PERSONA3　Re；venger

清良　要

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１９９９年９月、ムーンライトブリッジの事故に巻き込まれた少年はペルソナに覚醒し、機械の乙女と共にシャドウの王と対峙する。だが、その強大な力の前に倒れ、次に目覚めたときには半年が経っていた。

親も存在も奪われた少年は生きるために契約を結び、研究所で出会った少女を守るため戦うことを選択する。

傷付き、大切なモノを失い、それでも尚、少女たちが明るい温かな世界で生きられるようにと戦い続ける少年が、最後に辿り着いた〝命のこたえ〟とは……。

※本作では、劇場版と同じく原作の舞台である２００９年から１０年前の１９９９年にポートアイランドインパクトが起きた、という設定を基準に原作より過去に起きた事柄の発生時期を決めております。これは、２００９年に届いた『十年後に届く手紙』の出した時期が２０００年になっているなど、原作内で時間軸に矛盾が発生しているために決めたものです。

※２０２２年４月６日に完結しました。

目次

序章　―Distance―
第一話　始まりの日　1
第二話　ベルベットルーム　17
第三話　エルゴ研　32
第四話　室長会議　46
第五話　タルタロス　58
第六話　ペルソナ合体　76
第七話　肉体改造　91
第八話　ファルロス　106
第九話　有里湊　120
第十話　帰還　137
第十一話　訓練　148
第十二話　ペルソナ召喚　161
第十三話　室長会議　其二　173
第十四話　室長との会合　185
第十五話　第四研究室　197
第十六話　空からの贈り物　215
第十七話　動きだす計画　238
第十八話　飛騨の願い　254
第十九話　前篇　脱走―兆し―　266
第二十話　後篇　脱走―狂乱―　287
第二十一話　栗原シャルマ　307
第二十二話　情報屋　324
第二十三話　桔梗組　339

第二十四話　不視ノ太刀 363
第二十五話　二振りの刀剣 377
第二十六話　もう一人の住人 392
第二十七話　フェルメールでの会談 406
第二十八話　イリスとの仕事 427
第二十九話　管理者たちの悩み 440
第三十話　再会、発見 459
第一章　―Moratorium―
第三十一話　中等部入学 476
第三十二話　前篇　部活―立案― 494
第三十三話　後篇　部活―勧誘― 513
第三十四話　体育教師 528
第三十五話　夜の散歩 544
第三十六話　チドリの放課後 560
第三十七話　初めての課外活動 575
第三十八話　佐久間文子 592
第三十九話　ある日の部活動 610
第四十話　少しの喧嘩 624
第四十一話　影時間の密会 641
第四十二話　イニティウム 657
第四十三話　前篇　地下交戦―壊し屋― 676
第四十四話　後篇　地下交戦―不完全な獣― 695
第四十五話　鬼の一族 716
第四十六話　二人だけの部活動 733
第四十七話　中華な夕食 753

第四十八話　夏祭り、小さな出会い　768
第四十九話　アイギスを知る少女　784
第五十話　龍の娘　802
第五十一話　夏休み最終日　821
第五十二話　放課後の試合　836
第五十三話　ボクシング部マネージャー　852
第五十四話　それぞれの備え　870
第二章　―Ｍｅｍｅｎｔｏ　Ｍｏｒｉ―
第五十五話　出立　885
第五十六話　蠍の私兵　900
第五十七話　鬼の片鱗　915
第五十八話　幽霊と亡霊　930
第五十九話　中学二年生　946
第六十話　海外での誕生日　964
第六十一話　美術工芸部の客　980
第六十二話　武器整備　998
第六十三話　ラナフの日常　1016
第六十四話　土産と修羅場　1038
第六十五話　とある昼休みの一幕　1060
第六十六話　ラナフとの別れ　1076
第六十七話　候補者の勧誘　1096
第六十八話　母との対談　1113
第六十九話　ナギリの一族　1130
第七十話　仕組まれた依頼　1145
第七十一話　シャドウの力　1167

第七十二話　休日の過ごし方　186
第七十三話　二年、夏休み直前　201
第七十四話　誕生日会　216
第七十五話　前篇　夏祭り―開幕―　238
第七十六話　後篇　夏祭り―二人巡り―　255
第七十七話　過去、勧誘　274
第七十八話　動き出す世界　288
第七十九話　真田の入寮　306
第八十話　潜入　321
第八十一話　イリス　335
第三章　―Ｌｏｇｏｓ―
第八十二話　気付く者たち　349
第八十三話　虚ろな生者　371
第八十四話　葬儀　385
第八十五話　少年のために、少女達のために　400
第八十六話　騙った代償　420
第八十七話　仙道弥勒　436
第八十八話　報せ　455
第八十九話　仲間たちの会合　472
第九十話　悩み相談室　489
第九十一話　進む者、追う者、待つ者　505
第九十二話　続く争い　520
第九十三話　賞金首の受難　536
第九十四話　狼狩り　548
第九十五話　さらなる動き　570

第九十六話　捜索に向けて　―――――――

第百二十話　結果発表 ―――― 194
第百二十一話　美鶴たちの中等部卒業 ―――― 201
第百二十二話　依頼と報告会 ―――― 203
第百二十三話　中等部三年、開始 ―――― 205
第百二十四話　美鶴たちの適性 ―――― 207
第百二十五話　生徒会選挙 ―――― 208
第百二十六話　ベルベットルームからの呼び出し ―――― 209
第百二十七話　聖剣の鞘 ―――― 211
第百二十八話　生徒会活動 ―――― 213
第百二十九話　班決め ―――― 214
第百三十話　それぞれの放課後 ―――― 215
第百三十一話　ＥＰ社のお仕事 ―――― 217
第百三十二話　助っ人依頼 ―――― 218
第百三十三話　前篇　九尾切り丸―準備― ―――― 220
第百三十四話　後篇　九尾切り丸―潜入― ―――― 222
第百三十五話　前篇　修学旅行初日―出発― ―――― 223
第百三十六話　後篇　修学旅行初日―星空の下で― ―――― 225
第百三十七話　前篇　修学旅行二日目―夢オチ― ―――― 226
第百三十八話　後篇　修学旅行二日目―交際祝賀会― ―――― 228
第百三十九話　修学旅行最終日 ―――― 230
第百四十話　最も死から遠い存在 ―――― 231
第百四十一話　前篇　都大会―開始― ―――― 233
第百四十二話　後篇　都大会―曲芸― ―――― 235
第百四十三話　不良医師 ―――― 236
第百四十四話　初デート ―――― 237

第百四十五話　全中バスケ　2395
第五章　―Ｐｒｅｐａｒａｔｉｏｎ―
第百四十六話　三年、二学期開始　2409
第百四十七話　五式の少女　2432
第百四十八話　改めての対面　2435
第百四十九話　少女との墓参り　2452
第百五十話　新説・シンデレラ　2477
第百五十一話　八年の月日を経て　2493
第百五十二話　暴走　2510
第百五十三話　罪の重さ　2525
第百五十四話　自室デート　2539
第百五十五話　特別課外活動部からの離脱　2552
第百五十六話　仲介人　2565
第百五十七話　女子会　2583
第百五十八話　理想の少女　2597
第百五十九話　すれちがい　2612
第百六十話　確認事項　2625
第百六十一話　少女との別れ　2639
第百六十二話　年末特番　2657
第百六十三話　前篇　テスト勉強―建物探訪―　2679
第百六十四話　後篇　テスト勉強―食いしん坊万歳―　2694
第百六十五話　前篇　青年の力―発動の鍵―　2709
第百六十六話　後篇　青年の力―阿眞根―　2725
第六章　―Ｐｒｅｖｉｏｕｓ　ｓｔｅｐ―
第百六十七話　高等部入学　2744

第百六十八話　高等部での生活　762
第百六十九話　放課後の取り引き　772
第百七十話　ゴールデンウィークの予定　778
第百七十一話　染物と捕物　805
第百七十二話　旅館でのひととき　825
第百七十三話　テニスの皇子様　828
第百七十四話　少女の適性　843
第百七十五話　それぞれの研究　862
第百七十六話　ダイモーン　882
第百七十七話　大会に向けて　894
第百七十八話　テスト前日の過ごし方　910
第百七十九話　面倒な来客　924
第百八十話　ラボ見学　929
第百八十一話　祝勝会　942
第百八十二話　依頼と案内と　956
第百八十三話　霊園での出会い　994
第百八十四話　全日本選手権　1013
第百八十五話　研究の問題点　1030
第百八十六話　聖夜の決断　1063
第百八十七話　運だめし　1082
第百八十八話　前篇　好きという気持ち―勘違い―　1099
第百八十九話　後篇　好きという気持ち―切っ掛け―　1133
第百九十話　十年目を前にして　1273
第百九十一話　少女の勧誘　1443
第百九十二話　帰国と帰国　1563

第七章　―Ｓｔａｒｔｓ―
第百九十三話　来訪者　172
第百九十四話　新学年のはじまり　187
第百九十五話　候補者の監視　206
第百九十六話　戦いの訪れ　223
第百九十七話　特別課外活動部の勧誘　243
第百九十八話　新加入　257
第百九十九話　ダンジョン探索　271
第二百話　青年の選択　291
第二百一話　復調　307
第二百二話　委員会への参加　321
第二百三話　モノレールにも乗れーる　337
第二百四話　ギリギリの戦い　352
第二百五話　戦いを明けて　373
第二百六話　質問事項　386
第二百七話　テスト明けの過ごし方　401
第二百八話　風花の失踪　416
第二百九話　風花の田舎暮らし　431
第二百十話　騒ぎと訓練　448
第二百十一話　怖い話　460
第二百十二話　盲目の聖人　475
第二百十三話　怪談の聞き取り調査　486
第二百十四話　救出に向けて　503
第二百十五話　救出の果てに　516
第八章　―Ａｄｖａｎｃｅ―　351

第二百十六話　前を向く ―― 534
第二百十七話　未来人への助言 ―― 535
第二百十八話　新しい玩具、新しい仲間 ―― 565
第二百十九話　風花の復学 ―― 581
第二百二十話　遠い背中 ―― 583
第二百二十一話　戦いと日常の影響 ―― 598
第二百二十二話　計画通り ―― 614
第二百二十三話　復讐代行のお仕事 ―― 628
第二百二十四話　新たな情報 ―― 636
第二百二十五話　満月の戦いに向けて ―― 654
第二百二十六話　前篇　七夕マッチ―二つの反応― ―― 667
第二百二十七話　後篇　七夕マッチ―異変の予兆― ―― 683
第二百二十八話　七夕から一夜明けて ―― 693
第二百二十九話　昼時ハプニング ―― 709
第二百三十話　お昼時 ―― 722
第二百三十一話　テスト明けの過ごし方 ―― 735
第二百三十二話　屋久島旅行 ―― 747
第二百三十三話　屋久島二日目 ―― 762
第二百三十四話　それぞれの場所で ―― 777
第二百三十五話　十年ぶりの街 ―― 792
第二百三十六話　一学期終業式 ―― 811
第二百三十七話　繋がる記憶 ―― 828
第二百三十八話　訓練と出会いと ―― 842
第二百三十九話　少女たちの夏休み ―― 857
第二百四十話　青年たちの夏休み ―― 873
389

第二百四十一話　顔合わせ　395
第二百四十二話　月下の戦い　639
第二百四十三話　戦いの後で　423
第二百四十四話　対面、話し合い　920
第九章　―Discrepancy―　3976
第二百四十五話　情報を求めて　4014
第二百四十六話　彼の許へ　4399
第二百四十七話　青年との再会　4640
第二百四十八話　時を越えて　4824
第二百四十九話　幼子　5002
第二百五十話　幼い八雲　5134
第二百五十一話　夏祭りの楽しみ方　5294
第二百五十二話　迷い子と犬　5414
第二百五十三話　怪物　5514
第二百五十四話　目覚めた彼　5641
第二百五十五話　取るべき立場　5791
第二百五十六話　鬼と龍の邂逅　5941
第二百五十七話　野外フェス　6163
第二百五十八話　少女の転入　6415
第二百五十九話　不穏　6914
第二百六十話　正義と戦車　7203
第二百六十一話　美紀　7421
第二百六十二話　自覚　7423
第二百六十三話　裏の住人同士で　7425
第二百六十四話　彼について思うこと　7427

第十章　―Ｓｈａｄｏｗ　Ｏｆ　Ｔｈｅ　Ｌａｂｙｒｉｎｔｈ―

第二百六十五話　嵐の夜に　―――――――

第二百八十九話　参ノ怪を抜けて　647
第二百九十話　小さくても一人前　604
第二百九十一話　破魔と呪詛を操る者　670
第二百九十二話　脱出ゲーム　683
第二百九十三話　第三の番人　695
第二百九十四話　当時の事　708
第二百九十五話　稲羽郷土展　717
第二百九十六話　赤ん坊との付き合い方　729
第二百九十七話　マッスル　739
第二百九十八話　熱気　749
第二百九十九話　戦いのルール　763
第三百話　星になる　776
第三百一話　我慢強さ　787
第三百二話　一時撤退　799
第三百三話　怪しいモニュメント　811
第三百四話　恋愛トーク　825
第三百五話　複雑な思い　837
第三百六話　ダンジョンのこと、帰ってからのこと　850
第三百七話　影との対面　860
第三百八話　おともだち　871
第三百九話　隠されていた真実　881
第三百十話　少女の求めるもの　892
第三百十一話　善の犯した罪　901
第三百十二話　救出前夜　914
第三百十三話　時計塔　923

第三百十四話　神の天敵　―――――――

第三百三十八話　戦う理由について　208
第三百三十九話　決戦準備　205
第三百四十話　最後のアルカナシャドウ　229
第三百四十一話　戦いを終えて　239
第三百四十二話　策略　248
第三百四十三話　自分の心と　259
第三百四十四話　仲間の許へ　273
第三百四十五話　狂信者　284
第三百四十六話　錬金術師の祖　295
第三百四十七話　幾月の目的　306
第三百四十八話　光　316
第三百四十九話　リヴァイヴ　330
第三百五十話　浄化の光　342
第三百五十一話　長い一日の終わり　352
第十二章　―Ｒｅａｓｏｎ―　361
第三百五十二話　報せ、あの日の事　371
第三百五十三話　黄泉帰り　389
第三百五十四話　備えと心の準備　399
第三百五十五話　道中での出来事　409
第三百五十六話　母との再会　419
第三百五十七話　警備部の訪問　432
第三百五十八話　計画、警戒　443
第三百五十九話　遺言状の開封　455
第三百六十話　父の想い　465
第三百六十一話　深夜の密会　546

第三百六十二話　作戦第一段階　475
第三百六十三話　想定の範囲内　485
第三百六十四話　状況開始　498
第三百六十五話　制裁　512
第三百六十六話　賠償　528
第三百六十七話　美鶴の帰還　541
第三百六十八話　三人目の転校生　552
第三百六十九話　クラスメイトとの再会　556
第三百七十話　待ち伏せ　565
第三百七十一話　死後の世界とは　576
第三百七十二話　京都に行こう　590
第三百七十三話　京都の温泉旅館　603
第三百七十四話　男たちの戦い　612
第三百七十五話　慰安旅行　621
第三百七十六話　忘れた記憶　637
第三百七十七話　清水寺　650
第三百七十八話　美鶴が戦う理由　656
第三百七十九話　爽やかな朝食　671
第三百八十話　温泉ばったり作戦　683
第三百八十一話　覗きから一夜明けて　694
第三百八十二話　さらば京都　709
第十三章　―Ｄｅａｔｈ―　718
第三百八十三話　軍曹殿　729
第三百八十四話　作業ロボット　740
第三百八十五話　力こそ全て　752
575

第三百八十六話　ＥＰ社での昼休み　765
第三百八十七話　仕事の理想と現実　785
第三百八十八話　将来の仕事について　857
第三百八十九話　違和感の正体　878
第三百九十話　少年の苦悩　857
第三百九十一話　因縁　808
第三百九十二話　十年前の真実　818
第三百九十三話　選べる選択肢　828
第三百九十四話　選ぶことの意味　838
第三百九十五話　〝特別〟　848
第三百九十六話　少年の意地　858
第三百九十七話　路地裏の誓い　873
第三百九十八話　信じる事　884
第三百九十九話　冬休み前の女子会　895
第四百話　雪空の下で　904
第四百一話　プレゼント選び　913
第四百二話　彼女たちの選択、彼の選択　923
第四百三話　二人だけの戦い　934
第四百四話　二人の戦い　949
第四百五話　その戦う理由　960
第四百六話　前へ進むために　968
第十四章　―Ｄｅｐａｒｔｕｒｅ―　976
第四百七話　決戦までの予定　991
第四百八話　大晦日の過ごし方　1002
第四百九話　年の初めに　1026

第四百十話　神頼みと運試し　――――――

第四百三十五話　ストレガたちとの戦い　258
第四百三十六話　タカヤの主張　268
第四百三十七話　厄介な敵　278
第四百三十八話　空での戦い　287
第四百三十九話　共鳴　295
第四百四十話　最初の決着　305
第四百四十一話　罪だとしても　317
第四百四十二話　異変　326
第四百四十三話　伝播する想い　335
第四百四十四話　それぞれに出来る事　345
第四百四十五話　父娘の因縁　354
第四百四十六話　合流　363
第四百四十七話　祈りと願い　370
第四百四十八話　戦う姿　380
第四百四十九話　ニュクス・アバター　389
第四百五十話　宙にて開く瞳　398
第四百五十一話　神の力　408
第四百五十二話　絆の力　419
第四百五十三話　予言の日　427
第四百五十四話　大いなる封印　437
第十五章　―Ａｉｍ―
第四百五十五話　三年生に向けて　449
第四百五十六話　取り残されたもの　459
第四百五十七話　思考の人影　467
第四百五十八話　続けられる研究　475

第四百五十九話　送別会の打ち合わせ　485
第四百六十話　卒業式　497
第四百六十一話　約束の場所で　506
第四百六十二話　桐条からの報告　513
第四百六十三話　夢に見る　520
第四百六十四話　情報交換　527
第四百六十五話　巌戸台分寮の閉館日　536
第四百六十六話　三月三一日　543
第四百六十七話　襲撃者　551
第四百六十八話　新たな契約者　559
第四百六十九話　再集結　567
第四百七十話　変化の謎　576
第四百七十一話　メティス　584
第四百七十二話　契約の継続　597
第四百七十三話　最初の扉　605
第四百七十四話　古の路マレボルゼ　614
第四百七十五話　過去への扉　624
第四百七十六話　過去との出会い　635
第四百七十七話　意外な出口　646
第四百七十八話　罪の路コキュトス　656
第四百七十九話　過去に繋がる条件　665
第四百八十話　裏での情報収集　675
第四百八十一話　歪さの正体　684
第四百八十二話　夜の路アンテノラ　692
第四百八十三話　過去との向き合い方　701

第四百八十四話　哀の路トロメイア　711
第四百八十五話　真田たちの懸念　720
第四百八十六話　珍しい組み合わせ　728
第四百八十七話　業の路ジュデッカ　737
第四百八十八話　順平からの報告　745
第四百八十九話　認識の違い　753
第四百九十話　ラビリスに問う　760
第四百九十一話　王居エンピレオ　768
第四百九十二話　少女なりの矜持　776
第四百九十三話　戦力強化　783
第四百九十四話　湊の影　790
第四百九十五話　青年との戦い　798
第四百九十六話　時の鍵　807
第四百九十七話　最後の助言　814
第四百九十八話　再びあの日へ　826
第四百九十九話　エレボス　836
第五百話　決断　849
第五百一話　達成報告　857
第五百二話　現実世界への帰還　869
第五百三話　時を超える言葉　879
第五百四話　キミの記憶―Ｂｒａｎｄ　Ｎｅｗ　Ｄａｙｓ―（終）　898

序章　―Ｄｉｓｔａｎｃｅ―

第一話　始まりの日

１９９９年９月２５日（日）
影時間――ムーンライトブリッジ
ムーンライトブリッジ。開通してまだ半年も経たぬ真新しいその場所は、銃弾の跡がいくつもつき、路面はひび割れ、陥没している場所まで存在していた。
その変わり果てた橋には白い人影があり、円を描くように移動する人影からは、マシンガンの音が響く。
「やはり、初期開発装備の内蔵銃では目標への効果は薄いですね……」
移動しながらマシンガンとなった自身の指先より銃弾を放ち続ける人影。
金髪碧眼という、ここ日本から見れば異国人風の見た目をするその少女は、耳や肩、足の付け根などが人間のそれではなく機械となっていた。
そして、少女は銃弾のゆく先にいる存在を見ながら冷静に分析する。
少女からの銃撃を受けていた存在は、獣の骸骨のような頭部をした異形の化け物。首には鎖分銅を垂らし、黒いマントの様な物を纏って宙に浮いている。
そんな風に、じっと動かずに攻撃を受けていた化け物が音もなく右腕をあげると、そこから少女目がけて青白い雷が放たれた。
「っ……回避、成功。僅かに被弾しましたが、被害は軽微。作戦行動を続行します」
放たれた雷を大きく横に飛ぶ事で回避した少女は、地面を転がり、その勢いのまま立ち上がると、直ぐに体勢を立て直し走り始める。
少女は走りながら思考を巡らせていた。
こちら側の攻撃は効かず、逆に相手からの攻撃は自分の弱点を突いている。

故に、足を止めてその隙を狙われれば、なんとか均衡を保っている戦況は直ぐに自分の敗北という形で崩れさってしまうと。
それが分かっているからこそ、少女は相手を倒す方法を考える時間稼ぎとして、相手からの攻撃を回避できるギリギリまで近付いた距離での足止めに徹していた。
「最も有効だと思える攻撃はペルソナによるアタック。……ですが、出力の差によってこちらの攻撃は効果が薄い」
相対している化け物を倒す事が任務なのだが、自分と相手との実力差が大きくこれだと思える作戦がない。
事前の作戦命令の時点で実力差があることは分かっていた。自分が一方的に破壊される可能性の方が圧倒的に高いことも理解していた。
しかし、それでも自分がこの化け物を倒さなければ、人類は終わる。それが分かっていて、簡単に諦める事は出来ない。
なぜなら、少女は目の前にいる異形の存在とその同胞である〝シャドウ〟らを倒すために生み出された〝機械の乙女〟であったから。
「……どうにも難しいですね」
この任務の重要性と自身の存在意義は理解しているが、だからこそお互いの実力差から成功率の低さに歯痒い思いをする。
インストールされている戦闘に関する機能の一つに戦力差を考慮したシミュレーションというものも存在する。
それに現在の自分と相手を当てはめると、作戦前の説明とほぼ同様の結果が得られた。機械だけに現実的で、正確な戦力差を分析できている。
その結果は自分の完全な敗北。勝率にして１．７３パーセントという絶望的なまでの差だ。
だからこそ、機械の少女はその数値をどうにか自分の側へと手繰り寄せる方法を考えていた。
だが、走りながら有効だと思える策を練るその途中、近くに生体反応がある事に気付く。
戦闘に巻き込まれ横転しながら炎上している乗用車。その直ぐ近

くに小さな子どもが燃えている車に向かって何か叫んでいた。
「人間の子どもが、どうしてこんな場所に……。それに象徴化していないなんて」
異形の化け物と少女の戦っている時間の名は〝影時間〟。毎夜零時ちょうどに存在する、現実から切り離された時間だ。
影時間では、全ての電子機器が止まり、適性を持たない普通の人間は象徴化といって棺桶のようなオブジェになる。
よって、車に向かって叫んでいる子どもが象徴化していないということから、その子どもは適性を持っていることになる。
だが、今まではそれらを研究しているうちに自然に適性を持っていたという、後天的に適性を得た者しかいなかったため、彼の様な自然適合者は仮説の中にしか存在しなかった。
少女はそんな稀少な能力を持った少年に少々驚きながら、少年の置かれた危険な状況に目をやる。
横転し炎上している車に向かって叫んでいることということは、少年が乗っていたのは目の前の車なのだろう。残念だが、その中にいる人間が無事だとは思えない。
だが、このまま燃え続ければガソリンに引火し、周囲を巻き込んだ大爆発を起こす。
そうなれば、数メートルしか離れていない少年までも巻き込まれ命を落とす危険があった。
そう冷静に状況を把握し終わると、彼を救うべく少女は状況の改善のため駆け出した。
人間ならば耳のあるべき場所に備わったヘッドホン型のユニットを高速で回転させ、人間には出せない速度で少年へと近付く。
背を向けた自分に向かいシャドウが攻撃を放ってくる可能性もある。だが、それでもその攻撃が届くよりも先に少年の元に辿り着けると判断していた。
「失礼しますっ!!」
「……え?」
少女は少年に声をかけると、横を通り過ぎる途中で少年を抱え込

み、その場から高速で離脱する。
接近前の予測通りに攻撃が来るよりも先に少年を保護し、炎上する車からも距離を取る事に成功したのだ。
その直後、少年のいた場所はシャドウの放った青白い雷によって灼かれ、傍で炎上していた車にも当たったのか大爆発を引き起こした。
少女に抱えられた少年は、その爆発の瞬間を目にして眼を見開きながら息をのみ叫んだ。
「父さんっ、母さんっ!!」
「っ……ご両親が、乗っていたのですか？」
「戻って！　父さんと母さんを助けて!!」
「それは出来ません。何より、あの爆発ではお二人は既に……」
「そん、な……」
少女に残酷な現実を告げられた少年は拳を強く握りながら俯く。
それを見た少女は、自分の戦いに彼とその家族を巻き込んでしまったことを悔やむが、今はまだ戦闘中。彼を慰める方法は分からないが、どちらにせよ構っていられる状況ではなかった。
シャドウから大きく離れ、攻撃圏外へと出ると少年を下ろして目線を合わせて話しかける。先ずは、少年に状況を説明した方が良いと判断したからだ。
「あなたの、お名前は？」
「……やくも。数字の八に、空にうかぶ雲で、八雲」
「八雲さんですね。わたしはアイギス。あのシャドウという敵を倒すために作られた存在です」
俯いたままだが、八雲と名乗った少年は少女・アイギスの言葉に反応を返す。
両親が死んだ事にショックを受けているようだが、これならば状況の説明も早く済むだろうと少し安心した。
「状況を説明します。あの敵の名前はデス、あれを倒さなければ人類が滅びます。わたしはそれを防ぐためにやってきました。そして、戦力差が大きく、味方の援軍も存在しないために勝利は絶望的であります」

「……あいつがぼくたちの車をおそったの？」
「……いいえ。正確にはわたしとデスの戦いにあなた方を巻き込んでしまいました。通常、象徴化していれば戦いに巻き込まれないはずなのですが、もしやご両親もあなたの様に動けていませんでしたか？」
アイギスの質問に八雲は答えない。だが、強く拳を握りしめていることから、両親も八雲のように自然適合者だったようだ。
両親も揃って自然適合者であったのならば、八雲はかなり高い適性を持っていると思われる。
それが分かったアイギスは、シャドウに対抗するための人格の鎧〝ペルソナ〟を彼も使えれば勝てるかもしれないと思った。
「八雲さん。戦いに巻き込んでしまったあなたに、こんな事を頼むのは間違っていると分かっています。ですが、どうかわたしに力を貸してください。お願いします」
「……ぼくにできる事なんてないよ」
「いいえ。強く念じてください。あなたなら出来ます」
八雲の両肩に手を置き、真剣に見つめるアイギスに言われた八雲も、顔あげて相手を見つめる。
子供である自分に出来る事はないと思った。だが、アイギスは強く念じれば出来るという。
力を貸せと言うだけで具体的に何をしろとも言わない。
自分たち家族を巻き込んでおきながらなんて勝手なんだと、八雲は怒りのままに念じた。
眼を閉じ、八雲は自分の中を怒りで満たす。怒りを殺意に変え、あのシャドウと呼ばれた存在を消したいとただ強く望む。
感情が膨れ上がるのを感じながら、頭の中はクリアになっていく不思議な感覚。
それを味わいながら八雲は頭に浮かんだ言葉を口にした。
「　ペ　ル　ソ　ナ　」
呟くと同時に、パキィンッ、とガラスの割れたような音が頭の中で響き、八雲の周囲で水色の欠片が渦を巻く。頭上で集束していき、その中心に竪琴を持った人型の何かが現れた。

《我は汝……汝は我……我は汝の心の海より出でし者……幽玄の奏者、オルフェウスなり……》
光を纏いながら現れた、オルフェウスと名乗るペルソナを見ながらアイギスはただ感動する。
初めて見る他人のペルソナ。命の様な鮮烈な輝きを纏って現れたその存在の力強さに。
「本当に召喚できるなんて……これが自然適合者の力。すごいです。サポート無しでこんなに安定して召喚できるなんて」
「これで……いいの？」
「はい。わたしが撹乱しながらアタックをしかけます。あなたはそのオルフェウスを使って遠距離から攻撃を放って下さい。ただし、ご自分は決してシャドウに近付かない事。攻撃を喰らえば耐えきれませんから」
いくら自然適合者といっても、八雲の身体はあくまで子どものそれだ。
筋肉も骨も大人に比べれば柔らかく、アイギスですら一撃で仕留められかねない攻撃をそんな脆弱な身体で喰らえば、たった一発で簡単に死んでしまうだろう。
故に、アイギスは絶対に言いつけを守るよう強く言い聞かせる。
「それとペルソナも攻撃を受けないよう注意してください。ペルソナの受けたダメージは召喚者にフィードバックします。それに攻撃を受け過ぎれば消えてしまうので、常に敵の攻撃には細心の注意を」
アイギスの説明を聞いた八雲は頷くと、恨みの視線をシャドウに向ける。
その子どもらしからぬ表情と空気に、機械である筈のアイギスも一瞬薄ら寒い物を感じるが今は時間が無い。
そう思う事で思考を切り替えると、八雲に合図をしてから戦場に戻るため駆け出した。
「ペルソナ、レイズアップ！」
走りながらアイギスが声をあげると、頭上に眩い光が集まり、自身のペルソナである、戦車〝パラディオン〟が現れる。

呼び出されたパラディオンは進むにつれて速度をあげ、身体の中心から生えた槍でシャドウへと突撃し、アイギスも距離を取りつつ動きながら牽制の銃撃を放つ。
その銃弾を胴体から頭部にかけて受け続けるシャドウだが、それらを無視して持っていた剣を横薙ぎに払い、迫ってくるパラディオンを攻撃した。
「緊急上昇！　八雲さんお願いします！」
「オルフェウス、アギ！」
シャドウの攻撃を上昇することで避けたパラディオン。そして、避けられたシャドウは攻撃を外した事で隙が出来た。
アイギスがその瞬間を狙って指示を出すと、八雲のオルフェウスが左手を突き出しそこからバスケットボール大の火球を放つ。
轟々と燃え盛る火球は見事に敵の顔面に直撃する。だが、実力に差があるためか、あまり効いていないようだった。
「それでも、勝率は２．１１パーセントに上がりました！　パラディオン、キルラッシュ！」
回避で上昇していたペルソナに命令し、一気に急降下で敵へと攻撃を放つ。
シャドウがそちらに気を取られている間に、アイギスは自身の核であるパピヨンハートで練り上げた精神エネルギーを全身の機関へと送り込んだ。
この戦いは長引けば自分たちの敗北で終わる。それは揺るぎようのない事実であり、そうなる前に一気に勝負をしかける。アイギスはリミッターを解除し、スペックギリギリまで性能を引き上げるオルギアモードを発動した。
自身の性能を限界まで高めたアイギスは生温い影時間の空気を身体で切り裂きながら敵へと向かって行く。
その間に、八雲のオルフェウスが何度も火球を飛ばしているが、それと上空から迫るパラディオンが囮の目隠しとなってアイギスの接近は気付かれていないようだった。
「はあっ!!」

パラディオンよりも先に敵へと接近出来たアイギスは、助走の勢いも乗った拳を敵の横っ面へと叩きこむ。
かなりの硬度のある鉄の拳の一撃は、ガシャンッ、と機械特有の音を立てながら、自身の二倍以上ある敵の巨大な体躯をそのまま吹き飛ばした。
そして、今日の戦闘において初めてまともに決まったと言える一撃に続き。さらに、その吹き飛んだ相手めがけ降下してきたパラディオンの一撃が、倒れた敵を地面に縫い付け、ぶつかり合った衝撃が周囲に軽い揺れを起こす。
「ここで一気に倒します！」
気合と共にアイギスはパラディオンへ精神エネルギーを送り続ける。
絶対に敵を解放してはならない。そのために、パラディオンで敵を貫き倒すと力を送り続けているのだ。
強力な障壁の様な魔法陣らしきもので阻まれているため、攻撃は未だに通っていない。しかし、魔法陣ごと相手を地面に押し込み、動きを封じる事が出来ている。
倒れた状態で障壁を張っているために攻撃にも制限が付いているのだろう。別の角度から攻撃している八雲のオルフェウスの放つ火球が連続で当たっている。
こんなチャンスはもう二度とめぐってこないとして、アイギスは再び自身で敵にダメージを与えるため、敵へと接近した。
だが、
「っ!?　まずいっ、戻ってパラディオン！」
バチッ、と電気の爆ぜる音を聞いて即座にパラディオンを消すアイギス。
直後、倒れていたシャドウから広範囲に電撃が放たれた。
機械の身体のためか電撃に弱いアイギスは、パラディオンからのフィードバックダメージを受けないようペルソナを消したのだが、間一髪それは間に合った。
しかし、敵を倒すために接近していたという事実は消えず、広範囲

に向かって放たれたその一撃を自分の身で受けてしまう。
システムがダウンしたかのように身体の自由が利かなくなり、敵の近くだというのに倒れるアイギス。
ペルソナも出さずに、こんな無防備な状態でいればどうなるかなど分かっている。
起き上がったシャドウは八雲からの攻撃を受けつつも、その手に持っている巨大な剣を振り上げる。そして、空気を切り裂くヒュンッという音をさせながら、倒れているアイギス目がけそれを振り降ろした。
「やめろー!!」
少年の叫びの直後、金属同士がぶつかりあったような甲高い音が響く。
アイギスを襲うかと思われたシャドウの攻撃は、八雲のオルフェウスの竪琴の一撃によって軌道を逸らされた。
そのまま目標と別の場所へと向かった剣は、地面に衝突すると地面を深く抉る。
「やれ、オルフェウス!」
体勢を僅かに崩す事に成功したオルフェウスは、八雲の念じるまま裏拳の形で竪琴を振るい。アイギスが攻撃したのとは反対の横っ面へと一撃を決めた。
倒れてそれを見ていたアイギスは八雲のセンスに驚く。
これだけの異常な状況で両親を失った直後だというのに、味方を庇って戦い続けている。
普通の子どもでは考えられない精神の強さだが、それよりも体勢の崩れた相手への咄嗟の追撃という発想が子どもとしては考えられない。
連続で攻撃を放ち続けるのならば分かるが、八雲は裏拳の形で攻撃を放つ事により、崩した体勢にさらに勢いを乗せることが出来ている。
見たところ筋肉の付き方も同年代の少年と大差なく、武道をやっているようにも見えない。

だとすれば、八雲は一瞬の閃きだけで攻撃を選んだ事になる。
どうやら天は八雲という少年に二物も三物も与えているようであった。
そんな風に思いながらダウンから立ち直ると、アイギスはダメージを負った身体を庇いながら距離を取った。
ダメージレベルは小破。長時間の活動は無理だろうが、まだ多少の無茶は可能なレベルだ。
どうやら障壁を張りながら攻撃を放った事が原因で、術自体の威力がかなり抑えられていたようである。
「しかし、オルギアモードはもう使えませんね。オーバーヒートしなかったことは幸いですが、ギミックの一部に不備が生じたようであります」
アイギスはそうやって冷静に自分の損傷レベルを判断し、今出来る最善の策を考える。
シャドウは八雲のオルフェウスが牽制の火球を放つ事で抑えている。本当に大した子どもだと感心させられていた。
だからこそ、その頑張りに応えるため、アイギスも作戦を練り直す。
「……最悪、封印も選択肢として考慮しておくべきですね。わたしのパピヨンハートか、可能性の申し子である八雲さんに」
彼をこれ以上巻き込みたくはない。だが兵器としての思考が封印の適性の高さは八雲の方が上だと言っている。
実際に自分も八雲という少年を見て思った。ああ、彼はなんて神に愛された子なのだろうと。
敵への牽制の銃弾を放ちながら、八雲の様子を見ると、八雲はオルフェウスにかなり複雑な動きをさせていた。
しかし、それはただ滅茶苦茶に動いている訳ではない。
敵が生物に近い骨格をしていると判断し、関節の可動領域の関係で狙えない場所へと常に逃げ続けているのだ。
小学生になるかならないか程度の子どもが関節の可動領域など知っている筈がない。いや、仮に知っていても、そこから的確に死角となる場所を見抜くことなど出来ない。

「本当に、八雲さんはすごいです」
シャドウを倒すためだけに作られた自分。思考も人のそれに似るように作られているが、優先順位はシャドウを倒す事に関わることが高くなっている。
にもかかわらず、アイギスは自分と共に戦っている少年の未来を見たいと思った。
限界を知らず、無限に広がる可能性を秘めた子ども。その未来の行きつく先がどこであるか自分も見てみたいと。
強力な敵との戦闘中。それも人類の未来のかかった戦いだ。
自分の存在意義を考えれば、戦闘中にそんな事を考えるなど、不謹慎どころかバグでも発生しているのではないかというレベルと言える。
しかし、その不謹慎とも言える思考のおかげかアイギスは自分の中で力が湧くのを感じた。
自分の戦いはこの子の未来を守るための戦い。そう思うことで、心の力が増幅し、パラディオンに更なる力を与えた。
「パラディオン、電光石火！」
目覚めた力を自然と理解し、命令として口にする。
先ほどまでよりも速くなったパラディオンが縦横無尽に空を駆け、敵に接近すると槍による攻撃を何度も浴びせた。
「絶対に、あの子の未来を壊させはしない！」
ペルソナと自身の腕のマシンガンによる連続攻撃。
二度とめぐってこないと思われたチャンスは八雲によって引き寄せられた。
効果は薄くとも重い打撃を顔面に既に二発入れ、先ほどから攻撃を加え続けている。
いくら敵が強くてもそれなりのダメージが蓄積している筈だ。
《グルァァァァァァァァァァァァッ!!》
いい加減に鬱陶しくなってきたのか、持っている剣を振り回しながら電撃を放つシャドウ。
アイギスは離れた場所から、その狙いが八雲であると判断した。

「八雲さん回避を！」
「分かってる。オルフェウス、地面にアギ！」
それを見切っていた八雲は、オルフェウスに距離を取らせながらアギで敵の進路を塞ぐ。
「パラディオン！」
そこへすかさず別方向からアイギスが攻撃を加える。炎に進路を塞がれ怯んだシャドウへ斜め後方から接近し、掠める程度だが槍の一撃を当てて直ぐに離れていく。
先ほどの様に焦って一気に決めには行かず、あくまで自分が被弾せずに敵の体力を削る事に徹底する。戦いなど知らぬ幼い少年の戦い方からアイギスが学んだことだ。
プレッシャーを感じるのは良い。だが、それが焦りを生み。焦りが危機を招いては全ての努力が無に帰す。
そんな事では、両親を殺した自分に力を貸してくれている少年に失礼だと、アイギスは考え直した。
「はあっ!!」
疾走しながら銃弾の雨を降らす。常に的を絞らせずに追撃を与える事で、八雲と八雲のペルソナへ攻撃が集中しないように相手の気を逸らす事が出来る。
しかし、地力の差を考えれば、そういつまでも上手くいく筈が無かった。
異形の化け物、シャドウが攻撃を喰らいながら何も持たぬ左腕を天にかざすと、頭上に魔力の光が集束してゆく。
ＡＩだというのに、戦闘を続け八雲と出会った事で疑似人格が成長したのか、アイギスは存在しなかった筈の『本能』で危険を感じ取った。あれを受けてはならないと。
《グルァァァァァッ!!》
叫ぶシャドウの頭上に収束する光は、ゴゴゴゴゴッ、と地響きにも音を立てて威力を高めてゆく。
それを見た八雲も、アイギスと同様に危険を感じ取り、いま取れる最善の策をとることにした。

「避けきれないっ!? オルフェウス、ガード!」
「パラディオン、キルラッシュで少しでも攻撃を逸らしなさい!」
少しでも八雲のオルフェウスへのダメージを軽減させようと、アイギスは自分がフィードバックダメージを受ける事も構わずペルソナを突撃させた。
天にかざす腕をパラディオンの槍が貫く。ダメージを受けた事で、シャドウの腕は血の代わりに黒いもやを出した。
しかし、それでも集束してゆく魔力は治まらない。
そして、ついに魔力は光の奔流となり、周囲の全てを飲み込んだ。
爆心地の中心にいた二体のペルソナは耐久限界を超えたのか、光の奔流にそのまま飲まれて消え去る。
一方で、自身も吹き飛ばされながら、ペルソナの受けたダメージが返ってきたアイギスは回路がショートするのではないかと思いながら地面を転がっていた。
機体が活動限界を迎えようとしていることを知らせるアラートが表示され続けている。しかし、今はそれよりも自分に力を貸してくれていた少年の安否が気になる。
転がっていた身体がついに止まると、ギギギという異音をたてながら腕を地面について上体を起こす。
攻撃が止み。巻き上がった砂ぼこりの向こうに佇むシャドウを見て。その向こうに倒れている少年の姿を発見した。
「や、くもさん……」
意識を失っているのか八雲はピクリとも動かない。
当然だ。自分のような機械でも動けそうにないのだから、生身の子供であるのならば死んでいてもおかしくない。
そう考えたところで、アイギスは背筋に冷たい垂氷が突き刺さったかのような、絶望へと通じる悪寒が走るのを感じた。
「八雲さんが、死ぬ?」
巻き込んだ自分に力を貸してくれた少年を死なせてしまった。彼の未来を守ると約束したのに。
人の心を待たぬ筈の自分が言いようのない恐怖を感じている事が

分かる。これが大切な物を失うことへの恐怖。
「ぐっ……オル、ギアモード、発動！」
パピヨンハートに残っているエネルギーの全てを注ぎ込み、再びオルギアモードを起動させようとする。だが、機体のダメージが大き過ぎたためか、一向に起動する気配がない。
「動いてっ、彼のところに、八雲さんの元に行かなくちゃいけないの！」
壊れた肩の装甲が落ちる事も無視して身体を起こし地面に膝をつく。
強い意思に呼応するように、ヘッドフォン型のユニットが煙を出しながらも高速で回転し始めると、アイギスは地面を蹴り、最短距離で八雲へと駆け寄る。
気付いた敵が雷を放ってくる。しかし、そんな物に構っていられないと、さらに機体を酷使し速度をあげて回避する。
「八雲さん！」
そうして、シャドウの数メートル横を通り過ぎながら、倒れて動かなくなった八雲の元へと辿り着いた。
辿り着くなりアイギスは八雲を抱き起こし、すぐに容体を確認する。
呼吸が浅く、顔色が優れない、自分同様に地面を転がったときに出来たであろう手足の擦りキズからは大量の血を流している。
だが、非常に危険な状態ながらも、なんとか生きているようだ。
しかし、生きているといっても、自分のペルソナは治療を施せるスキルを持っていない。今から治療できる施設へと連れて行っても間に合うとは思えない。
助けたいという想いに対し、現実は残酷だった。
「死なせたくないっ。誰でも良い、この子を助けてください！」
消えようとする小さな命を胸に抱きながらアイギスは天を仰ぎ懇願する。
だが、ここにいるのは自分と異形の化け物だけだった。
しかし、ここでアイギスはある可能性を思い付きハッとする。

自分の中に存在するデータによれば、シャドウとはペルソナに近しい人間の心から生じた存在。その身には不思議な力を宿しており、時に空間や時間にも干渉するという。
ならば、いまここで命の灯が消えようとしている子どもを助ける事も出来るかもしれない。そう、なぜなら、相手は『死』を司るシャドウだから。
「八雲さん、もう少し我慢してください。いま、あなたを助けます」
八雲を胸に抱きかかえながら死を司るシャドウ〝デス〟を見やるアイギス。一方のデスはアイギスと八雲の動向を見ているようで、動きを止めたまま何もしてこない。
それならば、丁度良いとアイギスは地面を踏みしめる。初動から最高速へと直ぐに達するよう身を屈め、足に力を込める。
耐久限界を超えている機体はギギギ……と不安な音を立てている。だが、それでも、デスの元へは何としてでも辿り着いて見せると、アイギスは駆け出した。
急激にGがかかったことで抱かれている八雲が気を失ったまま辛そうな表情をしているが、いつ攻撃されてもおかしくない状況だ。速度を落とす事は出来ない。
案の定、デスは持っている剣を振って斬撃を複数飛ばしてくる。
アイギスはそれを左右に飛んで避けながら、相手の元へと走った。
そして、相手が手に青白い光を溜め始めたところで、懐に潜り込む事に成功する。
この至近距離で攻撃を喰らえば大破は確実。瀕死の八雲も死んでしまうだろう。
それだけは何としてでも避けようと、自分の中にあった人工的に自分にペルソナを宿した方法の記録を開く。
シャドウの封印とは、人工的にペルソナを発現させることを逆からのアプローチでしかけるのだ。ペルソナと同じく精神から生じたシャドウを、別の存在の精神へと強制的に捻じ込むという荒技。
しかし、ペルソナと違い無意識の領域の存在であるため、性格が丸っきり変わってしまうということはない。

せいぜいが、元となった人間が短気であったのなら、捻じ込まれた側も少し神経質になるかもしれないという程度。
命を失うよりはマシだろうと八雲を地面に横たえると、アイギスはそのままデスのマントを掴み。残っている精神エネルギーで存在を揺らがせ、寝ている八雲にも同じように自分の精神エネルギーを送る事で強引にラインを繋いだ。
すると、生存本能なのか八雲がアイギスの精神エネルギーを大量に吸収し始め。ラインを繋がれたデスも同じように八雲へと吸い込まれていく。
吸収し始めたときには、こんな小さな体に強大な存在を宿らせることなど出来るのだろうかという不安を抱いていた。
だが、八雲はあらゆる可能性に恵まれた存在だ。
そう考えると、例え数百人分の精神の融合体であろうと内包しきれるだろうと自然と不安は消えていた。
吸収が進むにつれて呼吸が安定し、八雲の顔色が良くなっていく。暴論とも言える推測からの賭けだったが、どうやら成功したようだ。
人類を滅ぼす存在は子どもの中に宿り、この子が青年へと成長するほど時間が経たなければ出て来れないだろう。
八雲と人類。その両方をなんとか守る事に成功したアイギスはエネルギーを使い果たし、機体の耐久限界を超えていたため、静かにその機能を停止したのだった。

第二話　ベルベットルーム

???――ベルベットルーム

「ほう……これはまた、変わった定めをお持ちの方がいらしたようだ……」

そんな言葉が聞こえ、少年が眼を開けるとそこは不思議な空間だった。

目の前にはテーブルがあり、その向こうには眼を大きく見開いた鼻の長い不気味な老人がいた。

「だ、だれ？　ここはどこ？」

目を覚ました少年〝八雲〟は自分のおかれた状況が分からず困惑する。しかし、テーブルをはさんで向かいに座る老人は楽しそうに笑いながら口を開いた。

「ほっほっほ、失礼、申し遅れました。私の名は、イゴール。……お初にお目にかかります。こちらはエリザベスにテオドア。同じくここの住人だ」

イゴールという老人がそう説明すると、いつの間にか老人の後ろに控えていた二人が一歩前に出て八雲に挨拶をしてくる。

「エリザベスでございます。お見知り置きを」

「テオドアと申します。テオとお呼びください」

エレベーターガールとベルボーイを思わせる青い服を着た二人が、丁寧に身体を折って礼をするのを見て八雲はいくらか冷静になる。

というのも、二人もどこか人間らしからぬ雰囲気を纏ってはいるのだが、異国人風の整った容姿がその原因だと思えなくもなかったためだ。

不気味という意味で人間離れしているイゴールと比べると、八雲は二人の方がまだ安心できた。

なので、極力イゴールを直視しないよう気をつけながら、控えている二人の事を見つつ挨拶を返す。

「えっと、ぼくは八雲。数字の８に、空にうかぶ雲で八雲。あの、ここはどこ？」

「ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所……。本来は、何かの形で〝契約〟を果たされた方のみが訪れる部屋でございます。貴方には、近くそうした未来が待ち受けているのやも知れませんな。……いや、どうやら小さくも既に契約を結んでいるようですな」
八雲は数えで七歳の私立月光館学園初等部に通う一年生。
成績はそれなりに優秀で幼いながらも様々な言葉を知っており、契約という言葉の意味も知っている。
だからこそ、そんなものを結んだ覚えがないために頭に疑問符を浮かべながら聞き返した。
「けいやく？」
「左様。お客人にとっては単なる口約束だったのやもしれませんが、それはこのベルベットルームへ訪れるに足るものでした。しかし、お名前と明確な返事をされていなかったようで、鍵をお渡し出来るほどではありません」
静かに答えるイゴールの言葉をゆっくりと三思九思し、自分が結んだという契約が何の事だかを八雲は思い出していく。
名前が不十分で明確な返事をしなかった。その事から考えられるのは、アイギスに力を貸した時の事だ。
確かに共に戦ったのだが、返事をする前にペルソナを召喚して戦いに移った。だから、イゴールの言う契約が不完全なのだろう。
そこまで考えた八雲は顔をあげると、自分から見てイゴールの右後ろに控えているエリザベスに話しかけた。
「じゃあ、ちゃんと何かけいやくしたらここに来ていいの？」
「八雲様がその意思を強くお持ちであれば」
「じゃあ、なにかけいやくする。なにがいい？」
契約の内容を尋ねられたエリザベスは、八雲の子どもらしい物言いと仕草に優しげに目を細める。
八雲の様な子どもがこの部屋に客人として訪れたことはなく。多くの者はビジネスパートナー程度の付き合いしかしようとしない。
だからこそ、八雲の様な純粋で真っ直ぐな存在が、自分のような客人の手伝いをするだけの存在と対等に言葉を交わす事が新鮮に感じ

たのだ。
　そうして、そのままイゴールと視線を僅かに交差させると、エリザベスは分厚い本を持って八雲の元へと進んでゆく。
　近付いてきた自分を相手が眼で追っている事に気付きながら、持っていた本の表紙を捲ると、それを八雲にも見えるようにテーブルの上に置いた。
「契約の内容の元になる部分は、八雲様がご自分でお決めになった方がよろしいかと存じます」
「ぼくが？　じゃあ、やくそくをやぶらないとかでもいいの？」
「そうですね……。では、少々変えさせて頂きまして、『契約を果たすまで死なない』というのはどうでしょうか？」
「よく分かんないけどいいよ」
　返事をした八雲は、エリザベスがどこからか取り出した羽ペンで、署名欄を指差されながら名前を書き始める。
　その客人の横で、柔らかな笑みを浮かべているエリザベスとは対照的に、姉の意図が分からないテオドアはイゴールの横に控えながら僅かに顔をしかめる。
　結んだ契約が不完全でありながら、その契約を果たすまで死ぬ事を認められないという契約。それはある意味で終わりのない呪いとも言えるようなものだ。
　幼い八雲に対し、どうしてそのような契約を結ばせたのかテオドアは理解できなかった。
　そうしているうちに、八雲は署名を終えて羽ペンをエリザベスに返す。署名欄にはその本の洋装に合わせるように『Ｙａｋｕｍｏ　Ｎａｇｉｒｉ』と筆記体のアルファベットで書かれていた。
「……確かに。これで八雲様はこの部屋の客人として正式に認められました」
「うん。でも、ここって何するところなの？」
「ここは力を得たお客人の手伝いをする場でございます。ペルソナという言葉に覚えはおありですかな？」
　イゴールに尋ねられると八雲は頷いて返す。ここにくる直前まで

それを使って戦っていたのだ。
夢だったのかもと少し思ったりもしたが、ここに来て再び同じ言葉を聞いた事で先ほどの戦いが現実であったことを理解する。
しかし、それと同時に自分の両親が死んだ事も思い出してしまった八雲は、悲しさと辛さから目に涙を浮かべる。だが、それは横から伸びてきたエリザベスの細い指によって拭われた。
「ありが、とう……」
「いえ……。八雲様はある戦いで気を失ってここへと辿り着かれたのです。それはあなたのご両親の命が奪われた戦い。八雲様の心情を考えれば、涙を流すのも不思議ではありません。ですが、契約が続く限り私は八雲様の力となりましょう」
「うん」
二人の会話を聞きながらテオドアは先ほどの契約の意図を理解する。
契約が不完全な八雲は偶然にここに辿り着いただけの存在だ。よって、ここから出れば次に訪れる事が出来るかどうか分からない。
それを回避するために拘束力の強い契約を結び、孤独となった八雲と新たな絆を結んだのだ。
「ふむ……」
そんな二人の様子を見ながらイゴールは少し考える。
幼い事に加え、八雲の精神状態を考えるのであれば今無理に説明しても意味がないだろう。
それならば、現実世界にある肉体が目覚めた後、再びここを訪れたときにでも説明した方がよっぽど効率的だ。さらに、滞在中に予備知識をつけておけば理解も早く済む。
そんな風に考えをまとめると、イゴールは口を開いた。
「エリザベス、今後も続けてお客人の担当はお前がしなさい。現実のお客様が覚醒するまでの間に、力の制御法やシャドウやペルソナに関する知識。それらをお客人に説明することもお前に任せる。ベルベットルームと我々の役割については、再びお客人がここを訪れたときにするとしよう」

「承知いたしました。では、今日はお疲れでしょうから、八雲様を寝室へとご案内いたします。テオ、八雲様が着られる大きさの服を私の部屋へ持ってくるように」
「分かりました」
「では、行きましょう。ご案内いたします」
言いながらテーブルに置いていた分厚い本を右わきに抱えると、椅子から立ち上がった八雲の手をとってエリザベスは扉の一つを潜りベルベットルームから出て行った。
それを見送ったテオドアも直ぐに別の扉へと向かうと、八雲の着られる服を探しに去っていったのだった。
――エリザベス私室
エリザベスに案内された八雲は、そのまま大きなバスルームへと連れられエリザベスと共に入浴を済ませた。
そこからバスローブを着てある一室に通されると、テオドアの持ってきておいたらしい服に着替えさせられた。
これといって学校の制服に思い入れはないので気にしないが、寝巻用の着替えが床に着く長さのローブであったことは少々面倒そうにする八雲。
しかし、バスローブを脱いで新しい下着を身に付けると、エリザベスもゆったりとしたピンクのワンピースタイプのパジャマに着替えていたので、素直に着替えると一緒にベッドに入った。
「ねえ、ペルソナってなに？」
「ペルソナとは自身のシャドウを制御することよって得られる人格の鎧。端的に申しますと具現化した心の力、もう一人の自分と言ったところでしょうか」
部屋の灯りを消し、ベッドランプだけ点けた状態で会話をする二人。
初めての戦闘をしたことで疲労している筈なのだが、一向に疲れた様子を見せない八雲を不思議に思いつつエリザベスは質問に答える。
すると、八雲はエリザベスの方を向きながら質問を続ける。
「じゃあ、シャドウは？」

「人から抜け出た無意識の精神の化生。制御下に置かれたペルソナとは逆に、シャドウは人々が心の奥底に持っている本能で動きます。中には知能の発達した個体もおりますが、多くは獣のような行動を取るものばかりでございます」
「でも、ぼくが戦ったあいつはすごく頭がよくてつよかったよ？」
「あれは特殊な存在ですから。シャドウらの母たる存在に最も近い、言わばシャドウの王と言えるでしょう」
　不安げな表情で尋ねてくる八雲の頭を撫でながらエリザベスが続けると、それを聞いた八雲は初めての戦いがそんな相手だったのならば、良く分からないまでも生き残った自分は大したものだと思っていた。
　倒せなければ人類が滅ぶとアイギスが言っていたということは、自分が生きているのが倒せた事の証明になる。ならば、もうあんな事は起きないだろうと安心してエリザベスへの質問を続けた。
「エリザベスって何のおしごとしてるの？」
「我が主の補佐と訪れたお客様のお手伝いをしております。今の私はさしずめ八雲様の教育係と言ったところでしょうか」
「じゃあ、エリザベスはセンセーなんだね。いっぱいふしぎな事しってるし、すごいね」
「フフッ……。いずれあなたは私などでは到底及ばぬ程の力を手にするでしょう。ですが、そうなった後も変わらず接して頂けると幸いでございます」
　優しげな笑みを浮かべると、エリザベスは八雲を寝かせランプの灯りを消した。
　そうして、そのまま二人は眠りについたのだった。

＊＊＊

二日目
――大部屋
目を覚ました八雲は洗面所に案内されて着替えると、身嗜みを整え

てエリザベスについて行った。
そして、いくつもの扉の中から一つを選び潜ると、そこは体育館ほどもある大きな部屋だった。
扉の先の空間がとてつもない広さであった事に驚いている八雲が部屋の中を見渡していると、部屋の中央にいたテオドアが二人がやってきた事に気付き近付いてくる。
そのまま目の前までやってくると、丁寧にお辞儀をしてから話しかけてきた。
「おはようございます。昨夜はよく眠れましたか？」
「うん。テオはなにやってたの？」
「私は姉上に言われて、八雲様の訓練に使う的を用意しておりました」
振り返りながら自身が先ほどまでいた場所を指差すと、確かにそこには丸太のような物が数本立っていた。
ばらばらの間隔で、丸太自体の太さと高さも一定ではない様子。確かに的として狙うのならば、こちらの方が効果的だろうと八雲も思った。
「けど、なにであれをねらうの？　それにくんれんって」
「八雲様にはペルソナの制御を覚えて頂きます。既に実戦を経験しておられるのであれば、何も難しい事は御座いません。ペルソナを呼び出し、思い通りにコントロール出来るようになれば、再び戦う事になっても身を守ることが出来ますから」
持っていた分厚い本を開きながらエリザベスが答えると、八雲も表情を引き締め、真剣な物へと変えた。
両親はもういない。それは自分に力が無かったからだ。しかし、今はもう守るための、戦うための力を持っている。
二度と大切な物を奪われないためなら、八雲はどれだけきつい訓練だろうと受けてやろうと思った。
「では先ず、ペルソナを呼び出してください……おや？」
「どうしたの？」
「八雲様のペルソナ全書に他のペルソナが……既にワイルドの力が覚醒している？」

エリザベスが持っていた本の名前はペルソナ全書。八雲に目覚めたペルソナを記録しておくための、言わば八雲専用のペルソナ図鑑。
確認されている全てのペルソナが描かれているが、八雲が目覚めたペルソナは白黒からカラーに変化するようになっている。
しかし、今はまだ力に覚醒しただけで、他のペルソナを得ている筈がないのだが、エリザベスの持っている本にはオルフェウス以外にもカラーで描かれているペルソナがいた。
もし描かれているペルソナが既に八雲に宿っているのであれば、教えることが変わってくる。
ペルソナは心の具現化であるため、本人のパーソナリティと同じく一人につき一体というのが基本だ。
しかし、稀に『ワイルド』という複数のペルソナを自由に付け替えて戦うことが出来る者がいる。
八雲もその力に目覚める可能性があることはベルベットルームの三人とも分かっていたのだが、ペルソナの覚醒、ワイルドの目覚め、それらの時期が予知されていた未来と変わっていることに僅かな疑問を抱いてしまう。
だが、既に目覚めているのであれば、その稀有な能力を活かす方法を教えた方が良いだろう。そう思い、気を取り直すとエリザベスは口を開いた。
「八雲様、いまご自分の中に何体のペルソナを感じますか？」
「え？　えーと……分かんない。さいしょに出したオルフェウスと、他にぼんやりとしたのがなんかいるみたい」
「結構です。では、そのぼんやりとしたものの存在を意識して明確に認識してください」
「わかった」
しっかりと頷くと八雲は目を閉じて集中し始める。
ワイルドの能力であるペルソナの切り替えとは、精神の切り替えと同義。
心理学におけるペルソナのように状況に応じて仮面を使い分ける能力だが、幼く精神の未熟な八雲にはそれが出来ない。

八雲は両親だろうが友人だろうが同じように接していた。それはアイギスやベルベットルームの住人に対しても同じで、基本的に同じ自分で接してしまうのだ。
しかし、ペルソナは人に対してのものだけではない。家での自分、学校での自分、仕事での自分など置かれた環境ごとにもペルソナは存在する。
集中を始めた八雲の周りに薄い水色の光が集まり始めると、それが次第に色を変えていく。
「こい――――タナトス！」
色が濁り、全てを塗り潰す黒へと変わった時、瞳を開いた八雲に重なるように具現化した存在が背後から浮き上がった。
それは鎖で連なった棺桶を背負い、獣を思わせる形をした髑髏の仮面を被った死の神。
今の八雲が制御できるレベルの存在ではないのだが、八雲は落ち着いた表情で宙に浮いていた。
それを近くで見ていたテオドアは思わず呟いた。
「……あなたはペルソナで宙に浮かぶことが出来るのですね」
「え？　あ、ほんとうだ。すごいね、タナトスの能力？」
「いえ、それは召喚方法の付与効果でございます。名称は特にございませんが、通常よりも高い同調率で召喚した場合そのような現象が起きるのです」
テオドアと違い、八雲の召喚方法に覚えのあったエリザベスが手を貸して八雲を地面に降ろしながら説明する。
それを感心ながら聞いていた八雲は現れた黒い死神を見て、どこか先日戦ったシャドウに似ていると感じていた。
雰囲気、持っている剣、顔を覆う仮面など共通点が多い。
しかし、シャドウの様な嫌な気配がないので、オルフェウスの胴体がどこかアイギスに似ていた事も含めて、今回呼び出したタナトスがシャドウに似ていることも偶然そうなのだろうと納得する事にした。
「高い同調率の為、通常よりも強い力を振るうことが出来ますが、その分ペルソナの受けたダメージがより多く返ってしまいます。ですの

で、このようなカードによる召喚にした方が宜しいでしょう」
　そういってエリザベスはペルソナ全書の上にカードを浮かび上がらせると、本を閉じることで、パキィンッという音をさせてカードを砕きペルソナを召喚した。
　小さな妖精型のペルソナ恋愛〝ピクシー〟は現れると、八雲のまわりを飛び始める。
　それに触れようと手を伸ばすと、ピクシーも近寄り八雲の指を両手で包み握手の様に手を振った。
「ふふっ、こんな小さなペルソナもいるんだね」
「ピクシーはペルソナの中でもかなり小型の部類でございます。大きいものですと、そのタナトスの倍以上のものもおります」
「そうなんだ。えーっと、カードを出して、壊すっと」
　話を聞きながら八雲はエリザベスの真似をして召喚を試みる。
　いまだカードの出し方すら教えていないにもかかわらず、八雲は愚者のカードを出現させるとそれを握るように砕き、愚者〝オルフェウス〟を呼び出した。
「エリザベス、ぼくもできたよ」
「二体同時召喚……それも一体は同調状態だというのに……。八雲様、その召喚は他者に見せてはなりません。我々の前以外ではカードによる召喚で、呼び出すのは一体のみにしてください」
「どうして？」
「それはあなたが特別だから出来る事なのです。しかし、それを悪用しようとする者もいます。ですから、いらぬ危険に晒されぬよう注意するに越したことはありません」
　そう言われてしまうと八雲も言う事を聞くしかないとタナトスを解除し、オルフェウスのみ呼び出したままにする。
「つぎは、なにをすればいいの？」
「ペルソナの切り替えをしましょう。オルフェウスを一度戻し、直ぐにタナトスに切り替えてください。そして、呼び出せたら再びオルフェウスと何度も練習いたしましょう」
「うん」

言われた通りにオルフェウスを戻すと、直ぐに死神のカードを出して握り潰す八雲。
そして、タナトスが顕現すると再び消して、すぐに愚者のカードを取り出し、何度も出しては切り替えるという行為を繰り返した。
その訓練を傍らで見守りながらエリザベスは八雲のペルソナ全書を見て考え込んでいた。
よくあるテレビゲームのように明確に実力が数値化出来る訳ではないが、今の八雲はただの子どもであり、仮にレベルをつけるとしたら1～5程度と言える。
しかし、八雲の召喚したタナトスは死の具現化というだけあって、かなり熟練した者でないとコントロールできない潜在能力を有している。
通常、自分の実力以上のペルソナを呼べば召喚失敗か、コントロールできずに取り殺される。
だというのに、八雲には暴走すら起きていないことが不思議でならず、エリザベスも原因を突き止めようと考えているのだが、明確にこれだと思えるものはなかった。
「ふう……」
「どうかされましたか、姉上？」
「いえ、少々、八雲様の能力に疑問が浮かんだものですから」
姉が難しい表情で溜め息を吐くなど珍しいと心配で声をかけてみたのだが、悩みの種を聞いてテオドアも納得した。
確かに八雲の力は他のペルソナ使いとはかなり違っている。二度目にしてはあり得ない召喚方法、得ている筈のない二体目のペルソナ、易々と同時に召喚するなど規格外にも程があった。
しかし、だからと言って本人に何か問題があるようにも見えない。
今も言われた通り、何度も愚者と死神のペルソナを付け替えているし。そもそも、同時召喚が可能なのであれば、付け替えるというよりは混在する意識のうちの該当する一部だけを表層意識としてあげるような感覚と思った方が近いかもしれない。
そう思ったからこそ、テオドアはエリザベスほど八雲の能力につい

て疑問や異常性を感じていなかった。
「確かに少々特殊な力の発現の仕方をしておりますが、私にはそれほど異常には思えません。現に今も何度もペルソナを付け替えれていますし」
「……何故、自身の実力以上のペルソナが扱えないかを理解していないのですか？　ペルソナは心の力。故に、本人の持つ身体的、精神的な力と密接に関係しています。その制限を超えて力を行使出来ている時点で、八雲様は精神に何か異常をきたしているのですよ」
「っ、では、その原因が消えれば力の制御を失う可能性も？」
「それは分かりませんが……」
　エリザベスの説明を受けてテオドアも理解する。
　自分たち力の管理者のペルソナ全書に記された存在を呼び出す召喚と違い、八雲は自分の心の仮面を付け替えての召喚だ。
　心や精神状態を簡単にコントロールできないように、心の具現化たるペルソナも制御にはそれ相応の技量が必要になってくる。
　それを無視してペルソナを使役できるというのは、八雲がその年齢ではあり得ぬほど精神が完成しているか。または精神が何かによって変質している可能性があるという事だ。
　どこもおかしいように見えないからこそ、余計にその異常がどこに生じているのか分からない。
　ただでさえ人間の精神などブラックボックスであるというのに、強力な能力を持っていながらそれがいつ暴走するかも分からないなど厄介な事この上なかった。
「エリザベス、もうなれてきたんだけど、次はなにすればいいの？」
「そうですね。今回は精神のみでお越しのようなので、肉体が現実にある以上は鍛錬しても仕方がないですし。肉体の鍛錬は夢を通じて来られた際にするとして、次はペルソナやシャドウについての知識を身につけるといたしましょう」
　言いながらエリザベスは全書のオルフェウスのページを開き、そのまま八雲に見えるように本を向ける。
　そこには八雲のオルフェウスの覚えているスキル、耐性や弱点など

について詳しく載っていた。
　そして、エリザベスはその耐性や弱点の欄を指差しながら説明する。
「この弱点や耐性というのは、ペルソナやそのペルソナを装備している者へのダメージに関わってくる項目です。空欄は通常ダメージ、耐性は小ダメージ、弱点は大ダメージを受けます。また、無効・反射・吸収というのもありまして、無効は一切効かず、反射は魔法壁で相手に攻撃を返す効果となっており、吸収は敵の攻撃を魔法壁でエネルギー変換し取り込むことで回復することが出来ます」
「じゃあ、オルフェウスは電気と闇によわいんだね」
「ええ。しかし、注意する点がございまして、仮に火炎無効のペルソナを着けていても魔法由来の炎以外では効いてしまいます。例えばオルフェウスのアギで火事が起きたとして、この場合ですと元がアギという魔法なので火炎無効のペルソナを装備していれば炎を一切恐れる必要はございません。ですが、マッチの火で起こった火事ですと魔法由来ではありませんので、無効も反射も効かないということになります」
　同じように魔法の雷ならば無効や反射で防げるが、単純に自然現象の落雷や電線に触れての感電であれば死んでしまうといってエリザベスは本を閉じた。
　それを聞いた八雲は聞いた事を自分の中でゆっくりと整理していく。
　項目には物理に関する欄もあり、斬・打・貫の三種となっていた。物理に魔法由来などあるのかと思ったが、ペルソナの攻撃がその判定に関係するかもしれないと納得する事にした。
　そして、魔法由来かどうか見分ける方法は、実際に耐性などを持っているペルソナを装備して触れてみるしかないのだろうかと少し考え込む。
「……もしふつうの火で火事になったとして、それをペルソナのまほうの火で上書きすればだいじょうぶになるの？」
「そうですね。実際に試した者がいないため不明ですが、スキルで炎

を放ち続けて身を守っていれば、通常の炎も効かなくなる可能性は大いにあります」
八雲の質問に答えるテオドアはどこか苦笑気味にそう返す。
通常の火を魔法の火で上書きして防ぐなど子どもが思いつく事ではない。発想の柔軟さこそ子供らしいと思えるが、どこか目の前にいる子どもは人と違っていると感じたのだ。
それは傍らで同じように聞いていたエリザベスも同様で、答えを聞いて嬉しそうに頷いている子供らしい表情と思考に大きなズレを感じる。だからこそ、いまここでその内面を知っておきたい。
八雲に起きている精神の異常、それが何であるのかを全く理解できないまま現実に帰しては、今後ベルベットルームの住人として万全なサポートをしていけないと思ったからだ。
「……八雲様、あなたは争い事が恐ろしいと思えますか？」
「あらそいごと？　たたかいとか、ケンカとか？」
「そうです」
「んー……あんまりこわくないかも。痛いのはイヤだけど、たたかわないと守れないものもあるって分かったから。たぶん、これからはボクも守るためなら力をつかうとおもう」
エリザベスは、最も高い可能性として脳が恐怖を感じなくなっているかと思い尋ねてみたのだが、その答えから得られた情報は似て非なるものだった。
八雲は恐怖を感じない訳ではない。自身や己にとって大切な物を守る事に強い執着を持ち、守る際には危険から遠ざけるのではなく、その根源を自ら断つと考えるようになっていたのだ。
両親を失った直後に守ることが出来る力を得たことがそうなった原因だろう。
なぜ自分は両親が死ぬ前にこの力を発現出来なかったのかと己を責めている。その心の傷が力の根源であり、同時に八雲の隠れた攻撃性を表に出していた。
八雲の精神の異常の一端を理解したエリザベスは暫し考える。客人である八雲をどうすれば正しく導けるのかを。

「……難しいものですね。私には八雲様を導く方法が思いつきません。こんな時には己の人ならざる身が恨めしく思います。私が同じ人間であればかける言葉の一つでも思い浮かぶでしょうに。ですから、私は祈ります。八雲様の御心を救ってくださる方が現れる事を」
「なんのこと？」
「今は分からずとも構いません。ですが、その力は心の鎧。鎧とは守るためのものです。ですから、本当に大切な物を守るためにのみ力をお使いください。壊すのではなく、守るために」
悲しげな顔でそう告げてくるエリザベスの言葉を聞き終わると、八雲は急な眠気に襲われた。何故だかは分からない。しかし、立っている事も出来ず、八雲はエリザベスに支えられながら意識を失ったのだった。

第三話　エルゴ研

２０００年３月２０日（月）
深夜――病室
ベルベットルームで急激な眠気に襲われた八雲は、気付くとどこか知らない部屋のベッドにいた。
身体が上手く動かず、なんとか身体を起こし、壁にもたれ掛って座る形で辺りを見ると、急な眩暈に襲われる。
「うっ……え？　なんだ、これ？」
眩暈から顔に手を当て、眩暈がマシになってから再び周囲に目を向けて八雲は驚く。
確かに、さっきまでここはただの病室だった。しかし、再び見ると壁や天井、ベッドに窓を覆うように掛かるカーテンにまでよく分からない黒い線の様なものが引かれていた。
それは八雲自身の身体にもあり、何かは理解できないが嫌な気配を感じた。
「おんやぁ？　物音が聞こえたと思ったら、まーさか目を覚ましていたとは。くっふっふ、グッドモーニング、少年。随分と寝ていましたが気分はいかーがですか？」
「だれ？」
急に隣から聞こえていた声に反応すると、見えていた線が消えた。
一体何だったのだろうと思いつつ、声の主に聞き返すと声の主である白衣を着た男がベッドに近付いてきた。
身長はおよそ一七五センチ程度でかなりの細身、年の頃は三十半ばのようだが白髪まじりの長髪をゴムで一つに束ね、分厚いレンズのはまった眼鏡をかけている。そんな風貌の男は、白衣のポケットに手を入れながら八雲を眺めると口を開いた。
「私の名前は飛騨（ひだ）。君の身柄を預かっている者とでもいいますか。九月にムーンライトブリッジで保護された君は実に半年もの間眠り続けていたのですよ？」
「半年？　そんなはず……」

「まぁ、信じられないのも無理はありません。でーすが、君のその身体がそれを真実だと証明しています。見てみなさい、半年で衰えきったその筋肉を」
言われて八雲は絶句した。平均的だった自分の身体はいまや見る影もなく、骨の上に最低限の肉がついている程度とガリガリに痩せこけていた。
先ほど起き上がるのも一苦労だった理由も理解した。
自分は飛騨の言う通り、半年の間眠り続け身体を動かすための筋肉が完全になくなってしまっていたのだ。
どうして、そんな風になったのかが分からないと八雲は考え込む。
自分はシャドウと戦って直ぐにベルベットルームという不思議な場所にいたはず。
そこにいたのはせいぜいが二日にも満たない程度。
あの急な眠気で意識を失ってから半年が経過したのか？
そう考えて直ぐに違うと否定する。何故なら、エリザベスたちが気になる事を言っていたから。
彼女らは現実の自分は寝ていると言っていた。つまり、自分は精神だけベルベットルームに言っていたのかもしれない。
そんな風にあり得ないと思いつつも、既にペルソナやシャドウ、影時間と言った非日常を体験していた八雲は納得する事にした。
「それで、ここはどこなの？」
「桐条グループのラボですよ。通称、エルゴ研と呼ばれていますが、まあ、覚える必要はないでしょう。それより、君は倒れる直前の事を覚えていますか？　そう、ムーンライトブリッジでの出来事を」
「……聞いてどうするの？」
古臭い瓶底メガネのようなものをつけているせいで、飛騨の目は見えない。
だが、表情だけでなく全身から好奇心を滲ませて笑みを浮かべていることから、八雲は冷たい瞳で返した。
しかし、筋肉が衰え自分で立つ事もできない子供がいくら冷たい視線を送ってこようが怖いはずもなく、飛騨はにやにやとしたまま答え

る。
「たーんなる、好奇心ですよ。君はアイギスに抱かれた状態で発見された、どこの誰とも分からぬアンノウンです。しっかーし、アイギスのメモリーを解析すると、データの大半が破損していながらもシャドウと戦う君の姿が映っていました。そう、君は影時間に自然に適合し、ペルソナを扱える……違いますか？」
「映像がのこってたなら分かってるくせに」
「んっふっふ、研究者としては本人の話も貴重なデータとして聞いておきたいのですよ。まぁ、それはそれとして、目を覚ましたのなら君がこれから過ごす場所へと移動しましょう」
言いながら飛騨はベッドから離れると、入り口の傍にあった畳まれた車椅子を使えるよう広げ、ベッドまで押してきた。
そして、それをぼんやりと見つめていた八雲を抱え上げると、椅子に座らせ、かけていたタオルケットも膝に乗せる。
飛騨という人間は、胡散臭い風貌に話し方や人柄自体もかなり特殊な人間のようだが、子供である八雲に細かい気遣いをしている。そのことから、根は悪い人間ではないように八雲は感じていた。
――ラボ内廊下
車椅子を押されながら八雲はラボの廊下を進んでいく。
途中で見える部屋の中には白衣を着た大人たちが何かの薬の様なものを研究していたり。苦しそうにしている子供を見ていたりした。
子供がどれだけ苦しそうにしていても、周りにいる大人たちは計器類を確認しながら手元の紙に何かを記入するだけで助けようとはしていなかった。
あれだけの大人がいるのであれば、一人くらいは助けようとしていいはず。自分にはなにも出来なくとも、医者を呼ぶことくらいは出来るだろう。
しかし、誰一人としてそれをしない。ということは、あれは分かっていて助ける気が無いということだ。
それを見ていた八雲は怒りから筋力の弱った拳を自然と握りしめていた。

「……気になりますか？　まぁ、見ていれば分かったでしょうが、ここは非人道的な研究もしています。むしろ、現在の主な研究はまさにそれです」
「あれだけの大人がいて、子どもを苦しめるのがふつうなの？」
「耳が痛いですねぇ。現在進められているプロジェクトは『人工ペルソナ使い』を生み出す研究です。施設にいた子や身寄りのない子を百人程度集め、八つの研究室に分かれさせています。各研究室よって専門が違いますが、投薬や精神操作、また危機的状況に追い込む事でペルソナの発現を促しているのですよ。先ほどの子供もそうです」
　軽蔑した目で見られても飛騨は気にした様子もなく奥へと進みながら答える。
　しかし、対照的に八雲の怒りは増していた。
　研究するに至った原因は知らない。けれど、人工的にペルソナを発現させるというのは、きっとシャドウと戦う戦力が必要だからだ。
　自分やエリザベスは簡単に召喚していたが、それでも召喚までに多少の集中を要した。
　だというのに、ここではその集中を阻害しながらペルソナを呼び出させようとする。目的を達成する手段としてはあまりに間違えていた。
「あんなので呼べるはずがない。ペルソナは集中しないと呼びだせない」
「たーしかに、ペルソナの召喚には精神状態が強く影響します。で・す・が！　普通の人間は集中したからと言って召喚できる物ではないのですよ。くふふ、君は集中するだけで召喚出来たのですね。素晴らしい、素晴らしいです。君が目覚めるのを待った甲斐がありました」
　保護した人間が目を覚まさない事を心配していたという訳ではないだろう。
　どちらかと言えば、自分もこのエルゴ研とやらで研究材料として扱われる方が可能性は高い。
　そう考えつつ、八雲は情報を得ようと飛騨に聞き返した。
「目がさめるのを待った？　何のために？」

「君は貴重な自然適合型且つ天然のペルソナ使いですからねぇ。室長らは誰もが君を自分の研究室に所属させたがった。しっかーし、君は一向に目を覚まさない。その間に人々の興味は失われていき、この私の第八研究室の所属にする事が出来たのです」
「じゃあ、飛騨さんも室長なの？」
「ええ、言った通り第八研究室は私の研究室です。といっても、所属しているのは私と君、それから女の子が一人です。最初は五人の子供が配属されたのですが、残念な事に自分のペルソナを制御出来なかった者、タルタロスというシャドウの巣の探索中にシャドウに襲われた者たちは死んでしまい。今は一人しか残っていません」
自分たちの研究に巻き込んで殺したくせになにを言っているんだと八雲は内心憤る。
だが、飛騨の声色と覗き見た表情からは本当に子供の死を悲しんでいる様子が伺えた。
それらと、先ほども自分を気遣いながら車椅子に乗せていたこともあり、他の研究員よりは正常な神経を持ち合わせているのかも知れない。
そう思う事で、八雲は何も言わずに第八研究室と書かれたプレートの部屋へと入った。
――第八研究室
ドアを潜るとそこには何かの研究をしているらしい、様々な機械類が並んでいた。
飛騨は八雲の車椅子をテーブルまで運ぶと、自分は席を離れて奥の部屋へと入っていった。
その間に八雲は顔をあげて辺りを見渡す。
第八研究室長と書かれたプレートの置いてある執務机、その前に置いてある客用のテーブルとソファー。機械だらけの研究室らしい部屋の内装には恐ろしく似合っておらず、そのギャップから異様な雰囲気となっている。
機械類は今も稼働しており、色とりどりのランプが点滅していた。
そうして、少しの間部屋の中を見ていると、奥の方から足音が聞こ

え飛騨が戻ってきた。
「お待たせしました。彼女が先ほど言っていたもう一人のうちのメンバーです。被験体番号なんてものもありますが、あんなものは人間に付けるものではありません。そう言う訳で、私は少女と呼んでいます。ちなみに君は少年ですよ。さぁ、新しいメンバーに挨拶しなさい」
「……誰？　へんなの、骨みたい」
「そーんな失礼な事を言ってはいけませんよ。彼がいなければ私たちはいまここにいなかったかも知れないのですから。それに……なんと、彼は私がずっと探し求めていた自然適合型天然ペルソナ使いなのです。これで君の能力を安定させる方法が見つかるかもしれませんねぇ」
奥から連れて来られたのは八雲と同じ年頃の茶髪の少女。
無愛想な表情のその瞳で、半年寝たきりでやせ細った八雲を怪訝そうに見ていた。
一方で八雲も相手の少女を観察する。
目測だが、同じ年頃という事で男の自分の方が背は高い。無愛想で気だるげな表情をしてはいるが、整った顔立ちをしており素直に可愛いと思った。
「でーは、私は飲み物を持ってきます。その間に自己紹介を済ませておきなさい」
そう言って飛騨が奥へと戻っていくと、茶髪の少女はソファーまでやってきてボフっと音をさせながら乱暴に座った。
八雲はそれを眺めていたのだが、自分が見られている事に気付いた少女が睨むように見ながら口を開く。
「なに？　なんかよう？」
「え？　いや、別に。ああ、ぼくは八雲。君の名前は？」
「名前？　チドリだけど……。ねぇ、なんでそんな弱そうなのにここにいるの？」
「なんでって言われても……」
聞かれた八雲は思わず返答に困る。そもそも、ここにいるのは自分

の意思ではない。気付いたらここにいて、尚且つ半年も寝ていたという衝撃の展開だったのだ。
　自分としては戦闘後は直ぐにベルベットルームでペルソナの呼び出しの練習などをしていたため、その空白の半年の記憶が無い。
　だから、その間の物事についてこの第八研で理解しているのは飛騨しかいないのだ。
「えっと、ぼくは半年間いしきを失ってたらしくて、さっき目をさましたばっかりなんだ。だから、ここにいる理由もよく分かってないんだよ。君はどうしているの？」
「しせつからこっちに来るように言われたから。前にいたことところもあんまり良いところじゃなかったから、大してかわらないけど」
「実験とかされてるのに？」
「ここはとくべつな力を持ったペルソナを使えるやつが集められてるの。だから、他とは少しちがうのよ」
　確かに他の場所では今も何かの研究の様な物をしていたが、チドリと名乗る少女は奥の部屋から出てきただけで暇そうにしている。
　鼻歌でベートーヴェンの交響曲第九番を歌いながらトレイに飲み物を持って戻ってきた飛騨がコップを置くと、ストローに口をつけて飲んでいて、至って特別そうには見えない。
　ならば、本当にこの飛騨という男と、その男の管理する第八研だけは特殊な立ち位置なのかもしれないと思った。
　そうして、八雲も自分の前に置かれたコップをよろよろしながら掴むと、ストローでコップに注がれたジュースを吸った。
「っ!?　ごほっ、ごほっ!!」
「おっと、半年間食事をしていなかったことを忘れていました。急に冷たい物を飲んで身体が驚いてしまったようですね」
「そんな身体でここにいるの？　ごはんも食べれないんじゃ直ぐに死ぬわよ」
「分かっていますよ。でーすから、少年には自分で歩ける程度にはなってもらうため、起きたら直ぐに始められるようリハビリのメニューを組んでいます。まぁ、そっちは私ではなく、病院のリハビリ

科に連れて行って看護師にしてもらうんですがね」
ジュースを飲んだ瞬間にむせて濡れた八雲をタオルで拭きながら飛騨はチドリに答える。
それを聞いていた八雲は自分の身体の衰え具合に驚きながら、そのリハビリとやらを始め、一刻も早く元の身体に戻りたいと思っていた。
シャドウとの戦いの日までの八雲の運動能力は同学年の者よりも頭二つほど飛びぬけ、足の速さで言えば高学年のトップクラスの者らと並ぶほどであった。
本人にしてみれば、注目される事も多かったが、特殊な家の事情を考えれば別段驚くことでもなかった。
だが、それでも飲み物すらまともに飲めないほど弱っている事がとにかく悔しい。
そして、両親が死に、自分は衰えきった状態で訳の分からない研究施設にいる。その原因を作った者らへの怒りが胸の中で黒く渦巻いていた。
「おやおや、感情が昂っていますねえ。もしや、その状態でもペルソナを召喚出来たりします？」
「出来ても、お前らには見せない。あんたが他の大人よりはマトモなのは分かった。だけど、子どもをわけの分からないことにまきこんで殺してる。そんなやつらには何もきょうりょくしない。見せるとしたら、お前らを殺すか脅すかするときだ」
むせた事で苦しそうにしながらも、瞳に怒りと憎悪を宿らせる八雲に睨まれても飛騨は全く動じていなかった。
そして、冷たいジュースではなく薄っすらと湯気を立てている半透明な物を用意しながら、楽しげに答える。
「んっふっふー、嫌われてしまいましたねぇ。で・す・が、別に無理に召喚させる気はないので安心してください。科学は人の役に立つべきなのです。でーすから、私もここで人の役に立つ物を研究している。それで人を殺しては本末転倒という訳ですよ」
「じゃあ、ここにいた子どもが死んだのも自分とはかんけいないって

いうの？」
「……いいえ、彼らが死んだのは間違いなく私の責任ですよ。まずはじめに言っておきますと、彼女や他の人工ペルソナ使いも自身のペルソナを制御できません。いまは普通にしていますが、定期的に制御剤を投与しなければ暴走したペルソナに自分を殺されてしまうのです」
その言葉に驚き思わずチドリを見る八雲。だが、話に出た本人は気にした様子もなくテーブルに出されたクッキーを食べていた。
飛騨は追加のお菓子をチドリの前に置くと、八雲に新たな飲み物を渡し、自分も席について続きを話す。
「しかし、制御剤はまだ開発段階のモノ。副作用も命を縮めるほど強く。なにより持続時間が短くて使う者によって効き目が違うのです。亡くなった彼らも、疲労からか効き目が薄く、緊急コールが鳴ってすぐに駆けつけたのですが、部屋に着いたときには首の骨を折られて死んでいました」
「……けど、それはちゃんとしたクスリが出来てないことが問題じゃないでしょ。それよりも先に、かってにペルソナにめざめさせたのが問題なんだ」
「……その通りです。君がアイギスと共にデスを倒してくれたために世界は滅びを免れた。しかし、あの日から毎夜０時になると影時間という特殊な時間が生まれるようになりました。そして、月光館学園という場所が影時間の間だけシャドウたちの巣である滅びの塔〝タルタロス〟になるようになったのです」
話を一度区切った飛騨はコーヒーに口をつける。対して、話を聞いていた八雲は自分が通っていた学校にそんな事が起こっていたと知らず、表情には出さないよう気を付けながら驚いていた。
影時間という不思議な時間については分かっている。アイギスと戦った時間がそれで、ベルベットルームでも少し説明を受けた。
しかし、シャドウの巣であるタルタロスとは何だと疑問に思う。
シャドウとは人から心の一部が抜け出たことで生まれる化け物だ。そんな存在が巣という概念を持つ筈がない。
ならば、一体何があって種という括りを持たない別固体同士である

シャドウが一ヶ所に集まるのか。
　そんな疑問が浮かんだ八雲だったが、実際に行ってみなければ分からないとして話を再び聞くことにした。
「我々は突如現れるようになったタルタロスの探索を始めました。ですが、そこはシャドウたちの巣。通常兵器が効かない相手に我々は為す術がありません。そこで持ちあがったプランがこの人工ペルソナ使いを生み出す事だったのです」
「アイギスは？　かのじょみたいなペルソナを使えるロボットが何体もいれば子どもよりも強いんじゃないの？」
「アイギスは損傷が激しく現在も慎重に修理中です。そして、彼女の他にも確かに対シャドウ兵装シリーズの機体は開発されていました。ですが、そこで君の存在が上がったのです。影時間に対する適性を持っている子どもはペルソナに目覚めやすい。そして、そのペルソナは対シャドウ兵装のものよりも強力だとね」
「そんな……」
　まさか、人工ペルソナ使いを生み出すという悪魔の実験の発端に自分が関係しているとは思っていなかった。
　アイギスが言うには、自分は両親も同じように影時間に適性を持っていたから高い適性を持っていたに過ぎない。よって、ペルソナについても自分というよりも両親から受け継いだ高い適性による恩恵である可能性が高い。
　それを両親も適性持ちであったことを知らない研究者は、勝手に自然適合型の子どもはペルソナの素養があると勘違いして実験を進めてしまったのだ。
「……ぼくは両親もてきせいを持ってたからペルソナを使えたんだ。それを調べもしないで始めるなんて」
「っ、両親も自然適合者だった？　何たる失態！　アイギスのメモリーからどーうして、その情報を得られなかったのでしょう！」
　急に立ち上がると飛騨は頭をがしがしと掻きながら部屋の中を歩き回る。
　とんでもない過ちを犯してしまったという後悔と、それを事前に防

げたはずの情報が見落とされていたという憤りを顔に浮かべながら、机の上にあった紙に何かを書きなぐる。
　そして、それを千切って白衣のポケットに押し込むと、そのまま電話の受話器をあげ、耳に当てながらダイヤルを押して通話を始めた。
「私です。いーますぐに、各室長並びに副長を第一会議室へ来るように言いなさい。先ほど、エヴィデンスが目覚めました。そして、彼の証言によれば彼は両親も自然適合者であったというのです。そうです。研究の前提が崩れたのですよ。ええ、今すぐにです。通達をお願いしますよ」
　ガチャン、と音を立てながら受話器を下ろし、通話を終えた飛騨を子どもたちはただ見ていた。それに気付いた飛騨は先ほどまでの不機嫌そうな表情をおどけた笑みに変え、話しかけた。
「私は少し用事が出来ました。今日のお茶会はお開きです。ずっと寝ていて眠くないかも知れませんが、私もいつ戻ってこれるか分かりません。ですので、少年を君たちの寝床へ案内します」
　そういって飛騨は車椅子の後ろに回ると、テーブルから離し、そのまま奥の部屋へと向かい始める。
　奥の部屋だと思っていた入り口の先は廊下になっていて、その途中にいくつもの扉があり。資料室に仮眠室、シャワールームにトイレなど普通に生活できるだけの環境が整っていた。
　そうして、一番奥にある扉の前に立つと扉の横のキーを操作して、プシューと音をさせながら扉が開いた。
「ここが君たちの部屋です。ベッドは沢山ありますが、どうせ君たちしか使いません。ですので、好きに使ってください。ああ、トイレと洗面台もありますが、まあ、今の君では自分で歩くことも出来ないでしょうから説明はまた今度ですね」
「ここ、わたしのベッド」
「だ、そうなので、一緒に寝ますか？　それとも、まだ会ったばかりなので離れたベッドに？」
　にやけた飛騨に尋ねられながら八雲は部屋の内装を見渡す。部屋の広さはおよそ十二帖で、入り口から最も離れた壁側に目の字を横に

したように二段ベッドがくっついて三つ並んでいる。
チドリが選んだのはその一番左側の下の段で、洗面所とトイレに近いベッドだったのだが。
それとは別に、縦置きでくっつけるなど何かあった時は不便でしかないというのに、何を考えてこんな配置にしたのだと思いつつ。八雲はチドリの隣のベッドに寝る事にした。
「それじゃあ、となりで」
「わかりました。よいしょっと」
八雲が場所を決めると飛騨は車椅子から抱き上げて、狭い入り口側からゆっくりとベッドに寝かせる。
それを横から柵に肘を置いて見ていたチドリは、寝かせ終わったのを確認すると飛騨よりも先にタオルを取って八雲にかけた。
「……ありがとう」
「べつにいい」
「んっふっふ、そのまま仲良く寝てくださいね。ああ、貴女はお菓子を食べていたのでちゃんと歯を磨くように。それと、緊急呼び出しは扉のところにあるキーで９９＋エンターです。では、お休みなさい」
そういって飛騨は車椅子を壁際に移動させると、電気を消して部屋を出て行った。
後にはチドリと八雲だけが残るが、チドリはベッドから出ると暗闇だというのにぶつからずに洗面所まで行き。電気を付けて口を濯ぐと歯を磨き始めた。
シャコシャコと音をさせながら洗面所を出ると、チドリは八雲のベッドの縁に座って八雲を見つめる。
「あなた、八雲っていうんでしょ？　なんでエヴィデンスって呼ばれてたの？　エヴィデンスってどういういみ？」
「え？　しらないけど、エヴィデンスっていうのは証拠とか根拠って意味の外国語だよ。たぶん、影時間に適性をもった子どもならペルソナを使えるようになりやすいと思ってたみたいだから、そう思うようになった『原因』って意味で呼ばれてたんだと思う」
「ふーん、ヘンなの」

自分から意味を聞いておきながら、チドリは大して興味がないようで立ち上がると洗面所へと戻っていった。
そんな相手を見ながら八雲は一人で考える。自分はエヴィデンスなんて言葉は知らなかった。今日初めて聞いた単語なのだ。
しかし、なぜか直ぐに意味が分かった。加えて、何故だか英語や他の国の言語まである程度理解できる。
時間が経つにつれてそういった知らない筈の知識を思い出し、自分が寝ている間に何かされたのではという疑問が浮かんでいた。
「……学習装置なんて本当にあるのか？　手術したような痕はないみたいだけど、変に頭をいじるくらいなら身体の方をいじって動けるようにしておいてくれたらいいのに」
「なんのはなし？」
「ううん、なんでもない」
シャドウとの戦闘から半年過ぎているのであれば、現在は三月になったばかり。だとすれば、来月には自身は小学校二年に上がる。己の知能が既に小学校低学年のレベルを超えているのを自覚していたが、この少女にそれを話しても不安にさせるだけだ。
そう思ったため、八雲は隣のベッドに寝転がり柵越しに自分を見つめる少女に笑って返した。
だが、相手は自分が何かを隠していると直ぐに分かったようで、表情を少しばかり険しくする。
「半年も寝ててよくふつうに話せるわね。からだがおとろえ、て、る？
って、言ってたけど、それってノドもそうなんじゃないの？」
「っ……そうだね。でも、ここは色んな研究をしているしせつでしょ。それくらい出来るんじゃないかな？」
「そんな一ヶ所だけなんておかしいじゃない。だとしたら、からだだけ何もしなかったのは逃げれないようにするためよ」
八雲はチドリの話を聞き驚いていた。
彼女は『衰える』という言葉もよく知らないようで、やや疑問形に言っていた。そこから考えるに、年相応かそれより僅かに賢しい程度だと思われる。

しかし、今のチドリの読みは実際にあり得る話だと思えた。それは普通の子どもが思いつくような発想ではないが、エルゴ研のしている事を考えれば確かに可能性は高いように思える。
そんな風にチドリの特殊性を認識しつつ、今も柵越しに自身を見つめる相手を見ながら八雲は口を開いた。
「確かにそうだね。けど、もう実際に動けないようになってるし、今はリハビリを頑張るしかないかな」
「ペルソナを安定してよべるなら簡単に逃げれるんじゃないの？」
「逃げてその先は？　近所の病院じゃ直ぐにばれるし、遠くの病院ではボクがもたない。どっちにしろ、少しはここで筋力を戻さないといけないんだよ」
そこまで思考を巡らせてから八雲は再びチドリについて考え始める。
自分も年相応とは言えない発想を度々していたが、チドリもどうやら同じタイプらしく頭の回転がずば抜けている。知識量自体は年相応なことから学習装置を使っている様子は見られない。
だとすると、稀少な能力が目覚めるには、こういった本人の能力の高さが関係しているのかもしれないと八雲は思った。
「……チドリはここは好き？」
「嫌い。つまらないし、痛いことがいっぱいだから。わたしはハカセが担当だからマシだけど、それでもひとりぼっちでこの白い部屋にいるのはいやだった」
「そう。変なこと聞いてゴメンね。僕は死なないから大丈夫だよ。死んではいけないっていう契約が僕を守るから」
最後の言葉だけは相手に聞こえないように呟くと、八雲はそのまま目を閉じて眠りについたのだった。

第四話　室長会議

深夜――エルゴ研・第一会議室

飛騨が研究室をあとにし、八雲とチドリが眠りついた頃。広い部屋に置かれた長机を十三人の大人たちが囲んでいた。

その中には飛騨の姿もあり、少々イラついた様子で腕組みをしている。

直後、静かな音をさせながら扉が自動で開いた。

「遅れてすまない。急な呼び出しだったので、少々時間がかかってしまった」

言いながら新たに部屋に入ってきた男は部屋の中を一通り見渡すと、部屋の奥にある上座の空いている席に腰を下ろした。

それを見て全員が揃った事を確認すると、今まで座っていた飛騨が立ち上がり口を開いた。

「皆さんを集めたのは他でもありません。我々の研究の前提が崩れたことを知らせるためです」

「前提が崩れた？　飛騨室長、もう少し分かりやすく言ってもらえませんか？」

飛騨に言葉を返したのは、腰まで届く長い黒髪を前髪だけシルバーのダッカールで分けている、三十代前半の女性。唯一の女性室長である第四研究室室長の沢永だった。

彼女が室長を務める第四研はペルソナの持つ耐性の強化、耐性の無効化を主な研究テーマとして扱っている。

最近になってペルソナのスキルとしてそう言ったものがあるという可能性が出たため、やっと軌道に乗り始めたというのに飛騨の言葉は聞き捨てならなかった。

「先ほど、半年間眠り続けていたエヴィデンスが目覚めたのです。そして、少しばかり話をしたのですが、彼の高い適性は本人の才能ではなく、自然適合者であった両親から受け継いだものだったと分かりました」

「両親が自然適合者だった？　そんな馬鹿な。世界初の自然適合者が

同時に現れるなんてありえない。それにそれが子どもに受け継がれる事も考えにくいでしょう？」
「しかし、それが現実に起こっていたのですよ。彼の話ではアイギスもその事を確認していたようです。メモリー解析班は、何故、このような大切な事を見逃していたのですか！」
激昂した様子の飛騨は、目の前の机を右手で強く叩く。そして、自身から見て左側に座っている男らを睨みつけるように見やった。
「無茶を言わないで頂きたい。ドクトア・飛騨も見たはずだ、ズィーベンの破損具合をね」
そう答えたのはくすんだ茶髪をオールバックにしている四十前後の外国人の男。対シャドウ兵器についての研究を専門としている第五研究室のトップを務めるヘーガーだった。
ドイツ人であるヘーガーは肩を竦めると、隣に座っていた副長の男にパソコンを操作させる。すると、天井に備え付けられていたプロジェクターが動き、ボロボロな状態で八雲を抱いているアイギスの画像がスライドショーで流れ始めた。
他の者がそれを見ているのを確認しながらヘーガーは続ける。
「御覧の通りズィーベンは中破して機能を停止していました。中身については思考系の一部がショートしていましたし、機能停止しているにも関わらずパピヨンハートからエヴィデンスへと精神エネルギーが送られ続けていました。そのせいでバックアップ用の電源を確保できていなかったのですよ」
「……それで、メモリーの復旧はどの辺りまで済んでいるのですか？」
「正直に言いますと、これ以上の復旧は見込めないでしょうな。エヴィデンスから離してからは、パピヨンハートも沈黙している。ドクトア・幾月にも協力して頂いたが、一切の反応が無いのですよ」
沢永の質問に答えながらヘーガーは机を挟んで向かい側に座っている第二研究室室長である幾月に視線を向けた。
研究室は別だが、幾月も対シャドウ兵器の開発には初期の段階から関わっていた。その幾月までもが同意するということは、アイギスのメモリー復旧と再起動は当分不可能であるということ示している。

あのムーンライトブリッジでの戦闘については桐条関係の人間でも、新たに発足し直されたエルゴ研に所属している者とグループ総帥である桐条武治しか知らない。
同日に起こった大規模な事故で多くの研究者が死亡し、そのトップを務めていた岳羽詠一朗までもが帰らぬ人となった。
しかし、あの日より影時間とタルタロスが毎夜０時に発生するようになり、研究のトップを務める者が死んだところで研究を中断する訳にはいかなくなった。それにより集められたのが、ここに揃っている五人の室長とそれぞれの室長が選んだ副長らだった。
多くは以前からエルゴ研に所属している者が、そのまま以前と同じ研究を続ける形で編成されているが、主任が死んだ事でいくらかの人事変更も行われた。
元々は第一から第八まで研究室は作られていたのだが、現在進められている人工ペルソナ使いを生み出す研究で配属された子ども等が死に、研究を続行できなくなった研究室は他の研究室へと統合された。
その中でいま残っているのは、遅れてきた男、松本がトップを務め解体された研究室を全て統合したため最大規模を誇り総合的に研究を進めている第一研究室。
エルゴ研でも古株であり、現在残っているメンバーでは最もペルソナやシャドウといったものに精通しているといわれる幾月がトップを務める、シャドウに関する研究をしている第二研究室。
ペルソナやシャドウの耐性や弱点の強化や分析について研究している、唯一の女性室長である沢永がトップを務める第四研究室。
アイギスをはじめとした対シャドウ特別制圧兵装シリーズだけでなく、対シャドウ弾など主に対シャドウ兵器関連の研究を進めるヘーガーの第五研究室。
そして、稀少性能力の発現と解析を主に研究している、室長である飛騨のみが所属している第八研究室の計五つ。
一応は各室長同士は専門とする分野が違っているために、権限などは等しくなっている。だが、飛騨という特殊な人間を除き、その研究

室の規模が会議における発言力の強さも表していた。
　故に、最大規模を誇り、研究のためとして最も多くの被験体の子供を殺してきた男、松本は飛騨の方を見ながら口を開いた。
「それで、飛騨博士は先ほどエヴィデンスが目覚めたとおっしゃっていましたが、あれはいまどこに？」
「私の第八研にいますよ。で・す・が、少年は既にうちの所属となっています。なーので、先に言っておきますが、勝手な接触は止めてください」
「ふふふ、困りますなぁ、博士。エヴィデンスは自然適合型の天然ペルソナ使い。それがどれだけ稀少な存在か分かっているでしょう。我々の研究が飛躍的に進歩する可能性を秘めているというのに、研究成果を独占しようとは、貴方は人類がどうなっても良いのですか？」
　目の奥をぎらぎらとさせながら松本が厭らしい笑みを浮かべて尋ねると、他の者たちも飛騨に視線を集める。
　松本が言っているのは本心ではない。むしろ、飛騨に言った事を実際にしたいと思っているのは松本の方であり、それは今までの付き合いから松本という男をある程度理解している全員が分かっている。
　だが、別の研究室に所属している被験体へ勝手に手を出すのは厳重な罰則がつくことになっている。そのため、松本ほどではないにしろ、稀少な存在である八雲を研究したいと思っていた他の者らも自分たちが研究できるようになるのならばと口をはさむ事はしなかった。
　そんな中、部屋中の視線を受ける飛騨は、全員の思惑を理解し、少々うんざりしながら松本に返事をする。
「やれやれ、私の研究は解析を主としているので、他所と違って明確な成果が出るようなものではありませんよ。まぁ、どちらにせよ、彼をうち以外に行かせる気はありませんが」
「明確な成果が出ないというのであれば、何故、あれを独占しようというのですか？　あれは飾って眺めるだけのコレクションではないのですよ？」
「そんな物は分かっていますよ。別に独占などという意識はありませんが、彼を研究させない理由ならきちんとあります。彼を他所に行か

せた場合、死ぬのが分かりきっているからです」
淡々と告げる飛騨の言葉に、他の者らは眉を顰める。確かに研究によって何人もの子どもを殺している。生きてはいても廃人となった者もおり、そういった点で見れば殆ど死者を出していない第八研が最も優秀と言える。
けれど、本来ならば研究員と被験体が一人ずつしか残っていない第八研は解体されるはずだった。
それを研究の特殊性と飛騨が元から自分一人で第八研を切り盛りしていたことによって、第八研は現状のままで良いという許可が出ていたのだ。
被験体の消耗を一切気にしない松本はともかく、人類をシャドウの脅威から守ろうと研究を続けた結果、被験体らを大量に死なせるに至ってしまった他の室長らはその点について物申したかった。
そうして、その代表として幾月が飛騨を見ながら静かに言葉を返す。
「お言葉ですが、我々は遊びで子どもたちを危険な目に遭わせている訳ではありません。彼らと現在進めている研究が人類の為になると思って研究を続けているのです。それを悪戯に死なせているように仰るのは、流石に博士と言えど言葉が過ぎます」
「分かっていますよ。けれど、彼にとってそんな物は理由にならないようなのです。話して分かりましたが、彼の知能の発達レベルは小学生を遥かに超えています。制御剤が研究段階であることを告げると、正式な薬が出来ていないことが問題なのではなく。それが開発されるよりも先に無理矢理にペルソナを発現させたことが問題だと言い返されました」
『……ッ!?』
飛騨の話を聞いた者たちは八雲が言ったという言葉の内容に思わず驚く。
大人であれば確かに八雲と同じ意見に辿り着く者は多くいるだろう。しかし、それが知能の発達が未熟である小学生の意見だとすれば話は別だ。

八雲は自分が新たに得ていた知識について、飛騨や他の研究員が寝ている間に学習装置を使ってインストールしたのだと思っていた。
だが、いくらアイギスの様なオーバーテクノロジーの対シャドウ兵器を開発していようが、人間の脳というブラックボックスに直接データをインストールすることなど出来はしない。
すると、八雲の知識は意識を失っているいつの間にか得ていた事になるのだが、本人も知らぬ事を他の人間が理解できている筈がなった。
「……他にエヴィデンスの少年は何か言っていましたか？」
「ええ、子ども等を殺している私たちの研究には一切協力しないとしっかりはっきりとね。もし我々にペルソナを見せるとすれば、それは我々を脅すか殺すかする時だと言われてしまいましたよ」
やれやれと苦笑気味に話す飛騨だが、他の者はそれほど楽観的な態度は取れない。
去年末頃から始まったこの計画で、被験体らをコントロールし、自分たちの管理下に置いているが、実際はこれはかなり危ういバランスで成り立っている行為だ。
ペルソナとは現代科学では解明しきれない超常の力であり、それを有している子どもは一種の兵器の様なものである。
その危険な存在を研究者らは制御剤と多少のマインドコントロールで逆らわないようしているため、今のところは子ども等の反乱なども起こらずに研究を続けられている。
しかし、八雲は違う。
八雲は自らの力でペルソナを発現することに成功したため制御剤を必要としておらず、半年もの間、昏睡状態で寝続けていたためマインドコントロールを施していない。
そんな一切制御することの出来ない相手が自分たちを敵視している。それも自分の持っている力の強大さを理解した上でだ。
ペルソナを見せるのは脅すときか殺すときかの二択。
医学・科学・影時間に関わる知識と多くの分野に精通し、天才の部類に入る飛騨のお墨付きの頭脳ならば、わざわざ敵視する研究者側の

人間に自身の胸の内を話したのも理由があるのだろうと考える。
そう、それらは当然、報告として上がり主要な研究員らの耳に入る。すると、そんなことを聞いた者たちは危険を冒そうとはせず、八雲に手を出そうとはしなくなる。
仮にそれを見越した上での飛騨の嘘ならば飛騨を失脚させる事が出来るようになるが、本当に八雲が言った事ならば手を出してしまったときには火傷程度では済まない。
研究の飛躍的な発展の可能性の芽として自分たちの内に招きこんだと思ったら、目覚めてみれば自分たちの存在を脅かす厄災の種だったとは、笑えない冗談だった。
「くっふっふ、エヴィデンスかと思っていたら、彼はどうやらプロヴィデンスだったようですねえ。まぁ、彼がいたからこの世界があるのですから、我々はそれを弁えて接しなくてはいけません」
「今はまだ弱っているから良いものの、今後、あれの身体能力が戻ってきた場合どうするのですか！　目覚めて直ぐにそのような危険な思想を持っているのであれば、自ら動けるようになった時には我々を殺しに来るやもしれんのですぞ！」
「そうなったら、そうなる運命だったということでしょう。彼のおかげで世界の滅びは免れたんです。親の仇を殺す権利くらいはある」
激昂し声を荒げる松本にそう言うと、飛騨は席を立って入り口へと歩いて行く。
他の者がその後ろ姿を黙って見送る中、自動で開いた扉が閉まる直前に飛騨は呟いた。
「同僚として忠告しておきます。殺されたくなければ、彼には関わらない方が良いですよ。あんな目をする子どもが、殺す事を躊躇うとは思えませんから」
そう言い終わると扉は完全に閉まり、飛騨の姿は見えなくなった。しかし、部屋の中に残った者たちの表情は皆複雑なものだった。

＊＊＊

３月２１日（火）
朝――第八研究室
朝になって目が覚めた八雲は、両の手足を使ってなんとか身体を起こすと、今日も壁に寄り掛かるようにして座る。
子どもらを入れておく部屋には窓が無いため、日の光が射しこまず。扉の横にある数字の入力キーと電気のスイッチについている小さな赤いランプだけが部屋の中に存在する灯りだ。
利用する際に切り替えれば部屋の電気をつけることは出来るが、今の八雲ではペルソナを使わなければ自分の身だけではそんな事は出来ない。
しかし、チドリをもう少し寝かせておきたいことと、部屋の中につけられているであろう監視カメラにペルソナを撮られるのが嫌なため、八雲は座りながらボーっとしておく事にした。
「ん、ん……」
声がしたので隣に視線を向けると、チドリはタオルケットに包まるように身体を縮めてまだ寝ていた。
寝惚けているのか、寝がえりを打ったために声を出したのだろうと推測すると、興味を失ったため八雲は思考の海に潜り始める。
（この子らはペルソナを制御できない。それは心がまだ未熟だから、自分の中にいるシャドウを飼いならせていないため）
八雲の年齢不相応な精神は一夜明けると、およそ中学生ほどで安定化していた。
本人もそれを自覚しているが、それを知ったところで原因が分かる訳ではないとして考えないようにしている。
（シャドウとは無意識下の自分の心。そんな領域が存在すると認知しておく事は出来ても、無意識下の自分を意識する事は出来ない。ならば、どうやって矛盾をはらんだペルソナを制御するのか……）
そんな風に八雲が考え事をしていると、プシューと音をたてて入り口の扉が自動で開く。
胡散臭い笑顔を浮かべた飛騨が入って来た。
「おんやぁ？　グッモーニン、少年。起こしに来たのですが、既に起き

ていたのですねえ。少女にも声を掛けてもらえますか？」
制御剤が寿命を縮める劇薬だと知って、それを使わずに済むようペルソナの制御方法を考えていた八雲。
しかし、その思考は飛騨が入ってきたによって途切れ、また後で考える事にすると、言われた通りにチドリを起こす事にした。
「チドリ、飛騨さんが起きろってさ」
「んー……」
「まぁ、こんな窓一つない太陽光も入ってこない部屋じゃ体内時計も狂うか」
「その割に君の体内時計は正確に時間帯を理解しているのですねえ。ほら、少女。朝ですよ、朝食と合同の訓練がありますから、起きてください！」
八雲の呟きが聞こえていた飛騨が、その言葉に少々驚きつつ八雲を車椅子へと移して。さらに、チドリに起きるように声をかける。
すると、チドリも目を覚ましたのかぼんやりしながら伸びをして起き上がると、目をこすりながらベッドから抜けだし洗面所へと向かって行った。
「ガラガラガラ……ペッ」
洗面所に向かったチドリは顔を洗うと、うがいをしてから歯を磨きだす。
それらの準備が終わるまで少々の時間があったため、飛騨は八雲に話しかけた。
「昨日はよく眠れましたか？」
「まぁ、やることもないしね」
「少女と親睦を深めたりはしなかったのですか？」
「翌日に何をするか分からないのに、夜更かしさせて影響だしちゃ不味いだろうし。そんなに話す事も無いよ」
昨日にも増してさらに精神年齢が上がっているように感じた飛騨だが、不思議に思いながらもチドリの事を気遣う八雲の気持ちは本物だと思えた。
そして、それだけに敵視されているのはあくまで自分たちの様な実

験に関わる大人であるとも理解し。昨日の内に他の室長らに釘をさしておいて正解だったと思いつつ、やってきたチドリも連れて部屋を出た。

――辰巳記念病院

チドリと途中で別れた八雲と飛騨は港区にある大きな病院に来ていた。

それは八雲のリハビリをするためであり、病院側には既に話が通っているとして、奥のリハビリ施設のある病棟へと案内された。

「こちらです。これから自力で歩けるレベルまでこちらに移ってリハビリを続けていきます。経過については室長のパソコンに通知を送りますので、ご安心を」

「はぁーい、わかりました。……では、少年。歩けるようになるまで、こっちで頑張ってくださいね」

「結構、適当なんだね。まぁ、どうでもいいけど」

呆れ半分にそんな風に答える八雲に看護師の女性は少しばかり驚いているが、言った本人も言われた本人も大して気にした様子もなく離れる。

それを見た看護師は再び驚くが、空いた八雲の車椅子を押す事にすると去っていった飛騨に一礼してからマットの敷いてある場所へと向かった。

そして、マットのところまでやってくると、八雲を抱き上げてマットに寝かせる。先ずは準備運動から始めるのだ。

「それじゃあ、先ずはストレッチから始めるけど先にお名前を聞いても良いかな？」

「名前？　書類に書いてなかったの？」

「え？　ああ、うん。そうなの。だから、あなたのお名前教えて？」

看護師は八雲の年齢不相応なはっきりとした口調に慣れないのか、少々引き攣った笑顔になりながら名前を尋ねる。

これは本来ならば、最初の自己紹介から始める事で、相手の子どもとの信頼関係を築き。病院での生活とリハビリと言うキツイ行為から来るストレスを軽減させることが主な目的である。

しかし、八雲の場合は本当に名前が記入されておらず、書類にはエルゴ研に登録されている『エヴィデンス』という名称しか記載されていなかったのだ。
いくら話が通っているといっても、それは被験体の子どもの一人をリハビリ施設に送るという話であって。エルゴ研などで起こっている研究の内容については知らされていない。
いま八雲の目の前にいるヘルパー用の制服を身につけた女性も、普通の一般職員であり。たまたま、本日の八雲の担当になったに過ぎない。
故に、病院側から新しい患者が来ると聞いていただけに、何か特別な子ではあるのだろうとは思っているが。対応については先ずは分からない名前を聞いてから、あとは他と同じ様に接しようと考えていた。
「……テオっていうんだ」
「テオ君ね。格好良いお名前ね。それじゃあ、テオ君。一緒に頑張りましょうね」
本当は変わっている名前だと思ったが、もしかしたらハーフなのかもしれないと納得し。女性は八雲を足を広げた状態で座らせると、そのまま背中をゆっくり押して前屈姿勢を取らせ始めた。
一方の八雲は相手を信用していなかったために偽名を使ったのだが、それが通ったことで相手が本当に名前を知らされていないのだと思っていた。
（この人は一般人か。話が通ってるって言ってたのに、名前も知らせてないなんてあり得るのか？）
エルゴ研以外にペルソナなんてものを研究している場所があるとは思えない。
よって、自身の存在を隠す必要性をあまり感じていなかったのだが、何故か一般人の看護師には名前すら伏せられていた。
普通は協力する側に名前くらいは教えるため、教えていなかったとすればそれは不備ではなく態とである可能性が高い。
教えていないのは故意だが、名前を伏せる理由が無い状況で敢えて

伏せる。多数の人間を抱えている組織がそんな手間のかかることをする訳がない。
それに飛騨も会ったばかりに自身を『どこの誰とも分からないアンノウン』と呼んでいた。
彼自身は自分たちを被験体名で呼びたくないから『少女』や『少年』という単語を使っているようだが。室長まで務める男が、わざわざ知っている筈の名前で呼ばない事も妙な違和感を持っていた。
ここまでくると、最初の発言は嘘偽りないことで、実は飛騨も自分たちの名前を知らないのではと考えられる。
とはいえ、非人道的な研究であるために、戸籍を権力で抹消しそんな人間はいなかったようにする。さらに、もしもの時のことも考えて、抹消前の個人を特定できる物も全て破棄したために、室長レベルの者でさえ本名を知らないという可能性ある。
だが、どちらにせよ研究者らですら自身の名前は知らないことだけは理解ができたとして、八雲は納得する事にした。
(飛騨さんも知らないんだとすれば、こっちとしては好都合だ。今後は関係者らには本名を一切名乗らない。チドリには既に名前を教えてしまったけど、彼女からはこっちも名前を聞いたし。これといって悪用される恐れも無いから、まぁ、良いだろう)
ストレッチをしながらそんな風に考えた八雲は、それから二週間に亘ってリハビリを続け。なんとか、自力でゆっくりとなら歩ける程度にはなったのだった。

第五話　タルタロス

４月５日（水）
昼――エルゴ研・食堂
病院でのリハビリトレーニングのスケジュールを一応消化した八雲は、迎えに来た飛騨に案内されるまま被験者たちが昼食をとる食堂へとやってきた。
配膳係りから食器の乗った盆を受け取った者から、長い二つのテーブルに適当に分かれて座って食べている。
その中にはチドリの姿もあり、チドリは一人で食事をとっていた。
「おやおや、まーた少女は一人で食事を。確かに他の研究室の子らとは話した事がないから、自分から誘うのは難しいとは思いますが……。ああ、貴方は少女のところに行っていてください。歩けるようにはなりましたが、物を持って歩くのはまだ辛いでしょうから」
「うん、わかった」
八雲の返事を聞いた飛騨は配膳係りの元へ八雲の分の盆を受け取りに行った。
それを一瞥しながら八雲はゆっくりとだが、自分で歩いてチドリの座っているテーブルへと向かって行く。
初めて見る子どもということで周りからいくらかの視線を集めているのは気付いているが、別に今はそんな事は無視する。
そうして、無事に辿り着くとチドリの向かい側の席に座って声をかけた。
「よいっしょっと、ふぅ……久しぶり」
「え？　……ああ、八雲だっけ？　もどってきたんだ」
「うん。一応、自分で歩けるようになるまでって予定だったらしいから」
千切ったパンをシチューの様なものに浸しながら食べていたチドリは、急に話しかけられ驚いたようだが。直ぐに相手が数週間前に同じ第八研にやってきた相手と分かり返事をした。
八雲も相手が自分を覚えていた事に安堵し笑みを返すと、そのタイ

ミングで飛騨がやってきた。
「おー待たせしました。食べ終わった食器は向こうの食器返却口へと持っていけば終了です。その後は、少年は今日は見学ですが、少女や他の被験者たちは合同で戦闘訓練を行いますので一緒に行ってください」
「了解」
「なーんとも素っ気ない返事ですねえ。他所はもっとキビキビ返事をしたりすると聞くんですが……まぁ、良いでしょう。それでは、私はいきます。午後も頑張ってください」
八雲の返事を聞いた飛騨は肩を竦ませていたのだが、直ぐにニカッと笑うと食堂を出て行った。
後には、その後ろ姿を見ていた二人が残るが、直ぐに興味をなくし。食事に戻る。
八雲にとってはここでの初めての食事だが、一応は栄養バランスが考えられた給食の様なメニューだった。
なので、さっそく試しにスプーンでクリームシチューらしきものを食べてみると、薄味だが野菜が多く入っていてそれなりに美味しいと思えた。
「ふーん、結構しっかりしてるんだ」
「どういう意味？」
「ん？　ああ、ここって沢山の子どもを殺してるし、食事とかも酷いのかなって思ってたから。味も栄養バランスも考えられてて少し驚いたって話」
それを聞いたチドリは納得したようで頷きながら食事を続けている。
頷いたということは、ここで長く生活しているらしいチドリも同様の意見を感じていたようだ。
八雲はその事でこの食事関連が初期の段階から今の状況であるらしいことを理解しつつ、さらに食べ進めながら会話を続ける。
「合同の戦闘訓練ってどんなことするの？」
「えっと……武器をもって、子ども同士でたたかうの。たまに大人が

あいてのときもあるけど」
「ペルソナは？」
「みんな、そんなにうまく召喚できないもの。だから、武器と自分の身体だけでたたかうの」
ペルソナの召喚にはある種の自己暗示のようなものが必要だと考えられている。しかし、ここにいる子どもたちは皆、まだ未熟でそれらが上手くいかない。
そんな事では実戦で召喚出来ずに終わり、ただ黙って殺されてしまうことになるので体術を教えているのだ。
加えて、召喚が上手くいったとしてもシャドウが一体だとは限らない。
その場合は味方がいなければ他の敵から身を守りながら戦うことになるため、どちらにせよ体術は重要になってくるという訳だった。
「そういえば、今日の夜は新月だからタルタロスにいかないといけないんだけど、あなた行けるの？」
「入院中に窓の外に見えてた塔がタルタロスだよね。どうかな……戦闘なんて一回しかしてないし。何より今の身体で召喚に耐えられるかも分からないな」
それは知能と共に精神年齢も上がっていた八雲の率直な意見だった。
客観的にみれば今の自分は歩くことがやっとで戦闘なんて出来る訳がない。
だが、他の者と違い八雲はペルソナを安定して召喚できる。
召喚さえすれば、あとはペルソナを操って戦闘すれば良いので本人が戦闘を行う必要はないのだ。
だからこそ、八雲は自分が戦うのではなくペルソナが戦う事を前提にして、その戦闘を自分が操り続けられるかと心配していた。
「結構歩くからむずかしいかもね。けど、わたしもいっしょだから一人よりはマシよ」
「チームごとで探索？」
「チーム……じゃないけど、そんな感じ」

初めてのタルタロス探索が個人でやれということなら厳しいと思っていた八雲も、チドリの言葉を聞くと笑顔になった。
いくら精神年齢が高くなったとは言え、碌に信用できる相手もいない状態は精神にかなりの負担をかける。
しかし、目の前にいる少女はぶっきらぼうで素っ気ない言い方だが、しっかりと八雲を見て気遣う言葉をかけてくる。
エルゴ研に敵対すると決めているため、精神的に孤立状態の八雲には、それが途轍もなく嬉しかった。
そんな笑顔を見せる八雲をチドリは少々怪訝そうに見ていたが、苦笑して「なんでもない」と告げた事で興味を失ったのか、その後は普通に適当な雑談をしながら食事を続けた。
そうして、二人は一緒に昼食を取り終えると、合同訓練所まで行って午後の訓練とその見学をして過ごしたのだった。
影時間――タルタロス・エントランス
深夜零時丁度に存在する影時間。その、日常と日常の間に存在する非日常な時間に、八雲とチドリの他、多くの被験体と研究員が集まっていた。
今夜は新月でシャドウらの動きが普段よりも少々大人しくなる。
そのタイミングを狙って、この謎の多いシャドウの巣である奈落の巨塔を少しでも攻略しようというのだ。
「では、第一研アルファチームは行け。五分後にベータチーム、さらに五分後にガンマチームが続く。探索目標は五階以上だ。それ以下の階層では戻ってくるな」
第一研の室長である松本がデータ収集用の機材の前でそう言うと、五人一組となった子どもらは順に時計の様な形をした入り口へと入っていった。
そして、続くように第二・第五・第六研からも人数はバラバラだが一チームずつが送りだされた。
残るは第八研に所属している八雲とチドリだけである。
既に自分らの管理している被験体たちが探索を始めたことで、他の研究室の者らは忙しそうにデータを採っているが、どこか落ち着かな

い様子で八雲の事をチラチラとみていた。
　そんな大人たちの様子に気付いたのか、チドリは隣に立っている八雲の手を握りながら問いかける。
「ねえ、なんでわたし達見られてるの？」
「僕がいるからじゃないかな。ほら、僕の能力はまだよく分かってないし」
「あぁ、そういうこと。でも、うちは別にダメだと思ったら帰ってきていいってハカセに言われてるし。敵から逃げておけば出さなくても済むわよ」
　そう言って他のチームで計測されているデータを見ている飛騨に視線を送ると、それに気付いたのか飛騨は顔を挙げてパッと見、かなり胡散臭い笑みを浮かべて二人に手を振った。
　自分達の上司にあたる人間のそんな行動に少々呆れながらも、それならば力をわざわざ見せずに済みそうだと八雲は安心する。
　研究員らが知っているのはアイギスのメモリーに残っていたオルフェウスで戦う自分。
　しかし、今の自分の力はそれだけではない。
　止められているが、オルフェウスよりもかなり強いタナトスもいれば、高い同調率での召喚も扱える。
　エリザベスの言っていた自分の力を悪用しようとする者というのが、今ここにいる大人たちである事は先ず間違いなく。そんな相手に手の内を晒したくなかったのだ。
「それじゃあ、いきましょ」
「うん。って、チドリ。武器はそのナイフだけ？」
「そうよ。他のは重くてもてないもん」
　チドリが自分と繋いでいない方の手に刃渡り十五センチ程度のナイフを持っている事に気付き、装備はそれだけなのかと八雲が尋ねると、チドリは淡々とそう返した。
　確かに小学校二年になったばかりの少女に普通の剣など持てる筈がないとは思うが、それでもそんな短いリーチの武器よりかは子ども用の金属バットの方がマシなように思えた。

だが、今この場に無いものについて言っても仕方がない。
そうやって気持ちを切り替えると、八雲はチドリに案内されながらタルタロスの探索を始めた。
――タルタロス２Ｆ
「ここが、タルタロス……」
時計型の入り口を抜けて出た先で、八雲はその内部の様子に少々驚く。
床や壁には血の様なものが付いており、また別の場所では壁の一部が崩壊して通路を歩き辛いものへと変えていた。
ただでさえ、歩くのがやっとで体力に不安が残るというのに、敵が出るだけでなくただ歩きまわる事ですら楽にはいかないのかと大きくため息を吐く。
「はぁ……やれやれ、ままならないね」
「……？　よく分からないけど、こっちよ。今は敵も遠いからだいじょうぶ」
「分かるの？」
「それが第八研にいる理由だから」
表情を変えずに答えたチドリは八雲と手を繋いだまま先へと進み始める。
確かにこんな機械もまともに動かない状況において、地形や敵の位置情報を知覚できるのはかなりのアドバンテージだ。
そんな能力など八雲の持っているペルソナらは持っていないし。稀少な能力を専門としている飛騨の研究室に所属している理由としては十分に信用できた。
「……けど、八雲がうちにいる理由が良く分からないのよね」
「僕が？　天然のペルソナ使いだからじゃないの？」
「そうだけど、それってわたし達が安定したらあんまり違わないでしょ？」
言われてみれば、天然ペルソナ使いであることやペルソナを自由に呼べることなど、他の被験者らが安定化してしまえば大して意味がない。

存在が稀少なのであって能力が稀少とは言えない八雲は、チドリの言う通り第八研の専門とするテーマとしてはずれていた。
（ワイルドの能力に気付かれた？　いや、あれは使わなければばれないとエリザベスが言ってた。だとすれば、本当に研究の為だけに？）
召喚しない限り、かなり高精度な感知型のペルソナでもなければ、その人間の持つペルソナの種類など分かるはずがない。
故に、ワイルドであることはばれてないはずと考え込んでいると、隣をゆくチドリが話しかけてくる。
「わたしから言った事だけど、そんなに考えこまなくていいわよ。前にいた人たちも珍しい能力って言っても、そこまで使える力じゃなかったし」
「え？　あ、うん。そうなんだ。また、戻ったら飛騨さんにそういうのも聞いてみようかな」
「答えないかもしれないけどね」
確かにいくら八雲が年齢不相応な知識と精神年齢をしていても、そういった研究データに関しては見せないかもしれない。
しかし、その時には自身の研究に対する対価として要求しようと考えながら、八雲は先へと進んでいった。

――４Ｆ

現在二人がいるのは四階。他のチームには出会わずにやってきたので、最後発の自分たちが一番遅いのだろうと思いつつ八雲は壁に背を預け座りこんでいた。
「はぁ、はぁ……ぐっ……はぁ」
「だいじょうぶ？　戻るにしても脱出装置まで少し歩かないといけないんだけど」
「ゴ、メン。もう、少しで、立つから……」
八雲が座りこんでいる理由は単純に体力の限界に達したため。
今の八雲は歩けるようにはなったが、走れもしなければ押されればそのまま倒れるなど、筋力も体力もまだ衰えたままである。
それをチドリと手を繋いだまま、歩き辛い道を2フロアも歩き続けたことが原因で体力に限界が来てしまい。いまもガクガクと震える

足を押さえながら呼吸を整えようとしていた。
（くそっ、本当に情けない。自分よりも小さな女の子が息も切らさずに待ってくれてるって言うのに）
本来ならば敵もいるこんな危険な場所で座り込むなど危険極まりない行為だ。
しかし、今の八雲はそれすらも考えられない程疲弊していた。
喘息のようにやや掠れた呼吸音をさせながら座りこんでいる八雲を、チドリは傍らで心配そうに見守る。
だが、そんな風に八雲のみに意識を持っていっていた事が、突然現れた敵への反応を遅らせたのだった。
《キュララッ！》
「シャドウっ!?　八雲、逃げるわよ！」
「わかっ!?　ぐっ……」
現れたのは、長髪の頭に王冠を被り浮遊した女性の生首のようなシャドウ、女教皇〝囁くティアラ〟。
チドリは敵を見ながら持っているナイフを強く握るが、八雲は立ち上がろうとしてそのまま倒れてしまう。
そして、痛みで顔を歪めはしているが、そのまま起き上がろうとしないことで、チドリは相手がまだ動けない状態だと理解する。
「……待ってて、わたしが倒すから」
「チド、リ」
「はあっ!!」
ナイフを持ったチドリは身を屈め、地を蹴り敵へと接近する。
今までの探索で同じ相手とは何度か遭遇した。
だからこそ、敵の行動パターンは理解できている。
《キュララッ！》
ゴォオオッと、燃え盛るシャドウの放った炎弾は敵へと向かうチドリに直撃する。
だが、
「きか、ないっ!!」
それはぶつかった瞬間に霧散してしまった。当たった筈のチドリ

は服にも汚れすらついていない。
そう、チドリの持つペルソナは火炎属性に無効の耐性を持っていたのだ。
まさか、己の放った攻撃が一切ダメージを与えられないと思っていなかったシャドウは動揺するが、その間に接近していたチドリはナイフを横に一閃した。
「はあっ!!」
一閃されたナイフは躱そうとしていた敵の髪を斬りつけ、見事数本の束を斬り飛ばすことに成功し敵にダメージを与える。
《キュルゥ!?》
攻撃を喰らったシャドウは大きく後退し、喰らったダメージが大きかったのか現れたときよりもいくらか弱っているようだった。
ならばと、一気に敵を倒すため着地したチドリは再び駆け出す。
敵へと向かう途中、チドリは今の自分の事を考えて、おかしさに口元を歪めたい衝動にかられていた。
ここまで積極的に戦う事は初めてで、今までは自分の身を守るためにしか戦った事はなかった。
それが、今の自分は急にやってきたメンバーを守るために戦っている。
「これでっ!!」
思い入れは特になかったつもりだが、独りでいる期間が長かったため、久しぶりに得た親しい人間に情が移ったらしい。
それも、今まで危険を避けてきた自らを危険に晒してまで守るほどに。
「終わり!!」
チドリは言葉と共に振り下ろしたナイフを、ドシュッ、とシャドウの仮面に深く突き刺し、そのまま両手を使って地面に縫いつけるようにナイフごと敵を地面に叩きつける。
《キュルゥ……》
すると、走った勢いの乗せられたナイフによる刺突で攻撃を喰らったシャドウは、地面にぶつかるとそのまま黒い靄になって消え去っ

た。
敵を無事に倒せたことで、チドリは戦闘で乱れた呼吸を整えながら八雲の元へ戻り始める。
その表情はどこか嬉しそうで、疲れている筈の八雲も思わず見惚れてしまっていた。
そう、新たなる敵の出現に気付けぬほどに。
《グララッ》
「てきっ!?」
チドリは新たに背後から敵が現れたことに気付き振り返る。
だが、背後からこられたことで反応が遅れ、敵の攻撃を許してしまう。
《グララッ!!》
シャドウは振り上げた拳で、振り返りかけていたチドリの肩を強く殴打する。
「きゃあっ!?」
攻撃を喰らい悲鳴を上げたチドリは、転倒しながらズザァッ、と地面を転がり滑った。
「チドリ!!」
突然現れ少女を殴りつけたのは水色の仮面をつけたシャドウ、魔術師〝臆病のマーヤ〟。
倒れたチドリを心配した八雲が声をかけるが、攻撃を喰らって地面を転がる少女に向かって、敵はさらに魔法を放った。
《グララッ》
「あぐっ……」
敵の放った魔法は氷結属性の初級スキル『ブフ』。
周囲の空気を凍らせて氷塊を作り、それをチドリに向けて放つと、そのまま倒れていたチドリの腹部へと直撃した。
子どもの頭ほどもある氷塊を身動きの取れない状態で喰らえばどうなるか、考えるまでもなく大きなダメージを受ける。
胃の中の物がせり上がってくるような感覚を覚えながらも、幼いチドリはそのあまりの痛みに、吐くより先に脳が痛みから守るよう意識

をシャットダウンしたため、そのまま気を失った。
「チド、リ？」
一方で、離れた場所でそれらを見ていた八雲は驚きと戸惑いに目を見開く。
自分がこんな場所で倒れていなければこんな事にはならなかった。
チドリの後ろから敵が来ていることを指摘出来ていれば、チドリが攻撃される事もなかった。
何故、無茶をしてでもペルソナを呼び出し盾となる事をしなかったのか。
そういった後悔が自分の中で渦巻いてゆく。
しかし、今は何よりも少女を助けることが先だった。
敵が憎い、彼女を傷付ける全てを殺したい。
それら心の奥底から湧いてくる感情を糧に、八雲は死の神を呼び出した。
「こい――――タナトス！　あいつのとこまで飛べッ!!」
高い同調率で召喚することにより浮き上がった八雲は、ペルソナと共に敵へと向かってゆく。
何故か、あのベッドで目を覚ましたときのように、周囲の壁や床に黒い線の様なものが見えていることに気付くが、今の八雲にそんなものを気にしている暇はない。
――パシッ！
途中で、チドリの手を離れ地面に転がっていたナイフを掴み、敵へと狙いを定める。
黒い線はシャドウにも同じよう見えており、八雲はその最も太い線の走る仮面へとナイフを突き立てた。
「はあっ!!」
今まさにチドリに襲いかかろうとしている敵は、深々と仮面にナイフを突き立てられると、声すら上げずにそのまま弾けるように黒い靄となって消滅した。
その光景を見ながら、この線の正体におよその見当を付けつつも、八雲は優先すべき事があるとしてタナトスにチドリを抱かせた。

「全速力で飛べ、途中の敵は俺がお前を操って殺す」
《グルル……》
八雲の言葉に短く答えながら、死の神は脱出装置の元まで急いだのだった。
――タルタロス・エントランス
被験体らを探索に向かわせると、残った研究者たちは持ってきていた計器類を操作しながら待っていた。
本来ならば、影時間では全ての電子機器が停止するのだが、黄昏の羽根というものを内部に組み込む事によって使用可能となる。
そして、現在使用しているのは探知機の一種で探索を行っている被験体らとシャドウの位置を把握できるようになっていた。
しかし、難点があってタルタロス自体を構成している床や壁は、現実のそれと性質が少々異なっており。探知機が上手く通らないため精々十階程度までしか探知できないようになっている。
だが、それを見ていた研究員の一人がある異常に気付き、声をあげた。
「な、なんだこの速度?!」
「ん? どうかしたのかね?」
その声に反応したのは第二研究室室長の幾月であった。
幾月は声をあげた研究員の見ていた画面を見ながら、どこかおかしい点があるのかを探していると男が口を開いた。
「ここです。第八研の被験体二人を見ていたら、急に信じられない速度で移動を始めて」
「っ!? 確かに。それにどうやら脱出装置へ向かっているようだ」
男の指差した場所には確かに二人を示すマークが信じられない速度でフロア内を移動しているのが映っていた。
そして、その先には脱出装置があり、もうすぐ到達する。
マークは二人を表す物だが何故そのような速度が出ているのか分からない。
警戒するに越したことはないとして、緊張した面持ちでエントランスの脱出装置を見つめた。

すると、シュインッと音を立てて起動した脱出装置から何か飛びだした。
「治療班を！　今すぐ治療班を呼べ！」
「あれは、エヴィデンス？　しかし、あのペルソナは……」
突如、ペルソナを召喚したまま現れた八雲に研究員たちは驚く。
しかし、いまの八雲はその僅かな時間でさえも惜しかったのか、ペルソナと共に飛び上がると腕を一閃させ、連動するように振るわれたペルソナの剣から斬撃を飛ばした。
放たれた攻撃で、エントランスの壁に深い傷が出来る。その様子に恐怖を感じている研究員たちに八雲はさらに命令する。
「さっさと言う通りにしろッ！　殺されたいのか！」
「ま、待ちたまえ！　先に理由を言ってくれないと、こちらも対処できない」
「チドリが怪我をした！　だから、早く治療できる者を呼べと言ってるんだ！」
言われて視線を向けると、確かに力なくぐったりしたチドリがペルソナの左腕に抱かれていた。
それが分かった第四室長の沢永は研究員を走らせ、外に待機している治療班を呼びに行かせた。
研究員が呼びにいった治療班が中へと来るまでの間も、八雲はペルソナと共にエントランスの天井近くで研究員らを見下ろしている。
何故、ペルソナと共に宙に浮けているのか？
何故、アイギスのメモリーに残っていた映像とペルソナの姿が違っているのか？
そんな風に疑問はいくつもあるが、不用意に八雲を刺激しては拙いと全員が動けずにいた。
そうして、一秒が数倍にも感じられるような緊張感の中で治療班が担架を持ってやってくると。
天井近くから下りてきた八雲が連動しているペルソナをゆっくりと動かし、優しくその上にチドリを寝かせた。
「シャドウに殴られて、その後に腹部に氷塊を喰らったんだ。頭とか

は打ってないけど、骨にひびが入っている可能性がある。少しの揺れが痛みに直結するかもしれないから、慎重に運べ」
「わ、分かりました。では、失礼します」
見た目は小学校低学年にしか見えない八雲の、明らかに異常な雰囲気と言葉使いに少々驚きながらも、治療班の一人が返事をすると気を付けながらタルタロスの外へとチドリは運ばれて行った。
それを見守り終えると、八雲は来るときに持って来ておいた車椅子をタナトスでセットし、自分が座りながらペルソナを消した。
そうして、周りで緊張した面持ちで傍観していた者らも、ペルソナが消えた事で危険が去ったと思い。今さっきの事を尋ねようと八雲へ近付いて行く。
だが、その誰よりも早く飛騨が八雲の車椅子の後ろに移動しており、持ち手を掴むと笑顔で出口へと向かいながら話し始めた。
「フッフッフー、少年も今日は疲れたでしょう。少女も治療班に任せましたし、我々も帰るとしましょう」
「ま、待ちたまえドクトル・飛騨！　先ほどのことをエヴィデンスにっ」
「宣言通りに脅すためにペルソナを使っただけでしょう。その他の事については彼は何も話しませんよ。我々は信用されていませんから」
八雲の車椅子を押しながら第五室長へーガーに返す飛騨の言葉に、同じように尋ねようとしていた者らの表情が歪む。
しかし、それでは諦められないとして、第一室長の松本が外へと向かおうとする車椅子の前に立ち塞がった。
「あのペルソナの名は？　どうして、さっき宙に浮いていた？　答えなければ、先ほどの被験体の治療は最低限の生命維持しか行わない」
「……」
「っ!?　がっ、あぐっ!!」
苦しさから足をばたつかせ逃れようとする松本。
いま松本は、八雲から浮き上がるように現れたタナトスの左手で首を掴まれていた。
カードではなく、高同調状態で呼びだしたペルソナの動きは基本的

に召喚者の動きである。
即ち、今、松本の首を掴んでいるのは八雲の意思だった。
ペルソナを使って松本の首を掴んでいる本人は、冷たい目で苦しんでいる相手を見ながら静かに口を開いた。
「お前、殺されたいの？　良いよ、別に。そんなに死にたいんならさ。ねぇ――どうして欲しい？」
「わが、わがっだ！　だがあ!!」
「……ふん」
必死の懇願の末に解放された松本は、ドサッと、鈍い音をさせながら落下すると地面に尻餅をつきながら咳き込む。
強く掴まれていたことで、首には指の形に痣が残っていた。
しかし、それらに対して怨み言を言おうものなら、顕現し続けているペルソナによって今度こそ殺されるため、松本は八雲へ殺意を抱きながらも黙っている事した。
「もーう、行ってもよろしいですか？　少女も既にエルゴ研の治療設備のある区画へと運ばれているでしょうから、少年も同じく治療を受けに行った方が良いでしょう」
「俺はいい。けど、飛騨さんには少し話があるから、第八研に向かって」
「んんー？　よーく分かりませんが、まあ良いでしょう。では、我々は先に戻りますので。皆さん、ごきげんよう」
それだけ言うと、飛騨と八雲はエントランスから出て行った。
後には、怒りに震える男や、明らかに非力な存在である筈の子どもが自分たちの生殺与奪を握っていた事に対する恐怖を感じている者などが残っていた……。
深夜――第八研
タルタロスから戻った八雲と飛騨は、気を失ったまま治療を受けているチドリを見舞うと、そのまま第八研へと戻ってきていた。
車椅子に座っている八雲の真剣な表情から、かなり真面目な話なのだろうと飛騨も正面のソファーに座り言葉を待っていると。
意を決したように八雲は話し始めた。

「話って言うのは飛騨さんにある頼みごと聞いて欲しいってことなんだ。今日、チドリが怪我をしたのは、体力が尽きて動けなくなった俺を守ったからなんだ」
正面から真っ直ぐ見つめる八雲の瞳に、影が射すのを感じながら黙って聞く飛騨。
足手まといの自分を守って怪我を負わせたとなれば、当然、責任を感じてもしょうがないからだ。
「エントランスのことで分かっただろうけど、俺にとってペルソナを呼ぶのは呼吸をするように自然に出来る事なんだ」
それはペルソナを研究している者としては非常に驚きの光景だった。
言葉を発する事も無く極自然に自身の動きと連動させてペルソナを呼び出す。
これが自然適合型の力なのかと、エルゴ研にいる人工ペルソナ使いらとは埋めようのない性能の差を感じた。
しかし、そんな誰よりも優れた能力を有している八雲も万能ではなかった。俯いていた顔を上げると、その声色に強い怒りと悔恨を宿し叫ぶ。
「……けど、チドリが戦っているとき、俺は一人で床に這い蹲ってただけだった！」
先のタルタロスを含めると、八雲が飛騨に強い感情を見せるのはこれで二度目。だが、その両方がたった一つの事柄に起因していた。
そう、全てはチドリを助ける事が出来なかったということ。
そして、筋肉の衰えたその非力な拳を色が変わるほど強く握りしめ、八雲は続ける。
「両親を失って、それから力を得たときに決めた筈だったっ。もう二度と目の前で大切な物を奪わせないと、殺してでも守るって！　でも、また守れなかった。力を持ってたのに、あんなに近くにいたのに!!」
「……それで、少年は私に何を望むのですか？」
「力が欲しい。俺を戦える身体にしてくれ。寿命を削ろうが、死ぬよ

うな目に遭おうが耐えてみせる。だから、この身体を戦えるようにして欲しい！」
八雲の身体はこのままリハビリを続ければ、半年後にはある程度回復する事が分かっている。
衰えた筋肉を鍛え、体力を徐々に付けていく。身体への負担などほぼ皆無と言っていい方法だ。
しかし、八雲が求めているのは『戦える身体』。
八雲の言う戦える身体とは、事故前の状態と言う意味ではなく、戦闘に適した改造を施した肉体と言う意味だろう。
確かに、桐条の技術を使えばそれは不可能ではない。
実際に、第一研の行っている研究の中に、被験体の運動性能を上げてペルソナに耐えられるようにするという実験もある。
だが、それには大きな欠陥があり。運動性能を上げた被験体には共通して戦闘依存症のような症状が報告されているのだ。
八雲がそうなるとは思えなかったが、殺人への躊躇いを持っていない事を考えると、もしもの時の対処が出来ない以上、簡単には承諾できなかった。
「ふーむ……何故、会ったばかりの少女のためにそんな自殺行為をしようというのですか？　貴方は年齢不相応の精神の成熟度です。知識に関しても同様の事が言えます。だからこそ、『大人』なら選ばない選択をしようとする意味が分かりません」
「……理由なんてない。会って、接して、それでもう俺はあの子を守りたいと思った。理屈じゃないんだ」
嘘偽りない言葉だけに飛騨は少々面食らってしまう。
（やれやれ、少女も少年が入院しているときは、頻りにいつ戻ってくるかと聞いていましたし。たった数度の邂逅でどうしてこうなったのやら）
八雲が本気で言っていることが分かってしまった。
だが、色々と異常な部分の多い八雲が、まさかそんな理由で自身の寿命を削ってでも戦おうとするとは思っていなかったのだ。
「見返りとして、ペルソナの制御法を教える。改造後の戦闘データが

欲しいなら、それの採取も協力する。……だから！」
「はいはい、そーこまで言わなくても分かりましたよ。その話、お受けします」
　両親を失った事を発端として大切な者がいなくなることへのトラウマを持っている事は分かったが、八雲がチドリを守ろうとする理由は、それとはまた違ったものだった。
　これがもっと別の理由であれば、精神がペルソナに対しどのような影響を与えるかというデータが採れたのだが、その目論見が破綻したにもかかわらず飛騨の表情は楽しそうだった。
「実際に始めるのは明後日からにします。今日のことで各室長が貴方に目を付けているので、改造等はここの最奥にある隠し部屋で行います。それが始まれば、改造が終わるまで何ヶ月経とうが出せませんのでご注意を」
「それはやっぱり部屋にカメラとかがついてるから？」
「ええ、人体の改造はうちの研究テーマから外れていますからね。専門としている研究室よりも素晴らしい物を作っては怒られてしまうのですよ。で・す・が！　こう見えて、私は医者でもありますから、中途半端な作品など作りません。やるからには、貴方のその肉体のスペックをフルに使えるようにしてみせます」
「作品、か。じゃあ、そのための名前も考えておいてね」
　そう言って笑って返すと八雲は車椅子から立ち上がり、飛騨に被験体らの寝室のドアを開けてもらって眠りについた。
　飛騨も八雲と別れた後、徹夜で改造の為の計画書や機材を集めてまわり。万全な状態で計画を始めたのだった。

第六話　ペルソナ合体

???――ベルベットルーム

「再びお目にかかりましたな」

そんな声が聞こえて瞳を開くと、八雲はベルベットルームの椅子に座っていた。

テーブルをはさんで向こう側には、以前と同じように椅子に座ったイゴールとベルベットルームの住人たちが佇んでいる。

あのタルタロス探索から一日が経過し、明日から自身の肉体を改造するというこのタイミングで、なぜ自分がここにやってこれたのかは分からないが、八雲は丁度良いとして彼らに話しかけた。

「そっちはこっちの事情とかも理解してるんでしょ？　だから、単刀直入に言うけど、俺に戦い方とペルソナについて教えて欲しい」

「ふむ、お客様が今お持ちでいらっしゃるペルソナならば、大概の敵を倒す事が可能だと思いますが。それでは足りないと？」

「俺のペルソナには探知能力も無ければ、傷を癒すための力もない。なら、さらにペルソナを増やしてその力を得れば良いと思ったんだ」

普通のペルソナ使いならばペルソナは一人につき一体ということで、その能力を伸ばす事で新たな力を得るしかない。

しかし、八雲はワイルドと言う複数のペルソナを使役する能力を持っている。

よって、いま所持しているペルソナで新たな力を得るよりも、その力を持っているペルソナを扱えるようになれば良いと考えたのだ。

確かに、鍛える事でペルソナが新たな力に目覚めるにはかなりの時間が必要になり。それをするよりかは、他のペルソナを得る方が簡単ではある。

イゴール自身も、効率を考えるのであれば八雲の考えの方が正しいと思えた。

けれど、ペルソナとは自身の心の内に潜むもう一人の自分。

たった一体のペルソナを扱うだけでも、他の者は制御剤に頼らなければならないというのに。それをさらに増やしていけば、八雲も他の

者のようにペルソナを制御できなくなる恐れがあった。
「……今の貴方では持てても六体が限度でしょうな。戦い方に関してはお客様の肉体が戦えるようになってから教える事にしましょう。今日のところは新たなペルソナの得方、それとペルソナの合体と言うものをお見せしようと思います。テオドア、お客様を部屋まで案内しなさい」
「畏まりました。では、八雲様。ご案内いたしますので、こちらへどうぞ」
　そういってテオドアは八雲の席までやってくると、手を差し伸べて椅子から下りるのを手伝い。そのまま、数多ある扉のうちから一つを選び、その奥へと案内した。
　――大広間
　テオドアに手を引かれてやってきたのは前回やってきた場所とは別の部屋だった。
　天井や壁と言ったものがなく、空は青ではなく白、地面はどこまでも続く荒野となっていた。
　そんな空間にポツンと佇む扉からエリザベスが遅れて入ってくると、八雲に笑顔を向けて隣までやってくるなり頭を撫でる。
　急にそんな事をされて少々驚く八雲だったが、当の本人は気にした様子もなく話し始めた。
「ペルソナを得るには心が大きく変化するか、シャドウと戦う事で可能性の芽と出会う必要があります。そして、ペルソナの合体には多くのペルソナが必要となりますので、この部屋にシャドウを放ち、それらと戦う事でペルソナを得て頂こうという次第でございます」
「わかった。まだ俺自身は動けないからペルソナで戦うけど良いよね？」
「ええ、勿論でございます」
　戦闘に関して類い稀なセンスを持っている八雲だが、今現在は身体のせいでそれらは封じられている。
　しかし、それでも戦うしかないとなると、当然、ペルソナによる力押しの戦い方が基本となる。

エリザベスにルールの確認を終えた八雲は、死神のカードを掌の上に具現化させるとそれを握り潰し。死の神を呼びだした。
「準備は宜しいですね？　では、先ずは小手調べに魔術師〝マジックハンド〟を三体ほどお相手して頂きます」
《グララ……》
言ったテオドアの隣に現れた赤銅色の扉が開くと、渦巻く銀色の境面から水色の仮面をつけた頭部に手の形をした胴体を持ったシャドウ、魔術師〝マジックハンド〟が三体出てきた。
シャドウが現れてからも、扉の中に存在する鏡面は向こう側が一切見えない不思議な作りのまま渦巻いている。
それを見た八雲は、タルタロスの二階へ上がるゲートに似た物なのだろうと当たりを付け。視線をシャドウらに戻すと、袈裟切り、横薙ぎ、刺突と一体につき一撃を見舞う事で、敵を全て黒い霧へと変えた。
「ん？　この頭の中に浮かんでるカードを選べば良いの？」
「はい。私共には見えておりませんが、それが八雲様の出会った『可能性の芽』でございます」
説明を聞いている最中も八雲の頭の中では、三枚のカードが衛星の様な軌道でグルグルと回っていた。
どのカードが良いかは分からないが、とりあえず目の前に来た一枚に手を伸ばして捲るイメージを抱くと。それが現実に起こり、八雲の手には一枚のカードが握られていた。
「……女教皇〝アプサラス〟。これが新たにペルソナを得るってことか、自分の中にペルソナが増えたのが分かるよ」
「フフッ、では続けて参りたいと思います」
手に入ったカードを光にして消す八雲に笑いかけるテオドア。
そして、テオドアの言う通り、再び扉の鏡面が揺れると、今度はピンクの仮面をつけた黒い小さな天使のようなシャドウ、恋愛〝狂愛のクビド〟が三体現れる。
さらに敵は、出てきて直ぐに八雲に向けて持っていた弓で矢を飛ばすが、それらは顕現し続けていたタナトスによって全て叩き落とされた。

その光景を冷静に見つめながら、精神エネルギーを練っていた八雲は静かに呟いた。
「……タナトス、メギドだ」
《グルォオオオオオッ!!》
練り上げられた精神エネルギーはタナトスによって魔力に変換され、変換された魔力は咆哮するタナトスの手の先より放たれる。そして、それらは力の奔流となって全ての敵を飲み込んだ。
敵を飲み込んだ攻撃の余波で地面と大気が震え。濛々と砂塵が巻き上がるが、見ていたエリザベスによって支えられ八雲は倒れずに済んでいた。
そうして、視界が戻り始めるころに、再び頭の中でカードが回転していた。
先ほどのやり方を思い出し、八雲は再び一枚のカードを捲るようイメージする。
「小アルカナ〝コイン〟か。ゴメン、エリザベス。これ預かっといて。テオドアは、次をお願い」
『承知いたしました』
大きく一枚のコインの描かれたカードが光となって消えると、八雲の手の上に七百円が現れていたので、それをエリザベスに渡すと今度はテオドアに次の相手を頼む。
そうして、頼まれたテオドアがシャドウを呼ぶと、突如タナトスが扉へと疾走を始めて向かって行った。
右手に持った剣を振り上げながら扉へと向かったタナトスは、鏡面を揺らして現れたばかりのカブトムシ型のシャドウ、皇帝〝死甲蟲〟に向けてそれを振り降ろし。角の先から真っ二つに切り裂く。
シャドウを呼んだばかりだったテオドアは、その一瞬の事に少々驚くがタナトスの潜在能力はエリザベスに見せてもらったペルソナ全書で既に知っていた。
そのため、ペルソナを自在に使役する八雲であれば、この程度は簡単にこなしてしまうだろうと納得する事にした。
「戦車〝アラミタマ〟。色んなアルカナがいるんだね」

「はい。タロットの大アルカナに対応していまして、愚者から永劫までの計二十二種になります」
「へぇ、そんなにあるんだ」
新たに手に入れたカードの他、顕現させているタナトス以外のカードも出して掌の上で回転させる八雲。
話を聞きながらのその行動に年相応な幼さを見て、力の管理者である二人は思わず笑みを浮かべた。
しかし、途中で八雲はその三枚のカードを掴んで遊ぶのを止めたため、気を取り直して己の役目を果たす事にする。
「では、ペルソナも集まりましたので、一度ベルベットルームに戻りましょう」
「わかった」
そうして、シャドウを出していた赤銅色の扉が消えていくのを見ながら、三人は入ってきた銀色の扉から部屋へと戻ったのだった。
――ベルベットルーム
部屋へと戻ってきた八雲は椅子に座ると、テーブルの上に三枚のカードを置いた。
愚者〝オルフェウス〟、女教皇〝アプサラス〟、戦車〝アラミタマ〟のカードを渡されたイゴールは興味深そうに笑みを深めると、それらを手に取り、口を開く。
「ホッホッホ、やはりお客様は素晴らしい素養をお持ちのようだ。〝ペルソナ能力〟とは〝心〟を御する力……〝心〟とは、〝絆〟によって満ちるのです。他者と関わり、絆を育み、貴方だけの〝コミュニティ〟を築かれるが宜しい。〝コミュニティ〟の力こそが、〝ペルソナ能力〟を伸ばしてゆくのです。よくよく、覚えておかれますよう」
そんな風に言い終わると、イゴールの持っていたカードは宙に浮き、現れた複雑な魔法陣に正三角形に配置された。
そして、カードと魔法陣の光がひときわ強くなった時、イゴールが腕を一閃させると三枚のカードが光を纏ったまま魔法陣の中心で融合した。
《ヒッホー!!》

「ふむ、魔術師〝ジャックフロスト〟。これがお客様の新たな力ですな」
融合したカードから勢いよく飛び出してきた雪だるま型のペルソナ、魔術師〝ジャックフロスト〟はテーブルの上でキョロキョロと辺りを見渡すと八雲を見て嬉しそうにピコピコと変わった足音で近寄る。
そして、子どもが抱っこを強請るように両手をやや広げて伸ばしてきたので、八雲はそのぬいぐるみ大の小さなペルソナを抱こうとした。
しかし、そこで考える。今の自分の非力な腕で重さも分からない相手を抱き上げることが出来るのだろうかと。
目測で身長約三十五センチ。これは帽子の分を除いた高さだが、自分で動けるということはぬいぐるみよりも動物の子どもの重量に近いと考えた方が良いだろう。
抱き上げるために手を伸ばしかけてから思考を終えるまでにこの間僅か一秒。
そうして、自身で抱き上げることの危険性を考えた八雲は高同調状態でタナトスの腕だけを顕現させ、テーブルに乗るジャックフロストを自分の膝の上に移動させた。
ペルソナの部分具現化など実際に出来るかどうか不安だったが、どうにか成功できた安堵と膝に座り嬉しそうに「ヒホヒホ♪」と歌っているペルソナをみて、八雲は笑みをこぼした。
「呼びだしたばかりだというの良く懐かれていますね。しかし随分と小さなジャックフロストだ。突然変異種でしょうか？」
「普通はどれくらいなの？」
「ペルソナ全体で見ますと小型に分類されますが、およそ五十センチから七十センチ程度が平均かと。ですので、八雲様のジャックフロストは二周りほど小さいですね。差し詰め、プチフロストと言ったところでしょうか」
「ふーん」
テオドアの話を聞きながら自分の膝の上に座るジャックフロスト

に視線を移す。
　確かに小さいペルソナだとは思っていたが、エリザベスの召喚したピクシーの方が小さかったのでジャックフロストも小さいものなのだと思っていた。
　しかし、ペルソナに詳しいテオドアがいうには目の前のジャックフロストは普通よりも小柄なのだとか。
　とはいえ、小柄だと弱いのかと言えばそうではなく、軽くて持ち運びがしやすいなどのメリットもある。
　なので、八雲はこの小ささは欠点ではなく個性だとして気にしない事にした。
「じゃあ、お前はプチフロストだ。エリザベスもそう登録しておいて」
《ヒホ？》
「畏まりました」
　エリザベスがペルソナ全書のジャックフロストの次のページに栞を挿み、その栞を指でなぞると新たなページが現れる。
　そして、八雲の元までやってくると、プチフロストに指で一度触れカードに戻し。プチフロストのカードを登録するためページに挿んだ。
　カードを挿んだペルソナ全書は薄っすらと発光すると、それで登録が終了したのか再び本を開き。カードとなったプチフロストは八雲に返された。
「登録ってなんかアナログなんだね」
「ご希望でしたら〝ハイテク〟な登録もご覧にいれますが？」
「どうやって？」
「こうやってで御座います」
　言うなり、エリザベスはペルソナ全書から栞を抜き取り、そのままペルソナ全書を発光させて消してしまった。
　続いて、先ほどページを増やしたときのように栞をなぞると、今度は空中に淡い光の球が現れ。エリザベスの手へと降りてくる。
　そして、光が治まったときには、エリザベスの手にはやや丸い形のノートパソコンが現れていた。

「こちら、ＣＯＭＰと申しまして、本来ならば悪魔を管理する道具でございます。けれど、ペルソナも似たようなもの。ですので、図鑑として管理するにはなんら問題ありません」
「へぇ。けど、悪魔って何？　実在するの？」
「ええ。ですが、それはまた別の世界のお話。この世界の住民である八雲様は知っても意味がありません。ですので、あまり興味を持たれぬようお願いいたします」
　いくら精神年齢が年齢不相応に高いと言っても、流石に未知の存在が実在すると言われて興味を持つなと言われても無理な話だ。
　どうにか自分もその悪魔とやらの事をもっと知ることは出来ないかと考えを巡らせながら、八雲はタナトスのカードを取り出すと登録をするふりをしてＣＯＭＰに触れようとしてみた。
「登録はこちらでやりますので、カードのみをお渡しください。お触りは厳禁でございます」
　冗談の様な口ぶりだが、エリザベスは至っていつもと変わらぬ表情でカードを受け取り、ＣＯＭＰの側面に開いたフロッピーディスクの差し込み口の様な場所にカードを入れた。
　そして、今度は栞をＵＳＢメモリ代わりに別の小さな差し込み口に入れると、それが始動キーとなっていたのか画面が立ち上がり登録が始まる。
　チラリと見えるＣＯＭＰの画面にはペルソナ全書と同じタナトスに関するデータが表示されているのだが、上手く見えない八雲は催促するようにエリザベスの服を引っ張った。
「見えない」
「……見ても分からないと思いますが？」
「俺のペルソナだよ？」
　それを言われてしまえばエリザベスとしても困ってしまう。
　しかし、普通の人間が触れて良いものではないので、どうすべきか主であるイゴールに視線だけで判断を仰ぐと、イゴールは少々の間を置いて頷いた。
「わかりました。ですが、不要な操作はご遠慮ください。タナトスの

カードは抜いても構いませんが、白金細工の栞にも御手を触れないようお願い致します」
「うん。これ、どうやってみるの？」
「基本的には現実のパーソナルコンピュータと同じ使用法でございます。タッチパッドでポインタを移動させ、画面上部にあるローマ数字を選ぶ事で対応するアルカナのペルソナを一覧表示するようになっております」
「ふーん……」
　生返事だが説明を聞きながらテーブルに置かれたＣＯＭＰを操作してゆく八雲。
　Ｎｏ．０の愚者の一覧には既に合体で使ったオルフェウスの情報が載っており、隣のＮｏ．１の魔術師の一覧には登録したばかりのプチフロストが載っている。
　自分の中にいる状態であれば少し集中すれば耐性や弱点、スキルと言ったものも自然と理解できるのだが。感覚的に捉えるのと視覚的に理解するのでは違った感想を抱いた。
　そうして、まだ登録数の少ない自分のペルソナ全書を見終わると、タブの影に隠れるようにポツンと置いてあるアイコンが目に入った。
（ＧＡＴＥ？　なんだろこれ……門？）
　渦巻く銀色の円形のアイコンには『ＧＡＴＥ』という名がつけられており、どこかシャドウらが出てきた扉を連想させた。
　八雲はこのＧＡＴＥというアイコンを開いてみたいという欲求にかられた。だが、現在も横ではエリザベスが目を光らせているので滅多な事は出来ない。
　しかし、もしもこれが先ほどの話に出てきた『悪魔』という存在を呼び出すものならばと強い好奇心が湧いた。
（チャンスは一度きり。尋ねるフリをしてそのままタップすれば……）
　そう考えて、八雲は一度エリザベスの方へと振り向くと、声をかけた。
「ねえ、エリザベス。これなぁに？」

「どちらでございますか？」
「えっと、これだよ」
「っ!?　それを開いてはなりません！」
普段の落ち着いた余裕のある様子から一転、本当に焦った様子でエリザベスが手を伸ばして制止するよりも早く、八雲はアイコンの上にカーソルを合わせ。タッチパッドを二度タップする事に成功した。
そして、アイコンが開くまでの砂時計が表示されると画面が眩い光を放つ。
エリザベスは八雲に覆いかぶさるようにしながらＣＯＭＰのキーを叩いて、操作を中断しようとするが全く操作を受け付けず。アイコンが開くのを止めることは出来なかった。
「……フゥ、仕方がありませんね」
諦めたように呟いたエリザベスは、画面の輝きが強くなるのを見ながら八雲を抱き上げるとＣＯＭＰから離れた。
抱きあげられた八雲は一体どうなるのだろうと思いつつ画面を見つめていると、ついにＧＡＴＥのタブが表示された。
開いたタブに表示されているのはアイコンと同じ銀色の渦。
しかし、こちらはアイコンと違って現在も不規則に渦巻いており、先ほどの赤銅色の扉に近いものだった。
「あれは悪魔をこの人間界へと呼ぶためのゲート。悪魔召喚の儀式と違い完全にランダムで呼びだすため、私共でも何が出てくるかは分かりません。それと、八雲様の頭脳を持ってすればあれが召喚の為のものであることは容易に推察できていたはずなのですが、一体何のためにあのような事をされたのか……御聞かせ願えますか？」
表情はいつもとほぼ同じ。いや、やや呆れている様子のエリザベスは、抱き上げているため直ぐ近くにある八雲と視線を合わせながら尋ねる。
しかし、呆れている様子であっても器用に冷たい怒りのオーラを出しているため、逃げられない八雲は生命の危機を感じていた。
「……知的好奇心から、かな？」
「好奇心は猫をも殺す、というイギリスの諺が元となっている言葉は

ご存知ですか？　悪魔は根本的に人間界の生物とは異なります。もし、我々の手に負えない者が現れれば人間界に災いが降りかかることもあり得るのですよ？」
「……うん。けど、大丈夫みたい」
エリザベスに叱られながらもゲートを見つめていた八雲が呟くと、ゲートからは何か黄色い獣の耳の様なものが出ていた。
だが、その耳は一度引っ込むと、今度は短い足の様なものが恐る恐ると言った感じで出ている。
イゴールとテオドアの方からは画面の向きで何も見えていないようだが、見えているエリザベスとアイコンタクトをとって大丈夫なことを確認すると、動向を見守る事にした。
《メー、メチ？》
「なにあれ？」
「八雲様の呼びだした悪魔で御座います」
現れたのは黄色い卵型の身体から直接、耳と手足が生えた奇妙な生き物だった。
大きさは先ほどのプチフロスト程度で、ＣＯＭＰの画面から出てきてテーブルに乗ると、キョロキョロと辺りを見渡している。
そして、エリザベスに抱きあげられている八雲と目が合うと、嬉しそうに鳴いてテーブルから八雲目がけてダイブした。
《メッチー!!》
「……タナトス、キャッチ！」
《メチィッ!?》
突如現れた死の神に掴まれた黄色い生物は怯えた様子で丸まる。
だが、八雲も別に悪魔を倒すために捕まえた訳ではない。先ほどのプチフロストのときと同じく、自分自身で抱けるか心配だったのでペルソナを使ったのだ。
なので、キャッチすると、そのままタナトスに自分の元まで連れて来させ。数秒観察してから、ぬいぐるみを抱くように受け取った。
「エリザベス、これなんて種族？」
「『メッチー』と申しまして、魔界のペット悪魔でございます。本来な

らば呼びだし、交渉することで仲魔とするのですが、そのご様子ですと必要はなさそうです」
　言いながらメッチーを抱いている八雲を椅子まで連れていき、既にゲートの閉じたＣＯＭＰを操作して悪魔図鑑を表示するエリザベス。
　そこにはメッチーという種族の説明と耐性と弱点、覚えているスキルが表示されており。八雲は見た目よりも優秀なスキルを持っている事に驚く。
「お前、回復スキル使えるんだ。ふーん、雷撃属性ね」
《メッチー！》
「この子を連れていきますか？　ペルソナとは違い、独立した自我を持っているのでカードには出来ませんが」
「そう、だね。俺のペルソナは回復スキルを持ってないから、一緒に行けるならお願いしたいな」
　今の八雲にとって回復スキルはかなり魅力的な魔法だ。自分の肉体を改造すれば、その手術の傷が塞がるまでは無理が出来ない。
　だが、もしも回復スキルがあれば直ちに傷を塞ぎ、体力が続く限りは次の手術や訓練をする事が出来る。
　チドリを守るため少しでも早く強くなりたい八雲にはメッチーの力は最も望んでいたモノだと言えた。
　そんな八雲の意思を理解したのか、エリザベスは起動していたＣＯＭＰをシャットダウンし白金細工の栞を抜き取り、続けてＣＯＭＰを光にして消す。
　そして、抜き取った栞を指でなぞり新たな光の球を取り出すと、それを八雲の左手首へと纏わせた。
　興味深そうにエリザベスの行動を見ていた八雲だったが、光の治まった左手首には黒いベルトのウェアラブルコンピュータが巻かれている事に気付くと、驚いた表情のままエリザベスを見上げていた。
「フフッ、これはＣＯＭＰの一種でＥｖｉｌデヴァイスと申しまして、省略してＥデヴァイスと呼ぶ事もございます。仲魔となった者はその端末に登録し、好きなときに呼び出せるようになります。ですが、仲魔と言っても所詮は悪魔。一種の契約によって力を貸しているに

過ぎません。ですので、契約の対価を払う事を覚悟しておいてください」
「でも、こんなの貰っちゃっていいの？」
「大変貴重な物ですから、本来ならば御譲りする事は出来ません。ですが、八雲様はペルソナ使いとしての素養だけでなく、悪魔召喚師の素養も持ち、既に一体の悪魔を使役している。ならば、私はその手助けをするだけでございます」
　自分自身を知りたいという願いを抱いているベルベットルームの住人にとって、客人とは自分が何者であるかを知るための可能性。
　そして、歴代の客人らを超える程の可能性を秘めている八雲は、エリザベスにとって自分が何者であるかを教えてくれる存在まで成長する確信があった。
　よって、先ほどまでは悪戯で悪魔を呼び出した八雲を母親のように窘めるつもりだったが、いまの心境はむしろ才に恵まれた八雲を出来得る限り後押ししようという気持ちだった。
「……ありがとう。でも、貰ってばっかりだと悪いから、いつかエリザベスに何かお返しするね」
「はい。そのときを心待ちにしています」
　八雲が言ったのはプレゼントを贈るという意味だったが、エリザベスは自分と戦えるまでに成長することだと受け取った。
　その食い違いのせいか八雲は妙な寒気を感じながらも、貰ったＥデヴァイスを起動させタッチ操作で機能を確認して気のせいだと思う事にした。
「……ペルソナ全書の機能も搭載してるんだ。それに電話とメール機能もあるんだね」
「はい。ペルソナ全書はサーバと繋がっているような状態ですので、八雲様がご自身で登録・更新されれば私の方でも上書きされるようになっております。それから、ご利用に為られない時は『ＤＥＡＤ』の掛け声で待機状態としましてリストバンドに出来ます。また呼び出される際は『ＳＥＴ』の掛け声で呼び出せますので、状況に応じてご使用ください」

「へぇ、凄い便利なんだね。それじゃあ、メッチー。また後で呼び出すから、一回戻っておいて」
《メッチー!》
　エリザベスの説明を聞きながら早速試してみようと考えた八雲は、先にEデヴァイスで送喚プログラムを起動させゲートを開いた。
　そして、テーブルの上に移動していたメッチーは、呼ばれると素直にEデヴァイスの上に出現したゲートに飛び込み魔界へと帰っていったのだった。
「あとは……DEAD!」
　教えられた掛け声をすると、Eデヴァイスは光に包まれリストバンドになっていた。
「うわ、本当にリストバンドになった。どんな技術なんだろ?」
　現代科学では考えられない機能に驚かされながらも、リストバンドになったEデヴァイスを撫でながら八雲は顔を上げた。
　そう、そろそろ眠気が襲ってきたため、今回の会合は終わりを迎えようとしているのだ。
「さて、先ほど私がやってみせたのはトライアングルスプレッドという三身合体です。他に、二身合体のノーマルスプレッド、四身合体のクロススプレッド、五身合体のスタースプレッド、六身合体のヒランヤスプレッドがございます。ですが、四身以上の合体はまだお客様の力が足りませんので、そのときが来れば解禁とさせていただきます」
「わかった」
「では、そろそろお時間のようですな。最後にこちらをお持ちください」
　そう言ってイゴールは手をかざすと、そこに青い光が集まり鍵の形となった。
　一体何に使うのだろうと思っている間に、その鍵は八雲の前までやってきて宙に浮いている。
　他の者も黙ってそれを見ているので、浮いている鍵を掴むと鍵は強く輝き消えてしまった。
「……?　どうなったの?」

「お客様は鍵の所有者として選ばれたのです。今後は必要なときにペルソナカードのように呼び出せば、元の形に戻ります。夢ではなく、現実からここへ入るには必要となりますので、使うタイミングになれば自然と鍵の方から呼びかけてくるでしょう」

言われて直ぐに鍵を呼び出すと、確かに先ほどイゴールがやったように青い光が集まって鍵となった。

イゴールと従者の二人はそれを満足気に見つめ、現実世界の肉体が覚醒しようとしているためか急な眠気に襲われ始めた八雲に別れの言葉を告げる。

「フッフッフ、またお会いしましょう。それでは、御機嫌よう」

イゴールの笑い声を聞きながらそこで八雲の意識は完全に途切れたのだった。

第七話　肉体改造

４月７日（金）
朝――第八研・被験体用寝室
ベルベットルームより戻ってきた八雲は、起きると自分の左腕に黒いリストバンドが巻かれている事に気付き、今までのことが夢ではないことを確信した。
そして、ゆっくりベッドから出ると洗面所へと向かい準備を終える。
そうして、ベッドに腰掛けたところで、入り口の扉が開いた。
「グッドモーニング、少年。君はいつも良い時間に起きていますねぇ」
「身体が勝手に目覚めるんだよ」
「それはそれは羨ましい体質です」
準備を終えた丁度のタイミングで飛騨がやってくると、八雲を見て楽しそうに相手は話し始める。
しかし、それほど話す気のない八雲は静かな表情のまま適当に返し、途中で話を切りあげて案内するように伝え。
飛騨も気にした様子もなくそれを了承した。
――第八研・飛騨専用開発室
飛騨の後について案内されたのは第八研の最奥の部屋ではなく、その手前の用具室だった。
だが、この用具室自体に用がある訳ではない。
実は、第八研の用具室には棚の後ろに隠された扉があり、本当の目的地はその扉の向こうにある。
そして、少し離れた場所に隠されたハンドルを回す事で棚を動かす。
普段、あまり人が寄りつかない第八研の用具室などまともに調べる人間もいないため、いままでは隠れた研究は全てこの場所でやっていたと語るのを聞きながら八雲は部屋に入った。
隠された研究室は、部屋自体がそこそこに広く、ここもまた簡易キッチンやトイレにシャワー室など、最低限の生活が出来る設備が

整っている。
　加えて、メインが研究と開発であるため大きな機材やシートを被せられた何か分からないようなものが一番大きな部屋には置かれていた。
「ンッフッフ、驚きましたか？　ここは私専用のラボです。ですので、ここで作られた物はエルゴ研製ではなく飛騨製と呼ぶようにしています。まぁ、誰にも見せていないんですがね」
「……それで、計画は考えてくるって言ってたけど、最初は何から始めるの？」
「んー、つれない反応ですねぇ。本当ならばもっとオーバーリアクションでいってもらいたかったのですが」
　研究者にはコレクターが自身のコレクションを自慢するように、自分の研究環境や研究対象、研究に扱う器具に最終的には研究結果を他人に自慢したがる者もいる。
　飛騨もその一人であり、いままで誰にも見せた事のない研究室に対する感想として、八雲の素っ気ない態度は少々気落ちするものだった。
　しかし、本題についても忘れている訳ではないので、奥にある大きな機材と手術台の様なものを準備しながら八雲へと説明を始めた。
「まーず、最初にするのは電気刺激によって貴方の筋肉を強制的に鍛えます」
「え？　それって通販にある腹筋を鍛えるベルトみたいなのと大差ないんじゃないの？」
「ええ、やることは同じですよ。流石に今のその貧弱なボディでは体力もつけれませんし。体力がなければ手術にも耐えられません。そう言う訳で、超回復なんてものも無視して無理矢理に筋力の復元に努めます」
　言い終わると、飛騨は八雲に手術台に寝るようジェスチャーで示し。さらに身体に取り付けるベルト型の器具を複数用意した。
　八雲は素直にそれに応じて仰向けに寝そべるが、外科医療的な施術をすると思っていただけに少々気落ちする。

飛騨の言う事は尤もであり、いくらメッチーの回復スキルを使おうが元の体力がなければ回復する前に死ぬ。
しかし、それでも少しでも早く戦える身体になりたいと思っている八雲にとってはもどかしさを感じずにはいられなかった。
だが、そんな八雲の気持ちを見抜いてか、四肢にベルトを巻き、腹筋と胸部に機械とコードで繋がったパッドを張り付け終わった飛騨は笑みを浮かべて新たな機材を取り出した。
「そーんな顔をしないでください。筋力増強の他にも同時進行で肉体の改造はします。これは、貴方の神経伝達速度を速めるために持ってきたものです。電気刺激で筋肉を鍛えるので、本当ならば併用してはいけないのですが。これをそれぞれの指の先にはめて微弱な電気を流します。すると！　それにより神経に脳からの信号と似た物が流れ、神経自体が強化されるというものなのです」
「神経の強化って、感覚が鋭敏になり過ぎたら普通よりもダメージの負担が大きくなるんじゃないの？」
「ノンノン。感覚を鋭敏にするのではなく素早い電気信号の行き来を神経に慣れさせるのです。続けていけば、人の反射限界を僅かに上回れるかもしれません。見てからでも余裕で反応出来るなんて当たり前というくらいにね」
手足の全ての指に機材とコードで繋がったキャップのようなものを取り付けながら飛騨はそう言った。
慣れたところで反射神経が良くなるのかと疑問を感じつつも、八雲は結局は自分に医学的なことは分からないとして飛騨に任せる事にした。
そして、全ての準備を終えたところでカウントダウンが始まった。
「では、３・２・１、スタート！」
パチンっ、
「っ!?　がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
電源を入れたと同時に八雲の全身を激痛が襲った。
手足は震え、身体は痙攣しながら跳ねる。さらに、指先から直接神経に電流を流され、脳にも焼けつくような痛みを感じていた。

自分で頼んだことだが、こんなにも苦しい事だとは思っていなかった。
痛みで目の前が真っ白になるが、神経に電流を流されているので意識を失いかけても強制的に覚醒させられる。
飛騨の説明では半年後には自然に以前の状態くらいには回復すると言っていた。ならば、そうなってからでも遅くはなかったのではないかと後悔しかける。
「……辛いですか？　止めても良いですよ。半年後には元の身体に戻れるのです。何も寿命を縮めてまで、子どもの君がこんな事をする必要はない」
突如、聞こえてきた飛騨の声は低く真面目な口調だった。
その声色の通り、いつもの胡散臭い笑みはなりを潜め、自分たちの研究が多くの子供らの命を奪っていることを認めたときのように、悲しげな表情をしている。
そう、まるで八雲に止めると言って欲しいかのように。
「っ!?　お、れは、俺はチドリを助けたいんだ！」
先ほどまで焦点の定まっていなかった瞳に強い意思を宿らせ八雲は続ける。
「こん、な……場所じゃない。もっと、チドリが、ちゃんと笑える場所へ、連れていくんだ。だから、俺は絶対にやり遂げるっ」
額に脂汗を滲ませ、痛みで呼吸すら満足に出来ていない筈の八雲は、言い切って以降どれだけ続けても歯を食いしばり叫び声を上げることはなかった。
大人でも我慢できないほどの激痛を子どもが意志の力で捩じ伏せる。
そんな驚異的な精神の強さを見た飛騨は、本当に八雲ならばやり遂げるだろうと思い。
期待と同時にその茨の道をゆく少年の痛々しさに思わず目を背けそうになりながらも、八雲の意思を酌んで計画を進めたのだった。

???――ベルベットルーム

現実世界で飛騨の改造を受けるようになって数週間。扉が無いために夢を通じてベルベットルームにやってきていた八雲は、今日もまたベルベットルームの住人であるエリザベスとテオドアに戦闘の手ほどきを受けていた。
「攻撃を喰らっても目を閉じてはなりません。周りの状況を見れていれば、攻撃を受けても直ぐに態勢を立て直す事が出来ます」
拳を握りしめ、体勢を低く保ったまま駆け寄った八雲を見ながら、エリザベスは真剣な表情でレクチャーする。
それを聞きながらも、八雲はテオドアの連続蹴り躱しきれず、攻撃を受けた際に目を閉じ吹き飛ばされてしまう。
「ぐあっ!?」
「フム……」
筋力が戻り、なんとか戦えるようになったとは言え体力はまだ戻っていない。
加えて、体力が戻ろうがいまはまだ年相応の子どもの筋力でしか無い。
そんな脆弱な存在が相手であれば、テオドアはさらに追撃をする事も可能だったが、ただ意識を刈り取っては何の訓練にもなりはしないと追撃をしなかった。
「目を閉じてはなりませんと申した筈ですが?」
「っ!?」
しかし、二人の鍛錬を傍らで見ていた姉は違う。
八雲が本物の強さを得るためならば、甘さから来る情けや容赦は一切掛けないつもりでいた。
そのため、いまもまた攻撃を喰らい目を閉じた八雲へ、罰の意味も込めて高く飛び上がった状態で踵落としを決めた。
「ハァッ、ハァッ、グ……ハァッ」
「……よく回避が間に合いましたね」
踵落としを決めた際に出来たクレーターの中央に静かに立ちながらエリザベスは呟く。
そのクレーターの外には、回避したものの巻き上がった土と共に外

へと押し出された状態で倒れた八雲が、肩で息をしながらエリザベスを睨んでいた。
喰らえば一撃で意識を刈り取られ、骨や内臓にダメージを負い重体になる威力なのは、この数日で既に学習している。
罰の意味でしかないため、それ以降の追撃をしてくることはないという事も分かっている。
ならば、いくら体力が尽きかけているとはいえ、強化された反射神経をフルに使えば直撃を避けることくらいは出来るようになっていた。
そして、そんな様子を見ていたテオドアも、うつ伏せになりながらも顔だけを上げてエリザベスを睨んでいた八雲を助け起こしながら素直に褒める。
「咄嗟の反応速度に関して言えば、八雲様は我々よりも遥かに速いです。身体が小さいので、その分、脳からの信号が身体の末端まで届くのが早いというのも当然ありますが。それよりも、純粋に伝達速度が反射に近い域に達しています。これも例の改造の成果ですか？」
「ぐっ……ああ、うん。神経に微弱な電流を流して、脳からの信号がスムーズにいくように調整してるんだ。飛騨さんがいうには見るのと同時に思考して、ラグ無しで対処行動をとれるようになるって」
「それは……。しかし、肉体がついてこれないのでは？」
八雲の話を聞き、そんな事が本当に可能なのかと思わずにはいられないテオドア。
今の反射レベルの反応に合わせた動きでさえも、八雲の肉体は完全には合わせれないでいる。
それも、ただ合わせられないのではなく、肉体がその動きについていけず。関節や筋繊維に続けての行動に支障をきたしかねない負担をかけているのだ。
エリザベスの攻撃を回避した際にも、座っているというのに手足が痙攣するほどの負担が掛かっている。
テオドアはペルソナ全書からピクシーを召喚すると、ディアラハンで回復してやりながら八雲の言葉を待った。

「……身体も後で調整するよ。今は体力作りと神経伝達速度のアップ。それから毒に対する免疫とかをつけてる段階だから」
「毒への免疫でございますか？　それならば、毒の効かないペルソナを装備していれば、ある程度は防ぐ事も可能かと思いますが」
「かもしれない。だけど、多分、改造が終わって表に出たら、他の研究員に狙われると思うから。食事を自分の分だけ別に用意するとチドリが心配してくるかもしれないしさ。彼女にはなるべく心配とか不安な想いさせたくないんだ」
苦笑気味にそう答える八雲の表情は疲れているにもかかわらず、どこか楽しげで年相応のものだった。
父と母を失った少年は、力を得て、今度こそ大切な物を守りたいと願った。
そして、いま少年は一人の少女のため、自分の全てを賭けて守る事を誓い。更なる力を、守るために必要な全てを求める。その想いが少年に新たなる力を授けた。
「これは……？」
光を纏いながら目の前に現れたのは『ＸＸ・審判』のカード。
クルクルと回りながらゆっくり降りてきたそれを、八雲は他のペルソナを呼び出すのと同じように握り砕いた。
《我は汝……汝は我……》
初めてオルフェウスを召喚したときのように、水色の欠片の様なものが集まってペルソナが形作られてゆく。
可能性の芽に出会ったわけでも、ペルソナを合体した訳でもない。
にもかかわらず、八雲は新たなペルソナを自分の内から目覚めさせた。
それは完全にイレギュラーな事態であり、自身の担当する客人のそんな異常事態を本来ならば気にやむべきなのだが。エリザベスは少年が自分の前に敵として現れる未来への期待から、口元に笑みを浮かべるのを我慢出来ずにいた。
「これが人の可能性。やはり、八雲様は……」
「……姉上」

「っ、失礼致しました。八雲様、そのペルソナも新たに登録なさいますか？」
いつか訪れる戦いのときを想い気持ちが昂ったのか、エリザベスが周囲に闘気を放ち始めたので、それを軽く諌めるテオドア。
姉と同様にテオドアも自分が何者であるかを常に知りたがっている。
だが、いま目の前にいる客人はエリザベスの担当であり、またテオドア自身も姉たちほど好戦的な性格という訳でもない。
故に、多少は共感できる部分があろうと、テオドアにとって八雲はイレギュラーの多い客人という扱いでしか無かった。
そうして、今は自分自身が強くなる事に精一杯の少年は、最低限動ける程度には体力が回復したので、新たに得たペルソナのカードをエリザベスに手渡した。
「では、少々お待ち下さいませ」
言って、カードを受け取るとエリザベスは白銀細工の栞からペルソナ全書を取り出し。カードを挿んで登録を始めた。
登録をしている間は何もすることがないため、ジッとエリザベスを見ながら八雲は考えに耽る。
（自分の中にいるペルソナたちには変化が無いのに、新しいペルソナに目覚めた。ペルソナは人格の鎧だから、自分の精神に何か変化があれば目覚めるのかも知れない。だけど、俺は何か変わったつもりはない。そんな無自覚な状態でも目覚めるものなのか？）
八雲の考える通り、新たにペルソナが目覚めたのは八雲自身の精神に変化が起こったためだ。
そもそも、チドリのように固有のペルソナを一体しか呼び出せない者たちは、自身のパーソナリティーの根源であり核に当たる部分の精神からペルソナを呼び出している。
心理学用語の『ペルソナ』を語源としているには、全く意味が変わってしまっているが。そういった理由の為、たとえ敵が変わっても『自分』という存在は変わらない、変えられないとして彼女たちは一つのペルソナを使い続けている。

本来ならば、そういったペルソナ使いのペルソナは、強い精神の変化があれば固有ペルソナが変化するのだが、八雲はワイルドの能力を持っていた。
そのため、チドリを守るためなら何でもするという気持ちに呼応するように、足りない部分を補うべく所持しているペルソナ達とは違う力を有しているペルソナを得たのだった。
「……ま、考えてもしょうがないか」
「どうかされましたか？」
「いや、ペルソナの目覚め方についてちょっと考えてただけ。それより、エリザベス。そろそろ、俺の方も時間みたいだ」
そういった八雲の瞼は本人の意思とは無関係に降りはじめていた。
ここへは夢を通じてやってきている。そのため、現実世界の肉体が眠を覚ませば、こちらにいられなくなるという訳だった。
だが、夢を通じて来ているといっても、何も精神だけを飛ばしてきている訳ではない。
こちらで行った鍛錬は肉体にキチンとフィードバックするし、傷を受けたまま目覚めると現実の肉体も同じ場所に傷が出来た状態となってしまう。
そのように、単に夢を通じてやってきているだけで、なんら生身の肉体でやってくるのと違いはなかった。
そして、丁度エリザベスの方も登録が終わったようで、ペルソナ全書を開き挿んでいたカードを八雲に返す。
受け取った八雲はそれを光の粒状にして消すと、二人に今日の鍛錬の礼を言って現実へと戻った。

7月9日（日）
昼――第八研・低酸素訓練室
飛騨の隠し研究室の中には、様々な状況を作り出せるように必要な部屋も用意されている。
これは今のエルゴ研になる前の岳羽詠一朗がトップであったときに許可を取って改造していたので、現在の室長クラスの人間は知らな

いだけだ。
そして、いま八雲が入っている部屋は低酸素室。気圧を下げる事で空気の密度を低くし、空気中の酸素濃度を下げている。
この部屋を使うのは今日が初めてというわけではなく、動けるようになってからは日課の様なものとなっていた。
「はぁ……はぁ……」
ランニングマシーンで時速およそ十五キロと普通の大人でもキツいペースで走り続ける八雲。
これは成人女子のマラソン選手よりも少々遅い程度の速さで、八雲のいる訓練室内の設定はエベレストの山頂付近並みの酸素濃度となっている。
同じ酸素濃度であっても登山と違って大量の荷物も持っていなければ、室温も空調によって２４度に設定されているため、酸欠になる事さえ注意すれば実際の登山よりかは難易度は抑えられていた。
とはいえ、二月前は走る事もままならなかった小学二年生が、一般の成人よりも高い運動能力を有している。
そのことに、外でそのトレーニングの様子を見ている飛騨も苦笑いせずにはいられない状況だった。
《……少年、そろそろ一時間ですよ》
「……うん。じゃあ、クールダウンしてから出るよ」
《では、少し酸素濃度を上げておきますから。出たらシャワーを浴びて昼食を取っておいてください。私は午後の準備をしておきますので》
「うん、了解」
答えて八雲は走るペースを落とし、軽いジョギング程度にする。
急に運動を止めるのは身体に負担をかけるので、その後の活動を考えるとクールダウンを疎かにすることはできないのだ。
（今日の午後は、『黄昏の羽根』とかいうのを移植するって言ってたっけ。データは見たけど、実物を見ない事には分かんないな）
そんな風に考えながら八雲はクールダウンを終えると、そのままシャワー室で汗を流しに向かった。

午後――飛騨専用開発室
シャワーと昼食を済まし、食後の休憩を終えた八雲はいつもの手術台に座っていた。
その近くではゲートから呼び出したメッチーがピョンピョンと楽しそうに遊んでおり。眺めている八雲も優しく頭を撫でてやる。
《チー！》
「気持ちいい？　今日はまた身体をいじるから、終わったら回復魔法を頼むよ」
《メッチ！》
八雲が頼んだのは、手術後の傷口を回復魔法で塞ぐということだ。
いままでも何度か筋肉や骨に内臓といったものをいじるために手足だけでなく、背中や腹部を開いたことがあった。
通常ならばそんな事をした場合、数ヶ月は安静にしながらリハビリをする必要がある。
だが、八雲はその時間すら惜しいと、回復魔法で一気に傷口を閉じて、翌日には日課のトレーニングに励んでいた。
最初は飛騨もその無茶な治療法に難色を示していたのだが、今ではプランの大幅な短縮が可能だとしてある程度は許可していた。
そうして、今日もまた開胸手術を行うため、先にメッチーを呼び出して回復魔法を頼んでおいたという訳だったのだが。丁度、一人と一匹が会話を終えたところで、飛騨が重厚な鈍い輝きの黒い金庫のような物を持って現れた。
「いやはや、お待たせしてすみません。これを保管していた金庫のパスワードを思い出すのに時間が掛かってしまって」
「金庫に金庫を入れてたの？」
「ええ、これはちょっと特殊なものでして、他の研究室に狙われかねなかったものですから」
部屋へと入ってきた飛騨は、手術台の近くの台に持ってきた三十センチ程度の立方体型の金庫を置くと、今度は普段着ている白衣を脱ぎ。
さらに、備え付けのロッカーから手術着を取り出し着替え、手など

もしっかり洗うと手袋を付けて戻ってきた。
　飛騨が準備を終えたことでもう少しで手術が始まるのだろうと思っている前で、飛騨は置いていた金庫を開け。中から青白い光を発する何かを取り出した。
「これが言っていた黄昏の羽根です。前にも説明しましたが、影時間に動いている機械はこれを組み込んでいるために稼働出来ているのです」
「ふーん。けど、他の人も知ってるならなんでそれが狙われるの？」
「これは少々特別な物だからです。黄昏の羽根はその名の通り、それぞれが羽根の形をしています。ですが、その中でただ一つアイギスに搭載された黄昏の羽根である『パピヨンハート』のみ、二枚の羽根が結合し蝶の様な形をしていたのです」
　話を聞き、以前見せられたパピヨンハートの写真を思い出す八雲。
　確かに写真に写っていたパピヨンハートは鳥の羽根というよりも、蝶の様な形状をしていた。
　それに対し通常の黄昏の羽根は普通の鳥の羽根の形をしており、青白く発光しているそれは、大きさにして十センチから二十センチ程度と大きさもバラバラだった。
　そして、いくら普通の黄昏の羽根を二枚使ったところで、パピヨンハートの様な形状にはならないことを踏まえて考えると、アイギスのパピヨンハートは正にイレギュラー中のイレギュラーな存在と言えた。
「そして、私はオーバーテクノロジーの塊である黄昏の羽根で、どうにか人工的なパピヨンハートを作れないかと考えました」
「ああ、それでやってみたら出来たんだ。なら、狙われるかもね」
「……答えが分かっても、私が言う前に言わないでください。はぁー……ま、その通りなんですけどねぇ」
　お披露目するよりも先に結果を言われてしまい肩を落として落ち込む飛騨。
　しかし、四十になろうかという成人男性が落ち込んでいたところで、八雲はなんのフォローもする気はなかった。

一方で、飛騨も飛騨で八雲のそういった性格をここ数ヶ月で理解していたので、気を取り直すと金庫の蓋を開け。中から人工的に結合された黄昏の羽根を取り出した。
「自分で作っておいてなんですが、これは偶然できた産物です。オーパーツとも言える黄昏の羽根は構成物質からして未知の存在なので、私なりに様々な方法で干渉を試みました。ですが、結果は全て思わしくなく。その日は諦めて放置したのです」
言いながら八雲の元まで持ってきた黄昏の羽根は、パピヨンハートのような特殊な形ではなく。普通の鳥の羽根のまま継ぎ目も無くX字になっていた。
まるで、初めからその形状だったかのように自然に融合してしまっているそれを見ていると、飛騨はさらに続ける。
「と・こ・ろ・が！　次の日に保管していた羽根を見ると、なーんとクロスしたまま融合してしまっているではありませんか。パピヨンハートではありませんが、結合した羽根が出来た事より、自分の苦労が全て徒労に終わったことの方がショックでしたよ」
「けど、性能は普通のよりも上なんでしょ？　どんな効果があるか知らないけどさ」
「ええ、それは保証します。これの名前は『エールクロイツ』。一部フランス語であるパピヨンハートに倣って、ドイツ語とフランス語を合わせた造語で『交差する羽根』という意味です。まぁ、見たままの名ですが、これはなんと組み込まずとも触れているだけで、その機械が影時間でも動くという効果があります！」
影時間には全ての機械が止まる。
だが、エルゴ研の計測機器のように影時間だろうと稼働するものも存在した。
何故、影時間であっても稼働するかというと、それは装置の動力部に黄昏の羽根を組み込んでいるためである。
使っているエルゴ研ですら原理は解明されていないが、動力部に黄昏の羽根を入れておくと、その機械は影時間だろうが正常に動く。
しかし、飛騨の持つエールクロイツは動力部に組み込まずとも、た

だ上に置いておくだけでも稼働するようになる。
黄昏の羽根は貴重な物で、各研究室に割り当てられる個数が決まっているだけに、組み込まずとも繰り返し使えるエールクロイツは他の研究室も喉から手が出るほど欲しがるような代物であった。
だが、八雲は話を聞いてその価値を理解すると、本当にそんな大切な物を自分の我儘で始まった改造なんかに使って良いのかと疑問を持ってしまう。
そして、少々申し訳なさそうな表情で口を開いた。
「そんな大切な物を使って良いの？　別に普通のやつでも良いと思うんだけど」
「そーうですねぇ、惜しい気持ちもなくはないですが、やはりどうせなら最高の作品に仕上げたいというのが一番の気持ちです。な・の・で、これを使って良かったと思えるほど、少年が素晴らしい存在になってくれるのなら構いませんよ」
「……フフッ、まぁ、そうなれるよう精々頑張るよ」
《メッチーー!》
お互いに楽しげに笑うのを見てメッチーも楽しそうに鳴くと、飛騨は本格的に準備を進め。八雲の心臓を包むようにエールクロイツを移植した。
機械に組み込むのと違い、包んだ心臓に負担を掛けないようにする必要があったために手術は五時間に及んだが、包んだ状態で配置を終えたときには一度強い蒼色の光を発するという謎の現象が起きた。
シャドウ兵器シリーズの黄昏の羽根では起動時ですら、そのような報告はなく。飛騨もアクシデントに驚かされたりもしたが、光が治まると本体と同じように発光する太い血管のような物が出現していた。
周囲と繋がるそれに触れようにも、器具も手も全てすり抜けてしまい一切の干渉が出来ない。だが、心臓の鼓動に合わせて黄昏の羽根からその光の血管を通じて白っぽい光が移動していたことから、黄昏の羽根と八雲の間にパスのような物が繋がったのではないかと思われた。
オーバーテクノロジーの塊で、物質にアイギスらのような精神が宿

るというあり得ない現象も起きていたので、目覚めた時には別の人格になっていることも危惧したがそのようなことは起こっておらず。
また、最終的に最初から臓器の一つだったかのように八雲の身体に適合したため、移植自体が賭けの様なものだと思っていた飛騨も安堵せずにはいられなかった。
そもそも、黄昏の羽根は日常ではなく影時間に関係のあるモノの為、その影時間へ高い適性を有している八雲ならば、他の者よりも高い親和性を持っていても不思議ではないと思えた。
そうして、手術の傷もメッチーの回復魔法によって傷跡が残らないよう塞がれると、数日間安静にした後、移植に成功した八雲の改造は最終フェイズへと入ったのだった。

第八話　ファルロス

???――???

どこまでも広がる闇のみが存在する空間。

寝ていた筈の八雲はそこでただ一人浮いている状態で目を覚ました。

「……ここは？」

「気がついた？」

「え？」

状況を確認しようと考えたその時、突如背後から幼い少年の声が聞こえてきた。

そして、振り返るとそこには囚人服のような白と黒のボーダー柄の服を着た、八雲と同じ年頃の水色の瞳を持つ少年が自分と同じように浮いていた。

見覚えのない場所だが、八雲は何故か少年を知っている気がした。

そう、薄れてはいるが少年から微かに感じる気配。それはあのムーンライトブリッジで感じた物と酷似していた。

「……デスか？」

「んー、やっぱり分かっちゃうよね。初めまして、僕はファルロス。正体は君に封印されたことで自我が芽生えたデスだけどね」

「俺に封印された？　デスはアイギスが倒したんじゃ？」

あの日の戦いでは、八雲はデスの放った万能属性の魔法を喰らった事で気を失ってしまった。

そのため、戦いの結末を飛騨に聞いた事しか知らず。聞いたのも共同戦線を張ったアイギスがなんとか最後にはデスを倒したようだという内容だったので、自我に芽生えたデスを自称する少年との説明に齟齬を感じる。

通常、チドリ以外の人間は疑うことから始め、基本的に信用しなくなっていた八雲は、こんな突飛な話をされたところで素直に信じたりはしない。

だが、八雲は相手からデスの気配を感じ、相手もデスだと認めたこ

ともあり。とりあえず、納得することにして話を進めることにした。
「俺は……二式かな。まだ正式に名前が決まってないから」
「それが今の君の名前かい？」
「いや、正式名称は飛騨製人型特別戦略兵装二式だよ。けど、最後に人間っぽい固有名詞を足すらしいから、それまでは名前がないんだ。ちなみに飛騨製は開発した物の種類に関係なく順に一式、二式って数字だけ変わっていくんだけど。一式は俺に搭載されてるエールクロイツね」
　自分の名前がないことを苦笑して話す八雲にファルロスも「そっか」と笑みで返す。
　八雲の選んだ道は、たった一人の少女の為に自分という存在の全てを賭けるというもの。
　そのために肉体の改造を受けて、元々の自分という存在は消した。
　よって、本名であった八雲という名前を今後は名乗る気はなく、飛騨が新たに付ける作品名を今後は名乗るつもりだった。
　そんな風に名前について笑っていた二人だが、少しするとファルロスは穏やかな笑みを浮かべ口を開いた。
「君の以前の名前も僕は知ってる。けど、それは君にとって特別なものみたいだから、僕は君が名乗ってくれたときに、その時の名で呼ばせて貰うよ」
「ああ、そうしてくれると助かる。それでここは？　それにどうしてデスが俺の中に？」
「ここは言ってみれば君の中かな。そして、僕はアイギスによって瀕死の君に封印されたからここにいるんだ」
　両手を後ろに回して笑っている相手の表情や態度は嘘をついている様には見えない。
　実際、倒された筈のデスがここにいる理由として考えられるのは、ファルロスが言った通り、アイギスが八雲に封印したか、倒される直前にデスが逃げ込んだかくらいである。
　そして、自我が目覚めて会話が可能になった相手が敵意も出さずに言っているという事は、ある程度信じて良いだろう。

そう考え、八雲も一度頷くと再びファルロスに問いかけた。
「瀕死ってのはあの強力な攻撃を受けたのが原因だよね？」
「うん、万能属性のメギドラオンだよ。で、何で封印して助かったかというと、シャドウ自体に時や空間に干渉する力があるんだけど。その中でもデスは特殊で、生物の死を司る力を持ったシャドウだったんだ。だから、彼女はそれに賭けて僕を死にかけていた君に封印した。そして、偶然と言えば偶然だけど、宿った僕は君と一緒に死なないよう肉体に働きかけたってわけ」
「俺が死ねばデスも死ぬの？」
「死ぬって表現は正しくないけど、消滅はするね。だけど、そうすると世界の滅びの訪れが早まる。だから、君は僕を内包している限り絶対に死んじゃいけないんだ」
自分があの戦いで生き残った理由とデスが封印されている理由は理解した。
だが、ファルロスの言葉の中に聞き逃せない単語が混じっていたので、八雲は思考に耽り俯かせていた顔を上げ口を開く。
「世界の滅びって？　飛騨さんも言ってたけど、君がいたら人類は滅びるの？」
「いや、人類だけじゃない。この地球上に存在する全ての生命が打ち消され死を迎えるんだ。だけど、僕が滅ぼすわけじゃない。僕は宣告者なんだ。大いなる存在〝ニュクス〟を呼ぶための、滅びの確約さ」
ニュクス。それはギリシア神話の原初の神の一柱であり、夜を神格化した女神だ。
八雲の持っているタナトスは、そのニュクスの息子であり。それらを知っていた八雲は何か自分にも関係があるのかと考えるが、流石に情報が少な過ぎて何も思いつかなかった。
「……ニュクスって何？　シャドウの親玉？」
「うーん……まぁ、そういう言い方も出来るかな。ニュクスはこの地球に死というものを齎した存在なんだ。そして、シャドウっていうのは現在封印されているニュクスの精神の一部でね。それが人の精神の一部になったことで『死』という概念が生まれたんだよ」

「封印？　何でそんな神様みたいなのが封印されてるの？　ていうか、どこに？」
　ファルロスは受けた質問に笑顔で答えるが、答える度に新たな疑問が生まれる。
　その事が間怠っこく感じた八雲は、新たな質問をぶつけつつも相手に始まりから説明してもらおうと思った。
　そんな八雲の考えを理解したのか、笑みを崩して少々考え込むとファルロスは説明し始めた。
「……さっきも言った通り、ニュクスは太古の地球に生まれた生物に『死』という物を与えたんだ。ジャイアント・インパクト説は知ってるかい？」
「原始惑星テイアが地球に衝突して月が出来たっていうやつ？」
「そう、衝突した惑星はオルフェウスとも呼ばれているね。で、ニュクスは言ってしまうと、そのテイアやオルフェウスだったものなんだ。地球に衝突した後、身体は月になり、精神は集合的無意識に封印されるようになったんだよ」
「……え？」
　真剣な表情で説明するファルロスだが、八雲はその突拍子もない話を信じられず思わず聞き返してしまった。
　ジャイアント・インパクト説は八雲の言った通り、地球の衛星である月がどのようにして出来たかという仮説である。
　太古の地球にテイアやオルフェウスと呼ばれる火星ほどの大きさの惑星が衝突し、その際に散らばった破片が集まって今の月になったという。
　だが、それはあくまで最も有力である仮説であり、どれだけ有力であっても推測の域を出ない。
　そもそも、それらが起こったのは四十億年以上も前の地球でのことであって、その当時の地球には今の様な複雑な思考を持った生物など存在しなかった。
　にも拘わらず、ファルロスは月となったニュクスは生物に死を齎したといったため、八雲は相手の言っている事が理解出来なかった。

「ファルロス、その当時の地球には生物なんていない」
「その衝突した惑星がパンスペルミア説の雛型になったとは思えないかな？」
「いや、でも、その数億年の間に地球でどれだけの環境変化が起こったと思ってるんだよ。そもそも、集合的無意識って言っても、当時そんな高度な思考能力を有した生物は……外宇宙にはいたのか？」
「いたかもしれないねぇ」
年不相応な知識を持っていながらも、興味深いものを見つけたように子どもらしい表情で太古の地球における生命の誕生について考え込む八雲。
それを傍らで見守るファルロスは楽しげに笑みを浮かべながら、フフッと笑い声を洩らす。
実を言えばファルロスは今日までの間に、何度かこのように八雲と話そうとはしていた。
しかし、八雲はまだ改造の最終フェイズを行っていたため、その終了の目途が立つまで待っていたのだ。
自我が芽生えて以降、辛い改造と鍛錬にも耐えてきた八雲をその内側で見てきた。
封印されているとは言っても別人だ。何のために頑張っているのかは、外での会話を聞いて理解する事や、たまに心が伝わってくることでしか理解できなかった。
そうして、随分と待ったこともあり、いまこのように面と向かって会話できる事がファルロスには嬉しくて堪らなかった。
「さて、話を戻すけど、影人間というのは知っているよね？」
「うん。最近見られるようになった、無気力症とかいうのにかかった人間のことだろ？」
「そうそう。あれは、精神の一部であるシャドウが抜け出てしまったから起こることなんだ。抜け出たシャドウが倒されれば、本人に戻って無気力症も治るけど。抜け出た時間が長いと、精神が変質してしまって完全には治らなくなる」
無気力症。そのような病名をつけられているが、実際は病気などで

はない。
シャドウという心の一部が抜け出てしまった事で、精神がまともに働かなくなった抜け殻状態のことを、原因の分からない一般の医者らが仮にと名付けたもので。その無気力症に陥った者は、一部では影人間などと呼ばれている。
ことの発端となった桐条の研究施設であるエルゴ研にも当然その報告は挙がっており。今もその回復のための研究が行われているが、ファルロスの言った無気力症発症の原因と回復方法などは知られていなかった。
当然、元から桐条やその研究員を敵視している八雲は、桐条のせいで一般人がそんな目に遭う事に怒りを覚えていたので、今の話を聞けたことを内心喜んでいたが。その一方で完全に回復しなくなる可能性がある事を聞いて焦りを覚えた。
「時間が経ち過ぎたら助ける方法はもうないの？」
「うん、残念ながらね。まぁ、経ち過ぎたらって言っても、三ヶ月とか半年ってレベルだから、そこまで早急に対処しなければならない訳じゃない。それに、君はもう選んだんだろ？　なら、他の人間まで救おうとするのは贅沢ってものだよ」
確かに八雲はチドリを選んだ。
自分の全てを賭けて守ると誓い、寿命を削ってまで肉体改造を受け戦う力を得た。
だが、元々が善人である八雲にとって自衛手段を持たぬ一般人は弱者であり、力を持つ者の立場からすればそれらを非日常から守るのが当然だと思っている。
なので、例えそれが贅沢だと言われようとも、自分が助けたいと思えば、出来得る限り助けようと心に決めた。
それを宣言するため八雲は歯を見せるような獰猛な笑みを浮かべ、ファルロスと向き合った。
「ファルロス、俺は我儘なんだ。例え贅沢だろうが、やりたいと思えばやるし。人でなしのように言われようが、嫌だと思えばやる気もなければ見殺しにもする。歪だけど釣り合いが取れてるだろ？」

「フフッ、それはなんか違うと思うけど、君らしいよ」
周りの意見に左右されず、自分の意思で全てを決める。そんな我儘な生き方をしようという、八雲の自由さにファルロスも思わず笑ってしまった。
現代社会においてそんな勝手が許される筈がない。社会である以上、それを形成するのが動物だろうと一定のルールが存在する。
それを破るというのならば、その社会からは当然弾かれてしまうだろう。
だが、八雲本人もそんな事は分かっている。重要なのはその考え方と、それを念頭に置いた上での優先順位を自分の中で作ることだ。
「彼女のためなら世界は二の次三の次ってことだね。本当に君は人間らしからぬ人間らしさだ。人間社会のルールを破ると決めた上で、そうやって本当に人間らしい行動をする。矛盾を孕んでいるのに、なんて尊い想いなんだろう」
「自我が芽生えたのなら、ファルロスだっていつか理解出来るさ」
「僕にもそんな自分の全てを賭けたいと思える女性が出来るって？うーん……今は良く分からないけど。それはとても素敵な事なんだろうね。だったら、封印が解けたら僕も人間として外に出る事にするよ」
「そんな事が出来るの？」
「勿論。今のこの姿だって自我が芽生えて出来たものだからね。なら、シャドウのときの姿を今の姿に合わせる事も可能さ」
確かに元がシャドウであるはずが、今のファルロスは人間そのものにしか見えない。
封印が解けるという不吉な言葉も聞こえたが、もし本当に人間の姿で外に出てくるのであれば、八雲も心配しなくて済みそうだと思えた。
「……あ、そう言えば。封印が解けるって、解けたらどうなるの？　それと、解き方っていうのがあるのかな？」
「解けたら僕が外に出るだけだよ。そして、解き方だけど、君は封印の器として非常に優れていたみたいでね。不完全な僕の力じゃちょっ

と解けそうにないんだよ。実は、あの事故の日に当時の責任者だった岳羽詠一朗という人物が、実験を途中で中止したために僕の力の欠片として十二のシャドウがここ港区に散ってしまってね。彼らも結構な傷を負っていたし、彼らにとっては一日は影時間の分しか存在しない。だから、傷が癒えるまでの間は活動しないと思う」
「活動が始まったら、君の元に戻ってくるのか？」
「正確には戻ろうとしてくるだね。こればっかりは僕にも止められないけど、倒さないと自分を維持するために人間の精神を食い散らかして無気力症の被害が増えるだろうから、封印を解かないようにするために倒さないってのは止めといた方が良いと思う」
全員という訳ではないが、シャドウから人を守ったりもしようと考えた矢先にこの話だ。流石の八雲も面倒事を避けるために前言を撤回しようかなと表情を歪ませる。
しつこいようだが、八雲の優先順位は『アイギス＝チドリ〉自分〉エリザベス〉その他』、と言った風になっている。
アイギスとチドリが同率なのは、両者が八雲にとって命の恩人であるためであり。エリザベスの優先順位が他者より高いのは契約者だからという理由で、もし契約が無ければ他の者よりかは上だが、他の者とそこまで応対に差をつけない可能性があった。
「……ファルロス、やっぱり俺は自分の手で守れる人だけを守るよ」
「うん。まさか、この僅かな時間で心変わりするとは思ってなかったよ。けど、まぁ、それが良いんじゃないかな。君も彼女も力を持っているからね。非日常を生きている限り、守るのは普通の何倍も大変だから」
それは守ると決めた八雲自身も分かっている事だった。
自分達は既に非日常に関わっている。さらに、その原因となった桐条とも関わるようになってしまった。
いつかはここから去るつもりだが、逃げ出したところで影時間と無関係になる訳ではない。
その事を考え、八雲は一瞬表情を曇らせるが、顔を上げると瞳に強い意思を宿らせ口を開いた。

「分かってるよ。でも、出来る事なら彼女には普通の世界で生きてもらいたい。俺も彼女もそう長くは生きれない身体になってるけど、生きているうちはね」
「……僕もそうなるよう、精一杯祈ってるよ」
ファルロスは、まだ短い間だが八雲を見てきて人間として好きになった。
だが、無茶な改造と、その傷を魔法で無理矢理に回復させてきたことで、八雲の身体はそう長くは生きられない物へとなっていた。
自我が芽生え、最初に好意を抱いたその相手の死期がそう遠くないうちにやってくることに、ファルロスは悲しそうにどこか泣きそうな笑みを浮かべる。
だが、今はまだ話をする事が出来る。そう気持ちを切り替えて、表情も普段の人懐っこい笑顔にすると、再び話を続ける事にした。
「……さて、話がまた脱線したけど、僕の封印が解けるとニュクスの封印を解けるんだ。といっても、期間が開くけどね。その時になったら僕の方から君に知らせるよ」
「うん。けど、どうしてそれを今話しに来たの？」
それは素朴な疑問だった。
確かに前もって説明されていれば色々と準備をしておく事が出来る。
だが、自身の欠片たちの復活のときすら分からない状態で、なぜ今になって話しかけに来たのかが八雲は不思議だった。
そうして、相手に問いかけ答えを待っていると、質問を受けた相手はおかしそうに笑いながら右手で八雲の胸部に触れた。
「うん、本当は不完全体だから記憶なんて戻ってなかったんだけどね。けど、君が僕らの母たるニュクスの一部を宿したことで、それを通じて僕も宣告者としての使命を思い出したんだよ」
「ニュクスの一部って……エールクロイツが？」
「そう。正確には黄昏の羽根っていうのは、月の表面が薄く剥がれ、地上に落着したものなんだ。僕が封印されている状態でそんな物を宿すなんて、もしかしたら封印が解けていたかもしれないよ？」

最後に悪戯っぽく「ま、そうはならなかったけどね」と続けるファルロスだったが、一方の八雲は信じられない話に固まっていた。
謎のオーパーツだと思っていたのは敵であるシャドウの母たる存在の身体の一部。
確かにエールクロイツを移植してからは、さらにペルソナの扱いが上手くなっていたりするのだが、正直な話をすれば親の仇の親から施しを受けたようで屈辱的である。
全てはチドリを守るためにと言いつつも、八雲も実年齢はまだたったの七歳。簡単に納得できるほど大人になりきれてはいなかった。
そして、そんな八雲の心情など当然理解できるはずもなく、笑っていたファルロスはさらに続ける。
「これで君も半分僕ら側ってことになるのかな？　両眼も金色に変わったしね」
「……フン」
不機嫌そうにした八雲は、ファルロスの言葉を聞くなり瞳の色を変えた。
それを見て、ファルロスはハッとしながら感心して話す。
「あ、そっか。君はそっちの眼も持っていたね。それは流石に生物としての死を理解出来ない僕らシャドウじゃ持てないな」
エールクロイツを移植して目を覚ますと、八雲の瞳は両眼とも明るい金色に変わっていた。
その事を話したエリザベスとテオドアも似た色をしているが、それよりも濃い色なので、また別モノなのだろうと思われていたのだが、明かされた真実はシャドウの力が現れてしまっていただけというもの。
しかし、八雲の眼はもう一つ別の色にする事も出来た。
そう、それはエルゴ研で目覚めたばかりのときや、チドリに怪我を負わせたシャドウを殺すときに僅かに発動していた不思議な力を持つ、蒼い瞳。
残念そうしているファルロスは、その不思議な輝き方をしている蒼い瞳を見ながら八雲に話しかける。

「それはモノの死を視る眼だよ。言ってみれば、そう、『直死の魔眼』ってとこかな。僕との戦いで死にかけて、『死』を司る僕をその身に封印したことで目覚めたんだと思う。基本的に防御不可能な力だけど、その分君自身も否応なく『死』を視続けることになる。だから、あんまり使わない方が良い」
「うん、わかった」
「よし。それじゃあ、そろそろ時間みたいだね。僕もまだあんまり起きてられないから、次はいつ会えるか分からないけど、また話せると嬉しいな」
「ん、その時は勝手に呼んで良いよ。別に肉体に疲労はないだろうから」
「フフッ、ありがとう。それじゃあ、そうさせてもらうよ。またね」
最後にそんな風に挨拶を交わすと、八雲は急激な眠気に襲われ意識を失った。

7月16日（日）
夜――総合訓練室
ここはエルゴ研にある人工ペルソナ使いたちに体術の訓練をさせる為の部屋。
体育館ほどの広さのある部屋で、子どもたちは合成樹脂製の武器を持って戦闘訓練を行っていた。
怪我で三週間ほど入院していたチドリも現在では復帰しており、今も他の研究室に所属する女子とナイフ型の武器で戦っていた。
（……どうせ、私はあんまり探索に出ないんだし。こんな疲れる事させないで良いのに）
チドリが相手をしているのは、金色の髪をした同じ歳の頃の少女。無表情のチドリに対し、相手は少々興奮した様子で敵意を剥き出しにしていた。
「このーっ!!」
「……フン」
少女の持つ武器はチドリよりも大型でククリ刀と呼ばれる剣の形

をしている。
背丈も近い分、武器のリーチのある少女の方が有利の筈だが、チドリはつまらなそうにしながらも大振りに斬りつけてきた相手を横に跳んでかわし。隙だらけの腹部につま先で、ドゴッ、と蹴りを入れた。
「ぐうっ」
チドリの攻撃を受けた少女は、武器を手放しながら地面に崩れる。
別に本気で蹴った訳ではない。既に訓練が始まって二十分ほど経過しているのだが、その間、攻撃を当てているのはほぼチドリの方だった。
しかし、どういう訳かやたらと打たれ強かったので、急所を攻撃する事でダウンを狙ったのだ。
そうして、今度ばかりは打たれ強い少女も立てないのか、腹部を押さえながら地面に座りこんで顔だけを上げてチドリを睨む。
「おま、え、殺すっ」
「負けてるくせに何言ってんのよ。ペルソナが使えない私達じゃ体術で勝負着いたら、それで終わりじゃない」
「くっ……ぺる、そな……」
チドリの言っている事は事実であり、八雲から齎されるペルソナの制御法を飛騨が他の研究室に教えているにも拘わらず、成果は未だに殆ど出ていない。
影時間になると適性から能力が付与されるためか、幾人かは召喚の成功率が上がっているのだが、現在の時刻は午後七時四十分。
影時間まではまだまだ時間がある上に、訓練によって疲労している状態ではまともに召喚など出来る筈が無かった。
「ペルソナっ、ペルソナっ、ペルソナーッ!!」
しかし、少女は余程チドリを殺したいのか「ペルソナ」と叫び続けている。
だが、そんな風に叫んでいたことでその様子に気付いたのか、周りで見ていた研究員がアンプルを持ってやってくると、興奮状態の少女にそれを投与し。急にぐったりとした少女を、そのままどこかへと運んでいってしまった。

訓練の相手がいなくなったチドリは、自分はどうすれば良いのかと心の中で文句を言いつつ、その場に座って指示を待つ事にした。
（こんな事しても意味ないのに。ペルソナが使えたっていう八雲も簡単に死んじゃったもの。いなくならないって言ったくせに嘘吐き。ハカセも「いーまは、ちょーっと会えない場所にいるだけですよー」とか適当なことといって。私が気を失ってる間に殺されたんでしょ。気を遣わないで本当のこと言えば良いじゃない）
指示を待っている間に一人考えに耽って憤るチドリ。
目が覚め、第八研に戻ってきたときには既に八雲の姿はなかった。
どこにいるのかと聞いても、飛騨はチドリが先ほど言ったようにはぐらかすばかりで、それ以外は何も答えなかった。
普通に考えれば、自分が気を失った後にシャドウに殺された可能性が高い。
立ち上がる事すら出来ぬほどに疲弊していたので、まともに逃げられたとは思えないからだ。
しかし、そうなると、誰が気を失った自分を運んだのかという謎が残る。
研究員らは基本的に上のフロアには来ないで、装置を使って様子を見るだけだ。なので、稀少な能力を持っているとは言っても、子ども一人のために救助にきたとは考えづらい。
次に他の被験体らが救助隊として派遣された可能性もあるが、いくら被験体では年少組に入るチドリでも。他の者らも小学校高学年から中学生と年齢に差はない。
自分達の探索を終えた後で、そんな者たちが体格にあまり差のないチドリを担いで運ぶのは難しいだろう。
尤も、ペルソナを使えば簡単かもしれないが、ペルソナの制御が出来るようになってきたのは、ここ一ヶ月の間のこと。
そういった事を考えていくと、どれもこれもが正解だとは思えなかった。
（じゃあ、やっぱり八雲がペルソナで私を運んだの？　でも、だったら何でどこにもいないの？　生きてるならハカセもハッキリそう言え

ばいいのに……訳分かんない）
やはり情報が少な過ぎるため、今日も結論は出なかった。
ここ数ヶ月の間に何度も同じ事を繰り返しており、そのたびにフラストレーションを溜めていたのだが、今日は訓練を見ていた研究員の声によって、それらは思考の端に追いやられた。
「訓練はここまで！　これより食堂に移動し夕食の時間だ。夕食を食べ終えたら再びここに戻り、指示があるまで休憩しているように。また、今日の影時間には合同でのタルタロス探索を行う。グループによっては他の研究室の者も一緒に組ませるので、そのつもりでいろ！
では、解散！」
合同での探索など初めて聞いたチドリは、突然の事に驚く。
自分の所属する第八研は人数の関係と、室長の飛騨は積極的な調査をしようとしていなかったため探索は除外されてきた。
しかし、今日になって急に他の研究室の被験体らと一緒に組まされるという。
（そんな、名前も知らない人間と組ませるなんて、余計に死亡率高めるだけじゃない……）
そんな風に研究員の連絡に納得できないチドリだったが、研究員の命令には逆らえず。時間になるとタルタロスに向かい、他の研究室のグループへと組み込まれたのだった。

第九話　有里湊

???――ベルベットルーム

ファルロスと別れたあと、八雲はベルベットルームで目を覚ました。

そもそも、ベルベットルームには夢を経由してやってきているので、目が覚めたらまた別の夢の中にいたようなものなのだが。鍛錬の仕上げの段階に入っていたので、八雲は素直にテオドアとエリザベスに本日の手ほどきを受けた。

そうして、今日の鍛錬で最低限の戦闘技能を伝えるという依頼に一区切りがついたので、渡す物があると言って八雲は二人と共にイゴールのいるメインルームに戻ってきていた。

鍛錬の間は師弟関係だった三人もここへ戻ってくれば、八雲が客人である。

そのため、言われるまま席に着くと、イゴールの後ろに控えていたテオドアが持っていたペルソナ全書から白檀香の栞を抜きとり、指でなぞると何かが光になって現れた。

その光はゆっくりと降下し、八雲の前にあるテーブルでその正体を晒した。

「これは私からの贈り物です。名を『無の鎧』と言います。本来、『無の装備』は武具しか存在しないのですが、これはそのイレギュラーナンバー。他の無の装備と同じくペルソナと組み合わせることで、能力と形状が変化します。また、普段は八雲様の力に呼応して靴という縛りはありますが、スニーカーやブーツ、サンダルに脚鎧にも変化する優れモノです」

テオドアの説明を聞きながら、八雲はテーブルの上に現れた騎士鎧の脚鎧に手を触れてみる。

成人男性用のサイズのようで自分には大き過ぎると思っていると、触れた途端に鎧が光に包まれた。

そして、その光が治まるとそこには八雲の足のサイズに合った編み上げブーツが現れており。テオドアの言っていた事が真実であるこ

とを表していた。
「では、続いて私からはこのマフラーを贈らせて頂きます」
現れた編み上げブーツをせっせと履いていた八雲。
今まで履いていたのはエルゴ研から被験体らに支給されるスニーカーだったので、久しぶりに素材の良い物を身に着けられると喜んでいたのだが、左足の紐を結び終えたところで、エリザベスに黒いマフラーを巻かれた。
ベルベットルーム内は現実と違って温度・湿度共に快適な状態であり、別に防寒具が必要だとは思えない。
そもそも、マフラーを渡してきたエリザベス自身、袖の無い制服を着ているので季節感もなにもないのだが、弟テオドアの渡してきた靴も特殊な魔法具だ。
ならば、当然、エリザベスのマフラーにも特殊な機能が備わっているのだと推測した。
「これも何か特殊な物なの？」
「はい。先ず、防具としての性能ですが、例えチェーンソーで斬りかかられたとしても受け止める事が出来るほどの強度を有しております。また、無の鎧よりも形状変化に幅があるため、基本はマフラーですがコートなどにする事も可能です」
「へぇ、凄く軽いのにそんなに丈夫なんだ」
話を聞きながら八雲は右足の紐も結び終え、巻かれたマフラーをモフモフと触ってその性能に感心する。
エルゴ研に来るまで、八雲はどちらかと言えば富裕層に属する家庭で育っていた。
そのため、生地の良さなども自然と分かるようになっており、ブーツに続いてエリザベスに貰ったマフラーも非常に上等な物だと理解している。
その上、防具としての機能も優秀であるならば、普段から身に着けておこうと考えた。
しかし、エリザベスの話はまだ終わっておらず、八雲の首にマフラーを巻いたまま隣で話していたのだが、急に手を伸ばしてそのまま

マフラーの中に入れてしまった。
「……え？　どうなってるの？　エリザベスの手、俺の方に来てないよ？」
「はい。これがもう一つの機能で、このマフラーには物を収納しておく事が出来るのでございます。我々、ベルベットルームの住人と八雲様のみ、このように出し入れが可能となっており。いくら収納してもマフラー自体の質量は変化することはないので、是非ともご活用ください。取り出すにはペルソナカードを出す時のように、手に力を纏えば出来ますので、試しに私が入れておきました物を取り出してみてください」
「あ、うん。わかった」
マフラーから手を抜いたエリザベスは、八雲が試すのを隣に立ったまま見ており。その表情はどこか楽しげだ。
それが八雲が厳しい鍛錬を修了したためなのか、それとも自分の贈り物を相手が気に入っている様子だからなのかは本人にしか分からない。
だが、八雲はその万人が息をのむような美しい笑みに動じた様子もなく、薄っすらと手に光を纏ってマフラーに手を入れた。
「……あ、あった。よいしょっと」
そう言って引き抜かれた手に握られていたのは、一振りの短刀。
華美ではないが、境界部が金色に縁どられており、一目で上質と分かるほど美しい逸品。
それを手に持っていた八雲は惹きこまれるように刀を鞘から引き抜くと、刃が薄っすらと蒼くなっていて、凶器でありながら芸術品としても大変価値のあるものだと感じた。
「凄いね、これ。剣筋が乱れないし、造りもかなり丈夫みたいだ」
「無銘のため、黒漆仕立ての短刀とだけ呼ばれている逸品でございます。八雲様の本領は武器とは無関係の部分でしょうが、戦士が手ぶらというのも格好がつきません。ですので、それもお贈りさせて頂きます」
「そんなっ、Eデヴァイスだって貰ってるのに、こんなにいっぱい貰え

ないよ」
「〝先行投資〟というものですから、気にされる必要はございません。受け取ることが心苦しければ、その分、鍛錬の次の段階で成長を見せて頂ければ私は満足でございます」
今日で最低限の戦闘技能を身に着ける鍛錬は修了した八雲は、現段階で成人を相手にしても一般人ならばある程度は勝てる強さになった。
だが、八雲が戦うのはシャドウという異形の化け物であり、またチドリを傷付ける不特定の相手である。
そんなモノから守り続けるため、今後もエリザベスの言う通り、八雲は彼らのもとで鍛錬を積むつもりだった。
「……まだ、テオに一発も攻撃入れれてないもんね」
「フフッ、私や姉は力を司る者。人の理からは外れた存在ですので、身体の未熟な今の八雲様では、まだその拳は届きませんよ」
ここ二ヶ月ほどの鍛錬では戦闘の心得と実戦経験を重点的に積んできた。
ペルソナを使えばタナトスの覚えているメギドラオンで傷を与えることくらいは出来ただろうが、エルゴ研を出ればアクシデントに遭遇するのは普通の街中だ。
そんな場所でペルソナをポンポンと出せるはずがないので、基礎中の基礎として体術をメインに鍛えたのである。
しかし、飛騨の手によって神経伝達速度が人間の限界を僅かに上回っている八雲も、身体は七歳の子ども。
一八〇センチ近くある身長のテオドアとはリーチに差があり過ぎて、いくら瞬間的に速くても距離を取られれば何も出来なかった。
そして、余裕すら感じる笑みを浮かべて言ったテオドアの言葉は八雲も自覚している。まだ足りない。今の自分ではチドリを守りきる事は出来ないと。
「だろうね。けど、そうやって負ける言い訳を作ってられないからさ。これ、ありがたく貰っておくよ」
「はい。どうか、八雲様の秘める願いを叶える力とならんことを祈っ

ております」
そう言って短刀を受け取った八雲にエリザベスは笑みを返すと、貰った短刀をマフラーに仕舞い直し。目覚める時間がきたので、八雲は椅子に座ったまま意識を手放した。
影時間――第八研・飛騨専用開発室
ベルベットルームから戻ってきた八雲は、辺りの景色が普段と違っている事に気付いた。
普段は白い壁が緑色になっていて、景色だけでなく空気自体が別の物になっている。
「……影時間か。けど、なんでこんな時間に目が覚めたんだ？」
手術などが無い限りは、十一時ごろに就寝し、翌日の六時頃に起きる生活をしている八雲は、かなり正確な体内時計を持っているため、その他の時間に起きる事は珍しい。
だが、何か嫌な予感がすると思っていると、入り口の開く音がして飛騨がイラついた様子で入ってきた。
「なーぜ、よりにもよって満月の日に室長である私に断りも無く勝手な探索を決行したのでしょう！　まったくもって理解でっきません！」
「どうしたの？　何かあったの？」
第八研にいるメンバーは基本的に冷静であることが多い。内面では心が荒れ狂っていても、静かにキレるタイプなのだ。
だが、そんな一人である飛騨には珍しく愚痴をこぼし、どこか焦りを見せている。
それが気になった八雲は寝台から降りると、飛騨の元へ歩み寄った。
「ああ、少年！　良ーい、タイミングで起きてくれました！　非常事態です。他の室長たちで決議が勝手に行われていたようで、満月というデンジャラスな日に合同のタルタロス探索が行われるのです。そして、少女もそのメンバーとして徴集され、既にタルタロスに行ってしまいました！」
「っ、満月に、そんな無茶な!?」

シャドウらの強さは月の満ち欠けが関係していると言われており、事実月が満ちるにつれ強さと凶暴性が上がるという結果が出ている。
だというのに、よりにもよって満月という最もシャドウらが凶暴になる日にタルタロス探索を行わせるとは、正気を疑うしか無かった。
「少年のおかげでペルソナを扱える者も増えましたが、殆どの者は未だに成功率は数十回に一度と言ったところです。それなのに、成功率が上がって調子に乗ったのか、このような愚行に出るとは信じられません！」
「クソッ、チドリが危ない！　飛騨さん！」
「分かっています。貴方の調整は既にほぼ終わって、稼働実験の段階に入っています。私も一緒に行くとなると、きっと間に合わないでしょう。なので、頼みます。貴方だけ先に行ってください」
一切遊びの無い飛騨の真剣な言葉に八雲はしっかりと頷いた。
――エルゴ研・屋上
《少年、聞こえますか？》
隠し部屋から三ヶ月ぶり出た八雲は、飛騨に言われたルートを通ってエルゴ研の屋上へとやってきていた。
屋上へ出るための扉には南京錠と鎖がかかっていたのだが、一刻を争うときだと眼を使い、死の線を視て、そこをなぞり破壊した。
そうして、渡された通信機から、バタバタと忙しそうにタルタロスに向かう準備の音をさせながら飛騨が話しかけてくると、準備運動をしていた八雲が答える。
「大丈夫、聞こえるよ」
《では、貴方はそこから飛んでタルタロスへ向かってください。居場所も少年なら分かりますね？　向こうではこの程度の通信機では通信圏外になってしまうでしょうから、こちらから補助することはできません》
「うん。それも問題ない」
答えながら遠くに聳える奈落の巨塔に向けて、屋上の中央から縁の方へと走り始める。
《そう言えば、少年にはまだ名前を伝えていませんでしたね。少年の

作品名が決まりました。【飛騨製人型特別戦略兵装二式、有里湊】。それが君の名です。そこにただ在るだけで人の集まる里のような存在になるように、という意味ですよ》
「アリサト・ミナト……うん、わかった」
《では、行きなさい。少女を頼みます！》
「了解ッ!!」
その声に答えるように自らの内より現れた死の神と共に、兵器としての名を手に入れた湊は満月の輝く空へと飛び立ったのだった。
――タルタロス・エントランス
合同探索のために運び込まれた機材を前に、第一研の室長、松本はイラついた様子でそれを見ていた。
「なんという様だ！」
今日という日の為に、飛騨に秘密にした状態で他の室長らで合同探索を決定し。それにより稀少な探知能力を持つチドリをメンバーに組み込むことに成功した。
そして、いつもよりシャドウが凶暴であることを踏まえ、一グループの探索メンバーをいつもより多い六人になるようにした。
最近の研究で少しずつ成果が出始め、影時間ならば平時より高確率でペルソナを呼べる者もいる状態で、万全を期した――――筈だった。
そう、松本が見ているのは被験体らを表すマーカーが消えていくレーダーの画面だった。
「失敗作共め、少しは力が上がったかと思えば。結局、無様にやられているではないか！」
「やはり、慣れていないメンバーと組ませたことで、少なからず精神面に影響が出てしまったのでしょう。こんな事なら、他の研究室とも共同生活をさせておくべきだったか……」
不機嫌な松本に冷静に状況を分析していた、第二研の室長、幾月が返す。
既にマーカーでは一グループが全滅し、別のグループでも固まって行動しているのは二・三人単位で、他は殆どはシャドウから逃げる際

にバラバラになってしまっていた。
「まぁ、バラバラにでも戻ってきてくれる分にはありがたいんだがね」
そういって個人単位になりながらも、疲弊した様子で戻って来た被験体らを幾月が冷めた瞳で見ていると。急に外が騒がしくなっている事に気付いた。
《な、なんだっ!?》
《シャドウか!?》
そんな風に外から聞こえてくる言葉の意味を理解しようとしている間に、何か高速で飛行する者がエントランスに入って来た。
バァンッ、と扉を開ける際の大きな音と共に入って来た存在に研究員らは驚くが、その存在は他の者が反応する前に正面のゲートからタルタロス上階へと去って行ってしまった。
「……エヴィデンス?」
小さく呟いた幾月の声に、反応を返せる者は誰もいなかった。
――タルタロス・９Ｆ
合同探索でタルタロスへと連れて来られたチドリは、第四研の者らとチームを組まされ、九階まで上がってきていた。
序盤はチドリの探知能力で戦闘を避けてきたのだが、徐々に敵も増え何度か戦闘に突入した。
だが、残念ながらチドリのいたチームにペルソナを呼び出せる者はおらず、倒せないと分かると生き延びるためにバラバラに逃走し、現在三人にまで人数が減っていた。
「ぐっ……はぁ、はぁ……」
そして、今もまた巨大なカブトムシ型のシャドウ、皇帝・死甲蟲に遭遇し戦っていた。
チドリの他は少し年上と思われる男子と女子が一人ずつ。その二人ともが疲労から肩で息をしている状態でまともに戦闘できるとは思えない。
(脱出装置がなくてここまで上がって来たけど、これは……っ!?)
とはいえ、斯く言うチドリも武器のナイフを持って、敵を睨んでいるが立ち上がるのも辛く。先ほどから紙一重で敵の突進を転がるよ

うに避けている有様だった。
《ギギィッ》
「くっ!?」
ズザァッ、と転がりながら緊急回避して、なんとか直撃を避けるチドリ。
今この状況の打開策を考えるが、まともに動けない二人に代わり敵を引きつけているチドリは、落ち着いて考える暇もない。
せめて、どちらかが陽動をしてくれていれば、少し集中してペルソナ召喚を試みる事も出来るのだが、完全に傍観者になってしまっている二人にそれを期待することは出来なかった。
（っ、今ので少し足を捻ったかも。ったく、年上で私より探索回数多いくせになんで見てるだけなのよ）
そんな風に内心で愚痴っても言葉にはしない。下手に大声で援護を要請すれば、思考が戦闘モードに切り替わっていない二人は真っ先にやられてしまうからだ。
《ギギギィッ》
「あぐっ!?」
しかし、流石のチドリも紙一重で回避し続けられていただけで、足を痛めたこともあり、ついに敵の突進をまともに受けてしまう。
軽い身体は当たられた勢いで通路の方まで吹き飛ばされると、四回転してやっと止まった。
《ギギィッ》
「っ!?」
だが、敵はさらに追い打ちをかけようと、再びチドリ目がけ突進してくる。
痛みで身体が一時的に麻痺して動くことは出来ない。
当然、そんな状態でペルソナを呼ぶ事も出来ず。チドリも含めたここにいる全員がこれまでかと思った――――そのとき
「はぁあああああああっ!!」
チドリの背後から飛びだした影がそのまま両者の間に躍り出ると、周りに衝突の衝撃を物語る低く響く音を立てながらも、突進してきた

シャドウの角を真正面から掴み、一切退く事なく受け止めた。
背中まで伸びた暗い蒼色の髪、首には黒いマフラーを巻き付け、靴は編み上げのブーツ。そして、敵を睨みつける金色の瞳をした少年。
チドリがずっと探していた、けれど、以前とは体格から雰囲気まで比べ物にならないほど〝変わった〟少年は、敵の攻撃を正面から受け止めたまま口を開いた。
「――遅れてごめん。やっと、君を守れる」
「……八雲？　生きて、たの？」
「チドリ、君を守る。君を傷つけようとする全てのものから俺が守る」
少女を守るため名も変えた少年、湊は再会した少女に宣言する。自分の決意を、在り方を契約にして。
湊に守ると言われた少女、チドリも湊自身がどのような想いから自分を守ると決めたのかは分からない。だが、不思議と全てを委ねられると思い。疲れていながら綺麗な笑みを浮かべて返す。
「……うん、最期まで守ってね」
そして、ここに第三の契約は結ばれた。
チドリと結ばれた契約により、湊は心が満たされ万能感に包まれる。
その万能感に包まれたまま、先ずは目の前の敵を排除しようと、両眼を閉じて両足に力を籠め重心を下げる。さらに、背中から指先まで全ての筋肉に神経を巡らせると、相手の角を掴んでいた手に力を入れ、開眼と同時に敵を持ちあげた。
「うおぉぉぉぉぉぉっ!!」
三倍以上の体格差を持つ相手を一本釣りで地面に叩きつける湊。
ドゴンッと、空気を震わす音が響き、他の者が驚きで目を見開いている間に再び敵へ接近すると、ひっくり返りジタバタともがく敵の角を両手で掴む。
「ぐう、おっらぁぁぁぁぁぁっ！」
両手で掴んだ角を持ち手に、湊は敵を持ち上げ振り回す。
ハンマー投げのようにグルグルと回転を続け、その勢いのまま放り投げると敵はぶつかった壁が崩れる程の威力で衝突した。

だが、弱ってはいてもまだ脚が動いていることから生きているのだろう。
最後の止めを刺すべく、湊は足に力を籠めると敵に向かって駆け出した。
「これで、ラストぉぉぉぉっ!!」
弱っていた背中から壁に衝突したため、敵は湊らに腹部側を見せていた。
そして、カブトムシは表面の羽根よりも腹部の方が柔らかいので弱点と言える。
だが、それは普通のカブトムシの話であって、シャドウである死甲蟲は羽根よりは柔らかくとも、腹部もそれなりの硬度をしていた。
それを勢いをつけたとは言え、ただの拳で貫き、あまつ崩れていた壁まで腕が突き刺さっているのを見ると、先ほどまでの自分の苦労は何だったのかと、チドリは言いようのないもやもやとした感情が湧いた。
そうして、敵が黒い靄となって消え、湊も壁に突き刺さっていた腕を引き抜くと振りかえり口を開く。
「……よし。それじゃあ、先ずは回復かな。カグヤ、チドリとそっちの二人にメディラマ」
戦闘が終了した事で、一時的な安全が確保されると湊はチドリの後ろで少女を抱いたまま浮いていたカグヤに回復を頼んだ。
《ルルゥ》
どこか不思議な響きの声でカグヤが答えると、パァア、と温かな淡い光が身体を包む。
いままで湊だけに気を取られていた三人は、安定して顕現しているペルソナとその回復スキルの強力さに驚くが、一先ず動けるようになるとチドリは湊に助け起こされ、他二人は壁に手をつき立ち上がった。
「……これ、八雲のペルソナ？　ってか、なんでペルソナが子ども抱いてるの？」
「ああ、来る途中で見つけて拾って来たんだよ」

――タルタロス・６Ｆ
湊がチドリの元に到着する少し前のこと。
タルタロスの六階。そこは最近になって上がってこれるようになったエリア。
現在の探索で最高到達階層は九階で、それ以上へ行った者はまだいない。
以前は五階まで行くのも大変だったというのに、それより先へ行けるようになったのは被験体らが強くなった証拠だった。
「いやぁ、死ぬのいやぁっ!!」
だが、今日は満月。シャドウらが一月で最も強くなる日だ。
泣きながら壁際に逃げる金髪の少女に、法王・トランスツインズが迫っていく。
少女の他に子どもの姿は見えない。あまりにシャドウが強くて逃げる際にバラバラになってしまったのだ。
「キャアッ!?」
そして、少女に迫っていたトランスツインズが少女目がけてジオを放った。
その直撃を受けた少女はかなりのダメージを受けたようで、涙を流しながら力なく地面に倒れる。
「う、うぅ……」
だが、幸か不幸か意識は失っていなかった。
いや、少女にしてみれば不幸以外の何物でもないのだろう。化け物が自分の命を奪う瞬間を最期まで見ていなければならないのだから。
そうして、意識のはっきりとしないまま目だけは、シャドウの動きを見ていると、敵は再び頭上に電撃を集め始めた。
バチ…バチィ……、と集中した電気が時折弾ける音が少女の耳に届く。
「……あぅ」
意識ははっきりせずとも死にたくないとだけは思っていた。
戦うのは嫌いで、こんな怖い思いをするのも嫌だった。
しかし、研究所では戦わなければ生かして貰えない。そのために少

女は辛いことも我慢し続けてきた。
同じ研究室の人間ですら信用できず、まわりは全て敵。
そんな辛い環境でただ自分が生きるために戦って来た少女の最期が、このような残酷な物で良い筈がない。
「タナトスッ!!」
そう、敵の放った電撃が少女に届こうとしたそのとき、少女を守るように死の神が少年と共に舞い降りた。
「ブレイブザッパー!!」
轟音を立てながら光刃が飛び、少女を今まさに葬ろうとしていた敵を飲み込む。
《グ……ラ……》
通路全てを埋め尽くすような、破壊の光を受けた敵は黒いもやとなって消えていった。
だが、少女は思考が定まらないのか、突然現れた存在に戸惑う。
「うぅ……」
「大丈夫？　メッチー、この子に回復魔法かけて」
《メッチー!》
少女を助けるため現れた湊は、タナトスと共に宙に浮きながらEデヴァイスのゲートからメッチーを呼び出し、少女に回復魔法をかける。
メッチーの手が淡く光ると、少女の身体も同様の光に包まれる。
そうして、傷がある程度癒えると状況が把握できるようになったのか、少女は身体を起こし座りなおした。
「だーれ？」
「ん？　ああ、俺は湊。ちょっと急いでるから、話は移動しながらにしよう」
「っ、いやぁ……」
チドリを助けるためにきた湊だが、チドリがいるのはここよりも上の階だ。
そのため、この僅かな会話の時間すらも惜しいと、自身と連動しているタナトスの腕で少女を抱き上げようとしたのだが、少女は怯えた

様子で腕から逃げる。
少女のその行動に湊は少々驚く。自分にとってタナトスは見慣れたものであり、オルフェウスの次に目覚めていたペルソナだ。
しかし、確かに死の神だけあって見た目は不気味で不吉なイメージを受ける。
よって、それならばと、少女が怖がりそうにないペルソナを呼び出す事にした。
「……こい、カグヤ！」
「わぁ……ウサギさん！」
現れたペルソナを見て、少女は瞳を輝かせる。
「カグヤ、この子を抱っこしたままついてきて。それと探知の方も同時進行でお願い」
湊が新たに呼び出したペルソナは永劫〝カグヤ〟。人間に近い女性型のペルソナだが、レーダーの役割を果たすウサギの耳が生えており、少女はそれを見て目を輝かせると、素直に抱きあげられた。
そして、少女を抱き上げたカグヤは移動を始めたタナトスと湊の後ろを飛びながら、耳を動かしてチドリや地形の把握を開始する。
カグヤはタナトスのような戦闘特化タイプではなく、魔法特化タイプのペルソナでさらにチドリとほぼ同じ力を有している後方支援型のペルソナ。その能力の特性上、装備さえしていれば召喚しなくてもある程度は分かるのだが、湊は今はタナトスと高同調状態で移動している。
そのため、改めて召喚した状態で探知することによって、湊はより正確は位置を割り出そうとしているのだ。
「……九階か、カグヤ急ぐぞ！　チドリは敵と遭遇してるみたいだ！」
《ルルゥ！》
チドリの元へ急ぐため加速した湊に返事を返すと、カグヤも少女をしっかりと抱きとめ速度を上げたのだった。
――タルタロス・９Ｆ
そんな風に少女を助けてきた経緯を話し終えると、聞いていたチドリはムスッとした表情になっていた。

何故急にそんな表情になったのか分からない湊は、不思議に思いながら尋ねる。
「……どうしたの？」
「別に……」
守ると誓ったものの、湊自身はチドリの事をほとんど知らない。
そのため、彼女が何に対して不機嫌になっているのか見当もつかず反応に困っていると、横から別の声が掛かった。
「ミナト、もう帰りたい」
「……ミナト？」
カグヤに抱かれていた少女が湊の名を呼ぶと、本名しか知らないチドリは何の話だと湊を見やる。
「ああ、うん。名前変わったんだ。今後は有里湊って名乗るから、チドリも出来ればそっちで呼んで」
「変わったって……そんな簡単に変えるものじゃないでしょ？」
「そう、だね。けど、俺もそれだけ変わったから」
苦笑する湊の目に陰が差すのを見ながらチドリは考える。
エルゴ研に来て以来、ほとんどの被験体は名前で呼ばれる事が無くなった。
研究員は被験体を番号で呼び、被験体同士もそれほど仲が良くならないので、会話自体が乏しい。
それだけに、お互いを名前で呼ぶということがここでは特別なことだと思っていたチドリは少々ショックを受ける。
湊の言った事が嘘ではないのは先ほどの戦闘で理解した。最後に会ったときとは比べ物にならないほど強くなっている。
しかし、それでも本来の名であるはずの『八雲』と呼べないことに寂しさを感じずにはいられなかったのだ。
「……たまになら、八雲って呼んで良い？」
「え？　ああ、別に構わないけど」
「うん。じゃあ、今は湊って呼んでおく」
きっとエルゴ研で湊の本名を知っているのは自分だけだ。
だから、チドリは自分も特別なときにだけ、その名を呼ぶ事に決め

た。
　そうして、二人がお互いを見ていると、後ろから声をかけられた。
「えっと、助けてくれてありがとう」
　再会した二人が話しているのを傍らで見ていた二人のうち女子の方が、話が一区切りついたと思い話しかけた。
　湊はその声の方にちらりと視線を向けると、助けられた二人は怪我と体力が回復したことで余裕が出たのか、落ち着いた様子で自分たちを助けた者の姿をその目に焼き付けている。
「別についでだったから……。それで、あっちの子が、帰りたがってるから、戻ろうと思うけど、そっちはどうする？」
「あ、ボク達も今日はもう無理そうだから、一緒に着いて行ってもいいかな？」
　自分のことを『ボク』という女子が少々不安げに尋ねてきたので、湊もそれを了承し移動のためのペルソナを呼び出す事にした。
　湊の手に現れたのは『節制』のカード。
　突然現れたその不思議な輝きをもつカードに他の者の視線が集まっていると、気にした様子も無く湊はそれを握り砕いた。
「出ろ、バイフー！」
《グルル……》
「っ、虎のペルソナ……」
　湊が呼び出したのは巨大な青い虎、節制〝バイフー〟。
　バイフーとは中国語で白虎を指すのだが、湊のバイフーはホワイトタイガーではなくマルタタイガーにしか見えない。
　しかし、言葉の知識もなければ、間近で虎など見た事もない者たちは、自分たちとは完全に違う捕食する側であることを本能で感じ取り恐怖を抱いていた。
「おっきい、トラ！」
　そんな中、カグヤに抱かれている少女だけは動物が好きなのか嬉しそうにしている。
　相手の子どもらしい反応に呼び出した本人は軽い笑みを浮かべ、カグヤを近くに呼び少女がバイフーに触れられる様にしてやった。

そして、それらを見ていたことで他の三人は気付いた。嬉しそうにしている少女を抱いているカグヤが湊のペルソナだというのは先ほどの説明で聞いた。

だが、いま呼び出されたバイフーも湊のペルソナだ。

常時安定して召喚できることですら驚くべき事だというのに、ペルソナを複数所持しそれらを同時に召喚できるなど聞いた事がなかった。

「湊。あなた、ペルソナを何体も呼び出せるの？」

「まぁね。前は隠さないといけなかったけど、自分の身を守れるくらい強くなったし。もう隠すの止めたんだ。それじゃあ、そっちの二人はバイフーに乗って。それでチドリはカグヤに」

それぞれに言ってる間に、さらに湊は高同調状態でタナトスを呼び出し宙に浮く。

動物の姿のペルソナに喜んでいる少女以外にとっては信じられない出来事の連続だが、ここまで非常識な能力を持っている者と共にいれば、自分達の命は先ず間違いなく安全だろうと思える。

精神的にはいくらか落ち着き、体力も僅かに回復したが疲労状態には変わりない。

なので、いまこの状況で疑問を解決するよりも、早く安全な場所に戻るべきだとして言われたペルソナに乗り。

先導して飛んでいく湊に案内されながら脱出装置へと向かったのだった。

第十話　帰還

――エントランス

湊が屋上より飛び立った後、状況を確認するためにやってきていた飛騨は、エントランスに到着し二人の帰還を待っていた。

待っている間、かなり弱った様子の被験体らが個人単位で戻ってきているのを何度も見た。

それだけ今日のタルタロスは危険な場所だったのだろう。

子どもらを、使えない失敗作と呼んで憤っている松本に、一言物申してやりたい衝動にも駆られたが、それは自分の仕事ではない。

そう、もしも、少女の救出が間に合わなかったそのときは、今は沈黙している転送装置から少年の姿をした、鬼が現れるはずだから……。

そうして、湊がどちらの姿で戻ってくるか心配しながら見ていると、転送装置が勝手に起動し始めた。

上のフロアから誰かが戻ってくるようで、他の研究員らもそれを見守っていると、現れたのは第四研に所属する被験体の男子だった。

しかし、それで終わりではなく、続けて同じ所属の女子。さらに、ムスッとした表情のチドリ、年不相応に冷めた表情をした湊、その湊のシャツの裾をちょこんと摘んでいる金髪の少女が次々と現れた。

何故、チドリを助けに行って他の女子が懐いているのかは不明だが、とりあえず無事の帰還を喜び、声をかけようとすると。エントランス内の研究員らに視線を送っていた湊が、ある一点に視線を固定したまま右手を一閃した。

直後、薄っすらと光る刃が飛び、爆発音が響いた。

「っ、ぐぁぁぁぁっ!?」

一閃した右手から斬撃波が飛んだかと思うと、それは置かれていた機材を大破させ、その近くで湊らを見ていた松本に破片が直撃した。

致命傷という訳ではないが、爆発の熱といくらかの破片が手足に刺さり、服だけでなく身体にも達していたようで、着ている物を赤く染めていく。

手を一閃させる一瞬の間にタナトスを呼び出し攻撃を放った湊を、他の者は驚いた様子で見ているが、当の本人は冷めた表情のままだ。
そして、他の研究員によって応急処置を施されている松本に向かって静かに口を開いた。
「……お前、そんなに殺されたいの？　自分はペルソナの素養すらないくせに鬱陶しい。自分らは安全圏にいながらごちゃごちゃ五月蝿いんだよ。先ずは戻って来た子どもらの容体確認と治療だろ」
言い終わると湊はタナトスを消し、続けて永劫のカードを砕いてカグヤを呼び出して、回復スキルで子どもらの傷を治療していく。
そして、回復の光が治まると、カグヤを消してから口を開いた。
「応急処置はしといた。あとは向こうに帰ってから、ちゃんとした設備で検査して治療を受けさせろ」
「エ、エヴィデンス。君は複数のペルソナを使えるのか？」
アイギスのメモリーに映っていた湊のペルソナはオルフェウスだったのだが、前回の探索時にエントランスに現れたときにはタナトスを使役し。今日は研究員らの目の前で別のペルソナを召喚して見せた。
前回の時点では、ペルソナは心の具現であるため、内面の変化によって姿が変わったという可能性もあり得た。
両親を失った戦いから半年もの間眠り続け、変わり果てた自身の姿を見たのだ。何の感情の変化も起こらない方がおかしい。
しかし、湊が今回見せたものは別だ。あれはどうみても複数のペルソナを所持し、自由に付け替えることが出来るとしか思えない。
治療に加わっていなかった第五研の室長、ヘーガーはそのような思いから目の前で起こっていた事が信じられないとして尋ねると。
湊はその返答として新たなカードを砕いた。
「バイフー、マハジオだ」
《――――――――ッ!!》
呼び出されたバイフーは咆哮すると、湊の命令のまま頭上からマハジオを発生させ。ヘーガーを襲う。
「ぐあぁぁぁぁぁっ!?」

突然の攻撃に加え、電撃という速度のある魔法だ。そんな物を避けられる筈もなく、ヘーガーは松本のように地面に倒れこみ、他の研究員らが駆け寄っていく。
同じ室長でありながら驚きで動けなかったために攻撃の対象から外れていた沢永と幾月は、そんな様子を見て、自分も同じ目に遭っていた場合のことを想像し、引き攣った顔で嫌な汗が背中を濡らすのを感じた。
「何を聞いてたんだよ。治療と容体確認が先って言ったばかりなのに、ペルソナ〝如き〟のことなんて後で良いだろ。こっちは応急処置しかしてあげれてないんだしさ」
冷たい金色の瞳を向けながら話す湊だが、本人も別にペルソナという力を軽く見たりはしていない。
自分がペルソナを扱えるのは、両親が適性者であったために偶然にもその強い素養を引き継いでいただけ。
また、多数のペルソナを使えるのも、アイギスが自分にデスを封印したことが影響しており。
もっと根本的な問題として、ベルベットルームの人間の協力があればこそ強力なペルソナを得ることが出来ている。
いくら強い力を得ようとも子どもの身で大切な人を守っていこうというのだ。
それだけ他人の力を借りて得たものを、たとえ使えるのは自分だけだと言っても驕るようなことはなく。未だ自分はとても未熟で弱い存在だと湊は認識していた。
ならば、なぜ湊は敢えてペルソナをくだらないもののように言ったのか。それはここにいる研究員ら全員に自分という存在を『絶対に逆らってはいけない者』として認識させるためであった。
「今日は満月だ。シャドウが凶暴になることくらい分かってただろ？それなのに態々探索させるなんて、本気でこの塔を調べる気ある？」
背後ではチドリのついでに拾って来た第四研の二人が怯えているのだが、湊はより一層冷たい触れれば切れるような空気を纏いながら

問いかける。
ペルソナに限らず、シャドウのものであっても耐性のない普通の人間が魔法スキルを喰らえば相当のダメージを負い、数時間は動けなくなる。
だが、湊は出力を抑えたのか少々の痺れは感じるもののヘーガーは支えられながら立ち上がることが出来た。
それを見ながら話を聞く限りでは懲罰の意味で電撃を放ったようだが、その攻撃に一切の躊躇ないがないことから、自分たちは今この場において〝生かされている〟ことを研究員らに実感させた。
「子どもらを管理して自分達の方が偉いと思ってた？　残念だったね、俺が出てきたからには、研究所でのカーストは俺が頂点だ。今度勝手に今日みたいなことしてみろ、敷地ごと消し飛ばすぞ」
それはハッタリでもなく、純粋な脅し。
脅しをかけた張本人を近くで見ていた第四研の被験体の二人は、自分たちが逆らえない筈の研究員らが湊を怯えたような目で見ている事が信じられず。
一方、傍らに立っていた二人の少女は、湊が自分たちのことで怒っているのだと理解し。それにより、湊への信頼を厚くする。
所詮、非人道的な研究をしている悪魔の群れでも、表情一つ変えずに理不尽なまでに圧倒的な力を振るえる死神に勝てないのだ。
そして、そんな死神を生み出したはぐれ悪魔が、表情を歪めながらも子どもらの容体確認と搬送に動く研究員らを横目で見つつ少年に話しかける。
「どうも、お疲れ様です。無事に少女を助けられたようで何よりです。ですが……何故、新たに少女が増えているのですか？　そちらは別の研究室の所属でしょう？」
「うん。まぁ、途中で拾ったんだけど、なんか離してくれなくて……」
困った表情をしている湊の後ろには、裾を掴んだまま飛騨から逃げるようにして湊の背に隠れる金髪の少女が立っている。
チドリはそれが面白くないのか不機嫌そうに睨みつけているが、流石の飛騨も別の研究室の子どもを勝手に連れていく事は出来ないと

して、どうすべきか悩みはじめた。
　すると、近付いてきた飛騨に怯え、不安そうにしていた少女がチョイチョイと服を引っ張り、湊を呼ぶ。
「ミナトと一緒がいい……」
「ダメ、あんたは別の研究室でしょ。うちは私と湊だけで良いのよ」
　チドリはそういって湊を見つめている少女を睨みつける。
　実を言うと、少女は今日の夜にチドリと訓練を行っていた相手で、自分を殺すと言っていたくせに今は一切眼中にないようで湊ばかりを見ている。
　今までの訓練で何度か顔は見ていたものの、名前も知らないような相手が自分よりも先に湊に会っていた次点で面白くなかったのだが、さらにいつまでもベタベタと纏わりついている事もチドリの気に障った。
　しかし、少女は湊と離れたくないようで、チドリの意見を聞きつつ別の案を出す。
「じゃあ、ミナト。一緒にいこ？」
「え？　ていうか、キミ名前は？　どこの子？」
「私、マリア！　マリア、だいいちけん？　ってところでペルソナの練習してる」
　自分の自己紹介を嬉しそうにするマリア。
　マリアの食堂や訓練時の様子を少しだけ覚えていたチドリにとっては、相手がこんなにも年相応の明るい表情をしているのは非常に驚くべきことだ。
　しかし、それでもやはり、第八研にまでこられて湊にベタベタされては嫌だと思ったので、ここは一つ年功序列で年下に命令してやることにした。
「あなた新参のくせに生意気なのよ。こっちは私と湊だけで良いって言ってるでしょ。子どもは帰って寝てなさい」
「ちょっとチドリ。小さい子にそんな言い方したら可哀想だよ」
「マリア、子どもじゃない！　マリア、もうすぐ８さい！」
『……え？』

湊とチドリは思わずポカンとしてしまった。
明らかに自分たちよりも年下にしか見えないマリア。
背丈もチドリの目線くらいまでしかなく、言動も幼稚園児のそれに近い。
だが、マリアは自分がもうすぐで八歳。つまり、湊らと同じ小学二年生にあたると言っているのだ。
小さな子どもの言う事をそれほど疑ったりするつもりのない湊も、流石にそれは信じられなかった。
「あのね、マリア。八歳って両手を使って数えるんだよ？　マリアは本当はもう少し指を折り曲げないといけないよね？　ていうか、そうじゃないと俺より数ヶ月年上になるし……」
「数字ちゃんと数えれるよ？　１９９２年の７月２７日うまれ！」
嘘を言っているようには見えない。
何より、幼いわりにしっかりと西暦で誕生日を言えることが、マリアが本当に湊らと同学年であることを表していた。
そうして、マリアが実は数ヶ月という僅かな差だが年上であることが分かった二人は少々落ち込むが、チドリもついでとばかりに自分のプロフィールを湊に教えておく事にした。
「……私、八月十二日生まれ」
「え？　ああ、うん。俺は十月生まれだよ。けど、なんか悔しいから『有里湊』としては四月五日生まれにでもしておこうかな。飛騨さん、それで登録しておいて」
「別に構いませんが、少年に限らずうちの研究は公に出来ないものですから、全員戸籍を抹消して詳細プロフィールなんてものは残していませんよ。せいぜいが少年の〝エヴィデンス〟や少女の〝被験体０６８〟といった名称。それと発現したペルソナのアルカナと能力くらいですね。少年に至っては最初の時点で元の名前も分かっていませんし、本当に不思議なものです」
少々呆れ気味に答える飛騨の言葉も尤もで、湊達のいるエルゴ研は、公には出来ないが仮にも桐条グループという世界有数の大企業の研究機関である。

桐条の影響力と情報網はかなり大規模に亘り、時間はかかろうが被験体らの本当の親も探しだす事が出来る程だ。
しかし、何故だか湊に関する情報だけは一切公開されていなかった。
各室長らが桐条家当主の方に情報を尋ねても、教える事は出来ないという答えが返ってくるのみで、現在も非公開のままきている。
乗っていた車のナンバープレートから身元を割り出そうと試みた者もいたが、爆発したときに海に落下したのか、それも不発に終わった。
情報を秘匿するからには当主である桐条武治は湊の身元を理解しているようだが。どのような理由から隠し続けるのかは研究員らも分かっていない。
そういった理由から、桐条に並ぶほどの家の者だという尤もらしい噂に、もしや桐条の隠し子ではないかという突飛な話が研究員らの間で囁かれていたのだった。
「へぇ、やっぱり俺の情報って名前も知られてなかったんだ……」
以前、病院で自身の名がエヴィデンスとしか書いていなかった事で、その可能性を考えていた湊は予想が当たり小さく笑みを浮かべる。
湊はそのうちチドリを連れてここを出るつもりだ。
しかし、名前などを知られていると逃げた後で見つかってしまう可能性が高くなる。
それを潰すために逃げる前に自分たちの情報を出来る限り消すつもりだったが、そもそも情報自体がないのであれば、その手間はかなり少なく済みそうだった。
そんな思惑を理解していない少女二人が、湊の笑みの理由が分からず不思議そうにすると、不安を与えぬよう苦笑して「なんでもない」と返し、湊は話を戻す。
「それで、マリアには悪いけど俺はチドリと同じ所属でいるつもりだから移籍は出来ないよ」
「なんで？　ミナト、マリアのこと嫌い？」

「別にそういう訳じゃないよ。単に俺はチドリを守るためにいるから、チドリのいないとこに行く気が無いだけで」
泣きそうな顔で見上げるマリアの頭を撫でつつ答える湊。
だが、やはり湊としては優先順位はチドリが上なのでチドリのいる研究室以外に移る気はなかった。
一方で、チドリの方も湊がマリアに優しくしているのは気に食わないが、自分を守るために傍にいると言われ、無愛想ながらもどこか嬉しそうにしている。
遠くでそんな輪に加わりたそうに湊を見ている第四研の少女も含め、分かりやすい相関図の矢印の向きに飛騨は苦笑しながら、子どもらを早く休ませるためエントランスの外へ出るよう伝え自分は車に乗りこんだのだった。
深夜――第八研・被験体用寝室
タルタロスから戻ってきて影時間が明けると、湊はマリアを第一研へと送っていき。その間にチドリは入浴を済ませることにした。
そして、湊も第八研に戻って入浴を終えると、以前と同じ被験体用の寝室のベッドでチドリと雑談を交わす。
内容は主に今まで湊が何をしていたかだ。
肉体に施した改造の全てを話したりはしないが、自分がどのように力をつけたか。また、瞳の色がなぜ変化しているかなどについては話した。
最初は驚いていたチドリも、話が進むにつれ非常識な事柄のオンパレードに思わず呆れてしまう。
「……それじゃあ、ずっと引き篭もって戦う準備してたんだ。そんな近くにいたのに一切連絡もしないで」
「うん。まぁ、引き篭もってたというより、終わるまで出られなかったって言った方が正しいんだけど」
不機嫌さを隠さず棘のある言い方をワザとするチドリ。本気でキレてはいないが、かなり真面目に怒っているようで、隣に寝ている湊の腕をかなり強く掴んでいる。
対して、湊の方はチドリの怒りの理由と非が自分にあることは認め

るので、敢えてその腕を解かずに好きなようにさせる。
「貴方、いなくならないって言ったわよね？　で、言ってすぐにリハビリで二週間いなくなったくせに、今度は三ヶ月も消息不明。……ねぇ、私のこと舐めてるの？」
「別にそんなことはないよ。けど、一緒にいるために必要なことだったから」
「男が言い訳してんじゃないわよ、この黒マフラー」
言って、チドリは湊の首に巻かれている黒いマフラーを掴むと自分の方へと強く引っ張る。
湊のマフラーは肌触りはシルクのような高級なものでも、素材自体は現実世界のものではない。
なので、いくら引っ張られようが湊が念じない限り伸びてしまう事はないのだが。今回はそれが悪い方に働き、巻いていた本人も一緒に引っ張られてしまった。
『痛っ』
勢いよく引っ張られたマフラーにつられた湊は、そのままチドリの方へ移動し、お互いの頭をぶつける形となってしまう。
だが、口ではつい痛いと言ってしまった湊は、肉体改造で防御力があがり、尚且つ現在タナトスを装備していることで打撃耐性がついていたことで、実はそれほどダメージはない。
しかし、チドリは普通の女子であり、発現したペルソナに打撃耐性などついていなかった。
そうして、チドリは思わずぶつけた個所を押さえて涙を滲ませながら悶絶しつつ、原因となった少年へと逆ギレした。
「なんで、ちゃんと耐えないのよ！　それに、頭硬すぎ。どんな身体してんのよ、まったく」
「えっと、なんだろう。ゴメン……であってるのかな？　まぁ、いいけど、大丈夫？」
「……目の前で痛がってるのに大丈夫に見えるなら、眼科行った方がいいんじゃない？」
「ああ、大丈夫そうだね。コブにもならないだろうし治療は必要ない

かな」
淡々とした口調で言いながらも湊は触診でチドリの容体を確認する。
飛騨が医者だったこともあって、隠し部屋の方では暇なときに医学書を読んでいた湊。
ペルソナやメッチーの力を使えない状態でも容体を判断して、怪我の応急手当てくらいは出来るようになるためにしていた事だが。その知識が初めて活かされたのが今だった。
だが、そんな事を知らない者にとっては湊の対応は適当に流しているようにしか思えない。
その結果、さらにチドリの怒りを増長し、本人はぶつけた額の痛みも忘れて起き上がると、湊にまたがり不良が襟元を掴むように両手でマフラーを掴み上げた。
そして、暗闇の中で相手の目があるであろう場所を睨みながら口を開く。
「……急にいなくなるし、突然現れたと思ったら変な子連れてるし、今のだって適当に相手されてるようにしか思えない。私、そんなの……なんかイヤ」
最初は凄みをきかせた声色だったが、徐々に小さく呟くようになり、最後はどこか泣きそうな印象の声色だった。
痛みで涙が滲んだ事が原因ではないだろう。
味方のいないこの場所で久しぶりに出会った同じ所属の少年。その少年は他の第八研に所属していた者たちのようにいなくなったりはしないと約束した。
こんな異常な環境だからこそ、感覚が麻痺していたチドリは孤独にも慣れたように思っていたのだが、本心では寂しさを感じていたようで。そんなただの口約束が嬉しかった。
「もう、本当にいなくならないで」
しかし、湊も他の者たちと同じようにいなくなってしまう。
死んでしまったというなら、まだ諦めもついた。
立ち上がれもしなかったのだ。

守っていた自分がシャドウにやられれば殺されてしまってもおかしくはない。
だが、飛騨は明確に死んだとは告げなかったので、その中途半端な対応が生きているかもしれないと単純に諦める事を躊躇わせていた。
そうして、その僅かな希望が自分の命が失われる直前に現実となって現れた。
自分を守るように敵との間に降り立ち、その後、敵を体術のみで倒すと柔らかい笑みで再会を喜んでいた。
自分だけが会いたいと思っていた訳じゃない。
湊も守るために力を得て、ずっと再会するのを待ち望んでいたのだ。
「……うん、約束する」
その気持ちが相手に伝わるように優しく答えながら、湊は自分の上に座っているチドリを抱き寄せると、身体を回転させて横に寝かせ、抱きしめたまま頭を撫でる。
取り付けられたカメラは既に破壊しているので、自分たちだけの時間を見られる事もない。
再会した二人はお互いに抱きあうと、穏やかな気持ちのまま眠りについたのだった。

第十一話　訓練

7月19日（水）
朝――エルゴ研・食堂
チドリと湊が再会した夜から三日が経った。
戻って来た研究員らは、湊の指示通りに被験体の子どもたちの容体を調べるのに一日使い。
さらに、休ませるため一日を休養日とした。
そして、訓練などが再開される日の朝、チドリと共に湊も食堂にやってきていた。
食堂にいる被験体たちの顔色に特に問題がないことを確認し、脅しがしっかりと利いてたことに内心でほくそ笑む。
「……クスッ」
「……すんごい悪人顔」
大人でも出来ないような悪さを感じる笑みを浮かべていたのをみて、チドリは湊を注意する。
湊は母親に似たのか、男にしてはかなり中性的な顔立ちだ。
一応、男子用の支給品の服を着ているので男だとは分かるが、ずっと髪を切っていないこともあって、外見上の性別はより曖昧になっている。
しかし、幼いながらもクールな印象を受ける端正な顔の造形は、笑みを浮かべれば異性を魅了し。邪悪さを醸し出せば他の者に近付く事を躊躇わせる。
それらはどちらも美しくはあるのだが、チドリとしては湊の困ったような笑みが一番好きだった。
なので、それとは程遠い悪い笑みを止めさせたのだが、言われた方は気にした様子も無く普通の笑みで答えた。
「生まれつきだよ」
「両親が泣くわよ？」
ここに集められた子どもたちは基本的に児童養護施設にいた者ばかり。

そんな中で、唯一の例外である湊であったから、チドリも特に気にすることなく親の話を出した。
しかし、返って来た言葉を聞いて言ってしまった事を後悔する。
「もういないけどね」
「っ、ゴメンなさい」
自分の一番好きな困ったような笑みに似ているが、いま湊が浮かべたのは諦めからくる「どうしようもない」ことへの自嘲的な笑み。
そもそも、親がいれば半年以上もこんな施設に黙って居るはずがない。
単純な事へ考えが至らず、相手を傷つけてしまったことにチドリが申し訳なさそうに俯いていると、突然、頭に柔らかい感触が触れた。
「別に気にしなくていいよ。両親が死んだ事は確かに悲しいことだけど、別に独りって訳じゃないし」
そういって湊はチドリの頭を撫でながら柔らかく笑う。
心配をかけないように、チドリを傷付けないように。湊は自分自身にもそれを適応してチドリと接する。
両親の死は今でも悲しいと思っているし、桐条や研究員に対しての憎しみの炎も黒く燃え続けている。
だが、それをチドリに見せてはいけないとして、少年は心に仮面を被り、自分の本心とその表情を隠した。
「そんなことより、ご飯済ませちゃおうよ。今日も戦闘訓練があるんでしょ？」
「え？　えっと、うん。基本的に毎日あるから」
「なら、早く食べて少しお腹を休ませないとね」
クスッと笑って配膳台へと向かいながらチドリがついてきている事を横目で確認する。
少し前までの暗い表情は消え、今は自然に湊の手を取って本日の朝食のメニューに視線が行っている。
（これでいい……）
自分が少し気を遣うだけでチドリは笑顔でいられる。
苦労する事もあるだろうが、笑顔が見られるのであればやすいもの

だ。
　そんな風に考えながら食器の載った盆を受け取り、空いている席を見つけて向かっていると後ろからパタパタと駆け足でよってくる足音が聞こえた。
　そして、その足音の発生源である金髪の少女は嬉しそうに湊の腰に抱きついた。
「ミナトー！」
「うわっ!?　ちょっと、危ないよマリア。落としたらどうするの」
「マリア、一緒にごはん食べたい！」
「ああ、うん。別に良いけど、それなら食器とってきなよ。先に席についておくから」
　後ろから勢いよく抱きつかれたことで、バランスを崩し食事をこぼしかけるが、人間の限界を超えた反射神経で素早く体勢を立て直し、なんとか事なきを得た。
　自分自身で行動を起こしながらも、なんとも無駄な力の使い方だと湊は思いつつ、マリアを諌めて食器を取ってくるように言うと、マリアは素直に返事をして駆け足で食器を取りに向かった。
　そうして、気を取り直し、元から座るつもりだったテーブルに食器を置いて、湊は席に着いたところで横で不機嫌そうに座る少女に声をかけた。
「……どうしたの？」
「……別に」
「嫉妬？」
「うるさい、自惚れないで」
　湊にしてみれば軽いジョークのつもりだったのだが、意外にもチドリが真面目に答えたことで少々面食らってしまう。
　これ以上何かを聞けばさらに機嫌を損ねるだろうし、湊もここは放置する事に決め。マリアが来るのを待って食事を始める事にした。
「持ってきた！　一緒にたべる！」
「うん。それじゃあ、食べようか」
　今日の朝食は和食の献立だ。

ご飯、味噌汁、出し巻き卵、鰤の照り焼き、ホウレン草のおひたし、漬け物。
特に嫌いな物のない湊は、パクパクと箸を進めていく。
左に座るチドリも無愛想な素の表情で食事を続け、向かいの席のマリアも湊を見ながらニコニコと食事をしている。
そして、口の中の物を飲み込むとマリアは話しかけてきた。
「ミナトも訓練くる？　マリア、ミナト見た事ない」
「うん、まぁ、行くけど。マリアって日本人じゃないのかな？　ちょっと言葉が独特だね」
「……？　分かんない。マリア、上の名前、シロツユっていうの。真っ白と雨みたいな漢字書く。マリアは棒と四角がいっぱい」
キョトンとした表情から一生懸命に自分の名前を説明するマリア。
それらを聞いて湊は頭の中で、マリアの名前に使われている漢字を推測していく。
棒と四角がいっぱいというのはよく分からなかったが、マリアという読みによく使われる漢字のどれかだろう。
そう考えてEデヴァイスを呼び出すと、キーボードを操作してマリアに画面を見せた。
「これでいい？」
Eデヴァイスの上に浮かび上がった画面に表示された文字は、【白露　真理亜】。
雨のような漢字でツユと読むのは『露』か『梅雨』だけ。
しかし、マリアは精神が幼い割に理解力などはあるようなので、雨という字を実際に使っていれば「雨の様な」とは言わない筈と思ってこれらを選択した。
そして、正解かどうかの答えを待っていると、マリアは目を輝かせてテーブルの上に身を乗り出した。
「それなーに？」
「これ？　Eデヴァイスっていう、まあ、パソコンみたいなものかな」
「でも、普通のパソコンじゃないでしょ？　画面もキーボードも立体映像みたいな感じだし。この前はタルタロスの地図とか表示してた

じゃない」
チドリが言ったのは、チドリと湊が再会したタルタロスでの事。
他の者をペルソナに乗せて移動を始めると、湊はEデヴァイスを起動させタルタロスの地図を表示した。
最初は周囲の図しか表示されていなかったのだが、カグヤが耳をピコピコと動かすと、範囲が拡大し、落ちているアイテムや敵の位置、さらに階段と脱出装置の位置まで表示されていたので、なんと高性能なのだとマリア以外の三人は驚いたものだ。
もしも、これを量産することが出来れば、被験体らの生存率や探索効率は飛躍的に上がるだろう。
だが、Eデヴァイスは現代の技術で作れるものではなく、また、マッピングは探知能力を有しているペルソナを持っている者しか使えない機能なので、どちらにせよ量産する意味はない。
その事を理解している湊は、二人に変な誤解を与えないよう気を付けながら説明する。
「地図は探知能力の応用だよ。掴んだ感覚を視覚化した方が分かりやすいからって、アプリを追加したんだ」
「ふーん、それもハカセの作品？」
「いや、エリザベスっていう、俺に戦い方を教えてくれてる人からのプレゼント。ついでに言うと、このマフラーもそうだよ。靴はその弟からだけどね」
Eデヴァイスを消し、食事を続けながら、左手でマフラーを軽く引っ張って見せながら笑って答える湊。
急に消えてリストバンドになってしまったEデヴァイスに、マリアは興味津津のようだが、チドリは湊の身に着けている数々の品が、自分の知らない女からの貢ぎ物であるとして不機嫌になった。
そして、不機嫌さを隠さずに問いかける。
「どこの人間？　年上？」
「どこって……どこだろう？　現実とは違う、不思議な空間としか言えないかな。それで、年上だよ。見た目は二十代中盤くらいかな」
「二十代って、おばさんじゃない」

言って内心で勝ち誇るチドリ。自分たちよりも一回り以上年上なのだ、そんな相手がいくら湊にご執心だろうが、若さという最大の武器を持っている自分には敵わない。
よって、そのエリザベスなる人物は自分の敵ではないと、勝手に勝敗を決めると、機嫌を少し戻し食事を続けた。
だが、チドリはこの時知らなかった。チドリの『おばさん』という発言が相手に伝わっており、その罰を湊が受ける事になる事を。また、エリザベスが不老であり、いつまでもその全盛期の美貌のままである事も。
そうして、次回の鍛錬で罰を代わりに受けさせられ、回復もされぬまま不老である事を延々と説明される湊は、何か背筋に寒いものを感じながら、その後も食事を続けた。
――総合訓練室
朝食を食べ終え、少し休憩した後、三人は時間になったので体術の訓練をするための施設にやってきていた。
ここは先日、チドリとマリアが訓練で戦ったのと同じ場所である。しかし、マリアはそのときの事など覚えていないようで、今日も湊の服の裾をちょこんと摘んで部屋内をキョロキョロと見ている。
それを気にした様子もなく、湊は二人に尋ねた。
「それで、ここで何するの？　前はただ走ったり筋トレしたりしてたけど」
「武器もってたたかうの。マリアのおっきい剣」
言って、マリアは遠くの研究員らの近くにある箱を指差した。
訓練で使う武器はそこに入っており、種類も小型のナイフから大型の斧や槍まで存在する。
しかし、殆どの者は筋力と体力の関係からナイフか六十センチ程度の剣を使用していた。
案内されるまま、湊もそこへ向かうと置かれている武器を見ていく。
一応、自分自身の武器はマフラーに入っているが、流石に訓練に真剣を使う気はない。なので、他の二人がそれぞれ武器を取りに行った

のを見届けると、自分はフリウリスピアを選ぶことにした。
掴んだそれの調子を確かめるように少し離れて振り回すと、研究員や被験体らの注目を嫌でも集めた。
そもそも、被験体らにとって湊は全く見覚えの無い新参である。そんな新参が、男女の違いはあっても全員が共通の支給品の服と靴を身に着けている中、一人だけ黒いマフラーと編み上げブーツを身に着けている。
そして、極めつけに、誰も使った事の無い変わった形状の槍を振り回す始末。
研究員には逆らわないが、好戦的な性格をしている者たち数名に、普段の鬱憤を晴らすため今日の訓練相手にしようと思われても仕方がなかった。
「なァ、新入り君。面白ェ武器つかってんじゃねェか。それ使ってるやつとやったことなくてよ。今日はオレの相手してくれねェか？」
「ん？　新入りって俺？」
若干、独特な口調で話しかけてきたのは、湊と同じ年頃の少年だった。
湊よりも色白だが、髪は湊よりやや短めに切り揃えられた濃い黒髪。
そんな少年は、自分がいままで戦った事の無い相手と戦ってみたいという台詞の割に、口元が下卑た笑いに歪んでいることから、本心は目立っている湊を嬲りたいだけだろう。
だが、嬲りたいという事は、それをするだけの最低限の自信と強さを持っているという事だ。
ならば、それを思える実力がどの程度か確かめるため、湊はそれを了承することにした。
「いいよ。俺は第八研の湊。そっちは？」
「第一研の鈴原（すずはら）　和輝（かずき）だ。カズキでイイぜ。よろしくなァ、新入り君。ンじゃ、また後でな」
そういうと、カズキと名乗った少年は楽しそうに合成樹脂製のナイフを投げて遊びながら離れていった。

「あいつとやるの？」
離れていく相手の後ろ姿を見ながら突っ立っていると、チドリが話しかけてきた。
その表情は心配しているというより、どこか呆れているようだ。
理由が分からない湊は、槍の石突きを地面につけると、チドリの方に向き直り尋ねる。
「何か問題あった？」
「なくはないわね。だって、あいつ一応は強い方だし」
「大丈夫、負けないよ」
心配をかけぬよう笑って返す湊。その声や表情に一切の緊張や気負いは感じられない。全くの自然体で答えていた。
だが、そんな返事を受けたチドリは呆れたような視線を送り首を横に振る。問題はそちらではないと。
「あいつも言ってたけど、貴方は私たちにしてみれば訓練にも出てない新入りなのよ。本当は最古参でしょうけど、そんな新入りが被験体でも強い方の人間を一方的に倒したらどうなると思う？」
「ミナトが強いってみんな思う」
急に会話に入って来たマリアの回答にチドリは溜め息を漏らす。確かにそうだが、問題はそう認識した後の事だからだ。
そんな中身の幼いマリアにも問題点が分かるよう、チドリは簡潔に述べた。
「そうだけど、強過ぎると他の人間に疎まれるようになるのよ。強さで自分っていうのを保ってる人間は、特にそうでしょうね。気に食わない、自分の方が本当は強い、あいつがいなければって」
「そして、逆に弱者には恐怖を抱かれる。自分もあんな風に痛めつけられるんじゃってね。その両者から負の感情を向けられた俺は、同様に俺を疎ましく思っている研究者からも、何かしらの妨害を受け。それを苦に、この研究所を去る事に決めたのでしたっと」
チドリの言葉を引き継ぎ、続けた湊の表情は驚くほど感情の籠もっていない、冷たい仮面の笑みだった。
冗談のような口調だが、湊は本当にこの研究所を去るつもりなのが

分かる。それも今の話で言ったように追われるのではなく、時が来れば明確に自分の意思で出ていくつもりなのだろう。
どうやってそれを実行するのか分からないが、きっと大きな事件となる。どう心構えをしておけば良いのか分からないが、少女二人はそれが来る事だけは覚えておこうと思った。
「よし、それでは整列しろ。準備運動を終えた後、ペアを組んで模擬戦をする。意識を刈り取るか、動けなくすれば勝ちだ。また、こちらで判断して止めることもあるので、注意しろ」
話が終わったところで、研究員とは違う、スーツにサングラスをかけたＳＰ風の男が仕切り始めた。被験体らが、その指示に従っているので、湊も他の者と同じように武器を持ったまま整列し、一緒になってランニングを始める。
最初は、武器を置いて走り体力をつけた方が良いのではと思ったものの、実戦まで期間がそんなにある訳ではない。
ならば、探索時と同じように、訓練でも武器を持って走る方が確かに効果的だと思えた。
（ふーん、意外と全員がちゃんと走れるんだ）
速めのペースで全員が走り終わり、息を切らしているのを見ながら、湊はそんな風に全員が最低限の下地は既に出来ていると感じた。
後ろの方で走っている姿を観察していたので、誰が運動が苦手かなども、ある程度は把握できた。
チドリとマリアは女子だが、全体でも上位に入る運動性能をしており、身体が成長すればかなりの強さになるだろう。
先ほど、湊に話しかけてきたカズキも、チドリが言うだけあって体力もスピードもある。
先日助けた第四研の二人は、男子は中の下で年相応の運動性能しか無い凡人。女子は、そこそこに高い運動性能を持っているが、チドリとマリアには若干届かないイメージだった。
そんな風に全員の採点をして、ランク付けをしながらランニング後の体操と柔軟を終えると、ペアを組んだ者らが広がり始める。
今日は湊がカズキと組んだので、チドリとマリアは二人で適当に流

しながらやるらしく、斬り合いをしても最後の踏み込みで斬りつける場面でバックステップで距離を取っていた。
それを見ていると、湊の元にもカズキがやってきて、先ほどよりも悪さを感じる笑みで大型のナイフを持っていた。
「ンじゃ、やろうか。間合いは勝手に決めてイイぜ。直ぐにつめてやるからなァ」
「そう、じゃあ、この距離でやろうか」
湊がとった距離はおよそ五メートル。小学生で身体の小さい二人にとっては、十分に離れていると言える。
そして、この距離は二メートル二十センチという、用意された武器で最長のフリウリスピアに有利な間合いだった。
カズキもその事は十分に理解している筈だが、よほどスピードに自信があるのか狂気の混じった笑みを浮かべ、湊の準備が終わるのを今かと待っている。
「ハハッ、準備は出来たかよ?」
「……ああ、良いよ。それじゃあ、やろうか」
言って湊は石突きから四十センチほどの場所を右手で掴み、他を背中側に回して槍を肩に担ぐ。
構えとしては不自然、咄嗟に武器を振るうにしても、今の構えでは振れたときには間合い詰められているだろう。
だが、今の湊からはむしろ余裕さえ感じられた。その奇妙は様子を怪訝に思いながらも、戦闘開始の合図でカズキは地を蹴った。
「クハッ、速攻で終わンじゃねェぞ!! 気取った武器で見かけ倒しでしたじゃ、洒落にもなンねェからなァ!!」
姿勢を低く保ち、直線ではなく僅かにジグザグに走る事で、相手が真っ直ぐ攻撃出来ぬようにするカズキ。
湊が武器を振るう前に、五メートルの間合いを一気に詰め、下から斬りあげるようにナイフを振るった。
「ヒャハハッ! おいおい、どうした新入り君? 使えねェ武器を選ぶなンざ、初歩的なミスすぎンだろ!!」
斬り上げを後ろに跳んで躱した湊に合わせ、自身も跳躍して追撃す

るカズキ。横薙ぎを躱されれば、その勢いを利用してハイキックを放ち、足が地に着けば肘鉄を顎目がけて放つ。
湊も上体を反らし蹴りを躱すと、顎に向かって来た肘を左足を引いて半身になることで避けた。
続けて肘も避けられたカズキは、半身にした事で前に出ていた湊の右足を払おうと、しゃがんで横薙ぎに蹴るが、今度はそれを上から踏みつけられ、動きを止められた。
「ぐあっ!?」
完全に重心が後ろに行っていたと思われたタイミングのため、その予想外の踏み込みの強さにも驚き、苦痛に表情を歪める。
だが、堪えて顔をあげ、相手を睨みながら、合成樹脂製のナイフでその足を突き刺そうとしたその時、顎に強烈な衝撃を受け、カズキは吹き飛んだ。
「がッ」
衝撃を受け、自分が吹き飛んで空中にいる間、カズキは自分が何をされたのか理解できていなかった。
防戦一方の新入りを追い詰め、気持ちよく嬲ってやろうと思っていたのに、最初にダメージを受けたのは自分だった。
武器もまともに選べない新入りと思っていただけに、先に攻撃されたのは深くプライドを傷付けられ、ふざけるなと足を突き刺してやる筈だった。
しかし、顔をあげ、相手を睨みつけたときに見えたのは、とても退屈そうな冷たい瞳。
開始前のどこか不敵に思える表情など欠片も無く、本当につまらなそうにカズキを見下していた。
そして、その直後にカズキは顎に衝撃を受け、吹き飛んだ。そう、湊はカズキの足を踏みつけていた足で、そのまま顎を蹴り上げたのだ。
体重移動が信じられない速度で行われているが故に可能な連撃。
ふきとばされたカズキも、床に落下した衝撃と痛みを感じたことで、漸くその事を理解し。ぐわんぐわんと視界が揺れ、身体の自由が利かないまま、悔しさと怒りで叫ぶ。

「ぐっ……テメェ、ふざけンな！　どンなイカサマ使いやがった!?」
ナイフも取り落とし、床に手をついてもまともに起き上がれないまま、カズキは湊に怒りを向ける。
訓練でも、実際のタルタロス探索でも、上位の強さを誇っている自分が、こんな新入りに負ける筈が無い。何か卑怯な手を使ったのだろうと、そう非難する。
だが、それは上から降って来た三叉になった槍が、自分の首をギリギリ避けるように地面に突き刺さった事で中断された。
何故なら、降って来た槍には、その使い手も一緒についていたから。
首ギリギリを狙って地面に刺さったことで、喚いていたカズキが静かになると、武器を片手で掴んだままの湊が口を開く。
「実戦は負けたら死んで終わりなんだよ。卑怯？　それの何が悪い。相手が卑怯って思うからには、それだけ戦略的に有効ってことだろ。命のやり取りで、文字通り負け惜しみにくだらないこと言ってんじゃないよ」
言い終わると、湊は槍を引き抜いて離れる。
その周りの被験体らは、あまりに一方的な戦いの終わりに、思わず目がいってしまっている。
それは監督役のＳＰ風の男たちも同様で、本来ならば最後の槍を首ギリギリに刺す前に止めなければならなかったのだが、湊の動きが完全に想定外の速度だったために、止める事が出来なかった。
「クソッ、テメェ、待てよ！　ブッコロしてやるから戻ってこい！　おいっ、勝ち逃げなンざ許さねェぞ！　戻ってこッ!?　ごはっ」
解放されたカズキも、悔しさで悪態を吐いていたが、それは途中で止まった。戻ってこいと言っている途中で湊が走って蹴り飛ばしたからだ。
蹴り飛ばされたカズキの身体は、突っ立っていたＳＰ風の男のとこまで飛び、地面に落下する前に受け止められる。
既に意識は失っているようで、腕をだらんとしたまま動く気配はなかった。
冷めた表情でそれを見た湊は、カズキの今後の活動のことを考え、

カグヤを呼び出し回復魔法をかけると、手を払う仕草で連れていくよう命令した。

そうして、素直に命令をきいた男が、カズキを医務室かどこかへ運んでいくのを見ながら、湊は手の止まっている者らの間を進み、呆れた表情のチドリと憧れの様な輝いた瞳を向けているマリアの元へ向かった。

第十二話　ペルソナ召喚

――総合訓練室

カズキを一方的にのして、湊がやってくるとチドリが先に声をかけた。

「やり過ぎ」

「あれでも手加減したんだよ。本当なら、最初の接近の時点で槍の横振りで殴り飛ばせたし」

実際、湊の反射神経ならばそれも可能だろう。カズキも決して遅くはないのだが、言ってしまえば人間の子ども。野生動物よりも速く反応できる湊にとっては、その程度は十分対応できるのだ。

しかし、自分には絶対に出来ない事を簡単に言いのける湊を、マリアは拍手で褒める。

「ミナト、強い！」

「うん、強いよ。この研究所を一時間かからず潰せる程度には」

「潰されたら、私たちの制御剤がなくなるから止めて」

「ああ、それがあったね。何か考えておかないとなぁ」

呑気な口調のまま顔には冷たい笑みを浮かべ、槍を持っていない方の手を顎に当てて考える湊。

湊自身は自然適合者なので、制御剤を使っていないが、チドリやマリアなど、他の被験体は皆、決まった時間に制御剤を投与している。

それを怠ると、自分の制御を離れたペルソナによって殺されてしまうのだ。

もし無事に研究所から脱走出来たとしても、その事に関しては湊は何も出来る事が無い。いや、方法はなくはないのだが、それは湊と常に共にいるか、戦う力自体を失う必要がある。

チドリから力を奪う気がない湊は、飛騨と相談して、なんとか解決法を考える事に決め、思考をいったん止めると、不思議そうに自身を見つめる二人の少女に笑いかける。

不意討ちの優しい笑顔を向けられた少女らは、一人は顔が赤くなるのを感じて視線を逸らし、もう一人はポヤっとした表情で「えへへ」と

照れて笑っている。
「フフッ、二人ともどうしたの？」
「何でもない。それより、また簡単にペルソナ呼び出してたけど、あれどうやってるの？」
まさか、その笑顔に見とれていたと言える訳もなく、やや強引に話題を変えるチドリ。
湊自身は、急な話題の変更も気にしていないのか、少し考える素振りを見せると、槍を置いてその場に座った。
話していた二人もそれに倣って、その場に座る。本来ならば、訓練中に勝手に雑談や休憩をしていれば黒服の男がやってくるのだが、今日は湊がいるため見逃されている。
マリアは分かっていないようだが、湊とチドリはその事を理解しつつも、再び会話を始めた。
「まず、ペルソナがどんなものかは知ってる？」
「もう一人の自分って聞いてるけど」
「うん。じゃあ、それは何を指して、もう一人なのかな？」
尋ねられた二人の少女は、その意味を分かりかねて頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。
頭が良いと言っても、知識に関して言えば湊以外は小学生レベルなのだ。あまりにチドリが自分に近い雰囲気で話していたので、その事を忘れていた湊は苦笑しながら謝る。
「ごめん、ごめん。えっと、ペルソナが心の具現化なのは分かる？」
『うん』
「じゃあ、ペルソナは自分の心ってことになるけど。二人は今いる自分以外の人格、つまり、別の自分っていうのを感じたことはある？」
そう聞かれると、二人は少し考えて首を横に振った。
聞いた本人である湊も、これで頷かれていると、次の話に移る前に精神鑑定を受けさせる必要が出ていたので、そうならず安心すると、続きを話し始める。
「うん、感じたことがなくて当然だよね。ペルソナっていうのは、自分の心の無意識の領域に存在するんだ。つまり、自分が普段感じていな

い、自分の一面ってことね」
「マリアも知らないマリア？」
「そうそう」
精神面で幼いマリアもしっかりと話を理解しているようで、ぽやんとしながらも湊に確認をとっている。
そして、湊が肯定すると、うんうんと頷いてきっちりと理解したようだ。隣にいるチドリも真剣に聞いて口を挿んでこないということで、続きを待っているのだと受け取った湊は続ける。
「そこで、自分を定義して、無意識の領域に意識を向ける事で、自分ではない自分を呼び出すんだ」
「よく分からない。もう少し簡単に言ってよ」
「自分はここにいて、だけど、ペルソナも自分の中にいるってことだよ」
チドリに言われたので湊は別の言葉に言い換えたのだが、再びチドリとマリアの頭上にはクエスチョンマークが浮かんでいた。
これは直接教えた方が早いと判断すると、湊は立ち上がって二人も立ち上がらせる。
そして、二人に少し距離を取らせ、実際にペルソナを召喚させてみる。
「まず、現段階でどんな感じかやってみて」
「いいけど、召喚なんて出来ないわよ？」
「うん。ダメな部分はこっちで修正するから大丈夫」
今までと何が変わったという訳でもないので、今やったところで先日のタルタロス探索のように召喚は出来ないだろうと思いつつ、チドリは湊の言葉に従って集中を始める。
眼を閉じ、自分は自分だと言い聞かせる。そして、そこでペルソナの姿も思い浮かべて、自分からそれが抜け出るようにイメージし、宣言する。
『ペルソナっ』
マリアと同時にペルソナと叫ぶが何も変化は起こらない。
もう少し集中してみるが、以前呼び出したペルソナの気配すら感じ

ない。これではやはり無理だと諦めると、瞳を開き湊を見た。
「やっぱり無理」
「自己の定義が甘いんだよ。自分っていうのは、命そのものだ。死を見つめ、それを受け入れるか拒絶することで力とし、ペルソナを召喚する」
言い始めると、湊の周囲にいくつものカードが回り始める。
カグヤやバイフーを召喚するときには一枚だけ取り出し、握りつぶしていた。しかし、今はその不思議な力を感じるカードをただ自分の周囲で回すだけ。
見ていた二人は何をするのだろうと不思議に思いながら見続ける。すると、湊は自分の周囲でカードを回しながら宙に浮き始めた。
「人はいつか死ぬ。それは運命であり、絶対に変える事は出来ない。だけど、俺も君たちも、いまここにいる。死は運命なのは分かってるけど、ならその運命を早めようとする敵がいたら？　マリア、死ぬのは嫌だろう？」
宙に浮いた湊の瞳が蒼くなると、その背後にタナトスが現れる。だが、先日タルタロスでみたときとは姿が違っていた。
仮面だった筈の獣の頭蓋が今は本体となり、その口が裂け内部には闇が広がっている。また、双眸が紅く輝き、身体からは吹き出した黒い靄を纏い、禍々しさを感じる。これでは、ペルソナというよりもシャドウだ。
シャドウと思われる死の神の顕現に、チドリも本能で嫌なものを感じ、嫌な汗で背中が濡れるのを感じていると、横で湊を見ていたマリアが歯をガチガチと鳴らし、嫌々と首を横に振りながら涙を流している。
しかし、氷よりも冷たい蒼い色の瞳をした湊は、マリアのそんな異常な様子を一切気にせず、シャドウ・タナトスの手をマリアに向けて伸ばし始めた。
「何をしている？　拒絶しなければ、死ぬぞ？」
「い、いや、死ぬのはいやぁっ」
伸びてきたタナトスの腕から逃れるようにマリアはしゃがんで蹲

る。しかし、タナトスの腕はさらに伸びてくる。
直ぐ近くにいるチドリに、タナトスの纏っている黒い靄が流れてくると、本能が拒否するような寒気を覚える。このペルソナは危険だ、この異常な存在に触れてはならないと、脳が警笛を鳴らし離れるよう命令してくる。
「力を示せ。ここに居たい、死にたくないと」
「あ、ああっ、ペルソナーッ!!」
だが、恐怖で固まっているマリアに、タナトスの腕が触れようとしたそのとき、マリアは湊に言われたように、死を拒絶しここに居たいと強く願った。
その瞬間、マリアの身体が一瞬光ると、そこには黒い甲冑に身を包み、頭には二本の角、背中には巨大な龍翼を生やした女性型のペルソナが現れていた。
兜は目元までを隠しており、その下からは薄緑の長い髪と、紫の紅の引かれた美しい口元が見えている。さしずめ、龍騎士といったところか。
そうして、マリアの呼び出したペルソナ、女帝〝ティアマト〟が持っていた槍でタナトスの腕を弾くと、湊はタナトスごと上昇して距離を取った。
「……マリア、見てみな。それが君のペルソナだよ。君が強くここに居たいと思ったから呼び出せたんだ」
「あう、ペルソナ……ティアマト……」
自分を守るように浮いていたペルソナに呼びかけると、ティアマトは振り返りマリアに手を伸ばした。
抱っこをねだる子どものようなマリアに、ティアマトは笑みを浮かべると、槍を持っていない腕で抱き上げる。抱き上げると、そのまま宙に飛び上がり、タナトスと同じ高さまでやってきた。
マリアは特に命令をしていないが、このまま戦闘するつもりなのかと周りが動向を見守っていると、湊は空中でタナトスを消し、直後にカードを握り潰す事で、緑色の龍を呼び出す。
「こい、チンロン」

湊は青龍である、節制〝チンロン〟を呼び出すと、その頭に乗ったまま、ティアマトの元まで移動して、手を伸ばしティアマトからマリアを受け取った。
マリアが先ほどまで恐怖を抱いていたのは、タナトスに対してだけらしく。目も金色に戻り、優しい普段通りの表情の湊には、首に手をまわしてしっかりと抱きついている。そのことに若干の苛立ちを感じながらも、二人が降りてくると、チドリは湊に話しかけた。
「さっきのタナトスは何？　それに湊の眼の色も変わってた」
「俺が蒼い色の眼をしているときだけ、タナトスはあのシャドウに近い姿になるんだ。で、俺の眼は魔眼になっててね。あの蒼色のときには物だろうがペルソナだろうが殺せるんだよ」
生き物ではない物やペルソナを殺せる。その意味は理解できないが、湊が事実を言っている事だけは分かる。
肉体も改造し、体内には黄昏の羽根という未知の物質を内包しているために、そんなペルソナとは異なる異能を持っているのだろう。そんな風に当たりを付けると、これ以上は第八研に戻ってから話そうと決め、自分のマフラーでマリアの涙を拭ってやっている湊に話しかけることにした。
「私もマリアみたいに召喚させるの？」
「いや、マリアは拒絶型だから死の恐怖から発現させたんだよ。でも、チドリは受け入れた上で生きていくタイプだろうから、やるならこうかな」
そう言うと、湊はマリアに少し離れるように言って、そのままチドリをしっかりと抱きしめた。
不意討ちに抱きつかれたせいで、チドリは理解が追い付かず困惑する。体温が上昇し、心臓の鼓動も速くなる。
完全に密着する形で抱きつかれているせいで、湊に自分の鼓動が速くなっていることもばれているだろう。恥ずかしさから、離れようと手で相手の胸を押すが、湊はびくともせず、しっかりと抱きついたまま、チドリの背中をポンポンと叩く。
「チドリ、君はここにいる。大丈夫、俺が守る」

「……もう、そんなの分かってるのに」
頬を染め、照れ隠しにそう返すが、チドリは湊から感じる温もりから、自分がいまここにいる実感を感じた。
それが分かると、今まで掴めていなかったペルソナという存在を自分の中に感じ、意識をそこに向けることで、もう一人の自分である心の鎧、ペルソナを呼び出した。
「来て、メーディア」
パァア……、と光が集まり現れたのは、赤い瞳の輝く羊の頭骨のような物を被り、ロールした長い金髪垂らす女性型のペルソナ、刑死者〝メーディア〟。
手には炎の燃え盛る金の杯を持っているため、湊はアナライズをせずともメーディアは炎に対する耐性なりを持っているのだろうと推測した。
湊に抱きしめられたまま、自分が呼び出したペルソナを見て、チドリも微笑む。
「また会えた……。これからはちゃんと呼ぶから、力を貸してね」
《ルルゥ》
召喚者のチドリに頷き返し返事をすると、メーディアはそのまま輪郭をぼやけさせ消えていった。
しかし、今のチドリは自分の中に、自分だが自分ではない心の一部を感じる。これがペルソナを所持するということなのだと、いまになって漸く理解することが出来た。
その充足感を感じながら、チドリは湊から身体を離すと、穏やかな笑みで礼を言う。
「ありがとう。これで、私も戦える」
「マリアも！」
「うん。じゃあ、もう一回呼び出してみようか」
マリアに関してはショック療法的な形になってしまったが、ペルソナを呼び出す事の出来た二人が嬉しそうにしているので、湊も感覚の残っているうちに反復練習させようと二人にいう。
言われた二人の少女は頷いて、瞳を閉じると、自分の中にいるもう

一人の自分に語りかけるように呟いた。
「お願い、メーディア」
「きて、ティアマト！」
　再び自分だけでやってみた召喚は見事に成功。今までの不安定な召喚とは違い、湊のペルソナのようにしっかりとした存在感がある。
　湊もそれを確認して、満足気な笑みを浮かべると、急にペルソナの召喚が上手くいった少女二人を見ているまわりの者へと視線を移した。
「他も安定してペルソナを呼び出せるようにしてやる。研究員の指示は気にしなくていいから、現段階で呼び出せる者はこっちへ、不安定だという者は俺から見て左、まったく反応が無いものは右に移動しろ」
　突然の湊の指示に被験体らは顔を見合わせているが、湊がタナトスの斬撃で床にラインを引くと、全員が渋々ながら指示に従い移動を始めた。
　全体の人数は三十人程度。元が百人ほどだと聞いていただけに、随分と少なくなってしまっているんだと思い、先日のようなことが二度と起こらないように、しっかりとペルソナを呼び出せるように教えようと思った。
　そして、全員が動き終わると、既に召喚できるようになっているのは、自分たちを除けばたったの三人。
　飛騨の話では、安定して召喚できる者は五人にも満たないと言っていたので、この少なさは前回の探索とは関係ないのだろうと思考を切り替えると、召喚できる者らに話しかけた。
「自己紹介を頼める？　俺は第八研の湊。研究員にはエヴィデンスって呼ばれてる」
「第一研の榊貴（さかき）　隆也（たかや）です。先ほどの召喚を見ていましたが、貴方は複数のペルソナを扱えるのですね」
　最初に自己紹介を返してきたのは、湊らよりいくらか年上の髪の長い男子だった。物静かな雰囲気だが、色素が薄いのか顔色が悪く見える。

しかし、湊も眼の色など、他人とは異なる部分があるので、気にしないことにすると言葉を返す。
「伊達に自然適合者と天然覚醒型を兼任してないんでね」
「ほう……。では、室長の言っていた忌々しい成功体とは、貴方の事でしたか」
「湊で良い。で、多分、そうかな。松本には何回も攻撃してるし」
松本から湊の噂を聞いていたようで、タカヤが感心したように言うと、湊は悪人のよう見える冷笑を浮かべる。
タカヤ以外の二人はそれを聞いて驚いているようだが、タカヤはチドリとマリアと同様に気にしていないようだった。
それを見ながら、話を進めるため、湊はタカヤの後ろにいた二人のうちの女子の方に視線を向け、自己紹介するよう促す。
「本庄（ほんじょう）　菫（すみれ）です。いるのは、第一研ってところで、ああ！　そうだった。ミナト君だったよね？　この前はありがとうございました。ケガ治してもらっちゃって」
「ん？　ああ、タルタロスのエントランスにでもいたのかな？　気にしなくていいけど、礼は受け取っておくよ」
二人目はおっとりした雰囲気のマリアと同じくらいの見た目の少女だ。マリアは実年齢よりも幼く見える特殊な例だが、今回の少女は、見た目と年齢が一致してそうだと思いつつ返すと、相手も嬉しそうに笑っている。
「えへへー、わたしのペルソナって刑死者のアルカナなんだけど、凄くおっきいから通路みたいな狭いところじゃ召喚出来ないんだー」
「大きい？　第一研は確か、能力者の身体能力の強化とかの研究がメインじゃなかったか？」
「少々違いますね。確かに、そのような研究も行っていますが、既に潰れた研究室も統合しているため、移籍してきた者の中には、引き続きいままでの研究を受けつつ第一研の研究を受けている者もいるのです」
湊の疑問にタカヤが答えると、他の研究室はそうなっていたのかと素直に関心する。一応、飛騨からは各研究室の特色を聞いていたが、

それはメインがそうなだけで、研究自体は複数行っている。
　そして、最大規模の第一研は、解散した研究室を統合しているため、第八研とは違った意味で、多様な研究を行っているのだった。
「ふーん。それじゃあ、スミレの前の所属は？」
「第六研だよ。でも、テュポーンが大きいのは、第一研になってからなのです。運動が苦手だから戦いながら自分も守れるようにって頑張ったのですよー」
　ということは、スミレのいうテュポーンというペルソナは、ただ巨大なだけでなくかなりの防御力も有しているらしい。
　状況に応じたペルソナに付け替える自身とは対極な、ペルソナを付け替えれないからこその正当な進化。
　おっとりした雰囲気のまま笑っているその裏で、一体どれだけの辛い研究と訓練を行ったのだろうかと考えつつ、湊は最後の一人に視線を向けた。
「俺は第二研の谷口（たにぐち）誠也（せいや）だ。セイヤでいいぞ。よろしくな！」
　最後の一人は短めに揃えられたスポーティーな髪型をした、タカヤと同じ年頃の少年だった。髪型通りに快活な好青年タイプらしく、湊に右手を差し出し、握手を求めている。
　本来ならば、握手などしたくないのだが、ここでマイナスの印象を与えるのも今後に響くかもしれない。そう、割り切る事で、湊も内心では嫌がりつつも、差し出された手を握り返した。
「ハハッ、俺は皇帝〝フレイ〟を使える。だが、君のあの黒いペルソナも強そうだったな。あれの名前はなんていうんだ？」
「死神〝タナトス〟だよ。俺は他の人間と違って、死の先である死神以降のアルカナも扱えるんだ」
「タナトス、ですか。私の運命〝ヒュプノス〟とは縁がありますね」
「ギリシア神話か。俺のフレイは北欧神話だから、残念ながら繋がりはないな」
　湊と意外なところに共通点を見出したタカヤに、セイヤも笑って会話に参加する。繋がりがないと言っても、別に落ち込んではいないようで、少々残念に思った程度らしい。

だが、言ってしまうと、複数のペルソナが使えると言っても、湊の主人格とも言えるペルソナはギリシア神話の者であるし。タカヤだけでなく、チドリ・マリア・スミレも同様にギリシア神話の神らがペルソナとなっている。

その事に気付いているのは、ここに集まった者らのペルソナを把握し、尚且つ神話の知識を持っている湊だけだったが。それはセイヤのために伝えないことにした。

「そう言えば。貴方が先ほど一方的に倒したカズキも、隠者〝モーモス〟というペルソナを召喚出来ます。なので、現段階で比較的安定してペルソナを呼び出せるのは、我々四人と貴方、それにそちらの二人を加えた七人だけです」

「ありがとう。安定っていうのが、どの程度なのかはまた見せてもらうけど。俺は他の大勢に召喚というか、自分の中のペルソナを自覚させるから、皆は見学でもしてて」

追加で情報を伝えたタカヤに礼を言って、湊は皆から離れて他の被験体らの前に立つ。

その背後にはペルソナを付け替えて現れた、高同調状態のカグヤが浮かんでいて。淡く身体が光ると、その光が広がり、全員を包みこんだ。

「……アナライズ完了。ＯＫ、それじゃあ始めよう。全員にチドリとマリアみたいにマンツーマンでしてやりたいところだけど、面倒なんだよね。ていうか、大して知りもしない人間に優しくするほど甘くもないし」

全員をアナライズの光で包みこみ、それぞれのおおよその状態を把握した湊は、全員の前を横切りながら淡々とした口調で続ける。

「結局、ペルソナは自分の死と向き合うことで召喚するんだ。死にたくないから自分を守るためにペルソナを呼び出す。いつか訪れる死を受け入れた上で今を生き続けるため、戦う力としてペルソナを呼び出す。ようは、その二通りだ」

集団から離れた湊は立っていた黒服の元へ行くと、手を出してある物を強請る。

「拳銃貸して、弾はいらない。マガジンも空にして、装填済みのやつも適当な方に撃って抜いて。本体だけでいいから」
指示の意味は分からない。しかし、湊のペルソナが相手では拳銃も通用しないので、大人しく腰と胸のホルスターから銃を取り出すと、弾を抜いてから手渡す。
そして、湊は銃を持つのは初めてだが、本物だけあって中々に迫力があるなと考えながら、二挺の銃を持って被験体らの前に戻った。
移動中も、戻ってからも、何度も確認するように銃口を上に向けた状態で引き金を引いている。
他の者がその行動の意味を理解しかねていると、引き金を引くのを止めた湊は口を開きながら、近くにいる被験体にそれを渡した。
「これを頭か喉に当てながらペルソナを召喚するんだ。ゆっくり引き金を引いて、ペルソナを呼ぶ。簡単だろ？」
まるで、初めてゲームする子どもに操作法を教えるような気軽さで湊は告げる。表情は歳不相応な冷めた笑みだが、いたって自然体だ。
それだけに渡された被験体も、まわりにいた被験体も背筋に寒いものを感じた。
弾は何度も確認していたので、もう入ってはいないだろう。だが、拳銃は本物なのだ。光りの反射で、冷たい鈍い光を放つ、人を殺すための道具。
湊はそれで自殺まがいのことをやらせると、極めて自然に――
「じゃあ、自分を殺すところから始めようか」
――そう言った。
そうして、被験体らは、安定して召喚できるようになるまで、湊とシャドウ・タナトスに見張られたまま、引き金を引き続けたのだった。

第十三話　室長会議　其二

夜――エルゴ研・第一会議室

被験体らの訓練が終わり、本日はタルタロスの探索もないので、夕食を食べた被験体らは各研究室の部屋に戻っている。

そんな中、各研究室の室長と副長らは、以前、湊が半年ぶりに目覚めたときのように、会議室へと集まっていた。

全員が集まった事を確認すると、第二研究室の室長、幾月が口を開く。

「全員、集まったようですね。では、会議を始めたいと思います。といっても、既に皆さんの耳にも入っているでしょうが」

「全被験体のペルソナの安定召喚……。私たち研究者の目下最大の目標が、こうも簡単に成し遂げられると、自信をなくしますわね」

幾月の言葉を引き継いだ第四研の室長、沢永が目の前に置かれた報告書に目を通しながら肩を落とす。

そこには、午前中に行われた訓練内容と、訓練中に起こった出来事の報告が細かく記されていた。

「ンッフッフー、研究者は所詮、データから推測して、仮説を立てているだけですからねぇ。少年のように実際にペルソナを自在に操る者には、理論面においても勝てません」

飛騨はチドリも無事に召喚できるようになったことを聞き、嬉しそうに話す。

これで、今までよりも、制御剤の効果を下げてもよくなったのだ。効果の高さは副作用の高さに比例する。

湊は他の被験体たちとは違う理由により、既に短命が決まっているが、チドリ達はそうではない。

今後も制御剤を使い続けることになるかもしれないが、副作用を抑えれば四十年以上生きられるかもしれない。

湊の願いはチドリが平和に生きていく事なので、それに協力する飛騨も、少しでも協力できそうだと喜んでいるのだ。

しかし、それとは対照的に第一研の室長、松本は苛立った様子で返

す。
「それでは私たちがいる意味がないのですよ。確かに、エヴィデンスによって被験体らが以前よりも安定して召喚できるようになった。これは喜ぶべき事です」
一度言葉を区切ると、パソコンを操作して、監視カメラの映像を編集したものを呼び出し。プロジェクターで映写する。
「しかし、それはシャドウとペルソナについて長年研究していた我々よりも、エヴィデンスの方が存在の核に近い場所にいるということです」
そこに映っているのは、禍々しい姿の死の神、シャドウ・タナトスだった。
「あれは危険です。自己のシャドウを制御した物がペルソナ。しかし、エヴィデンスはペルソナをシャドウにして使役出来ている。その行き来すら異常であるのに、シャドウに自我が乗っ取られないなど、人間の精神構造上あり得ない事です」
松本の言っている事は事実だった。
ペルソナは、シャドウを意識化において制御して発現させる。よって、召喚者が影人間にならないのであれば、自分自身から抜け出た時点で暴走を起こしていようとペルソナはペルソナだ。
だが、湊の召喚はその条件を無視している。
ペルソナとして呼び出したモノをシャドウへと戻す。一歩間違えれば、無気力症になってもおかしくない危険な行為。
苦もなくやってのけているが、他の人間には真似できないだろう。
「ペルソナの同時召喚もそうです。確かに、無意識の領域ならば、自分の知らない自分の一面が複数あってもおかしくはない。だが、それらを同時に顕現させるなど、精神が分裂してでもいないと不可能だ」
「では、松本室長はエヴィデンスは精神に何か異常を抱えているため、あのような力を行使できるとお考えで？」
松本の話を聞いた沢永は、確かに湊の行動や精神の発達レベルは、小学生にしては、異常だと思いながら尋ねる。
だが、松本が答える前に、湊を預かっている飛騨が口を挿んだ。

「残念なーがら、彼の精神状態は極めて普通ですよ。精神の分裂も無く、何かの精神病を患っているわけでもありません。目覚めたばかりの頃、リハビリの合間に精神鑑定を受けさせましたので、ご希望でしたら鑑定結果をお見せしますよ？」

にやにやと笑みを浮かべ、軽い調子で飛騨は答える。

精神鑑定を受けさせた当時、飛騨は湊がペルソナを召喚できる事は知っていたが、付け替えや複数同時召喚出来ることは知らなかった。

一応、デス戦で呼び出していたオルフェウスから、ペルソナの姿が変わっていたので。何か精神面に異常なり問題を抱えている可能性がある場合の事を考え、受けさせたが。出た結果は、いたって問題は見受けられないというものだった。

ただ一点、精神年齢や知能が異常に高いという点は気になったが、それは鑑定を受けさせる前から、飛騨自身も思っていたことだ。

だが、湊は元々、身元すら一切明かされていないイレギュラー。

他の被験体らは意図的に戸籍等を抹消しているのに、湊だけ上が情報を伏せているということは、何かしらの事情を抱えている存在だと容易に想像ができる。

よって、飛騨も必要以上に調べることはせず、湊と実際に接することで、相手のパーソナリティーを理解するようにしてきたのだ。

しかし、突然目覚めたにも拘わらず、急に姿が見えなくなったために、まったく湊のことを知らない他の研究者は簡単には納得できない。

幾月もその一人で、自身の抱いていた疑問をぶつける。

「では、何故、彼だけペルソナの付け替え及び、同時召喚が可能なのです？　第八研で、そういった研究をしているわけでもないのでしょう？」

「ええ。出来るのであれば、少女にもしていますからね。ただ、少年がいうには、ペルソナを付け替える能力は〝ワイルド〟と呼ぶらしいです」

「ワイルド……」

飛騨が湊に聞いた事を伝えると、他の者はメモを取りながら確認す

るように呟く。
　ワイルドの意味は、野生や自然のままである様というのがあるが、ここでのワイルドはカードゲームのワイルドカードの事だろう。
　他のカードの代用が出来る万能なカード。トランプではジョーカーが主に、その役割を果たすことが多いが。確かに固定である筈のアルカナを無視して、ペルソナを付け替えれるとなれば、その能力名として〝ワイルド〟は非常に相応しく思える。
　他の者がそうやって、納得しているのを見ながら、飛騨はさらに続ける。
「同時召喚に関してですが、こちらは特に名称はありません。というのも、曰く、ワイルドに目覚めた者でも、同時召喚は前例がないらしいのです」
「前例がない？　……ちょっと待って下さい。それはエヴィデンスが言ったのですか？」
　飛騨の言葉に引っ掛かるものを感じた幾月が聞き返すと、飛騨は「そうですよ」と答える。
　答えた本人はただ訊かれた事に返しただけのようだが、対照的に他の研究員らは絶句していた。
　ペルソナの付け替えがワイルドという名前なのはまだ良い。変に精神年齢の高い湊ならば、ワイルドカードという単語を知っていそうなので、そこから命名したと思える。
　しかし、同時召喚に関しての情報は駄目だ。
　前例がないというのは、エルゴ研でも湊しか確認していないので、同様の見解だが。自分自身でそれを研究員の飛騨に話したのであれば、湊はこことは別のペルソナ使いの存在を認識しているか、また、そういった情報を持った者と繋がっていることを示している。
　情報の漏えいだけでなく、自分たちよりもペルソナやシャドウに精通している者がいるなど、専門として秘密裏に研究している以上、看過できるものではなかった。
「博士は何故、そんな事を黙っていたのですか！　エヴィデンスは他の組織と繋がって、ここの情報を流していた可能性があるんですぞ

！」
「言っても意味がなかったからですよ。仮に少年の後ろに何かの組織があったとして、どこで少年と接触したんですか？　少年はずっと第八研の奥の部屋に籠もっていました。通信手段は持っていません。ほぼ軟禁状態でも、その組織は連絡を取れたことになります」
バンッ、と音をさせながら机を強く叩くように立ち上がり、激昂する松本に、飛騨が先ほどまで浮かべていた笑みを消して冷静に答える。
情報の秘匿義務を理解している飛騨は、一応、奥の部屋に電話やパソコンは置いておらず、湊もそれらを所望してきた事はなかった。
よって、外部と連絡を取る事など出来ている筈がなく、どこか別の組織に情報を流しているとは思えないのだ。
だが、他の者の言うことも分かるので、さらに続ける。
「私がスパイなのではと疑うのならば、それでも構いません。もしも、他にペルソナの研究をしている組織があるのであれば、副作用の少ない制御剤について話してみたいものですがね」
「では、ドクトア・飛騨は、エヴィデンスがどのようにして、バックの組織と連絡を取っているかまるで分からないと？」
「ええ。彼の身に着けている物も、朝見に行ったら既に持っていましたしね。ああ、部屋に他人が侵入した形跡はありませんよ。影時間であろうと、侵入した時点で警報がなって知らせてくれまーすから」
ヘーガーの質問に返した飛騨の言葉で、集まっている研究員らは再び沈黙する。
それぞれが、研究室の中に、さらに個人的な研究スペースを持っているのは、暗黙の了解となっているが。そのセキュリティレベルは、他の区画よりも高く設定されている。
例えば、ヘーガーであれば、扱っている研究が兵器関係なので、取り扱いの危険度も考慮して、網膜と静脈認証を影時間でも動くようにして設定しており。
もしも、誰かがハッキングや物理的に扉を破壊して侵入した場合、即座に防護シャッターでその区画だけ封鎖され、エルゴ研中に侵入者

が現れたという警報が鳴るようになっている。
よって、セキュリティは個人で設定するが、そのエルゴ研中に侵入者が現れたという警報は鳴るのは共通となっているので、飛騨がいった侵入した形跡もないというのは全員が信じられた。
そうして、暫しの間、会議室内に沈黙がおりていると、暗い表情の幾月が顔をあげて口を開いた。
「……エヴィデンスに聞いたとして、それについて答える可能性はどれほどでしょう？」
「そーですねぇ。まぁ、普通に考えてゼロでしょう。しっかーし、被験体らのためになる研究であれば、知識なり情報なりを教えてくれるとは思います。ここ数ヶ月、私が公開してきたペルソナの制御法は彼の賣してくれたものですから」
飛騨の言葉を信じるのであれば、それは自分たちにとっても非常に喜ぶべき事だ。
完全に安定したとは言えないが、今日の訓練によって被験体らは低い者でも５０％以上の成功率で召喚できるようになった。
さらに、ここで制御法を確立できるようになれば、人工ペルソナ使いの研究も、安定したと言えるようになり。桐条の許可さえ下りれば、再び子供らを集めてさらに研究を進める事が出来る。
ペルソナの性能は本当に千差万別で、チドリや湊のように珍しい感知タイプは、どういった人間に発現しやすいのかなど、スキルや特殊能力持ちが発現する傾向を持つ者を探せるようになったりもするだろう。
自分たちの研究の飛躍的な進歩と、専門としている研究員としての矜持。その二つを天秤に掛けながら、考え込み、沢永も意を決して尋ねた。
「飛騨博士。明日以降、彼と話す時間を作っていただくことは出来ますか？　研究についていくつか訊きたいことがあるんです」
「それは本人に聞いて頂かないとわっかりませんねぇ。別に私は少年の行動を制限した覚えはありませんから」
「でしたら、彼に私が面会したがっているといった旨を伝えておいて

ください。話を聞かせてもらえるのであれば、彼が傍においている少女を連れてきても構いません」
「ふむ。まぁ、伝えるくらいなら良いでしょう。ですが、少年と話す際の注意点として、被験体を人間扱いすること。研究員が被験体よりも下の存在であるという前提で話を組み立てることを徹底してください」
自分たちを子どもたちよりも下の存在とする。これは大人と研究者、どちらの目線になってもプライドに関わることだ。
人一倍プライドが高く、被験体をモルモットのようにしか見ていない松本など、どれだけ研究に行き詰っても、絶対に出来ないだろう。
例え、その結果、湊に殺されることになっても。
だが、沢永は、個人的な感情を研究に持ち込むべきではないとし、飛騨のいった注意点を守ることにしたのか、少しだけ考える間を置くと顔を上げ、
「分かりました。十分に注意致しますわ」
静かにそう答えた。
その後、集まった者たちは、湊の言っていたペルソナ召喚のプロセスを解析し、明確なデータとして確立させていくという方針を決め。
次回集まるまでに、各研究室で資料をまとめておくという話をしたところでお開きとなった。
会議が終わり、部屋を出ていく者は皆、新たな段階へと進む研究に対する意気込みの様なものが顔に浮かんでいた。
――第八研・被験体用浴室
室長ら主な研究員が会議室に集まって会議をしている頃。第八研の被験体用寝室と隣接している浴室で、湊らはお風呂に入っていた。
湯船に浸かり温まっているチドリは、シャワーのところでマリアの頭を洗っている湊をジッと見ている。
この前はマリアは他の研究室の被験体だったので一緒にいられなかったが、今回はつい先日の満月のタルタロス探索のように他の研究室の被験体らとチームを組むこともあるかもしれないからと、湊が研究員らを言いくるめてマリアを連れてきていた。

その際、チドリが口では何も言わなかったものの、心底嫌そうな表情をしていたので、チドリがマリアを歓迎していないことは湊も知っている。
しかし、チドリを表の世界に返した後、同性の友人が全くいないのはよくないとして、湊はマリアをチドリの友人にしようと考えていた。
なので、例えチドリが嫌がっていても、後々チドリのためになることだとして、湊は譲る気はなかった。
「それじゃあ、シャンプー流すよ?」
「うんっ」
目をギュッと閉じているマリアの髪にシャワーを当てて、シャンプーを洗い流していく。
ただお湯で流すだけでは、洗い残しが出来るので、湊はシャワーを片手で持ちつつ、反対の手でマリアの頭をシャカシャカと掻いていく。
それが気持ちいいのか、目を閉じていても、マリアが上機嫌なのが、傍から見ていても分かった。
「はい、終わり。それじゃ、あとはお風呂に浸かって温まったらあがるよ」
「うん! ミナト、おんぶ!」
「うわっ、ちょっと、裸で抱きついたらダメだって」
髪を洗い終えたマリアは、浴槽へと向かい始めようとしていた湊の背に飛び乗る。
後ろからしっかりと首に手を回し、戦闘訓練で鍛えた跳躍を見せたので、湊が手で支えなくとも自力でおぶさることには成功している。
しかし、いくら二次性徴を迎えていないとはいえ、お互いに全裸の状態でそんな事をするのは拙いとして、湊はマリアを窘めるのだが。
マリアは何でいけないのかをあまり理解していないようで、結局、湊が浴槽に到着するまで、おぶさったままだった。
先に湯に浸かってそれを見ていたチドリは、出会った初期の無表情のまま、視線を湊に向けると口を開いた。

「このムッツリ」
「え？　いや、ムッツリじゃないよ。ていうか、一緒にお風呂に入ろうって言ったのは二人だろ？」
「マリアが一人で入れないって言ったからじゃない。私、子どものお守なんてしたくないもの」
　第八研に初めてやってきたマリアは、最初は部屋をキョロキョロと見回していたが、時間も遅くなる前に順にお風呂を済ませていこうという話になったとき、一人でお風呂に入ったことがないと二人に話した。
　ならば、ものは試しだと湊が一人で入るように言うと、マリアは泣きながら湊に抱きつき拒否した。
　しょうがなく同性のチドリに世話を任せようとしたのだが、今度は先の理由でチドリが拒否した。しかも、湊とマリアが二人だけで入浴するのも認めないという言葉つきで。
　そうなると、マリアが一人で入れない以上、チドリの意見も取り入れるならば三人で一緒に入るしか無くなり今に至る。
　そのような、事の経緯があるだけに、湊は背中にいたマリアを降ろして湯船に入ると、チドリの横に座って自分に非がないことを説明する。
「一緒に入ることになったのは、二人の意見を聞いたからだし。今、抱きついてきたのは、マリアからなんだから、俺は何もしてないだろ？」
「だらしない顔してた。抱きつかれて満更でもないって顔」
「いや、しないよ流石に。どうみても困ってたでしょ」
　客観的にみれば、二人の言い分の内、正しいのは湊の方になる。
　そもそも、精神年齢が上がっている湊にとって、幼いマリアは妹のような存在でしか無いため、邪な想いを抱くことすらないのだが。
　それでも、二人が裸の状態でベタベタと触れあっていたことは事実なので、チドリは不機嫌さ滲ませつつ、その点を責めることにした。
「湊がどう思ってようが、裸で抱き合ってたじゃない。大人になるまでそういうことしちゃいけないって本に書いてあったのに」
「抱きつかれてただけで、抱き返してないよ。ていうか、ここって性教

育の本とか置いてるんだ。子どもを使い捨てにしてるくせに意外かも」
　被験体の寝室には、小さな本棚が一つ置いてあり、そこには小学生向けの本が何冊か収められている。
　湊もそれには気付いていたが、本自体は飛騨から借りた医学の専門書などしか見ていなかったので、置いてある本の内容までは把握していなかった。
　そのため、チドリが読んだという本が性教育関係のものであると聞き、その知識が必要になる年齢まで子どもを生かしておくつもりもなさそうなエルゴ研にしては、意外な選択だなと思い考えていると。
　急に二人の間のお湯が盛り上がり、そこからザパァ、と音をたててマリアが顔を出してきた。
「マリアもいっぱい本読む！　この前は、たくさん生きるネコの本読んだ！」
「きゅ、急に下から出てくんな！　ていうか、あんた何で潜ってて話が聞こえてるのよ!?」
「……？　お風呂の中、音ひびくよ？」
　突然現れた相手に驚き怒っているチドリに、キョトンと不思議そうな顔で返すマリア。
　確かに、水の中にいても外の音は響いて意外と聞こえるものだ。
　だが、知識として知っている湊と、知識と経験の両方で知っているマリアと違い、チドリはそのどちらもが欠けていたため、マリアの言う事が信じられなかった。
「そんな訳ないでしょ。適当なことばっかり言ってるんじゃないわよ」
「マリア、嘘ついてない！　イルカが芸するとき、水の中でも音が聞こえるから出来るって本に書いてあったもん」
「私、そんなの見たことないもの。そんなに言うなら証拠持って来なさい」
　冷めた表情で話すチドリと、自分のいうことを信じないチドリに怒っているマリア。

その傍らで湊は、のんびりと肩までお湯に浸かって温まっているが、頭の中では「まぁ、マリアの言ってることが正しいんだけどね」と、分かっていながらも止めるつもりはない様子。
マリアを連れてきたのはチドリに同性の友人を作るため。ならば、ケンカしててもお互いに本音をぶつけられた方が良いだろうとして、ここでは傍観者になっていた。
だが、湊は自分が二人にどのように思われているのかを知らなかった。
そう、チドリもマリアも、湊が自分たちはおろか、研究員らよりも様々な知識を持っていることを知っていたのだ。
よって、二人の意見が真っ向から対立した場合、その真偽を尋ねられることは必然だった。
「ミナト、マリア嘘ついてない」
「本当はどっちなの？　知ってるんでしょ？」
「いや、急に聞かれても……。ああ、大丈夫。話の内容は頭に入ってるから」
チドリだけでなく、珍しくマリアも怒った表情を自分に見せてきたので、慌てて言い繕う湊。
実際、話は適当にだが聞いていたので、どちらが正しいのかなど分かっている。
よって、二人が怒りだす前に、さっさと答えてあがろうと湊は答える事にした。
「イルカの事も含めて、マリアの言っていた事は正しいよ。音っての は空気に限らず、振動する事で伝わるんだ。だから、水の中にいても、水が振動することで音の振動が伝われば聞こえるってわけ」
「ほら、マリア嘘ついてなかった。チドリ、頭わるい！」
「日本語すらまともに話せてないくせに偉そうにすんな！」
「はいはい。いいから、そろそろあがるよ。冷蔵庫にアイスがあるって飛騨さんが言ってたから、早い者順で選んで良いよ」
湊がそういうと、喧嘩していた二人は立ち上がって、ペタペタと脱衣所でもある洗面所へ向かっていった。

それを見ていた湊は、二人ともまだまだ子どもだなと思いつつ、後に続いて風呂から出たのだった。

余談だが、先にあがって着替えと髪を乾かし終えた二人だったが、被験体である二人は研究室へと出るための扉のロックを開けることが出来ず、ロック解除の番号を知っていた湊が髪を乾かし終えるまで待たされることになった。

加えて、研究室の冷蔵庫を開けると、そこにはあったアイスは三つとも同じバニラ味だったため、順番など関係ないと知っていた湊以外は少々落ち込むことになったのだった。

第十四話　室長との会合

7月22日（土）
昼――エルゴ研・会議室

湊の復活から約一週間経った頃、湊はチドリと飛騨と共に、会議室へとやってきていた。

入った部屋の中には、数名の大人たちがおり、その中には幾月や沢永の姿もある。

湊がここへやってきたのは、被験体らのペルソナ制御の安定化のために力を貸して欲しいと、飛騨経由で依頼があったためだ。

三人が到着すると、傍に座っていた他の研究員と話していた沢永が話をやめ、席から立ち上がって湊を歓迎する。

「きてくれてどうもありがとう。私は第四研究室の室長を務める沢永よ」

「私は第二研の室長の幾月。第一研と第五研は今回は不参加なんだ。だけど、私たちだけでも、新たな制御剤は作れるから、その点は安心して欲しい」

「俺はエヴィデンスで良い。それとまぁ、自分たちに危害を加えた人間の力を借りるのなんて癪だろうしね。不参加でも別に構わないよ」

笑顔で湊を迎えた幾月も立ち上がって歓迎すると、挨拶をしてきた二人に、冷めた表情で返し、湊は椅子を引いてチドリを座らせてから自分も席についた。

席順はスクリーンに近い方から湊、チドリ、飛騨の順で。その向かい側には、同じようにスクリーンに近い方から順に、幾月、沢永、その他の研究員らが座っている。

そして、湊とチドリが座る際の様子を見ていた飛騨以外の研究員が、湊にとってどれだけチドリが大切なのかをある程度理解する。

チドリは湊とってアキレス腱だと言えるが、それと同時に逆鱗にもなり得る。

よって、ここでの発言では、チドリを第一に考えて話を構築していこうと心の中で決め。沢永は早速話をするためプロジェクターに先

日の訓練の画像を映し出した。
「では、早速話を聞かせて貰いたいのだけど。その前に何か飲み物はいるかしら？」
「俺は赤いパッケージのコーラ。チドリはどうする？」
「りんごジュースで良い」
「それじゃあ、それで」
二人の要望を聞くと、幾月の指示で研究員の一人が準備のために部屋を出ていく。
そして、「すぐ届けさせるから待っていてくれたまえ」と、笑って言ってきたので、二人は待っていると、二分もしないうちに研究員の男が帰って来た。
手にはそれぞれの1．5リットルのペットボトルと、未開封の紙コップの束を持っている。
ペルソナを召喚せずに密かに湊がそれにアナライズをかけ、本当に未開封で手も加えられていない事を知ると、相手がわざわざ未開封の物を持ってきた理由を察した。
ようは、自分たちは何も企んでいないという事をアピールするため、最初から開いているものではなく、目の前で開ける物を準備したのだろう。
量が多いのは何度も運ぶ手間を避ける他に、自分たちも同じ物を口にする事で、その安全性をより伝えるためのようだ。
広げた紙コップにそれぞれジュースを注ぎ、自分たちの前にも同じ物を置くと、「どうぞ」と言ってから沢永が本題を口にする。
「それでは、先ず初めに聞きたいのは、この訓練時の子どもたちに召喚させるために貴方が拳銃を使った理由なの。その前の彼女たちのときには使っていなかったけど、それはどうして？」
「質問に質問で返すけど、現段階で、エルゴ研ではどういった方法でペルソナを呼び出していると思っているの？　ペルソナはシャドウを自分の制御下に置いて安定させた、自分の内面の具現化だ。過去の実験データを見ると、極限状態に追い込んで呼ばせたりしてるけど、それらは何か仮説があって、その実験方法をとったの？」

表情は冷めているが、雰囲気からは怒りなどは感じられない。
湊の言葉から、相手は、純粋にエルゴ研ではペルソナ召喚のプロセスをどう認識しているかを聞きたいのだと分かると、幾月がプロジェクターで自分たちの立てた仮説をチャート図にしたものを表示し、説明することにした。
「先ず、我々が最初に立てたのは、ペルソナは強い感情の現れであるというものだった。これは、アイギスのメモリから僅かに得られた君との会話が元になっている。君は、デスというご両親を殺し、自分をあんな目に遭わせた相手を倒したいと思っていた。だから、その怒りや憎しみで召喚することが出来たんだと思ったんだ」
湊が話を聞きながらジュースに口をつけ、二・三度頷いて反応を返すと、さらに幾月は進める。
「その仮説によって私たちは、脳波計を着けさせた状態でいくつかパターンの違う極限状態に子どもたちを置いてみた。しかし、それは彼らの精神を乱すだけで、なんの成果も得られなかった。なにせ、君より年上でも殆どの者は怒りや憎しみよりも、恐怖に呑まれてしまったからね。これで感情はペルソナの強さの一要因ではあっても召喚プロセスには関係ないと分かった」
子どもたちを極限状態に置いたと聞いたときに、湊の視線が僅かに鋭くなったが、隣でジュースを飲んでいたチドリが湊の右手首を握ると湊の表情が元に戻った。
視線が鋭くなった事で焦りを覚えていた研究員らは、チドリが湊を抑えてくれた事に感謝する。
しかし、チドリは自分から今の行動を取ろうと思っていた訳ではない。
湊はここへ来る前に、本日の話し合いで相手の言葉に我慢できなくなって手を出してしまうかもしれないと思っていた。
なので、自分の感情が抑えられなくなった時には止めて欲しいとチドリに頼み、チドリはその頼みを実行しただけだ。
裏にそんな事情があったとしても、湊が冷静になってくれた事に違いはない。

湊を止めたチドリに感謝しながら、再び話を続けるため、幾月は次のスライドを表示した。
「先の感情の揺れが召喚に関係するという仮説の次に立ったのが、〝決意〟というものが関係するのではというものだった。これは、アイギスのような対シャドウ兵装シリーズがペルソナを召喚させていたときに得たデータと、デスと戦うと決めた君からヒントを得た」
「ペルソナは元々は心という不安定な存在。だから、それをペルソナという形で固定化するために、決意という心を固定化する行為がトリガーになるのではと考えられたのよ」
スライドショーを見ていた湊が、話している者に視線を戻すと、沢永が補足説明を入れて自分たちの仮説が相手に伝わるように気をつける。
チドリは暇そうに机に突っ伏して、スライドショーをぼうっと眺めているが、湊はきちんと相手の説明を聞いて、話も理解して頷いている。
一部の研究員は、その理解力の高さを不気味に感じるが、室長らは既に湊の精神年齢の高さなどは理解していた。
故に、自分たちの話が伝わっていることにだけ喜び、再び幾月が仮説の証明実験から得られたデータを説明する。
「これの証明のために、我々は子どもたちにシャドウは倒すべき敵であると教え、それを倒すための実戦訓練も積ませた。目標を倒すために必要な技術、平時と戦闘時で思考を切り替える訓練など、様々なことを行った。第一研など、その為だけに一部の子どもにマインドコントロールを施していたしね」
「第一研は幅広い研究分野を持っているのだけど。思考を切り替えさせる実験によって、何人か精神が変化した者がいたの。ある者は戦闘時に凶暴化し、ある者は普段から好戦的で戦闘を楽しむようになった。まぁ、それでペルソナに影響が出る可能性も懸念されたのだけど、一応、そういった精神の変化が起こった者の方がペルソナが安定したから、私たちも何も言えなくなってしまったわ」
その例として挙げられるのが、マリアやカズキといった者たちだ。

マリアは普段は精神的に幼く戦闘を嫌うが、一度スイッチが入ると、脳のリミッターが一部外れ、平時よりも身体能力が上がり、敵を殺す事を第一目標として行動する。
第一研ではこれを〝バーサーカー型〟と名付けているのに対し、カズキのように常時好戦的な者は、〝戦闘狂型〟と呼び区別している。
しかし、中には潜在的な戦闘狂型が存在し、それが先日出会ったスミレである。
彼女は、普段はマリアのようなおっとりした性格だが、あの性格のまま戦闘を好み、戦闘時にはそれが面白い遊びであるかのように楽しげに戦う。
他の研究室は、こういった者らを生み出した第一研の研究に反対の立場を示していたが、結果を見ればそういった者の方がペルソナを発現出来ている。
そのため、いまでこそ研究は行われなくなったが、当時は何も言う事が出来なかった。
沢永がそれを告げると、自嘲的な笑みを貼り付けた幾月が湊に声をかけた。
「我々の仮説では、現在もこの〝決意〟という物が召喚の根幹にあると思っているんだ。そして、その決意の内容に関わるもの、つまり最も大きな感情だね。それが何であれば召喚しやすいのかを研究している段階というわけさ」
「それを踏まえて、貴方には間違いの指摘と、召喚はどういったプロセスを経ているのかを教えて欲しいの。勿論、感覚的に行っているので分からないのならそれでも構わないわ。でも、それなら、どういった感覚で召喚しているのかを、なるべく具体的に聞かせてくれないかしら？」
プロジェクターを切り、会議室に明かりを点けると、沢永は自分では優しげと思われる表情を湊に向ける。
毎日を忙しい研究に追われながらも、女性としての最低限のプライドは持ち合わせているので、美容には気を遣っている。
その成果か。他の男たちが暗く小汚い相貌をしていることも相

まって、湊の目には沢永は他の研究員よりまともに見えた。
勿論、その程度で信用するほど、今の湊も甘くはないが。
「じゃあ、間違いの指摘から。ペルソナの召喚において、感情の揺れも決意も関係ないよ。それは召喚後の出力とか力の方向性に関係ある要素だ。極限状態なんてもっての外だね。ペルソナ召喚時に最低限の思考能力は必要。これ重要だから覚えておいて」
正面から二人の室長を見ながら伝えて、湊はコップに口をつける。
その間、二人や他の研究員は湊の言葉を聞き逃さぬよう、録音しながらメモを取っている。
そんな様子を確認しながら湊は、チドリに声をかけた。
「チドリ。ここの人間に召喚して見せてあげて」
「え、なんで？　湊なら１００％召喚できるでしょ？」
「被験体の安定召喚を見せないと、決意や感情の揺れが関係ないって証明できないから」
不思議に思って見返してチドリに、湊がそう告げると、ならばしょうがないかとチドリも了承して一度頷いた。
そして、目を閉じて静かに呟く。
「お願い、メーディア……」
チドリが静かに呼びかけると、パァア……と光が集まり、チドリの頭上に刑死者メーディアが現れる。
目を開いたチドリが、メーディアの姿を確認してホッと息を吐いている事から、以前よりも安定して呼び出せるようになったといっても、未だ１００％ではない事が伺えた。
だが、それでも被験体がこうもリラックス状態で安定して呼び出す様子を見ていた研究員らは、確かに感情や決意は必要ないのだろうと実感した。
実感して、やはり湊が自分たちよりもペルソナに関して熟知していると分かり。これまで実験や研究に費やしてきた時間が無駄なものになっていくような感覚を覚えた。
しかし、それに気付かない湊は、チドリにメーディアを消すように言ってから再び話し始めた。

「本題はここからだ。ペルソナは無意識の領域にいる。それを意識レベルに引き上げるために必要なのは、自分という存在を定義し、さらに己の死を意識すること」
「だから、拳銃を使って自殺のような真似をさせたの？」
「そう。死の意識後、ペルソナを召喚するに当たっては、大きく二種類に分かれるんだ」
沢永に答え、他の者に見えるよう、右手の人差し指を立ててから湊は続ける。
「一つ目は死を拒絶するタイプ。死にたくない、生きたいと願う事で、自分を守る存在としてペルソナを呼び出す者。俺がタナトスでマリアを脅していたのは、そういった理由。タナトスは死神だからね」
冷めた雰囲気でクスリと笑う湊に、一部の研究員は背筋に氷の矢が刺さったかのような寒気を覚える。
シャドウにも成り得る死神を操る少年。
あり得ないはずのアルカナを持っている湊だけに、見た目とその精神構造に大きな齟齬を感じてしまい、相手が人間とは別の存在なのではないかと、本能が警笛を鳴らすのだ。
だが、その相手は誰よりも存在感を放ち、視線を逸らす事が出来ない。
続けて、湊は右手の中指も立てて話を進める。
「そして、二つ目は、いつか訪れる死を受け入れた上で今を生きようとするタイプ。自分はいつか死ぬ。だけど、それを他人に決めさせはしないと、戦う力としてペルソナを呼び出すんだ。チドリや、俺と話してた第一研のタカヤとかがそっちに分類される。ペルソナ召喚はこの二種類の精神構造を根底に行うんだ」
湊の言葉を聞いた者は、チドリと飛騨を除いて、全員がその表情を驚愕に染め固まっていた。
初めて語られたペルソナ召喚の真実。
分からない筈だ。なにせ、死を意識することで無意識を意識レベルにまで高められるなど、誰も想像すらしないのだから。
あまりに衝撃的な内容に、自分でも気付かぬうちに握っていた掌に

汗を掻いている事に気付いた幾月は、上着の内ポケットからハンカチを取り出すと汗を拭いていく。
　そして、まだ冷静になりきれず、思考も定まらぬ状態で、湧いてきた好奇心のまま質問をぶつけていた。
「君のペルソナを付け替える能力、確か博士がワイルドと言っておられたが、あれは？　あれも同じ方法で使う事が出来るのかい？」
「ワイルドは無理だよ。あれは愚者のアルカナを持つ、特別な素質を持つ者しか使えない。言っただろ。ペルソナは自分の心だって。心理学におけるペルソナが語源になってるけど、俺たちのペルソナはその意味からすると外れていることになるのは理解できるよね？」
　幾月と沢永だけでなく、他の研究員らの方まで見まわして、相手が頷くのを確認して湊は続ける。
「心理学のペルソナは、簡単にいうと場面や相手の数だけ異なる自分がいるってことになる。俺のワイルドはどちらかと言えばそっちに近いんだ。火炎魔法を使う相手、疾風が弱点の相手、俺はそれに対する仮面を、ってね」
「では、逆に、何故ほかの子どもたちは一体しかペルソナを所持出来ないんだい？」
「他の皆は自分というパーソナリティの根幹の存在をペルソナとしてるからだよ。貴方たちを相手にしてようが、アイギスを相手にしていようが、俺は俺だろ？　人が完全に心をコントロールできないように、他の皆は自分の分身であるペルソナも一体しか持てないんだ」
　幾月の質問に答えた湊は、言い終わるとペットボトルを手に取り、自分のコップにコーラを注ぐ。
　その間、話を聞いて改めて納得がいったという顔をしている幾月らは、自分の頭の中を整理しているのか話しかけて来ない。
　机に突っ伏していたチドリは、研究員らのその様子をぼーっと眺めているが、飛騨は少し楽しそうだ。
　どうやら、改めて湊の話を聞いて、自分たちの研究はまだまだ進歩すると確信したらしい。
　そして、笑みを浮かべたまま、飛騨が湊に話しかけた。

「ンッフッフー。そーういえば、少年。今回のために君が作った物を皆さんにお見せしなくて宜しいんですか？」
飛騨の話を聞いて、沢永が「彼が作った？」と不思議そうに湊を見つめ、幾月たちの視線を同じように湊に集まる。
すると、数瞬だけ飛騨にじとっとした非難の視線を送ってから、溜め息を一つ吐いた湊が、黒いマフラーをごそごそといじって何かを取り出した。
取り出した物を、そのまま他の者にも見えるよう机に置くと、幾月が声を漏らす。
「これは拳銃？」
「ベースはね。ただ、銃身の奥は詰めてあるし、マガジンを収めるスペースに黄昏の羽根を入れてる。だから、これに武器としての機能は一切ないよ」
「黄昏の羽根を入れている？　一体何のために？」
各研究室に決まった数だけ支給されている貴重な品である黄昏の羽根を、機械の動力部ではなく、武器としての機能を失った拳銃に入れる。
その意味が分からず、戸惑った様子で沢永が銃と湊へ視線を往復させる。
いつの間にかチドリも身体を起こし、ジュースを飲みながら湊を見つめていたので、湊はチドリにも理解できるよう説明を始めた。
「これの仮称は〝召喚補助媒体〟。正式な名前はそっちで決めてもらっていいけど、ペルソナ使いが安定して召喚できるようにするためのものだよ。さっき言った死を意識するのって、人によって集中力が必要だし、戦闘中に咄嗟に実行するのって難しいと思うんだ。そこで、俺は最もシンプルに死を連想させるものとして、銃を利用しようと考えた」
「では、黄昏の羽根にはどんな意味が？」
そこまでの説明は、以前の訓練時に被験体らに銃を使って召喚させたことと内容が被っていたので直ぐに理解できる。
しかし、黄昏の羽根を積み込んだ理由だけが分からないと、沢永が

尋ねると、湊は微笑を浮かべて答えた。
「黄昏の羽根には、不思議な力があってね。ペルソナの出力アップや、安定させる効果があるんだ。だから、それを使ってさらに機能を高めて、召喚の補助をさせようと思ったのがこれを作った理由。実際、チドリに補助無しの召喚と、これを使った召喚とで比べて貰ってデータも取ってある」
「そちらのデータは私の方でメールに添付して送っておきますから、安心してください」
　飛騨が途中で口を挿むと、湊はそれに礼を言ってから、さらに研究員に召喚補助媒体の機能説明を進める。
「詳細なデータは後で確認してもらうけど、補助無しの安定度が約６７％に対し、補助有りの安定度は約９６％だった。この４％の誤差は、連続召喚による疲労も含まれてるから、ほぼ１００％と思ってもらっていい」
「では、これを使えば！」
「うん。安定召喚のために効果を高めている制御剤を、本当に制御効果だけにしても大丈夫だと思う。ていうか、変えるなら早めにしてもらわないと、今の強い薬に慣れて、弱い効果を受け付けなくなるかもしれないから、出来るだけ開発を急いで欲しい。そのためなら、俺もある程度は協力してあげるから」
　喜色満面の顔で勢いよく立ち上がった沢永に対し、湊も普段の研究員を相手にするときよりも、いくらか柔らかい表情で協力することを伝える。
　幾月や他の研究員も喜びから瞳を輝かせ、今後の研究について話していることから、改良された制御剤も比較的早く完成するように思えた。
　それを見た湊は、隣で暇そうにしているチドリの手を握りながら、他に被験体らに負担をかけそうな研究を行わずに済むよう、事前に他の質問にも答えておく事にした。
「こっちもそんなに頻繁に時間を合わせられる訳じゃないから、現段階で滞ってる研究で相談があれば聞いておくよ。シャドウとペルソ

ナ、それにタルタロスに関しても探査とアナライズが出来る俺たちの方が詳しいだろうから」
湊の申し出は沢永にとっては、非常にありがたいものだった。
何故なら、彼女たちの研究内容にはどうしてもアナライズが必要になってくるものだったから。
元々、被験体でアナライズが出来るのはチドリを含め百人中たった七人しかいなかった。
本来ならばチドリ以外の者も第八研にくる予定だったが、他の稀少性能力を独占するのならば、探知・アナライズ能力持ちはチドリだけで良いだろうという事で、他の六人は第一、第二、第三、第六研に各一人ずつと、第四研に二人の所属となっていた。
「ほ、本当に？　では、第四研の研究内容がスキルの耐性や弱点なのは知っているかしら？」
「各研究室の大まかな研究内容は把握してるよ」
しかし、第四研とチドリ以外の能力持ちは全員死んでしまい、第四研のその二人もペルソナの召喚すらままならなかった。
アナライズは普通の召喚よりも高いペルソナコントロールが必要なので、それでは能力を持っていたとしてもまるで意味がなく。
加えて、探知能力は片方の一人だけが僅かに持って程度なので、チドリのように召喚せずに地形や敵の位置を把握することも出来なかった。
そのため、研究は仮説段階で止まってしまい、専門よりも他に行っている研究の方が成果が出ている始末。
ならば、自分たちの専門についても把握している湊に、出来る限り協力してもらおうと、沢永は第四研に湊を招くことを考えた。
「それなら話が早いわ。ここで質問をするよりも、実際に研究室でデータを見てもらった方が貴方も分かりやすいと思うのだけど、今から来てもらうことは可能かしら？」
「俺が施設内を自由に歩いていいのか分からないけど、チドリも一緒なら良いよ」
「ええ、そちらの子も一緒で構わないわ。それに、飛騨博士にも来て頂

きたいのならお願いしてみるけど？」
「いや、博士は別に良いよ」
「そーんな、反応は冷たすぎはしませんか？　もうすこーし、少女に対する愛情の千分の一でも分けて欲しいものです」
ばっさりと飛騨を拒絶するような事を言った湊に対し、飛騨がいじけたようにこぼす。
しかし、子どもたち二人は、飛騨のそんな反応に慣れているのか、湊が召喚補助媒体をマフラーの中に入れると、歳不相応に冷めた表情で椅子から下りて、座っていた椅子を仕舞っていた。
さらに、止めとばかりに、飛騨の後ろを完全スルーで通って入り口の方へ向かい始める。
他の研究員はそんな様子を見て、慌てて荷物を纏めて後を追うようにするが、入り口の前で立ち止まった湊が振り返り口を開いた。
「第四研に行ったら、第二研の方にも行ってあげるよ。だから、誰か同行しておくか。後で沢永さんから第二研の方に連絡入れるか、今のうちに決めておいて」
チドリと手を繋いでいる湊が、皆にそう伝えると、室長同士で話し合い、幾月が同行することに決定した。
湊が第四研に行っている間、飛騨は第八研に籠もって作業すると言い。
他の第二研の研究員は飛騨から送られてくるチドリの召喚補助媒体を使ったデータを元に、自分たちも同じ物を作れないか話し合う事で纏まった。
そうして、沢永に案内されるまま、湊とチドリは初めて入る第四研の研究ラボへと向かったのだった。

第十五話　第四研究室

午後――第四研・研究ラボ

会議室を出て湊たちがやって来たのは、第四研の研究ラボ。

執務室兼研究室と被験体らの部屋が繋がっている第八研は特殊な例で、他のほとんどの研究室では、執務室・研究室・被験体らの部屋はそれぞれ分かれて存在している。

それだけで、第八研がいかに他所と違っているか実感したチドリは、移動する面倒の少ない第八研で良かったと密かに思っていた。

そうして、データ収集の機器類の置かれた部屋と、実際に実験を行う部屋とが、強化ガラスで仕切られた第四研のラボへと湊が足を踏み入れる。

途端に、悪い意味で有名な湊に、中で作業していた研究員らの視線が集まるが、特別話しかけられることもなく、湊は少し大きな画面をした機械の前に案内された。

少し待っていてと伝えて、機械の電源を入れている沢永を見ながら、湊が声をかける。

「それで？　俺に何を教えて欲しいの？」

「片方は質問ではないけど、大きく分けると二つよ。一つはうちに所属するアナライズ能力持ちの二人にアナライズの方法を教えて欲しいの。素質を持っているのは分かっているのだけど、最近になってペルソナをまともに呼べるようになっただけだから、上手くアナライズ出来ないのよ」

沢永の話を聞いていると、丁度そのタイミングで入り口が開き。二人の子どもが研究員によって連れて来られた。

その二人が自分たちの前までやってくると、顔に覚えのあった湊とチドリは少々驚く。

何せ、目の前に並ぶ二人は、あの満月のタルタロス探索でチドリと一緒にいた二人だったからだ。

少々不安げな様子の女子を湊が見ていると、沢永が口を開く。

「二人とも、彼に挨拶を」

「は、はい。えと、顔は覚えてくれてるかな？　ボクは藤崎（ふじさき）　瑪瑙（めのう）」
「わしは白戸（しらと）　陣（じん）や。呼び方は、ジンでええ」
　メノウと名乗った相手は、少々アッシュがかった茶髪のおかっぱに、赤茶色の瞳をした少女で、二人に挨拶をしたはずなのだが、頬を軽く染めてチラチラと湊を見るという、チドリにとっては不愉快な行動を取っている。
　それに対し、ジンと名乗った関西弁の少年は、湊よりもさらに青みがかった髪の七三分けで、虚ろな瞳をしてメガネをかけている。
　両者とも、自分たちよりも少し年上に見える二人が挨拶をしてきた事で、湊も改めて自己紹介をする事にした。
「前にも言ったかも知れないけど、俺は湊。研究員からはエヴィデンスって呼ばれてる」
「私、チドリ。今日は湊についてきた」
　メノウの湊への態度に、若干不機嫌になったチドリが無愛想に挨拶をして、全員の自己紹介をすませる。
　大人ならばここで握手なり礼なりをするところだが、そこまでする気のない湊は、照れたような笑みを向けてくるメノウが少々気になりながらも沢永に向き直った。
　すると、起動を終えていた機械をいじっていた沢永が、画面を見ながら話し始めた。
「挨拶は終わった？　なら、話を進めるわね。その二人は貴方たちと同じアナライズ能力を持っているのだけど、さっきも言った通り上手くやり方が分からないの。加えて、十四号……えっと、メノウは探知能力も持っているから、出来ればそちらのアドバイスも頼めるかしら？」
「了解。だけど、俺と話をしたければ、次からは全被験体を名前で呼べるようにしておけ。そっちの事情は知らないし、知るつもりもないけど。カーストの下位が上の者をそんな風に呼ぶなんてあり得ないだろう？」
　沢永が誤って普段の呼び方でメノウを呼んでしまうと、先ほどまでと打って変わったように、湊の言葉がナイフの様な鋭さを宿してい

た。
傍にいるチドリが実際に冷気を感じるほど、いまの湊は静かな怒りと殺気を放っている。
これには、メノウとジンも目を見開いて驚き。幾月や他の研究員は、嫌な汗が背中で流れるのを感じた。
そして、睨まれている沢永が、自分の命が簡単に消される恐怖に身体を震わせながら答える。
「は、はい。わ、わかり、ました」
「うん。それじゃあ、他の人間もそれで頼むよ。他の研究室にも言っておいて。呼び方のミスは一度きりだって」
言いながら振り返った湊の瞳の色に、研究員らは息をのむ。
湊の瞳の色は、珍しい金色をしていた事を明るい場所で確認している。
しかし、いま振り返った湊の瞳は、不思議な輝き方をする蒼。全てを見透かすようなその視線に射抜かれると、他の者は首を縦に振る事しか出来なかった。
研究員らの反応に満足したのか、湊はそれを確認し終わると、すぐに沢永の方に向き直り。その時には、瞳はいつもの金色に戻っていた。
それにより、先ほどの根源的な恐怖から解放された沢永は、どっと冷や汗が吹き出すのを感じながらも、自分がいま無事であることを実感し安堵する。
常とは違う様子の研究員らにメノウとジンが驚いていると、湊は横から引っ張られるのを感じた。
そちらに視線を向けると、非難するような目で自分を見つめながら、マフラーを引っ張るチドリが立っていた。
「えと、なに？」
「湊のせいで寒くなったからマフラー貸して」
「貸すのはちょっと無理かな。これ色々としまってあるから」
先ほど冷気を実際に発するほどの殺気を湊が出したことで、入院着のようなものしか着ていないチドリは寒くなってしまったらしい。

それを理解しながらも、マフラーには武器や召喚補助媒体の試作品を入れているため、苦笑しながら貸す事は出来ないと湊は断る。
だが、チドリがそれでは納得しないことも分かっていたので、湊はマフラーを緩めると、手に力を纏いながら二人で巻ける長さになるよう念じてマフラーを伸ばす。
そうして、元のサイズの約二倍になったマフラーをチドリにも巻いて、そのままギュッと手を繋いだ。
「これでいい？」
「……うん」
湊が優しく微笑みながら尋ねると、チドリは顔の半分をマフラーで隠しながら小さく頷く。
よく見ると、耳が赤くなっていたりするのだが、マフラーに顔を埋めているチドリを眺めている湊はそれに気付かない。
「さてと、それで？　もう一つっていうか、研究の質問は？」
「え？　あ、ああ、今から説明するわ」
急に話しかけられ、ビクリと肩を跳ねさせ反応が遅れる沢永。
しかし、湊を呼んだ元々の理由を思い出したため、画面に自分たちの仮説と疑問点をまとめたものを表示した。
「うちの専門は耐性や弱点に関する研究なのは知ってると思うけど。私たちはこれを後天的に変更することや、一時的にでもスキルを用いて変える事が出来るかが知りたいの。研究と鍛錬の結果、ペルソナが巨大化した者もいるから、私たちは可能だと見ているのだけどどうかしら？」
「率直に言えば答えはイエスだよ。ただ、後天的に変更っていうのとは少し違う。スキルには常時発動型と随時発動型があるんだ。だから、光無効や光反射ってスキルを覚えれば、元は弱点でも上書きされて光が効かなくなったりするんだ」
説明を受け、スキルの種類が二つあると初めて知った沢永は、興味深そうにメモを取る。
後ろで話を聞いている幾月も、手帳を取り出しメモしていることから、エルゴ研全体で未だスキル自体の研究があまり進んでない事が伺

えた。
「次に、随時発動型だけど、そっちもスキルとしては存在する。そんなに効果が持続する訳ではないから、常時発動型ほど安心することは出来ないけどね。でもその代わり、そっちは他の人間のペルソナにも使う事が出来る。まぁ、ペルソナに覚醒してる人間にしか使えないから、適性しか持たない研究員らには使えないけど」
「それは相手の耐性や弱点を変更する方もあるのかしら？」
「弱点変更はないけど、耐性を消すのはあるよ。効果時間は味方に耐性を付加するのよりも短くなると思う。ああ、先に言った味方に耐性を持たせる方もだけど、あるのは火炎・氷結・疾風・電撃の四種だけだから。呪いの闇属性と浄化の光属性は喰らえば一発でダウンする技だから注意して」
　湊の言葉により、自分たちの仮説が正しいことが証明された第四研の人間たちは、お互いに握手し合うなど、顔を輝かせて喜んでいる。
　それは、シャドウに関する研究も扱っている第二研の幾月も同様で、シャドウの耐性を消す事が出来ると分かり。これを利用すれば、シャドウとの戦いをより有利に進める事が出来るだろうとして、自分の研究室でも調べていこうと考えていた。
　大人たちの喜びようを見ていた湊は、まだスキル名も教えていないのにと心の中で嘆息するが、一緒にマフラーを巻いているチドリが上機嫌だったことで、本人も気分が良くなっていたため、細かいことを言うのは止めておいた。
　そうして、研究員らがある程度落ち着いてから、苦笑気味に湊は沢永に話しかける。
「スキル名を言っても良いかな？」
「あ、ごめんなさい。ええ、教えてもらえるかしら？」
　自分より二回りほど若い相手に、気を遣わせてしまったことに申し訳なさと羞恥心が湧き。頬に僅かに朱の差した沢永が笑顔で返す。
　湊はそれに一度頷くと、先に常時発動型についての説明を始めた。
「常時発動型からいくけど、これは斬・打・貫の物理も含めた全属性にあって。それぞれ、耐性・無効・反射・吸収って感じ。ただし、光と

闇には吸収はないよ」
「物理にも吸収があるの？　でも、吸収って？」
「無効＋回復って感じかな。敵の力を奪って体力なり精神力なりが回復するんだ。でも、それはペルソナやシャドウの攻撃のみの話ね。これは耐性系全てに言える事だけど、例え炎無効のペルソナ持ちだろうと、科学や自然発生した火は普通にダメージを負うんだ。だから、物理の反射・吸収を持っていようと、シャドウの攻撃の余波で飛んできた物とかは、防ぐことは出来ないってワケ」
そう告げると、湊は右手をあげて節制のカードを出現させる。
掌の上で浮きながら回っているカードに他の者の視線が集まっていることも気にせず、湊はそれを握り砕いた。
「こい、スーツェー！」
カードを握り砕くと同時に現れたのは、煌びやかな尾羽を持つ朱い鳥、節制〝スーツェー〟。
突然呼び出されたペルソナに、他の者が驚いていると、湊は微笑を浮かべて呟いた。
「スーツェー、俺にアギラオ」
湊の指示に驚き、他の者が止める間もなく、スーツェーの口元で作られた火球が湊とチドリを襲った。
ドゴォン、という爆発にも似た音がラボ内に響き、沢永も幾月も、二人が炎に包まれるのを黙って見ている事しか出来ない。
そうして、ようやく炎が治まると、命令したときと同じ微笑を浮かべた湊が一切の怪我なく立っていた。
同じように急に炎に包まれたチドリも、じとっとした目で湊を睨み、繋いでいた手を力いっぱい握っているが、特に怪我をしているようには見えない。
それにより、二人とも火炎属性に対し、無効の耐性を持っていたことを他の者は理解した。
事情は理解したものの、躊躇いなく自身とさらに共にいる少女にも炎を放つという異常な行動を目の当たりにして、沢永は嫌な汗が額に滲むのを感じながら口を開いた。

「そ、それが無効耐性なのね？」
「そう。影時間だろうが、平時だろうが、それがペルソナやシャドウの攻撃であれば、耐性は絶対に効果を発揮する。で、それ以外だと……ああ、誰かライター貸して？」
実演するために、湊がライターを求めると、研究員の一人がポケットから取り出したライターを持ってきて、それを湊に手渡した。
チドリと繋いでいた手を解いた湊は、受け取ったジッポータイプのそれで、何度かカチャンカチャンと鳴らしながら、火をつける練習をする。
三回ほど繰り返すと、火の点け方に慣れたのか、火を点けたままにして、湊は躊躇いなくその火を自らの腕につけた。
『っ!?』
湊が自分の腕を焼き始めて数十秒経った頃、先ほどのペルソナのスキルと違い、実際に肉の焦げる臭いがし始める。
顔色一つ変えず、平然と湊がそんな真似をしていることに、研究員の誰もが動けずにいると、チドリが先ほどまで湊と繋いでいた方の手で、湊の持っていたライターを払い遠くに飛ばす。
カランと軽い音を立てながら落ちた衝撃で蓋が閉まったので、火事になる心配はないが、危ないなと湊が相手を見返すと、明らかに怒った表情のチドリが湊を睨んでいた。
「……何で自分の腕焼いてんの？」
「分かりやすいかなって。大丈夫、簡単に治るし。そこまで痛くないから」
「治るとかそういう問題じゃない！　わざわざ怪我するようなことしないで！」
「……気をつけるよ」
予想外のチドリに怒りに、少々驚いた湊は、それだけ返すと高同調状態でカグヤを呼び出し自分を治療する。
身体が回復スキルの光に包まれ、光が治まると、湊の腕は傷の跡すら残らずに回復していた。
それを確認させるように、チドリに傷のあった部位を見せると、ペ

タペタと実際に何度も触れてようやくチドリは納得したように手を離した。
「さてと、ああ、貸してくれた人はゴメンね。壊れてはいないと思うけど、壊れてたら飛騨さんに請求まわしていいから」
「それより、君は大丈夫なのかい？　顔色一つ変えていなかったけど……」
肉の焦げる臭いが未だ消えないことから、先ほどの湊の行為が現実である事を嫌でも認識させられる。
何名かの研究員が、口を手で押さえながらラボから出ていった事で、よりはっきりとそれを理解しながら、引き攣った表情で幾月が尋ねると、湊は普段と変わらぬ声色で答えた。
「大丈夫だよ。俺も、死んでいった他の被験体も、もっと苦しくて辛い痛みを知ってるから。あの程度なら普通に我慢できる」
「出来ないわよ。少なくとも私は、自分のときでも、湊のときでも、あんな風に笑ったままではいられない」
「そう？　そっか……そっか……」
湊の言葉を否定すると、繋ぎ直していた手を離し。今度は腕を絡ませて組み、チドリは悲しそうな瞳で湊を見上げる。
すぐ近くでその表情を見ながら、自身を気遣う言葉をかけられた湊は、少し照れたように年相応の笑みを浮かべた。
飛騨曰くプロヴィデンスでもある少年のその笑みと雰囲気に、それを引き出した、ただの被験体でしかないチドリの重要性を研究員らは再度理解する。
湊の行動原理は被験体らの安全の確保だと思われていた。
しかし、それは間違いだったのだ。
確かに、被験体らの安全を確保したいというのも、湊の本心かもしれない。
けれど、その根底にあるのは、チドリという一人の少女をただ守りたい。それだけなのだ。
（あの子をコントロール出来れば、エヴィデンスはこちらの言う事を聞いてくれるかもしれない。だけど、エヴィデンスと接しているから

か、あの子自体の精神の成熟度も小学生のレベルを超えている。だとすると、刷り込みも出来ないでしょうし、手段は第一研のようなマインドコントロールに限られてくるわね）

最も扱い辛く、目下最大の障害になり得る湊をコントロールする。

これは第八研を除く、全ての研究室で考えられた事だ。

ペルソナやシャドウに関する知識で湊を超える者は、いまのエルゴ研には存在しない。

ならば、その相手をコントロールできたなら、自分たちの研究は一気に真相へと至る事が出来るだろう。

よって、いま湊をコントロールする鍵を見つけた沢永が、このように本人らを目の前にして、その方法を考えてしまうのも無理はない。

そして、当然、それは幾月にも同じ事が言えた。

（だが、それは不可能だ。エヴィデンスが彼女を自分の傍から離すわけがない。仮に離れたとしても、探知が出来るためこちらの行動は相手にばれる。それに、我々が彼女にマインドコントロールをしようとすれば、情報がばれた時点で皆殺しにされる。それとも、彼女を人質にして、こちらの言う事を聞かせるか？　流石のエヴィデンスも一瞬で数百メートルを移動することは出来ない。彼女の無事を保障する代わりに、彼の持つ知識全てを吐かせれば……）

〝ハイリスク・ハイリターン〟。チドリを人質にして、湊をコントロール出来れば、得る物はかなり多い。

腕を組んで、右手を口元に当てながら、難しい表情で考える幾月は、その齎される情報の誘惑に沢永以上に惹かれていた。

自分たちが皆殺しにされるかも知れないと、そう分かっていても手を出したくなる。

研究者だけでなく、一人間として、未知なる存在であるシャドウやペルソナを理解したい。

そんな根源的な欲求に駆られながら、寄り添いあう二人の子どもを見つめる瞳には、死を齎す湊とは別の狂気が混じっていた。

対して、チドリに見つめられ、周囲への警戒を緩めていた湊は、楽しげに顔を綻ばせながら、先ほどの話を思い出し。沢永の方へ向き直

りながら、口を開いた。
「あ、話を戻すね。今度は随時発動型のスキルで、火耐性付加の〝赤の壁〟、氷耐性付加の〝白の壁〟、風耐性付加の〝緑の壁〟、雷耐性付加の〝蒼の壁〟の四種類があるんだ。でも、無効ではないし、元から耐性類を持ってる人間に重ね掛けしても効果はないから、そこは注意して」
「重ね掛けしても効果がないってことは、後天的には常時発動型でしか無効・反射・吸収はつけれないってことね？」
話を聞きながら興味深そうに頷いていた沢永が尋ねると、湊は小さく笑いながら「そういうこと」と返事を返す。
腕を絡ませ、湊の肩にこてんと頭を載せているチドリがいるため、湊も雰囲気が穏やかになっており、恐怖は微塵も感じない。
それを見ている者にすれば、殺気を放つときとのギャップが激し過ぎるだろうと少々面食らうが、それでも生命を脅かされると思った先ほどとでは天地の差だ。
もうあんな目には遭いたくないと思っている研究員らは、言葉を交わさずとも、お互いが同じ事を考えていると理解し。不用意な発言をせぬよう、気を付けながら今の湊を扱うことにした。
「それでは、今度は相手の耐性を消すスキルを教えてくれるかしら？」
「うん。まぁ、そっちは単純に火炎・氷結・疾風・電撃の属性名のあとにガードキルって付けるだけなんだけどね。敵単体を対象に耐性・無効・吸収・反射を全て解除するんだ。さっきいった壁系のスキルと違って単純に耐性を付加させるよりも複雑な術だから、その分、効果は短くなるからこれも注意ね」
湊のいった注意点もしっかりとメモしながら、沢永は自分たちの仮説が実在すると分かり、自分たちの研究に手応えを感じ内心でガッツポーズをしていた。
仮説が湊によって肯定されただけだが、無駄な嘘を吐く相手ではない。
よって、無条件にとはいかないが、湊をある程度信じることは出来るのだ。

そして、今回のこの情報を元に、第四研の被験体らで耐性付加・消去スキルを発現させる方法を確立出来るかもしれない。
そうなれば、自分たちの研究は他の研究室よりも一歩抜きん出ていると認められ、影時間に関わる研究を終えた後も、組織のトップである桐条武治から自分のしたい研究の資金を融通してもらえるようになる。
そんな未来のことを思いながら、喜びで緩みそうになる表情をどうにか引き締めると、メモを終えた沢永が顔をあげた。
「それで、いまいったスキルはどうやれば発現するようになるのかしら？」
「……さぁ？」
「そ、そんなっ!?」
直前の喜びから一転、地面に叩きつけられるような精神的なショックを受け、沢永ら研究員は顔を驚愕に染める。
自分たちを導いてくれる筈の湊に、まさか知らないことがあるなどとは思わなかったのだ。
「そもそも、ワイルドの力を持ってる俺は、皆と違った理論でペルソナを行使してるからね。弱点も耐性も、それを持っているペルソナに付け替えれば良いんだから、スキルを目覚めさせる方法なんて分からないんだ」
「ひ、ヒントは？　何か、切っ掛けになりそうな事でも良いの。何でもいい、能力の発現に繋がりそうなことを教えてちょうだい」
「いや、そう言われてもね……。まぁ、ペルソナは心の力だし、本人が強く望めば得られる可能性もあると思うけど？　いま弱点でも、それを克服すれば耐性になるかもしれないし。苦手な物を強く拒絶し続けていれば、反射になったりってさ」
ワイルドを持つ湊は、個人レベルで足りない力を補うという方法が分からない。
足りないのならば、それを持っている別のペルソナを使えば良いのだから、補うのではなく完全に他所から持ってくる発想なのだ。
故に、ことペルソナの弱点・耐性の改善という分野に限り湊は教師

として不適任であり。それならば、自身の運動性能の低さを補う形でペルソナを進化させた、第一研のスミレのような者の方が教師としては適任だと言えた。
「本人の弱点の克服という、精神の変化がペルソナに強い影響を齎す。心その物であるペルソナだからこそ出来る方法ね……」
しかし、第八研を除き、各研究室は研究成果の独占を計り、自分たちの元にいる被験体の能力発現の過程を公表したがらない傾向にある。
そのため、スミレに関して、ペルソナが巨大化したという最低限の情報しか持たぬ第四研の人間から、その発想が出る事自体が起こる筈もなく。
沢永は素直に湊の助言だけを信じてしまった。
その選択で、第四研に所属する被験体らは、第一研とは違うペルソナの成長を迎える事になるのだが、それを皆が知る事になるのは当分先のことである。
そうして、耐性・弱点変化に関する研究について、今日中に部下たちと話し合う事に決めた沢永は、気持ちを切り替えると、顔をあげて湊に話しかけることにした。
「それじゃあ、研究に関する質問は以上で終わりよ。どうもありがとう。それで、後はジンにアナライズを、メノウにはそれに加えて探知も教えて欲しいのだけど。時間的にもう第二研にいかないといけないかしら？」
ラボ内に設置されたアナログな時計を見て、沢永は幾月にちらちらと視線を送りながら湊に本日のスケジュールを尋ねる。
湊は被験体番号０００の番外個体なので、普段から、チドリらのように戦闘訓練も課されていなければ、命令権を誰も持たないので自由時間も多い。
だが、その分、湊は湊で被験体のためになる研究や、エルゴ研から去った後の事を考えて準備を始めているので暇だという訳ではない。
よって、今日のような、助力を得ることが出来る機会を逃したくない沢永は、第二研の方では既にアナライズ持ちは死んでしまっている

ものの、幾月も興味を引く内容で湊を第四研に残そうとした。
そして、その結果、
「いや、構わないよ。アナライズや探知の仕方が分かれば、いまは目覚めていなくとも才能が眠っている者の力を目覚めさせてあげることも出来るかもしれないからね」
幾月から、その言葉を引き出す事に成功した。
確かに、初期段階からアナライズの力があると分かっていた者に劣るにせよ。後の強化で使い物になるレベルまで力を高める事が出来る可能性もある。
そうなれば、探索時の被験体らの損害を最小限に抑えることも出来ると思うので、沢永も湊も幾月の案自体に反論はなかった。
メガネの位置を直しながら、落ち着いた様子で自分を眺める幾月にもう一度視線を向けると、湊は視線を沢永に戻し口を開く。
「いいよ。もう少ししたら今日は帰るけど、最低限の知識は今日中に教えるから」
「知識？　アナライズは対象の情報をデータとして知覚するだけのものではないの？」
不思議そうな表情で、沢永はそういって湊に尋ねる。
沢永ら研究員の仮説では、アナライズは対象をスキャンし、情報のみを読みとるという発想のものであった。
だが、湊が〝最低限の知識〟というからには、情報を読みとるだけではないのだろう。
能力自体の全貌が分からず、尋ねたまま沢永が視線を湊に固定していると、湊は苦笑しながら後ろにいたメノウとジンに向き直った。
「沢永さんさぁ、ゲームのやり過ぎじゃない？　アナライズはそんな単純なものじゃないよ。探知なんて、さらに難しいしね。俺は世界とリンクする感覚で探知してるけど、チドリは生体反応を元に知覚するって感じだし。情報の得方すら何タイプもあるんだよ」
「世界とのリンクに、生体反応？　タイプが違うとやはり能力の強弱や、目的ごとの得手不得手も変わってくるのかい？」
現在、実際に探知を行えているのはエルゴ研では、第八研の二人し

かいない。
　そのため、どんな些細な情報でも貴重だとして、幾月が尋ねると、それにはチドリが答えた。
「アプローチは違うけど、私と湊の能力は結構似ているから、そこまで差はない。だけど、一度に処理出来る情報量の違いもあって、湊は私より速く広範囲を調べられる」
「ああ、そこはそうだね。けど、明確な違いもあって。チドリは生体反応を元に情報のやり取りをする訳だから、他の誰かが似た系統の力を持てば、乗っ取ったり乗っ取られたりする可能性があるんだ」
「では、貴方はそんな事には成りえないと？」
「周波数が違うようなもんだからね」
　小さく笑って湊が能力のタイプを周波数に置きかえると、話を聞いていた者もいくらかすんなり理解することが出来た。
　車で携帯オーディオ機器をトランスミッターで繋ぐと、近くに同じ周波数を使っている車があると、混線してスピーカーからは同時に二つの音楽が聞こえてしまう事がある。
　湊のいう、乗っ取ったり乗っ取られたりというのは、まさにそれと同じ事なのだろう。乗っ取れば相手の車のスピーカーからは自分たちのかけている曲が聞こえ、乗っ取られれば自分たちの車のスピーカーからは相手のかけている曲しか聞こえなくなるのだ。
　しかし、湊は周波数が違うので混線することがない。
　乗っ取ることが出来ない代わりに、自分も相手からハッキングを受ける心配もないなど。タイプの違う湊とチドリの能力は、どちらも一長一短であった。
「さて、話を戻すけど、先にアナライズを説明しようか。アナライズの基本は相手を観察すること。全てを見透かすように、対象の構造だけでなく、その内面すらも探る。まぁ、強さに差があり過ぎると、把握出来なくてあんまり役に立たないけど、差が縮まれば分かるようになるから気にしなくて良い」
　そんな風に説明を受ける二人だが、まともにアナライズをしたことがないため、湊の具体性に欠ける説明では欠片も理解できていなかっ

た。
　しかし、そんな事を言えば、自分たちも研究員のように脅されるかもしれないという恐怖から、何も言う事が出来ず。
　最低限理解した、相手を観察するという事だけとりあえずやってみることにした。
「えと、ペルソナを召喚しても良いかな？」
「良いよ。けど、最終的には召喚しなくてもある程度は調べられる様になるから、非召喚時でも対象を解析する練習もしておいてね。それと、これ貸してあげるよ。これ使えば召喚が安定しやすいから」
　そういって湊は、マフラーから召喚補助媒体を取り出してメノウに手渡す。
　武器としての機能はなくなっているが、それ自体は本物の拳銃であるため。受け取ったメノウは不安そうにしている。
　しかし、以前の訓練時にも黒服から借りた拳銃を使った召喚を行っているので、今回のこれも同じ物だろうと思う事にし。
　メノウは銃口を喉に向けて引き金を引いた。
「……来なさい、デュスノミア！」
　引き金を引くと同時に光を纏って現れたのは、メノウのペルソナである正義〝デュスノミア〟。
　ギリシア神話で『不法』を司るデュスノミアは、赤い瞳に、長い銀髪をたなびかせている女性型のペルソナである。
　その瞳と髪のある頭部は、石膏像を思わせる真っ白い肌をしているが。首より下は薄っすら透き通った水色のガラスのような素材で出来たマネキンで、右手には高さ二メートルほどの拷問器具である鉄の処女（アイゼルネ・ユングフラウ）を鎖に繋いだ状態で持っている。
　メノウによって呼び出されたペルソナを見ながら、湊が改めてアナライズをしていると、一発で召喚出来たメノウが少々驚いた表情をしていた。
「これ、すごいね。なんか、いつもよりすんなり召喚出来たよ」
「仮名は召喚補助媒体。俺には関係ないけど、他の人が召喚しやすいようにって試作したんだ」

「へぇ。じゃあ、勝手に名前付けても良いかな？　召喚補助媒体って長くて言い辛いし」
　手を後ろで組んだまま顔を傾け、やや上目使いにメノウが尋ねてくると、名前に拘りの無かった湊は頷いて返す。
　そんな二人のやり取りを、チドリが不機嫌そうにしながらみているのだが、メノウの視界には湊しか入っていないようで。
　少し考える素振りを見せると、顔をあげて口を開いた。
「決めたよ。やっぱり難しいのにしても覚え辛いし、シンプルに〝召喚器〟か〝召喚銃〟が良いと思う。ミナト君もこれからはそう呼んでよ」
「召喚器に召喚銃ね。いいよ。それじゃあ、正式名称は召喚器ってことで。ジンも召喚器を使ってペルソナを呼び出してみて」
「おう。こいや、モロス！」
　メノウに続き、召喚器を受け取ったジンがこめかみに銃口を当てて引き金を引くと、ジンの頭上に隠者〝モロス〟が現れる。
　ギリシア神話で『定業』を司るモロスは、湊の持つ死の神タナトス、タカヤの持つ眠りの神ヒュプノス、カズキの持つ嘲りの神モーモスの兄弟で、ニュクスの子どもとされている。
　そのデザインは、上から順に大中小と大きさの違う三つ重なった独楽で、頭部・胴体・腰を表しており。独楽同士が重なっている部位の回りに浮いているリングから手足が生えているという、非常に奇抜な見た目をしていた。
　他の者のペルソナは人間から離れたデザインをしていても、どこか生物らしさを残していたりするのだが、ジンのモロスには顔のパーツすら存在しない。
　故に、これは機械なのではないだろうかと思ったチドリが、小さく毒を吐く。
「……変なロボット」
「あん？　こいつはわしのペルソナのモロスや。ロボットちゃうぞ」
「顔もないし、ロボットにしか見えないわよ」
　急にチドリが言ってきたので、湊に召喚器を返していたジンが言い

返すと、チドリはさらに小馬鹿にしたような呆れ顔で返した。
ジンからすれば、言われたから召喚しただけだというのに、ここで自身のペルソナを貶される覚えはない。
そのため、怒りからチドリを睨みつけると、苦笑した湊がチドリの腰に手をまわして抱き寄せ。ジンの視線から隠れるようにしてから、チドリに話しかけた。
「モロスっていうのはね、定業を司る盲目の神なんだ。だから、その概念を形として表すのなら、目がなくてもおかしくないんだよ」
「じょうごう？　それってどういう意味？」
「ある行いをしたことで起こる結果が定まった事って意味だよ。ただ、モロスの場合は死の定業だから、どちらかというと死という概念を定義づけた存在って考えた方が近いと思う。でもまぁ、その定業自体を司ってるんだし、分かりやすくいうなら、その起こる結果を定める神って感じかな」
説明してから、湊は相手が理解できているか確認を意味も込めてどんな表情をしているか、視線を向ける。
すると、最初は眉根を寄せて難しい表情をしていたチドリは、最後の言葉で理解出来たらしく、フムフムと頷いていた。
同じように説明を聞いていたメノウとジンも、神話などまるで知らなかったようで、年下である湊の話にも素直に感心していた。
「さっきも研究所の人に色々教えてたし、ミナト君って物知りなんだね。ボク、すごく尊敬するよ」
「そう？　まぁ、それは良いから、アナライズの練習をしよう。俺が基本属性を持った四体のペルソナを呼ぶから、今日はペルソナを呼び出したまま、相手を観察して。そのとき、ただ眺めるだけじゃなく、中身や本質を見抜くよう意識することを忘れないで。それじゃあ、皆でてこい！」
言い終わるなり、湊は相手の返事を聞かずに、カードを連続で握り潰し四体のペルソナを呼び出した。
珍しい青毛の虎、節制〝バイフー〟。緑の鱗を持つ竜、節制〝チンロン〟。赤い羽根の鳥、節制〝スーツェー〟。黒い亀とその甲羅に絡

みつく黒い蛇、節制〝シェンウー〟。
次々と呼び出された、巨大な四神のペルソナたちに、第四研の二人は怯え気味に驚いている。
しかし、ゆっくりするつもりの無かった湊が、二人に声をかけて直ぐに練習を始めさせ。夕食の時間になるまでやらせると、その日の練習と他所の研究室訪問を終えたのだった。

第十六話　空からの贈り物

――???

何も存在しない、闇だけが只どこまでも広がる空間。

そこで湊は目が覚めた。

しかし、特別驚きはしない。

何故なら、目の前には囚人服のような物を着た少年が、楽しげに笑って立っていたから。

「やあ、久しぶり。元気だったかい？」

「まぁ、そこそこに。そっちは？　封印はちゃんと効いてる？」

「フフッ、僕にとっては残念なことなんだけど、しっかり効いてるよ」

湊から、挨拶のお返しに皮肉気な言葉を受けながらも、少年は苦笑して楽しそうにしている。

その少年の名はファルロス。正体はアイギスによって湊に封印されたデスの不完全体で、現在は力の欠片である十二のアルカナシャドウが戻っていないことで、力をほとんど失ってしまっている状態である。

本来ならば、力を失った事で記憶もなくしている筈だったのだが、湊がエールクロイツを宿したことにより、シャドウの母たる存在〝ニュクス〟の力の一部を受けて自分の存在と使命を思い出したのだ。

ファルロスはひとしきり笑うと、顔に微笑を浮かべたまま、湊を見つめて再び話しかけた。

「さて、今日は最初に君の名前を教えてもらおうかな」

「いいよ。有里湊。それが今の俺の名前だ」

「有里湊、か。うん、すごく素敵な名前だね。それじゃあ、改めてよろしく。湊君」

改造を受け以前の自分の存在を殺した湊は、前回ファルロスと会ったときにはまだ名前がなかった。

だが、新たに生まれ変わり、別の存在としての名前を得た今ならばしっかりと名乗る事が出来た。

ようやく名前を聞くことが出来たファルロスも、名前を反芻するよ

うに瞳を閉じて、初めて友人となった相手を慈しむ。
そうして、数秒経ってから、漸く顔を上げて瞳を開くと右手を差し出し握手を求めた。
「……うん」
湊は差し出された手を暫し見つめるが、自我を得て一つの個となったファルロスは敵ではない。
両親を殺したデスとは別の者であると、そう言い聞かせることで、友人に向ける微笑でその手を掴むことが出来た。
「フフッ」
自分の手が握り返されたファルロスは、心が喜びで満たされるのを感じた。
一方的ではない、相手からも反応が返ってくるコミュニケーション。
前回は言葉でしかそれを行わなかったが、今は触れあったことで相手の体温を感じ、命の温もりを知った。
「これが人、これが命……すごいや。シャドウが人を襲ってしまうのは、きっとこの温もりを本能で求めているからなんだね」
「抜け出たあとも人を求めるって？　それなら、素直に元の持ち主に帰ったら良いのに」
「元の持ち主自体がきっと求めているんだよ。だから、自分という器から抜け出し、本能のまま他者の存在を求めるようになるんだ」
自分と同じシャドウの行動原理を考え、ファルロスは悲しげで憂いを帯びた表情で返す。
いま触れあったことで知った温もりを求めている人がいると理解して。
「僕は封印が解けたら、色んな人と接してみたい。いま湊君と握手したとき、とても小さいけど温かな光のようなものを感じた。だから、シャドウが抜け出そうになっている人に、決してあなたは孤独ではないと教えてあげたい」
「……うん。いいと思うよ。シャドウであるファルロスなら、きっと他者の心にも敏感だろうし。向いてるんじゃないかな」

真剣な表情で話すファルロスを、湊は存在含めて全て肯定し受け入れる。初めての友人に自身の夢を認められたファルロスはとても嬉しそうに笑った。
敢えてファルロスをシャドウと言った湊だが、それは人間とは別の存在だと現実を突きつけるためにいった訳ではない。
シャドウは心そのものである。だからこそ、他の人間の心にもより近付くことが出来るのではと思ったのだ。
湊の言葉の意味を、当然ファルロスも理解した。
理解したからこそ、宣告者ではない、ただのファルロスとして自分の意思で決めたことを認めて貰えて嬉しかったのだ。
そして、ファルロスは期待に満ちた表情で湊に話しかける。
「はぁ、すごく待ち遠しいよ。人々との触れ合いが、君と現実で言葉を交わす事が出来る日が」
「自分で言ってただろ。それが叶うのは十年後だって。それまでは大人しくここで話をするだけで我慢してなよ」
「君との会話はとても素敵なことだと思うよ。いまもとても楽しいしね。でも、僕は人々の生活が営まれ、命に溢れた生の世界も見てみたいんだ」
「ふーん。まぁ、世界はとても刺激的だけど、同時に残酷でもあるからね。夢や希望だけに目を向けないで、変えようのない現実も受け入れる心構えだけは今の内からしておいた方が良いよ」
生の世界を知り、そこで暮らしている者としてアドバイス。
同年代の人間の何倍も非現実的なことを目にしてきているので、湊の感覚が一般人と同じであるかは怪しいところだ。
けれども、その分、残酷な現実については詳しくなっている。
自分の実体験を通して語る湊の言葉には重みがあったため、ファルロスも真剣な表情で湊の言葉に頷いた。
「さて、ずっと話していたいけど、どうやら時間みたいだ。今日はありがとう、とても楽しかったよ」
「会いに来る方法が分かれば、こっちから行くことも出来るんだけどね。まぁ、呼んでくれれば話し相手にはなるから」

「うん。じゃあ、また呼ばせて貰う事にするよ」
手を後ろで組んでファルロスは笑みを浮かべる。
湊と話している間は基本的に笑顔だが、その全てが本心からの笑みである。
それに対し、湊も研究員を相手にするときのような偽りの表情で話したりはしない。ファルロスにとってそうであるように、今の湊にとってはファルロスが唯一の友人なのだ。
そうして、現実の湊が目覚めることで、二人の談話の時間が終わろうとしたとき、最後にファルロスが何かを思い出したようで、悪戯っぽい笑みで口を開いた。
「あ、そういえば。今日は影時間に空から変わった贈り物がくるよ。他の人が持つとややこしくなるから、影時間になったら屋上にでも出ておいた方が良いと思う」
「贈り物？　……良く分かんないけど、わかった。注意しておくよ。それじゃあ、また」
「うん、またね」
二人が笑顔で別れの挨拶を済ますと、湊は急激な眠気に襲われそのまま意識を失った。

7月27日（木）
昼――エルゴ研・食堂
他の被験体と違い、訓練に参加する義務のない湊は、午前中の空き時間に第二研の幾月と共に、第五研のヘーガーのところへ顔を出していた。
その理由は、新たな召喚器の開発や、対シャドウ兵器について話し合うためである。
以前、タルタロスで湊に攻撃されたヘーガーはどこか警戒していた様子だったが、話し合い自体はそれなりに実りあるものだったようで、室長の二人は終始熱く話しあっていた。
結局、ここの人間は皆、知的好奇心を抑えられない生粋の研究者ばかりなのだ。

いくら知識が豊富で、知能の高い湊も、流石にそんな人種に付き合っていつまでも議論していたくない。
そうして、昼ごはんを理由に本日の話し合いを終えてきたため、湊は少し疲れた様子で食堂へとやってきていた。
他の被験体も訓練を終えてやってきたばかりのようで、食器を受け取った湊に気付いたチドリが手を挙げている。
気付いた湊は、そのままテーブルまで行くと、今日はチドリの他にマリア・スミレ・メノウ・セイヤの四人も一緒に座っていた。
マリアはたまに一緒に食べているから分かるが、他の人間は所属もバラバラでよく分からない組み合わせである。
「珍しい組み合わせだね。どうしてこのメンバー？」
気になった湊が尋ねながら、空けられていたチドリとセイヤの間に座ると、正面にいるマリアの左に座っていたメノウが答えた。
「えっと、ボクは探知能力を上げるためにチドリの傍にいようと思ったんだけど。多分、ミナト君が来るからってマリアが一緒に座って。今日の訓練でマリアの相手をしてたスミレも一緒に来て。セイヤも一応はミナト君目当てだったかな」
「ああ。午前中の訓練にいなかったから、午後の訓練にはくるのか聞きに来たんだ。今日は最近になって始まったペルソナを使っての戦闘訓練なんだが、君と戦ってみたくてな」
メノウに一緒にいた理由を言われて、セイヤが詳しく話す。
そういえば、被験体らが安定して召喚出来るようになってきたので、ペルソナでの戦闘に慣れさせるために戦闘訓練を開始したと飛騨が言っていた。
それを思い出した湊は、ふむふむと頷きながら昼食のトンカツを一切れ口にしてから、ご飯を食べてゆっくりと咀嚼する。
「それで、ミナトは午後はどうするんだ？　来るなら、是非相手をしてくれ！　俺たちの中で一番強いのは君だからな。どれぐらい差があるか知っておきたいんだ」
話しは聞いているが、答えを返していなかった湊にセイヤが期待に満ちた視線を送ってくる。

会話を楽しみながら食事をすることは湊も好きだが、騒がしいのは元来好きではない。
今日会って初めて会話したセイヤに罪はないのだが、先ほどまでいた研究室から出てきたのも、それに近い理由であったのに、食事に出てきてまで同じような熱い人間の相手をする状況になり湊は少々うんざりしていた。
啜っていた味噌汁のお椀をトレーに置くと、俺に構うなというオーラを全身から出しながら顔をそちらに向けて口を開いた。
「これでも色々と調査と研究もしててさ。弱いやつを何人も相手にしてる時間もないから、俺と戦いたいなら、とりあえず他のメンバー内でトップになってよ。ランキング制って言えば良いのかな？　まぁ、そんな感じでランキング一位が俺への挑戦権を与えられるってね」
実を言えば、これは相手をあしらうために用意した適当な理由である。
調査と研究をしているのは嘘ではないが、いまの湊は研究員が準備している副作用の少ない制御剤待ち状態なので、訓練自体には空いた時間を利用していつでも参加できる。
その証拠に、昨日もフラッとやってきて、ジンとメノウにアナライズをレクチャーし。メノウにはさらに探知のコツも教えていた。
他の自由時間には、チドリとマリアに小学校で行うような勉強を教えていたので、一週間もあれば被験体全員と個別に戦って訓練することも可能なくらいには空いた時間を作ることも出来た。
しかし、湊はチドリ関係以外は面倒なことを避けたがる性格なのだ。
そのため、適当にでっちあげられた理由で、セイヤは丸めこまれることとなった。
「わかった。なら、いまの段階でライバルになり得るのは、タカヤとカズキだな。その二人に勝てたら相手してくれよな」
熱いがスポーツマン的な爽やかさも持ち合わせているセイヤは、そう言って笑顔を見せた。
「うん」

食事中の湊は、完全に作られた笑みで返し、本日の訓練の相手をすることを断れて内心で喜ぶ。
だが、ここでマリアから予想外の発言を受けることになる。
「ミナト、いっぱいペルソナ呼べるよ？　皆ともいっぺんに戦える！」
「そういえば、そうね。面倒だから、まとめて相手にしちゃえば？」
マリアに続き、チドリもそれを肯定して、尚且つ被験体トップ３のタカヤ、カズキ、セイヤを一度に相手して戦えと言って来た。
研究員を除けば、チドリ・マリア・ジン・メノウの四人にしか複数同時召喚は見せていなかったので、複数所持したペルソナを付け替えて戦えるとだけ思っているセイヤを、騙しきることが出来ると湊は踏んでいた。
それだけに、マリアとチドリの発言は味方に背後から撃たれたかのような衝撃を湊に与えた。
案の定、二人の話を聞いたセイヤが、その話題に食い付いてくる。
「それは本当か？　すごいな！　他のやつと一緒でも構わない。是非、俺と戦ってくれ！」
「えっと、ほら、他のメンバーが同意するとも限らないしさ。そうなると、後で個別に相手するのも時間取れないと思うし。公平を期すために、全員が話を受けないことには無理だよ」
「わかった。それじゃあ、他のやつにも声をかけてくるから待っててくれ！」
今日の訓練で早速戦えそうだと、興奮してやる気を出していたセイヤは、そんな風に言い残すと食べ終わった食器を片づけて、他の被験体に声をかけに行ってしまった。
湊や一緒にいた女子らが、去っていったセイヤを視線で追うと、セイヤに話しかけられたタカヤが薄く笑って湊に視線を送ってきたり。
次に声をかけられたカズキが、口の端を吊り上げていたりと、どうやら戦う事が確定しそうな流れになっていた。
午前中のことで精神的に少し疲れていた湊は、夢の中でファルロスに言われたこともあり、午後は夕食の時間まで休んでいようと思っていただけに、酷く落胆する。

「くそっ……なんで俺が訓練に参加しないといけないんだ。夜に少し用事があるから休んでようと思ったのに」
「用事？　それって何の？」
夜に被験体らが出歩けるのはタルタロスの探索のみである。
それ以外の理由で出歩くことは、セキュリティなどの関係で不可能なため、チドリが不思議に思って尋ねると、テーブルに突っ伏していた湊が身体を起こしながら答えた。
「んー、なんか空から変わった贈り物が降ってくるらしいんだ。他の人間の手に渡ると面倒になるらしくて。だから、俺がタナトスで飛んで手に入れてこようと思ってたんだ」
「贈り物？　マリア、今日が誕生日！」
「ああ、そうだね。誕生日おめでとう。渡せる物は特にないけど、その贈り物ってやつがあげて良い物ならマリアにあげるよ」
「やったー！」
本日で八歳になったマリアは、湊から誕生日プレゼントが貰えると聞いて嬉しそうな笑顔になった。
隣に座っているスミレも、「よかったねー。おめでとうなのです」と、おっとりした口調でマリアの誕生日を祝っている。
元々、冷めた性格であるチドリは呆れた様子でそれを見ているが、湊らの一つ上に当たるメノウは、こんな世間と隔絶された場所であっても誕生日を素直に喜べる幼いマリアたちを少し羨ましそうに見ていた。
午後――総合訓練室
昼食と食後の休憩を終えた湊らは、他の被験体と共に、いつもの訓練を行う場所にやってきていた。
午後の訓練はペルソナを使った戦闘という事で、体術の教官である黒服だけでなく、室長クラスの研究員の姿もチラホラとあった。
そして、整列するように言われて、湊は一番右の列の最後尾に並んでいると、黒服ではなく第二研の幾月から説明が入る。
「やぁ、諸君。今日の午後はペルソナを使った戦闘訓練だが、今回は君たちが召喚しやすいようにある物を持ってきたんだ」

言いながら、背後に置かれていた長机が見えるよう脇に避け、そのまま机の上に置いてある物を一つ手に取ると、皆に見えるよう掲げた。
「この一見拳銃にしか見えないもの。実はこれが君たちの召喚を補助してくれるんだ。その名も〝召喚器〟。これは我々が量産した物だが、召喚器自体を開発したのは第八研にいるエヴィデンスなんだ。今日の訓練では実際に使って、是非、この性能を試して欲しい」
幾月が湊の名を呼ぶと、被験体らの視線が集まる。
マリアとスミレは素直に感心して「すごい！」と言っているが、この後のことを考えて憂鬱になっている今の湊にそれを相手している元気はなかった。
「さて、体術の訓練のときは広がってやってもらっているけれど、ペルソナの戦いはスキルを使って非常に危険だからね。実際に戦う者以外は、壁際で見学しておこう。順に戦っていくことになるが、最初は誰と誰からやるかな？」
「最初は俺たちがやります！」
「ん？　俺たち？」
幾月が順番を尋ねたところで、セイヤが挙手しながら集団の前に出て答えた。
すると、タカヤとカズキも一緒に前に出たので、しょうがなく湊も集団の前までまわると他三人の横に並ぶ。
一対一の戦いを順にしていくと思っていた幾月は、湊を含め四人の被験体が出てきたことを不思議に思っているようだが、幾月が聞いてくる前にタカヤが口を開いた。
「他の者は我々ほどペルソナの戦闘に慣れていません。なので、先ずはペルソナの戦い方を見せるため、我々と彼とで戦おうと思います」
「君らと彼とって……三対一でかい？」
「ハッ、あいつは一人で何体もペルソナ出せンだから、数は対等だァ。それに、仮に話しにならねェ弱さだったら、オレらでやり合うからよ。他のやつらに見せンのには問題ねェ」
カズキの言う通り、数は確かに対等に出来る。いや、むしろ湊の方

が多くすることも可能だ。
しかし、一人で三体操るのと、チームで三体操るのとでは、難易度がまるで違う。
ペルソナが少しくらいならば簡単な自律行動が可能であっても、ダメージのフィードバックや、スキルに必要な精神力などを湊は三体分負わなければならない。
よって、湊の強さを知らぬ者にとっては、無謀にしか思えない話だった。
「ふーむ、確かに探索中はチームで動くから、団体戦も必要だが……エヴィデンスもそれで良いのかい？」
「今後の訓練で相手をしてくれって言ってこなくなるようにするためなら、一回くらい我慢するさ」
心から面倒だと思っているようで、湊は不機嫌さを隠さず答える。
殺気こそ放っていないが、機嫌の悪い湊の相手をするほど幾月や研究員は命知らずではないため、四人が納得しているなら戦闘を許可することにした。
＊＊＊
広い体育館のような訓練室で、湊ＶＳタカヤ・カズキ・セイヤの形で訓練用の武器を持って相対する。
ペルソナを使った戦闘訓練という名目だが、タルタロスでのシャドウ戦を意識させるのであれば、武器も持って本人が格闘を行うのも許可すべきだろうと幾月が判断したのだ。
それぞれ、好きに武器を選び。湊が刃渡り十八センチのファイティングナイフ、タカヤは湊と同じ物を敢えて選び、カズキは刃渡り六十センチの片手剣、セイヤは一二〇センチの棒を選んだ。
湊が初めて使う得物の調子を確かめている間、他の三人は貸しだされた召喚器をじっくりと見ていた。
「ルール、制限時間、共に特になし。だが、意識を失った相手や、戦闘続行不可能な相手への追撃はなしだ。それでは、準備が出来たら始めてくれ」
改めて幾月が戦闘方法について確認すると、直ぐに他の研究員に

データを取るよう指示している。
普段の湊ならば、そういった周囲の事にも僅かに意識を割いておくのだが、今の湊はグリップを何度も握り直し、集中力を高めていた。
（向こうに指揮官は居ない。だけど、単独行動を好むカズキに、他の二人が合わせてくるだろう。タカヤが技、カズキが速さ、セイヤが力ってとこか）
静かに集中力を高めた湊が、冷たく鋭い空気を纏う。
魔眼は発動していないが、それでも今の湊はどこか危険だと、相対する三人ははっきり感じていた。
そのため、一度目配せをすると、タカヤだけを残して、他の二人は走り出し、こめかみに当てた召喚器の引き金を引いた。
「出やがれ、モーモス！」
右側から迫って来たカズキが、引き金を引くと、その頭上に隠者〝モーモス〟が現れる。
ギリシア神話のニュクスの子の一人で非難や皮肉を擬人化した『嘲り』の神。
その見た目は、赤いボロ布を纏い、髪も顔も真っ白で骸骨のようにやせ細っているが、首より下は黒一色の肌。そのような異色な見た目でありながら、さらに、肩からは牛の角が生えており、手には大鎌を持っている。
「いくぞ、フレイ！」
カズキに続いて、反対側から向かってくるセイヤもペルソナ、皇帝〝フレイ〟を呼び出す。
北欧神話の豊穣の神であるフレイは、ウェーブのかかったくすんだ金髪を肩まで伸ばした筋骨隆々な男性型のペルソナで、古代ローマの服の上に金色のマントを身に着け、その右手には煌びやかな装飾のされた細身の剣を持っている。
現れた二体のペルソナは、召喚者より先行して武器を振り上げながら湊へと迫る。
だが、別方向からやって来たペルソナを視界に収めながらも、湊は真っ直ぐ正面に立つタカヤを見つめていた。

自身が見られていることに気付いたタカヤは、薄い笑みを浮かべると、渡されていた召喚器を使わずにペルソナを呼びだした。
「ヒュプノス、ガルーラ！」
ギリシア神話で『眠り』を司り、死神タナトスの弟である運命〝ヒュプノス〟。
黒い目隠しをした青白い肌の青年の、肩や背中から伸びた太い血管のようなものが絡み合い、大きな翼を形作っている。
そんな、かなりグロテスクで不気味な見た目のペルソナは、顕現するなり背中の翼をはためかせ、湊に風の一撃を見舞おうとした。
「スーツェー、マハラギオン！」
《クォオオオオオッ！》
だが、それに対し、湊は目の前に一枚のカードを出現させると、それを回し蹴りのハイキックで蹴り砕き。
現れたスーツェーに広範囲に炎を吐かせ、ヒュプノスの放った風を打ち消し、迫ってきていたカズキを牽制する。
さらに、反対側から迫っていたフレイが湊を切り伏せんと振り下ろした一撃を、軌道を読み切り躱して、跳んで胸を蹴りつけることにより、反動を利用して距離を取った。
スタン、と軽やかな音をさせながら着地した湊は、左手にナイフを、右手には手の周りで数枚のカードを衛星のように回しながら、いつでも召喚できるよう備えている。
いまの数手で湊のペルソナの強さ、湊自身の体術のレヴェル、加えてカズキとセイヤは召喚方法の違いから、召喚シークエンスにおいて数瞬遅れてしまう事に気付いていた。
戦いのための思考に切り替わっている湊が、戦闘中に単純なミスを犯すとは思えない。
ならば、その数瞬の遅れは致命的な差になり得る。
静かに視線で自分たちを制しながら、次の行動へ移ろうとしている湊を見て、対峙している三人は、今まで持っていた多対一で勝っても何の意味もないという、小さなプライドを捨てることに決めたのだった。

＊＊＊

「ヒュプノス、ジオンガ！」

「モーモス、パワースラッシュ！」

上空からヒュプノスが雷を放ってくると、それに合わせてモーモスが大鎌を振り上げながら接近してくる。

モーモスは雷に対し無効の耐性を持っている。そのため、ヒュプノスがモーモスごと湊に攻撃を放っても問題はない。

「バイフー、デスバウンドで迎撃！　スーツェーはマハラギオンでフィールドを焼け！」

しかし、湊は二枚のカードをナイフで斬りつけ破壊しながら指示を出して対処する。

大鎌で斬りかかってきていたモーモスを、バイフーが爪で斬り裂こうと正面からぶつかりに行き。別の方向から密かに攻撃をしようとしていたセイヤを、炎で視界を奪う事で封じる。

「くっ、フレイ、疾風斬だ！」

目の前まで炎が迫って来たことで、焦りを覚えたセイヤがフレイに命じて炎を切り裂かせる。

その攻撃で斬撃波を飛ばして湊を狙う事も忘れないのは、被験体トップクラスの実力故か。

だが、

「――――タナトス！」

振り向き様に、高同調状態で腕を振り、斬撃波に斬撃波をぶつける事で湊はフレイの一撃を打ち消した。

完全に背後から放った攻撃を対処され、セイヤは悔しそうに表情を歪めるが、湊は一瞥すらせずに別の方向へ向き直るとタナトスの左手をかざして命じた。

「タナトス、メギドラ！」

《グルォオオオオオ！》

タナトスが極光の奔流を放った方向には、先ほど雷を放った場所から移動していたヒュプノスが同じく極光の一撃を放っていた。

攻撃を放ったのはヒュプノスの方が早いが、威力はタナトスの方が

上だ。
ぶつかり合う瞬間こそ周囲に衝撃を伝えたが、即座にタナトスの一撃が敵の攻撃を飲み込んで、そのままヒュプノスへと迫る。
「ハッハァ！　ガラ空きってなァ！」
だが、攻撃が直撃するのを確認する前に、横からペルソナの影に隠れて迫っていたカズキがやってきて湊に片手剣の一撃を振り下ろした。
それを躱し、カウンターで湊が蹴りを放つ。
「寝とけ！」
戦いが始まって既に三十分。
接近戦も挑んでいるカズキとセイヤは何度か惜しいこともあった。
しかし、湊の反射神経がその決定的とも思われる隙を即座に埋めて反応してくる。
そうして、今もまた上体を大きく後ろに逸らすことで攻撃をすれすれで躱し、空振ったカズキの脇腹へと踏み込みの浅い蹴りを叩き込み、三メートルほど吹き飛ばした。
「ごあっ!?」
床の上を転がりながら、途中で手をつき滑りながらも体勢を立て直したカズキは湊を睨みつける。
戦闘によって蓄積してきた疲労により、そろそろ足に力が入らず、呼吸もゼェゼェと荒いままになっていた。
それは、ペルソナでスキルばかり放っているタカヤも、カズキと同じようにペルソナと己の両方で挑んでいるセイヤも一緒だ。
けれど、もっとも疲労の色が濃いのは、三人を同時に相手にしている湊だろう。
敵が迫ってきていない間に呼吸を整えようとしているが、既に多少休んだところで無意味なレヴェルまで疲労が高まっている。
ポタポタと髪や顔を伝って汗を垂らし、身体が酸素を求めて口を開けたまま肩で息をしている。
にもかかわらず、敵が来れば対処するのであるから。戦っている三人だけでなく、周りで見ている者もその執念に驚嘆するしかなかっ

た。
「……ここまでですね」
そして、突如タカヤがペルソナを消して、そう呟くと同じようにカズキとセイヤもペルソナを消して構えを解いた。
まだ勝負はついていないというのに、戦闘をやめてしまったことに見ていた幾月は困惑する。
湊は言うに及ばず、戦っていた三人も既にタルタロスの下層エリアに敵はいない程の実力を持っている。
そんな者たちの戦闘データがどれほど貴重か分かっている幾月は、冷静さを僅かに欠きながらタカヤたちに尋ねた。
「ど、どうして途中で止めてしまうのかね？」
「これ以上は無意味だからですよ。このまま続ければ、確実に誰かが死にます」
静かに答えたタカヤはそのまま歩いてゆくと、膝をついて休んでいた湊に手を貸して立たせる。
他の二人も顔に疲労の色を浮かべているが、湊とタカヤと一緒に戻ってくると召喚器を近くの被験体に渡してドサッと腰を下ろした。
だが、納得がいかない幾月は再度タカヤたちに質問をぶつけた。
「誰かが死ぬって、あのままいけばエヴィデンスの体力が尽きて君たちが勝っていただろう？」
「オレらはほぼ最初っから殺す気でいってンだよ。それをコイツは殺さねェように力をセーブして対等にやり合ってンだ。ンな状態で、持久戦に持ち込ンで勝ったトコロで勝ちなンて言えるかよ」
「力を、セーブだって？」
カズキの言葉で、三人が湊を殺す気で戦っていたことにも驚いたが、被験体トップの実力を持つ三人を相手に湊が全力を出していなかったと聞き、幾月は固まってしまう。
殺す気で来ている人間を、殺さずに無力化するのはかなりの熟練の技が必要だ。
無力化まですることは敵わなかったが、湊は戦闘終了までそれをやりきった。

だとすれば、試合内容だけ見れば単純に被験体の三倍の強さを持つと思われた湊は、さらにその奥に途轍もない実力を隠していることになる。
「これが、死(デス)を内包した者の力か……」
小さく呟いたその声を聞いた者は誰もいない。
座って自分や他の三人に回復魔法をかけている少年が、人間の形をした別の存在であるように思えてしまった幾月は、その後の訓練を他の者に任せると足早に訓練室を後にしたのだった。
影時間――エルゴ研・屋上
訓練だけでなく、夕食や入浴も終えた湊たちは、以前タルタロスに向かって湊が飛び立った屋上までやってきていた。
メンバーは湊・チドリ・マリア・飛騨の四人。
チドリとマリアが一緒にいるのは、贈り物の正体が気になったためで、飛騨は被験体だけで屋上へ行かす事は出来ないという理由からの付き添いである。
そうして、影時間独特の生温い風を肌で感じながら、チドリが口を開いた。
「贈り物っていつくるの？」
「んー、正確には分かんない。単に影時間に来るよって言われただけだから」
カグヤを高同調状態で顕現させ探知しながら答える湊。
先ほどから主に上空に意識を向けているのだが、未だに何も発見できないため、湊自身も少々焦れていた。
「マリア、たのしみ！」
「うん。変なのじゃなかったらあげるから待っててね」
マリアは屋上に来る前からずっとこんな調子であった。
前にいた孤児院では誕生日プレゼントを貰ったことがなく、今日は初めて貰えるかもしれず、くれる相手が大好きな湊ということで喜びはさらに大きいらしい。
普段はマリアを子ども扱いして鬱陶しそうにしているチドリも、年に一回の誕生日ということで気を遣っているようで、無愛想ながら口

を挿む気はないようだ。
そうして、さらに湊が探知を続けること十分。
ハッとした表情で顔を月に向けると、湊はペルソナをタナトスに切り替え、一気に加速して屋上から飛び立った。
（この反応、間違いない。黄昏の羽根だ！）
高度を上げ続け、雲と同じ高さまで昇って来たところで、湊はキラキラと光を発しながら降ってくる二つの物体を発見した。
低酸素に慣れている事で呼吸は問題ないが、いつまでも飛んでいると他の研究室にばれるかもしれない。
そう思った湊は、目標物を手に入れると直ぐにチドリらの待つ屋上へと戻った。
「おかえりなさい、少年。目的の物は手に入りましたか？」
「うん。確かに、これは他に渡るとややこしくなるね」
屋上に戻りペルソナを消した湊に飛騨が声をかけると、湊は苦笑で返す。
その左右の手には、それぞれ通常とは異なる形状の黄昏の羽根が握られていた。
「そ、それはっ」
淡い青い光を発していたことで、湊が黄昏の羽根を持っていることには飛騨も気付いていたが、形状を見て驚愕する。
一つは三枚の羽根が付け根の部分で結合し、まるで花の蕾のようになっているもの。
一つは大小二枚の羽根が交差した状態で結合し、ラテン十字のようになっているもの。
アイギスのパピヨンハートに続く、天然の結合した特殊な黄昏の羽根。
それらが同時に降ってくるなど信じられず、無意識のうちに飛騨が手を伸ばしかけていると、湊は開いていた手を閉じる事で相手が触れることを拒んだ。
飛騨が悪用するとは思わないが、湊はこの二つを手にした時点で使い方を決めていた。

そのため、例え飛騨が研究させてほしいと言ってきても最初から断るつもりだったのだ。
湊が手を閉じたことでハッと意識を戻した飛騨に対し、湊は申し訳なさそうな笑みを浮かべて話す。
「ゴメン、これは飛騨さんにはあげられないんだ」
「……二人にあげるのですね？」
「うん。今の俺なら手術もなく渡せると思うし」
湊がいう前に用途を理解した飛騨が確認するように尋ねると、湊はどこか嬉しそうに頷いて答える。
そう、湊はこの二つの羽根をここにいる被験体の少女二人に渡すつもりだった。
本人たちは分かっていないようだが、事情を説明するため湊は二人に羽根を見せながら優しく話し始めた。
「……これは、『黄昏の羽根』って言ってね。ペルソナの力を上げたり、安定化させる効果があるんだ」
他に、これを動力部に組み込めば、影時間でも機械が動くようになったりもするのだが、いまは関係ないとして、その説明を省いて湊は話を続ける
「俺はこれを君たちに貰って欲しい。これを内蔵すれば、多分、もう制御剤を飲まなくて済むと思うから」
「ないぞう？　具体的にどうすればいいの？」
言葉の意味があまり理解できなかった二人は、不思議そうな表情のままチドリが代表して湊に聞き返す。
すると、湊は羽根二つを片手に持ち替えて、空いた手で自身の胸を指しながら静かに答えた。
「これを心臓のところに収めるんだ。大丈夫、いまの俺なら手術もせずに入れてあげられるから」
「……マリア、怖い」
「怖くないよ。俺の心臓のところにも、こっちの十字のやつに似たのが入ってるからね。目の色が変わったりしたけど、特にデメリットはないから」

怯えるマリアの頭を撫でながら話す湊に対し、二人の少女は初めて聞かされた情報に目を見開いて驚く。
湊が色々と肉体に改造を施しているという話しはチドリしか知らなかったが、以前、湊から聞かされた話しにそんな物は含まれていなかった。
よって、条件的にはマリアと大して変わらず、このようなよく分からない物体を心臓という最も大切な場所の付近に収めていることに驚く以外のリアクションが取れなかった。
そうして、二人が驚きに固まって少し経つと、湊の瞳を真っ直ぐ見つめながらチドリが口を開いた。
「……それを使えば、私も湊みたいに強くなれる？」
「ワイルドは無理だけど、今よりはね。俺のはエールクロイツっていうんだけど、こっちの二つにも影時間に触れた機械を任意に起動させるって力があるかは分からない。だけど、ペルソナの安定と出力アップに関しては問題ないよ。こっちの三枚羽なんて、むしろ出力に関しては俺より上になると思う」
傍らで子供らの話を聞いている飛騨も、湊と同じ認識を持っていた。
アイギスが他の対シャドウ兵装よりも強かったのは、ラストナンバーで最新鋭の技術で作られたことだけが理由ではない。
他の対シャドウ兵装が通常の黄昏の羽根であるのに対し、アイギスのパピヨンハートは二枚の羽根が結合したものだ。
よって、適性が同一であれば、ペルソナの出力は羽根の枚数で決まる。
これがエルゴ研での黄昏の羽根に対する認識であった。
先ほどまで不安そうにしていたチドリの表情が、湊の答えを聞いて決意の色に変わる。
マリアも、湊も同じように内蔵していると聞いた時点で不安が消えていたようで、二人の答えが決まったことに湊は内心安堵していた。
だが、それを表情に出すと、再び少女らが不安になってしまうと思い、顔に出ないよう気をつけると二人にそれぞれの羽根を見せながら

尋ねた。
「答えは決まったね？　それじゃあ、二人はどっちを入れたい？
被ったらじゃんけんとか決めて貰うことになるけど」
「マリア、ミナトと同じやつ！」
「私は強くなれるつぼみっぽい方」
「良かった。別々のやつで」
笑みを浮かべながら湊は持っていた羽根を左右入れ替える。
右手にはマリアに渡す十字型。左手にはチドリに渡す蕾型。
二人の胸の前に手を近付けると、ペルソナカードを出すときのように、手に羽根と同じ淡い青色の光を纏わせ、羽根を光の粒に変えてゆく。
羽根の全てが光の粒状になると、さらに湊が手を近付ける事で徐々に二人の胸の中へ吸い込まれ始めた。
その不思議で幻想的な光景を見つめながら、チドリが湊に話しかける。
「ねぇ、名前つけて。エールクロイツだっけ？　湊のはそういう名前なんでしょ？　だから、私たちのにも個別の名前が欲しい」
言われて確認するようにマリアにも視線を向けると、うんうんと首を縦に振っていた。
そもそも、エールクロイツという名前を考えたのは飛騨なのだが、目の前の二人は湊に名付けるように言ってきたので、飛騨が名付けても納得しないだろう。
そう思い、作業しながら様々な言葉を組み合わせて名前を考えると、ようやく思い付いた名前を湊は口にした。
「それじゃあ、マリアのは『クロワフェーダ』。フランス語とドイツ語を組み合わせて〝羽根の十字架〟って意味ね。チドリのやつは『ペタル・デュ・クール』。フランス語で〝心の花びら〟って意味だよ」
「ペタル・デュ・クール……」
「クロワフェーダ！」
それぞれの黄昏の羽根の名前が決まり、チドリは反芻するように、マリアは嬉しそうに名前を呟く。

飛騨も湊のセンスが気に入ったのか、楽しげに笑ってメモを取ると、湊の作業に視線を戻した。
初めは湊の掌に納まりきらない程の量があったのだが、光の粒は既に残り僅かとなっていた。
ジッと眺めていた二人も、光の粒となった羽根が自分の中に入ってくると、何か温かな物を感じ。これが湊の言っていたペルソナの出力アップと安定化なのかと実感していた。
そうして、ついに最後の一粒が二人の中へ入ると、湊は手に纏っていた光を消して少女らの様子を眺める。
以前、自分の瞳の色が変わっていたときのような、外見の変化が起こるかもしれないと思ったからだ。
すると、

「んっ」
「あうっ」
「っ!?」
二人が小さく声をあげて、直後、二人の身体が先ほどの湊の手のように光を纏う。
自分のときは麻酔で眠っていたため、こんな事が起こるなんて知らないと、二人の身に起こった現象に湊が驚いていると、さらに輝きが増し始めた。
「ぐっ、肩が、熱いッ……」
「あぐっ……」
「適合失敗かっ!?」
光が増すにつれ、チドリとマリアは苦しそうに表情を歪めながら、肩を押さえて蹲ってしまった。
予想外の自体に驚きながら、光を纏っている二人に触れて、湊はなんとか安定化させられないか能力でコントロールしようとする。
だが、
『あぁあああああっ!!』
制御しようとする前に、二人の纏っていた輝きが、湊の視界を奪う

ほどに強まってしまった。
通常の人間よりも神経伝達速度が速いので、瞳孔も即座に合わせて対応したようだが、目に取り入れられる光には限界がある。
それを超えた光を見たことで僅かな間、視界を奪われていると、視界が回復したとき、湊は目の前に倒れている少女二人の変化に見とれてしまった。
「うっ……はぁ……終わった？」
「あぅ、熱かった……」
起き上がった二人の少女。先ほどまで苦しんでいたようだが、身体に異常はないようで額に浮かんだ汗を袖で拭うと座りなおしている。
しかし、ある一点だけが、変化していた。
「――――すごく、綺麗だ」
呆けたように呟いた湊が目にしていたのは、二人の髪の色。
暗い茶髪だったチドリは、鮮やかな緋色に。
元々金髪だったマリアは、より輝くような金色に。
それぞれが、影時間の月光に照らされながら、キラキラと光っている様を見て、湊は自然と手を伸ばし触れていた。
「え、ちょっと、なに？」
「ミナト？」
普段と違った様子で、自分たちに触れてくる少年に少女らも困惑する。
だが、湊はそれに答えず、色の変化した二人の髪をただ黙って梳いていた。
こんな状況での対応の仕方を知らない少女らは黙ってそれを受けるしかない。
湊の後ろにいる飛騨は、湊とは違った外見変化を起こした二人を興味深そうに眺めているだけなので、助けを求めることも出来ない。
そうして、湊が満足するまでされるがままになっていた二人は、湊が離れ解放されたときには顔を紅潮させた状態で俯いていた。
対して、少女らをそんな状態にした湊は、既に普段通りに戻ったようで、いつもの口調で二人に話しかけた。

「二人も上手く適合したみたいだね。俺は目の色が変わったけど、二人は髪色の変化だったみたいだ。チドリは緋色で、マリアは前よりも明るい金色。うん、二人ともすごく綺麗な色だよ」

綺麗な色と言っている本人の表情も、とても綺麗な笑顔になっているのだが、恥ずかしさで茹であがっている二人はリアクションが取れない。

しかし、話の内容は理解できていたので、頭の片隅で後で鏡で見てみようと考えると、その場から逃げだすように早足で中へと戻る扉へと向かっていってしまった。

「……ん？」

二人のそんな様子に湊は少し不思議そうにすると、被験体だけでエルゴ研の中を歩いていると思われれば騒ぎになると思ったので、直ぐに飛騨と一緒に後を追って研究室に戻ることにした。

そうして、研究室に戻ってから、汗をかいたということで風呂に二人が入り直すと、服を脱いだ時に肩にあった紋様が消えていることに気付いた。

それにより、適合中に肩に感じた熱と痛みは紋様が消えていく際の症状で、失敗作の証として浮かび上がっていた紋様が消えたことで、正式に二人が制御剤の投与の必要がなくなったことが分かった。

話を聞いた湊は二人の寿命がこれ以上削られないことに喜ぶと、他の被験体用の制御剤が完成次第このエルゴ研を出ていくという計画を、より具体的に立て始めたのだった。

第十七話　動きだす計画

――???

暗闇の中で、少女はただ独り夢をみる。

人類を守るために、両親を奪われ、その身体を器として捧げることになった記憶の中の少年の姿を思い浮かべながら。

（――八雲、さん）

八雲と名乗ったその少年から、自分が大切な物を奪った。

彼はそんな自分に、〝機械〟でしかなかった自分に、〝人〟としてかけがえのない物をくれた。

（――あなたに、会いたい）

故に、少女は独り想う。

この身が再び自由となったなら、その時は彼の傍にいよう、彼のために生きようと。

7月30日（日）

影時間――タルタロス・7F

「残酷のマーヤ、火が耐性やけど、それ以外の基本魔法は全部弱点や」

そういってモロスを召喚して、ジンは目の前にいる三体のシャドウ、女教皇〝残酷のマーヤ〟をアナライズして、結果を他の者に知らせる。

今日は久しぶりのタルタロス探索だが、目的は塔の調査ではなく、被験体がどれだけ戦えるようになったかの確認である。

メンバーは前回の失敗を踏まえて、最低でも所属が同じ被験体が二人以上になるようにしながら、他の研究室の者と組ませる変則的なチーム編成となっていた。

「了解。それじゃあ、チドリは後方待機で、メノウは敵全体に氷結魔法。止めはカズキとマリアで」

「うん。来て、デュスノミア！　マハブフ！」

ジンのアナライズ結果にミスがないか確認してから、湊が他のメンバーに指示を出す。

湊らのいるチームのメンバーは合計六人で、その構成は第一研のカズキとマリア、第四研のメノウとジン、第八研のチドリと湊となっている。
「テメェが仕切ってンじゃねェ!!」
言いながら、カズキは刃渡り三十センチほどのナイフを右手に持ちながら駆け出し、弱点の魔法を喰らったことで怯んでいたシャドウの仮面に蹴りを見舞い、吹き飛んだところで、さらに追撃として深々とナイフの刃を突き刺して一体を消し去る。
その間に、同じようにククリ刀を持ってシャドウへ接近していたマリアが、
「はぁあああっ!!」
と、戦闘になったことでバーサーカーのスイッチが入り、一閃一殺で二度振り切ると二体の敵を殺した。
そうして、周囲にシャドウの反応がなくなると、敵を殺しに行っていたマリアとカズキが湊らの元へ戻ってくる。
以前の探索とは比べ物にならないほど、個々の練度が上がっており。ここまで十数体のシャドウと戦闘を行ったというのに、誰一人息すらあがっていない。
その違いを最も実感しているのは、紛れもなく被験体たち自身だった。
「なンだこのチョロさは？　この程度じゃ、準備運動にもならねェぞ」
「ボクとジンがアナライズで弱点探ってるし。それを基にミナト君が戦闘を組み立ててるから、前みたいな行き当たりばったりの戦闘と比べちゃ駄目だよ」
カズキの言葉にメノウが苦笑で返すと、つまらなそうに「けっ」と吐き捨てカズキは背中を向けた。
しかし、カズキがそんな態度を取るのは、本人もそれが正しいと理解している証拠なので、誰もその態度を咎めたりはしない。
不必要に探索中にいがみ合う気は、誰にもないのだ。
他の者がカズキのそんな態度を見ている頃、湊はＣＯＭＰを起動させ、今いるフロアのマップに目を通していた。

下層フロアなので、今の湊なら一人でこのメンバーを守ることは容易い。
完全とは言えないが、この一週間の訓練でジンのアナライズの性能も上がり。メノウもジンほど性能は上がっていないが、最低限使える程度にはアナライズが仕上がっている事に加え、探査の方も極狭い範囲に限り調べられるようになってきている。
第八研の二人には遠く及ばないが、それでも索敵系のサポートを行える者が増えている。
これはかつてのタルタロス探索と比べれば、戦力に天地の差があると言えた。
「ミナト。今のやつで、もう敵はおらんようやけど。どないするんや？」
湊が助けにはいった満月の日と違い、今日のジンにはかなりの精神的な余裕が感じられる。
それは、気力・体力ともに十分である事と、湊という絶対の守護者が行動を共にしていることに起因するのだが。
アナライズには冷静さが必要なので、今回のこの余裕はむしろ理想的なコンディションと言える。
フロアマップを見ていた湊は、ＣＯＭＰをリストバンド状態に戻しながら、ジンの体調を確認しつつ口を開いた。
「うん。フロア自体にも、もうあんまり敵がいないっぽいからね。戦えることもわかったし、今日は戻ろうかな」
「あン？　おいおい、エヴィデンス様がなにビビってンだ？　お楽しみはこれからだろォが。このまま上にいる化け物でも面白おかしくブチコロシにいこうぜ」
「……それじゃあ、俺とカズキは探索を続行しよう。ただし、これは戦闘のためじゃなく、戦闘に梃子摺ってる被験体の回収が目的だ。だから、探索中の人間がいなくなったら帰るよ。皆は脱出装置まで案内するから、先にエントランスに戻ってて」
言いながらブーツの靴紐を結び直していることから、湊は本当にこのまま探索を続け、尚且つ戦闘に参加するつもりらしい。

カズキは探索の理由を聞いて微妙な表情をしたが、戦闘自体は確実に出来るようなので、気を取り直し楽しげに口元を歪めている。
今日のこのメンバーでの探索では、湊は殿を務めながら指示を出していただけだった。
直接の戦闘は全て他の被験体に任せ、自分はカグヤで探知しながら本日のタルタロスのマップを記録する。
タルタロスの地形は日によって変化するのだが、湊はもしかしたら規則性があるのではと思った。
そのため、こうやって来た時にはマップを記録して、後に同一の構造がないかを調べている。
「他のチームは……二つ上だね。けど、その次のフロアに少し強いやつがいるみたいだ」
「クハハッ！　ンなら、そいつもブチコロシておこうぜ。次の探索でほかのやつらが、先に行っちまったら危ねェからなァ」
カズキは他の被験体の安全など欠片も気にしてはいない。
唯一の例外として、被験体でトップの実力を誇っている湊と、自身と同列のタカヤとセイヤの三名だけは何かと気にしているが、それはいつか頂点に君臨するために倒すべき存在だと思っているからだ。
最近になって急に実力を上げ始めたチドリとマリアもチェックリストに入れてはいるが、カズキから見て、二人は湊の腰にひっついているオマケ程度の認識なので、ペルソナが巨大過ぎて召喚出来る場所が限られているスミレ同様に、湊らほど気にしてはいなかった。
そうして、言葉とは裏腹に口の端を吊り上げながら、戦闘狂であるカズキがそのような発言をした真意は、単純に自分が強敵と戦う事を望んでも、指揮を執っている湊が認める筈ないと考えたためだ。
底の知れない強さを持っている湊ならば、単独でタルタロスの上層フロアを目指す事が出来る。
しかし、湊は必要以上の戦闘を避けて、他の被験体の安全面を考慮して行動するので、それを逆手に取った搦め手でカズキは攻めた訳だ。
そんな、カズキの言葉の裏に隠された、「こう言えば、テメェは断れ

ねェよなァ？」という卑怯な発想に、他のメンバーが表情を険しくする。
湊も当然、その裏の意味を理解しているが、他の被験体の安全さえ確保できれば、少しくらい遊んでも構わないと思っていた。
そして、
「――――いいよ。じゃあ、そいつらも殺そう。皆の安全の為に」
瞳の色を蒼色に変えながら冷たく笑って答える湊に、他の者は戦慄した。
死を見透かす瞳。
自分たちに否応なく死を実感させ突き付けてくる、直死の魔眼は、バーサーカー状態のマリアも身を竦ませ正気に戻す。
カズキだけは、殺しの雰囲気を纏った湊に対し、強がりで笑いながら、
「ク、クハハハ！　イイぜ、やっぱオマエ最高だわっ！」
と、言っているが、その額には汗が滲み、表情が引き攣っている。
他の者のそんな態度を気にせず、湊は瞳を戻すと、チドリの腕をとって歩きだす。
遅れて反応した者が後に続いていくと、途中に出てきた数体のシャドウを、湊が部分顕現させたタナトスの攻撃で倒し、脱出装置まで案内した。
他のメンバーを先に帰した二人は、道順と現れたシャドウの耐性と弱点、その最低限の会話のみで上階を目指し。
別のチームを助けると、そのチームにいたタカヤとセイヤも同行したいと言ったので、四人で十階のフロアボスである魔術師〝ダンシングハンド〟を相手にした。
タカヤたちが梃子摺っていたのは、他の被験体を守っていたからで、個人の実力でいえば間違いなくこの四人組が被験体最強の組み合わせだった。
そんな四人を相手に、たった三体で戦いを挑んできたシャドウは、まるで下層フロアの雑魚のように簡単に葬られ。
転送装置を起動した四人はそのままエントランスに戻り、エルゴ研

へと帰ったのだった。
深夜――エルゴ研・会議室
被験体と共にタルタロスから帰って来た研究員は、一般の研究員のみで本日のデータを解析する作業を行い。
各室長と副長らは、再び会議室に集まっていた。
今日の議題はいうまでもなく、急激に向上した被験体の能力について。
データなど見なくとも、以前は満身創痍で帰って来た者たちの今日の姿をみれば、どれだけ無事に進められたかなど一目瞭然だった。
「さて、今日の探索で、被験体たちの能力が飛躍的に向上していることが実証されました。第四研のアナライズ能力を持っている二人も、ほぼ安定して解析できるようになってきたようですし。私の方でしている潜在的にアナライズ及び探知能力持ちを、実用可能レベルにするのも、もう少しで研究が進められそうです」
手元にある資料を他の者に見せながら、幾月は満足気に笑う。
今まで探索のたびに被験体を何人か失っていたのだが、今日の探索では全員が無事に帰って来た。
怪我をしていても、軽微だったので、湊が全員にかけた回復魔法で簡単に治ってしまい。また明日も探索が可能なぐらいだ。
勿論、データの解析などがあるため、連日で探索をさせる気はないが、出来るようになったという事、それ自体が研究の素晴らしい成果と言える。
そうして、幾月の持ってきた資料に目を通していた松本が顔をあげると、口を開いた。
「この〝召喚器〟は他の形式では試したのですか？　今のところ、エヴィデンスの製作したプロトタイプと、それと似た拳銃タイプを数機しか作っていないようですが」
「以前お渡しした資料に書いていた通り、ペルソナの召喚は死を意識することがトリガーとなります。具体的に、よりはっきりと死を意識させ、なおかつ黄昏の羽根を搭載できる構造でなくてはならない。そうなると、拳銃のマガジンを収める空間に入れるのが最も簡単なんで

す」
湊との会話で明かされたペルソナ召喚のプロセス。
死を意識することがトリガーであるのならば、召喚器は人を殺すための道具であることが望ましい。
湊が開発した拳銃タイプを知って、幾月もヘーガーの協力を得てから、ナイフや爆弾など手で携帯出来る兵器で他にも作れないかと考えた。
しかし、試作する前段階で、湊に「引き金を引く事で自分を殺す形をとるのが、一種の儀式のようなものになっているんだ」と、言われたため、ただ持つことしか出来ない爆弾などは候補から外された。
一応、ナイフだけは、グリップ部に黄昏の羽根を内蔵し、自分の首を切り裂く動作で拳銃タイプと似た事が可能だと分かったが。
刃を切れないようにしていても、力加減や扱いを誤れば怪我を負う事になるので、素直に湊の言う事を聞いておいたのである。
説明を受けた松本は、それでとりあえず納得したのか、再び資料に目を落とすと、続いてヘーガーが話し始めた。
「対シャドウ兵器に関してですが、我々のような適性しか持たない者でも使える物が、理論上は開発が可能となりました」
「本当ですか!?」
「ええ、ですが、あくまで理論上です」
子どもだけに戦わせている現状に不満を持っていた沢永は、ヘーガーの言葉を聞いて驚きながら思わず立ち上がっていた。
しかし、ヘーガーは沢永に冷静に返すと、副長の男にパソコンを操作させて、スクリーンにスライドを表示した。
「シャドウには通常兵器が効かない。しかし、被験体やズィーベンを始めとした対シャドウ兵装シリーズなどペルソナ使いの武器は効果がある。これにより、シャドウはペルソナ使いにしか倒せないと言われていたわけですが、影時間に対し一定の干渉力を持つ〝黄昏の羽根〟がその問題点を解決してくれました」
スライドで表示されたのは、召喚器の様に黄昏の羽根を内蔵した武器の設計図。

元々あった武器に、黄昏の羽根を内蔵する部分を加えて設計し直したものである。
「このように黄昏の羽根を搭載していれば、我々が使ってもシャドウにダメージを与えられます。しかし、我々にはペルソナの恩恵がありません。つまり、敵の攻撃に対し、何も対応が出来ない訳です。遠距離から撃とうにも、敵も魔法で遠距離攻撃ができるのですから、何の安全も保障されません」
「んっふっふー、少年がいうには、それならば被験体に持たせた方が効果が高いらしいですしねぇ」
笑いながら飛騨が性能について口を挿むと、ヘーガーは僅かに表情を引き攣らせる。
松本と違い、ヘーガーは幾月が連れてきた湊を、対シャドウ兵器開発のオブザーバーに据える事を容認するようになっていた。
様々な事が明らかになってきたとはいえ、知識と発想の点から言って湊の存在は今でも非常に大きい。
そのため、湊の協力で成果を上げるようになってきた第二研と第四研に遅れては拙いと、ヘーガーも意を決した訳だが、未だに苦手意識や敵意は自分の中で消化しきれていない。
名前が出るだけで表情に現れることから、言葉にせずとも他の者も事情を理解出来ていた。
「ええ、そうです。これを対シャドウ銃と呼びますが、対シャドウ兵装シリーズの腕に内蔵された武器の方がシャドウに対し効果がありました。これにより、ペルソナ使いは、その身体自体が黄昏の羽根のような効果を持っていることが分かります」
「では、その効果を仮に〝補正〟と呼ぶとして、何故、同じ対シャドウ銃を使っても被験体の方が威力が高いのですかな？」
自分たちもシャドウと戦えるようになる武器が完成すれば、シャドウと同じく影時間では通常兵器が効き辛くなるペルソナ使いもより管理しやすくなる。
表情は隠しながらも、内心でそのように思っていた松本が尋ねると、幾月が答えた。

「補正を持つ者同士だと補正は加算されていくんです。仮に、攻撃力がそのままシャドウに通った際の基準を１００％とした場合、弱点も耐性も関係なければペルソナの攻撃は１００％で通せます」
　幾月は席を立ち、ホワイトボードまで歩くと説明をしながら板書していく。
「ペルソナ使いも補正を持っているので、武器を使って攻撃すれば１００％ですが、ここに黄昏の羽根の補正が加わると１２０％や１５０％になったりするんです。我々とペルソナ使いの威力の差はこれですね」
「さらに言うのなら、補正は二次接触だと減少します。対シャドウ銃に普通の弾丸を込めて使った場合、黄昏の羽根の補正は銃本体に掛かるので、補正を受けた銃本体から補正を受ける弾丸の威力は７０％未満になり、我々が銃の威力をそのままシャドウに与えるのならば、対シャドウ銃ではなく、対シャドウ弾を使う必要があります」
　幾月の説明にヘーガーが補足を入れると、研究員らは一様に難しい表情をして聞いている。
　理論面では対シャドウ弾の存在は前々から上がっていたが、費用対効果を考え開発は断念されていた。
　それも当然で、黄昏の羽根はただでさえ入手困難な貴重品だ。
　例えシャドウに大ダメージを与える事が出来るとしても、影時間の研究がいつまで続くか分からない状況で、使い捨ての弾丸に使用することなど出来る筈もない。
　そんな事をするくらいならば、威力は落ちても、弾を補充すれば繰り返し使用可能な対シャドウ銃を量産する方が、よっぽど良いだろう。
「まぁ、いま言ったパーセンテージは仮に付けたものですが、ペルソナ使いごとに補正の強さも変わってきます。強さがそのまま補正の強さになると考えてもらって構いません。ですから、影時間にエヴィデンスが対シャドウ銃に対シャドウ弾を込めて使えば、ペルソナのスキルよりもかなり強力な一撃にだってなり得るのです」
　たった一発の鉛玉が、自分たちの研究しているペルソナよりも強力

な一撃を放つ。
話した幾月ですら顔に苦笑いを浮かべているが、補正が加算され増していくのならば、補正を足す事の出来ないペルソナの一撃よりも強力になることは十分に考えられた。
「近代兵器が超常の存在を打ち負かす……ですか」
呟いた松本の目には野心のようなものが伺えた。
湊の登場によって、松本は何度も辛酸をなめさせられてきた。
しかし、44マグナムなど途轍もない威力を持つ銃とその弾丸を対シャドウ仕様にすれば、流石の湊も完全に防ぐことは出来ず大怪我を負うだろう。
これまで自身のプライドを傷つけてきた相手と、正面から戦えるようになる糸口が掴めたことで、松本は組んだ手の下で小さく口の端を吊り上げていたのだった。
――第八研・被験体用寝室
室長らが会議室で話しあっている頃、第八研の被験体用寝室でも同じように、湊が被験体の何人かを集めて話をしていた。
これは、他所の所属の者でも、最近になって探索チームの組み合わせがバラバラになったことで、事前に申請しておけば他の研究室に一泊することくらいは可能になったためだ。
そして、集められたメンバーは、第一研のタカヤ・カズキ・マリアの三人と、第二研のセイヤ、第四研のメノウに湊とチドリを加えた計七人。
ベッドに腰掛けて座っている湊の横で、チドリとマリアが同じように座っているが、他の者は置いてあったクッションを使って床に座っており。
全員の視線が湊に集まるのを確認すると、湊は口を開いた。
「さて、この部屋のマイクとカメラは潰してあるから安心して話していいんだけど。単刀直入に言うと、俺はもう少ししたらこの研究所を出ていこうと思ってる」
『っ!?』
真剣な表情で静かに話す湊の言葉を聞いた他の者らは、全員が少な

からず驚きを感じたようで、その理由を尋ねたそうにしている。
マリアなど、不安そうに湊を横から見つめて手を握っている。
それを安心させるように手を握り返すと、湊は再び話し始めた。
「皆が訓練を受けている間、俺は色んな研究室でデータに目を通したり、質問に答えたりしてるんだけど。副作用を抑えた新しい制御剤がもう少しで完成しそうなんだ。だから、それが出来次第、俺は時期を見計らって影時間を利用してここを出ていく」
「ふむ……私たちを集めて話したということは、それに協力しろということですか？」
少しの間を置いてタカヤが尋ねると、湊が一度頷いて、
「うん。単体で出ていく事自体は簡単だけど、俺は被験体全員を脱走させようと思ってる。けど、流石に俺一人で誘導、制御剤の確保、今後のための武器調達に、研究員を抑えて逃げる時間を稼ぐなんて全部こなすのは無理だから、作業を分担して手伝ってもらいたいんだ」
皆に視線を向けながら笑顔で言った。
湊は一人でと言ったが、実際に逃げるときはチドリを傍らに置いて守りながら脱走するつもりだ。
なので、正しくは二人なのだが、そんな個人レベルで逃げ出す事は魔法で天井を破壊して空に逃げれば簡単に済む。
チドリも制御剤が不要になったので、最悪の場合、それでもいいが。出来れば全員を無事に逃がしたいと思っている。
よって、話をした相手に、協力してくれるか？
という、視線を向けていると、戦闘中とは打って変わって冷静な表情のカズキが最初に答えた。
「現段階でオマエが立ててる計画を教えろ。脱走つっても、仕事割り振ったヤツ以外もダラダラと固まって動くワケじゃねェンだろ？」
「まぁね。メインになるのは制御剤の確保だ。これが達成できなきゃ、脱走できても俺たち三人以外はペルソナの暴走で死ぬし」
自分の隣に座っている二人に視線を送ってから、湊が再び正面にいる者らに向き直ると、セイヤとメノウが頷く。
いくら安定して呼び出せるようになってきたと言っても、制御剤が

なければ未だペルソナをコントロールできない。
その点に関して言えば、タカヤやカズキといった被験体トップの実力を持つ者らも、それは同様だった。
そうして、事の重要性を全員が認識した後、タカヤが真っ直ぐ湊を見つめて発言した。
「ならば、制御剤の確保は我々三人の誰かが担当しましょう。研究員も我々の目的を理解し、一番に守ってくるでしょうから、戦える者が行った方が良い」
「だったら、速いやつの方が良いだろう。俺たちの中じゃカズキが最速だ。頼めるか？」
「オレとしては、研究員をブチ殺す方を担当したかったンだけどよ。……しょうがねェから、やってやる」
若干の不満を見せながらも、カズキも脱走の危険度を正確に理解しているのだろう。
湊が逃げ出しただけならば、研究員もコントロールできていないのでしょうがないという結論になる。
しかし、被験体全員が脱走を謀れば、失敗して研究所に取り残されれば、まず助からない。
故に、失敗は許されず。最も成功率が高いのならばと、セイヤの言葉にカズキも了承で返した。
「流石に単独ではいかせられないから、当日はメノウもナビゲートとして一緒に行って欲しい。確保したら、誘導と合流して先に外に出ておいて。それと、出来れば五つくらいに分けておいて欲しい。脱走後は五・六人の小グループに分かれて逃がすから」
「逃がす、ということは貴方が足を用意するのですか？」
「うん。乗れるようなペルソナを呼び出すから、それで街の外まで送るよ。場所は当日に決めるけど、合流は脱走から丁度二ヶ月後の同日の影時間。それまでは、影時間中に店から商品なりお金なり盗んで生き延びて」
合流までの期限を決めたこと、合流までの暮らし方を具体的に話したことで、計画がより現実味を帯びてくる。

自身が飛ぶ分も含めると、最低でもペルソナを六体同時に顕現させ、尚且つ別々の方向へ向かわせることになる。
常人の精神力では街の外まで持たないだろうが、湊ならばやり遂げる。
歳不相応な落ち着いた雰囲気で話すことにより、聞いている全員がそれを確信できた。
そして、自分たちよりも年下の湊が頑張るのなら、自分たちもそれに応える働きをしようと。タカヤとセイヤが自分たちの役割について話す。
「武器の確保は私がしましょう。セイヤは誘導を」
「いや、俺は足止めだ。狭い通路なら、俺のフレイは建物も壊さずに戦える。誘導はミナトがしてくれ」
「ゴメン。俺は皆を部屋から出したら、研究所のコントロールを奪って、全体の指揮を執りながら足止めしつつ施設の破壊を行うから、作戦内には組み込めないんだ。だから、マリア。君が誘導を担当してくれる？」
当初の予定よりも皆が協力的だったこと。それにより、湊は決行日はより自由に動けそうだと思ったため、誘導をマリアに任せる。
強さで言えば、マリアも全被験体中でもトップクラスだ。バーサーカー状態ならば、幼さが消えて冷静な判断も出来る。
それを踏まえ、湊が信頼した瞳を向けると、マリアは不安そうにしながら尋ねた。
「……また会える？」
「うん。無事に逃げられたら絶対に会える」
「……マリア、がんばる」
「うん、ありがとう」
両の拳を握りしめて意気込むマリアの頭を湊は撫でる。
すると、マリアは目を閉じて、気持ち良さそうにその感触を味わっていた。
計画の実行はまだ先だが、それ以降は当分会えなくなる。
本当ならば一緒に行きたいのだが、幼いマリアも計画の難易度は

しっかりと理解している。
そのため、我儘を言って失敗して二度と湊に会えなくなるくらいよりは、しばらく我慢して湊に褒めてもらおうと思ったのだ。
湊自身もマリアのそんな考えを理解しているため、頑張って我慢している少女を計画までの間、少し甘やかしてあげようと思った。
そうして、左手でマリアの頭を撫でながら、湊は皆に向き直り話を再開した。
「決行日は俺が決めるから、決まるまで他の人間には話さないで。人数が増えると情報の管理が難しくなるから、ばれれば直ぐにでも殺されるかもしれないし」
「ま、妥当な判断だなァ。ペルソナ使いって言っても、影時間外じゃオレらもただのガキだ。適性の付与効果のある影時間ほど動けねェし。平時なら、ペルソナを呼び出してなきゃ、銃弾で即オダブツだ」
平時と影時間とでの自分たちの強さを比較しながら、自嘲的な笑みを浮かべてカズキが話す。
聞いている他の者も頷いていることで、その情報は全員が正確に理解しているようだ。
ただ適性を持っているだけの研究員と違い、ペルソナ使いは影時間中は魔法だけでなく物理攻撃に強くなる。
大人でも一撃でダウンするシャドウの攻撃を喰らっても耐えられるのはそのためで、加えて、身体能力も平時と比べると強化される。
しかし、平時はペルソナ使いであってもただの子どもに戻る。
ペルソナを召喚すれば、召喚している間だけ僅かに付与効果が働くが、影時間ほど強化されるわけではないので、大人と子供の力の差を埋めるのは難しい。
よって、実行前にばれて平時に決行せざるを得なくなる状況は、なんとしても未然に防ごうと考えた。
「皆には決まり次第教えるけど、他の皆には三日前くらいの影時間の探索中に教えてやって。殆どは誘導について行って外に出るだけだけど、スミレとかには外に出たらペルソナで皆を守ってもらったりすると思うから、完全に守ってもらう側って意識だと困るし」

「途中で倒れちゃった人はどうする？　回復はボクらはあんまり得意じゃないし。ミナト君を待つ時間もなさそうだけど」
「その時は、おいていくしかありません。冷たい言い方ですが、カズキとそのナビ役の貴女は、他の被験体を盾にしてでも目的を達成し生き延びねばなりません。我々の役目も勿論重要ですが、私とセイヤは最悪研究員を巻きこんで死んでも構わないのです。十を生かすために一を切り捨てる。この計画はそういった考えで動かなければならないものです」
タカヤがメノウの言葉に静かに返すと、セイヤもそれに頷いた。
死んでやるつもりは勿論ない。しかし、それでも覚悟だけはしておかなくてはならない。
ここにいても未来はなく、シャドウと戦って死ぬか、薬の副作用で緩やかな死に身体を蝕まれていくだけだ。
それならば、命懸けだろうと、〝生きる〟ために湊の計画に乗るべきだ。
逃げて全員が無事に外に辿り着けるとは思えない。逃げた先に今以上の苦難と絶望が待っているかもしれない――――だが、
「それでも、俺はここで君らにただ死を待たせるつもりはない。ペルソナは死と向き合うことで召喚できる。死と向き合えるということは、生きているということだろ？　ここでの生活を生きていると言えるか？　俺はそうは思わない。いまのここでの生活は生かされてるだけだ」
湊の瞳に強い意思が宿る。
元は一人の少女の為だった。いや、今も本当はそうなのかもしれない。
しかし、他の者も助けたいと思う事は贅沢だろうか？
自分一人で皆を助けようとするのなら傲慢かもしれない。それはしっかりと理解している。
だから、湊は助けようと思う相手にも助力を願った。
「だから、勝ち取ろう。既に死んでいった者たちのためにも、俺たちは生きるんだ。今という瞬間を生きて、生きて、生き足掻いて、自分が

誇れるような、望む最期を迎えられる様に」
聞いていた者らの心に湊の言葉は不思議と響いた。
ただ怠惰に生きることを許さない。普通の小学生が、生と死に価値を持って生きろと言ってくるなど異常だ。
けれど、ここにいた者は、湊の言葉を胸に刻み。今日、いまこの瞬間より、生きるために戦う事を決意したのだった。

第十八話　飛騨の願い

８月７日（月）
夜――食堂
湊が幾月や沢永と話をして研究に協力を始めてから、約二週間経った頃、ついに新たな制御剤が完成した。
これは、被験体らが安定した召喚を行えるようになり、召喚器という補助媒体が量産されたことで、召喚面のサポートを薬で行う必要がなくなったため開発が始まったものだ。
純粋にペルソナの制御のためだけに調合したので、以前よりも副作用がぐんと弱くなり。このまま常用していても十年は生きられるだろうと見られている。
当初の薬ならば三年も持たないと言われていたので、これはとても大きな進歩だった。
勿論、いまだ研究段階の薬なので、今後、さらに副作用を抑えた新薬を開発することも考えられる。
しかし、
（とりあえずは今回ので良いだろう。薬の開発データをコピーして抜き出しておいたし。さらに改良した新薬は脱出後に何とか出来るところを探そう）
テーブルについて食事を取りながら、湊はそんな風に考えていた。
今日はこの後、影時間にタルタロスの探索がある。
以前、部屋に呼んだメンバーにはその時にでも話せばいい。ここで話しては、監視の研究員や黒服に聞かれる恐れがあり、いたる所にあるカメラやマイクに記録が残るかもしれない。
失敗が許されない以上、何事も慎重に行わなければならず。そんな些細なミスを湊は犯す気はなかった。
だが、湊と普段から一緒にいる少女は、どこかいつもと違う様子に気付き、心配そうに声をかける。
「……考え事？」
「え？　ああ、いや。今日の探索メンバーについてちょっとね」

「今日は第二研とかの奴らと一緒でしょ。あんまり強くないから、私たちがメインになると思うけど」
苦笑して話を誤魔化した湊だが、メンバーの構成について事前に連絡が行われるようになったため、チドリは説明してからスープに口をつける。
別にメンバーに対し不満を口にしたりはしないが、チドリ自身も弱い者らと組むのはフォローが大変だと少し面倒に思っていたらしい。
なので、誤魔化しで言った湊の言葉も同意できる部分があり、素直に信じたようだ。
（ふぅ、結構危なかったかな。一緒にいる時間が長い分、俺の内面を読んでくるかもしれないから、今度から咄嗟でも仮面を被れるようにしておかなきゃ）
案外、大人よりも子どもの方が感情の機微に敏感であったりする。
その事を忘れていた湊は、内心ひやっとするが、今後のことも考えて、すぐに心の仮面を被れるようになろうと思った。
――第八研究室
被験体たちが食堂で夕食を食べている頃、飛騨は一人研究室に籠もってパソコンを操作していた。
画面には過去の制御剤についての情報と、各成分がどのような部位に反応して被験体がペルソナをコントロール出来るようになっているのかという詳しい説明が書かれている。
そうして、今までしていた作業に一区切りつくと椅子を引き、席を立って大きく伸びをする。
（んー……はぁ。ま、なんとか少年の出発には間に合いそうですねぇ）
伸びをしてからも、長時間の作業で固まった身体の筋肉を解すように、腕や腰をまわしてストレッチをする。
独り言を呟いた飛騨は、いつもの楽しげな笑みとは違った、どこか慈愛の含まれた微笑を浮かべていた。
飛騨は被験体を少年・少女と呼ぶが、基本的に少年は湊のことを指す。
その湊が出発すると言えば、今度の満月に計画している被験体全員

によるエルゴ研からの脱走のことだ。
しかし、湊は飛騨にも計画について漏らしてはいない。
ならば、飛騨はどうやって計画について知り得たのか？
その答えは、先日のマリアの誕生日の一件が関係していた。
（んっふっふ、少女が制御剤が不要になったらすぐに出ていくと思いましたが、まだ動かないということは他の子どもたちも一緒に逃がすつもりなんですねぇ）
そう、飛騨は湊が改造を依頼してきた時点で、いつかチドリと共にここを出ていくつもりだと察していた。
被験体トップの三人を同時に相手しても戦えるほど実力を持っているのなら、逃げ出すこと自体は簡単だろうが、最もネックになるのはチドリが制御剤を必要としていた事だ。
制御剤について飛騨も度々相談を受けていたので、湊の脱走計画の日付設定に制御剤の完成が関係していることも分かっていた。
けれど、結局、それは天から降って来た蕾型の黄昏の羽根、『ペタル・デュ・クール』によって解決することになる。
自身の見ている目の前で、チドリとマリアが安定したペルソナ使いに変化したことで、これで二人ともお別れかと思ったのだが、それ以降も湊は他の研究室に顔を出して研究を手伝っていた。
飛騨が湊の思惑に気付いたのはその時で、その日から湊の旅立ちに必要なものを色々と集めるようにしていた。
いまパソコンで編集してまとめている薬のデータもその一つで、被験体らが無事に逃げられれば、そう遠くないうちに必要になるだろうと、一般の医者でも調合できるように詳しくデータを載せていたのだ。
（後は、住む場所ですが……そっちは頑張ってもらうしかありませんねぇ。まぁ、少年と少女くらいなら、預かってくれる当てもなくはないですが……）
そう心の中で呟くと、飛騨は机の引き出しを開けて、中にあった黒い革の表紙の手帳を手に取る。
そして、研究所の電話ではなく、自分が一般用に使っている携帯電

話を白衣のポケットから取り出すと、とある番号に電話をかけた。
夜とはいえ、まだ八時前なので寝ていることはないだろうと数コールの間待っていると、ブツッ、と音をたてて電話が繋がり、電話の相手が声をかけてきた。
《はい、もしもし？》
「どうもお久しぶりです」
《確かに久しぶりだけど、何の用だい？　とっくに研究所を離れた私に連絡してきたってことは、何かしら面倒な用があるんだろう？》
「んっふっふー。流石に鋭いですねぇ」
相手の言葉を聞いて、飛騨は楽しそうに笑って肯定する。
電話から聞こえてくる声は、飛騨より少し若いと思われる女性の声で、彼女の言葉から、相手も過去にエルゴ研に所属していたことが伺えた。
けれど、既にエルゴ研からは離れている。だから、余計な面倒は押し付けるなという意思が、言葉の端々から滲みでていた。
普段はふざけているが、飛騨も空気を読むことや、相手の言葉の裏にある感情を読みとることくらいは出来る。
なので、ここまでストレートに言われれば、当然、相手がこちらの頼みを嫌がっているのは分かるのだが、今回はそれを無視することにした。
「実は、いまウチでは人工ペルソナ使いの研究をしているんですがね。近々、その子供らが脱走するんで、その中の二人を預かって貰えないかと思いまして。ああ、ご心配なく。その子どものうち、一人は世界初の天然覚醒者ですし、もう一人も後天的に制御できるようになっているので、暴走の心配はありません」
《はぁ？　嫌だよ。なんで、見ず知らずの子どもなんて預からないといけないんだい。それなら、あんたのコネで学会の誰かに預ければいいだろう？》
「影時間に関わっていない相手には難しいんですよ。それに、多分、少年と貴女は面識があります。彼は学校で岳羽詠一朗と何度か話したことがあると言っていましたから」

《っ!?》
飛騨の告げた事実に、電話の向こうでは息を呑む音がした。
湊がその事を話してきたときには飛騨自身も驚いたが、ここに来る前まで湊は月光館学園の初等部に通っていたのだ。
エルゴ研の研究施設を置いていたのも、同じ月光館学園の高等部なので、少し敷地内を移動すれば出会うこともあり得ただろう。
そして、湊から聞いた相手の身体的特徴や人柄も、飛騨の知っている岳羽詠一朗と見事に一致していた。
研究と無関係と思われた少年が、密かにそうやって繋がっていた事で、世界の狭さを感じたものだが、電話で話している飛騨に感傷に浸っている暇はない。
「初等部の男子生徒で、前髪が目に少しかかるくらいの長さの子どもです。彼が話していた子どもなど、そう多くはいないでしょうし。休憩中の彼をよく呼びに行っていた貴女なら思い当たる節があるんじゃないですか?」
《……確かにいたよ。主任の娘さんと同い年だからって、よく構ってた子が一人ね。主任は八雲君って呼んでたけど、私は実際に話したことは殆どないよ》
反応するまで少しの間を開けてから、女性は湊の本名を呼んだ。
チドリが湊を『八雲』と呼んでいたのを聞いたことがあったため、相手がそれを答えたことで飛騨の中で話が繋がり。湊と岳羽詠一朗に交友があると分かってから疑問に思っていた適性についての謎が一つ解けた。
やはり、湊の適性は両親から受け継いだ物ではなかったのだ。
湊は人工的に適性を入手した岳羽詠一朗と接することで、知らず知らずのうちに感化され適性を入手していた。
そして、あの日の事故で死んだ両親は、適性を入手した湊と接していたことで、適性を入手したのであって、二人の適性が湊に遺伝した訳ではなかったのだ。
子どもは適性を入手しやすく、ペルソナも発現させやすいという当初の仮説は間違っていなかった。

誤った仮説で子ども等を集め、死なせてしまっていた訳ではないと分かり、飛騨は僅かに安堵する。
現場で話を聞いたアイギスが勘違いするのも無理はない。どう考えても、普通の子どもが研究主任と実は知り合いだったと思う筈がないのだから。
「その子が天然覚醒者です。あの、彼が死んだ日に、少年とその家族がアイギスとデスの戦闘に巻き込まれました。両親は乗っていた車の爆発で亡くなりましたが、車外に投げ出されていた少年をアイギスが回収し、その場でペルソナを発現させたのです」
《ま、待っとくれ。あの事故の日に戦いに巻き込まれて覚醒した？　それに両親は死んだって、家族全員が適性持ちだったのかい？》
「ええ。ですが、少年と彼の繋がりでやっと理解できました。少年は純粋な自然適合者ではありません。素質はあったのでしょうが、彼と接しているうちに適性が目覚めたんです。両親は、その目覚めた少年と接していてうつったんでしょうね」
《私らが、あんな場所で研究してたから……？》
既に離れたといっても、湊が適性を得ることになった時期には、まだエルゴ研に所属していた。
正確にいえば、研究主任であった岳羽詠一朗が、素質を持っていた湊と話をしていたから起こった事態なのだが、無関係とは言い切れない。
そもそも、あんな子どもの多い場所で研究していたこと自体が間違いなのだから。
研究場所を決めたのは桐条グループなので、一研究員だった女性に非はないのだが、それでも真面目な性格なのだろう。
自分もその一因を担っていたとして、女性は贖罪のために飛騨の頼みを受けることに決めた。
《……わかったよ。八雲って子と、もう一人だね？　その二人だけなら、少しの間、預かってやる》
「ご当主も少年の素性を知っているようですが、私たちに隠しているのでね。追手は出さないと命じると思いますが、室長の中には独断で

動く者もいます。なので、十分に気をつけてください」
《ご当主が？　確かにご令嬢も通っている学校の生徒だったから、簡単に調べられるだろうし、知っていてもおかしくはないけど。なんで隠してるんだい？》
　二人の話す当主とは、このエルゴ研の母体である桐条グループ総帥の桐条（きりじょう）　武治（たけはる）のことだ。
　その娘は、桐条（きりじょう）　美鶴（みつる）といって、湊の一つ上の学年で、いまも月光館学園初等部に通っている。
　なので、湊と美鶴は同じ学校の先輩後輩だが、面識は特になかったので、娘が他所の街にいて学校自体とは無関係でありながら岳羽詠一朗と湊が出会ったというのはある意味奇跡だった。
「わかりません。前にプライベートラインで連絡したら、少年の怒りに触れぬよう注意しろとは言われたんですがね。ペルソナ持ちとはいえ、何をそこまで恐れるのかさらに聞くと、少年は〝名切り〟だと言っていたんです」
《〝名切り〟って、どういう意味だい？　別に普通の子なんだろ？》
「普通とはちょっと言えませんが、常識は理解してますよ。それで、名切りというのは、ご当主も言葉を濁していたのではっきりとは分かりませんが、どうも家系断絶を担っていた者って意味らしいです。分かりやすくいうと殺し屋、暗殺者ってとこですかね」
《あ、暗殺者？》
　これから預かることになる子どもが人殺しのプロフェッショナルと聞いて、流石の女性も声が引いている。
　飛騨もその心情は大いに理解出来るので、預ける前から脅すような事になり申し訳なく思うが、湊について自身もよく分かっている訳ではない。
　分かっているのは、ここに来てからの湊のことだけで、過去や家系のことなど、知らない部分の方がむしろ多いのだ。
　けれど、このままだと相手が言葉を撤回しかねないので、しっかりとフォローを入れることにする。
「いまの少年なら人も殺せるでしょうが、性格はいたってまともです

よ。もう一人の少女を守ることを絶対としていますが、精神鑑定も正常の値が出てます。彼がご当主のいう〝名切り〟だったとしても、それは生まれた家が過去にそういった一族だったという事でしょう。桐条家は古くから続く名家ですし、そういった不吉なことには敏感なんですよ、きっと」

《あー……まぁ、確かに今のご時世に暗殺者一族って言われても、普通はピンとこないね。あっても、身体能力が高いとかってくらいだろうし》

「よっく分かりましたねぇ。色々と身体をいじってるんでー、見た目は小学生ですが、スピードに関しては普通に成人男性以上の身体能力はありまーすよ？　反射神経なんて野生動物超えてますから、はい。ああ、データとかは、後で送っておきますからご心配なさらずにぃ」

女性が湊の身体能力について話すと、途端に飛騨がいつものふざけた調子で湊のスペックを自慢げに説明し出す。

湊は自分の生み出した最高傑作だが、それをいままで自慢することが出来なかった。

しかし、今回はこうやって初めて自慢する機会を得た。

すると、今まで抑えていたものを発散させるかのように、楽しそうに満面の笑みで相手に説明するのだが、相手の女性も飛騨とはそれなりに古い付き合いだ。

こうなったときの飛騨の対処法くらいは知っていた。

《はいはい、後でちゃんと読んでおいてあげるよ。……ん？　身体をいじった？》

「ええ、事故から半年意識を失っていたので、筋力や体力がかなり低下していたんですよ。ですが、少年は戦える身体にして欲しいと、改造を依頼してきたのでその話しを受けた訳です」

《なっ!?　アンタ、依頼されたからって子どもになにしてるんだいっ！　それでも一応医者だろ！》

飛騨の話が本当ならば、ただの子どもが部分的にでも成人男性以上の身体能力を持つなど異常事態である。

改造といっても、スポーツ選手のように徹底的に身体を鍛え上げる

『肉体改造』ならば、子どもの身体でそこまでの能力を得るのは不可能。
　そうして、考えられるのは、違法な手段によって無理矢理に能力を引き上げたという事だが、仮にも医者である人物が、頼まれたからと言ってそのような事をしたとは、完全に正気だと思えなかった。
　そんな風に、女性があまりに大きな声で怒鳴って来たことで、受話器を当てていた耳がキーンとなりながら、飛騨も自嘲的な笑みを僅かに浮かべると、当時のことを少し話す。
「私も本当に良かったのかと悩まない日はありませんよ。ですが、少年は、私を頼って来たんです。自分の寿命を削ってもいいから、少女を守れるようになりたいとね。あんな風に言われて断ることは出来ませんでした」
《寿命を削る？　まさか、本当にそんな事をしたのかい？》
「正確な時期は分かりません。ですが、そう遠くないうちに、無理な改造でガタが来ると断言できます。一度始まったら崩壊まで一気に進むでしょう。よって、医者としての見立てでは彼の寿命は二十歳前後かと」
　飛騨が湊の寿命について述べると、電話の向こうから再び息を呑む音が聞こえた。
　実際はもっと短くなるはずだった。けれど、エールクロイツが適合した事で、僅かに肉体の変異が起こり、初期の見立てよりも寿命が延びたのだ。
　その時には飛騨も非常に喜んだが、湊が短命である事は変わらない。
　依頼を受けて改造を施したのは自分だが、いまの医療技術ではエールクロイツ以上の寿命を回復させる延命措置は出来ないと分かっているだけに、声に後悔の色が混じる。
「彼の命を削った私が頼むことが間違っているのは分かっています。ですが、彼らをお願いします。少年の願いは、少女が明るい温かな日常の世界で生きることなんです。私ではそれを叶えてやることは出来ない。ですから、どうか、どうかお願いします！　人類のために家

族を失ったあの子の、たった一つ願いを叶えてやってください！」
心からの叫び。目の前に相手がいれば、きっと飛騨は地面に頭をこすりつけて土下座していただろう。
それほどまでに、湊とチドリの幸せを願い。もっとも信頼できる相手に今回電話をかけたのだ。
湊が顔見知りであることや、岳羽詠一朗と知り合いであったことなど、色好い返事を貰えるために練った姑息な策でしか無い。
既に幾人もの子ども等の血に濡れた手では、湊の想う明るい温かな日常に二人を連れていく事は出来ないと思ったからこそ、研究には参加していたが、人を殺してはいない彼女に託そうと決めた。
それが子ども等には隠していた飛騨の本心だった。
《……あんたがそこまで言うなんてね。本当は自分が一番傍にいてやりたいんだろう？》
「私にはその資格がありません。明るい温かな日常、そこへ行くには、私の手は血に濡れ過ぎている」
《きっと、子どもらは気にしないよ。八雲って子はあんたに感謝すらしてるだろうさ》
「それでもです。私は彼らに危険が及ばぬよう残って研究を続けます。そして、いつか影時間を消す事が出来たら。その時に一目会って謝罪をさせてもらえれば結構です」
女性の言う事は、確かにそうだろうと飛騨も確信に近いものをもっていた。
実験や研究員に対し、湊もチドリも敵意のようなものを持っているが、自身に対してそれを感じたのは会ったばかりの頃だけだ。
今では、普通に知り合いのおじさんといった風に話しかけてきて、たまにトランプで遊んだりもしている。
お茶やお菓子を準備してやった後は、子どもたちの世界にいるべきではないとして、パソコンの前で作業しがてら、ばれないように遊んでいる様子を眺めていたが、そんなときでも遊びに誘ってくることもあった。
家族を持たぬ飛騨にとって、その温かさは、他の自分の全てを犠牲

にしてでも守りたいと思えるものだった。
かつての同僚である岳羽詠一朗が、前当主の思惑を知って必死に阻止しようとしていたのも、きっと今の自分と同じ気持ちを持っていたからなのだろう。
今になって、ようやく飛騨はそれを理解出来た。
「……決行日は聞いていませんが、私の予測では次の満月の日だと思っています。満月の影時間はシャドウが活発化しますから、戦う力のない我々は影時間が明けるまで追う事ができません」
《なら、二人が来るまでに諸々を送ってこれるようにちゃんとしておくんだよ。まぁ、ご当主が情報隠蔽してるなら、八雲の方は経歴不明だろうけど、女の子の方は分かってるだろ?》
「実は、被験体は全員戸籍を抹消しています。ですが、ちょっとコネを使って新しい戸籍を用意しました。少年も改造後に名を有里湊に改めたのですが、そちらも用意してあります。ですから、普通に学校へ通ったりも出来るでしょう」
《また無茶を……。まぁ、それであんたがどれだけ本気なのかが余計に分かったけどね。子どもらにはこっちの素性とかも先に伝えておくんだよ。それにタダ飯食らいは置いてやらないからね。そっちが落ち着くまではいいが、少ししたら店の手伝いをさせるよ》
「……はい、ありがとうございます」
打算もなにもない、相手の善意に感謝し、飛騨は静かに通話を切った。
通話を終え、ポケットに携帯をしまうと、ソファーまで進んでそこに腰を下ろす。
飛騨はだらけた様子で座り、天井を見上げながら疲れたがどこか満足そうに息を吐いた。
「……ふぅ」
湊の望む未来。
そこへと続く道を作る手助けが出来ることが何よりも嬉しい。
本当は湊はそれを必要としていないかもしれない。
なにせ、湊の背後には自分たち以外のペルソナについて詳しく知っ

ている者たちがいるようだから。
だが、湊は自分の用意した物を笑顔で受け取ってくれる気がする。
それだけで飛騨は、ここ最近の準備に追われて溜まった疲労を忘れられるほどの喜びを感じられた。
（本当は八雲の方で準備してあげたかったんですがねぇ。名字を調べるために、私が初等部の名簿を漁って他の研究員に君の素性がばれても困りますから。有里湊で我慢してくださいね）
独り心の中で呟いた飛騨は、湊に対し僅かに申し訳なさそうにする。
飛騨が依頼して作ってもらったのは、有里湊と吉野千鳥の戸籍だ。
チドリの方は過去のデータを漁れば、削除されたものを発見できたので、それを基に作りなおせば良かっただけだった。
しかし、湊はチドリに対しても八雲としか名乗っていない。
あのムーンライトブリッジの事故以降で、名字を名乗ったのはベルベットルームの契約の署名のときのみ。
それも、英語の筆記体で『Ｎａｇｉｒｉ』と書いただけなので、正確に湊の本名を把握しているのは、今のところ桐条武治だけだろう。
（まぁ、名切りの一族だったなら、読みはナギリで、それに別の漢字を当てはめて名字にしたんでしょうねぇ）
そんな風に湊の本名を予想しながら、飛騨は席を立つと、冷めたコーヒーを淹れなおし。再び作業に取り掛かり始めたのだった。

第十九話　前篇　脱走―兆し―

８月１５日（火）
夜――第八研・被験体用寝室
ついに、作戦の決行日となった。
現在の時刻は、午後十一時。後一時間で影時間となる頃、ベッドに腰掛けながら、目を閉じて湊は意識を集中していた。
（まず最初に全ての研究室を回って被験体を逃がす。その後、分かれて避難経路・武器・制御剤の確保に動く。俺はチドリを連れて、足止めしながら施設の制御系を奪う。どれだけサポート出来るか分からないけど、俺の働きで皆の作戦の難易度がだいぶ変わってくるな）
閉じていた目を開け、自身の後ろで穏やかな寝息を立てているチドリとマリアの寝顔を見つめる。
マリアとは今日でしばらく会えなくなるが、マリアもそれを了承していた。
年齢的には同い年だが、精神的にマリアはまだまだ未熟で、直前になって我慢できなくなることも考えられたが、マリアはしっかり自分の与えられた役目を全うしようと意気込んでいた。
（強い子だ。この子も絶対に守らなきゃ。約束をちゃんと守るんだ）
寝ている少女の頭を撫でながら、作戦の成功を祈り。少しでも成功率を上げるため、時間が来るまで計画の手順を何度も確認していた。
そして、影時間の二十分前に二人を起こすと、準備をさせ。影時間になると同時に、研究室を抜けだした。
影時間――エルゴ研・第二研究室
《ビーッ、ビーッ、ビーッ！》
「ん？　何の騒ぎだ！」
研究室のスピーカーから聞こえてきた警報に、幾月が状況を確認するよう他の研究員に指示を出す。
そして、モニターまで走って、研究所内の状況を示す画面を表示させると、それと同時に研究室の扉が音をたてて倒れてきた。
金属製の扉が固い床にぶつかる音に、研究員の視線が行く。

その先には、蒼い瞳をした湊が、無銘の短刀を手に持って立っていた。
「エ、エヴィデンス……」
「お前らに用はない。邪魔すれば殺す」
湊の登場に驚くのも束の間、研究室の中へと走って入って来た湊は、そのまま奥の被験体たちのいる部屋へと向かう。研究室の広さと規模こそ違えど、他の研究室の中で第二研だけが、第八研と同じく被験体らの部屋が隣接しているのだ。
そして、短刀とはいえ、相手が武器を持っていることで、研究員らが怯えていると、奥の扉の前に到着した湊は短刀を数回振り。金属製の扉が、まるでバターで出来ているかのように、一切の抵抗も感じさせず音もなく切り裂いた。
斬られた扉は、研究室の扉と同じように、音をたてながら倒れて崩れる。
幾月の立っている場所からでも僅かに見えたが、扉の中ではこの時間は寝ているはずの被験体らが皆立ちあがって待っていた。
「全員行くぞ！　指示通り分かれて進め！」
『おおっ!!』
湊の言葉に被験体たちも声を上げて答え、次々と脱走してゆく。
その表情は、どこか決意の色を見せており。被験体らのそんな表情を初めて見た研究員らは、動揺した。
だが、事態に気付いた幾月は、机の裏にあった被験体が脱走したことを知らせるための緊急ボタンを押す。
いくら動揺しようが、最低限の責任は果たす。伊達に室長を務めている訳ではないのだ。
《被験体が脱走しました！　被験体が脱走しました！　各員、装備を整え。被験体の鎮圧に向かってください！》
幾月がボタンを押した事で緊急時の音声が流れ、先ほどの警報以上に、研究所中に事態が知れ渡った。
第二研の最後の被験体が廊下へと出ていくのを待っていた湊が、その事実に表情を険しくさせ、舌打ちをしている。

「チィッ、余計なことを！　チンロン、マハガルーラ！」
《ウォォオオオオオオオオ！》
湊がカードを砕くと、青龍が現れ、室内の温度を下げながら口元に収束した空気が、解き放たれると同時、荒れ狂う風となって研究室内の全てを蹂躙していく。
「ぐあっ!?」
ファイルに綴じられていた書類が風によって舞いあがり細かい破片となって散り、何かを計測していた機械が圧力に耐え切れず、煙を出して爆発する。
さらに、その場で堪えきれなかった研究員が吹き飛ばされ、壁や床にぶつかり、身体のいたる所に怪我をして血を流していた。
幾月も倒れた衝撃で眼鏡の右のレンズにヒビに入り、視界が安定しない。
だが、なんとか痛む頭を手で押さえながら顔を上げると、ペルソナを消していた湊に廊下からやってきたチドリが声をかけていた。
「湊、時間がない」
「わかってる。行こう！」
そういうと、湊は高同調状態でカグヤを呼び出し、腕にチドリを抱きながら飛びあがり廊下へと出ていった。
＊＊＊
先に出ていった者を飛んで追いかけてきた湊は、先頭にいたセイヤに合流すると、隣を飛びながら並走する。
後ろから研究員や黒服が追ってきているようだが、カグヤで探知している湊には、追い付かれる前に合流できることが分かっていた。
「ミナト！　向こうは先に行ってるのか？」
「制御剤は、予定通りカズキとメノウと他に二人くらい確保に向かってる。武器はタカヤにジンと三人くらい付いて行った。他はマリアとスミレが先頭になって外へ向かってるよ」
隣を走りながら話しかけてきたセイヤに、訓練で使っていた合成樹脂製の武器を渡しながら返す湊。
本物の武器は、タルタロス探索のときしか渡されず、タカヤたちは

それを求めて今も走っているのだが、訓練に使っていた合成樹脂製の物でもないよりはマシだ。
そのため、湊は事前にいくらかの武器をマフラーに収納して、今回の作戦時に被験体に配った訳である。
そして、ただ一人本物の武器を持っている湊は、瞳の色を金に戻し、手に持っていた短刀は今はお姫様抱っこされたチドリが持っている。
湊がここに来るまでに被験体らを逃がした順番は、第一・第四・第五・第二研の順。
第一と第四を優先したのは、制御剤と武器の確保員がそちらに固まっていたからで、第二研が最後だったのは、施設の部屋が最も離れていたためである。
「足止めに何人か残ってるみたいだから、セイヤも後続を先導の脱出部隊に合流させたら、何人か連れて足止めに向かって。俺はチドリと先に行って、施設の機能を奪う！」
「わかった！　そっちも頑張れ。無茶して死ぬなよ！」
手をあげて言って来たセイヤに頷いて返し、湊は再びカグヤを加速させると、第二研の者らを後ろに残し廊下を進んでいく。
施設の機能を奪うには、防火シャッター等の管理を行っている区画に入る必要があるが、そちらの警備は他よりも厳重だ。
施設の倒壊を防ぐため、あまり強力なペルソナのスキルで戦う訳にもいかない。
「……この先に研究員が何人もいる。武器も持ってるみたい」
「わかってる。このまま突破するから、しっかり掴まっててて」
湊と同じように、ペルソナを呼ばずとも探知出来るチドリが、進む先の通路を見つめながら注意してきたことで、言われた湊も頷いて返す。
探知で把握できた人数は六人。全員が研究員なので、戦闘に慣れている黒服と違い、少しでもビビらせることが出来れば突破は容易いだろう。
そして、さらに進むと、探知の結果通りに拳銃を持った白衣の男たちがいた。

「き、きたぞ！　全員撃てぇ！」
「し、死ねぇ！」
「っ、ガルーラ！」
相手が撃ってきたことで、チドリが首に回している腕に力がこもるのを感じながら、湊はカグヤに魔法を放たせる。
狭い通路なので逃げることも出来ずに、放たれた風で全員が吹き飛び倒れていた。
それを確認し、敵を無力化出来たことで、チドリの身に危険が及ぶ心配の無くなった湊はとりあえず安堵する。
そして、相手が発砲してきても速度を落としていなかったので、研究員らの上にきたとき、湊はそのまま素通りするかと思われたが、チドリの予想とは裏腹に、湊はペルソナを出したまま何故か床に降りた。
「どうしたの？　急がないと、マリア達の方がもたないわよ？」
降りると同時に、お姫様抱っこを解除されたチドリが、一刻を争う場面での湊の行動を怪訝に思い尋ねる。
すると、魔法を喰らって倒れながら呻いていた研究員の持っている銃を手に取り、湊が口を開いた。
「これ、黄昏の羽根を積んでる……。クソッ、開発はまだしてなかった筈なのに、もしものときは被験体を制圧出来るようにって、隠れて対シャドウ銃を量産してたんだ！」
湊が研究員の銃が気になった理由、それは敵の撃ってきた弾の一発がカグヤの左肩に命中した際、受けたフィードバックダメージが想像よりも高かったためだ。
ただの拳銃であるのなら、ペルソナが喰らっても触れた感触があるだけで、ダメージと呼べるものは受けない。
しかし、湊はカグヤが銃弾を受けたのと同じ部位に、今も鈍い痛みを感じている。
その理由が、湊に隠れて量産されていた黄昏の羽根搭載型の拳銃、対シャドウ銃による攻撃だったのだ。
世界のためと謳っておきながら、結局は、管理しきれなければ子ど

もらを殺すつもりだったことを改めて理解し。
湊は、怒りながら研究員の持っていた銃を全て回収すると、カグヤに命じた。
「マハジオ！」
《ルルゥ！》
両手を前に突き出したカグヤの手から、青白い閃光が走り、倒れていた研究員らの意識を刈り取った。
そんな、突如起こった事態に、チドリは驚き目を僅かに見開いていたが、直ぐに冷静さを取り戻すと、気絶した者らに怒りと憎しみの視線を送っていた少年を見つめ、強く拳の握られた腕を取って話しかける。
「……湊」
「……分かってる、行こう」
それだけ答え、湊は預けていた武器を仕舞ってチドリを抱き上げると、再び管制室を目指し、カグヤで飛行しながら移動を開始した。
――薬品開発部
制御剤の確保のためにやってきたカズキとメノウ。さらに、第一研に所属している男子が二人いるが、ここまで大した戦闘もなく無事に辿り着くことが出来た。
開発された制御剤は特別な薬品なので、耐火性の銀色のケースにいれられ厳重に保管されている。
だが、今回はむしろ、その厳重な保管方法によって、ケースごと持ち運べるようになっていたので、カズキらは幸運だったと笑みを浮かべた。
「小分けに出来そうな袋も見つけたし、行こう。結構、近くまで研究員が来てる」
「あァ、テメェらもさっさと逃げンぞ！」
メノウに答え、大きなケースを抱きかかえながら、カズキを先頭に部屋を出ていく。
ここにいる筈の研究員が一人もいないことが気になったが、大方、先ほどの放送にあった被験体鎮圧用の装備を取りに行っているんだ

ろうとして、逃げる距離を少しでも稼いで置くことにした。
メノウがデュスノミアを呼び出し、探知しながら廊下を走り続ける。
すると、突如、先ほどの警報とは別の放送が流れてきた。
《コード、メメント・モリ！　コード、メメント・モリ！》
聞こえてきた声は、第二研の幾月のものだった。
メメント・モリというのは、聞き慣れない言葉だが、その前にコードといっていたからには、何かしらの作戦用の隠語なのだろう。
ここでそんな作戦コードを流したという事は、自分たち被験体を鎮圧するためのもの以外考えられない。
文字通り生命線である制御剤を届けられなければ、仮に逃げられたとしても、全員が死ぬことになる。
それだけは避けねばと、カズキが気を引き締めていると、後ろを走っていたメノウが口を開いた。
「今のどんな作戦だろうね。ボクらを追ってきてるのは何人か確認出来るけど、なんか数が少ない気がするよ」
「被験体の数はどうだ？　何人残っていやがる」
「被験体？　ちょっと待って……っ、ど、どうして？　なんで、そんなっ」
カズキに言われたメノウが意識を被験体らの方に向けると、急に動揺を見せ出した。
それだけで別動隊になにかあったことが分かってしまう。
しかし、動揺するメノウの言葉からは、実際の状況を把握することまでは出来ない。
よって、カズキは冷静になって正確に報告するよう、メノウを怒鳴りつけた。
「馬鹿野郎！　テメェが冷静さ失ってどうする。探知が消えちまったら、オレらは死ぬンだぞ！　落ち着いて、状況を話せ！」
「っ、ご、ごめん。でも、仲間同士で戦ってるんだよ」
「仲間同士だァ？　被験体で寝返ったヤツがいるってことか？」
「分かんない。けど、これは……」

言いかけたその時、長い長い通路の先にとある人影を見つけ、メノウは言葉を止めた。
「テメェ……」
どこか虚ろな目をして立っている、その人物を見て、カズキはケースをメノウに投げ渡すと、訓練用のナイフを手に持ち、叫びながら飛びかかった。
「なに裏切ってンだ！　セイヤ！」
カズキが斬りかかると、セイヤは持っていた棒で、ナイフをいなし距離を取る。
だが、逃がすかと、カズキは身を屈め、地を蹴り、今度は刺突でのど元を狙う。
「オイ！　何で裏切ったか聞いてンだぞ！　答えやがれ！」
「……」
刺突を棒で受け流して躱し、セイヤが反撃に後頭部を狙った棒を振り抜いてくる。
それは屈んで回避し。お返しに足払いをかけるが、飛んで距離を取られたことで振り出しに戻る。
自身の言葉を受けても、セイヤは無言のまま戦い続けていることで、どこか様子がおかしいことにカズキも気付く。
だが、何があったのかが分からない。ただ一つ言えるのは、
「メノウ、ミナトに連絡しろ！　さっきの放送は、被験体のヤツらを寝返らせるタメのもンだ！」
先ほどの放送がトリガーであることだけだった。
――別棟
「逃がさんぞ、絶対に……」
そう呟きながら、館内放送用のマイクの前に立っていた幾月は、険しい表情で拳を握りしめる。
先ほど、湊が研究室を襲って来た後、他の研究員に直ぐ被験体らを鎮圧するよう命じて、本人はこの離れた場所にある、もう一つの管制室にやってきていた。
棟自体が分かれているので、湊たちのいる本棟の施設を制御するこ

とは出来ないが、放送することくらいは出来る。
そのため、湊らが来る筈のない、この安全が確保された場所で、事前に仕込んでいた仕掛けを発動させたのだ。
そうして、放送を終えた幾月が、通信機から聞こえてくる本棟の状況を把握しようとしていると、背後から足音が聞こえてきた。
被験体が来る事などないと思っていた幾月は、緊張から額に汗を滲ませ、左手に銃を構えて振り返った。
「誰だ！」
「おー、怖い怖い。あまり物騒なものは向けないでください」
銃を持っている幾月に対し、足音の主は、部屋の入口までやってくると立ち止まり、軽い口調で返した。
相手の姿を確認した幾月は、構えていた銃を僅かに下げ、不思議そうに尋ねる。
「飛騨博士？　何故、ここに？」
「何故？　簡単なことです。貴方が……いえ、君がここに来ると思ったからですよ、幾月君」
白衣のポケットから抜かれた右手で、眼鏡の位置を直し、飛騨はそう返した。
普段、飛騨は幾月の事を〝幾月室長〟か〝貴方〟と呼んでいた。
それを、わざわざ目下の者を呼ぶように言い直したことで、幾月は飛騨に何かしらの思惑がある事を理解する。
「懐かしい呼び方ですね。その呼び方は、先代がいた頃以来でしょうか？　ですが、緊急時とはいえ、今は同じ立場です。上の役職に就いている者が、公私を混同されては示しが付きませんよ」
「ええ、確かに。しかし、君が心の内に狂気を宿していたのも、その先代がいた頃からですからね。話をするなら、当時と同じようにしようと思ったんですよ」
言いながら飛騨は歩を進め部屋に入ってくると、十メートルほど離れた場所で、幾月の正面に立ったまま両手をポケットに入れて佇む。
飛騨が何の話をしようというのかは分からないが、幾月はいつでも銃を構えられるようにしながら、話を続けることにした。

「狂気？　……何を仰っているのか分かりませんが、無駄な話をしている暇があるなら、職員たちとともに、被験体の鎮圧に向かうべきではありませんか？　私も今から向かおうと思っていたところです」
「私が行ったところで変わりませんよ。それに、鎮圧は先ほどの放送を聞いた第二研の子どもたちが協力してくれているでしょう。フフッ、君のことだから、謀反を起こした時点で殺すような仕掛けを施していると思ったのですが、マインドコントロールで手駒にするとは、いくらか子どもに優しい設計ですねぇ」
「ほう……、現場を見ずに先ほどの放送の意味まで理解するとは」
　同じ研究室の者らにも話していない、秘密裏に自分の研究室の被験体に施した処置。
　ある特定のキーワードを聞いた時、キーワード決定時に教えた命令を忠実に実行させる。
　それが先ほどの放送と、脱走しようとしていた被験体が急に寝返った理由だ。
　以前、第一研が行ったマインドコントロール実験で被験体の性格に変化が起こったため、マインドコントロールはエルゴ研全体でタブーとなっていた。
　当時は、幾月も表面上は反対派の立場を取っていたので、ばれぬよう細心の注意を払っていたのだが、まさか気付く者がいるとは思わず。幾月も苦笑で返す。
「やはり博士には敵いませんね。仰る通り、あれは予め設定していたキーワードを聞かせる事で、キーワード設定時に仕込んでおいた命令を実行させるという単純なものです。催眠状態なので、ペルソナは弱くなりますが、動揺している相手を無力化するくらいは出来ますよ」
「まぁ、被験体が脱走者を押さえていれば、物影から対シャドウ銃で撃ち殺せますからね。自分たちの安全を考えた良い作戦です」
「殺すだなんて、ちゃんと生かしたまま確保しますよ。どうしたんです、博士？　今日はやけに言葉が辛辣ですが」
　普段のおどけた様子を一切見せない飛騨の態度に戸惑っている。
　そんな風に尋ねてきた幾月を見て、フッと小さく口元に笑みを浮か

べた飛騨は、白衣のポケットからある物を取り出すと、それを幾月に向かって投げた。
「っ!?」
突然、自身目がけて物を放られたことで、幾月は身体を固くするが、それがケースに入れられたＣＤ―ＲＯＭだと分かると、空いていた手で受け取った。
「……これは？」
受け取ったそれを幾月は眺めるが、どこにも内容を示す情報が書かれていない。
このタイミングで渡したのならば、何かしらの意味があるのだろうが、渡してきた人物が人物だけに内容も確認せずに読みこませるのは怖いものがある。
そうして、幾月が視線を飛騨に戻すと、飛騨が静かに答えた。
「それは、私の友人、岳羽詠一朗の遺言です。事故現場で録画された、あの事故の真相と、いつか訪れる滅びについてのね」
「何っ!?」
飛騨の言葉を聞き、幾月が対峙して初めて動揺を見せる。
相手の言ったことが真実であるかを確認するように、すぐさま機械にＣＤをセットすると、流れ始めた音にノイズの混じる映像に目をやっている。
《この記録が……心ある人の目に触れる事を……願います》
それに構わず、飛騨は言葉を続けた。
「君は知っていたのでしょう？　あの少年にデスが封印されていることを。アイギスのメモリから回収できた情報。その一部に改竄の痕跡がありました。まぁ、単純に終盤を消しただけですし、他の方は気付いていなかったようですがね」
丁度のタイミングで映像を見終わったのだろう。
幾月は険しい表情で、ＣＤを機械から取り出すと、ケースに入れて上着のポケットに仕舞い、声を荒げて飛騨に拳銃を向けた。
「貴様、これをどこで手に入れた！　他の者にもこれを見せたのか!?」
「発見したのは事故現場です。余計な混乱を防ぐため、ご当主含め誰

にも見せていませんし、マスターデータとコピー一つしか残していません。ああ、勿論、それがコピーですよ」
「マスターデータはどこにある？　言えっ」
普段の静かな物腰とは打って変わって、幾月は全く余裕のない様子で、いまにも引き金を引くのではないかという剣幕で拳銃を向け続けている。
そんな相手の態度が面白いのか、拳銃を向けられていながら、飛騨は右手の人差し指を立てると楽しげに答えた。
「ンッフッフー、マスターデータは少年に渡しました。彼は岳羽詠一朗と知り合いでしたからね。遺言だと教えておきましたし、いつか家族に渡してくれるでしょう」
「エヴィデンスにだとっ、貴様なら呼び戻せるだろう。今すぐアイツを呼び戻せ！　デスの器を失う訳にはいかない！」
「いやいや、出来ませんよ、そんな事。少年は自ら飛び立つことを決めたのです。それを止める事など、誰にも出来はしない」
「っ!?」
直前まで浮かべていた笑みを消し、飛騨がポケットから取り出した拳銃を構えたことで、幾月も息を呑む。
研究員の中でも、ある種真っ当な神経を持ち合わせていた飛騨が、人を殺すための道具を手にした。
古くからの付き合いがあるだけに、幾月は表情を強張らせ、それを信じられないという目で見ている。
そうして、お互いに銃を向けあう形で立ったまま、飛騨が口を開いた。
「少年は知能も知識も非常に高いレベルで持ち合わせています。ペルソナを使われれば、直接戦って彼に勝てる者などいませんし。今回の脱走でも、それらを駆使して多くの被験体らと共に逃げるつもりだったのでしょう。……ですが、たった一つ致命的なミスがありました。それは、彼が未だ経験不十分な子どもだったという事です」
話している間も、飛騨は相手の心臓を狙って構えた銃を一切ぶれさせず。幾月の行動を制限する。

しかし、今も研究所内で戦っているであろう少年を想う表情は、慈しみの中に悲しさを混じらせた、どこか泣きそうなものだ。
「彼は我々を脅していましたが、誰一人殺していませんし、後遺症の残るような怪我を負わせてもいません。結局、人を傷付けることを嫌う優しい少年なんですよ。だからこそ、手段を選ばない狂った大人には勝てない。彼は英雄へと祭り上げられただけの、ただの人間ですから」

――管制室

カズキらの向かった薬品開発部と同様に、もぬけの殻だった管制室に到着するなり、湊は先ほどの放送を聞いた。
影時間であるにもかかわらず、この管制室以外にも施設中に放送できる場所があったことも驚きだが、湊はそれよりも管制室内の惨状に言葉を失ってしまった。
「どう、して……。機器類が、破壊されてる？」
そう、もぬけの殻だった管制室だが、そこにあった機器類は、全て破壊されていた。
弾痕や爆発によって焼け焦げたと思われる跡、そして、破壊された影響でまだ室内が他の場所よりも暑いため、それが行われたのは騒動が起こってからなのだろう。
自分たちがやってきて施設の制御を奪うことが予想できていたとは思えない。
何故なら、他の研究室の人間が湊のエールクロイツの効果を知っている筈がないから。
「湊、どうするの？」
「飛騨さんじゃないとすれば、一体誰が？　こっちの力を知らない人間が、こっちの行動パターンを予想できる訳が……」
壊れて沈黙する機械を見つめながらチドリが問いかけてくる。
しかし、第八研の部屋に置かれていた手紙によって、飛騨が今回の脱走に協力してくれていることを知っている湊は、答えずに、自分たちの手を事前に封じてきた者の正体を考えることに集中してしまった。

それにより、背後に現れた気配への対処が僅かに遅れる。
「っ!? 危ない！」
「きゃあっ!?」
気配を察知した湊が、傍に立っていたチドリを抱えるように物影へと飛び退くと、二人が元いた場所に銃弾の雨が降り注ぐ。
「痛っ……」
ダダダダッと、銃弾が放たれ続ける音が部屋の中に響き渡る。
一時的に周囲への警戒の集中を解いた事で、攻撃への反応が遅れ、チドリを抱えるように物影へと飛び退く際に右腕に銃弾を一発受けてしまい。
湊はその部位を押さえながら、入り口にいる人物に物陰から視線を送る。
そこには、サブマシンガンを手にした、オールバックの男が立っていた。
「フハハハハッ！ 無様だなぁ、エヴィデンス。いくら力を持とうが所詮はガキの浅知恵。どんな手を使ってかは知らないが、貴様が施設のコントロールを奪おうとするのは分かっていたさ」
「松本……」
呟き、腕から感じる焼けるような痛みに耐えながら、湊は松本を忌々しそうに睨む。
その間、隣にいるチドリが泣きそうな顔で、湊の怪我を負った部位を押さえているが、今の湊に宥めている余裕はなかった。
（油断した。前に脅したことで、相手は殆ど抵抗してこないと思ってたのに……）
心の中で自分の見通しの甘さを反省しながら、湊は状況の打開策を練る。
治療しようにも、いまいる物影では回復スキルを持ったペルソナが隠れきることが出来ないので、松本の持っているサブマシンガンタイプの対シャドウ銃の餌食になる。
メッチーならば隠れたまま呼び出せるだろうが、悪魔の呼び出しにはペルソナよりも力を必要とする。

この後のことを考えると、少しでも力を温存しておきたいため、力の消費の大きい存在は湊に召喚を躊躇わせた。
「どうかね、この銃の威力は？　人間である我々が、シャドウやお前たちのような化け物と戦えるよう開発したのだ。まぁ、開発は成功と言っていいだろう。何せ、あのエヴィデンスに怪我を負わせることが出来たのだから」
言い終わると、松本は再び引き金を引いて、湊たちの隠れている物影に向けて弾丸を放ってきた。
狭い場所で兆弾も考えず放たれ続ける魔弾の雨は、隠れている湊らの命を脅かす。
一発の弾丸は足元に突き刺さり、一発の弾丸は耳元をかすめて通過する。
湊は一緒にいるチドリを自分の身体で守るため、覆い被さりながら耐えているが、それでも身体に当たらないのは、持って生まれた悪運の賜物か。
「フフッ、この程度で死んではいまい。何せ、貴様は両親を見捨ててまで生き延びた呪われた子どもだからなぁ」
瞳を狂気に染め、楽しそうに口元を歪めて嗤う松本は、空になったマガジンを取り外すと、新たに装填し直しながら続ける。
「親の死によって得た力はどうだ？　攻撃してきても良いんだぞ？　この部屋が崩壊しても良いのならな」
安い挑発だが、湊も部屋の崩壊の危険性は理解していたので、苦虫を噛み潰したような表情をしながらも手を出す事が出来ない。
先ほど手に入れた拳銃を使うことも考えたが、チャンスは飛びだした一瞬しか無く、初めて使う武器でそんな精密射撃など出来る訳がない。
失敗すればチドリは確実に殺される。
自分だけの命で済むなら大博打も構わないが、チドリの命までベットすることなど出来はしなかった。
――別棟
「ハハッ、おかしなことを言う。後世に語られることはないが、彼は間

違いなく英雄だ。両親を失いながらも、力に目覚め、アイギスと共に人類を滅ぼす存在と戦い、最後は自分の身を封印の器とすることで世界を救った。これが英雄以外のなんだというのかね？」

飛騨の言葉に幾月は嘲笑を浮かべて返す。

湊を英雄などと呼びたくはないが、人類を守ったという意味では、湊は間違いなく英雄として称賛されてもおかしくなかった。

今回の脱走劇もそうだ。人類にとっての英雄だった少年は、今回は子どもたちの英雄として、皆を率いて自由を目指す。

規模は違っていても、英雄は運命によって選ばれた者しかなることは出来ない。

選民思想の強い幾月は、湊を疎んではいても、ただその一点だけは認めていた。

しかし、飛騨はそれをまたもや否定する。

「……彼は人々の願いを押し付けられた哀れな犠牲者ですよ。君が言った通り、彼は英雄と呼ばれるに相応しい功績を残した。しかし、滅びは再び訪れる。少年を運命という名の鎖で縛りつけたままね」

デスの器になった湊は、再び訪れる滅びに向かう戦いへ駆り出される。

逃げることは出来ない。何故なら、飛び散った十二のシャドウらは、湊に封印されたデスと一つなろうとするから。

「英雄は運命によって選ばれた者だけがなることを許される。逆を言えば、英雄になるべき者は、そういった運命を歩むことになる。エヴィデンスもその一人だっただけだ」

「違います。彼は我々に巻き込まれただけの普通の少年ですよ。確かに才に恵まれた者ではあったのかもしれない。しかし、彼はその優しさから、アイギスの望みを叶えるため自分に出来る事を精一杯やったに過ぎません」

「フハハハッ！　面白いことを言う。しかし、デスは子どもが精一杯やった程度で戦える存在ではないのだよ。そう、普通の子どもならばね」

頑なに湊は普通の人間だという飛騨の主張を、幾月は論理的に潰

す。
ペルソナに目覚めたばかりで湊はデスと戦っていた。
だが、力の使い方もろくに知らない子どもが、シャドウの王とも言える存在と戦えている時点でおかしいのだ。
現在の湊ならば分かるが、訓練を積んだ被験体のトップクラスの者ですらデスと戦うことは出来ないだろう。
見た者に『死』をイメージさせ、放つ気配が明確な力の差を嫌でも理解させる。
湊は親を奪われた憎悪と、アイギスの望みを叶えるという想いで、それを捩じ伏せたが、誰もがそんな事を出来る訳ではない。
他の者ならば脳がどれだけ命令を発しても、身体は金縛りに遭ったように命令を拒否する。意思という名の理性を、生物としての本能が上回るのだ。
あらゆる分野に精通する飛騨が、そんな単純なことを理解していない訳がない。
そう思った幾月は、冷静さを取り戻し、嘲笑を浮かべながら尋ねた。
「博士はアレを頑なに人に留めておきたいようですが、何かあるのですか？　英雄になっては拙いことでも」
尋ねながらも、幾月は飛騨が何かしら拘る理由があることは明白だと思っていた。
エルゴ研全体の研究方針や、研究結果について議論することは今まで何度かあったが、飛騨の意見は全て論理的且つ客観的な考察もなされた、他の者を思わず唸らせるものばかりであった。
それが、湊に対する主張だけは、筋道立っておらず、飛騨個人の主張止まりでしか無い。
銃を構える姿は落ち着いていても、その胸中には不安が拡がっている筈だった。
そうして、幾月が尋ね言葉を待っていると、僅かに間を開けて、やっと飛騨は口を開いた。
「神話の天使と同じく、英雄は怪物を別の角度から見ただけなのですよ。しかし、彼はそんな者ではない。普通の人間よりも、少しばかり

他者に優しくなれる、どこにでもいる少年です」
「フフ、どんな理由かと思えばそんな事でしたか。ですが、博士も分かっておられるでしょう。アレはまだ人間側にいるに過ぎないだけだと。……そう、既に扉は開かれている。後は、たった一歩踏み出すだけだ」
踏み越えれば、二度と戻ることの出来ぬ深淵。
湊がチドリにいて欲しいと願う場所の対極。
幾月は冷笑を持って、湊がそこへと堕ちるのは時間の問題だと告げる。
しかし、飛騨も銃を両手で構え直し、一歩も引かずに返す。
「そうはさせません。そのために、私はここへ来たのだから」
「そのためにここへ？　申し訳ないが、理解しかねますね。私を足止めしたところで、何の意味もないでしょう？」
対シャドウ銃を使おうが、正面から戦えば湊に勝てる筈がない。そんな事は本人が一番分かっている。
だというのに、飛騨は真面目に言っているようで、直ぐに言葉を返した。
「狂気は災いを呼び、災いは英雄たり得る者を呼び寄せる。私の知る限り、内に狂気を宿しているのは君と松本室長だけだ。そんな者を、彼のいる舞台にあげる訳にはいきません」
「私のこの胸に渦巻く感情が狂気？　クフフ、面白いことを言う方だ。これは狂気ではない。嘆きだ！　人間の手により、虚無の王国となってしまったこの世界へのな！　そのために、まず貴方から死んでもらう！」
「っ!?　がはっ……」
空いている腕を広げ、幾月が高らかに宣言した直後、飛騨は背後から腹部を貫かれる痛みを感じ、口から血を吐きながらその場に倒れた。
激痛で視界が歪む。身体に力が入らない。
しかし、一体何が起きたのかと背後に目をやると、虚ろな瞳で槍を握った一人の少女が立っていた。

「あな、たは……」
「フフフッ、偉いぞ。よくやった」
倒れたときに手から離れた飛騨の銃を拾い上げ、幾月は静かな笑みを浮かべながら、飛騨と少女の元までやってくる。
そして、血のついた槍を握っている被験体の少女の頭を撫でると、幾月は倒れた相手を見下しながら言った。
「私が一定時間戻らなければ、ここへ来るようこの子には命じていたのですよ……。それにしても博士、貴方は実に惜しい人だ。貴方も私のように先代の思想に対し、理解を持っていれば良き友人となれたのに。まさか、あの愚かな彼、岳羽詠一朗と同じ考えを持つとは」
幾月の持っていた銃が火を吹き、発射された鉛玉が飛騨の左足の太ももへと吸い込まれる。
「うぐぅっ!?」
槍で貫かれた身体と、銃で撃ち抜かれた足から血を流し、床に赤い水たまりを作っていく。
その苦痛に脂汗を流しながら表情を歪める様子をみて、幾月はさらに楽しそうに口の端を吊り上げた。
「博士の研究データはありがたく使わせて頂きますよ。今回の騒動で被験体らはいなくなるでしょうが、子どもなんてまた集めれば良いだけだ。エヴィデンスは捕らえた後、薬で脳を破壊し、時が来るまで地下で飼ってあげましょう。デスの器という、生きた屍としてね」
「やめな、さい」
「フハハハハッ！　何をやめろというのです？　アレに情でも湧きましたか？　安心してください。貴方の望み通り、エヴィデンスは人のままモノに変えてあげますから」
「違います……〝名切り〟の血を、甘く見てはいけない……」
息も絶え絶えに飛騨が言ったその時、
「っ、なんだ!?」
建物全体に揺れが走り、どこからか爆発音が聞こえてきた。
状況を把握しようと、幾月は機械のところまで駆けてゆき、本棟の映像を確認しようとするが、画面には砂嵐しか表示されない。

どうやら、本棟のカメラが潰れてしまっているようだ。
「い、今のはなんだ？　ヤツは何をした！」
聞こえ続ける爆発音と、人々の悲鳴。防音性の高い建物だけに、離れているこの別棟にまで聞こえてくるなど本来ならばあり得ない。
状況を把握するための映像が見られないと分かり、幾月は血に服が汚れるのも構わず飛騨を掴み起こし詰問した。
すると、僅かな衝撃でも顔が引き攣る程の痛みを感じている筈だが、失血で意識を朦朧とさせながらも飛騨は口を開いた。
「……少し、遅かったようですね。ぐっ……はぁ、彼は被験体らの危機を知り、踏み越えてしまったようだ。彼を追い詰めたのは我々です。素直に逃がしていれば良かったものを……エルゴ研はもう終わりです」
離れていても感じる〝消えてゆく命〟と〝死〟の気配。
あの日、ムーンライトブリッジへ飛び去ってゆくデスを一目見たときですら、いまのような感情は抱かなかった。
そんな、滅びを求めている幾月が、本能が近付くことを拒否していると感じてしまったのだ。
しかし、それを否定するように、幾月は言葉を荒げて飛騨に詰め寄る。
「アレはなんだっ、あんなモノ、私は知らないぞ！　英雄や怪物とはその者の内面と行動の話しだ！　しかし、アレではまるで本物のっ」
「伝承の……怪物だと？　そう、ですね。人々に畏怖されたであろう、名切りの起源はそこかも知れない。血に宿る殺しの力を持った彼は、死を間近で見て能力に目覚めた時点で既に第一の扉を開けていた。そして、今回のことがトリガーとなって、普通の人間が辿り着くよりも奥に隠された禁忌の扉を開けてしまったのでしょう……」
「ナギリとはなんだっ、それがアレの力の正体か?!」
「名を断つ存在らしいです。目覚めたのならもう遅い……。君も死にたくなければ逃げなさい。怪物か死神か、いまの彼が何かは分かりませんが……出会えば死は避けられない」
「くっ、おのれっ！」

飛騨の言葉を聞くと、焦りを浮かべた表情で幾月は立っていた少女を連れて駆け足で部屋を出ていった。
血に染まり、部屋で倒れている飛騨は、薄れゆく意識の中、独り想う。
(ああ、これが〝死〟ですか。何もない、完全な無。こんなものに救いなど無いというのに……)
桐条の先代当主、それに幾月は滅びに救いを感じていた。
だが、近付いてくる死を知った飛騨は、死には無以外は何も存在しないと思った。
そうして、視界が暗くなり音が遠くなるのを感じながらも、遠くから感じる湊の気配に意識を寄せながら、弱々しく呟く。
「守って、あげれなくて、済みません。ですが、どうか幸せに生き、て――――」
結局、湊を守ることは出来なかった。
湊がチドリに温かい明るい世界で生きて欲しいように、飛騨は湊にも同じ場所で生きて欲しかった。
しかし、それはもう叶わない。
幾月の足止めすら満足に出来なかった事に、申し訳なさを感じながら、影時間の中、飛騨は二人の子どもの幸せを願い、静かに息を引き取った……。

第二十話　後篇　脱走―狂乱―

――第五研・武器保管庫

武器の確保のために動いていたタカヤたち。

無事に武器のある第五研の武器保管庫へとやってきていたのだが、対シャドウ化されていない幾つかの武器と召喚器を回収したところで、集まって来た黒服と研究員によって足止めされていた。

「大人しく投降したまえ。いまなら、まだ助けてやることも可能だ」

ヘーガーは手に対シャドウ銃を持ちながら、隠れているタカヤたちに投降を持ちかけてくる。

しかし、投降することなど出来ない。

ここで捕まれば、待っているのは生かされた後、一度も自分で生きることも出来ぬまま、意味もなく死んでいく未来だけだから。

ここへ来たのは全部で五人。うち二人は、やってきた研究員と黒服に撃たれ、既に動かなくなっている。

相手が来るまでに僅かな武器を取ることが出来たので、まったく反撃出来ない訳ではないが、銃など使った事がないため十人近くいる者らを全て相手することは出来ないだろう。

ペルソナに至っては、攻撃して建物が崩壊すれば自分たちも生き埋めになることは明白なため、使うことは出来ない。正に、万事休すだった。

「やれやれ、生き足掻くと約束しましたが、どうやら十を生かすための一になるしかないようですね……」

どこか諦めたように呟くタカヤの横で、ジンが俯いたまま手榴弾を持って震えていた。

――中庭

他の者らが作戦のため動いている中、先導部隊として先に外に出ていたマリア達は、スミレの持つ体長二十メートルを超す巨大なペルソナ、刑死者〝テュポーン〟に守られながら、中庭に陣取って待っていた。

テュポーンはくすんだ赤色の長髪に黒い肌をした男性型のペルソ

ナで、足はそれぞれが大蛇の尾のようになっており、背中には鳥の羽根ではなく蛇を編んで出来たような翼が生えている。
そして、その大蛇の尾のような足で自分たちを囲んで、やってきた研究員と黒服の攻撃を防いでいたのだが、先ほど流れていた放送を聞いた途端に、第二研の者らが暴れ始めた。
突然の事態にマリアもスミレも驚くが、いまスミレがペルソナを解除しては攻撃の的になってしまう。
そのため、直接的な戦闘力を持たないスミレに代わり、バーサーカー状態になったマリアがペルソナを呼び出し、応戦していた。
「なんなんだ、お前はーっ!!」
マリアは叫びながら、馬に乗った騎士のペルソナを虚ろな瞳で呼び出した男子を蹴りつけ、ティアマトの槍で相手のペルソナの胸を貫く。
ダメージを受けたペルソナは消えていくが、休んでいる暇はない。
マリアらを含めて先に逃げてきたのは十人、その内第二研は全部で三人。いまので一人倒したが、マリア以外の者らは急に味方が襲ってきたことで混乱し、まともに相手が出来ていない。
この短時間で二人ほど殺され、さらに戦意が喪失している今、戦えるのはマリアだけだ。
「このぉおおおっ!!」
研究員たちの攻撃から身を守る要であるスミレに、第二研の女子が襲いかかろうとしていたため、マリアは湊に持たされた訓練用のナイフを、相手の顔面に向けて投げつける。
乱回転しながら飛んでいくナイフは、柄が相手の鼻にぶつかり鈍い音をさせた。
その間に、手に持ったククリ刀を握りしめ、疾走し、鼻血を流しながら倒れている女子に近付いて、逆手持ちに刀を振り上げ後頭部を強打した。
先ほど投げたナイフと同じく、ククリ刀も訓練用の物であったため、切れてはいないだろうが、頭部にダメージを与えたことで後遺症等が残る可能性はある。

本来味方である被験体にそれほどのダメージを与えることを心苦しく思うが、しかし、それでもマリアは、湊に託された自身の役割を全うするため、戦い続けた。

――通路

突如襲ってきたセイヤとカズキが戦い始め、いくらかの時間が経った。

その間に後ろから敵がやってきて、制御剤を取りに行ったカズキ達は挟撃に遭うが、一緒に来ていた一人がメノウを庇い頭部に銃弾を喰らって倒れた直後、デュスノミアのマハブフーラで通路を塞ぐ氷を作りだし、何とか背後からの攻撃を防いでいた。

「セイヤ、目を覚まして！　ミナト君の言葉を忘れたの!?」

「……」

「無駄だっ！　今、この野郎は、自分の意思で戦ってる訳じゃねェ。大方、第一研みてェに第二研の被験体も精神いじくられてたんだろ！」

メノウの呼びかけにもセイヤは何の反応も示さない。

そして、呼び出したフレイに斬りかからせようとしていたので、横からカズキのモーモスが大鎌で制し、カズキ本人もナイフでセイヤに斬りかかる。

そんな二人の戦いを見ながら、メノウは自身を庇って死んでしまった者の事を想い、腕に抱いているケースに入った制御剤を何としても届ける方法を考える。

後ろは既に追手が来ているので逃げようがない。

探知をすると、別のルートから正面側へと回ってこようとしている者もいるが、セイヤさえ突破出来ればまだ逃げ切れる希望はある。

だが、正気を失ってはいても、相手はあの被験体トップクラスの力を持つセイヤだ。

同じレベルのカズキだからこそ、いまも相手を出来ているが、メノウや、もう一人の被験体では直ぐにやられてしまうだろう。

「……どうすれば」

もう少し通路が広ければ、隙を突けば脇を通って行く事も出来た。

しかし、現実は非情で、この広くない通路で横を通り抜けようとす

れば、二人の戦いに巻き込まれてしまうだけだろう。
　そうして、焦りを覚えながら、メノウが親指の爪を噛みながら状況の打開策を考えていると、隣で俯いていた被験体が小さく呟いた。
「……君たちは行って。俺が何とかするから、その隙に」
「え？」
「うぉおおおおおっ!!」
　メノウが聞き返すも、被験体の少年は答えず叫びながら駆け出し、ワーウルフのようなペルソナを呼び出しセイヤへと突っ込んだ。
「なっ!?」
　突然の乱入者にカズキも驚いているが、少年は棒で腹部を突かれながらも歯を食いしばってセイヤを押し倒し、抱きついたまま床に抑えつける。
　そして、ワーウルフ型のペルソナも、肩にフレイの剣が食い込んでいるが、腕に喰らい付き、その大きな手と爪を胴体に突き刺して動きの自由を封じた。
「何してるっ、さっさといけぇえええっ!!」
「っ!?」
　メノウは、一緒にいた少年のそんな行動に呆気に囚われたが、少年の叫びで我を取り戻し、ケースを大事そうに抱えると駆け出した。
　駆けていくメノウの後ろ姿を見たカズキは、少年がセイヤを抑えているので、今ならセイヤを殺す事も出来ると武器を握り直す。
　そうして、攻撃しようとしたその時、背後でガシャンッ、と氷の砕ける音が聞こえ、銃声と突撃してきた追手の靴音が近付いてきた。
　これでは、手を出している暇はないと、カズキがメノウを追おうとしたとき、少年の声が耳に届く。
「――――逃がしてくれて、ありがとう。元気でね」
「っ……!!」
　仲間を残し、メノウを追うカズキの背後で、耳に残る一発の銃声と少年の呻き声が響いた。
　――管制室
　袖を破り、それで腕をきつく縛って止血した湊は、物影に隠れなが

ら状況の打開策を練っていた。
管制室が機能しないのであれば、足止めと研究員らの鎮圧に行くべきだが、このままでは、他の者らの助っ人に行く事も出来ない。
一か八か、ペルソナを呼び出すと同時に天井に向けて攻撃を放ち、脱出を計ろうかと考えたそのとき、
《ミナト君、聞こえる?!》
突如、脳内にメノウの声が聞こえてきた。
このテレパシーのようなものは、探知能力の一部で、使う側が対象を指定して通信が出来るという能力だ。
普通の人間では傍受できず、傍受するには同じ探知能力を有している必要がある。そのため、こういった状況で、味方同士で密かに会話できるのだ。
「なに? どうしたの?」
《あ、繋がって良かった! それが、急にセイヤとか他の何人かの被験体が寝返って、こっちの味方を襲い始めたの。さっきのコードなんたらって放送あったでしょ? カズキが、あれが原因だから、ミナト君に連絡しろって! ボクらは何とか逃げてるけど、他の二人はボクらを守って……》
「なに……?」
メノウの言葉を聞いた湊は、直ぐに研究所全体の状況を把握すべく探知で探っていく。
すると、メノウの言ったことが真実で、第二研の者らが、他の被験体に襲いかかっているのが見えた。
それだけでなく、武器の確保に行ったタカヤたちや、先に外で待っているマリア達が敵に囲まれている。
制御剤の方はカズキとメノウ、武器調達はタカヤとジンの他にもう一人第一研の被験体が残っているだけ。足止めは裏切った第二研の者以外は既に全員死亡している。
「な、なんで、こんな……」
自分が逃げる手助けをすると言い、皆はそれを信じてくれた。
だが、実際は、何もする事が出来ず、信じてくれた者らを死なせて

しまった。
第二研の者らが裏切るとは思っていなかったというのはある。
対シャドウ銃が量産されていて、それを被験体の鎮圧用に使うと思っていなかったというのも勿論ある。
しかし、完全に予想できていなかった訳ではない。
第一研でマインドコントロールの実験があったのなら、他の研究室でも行っていたかもしれない。
対シャドウ銃の理論と設計図はある程度まで出来ていたのだから、実際に量産して緊急時に備えていたことは十分あり得た。
可能性はいくらでもあったのだ。
それを湊は見逃してしまった。
「お、俺のせいで……皆が……」
自分の行動が多くの仲間を死なせた事実に自責の念を感じていると、メノウの言葉が頭に響いた。
《――――お願いミナト君、皆を助けてっ》
「……っ」
その瞬間、湊の中で何かが壊れた。今まで自分を形作っていたものが、音を立てて明確に壊れていく。
「あああああああああああああぁぁぁ

湊はタナトスを召喚しながら、手に短刀を持って物影から飛びだし、松本へと迫る。
背後では現れたタナトスが、湊に向けて手を伸ばすチドリを抱えて天井にメギドラを放ち、部屋を崩壊させながらも飛び立っていった。
「おのれっ！」
同時に二人が別々の方向へ飛びだしたせいで、僅かに迷いが生じ、松本は最大の攻撃チャンスを逃す。
だが、チドリを取り逃がすのは惜しくとも、松本の目的は湊を殺す事だ。
すぐさま、湊に銃口を向けると、引き金を引いて銃弾を放つ。
駆ける湊を追って、ダダダダダッ、と放たれ続ける銃弾がぶつかった床や壁とで火花を散らしながら、室内に銃声と兆弾の音を響かせる。
だが、ずっと撃っているのに、それらは何故か湊には当たらない。
「くっ、何故当たらん！」
物影から飛びだした湊は、部屋の壁に沿うように弧を描く形で接近してくるが、速過ぎて狙いが定まらないことは分かる。
が、近付けば近付くほど、銃弾の速度を考えれば避ける事など敵わない筈だ。
現に、何発かは身体を掠めているようで、薄っすらと血を流している。
しかし、それでも直撃せずに、松本と直線になる場所まで走り切ると、湊は叫びながら壁を砕くほど強く蹴って飛んだ。
「松本ぉおおおおおっ!!」
「小僧ぉおおおおおっ!!」
お互いに吼えながら、敵を殺すための凶器を向けあう。
タナトスの攻撃で部屋の崩壊が始まっているが関係ない。自分は目の前の存在を殺さねばならないのだと、それでも、湊は止まらない。
落ちてくる天井の破片を空中で足場にして蹴り、ブレードから風を放ち加速して、松本の懐を目指し一気に距離を詰めにゆく。
そして、

「なにっ!?」
撃ち続けていたことで弾切れを起こした松本は驚愕の表情を浮かべ、敵を穿つように突き出された湊の短刀を、深々と胸に突き刺されたのだった。
「ばか、な……」
最期にそういって、手から銃を落とし倒れる松本。
その様子を何も感じさせない瞳で見ていた湊は、落ちていた銃をマフラーに仕舞うと、直ぐに部屋を出ていく。
向かうのは襲われている被験体たちの元だ。
――通路
「畜生ッ!!」
制御剤の入ったケースを持ちながらメノウと共に走るカズキは毒づく。
背後から迫ってきている追手が何度も発砲してきており、狭い通路でまともにペルソナで戦えない二人は、背後から撃たれぬよう、何度も道を曲がりながら外へ向かうことを強いられていた。
しかし、このまま進むと、先ほどセイヤと戦っていた通路のように、長い真っ直ぐの道に出てしまう。
そうなれば、狙い撃たれることは分かりきっている。
かといって、今更引き返して別の道に入る時間はない。
「ごめん、ボクが道を間違ったからっ」
「黙ってろ！　今、そんなくだらねェ話してる暇はねェンだよ！　テメェは、少しでも速く通路を突っ切ることを考えてろ！」
自分がナビを上手く出来なかったからこんな状況になった。
そんな風にメノウが謝ると、カズキは乱暴な口調で謝罪を拒否する。
確かに、こんな状況になったのは、メノウの道案内のせいだ。
しかし、メノウのナビがなければ、ここまで逃げることも出来なかった。それが分かっているため、カズキもメノウを責めるつもりはない。
そうして走り続けていると、突如、乾いた銃声が背後から響いて来

る。
「っ、追い付いてきやがった！　急げ、メノウ！」
「う、うん！」
銃声が聞こえた後、直ぐ近くでカァンッと、銃弾が壁か床に当たった甲高い音がした。
となると、それほど距離はもう離れていないのだろう。
真っ直ぐの通路になるまでに少しでも距離を稼いでおきたかったカズキは、僅かに焦りを見せ、メノウにさらに速く走るように言った。
メノウもそれに頷いて返すが、既に限界は近い。
逃げている間ずっと走り続け、背後から追われている恐怖、自分たちが生き残らないと全員が死ぬという重圧、それらが重なって探知の力もあと少しで使えなくなるほど疲弊していた。
「きゃあっ!?」
そして、ついに足をもつれさせ転倒してしまう。
メノウが倒れたことに気付いたカズキは、急制動をかけて振り返るが、その視線の先に迫ってきている追手の姿を見てしまった。
転倒のダメージを考えると、先ほどのペースで走ることは出来ない。ここは諦めて、ペルソナで応戦するかと考えたその時、背後からそれは来た。
『あぁあああああああっ!!』
二人の頭上を飛び越え、インラインスケート型の靴で床や壁を蹴って飛んでいく人影。
特徴的な黒マフラーと後ろ姿を見る限り、それは湊にしか見えない。
だが、自分たちの知っている湊とは何かが違っていた。
「ミナト、か？」
「っ、あの服……血？」
思わず、二人は足を止めて見入ってしまった。
元は他の男子の被験体と同じ薄水色だった服が、湊の着ているものは赤黒く変色していた。
同じように、手や髪にも同じような色がついているが、それが血で

ある事に気付くと背筋に寒いものが走る。
一体、ここに来るまでに何があったのかと。
「なっ、エヴィデンスか！」
「撃て、撃ち殺せ！」
黒服と研究員が湊に銃口を向けて発砲する。
しかし、湊は靴から風を放って空中で方向を変え、それらを避けてゆく。
「あ、ああ、化け物ぉおおおお！　くるなぁあああ！」
追手の者らも、湊の全身の赤黒い色の意味に気付いたのだろう。恐怖で錯乱したように、一人の男が狙いも定めず引き金を引き続けると、湊は再び最低限の動きで銃弾を躱し切る。
そうして、ついに追手のいる場所に辿り着いた。
『あぁあああああああああ!!』
狂気を感じさせる叫びをあげながら、通り過ぎる際に短刀で一人目の胴体を真っ二つにする。
続けて、空中で体勢を変え、靴のブレードで二人の首を切り裂き、驚愕に固まっていた四人目の心臓へ短刀を突き立て壁に磔にする。
「こ、このぉ！」
突きを放った直後の着地で、一瞬湊の動きが止まった隙を突いて、五人目の男が銃口を向けるが、男は銃口を向けたと同時に発砲すべきだった。
探知で全員の動きが見えていた湊は、その場で宙返りすることで、ブレードから風の斬撃を飛ばし、男を頭からに真っ二つにしてしまった。
「マジ、かよ……」
僅か数秒の間に起こった出来事に、カズキも理解が追い付かない。
死体に変わった男たちの中央で佇む湊に、時間差で崩れ落ちてゆく男らの血が浴びせられる。
もはや、血で濡れていない場所を探す方が難しい。
だが、全身が血に濡れようと、湊は動じた様子もなくペルソナを召喚した。

『カグヤ、二人を回復しろ』
どこかノイズが混じり二重に聞こえるような声で呼び出されたカグヤが、二人に回復スキルをかける。
温かな光に包まれた二人は、身体の疲労も回復したことを感じるが、それでも今の湊の様子がおかしいことで動くことが出来ない。
そうして、二人が固まったまま見ていると、背を向けていた湊が振り返った。
全身に血を浴びながら、瞳だけは蒼い輝きを放っている。二人は、知っている。あれが自分たちの死を見透かす瞳だと。
『いけ。タカヤたちも俺(僕)が助ける。途中のポイントまで先に行って待ってろ』
「あ、あァ。助かったぜ……」
「き、気をつけてね」
引き攣った表情で答えた二人は、そのまま背を向けると、追加で湊が指示した場所を目指し走っていった。
それを見送ると、湊も落ちていた銃を拾って再び走り出す。
タカヤたちの待つ、武器保管庫へと。
――第五研・武器保管庫
武器保管庫にいたタカヤたちは、いまだこう着状態が続いていた。
いや、厳密に言えば、タカヤたちにかなり不利な状況だ。
相手がなだれ込んでくれば、ろくに武器も使えない子どもなど簡単に鎮圧されるだろう。
(まぁ、それも時間の問題ですがね。カズキ達は無事に制御剤を届けられたでしょうか……)
今計画の要となるのは、先導部隊のマリア達と、制御剤確保のカズキ達だ。
どちらが欠けても、被験体らは研究所から逃げられず、死んでしまう。
この場にいない他の者らの身を案じながら、タカヤは銃を両手で構えると、密かに近付いてきていた者の気配を感知し。
男が転がるように飛びだしてジンに銃口を向けた瞬間、反対に引き

金を引いた。
「ひぃっ!?」
研究員らの使っている銃とは、明らかに威力が違うと思わせる銃声が轟くと、飛び出してきた男の胸部が吹き飛んで無くなっていた。
それに驚いたジンが息を呑んでいるが、ジンを助けたタカヤは引き金を引いた瞬間、構えが不完全であったからか、反動で跳ねた銃に引っ張られる形で、後ろに吹き飛び転がってしまっていた。
危うく物影から出そうになったところで、もう一人の被験体が咄嗟に掴んで止めてくれたことで、何とか物影に留まる事が出来た。
「ありがとう、ございます」
肩が外れそうなほどの反動を受け、両手が痺れて使い物にならなくなったことを感じながら、タカヤが礼を言うと、少年は何やら口をパクパクとさせている。
そこで漸く、先ほどの銃声で自分の耳が一時的に聞こえなくなっていることを理解した。
しかし、仲間を守れたのだ。これくらいのダメージは安いものだ。
そう思う事で、元の位置に戻ると、恐怖に固まっているジンの肩を叩いて微笑を向けた。
「驚かせてしまい、すみません。何せ、咄嗟のことでしたから」
「い、いえ、助けてもろうて、ありがとうございます……」
顔色は悪いが、危ないところを助けられたことを理解しているのだろう。
ジンは弱々しい笑顔をタカヤに返し、礼を言った。
(しかし、ここまでですかね。こちらが一人殺したことで、相手もただ拘束するだけでは済まなくなった。もう、手段を選んでこないでしょう)
タカヤの推測は正しく、ヘーガーらも味方を殺された事で、これ以上待つことは出来ないと、重武装部隊を突入させようと考えていた。
タカヤが先ほど使った銃は、〝デザートイーグル５０．ＡＥ〟という最強の自動拳銃と呼ばれることもある、本来は猟に使うような代物だ。

流石のヘーガーたちも、被験体がそんな物を持っていると分かれば、自分の身を守るためにも容赦はしていられない。
そうして、ヘーガーが号令をかけようとしたとき、
「う、うわぁあああああっ!!」
「なっ、ぎゃぁあああああっ!?」
――――そこへ怪物がやってきた。
「……一体何が?」
急に研究員らの断末魔が聞こえてきたことで、状況を確認しようと、タカヤが僅かに顔をのぞかせると、そこには血飛沫を被りながら、次々と研究員らを切り刻んでゆく湊の姿があった。
他の黒服と違い、強化ベストを着ている者もいたのだが、そんな物は関係ないとばかりに、湊は短刀で肩から袈裟切りに身体を分断する。
また、その隣にいた顔を引き攣らせていた男には、片足を振り上げ独楽のように回転しながら風の刃を放ち、足と首を飛ばした。
瞬く間に武装した男たちが殺されていく光景を見て、ヘーガーは目を見開き呟いた。
「ゲ、化け物(ゲシュペスト)……」
『――――シネ』
最後の一人となったヘーガーの前に降り立つと、湊は冷たく言い放ち、左手で胸を貫き、心臓を直接握り潰した。
「ごぼっ……あ、が……」
心臓を潰されたヘーガーは口から血を吐き、白目を向いて、そのまま後ろに倒れ数度痙攣した後、動かなくなった。
床一面を血の海にした湊は、落ちている対シャドウ銃を回収していくと、その後、部屋の壁の死の線を切って廊下側に倒し、タカヤたちが歩けるように足場を作る。
『……他の皆は先に行ってる。お前たちで最後だ。行くぞ』
「ミナト、貴方は……」
『話してる暇はない。カグヤ、回復だ』
タカヤの言葉を遮って、湊はカグヤを呼び出すと三人に回復スキル

をかける。
それにより、いくらか体調が戻った三人は、全身に血を浴びながらも、瞳を蒼く輝かせ続ける少年の後に続き、外に出られそうな壁を破壊するとカズキらの待つ合流ポイントを目指した。
――中庭
「はぁ……はぁ……」
急に襲ってきた第二研の者らを大人しくさせると、マリアは疲れた様子で肩で息をする。
かなりのダメージを与えたのだが、意識があるうちは、地を這いずってでも襲ってこようとするので、意識を刈り取るまで何度も戦うはめになった。
また、他の者も同じように裏切ってこないか警戒していたため、精神的な疲労もそこに加わり、今のマリアは直ぐにでも倒れたい気分だった。
しかし、倒れる訳にはいかない。
未だ周囲を囲まれているという状況は変わっておらず、何発もペルソナを撃たれているスミレに限界がくれば、自分がまた戦わなくてはいけないのだ。
「ぐっ……そろそろ、まずいかもです……」
足を押さえて、苦痛に表情を歪めてスミレが弱々しく話す。
その原因は、ペルソナの受けたダメージが召喚者へと伝達するフィードバックダメージだ。
普通の拳銃ならば、大したことはないのだが、今回、相手が使っているのは黄昏の羽根を搭載した対シャドウ銃。
弾丸の威力をそのまま伝える対シャドウ弾には劣るが、その分、弾丸さえ補充すればいくらでも対シャドウ兵器として使えるという利点があり。
味方が来るまで、動くことはおろか、建物を巻きこんでしまうことを考え、ペルソナのスキルを使って反撃すら出来ないマリアたちにとって、その長期戦も行える武装は非常に厄介だった。
「みな、と……」

さらに、状況が悪化するように、ここでマリアのバーサーカー状態も解けてしまう。
普段から好戦的になるカズキのような戦闘狂型と違い、マリアのようなバーサーカー型は脳のリミッターを一部外すこともあって活動限界が存在する。
活動限界まで使用してしまうと、肉体の疲労からまともに動くことも出来なくなるのだ。
そして、まわりにいる研究者と黒服は、被験体を守っている二つの障害の片方が消えたことで笑みを浮かべ、テュポーンへの攻撃を激しくする。
防壁となっているテュポーンさえ、排除出来れば、あとはただの的でしか無い。
相手もペルソナについて研究してきた者たちだ。どうやれば、より効果的にダメージを与えられるかは理解している。
「ぐぅ……ごめん、なさい……」
数人がかりで、ほぼ同じ場所を狙われ、ついにスミレにも限界が訪れた。
額に脂汗を滲ませ、足を押さえたまま地面に倒れると、テュポーンが消える。
「よし、やれ！」
この瞬間を待っていたとばかりに、銃を構える者らを見つめながら、被験体は攻撃が来るのを待つ。
しかし、それは空からの介入者によって、防がれた。
「モーモス、マハジオンガ！」
「デュスノミア、マハブフーラ！」
「ヒュプノス、メギドラです！」
武器を構える者らを狙って放たれた攻撃魔法。広範囲に及ぶそれらは、攻撃のための手段しか持たぬ者たちを一撃で行動不能に追い込んでゆく。
中庭にいた両陣営の者らが、突然のことに混乱しているが、倒れているマリアたちにもただ一つ分かったことがある。

それは、
『タナトス、メギドラ!!』
自分たちは無事に役目を全うできたことだ。
チドリを送り届けたことで戻って来たタナトスと高同調状態になった湊が、極光の奔流で敵を薙ぎ払う。
その間に、チンロンとスーツェーと共に降りてきたタカヤたちが、中庭にいた者らへ急ぐよう指示を出し、倒れている第二研の者らはそのままに再び湊のペルソナに乗りこんでいく。
先に二つに分けていた制御剤を持って、武器調達でタカヤと一緒に行動していた少年は、中庭にいた三人の被験体と共にチンロンへ。
タカヤ・カズキ・ジン・メノウの四人は、動けないマリアとスミレを二人ずつで支えながら、スーツェーに乗り込んだ。
飛び上がっていく二体のペルソナ目がけて発砲する者もいるが、直ぐに湊がタナトスの五月雨切りで身体をいくつもの肉片へと変える。
『カグヤ、上の皆に回復魔法を。それと通信を繋いでくれ』
かなりの高度まで上がっていく二体のペルソナを追って、カグヤが回復魔法を全員にかける。
これから、二ヶ月の間は会えないのだ。ここで万全の体調にしておかなければ、潜伏中に死ぬ可能性もある。
これ以上の死者を出させないため、湊は全力で魔法をかけた。
そして、最後の連絡として、別々の方向へと飛んでいくペルソナに乗る者らに別れの挨拶をする。
《会うのは今から二ヶ月後の影時間。場所は港区のはずれにある旧陸軍の基地だ》
研究員らに聞こえぬよう、戦いながらもテレパシーの形で通信する湊の音声には、やはりノイズが混じる。
施設内での戦いを見ていた者は、その理由を何となく理解しているが、口を挿むことはしない。
《皆、死ぬな。仲間たちを守れなかった俺が言うのはおかしいかも知れないけど……生きろ。約束の場所に来れなくたっていい。無事に生きてくれ。それじゃあ、また会おう》

悲しそうな笑みを浮かべながら呟き通信を切った後、湊は振り上げた左手を研究所に向ける。
その動きに同調するように、タナトスも腕を振り上げ、持っている剣に輝きを集束させていく。
『滅べ、ブレイブザッパーァァァァァァァァァッ!!』
《グルォオオオオオオオオオオオオオオッ!!》
咆哮しながら放たれた光刃は、中央から施設の基礎ごと分断する。使われていた建築材を融解させ、湊の心情を表すかのような深い傷跡がその地に残された。
『アイギス……』
自分の手で付けられた傷跡を何の感情も籠もらない瞳で暫し見つめると、被験体らを助けに行く途中で見つけた機械の乙女に通信を繋ぐ。修復中により意識がなかったので、ちゃんと聞こえるかは分からない。それでも、この地を立つ前に言葉を残したかった。
《アイギス、俺はここを去る。でも、また会えるから。戦いの始まる、２００９年までさよならだ》
《――――分かりました。どうか、お元気で》
《っ、アイギス……。別れる前に、話せて良かった》
《はい、わたしも八雲さんの声が聞けて嬉しいであります。外界の情報はシャットアウトされているので状況は分かりかねますが、あなたの事は絶対に忘れません。２００９年。再起動したら、あなたに会いに行きます。ですから、どうかご無事で――――》
そこでアイギスの意識が途切れたのか、湊は何も感じなくなった。
あの日より一度も目覚めないアイギスが、何故、いま湊と通信とは言え会話できたのかは分からない。
黄昏の羽根同士の共鳴か、はたまた、お互いに話したいと願った事で奇跡が起きたのか。
しかし、どんな理由にせよ、唯一の心残りをなくせた湊は、そのままタナトスと共にチドリの待つ場所へと去っていった。
「エヴィデンスっ……」
飛び立った湊へ、別館の隅で隠れるように、憎悪の瞳を向ける幾月

に気付かぬまま。
――巌戸台中央区
影時間が明けた頃、エルゴ研のあった場所から内陸側へ数十キロ離れた場所にある、巌戸台中央区の住宅街にチドリはいた。
飛騨から満月に作戦が実行されると連絡を受けていたため、影時間にも拘わらず元研究員だった女性、栗原（くりはら）シャルマは、家の前に立って待っていた。
連絡では、昔、月光館学園で出会っていた湊も一緒にくるという事だったが、実際に来たのはタナトスに抱かれたチドリだけ。
そのタナトスも、チドリを送り届けると湊の元に戻るために直ぐに消えてしまった。
チドリの話では、湊は他の被験体を逃がすために遅れてやってくるということで、それならば中で休んで待っているように言ったのだが、チドリは湊が来るまで断固として動かないと言い。
子どもの扱いに慣れない栗原は、そんな風に言われてしまうと何も出来ず。しょうがなく、チドリに付き合って門のところで待っているというのが今の状況だった。
「はぁ……あの子の気配は感じないのかい？」
「まだ遠い」
「でも、こっちには向かってるんだね？」
「……うん」
事前に飛騨から報告を受けて、チドリが探査能力を有していると知っていたため栗原が尋ねると、チドリはジッと遠くを見ながら頷いた。
もしもの場合も想定していただけに、無事にこちらへ向かっていると聞いて、栗原も安堵の息を吐く。
湊は自分たちの研究の最たる被害者。預かって匿うのも、罪滅ぼしという要素が強い。
それを、何も償えぬまま、死なせてしまったとなれば、今ここで少年を想っているチドリにも申し訳が立たなくなるところであった。
（まぁ、無事と言ってもどの程度かは分からないけどね。少なくとも、

大丈夫とは言い難い状態の可能性はある）
腕を組んで、チドリの見つめる方向を同じように見ながら、栗原は考える。
チドリの服に血がついていたことで、怪我をしているのか尋ねると、それは腕を撃たれた湊の血がついたものだと言っていた。
他にも研究員らが対シャドウ銃なるものを開発して、被験体らに発砲していたらしいので、逃がしながら戦っていたのであれば、湊は満身創痍であることも十分に考えられた。
そして、そんな風に栗原が一人考えに耽っていると、チドリが急に声を発した。
「来た！」
見ると、確かに先ほどやってきたタナトスと共に飛んでいる人影が見えた。
深夜という事で灯りが少なく、どういった状態かまでは分からないが、とりあえず五体満足ではいるようだ。
飛行速度も速く、少し待っていると、すぐに湊は二人の前に降りてきた。
しかし、湊の姿を見た二人は思わず息を呑む。
なぜなら、全身が赤く染まっていたから。
「あ、あんた、それ……」
『俺の血じゃないよ。出会ったやつら、みんな殺してやったんだ』
どこか上手く聞きとれない、壊れたスピーカーから聞こえてくるような声で湊が返すと、二人は自分たちの知る声とは違う響きに、呆然とする。
そして、二人の様子に構わず、湊は蒼い瞳を血で固まった前髪で隠しながら、乾いた笑いを漏らした。
『アハハ、沢山、沢山殺した。黒い線を斬って殺して、血を浴びながら次のヤツを殺して。出会ったヤツらは全員殺してやったんだ』
「……もういいよ、湊」
悲しい瞳を湊に向けて、チドリは歩み寄る。
『莫迦みたいに叫んでたやつもいたけど、そいつも殺して。赦しを請

うてきたやつは、喋ってる喉を切り裂いて。ああ、素手で胸を貫いて心臓を直接握り潰したやつもいたっけ』

「もういいっ、貴方は頑張った！　湊は、八雲は、何も悪くないっ」

これ以上は聞いていられないと、自分に血がつくことも構わず、チドリは湊の頭を自分の胸に強く抱いた。

あれほど強かった少年の身体は、いまはまるで重さを感じない。

『大丈夫、俺(僕)が守るから。敵を皆殺して、仲間を守る。アハハ、アハハハハッ』

助けると約束した者らを死なせてしまった責任に打ち震えていた時、仲間の〝助けて〟という声を聞いた事で、湊は今まで無意識に踏み止まっていた人として超えてはならぬ一線を越えてしまった。

その結果が、味方を守るために出会った敵全てを殺すという選択。

「大丈夫だから、もう大丈夫だからっ」

『アハハハハハハハハハハハ――――』

十を生かすために一の味方を切り捨てる作戦で、一を生かすために百の敵を殺した少年の乾いた笑い声が虚しく響く。

チドリは涙を流しながら安心させるように湊を抱きしめるが、湊は糸が切れたように気を失うまでその空虚な笑いをやめなかった。

第二十一話　栗原シャルマ

深夜――桐条コンツェルン・本社

影時間の明けた深夜、桐条コンツェルン本社の一室に、後ろで手を組み窓の外を眺めている者がいた。

右目に眼帯をつけた精悍な顔つきの男性、桐条武治である。

「……今宵の影時間も終わったか」

そう呟くと桐条は机に戻り、静かに椅子に座って机の上に置かれていたファイルを手にして、エルゴ研から上がって来た研究の途中経過の報告書に目を通してゆく。

去年の九月に起こった大事故、〝ポートアイランドインパクト〟で先代当主だった桐条（きりじょう）鴻悦（こうえつ）が死んだ事で、桐条は新たな宗家当主とグループ総帥の座についた。

鴻悦が高齢だった事で、存命中に殆どの引き継ぎを終えていたので組織としては大きな混乱はなかったが、その代わりに、あの日より毎夜零時に発生するようになった影時間への対応は、全てが手探り状態で、未だに一つ一つ検証している段階であった。

しかし、シャドウに人が襲われる事を考えれば、分からないなどと悠長な事は言っておられず、シャドウに唯一対抗出来る〝ペルソナ〟を覚醒し得る者を探す事が急務となった。

（だが、あの事故当日。よりにもよって、デスと対シャドウ兵装の戦う戦場で力に目覚める者が現れた。飛騨の言ったことが事実ならば、ナギリの少年以外にも、研究員と接触した学園に通う生徒の中から力に目覚める者が現れるかもしれぬ）

感化されて適性を発現したにせよ、湊の存在によって自然に適性を有する者と、自力でペルソナ能力に目覚める者がいることが共に証明された。

そして、その少し後に桐条の娘である美鶴も、影時間への適性を有していると発覚し、タルタロスに行ったときにはペルソナも発現させたことで、適性の高い子どもはペルソナも目覚めやすいことが分かった。

だが、自然覚醒者の二人は、湊は事故から半年間目覚めず。美鶴も暴走はしないが召喚が安定しないとして、研究自体は全く進まなかった。

そのとき、先代の頃からエルゴ研に所属していた幾月から、〝人工ペルソナ使い〟の計画が立案され、桐条も悩んだ末に承認したのだ。

もっとも、承認した一番の理由は、第二の自然覚醒者であった娘を実験の対象にしたくなかったというものだが。

湊が目覚めてから、ここ数ヶ月の実験の成果を見る限り、美鶴の能力を解析する形で実験を進めていても、同じだけの成果が挙げられたとは思えないので、あの時の選択は間違っていなかったと桐条自身も思えるようになっていた。

しかし、そういった時にこそ、凶報はくるものである。

深夜にも拘わらず、机に置かれた電話機が鳴り、ディスプレイに表示された名前を見た桐条は、受話器を取り耳に当て話しかけた。

「幾月か、こんな時間に連絡とはどうした？」

《ご当主……エルゴ研が壊滅しました》

「何だとっ!?」

力のない声で話す幾月の言葉に、驚いた桐条は椅子が倒れるのも構わず、勢いよく立ちあがった。

そして、相手の言葉を聞き逃さぬよう集中して聞き返す。

「状況を詳しく報告しろ。原因は何だ、被害はどうなっている？」

《エヴィデンスです。やつが、他の被験体を連れて脱走を計りました。逃がすわけにはいかないと、研究員らも鎮圧に向かったのですが、相手がペルソナを使ってきたので、やむを得ず、開発したばかりの対シャドウ銃で応戦しました。結果、何人かの被験体が死亡し、それに怒ったのか、エヴィデンスがペルソナも使わずに研究員らを次々と……》

「ペルソナを使わず、だと？」

湊の身体能力の高さは桐条も報告を受けて知っていたが、流石に銃を持った相手に、ただの子どもがペルソナも無しに挑むなど無謀としか思えない。

だが、敗戦した兵が言い訳として敵戦力を誇大報告するような事を、幾月がわざわざする必要性もないことから、報告は紛れもない事実なのだろう。
衝撃的な話に、桐条も直ぐに受け入れることは出来ないが、個人的なことで報告を遅らせる訳にはいかないため、話の続きを促した。
「して、犠牲者と施設の被害は？」
《正確には把握できておりませんが、本日詰めていた内の生存者は私を含め二一人です。私以外の室長らを含めた他一六七名については、安否不明ですがほぼ殺害されたものだと。施設は、去っていく直前にエヴィデンスがペルソナで放った光刃によって本棟中央は基礎ごと崩壊し、別棟も本棟に面した側に被害が出ました》
「馬鹿な……」
《信じられませんが、エヴィデンスがペルソナを呼び出したのは、去っていく直前になってからです。そのため、施設内にいた研究員や監視員は、エヴィデンスが自らの手で殺したことになります。最終的に逃げた被験体は十人前後と思われますが、捜索はされますか？》
「いや、捜索は不要だ。直ぐに人を送るので、お前も生き残った者も今は休め。報告ご苦労だった」
それだけ返すと、桐条は受話器を一度置き。内線で現場に人を送るように指示をして、倒れた椅子を起こして力なく座った。
報告書を読んでいた時とは打って変わり、電話で報告を聞いただけだというのに、いまは完全に憔悴しきっている。
幾月から受けた報告が、あまりに衝撃的過ぎたのだ。
「これが〝名切り〟の力……。まさか、美鶴と一つしか変わらぬ子どもによって、エルゴ研が潰されるとは……。先々代で名の継承のみになったはずだが、菖蒲（あやめ）君から息子の八雲君にもやはり受け継がれていたか。鬼の血の業は未だ薄れぬな……」
机に肘をつき、頭を抱えるように疲れた声で呟くと、桐条は自身も現場に向かうため、準備をして部屋を出ていった。

８月２３日（水）

朝――栗原・自宅

湊とチドリがやってきてから約一週間が経った。

二人がやって来たあの日、空虚な乾いた笑いを続けていた湊が、急に意識を失うと、栗原はチドリと共に湊を自宅の風呂場に連れていき、血で汚れた身体を洗った。

着ていた物は、血で染まっている以外にも、弾痕があったり、焼け焦げたりしていたため、もう着ることはできないだろうと処分することにしたが、マフラーと靴とリストバンドだけはサッと水で流すだけで血の匂いも残らずに綺麗になったので残してある。

さらに、湊の身体を綺麗にするときに、湊を抱きしめたことでチドリも汚れていたので、一緒に洗ったが、その後は、買っておいた下着とパジャマを着せて二人とも寝かせた。

だが、本当に大変だったのはその後だった。

《えー、桐条グループ傘下の製薬会社地下で起きたガス管の破裂による爆発事故ですが、事故現場の復旧等はいまだ進んでおらず。建物の崩壊の危険性もあることから、警察の調査も進んでおりません》

湊は基本的に病気にならない。これは飛騨から受け取っていた湊の改造についての報告書に記されていた事だ。

生身の人間でありながら、免疫をつけているので致死量の毒を受けても身体能力が一時的に低下する程度で、怪我を負ってもスキルで回復するため、殺すのならば一撃で頭を吹き飛ばすしかない。

心臓を撃ち抜こうが、臓器を吹き飛ばそうが、脳が無事ならばデスの恩恵によって生きながらえる。ほぼ不死身と言っていい身体だ。

その湊が、翌日から熱にうなされ出した。

大量にあった湊に関する報告書に、何かしらの処置を定期的に施さねばらないというのは無かった。

また、目覚めたチドリには何の異常や問題点もなかったので、同じ環境で生活していた湊にだけ異常が起きるのはおかしい。

そうして、原因は、仲間を救うために大量の人間を殺したことによる、重度の心的ストレスだとわかった。

《しかし、犠牲となった職員の方々の遺体は、ほぼ搬出を終えたという

ことで、これから徐々に現場検証が行われるとのことです。今回の犠牲者はいま分かっているだけで、一五〇名を超えており……》
四十度の熱を出したと言っても、湊は毒すら効かない人間だ。解熱剤など意味はなく、濡れたタオルで身体を冷やすのも気休めにしかならない。
湊のそんな様子を心配してチドリも付きっ切りで看病していたが、意識も戻らないのでは出来る事など殆どなかった。
そんな日が三日ほど続き、四日目に漸く熱も下がって湊は目を覚ました訳だが、起きた湊の目は〝蒼〟かった。
言葉のノイズは消えていたが、本人も本調子とは言えない状態で、〝死〟を視る眼をオフに出来ない。
大量の人間を殺したことで、三日も熱にうなされた人間に、世界中に存在する〝死〟を視ることは辛かったようで、湊が奇声をあげたことで飛び起きたチドリが止めていなければ、自分の両眼を抉っていたところだった。
結局、湊の魔眼に対する説明を受けても栗原はあまり理解できず。
再び意識を失った湊の目に布を巻いて、起きて目を開けても何も見えなくする事で、死の線が見えないようにすることしか出来なかったが、再度起きた湊本人も、治まるまではそれくらいしか対処法はないと言っていた。
《桐条グループ代表である、桐条武治氏は、この不幸な事故に巻き込まれた職員の親族の方々に対して、出来る限りの補償をしていきたいとコメントしております。以上、現場からでした》
幸い、視界は閉ざされていても、ペルソナの探知能力を使えば、リアルタイムで周囲の状況は確認出来る。
よって、五日目からは湊も起き出して、栗原とチドリにあの夜の出来事や、今後の予定を説明し。家の中限定だが、目隠しをしたまま日常生活を送るようになっていた。
「……やっぱり、被験体は戸籍がないから、影時間の記憶の修正によって、死体を見つけてもいないものとして数えられるのか」
朝のニュースを見ながら朝食を食べていた湊がいうと、コーヒーを

飲みながら新聞を読んでいた栗原が返す。
「記憶の修正は、あくまで〝現実〟とされる表の世界に沿うのが基準だからね。中で銃火器を見つけようが、アイギスを初めとした対シャドウ兵装の機体を発見しても、適性がない人間は最初は皆スルーさ。まぁ、何度も見てたら流石に異常だと認識するようになるし。ご当主のことだから、警察とマスコミが来る前に、ある程度は別の場所に移してるだろうけどね」
「桐条武治……。あいつもいつか片付けるか。アイギスが起きたら、時期を見て……」
言って、湊は手に持っていたトーストをかじるが、その言葉を聞いていた栗原とチドリは、目を僅かに伏せ表情を暗くする。
魔眼をオフに出来ない以外にも湊には変化が起こっていた。その最たるものが、いま言ったように敵と認識した者を殺す事に躊躇いがなくなったことだ。
他に、精神年齢が高いと言われながらも、僅かに残っていた子どもらしさが完全に消え。チドリとの会話でも、全く笑わなくなってしまった。
精神の変化は、ペルソナにも多大な影響を及ぼすと分かっていたため、栗原は寝ていた湊をチドリにアナライズさせてみたが、これといったペルソナの変化は見られず。
精神学は専門ではないが、栗原なりに湊の精神の変化は、以前から内在していたモノが表に出るようになっただけと推察した。
（これがあいつの言ってた〝名切り〟の一部なのかね。魔眼とやらも含め、時間をかけて治していくしかないか）
一度壊れてしまった湊に、いま直ぐにしてやれることなど無い。
本人が寿命を犠牲にしてまで、何よりも守りたいと願った相手であるチドリの言葉ですら、いまは深く届くことはないのだ。
ただ匿っているだけの、精神的な繋がりを築けていない自身に出来る事など、衣食住を提供してやることだけだと栗原は冷めた思考で考えていた。
だが、湊と同様に精神年齢が高いと言われても、そのレベルは小学

生の域を出ない幼いチドリは、人生経験の差か、湊の状態を正確に把握できず、以前のように戻ることを祈りながら健気に甲斐甲斐しく接していた。
「湊、あとで勉強教えてくれる？」
「……いいよ。教科は？」
「今日は理科がいい」
「わかった。食べて少し休憩したらやろう」
「うん」
湊の言葉を聞いてチドリは嬉しそうに食事を再開すると、本日の授業について色々と考えているのか、上機嫌なままニュースの天気予報を眺めている。
湊の授業は、チドリにとって日常の一部になっており、それはエルゴ研にいた頃からの習慣だった。
戸籍を再び手に入れた二人だが、いまのところ小学校に通う気はない。
というのも、一応、チドリに限らず、殆どの他の被験体も孤児院にいたときには公立の小学校に在籍していたのだが。
しっかりと通えていたかというと、週に半分は休んでいたという者も少なくなかった。
そのため、チドリも知能はともかく、勉学に関しては基本的な読み書きと単純な計算くらいしか出来ず。エルゴ研にいるときは、マリアも交えて湊が勉強を教えていたので、今後もその方針で行く事にしたのだ。
何より、潜伏期間中に学校になど通えば、直ぐに見つかって現実時間中に襲ってくることも考えられる。
匿ってもらっている身の為、自分たちの生活基盤を築けるまでこの生活が続くことを考えれば、大人しく家で勉強するくらいしか出来ることはなかった。
＊＊＊
朝食が終わり、湊とチドリがリビングで勉強を始めると、栗原は食器を洗いながら二人に話しかける。

「ああ、先に言っておくけど、今日は店の方に行くから、私は九時半には出るよ。食料の買い出しもあるし、帰ってくるのは六時ごろになると思う。何か欲しいものがあれば買ってくるけど、何かあるかい？」
「俺は特にない」
「私、粘土が欲しい。本とスケッチブックは湊が持って来てくれたけど、粘土は持ってこなかったから」
チドリの言う通り、第八研の被験体用寝室に置かれていた本や、飛騨から与えられていたスケッチブックと色鉛筆はマフラーに入れて持って来ていた。
しかし、粘土は後で手に入れても問題ないだろうと、そのままにしてきたので、絵を描くことに飽きたときには、何度も読んだ本以外に他に遊べるものがない。
湊の説明から、これから一ヶ月は家に籠もりっきりになると理解したチドリは、それは耐えられないと考え、今の内に栗原に遊べるものを頼んでおく事にした。
そんなチドリの事情は、栗原も分かっているので、一度頷くと洗い物を終えてリビングに戻り、粘土の種類について尋ねる。
「何粘土が良いんだい？　道具とかも必要になってくるだろ？」
「紙粘土と石粉粘土。道具はなんかそれっぽい細かい作業出来るのが良い。あと、アクリル絵具も欲しい」
「せ、石粉粘土？　紙粘土はともかく、石粉粘土なんて普通の文房具屋に売ってるのかね……」
何やら子どもらしからぬ物を頼まれ、栗原は少々驚きながら言われた物を買ってこれるかと考える。
栗原の予想では、頼まれるのは油粘土・紙粘土・小麦粘土のどれかだろうと思っていた。
しかし、石粉粘土など小学校どころか中学校でも授業で使うことはほぼないと思われる。
一体何に使うのだと疑問に思い。チドリに尋ねてみた。
「一体どんな物を作るんだい？」
「色々。粘土とかは湊が得意だから、動物とかペルソナの人形とか

作ってもらってた」
「……いま、それは持って来てるかい？」
絵や造形物は作った者の精神状態を表す。
病院でも精神疾患を抱えた者の状態を知るため、カウンセリングの一つとされており。
もしも、以前に湊が作った物があるのなら、本日以降に作った物と比較して、どういった状態なのかを知り合いの医者に尋ねることも出来る。
そう考えた栗原が湊に聞くと、湊は読んでいた本をテーブルに置いて、マフラーに手を突っ込み、シマウマとライオンのフィギュアを取り出した。
それを受け取った栗原は二体のフィギュアを注意深く観察し。彩色も綺麗で、造形も細かいところまで非常に良くできていて。プロとまではいかないが、小中と学校の部活でやり続けていれば作れるようになるくらいの腕前はあると思えた。
（ふーむ、これが作れる時点でやっぱり普通ではないんだろうね。読んでる本もあいつの医学書みたいだし、カウンセリングは受けさせるだけ無駄か）
湊は、チドリに勉強を教えている最中は、自分は飛騨のところから持ってきた医学書を読んでいる。
ペルソナがいるので回復スキルを使うことは出来るが、いつもペルソナのスキルが使える訳ではない。
そのため、傷の縫合や、骨折の応急処置など、自分で出来るようになろうと思い読んでいるのだが、やはり普通の大人からすれば異常にしか映らなかった。
だが、とりあえず、栗原も家を出る時間が迫っているため、チドリに頼まれた物をメモすると、外出の為の準備をして、九時二十分ごろには家を出ていったのだった。
午後――エルゴ研・跡地
家を出た栗原は、車でポロニアンモールにある自分の店、〝古美術眞宵堂〟に行ってから、午後になると一度店を閉めてエルゴ研の跡

地にやってきた。
敷地内はいまだ警察が調査しているため入ることは出来ないが、すぐ近くに犠牲者らのための献花台が用意されており。栗原の目的はそちらだった。
献花に訪れた者用の臨時駐車場に車を止め、買って来た花を持ち、学校でよく見るような簡易テントが二つくっつけて作られた特設会場までいく。
すれ違う者の多くは涙を流し、暗い表情を見せている。
きっと家族か知人を失った者なのだろう。
それを横目に見ながら、栗原も進んでいくと、会場の手前に犠牲者の名前が五十音順に並んだリストが貼られた物を見つけた。
目を通して行くと、案の定、子どもらを自分に預けた男の名前があった。
(馬鹿なやつだよ。あの子らのために影時間を消すと言っておきながら、その前に死んじまうなんて)
冷めた思考でそんな風に思いながら、警備の人間に頭を軽く下げると栗原は献花台に花を供える。
無事に生き残れたら一週間以内に一度連絡をすると言っていたが、終ぞメールの一通も来なかったため確認しに来てみれば、ご覧の有り様だ。
初めは暴走した湊によって殺されたのかと思ったが、その考えは直ぐに捨てた。
本当に見境なく殺していたのならば、湊は助けるべき被験体らまで巻きこんで、施設の全てを更地に変えていただろうし。
何より、湊は部屋を出る前に、飛騨からの手紙を受け取って自身の家までやってきたのだ。
生き残っていた味方を救うために、百以上の人間を手にかけた少年が、敵と同じ研究員とは言え味方であった男を殺す筈がない。
考えがよぎる時点で、自分は贖罪すべき相手のあの子どもらを信用できていないのだと、自己嫌悪に駆られもしたが、これで一つの懸念が消えた。

（まぁ、湊の方は最後まで向こうに残っていたんだし、気付いてるだろうけど。親しい人間が自分たちの計画のあおりを受けて死んだと分かれば、チドリが深く傷つくだろうからね。わざわざ言う事はしないでおくとするか）

手を合わせ、黙祷を捧げると、栗原は顔をあげてテントを出た。

相手は裏方に徹するつもりだったようだが、飛騨は己などよりも様々な方面にコネのあった人物だ。

その助力が今後一切受けられなくなったのは非常に痛い。

事故の混乱が収まれば、桐条側からの追手が来る可能性はある。

桐条武治が命令をしなくとも、エルゴ研に代わる影時間の研究機関は発足されれば、そこの責任者となった、今回の騒動の生き残りの者が独断で追手を放ってくることは十二分にあり得る。

（さて、そんなやつらからどうやって匿い続けるかね。相手が新たにペルソナ使いを用意して、その中に探知能力持ちがいても、一応は大丈夫らしいが……）

これは起き上がれるようになってから湊が二人に話したことだが、桐条側にもまだペルソナ使いが残っている可能性は高いと言っていた。

黒服も研究員も殺して回った湊だが、マインドコントロールを受けて裏切った第二研の被験体は一人も殺していない。

無論、邪魔をしてきたときには当て身で意識を刈り取りもしたが、元々、脱走時に残っていた被験体は、『第一研十一人、第二研七人、第四研五人、第五研五人、第八研二人』の合計三三人だけ。

そして、先に外に出ていたマリアたち先導部隊に、第二研は三人いたので、結局、研究所内にいたのは四人だけで、殺して回っている時にはそもそも三人にしか出会っていない。

最後のブレイブザッパーで巻き込んだ可能性もあるが、何にせよ、人工ペルソナ使いのセカンドシリーズを作り始めることも考えられるので、相手が探知能力持ちだろうが見つからないよう、他の探知能力持ちとは違う方式のため干渉を受けない湊が、自分たちに常にステルスをかけておくことにしたのだった。

（対シャドウ銃もあるだけ回収したっていうし。私がいたときと羽根の残量が殆ど変わってないなら、もう武器の量産は無理だろう。新機関で使う機器類に積んで使えるようにしないといけないから、殆どはそれに回して。後は、桐条側のペルソナ使いに召喚器とやらを……）

特設会場のテントから少し離れた場所で、栗原が立ち止まって考え込んでいると、突然正面から声をかけられた。

「おや？　もしかして、栗原君かい？」

「……え？」

少々驚きながら顔をあげると、そこには岳羽が主任を務めていた時代のエルゴ研で一緒に研究していた人物、幾月修司が立っていた。

自分が研究所を離れてから、この男が飛騨と同じ室長になっていたことをすっかり失念し、ようやく思い出すことに成功すると、相手が桐条側の諜報部である可能性を考慮して何を話すべきかをまとめる。

飛騨の話しで聞いていた室長は五人いたが、他の室長は全員犠牲者のリストに名前が存在していた。

ならば、当主が新機関のトップであろうと、事実上の現場指揮を執る主任の座に納まるのは、この幾月である可能性が最も高い。

そう、湊らに追手を指し向ける者がいるのならば、この男がそうであるかも知れないのだ。

「幾月か……。久しぶり、今回はかなり大変なことになったね。今朝もニュースでやってたから、元同僚として花を手向けにきたんだが、どうやら前回で生き残った同僚も殆どのやつが逝っちまったらしい。離れておいて卑怯かもしれないが、寂しいもんだ」

「まぁ、ね。僕も現場にいたんだが、運良く被害の少なかった別棟にいたときに事故が起きたから、どうにか無事でいられたんだ。本当に……大変なことになってしまったよ」

そう言って、影の落ちた表情で儚げに笑って幾月は話す。どうやら、本来ならば事情を知らない栗原に、今回の件が影時間に起こった事だと知らせるつもりがないようだ。

これが既に部外者となっているためであったり、元同僚を気遣ってのことならば良いが、栗原では幾月の内面を読むことは出来ない。

そもそも、昔から専門とする分野が違っていたため、休憩時間に軽く話す程度しか付き合いが無かったのだ。
会ったのも約一年ぶりであるし、その間に精神面の変化があってもおかしくはない。
本当は事情を知っているが、どこで知ったかを勘ぐられると湊らを匿っていることがばれてしまうため、栗原も話しを合わせて相手を気遣う素振りで会話を続けた。
「あんまり気を落とすんじゃないよ？　何はどうあれ、あんたは生き残ったんだ。なら、他のやつの分も精一杯前を向いて生きな」
「ああ、ありがとう。心の整理はまだつかないけど、そう休んでもいられないからね。実は、エルゴ研はこの事故を機に完全に解体されることが決まったんだ」
「へぇ、それじゃあ影時間の研究は打ち切りかい？」
「いや、もう少し湾岸部の方に新しい施設を作って、今度は〝ラボ〟という新たな研究機関を組織することになったんだ。トップはご当主、主任は僕という形でね」
気を遣わせてはいけないと無理に表情を作っているのかもしれないが、幾月は先ほどよりは普段通りの表情で笑って見せた。
そして、栗原は自分の予想通りの組織形態になることを知り、やっぱりかと思いながら自然に振舞いながら祝辞を述べる。
「すごい出世だね。私がいたころは同じ平の研究員だったっていうのに」
「ははっ、まぁ、無駄に長くいるからね。発足当時からいた者は、今回の事故で殆ど亡くなってしまったし。運良く生き残った者と非番で事故に遭わなかった者を合わせても、八十人程度と随分規模は小さくなったよ」
「それでもさ。あの日に生まれた影時間。それを解き明かすには、あんた達に頼るしかないからね。ずっと研究を続けていたあんたがなるのは自然な事だと思うよ」
ポートアイランドインパクトで死んでいった嘗ての想い人を思い出し、栗原は表情を僅かに暗くしながら話す。しかし、これは栗原の

本心だった。
幾月らが湊たちにどういった事をしたかは知っている。それを非道だと思ったし、許される事ではないとも感じる。
けれど、他の誰も知ることのできない現象であるからこそ、それを消すには、幾月ら研究員に賭けるしかない。
それが新たな犠牲者を生みだす可能性もある。
さらなる災厄を招く可能性もある。
それでも、他の者には何もできないのだから、少しでも研究を続けさせて、影時間はどうすれば消えるのかという、解決の糸口を見つけるしかないのだ。
幾月は栗原がそんな事を思っているとは知らず、かつての同僚に功績を認められた事を喜び、穏やかな笑みを浮かべていた。
＊＊＊
そうして、それから暫しの間、世間話に花を咲かせていると、栗原は時計を見てかなりの時間が経っていることに気付く。
店自体は趣味でやっているようなものなので、少しくらい午後の開店が遅れたところで構わないが、体調の万全でない湊をいつまでも放っておくのは不安があった。
よって、話しはこれくらいにして、そろそろ別れることにした。
「結構話しこんじまったね。私は店の方があるから、そろそろ戻ることにするよ」
「ああ、引き留めてしまって悪かったね。久しぶりに話せて良かったよ」
「なに、趣味でやってる店だ。多少開けるのが遅れたって、別に売り上げに影響はないから気にしなくて良いよ」
お互いに笑みを浮かべ握手をすると、それじゃあと言って別れ、栗原は駐車場へと向かって歩き出す。
相手が己を部外者として扱っていたため、あまり詳しいことは分からなかったが、新組織体制については情報を得ることが出来た。
帰ったら早速湊に伝えようと思い、思考を今後の予定に移しかけたその時、

「ああ、そういえば――」
離れた場所にいた幾月が再び声をかけてきた。
一体何だと思って振り返ると、幾月は背を向けたまま言葉を続けた。
「――君、どこでここがエルゴ研だって聞いたんだい？」
「っ!?」
「ここは表では桐条傘下の製薬会社とその研究施設だ。確かに、去年の大事故からは移転したエルゴ研として利用していたが、辞めていった君にその情報が渡る筈はないんだがね？」
振り返った幾月の瞳を見て、栗原は思わず呑まれそうになる。
超えてしまった湊とは別種の、外れてしまった人間が宿す狂気。
酷く濁ったその瞳に見つめられ、身体が強張り、じんわりと額に汗が滲む。
だが、ここで黙っているわけにはいかない。緊張から乾いてしまった喉を、唾を飲み込む事で、少しでもマシな状態に戻し、栗原は呆れたような表情を繕って口を開いた。
「情報管理が甘いんだよ。辞めたって言っても、何人かは付き合いが続いてたからね。沢永が酒の愚痴に話してたよ」
咄嗟に考えた理由だが、これは全くの嘘という訳ではない。
完全な嘘ならばばれるだろうが、自身と沢永に交流があったことは同期の幾月も知っている。
そして、騙し切れるかと、内心で焦りながら相手の言葉を待っていると、幾月は狂気を収めて苦笑を浮かべた。
「ははっ、そうだったのか。いや、疑って済まなかったね。研究の内容が内容だけに、元関係者であっても情報を秘匿しておくようにしていたものだから」
「まぁ、当然のことだからね。別に気にしちゃいないよ。ただ、主任になることが決まって気を張ってるのも分かるが、頑張るにしても、もう少し肩の力を抜きな。じゃないと気苦労で潰れちまうよ」
「うーん、自分ではそうでもないと思ってるんだが、気をつけることするよ。何度も引き留めて悪かったね。また君の力を借りることもあ

るかもしれないが、そのときはどうか頼むよ」
「はいよ。じゃあ、またね」
それだけ話すと、今度こそ幾月と別れて栗原は自分の車に乗って去っていった。
見送った幾月は、道を曲がって見えなくなった車の方向を見ながら楽しげに口元を歪めていた。
「……そこにいたか、エヴィデンス」

夕方――栗原自宅
幾月と別れた後、栗原は店に戻らずに、食料品とチドリに頼まれた物や二人の衣類を買い。そのまま車をとばして家に帰って来た。
予定よりも早い帰宅に、リビングで勉強していた二人は不思議そうな顔をしていたが、事情を話すためテレビを消すと、栗原はソファに座って口を開く。
「今日、様子を見にエルゴ研の跡地に行ったとき幾月に出会った。なんでも、エルゴ研は解体され、別の場所に〝ラボ〟という名の研究機関を作ってそこで影時間の研究は続けるらしい。そして、トップはご当主、主任は幾月だ」
「残った研究員は何人？」
「八十人程度って言ってたよ。今回のことでだいぶ規模が小さくなったらしい」
エルゴ研に行って来たと聞いた時、チドリが驚いたように僅かに眼を大きく開いたが、反対に湊は落ち着いた様子で情報を集めている。
栗原としては、自分自身、なんとか落ち着いているように見せているだけなので、本来ならば異様に映る湊の態度は、逆に自分を冷静に戻してくれるのでありがたかった。
再び湊が黙って話を聞こうとするのを見ると、栗原はいく分か落ち着いて本題を話す事にする。
「……それと、済まない。多分だが、あんたらがここにいるのがばれた。事態の収拾でもう少しは大丈夫かもしれないが、一ヶ月を待たずに追手が来る可能性がある」

「そうか。じゃあ、早いうちに出ていくことにする」
「出ていくって当てはあるのかい？」
「ない。けど、ここにいたら栗原さんに迷惑がかかるし。安全とは言い難いから、明日から住む場所でも探してみようと思う」
そういうと、湊は目に巻いていた布に手をかけ、ぶちぶちと音をさせながら引き千切って外した。
見ていた二人は、三日前のことを思い出し、湊が暴れることも想定して構えるが、布を解いた湊の瞳は左目だけが金色に戻っていた。
「もう少しすれば魔眼の切り替えは可能だし。飛騨さんのくれたメモを頼りに、少し人を当たってみる。チドリ、明日の朝には出るから、そのつもりでいて」
「……うん」
「本当に済まないね……。着る物と鞄は買ってきたから使っておくれ。駄目だったときは、気にせず戻ってくるんだよ」
湊らは栗原の言葉に頷くと、渡された鞄に荷物を入れて、湊のマフラーに仕舞っておいた。
その後は、夕食と入浴を済ませると、少し早めに就寝し。次の日の朝一で、二人は栗原の家を出ていったのだった。

第二十二話　情報屋

８月２４日（木）
昼――巌戸台港区・喫茶店〝フェルメール〟
巌戸台港区のはずれの裏路地を入ったところにある、喫茶店〝フェルメール〟。
店内は少々薄暗くこじんまりとした感じだが、レコードで流しているクラッシックが、店の雰囲気を落ち着いたものにしており。窮屈な印象は一切受けない。
そんな隠れ家的な喫茶店だが、昼飯時だというのに客はほとんどおらず、店内にはマスターの男性と外国人と思われる女性が二人いるだけだ。
だが、そのとき、カランカランとベルの音をさせながら扉が開き、新たなお客が入って来た。
「いらっしゃいませ……おや、珍しいお客様だ」
やってきたお客に挨拶するためマスターが視線を向けると、こういった店に馴染みのなさそうな子どもが二人立っていた。
一人は夏だというのに黒いマフラーを巻いた少年、有里湊。もう一人は緋色の髪に、白いワンピースを着た少女、吉野千鳥。
今朝、栗原の家を出て、飛騨の遺したメモを頼りにここへとやってきた二人だった。
二人が来た理由を知らない者には、ただ珍しい小さなお客様にしか見えないため、奥のテーブルで向かい合ってコーヒーを飲んでいた女性の片方が微笑を浮かべてマスターに話しかけた。
「あら、こんな可愛らしいお客様がくるなんて、ここも随分と有名になったのね」
「ははっ、家族連れすら来たことはないんだけどね。まぁいいさ。二人とも、席は自由に座って。どこでも空いてるからね」
歳は三十半ばといった風に見える、顎に不精髭を生やし、ぼさぼさした黒髪のマスターが、穏やかな笑みで話すと、湊とチドリはマスターの正面のカウンター席についた。

二人が正面に座ったことで、マスターの男性はメニューと水と手拭きを用意する。
それを受け取ったチドリはメニューをしばし見つめてから、顔をあげると右に座っている湊に向かって呟いた。
「……全然分かんない」
「ジュースは分かる？」
「うん」
「じゃあ、それをまず決めて」
「わかった」
言われてチドリが再びメニューに視線を落とすと、二人の会話が微笑ましいのか、マスターだけでなく、奥に座っている女性たちも笑っている。
そんな周りの様子を気にせず、チドリはメニューを指差して頼む物を決めると、湊が代わりにマスターに注文した。
「この子は、メロンソーダとサンドウィッチ。俺はホットのブレンド。それと、〝ハイローストのブルーマウンテンの美味しい淹れ方〟を教えて欲しい」
『っ!?』
蒼と金の瞳で正面から見据え湊が話すと、店内にいた三人は皆、目を大きく開き驚愕の表情を浮かべた。
それはそうだろう。湊が最後に口にしたのは、情報を求めてやってきた裏稼業の人間であることを証明する合言葉だったのだから。
事情が変わった途端に、マスターは真剣な顔つきになり、よく通る低い声で湊に返す。
「驚いたな。君、それをどこで知ったんだい？　それと意味は分かっているのかな？」
「知り合いから信用出来る情報屋だって聞いてきた。仕事の仲介もしてもらえるって」
「そうか……。まったく、こんな子どもに教えるなんて、その相手は何を考えてるんだか」
マスターは呆れたように言うと、メロンソーダをコップに注ぎ、ス

トローと一緒にチドリの前に置く。
そして、コーヒーをセットしてから、サンドウィッチを作りながら話の続きをする。
「確かに、ここは情報屋だよ。けど、それは裏稼業のものなんだ。君たちのような幼い子どもが利用するものじゃない」
「住む場所が欲しいんだけど、家が手に入るような仕事ってある？」
「住む場所って、自分たちの家があるだろ？　家出くらいでこんな場所を頼っちゃ駄目だ。そんな者には仕事も情報も渡せないよ」
出来たサンドウィッチをチドリの前に置き、マスターは窘めるように言う。
髪の色や、瞳の色が少々人と違っているが、二人の身なりや雰囲気におかしな点は見られない。
裏稼業の人間を相手にする以上、マスター自身の人を見る目もある程度は肥えている。
それに照らし合わせて、二人は裏稼業とは無関係だと判断したのだが、さらに湊から返って来た言葉はマスターの想像とは違っていた。
「……ないよ。俺たちに家なんてない。両親は殺されたし、頼れる相手も碌にいない。今だって、匿ってくれてた場所がばれて、桐条の追手がいつ来るか分からない状態だし。後は自分で手に入れるしかない」
「殺された？　それに、桐条ってあの桐条グループかい？」
「ああ。ここ一週間、製薬会社の爆発事故のニュースがやってるだろ。あれ、本当は爆発事故なんかじゃないんだ。情報屋っていうなら、調べ物も出来ると思うけど。俺の言ってる事が本当かどうか知りたいなら、犠牲者の状態がただの事故で成り得るものか調べてみると良い」
落ち着いた口調で言い切ると、湊は自分の前に置かれたコーヒーカップに口をつけた。
基本的に好き嫌いはないが、湊はコーヒー党でブラック派だ。
エルゴ研で飲んでいたインスタントとは違う、ちゃんと豆を挽いて淹れたコーヒーの深い香りと味わいを楽しみながら、この店のブレン

ドは酸味を強めに付けているのかと考え、隣でサンドウィッチを頬張っているチドリにも時々視線を向ける。
だが、そんな普段通りの二人とは対照的に、店にいた三人は湊を訝しむような視線で見つめていた。
裏稼業と言っても完全にアウトローでやっている訳ではない。
危険で、違法なこともあるからこそ、協力を求めるときには普段の信頼関係というものが重要になっており。いまの湊の態度は、仕事だけの関係でいようとする、本来ならばシカトされてもおかしくないものだ。
けれど、二人はここを当たってみろと紹介されただけの、訳ありの子ども。
裏の人間ではないが、完全に表の人間でもないという非常に厄介な立場であった。
そうして、湊の言葉を聞いてから、ゆっくり三分経って苦笑を浮かべ、マスターは奥に座っている女性らに話しかける。
「……さて、どうしたものかな？」
「アタシらに聞くなよ。オマエの客だろ？」
「そうは言っても、僕のメインの仕事は情報屋だしね。ああ、君たちに自己紹介がてら一つ言っておくことがある。僕は情報屋の五代（ごだい）哲司（てつじ）。一応、仕事の仲介もやるけど、メインは情報屋だから、仕事の斡旋は殆どしてないんだ」
奥に座っていた茶髪の女性に言われると、そういって喫茶店のマスター、情報屋の五代は自己紹介をした。
さらに、五代に続けて、奥にいた女性二人も裏稼業の人間らしく、湊らに挨拶をしてくる。
「はじめまして、ここで斡旋してる仕事の仲介は殆どわたしがしているものなの。仲介屋の石動（いするぎ）静（しずか）よ。薔薇の様に美しいってことで、ロゼッタって呼んでね。んー、貴方たちは小猫（シャオマオ）ちゃんと、小狼（シャオラン）くんってところかしら？」
紫のドレスをきた長い金髪の二十代中盤と思われる女性、仲介屋のロゼッタは湊たちを見て楽しげに呼び名をつける。

しかし、急に変な呼ばれ方をしたことで、ジュースを飲んでいたチドリが何を言っているんだコイツは、と呆れた目をしたことで、五代が苦笑いでフォローをいれた。
「あはははは、えっと、彼女はね。相手の雰囲気や印象から、その人にアダ名を付けるのが趣味なんだ。特に気に入った相手には中国語でアダ名を付けるんだけどね。それと、ドレスを着ているのは彼女の趣味で、普通に日本の一般家庭に生まれた、イギリス人クォーターだよ」
「ふふっ、小猫ちゃんもドレスが似合いそうね。機会があったら、貴女に似合うドレスを選んであげるわ」
「……シャオマオってどういう意味？」
「中国語で子猫の事だよ。シャオランは小さい狼って書いて、狼の子どものこと」
ロゼッタの話しよりも、自分に付けられたアダ名の意味に興味を持ったチドリが尋ねると、湊はコーヒーを飲みながら答えた。
二人の態度で、自分の話を聞いてもらえていないと思ったロゼッタは拗ねたように、紅茶のカップに口をつけるが、五代ともう一人の女性は湊がスラスラと意味を説明したことに驚いていた。
「へぇ……オマエ、子どもの割に色々知ってるんだな。アタシはフリーの仕事屋、イリス・ダランベールだ」
黒のジーンズに黄色のTシャツと薄手の半袖の上着というラフな格好をした、肩口で切り揃えられた茶髪の外国人女性、仕事屋のイリスは、席を立つと湊の隣に座り、チドリの髪と湊の瞳を観察するように眺める。
それを見たロゼッタも湊らの元にやってきたので、湊もついでに挨拶をすることにした。
「俺は」
「ストップ！　名乗らなくて良い。アンタら訳ありなんだろ？　だったら、簡単に名乗っちゃ駄目だ。桐条が相手だったら、些細な情報からでも見つかる可能性があるからね」
「確かにそうだね。幸い、ロゼッタが付けたアダ名があるから、僕らもそっちで呼ばせて貰うし。本当に信用出来る人間といるとき以外は、

君らもそっちを名乗った方が良い」
イリスが湊の言葉を遮ると、不思議そうにしている二人に、五代も頷いて裏稼業の人間としてアドバイスをした。
確かに、桐条グループは〝キャンディからミサイルまで〟といったキャッチフレーズが似合いそうなほど、様々な分野に進出している世界有数の複合企業だ。
尤も、軍事関係の仕事は先代当主の桐条鴻悦が進めていたもののため、当主が桐条武治に代わってからは、規模を段々と縮小させて最終的に手を引くようだが。
それでも、その情報網は伊達ではなく。噂では個人所有の人工衛星で地上を監視しているとも言われている。
追手がそんな相手ならば、足取りがばれる可能性は少しでも減らすべきであり、名前を簡単にばらすなど言語道断であった。
そして、ロゼッタも親切心から、裏の人間として、訳ありの二人にアドバイスをする。
「チーム名があればさらに楽よ？　あれば、小猫ちゃんと小狼くんって言わないで、何々の二人ってパッと聞いただけじゃ分からなくなるもの」
「……仮面舞踏会（バル・マスケ）よ」
「仮面舞踏会？　それって何か意味があるのかしら？」
「多分ね。けど、ある人の受け売りだから、詳しくは知らない」
チドリが言った仮面舞踏会とは、かつて飛騨が湊ら二人を呼ぶ名称として考えていたものだ。
ペルソナと仮面をかけた名称なのだろうが、たった二人で舞踏会とはどうなのだと、当時はいまいちな評価だったが、自分で考えるのは面倒だと、チドリは飛騨の案を使うことにした。
それを聞いたイリスが、隣に座っている湊の頭をガシガシと乱暴に撫でつつ、決まったばかりの名称を口にする。
「仮面舞踏会の小狼と小猫か。ま、頼みごとがあったら言いな。相応の報酬で色々と聞いてやるからさ。アタシは銃火器とかの扱いが得意なんだ。まぁ、狙撃に関してはジャンの方が上手いけどね」

「ジャン？」
「ああ、僕のことだよ。特に意味はないけど、いつの間にかそんな風に呼ばれるようになったんだ」
乱暴に撫でられたせいで乱れた髪を直しながら湊が聞き返すと、五代がそういって湊のカップにコーヒーのお代わりを注ぐ。
情報屋と言っておきながら、狙撃の腕前があるということは、元々は仕事屋の方でならしていた人物なのだろうかと、湊が探るような視線を向けるが、五代はにこやかに笑っているだけだった。
そうして、何も読めないことで諦めたところで、ロゼッタが湊らに話しかけてくる。
「それで、小狼くんたちは家が欲しいのよね？　立地とかにこだわりが無いなら、わたしが持ってる仕事の中に一つあるけど？」
「おいおい、こんな小さな子どもに何を言ってるんだ」
「別に珍しくない仕事よ？　マンションの大家からの依頼で、ヤクザを立ち退かせて欲しいってやつでね。ヤクザの事務所があるって聞いたら誰も入居したがらなくて困ってるんですって。報酬は現金か、その立ち退かせた部屋よ」
五代の言葉も気にせず、ロゼッタは椅子から身を乗り出し、イリスの背中側から顔を出して湊の反応を見る。
別にロゼッタだって真面目に湊らに仕事を斡旋しようとは思っていない。
ただ、どこか擦れて見える湊を納得させるには、実際に説明して自分たちでは無理だと分からせた方が早いと判断したのだ。
しかし、それがロゼッタの犯した過ちだった。
「……いいよ。それやる。仮の住まいでもないよりはマシだ」
「えっ、ちょっと、相手はヤクザよ？　貴方たちじゃ、立ち退かせることなんて」
「無理じゃない。住む場所が手に入るならやる」
「っ……」
真剣な瞳で言い切られてしまうと、自分から仕事内容を説明したロゼッタは何も言い返せなくなる。

途中でロゼッタの思惑を理解していた五代も、湊の様子を見て、どうするつもりだとロゼッタに責めるような視線を送った。
そうして、一同の誰も言葉を発せずにいると、黙って湊を観察していたイリスが腰に手を回し、今度はそれを湊に向けた。
「イリスっ」
五代が声をあげるのも当然で、その手には光の反射でくすんだ黒い輝きを放つ拳銃、コルト・ガバメントが握られ、銃口が湊の頭部に向けられていた。
トリガーに指をかけた状態で、イリスは冷たい瞳を湊に向けて口を開く。
「……ガキの我儘で出来ることじゃないんだよ。こうやって銃を向けられたら、アンタらは何も出来ない。相手はヤクザだ。アタシらみたいな裏のプロよりはマシだが堅気じゃない。ガキなんて関係なく武器を使ってくるんだよ」
言葉で分からないなら、現実を教えて分からせる。
危険な方法だが、イリスを含め、ここにいる裏稼業の三人は、危険な世界に生きるからこそ、正常な感情も持ち合わせて二人の事を気遣っていた。
（こんな大人もいるのね……）
研究所にいた研究員のように、世界の為を謳って子どもたちを犠牲にするような者とは違う。これが外の人間かと素直に感心してジュースを啜るチドリ。
感覚が一般の子どもと違っているからこそ出来るマイペースな行動だが、さらに、湊は三人の予想を超えた行動を取った。
「っ!?」
相手の警戒が不十分だと判断して、湊は自身の反射神経の限界速で相手の腕を掴み、そのまま銃口を自分の喉に突きつける。
マフラー越しだが、しっかりと湊の喉に触れている感触を感じ、イリスが腕を引こうとするが、子どもとは思えない怪力を発揮する湊がそれを許さない。
そして、

「……撃ってみろ。何も出来ないと思うんなら、撃ってみせろッ!!」
「っ、こんのぉぉぉ!!」
「駄目だっ、イリス!!」
吼えた湊が両目とも蒼い瞳になった瞬間、イリスは危険を察知し、反射的に引き金を引こうとする。
それを理解した五代が止めようとする間もなく、湊が相手の腕を捻りながら肘を蹴りあげ、銃を手から離させてから床に倒す。
しかし、イリスもただ倒れるのではなく、咄嗟に片手をついて回転して着地すると、予備の銃を抜いて、椅子から飛び下りていた湊に向けた。
「なっ……」
だが、湊の手には直前まで自分が持っていた銃の他、どこに持っていたのか不明な短機関銃が握られていた。
これでは流石に勝てる筈もないと、敗北を認めるしかなく。深いため息を一つ吐くと、銃を仕舞って、両手をあげた。
「……キャリコM９５０ね。それ、本物か？」
「本物だよ。弾はもう入ってないけど」
「は？　それじゃあ、アンタ、銃を持った人間にハッタリ仕掛けたのか？　ったく、どこまで命知らずなんだか……」
呆れたように言いながらも、イリスの表情は笑っていた。
椅子に座り直す前に、湊から銃を返してもらい、それを受け取ってから、同じく座りなおした湊の頭を再び乱暴に撫でる。
「あーあ、こんな子どもにいい様にやられるとはね。アタシもそろそろ廃業かねぇ」
「フフッ、だったら二人の保護者にでもなってあげたら？　さっき見た限りじゃ、小狼くんはかなり筋が良いみたいだし」
「バーカ、アタシといたらそれこそ危ないだろうが。それに、小狼。さっき見たときに気付いたけど、オマエ、銃を撃った事ないだろ？」
ロゼッタの軽口を流しながら、イリスは湊の頭に手を置いたまま尋ねる。
咄嗟の反応は子どもらしからぬレベルであったが、先ほどの銃を持

つ手付きは、初心者丸出しのお粗末なものだった。
勿論、それでも銃を撃つことは出来るため、先ほどは降参したが、銃の扱いに慣れていないと分かれば、まだ勝てる可能性はあると、特攻をかけてくる者もいる。
そのため、ちゃんと確認しておこうと考えたのだが、イリスの読み通りに湊は素直に頷いた。
「なるほどねぇ、なんとなーく、アンタの素性が分かって来たよ。……ま、詮索するつもりはないけどね。ただ、仕事を受けるんなら、アンタが子どもなんて言い訳は利かない。失敗は全部、自分の責任だ。それでもやるってんなら、アタシはもう止めない」
「ちょっと、イリス。簡単にそんな事いうけど、わたしは」
「大丈夫だ。絶対とは言い切れないが、なんか隠し玉があるみたいだし。ただのチンピラ相手になら勝てるさ」
実際に対峙してみて思った感想。簡単に人を褒めないイリスだからこそ、湊なら出来るとプロ目線で判断し、太鼓判を押したのだろう。
そうなると、実戦は専門外のロゼッタでは反論できず、湊が受けると言っていたので紹介するしかない。
仲介料が結構良かったので、受け手がいてくれるのは嬉しいが、こんな筈ではなかったのになと、少々落ち込みながらロゼッタは立ち上がり、先ほど自分が座っていた席から荷物を取ってくると紅茶代を払いながら要点を伝えた。
「はぁ……じゃあ、依頼人のところに案内するわ。店を出たら、もう仕事は始まってると思って、お互いを名前で呼んじゃ駄目。貴方は小狼で、貴女は小猫よ。気をつけてね？」
「わかった。マスター、会計はいくら？」
「いや、今日は良いよ。また仕事が終わってから、時間が出来たときにでも遊びにおいで」
「そう。じゃあ、また」
「……ご馳走様」
それだけ言うと、湊とチドリは手を繋いでロゼッタの後ろに続いて店を出ていった。

後に残った二人は、閉まった扉から二人の姿が見えなくなると、五代は煙草に火をつけ、イリスはコーヒーを飲みながら静かに話す。
「良い子だったな。お姫様に、その騎士さまって感じか。ロゼッタが何でネコとイヌじゃなくて、ネコとオオカミって付けたのか分かった気がするよ」
「確かにね。僕も結構色んな場所で仕事してたけど、あんな子は初めて見たよ。……気付いたかい？　彼、既に何人も人を殺しているね」
肺にいれた煙草の煙を吐きだし、灰皿に灰を落としながら五代がいうと、イリスも苦笑で返す。
「そりゃ、あんだけ血の臭いをさせてれば気付くさ。髪も返り血で汚れたんだろうね。変な傷み方してたよ」
湊が大量の血を浴びてから、既に一週間が経っている。
だが、職業柄、血の臭いに敏感な二人は、一緒にいたチドリが気付かないような、湊の身体からごく僅かに香る血の臭いを感知していた。
それをさらに、確信を得るため、イリスは撫でるフリをして湊の髪を触って確かめたのだが、彼女の行動の意味をやっと理解して、納得がいったと五代は明るい表情を作る。
「ああ、それで触っていたのか。君が子どもを可愛がっているのなんて珍しいと思っていたんだ」
「そもそも、ここに子どもなんて来た事ないだろ……。それに、自分でも柄じゃないって分かってるさ。けどまぁ、なんていうか。その、見ていると放っておけなくてね」
「言いたい事は分かるよ。小猫ちゃんには小狼君がいるから大丈夫だろうけど、小狼君にはって事だろう？」
湊らが店に入って来た時点で三人が感じたこと。
それは、チドリが湊がいることでリラックスし、逆に湊は常に周囲を警戒して気を張っていたということだ。
初めは、慣れない雰囲気の店に緊張しているのかと思われたが、どこかピリピリとした気配を発している事で、仕事上そういったものに慣れている者たちは気付いた。

こんな休日の真昼間でありながら、湊はまるで深夜の暗い山の中にいるのかというくらい、過剰に警戒していたのだ。
その行動の理由は、二人が桐条の追手から逃げているということで理解できたが、あのままでは湊がいつか潰れてしまうだろう。
知り合ったばかりだが、純粋に少女を守ろうとする少年を見て、イリスはそれはあまりに可哀想だと思った。
「……桐条ねぇ。ま、アタシも好きじゃないし。見るからに堅気じゃなければ、何人か片付けても良いんだが、追われてる理由が分からないことにはな」
「ん？　さっき、小狼君の素性が分かって来たって言っていただろ？」
「ああ、多分、前に桐条が集めていた孤児だろうってくらいにはね。だが、それ以上は分からないよ。そもそも、なんで桐条が子どもを集めていたのかも知らないんだ。迂闊に飛び込めば全身大火傷さ」
言ってみせて、イリスは五代と共におかしそうに笑う。
それは去年の暮れの頃。ここ厳戸台港区近辺の孤児院から、何人もの子どもたちが桐条によって集められているという情報が入った。
当然、情報屋である五代も話しは聞いていたし。少しくらいは調べようかと、感づかれない程度に動きもした。
だが結局、集められていたのが百人程度で、その子たちは全員どこかへ連れて行かれたという事しか分からず。
子どもたちの行き先を一番知っていそうな、孤児院の者に何か聞いていないかと調査しようとも思ったが、その孤児院自体が、桐条の出資の元でつくられたものであったため、嗅ぎまわっている事をばれないようにするには、調査は断念せざるを得なかった。
窓の外を見ながら当時のことを思い出し、五代は湊たちが使った食器をシンクに置くと、洗い物をしながらイリスに話しをする。
「集められていた場所は、ニュースで話題になっている製薬会社で、小狼君のいうことが事実なら、あれは事故ではなく小狼君たちが逃げだす際に起こしたものだ。そして、被害者とされる職員の内、何人かは彼の手によって殺されたと。うん、言われなきゃ気付けなかったことが不思議なくらい、あの事故はおかしな点で溢れているね」

「だね。アタシも急に違和感を感じられるようになってきた。上空からの映像は見たか？　施設を真っ二つにするような深い傷跡がついていただろ。普通の爆発じゃあ、ああはならない」
　仮に施設の中央が爆発の中心だったとすれば、縦一線の傷跡がつくのはおかしい。
　放射状に広がるか、施設の構造によって歪に倒壊するか、普通の爆発事故であったらこの二択になるのが自然だ。
　しかし、そうはならなかった。
「ふむ……これは一種の暗示にかけられていたと見るべきかな？　人々がそれをおかしいと思わないように、記憶自体ではなく、認識の方に作用するような。しかし、小狼君たちは、それに対抗するだけの何かを持っていた。それにより、彼の言葉がトリガーとなって、僕らも通常の認識で事故の状態を把握できるようになった」
「これはかなり厄介だな。桐条の力を使うにしたって、日本中や世界の人間にまで暗示をかけるのは不可能だ。そういった物を専門としているヤツだっているんだし。全員を暗示状態に出来る訳がない。だけど、世間であの事故に違和感を感じて、それを公表している者がいない。インターネットも含めてね」
「ひょっとすると、僕らの知りえないところで何かが起こっているのかもしれないな。彼らはその切り札で、桐条もそれを理解して管理していた。となると、追手は口封じか、再び管理するために二人を追っているという訳か。……あんな良い子が人を殺してでも逃げようとするなんて、余程のことだろう」
「まぁ、その点に関しちゃ、小狼自体も謎だよ。アイツは間違いなく人を殺してる。それも全身に血の臭いが染み付くような人数をだ」
　イリスが飲み終えたコーヒーのカップを前に出し、五代がそれを受け取ってシンクに戻ってそれを洗う。
　その間に、イリスは元の席に置いていた鞄を持ってカウンター席に再び着くと、鞄の中から手帳を取り出し、ボールペンで何かを書きながら言葉を続けた。
「だけど、アイツはキャリコを持っていながら銃を撃った事が無いと

言った。子どもを管理してたなら、その辺に銃を転がしてる筈がないから、あれはきっと奪った物なんだろう。だとすると、あいつは銃を持った人間を相手に、銃以外の方法で勝負を挑み勝利して、おまけに相手を殺せている」
「近接格闘で短機関銃を相手にする、か。僕だったらゾッとしないね」
「普通の人間なら誰だってそうさ。けど、小狼はそれをやってのけた。小猫を守るためなのか知らないけど、アイツは自分の命を簡単に棄てようとするみたいだ」
　先ほど、イリスの銃を己の喉元に突きつけて啖呵を切った湊を見ているだけに、逃げだす際にも、湊は同じように敵の銃に一歩も怯むことなく挑んだことが容易に想像できる。
　しかし、湊の簡単に命を棄てるような行動は、チドリを守るために自身を犠牲にするのとはまた違っているようにも見えた。
「……さっき小狼がアタシに啖呵切ったときさ。アンタは何も感じなかったか？」
「急に彼が動いて驚いていたからね。あんまり状況を把握できていなかったけど、君が腕を引いてもびくともしてなかったよね、彼」
「ああ、確かにあの身体であの怪力も驚きだが。あの一瞬、小狼の瞳が両方とも蒼くなったんだよ。金と蒼のオッドアイってのも驚きだけど、両目が揃ったときの、あの感じは普通じゃなかった。脳が全力で逃げろって命令して、全身の毛穴が開いて冷や汗が噴き出るかと思った。生き残るためには殺すしかないって本気で思ったくらいにね」
　口調こそ普段通りだが、イリスは何か書いていた手を止め、先ほど湊に掴まれていた場所を撫でる。
　そこには、湊の小さな手の痕が内出血という形で残っていた。
　肌の色が白いだけに、黒ずんだ紫色がかなり目立つ。
「……咄嗟の反応は及第点。いや、むしろ、アタシらの業界でも誰もあんな反応速度は出せない。だけど、それだけだ。奇襲ならやりようもあるだろうが、アイツは正面からは戦えない。あまりに動きに癖がなさすぎる」
「癖がないという事は、何の型も持ってない。つまり、身体が動きを覚

えていない。全て思考制御で行動しているから、無意識に身体が反応することが出来ない……ってことかい？　今日は随分と喋るね。そんなに小狼君が心配かな？　大丈夫、君が認めたんだ。きっと無事に仕事をこなしてくるよ」

洗い終わったものを布巾で拭きながら、棚へと片付けて五代は笑って言う。

イリスも無事にそうなるように祈りながら、出会った二人の名を、手帳に記しておいたのだった。

第二十三話　桔梗組

午後――巌戸台中央区

ロゼッタに案内されて、湊たちはタクシーで巌戸台中央区にやってきた。

同じ中央区にあるが、栗原の家からは離れているので、仮に桐条側の人間が既に栗原の家をマークしていても見つかることはないと思われる。

そうして、十二階建てマンションの前でタクシーから降り、ロゼッタが代金を払って領収書を切ってもらっているのを無表情で眺めながら、湊はマンションの中を探知で探る。

（……十階の角部屋か。４ＬＤＫバルコニー付きとは豪勢だな）

湊が両親と住んでいたのは普通の一軒家だった。

なので、マンションの暮らしがどんなものかは知らないが、ファミリー向けは大体が３ＬＤＫなので、一部屋多くバルコニーまであるのは、十分に広いと感じた。

そんな風に一人で考えていると、同じように探知をしていたらしいチドリが隣に並び声をかけてくる。

「……六人ね」

「今は、だよ。外に出てるやつがいる可能性を頭の隅に置いておいた方が良い」

静かな声で湊が返すと、チドリも頷いて湊の手をギュッと握った。

一見落ち着いているように見えるが、チドリは訓練以外で人間と戦ったことはない。

いまは影時間外なので身体能力は強化されておらず、一般人を相手にペルソナを出すわけにもいかない。

そんな状態で、研究員に銃を向けられたときは、湊に抱きしめられ目を閉じていただけだったチドリが、実際に死線を越えてきた湊と同じように振る舞えるはずがないのだ。

けれど、傍から見ていたロゼッタは二人の会話に気になる点があったらしく、集中している様子の二人に構わず声をかけた。

「ちょ、ちょっと、貴方たちここからでも相手の居場所が分かるの？」
「……普通とは違った情報網を持ってるだけだ。それより、早く案内を」
「え、ええ、わかったわ。エントランス横の管理室に依頼人がいるの」
フェルメールでのイリスとのやり取りを見てから、ロゼッタはどこか湊に苦手意識を持ったようで、顔を強張らせ行き先を指差しながらチドリの横に並んだ。
それを確認した湊がエントランスに向かって歩き出すと、ロゼッタはチドリの耳元で小さく呟く。
「小猫ちゃん。お姉さんに、あとでどうやったかこっそり教えてね？」
「……女の勘よ」
「そ、そう。わたしも一応、女なんだけど。それはちょっと使えないかなぁ」
無口で無愛想だが、明らかに普通ではない湊よりは付き合いやすいと思い、チドリに尋ねたのだが、ロゼッタはあえなく撃沈する。
（ていうか、小狼君は男の子だし……まぁ、いいか）
しかし、綺麗な緋色の髪が気に入ったので、今後も諦めず交友関係を築いていこうと、決心しながら依頼人の待つ管理人室へと向かうことにした。
――管理人室
管理人室はエントランスと隣接しており、依頼の詳細を聞きに来たと伝えると、中にある座敷に通された。
ドレスを着た女と子ども二人という、どうみてもプロではない組み合わせに、白髪混じりの髪を短く刈りあげた初老の管理人も不審げな視線を送っていたが、引き受ける者に詳細な情報を渡すための調査に来たのだろうと思ったのか、緑茶を準備して話し始めた。
「えー、前にお願いした通り、依頼はヤクザを立ち退かせて欲しいというものです。ここの十階の一番奥に住んでるんですが、よく組員が出入りしているので、入居者がきても直ぐに引っ越してしまうんですよ。おかげで買い手がつかず、困っていまして」
「なるほど……。その人たちが、どこの人間かは分かっているんです

か？」
「ええ、桔梗組です。隣の六徳（りっとく）市に本部があるでしょう。偉い人がくることはありませんが、ここにいる連中はよく出かけて行ってるみたいです」
管理人の言った六徳市とは、ここ巌戸台中央区よりもさらに内陸部に行った山側にある市で、巌戸台と比べると随分と田舎な場所である。
そこに本部を構えているのが、桔梗組という極道一家で、広範囲に組員がいる訳ではないが、歴史もある分そっちの筋ではかなり影響力のある者たちだ。
隣接しているだけに、巌戸台の方にも何軒か事務所を構えており、ばれない程度に違法なことにも手を染めていると噂されている。
「んー……桔梗組はちょっと厄介ね。本部が近いし、横の繋がりもあるから、ここに住んでる下っ端を片付けて、ハイ終わりって訳にはいきそうにないわ」
「じゃあ、本部で直接交渉すればいい」
「解決するにはそれが一番早いけど、それだけに難しいのよ。完全にアウェーだし、存在が違法でも、向こうはただ住んでるだけで違法なことはしていないの。だから、交渉しようにも追い出せる正統な理由がないわ」
湊が意見を出してきたが、ロゼッタは困り顔でそれを実現不可能だという。
立ち退かせることが出来ても、後でまた来られては困る。そういった憂いを全て断つには、確かに湊が言ったように、大元に話しをつければ解決するだろう。
しかし、相手はヤクザだ。銃や刃物を持っていることは十分に考えられるため、話し合いが始まる前に、勝手な申し出をしてきた湊をどうにかしようとするかもしれない。
歳不相応な雰囲気と、店での動きから、ロゼッタは湊を普通の子どもではないと思っていただけに、少々短絡的過ぎるとも思える発言を聞いて、相手はこういった仕事に対する適性は低いかもしれないと評

価を改め始めていた。
だが、いまの説明を聞いても納得していないのか、再び湊が口を開く。
「……本部の正確な場所は？」
「あぁ？　あー、だいたいの場所は噂で聞いてるが……あの、この子どもは関係あるんですか？」
湊がジッと目を合わせて尋ねてきたことで、困惑しつつ管理人がロゼッタに尋ねる。
本来ならば、あまり表沙汰に出来ない依頼だ。
管理人がこんな依頼を出しているとヤクザの方にばれれば、それを聞いた子どもにも何かしらの被害が広がる可能性がある。
そう思って、関係ないのであれば、表で待っていた方が良いのではと判断を仰いだのだが、尋ねられたロゼッタも苦笑いで返した。
「あ、あはは……あの、実は依頼を受けるのはこの子たちなんです。見た目というか、実年齢も子どもだと思うんですが、実力の方はたぶん問題ないと思うので……」
「はぁっ!?　こ、こんな子どもがヤクザの相手なんて出来るはずないでしょう！　こっちもちゃんと高い金を払って仲介と依頼を頼んどるんだ。いくら受ける人間がいなかったからって適当な事して貰ったら困るよ！」
語気を荒げてテーブルに強く手をつき立ち上がる管理人。これにはロゼッタも上手く言い返す事が出来ず、申し訳なさそうに若干引き攣った笑いを返すしかない。
確かに、仲介料一つとっても、裏の人間への依頼はかなり高額になる。今回、ロゼッタが得た報酬は前払いで十万、依頼が達成されればさらに四十万が支払われる。
だというのに、仲介人が連れてきたのは、目と髪の色が普通とは違うただの子ども二人。
これでは困っている人間の弱みに付け込んだ詐欺にしか思えなかった。
「――――いいから、さっさと本部の場所言えよ」

「なっ!?」
だが、両の瞳を蒼くした湊は、管理人の意見など一切聞くつもりはないと、研究所で職員たちから奪った対シャドウ銃に改造されたベレッタＭ９２を両手に持ち、銃口を管理人の頭と胸にそれぞれ向ける。
これには、黙ってお茶を飲んで話しを聞いていたチドリも驚いて目を見開き。ロゼッタも焦りからじんわり汗を滲ませながら、腰を浮かせて湊に銃を下ろすよう説得する。
「しゃ、小狼君、銃を下ろしてっ。この人は依頼人なのよ!?」
「関係ない。俺は依頼を聞きに来て、それに必要な情報を話すように言った。それを拒むようなら、こいつは依頼の解決を望んでないってことだ。俺はそんな冷やかしに付き合ってる時間はない」
「き、桔梗組の本部の場所はわたしが知ってるから教えるわ。依頼人さんは正確な場所までは知らないみたいだけど、わたしなら教えられるから、ね？　その銃を下ろして頂戴」
「……ハァ」
少し間を置いて短く嘆息すると、湊は渋々といった様子で銃をマフラーにしまった。
向けられた銃口がようやく外されたことで安心したのか、管理人も肩で息をしながら身体を小さく震わせ、腰を抜かし畳に尻餅をつく。
そんな両者の様子を見ながら、ロゼッタは湊に仕事を回した事を激しく後悔していた。
（こんな幼い年齢で、出会ったばかりの依頼人にこんな真似をするなんて前代未聞よ。それに、あの目はなんなの？　オッドアイかと思ったら両目とも蒼くなったり、かと思えば左目だけ金色に戻った。いまもだけど、あの両目が蒼くなったときの雰囲気は普通じゃないわ……）
そうして、依頼人が落ち着くのを待ってから、ロゼッタは湊に桔梗組の本部の場所を教えると、管理人室を出て、自分たちだけで向かうという湊の言葉に従い別れて店に戻っていった。
夜――六徳市・桔梗組本部

夜になるまで、百貨店やショッピングモールという人が大勢いる場所にいた湊とチドリ。
栗原が買って来てくれた物以外にも、必要になりそうなものを買って全てマフラーの中にしまっておいた。
夕食も早めに外食で済ませ、夏で遅くなっている日の入りを待つと、建物の屋上からタナトスを使って高高度で飛び、そのまま目的地である桔梗組本部の門の前までやってきたのである。
かなり田舎の方にあるため、周りには田んぼや畑ばかりで、他に何もないと思ったが、桔梗組の本部がある場所はなんとちょっとした山の頂上だった。
雰囲気的に、寺や神社の建て方に近いそこは、石段を上り山門に着くだけで数分かかりそうだった。
「山の頂上にあるし、大きい家ね。これってまわりに何もないから目立つようにってこと？」
「それもあるけど、舐められないようにってのが大きいと思う。本部って言っておきながら、普通の庶民的な一軒家じゃ貫録も何も感じられないし。そういうのって重要だろ？」
上空から降りてくるときに、敷地内の様子を見ていたチドリが尋ねると、湊はEデヴァイスのゲートを開いてメッチーを呼び出しながら答える。
現れたメッチーは嬉しそうに鳴いているが、何のために呼んだのだろうかとチドリが不思議に思っていると、湊は抱き上げたメッチーをチドリに渡した。
それほど重くないので、持っていろというのならば持っているが、一言くらい説明が欲しい。
視線にそのような気持ちを含んでジッと見ていると、湊が口を開く。
「……メッチーはぬいぐるみのフリしておいて。いざってときは普通に雷で攻撃してくれて良い。それまでは子どもが変なことを頼みにきたって風に装うことにするから、ちゃんとチドリを守ってくれ」
《メッチ！》

「うん、ありがとう」
任せろと言わんばかりに短い手をギュッとさせ、やる気を表すメッチー。
そんな相手に礼を返し、湊はそのまま門のところまで行き呼び鈴を鳴らした。
見ているチドリは、真正面から行って大丈夫なのかと少々不安になるが、標準的な『ピンポーン』という音の後、少し待っていると若い女性の声が聞こえてきた。
《はーい、どなたですか？》
「夜分にお訪ねして済みません。ある住宅地で、お宅の組員の方たちが出入りするため、マンション等で部屋の買い手がつかないと相談を受けてやってきました。普通に住んでいるだけのそちらに非がないのは分かりますが、双方の主張を聞かぬことには十分な判断が出来ないため、少々お話をさせていただきたいのですが、御時間宜しいでしょうか？」
《え？　えーっと……ちょっと待っててくださいね？》
女性がそういうと、ブツッと音がして通話が切れる。
声の調子からすると、話の内容だけでなく、カメラで見えている相手の姿が子どもにしか見えず、その子どもが歳不相応な受け答えをしていることにも戸惑っているようだった。
湊に言われてぬいぐるみのフリをしてジッとしているメッチーを両手で抱きながら、よくもまぁ口が上手くまわるものだと、チドリも感心して見ていると、正面の大きな扉ではなく、自分たちから見て左側にある小さな門扉が僅かに開いた。
そちらに視線を向けると、先ほどの声の主と思われる、二十代中盤になるかどうかという見た目の女性がぴょこんと顔を出している。
初めはそのままキョロキョロと辺りを伺っているようだったが、湊たちしかいないことが分かると、女性は大きく門扉を開いて手招きで二人を呼んだ。
「こんばんは。えと、話し合いってあなた達だけで来たの？」
「依頼を受けたのが俺で、この子は付き添い。仲介屋は街の方で別れ

た」
現れた女性は、艶のある黒髪を肩甲骨辺りまで伸ばし、藤色の着物をきた、仕草の端々に育ちの良さが伺える大和撫子然とした人物だった。
湊の言葉を聞いた相手は、いまいち信じられていないようだったが、ふざけているとも思えなかったのか、湊達を中に招くとカランコロンと下駄の音をさせながら本宅と思われる場所へと向かって行く。
「ああ、自己紹介しておくね。わたしは鵜飼（うかい） 桜（さくら）。フフッ、ヤクザの組長の一人娘やってます」
「……小狼」
「小猫って名乗れって言われた。面倒だから適当に呼んで良い」
「二人とも偽名なんだぁ。本当のお名前を聞けないのは残念だけど、お仕事ってあんまり大きな声で言えない種類のだよね？　だったら、しょうがないかな」
二人が偽名を名乗ったことに、桜はくすくすと穏やかに笑って納得している。
ヤクザと聞いていたのだが、組長の娘である相手があまりに想像していたヤクザのイメージとかけ離れており、二人は僅かに面食らう。
だが、案内される先の建物には何人もの気配があり、さらに広範囲に探知をかけると、日本刀や拳銃といった武器の存在も確認したので、湊は普通の視界をしている左目で桜の背中をジッと見つめた。
そして、本宅に着くと、引き戸を開けて中に入る。
先にあがった桜がスリッパを用意するが、湊はもしものときの事を考えて、ブーツだった無の鎧をアンクレットに変化させてからスリッパを履いた。
「そうそう、お話しだけど、わたしは組のことは何も分からないの。おまえは堅気で暮らしとけーってお父さんに言われて、三月までは大学院に行ってたしね」
「学校やめたの？」
「ううん、ちゃんと卒業したのよ。これでも小中学校の教員免許と臨床心理士の資格取ったんだから。まぁ、身体が弱くて、お仕事は出来

ないんだけどね」
　チドリが聞き返すと、桜は最後に自嘲気味な笑みを浮かべて答えた。
　確かに、暗い外では気付かなかったが、明るい室内で見てみれば、とても肌の色が白いことが分かる。
　髪は黒いが、瞳がやや赤茶色をしていることから、アルビノではないが、かなり色素が薄いのだろうと湊は推測した。
　しかし、桜の方も、明るい場所で湊たちの姿を見たことで髪や目の色が普通と違っていることに気付いたのか、廊下を進みながら声をかけてきた。
「小狼君と小猫ちゃんも珍しい髪と眼の色してるんだね。染めたりコンタクトじゃないよね？」
「最近この色になった。染めた訳じゃないけど」
「そうなんだ。とっても綺麗で良いね」
　にこにこと楽しそうに笑いながらチドリの髪を褒め、歩き続けると、桜はある部屋の前で止まり、丁寧な手つきで障子を開けた。
　中には何人もの男たちがおり、桜がやってきたことに気付くと、口々に挨拶をしている。
「桜さん、まだ話し合いの途中なんですが、なんか誰かに用ですかい？」
「ええ、お客様がきて少しお話しをしたいって仰っているから、内山さんなら分かるかと思って」
　桜が内山と呼んだ男は、白のパンツにペイズリー柄の赤いシャツを着た男だった。剃りこみを左右それぞれ耳の辺りまで二本ずつ入れた坊主頭で、背はあまり高くないようだが、チンピラ風の威圧感を放っている。
　男は、客と聞いても思い当たる節が特になかったのか、少し考える素振りを見せてから、顔をあげて湊達に視線を移した。
「お客？　後ろのガキがそれですか？」
「そうだけど、そんな呼び方は失礼ですよ？　さぁ、小狼君、小猫ちゃん。このおじさんなら多分分かると思うから、内容を教えてあげて」

言いながら二人を中に通し、先に座っていた若い組員がどいた事で空いた席を用意されると、桜もそのまま居座るつもりらしく、テーブルを挟んで向かいに内山が来るように座った。
本来ならば堅気で無関係である人間の同席は遠慮したいが、相手が組長の娘ならば話は別だ。
巻きこむ気はないが、良識を持っている相手のようであり、事を起こしたときには、チドリと一緒にいさせればチドリの安全が保障される。
そうして、湊を中心に左に桜が、右にチドリが座ると、湊が顔をあげ正面にいる内山と視線を合わせて口を開く。
「巌戸台中央区にある十二階建てマンションの十階にあるバルコニー付きの部屋。そういわれて、覚えはある？」
「あん？　バルコニー付きのマンションつったら、タケの野郎が事務所代わりに使ってる場所だと思うが、それがどうしたい？」
あまり覚えていなかったのか、顎に手を当てて考えてようやく思い出したらしい内山。
湊を怪訝そうに見ながら視線を合わせ、湊も真っ向から見つめ返すと、単刀直入に述べる。
「組員が出入りするからって、その近隣の部屋の買い手がつかず、あのマンションの管理者が困っていてね。そこに住んでいなきゃいけない理由がないなら、立ち退いて欲しいんだ」
「おいおい、真っ当に金払って住んでるのに、そいつはちょっと言いがかりってもんじゃねえか？」
「近隣住民とトラブルを起こしたり、トラブルの原因となり得る行動や施設の利用法を取る人間は、管理者側で立ち退き要求が出来るようになってる。『組員の出入り』という行動により、安心して暮らせないと、引っ越してきたばかりで直ぐに出ていった家族もいるようだし。条件は揃ってると思うけど？」
実際にそんな法や条約があるかどうかは知らない。
だが、明らかにそういった方面に強くなさそうなので、こういったハッタリでも十分に相手は信じるだろうと湊は読んだ。

案の定、相手は「うぐっ」と言葉に詰まり、まわりの若い組員も驚きと戸惑いを顔に浮かべ、湊と内山に視線を行ったり来たりさせている。
しかし、子どもに論破された程度で引いていては、その筋の者として舐められるようになり、組としての沽券にも関わる。
そうして、平和的な会話路線から高圧的な脅し路線に変えた内山が、腕まくりをして腕の刺青が見えるようにすると、わざと大きくバンッと音を立ててテーブルに肘をついた。
「出ていった理由が組の者が出入りしてたからって証拠はあんのかい。買い手がつかないなんて、そっちさんの営業の下手さの言い訳に使われちゃあ、たまったもんじゃないぜ。こりゃ、名誉棄損だよなぁ？」
「出ていく前に、どういった理由で引っ越すかを管理者の方に伝えてる家族が何世帯もいたんだよ。因縁はそっちの十八番って聞いてるから、ちゃんと下調べはしてあるさ。他に思い付いたことがあったら言ってみな。そっちが思い付く〝程度〟の事はちゃんとルールに則って答えてやるよ」
「なっ、このガキィっ!!」
挑発的に相手を見下して湊が言った事で、額に血管を浮かばせ、顔を真っ赤にさせた相手は、立ち上がりテーブルに足をつくと、腕を伸ばして湊の襟を掴もうとした。
「……フン」
だが、湊が桜とチドリを抱えて後ろに飛んだ事で、その手は空を切り、内山は前のめりにバランスを崩す。
まわりにいた者も咄嗟の湊の跳躍に反応出来ず、腰を浮かせた状態で固まっているが、急に抱えられて驚いている二人を廊下側の部屋の隅で下ろすと、そのまま立ち上がりアンクレットをブーツに戻して湊は言った。
「勝てば官軍って言うし、お前らのレベルに合わせてやる。俺が勝ったら、お前らのお仲間を立ち退かせろ。逆に、お前らが勝ったら俺を好きにして良い。そのまま売ろうが、臓器を売り払おうがそっちの自

由だ」
「テメェ、組の本部でこんだけ舐めた真似してどうなるか分かってんだろうなぁ？　ぶちまけっぞガキがッ!!」
内山は言いながら拳を振り上げ、湊に飛びかかる。
研究所にいた黒服たちのような、訓練を受けて身に付けられた型通りの上品な体術と違い、こちらは普段のいざこざで身に付けたチンピラの喧嘩殺法だ。
体重移動のタイミングと腕を振り抜く動きが微妙にずれており、これでは助走の勢いをそのまま拳の威力に乗せることは出来ないだろう。
だが、それだけに動きを読みづらく、湊は黒服を相手にしたときよりも、集中して相手の次の動作を予測する。
まわりの者も、すぐに続けるようにメリケンサックやドスを抜き、明らかに子どもを相手にするには度の過ぎた装備をしている。それだけに失敗は許されない。
湊は真剣な表情のまま拳を握りしめると、蹴った畳がズタズタになるほどの速度で駆けて相手の懐に潜り、腹部に肘を当てて吹き飛ばす。
続けて、飛び上がり、近くにいた金髪の男の正面に行くと、相手が反応する前に喉仏を殴りつけた。
「あがっ……」
呻きながら相手が倒れきる前に、着地して、湊は真っ直ぐ縁側に面した障子まで走る。
部屋の中で暴れてはチドリと桜を巻きこむ可能性がある。
それを避けるため、障子と戸を開けると、砂利の敷かれた庭に降り立ち、組員を睨みながら挑発するように顔の高さで左拳を握り、
「こい、殺さない程度に遊んでやる」
月に照らされ――嗤った。
――奥の間
湊と組員が外でやり合っている頃、桔梗組の組長である鵜飼（うかい）　清十郎（せいじゅうろう）は、奥の自室で部下と将棋を指していた。

整髪料で整えられた髪に白髪がまじり、年の頃は五十過ぎといったところか、盤面を見つめるその眼光は並みの者ではないと思わせるに相応しい鋭さを放っている。
娘の桜と同様に鵜飼もグレーの着物に小豆色の羽織りを纏い、背筋を伸ばししっかりと座していたが、ふと、顔をあげて鵜飼は庭の方を見つめ口を開いた。
「なにやら、騒がしいな。今日は客はいねぇはずだが？」
「先ほど呼び鈴が鳴って、桜さんが出られたようですから、もしやそれかもしれません」
落ち着いた低い声で答えた部下の名前は、渡瀬（わたせ）　伸晃（のぶあき）。
かなりがっしりとした体躯を黒のスーツで覆い、口周りに整えられた髭を生やし、外からは目元を全く見ることの出来ない黒いサングラスをかけている。
だが、左目のところに斬られたような傷跡が縦に一本入っているため、サングラスは目元よりも、その傷を隠すためのもののようだ。
鵜飼は渡瀬の言葉を聞くと、目を閉じて、何やら考えている。
同じように渡瀬も黙って耳を澄ませると、時折、ガキィン、と金属のぶつかる音が聞こえてきた。
すると、少しして閉じていた目を開き、鵜飼が障子を指差し、
「どこのもんか分かんねえが、あいつらでは相手にならんらしい。おめぇが行って黙らして来い」
「……片付（ころし）けますか？」
「そこまでする必要はねぇ。うちのが先に手を出してるかもしれねぇからな。今日来てんのは明夫だろ？　あいつは腕っぷしも強くねぇくせに喧嘩っ早いからな」
着物の袖に手を入れるように腕を組み、そういって鵜飼は笑う。
明夫とは内山のことで、既に湊に一方的にやられているのだが、見に行かなくとも鵜飼には内山の様子が分かっているようであった。
同じく、立ち上がって廊下へと向かって行く渡瀬も口元を小さく歪めていることから、組内では内山の弱さは知れ渡っていることが伺える。

「では、行って参ります。相手の実力が分かりませんから、騒がしくなるのはご容赦を」
「構わん。少ししたらわしも様子を見に行くから、それまでに終わらせとけ」
「はい、分かりました」
そうして、鵜飼の懐刀、〝桔梗の虎〟が湊を仕留めるべく、部屋を後にした。
――庭
部屋の中から見ていた桜は驚いていた。
「しゃ、小狼君って、あんなに強いの？」
「負けたの見たことない」
「す、すごいんだね……」
隣に座り、無表情で眺めていたチドリが答えると、桜もやや表情を引き攣らせながらも納得したように視線を戻す。
湊が組員をかなり一方的に倒している途中で、ぬいぐるみだと思っていた黄色いモノがはしゃいで「メッチー！」と鳴いていたりもしたが、そんなことが些細なものに思えるほど、目の前で起きたことが衝撃的過ぎた。
止める暇もなく乱闘が始まった時には、子どもである湊の身を案じたが、結果は湊の圧勝。
「ば、ばけものか、このガキ……」
頬を腫らし、鼻血を出しながら仰向けに倒れた内山が呟く。
まわりには、同じように顔を腫らしている者や、既に気を失っている者が転がっていた。
膝をついて湊を睨んでいる者もいるが、腹部を押さえながら肩で息をしていることから、再び挑むことは出来なさそうだ。
「……これで終わり？　それじゃ、約束通り立ち退いてもらうぞ」
倒れている者たちにそう言った湊は、相手のドスを受けるために出していた短刀をマフラーに仕舞って、静かに佇みながら様子を眺める。
倒した組員の数は十三。全員が二十歳以上で、内山など一部の者は

三十を超えている。
そんな大人たちを一人で相手しながら、呼吸も殆ど乱さず無傷で勝った事に、この場にいたチドリと本人以外の全員が驚いていた。
だが、そんな場所に、スーツを着た一人の男がやってくる。
「これは……少々驚きました。全て、貴方が一人で？」
「……一応。まぁ、刃物振り回してきたから、こっちも武器で受けたけど、攻撃自体は拳と蹴りしか当ててないから、冷やせば大丈夫だと思う。それで、そっちは援軍？」
「まぁ、そんなところです。静かにさせてこいとの命令ですが、流石に子ども一人に全員がのされたとあっては組の面子に係わります。それ相応の相手として、真剣に挑みますがご勘弁を」
言いながら渡瀬は、靴を履いて庭に降りると、湊と七メートル程の距離を開けて対峙し構える。
足を肩幅よりやや広く開いて半身になり。右手は掌を上に向け肘を曲げて突き出すように、左手は腕を下げたまま肘を曲げ拳があばらのところに来るようにしている。
どうやら、中国拳法の使い手のようだ。
「フゥ……ハァッ!!」
「なっ!?」
呼吸を整え、叫ぶと共に一歩踏み出した瞬間、渡瀬は地面すれすれの空中をまるで滑ったかのように思える動作で距離を一瞬にして詰めた。
「フンッ!!」
そして、湊の目の前で砂利が弾け飛ぶほど強く音を立てて地面を踏みしめると、腰溜めにされていた拳に威力を乗せて真っ直ぐ打ち放つ。
「くっ」
咄嗟のことで反応が遅れたが、湊もそれを棒立ちで喰らうことはない。
威力を目視で判断し、防御は勿論、往なしても腕が駄目になると分かると、瞬間的に限界速でしゃがんで拳をやり過ごす。

「おらぁあっ」
さらに、お返しとばかりに、そのまま左手で半分逆立ちのようになりながら、相手の左脇腹目がけて蹴りを放つ。
「フンッ」
「ぐあっ!?」
だが、その蹴りが当たる前に、渡瀬はもう片方の腕の肘を使い、湊の攻撃を上から潰した。
丈夫なブーツの上から攻撃を喰らったというのに、的確に骨を伝ってダメージが響き、湊もたまらず呻く。
片手の逆立ち中に蹴りを放つという不安定な状態を、さらに上から叩き潰され、湊は背中から地面に落ちる。
しかし、ここは相手の距離だと、すぐさまバク転で起き上がり、倒れたときに握っていた砂利を相手に投げつけ牽制しながら距離を取る。
倒れた湊に追撃で蹴りを決めようと思っていた渡瀬は、攻撃を喰らった直後に相手が牽制しながら後退出来たことに驚いたようだが、湊の投げた砂利から腕で顔を守ると、今度は掌を湊に向けたまま右手を伸ばし、肘が耳の高さになるよう左手を曲げて構えた。
(はぁ……はぁ……こいつ化け物だ。初見で俺の攻撃に反応して潰してくるなんて)
(……フム。反応速度が異常に速い。子どもであれだけの反応を見せるという事は、何か特殊な訓練を受けている可能性があると見た方が良いか)
攻撃を喰らった右足を庇うように立つ湊と、最初と違う構えを見せた渡瀬が、対峙したままお互いを見つめ沈黙する。
反応速度は湊の方が上だが、渡瀬は経験と勘からそれらに対応してくる。
テオドアやエリザベスでさえ、カウンターで放つ攻撃を躱す事は出来ても、完璧に潰す事は出来ていないというのに、人間でそれを為す者がいるなど、完全に想定外であった。
(右足の負傷で動きが鈍くなった。この程度の距離は、最初にあいつ

が見せた活歩で詰められる。ってことは、こっちが出来るのは相手が来たところを、限界速によって皮一枚で躱し続け、速度を維持したままカウンターに続けて攻撃を一気に叩き込むしかない）

そうして、相手の戦力を分析した湊が拳を強く握りしめ、我流の構えを見せたところで、渡瀬が再び動いた。

初めに見せた、震脚からの活歩という一瞬で間合いを詰める戦法から一転、今度は左手を腰溜めにしたまま駆けだし、着地直後を湊に狙われぬよう対策を取って来た。

これには、カウンターを主軸にした戦法を考えていた湊は、内心で舌打ちをするしかなく。

受け手に回ってもジリ貧になることしか想像できなかったので、痛む右足を我慢しながら、同じように相手に向かって駆けだした。

両者とも、世界陸上の短距離選手かと見紛うばかりの加速で接近したため、距離はすぐに詰まった。

先に仕掛けたのは渡瀬で、右足を振り上げて牽制をかけると、湊は死角を突くように半身のまま踏み込みそれを躱す。

だが、渡瀬は続けて軌道を斜めにした踵落としで右手を振り上げかけていた湊を狙うと、湊も今度のそれにも反応して、逆に足を潰してやろうと降りてきた太腿に、かち上げた肘を躊躇いなくぶつけた。

「死ねッ」

「ぐっ、はぁあああっ!!」

「っ!?」

しかし、ここで再び渡瀬は湊の予想の範疇を超えた動きを見せる。

確かに湊の攻撃は相手の足にダメージを与えた筈だ。それなのに、渡瀬は歯を食いしばり強引に足を振り下ろした。

それにより、受けていた湊は体重差によって飛ばされ、相手の蹴りの軌道に沿って横に転がってしまう。

受け身を取り、相手からも目を離していないが、体勢を立て直した時には、ついたばかりの右足を軸足にして、渡瀬が連続で回し蹴りを放って来ていた。

足を負傷したという条件はイーブンになった筈だというのに、攻撃

の手が一切緩まない化け物と対峙し、湊もどうやって勝てば良いのかと心に不安が過り始める。
勝つためには攻めねばならないが、この近距離だと湊の攻撃は十分な威力を出せない。
大人と正面からぶつかって吹き飛ばせていたのは、スピードを活かして威力を上乗せしていたからで、その助走がなければ、握力以外は真っ向から太刀打ちできるものではない。
飛騨の改造は、力自体の底上げも多少は為されているが、正面から殴り合って勝つというコンセプトで施したのではなく、実際は湊の長所である〝速さ〟をさらに伸ばす事に主体を置き、速さと戦術を駆使して大人とも戦えるレベルに引き上げることが目的とされていたのだ。
だがそれでも、チドリのためにこのまま負けることは出来ないと、後ろ髪に相手の蹴りが掠るのを感じながらしゃがみ、足が通り過ぎるとそのままバク転して、僅かに開いた距離を最大限に活かすため、湊はつま先に力を溜めた状態で地面ぎりぎりまで身体を倒して勢いを乗せて飛びだすと、一気に敵の背後に回り込んだ。
「はあぁぁあっ!!」
そこから、相手の首を狙って回し蹴りを放つ。相手は蹴り足がまだ地面に着いていないので、絶対に躱せるタイミングではない。
一発当たれば続けて放ち、ダメージを蓄積させて勝てば良い。その第一打となる蹴りが、渡瀬の首に吸い込まれる
「ふんッ」
「またっ!?」
はずだった。
しかし、渡瀬は地に足がつく前に腕を引く動作で上体を捻り、肘で湊の攻撃を逸らすと、体勢を立て直すべく再び構えて、着地した直後の湊を叩きに行く。
「なめるなぁっ!!」
けれど、湊もただやられているばかりではない。
着地した一瞬で即座に切り返し、連続で蹴りを放つ。

それを相手は両腕で往なし防ぎ続けるが、触れた次の瞬間には空中でありながら体勢を変え続けるという、離れ業で湊が猛攻を見せるため、渡瀬も驚き、守勢に回らざるを得ない。
「くっ」
しかし、ようやく、下向きに攻撃を往なせたことで、湊が地に足を着く。
速さで負ける渡瀬にとって、湊が停止するこの決定的な隙を逃す手はない。
体格にかなり差があるが、腰を落としたまま自身の右足を湊の左足に沿えるように内側に滑りこませ、その足で相手の足を刈りながら、肩と肘を利用して相手の身体を押す。
ダメージこそ一切ないが、渡瀬の使ったこの梱鎖歩こそ、湊という人を超えた速度の領域にいる人間に反応すら許さず、ただの木偶として数瞬動きを封じ大きな隙を作り出す技だった。
自身の意思とは無関係に、驚愕の表情を浮かべながらよろけて下がる湊の目の前で、再び砂利を弾けさせながら渡瀬が震脚で踏み込む。
そして、
「はあっ!!」
踏み込み、腰の回転、腕の伸縮、それらを一分の無駄もなく連動させて放たれた剛腕の一撃が、その場の空気を押しのけ、ゴウッ、と音をたてながら湊の胸に突き刺さった。
鍛え上がられた拳は、まるで鋼のような硬さで、ぶつかった瞬間から湊の骨を軋ませ、鈍い音をたてそれを砕き、さらに骨に守られていた臓物に届いて無惨に破裂させる。
「――――かはっ」
吹き飛びながら口から血を吐き、何度も地面を跳ねて転がる様子を見て、誰もが湊が死んだと思った。
「湊っ!!」
部屋の中にいたチドリも、目を見開き驚き叫んだ後、裸足で庭に飛び出すと倒れたまま動かぬ湊に駆け寄る。
それにより、正気を取り戻し動けるようになった桜が、同じく裸足

のまま庭に出て、険しい表情で渡瀬に詰め寄った。
「渡瀬さんっ、なんで子どもにあんなことをっ!?」
「……申し訳ありません」
「そんな言葉は要りません！　医者を、急いでっ、早くっ!!」
あんな一撃を喰らって助かるとは思えない。
しかし、それでも倒れていた者に医者を呼ばせることしか自分には出来ず。悔しさを感じながら、桜も急いで湊とチドリの元へ向かう。
「湊っ、湊っ！」
口から血を垂らし動かぬ相手に、何度も名を呼びながら身体を揺らしているチドリを見て、桜も最悪の結果を想像する。
チドリとは反対側に腰を下ろし、脈と鼓動を確かめようと、桜は湊の首と陥没した胸に手を伸ばした。
「っ……」
その結果に息を呑む。
呼吸が停止しているだけならば、まだ可能性はあったが、湊の脈と鼓動は既に止まっていた。
吐血していることから、内臓に深刻なダメージがいっていることが分かるため、迂闊に心臓マッサージをする事も出来ない。
もう桜に湊を助ける手段はなかった。
しかし、それでも状況が把握できていないのか、チドリは諦めずに湊を救う方法を考える。そして、自分の隣で心配そうに湊を見つめている、小さな悪魔のスキルを思い出した。
小さな可能性でも、いまはそれに賭けるしかない。
「っ、メッチー！　急いで湊に回復を……っ!?」
そうして、治療を頼んだが、言っている途中でチドリは言葉を止めた。
「嘘、心臓は止まってたはずなのに……」
桜も困惑する目の前で、倒れていた湊がまるで幽鬼のように、だらんと腕と頭を垂らしたまま立ち上がった。
だが、立ち上がり、口から大量の血を吐いて、湊はそのまま沈黙している。

殺す必要はないと言われていたが、湊の実力から手を一切抜くことが出来ず、殺めてしまったと思っていた渡瀬はその不気味な様子に気を引き締めると、咄嗟の反応が出来るように構えを作る。

「――――」

そのまま動向を見守っていると、湊の背後に青白い光と黒いもやが吹き出し始めた。

何かは分からない。だが、自分の知らない何か異形の存在の形を為してゆく。

「湊、だめっ!!」

ペルソナを呼ぼうとしていると思い、チドリが抱きついて制止の声をかけるが、もやの変容は止まらず、次第に輪郭を帯びてきた。

黒いぼろぼろのローブ、長い西洋剣、首にかけられた両端に分銅のついた鎖、口の大きく開いた獣の頭骨を思わせる頭巾の中にはさらに人の髑髏がある。

異形の存在の顕現を見ていた渡瀬は、知らず全身を汗が伝う事に気付く。

状況は把握できず、アレが何かは分からない。それでも本能が知っている。アレは〝死〟そのものであると。

そして、両目を〝水色〟にした湊が口元の血を手で拭いながら、言葉を発した。

『あーあ、駄目じゃないか。〝彼〟を殺しちゃ。僕がいる限りは基本的に死なないけど、それでも蘇生は身体に大きな負担をかけるんだ。本当に死んじゃったら、人類どころか地球上の生命が全て滅びるんだし、気をつけなきゃ』

「みな、と?」

『ん? ああ、今は別人だよ。僕の力で破壊された臓器と骨を再生させてるからね。治ったら彼に戻るから、もう少し待っててよ。……それはそうと、僕はいまとっても怒ってるんだ。大切な友人である〝彼〟を、こんな目に遭わせた相手に、ね』

湊であったモノがそういうと、背後に現れた存在、シャドウ〝デス〟が剣を振り上げ渡瀬に斬撃を飛ばす。

「くっ!?」
反応が遅れた渡瀬が腕で防御の構えを取るが、放たれた斬撃は渡瀬の真横に深い溝を作っただけだった。
微笑みながらも静かな怒りを発している湊だったモノは、攻撃をわざと外し、口調だけは穏やかに告げる。
『殺すつもりはないから、いま直ぐに降参してくれると良いんだけど、挑むって言うなら拒みはしないよ。そのときは、僕もこの力で迎え撃つから。フフッ、素直な気持ちで言えば挑んでくれた方が良いんだけどね。死なない程度にお礼ってやつをさせてもらいたいからさ』
異能、超常と呼ばれる力。初めて見る、悪鬼神霊の類いに皆言葉を失っているが、そこに静かな老人の声が響く。
「おうおう、庭を滅茶苦茶にしちまいやがって。それに随分なもんを相手にしてるじゃねえか。坊主、お前なにもんだ?」
やってきた鵜飼はそれほど動じた様子もなく庭に降りると、渡瀬の横に並び立ち湊であったモノに尋ねる。
『僕はこの後ろにいるものと同一の存在さ。でも、この身体の本来の持ち主が死んじゃったからね。蘇生している間は僕が出てきてるって訳。お爺さんがここで一番偉い人? だったら、部下の人たちにこっちの要求を素直にのむ様に言ってくれないかな?』
「要求? なんだ、言ってみろい」
『タケさんって人が使ってる、巌戸台中央区にあるマンションから立ち退いて欲しいんだ。身体の持ち主である彼と彼女は、ちょっと訳ありでね。追手から隠れるために住む場所がいるんだ。立ち退きを成功させたら部屋かお金を貰えるってなってるから、どうしてもお願いしたんだけど、駄目かな?』
普段、湊のやらない子どもらしい表情に、後ろで手を組むというポーズを取って、湊であったモノが言外に〝従わねば、力を振るう〟とばかりに、デスを自分の傍に移動させながら返す。
湊の動作を見てきたチドリは、そこで本当にいまの湊の人格が別の者であると理解するが、他の者はその違いを確信できる程湊を知らない。

分かるのは、この場における上下関係であり、自分たちが取るべき正しい行動のみだった。
「……わかった。連絡して別のとこにいくよう言っておく。だが、坊主と嬢ちゃんは、そこに住んで安全だって言えるのかい？　追手ってなぁどこのもんだ？」
『安全とは言えないけど、仮にでも住む場所は必要だからね。それと追手は桐条グループだよ。追われてる理由は、僕やそれに近い存在と戦えるのが、彼らしかいないからって理由さ。そんな存在が現れるようになったのは、先代桐条の研究のせいなんだけどね』
「そうかい。……だったら、そっちに住まずに少しの間うちにいな。部屋は余ってるからな。ガキが二人増えたところで別に困りゃしねえし。うちのもんが迷惑かけた詫びってやつだ。素直に受け取ってくんな」
ニカッと笑って鵜飼が答えると、他の者が驚いた表情をする。湊であったモノも、流石にその発言は予想していなかったのか、一瞬ポカンとすると、すぐに楽しそうに笑いだした。
『あは、あはははっ！　それは良いね。うん、彼らにとってすごく魅力的な提案だよ。確かに、まさか二人がヤクザの家にいるとは思わないだろうし。ばれたところで迂闊には踏み込めない。けど、僕みたいな普通でない存在を宿してる彼を、すぐ傍に置いて大丈夫かい？　もしかしたら、その首を取りにいくかもしれないよ？』
「ま、それはあるかもしれねぇが。わしもガキのころに先代に拾って貰った身でな。ガキながらに生きていくキツさは知ってるし。坊主は桜を人質にしたりはしなかったんだろ？　筋を通してるんなら、信用もできらぁな」
『そう……。じゃあ、お言葉に甘えようかな。僕の方で蘇生は終えたし、顕現を解いたら眠った状態になるから、後はよろしくね。状況は把握できた状態で起きるから、自己紹介とか、より詳しい話しはそのときに』
言い終わる直前にマフラーから衣類の入ったリュックを取り出すと、直後に顕現していたデスが消えて、ふっと力が抜けたように湊の

身体がその場で倒れた。
地面にぶつかる前に、桜とチドリが抱きしめ支えたことで、怪我もせずに済んだが、湊だったモノの言う通り、湊はただ眠っていた。
陥没していた胸は元通りになり、規則的に呼吸を繰り返し、脈と鼓動もしっかりとしている。本当に蘇生が為されたようだ。
湊が無事であることを確認したチドリは、安心したのか抱きついたまま啜り泣き、そんな様子を眺めていた桜もつい穏やかな表情になる。
「……お父さん。この子たちは、今日はわたしの部屋で寝かせるわ。先にお風呂に入れてくるから、お布団の用意をお願い」
「お前一人で大丈夫か？」
「ええ、この子、こう見えてすごく軽いの。どうやってあんなに動けたんだろうってくらい、本当に軽い……」
そう言って、二人を抱きしめると、桜はチドリと共に湊を運び。入浴を済ませると、リュックに入っていた服に着替えさせて、自室で二人を寝かせたのだった。

第二十四話　不視ノ太刀

深夜――奥の間

湊がチドリと桜に運ばれ、入浴も終えて部屋で休んだ後、奥の部屋に戻って来た鵜飼と渡瀬は向かい合い座っていた。

用意した緑茶に口をつけ、湯呑みを茶托に置くと、鵜飼は苦笑を浮かべて口を開く。

「……坊主はそんなに強かったか？　砂利の下の地面まで震脚で踏み抜いて放った衝捶で殺っちまったんだろ？　おめぇが初っ端から本気になるなんて、ここ数年なかったぜ」

「あの年齢で考えられない身体能力をしていました。身体に対し何かしらの処置を施した上で、さらに実戦的な訓練を積んでいたようです。瞬間ごとの反応速度で言えば、人間の限界を超えています」

「おうおう、〝桔梗の虎〟にここまで言わせるとは、ガキの癖に大したもんだな。桐条が欲しがっても無理はねえってことか」

ヤクザだけでなく裏の世界でも渡瀬は〝桔梗の虎〟として、それなりに知られていた。

鈍器や刃物を持った者を生身で相手し、逆に拳や蹴りでそれらを破壊した上で、湊にしたように骨ごと内臓を破壊して殺す、裏界でも生粋の破壊屋。

数年前まで海外で傭兵をしていたところを、鵜飼が気に入り自分の部下として傍に置くようになり、嘗ての野性味はなくなったがその実力は一切衰えていない。

仕事初日という事情を鵜飼は知らないが、そんな相手に当たってしまった湊に同情しつつからからと笑い、再び湯呑みを手に取った鵜飼に、渡瀬が真剣な面持ちで言葉を続ける。

「あの妖しのようなものがあの方に宿っているのなら、それをあの方自身も使役出来ると見た方が良いでしょう。どうして使わなかったのかは不明ですが、あちらが殺す気で来ていれば死んでいたのは自分だと思います」

渡瀬はデスと相対したとき、自分ではあの力に対抗できないとはっ

きりと理解した。
故に、湊がペルソナを使えば勝敗は逆転していたと判断したが、湊はチドリの前で人を殺す気がない。
人を殺したという事実は、自分がチドリとは別の世界で生きる事の証として湊は隠す気はない。
しかし、人を殺す場面を見せることも、死体となった者を見せることも、明るい温かな世界とは程遠い存在だとして、いくら自分が窮地に追い込まれていても、チドリが傍にいる限りは一切見せる気がないのだ。
その湊と同じような決意を娘に対ししてきた鵜飼は、なんとなく湊の事情を察しながらも、敢えて気付かぬふりをして返す。
「まぁ、そうだろうな。わしも修羅場で何度か死神みてぇなモンがちらついた事はあったが、あそこまではっきり見えちまうと笑うしかねえや。死線越えてきたならわかったろ？　ありゃ、〝死〟そのものだぜ」
「……殺して吹き飛ぶ瞬間、本当に刹那の間だけですが、あの方は蒼い目でこちらを見て僅かに嗤ったんです。その後、妖しが現れましたが、あの方の中にはまだ〝ナニか〟が居ます。妖しの同類ではなく、もっと別の、禍々しい殺意に取り憑かれた〝ナニか〟が」
死に瀕した刹那のときだけ表出した湊に内在する〝ナニか〟。
殺し合いに慣れ狂人も見てきた自分でなければ、嗤ったナニかと視線が合っただけで発狂していたかもしれない。そう思えるほど、薄気味悪く寒気を覚えた。
デスが〝死〟を理解させられ恐怖するなら、ナニかは理解できないからこそ恐怖を感じる。
そんな風に、小さな身で相反する二つの存在を内に宿す湊のことを考え、渡瀬が目線を伏せると、鵜飼は空になった湯呑みを茶托に置き、それらを盆に載せて渡瀬の前に出してから立ち上がる。
「わしら死と隣合わせの人間と違って、生きたまま、〝死〟そのものを内包できる人間だぜ？　それが普通なわきゃあるかい。まぁ、人としては信用出来るだろうし。当分はここに住まわせるんだ。桜はあの

様子じゃ、ずっとうちに置いておくつもりになってそうだが、おめぇも二人には良くしてやれ」
「はい、承知いたしました」
寝室へと去っていく長に丁寧に頭を下げると、渡瀬は盆を持って静かに部屋を後にした。
――???
何も存在しない、闇だけがただどこまでも広がっている空間。
渡瀬に殺され、意識を失った湊はそこから外でのやり取りを見ていた。
そうして、自分の代わりに外に出ていたファルロスが戻って来た事で、外の情報が得られなくなると、ニコニコと笑っている相手に話しかける。
「どうして、あそこに住む事を了承した？」
「それが一番だと思ったからだよ。大丈夫、桜さんを見る限り、お爺さんは巻き込みたくない相手は絶対に巻き込まない人みたいだから」
「そんなのは絶対じゃない！　他のやつらがチドリに危害を加えるかもしれないし。別の組の人間なりが攻めてくることだって考えられるだろっ」
声を荒げて胸倉を掴み、湊はファルロスを睨む。
掴まれたときにはファルロスも驚いたようだが、すぐに表情を真剣な物にすると、ジッと視線を合わせたまま言葉を返した。
「なら君は、本当にあの部屋を得た程度でチドリさんを守れると思ってるの？　栗原さんの助力はもう当分期待できない。情報屋の五代さん達だって今はまだ単なるビジネスパートナーだ。そんな状態で、君はその胸の内で燃え続けている憤怒と憎悪の業火とも言える殺人衝動を抑えながら、彼女を十分に守る事が出来るとでも？」
それが湊の意思でなくとも、湊はあの夜に既に踏み超え、禁忌の扉を開いてしまった。
無意識に抑え躊躇っていた力の行使を、踏み越えた今は一切の躊躇いも持たずにいられる。
だが、代償として、味方と定めた者以外に対し、相手が見知らぬ者

であろうが殺人衝動を感じるようになってしまった。
これは味方を助けるために踏み越えたことが原因だとファルロスは推測している。
通り魔事件があるように、全く関わりの無い人間でも『その場にいたから』という理由で傷付ける者はいる。
そのため湊は、味方が害されるかもしれないという被害恐怖を感じ、理性がそれを抑えてはいるものの、本能は〝疑わしきは滅せよ〟と排除行動に移ろうとしてしまうのだ。
尤も、〝味方に〟というのが重要で、自分自身が害される可能性はおろか、実際に他者から襲われようとも湊は気にしない。掛かる火の子は振り払うだろうが、その行動にはそれ以上の意味はなく、意思も全く備わらない。
そんな歪な在り様が異常であると気付いていない湊を、冷たい瞳で真っ直ぐ射抜きファルロスは続ける。
「――――自惚れるなよ、有里湊。君は彼女を独りで守れるほど強くない。君があの日抱いた高潔な決意は、力を持たぬ今の君では単なる絵空事で我儘に過ぎない。僕がいるから君は死なない。だが、〝堕ちなければ〟、即時再生なんて不可能だ。今日のように治癒を行っている間、君は何も出来ない。その間に彼女は死ぬ」
「力を使えば、それはっ」
「だが、彼女の前で君は人を殺す事は出来ないだろう？　斬りつけるくらいなら、腕の一本程度なら、そんな風に殺してはいないと言い訳をしながら、彼女の前でも力を揮うのかい？　そんな甘い考えで守ろうというのなら、君は直ぐに彼女の元を去るべきだ。敵ばかりの世界で人を守るというのは、そんなに容易いことじゃない。手段と目的を履き違えるなっ」
言われて湊は苦痛を我慢するような表情で顔を俯かせ、相手の胸倉を掴んでいた手を離す。
敵の多いこの世界で、自分だけでチドリを守ることが如何に難しいかは分かっているつもりだった。
戸籍はあっても後ろ盾がないため、正規のルートでは未成年である

自分たちでは家を借りることすら出来ない。
仮にホテル住まいが出来たとしても、そんな安定しない生活基盤では、チドリを学校に通わせる事など不可能に近い。
何より、血に濡れた自分しかいない状況で、対極の存在である明るく温かな世界にチドリを導くなどどうやっても無理なのだ。
光と闇、それらは表裏一体で、決して交わる事はない。
だからこそ、チドリを導くには、桜のような光の世界に生きている者の助けがいる。
ファルロスの言葉を受け、ようやく湊はそれを認めた。
「……わかった。完全に傍を離れる事は出来ない。だけど、あの人にチドリを任せてみようと思う」
「うん、僕もそれが一番いいと思う。幸いなことに、彼女は教員資格を持っている。チドリさんの勉強は彼女に任せて、君はその間に力をつけると良いよ。単純な力の強弱だけで負けた訳じゃない事はわかってるでしょ？」
「一応は、ね。エリザベスとテオドアに習ったのは実戦がどういうものかって事だけで、技術面に関してはほぼ完全に我流だ。それにも限界を感じてたところだし、教えて貰えないか頼んでみる」
湊がそういって顔をあげると、ファルロスはいつもの人懐っこい笑顔に戻って頷いた。
友だからこそ、如何に残酷なことであろうと事実を述べて、その過ちを正す。そんなファルロスの優しさに触れ、湊も久しぶりに少しだけ笑みを浮かべると意識を手放し、光となって消えて現実へと戻っていった。
「……頑張ってね、湊君」
誰もいなくなった空間に残ったファルロスも、小さく呟くと瞳には慈愛の色が宿らせ、同じように光となって姿を消した。

8月25日（金）
朝――桜私室
自分の心の世界から消えると、湊はすぐ現実で目を覚ました。

ずっと片目だけ見えていた死の線が消えたことで、〝直死の魔眼〟のオンオフが再び可能になったのだと何となく理解し。
動いた際に身体の至るところに痛みを感じて、それによりぼんやりとした意識を徐々に覚醒させながら周囲の状況を把握する。
（……ここは彼女の部屋か。いまの時刻は朝の六時）
右に寝がえりを打つと、チドリが自分の手を握りながら眠っているのが見え、安堵しながら部屋の中に視線を送る。
物が少ないこともあり、整理整頓された部屋はどこか生活感が欠けている印象を受けるが、沢山の本が収められた書棚と壁にかけられた古いアンティークの時計だけは、他のインテリアとの違いからこの殺風景な部屋で存在感を放っている。
そうして、その時計で現在の時刻を確認し、湊は自分が十時間近く眠っていたことを知って、何の抑揚も無い声で呟いた。
「……最近の俺は寝てばかりだな」
「あら、起きたの？　身体は大丈夫？」
「っ、起こした？」
急に左側から声をかけられ、そちらに顔を向けると、湊たちの寝ている布団と並べて敷かれた布団で、寝巻用の若草色の浴衣を身に付けた桜が目を覚ましていた。
独り言を呟いた直後に話しかけられたので、自分の声で起こしてしまったのかと申し訳なく思ったが、湊の言葉に桜は首を横に振った。
「いいえ、わたしはいつもこの時間に起きるの。うちには道場があって、そこで瞑想するのが日課なのよ。朝ご飯の準備はそれからだから、小狼君も一緒にくる？」
「……有里湊。それが今の俺の名前。好きな方で呼んでもらって良いけど、教えておく」
尋ねられた湊はそれには答えず、少し迷ってから相手に自分の名を明かした。
自分の心はすぐに信用することは出来ないと言っている。だが、ファルロスと話したことを実行していくならば早い方が良い。
そうして、胸中は複雑でありながらも、湊が相手の目を見ながら答

えると、桜は数瞬きょとんとしていたが、直ぐに嬉しそうな表情になって、もそもそと布団を移動して湊に抱きついた。
「ふふっ、教えてくれてありがとう。なら、わたしはみーくんって呼ばせてもらうね。昨日、口から吐いた血で汚れた貴方をお風呂に入れたときに、その子にも名前を教えてもらったの。吉野千鳥だから、ちーちゃんって呼ばせてもらうって言ったら好きにすればってＯＫも頂いたわ。だから、貴方のことはみーくんって呼ばせて頂戴」
「……俺は桜さんとしか呼ばないよ。愛称はあんまり付けたりしないから」
馴れ馴れしい。はっきり言ってしまえば、湊は桜に対しそう思っていた。
女性特有の柔らかさと、優しい香りに包まれ、不快感は一切ない。
しかし、こんな風に大人の女性に抱きしめられるのは、初めてベルベットルームに訪れたときにエリザベスにしてもらって以降は殆どなかった。
そのため、あの時よりも精神年齢がかなり上がったこともあり、どういった反応をすればいいのだろうかと悩んでしまい、しばらく相手の好きなようにさせるしか無かった。
相手はそれで満足なのか、服の上からでも豊かと分かる胸に、湊の頭を抱き寄せて慈しむ様に撫で続け。しばらくそうした後、いい加減飽きたとばかりに湊が身体を起こそうとした事で、身体を離すと浴衣の襟を整えてから起き出した。
「それじゃあ、改めて聞くけど、みーくんも道場にくる？　こっちはわたしの私室だからって組員の方も近付かないし、ちーちゃんには書き置きをしておけば大丈夫だと思うけど」
「……メッチー、俺の身体に回復魔法かけて」
聞かれたことに答える前に、湊はそういって枕元で寝ていたメッチーを起こす。
デスの恩恵により潰された臓器と骨は治療されているが、それ以外の部位は治療がされておらず、身体中が痛んでしまいまともに動くことが出来ない。

それを治すため、湊が送還用のゲート展開出来なかったため、帰れずにいたメッチーに頼むとメッチーは眠そうにしながらも湊に回復魔法をかけた。
それでようやく動けるようになった湊は、自分のマフラーを探すと、傍に置いてあった鞄から自分の着替えを取り出し、着替えながらメッチーに伝言を頼む。
「メッチー、俺は桜さんと道場の方に行ってくるから、チドリが起きたらこれを渡しといて」
《メッチィ》
そうして、さらさらと走り書きした伝言の紙を受け取りメッチーが元気に鳴くと、湊はその頭を撫で。桜が寝るときには着けていなかった和装下着を身に付けて、浴衣の上から羽織りを着るのを待ってから、共に部屋を出ていった。
――道場
道場に行く前にブーツを回収し、アンクレットにして装備すると、湊はサンダルを借りて敷地内にある道場にやってきた。
早朝の澄んだ冷たい空気だけのせいではない、武の為に存在する厳かで侵し難い雰囲気を感じ、湊は少々懐かしいと感じた。
「あら？」
知らず表情が柔らかくなっていたのか、それに気付いた桜が不思議そうに湊を見つめる。
昨夜やってきたときは、どこかピリピリとした空気を纏っていたので、今朝名前を教えてきたときから、少々不思議には思っていた。
本来ならば、己を殺した男側の人間である桜を敵視してもおかしくはない。
だが、湊はどんな心境の変化か、複雑な胸中を表すような僅かに不貞腐れた顔で本名を教えるという、自ら歩み寄りをみせてきた。
桜としては、それ自体はとても嬉しかったので深く追求する気はなかったが、そんな湊が今度は道場に入り、この独特の空気に触れて直ぐに僅かに目を細めた。
笑みとまではいかないが、肩の力が抜けたように見える。

そんな様子から推測出来るのは、湊は道場に何かしらの思い入れがあるという事だ。
いまの湊なら、その理由を話してくれるのではないかと、桜は僅かに期待して尋ねた。
「みーくん、どこかの道場にいったことあるの？」
「ん？　ああ、まぁね。うん、昔、すこしだけ」
「あ……ごめんね。話したくないならいいの」
桜が尋ねると、声をかけられた湊は声のトーンを落として表情に暗い影を落とし答えた。
それを見て、触れてはいけない事だったかと申し訳なく思い、桜はすぐに頭を下げる。
だが、顔を再びあげると、湊は首を横に振っていて、落ち込んだ表情をしている桜を気遣うように口を開いた。
「別に、少し懐かしく思っただけだから。俺が前に道場に行ったのは、お爺さんが連れて行ってくれたからなんだ。そのときは折角来たから特別にって一つの型しか教えて貰わなかったけど、ここはどこか特別なんだってのは幼い俺でも理解できて。もう少し大きくなったら色々と教えてやるって言われたんだ」
「優しいおじい様なのね。おじい様は何か武道をやっていらしたの？」
「何かしらはやってたと思う。だけど、特にどんなものかは聞いてないんだ。聞く前に、次の年に病気で亡くなったから」
入り口に立ったまま話す意味がないため、礼をして道場の中へ進むと、二人は真ん中で向かい合って正座をしながら会話を続ける。
祖父が死んだといった時には、再び桜の表情に申し訳なさそうな色が過ったが、道場に足を踏み入れたときに感じさせたような、力の抜けた自然な佇まいを見せたことで、それは消えた。
湊の中で、祖父の死は既に乗り越えたことであり、死を悲しむよりも一緒に過ごした思い出を大切に想う状態にある。
それに他人が同情の眼差しを向けるのは侮辱になると思ったのだ。
だから、桜は過去の思い出を話す湊を見守りながら、その大切な思

い出にもう少しだけ触れることにした。
「……ねぇ、みーくん。おじい様に教えて頂いたっていう型が、どんなものか見せてくれないかしら？」
「え？　見せるっていっても、攻撃を当てる物がないと何をしてるのか分からないと思うけど？」
「そうなの？　じゃあ、あそこに立てかけてる畳は古い物だから、別に傷付けても構わないわよ」
　言いながら指を指す方向には、確かに壁に立てかけられた畳があった。一体何のために態々古い畳を残して壁に立てかけているのかは不明だが、傷付けても構わないのであれば、実践して見せるための対象としては丁度良い。
　立ち上がり、畳の前まで湊は歩いてゆくと、二メートルほどの距離をあけて、右足を一歩前に出したまま腰を落として構えた。
　左手を腰のベルトのところで半握りの形にし、右手もその延長線上で同じような形にしている。
　その姿はまるで、
（抜刀術……）
「――――っ!!」
　湊が動いたと思ったそのとき、次の瞬間には、湊は畳に背を向けて左足を前に出し、右手を振り抜いた姿になっていた。
　一瞬のことで最初の動と最後の静の姿しか見えなかったが、湊が何をしたのかは、畳を見れば理解出来た。
「畳に、刀傷が……」
　どの剣術流派のものかは分からぬ抜刀の構え。そこから何も持っていないにも拘わらず、湊は抜刀のモーションに移り、目の前の畳に刀で斬ったような痕をつけた。
　昨夜、組員を相手したときに武器を知らぬうちに取り出していたが、いまのはそんな物ではない。
　一体何が起こったのかと、桜が驚きに目を見開き、言葉を発しようとしたそのとき、
「おうおう、不視ノ太刀（ミエズノタチ）とはまた偉えもん知ってやがんな……」

「……お父さん」
密かに見ていたのか、入り口の壁にもたれて立っていた鵜飼が苦笑いしながら道場に入って来た。
気付いていなかった桜は、いつから見ていたのか視線で尋ねるが、鵜飼はそのまま湊の元までやってくると、斬った痕のついた畳にそっと触れた。
「……こりゃ、本物だな。坊主、おめぇ、無刀抜刀なんてどこで習った？」
「三年前にお爺さんからこれだけ教えてもらった。ただ、技の名前は知らないし。初期の構え自体はそれぞれのやり易いものがあるからって、振り抜く動きと手の形しか聞いてないけど」
「三年前っ!?　坊主、いまいくつだ？」
「いまの戸籍なら、一応、八歳だよ」
そうなると、湊がこの技を習ったのは五歳のときという事になる。
ついている傷は長さおよそ五十センチに、幅は二ミリ程度。深さは中央の最も深い場所で二センチ弱と、畳の硬さを考えれば素手で付けたとは思えないレベルの物だ。
このような、えげつない斬撃を素手で放ったこと自体が信じられないのだが、習ったのが小学生にも満たない年齢であった事の方が衝撃的で、鵜飼は口を開けてあんぐりとしていた。
しかし、いつまでもそうしてはいられないと、頭を振って気を取り直すと、湊も呼んで桜の近くに座ってから話し始めた。
「あー、坊主がやったのは不視ノ太刀ってぇ呼ばれる、無刀の抜刀術だ」
「無刀の抜刀って矛盾してるじゃない」
「そう言うんだからしょうがねえだろ。わしだって実物を見るのは初めてなんだ。なんせ、実在はするが、存在はしないって言われてた幻の剣戟だからな」
桜に言葉を返す鵜飼のいう〝剣戟〟とは、刀剣による戦闘ではなく、刀などの武器のことだろう。
一部の人間には知られている、技でありながら一振りの刀として扱

われるもの。それが、鵜飼の知る『不視ノ太刀』だった。
「わしがこれを聞いたのは先代からでな。といっても、先代も実物は見てなかったらしいが、戦後のまだ治安がいまほど良くなかった頃。不貞を働いてた外道なやつらを素手で斬り伏せ、人々を守った男がいたらしい。単純に速くて見えねえんじゃねえ。実際にそいつは何も持ってなかったんだ。そんで、守られたやつが付けた名が『不視ノ太刀』だ」
「それじゃあ、みーくんのお爺さんがその噂の人物ってこと？」
「そりゃ分からんが、少なくとも無関係ではねえだろうさ。本人か師弟か、どちらにせよ坊主が教わったのは、そういった夢現の狭間にあるもんだ。あんま他所で見せんじゃねえぞ。簡単に真似出来るもんじゃねえだろうが、そんなもの使えるやつが他に現れたらたまったもんじゃねえからな」
鵜飼はそういうと立ち上がり、入り口へと向かって歩いていく。
単に様子を見に来ただけで、特別ここに用があった訳ではなかったらしい。
そして、出ていくと思われた鵜飼は、背を向けたまま入り口で止まると、そのまま話しかけてきた。
「……坊主、おめぇ剣や刀は使えるか？」
「我流だけど、短刀だけ持ってる」
「そうか。んじゃ、飯食っておめえらの話聞いたら良いもんやる。だから、桜は飯の用意して、坊主は嬢ちゃん起こしてこい」
どこか楽しげにそう言い残すと、鵜飼は道場を後にした。
娘の桜も、父親が湊に何を与えようとしているか分からず首をかしげているが、とりあえず言われた通り、本日の瞑想は止めて、朝食を作りに行くべく立ち上がった。
「じゃあ、みーくんも行こっか。朝ご飯なにがいい？」
「……和食かな」
立ち上がりながら湊が答えると、桜は笑顔を浮かべて湊の手を引っ張り道場を後にした。
冷めた表情のまま手を引っ張られる湊と、朗らかな笑顔のまま楽し

げに歩く桜は対照的ながらも、どこか仲の良い姉弟のように見えた。

――桜私室

朝食を作りに行った桜と別れ、湊はチドリの寝ている桜の私室に戻って来た。

布団には静かな寝息を立てているチドリとメッチーの姿があり、部屋に入った湊はもう少し寝かせておくため、静かに部屋の隅に座る。

（……手を握られた。その前には、抱きしめられた）

先ほどまで桜と繋がれていた右手を見つめ、湊は独り考えに耽る。

〝八雲〟から〝湊〟に変わって以降、他者の力を借りながらも、人から頼られてばかりだった。

多数の人間の心の集合体である〝デス〟を内包した事で、湊はデスの元になった者らの知識を一部吸収した。これがあのムーンライトブリッジの戦いから目覚めて以降、本人の知らぬ知識を持ち、精神年齢が急激に上がった理由と湊は推測している。

（あの人は温かい。姉か、母親か、両方かもしれないけど、なんでも受け止めてくれそうな人だった）

それにより、広い知識と高い知能を持ち、飛騨の改造を受ける事で戦えるだけの力も得た。

他の者では湊ほど多く手に入れられぬ飛騨の改造全てに耐えられたのは、デスが宿主である湊を生かすからであり。他者から頼られるのは、力を得た責任と家族の中で自分だけが生き残ってしまった贖罪という形で受け入れることにしていた。

けれど、エルゴ研からの脱走のとき、仲間を死なせた責任に打ちのめされ、それでもまだ助けを求め頼られたことで、多くの重圧に無意識に耐えていた湊の心の針は振りきれてしまった。

守るために戦ってきたが、それでは足りない。このままでは、大切な物を守る事は出来ないと、いままで踏み止まっていた自分を殺した。

（信用、しても良いかもしれない。あの人なら、チドリの心を守ってくれる）

その湊が契約を結んだ者とファルロス以外にも、心から信じられそ

うな相手を見つけた。
　不安が完全に拭えた訳ではない。自分がいない間にチドリが襲われる心配もある。
　けれど、
（……強くなるために、俺を殺したあの男や、喫茶店で会ったイリスたちに戦う技術を教わろう。チドリを彼女に任せ、その間に俺は出来る事をなんでもやって２００９年に備える。裏の仕事をしていれば、情報も入ってくる。追手がいれば、俺が殺せば良い。だから、チドリは安全な場所にいさせておく）
　今までエルゴ研でも訓練中以外は基本的に傍にいさせたチドリを、湊は初めて自分とは完全な別行動を取らせようと考えた。
　チドリを守るために傍にいる事を第一に考えていたが、それが最も安全であるとは限らない。
　エルゴ研では、危うく松本の凶弾を受けそうになり、戦う自分の近くにいるのは危険だと薄々気付いてはいたのだ。
　だから、より安全でいられるよう、組長の娘である桜と共にいさせることにする。
　力をつければ今回のような事にならずに済み、裏の仕事で巌戸台の方で活動していれば隣の市にあるここへは気付かれにくくなる。
（俺もここで暮らしていくし、仕事関係で少し離れてもチドリも納得してくれるだろう。だから、俺は少しでも早く強くなる。チドリを危険な目に合わせないために）
　湊は決意を新たに固めると、精神の昂りに反応していた蒼い瞳を金に戻し、チドリを起こし着替えさせて、呼びに来た桜と共に朝食へ向かった。

第二十五話　二振りの刀剣

午前――広間

桜が作った朝食は、湊の希望した通り和食だった。食事の場には昨日の組員らはおらず、鵜飼・渡瀬・桜の三人に湊とチドリを足した五人だけで食事をした。

この家に住んでいるのは鵜飼・渡瀬・桜の三人だけで、他の組員はタケという組員に中央区のマンションから立ち退くよう連絡をして、そのままそれぞれの家に帰ったのだという。

そうして、朝食を済ませ、使った食器も洗い終えて食後のお茶を用意すると、鵜飼と湊は向かい合って座っていた。

湊の右後ろにチドリが控え、左後ろには桜がいる。対して、鵜飼の左後方では渡瀬が静かに座っていた。

「……さて、まずは自己紹介といこうか。わしは桔梗組六代目組長の鵜飼清十郎だ。妻は桜が十歳のときに病気で死んじまったから、今は二人家族でやってる。そんで、こいつは渡瀬伸晃。組内での肩書きは最高顧問だ。外国で拾って来た元傭兵でな。他のはみだしもんだったやつらと違って、こいつだけ本物の修羅場潜って来てんだ。そんなやつが相手で災難だったな坊主」

「……有里湊。この子は吉野千鳥。桐条傘下の研究施設にいた被験体で、追われているのは俺たちの異能と施設を破壊して脱走してきた事が原因。ここ連日ニュースでやってる製薬会社地下のガス管破裂による爆発事故。あれを起こしたのが俺なんだ」

隠しても意味はない。それを示すように、しっかりと相手の目を見て湊は真実を述べる。

桜だけは湊たちが研究施設の被験体だといったときに肩を揺らしたが、鵜飼らは後半の爆発事故を起こしたのが湊だという部分に少々驚いている様子だ。

だが、直ぐに表情を戻すと、鵜飼が湊に尋ねた。

「そうかい。それで、昨日のアレは一体どういった類のもんなんだ？守護霊とか、そういったもんじゃねえんだろ？」

「人間の精神が具現化したものだと思ってくれていい。ただ抜け出たものが〝シャドウ〟で、それをコントロールしたのが〝ペルソナ〟と呼ばれてる。俺たちはペルソナに目覚めたからシャドウと戦えて、その力を持ってるから桐条の研究所にいたんだ」
「へぇ、おめぇらも難儀なもんに関わっちまったんだな。力は争いを生み、争いは災いを招く、ってなぁ先代の言葉だが、望むにしろ望まざるにしろ、力を持ったなら一つ覚悟を決めねえとな」
言って、お互いの自己紹介はこれで良いとばかりに鵜飼は小さく笑う。
湊たちの事情を軽視している訳ではなく、ここで必要以上に話しても無意味だと経験で分かっているからこそ話を切り上げたのだ。
湊もそれを理解して返さずにいると、再び鵜飼が口を開いた。
「んで？　おめぇらをここに置くって言ったのはわしだからな。一ヶ月と言わず、自分らで生きていける目途が立つまで居てもらって構わねえ。だが、ただダラダラと居候するだけってんなら他所に行ってもらう。だからこそ聞くが、坊主はこれからどうするつもりだ？」
尋ねられた湊は考え込む様に暫し視線を伏せる。
道場から桜の私室に戻ってから今後の方針はある程度固めた。だが、それはチドリには話していない。
相手の意思を無視して決めた方針に、チドリから反対の言葉が出るかもしれず、湊は本当にこれで良いのかと考えるが、結局、全ては未来に続くためと思うことにした。
そして、伏せていた視線を戻し、正面から鵜飼を見つめ返事をする。
「……俺は、裏の仕事をしていこうと思う。事態が動くのは２００９年って分かってるんだ。それまでは情報も集まるし、何より力をつけることが出来る。だから、情報屋と仲介屋で仕事を貰って備える」
「そいつぁ、嬢ちゃんも一緒にか？」
「チドリにはそんな事はさせない。学校は中学になってから通おうと思ってるから、それまでは桜さんが勉強を見てあげてくれないかな？」
「それは構わないけど……」

振り返り声をかけられ、桜は湊の言葉に了承で返すが表情は困惑の色を浮かべている。桜の隣に座っているチドリが湊の話しを聞いて驚き、怒っているように見えるからだ。
口には出していないものの、チドリの表情から察した桜は、あくまで遠回しに湊に意見をする。
「その、みーくんはちーちゃんとお話した？　ちーちゃんは、初めて聞いたみたいだけど」
「してないよ。けど、今のチドリは知識も実力も不足してる。それらを最低限のレベルまで備えていない状態で、一緒に仕事に連れていこうとは思わない。だから、反論は聞いても聞き入れはしないし。言いたい事があるなら、言えるだけの立場になれって先に言っておく」
「……最低限のレベルって？」
「現在の俺と同程度。今の俺はリーチもパワーも子どもの物だし、チドリなら鍛錬しつつ身体が成長していけば普通にこのレベルにはなれる筈だよ」
尋ねたチドリは湊の答えを聞いて、理解は出来るが納得は出来ないとばかりに眉根を寄せて不機嫌な表情を作る。
確かに、依頼を受ける仕事屋をしていくのであれば、何か一芸に秀でてもいない限り、総合的に高い能力が求められるだろう。
知識と知恵がなければ計画を立てられず、緊急時に活路を見出すことも出来ない。実力が不足していれば、どんなに素晴らしい案であっても実行に移す事が出来ない。
仕事を受けるからには、子どもだから、という言い訳は利かないとイリスも言っていた。
それだけに、小さな身体でも大人ともやり合うことのできる湊の実力が基準となるのは、果てしなく遠く思えるがしょうがないと認めざるを得なかった。
「……約束。今の湊くらい強くなったら、私も一緒に行く」
「いいよ。仮面舞踏会（バル・マスケ）は俺たち〝二人〟のチームだから、ね」
「……うん」
湊がいうと、チドリは少し嬉しそうに笑って頷いた。

別行動は自身を邪魔に思っているとか、意地悪でしている訳ではない。ちゃんと追い付くまで、湊は隣を空けて待っていてくれる。
それを理解し、今後の活力を得てチドリが納得した表情になると、話を終えた湊は再び正面の鵜飼と向き合った。
「話は決まったよ」
「そうかい。んじゃまぁ、わしらにして欲しいことがあったら先に言っとけ。ガキの我儘を聞くのも大人の仕事だからな」
「……近接戦闘を教えて欲しい。銃の扱いとかは、知ってそうな当てがあるけど、格闘は我流だから」
我儘を聞くといった鵜飼に湊は早速一つ頼みこむ。これは桜の私室でも考えていたことだ。
ベルベットルームで習ったのは、最低限の戦いの心得。そして、技術云々よりも、自分自身の肉体性能（スペック）を知り、そこから繰り出す事の出来る力はどういった物であるかを把握するという事。
体運びや、間合いの取り方、死角の突き方は、エリザベスが教えるまでもなく、あのムーンライトブリッジの戦いの時点で何故だか既に知っていた。
武の道に進んだ者たちが長い年月をかけて身に付けるものを、湊は誰に教えられるでもなく理解していたのだ。
今朝の道場での事を思い出し、鵜飼も湊がどれだけ普通でないかは分かっている。それだけに、湊の目指す未来に辿り着くために、必要な才を持って生まれたのは運命かと感じた。
「いいぜ。坊主は得物も使うんだったな？　だったら、剣はわしが教えてやる。ステゴロは渡瀬に習いな。まぁ、わしらもずっと教えてる訳にはいかねえから、おめぇの都合ばっかには合わせれねえけど、その間は自分でやってられるだろ？」
「ああ、問題ない。宜しくお願いします」
「へへっ、そう畏まらなくていい。わしも同じように先代から仕込まれただけだからな。とりあえず今朝言ってたもん渡しておくから、坊主は蔵にいくぞ。嬢ちゃんと桜は別に待ってて良いから、好きにしな」

言いながら立ち上がる鵜飼に合わせて渡瀬と湊が立ち上がると、チドリと桜の二人も一緒に来る気らしく、部屋を出た鵜飼を追う湊の後ろをついてきた。
そうして、一行は部屋を出て、玄関で靴を履くと、敷地内にある大きな蔵へと向かった。
――土蔵
広い敷地内の端にある大きな土蔵。外壁の板には漆喰が塗られているが、その馴染んだ色合いから推測するに相当に古いものだ。
その前までやってくると、戸に掛けられた重厚で頑丈そうな大きな錠を鵜飼が外し、薄暗い土蔵の中へと進んでゆく。
「悪ぃな。ここには電灯はつけてねえんだ。いま外の光を入れて見えるようにすっから待っといてくれ」
中に入り壁沿いに進んで鵜飼がそういうと、何かをいじったのかゆっくりと雨戸が開き、外の光が土蔵の中へと射し込んでくる。
それにより視界の確保された湊とチドリは中に置かれている物を見て驚いた。
壺や掛け軸、反ものなどきっと価値がある物なのだろうと思える物品の他、奥の壁際の棚には刀を保管する桐箱や甲冑などが置かれていた。
驚いている二人の様子に満足気な顔をしながら鵜飼が笑うが、チドリと湊では驚きの意味が違っていた。
チドリは価値を知らない自身でも分かるような、高価そうな物が多数置かれていたことによる素直な驚き。
だが、湊はいくつかの桐箱に黒い靄のようなものが視えていたことによる驚きだ。
今の瞳の色は、シャドウの証である金色。魔眼でもない瞳で、常世のモノと思われる存在が視えている。
チドリはキョロキョロと置かれている物に視線を送っているので、視えていないのだろう。
「おし、それじゃあ好きに得物を選びな。ここにあんのは業物ばっかりだからよ、鈍らはねえから安心しな。保存状態はどれも良いし。わ

りかし、新しいのはここらへんの」
説明しながら鵜飼の手が黒いもやのかかった桐箱の一つに伸ばされる。
普通の人間があんなモノに触れてはいけない。そう思い、湊は咄嗟に叫んでいた。
「触れちゃ駄目だっ!!」
「っ、……んあ？　どうしたってんだい？」
湊が叫んだことで手を止め、怪訝そうな顔つきで頭を掻きながら尋ね返してくる鵜飼。
同様に、急にどうしたのかと不思議そうにチドリと渡瀬も湊を見つめている。やはり、自分以外には視えていない。そう思った、その時、
「お父さん、それの中身は駄目よ。あと、上の棚にある茶色の紐で箱を縛っているやつ、それに壁にかけてある紫の飾りのついた槍も」
後ろから優しく湊の肩に桜は手を置き、しかし、真剣な瞳で湊が黒いもやの視えていたものと同じ武器類を言い当てた。
自分以外にも視えている者がいた。それが信じられず、湊は瞳を揺らしながら振り返って桜を見上げる。
すると、肩に置いていた手の片方で頭を優しく撫で付けながら、自身を見やる少年を落ち着かせるため、穏やかな声色で桜は語りかけた。
「大丈夫よ、みーくん。大丈夫。貴方以外にも視える人はちゃんと居るから。そんなに怖がらなくて良いの」
「〝アレ〟が……視えるの？」
「同じようにかは分からないけど、同じモノは視えてると思うわ。だから、大丈夫よ。ああいったものを視るのは初めて？」
その問いに湊が小さく頷くと、桜は「そっか」と呟き、再度落ち着かせるように抱きしめて背中を優しく叩きながら頭を撫でる。
すると、桜と湊、両者だけが分かり合っていることが面白くないチドリが、若干の苛立ちを含んだ声色で尋ねた。
「……何が見えるの？」
「ん？　ふふっ、ちーちゃんは視えないのね。けど、それが普通だから

拗ねちゃ駄目よ。みーくんがさっき大きな声を出したのは、お父さんが触ろうとした箱によくないモノが視えたからなの。みーくんが部屋で言っていたシャドウやペルソナにニュアンスは似ているかも知れないけど、実際はきっと別のモノね。誰かの想いや魂と言えば良いのかしら？　簡単に言えば幽霊のようなものよ」

幼いチドリにもちゃんと分かるように桜は〝幽霊〟と言ったが、湊に視えていたのは所謂、〝怨念〟の類い。

言った桜自身もよくないモノと感じているようなので、湊と同様に人の魂である〝幽霊〟ではなく、邪気の籠った想いの塊として視えているのだろう。

それらを視認出来る能力の名は〝霊視〟。殺すための存在の綻びが視える〝直死の魔眼〟とは全く別の系統であり、魔眼と違い強弱はあれど一般人でもこの力を持っている者はそれなりにいる。

桜もその一人で、どうやら湊と違い、力を持ってから長いようだ。

「お父さん、何度も言ってるけどちゃんとお祓いをして貰った方が良いわ。武器なんて曰くありげな物もいっぱいあるんだから」

「つっても、わしらには分からねえしな。お祓いに来てもらっても、ちゃんと出来てるか確かめようがねえぜ」

娘に言われ、鵜飼は困ったように顔を顰めて頭の後ろを掻く。

今までの話しに特に口を挿んだりしなかったことから、鵜飼は自分の娘に霊感があることを知っており、尚且つ、それが真実であると信じてもいるようだ。

出まかせを述べて、霊感商法などというあくどい詐欺商売をしている者もいるというのに、自分は視えなくとも娘の言う事をしっかりと信じている辺り、この親子の絆はかなりのものだと湊は感じた。

だからこそ、その者たちの世話になるのであれば、自分も少しでも役に立とうと思い、桜から身体を離すとマフラーから黒い短刀を取り出し口を開いた。

「……じゃあ、俺が殺ヤるよ」

言いながら湊は黒い靄に覆われた箱や武器の元へと歩を進める。

その瞳は〝蒼〟。シャドウですら傷付けるだけでなく、存在ごと殺

すことも出来るようになる瞳ならば、例え実体の無い怨念であっても、その存在を殺すための綻びが視えるだろうと思った。
事実、他のモノよりも視え辛くはあるが、黒い靄にも薄っすらと線が視える。
しかし、今までは黒いひび割れのように視えていた線が、赤い光の線のようになっていた。霊視が出来るようになったからか、再び死んだからかは分からないが若干変化した現在の眼の方が殺し易いと湊は思った。
そして、まわりの者が動向を見守っている中、湊は本人も気付かぬほど無意識に〝何かを殺せる〟という事に悦楽を感じながら小さく口元を吊り上げ、
「――――シネ」
綻びに刃を通し、刀を何度か振るった。
チドリ・鵜飼・渡瀬の目からは、湊は何も無い空間で短刀を振りまわしたようにしか見えない。
だが、纏わり憑いていた怨念が視えていた桜には、湊が刀を振るう度に黒い靄が霧散していく様子が鮮明に視えていた。
その光景が信じられず大きく目を見開き、口を手で覆い驚いている桜の方に振り返り湊は告げる。
「これでもう二度と現れない」
「そんな、清めも祓いせずどうやって……」
桜は湊の目の力を知らない。話を聞いているチドリもはっきりと把握出来ていないため、説明されても他の者も完全に理解することは出来ないだろう。
だが、湊の瞳が変わっていることが関係している事は分かる。あの瞳が普通ではない事は誰が見ても明らかなのだから。
「みーくん、その眼は何？」
「これは魔眼。死の概念を視覚として捉えられる。だから、傷付けるだけでなく、存在そのものの死を齎す事も出来る。ペルソナの方が目覚めたのは先だけど、この力の方が俺の身体によく馴染んでいるんだ。まぁ、何度も死んでいるからだろうけど、むしろ段々と使い易く

なってるから気にはしてない」
会ったばかりだが、今までで一番饒舌に話す湊は違和感に溢れていた。何がおかしいのかは分からないが、近寄りがたい雰囲気。
怨念を払うのに使った短刀を仕舞い、眼を元の金色に戻したことでそれらは消えたが、桜はどうにも先ほどの違和感を忘れられそうになかった。
しかし、これで武器選びが自由に出来るようになった。
改めて鵜飼は湊に置かれている武器の説明を始める。
「さて、おめぇは刀か剣の方が良いだろうな。先は分からねえが、力よりも技術で殺り合いそうだし。槍や鉾じゃ狭い場所で使えねえ。だから、よく考えて選びな。テメェの命預けるものなんだからよ」
言われて湊は置かれている桐箱を下に下ろし、刀身の状態や柄などを実際に手にとって見てゆく。
長さ、重さ、柄の握り易さなど、刀身自体よりも振り回し易いかどうかで判断しているという、切れ味は関係ないとばかりの選び方に、これで剣術と剣道を習う気があるのかと鵜飼は思ってしまうが、素人なら逆に切れ味よりも自分が使い易いかどうか選ぶもあり得るかと納得することにした。
そうして、数分経って湊が手に取ったのは一つの桐箱と一振りの剣だった。
桐箱に入った刀は組んだ際の全長約百センチ、黒い柄で鍔はなく、波打つような美しい刃文の刀身と暗い紫の鞘に並んで収まっている。
剣は見た目からすると中国剣と呼ばれるもので、全長約一二〇センチ、柄自体と鞘の大部分は黒だが、剣首や鍔、鞘に金色の金具の装飾がなされており、さらに剣首には赤い長穂がついていた。
選んだ刀剣を道具を置いておく簀の上に並べ鵜飼に見せる。すると、鵜飼は興味深そうに顎に手をやりながら笑った。
「ほう、珍しいもん選んだな。そいつは〝姫鶴一文字（ひめつるいちもんじ）〟と〝星噛（ほしがみ）〟って言ってな。短刀使ってたなら鍔迫り合いなんてしねえだろうから、姫鶴一文字でも問題ねえだろうし。星噛は製作者も分からんもんだが、造りは確かだ。俺が教えるのは刀が前提の使い方だが、自分で鍛

錬するなら剣も勝手に使ってて良いぜ。別に型が多少崩れても気にしねえしな。それと、刀の方は後で組んでおいてやるよ」
「わかった。それじゃあ、先にこっちだけ貰っておく」
言われて桐箱をそのままにして、新たな武器である星噛を湊はマフラーに仕舞う。
そんな様子を眺めていた桜は、昨夜から思っていた疑問を一つ口にした。
「ねえ、みーくん。そのマフラーって一体どうなっているの？　さっきも短刀を取り出していたし、いまも武器を仕舞っちゃったわよね？」
「一応は無限収納だよ。生物以外は何でも仕舞えて便利だから、いつも身に着けてる」
「無限収納って、入れても重くならないの？」
「時間経過の無い専用の異空間に放りこんでるだけだから、別に重量に変化はない」
質問に答えた湊はマフラーを首からはずし桜に手渡す。
それを受け取って重さを確かめるが確かに普通の衣服とそれほど重量は変わらないと思った。
刀は長尺でもない限り一振りが大体一キロ前後で、重い物でも二キロにも届かない。
そんな物を入れても軽いと感じたことで、確かにマフラー自体に入れているわけではなく、マフラーは一種のゲート的な役割を果たしているだけなのだろうと当たりをつけた。
そうして桜は、アンクレットに変化する靴もそうだが、湊の持ち物はあまりに現代の技術とかけ離れていると思いつつ、湊にマフラーを返す事にした。
「はい、どうもありがとう」
「別に良い。それで、この後はどうするの？」
返して貰ったマフラーを巻きなおしながら湊は視線を鵜飼に向ける。
本音を言えば、この後直ぐにでもどちらかに見てもらって鍛錬した

いが、急にきた自分らと違い予定があるだろう。
現役の組長と最高顧問だ。大きく動くことは稀だろうが、暇な時間の方が少ないとみて良い。
ジッと見ながら湊が待つと、鵜飼ではなく黙って着き従っていた渡瀬が口を開いた。
「本日は他の組との会合があるため鍛錬は出来ません。昼前に出て、戻ってくるのは八時ごろになりますから、今日は身体を休めるなり、素振りで武器の重さに慣れるなどしておいてください」
「まぁ、そういうこった。悪いな、坊主。また明日の朝になら時間作れるから、今日は桜と一緒に出かけてこい。生活するのに必要なもんもあるだろ？」
いま湊が持っているので日常で使えるのは研究所から持ってきた本と昨日のうちに買い足したチドリの遊具を除けば、栗原が買ってきた五日分程度の服と鞄だけだ。
制御剤のデータ、対シャドウ兵装シリーズのデータ、内容の分からない一枚のＣＤ―ＲＯＭなど、当分は使うこともないだろう。
となれば、鵜飼の言う通りもう少し日用品を買ってくる必要がある。
幸いなことに、金銭的な余裕はそれなりにある。シャドウを倒すことで手に入れた金銭は、そのままマフラーの中にある袋に放りこんでいたので、殆どが小銭だが貯まりに貯まって現在では四十万ほどになっているのだ。
「……今日は買い物にする。今は五日分くらいの服と、本とかしか持ってないから、もう少し衣類を買いに行きたい。でも、巌戸台の方は桐条がいるから駄目だ」
「わかったわ。それじゃあ、お出かけの準備をして車で出かけましょ。久しぶりだわ、自分で運転してお出かけできるなんて」
そういった桜はとても嬉しそうな笑顔をしており、手を引かれて一緒に蔵を出ていくチドリは不思議そうに見つめていた。
後に続くように湊が蔵を出るとき桐箱を運びながらそっと耳打ちしてきた渡瀬が言うには、桜は病弱で尚且つ箱入りで育ったのだが、

元々の性格は茶目っ気に富んだ活発なものらしく。自分の身体に負担のかからない車の運転は嬉々としてスピードを出すという事だった。

例え事故を起こしても、今の湊であればペルソナを使って二人を守るくらいは可能だが、そんな事は起こらないに越したことはない。

そうして、準備をして桜の愛車の一台である黒のメルセデス・ベンツＳ５５　ＡＭＧに乗り込むと、子どもを乗せているのだから安全運転で頼むと湊が伝えて、桜の贔屓にしている服屋へと向かった。

昼――呉服屋〝染川〟

車で一時間ほどドライブしてやってきたのは、桜がよく着物を仕立てて貰っている呉服屋〝染川（せんかわ）〟。

店の外観はとても古い見世蔵で、まわりにある他の店も似たような雰囲気であることから、ここら一帯がそういった老舗の集まる場所なのだろう。

車から降りてまわりを見ていた湊はそんな風に思うと、続けて降りてきたチドリに手を貸す。

「……気持ち悪い。あの人、車の運転荒い」

乗ったばかりのときは桜も湊の言いつけ通りに安全運転をしていた。しかし、山道の方までやってくると徐々に速度が上がり、搭乗者の身に多大な負担のかかる運転技術を披露した。

それにより、着いたころにはチドリはぐったりしており、歩くのも大変そうなので湊がお姫様抱っこで店内まで運んでゆく。

「呉服屋なら畳があるから、そこで少し休んだらいい。どうしても駄目そうなら、マフラーに車を入れて、帰りはペルソナで飛ぶことにするし」

「車もいれれるの？」

「最大面積は知らないけど、六畳くらいまでなら広げたこともあるよ。だから、車くらいは大丈夫」

そう言われても、チドリは六畳がどれくらいの大きさなのか分からない。けれど、湊に抱かれながら空を飛ぶのは好きだった。

なので、帰りは少し駄々をこねて、どうにかしてペルソナで帰れる

ようにしようと密かに決め、降りたときのチドリの様子を見て、桜が申し訳なさそうに「ごめんなさいね」と言っていたが、それを頷いて返すに止め、スルーした。

「あらあら、桜さん。いらっしゃい。今日はどうしたの？」

店に入って最初に聞こえてきたのは少し高めの女性の声。その主は、上品な雰囲気を纏い、花の柄の描かれた黒い着物を着た六十を過ぎた年頃の白髪の女性で、店に入って来た桜と、その後ろに続いてやってきた湊とチドリに視線を送り。何やら興味を持ったらしい。

「こんにちは、染川さん。今日はこの子たちの着物を仕立てて貰いに来た。何着かお願いしたいんだけど、大丈夫かしら？」

答える桜の横を通り過ぎて、湊がチドリを畳の上に寝かせていると、染川と呼ばれた女性は、人数分の湯呑みを用意して、急須にお湯を注ぎお茶の用意をしている。

「ええ、いまは仕立ての仕事は入ってないから大丈夫だけど。御親戚のお子さん？」

「いいえ、昨日うちにやってきた新しい家族よ。湊くんと千鳥ちゃんっていうの」

楽しそうに話すに桜に対し、湊とチドリは僅かに驚いて視線を上げる。

出会ったばかりで、素性も分からぬ人間を家族として紹介するなど普通ではない。馴染みの店ならば多少の冗談を言い合うことも出来るだろうが、それもあまりに突飛では不審がられるだろう。

そうして、相手の反応にも目を向けると、女性は二人の想像の斜め上をいく対応を見せた。

「そうなの。それじゃあ桜さんはお姉さん？　それとも、お母さんかしら？　ふふっ、私は染川（せんかわ）芳乃（よしえ）っていうの。旦那が死んでから一人でお店をやってるのよ。仕立ては職人さんがやってくれるから、二週間くらいで出来ると思うわ」

なんと、染川はそういってくすくすと笑っていた。特別怪訝そうな表情も見せず、桜の言葉をそのまま受け取っているような反応。

本当にどうなっているのかと、湊は染川に疑心を募らせ、口を開い

た。
「……何故、何も訊かない？」
おかしい。自分が会って来た人間と何か違う。
研究所を出てから会った人間の何人かに覚えた違和感だが、それが顕著に感じられた染川に対し、今朝からは抑えられていた湊の警戒心が剥き出しになり、ピリピリとした緊張感が店内を包む。
だが、湊がそんな様子を見せても、染川は穏やかに笑ってお茶を湯呑みに注いでいた。
「ふふっ、血の繋がりだけが家族じゃないでしょう？　だから、桜さんが貴方たちを自分の家族だっていうなら、私もそれで良いと思うの」
お茶を注ぎ終えた湯呑みをそれぞれの前に置き、染川はゆっくりと立ち上がる。表情は優しげで上品な笑顔のままだ。
「さぁ、そんな怖い顔をしてないで、生地を選びましょう？　貴方たちは瞳や髪が綺麗な色だから、他の人よりもずっと沢山の物が似合うと思うわ」
そんな風に、純粋な善意のみしか感じられない対応をされては、湊も警戒心を出していても意味がないと、一度短く嘆息してから放っていた気を収めた。
その後、先に湊の採寸を取り、何種類かの生地を選び。時間が経って回復したチドリも、同じように採寸をしてから生地を選び、最終的に二人で十一着ほど注文した。
着物を買うつもりはなかったが、自分たちの物だからと湊が支払いをしようとしたのだが、支払いは全て桜がカードで済ましてしまい。僅かに見えた請求書にはゼロが六つほど付いていたため、どちらにせよ所持金の足りていなかった湊は素直に諦めることになった。
当初の予定よりも多く注文したため、全て出来上がるには七週間は掛かることになったので、二着ずつの計四着が出来上がったら一先ず取りに来て、残りの七着は全部出来上がってからという事になり。
そうして、店を出ると、今度こそ湊たちの日用品を買うために大型のショッピングセンターに行き、桜がチドリに勉強を教えるための教材や、湊が鍛錬のときに着る服などを買い揃えてから帰宅したのだっ

た。

第二十六話　もう一人の住人

???――ベルベットルーム

湊は目を覚ますと、ベルベットルームの椅子に座っていた。

上昇するエレベーター特有の浮遊感を感じながら、テーブルを挟んだ向かいで不気味な笑顔を見せて座っているイゴールに視線を向ける。

だが、基本的に湊がイゴールと言葉を交わすことは少ない。

ここベルベットルームの主で、ペルソナの融合など従者の二人には出来ない技術を持っているようだが、湊は現在の所持ペルソナたちでメンバーを固定しているため、新たなペルソナを生み出す以外の仕事をしていないイゴールとの接点はほぼ皆無となる。

そうなってくると、来たときには挨拶をするものの、鍛錬を受けているというのもあり、主に接するのはイゴールの後ろに控えている従者の二人になってしまうのだ。

けれど、いつも従者が立っている場所に視線を向けた湊は、普段とは違う者がそこに加わっていることに気付く。

「……？」

己から見て、イゴールの左側にテオドアが立ち、右側にはエリザベスがいるのが常だった。

しかし、今日はエリザベスだけでなく、青いスカートタイプのスーツを身に付けた銀髪の女性もその隣に立っていた。

ヒールを履いているのもあるのだろうが、エリザベスよりも背が高く、雰囲気からして年上に見える。

そこまで考えたところで、そう言えば三人姉弟だと言っていたなと思い出し、湊はスーツの女性が二人の姉だと気付いた。

「はじめまして、俺は有里湊」

「お初にお目にかかります。私はマーガレット、エリザベスとテオドアの姉です。お客様のお話は二人から聞いておりました。別件の仕事で出ておりましたが、これより私もお客様のサポートに就きますので、どうぞよろしくお願い致します」

挨拶を交わしたマーガレットは丁寧に礼をして、湊に微笑を向けてくる。
エリザベスとはまた違った妖艶な雰囲気を漂わせているが、人ではあり得ぬ気配も同時に纏っている事で、マーガレットもまた力を司る者の一人であることを湊は本能でも理解する。
彼女の瞳は他二人や湊と同じ、人ならざる者の証である金色。
年齢が上の分、妹弟よりもまともな知識や常識を持ち合わせているのだろうが、最も危険なのはマーガレットだと思う事にして、湊は会話を続けてゆく。
「サポートって、今後は二人で俺の担当をするってこと？」
「はい。お客様があの箱庭よりお出になったことで、夢を介さずとも現実からここへお越しいただけるようになりました。ここへ訪れるための扉は、契約者の鍵をお持ちの方のみ視認が可能となりますが、現在用意しましたのはタルタロスのエントランスとポロニアンモールの裏路地の二ヶ所のみ。ですが、お客様は諸事情によりなかなかどちらにも近付けないようですので、私も担当に就くことで特例で三つ目の扉をご用意することになったのです」
それは湊にとって非常にありがたい決定だった。桔梗組本部からタルタロスまでは、タナトスで普通に飛べば三十分ほど掛かる。
全速力ならばもう少し短縮出来るだろうが、ベルベットルームに来るためとはいえ、桐条に対する警戒をした状態で、そんな往復を続けていればいつかとんでもない失態を犯すだろう。
客側の事情など本来ならば無視しても構わないというのに、サポートが増える上に特例まで認めて貰えるとは至れり尽くせりだ。
そうして、少々気を良くした湊は、今でも鍛錬で世話になっているテオドアだけ担当になっていないことを僅かに気にしながらも、三つ目の扉の場所と、担当者が増えることでのサービスの変更点を尋ねることにした。
「特例を認めてくれてありがとう。それで、扉の場所と担当が増えることで何が変わるのか教えてくれる？」
「フフッ、その説明は私がいたしましょう」

湊が尋ねると、そういって今まで楽しそうに見ていただけのイゴールが話に加わる。
説明は基本的に従者に任せている場面しか見てこなかっただけに、珍しいと思いながら湊も耳を傾ける。
「まず、扉の場所ですが、それは未だ決まっておりません。と言いますのも、お客様が今後為される活動を考えれば、行動範囲があまりに広過ぎるため、特定の場所に用意してもご利用して頂けない可能性があるからでございます」
確かにイゴールの言う通り、裏の仕事を始めればどこかに何泊かして仕事に当たることも考えられる。
湊は今も基本的にチドリの傍にいようと思っているが、これまでのように自分の傍に置くことは安全だとはもう思っていない。
むしろ、自分たちのいる場所を嗅ぎ付かれないよう、日中以外は単独ないし裏稼業の人間と活動して家から離れるつもりでいる。
そうなると、活動範囲から行動パターンまで何もかもが未定で、仮に三つ目の扉が桔梗組本部の敷地内に用意されようが、帰宅自体が不定期で無駄になり得ることが容易に想像できた。
「それゆえ、三つ目の扉はお客様にお渡しした鍵に少々手を加えさせて頂き、悪魔召喚のゲートのように展開して頂くことにさせていただきます」
「八雲様、契約者の鍵を此方へ」
イゴールが説明を終えると、心なしどこか普段よりも冷たい無表情なエリザベスがペルソナ全書を開いて持ってきた。
開かれたページには鍵を納める窪みがあり、その周りには見たこともない文字と紋様が描かれている。
たったこれだけで鍵の機能を追加できるとは、やはりベルベットルームの技術は現実とはかけ離れていると思い知らされつつ、湊は素直に鍵を具現化して窪みに納めた。
「確かに……では、失礼致します」
しっかりと鍵が納まったことを確認してエリザベスが本を閉じると、途端に本が淡い光を纏いだす。

白けた青、若葉のような緑、夕焼けを思わせるような赤、そんな風に次々と色が変化し光が増してゆく。薄暗いベルベットルームが本の放つ極光に照らされると、最後に一度強烈な真っ白い光を発して本は沈黙した。

「……」

見た限りでは本の装丁には何も変化はない。テオドアやマーガレットの持っている物と全く同一のデザインのままだ。

あれだけの光を纏いながら本自体に変化がないのであれば、鍵に効果を追加するのはそれほど複雑な技術を必要としたのだろう。

エリザベスが本のページを開くと、今までペルソナカードの裏面と同じ仮面が描かれていたキーヘッドが、新たにペルソナ全書と同じ六芒星に絵柄を変えてそこにあった。

自分で手に取れとばかりに本を差し出され、若干いつもと違う様子のエリザベスを不思議に思うが、湊は素直に鍵を窪みから取り出した。

「……使い方は？」

機能を追加した事で変化したことは分かるが、その新機能を使う方法が分からない。

まさか鍵を使って空間を切り裂くなどという事はないだろうし、手元の鍵とエリザベスへ交互に視線を送りながら尋ねる。

すると、ポンッ、と音を立ててペルソナ全書を光に変化させ栞に仕舞い。背後から椅子の背もたれを越え、頭の上に覆いかぶさるような形でエリザベスは湊の鍵を持った右手に自身の右手を重ねた。

「実際の扉の場合は現実の鍵と同じ使用法で構いません。そして、八雲様専用の扉を開くときには、このように手に力を纏ったまま十字を切り、その中心に鍵を差し込み右に回します」

ペルソナのカードを出すときと同じ要領で、鍵を持ったまま青白い光を手に纏い、エリザベスは素早く十字を切る。

普通ならば空中で十字を切ってもどこが中心か分からないだろうが、手に纏った力に鍵が反応したのか、空中に十字の光が残り、はっきりと中心がどこであるか視認できる。

そして、そのまま丁度交差している部分に鍵を挿し右にまわすと、ガチャリ、という鍵の開く音が頭の中で響いた。
その直後、まばたきをした一瞬の間に、目の前に青い大きな扉が現れていた。金色の蝶のような模様が描かれており、初めて見るがこれがベルベットルームへと通じる扉なのかと湊は把握した。
「開いてみても？」
「モノクロチェックの床をした境道を通り、あちらの扉から出てくるだけでございます」
「……今日はどうしかしたのか？」
現れた扉を実際に開けてみてもいいのか尋ねると、エリザベスは壁際にある扉を指差し淡々と答えるだけで、まるで素っ気ない態度を取る。
いままでこんなことは一度もなく、むしろ、一歩引いた態度でありながら助言をするなど、エリザベスの方から控えめに関わってくることが多かったくらいだ。
そのため、今日の態度は怒っているようにしか思えず、鍵を消したことで一緒に扉も消えるのを見てから席を立ってエリザベスと向き合う。
ここ数ヶ月で身長も少しは伸びた。まだエリザベスの肩にも届かぬ背丈だが、来たばかりの頃は普通に抱き上げられていたので、それが難しくなってきたのは大きな変化だと湊は思っている。
そうして、縮まってきた身長差を実感しつつ湊が真剣な表情で見つめていると、完璧に作られた微笑を貼り付けていたエリザベスは、小さく溜め息を吐いて無表情になった。
現実離れした美しさをしているだけに、表情が完全に消えると人形のような不気味さも感じてしまう。だが、その無表情の奥に何かしらの感情が隠されているのは分かっているため、見続けていると、エリザベスは右手を振り上げ、高速で振り抜いた。
「っ!?」
急なことで状況は分からないが、湊は反射神経をフルに使って上体を逸らし、死神の鎌とも言える攻撃を何とか躱す。

目の前を通り過ぎる腕は、あまりの速さに一条の青い曲線と化し、その威力からゴオッ、というあり得ないスイングの音を湊の耳に届けた。
上体を逸らしそのままバク転で距離を取ると、攻撃してきた理由を湊は問い詰めた。
「……何も言わずに急に攻撃とは、随分だな」
「先日の夜の事を思い出して頂ければ、私がこうした意図もお気付き頂けると存じます」
「先日の夜？」
言われて思い出そうにも、最近はエリザベスと会っていなかった。
脱走の日から一週間ほど寝込み、その後も魔眼のオンオフが使えなくなっていたので、鍛錬が出来ずにいたのだ。
もしこれで、「ずっと心配してたんだから！」や「何で会いに来ないの！」という恋人的な発想であれば湊も悩む事はない。勿論、本当にそうであったなら、今とは別の悩みを持つ事になるが、言われても全く覚えの無い湊は、正直に白状する事にした。
「ごめん、言われても覚えがない」
「では、私と結んだ契約の内容は覚えておいででしょうか？」
湊が覚えがないと言った途端に、エリザベスは普段よりも僅かに目を大きく開いて、再び無表情に戻ると、底冷えするような冷淡な声色で湊に尋ね返す。
先ほどの話は全く思い出せなかったが、今度の方は大丈夫だと顔を上げて答えた。
「契約を果たすまで死なない、だろ？」
「結構です。では、それを踏まえた上で、現実時間で一昨日の夜、八雲様ご自身の身に起きた事をお聞かせ願えますか？」
「……そういう事か」
一昨日の夜と言えば、湊とチドリが桔梗組の本部に乗り込んだ日であり、その日の最後に湊の身に何が起こったのかを考えると、渡瀬との戦闘で敗北し殺された、というのが思い出された。
エリザベスは契約不履行の場合には、相応の処罰を受けて貰うと湊

に告げてある。
よって、先ほどの攻撃は、何故契約を果たす前に一度死んだのかという、問い詰め兼罰則だったのだろう。
生物は死ねばそこで終わり。湊はデスを宿していたから蘇生されただけで、その力だって頭部を一撃で飛ばされれば使えず死んでしまう。
自分の命に対する認識の甘さと、契約を意識していなかったことを反省し、湊は未だ冷たい視線を送り続けている女性に謝った。
「ごめん、一回死んだ」
「見事正解でございます。では、私との契約を反故にした罰則を受ける覚悟は出来ておいででしょうか？」
「いや、出来てないよ。俺はまだ生きてる。その契約における死の定義は〝完全な生命活動の停止〟だ。だから、罰則を受ける事は出来ない」
湊がそう答えると、エリザベスは僅かにムスッとした表情になる。
別に罰則を与える事を嬉々として楽しみにしていた訳ではない筈なのだが、生き返ったからノーカウントだと躱されるのは、少々詭弁ではないかと思ったのだ。
だが、湊も簡単に認めて、あんな喰らえば頭が飛びそうな平手打ちを受けたくはない。
そうして、お互いに譲らず、徐々に闘気のようなものを纏いだすと、第三者がそれを止めた。
「エリザベス、話の途中よ。下がりなさい」
「……姉上、これは契約を交わした者同士の問題です。例え姉上であっても、干渉はご遠慮ください」
向かい合っていた両者の間に立ったマーガレットがエリザベスを下がらせようとするが、エリザベスは背筋がゾクリとするような微笑を見せ、「関係ないやつは引っ込んでろ」と遠回しに返す。
妹にそんな事を言われ、口元を僅かに引き攣らせ、直ぐに目だけが笑っていない微笑みを作ったマーガレットもエリザベスのように闘気を放出し始めるが、大人の対応か、急に戦いを始めたりはせず、持っ

ていたペルソナ全書を開いて湊に歩み寄った。
「失礼致しました。先ほどまでの話の続きをさせていただきますが、先ずはお客様に私との契約を結んで頂きたいのです。契約には責任が伴いますが、お客様ならば果たす事が出来るかと」
マーガレットとの契約は鍵に機能を追加する条件として含まれているので、鍵に機能を追加してしまった以上、はっきり言えば事後承諾のような形である。
しかしながら、相手が同意を得ようとしている事から、先に鍵への機能追加をしたのはイゴールかエリザベスが先走っただけで、マーガレット自身は誠意を持った対応を心掛けているように思えた。
ならば、邪険になどするはずがなく、湊は自分と同じ色をした相貌を見つめながら返す。
「……内容は？　契約内容によっては、結べないものもあるから、聞かないことには答えられない」
「お客様が私と結ぶのは、『命のこたえをみつける』という契約でございます。〝命のこたえ〟とは本来明確な答えなどなく、常人ならば末期にようやく至るようなものでございますが、いかがでしょうか？」
小さく首をかしげて尋ねてくる相手に湊は何も返さず、自分の中でその契約内容の意味を考える。
思えば、これまで自分が結んできた契約は全て〝命〟や〝死〟に関わる内容になっていた。
第一の契約はアイギスと結んだ、地球に存在する全ての生命の滅びを回避するため、デス（死）を倒すことに力を貸すというもの。
デスの存在理由を知った今となっては果たす事は出来ないが、滅びの回避に主点を置くのであれば、シャドウの母たる存在であるニュクスを倒すことに力を貸せば良いのだろう。
続いてエリザベスと結んだ第二の契約は、契約を果たすまで死なないという、まるで湊が死ぬことが前提であるような内容だ。
もっとも、確かにエリザベスの推測は当たっており、湊は既に臨死体験を一度と、生命活動の停止を一度経験している。
これが近所の主婦同士による井戸端会議のノリならば、「まったく

よく死ぬわねぇ」と笑い話で済んだのだろうが、先ほどの反応を見る限りエリザベスはかなり本気で怒っているようだった。
契約における死の定義を、〝完全な生命活動の停止〟としなければ、もう既に一度反故にしているため、湊はアイギスの契約を果たすまで先の定義という詭弁を掲げてこれを乗り切るつもりだ。
そして、第三のチドリと結んだ契約は、最期までチドリを守り続けるというものだ。
これは、生命活動が完全に停止し事切れる瞬間までチドリを守るという、湊が自分に課した誓約でもある。
故に、手足がもがれれば這いずってでも、その胴体を地面に縫いつけられれば、首だけになっても動けなくなるその瞬間まで、湊は敵を殺そうとするだろう。そう、例えチドリが望まなかったとしても。
そのように三つの契約を結び、新たに結ぶ契約内容が〝命のこたえ〟などという、非常に曖昧な概念であり、死に触れ続けている湊には相応しくないものを見つけろという課題なのは、一体誰の趣向によるものだろうか。
死と戦い、戦いが終わるまで死ねず、死ぬまで守り続け、その人生の意味を知る。
矛盾を孕みながらも、全ての契約を果たす事も可能だと結論付けた湊は、考えている間ずっと自分を見続けていた力を司る者が長女に承諾で返した。
「その契約内容で問題ない」
「ありがとうございます。では、こちらに御署名をお願いします」
契約内容が一文で書かれたページ。それを見ていると初めてベルベットルームに迷い込んだ日の事を思い出す。
挿んでいた栞から羽ペンを取り出し湊に渡したマーガレットは、綺麗な細く長い指で右下にある署名欄を指し示し。湊も受け取ったペンで今の自分の名を署名する。
だが、
「……ん？　これインク付いてないのか？」
「いえ、そんな事はありませんが……？」

何度、署名しようとしても文字が書けない。
インクが付いていないことが原因かと思ったが、マーガレットは不思議そうにしながら、そんなことはないと否定する。
しかし、実際に書けないので、マーガレットの話しが勘違いではないとすれば、何が原因なのか分からない。
試しに自分の手の甲にペン先を当て、一本の線を引いてみる。すると、確かに黒いインクで細い線が書けた。どうやら、問題はペンではないようだ。
そうして、ペンと契約のページを交互に見ながら湊が考え続けていると、書けない理由に思い当たったのか、他の者が気付かないほど僅かな時間、形の整った眉を顰めてからマーガレットが口を開いた。
「ねぇ、貴方もしかして名前を偽ってない？」
「え？」
先ほどまでと打って変わって、どこか高圧的に思える雰囲気と口調でマーガレットが尋ねてきたことで、湊は面食らったような顔で面をあげる。
「その契約はね、本来の名前でないと結べないの。過去にそんなお客様はいなかったけど、結婚や離婚で姓が変わったのならば、表記を後で変更することも可能よ。けれど、貴方はそういった対象には含まれない。だから、他の名前では署名が出来ないの」
悪戯をした子どもに言い聞かせるように、どこか呆れを含んだ声色でマーガレットはさらに続けた。
「〝名は体を表す〟と言うけれど、実際に存在そのものを示すものなのよ。それを偽るというのは、その存在が偽りであると認めるようなもの。いくら周囲を騙せても、誰も本当の自分からは逃げられないわ」
「……いまの俺は有里湊だ」
「そうね。でも、有里湊は小狼と同様にナギリヤクモの仮面の一つでしかないわ。ナギリヤクモが有里湊に為れても、有里湊はナギリヤクモには為れない。虚像は実像にはなり得ないのよ」
マーガレットは感情の籠もらない冷たい瞳で、淡々と事実を突きつ

ける。例え、チドリと再会した日に生まれ変わったのだと言っても、それは八雲が外界に対する新たなペルソナを被っただけだ。
どれだけ周囲が湊を〝有里湊〟という存在として認知しても、湊本人が本当の自分は別に在ることを知っている。
今まで結んできた契約も全て八雲の名義だ。故に、契約を果たそうとしているのは、契約を結んだナギリヤクモという人間であり、有里湊という人間ではない。
契約を結ぶのであれば真実の名を記せ、目の前に立ち、見つめ続けている者は湊を逃がす気はなかった。
客の事情や内面を一切考慮しない、残酷な公平さを持った者に怒り覚え湊は怨嗟の言葉を吐く。
「……地獄に堕ちろ」
「そのときは貴方も一緒よ。契約は双方を繋ぐ呪いの鎖だから」
名を書き、蒼い瞳で睨みながら相手の胸に向かってペンと本を湊が投げ返すと、サディスティックな笑みを浮かべて涼しい顔のマーガレットは片手でそれを受け取った。
署名を終え契約が成立してからも、椅子に座って相手を睨み続け、先に鍵へ機能を追加させたのも実はこいつが黒幕ではないのかと、湊は疑っていた。
人の皮を被った悪魔の長女、真顔で無茶な要求をしてくる次女、そんな姉たちにこき使われている不憫な末弟。
力の管理者は、年齢が上がり知識と常識を得るのと比例して、人格に歪みが生じていくのだと、今回の件で確信した。
騙された上に精神的苦痛を強いられたことで、マーガレットに向かって口汚く〝糞ババァ〟や〝行き遅れ〟と罵ってやりたかったが、チドリが現実世界でおばさん呼ばわりしたことを、何故か知っていたエリザベスにより折檻を受けたのも記憶に新しい。
あんな目にもう一度遭うのは御免だと我慢することにして、思考を切り替えると表情を戻し、口を開いた。
「……それで、マーガレットは俺に何をしてくれるんだ？」
表情は普段の冷めたものに戻ったが、言葉には若干の棘が残ってい

る。ペルソナを制御することは出来ても、感情を完全にコントロールするにはまだ経験が足りていない。
そんな契約者を内心で微笑ましく思いながら、尋ねられた者は仕事モードに切り替え答えた。
「私が担当しますのは、コミュニティの管理とスキルカードの管理と複製でございます。ペルソナの管理は今後もエリザベスが担当致しますので、ＣＯＭＰでの呼び出しの際は担当者へとご連絡くださいますようお願い致します」
「俺、エリザベスとテオドアの番号とアドレスしか知らないけど？」
「既に追加してありますのでご安心ください」
綺麗な笑みを見せて言っているが、完全にクラッキング行為である。
エリザベスかテオドア経由で情報を送ってくれれば、いくら好ましくない相手のデータだろうと湊だって登録くらいはする。
それを無断で行っていながら、まったく悪びれた様子もない辺り、大した面の皮の厚さだと湊は冷ややかな視線で返した。
「さて、私とも契約を結んだ事で、時期が来ましたらエリザベスだけでなく、私からもいくつか依頼をさせていただきます。担当者が増えたことで依頼数も大幅に増加しておりますが、どうか御受けくださりますようお願い申し上げます。本日はありがとうございました」
マーガレットのその言葉を聞くと、湊は急激な眠気に襲われ意識を保っていられなくなる。
そうして、意識を失い完全に光となって消えてゆく客人を見つめ終わると、マーガレットはエリザベスらの元に戻って自分の持っている本を開いた。
書かれているのは、湊が築いたコミュニティの一覧。
現在、湊が築いたコミュニティは『魔術師・女帝・皇帝・刑死者・死神・悪魔・永劫』の全部で七つ。
その内、〝魔術師〟は相手が湊を実の息子のように思っていた事で絆がほぼ極まっていたのだが、極まる前に対象が死んだ事によって消失している。

そう、湊の〝魔術師〟のコミュニティは飛騨との間に築かれたものだ。
先の僅かな時間のやり取りで、湊のパーソナリティを少しばかり理解したマーガレットは、あの様子でコミュニティを築けていることに関心しつつ、視線を下げていったところで口元を引き攣らせながら停止した。
「……普段からあの様子で、よくコミュニティが築けたわね。というか、何で私が〝悪魔〟なのかしら？」
一覧の下の方に書かれた〝悪魔〟のコミュニティ、そこに書かれていたのはマーガレットの名だった。
大アルカナで十五番に位置する〝悪魔〟は正位置では『裏切り』など負の意味を、逆位置ならば『回復』など正の意味を示すというカード。
尤も、カードを使う占いの場面を基準にコミュニティに選ばれた意味を考えるのであれば、警告や転機の訪れを象徴している存在として認識されているといった方が正しいのだが。
やはり、素直に悪魔のように思われているのではと、納得がいかないのかマーガレットは複雑な表情で本を眺めている。
すると、そんな姉を気遣ってか、湊の〝女帝〟のコミュニティに選ばれているエリザベスが自論を述べる。
「〝悪魔〟は中々に淫靡な解釈が含まれますから、姉上に対し八雲様の雄として本能が何かしら反応されたのでは？」
「それだったら貴女の〝女帝〟の方がかなり直接的でしょう。〝女帝〟はそのまま女性を象徴するアルカナですもの」
「八雲様とはご両親を亡くされた直後に出会い、当時は年相応に幼い人格でしたから、傍にいる大人の女性という存在に母性か何かを見出したのではないでしょうか？」
二人は自分たちに割り振られたアルカナに対し真顔で考察しているが、表情とは裏腹にあまり真剣には考えていない。
湊のコミュニティは、魔術師は飛騨（消失）、女帝はエリザベス、皇帝はテオドア、刑死者はチドリ、死神はファルロス、悪魔はマーガレッ

ト、永劫はアイギスがそれぞれ対応している。
この通り、唯一例外だった魔術師が消失したことで、湊のコミュニティはベルベットルームの住人と契約者と共生者しかいないのだ。
今後のコミュニティの成立具合で、湊がどういった傾向で対象を選ぶのか分かってくるだろうが、今のところはカードの解釈を直感で対象の人物に見出して決まっているようにしか見えない。
一蓮托生の関係であるファルロスは例外だとして、他のコミュニティがほぼ女性ばかりだというのは若干気になるが、そもそも湊のまわりは関係性はともかくとして常に女性で溢れていた。
選んでいるのかというくらい、それぞれ別種の魅力を持った整った顔立ちをしている者ばかりだ。
研究所時代に髪を切っていなかったこともあって、肩甲骨よりも髪の伸びている湊は、異性からは凛々しく、同性からは美人に見える若干危険な中性的な顔立ちをしており、憂いを帯びた神秘的な印象と相まって周囲を魅了するのだろう。
このまま成長すれば、将来は女泣かせになるだろうと思いながら、マーガレットは静かに本を閉じたのだった。

第二十七話　フェルメールでの会談

９月９日（土）
朝――桜私室
土曜日の朝、朝食を終えた桜が自室で軽く化粧を済ませると、部屋で本を読んでいた湊と、絵を描いていたチドリに声をかける。
「お待たせ。準備が出来たからいきましょうか」
化粧台から立ち上がり、ピンクに花柄の模様の着物に合うよう、落ち着いた色合いのバッグを持つ。
すると、声をかけられた二人も、立ち上がり桜の私室から廊下へと出た。
玄関で靴を履き、表の山門ではなく裏門の方へと敷地内を歩いてゆく。三人が門を出ると、横から落ち着いた男性の声で話しかけられた。
「どうぞ、お乗りください」
話しかけてきたのは、黒のスーツに身を包んだ渡瀬で、彼は車のドアを開け、子どもたち二人を後部座席に乗るように勧める。
「ありがとう、渡瀬さん」
ドアを開けてくれた事に湊が礼をいうと、チドリも一緒になって乗り込みドアを閉める。その間に助手席に回っていた桜も乗ると、最後に渡瀬が運転席に座った。
今日の車は桜の愛車ではなく、鵜飼や桜が出かける際に使用しているＢＭＷのＬ７リムジンである。
先に冷房をかけていた涼しい車内で、湊らは寛ぐと、渡瀬の運転で一同は巌戸台へと向かった。
午前――喫茶店〝フェルメール〟
巌戸台港区のはずれの裏路地を入った場所にある、喫茶店〝フェルメール〟。
今日もまた昼前だというのにお客はイリスとロゼッタしかおらず、経営が心配になるような客の入りだった。
前に湊らが来たときと違いカウンター席に座っていたイリスは、英

語で書かれた紙の束に目を通しながら紅茶を呑み、ロゼッタに話しかける。
「それで、依頼人から報酬は？」
イリスが尋ねたのは、湊が受けた依頼のことだ。前払いで十万、成功報酬で残りの四十万が仲介人には支払われる。
湊が依頼を受けて既に二週間経っており、本部へ子どもだけで乗り込んだというのなら、依頼の成否は既に分かっている頃だろう。
そうして、それを報酬が支払われたかどうかという、遠回しな尋ね方をしたことで、カウンターの中でグラスを磨いていた五代は素直じゃないなと笑みをこぼし。聞かれたロゼッタは少々気の抜けた返事をする。
「報酬は支払われたわ。四十万しっかりね。でも、あの子たちあそこに住んでないみたいなのよ。三日後にヤクザは引っ越して、次の日の夜に小狼君が一人で来たと思ったら、そのままお金を受け取って去って行ったんだって」
「ん？　依頼自体の成功報酬はいくらだったんだい？　流石にマンション一部屋並みに高いなんて事はないだろう？」
やってきた湊たちが家を必要としていた事は知っている。そして、自分たちでは未成年で保証人もいないため契約が出来ず、所持金に関係なく家を買う事など出来ないから依頼を頼ったことも。
だというのに、湊はお金だけを受け取って帰って行った。
後で報酬を変えて欲しいなどというのはルール違反の為、金だけを持っていったのなら、推測出来る理由はおおよそ二つ。
一つは部屋を買うくらい報酬が良かった場合。もう一つは既に住む場所を手に入れたという場合だ。
興味を持った五代に対し、ロゼッタは当たり前でしょうと呆れを含んだ瞳で返した。
「報酬は現金なら六百万よ。子どもが持つにはあまりに大金だけど、逃げながらの生活なら足りないくらいね」
約一ヶ月経った今でも、エルゴ研での事故の報道はニュースで取り上げられていて、桐条武治も会見を行っていることから、事後処理に

追われて桐条の追手はまだ放たれてはいないだろう。
しかし、時間が経ち、事態が落ち着いてくれれば、どれだけの人数が追手として湊たちを捜索するようになるか分からない。
エルゴ研にいた黒服たちは最低限の体術の資格を持ち、訓練を受けて採用されただけの実戦経験皆無の素人であったが、影時間の湊がそれ以上の戦闘力を有していると分かった以上、捜索部隊は軍人あがりや裏の仕事している者たちの可能性も出てくる。
ここにいる三人はそんな事情までは知らないが、追手が大企業の桐条グループならば、逃走資金は六百万程度では全く足りないであろう事は分かっていた。
そうして、三人が湊たちについて話しているとドアが開き、来客を知らせるベルの音と共にお客がやってきた。
「あ、いらっしゃいませ」
客に挨拶をする五代だが、入って来た人物はサングラスをかけた明らかに堅気に見えない黒スーツの男で、その男はドアを開けたまま脇に避けて後ろに続いてやってきた者を先に通す。
男だけならば裏稼業の者かと思うところだったが、次に入ってきたのはピンクの着物を着た若い女性、そして、黒い着流しを着た湊と白地に桔梗柄の着物を着たチドリの二人だった。
二週間ずっと音沙汰無しだった二人が、今度は大人と一緒にやってきた事を不思議に思いながらも、とりあえず無事で良かったと安堵の笑みで三人は迎えた。
「やあ、二人とも久しぶり。元気だったかい？　今日は大人の人と一緒に来たんだね」
「今日はイリスたちに依頼があってきた。あと、桜さんが話しをしたいって」
やってきた理由を答えた際に名を呼ばれ、桜は丁寧な仕草で礼をして自己紹介をする。
「初めまして、鵜飼桜と申します。裏のお仕事の方なら、桔梗組組長の娘と言った方が分かり易いでしょうか？」
「なっ!?　桔梗組のって、小狼君、立ち退かせた側の相手をここに連れ

てきたの!?」
「いえ、別に報復とかそういった理由で来たわけではないで大丈夫ですよ。今のわたしはこの子たちの保護者ですから」
焦った様子のロゼッタに苦笑で返し、直ぐににっこりと朗らかな笑みを浮かべて答える桜は、嘘を吐いているようには見えない。何より、二人とも上等な着物を身に付け、尚且つ湊が否定しないことが、それが真実であると物語っている。
さらに、女性が組長の娘だと分かれば、左目に刀傷の痕があるスーツ姿の男の正体にも気付く。中東の辺りで傭兵として活動し、壊し屋として名の知られた男、現在は〝桔梗の虎〟こと渡瀬伸晃であると。
「私は渡瀬と申します。今日は御三方の護衛として付き添っていますので、どうぞご安心を」
「ご丁寧にどうも。まぁ、立ち話もなんですから、お好きな席にどうぞ」
「はい。では、失礼します」
言いながら店内を進み、桜たち三人はカウンター席へ、渡瀬はその後ろにある二人掛けのテーブルについた。
何やら大切な話のようなので、五代は扉の小窓のカーテンを閉め、かけてあるプレートを『ｃｌｏｓｅｄ』にして、水と御手拭きを用意する。
チドリはその間にメニューを眺めているが、隣に座った湊にイリスが声をかけてきた。
「小狼、オマエよく壊し屋相手に無事で済んだな。普通に話し合いで解決したのか？」
「普通に戦ったよ。他のやつには勝ったけど、渡瀬さんには心臓潰されて負けた。だけど、その後に鵜飼さんが来て、立ち退きの約束と俺たちを家に置いてくれるって言ったんだ」
「いや、ちょっと待て。心臓を潰された？　オマエ、普通に生きてるじゃないか」
「俺は身体をいじってるんだ。流石に一瞬で蒸発させられたり、頭部をまるごと吹き飛ばされたら死ぬけど。内臓をいくつか潰されたく

らいなら、治療や再生も出来る」
本人はなんて事はないように答えるが、先に店内にいた三人は湊の言葉に驚いていた。
一緒にやってきた三人は、心臓や肺が破裂した状態で、胸骨含めて蘇生と再生が為されたのは確かに見ている。
しかし、蘇生場面を見た者ですら未だに信じられないのだから、それすら見たことの無い三人は、口を半分開け目を丸くするしかなかった。
けれど、イリスは直ぐに復活すると、反対側で固まっていたロゼッタに対し声を荒げて怒鳴りつけた。
「おい、ロゼッタ！　オマエ、壊し屋がいること小狼に伝えてなかっただろ！　そんなこっち側の化け物がいるなら、アタシだって止めてたぞ！」
「え、えーっと……うーん、ちょっと覚えてないかなぁ、なんて」
「仲介するなら、ちゃんと相手側の情報を教えておくのがルールだろうが。情報提供の不備で仲介した相手を死なせるとか、違約金どころじゃないぞ、まったく」
プロとして中途半端な仕事をした相手を怒り、とりあえず無事で良かったとイリスは少し乱暴に湊の頭を撫でた。
前にもやられているので、湊はそれを黙って受けているが、チドリが注文を決めたようなので、聞くときになって止めさせた。
「今日はホットケーキ、ジュースはリンゴ」
「俺はアイスコーヒーだけでいい」
「わたしはホットアップルティーでお願いします。それと、渡瀬さんにはホットのブレンドとワッフルを」
「いえ、桜さん、私はコーヒーだけで……」
「あ、パフェとかの方が良かったですか？　けど、後で買い物をしてから食事にも行きますから、これくらいにしておいてください」
腰を上げて言った渡瀬の言葉を笑顔で流し、結局、渡瀬はコーヒーとワッフルを注文される。
というのも、渡瀬は実は甘い物が好きで、仕事で出たときには、桜

へのお土産という名目で自分も食べたいケーキなどを買ってくる。
桜はそれを知っていたため、あまり食べる機会の無い喫茶店のワッフルを注文してやったのだ。
注文を受けた五代は本当に良いのかと思いつつ飲み物とワッフル、ホットケーキの準備を始めつつ、湊の話しを聞くようにする。
「それで、小狼君は依頼があるって言っていたけど、一体どんな内容なんだい？」
「銃火器の扱いと、仕事の仕方を教えて欲しい。住む場所は出来たけど、俺は仕事を続ける。だから、そっちの世界での生き方を知りたいんだ。報酬は、俺が自由に出来るのは手元の三百万しかないから、今後の仕事で得た報酬から追加で払っていく」
先日マンションの依頼で得た報酬は六百万だが、湊はそれをチドリと自分の半分ずつにした。
チドリは自分は何もしていないと、戦った湊に全額を渡そうとしたが、チームである仮面舞踏会（バル・マスケ）の名義で受けた仕事だからと押し切り。結局、報酬は半分ずつにして、チドリの分は桜がチドリ用に開設した口座に貯金された。
一応、湊の口座も一緒に開設されたのだが、開設の際に桜がこっそりいれた十万円しか中にはなく、湊の分はマフラーに直接入れられていた。
その報酬の現金を着物状態でも巻いているマフラーから取り出し、カウンターの上に置いて湊はジッとイリスの目を見つめた。
「っ……」
目を合わせたことで、イリスは前に会ったときと湊の目の色が変わっている事に気付く。だが、嫌な気配を感じたのは蒼い瞳の方だったと、いまの金色の瞳の方が自然だと思えた。
そんな事を思いながら、次に依頼について真剣に考えてもみる。
弟子と言っていいのかは分からないが、技術等をレクチャーするのはほぼ未経験だ。最低限の取り扱いの注意点や、メンテナンスの仕方などでよれば問題なく教えられる。
だが、実際の取り回しになってくると、軍など公的組織で教えるモ

ノとは違い、長年の仕事の中で癖がついてしまった自己流のものしか指導する事は出来ない。
前に湊の動きを見たときには、真っ白なキャンパスのような印象を受け、本当に何の癖も付いていないため、〝体術〟ではなく〝身体操作〟といった方が正しいのではと思ってしまったくらいだ。
そんな稀有な存在を自分が教えれば、確実に湊はその色に染まってしまう。どちらに転ぶか分からないが、一つの才能とも言えるモノを上から塗りつぶしてしまっていいのか悩む。
最終的な決定をするより前に、戦闘自体の経験はそれなりにありそうだというのに、一体どうやればあそこまで何にも染まらずいられるのか、イリスは本人に尋ねようと思った。
「いくつか訊いても良いか？　オマエ、格闘の経験があるようだったけど、師はいたのか？」
「技術的なものは教わってないけど、戦闘の心得っていうか、実戦がどんなものかを教えては貰っていた。最近は鵜飼さんと渡瀬さんに剣と体術を習いながら、そっちの人とも実戦形式でまたやるようになった」
「ってことは、あの時は我流でやってたのか。……オマエ、自分がどれだけ異端か自覚は持ってるのか？　我流で長くやってたのに癖がないって矛盾してるぞ。型通りに習ったって微妙な癖は出るって言うのにさ」
言いながら、本人にとってはもはや癖なのか、肩を越えて肩甲骨近くまで伸ばされた湊の髪を指で梳いてから頭を撫でる。
実は、湊以外の被験体は水曜までに申し出をしていれば、外部から招いた美容師に毎週金曜に髪を切ってもらえていた。
だが、湊はほぼ単独で研究所内を徘徊していたので、本人が切る必要性を感じなかったこともあり、ずっと切らずにいて今ではチドリと変わらないくらい長くなってしまっていた。
尤も、周りは男性で髪が長いことにも理解があって別に何も言っていないが、評価としてはむしろ似合っていると好評で、桜はお風呂上がりの二人の髪を梳くのが日課であったりする。

その成果か、以前触ったときの傷みが髪から消えて、柔らかくなった髪の触り心地を楽しみながらイリスは依頼を受託すると笑って答えた。
「いいよ。仕事の仕方も、武器の扱いも、実際の依頼をこなしながらで良いなら教えてやる。ただし、金はこんなにはいらない。せいぜい武器や弾薬を調達する分だけあればいい。あとはビジネスパートナーとして、一緒に依頼をこなすだけだ」
「……そう。じゃあ、あとで掛かった経費をその都度教えて」
笑っているイリスと対照的に、湊は冷めた表情のままカウンターの上に載せた三つの札束をマフラーに仕舞った。
話している途中で置かれたコーヒーのグラスを掴み、ストローで苦みの強い黒い液体を体内にいれる。
髪も、着物も、マフラーも全て黒。同じ黒でも、髪は青みがかっていたり、マフラーには若干光沢があったり、着物は濃いグレーとも言えたりと違っている。だが、飲み物という形でさらに黒を取り入れるなど、いったいどれだけ黒に拘りがあるのだと思ってしまう。
隣に座ってホットケーキを頬張っている少女は、髪は緋色、着物は地の白と紫色の桔梗柄と色彩に富んでいる。
対比すれば、これほどはっきり分かれていると笑えてくるが、この場合は少女が自然で、態々自分から裏の世界でさらに深みに嵌ろうとする少年の方がずれているのだろう。
これではまるで葬式の――とそんな風に考えたところで、イリスは抱いたくだらぬ考えを途中で捨てた。
恨み辛みはあっても、それらで殺す権利や、裁かれる義務など発生したりはしない。湊が一体どんな考えで〝死〟を象徴する衣服を纏っているのか分からないが、決してプラスに働く事ではないだろう。
ならば、気付いても気付かぬふりをして、精々一人でも依頼をこなせるように鍛えてやるのが自分の役目だと思うことにした。
「それで、桜だっけ？　話ってのは、一体誰にだ？」
「貴女方の全員が仕事に関わるのでしたら皆さんに、ということにな

りますね。出来れば大人だけでお話したいのですが、お部屋か何かはないでしょうか？」
浮かべていた柔らかい笑みに、しっかりとした芯のようなものが宿る。
桜は〝大人だけ〟と言ったが、子どもに聞かせられないというよりは、二人の事情を話したいように見えた。
立ち退きを要求しにいった相手の家に、二人が転がり込んでいることも疑問に思っていたため、相手が説明をしてくれるというのであれば拒否する理由はない。
イリスが五代に視線を送ると、五代は小さく頷いて、トレーの上にケーキや飲み物を準備し始めた。そして、それを持って店の奥側カウンターのすぐ隣にある階段に向かうと、桜たちではなく子どもたちを呼ぶ。
「小狼君、小猫ちゃん、ちょっと付いて来てくれるかな。桜さんは大事な話をしたいみたいだから、上の事務室で少し待っていて欲しいんだ」
「……それ食べてて良いの？」
「ああ、良いとも。さ、階段は暗いから気をつけてね」
湊と一緒に椅子から降りて、チドリが五代に尋ねながら後ろをついてゆく。
階段へと消えていく前に、湊が蒼い目で一瞬流し目を送って来たが、それの意味するところを汲み取れなかった桜は、あれが自分たちの事を話すなという警告なのかも知れないと、ここへ来て話そうと思っていたことが本当に良い事なのかと気持ちが揺らいだ。
しかし、少しして五代が戻って来た事で、話す状況が整ってしまう。
渡瀬が目を光らせているため、録音などをされている心配はない。
だとすれば、自分が湊に恨まれるだけで、彼の今後の活動がより安全になるのならと、やはり話す事にした。
「皆さんのお名前は先に彼に聞いているので、改めての自己紹介は省かせていただきます。まず、先ほど言った通り、あの二人はいま家で暮らしています。色々と必要になるだろうからと、みーくんとお父さ

んが話し合った結果、未成年後継人という形でわたしたちが後ろ盾になっています」
桜がそういうと、テーブルにいた渡瀬がカウンターにやってきて、それを証明する書類を三人に見せる。
そこには二人の本名がしっかりと書かれており、仕事用の名前で呼んでいた五代は、自分たちのような者にそれを見せていいのかと問い返す。
「我々は、彼らの本名を知りません。彼らが追われている立場だと聞いておりましたので、敢えて前回は愛称で呼んでいたんです。それをいま保護者になったとはいえ、他人であった筈の貴女方が勝手に見せてもよいのですか？」
「それは貴方たちを信用してとしか言えません。ですが、みーくんに関しては過去の一切が存在しません。ちーちゃんはこれが元々の本名ですが、みーくんはこれすらも新たに作られた名前ですから、桐条グループでも辿り着くのは難しいでしょう」
飛騨の用意した戸籍は、チドリは抹消されたものを復元して用意した物だが、湊は新たに一人の人間の情報を作り出した形になっている。
誕生日も、両親も、生まれた土地すらも全くのデタラメ。湊という名は被験体たちが呼んでいた事でばれているだろうが、表記も分からなければまず辿り着くことは出来ない。
最近になって急に作られた戸籍という形で情報を探っても、過去の情報にまで遡って改竄が為されているため、情報のプロフェッショナルを何十人も雇って見つかるかどうかという念の入れようだ。
これには、二人の過去を洗わせて結局分からなかった鵜飼も驚いたが、それだけ飛騨が二人を守ろうとしたのだろうと、戸籍を用意した者の想いを改めて認識させられ、鵜飼も細心の注意を払って保護者となった。
会ってたった二週間という短い期間の筈だが、力を持った大人たちの手により二人を守るための布陣が形成されつつある。他人である二人に対し桔梗組はどうしてそこまで危ない橋を渡りながら守ろう

としているか、イリスは最もそこが気になり尋ねることにした。
「アンタたちは二人に何を見てる？　桐条の研究の被害者、確かにそれは同情するだけの理由にはなる。あんな子どもが、人を殺してまで逃げだしたっていうんだからね。だけど、保護者になったのだって、多分だが真っ当なルートで通したんじゃないだろう？　そんな危ない橋を渡ってまで助けるメリットはあるのか？」
「理屈じゃない、って言えれば格好良いんでしょうけど。そうですね、二人をただ放っておけなかった以外にも理由はあります」
　そこで桜は紅茶を一口飲み、喉の調子を整えてから、笑みを消し、凛と引き締めた真剣な表情で続きを話し始める。
「まだそれほど話題にはなっていませんが、〝無気力症〟と呼ばれる精神病を発症する者が現れてきているのはご存知でしょうか？　あれは正確には病気ではなく、心の一部が喪失して起こるらしいんです。いえ、喪失という言い方も正しくないですね。実際は、心の一部がシャドウという存在となって抜け出てしまった状態を〝無気力症〟と呼んでいるんです」
「シャドウ？　それに、抜け出るってどうやって？」
　耳慣れぬ単語を口にした桜にロゼッタが尋ねる。
　それに桜は視線を合わせて簡潔に答えた。
「自分の心の暗部を見つめる力が弱まったとき、わたし達のような普通の人間では認識できない〝影時間〟というものが存在して、そこで弱った心がシャドウという形で勝手に抜け出るんです。にわかには信じがたい事ですが、証明するためにその時間に入る直前にビデオカメラを回し始め、終わったときには二人が一瞬で別の場所にいたという事があり、その特殊な時間について信じることが出来ました」
　影時間に入る前にテーブルの上に『二人を撮り続けて』と直筆で書いたメモとビデオカメラを置いておき、桜が自分の声で正面にいる二人を撮っているという証言を残す。
　その後、影時間に入ってから移動して庭に出ていた二人を、メモを見た桜がカメラを動かして撮影すると、補正のかかった桜の記憶とは別に、二人が一瞬で消えて別の場所に現れたという映像記録が出来

る。
　その時には、自分の記憶と映像記録の齟齬に桜は僅かな混乱を見せたが、湊から改めて説明を受けるうちに、自分は認識していないが確かに〝影時間〟は存在するのだと思えるようになった。
　それをこの場にいる者にも教えるため、渡瀬が持って来ていたビデオカメラをカウンターの上に置いて映像を流し、確かに湊たちが急に消えて別の場所に現れたという映像を見る事が出来た。
　けれど、昨今の技術なら、この程度の映像は容易に作ることが出来る。
　現場で実体験をした者と違い、他の三人は「はい、分かりました」と素直に信じる事は出来なかった。
「悪いけど、これだけじゃ簡単には信じられない。わざわざそうする理由もないが、アンタらが映像に細工したって可能性もあるからね」
「はい、それは分かっています。ですが、そんな物が存在するという前提で話を進めさせてもらいます」
　怪訝そうに見やるイリスに、桜は真っ向から言葉を受けとめて、自分たちの行動理由も説明してゆく。
「その影時間は、桐条の研究が原因で発生するようになりました。その時間帯に現れるシャドウには、通常兵器は効きません。ですが、ペルソナというシャドウによく似た力に目覚めた者なら、シャドウと戦う事が出来ます。みーくんはそれを自然に発現させた第一号、ちーちゃんは人工的に発現させられた被験体の一人だったそうです」
「だから、桐条は二人や似たような子どもたちを、シャドウに対抗するための駒として管理していた。そして、その場所は今月初めに事故のあった桐条傘下の製薬工場、とそういう事ですか？」
「はい。ただし、みーくんはご両親が亡くなられた事故から半年間昏睡状態だったので、途中からの合流だったそうです。さらに、初めから力を完全に制御出来ていたので、研究者たちを脅して被験体を守っていたとちーちゃんからは聞いています」
　力がいくらあろうが湊は子どもだ。だというのに、大人たちを脅してまで他の者を守るというのは、親を失ったばかりの子どもがやろう

と思って出来る事ではない。
辛い現実から心を守るため、脳が無意識に感情にプロテクトをかけている可能性もあるが、時折感情的になりながらもチドリを守り続けていることを考えると、単純に逃避を起こしているとは思えない。
精神の成熟度も高いため、感情の制限ではなく、人格形成に異常をきたしている。どちらかと言えば、そちらの方が的を射ているように思える。
仕事柄多くの人間を見てきた五代はそのように考えた。
しかし、湊たちの事情は分かったが、それだけで桜たちが二人を危険を冒してまで守るには理由が弱い。
何故なら、桐条は一般人への被害を防ぐために、新たな駒を作る技術を持っているのだから。
「……それで、彼らを守る最大の理由はなんですか？　彼らが力を持っていることは分かった。けれど、桐条は人工的に力を得る方法を知っている。なら、誰かが犠牲になったとしても、桐条が駒を新たに用意して被害拡大を防ぐでしょう。ならば、素性の知れない子どもを匿う意味はない」
「戦う力を持つ者ならばそうですね。ですが、みーくんは代替が利かないんです。彼にだけは特別な役割がある。いまそれまで話しても、きっと皆さんは自分の中で消化しきれないでしょうから、みーくんの役割はまた後日話したいと思います」
「彼だけって、小猫ちゃんは違うんですか？　彼の様子を見ていると、むしろ彼女の方が大切に守られているように見えますが？」
「みーくんだけです。将来的な可能性は分かりませんが、現時点でみーくん以外は誰も同じ役目を果たせません。そして、桐条側はそれを知らない。だから、わたし達は自分のためにも彼と、彼が最も大切にしている彼女を守るんです」
それは、意識が表に出てきたファルロスが語った事だった。
湊自身は自分が寝ている間の事なので知らないが、湊は本当にギリギリまで死に近付いた状態で寝ている。呼吸も脈拍もかなりゆるやかになり、体温も三十二度まで低下する。

眠りは死に最も近いと言われるが、体調までもがここまで変化する者など滅多にいないだろう。
そして、湊が寝ている間は、極稀にだがファルロスの意識が浮上してくることもある。
脳と身体を休める時間に別の人間が操っていれば、翌日まで疲れを残す事になり得るので、基本的に出来てもファルロスは肉体の支配権を奪ったりはしない。
しかし、湊の事情を桜に話すため、自分の役割と、湊が現在も起こしている奇跡について一度だけ語った。
瞳の色と口調の変化で湊ではないことは信じて貰えたが、湊が封印の器になっていなければ地球の全生命が滅んでいたと言ったときには、流石の桜も半信半疑といった態度を見せた。
けれど、湊が完全に死ねば封印が解けるというのに、わざわざ蘇生させて自分が封じられたままでいる意味を考えたとき、湊を生かし続けるだけの理由としてそれらは納得出来た。
「……ちーちゃんはわたし達が隠し通し守ります。ですから、みーくんをどうか宜しくお願いします。彼に、生きるだけの力を与えてあげてください」
そういって最後に桜は立ち上がり頭を下げた。
自分のためでもある、そんな風に言っていたが、この人物は自分のことなど欠片も考えていないだろう。
不幸にも力に目覚め特別な役割を与えられてしまった少年と、不幸にも素質を持っていたが故に力を目覚めさせられた少女、その二人をあまりに不憫に思い。何かをしてあげずにはいられなかった。
深く頭を下げ続けている様子から、そんな想いが痛いほど伝わり、イリスは先ほどの話しよりもまずは桜個人を信じてみようを思った。
「とりあえず、頭上げな。それで、仕事をするときは、子どもだからなんて言い訳は利かない。だから、アイツを何度も死ぬような目に遭わせると思う。けど、ああいう奴は放っておくと危ないからね。見える部分で手綱握って、ちゃんとアンタの家に帰してやるよ」
「というか、裏の世界って言ってもいる人間にも幅がありますからね。

仕事も殺しはむしろ少ない方で、情報を手に入れるだとか、荷物の運搬だったりと危険の低いものの方が多いです。当然、他のチームからの妨害もあり得ますが、初めは安全性の高いものを回すようにしますから、ご安心ください」

頭を上げた桜に、イリスとロゼッタが安心させるように笑顔で返す。

ロゼッタとしては、情報伝達が不十分で湊を死ぬ目に遭わせた負い目があるだけに、ここで保護者からの信頼を回復し、ポイントを稼いでおかなくてはいけない。

湊のような他の同業者の唾のついていない将来有望なルーキーは、仲介屋としては仕事をコンスタントに回せるので、非常に大きな収入口になるのだ。

湊はイリスと共に仕事をするので、仲介時に変な真似はできないが、自分の利益に繋がるように考えている辺り、ロゼッタは実にプロらしい強かな考えの持ち主だった。

その後、話し合いが終わったとして、二人に降りてくるよう告げると、イリスたちと連絡先を交換してから湊らは帰って行った。

夜――巌戸台・港区

フェルメールから出た後、周囲に気を付けながら買い物をして回り、夕食を終えてから車で帰っている頃、後部座席に乗った湊は、寄りかかって眠るチドリの重さを肩に感じながら、窓から外の景色を眺めていた。

流れていく景色の中に知っている風景がまざり、両親と暮らしていたときの事を思い出す。

あの事故からまだ一年も経っていないが、思い出として残っている両親の声も顔も記憶が薄れてきており、薄情なやつだと自分の事ながらどこか他人事のように思っていた。

しかし、そうして昔のことを思い出していると、急に聞こえてきた消防車のサイレンの音で意識を現実に戻される。

「火事みたいね。遠いのかしら？」

「音からすると、それほど遠くないようです。一応、迂回しておきます

か？」
サイレンの音というものは、その種類に関係なくどこか人を不安にさせる。桜が心配そうな顔で呟くと、渡瀬が巻き込まれないよう先に遠回りしておくか尋ねた。
その間、湊は音の大きさと方向から場所を推測し、カグヤを使って現場の状況を探る。
まるで模型を上から眺めているかのような感覚で、この街で起こっている事を知覚していくと、十キロも離れていない場所で、消防車が消火活動をしていた。
まわりには近所の住民が集まっているのか人だかりができている。
だが、それにしては子どもの数が多過ぎることが気になり、燃えている建物に意識を集中させた。
（火災が起きてるのは、児童養護施設か。避難状況は……完全には逃げきれてない？）
燃えている建物の中に、まだ人の気配を感じる。
火災が起きてからまだ時間が経っていないのか、火はその部屋まで届いていないが、煙が充満すれば一酸化炭素中毒で死んでしまう。
なにより、密閉された空間で壁などが加熱されれば室内の温度が上昇し、熱中症や蒸し焼きになることも考えられる。
消防隊が中へと入れていないのであれば、救出は絶望的だろう。
（……助ける、ことは可能かもしれない。けど、知りもしないやつのために危険を冒すのか？　馬鹿馬鹿しい）
助けたところで何が得られるのだろうか。チドリを守ることすら満足に出来ていない自分が、そんな一時の正義感で動いても碌なことにはならない。
歳不相応に冷めた思考で考えた湊は、湧きあがった莫迦な考えを切って捨てた。
――だけど
そう、切って捨てた後、湊はある別の想いを持って、自分にもたれ掛かって寝ていたチドリを席にそっと横たわらせ、窓を開けると、身を乗り出して桜たちに言い残してゆく。

「ここから四キロほど進んで、左に真っ直ぐ進むと、いくつもの路地のある場所に着く。そこが火事の現場近くだから、俺はそこへ行ってくる。先に帰ってて貰って良いから」
「えっ、ちょっと、みーくんっ!?」
　驚いている桜に答えず、湊は窓から車の屋根に移ると、タナトスを呼び出し飛んでいってしまった。
　すぐに見えなくなってしまった事と、突然の事で事態が呑み込めず少々呆気に囚われるが、正気を取り戻すと桜は渡瀬に言った。
「渡瀬さん、いま直ぐみーくんが言ってた場所に向かってください」
「宜しいので？」
「お願いします。……もう、なんで走ってる車の屋根に乗るだなんて、危ないことするのかしら。あとでちゃんと叱らなきゃ！」
　フンスと叱る決意を固めると、桜は湊の向かった方向を見続ける。速度を上げて言われた場所へと向かう渡瀬は、桜のそんな母親らしい様子に小さく口元を綻ばせていた。
＊＊＊
　轟々と燃え盛り天高くまで上がる炎、自分たちの暮らしていた施設のそんな姿に泣いている子どももいる。
　そんな中、一人の少年が大人たちに後ろから引き留められ、何やら喚いていた。
「離せっ、離してくれ、まだ中に妹がいるんだ！」
「危ないから駄目だ！　妹さんは私たちが助けるから、君はここでジッとしててくれ！」
　大人に腕を掴まれている少年は暴れるが、力の違いから、止める大人の腕を振り払えずにいる。
　しかし、目の前ではパチパチと時折爆ぜる音をさせながら、施設が燃え続けているため、このままでは妹が死んでしまうと涙を流していた。
「美紀っ、美紀ぃぃぃぃ!!」
　そうして、何度も妹の名を叫んでいるとき、空から〝黒い物体〟が降って来た。

『なっ!?』
急に降って来た物体に大人たちが唖然としていると、その正体である湊は、まわりの様子に構わず短刀を抜き放ち、扉を斬りつけて中へと飛び込んでいった。
扉が崩れたことで酸素が供給され、爆発したように炎が噴き出したが、そんな物は関係ないとばかりに短刀で切り裂き霧散させるという、普通ではあり得ない光景に一同は何が起こったのだと理解が追い付かない。
しかし、子どもが中に入って行ってしまった事で、消防士らはさらに被害者が増えるやもしれぬと、焦りながら消火活動を進めた。
子どもを助けるために火を消そうとするが、火の勢いは一向に治まらない。どうにか無事でいてくれと祈り続けたそのとき、上の窓ガラスの割れる音が聞こえた。
その方向を見ると、先ほど飛び込んでいった湊が、少女を背負い飛びおりてきていた。
危ないっ、そう思って少年が受けとめようと駆け出そうとしたが、未だに大人が腕を掴んでいて駆け寄ることも出来ない。
けれど、その心配は杞憂で、子どもを背負ったままの湊は、まるで猫のように何事もなく着地をして見せ。さらに、他の者のいる方へ歩いてきた。
「……意識はあるけど、多少、煙を吸って喘息になりかけてる。それと熱中症も起こしかけてるから、直ぐに病院に搬送を。中にはもう誰もいないから、救助に関しては安心して良い」
「美紀っ!!」
背負っていた少女を道路に寝かせて消防隊に症状を伝えると、今まで大人に押さえられていた少年が少女に駆け寄り、泣きながら抱きしめた。
そんな光景を見て、周りの者は近くまで来ていた救急隊を呼びながら、誰一人死人が出なかったことに安堵の表情を見せている。
だが、無事で済んだから良かったものの、湊がしたのは危険な行為にかわりはない。

一人の警官が湊に近付くと険しい表情で注意した。
「君は一体何を考えてるんだ！　無事だから良かったものの、普通だったら死んでいたんだぞ！」
近付いて注意したことで、警官は初めて湊が男であることに気付いた。
着ている着物は確かに男性用だが、髪も長く、アンニュイな表情の顔はどちらかと言えば美人に分類される。
普通に考えれば、女子が同じくらいの背丈の女子を背負って二階から飛び降りることなど出来ないのだが、それを言ってしまうと男子であっても無理という話しになる。
そうして、叱りつけた警官が湊の反応を見ていると、湊は気だるげなまま冷めた表情で呟いた。
「……泣くほど大切なら自分の手で守れ。周りの制止を振り切ってでも、ボロボロになりながらで良いから助けろ。守る者にとって弱さは罪だ。そんなことじゃ、簡単に零れ落ちていくぞ」
湊が言葉を向けたのは、少女を抱きしめ泣いている少年に対してだった。
その声が聞こえたのか、少年は身体を起こし涙を流したまま湊に返す。
「ああ、俺は強くなるっ。二度と、二度と美紀をこんな目に遭わせないように、自分の手で助けられるように、強くなってみせる！」
「……精々頑張りな」
それだけ言い残し、湊はふらふらと人ごみを避けて去って行ってしまった。
何人かの警官が事情を聞くため追おうとするが、集まった野次馬の中を湊のように抜ける事が出来ず、誰一人追えずに見失ってしまった。
妹を抱きしめ泣いていた、後に兄妹とも真田夫妻に引き取られ真田（さなだ）　明彦（あきひこ）という名になる少年は、湊の去って行った方を見ながら涙を拭うと決意の炎を目に宿し、妹を助けた少年に言った言葉を嘘にしないよう、強くなる事を誓った。

＊＊＊

「みーくん、何か言う事は？」

野次馬の中を抜けて、路地を出たところで湊は待っていた車に乗り込むと、中で桜に声をかけられた。見ると、形の良い眉が若干つり上がり、どうやら怒っているようである。

けれど、無言で重圧を放ちながら見下してくるエリザベスに比べると、獅子とハムスターくらいに迫力差があるため、湊は気にした様子もなく返した。

「一人助けた。後遺症もなさそうだった」

「そうなの？　じゃあ、もしかしたら新聞に載っちゃうかもね。写真は撮られなかった？」

「警官を盾にしてたから大丈夫。そういうの把握するのは得意だから」

人の視線だけでなく、カメラにだって気付くことが出来る。故に、何人かいた記者のような男たちに撮られぬようにしながら、ここまでやってきた。

既に車は発進しているので追う事が出来ず、記者たちは『少女を助けた着物少女』というスクープを逃す事になり、いまはさぞかし悔しがっているだろう。

もっとも、見出しの時点で性別を間違っているのだが、長い髪のせいで近くで見なければ正確に判断できないので、それも無理の無い事である。

「危ない事しないでって前にも言った」

戻って来た時点で目覚めていた少女が心配そうに言う。

起きてみると、遠くの空が赤く燃えていたので、すぐ近くで火事が起きていることは分かった。

けれど、まさか湊がそこに行っているとは思わず、探知で居場所を把握しながらも気が気でない状態で待っていたのである。

「……ごめん、拾える命は拾いたかったんだ」

少女の言葉に少年はそういって返し、相手の肩を抱き寄せて頭を優しく撫でた。

そんな光景を見せられてはこれ以上怒ることも出来ず、桜は深く溜め息を吐くと、寄り添いあう二人をバックミラー越しに笑顔で眺め続けた。

第二十八話　イリスとの仕事

９月１２日（火）
朝――道場

「馬鹿野郎！　刃で受けんなって何度言わせんだ！　流すなり、弾くなりいくらでもあるだろうがっ!!」

朝から道場には鵜飼の怒声が響いていた。その手には模造刀が握られており、向かい側には同じように模造刀を持った湊が大量の汗をかいて肩で息をしていた。

「時代劇のチャンバラじゃねえんだぞ、そんな雑な受け方してたら武器が何本あったって足りねえや」

鵜飼が湊に教えているのは剣術の神道無念流だ。

しかし、今まで使っていたエリザベスに貰った短刀が、刃で受けようが刃こぼれもせず、力任せに敵を切りつけても曲がりもしない、あり得ない代物だったため、湊は普通の刀の扱いに慣れずにいた。

真剣で練習してはお互いに重症になるので、愛刀の模造刀で実戦的な鍛錬を積んでいる。

勿論、模造刀と言えど、腕に当たれば骨折するし、突きを放てば普通に突きささる。

そのため、鵜飼が注意して指導しているのだが、湊は追い込まれると素手や蹴りで相手の刀を捌いてしまい。追い込まれても刀で対処するように言うと、今のように刃で受けてしまうこともあった。

「腕で振るから隙が出来て間に合わなくなるんだ。渡瀬に習ってる拳法じゃ、腕だけで拳放ってねえだろ？　踏み込みと体重移動、そんで肩を入れたり引いたりで腕もその都度意識して動かす。おめぇは身体操作が出来んだから、慣れさえすれば出来んだよ」

湊が刀の扱いに困っているのは、小学二年生の子どもが扱うには刀が長い事が原因だろう。

湊の身長は約一二三センチ、それに対し姫鶴一文字は約一〇四センチと、並べば足から顎あたりまであるのだ。

そして、重さはおよそ一キロだが、遠心力が加わるため、実際に扱っ

ているときにはそれ以上に感じる事の方が多い。
使いなれぬ上に、長さの合っていない武器をたった数週間で自在に使いこなせというのは、あまりに無茶だった。
「いいか、その刀には鍔がねえ。だから、おめぇは捌くしかねえんだ。刀身を走らせるのも難しいしな」
「……そもそも、俺にこの流派合ってないと思う」
「馬鹿、まだ技もなにも教えてねえだろうが。刀を駄目にしちまうような受け方しか出来てねえくせに生意気言うな」
速さが長所の湊にとって、力の剣は自分には向いてないと思ってしまう。
実際、持っている武器が刀でなく、いつもの短刀だったなら、鵜飼の剣を捌いた上で攻撃にも転じることが出来ただろう。
確かに鵜飼も十分に強いのだが、老いがあるだけに、渡瀬ほどの脅威は感じない。
型にさえ拘らなければ、刀でも一太刀浴びせることくらい出来そうだと考え、湊は腰に差していた鞘を捨て、刃を寝かせた状態で自身の右側で構えた。
それを見ていた鵜飼は何か言いたそうにしていたが、好きにやらせようと思ったのか、何も言わずに構えを作る。
「ふっ!!」
直後、畳を蹴って駆け出した湊が、裏拳の要領で遠心力を乗せた横薙ぎを放つ。
鵜飼はそれを退いて躱し、振った刀の重さで身体の流れた湊の背に向かって一太刀浴びせようとする。
だが、湊は切られる前に片手に持ち替え、柄尻を当てる事で軌道を逸らすと、再び両手を添えて切りあげた。
「くうっ」
体勢が悪く、握りも甘かったことで、それは切っ先が鵜飼の道着を掠める程度だったが、予想外の返しに鵜飼は冷や汗をかく。
けれど、引いていた身体を戻し、踏み込んで即座に逆風で切り返すと、刀を持ったまま片手で後方倒立回転の回避を湊に行わせ距離をあ

けた。
　肩で息をしていたはずの相手が、急に息を吹き返して、大道芸のような真似までしている事に、剣を教えていた者として鵜飼は少々うんざりする。
（ったく、試合なら使い物にならねえが、死合には天性のものを持ってやがるな。確かに受けるも何も避けちまえば良いんだが、刀振り回しながら飛んだり跳ねたりできんのなんて、おめぇくらいだぞ）
　距離をあけて再び構えている湊を見ても、先ほどと違い落ち着いた呼吸で様子を伺っている。
　普通の人間が同じ事をやれば、ぜえぜえと荒い呼吸をしているところだろう。つくづく、常識外の行動を取る餓鬼だと、内心で苦笑を洩らしたところで、第三者の声が道場に響いた。
「みーくん、お父さん、朝ご飯もうすぐ出来るわよー」
「おう、わかった。んじゃ、今日はここまでだ。刀は片付けておいてやるから、風呂で汗流してこい」
「……わかった。ありがとうございました」
　ぺこりと、礼だけは子どもらしい仕草ですると、湊は捨てていた鞘に刀を仕舞って鵜飼に渡し道場を出ていった。
　それを見てから、自身も出るため入り口に向かうと、待っていた桜から声がかかる。
「みーくん強くなった？」
「あいつは初めから強ぇよ。だが、剣術は駄目だな。素手の体術と違って、型にはめると動きが鈍るんだ。そんで今日の最後に自由にやらせたら、途端に動きがよくなってた。素人のチャンバラと違って、敵を殺して自分を生かすってのを本能で察知して、それに合わせて動いてる。ああいうのが天賦の才っていうんだな」
「ふーん。それじゃあ、お父さんもすぐに負けちゃうね」
「冗談言え。あいつは殺気も闘気も抑えられてねえ。確かにこっちの予想の範疇外の動きもするが、あれじゃあ攻撃しに行きますって言ってるようなもんだ。気配に鋭いやつなら、それで動きを先読み出来らぁな」

今の湊は攻撃が正直過ぎる。フェイントや敵の死角を突いて攻撃するにも、まったく気配を殺さずに攻めているため、武を修めている者や勘の鋭い者なら咄嗟の驚きはあれど対処は可能なのだ。

湊が一つ上の段階へ上がるには、感情を内に秘め、攻撃にはそれらを乗せずに戦う方法を身に付けるか。相手が読んで尚対応できない速度まで昇り詰めるしかない。

身体が二次性徴を迎えて出来上がってくれば自然と後者にはなるが、本格的に裏の仕事をするのであれば早急に力が必要なので、時間の掛かる後者はまだ諦めるしかなく、前者を会得させねばならないだろう。

「どうにも上手くねえな……」

才を持ちながら問題も同じだけ抱えている少年を思い、鵜飼は頭を掻きながら小さくこぼした。

＊＊＊

朝食を終えて、それぞれが休憩なり職務なりに動きだした頃、湊は桜の私室で着替えさせられていた。

本人は普段のチドリ以上に無愛想でされるがままになっているが、対照的に桜はとても楽しそうにしている。

そうして、最後につばの広い白の帽子を被らせると、一度離れてから見た桜が満足気に頷いた。

「うん。とっても似合ってるわよ」

「……変なの」

「どうでもいい……」

桜とチドリからそれぞれのコメントを貰った湊は、特に反応を返さずに〝契約者の鍵〟を持って十字を切り、その中心に鍵を挿して回すと、他の者には見えない扉を出現させた。

そして、鍵をあけて扉を開くと、振り返って挨拶した。

「それじゃあ、いってくる」

「うん、気をつけて行ってらっしゃい」

「お土産、アイスが良い」

「わかった。何か買ってくる」

これからイリスとの仕事に行くというのに、湊は普段と変わらぬ様子で答え、他の者には見えぬ扉の中に消えた。

――ベルベットルーム

桜の私室に出現させた扉を潜り、モノクロタイルの境道を通って湊はベルベットルームにやってきた。

だが、別にベルベットルームに用がある訳ではなく、ここを通ってポロニアンモールに通じる扉を潜り、そこから喫茶店〝フェルメール〟に行こうと思っただけだ。

音が鳴り客では彼しか使えない扉が開かれたことで、イゴールを除く住人たちは自然とそちらに視線を送り、やってきた者の姿を目にする。

直後、現世とは理の違う荘厳な空気のこの空間に似つかわしくない、女性の笑い声が響いた。

「あははっ、あはははははっ!!」

「……姉上、少々笑い過ぎでは？　八雲様も呆れられておりますよ？」

急に大声で笑い出した姉マーガレットを妹のエリザベスが諌める。だが、間に部屋の主を挟んだ反対側では、テオドアも顔を背けて笑いを堪え、肩を震わせていた。

普段の佇まいからして、礼節を弁えたプロの様相を見せていただけに、三人中二人がこのような無様を晒すのは、非常に珍しいと言える。

その原因はいまの湊の格好にあった。

頭にはピンクのリボンの巻かれた白い帽子、首にはマフラーの長さと幅を変更した黒いチョーカー、服はフリルのついた白い涼しげなワンピースの上から、薄いグレーのカーディガンを羽織り、足元は服に合わせた白のリボンシューズだった。

体型に男女の差が出る前のこの年頃で、髪が長く男女のどちらにも見える中性な顔立ちの湊だからこそ、まだ残暑のきつい秋を過ごす可愛らしい少女にしか見えない。

普段、子どもらしさの欠片もない契約者が、真面目にそんな恰好をしていたため、マーガレットは柄にもなく大きな声で笑ったのだ。

ひとしきり笑い、ようやく話せる状態になったことで、笑い過ぎて

滲んだ涙を拭いながらマーガレットは話しかけた。
「それで？　初めて現実からやって来たのがその姿なのは、何か意味があっての事なの？」
「変装。ただそれだけ」
「ブフッ……そ、そう、よく似合ってるわよ」
どれだけ凄んでも見た目のせいで全く迫力がない。むしろ、か弱い少女が精一杯の虚勢を張って強がって見せているようにしか見えない。
それがツボに入ったのか、マーガレットは吹き出し、いままで真顔だったエリザベスも小さく笑っていた。
《我は汝、汝は我……》
自分を見て笑っている力の管理者らを見ていると、湊の頭の中に急に声が聞こえてきた。過去にも何度か聞いた事がある、絆が生まれたときや深まったことを知らせる存在の声だ。
コミュニティーの絆が深まると、ペルソナを生みだす際に力が増すので、今後の事を考えると喜ぶべきなのだが、こんなくだらない事で〝皇帝〟と〝悪魔〟との絆が深まると知って、湊は素直に喜べずにいた。
そうして、声が聞こえなくなり時が再び動き出すと、他の者らを無視してポロニアンモールに繋がる扉の前に立ち。去り際に一言を残してゆく。
「……ポルカ・ミゼーリア」
「なっ!?」
冷たい瞳で見つめながら言葉を残し、湊は扉の外へ消えていった。
それを言われたマーガレットは言葉の意味を理解し、拳を強く握りしめて湊の消えた扉を睨む。
姉のそんな様子を不思議に思ったテオドアは、怒りに震える長女を黙って見ている次女に意味を尋ねた。
「あの、先ほど八雲様が言い残した言葉はどういった意味なのですか？」
「ポルカ・ミゼーリア。イタリア語で直訳〝惨めな雌豚〟と言ったと

ころでしょうか。八雲様は語学がご堪能のようなので、非常に羨ましい限りです」
「は、はぁ」
欠片も本気で言っていないエリザベスの笑顔に戸惑うテオドアだが、これ以上なにかを聞けば藪蛇になるだろう。
故に、不機嫌そうな長女共々触れないように、主の隣で気配を消し。次に湊がやってきたときには、去り際に姉を挑発しないよう頼む事を心に決めた。
午後――巌戸台・市内
ベルベットルームを通ってポロニアンモールに出た湊は、歩いてフェルメールに向かうと、そこで待っていたイリスと合流し、今回の仕事内容を聞いて一緒に店を出た。
店に現れた湊の姿を見たとき、イリスは大笑いし、五代は笑いを堪え、ロゼッタは何か良いモノを見つけたような表情をしていたが、元々女装して来いと言ったのはイリスであった。
だというのに、言った本人が一番笑うのはどうなんだと、冷めた瞳に侮蔑の色を混ぜて見つめたのだが、そこで五代も堪え切れず吹き出し、イリスには「オマエ、可愛いやつだな」と抱き上げられるといった事態になった。
結局、他の者が落ち着くまでジュースを飲んで待つ事になったのだが、外に出た今でも湊は無表情でイリスに手を引かれていた。
「ほら、もう少し愛想みせろって。せっかく可愛いのに勿体ないぞ?」
「どうして、わざわざこんな変装に指定を?」
「そりゃ、オマエの姿が桐条にばれてるからだよ。カツラだと激しく動くと外れたりするし。子どもに化粧するのも無理がある。となれば、その性別のはっきりしない顔を利用して、完全に女の子にした方が確実なのさ」
手を引かれながら歩く湊が尋ねると、イリスは楽しそうに笑いながら答える。
湊は桐条から見つからずに隠れようとしていたが、逃げた被験体の中で湊・チドリ・マリアの三人は容姿にかなり目立つ特徴を持ってい

る。
　それぞれ、金色の瞳、緋色の髪、金色の髪とこれらは黄昏の羽根を宿したことによる肉体の変化の為、隠すにはその部位を完全に覆わなくてはならない。
　瞳が変化した湊は、髪が変化した二人よりも隠す事は容易いが、サングラスもカラーコンタクトも邪魔くさいからと付けるのを嫌がった。
　そうして、本人の我儘を聞きながら、外でも自由に活動できる方法としてイリスが考案したのが、今回の深窓の令嬢仕様の女装だった。
　無愛想な顔は帽子で殆ど隠れ、手を引かれている姿は、仲の良い親子の微笑ましい光景にしか見えない。
　これで両者が違法取引の現場を押さえるため、その場所の下見に向かっているなど誰も思える筈がなかった。
「親子連れってのは、それだけで警戒が薄くなるんだ。まして、子どもの方にまで戦闘力があるなんて先ず思わない。まぁ、それはここが安全な日本だからだけどね」
「……随分と派手な母親だな」
「はっ、ほっとけ」
　自身の格好について指摘され、イリスは鼻を鳴らし物言いたげな半目で返す。
　大人しい格好の湊に対し、イリスはオレンジのチューブトップの上に白いシャツを纏い、黒のジーンズを穿いている。
　鎖骨とヘソを出している事で、道行く通りすがりの男から、邪な想いを含んだ視線を送られているが、気付いていながら本人はどうってことないと流している。
　そうして、湊が皮肉気な事を言い会話が途切れるかと思ったが、モノレールに乗って都心部から外れて高級ホテルの並ぶ地区の方に入ったところで、イリスが再び話しかけた。
「アンタさ。人殺したことあるよな？　そのときどう思った？」
「別に。敵を殺して、早く他の皆を助けに行こうと思ってたから、殺したこと自体には何も感じてない」

あのときの湊は、思考がぐちゃぐちゃになった状態で、さらに助けを求められた事で壊れたようなものだ。
そんな状態で動けたのは、敵を殺し仲間たちを助けるという目的があったからで、チドリを含めた他の全員が死んでいたなら、復讐すら考えずに廃人となって殺されていただろう。
よく聞く〝殺す覚悟〟などというものは、精神的に追い込まれた者が自分の背を押すために考えた自己暗示の一つに過ぎない。
人はそんなものを持たずとも、容易く人を殺せてしまうのだから、殺す事で助けるという方法を覚えた湊にすれば、今後も殺し自体に何かを感じる事はないと思っている。つまり、それは目的達成の一手段でしかないのだ。
「アタシが初めて人を殺したのは二十四のときだ。仕事って割り切ろうにも、最初は殺した相手が死ぬ直前にあげた呻き声が耳に残って忘れられなかった。まぁ、それでも続けてたら、いつの間にか何も考えずに引き金引けるようになってたけどね」
急に自身の昔話しを始めたイリスの横顔を湊は見上げると、自嘲的な笑みを浮かべていることに気付いた。
けれど、相手が一体何の話しをしたいのかが分からず、話しを切り上げるために適当な事を言って返す。
「十年くらい前ってこと？」
「……オマエ、アタシを幾つだと思ってんだ。十年前じゃ、まだ十代だよ莫迦野郎。一応、失礼なアンタに教えておいてやるが、アタシは今年で二十七、ロゼッタは二十五だ。ジャンはオッサンだからどうでも良いが、女に歳の話で滅多なこと言うもんじゃないよ」
そういうと、繋いでいない方の手で作った拳を軽く帽子の上に落とし、冗談めかして窘めるとイリスは目的地に着くまで一言も喋らなかった。
＊＊＊
湊が連れて来られたのは、超高層のオフィスビルだった。
いくつかのフロアにレストランや展望台が入っているので、親子連れでも怪しまれる事なく、エレベーターに乗って展望フロアに到着し

た。
「さてと、別にここに用がある訳じゃあないんだ。こっち来てみな」
そう言われても、湊の手はイリスがずっと掴んでいるので、湊本人の意思とは無関係に付いていくしかない。
振りほどくことも、勿論不可能ではないが、周りの目は上手く誤魔化せているようなので、この作戦を思い付いた人間を邪険にする事は出来ない。
よって、まわりにいる同じ年頃の男子の何名かが見惚れてきても無視して、とある高級ホテルが見える場所へと移動した。
「あそこが取引場所だ。んで、アタシらはターゲットが取引してる現場を写真にでも撮れば良いって訳さ。取引を失敗させるんじゃなく、噂の種火を用意するのが依頼でね。現場が高級ホテルの上の方の部屋だから面倒なんだが、危険が少ない割に報酬が良いんだ」
「俺は戦うような依頼の方が良い」
「駆け出しが生意気言うな。言っとくが、オマエが初めて店に来たとき、アタシらはオマエが人を殺した事があるって気付いてたぞ。理由は分かるか？」
後ろから抱き上げられ、小さな子どもには少々高い位置にある手すりに掴まって、向かいのホテルを見つめながら呟いた湊にイリスは問う。
初めに抱き上げたときより、腕に力が籠められた事で、相手は雑談のつもりで言っている訳ではないらしいと湊も真面目に考える。
単純に考えれば凶器を持っていたからだろう。けれど、そんな事をわざわざ理由としてあげるとは思えない。
自分では気付いていなかっただけに、これ以上考えても無駄だと諦め、湊は答えを聞くことにした。
「分からない。答えは？」
「血の臭いだ。一般人なら気付かないだろうが、全身から微かに人間の血の臭いがした。アタシらみたいなやつなら、それで気付く。普通、全身から人の血の臭いなんてさせないからね」
人が大量に死ぬ事故や大災害に見舞われた訳でもなく、現代日本で

子どもが全身から血の臭いをさせていること自体が異常である。
臭いに気付いた者は、それだけで相手を警戒するだろうが、湊は自分たちが研究所から出てきた事を話したので、不必要な警戒をされずに済んだ。
しかし、仕事を始めれば、相手が事情など聞く筈もなく、攻撃を受けるか逃げられてしまうかするだろう。
銃も未だに覚えていないため、湊はペルソナを使わない限りは近接格闘で制圧するしかない。
となれば、返り血の臭いが取れるまで仕事を回せなくなるので、裏の仕事に慣れさせるまでは、そんな無駄な期間を挟まずにいられるような仕事をこなしていく必要があった。
「まぁ、アンタを責める気なんてないが、仕事に慣れるまでは親子ごっこしながら興信所や探偵の真似事をしていくよ。途中で銃の扱いも教えてやるから、殺しはそれからだ」
「……わかった。持ってるのは使いたくないから、イリスに俺の銃を用意して欲しい」
「ん？　まぁ、アタシが使ってる銃と同じで良ければ、教えるのも楽だが、どうして使わないんだ？」
実際に目にしたのはキャリコだけだが、湊が拳銃も持っているというのは店で聞いている。
研究所で職員から奪ったベレッタＭ９２型の対シャドウ銃は、既に黄昏の羽根を抜いてあるので、今後は普通の拳銃としてしか使えない。
それをわざわざ別の銃を用意して欲しいなど、どういった理由からか不思議に思いイリスが尋ねると、湊は展望台から見える街を眺めながら小さく呟いた。
「あの銃は、逃げようとした皆を殺したから。そんなものを使おうとは思えない」
まわりの喧騒にのまれてしまうほど小さな呟きだったが、抱き上げていたイリスの耳には確かに聞こえた。
抑揚のない、何の感情も込められていない、空虚さだけを宿した少

年の声が。
「……わかった。武器の仕入れはジャンがしてくれるから、アタシの方から言っておく。まだ早いが、突撃銃やら狙撃銃も用意させておくから、頑張って稼ぐんだよ。銃も弾も高いからね。さてと、それじゃあ下のレストランで夕食でも食べるか。お子様ランチでもご馳走してやるよ」
「本当にまだ若かったんだな。バブル期の人間なら、ステーキを奢るとか言いそうだと思っていた。いや、子どもの御馳走がお子様ランチって発想も十分あれなのかな？」
重くなった雰囲気を振り払うように、イリスが冗談めかして言いながら湊を下ろすと、湊は真顔のまま皮肉で返した。
だが、先ほどと違い、普段通りの様子に戻っているようなので、イリスは相手の手を掴むと引っ張りながら化粧室への案内板が見える場所へと誘導していく。
「オマエ、女子トイレに放り込むぞ。そもそも、日本がバブルのときは、アタシは母国で学生してたってんだ」
「高校？　大学？」
「プライマリースクールだよ！　もう駄目だ。アンタ、アタシのこと舐めてるだろ？　大人相手にふざけた真似ばっかりしてるとどうなるか、一度きっちり教えてやる」
言いながら、まるでぬいぐるみのように湊を脇に抱え、イリスは少々早足でエレベーターに向かいオフィスビルを出て行った。
途中で携帯を使ってロゼッタを呼び出し、大きなトランクを持った満面の笑みの相手と合流すると、イリスが現在の拠点としているホテルまで連れて行って湊を一泊させ。
翌日、昼過ぎに部屋から出てきた湊は前日とは別のワンピース姿でぐったりした様子になっており、反対にイリスは満足気な表情で、トランクを持ったロゼッタはほっこりした表情で肌がツヤツヤとしていた。
そんな様子で大丈夫かとも思われたが、夜にあった仕事自体はしっかりとカグヤの索敵能力で知覚したものを、Eデヴァイスに映像とし

て表示し、それをそのまま画像と映像のデータにして収め、データの入ったメモリーカードを依頼人に渡し、無事に達成したのだった。

第二十九話　管理者たちの悩み

１０月２日（月）

朝――道場

早朝、まだ空気が日差しで熱せられていないため、道場の中は少々肌寒くあった。だが、鍛錬を行っている二人は、運動で体温が上がった事により僅かに汗を掻いている。

「無理に引っ張んな、ちゃんと相手の力も利用できてれば投げるのに力はいらねえ」

傍らに立って指導している鵜飼が、腕の力で湊を投げようとするチドリを注意する。

いま組手をしているのは、合気道の道着を着た湊とチドリで、二人は週に三日はこのように鍛錬をしていた。

というのも、研究所を出て以来、チドリは毎日のようにやっていた戦闘訓練がなくなったので、身体が鈍り始めていた。

勉強は桜が時間割を作って教えているため日々成長中だが、このままでは湊の強さに追い付けない。では、どうすれば良いかと考え、小学校で言うところの体育代わりに鵜飼から合気柔術を学ぶことにしたのだ。

何故、合気柔術になったかというと、初めは鵜飼からは剣術を、渡瀬からは八極拳と劈掛拳を湊が学んでいたので、同じように習おうとしたのだが、チドリは飲み込みの速い天才であった。

剣術に関しては、湊よりもちゃんと鵜飼の指導通りに武器を傷めずに捌くことが出来。拳法に関しては、直ぐに型を覚えて、実戦レベルには満たないものの、子ども同士の喧嘩ならば基本的に負けないだろう実力をつけた。

けれど、基礎中の基礎を身に付けられただけで、実戦向きの技の習得は、身体がまだ未熟過ぎて上手く出来なかったのだ。

加えて、拳法を使った試合形式では勿論のこと、剣術に関しても自身より覚えの悪い湊に実力を抑えた状態でチドリは勝てなかった。

その原因はチドリもしっかりと理解出来ていて、覚えが速く教えら

れた事を実践できる才を持った己に対し、湊は教えられたことを自分の中で消化して、別の技術と組み合わせて使う事が出来るのだ。
「……アイツ、なんか不真面目に見えるねぇ」
湊に今日の依頼で使用する狙撃銃の扱いを教えるという理由で来ていたイリスが、壁際で桜と見学していて呟く。
視線の先では完璧に投げられながら、受け身ではなく逆立ちで着地している湊の姿があった。
その姿が余裕をかましている風に見えたのか、チドリが蹴りかかっていったが、ハンドスプリングで起き上がった湊に、蹴りで足を刈り取られた上に頭の後ろを腕で押された事で、空中で一回転して背中から畳に落とされていた。
確かにその光景を見れば、そんな言葉も出てしまうだろうと苦笑しながらお茶を淹れ、湯呑みを渡して桜は返した。
「ちーちゃんも十分に優秀すぎるんですよ？　教えたら何でもすぐに覚えちゃって、わたしもついその学年じゃ教えない単元まで教えちゃうんです。だけど、それでもみーくんに敵わないんですよね」
「そりゃ、アイツに勝つのは無理だろう。小狼はルールというか、常識を無視するからな。あれほど教え甲斐の無いやつも珍しいよ」
教師からすればチドリの方が何倍も優秀に思えるだろう。しかし、まわりの凡人の目線からすれば、湊のような化け物には勝てないことが分かってしまう。
チドリは教えれば教えるだけ成長するが、それは教師側の限界がそのままチドリの限界にもなってしまうという事だ。
その点、湊は教えられた事を吸収して最適化してから使用するため、自分向けにアレンジする事や新たに技法を生み出す力を持っている。
チドリも成長していけば自分で考え、工夫できるようになるのかもしれないが、元々、湊も技術・知識の習得速度は並はずれているので、学習能力に関してほぼ条件が同じならば、機転の差でチドリは今の湊に勝つ事が出来ない。
イリスも桜も常人よりは優秀だが、それらは努力によって得た力な

ので、特別な才を持ちながらも、それを上回る才の存在を知ってしまったチドリの苦悩は理解する事が出来なかった。
しかし、そんな時だった。
「ん？　おお、小猫もやるじゃないか」
背中を打って痛がっていたチドリは立ち上がると、今度は助走をつけて湊に飛びかかった。
両手を広げていったので、湊もぼうっとしながら抱きとめたのだが、そこでなんとチドリは湊の首筋に噛み付いた。
肉を食い千切るような程ではないが、白い健康的な歯を立てて、湊の肩に食い込ませている。
合気柔術の鍛錬で、そんなラフファイト的なことをされると思っていなかったのか、湊は驚いているようだ。
「ち、ちーちゃん、流石にそれは……」
「あ、いや、駄目だな。小狼のやつ、相手の頭を押さえつけて鼻と口塞いでるよ。タップしてるのに離してないし、止めないと拙くないか？」
「み、みーくん！　ちーちゃん、ギブアップしてるよ！　顔色変わってるから離してあげて！」
桜は慌てて声をかけるが少し遅かったようで、湊から解放されたときには、チドリは気を失ってぐったりしていた。
教えていた事と全く違う事をして戦闘不能にした者とされた者をそれぞれ見つつ、指導していた鵜飼は呆れ気味に頭を振って様子を確認するため近付くが、畳に寝かせた湊が呼吸確認と気道確保をして助けているので、少しすれば目を覚ますだろう。
そうして、とりあえずは無事なようなので、桜も安心して腰を下ろすと隣からイリスが話しかけてきた。
「アイツ、なんで小猫を守るのかね？　好きな子を守る、っていうのとはまた違ってるよな？」
「本当に大切だから守っているんだと思いますけど、確かに異性に対する愛ではないように思えますね。見返りを求めない無償の愛にも、何かしらの種類はあると思うんですが」

性愛、家族愛、兄妹愛、隣人愛と愛にも様々な種類がある。
湊がチドリに対して抱いている物が、何に基づいての愛なのかが分かれば、そのパーソナリティーを少しは理解でき、チドリ以外に対する行動原理も分かるようになるかもしれない。
そんな事を考えながら、イリスはお茶を一口啜って笑いながら話す。
「無償の愛ね。それって、アガペーって言って元々は神が人に対して抱いたものだからね。もし本当に、ただその存在を慈しむように愛を注ぐのならば、それが出来る奴は人の心を持っていない筈だよ。人は神に近付けはすれど、神にはなれないってね。逆もまた然りさ。神の視点に立つ者は、一生真に人を理解する事は出来ない」
「仕事中のみーくんは、やっぱり人とは違いますか？」
表情を曇らせ尋ねる桜の顔に不安の色が浮かぶ。
チドリも十分変わっている子と言えるが、湊はそんなレベルを超えて〝普通ではない〟という域に達している。
それを理解した上で引き取って共に暮らしている訳だが、危険な仕事をしていて無事に帰ってくるかいつも桜は心配していた。
本当なら裏稼業などせずに普通の子どもとして暮らして欲しい。チドリも湊が鍛錬や仕事をしているときには、桜が共にいても寂しそうにしている。
けれど、２００９年の戦いがどんなものになるか分からない以上、どれだけ力を付けてもつけ過ぎるという事はない。
それが分かっているからこそ、桜もチドリも湊が硝煙の臭いをさせて帰ってきても何も訊かず、ただ「おかえり」と迎えていた。
「……お父さんたちに聞いたんです」
「何をだ？」
暗い表情のままぽつりと呟いた桜にイリスが尋ねる。
「みーくんの本質は多分〝殺すこと〟だろうって。殺すことで生かす、殺すことで守る、何かを為すために自分すら殺してしか行えないんだって」
「そんな本質があってたまるか。生きているうちに性格だってなん

だって変わってくる。それを、幼少期の一時を切り取って周りが決めつければ、本当にそんなくだらない本質に染まってしまうぞ。アンタもそんな事で悩んでないで、子どもらの世話でもしてやりな」
言って指をさした先には、今日の鍛錬を終えたらしい子どもらが鵜飼に礼をしていた。
先ほどまで倒れていたチドリは湊にお姫様抱っこされているが、終わると桜たちの元に向かってくるようだった。
それを見て、桜も笑顔になると、飲んでいたお茶を片付けて立ち上がり。イリスも続いて道場を後にした。
深夜――ポートアイランド港
影時間を過ぎた後の深夜、コンテナの並ぶ港に一台の車が入って来た。
ライトも点けず奥までやってくると、空いていたコンテナの間のスペースに停車し、そこから三人の人影が降りてくる。
そして、その人影たちは近くにあったコンテナの一つによじ登ると、それを伝ってさらに積まれている別のコンテナへと登って行った。
最終的に三段目まで積まれたコンテナに登った三人の人影、それは湊・イリス・五代の三人で本日の依頼をこなすために港へとやってきて、周囲から見えないコンテナの上で待機していたのだった。
既に時計の針は二時を回っており、そんな時間の港とあって人はおろか港の関係者の車すら全くない。ただ、波と風の音だけが、耳に届いていた。
「おい、少女。いや、いまは少年だったか？　まぁ、どっちでもいいが、子どもには辛い時間だからって寝てないだろうな？」
コンテナに登ってから既に三十分以上経過している、そうして超長距離狙撃銃として使用可能な対物ライフルである、バレットＭ８２Ａ１のスコープを覗いていたイリスが、自身の腰を枕にして丸くなっている湊に声をかける。
本当に仮死状態に近い状態で寝るので、寝息は元々聞こえないが、眠っているように思ったので肘で頭を小突くと、湊はいそいそと起き

出した。
「……起きてるよ」
「嘘付け。オマエ、アタシにやらせるんだったら分け前やらないぞ」
二人のそんなやり取りを見て、隣に座って双眼鏡で遠くを眺めていた五代は微笑ましそうに笑うが、勝手に枕にされていたイリスは眉間にしわを寄せながら身体を起こし湊を見ている。
普段は湊とイリスだけで仕事をしているが、今日は狙撃銃の使い方を学ぶため五代も同行していた。
手入れの仕方や、使用時の注意点に関しては昼間のうちに武器を届けにいったイリスから説明をしていたが、威力が強過ぎるため実射は一度もしていない。
それだけに、イリスは狙いが外れるなどの失敗も危惧して気を張っているというのに、当の本人は寝ぼけ眼のままスコープを覗いているので本当に頭が痛くなりそうであった。
そして、そんなとき、座っていた五代が双眼鏡を覗いたまま静かな声で湊に話しかけた。
「対象が取引をする場所までは約１２００メートル離れてる。その銃なら十分届く距離だ。使用している銃弾の特性でほとんど風の影響を受けずに真っ直ぐ飛ぶが、全く影響を受けない訳じゃない。なにより、ここは海の傍だからね。海風はビル風よりも不規則で流れが読みづらい。十分に注意して撃つんだ」
言われて湊は小さく頷いて、一度スコープから顔を離すとマフラーからゴーグルを取り出し装備し、次に黒いイヤーマフを首にかけた。
両方とも付けなくても射撃自体は可能だが、射撃時にマズルブレーキより噴射する発射煙が大量に射手へとかかるので、目を守るためにゴーグルは必要で、直前になってから付けようと思っているイヤーマフも、かなり大きな音が出るので聴覚を一時的にでも失わないための対策である。
「取引相手からは情報を引き出す必要があるからね。間違って全員殺さないようにしてくれよ」
本日の依頼は、外国のとあるネットワーク関連企業の技術を流そう

とする男を処理するという殺しの仕事だ。そして、データを受け取る者の情報は齎されておらず、何人来るかも分かっていない。
けれど、横流ししようとしている男の顔は写真で分かっているので、湊たちはそいつだけ撃ち殺せば良い。
その際、受け取る側が数人いるのならば、会話中の雰囲気で中心人物を見極め、そいつだけを残して他は同じように処理をする。実に単純な仕事であった。
何もそんな仕事でわざわざ難度の高い狙撃をする必要もないが、平和な日本の街中でやるには殺しの時点で目立ってしまう。それを対象までとの距離が遠く、隠ぺい工作を施しに向かうまで時間のかかる狙撃を練習するのはかなり難しい。
しかし、湊に様々な技術を習得させるため、実際の依頼中に狙撃の経験を積ませる事は必要不可欠。そうした考えによって、今回、この深夜の貿易港という人のいない場所が取引場所であるのは好都合であり、恰好の練習機会だと五代まで出張って来た訳である。
「おっ、来たみたいだ。あれは……ターゲットだね。小狼君、その銃はこの距離でも相手を吹き飛ばしてしまえるんだ。だから、向かいに受け取る人物が来た場合は、気をつけて撃ってくれよ」
そうして、静かに待っているとシャッターの下ろされた倉庫の前にスーツを着た茶髪の太った白人系の男が一人やって来た。湊と同じようにイヤーマフを首にかけ、双眼鏡で見ていた五代は湊に伝えると受取人の存在も探し始める。
湊も同じように動じた様子もなく、落ち着いた呼吸で寝そべりながら引き金に指をかけて待ち、ターゲットの左肩辺りに照準を合わせている。これで正面に受取人が来ても銃弾が逸れてターゲットのみ殺せるだろう。
ターゲットから遅れること五分、受取人らしきスーツの男もやってきた。
深夜の港に不釣り合いなビシッと決めたスーツ姿であり、スコープを覗いてその相手の顔を見た湊は小さく呟いた。
「あいつ……エルゴ研にいた、桐条の研究員だ」

「なに？　アンタが逃げだしたっていうところのやつか？」
「間違いない。下っ端だけど、対シャドウ兵器開発にも関わっていたやつだ。名前は、たしか横島（よこしま）」
ヘーガーの研究室にいた三十路手前の男、黒縁の眼鏡をかけた背の高い姿に確かに湊は見覚えがあった。
事故当日に研究所にいた職員は九割以上を殺したので、生きていたのなら、奇跡的に湊と遭遇しなかったか、休みだったかのどちらかだろう。
けれど、再び出会ったのなら生かしておくつもりはない。湊は頭の奥が熱くなるのを感じながら、イヤーマフを耳に当てると、蒼い瞳でスコープを覗き照準を二人とも貫通するように合わせ直した。
「おい、小狼。アイツはまだ殺すなよ。情報を聞きだすのも依頼だからな、オマエの因縁はそれを終えてからだぞ」
湊が銃口を僅かに動かしたことでイリスは湊が何をするつもりか理解し、制止の声をかける。
ここで「絶対に殺すな」と言っても聞かないのは分かっている。だから、情報を聞き出してから殺せと、殺しを肯定しながら依頼を優先させようとしたのだが、湊は何も答えず引き金を引いた。
その瞬間、ダゴンッと大きな音がしてその場の空気が震えた。寝そべっていたにも拘わらず、反動で小さな身体の湊が後ろに下がりそうになるが、慌ててイリスが横から抱きとめ何とか無事に済む。
その間に、銃口からは発射された弾丸が暗い夜の空に炎の尾を引いて対象へと迫っていく。
しかし、それも途中で消え、距離があるため発砲音も聞こえていないターゲットらは、スコープの先で一人は頭部を弾けさせ、一人は銃弾の当たった右肩を弾けさせて倒れもがいていた。
よりにもよって、本来のターゲットの頭部を弾けさせてしまったことで、ターゲットの死体を依頼人に渡す際に、それが実際に本人の遺体であるか証明出来る物を用意する必要が出来てしまった。
その事に、五代は思わずため息を吐くと、イヤーマフとゴーグルを外してイリスから身体を離していた少年に声をかける。

「はぁ……小狼君、僕やイリスの声は聞こえていたかい？　殺すのはターゲットだけで、受取人からは何の目的で技術データを手に入れようとしたか、その情報を聞き出すことがクライアントからの依頼だったって」
弾丸の威力で肩が吹き飛び、組織がズタズタになって腕が胴体と別れてしまったため、横島という男の右腕は二度とくっつかないだろう。
だが、それでも今はまだ生きている。錯乱しているようだが、情報を喋らすことは出来るかもしれない。よって、どうにかギリギリでこの依頼は達成できそうだと思いながらも、五代は感情に呑まれた湊を諌めた。
因縁のある相手の一人で、思わず我慢できなくなった事情は分かるが、本当に危ないところだったのだ。
だが、そうして、湊がどのように返すか待っていると、湊は蒼い瞳のまま武器を置いてコンテナを飛びおりて行ってしまう。
イリスたちは、湊の勝手な行動に舌打ちをしたい気持ちになりながらも、荷物をすぐに片付けると、ワイヤーを使ってコンテナから降り、湊の後を追って行った。
＊＊＊
「あ、ああ……僕の、腕、痛い……誰か、助けてくれぇ」
時折、掠れたような呼吸をしながら、仰向けに倒れている男がいる。
その男の近くには頭の無い死体と、小さなアタッシュケースが落ちていて、近付いた湊はそれを拾い上げた。
「……」
瞳は蒼いままで、本人も気付かぬうちに、掴んでいた取っ手を握り潰しそうになっている。
だが、後ろから二人の大人が追い付いてきたことで、僅かに冷静さを取り戻した。
「小狼、まだ何もしてないだろうな？」
「もう殺して良かったの？」
「よくないよ。だから、まだ殺してなくて良かったと安堵したところ

さ」
　黒いコートに身を包んだ五代は、そういって湊の頭にポンと手を置いて通り過ぎると、倒れている横島の傍にしゃがんで声をかけた。
「君、まだ喋れる？」
「あ、あえ？　た、助けて、僕の腕が……」
「ああ、僕も君を助けたい。だから、君はここで何をしようとしていたか、教えてくれ」
　弱々しい声で助けを求める横島に、五代は持っていた注射型の痛み止めを打ってから、安心させるよう落ち着いた声色で語りかける。
　錯乱したままでは、まともに情報を引き出すことも出来ない。だからこそ、ここで落ち着かせながら、自分を味方だと思わせて情報を喋らせるのだ。
　横島の声を聞くたびに拳をきつく握りしめている湊は、イリスが後ろから抱きとめているが、いつ拘束を振り解いて殺しにくるか分からない。
　それは五代も理解しているので、焦る気持ちを抑えて、いかに早く情報を得るかと言う事に集中しようとした。
「君はどこの人間かな？　相手から、何を受け取ろうとした？」
「ぼ、僕は、桐条の開発者で、システムを立ち上げるデータを貰おうと」
　目の焦点は合っていないが、目は五代の方へ向いている。
　ぽつぽつと呟く声を拾い逃さないよう、しっかりと左手に録音用のマイクを持って、相手の口に近付けた。
「それは何のシステムだい？」
「け、研究所で使うネットワークの」
「どうしてそんな物を？　自分たちもネットワークの立ち上げは出来るだろう？」
　桐条にはコンピュータ関連の事業も存在する。それはハードだけでなく、ソフト面にも対応していた筈で、自分たちで作れるというのに、わざわざ外部の情報を手に入れる意味が分からない。
　単純に商売敵を知ろうと言うのなら話は簡単だが、横島の口ぶりからすると自分たちで使おうとしていた様子だ。

尋ねて相手をじっと見つめて待っていると、横島は再び口を開いた。
「僕たちのいるところは、桐条でも独立してて、メンバーが不足している」
「それで？」
「専門の技術者がいないから、とりあえず最新技術を手に入れようとしたんだ」
横島が現在所属していて桐条で独立した部署となると、エルゴ研の生き残りでメンバーを構成している〝ラボ〟という研究機関の可能性が高い。
組織内の物を使うなら、それを専門としている表の部署の人間を引っ張ってこなくてはいけないため、情報の漏洩や拡散を避けるために桐条がそれをさせなかった。
そのため、ラボの人間はシステム自体は元から存在するものを流用することにし、且つ、それは桐条と無関係のものにしようと思ったのだろう。
「それで、何のために新しいネットワークを作ろうと？」
「機密情報を扱ってるから、完全に、外部から遮断された独立したものが必要になったんだ」
「その情報は、ハッキングやクラッキングされると拙いものなのかい？」
「世間にばれると、桐条はなくなってしまう。もう僕たちにも後はないんだ」
そこまで聞いて五代は録音をやめた。
全ての情報を依頼人に渡す訳ではないが、自分としても知りたいと思っていた、桐条には世間に公表できない部分が実在する証言は手に入れた。
もうこれ以上手に入れられそうな情報はないと立ち上がり、静かな殺気を振り撒いている湊に視線を向ける。イリスが後ろから抱きしめるように抑えているが、湊の瞳は今も蒼いままだ。
「……もういいよ」

五代が声をかけると、イリスが湊から身体を離した。すぐにでも飛びかかるのかと、湊が直接殺す場面を初めて見る五代は、その動向を見守る。

しかし、五代達の予想は外れ、湊はゆっくり相手の横まで進み、虚ろな瞳で中空を見ている横島を見下ろしながら口を開いた。

「第二研の被験体はどうした？　生き残っていたやつもいるだろ」

「生き残った被験体は、主任の命令で薬で眠らせたままにして保存してる……。あいつらはペルソナの容れ物だから」

横島は誰に話しかけられたのかも分かっていないだろう。血を失い過ぎて意識が混濁している状態で、聞かれた事に対し、ただ答えただけだ。

だからこそ、その言葉に嘘はない。相手にどんな気持ちを抱かせるかも全く考えず、反射的に自分が普段から思っている事を口にした。

けれど、そんな横島の言葉は、ぎりぎりのところで抑えていた湊の逆鱗に触れてしまった。

《――――――

く頑丈な素材でつくられた路面が、無惨に破壊される音が港中に轟いていた。
物理スキルのゴッドハンドではなく、単純に拳で相手を殴りつけただけだが、拳の威力で胸部から身体が上下に分断された横島は息絶えている。
シャドウ・タナトスの拳が突き刺さり、地面に開いた穴には赤黒い液体が染みこんで溜まっている。
そして、同調した状態でペルソナが取った動きは、召喚者自身もしたと言う事で、同じように自分の足元に拳をぶつけ、そこから血を流しながら停止している湊がいた。
痛みを我慢しているのか、アドレナリンが過剰分泌され痛覚が麻痺しているのかは、他の者が見たところで分からない。
しかし、いつまでもそんな痛々しい姿のままでいさせる気には、イリスも五代もなれなかった。
「……小狼、相手は死んだぞ。ほら、手の治療してやるから、こっちこい」
「二人の遺体の回収と処理は僕がやっておくよ。だから、小狼君はイリスのところに行っておくんだ」
「……」
声をかけられたことで、ようやく反応した湊はシャドウ・タナトスを消すと、小さなアタッシュケースを手にしたまま、フラフラとした足取りでイリスの元に向かった。
暗い場所での手当ても慣れていない訳ではないが、全力で硬い地面を殴った事で骨に異常が出ているかもしれない。
そう考え、イリスは狙撃銃の入ったケースを背中に担ぐと、湊の事は両腕で抱き上げて車へと戻って行った。
「……ふむ、あれがペルソナか」
遺体を容れておくための寝袋に似た袋を取り出し、男たちの遺体を入れつつ五代は小さくこぼす。
桜の言葉を聞いても姿や力の規模が想像出来ていなかった。
しかし、実際に見て、初めて桐条が湊らを確保したがっていた意味

を理解出来るようになった。普通の人間があんな力に対抗することなど不可能だと思い知らされたから。
「オカルトやファンタジーは、あまり信じていなかったんだけどな」
イリスがタロット占いをよくしていることもあって、五代も話のネタとしてはオカルトも扱う事はある。
だが、魔法や超常の存在などというものは、馬鹿馬鹿しい創作話としてしか考えていなかった。
実際に目にしても信じられない気持ちは少なからずあるが、いまさら嘘だと完全に否定する気にはなれない。
深入りする怖さはあるが、知ってしまったからにはこのままでいられない。ばれないよう細心の注意を払いつつ、今後も桐条の怪しい動向などの情報を集めようと思った。
そうして、遺体を容れた袋を車の荷台に運び、現場に残った血や肉片の隠ぺい工作を済ませると、湊だけ帰る場所が離れているので途中で別れ、五代とイリスの二人は死体の引き渡しのため車で去って行った。

――ベルベットルーム

依頼を終えた後、湊は狭い路地に入ってから契約者の鍵を使って扉を出し、モノクロタイルの境道を通ってベルベットルームに到着すると、椅子に腰かけた。
それを見やり、気味の悪い笑みを浮かべた老人が口を開いた。
「これはこれは、ようこそいらっしゃいました。現実では今は深夜のはずですが、このような夜更けにどのようなご用件ですかな？」
「……依頼、済ませてきた」
湊は言いながらマフラーに手を突っ込むと、なにやら湾曲し表面がツヤツヤした装甲のような物と、年代物のモノクルを一つテーブルの上に置いた。
イゴールは湊がテーブルの上に置いた物を見て、「ふむ」と短く呟くと、その後ろに控えていた二人の女性が、テーブルに近付きそれぞれ手に取った。
「確かに、〝甲虫の外殻〟をお受け取りいたしました」

「これは見事な品ですね。〝アンティークな片眼鏡を持ってくる〟、確かに依頼達成でございます」
　エリザベスとマーガレット、二人は湊が持ってきた依頼の品を手に取り確認すると、笑みを浮かべてペルソナ全書にそれを挿み、光にして収納した。
「では、こちらが報酬になります」
　何も書かれていない茶封筒をポケットから出すと、エリザベスは湊にそれを渡す。
　一体何が入っているのかと、開けて中身を取り出してみると、そこには福沢諭吉と二人の夏目漱石がいた。どうやら、成功報酬は一万二千円であったらしい。
　このベルベットルームの依頼は、先にどんな報酬が手に入るのか教えて貰えないので、初めからこの額であったのかは不明だが、シャドウの羽根を引き千切って持ってきたくらいで金が貰えるのならと、湊はプラス思考で受け取ることにした。
　そして、続いて、もう一人の依頼人も湊に報酬を渡すべく準備していた。
「私から報酬として、こちらをお渡しいたします」
　言いながら、マーガレットが湊に渡した物、それは青い薔薇の刺繍のされた黒い日傘であった。
　じっと見つめながら、湊が受け取るのを待っているマーガレットの唇の端が小さく揺れている。その事に気付いた湊は、瞳を蒼くして日傘を手に取ると、開きもせずマフラーにしまった。
　すると、仕事モードから素の性格に戻ったマーガレットがつまらそうに湊に話しかける。
「あら、どうして品を確認しないの？　どんなものか気になるでしょう？」
「……どうせ、俺が女の恰好してるときに使えるようにって、女物の日傘を用意したんだろ。口の端を震わせて笑い堪えてるのがばれてるんだよ」
「気のせいよ。これでも自分のコレクションの中からしっかりと選ん

だ、品としては確かな物なのよ?」
「だったら、自分が外に出るときに使えば良いだろ」
仏頂面のまま返した言葉を聞いたとき、からかうような笑みを浮かべていたマーガレットの顔に僅かに影が差した。
『……』
同じように、エリザベスとテオドアもどこか気まずそうに目線を伏せる。
イゴールだけは変わらず不気味な笑みを浮かべて、客人である湊を見ているが、どうして三人の様子が変化したのか、直前の自分の言葉を思い出し、ある可能性に至った。
「もしかして……ここから出られないのか?」
ベルベットルームは夢と現実の狭間にある。以前、そんな風にイゴールは言っていた。
ならば、シャドウやペルソナよりも存在としては不確かで、現実では実体を保つことが出来ず、自由に動き回る事はおろか、物に触れることすら出来ないのかもしれない。
そして、急に湊は椅子から降りるとエリザベスの腕を掴んだ。本人は気付いていないようだが、その表情はまるで迷子になった幼子のように不安げで、手を振り払えば泣きだしてしまいそうだとも思える。
エリザベスは自分の腕を掴んでいる小さな手をしばらく見つめると、本を持っていた手を湊の背中にまわして抱きしめ、普段の淡々とした声色に僅かに優しさを込めて答えた。
「いいえ、鍛錬の間へと移動したように現実へと赴くことも可能です。厳密には違いますが、人間と変わらぬ身体をしていますので、食事も睡眠も物に触れることも可能でございます。しかし、私共には現実へと赴く理由が存在いたしません。故に、ここより出ることもないのです」
「理由なんていくらでも作れるだろ。買い物がしたい、あれが食べたい、何かを見たい、そうやって自分でどんな理由だって考えられる筈だ」
「そう、ですね。好奇心は確かに胸の内に存在いたします。けれど、自

分が何者か、それが分からぬ状態で外界に触れて意味があるのかとも思うのでございます」
いらついた様子で口早に話す湊を少々不思議に思いながら答えるエリザベスは、普段通りの特に感情の籠もらぬ声で言った。
自分たちは自分の事もまるで分かっていない。だから、外で何を見ても心が震えないかもしれないと、大真面目に答えた訳である。
実際にそうなれば、確かに怖いだろう。好奇心が存在するというのに、新たな世界に触れても何も感じない。それは、自分の心が死んでいるに等しいと言える。
もしかしたら、自分に答えをくれるかもしれないと、小さな可能性を感じている存在に対しても、どうせ無駄だろうとネガティブに思ってしまいそうなほどだ。
そして、ネガティブな思考は続き、一生自分は自分の存在を理解出来ず、いつか自我崩壊を起こして消えてゆくだろうと、そこまで考えてしまうようになる。
あくまで、それらは可能性に過ぎないが、シュレディンガーの猫よろしく、可能性が五分しかないのなら、自身の存在をベットしてまで賭けに出る事は出来ない。エリザベスはそのように考えていた。
だが、
「……イゴール、三人とも借りてくぞ。全員、いま直ぐついてこい」
そう言うなり、イゴールの返事も聞かず、湊はエリザベスの手を引っ張って扉へと歩き出した。
流石に、予想外だったのか、エリザベスは驚いた表情をして主へ顔を向けるが、イゴールは何も答えず、困惑する他の姉弟らにもついて行くよう手で指示するだけで、黙って見送った。
＊＊＊
扉を通ってポロニアンモールに出てきた湊は、他の三人の言葉に何も返さず、その場で鳥型のペルソナ〝スーツェー〟を呼び出して背中に乗って上空へと飛び上がった。
真夜中と言っても、完全に街から人が消えた訳ではない。月明かりで照らされる巨大な鳥の姿を誰かに見られるかもしれない。

だが、それを理解しながらも、マフラーをクローク状にしてエリザベスに羽織らせた湊は、黙って雲と同じ高さまで上昇し続ける。
そして、ようやくペルソナの上昇が止まったとき、
『あ……』
空を見上げた三人は思わず声を漏らした。
眼下には深夜とはいえ、都会の明るい街明かりが広がっている。だが、上空までやってきたことで、それらは遠く離れ、秋の星空がよく見えた。
満天の星空。その言葉は知っていたが、実際に目にしたことはなかった。まわりは雲海が広がり、遠くの彼方まで見渡す限り星空しかなく、まるで宇宙にきたのかと思ってしまう。
そうして、呆けていると、エリザベスは自分の頬が濡れていることに気付いた。
「これは……？」
エリザベスだけでなく、テオドアもマーガレットもいつのまにか涙を流していた。
しかし、どうして自分が泣いているのか分からない。とめどなく溢れる涙を不思議に思っていると、勝手にエリザベスの膝を枕にして寝転がっていた湊がようやく口を開いた。
「自分を理解できてなくたって、心は震えただろ」
「これは、そうなのですか？」
「自分の感情が何に由来するのか分からないのは、経験が不足してるからだ。三人とも同じ理由かもしれないし、全員違うかもしれない。それは結局、本人にしか分からない」
三人が黙って湊の言葉を聞いていると、自然と涙は止まっていた。
しかし、胸の中で何かの感情がいまも存在している。
その答えを知るため、相手が子どもだろうと関係なく。いまここでの言葉は自分たちにとって意味があると感じ耳を傾ける。
「自分が何者かなんて俺だって分からない。マーガレットが言ってた〝命のこたえ〟が、多分それなんだと思う。客に見つけろって言っておきながら、自分たちも見つけてないなんてお笑い草だ」

表情は特になく、ただ黙って星空を眺めている湊だが、マーガレットもその皮肉に何も言い返さない。
「だけど、本気で見つけたいって思っているなら、俺だって力を貸す。ベルベットルームの住人は、自由に出る事が禁じられているなら、外の案内を依頼にでも出せば良い。担当者じゃないテオドアだけ駄目だって言うなら、俺が依頼を引き受ける条件にテオドアの同行を足してやっても良い」
「っ……」
その言葉にテオドアの肩が揺れた。
確かに今日のことは特例で、今後は無条件に現実へ出る事も、湊の担当ではないテオドアが依頼を出すことも認められることはないだろう。
だが、住人から出される依頼に条件をふっかける者は今までいなかった。依頼は秘密裏に客人の能力を上げる事を目的としているので、受けて貰わねばイゴールも少々困ることだろう。
となれば、それぐらいの条件で済むのならばと認める可能性はあった。
「知識だけじゃ駄目なんだ。自分が何者か知りたいなら、この世界とのコミュニティを築け。その先で、〝こたえ〟はきっと見つかる」
『――――はい』
三人が返事をすると、時が止まり湊の頭に声が響いた。今回の事で、女帝・皇帝・悪魔の三つのコミュニティとの絆が一度に深まったのだ。
極まるにはまだまだ遠いが、住人達の心にも何かを残す事が出来た。ならば、これからも絆を深めていけるだろう。
それからしばらくして、湊は扉を開き三人をベルベットルームに帰すと、エリザベスからマフラーを返してもらい、現実に戻ってタナトスで飛んで帰って行った。
この日より、依頼書に現実世界の案内が加えられたのだが、湊がそのことを知り受託されるのはもう少し後の事になる。

第三十話　再会、発見

１０月１５日（日）
夜――港区・繁華街
既に時計の針は九時を回っている。飲み会で店から出てきたばかりなのか、大学生ほどの年頃をした若い集団が話している横を、長い黒髪を二つに縛り眼鏡をかけた少女が一人で歩く。
服装は白のブラウスに、赤を基調としたチェックのスカート、そして緩めた黒のネクタイをしており、どこかの学校の制服のようにも見える。
こんな時間に少女が一人で繁華街を歩いているのが不思議なのか、気付いた集団の女子が何名か心配そうに声をかけた。
「あの、こんな時間にどうしたの？　一人なのかな？」
「危ないからお母さんたちのところに戻った方が良いよ。ここらへんは酔っぱらいとかばっかりだし」
声をかけられた事で、少女は立ち止まり話しかけてきた女子らに視線を向ける。
しかし、表情は変わらない。何の用だと、ただただ面倒くさそうにジッと金色の瞳で見つめ返しているだけだ。
瞳の色も雰囲気もあまりに不思議で女子たちが見入っていると、一緒にいた他の者も、何やら自分たちの仲間が一人の少女に構っていることに気付いたらしく、少女をやや囲むように集まって来た。
すると、少女は見返すのをやめて再び歩き出す。
慌てて引き留めようとする者もいたが、その手が少女の肩に届こうとしたとき、少女は身体を捻り躱してしまう。
掴もうとした目標が途中で消えたことにより、女子は空を切った手に釣られて前のめりに倒れそうになる。
だが、倒れる前に横から伸びた少女の手に受け止められ、女子は前傾姿勢で少女に寄りかかるように止まる事が出来た。
倒れずに済んだ事に安堵しながら、女子は少し照れた様子で身体を離すと自分を助けてくれた少女に礼を言う。

「あ、ゴメンね。受け止めてくれてありがとう」
「……別にいい。それじゃあ、俺はもう行くから」
「え？　……俺？」
少女の言葉を聞いた女子は、恰好と不釣り合いな一人称を疑問に思ったようだが、少女はそれに何も返さずそのまま歩き続けた。
＊＊＊
繁華街を歩き続け、白河通りの方までやってきた少女の恰好をした湊。
もう少しで十一時になるということで、人通りはかなり少なくなっているが、場所がラブホテル街ということもあって、カップルが何組か歩いている。
場所と時間を考えれば子どもが一人でいること自体が異常なのだが、カップルたちは自分たちだけの世界に入っているのか、湊に視線を送りつつも直ぐに興味を失ったようにお互いを見ながら会話をしていた。
「……」
そんな状況をむしろ好都合に思いながら、湊はイタリア語で『迷える羊』という意味の名前をした、キリスト教徒に喧嘩を売っているようなホテルの前のガードレールに腰掛け、入り口をジッと見ながら眼鏡の縁にある小さなボタンを押す。
実はいまかけている眼鏡は、小型のカメラを内蔵しており、これを使ってとある会社役員の不倫現場を撮影する事が今日の依頼だった。
依頼人は同じ企業の会社役員で、つまりはライバルを失脚させるためのネタを欲したという訳である。
この程度の依頼は何度かこなしているのでイリスの助けは必要なく、むしろ、一緒にくれば何事も経験だとホテルに連れ込まれる可能性があるため湊は一人で行動していた。
実際のところ、相手の部屋に何度か泊まって無理矢理に一緒に入浴させられたり、同じベッドで寝たりもしているが、イリスに対し貞操の危険を感じた事はない。
それならば、ロゼッタの方が湊の中では危険人物と認識されてお

り。前にイリスの部屋で着せ替え人形にされたときなど、興奮した様子で目を血走らせながらドレスを脱ぎつつ襲いかかって来た。
相手が可愛い少女に興奮しているのか、それとも女装している少年に興奮しているのかは分からなかったが、嫌悪感を抱いたので湊は服を脱がされながらも顎を蹴り、倒れたところをさらに追撃で首を絞めて落とし何とか無事に済んだ。
そう言った事もあり、ロゼッタならいざ知らず、イリスが湊をホテルに連れ込もうと、それはホテルの内装がどんなものか社会勉強として教えることが目的で、子孫を残す機能もまだ備わっていない少年を毒牙にかけることなど先ずあり得なかった。
ならば、湊は何故イリスの同行を拒否したのか？
それはこの後の予定が関係していた。
「いやぁ、十月も中旬になると夜は寒いねぇ」
湊がこの後の予定の事を考えていると、ホテルから脂ぎった顔をした四十代頃の男が、二十代と思われる派手な格好をした女と出てきた。
写真と同じ顔で、その男がターゲットだと分かると、腕を組みながらホテルの駐車場へと向かう二人を湊は撮影し続ける。
車に乗ってからも中々発進せず、楽しそうに車内で話しながら時折口づけをかわしていて。他人の事など基本どうでもいいと思っている湊も、親子ほど年の離れた者同士のそんな物を見続けなければならない事に、生理的に受け付けない不快感を抱き、この眼鏡型のカメラを使えと渡してきたロゼッタに殺意が湧いた。
ターゲットが車を発進させたのは、それからさらに二十分後で、ようやく仕事を終えた湊は、依頼人にデータを渡す前にロゼッタに先ほどの気持ちの悪いラブシーンを見させる事に決め、今日一番の目的地へと向かう事にした。
影時間――巌戸台・港湾部北
世界が緑色に塗りつぶされたころ、湊は波の音を聞きながら岩の上に佇み月を眺めていた。
満月を過ぎた事で、右端が僅かに欠けている。二ヶ月前のあの日の

月は似たものだったかと思案に耽っていると、背後でジャリっと砂の擦れる音がした。
見なくても分かる。他の者では湊のステルスを能力で看破出来ないが、その逆は違う。チドリのだろうが、他の者だろうが、能力で気配を隠蔽しても探知のアプローチが異なる湊の能力の目は誤魔化せない。
そうして、振り返ると現れた者たちに声をかけた。
「……久しぶり」
「ええ、お久しぶりです。今日はまた随分と変わった恰好をしていらっしゃいますね」
依頼時の服装のままだった湊を見て、楽しげに笑いながら立っていたのはタカヤ。
そのまわりには、タカヤ同様、研究所の支給品ではなく、市販の洋服を身に付けたジン・マリア・メノウ・スミレが、久しぶりに出会った湊の様子を不思議そうにしながらも、どこか安堵した表情で見つめている。
しかし、脱走時に一緒にいたはずのカズキがいない。
そう思った直後、
「オッラァァアアア!!」
道も存在しない場所から、ナイフを持ったカズキが飛び出していた。
どういった意図があって奇襲をかけたのかは分からない。けれど、わざわざ攻撃を喰らう気はないと、一歩引きながら身体を捻ってナイフを躱し、着地した直後の相手の顔に回し蹴りを叩き込むと、吹き飛んだカズキのいる場所まで跳躍する。
そして、相手の背中を踏みつけ動きを封じながら、マフラーを変化させたネクタイから取り出したコルト・ガバメントの引き金を引いた。
「っ……」
乾いた銃声が響くと、湊以外の全員が驚いた表情をしている。頭のすぐ近くに銃弾が撃ち込まれたカズキも思わず硬直している程だ。

久しぶりに会った嘗ての仲間に対するあまりに容赦のない反撃に、他の者が言葉を発せずにいると、髪を縛っていた紐を解き、踏んでいた足をどけながら湊が口を開いた。
「奇襲するならもっと多面的に攻めろ。隙を突いてたった一撃叩きこむ準備しか出来てないなら、それは馬鹿な特攻でしかない」
「……テメェ、随分と容赦が消えたじゃねェか」
「実力の差だろ。研究所を出てから、こっちも遊んでた訳じゃない」
言い終えると、湊はネクタイに拳銃を仕舞って他の者へと近付いてゆく。
起き上がったカズキは何か言いたげな悔しさの滲む表情をしていたが、ようやく話せる状態になったことで、ずっと我慢していた様子のマリアが笑顔で湊に抱きついた。
「ミナトー！」
飛びかかるように抱きついてきたマリアを、湊は静かに受けとめた。
そのまま、優しく髪を梳きながら頭を撫でてやると、気持ち良さそうにして胸に顔をうずめているので、他の者にも話しかける。
「それで、この二ヶ月はどうだった？」
「ボクらは基本的にミナト君が言ってたような事をしてたよ。影時間の間にお店に忍び込んだりとか、日中はネットカフェで過ごしたりとかね」
口元に笑みを浮かべているが、言うほど楽ではなかったのだろう。メノウはエルゴ研にいたときよりも少し痩せたようで、他の者たちも似たような感じだ。
安定した生活基盤がないというのは、満足に休息も取れないということであり、時間が経てば桐条の追手が来るのではという不安も増してくる。
エルゴ研の研究員に恐怖感情を抱いていた子どもに、その重圧はかなり堪えたことだろう。
実際のところ、五代や他の情報屋を通じて得ている桐条の動きに、自分たちに対する追手らしきものは見られていない。

だが、何の情報も入ってこない状態で、ネガティブな感情を自分だけで振り払うのは大人でも難しいことだ。
合流したからには、今後はそれをどうにかできるようになればと、湊は少し考えながら、何か言いたそうなスミレに視線を向けた。
「ねぇねぇ、ミナト君。そのお洋服かわいいねー。でも、どうして女の子の格好してるのかなぁ？」
「……日中の仕事のときに着てたんだよ。で、ここに来る前にも一つ仕事入れてたから、着替えずにそのまま来た」
「随分と変わった仕事をされているのですね。私たちでも出来る仕事なら紹介していただきたかったところですが、我々は女性的な顔立ちをしていませんので、貴方のように出来そうにありません」
わざとなのだろう。タカヤは湊の恰好を改めて見回すと口元を歪め、自分たちには同じ仕事は出来そうにないと、さも残念だとばかりに肩を竦めた。
それを聞いて年少組のマリアとスミレは仕事内容が理解出来なかったようだが、他の三人は大凡の想像が出来てしまったのか、複雑な表情をしている。
確かに、湊の容姿は金色の瞳も含めてマニア受けしそうなものだ。少年として、女装した少年として、少女としての三種類の楽しみ方が出来るとは、ロゼッタがイリスに語った言葉である。
しかし、湊は変装として女装させられているだけで、ロリコンやショタコンと呼ばれる人種の相手をしている訳ではない。
よって、面倒ではあるが、マリアが抱きついてきたときにずれた眼鏡の位置を直しつつ、湊はアンニュイな表情のまま答えた。
「仕事の下見で日中は変装してるだけだ。仕事は調査、物品運搬、殺しと色々ある。そっちが望むなら、俺が懇意にしてるのと別口で良いなら仲介屋を紹介する」
湊の言葉を聞いたタカヤは、「それはありがたい」と何やら好奇心を抱いた様に返事をした。
いまの言葉のどこに好奇心を抱く要素があったのかは不明だ。けれど、どこに反応したのかは分かっている。タカヤが反応したのは、

仕事内容に〝殺し〟があると言ったところだ。
自分と同じように殺人衝動がある訳ではない。もしそうなら、目を見たときに分かっているはず。
そう思いながら、湊はタカヤが本当に〝殺し〟に反応したのか考えるが、結局なにも分からなかった。
なので、話しを切り上げ移動する事にした。
「……移動するぞ。もう、来そうにないからな」
「なぁ、チドリはどないしたんや？」
「家にいる。この時間なら寝てるから、連れて来なかった。そことは全く離れた場所だけど、お前たちが住める場所を用意しておいた。いまからそこに行く」
湊はそういってカードを握り砕くと、スーツェーを呼び出して、六人をペルソナの背中に乗せて影時間の空を飛んだ。
＊＊＊
空を飛んでやって来たのは、港区の東にある巌戸台南東区。ビジネス街や住宅密集地のある、それなりに大きな特別区の一つだ。
港区ほどではないが、商業施設も多数存在し、それなりに発展していると言える。
そんな中、湊がタカヤたちに用意したのは新たに開拓されたニュータウンではなく、旧街地と呼ばれる昔から存在する住宅地域の一軒家だった。
赤い屋根の洋風の落ち着いた外観のこの一軒家は、バブル期の終わりごろにあるデザイナーが建てた物で、バブルが弾けると仕事が激減し、泣く泣く手放したという経緯がある。
それが安く売りに出されていたので、さらに五代らのコネを借りて値引きして貰い、最終的に一千万ほどで買い取ったわけだが、湊は仕事で稼いだ自分のポケットマネーからそれを出した。
故に、土地も物件も湊が所有権を持っているのだが、本人は近いうちにタカヤにでもくれてやろうと考えていた。
「……ここ。少し前に買って、水道とか電気とか使えるようにしてあるから」

「買ったって、ミナト君そんなにお金持ってたの？」
「……選べば一晩で数百万稼げる仕事もあるから。それは良いけど、とりあえず案内する」
メノウに返事をしながら鍵を取り出すと、それを使って頑丈そうな黒い扉を開けた。
広い玄関に一同は少々驚いているようだが、湊は構わず靴をアンクレットにして家に上がる。そして、そのままリビングに向かおうとすると、玄関で靴を脱いでいたジンが呼びとめてきた。
「ちょ、ちょい待てって。わしらは暗くてよう見えんのや」
言われて振り返ると、タカヤとカズキはついて来ていたが、他の者は暗い玄関で靴を脱ぐのも苦労しているようだった。
影時間が明けていないので電気を点けられず、扉を閉めて月明かりもないとなると、確かに夜目が利かない者には辛いだろう。
そう考えると、湊は手に黄昏の羽根と同じ淡い光を纏って床に触れ、それから玄関の照明のスイッチを入れた。
「っ……電気が、点いた。影時間なのにどうして？」
「俺が黄昏の羽根の代わりをしてるからだ」
「本当にテメェは便利な野郎だな」
エルゴ研では研究所内で使う発電機にも黄昏の羽根を積んで動かしていたが、この家にそんなものはないように思えた。
ならば、湊はこの家だけでなく、電力の供給システムにまで干渉して動かしていることになる。
影時間において、ペルソナよりもこちらの能力の方が遥かに貴重だろうと、カズキが呆れた様に言ってきたが能力の詳細についてはなにも聞かなかった。
湊の能力は始まりこそ天然のペルソナ使いと同じであったが、半年後に目覚めて以降は根本的に変質して異端になっていたのだ。
それはベルベットルームの住人ですら原因や全容を把握できないほどで、観測できて初めて能力を理解できる状態にある。
いま行使している黄昏の羽根の代わりになるという力は、飛騨が持っていたエールクロイツの能力に湊が力を上乗せして、効果の及ぶ

対象と範囲を広げているだけだが、ベルベットルームの住人に分からない事をエルゴ研の職員が分かる筈もなく、エルゴ研の職員が分からない事を子どもの被験体らが理解できる筈もない。
よって、詳細など聞くだけ無駄だと、分からないことよりもこの家についてだけ説明を受ける事にしたのだった。
「とりあえず、上に女子部屋と男子部屋を作ってる。着替えも適当に置いておいたから、話す前に入浴を済ませてこい。タオルは風呂場に用意してるから」
「ンだよ、先に話せば良いだろォが」
この二ヶ月の間に起こった事、分かった事についてカズキは湊からすぐにでも聞きたいと思っていた。
本日の出会い頭の一撃、さらに躊躇い無く引き金を引いてきた事。それらは、研究所時代の湊の性格を考えれば、絶対にあり得ないことだ。
だが、今の湊はそれを簡単に出来るようになった。以前の湊はどこか甘いと思っていただけに、カズキにすればとても面白く歓迎すべきことである。
初めて訓練で一方的にのされた時から、いつか本気で殺し合いたいと思っていた。
その夢の相手がより相応しい状態へ成長する切っ掛けがなんだったのかを知りたい。そう思い、カズキは湊に意見した。
「お湯もタイマーで溜まるようにしておいたから、メノウはマリアとスミレと一緒に行ってきてくれ」
だが、湊は二階へと続く階段を指差して、女子らに着替えを取ってきてすぐに入浴するよう勧めている。
幼いマリアとスミレは湊の言う事を素直に聞いて、知らない家の中を軽く探検するような気分で階段を上がって行ってしまった。
カズキや湊のことが気になるが、二人だけを先に行かせる訳にもいかないと、一度振り返ってからメノウも階段を上がって行くのを確認して湊はリビングに進んでゆく。
その背中を見ながらイラついた様子のカズキをみて、ジンがフォ

ローのため尋ね直した。
「なぁ、ミナト。先に風呂を済まさなアカン理由でもあるんか？」
「あると言えばあるし、それほど重要でないとも言える。それでも、一応、意味はあるから、お前らも上で着替えを選んで準備しておくといい。早く話しを聞きたいのなら」
湊はしっかりと他の者の心情を理解していた。理解した上で、こんな焦らすような事をしているのだから始末が悪い。
聞いてゲンナリしたように脱力するジン、気に入らないと舌打ちをするカズキ、楽しそうに静かに笑うタカヤと三者三様の反応を見せ、しょうがなく湊の言う通りに準備をすると、女子たちが出てから順にシャワーを浴びに行ったのだった。
＊＊＊
順に入浴を済ましているうちに影時間が明けた。
最後に上がったカズキがリビングに戻ってくると、他の者はソファーや床にクッションを置いて座ったりしながら、テレビでニュースを見て寛いでいた。
だが、その中に湊とメノウの姿がない。一体どこへ行ったのかと傍にいたタカヤに尋ねようとしたところで、ある方向から鼻孔に香ばしい匂いが届いた。
「……なンの匂いだ？」
「さぁ？　匂いからすると、生姜焼きではないですか？」
「誰が作ってンだよ」
「ミナトですよ。メノウが手伝いをしていますが、味付け等はミナトがしています」
話しを聞いてからキッチンを覗いてみると、確かに料理をするため髪を縛った湊が無表情で生姜焼きを焼いていた。
その隣ではメノウが片手鍋の中身を混ぜているが、どうやらそれは味噌汁らしい。
温まったのを確認して、用意していたお椀によそってからお盆で運び始めたところで、キッチンの入り口にいたカズキに気付き、メノウが話しかけてきた。

「暇なの？　だったら、これテーブルに持って行ってよ」
「待て。先に説明しやがれ」
強引に味噌汁のお椀の載ったお盆を渡され、すぐに戻って行くメノウをカズキが呼び止める。
しゃもじを掴んだところだった相手は、やや面倒そうにしながらも振り返り、素っ気ない口調で返事をした。
「なに？　ボクも忙しいんだけど？」
「何じゃねェよ。これは何のつもりだって聞いてンだよ」
「ボクらの食事。ミナト君が作ってくれたから、心配する必要はないよ」
それだけ答えると、メノウは炊飯器からご飯をよそい始めてしまった。
よって、もうこれ以上は何も聞けないだろうと諦め、カズキはリビングに戻るとお盆をテーブルの上に置いてソファーに座った。
カップ麺以外の湯気のたつ料理など久しく見ていなかったため、自然と視線が集中してしまう。
だが、それはリビングにいた他の者も同じようで、寝転がってテレビを眺めていたマリアは起き上がって味噌汁のお椀を見つめていた。
「ごはん？」
「味噌汁だ、馬鹿」
「そういう意味ではないでしょう。我々の食事と言う意味なら、それで合っていますよ」
聞いてきたマリアに子供じみた返しをしたカズキを諌め、タカヤは微笑を浮かべて頷いた。
すると、マリアは隣にいたスミレと一緒に顔を輝かせて笑っている。
この二ヶ月の逃亡生活では、食事は影時間に盗んだ弁当や総菜ばかりで、温かいものと言えば昼に食べるハンバーガーくらいであった。
ファミレスや他の外食の店は大人が多くてあまり入る気になれず、それを避けていてそんな事になっていた訳だが、直接口には出さなかったが、全員がそんな食生活に限界を感じていた。

なので、いま用意されている食事は非常にありがたかった。
「夜食……には少し重いけど、食事作った。話しは食べ終わってからするから、先に食べて」
取り皿と箸とご飯の茶碗を持ってきたメノウと一緒にやってきた湊が、そういって二つの大皿に盛られた生姜焼きを皆の前に置いた。
そして、再びキッチンに戻ってお茶のペットボトルとコップを用意すると、スカートの中が見えないように綺麗に座りながら、他の者に食べ始めるように言う。
風呂で身体を綺麗にして、温かい食事を落ち着いた場所でする事が出来る。ずっと忘れていた〝安心〟というものを感じながらの食事は、六人に自然な笑みを浮かべさせていた。
＊＊＊
食事が終わり、湊が洗い物を終えて戻ってくると、他の者はお茶やジュースをテーブルに置いて待っていた。
本当はダイニングに上座と下座を合わせて十人座れるテーブルもあるのだが、子どもたちはリビングにある低いテーブルの方が好みのようだ。
そうして、マリアが自分の隣にクッションを用意していたので、そこに湊が座るとタカヤが口を開いた。
「貴方に料理が出来るとは思っていませんでした。外見的には違和感もないのですが、実に巧妙に隠されていた特技ですね」
タカヤの言った外見的に違和感はないというのは、湊が女装したままでいるためだろう。
実際のところ、このまま身体を鍛えながら成長していけば、体格からもう女性には見られなくなる筈なのだが、残念なことに湊はまだ二次性徴も迎えていない子どもである。
故に、タカヤは数少ない湊をからかえる話題として言ってみたのだが、今回の湊はそれを聞き流した。
「まず、制御剤は既に調合する薬剤師を見つけてある。実際に作らせて、比較して成分に問題も無かったし、金を払えば大丈夫だ」
「アンプル一つでナンボや？」

「発注はダース単位。細かい設定は棚の中のファイルにまとめておいたから、それを各自で読んでくれ」
言いながら湊は、『受胎告知』の画が印刷されたタイルがはめこまれた壁際の棚を指さした。
丁寧に付箋で『薬関係』や『家の管理費の支払い方法』など、それぞれの引き出しの中にどんなファイルを入れているのか書かれている。
エルゴ研では研究データを報告書形式にしていたりもしたので、こういった事務関係のことは性格的にも得意なのかもしれない。
「あ、家事の仕方も書いてある。ミナト君も出来るの？」
「専門的なのは無理。料理だって簡単なものしか作れないし、書いてるのは洗濯では洗剤をどれだけ使うかとか、そんなものだよ」
試しに引き出しを開けてみたメノウが尋ねると、湊は無表情のまま肩をすくめた。
料理など殆ど作った事がないし、家では掃除も洗濯も桜がしている。やり方は知識としては知っているが、実践したことのないものなど上手く出来よう筈もない。
けれど、子どもだけで生活するマリアたちが、ちゃんとした生活が送れるようにと、桜やイリス、眞宵堂に行ったときには栗原にも尋ねて、『子どもでも出来る家事ガイドブック』を製作したのだった。
その〝出来る〟の基準は、湊が何度か試して出来るようになったかどうかなので、マリアとスミレ以外は年上の人間ばかりのタカヤ達の方が上手くこなせると思われる。
実際のところ、男子はジンを除いて性格的に家事をしなさそうなので不安はあるが、女子で最年長のメノウは中身もしっかりしていて、面倒見も良いためとりあえずは大丈夫だろう。
「今後の予定だけど、とりあえずお前ら全員の戸籍を作る。それがなきゃ、色んな契約手続きも出来ないから」
「それもお金でどうにかなるのですか？」
「ああ。親とかに関しては適当になると思うけど、生年月日と名前は正しいもので作れる」

飛騨がコネを利用して作った湊とチドリのものほど隠すことは出来ないが、ちゃんと正式文書に利用できるものには違いない。
桐条側に見つかる可能性も上がるが、普段の生活でのメリットの方が大きいので、この場に居て話しを理解できている者から異論の声は上がらなかった。
その後も制御剤を調合してくれる薬屋の場所や、ここの周辺がどんな場所かという説明をして、ひとまず話しが終わると、続きはまた追々話す事にし、湊は他の者たちを休ませたのだった。
そして、翌日以降、湊は家での鍛錬、イリスや五代との仕事、ベルベットルームの依頼、マリア達に家事や仕事の仕方を教えるなど、非常に忙しいときを過ごすようになっていった。
――???
明かりのついていない暗い部屋の中にキーボードを叩く音が響く。
唯一の光源は男が操作するパソコンのディスプレイで、その光で部屋の中がわずかに照らされている。
机の上には本や書類が積み重なり、ここは作業中の男の書斎か研究室のようだ。
「ここは……よし、いいぞ……」
男の操作しているパソコンは、別のパソコン本体といくつものコードで繋がっている。
何のためにそんな事をしているのか不明だが、男は作業が上手く進んでいるようで口元を吊り上げている。
「よし、よし……っ、やったぞ！　ついに見つけた！」
ディスプレイに一つのファイルが立ち上がっている事を示すマークが表示される。
そうして、少し時間が経ってから、カルテのようなものと、ＰＤＦで文章データが表示され始めた。
いままで作業していた男は、椅子から立ち上がりそれらに目を通しながら嬉しそうに笑いだす。
「ハハッ、飛騨データの復元に成功した。これでエヴィデンスの秘密を知ることが出来る」

パソコンを操作する男の名は幾月、彼はエルゴ研から第八研のパソコンを引きあげて自分の家へと持ち帰っていた。
その目的は、飛騨の研究データと、湊の身体に施された改造の詳細なデータの入手である。
他の室長は湊の異常な身体能力をペルソナの恩恵として見ていたが、幾月は飛騨が湊に何かしたと睨んでいた。
もしも、そのデータを見つけることが出来れば、今後、同じレベルの身体能力を有した兵士を作ることも可能となる。
ラボの発足を進めながらも、自宅に帰ってはずっとデータの復元に努めてきた。
そうして、ついにいま、幾月は飛騨のパソコンから、〝飛騨データ〟と呼称することにした物を取り出し復元することに成功したのだった。
「そうか、そうだったのか。〝飛騨製人型特別戦略兵装二式〟、それがエヴィデンスの正式名称。神経や筋肉に処理を施し、機能をかなり強化しているな。だが、そのせいで細胞が変異し、十年もせずに急速な劣化が始まると……ふむ」
求めていた情報が手に入り、研究者としての視点から内容を詳しく読みこんでゆく。
そんな手法で施術が可能なのか疑わしいものもあれば、普通ならばまず患者が耐えられないと思われるものも存在する。
だが、データに書かれていることは、実際に全て湊の身体に施されたものであるため、それを行った飛騨だけでなく、耐えきった湊に対しても幾月はある種の畏怖の念を抱いた。
「執念、か。やつも自分の全てを賭けて叶えたい望みが……」
そう呟いたとき、背後で扉の開く音がした。
「お父さん？　大きな声を出してたけど、なにかあったの？」
「玖美奈（くみな）……」
幾月は声の主の方へ振り返ると、席を立って入り口へと近付いて行く。
部屋の入口に立っていたのは、幾月によく似た色の緩いくせ毛の髪

を肩まで伸ばした少女で、歳は湊と同じか少し年上と言ったところだろう。
時刻は既に深夜の二時をまわっているのだが、大きな声を出していた父を心配して起きてきたようだ。
夜も遅いというのに自分を心配して起きてきた娘を愛しく思い、幾月は膝をついて目線の高さを合わせて娘の頭を優しく撫でる。
「大丈夫だよ、玖美奈。お父さんは嬉しい事があって少しはしゃいでしまったんだ。起こしてしまって悪かったね」
「ううん、大丈夫なら別に良いの。でも、嬉しい事って？」
「ああ、前に言っていたエヴィデンスの秘密をついに見つけたんだ。やつはね、普通の人間じゃなく、肉体を改造した強化人間だったんだよ」
頭を撫でる仕草も、声色にも娘に対する優しさが感じられる。だが、笑っている瞳にだけは、黒い狂気が混じっている。
娘の玖美奈はそれを見ながらも、気にした様子もなく父に質問を続けた。
「改造って、ロボットってこと？」
「ああ、似たようなものさ。人型特別戦略兵装、つまり人間の姿をした兵器ということだからね。戦術兵装ではないというのがポイントかな。確かにあれは、戦いそのものを終結に導くだけの力を持っている」
エルゴ研の脱走時に湊が見せた力は全てではない。
あれは、エルゴ研を終わらせるために放った一撃であり、施設に残っていた被験体も巻きこんで全研究員を殺す気だったのなら、タナトスの一撃でエルゴ研の周囲数百メートルは全て融解していただろう。
複数のペルソナを同時に操る事も可能ならば、それだけ大規模な攻撃も数回は放てると見て良い。
存在そのものが桐条側を牽制している事も含め、非常に優秀な戦術兵器でありながら、湊はやはり戦略兵器であると言えそうだと、幾月はおかしそうに笑った。

しかし、そんな父の姿を玖美奈は心配そうに見つめて尋ねた。
「……そんな相手に勝てるの？」
「いまはまだ無理だ。でも、これで勝てるようになるかもしれない。何年かかるか分からない。それでも、私たちの夢を、あんな者に奪われる訳にはいかないんだ」
「うん、頑張ってお父さん。私もお父さんに協力するから。だから、絶対にあんなやつに負けないで」
親子二人はお互いを抱きしめ、自分たちの夢を阻む存在への勝利を誓った。
何も知らず生きてきた子どもに負ける事は出来ない。自分たちの夢には世界の滅びが不可欠なのだ。
邪魔をするのであれば、どんな手を使ってでも勝ちに行き、計画を阻まれぬよう命だって刈り取ってやる。
そう固く決意して、この日より、幾月はさらにペルソナの研究を進め、再び滅びが訪れるための方法を見つけ出してゆくのだった。

第一章　―Ｍｏｒａｔｏｒｉｕｍ―

第三十一話　中等部入学

２００５年４月３日（日）
影時間――タルタロス・１５Ｆ
牛ほどもある巨大なカブトムシ型のシャドウ、皇帝〝死甲蟲〟。同種のシャドウ三体が集まり、一人の少女を囲んでいた。
少女は長い緋色の髪を揺らしながら、拳銃を自分の喉元につきつけ引き金を引く。
「メーディア、全部燃やして」
《ルルゥ！》
呼び出されたペルソナ、刑死者〝メーディア〟は手に持った金の杯から炎を放ち、シャドウたちを燃やしてゆく。
相手は翅を震わせ逃げようともがくも、身体に燃え移った炎は敵を逃がしはしない。
そうして、炎が治まると、敵は全て消えていた。
だが、警戒は最後まで解かない。
目を閉じて周囲の敵の居場所を調べる。最も近い敵までは数十メートル離れていることが分かると、そこでチドリはようやく召喚器をホルスターに収めた。
「ふぅ……」
エルゴ研を脱走したあの日から既に五年の年月が経っている。
小さかったチドリも三十センチほど身長が伸び今ではおよそ一五〇センチで、二次性徴が始まりだしたことで体つきも徐々に女性的になろうとしていた。
そんなチドリは一つ息を吐くと、壁に寄りかかり近くで戦闘を見ていた湊の元まで進み声をかける。
「終わった」
「ああ、それじゃあエントランスに戻ろう」
答えて湊はチドリと並んで脱出装置へと歩き出す。

チドリに年月の流れで変化があったように、湊にも見た目の変化が出ていた。
トレードマークとなった黒いマフラーは変わらず巻かれているが、長かった髪はばっさりと切られ、今では肩にかかるかどうかという長さになり。身長もチドリと同じく三十センチほど伸びて現在およそ一五五センチ。
声変りはしたものの、まだ成長期を迎えていないため、このままいけば身長は一七〇センチを超えそうだと、桜も湊の成長を楽しみにしている。
体つきも筋肉がついたことで、服の上からでもがっしりとした体格である事が分かるようになり、いま女装をしても一目で男だとばれてしまうだろう。
「ここの敵、つまんない」
「今日の目的はベルベットルームで、戦闘はチドリの要望を妥協して聞いただけだ。明日から学校だというのに、本気になられても困る」
少々むくれた顔をするチドリに、湊は振り向かずに返して歩き続ける。
チドリがタルタロスで再びシャドウと戦うようになったのは去年の事で、昔は強いと思っていた敵も簡単に倒せるようになってしまった。
だが、裏の仕事は、学校生活に影響が出るからと未だにさせてもらえず、湊はこの五年間ほぼイリスとコンビを組んで仕事をしていた。
そのおかげで仮面舞踏会（バル・マスケ）の名はそれなりに知られるようになり、高報酬の仕事を任されるようになっている。
しかし、仕事をしていない人間の名は知られようがないので、仮面舞踏会は湊の偽名である小狼の個人チームか、またはイリスとのチームだと思っている者も多く存在した。
「私も仕事したい。銃だって覚えれば使えるようになる」
「使えるようになる必要はない。銃なんて、普通に日本で生活してる人間が使うものじゃない」
「今はヤクザの家の娘だもん」

淡々と返す湊にチドリも不貞腐れて言い返す。
二人は養子にはなっていないものの、組の人間からは〝若〟と〝お嬢〟と呼ばれるようになり、桜と同じく組の仕事には関わっていないが、命令一つで簡単に動いて貰えるだけの信頼関係を築いた。
そのことについて、組長である鵜飼は呆れて組員達を散々注意したのだが、鵜飼の孫のような存在である二人を守るのは当然だと、もはや言っても無駄な状態にあるため、変な事に組員を使わないよう二人に言うに留めている。
もっとも、湊・チドリ・桜の三人は、何かついでの用があるときに、必要になったものを組員に買って来てもらう程度のことしか頼まないので、密かに組員達がしたいと思っている、『組の宝を守るための戦い』は未だ実現していない。
仮にそんな事が起こるにしても、組の最大戦力である渡瀬と次点で強い湊を投入すれば、大概の組は壊滅に追い込めるので、実際に組員が活躍することはないだろう。
守る者より守られる者の方が強いというのは悲しいことだが、はっきり言えば湊の方がよっぽど危険な修羅場を潜ってきている。
奇跡的に生きていたなどという事も一度や二度ではないので、縄張り争いで他所の組のチンピラと喧嘩しているような連中が勝てるわけがないのだった。
「エントランスに戻ったら俺はベルベットルームに行ってくる。だから、少し待っててくれ」
「……」
湊の言葉にチドリは視線を逸らして答えない。しかし、ちゃんとついてきているので話は聞こえている。
そうして、脱出装置でエントランスに戻ると、湊はベルベットルームへの扉を潜った。
＊＊＊
全体的に青い空間、その名はベルベットルーム。
現実にすれば五年の歳月が流れたのだが、いまもこの部屋は一定の速度で上昇を続けている。

もしや、宇宙エレベーターなのではないかと疑った事もあるが、湊は部屋に来ると一切歳をとっていない力の管理者が次女に話しかけた。
「頼んでいたものは出来てるか？」
「はい。加工自体はそれほど難しいことではありませんので、既に用意しております」
答えながらエリザベスは湊の前にやってきて、黒い小箱をポケットから取り出し湊に手渡した。
受け取って湊は小箱の蓋を開けて中身を確認する。小箱の中には、シルバーの金属に濃い青色の石のついた小さなピアスが一組収められていた。
これはポロニアンモールにある、『Ｂｅ　ｂｌｕｅ　Ｖ』というアクセサリーショップで中学校への入学記念に先日チドリと買ったもので、湊が左耳に、チドリが右耳に付けることになっている。
だが、二人は仕事やシャドウとの戦闘などで、せっかく買った物が壊れてしまうのではないかと思った。
そこでベルベットルームという現実とは別のテクノロジーを持った者を頼り、ハンマーで殴ろうと壊れないよう加工して貰っていたのだ。
入学式を明日に控え、どうにか間に合って良かったと内心で安堵するが、それらは湊の表情には全く出て来ない。
すると、アクセサリーを受け取っていた湊に、仕事ではなくプライベート状態のマーガレットが声をかけてきた。
「子どもの癖に色気なんて出して、学校というのはそういった装飾品に厳しいものではないの？」
「子どもは自分で思っているよりもずっとガキだけど、大人が思っているよりは少し大人なものだ。他の人間がどう言ってこようと、新しい繋がりを奪おうとするなら、それ相応の対応をする」
ポケットに入れた小箱を手で遊ばせながら答える相手に、マーガレットは思わずため息を吐く。
湊はピアスを買ったときにチドリが嬉しそうにしていたので、その

表情を陰らしてまで校則は守らなくてはいけない物なのかと考えて発言したのだが、マーガレットには単なる我儘にしか聞こえなかったのだ。
テオドアはよく分かっていないようだが、エリザベスも苦笑している事から、湊の今の発言は少々子どもっぽい理屈に聞こえたらしい。
しかし、湊の優先順位はしっかりと理解しているので、あえてそこには触れず、別の話題に移した。
「それで、この度の依頼の報酬ですが、八雲様は私に一体何をくださるのでしょう？　よもや、〝お礼の言葉〟などという形にも残らない物だけで済まされる事は、当然ないと思っておりますが」
「……何が欲しい？」
「そんな、私から強請るなど滅相もございません。まさか、数日もの時間があったというのに何も用意しておられないとも思っておりませんし。八雲様ともあろう方が、親しい者を〝都合の良い女〟として扱う筈がございません。ですから、私は八雲様の〝感謝の気持ち〟を頂ければ結構でございます」
男女問わず魅了するような、綺麗な微笑を浮かべてエリザベスは妙に芝居がかったイントネーションを挿みつつ言い切った。
慣れた者にとっては、どこか人形めいた現実感のない作り物の表情なのだが、それだけに裏の本音も分かり易いため湊は少しばかり考え込む。
湊がいまのエリザベスの言葉から読みとった本音は『自分も何か欲しい４：湊の反応で遊びたい５：チドリとの仲に少し嫉妬１』といった感じだ。
理由の半分以上が、自分が困っている姿を見ることの時点で考える事を放棄したいが、相手も案外子どもっぽい性格をしているので、ここで何も渡さずに帰れば、次回ここを訪れたときに口を聞いてもらえなくなってしまう。
それで不都合があるかと言えば、湊には特にないのだが、拗ねたエリザベスのストレスの捌け口に末弟がなるのは忍びない。
そうして、湊が考えた末に選んだ〝感謝の気持ち〟は、エリザベス

を抱きしめることだった。
「っ……」
少年の背丈はまだ相手に追い付いていないが、逞しくなった体躯で細い女性の身体を強く抱きしめる。
力を込めれば簡単に壊れてしまいそうな、脆い美術品を扱うように丁寧な仕草で腕を腰にまわし、優しく髪を梳いて頭を撫でる。
その間、エリザベスは抱き返しもせず、湊にされるがまま黙って立っている。
すると、少年は相手の耳元に口を近づけ、男のものに変わり始めた低い声色で囁くように呟いた。
「ありがとう、エリザベス。本当に感謝してる。だから、また改めて礼をさせて欲しい」
「……フフッ」
若さに反して落ち着いた色気を感じさせる相手から、そっと胸を押して身体を離し、エリザベスは楽しげな表情で湊を見つめる。
身長はまだ足りていないが、抱きしめ方も手慣れた様子で対応としてはほぼ満点と言って良いだろう。それに次のアポイントの取り方も実に自然だった。
これが仕事のために身に付けられた技術であることは重々承知しているが、それでも受けてみて悪い気はしなかった。
そのため、エリザベスは〝また改めて〟に期待し、今回は湊を帰してやることにした。
「では、その時を楽しみにお待ちしています」
「ああ、次はちゃんと用意して会いに来る」
別れ際、湊はエリザベスの頬にキスを一つ落としてエントランスへと帰って行った。
長女はそれに眉を顰めたが、末弟はわずかに目を見開き、次女は触れられて熱くなった頬に手を当てて見送るだけだった。

4月4日（月）
朝――月光館学園・中等部

月光館学園。それは、巌戸台港区にある人工島〝辰巳ポートアイランド〟に存在する、広大な敷地を持った初等部から高等部まである私立校である。
その中等部の入り口となる校門には、『月光館学園中等部・入学式会場』という看板が立てられていた。
さらに、敷地内にある講堂の入り口には『月光館学園中等部・入学式』『ご入学おめでとうございます』と二つの看板が立てられているので、多くの生徒と保護者は、そちらで写真を撮っていた。
皆、明るい笑顔を浮かべて今日から始まる学校生活に胸を躍らせているようだ。
（ほーんと、皆、楽しそうだなぁ）
そんな中、校門の傍に立っていた茶髪の少女、岳羽（たけば）ゆかりは、両親と共に笑いあっている生徒を見て、僅かに表情を曇らせていた。
（お母さん遅いなぁ。先に教室に入っちゃおうかな？）
ここに彼女が立っている理由、それは入学式へとやってくる母親との待ち合わせのためだ。
ゆかりは、月光館学園への入学を機に学生寮へと入った。入学直前ガイダンスや学力テストを受ける必要があったので、入寮自体は三月の中頃に済ませている。
そのため、実家からやってくる母親とは、入学式の前に一度落ちあう事になっているのだ。
しかし、入学式は十時からだが、生徒は九時までに本日発表されたクラスの教室に一度行かねばならない。
高等部からは十クラスだが、中等部は六クラスで、寮で知り合った者が同じクラスにいるかなど気になっている事もある。
約束の時間は既に十分ほど過ぎているため、メールだけ送ってクラスを見に行こうかと思ったとき、薄いピンクのスーツを着た女性が声をかけてきた。
「ゆかり、遅れてごめんね」
「遅いよ、もう。遅れるときはちゃんと連絡してよ」
「ええ、次からは気をつけるわ。時間はまだ大丈夫？」

やってきた身なりの良い女性は、ゆかりの母親である岳羽（たけば）梨沙子（りさこ）。名家の出身で、そのおっとりした雰囲気から、かなりのお嬢様育ちであることが伺える。

だが、娘のゆかりは対照的にサバサバした性格で、時計で時間を確認すると、ムスッとした顔で母親に返した。

「結構、ギリギリ。あと十五分で教室にいかないと行けないもん」

「そう。じゃあ、写真を撮ったらお母さんは会場に行ってるね」

娘の言葉に笑って返すと、梨沙子は鞄からデジタルカメラを取り出して、講堂の看板のところへ向かいだした。

遅れてきたというのに、随分とマイペースなものだと、振り回される精神的疲労から思わずため息をこぼす。

しかし、追わない訳にもいかないので、母親の後を追おうとしたとき、校門の前に一台の車が止まった。

「うっわ、高そうな車。やっぱり、お金持ちだからって入学する人もいるんだぁ……」

月光館学園の学費は一般的な私立とそう変わらない。制服などは僅かに高かったりもするが、生地の丈夫さを考えると、決して高い物ではない。

だが、校舎の新しさや、学校内の備品は高級な物を揃えているため、学習環境の良さから裕福な者が子どもを通わせようとしたりもする。

ゆかり自身は、少しぎくしゃくしている母親と距離を開けたいことや、数年前に死んでしまった父の事で知りたい事があるため入学を決意したという事情があるのだが。

いま目の前で止まった車の主は、自分とは違う裕福だから入学を決めた者だろうと思い、思わずどんな者か確かめたくなった。

そして、運転席からサングラスをかけた強面の男が出てくると、校門側に回り込んで車の扉を開けた。

（うえっ!?　あ、赤髪にピアス？　それに、男子もピアスにチョーカーにマフラーって装飾品多過ぎでしょ。学校に何しに来てんのよ）

降りてきた者を見て、ゆかりは心の中で思わずツッコミを入れてしまった。

助手席から降りてきた母親らしき着物の女性の若さもツッコミ所だが、それよりも制服を着た女子と男子の方が人目を引いている。
一人は真っ赤に髪を染めて右耳にピアスをした女子。一人は左耳にピアスをして、首には黒いマフラーとその下に何やら石のついたチョーカーを着けている男子だった。
二人に笑顔で話しかけている母親の雰囲気は、どこか自分の母親と似ているように思ったが、子どもは笑顔も見せずつまらなそうにしている。
そんな異色な存在に暫し視線を奪われていると、梨沙子が不思議そうに自分を待っていたので、彼らと同じクラスにならない事を祈りながら、近くにいた家族に写真を撮ってもらい、ゆかりはクラスを確認すると教室へ向かったのだった。
＊＊＊
（この世界に神様なんていない……）
教室から講堂へと移動してきて、生徒用の席についたゆかりは心の中で呟いていた。
二・三年は定期考査の成績が基準となるが、一年のクラスは入学前に受けた学力テストの成績を基準に決められていると寮の先輩から聞いた。
となると、自分のクラスに新入生代表の挨拶を務める〝真田（さなだ）　美紀（みき）〟という生徒がいたことから、バランスを取るため必然的に成績の悪かった者が割り振られることになる。
今まさに、黒のリボンをカチューシャのように結んだ姫カットのその少女が壇上で代表の挨拶をしており、実に堂々として様になっているというのに、隣でポケットに手を入れたまま寝ている黒マフラーのクラスメイトを見て、こいつがバランスを取るための成績下位者なのは確定だと思わずため息を吐きたくなるのはしょうがなかった。
（つか、赤髪の子も同じクラスって、二人揃っておバカさんなのね。兄妹にしては似てないけど、親もちゃんと躾けなきゃ退学になるわよ？）
出席番号の関係から赤髪の女子は離れているが、同じクラスである

ことは既に確認している。
二人が揃って教室に入ってきたときなど、今まで話していた声がピタリと止まったくらいなのだから。
『――挨拶とさせて頂きます。新入生代表、1年D組、真田美紀』
そんな風にゆかりが考えていると、新入生代表の挨拶が終わっていた。
生徒や保護者からの拍手の中に、「うおぉぉぉ！　美紀ぃぃぃ!!」という奇声が混じっていた気もするが、何にせよ会場内はかなり五月蝿い状態だ。
だというのに、隣の男子はずっと眠ったままでいる。寝息も聞こえず、顔の血色も悪いように見えるため、本当に大丈夫なのか少々心配になったゆかりは、相手の肩を揺らし小さな声で話しかけた。
「ねぇ、君、大丈夫？　気分悪いの？」
「……なにか言った？」
「いや、顔色悪いし……あれ？　戻ってる？」
声をかけると相手は目を覚ました。近くで見ると、相手の瞳が金色をしていることに気付くが、それよりも先ほどまであんなに悪かった顔色が戻っている。
その事を不思議に思いつつ、とりあえず大丈夫そうなら良いかと、ゆかりは相手に声をかけた理由を話すことにした。
「えと、寝てたから、気分悪いのかなって思って。大丈夫なら、別に良いんだけど」
「別に、問題ない」
「そ、そっか。気分悪くなったら言ってね。先生呼んであげるから」
引き攣った笑顔でゆかりが返すと、相手は軽く頷いて再び寝始めてしまった。
教育委員長など来賓の挨拶はゆかりも興味が無かったので、特に意味はなかったが暇つぶしに寝顔を見つめていると、徐々に顔色が悪くなっていることに気付く。
やはり、先ほどのことは見間違えではなかったようだ。
（寝ると顔色悪くなるって大丈夫なのかな？　体質にしても、検査と

か受けた方が良いと思うんだけど）
俯いて顔が影になっていても、明るい場所では顔色の悪さがはっきりと目立つ。自分は相手の顔色の変化の規則性を偶然にも理解したが、知らない者には一種の恐怖となるだろう。
小学校と同様に、中等部に入ってからも校外学習や修学旅行で何泊かすることもある。
教師側には家族から事情の説明がいくと思われるが、同じ部屋で寝る事になった者たちは、きっと困惑してトラウマになる者もいるのだろうなと、ゆかりはいまこの時点で同情を禁じ得なかった。
「……ねぇ、それって体質？　先生、呼ばなくて良い？」
未来でトラウマを覚える相手に同情した矢先、ゆかりは再び男子に声をかけていた。
心配症というより、身近な場所で困っている人がいたら、つい手を差し伸べずにはいられない面倒見の良い性格をしているらしい。
小さな声なのでまわりには聞こえていないが、周囲から浮いている男子に話しかけていることには、他のクラスメイトも気付いている。
冷たい雰囲気と、ピアスを開けていることから、既にまわりからは不良と思われている相手に話しかける。そんな勇気の要ることを実行に移したゆかりをまわりはジッと観察した。
すると、話しかけられた男子は、ゆっくり目を開けた。
「……お前が何を言ってるか分からないけど、呼ばなくて良い。ただ寝てるだけだ」
「お、お前って言った？　ちょっと、初対面の相手に失礼だよ？」
「……どうでもいい」
「なっ!?」
人を〝お前〟などと呼んでおきながら、それを注意されると今度はどうでもいいと切って捨てた。そのあまりに非常識な態度にゆかりは頭に血が上るのを感じる。
入学式というめでたい場で、大声を出して怒鳴りつける気はない。
しかし、これから最低でも一年は同じクラスで机を並べて勉強していくのだ。その最初の時点から、このような態度は良くないだろう

と、声を抑えて注意する。
「あのね、私は貴方を心配して声をかけたの。それで〝お前〟って言われたのが気になったから、そういうのは良くないよって言ったわけ。なのに、〝どうでもいい〟はないでしょ？」
「〝心配して頂いてありがとうございました。自分は大丈夫なので、気にかけて頂く必要はありません〟」
「そっちはもう良い。つか、棒読みで言うな！　ったく、どんな躾け受けてんのよ。とんだ我儘プーったらありゃしないわ」
最初に感じた不良という印象、それは決して間違いではないが、ゆかりは少しの会話でどちらかと言えば不真面目なのだなと認識を改めていた。
相手の人間性はまるで知らないが、体調を気遣ってくれた初対面の相手にここまで馬鹿にした態度を取るのだ。それがまともな性格のはずがない。
桜も咲いている春にマフラーを巻いているのも不自然だが、中等部では校則で禁止されている筈のアクセサリーをいくつも着けている。
親が金を払って学校に黙認するよう口利きした可能性があるにしても、校則を破って自分のしたいようにしている相手に、ゆかりは呆れを通り越して、むしろ自分が更生させてやろうか思い始めていた。
「私は岳羽ゆかり、〝お前〟じゃない。そんな呼び方をされても返事をする気はないから、そのつもりで、よ・ろ・し・く！」
「たけば……ゆかり？」
「そう、山岳の岳に、鳥の羽根で岳羽。ゆかりは平仮名よ」
自己紹介をして名前を教えると、男子は目を少し大きく開いてゆかりを見つめ返してきた。
別によくいる名前ではないが、それほど珍しくもなければ、所謂、ＤＱＮネームやキラキラネームと呼ばれる類いの物でもない。
だというのに、何が気になるかと思いながら見ていると、男子は俯いてボソボソと何かを呟いている。
「岳羽……ゆかり……」
「合ってるよ」

ちゃんと名前を覚えようとしているのか、男子はゆかりの名前を俯いたまま呟く。
男子に名前で呼ばれる事など殆ど経験がないのでこそばゆい気もするが、今はフルネームで言っているだけなので気にしない。
しかし、相手はまだ俯いて呟き続けている。
「……岳羽ゆかり」
「そうだってば」
「岳羽」
「しつこいわ！　合ってるって言ってるでしょうが！　そんなに何度もフルネームで呼ぶな！」
「……最後は呼んでない」
意味もなく名前を呼ばれ続け、ゆかりは耐えきれず思わず怒鳴っていた。声量は抑えているが、周囲の者たちには聞こえていたため、その視線は二人に集中している。
だが、ゆかりは感情が昂っているため気付いていないようである。
そして、彼女をそんな状態にした張本人は、どこか遠くを見ているような虚ろな瞳でゆかりをジッと見つめた。
「……」
「なに？　ってか、君の名前は？　私が名乗ったんだから、君も名前教えてよ」
「名前は、有里湊」
相手に言われた事で名乗り、湊は携帯のメモ画面で自分の名前を打ち込んで、ゆかりにどんな字を書くのかを見せた。
一度見たら当分忘れられない目立った容姿だが、一応、教えられたばかりの名前と顔をちゃんと覚えて、自分の中ですぐに一致するようにしておく。
そうして、相手が携帯を出していたので、ゆかりは式の進行具合に目をやり、まだまだ時間が掛かる事を把握すると、自分も中学への入学を機に先月買ったばかりの携帯を取り出した。
「連絡先、一応、交換くらいしとく？」
「……先に送る」

「了解。はい、どうぞ」
赤外線でデータを送り合うため、お互いの携帯のＩｒＤＡを向けあって、電話番号とアドレスを交換する。
ゆかりは、母親と親戚以外では寮で知り合った者と交換しただけなので、登録された湊のアドレス番号はまだ若かった。
しかし、まだ持って間もないため、たった一人増えただけでも何やら嬉しくなってくる。
知らず緩んでいた口元を湊がジッと見ていたが、少しするとそれも治まり、ゆかりは携帯を仕舞って湊に話しかけた。
「有里君さ、あの赤髪の子と兄妹なの？」
「違う。同じ家で暮らしているけど、別に親戚という訳でもない」
「そうなんだ。だから、同じクラスになれたのねぇ。普通、兄弟姉妹って同学年でも別クラスになるもんだし」
どうして一緒に暮らしているのかも気になるが、流石に急にそこまで聞くのは失礼だろうと、自分の中で湧いた好奇心を抑え込む。
兄妹でないなら、少なくとも同じクラスになるために不正な事をしたわけではないはず。
ならば、もう一つの質問の答えによって、相手が家の力を使って傍若無人な態度を取る者ではないと、いま抱いているマイナスのレッテルを取り払うことも出来るだろうと思った。
「もう一つ聞きたいんだけどさ。髪染めるのもだけど、カラコンとかピアスって中等部の校則では禁止されてたよね？　そういうの気にしたりしないの？」
「……俺の目も、チドリの髪も自前だ。治療の副作用みたいなもので、色素自体が変化したから、治しようがない」
「え、あ、そうなんだ。ごめんね、知らずに失礼なこと言って。でも、ピアスは？　君、さらにチョーカーとかも着けてるよね？」
「別にファッションじゃない。大切な人との繋がりのために着けてる。だから、外せっていわれても聞く気はない」
「つ、繋がり、ね……」
ファッションかと思いきや、中々にシリアスな雰囲気でしっかりと

言い切られてしまっては、中途半端な優等生っぷりを見せようとしていたゆかりも言葉に詰まってしまう。
流行だからと、整髪料で髪を立てていたり、だらしなくズボンを下げている男子よりは清潔感もあって、自分の中では不快さを感じない。
もちろん、本人の雰囲気も相まって他を寄せ付けない威圧感は放っているが、話してみると普通に受け答えをしてくれるため、ゆかりとしてはクラスメイトとしてやっていけそうだと認識を改めたところだ。
そんな相手が、我を通そうと言うからには、きっと大切なものなのだろう。
湊が我を通すため、もしも校則を改定させることが出来れば、自分もアクセサリーでお洒落したいと思っているので、ゆかりもその我儘から来る行動力に密かに期待を寄せるのだった。
昼――教室
入学式が終わると、生徒達はホームルームに戻っていた。講堂では入学式に続けて保護者向けの説明会をしているので、生徒らにも今後の行事予定などの連絡をするのだ。
ゆかりのいる1―Dは教室棟の四階にある。生憎と、街や海があるのは廊下側なので、教室の窓から見えるのは学校の中庭や体育館だが、ゆかりは窓から二列目のため、どちらにせよ見る事は出来なかった。
講堂で座ったときには一列の折り返しの人数から、湊とゆかりは隣同士だったが、教室では湊は窓際一列目の前から二列目、ゆかりは窓際二列目の前から五列目と随分離れていた。
むしろ、教室で湊の隣なのは、新入生代表という学力テストで一位の者が務める係となった真田美紀の方だ。
現在は担任が話しているため話しを聞いている両者は喋っていないが、〝優等生の美紀〟が〝不良の湊〟に何かされはしないかと、外見のみで判断して勝手なことをクラスメイトたちは心配していた。
そのことについて、ゆかりが僅かに湊の方を心配していると、

「えっへへー、私はこれから一年あなたたちの担任を務めます〃佐久間（さくま）　文子（ふみこ）〃です。私も皆と一緒で今年学校にきたばっかりの新米だけど、一緒に頑張っていきましょうね」
　カツカツとチョークの音をさせながら、自身の名前を黒板に書いて、スカートタイプのリクルートスーツを着た紫がかった長髪の女性教師が挨拶をした。
　教師一年目で、いきなり担任を持つこととなり普通は緊張するようだが、教壇に立っている相手は気にした様子もなく、ニコニコと満面の笑みを振りまいて生徒をみている。
　耳の後ろ辺りの髪を三つ編みのようにして左右とも肩から前に垂らしているが、動くたびにそれをふわりと揺らして、教師というよりお姉さんのような感じで生徒に慕われそうな印象だ。
「まだ時間はあるから、皆も自己紹介をしていっきましょー。名前・これから頑張っていきたい事・一言、その三つで自己紹介してください。それじゃあ、出席番号一番、相沢さんお願いしまーす」
「はい。相沢友子です」
　湊の前の席の女子生徒が立って自己紹介を始めた。その後ろで、湊は連絡事項をメモしていた手帳を見つめて、暇そうにしている。
　すると、すぐに湊の番がやってきた。教師に呼ばれ、湊は左手をポケットに入れたまま立ち上がる。
「有里湊。とりあえず、クラスメイトの顔と名前を覚える。どうぞよろしく」
「えっとー、クラスの皆の顔と名前を覚えるっていうのが、頑張っていきたい事なのかな？　じゃあ、先生とどっちが先に覚えるか競争だね。はい、ありがとうございましたー」
　淡々とした自己紹介にクラスメイトの何人かの表情が引き攣った。けれど、楽しそうにしている担任は、それに気付かなかったようで、湊を静かな生徒と認識したらしい。
　そうして、笑顔で上手い具合に進行させてゆくと、山岸という生徒の自己紹介が終わり、最後であるチドリの番がまわってきた。
　長い赤髪という、湊の黒マフラーよりある意味目立つ存在に、クラ

スメイトの注目が集まる。
顔の造形こそ整っているが、無愛想なため少々きつ目に見え。教室でも講堂でも、まわりをずっと無視していたのだ。
そんな相手が、一体どのような自己紹介をするのか、皆の注目が最高潮に達したとき、チドリが口を開いた。
「吉野千鳥。部活っていうの？　それにでも入ってみたらって湊に言われたから、見学はするつもり。よろしく」
「吉野さんは、どんな部活に入りたいのかな？」
「どんなのがあるか知らない。けど、美術部とかその辺りが妥当って聞いてる」
挨拶を終えた後も担任はチドリに話しかける。他の生徒にも同じようにしていたので、単純に相手とコミュニケーションを取ることが目的なのだろう。
他の生徒が軽く尊敬するほど、佐久間は自然にチドリと話を続けている。
「聞いてるって、さっき言ってた人から？」
「そうよ。湊なら、そこにいるでしょ」
「あっ、そっか、有里君のことだったのね。吉野さんと有里君はよく話すの？」
「家、一緒だもの」
チドリが答えると、佐久間は少し驚いた表情で、手元にある帳簿を開いて何やら読み出した。
生徒の名前などは事前に把握しておいたようだが、流石に住所までは見ていなかったらしく、開いてほぼすぐのページと後ろの方のページを交互に見て、「わお！」と驚きつつ感心したように頷いている。
他の生徒達も、佐久間の反応からチドリの言葉が真実だと理解したようだ。
「そうだったんだぁ。じゃあ、お休みのときの連絡とかは頼んじゃおっかなー」
「……多くないならね」
表情は面倒くさそうだが、チドリは佐久間の言葉に小さく頷いて了

承した。
湊と同じように周囲から浮いているが、相手を無視したりはしない辺り、見た目よりも付き合い易いのかも知れない。
そんな風にゆかりが思っていると、佐久間は帳簿やファイルを片付けながらホームルームを締めくくった。
「それじゃあ、時間だから今日はこっこまでー。明日は身体測定だから、体操服を忘れないでねー。全員起立、礼」
『ありがとうございました』
「気をつけて帰ってねー」
教室を出ていく生徒に佐久間は笑顔でブンブンと手を振っている。それを眺めながらゆかりも鞄を持つと立ち上がった。
湊とチドリの出現により、最初は今後の学校生活に不安を覚えたが、実際に接してみると悪い人でないという印象だった。
教師も中々に良い人そうなので、ゆかりは今後の学校生活に期待を持ちつつ、母親と一度落ちあってから寮へと帰って行くのだった。

第三十二話　前篇　部活―立案―

――???

人は極稀にだが夢を見ているときに、自分が夢を見ていると認識出来ることがある。

それは一般に明晰夢（めいせきむ）と呼ばれており、実際に明晰夢を経験した者によると、夢だと自覚した後は内容をある程度思い通りにコントロールする事が出来ると言われている。

だからと言って、明晰夢を見た全ての人間が夢の中で好き勝手に行動できるかといえば、それはまた別の話であり、単に自分が自覚を持って観客でいられるというだけであったりもする。

そうして、普段は夢など見ずに、ベルベットルームで鍛錬したりファルロスと会話をしている湊も、今日は自分が過去の記憶を夢で見ていると自覚しながら目の前の光景を眺めていた。

「ほら、八雲君、これが娘の写真だよ。ゆかりって言うんだ。とっても可愛いだろ？」

初等部の敷地内にある木陰のベンチに幼い湊と岳羽詠一朗が並んで座っている。岳羽の手には、バースデーケーキの前で満面の笑みを浮かべている幼いゆかりの写っている写真が握られていた。

ジュースを飲みながら垂らした足をぶらぶらとさせている湊は、ゆかりの姿を見て眉を僅かによらせると、子どもらしく自分が思った意見を素直に述べる。

「えー？　んー……まぁ、ふつうかな。七歌（ななか）と大してかわんないとおもう」

「なっ!?　ちゃんと見なさい！　ほら、どこをどう見ても天使だろう！」

湊の言葉に驚いた岳羽は、すぐに慌てた様子で写真を湊の顔の前に突きつける。

そこまで至近距離になると、焦点を合わせられず、ぼんやりとしか見えないはずだが、幼い湊は気にせず岳羽を見ながら言葉を返した。

「天使はほんらい性別がないそんざいっていわれてるけど、きほんて

きには男性的なとくちょうでかかれてるんだよ？　ゆかりちゃんって男なの？」
「女の子だ！　将来は梨沙子に似てかなりの美人になるに決まっている、とても可愛い僕の自慢のム・ス・メ！」
「あと十年もしたら、おじさんの誕生日でも〝わたし、今日は彼氏とデートだから〟って言ってるよ」
「そ、そんな事は言わない。ゆかりは十年後でもパパって呼んでくれて、僕に抱きついてくるはずだ」
　小学一年生とは思えぬ変にリアリティのある冷めた言葉に、岳羽は思わず想像してしまったのか、顔を僅かに青くしながら否定した。
　だが、十年後の自分の娘は間違いなくモテる。他校の生徒にすら噂が広がり、〇〇高校のマドンナと呼ばれて毎日男どもに交際を申し込まれるに違いない。
　そんな風に考え、優しい娘が交際を断る度に心を痛める姿を幻視して、あまりの健気さに目に滲んだ涙をハンカチで拭いた。
「うぅ、ゆかり……。大丈夫だ、身の丈を弁えない男子が悪いんだ。交際を断る度に、お前が心を痛める必要はないんだ……」
「恋に恋して一人目でつきあうかもしれないじゃん」
「だから、君はどうして変に冷めてるんだ！　おじさんの心を抉って何か楽しいのかなっ!?」
「ま、それなりに」
　そう返して湊は紙パックの中身を飲み乾し、少し離れた場所にあった屑カゴに空の紙パックを投げ入れた。
　縁に一切触れずに綺麗に入ったのを見て、げんなりしていた岳羽も思わず感嘆の声を漏らした。
「ほう、やっぱりすごいね。特別な訓練はしていないんだろう？　それでそんなに見事なコントロールを持つのか」
「お父さんは下手だけど、僕とお母さんは血すじなんだって」
「それはすごいな。動物だと品種を固定化するために、何代にも亘って運動性能や身体的特徴の似た個体を掛け合わせるんだ。そうする事で、足の速い馬を作ったり、身体の小さな犬を作ったりするんだよ。

八雲君たちも、運動が得意な人が祖先に沢山いるのかもしれないね」
学者である岳羽は真剣な表情で考察しつつ説明すると、最後は湊と母親の血筋とやらのすごさを褒めて笑った。
そして、腕時計で時間を確認した岳羽は、休憩時間がそろそろ終わるのか、膝に手をついて立ち上がり、二人を見ていた湊の方を向いた。
「いつか、八雲君が僕の娘に会ったら、そのときは仲良くしてあげて欲しいと言ったね。優しい子だから、八雲君みたいな強い子が守ってくれたらおじさんも安心だと。今でも、まだあのお願いは有効かな？」
「――――――」
夢の中の湊は声を出す事が出来なかった。だが、確かに湊の言葉を聞いた岳羽は、嬉しそうに笑っていた。

4月6日（水）
朝――1―D教室
入学式を終え、翌日は身体測定とクラス単位での学校内の施設巡りをした。
午後からは部活案内ということで、新入生に入部してもらうため、各部が独自性に富んだ活動案内とアピールをしたのだが、岳羽ゆかりが興味を持つような部活は去年の夏のオープンスクールの時点で興味を持っていた弓道部しかなかった。
クラスの男子の何人かは、袴を着て凛とした姿を見せる女子の先輩に視線を奪われていたが、ゆかりは純粋に格好良いなと思った。
だが、残念ながら運動部に入れるのは四月の終わりごろで、それまでは何もする事がない。
折角、親元を離れたといっても中学生ではバイトも出来ず、当分は帰宅部として学校と寮を往復するような生活になることだろう。
それはあまりに味気ないなと思いながら上履きに履き替えて、階段を登って四階にある教室を目指す。
（はぁ、なんで一年が四階なんだろ……）
運動は嫌いではない。しかし、朝から階段の上り下りは実に面倒で、身体の未熟な最低学年に最もきつい運動をさせる学校へ、不満を

小さくこぼすのも仕方がなかった。
（せめて、三階だったらねぇ。ってか、文化部の部室を別の棟にしたら良いのに、本当に変なの）
月光館学園の中等部と高等部は、教室棟は四階建てで上の階から順に一年、三年、二年、文化部の部室という構造になっている。
部室以外にも科学室や被服室も入っているが、それは放課後にはそれぞれ科学部と家庭科部が使用しているので、文化部と全く無関係という訳ではない。
授業での移動がフロア移動のみで少なく済むというメリットがあるのかもしれないが、ゆかりとしては前に通っていた小学校のように、専門教室は別館に集めた方が楽だと思えた。
そんな風に、学校の構造について考えていると教室についた。何人かの女子が挨拶をしてくるので、それに返事をして自分の席に鞄を置いて座る。
今日から実際に授業が始まるため、沢山のノートと教科書を鞄から取り出し机に入れた。
（授業ついていけるかな……一応、ここの高等部って上位は超難関大学に進めるくらい頭良いらしいし、定期テストの順位が貼りだされるのも嫌だなぁ）
教材を机に仕舞い終えると、ゆかりは来る途中に買ってきていた紙パックのジュースを飲みながら少々だらける。
実家に住んでいた頃、家に届いていた通信教育の案内の宣伝漫画を読んだのだが、中学校の授業は小学校のように生徒が分かるまで熱心に教えるような事はしないと書いていた。
授業の進行ペースが決まっているので、分からない生徒がいても単元を進めていき。生徒は必死に黒板を写さなければならない。
だが、黒板を写すことばかりに気を取られ、教師の話を聞けていないと、後でノートを見ても理解できない。
けれど、理解しようと教師の話に集中していると、黒板を写すのが疎かになって、ノートはスカスカで全く役に立たなくなる。
（だから、頑張って予習をして、授業に出てくる言葉を理解できるよう

にしておきましょう、ってね。けど、知らないものを自分だけで勉強するのって難しくない？　私、出来る気しないわ）
授業に乗り遅れるのは嫌だが、そもそも自分で単元を先取りして勉強出来ると思えない。
故に、ゆかりは授業では自分で頑張るが、テスト前などは分かる人に聞きながら勉強していくスタイルで行く事に決めた。
そうして、だらけていた姿勢を正し座りなおしたところで、教室で喋っていた生徒らの声のトーンが急に下がり静かになった。
このクラスになって三日目だが、同じ現象は昨日も一昨日も起きている。そう、湊とチドリが登校してきたのだ。
「あ、吉野さん、その、おはよう」
「……ええ、おはよ」
教室に入ってそれぞれの席へと別れると、勇気ある事にチドリの前の席の山岸という女子が挨拶をしている。
席について鞄の中身を仕舞っているチドリが、それを一瞥して反応を示すと、すぐに視線を外され女子は戸惑っているようだが、ちゃんと返事をしてもらっているだけもう片方よりマシだとゆかりは思った。
チドリと同じように、湊の傍の席の女子が恐る恐る挨拶をしている。しかし、湊はイヤホンを耳にはめたままで、完全に無視しているのだ。
あれは本当に聞こえていないのか、それとも反応が面倒で、音楽を聴いていて聞こえなかったという理由を作っているのかは分からない。
しかし、今後の事を考えると、その反応もどうだとゆかりは湊にメールを送ることにした。
（後ろの席の子が挨拶してるけど、聞こえてないの？　っと）
素早く文面を打ち終わり、最後に送信ボタンを押して湊をジッと見つめる。
すると、届くまで十数秒のラグが存在したのか、少ししてから湊が携帯を取り出した。

たった一文なので、読むのに時間がかかるとは思えない。実際に、湊もすぐに読み終えたのだろう。
携帯をポケットに仕舞うと、イヤホンを外して挨拶をしていた女子に、
「ごめん、聞こえてなかった。おはよう」
と、感情のほとんど籠もらない声で返した。
自分が挨拶をしてから一分は経っていたので、挨拶をされた女子は驚いたようだが、雰囲気はともかく見た目と声はクラス内でも飛びぬけて良い湊に話しかけられ喜んでいるようだ。
その後は、湊は再びイヤホンをつけて目を閉じてしまったので、女子たちと会話が続くことはなかったが、先ほどまでの嫌な雰囲気は多少薄れた。
なんで自分が世話を焼いているんだと苦笑しつつ、ゆかりは朝のホームルームが始まるまで、人付き合いが不器用そうなクラスメイトを眺めて過ごしたのだった。
午前――教室
「んっふふー、これ一回目の中間テストで絶対出しますからね。サービス問題だよー」
そう言いながら、楽しそうに佐久間は黒板に書いた、『アウストラロピテクス』という単語を指示棒で指した。
佐久間の担当は社会科で、高学年になると世界史を主に担当するようになる。
指示棒は自分で買って来たと自慢げに生徒に話したり、何かと子どもっぽさが見られるが、ゆかりとしては非常に分かり易く、ペースも早過ぎないので良い先生だなと思えた。
何より、ノートも必要ではあるが、基本は佐久間自作のプリントを配り、それに重要語句を穴埋め形式で記入して授業を進めていくので、教師の話を聞きながら重要語句を覚える事が出来る。
他の教科では、こういった教え方は難しいのかもしれないが、他の教師は出席を取り、自身の自己紹介をすると、ほぼすぐに授業を進め出したので、ゆかりの中での教える上手さランキングは佐久間が単独

トップである。
（良い先生だなぁ。高校と大学が女子校で、彼氏がいたことはなかったらしいけど、こりゃ男子の中から告白する冒険者もでるかもね）
教室を眺めてみると、真面目に聞いているようで佐久間の姿を目で追っている男子が何人か確認出来る。
恋愛面で鋭い者ならば、そのうち幾つかが恋慕の情を宿し始めていることにも気付くだろう。
佐久間は経歴からすると、どちらかと言えば箱入りのお嬢様育ちのようなので、生徒から告白されれば真剣に悩んで寝込んでしまうやもしれない。
そうなると、佐久間自身が可哀想な上、自分たちも迷惑を被るので、馬鹿な真似だけはしないでくれとゆかりは心の中で密かに願った。
「アウストラロピテクスはね、大人でも一四〇センチくらいしかなくて、脳も現代人よりとっても小さかったの。あ、誰か現代人の脳の容積は知ってるかな？　このクラスは入学前の学力テストでとっても優秀な子が集まっているので、知ってる人もいると思うなー」
ゆかりが今後の学校生活の安寧を願っていると、ニコニコと笑いながら佐久間が教室を見渡していた。
〝アウストラロピテクスの脳容積は約５００ｍｌ〟と書き足され、その後に即興で問題を考えたらしい。
生憎と、ゆかりは自分たちの脳の容積など知らないので答えられないが、自分の三つほど前に新入生代表を務めた真田美紀という存在がいる。
学力テストでトップを取った者が答えられなければ、他の者も答えられないだろうと思ってみていると、佐久間が美紀に視線を送った。
「それじゃあ、真田さん。真田さんは現代人の脳容積は知ってる？」
「えと、分かりません。２０００ｍｌくらいですか？」
「んー、惜しいけどハズレでーす。それじゃあ、隣の有里君、正解をズバッと言ってあげてー！」
笑顔で期待に満ちた眼差しを送る佐久間。だが、教室にいた他の者たちは、なぜよりにもよって湊を指名したのだと、思わず心の中で

ツッコミを入れていた。
当てられた本人は板書がないときは、窓の外を眺めたりしていて、反応までに数秒のズレが存在する。
しかし、話自体は聞いていたようで、アンニュイな表情で佐久間の方へ振り返った湊は、低いがよく通る声で答えた。
「……成人ならおよそ１４００ｍｌ前後、人類の進化の過程で脳容積２０００ｍｌは流石にいなかったけど、進化で途中分岐したネアンデルタール人なら１７００ｍｌくらいはあったと思われるものも確認されている」
「大正解！　有里君が言った通り、ネアンデルタール人って脳容積が大きい種族がいたんだけど、それは私たちの直接の祖先ではないの。それはもう少し後で習うから、そのとき詳しく説明するね。それじゃあ、授業を進めていっきまーす！」
湊が答えると、佐久間は満面の笑みで授業を進め出した。しかし、ゆかりは湊が美紀も分からなかった問題をすらすらと答えた事で、軽い混乱を覚えていた。
（なんで⁉　有里君って我儘プーのお馬鹿さんじゃなかったの⁉　ってか、先生も正解すると思って当てたってことは、実は成績上位者？　うっそぉ、見た目は舐めてるのに、そんなスペック高いとか卑怯でしょ……）
相手を見下していたつもりはなかったが、心のどこかで自分よりも成績下位がいることに安心感を覚えていた。
けれど、それは全くの勘違いで、相手は隠れた知的キャラであり、クラスでトップと思われていた人物よりも、いま確認しただけでも社会科や生物に関する知識については上だったのだ。
家は金持ち――と思われる――で、顔はクールなイケメン、身長もクラスでは高い方で運動が出来そうなしっかりとした身体付き。そこに頭の良さまで加わるとなると、ゆかりには性格と雰囲気と人付き合い以外に悪い点が見当たらなかった。
無論、その時点で十分に駄目人間に分類されるのだが。
（うぅ……なんだろ、すんごいヘコむ……）

その後、授業自体はちゃんと受けていたが、ゆかりは湊に対して抱いた疑問のせいで、どこか集中を欠いていた。

昼休み――教室

午前中の授業が終わり昼休みになった。月光館学園では初等部以外では給食は存在しないため、中等部と高等部では、自分で昼食を持って来なければ、購買部で何か買うか食堂に行くしかない。

もっとも、高等部になると昼に抜け出して外に買いに行ったり、どこかで食べてくる者もいるが、もしも見つかった場合、それなりのペナルティが発生するので、そのような事をする者は殆どいなかった。

そうして、岳羽ゆかりはどのような昼食を用意しているかというと、まだ自炊出来るような料理スキルを持っていないため、オニギリ二つとポテトサラダを学校へ来る途中に買ってきていた。

「やっぱり、頭使うとお腹減るわねぇ」

授業はまだ始まったばかりだが、新しい環境で内容が難しくなった勉強をするというのは、中々に疲れるものである。

今後はさらに難しくなっていくことを考えると嫌になってくるが、不満ばかり漏らしていても何にもならない。

故に、いまは身体が求めているように、食欲を満たし身体に栄養を取り入れようと、鞄から取り出したコンビニ袋の中身を机の上に広げた。

しかし、食べ始めようと未開封のオニギリを手に取ったところで、視界の端で赤髪の少女に話しかける者の姿が目に入った。

「あの、お昼……一緒に食べても良いかな？」

そんな風にチドリに話しかけている者の名は、山岸（やまぎし）　風花（ふうか）。

クラスにラ行とワ行の名字の者がいないため、出席番号の最後になっているチドリの一つ前の番号の生徒である。

透き通るような声をした、小柄で小動物を思わせる中々に愛らしい容姿をしており。ゆかりと同じように中等部からの入学のようで、まだクラスで親しくなった友人もいないため、席が前後で同性であるチドリと交友を深めるため昼食に誘ったらしい。

しかし、他の者もゆかりと同じように考えているはずだ。湊がいる

チドリがそんな誘いを受ける筈がないと。
そうして、小さなお弁当の包みを持って、風花が不安を隠しながら笑顔を向けてチドリの返事を待っていると、チドリは机の横にかけていた鞄を手に持って立ち上がった。
「私、ここでは食べないから。来るなら勝手にすればいい」
「一緒に食べていいの？」
「勝手にすればいいって言った」
チドリは少々冷たく聞こえる言葉で淡々と返したが、意味する内容は共に食事をすることを拒否しないというものだ。
風花はそれを理解して明るい表情を見せると、鞄から水筒を取り出し、弁当の包みと一緒に持って立ち上がった。
一方のチドリは、教室に前と後ろに一つずつある出口の後ろ側の方に立って、湊がやってくるのを待つ。チドリと同じように鞄を丸ごと持って席を立つと、湊も合流するため後ろの扉に向かって歩き出した。
だが、何を思ったのか、湊は途中でピタリと足を止めた。そう、岳羽ゆかりの机の横で。
「……何か御用でしょうか？　そこに立たれると威圧感があるんだけど？」
「友人もいないのか？」
「っ……まだ親しくなれてないだけでいない訳じゃないわよ」
「……行くぞ」
失礼な事を言われてムスッとした表情でゆかりが反論すると、湊は表情の通り、興味もなさげに切って捨て、ゆかりの昼食を全てコンビニの袋に仕舞い直して持ち去った。
急に変な声をかけてきた上に、空腹の自分からまだ手をつけていない昼食を奪うとは何事だと、ゆかりは貴重品を手に取って慌てて立ち上がり、既にチドリらの元へ歩き出していた湊を追う。
まわりの生徒は事態がよく分かっていないようで、目を丸くして傍観者に徹しているが、今のゆかりにまわりの様子を把握している余裕はなかった。

「ちょっと、私のお昼返しなさいよ！」
「チドリ、一人追加」
「そう。なら、時間もなくなるし、早くいきましょ」
短く返事をすると、チドリは特に気にせず教室を出て歩き始めた。その後ろをついていく風花は、湊の後ろで怒って騒いでいるゆかりを時折心配そうに振り返ってみているが、怒らせている本人は意に介さず、チドリの後をついて歩いて行く。
そうして、ゆかりは相手の制服を掴んで止めようとしたりもするのだが、湊は振り返りもせずに身体を捻って躱し、結局、止まらせる事は出来ずに相手の目的地まで共に行く羽目になった。
＊＊＊
「屋上って出れたんだ……」
キョロキョロと周囲を見渡しながら風花がこぼした。
チドリたちがやってきたのは、一年生のフロアからさらに上がって扉を出ると行く事の出来る学校の屋上。
屋上へ出るための扉の前には、お約束通りに予備の机と椅子が大量に置いてあったが、幸いなことに壁際には人が一人通る事が出来る隙間が空いていたので、四人はそこを通って扉から出たのである。
ただし、高等部と違い屋上は解放されておらず、扉にはしっかりと鍵が掛けられていて、それを湊がポケットから取り出した鍵で開けてしまったのだが。
「ねぇ、有里君さ。なんで屋上の鍵持ってるの？」
「拾った」
「……私、クラスメイトから退学者出るとか嫌だよ？」
「共犯だろ、一緒に屋上に出た時点で」
相手を心配した言葉に湊は振り向きもせず答えると、そのままフェンスの方へと歩き出した。
チドリも同じように後を追っていくが、ついてきた風花とついて行かざるを得なかったゆかりは、お互いに顔を見合わせて口元を引き攣らせていた。
学校が始まったばかりでいきなりの校則無視。

もっとも、湊とチドリに関しては入学式の時点で服装の違反をしていたが、それは本人らも自覚してやっているので、学校側と本人だけの問題だ。
けれど、風花とゆかりの両名は、本人たちに破る意思はなかったというのに、巻きこまれる形で共犯にされてしまった。
屋上へ出ることでのペナルティがどうなるかは分からない。しかし、これで清く正しい学校生活を過ごす日常は半分終わったと理解した。
「……諦めよう。もう、色々と諦めよう。彼に関わった時点でそういう運命だったって受け入れる事にするわ」
「だ、大丈夫だよ。ほら、先生もまだ気付いてないし。明日から別の場所で食べようって言えば、ね？」
脱力しながらとぼとぼと歩きだしたゆかりを、風花は出来るだけ安心させられるような笑顔で慰める。
屋上に出てきた事は確かに校則違反だが、何も悪い事をしようと出てきた訳ではない。自分たちは、ただ落ち着いて昼食を取れる場所を探して屋上へとやってきたのだ。
故に、場所が駄目なのならば、明日からはまた別の場所へ移ればいいだけだと、風花は落ち込むゆかりを元気付けようとした。
その言葉を聞いたゆかりは、視線の端にブルーシートを広げている男子を収めながら、少々意外そうに風花を見た。
「ああ、次から別のグループと食べるって選択肢はないのね。けど、そういうのって、見た目と雰囲気だけでレッテル貼るような連中よりも良いと思うよ。二人って多分、不器用なだけで悪い人じゃないと思うし」
「そ、そうかな？　私は、ただ同じクラスになった人とお話したいなって思っただけなんだけど」
「朝の挨拶した人もいるけど、他の人は明らかに避けてるでしょ。十分に少数派よ」
ゆかりの言葉に照れたように困惑する風花と話しているうちに、二人は湊の広げたブルーシートに到着した。

上履きを脱いで上がっているチドリに倣って、ゆかりと風花も上履きを脱いでシートに座る。
すると、鞄から大きな弁当箱を取り出していた湊が、ゆかりにコンビニの袋を返してきた。
「……返す」
「勝手に取っておいて、返すじゃないでしょ。ま、もういいけどさ。ってか、君、そんなに食べるの？」
袋を受け取ったゆかりは、湊の持っている二人前は軽くありそうな弁当を見て、その細身のどこにそれだけ入るのかと不思議に思った。
隣にいるチドリは女子では一般的な二段の弁当箱なので、これは明らかに湊だけが大食いである事を示している。
包みから自分の弁当箱を取り出していた風花も、湊の弁当箱のサイズと中身の量に驚いているようだ。
「あ、有里君ってたくさん食べるんだね。でも、男の子だし、私たちよりいっぱい食べないとお腹すくよね」
一人で感心して一人で納得する風花に、ゆかりは「いや、これ大人でも多いって……」という、ツッコミを入れたかった。
だが、この場では自分だけがツッコミ役のようなので、気疲れしないためにも流すことにし、オニギリの包装を外してぱくりとかぶりつく。
普通のコンビニのオニギリだが、温かな日差しと通り抜ける風の気持ち良さもあって、普段よりも美味しく感じられた。
（あー、なんか良いかも。フェンスの向こうには街と海が見えるし、こんな場所でお昼っていうのも小さな贅沢だなぁ）
そんな風にゆかりが思っていると、風花も同じように思ったのか、ベーコンのアスパラ巻きを箸で摘みながら笑顔で皆に話しかけた。
「屋上って気持ち良いね。高等部だと屋上も解放してるらしいけど、こっちでも解放してくれたら良いのに」
「……フェンスはあるけど、屋上でサッカーとかバレーする馬鹿もいるから無理でしょ。落ちてきたボールで怪我人が出ても、名乗り出ない犯人もいるでしょうし。責任を取りきれない学校は、最初から解放

しないって選択肢しか取れないわ」
「あ、そっか。そうだよね。軽いボールでも、この高さから落ちてきたら怪我するよね」
チドリが饒舌に話す姿を見て固まるゆかりに対し、風花はもぐもぐと咀嚼しながら共感して頷いている。
これは自分が驚き過ぎなのか、それとも山岸風花の適応力が高いのか。そんなどうでも良い事に悩んでいると、食べながら無言で他の者を眺めていた湊と目があった。
入学式で話して以降は、まともな会話や雑談をしていないと思い、ゆかりは自ら話題を振ってみる。
「そういえばさ。有里君たちと一緒にいた女の人ってどっちのお母さんなの？　かなり若いなって思ったんだけど」
「どちらのでもない。あの人は俺たちの未成年後継人。保護者ではあるけど、血の繋がりは一切ない」
「未成年後継人……？」
〝未成年〟と〝後継人〟、それぞれの単語の意味は分かるが、〝未成年後継人〟という単語は聞いた事がなかったので、どういったものなのか分からない。
風花も同じようにキョトンとしているので、同年代で知っている者の方が珍しいものだと思う。
そうして、ゆかりらが湊を見ていると、湊は少々面倒そうにしながら説明を始めた。
「保護者や身元保証人という認識で良い。親がいない、親が保護者としての責任を果たせない状態でも、その子どもが困らず生活していけるようにするための制度だ。ようするに、昔の俺たちは親がいない状態だったんだよ」
「私は両親の顔も覚えてないけど、桜とは五年近く一緒に暮らしているから、もう母親みたいなものよ。だから、別に親がどうとかあなた達が思う必要はない。ていうか、思われても私たちは気にしてないから、気にされた方が迷惑」
湊の言葉に続けてチドリが話すと、チドリらの境遇を〝可哀想〟だ

と感じていた二人は、不意をつかれたようにハッとした表情をした。
確かに、親がいないことは幸せではないかもしれないが、いないからと言って、その人が現在も不幸かと言えばそれは違う。
自分たちが勝手な価値観で決めつけていた事を自覚すると、ゆかりと風花は二人に抱いた間違った感情を訂正した。
そして、折角話す機会が出来たのだからと、暗くなりかけた雰囲気を払拭するため、風花も自ら新たな話題を出す事にする。
「そういえば、吉野さんは美術部に見学に行くって言ってたけど、もう行ってみました？　私も美術部に興味あったから、知ってたらどんな感じだったか聞きたいんだけど」
「……ここ、美術部なかった。何年も前に部員がいなくなって休部状態だって」
「え、ええ？　そう、なんだ……ちょっと残念だなぁ」
風花は特別絵に興味がある訳ではないが、自分で何かをするという事に軽い憧れを覚えていた。
小学校の図工の授業では、下手なりに絵や粘土細工を楽しんでいたので、クラスメイトが入部するのならば、自分も思い切って入部しようと考えていたのだが。
それがまさか、入部以前に部自体が既に過去のものだとは思わず、小さく箸を咥えたまましょんぼりと肩を落とした。
しかしそこに、二人前の弁当を既に食べ終えて、鞄からお菓子を取り出して食べていた湊が声をかける。
「部活、ないなら復活させれば良い。部員は五人いれば条件は満たしていることになる。後一人見つけて申請用紙を出せば四月中にでも活動再開させられる」
「そうなの？　顧問の先生とか見つけなきゃいけないんじゃ？」
「……〝クマモン〟がいる。あの人、新任だからまだ顧問になってない」
『くまもん？』
チドリの言葉にゆかり達が頭上にクエスチョンマークを浮かべる。
二人がまず思い浮かべたのは、とあるご当地キャラクターのクマの着

ぐるみの姿だ。
けれど、そんな存在は学校にはおらず、また、見た目が似ている教師もいない。
一体誰の事を言っているのだと思っていると、湊が呆れた表情で補足した。
「佐久間文子。佐久間のクマに、文子の文はモンとも読む。だから、カタカナでクマモン。チドリが思い付いた適当なニックネームだから、分からなくて当然。別に気にしなくて良い」
「吉野さん、まさか先生にそれ言ったりした？」
「……クマは好きだって」
（言ったんだ……）
普通、そのような間抜けなニックネームを付けられて喜ぶ者はいない。まして、教師を敬うべき生徒が呼んだとなれば、軽い叱責を受けてもおかしくないだろう。
だが、幸いにも佐久間はそういった事に大らかで、むしろ、生徒が親しみを込めて呼んでくれたと喜んだに違いない。
入学早々、良いクラスになれたとは思っていたが、自分が思っていた以上に緩いことに、ゆかりは思わず口元を引き攣らせた。
そう、引き攣らせたのだが、それより僅かに前の湊の言葉に引っ掛かる事があった事を思い出し、湊に視線を向けた。
「ねぇ、さっき後一人って言わなかった？　君と吉野さんと山岸さんで三人。となると、後二人が正しい筈なんだけど……もしかして、私も数に入れてたりします？」
「……暇だろ？」
「暇じゃねえっつの！　てか、会って三日でどんだけ遠慮のない態度取ってんだ！　私は弓道部に入る予定なの。だから、美術部は無理よ」
入部はまだ出来ないが、道具にどれだけの金額が掛かるかという書類は一応既に貰って来た。
最初は体力作りの筋トレと、射る際の動作を反復練習して、徐々に実際に矢を射るようになるのだろうと思っている。

運動は苦手ではないが、授業に必死に付いていきながら、部活で毎日くたくたになるに違いないので、流石に文化部にまで所属する余裕はない。
食べ終わって出たゴミをコンビニ袋に放り込みながら断ると、ゆかりは袋の口を縛って湊に視線を再度向けた。
「……」
視線がかち合うと、相手は何の感情も読めない、ただ気だるげな表情のまま見返してくる。
ゆかりの個人的な印象だが、湊とチドリは二人とも似たような雰囲気を纏っているものの、実際は性質そのものが違っているように思う。
面倒くさそう、つまらなさそう、それが二人の表情を見て最初に感じる印象だろうが、チドリは素でそういった顔つきをしているだけだ。つまりは、普段から真顔でいるだけ。
対して、湊は真顔なのではなく、本人が実際に周囲に何の感情も抱いておらず。無感動でほぼ全くと言っていいほど興味を持っていないのだ。
一応、入学式の最中に僅かに驚いた顔をしていたので、全く感情を持っていない訳ではなく、さらに言うなら感情の動きも存在する。
それらが何を基準にどのように動くのかは分からないが、湊がどのような返事をしてくるか待っていると、たっぷり三十秒ほど見つめあった末に口を開いてきた。
「……名称は美術工芸部。活動日は火・木・土曜日で、テスト前には部室で勉強会を開催したりしなかったり。因みにどこぞの弓道部志望者は入学前テストで全体の半分くらいの順位だったが、山岸は十六位と入部希望者には成績上位もいる」
「え、本当に？　へぇ、すごいじゃない」
密かに自身のテストの成績を暴露されたことを華麗に流し、感心したようにゆかりが風花を見ると、風花は僅かに頬を染めて返した。
「べ、別にすごくないよ。ただ、両親が成績に厳しいから勉強してただけなの。それにほら、うちのクラスには真田さんもいるし」

「あー、新入生代表ね。あの人が参加するなら、一緒にテスト勉強したいかも。休み時間の様子見てると、すごく親切で分け隔てなく接する人みたいだし」
アウトローさで目立つ湊に対し、隣の席である真田美紀はその聖母の如きオーラで目立っている。
既に何人もの男子が、放課後に一緒に遊ばないかと廊下で誘っていたのを見かけたが、彼らはどこからともなく現れた彼女の兄で、同じ月光館学園二年生の真田（さなだ）　明彦（あきひこ）から放課後に部活見学に来るよう言い渡されていた。
相手は二年生にして既にボクシング部のエースで、そこへ見学に来るように言われたとなれば、当然、その末路は分かっている。
案の定、今日の朝に見た、見学に行った男子らの顔には痣と腫れがあった。
周囲の男子が何があったのかと詳細を聞いていたため、ゆかりの耳にもその内容は入ってきており。なんでも、美紀をデートに誘って良いのは自分とのスパーリングで３Ｒ以上耐えた者のみ、告白して良いのは自分に試合で勝利した者のみと言われたという。
だが、試合時間こそボクシングと同じでも挑戦者は蹴りや肘もありで、武道を嗜んでいるなら竹刀などその武道の試合で使う道具は使用可。さらに、階級や減量を一切気にせず試合をするとのことで、実はかなり挑戦者に有利な条件となっている。
しかし、真田は全ての相手に勝利した。八十キロちかい体重の柔道部員も、真田がトレーニング時に着ているシャツすら掴ませずにノックアウトしたため、美紀を狙っている在校生の男子らは皆、どうやれば勝てるかと意見を交換し合っていた。
そんな騎士の存在するお姫様を、周囲から不良のレッテルを貼られている男が部活に誘って入部させられるとは思えない。一緒に勉強できないことは残念だが、ゆかりはこれで体よく断ろうと思った。
だが、そう考えたのも束の間、
「なら、五人目はあいつで良い。他のメンバーは……別に必要ないな。とりあえず、俺たちと真田、顧問は佐久間先生で申請しておく。許可

は一週間くらい掛かるだろうけど、今日の放課後にミーティングをするから空けておくように」
湊は大真面目に言って鞄に弁当箱を仕舞いだした。
それを聞いたゆかりは焦ったように声をかける。
「ちょ、ちょっと、まだ誘ってもないのにミーティングなんて」
「場所はまた後で連絡する。とりあえず、俺はいまから声をかけてくる」
そういうと湊は鞄を持って立ち上がった。
他の者も既に食べ終わっていたので、慌てて立ち上がり上履きを履くと、戻りかけていた湊はブルーシートを片付けて扉へと向かった。
チドリは黙ってその後ろを歩いているが、ゆかりと風花は困惑した表情で前を行く男子の背中をただ見ていた。

第三十三話　後篇　部活―勧誘―

――教室

屋上から校舎に入ると、湊は本人曰く拾ったものだという鍵を使い、屋上への扉の鍵をしめて教室へ向かった。

幸いにも教師に出入りの瞬間を見られずに済み、ゆかりと風花はホッと胸を撫で下ろしていたが、四人が教室に戻り各自の席に戻ると、出て行くときの騒ぎを見ていた者から大丈夫だったかとゆかりは尋ねられた。

無論、ただ一緒に昼を食べただけなので何の問題もなく、「一緒にお昼食べただけだよ」と返しておいたが、現在ゆかりと風花の意識は湊に向いていた。

美紀は昼食を食べ終えたのか、いまは自分の席で他の女子と雑談をしている。

湊が帰ってきたことで、一瞬そちらに視線を向けたが、すぐに話している女子へと戻したので、お互いの間にはまだ何も存在しない。

そうして、机の横に鞄をかけ終えた湊がどんな風に話しを切り出すのか見ていると、湊は立ち上がり相手の肩を軽く叩き、目線的に見下す形で話しかけた。

「……もうどこの部活に所属するかは決めてる？」

「え？　う、ううん。見学してからにしようと思って、まだ決めてませんけど」

談話中に声をかけられた美紀は少し戸惑ったようだが、特に嫌な顔もせずに答える。一緒に話していた女子は、一人は怖がり、一人は怖がりながらも湊の顔をジッと見つめている。

自分の席からそれを眺めていたゆかりは、やはり怖くても顔が良いのは認められているのだなと思ったりもしたが、湊がどんな失礼な発言をするか分からない。

故に、いつでも乱入できるよう構えて次の発言を待った。

そして、ゆかりの想像通りに湊は一方的に用件を告げる。

「なら、美術工芸部に入れば良い。いまなら部長の席も空いてる」

「え、あ……はい？」
「今日の放課後にミーティングのようなことするから、勝手に帰らないように、以上」
言われた美紀は、首をかしげて頭の上にクエスチョンマークを浮かべているが、用件はそれだけだと湊は席に戻り読書を始めてしまった。
これでは、相手も何が何だかという感じで、本当に放課後に待っていなければならないのか悩むだろう。
再度尋ねようにも、湊はイヤホンを付けた状態で読書しているため、相手を気遣える美紀は邪魔をするのは悪いと思い躊躇っている。
そうして、ゆかりがちゃんと説明しようと立ち上がったところで、教室に誰かが入ってきた。
「あ、兄さん、それに真次さんも」
やってきた人物をみて呟いたのは美紀だった。
一人は短めの髪をした少し肌の白い少年・真田明彦、もう一人は身体付きのしっかりした目付きの鋭い男子・荒垣（あらがき）真次郎（しんじろう）。
二人の手には筆記具と教科書類があり、五限目は移動教室なのだろう。だが、その途中にわざわざ真田が妹の様子を見に来たため、一緒に行動していた荒垣は幼馴染の過保護っぷりに呆れているという訳だ。
教室に入ってきた真田の姿を見て、何人かの男子がびくりと身体を震わせている中、湊だけは視線も向けず読書を続けている。
すると、真田はそのまま湊の机まで進み声をかけた。
「なぁ、君、今日の放課後にボクシング部に見学に来いよ。俺がマンツーマンで運動の楽しさを教えてやるからさ」
最後にキランッと光るエフェクトがかかりそうな、口調は優しく表情は爽やかな笑顔の先輩を演出しているが、目だけはギラギラとしていて一切笑っていないことに周囲も気付く。
先日、妹を放課後の遊びに誘った男子にも同じような口調と表情で声をかけたのだ。つまり、真田は湊に妹と遊ぶ許可を貰いに来いと言っているのである。

だが、言われた本人は顔も向けず読書を続けていた。
これには後ろで成り行きを見守っていた荒垣も、「肝が据わってんな」と僅かに感心する。
しかし、真田はイヤホンをしていて聞こえなかった可能性もあるとして、相手の肩を掴むと再び声をかけた。
「なぁ、放課後、少しボクシング部に来てくれないか？　俺は真田明彦、真田美紀の兄だ。さっき偶然教室の前を通ったときに、君が妹を放課後に誘っているのが見えてね。ぜひ、少し話がしたいんだが、良いだろうか？」
「……放課後は用事がある」
肩を掴む手に力が徐々に籠もっていく事で、湊も本を閉じるとイヤホンを外し、面倒そうに真田を見返して答えた。
それを聞いた真田の表情は引き攣り、直前までの〝良い先輩〟の仮面を脱いで厳しい目を向けた。
「その用事は美紀に関係しているんだろう？　俺は適当な人間を妹に関わらせるつもりはない。お前が美紀と関わるに相応しいか、実際に確かめてやる。だから、放課後にボクシング部に来い」
「用事があるって言っただろ。先に決まってた予定を遅らせて別の予定を入れるってのは、適当な人間がやることじゃないんですか？」
「っ……相手の了承は俺が取ってやる。それなら良いだろ？」
「俺に行く気がない。それで話は終わりだ。昼休みが終わる前に移動した方が良いですよ、〝お兄さん〟」
「っ!!」
湊にお兄さんと呼ばれた真田は、目を見開き持っていた物を後ろに放ると、座っていた湊の制服の胸倉を掴んで無理矢理に立たせた。
一触即発の状況に、クラスの女子が悲鳴をあげるが、流石にボクシングをしているだけあって、真田は相手を殴ったりはしなかった。
ただし、手は未だに制服を掴んでおり、手に力が籠もるにつれ湊の首を圧迫してゆく。
「……お前にそんな呼ばれ方をされる筋合いはない」
「……それで？」

「二度と俺をそんな風に呼ぶな。そして、放課後は部室に来い。でなければ、美紀と関わる事は許さない」
「……部室にはいかない。けど、お前が好きそうな遊びを一つしてやる」
少しの間を置いて答えると、湊は真田の腕を振り払って教卓まで進んだ。そして、真田にも来るよう合図をすると、二人は教卓を挟んで向かい合う形になる。
「放課後って3Rもスパーリングに付き合わなきゃいけないんだろ？
それは面倒だから、今ここで腕相撲しよう。一回勝負、腕はお前が決める、ルールはそれだけだ」
「お前が勝てば美紀と遊ぶ事を許可しろっていうのか」
「それは真田自身が判断する事だと思うけど、先輩が納得しないようなので、まぁ一応」
確かに、どのような相手と交友関係を結ぶかは美紀が決めることであり、真田は「友達はちゃんと信頼できる相手を選べよ」ということくらいしか出来ない。
だが、男子に関しては兄として妹を守るのが義務だと思っている。
見るからに柄の悪い男、それが妹と放課後に遊ぼうとしているなど、絶対に阻止しなければならない。
そうして、真田は利き腕である右腕を構えた。
「……シンジ、コールを頼む」
「ああ？　ったく、勝負がついたらグダグダ言うんじゃねえぞ」
先ほど真田が放り投げた物を拾っていた荒垣は、自分の荷物も合わせて美紀に預けると、右手をがっしりと組み合って構えている二人の横に立った。
ちゃんと教室の者にも見えるよう黒板側に立つ辺り、荒垣という人間の気遣いと性格の良さが伺える。そして、レフェリーとなって湊を間近で見た本人は、周囲に気を遣いながらも幼馴染の対戦相手を観察していた。
ブレザーで腕の太さは見えないが、身体付きを考えると湊は他の同級生よりもしっかりと鍛えているように見える。

対して、真田はボクシング部のエースだけあって、線は細い様に見えるが、その中身の筋肉は誰よりも良質に仕上げてある。
となれば、一つ年上の真田の方が身体が出来上がりつつある分有利に思えるが、結局、勝った者が強いのだ。
結果が出る直前にあれこれと考えるだけ無駄だと、観察を終えた荒垣はレフェリーとしての仕事を全うする事にした。
「いくぜ。レディ……ファイト！」
組み合った手の上に自分の手を乗せると、コールと同時に荒垣はそれを放す。
「はあぁぁぁっ！」
瞬間、真田は左手で教卓を掴み、身体ごと力を入れて湊の右手を倒そうとする。
腕まくりして見えている腕の筋肉が隆起し、女子の何名かは真剣な表情と共にそれに見惚れていた。
「……はい、終わり」
だが、真田の気合を無視するように、勝敗はあっさりと決まった。
普段とまったく変わらない表情で、特別に力を籠めた様には見えない。実際、真田の手の甲が教卓に着くまでは、決して速くない一定のペースで動いていた。
それだけに、周りで見ていた者は、一体何があってあっさりと勝負がついたのか理解できなかった。
無論、負けた本人の衝撃は、その比ではないだろうが。
「俺が、負けた？」
「おい、アキ、今どうなったんだ？」
驚愕の表情で放された自分の手を見ていた真田に、状況を把握できず心配した荒垣が声をかける。
それでようやく我に返ったのか、真田は悔しそうに拳を握り、それを震わせながら答えた。
「俺の負けだ。力を籠めてもびくともしなかった。それで逆に、あっさりと……おい、お前、名前は？」
「……瀬多（せた）　総司（そうじ）」

「瀬多か。お前の名前、覚えたぞ。今日の放課後に遊ぶ事は許可してやる。だが、カラオケなど個室に二人きりになる場所で遊ぶことは許さん。そのときは俺に伺いを立てろ。いいな？」
「……了解」
相手の返事を聞いてこの場は納得することにしたのか、真田は荒垣から荷物を受け取ると、美紀に「午後も頑張れよ」と声をかけて帰っていった。
その後ろにいた荒垣は、真田が教室から出て行ったことを確認してから、
「騒がしくして悪かったな。ありゃ、病気みたいなもんだから、気にせず美紀と仲良くしてやってくれ」
とクラスメイトにしっかりとフォローを入れていた。
一同は去って行った上級生二人にやや呆然としていたが、少々強面でも荒垣が良い人であることは理解した。
そうして、その上級生と騒ぎを起こした張本人は、何故、あの場面で偽名を名乗ったかという疑問を残し、クラスメイトとまた溝を深めたのだった。

放課後――ラーニング・コモンズ
放課後、ゆかり達は湊の言っていた通りに集まっていた。
だが、集まっている場所は中等部ではなく、高等部の図書館の中にある部屋だった。
ここへと連れてきたのは湊で、高等部の施設を利用した事の無い佐久間も、遠くを眺めるように指を伸ばした右手を目の上辺りに当てながらキョロキョロと周囲を見渡していた。
「有里君、高等部の図書室にも来てるの？」
「中等部よりラインナップが充実しているし、こっちにはパソコンやＤＶＤもある。暇を潰すなら理想的な環境だって、前にある人に言われて連れて来られた。それ以来何年も来てなかったけど、部屋は学生と教師なら使えるから問題ない」
図書室に入ったときに学生証を提示して、五人は名前を書き、佐久

間も教師ＩＤを提示して名前を書いた。
　そして、図書館の奥まで進むと奥にある扉を開けて、六人は沢山の机と椅子にホワイトボードやパソコンも置かれている教室ほどの広さの部屋に入った。
　佐久間は自身の出身大学にもラーニング・コモンズが存在したので、湊と一緒に机を動かして場所を作っているが、他の者はここが何をする場所か分からない。
　そうして、ただ立ってみていると、ドーナツ型に机を並べ終えた佐久間が女子たちに説明をした。
「えっとねー、ここはラーニング・コモンズと言って、学生が自由に勉強や議論したりする場所なの。同時に何組も部屋を使う事もあるから、こうやって自分たちで机と椅子を組み換えて、ホワイトボードを持ってきたりするわけなのです」
　言って、佐久間は笑顔で自分の席の後ろにホワイトボードを押して持ってくると、他の者へ座るように合図する。
　佐久間から時計回りに美紀・風花・ゆかり・チドリ・湊の順に席に着くと、佐久間は手に持っていたファイルから部活の新設申請書と、新設に関しての注意事項の書かれた紙を配っていく。
　早速、配られたものに目を通していると、佐久間は全員に聞こえるように話しだした。
「それじゃあ、説明するねー。まず、有里君の要望で部活を始めるんだけど、美術部を復活させるのではなく、美術工芸部という部活を新設する形になりまーす」
「新設って、活動再開じゃ駄目なんですか？」
「良い質問だね！　答えは、イエス。というのも、美術部の顧問だった美術科の土我（どが）先生がいらっしゃるから、再開って形だと顧問は土我先生になってしまうの。でもそうすると、私だけ仲間外れになっちゃうでしょ？　だから、新しく部活を作る事にしましたー」
　美紀の質問に答えた佐久間は、「てへへー」と悪戯っぽい笑みを浮かべて、申請書の顧問の欄に自分の名前と判を既に記入済みであることを見せた。

その下の部活代表者と部員の欄には、部員の欄の二番目に湊の名前が既に書かれている。自分で言いだしておきながら、副部長にすらなる気がないらしい。
ゆかりなどは、そんな相手の自分勝手さに溜め息を吐きたくもなったが、湊は約束通りに美紀を連れてきた。
まだ入部するとは決まっていないが、約束はちゃんと守る点に関しては信頼して良いだろうと、佐久間の話を聞きつつ信頼面の評価を僅かに上げておく。
「それで、有里君からは、部長が真田さんで、副部長が山岸さんって聞いてるんだけど」
『……はい？』
美紀と風花は佐久間の言葉に目を丸くするが、佐久間は気にせず続ける。
「先生もそれで良いと思うの。成績順ってことにしたら、有里君が一番なんだけど、有里君は目立っちゃうからね。かといって、繰り上げ当選で吉野さんを副部長にするにも、同じように目立ってるから、二人が良い子だって知らない先生から何も言われないようにするなら、これがベストかなーって」
「は、え？　成績順って、真田さんが一番じゃないんですか？」
「違うよ？　有里君は満点一位で、吉野さんは二位の真田さんと六点差で三位、それから少し差があって山岸さんが十六位だったの。フフッ、実はこの部活はうちのクラスの成績トップ陣が集まっているのです」
えっへん！　と、どこか自慢げに佐久間は座ったまま腰に手を当て、１６２センチと低くない身長でもかなり豊満だと分かる胸を強調するように張って見せる。
そんな、本当に年上なのかと思ってしまう雰囲気へのツッコミも忘れ、担任の言葉を聞いたゆかりは背中に電流が走ったかのような衝撃を受けていた。
湊には授業でのことで成績が良いのではという疑惑はかかっていた。しかし、まさかチドリまでもがぶっちぎりに成績が良いとは思っ

ていなかったのだ。
（……あれ？　もしかして、この中で一番の馬鹿って私？）
衝撃の事実を受け入れようとすると、さらに突きつけられた残酷な現実にゆかりは沈んだ。
さして他人に興味がなさそうな湊とチドリ、急に部長と副部長にされた美紀と風花、ただ楽しそうにしている佐久間は、そんな一人ダメージを受けているゆかりに気付かず話を続ける。
自分が部長に抜擢されていた美紀は、少々戸惑い気味に口を開いた。
「あの、私はまだ部活に入ると決めた訳ではないのですが……。それに、この部活がどんな活動をするのかもよく分かりませんし」
「ええっ、そうなのっ!?　駄目だよ、有里君。ちゃんと説明しておかないとー」
「活動日は火・木・土曜日の放課後。活動内容は色々。絵を描いたり、粘土細工をしたり、陶芸や刺繍もしたりする。休日を利用して、美術館巡りだけでなく、何かを作る体験講座にも参加。またインスピレーションを得るため、動物園や水族館、遊園地やお祭にも参加予定」
説明を求められた湊は席から立ち上がると、ホワイトボードに活動日や活動内容を記入してゆく。
チドリは見慣れており、佐久間は事前に湊の字を見ているため驚かないが、他の者はホワイトボードに書かれた字の達筆さに感心している。
だが、すぐに気を取り直すと、活動内容の幅広さに疑問を持った風花が質問をぶつけた。
「あの、そんなに沢山の活動って出来るのかな？　よく分からないけど、美術部って作品をコンクールに出展したりもするんでしょう？」
「今年開催するコンクールの予定表は入手してる。来年も締め切り時期はほぼ変わらない筈だから、一年目は自分にどんな物が合っているかを見つける。そして、二年目でコンクールに応募。三年目は入選や受賞を狙いに行く」
「そ、そっか。確かに向き不向きは分かってた方が良いもんね。あり

がとう、納得しました」
うんうんと二度ほど頷き、風花はホワイトボードの内容をメモ帳に記入している。
風花が先に言った通り、ゆかりや美紀も同様の疑問を抱いていたので、湊の説明を聞くとすんなりと納得する事が出来た。
佐久間に美術の技術指導が出来るとは思えないが、休日や放課後でも生徒にしっかりと付き合ってくれそうな印象を持っている。
ならば、ちゃんと自分のやりたい事、作りたい物を見つければ、部活の活動日でなくとも作業するため、部室を開けてくれるだろう。
場所さえ提供して貰えれば、後は自分でこつこつと作業を進め、時折他の者から意見や感想を貰えば納得のいく作品が出来る。
行き詰まったときには、湊の言った課外活動などが良い息抜きになるのだろうとして、ゆかりは純粋に楽しそうだなと興味を持った。
「ねえねえ、その体験講座って何か既に考えてたりするの？」
「何がしたいか言ってもらえれば、その希望に沿う物を見つけてくる。コンクールの予定表は美術系のしか入手してないけど、美術工芸部って名前なだけで、手芸や写真だって良い。ここは広義の芸術部を目指してるから」
「先生は編み物とか得意だよー。ベッドのまわりには自作の編みぐるみとか、いっぱいあるからね！」
「……そう。それは良いけど、意見がないなら、陶芸でもまずはしてみようと考えてる。必要なのは汚れてもいい服装と各自の飲み物くらいだけど、先に親交を深めたいなら、イチゴ狩りとかもありと言えばあり」
「うえーん、生徒に無視されたー」
ホワイトボードの前で振り向き答える湊の左足に、自身の話を流された佐久間が椅子から降りて纏わりつく。
がっしりと抱き付きながら、「先生のお話も聞いてー」と瞳を潤ませ見上げているが、相手の反応が鬱陶しいのか、湊はアイアンクローで引き剥がそうとしている。
「有里くーん、前が見えないよー。それにちょっと痛いかなーって」

だが、口では痛いと言っている割に、まだまだ耐えられるようで口元は笑っており。相手をしてもらっている事に喜んでいるらしく、佐久間にはそれなりの余裕が見えた。
湊は昼休みにボクシング部エースの真田を腕相撲で負かしていたので、力は他の男子よりも強いはずなのだが、意外に自分たちの担任はタフらしいと、集まった女子生徒に共通の認識が生まれた。
そして、表情を引き攣らせながらも、風花は見ていて気付いた事を他の女子らに話す。
「思ったんですけど、有里君と吉野さんが佐久間先生のクラスになったのって多分わざとですよね。二人って、その、目立ってると思われてるけど成績は良いし。他の先生じゃ対応しきれないから、新米の佐久間先生があてがわれたんだと思うんです」
「あー、確かにクラスに成績トップが三人とも固まるって変だしね。本当は生け贄のつもりだったってわけか」
「でも、有里君と佐久間先生って仲が良さそうですよね。というより、佐久間先生が有里君を気に入っているというか」
そう話す美紀達の目の前では、アイアンクローが解かれた隙をついて、佐久間が俊敏な動きを見せ立ち上がり、立ったままおぶさるような形で湊の背中に抱きついている。
大学を出たばかりの若い女性教師が思春期の男子生徒にして良いことではないが、当の佐久間は苛ついている湊とは対照的に「にゃははー、スキありー！」と楽しそうだ。
そして、そんな様子を冷めた表情で見ていたチドリも、先月のことを思い出し、他の女子たちに伝える。
「クマモンは新入生の挨拶をしないかって説明のために、学校が始まる前に校長と教頭の三人で一回家に来てる。しないって答えたらオッサン二人は安心してさっさと帰ったけど、クマモンは湊にやろうよって数時間粘って、結局、晩御飯食べて泊まっていった」
「す、すごいね。二人のお家ってどこにあるの？」
「隣の六徳市。おじじと渡瀬は苦手そうにしてたけど、桜はクマモンと良いお友達になれそうって喜んでた。あと、次の日にバイトで出か

けようとしてた湊に遊びにおいでよって家に誘ってたし、クマモンは湊のことかなり気に入ってると思う」
「そ、そうなんだ……本当に大丈夫か？　この新米教師」
話の流れを聞く限り、佐久間が自宅に招待したのは湊だけのようで、倫理や世間の目という物を考えれば確実にアウトだ。
もしかすると、佐久間は普通に仲の良い生徒なら自宅に招待するのかもしれないが、今のところは湊との交流が最も多いため、ゆかり達は佐久間のお気に入りに湊が選ばれたようにしか見えない。
問題児を押し付けると言う、学校側の汚い思惑は佐久間の特殊な性格によって外れたが、その性格が災いしてＰＴＡになんらかの報告がいきそうだと考えると、ゆかりは今から頭痛がしてきそうだった。
良いクラスではあるものの、学校一の色物クラスの可能性も同時に浮上し、ゆかりは思わず深い溜息を吐く。
「はぁ……って、そういえば先生って二人の家に行ったのよね？　じゃあ、なんで入学式の日に同じ家だって気付いてなかったの？」
「……変なのが来たと思ってずっと部屋にいたもの」
「そ、そう……。じゃあ、有里君のバイトっていうのは？　中学生じゃ雇ってくれるとこなくない？」
ゆかりのイメージからすると、中学生でも出来るバイトと言えば新聞配達くらいなものである。
しかし、いま自分たちの隣で教師を背負い投げの要領で床に落とし、マウントポジションをとって首を絞めている男が、そんなバイトをするようには思えない。
もしも、自分でも出来るようなものなら、興味があるので紹介して欲しいと思いつつ、その答えを待っていると、チドリはやる気の無い半目で答えた。
「ポロニアンモールの骨董品屋。そこの店主が知り合いだから、労働じゃなくて手伝いって名目で私もたまにバイトしてる。時給は一二〇〇円」
「最低賃金が八五〇円ですから、中学生で一二〇〇円ですとかなり良い条件ですね。主な業務内容はどんな事を？」

「一言で言えば掃除がメイン。古い物が多いから、埃を被るとただの汚い物に見える。そうならないよう、棚から降ろしてドライヤーみたいなので埃を吹きとばしたりしてる。レジとかもたまにするけど、配送の手続きが面倒だから、そっちは店主の栗原が基本的にやってる」

バイトという自分たちの知らない世界に興味を持ち、話を聞いていた三人は改めて感心したように頷いた。

ゆかりはまだ厳戸台にきて日が浅いので、ポロニアンモールにどんな店があるか把握しきれていないが、地元民である風花と美紀は、なんとなくでどの店か理解していた。

骨董品屋という名前から、鑑定番組に出てくるような壺や掛け軸を取り扱っている印象を持っていたが、クラスメイトがバイトをしているのなら、次に出かけたときに立ち寄ってみようという気にもなってくる。

湊が先ほど、初回の体験講座に陶芸をしてみようかと言っていたので、自分がどのような焼き物を作るかの参考になるかもしれない。

そうして、初期から入部するつもりだった風花以外の二人も、実際に入ってからの事を考え出している自分がいる事に気付き、内心で苦笑しながら入部する事に決めた。

「ま、弓道部と活動日も被ってないし。結構、楽しそうだから入部してみますか」

「私は、部長はちょっと遠慮したいんですが、先生があの様子ですとほぼ決定事項のようですね」

困ったような笑みを浮かべる美紀の視線の先では、マウントポジションを取られていた筈の佐久間がいつの間にか湊を押し倒し、お互いの頬を擦りつけるようにして首に抱き付いていた。

二人の身長差は約十センチなので、確かに佐久間の方が体格的に有利ではあるのだが、湊の腕力の強さを昼休みに見ていただけに、それを不利な体勢から覆す佐久間のパワーに驚きを隠せない。

「ふはははー！　先生に勝とうだなんて五年早いわー！　勝利者の特権でチューしちゃうぞー！」

「……学校、教育委員会、ＰＴＡにそれぞれ報告するぞ」

「わわっ!?　それはズルイよ、有里君。そう言われると、こっそりしかチュー出来ないじゃん」
　一応、自分がしようとしている行為が、三つの組織に報告されれば問題となることは理解していたのか、佐久間は渋々ながら首に回していた腕を解くと起き上がって服装を正す。
　しかし、まだ未練があるのか、眉を寄せて不満顔のまま湊を見つめている。
　もしかすると、自分たちの担任は本気で生徒に手を出そうとする危険人物なのかもしれない。そんな疑いの目で見ていると、自分が見られていることに気付いた教師は、輝くような笑顔で振り向いた。
「わーい、なんか注目されてるー！　それでそれで？　皆は申請書にお名前書いてくれるかな？」
「あの、やっぱり私が部長じゃないと駄目でしょうか？　入部はしても良いと思ったんですけど、部長となると……」
「大丈夫、大丈夫。なんてたって先生がついてるからね！　それに、有里君がいるし問題ナッシィングだよ！」
「理由になってないぞ、酔っぱらい」
「残念でしたー、今日の先生は素面でーす」
　服装を元通りにした二人が再び席に着くと、美紀への回答も曖昧なまま、佐久間はおかしそうにケラケラと笑いだした。
　確かに湊の言う通り、佐久間のテンションは時間が遅くなるにつれ、酔っぱらいに近付いているように思える。
　無論、まだ就業時間中であるため、本人が言う通り、アルコールは一切摂取していないのだろうが、素面のまま酔っぱらいのテンションになれる方が稀有な存在である。
　物理的な意味でのその主な被害者がクラスでも硬派な湊であることは、問題が起きないという点で不幸中の幸いではあるが、やはり、自分が部長になるのは決定事項なのだなと、美紀は肩を落としつつ申請書に署名した。
「……はい、書けました」
「じゃあ、部員の欄の一番上は副部長の山岸さんが書いてね。岳羽さ

んと吉野さんは有里君の下でＯＫだよー」
「は、はぁ……」
副部長の仕事内容も分からぬまま書類を受け取り、風花は言われた場所に署名するとゆかりに紙を回した。
ゆかりが書き終わると続いてチドリが署名し、既に署名を終えていた湊が紙を受け取ると、全員分の署名を終えた申請書が佐久間に届けられた。
顧問の自分、部長の美紀、副部長の風花、部員の湊・ゆかり・チドリの名前をそれぞれ確認すると、大切そうにファイルに仕舞い込み、閉じたファイルの表紙を撫でている。
そうして、三十秒ほどそんな事をしていると、ファイルから手を離し、顔をあげた佐久間が湊に話しかけた。
「やったね、有里君。これで君のハーレムランドが建設出来るよん！」
「……そんな物、取り壊してしまえ」
「まったまたぁ、本当は嬉しいくせにー」
佐久間は本気で命知らずなのか、笑いながら湊の頬を右手の人差し指で突いている。
第三者の立場にいる状態でも、見ていて少々疲れるテンションなだけに、実際に相手をしている湊の心中を察してゆかりは同情を禁じ得ない。
そうして、どんな表情をしているか視線を向けたとき、一瞬だが湊の目が蒼くなっているように見えた。
（あれ？　いま、有里君の目が変な色に……ま、気のせいか）
しかし、常識で考えて、瞳の色がコロコロと変化するはずもないので、ゆかりは気のせいで片付けると、最終下校時刻が近付いていたため荷物をまとめ始めた佐久間に倣い、自分も帰る支度を始めた。
ホワイトボードを綺麗にして元の場所に戻すと、机と椅子はそのままにして帰っても良いという決まりのため、中等部の職員室に戻るという佐久間と別れると、他の者は途中まで一緒に下校したのだった。

第三十四話　体育教師

４月８日（金）
午後――中等部・グラウンド
中等部の体育の授業は一年生のときだけクラス単位で、二年生からは二クラス合同で男女別に分かれる。
１―Ｄの体育は火曜二限目と金曜五限目にあるため、身体測定で火曜日の授業が潰れたことで、第一回目は金曜日の五限目となった。
昼食の後という事で、半袖とハーフパンツの体操着に着替えてグラウンドにやってきた生徒達は、皆、若干面倒そうにしている。
ゆかりもその一人であり、隣を歩いていた風花に愚痴をこぼす。
「はぁ……火曜日の二限は良いけど、なんで金曜日は五限なのかねー。お昼食べた後に運動とかやってられないっての」
「そうだね。最初は体力テストをやっていくらしいから、今日は持久走じゃないといいなぁ」
「外でやる体力テストって、持久走・５０Ｍ走・立ち幅跳び・ハンドボール投げしかなくない？　長座体前屈・上体起こし・反復横とび・握力は体育館でやったりするじゃん」
クラスの人数を考えると、それらを全てやるには最低でも野外と屋内で各二時間ずつは必要だろう。
走る種目を同日に行うとは思えないので、持久走にしろ５０Ｍ走にしろ、今日は走らなければならない事がほぼ確定し、ゆかりはがっくりと肩を落とした。
それを風花が慰めようとしている後ろでは、普段はおろしている髪をゴムでポニーテールにしたチドリと美紀が並んで歩いていた。
部活はまだ許可が下りていないが、佐久間から後は部室の調整だけだと聞いているため、同じ部員ということで美紀の方から話しかけるようになったのである。
「吉野さんは運動は得意ですか？」
「普通。でも、疲れるのは嫌い」
実際のところ、チドリの運動能力は同年代男子よりも上なのだが、

チドリは他の同年代がどれだけ動けるか知らないので、自分が思っていることを素直に答えた。
そんな淡々と答えるチドリに、美紀は口元に握った右手を当てながらくすくすと苦笑で返す。
美紀自身、そこまで他人に誇れるほど運動が得意という訳ではないが、兄がボクシング部のエースということで、妹にも期待がかかって様々な運動部から勧誘された。
中にはマネージャーになってくれと言ってきた男子部もあり、そのような部活は兄である真田が『お話』して来なくなったが、今でも選手として試しに入部しないかと誘われることもある。
本人としては、当初から部活は一つの文化部だけで良いと考えていたので、美術工芸部に決めた以上は、他のどこにも入るつもりはない。
しかし、かけ持ちでも良いからと必死にお願いされて、それを断るのも心苦しく思っていたので、ここで少しばかり手を抜いて、クラスメイト経由で「真田美紀は運動はからっきし」という噂を広めてみるのも良いかもしれないと考えた。
（……でも、やっぱり駄目ですね。皆が頑張っているのに、一人だけ手を抜くのは良くないです）
本日の種目はまだ分かっていないが、先ほどまで考えていた事を頭から振り払う。
風花と同じように何事にも真摯な性格をしている美紀は、仮に勧誘が増えるとしても、卑怯なことは良くないと、一生懸命に今日の授業に臨むことにした。
そうして、顔をあげて女子よりも先にグラウンドに集まっていた男子たちの方を見る。
その中に、同じ部活の唯一の男子メンバーで、尚且つ、学年で自分よりも上の成績である湊を見つけ、一人で何をしているのかジッと見つめると、湊だけ服装が浮いていることに気付いた。
前を歩いていたゆかりも同じ事に気付いたのだろう、美紀が言うよりも早く口に出していた。
「……なんでブーツやねん」

「あれ、岳羽さんって関西の出身だったの？」
「え？　いや、京都にいたこともあるけど、関東の人間だよ？」
やった後に自分でも後悔するような下手なノリツッコミをしてしまったのだが、風花が違う部分に食いついてきたので、耳だけ赤くしながらゆかりはそのまま会話を続ける。
ゆかりの言った通り、湊も他の者と同じように体操着に着替えていたが、上は長袖のジャージを着ており、靴は運動靴ではなく脛辺りまである革のブーツだった。
マフラーを装備したまま、チョーカーもしていたので、流石に運動時に怪我をする可能性を考えて教師からストップがかかるのではないかと思えた。
そして、そんな事を考えつつ話しながら歩いて行き、グラウンドに下りる階段に座って本を読んでいた湊の元までやってくると、一番初めにゆかりが声をかけた。
「君さ、もうちょい運動しやすい格好にしようよ」
「……俺、見学だし」
「もしかして体調悪いの？　保健室に行くなら一緒に行こうか？」
「そういうのじゃない。とりあえず、医者の診断書は学校に渡しているから、体育は基本的に見学だ」
風花が様子を窺うため、心配そうな表情で腰を屈めて顔を近づけてくると、湊はその額を軽く手で押して距離を取りつつ訳を話した。
もっとも、その診断書は知り合いの医者に書かせた虚偽の内容であり、湊の身体はいたって健康そのものだ。
だが、無駄な体力を使いたくないという理由で、そんな真似をしている事を知っているチドリは、ムスッとしながら湊に不満の籠った目を向けている。
他の三人はチドリの表情に気付かず、もしや、湊は何か重い病気を患っているのではないかと心配そうに見ていた。
＊＊＊
湊とチドリの存在は生徒だけでなく、教師の間でも話題となっている。

二人の目と髪が後天的ながら天然であると知っているのは、入学前に保護者である桜から学校用の診断書を受け取って読んだ者たちのみで、担任である佐久間と保健室の養護教員、中等部の校長と教頭の四名だけである。

そして、事情を知らない多くの教師は、湊はカラーコンタクトをつけ、チドリは髪を染めていると思っているのだ。

無論、ただ勝手にそう思っている訳ではなく、二人がピアスを初めとしたアクセサリーを多数身に着けているため、同じようにファッションの延長線上と考えて判断しているのだが、授業を担当する教師の対応は大きく分けて三通りだった。

まず最も多いのは、教師らしく二人の格好を注意し、湊の冷たい視線で睨まれながら学校側に許可を取っていると言われ、かなりの精神的疲労を感じて授業に入っていくタイプ。

次に多いのは、二人の姿を見て蔑むような視線を送ると、不快そうにしながら無視して授業を進めるタイプで、出席を取った後は、湊が窓の外を眺めていようが、完全にいないものとして他の生徒のみを相手にして授業をしていた。

そして、最後に、これは女性教師に多かったのだが、初めから注意などせず完全に二人に怯えて恐る恐る授業を進めるタイプで、不良という人種に免疫がないらしく、ただ黙って席に座っているだけの二人に見られるだけで挙動不審になっていた。

以上の三種、疲弊・無視・怯えと極端な反応をみせているが、1―Dの体育を担当する体育科の盛本（もりもと）は、同僚達の情けない態度を見て、自分はガツンと言ってやると意気込んでいた。

身長は一九四センチ、髪型は角刈り、ピッシリとした白のポロシャツに下は黒のジャージで、首からホイッスルとストップウォッチを下げてグラウンドまで下りてくる。

高校と大学時代にラグビーをしていて、今年で三十二歳だが、トレーニングの賜物か未だに現役時代と変わらぬ体型を維持していた。

（うーむ……お、あの二人か、見るからに柄の悪いクズだな）

集まっている生徒の中に、一際目立つ髪色の女子と服装の男子を見

つけ、同僚達から聞いていた特徴と一致することから、ニヤニヤと笑いながら二人が噂の人物であると理解する。
教師がやってきた事で、喋っていた生徒らが集まってくる中、湊だけはただ一人階段で本を読んでいたため盛本は顔を顰めるが、粛清は他の者に指示を出してからだと我慢した。
「おーし、集まっているな。俺がお前たちの体育を担当する盛本だ。部活は男子バスケ部の顧問をしている。女子は今年だけだが、男子は来年も担当するかもしれんから、今から胡麻をすっていた方が良いぞぉ。アッハッハッハ！」
最後に冗談めかして豪快に笑い、まずは体育会系の教師であることをアピールする。
自己紹介の際に、わずかにジョークを挿む事で、生徒たちの印象を良くしておく狙いもあり、生徒の大半が笑ったことで狙いは成功したと内心でも笑った。
「それじゃあ、まずは基本の並びを作るぞ。火曜日に測った身長は覚えているな？　男女別で一列に並べ。お前らから見ると左に行くほど背が高くなるようにな」
盛本が指示を出すと、男女別に分かれた生徒がお互いの身長を教え合って正確に背の順を作ってゆく。
男子の何名かは、離れた場所にいる湊に視線を送ったりもしていたが、盛本が、
「並んでないヤツと欠席してるヤツは気にするな」
と言ったので、今いる者だけで並ぶことになった。
そうして、男女背の順で二列が出来ると、生徒の動きを見ていた盛本が続いての指示を出す。
「これが基本の二列横隊だ。縦並びなら縦隊というから覚えておけよ。次に点呼を取るが、俺が〝番号〟と言ったら、お前らは右から順に数を言っていけ。ただし、四は〝し〟、七は〝しち〟と発音するように。男女ともお互いに釣られるなよ？　それでは、番号！」
盛本の掛け声とともに、生徒は順に番号を言っていく。小学校では習わなかったことなので、何やら慣れない様子だが、お互いに釣られ

て間違えるということなく言い切る事が出来た。
　生徒の中には声の小さい者もいたが、盛本の今日の目的は既に決まっている。よって、声が小さい者は次回以降に直させることにして、次の動きの指示を飛ばす。
「では、女子は大きく一歩後ろに下がれ。そして、点呼で偶数を言った者は、斜め右後方に一歩動くんだ。つまり、いま右に立っている者の後ろという事だな。……よし、空いたところは右に詰めろ、これが四列横隊だ。次回からは、授業開始の時点でこの並びで整列しておくようにな」
　それだけ言うと、盛本は生徒をその場に座らせて出席を取り始めた。
　離れた場所で本を読んでいた湊も返事をしたので、一応、出席に丸印をつけると、出席を取り終わってから生徒らを体操するため広がらせた。
　次回からは、日直の生徒が掛け声の当番をするようになるが、今回は手本を見せると言って準備運動をさせてゆく。
　準備運動が終わると、続けて腕立て二十回、前後のペアで腹筋三十回と馬跳び二十回をさせて元の隊形に戻らせる。
　そして、今からトラックを一周走らせるのだが、その前に盛本は二人の生徒の名を呼んだ。
「よし、それでは今からこの隊列のままトラック一周走って来い。だが、吉野、有里、お前らは俺のとこに来い」
「……何か用？」
「何だ、その口の利き方は！」
　呼ばれたチドリが列から外れて盛本の前に出ると、盛本はチドリの言葉使いを注意した。
　相手によって敬語も使える湊と違い、チドリは誰が相手であってもタメ口＋呼び捨てが基本であったため、教師である盛本がそれを注意する事はなにもおかしくはない。
　学校というのは、社会に出る前に最低限の教養とマナーを学ぶ場なので、仮に心の中で相手を見下していようが、目上の者には敬語を使

うように言う事は至極真っ当なことだ。
だが、大男がいきなり幼い女生徒を怒鳴りつけるというのは、いくら礼節を教えるためであっても、周囲からすれば良いようには見られない。
走り出そうとしていた生徒達も、盛本の声を聞くと一体何だと、立ち止まって怪訝そうに事の成り行きを見ていた。
チドリを注意していた盛本は生徒のそんな様子に気付かず、腕組みをして胸を張ると、自身よりも三十センチ以上も背の低い相手を見下すように声を張り上げた。
「お前は学校をなんだと思っているんだ！　学生のくせにピアスなんぞ開け、髪もド派手な色に染めて。ここはファッションショーの会場じゃないんだぞ！」
「これ、地毛なんだけど？」
「そんな日本人いるか！　俺が黒く染め直してやる、こっちに来い！」
「痛っ」
髪を染めてきた生徒がいた場合、それを染め直せるように黒の髪染めスプレーが職員室には常備されている。
その事は、該当生徒がいた場合に教師が染め直すという事を含めて、入学案内の時点で告知していたので、そこまで連れていこうと盛本はチドリの腕を掴んだ。
だが、あまりに乱暴に強く掴まれ、チドリが声をあげると、その声に反応し動く影があった。
「お前、その手を離せ」
「……あ？」
「さっさと離れろ。チドリに触れるな」
読んでいた本を階段に置いたまま、湊は目を大きく開いて立ち上がり階段を降りてきた。
低く感情の抑えられた声は、中学生に出せるレベルを超えた尋常ならざる凄みを含んでいる。
しかし、所詮は中学生だと、チドリの腕を掴んだまま振り返った盛本は、自分に命令してくる湊に注意した。

「お前もか、有里！　目上の人間には敬語を使えと教わっとらんのか！」
「……いいから離せって言ってるだろ」
「っ!?」
やってきた湊は、相手の言葉を無視してチドリの腕を掴んでいた相手の腕を強く握る。
そのあまりの強さに怯んだ盛本は、掴んでいた腕を離し、湊の腕から逃れるように腕を振って数歩下がった。
離れて湊に掴まれた部位を見ると、十秒にも満たない時間しか掴まれていなかったというのに、くっきりと指の痕がついている。
本人にその意思はなくとも、先にチドリに暴力を振るったのは自分だということも忘れ、盛本は湊を睨むと怒声を張り上げた。
「貴様、教師に暴力を振るったな！　生徒がそんな真似をして良いと思っているのか！」
「俺は腕を掴んだだけだ。お前もチドリにやったことだろう？」
「学園始まって以来の問題行為だぞ！　貴様を停学にして保護者を呼び出してやるからな！　退学も覚悟しておけ！」
頭に血が上っているためか、話を全く聞いていない相手に、湊もチドリも嘆息して呆れたような視線を向ける。
それがさらに頭に来たのか、盛本は湊に近付いて襟元を掴むと、身長差を利用して相手を持ち上げた。
身体ではなく、服を掴んで持ち上げるには、かなりの力で服を引っ張らないと支えられないため、掴まれている方は首が絞まるのだが、激昂している相手は気付かず言葉を続ける。
「どこまでも大人を馬鹿にしおって！　生徒が一丁前に教師に逆らうな！」
「……っ」
言った直後、盛本は右腕を振り抜いて湊の頬を殴りつけた。
掴まれていた手を離されたことで、浮いた状態で攻撃を喰らった湊は、殴られた勢いで倒れて地面を転がった。
「有里君っ!?」

様子を見ていた生徒からどよめきが起こり、ゆかりたち部活メンバーが心配して駆け寄ってくると、他の生徒も同じように集まってくる。
一方、傍にいたチドリは目を見開き、直後に殺意の籠った視線を敵に向けるが、敵の殲滅よりも先に倒れた湊を気遣って傍らにしゃがみ様子を尋ねた。
「湊、大丈夫？」
「……口の中、切った」
口元を拭いながら立ち上がり、横を向いて唾を吐くと、確かに赤いモノが混じっていた。
それを見た風花や何人かの女子から息を飲む音が聞こえてくるが、立ち上がった湊は、他の者を下がらせると、敵と定めた者を真っ直ぐ視線で捉えた。
「……先に手を出したのはお前だぞ」
言い終わったときには、湊は一歩を踏み出し、二歩目に右足で固い地面を踏み抜いて、空中を滑るように移動していた。
その一連の行動が行われるまで僅か一秒、そして、相手の目の前に左足で着地した瞬間、周囲にバンッ、と何かの炸裂音が響き、空中で腰溜めにされていた右腕が真っ直ぐ打ち抜かれた。
「っ……おぼぇっ!?」
腹部を殴られた盛本は、足と腹筋に力を籠めたにもかかわらず、踏ん張りきれず後方に吹き飛び地面を転がると、止まったときには苦しそうに胃の中身を嘔吐し、咳き込んでいた。
湊の一撃が決まり、吹き飛んだ相手が止まるまで、実際には六秒はかかっていたが、武道の試合はおろか、殴り合いの喧嘩もほとんど見たことの無い生徒達は、一瞬のことで何が何だかと状況が呑み込めていなかった。
しかし、同じクラスの少年が三十センチ以上も身長差のある巨漢を、拳の一撃で吹き飛ばし、沈めたという事実だけは理解出来た。
「……あ……り、さとぉ！」
転がったときについたのか、顔を土で汚した盛本が顔色を青くしな

がらも、地面に蹲ったまま恨めしそうに湊を睨んでいる。
怨嗟の声を吐いた直後、再び咳き込んでいるが、湊のまわりにいる女子は冷たい視線でそれを見ている。
どうやら、今まで湊に恐怖感情を持っていた者も、激昂して先に手をあげた大人には強い不信感を抱いたらしい。
そして、以前、湊に朝の挨拶をしてきた女子が、湊の傍にやってくると声をかけた。
「有里君、口の中切ったなら保健室行こうよ。私、今日は日直で保険室の場所も知ってるから連れて行ってあげる」
「……必要ない、すぐに止まる」
「有里君の怪我を放っておいたら、私が怒られちゃうの。だから、お願いだから案内させて？」
腕を引っ張られてそう言われてしまうと、そこまで強く拒否しようと思っていない湊は従うしかない。
俯き小さく溜め息を吐くと、顔をあげて頷いて返した。
そのように湊の了承を得られた女子は、嬉しそうな輝く笑顔を見せ、吐瀉物の傍で蹲ったままの盛本を迂回するように階段まで進み、湊の本を回収すると階段を上がって行った。
「お、おい、お前たち！　ごほっ、ごほっ……まだ、授業は終わってないぞ！　戻れー！」
まだ授業時間は三十分ほど残っているが、日直の女子の後ろを続く湊のさらに後を、クラスの女子たち全員がついてゆく。
腹部を押さえてよろよろと立ち上がった盛本が制止の声をかけるが、誰一人として振り返らずに帰って行ってしまい。
慌てて盛本が帰って行く者らを追おうとするも、先ほどの一撃でかなり深いダメージを負ってしまったため、数歩進んだだけでよろけて地面に膝をつく羽目になり。階段に手をついて悔しそうに「くそっ、くそっ」と呟いていた。
全員が湊を案じてついて行った訳ではないが、真面目な美紀や風花でさえ、今回の盛本の行動は許せないと授業のボイコットを決めた辺りに、女子たちの本気度が伺える。

そうして、自分たちはどうすべきかと悩み、帰るタイミングを逃した男子たちは、授業終了のチャイムがなるまでグラウンドで立ちつくしていた。

――保健室

湊は更衣室で着替えると、日直の女子と合流し、一緒にいたチドリと風花と共に中等部の保健室へやってきた。

本当は何人も同行したがっていたが、いつの間にか委員長のような立場になっていた美紀があまりに大人数で行くのもどうかと諌め、他の女子を大人しく引き下がらせると、学校へ向けた授業をボイコットした理由説明をまとめておくと言って教室へ帰って行った。

そうして、保健室へ向かう先頭を歩いていた湊が扉に手をかけ開くと、中にいた女性の一人が慌てた様子で何かを隠そうとしていた。

「わわっ、有里君だ！　姫子センセ、隠して隠して！」

「そうは言っても、既に見つかっているからな。無駄だと思うぞ？」

何故、彼女がここに居るかは不明だが、湊が入ってきたことに気付いた佐久間は、中等部の保険医である女性にビールの缶を渡そうとする。

しかし、保険医の言う通り、湊は佐久間が持っている缶の柄を既に見て記憶していた。

故に、冷めた瞳を向けると、佐久間はしょんぼりと肩を落として勝手に言い訳を始める。

「び、ビールじゃないもん。ノンアルコールのビール風飲料だもん」

「……仕事はどうした？」

「フフン、先生は金曜の五限はお休みなのです。なので、お友達の姫子先生と酒盛りをしてました」

「……帰れ」

一応、話を聞いてやったが時間の無駄だったと嘆息すると、湊はすぐにばっさりと切り捨ててやる。

すると、佐久間は中身のまだ入った缶を保険医の使っている事務机に置き、湊の腰に向かってタックルした。

「うわーん、見捨てないでー」

「うぐぅ……っ」
その、全身砲弾と呼べそうな見事なタックルを喰らった湊は、歯を食いしばり何とか倒されないよう耐えきるが、刹那の瞬間だけ瞳が蒼くなった事をチドリは見逃さなかった。
そうして、普段の瞳に戻っていても、湊が多大なストレスを感じていると理解したチドリは、湊の腰に抱きついたままの担任の脇腹を、靴の底で強く押しやった。
「わきゃーっ!?」
急に横から力が加わると、バランスを崩した佐久間はそのままひっくり返る形で倒れる。
他の女子二人と保険医が少々驚いた顔をしたが、このままストレスを感じ続けると、湊の瞳が蒼くなってしまうので、それを阻止するために元凶を断つのは止むを得なかった。
倒れたときに後頭部を打ったのか、佐久間は手でさすりながら起き上がり、自身を文字通り足蹴にした生徒に非難の声をぶつける。
「先生を足蹴にしたなー！　吉野さんだけ夏休みの宿題多めにだすからねっ」
「……それより、湊が盛本とか言うゴリラに殴られて口の中切った」
「ん？　ああ、本当に用事があってきたのか。なら、ほれ、私の膝を枕に寝て口の中を見せてみろ」
チドリの言葉を聞いた保険医はやれやれという表情を見せるも、すぐに長椅子に移ると自身の膝をポンポンと叩いて湊を誘った。
そんな保険医の名前は、櫛名田（くしなだ）　姫子（ひめこ）。今年で二十六歳で佐久間よりも長身だが胸は標準サイズであり、何故か高等部の女子制服の上に白衣を羽織っている。
服装に目を瞑れば、その尊大な口調も雰囲気も大人の女性と言える分、何かと子どもっぽい佐久間よりはマシかもしれない。
ただし、腰まで伸ばしている艶髪のところどころに寝癖のような跳ねっ毛があり、四つあるベッドの内の一つに携帯ゲーム機やお菓子が置いてあることから、暇なときはそこで寝ているのが丸分かりであるため、実際は同じくらいに残念な相手であった。

そうして、櫛名田に膝へと誘われた湊が、一体どんな対応を見せるか他の者が注目していると、湊は棚にあったグラスの一つをとって、それに水道水を入れて口を濯ぎ出す。
「……ふむ」
無言で誘いを断られた櫛名田は、眉を寄せて不満そうにするが、湊の吐く水が朱に染まっているのがチラリと見えたので、薬棚に向かうと、口の中に貼れる絆創膏のような役目を果たす透明なシートを取り出した。
「ほら、これを切った部分に貼るといい。貼り方は切手とほぼ同じだ。ただし、患部周辺は乾かしておけよ。なんなら、私が貼れる状態に」
相手の言う事も無視して、近くにあったティッシュで患部の周辺を拭くと、湊はシートを水で濡らして口内の粘膜に貼りつけた。
最初は変な感じがしたのか、口をモゴモゴとさせていたが、すぐに慣れたようで、櫛名田のプライベートスペースと化したベッドに向かい、湊は一枚ずつ小分けになったソフトクッキーの大袋を手に取り、そこから一つ取り出し食べ始めた。
口の中を切ったというのに大丈夫かと女子たちが心配する中、起き上がりノンアルコールのビールの残りをあおっていた佐久間は、長椅子に腰をおろして湊に話しかける。
「ねぇねぇ、盛本って体育科の盛本先生だよね？　なんで殴られちゃったの？」
「あいつ、私の髪が地毛だって知らなくて、染め直してやるって腕を強く掴まれたの。それで湊が怒って腕を離させたら、今度はキレて教師に逆らうなって」
「なんとも勘違いしたやつが居たものだな。それは他の奴らも見ていたのか？」
櫛名田が尋ねると、風花たちがしっかりと頷いた。それを見て、佐久間と櫛名田は視線を交差させ、佐久間が頷いて返す。
そして、櫛名田が引き出しから書類を取り出し、机の上の羽根ペンで何かを書き始めた。
「……殴られたのは左の頬だな。濯いだ水が赤くなるほど出血してい

たようだし、病院への紹介状を書いてやろう。まったく、原人め、大切な生徒に手を出すとは」
実を言えば、血はここへ来るまでに止まりかけていた。
しかし、先ほどの佐久間のタックルを受けた際に、歯を食いしばるほど力を籠めてしまい、再度傷口が開いたのである。
湊たちが制服に着替えているため、殴られてから経っている時間を計算した櫛名田はその可能性にも気付いているが、被害を受けた当人が何も言わないので、可愛いヤツめと思いながら佐久間には伝えないでいた。
すると、湊が再び出血した原因に気付いていない社会科教師が話に加わる。
「歴史を専門にしてる私としては、原人と一緒にして欲しくないんですけどねー。でも、教頭先生には他の先生方に連絡してくれるよう私の方から言っておきます。ゴメンね、二人とも。先生たちがちゃんと髪のこととか連絡してなかったせいで嫌な思いさせちゃって……」
心から申し訳なく思っているように表情をくしゃりとさせると、佐久間は湊とチドリに深々と頭を下げ謝罪した。
風花と日直の女子は、担任が頭を下げて謝っていることに衝撃を受けているようだが、確かに事前に事情を学校側に伝えていたのに、それが全ての教職員に伝わっていなかったのは学校側のミスだ。
今回の件も、学校側が事情説明を怠らずしっかりとしていれば防げた事態であるし、盛本の軽率な行動も十分に問題だが、世論を考えた場合の責任は学校と盛本で４：６の割合ほどになるだろう。
当然、教師が生徒に手を出したということで保護者に連絡がいくだろうが、それを桜たちから聞いた喧嘩っ早い組員たちは全面戦争だと意気込むかもしれない。
佐久間は以前に家に行った事があるので二人の家が極道だと知っているが、無論、そうなる可能性を考慮して謝罪した訳ではないだろう。自分たちの責任で生徒に怪我を負わせてしまった。その事を心から申し訳なく思っているだけだ。
そうして、佐久間がいつまでも頭を下げていると、湊は傍まで近付

き後ろ襟を掴んで引っ張り上げた。
「わわっ、ちょと、有里君っ!?」
「……別に謝ってもらう必要はない。けど、体育の担当教官は、チドリや他の女子のためにも替えてやって欲しい」
「あ、うん。教頭先生と学年主任に言えば。一年のもう半分のクラスを受け持ってる柿原(かきはら)先生っていう女性の先生に替えて頂けると思う。二人の事も、今日の放課後に言っておくから、また連絡するね」
顔をあげた佐久間の頭に湊はポンポンと優しく二度ほど手を置いた。
身長で言えば湊の方が低いが、生徒にされたことでも嬉しかったようで佐久間の顔に明るさが戻り、にっこりと笑って喜んでいる。
佐久間に元気が戻ったことで風花と日直の女子が安心していると、紹介状を書き終えた櫛名田が冷めた表情で湊を見つめ、書類を手渡した。
「……童貞にしては、随分と女の扱いに慣れているな。騒ぎに巻き込まれるトラブルメーカー体質だと見抜き、入学より目を付けて楽しみにしていたが、その様子だと女性関係での問題も起こしそうだ。これは大人・医者・教師・女の四つの立場からの忠告だが、責任を取るつもりがないならするな。人間なら欲望に理性で勝て……余談だが、私は二十六だがまだ処女だぞ?」
「帰るぞ。こいつらの傍にいるのは、お前たちの教育上よくない」
「……あれ? 先生も含まれてる? 有里君、それはあんまりだよ!」
先生は姫子先生みたいに歪んだ趣味はしてないもん!」
女子たちの背中を押して保健室を出ようとしている湊に、佐久間は人差し指だけ伸ばした手を頭の横にやり、鬼の角を表し自分が怒っているとアピールして抗議する。
就業時間中にノンアルコールとはいえ、ビールを飲んでいた者にそのように言われた櫛名田は眉を顰めるが、湊と佐久間が揃ってこき下ろすのには理由がある。
櫛名田の表向きの趣味はゲームとアニメ観賞だが、本人が生き甲斐にしているのは騒ぎを第三者の立場で眺めること。また、美しい者が

浮かべる様々な表情を眺め、性別を問わず時にＢ辺りまでつまみ食いするのも趣味だったりする。
今年から中等部にやってきた二人は、流石につまみ食いの事はまだ知らないが、何かにつけて湊へセクハラを働こうとしているのは体験・目撃しているため、被害者と生徒を守る教師として警戒していた。
故に、湊は櫛名田が自分以外に目を付けないよう佐久間の言葉に何も返さず、そのまま急いで出て教室へと帰っていったのだった。
その後、佐久間も終わりのホームルームをするため職員室に一度帰ると言って保健室を出ていき、職員室で湊を退学にすべきだと騒いでいた盛本を、頬にシステマのストライクを放つという力技で黙らせ。
ホームルームを終えて帰ってきたときには、櫛名田と共に五限目での盛本の行動を話し、教頭には教師陣に湊たちの瞳と髪の事情説明の徹底を誓わせ、最後に体育教官の変更までを約束させた。
それにより、湊が盛本を殴ったことは正当防衛だと不問とされ、盛本は三割の減給六ヶ月の処分がくだり、中等部校長・教頭・盛本が揃って日曜日に菓子折を持って二人と保護者に謝罪に行くという結果になった。
その際、子どもたちは眞宵堂のバイトに行っていたのでいなかったが、応対した桜が組員も縮みあがるような凄みを見せたため。以降、謝罪に行った三名は、子どもたち二人に対し常に低姿勢で接するようになったのだった。

第三十五話　夜の散歩

４月１９日（火）
放課後――月光館学園
「じゃあねー、みんなー！」
部活を終えて下校して行く生徒らに、下駄箱の置いてある生徒玄関から佐久間が手を振る。
手を振っている担任に、女子たちは軽く頭を下げているが、湊とチドリは振り返りもせずスタスタと歩いていた。
そうして、他の生徒も前を向いて歩きだしたことで、振っていた手を下ろし、今まで張っていた気を抜く様に息を吐く。
「フゥ……」
佐久間の目が追っているのは、青みがかった黒髪の男子の後ろ姿。自分が正式に教師となって初めて会った記念すべき生徒だ。
ルックスも威圧感も人並み以上で、存在感という意味では他を圧倒している。
初めて会ったとき相手は着物を着ていたが、何故か蒼い瞳をしているように見え、保護者がいるというのに挨拶よりも先に「綺麗……」と思わず呟いてしまったほどだ。
生徒と対面することが教師人生のスタートというのなら、佐久間はこれ以上ないくらい衝撃的な出会いをした訳で、例えこれから定年まで教鞭をとり続けたとしても、始まりの出会いを忘れない自信がある。
生徒には平等に接するべきというのは理解できるが、それほどの出会いをした相手を、他の生徒と同じように扱う気にはどうしてもなれなかった。
「んー……あれ？　むむむぅ」
そうして、佐久間は湊の姿が見えなくなるまで眺めていようと思ったが、湊の隣に何やらぼんやりとした人影が動いているように見えた。
一瞬の事だったので、はっきりと認識するには至らなかったが、人

影の髪は湊と似た色の長髪で、背は少し低いくらいの印象だった。
あれが何かは分からない。だが、何か悪いモノの可能性も考慮して、今後の学校での湊の様子に注意しておく事にし、佐久間は職員室へと戻ってゆくのだった。
影時間――タルタロス・２７Ｆ
タルタロスの狭い通路に銃声が響く。一つ、二つ、三つ、飛びだした薬莢が固い地面に落ちた際の甲高い音が銃声の反響と共にその場に余韻を残しながら、心の化生たるシャドウと共に静かに消えてゆく。
「……」
残弾が空になったのか、湊は弾倉を外してその場に捨てると、腰のホルダーから新たな弾倉を取り出し、銃に装着した。
何年もしてきた動作だけに、最初期のようにもたつくことはない。しかし、来週の日曜に満月が迫っているため、シャドウたちも活発になっているのか、倒したばかりだというのに新たな敵が姿を現していた。
敵の数は六。目の前に四体の魔術師〝ダンシングハンド〟が、背後から二体の女帝〝ヴィーナスイーグル〟がさらにやってきた。
《グララ！》
二体のダンシングハンドが現れてすぐに攻撃を仕掛けてきたため、蒼い瞳で敵を睨み、銃を構える際にグリップの底でカード砕くと、水平撃ちで素早く相手を撃ちながら呼び出したペルソナに指示を出す。
「ザシキワラシ、後ろの鳥にマハブフ」
節制〝ザシキワラシ〟は、ふわりと青い髪を揺らしながら現れると、こくりと頷いて両手を突き出し氷の刃を幾つも放つ。
決して小さくない身体で羽ばたき空中に留まっていた敵は、面で迫りくる攻撃を回避しきれず、仮面や胸、羽ばたいていた翼を氷に貫かれ、落下すると黒いもやとなって消滅した。
襲いかかってきた敵を殺した湊がそれを気配で感じながら、銃を構え直しリアサイトとフロントサイトで正確に狙いを付けると残りの敵の仮面に弾丸を撃ち込み、全ての敵の排除を完了した。

「……フゥ」
周囲の敵の気配も消え、とりあえずの安全が確保されると、セーフティを外したままの銃を腰のホルスターに戻し、湊は自分を見上げていたザシキワラシの頭を撫でた。
ペルソナだというのに、撫でられた相手は嬉しそうに顔を綻ばせもっと撫でろと頭を突き出している。
ザシキワラシは、湊がこの五年の間に新たに作ったペルソナで、見た目は身長一四〇センチ後半ほどの女の子にしか見えない。
髪は湊よりもさらに青みがかった長髪で前髪をパッツンと切り揃えており、服は胸元に大きな水色のリボンがアクセントとなった白地に黒の生地を重ねたパフ・スリーブの膝丈ドレス、さらに真っ白のレース付きのソックスを膝辺りまで伸ばし黒のエナメルシューズを履いている。
古来から知られている日本の妖怪でありながら、服装が完全に現代風であるため、最近になって初めて対面したチドリは「……変」とこぼしていた。
しかし、湊にしてみれば、相手は現れた時点で今の服装で似合ってもいるというのに、どこが変なのかが分からない。
ザシキワラシ自身は、マスターである湊と同様にどこがおかしいのか分かっていないので、彼女の服装は湊の心象イメージが反映された可能性があるというのが、ベルベットルームの住人の推測である。
《もっと……撫でて……》
「影時間が明けるから、そろそろ帰る。俺の中に戻ってくれ」
《私は……ペルソナだってばれない……》
シャドウだけでなく他のペルソナも鳴き声のようなものは発するので、ザシキワラシが声を出しても不思議ではない。何より、今では馴染み過ぎて宿主もすっかり意識から外しているが、ファルロスという本来はシャドウでありながら人の形をして流暢に話す先人もいる。
だが、別の人格であるファルロスならばともかく、湊のペルソナでありながら、さらに湊とは別の思考を有している点については、流石にベルベットルームの住人も首をかしげた。

以前から、心の具現たるペルソナを同時召喚が可能だったことで、湊は精神が複数に分裂している可能性を指摘されていたが、飛騨が精神鑑定や診断を受けさせた時点では、全く異常は見られないという結果となっていたのだ。

しかし、異常がないとすれば、湊と別の記憶と人格を持ったザシキワラシが何者なのかという疑問が生じる。

ザシキワラシは呼び出す度、過去に呼び出された記憶も連続して持っている。呼び出されていないときには、不思議な広い空間を他のペルソナと同じように漂っているらしいが、それが湊の心の海であるとすれば彼女は確かに湊の心の一部ということになるのだ。

ならば、ザシキワラシの行動は全て湊の心が反映されている事になり、湊には自分自身に甘えたい、自分自身に懐いているという部分があることになるが、相手が自分だけの記憶を持っていることでそれは否定された。

今は彼女を生み出す素材として使ったため手元にいないが、最初にペルソナ合体で生み出したプチフロストも同じ様子が確認されていた。それは相手が呼び出されたときの事を、己の記憶として保持しているということだ。

確かに、声を出し、ある程度は自律して動いていたので、身体の構造も生物に近いということで脳などが存在するのかもしれない。

そうなると、脳があるのだから自分だけの記憶を持てていても不思議ではなくなるのだが、記憶があるのならば、いつかそのペルソナだけの自我と心が形成され、ペルソナでありながらペルソナやシャドウを生み出せるようになってしまう可能性も危惧される。

《あなたと……お散歩……したい、な》

「……少しだけだぞ」

《……やった……うれしい》

湊のように複数のペルソナを扱える〝ワイルド〟の覚醒者ならば、仮面の一つを失う程度で済むが、他の者は自分の精神の根幹を呼び出し使役している状態だ。

それが自我を形成し、勝手に動き回るようになれば、シャドウが抜

け出た状態と同じようになり、途端に影人間になってしまうだろう。
相手を倒したところで、自我の生まれた者を精神の根幹に戻して大丈夫なのかという疑問も残る。
ペルソナ及びシャドウが自我を持って、さらにペルソナ能力に目覚めた前例はないが、湊とベルベットルームの住人達の間では、そのような存在が現れたときには、抜け出ている間の元の持ち主の状態の確認と、討伐して自我を持ったペルソナが戻ったときに持ち主にどのような変化が起きるかを確かめようという意見で纏まっている。
湊ならば問題が起きる前に解決することも可能かもしれないが、相手がチドリやチドリのまわりの世界の人間でもなければ、それほど進んで助ける気はない。
何故なら、救える力があるからと言って、救わなければならないなどと湊は思っていないから。
仮に力があるなら救わなければならないのであれば、世界中の募金箱からお金が溢れ出る事になり。さらに、輸血の血が足りなくなることはあり得ないし、ドナーは必要な情報を打ち込めば簡単に見つかることになる。
しかし、現実はそうではない。今の世界の人間の多くは、〝救ってやりたいとは思う〟に留まり、結果的に救う気の殆ど無い湊と同じように行動には移さないのだ。
まわりがしていないから良いかと言えばそうではないが、やりもしない口先だけの人間の言葉はあまりに軽い。親を殺され自分の身を器として既に地球上の全ての生物を一度救っている湊が、そんな者の戯言を聞く必要はないだろう。
《私……海の近くを歩きたい……》
「まだ水は冷たいぞ」
《波の音が……聞きたいだけ……》
湊の上着の裾をちょこんと摘みながら、その後をついて行くザシキワラシの言葉を聞くと、湊は彼女に視線を送り、すぐに前を向いて脱出装置を目指す。
他の者は十六階の階段を柵が囲っているため登ってこられないが、

湊は空を飛んで窓から上階に侵入している。番人のいるフロアには転送装置が置かれていたが、柵で囲われていることにも意味があるのだろうと、敢えて起動させずに置いていた。

しかし、脱出装置は一方通行のため利用しても問題がない。行き止まりに装置を発見した湊は、操作して起動させるとザシキワラシと共にタルタロスを後にした。

＊＊＊

影時間が明けて既に一時間が経過しただろうか。湊は真っ直ぐ帰らずに、月夜の散歩に付き合っていた。

夏には海水浴客で賑わう浜辺を歩き、暗い海を眺めながら波の音に耳を傾ける。

傍らには、少女の姿をした仮面の一つが砂に足を取られないよう注意しながらとてとてと歩き、言葉を交わしていないにもかかわらず、どこか楽しそうに穏やかな表情をしている。

（……静かだな）

ブーツの底が沈みこむ感触を感じながら立ち止り、湊は空に浮かぶ月を眺めて独り心の中で呟いた。

仕事を始めてからというもの、湊は鍛錬か仕事かシャドウ狩りにばかり出向いていた。チドリや桜に付き合って出かけたこともあるが、素直に遊びを楽しめるほど今の湊は感情に揺らぎがない。

チドリやその周辺の人物に関わることであれば、他よりも感情が動きもするが、それらは全て激情である。先日の盛本との一件がその良い例だ。

鍛錬を重ね、仕事をこなしていく中で感情のコントロールも徐々に覚えたことで、完璧ではないが攻撃に感情を乗せないことも成功し、魔眼の発動を抑えられるようにもなっている。

だが、怒りは未だに抱き易く呑まれ易い。敵になる可能性がある者は殺せという、自分の中に居るナニかが囁き続け、湊も仕事の中でそれに同調しかけたことがあった。

仕事では探知以外でペルソナを使用しないことにしているので、幸いなことに周囲を巻き込まずに済んだが、人質の子ども奪還の仕事で

は犯人らを全員細切れにした事もある。
引き金となったのは、人質の中にいたチドリに似た背格好の少女が犯人に殴られたことで、探知でその瞬間を見ていた湊は、イリスと決めていた当初の予定も無視して壁を切り崩し、銃火器を使ってくる犯人グループを相手に、中華剣一振りで鏖殺してみせた。
人質の子どもらは、湊が入ってきた壁の穴から先に逃がしたので、トラウマになるような凄惨な場面は目撃していないが、制圧後に現場を目にした依頼人も信じられず、青ざめ引き攣った表情で湊に依頼金を倍額払うと申し出た。
仕事は自身のスキルアップの他、チドリが一生涯お金に困らないようにと稼いでいるため、不思議に思いながらも素直に受け取ったが、イリスは作戦を無視した事と、湊の行動が人質救出から犯人の殺害に切り替わっていた事を指摘し、湊の頬を全力で殴りつけ怒っていた。
《……楽しい、ね……》
「なら、良かったよ」
《あなたは……楽しくない……？》
「いや、いい気晴らしになる」
湊が立ち止まって月を眺めていたことで、少し先を行っていた少女が振り返り小さく笑いながら喜びを表した。
その言葉を聞いて淡々と返すと、今度は不安そうな表情を見せたので、湊は仄かに笑みを浮かべて歩み寄り頭を撫でた。
《あなたが……うれしいと……私もうれしい……》
そう言って、途端に相手は湊の胸に顔を埋めて抱き付いてくる。どことなく昔のマリアの姿がそこに重なるが、やはり相手が自分の精神の一部だとは思えなかった。
現在、湊の持てるペルソナの最大数は十体で、既に八体が埋まっている。可能性の芽のカードチャンスでは、探知で絵柄を見抜くという反則技を使って選択しているため、新たなペルソナを得ようとしない限りは、手持ちが増える事はない。
嘗てのように、精神が大きく変化・成長することで、新たなペルソナが目覚めることもあるが、湊もそんな物は一度しか体験していない

ので、ほぼあり得ないと思っている。
エリザベスの説明では、合体で生み出す以上に、自力で目覚めたペルソナの方が強い力を秘め易いということだが、無限の可能性を秘めたワイルドの力を持っている者には無関係と言っていいだろう。何せ、ペルソナさえ付け替えれば、攻守ともに楽に対策を取れてしまうのだから。
そして、ある程度の時間マスターである湊の胸に顔をうずめていた事で満足したのか、ザシキワラシは身体を離した。
離れてもまだ服の裾をちょいと摘んでいるが、それには何も触れず、湊は無粋な出歯亀へと冷ややかな口調で声をかけた。
「……こんな時間に散歩か？」
抱きついていたザシキワラシが身体を離したタイミングで、影から二人を見ていた存在に声をかけると、相手は砂浜との境界になっているコンクリート製の階段から降りてきて、含みのある微笑で言葉を返してくる。
「こんばんは。満月はまだ先ですが、月の綺麗な晩は散歩をしてみるものですね。このように不思議な出会いがありますから」
下りてきたのは、素肌に纏った橙色の麻柄半袖シャツの前を全開にし、青いヴィンテージ物のジーンズを穿いたタカヤ。その後ろには上下ともスポーツメーカーの白いジャージを着て、小さなアタッシュケースを持ったジンもいる。
二人は湊よりも年上で既に二次性徴を迎えており、今では湊より十センチ以上背が高くなっている。
もっとも、一年もすれば湊も十センチ以上背が伸びているだろうから、現時点でのことなどまるで気にしていない。
だが、近くにやってくると、僅かに見上げる必要があるため、その点だけは面倒に思っていた。
タカヤとジンは、湊の元までやってくると、湊の背に隠れるようにしているザシキワラシに視線を送る。そして、初めて見る顔に興味を持ったのか、「ふむ」と小さく声を漏らすと湊に話しかけた。
「チドリにしては小さいと思っていましたが、別人でしたか。そちら

の方は仕事仲間ですか？」
「……違う」
「おや……。では、どういったご関係で？」
「話す必要性を感じない。用がないなら、俺たちは帰るぞ」
言い終わると、相手が何かを言う前に湊は階段に向かって歩き出した。
ジンがそれを見て少し驚いた様子を見せるが、タカヤは湊のつれない反応にも慣れているので、小さく息を吐いて肩を竦めるに止めている。
しかし、全く何もしないかと言えばそうではなく、湊とザシキワラシが階段を登り切ったところで、ジーンズのベルトに差していた大型の拳銃を抜いた。
ジンが制止するも間に合わず。しっかりと足元を固め両手で構えると、タカヤは湊の背中に向かって躊躇いなく引き金を引いた。
瞬間、爆発音が浜辺に轟き、文字通りにタカヤの握る拳銃が火を噴いていた。
決して人間を殺すために使う威力ではない、クマであっても一撃で仕留められる凶弾が湊に届こうとしたとき、それは氷壁に阻まれ止まっていた。
「……そういう事ですか」
湊を守るため両手をかざし、紫水晶の瞳でタカヤを睨んでいた少女を見て、タカヤは得心がいったと拳銃をベルトに戻す。
タカヤが使用した銃の名前は『Ｓ＆Ｗ　Ｍ５００』、２００５年現在の時点で世界最強の威力を持つ回転式拳銃と呼ばれるものだ。
発射から急速に弾速が落ち始めるため、三十メートルほど距離が開いていた事でザシキワラシは防いでみせたが、距離が十メートル程度だったならば防御に張った氷壁は破壊され、湊はファルロスに蘇生して貰わなければならない重傷を負っていただろう。
威嚇や反応を見るというには、あまりに過ぎた威力の代物を容赦なく放ったタカヤを敵と定め、ザシキワラシは野球のアンダースローのように腕を振るうと氷槍を地に走らせる。

「モロス、アギラオや！」
一直線に地を走りタカヤを狙う氷槍をジンのモロスが壁となり、さらに巨大な火球をぶつけて防ぐ。高温の火球が氷と衝突し、周囲は真っ白い水蒸気に包まれるが、追撃の様子は見られない。
相手が敵と見なしたタカヤを仕留めようと威力と確実性を優先したことで、速度が犠牲になりジンは何とか召喚と撃墜が間に合ったが、視界が悪い状態では分が悪い。
そうして、気を張った状態で視界が晴れるのを待っていると、階段の上にいた湊はザシキワラシの頭に手を置き、氷のように冷たい蒼い瞳でタカヤを見ていた。
「……新しい玩具の自慢か？」
「ええ、発売されたのは二年ほど前ですが、色物という扱いの割に人気でしてね。やはり、最強の拳銃という響きに惹かれる者が多いのでしょう。かなりの値が張り、手に入れるのに苦労しました」
言われてタカヤは再び銃をベルトから抜き出し、月光で照らして相手に見えるようにして話す。
タカヤがこの銃を湊に見せるのは初めてだ。今でも交流は続いているが、それぞれが別口で仕事をしていることもあり、休日らしい休日もない事から、自然と会う機会は減っていた。
マリアは湊に会うためにポロニアンモールの眞宵堂に出向いてくることもあるため、以前と変わらぬ親交が続いているが、湊とチドリが中学校へ通い始めることで会う時間が減ると知ったときには、悲しそうな顔を見せた事もある。
そのときは、湊がお揃いのアクセサリーとして、菱形のアレキサンドライトが一つあしらわれた黒いレザーチョーカーを買い与え、ベルベットルームで防護処理を施して貰うと大変な喜びを見せていた。
入学を機にチドリがタンザナイトの付いたお揃いのピアスを欲しがったのは、バイトで店に行った際に、その事をマリアの口から聞いたためなのだが、湊は仮面舞踏会としての仕事で席を外していたので未だに知らなかったりする。
そんな湊は傍に落ちていた空き缶を空高く放り投げると、マフラー

に手を入れ拳銃を取り出し、引き金を数度引いた。
放たれた弾丸は真っ直ぐに空き缶を貫き、空中で踊った空き缶にまた次の弾丸が吸い込まれる。
そうして、地面に落ちてくるまでに三回ほど舞った空き缶が傍に落ちてくると、タカヤはそれを手に取り感嘆の声を漏らす。
「……ほう、大したものですね。私には出来そうにありません」
タカヤが確認した缶に開いた穴は湊が引き金を引いた回数の倍だ。つまり、一発のミスもなく、全ての弾が缶を貫通したことになる。
空中でイレギュラーに舞う物体に続け様に当てるなど、余程のコントロールと反射神経がなければ不可能。小さな空き缶でこれならば、人間など外しようがない巨大な的にしか思えぬだろう。
そうして、手に取った缶を捨ててタカヤが再び湊を見やると、湊は瞳の色を戻して口を開いた。
「大艦巨砲主義でもあるまいし、威力過剰の武器は自分の身体にも影響が出るだけでメリットがない。それなら、こういった小回りの利く、連続射撃が可能な武器の方が何倍も優秀だ。前に使ってたデザートイーグルはどうした？」
「部屋に置いていますよ。サイドアームにはなりませんしね。今はこれ一挺で仕事をしています。元々、それほど命中率は高くないので、威力に特化している方が向いているんですよ。身体への影響も、影時間で補正が働いていれば片手でも撃てますし」
「ペルソナで殺せば良いだろ。そんな一発撃っただけでもメンテしなくちゃならないものより、よっぽど手間も費用も掛からない」
「それではあまりに味気がない。超常の存在よりも、凶器の方が簡単に死をイメージ出来るので、純粋に相手の死への恐怖を眺めるにはこちらの方が優れているのです。なにより……貴方も殺しにペルソナを使っていないでしょう？」
真っ直ぐ瞳を見据え、その奥にある湊の感情を読みとろうとするようにタカヤが口の端を歪める。
しかし、湊が殺しにペルソナを使わない理由は、単純に自身の戦闘技術を鍛えることを目的にしているからであり、それ以外の理由は存

在しない。
そう、存在しないはずなのだが、タカヤは湊の中に何かを見たのか、銃をベルトに差し込むと歩き出し、階段の上にいた湊の元までやってきた。
後に続いたジンは状況が掴めず静観し、マスターを守るように動こうとしたザシキワラシは、湊が頭に手を置いたままなので動くことができない。
そうして、死と眠りの兄弟神をその身に宿す二人が視線をぶつけあうと、すぐにタカヤは湊が向かおうとしていたのとは別方向へと歩き出した。
言葉も残さず去っていくのかと思い、湊がザシキワラシの頭に置いていた手を下ろすと、
「――そういえば」
そう言って、去っていく背中に湊が視線を向けていることを分かっているのか、タカヤは背中を向けたまま湊に言葉を投げてきた。
「入学祝いという訳ではありませんが、仕入れた情報を一つ教えておきましょう。なんでも、貴方と同じ武術を使う壊し屋がこちらに来ているようです」
「……何日前の情報だ？」
「二日前ですよ。どこかの金持ちが日本に長期滞在するので護衛につけているのだとか。当人は武術家ですが、その護衛対象が中々に悪人らしいです。殺しの依頼が入ったときには、ぶつからないよう祈った方が良いでしょう」
「……そう、か。わかった。覚えておく」
それだけ答えると、湊もザシキワラシを連れて歩き出した。
話をしていた当人らの後ろをゆく者たちは一度振り返り、あんな話の終わりで良かったのかと疑問を持ったが、お互いが見えなくなっても振り返ることなく歩き続けたため、黙って従い隣へ移動した。
そして、湊は自宅へ、タカヤとジンは依頼のため別の街へ去って行ったのだった。
深夜――桐条コンツェルン・本社

桐条コンツェルンのビルの一室。そこで桐条武治は机の前に座り、送られてきた封筒の中身を眺めていた。
手にあるのは月光館学園の生徒名簿、そして、各生徒の影時間への適性検査の診断結果。
桐条グループは同じグループ出資の元に作られた月光館学園の生徒らに、年次はじめに行われる身体測定と学期ごとに行われる内科健診を利用して、密かに適性検査も受けさせていた。
これは、自分たちが学校運営に関わっているため、生徒に検査を受けさせやすいことが実施している最大の理由だが。他にもペルソナに目覚めた者の年齢が、丁度その辺りの子どもであったことも大きな理由となっている。
当然、子どもだけを対象にしていては適性の高低が正確に判断できないため、同じようにグループ会社の社員にも健康診断を利用して受けさせているが、今のところ子どもの方が潜在的に高い適性を有しているという結果が出ていた。
「……」
そして、今年の検査結果はほとんどが例年と同じ不適格で溢れていた。
影時間への適性は誰もが有していて適性ゼロというのはあり得ない。だが、影時間に象徴化しないレベルまで高い者は稀であり、ラボの職員のように人工的に強化しない限りは、ペルソナに目覚める可能性を有している者でもない限り、そこまで高い適性を持つのはあり得ないという報告も上がっている。
故に、いま桐条が難しい表情をして眺めている〝適性有り〟という判が押された生徒は、明日か一月後かは分からないが、自身の娘と同じようにペルソナに目覚めるのだろう。
そう思いながら持っていた他の書類を脇に置き、二人の生徒の書類を手に取った。
（……似ている。いや、きっと本人なのだろう。だが、何故だ。どうして、この地に戻ってきた？）
桐条が悲痛な表情で見つめる紙には、身体測定と適性検査の結果が

書かれ、学生証用に撮影された湊の写真が貼られていた。そして、もう一枚の紙にはチドリの写真が同じように貼られ、そのすぐ上に〝適性有り〟の判が押されている。
エルゴ研時代に、湊が赤髪の少女を大切にしているという報告は、桐条の元まで届いていた。
ならば、既にペルソナに目覚めている娘以上の数値を叩きだしたこの二人は、あのエルゴ研壊滅の日に脱走して行った二人に違いない。
桐条の命令で追手を放つということは最後までなされなかったが、それとなくペルソナの暴走と思われる事故事件がないかの調査はさせていた。
幸か不幸か、その結果は発見できずというものだったので、子どもたちは遠くに逃げたのだろうと思っていた。
食事や衣服は影時間になれば簡単に盗む事ができる。そうして、自分たちの痕跡を隠しながら密かに生きていると、そう思っていたのに、全ての始まりの少年が再びこの地に現れた。
現れた理由は分からない。単純に住み慣れた街に戻ってきた可能性も十分にあり得るが、わざわざ中学校に通う必要性を感じられない。
湊の真意を理解できない桐条は、出口のない思考の迷宮を彷徨い続け、その不気味さに軽い疑心暗鬼に囚われる。
(復讐か、それとも、何かが始まるのか？　八雲君が生きていることを九頭龍に……いや、今更言ってどうなる。葬式に出ておきながら黙っていたとなれば、私だけでなく家同士の衝突問題になる。影時間を消す方法も分かっていない今、そんな事になれば研究の継続も危うくなってしまう)
桐条は書類を机の上に投げ出し頭を抱える。じんわりと滲む汗をハンカチで拭うと、急激な喉の渇きを覚えて、傍に置いていたペットボトルの水を一気に呷った。
「……ハァ、ハァ」
ペットボトルの中身を全て飲み干すと、冷たい物を摂取した事で頭も冷えたのか、先ほどよりも冷静に考える事が出来るようになってい

た。
実際のところ、湊はいままでもずっとこの街の傍に留まっていたが、それを桐条は知らぬので、自分の持っている情報だけを使い現状で推測出来る事をはじき出してゆく。
湊が何のために戻ってきたのかは現時点では不明。少なくとも、顔を見られて存在を桐条側に知らせても問題がないと考えている可能性は高い。
湊が大人の中にいても聡明であることは、エルゴ研で湊が齎した研究データを目にすればすぐに分かり。その湊が桐条の学校に通うことで存在がばれる可能性を考えない筈がない。
そのため、桐条が考えた通り、湊は身元がばれることをリスクだと思っていないと言うことになる。
(次に、彼らの現在の強さだが……少なくとも弱体化している可能性は外して良さそうだ)
ペルソナ使いにとって適性の高さは、ほぼそのまま強さと言い替えて良い。
適性をただ持っているだけの人間と比較すれば、桐条の娘である美鶴も遥かに高い数値が計測されているが、湊はおろか、チドリにすら倍以上の差を開けられている。
さらに、美鶴のペルソナである女帝〝ペンテシレア〟は火炎属性の弱点を持っているので、火炎属性魔法が主体であるチドリのメーディアと戦闘になった場合には、たった一撃で敗北することも考えられた。
いくら研究データの収集ばかりで実戦を経験していないと言っても、流石に仲間もいない状態で倒れられては困るので、イレギュラーシャドウや湊たちと敵として遭遇した場面を想定し、娘にラボにいるシャドウの実験個体との戦闘訓練を徐々に始めさせようと決意した。
そして、逸れかけた思考を再び湊たちの事にシフトさせていく。
(今のところ大きな動きは見せていない。積極的な接触は避け、遠目からの監視を徹底させるのが最善か。動きがなければそれで良いが、下手に触れて眠れる獅子を起こすわけにはいかない)

今後の方針は決めた。消極的だと言われれば確かにそうだが、湊にはペルソナを使わずに一夜で百人以上の銃を持った大人を殺してみせた前科がある。

そのときは影時間で身体能力が上がっていたから可能だったと推測されたが、肉体が成長した今なら、さらに地力が上がっていて影時間外でも簡単に人を殺せるはずだ。

ならば、湊が通っている学校には娘もいるため、最上級の厳戒態勢を敷いて臨むべきである。自分たち大人が復讐の対象になるのは報いとして受け入れるが、自分たちを苦しめるために子どもを見せしめに殺されるなどあってはならないのだから。

桐条は適性有りと判断された二人への対応を、『接触を許可せず監視に留める』と決定すると、その旨をメールで通達し、パソコンの電源を切った。

そして、部屋を出るため席を立ったとき、ある少女のデータが記載された書類が目に止まり停止する。

少女の名は、『岳羽ゆかり』。

「……彼の娘も八雲君と出会ってしまった。偶然か、必然か、何も起きなければ良いが」

厳しい表情で呟くと、書類を全てファイルに戻し。それを手にとって部屋を後にしたのだった。

第三十六話　チドリの放課後

４月２８日（金）
放課後――辰巳ポートアイランド
学校の終わった放課後、本日の部活がないチドリは校門を出て一人で駅へと向かっていた。
湊は仮面舞踏会としての仕事で遠出しているため欠席、美紀は委員会、ゆかりは弓道部、風花は掃除当番と全員がばらばらの用事を抱えているため、眞宵堂のバイトに向かうチドリは待たずに学校を出たという訳だ。
（前に湊が行ったときに掃除したって言ってたから、今日は店番が主な仕事。……絵でも描いておこ）
そう考えて鞄の中にあるスケッチブックと画材道具に視線を送ると、すぐに前を向いて歩きだす。
チドリは部活の活動が始まる以前から、学校の鞄に画材道具を入れて持ち歩いていた。
三週間前に申請書を提出し、約一週間後の十四日の木曜日に正式な許可が下り。盛本の一件で謝罪訪問した際に桜に脅された校長らが、部員である湊とチドリに気を遣ったことで、部室は他の文化部よりも広く日当たりの良い部屋が宛がわれた。
場所は教室棟ではなく、職員室などが入っている管理棟の二階で、すぐ真上に吹奏楽部の部室である音楽室があるため、部屋の壁と扉には防音処理がなされ、窓を閉めても良い様にエアコンが備え付けられている。
部室を出て右に行くと、すぐに外に繋がる非常階段への扉が存在するので、真下の保健室にもすぐ戻れるという事で、保険医の櫛名田も頻繁に遊びに来ていた。
（そういえば、湊が部室に何か要るって言ってたような……）
現在の活動は、自分に何が向いているかを探すため、一週おきに別の課題で作品を作っている。
ただし、一週目は部室の環境を整えるために、掃除や備品の運び入

れをしたので、作品を作ったのは先週と今週だけだ。
先週は石膏像のデッサン、今週は水彩絵の具での塗り絵を行っており、来週は紙粘土をやると湊は紙粘土を買ってきていた。
昔から絵を描いているチドリが一番上手くデッサン出来ていたが、塗り絵に関しては風花の方が上手かった。来週の紙粘土は、立体造形が得意な湊が最も上手に作る事だろうと思いながら、常に二番手ほどの実力を持った美紀はともかく、ゆかりの才能の無さはどうなのだろうかと少し考え込む。
(なんか変だった。不慣れな素人っぽさはあったけど、それより……歪っていうの？　色がときどき変に暗かったりして、あれって多分精神的な不安や悩みがあるってことよね)
創作物は製作者の心を映す。湊もデッサンは上手かったが、塗り絵はゆかりと同じように部分的に変な色で塗っていた。
同じ場所に二人もそのような塗り方をした者がいたために、他の二人と佐久間は違和感に気付いていなかったが、保険医である櫛名田だけは二人の塗った絵を見た際に、何やら考え込むような姿を見せていた。
よって、チドリの推測通り、他人と違う芸術的感性で選んだのではなく、心に抱え込んだものが絵として現れていると見るべきだろう。
バイトで店に行ったときに、栗原から湊の創作物をよく注意して見ておけと散々言われていたので、今回の二人のこともすぐに違和感として気付けた。
もっとも、湊だけでなく自分たちとは違う〝普通の人間〟のゆかりにまで、そんな物があるのは驚いたが、ゆかりに関しては湊が何やら気にしているようなので、チドリも同じように目を配っておく事だけはしておこうと思った。
「ん？　よう、瀬多妹」
「……は？」
一人で考えながら歩いていると、前からジャージ姿の真田明彦が声をかけてきた。どうやら部活でロードワークをしていたらしい。
爽やかに声をかけられても、チドリにとってはただのシスコンとい

うイメージしか無い。よって、話すに値しないとして、相手の呼び名だけ訂正して横を通り過ぎる。
「……私、湊の妹じゃないから」
「ああ、そう言えばそうだったな。すまんすまん」
真田がチドリを湊の妹と思っている理由は、単純に一緒の車で登校してくるのを美紀と目撃したからで、そこに一緒に住んでいるという情報も加わり勘違いに発展したという経緯がある。
しかし、二人が兄妹ではないことは、美紀から湊の本名が有里湊あることと共に訂正されていたので、既に勘違いは正されたとばかり思っていたのだが、深く考えずに発言するタイプらしく軽い調子で謝罪を述べた。
本当に謝る気があるのかと思いつつ、駅に向かって歩き続けていると、通り過ぎたはずの真田がジョギングでついてきた。
一体何の用だとうんざりしているところに、真田らしい台詞が耳に届く。
「今日は美紀は一緒じゃないのか？」
「……部活は休みだけど、委員会があって六限目に出てる」
「そうなのか。瀬多は委員会には出てないよな？」
尋ねた真田の視線が僅かに鋭くなる。現在、真田が妹に近付くことを許可している男子は二人いて、一人は幼馴染の荒垣、もう一人は腕相撲で勝利した湊だ。
しかし、後者に関しては勝負に負けて認めざるを得ないだけで、本心で言えばもっとも近付けたくない相手である。
これで仲良く参加しているなどと答えたらどうなるだろうか、とチドリは少しばかり考えてみて、直ぐに面倒だからやめておこうと真実のみを淡々と告げた。
「男子の学級代表は友近っていうジャンケンに負けたモブ顔よ。っていうか、私、用事があって急いでるから、それじゃあ」
「あ、ああ、またな！」
チドリが別れの挨拶を切り出すと、真田は快活に笑って走り去って行った。

初めから雑談よりも美紀の事を答えればすぐに去って行くのなら、チドリは淀みなく躊躇いなく答えただろう。真田のような熱血キャラは相性が悪いのか、相手をするのも面倒だから。
もっとも、真田は美紀のことだけでなく、妹の友人としてコミュニケーションを取ることも目的に入っていた。そのため、美紀の情報を得たとしても少しばかり雑談をするつもりだった。
それを今回はチドリが急いでいるように見えたため素直に別れただけであり、本当はチドリが思っているよりも、真田は不器用なりに相手の事情を聞いて気を利かせることの出来る人間だった。
そんな事には気付かず、チドリは駅の改札に到着すると定期を取り出し通過して、そのままバイト先である眞宵堂へと向かったのだった。
夕方――ポロニアンモール
女子の学級代表になっている美紀は、委員会が終わると真っ直ぐ家に帰り、一度着替えてから出かけていた。
やってきた場所はポロニアンモール。今日は予約していたＣＤを買いに来たついでに、湊とチドリのバイト先である『古美術・眞宵堂』まで足を伸ばすのが目的だった。
「えっと、ポロニアンモールの骨董品屋さんは……あっ、ありました」
立地は中央の噴水広場のすぐ近くと中々の好条件にあるが、道を挟んで反対側にある交番並みに人が入ってゆく様子が見られない。
平日の晩御飯の買い物時という時間帯のせいでもあるのだろうが、そのような閑古鳥も鳴くような客足の寂しさで、バイトに高い給金を払っていて大丈夫なのかと心配になってくる。
しかし、他の店よりも商品単価が高いのであれば、売れればそれだけでかなりの儲けになり、売り上げ的には問題もないのだろう。
ただの冷やかしでは悪いだろうからと、何か小物くらいは買えるようにお金は多めに持って来ている。
そうして、準備を済まし覚悟を決めると、美紀は眞宵堂の戸を潜った。
＊＊＊

「……いらっしゃい」
中に入って最初に聞こえてきたのは、緋色髪の少女のやる気のない挨拶だった。
目があった事で軽く礼をすると、壺や置物以外にもカントリー風の家具や大きなぬいぐるみの置かれている店内を進み、美紀はレジカウンターで座って絵を描いているチドリの元へ向かう。
「こんばんは。今日はバイトですか？」
「今日は店番でここに座ってるだけよ。掃除は前に湊がしちゃったから」
言われて店内を見渡すと、確かに棚には埃も積もっておらず、非常に清潔であると思えた。
店の中はお茶の葉の御香が焚かれ、外国製と思われる照明器具の柔らかい光で照らされている。
他の店よりも暗く思うかもしれないが、見えづらいという事はないので、環境やエコを考えれば十分だと言えた。
初めて入る骨董品屋だったが、御香の効果もあってかリラックスしている自分が居る。そう感じながら、笑みを浮かべて美紀は素直な感想を述べた。
「落ち着いた雰囲気の良いお店ですね」
「……そう？　栗原の趣味で並べてるだけだから、私は良く分からないけど」
「系統ごとに集めて置いていますから、物は多くてもごちゃごちゃして見えないように工夫されていますし。御香も匂いがきつくないので素敵だと思います」
「ふーん、客がそう言ってたって栗原に伝えておく」
自分はただのバイトだから店を褒められても別になんとも思わない。そんな内心を表すような反応に美紀も思わず苦笑し、置かれた商品を見てまわりだす。
絵を描いていたチドリは、美紀が動いたことで視線だけチラリと送ってきたが、すぐに興味を失ったようにスケッチブックへ視線を戻した。

会話は絵を描く邪魔になってしまうだろうか、と普段から相手を気遣う美紀は考えつつ、コミュニケーションも時には必要だろうと思うことにして、棚に置かれた華美な柄のティーセットを眺めながら話しかけることにした。
「吉野さんは普段から絵を描いていますが、一体どのような物を描いているんですか？」
「色々。ただ目についた物をスケッチしたり、抽象画っぽいものを描いたり」
「有里君も上手でしたけど、彼も絵を描いたりするんですか？」
「あんまり描かない。けど、前に描いた絵ならそこにある」
言われて振り返ってみると、チドリは美紀のことを見ながら、カウンター側にある売り物ではない物が置かれた棚を指さしていた。
見てみても良いかと手ぶりで尋ねたところ、チドリは頷いて返して絵の続きを描いているので、美紀はまわりの物に触れないよう気を付けながら棚の前に向かった。
「えっと、どれですか？」
「緑の表紙のスケッチブック。左開きで最後の方の人物画」
美紀は言われた通りに、アルファベットでスケッチブックスと書かれた緑の表紙の物を手に取る。
それを開こうとした際に、座って見ろとばかりにチドリが近くの椅子を勧めてきたので、お言葉に甘えて座ってから表紙を開き中の絵を見てゆく。
表紙を開いたばかりのページでは、植物や景色のスケッチであったり、赤と黒の線でページが塗り潰されたようになっていたりで、描いた相手は自分の知らない芸術に触れているのだと感動を覚えながらページを捲り続ける。
このスケッチブックはチドリの持ち物だったらしく、殆どは同じような癖を持ったタッチで描かれている。
だが、終わりの方のページを開いたときに現れた絵は、他の絵と雰囲気も癖も違っていた。
「……これ」

今見ているものが言っていた湊の絵であることは間違いない。次のページでは他の絵と同じ人物の描いた物に戻り、スケッチブックの終わりの方では人物画はこの一枚しかないのだから。

他の絵も自分の描く物などより遥かに上手いと思ったが、この一枚は描いた人物の想いのようなものすら感じられ、技巧などを抜きにして綺麗な絵だと思える。

しかし、それを見ていた美紀の中で、一体この絵の人物は誰なのだろうかという疑問が湧いた。

描かれているのは微笑みを浮かべる金髪碧眼の女性。その頭にはどこのメーカー製か分からぬ特徴的なヘッドフォンが付けられている。

普段は周囲を拒むような空気を放っている湊が、こんなにも優しい絵を描けること自体が、正直に言えば意外だった。

それだけに、彼にここまで心を許されている者の正体を知りたい。そう思った美紀は、絵を描いていたチドリに何度も失礼だと思いながらも尋ねていた。

「あの、この絵の女性は？」

「……知らない、私も見た事ない」

「え？　これはデッサンじゃないんですか？」

「違う。バイトが暇だったときに、寝てた湊に何か描いてって言ったらそれを描いた。目を完全に覚ました後、その絵を見たら驚いてたから、本人も無意識に描いたんだと思う」

その言葉を聞いても俄かには信じられなかった。

絵の女性は優しく微笑んでいる。これを記憶だけを頼りに無意識に描いたというのだろうか？

美紀は自分の家族が笑っている場面を思い出すことはできるが、思い出そうとすればするほど詳細がぼやけてしまう。

笑っている兄は歯が見えていただろうか、義父は髭が伸びていただろうか、義母は何色の石のピアスをつけていただろうか、そんな風に細かいところの記憶は曖昧で、記憶を頼りになど全く描ける気がしなかった。

「……有里君がこういった絵を描いたのは初めてですか？」
「ええ、他にも描いたのは残ってるけど、その女の絵は一枚だけ。それに絵のタッチも微妙に違う」
今度の言葉にはなるほどと納得できた。描いた本人が驚いていたことも踏まえて考えると、やはりこの絵は湊の深層心理に深く関わっている。
想像上の人間でないのであれば、この絵の女性は実在し、チドリが知らないような大切な思い出として湊の中で今も残っていることになる。
チドリが「その女」と言った際には、普段はアンニュイな表情をしているというのに、言葉にわずかに棘が感じられたので、チドリも相手の正体や湊との関係性についてやきもきしているのだろう。
絵の女性と湊の関係はともかく、いまいち掴めていなかったチドリと湊の関係が今の反応で見えてきた。そんな新たな友人の密かな想いを知り、美紀は持っていたスケッチブックを棚に片付けると笑みを浮かべて口を開いた。
「あの、今度から名前で呼んでもいいですか？」
「……別にいいけど。どうしてにやけてるの？」
「え、あ、ゴメンなさい。ちょっと、可愛いなって思ったので」
普通の笑みを浮かべていたつもりが、頬と口元が緩んでいたことを怪訝そうにしているチドリに指摘され、慌てて頬をマッサージして表情を元に戻す。
だが、相手がどこを可愛いと思ったのか分からないチドリは、眉を寄せて美紀を見つめながら問い続けた。
「可愛いって何が？」
「えっと、チドリさんが絵の女性に嫉妬しているようだったので……なんて」
「……頭大丈夫？　別に嫉妬なんてしてないんだけど。ていうか、私と湊は家族とか幼馴染ってだけで、異性とかそういうのじゃないし。あの女がどこの誰かっていう多少の疑問はあるけど、そこまで湊に聞こうと思った事もなければ、知らない人間に嫉妬とかあり得ないか

ら」
　チドリは本気で呆れたような目で見ながら、目の前に立っているクラスメイトに説明した。
　エルゴ研にいたときから一緒で、一緒に寝た事もあれば、一緒にお風呂に入った事もある。兄妹という育ち方ではなかったが、自分たちの関係を表すのなら家族や幼馴染という言葉が適切だろう。
　そう思い、しっかりと分からせるように伝えたのだが、話しを聞き終わった美紀は目元まで緩ませてチドリを見ていた。
　相手のそんな反応が気に入らず、鉛筆とスケッチブックをカウンターの上に置くと、チドリは視線を鋭くして相手を睨んだまま立ち上がった。
「なに笑ってんのよ。本当に違うって言ってるでしょ。シスコンの妹のくせに調子のんな！」
「なっ!?　兄さんはいま関係ないじゃないですか！　悪口に兄妹の存在を含めないでください！」
　兄がシスコンである。そのことは小学生の時点で薄々ながら気付いており、まわりから直接指摘を受けるような事はなかったが、美紀自身も気にしていた。
　そして、人生で初めて面と向かって言われたのがまさに今なのだが、流石に自身を罵倒するために兄がシスコンだと言われるとは思っていなかった。
　やっぱりという気持ちと同時に、直接に自分を罵倒されるよりも心にくる。自分に非がないだけに直しようがなく、自分の兄が特殊な存在だと言われて恥ずかしい気持ちも湧きあがってくる。
　先にからかうような態度を見せたのは自分だが、思わぬ反撃に顔と頭が熱くなるのを感じながら、なるべく相手が傷付かなそうな言葉を選んで美紀も言い返した。
「あ、有里君だって佐久間先生によく抱き付かれてますし、櫛名田先生のベッドでお菓子食べながらごろごろしたりとか、色んな女性と一緒にいるじゃないですか！　そういうのって女ったらしっていうんですよ！」

「湊が自分から行ってるわけじゃないもの。クマモンと櫛名田が勝手に色目使ってるだけで、むしろ被害者よ。前はシスコンに因縁つけられてたし」
「だから、兄さんがシスコンなのは分かりましたから、それで私を罵倒しないでください！　私にまったく関係ないじゃないですか！」
「ふん、今日も帰りに妹はどこにいるかって聞いてきたわ。委員会だけど湊と一緒じゃないって分かって機嫌よくしてたし。シスコンに加えて器小さすぎ」
「もぉー!!」
その後も、チドリは真田のことをネタに美紀をいじり続け。配送する商品を出しに行っていた栗原が帰って来たときには、自分の兄が真人間になるまで口を聞かないと宣言する美紀の姿が見られた。
相手を言い負かす事の出来たチドリは、見た目は変わらないがご機嫌だったようで、地元の最寄り駅まで迎えにきた桜が不思議そうにそれを見ていた。
深夜――廃ビル
影時間の明けた深夜、巌戸台から離れた地方都市の廃ビルの中に湊はいた。
右手の指から血を垂らし、その近くには首のない男の死体が転がっている。さらに、死体の傍らには上から下までブランド物一色でコーディネートされた衣装を着た女が、咽び泣きながら男にすがり付いていた。
「なんでっ、どうしてっ」
涙で目のまわりの化粧が崩れたまま、女は湊を憎悪の籠った瞳で睨み叫ぶ。泣いている女は、湊に殺された男の妻だった。
二人でホテルのディナーショーを楽しんだ帰り、バイクに乗った湊から銃を突きつけられ車を降りろと脅された。
逃げようにも前輪をパンクさせられ、サイドミラーとフロントガラスを破壊されたため、二人は恐怖に怯えながら言う事を聞いた。
そして、そのままビルへと連れて来られ現在のフロアまで昇ってくると、妻の目の前で手を一閃させただけで男の首を刎ねたのである。

刎ね飛ばされ空中で白目を剥く夫の頭部、硬直したように倒れながら血の吹き出している胴体、女は一体何が起こったのか分からず、まるで理解が追い付かなかった。
「アンタもこのまま夫の後を追うんだが、一応、殺される理由くらいは教えてやっておこうか」
女が湊を睨んでいると、荒れたビルの奥から硬い靴の音をさせながらイリスがやってくる。
手には数枚の紙の束、そこにはこの夫婦を殺すよう依頼した人物の動機が書かれている。
外からの月明かりで手元を照らすと、イリスはよく通る声でゆっくりと読み上げた。
「今から約二年前、アンタらは雨の日に制限速度を超えて車を走らせていた。ま、そんなやつらは世の中たくさんいるが、アンタらは住宅街のすぐ近くの国道で、徐行せずに曲がって子どもを一人撥ねてるね。その子どもは頭を強く打った事が原因で意識不明となり、三日後に死んだ。間違いないだろ？」
「それは、示談が成立してっ」
「したんじゃなくてさせたんだろ？　裏で相手側の弁護士に高い金を払って色々と言わせてさ」
二人の殺害を依頼したのは、轢かれた少年の父親だった。
裁判で争ったのはお金のためではなく、子どもに一切の非が無かったことを認めさせ、自分たちの罪を償うよう求めたためだった。
だが、加害者夫婦は、被害者側の弁護士に密かにお金を払い、示談に持ち込むように説得することを依頼。金を受け取った弁護士は嬉々としてそれを受け入れ、子どもが死んで精神的にまいっていた遺族に、子どものためだと早期に問題を解決させることを提案、そして示談へと持ち込んだのである。
子どもの母親は精神病を患い現在も通院中、示談で支払われたのはたったの五百万円。子どもを失い、妻も病んでしまった男は復讐を決意した。
そうして、そのとき運転していた女へより強い絶望を与え、最後は

夫婦そろって殺してくれと仮面舞踏会の小狼に依頼が来たのである。
「……アンタらさ。子どもの命奪っといて、五百万なんてしけた金で解決しようなんてふざけてんのか？」
紙の束を丸めて上着の内ポケットに仕舞うと、イリスは腰の銃のセーフティーを外して、スライドを引き、初弾を薬室へ送り込む。
月明かりに照らされた鈍い光を放つ凶器を見た女は、銃口が自分に向けられると顔を恐怖に歪め、転がるように窓際へと逃げ出した。
しかし、窓際へ向かったところで、ここはビルの四階。下は固いアスファルトばかりで、飛びおりて助かる見込みなどまるでなかった。
「ああっ、い、いやぁ！」
ガラスの割れた窓から外を見て、やっと自分のいる場所がどんなところか理解したのだろう。女は慌てたように窓から離れ、下へと続く階段へ向かおうとした。
けれど、階段側には湊が居る。武器も使わず夫の首を刎ねた殺人鬼、そんな得体の知れない相手に近付く事など出来るはずがなかった。
逃げ場がないこと理解した女は、壁際で頭を抱え震えながら蹲る。
追い付いたイリスが女に銃を向けて言った。
「……恨みはないがムカついた。それが依頼を受けた理由だよ」
直後、乾いた一発の銃声が古い廃ビルの壁や床に反響してよく響いた。
そして、ドサリと音を立てて女が頭から血と脳漿を流し倒れる。手足を痙攣させ、口から泡を吹いて動かなくなったところで、イリスは銃をしまって奥に置いていた死体の収容袋を取りに向かった。
血が抜けきった方が軽くなる分運ぶのは楽だが、筋肉が硬直する前の方が袋には入れやすいので、どのタイミングで入れるかは状況ごとに判断する。
イリスが袋を取りに行っている間、湊はこのビルの管理状況などの書かれた書類に目を通し、地元の不良や肝試しに訪れるような者が来る可能性はあるだろうが、管理者や行政に関わる者が来る事は当分ないだろうと判断した。

よって、血をここで抜いても風化してばれないと、倒れている男の腹を踏みつけ血を押しだす。
その光景を遠目から見ていたイリスは、持ってきた袋を床に置きながら、服が汚れないようにその上に座り、呆れたように声をかけた。
「オマエ、自分が殺したにしても、死体になったら少しは丁寧に扱えよ。そのうち祟られるぞ」
「……魂になってまで来た奴は今のところいない。いたとしても殺せるから問題ない」
イリスに返事をしながらある程度の血を抜くと、近くに落ちている廃材を使って頭が低くなるように置き。続いて、イリスの殺した女の首を刎ねて窓枠に足をかけてぶら下がるように血を抜かせる。
外から見ている人間がいれば、窓から女の足だけが出ているように見えるため、即座に通報されるだろう。
しかし、その点に関しては湊がカグヤで周囲の探知をして、気を付けているので問題はない。血が抜けるまで待つため、湊もイリスの元にやってくると隣に腰を下ろした。
「そういや、オマエと桜は視えるんだっけ。んじゃ、アタシの守護霊はどんなやつか視えるか？」
「……誰か自分を守ってて欲しいやつでもいたのか？」
「いんや、怨霊がついてなきゃそれでいい」
軽い調子で笑って言いながら隣に座った湊の肩を掴むと、イリスは自分の方へと引っ張り、左足の太ももに相手の頭を乗せて寝かせる。
昔のように抱き上げるのは難しくなってしまったが、身体が大きくなっても膝枕くらいはしてやれる。
急に寝かされ不思議そうに蒼い瞳のまま見ている湊の目の上に左手を被せると、血抜きが終わるのを待つ間、明日も学校の湊を少し休ませるため反対の手で髪を梳きながら優しく頭を撫でた。
だが、完全に寝に入られても困るので、静かな声で湊に話しかける。
「……その眼さ。もう治らないのか？」
「どっちの目か分からないけど、他人の目を移植しない限り治る事はない」

「ハッ、それは治るとは言わないよ」
鼻で笑いながらも、イリスは湊の目を手で覆いながらわずかに悲しそうな顔を見せる。
彼女が言った眼というのは、シャドウの瞳ではなく直死の魔眼の事だ。
直死の魔眼は文字通り〝直に死を視る〟魔眼であり、感情の昂ぶりや相手を殺す際に自然と発動するようになっている。
湊が意識すれば、冷静な状態ならば発動せずに戦う事も可能だというが、世界に溢れている死を強制的に見せられるというのはどんな気持ちなのだろうかと考えてしまう。
それはまるでひび割れた氷の上を歩くようなもので、床が崩れ自分が落ちること、天井が崩壊して降ってくる事を嫌でも想像する筈なのだ。
自身は仕事を続けているうちに人の死に慣れていったが、床や天井にまで視える状態を考えるとあまりの恐ろしさに動けなくなると断言できる。
湊が裏稼業をする理由は来たるべき２００９年の戦いのため。ならば、それが始まれば続ける必要はなく、戦いが終わればただの子どもに戻るはず。そんな世界に殺すための力は不要だと思えた。
「アンタはその歳で人の死を見過ぎた。だから、全部が終わったら、もう見なくて良いようにって力が無くなると良いね」
「……よく、分からない」
「難しく考える必要はないよ。戦いのために捧げた分の人生を、後から取り返すだけだ。人を殺してきた罪悪感に苛まれたら、贖罪の旅に出たって良い。自由に子どもらしく遊びたいなら出かけたって構わない。誰の為じゃなく、自分のために心のまま生きればいいさ」
そういって最後に二度優しく頭を叩くと、イリスは湊に十五分ほど仮眠を取らせてから起こし、二人で死体を袋に詰めた。
湊も男の方を担当して袋に詰めると、その死体を依頼人に確認させるため、依頼人を待たせている死体処理屋に運び込み。仕事を終えた二人は深夜という事もあってイリスのホテルに一泊すると、湊だけ早

朝に桔梗組に帰ってチドリと共に学校へと向かったのだった。

第三十七話　初めての課外活動

５月７日（土）
朝――駅前
２００５年のゴールデンウィークも残り二日となった土曜日。岳羽ゆかりは美術工芸部のメンバーで課外活動をすると言う事で、駅前に向かっていた。
寮生は自分だけなため、自身の私服を見せる事も、他の者の私服を見るのも初めてという事で、薄いピンクの色の付いたリップを塗るなど少しばかりお洒落をしてきたが、悲しい事に見せるのは同性ばかり。
唯一の異性である有里湊は、平気で女性の頭を掴んだり首を絞めたりする男――と言っても相手は佐久間ばかりで、される原因は佐久間にあるのだが――なので、気の利いた台詞を言えるとは思えない。
よって、過度な期待はせずに、単純に皆と遊びに行く事を楽しもうと考えながら、待ち合わせ場所に到着した。
約束の時間の十五分前、集合場所には落ち着いた雰囲気の私服を着た美紀と風花が待っていた。相手はゆかりがやってきた事に気付いたようで、軽く手を振り挨拶をしてくる。
「あ、ゆかりちゃんおはよう」
「ゆかりさん、おはようございます」
「うん。二人ともおはよう」
この一ヶ月で親睦を深めたこともあり、以前、眞宵堂でお互いを名前で呼び合うことになった美紀とチドリだけでなく、女子同士は皆が名前で呼び合うようになっていた。
もっとも、休み時間も仲良くお喋りする関係かと言えば、チドリは今まで通りの反応なのだが、同性で話す相手がいない湊よりはマシだと言える。
当人とチドリは気にしていないが、湊が男子に馴染めていないことを風花は密かに気にしており、どうすれば良いかとゆかりと美紀にも相談した事もある。

だが、湊が馴染めていない理由ははっきりとしている。それは、湊が他人に興味を一切持っていないためだ。
いくらまわりが協力しても、当人が歩み寄りか受け入れるなりしなければ意味がない。何かクラス単位で動く行事でもあれば切っ掛けになるのではないか、という結論に行きつき、有効な解決策も出ぬまま今に至る。
そうして、三人が他の者が集まるまで談笑していると、遠くの方から大きな声をあげながら駆け寄ってくる者がいた。
「みんなー！　おっはよー！」
満面の笑みを浮かべながら手をぶんぶんと振って走ってきた者の名は、佐久間文子。今年の三月に大学を卒業したばかりだが、れっきとした社会人であり大人である。
そして、今日の引率役でもあるはずだが、公共の場で大声を出して人目を引いている時点でアウトだろうと、ゆかりらは表情を引き攣らせていた。
「あっははー！　先生、ちゃんと最後じゃないもんね。約束の十分前に着いてるし、大人の余裕ありまくりだよ！」
両手でピースをしながら「ブイブイ！」と口で言って誇らしげにしているが、佐久間の今日の服装は膝丈の水色のワンピースに七分袖の白のカーディガンを羽織っているだけであり。似合ってはいるのだが普通の若者にしか見えず、胸のボリュームという一点を除けば大人らしさは欠片もなかった。
しかし、本人は立派な大人だと思っているようで、ブランド物の可愛らしいピンクの腕時計を見ながら、まだ到着していない者への不満を漏らす。
「うーん、駄目だなぁ有里君。女の子を待たすなんて減点だよー」
「……来たばっかりで偉そうに」
「あやや!?　なんと、いつからそこに？」
急に後ろから声がして佐久間が振り返ってみれば、そこには湊とチドリがハンバーガーショップのドリンクの容器を持って立っていた。
ゆかりは風花たちから説明を受けていたが、湊とチドリはゆかりが

来る前に到着し、約束まで時間があったため近くの店へ飲み物を買いに行っていたのだ。
　それを知らずに好き勝手言っていた者へ冷たい視線を向けると、湊はマフラーの内側をごそごそと触り、中に手を入れていることを誤魔化しながら人数分の切符を取り出した。
「切符は既に買ってある。しかし、一名は頭の調子が悪く今日は不参加のようなので、部員のみに配ろうと思う」
「せ、先生も部員だもんね！」
「……教師は顧問でしょ。部員じゃないわ」
　佐久間の言葉にチドリが冷めた態度で返すと、佐久間は切符を配る湊の背に立ったままおぶさるように纏わりつき、「吉野さんのいじわるー」と泣き言を言っている。
　どうして言葉を返す相手ではなく、湊に纏わりついているのかは不明だが、１―Ｄの人間には既に日常の光景である。
　故に、改札へと向かう湊に続いてゆかりたちも、やや引き攣った表情で笑みを浮かべつつ移動を始めた。
＊＊＊
　結局、佐久間は湊にペコペコと頭を下げる事で切符を譲ってもらう事が出来た。
　本来ならば尊敬されるべき立場の人間が、生徒に簡単に頭を下げて良いのかという疑問は残るが、佐久間はその特殊な性格とキャラクターからあまり気にされていない。
　そうして、切符に書かれた座席に向かうと、三人掛けの椅子を回転させ全員が向かい合うように座り、発車時刻丁度になってから電車が発車した。
　初めは都会の街並みだった窓の外の景色も、少しすればすぐに田舎の景色ばかりになる。
　特急電車での遠出が初めてなのか、窓側に座っていた風花は、景色が変わるたびに「わぁ……」と感嘆の声を漏らしていた。
　その様子を見て、隣に座っていたゆかりは可愛らしいなと思わず笑みをこぼした。

「ふふっ、風花ってなんか子どもみたい。こういう電車って初めて？」
「え？　あ、うん。普段は家の車だから、新幹線にも乗った事ないの」
子どもみたいと言われたことで、照れて頬を軽く染めながら、風花は窓から手を離して振り返り答える。
ゆかりはそれに頷いて返しつつ、今度は自身の正面に座る湊と風花の正面に座るチドリに話題を振った。
「そうなんだ。有里君たちは？　切符先に買っててくれたけど、席取ったりとかも慣れてるの？」
「……湊はね。私はあんまり外に出ないから、やったことない」
「へぇ、色々知ってるんだね。私も自分ではしたことないなぁ。いつもお母さんとか、親戚の人がやってたから」
「ふふっ、私たちの歳では自分でやる方が珍しいですから、気にする必要はないですよ」
苦笑するゆかりに隣に座っていた美紀が笑ってフォローをいれる。その言葉に他の女子も頷いているので、やはり湊だけが特殊なのだと改めて思ってしまう。
ゆかりの前に座っている湊は、今はイヤホンをつけて音楽を聞きながら本を読んでいる。
湊から見て左に座っている佐久間は、乗り物に乗ると寝てしまうタイプなのか、肘置きをどけて湊の膝を枕にしているが、湊はその頬の上に本の角を当てて読んでいるので、駅に着いたときには顔に跡が残っているだろう。
構って貰いたがりの教師と、あしらいつつも相手をさせられている生徒。これでお互いの行動が逆ならば、生徒が教師に恋をしたといった感じになるのになと、ゆかりは二人のよく分からない関係性に苦笑を漏らした。
「ふふっ、有里君。起きたときに跡がついてたら可哀想だから、もう少し本の当たる角度変えてあげな」
「……わざわざ他人の顔を見るとは思えない」
「あの、有里君はそうでもないようですけど、佐久間先生って一般的に見たらかなり美人の部類に入るんですよ？　それにスタイルも良い

ですし、周囲の目を考えるとやめておいた方が」
ゆかりだけでなく美紀にも指摘され、湊は本をどけると仰向けで寝ている佐久間の顔を怪訝そうに見つめた。
時折、手で顔の角度を変えて見ているので、美紀の言った〝かなり美人〟というのを確かめているのだろう。
湊に顎や頬に触れられても、佐久間はすやすやと寝息を立てていて起きる気配は一切ない。
そうして、しばらく観察を続けていたが、結局、理解できなかったのか、湊は首をかしげると相手の顔にハンカチを被せて自身も腕を組んで眠り始めた。
そのハンカチが眩しくないようにという気遣いなら評価するが、きっと顔を見ないための工夫なのだろう。チドリ以外の女子は「あはは……」と乾いた笑いを漏らすと、二人を起こさないよう小さな声で談笑を続けた。
午前――桐条ラボ
湊たちが電車で移動している頃、巌戸台の湾岸部近郊に建てられた桐条の研究機関、通称〝ラボ〟の一室で桐条武治の娘、桐条（きりじょう）美鶴（みつる）は先日の適性検査の結果を眺めていた。
赤みがかった緩い縦ロールの髪をゆらして、眉を寄せながら難しい表情で改めて適性の数値に目をやる。
「私の……倍以上の適性を……」
「そう。この二人は君よりも高い数値を叩きだした。これはいつペルソナに目覚めてもおかしくないレベルだよ」
机を挿んで正面に座っていた男、黒いタートルネックの上から白衣を羽織った幾月が、口元を楽しそうに吊り上げながら静かにコーヒーに口を付ける。
桐条はこの書類を娘に見せる気はなかったが、遅かれ早かれ仲間が必要になると思っていた幾月が、適性のある者を美鶴自身にスカウトさせるため、わざわざペルソナの鍛錬の合間を縫って呼び出したのだ。
幾月の予想では、これを見た美鶴は休み明けすぐにでもスカウトに

行ってくると言い出すと思っていた。
だが、大人びてはいても美鶴はまだ中学二年生。今はペルソナに目覚めた自分だけが頼りだと、そう父から言われていた美鶴にとって、自身の立場を脅かす存在の出現に心が揺れていた。
しばし黙って書類に目を落としていると、それから五分ほど経ってから美鶴が顔をあげる。
「この二人は影時間を体験しているのですか？」
「それは分からない。特記事項に書かれている通り、二人は極道の家の子どもなんだ。いくら桐条の雇った人間でも、そう簡単に調査出来ないのが実情でね。だから、そういった物とは無関係の学内で桐条君に調査してもらいたいんだ」
「目立つだけあって、二人の噂は私の耳にも届いています。悪評の方が多い様に思えましたが、実際は根も葉もない噂がほとんどでした」
二人は面倒くさがりということもあり、目立った行動以前にそもそも学校内ではあまり活動を見せないが、容姿や服装に目立つ特徴を持っている。
また、佐久間が湊を学内で見つける度に、大きな声で名前を呼んで手を振っているので、他の学年の者にも『黒マフラーの男子＝有里』という認識が出来上がっていた。
佐久間が名前を呼んでも、湊は見向きもせず去っていくところまでが一連の流れだが、同じ廊下で出会ったときには抱き付かれていることもある。
湊は苛々しているようだが、周囲の男子はそれを羨むように見ており。若い女性教師が特定の男子に構っているため、湊が佐久間と遊びで付き合っているなどという噂も流れていた。
現在、生徒会副会長を務めている美鶴も、己の実家が運営している学校でそのような事実があれば厳重に対処すべきだろうと思い。自分の足で情報を集めて、全てがデマだとつきとめた。
無論、誤解を招くような佐久間の行動は問題になるが、少なくとも湊は表面的には服装の違反しかしていない。
その事を思い出しながら伝えると、聞いた幾月は学校から届いた調

査書を手にしながら苦笑する。
「ま、そうみたいだね。服装の違反はしてるけど、授業ではノートも取ってるし、テストも有里君は満点ばかりで、吉野君はたまに一、二問のミスをするだけだ。流石は学年トップ陣と言ったところだね」
「はい。それに部も立ち上げ、誠意的に活動に取り組んでいるようです。今年はコンクールへの応募は考えていないようですが、部員それぞれの好みや向いている物を探すために一年を使い。来年からは実際に応募してみて、三年で集大成として入選・入賞を狙うそうです」
「部員のことをしっかりと考えているし、とても楽しそうだね。僕も学生時代にこんな部活があれば是非とも入部させてもらいたかったよ」
アハハと明るく笑う幾月を見て、先ほどまで顔を強張らせていた美鶴の表情から固さが抜ける。
自分で調べた情報、学校側が調べた情報、それらは単に学内の目立っている生徒を調査するためのものでしかなかった。
だが、研究員たちが安心して見ていられるほど、安定してペルソナを使役している自分を遥かに超えた素質。チドリは美鶴の約二倍、湊はそのチドリの三倍以上という俄かには信じ難いデータが出たため、急遽、候補者の調査報告書に流用された。
小学校を卒業して間もない後輩を巻き込むことに罪悪感はある。また、父の目がその二人に移ってしまう怖さもある。
それでも、シャドウと戦っていくには戦力が欲しい。つい先日にも研究員を通じて、研究用のシャドウとの戦闘訓練を始めるように父から言われている。
今にして思えば、あれは新たに見つかった候補者がペルソナに目覚めたときには、お前が戦い方を教えてやれという意味が籠められていたのではないだろうか。
実際のところ、桐条武治の真意は分からないが、このタイミングで父が訓練するよう言って来た事には意味がある。
そう考えて、美鶴は幾月の頼みを承諾することにした。
「分かりました。すぐにとはいかないでしょうが、時期を見て接触し、

話を聞いてもらってみます」
「たぶん、全てを正直に話したところで、普通の人は信じてくれないだろう。正気を疑われ、酷いことを言われるかもしれない」
「ええ、それも理解しています。一人ずつか、二人一緒にかは分かりませんが、まずは接触から始めてみます」
「ああ、よろしく頼むよ。でも、あまり無理はしなくていいからね。話を切り出すのは、普通に先輩後輩として親しくなってからでも良いんだから」
幾月の言葉に頷いて返すと、美鶴は適性検査以外の湊とチドリに関する調査書を全てファイルに仕舞い。それを手にとって部屋を後にした。
美鶴が出ていき扉が閉まると、机に残された適性検査の書類をファイルに片付けながら幾月が呟く。
「……随分と成長したものだな。今では被験体の娘ですら桐条君を上回るか。だが、桐条君に加え、これだけ高い適性を有した人間が一ヶ所に集まれば、感化され適性に目覚める者も出るはず」
それは飛騨データから得られた情報。影時間の適性は、相手側にもある程度の素質があれば、適性を持った人間の近くに居る事で感化され急速に目覚めることがある。
湊はその貴重なファーストサンプルであり、適性を目覚めさせたのはエルゴ研の研究主任であった岳羽詠一朗だ。
その娘は未だ低い数値しか出せず、ペルソナはおろか適性すら得るに至っていないが、ゆかりの書類と写真を見ながら幾月は席を立った。
「他者に影響を与えるのは君の役目だぞ、造られた英雄様。玖美奈とイニティウム（始まり）の準備が整うまで、せいぜい、こちらの駒を増やすために頑張ってくれたまえ」
部屋を出た幾月は、湊たちが接触している生徒が目覚める可能性が高いとして、その情報を集めるため学校側へさらなる調査を依頼するのだった。
午後――農園

「見て見て、有里くーん。先生、口の中で茎を結べたよー」
そう言いながら、麦わら帽子を被った佐久間が口を開け舌を出して走ってくる。
女子たちは教師のそんな姿に苦笑いしているが、湊は自分の目の前ではしゃいでいる相手をジッと見つめると、その舌の上に乗っていた、結び目の出来たサクランボの茎を手にとって袋に投げ捨てた。
急に舌を指で触られ、尚且つ、自慢していた品を捨てられた佐久間は驚きつつも抗議する。
「あー！　五分くらい掛かってやっと出来たのにー！」
「五月蝿い。黙って食ってろ」
「ふーんだ。言われなくても食べるもんねー」
拗ねながら湊に背を向けると、佐久間は小さなザルを持ってどこかへと駆けて行った。その後ろ姿を見て溜め息を吐きつつ、湊は振り返って後ろにいた他の者たちを写真に撮る。
いま湊たちは、山梨県にある農園の温室でサクランボ狩りを楽しんでいた。
本来ならゴールデンウィーク明けから始まるのだが、そこは湊と桔梗組のネットワークを駆使して、学校の部活動ならばと特別に前倒しで許可されたのである。
「そういえば、サクランボの茎を口の中で結べる人って、どうとかって何かあったよね」
「……キスが上手いとかってやつ？」
「き、キスって……そうなの？　じゃあ、先生って……」
サクランボを食べながら明るい調子で言っていたゆかりにチドリが答えると、聞いていた風花が顔を赤くして照れている。
さらに、どういうつもりなのか、チラチラと湊と去って行った佐久間の方を交互に見ていたため。まわりの人間は、彼女が何を想像してそのような視線を送っているのかすぐに理解した。
しかし、ここでそれについて言及すれば、風花は羞恥から泣きそうな顔になるに違いない。故に、武士の情けで、誰もあえて触れずにいる事にした。

「甘くて美味しいですね。でも、有里君は食べないんですか？」
「部の活動写真も残しておく必要があるから、他のやつが食べてるうちに撮影してる。ある程度の枚数が溜まったら勝手に食べるから気にしなくて良い」
「あ、そうなんですか。何か手伝う事はありますか？」
「……今は特に」
　静かに言いながら他の者の食べている姿を写真に収め、湊はデジタルカメラを腰につけたケースに仕舞う。
　口に入れようとしている瞬間などは、相手が女子であるため撮らないでおいたが、顧問である教師が写っている写真は、どれも教師が一番はしゃいでいるように見えた。
　これを学校側へ活動報告として見せて大丈夫なのかという不安はある。しかし、引率の教師が一枚も写っていないのでは不自然になるため、ある程度の厳選を行ってから提出することにしようと決めた。
　そうして、カメラを仕舞ってから、近くになっていた実に手を伸ばして摘むと、艶のある真っ赤な実を一つ口に含み咀嚼する。
　傍で湊が食べるのをジッと見ていた風花が、様子を眺め柔らかい笑みを浮かべて感想を尋ねた。
「美味しい？」
「……まぁまぁ。別に好き嫌いはないから」
「そうなんだ。有里君、ご飯もいっぱい食べてるし、好き嫌いがないと色々楽しめて良いよね」
　にっこりと笑って茎と種を捨てる袋を湊の前に置く。すると、湊は素直にそれを掴んで中に種を吐きだした。
　たまに変なところがあるため、ゆかりは湊が種を飲み込むのではと思っていたので、しっかりと吐きだしたことを確認して安堵する。
（まあ、流石にスイカの種ならいざ知らず、梅干しとかサクランボの種は食べないか）
　そうして、その後も注意して見ていても、毎回、しっかりと種を出していたので、ゆかりも安心してサクランボを食べ続けた。
＊＊＊

時間が来たため、お土産用のサクランボをパックに詰めてもらうと、一同はそれを持ってお昼を食べる場所へと向かっていた。
途中でいなくなっていた佐久間は、あの後、すぐに戻ってきてラムネを飲みながら食べていたので、機嫌はすっかり戻っている。
午後からは天気が崩れるという前日の予報通りに雨が降り出した。
だが、移動は湊が予約していた大型タクシーに来てもらい、それで事前に調べていた店まで送らせたため、少し肌寒くはあったが誰も濡れずに済んでいる。
「六人、禁煙で」
「はい。では、奥の座敷へどうぞ」
湊がやってきたのは、建物が木で出来た古くからありそうな店だった。
暖簾をくぐり、店の戸を開けると中にいた和装の店員に案内され、湊たちは座敷へと移動すると、窓側から風花・チドリ・湊の順に座り。それぞれの向かいにはゆかり・美紀・佐久間が座る。
窓の外には下の方に川が流れているのが見え、雨という悪天候ではあるが、明るく開放感があるように思えた。
「あの、ここは何屋さんなんですか？」
「和食がメイン。一応、午後は寒くなるって聞いてたから、山梨の名物でもあるし、ほうとうでも食べようかと思って来た」
店員が持ってきた水とおしぼりを受け取り、それを各自に配りながら湊が店の説明をする。
「ほうとうって何？　どんな料理？」
「かぼちゃとか野菜の入った味噌だしのうどんだよー。他にも名物料理はあるから、それは三人前くらい頼んで、あと何品か頼んで少しずつ食べようよ！」
そして、ゆかりの質問には社会科担当で日本の地理や土地名産にも詳しい佐久間が答えた。メニューに載っている写真を見る限りではボリュームもありそうである。
午前中にはサクランボを結構な量食べていたので、食べる量を調節できそうな佐久間の案に、女子たちは頷いた。

女子たちの知らない料理は、湊と佐久間が基本的に全て答えられたため、滞りなく注文する品を決定すると、店員を呼んで料理を頼む。
料理が来るまでの間、追加で頼んだ熱いお茶を飲みつつ待っていると、佐久間がジッと湊のことを見つめ続けていた。
腕を組んで目を閉じている湊は無視しているが、本当にずっと見ているので、雑談をしていた女子たちも気になり、ゆかりが代表して佐久間に声をかける。
「あの、先生？　どうして、ずっと有里君のことを見てるんですか？」
「うぇ？　ああ、大丈夫大丈夫。ちょっと気になっただけだから」
普段の明るい表情と違い、いまの佐久間には生徒に心配をかけまいとする気遣いの色が見られた。
新米教師としては破天荒ながら、生徒の事を考えて行動する情の厚い人物なので、こういった態度を取るとむしろ何かあるのを隠しているというのが分かってしまう。
そして、佐久間がずっと眺めていたため、それは湊に関わることなのだろう。
幼い頃より一緒にいる自分では気付けないことに、会って一ヶ月の佐久間が気付いたというのは、どうにも納得できないが、自分の感情よりも問題の把握が先だ。
そう考え、チドリはいつもより真剣な表情をすると、佐久間に尋ねかけた。
「気になったって、何の事？　湊に何かあるの？」
「ううん。別に悪い事じゃないから、大丈夫だよ！　ほら、先生は嘘つかないし！」
「五月蝿い、答えて」
「あう……」
明るく振る舞いチドリを安心させるつもりが、表情を一切緩めないチドリにばっさりと切り捨てられてしまう。
しょんぼりと肩を落としつつ、佐久間は生徒たちに順に視線を送る。
だが、誰も助け船を出してはくれず、話しを聞きたそうに見ている

ことから、深く溜め息を吐いて姿勢を正し話す事にした。
「ハァ……えと、あのね。有里君の傍に小さな女の子が視えたりなんかしちゃったりして、ね？」
『……はい？』
「だ、だから、有里君の傍にいっつも綺麗な格好した小さな女の子がぁ……」
言った直後に女子全員から「何を言っているんだコイツは？」という怪訝に思っていそうな視線を向けられ、佐久間は半分泣きそうな顔で改めて言い直した。
『……』
だが、風花と美紀から何やら憐れんだような目で見られ、ゆかりは口元を引き攣らせて佐久間から距離を取っている。
生徒のそのような反応に耐えきれなくなり、おしぼりを顔に当てると、佐久間は急に泣き出した。
「う、うえーんっ、だから言いたくなかったのにぃ！」
こんな態度を取られるのは、過去の経験から分かっていたため言いたくなかったのだ。
佐久間が湊に構っているのには二つの理由があり、いま言った事がその内の一つであった。
悪意のあるような存在ではないが、湊に少女の霊のようなものが憑いている。はっきりと視認出来るレベルのときもあれば、ぼやけたようにしか視えないときもあるが、数週間前からたびたび視えていた。
特殊な家の出身という訳でもなく、自身に除霊する力も特にはないが、憑いている霊が湊に干渉しようとしたときは、湊の身に危険なことが起こると思っていたため、学校にいるときには湊をずっと気にしていたのである。
そうして、いま間近で見る機会が改めて出来たので、その少女がどんな存在なのか見極めようとしていたときに声をかけられた。
霊に憑かれているなど、本人に聞こえては気分を害するだろうというのも話したくなかった理由の一つなので、おしぼりを顔に当てつつ、湊の様子を窺うと真正面から視線がぶつかった。

「あ……」
湊が本当に寝ているかどうかは簡単に判別できるが、ここに居る者で判別方法を知っているのはチドリとゆかりの二人だけ。
そして、今回は目を閉じて眠っていたように見えたが、肌の色は普段通りの健康的なものだった。つまり、話に参加しないようにしていただけである。
話が聞こえていたと気付いた佐久間は、身体を微かに震わせながら視線を外すことが出来ず、ただ相手の反応を待つしか無かった。
そして、今まで黙っていた湊が普段と変わらぬ冷めた表情で口を開く。
「……髪は青で、髪型はチドリみたいな感じか？」
「え、あ、うん。知ってたの？」
「座敷童子だ。別に悪いやつじゃない。視えても気にしなくて良い」
言い終わると湊はお茶を飲んでいるが、相手から拒絶の言葉をかけられると思っていただけに、霊の存在を認める発言をしてきたことで佐久間はキョトンと目を丸くする。
ゆかりらも、まさか湊自身も認識していると答えるとは思っていなかったため、素直に驚きを隠せなかった。
湊とチドリ以外が固まっている中、話を聞いていて、いち早く復活した美紀が気になったことを湊に尋ねる。
「あの、座敷童子って家とかに住み着いて幸せを運ぶっていう妖怪のですか？」
「別にそんなスキルはない。名前が同じだけだ」
「チドリさんは視た事は？」
「……私は湊と桜みたいに霊感はないから、普段は全くみえない」
チドリから湊と桜にも霊感があると聞いたとき、佐久間は目を見開き直後に感動したように目を潤ませた。どうやら、自分以外にも同じ話題を共有できる人物に会えて嬉しいらしい。
そして、素早く立ち上がりテーブルを挿んで向かいにいる湊の背後に回り込むと、おぶさるように絡みつく。
「わーい、有里君も一緒だー！　ねえねえ、座敷童子ちゃんって昔から

一緒にいるの？　先生もお話してみたーい」
「黙って座ってろ、店で暴れるな」
「呼んであげなよー。一緒にご飯食べようよ」
はしゃぐ佐久間は料理が来るまで湊に絡み続け、食事が終わったあとも、しつこく座敷童子に会ってみたいと言い続けた。
他の者は途中で慣れて流していたようだが、チドリだけは湊の瞳が蒼くなることを心配し、解散まで気が気でなかったのだった。
深夜――桔梗組本部
課外活動という名の日帰り旅行から帰って来た後、影時間のシャドウ狩りから戻ってきた湊は、入浴を済ませ、黒の着流しを着て縁側で涼んでいた。
他の者は既に就寝しており、足をだらりと垂らした湊は、麦茶の入ったグラスに口をつけて田舎の星空を眺める。
「……ザシキワラシ」
《なにか……用？》
静かに正座をした状態で現れたザシキワラシは、湊の持っていたグラスを横から奪うと、こくりこくりと小さく喉を鳴らしながら中身を飲み干す。
空となったグラスを盆の上に置くと、それにお茶を注ぎながら湊は尋ねた。
「ああ、お前、佐久間文子が視ていることに気付いてたのか？」
《たまに……私が動くと目で追ってた……かも》
「顕現してなくても視えるもんなんだな」
言って、注ぎ直したお茶を今度は自分だけで飲む。
湊は相手が自分のペルソナということで、呼び出していなくても存在を常に感じていたし。また、他のペルソナはそんなことはないが、ザシキワラシは半顕現状態とでもいうのか霊体のような状態で傍にいることもあった。
霊体化が出来るかどうかは、ペルソナの自我の形成度が影響していると思っていたため、完全に独立した思考と記憶を所持しているザシキワラシならば、そのような事が出来ても不思議には思わない。

だが、湊と同じレベルではっきりと霊を視認出来る桜から何か言われた事はなかった。
厳密に言えば霊ではないので、そういう物なのだろうと思っていたが、どうやら実際は違っていたらしい。
桜にはまだ聞いていないが、霊体化しているペルソナは力の強い者には視えてしまう。これは流石の湊も予想外であった。
「……これからは、あまり人前で出てはいけない。どこに視えるやつがいるか分からない」
《でも……お話……できない》
悲しそうな顔で俯き、キュッと湊の着物の袖を掴むザシキワラシ。
夜空を眺めていた湊は、ザシキワラシへと向き直ると、相手の頭に優しく手を乗せた。
「話したいときは、装備ペルソナをカグヤからお前にしてやる。そうすれば話せる」
《カグヤと……いつも話してた……？》
「いや、感情のようなものは読みとれても、本当に話せるはお前だけだ。四神やタナトスは読みとることすら難しい」
苦笑しながら湊が頭を撫でてやると、ザシキワラシは気持ち良さそうに目を細める。
カグヤを装備ペルソナにしているのは、探査・アナライズ・気配のステルスを普段から使用しているためだ。
チドリもメーディアを使ってステルスをかけているが、チドリのステルスは同系統の能力持ちには見破られる可能性がある。
その点、湊は同一系統が存在しないため、視認されない限りは探知能力から逃れることが可能であり、桐条の学校に通う上で湊はいつも警戒していたのだ。
確かに、カグヤの能力は装備していなくてもある程度は使える。
だが、話すためだけに精度を落ちることを無視して装備するというのは、チドリの安全を第一に考えているなら、決して許可できる物ではなかった筈だ。
ペルソナチェンジは三秒もかからず行えると言っても、湊がそれを

許可すると思っていなかったザシキワラシは、驚き大きく開いた瞳で湊を見ていた。
《本当に……いいの？　あなたは……あの子が……大事》
「授業中とか、二人とも教室にいるときなら大丈夫だ。それに、学校でしかけてくれば、自分の娘が殺されることくらい桐条だって分かっているはず。ラボの人間にしても、唯一の手駒を失いたくはないだろ」
《あなたは……桐条が……嫌い？》
「桐条って括りは正しくないな。エルゴ研の生き残り、桐条武治、そして、そいつらを肯定する者は許せない。影時間解決の目途が立てば、生き残りは全員殺す。邪魔をするやつも同様に対処する」
感情の昂りを表す蒼い瞳で言い切った湊を、ザシキワラシは僅かに悲しそうな表情で見つめていた。
しかし、自身の仮面のそんな表情に気付かず、湊はグラスとお茶容れを載せた盆を持って立ち上がると、それらをキッチンに片付けて、自室に戻り眠りについた。
ザシキワラシは湊の言いつけを守るよう、翌日から人のいる場所では霊体化した状態でも現れないようになり。授業中に装備されたときには、嬉しそうに二人だけの会話を楽しむ様になったのだった。

第三十八話　佐久間文子

5月9日（月）
朝――1―D教室
突然だが、佐久間文子は自覚ある人格破綻者である。
「やっほー、皆。ひっさしぶりー！　先生に会えなくて寂しかった？」
ゴールデンウィーク明けの今日、自身の受け持つクラスの教室に入ってくると、教室内にいた生徒たちに挨拶をしながら教卓と黒板の間に立つ。
服装はいつも通りの黒のリクルートスーツで、手には出席簿と朝のうちに配る必要のあるプリントがあり、出席簿を教卓に置くとプリントを各列の先頭の者に渡して、欠席者を確認しながら軽い調子で話しだす。
「先生も休みを満喫しちゃったよー。会えなくて寂しくても、メールとか電話で連絡できるし便利な時代になったものだよね。そうそう、有里くーん、先生ね？　今日は土曜日のサクランボでゼリー作ってきたんだ。お昼休みに一緒に食べようよ」
「センセー、有里君と土曜日に遊んだんですか？」
連休中に海外にでも行ったのか、こんがりと肌の焼けた女子生徒の一人が軽い調子で佐久間に尋ねる。
佐久間が湊を特別扱いしていることは周知の事実だ。男子生徒の何人かが湊に嫉妬のようなものを抱いていることや、先輩の教師陣からもやんわりと指摘を受けているため、佐久間も自分がどのような事をしているかは当然気付いている。
だが、それを理解していても佐久間は態度を改める気は全くなかった。
「そうだよ。部活で日帰り旅行に行ってねー。サクランボ狩りしてきたんだ。温室のサクランボはシーズンが始まるころだからね。美味しかったよー」
「先生、お土産はないんすか？」
「あっりませーん。だけど、皆からのお土産は受け取るから、遠慮せず

に持って来てね！」
男子生徒に土産について尋ねられると、佐久間は手を胸の前で交差し、バツマークをつくって答えた。
しかも、自分は土産を用意してないと言っておきながら、直後に自分への土産は受け取るという辺りに佐久間の図太さが伺える。
言った本人も、クラスの生徒たちもお互いに笑っているが、佐久間は視界の端で外を眺めている青みがかった黒髪の男子に意識を向けていた。
今日も世界をつまらなそうに見ている少年。それが佐久間の中での湊の印象。
だが、だからこそ、佐久間は湊に執着するのだ。
「休み明けだけど、再来週には中間テストだからね。皆、ノートとプリントをちゃんと整理しておくんだよ？」
彼女本来の性格は、今この場にいる中では湊が最も近いと言える。過去に親交のあった同級生に尋ねれば、教師としての姿を見ても昔と変わらないと答えるだろう。
だが、それは昔から周囲に『お調子者の佐久間文子』という仮面で接していたからだ。
仮面を外せば、いまのように明るい口調で話す事など一切なく、世界は色褪せていてつまらないと諦め、心の中でまわりの人間を冷めた思考でくだらないやつらだと見下していた。
それが素の佐久間文子という人物。
「センセー、テストのときに課題ってありますか？」
「授業で配ったプリントを、ちゃんと番号順にファイルに挿んで提出してくれたらＯＫだよ。提出点が付くから、無くした人は貰いに来て、誰かに写させてもらってね」
彼女には幼い頃から霊感があった。湊のように急に視えるようになったのではなく、桜のように気付いたときには視えるようになっていた。
小学校に上がったばかりの幼い彼女がそれを両親に話すと、父は彼女の言葉を信じながらも彼女の身を案じてあまり人に喋らないよう

にと言った。
だが、母親は娘の力を知って、テレビ局へと電話をかけていた。それも本人と夫には内緒にして。
母親が電話をしてから数日後、当時は超能力や霊感がブームだったこともあり、テレビ局から霊感少女として番組に出ないかと依頼がやってきた。
それを知った父親は娘を見世物にするのかと怒ったが、母親はそれを聞き入れず、娘を連れて言われていた収録場所へと向かった。
結果、佐久間は『霊感少女』として話題となり、いくつもの番組へと引っ張りだこになった。
急に環境の変わった佐久間はそれに戸惑ったが、母親がスケジュールの管理をしていたため、言われるままに番組に出演し、よく分からないままに仕事をこなす日々を送った。
＊＊＊
「四大文明には、それぞれ大きな河が関係していまーす」
カツカツとチョークの音をさせながら、黒板に四大文明という文字と、赤いチョークで大河という文字を書く。
板書が終わると生徒の方を向き、教卓に置いた教科書やプリントに目を通すが、佐久間はこんなものを見なくとも授業を進める事が出来る。
霊感少女として話題となった事が切っ掛けとなり、佐久間の両親はしばらくして離婚した。
離婚後は母親が彼女を引き取り、メディアには父親側の姓を名乗ったまま出ていたので、母親の姓となった佐久間文子という名前を聞いたところで当時の霊感少女であると気付ける者はほとんどいない。
「チグリス川とユーフラテス川、この二つの川の傍で栄えたのがメソポタミア文明と言って――」
離婚後も母親と共にテレビに出演していたが、ブームというのは移り替わるものである。
佐久間の母親は子どもが注目されることで、まるで自身も注目されているように錯覚するような典型的な人物で、世間の関心が別の物へ

逸れてゆくと、次第に出演の依頼もこなくなり、佐久間の稼いだギャラで生活していた母親は焦るようになっていった。
そうして、最後には仕事が一切来なくなり、一時のブームで稼いだ金だったが、母と娘の二人で数年暮らしていくには十分に足りていたこともあって、二人は少し田舎の方に引っ越し普通に暮らすようになる。
だが、佐久間の母は煌びやかで華々しい生活を忘れられず、密かに娘をもう一度芸能界へと復帰させることが出来ないかと画策していた。
そして、中学三年生のある日、佐久間の別の才能が見つかった。
いや、正確に言えば、霊感少女として仕事をしていたことで、いままで誰も気付くことが出来なかった才能が、ようやく発見されただけだ。
「メソポタミアの人たちは、私たちも使っている一週七日制を決めたと言われていて――」
そう、佐久間文子は天才だった。
初等教育時にまともに学校に行っていない人間は、学業における基盤がスカスカということである。
にも拘わらず、佐久間はテストでは好成績を取り続け、中学校になると模試で満点を取るようになっていた。
塾にも行かず、通信教育もしていない。学校から帰れば宿題はしていたが、日に決まった自習時間を設けてなどいなかった。
どうしてそれで必死に勉強している者よりも成績が良いのか不明だったが、全ては才能の一言で済んでしまう。
霊感のときと違い、彼女は自分の学習能力の高さを正確に認識し、それが周囲から見れば異端である事も分かっていた。
試しに円周率を何ケタまで覚えることが出来るか試してみると、五分で五十ケタまで覚えられた。
それ以上は特に覚える必要性を感じなかったため試していないが、彼女がその気なら百ケタだろうと覚えられたかもしれない。
そうして、彼女は彼女の才能を理解した母親の勧めで超難関の女子

進学校へと進学した。
どうして『天才少女』として自分を売りに出さないかという疑問を持ったが、すぐに母親の思惑を理解することになる。
佐久間が高校に入学したばかりだというのに、母親は次に進学する大学を決めていたのだ。
「彼らが使っていた文字は楔形文字という、こーんな不思議な図形っぽいものでね？」
母親は学んだのだ。霊感少女も天才少女も一時のブームにしかなれず、ブームはいつか終わってしまうと。
故に、ミスコンでグランプリを取れば、芸能界へ行けるという大学へ進学させる方法を考えた。
しかし、母親が自分を金儲けの道具のように考えている部分を知っても、佐久間は今までの自分を演じ続けた。
通学時間の暇つぶしに本を読み、様々な知識を手に入れたことで、国内でもトップクラスの偏差値を誇る学校の授業も簡単に思える欠伸の出るような毎日。
必死になっている人間を笑うような趣味はなかったが、どうせ出来もしない事を夢として語っているのを聞いていると滑稽にしか思えなかった。
それでも彼女が周囲を騙し、まわりの望む自分を演じ続けて、母親の言う通りに大学へと進んだのは理由があった。
それは、母親の考えた計画へのささやかな反逆のため。
彼女は大学に進学すると一年生の頃から教職科目の講義を受けた。
母親は佐久間が教師になりたいと言い出すのではと心配したが、丁度良いタイミングで女子アナに教職の資格を持っている人間が大勢いるとバラエティ番組で言っていたため、資格を持っている方がウケも良いかと何も言ってこなかった。
その後も順調に単位を取り続け、無事に中学・高校の社会科の教員資格を手に入れることが出来た。
ここまでの準備は万端。
さらに、四年時の学園祭でミスコンにエントリーした佐久間は、既

に芸能事務所に所属している者らを押しのけ、見事グランプリに輝いた。
新聞やテレビにも取り上げられ、どこにも所属していないと分かると、多数の芸能事務所から卒業後はうちへ来ないかと誘いがあった。
高校受験の前からこの時を待っていた母親は歓喜した。誘いのあった事務所に所属している芸能人、その相手の活動内容、それらを細かく調べて事務所の売り出し方を知り、娘がどこへ所属すべきかを考えていた。
だが、佐久間はその裏で教員採用試験を受けていた。母親は娘が働く上で最も好条件の事務所やテレビ局を探していたので気付いていない。
そして、試験を受け続けた結果、佐久間は卒業を前に月光館学園に勤務する事を決めた。さらに、今まで住んでいた家を出て独り暮らしをすると母に告げて。
「そういえば、ハンムラビ法典ではね。お酒の量を誤魔化したら死刑になるんだよ？　というわけで、先生はいくら泡の方がアルコール度数が高いと言っても。泡の多いビールは認めません！」
当時の母親の表情を見たとき、佐久間はモノクロの世界に久しぶりに色が戻ったと感じ、悪戯の成功を子どものように喜んだ。
母親はヒステリックを起こし、奇声を上げながら罵倒してきたが、佐久間はケタケタと笑い続けて家を出て契約していたアパートに向かった。
ずっと従順なフリを続けていたが、自分はお前の夢を叶える道具ではない、そう言い残して。
だが、ようやく自由になったというのに、すぐに世界は再び色を失ってしまう。
新学期からの準備のために何度も学校へ足を運んだが、自分が採用されたのは、『桐条美鶴』という学校の出資者の娘で、テストで満点を取り続けている〝天才〟の娘に勉強を教えるためだと告げられたからだ。
相手は新二年生だが生徒会副会長の役職に就いており、春休みにも

学校へ来ていたので佐久間も面会する機会があった。
しかし、実際に会って話してみたところで佐久間は察した。相手は泥臭い努力によって今の地位に存在する秀才だと。
育ちが良く帝王学でも学んでいるのか、周囲の目を惹く気品とカリスマは確かに持っている。だが、頭の回転は速いが、視野は決して広くない。これならしっかりと学習内容を把握している者なら誰でも教えることが出来る。
父親か学校かは知らないが、こんな人間一人のために自分はここへ呼ばれたのかと思うと虚しさが広がった。
教えるのは良い。それが自分の選んだ教師という仕事だから。
しかし、これならば母親の言う通りに芸能界にでも入っていた方が、まだ代わり映えのある毎日だったろう。
自分の部屋に戻った佐久間は、気を紛らわすように毎夜酒を飲むようになった。
「先生はお酒がだーい好きです！　お酒を飲むときにご飯を食べない人もいるけど、先生は丼でだって食べられます！」
それから少ししてある転機が訪れる。新一年生に桐条美鶴級の天才が入ってくると、学校側が騒ぎ出したのだ。
対象者は三名、有里湊・真田美紀・吉野千鳥。
中学校の単元も僅かに含んだ『国・算・英・理・社』の五科目のテスト。それを小学校を卒業したばかりの生徒が、一人は満点、一人は４８２点、一人は４７６点と四位の生徒が４４６点だというのにかなりの差を開けて高得点を叩き出した。
新二年生では美鶴だけが突出していたが、新入生は三人も同クラスが存在する。
この事態を重く見た学校側は、天才は天才に任せれば良いと、急遽、佐久間を三人の担任にすると決定した。
その知らせを聞いても佐久間の心は何も動かなかった。校長と教頭が揃って天才だと言っていた桐条美鶴が〝普通の人間〟だったのだ。
ならば、人数が三人に増えたところで、どうせ今回も自分とは違う

〝普通の人間〟だろうと思ってしまうのもしょうがない。
笑顔で担任になることを了承するも、新入生代表の挨拶をしないかと一位の生徒の家へ訪問する車の中では暗い表情をしていた。
だが、そこでの出会いにより佐久間の世界は再び色を取り戻す。
「はーい、有里君に問題です。〝目には目を、歯には歯を〟これはハンムラビ法典の中に存在する言葉ですが、これの意味するところを答えなさい！」
「罰則の制限。過剰な報復を防ぐため、罰則は同刑罰までにせよという意味」
「だーいせいかい！　そうだよ。やられたらやり返せじゃないんだよー。やり返すときは、自分がやられた事までしかやり返しちゃ駄目って言ってるの」
佐久間は湊に初めて会ったとき、思わず目を奪われた。相手は自分と同じ天才ではない、だが、他の〝普通の人間〟でもないと一目で分かった。
このクラスだけでなく、学校全体でも天才は佐久間を除けばチドリしかいない。チドリよりも上の成績である湊も美紀も桐条美鶴と同じ秀才型なのだ。
しかし、それでも佐久間は湊に何故か惹かれる物を感じた。才能という点では自分が遥かに勝っている。
それでも、生物として、または人間という枠で比べたとき、自分は湊に勝つことが出来ない。本能でそれを悟ったとき、佐久間は〝孤独な天才〟から落とされ〝普通の人間〟の輪の中に組み込まれていた。
「だ・か・ら、先生は有里君にアイアンクローや背負い投げをする権利を有しているのです！　ちゃんと、その日に受けたＤＶをメモ帳に書いてあるもんね！」
「……家庭なんて持ってないだろ」
「むむむ……じゃあアカハラ？　あ、でも、この前の先生の舌を指で触ったのはセクハラで良いよね？」
「……自分が普段、俺に何しているか理解してるのか？」
同じ才を持ったチドリの存在は認知しているが、チドリは佐久間と

違って〝普通の人間〟として生活している。
才能が開花している時期の早さを考えれば、チドリも自分と同じようになっていてもおかしくないはず。しかし、彼女もまた、人間のまま輪から外れている者を見ている限り、『天才』ではなく『個人』でいられるらしい。
あの出会い以来、佐久間の世界から色が消える事はない。自分の能力は全く変わっておらず、今でも周囲を僅かに見下している自分がいることには気付いている。
しかし、周囲と話すときは『お調子者の佐久間文子』を演じていたはずだというのに、いまの自分は素でその『佐久間文子』と同じことをしている。長くそれを演じ過ぎていて、素の自分というのを忘れてしまったようだ。
だから、佐久間は今の自分を受け入れた。演技で始まった物でも、それは自分の一部である。境界が曖昧になったのなら、あの瞬間に新しい自分が生まれたと考えれば良い。
それから、佐久間は付き纏うようになった。自分を人間でいさせてくれる存在、世界に再び色をくれた恩人へ。
「先生ね、生徒とのコミュニケーションは大切だと思うの。あ、でも、他の男子は駄目だよ？　皆はえっちぃ目をしてるからね。授業中にさ、胸にばっかり視線送るのってよくないよね？　まぁ、気付いてても言わない優しさっていうの？　それで許してるけど、先生は女子校育ちなので、えっちぃ人はＮＧでーす」
佐久間が笑ってはっきりと男子からの想いを拒否すると、女子たちは軽蔑するような冷めた瞳で男子を見つめ、女子からそんな目で見られた男子らは慌てて首を振り否定しだす。
そんな様子が面白かったのか、状況を作り出した張本人はわざと大仰な身振りでモデルのような立ち姿を見せる。
「あはははは！　思春期の諸君には、ミス荘厳（しょうごん）女学院のグランプリを取った先生の美貌は眩し過ぎたかなぁ？」
「え、マジ？　先生ってショジョガクの出身なの？」
「うっわー、その略し方はないよー。私たちはショゴジョって言って

るからね？　友近君はセクハラで減点決定！」
「おわっ、スミマセン！　先生の美しさに目を奪われ頭が回ってませんでした！」
「んー……ま、見え透いたおべっかで子どもに褒められてもね。先生もこれで大人なんで、流されたりはしないのですよ。という訳で、減点は取り消しまっせーん！」
　世界から色が消えているというのは、まともな状態を知っている者には緩やかに心を殺されていくようなものだ。
　湊に初めて会ったときから、その瞳が嘗ての自分と同じ物を見ていると気付いていた。
　そのため、佐久間は湊の世界に色を与えようとする。方法は分からない。しかし、正常に戻った今ならどれだけあれが苦しい事かはっきりと分かる。
　みっともないと陰口を叩かれても気にしない、周囲に自分の行動を咎められても必要なことだと言い返す、いまのこの職を失うのだって構わない。
　それでも、有里湊を一人の人間として愛し、助けてやりたいと心から想っているのだ。
　故に、佐久間文子は自覚を持ってかつてと同じ人格破綻者でいることにしている。常人のままでは助けられない、彼を助けるには常人と同じ接し方では不可能だと理解しているから。
　夜――佐久間自宅
「座って待っててねー。今ちゃちゃっと作っちゃうから」
　そういって長い髪をゴムで一つにまとめた佐久間が、フリルのついたエプロンを付けながらキッチンへと入っていく。
　学校が終わった後、佐久間の自宅アパートに湊はいた。チドリや他の部活メンバーはおらず、完全に二人きりである。
　湊がここへやってきたのは、佐久間が作ったサクランボゼリーを自宅に忘れたからで、昼休みになって気付いた佐久間は、明日には駄目になっているからと夜の予定を聞いて湊を自宅へ招いた。
　他の者も来るかと聞いたが、チドリはバイトが入っており、他の者

は寮や自宅の門限があるため、またの機会にとなった。
「有里君さぁ、ケチャップ派？　デミグラ派？　それとも渋めにソイソース？」
「……ホワイトソース」
「っ!?　あ、有里君が冗談を言った？　は、初めて聞いたから、びっくりしたー」
自分のミスから家に呼んでおいて、ただゼリーだけを食べさせて帰らすのは申し訳ない。
そうして、佐久間は夕食も食べていくようにと、湊にオムライスを振舞う事にしたのだ。
断られると思っていた佐久間は、ゼリー一つで湊が自分の家へ来てくれることに大変喜んだが、相手の真意が分からず不安が心に残っている。
今は料理が出来るのをリビングで待ってくれているが、次の瞬間にはいなくなっているかもしれない。
湊は普通の人間よりも存在感を放っているが、それは燃え尽きてしまう直前の恒星の輝きのような印象も同居させていて、その点が佐久間の抱く不安の原因となっている。
材料をテキパキと切って、チキンライスを作っていく。フライパンでご飯を混ぜながら、リビングの方に視線を向け、テレビを眺めている湊の背中を見て安心感を得る。
「実はね。この家に来たのって新聞とか宅配便とかの人以外だと、有里君が初めてなんだ。先生の家、どうかな？」
「……酒のゴミが多い。ここらへんは瓶と缶は一緒に出して良いんだから、さっさと捨てろ」
湊がそのような事を言ったのは、部屋の端にボーリングのピンのように置かれた様々な種類の酒瓶を見つけたからだ。
その隣には『燃えないゴミ』と書いた袋に、ビールやチューハイの缶が潰されて入れられている。
アパートとは言えベランダがあるのだから、ゴミの日までは外にでも置いておけばいいものをと思いながら、湊が立ち上がり薄ピンクの

花柄カーテンを開けると、ベランダには洗濯物が干されたままになっていた。
「……いま、七時半だぞ」
「にゃーっ!?　あ、有里君のえっち！　下着も干してるんだから、洗濯物みないでよー！」
「取り込まないと湿るぞ」
「君が居るから、ご飯を優先したの！　それに取り込んだ物は畳むまでソファーに積んでおく派なんだから、取り込んじゃったら君の座る場所がなくなっちゃうでしょ？」
慌ててキッチンから出てきた佐久間は、カーテンを掴んでいた湊の手を離させると、すぐにカーテンを閉め切った。
珍しく頬に朱がさしているため、抱き付くことには照れない佐久間も、干している下着などを見られるのは恥ずかしいようだ。
そんな事実を知っても、湊は普段と変わらぬアンニュイな表情のままソファーに戻り、ぼーっとテレビを眺めている。
先ほどは焦っていた佐久間も、普段通りの相手の様子を見ると落ち着きを取り戻し、キッチンに戻って料理の続きをする。
「それで、さっきの話に戻るけど、インテリアとか雰囲気とかはどうかな？」
「特に変だとも思わない」
「本当に？　落ち着く空間になってる？」
佐久間はここまでしつこく聞くのは、彼女には〝普通〟の感覚がまだ分からないからだ。
家具の配置は自身の動線を予測し、機能性を重視した数パターンの中から最も優れた物を選んだに過ぎない。
インテリアも材質と値段を考慮し、無駄の少ない長期に亘って使えるものを選んだため、色や柄は二の次にしている。
湊と関わるようになってからは、自分も女の子っぽくしなければと勉強するようになったが、部屋の中身は未だに引っ越してきた当初とあまり変わっていなかった。
そうして、完成した料理をテーブルに置きながら答えを待っている

と、湊はテレビの画面に向けられていた視線を佐久間へ移して口を開いた。
「俺に聞かれても答えようがない。こっちも普通の感覚なんて持っていない。そんな物は他のやつらに聞いてくれ」
「……こっち、も？」
相手の言葉に引っ掛かるものを感じ、それと同時にある可能性に行きつく。
初めて会ったあの日、佐久間は湊の瞳の奥に嘗ての自分と同じ物を見た。
だが、自分だけがそれに気付いていたとは限らない。湊もまた佐久間の瞳の奥に存在した、彼女の心の内を読みとった可能性がある。
「……お前が、俺に構う理由なんて想像がついてる。自分よりも異常な者を見つけて安心したんだろ。俺に比べれば自分は人間だと、輪から外れてなどいなかったと、初めて会ったあの瞬間にお前は気付いたんだ」
「ち、違うよ、私、そんなつもりじゃ――――っ!?」
座ったまま佐久間を見つめていた瞳の色が〝蒼〟に変わり、一瞬の驚きを感じて、直ぐに初めてあったときの事を思い出す。
気のせいではなかった。少年の瞳は、あのときも今と同じ全てを見透かすような色をしていた。
何が起こったのか分からないが、佐久間の脳は、本人の感情とは別に冷静に状況の把握を行おうとしている。
現在の最優先事項は、自分の考えを見抜いた上で、〝想い〟の部分を全く読みとれていない相手の誤解を解くこと。
脳が弾き出した答えを、佐久間は様々な感情が胸の内で渦巻いたまますぐに実行に移した。
「わ、私は、確かにあなたをみて、違いを思い知らされた。あなたは人なのに、違うんだって、私みたいに一般人とは違っている人間ともまた違ってる人なんだって気付いた」
蒼い瞳で見られると怖くて逃げだしたくなる。
先日、自分が霊を視える事を告白したとき、湊から拒絶の言葉を受

けると想像したときよりも、ずっと心も身体も怖がっている。
だが、ここで逃げ出せば自分は後悔する。逃げ出して、明日また普段と同じように教室で顔を合わせられる自信がない。
自分を抱きしめるように震える肩に爪を食いこませ、一時的に痛みで感覚を呼び戻すと、佐久間は隣に座っている湊に抱き付き胸に顔を埋めて続けた。
「でも、私があなたに構っているのは、自分が安心したいためじゃない！　世界に色を戻してくれたあなたにお礼がしたくて、あなたがこっちに戻れるように方法を探しているの！　つまらないなら楽しくすれば良い。何にか興味が湧くようにってあなたにいっぱい話しかけるし、好きな物があれば探して持ってくる」
相手がどんな顔をしているか分からない。目を見ず、表情すら見ないまま話すのなんて逃げでしか無い。
そう分かっていても、この場から逃げ出さずに話を続けるには、こんな方法しか思い浮かばなかった。
「出かけるなら付き合うから、遠くでも休みじゃなくても一緒に行くから！　だから……だから……いなくならないでよぉ、傍にいさせてよぉ……わあぁぁぁぁぁんっ」
堪え切れなくなったのか、最後は抱き付いたまま子どものように泣きだしてしまった。
湊がどこにも行かないよう腕には力が籠められており、動くことの出来ない湊は、急な相手の変化に瞳の色を戻して手の置き場所に困っている。
そして、とりあえず、自分と十歳ほど歳の離れた相手を泣き止ます事が先決だと、相手の頭を撫でながら背中を擦ると徐々にだが、泣き声が啜り泣きに変わってきた。
もう大丈夫かと手を離そうとすると、腰をホールドしている腕に力が籠もるので、泣きながら催促するとは図々しいやつだと呆れつつ、湊は相手が完全に泣き止むまで撫でる手を離さなかった。
＊＊＊
佐久間が泣き止んだのはそれから二十分後で、テーブルに運ばれて

いた料理は完全に冷めていた。
泣き止んだ後も、佐久間は仰向きで湊の膝を枕にし左手で制服のシャツの端を摘んでいるので、ホールドを解かれても湊は動くことが出来ない。
だが、いつまでもこうしていられる訳ではないので、時折鼻をすすっている二十二歳児に声をかけることにした。
「……別にどこかに行くつもりはない。転校するつもりも特にないし、授業も部活も可能な限りは出る。お前への反応も今まで通りだ」
「……ぐす……ほんとぉ？　私といっぱいお話してくれる？」
「……元からそんなに話してない」
今まで通りと言ったはずなのに、佐久間が頻繁に会話をしてくれるかと尋ねてきたので、湊は溜め息を吐きながら返す。
それを聞いた佐久間の表情がわずかにくしゃりと歪むが、腹の上に置かれていた相手の右手に湊が手を重ねると、わずかにびくりと震えて掴んできた。
そして、佐久間はそれを恋人繋ぎに持っていこうとしながら会話を続ける。
「ねぇ……私ね……有里君が好きなんだ。小さい頃から自由な時間がなかったから、恋愛とかよく分からないんだけど、有里君と一緒にいてお話したいし。こうやって触れたりしたいの」
「お前は教師だろ。それにこっちは二次性徴も始まったばかりだ。そんなガキに構うな」
「……うん。でもね、私は気にしないんだ。一目惚れしちゃったらしょうがないもん」
言って、佐久間は制服のシャツを摘んでいた左手で湊の顔の輪郭を撫でる。
右手は繋いだまま、手が喉に触れると菱形のアレキサンドライトのついたチョーカーに伸ばされ、泣いて充血した瞳で見つめ尋ねる。
「有里君さ。吉野さんと付き合わないの？　いま、彼女いないんでしょ？」
「俺がチドリに抱いてる感情は異性に対するものじゃない」

「ふーん、でも吉野さんが告白してきたら？」
「付き合わない」
すらすらと答えた湊の瞳を覗きこみ、佐久間はその真意を探ろうとする。だが、金色の瞳の奥には何の感情も籠もっておらず、言葉の真偽はまるで分からなかった。
蒼い目で見られたときには、自分の全てを見透かされているように思えたというのに、不公平だなと頬を膨らませ拗ねる。
急に相手がそんな態度をとったことに湊は不思議そうにしているが、その顔を見た佐久間は何かを思い付いたのか、悪戯っぽい笑みを浮かべ湊に顔を寄せた。
そして、お互いの唇が触れあうと、湊の頭の中に謎の声が響く。
《我は汝、汝は我……》
キスから始まるコミュニティーなど湊は初めて知ったが、これでまた新たな絆が開けてしまった。
佐久間文子の対応するコミュニティーは『ＸＶＩ・塔』。正位置ならば困難や破滅、逆位置ならば再生や解放など、正位置の時点で他のカードよりも負の意味合いを強く持つカードだ。
カードの絵柄に描かれた塔は〝神の家〟以外に〝バベルの塔〟だとも言われており、本日の佐久間の授業で習ったメソポタミアにも深く関係するという説もある。
彼女が〝塔〟に選ばれたのは、相手の内面だけでなく授業内容が頭に残っていたことも関係しているのだろうか、と湊が考えているとき佐久間が唇を離した。
「――――ハァ、えへへ、奪っちゃった」
顔を離した佐久間は自分でやっておきながら、顔も耳も真っ赤に染めて、表情がだらしなく緩んでいる。
対して、教師に唇を奪われた湊は、冷静に口を拭っていた。
自身のファーストキスを捧げたというのに、まるで汚いもののように扱われ、憤りを感じた佐久間は身体を起こしソファーに座り直すと抗議した。
「あー！　先生のファーストキスだったのにー！」

「俺は別に初めてじゃない。気が済んだなら離れろ」
怒って大きな声を出している相手の顔を掴むと、湊はそのまま押しやり佐久間をソファーから落とした。
部屋着のズボンに着替えていたので、下着が見えるということはなかったが、本来の持ち主である自身がソファーから落とされ、佐久間は不満顔で睨んでいる。
しかし、食事をしたら帰るという約束が、既にかなりの時間をオーバーしてしまっている。
その事を指摘するように、湊が壁の高い位置に掛けられた時計を指差すと、佐久間も既に九時前になっていることに気付いたようで、慌てて立ち上がった。
「わわっ!? お、お腹空いてるのにごめんね。ご飯も冷めちゃったし。今から作り直してたら家に着くの夜中になっちゃうよね？ そうだ、外に食べに行く？ 駅前で食べてそのまま帰ったら少しは大丈夫だよね？」
「……夜中に用事があって、十一時半くらいまではここにいられる。帰るのは初めから深夜の予定だから問題ない」
「そうなの？ じゃあ、ご飯作りなおしても良い？」
「……ああ」
返事を聞いた佐久間は直前の怒りはどこへ消えたのか、鼻歌を歌いながら冷めた料理をキッチンに下げ。改めて料理を作り始めた。
待っている間の湊は、相手が抱き付いてきた際にシャツについてしまったピンク色のルージュをどうするか考え、結局、マフラーの中にあった替えのシャツに着替えて、ルージュの付いた着ているシャツは帰る途中に捨てていく事にした。
少ししてから作りなおしたオムライスが運ばれてくると、二人でそれを食べ、食後には当初の目的であったサクランボのゼリーも食べた。
食事を終えても湊が出ていくまでまだ時間があったため、佐久間は生徒視点での授業の進め方などの感想を聞き、それらを参考にして新たな授業の進行計画を書きあげたところで時間が来た。

帰るという湊をアパートの下まで送ると、部屋を出た湊はそのまま影時間のタルタロスでシャドウ狩りをしてから帰宅したのだった。

第三十九話　ある日の部活動

６月７日（火）
放課後――生徒玄関エントランス
佐久間の家での一件以来、湊に対する佐久間の対応は一時沈静化した。
他の生徒よりも特別扱いしているのは変わらないが、出会う度に抱き付くことがなくなり、今では湊の手に触れるだけで嬉しそうに笑っている。
女子らは、そのはにかむような喜びの表情から、佐久間が恋する乙女になったと言っているが、一方の湊が完全に今まで通りの反応なので、報われない恋だなと思いつつ応援している者もいる。
もっとも、湊はチドリとペアの扱いが強いので、浮気されても良いのかとチドリに言った者もいるが、チドリは自分たちの関係を異性のものではないと否定したので、三角関係というゴシップを求めていた相手はつまらなそうに離れていった。
さらに、一学期の中間テストを迎え各自が勉強に忙しかったこともあり、その話題は知らぬ間に廃れ、生徒たちの関心はテストの順位に移っていた。
一年生の結果で言えば上位陣に変動は無く、一位は全教科満点の湊だった。二位の美紀は４８９点、三位のチドリは４８７点と上位陣はかなり競っている。
それから少し差があって、風花が十一位、ゆかりは成績トップ陣に教わりながらテスト勉強をしたためか、約２４０人いる一年生の中でほぼ中間だった順位を６７位まで引き上げていた。
一学期の初回から躓くと後の成績にも大きく響くため、大躍進を遂げたこと自体には大いに喜んでいる。
だが、同じ部活メンバーがほぼ一ケタ台ばかりのため、もろ手を挙げて喜ぶ事は出来なかった。
そうして、順位の発表からさらに一週間ほど経って、それぞれが普段通りの変わらぬ日常に戻った頃、部活の前に購買で何か買おうとし

ていた湊の前にある人物が現れた。
「すまない。君が有里湊君でいいか？」
「……」
現れたのは緩い縦ロールの髪型をした女生徒。二年生の桐条美鶴だった。
相手は他者を魅了するような、歳不相応な色気の混じった笑みを浮かべて湊と対峙している。
その手には薄ピンクのバインダーがあり、中に何枚かの書類が挟まっているようだが、興味のない湊はペットボトルのコーラといくつかのお菓子を選ぶと、売店の女性にお金を払い、そのまま部室を目指すため管理棟へ向かいだした。
声をかけた時点では視線を一度送ってきたというのに、まさか無視して相手が去っていくと思っていなかった美鶴は驚き焦る。
成長期に入って背が伸び出したことで身長差のほとんどない湊の肩を掴むと、美鶴は改めて声をかけた。
「ま、待ってくれ。君は1年D組の有里君だろう？　ちょっと用事があって話を聞いてもらいたい。少し付き合ってはくれないか？」
予想外の相手の行動に驚きはしたが、美鶴は相手に用件を伝えながらすぐに冷静さを取り戻す。
初めから真面目に話を聞いて貰える可能性は低いと踏んでいた。無論、事前の人柄調査では他人の話を表面上は聞くタイプだと出ていたので、今のように聞きもせずに立ち去られそうになったのは予想の範疇外だが、それでも正気を疑われ罵倒されるよりはマシだ。
そう考えると、相手に話を聞いてもらうにはどうすれば良いかと冷静に考える余裕が生まれる。
相手との会話のために事前の調査はしてきたつもりだ。学内での交友関係、男女・生徒と教師・同級生と上級生、それぞれに対する対応も分かる限りで調べた。
調査結果を踏まえて考えると、女子で上級生である自分にはそれほど冷たい態度は取らないはず。誰の教育の賜物か湊は女子には甘いと出ているから。

内心でそのように思いながら美鶴が肩を掴んだまま待っていると、湊が反応を返した。
だが、それは美鶴との会話のためではなく、まるで服に付いていた糸クズを取るかのように、肩に置かれた美鶴の手を興味無さげに払うものだった。
「っ!? き、君！ 何故なにも答えない？ 何か返事くらいしてくれても良いだろう」
「……」
管理棟へ入っていく相手の背に言葉をかけるが、湊は一切足を止めなかった。
事前の調査とまるで違う人柄、それ以前に相手は最初の一瞬しか自分を視界に収めてすらいない。
道を行けば自然と周囲の視線を浴びることに慣れていた美鶴にとって、今受けた歯牙にも掛けない態度は未知の感覚であり、胸中に言い様のない痛みを感じた。
二人のやり取りを見ていた周囲がなにやらざわついている。
だが、美鶴の視線は、廊下の奥で職員室から出てきた若い教師の相手を面倒そうにしている男子の背中に注がれていた。
「有里、湊……」
まわりに聞こえないほど小さな声で呟くと、美鶴は拳を強く握りしめたまま踵を返し、エントランスを後にした。
――部室
職員室の前で出会った佐久間と共に湊が部室に向かうと、部室には全員が揃っていた。
壁や天井に防音処理のなされた部室の広さは普通の教室より一回り小さいが、部員五名の文化部には十分な広さだ。
机と椅子、ホワイトボードにエアコンは初めから置かれていたため、今週からの作業内容が書かれ、エアコンで涼しくなった教室内で、各自何やら準備をしていた。
ここ美術工芸部の部室は、道具を置いておく幅の広い三段の棚、資料を置いている本棚の他、湊が勝手に運び入れたノートパソコン・電

子レンジ・冷蔵庫などの家電用品、佐久間が用務員室から貰って来たカセットコンロに掃除機もあり、他の部室よりもかなり恵まれた環境になっている。
　そんな、若干プライベートスペースと化した部屋に、湊が荷物を置いて適当に座るため歩きだそうと思ったとき、視界の端で何かが動いた。
　そちらに目をやると、部員でもっとも小柄な少女・山岸風花が、左の壁に沿うように置かれた棚の下の段に左腕を伸ばしてごそごそと漁り、入り口の人間に向かって尻を振っていた。
「……ハァ」
「わははー、有里くーん？　その溜め息はどっちの意味かな？」
「……あいつの無防備さに呆れてだ」
「うんうん。君ならそういうと思ってたよ。という訳で山岸さん、探し物をしてるみたいだけど、スカートがめくれて部屋に入った人に下着が見えちゃってるから気を付けてね」
「え？　えーっ!?　痛っ……うぅ、頭うったぁ……」
　キョトンとした表情で振り返り、湊と佐久間の姿を発見した直後、風花は驚いて跳び上がったときに上の段の底に頭をぶつけた。
　血が出るような怪我はなかったようだが、目に涙を滲ませ、手でぶつけた箇所を触りながらいそいそと出てくる。
　見ていたゆかりや美紀は相手を心配しながら苦笑し、冷蔵庫から保冷剤を一つ取り出し、ハンカチで包んでそれを風花に渡した。
「はい。コブにならないように冷やしておきな」
「血は出てませんか？」
「う、うん。ただぶつけただけだから。そ、それより……有里君も見た？」
　ゆかりから手渡された保冷剤を患部に当てて、座ったままの風花が上目遣いで照れながら尋ねる。
　尋ねられた湊にすれば、同級生の下着を見たところで何の感情の揺れも起こらないが、相手が恥ずかしがっていることは理解出来る。
　なので、どう答えれば良いかを少し考えると、空いている机の上に

鞄を置きながら静かに答えた。
「山岸の方を向いたときに少し。嫌な想いをしたなら謝る」
「そ、そんな、謝らなくて良いよ！　私の不注意っていうか、ただ油断してただけだし。私の方こそ変なもの見せてごめんね」
申し訳なさそうに謝る山岸だが、他の者は別に変なものではないだろうにと小さくツッコミを入れたい気持ちになった。
山岸風花はとても礼儀正しく真面目だ。１―Ｄの中では美紀と共にクラスの良心と呼ばれ、それほど深い交流があるわけではないが、湊やチドリよりもよっぽど普通にクラスメイトらと付き合っている。
体育の着替えも丁寧に制服を畳み、授業後に制服へ着替える前にタオルなどで汗をきちんと拭いてから着替えているので、とくに制服が汚れているわけでもない。
彼女の下着に少女アニメのキャラクターがプリントされているなら、それは確かに年齢を考えると変に思われるが、別にそんな事はなく、リボンのワンポイントのついた薄い水色の年相応といえるものだ。
そんな彼女の下着が変な物だというのなら、似たような物という意味で、ここにいる女子の下着は全てが変な物になってしまうだろう。
「風花さ。別にそんな、自分を卑下しなくて良いと思うよ？　ほら、有里君も見れてラッキーとか思ってるかもしれないし。あ、嘘です。ゴメンなさい……」
耳を真っ赤にしていた風花を慰めるつもりが、ゆかりは口を滑らせたことに気付き、後ろに無言で立っていた湊に頭を下げて謝る。
しかし、湊はゆかりを粛清しようとやってきた訳ではないので、その隣を通り過ぎると、床にしゃがみこんでいた風花に手を貸した。
「あ、ありがとう、有里君」
相手の行動を意外に思ったのか、風花は差しのべられた手を取りながらも不思議そうに湊を見つめて立ち上がる。
風花がしっかりと立ち上がったことを確認した湊は、逆にしゃがみこんで風花に尋ねた。
「探し物は？」

「探し物？　あっ、えっと、六十センチ定規ってあったよね？　あれ、どこにしまったかなって思って」
「六十センチ定規は……佐久間」
「ふぁい？　えと……あ、ごっめーん。前に姫子先生とチャンバラして折っちゃった」
窓際に置かれた事務机でノートパソコンを使って作業していた佐久間は、声をかけられると少し考える仕草を見せ、ばつが悪そうに頭を掻きながら謝罪した。
佐久間が定規を折ったのは、部員で言えば湊とチドリだけが部室で昼食を取っていた日で、佐久間と櫛名田も事務仕事をここでしがてら昼食を取っていた。
だが、途中でアニメの話題で二人が盛り上がり、抜刀術と言い合って一メートル定規と次点で長い六十センチ定規で斬り合った。
その結果が、六十センチ定規はひびが入って折れてしまい、一メートル定規も目盛りの部分が大きく欠けて使えない状態になるというものだった。
部の備品を破壊した教師二人は、二人の生徒から冷たい視線を受け、後日新しい物を持ってくると謝罪したのだが、未だに納品されていないようである。
一週間以上前に言っていたことが未だになされておらず、使おうとしていた部員が被害を被っていることに軽い怒りを感じた湊は、他の者から見えない角度で瞳を蒼くして相手を脅した。
「っ!?　わわっ、いま直ぐ取ってきまーす！」
湊の瞳の秘密は知らないが、その瞳で見られることに慣れていない佐久間は大慌てで部室を出ていった。
残された者は不思議そうに顧問が出ていった扉を見ているが、風花の探し物は解決した。
そうして、いつまでも遊んでいる訳にもいかないので、各自が座っていた机に戻り作業を再開する。
部員達がいまやっているのは、Tシャツにプリントするデザインの作成だった。

模様でも絵でも文字でも構わないが、夏に着られるようなＴシャツの柄を自分でデザインし、それを業者に頼んでプリントしてもらうのだ。

当初は部員でお揃いのものにしようかという案も出されたが、これも各自の向き不向きを知るためのものになるので、個人別にしようという結論になった。

今までは一週間おきにテーマを変えていたが、今回は人によっては色を塗る作業もあるため、製作時間は二週間設けてある。それだけあれば、昼休みも利用すれば出来そうだと、ゆかりや風花も言っていたので、皆それぞれ思い思いのデザインを考えていた。

「うーんと……有里君、こういう英語のデザインって何ていうの？」

尋ねてきたゆかりの手には、自分で書いたらしい中が一部白抜きされたアルファベットが書かれている紙が握られていた。

手書きにすれば十分に上手いが、フォントというのは非常に多種に亘り、似ていても名前が全く違っていたりする。

そのため、珍しく難しい表情で悩んだ末に、湊はそれと思わしき書体名を挙げた。

「……オールドイングリッシュか？　オールドイングリッシュと書体やフォントで検索してみろ。なかったら、図書室か美術室に書体名鑑みたいなのがある」

「了解。でも、よく知ってるね。どこでそんなの覚えてくるの？」

湊の知識にはいまのところ偏りが見られない。佐久間も仕事をしているときに、ふとド忘れして湊に尋ねることがあるが、そんなときでも普通に答えを返す。

生徒だけでなく教師でも知っている者は限られているが、佐久間が大学で在籍していた学部の偏差値は７５と、日本でもトップクラスだ。

そこを首席で卒業し、さらに高校時代には海外で設立された知能指数の高い者のみが入会を許される、非営利団体〝ラウンズ〟への入会資格を有していた。

そんな聞けば誰もが認める本物の天才である佐久間だが、彼女が知

識に関して自身と同列以上に認める数少ない人間が湊である。
もっとも、佐久間と同じ天才型なのはチドリなのだが、チドリは興味のないことにはどうでもいいと考えるタイプなので、佐久間のように暇つぶしに知識を得ようとはせず。また、湊のように何が使える知識になるか分からないからと学ぶ気もないので、学校の授業と宿題だけをしていて成績は学年三位になっている。
そうして、湊の知識の豊富さの理由を知りたいと思ったゆかりが、情報源を尋ねたのとほぼ同じタイミングで部室の扉が大きな音を立てて開いた。
「おっまたせー！　教頭先生に新しい定規貰って来たよー」
「あ、ありがとうございます。わざわざ持って来てもらってすみません」
「いいの、いいの。元々、私と姫子先生が壊しちゃったんだしさ。だからぁ、ね？　有里くーん、怒ったりしないでよー」
「……仕事でもしてろ」
ゆかりの質問は、騒がしく入ってきた佐久間によって有耶無耶になり流れてしまった。
その点については少々残念に思うが、佐久間の登場によって湊への質問が終わってしまうことは珍しくない。
あまりに狙ったようなタイミングで登場するので、密かに湊と接点を持とうとしている女子などからは、大人げなく他の女が近付くことを妨害しているとまで言われることもあるが、ゆかりは単純に間が悪い人間なのだろうと考えていた。
故に、生徒に仕事をしていろと言われ、落ち込んだ様子でパソコンの前に戻っていく相手に苦笑しながら、自分のデザインを考える作業に戻った。
＊＊＊
雑談を交えながらの作業が進み、三十分ほど経った頃、六十センチ定規を使い終えた風花が立ち上がり、部室の端にある長い物を差しておく箱にそれを片付けた。
席へと戻ってくる際に今までの座り作業で固まった筋肉を解すよ

うに背伸びをする。
「んー……はぁ」
自分の直ぐ近くで声を出されたため、チドリが紙から視線をあげると、そこにはやや胸を張るような姿勢の風花の姿があった。
クラスでも小柄な方なのであまり気にしていなかったが、身体を弓なり反らせてみると意外と胸が大きい事に気付く。
性格は兎も角として、知能・体術・プロポーションのそれぞれがチートスペックな部活顧問を除けば、二次性徴を迎えてクラスでも背が高くスタイルが良い美紀と同じレベルに見える。
いや、身長差で考えれば風花は胸だけが育ち過ぎているくらいだろう。
佐久間・美紀・ゆかり・自分とついでに湊を見てから、再び風花の胸に視線を送る。大きさが全てではないが、女性として分かり易い性的象徴は確実に武器になりえるため、現段階で負けているチドリは、少々悔しそうに風花を見つめた。
そして、珍しくチドリがジッと見ていたため、背伸びを終えた風花は視線に気付き、優しげな表情で声をかけた。
「あれ、チドリちゃん、何か私に用事あった？」
「……別に。ただ、背は小さいのに胸だけ大きいのねって思って見てただけ」
「……胸？　な、急に何でっ!?」
予想だにしていないチドリの発言内容に、風花は顔を真っ赤にして胸元を手で隠す。
二人のやり取りを見て、パソコンで作業していた佐久間は一人で大笑いしているが、他二人の女子は風花に同情的な視線を送りつつ、作業していた手を止めチドリを窘めた。
「あー、あのさ。一応、ここって男子もいるから、そういう話題はやめようよ。じゃないと風花が次回から恥ずかしくてこれなくなるし」
「……どうして？　さっきは下着の話をしてたでしょう？」
「どうして、と言われても。内容に裸を見せるのと、下着を見せるくらいに違いがありますから」

「湊は見ても気にしないわ」
チドリの言葉を聞くと、今度は顔を真っ赤にしていた風花も、大笑いしていた佐久間も、他の女子と同じように驚愕の表情で湊を見た。
同じクラスの男子などが比較対象だが、どの男子も女子の足や胸元へ邪まな視線を送っていることがある。前に佐久間が授業で、湊の視線にはそんなものは含まれていないと言っていたが、流石に同じ年頃の女子の裸体を見て平然としているとは思えない。
しかし、チドリの言葉から想像すると、実際に湊が一切動じていない場面を見たことがあるのではと考えてしまい。では、誰の裸体を見たのかと考えると、当人のもっとも近い場所にいる異性と言えばチドリだとすぐに思い至った。
だとすれば、チドリは湊に見られたことが、湊はチドリのものを見たことがあるという訳だが、いくら家族だと言っても中学生でそれは駄目なのではという想いが視線に籠められ、紙と向き合っていた湊に注がれた。
会話に参加せず、いままで紙と向き合っていた湊も、流石に四人から見られていると何も答えない訳にはいかず。小さく嘆息すると、誤解を生まないよう気を付けて話しだす。
「……昔、俺たちは一緒に風呂に入ることもあった。チドリが言ってるのは、そういったときの話しだろう」
「最後に入ったのはいつ？」
尋ねるゆかりの瞳に疑いの色が混じる。何故、いまの質問でそんな事になるのかが分からない。だが、湊はその疑問を表情に出さず、淡々と答えた。
「最後は……去年の」
『アウトー！』
「……年末くらいに、旅行先で水着着用の家族風呂に入っただけだ。本当に裸で入ってたのは、三、四年前までで、それ以降は一切ない」
途中まで聞いたところで、ゆかりと佐久間が勢いよく立ち上がり球審のような動きを見せた。
実に息の合った動きに他の者も目を見張るが、その判定は完全に誤

審である。
　あまりに呆れて湊が眉を顰め、チドリが小さく「ばーか」と呟いたため、先走った行動をとった二人は、先ほどの風花のように顔を赤くして席へと戻った。
　一方で、美紀と風花は最後まで話を聞き、二人も世間と同じような倫理観を持って過ごしてきたことを理解し、ほっと胸を撫で下ろしていた。
（はぁ……流石に中学校に入る前まで一緒に入るのはないよね。ゆかりちゃんじゃないけど、私も勘違いしてびっくりしちゃった）
（施設では男女別で入っていましたから、私は兄さんとも殆ど入ったことがありませんが。チドリさんの立場ですと、有里君が裸に無反応というのはどんな気持ちなんでしょう？　ですが、やっぱり、有里君は他の男子よりも攻略が難しいんですね）
　腕を軽く組むポーズで考えながら、美紀は他の女子たちに同情する。ある意味で、湊は色仕掛けには惑わされないため、プロポーションによる優位性はかなり低くなった。
　年齢を問わずスタイルの良し悪しで悩む女性は多く、それが男を落とすための武器になるのは、変えようのない事実と言える。
　その武器が武器になりえないのなら、スタイルに自信のない者には朗報となるだろう。
　だが、逆を言えば、いくらか挑発的な恰好をしたところで湊には効果がないことになる。
　全裸よりも厭らしく見える恰好というのもあるが、湊がそんなものに惑わされるとは思えず。女性の好みも全く分かっていないので、どういったアプローチが効果的かも不明だ。
　そうなると、今回のこの情報は、敵にはこの攻撃が効かないと分かっただけなので、湊攻略の難易度がマニアクスだと再確認されただけと言えた。
　美紀がそのように考え、苦笑してから作業に戻ろうとしたとき、意外なことに最近は湊にあまり絡まなくなっていた佐久間が席を立って湊の背後に回った。

他の者が一体何をするつもりなのだとそれを見ていると、肩をトントンと叩いて湊が振り返ったタイミングで佐久間が湊の頭を胸に抱いた。途端、三人がうろたえ、一人が眉を顰め不快感を表情に出す。
だが、構わず湊の顔を自分の胸部に押し付けながら、ぎゅっぎゅと何度かやったところで、佐久間がようやく口を開いた。
「……どう？　興奮する？　服の上からでもある程度は柔らかいと思うんだけど」
「せ、先生！　急になにをしてるんですか!?　相手は生徒ですし、男の子ですよ！」
突然の佐久間の行動に常識を持った美紀が立ち上がり注意する。
風花など茹でダコのように顔を赤くし俯いてしまっているので、そういった男女の関係を想起させる行動を慎むよう言いたいのだが、注意されている間も佐久間は湊の頭を抱いたままだ。
「え？　いや、有里君も男の子なら好きかなと思って。裸を見て動じないとしても、実際に身体に触れればちょっとはムラっとしないかなぁと思ってさ」
「させてどうするんですか！」
「どうするって……ちょっとイチャついてみたり？　あ、えっちぃ事はしないよ？　先生はお付き合いには順序があると思ってるからね」
「おかしいです、その順序！」
美紀は珍しく大きな声でツッコミを入れた。
佐久間は、厭らしいことはしない、ちゃんと順序を踏んで節度ある付き合いをすると言っているが、言葉とは裏腹に目の前でしていることは順序をいくらかすっ飛ばしている。
今まではよく抱き付いていたのだから、その次のステップがこれだと言われれば確かにそうかもしれない。
しかし、これが厭らしいことに含まれないというのは、声を大にして反論する。それはおかしい、明らかに他者と考えがずれていると。
そんな美紀の想いが雰囲気と気迫として伝わったのか、佐久間は渋々といった表情でようやく湊を解放した。
「むー……で、有里君はどうだった？　気持ち良かった？　心がぽか

ぽかした？」
「……息苦しかった」
「あ、そっか、ごめんね。次は気を付けるから」
『しなくていい！』
今度のツッコミは風花以外の女子全員がいれた。二人は良識ある一般人として、一人は危険人物から湊を守ろうとして。
湊の反応はこの際無視しておいても問題ない。ハニートラップに引っ掛からないとは大した精神力だと思うのが普通だが、それは一般人の話であり、湊が相手ならば結果は分かっていたというのが本音だからだ。
「先生は座っててください。仕事しろ、仕事！」
「ちょっ、岳羽さん、先生ちゃんと仕事してるよ？　わわっ、吉野さん、腕掴む力強いよー」
声を揃えた女子三人は、席を立つと佐久間を湊から引き離し自分の席へと座らせる。
急に囲まれ連行された事で、相手は状況が理解出来ていないようだが、風花は可哀想な人を見る目で、湊は呆れたような目でそれぞれ見ていたので、彼女たちの行動を理解できていないのは連行された本人だけだ。
佐久間を椅子に座らせると、他の者は自分の作業に戻ったが、佐久間がパソコンのキーを打つ以外の動きを見せると直ぐに鋭い視線を向けられた。
そんな空気に耐えきれず、最後はパソコンをシャットダウンしてＵＳＢだけ抜き取り、
「うえーん、皆のばかー、岳羽さんのペチャパイ！　吉野さんの半目！　真田さんのお兄さんシスコン！　女の嫉妬は見苦しいんだから！」
と言い残し走って部室を出ていった。
チドリは自分に対する言葉が悪口なのか不思議そうにしていたが、ゆかりは地味に気にしている点を突かれダメージを負い。美紀はまた自分の兄の存在が己への罵倒に使われたと落ち込んでいた。
結局、そのまま佐久間は帰って来ず。下校時刻になって部室の鍵を

返しに行ったときに、職員室で授業に使うプリントをコピーしている姿が発見されたため。

ゆかりの言葉を否定していた通り、仕事自体はきっちりしているのだなと部活メンバーに認識されたのだった。

第四十話　少しの喧嘩

6月22日（水）
放課後――生徒玄関エントランス
本日の授業が終わり、掃除当番を終えると、岳羽ゆかりは荷物を持って女子弓道部の部室を目指していた。
美術工芸部の活動日を決めたのは湊だが、湊はわざと弓道部と被らないように設定したので、ゆかりもほぼ毎日下校時刻まで部活に勤しむという充実した日々を送っている。
もっとも、母と少し距離を開けたいという想いだけでなく、父の死の真相を調べるという目的を持ってこの地へやってきたが、知るための糸口すら掴めていない。
唯一、いま分かっているのは、父親が現場レベルとは言え、桐条グループに勤めてそれなりの役職についていたこと。
ならば、桐条に近付けば何かしら知ることが出来るはずだが、この学校に通っている桐条グループのご令嬢こと桐条美鶴と接点を持つ方法が分からない。
何度か廊下などですれ違うことや、生徒総会で発表している姿を目にしているが、ただの一生徒でしかない者ならば、それが普通と言えた。
しかし、教室のある四階から一階まで下りてきたところで、偶然にも出会ってしまった。自分のクラスメイトが桐条美鶴に話しかけられている現場に。
「有里、吉野も一緒で良い。少し話を聞いてくれないか？　十五分、いや、十分でも良い。頼む」
そういって美鶴は軽く腕を組んだまま真剣な眼差しで湊を見ていた。
二人の邂逅を初めて目にしたゆかりにとっては意外な組み合わせだが、自分が湊の立場なら首を縦に振るしか出来ないだろうと思える。
相手は一般人では持てないオーラのようなものを持っている。そ

れが俗に言う〝カリスマ〟と呼ばれる物なのかも知れないが、あの気に当てられ呑まれないのはよっぽど場数を踏んだ者くらいだろう。
一応、靴を履き替えている湊と一緒にいるチドリが、真顔と思われる普段通りのやる気の感じられない瞳で相手を見ているが、美鶴の瞳は湊しか映していない。
状況から推測するに、目的は湊でチドリはサブプラン程度の扱いか、湊に願いを聞いてもらうため同行を許可しているだけなのだろう。
（どうして桐条先輩が有里君に話しかけてるの？　それもあんなに真剣な表情で。まわりの人間がざわついてるのに気付いてないし、そんなに重要な用件なのかな？）
部室へ向かうという目的も忘れ、ゆかりも他の生徒と同じように動向を見守る観客の一人になる。
観客となった生徒の表情には、いま思っている考えが分かり易く浮かんでいた。そう、結果は分かりきっているという表情だ。
しかし、有里湊という人間を知っている者ならば、そんな表情はしなかっただろう。彼は存外まともであっても、総評としてまともでない事を嫌でも理解させられているから。
案の定、湊は他の大勢の予想の斜め上をいく対応を見せた。
「チドリ、靴出しといた」
「え？　ああ、ありがとう。すぐ履き替える」
湊が見せた反応は、美鶴を完全に無視するというもの。自分の靴を履き替えると、立ち止まっていたチドリの靴を取り出し、履き易いように置いていた。
声をかけられたチドリは僅かに驚いていたが、直ぐに靴を履き替えると湊に上履きを仕舞わせる。
そうして、二人とも外靴に履き替え終わると、そのままスタスタと歩き出してしまった。
（えーっ、流石にそれはないでしょう!?　だって、名指しだよ、名指し。それで話しかけてきた相手を全く視界にも入れないって、王様なの？　皇帝気質なの？）

承諾でも拒否でもなく、話しかけてきた相手を視界にすら入れない。他の者がやれば、意識して無視しているのが伝わり、随分と子供染みた真似をしていると思われるところだ。
だが、湊の対応にはそれが見られなかった。違和感なくごく自然で、湊だけを見ていれば彼が誰かに声をかけられていたなど、言われたところで信じられないだろう。
生徒玄関から出ていった二人は、チドリだけが一度振り返ったが、湊はそのまま前を向いて気だるげに歩いて行った。
そうして、校門からも出て行ってしまうと、湊の後ろ姿を睨むように見ていた美鶴だけがエントランスに残された。
苛ついた空気を放つ相手に周囲は動くことが出来ず、目をつけられないよう気配を限りなく消して背景と化す。
すると、五分ほど経ってから、ようやく美鶴は深く息を吐いて頭を振り、そのまま管理棟の方へと去って行った。
「はぁー……やっと行った。つか、なんで有里君は相手しなかったんだろ？　様子からすると以前から何度も声をかけられてたのかな。ま、バイトだったのかもしれないし、答えの出ない事を考えるだけ時間の無駄か」
湊と美鶴、それぞれが去って行った方へ視線を送ると、ゆかりは気を取り直して部活へ行く事にした。
靴を履き替え、外からまわって部室へ向かうと、先輩から言い渡された基礎練習のメニューを他の一年と共にこなしたのだった。
――生徒会室
エントランスを去った美鶴は、誰もいない生徒会室に一人で座っていた。
今日は生徒会の集まりはなく、美鶴自身も学内で済ませる用事は先ほどなくなったところだ。
事が上手く運べば、今ここにはもう二人ほどいるはずだったというのに、前回同様、今回も会話すらすることが出来なかったと悔しさに表情を歪ませる。
（何が問題なんだ。私の声の掛け方か？　しかし、用事があるから話

を聞いて欲しいというのに、それほど声の掛け方もあるまい。特段、礼を失する行いをしたつもりもないし、吉野は私の方を見ていた）

美鶴の最大の悩みは、話を聞いてもらえないことではなく、自分のことを視界にすら収めてもらえないことだ。

似たような雰囲気を纏っているチドリは、声をかけた美鶴をジッと見つめていたし、靴を履き替えて歩き出してからも一度だけ振り返っていた。

となれば、共にいる湊にも認識はされているはずなのだが、本当にそうだろうかと美鶴は不安を覚えずにはいられなかった。

（……佐久間先生のように直接的にアプローチをかけてみるか？　腕を掴んだりすれば、流石に認識していないと言い切ることも出来ないだろう）

実を言えば、美鶴は最初に声をかけてから、かれこれ五回ほど湊に接触を試みていた。

しかし、視界に収めてもらえたのは最初の一度だけで、それ以降は極めて自然に無視されている。

三度目のときは、初回同様に制止しようと肩を掴もうとしたが、触れようとした瞬間に自身の腕が切断される光景が脳裏に浮かび、現実へと意識が戻ったときには全身から冷や汗を掻いて声をかけるどころではなかった。

どうしてそのような光景が浮かんだのかは分からないが、あまりにはっきりと幻視したせいで、いまでも湊を見る度にフラッシュバックを起こし、軽度のＰＴＳＤを患ってしまった。

そのため、他の者はともかく、湊に触れることを極度に恐れる自分がいるのだが、このままでは事態は好転しない。

幾月からは、もっと時間をかけて、外堀から埋めていく方法に切り替えても良いのではという意見も貰っている。

フラッシュバックとＰＴＳＤ、さらに、認識されないという自己の存在を否定される行為を受け続け。精神的に弱っていることを自覚している身としては、幾月の提案は非常にありがたく思える。

だが、仲間になるかもしれない者を恐れてどうする、と己を叱咤す

る内なる声も存在するのだ。
（……触れても、大丈夫なはずだ。佐久間先生は実際に問題なく触れられている。腕が切断されるなどあり得ない。そう、大丈夫だ）
心を落ち付けながら自分に大丈夫だと言い聞かせ、美鶴は湊に再び接触を試みようと考える。
アプローチの方法は佐久間を参考にするが、流石に全く同じという訳にもいかない。
若い教師がやるには十分に問題のある行為が目立っていたが、それはやる人物を桐条グループの娘に置き替えても同様の事が言える。
ほとんど会った事もないが、父親が相手側の親と共に決めた婚約者もいるので、不要なスキャンダルは避けるべきであり、せいぜい腕や肩を掴むのが限度だろう。
（一応、お母様にも助言を頂いた方が良いか。静養しておられるとはいえ、どう接すれば男性に不快感を与えないか、私よりもよっぽど知っているだろうしな）
身体が弱いため美鶴が幼い頃から、遠くの保養地で静養中の母・桐条（きりじょう）英恵（はなえ）は、グループの者として表に出てはいないが、それでも社交のマナーをしっかりと身に付け、どのような場でも相手を不快にさせない接し方は心得ている。
そして、堅物でいつも厳しい表情をしている桐条武治に、心を許されている女性でもある。
そんな母ならば、湊のような相手との有効な接し方も知っているのではと思い、今晩にでも電話してみることにした。
電話でどのように話を切り出せば良いか考え、さらに、自分でも次回の接触時のことを何度か脳内でシミュレーションし、美鶴は鞄を手に取り席を立つ。
今回も接触には失敗したが、チドリには認識されていることは理解出来た。結果的に失敗でも得る物はあったため、そのことを報告するついでにラボへ向かおうと、生徒会室を出た美鶴は携帯で車を呼び学校を後にした。
影時間――タルタロス

本日は満月。一月の中で最もシャドウが活発であり凶暴になる日だ。
しかし、下層フロアのシャドウなど、成長し強くなった湊たちの敵ではなく、チドリは鎖で繋がったハンドアックス二つを手に持ち、片方を恋愛〝狂愛のクビド〟の仮面に投げつけ仮面ごと頭部をかち割って霧散させた。
正面からの敵が消えると鎖を操り、地面に落ちた斧を手元に手繰り寄せ、背後で数体の敵を相手にしている湊に視線を向ける。
湊の足もとには仮面を踏みつけられ、耐えきれずに黒い靄になっていく金色の手のシャドウが一体いた。
黒い靄が消えると、そこには金属の剣のような物が落ちていたが、湊は踵で蹴ってチドリの方へ滑らせ。そのまま、正面にいる二体の女教皇〝囁くティアラ〟に、腰のベルトに複数付けていたプッシュダガーを投げつけた。
一体は仮面の目の部分に小剣が入り、痛みにもがくように飛びまわる。もう一体は上昇して回避したところへ、湊が飛び蹴りを叩き込み通路から広間へと押しやられる。
「ハァッ!!」
《グララ……》
広間へ飛んでいった一体は距離が開いたので、湊は着地した直後に、もがいていた一体を中華剣で叩き切った。
《グラララッ》
そして、すぐにもう一体を視界に収め、床を蹴って疾走すると、体勢を立て直した敵がいくつもの氷塊を放ってきたため、マフラーからエリザベスに貰った小刀を取り出し、二刀流で斬り伏せてゆく。
「邪魔だっ!!」
面で迫ってくる氷塊を全て砕き、欠片となって飛び散る氷の煌めきの中を猛進する。
魔法を体術のみで無効化された敵は、慌てて背を向けて逃げ出そうとするが、逃げ出すにはあまりに距離が近過ぎた。
背を向け、さぁ逃げ出そうと移動を開始する瞬間、シャドウの体内

を突き破り仮面から刃が飛び出していた。
「……討伐完了。もっとも近い敵で四十メートルほど離れてる」
背後から敵を貫いた湊は中華剣を鞘に戻し、小刀をマフラーの中へ仕舞いながら、索敵で周囲に敵がいないことを確認する。
そして、レアシャドウ〝宝物の手〟が落とし、湊が先ほど蹴ったアイテムを、背後からやってきたチドリが拾っていたので向き直ると、相手が無言で差し出してきたアイテムを受け取った。
「ありがとう」
「別に良い。でも、それ使えるの？　ぼろっちいけど」
湊がチドリから受け取ったアイテムの名は『無の小剣』。見た目は鈍らの西洋剣で、何か硬い物を切ればすぐに刃こぼれを起こし、下手をすれば刀身が折れてしまいそうな状態をしている。
物の正確な価値は分からないが、自身も武器を使う者としてチドリもそれなりに武器の良し悪しは分かるようになっている。
その鑑識眼を使ってみたところ、無の小剣は打ち直しも出来ないような酷い武器だ。これなら、熔かして何かに作りなおした方がよっぽど使えるだろう。
その事を伝え、武器を見つめてから続いて湊の顔に目を向けると、湊は静かに武器をマフラーに入れながら答えた。
「これはペルソナと合体させる事で真の力を発揮する武器だ。俺のようにワイルドの能力を持っていないと使えないが、合体後の武器は他の者でも使える。チドリが使いたいなら、何かと合体させておくから、そのときは言ってくれ」
「ふーん……それって一般人でも使えるの？」
「対シャドウ兵器という意味なら、その認識で合ってる。適性しか持たない人間でも、合体後の武器を使えばシャドウにダメージを与えられる」
無の武器シリーズは素材として使ったペルソナの強さに依存するが、黄昏の羽根を搭載した対シャドウ兵器と同じように一般人でもシャドウと戦える武器に変化する代物だ。
湊が普段から装備している無の鎧はイレギュラーナンバーのため、

他の武器と違って湊の力に反応して姿を変えるが、他の物はペルソナと合体させない限りは変化しない。
故に、チドリが使いたいと望むのであれば、湊に頼んで変化させねばならないのだが、チドリは何を考えているのか、視線を僅かに伏せて黙っている。
もっとも近い敵でも大分離れており、接近していたとしても今いる広間からなら通路の敵をすぐに捉える事が出来るため、ここでしばらく悩んでいても別に構わない。
しかし、何をそんなに考え込んでいるのかと、湊が近づきジッと見つめた途端、チドリはハッとした表情でわずかに後退し距離を取った。
そんな相手の珍しい反応を、湊は不思議に想い尋ねる。
「……何故、逃げる？」
「に、逃げてない。ちょっと近くて驚いただけよ。それより武器ってどんなのでも作れるの？」
「あんまり特殊な物は無理だな。それに近代兵器も大砲的なものを除けば、ほぼ対象外だ」
声を上ずらせながら答えるチドリを怪訝に思うが、言いながら湊はマフラーに手をつっこみ何かを取り出した。
それは錆びていると言ってもいいような、古さからくる鈍いくすんだ色をした筒状の物だった。
眺めても実際に何かは分からない。なので、形状が前腕に沿う形のように思えたので、そこから推測し導き出した答えをチドリは呟く。
「……手甲？」
「いや、これは無の銃だ。確かに形状は人の肘から先に沿う形だけど、底に結合部があるから腕は通せない」
「そう。それで、それが何なの？」
「まぁ、見ててくれ――――タナトス」
言うなり湊はタナトスを顕現させて、そのままカードに戻し手に取った。
そして、次にカードを無の銃に添えると、カードと武器が光りに包

まれ形状を変化させてゆく。
だが、光は途中で属性が反転したかのように黒く染まり。黒い輝きが解かれると、そこには黒い翼の飾りのついた、暗い紫の装甲に艶のある黒い金属で蔦状の装飾のなされた、美しい手甲のように見える大砲が存在した。
銃は湊が使う事を許可しなかったので、召喚銃を除けばほとんど見たことがないチドリでも、これが何かの力を秘めていることは一目で分かる。
そうして、美術品と見紛うばかりの大砲を手にしている少年に、その武器の銘を尋ねた。
「なんていう武器？」
「さぁ？　ベースカラーが紫だし、ラテン語で〝ウィオラケウス〟とでも呼べば良いんじゃないか？」
今まで名前を付けていなかったらしい武器を作り出すと、湊はマフラーを使って自分の腕にそれをくくり付け始めた。
マフラーを長くしてまで念入りに縛っている様子を眺め、チドリがぼーっとしていると、通路の奥から新たな敵がやってきているのが見える。
未だに湊は固定するのに時間をかけているので、チドリが武器を持ちなおし倒しに行こうとしたところで声がかかった。
「……チドリ。口を軽く開けたまま、耳を塞いで少し下がっててくれ」
「え？　あ、うん。別にいいけど」
言われて素直に言う事を聞き、チドリは口を半分開いて耳を塞ぎ後ろに下がった。
すると、湊は通路に向けてウィオラケウスを固定した右腕を構える。左手は伸ばした右腕を支えるように手首の辺りを掴んでおり、足を肩幅程度に広げて準備は終えたらしい。
「……照準完了、敵を殲滅する」
「っ!?」
次の瞬間にチドリが目にしたのは、シャドウたちのいた通路を埋め尽くす赤と黒の光の奔流だった。

轟音が響き、空気が振動している。少し離れた場所にいるというのに、攻撃の余波かかなりの熱気を感じる。
発射台と化した本人は足を前後に開き直して踏ん張っているが、たかだか下層フロアのシャドウを倒すには十分過ぎる威力を有しており、チドリはこれが大砲などと言われて信じられる訳がなかった。
そして、光線を出し始めて十秒ほど経つと、徐々に光が細くなり最後には消えた。
今まで光線に埋め尽くされていた通路は壁や床が融解し、赤く光って焦げたような臭いを周囲に充満させている。
あまりの威力に呆気にとられると、湊がマフラーを解き始めたところで復活したチドリが、先ほどの攻撃の正体を聞くため口を開いた。
「さっきの攻撃ってなに？　どう見ても普通の大砲じゃなかった。レーザーとかビームって言われた方がまだ納得できる。もしかして、ペルソナのスキルを放てるの？」
「この武器に出来る攻撃はアレ一つ。万能属性によく似た別のスキルを放てるんだ。便宜上、虚無属性と名付けてるけど、効果は分からない。まぁ、この武器以外であんなスキルは見たことがないし、自分で喰らった事もないから当然だが」
「ふーん。けど、流石にあんな威力の武器は振り回せないわ。もっと、近接用の武器で良いのはないの？　この斧、投げた後に手繰り寄せるのが面倒なのよ」
「……中近距離向けで、さらに個性を狙って自分で選んだくせに」
「私は過去を振り返らないわ。前を向いて生きていくって決めてるの」
ドヤッ、という擬音を付けたくなるような、どこか得意気な表情で言い切るチドリに、湊は思わずため息を吐く。
チドリの鎖付きのハンドアックスは、彼女が自分で選んだ武器であり、その武器を選ぶ場に湊も同席していた。
この五年間の経験の中で様々な武器の使い手と遭遇したが、対処法を覚える中で各武器の使い方も理解していたため、その武器は大きな欠陥を抱えた中途半端なものだとも忠告した。

しかし、そういったキワモノの武器は極めれば強いだろうと、チドリは湊の忠告を無視して五代の知り合いの武器商から買い取ったのである。
近距離は斧で攻撃を受けつつ斬りつけ。中距離では重心が中途半端な部分にありコントロールにコツのいる武器を、見事に敵に投げつけ使いこなしており。斧だけでなく、鎖で攻撃を受け止めることもあれば、鎖を操作して迂回するような軌道で斧をぶつけることもある。
本人の言った通り、確かに使いこなせば強いことを証明したため、湊も口には出さないが感心していた。
だというのに、ここへ来て自分で選んだ武器に不満をたれるとは、一つの武器も満足に使いこなせない人間に喧嘩を売るようなものであり。才能を持つ者特有の我儘だなと、小さく呆れるのも無理はなかった。
「……ハァ……ザシキワラシ、通路を氷で冷やしてくれ」
《……わかった》
武器を固定していたマフラーを解き終えると、湊はカードを砕いてザシキワラシを呼んだ。
現れたザシキワラシは、ケーキのロウソクを吹き消すような軽い仕草で氷の混じった風を起こし、熱で赤くなっていた通路を冷やす。
固まった床は表面がくすんだガラス状になっているが、湊が魔眼で壁を切り崩したフロアも、翌日には傷一つない別の物になっていたので、どうせ明日には何事もなかったように新しいフロアに作りかえられているはずだ。
そうして、湊らを包んでいた熱気もザシキワラシのおかげで消えると、湊は相手に礼を言って自身の中に戻した。
「……よし、行こう。新しい武器については歩きながら話せば良い」
「ちょっと待って。あなた苦しそうだけど、どうしたの？　気分でも悪いの？」
歩き出そうとした相手の腕を掴み、チドリは湊を自分の方へ向かせて表情を窺う。
ザシキワラシを呼んだ時点で湊の顔色はわずかに青ざめ、呼吸が乱

れていた。
フルマラソンをしようが発汗と多少の呼吸の乱れしか起こさない人間が、これほどの状態になるのは普通では考えられないことだ。
相手の身に何か起こっているのかも知れないという不安を隠し、真剣な表情でジッと見つめていると、湊はウィオラケウスを左手に持ち替え、右手をチドリの頭に置いた。
「単純に疲労状態になっただけだ。虚無属性は他の攻撃と違ってかなり疲労する。威力はあれで固定で、俺も日に三度しか撃てない。限界まで撃つとペルソナも呼べなくなるので、ある意味で切り札と言ってもいい攻撃なんだ」
「……本当に？　怪我とか病気じゃない？」
「俺の身体は病気にはかからない。チドリも知ってるだろ？」
「……うん」
湊の言葉に静かにチドリは頷いた。
飛騨から渡された湊の身体に施された改造のデータは、栗原の手を離れ今は桜が所持している。
中には常軌を逸している内容もあったが、それらは既に過去のことであり、湊は無事に戦えるだけの力を手にして生きている。
そのため、全てに目を通した桜も湊に何かを尋ねるようなことはせず、他の誰にも見せないように机の奥にしまっていたのだが、チドリの勉強に使う道具を探していたときに桜はそれを落としてしまった。
まるで漫画やアニメのようなタイミングの悪さだが、落ちた拍子に飛びだした封筒の中身を拾おうとしたチドリが見てしまい。半分も理解出来なかったが、湊が再会した夜に話した以上のことを身体に施していたことだけは理解して、どうして黙っていたのかと詰め寄った。
毒に対する免疫を得るときなど、痙攣を起こして心停止に陥ったとも記載されているのに、多少痛い事もあった程度にしか伝えていないことが許せなかったのだ。
それに対する湊の答えは、尋ねたチドリも言葉を失うような実に単純な理由で、『苦労話は誰の得にもならない』というものだった。

確かにそうかもしれないが、自分は話して貰いたかったという気持ちがあるだけに、チドリは未だに納得しておらず、湊が原因で拗ねるときには、前も自分に隠し事をしていたと湊にとっては済んだ話を蒸し返している。
今回はそのような状態ではないため、頷いたチドリは疲労状態の相手を気遣いつつ、武器を構え直すと脱出装置の場所を探り到達するまでのルートを割り出した。
「脱出装置の場所、こっちから行ける……いこ？」
「まだ戦えるけど良いのか？」
「いい。へばってる人間を連れ歩くと、三ヶ月も連絡つかなくなりそうだから」
訂正しよう。チドリは今回も密かに拗ねていた。
わざわざ実演して見せる必要もなかったというのに、それで呼吸が乱れるほど疲労するのならば、先に説明しておけと怒っているらしい。
随分と懐かしいネタで皮肉を言ってきた相手に、湊は苦笑で返し、黙って隣を歩きながらウィオラケウスからカードを抜き出した。
わずかに光って元の無の銃に戻ると、湊の手には死神のカードが握られ、すぐに青い光になって消えていった。
「……それって簡単に元に戻せるの？　合体したやつにポコポコ抜け出されて、急に鈍らになるんだったら命預けられないんだけど」
「いや、普通は戻せない。エリザベスたちも武器合体は出来るが、合体解除は上司のイゴールでも無理らしい」
武器合体の技術を持っているのはベルベットルームの住人と湊、そして、シャドウに対抗し得る存在としてペルソナを発見した栗原シャルマだけだ。
もっとも、最初期の栗原は、情報と物質の狭間の存在である黄昏の羽根に、人格とペルソナを宿らせる技術を応用して、宿らせる対象がペルソナと親和性が高い場合のみ理論上は可能かもしれないと言っていただけだった。
彼女は桐条を離れて研究に一切関わらないでいたが、自分のしてい

た研究で被害者が出た事は事実であり、贖罪として再開し、この五年で湊とチドリに手伝って貰いながら独自に研究を続けている。
そして、かつて組み上げた理論の証明として、銃火器ではなく近接用の対シャドウ兵装を作れはしないかと、湊にペルソナを借りて剣や槍など武器類に宿らせる実験を繰り返した。
だが、親和性の高い物などそう見つかるはずもなく、ペルソナが武器に宿ることはなかった。そう、湊が無の武器を見つけて持ってくるまでは。
「じゃあ、なんで湊は出来るの？」
「……特別、だからだろ？」
「あっそ……私、そういう自信過剰なやつって嫌い。それに本当は分かってるくせに、適当な言葉で誤魔化して隠すようなやつも」
湊は自分が合体解除できる理由を理解している。そう読んだチドリは、隣を歩いている少年を上目使いで睨みながら自身の右腕と相手の左腕を組み、視線を正面に戻して肩に頭を乗せる。
「買い被ってくれてどうもありがとう。だけど、俺にも分からない事くらいはある」
だが、少年は本当に分からないと伝えた。通路の先を見つめる瞳には感情が籠もっておらず、その内面はまるで読めない。
「……フン」
一度視線を送って瞳と表情を確認したチドリは小さくむくれると、少し上げた頭を湊の肩にぶつけ、真面目に言えと催促した。
相手がどう言っても、チドリの中では湊は理由を理解していることになっているようだ。
そんな相手の思考を理解してか、湊は短く嘆息すると、少し考えるための間を置き、しばらくして口を開いた。
「……合体に使ってるのは俺のペルソナだ。ベルベットルームの住人は、ペルソナ全書のペルソナを呼び出しているだけで、別に自分のペルソナという訳じゃない。なら、素材として使った後でも、持ち主ならある程度はコントロールないし干渉が可能だと思えないか？」
「最後に同意を求める辺り、自分で頷くことで納得させようって魂胆

が見える。それらしい理屈を並べて誤魔化さないで。さっきも言ったわ、そういうやつは嫌いだって」
「……これで納得できないなら、俺にはもう説明出来る言葉が見つからない」
「正直に話せばいいじゃない。どうしてそんなに隠すの？　ここには敵もいないし、私も誰かに話す事なんてしない。何より、話したところで他の人間には真似できないんでしょう？」
　周囲を探知してもシャドウ以外には誰もいない。数十キロとかなり遠く離れた場所にならば、桐条の関係者もいるようだが、いまタルタロスにいるのは自分たち二人だけだ。
　メノウという探知とステルスを担当する存在のいる、イタリア語で〝魔女〟を意味する〝ストレガ〟というチーム名で呼ばれるようになったタカヤたちも、ステルス特有の小さな違和感を現在は感知していないため、ここにはいないとはっきり言い切れる。
　だというのに、湊がなにをそこまで隠すのか理解できない。自分はそんなにも信用するに値しない人間なのかとも思ってしまう。
　湊の腕を掴んだまま、チドリが怒ったように立ち止まりジッと見つめる。そんな、いつもとどこか様子が違うことに気付き、湊は質問に返さぬままその事を尋ねた。
「今日はやけにつっかかってくるな。何が原因だ？　俺が嘘を言っている、何かを隠している、そう思った根拠は？　勘なんてくだらないもので疑ってるなら止めてくれ」
「……私はあなたのペルソナを把握してない、能力も含めて出来ていない。だけど、極稀にステルスが解けて中にいる数だけは分かる。それが疑う理由よ」
「まだ見せてないやつを見せろってことか？　素直に言えば良いものを」
　つっかかっている本当の理由を知った湊は、呆れたように鼻で笑って掴まれていた腕を振り解き、腕組みをして壁に背中を預ける。
　それが自身の聞きたい事を答えるポーズなのかは分からないが、チドリは声に怒気を含んで湊を正面から見据えた。

「言って見せてくれるの？　ザシキワラシだって最近になってようやく見せたんじゃない。私が感知したときから数えれば、半年以上経っても見せも教えもしてくれなかった。それなのに、素直に見せろって言えると思う？」
「思おうと思うまいと、聞かない限り答えは出ないだろ。俺が教えるまで待てないなら素直に聞けばいいんだ。回りくどいことは止めてくれ」
「っ……じゃあ、見せて。八体目のペルソナを、いま直ぐに」
効率を優先した正論らしいことをいちいち癇に障る言い方で言われ、チドリは頭に血が上るのを感じながら、相手が言った通りに催促した。
二人きりのときに限り、湊とチドリがこんな風に言い合う事は別に珍しくはない。一人で先を見据えて行動する湊に対し、何も伝えられていないチドリが説明を求めて絡む。
幼い頃から、自分は危険なことに顔を突っ込んでいるというのに、お前はそんなことをしなくて良い、そんな事をする必要はないと行動を制限されてきた。
相手が自分の身を案じていたり、自分のために行動していることは理解している。しかし、湊がチドリを想うように、チドリも湊の事を考えて手伝いたいと言っているのだ。
それを湊は全く理解せずに、常に一方的に告げて反論されても聞き届けない。頑固というよりは独善的で、そこに正統性を感じたとして素直に聞く気にはなれなかった。
故に、チドリは自分でも子供じみていると自覚しながら、湊を逃がさないように胸倉を掴んで、相手が召喚するのを待った。
そして、それに対する湊の返事は、
「……勘違いしているようだから訂正しておく。こいつは〝八体目〟じゃない、俺自身から目覚めた〝三体目〟だ」
〝審判〟のカードが砕けると同時、渦巻く風と共にチドリの背後に現れたのは翠玉の騎士。その姿と湊の口から語られた能力にチドリは耳を疑った。

同時に、話さなかった理由もおおよそ理解する。その能力を一言で表すのならば『最凶』。

そんな物を聞かされてしまえば、相手が黙っていたことを許すしかなく。

湊が自らの内に三体目を戻してしばらくすると、チドリはもう怒っていないと示すように腕を絡め、肩に頭を乗せて湊と共にタルタロスを後にした。

第四十一話　影時間の密会

7月2日（土）
影時間――地方の町
厳戸台から遠く離れた静かな地方の高級別荘地。白を基調とした洋風の外観の屋敷の二階の一室に、その白く細い指にガラス製のように見える王冠の形をした指輪をはめた女性が、一人ベッドに座り、アンティークの石油ランプを使って本を読んでいた。
影時間には全ての機械が止まってしまう。けれど、ロウソクやこのランプのように、燃料に火を点ける事で灯りにするアナログな照明ならば、黄昏の羽根を使用せずとも問題なく使う事が出来た。
そうして、女性が静かに本を読み進めていると、部屋とバルコニーを隔てる扉のガラスを叩く音がする。
ここは二階で、バルコニーには梯子でも使わない限り登ってくる事は出来ないはずだが、影時間という非日常に来訪してきた者には、そんなのは些末事らしい。
本を読んでいた緩いウェーブのかかった長髪の女性・桐条英恵は、本に栞を挟んで閉じると、寝巻の上に羽織ったストールを正しながら立ち上がり、バルコニーに続くガラス戸の鍵を開けた。
「いらっしゃい。よく来てくれたわね、八雲君」
柔らかい笑みを浮かべ英恵が招き入れたのは、どこか中東の民族衣装風な襟と袖に柄の入った白のシャツを着た湊だった。
湊の恰好を見た英恵は、相手をソファーの方へ案内しながら話しかける。
「うふふ、今日はエキゾチックな服を着ているのね。それは、いまの保護者の方が選んでくれたのかしら？」
「仕事の知り合いが、どこからか買ってきた」
「そうなの。その方は八雲君をよく理解してらっしゃるのね。貴方の髪や瞳にとても合っているわ」
ソファーに座ると、そう言って優しい笑顔を向けながら湊の髪をそっと撫でる。

瞳の色は変わってしまったが、今は亡き親友と同じ青みがかった黒髪によく映える、湊のために選んだ物だと一目で分かった。
自分も身体がもう少し強ければ、親友の忘れ形見である少年に色々としてやれるのだが、と英恵は考えるも、いくら悔んだとて現実は変わらない。
「影時間だと電気やコンロが使えないから、保温出来るポットに紅茶を移しておいたのだけど、味はどうかしら？」
淹れたのは親友が美味しいと言ってくれた思い出の紅茶。この茶葉の配合は誰にも教えておらず、レシピも鍵付きの宝箱にしっかりと入れている。
お茶受けとしてクッキーとチョコレートを用意し、ポットからブランド物のティーカップに紅茶が注がれると、湊は静かにそれを手にとって口を付けた。
「……前に飲んだ事がある気がする」
「ええ、貴方のお母さんが好きだったお茶でね。一緒にお見舞いに来てくれたときに淹れた事もあったのだけど、よく覚えていたわね」
そう、美鶴の母親である桐条英恵は、今は亡き湊の母・菖蒲（あやめ）と無二の親友と呼び合う関係だった。
英恵は桐条の名士会に名を連ねる名家の出身で、旧家であったナギリの出身だった菖蒲と同じ中学に入学し、そこで出会ったのだ。
身体の弱かった英恵と対照的な、男子を押し退け学校トップの運動神経を誇っていた菖蒲は、どういう訳か馬が合い。すぐに親友と呼び合うような仲へ発展した。
その後、中学ではお互いに成績が良かったこともあり、高校も同じところへ一緒に進んだが、身体の弱かった英恵は大学へは進学せず、休みのたびに菖蒲が静養している英恵に会いに行くことで親交は続いた。
それから、菖蒲が大学に通っている間に、桐条武治との縁談の話が持ち上がり。まだ成人して間もなかったが、英恵は桐条と婚約し一年後に妻となった。
しかし、盛大に執り行われる結婚式にその親友を呼ぶ事は出来な

かった。
「どんなお仕事で今日はこっちへやってきたのか、聞いても良いかしら？」
「今回は仕事じゃない。前に仕事でマフィアを片付けたとき、タイミング悪く捕まってた馬鹿を助けて、その親が礼をくれるからって受け取りに行っていた」
「ふふっ、そうなの。でも、ちゃんと助けてあげるなんて、八雲君は優しいのね」
式に菖蒲を呼ぶことが出来なかった理由、それは菖蒲が名切りの一族であったから。
当然、そんな物は数代前に廃れて、菖蒲もその父親も人を殺したことなど生涯一度たりともない。湊は一族の直系で殺人も行っているが、ナギリとして仕事をしている訳ではなく。また、ナギリの家についても知らないので、この場合は例外となる。
だが、大きな家というのは、そういった言い伝えに過剰に反応してしまう。
式の主役は新郎新婦というが、桐条と英恵の場合は家同士の結婚の意味合いが強く、一族に迎えられた嫁が我儘を言う事など出来なかった。
そのことを泣きながら伝え、謝罪を受けた相手は、涙でぼろぼろの顔をした英恵に苦笑して「確かに残念だけど、英恵が幸せならそれで良いよ」と明るく笑って結婚を祝った。
それから二年後、菖蒲は九頭龍家の二男だった九頭龍（くずりゅう）　雅（みやび）と大学を卒業してすぐ結婚し、親友の式に英恵は少し大きなお腹で出席した。
同年の五月に英恵が美鶴を出産。そして、冬に菖蒲も妊娠が発覚し、次の秋に湊が生まれた。
「……身体の調子は？」
「心配してくれてありがとう。でも、八雲君がたまに会いに来てくれるから元気よ。定期的に検診してくださるお医者様も、急に調子がよくなってるって驚くほどなんだから」
普段と変わらぬ感情のほとんど籠もらない様子で湊が体調を尋ね

ると、英恵はその心遣いが嬉しく、また、かつての親友とどこか重なって見えて思わず笑みをこぼした。
湊が生まれて半年も経たぬ頃、言葉もまだ話せない状態だったが、母親二人が集まったことで、美鶴と湊は実は出会っている。
今は大人びた雰囲気を纏っている美鶴も、赤ん坊のころはわんぱくで、初めて出会った同世代の少年にキャッキャと笑いながら纏わりついていたものだ。
それに対し、当時既にハイハイや掴み立ちが出来るようになっていた驚異の赤ん坊だった湊は、美鶴から逃げるように母親の元に行っていたため。追う者と追われる者という関係は、現在も全く変わっていないと言える。
しかし、美鶴が言葉を話し出すようになると、母親たちが会う機会は急激に減っていくようになる。美鶴に桐条宗家に相応しい人間になるよう英才教育をするようになったからだ。
加えて、その頃から英恵の体調が悪化。命に別状はないものの、都会に近い場所では身体に障るからと、この高級別荘地の桐条別宅で静養するようになった。
その頃、夫はグループの仕事をしながら、その父である桐条鴻悦が新たに始めた研究の手伝いを始め。娘の美鶴は宗家で父と暮らしながら桐条の教育を受けていたため、長期の休暇を除けば、ほとんど会う事が出来なくなってしまった。
しかし、都会から遠いこの地へ、親友とその息子は二人でよく遊びに来てくれた。
残念ながら、親友の夫は仕事だからと一緒ではなかったが、本を読んだり編み物をしたりするだけの毎日の中で、二人と過ごす時間は英恵にとって掛け替えのないものであり。
我が子と会う機会のないこともあって、娘と同じ年頃だった親友の息子は、第二の我が子のような存在になっていった。
「学校は楽しい？　お友達は出来た？」
「チドリは楽しんでる。部活のメンバーとも仲良くしてるから、今の生活は充実しているみたいだ」

「もう、おばさんは八雲君がどう思っているか聞いているのよ？」
そんな生活が続いていたある日、英恵の元にあるニュースが飛び込んできた。
ポートアイランドインパクトと呼ばれる爆発事故で義父の鴻悦が死亡、夫は事故現場にいて片目を負傷しながらもどうにか命は無事に済んだというが。さらに、同日にムーンライトブリッジで菖蒲たち一家の乗った車が事故に遭ったと聞いた。
その報告を受けた英恵は夫の安全の確かめることと、菖蒲たちのことを知るため宗家に一度戻った。
だが、そこで伝えられたのは親友一家の死という残酷な報せ。九頭龍家が執り行った葬儀にも眼帯をした夫と一緒に参列したはずだが、廃人のようになってしまい、そのときの記憶はまるでない。
夫と娘は、英恵のそんな様子を心配してくれたが、親友と息子を同時に失った彼女にその言葉はほとんど届かなかった。
生気を失った英恵は別宅に戻ると、なにかに取り憑かれたように親友と息子との思い出の品を誰にも見せないよう保管し、それを部屋で眺めて一日を過ごすような生活を送る様になる。
それから時間が経てば徐々に心の整理もついてきて、桐条の置かれた状況などを把握できるようにもなっていったが、やはり心にはぽっかりと穴が開いたままで、人と会っているとき以外は無気力な状態で過ごしていた。
しかし、それから三年後、どのような神の悪戯か、死んだと思われていた息子と英恵は再会する事となった。
「危ない事、いまも続けているんでしょう？　でも、それなら尚のこと、自分を大切にしなきゃ駄目よ？」
話は聞いているようだが、湊は皿にのったクッキーに手を伸ばし、ポリポリと黙って食べている。
そんな様子に、困ったような笑みを浮かべ、英恵は自分のティーカップを手に取った。
二人が再会したのは偶然で、桐条の名士会の婦人を対象にした集まりに参加した日の帰り、会場となっていた場所から出たところで、仕

事で遠出してきていた湊とばったり遭遇したのだ。
数年ぶりに会った事、瞳の色が変わっていた事、それによって初めは本人だと確信が持てなかったが、八雲君と呼びかけて相手が振り返ったことで、湊が八雲本人であると分かった。
だが、英恵の顔を見た瞬間に湊は逃げようとした。幼い頃より呼ばれていた条件反射か、完全に警戒の対象から除外していたような、はっきりと驚愕の色を顔に浮かべて全力で駆け出そうとした。
けれど、崩れるようにへたり込み、湊が生きていた事に喜びの涙を流していた相手を見て、湊は逃げる事を止めた。
桐条の妻なら、自分が生きていると知っているはず。だというのに、相手の反応は本当にいま初めて生きていることを知ったようにしか見えない。
そうして、諦めたような表情で湊が戻ってくると、英恵はひしっと抱きしめたまましばらく泣き続け、少ししてから近くの料亭の個室で湊の話を聞いた。
湊たち一家を襲った事故の真相、エルゴ研での事、いまの生活など、信じられないような話ばかりだったが、子どもである湊が、桐条でも一部の人間しか知らない事を知っている。
それだけで、全てが事実だと信じるには十分で、何より、英恵には湊を疑う気持ちなど初めから存在しなかった。
話を聞き終わって湧いてきたのは、湊の生存を黙っていた夫への怒り。
だが、それが娘を守るためだったことを考えると。美鶴と湊を等しく愛していた英恵と違い、ナギリを恐れ湊と殆ど面識もなかった桐条が娘の安全を優先した事は仕方がないと言える。
無論、それが分かったところで完全に許せるかと言われれば答えはNOであり。ちょっとした復讐として、英恵は自分が湊と繋がっていることを他の誰にも話していない。
「そういえば、少し前に美鶴から電話があったの。最近、ある男の子に声をかけようと頑張っているんだけど、相手が話を聞いてくれなくて、中々上手くいかないって。私は女性側としてアドバイスをしたの

だけど、男性側として何か美鶴に良いアドバイスはないかしら？」
当然、英恵はその相手が湊である事を知っている。美鶴も高い適性を有している相手として、有里湊という名前を母に伝えている。
しかし、こう言われて相手がどんな反応を見せるか知りたい。そんな欲求から、わずかに悪戯っぽい表情で相手の言葉を待った。
「……脈がないなら諦めれば良い。世界の半分は男だ。そいつ以外にも気に入るやつが一人や二人見つかるだろ」
「でも、美鶴はその子が良いらしいの。どうにかお話だけでも出来るようにならないかしら？」
「出家でもしろ。そしたら、説法くらいは聞いて貰える」
「もう……分かってて、そんな事言うなんて意地悪ね」
くすくすと口に手を当てて笑う英恵。湊の見せた反応がおおむね予想通りだったためである。
湊は桐条にエルゴ研、及びそれに関わる者を憎んでいる。
自身が例外なのは、影時間とそれに関係する話しは知っているが、このように全く関わりを持っていないからだと推測している。
また、湊の今を知っても以前と同じように接して、繋がりがあることを夫にも娘にも一切ばらしていないことも信頼を得ている理由だろう。
しかし、ならば何故、ほとんど大人の言いなりになっているだけの美鶴に冷たく当たるのか。
彼女の場合、関わりたくて研究に関わる様になった訳ではない。湊と同じように〝目覚めてしまった〟立場なのだ。
少年にその理由を尋ねてみたい。そう思った英恵は、カップをソーサーに静かに置きながら口を開いた。
「八雲君は美鶴が嫌いなのかしら？　まぁ、桐条の人間だから好きではないでしょうけど、あの子も力に目覚めてしまって色々と辛い実験を受けてきたの。だからという訳ではないけれど、似た立場であるあの子と、何故言葉を交わさないのか教えてもらえないかしら？」
母親としては、自分の娘と親友の息子に仲良くして貰いたいが、それを口にすることは出来ない。

桐条家の自分はどこまでいっても加害者だ。それで、どうして被害者にそのような図々しい願いを言う事が出来るだろうか。
だが、似た境遇の娘と会話くらいはしてあげて欲しい。そうして、湊の口から理由が語られるのを待っていると、数分経ってようやく答えが返ってきた。
「話すに値しないから。それだけだ」
「……では、どうすれば値する者になれるのかしら？」
「あれは父親と似過ぎている。無意識だろうが、嘘と欺瞞で塗り固めた仮面で近付いてきて、本当なんて何一つない」
テーブルを見つめている湊の瞳が蒼くなる。負の感情が高まった証であり、感情の向けられた対象が夫なのか美鶴なのかで、英恵も対応を変えなければならない。
だが、湊の言葉を聞いて、英恵は過去の自分の行動について考えていた。
（美鶴が武治さんにそっくりなのは私のせいね。桐条の厳しい教育を受けているあの子に、ここにいた私はなにもしてあげられなかった。影時間が始まってからもそうだわ。菖蒲さんと八雲君の死に悲しんでばかりで、美鶴をまったく見ていなかった）
遠く離れた地にいた英恵は、幼い我が子に母親の愛情をほとんど注いであげることが出来ず。辛い状況に置かれた美鶴は、傍にいて自分を愛してくれる父を心の頼りにするようになった。
尊敬する父のようになりたい、愛する父の役に立ちたい、それが娘を見ていて英恵が見抜いた美鶴の本心。
それを、〝世界のため〟〝桐条の罪として〟、そんな言葉で覆い隠し自分すら騙して湊の協力を仰ごうとしている。
本人は本気で気付かずに言っているのかも知れない。桐条の教育を受けてきたことで知識は持っているが、どこか世間とずれていて、そのせいで視野が狭く情緒面が他者より未熟であるため、情は厚いのだが他人の心の動きに疎い部分がある。
桐条武治も不器用な男で、娘に愛情を注ぐばかりで、普通の子どもらしいことは何一つさせていなかった。子どもの心は、同じ年頃の者

と関わる中で育まれる部分もあるというのに。
そんな湊が認めないという美鶴の人格の形成は、両親である自分たちと桐条家のせいだと、英恵は美鶴に申し訳なさを感じずにはいられなかった。
そこへ、さらに酷く冷たい声色で湊が言葉を続ける。
「あれが求めているのは、〝俺〟じゃない。シャドウは、ほぼ毎日数十体狩ってる。多い日には百体以上だ。影時間を消す方法も分かってない状態で、シャドウを狩る以外にすることなんてないはず。協力する必要性を感じない」
シャドウに心を食われて、まるで廃人のようになってしまう〝無気力症〟。それが桐条の認識だが、英恵は湊から無気力症の真の原因を聞いている。
シャドウが長期間抜け出たままでは、例えシャドウが倒され戻っても、完全には回復しなくなってしまう。
それを知らぬ桐条は、戦力が美鶴しかいないこともあってタルタロスのシャドウを放置しているが、実際は湊が毎日のように狩り続けているおかげで、今のように世間でもあまり問題としてあがっていないだけだ。
湊と会っていることや、連絡を取り合っていることを隠しているのは、ちょっとした悪戯気分だが、そういった研究に関わることを黙っているのは心が痛む。
しかし、それを伝えれば、湊のことも話さなくてはいけないため。誰からも称賛や感謝を受けることなく戦い続けている少年に、英恵は頭を下げて心からの謝辞を述べた。
「そうね。貴方のおかげで無気力症はほとんど広まっていない。本当にありがとう」
「……おばさんが礼を言う事じゃない。俺が勝手にやってるだけだ」
「それでもよ。貴方は人に褒められるだけのことをしているの。世間の誰も知らなくても、私がそれを知っている。だから、私は貴方にせめて感謝の言葉を送りたい。そして、褒めてあげたいの」
言って、英恵は隣に座る湊を抱きしめた。胸に頭を抱いて、髪を優

しく梳いて撫でてやる。
急にそんなことをされた湊は、黙ってされるがままになっているが、瞳の色は普段と変わらぬ金色。つまり、不快さはとくに感じていなかった。
そして、子どもをあやす様に頭を撫でながら、英恵は静かに呟く。
「ごめんなさい。貴方ばかりに押し付けて。影時間なんてなければ、ここで静かに一緒に暮らしてあげたいのに。私たちは貴方に頼ることしか出来ない」
どうすれば影時間が消えるか分からない。その方法を桐条が必死に調べているが、シャドウについても殆ど分かっていない状態では、何年後に判明するかも不明だ。
その間、無気力症の拡大は全て湊に防いで貰う事になる。
湊が力を付けているのは、シャドウと戦うためであり、また、チドリという少女の世界を守るためだと聞いている。
その先に、どのような目的があるのかは聞かされていないが、様々なことを教えてくれる少年が黙っているということは、それだけ無闇に話す事の出来ない事柄なのだろう。
故に、英恵はあえて尋ねる様なことはしない。聞くのは少年のすぐ回りのことだけ。
仮に人類の未来に関わるような途轍もない話しを教えられれば、それを自分の内だけで黙っていられる自信がない。
世界の危機だからと桐条に伝えてしまえば、湊は二度と英恵の前に姿を現さなくなる。かつて味わった絶望を再び味わうなど、絶対に耐えられない。
「八雲君、本当に気を付けて、自分を大切にしてね。私以外にも、貴方が傷付くことを悲しむ人は大勢いる。亡くなった菖蒲さんと雅さんも、貴方の無事と幸せを祈っているわ。だから、自分を犠牲にして何かをしようだなんて考えないで」
ムーンライトブリッジでは両親と自らを、守るための力を得るときには寿命を、エルゴ研の脱走時には心を、その都度、湊は犠牲にしてきた。

そして、いまもチドリの世界を守るために、日常を犠牲にしている。
全て必要な犠牲だったと言えばそうかもしれない。けれど、親友の忘れ形見であり、第二の我が子のような存在の少年に、そんな自己犠牲ばかりの生き方はして欲しくなかった。
英恵は抱擁を解くと、しっかり相手の目を見て手を握りながら話した。
すると、どこか虚無的な感情の籠もらない瞳で見返してきた少年が、その返答としてゆっくり言葉を紡ぐ。
「犠牲じゃない、対価だ。自分が欲しい物を手に入れるため、対価として様々な物を払ってきたんだ。そして、払っただけの物は手に入れてきた」
「……ご両親も対価なの？　寿命も心も、それらを対価に貴方が手に入れたものは一体何？」
「……アイギスの守ろうとした世界の存続。そして、チドリの平穏。だけど、まだ足りないんだ。俺はチドリに安心して暮らせる世界を与えてやりたい」
少年の答えに英恵は言葉を失った。
これが心を犠牲にした影響なのかと考えてしまうほど、湊の答えは子どもどころか、大人でも普通ではあり得ないものだった。
家族や恋人、友人など大切な者の幸せを願うのは分かる。そのために自分も何かをしてやろうとする者もいるだろう。
だが、自分の手を血で染めて、何度も死ぬような目に遭っているというのに、この少年はその世界に己の存在を含んでいないことを理解してしまった。
安心して暮らせる世界というからには、影時間などという非日常は当然なくなった世界に違いない。それを消し去るためならば、少年は自分の命だって対価として平然と支払うつもりでいる。
それを知って、少年の死を娘の死と同等に考えている彼女は、再びあの恐怖を思い出してしまい身体が震えだした。
「だ、駄目。死んでは駄目よ。貴方は生きていて良いの、生きなきゃいけないの！　お願いだから、死のうとなんてしないで頂戴。また、ま

た貴方を失うことになれば、私は……」
「俺の契約は最期までチドリを守ること。他にもいくつかあるけど、契約を全て果たすまで死ねない。それに頭を狙われない限りは死なない。だから、大丈夫」
「違う！　それでは、それでは八雲君が幸せになれない！」
　珍しく声を荒げる相手に驚いた様に湊は顔を上げる。それを正面から見つめて、英恵は泣きそうな表情で続けた。
「どうして自分の幸せを願わないの？　チドリさんが大切なら、貴方も傍にずっといれば良いじゃない。七式アイギスだって、貴方が一緒にいたいなら、私が武治さんに言って自由にさせるわ。だから、貴方はもっと我儘を言っていいのよ。叶えられないくらい大きな夢を言ったって、誰も責めたりしないわ」
「俺の望むチドリの世界に殺人鬼はいらないんだ。どんな理由があっても、俺は自分の意思で人を殺してきた。あの日から今日までで千人じゃきかない。司法なら死刑は確定で、どこかへ行こうと国際指名手配だ。そんなやつが傍にいれば、チドリやおばさんにだって迷惑がかかる。なら、消えなきゃならない」
「世界はその事を知らないわ。それに貴方が裁かれるのなら、私たち桐条だって同じよ。研究員だけじゃない、罪のない子どもを実験体にして、いまだって大勢の人を危険に晒している。貴方の罪は全て私が桐条の罪と一緒に持っていくから、貴方はどうか生きて頂戴」
　言い終わると同時に、湊の頭の中に不思議な声が聞こえてきた。
《我は汝、汝は我……》
　コミュニティーの絆が深まったことを告げる声。
　桐条英恵の担当するコミュニティーは『ＩＸ・隠者』。
　正位置ならば秘匿・思い遣り・核心などの意味を持ち。逆位置ならば、隔離・悲観的・現実逃避など暗い意味を持つ。
　しかし、カード自体としては真実の探求など、決してマイナスではない意味を持つアルカナだ。
　身体が弱く、都会から離れた保養地で静養していることに加え、夫と娘にすら湊と会っていることを隠しているため、彼女がこのアルカ

ナに選ばれたのだと湊は推測している。
そして、絆が深まったというのなら、相手は本気で自分が罪を被ってまで湊に生きていて欲しいと願っているということだろう。
今の自分を知ってからも、変わらぬ愛情を注いでくれる者に感謝の念を抱きながら、湊は感覚でそろそろ影時間が明けることを感知すると、黙って立ち上がった。
「あ……もう、そんな時間なのね」
自分たちが会うのは影時間の間だけ。そう決めているため、湊が帰ろうとしていることで、影時間が明けることに気付いた英恵は、とても寂しそうな表情を浮かべた。
メールや電話で連絡を取ることもあるが、仕事で近くに来たときにしか会えないとなると、影時間の間だけというのは短く感じる。
翌日も休みなのだから、どうせなら泊まっていってくれて構わない。
しかし、万が一にも湊の存在がばれれば、彼が立てている計画に何か不都合が生じるかもしれない。
それを考えれば、我儘など言えるはずがなかった。
立ち上がった湊がバルコニーに向かってゆくと、英恵も立ち上がってその後へ続く。だが、そう言えば渡す物があった事を思い出すと、声をかけて呼び止めた。
「あ、ちょっと待って。実は、今日は八雲君にあげようと思って、ある物を用意しておいたの。ほら、これよ」
声をかけてから、ドレッサーに何かを取りに行って戻ってきた英恵の手には、小さなアクセサリーを収める小箱があった。
それを受け取り湊が開いてみると、中に入っていたのは、英恵が付けているものと同じデザインの白い王冠の形をした指輪だった。
不思議そうに眺めている湊に、くすくすと笑って英恵が説明を始める。
「それは桐条製の影時間に対する簡易補整機よ。適性を持たない人間でも、それを付けていれば影時間を体感し、さらに外した後も影時間に関わる記憶を保持できるの。ただし、それを破壊したら、それを付

けていた間の記憶は消えてしまうから。誰かに使わせるときは注意してね」
「人工的に適性を得ることが出来るのに、こんな物まで作っていたのか？」
「人工的に得るのにも素質が必要なの。それに私みたいに身体の弱い人間は耐えられない。だから、誰でも使えるようにと、こういった物を開発したのよ。付けたのが何年前だろうと、破壊すればその時の記憶が消えるという保険付きでね」
そう、ペルソナに覚醒した美鶴や、人工的に適性を得た桐条と違い、英恵は影時間の適性を持っていない。
影時間を体感するのは、湊から今度遊びに行くと連絡を受けたときのみで、そのときには指輪の力を借りて影時間を過ごしているのだ。
人工的に処置を施して適性を得るのと違い、ただ指輪を付けるだけで適性を持てるメリットがあるものの、当然、指輪の破壊で記憶が消える以外にもデメリットはある。
「この指輪は、月齢や使用者の精神状態で効果が安定しなかったりするの。そうすると、使用者の肉体に非常に負担がかかるから、その点も注意しておいてね」
「……なら、おばさんは一番使ってはいけない人間だろう。俺に会う程度のことで、自分の身体に負担をかけてどうする」
少し呆れた様子で言って、湊は英恵の胸の前に右手をかざした。
すると、湊の掌から温かな優しい緑色の光の粒が放出され、そのまま英恵の身体の中へと吸収されてゆく。
いま湊が行っているのは、生命力の譲渡。光の色は違えど能動的な力の使い方をするメーディアを持つチドリも同じことが出来るが、力の保有量が圧倒的に違うので、チドリならば死んでしまうような量を他者に与えても、湊は少し疲労を感じる程度で済んでしまう。
湊が来る度に英恵の体調がよくなるのは、この生命力の譲渡が理由だった。
「ごめんなさいね。今まで秘密にしてて。でも、貴方が力を分けてくれるから、本当に会った後は体調が良くなっていたのよ」

「力を分けられないくらい疲弊してやってきたらどうするんだ。そんな会うだけで命懸けのようなことはしないでくれ」
「うふふ、それはおばさんがいつも貴方に言っている事ね。危ない事はしないで欲しいって言っても、八雲君はまるで聞いてくれないんだもの。お相子だわ」
　それを言われてしまうと湊は何も言い返せない。
　そして、かなりの量の生命力を与えると、湊は指輪の入った小箱をマフラーに仕舞ってバルコニーに出てゆく。
　カグヤの探知で他に動いている者がいないかはずっと調べていた。
　今回のことで、適性がなくとも影時間を体感する方法があると知ることが出来たため、ならば、今後はさらに注意しながら行動する事にして、高同調状態で背後に顕現させたタナトスと共に僅かに浮かび上がる。
「それじゃあ、身体に気を付けてね。次に会えるのを楽しみにしているわ」
「夏休みにでも会いに来る。それまでは電話かメールしか出来ない」
「ええ、それでも十分よ。あの人も美鶴も忙しいみたいで、電話もあまりしないから、八雲君からメールがくるのを楽しみにしているの。ふふ、でも、貴方が美鶴を無視していれば、私に相談してくれるみたいだから、これからは二人の連絡を期待できそうね」
　美鶴にとっては散々な対応でも、それで娘と話が出来るのなら英恵にとっては嬉しいことらしい。
　心の中では娘に謝罪しているのだろうが、あまり娘に頼られる事もなかったので、母親らしいことをしながら、子どもたちと話せるという特典の方が英恵には魅力に映った。
　そんな風に考え、朗らかに笑うと、帰る前に湊の手を包む様に握って別れの挨拶をする。
「では、おやすみなさい。またいつでも来てくれて構わないから。何か困ったことがあれば、ここなら匿ったりも出来るし。頼ってきて頂戴ね」
「そうならないよう気を付ける。それじゃあ、また来る。おやすみな

さい」
言い終わって手を離すと、湊は一気に高度を上げて飛び去っていった。
たまに来る報告書や、極一部の人間しかアクセスできない桐条のサーバの中で、娘のペルソナについてのデータにも目を通したが、確かに大人と子ども以上の実力差があると感じられた。
過去の人工ペルソナ使いの研究については、何も知らされていないが、湊の話を信じるのならば、乗って飛ぶ事が出来る者はいたが、湊の様にペルソナと共に飛べるものはいなかったらしい。
これが自分たちを守り続けている少年の心の強さかと思うと、英恵は安心感よりも不憫に思う気持ちの方が湧きあがった。
「……貴方は憎んでいる人間すらも守っているのね。人という鏡を置くことでしか、貴方は自分の願いを持つことが出来ない」
湊の願いは誰かのためという前提が存在している。世界のためにデスと対峙し、チドリを守るために改造を受け、被験体を救うために研究員らを殺した。
そのときどきに払った対価で何か得たのは、実際は湊ではなく他の者たちだ。それを湊は、自分の望んだ状況にする事が出来た、と自分の願いが叶ったように錯覚している。
さらに、自分が異常であると思ってはいるようだが、願いの抱き方が歪である事は自覚していない。
そんな少年を救ってやることが出来そうな鍵は、いまのところアイギスとチドリの二人だけ。
どれだけ相手を想っても、自分では何も出来ない歯痒さに、英恵は表情を暗くして、少年が飛び去った方角へもう一度視線を送ると、そのまま部屋へと戻っていった。

第四十二話　イニティウム

7月7日（木）
放課後――月光館学園中等部
既に遠くの空で星が輝き出した頃、岳羽ゆかりは竹を運んでいた。
別に駄洒落という訳ではなく、半分に切られた竹を肩に担いで風花と共に生徒玄関を出たところへ運んでいる。
「……普通、逆じゃない？」
「しょ、しょうがないよ。私たちは料理出来ないから」
女子である自分たちが重い荷物を運び。力も体力もありそうな唯一の男子部員が、調理室を占拠して料理をしている。
その役割分担に思わずツッコミを入れたくなったのだが、風花に現実的な返しされて、ゆかりは肩を落として項垂れた。
しかし、そんな丁度良いタイミングで二人に声をかける者がいた。
「おーい、お前たち！　運ぶ物があるなら人貸すぞー！」
言いながら走ってきたのは、美紀の兄である真田明彦と愉快な仲間達であるボクシング部員だった。
予定時刻まではまだ少々あるため、食前の運動としてロードワークをしていたらしい。
運動部にも所属しているゆかりは自身の経験から、食べる前にあまり激しい運動をすると、反対に食欲が減退するのではと思ったりもしたのだが、ここでは何も言わず相手の厚意に素直に甘えることにした。
「あ、お願いして良いですか？　中庭のブルーシートの上にある分も全部使うらしいんで、こっちに持って来て欲しいんですけど」
「わかった。軍手はどこから借りれば良い？」
「切り口は綺麗に処理してるんでなくても大丈夫ですけど、気になるんでしたら、職員室に行けばクリーンデーで使うのを貸してもらえます」
「了解した。鮫島、お前は他の奴らにも声かけて来い。手伝いを渋った奴は麺つゆしかやらんとも伝えろ。他のやつは俺と一緒に中庭だ。

これもトレーニングになると思え」
『はいっ！』
　真田の号令と共に部員たちは駆け足で散って行った。元気良く返事をした者の中に、かつて美紀に声をかけて真田にスパーリングを受けたクラスメイトの姿を発見し、ゆかりと風花は思わず苦笑する。
　そして、止まっていた足を再び動かし、目的地である竹脚の組まれた場所に到着した。
「ああ、ご苦労。数が揃うまでは、そのまま置いてて良いぞ」
「……櫛名田先生は手伝わないんですか？」
「私は監督だからな。子どもの思い出作りを邪魔する事は出来ないさ」
　そのようにアウトドア用の簡易椅子に座って、不遜な物言いでさぼっている保険医の櫛名田の手には、かき氷の盛られた容器が握られていた。
　近くにかき氷屋はなく、購買にも氷を削り出したかき氷は売っていない。ならば、櫛名田はどこでそれを手に入れたというのか。
　竹をブルーシートの上に置いた風花は、重い物を運んで乱れた呼吸を整えながら尋ねた。
「先生、それどこで貰ったんですか？」
「ん？　ああ、これは二年の目付きの悪いやつに作らせた。氷は冷凍庫に大量に入っていたからな。マイかき氷機を持参して行くと、暇そうにソーメンを茹でていたから、命懸けで削れと言ったら快く引き受けてくれたよ」
（……絶対違うと思う）
　クスクスと妖艶な笑みを浮かべながら、イチゴシロップのかかったかき氷を口へと運ぶ櫛名田を、ゆかりは疲れた表情で見ていた。
　しばらくすると、真田を先頭にボクシング部員らが竹を持ってやってきたので、櫛名田の指示のもと水路を組み上げ、実際に水を流しても問題がないか確かめ、主役が到着するのを待った。
＊＊＊
　他の者たちが外で待っている頃、湊たちは調理室で料理を作ってい

た。
今日は七月七日の七夕だ。ならば、何か行事をしようと二週間ほど前に佐久間が言いだし、美術工芸部と美紀の兄のいるボクシング部、それにゆかりがかけもちで所属している女子弓道部にも声をかけ、学校の敷地内で流しそうめんをすることになった。
そうめんは桔梗組本部にお中元として届いたものが大量に余っていたのでそれを使い。竹は鵜飼の所有する山から切り出してきたものを組員に運ばせたため、学校側へは場所の使用許可の申請だけで済んでいる。
そして、総勢で六十人前ほどの料理を作るのに、たったの三人では不可能だろうと、料理経験者の荒垣も呼び出され、現在、汗を掻きながらお湯の沸騰した鍋の前でそうめんを茹でていた。
(……おかしいだろ。なんで急に呼び出された俺が、一番きついことやらされてんだ)
荒垣は黙って黙々と茹でたそうめんを水でしめ皿に移すと、次の乾麺の束を解いて鍋に投入する。
空調を効かせているとは言っても、沸騰したお湯から湧きたつ湯気のせいで湿度も高まり、鍋の近くはサウナ状態となっている。
鍋の中に汗が入っていけないと、頭にはタオルをバンダナのように巻いて、さらに首にかけたタオルでも顔の汗を拭っているが、心の中は不満でいっぱいだった。
まず、現在この調理室にいる人間は五人。湊・チドリ・美紀・佐久間の四人に加え、茹で時間を気にしながら周囲を観察している荒垣自身だ。
そして、それぞれが何をしているかというと、湊と佐久間は七夕にちなんで星型に切った具材を入れたりしているチラシ寿司を作っている。放課後になってからずっと酢飯を作り、具材と混ぜて寿司桶に盛りつけているので二人はまぁ良い。
次に美紀は何をしているかというと、大勢で使うためヤカンに麺つゆを作り、各自が入れる薬味を切ったりしている。これも生姜をおろしたり、ネギを切るのに時間が掛かるだろうからと許せる。

だが、最後の一人はいる意味がまるで分からなかった。
そう、調理室にいながらチドリだけは、ただ椅子に座ってかき氷を食べている。
先ほどかき氷機を持って急に現れた櫛名田が、そうめんを茹でていた自分に作れと言ってきた際、チドリの分も作って渡したのは確かだ。
しかし、彼女はかき氷を食べる前は絵を描いていたはずであり。時折、美紀から麺つゆの入ったヤカンを運んで欲しいと頼まれたとき以外は動いていなかった。
(なんで、あいつは何もしてねえんだ？　料理ができないっつー他の二人は水路用の竹を運んだりしてるってのに。てか、あの保険医だって料理出来るって話しじゃねえか。役割分担おかしいだろ)
心の中では愚痴りつつも荒垣は真面目にそうめんを茹で続ける。どう考えても最初期に茹でた分は乾いてくっついてしまっているはずだ。
しかし、それは自分のせいではない。ボクシング部の男には微塵も期待していないが、ゆかりの所属している女子弓道部にはそうめんを茹でるくらいは出来る人間もいる。
だというのに、七夕の笹を飾りつけるからと、全員がそちらに行ってしまっているのが悪いのだ。
そう、これだけ必死になってやっている自分は悪くない。荒垣は自分に言い聞かせた。
「……あぁ？」
それから、さらに茹でながら時計をジッと見ていると、荒垣は脇腹を突かれ視線をそちらに向けた。
向いた先には、所謂、ロリータファッションのドレスに身を包んだ暗い青髪の少女が、お茶の入ったコップを手に立っていた。
どこから入ってきたのかは分からないが、明らかに学校の生徒どころか中学生ですらない。しかし、呼ばれたので見続けていると、可愛らしい小さな声でポツポツと話しかけてきた。
《……これ……湊が飲めって》

「ああ、ありがとよ――――ハァ」
《……頑張って》
「っ!?」
冷たいお茶を受け取り喉を潤すと、先ほどまで感じていた疲労感がいくらかマシになったような気がした。
そして、コップを持っていって貰おうと思ったとき、相手は頑張れと言い残し、くるりと振り返って消えてしまった。
慌てて周囲を見渡すが姿も形も完全に消えている。だが、渡されたコップは残っているので、少女が存在したのは確かなはずだ。
「な、なんだ？　幽霊だったとでも言うのか？　お、おい、有里！」
動揺したまま荒垣は寿司に海苔をちらしている湊を呼ぶ。
先ほどの少女は湊が自分にお茶を渡すよう言ったと言っていた。ならば、湊に聞けば何か分かるかもしれない。
そんな一縷の望みに賭けて相手を呼ぶと、湊はゆっくりと視線を上げた。
「……終わったんですか？」
「いや、それは後少しだが、お前、青い髪のこんくらいの背の女を知ってるか？」
「んー、あ！　それ座敷童子ちゃんだよー！　荒垣君も視えたの？」
「は？　座敷童子？　みえた？」
急に話しに入ってきた佐久間に面食らうが、それよりも言っている意味がよく理解出来ない。
荒垣の知っている座敷童子は某週刊誌の妖怪漫画に出てきた、せんべい好きの人形のような妖怪であり。先ほど見た小学生くらいの少女とは似ても似つかない。
また、人間なのだから見えるのは当然であり、佐久間が何を言いたいのか全くもって分からなかった。
そのため、そうめんをザルにあけて、水でしめながら話しを続ける。
「座敷童子ってアダ名かなにかっすか？　つか、俺にお茶を渡したら急にいなくなったんだが、どんなタネだ？」
「ぷぷー、座敷童子ちゃんは有里君にひっついてる幽霊なのでお茶な

んか渡せませーん。さては、麺と一緒で頭が茹っちゃってたな？　適度に水分とって休憩しなきゃ駄目だよー」
「幽霊？　いや、確かにコップを渡してきたし、会話も……したよな？」
　言われてみると急に自信がなくなってきた。確かにお茶を飲んだコップは手元に残っているが、半分朦朧とした意識で自ら取りに行った可能性もある。
　それに急に人間が消えるなど普通に考えてあり得ない。
　佐久間の言っている幽霊という話しはにわかに信じ難いが、先ほどの少女は自分が見てしまった白昼夢だったとすれば急にいなくなったことも納得する事が出来た。
（……クソ、意識朦朧とするまで必死こいてたなんて笑えねえぞ。これで飯が不味かったら承知しねえからな）
　お茶を飲んだことで覚醒した思考のまま心の中で悪態を吐き、最後の一束を水でしめると、荒垣はそれを皿に盛り、外へ運ぶワゴンに乗せた。
　荒垣が皿をワゴンに乗せた頃、湊たちの方も準備を終えたようだったので、外にいた者たちを呼び、完成した料理を会場まで運ばせた。
＊＊＊
「……世辞抜きに美味いな」
「ああ、そうだな。腹を空かせて待った甲斐があった」
　荒垣と真田は二人で並んで花壇の縁に腰掛け、紙皿に盛られたチラシ寿司を割りばしで食べながら話しをしていた。
　流しそうめんは初めの方に食べてしまい、後は湊と佐久間の作ったチラシ寿司や、各々が持ち寄ったお菓子などを食べて談話している。
　中には用意された短冊に願い事を書いて笹に吊るしている者もおり、真田は自分の妹が友人と笑いながら短冊を書いている姿を微笑ましそうに眺めている。
「立案はあの教師らしいが、動いたのは基本的に有里らしいぞ。美紀に言われてお前らのことを許可したのもあいつだ。ま、食材も竹もあいつの家が用意したんだから、あいつの許可がなきゃ無理に決まって

るけどな」
「……そうか。なら、後で礼を言っておく。おかげで美紀も楽しそうだからな。七夕なんていつ以来だ？」
「揃ってって意味なら施設で別れて以来だろ。ここで再会してなきゃ一生会わなかったかもしれねぇんだからな」
真田兄妹と荒垣はかつて同じ児童養護施設で暮らしていた。
だが、五年ほど前に真田たちが子どものいない真田夫妻の養子となって施設を去り。それから半年後に荒垣も荒垣夫妻の養子として施設を出た事で音信不通となった。
新しい環境に慣れるまで余裕がなかったこともあり、ようやく連絡が取れる状態になったときに連絡がつかないことを知って落胆したものだが。
真田と荒垣は偶然にもここ月光館学園の中等部で再会する事になった。
その際、兄の入学式について来ていた美紀も再会を喜び、来年は自分も入学すると決めた経緯がある。
荒垣は現在月光館学園の男子寮で生活しているが、真田兄妹は実家から電車で通っているため、真田と荒垣が休日や放課後に遊ぶ事は稀にあったが、美紀も揃ってとなるとかなり久しぶりだ。
随分と懐かしい感覚を思い出させてくれたイベント主催者に感謝し。二人は食べ終えた使い捨ての食器をゴミ袋に放り込むと、短冊を持って笹の近くで手を振っている妹の元まで肩を並べて歩いて行った。
深夜――巌戸台・某所
影時間も明けた深夜。薄暗い廊下を白衣を着た男を先頭に、数名の男の一団が進んでいく。
「それで、経過の方はいかがですかな？」
「良好、と言っていいと思います。最近になってようやく再び言葉を話せるようになりましたから」
鶏の卵のような体型をした、全身をブランド品で固めたスーツ姿の背の低い外国人の男がにやついて尋ねると、白衣を着た男・幾月が愛

想よく笑って返す。
幾月のすぐ後ろをいく男の名はアロイス・ボーデヴィッヒ。既に還暦を迎えている年齢だが、長年培った技術と人脈によって違法な臓器取引を行っている密売組織の元締めだ。
今日、幾月に会いにやってきたのは、以前、幾月に頼まれて医師とスタッフを派遣し行った手術の経過報告を受けるためだった。
臓器取引をメインにしているが、それ一本で稼いでいる訳ではなく、人体に関わる物であれば細胞から生きた人間まで取り扱っている。また、売った臓器の移植など手術も請け負い、そのための医師やスタッフに機材も超高額で貸しており、その分、信頼性の高さから彼を頼る者も大勢いた。
幾月もその一人であり、様々なルートを通じて彼との接触を図り、来日している今がチャンスだと数ヶ月前にアポイントを取りつけたのである。
大勢のボディガードを引き連れて歩くアロイスは、前に幾月と会ったときのことを思い出し、脂ぎった顔を愉快そうに歪めながら話す。
「しかし、いつの世も神の禁忌に触れたがるのは科学者の性（さが）なのでしょうな。世界がタブーとした人体実験など不完全な技術に頼る。そうまでして叶えたいこととは一体なんなのですか？」
「一言で説明するのは難しいです。ただ、人類の未来のために彼を人を超えた救世主（メシア）にする必要があった、とだけお答えしておきます」
「アッハッハッハ！　人類の未来のため、そのために禁忌であるものを使うとは随分と頓知がきいていますな。いや、やはり先を見据える者は、それだけの覚悟を持っておかねばなりません」
大声で笑い、まわりに唾を飛ばしているアロイスの言葉に、幾月は「恐縮です」とだけ答えた。
そうして、廊下を進み続けると、カードキーや網膜、静脈といった多数の認証を済ませる事でしかロックを解除できない扉にやってきた。
他の者を待たせて幾月は次々に済ませると、ガチャン、とロックの外れる大きな音を確認してから彼らを中へ招く。

「どうぞ」
「ええ。ですが、少々お待ちを。仙道(せんどう)、ついて来るのはお前だけで良い。他の者は扉の前で待っておけ」
しかし、入る直前にアロイスはボディガードの一人を呼び、他の者らは扉の前で待っているように命令した。
アロイスに呼ばれてやってきた男は、背中にハスの花の刺繍の入った黒のカンフー服を着た、二メートル近い大男。他のボディガードは黒いスーツを着ているというのに、明らかに一人だけ異質であり、雰囲気も相まって短めに揃えられた逆立つ赤い髪が血の色に見えてしまう。
男がすぐ傍までやってくると、幾月がわずかに緊張していることに気付き、男の方から挨拶をしてきた。
「お初にお目にかかる。わしは仙道(せんどう)　弥勒(みろく)。いまはこいつの警護をしておるが、普段はただの壊し屋だ。お主も誰か壊して欲しい者がいれば、わしに頼むが良い。もっとも、わしに壊せるのは相手の肉体だけだがな。フーハッハッハッ！」
「ええい、やかましい！　貴様は黙って私を守っていればいいのだ」
空気がビリビリと振動するほどの声量で高笑いする仙道を、迷惑そうに耳を塞いでいるアロイスが怒鳴りつける。
ボディガードとして仙道を雇っているのはアロイスだが、そこに明確な上下関係は存在しないようで、豪快な相手の扱いに困っているようにも見える。
その証拠に、雇い主に怒鳴られても仙道は笑顔のまま返している。
「まぁ、許せ。こちらに来てからというもの、全く戦えていないのだ。たまには大声で笑って鬱憤を晴らさねばやってられん」
「そんな物は別の場所でしろ！　ここはミスターの研究施設なのだぞ。貴様のせいで不具合が出たらどう責任を取るつもりだ」
「ま、まぁ、気にしないでください。研究施設と言っても、ここで行っているのは彼についてのことだけです。それも娘が一緒にいてやっているので暴れたりはしませんし。多少騒いでも問題ありません」
「む、むぅ……ミスターの厚意に感謝しろ。次に騒げば、違約金を取る

からな」
　困ったような作り笑いで幾月が宥めると、仙道を睨みつけアロイスは幾月に続いて中へと入った。
　あれだけ扉にロックが掛けられていたにも拘わらず、扉の先はまだ廊下が続いていたが、これまで歩いていた薄暗い廊下と違い。かなりの明るさが確保された、どこか病院を思わせる白い内装をしている。
　そんな場所を十メートルほど歩くと自動扉があり、それを潜ったところで、ようやく目的地についた。
「ん？　どれがお主の研究物だ？」
　部屋に入った仙道は不思議そうに幾月に尋ねた。
　彼らが現在いる場所は、縦十メートル幅二十メートルほどの横に長い部屋だ。しかし、入り口から見て正面にガラスを隔てた向こう側に学校の教室ほどの広さの部屋が見えている。
　その中には中学生か高校生といった年頃の少女が、少女よりわずかに年下と思われる少年を膝枕しながら、傍にカップやクッキーを置いて読書しており、特別何かがあるようには見えない。
　アロイスが散々大仰な言い回しで話していたので、何かとんでもない物があると想像していた仙道は拍子抜けし、腕を組んでつまらなそうにしながら相手の言葉を待つ。
　すると、幾月は白衣のポケットに手を入れ、取り出したリモコンを操作し、今までマジックミラーとなっていたガラスを向こうからでも見える状態にしてから口を開いた。
「私の研究物は彼ですよ。娘が遊んでやっている少年。あれがアロイス殿の手を借りて改造を続けている、人を超えた救世主です」
＊＊＊
「……姉さん、外に幾月さんと知らない人が来てるよ？」
　急に鏡だった壁がガラス状態になり、その向こう側に三人の男がいることに気付いた少年が、閉じていた黒い瞳の相貌を少女に向け静かに伝える。
　年の頃は十二・三歳、髪の色は暗い青、前髪が長く右目がやや隠れるようになっているが、驚くことにその顔は湊と瓜二つだった。

違いと言えば、瞳が黒い事と右目の下に泣き黒子があること。それと湊ががっしりとした体格であるのに対し、少年はどちらかと言えば線が細い体型をしている。
「うふふ、お父さんはね。貴方の様子を見に来てくれたのよ？　ほら、前に身体を少しいじったでしょう。あの手術はあそこにいるおじさんのおかげで出来たものなの。だから、今日はその経過を見に来たってところでしょうね」
自身を見上げる少年の頭を愛おしそうに玖美奈は撫でる。
すると、少年は気持ち良さそうに目を細め、身体を少し起こすと玖美奈の腰辺りに抱き付いた。
抱き付かれた衝撃で肩に掛かる緩い癖のかかった茶髪がふわりと揺れる。その揺れた髪からは香水のような良い香りが広がり、少年は穏やかな表情で笑っている。
「僕、姉さんの匂い好きなんだ。花みたいな匂いがするから」
「ふふ、ありがとう。でも、今はお客様がいらしてるから、先にご挨拶をしましょうか。ほら、おじさんに自分のお名前を言って？」
最後にポンポンと優しく頭を叩くと、玖美奈は相手を立たせて二人揃ってガラスの前まで行き、アロイス達に挨拶をするように言う。
言われた少年は姉と右手を恋人のように繋ぎながら、素直に言う事を聞いてガラス越しにアロイスらに自分の名前を告げた。
「えっと、はじめまして。僕の名前はナギリヤクモです」
「違うでしょう？　それは貴方があの模造品を殺したときに名乗れるお名前よ。さ、私が付けてあげた名前で改めてご挨拶して？」
「あ、うん。今の僕の名前は結城（ゆうき）理（まこと）です。その、本当はさっきの名前なんだけど僕の偽物が取っちゃったんだ。だから、僕は偽物を倒すまでは本当の名前を名乗れない。けど、姉さんがつけてくれた名前も好きだから今はこれで良い」
ガラスの向こう側で頷いているアロイスに対し、仙道は幾月から何かを聞いて驚いているようだが、湊と同じ顔を持つ少年・結城理は何を驚いているのか分からない。
しかし、しっかりと挨拶が出来た事で、姉が額にキスを落とし頭を

撫でてくれるため、見知らぬ男の反応などすぐに気にならなくなった。
　リラックスした表情で抱きしめられた理に、玖美奈がそんな風に愛を注いでいると、部屋の隅に取りつけられたスピーカーから幾月の声が聞こえてくる。
《玖美奈、彼に名前を付けてあげたのかい？》
「ええ、手術はほとんど終えたし、いつまでもイニティウム（始まり）なんて名前では可哀想だわ。模造品（アレ）が〝ただそこに在る里〟なら、この子は〝結いによって作られるお城〟のような存在にならないとって思ってね」
《彼はアロイス殿を初めとした様々な人の力を借りて人を超えようとしている。それは確かに〝結い〟という制度を用いた城造りのようなものだね。では、理というのは？》
「私たちと同じ新たな世界、〝新たな理（ことわり）〟で生きる。さらに、居場所を奪った模造品（アレ）を殺して無事に〝真（まこと）〟の存在となることも祈って、結城理と名付けたわ。この子も気に入っているから、彼が再び八雲という名前を取り戻すまではそう呼んであげて」
　名前の由来を聞いて納得したように頷く幾月とアロイス。
　しかし、仙道だけは何やら理を値踏みするようにジッと見つめているので、玖美奈はその視線を遮るように理を抱きしめ、そのまま口づけを交わした。
　理は急な姉の行動にわずかに驚き、目を大きく開いたがすぐに瞳を閉じて相手の身体を抱きしめ返す。
　ガラスの向こうにはまだ大人たちがいるが、そんな物は関係ないとばかりに、熱い吐息を漏らしながら深い口付けで二人は互いを愛し存在を確かめ続けた。
《ホッホッホ、ミスターマコト。その後の身体の調子はどうですか？
　流石に前回の毒への免疫を手に入れるのには苦労したと思いますが》
「……ええ、かなり調子は良いと思います。それなりに身体は痛みましたが、僕はアイツと違ってそう簡単には死にませんから」
　自分たちだけの世界に入っていた二人にアロイスが声をかけると、

理は唇を離したときにかかった銀色の橋を舌で舐め取り、少々冷たい声色で返した。
まだ名残惜しいとばかりに、玖美奈は頬を上気させ潤んだ瞳で理を見つめており。理自身も姉との時間を邪魔されたと相手を殺したいと感じている。
だが、いまの自分の身体はガラス越しに立っている男がいなければ完成しなかった。飛騨データに残された項目はまだ幾つか残っているため、今後もしばらくは男の力を借りなければならない。
故に、腰に付けているホルスターに伸びかけた手を途中で止めると、理は姉をお姫様抱っこの状態で抱き上げ、奥にある部屋へと進み始めた。
その去っていく背中に向かって幾月が声をかける。
《結城君、また明日から訓練を再開するから、君もそのつもりでいてくれ》
「了解です。じゃあ、僕たちはもう休みます。幾月さん、そして、お二人もお疲れ様でした。これで失礼します」
《ええ、また会いましょう。ミスター》
アロイスの言葉を聞き終わるとガラスは再び鏡状態へと戻った。その向こうに離れていく気配を感じながら、理は部屋の灯りを消すと、ベッドルームに入って行ったのだった。
＊＊＊
部屋を出て廊下を進み続ける幾月とアロイスの一団。その中で仙道だけが、険しい表情で周囲に威圧感を放っていた。
ボディガードの黒服たちは銃を使ったところで仙道に勝ち目がないため、相手に絡まれぬようアロイスを咄嗟に守れるギリギリの距離で離れている。
そして、そんな相手の様子が気になった幾月は、歩きながら振り返り声をかけた。
「難しい顔をしていますが、どうかされましたか？」
「うむ、先ほどの小僧の名だが〝ナギリ〟と言っていたな。わしの知る限り、裏に通じておるナギリなどただ一つしか無い。もしや、小僧

はその生き残りか？」
「はて？　生き残り、とはどういう意味でしょうか？」
話しをすることで表情の険しさが幾らか薄れ、周囲に放っていた威圧感も消えた事で幾月も自然に言葉を返す。
幾月自身は理の本名であるナギリには、さして興味を示していなかったため、それほど調べていない。
こうして、ナギリという存在を知っている者にもほとんど会った事がなく。今日まで事情を知らずに過ごしてきた訳だが、知っている者がいるなら聞いて損はない。
そう考えて尋ね返すと、少ししてから仙道はゆっくりと話し始めた。
「関わっているのならお主も知っているだろうが、ナギリとは名を切る者という意味だ。つまり、一族や組織の殲滅を専門とした今でいうアサシンの一族という事になる。だが、ナギリは数多ある殺し専門の一族の中でも特殊でな。量より質を究めるために、一族と言いながらも子は殆どこさえなんだ」
「アサシンならば外から優秀な人間を引っ張ってくればいいだろう。何も珍しくあるまい」
アロイスの言っていることは間違っていない。血で一族という者たちもいるが、一族という体裁だけ整え中身は外から招き入れた者たちの集団ということも珍しくはない。
量より質というなら、むしろ、そういった手法で一族を形成していた可能性の方が高く。子どもの有無はさして重要には思えない。
しかし、それを言ってきたアロイスに仙道は呆れたような表情で返した。
「戯け。そんな無法者の集団が、一族として海を越えた向こうまで名を知られる筈がなかろう。確かに罪人だろうと異国の血だろうと構わずに招き入れていたと聞くが、ナギリの血筋は続いている。もっとも、それは子を為すというより、完全なるモノを作るための交配を繰り返したと言った方が正しいがな」
「完全なるモノ？　それに海を越えた向こうまで名を知られていた

？」
「ああ。裏で仕事をしていれば少し年老いた者らから日本のナギリの噂は耳にする。どこまでが本当かは分からんが、武器も持たずに首を刎ねる鬼がいたとな。また、その鬼は自らの腕が飛ぼうが、傷からハラワタが飛び出そうが構わず戦い続けたとも聞く。それが本当ならば、殺しに慣れた者でも怖気が走るだろうさ」
その言葉を聞いて幾月の頭を過ぎったのは、あのエルゴ研の惨劇の様子だった。
自身は別棟にいたため免れたが、瓦礫の下から出てきた部下や同僚たちの亡骸は四肢を刎ねられ、身体を分断され、心臓を穿たれ、皆が凄惨たる殺され方をしていた。
殺した張本人は全身に血を浴びて、ただ殺す機械のように殺戮を繰り返した。幼い時点で飛騨データの改造に耐えきった耐久力を見せているため、同じ一族で成人となった者ならばさらに敵の攻撃に耐えて死を撒き散らすことが出来たのだろう。
しかし、まさか、海の向こうにまで名が知られるほど有名な殺しの一族だったとは知らず、改めて敵としての湊の強大さに、幾月は他の者から見えない角度で苦虫を噛み潰したような表情を密かに見せた。
「して、ナギリの鬼だが、実は数代前に時代に合わせて廃業しておる。というのも、鬼は龍を守るための一族であり、その龍が好きに生きよと命じたからだそうだ。故に、鬼は現代に解け込み人へと戻って行ったそうなんだが、末裔が数年前に事故で死んだため、完全に途絶えたらしい」
「そんな末裔が死んだことまで噂になるんですか？」
「いや、ナギリの鬼は有名だが、流石に末裔までは話にのぼらん。だが、中には熱狂的なファンやら心酔するような輩もいてな。ナギリが完全に途絶えたと知り、首を吊った者もおるくらいだ。まぁ、わしの話もその者たちから聞いたんだが、まさか生き残りがいるとは思わなんだ」
途端、肉食獣が如き獰猛な笑みを口元に作り、仙道は壁に向かって拳を放った。

身体を横に向けたまま震脚で床を踏み鳴らし、腰に溜めた拳を真っ直ぐに打ち抜く冲捶（ちゅうすい）の一撃。

常人ならば殴って返って来た威力で骨折してしまうほど硬い金属製の壁にも拘わらず、仙道はくっきりと壁に拳をめり込ませていた。

そんな馬鹿げた威力と拳の強度を持った男に、周囲の者らが唖然としていると、当の本人は壁にめり込んだ拳を抜きながら高らかに哂う。

「フハハハハッ！　愉快だ、実に愉快だ！　今日ここで拳を交えることが出来ぬのは残念だが、鬼の末裔が生きていたのであれば、また因果により戦場で相見えるだろう。幾月殿、あの小僧に修練を積ませておけ！　如何に鬼と言えど、鍛えねばただの人だからな！　フーハッハッ！」

笑いながら進んでいく仙道の後を追いかけるように、アロイス達は幾月の研究所を後にした。

強者との心が震えるような死合、それこそがこの男の求めるただ一つの物。

己を楽しませてくれるのならば、自ら鍛えて達人の域まで引き上げてもやっても良い。それほどの気持ちで、仙道は完全な状態の理との戦いを望んでいた。

かつては、戦いの最中に絶頂に達してしまいそうになるほど、心が震える戦いを自身と繰り広げる者がいたが、その同門だった男は自分との戦いで片目を負傷してしまう。

以降も、男は中東へ渡って壊し屋として名を馳せていたが、隻眼となる前の強さを知っている仙道にとっては、いっそ殺して楽にしてやりたいと思うほどの弱さであり。現在の居場所を知っていてもまるで会う気にならないほど興味を失っている。

仙道が強者との戦いを望むのは、その己と研鑽し合っていた男との戦いが忘れられないからであり、ようやく相手として相応しい者が現れたことで歓喜に心が震えるのを感じたのだった。

＊＊＊

来客たちが帰り、研究所の中が静まりかえった頃、研究所の中にあ

るベッドルームには玖美奈に寄り添われベッドに入っている理の姿があった。
ベッドの脇には衣服が脱ぎ散らかされており、毛布をはぎ取れば二人の一糸纏わぬ姿が拝めるだろう。
だが、頭の後ろで腕を組んで真っ暗な中空を見つめている理と違い、玖美奈は理の肩に頭を乗せるように既に寝入っている。それ故、この二人が情事に耽っていたのかは、本人たちにしか分からない。
(……桐条の方でもアイツが再び姿を現したことを確認したって言ってたな。本当なら僕が姉さんと同じ学校に行くはずだったのに)
理の中に渦巻く感情は憎悪と憤怒。過去の自分を知る者から見たという意味で、自分が本来いるべき場所を奪い、再び己の邪魔をするかのように姿を現した〝有里湊〟という存在がとにかく疎ましかった。
相手が現れなければ、自分も姉と同じ月光館学園に通い、奪われた場所を徐々に取り戻すことが出来るはずだった。
桐条武治は湊に恐れを抱いているため、遺伝子レベルで同一である自分に対しても警戒するだろうが、その娘の桐条美鶴が相手ならば違う。
影時間に対する適性数値を見せられ、幾月の言葉を簡単に信じて今も健気にコンタクトを取ろうとしているのだ。何を思って湊が接触を拒んでいるのかは分からないが、自分ならば話を聞いて徐々に信頼関係を築き仲間になることも出来た。
そうなれば、桐条もここ数年で湊にも変化が起こって丸くなったのだろうと、勝手に警戒を解いてかつてのように接してきたかもしれない。
(それなのに、アイツはまた僕から居場所を奪った)
時はもう戻らない。理が姉と一緒に考えたプランは全て潰えた。
話によれば、湊は岳羽詠一朗の娘であるゆかりとも交流を持っていると聞く。そのこともまた、理には耐えがたい怒りを感じさせる。
(おじさんがゆかりちゃんを任せたのは僕だ。仲良くしてやって欲しい、僕みたいな強い人間が守ってくれたら安心だって、おじさんが

言ったんだ）
世界で初めて自らの力のみでペルソナに目覚めた少年・ナギリヤクモ。
だが、ムーンライトブリッジでの事故から目覚めぬ少年に業を煮やし、その血と細胞から一人の少年が生み出された。
投薬で成長を促進させオリジナルと同じ年の頃になってから、密かにエルゴ研にいたオリジナルと入れ替え、オリジナルは桐条の金を一部横領して建てたこの研究所へと移される。
幾月が立てていた当初の計画では、第二・第三の人工ペルソナ使いを生み出し研究を続けながら、オリジナルが目覚めるのを待ち。目覚めた後は事情を説明して自身の研究に協力させ、滞っていた研究が爆発的に進み、功績からエルゴ研の主任に納まるはずだった。
そう、そこまで計画を立てていたというのに、先に目覚めた者はどういう訳かオリジナルの記憶を引き継いでいた。
その点に関して、人の思い出などは脳だけでなく細胞一つ一つに記憶されているという、〝細胞記憶〟という仮説もあるため、元となった細胞から情報を取り出しクローンの脳へ自己の記憶として蓄えられたという可能性が一つ。
また、クローンの安定化のために生まれた後にオリジナルの血液を輸血した事で、臓器移植をした者が臓器の元の持ち主の記憶を一部引き継ぐ現象である〝記憶転移〟が起こったのかもしれないと、幾月は両方の可能性を玖美奈と理に話した。
さらに、デスが理ではなく湊に内包されている事に関しては、（アイギスは僕を死なせないようにデスを封印したから、まだ不完全な技術で生まれたクローンを死なせまいと、生物として弱いアイツに移動してしまったのではと幾月さんは推測していた。確かに可能性としてはそれが一番高いだろう）
つまり、アイギスの籠めた〝八雲を死なせない〟という想いが、クローンにも働いたのではと幾月は話している。
デスがそのまま自分の中にいれば、幾月や姉の助けになれた。
しかし、目覚めたときにデスを内包していたのは湊だったため、そ

れもまた理が湊を恨む理由となっていたのだった。
理は組んでいた腕を解くと、左腕で姉の肩を抱きよせ、右手で枕元に置かれた召喚器を手に取りこめかみに当てる。
そして、慣れた仕草で引き金を引き、どこかアイギスを彷彿とさせる金色の髪に赤い身体の吟遊詩人を呼び出した。
デスを宿した恩恵か、オルフェウスは新たな力を手に入れていた。そのスキルの名は〝勝利の雄叫び〟。
完全に死んだ状態からの蘇生は出来ないが、かなりの重傷だろうと、理は凄まじい速度で治癒する事が出来る。
治癒速度で勝る理、心臓を破壊されようと蘇生する湊、己の存在を賭けて相見えるときを想い、理は自身のペルソナに声をかける。
「……僕は自分の存在を取り戻す。だから、力を貸してくれオルフェウス」
《……》
理の言葉にオルフェウスは静かに頷いた。

第四十三話　前篇　地下交戦―壊し屋―

――ベルベットルーム

時の流れの違う世界に存在する青い部屋。今なお上昇を続けるその場所で、人間に限りなく近い人形の老人が山札から引いたカードを机に広げていた。

裏の図柄を見せた状態で広げられたカードを順に捲って行く。どうやらタロットで占いをしているようだ。

「……ふむ、これは興味深い」

「何か出ましたか？」

呟いた老人にベルボーイの従者が尋ねる。姉たちと違い、彼はタロットの札の名前は言えても占いの方法や、札から結果を読みとる事は出来ない。

そのため、何がそんなにも興味を引いたのかと思ったのだが、部屋の主人たるイゴールはいつも通り思わせぶりに語るだけだった。

「満月が近いため、あの方の血が騒ぐということだろう。フッフッフ、やはり此度のお客人は実に興味深い」

「は、はぁ……」

戸惑いの表情を浮かべるテオドアに対し、不気味に笑うイゴールの視線の先には、逆位置の〝戦車〟のカードが置かれていた。

7月19日（火）

午前――喫茶店〝フェルメール〟

夏休みが目前に迫ったある日、湊は午前中から仕事の内容を聞くためフェルメールに向かっていた。

基本的に学校のある時間はそちらを優先することにしているが、依頼内容や報酬によっては学校を休んで仕事に向かう事もしばしばある。

そういった日には、体育をいつも見学していることにより、密かに病弱なのではと思っている部活メンバーや佐久間から体調を気遣うメールが送られてくる。だが、仕事中はプライベート用の携帯はマフ

ラーに仕舞うことにしているため、返信は夜遅くか学校で会った時にしていた。
そうして、店の前に到着すると周囲に探知をかけて尾行がいないことを確認して中へ入る。
今日は、事前に依頼内容も報酬も聞いていない特殊なパターンであり、やってきてカウンターに座ると、奥で新聞を読んでいたイリスに声をかけた。
「用件は？」
「普通、会ったら挨拶が先だろうが」
新聞から顔を上げ、挨拶も無しに尋ねてきた湊を呆れた様子で諌めると、イリスは紅茶のカップに口をつけてじとっとした視線を送ってきた。
一見、湊は知的で寡黙な美少年のように見えるが、その内面は佐久間とは違った方向に常識を欠如しており、真面目に相手をすると疲れるというのがゆかりの談である。
イリスもそういったことは長年の付き合いで理解していて、将来苦労しないで済むようにと普段から常識や良識を教えているのだが、残念ながらそう簡単には行かないようだ。
「〝おはようございます。イリスおばさん〟」
「よーし、手を頭の後ろで組んで背中を向けろ。景気付けに一発殺してやる」
「お、おいおい、爽やかな夏の朝にスプラッタはやめてくれ。前に依頼人をボコボコにしたときだって掃除が大変だったんだぞ」
腰から拳銃を抜いて構えたイリスを見て、湊のコーヒーを用意していた五代が非難の視線を向ける。すると、イリスは銃を仕舞ったが、テーブルの下にある足が床板をタンタンと叩いていることから、年齢のことでからかった相手をまだ許していないらしい。
けれど、五代が言ったように、イリスと湊は先月ここへやってきた依頼人をボコボコにのしてインテリアを破壊し、さらに床や壁を相手が鼻や口から出した血で汚したばかり。
相手を痛めつけた理由は、現金か小切手で支払う約束の報酬を売れ

ば大金になる違法薬物で払おうとしたためで、五代も契約違反の上に二人を仕事屋から密売人に落とすような真似を働こうとした相手が悪いとは思っている。

だが、それで店内で暴れて店に被害を出されてはたまったものではない。二人は仕事だけでなく家事も人並み程度にこなせるが、仕事があるからと片付けは丸投げしていった。

故に、再び自分が片付ける羽目になるのは御免だと止めたのである。

銃を収めたことで店内の平和が確保されると、五代は湊にコーヒーとサンドウィッチを渡して話しかけた。

「はい、小狼君。それで用事なんだけどね。かなり高額の依頼が協会経由でまわって来たんだ。相手は偶然にも日本にやってきているし。どうかなと思って呼んだんだけど、話しだけでも聞いてみるかい？」

情報屋である五代の言った〝協会〟とは正式名称〝地下協会〟という、裏に限らず様々な情報を取り扱い、世界中に支部と組合員を存在させている中立組織のことだ。五代はそこの組合員となっていて、組合仲間とやり取りをして世界中の情報を仕入れている。

通称は協会やギルドと呼ばれており、主な仕事は大きく分けると三つ。一つは情報屋、一つは仲介屋、そして最後の一つは裏懸賞金の手配だ。

裏懸賞金はその名の通りに公に出来ない懸賞金のことで、国際指名手配などとは違い一般に公表されることはなく、こちらは二通りの掛け方がある。

一つは国聯（こくれん）や国など公的な組織からの正式な依頼。これは主にテロリストや狂人が対象になる方法で、世界にとって脅威であると認識され、人類や市民の敵であるとして排除すべきだとみなされた時に為される。

無論、世界や市民の敵であるため国際指名手配もかかるが、進んで排除しようという者を募るために、この場合は指名手配よりも高額で懸賞金をかけている。

そしてもう一つは、巨大な組織からの報奨金を預かって付けられる

という、達成後に契約する一種の依頼形式である。
こちらは先払いで地下協会に報奨金が預けられ、撤回するときには違約金として預けていた金がそのまま地下協会にプールされるようになっている。
だが、どちらも自分たちでは手に負えないので助けてくださいと公表していることになり、そういった意味では組織としての敗北宣言に等しいため、余程のことがない限り掛けられることは先ずない。
もっとも、その分、大金を手に入れようと不特定多数の人間が対象を殺しにかかるため、普通の依頼よりも確実性だけはあった。
「……協会経由の依頼は嫌いだ。死肉にたかるハゲワシこそ殺したくなる」
「あ、あはは、組合員としては耳が痛いよ」
今回の依頼は単に協会が仲介しただけのため、裏懸賞金のときのように獲物を取りに来た他の人間とブッキングする事はほぼない。
ブッキングしたところで、二人は譲って帰るような性格はしていないが、湊が協会を嫌っている理由は、安全な場所にいながらパイプ役になった程度で金を貰っているからだ。
協会のおかげで回っている物もあるだろうが、逆に協会があるからこそ簡単に依頼が出回っていることも事実。己を殺されても仕方がないクズと見なしながらも、自分なりの基準で同類を狩っている湊にすれば、戦火を広げる者も同類と見なす事はなにもおかしくはなかった。
そんなやつらの事を考え、瞳を蒼くしている湊を見て五代が苦笑して表情を引き攣らせていると、席を立ってカウンターまでやってきたイリスが湊の隣に腰を下ろして口を開く。
「それなら、海の向こうにある協会本部にペルソナの一撃でも叩きこめ。大都市一つを更地に出来るんなら、たぶん成功するだろうさ。だが、田舎町一つを焦土がやっとならやめときな。報復は世界が相手になるぞ」
「地球上に存在する全ての命と俺個人の命は等価値だ。相手は知らないだろうが、死なば諸共だよ」

「ほんっとに、アンタは可愛くないねぇ。それが事実だってことがさらにムカつくよ」
言いながらイリスは食事中の相手の頭をワシワシと無遠慮に撫でつける。
しかし、湊は慣れた様子でこぼさずに食事を続けていることから、これが二人とっては珍しくもないコミュニケーションであることが伺えた。
彼女は苦笑気味に湊を見つめているが、相手が背負わされている運命については既に知っている。
たった一人の少年の完全な死によって、世界に滅びが訪れる。
代わりの封印の器が存在すればそれは免れるが、シャドウの王は百や千ではきかぬ人間の精神の融合体であり。そんなものを自身の内に宿して無事で済む方がおかしい。
本来ならばまるで信じられるような内容ではないが、二人は適性を有していないなりに影時間の存在を違和感として認識できるには至っている。
そして、ペルソナという物理的干渉力を持った超常の存在を知ってしまえば、桜から聞かされた湊の持つ特別な役割に関してもある程度の理解を示す事が出来た。
「ジャン、コイツに話してやれよ。まぁ、多分、受けるだろうがな」
「ああ、ターゲットの名前はアロイス・ボーデヴィッヒ。違法な臓器売買をメインに、医療関係でかなりの稼ぎを持っている人物だよ。業種からも分かる通り、各国の要人が彼に頼ることもあるけど、商品のストックを用意するために人を攫ったり殺したりもしてるからね。依頼人はその被害者遺族ってわけさ」
言いながらカウンターの上に依頼書が置かれると、湊はパンの粉がついた指を手拭きで綺麗にしてから手に取り目を通す。
ターゲットは名前からしてドイツ系と思われる白人の男一人。近辺警護しているガードは六人で全員が銃火器を装備している。
だが、殺すのはターゲットのみなので、遠距離から狙撃したって構わない。死体の確認も不要とのことなので、協会経由で事実確認をさ

せれば問題ないだろう。
成功報酬は三十万米ドル。対象を殺すために掛かった経費は自己負担だが、戦闘力を有していないターゲット一人を殺すにしてはかなりの高額だと言えた。
そして、見終わった依頼書を五代に返しながら湊は呟く。
「……随分と豪勢だな。警護の人間たちの前職は警官やマフィアだが、どいつも半端者として弾かれたような人間だ」
「そうだね。警護の人間を殺してからだって、君なら簡単にターゲットを狩れるはずさ。まぁ、日本っていう場所がハンデになってしまうけど、他所に持って行かれるよりは良いだろ？」
コーヒーのお代わりを注ぎ、柔らかく笑いながら五代は湊を見つめる。
日本がハンデと言ったのは、この国が一般人に銃の携帯を許可していないため、街中での銃撃戦などになった場合に騒ぎが大きくなってしまうからだ。
さらに言うなら、都会ならばそこら中に防犯カメラがつけられているため、それを避けて動くのは困難だという理由も挙げられる。
影時間ならば両方の条件をクリア出来るが、スキルアップを目的にしている仕事で楽をしてもしょうがない。故に、湊は仕事をあくまで現実の時間内で行うことにしていた。
「……おばさん」
「殺すぞ。いつまでも、同じネタを引っ張ってるんじゃない。……んで、アタシは別に構わないよ。地形を把握しないと分からないが、逃走の待ち伏せ型にでもしようか。調査に今日と明日で決行は二日後から五日の内で予定を組む」
「了解。学校は……別に良いか。どうせ後は夏休みに向けての連絡程度しかない」
「ばーか、そっちは真面目に行け。あんまり親に心配かけんな」
「あはは、そうだね。仕事を紹介した僕が桜さんに怒られてしまうし、通えるなら行った方が良い」
注意され頭を小突く様子を見ながら、五代は依頼書に判を押してギ

ルドにメールを送る。
少年の両親が既に死んでいることは知っているが、二人は桜を湊とチドリの母親として認識している。桜本人は親代わりにもなれていないと言っていても、出産経験もなく自身の母親が幼い頃に亡くなっていることを考えれば立派に親の務めを果たしているだろう。
そんな努力家で子どもたち二人を真剣に想っている彼女に心配をかけるのはよくない。大人たちから諌められると、湊は溜め息を吐きながら頷いて、朝食代をカウンターに置くとイリスと共に調査のため店を後にした。

7月21日（木）
午後――横浜
依頼を受けて二日後、湊とイリスはターゲットの居場所と数日中の予定を突き止めていた。
殺すために設定した日取りは四日間あるが、そのどれもが場所を考えると中々に難易度が高かったため、二人はどうせ難しさが変わらないなら近場にしようと最も近い初日を選んだ。
決行は深夜になってからなので時間はまだある。
遠くに観覧車の見える海に近い駐車場に、偽装のナンバープレートを取り付けたシルバーのＳＬＲマクラーレンを停め、二人は食事を取りながら今日の段取りを改めて確認していた。
「タピオカってグロくないか？　似た外見でも黒豆は食えるけど、タピオカは何か駄目だわ。生理的に受け付けない。日本だと梅雨とか今ぐらいの季節にたまに溝で見るしな」
「……勝手に買って渡してきたくせに、よくそんな事が言えるな」
「まぁ、来たついでだしな。名物なら試した方が良いだろ？　ほら、こっちの点心も食えって」
モバイルパソコンに五代作のマップソフトを立ち上げ、ターゲットの宿泊しているホテルと周辺の地形を確認していた湊に、運転席に座っているイリスが箸で胡麻団子を摘んで口に運んでやる。
直前に相手が食べ物を両生類の卵に例えていたことで、何を言って

いるんだと呆れた表情を見せていたにもかかわらず、素直に口を開けて食べさせて貰いながらパソコンのキーを叩き続ける。
　そんな大人びた少年の素直な反応を見て優しげに目を細めつつ、イリスは大量に買って来た点心の一つを箸で摘んで自分の口に放り込んだ。
「んあ、あんまり味しないなこれ」
「ポン酢とからしが付いてただろ。そのままでも食べれるけど、好みに合わせて自分でつけろ」
「ああ、そういやあったな。んで、地下駐車場はどうだ？　乱戦になったら他のやつの車が爆発するかもしれないし、逃走経路は最低六個くらい用意しておかないときついぞ」
　横から画面を覗き見て尋ねるイリス。すると、湊は人と同じ視点の画像の隣に上から見た見取り図を並べ、それぞれの場所がかなり離れているが経路は六つ以上存在する事を知らせた。
　それを理解すると頷いて返し、イリスは笑顔のまま湊の口元にポン酢をつけた焼売を運び、話を続ける。
「これだけあれば各個で逃げられるな。車はアタシが使うけど、アンタは一人で逃げられそうか？」
「……アルファ部隊や特殊空挺部隊に囲まれたら難しいな」
「ぼーか、せめて日本の組織で例えろ。つか、何の影響だ、それ？　アンタ、外国の部隊とかに興味無かっただろ」
　このように軽いノリで話してはいるものの、失敗すれば姿を見られることや警察に捕まることも十分にあり得る。
　イリスは敵を逃走に追い込むだけなので逃げる事は容易いが、湊は待ち伏せして敵を叩くためどうしても逃げ遅れる可能性があるのだ。
　そして、湊の口から外国の特殊部隊の名称が出てきたことに、イリスは軽く驚きを感じながら真面目にやれと頭を小突くと、湊は頭を押さえながら自分が外国の部隊名を言った理由を話した。
「チドリが銃を使わせない反動か、最近になってよく銃の出てくる漫画やアニメを見てるんだ。主人公の使ってる銃の現物がみたいとかって言ってくることもある」

湊は呆れたような口ぶりでパソコンを閉じると、イリスがテーブル代わり使っている膝の上に置いたボードから、大量に乗った料理を手にとって食事を始める。

チドリが一番初めに見ていた作品は何だったか知らないが、最近になって見ていたのは大泥棒の孫の出てくるアニメや、突撃銃で狙撃をする殺し屋のアニメだった。

相手はアニメを見終わるなり、ワルサーＰ３８やＭ１６を見せて欲しいと言って湊の部屋に入ってきたが、残念ながら刃物は多数揃えてはいても、銃器マニアではないので湊は自分が使う銃以外はほとんど買う事はない。

そもそも、生産の終わっているワルサーＰ３８は一挺で五万円はするし、突撃銃であるＭ１６も三万円はする。使いもせずコレクションする趣味もないのであれば、仕舞っておくだけのものにそんな金を払うのは馬鹿みたいだと買うことも断った。

相手はそれで納得して帰るかと思いきや、ならば、Ｓ＆Ｗ　Ｍ１９という銃は持っているかと聞いてきた。これはコンバットマグナムと呼ばれる回転式拳銃であり、大泥棒の孫の相棒が使っている銃である。

そして、湊もこちらは所持していた。普段はコルトガバメントのグリップをコルトディフェンダーのようにカスタムした銃を使っているが、状況によって使い分けるため回転式拳銃として威力のあるＳ＆Ｗ　Ｍ１９とＭ２９の二挺も持っている。

だが、銃を使わせない事にしているチドリに、持っているからと見せるだけでなく触れさせるのはどうだろうかと悩んだ。

結局、最後は己の部屋内で見るのであればと弾を抜いてから見せたが、チドリは少し観察すると去って行ったので、単に作品をより深く知るため実物を見てみたかったのだろうと納得する事にした。

「あの子が銃をねぇ……ワルサーＰＰＫとかか？」

「００７は見てない。チドリがいうには〝狼の目（ウルフ・アイ）〟は嫌いじゃないけど、軟派なオッサンは趣味じゃないらしい」

（狼の目ってアンバーとか金の瞳のことだよな。コイツ、マジで意味

分かってないのか？）
　ジェームズ・ボンド役の俳優は必ずしも狼の目と呼ばれる色ではなかった。それなのにチドリが俗称を使って色を指定して言ってきた意味を理解していない湊に、イリスは呆れを通り越して哀れだと感じる。
　そして、そんな遠回し過ぎる物言いで健気なアピールをした幼い少女に、人生の先輩である同性としてエールを送りたい気持ちで胸がいっぱいになった。
＊＊＊
　深夜、既に部屋の明かりも消えて、街のほとんどが寝静まっている。
　そんな時間、アロイスはホテルのスイートルームに部屋を取って休んでいた。真下のフロアにいくつかボディガード用に部屋を取り、時間交代で自身の部屋の前も見張らせている。
　だが、最強の護衛である仙道だけは部屋のリビングルームのソファーで休ませている。相手は人であって人ではない。銃弾を至近距離で躱し、戦斧を蹴りで砕き、拳の一撃で心臓を穿つ。
　そんな真似が可能な者など、この島国はおろか大陸にもそうはいない。故に、アロイスは心から安心して睡眠を取っていたのだ。そう――
――無粋な侵入者が窓ガラスの割れる音と共に現れるまでは。
「ひやぁっ!?　な、何事だ!?」
「アロイス、無事か！」
　窓ガラスが割れた音でアロイスが飛び起きると同時、寝室のドアを蹴り破って仙道が入ってくる。
　室内に目を凝らすと、割れた窓の近くに帽子とゴーグルで顔を隠した女と思われる体型の侵入者が立っていた。
　右手には自動拳銃、そして、左手にはＭ６７手榴弾（アップル・グレネード）がある。確認した仙道はアロイスに向かって叫びながら駆けていた。
「ベッドの脇に隠れろっ!!」
「うぎゃーっ!?」
　ピンの抜かれた手榴弾がベッドに向かって投げられる。
　相手はワイヤーを使って窓の外に出て上へと昇って行ったが、爆発

までは約四秒。
入り口からベッドに辿り着くとアロイスをベッドの脇に放り投げ、キングサイズのベッドを蹴りでひっくり返し窓の外に飛ばし、さらに自身の身で上に覆い被さる形でアロイスを守る。
直後、ベッドが窓から飛び出すかどうかというタイミングで爆炎が広がり炸裂音が聞こえた。
シーツや毛布が燃えた焦げくさい臭いの中に、燃焼した火薬の臭いも混ざっている。だが、散らばった殺傷能力のある破片は、高級で丈夫なベッドを貫通しなかったようで、二人はどうにか無事だった。
「アロイス、貴様、走れるか？　表の人間と共に先に行け。この女、あやつらの装備では相手など無理だ」
素早く身体を起こし、仙道はアロイスを逃がそうとする。しかし、怒りで頭に血が上っている相手は、銃を持った敵が部屋に戻ってきたというのに立ち上がり怒鳴りつけていた。
「ど、どこの人間だ！　貴様、私が誰か分かっているのか！」
「危ないねぇ、あんなデカい物を下に落とすなんて死人が出るところだ。んで、オッサン。そりゃ、分かって狙ってるに決まってるだろ。ビールとソーセージでよく肥えたその腹を見間違える訳がない」
言いながら銃を構え女が撃ってきた。咄嗟にアロイスは蹲るが、その前に仙道が踊り出て銃弾から身体を張って雇い主を守った。
コトン、と小さな音を立てて銃弾が床に落ちる。外した訳でも、貫通した訳でもない。銃弾は確かに仙道のカンフー服の腰の辺りに命中し、そこで止まっていた。
自身の放った弾丸が床を転がったのを見て、女は忌々しそうに舌を一度鳴らす。
「チッ……防弾繊維か、暑い上に重いっていうのに普段から着てるとはね。おい、赤毛。そいつは刃は通すのか？」
効かないと分かりながらも、仙道が自分の方へ来ないように銃で牽制し、窓枠まで下がりながら女は尋ねる。
腕を顔の前で交差して防御姿勢を取っている仙道は、歯を見せるように獰猛に嗤いながら返した。

「戯(たわ)け、敵に己の内を晒すは愚の骨頂ぞ。知りたくば、わしと拳を交えるがよい」
「いやだね。女には手を上げるなって母親に習わなかったかチャイニーズ？」
「フハハハッ！　残念だが、わしは日本人だ。この服はわしの戦装束なだけよ」
「ハンッ、愚の骨頂とか言って口が達者だなぁエセ侍。赤毛の大男でカンフー使いに〝戦闘狂い〟って言えば、裏界じゃ有名だろうさ。そんな化け物と戦う気はないよ。そこでチビってるオヤジと一緒に死んどきな！」
「くっ!?」
　窓から去っていく直前、女は何かのボトルを放り投げ、空中にあったそれを銃で撃ち抜いた。
　容器が割れ中に入っていた液体が散らばると、撃ち抜かれた際に引火した炎を燃え拡がらせる。
　鼻を突く特有の臭い、そして、引火の速度から考えるに、液体の正体はガソリン。先に火を点けて投げるという布で栓をするタイプでなかったのは、初めから撃ち抜くことで引火させられると踏んでいたためだろう。携帯性と安全性を考えるのであれば、しっかりと中身が漏れないよう栓をした方が良いに決まっている。
　初撃が室内でのＭ６７手榴弾の投擲なんて馬鹿げた真似だったので、どこか頭のネジでも吹っ飛んでいるように思っていたが、自分たちをここに居させないため部屋に火を放って逃げる辺りに相手の狡猾さが伺えた。
　このまま部屋に留まれば焼け死んでしまう。そんな目に遭うのは御免だと、仙道はアロイスを走らせ部屋を出ていった。
　そして、ワイヤーで屋上へと昇って行った女、イリス・ダランベールはスイッチが入りっぱなしになっていたインカムに話しかけ、別の場所で待機している相棒と連絡を取る。
「聞こえるか、小狼。相手が部屋を出ていった。Ｂ地点(ポイント)の仕掛けを作動させて逃げ道を誘導する」

《了解。そっちの動きは把握してる。護衛含め対象の人数は八名、ホテル側が火災に気付いてエレベーターを使用しているから、誘導は上手くいくだろう。地下駐車場で待機を続けるが、敵の動きによっては追跡を開始する》
「ＯＫ。だが、報告書に載ってなかったが敵に拙いヤツがいる。赤毛の大男だ。アイツはアンタんのとこの渡瀬以上の壊し屋。ターゲットを殺したら相手をしようとせずに逃げろ」
《……ターゲット接近。通信はまた終了後に》
　返事をする前に湊からの通信が切れた。話をしっかりと聞いていたのかどうかも分からない。
「……満月か。嫌な予感がするな」
　背後に輝く大きな月を見つめると、胸に妙なざわつきを覚えた。
　これが予想以上の敵の出現を目にして気が昂っているというだけなら良い。
　しかし、仮にこれが〝味方〟に対して抱いた感情だったならば……。
「急ぐか」
　ワイヤーを巻き終え装備を確認すると、イリスは予定していた逃走経路ではなく、自分たちがターゲットを仕留める場所として選んだ地下駐車場を目指した。
＊＊＊
　ホテルから少し歩いた場所にあるホテル駐車場の地下フロア。そこに護衛とともにやってきたアロイスが湊を見るなり叫んだ。
「っ!?　ミスターマコト!」
　地下で待機していた湊が柱の陰から姿を現し、腰につけた銃に手をかけながら歩み寄ると、僅かな驚きを見せアロイスが微笑む。
　護衛たちも向けてきた銃口を下げたことを不思議に思いながらも、相手が無抵抗で居てくれるのならばと考え、左手で車にセットしていた爆弾の遠隔操作スイッチを押した。
『ぐあーっ!?』
　地下駐車場という閉塞された空間の空気が震える。ごうごうと炎

と黒煙が立ち込め、車に乗り込もうとしていた男たちに引火し、生きたまま顔を、身体を焼き焦がしてゆく。
吹き飛び天井や柱にぶつかり動かなくなった者、車のパイプのようなパーツが腹部を貫きぐったりとしている者など、そんな様子を見つめていた心優しい湊は、火を消そうと床を転がっている背の低い男を視界に捉えると、相手を楽にしてやるため躊躇いなく引き金を引いた。
――――タンッ
反響がいつまでも残るような高い音が耳に届く。その数瞬後、転げまわっていた男は、ぴくりとも動かなくなっていた。
「……雇い主を庇う素振りも見せない護衛がいるとはな」
車が爆破される直前、他のどの護衛も反応出来ていなかった中でただ一人だけ、距離を取り、柱の陰に身を隠した者がいた。
二メートル近い体躯の巨漢。しかし、アメリカンフットボールの選手のような分厚い筋肉の鎧で身を固めているようには見えない。
極限まで絞り込まれ、筋肉によって動きを阻害しないよう考えられた武のための肉体。黒いカンフー服に身を包んだ赤毛の男・仙道弥勒。
「フッハッハッハ！　あやつは遅かれ早かれ死ぬ定めであった。何せ、ナギリに狙われたのだからな！」
「っ、何か知っているのか？」
「うむ、よい眼だな。鬼に相応しい、殺しの気配を纏っている。わしは仙道弥勒。遠縁の者か知らぬがナギリの末裔よ、名を聞かせて貰おうか！」
三十メートルほどの距離は開いているが、銃を持っている者の前に仙道は堂々と姿を現した。
相手が何を持って自身の捨てた名を当ててきたのかは分からない。だが、自分の名を知っている者を生かしておけば、そこから自分の情報が広まり桔梗組やチドリに危害が及ぶ可能性がある。
チドリの言った〝狼の瞳〟を〝死の魔眼〟へと変貌させ、左手のスイッチをマフラーへ仕舞うと、湊は名乗り返さず刃渡り十八センチの

ファイティングナイフを銃と共に構えた。
＊＊＊
一言で言えば、仙道の強さは次元が違っていた。
「こんな物ではあるまいナギリよ！」
放たれた四つの弾丸を走りながら身体を左右に揺らすだけで回避する。
距離が詰まったことで、湊は銃をホルスターに仕舞い、逆手で持ったナイフの切りつけを囮に右手で川掌（せんしょう）による突きを放つが、仙道は笑ったまま上体を捻りナイフを避けながら、湊の手の平に冲捶の拳をぶつけ押し返す。
だが、力負けによって下がる勢いを利用し、頭を下げつつ左肩を入れるように捻って、後ろ足で敵の後頭部を蹴りつけた。
「ほほう、ジークンドーも使えるのか！」
しかし、今度も仙道は楽しげに笑い、聴頸を使い見向きもせず、右手の纏（てん）で攻撃を弾き逸らす。
攻撃を再び防がれた湊は内心で舌打ちをするが、弾かれた事で、空いている右手を地面につき側転のような形で距離を取る。
側転からバック転に切り替えた際に、腰に十個付けたプッシュダガーの半分を投げつけ敵が接近するのを妨害する。
だが、相手の服は防弾防刃繊維の特殊装備。手に持っているナイフで本気で突きを放っても貫ける事はないため、それ以下の威力の刃物を投げるのなど気休めでしかない。
現に、仙道は顔に飛んでくるナイフだけは頭を傾け避けたが、他は無視して突進を続けてきた。
（なんだコイツ、速くないのに攻撃が通らない。それにあの服が面倒だ）
蒼い瞳で相手を観察しながらその間も湊は距離を開けるよう、側転やバック転を続けていた。
そして、わずかにでも距離が開いたことで銃弾を横並びになるよう三発放つ。
「大した身軽さだ！」

仙道はそれらを腕で防ぎ、震脚で一歩一歩が飛ぶように一気に距離を詰めてきた。
アロイスを殺した際に一発使っていたので、弾倉は今ので空だ。素早く銃をマフラーに仕舞い、ナイフを右手に持ち替え接近してきた敵へと攻撃に転じる。
助走による威力の上乗せを図る。単純な重量と筋力の差はどうしても埋め難いが、返し技ならば敵は勝手に自爆する。
相手の右手に力が籠められるのを見ながら、それに合わせるように湊も相手と同時に渾身の震脚で床を踏み砕き、威力を乗せた肘の一撃と拳の一撃とを正面からぶつけあった。
「がぁぁぁぁぁっ!?」
角度、タイミング、そして威力。返し技としてはどれも申し分なかった。
しかし、硬度の点においても敗北していたのは湊の方であった。
至近距離で爆発に巻き込まれたかのような衝撃、骨が砕け筋肉が断裂する音が腕を伝って耳に届く。
持っていたナイフも握っていられず取り落とし、湊は無様に固い地面を転がり吹き飛んだ。
勢いのついたまま転がり、その先に駐車してあったシルバーのワゴン車のナンバープレートに衝突し、歪ませながらも何とか止まる。
「カーカッカッカ！　中々に響いた。いや、その若さで大したものだ。眉つばかと思いきや、噂に違わぬ才の塊よ！」
背中をぶつけ息を詰まらせている湊目がけて、仙道は直ぐに追撃のため駆け出す。拳を見ると肘がぶつかったと思われる個所から血をわずかに流していた。
金属の壁を殴っても傷一つついていなかった相手に、血を流させたことは大したものだが、面と点でぶつかり片腕を代償にしたにはあまりに小さな戦果だった。
（腕は……完全に関節が砕けてる。ファルロスの蘇生を待ってる時間はない。左手で銃を、いや、銃は防がれる。刀は、それも無駄だ）
痛みで脂汗を流しながら、歯を食いしばり立ち上がろうとする湊。

敵は己の実力を見る事を楽しんでいる節がある。すぐに追撃に動いているが、殺す気ではなく潰す気であることにまだ救いがある。やりようによっては虚を突いて殺せるかもしれない。
様々な方法を頭の中でシミュレートし、その度に相手には効かないだろうからと候補から除外し続ける。
その間に間合いが縮まり、敵は走りながら飛びあがると振り下ろした右手の平で敵を打つ劈掛拳の技を放つ。
「くっ」
バシンッ、とまるで鞭で地面を叩いたかのような鮮烈に耳に届く音が鳴る。
車を蹴って間一髪転がるように避けたが、受けていれば今ので足をやられていただろう。湊も中国武術は八極拳と劈掛拳を同時に習ったが、流石に相手も複数の拳法も学んでいるようだ。
「よくぞ躱した！　だが、反撃せねばわしは倒せんぞ！」
転がる勢いを利用して立ち上がり湊は距離を取る。先ほど来た道を戻る形になるが、痛みを我慢しながらでも速さは自分の方が上だ。
右腕を負傷したことで出来ることは限られていても、自分のことを知っている人間を生かして帰すわけにはいかない。
そうして、マフラーから姫鶴一文字を取り出すと、鞘はマフラーに戻して、左手で刀を握った。
「フゥ――――よし」
距離を開けて一気に切り返す。虚を突いた訳ではない。それでも、倒すには敵の態勢を崩す必要がある。
「む？　フフフ、フハハハハ！　負傷して尚挑む、その意気や良し！」
逃走に徹するかと思った湊が攻勢に転じようとするのを見て、相手も拳を強く握りしめ愉快そうに笑う。
両者は相手に向かって地を蹴り続ける。爆発した車の火が燃え移り、隣の車も爆発した。だが、二人はお互いの姿しか瞳に映していない。
関節の潰れた右腕を柄に添えて刃を寝かせ構える。両手の拳を握り腰溜めに構える。

あと、十メートル、七メートル、五メートル、そこで湊は身体を地面すれすれまで倒し、倒れる勢いも乗せた状態から地面を一度蹴って斬り上げを放った。
「はあっ！」
「フンッ!!」
しかし、刃は弾かれる。仙道は身体を独楽のように回転させ、腕を使い攻撃を往なし流す。
武器と共に身体の流された湊は追撃も防御も出来ない。そこへ、仙道のもう一本の剛腕が遠心力で威力を増し、鉄の鞭のように湊の背中を強かに打ちつけた
「らあっ！」
かのように見えた。
刀を逸らしコンマ以下の速度で放たれた鉄鞭の如き追撃を、来る前に身体を捻っていた湊は躱すだけでなく、空いていた脇腹に受け流されたことで不完全に残っていた勢いを乗せた膝蹴りを叩き込んでいた。
特殊な繊維を編んで作ったカンフー服は、銃弾や刃は受けられても、流石に鈍器で殴ったかのような打撃までは防ぐことは出ない。
似たような物（黒いマフラー）を持っている湊はその事を理解し、自身の反射神経のみを頼りに懐へ潜り込み攻撃を通す事に成功した。
死の線を切れればそれが最高の威力を発揮するが、残念ながら息もつかせぬ攻防の最中で、狙った部位を斬りつけるのは至難の業だ。
故に、湊はその隙を突くために敵を鈍らせる。防御姿勢を取ることよりも敵に傷を与えることを狙い。背中から倒れる際に刀を敵に向けて投げつけた。
「――――フッ」
「ぐぬっ……!!」
投擲された刀は躱しきれなかった仙道の右の頬をかすり、小さな傷をつけた。出来たばかりの傷がうっすらと染まると、すぐに鮮血が流れ出した。
戦闘中に血を流した相手の反応は大きく分けて二つ。一つは戦意

を大きく削がれ集中を欠くタイプ。一つは血を見て興奮を覚え戦意をさらに高揚させるタイプ。
そして、仙道は後者だった。
「はぁっ!!」
「がはっ」
血を見た仙道は嬉しそうに口元を吊り上げ、倒れようとしている湊を不安定な体勢から蹴りあげた。
蹴りは右の脇腹と折れている腕にぶつかり、湊は転がりながら倒れた。
しかも、それで攻撃は終わらない。
「ふはは、ふはははは!」
「――――うぐぁっ」
仰向けに倒れた相手に駆け寄り、その腹を胸まで振り上げた震脚で踏みつける。
折れた部位を蹴られたことで思考が一瞬止まっていた湊は反応できず、骨と内臓を文字通りに踏み潰された。
内臓を潰されたことで、湊の口からは赤黒い血が大量に吐き出される。
だが、ナギリは腕を刎ねようが、内臓がはみ出ていようが戦い続ける種族だと聞いた。
それ故、仙道は湊のマフラーを掴んで無理矢理に起こすと、柱に背を預けるように立たせ、渾身の一撃を頭部に向けて放った。
「はあぁぁぁぁぁっっ!!」
決して速くはない。だが、震脚による威力の上乗せ、体重の移動、腰の回転、対象のさらに先にある物体を打ち抜く心構え、それらを用いた発勁で目に見える以上の威力を実現し、敵を確実に屠る凶拳を放つ。
そして、ぐちゃり、と水分を含んだモノが潰れた、酷く耳に残る音が地下駐車場に響いた。

第四十四話　後篇　地下交戦―不完全な獣―

――ホテル・地下駐車場

「小狼っ!!」

バンッ、と大きな音を立てながら非常口の扉を開いてイリスが現れる。いくら連絡をしても通信に出ない湊を心配し、騒ぎの起こっていたホテルから脱出すると、少し離れた場所にある地下駐車場まで下りてきたのだ。

近くには燃え盛る車と、その周囲に転がっている男たちの死体がある。うち一体が見覚えのある卵のような体型をしていることから、湊はターゲットを仕留めたのだろう。

だが、その依頼を終えた本人はどこにいるのだろうか？

警戒して銃を構え辺りを窺うと、拳に大量の血液を付着させた赤髪の巨漢の姿を発見した。

そして、その足元に広がる血溜まりの中に〝ソレ〟を見つけてしまった。

「……しゃ、お……らん？」

うわ言のように湊の名を呟き一歩一歩近付いてゆく。目を見開き、唇を震わせ、顔が青ざめている様子は正気を失っているようにしか見えない。

イリスは血溜まりなど依頼の中で何度も見てきた。血の臭いに顔を不快に歪めることはあっても、それ自体に恐怖を抱くことはなかった。

人としては異常であり、決して慣れていい事ではない。だが、精神に異常を来さぬよう〝慣れる〟というのは、人の死を商売に含んでいる者としてある意味で〝まとも〟だったのだ。

だが、そんな者でも、目にした身内の変わり果てた姿は、正常な思考を奪うだけの衝撃を与えるに十分だった。

右腕がひしゃげ青紫色に腫れあがり、腹部が歪に陥没している。さらに、頭部から下は全て血に濡れていた。

仮に息があっても床一面を血の海にする出血量だ。急いで病院に

担ぎ込んだところで助からぬだろう。
「オマエ……オマエぇぇぇぇぇっ!!」
腹の底から絶叫したイリスは銃を仙道に向けた。
全身の血液が沸騰しているのかと思うほど身体が熱い。視界も部分的にホワイトアウトしていて、構えた銃も腕ごと震えている。
それを理解していても感情を抑えることが出来なかった。こんな商売だ。いつ自分が殺される側に回ってもおかしくはない。
湊との仕事の中で同業者も片付けてきたし、二人揃って生きて来られたのは運が良かったに過ぎない。
だが、何故その報いを先に受けたのが少年だったのか。少年はただ少女の世界を守ろうとしていただけだ。
そのために、自らこんな血生臭い世界に堕ちたというのに、何の目的もなく人を殺した金で生きてきた自分が生き残ってしまった。
「殺すっ、絶対に殺してやるっ!!」
引き金を引くも弾丸は外れる。手先どころか腕が震えているのだ。そんなもので当たる方がおかしい。
引き金を引き切っても弾は最後まで当たらず、弾倉が空になってしまった。
「くそっ」
舌打ちをしてイリスは銃を投げ捨て予備の銃（サイドアーム）に手を伸ばす。
しかし、そこで仙道が動きを見せた。イリスが絶叫し、銃を撃ち続けても湊の前に立っていたというのに、急に後ろに跳んで構えたのだ。
頭に血が上っていても敵が怪訝な動きを見せた事は把握出来る。
手に持ったブリガディアのスライドを引き、初弾を薬室に送りこみながら相手の視線の先を追う。
とそこで、イリスはさらに驚きに目を見開いて動きを止めた。
「……小狼？」
＊＊＊
歓喜し浮き立つような気持ちで戦っていた。最後に相手を仕留める瞬間まで、久しく味わっていなかった〝死合い〟に心が躍っていた

のだ。
だが、湊はまだ自分を追い詰めるほど完成してはいなかった。
一般人の中ではまず達人の域に入っていただろう。相手の使う中華武術の型にどこか懐かしさも感じたが、一度殺してしまえば一緒だ。
壊れた物はもう動かない。鬼と呼ばれたナギリならばもしかしてとも思ったが、結局、ナギリは既に人に戻ってしまっていた。
「殺した……はずなんだがな……」
しかし、最後の一撃の瞬間、湊は満身創痍でありながら自ら拳に頭突きを合わせてきた。
岩を砕き、鉄を曲げる一撃だ。人の柔らかい骨では、衝突した瞬間に折れるか砕けてしまい。普通ならば、まず助からない。
だというのに、湊は額が割れて血を噴き出しはしたが、仙道の指をへし折り頭が砕かれる事を防いだ。
理由としては、初めに肘と拳をぶつけあった事が、骨にダメージを与えていたんだと考えられる。
その後も仙道はアドレナリンの分泌で痛みに気付かず、ヒビの入った拳で湊を攻撃し続けた。
そして、最後の瞬間、湊の頭突きで骨が折れて威力が分散し、湊の頭部を吹き飛ばす事が叶わなかったという訳だ。
故に、湊に息があることは百歩譲って認めよう。
『――――』
だが、ひしゃげていた腕が、ゴキゴキと鈍い音を立てて治ったこと。口から大量の血を吐きながら幽鬼のように立ち上がったことで見えた腹部が、何事もなかったかのように正常に膨らんでいること。その二つについてはまるで理解が追い付かない。
どんな達人であっても、このような回復速度はあり得ないし血液を失えば死ぬ。けれど、相手にはその常識が通じない。
自身の強さも人間業とは言えぬ領域にあるが、生物の域はまだ出ていないというのに、相手はその通常の生物としての域を超えている。
「フフフ……貴様、まさか真に悪鬼の類いか！」

相手の纏う異常な気配に、本能が危険を感じ全身に鳥肌が立つ。
しかし、こんな敵と相見えることは二度とないだろう。
自分を殺すことの出来るような強者と戦いたい。化け物だろうが知ったことか。欲望が本能を凌駕し、仙道は潰れていない拳を握りしめ、敵の動きに備えた。
すると、今まではぐらぐらと不安定に揺れていた湊の身体がピタリと止まった。
肩を落としだらりと垂らした腕、そのわずか上に視線を向けると、今まで俯いていた顔がゆっくりとあげられてゆく。
ギギギと油の切れた古い機械のような鈍い音がまるで聞こえてくるかと思えるほど遅い。だが、そこにあった瞳がギョロリと仙道を捉え、裂けて見えるほど口を吊り上げ嗤っていたのを見た瞬間、姿がぶれて湊がその場から消えていた。
「っ!?」
『グキャキャキャキャキャキャッ』
「くっ!?」
消えたと思った次の刹那、負傷した右腕の側面から現れた敵に身体が勝手に反応していた。
両手にそれぞれ形状の違うナイフを持ち、湊は不快な笑い声を上げながら跳びかかってきた。それを腕で弾き、空中に浮いた相手へ即座に回し蹴りを放つ。
「はぁっ!」
『ギャハハハハハッギャハハハハハッ』
だが、攻撃は空振りに終わる。
浮いた状態、それも地面から一メートルは離れていた。だというのに、湊は空中で上体を逸らし躱すと、右手に逆手で持っていたナイフを仙道に向けて射出した。
(弾道ナイフかっ!?)
柄から発射された刀身は、ぎりぎりで捻って回避した仙道の首を掠める。
湊の使ったナイフは、通称スペツナズナイフと呼ばれる、強力なス

プリングの力で刀身を射出できる奇襲向けの武器。
ただのナイフかと思いきや、あのような不安定な体勢から反撃してきた事に胆を冷やしたが、仙道は過去のどの戦いよりも、いま目の前にいる化け物との戦いを驚喜していた。
着地は転がってそのまま勢いを次の動作に利用するため隙が少ない。どういう訳か、見た目以上に武器を所持してポンポンと使い捨てている。
今も刀身を射出した柄は放り投げて、マフラーから刃が大きめのカランビットナイフを取り出し、嗤って飛び跳ねながら柱の陰に消えた。
左手には初めに取り落とした物とは種類の違うファイティングナイフを持っていたため、よくまぁ刃物ばかり集めたものだと感心するところだ。
「フハハハッ！　滾る、この歓喜に震える身体を流れる血潮の全てが滾っておる！　ナギリの鬼よ！　もっとだ。もっとわしを楽しませてくれ！」
『クキャキャキャキャキャッ』
攻撃時には不気味にずっと嗤い続けているため、現れてからは場所の特定がしやすい。
天井を伝っているダクトやパイプ、ケーブルなどを利用して移動していた湊が降ってくると、後ろに跳びのき素早く攻撃に転じる。
「ハアァァァッ！」
それは着地した相手も同様で、着地後コンマ以下の反応で仙道にナイフを構えて突進してくる。
『ギャハハッギャハハハハッ』
仙道は肘で突き、身体を捻って拳を振るい、膝で蹴りあげ、振り上げた足で地面を踏み抜き、鋭い突きを放つ。
受けた湊は、頭部を下げながら滑り、ナイフで敵の伸びかけた腕を逸らし、その場で宙返りをして、突きには頭突きで返す。
両者がぶつかり合うと、周囲にドゴンッ、という衝突音が響いてお互い後方に弾け飛んだ。

攻めているのは仙道だが、相手は見てから全てに反応しそれらを捌きき る。
一撃でも掠れば筋肉が断裂して動けなくなるというのに、相手の距離で戦い続けるなど正気の沙汰ではない。
それが仙道にさらなる興奮を与えていた。
＊＊＊
イリスは呆けたように佇み異次元の戦いを見ていた。
湊が生きていた。その事は飛び上がるほど嬉しいことだ。
だが、
――――――〝アレ〟は何だ？
顔を血で濡らしながら敵の蹴りを喰らい、吹き飛びつつもナイフを投げている。
相手がそれを躱したときには、頭から地面に落ちる途中で手を突き、後ろ向きにハンドスプリングを決めて、切り返すと即座に無手で敵に跳びかかっていった。
敵の肘を避け手刀を掻い潜り、掌を腹部に当てたと思えば、一拍置いて敵の巨体が大きく後退していた。
相手は歯を食いしばり両足で踏ん張って持ちこたえたようなので、あの密着状態から助走もつけずに敵を押し退けて見せたことになる。
あれは今まで湊が見せていた普段の戦い方ではない。
が、獣の動きかと思えば、理に適った動きも見せているので、相手の内面には人と獣が同居しているように思える。
（なんだ、どうなってる？　あの出血量だぞ？　ってか、壊し屋のヤツ、小狼をナギリって呼んでなかったか？　ナギリって、あのナギリか？）
状況は考えられる限り最悪の方向に進んでいる。いまは自身が起こした騒ぎの対処にホテルの者らは追われているが、時機に警察などがやってきてホテルから少し離れた地下（ここ）の騒ぎにも気付くだろう。
湊が爆破した車の炎は隣の車にも引火して燃え拡がっている。原因は吹き飛んだパーツが突き刺さった事だと思われるので、これ以上の拡大はないと思うが、それでも消火のために救急隊が呼ばれるかも

しれない。
警察と救急隊がやってくればマスコミと野次馬に周囲を囲まれる。そうなれば、あんな暴走状態の人間を連れて車まで戻り逃走出来る気がしなかった。
「ラァァァァッ！」
『グキャキャキャッ』
両者が拳を衝突させ湊だけが吹き飛んでいる。体格差で考えれば当然の結果だが、潰れた拳で殴り人を吹き飛ばすなど人間業ではない。
今の湊の身体操作や反応速度は人間離れしているが、戦うにつれ仙道もまた速さと強さを増しているように思える。
「止まれよ、小狼……」
イリスの言葉は両者の戦いの喧騒に呑まれ消えてゆく。
上限無く強さを増していく両者の戦いを止める術をイリスは持たない。
だが、間違いなくこのままでは、湊はチドリや桜の待つ場所に帰れなくなる。
「止まれって……小猫に、チドリに会えなくなるんだぞ……」
先ほど、腰のホルスターに戻した予備の銃に手をかける。両者の間に自分が割り込む事など出来ない。
湊にジークンドーやシラットを教えたのは自分だが、体術に関してはとっくに湊の方が上をいっていたのだ。
まして、人の域を超えつつある戦いの渦中に、多少武術の心得のある人間が飛び込んだところで何が出来ようか。
しかし、それでもイリスは自分に出来る方法（射撃）で湊を止めることにした。
「その御霊（みたま）、わしが喰ろうてやるぞ鬼よ!!」
『ギャハハッギャハハハッ』
距離を取った武神と戦鬼が血の付いた拳を握りしめ距離を詰める。
これが決まればどちらかが死ぬ。命のやり取りをしてきた者のみが感じ取れる、そんな気配を察したイリスは湊の動線を予測し銃口を

向けた。
二人が同時に震脚で地面を踏み砕き、活歩で地面すれすれを滑るように移動する。両者とも空中で腰溜めに手を構えた。後は、着地の瞬間に再び震脚で地面を踏み抜いて突きを放てば終了だ。
故に、身動きの取れないこの時をイリスは待っていた。
「止まれぇぇぇぇっ！」
地に足が付く直前、湊の肩を狙ったイリスの銃が火を吹く
「――――ドラスティックお邪魔致します」
はずだった。
この場に似つかわしくない妙な声が聞こえてくると、両者が丁度ぶつかる中間地点の傍にあった非常口の扉が吹き飛んだ。
凄まじい速度で飛来する物体に当たらぬよう、戦っていた二人が後退し距離を取る。
血沸き肉躍る極上の死合い。それを邪魔した無礼な者に、血管が浮き上がるほどの憤怒の表情で殺気を籠めた視線を仙道が送る。
「何用だ、無粋な。ナギリとの死合いを妨げるとは、貴様、余程の覚悟があってのことであろうな？」
突然の乱入者は青い服を着たエレベーターガールのような女性だった。
その後ろには、似たような服を着た者がさらに二人ほど立っている。力の管理者である、エリザベス、テオドア、マーガレットの三人だ。
顔には楽しげな笑みを浮かべているが、妙な気配を感じる。存在の違和感、何がおかしいのかは分からないが、今の湊に似た存在自体が人間とは異なっているかのような気配。
そんな違和感を撒き散らす者たちは、テオドアを除きおかしそうにクスクスと笑うと、先頭に立っていたエリザベスが分厚い本を持っていない手で、床に四つん這いになって不気味に嗤ったままの湊を指さす。
「あらあら、随分と異なる事を仰るのですね。ナギリ、とは、そこに転がっている獣のことでしょうか？」

「クカカカカッ、貴様にはアレが獣に見えるか？　あれは鬼よ。多くの人を喰らいて理を外れた純粋なる化け物だ」
「いいえ、残念ながら今のあれは獣です。鬼本来の力が見たいのであれば、もうしばらく待たれた方がよろしいかと。八雲様はまだ二次性徴すら終えていませんから」
　女の言葉を聞いた仙道は、目を普段より大きく開けて驚いた様子を見せている。
　なにやら、気になる部分があったらしい。少し考え込む素振りをみせると、顔をあげて口を開いた。
「……やつはまだ元服すら終えていないのか？」
「はい。ジュニアハイスクールに通う一年生です……テオドア」
「はい」
　話している途中に跳びかかってきた湊を、テオドアが回し蹴りで後退させる。
　着地してすぐにナイフをマフラーから取り出し切りかかってくるが、テオドアはそれを本で挟んで受け止め、湊の顎に膝を喰らわす。
「ふむ……ならば、確かにいま狩るのは惜しいな。だが、お主たちならば、アレを人に戻せると？」
「勿論です。ですが、それにはあなた方がいると不都合があります。そのため、お二人には早急にこの場を立ち去って頂きたいのです。鎮圧後は家まで送り届けますので、お連れ様は先にあの方の家へ向かってください」
「本当に大丈夫なのか？　アイツ、あれだけ血を流してるんだぞ？」
　イリスが差した方向には大きな血溜まりが出来ていた。さらに、戦闘中にも血を流し続けているため、常人なら既に失血死していてもおかしくないのだ。
　その点を心配して尋ねたのだが、その質問には長女であるマーガレットが刃物のような鋭さを感じる少々冷たい笑みを浮かべて答えた。
「問題ありません。あの方の血は常人とは成分が異なっています。今頃、体内の水分を使い常人レベルまで血を薄めて活動しているはずで

す。ナギリの血は常人の何倍も濃く、また滋養強壮の効果もあるのです。そのため、一舐めであろうと発狂しそうになりますから、死にかけているとき以外は口を付けないよう忠告しておきます」
スッポンの血に滋養強壮効果があると聞いたりするため、他の動物の血にも同じような効果があっても不思議ではない。
しかし、血が濃いから、失血しても薄めて大丈夫になるというのは意味が分からなかった。
無論、現に仙道に続けてテオドアとも戦えているので健康状態は問題ないのかもしれない。
それでも、『常人とは違うから』で、様々な問題が解決するとはにわかには信じられなかった。
「オマエら、アイツの生まれ……ナギリのことは詳しいのか？」
「いえ、私共が存じているのは、あの方の事だけでございます。ナギリに関しては、龍より生まれた一族の御伽草子に記述があるというくらいしか」
「御伽草子、昔話ってことか。それがアイツの生まれに繋がってるのか？」
「はい。といっても……あら、あれは拙いですわね」
話している途中でエリザベスの視線の先を見ると、テオドアと戦っていた湊が距離を取って大きな銃を構えていた。
イリスが密かに買い与えた重機関銃〝ＧＥ　Ｍ１３４〟、通称ミニガンだ。
ミニガンなどという名前だが、本体だけで１８キロあり、弾は四千発一セットのベルト給弾式なので総合的に成人男性一人分並みの重量になる。
そんな一人で担いでの運用を想定していない武器を、子どもが一人で使おうとしているわけだが、一秒間に最大で百発もの弾丸を放つため、まともな盾があっても防ぐのは至難の業。
それを、こんな乗用車（ばくはつぶつ）の多い狭い場所で使うなど、正気の沙汰とは思えなかった。
「ぼっ、こんなところでそんなもん撃ったらっ!?」

「はぁ……ヨシツネ、全て防ぎ切りなさい」
《ハッ!!》
溜め息を吐いてマーガレットは本の上に浮いたカードを破壊すると、三メートル近くありそうな人型のペルソナ、塔〝ヨシツネ〟が現れた。
仙道とイリスは驚いているが、ヨシツネは湊の正面に立つと両手に太刀を構えて向き合った。
両者が対峙すると、途端に湊の持っているミニガンがヨシツネとその後ろにいるテオドアを狙って火を吹く。
『ギャハハハハハッ』
《ハァァァァァァァッ!!》
バラバラと薬莢の散らばる音と、太刀で弾丸を弾く甲高い音が辺りに響く。
人間ならば痛みを感じる前に死ぬような連射速度も、ペルソナでもかなりの速さを誇るヨシツネならばなんとか耐えられていた。
そして、その間にエリザベスは再びイリスと仙道に声をかける。
「まぁ、こういう訳ですから、お二人はいま直ぐにこの場を離れてください。我々としても、あの方の成長のために必要な方を巻き込み殺したくはありませんから」
「それに、直にここへも人がやってくるでしょう。私どもと八雲様は特別なルートで脱出することも出来ますが、お二人はそこを通る事は出来ません。そのための気遣いとも思ってください」
お前たちがいると本気を出せない。暗にそう言われれば、イリスは頷くことしか出来なかった。
仙道はナギリとはまた違った意味で化け物である三人の戦いを見たがっていたようだが、いま最も興味を抱いているのは湊だ。
エリザベスたちが〝八雲〟と呼んだ事で、幾月の研究所で出会った結城理と同姓同名であることは理解した。そして、偽物という意味も大凡だが理解した。
けれど、そんな些細な事はどうでも良い。鬼としての力を見せたのは湊だ。ならば、自分は理よりも湊との戦いを何より望む。

「……よかろう。わしは護衛対象が死んだため、一度大陸に戻る。次に相見えたとき死にたくなくば、ナギリも戦いに身を置けと伝えてくれ」
仙道の言葉にイリスは鼻を鳴らしてそっぽを向いた。
しかし、それで満足したのか、仙道は扉の吹き飛んだ非常口へと走って去って行った。
その背中を見て、次に、戦っている湊に視線を送ってから、イリスはエリザベスに声をかける。
「……頼む」
「畏まりました。道中お気をつけて」
頷いて返すとイリスも仙道と同じ非常口から去って行った。
＊＊＊
弾を撃ち切った湊はミニガンをマフラーに仕舞った。
ナイフを使い捨てるようにしていたというのに、銃火器はしっかり回収する辺りに理性が欠片ほどは残っているように思える。
いくらか弾を喰らいながらも、テオドアを守り切ったことでヨシツネが消えると、湊は再び徒手格闘でテオドアと戦い始める。
回し蹴りがくれば素早くしゃがんで相手の足を刈る。それを跳んで避けた相手が踵落としを決めてくれば、横に転がり回避する。
人間を遥かに超えた怪力を持つ力の管理者が相手だ。相殺なり、カウンターを狙えた仙道を相手にするよりも警戒して戦うのは非常に賢い選択と言える。
だが、彼本来の戦い方に比べれば、獣が必死に立ち回っているようにしか見えない。
「……無様ね。見るに堪えないわ」
組んでいた右手をこめかみに当て、眉を顰めてマーガレットが呟く。
すると、クスリと笑みを浮かべてジッと湊に視線を送っている妹が同意する。
「そうですね。あまり幻滅させないで頂きたいのですが、今日はまだ死んでおりませんでした。よって、私も幾許かの情けをかけ一撃で仕

留めようかと」
小さく笑うと、エリザベスがマーガレットの隣から消えた。
直後、床が連続で爆発し、その爆発が湊へと迫ってゆく。
異変を察知した湊は切り返し逃走を図ろうとするが、そこには冷笑を浮かべたエリザベスが立っていた。
「――――伏せ」
呟きの余韻が消える間もなく、轟音が地下の空間を包む。
嗤ったまま上げられた湊の顔面にエリザベスが拳を振り下ろすと、湊は仰向けに床に埋め込まれていた。
自分で伏せと言っておきながら、相手を仰向けにしてどうするのだろうか？
だが、ある意味で、いまの湊は犬の服従のポーズを取っているようにも見えた。
それに気付いたエリザベスはサディスティックな黒い微笑を浮かべたまま、意識を失っているであろう相手に言葉をかける。
「あらあら、自ら服従の構えを見せるとは、随分と物分かりが宜しいのですね。もっとも……私はそういった性癖を持っておりませんので、貴方に何もしてあげることが出来ないのですが」
言いながらも、エリザベスはブーツの底で湊の顔を踏みつけている。
下は固い地盤しかないため、これ以上は埋まる事は出来ない。それを理解してやっている相手がそんな趣味はないと言ったところで、誰も信じることは出来ないだろう。
だが、
『グキャキャキャッ』
「っ!?」
笑い声が聞こえると、エリザベスは片足を掴まれ握り砕かれた。
痛みは我慢できるが、あの一撃を受けて意識を手放していなかったことに衝撃を受ける。
骨を砕かれた足で相手を踏みつけ、拘束が緩んだところで無事な足を使って距離を取る。

戻ってきたエリザベスにテオドアが即座に回復魔法をかけた。
「姉上、動けますか？」
「ええ、問題ありません。ですが、まさか骨と腱を持って行かれるとは思っていませんでした。私の一撃を喰らってまだあそこまで動けるとは」
「……また新しい仮面を手に入れたようね」
三人の見つめる先、起き上がった湊の前に淡い光が集束していた。それは段々と形作られ、光が消えたときには一枚のカードが姿を見せた。
空中で回転しているカードの数字は〝ＸＸＩ〟。左上に天使、右上に鷲、左下に牛、右下にライオン、中央には踊り子が描かれている、最後のアルカナ。
絵柄を見た三人は湊がカードを砕くよりも速く、全書よりカードを引きぬきペルソナを召喚していた。
「マサカド！」
「ベルゼブブ！」
「ルシフェル！」
臨戦態勢のペルソナがそれぞれの前に現れる。命令を受ける前に力を溜めており、いつでも放てる状態だ。
『クキャキャキャキャッ！』
湊がカードに噛み付き砕いた。途端、大気と大地が振動し、空間が歪むほどの力の顕現が始まる。
最初に見えたのは、車がすれ違ってもまだ十分な余裕のある通路を埋め尽くすほど凄まじく巨大な、黒い鱗に覆われた鼻先、さらに頭から生えた銀色の角が天井を削り徐々に姿を現してくる。
だが、頭部だけでこの大きさだ。全長がいったいどれほどになるか想像もつかない。
影時間でもない現実の世界で、そんな物を呼び出されては拙いと、力の管理者たちは一斉に攻撃を放った。
『――――メギドラオン！』
放たれた三条の極光は、一つの巨大な奔流となって地下の空間を埋

め尽くした。
＊＊＊
力の管理者と湊の戦闘は、光の奔流に呑まれた湊が意識を失ったことで決着となった。
三人が全力でメギドラオンを放った地下駐車場は半壊。半壊で済んだのは、湊の呼び出したペルソナと衝突した際、ほとんどのエネルギーを相殺したためだ。
もっとも、地下駐車場の天井が崩落したことで、上に建っていた立体駐車場が落下したため、あのホテルは当分営業停止になってしまうだろう。
原因を調べたところで何も分からない。誰が今回出た損害を補償するのかも揉めそうだ。
そんな事も知らずに、エリザベスの膝に頭を乗せて広い後部座席で寝ている少年をバックミラー越しに眺め、マーガレットは溜め息を吐いた。
「はぁ……私たちが駆り出されるほどの事態だっていうのに、呑気に寝ちゃって」
「何事もなかった、とはいきませんでしたが、あの程度の被害で済んだ事は僥倖でしょう」
ベルベットルームから持ってきたリムジンを運転しているテオドアは、前を向いたまま苦笑しつつ姉を宥める。
本日の被害総額は軽く見積もっても一億では済まないだろう。
だが、怪我人という点では、湊と戦った者以外はこけたことで身体のどこかをぶつけた程度なのだ。
死者が出てもおかしくない大事故で、たったそれだけの被害で済んだ事は僥倖に他ならない。
弟の言葉を自分でも理解していた姉は、フンと鼻を鳴らして流れてゆく窓の外の景色を眺め出した。
そうして、車内が静かになると、湊の頭を撫でていたエリザベスがぽつりと呟いた。
「……たった一人で世界に辿り着いた。一体どういう事なのでしょ

う」
妹の呟きが耳に届いた姉は、窓の外を眺めたまま言葉を返す。
「どういう事も何もないわ。あのペルソナの当てはまるアルカナが世界だっただけで、ユニバースの力が目覚めた訳ではない。その子の中に〝世界〟に適合する部分が存在するというだけよ」
「ペルソナ全書にも登録されない、黒蛇の創造神及び文化英雄ですからね。顕現が不完全でなければ、たった一撃で止めることは出来なかったでしょう」
「ウロボロスに伏羲、ザルティスにユルルングルやアンラ・マンユなど世界中に蛇神の神話は存在します。ですが、銀の瞳と角を持った黒蛇となると、語られる神話だけでは判断がつきません」
目覚めたペルソナはエリザベスのペルソナ全書に記録されるのが常だった。
しかし、あの戦いの最後に召喚されかけた黒蛇は、全書には存在しない世界のアルカナに属している。
ベルベットルームの主たるイゴールに言えば、本をバージョンアップして登録出来るようになるかもしれないが、それが出来るようになるまでは、あのペルソナは湊しか名を知ることが出来ない。
加えて、ペルソナの容姿は召喚者のイメージに左右される部分もあるため、神話で語り継がれる容姿とは異なっていることも多い。
タカヤのヒュプノスなどが良い例であり、神話のヒュプノスは穏やかで心優しい有翼の美青年だが、タカヤのペルソナはどんな偏見を持っていたのかグロテスクな印象を持つ拘束された青年になっている。
湊の黒蛇も同じようにイメージから黒蛇の姿を取っている可能性も捨てきれないので、本人が起きるまでは正体不明の創造神か文化英雄という扱いになった。
創造神と文化英雄のどちらかであるという事が確定しているのは、力を司る者であるが故に見ただけで理解出来ることらしい。
もっとも、性質が創造神であったりするだけで、何かを創造するようなスキルを有している訳ではないが。

そうして、九体目のペルソナの事を考えながら、俯いて湊を見つめていたエリザベスは、脇に置いていた折れた刀に目を落とした。
「五年も使っていた愛刀を投げたまま放置し、崩落に巻き込まれ折ってしまうとは……」
「そんなに貴重な物なの？」
「ええ、何故これが蔵に眠っていたのかも不明ですが、表に出れば国宝か重要文化財に指定されたことでしょう。雑に扱うくらいならば、譲ってくだされば宜しかったのに」
大人びた雰囲気を少し崩し、拗ねたような様子で湊の額を指でぐいぐいと押すエリザベス。
日本刀に造詣が深い彼女は、湊に依頼してまで日本刀を収集していたりする。
その候補の中には湊の愛刀だった姫鶴一文字も当然はいっていたというのに、依頼に出す前に雑な扱いで落盤に巻き込まれ折れてしまうとは、あまりに刀が可哀想でならなかった。
心の中で「丁寧に扱え、このバカたれ」と子どものように罵りつつ、エリザベスは車が桔梗組本部に到着するまで、寝ている湊の顔で遊び続けた。
――地下協会・関東支部
ホテルの駐車場を出た仙道は、車で三十分ほど走ったところにある地下協会の支部にやってきていた。
護衛対象が死んでしまったため、その報告を本部にしようと思ってきたのである。
部屋を借り、室内に置いてあった電話で番号を押していくと、受話器から若い女の声が聞こえてきた。
《あら、仙道。こんな時間に何の用かしら？》
「ああ、急に連絡して済まない。だが、いくつか報告があってな。まず、わしが護衛していたアロイスなんだが、先ほど殺された。二人組に襲われ、逃走しようと車に乗り込んだところで車を爆破されてな」
《ふーん、別にわたくしが頼んだ依頼じゃないからどうでもいいわぁ》
言葉通り、心底興味がないというのが伝わってくる。一応、相手の

父親経由で頼まれ護衛していたのだが、それを理解していても気にしていないようだ。
　そんなお嬢様の難儀な性格に苦笑しつつ、仙道は自分が話したかった本題に移る。
「では、次だが、実は面白いやつをみつけた。ナギリの末裔らしくてな。お主の一つ下だが、あのまま戦っていればわしが負けていたやもしれん。仕事の名前か分からんが、シャオランと呼ばれていた」
《わたくしの一つ下？　それであなたが生きているという事は、相手は死にましたの？》
「いや、生きておる。少々、横槍が入ってな。二次性徴も終えていないというし。暫く様子を見て、また再戦するつもりだ」
　今日の戦いで潰れた拳が治るまで一ヶ月以上は掛かるだろう。それからまた調整をして、ベストな状態へ仕上げるには三ヶ月は要する。
　しかし、湊の成長を考えれば、もう一年ほどは待たねばならないだろう。
　獣のような理性の働いていない状態で自身と対等に渡り合った相手だ。成長し理性がある状態で、己が力と技巧の全てを駆使して戦ったならば、どれほどの死合いが出来るのだろうか。
　電話の相手にもこの心躍る気持ちを分かち合いたいと思うほど、仙道は湊のことを想っていた。
「お主も知れば会いたくなるはずだ。やつもお主と同じように試験管で生まれたようだからな」
《〝ジーンリッチ〟と言ってくださる？　それに実験器具から生まれた訳ではないわ。優秀な精子と卵子をかけ合わせ、さらに手を加えてから母体に産ませたの。勿論、これは世間からはタブーとされているから秘密裏にだけど、そのシャオランとやらは遺伝子をどういじったのかしら？》
「いや、遺伝子はいじっておらん。クローンだったか？　確か、そういうものだ。何より、ナギリは優秀な個体を何代にも亘って自然交配している。今更、いじるところなどありはしまいて」

《ふーん、クローンねぇ……》
急に静かになった相手にわずかに嫌な予感がする。
相手は頭は良いのだが、かなり我儘な性格だ。
その日のリボンの色が気に入らなかったからと、支度を手伝っていたメイドを銃で撃ち殺したこともあれば、暇だから面白いものがみたいと足を撃ち抜いたSPを池に突き落とし、相手が溺れて死ぬのを笑いながら眺めていたこともあった。
常軌を逸した行動だが、相手は周囲を黙らせそれが許されるだけの権力を持っている。
電話の女の名は、ソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタイン。ヨーロッパに本拠地を置き、表裏どちらの世界にも通じている巨大組織〝久遠の安寧〟のトップの娘である。
また、彼女自身も〝神子〟と呼ばれ、千里眼や神通力を使えると崇めている者もいる。
先ほどは興奮して話していたが、相手が必要以上に興味を持ってしまうのは拙い。湊で遊んでみたいなどと言い出せば、己の待ちのぞむ戦いが出来なくなるからだ。
そうして、相手の言葉を待って考えていると、少ししてようやくソフィアは口を開いた。
《ねぇ、そのシャオランって可愛いのかしら?》
「む? ふーむ、顔は整っていたが、分類するのなら美しいになるのでないか。まぁ、男だが」
《美しい。あゝ、とても良い響きだわ。ふふっ、わたくしもシャオランと言葉を交わしてみたい。ねえ、どうすれば会えるかしら?》
嫌な予感は的中する。ソフィアは湊に興味を持った。
言葉を交わしてみたいと言ったが、いま二人は国際電話で話していて、その言語は英語だ。
イリスも湊も日本語でしか話していなかったので、湊が英語を理解出来るか不明である。
無論、ソフィアは流暢に日本語でも話せるので、湊が仮に英語を話せなくとも意思疎通は簡単に出来るだろうが。それでも、仙道はソ

フィアが必要以上に湊に干渉する事を嫌がった。
「あやつの周囲は嗅ぎ回るな。時期が来ればやつも大陸へと渡ろう。そこでなら、お主が人を寄越そうが、自ら出向こうが自由だ」
《あら、随分と相手を守ろうとしますのね。でも、わたくし、そのシャオランが欲しくなってきましたの。わたくしが欲しいって言ったら絶対なのよ》
「……人間にも熟成というものが必要だ。お主が欲するは、磨きかけの原石か？　それとも、完成された至高の宝物（ほうもつ）か？　ナギリは戦いを続けることで完成に至る。お主が真にナギリを望むのならば、やつには戦いをくれてやれ」
　こういっても駄目なのなら諦めるしかない。本部への帰還を後回しにし、ソフィアが接触しようとする前に不完全だろうと湊と決着をつけねばならない。
　〝久遠の安寧〟の主な産業は兵器開発と医療。多くの産業を手掛けている桐条でも、撤退しつつある兵器産業は勿論、医療分野においても久遠の安寧に一歩譲っている。
　そんな組織で、トップである父や幹部ですら顎で使うソフィアなら、湊によりレベルの高い戦闘を経験させることが出来るだろう。
　相手を止めつつ、自分の望みのための布石も打つ。仙道は受話器を握る手にじんわりと汗を掻くのを感じながら、相手の言葉を待った。
《……まぁ、それもそうですわね。会いに行くより、相手から来てもらった方が都合も良いですし。準備だけしておきますわ》
「ああ、感謝する。では、わしも少ししたら其方に戻る」
《ええ、どうぞご自由に。言えば空港に迎えくらいは寄こします》
「うむ。それではな」
　通話が切れたことを確認に受話器を電話に戻すと、仙道は深い息を吐いた。
　仙道はフリーの壊し屋のように思われているが、実際は、久遠の安寧に雇われている傭兵だ。
　雇われている理由は、ただ依頼を受けるよりもコンスタントに戦える依頼が回ってくるためで、対象は組織にとって邪魔になる者が殆ど

であり、その分腕も立つ者が多い。
そういった立ち位置のため、他の構成員と違って実質トップであるソフィアとも対等な立場でものを言えたりする。
けれど、相手の堪え性のなさと、その歪んだ本性も理解しているので今回ばかりは無理かと思った。
己の存在を賭けて戦える者になどそう会えるものではない。無事にことが運ばれたことに安堵し、部屋を出て怪我の治療を受けると、仙道は部屋でゆっくりやすみ。翌日、飛行機で日本を発っていった。

第四十五話　鬼の一族

7月22日（金）
午後――桔梗組本部
ホテルの地下での戦いから一夜明け、桔梗組の本部には大人たちが集まっていた。
湊は未だ目を覚まさず、チドリは湊の身を案じていたが学校へ行くように言われ、命に別条がない事を説明されると渋々登校して行った。
そして、その間に湊に関わりペルソナを知る者らを呼び出し、イリスの口から昨夜の顛末を話された。
組の談合にも使われる広い一室。いまそこにいるのは、この家に住む大人と栗原・五代・ロゼッタたち三人に、昨夜ここに泊まったイリスと力の管理者三人を加えた合計十名だ。
縦長のテーブルの上座に鵜飼が座り。鵜飼から見て右側、近い方から順に渡瀬・桜・ロゼッタ・五代が座っている。その反対には鵜飼に近い方から、テオドア・マーガレット・エリザベス・イリスが座り。下座に栗原が座っている。
イリスから彼女があの場を去るまでの話を聞き終えると、鵜飼が並んで座っている力の管理者たちに視線を送り、静かに口を開く。
「それで、今朝からニュースでやっていたホテル駐車場の崩落事故は、お前さんらと坊主がやりあったからってことかい？」
「正確に申せば、八雲様の呼びだそうとしたペルソナ……仮に蛇神と呼びますが、その顕現を阻止した為です。イリス様なら想像が付き易いかと思いますが、蛇神は頭部だけであの通路を埋め尽くす大きさでした。頭部でそれですと、全長がどれだけになるか及びもつきません」
マーガレットの言葉にイリスは目を大きく開いて絶句した。
正確な広さは分からないが、感覚としてコンビニがまるごと一つ納まるだけの広さは優にあったと思える。
頭部がその大きさならば、例えツチノコのような体型であっても全

長は五十メートルでは済まないだろう。
直線距離で考えれば、地下駐車場の全て使えばそれだけの距離を稼げるだろうが、通路を埋め尽くす巨体が動けば周囲は火の海になっていたやもしれない。
それを、崩壊させたとはいえ、顕現を防いで被害を駐車場だけにとどめた事は、十分に称賛されるべき成果であった。
しかし、この中では唯一ペルソナに関する詳しい知識を有している栗原が、力の管理者に対し不可解に思った事を怪訝そうに尋ね返す。
「ちょっと待っとくれ。ペルソナの召喚には精神の安定が関係している。イリスさんやあんたたちの話を聞く限りじゃ、湊は人としての思考すら持っていなかったはずだ。それで召喚は無理があるんじゃないか？」
「何事にも例外が存在する、というのが答えになるかと」
湊は意識があれば暴走の有無を問わず召喚できる。薄っすらと笑いながら、マーガレットは栗原にそう返した。
ペルソナに関する知識は持っているが、確かに湊はチドリなど一般的なペルソナ使いとは異なっている。
ならば、相手の言う通り、精神状態は召喚になんの影響も及ぼさないのかもしれない。
栗原は話を進めるため、全てに納得は出来ずとも収めておこうとそれ以上の質問を控えた。
「それで、みーくんは起きても大丈夫なんですか？　また、ファルロス君に蘇生して貰ったんですよね？　今までは、蘇生された後に戦ってなかったんですけど、今回はいっぱい戦ったみたいですし」
意識の戻らぬ湊の身を案じ、悲痛さと不安を表情に浮かべて桜は尋ねる。
彼女がファルロスの存在を知っているのは、湊の身体を使ってファルロスが名乗ったためで、その正体については、直接聞いた桜から他の者にも説明がなされたのでチドリ以外の全員が知っている。
力の管理者らには、昨日の夜に初めて会ったので話していないが、今までに湊が何度も名を口にしていたので、当然知っているという前

提で話した。
　すると、今度は長女に代わり、置かれた湯呑みに口をつけていたエリザベスが質問に答える。
「いいえ、八雲様は今回死んでおりません。死ぬ直前に意識を内なる獣に呑まれたため、ファルロス様の再生力を行使しながら、あの武術家の方と交戦に入られましたので」
「内なる獣？」
「分かり易く言えば、ナギリの血の業にして怨霊。八雲様の抱える殺人衝動の一因でもあります。八雲様はファルロス様に加えて黄昏の羽根を内蔵したことにより、シャドウに近い性質を有しておりますので、月が満ちるにつれ抑制が効き辛くなるのです」
　分かり易くと言いながら、暴走が月の満ち欠けと関係していることしか、聞いている者は理解出来なかった。
　そもそも、湊が殺人衝動を抱えていることすら初耳だ。
　今まで一緒に過ごしてきたというのに、保護者にすら打ち明けていなかったことについて、渡瀬を除く一般人側の全員が深いため息を吐く。
　一同が同じ反応を見せたことで、エリザベスは湊が話していなかったと気付いたようで、フフッ、と小さく笑みを漏らした。
「その様子ですと、どうやらご存じなかったようでございますね。実際は殺人衝動ではないのですが、今はご本人がそう勘違いされておりますので、同じように呼ばせていただきます。いつから、ということでしたら、五年ほど前に研究機関で殺戮の限りを尽くしてからになります」
「初めて人を殺した、っていうのがトリガーじゃなさそうだ。殺すために変質したという方が正しいかな？」
「ええ、概ねその通りでございます」
　五代の予想は見事に当たった。
　といっても、過去の湊は知らないが、普段からチドリに気を配っていることから、根は優しい少年だと思っていたため。その少年が殺人衝動を得る順路を考えたとき、殺したから変わったよりも、変わった

から殺せるようになった、と考えた方が納得出来たのでそれを口にしただけだ。
初めて一緒に依頼の下見へ行ったとき、最初に人を殺したときにどう思ったか本人に尋ねたことのあるイリスも、当時の会話を思い出し、五代と同じことを考えていた。
そして、エリザベスがそれを肯定すると、そんな物を抱える事になった少年に同情してしまう。
ポートアイランドインパクトに巻き込まれていなければ、あの場でペルソナに覚醒していなければ、桐条が被害者の少年を研究しようとしなければ。そんな風に、過ぎてしまったことだが、やはり、あの事故から湊の人生は大きく狂わされたのだと実感した。
目の前のテーブルに置かれた湯呑みを見つめながら、少年のことを考えイリスは尋ねる。
「……アイツの眼。アレはいつからだ？」
「元々、そういった素質を持った肉体だったこともありますが、あの魔眼は、シャドウの王との戦いで死にかけ、身体の内に死を宿したことで得た力です。半年ほど意識不明のままでしたが、さらに一月ほど経った日に八雲様を庇ってチドリ様が怪我を負いました。そのとき、敵を殺そうとして魔眼の力を自覚されたようです」
「え？　ちーちゃんがみーくんを庇ったんですか？」
そんな話は子どもたちから聞いていない。
出会った当初から湊の強さを知っているだけに、桜はチドリが彼を庇ったということが想像出来ず聞き返した。
すると、その質問には湊の事情を飛騨から直接聞いていた栗原が答える。
「湊が身体をいじる切っ掛けになった事故さ。半年も昏睡してたんだ。点滴やマッサージだけじゃ、普通に日常生活を送ることも出来ないほど衰えてもおかしくない。それを二週間で自立して歩けるようになっただけでも異常だ。まぁ、流石にタルタロスの探索は無茶だったみたいだけどね」
「じゃあ、みーくんがちーちゃんを守っているのって……」

もしも、湊が罪の意識や責任感だけでチドリを守っていたのなら、二人を見てきた保護者としてはとても悲しいと思った。
二人はお互いを想い合っているようだが、それは家族や異性というのとはどこか違っていると感じていた。
湊の方がそれは顕著だが、残念ながら湊は自分のことをほとんど話さない。
チドリはいくらか雑談にも付き合うので、淡い想いを抱いていることも感じられるのだが、湊の守る理由がそういったことなら成就されることは難しい。
さらに言うなら、聞いたチドリは深く傷つき湊に心を閉ざすかもしれない。自分が大切に想う相手の枷になるなど、誰が受け入れるだろうか。
そんな物になるくらいなら、自分はこの家を出ていくとまで言い出すかもしれない。
チドリがいないときを狙って一度しっかりと話し合うべきか、暗い表情で桜が悩んでいると、下座に座っていた栗原が声をかけた。
「罪の意識や贖罪の部分はあるのかもしれない。だけど、研究所で二人の面倒を見てたやつが言ってたが、その事故は決意の切っ掛けでしかないよ。あの子は自分の意思でチドリを守ってる。そもそも、あの子が変わったのは脱走後だ。決意の方が先なんだから、心配する事はないよ」
「あ……そう、ですよね。みーくんはちゃんと人の痛みが分かる、優しい子ですから」
栗原の言葉で桜に笑顔が戻る。
自分の見ていた湊が嘘だとは思えない。そこには確かに想いがあったし、二人だけの絆も確かに存在した。
だから、自分はちゃんと子どもたちを見ていてやればいい。困ったときに手助けをして、自分では駄目なときは、他の者を頼るように助言をすればいい。
そんな風に決意を改めると、桜は顔をあげて引き締めた表情でエリザベスに尋ねた。

「あの、みーくんの名前なんですが、ヤクモというのが本当の名前なんですか？　それとナギリとは一体？」
「……あの方の本来の名は〝百鬼（なぎり）八雲（やくも）〟。百の鬼、八つの雲と書きます」
『っ!?』
エリザベスが二つのカードをテーブルの上に置いて見せる。そこには〝百鬼八雲〟の名で結ばれた、第一と第三の契約の内容が書かれていた。
湊がエリザベスとマーガレットと結んだ第二と第四の契約は、湊がアルファベットで署名していたが、こちらは口頭で契約したため、湊の本来の名前表記で自動記入されたらしい。
明かされた湊の本名を見たとき、桜と栗原以外の全員が少なからず驚きを見せる。
両者は何をそんなに驚いているのか不思議そうにしながら、話の続きを聞いた。
「家柄については、他の皆さまの方がお詳しいかと。私たちは八雲様のこと以外はあまり知りませんから。その様子ですと、皆さまそれなりにお詳しいと思って良いようですね？」
カードを手元に戻して仕舞い、エリザベスが涼しげな表情で他の動揺している者を見渡した。
その姉と弟は、表情を崩さずに視線を他の者に送っているので、エリザベス同様、他の者から説明させる気のようだ。
そして、皆が何やら難しい表情で考え込んでいると、自身を落ち着かせるように深く息を吐いた五代が口を開く。
「ナギリは名を切る一族。つまり、家系や組織を断絶させる殺しの一族だ。その強さや残忍さから、人々から鬼と呼ばれてね。一騎当千って訳じゃないけど、鬼の集団ってのと掛けて、苗字に存在した百鬼（なぎり）を当て字で付けられたんだ」
「殺しの一族って、今のみーくんみたいに依頼を受けていたんですか？」
「いいや。鬼は龍を守っていたんだ。旧家として今も存続している〟

九頭龍〝家の命令でしか、百鬼は動かせない。昔の権力者はこぞって百鬼を欲したようだけど、その鬼が龍を守っていたから手を出せなかったらしいよ」

先ほど驚いていた者は誰一人否定しない。その反応が、五代の言葉が真実であることを証明していた。

しかし、そことは別の部分で気になったことがあるのだろう。イリスがテーブルに肘を突いて向き直ると、五代に質問をぶつけた。

「なぁ、昨日、そっちの……エリザベスだったか？　が、言ってたんだが、龍の御伽草子って知ってるか？」

「龍の……もしかして、九頭龍の出自についてのことかい？　九頭龍家は龍から生まれたっていう伝説なんだけど」

『龍から？』

少々考え込む様子を見せた五代が再び言葉を紡ぐと、それを聞いたイリスだけでなく、ロゼッタもどういうことだと怪訝そうにしている。

その反応も当然で、龍はそもそも架空の生物である。自然の象徴化により人々が勝手に想像から生み出した存在だ。

似たような話しで、世界各国にルーツに神を持つ一族や王家も数多あるが、龍から生まれた一族というのは珍しい部類に入るだろう。

一体それはどういった内容なのか。気になった他の者は、静かに注視して話を聞くことにすると、五代はゆっくりと語り出した。

その昔、豊玉姫命（トヨタマヒメノミコト）という龍がいた。

人の姿になることも出来るその龍が、あるとき一人の青年を愛し、二人の間に出来た子どもを地上のとある里で出産した。

生まれたのは光を纏ったとても美しい女の子。神に愛され導き手として人々を救う存在となる者だ。

だが、人間の中には悪意を持った者もいる。女の子のような存在が許せないと、亡き者にしようとする者が現れるのは分かりきっていた。

それ故、豊玉姫命は女の子が生まれて直ぐに、里近くの裏山の土から人型を作り。神力を用いて命を吹き込んだ。

命を吹きこまれ、意思を持った人型に豊玉姫命は言う。
――娘とその子孫を守れ。お前は人ではないが、目指し続ければいつか本当の人間になることができるやもしれぬ。だが、娘とその子孫である龍の一族を守り続けなければ、お前は元の土くれに戻るだろう。故に、お前とその一族は完全なるモノを目指しながら龍を守り続けなければならぬ――
言葉を聞き届けた人型は龍を守り、龍のために生きる一族となった。
龍の子は人々を導き国に繁栄を齎し、その裏で人型がより優れた者と交配し、人になることを夢見ながら龍の憂いを払う。
いつしか人型は鬼と呼ばれるようになったが、いつの日か人になれることを願い完全なるモノを目指しながら鬼は龍を守り続け。
そうして、己の治世により安寧の訪れた世で、龍たちは末永く幸せに暮らしたという。
五代が話し終えると、場には沈黙が下りて他の者は考え込む様子を見せる。
龍であり神でもあった豊玉姫命は、いくつか逸話が残っているが、それは鶴の恩返しのような〝禁室型〟や〝見るなのタブー〟と呼ばれるタイプのストーリーばかりだ。
無論、地域ごとに内容に違いやアレンジが加えられていることもあるが、九頭龍と百鬼のルーツの話だけは根本的に内容が違っている。
子を守るために土に命を与えるなど、全く別の権能であり、豊玉姫命の話とそもそもが繋がらない。
しかし、そんな不思議な祖先の逸話を持った九頭龍家は今も存在している。事の真相は何にせよ、そういった話として受け止めるしか無かった。
「さて、いま話したことで分かったと思うけど、百鬼のルーツは土から生まれた人型だ。まさか、本当に土からできたとは思わないけど、完全なるモノを目指すって部分は現実に行われたようだよ」
そこまで言って、五代は置かれた湯呑みに手を伸ばし、熱いお茶をすすって一息つく。

と、そこにロゼッタが内に湧いた疑問を困惑気味な表情のままぶつけた。
「その、〝完全なるモノ〟ってどういうこと？　小狼くんは既に人間だし、十分に他者より優れているわ。むしろ、九頭龍よりも上だと思うのだけど、どうして反乱を起こしたりしなかったのかしら？」
彼女の疑問は当然である。何代にも亘って優れた頭脳や肉体を持っていた者を掛け合わし、生まれた時点から性能（ステータス）と潜在能力（ポテンシャル）で他者を圧倒しているのが百鬼だ。
五感の鋭さは愚か、細胞の一つをとっても種として異なっている。
そんな超人の一族が、優れた才を持っているとはいえ、人類の枠組み内に存在する劣った者らに仕える。どう考えても立場は逆であるべきだと思った。
ロゼッタが問いかけ五代を見つめている。すると、今度は別の方向から答えが齎された。
「そりゃ、鬼は龍に危害を加えることが出来ねぇことになってるらしいからな。よく分からねえが、〝そういう風〟になってんだとさ」
「そういう風……暗示で逆らえないようにするとか、それに近い処置を受けていたってことですか？」
「詳しいことは知らねえよ。ただ、聞いた話では、鬼はどうやっても龍に手を上げることはできなかったそうだ。ま、昔話が本当なら、龍の神様が呪印でも刻んだんだろうさ」
不明な点は残るが、言われて成程と納得がいった。
どういった手段を使ったのかは分からないが、最初から反乱を起こされる心配がないのなら、龍は躊躇いなく鬼を使役出来ただろう。
今よりも身分に厳しかった時代なら尚のこと、大きな戦は本分ではないが、鬼と畏怖された者どもを戦に投入すれば、味方は鼓舞され、敵の士気は落ちる。
それによって、龍は自分たちの懐を一切傷めずに恩を売り、高い地位にあり続ける事が出来たという訳だ。
「あの……」
話が一段落したところで、桜が控えめに声を発した。

ここまで五代や鵜飼の話を聞いて、湊とそれに関わる一族のことは分かった。
しかし、まだ根本的な謎が残っている。それはエリザベスの語った〝血の業〟と〝怨霊〟とやらの話だ。
今までの話では、その部分に触れていない。むしろ、情報屋である五代も知らない様子だ。
ならば、知っている者に尋ねるしかない。桜は力の管理者たちに視線を向けた。
「みーくんの暴走の原因を教えてください。百鬼の血の業ってなんですか？　怨霊って、みーくんに取り憑いているんですか？」
尋ねながら真っ直ぐ見つめる瞳には力が宿っている。
子どもの事を心配し、その原因を取り除けるなら取り除いてやりたい。
相手の目を見ていると、そんな想いがひしひしと伝わってきた。
それを見てエリザベスは自分が話すべきか姉と視線を交わす。相手が頷いたことで桜の方へ身体ごと向き直すと、表情を消して緊張感を漂わせながら話しだした。
「八雲様の一族は細胞一つとっても異なっています。ですが、血は別の意味で特殊でして、八雲様を血液検査すれば一体どの生物の血だと医者は首を傾げるでしょう。これは何代にも亘って優れた遺伝子を取り入れたことにより、純粋な意味でホモ・サピエンス・サピエンスでは分類上なくなっていることを示しています」
「現代人類と別の種族？　では、彼らには学名が別に存在するんですか？」
「いえ、これも百鬼の特性なのですが、百鬼は戦いの中や極限状態に置くことで肉体が真に活動を始めます。細胞や血の質に変化が起こるのもそれからなので、日常生活しか行っていない百鬼は常人よりヘモグロビンが多い程度の違いしかございません」
その証拠として、力の管理者たちは湊の母親が湊を普通の病院で出産し、さらに血液検査を受けさせていることを知っている。
母親と子ども、どちらも百鬼の直系ではあるが、検査結果は酸素の

供給が常人よりも為され易いため、運動に向いている性質があるくらいのものだった。
　もっとも、どうやって過去を調べたのか訊かれると面倒なので、その部分については聞かれない限り教えたりはしないが、相手は今の説明だけで信じているようだった。
「特殊な血ですが、成分と濃度以外にも異なった部分がございます。それは血に記憶や経験が宿っているということ。つまり、血を介して直系の先祖の情報を己の物としてフィードバックできるという訳でございます」
「……は？　血からフィードバックってどうやってだよ？　シナプスやニューロンでも混じってるっていうのか？」
「さぁ？　私たちは医者や学者ではありませんから、八雲様がそういった血を持っているということしか知りません。ですが、その先祖の記憶や経験に強い影響を受け、一時的に自我を侵食されたことで暴走は引き起こされました。これが百鬼の怨霊の正体です」
　再び〝そういう物だから〟という言葉で説明が終わってしまった。
　実際は細胞記憶や記憶転移が起こっているのかもしれないが、確かに、エリザベスらはどう見ても医学や生物学には精通しているようには見えぬ風貌をしている。そもそも、純粋な人間であるかどうかも怪しい。
　一応、湊を救うために現れたので信用もされているが、街中で出会っても余りお近づきにはなりたくない部類の印象だ。
　長女らしい女性は比較的人間らしさも持ち合わせているが、他の二人は異質さの方が上回る。
　初めに尋ねた桜が何も聞き返さないのであれば、自分もこれ以上は訊かないでおこうと、イリスは深く息を吐いて肩の力を抜いた。
　――???
　深い深い闇の中を湊は漂っていた。
　闇以外は何もない空間で、何かの気配が近付いてくる。
《八雲、八雲……》
　薄れていた過去の記憶の中に存在する母の声。

だが、不思議と懐かしさは全く感じなかった。
闇以外は見えない。しかし、何かの気配が近付いてくることは分かる。
声は確かに母のものだが、近付いてくる気配は母だけではないように感じた。
近付いてきた気配は年老いた男の声で云う。
《遂に為った。我らが悲願、完全なるモノよ》
完全なるモノ、その意味は分からない。我らというのが、誰の事をさしているのかも分からない。
しかし、男の声が聞こえると、気配は背後に移動して若い女の声で話しかけてくる。
《お前を千年以上も待っていた。嗚呼、素晴らしい完全なるモノよ》
自分はそんなものではない。耳慣れぬ言葉に苛立ちが募る。
けれど、振り返ったところで気配は自身の右側に移動し、先の戦いで潰れた肘の関節に触れてきた。
《私の可愛い八雲。お母さんが守ってあげる。あなたを傷付けるモノから、あなたがこれ以上自分の手を汚さなくていい様に》
気配はしっかりと触れて、母の声で語りかけてくる。
だが、感触はあるものの体温を一切感じない。ペルソナでもまだ人肌の温かさか、ひんやりとした冷たさを感じさせるというのに。
そこで湊は気付いた。この気配は自分の母親そのものではないと。
全身に力を入れて意識をより高いレベルに引き上げる。ここは自分の中だ。ファルロスがいないということは、また別の意識領域なのだろう。
それでも覚醒してしまえば、こんな訳の分からない気配に苛立ちを感じる必要もなくなる。
《八雲、どこへ行くの？　お母さんが代わりにやってあげるから、あなたは眠っていて良いのよ？》
「俺は自分の意思で動いてる。お前らみたいな訳の分からない奴らに代わってもらう必要はない」
《何故拒むの？　私は、私たちはあなたの一部なのよ？　百鬼の血は

あなたにも流れてる。血の記憶を受けいれて。そうすれば、あなたは人を超えられる》
「目障りだ。消え失せろ！」
蒼い瞳を開き、相手の手を振り払うと、解放された腕を薙いで気配を霧散させた。
悲しみと怨嗟の声が耳に届くが、そんなものは殺しの依頼で慣れている。
そして、もうここには用はないため、水面へ浮上して行くように意識を浮かび上がらせてゆき、目を覚まそうとする。
しかし、目が覚める直前、
《オマエハ、逃ゲラレナイ》
鬼の仮面を頭に付け、肩にかかる茜色の髪をした隻腕の女に凄まじい力で足を掴まれた。
瑠璃色の瞳の下には頬にかけて紫の模様が描かれ、袖のない服はどこかの民族や部族の物のようだ。
そんなことを把握しながら、湊は自由のきく足で女の綺麗な顔を踏みつけ、掴まれていた足から手を解かせると意識を現実へ戻していった。
＊＊＊
夢から覚めた湊は、自分の部屋のベッドで全身に汗を掻いた状態で起床した。
服装はTシャツにハーフパンツのジャージというラフな姿。
時計に目をやると時刻は午後三時になるところで、誰がマフラーから取り出したのか、枕元にあったプライベート用の携帯にはメールの着信を告げるランプが点滅し、部員と担任の名前が送信者の欄に表示されていた。
内容は体調不良の自分を心配するものばかり。佐久間に至っては看病しに行こうかと尋ねてきている。
しかし、仕事をほっぽり出してこられても迷惑だ。何より、家には桜がいる。
看病してくれる保護者がちゃんといるというのに、担任がわざわざ

やってくる意味などまるでなかった。
「……馬鹿か」
呆れたように小さく呟き、全員に夏の暑さで少しやられただけだと返信しておいた。
そうして、ベッドから出ると、どことなく違和感を覚えながら自室を出た。
＊＊＊
家の中を歩いていると、リビングには誰もおらず、別の部屋から大勢の人間の気配を感じた。
ペルソナは使っていない。それでも、隠れていない人間の気配を感知することくらいはできる。
そして、部屋の前まで行き襖を開けると、総勢十人の大人たちの視線が現れた湊に集中する。
その中に、本来ここにはいないはずの者の姿を確認した湊は、他の者が声をかけてくる前に口を開いた。
「……自分で出てきたのか？」
「いえ、主の命（めい）で八雲様を止めるために此方へきたのです。それよりも、その足と眼はどうされたのですか？」
「……？」
エリザベスに言われて、初めて自分が直死の魔眼のままであることに気付いた。
先ほど感じた違和感の正体は、周囲に赤い光の傷のようなものが視えていることが原因だったのだ。
気付けばどうという事はない。そう思って眼を戻そうとするが、何故だかオフに出来ない。
湊が中々眼を戻さないことで、いまの状態に気付いたのか、栗原が声をかけてきた。
「もしかして、また戻せなくなったのかい？」
「いや、別に今回はなにも……」
戻せなくなったのはエルゴ研を脱走したときだけだ。
あれからはどれだけ人を殺し続けても、ちゃんと切り替えることが

出来ていた。
ならば、何が原因で今は切り替えることが出来なくなっているのか？
原因にまるで心当たりがないため、疑問に思いつつも湊は右手を握りしめると、かなりの威力で眉間を殴りつけた。
部屋に鈍い打撃音が響き、鵜飼・渡瀬・力の管理者を除く他の者が息を呑む。殴りつけたところからは、血が顔を伝ってＴシャツに垂れ、赤い染みを作ってゆく。
しかし、拳を顔から離した湊の瞳は、無事に金色へと戻っていた。
「……戻った」
「ば、馬鹿かオマエは⁉　昨日もリットル単位で血流してんだぞ！」
慌てた様子で立ち上がったイリスは、ポケットから取り出したハンカチを湊の額に当て、血が流れることを防ぐ。
しかし、額は傷が浅くとも派手に出血する部位だ。血が顔を伝う事は防げても、ハンカチは直ぐに赤く染まった。
そんな急にやってきて騒ぎを起こす少年に鵜飼は嘆息し、おろおろとしている自分の娘に声をかける。
「あー……桜、お前は坊主の手当てしたら飯作ってやれ。食う物ちゃんと食わねえと血も作れねえからな」
「治療はこちらでやりましょう。ピクシー、八雲様にディアラマを」
鵜飼の言葉を聞いたエリザベスはペルソナ全書からカードを引くと、召喚したピクシーに湊の治療をさせた。
治療によってすぐ血が止まったのか、顔を血濡れにしつつも湊は普段通りのアンニュイな表情をしている。
そんな様子を見たエリザベスは、ピクシーを召喚したまま再び湊に問いかけた。
「それで八雲様、その右足はどうなされたんですか？　昨夜の時点では怪我は全て治したはずですが」
「右足……？」
言われて視線を向けると、確かに脛の辺りが浅黒く変色していた。
しかも、ただ変色しているだけでなく、注意して見ると人の左手の

痕のように見える。
そこで気付いたのは夢の最後の出来事。茜色の髪をしたフェイスペイントの隻腕女に掴まれた部位が、いま変色している部位と丁度合致していた。
夢だけの出来事だと思っていたが、あそこもベルベットルームの中と同じように現実世界の肉体にダメージがフィードバックするのだな、と少しぼんやりした頭で考え。
顔を上げると湊は淡々と事実のみ簡潔に答えた。
「……女に掴まれた。逃げられない？　だか、逃がさないだとか言ってた気がする」
「そ、そう。みーくん、格好良いもんね。でも、あんまり熱烈なアプローチかける子は、わたしとか大人の人に相談してね？」
「……？　多分、二度と会わない。顔面を踏みつけて手を離させてやったから」
引き攣った笑みで声をかけてくる保護者と、湊の間では大きな認識の齟齬が発生していた。
エリザベスが夜のうちに治療を施し、湊は怪我を完治した状態で眠っていたのだ。そのため、怪我を新たに負っていたのなら、自分たちが話している間に誰かがここに侵入したことになる。
そんなはずはないので、では、誰がいつ湊に接触して怪我を負わせたのか、桜や周囲の人間は尋ねるべきであった。
しかし、この場には積極的に両者にツッコミを入れようとする者はいない。
二人は聡いが、変に世間ずれしている。そこに巻き込まれれば精神的疲労を負う事は必至。
確かに気になる事は気になるのだが、そういった理由により積極的に会話に混ざる者はいなかった。
その後、傷は塞がったが顔と服を血だらけにした湊は寝汗を掻いていたこともあり、入浴して着替えを済ませ、桜の用意した食事を中途半端な時間だが取った。
集まっていた大人たちは湊の無事な姿を見て解散し、力の管理者ら

も後日ベルベットルームで蛇神についての説明を約束させると湊の鍵で扉を開いて帰って行った。

第四十六話　二人だけの部活動

深夜――幾月ラボ

深夜、幾月が一人で自分の研究所に籠もっていると、一本の電話がかかってきた。

表示された番号から国際線であることを不思議に思いつつ電話に出ると、受話器の向こうから聞こえてきた聞き覚えのない外国人男性の言葉に耳を疑った。

「ボーデヴィッヒ氏が、亡くなった？」

《はい。先日のホテルの駐車場での事故の前に、何者かから襲撃を受けたと連絡があったため、死因は他殺だと思われます》

「そんな……」

あまりに現実味のない話に思考が働かず、受話器を持ったまま思わず倒れそうなる。

理の改造はほぼ終わったと言っても、まだ完全には済んでいない。それでは、同じワイルドの力を持っていても、複数同時召喚が可能な湊には勝てないだろう。

そう考え意識を戻すと、二・三歩後退したところで踏み止まり、幾月は相手に今後の理の手術はどうなるのか尋ねた。

「ボーデヴィッヒ氏が亡くなられたことで、そちらも慌ただしい状況だとは思いますが、予定されていた手術に関しては今後どのようになるのでしょうか？」

《引き継ぎや襲撃者の特定に時間が掛かるため、しばらくは延期となります。しかし、それが済み次第、依頼のオペを進めて行きますので、どうかご了承いただきたい》

相手の言葉に思わず安堵する。

違法な手術だけあって、それを完璧にこなせる医者を探すのはとても難しい。国内で探すとなれば、もはや絶望的だろう。

そのため、延期になってもどうにか受けることが出来ると分かり、落ち着きを取り戻して幾月は相手に礼を言った。

「ありがとうございます。延期については問題ありません。また予定

が決まり次第、電話かメールで連絡をください」
《ええ、勿論です。では、これで失礼します》
「はい。ご連絡ありがとうございました」
電話が切れて受話器を置くと、幾月は近くに置かれたソファーに深く座って、疲れたように息を吐いた。
「ふぅ……まだだ。これくらいのことで、私は諦める訳にはいかない。岳羽詠一朗やエヴィデンスの件に比べれば、ただ日程がずれ込むだけだ」
疲労の浮かんだ顔で、ソファーに座ったまま中空を見つめ独り呟く。
その言葉は、折れそうになっている自分に、どこか言い聞かせているようにも思える。
「大丈夫だ、茜(あかね)。僕は絶対に諦めないよ。玖美奈のために、君とまた暮らせる世界にしてみせる。僕は負けない」
幾月の強い意志の籠められたその言葉は、独りしかいない部屋に、寂しく響いて消えていった。

8月5日（金）
午前――月光館学園
夏休み。バカンスという制度のないここ日本では、最もそれらしい休暇と呼べるものだ。
寮生も多く通っている月光館学園では、一年でもっとも生徒が街に少ない期間であり、その者たちはどこにいるかと言えば実家に帰省していた。
しかし、巌戸台近辺の実家から通っている者も多数いるので、長期休暇にはいってハメを外し過ぎての苦情も多く寄せられる。
冷房の効いた生徒会室で、桐条美鶴が真剣な表情で目を通している分厚い紙の束は、そういった近隣から学校に宛てられた、我が校の生徒の元気の良過ぎる証だった。
（飲食店のドリンクバーで飲み物を混ぜて遊んでいた……図書館の自習スペースで携帯ゲームを持ちこみ、充電のためコンセントを使用し

ていた……住宅街の空き地に侵入しロケット花火をしていた……子どもか。いや、子どもだったな）

自分で言った心の中の呟きに、真顔のまま自分でツッコミ返す美鶴。

今、この部屋にいるのは彼女一人で、他の生徒会メンバーは週明けまでやってくる予定はない。

それは、彼女のしている作業が、生徒としてのものではなく、学校経営側として報告書を読み込む作業だったためである。

将来は企業の経営と運用を任される立場であるため、このように幼い時分からでも、少しずつグループの仕事に関わり経験を積む。父親と美鶴本人の同意の上でのことであり、いくら大変であっても美鶴は音を上げようとはしていなかった。

「んー……はぁ、少し休憩するか」

しかし、流石に長時間の作業は疲労を蓄積させ、作業効率の著しい低下に繋がりかねない。

仕事を終わらせようと根を詰めた結果、作業が大幅に遅れるようでは本末転倒だとして、長時間の作業で疲れた目元を揉んで、少し休憩を取ろうと美鶴は席を立った。

向かった先は壁際に置かれたティーカップなどの置かれた棚。

その中から自分用の陶磁器のカップとソーサーを一つとって、隣の棚からインスタントの紅茶のティー・バッグを選び始める。

本当ならしっかりとお湯を沸かして紅茶を淹れたいところだが、生憎と生徒会室には電気ケトルとインスタントのコーヒーか紅茶しか置かれていない。

無論、家庭科室にでも行けばコンロもケトルも置いてあるが、気分転換のためにうだる様な暑さの廊下へわざわざ出る気にはなれなかった。

（……そういえば、何故、美術工芸部にはカセットコンロがあるんだ？）

インスタントと言えど淹れ方は拘る。電気ケトルのお湯でカップを温めていた美鶴は、ふと湊たちの部室に疑問を持った。

生徒会室があるのは、管理棟の二階。つまり、美術工芸部と同じ棟、同じフロアに存在するのだが、場所は教室棟に最も近い場所と最奥とで離れていた。

広さと靴箱のある生徒玄関にすぐ行けるという点では、生徒会室の方が良い環境だと思えるが、部室自体の生活環境は美術工芸部が圧倒的に勝っていた。

まず、生徒会室には家電は最初から取りつけられていたエアコンを除けば、作業に使うパソコンに、電気ケトルと古い業務用のような掃除機しかない。

掃除機は高さ六十センチ程度の丸太を立てたような形状に四つタイヤがついて、コードは本体にぐるぐる巻き付けることで片付けるタイプであり、重さと騒音を考えれば箒で掃除をする方が楽なくらいだ。

対して、美術工芸部にはどこから集めたのか、ノートパソコン・電子レンジ・電気ケトル・家庭用掃除機・小型冷蔵庫に加えて、カセットコンロまでも配備されている。

すぐ上が音楽室ということもあって、部屋の壁や扉は防音処理がされ、さらにエアコンもしっかりと完備。水も直ぐ下の保健室で簡単に汲めるので、トイレが遠いことくらいしか不便さはないだろう。

考えれば考えるほど、己の属する学校運営組織よりも一部活の方が環境の良いことへの疑問が湧きあがった。

(何故、一つの部だけそんなに恵まれているんだ？　自前の道具を持ち込むにしても、生活環境が良過ぎるだろう。私もお茶のためにカセットコンロやケトルを持ち込んでも良いか尋ねるべきか……いや、あちらには監督する教師がほぼ顔を出しているが、生徒会はあまり先生も見に来られない。その差で許可は下りないだろうな)

部活と同じように生徒会にも顧問の教師は存在する。

今年で五十四歳になる、三年生の数学担当のベテラン男性教師だが、相手はクラス担任も受け持っているので、他校の高校に進学する生徒の面接練習などにも付き合っているため、生徒会ばかりに顔を出すわけにはいかない。

その点、美術工芸部の顧問である佐久間は、一年生のクラス担任で受験とは今のところ無関係。

尚且つ、異常に優秀なので部室で生徒の面倒を見ながら事務仕事や授業の準備を終えてしまうので、空き時間を考慮すれば佐久間が顧問になる部活ほど教師に監督して貰える部活は存在しないように思えた。

そうして、わずかに羨む気持ちを抱いたまま、美鶴は紅茶の入ったカップを机に運ぶと、それを飲みながら再び書類に目を通し始めたのだった。

――とある田舎

美鶴が学校で一人黙々と作業をしているとき、風花は湊と共に田舎のローカル線の駅にやってきていた。

湊とチドリ、湊と佐久間という組み合わせを除き、特定の組み合わせで動くというのは殆どないが。他の女子がたまに休む湊よりもチドリとの親交が僅かに深いことを考えると、風花だけが湊と一緒に行動しているのは非常に珍しいと言える。

何故、このような状況になったか。それは、ゆかりは弓道部の大会の応援に参加、美紀は荒垣と一緒に兄の試合の応援に遠征、佐久間は櫛名田と一緒に和歌山に温泉と酒を楽しみに行き、チドリは桜と前々から約束していた舞台を観に行ったためである。

風花には予定がなかったのか、という話になるが、来週になれば盆で父方の実家に帰省するため、いまは丁度暇をしていたのだ。

そうして、湊に誘われ駅で待ち合わせをし、電車に四十分ほど揺られてついたのは、周囲にほとんど店や建物のない長閑（のどか）な田舎だった。

「わぁー……自然がいっぱいだね」

改札を出たところでハンドバッグから白い日傘を取り出し、眩しそうに目を細めながら風花は話しかける。

駅の周囲は小さな森や竹林が存在し、周囲に目をやればどこかにしら緑が目に入りこんでくる。

巌戸台ではこうはいかないと、少し新鮮な気持ちになっていたのだが、隣に立つ真夏に黒マフラーを装備している男は、手に持った平た

い大きな包みを持ち直しながら、淡々と返した。
「ただの田舎だろ」
「え、あ、うん。で、でも、巌戸台にはあんまり緑がないから、こういう景色って新鮮だよ、ね？」
少し自信無さげに、湊を見上げながら風花は尋ねた。
相手をよく気遣うという点で美紀と風花は似ている。
だが、美紀はしっかりとした芯を持ちながら、自分の出来る範囲で他者を手助けするのに対し、風花は自分に自信がないため頻りに相手の顔色を窺っている様子だ。
確かに根底には彼女の優しさが存在するようだが、それでは自分が先に参ってしまうのではないか、と彼女のまわりにいる人間は気にしていた。
そして、彼女の隣に立つ男も、相手との距離感はわからずともチドリの友人として、気遣う素振りを見せてきた。
「……ここから少し歩く。向こうには売店もあるから、そこでアイスでも食べよう。地域限定の味もあったはずだから、少し珍しいと思う」
「あ、そうなの？　ここらへんって何が特産なんだろう？」
急な話題転換にもかかわらず、風花は感心したように頷いて湊の隣を歩きだす。
これがゆかりや美紀なら、わずかに驚いた様子見せていただろう。
しかし、良くも悪くも風花は天然でおっとりした性格のため、世間から微妙にずれている湊やチドリにも素のまま対応できる稀有な人材だった。
（黒豆とかかな？　それとも、果物系？　今日は暑いから、楽しみだなぁ）
田舎道を歩きながら、風花はぽやぽやとした表情で地域限定のアイスクリームに思いを馳せる。
乗っていた電車は弱冷車両だったので、外に出ても気温差に参ることはない。しかし、暑い事には変わりないので、どうしても冷たい物は欲しくなってしまうのだ。

そうして、しばらく田舎の風景を眺めながら、湊の道案内に従い風花は歩き続けた。

＊＊＊

「東西武器美術館？」

三十分ほど歩き続けやっと着いたのは、美術館というよりもモノクロ調の近代博物館のような外観をした新しめの大きな建物だった。

そこの看板の文字を読み上げ、風花は首をかしげてから隣の湊を見やる。

美術館としか聞いていなかったが、武器に興味があったのかと思ったためだ。

「武器、好きなの？」

「……別に」

「本当に？」

「ここの館長が知り合いなんだ」

「ま、待ってよう」

風花の質問をどこかはぐらかす様に答えると、湊は風花を置いてすたすたと歩き出してしまった。

体格の違いで歩幅も大きな差があるため、先に行かれてしまうと追い付くのはそれなりに面倒だ。故に、風花は質問の答えよりも置いて行かれないよう、駆け足で後を追った。

建物の屋根で影が出来ており、日傘はもう畳んでも問題ない。そうして、追い付き傘を畳んで袋に入れ鞄に仕舞うと、前を行っていた湊が急に立ち止まった。

「あれ？　中に入らないの？」

不思議に思った風花が声をかける。

すると、湊は右手の包みを左手に持ち直し、振り返ってから右手で隣を指した。

「アイスを食べてからにしよう。見終わった後に、少し館長と話をするから食べる時間がなくなるかもしれない」

「あ、そうなんだ。うん、じゃあ先に食べよ」

了解したと首を縦に振り、風花はコンテナの屋台まで進むと書かれ

たメニューに目を通してゆく。
アイスクリームだけでなく、ジュースやかき氷も置いてあるようで、どれにしようか目移りする。
湊が言っていた地域限定の味は、蕎麦のソフトクリームで、色は胡麻ソフトよりもう少し白い印象を受けた。
だが、味はいまいち想像できない。
まさか、麺つゆ味というオチではないだろうし、こればかりは実際に食べてみるしかないだろう。
そして、味への興味とご当地物を試してみようという好奇心から、風花は蕎麦ソフトを注文する事に決めた。
鞄から財布を取り出し、店員の女性に声をかける。
「あの、蕎麦ソフトのコーンを一つください」
「……二つで良い」
「はい。蕎麦ソフトお二つですね。五百円になります」
「……ん」
「丁度いただきます。ご用意しますので少々お待ちください」
店員は湊から金を受け取ると、レシートを渡してソフトクリームを作り始めた。
お金は自分で払おうと思っていただけに、湊が勝手に払ってしまったことに驚くが、代金を渡そうとしたところで、丁度、ソフトクリームが出来上がってしまう。
「お待たせしました。蕎麦ソフトお二つです」
「あ、ありがとうございます。あの有里君、お金……」
「ここは俺が払うから、後で飲み物でも買ってくれ」
言いながら相手は同じ日影内のベンチへ歩き出す。お金を渡そうにも、いまの湊は包みとアイスで手が塞がっているため、どちらにせよ受け取ることは出来ないだろう。
アイスが一つ二五〇円に対し、飲み物などペットボトルでも一五〇円も出せば買えてしまうが、しつこく言えば不快がられるかもしれない。
そうして、渋々ながら支払いを諦めると、風花は湊の隣に座って目

的のソフトクリームを一口頬張った。
「あ、美味しい！　何だろう、お蕎麦の味と香りがするんだけど、ちゃんとソフトクリームの味もする。なんか、不思議かも」
蕎麦の粉が混ざっているのか、薄いグレーの生地は普通のバニラよりも少し硬めのしっかりとした印象で、口に含む度、蕎麦の味と香りが口に広がり、甘すぎないことも含めて、飽きの来ない味だと風花は絶賛した。
炎天下の中を長時間歩いた疲れも吹き飛び、いまの風花の表情は幸せそうな満面の笑みである。
隣で食べている湊は、そんな風花の様子を眺めているだけだが、傍(はた)から見れば夏休みを過ごす兄妹のようにも見えるかもしれない。
何故、同い年でありながらカップルに見えないか、というのは二人の容姿と身長差が原因だ。
風花は胸の発育は良い方だが、着痩せする事に加えて、身長はクラスでも低い方で実年齢相応か少し幼く見える。
対して、湊はこの数ヶ月で身長が一六二センチまで伸びたため、成人男性と比べれば低身長だが、陰のある大人びた表情も相まって実年齢以上か高校生ほどに見えた。
そんな二人が並び、女子の方がにこにこと笑っていれば、真顔でいる男の方が保護者として面倒を見ているように見えても不思議ではない。
そして、その妹がスプーンを咥えながら、兄に声をかけた。
「お蕎麦のソフトクリームって初めて食べたけど、すごく美味しいんだね。私、家族で出かけてお蕎麦を食べることもあるんだけど、お蕎麦屋さんでは見た事がなかったの。今度、そういう店に行ったら、お蕎麦のアイスは出したりしないんですかって聞いてみようかな？」
「サーバー……いや、ソフトクリームを作る機械があるだろ。あれは、レンタルでも結構するんだ。小さくても冷凍庫みたいなもんだし、電気代もかさむ。そういったコストを考えると、趣味でやってる店や老舗とかだと導入は難しいな」
「そうなの？　有里君、そういうのも詳しいんだね」

風花の発案は全ての蕎麦屋で出来ることではないと言われたが、風花は残念そうにはしておらず、むしろ、湊の知識の広さを感心して、瞳に尊敬の色が浮かんでいた。
そして、アイスを食べ終え、ナプキンで口の周りを拭くと、ゴミをまとめながら少し思い付いたことを湊に尋ねてみる。
「ねえねえ、有里君が知らないことってないの？」
「山岸が昨日の晩に何を食べたのかも知らない」
「あ、そういう個人のプライベートな情報とかじゃなくって、こういった方面の知識は疎いなぁとかっていうのは？」
「……一般常識全般」
（あ、自覚はあったんだ……）
少し考えてから口にした湊の言葉に、風花は何とも言えない気持ちで納得してしまった。
しかし、それを言葉に出すのは勿論、表情にすら出してはいけない。そう考えた風花は、かなり無理があると思いつつも、湊の分のゴミを手に取り、
「コレ捨ててくるね」
と言って、ゴミ箱へ向かって小走りで駆けていった。
＊＊＊
休憩を終えてから中に入ると、風花は初めて見る東西の武器を呆けたような表情で眺めていた。
華美な装飾のされた西洋剣、どこか妖しい輝きを放つ刀、宗教の儀式で使う装飾ナイフなど、単に武器と言っても用途からなにから様々で。
中には、三メートル近い槍や、金属の板にしか見えない剣などもあり、どうやって使っていたのか想像するだけで、好奇心を刺激された。
そうして、二階にあるショーケースを眺め、自分でも知っている武器を発見し、声を弾ませて湊に話しかけた。
「これ知ってる。手裏剣だよね。うわぁ、本当に折り紙で作るのと同じ形してるんだ。あ、でも、こっちは棒みたい。えっと、〝棒手裏剣〟？　ふふっ、そのまんまの名前だね。どうやって使うのかな？」

あまりに見た目通りの名称におかしそうに笑う風花。
自身の知っている手裏剣とあまりに形状が違うため、これも投げて使用するのだろうか疑問に思う。
そして、隣に置かれた説明文に目を通していると、横から男性の老人に声をかけられた。
「ほっほっほ、実際に使うところを見てみるかね？」
「え？　そんなの見れるんですか？」
黄色地に茶色のチェック柄スーツを着た老人に聞き返すと、老人は後ろに控えていた長い前髪を右目側に垂らしたスーツの女性に視線で合図を送った。
すると、女性は腰のベルトからチェーンに繋がった鍵束を取り出し、ケースを開けると展示物の一つを手にとって、そのまま湊に渡した。
「小僧、お前ならわかるじゃろ？」
「お前の頭を狙えばいいのか？」
「死ぬわ、馬鹿もん！　紅花（ホンファ）、あそこの畳みを壁に置いてやってくれ」
「少々待ててください」
老人に紅花と呼ばれた女性は、展示品にもある苦無や短刀を持った忍者たちが戦っているセットから畳みを一枚抜いて来ると、それを二十メートルほど離れた何もない柱に立てかけた。
そして、準備が終われば戻ってくるかと思いきや、紅花は畳みのすぐ脇に立っている。
これでは湊が狙いを外せば大怪我をしてしまうだろう。心配した風花は相手に声をかけようとしたが、その前に武器は投げられていた。
「っ!?」
ヒュンッ、と空気を切る音がしたと思えば、すぐにトンッ、という軽い音が聞こえていた。
見れば、投げられた棒手裏剣が綺麗に畳みに刺さっている。
無事で良かったと思うのと同時に、あんな道具でも綺麗に刺さるものなんだと、風花は少しの驚きと共に再び感心させられていた。

そんな風花の様子を眺めていた老人は、満足そうに笑って説明を始めた。
「ほっほっほ、これで使い方は分かったかな？　他にも、穴を掘るのに使ったり、直接、手で持ったまま刺したりもしたんじゃよ。また流派によって重さや鋭さなどを変えておってな？　ある流派の達人じゃからと言って、他の流派の手裏剣も上手く投げられるとは限らんのじゃ」
実際の棒手裏剣は、十メートルかそこらが当てられる限界距離だと言われている。
だが、その二倍の距離を難なく命中させても、湊が風花から称賛を受けると癪なため、老人はあえて説明しなかった。
武器に関する知識のない風花は、そんな老人の心の狭さに気付かず、素直に相手の博識さに感嘆の声を漏らす。
「へぇ、すごいですね。でも、お爺さんはどうしてそんなに詳しいんですか？」
「それは、ここの館長じゃからじゃよ。わしは車谷（くるまだに）源治（げんじ）、彼女は秘書の紅花じゃ。小僧は今更あいさつせんで良いな。よろしくお嬢さん」
「紅花です。どぞよろしく」
車谷に続いて、畳みと手裏剣を片付けて戻った紅花が、自分たち二人の名刺を風花に渡し礼をする。
受け取った風花は目をパチクリとさせているが、確かに館長ならば、今のように勝手に展示品をいじったりすることも出来るだろうと納得した。
そして、相手だけに挨拶をさせては申し訳ないと、名刺を財布のカード入れに仕舞ってから、真っ直ぐ立って挨拶をする。
「あの、山岸風花って言います。今日は有里君が誘ってくれて見に来たんですけど、初めてみる物ばかりで、すごく楽しいです」
「うむうむ、ニコリともせん小僧と違って素直な良い子じゃな。じゃが、男はしっかり選んだ方がよいぞ。こいつは極悪な外道でな。わしにさっさと棺桶に入れと言ってくるようなやつなんじゃ」
「あははー、その分、私とは気が合うですよ。遺産を私に渡すと遺書に

書き、なるべく早く輪廻の輪に乗た方が良いと館長には常々言てますから」
（こ、この美人な秘書さん怖いよぉっ!?）
部分的に言葉使いが変なことから、相手は名前の通りに中国人なのだろうと推測する。
しかし、性格と出身は関係ないため、にっこりとした紅花の笑顔がとても黒い物に見えてしょうがなかった。
怯える様子の風花に代わり、今度は隣に立っていた湊が相手に対し口を開く。
「姫鶴一文字が折れた。これをやるから、代わりの武器をくれ。うちの蔵には、あんまり気に入るのがなかった」
「ぬあっ、ぬあんじゃとー!?　ききき、貴様、姫鶴一文字を折った？　何をしとるんじゃ、お前はー！」
湊が包みを解き、桐箱を床に置いて蓋をあけると、中には無惨に折れた湊の愛刀・姫鶴一文字が収められていた。
それを目にした瞬間、声の限りとばかりの車谷の怒声が館内に響く。
驚いた風花はびくりと肩を揺らし、紅花は笑顔のまま耳を塞ぎ、湊はいつも通りの表情で桐箱を再び閉めている。
車谷はその箱をひったくる様に手に持ったが、折れた刀が中にあった事しか確認できなかった風花は状況が分からず困惑した。
（え、えーと、あの刀は有里君の物で良いんだよね？　でも、館長さんは武器を集めてるから、折れている武器を見て怒ったってこと？）
困惑しながらも自分で状況を推測し、ほぼ正解に辿り着く。
実際は、何度も譲ってくれと言っていた武器をくれると思ったら、修復不可能なレベルで折れていたという怒りが加わっているのだが、両者の関係を詳しく知らない風花には分からない事である。
状況の把握を終え、ふと、視線を上げると紅花と目が合うが、紅花はにこにこと笑ったまま人差し指を唇に当てた。
ジェスチャーが意味するのは、静かにしていようという事らしいが、車谷は顔を真っ赤にして怒っているので、高齢ということを考え

ると身体によくないのではと思ってしまう。
（……あれ？　もしかして、紅花さんってそれを狙ってる？）
部外者は黙っていよう、ではなく。このままにした方が都合が良い、という裏の意味を理解した風花は、本気で紅花の腹黒さに戦慄を覚えた。
＊＊＊
あの後、風花は誰も助けてくれない孤立無援の状態で車谷を宥め、湊と紅花の小さな舌打ちを聞かなかったことにし、車谷に案内されるまま、美術館の奥へと移動した。
恐怖や疲労で精神的にぼろぼろで、いますぐに帰りたいところだが、他の二人と一緒に残していると車谷の身が危険な気がして帰るに帰れなかった。
（……アウェーってこういうのを言うのかな。二人は仲良さそうにナイフでキャッチボールみたいなことしてるし、私の知らない世界に迷いこんじゃったよ）
車谷を先頭に、後ろに風花が続き、さらに後ろに湊と紅花が並んで歩いている。
最後尾の二人は、幅三メートルの通路の壁側にそれぞれ離れ、紅花がどこからか取り出した小さなナイフを投げては投げ返しを繰り返している。
お互いに視線は前に固定され、武器をキャッチする瞬間すら見ていないことから、かなりの実力を持っていることが分かる。
しかし、どうみても本物のナイフで、そんな怪我に繋がりそうな遊びをする神経が理解出来ず、風花はさらに精神的に追い詰められていた。
（あれは玩具……あれは玩具……あれは玩具……）
「アウチっ、ちょと指切ったよ。今日は私の負けね」
キャッチしそこねて右手中指の第二関節辺りから血を流す紅花。ナイフを仕舞いながら残念そうに肩を竦めているが、顔は笑顔のままだ。
態度と表情の一致していない相手に、勝者である湊は静かに言葉を

返す。
「一回も勝ったことないだろ」
「そうねー。でも、剣とか槍を持たせたら私の方が強いよ。こんな反射神経鍛える遊びじゃ、相手の実力は測れないね」
「遊びすら出来ないって意味では測れるだろ」
「あははー、確かにそうね。これで左肘の腱を切った馬鹿も私しってるですよ。あいつ、その後の仕事トチって、いまごろ海で魚と戯れてるかなー」
（……魚？　スキューバダイビングのインストラクターさんなのかな？）
喜ばしい事に、風花はこの短時間で、現実逃避して自分の心を守ることが出来る程度の精神的な強さを手に入れた。
それが今後どのような場面で役に立つかは不明だが、素の状態で湊と普通に接する事が可能なことを踏まえれば、多少、湊の本業を覗いても今後は大丈夫そうではある。
得体の知れない物を怖がるゆかりや、常識の枠からはずれることが出来ない美紀よりも、湊やチドリと上手く付き合ってゆけるのなら、彼女も何かしら得る物があるだろう。
「着いたぞい。まったく、自分の得物もろくに管理できんなら、丸太でも使っとれば良いんじゃ」
そうこうしている内に目的地に到着した。
扉を開けて中に入ると、ちょっとした倉庫のような部屋に着き、湊が持っていたような桐箱が沢山置かれているのが目に入る。
これら全てが刀なのかと思っていると、車谷は部屋に二つ置かれている大きな机の片方で箱を開けて、折れた姫鶴一文字の破片を並べていた。
「うううー……可哀想に、お前のような美しい芸術品も、小僧のような猿には棒きれとしか思われんかったらしいなぁ」
「あははー、館長の目は節穴ですね。湊の剣舞はまるで神楽舞よ。それで折れたのなら、定めとしか言いようがない。茶番は良いから、ささと湊に剣あげてやりなよ。欲しがてたの貰いましたでしょ？」

「わしが欲しがってたのは完品じゃ！　こんな砕かれた状態じゃ、供養しかしてやれんわ」
紅花に言われても、車谷は鞘や柄を撫でて悲しそうにしている。
どうやら本気でショックを受けているようなので、あまりお客を待たせても悪いと気を利かせた紅花が、溜め息を吐いて肩を竦めてから湊に要望を尋ねた。
「湊、希望はあるですか？　刃長、反り、重さ、それで見合ったの出しますです」
「前のより長い方が良いな。刃長が七二センチ弱くらいだったはずだから、それ以上で。直刀は星噛で間に合ってるから、ちゃんと反りのあるのにしてくれ」
「んー、太刀か大太刀ですね。よくそんな細長い軽いの使えるますな。ただ斬るにも技量いるし、片手で使い辛いし、武器として中途半端な長さで私は使う気ならないよ」
言いながらも紅花は保管されている武器の目録を手に取り、湊の希望に沿った条件のものをメモしている。
その間、湊はどこから出したのか、小さなナイフで何もない場所を切っているが、紅花が「ああ、謝謝。助かるですよ」と礼すら言っていたので、風花も止めることはしなかった。
二人には何が視えているのか聞いてみたい欲求にも駆られるが、風花が口を開こうとすると、紅花が感情の籠もらない貼り付けた笑みを向けてくるので、結局、聞くことは出来ずに終わった。
「んー、候補はいっぱいありましたけど、実戦に耐えられるか難しいです。いっそ、既に持ってる蛍丸か之定にしたらどうか？　あれも長かったでしょう？」
「之定は確か……刃長が約八五センチだな。無ければ使うけど、最終候補だ」
「使える武器をコレクションにするは可哀想ですよ。まぁ、蛍丸は遥か前に紛失した国宝ですし、之定も美術品の価値も高いですけど」
湊たちが先ほどから話している〝之定〟とは、和泉守兼定（イズミノカミカネサダ）という刀工の中の二代目兼定と呼ばれる人物の作品である。

国宝や重要文化財に指定されてこそいないが、非常に優れた刀剣であることは間違いなく、中でも湊が所持している物は現存する之定の中では長い部類にはいるため、コレクターなら云千万出しても欲しがるような逸品である。
湊はこれを仕事の途中で欲しいからと持って来てしまったわけだが、持ち主は既にイリスの手によってこの世から旅立っているので、警察に盗難の届けは出されていない。
そして、〝蛍丸〟は刀身だけで一メートルを超す大太刀で、昭和六年に国宝に指定されたのだが、終戦時の混乱で行方不明になっていたものだ。
何故、湊がそんな物を持っているかというと、あるマフィアを殺しに行った際、少女が一人監禁されていて、その少女を助けたことがあった。
少女の親は貿易業を営む美術品コレクターの富豪で、娘を無傷で助けた湊にお礼をしたいと言ってきたので、相手の別荘の屋敷でインテリアになっていた蛍丸を見つけて、これが欲しいと譲って貰った経緯がある。
それが丁度、前に桐条英恵の過ごしている桐条別邸の近くに寄った理由だったのだが。オーディエンスになっている風花はそれぞれの漢字すら分からず、二人のやり取りを眺めているだけなので、それをどこで手に入れたのかという話も起こらなかった。
「では、大和守安定（ヤマトノカミヤスサダ）か包平（カネヒラ）の辺りで宜しいな？　両方本物よ。前と似た感覚で振れるのは大和守安定か。包平は之定より長いからコツいるですし」
「じゃあ、両方くれ。慣れれば使えるだろ？」
「んー……ま、良いか。館長が話聞いてないが悪いですからね。ここで組みますか？　それとも箱のまま持って帰りますですか？」
「自分で組むから、中身の確認だけさせてくれ」
箱を二つほど持って来て紅花は空いていた机の上に置いた。
湊はそれの蓋を開けて柄と刃の様子を見ているが、風花はどの部分を見ているのか分からず、ただ綺麗な刀だなと美術品としての感想を

抱いていた。
「なんか怖いけど、すごく綺麗だね」
「あははー、人斬るがものですから、怖くて当然ね。むしろ、怖さを感じない武器なんて製作者の神経を疑うよ。そんなものは命を統計的データとしてしか見てないことですから。最近のプラスチック使った銃とか、舐めてるですかって感じでねー」
「あれはあれで役に立ってる。玩具みたいな見た目で市民への威圧感が低いからと、正式に採用している公的機関もあるくらいだ」
「作てる側はコストと量産性しか見てないよ。兵器を売るのがどういう仕事か理解してませんです」
口調は軽いが呆れた表情にわずかに不快さのような感情が混ざっている。
相手は武器の美術館に勤めているだけあって、近代兵器にも詳しいようだが、彼女の何がそこまで静かな怒りを感じさせるのか、相手を知らぬ風花にはまるで分からなかった。
また、同級生である湊が、ここに来てからはさらに別世界の人間のような雰囲気を纏っていることも、風花が混乱する要因の一つであり。妙な胸騒ぎを感じる事から、早く美術館の方へと戻りたいと思った。
そうして、箱の中身を確認していた湊が、二つの箱を持っていた包みでくるむと、手に取って紅花に向き直る。
「問題ない。これで良い」
「はいはい。じゃあ、どうせ館長の趣味の品ですし、お金はよろしいですから、上に戻るます。けど、これもついでにあげとくますよ。湊が来たら渡そう思ってました」
譲渡した刀を筆ペンで目録から削除した紅花はそう言って、壁のところに置かれていた布袋を湊に投げ渡す。
受け取った湊が袋から中身を取り出すと、そこにも一振りの刀が組まれた状態で入っていた。
錆びることを考えれば組んだまま保存するなど言語道断だが、抜かれた刃は薄っすらと青く輝き錆びなど一つもついていない。

「それ清磨(キヨマロ)よ。前にポーカーで館長から巻きあげたから、湊にあげるです。鍔が後付けみたいだけど、愛らしい蝶だったから気に入るか思いますがどうか？」
刃長約七四センチ、柄長約二四センチ、柄は蛍火色で鞘は黒。紅花の言う通り鍔が刀身より新しい時代の物のようだが、確かに綺麗な一匹の蝶の形をしていた。
刃を通す部分が丁度胴体になっているため、大きく翅を広げている姿をしていて、これはこれで良いデザインだと思える。何より、湊はデザインとしての蝶が好きだった。
ベルトに鞘を差し、風花を下がらせ、湊は腰を落とし構えて抜刀する。
ヒュン、と空気を切り裂く音が聞こえたかと思うと、部屋の中の空気が流れ風が吹いていた。
髪が風で揺れるのを感じながら、風花は相手の姿に見惚れて、ただ一言呟く。
「……綺麗」
その隣に立っていた紅花も楽しそうに笑って頷く。
「うん、よろしいな。さっきあげたのより似合ってます。使うのはそちらにしたらどうか？」
「ああ、それも考えておく。号は何かついてるか？」
「号は……館長、この前の蝴蝶(フーディエ)の刀の号は何ですか？」
刀を貰っただけで詳細を聞いていなかった紅花は、箱に折れた姫鶴一文字を片付けていた車谷に声をかけた。
呼ばれて振り返った相手は、湊が自分が前に巻き上げられた刀を持っているのを見て、機嫌を損ねたようだが、言葉に棘を含みながらもしっかりと答えた。
「……春夢(しゅんむ)じゃよ。それを持った男が結婚してすぐに死に、残された妻が人生の儚さから名付けたんじゃ。因みに、その鍔はミヤマカラスアゲハを表しておる　。曰くある刀じゃが、小僧には勿体ない逸品じゃ」
「だ、そうです。湊、死なないように気を付けてください。お葬式は着

る物が準備面倒ですから。それじゃあ、上に行きましょう。風花(ファンファ)もどうぞ、こちらね」
「あ、はい」
聞き慣れない言葉で呼ばれたが、相手が中国の読みで自分を呼んだらしいことは理解したので、風花は素直に後に続いて部屋を出た。
湊と車谷もその後ろに続き、美術館の方に戻ると、まだ見ていなかった展示品を車谷から解説して貰い、風花は初めての武器鑑賞で非常にためになる時間を過ごして帰って行った。
余談だが、車谷は湊が春夢のみを持って帰ったと思っていたため、後日、コレクションの整理をする際に、二振りの刀が無くなっている事に気付き紅花に尋ねると。
紅花は湊に二つともあげたと答えたため、総額で一千万以上する武器を折れた姫鶴一文字と交換したと知ってショックで三日ほど寝込むことになるのだった。

第四十七話　中華な夕食

夕方――巌戸台駅

美術館を出て、電車で巌戸台に戻ってくると、空は暗くなり始め、時間は既に夕方となっていた。

お土産として、とある錬金術師が持っていたとされるアゾット剣を模した、長さ二十センチほどのペーパーナイフを貰い、風花はとても充実した気持ちで駅から出てきた。

後ろを行く湊は、肩に布袋をさげ、右手に二つの桐箱の入った包みを持っている。

「なんか知ってる景色に戻ってくると安心するよね。あ、晩御飯はどうしようか？　一応、友達と食べてきても良いよって言われてるんだけど」

「……別に食べても構わない。食べたい物は？」

「んーと、中華料理とかかな」

本当のことを言えば何でも良かった。流石にファーストフードは遠慮したかったが、ファミレスでもラーメンでも気にしたりはしない。

ならば、何故、ここで中華料理を選んだのか。

それは先ほどまで一緒にいた紅花の顔がふと頭を過ぎり、彼女の国の料理が思い浮かんだからだ。

そうして、自分の意見に対するリアクションを待っていると、隣に立っていた湊は背を向けて歩き出した。

「こっちに知ってる店がある。料金は普通だから安心して良い」

「そうなんだ。でも、こっちの街にも詳しいんだね。昔からよく来てたの？」

自分は地元の人間だが、自分が普段から利用する様な服屋や本屋を除けば、映画館や少し遠くにあるジュネスくらいしか案内する事は出来ない。

中学生になったことで以前よりも活動範囲は広がったが、それでも、この料理が食べたいから美味しい店を教えてくれ、と言われても

答える事は出来なかった。
そのため、隣の市に住んでいる湊が詳しい事は少々意外だった。
確かに相手は色々な知識を有しているが、どこか普通とは違う雰囲気を纏っているせいで、そもそも庶民的な買い物や外食をするイメージすら湧かない。
それを踏まえると、相手の金銭感覚にも疑問が出てくる。相手と自分では料金における〝普通〟の感覚がずれているのではないか。財布の中身は普段より多いが、風花は少し不安を感じながら相手の返事を待った。
「両親が生きていたときは、こっちに住んでた。桜さんの家で暮らす様になってからも、知り合いがこっちにいたから、よく出てきてはいた」
「ふーん、じゃあ、もしかしたらどっかですれ違ってたかもしれないね」
相手がこちらの街に詳しい理由を理解すると、風花はにこやかな表情を浮かべて湊の隣を歩く。
流石に、湊のような人間を見たことがあれば記憶に残っていてもおかしくない。金色の瞳に黒いマフラーというかなり特徴的な姿をしているのだ。
チドリもセットならさらに目立つだろうが、やはり噂にも聞いておらず。欠片も記憶にないということは、会った事はおろか、すれ違ったことすらないのだろう。
(やっぱり、会ったのは中学校に入ってからだよね。でも、なんか美紀ちゃんが有里君を知ってるかもしれないって言ってたし、私もただ忘れてるだけですれ違ったりはしてたのかも)
以前、美紀から聞いた言葉を思い出しながら、風花は湊に続いて目的地へ向かって歩き続けた。
＊＊＊
湊の案内で着いたのは、明らかに周囲の店から浮いている高級そうな中華料理店だった。
店の外観は赤を基調とした、まさに中国といった印象なのだが、外

にはメニューや食品サンプルなどといったものを一切置いておらず。この店の平均的な値段も分からない。
（う、うそつきー！　絶対、普通の料金じゃないよ、ここー！）
顔の筋肉を引き攣らせながら風花が固まっていると、湊はすたすたと中に入ってしまった。
案内をして貰っておきながら、やっぱり別の店がいいとも言い出せず、風花は肩を落としながら後に続く。
すると、店に入ってすぐ、スリットの入った膝丈の青いチャイナドレスを着た女性店員がやってきた。
「にゃにゃっ、湊がまた女の子を連れて来たね！　媽媽（母さん）、湊が新しい女の子連れて来たよー！」
頭の高い位置で二つのお団子を作った髪型の女性は、どこかイントネーションのずれた日本語で店の奥に話しかけている。
急にそんな反応を見せられ風花は驚くが、同時に、店の人間に名前と顔を覚えられているのだなと、本当に相手の行きつけの店であったことを実感する。
そして、ただ立って見ていると、湊は風花を手招きして店員の横を通り過ぎた。
「……無視して良いぞ。あれ、紅花の妹だから」
「え？　あ、そうなの？」
「ここ、あいつの実家なんだ」
言われて振り返って相手の顔を確かめれば、どこか愛嬌のあるニコニコとした表情は姉の紅花と通じるものがあるかもしれない。
ならば、ここは本場の中国料理を食べることの出来る店なのだなと思い。同時に、馬鹿高い料金を請求されたらどうしようかと不安にもなる。
店は内装も綺麗で、紅花の妹以外の店員も皆が綺麗なチャイナドレスを着て、忙しそうに働いていた。
そして、湊が向かった先はテーブルの横に龍など中国らしい柄の仕切りがある場所で、他の客の姿はあまり見ることが出来ないが、少し見えただけで歳のいった裕福そうなスーツ姿の男たちが確認出来る。

平均的な客層が男たちのような人間なら、まず間違いなく高級中華ということになるだろう。
しかし、先を歩いていた湊が壁際の席で椅子を引いて待っていたので、礼を言ってそこに座ると、後は注文するだけだと覚悟を決めるしかなかった。
「ややー、本当に新しい女の子と一緒とは、湊も隅に置けないな。おばさんにも紹介してよ」
「学校のクラスメイトで、チドリの友達の山岸だ」
「あ、山岸風花です。どうもはじめまして」
水とおしぼりを持ってやってきた、モデルの様にすらっとした長身の女性に風花は自己紹介をする。
先ほどの二十歳前後の女性が妹なら、このショートの髪型をした四・五十代の人物は紅花の母親だろうか。
そんな風に推測していると、女性は風花に笑顔で挨拶を返してくる。
「あははー、はじめまして。この店の主人の花琳(ファリン)よ。こう見えて、二児の母ね。さっきのが下の娘の鈴音(リンイン)よ。上の娘は仕事でもう少しで帰ってくるな」
「あ、紅花さんには美術館でお会いしました。それで、帰りにご飯を食べることになって有里君に案内してもらったんです」
「おお、売り上げ貢献とは偉いな湊。杏仁豆腐サービスするよ」
「いいから、先にメニュー持って来てくれ」
言われたところで気付いたのか、手をポンと一度打って花琳はメニューを持ってきた。
受け取った風花はメニューを開いて値段を確認する。どうか良心的であってくれと願いながら目を向けると、そこには普通の店よりかなり安い価格が書かれていた。
「あれ、すごく安い」
「お、見た目に騙されたな？　ここは食を楽しむ店だからね。メジャーなものは安く、一部だけリッチに高級志向よ。おすすめは点心の食べ放題な。七十種の点心がドリンクとセットで九十分、千七百円

也！」
「俺はレタスチャーハンに天津ラーメン」
「お前にはがかりだよ……。御嬢さんはどうするか？」
明るく元気にオススメを紹介した直後に、感情の籠もらない声で単品の商品を湊は注文した。
それに花琳は呆れたように深いため息を吐いているが、すぐに笑顔に戻り、風花に尋ねてきた。
メニューを見ていた風花はどれを頼むか迷ってしまう。表記は日本語で写真付きなので分かり易いが、その記載されている写真の時点でとても美味しそうなのだ。
そして、一品物も魅力的だが、花琳がオススメと言った点心食べ放題にも心惹かれる。どちらも食べたいが、自分はそんなに大食ではない。
よって、風花は小食でも様々な料理を楽しめる、相手のオススメを注文する事にした。
「じゃあ、私はその食べ放題でお願いします」
「はいはい。ドリンクはどれがいいか？」
「えっと……この鉄観音ってなんですか？」
メニューにはジュースなどのソフトドリンクだけでなく、ジャスミン茶やコーヒーも書かれている。
だが、鉄観音や東方美人という名前は初めて目にしたため、それが何であるか気になった。
もしも、中華料理ではメジャーな飲み物だとすれば、自分の無知さを恥じるところだが、風花の質問には湊がすんなりと答えてくれた。
「ただの烏龍茶だ。色は山岸が想像する烏龍茶よりも普通のお茶っぽいと思うが、味は別にそこまで変わらない。というか、日本の烏龍茶では割とポピュラーなんだ」
「へぇ、そうなんだ。じゃあ、こっちの東方美人は？」
「それもくせあるけど烏龍茶の一種だよ。ちゃんと選んで仕入れてるから、味と香りは抜群で美味しいな。ただし、ジュース以外は鈴音が淹れたときは外れだから、そのときは運悪かったと諦めてね」

「そ、そうなんですか。えと、それじゃあ、鉄観音でお願いします」
「はいはい。料理は最初の何個はこっちでオススメを出すから、食べながら追加の点心選んでね。そっちの馬鹿たれは、御嬢さんの会計も払えば一緒に点心摘んでも良いよ。それじゃあ、待ててね」
言うだけ言って、花琳は手を振って去って行った。メモも何もしていなかったが、湊の分の注文がちゃんと通っているか少し心配になる。
自分があれこれと悩んで話しているうちに忘れられてはいないかと、風花は小さな声で湊に話しかけた。
「有里君のもちゃんと注文されたのかな？　花琳さん、何も書いてなかったけど」
「ああ、一度に三十種類の注文を受けても間違えずに覚えておける人間だから、そういったことは気にしなくていい」
「す、すごいね。ていうか、そんなに注文するって、パーティーでもしたの？」
「いや、俺らの保護者が面倒みてる人らと一緒に食べに来たんだ。桜さんとチドリもいたけど、男が十五人もいればそれくらいの数にはなる」
湊らの保護者とは鵜飼のことで、その鵜飼が面倒を見ているというのは、つまり桔梗組の組員ということである。
今のところ、教師を除けば誰にも家が極道だとは話していないので、その部分を伏せたまま説明したが、納得したとばかりに相手が頷いていることから、伏せたままでも話しに影響はなかったらしい。
風花は、疑問や分からない事は素直に質問してくるが、相手のプライベートにはあまり踏み込まない性格のため、こういった場面での会話はスムーズに進むのだった。
「我回來了（ただいまー）。あや？　湊、風花、また会ったですね。まぁ、ここ私の実家だから、夜に来たなら会うが当然ですけど」
「あ、紅花さん。どうも、お邪魔してます」
正面の入口から店内にやってきた紅花。相手は客の入りを確認しながら進んでいる途中で二人の姿を捉えると、まっすぐ歩いて通路を

挟んだ隣のテーブルに腰を下ろした。
仕事中はスーツを着ていたが、今はジーンズに上は黒のTシャツと薄いピンクのシャツを羽織っているというラフな格好なので、オンオフのギャップに風花は目をパチクリとさせている。
だが、風花のそんな様子も気にせず、荷物を置いたままグラスを取ってくると水を注いで、紅花が話しかけてきた。
「湊は良いとして、風花は夜に男といて大丈夫ですか？　一応、ここらへんは都会で物騒だからね。親御さんも心配しますですよ」
「えと、友達とご飯食べてきて良いって言われてるので、メールもしましたし大丈夫です」
「あははー、でも、男と二人とは思ってませんですよ、きっと。湊は、ちゃんと風花を家に送り届けるが良いです」
うんうん、と頷いて言ってくる紅花の笑顔からは何の裏も読めず、素直に風花を心配して親切で言ったらしい。
昼間は車谷に対して、かなり黒い部分を見せていたため少し意外に思うが、思い返してみれば、湊には刀を無償で渡していたりもしたため、基本的には善人であるのかもしれない。
そんな風に考えている間に、入り口で先ほど会った鈴音が湊のラーメンと一緒に四段の蒸籠を持ってやってきた。
「はいはい、お茶とラーメンと点心おまち。炒飯は次に持ってくるよ。紅花は何か食べるか？　言っても私作らないけど」
「なら、聞くんじゃねえです。適当にご飯もので良いから、食べる伝えておいてよ」
「わかたよ。湊、あとでその子の紹介してね」
「……仕事しろ」
湊が受け取った天津ラーメンの卵を箸で摘みながら返すと、鈴音は手をひらひらと振って厨房へ入って行った。
その間に、風花の前に置かれた蒸籠を紅花が広げてやっている。
中華風おこわ、大根餅、小籠包、焼売（シューマイ）、出来たての料理は食欲をそそる香りをさせており、風花は口の中に唾液が溜まるのを感じた。
早速、箸を持って取り皿に小籠包を一つ乗せる。食べる前に紅花が

「熱い汁が出るから気をつけるですよ」と言っていたので、かぶり付くのをやめて箸で半分に割ることにする。
だが、箸を刺した瞬間に中から、湯気の立つ肉汁がジュワリと流れ出てきた。せっかくの汁が勿体ないと思ったが、それは最後に飲めばいいと湊も助言をしてくるので、気を取り直して一口大になった小籠包を口に含んだ。
「っ、おいひい！　ふわ、あついけほ、すごくおいひいです！」
「あははー、それは良かたけど。口に物入れて喋るは行儀良くないね」
「あっ……はふ……あ、あはは、美味しくてちょっと興奮しちゃいました」
指摘された風花は照れて頬を染めて身体を小さくする。しかし、こういった本格的な中華料理を食べたことがなかったため、意識はいまも料理に向いており。
残り半分と溢れ出た汁を飲み干すと、すぐに別の料理に箸を伸ばした。
「これは何て料理ですか？」
「ん？　ああ、大根餅よ。うちでは広東風ので出してますが、簡単に言えばおろし大根に椎茸やソーセージにエビとかも混ぜて固めて蒸して焼いたものね。蒸篭で出てきたのは、冷めないためだから、実際は最後に表面を油で揚げるように焼いてるですよ」
「へぇ、あ、表面はサクサクしてる。でも、中はもっちりして柔らかい。ふふっ、なんか不思議な食感かも」
初めて食べる料理の楽しい食感に笑顔になり、続けて風花は他の料理も食べ続ける。
追加の分は炒飯を持ってきた鈴音に湊が勝手に注文したので、温かいお茶を飲んでホッとしながら、風花は何がくるのだろうかと心を躍らせながら料理を待つ。
すると、次にやってきたのは、チャーシュー、中華粥、餃子、生春巻き、胡麻団子、上海焼きそば、酢豚の計七品で、料理は花琳と鈴音が二人で持ってきた。
実を言えば、この中のいくつかは本国でいう点心には含まれない。

しかし、日本では中華のおかずが点心だと思っている者もいるので、この店でも気にせず出しているのだ。
それを知らない風花は、テーブルいっぱいに並ぶ料理にただ驚いているばかりで、花琳たち店員もその様子に和んだように笑みを漏らしている。
「御嬢さん、いい反応するな。遠慮しらないそっちの馬鹿たれも、少しは見習えな。お前の分の料金も取るぞ」
終始笑顔で食べ続けている風花に笑いかけ、続いてその正面で自分の頼んだ料理を完食して点心を食べている男に花琳が言葉を投げる。
やってきた料理の三分の二を湊が食べているため、鈴音が忙しそうに厨房に追加注文しに行き続けていることを見かねての発言だ。
だが、チャーシューを箸で取っていた湊は、いつも通りの表情で素っ気なく返す。
「娘の治療代でお釣りくるだろ」
「あははー、原因つくった人間の言う事じゃないな。次に仕事でかち合ったら、遠慮なくぶっ刺してあげるですよ」
「え？　有里君、紅花さんとお仕事で会った事あるの？」
隣のテーブルで賄い食を食べていた紅花の言葉に引っ掛かる物を感じ、食べていた手を少し止めて風花は尋ねた。
自身の知っている湊の仕事は骨董品屋のバイトだけだ。そして、紅花は車谷の秘書が仕事なので、車谷が刀か何かを手に入れようとした際に、骨董品の仕入れをしにきた湊と同じ品をめぐって争ったのだろうかと想像を巡らす。
けれど、品物をめぐって治療が必要になる状況が想像できない。いや、美術館でのナイフ投げを考えれば、荒事でも起きたのかと考えることも出来るのだが、本格中華に舌鼓を打っているときに想像したくないだけだった。
そんな〝一般人〟である風花に気を遣ったのか、答えた紅花はにっこりとしたまま掻い摘んで説明を始めた。
「ある品を手に入れるって仕事がかち合ってね。早い者勝ちだたから、ちょっと手荒な方法で湊を黙らせようとしたですよ。けど、小さ

かったくせに喧嘩に慣れてて、私も自分じゃ動けなくされてしまった訳です。その間に、もう一人が私の仲間をボコボコにして手に入れて、こっちは怪我した上に儲けもなく散々だたでした」

実際に二人が出会ったのは二年前の裏の仕事でのことだ。普段は車谷の秘書をしている紅花も、ときには依頼を受けて様々な悪事に手を染めている。

元々、父親がチャイニーズマフィアの幹部をしていて、そっちの道に進む様になったのだが、七年前に本国で起こった組織同士の抗争で父が殺されてからは、日本に永住する事を決めた母と妹がこの店を始め。紅花は父の知り合いだった車谷の秘書の仕事をしつつ、裏の仕事も継続して行うようになっていった。

出会ったのは、対立する組織にそれぞれが雇われ、相手の組織の幹部を殺すという依頼で、つまり、ある品を手に入れるというのは、敵対組織の幹部の命の事を指す。

そして、偶然にも実行の日取りが重なり、雇われ同士で潰し合った上で幹部を殺すはめになり。湊は紅花と、イリスはもう一人敵に雇われていた男と交戦した。

美術館で言っていた通り、剣や槍捌きは紅花の方が上だ。けれど、湊は銃火器も使える。

結局、湊は身体中を切られ、足や腹部を刺されてもいたが、銃弾を肩や足に撃ち込まれ失血で倒れた紅花が敗北する事になった。

もう一人の男も、イリスから早々にヘッドショットを喰らって死亡していたため、まだ息はあっても紅花に勝ち目はない。

依頼も失敗し、勝負にも負けて、そのとき紅花は死を覚悟した。

「え、でも、じゃあ、なんで治療代って話になるんですか？」

「んー、まぁ、湊の気紛れとしか言いようがないです。助ける代わりに、色々と教えて欲しいと交換条件出して来てね。私も死にたくなかたですから、その条件で治療受けて、ここに運んでもらたですよ」

そう、死を覚悟した紅花に、湊は近接武器や刃物の使い方を教えてくれるのならば、治療を施し生かしてやると伝えた。

当時、刀の使い方は鵜飼から習っていたが、型にはめない方が強い

湊の剣は、剣道における邪剣の類いであり。投げナイフや、柄にワイヤーを結んで剣を投擲するような、紅花の型の方が近いものがあった。
そのため、自分の技術を伸ばすのに適した人物を見つけたと、イリスにも相談せず勝手に交渉を持ちかけたのである。
当然、紅花は相手の言っている意味が理解出来ず困惑したが、簡単に言えば槍に投げナイフ、さらに曲芸剣や他の武器も教えて欲しいと言い直すと、失血で半分朦朧とした意識の中で笑って承諾した。
その後、止血剤を射たれ、包帯などで傷口周辺を覆われたが、最後に緑の光を胸に注がれながら口に指を突っ込まれて血を舐めさせられ、そのおかげか何とか無事に家に帰ってこられた。
最後の行為が何であるかは今も分かっていないが、敵は殺すというのが当然の世界で、命を拾われたことに変わりはない。
故に、紅花たちは湊に恩を感じているし。死にかけた原因を作ったのだとしても、恨む様なことはないのだ。
「本当なら助ける必要なかたからね。自分も血だらけのくせに、私を担いで家まで届けたのは驚いたですよ。まぁ、勘違いした鈴音は湊を蹴り飛ばしたけど、別に勘違いでもなかたから、気にしないな」
言って紅花は、あははー、といつも通りの笑い声を響かせる。
蹴った人間と蹴られた人間は複雑そうな表情をしているが、それは紅花には関係ない。紅花は助けて貰う条件を守り、湊に自分の技術を教え、さらに武器を扱っている車谷を紹介した。
そうして、今は友好な関係を築けたことで、このようにふざけた事も言い合えるのだ。
加えて、あまり暗い雰囲気で話すと風花に自分たちの仕事がばれてしまう。湊がクラスメイトと紹介したことで、裏の仕事どころか極道の家の人間であることも伝えていないだろう。
親の職業を隠す苦労は、自身も父親がマフィアだったことで知っている。故に、紅花は気を利かせて笑い話に話題を変えたのだった。
桃饅頭を食べていた風花は、納得したとばかりに首を縦に振り。口の中の物を飲みこむと、二人の出会いを聞いて思った感想を告げる。

「なんか、面白い出会いですね。チドリちゃんとは病院で会ってから一緒だって言ってたし。普通に学校くらいしか出会いのない私と違って、有里君のまわりってすごいドラマチックかも」
「んー、仕事柄分かるですが、一番良いのは結局普通なことね。日常は尊いよ。だから、風花はいまが楽しいなら、その感覚を大切にするべきな。これ人生の先輩としてのアドバイス思って良いです」
「は、はい……？」
言われてもよく分からないらしく、風花は返事をしつつも首をかしげている。向かいの湊は黙って食べ続けているが、同業者にはその胸中もある程度の想像が付く。
なので、敢えてそちらには触れず、風花に笑いかけて「いつか分かるよ」とだけ返した。
その後、風花が満腹になってからは、あまり遅くなるのもよくないからと、時間よりも少々早めに店を出て湊と風花は帰って行った。
二人が帰ってからも席に残り、お茶を飲みながら仕事の手帳に何かを書きこんでいる紅花は、独り静かに呟く。
「……風花、衝撃的な出会いは、衝撃的な別れを生むですよ。物事は釣り合いが取れるようなってますから。小狼はそのこと知らないけど、湊は本能で理解してるです。因果応報も釣り合いの一つ。あの子は誰かに大切な物奪われるか自分が殺される運命背負ってるよ。私も人がこと言えないけどな」
自嘲的な笑みを浮かべ手帳を閉じると、鞄にそれを仕舞って、紅花は二階にある自宅部分へと上がって行ったのだった。
夜――駅前
「お土産も貰っちゃったね」
本来、テイクアウトは行っていないが、また来て欲しいということで、風花は胡麻団子と桃饅頭を持たされていた。
店の場所は覚えたので、家に帰れば両親にとても良い店だったと伝えるつもりだが、お土産まで持たされると流石に恐縮してしまう。
さらに、風花の分を払わないのなら食べ放題の料金も取ると湊が言われたため、どちらにしろ湊の支払う値段が固定ならと、苦しくなる

ほど食べたというのに風花はご馳走になってしまった。
店を出てからこっそり代金を渡そうとしたが、相手は受け取ってくれなかったので、もう一度しっかりとお礼を言って駅まで戻ってきたところで、偶然にも知った顔に出会う。
「あれ、風花じゃん。てか、有里君も。珍しい組み合わせだね。もしかして、デート？」
そう言って近付いてきたのは、弓道着を着ているゆかりだった。彼女の後方には、同じように弓道着を着ている集団がいるため、どうやら試合の応援の帰りらしい。
相手がこの場にいる理由は把握できたが、風花はデートという言葉に反応して顔を赤くして手をブンブンと振って否定する。
「ち、違うよ。今日は皆がいないから、私たちだけで美術館に行ってたの。ちゃんと部の活動だよ」
「えー？　いや、待ち合わせして、美術館行って、時間的にご飯でも食べてきたんじゃないの？　カップルかどうかはともかく、それって一般的にデートって言うと思うんだけど」
「美術館では館長さんと秘書の人も一緒だったし。ご飯を食べたのは秘書の人の実家で、一緒にお話ししてたの。だから、で、デートとかじゃないから」
瞳を潤ませ耳も真っ赤にして否定する風花に見かねたのか、ゆかりは苦笑しながら「わかったわかった」と相手を落ち着かせた。
例え実質デートだったとしても、〝友達と遊んだ〟と〝友達とデートした〟では本人の受け取り方も違っているらしく。別に相手をいじめたい訳じゃないゆかりは、今後、風花と話すときは言葉に注意しようと軽く心に留めることにする。
そして、次にもう一人の部活仲間に視線を向けると、相手の持っている物が気になったようで、軽いノリで尋ねていた。
「有里君、荷物多いね。肩のは竹刀入れっぽいけど、そっちの包みは何が入ってるの？　もしかして、部の備品に絵でも買った？」
「いや、今日行った美術館は絵じゃなく武器を置いている場所だ。時代だけでなく地域ごとにも冶金（やきん）技術に違いがあって、同じ時代のもの

でも全く異なった装飾が施されていたりする。実用性を無視すれば、美術品としての価値が高いものも数多く存在するから、ああいうのは、見てるだけで勉強になる」
「そ、そうなんだ（解説系以外でこんなに話してるの初めて見たかも。もしかして、武器とか好きなのかな？　うーん、やっぱりよく分からない人だわ）」
　饒舌な湊には違和感を覚えるが、それほど相手を理解している訳ではない。引き気味に返事をしたゆかりは、こういう面もあるのだろうとだけ思う事にした。
　続いて、包みの中身を聞くことが出来なかったので、事情を知っていそうな風花にこっそりと尋ねてみる。
「風花、風花。有里君の荷物ってなに？」
「えっと、包みはばらばらな状態の刀が入った木箱が二つで。布袋は組まれた？　状態の刀が一本入ってるんだよ。私、刀って初めてみたんだけど、薄っすらと青くて綺麗だったなぁ」
「か、刀っ!?　それも三つって何に使うのよ。買ったの？　刀って一本で何百万もするんじゃないの？」
　いくら武器が好きだったとしても、流石に三振りも一度に買ってくるのはおかしいだろう。さらに言うのならば、どこにそんな金があったのだとゆかりはツッコミを入れた。
　対して、風花はキョトンと首をかしげ不思議そうにゆかりを眺め、湊は興味なさげにジッと遠くを見ている。
　相手のそんな様子に、これだから天然少女とツッコミ所満載の人間はとゲンナリするが、ゆかりはめげずに質問を続けた。
「有里君、刀っていくらくらいする物なの？　その、木刀とか偽物じゃなくってさ」
「物による。作られた年代とか、その刀工の作品が何振り残ってるかで付加価値もつくから一概には言えない。どこの誰が作ったかも分からない数打ちなら、古くても十万以下で手に入ることもある」
　刀の価値を知らないゆかりと風花は、湊の話を聞いてそうなのかと頷いている。

だが、そうなると次に気になるのは、湊が持っている刀の価値だ。こんなにも武器が好きなのであれば、そんな十万以下の安物は買っていないだろう。
そう考え、ゆかりは驚かないぞと心構えをした上で尋ねた。
「じゃあ、君がいま持ってるのは？」
「……総額なら一千万は超える。ただ、それは保存状態が極めて良いからだ。同じ刀工のものでも、百万以下だってざらで、俺が持ってるこのランクに出会う事はまずない。お前がどこで刀は馬鹿高いなんて聞いたか知らないが、刀の価値はいまかなり落ちてきてる。買うつもりなら、もう少し待った方が良い」
「だから、お前って言うなし。ってか、買わねーよ。君は私にどんなイメージを持ってるのよ。刀振り回して街中闊歩するように見える？」
「……」
「何か言えよ！　無言は肯定と取るからね？！　月夜ばかりと思うなよ！」
「ゆ、ゆかりちゃん、それじゃあ有里君のイメージ通りだよ……」
憤慨するゆかりと、困ったような顔で宥める風花。怒られている本人はどこ吹く風と澄ました表情をしているが、数年後に本当に刀や武器を買う事になるとは誰が予想しただろうか。
その後、怒っているゆかりに湊がお土産に持たされた物を譲渡して機嫌を直させ、他の部員と一緒に寮に帰ると言って別れた後は、風花を家まで送って行った。
風花と別れた後、湊は新しい刀の使い心地を試すためタルタロスに挑み。問題なく手に馴染んだことで、今後のメインの刀は春夢に決めてから桔梗組まで帰って行くのだった。

第四十八話　夏祭り、小さな出会い

８月１３日（土）
夜――長鳴神社
お盆真っ盛りの休日の夜。岳羽ゆかりは麻の葉柄のピンクの浴衣を着て、神社の石段の近くで人を待っていた。
本日は巌戸台にある長鳴神社の夏祭り初日。祭り自体は明日もやっているが、メインは今日であり、海の方で揚がる花火も見られるということで、部活のメンバーと一緒にまわることにしたのだ。
「あ、ゆかりちゃん。こんばんは。浴衣、可愛いね。すごく似合ってるよ」
「こんばんは。ありがとう、風花もよく似合ってるよ」
ゆかりの次にやってきたのは、水仙柄の藍色の浴衣を着た風花だった。
昨日の昼まで、父方の実家に帰っていたそうだが、夕方には戻っていたため、本日の昼までぐっすり寝て、移動の疲れをとってからやってきたらしい。
からんころんと下駄の音を立てながら笑顔で寄ってくると、浴衣を似合っていると言われたことで、少し耳を赤くしている。
そんな照れる姿も小動物的で愛らしく思いながら、ゆかりは待ち時間の暇を潰すため、相手をいじって楽しむことにする。
「いやぁ、残念だったねー。今日は有里君がいないから、浴衣姿みせらんないね」
「だ、だから、あれはデートじゃないってば。館長さんとかお店の人も一緒にいたし、ゆかりちゃんもお土産もらったでしょう？」
今日の参加者は美術工芸部の女子四人に、害虫（ナンパ）よけとして真田と荒垣がやってくることになっている。
何故、湊だけは参加しないかというと、神に嫌われているから結界に弾かれて神社に入れないからしい。もっとも、実際は遠くの街に出かける用事があるとチドリから説明を受けている。
チドリの説明を聞くまで、風花以外の人間はやや信じかけていたの

はここだけの話だ。
無論、ばれたとしても素直に謝罪するつもりだが、ゆかりたちにも言い分はある。
そもそも、湊は神どころか世界を小馬鹿にしたような、斜に構えた思考をしている。
古今東西の神話についての知識を持ちながら、ある神は強姦魔だと言い捨て、またある神は女のくせに女の裸踊りに釣られた変態だと断じた。
確かにエピソードを聞けば、その認識も間違ってはいないのだが、その神たちを崇拝している信徒を敵に回しかねない発言はどうだとチドリ以外の女子からツッコミがはいったりもした。
けれど、そのとき部室に居たチドリ・佐久間・櫛名田の三人が、いざというときに守ってくれるのは神ではなく湊のような人間だと、『湊〉神』という独自思想を持っていたので、ゆかりたちは何も言えなくなってしまった。
当時のことを思い出すと苦笑するしかないが、それよりも今は風花の相手をする方が重要だ。
そうして、話題を湊から貰ったお土産のことにシフトしながら会話を続ける。
「てか、あれ少し冷めてたけど美味しかったよ。二人の思い出の店かもしれないけど、今度どこにあるか教えてくれない？」
「もぉー！　そういう言い方するなら教えたくありません。有里君にも教えないで良いって言っておきますから」
「……湊に言っておくって何の話？」
拗ねたように風花が顔を背けると、丁度良いタイミングでチドリが現れた。
ゆかりたちと同じように、チドリも牡丹の柄が描かれた黒色の浴衣を着ていて、家での普段着が着物や浴衣だけあって実に違和感無く着こなせている。
それを、やけに高そうな生地だなと思いながら、ゆかりは相手に訳を話した。

「いや、あのね。前に風花が有里君と一緒に中華料理を食べに行ったらしいんだけど、お土産でくれた料理がすごく美味しかったの。だから、どこのお店か教えてって言ったのに、二人の思い出のお店だからって教えてくれなくて」
「ち、違うよ。ゆかりちゃんが今みたいに変な事いってくるから、そんな言い方するなら教えたくないって言っただけで。あの、本当に有里君とは部活で美術館に行っただけで、デートとかじゃないの。ていうか、有里君のことは大切なお友達だと思ってるけど、異性としては見てないから、チドリちゃんも誤解しないでね？」
ゆかりがチドリに今までの経緯を話すと、相手が答える前に風花が焦ったように説明を被せた。
本当に誤解をして欲しくないらしく、説明を終えた風花の額には薄っすらと汗が滲んでいる。
ただの冗談のつもりだったが、そんなに必死になって弁解するとは、流石に悪乗りし過ぎたかとゆかりも反省し謝罪しようと思った。
けれど、ゆかりが謝罪を口にする前に、どこか呆れたような視線でチドリが口を開いた。
「……なんで私にそんなに必死に説明するの？」
「え？　あの、だって……ね？」
「怒らないからはっきり言いなさいよ。きっと、私と貴女には大きな認識の齟齬が発生してる。でも、それがどの程度かは分からない。だから、はっきりと声に出して私に教えてみせて」
困ったように乾いた笑いを浮かべた風花を、チドリはジッと見つめて逃がさないようにしている。
怒らないから、とは言っているものの、少しでも変な事を口にすれば分かっているんだろうな、と脅すようなオーラが他の二人には見えていた。
だが、それが分かっていても、相手に逃がす気がないのであれば、何かしら自分の考えを話さなくてはならない。
背中に嫌な汗を掻くのを感じながら、風花は脳細胞をフルに活用して、相手に怒られないであろう答えを弾き出そうとする。

あれでもない、これでもない、と考えは全く纏まらず。かといって、あまり時間をかけても変に思われるため、答えは直ぐに返さなければならない。
色々とプレッシャーを感じながら考えているせいか、妙に熱が出てきた様な気もしてきた。そして、半分泣きそうになっている風花の前に、救いの神が現れる。
「あ、皆さん、遅くなりました。お待たせしてすみません」
白地に撫子柄の浴衣を着た、最後の女子部員にして美術工芸部部長の真田美紀の登場は、風花にとってはまさに救いだった。
ゆかりも同じように思ったのか、場の空気を変えるため、率先して美紀とその後ろにいるTシャツにハーフパンツというラフな私服の男子二人に声をかける。
「こんばんは。真田先輩と荒垣先輩も今日はボディガードよろしくお願いします」
「ああ。まぁ、ここの祭りはそんなに荒れたりしないが、もしものときは任せろ」
「アホか。女子を守るにしたって、ボクサーのテメェは手を出せねえだろうが」
「ボクサーだって殴る以外も出来るさ。攻撃を躱して、相手の腕を捻りあげれば良いんだろ？　美紀に不埒な真似を働くやつがいたときのために、そういった無力化用の技もいくらかは習得している。甘く見るな」
荒垣の言葉に、真田は歯を見せるようにニカッと笑ってどこか得意げに答えた。
それを聞いた美紀は、習得理由が自分のためだと言われ恥ずかしそうにし、身体を小さくして他の者から隠れようとしている。
もっとも、石垣のすぐ傍で遮蔽物はなにもないので、隠れる事など出来ないのだが。
そして、他の女子が同情するような視線を送っているのを見ると、荒垣は美紀のために別の話題に切り替えた。
「そういや、今日はあいつはいねぇのか？　ボディガードつったら、有

里も結構できそうな雰囲気だったが」
「ああ、有里君は今日は欠席です。なんか遠くに出掛ける用事があったみたいで」
今日の参加メンバーに湊がいると思っていた荒垣は、ゆかりから説明を受けると、そうなのかと納得して頷く。
湊についてあまり知っている訳ではないが、自分の幼馴染でボクシング部エースの男に腕相撲で圧勝したのだ。
体格もかなりがっちりしているので、あれで腕っ節はてんでさっぱりと言われても信じることは出来ないだろう。
そのため、ボディガードにも向いているのではと思ったのだが、荒垣の発言に不機嫌そうに食い付いた者がいた。
「ふん、あいつがいなくたって、俺一人で他のやつらを守って見せるさ。腕力だけでは実戦に勝てない。常識だ」
確かに、いくら腕力が強かろうと、それを効果的に当てることが出来なければ、実戦で勝つ事など出来ない。
腕力で負けている真田が言っているせいで、どこか負け惜しみのようにも聞こえるが、その点については実戦を知らぬ風花や美紀も納得出来た。
けれど、真田の発言が湊を下に見ていると判断したチドリが、どこか不機嫌そうな表情をしていたため、ゆかりは諍いが起こる前に全員を移動させることにした。
「それじゃあ、全員が揃ったし移動しようか。いやぁ、あたし少しお腹空いてるんだよね。屋台で何か食べようと思って晩御飯まだだからさ。風花は何か好きな屋台の食べ物ってある？」
「好きな食べ物？　んーと、あ、たこ焼きとかかな？　普段食べても美味しいけど、お祭りだとちょっと特別な気がするの」
「良いですね。それじゃあ、どこか良いお店があったら買って食べましょうか」
石段を上がる人の流れについて行きながら、美紀が風花に笑って声をかけると風花も笑顔で返し頷いている。これで一先ずは大丈夫だろう。

そんな風に安堵して神社の鳥居を潜り、人で賑わっている出店の屋台に視線を送って進んでいると、途中である屋台の男に声をかけられた。
「あ、お嬢。どうもです。今日はご友人と一緒ですか？　サービスしますんで、よかったらうちで遊んでいってくださいよ」
相手は水色の祭り印の法被を着た、二十代後半と思われる坊主頭の男だ。
そんな知り合いはゆかりにはいないので、他の者に向き直りながら誰の知り合いか尋ねる。
「お嬢？　って、誰のこと？」
「私のこと。保護者の仕事の部下からは、そう呼ばれてるの。……サービスってタダってこと？」
「あはは。いやぁ、タダだと俺が怒られちまいますんで、全員で二百円くらいなもんでどうでしょう？」
流石にタダは無理だと困ったように笑って相手は答えたが、一回百円のところを六人で二百円にするのも結構な無茶だと思える。
だが、チドリはそれで構わないと思ったらしく、女子らを見てからヨーヨーの浮かんだ水槽の横にしゃがみ、自分の準備は万端だと一緒にいた先輩の男子二人をジッと見つめた。
その見つめている理由を理解したらしい二人は、どこか複雑そうな表情で百円ずつ財布から取り出し、店員に渡す。
「はい、まいど。取れなくても一個ずつ持っていって構わないんで、軽い気持ちで楽しんでくだせえ」
「了解です。ってか、私、こういうのあんまりやった事ないんだよね。ちゃんと釣れるかな？」
釣り針と容器を受け取り、ゆかりは袖を少し巻くって準備を整える。
お祭り自体は初めてという訳ではないが、父が死んでからは母と一緒に各地を転々としていたので、こんな風に友人と祭りを楽しんだ事はなかった。
行きたい気持ちはあったが、すぐに転校するのなら思い出を作って

も別れが辛くなると、今までは我慢していたのだ。
だが、これからは高等部までここで暮らしてゆく。今日のメンバーとずっと一緒にいられるかは分からないが、何の憂いもなく純粋に楽しめることが素直に嬉しかった。
そして、ちゃんと出来るかなと思いつつ、どれを取ろうか選んでいたゆかりに、隣にしゃがみこんでいた風花がアドバイスをしてきた。
「ふふっ、これってコツがあってね？　紙を濡らさないのは当然なんだけど、引っ掛かったからって勢いよく持ち上げても駄目なの。そうすると、紙に急な負担が掛かって千切れちゃうから」
「へぇ、そうなんだ。もしかして、風花って結構得意？」
「得意ってほどじゃないけど、お祭りにきたら大体やってるから、少しだけコツを知ってるって感じかな」
言って、風花は青色のヨーヨーを一つ釣り上げ容器に入れた。
上手く浮きあがっていたゴムに引っかけたので、紙の部分は一切水に触れていない。言うだけあって、実に見事な手前だと素直に感心した。
「おおー、やっぱり経験者は違うね。んで、ヨーヨーの次はどっかの男子を見事に釣りあげたり」
「し、しません！　って、あー！　ゆかりちゃんが変な事言うから、全部水に浸けちゃった……」
驚いて前のめりになった際、風花は針を持っていた手を水槽の中に少々入れてしまった。
それにより、紙は千切れていないが、全体が水を含んだ状態になり。次に釣ろうとしたときには、ヨーヨーの重さに耐えきれず切れてしまう事が容易に理解出来る。
試しに一つ釣り上げてみようとすると、ゴムを持ち上げている途中で千切れて針が水槽に沈んでいってしまった。
自身の数少ない特技を見せるチャンスが、いきなり潰えたことに風花は肩を落とし。釣り上げたヨーヨーを手にとって容器を店員に返し後ろに下がると、ポシャンポシャンと手でついて一人で遊び始めた。

前髪に隠れ表情は見えないが、どことなく暗い雰囲気を纏っているせいで、やけに怖く感じる。
「ご、ごめんて風花。ほら、私の針使っていいから」
「いいの。私にはこの子がいるから」
「こ、この子って……」
一人で遊んでいる風花はいじけたように、ゆかりの申し出を断った。
湊やチドリの影に隠れて目立たないが、風花も変なところで頑固なので、これ以上は言っても意味がないだろう。
諦めたゆかりは、後で謝罪とフォローすることに決め、気持ちを切り替えると早速ヨーヨー釣りに挑戦する事にした。
「えっと、紙を水につけないように、釣り上げるときはそーっとする、か。中々むずかしいこと言うわね」
「なら、初めから紙を捻っておけば良い。その方が紙が強くなるし、水も染みづらくなる」
「え？　そんな事していいの？」
急に隣のチドリから声をかけられ、ゆかりはその内容にわずかに目を丸くする。
こういったゲームは、与えられた物をそのまま使って遊ぶものだと思っていた。けれど、言われてみれば、チドリの言った事は科学的にも正しいと理解出来るものであり。チドリはその方法で既に三つも釣り上げている。
これならば、初心者である自分も出来そうだと、早速、針のついた紙を破かないようにそっと捻って強化する。
そして、無様に一つも釣れずに悔しがっている真田を視界の端に捉えながら、ゆかりは黒いヨーヨーのゴムの輪っかに針を通し釣り上げた。
「わぁ、やった、釣れたー！　すごいね、どこでこんなの聞いたの？」
「ここの店員とか、他にも祭りの屋台を出す人間から、ちょっとした遊びのコツを聞くことがあるのよ。まぁ、他所の縄張りだと因縁つけられるかもしれないから、あんまりしない方が良いけどね」

「縄張り……？」
「祭りの出店は地区ごとに出店許可が必要なの。私の言った縄張りは、その地区のこと。巌戸台は縄張りに含まれてるから、どこの祭りにも知り合いが出店してるから良いけど、他県の花火大会の祭りとかだと他の地区だから、知り合いもいないし。揉めるようなことはしない方が良いって事よ」
　実際は、組の縄張りという意味が含まれているのだが、ゆかりたちはチドリの保護者の職業を知らないので、そういう物なのかと素直に納得し頷いた。
　そして、美紀は二個、荒垣は三個ほど釣っていたが、一人一個あれば十分だと、必要分以外は水槽に返し、ゆかりらは別の屋台を見て回った。
＊＊＊
「あー……祭りでこんなに食い物買った事なんて初めてだぜ」
「ああ、俺もだ。というより、吉野の知り合いはどれだけいるんだ？」
　言いながら女子たちの後ろを歩く男子の手には、ビニール袋いっぱいの料理が納まっていた。
　店を回りながら奥でお参りもしようと進んできたのだが、行く途中行く途中で、桔梗組の人間に声をかけられ、そのたびに格安で大量の料理を貰ったのだ。
　お好み焼き・たこ焼き・焼きそば・カレーライス・今川焼き・フランクフルト・アメリカンドッグ・ベビーカステラ・りんご飴・綿菓子・焼きトウモロコシ。これらを一つ分の半額で三・四人前ずつ貰い、さらにサービスで瓶のラムネなども無料で頂いている。
　真田などは施設に居た頃、お祭りの屋台でお腹いっぱい食べるという夢を持っていたので、今日でその夢も叶いそうだが、何故だか支払いは自分たちばかりで、荷物も持たされていることに不満を感じてしまう。
　しかし、チドリのおかげで財布へのダメージも予定以下で済んでいるため。妹が楽しく遊べていることもあって、それを口に出したりは決してしない。

「せんぱーい、かき氷は何味が良いですかー？」
そんな風に考えて進んでいると、少し前を言っていたゆかり達がかき氷屋の前で止まっていた。
ここでも店員がチドリにペコペコと頭を下げているため、またしても知り合いであることは直ぐに理解出来た。
これだけの料理をこの後に食べるというのに、あいつらはまだ量を増やすのかと、荒垣が呆れた様子で深いため息を吐く。
「はぁ……言っておくが、俺はこんなに食える気しねぇからな」
「安心しろ。俺も無理だ。だが、昔なら意地でも食べようとしたんだろうな。こうやって、祭りの騒々しさの中で、三人でお好み焼きを分けあった事もあった。それに比べたら、随分と贅沢な悩みじゃないか」
「確かにな。けど、それとこれとは別だ。いい加減にあいつら止めねえと、マジでいくらか残して捨てることになるぞ」
真田に言われ、荒垣も昔のことを思い出し、少しだけ懐かしい気分にもなったが、重要なのは今起きている問題を如何に解決するかだ。
今度のかき氷屋では、女子らがお金を出し合って人数分を買っていることは確認した。
そして、自分たちが何味が良いかと答える前に、兄たちの好みを知っている美紀が、イチゴとメロンのかき氷を受け取っている。
手にこれだけの料理を持っていて食べられる訳がないので、そのまま座るまで持っていてくれるのならば大助かりだが、問題はそのどこで食べるかという事だった。
人ごみを避けつつ進み、ようやく合流できた二人はかき氷を食べている女子たちに声をかける。
「そろそろ、どこで食べるか決めないか？　一纏めにしているから、それぞれの熱で冷めにくくはなっているが、流石にそう長くは持たんだろう」
「そうですね。では、前に一緒に座って食べた場所にしましょうか。ほら、あの本殿の近くの」
「ああ、そこなら食い終わったらお参りも出来るな。んじゃ、そこに行

くまで俺らの分はお前が持っててくれ。流石にこれ抱えて持つのはキツイからな。ほら、お前らも美紀に続いて動き出せ。さっさとしねぇと融けっぞ」
荒垣に言われると、美紀が先導して他の者も歩き出す。
途中でチドリが何人かの店員に声を掛けられていたが、後で来ると伝えていたので、どうにか荷物は増えずに本殿近くのベンチにやってくることが出来た。
料理の入った袋をベンチに置いて、その中身を他の者に配りつつ、真田と荒垣は美紀から受け取ったかき氷を先に食べてしまう。
そして、ゴミは先ほどまで料理の入っていた袋に放り込み、全員が何かしらの料理を手に持つと、「いただきます」と言って食べ始めた。
「はふ、ん、このたこ焼き美味しい。チドリちゃんの知り合いのおじさん料理上手なんだね」
「……祭りのたびに作ってて、変に凝り性な人も多いし、常連には結構知られてるらしいわ。まぁ、私と湊はそんなに行った事ないから、あんまり知らないけど」
目当てのたこ焼きを頬張り、その味に満足したらしい風花が、満面の笑みで料理と作った者を褒める。
祭りの食べ物は、雰囲気で美味しいと感じる物もあるが、中には大きく外れの物も存在する。
そんな中、いま食べた物はお世辞抜きに美味しいと思えたため、風花は褒めたのだが、チドリにしてみれば、どっちが本業なんだと製作者に僅かに呆れたようだ。
けれど、チドリ自身も組員の作った料理は中々だと思っていたので、どちらが本業であったとしても、別に文句や嫌味を言うつもりはなかった。
「お、このカレー美味いな。肉もでかいし、俺好みだ」
カレーを食べていた真田が、屋台のカレーでは珍しい大きな牛肉が入っていることに喜び、さらにがっついて食べ進めている。
それを見た荒垣がやや呆れたような顔をしているが、自分の食べていた焼きそばを相手に見せながらコメントを一つ返す。

「ああ、こっちの焼きそばも悪くねえ。ちゃんと高温で麺を炒めてっから、ソースが絡んでるのに麺がべしゃってねえ。これなら、普通に鉄板焼き屋で出せんじゃねえか？」
料理ついては厳しい判断を下す荒垣も、味や食感、具の大きさも含めて、いま食べている焼きそばは非常にハイレベルだと太鼓判を押した。
ゆかりと美紀もアメリカンドッグやお好み焼きを笑顔で美味しそうに食べているので、チドリの言った祭りの常連に知られているという話も、あながち嘘ではないのかもしれない。
そうして、大量にあった料理も次々に胃に収まっていき、残りわずかとなった料理の中から、荒垣が今川焼を手に取ったところで、何か白い物が足元をうろついていることに気付いた。
初めは狸か何かかと思ったが、白い狸など聞いたことがない。狐のようにも見えないので、相手が顔を上げたときようやくそれが白い子犬だと分かった。
「あん？　なんだ、お前？　どっから迷い込んできたんだ？」
「きゅーん」
「あ、可愛い。毛もふっさふさで柔らかそう。ねえ、あなたどこから来たの？」
荒垣の足もとで靴を嗅いだりしていた子犬に、しゃがみこんだ風花が話しかける。
撫でようと手を伸ばしても逃げ出したりせず、むしろ、そのまま受け入れ気持ち良さそうに鳴いていた。
「くーんくーん」
「うふふ、気持ち良いの？　でも、この子、どこから来たんでしょう？　お祭りで人が多いから、飼い主さんを探すのも大変そう」
「ははっ、大丈夫だよ御嬢さん。虎狼丸はこの神社で飼っているからね」
そう言って現れたのは、紫色の袴を履いた宮司らしき初老の男性だった。
少し白髪混じりの癖のある黒髪、顔に年相応の皺が刻まれている

が、体格が良いのでみすぼらしさは一切ない。穏やかで優しげな雰囲気もあって、大人の男性といった感じの者だった。
男性がやってくると、子犬が嬉しそうに尻尾を振って駆け寄っている。
そして、男性は子犬を抱きあげると、苦笑しながら相手を窘めた。
「こら、勝手に行ってはいけないと言っただろう？　いや、この子が迷惑をかけたね。私はここの宮司をしている近衛（このえ）　博孝（ひろたか）。この子は柴犬の虎狼丸（コロマル）だ。私が来るまでに、この子が何か悪さしなかったかな？」
「いえ、大人しく良い子にしてましたよ。でも、白い柴犬って珍しいですね」
「ああ、アルビノというやつでね。兄弟の中でこの子だけがそうで、幼いときは身体も弱く育てるのも大変だから、誰も貰い手がいないならと私が引き取ったんだ。強く育つようにと、名前に虎と狼という字を入れてね」
にこやかな表情で言って、近衛はコロマルを地面におろす。
おろされたコロマルは、初めは近衛の回りをぐるぐると回っていたが、途中で立ち止まって顔を上げると、トコトコと歩いて荒垣の足もとに行儀よく座りこんだ。
何故、他にも大勢いる中で荒垣の前に座ったのかは分からないが、コロマルはジッと荒垣を見つめて尻尾を振っているため、その様子を見た美紀がおかしそうに笑って言葉をかけた。
「フフッ、シンジさんが気に入ったんですか？　そうですね。この中では一番上手にお世話をしてくれると思いますから、貴方の見る目は正しいと思いますよ」
「ふざけんな。ペットの世話なんてだりぃことしねぇっつの。ほら、テメェも俺以外のやつの前に行けって」
「わんっ！」
『あはははっ！』
荒垣が子犬の首の後ろの余っている皮を掴んで持ち上げ、逆向きに地面におろしてやるも、子犬は再び荒垣の方を向いて嬉しそうに一声

鳴いた。
何度やろうと元通りになるため、子犬は遊んでもらっていると思っているのかもしれない。
楽しそうにしている子犬と、面倒そうな顔をしている荒垣をそれぞれ見て、他の者は声を揃えて笑った。
動物は本能的に善人と悪人を見分ける事が出来るという。ならば、きっと荒垣もそういった理由で懐かれているのだろう。
ひとしきり笑っていた真田は、今もどうにか子犬を遠ざけようとしている幼馴染に、その事を伝えた。
「何だかんだ言って、お前は面倒見が良いからな。そいつも、しっかりと善人か悪人か見分けて寄って行ってるんだろうさ」
「あ？　……まぁ、下級生いたぶろうとして、無様に返り討ちくらった野郎よりは善人かもしれねえな。コロだったか？　お前はどこぞのやつみてぇに〝負け犬〟にはなんなよ」
「なんだと!?」
大笑いされた仕返しに荒垣が皮肉で返す。
途端、真田は竹で出来たベンチから勢いよく立ち上がり、憤慨した様子で荒垣に訂正を求めた。
「訂正しろシンジ！　俺はまだあいつに負けていない！」
「負けただろうが。ビクともしなかったつってただろ」
「あんな物は本当の戦いじゃない。リングでやり合えば、他の者と同じようにこの拳で負かしてやる。遊びと実戦は違うんだ！」
それは確かにそうかもしれない。しかし、その遊びで負けた人間が言うのはどうなんだ、と荒垣は眉を寄せて呆れたように深い息を吐いた。
「はぁ……そうかよ。だったら、有里にリベンジさせてくれって頼んでみろ。ま、噂になってる副会長への対応みてぇなのが関の山だろうがな」
湊も美鶴も校内ではかなり目立つ人間だ。お互いルックスも成績も学内トップレベルで、どこか世間とずれているところまで共通している。

そんな二人が出会って何かしていたとなれば噂にならない方がおかしい。
真田は校内に限らず噂などには疎いが、荒垣の耳にはその情報も入っていて、噂は真実だということも知っていた。
そして、普段の幼馴染に対する湊の反応もどこか似ているので、リベンジは実現しないだろうと確信に近い物を持っていた。
だが、気付いていない男は、右手の拳を左掌に打ち付け、瞳に炎を宿しながら不敵な笑みを浮かべている。
「ああ、すぐに再戦を果たしてやる。お前も立ち合わせてやるから、楽しみに待っていろ」
「ははは、最近の若い子は元気があっていいね」
話の内容はよく分からなかったが、真田が誰かに勝負で負けて、もう一度戦いたがっていることは近衛も理解した。
危ない事ならば大人として止める立場だが、どうやら格闘技など何かのスポーツでの決着のようなので、それならば良いかと思う事にし。
時計で時間を確認すると、コロマルを抱き上げて社務所に戻ることにした。
「さて、君たちの時間にあまりお邪魔しても悪いので、私たちはそろそろ戻ろう。もう少しで花火が揚がる時間だから、最後まで楽しんでいきなさい。ほら、虎狼丸、お世話になった方たちに挨拶だ」
「わん！」
「さようなら。ばいばい、コロちゃん」
去っていく一人と一匹に挨拶を返し、風花は手を振っていた。他の者も同じように挨拶をして、近衛らの姿が見えなくなると、時間になって揚がった花火を観賞し。
見終わった後はゴミを捨てて、参拝をしてから後半戦とばかりに祭りを大いに楽しんだのだった。
影時間――某所
他の者が祭りを楽しんでいた頃、湊は桐条宗家の本宅の近くに仕事でやってきていた。

もっとも、用事があったのは宗家ではなく、桐条の名士会に名を連ねている名家の一つで、既にその家に侵入して依頼の品を奪ってきている。
湊が今いるここは、桐条だけでなくゆかりの母親の実家など、桐条と交流のある名家や旧家が多く集まっている場所で、警官や警備員が巡回していたりもするため、一般人は土地に近付くことすら難しい。
だが、湊には能力の眼がある。街一つ分だろうと探知で探り、警備と防犯カメラの死角をついて進むことが出来るのだ。
そうして、屋敷から出てきたところで影時間に突入したため、警戒レベルを一段落とし、散歩気分で歩いていると、湊は何かの気配を感知した。
（……何だ？　影時間に、人の気配？）
影時間とは言え、桐条の関係者ならば人工的に適性を得ることも出来るため、人の気配を感じたとしてもおかしくはない。
だが、いま感知したのはある屋敷内に単独で存在するどこか懐かしい気配。
人工的に適性を得た金持ちは、影時間でも自分を守らせるように、ＳＰにも適性を持たせているはずなので、屋敷に単独でいるというのは通常考えづらい。
ならば、どうして、いま立っている門の奥にある屋敷には、どうみても子どもだと思われる気配が独りで存在するのだろうか。
そして、その気配は何故アイギスと似通っているのか。
疑問に思った湊は、相手を確かめるため、少し助走をつけて三メートルを超える大きな門を飛び越えた。

第四十九話　アイギスを知る少女

影時間――屋敷

世界が緑色に塗り潰された頃、屋敷の二階の一室で、カチューシャ状のヘッドギアを頭に付け、様々な機械とケーブルで繋がった少女が一人寝ていた。

肩よりも短めの艶のある黒髪、くりっとした大きな瞳、スレンダーな体型をしているため幼く見えるが、顔つきはどこか大人びている。

彼女の名前は水智（みずち）　恵（めぐみ）。学年で言えば中学二年生だが、残念ながら事情があって学校には通っていない。

そして、影時間だというのに象徴化していない恵は、身体でほぼ唯一と言っていい、自由に動かすことの出来る目で窓の外を見ようとした。

（あーあ、久しぶりに影時間に目が覚めちゃった。影時間だと虫の声も聞こえないから、本当に退屈なのよね）

心の中で独りごちる恵は、生まれつき身体に麻痺があって自由に動くことが出来ない。

見ることと聞くことは可能だが、口が上手く動かせないので話したりも出来ないのだ。

生まれたときからそれが普通であったため、両親が思っているほど自分の境遇を不幸には思っていない。

確かに、退屈だとか、不便であると感じることもなくはないが、機械で脳波を読みとって窓を開けることやベッドを起こす事が出来るので、外を眺める事は出来るのだ。

もっとも、それらの機械は黄昏の羽根など積んでおらず影時間にはストップしてしまうので、今の恵に出来ることはない。

本当にごく僅かな期間だけだが、以前は、頭に付けているヘッドギアでネットワークを経由して、アイギスと会話をしたことや、彼女のアイカメラの映像を見ていたこともあったが、デスとの戦闘で中破して機能停止してからは、アイギスのアイカメラも動作していないので見ることが出来なくなっている。

（アイギス、まだ目覚めないのかな？　廃棄されたりはしないと思うけど。修理も難航してるってお父さんが言ってたし。エルゴ研が解体されてからは、屋久島にある桐条家の研究施設に移されたみたいだけど。心配だなぁ）

何故、彼女にそんな事が可能なのか。それは桐条の名士会に籍をおいていた、彼女の父親が桐条の研究に頼ったことが切っ掛けだった。

現代の医療では娘の麻痺を治すことが出来ない。脳波を読みとって動作するパワーアシストスーツを使えば、多少は自由に歩いたりも出来るだろうが、発音が出来ないため緊急時に助けを求められないことから、もしもの場合を考えると一人で動き回る事は出来ない。

そしてやはり、いくら機械に頼って動くことが出来たとしても、それは根本的な治療にはまるでなっていない。

広いコネクションを有する桐条のってを使っても治療法が見つからず、最終的に恵の父が頼ったのは違法な研究をしていたエルゴ研の技術だった。

パピヨンハートに人格を形成させるためのプロジェクト、『七式特別制圧兵装開発計画』。それが恵の関わった実験の名称。

恵以外にも様々な子どもの脳波パターンを採取し、それらを組み合わせてアイギスという人格が生まれた。

その被験体の中で恵だけが参加する条件として、ネットワークを通じてリンクする事で、アイギスと通話することや、アイカメラの映像を観ることが出来るようになっている。

自由に動けないのなら、せめて外の世界を見させてやりたいと、父親がエルゴ研の人間に頼みこんだのだ。

神経ケーブルを使い、互いの脳がリンクするため、どのような影響が出るか分からないと言われていたが、実験は無事に成功し、恵は〝初めてのお友達〟を得ることが出来た。

（だけど、アイギスは何かと戦って……何の音？）

変な時間に起きてしまいなかなか寝付けず、昔のことを思い出していると、物音がしたような気がした。

しかし、それはあり得ない。アイギスとリンクするために適性を得

た自分と違って、父も母も適性を得る処置を受けていない。
よって、影時間にこの屋敷で物音がする訳がないのだが、窓の方から音がしたとして目だけを動かしたところで、ソレを見つけた。
（人？　え、なんでっ!?　ここ二階だし、影時間よ!?）
全体的に暗い色の服を着た男が、窓枠という殆どないに等しいスペースに掴まって部屋の中を見ていた。
だが、どうやって上がってきたというのか？
この部屋は恵がいるということで、外から誰かが侵入したり出来ないよう、直ぐ下は脚立や梯子を立てられないデコボコになっている。
壁などにも掴まるのはおろか足をかけるスペースもないため、屋根以外からは伝ってくることができず。例え、屋根から降りてきたところで、窓は特殊強化ガラス製で割る事は不可能。
加えて、室内にある機械で窓の開閉を制御しているので侵入は無理だった。
（こ、怖い。でも、窓は開けられないし、大丈夫よね？）
自分は動けないので、あの男が入ってくれば一巻の終わりだ。
身体は麻痺で何も反応していないが、心には得体の知れない相手への恐怖が広がり、仮に声出すことが出来れば、恵は叫び出したい気持ちだった。
しかし、娘の安全のためにと両親が大金を注ぎこんだセキュリティが自分を守ってくれる。
そうして、どうにか平静を取り戻そうとしたところで、カチャン、と何かが開く音が聞こえた。
（っ!?　どうして窓が開いたのっ、私は何も命令を出していない。というか、影時間には窓の開閉の機械は止まっているのに！）
部屋側からしか操作できないはずの窓が勝手に開いた。そんなことは今まで一度もなかったし、何より機械は動かないはず。
けれど、開いてしまったことで男は窓から入ってきて、ベッドに寝ている恵をジッと覗きこんできた。
（やだ、やだっ、怖い怖い怖い、誰か助けて！　アイギス、助けて!!）
動けないことが、こんなにも恐ろしい事だなんて知らずに育った恵

は、ただただ助けてと祈った。
　すると、
「……お前、起きてるだろ。質問に答えろ。何故、お前からアイギスの気配がする？」
（……え？　アイギスの、気配？）
　急に話しかけてきた相手の言葉に、自分が直前にも考えていた友達の名前があり、恵は軽く困惑する。
　質問の内容自体が理解しづらいが、それは自分が神経ケーブルでリンクしているからか。またはアイギスの人格形成の被験体となったことで、アイギスが自分に似た部分を得たからだと思われる。
　しかし、理由を考えたところで、身体に麻痺のある恵は伝える手段がない。
　それを黙っていると取ったのか、相手は蒼い瞳を暗闇で輝かせ首に手をかけてきた。
「答えなければお前を殺す。あんな大層な窓で部屋を守ってたんだ。お前も桐条の暗部に関わりのある人間のはず。さぁ、答えろ。何故、お前からアイギスに近い気配がするのかを」
（この人、窓の仕掛けにも気付いてっ）
　麻痺のせいでほとんど分からないが、ぼんやりと触れられている感じはあるため、実際に相手は首を掴んで絞めているのだろう。
　実際は黙っている訳ではないのだが、それを伝える事も出来ないため、恵はここで自分は死ぬのだと諦めた。
（あーあ、なんか呆気ないものだな……）
　そう考えると恐怖は途端に消えた。
　最後に、自分を殺す者の顔を見ておこうと目を動かしたとき、相手が同世代の少年であると気付いた恵は、暗くてよく見えないが既視感のようなものを覚えた。
　無論、家族と医者以外にはほとんど会った事がないため、同世代と思われる少年の知り合いなど一人もいない。
　テレビで見た芸能人の誰かに似ているのだろうかと考えてみたが、こんな不思議な眼をした芸能人など知らないので、その可能性は除外

した。
（あれ、なんだろう。この人どこかで……）
「……お前、話せないのか？」
（ん？　気付いてくれたの？）
ぼうっと相手の顔を見て考えている間に、少年の手は首から離れていた。
このまま殺されると思っていたので、気付いて助けて貰えるのならばありがたい。
だが、どうして気付けたのだろうか。その事について考えようとしたとき、影時間は明けていないというのに部屋に灯りが点いた。
《嘘、まだ影時間のはずじゃあ!?》
「……脳波か何かで動かせる読み上げソフトか？」
《え？　え、ええ、そうです。私、全身麻痺で話したり出来ないんで》
部屋の明かりだけでなく、室内にある全ての機械が使える状態になっていた。
そして、考えたことを読み上げさせる会話ソフトも起動していたため、スピーカーから棒読みの機械音声が聞こえてきたことで、少年は納得したように頷いている。
そのまま少年はしばらくベッドの恵と繋がっている機械類を眺めていたが、ある程度で興味を失ったのか、ベッドの傍の革張りの椅子に腰かけた。
《あの、どうして私が話せないって分かったんですか？》
「命の危険が迫っているときに一切動かない。極度の緊張状態で硬直しているのなら、そういった反応もあり得るが、お前は脈拍も正常で発汗もなかった。さらにいえば、少しずつ首を絞めているのに呻き声も出さないなんて普通では考えられない」
《そういった事に慣れている可能性もあるじゃないですか》
「……目の動きがおかしいだろ。命を諦めた目で俺を見ているのに、身体が生きようとしていないなんてあり得ない。諦めに至るまでに、絶対に反応を示すはずなんだ。だから、お前は理由があって反応を返せないと踏んだ」

そう言われたところで、恵は他者の身体に自分から触れた事がなく、どういった反応を見せるかというのも観察した事がないので分からない。

けれど、相手が自分に危害を加えるつもりがないことを理解したため。質問に答えてくれたお返しとして、自分もアイギスについての話をすることにした。

《あの、アイギスを知ってるんですか？　もしかして、貴方も七式特別制圧兵装開発計画の被験者だったとか？》

「七式特別……？　いや、聞き覚えもない。アイギスとは直接会って話したことがある。だから、知ってる」

《そうなんですか。えと、私が言ったのはアイギスの人格を生み出した計画なんです。私や他にも何人か対象者がいたんですけど、思考や脳波などを計測して、それらを元に〝アイギス〟という人格を形成したんです。ですから、似た気配を感じたのは、私がアイギスの元となった人格の一つだからだと思います》

素性も分からぬ見ず知らずの人間に、桐条の違法な極秘研究を話して良いのかは分からない。

話を聞いている間、相手は暇そうに椅子に座って受け答えをしているが、瞳が蒼から金色になっているなどおかしい点も多々ある。

けれど、どうしてだか、恵は相手を悪人だと思う事が出来なかった。

（というか、開発計画の被験者以外で、子どもがアイギスに会う機会なんてないはずなんだけど。親がエルゴ研の人間……ってこともないか。アイギスは起動してすぐに怪我して動けなくなってたし。……あれ？　もしかして、この人）

被験体でも、研究員の子どもでもない。そんな人間がアイギスに会えるはずがないのだが、恵には一人だけ心当たりがあった。

アイギスが中破して戻ってきたあの日、リンクを繋ぐと何かと戦っているのを見て怖いと感じた。

そして、すぐにリンクを切ってしまったのだが、少ししてからアイギスが心配になって再びリンクしたとき、アイギスは一人の少年と話していたのだ。

記憶はおぼろげだが、あの少年といま部屋にいる少年を見比べるとどこか面影があるような気がする。
確信はないが、確かめるのならば早い方が良いと思い。恵はアイギスが幼い少年から聞いていた名前を呼んでみた。
《あの……八雲さん？》
「っ!? 何故、お前がその名前を知ってる？」
《ご、ごめんなさい。でも、貴方はあの日にアイギスと一緒にいた男の子ですよね？ その、私はアイギスとリンクすることが出来るから、あの日も少しだけ見ていたんです。まぁ、怖くてすぐリンクは切ってしまったんですけど》
恵が名前を呼ぶと、警戒した様子で瞳を蒼くした湊が椅子から立ち上がった。
ただでさえ不審者で恐怖を抱いていたのに、重圧まで放たれたため、恵は動けないなりに焦って謝罪をすぐにしたが、相手の素性は判明した。
相手は約五年前にアイギスと共にいた少年と同一人物。
自身が世間話好きな中年の女性であれば、愛らしかった少年が、随分と美形に育ったものだと感心するところだが、生憎と恵はどういった顔ならば美形と言えるのかという感覚がない。
今まで接してきたのは大人の医者ばかりで、その他に人の顔を見る物はテレビくらいしかないので、同年代の異性に対する感覚がそもそも備わっていないのだ。
しかし、アイギスが短時間で心を開いていた相手ならば、自分のことをもう少し話してもいいと思えた。
ベッドも動かす事が出来るか確かめ、動かせる事が分かるとベッドの上体側を起こし、顔を心なし湊の方に向けて話し出した。
《先に自己紹介をしておきます。私は水智恵。運動も出来ないから身体は貧相ですけど、今年で中学二年生です。それで、全身麻痺は生まれつきなんです。原因を突き止め治療しようと、父も母も色んな医者にあたってくれたんですが、原因は結局分かりませんでした》
恵が話を始めると、湊は瞳を金色にして再び椅子に腰を下ろす。

重圧も薄れたので、雰囲気は怖いけれど、気を遣ってくれて優しい人だなと心の中で笑みを浮かべつつ、話を続ける。
《ならば、せめて外の世界を観れるようにと、父がアイギスの開発計画に参加させてくれて。このヘッドギアで神経ネットワークを通じてリンクすることで、通信による会話や彼女のアイカメラの映像を見ることが出来るようになりました》
「音声は？」
《あ、はい。音声も念話風に入ってきます。だから、どっちかというとテレビの中継を見ている感覚ですね。触覚や嗅覚は共有できませんが、映像と音だけはアイギスを通じて見聞きさせてもらえるので》
ヘッドギアと言えば大仰だが、実際は細いカチューシャと頭を一周するようにマジックテープで留めるベルトが巻かれ、カチューシャに色々と細いケーブルが繋がっているだけだ。
これを外すと、アイギスとのリンクだけでなく、窓の開閉や読み上げソフトを使った会話も出来なくなるため、恵にとってはまさに生命線だと言えた。
だが、湊が部屋に入ってきて影時間でも使用できるようになってから、ごく僅かに何かのフィルターを通しているような小さな違和感がある。
湊はこれを知っているのだろうかと、恵は考えたまま尋ねていた。
《あの、八雲さんがここに来てから電気が点いたりしたんですけど。これって八雲さんがしてくれたんですか？》
「ん？　ああ、まぁな。それより、アイギスとのリンクと言ってたが、今もそれは出来るのか？」
《いえ、彼女の電源がオンになっていないことには。貴方も知っているかもしれませんが、彼女は五年ほど前から凍結されたままなんです。修理も難航してて、今は屋久島の研究所に収容されているらしいです》
「屋久島の？　……連れ出すか。いや、修理がまだなら意味がない。だが、五年も経ってまだ修理も出来てないんだぞ。そんなやつらに任せて良いのか？」

座ったまま手を組んで足に肘をつき、真剣な表情で考えこむ湊。
言葉の端々に危険な単語が混ざっているが、相手は不法侵入で、さらに一度は自分を殺そうとしてきた相手だ。
悪人ではないのだろうが、完全な善人という訳でもない。ならば、深くは考えない方が精神的にもよいだろうとして、恵は相手が考え事を終えるのを待って話しかけることにした
「……お前、アイギスの開発計画以外で桐条に関わっているか？　当主や桐条の研究員と今も交流があるかという意味だが」
《それはないですけど。お父さんは名士会の人間なので、集まりがあったときには参加しています。ですが、私が家にいるので、お母さんは家に残ったりしますから、そこまで深く関わってはいないですね》
恵の返事を聞くと、湊は再び黙って考え込んでしまう。
相手が何かを自分にさせようとしているのは、雰囲気から感じ取っているが、残念ながら出来るのは、アイギスの状態がどうなっているかと両親に聞くことくらいだ。
湊がどうしてアイギスに執着しているのかは不明。しかし、五年経っても修理できていない相手に任せて良いのかと、少し怒ったように呟いていた。
ならば、この少年は真っ直ぐにアイギスの事を想っているのだろう。
自分の初めてのお友達に、こんなにも立派に成長した騎士が存在するなんて、とても素敵な事だと恵は感じた。
そして、少しの時間が経つと。ゆっくりと立ち上がった湊がベッドまでやってきて、よく通る低い声で話しかけてきた。
「今後、お前には桐条側の情報を流す役目を負ってもらう。そんなに難しいことは頼まない。ただ、アイギスの状態について分かる範囲で報告し、宗家やその周辺で影時間関係の動きがあれば、その〝動きがある〟という事を俺に伝えるんだ」
《え？　あの、私はここから動けないんですけど。話聞いてましたか？》

「それは俺が治療してやる」
《……はい？》
相手は何を言っているんだろう。もしも、表情を作ることができたなら、恵は口を開けてポカンとした表情をしていたに違いない。
だが、ベッドの脇に立っていた湊は、靴をアンクレットに変化させてベッドに上がってくると、恵の足を広げてその間に入り込んできた。
学校に通っていなくても勉強はしている。よって、今の状態が非常に危険だと思った恵は、心の中で大いに焦ってしまう。
《っ!?　あ、あの、何をするんですか？》
「脳波を読みとれるなら、脳は電気信号をしっかりと出しているはずなんだ。だが、その経路が途中で切れているのか、または別の信号と誤認して正しく全身に送れていないため、麻痺という形で出ているんだろう」
《へ？　いや、それは関係ないんじゃないかなっていうか。私なんか襲っても楽しくないでしょうし、止めた方が良いと思うっていうか。つまり何が言いたいかっていうと、本当に麻痺で動けないんで、いまさら変な事をして確かめる必要はないですよ？》
説得してやめて貰おうとするが、恵が話している間も、湊はマフラーをごそごそと触って青白く光る羽根を取り出して何かしている。
羽根を取り出したかと思うと、次にその羽根を恵の胸に押し付けてきた。
運動をしていないので、成長ホルモンも女性ホルモンもあまり分泌されておらず、はっきりと言って恵の胸は貧相だ。
にも関わらず、湊は今も本人の目の前で服越しに触り続けているため。麻痺で触られている感触はほとんどしていないが、こういう胸が趣味の人間なのだろうかと恵の中で湊の株が暴落していた。
「……よし。身体に変化は？」
《変化？　いえ、不感症みたいなものですから――――っ!?》
話している途中で、スイッチがカチリと切り替わったかのような、そんな〝変化〟を感じた。

身体の中を何かが駆け巡る感覚。視覚と聴覚以外は痛みに対してであっても鈍かったのだが、そんな物は嘘だったと思えるほどの激痛と熱さに襲われる。

痛みも熱さも、生まれてからずっと知らなかった未知の感覚だ。

（いやだ嫌だイヤだっ、苦しい、こんな感覚は知らないっ、この人が私に何かしたの？　見てないで助けて、私を助けてっ!!）

どうして今になってそれを感じているのか分からないが、知識でしか知らない恵は、それらを〝苦しい事〟としか判断できず、その苦しいことから逃れようと、必死にもがいた。

そして、

「――――あああああぁぁぁぁぁぁっ!?」

恵は絶叫した。声を出すことが出来ない筈の少女が、声を出して叫んだのだ。

無意識に自分で大声を出しておきながら、恵は自分の内から響いた音に驚き、びくりと肩を震わせて叫ぶのをやめていた。

すると、一時的に状況を把握するだけの思考能力が回復し、先ほどまで感じていた苦しさが納まっていることにも気付く。

（あ、れ？　苦しさが消えた。というか、私いま声が出た？）

そんなはずはない。しかし、先ほどから荒い呼吸で無意識に肩を上下させている。

今まではこんな事はできなかった。ならば、先ほどの〝苦しさ〟が原因で声を出せるようになったのかもしれないと、恵は息を吐く様に少しだけ声を出そうとしてみた。

「あ、ああ、ほふぁ……ふあ？」

「……発声の仕方はまだ分からないだろ？　それに、急に声帯を震わせたら、喉が炎症を起こしてしまうかもしれない。ゆっくりとリハビリをして、話し方や身体の動かし方を知れば良い」

言い終わると、湊は恵の足の間からどいて、相手の足を綺麗に閉じてからタオルケットをかけてやった。

直前までは変態的な行動をしていただけに、妙に紳士的なところがアンバランスだと感じるが、いまの恵はそんな事を気にしていられる

状況ではない。
声が出せる。本当に弱々しくだが、手や指も動かすことができる。ぼやけたような触覚が、いまはまるで世界が変わったかのように明確に感じるほど機能している。
自分が自分でないようだが、初めて手にした身体の自由に、恵は生まれて初めての涙を流していた。
「あうっ……えあ……」
「声を出さない方が良いと言ったんだが……まぁ、いいか」
それから恵が泣き止むまで、身体を自由にまだ動かせない彼女に代わって、湊は濡れたタオルで涙を何度も拭いてやり。ただ黙って落ち着くのを待っていた。
＊＊＊
《あの、ありがとうございました。それに着替えまで手伝っていただいて……》
恵が泣き止んだ後、相手が激痛を我慢した際に汗を掻いていたこともあって、湊は身体を拭いて下着とパジャマの交換もしてやった。
今までは、母親か介護士の女性にしか手伝ってもらったことがなかったので、同世代の異性に手伝って貰うのは顔から火が出そうになるほど恥ずかしかった。
けれど、身体の機能も徐々に回復してきて、泣くことや汗を掻くことが出来るようになったため、そのままでいれば身体を冷やし風邪をひくことになるだろう。
風邪をひけばもっと大勢に迷惑をかけることになるので、自分が恥ずかしい想いをする程度で済むなら、と湊に着替えを手伝って貰えないか頼んだのだ。
もっとも、娘の着ている物が、一晩明けてみれば変わっていたとなれば両親は驚くだろう。
その事に気付かぬまま、恵は血色のよくなった顔でぎこちない笑みと思わしき表情を作ろうとしながら、会話は機械に頼って礼を言った。
恵の手足を屈伸させてマッサージを施している湊は、その作業を続

けながら静かに返す。
「別に構わない。それより、どこか違和感はあるか？」
《その、むしろ違和感しかないんです。でも、それは感覚が正常になったってことだと思うんで、全身にそれがある以外は何も問題はないと思います》
「まぁ、一月もすれば慣れるだろう。リハビリはこんな風に足や腕を曲げることや、今まで使っていなかったせいで発達していない筋肉を鍛えることから始まる。感覚が戻ったことで、痛みも過敏に感じるかもしれないが、どうにか耐えてくれ」
口調は淡々としているが、自分を気遣って励ましてくれていることは分かる。
マッサージされている部位から感じる刺激が、どこか心地良く思っている自分もいて。不器用だが優しい人なのだなと恵は心の中でくすりと笑った。
そして、二人の間に静かなときが流れると、マッサージを受けたまま恵は尋ねた。
《あの、どうやって私の身体を治したのか聞いても良いですか？》
原因は胸を触られたことなのは分かっている。無論、胸を触られたことがトリガーのはずはないが、行為としてはそうとしか言いようがないので、恵も状況を把握できていない。
だが、両親があれだけ必死になって、様々な医者や研究者を当たっても、人間の身体はまだ解明されていないことが多いからと言われてきた。そんな原因も治療法も不明だった症状を、たったそれだけで治したのは事実である。
世間にこの治療法が公表されれば、それを騙って最低な真似を働く悪徳医師も現れるかもしれない。
そのため、正確に何がどのように作用して治療できたのかを知り、両親に聞かれたときにも教えてあげようと思って答えを待つと、少年は真っ直ぐ金色の瞳で恵を見ながら答えた。
「正確に言えば、あれは医療行為じゃない。現代科学じゃ解明できないオーパーツを利用した、疑似神経回路の構築なんだ」

《あの胸を触っていたのがですか？》
「……まぁ、そうだ。実際は、この黄昏の羽根というものを、お前の体内に入れていたんだが、それが神経の代わりに電気信号のやり取りをしてくれている」
答えながら湊はマフラーから青白い光を纏った羽根を取り出すが、胸を触っていたと言ったとき、僅かだが湊が眉を寄らせたのを恵は見逃さなかった。
本人は治療のためにやっただけで、胸を触っていたと意識していなかったらしい。
もっとも、着替えの際に全裸を既に晒し、汗を拭くときに身体中をタオル越しだが触られているので、今更なような気もするが、相手に女性の胸を触るのはよくない事という常識があるのならば良かった。
そう考えながら、さらに質問を続ける。
《神経の代わりにってどういうことですか？　あのとき、すぐに苦しくなったんですけど、それも何か関係して？》
「俺の場合は羽根の形状のままで内蔵しているが、お前には細分化した光の粒状のまま、全身に散らばらせた。羽根は内蔵されると、物質と情報の狭間の性質を有したまま通常の方法では触れることの出来ない光の管で繋がって、他の臓器や細胞及び神経などとエネルギーのやり取りをする。その応用として、超微細なまま脳から各部の末端まで配置すれば、そのまま神経と同化するか、神経に似たネットワークを形成し、シナプスなどに干渉が可能になる。それらを利用してお前の脳から各部位に活動電位、つまりは腕を動かすだとかの命令の電気信号を送れるようになると思ったんだ」
（……どうして小難しい言い方で説明するんだろう？）
湊の説明は分かりづらい。今まではそれなりに噛み砕いて説明してくれていたというのに、説明が長くなると単純化を放棄するタイプなのかもしれないと考える。
だが、自分から説明を求めてそんな事を言えば、相手はそのまま帰ってしまうかもしれない。
そうして、恵が考えたのは、事実を混ぜつつもう一度説明し直して

貰うという事だった。
《……済みません。私、学校行ってないんで、あんまり難しい説明は分からないんです。かなり単純に言って貰って良いですか？》
「……この羽根が、新しい回路を作るか、今まで切断されていた回路を繋ぎ直すかして、ちゃんと脳からの命令が全身に行くようにしたんだ。アナライズしてみたが、細胞レベルで同化しているみたいで、光の管は肉眼では確認できない状態だった。だから、精密検査を受けてもばれないだろうから、偶然何かで切れていた回路が繋がって、命令が正常にいくようになったと思われるだろう」
《あ、ＯＫです。今度は分かりました》
初めの説明とは別の話も増えていたが、今度は注文通りに簡潔な内容になっていたのですぐに理解出来た。
話を聞いている間に練習していた、口の端を少しだけ上げる笑みで返すと、聞いた話を恵は自分の中で反芻する。
神経伝達の中で、どの部位に異常があったのかは不明だが、胸を触られたときに相手は発光する羽根をナノマシンとも言えるような状態にして己に投与した。
そして、それが今も身体の内部で補助してくれているため。自分は他の者と同じように身体を動かすことが可能となって、今後医者にかかったとしても異常として検知されずにいられるという訳だ。
（じゃあ、お父さんとお母さんにも、八雲さんが言ってたように偶然にも回路が繋がって治ったって言った方が良いかな。ていうか、むしろ、自分でもよく分からないって言った方が良いか）
自分のために一生懸命になってくれていた両親には悪いが、先ほどの話で相手は桐条に存在をばれたくなさそうにしていた。
ならば、その話をせずに済むよう、己の完治の過程に人の手の介入がない状態でいなければならない。
騙していることに心は痛むが、恩人への義理は果たす。決意を固めた恵は、先ほどの依頼も合わせて湊の言う通りにする事にした。
《当分はリハビリで精一杯だと思いますけど、動けるようになったら、八雲さんに頼まれたことをしっかり果たしたいと思います。桐条グ

ループにばれないようにってことは、両親にもばれない方が良いんですよね？》
「ああ。当分の連絡は、俺が今日みたいに影時間に来る事で行う。自由に電話やメールが出来るようになれば、こっちの連絡先を知らせるから、それを使って連絡してくれ」
《了解です。あ、そうだ。このヘッドギアはどうしましょう？　治ってからも、これを使えばアイギスが起動しているかどうか分かると思うんですが》
　しばらくはリハビリをしても動けないので、窓やベッドを操作できるヘッドギアを使う事になるだろう。
　けれど、湊と自由に連絡を取ることが出来るようになったときには、普通のリモコンやスイッチで事足りるので、ここまで高性能な装置を使う必要はない。
　その時には捨てることになるかもしれないで、湊が必要だというのなら、どんな事があってもアイギスと通信可能なまま残すことにしよう、とそう思いながら相手の返事を待った。
「なら、残しておけ。彼女が自分で設定した再起動の年は分かっているが、詳細までは分かってない。屋久島にずっといられたら、かなり集中して意識を向けて探知しない限り気付きようがないから、そっちは任せる」
《はい、任されました。あ、話は変わりますが、そろそろ影時間が明けると思いますが、帰りはどちらから？》
　この短時間で相手の最低限の性格は把握している。
　よって、この質問の答えも分かっているが、相手との会話を楽しいと思えるようになった恵は、意識的に会話を続けようとした。
「窓で良い。そっちの方が早い」
《あ、やっぱり》
「……分かってるなら聞くな。時間の無駄だろ」
《いえ、私にとっては大切な時間なんです。初めてのお友達は、いまも眠ったままですから。二人目のお友達ができて、会話が出来るってとっても嬉しいんですよ》

「友達なんて自由に動けるようになればいくらでも作れる。俺みたいなクズをそんな物と思うのはやめとけ。お前のためにならない」
影時間が明ける前に帰るつもりらしく、マッサージを終えた湊は、恵をベッドに寝かせてタオルを整えている。
その言葉を聞き、話している横顔を見て、相手は本気で自分をどうしようもない人間だと思っているのだと理解した。
だが、恵にとっては一生返せないほどの恩を感じている相手だ。それを、例え自分のことであっても、そのように言って欲しくはない。
表情はまだ上手く動かせないが、目だけで相手を睨んで恵は自分の気持ちを伝えた。
《見ず知らずの私を治療してくれた。そんな貴方が悪い人なはずがありません》
「……利用するためにだ。使えないなら、放っておいたさ」
《関係ないです。受けた恩を返すなんて当たり前ですから、私は一生を掛けてでも貴方のために働きます》
表情こそ動かせていないが、きつめの視線が緩んだ事で、恵はきっと笑顔で言っているのだろう。
確かに、原因不明の病を治して貰ったとなれば、一生涯ずっと恩を感じてもおかしくはない。
けれど、そういう関係で友人と呼称するのはどうなのだと、湊は呆れたように嘆息し、シャドウと同じ機械を操る力を使って窓を開けた。
「……恩や貸し借りで動くなんて、普通、友人とは言わないがな。面倒だから、どうでもいい。好きに言ってろ。俺は帰る」
《ベッドに寝たままの挨拶で済みません。気をつけて帰ってくださいね。もしかしたら、次は病院のリハビリ施設に入院してるかもしれませんが。私の掛かりつけは弾指(だんし)記念病院ですから、ここじゃなければ、そこのリハビリ棟にいると思います》
「ああ、病院にいるなら、見舞いに香りの強い赤いユリの鉢植えでも持っていってやる。きっと病室が華やかになるだろうさ」
入院している者に持っていく見舞いの品では、いくつか縁起が悪い

とされる物が存在する。
そして、湊の言った「香りの強い赤いユリの鉢植え」は、その縁起の悪い物の項目を四つも含んでいるかなり非常識な代物だ。
見舞いの品として咄嗟に思い付く物でもないため、相手は敢えて組み合わせて言ってきたのだろう。
それに気付くと、ぶっきらぼうな言い方と合わさって、湊の態度が俗に言う〝ツンデレ〟のようで可愛いなと、恵は本気で思ってしまった。
自分が表情を作れたなら、きっとこれ以上ないくらい緩んだにやけ面になっていたに違いない。それが相手にばれなくて良かったと、今だけは自分の身体の不自由さに感謝して言葉を返した。
《……八雲さんって天邪鬼ですね。褒められたり、感謝されたりに慣れてないんですか？　なんか照れ隠しっぽくて可愛いですよ？》
「……フン、勝手に言ってろ」
《フフッ、はい。それじゃあ、お休みなさい。また来てくださいね》
恵の言葉を背中に受けながら、湊は窓枠から跳ぶとすぐにペルソナを使って空へと飛び上がって行ってしまった。
ベッドからではどの方角に去って行ったのか見えないが、少しすると窓が勝手に閉まったので、何も使わず遠隔操作も可能とは便利だなと呑気に考えていた。
窓が閉まると部屋の灯りや、他の機械が動作を停止するも、それほど待たずに影時間が明けた事で、恵もさして不安を感じることはなかった。
そうして、窓を操作し少しだけ開けて風を部屋に入れると、恵は外を眺めながら恩人の事を想い、心の中で呟いた。
（……そういえば、名前きいてない。なに八雲って言うんだろ？　次に会ったときに聞いてみよっと）
いつになるかは未定だが、次に会ったときの用事も出来た。
今からそれが待ち遠しいなと思いながら、風にのって届く虫の声を聞いて、恵は穏やかな気持ちで眠りについていった。

第五十話　龍の娘

８月２１日（日）
夜――桐条宗家・迎賓館
本日は桐条英恵の誕生日。いつもは保養地で静養している英恵も今日は宗家に戻り、盛大に行われるパーティーの主役として、親族や親交のある旧家の者たちと食事を楽しみながら話をしている。
そして、美鶴も一年の中で母に会える数少ない機会に、シックな青いパーティードレスに身を包んで参加していた。
だが、その傍には父も母もいない。今日は立食パーティーだが、英恵の体調を考えて二人はテーブル席を用意し、そこで挨拶にやってきた者らを相手にしているのだ。
本来なら、美鶴もそこに並んでいるべきだが、どうにも挨拶にきた大人たちの見え透いた媚を売る態度に食事をする気になれず。
少し風に当たってくると席を離れて、会場の端の方でドリンクを飲みながら窓の外を眺めていることにしたのだ。
「ふぅ……やはり、終わるまではお母様と話も出来そうにないな」
久しぶりに会った母は顔色もよく、長時間の移動もあったというのに、あまり疲れを見せていなかった。
けれど、パーティーの準備もあったので、あまり話をする事も出来ず、近況報告も含んだ相談事もまだ伝えられていない。
去年も同じようなスケジュールで動いていたので、これは事前に分かっていた事だが、今年は去年よりも話したい事が多い。
そのため、特に面白くもない顔見せの機会でしかないパーティーなど早く終われば良いのに、と心の中で美鶴は深いため息を吐いていた。
「おーい、みっちゅるー！」
だが、グラスを片手に窓の外を眺めていた美鶴に、遠くから呼びかける声が届いた。
力の抜けるような呼び名に前のめりに倒れそうになったが、どうにか踏み止まると、美鶴は一体誰だと眉を寄らせて声の方に向き直っ

た。
　そして、声の主はすぐに見つかった。赤い煌びやかな着物を着ているというのに、手をブンブンと振って駆け寄ってくる、どうにもパーティーという社交場でのマナーとずれた相手だ。
　他の者は、そんな少女を訝しそうに見ているが、走って美鶴の元までやってきた茶髪の少女は、そんなものはまるで気にしていないらしい。
　美鶴の前に立つと、快活な笑顔を浮かべ一人で話し始めた。
「やぁやぁ、お誕生日おめでとうございます」
「いや、私の誕生日という訳ではないのでな。それはお母様に言ってあげてくれ」
「あれ、そうなんですか？　おっかしーなぁ、〝みちゅるの誕生日〟ってカレンダーに書いてたんだけど」
　腕組みをして首をかしげている少女の名前は、九頭龍（くずりゅう）　七歌（ななか）。
　旧家である九頭龍家の一人娘であり、桐条とも親交があるため、当主である祖父と祖母は来ていないが、今日は客として両親と共に招かれてパーティーに参加している。
　その歴史の古さで言えば、南条と合わせて数えても桐条では遠く及ばないほど、九頭龍家は由緒正しい家柄である。
　もっとも、何かの事業をしているという訳ではないので、超富裕層ではあるものの、世間での知名度は大して高くはない。
　そんな一応は良家の娘である七歌は、全くそうは見えない、今時の若者らしい軽いノリで話を続けた。
「ま、いいや。それより、なんでこんな端の方でぼっち気取ってるんですか？」
「ぼっち？　……よく分からないが、挨拶を続けていて少し疲れてな。休憩がてら外を眺めていたんだ」
　七歌とはこういった社交の場で年に何回か会ったりしている。
　お互いに住んでいる場所が離れているので、プライベートではたまにメールや電話をするが、直接会って遊んだりということはこのような機会を除き全くしていない。

一般常識から少しずれている美鶴に対し、七歌はどっぷりとサブカルチャーなどと呼ばれる事もあるオタク文化にも浸かっている現代っ子なので、ときどき何を言っているのか分からない事もある。
けれど、意味を理解しなくても会話は続くので、美鶴はあまり深く考えずに七歌との会話を楽しんでいた。
「そういえば、さっきの『みちゅる』というのは私のことか？」
「そうですよ？　ていうか、他にそれっぽい名前の人なんていないじゃないですか」
「いや、私は美鶴なんだが」
「似てるでしょう？」
「……まぁ、な」
似ているかどうかで言えば、『つ』が『ちゅ』に変わっただけなので、似ていると言えるだろう。
だが、特に意味もなく、こんな大勢の前でそんな間抜けな呼び方を大声でされる者の身にもなって欲しい。
悪意の欠片も感じない無邪気な笑顔を見せているので、七歌は単に愛称のつもりで呼んだに違いない。
それだけに、美鶴は相手をあまり注意する気になれず、やんわりとだけ窘めておく事にした。
「その、なんだ。一応、私も桐条の娘としての立場があるのでな。こういった大勢いる場では、そういった愛称で呼ぶ事は控えて欲しい」
「む？　ということは、二人っきりならば呼んでもいいと？」
「……いや、君とはあまり二人きりになりたくない。何故だか嫌な予感がするんだ」
野生の勘とでも言おうか。七歌と二人きりになれば、自分の身が危ないと本能が何かを感知していた。
何がどう危ないかは分からない。しかし、こういった虫の知らせのような物は信じた方が良い。
美鶴はそれに従って七歌と二人きりの状況になることを拒否すると、グラスを片手に持ったまま身を守るように自分の身体を抱いた。
相手は美鶴の反応に悔しそうに指を一度鳴らしたが、本当になにか

するつもりだったのかと、美鶴は小さく恐怖を感じる。
しかし、二人がそんな風にやり取りをしているところに、白いスーツを着たある一人の男が近付いてきた。
「やあ、美鶴。ここにいたんだね。総帥と英恵様のところにいなかったから探したよ」
言いながら、シャンパンのグラスを片手に現れた、胸に薔薇を挿した白いスーツの男の名は、常盤（ときわ）兼成（かねなり）。
どこか爬虫類を思わせる顔つきの、歳は三十半ばといったところ。白スーツに薔薇という如何にも気障ったらしい風貌だが、オレンジの派手なネクタイも相まって、成金らしい悪趣味さが滲み出ていた。
そして、突然やってきた常盤は、美鶴の隣に立つと、肩に手を回して話しだす。
「新しいドレスかな？　よく似合っているよ」
「は、はぁ、ありがとうございます」
男の態度に美鶴はどこか嫌そうにしている。しかし、無下にする事も出来ない。
そんな雰囲気を読みとった七歌は、美鶴の手を引っ張ると、常盤の手から美鶴を奪い取った。
突然のことに美鶴も常盤も驚いているようだが、相手が口を開く前に、七歌が鋭さを感じさせる瞳で睨みながら言葉をぶつけた。
「あのさ、おじさん。先に美鶴さんと話してたの私なんだよね。まぁ、挨拶に来たってんならしょうがないけど、年頃の娘にベタベタと馴れ馴れし過ぎない？」
「な、なんだ、お前は！　馴れ馴れしいだと？　ボクは美鶴の婚約者だぞ。どこの家の者か知らないが、この常盤グループ次期社長であるボクに、そんな態度を取って良いと思っているのか」
「常盤グループ？　知らないなぁ。そんなＩＴ関係で急成長しただけの成金一族の名前なんて、九頭龍の方にはまるで届いてないよ。てか、一族の経営で地位につくだけの癖に偉そうだなぁ――――跪け」
言って七歌が常盤の肩に触れた瞬間、常盤の身体がぐらりと揺れて、手に持っていたシャンパングラスを取り落とし、言われた通り膝

をついて四つん這いになっていた。
　そのグラスは空中で七歌が中身をこぼさずキャッチしたが、傍で見ていた美鶴も、実際に膝をつかされた常盤も何が起こったのか分からない。
　両者とも表情を驚愕に染めながら、冷たい瞳で見下す様に立っていた七歌に視線を向ける。
「……それで、常盤の次期社長にこんな態度を取ったらどうなるんですか？」
「お、お前、九頭龍だとっ。の、呪われた鬼を失った古いだけの一族のくせに！」
　七歌の言葉によって動けるようになった常盤は、立ち上がったものの未だ動揺が抜けていないようで。表情をやや強張らせながら、声を荒げて怒りを表している。
　しかし、対する七歌はいたって冷静なまま言葉を返した。
「確かに確かに。龍を守る鬼は滅びてしまった。だが、お前は酷く勘違いしている。我々は鬼がいなければ何も出来ないような無能ではない」
　再び七歌が相手の肩に触れると、常盤は何の抵抗も出来ずに膝を折っていた。
　ただ触れただけだ。それ以外に何かをした様子はない。
　先ほどまで見せていた、どこにでもいる普通の若者らしい雰囲気は鳴りを潜め、いまの七歌は何か得体の知れない空気を纏っている。
　相手はこんな人間だったか、と美鶴が言葉を失っている前で、七歌は跪いている男に声をかけていた。
「龍は神に等しき幻獣だぞ？　お前の身を喰らう牙と引き裂く爪だって持っている。鬼が相手ならまだしも、人如きで相手になる訳がないだろう」
「ひ、ひぃっ!?」
　七歌の爪が相手の首をなぞると、なぞった箇所が薄っすらと傷になり、僅かにだが血が滲みだした。
　滲んだ血が垂れてきたのを感じた常盤は、慌てて傷に香水臭いハン

カチを当てて止血しようとしている。
それで周囲も異常に気付いたのだろう。テーブルを離れて会場を歩いていた桐条と英恵が三人のところまでやってきた。
膝をついている常盤に桐条が肩を貸して立たせている間に、三人それぞれに視線を送っていた英恵が尋ねた。
「一体どうしたの？　常盤さんが怪我をしているようだけど」
「こんばんは、おばさま。実は、私の手がその人の首に当たっちゃったんです。でもまぁ、その前に龍の逆鱗に触れたのは相手ですから、お相子ですよね？」
「逆鱗？」
「ええ。龍を貶されるだけなら許せますが、鬼を侮辱する言葉を受けました。私はあの人たちを侮辱する者は許しません。誰であろうと撤回させます。さぁ、さっき言った『呪われた鬼』という言葉を撤回しろ」
口調が静かであったため気付かなかったが、桐条に肩を借りて立っている常盤を見ている七歌の瞳は、怒りを表す様に瞳孔が開いていた。
中学一年生の少女が放つとは思えないような、気圧される敵意を向けられ、常盤は視線を逸らしながら呟く。
「す、すまなかった」
「……ふん、連れていって」
一応の謝罪を聞くと、七歌は普通の娘らしいむすっとした顔で男を連れていくよう命令した。
しかし、いま常盤を支えているのは、このパーティー主催者である桐条だ。桐条の当主でありグループの総帥である人物に子どもが命令するなど、普通では許される事ではない。
けれど、先ほどの異常な雰囲気を見ていたため、常盤のことも考えて桐条は大人しくその場を離れることにした。
足に力が入っていないのか、支えられながらもよたよたしている男の背中を見送り。七歌は英恵と美鶴に向き直ると、何か悪戯を思い付いた様な顔をして話しだした。

「さっきのは重圧として気をぶつけただけですよ。ま、簡単に言えば相手は腰を抜かしてただけです。それよりおばさま、お誕生日おめでとうございます。言われていた物ですが、ちゃんと持って来ましたよ。おじいちゃんに言えば許可されなさそうだったんで、私の独断で持ってきたんですけど」
「そう、ありがとう。無理を言ってしまってごめんなさいね」
七歌の言葉を聞いた英恵は嬉しそうに笑っている。祖父の許可を得ずに持ってきたというからには、彼女が持ってきたのは九頭龍の管理下にあるものだろう。
己の母が所望した品が何か分からない美鶴は、不思議そうな顔をして二人に尋ねた。
「あの、お母様。七歌に何を頼んでおられていたのですか？」
「少しね。欲しい物があったから、それを譲っていただけないかと七歌さんに頼んでいたの。どれくらいの数になるか分からないから、正直諦めていたのだけど」
「あー……今回のは数で言えば三つっていうか、二振りと一張です。ちょっと待っててくださいね」
待っていろというなり、七歌は会場を走ってどこかへと去って行ってしまった。
着物でよくあれだけ走れる物だと感心するところだが、七歌は龍の一族だ。鬼には及ばぬものの、常人よりも高い身体能力を有している。
それが分かっているため、美鶴も何も言わずに待っていると、外から入ってきたらしい七歌が、荷物を運ぶ用の台車を押して二人の前に戻ってきた。
その上に置かれているのは、とても古そうな金属の細長い箱。長さは約二メートル、幅は約五十センチほどで、中に何が入っているのか想像も出来ない。
周囲の人間もそんな異様な物を運んでいた七歌を見ていたのか、視線が三人に集まっている。
すると、その観客の中からスーツとドレスをそれぞれ着た男女が、

顔に驚愕を浮かべたまま駆け寄ってきた。
「七歌！　お前、何を持って来てるんだ！」
やって来るなり七歌を怒鳴った若々しい黒髪をした長身の男は、七歌の父親である九頭龍（くずりゅう）　恭介（きょうすけ）。
その隣にいる七歌と同じ髪色をした女性は、母である九頭龍（くずりゅう）　和奏（わかな）だ。
恭介は普段は温厚な優しい大人の男性といった雰囲気をしているのだが、娘が何を持ってきたのか把握しているようで、今は鋭い目つきで七歌を睨んでいる。
それに対し、娘の七歌は正面から視線を受け止めた上で返した。
「何って百鬼の武器だよ。おばさまが欲しいって言ってたから、迎えの人に百鬼の蔵から運んでもらって持ってきてたんだから。ていうか、これの所有権は九頭龍にはないんだし、親交の深かったおばさまが欲しいって言うなら、別にあげたって問題ないでしょ？」
「そんなはずないだろう！　英恵さん、貴女はこれが何か分かっているのですか？　実際に人殺しに使われていた凶器なんですよ？　いくら菖蒲さんと親しかったとはいえ、これを貴女にお譲りすることは出来ません」
「はーい、御開帳」
父親が話しているというのに、七歌はその隙をついて重厚な箱の蓋を足で押して開けた。
ズシン、と重い物が床に落ちる音が響く。そして、箱の中身が晒されると、周囲の者たちは息を呑んだ。
箱に入っていたのは、紅緋色の短弓が一張、所々に金の装飾具のついた黒地に白や金の浮雲模様の入った刀が一振りと、ほとんど装飾のない金属の塊と言って良いような、鍔はなく金色の柄が直接刀身に繋がっている大剣の計三つの武器だった。
弓は一本の木から作られた丸木弓で、長さは一〇九センチ、そして黒い弦がピンと張られている。
刀は白鞘のように鍔のない柄と鞘で一つのデザインとなっているが、全長およそ八三センチ、刃長は六十センチ程度。

大剣は全長およそ二メートル弱に、幅三五センチといったところだろう。
七歌が台車を使って運んだのも当然で、普通の大剣ならば五キロにも満たないだろうが、箱に収められている大剣は、どうみても十キロ以上はありそうだった。
「弓は暁って名前で、刀の方は八重桜。大剣の方はフェアティルゲンって言うらしいですけど、別名に九尾切り丸（くびきりまる）ってのがあるんで、そっちの方が覚えやすいと思います」
「くびきりまる？」
「はい、その大剣をぶんまわして九尾の狐を切ったそうですよ。だから、九尾を切った刀って意味で、九尾切り丸です。八重桜は殺した相手の血の吹き出す様が、まるで八重桜の花のようだってことらしいです。弓は本体の色が朝焼けの色っぽいから暁ってね」
九尾切り丸は一切錆びも傷もなく、まるでアクセサリーのような光沢のある銀色をしているため、どの時代の物かは分からない。けれど、どうみても西洋剣だ。名前もフェアティルゲンと言っていたため、外国から齎された武器をそのまま使っていたのだろうかと思ってしまう。
だが、英恵はそんな考えをすぐに否定した。百鬼は何代にも亘って様々な血を入れて強い個体を作ろうとしていた一族。
ならば、その中に異国の者も当然いたのだろう。この九尾切り丸はそういった者の作った武器であり、百鬼でなければ使いこなせなかった武器なのだ。
「九尾切り丸の重さはどれほどかしら？」
「六尺三寸、三十貫ですから……一九〇センチ、一一二キロくらいですかね？　両手剣ですけど、百鬼の仕様だと片手持ちの武器です。蔵の本に書いてありました」
一一二キロを片手で持って戦える。そんな事が可能ならば、武器で受けようと、武器ごと鎧も砕かれ、そのまま切り伏せられるに違いない。
最強などという言葉では生ぬるい。戦国の世ならば、まさに鬼神の

如き強さを誇っていたのだろう。
過去の百鬼を通じて、改めて英恵が湊の身体に秘められた力の底の見えなさに内心で喜んでいると、娘の行動に恭介が呆れたように頭に手を当てている。
「お前はまだあそこに出入りしていたのか」
「はぁ？　誰もあそこの掃除しないから、休みで本家に帰ったときに私がしてるんじゃん」
「百鬼の家と違って、蔵は普通の人間が入ったら危ないんだ。業者の者に掃除させて蔵を血の海にする訳にもいかないだろう」
「だから、お爺ちゃんとかお父さんがやれば良いじゃん。何のための武器があんなに残ってるか分からない訳じゃないでしょう？」
何のための武器か。それは言うまでもなく、九頭龍の命令で戦うための物ということだ。
百鬼が九頭龍から解放されたのは湊の曽祖父からだが、戦時中や戦後には混乱に乗じて悪事を働く者から人々を守っていたため、いつまた武器が必要になるか分からないと託された湊の祖父も、父からそれを聞いた菖蒲もしっかりと管理していた。
しかし、元服を迎えることで一族のことを知らされる十四歳の誕生日の前に、息子に伝えるはずだった菖蒲はこの世を去り、湊は公的には鬼籍に入ってしまった。
そのため、もう百鬼の武器を扱う者はいないのだが、それでも供養の意味も籠めて七歌は掃除を自らしている。
祖父も父も、何だかんだと強がってはいるが、内心では今も百鬼を恐れて、百鬼の家に近付こうともしていないから。
「死んだと思ってるんでしょ？　私が八雲君は生きてるって言っても信じてないんだし。それなら怖がる必要ないよね？」
七歌たちの先祖は百鬼に命令一つで人殺しを強要してきた。相手の気持ちなど考えず、自分たちの利益のためにしてきた残酷な仕打ち。
九頭龍も優秀な血を一族に入れてきたので、常人よりは基礎能力でかなり上回っている。

けれど、優秀な個を作るために交配を繰り返し、どのような相手でも屠るために技術を磨いてきた百鬼には勝てない。
それをコントロール出来たのは、ひとえに九頭龍の血のおかげである。
理由は不明だが、百鬼は九頭龍の命令に逆らえず、また故意だろうと事故だろうと傷付けることが出来なかったのだ。
故に、九頭龍は百鬼に対して恐怖を抱かずに過ごせていたのだが、最後に生まれた九頭龍と百鬼の混血児は、龍の血も持っていたため血の呪縛が効かなかった。
「あんまり粗末に扱ってるとさ。恨まれるよ、八雲君に」
「いい加減にしないか！　八雲君もあの事故で死んだ。どうしてそれを受け入れようとしないんだ！」
「だから、死体がないからって言ってるでしょ？　棺の中に一人だけいなかった。他の人は誰も不思議に思ってなかったけど、私はそれを覚えてる。一つだけ空っぽのまま骨壷を墓に納めて、なんでおかしいって気付かないかなぁ」
「っ!?」
父親に反論する七歌の言葉に、常盤を送って戻ってきた桐条が驚愕している。他の誰も見ていなかったようだが、英恵はそれを見逃さなかった。
湊に関わることは全て影時間に起こった事だ。死体がないことも、何もかも全て人々の記憶や認識に補正がかかっておかしいと認識されないはず。
それを七歌は葬式のころからおかしいと気付いていた。嘘を言っているようには見えず、自分が正しいと確信を持っているのが瞳の強さに現れている。
その事が意味するのは、九頭龍七歌は湊と同時期から影時間に対する高い適性を有しているということだ。
この中でそれを理解したのは湊が生きている事を知っている二人だけ。だが、英恵は湊の生存を知らないことになっている。
よって、自分の夫が何か行動に移す前に、百鬼の親子と親交が深

かった者としての仮面で七歌に声をかけた。
「あら、随分と興味の惹かれるお話ね。では、七歌さんは八雲君が生きている。そう確信を持っているのね？」
「居場所は分かりませんけどね。事故現場には血痕くらいしかなかったと思いますし。生きているなら五体満足で元気なんじゃないですか？　ああ、おばさまが出会う事があったら、三つとも八雲君に渡して貰えます？　それまでは桐条の蔵か何かで管理って形で良いので」
「ええ、分かったわ。でも、私は普段は別宅で暮らしているから、軽い物だけでも直ぐに渡せるよう。この弓と刀だけそっちに持って行かせて貰うわ」
　言いながら暁と八重桜を手に持つと、英恵は歳のいった使用人と会場の警備をしていた者を二人ほど呼び付けて、蓋をしっかりと閉めた状態で九尾切り丸を保管庫の方へと運ばせた。
　その間、桐条や恭介は何かを言いたそうにしていたが、どこか狂気を感じさせる薄い微笑を浮かべている英恵に声をかけられず、九尾切り丸は会場から台車で運び出されていった。
「うふふ。今日はとても楽しいお話が聞けて良かったわ。でも、少し疲れてしまったから、他の方には悪いけど、先に部屋に戻らせていただきますね」
「あ、ああ。ならば、私も部屋までついて行こう」
「いいえ、大丈夫です。あなたは来賓の方のお相手をお願いします。流石に二人揃って抜けるのは拙いでしょうから」
「そうか？　どうしても体調が優れないのであれば、内線で女中なりを呼びなさい。医者もすぐに手配しよう」
「ええ、ありがとうございます。では、皆さん、今日はどうもありがとうございました。またお会い出来ることを楽しみにしています。美鶴、何か話したい事があるのなら、パーティーが終わってから着替えて部屋にいらっしゃい」
　そういってから、もう一度、来賓へ優雅に一礼すると、英恵は八重桜と暁を手にしたまま会場を後にした。
　会場に残った他の者たちは、桐条や九頭龍夫妻は他の家の者たちと

挨拶がてら談笑し、美鶴と七歌は二人で適当に食事を摘みながらパーティーが終わるまで話していたのだった。
＊＊＊
会場を出た英恵は、刀と弓を持ったまま本宅に用意された休憩室に向かっていた。
使用人や女中がついてこようとしていたが、部屋で少し休むから誰も近付かないようにと言いつけると、何かあれば直ぐに呼んで欲しいと言って去って行った。
そして、部屋につくなり扉の鍵を閉めてソファーに寝ている少年に声をかける。
「もう……ベッドで寝ていて良いと言ったでしょう？」
苦笑した英恵に声をかけられると、その声で相手は目を覚ましたのか、もそもそと動いて身体を起こした。
伸ばしっぱなしで既に肩にかかっている青い髪に、不思議な輝きの宿った金色の瞳、首にはトレードマークの黒マフラーを巻いた少年は、本来ならばここにいるはずのない人物。
しかし、今日は英恵の誕生日だからと、パーティーが始まって警備が迎賓館に集中し、本宅の方が手薄になったらやってくる事を事前に連絡していたのだ。
電話やメールで構わないと言っていたのに、わざわざ危険を冒してまで直接祝いの言葉を言いに来てくれた少年に、英恵は綺麗な微笑を浮かべて持っていた弓と刀を渡した。
「はい、八雲君。これは貴方の御実家にあった物よ。七歌さんに頼んで持って来ていただいたのだけど、もう一つは百十二キロもある大剣だから、流石に持ってくることが出来なかったの。古い骨董品を保管しておく第二保管室に運んでおいたから、また次の機会に渡す様にするわね」
「……七歌も来てたのか。おばさんの娘と、岳羽が来ているのは分かってたが、七歌は気にしていなかった」
この部屋からでもペルソナを使えば簡単に来ている者らを把握出来る。桐条親子の他、母親にでも誘われたのだろう、岳羽ゆかりもブ

ランド物の服を着て出席しているのを確認していた。
しかし、従姉である七歌については、現在の姿を知らない事に加えて、どのような気配をしているのかペルソナで探知したこともなかった。
そのため、カグヤを高同調状態で呼び出すと、会場で美鶴と話をしている七歌を感知出来るようにしておくため、姿と共に気配を覚えておく。
「……綺麗なペルソナね」
湊の背後で両手を広げている月夜の異邦人に、英恵は素直に賛辞を送った。
窓から差し込む月の光に照らされた姿は、まさに月の姫といった然で、美しいという以外にかける言葉が見つからない。
そんな風に己のペルソナを褒められたわけだが、少年は気にした様子もなく目を閉じて探知を続けている。
話しかけて返事がなくても、英恵はまるで不快に思っておらず、少年の隣にそのまま座って少年の作業が終わるのを待った。
「終わった」
「そう。ペルソナを使っていたけど、大丈夫かしら？　ここには、ラボと同じようにシャドウやペルソナの出現を感知する装置があるのだけど」
「シャドウはともかく、ペルソナの出現感知は波長の記録が必要だ。エルゴ研では別の場所で目覚めた俺のペルソナの波長は記録していないから、感知のしようがない。仮に通常時の波長を記録しようと、高同調状態なら波長は変わるから、どちらにせよ今の召喚はばれない」
湊の来訪がばれることを危惧し、英恵が不安の色を表情に浮かべて尋ねると、湊は受け取った刀を眺めながら返した。
桐条側にはペルソナごとに波長を記録しておいて、それを元に相手の居場所や召喚を感知する技術もある。
だが、研究員らの目の前で目覚めた被験体と違い、湊のペルソナはベルベットルームなどで目覚めている。

そのため、エルゴ研時代に行っていたタルタロスの探索や、被験体との訓練の召喚だけでは記録する時間が足らず。エルゴ研にいた子どもの中で、湊だけ桐条側にペルソナの波長のデータが残っていなかった。

そんな、ペルソナの波長や、出現感知のメカニズムは知らなくとも、湊が安全であることだけは理解し、英恵は安堵してホッと息を吐いて、隣で今も刀の外身を眺めている少年に話しかけた。

「そっちの弓は〝暁〟で、刀は〝八重桜〟というそうよ」

「……この弓の弦は人の髪だな。それとこっちの方は退魔刀だ。古い家だから弓や刀があっても驚かないが、これなら一般人でもシャドウを切りつけられそうだ」

「退魔刀？　それに、普通の人でもシャドウを切りつけられるとは？」

湊は今も百鬼の血筋について知らない。

それは誰も教えていないからであり。もう少し上の世代であれば百鬼の噂を耳にしていただろうが、既に滅びたとされる百鬼の話を今でもしている者は、裏の仕事関係であっても少ない。

そのため、自分の実家に武器があることを多少不思議に思ったようだが、英恵が話題を自然に逸らすと、素直に説明をしてきた。

「陰陽師・神官・僧侶などが、妖怪や悪霊を切るために使っていた武器の事だ。類似品に破魔刀とかもあるが、細かい分類はない。そして、この刀は実際に何かの力が籠められているから、シャドウにも反応して切ることが出来る筈なんだ」

「シャドウにまで使えるだなんて、それを作った人はすごいのね」

「そうでもない。シャドウは心の怪物だから、武器を作る際に自分の想いや魂を籠めることが出来れば、それで十分干渉できるんだ。現代の職人だって魂や想いを籠めて作っているから、後は極限まで集中して一心に籠め続ければ同じように出来ると思う」

「フフッ、それを人は極地や極意というのよ。〝言うは易し、行うは難し〟ということね」

少年は本当に簡単そうに言うが、それがどれだけ難しいことか、大人である英恵は正確に認識していた。

職人は皆、魂や想いを作品に籠める。けれど、力が宿るほどの物となれば、生涯の内に一つでも作ることが出来るのはほんの一握りの者だけだろう。
当たり前のように己の全てを懸けて戦っている少年だからこそ、他の者には難しいことだと分かっていないらしい。
相手を見ていて思った英恵は、慈しむように湊の髪を優しく撫でた。すると、刃紋が薄っすらと紅い色をしている刀身を見ていた湊が、何かを思い出したように英恵の方を向いた。
「……プレゼント、用意してなかった」
「ああ、別にいいのよ。貴方がお祝いを言いに来てくれただけで嬉しいのだから」
真剣な表情で言ってきたため、内容を聞いて拍子抜けしてしまった。
影時間の別宅に来るのならともかく、今日の宗家の敷地内は旧家や名家の他にも、大企業の重役なども多数来ているため、普段よりも警備は厳重になっている。
それを掻い潜って祝うために会いに来てくれただけで、英恵にとっては十分過ぎる贈り物だった。
けれど、自分を見つめている少年は、それに納得していない様子だ。
何か欲しい物はないか、と暗に尋ねているのだろう。
しかし、欲しい物は基本的に湊や美鶴にあげたい物ばかりで、自分のためだけに欲しい物となると思い付かず困ってしまう。
そうして、しばらく悩んだ末にある事を思い付いた英恵は、少し間を開けてそれを口にした。
「じゃあ、一つお願いを聞いてもらっていいかしら。いつになるか分からないけど、美鶴が本当に大変な目に遭ったとき、一度だけ助けてあげて欲しいの。私や武治さんでは助けられない状況というものが、きっといつかやってくるわ。だから、そのときはあの子を助けてあげて頂戴」
言って、我ながらなんと狡いやつだろうかと嫌悪する。
少年の優しさに甘え、絶対に断れないであろうことを分かっていな

がら、憎んでいる男の娘を助けてやってくれと〝命令〟に近い〝お願い〟をしているのだ。
自分たち親では助けられない状況で助けるということは、結果的に桐条武治にもプラスになることである。
普通なら激昂してふざけるなと怒鳴るところだ。しかし、心の優しい湊は自分の頼みを絶対に断らない。その確信があった。
英恵の話を聞いたとき、僅かに眉を寄せた湊がどう返してくるか少しばかり待つ。そして、一分も経たぬうちに、湊は嘆息して首を縦に振った。
「一度だけだ。タイミングはこっちで決める」
「ええ、どうもありがとう」
第二の我が子とも言える少年を利用する罪悪感に胸が痛む。
けれど、少年が一度であっても娘を守ってくれる。それも本当に大変な目に遭ったときと言ったからには、湊は桐条どころか他の誰であっても助けられない状況で、どのような方法を使ってか助けようとするに違いない。
そのことにこれ以上ない安心感を覚え、複雑な心境ながらも英恵は喜びを感じていた。
英恵は湊に百鬼の武器を渡し、湊は英恵の誕生日プレゼントの代わりに約束を一つした。これで今日の予定は終了だと、湊はいつも通り帰る前に英恵の胸に手をかざして生命力の譲渡を始めた。
緑色の温かな光が手から放出され、英恵の胸の中へと吸収されてゆく。そんな不思議な光景を静かに眺めていると、湊が口を開いた。
「……そういえば。早ければ年明けで、遅ければ三月くらいに外国に行ってくる」
「あら、旅行にでも行くの？」
「学校側には留学ってことで伝えるが。実際は、日本ではこれ以上は難しいから、外国を巡って力をつけてくる。期間は留学名目なので一年くらいの予定だ。途中に帰ってこれるか分からないから、先に伝えておく」
力を付けてくるという事は、湊は旅行などという楽しい理由ではな

く、裏の仕事の延長で海外の危険な場所に行ってくるつもりなのだろう。
正直に言えば行って欲しくない。平和な日本と違い、外国では一般市民でさえも拳銃を所持していることがある。
酒に酔った勢いで発砲するような人間もいるような場所に、大切な子どもを送り出したくはない。
だが、湊は明確な目的を持って外国へ向かおうとしている。ならば、例えチドリやアイギスが行かないでくれと頼んでも、きっとそのまま行ってしまうに違いない。
相手を引きとめる力も言葉も持たない英恵は、どこか悲しそうな笑みを浮かべて、生命力を譲渡している湊の手をそっと自分の手で包んだ。
「……気を付けてね。何か困ったことがあったら、海外にいる知人に連絡してあげるから、電話するのよ？」
「問題ない。いま一緒に仕事してる相手が、留学中も一緒に来てくれることになってる」
「そうなの。でも、言葉が通じない場所では、色々と困る事も多いでしょうから、そういうときは迷わず連絡して」
今度の英恵の言葉には湊も素直に頷いた。
生命力の放出も終えたため、後はもう帰るだけだ。今は影時間ではないため、人に見られることを考えれば空を飛ぶ事は出来ない。
そうして、湊は隠密行動用にマフラーで口の辺りを隠すと窓を開けた。
「……おやすみなさい」
「ええ、おやすみなさい。またお話しましょうね」
「時間が作れれば。それじゃあ」
挨拶を終えた湊は、三階の窓から飛び降りて、音もなく着地すると、そのまま警備の人間に見つからずに中庭を走って行ってしまった。
着地した場所から目で追っていた自分はぎりぎり把握出来ていたが、服の色もあって確かに他の者からは視認されづらいことだろう。
警備の人間の三メートル後方を走り抜けたときなど、思わず吹き出

してしまいそうになったくらいだ。
あの様子ならば、誰にも見つからずに敷地から出て行けるはず。そう思って窓を閉めると、五分後に脱出完了というメールを受けて、英恵はとても良い誕生日だったと幸せな気持ちでベッドに入って休んだのだった。

第五十一話　夏休み最終日

８月３１日（水）
昼――巌戸台駅
夏休み最終日、人によっては一日中机に向かったまま、「終わらない」や「間に合わない」などと泣き言をいう日である。
しかし、駅前に集まっていた岳羽ゆかりと他の美術工芸部女子の面々は、七月中に全員で部活の休憩時間を使って宿題を終えていたので、そのような苦しみとは無縁であり。ただ休みが終わることに対してのみ、名残惜しさを感じるだけだった。
「じゃあ、全員集まったし。案内してくれる？」
ゆかりが辺りを見渡して、女子全員と真田と荒垣が来ていることを確認すると、行き先を知っているチドリと風花が頷いた。
ちなみに、湊が今日も欠席しているのは、事前にバイトがあると連絡がきているので、一緒に遊べないことは残念に思うが、連絡がつかなくて心配ということもないので、ゆかりは黙って二人の後をついて行く。
「なぁ、昼間っから中華食いに行く意味ってあんのか？」
「お昼ご飯に中華食べるのって変ですか？」
今日の集まりの趣旨をいまいち出来ていないらしい荒垣が尋ねると、ゆかりは不思議そうに返す。
昼間にラーメンを食べるなんてよく聞く話なので、それがグレードアップしたと思えばおかしくない。
そう思ったため聞き返したのだが、どうやら相手の聞きたい事は、〝何故、昼に中華なのか〟という事ではなかったようで、どうすれば伝わるかを考えてから再び口を開いてきた。
「そうじゃなくてだな。なんで、急に呼ばれたと思ったら、中華食いに行く話しになってんだってことだ」
「先輩、お昼ご飯食べて来たんですか？」
チドリと並んで歩いていた風花は少し心配そうに荒垣に尋ねる。
一行が向かっているのは、前に風花が湊と一緒に行った紅花の実家

の中華料理店だ。
　チドリもそこへは行った事があるので、道を知っている二人が先導している訳だが、注文するのは点心の食べ放題の予定なので、既に昼を食べ終わっているとしたら悪い事をしてしまったと申し訳なく思った。
　そして、僅かに風花の表情に不安の色が混じると、荒垣はどこかぶっきらぼうな口調で直ぐに否定し答えた。
「まだ早いと思って食ってねぇ。だが、緊急事態発生ってメールで呼ばれて走って来たら、単に夏休みが終わるって話だった俺の徒労はどうしてくれんだ」
「え？　ちゃんと下の方に書いておきましたよ？」
「ああ？　……普通に書けよ」
　ゆかりに言われて『緊急事態発生』というタイトルで『すぐ巌戸台駅前にきてください！』と本文に書かれたメールを下にスクロールしていくと、確かに『夏休みが終わっちゃいますΣ（・ω・＊）』と書かれていた。
　しかし、何か問題が発生してすぐに来て欲しがっていると思い込んでいる状態で、こんな子ども騙しのような仕掛けに気付けるだろうか。
　何も無かったのは良かったが、単に自分が一人で勘違いして焦っていた事を知り、荒垣はさらに疲労を感じながら、風花とチドリに案内されて店を目指して歩き続けた。
　――中華料理店〝南斗星君〟
　目的地に着くと、既に来た事のあった二人を除いた他の面々は、その高級料理店を思わせる外観に怯んでいた。
　しかし、チドリがすたすたと中に歩いて行ったので、後に続いて入って行くと、短い丈のピンクのチャイナドレスを着た女性に迎えられた。
「あや？　チドリに風花、昼間にくるは珍しいな。今日はお客さんいっぱいだから、少し五月蝿いけど勘弁ね」
　言いながら案内を始めたのは、紅花の妹である鈴音だった。

人数を確認して空いている席に皆を連れてゆくが、確かに昼時ということを踏まえても、今日は普段よりも客が多い様に感じた。
どうして今日はこんなにも客が多いのか気になったチドリは、席に着くなり鈴音に尋ねる。
「今日、何かあったの？」
「ないよー。まぁ、あると言えばあるけど、実際は関係ないから単に偶然と思いたいな」
「訳分かんない。普段と違うの？」
「んー……まぁ、今日の料理は久しぶりのバイトが作ってるくらいな。でも、味は美味しいから安心して良いね」
あははー、と姉と同じ笑い方をして鈴音はメニューを配って、水を全員の前に置いてゆく。
だが、話を聞いた他の者は人が多い理由を察した。
つまり、どういう訳か、料理人が料理を作れない状況になり、代わりにバイトが料理を作っているため、料理を出す速度が遅くなって客を捌けていないようだ。
店員が味は美味しいと言っていること、特に客からのクレームで騒ぎになっていないことを考えると、その評価は真実らしい。
ならば、作っているのがバイトだからと言って文句はない。そう考えて、適当にソフトドリンクを決めると、初めはお任せで点心の食べ放題を人数分注文する事にした。
「人数分の点心食べ放題。初めの内はそっちに任せる」
「あいあい。じゃあ、いくつか持て来るから待ててね」
他の者が頼んだドリンクだけメモして鈴音は去って行った。
そして、残された者の中で、眉を寄らせた難しい表情の真田が一番先に口を開く。
「……バイトが作ってるって大丈夫なのか？　明らかに忙しそうにしてるが、店が回って行かないんじゃないか？」
「客の俺らが気にしたってしょうがねえだろ。それに、注文受けて直ぐに料理は出てきてるみてぇだし。単純に客が頼み過ぎな可能性だってある」

荒垣の言葉で回りを見てみると、言った通りに蒸篭を持ってきた店員に、客が直ぐに追加注文をしている。
運んでも運んでも追加が入るとなれば、確かにどれだけ作るのが速かろうが、店側の供給が追い付かなくなるのも当然だ。
むしろ、店員の往復のペースが尋常でない気もしてくる。現に先ほど厨房に戻ったばかりの鈴音が複数の蒸篭を持って現れた。
注文してまだ三分も経っていない。蒸す時間を考慮すればあり得ない速度である。
メンバーを代表して表情をやや引き攣らせながら、不思議に思ったゆかりが、蒸篭を並べている鈴音に尋ねた。
「あ、あの、早過ぎませんか？　頼んでからまだ五分も経ってないって言うか……」
「ん？　ああ、普段の三倍速で料理提供してるな。午前様で一日の売り上げ達成してて、媽媽（母さん）も喜んでるけど。忙しいし、いつもより沢山料理だしてるから、ちょと食材の在庫が心配だよー」
提供速度の理由を聞いた他の者たちは、さらに自分の顔の筋肉が引き攣り硬直するのを感じた。
いくら忙しいと言っても、蒸す時間や焼成には必要な分数が存在する。それを無視しているようにしか思えない速度で提供するという事は、何か魔法でも使って調理時間を短縮していることになってしまう。
そんな手抜き料理で大丈夫か心配しながら、鈴音の「めしあがれ！」という元気な声に押されて、箸で春巻きを一つ取ると、ゆかりを恐る恐るゆっくりとそれを口に運んだ。
そして、噛んだ瞬間にパリっと気持ちのいい音が生地から聞こえ、コクのあるジューシーな中身が溢れだし、その味にゆかりは思わず声を上げた。
「うわ、なにこれ美味しいっ！」
「本格中華ってあんまり食べたことがなかったんですが、本当に美味しいですね」
「ああ、正直言って驚きの美味さだ。種類は任せる。どんどん持って

来てくれ！」
ゆかりに続いて真田兄妹も別の料理を口にして、その想像を超えた味につい顔を綻ばせる。
客のそんな反応に満足したのか、鈴音は真田の言葉に「かしこまり！」と言って厨房に戻って行った。
以前来た事のあった風花やチドリも、他の者が喜んでいるようで安心してパクパクと食べ進める。
だが、他の者がそうやって食べている中、ただ一人一口食べた料理を黙って見つめている者がいた。
何か苦手な物でも入っていたのか心配になった風花が、円卓の正面に座っている荒垣に声をかけた。
「あの、荒垣先輩？　何か嫌いな物でも入ってましたか？」
「いや……素直に驚いてるだけだ。豚のひき肉、生姜、タケノコ、しいたけ、玉ねぎ、白菜までは分かるが、このコクはなんだ？　ベーシックな醤油やオイスターソースを混ぜてるだけじゃ出ねえ味だ」
春巻きを見つめている荒垣は真剣な表情で考察している。たった一口食べただけで、彼がどうしてそこまで真剣になっているのか他の者は分からない。
しかし、料理が出来る人間だけあって、他の者も唸らせる料理のレシピに興味を持ったのだろう。
味や材料に不満があって箸が止まっている訳ではないと分かり、風花達もほっとすると、もうしばらく放置しておいてあげることにして、追加で運ばれてきた他の料理に舌鼓を打つことにした。
「二名様、ごあんなーい！」
『いらっしゃいませー！』
他の者が食べ進め、荒垣が新しい料理を食べる度に長考していたとき、風花は店員の声に聞き覚えあったため顔をあげた。
すると、深いスリットの赤いチャイナドレスを着た紅花が、新たにやってきた客をテーブルに案内していた。
美術館の仕事は休みなのだろうかと疑問が湧く。だが、接客を終えた相手に挨拶をしようと考えたとき、紅花の後ろにいた二人の客を見

て思わず声を上げてしまう。
「あっ、先生」
「ん？　おおっ、やっほー！　皆、ひっさしぶりー！」
紅花が連れていた客。それは湊らの担任である佐久間文子と保険医の櫛名田姫子だった。
風花の声で気付いた佐久間がブンブンと手を振ると、紅花も風花たちに気付いたようで、気を利かせて二人をすぐ近くのテーブルに案内する。
「ここの席にどうぞー。水は今持ってくるですよ」
「ああ、ありがとう。それにしても、お前たちも暇なんだな。折角の夏休み最終日に、恋人と思い出作りに行こうとは思わないのか？」
「姫子先生、うちの部活メンバーは全員がフリーなのですよ。ま、有里君は女性の影がチラチラとあるけど、恋人はいないみたいですし」
近くの席に着き紅花が水を取りにいくなり、櫛名田が生徒らを見て情けないといった表情を作る。
だが、佐久間が自分を含めて誰も恋人がいない事を告げると、つまらなそうに「そうか」と呟いた。
「お水お待ちどうさまね。今日は何にしますですか？　最近は甘い酒が好きな子も多いですから、果酒（くあちゅう）とかも仕入れるようにしたですよ」
「んー、じゃあとりあえずそれと、点心の食べ放題お任せで」
「私は生中で。焼き餃子が食べたいから、一緒に持って来てくれ」
「あいあい。では、お待ちくださーい」
二人もこの店では常連なのか、紅花も軽いノリで注文を受けて去って行った。
注文後もメニューを眺めている教師ら二人に、咀嚼していた唐揚げを飲み込んだゆかりが声をかける。
「先生、お昼からお酒飲むんですか？」
「ん？　そうだよ？　だって、いまはお仕事中じゃないもん。お休みの日くらい、朝昼晩とお酒飲んだって誰にも文句言わせないもんね」
ふわふわとした印象の花柄ワンピースを着た佐久間は、そういって胸を張って勝ち誇った顔をする。

確かに休日にどう過ごそうが自由だが、生徒の前でも全く取り繕わないで良いのか、とゆかりはげんなりしつつ次の料理に箸を伸ばす。
すると、今度はゆかりに代わって、風花の隣に座っていたチドリが質問をぶつけた。
「……恋人作ろうとか思わないの？　寂しく女二人で昼間から酒飲んで」
「私の求める条件を満たす良い男がいないんだ。まぁ、候補くらいはいるが、流石に捕まりたくはないからな。あいつが高校生になるまでは、摘み食いも我慢というわけだ」
「先生はねー、恋と友情を両立したいタイプなので、ちゃんとお友達とも遊ぶんだ。あ、好きな人はいるよ？　でも、まだ付き合うには時間がかかりそうだから、当分は友情を温める感じかな」
二人が言い終わった瞬間、その場に冷たい空気が流れた。
両者は傍目から見れば笑っているが、獲物を前にした肉食獣が睨みあっているかのような緊張がその場に走っている。
試合の緊張感に慣れている真田ですら、笑顔でお互いを見合っている女性二人から、冷や汗を掻きつつも目を離せないでいる。
故に、争いごとに耐性のない風花が泣きそうになり、隣のチドリの腕を掴むのも無理はなかった。
「失礼するですよ。桂花陳酒、生中、点心お任せと焼き餃子お待ちですね」
とそこで、場の空気をリセットする救いの神が現れる。
ジョッキとグラスの乗った盆と、蒸篭を器用に運びながら、持ってきた料理と酒を二人の前に置いてゆく。
先ほどまで笑顔で牽制し合っていた二人は、まるで何事もなかったかのように、料理がやってくると乾杯してから食事を始めた。
「ぷっはー！　やっぱり、お酒は良いよねー。他の人が働いてるときに、自分は涼しい場所で美味しい物食べながらお酒飲めるって最高だよー」
「同感だな。ただ無駄に金を払って娯楽をするよりも、こういった精神的な格差を嫌でも意識させる事の方が何倍も贅沢だ」

「あははー、仕事してる人間の前でよく言えたですねー。湊に言ってお客さんの料理には一つだけ激辛爆弾しかけるよう伝えておくですよ」
『……は？』
紅花の言葉を聞いた途端、隣のテーブルにいたメンバーが声を揃えてポカンとした。
聞き間違えでなければ、相手は湊が料理を作っているかのように言っていた。
それほど多い名前ではない事に加え。元々、風花やチドリも湊の紹介でここに来たらしいので、この店の店員がいう〝湊〟とは〝有里湊〟であるはずだ。
だとすれば、自分たちに出されている料理も湊が作ったのだろうか？
自分の料理スキルが未だペーペーであるゆかりは、同級生の男子がこんなプロ級の腕前であって欲しくないと願いながら、意を決して尋ねた。
「あ、あの、この料理って有里君が作ったんですか？」
「そですよ。湊、私の弟子になる条件として、昔からたまにうちでバイトしてるですから。ま、バイトの方が料理上手って店員にも評判で、料理長は半泣きだけども」
てっきり、バイトとは眞宵堂のことだと思っていた女子らは、チドリを除き全員が心に大きなダメージを負った。
あまりに料理スキルが違い過ぎる。プロの料理人に男性が多い事は知っていても、中学生ではまだ女子の方が料理をしているイメージが強い。
だというのに、相手はバイトのくせに料理長よりも上の実力を持っている。それは完全に敗北を認めなければならないほど、途轍もない実力差を示していた。
「ち、チドリは知ってたの？」
「ええ。最初から今日はバイトだって言ってたでしょ？」
自分や湊は初めから伝えていたはずだ。そう言いたげに、食べなが

ら答えるチドリ。
　しかし、それに美紀が苦笑いを浮かべながら言い返す。
「いや、あの、骨董品屋さん以外にもバイトをしてるって初めて聞いたんですが……」
「まぁ、こっちはあんまりしてないからね。でも、中学に入ってからも、何回かはしてたわよ？」
（だから、初耳だってば……）
　いくら自分たちと出会ってからもバイトをしていようと、そもそも情報として伝えられていなければ、分かるはずもない。
　隣のテーブルの教師らは驚きもせず飲み食いを続けているので、チドリと同じように知っていたらしい。
　どうして中学生でバイトをしていることに教師がツッコミを入れないのか、という疑問も浮かんだが、ゆかりは自分たち以上に衝撃を受けている男子二人を再起動させるため、静かに声をかけた。
「あの、先輩？　大丈夫ですか？」
「……あ？　あ、ああ、問題ねえ。ところで、シェフを呼んで貰えるか？　礼を言いたいんだ」
「あははー、うちではバイトはシェフとは呼びませんです。でもまぁ、そろそろ休憩時間だから構わないな。ちょと、待ててください」
　問題ないと言いつつ、どこか放心状態のまま荒垣が、シェフを呼ぶという日本ではあまり馴染みのない行動を取った。
　けれど、言われた紅花はこれと言って嫌な顔もせず。笑って承諾し、厨房に引っ込んでしまう。
　自分たちとの料理スキルの差を見せつけられた女子は、少々複雑な心境のまま、いったいどんな恰好で現れるのかと思いつつ湊の到着を待つ。
　そうして、しばらくすると、厨房の出入り口から紅花に手を引かれて、上着の丈が長いタイプの青色のチャイナ服を着た湊がやってきた。
　珍しく黒いマフラーを付けておらず、首のチョーカーがそのまま見えているのが新鮮だ。

女子らがそんな風に思っている間に、紅花と共に到着した湊が、テーブルの横に立って静かに荒垣を見下しながら口を開く。
「……何かご用でしょうか？」
「いくつか訊きたい事がある。まず、春巻きのあのコクは何で出してんだ？」
「気合」
『それはない』
ほぼ全員の声が綺麗に重なる。隣のテーブルにいた佐久間と櫛名田も一緒に言ってきた辺り、二人も実はツッコミ属性持ちなのかもしれない。
しかし、湊は真面目に答えるつもりがあまりないのか、腰の黒い帯を締め直しながら、相手の次の言葉を待っている。
そのことに荒垣は僅かに悔しそうにしつつ、次の質問を口にした。
「あの中華粥だが、もち米も入れてるよな？　白米との比率はきっちり決めてるのか？」
「その日の占いの結果に合わせて変えてます。今日は二位だったので、もち米多めでした」
「……何占いだ？」
「花」
『ぶふっ!!』
花占いで何を基準に順位を決めるか分からない。何より、湊と花占いの組み合わせが想像出来ず、男子とチドリ以外の全員が吹き出してしまった。
普段はお淑やかな美紀と風花でさえ、珍しく肩を震わせて笑いを堪えている辺り、中々の破壊力があったようだ。
だが、真面目に料理について聞きたかった荒垣は歯をギリリと鳴らし、やや睨むような形で三つ目の質問をぶつけた。
「テメェの一番の得意料理は？」
「塩結び」
「……てっめえ、少しは真面目に答えようとは思わねえのか！」
片手をテーブルにつき、勢いよく立ち上がって怒鳴る荒垣。

それに対し、湊は空いていた佐久間たちのテーブルに座って、歩いていた店員の女子に賄いを頼んでだらけている。
その様子が、さらに荒垣の怒りのボルテージを上げていくのだが、相手をこれ以上騒がせないため、湊に水を持って来た紅花がニコニコとしたまま荒垣に告げた。
「あははー、お客さん、バイトが店のレシピ勝手にばらすわけないよ。それに、湊の塩結びは美味しいよ？　湊の得意料理は和食と中華ですから」
湊は信用ならないが、他の店員が嘘を言うようには思えない。
そのため、少し冷静さを取り戻した荒垣は、湊をよく知っていると思われるチドリに確認のため尋ねた。
「……吉野、本当か？」
「基本的にある程度の味で作れるけど、プロ級なのはそうよ。和食は桜に習って、中華はここで習ってたから」
「……そうか」
チドリも肯定したことにより、荒垣は納得したのか、静かに席についた。
座ってからは一人でぼそぼそと、
「……やっぱり、独学には限界が……なら、俺は洋食やイタリアンにするか？」
など、自分の料理の腕について悩んでいるらしき言葉を呟いている。
隣に座っている真田と美紀は、彼の中でなにかしらのスイッチが入ったのだろうと思う事にして、今は放っておいてやることにした。
そうして、荒垣とのやり取りが終わると、紅花は仕事に戻り、湊は先ほどの女子が持ってきた料理を食べ始めているので。今度は真田が表情を引き締め、前々から言おうと思っていた事を口にした。
「有里、食いながらで良いから聞いてくれ」
「……なんですか？」
炒飯をレンゲで掬った状態で止まった湊が、どこか面倒くさそうに真田を見返す。

休憩時間は明確には決まっていないが、食事を終えて少し休めば、直ぐに仕事に戻らなくてはいけないのだ。
夕方には解放されると言っても、茹だるような暑さの厨房での作業は辛い。
そのため、少しでもリフレッシュしておきたいのだが、面倒な相手でしかない真田が真剣な表情を作っていることから、湊は嫌な予感しかしなかった。
「有里、俺と試合をしてくれ。ルールは一学期にしていた放課後の野試合と同じだ」
「嫌ですよ。俺に何のメリットもない」
「メリット……み、美紀と映画に行く事を許可する。チケット代は俺が持とう」
「それのどこが……いや、別に真田と出掛けることを嫌がってる訳じゃない。誘われれば、都合が合えばそれくらいはしてもいい」
真田が声を震わせ、口元を引き攣らせながら参加賞として妹との実質デートを許可する。
シスコンである真田が、たかだか参加賞程度で自腹を切ってまで妹とのデートを許すなど、普段ならばあり得ないことだ。それだけ真田は湊との試合を本気で望んでいることが他の者に伝わる。
だが、他の男子生徒が血涙を流すほど羨ましい権利であっても、湊はまるで魅力も感じなかったため、どこがメリットなのだと言い返そうとした。
しかし、流石に勝手に景品にされた美紀に失礼かと思い直し。出かける事自体は嫌ではないとフォローを入れた。
これには、兄に抗議しようとしていた美紀だけでなく、話を聞いていた女性陣も皆驚いたようで、軽く目を丸くしている。
そんな一同が驚いている場に追加の料理を持ってきた紅花が、にこやかな表情のまま会話に参加してきた。
「お客さん、湊と勝負するですか？　んー……体型的にボクサーね。実力はどうか？」
「今のところ、公式戦でも練習試合でも負けた事はないな。だが、有里

までボクシングで戦えとは言わない。格闘技をしているなら、自分の慣れたスタイルでいい」
「武器も使用してよいのですか？　湊は色々習てるですよ。素人が棒振り回すのとは、訳違うね。槍持てば、プロでも近付く前に終わりよ」
それを聞いた真田は、流石に予想外だったのか少し難しい顔をして考えている。
習っている武術に関係あるのなら武器も許可すると言っていたが、今まで武器で挑んできたのは剣道部が竹刀で来たくらいであった。
一メートルかそこらの竹刀であっても、熟練の者が持ったなら間合いは素手の倍以上になる。
それよりも長い槍にもなると、リングの全てが間合いの中に納まるのではないだろうか。
湊の実力は未知数。しかし、身体の作りや、普段の身のこなしを見ていれば、他の生徒とは比べ物にならない実力を秘めていそうだ。
何より、湊と同じクラスの後輩から、体育の授業で湊が飛んで教師を殴りに行った、と俄かには信じ難い情報も得ていた。
いくら負けなしと言っても、武器を持った相手との試合が圧倒的に不利である事は理解している。そのため、真田がどうすべきか悩んでいると、紅花がある提案をしてきた。
「なら、湊は武器無しでよいな。そもそも、武器なくても湊は強いです。プロならともかく、アマチュアで勝てる可能性はゼロな。ここのタダ券、賭けてもよいよ」
「なんだと？　それでは、有里は何で戦うつもりだ？」
「好きなの選ぶが良いです。武器無しですと、中国拳法・合気道・ジークンドーは使えるですから」
「……他にもカポエイラとかカリとか色々使えるわ。今回は相手がボクシングなんだし、やるならムエタイが丁度かしらね」
紅花の挙げた湊の習得している武術名が不十分であったためチドリが補足する。
聞いている間に女子らはポカンと口を開けているが、教師二人はそこまで驚いていないらしく、多少感心しながら食事を続けていた。

それに対し、勝負する事を前提に話が進んでいることについて、湊がやや不機嫌そうに口を挟んだ。
「やらないって言ってるだろ。そもそも、勝負を挑まれる意味が分からない。最強の称号が欲しいなら俺の不戦敗で良いから、放っておいてくれ」
心底嫌がる様に言った湊に、他の者はどこか苦笑している。
けれど、真田だけは真剣な表情をまま、静かな口調で返した。
「……守るためには力が必要なんだ。いつも吉野を傍に置いているなら、お前だって吉野を守るために力を付けたんだろう」
その言葉に湊はわずかに反応する。ただ強さに固執しているだけだと思っていた相手が、まさか自分の事を言い当ててくるとは思っていなかったからだ。
湊のそんな様子に構わず、真田はさらに続けた。
「守る者にとって、弱さは罪なんだ。周りに止められたって、どれだけボロボロになったって、俺は自分の力で守り抜く。そうじゃないと、大切な物は簡単に零れ落ちていくんだ。だから、俺は美紀をどんなやつからだって守るため、他の人間の言う通りお前が強いとしても勝ちたいんだ」
どこか悔恨の籠った言葉と、そこに秘められた想いを感じさせる瞳で、真田は射抜くように真っ直ぐ湊を見つめる。
今まで一度も見せたこともないただならぬ雰囲気に、美紀と荒垣も言葉をかけられずにいる。
そうして、他の者は湊がどう返すのか成り行きを見守っていると、瞳にどこか意志を宿して湊が答えた。
「……絶対に怪我を負うから、公式戦に影響が出ない余裕を持った日取りで実施する。負けた場合、卒業するまで俺に挑んでくるな」
この条件が呑めないのであれば、真田がどれだけ望んでも試合はしない。そう瞳で語る湊に、真田はしっかりと頷いて返した。
二年ながら部のエースで無敗を誇り、〝銀の皇帝〟の異名で呼ばれる真田と、〝蒼の皇子〟と影で女子に呼ばれている湊の試合は、話題となるだろう。

女子らは両者に怪我をして欲しくないと思っているようだが、既に酒を飲んでいる教師らは、楽しそうに教育者として相応しくない内容で盛り上がっている。
「姫子センセはどっちに賭けます？　私、有里君が勝つ方に日替わりデザート券五枚です」
「それじゃあ、賭けにならないぞ。私も、有里の勝ちに、日替わり定食券を賭けようと思っていたからな」
二人の話しに出てきた『日替わりデザート券・定食券』とは、月光館学園の食堂で使えるただの食券である。
しかし、三百円という安さに対して、その味とボリュームから生徒だけでなく教師にも人気のため、授業が終われば一日五十食限定の食券を手に入れようと、熾烈な争いが起こっていた。
もっとも、ここにいるメンバーは弁当やコンビニ食で昼を過ごしているため、その争いには興味本位で佐久間と櫛名田が一度参加したのみだが。
駄目な大人の見本である二人を、子どもらは呆れたような目で見ながら食事を続け。その後、湊は仕事に戻り、他の者は食事後もしばらく遊んで、夏休み最後の日を過ごしていった。

第五十二話　放課後の試合

１０月４日（火）
放課後――月光館学園外周
ジャージ姿でウォーミングアップとして軽く走りながら、真田は他の者が声をかけるのを躊躇うような雰囲気を纏い一人で考えこんでいた。
（後輩らの話を聞き、盛本先生から有里についての話が真実か確認したが、恐ろしいやつだ。身長差二十センチ以上ある相手を一撃で殴り飛ばすとは……）
　湊の腕力が強い事は分かっていた。全身の力を伝えるように腕相撲では戦ったが、それでも相手はビクともしなかった。
　今でこそ湊も身長一六〇センチを超えたが、当時の体格差を思えば、相手の腕力の強さだけが負けた理由ではないのはすぐに分かる。
　服の上からでもがっしりとした体型をしているのを見てとることが出来、さらに、効率的に力を伝えることに適した状態に筋肉も仕上げられているのだろう。
（油断は出来ない。過去最強の敵、格上を相手にするくらいの気持ちで丁度良い。だが、それで気負い過ぎては力が発揮できなくなる）
　相手が自分と同じように対人戦を経験していることと、見た目以上に腕力が強い事以外に情報がないため。真田は湊がどのようなスタイルで戦うか分からない。
　情報ゼロでの戦いは不安だが、結局、相手がなんであれ自分は自分の全力で勝ちにいくだけだ。
　そうして、真田は気合を入れ直すと、試合会場の部室へと戻って行った。
――ボクシング部部室
　夏休みに湊と真田が試合をすることが決まってから約一ヶ月が経った。
　これは、単純に真田の公式戦に影響が出ないときを待っていた事が原因であり。湊が面倒がって試合を拒否していた訳ではない。

だが、試合すると決まってからの真田の追い込みは凄まじかった。
九月にも公式戦を一つこなしたのだが、真田は紅花やチドリの言っていた『アマチュアでは相手にならない』という実力を持った湊を想定し鍛錬を積んだ。
結果、他校の三年エースを開始四十一秒でＫＯして勝利を決めるという、相手の実力を考えると嘗てないほど圧倒的な勝利を見せた。
その試合を応援名目で観戦しに行った湊を除く部活メンバーは、真田のあまりの強さに湊に勝ち目などないだろうと思い。今日のために設置された観客席で不安そうに主役の登場を待っていた。
「いやぁ、ギャラリー多いね。私たち以外の先生も何人か観に来るって言ってたし。有里君も真田君も有名人だねー」
そういって笑う佐久間に加えて、チドリと櫛名田も、お菓子片手にまるで映画を見るような気軽さで待っている。だが、それとは対照的に他の女子三人の表情は暗い。
例え食券だろうと賭け事は禁止だと言われて、佐久間たちは渋々諦めたようだが、二人の対決を聞き付けた学校の新聞部が勝敗予想調査を実施しており。どちらが優勢かという生徒の予想が出ている。
調査の結果では、約７６％の生徒が真田の勝利を予想し、生の試合を見たゆかりと風花も真田の勝利を予想した。
「有里君、絶対に怪我するって言ってたよね。大丈夫かな……」
「他のやつよりがたいはしっかりしてる。多少、パンチを喰らっても筋肉で守られて大した怪我はしねえよ」
一列に並んだ部活メンバーと一緒に座っていた荒垣が、心配そうにしているゆかりを宥める。
それを聞いても女子ら三人の表情は沈んだままだったが、一年のボクシング部員に案内されて、湊が部室に入ってきた。
ボクシング部の更衣室で着替えてきた湊の服装は、ムエタイ用なのかパンツにグローブ、素足に足首と踵周辺を覆うサポーターを身に付けた、殆どの者にとって見慣れぬ姿である。
そんな姿で現れ、部室内を見回していた湊にチドリが手を上げて場所を知らせると、相手はそのまま歩いて部員らの前にやってきた。

そして、アンニュイな表情で自分たちの前に現れた湊に、最初に櫛名田が声をかける。
「……お前、良い身体してるな。体脂肪率は一ケタだったか？」
「すっごーい。なんか涎出てきそうだよー！」
「……どうでもいい」
教師二人が鍛え上げられた湊の肉体に驚き、無遠慮に腹筋や腕にペタペタと触れ始める。
本人は面倒そうにして、チドリは教師二人を不機嫌そうに睨んでいるが、他のメンバーは想像以上に逞しい湊の身体を見て言葉を失ってしまった。
ボディビルダーのような作られた筋肉ではなく、実用性を重視して鍛えられた肉体。
だが、筋肉達磨にはなっておらず、柔軟運動で１８０度の開脚も出来ていることから、しなやかさも持っているのだろう。
真田も非常に良い身体をしているが、湊と比べてしまえば二段ほど見劣りする。
先ほどまで湊の身を案じていたはずなのに、メンバーはいつの間にか湊が勝つのではないかと思い始めていた。
「湊。今日はムエタイだけでいくの？」
「いや、混ぜていく。俺と先輩は対極な鍛え方をしているから、それを分からせるつもりだ」
柔軟をしている湊の背中を押しながらチドリが尋ねると、湊は簡潔に答えた。
だが、真田の戦闘スタイルは試合で知っていても、普段のトレーニングを知らないチドリは、二人の鍛え方がどう対極なのか分からない。
「対極って？」
「補完型と突出型」
「ああ、そういうこと」
再び尋ねてようやく得心がいったとチドリは頷いて見せる。
チドリはトレーニング方法の違いだと思っていたが、湊は武術の習

得そのものを指していっていた。
先に言った『補完型』、これは湊のことだ。
自分に合う合わないではなく、とりあえず習得してみる。そして、その武術の弱点を他の武術で補完し埋めてゆく。練習時間に物を言わせた、泥臭い習得方法だ。
対して、『突出型』はその人物に合った武術を習得する際に有効な方法で、自分の武器をひたすらに鍛えて究めてゆく。才を持った者の多くはこちらを選び、真田もその一人だった。
どちらが強いかは一概には言えない。守りならば対処方を多く持つ補完型が有利だが、突出型は自身の武器を使って一点から相手を崩す事が出来る。
攻め切れれば突出型が勝つが、捌ければ補完型が勝つのだ。
結局、最後は相性や錬度によるため、戦う者同士の実力を知らない者には、タイプが違う事を理解したところで、どちらが勝つか予想する事は出来なかった。
「きたわよ」
「闘気が剥き出しだな。予想より楽に勝てそうだ」
室内が騒がしくなったことで顔をあげると、ウォームアップを済ませてきた真田が、ギラギラとした瞳で現れた。
途端に部員やファンクラブの生徒から歓声が湧くが、真田の瞳には湊しか映っていないらしく、歓声には何も答えず、準備運動をしている湊のもとにやってくる。
「来てくれて感謝する。ウォームアップの時間はどれくらい必要だ？」
「柔軟と準備運動だけで十分です」
「そうか。では、改めてルールを確認しておく。試合時間はボクシングと同じだが、お前は拳だけでなく蹴りや投げ技、肘や頭突きもありだ。だが、ダウンした相手への追撃は無しだぞ」
真田が簡潔にルール説明を終える。
すると、そのまま去って行こうとしていたので、湊は話す事があったため相手を呼び止めた。

「一点だけ。あらゆる攻撃手段の許可は、俺だけじゃなく先輩にも認めます。これは、後で外野から言いがかりを付けられないためだと思ってください。拳より蹴りの威力が高いのなんて誰でも知っていますから。あいつは蹴りもあったから勝てたなんて言われたら、たまったもんじゃない」
「了解した。レフェリー役にもそう伝えておこう」
真田自身も、試合はその後の風評においてもフェアでいたいらしく。しっかりと頷いてから、レフェリーと新聞部の生徒に変更点を伝えに行った。
説明を受けた生徒らは、すぐにホワイトボードに書かれていたルールを、両者とも攻撃手段は自由だという内容に訂正している。
ボクシング以外は、不慣れな絞め技や投げ技を少ししか習得していない真田は、ルールが変わったところで自分の今まで通りの戦い方を変えたりはしないだろう。
だが、これで周囲から余計なバッシングを受ける事はなくなった。
柔軟を終えた湊はサンドバッグに近付き、部屋中に打撃音が響くほどの威力で、連続した拳と蹴りを叩き込み調子を確かめた。
「……手、抜いてる？　威力があんまり乗ってなかった」
「速度はだいたい真面目だ。威力は、壊さないように要調整って思ってるけど」
調子を確かめて戻ってきた湊にチドリが声をかける。
他の者が驚いて言葉を失うような連続攻撃も、湊の戦う姿を知っているチドリにすれば、ほとんど体重を後ろに残した軽い攻撃ばかりにしか思えなかったのだ。
案の定、湊もそれを認めた上で、理由が真田を壊してしまわないように必要なことだと説明した。
だが、新聞部の調査で湊が真田よりも低く見られていることを不快に思っていたチドリは、周りの目を覚まさせるため、わざと力を見せつけるように言う。
「零距離砲やってよ。たぶん、相手も驚くから」
「見世物じゃ……ま、見世物か」

チドリの言葉に呆れたような表情を見せ、途中で諦めたように嘆息し。湊は、グローブを外してチドリに預けると、素直にサンドバッグの前に戻って行った。
二人の話しに出てきた『零距離砲』がどんな技か分からないメンバーらは、湊の動きに注目している。
そして、湊が足を軽く前後に開いて、バンテージの巻かれた両手を重ねたままサンドバッグに触れた。直後、触れてから一拍置いて、ドゴンッ、と先ほどの比ではない打撃音が響いてサンドバッグが大きく揺れていた。
「……え？　今のどうやったの？」
ポカンと口を開けた佐久間がチドリに尋ねる。
湊は本当にただ〝触れた〟だけだ。手でサンドバッグを押した素振りも、腰を落としたような素振りもなかった。
だというのに、サンドバッグは力士が全力の体当たりをかけたのかと思えるほど、激しく揺れて吊り金具をガチャガチャと鳴らしている。
本人を除けばチドリしか、原理の理解も状況の把握もまるで出来ていないその場で、周囲の人間の呆けた様子に満足したのか、尋ねられたことにチドリはやや上機嫌に答えた。
「あれが零距離砲。本当は中国拳法の発勁だけど、私は面倒だから見た目通りに零距離砲って呼んでる」
「発勁って？」
「効果的に自分が生み出した力を対象に伝える技みたいなものよ。湊の零距離砲は、全身の細かい筋肉の動きと、呼吸とかを合わせて、掌から接地面に力をぶつけただけなの。あそこまでほぼ無動作で威力を出せるほどの身体操作の使い手なんて、世界中を探しても五人といないわね」
フフン、と得意げに笑ってチドリは湊の技の説明をした。
リングを挟んだ反対側で、バンテージを巻き直していた真田が、湊の今の一撃を見て驚愕に顔を染めていることが、チドリが上機嫌になっている理由だろう。

無知な者たちに知らしめるように、始まる前から勝敗は分かりきっていると言うように、チドリは真田の勝利を信じていた者たちを見下したように見まわし湊にグローブを返した。
そして、受け取った湊がグローブを装備し、紐をしっかりと結び直すと試合の開始時刻となり。他の者たちが不安そうに見つめる中、真田と湊はリングに上がって中央で向き合った。
＊＊＊
言葉も交わさず両者が向き合ったことで周囲の音が止むと、二人がグローブをぶつけ合い、試合開始のゴングがなった。
先に攻めたのは真田だ。両の拳を顔の高さまで上げた状態で構え、接敵すると様子見のジャブを左手で数度放つ。
「フッ!!」
湊はそれを両手をだらんと垂らした状態のまま、後退しつつ身体を捻るだけで回避する。
一見隙だらけだが、先ほどのサンドバッグへの連撃が頭に残っていた真田は、下手に打ちに行けば自分が餌食になると一度距離を取ることにした。
「……はぁ」
それを見た湊は、はっきりと周囲にも聞こえる溜め息を一つ吐いた。
不真面目にしか思えない湊の態度に、見ていた者は試合中に何のつもりだと不快感を覚えただろう。
しかし、攻撃に転じた湊を見て、その意味をすぐ理解する事になった。
「ッ!!」
様子見に後退した真田に湊が迫る。だが、その速度が尋常じゃない。
お互いに距離をとってロープ際に近い場所にいたというのに、湊はほぼ一瞬で真田の目の前に拳を振り上げながら現れた。
「くっ!?」
別に瞬間移動した訳ではない。ただ真っ直ぐ、信じられない加速で

走って接近したのだ。
そんな助走の威力も乗せて顔面を真っ直ぐ狙いにきた拳を、首を傾け身体を捻る様に真田は躱す。
カウンターを放つ余裕はない。それほどまでに、湊の拳は鋭く、耳の横を掠める拳の風圧だけで途轍もない威力を持っていると理解させられた。
だが、たった一撃を躱した程度で安心してはいけない。真田が必死に避けている間に、湊は突き出した拳と逆の足を軸に、回し蹴りのモーションに移っていた。
「ぐうっ」
咄嗟の回避で思考力を取り戻していなかった真田は、相手の回し蹴りを右腕に喰らい、やや体勢を崩し背中からロープにぶつかる。
正面からの攻撃に備え、反動でリングに戻されながらも両手のガードを胸と顔の前に構えるが、ガードを抜く様に重い攻撃が連続で放たれた。
湊は左脇腹、右頬、鳩尾、腹部を拳と肘で狙うと、さらに間髪いれず蹴りで足を刈りにゆく。
殻に閉じこもる様に守りに徹していた真田は、自分の腕で相手の蹴りが見えておらず、簡単に足を取られて左肩から落ちるように倒れ
「アキッ!!」
かけていた途中に、湊の膝蹴りを腹部に喰らってロープにぶつかり、そのままうつ伏せに倒れた。
「ごほっ、ごほっ……ぐっ」
完璧に攻撃を決められたことで、真田は蹴られた箇所を押さえながら苦しそうに咳き込んでいる。
ダウン中の相手に攻撃をすることは禁じられているので、レフェリー役の生徒によって湊は下がる様に言われているが、その間もカウントは続いてゆく。
まさか、真田が一撃当てる前にダウンを奪われると思っていなかった観客らは、皆、困惑顔でざわついていた。
＊＊＊

「い、いやぁ、有里君って私にＤＶするときは手加減してくれてたんだねー。うん……本気でやられてたら学校お休みしなきゃいけないところだったよ」
湊の勝利に賭けていた佐久間も、予想以上に湊が一方的に攻撃し続けているのを目にして、引き気味に乾いた笑いを漏らしている。
相手がダウンしかけたときに、膝蹴りを躊躇いなく的確に放つなど、こういった荒事に慣れていないと出来ない芸当だ。
「だが、今も本気ではないな。というより、全力を出す気がそもそもないようだ」
隣に座っていた櫛名田が、飲み物の入った紙コップに口を付けながら冷静に解説する。
櫛名田は保健医をやっているが、本来なら医療の前線で活躍できる腕を持つ医者だ。
そして、学校勤務になるのならと、部活で生徒が怪我をしたときに応急処置が出来るよう、格闘技などについても学んで、どんな打たれ方をすればどういった怪我をするかというのもしっかりと覚えている。
その目から見て、湊の攻撃は相手が酷い怪我をしないよう考えられた打ちこみ方をしていた。
「随分と優しいじゃないか。怪我をしないように、しても長引かないように、角度や威力を考えて打ちこんでいる。実力の差は歴然だな」
苦しそうにしながらも、リングに手をついて立ち上がりファイティングポーズをレフェリーに見せて、まだまだ続行可能だとアピールしている真田を見て笑いながら呟く。
確かに、一見クリーンヒットのようでも、体重を乗せきっていない攻撃なら、もう二、三発喰らっても立てるだろう。
けれど、それだけに埋め難い実力差があるのは、素人でも見ていればすぐに気付く。
まだそのことが分かっていない美紀が、並んでいる者の中でチドリに次いで状況を分かっている櫛名田に尋ねた。
「そ、そんなに兄さんより有里君の方が強いんですか？」

「ん？　まぁ、馬鹿みたいな縛りプレイで勝っているからな。ほれ、見てみろ。攻撃が当たったらすぐに次の攻撃に移ってる。触れるか触れないかのところで拳を引いたら、相手になんのダメージも与えられないだろう？」
櫛名田の指した先に視線を送ると、再び湊が一方的に真田を滅多打ちにしていた。
逃げようにも湊の蹴りが退路を塞ぎ、ガードをしていても骨に響くような打撃を上下左右からランダムに打ちこんでくる。
しかし、それでもガードがなんとか崩れていないのは、単に湊の攻撃が力を自分側に残した軽い攻撃ばかりで攻めているためだ。
「もう半歩踏み込めば簡単に決まるぞ。吉野、有里に指示して見ろ。流石に、ここまで実力差があると、手加減されても嬲り殺しのようで真田が可哀想だ」
「ええ――――湊、もう帰りたい」
櫛名田に言われてチドリは静かに頷き呟いた。
観客らが騒いでもいても、しっかりとそれは耳に届いたのだろう。
今まで相手をロープに追い込み殴り続けていた湊は、殴るのを止め。さらに半歩だけ下がると、相手に背を見せるように一回転して勢いを乗せた回し蹴りで、ガードごと真田の頭部を蹴り飛ばした。
あれだけ話題となり騒がれていた試合も、そんな少女の呟きから引き出された一撃で、ただただ呆気なく終わりを迎えたのだった。
＊＊＊
「ん……ぐっ……」
「兄さん？　大丈夫ですか？」
目を覚ました真田は、妹の声を聞いて徐々に意識を覚醒させ状況を把握しようとする。
自分はいまベッドに寝かされ、天井や周囲の様子からすると、ここが保健室であると判断した。
頭はまだどこかぼーっとしているが、身体の痛みに耐えながら起き上がり。どうして自分がここにいるのかを尋ねた。
「俺は……どうなったんだ？」

「それは……」
湊と試合をしたところまでは覚えている。しかし、肝心の試合内容が思い出せない。
そのため、美紀に何があって自分がここに運ばれたのか尋ねたのだが、どこか悲しそうな表情で美紀は黙ってしまう。
そんな物を見てしまうと、本当に何があったのか知りたくなる。
もう一度教えてくれるよう頼もうとしたとき、ベッドを囲っていた仕切りのカーテンが開き、幼馴染が姿を現した。
「シンジ、お前もいたのか」
「他のやつらは帰らせたが、一応、お前が目を覚ますまでってことでな」
答えて荒垣はカーテンを開けたまま長椅子に戻り、ベッドで身体を起こしている真田に話しかける。
「試合だが、結果はお前の一ラウンドＫＯ負けだ。ロープに追い込まれてたところを、最後にガードごと蹴りでブッ飛ばされて、気絶してたから保健室に運ばれたんだ」
「一ラウンドＫＯ負け……？」
言われて試合内容を思い出そうとする。
始まってすぐに自分の攻撃は躱された。その後、すぐに攻撃に転じた湊が一方的に攻めて、自身は躱す事も、逃げる事も出来ず守らされていた。
そして、ダウンを取られて、再び立ちあがってからは、さらに一方的に……。
全てを思い出した真田は、わなわなと震える手を見つめながら絞り出す様に溢した。
「俺は、負けた。何にも出来なかった。反撃も、脱出も考えられず、ただ耐えていただけだった……」
「吉野に聞いたが、有里は鍛え初めて五年くらいらしい。お前よりも経験を積んでるってことだ。ま、それだけじゃねえが、負けた理由なんて結局は実力が劣ってたってことだな」
「シンジさん……」

負けて落ち込んでいる人間に、何もそんな風に言わなくても、と美紀が僅かに責めるような視線で荒垣を見る。
だが、荒垣は構わずに続けた。
「有里が言ってたぜ。テメェの拳は守るにしては軽いってな」
「……どういう意味だ？」
怪訝そうに顔を上げて真田が聞き返す。それに対し荒垣は、荷物をまとめつつ肩を竦めながら軽い調子で返した。
「さてな。俺にはよく分からねえが、曰くお前は美紀自体を守ってる訳じゃないらしい。自分が傷付くのが嫌で、自分のために美紀を守ってるようにしか見えないそうだ」
その言葉を聞いた真田は驚いたように目を見開いた。
自分でも気付いていなかったことに気付かされた。そんな様子を見せる兄に、美紀はどんな言葉をかければ良いのか分からない。
しかし、兄に声をかけた荒垣は、話すだけ話すと荷物をまとめ終えて保健室から出て行ってしまった。
そうして、残された美紀がどうすれば良いか悩んでいると、俯いていた真田がぽつりと呟く。
「先に帰っていてくれ。俺はもう少し休んでから帰る」
「え、でも」
「……頼む。少し一人にさせてくれ」
静かだがどこか懇願するような口調に、美紀はそれ以上引き下がろうとはせず。言われた通り、自分の荷物を持って立ちあがると、一度心配そうに振り返ってから部屋を後にした。
一人になった真田は、自分しかいないことを確認すると、悔しそうに拳を握りしめ、寝ていたベッドマットを殴りつけた。

影時間――弾指記念病院
真田との試合をした日の影時間。湊は制服姿のまま、巌戸台から少し離れた場所にある病院の一室に来ていた。
湊はベッドの隣にパイプ椅子を置いて座り。ベッドの主の少女は上半身を起こし、リハビリと勉強を兼ねた文字の書きとり練習をしな

がら、湊に話しかける。
「それじゃあ、相手の人を蹴り飛ばして、そのまま帰っちゃったんですか？」
「勝った後に、対戦相手のことまで気遣う方がおかしいだろ」
「それは……そうですけど」
眉を寄せ、口を突き出す様に言って、水智恵はやや困ったような溜め息を吐く。
アイギスの人格形成実験に参加していた彼女は、夏休みに湊に麻痺を治して貰ってからリハビリを続け、今では自分で話すことや食事をすることが出来るようになっていた。
流石に、まだ走りまわるような事は出来ないが、歩行器を使えば自分でもゆっくりと少しは歩くことが出来る。
けれど、ずっと病院に籠もってリハビリをしていては退屈になるため、たまに会いに来て話してくれる湊の近況報告が彼女は大好きだった。
しかし、今日の話題は湊が友人と不仲になりそうな印象を受ける。
実際、真田を慕っている者の中には、湊に黒い感情を抱いた者がいたのは確かだ。
聡い湊がそれに気付いていないはずがないので、どうして自分から敵を作る様にするのだと、恵は少々呆れていた。
「八雲さん、お友達は大切にした方が良いですよ。貴方が困ったときに助けてくれる人が大勢いた方がいいじゃないですか」
「生憎、友人はシャドウに一人いるだけだ。それ以外の同世代は基本的に知り合いでしかない」
「もう、私もいるじゃないですか」
「それはお前が勝手に言っているだけだろう。諦めて他に同世代の友人でも作ってろ」
友達と認めているのはファルロスだけ。そう、湊が答えると、恵は頬をむくれさせて怒っているとアピールする。
だが、湊は恵の反応を流して、黒い弦の張られた弓を引いていた。
病室という狭い空間で弓を引く練習をするのは非常識だが、恵は湊

のすることに対して寛容だ。
故に、弓を引いていることには何も触れず、何か思い付いたようにノートにさらさらと字を書きこむと、それを湊に見せて悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「八雲さん、八雲さん。これ、声に出して読んでみてください」
「……莫迦か。一人で読んでろ」
「えー……〝私とあなたは友達です〟。ほら、読みましたよ。次は八雲さんの番です」
恵がノートに書いたのは、湊に自分を友人だと認めさせるための言葉。
それを見た湊が馬鹿らしいと切り捨てるも、恵は素直に読み上げて次は湊の番だと催促した。
あしらわれながらも、湊を相手にここまで踏み込んで接することが出来る同世代など皆無と言っていい。
それだけに、湊もどこか慣れない様子で、傍目には淡々と映る様に恵へリアクションを返した。
「〝残念ながら、水智恵は友達のいない寂しい娘です〟」
「んんっ、もうっ！　いますよ。ちゃんと、二人います。七式アイギスと八雲さんっていう、数字続きの二人が友達なんです」
「……俺の名前は従姉と関連付けられてるんだ。アイギスは関係ない」
「え、そうなんですか？　珍しいですね。親子とか兄弟以外で名前に共通点をつけるって」
近況報告以外で湊が自分のことを話すのは珍しい。加えて、従姉がいたというのも初耳だ。
今も左右どちらに構えても同じように引けるよう弓の練習をしている少年を見ながら、好奇心で瞳を輝かせながら、恵は尋ねた。
「その人の名前を教えて貰っても良いですか？　ああ、できれば、今まで聞く機会のなかった八雲さんの苗字も一緒に」
「……誰にも漏らすなよ。百鬼だ。百鬼八雲。従姉の名前は九頭龍七歌。従姉が９７で、俺が１０８になってる。まぁ、他にも意味がある

らしいが、よく知らないし、知っていた人間ももういない。存命の父方の祖父である九頭龍の爺は、理由は分からないが俺や両親を嫌っていたから、交流自体ほとんどなかった」
「え、実のお爺さんなのにですか？」
「撫でられた記憶も、抱き上げられた記憶もない。うちと九頭龍は実家が隣接していたが、家の前の道ですれ違ったときには、自分の前から失せろと言われた。嫌いなら無視すればいいのに、子どもながらに本当に器の小さい人間だと思ったさ」
昔を懐かしむような雰囲気ではなく、ただ相手の矮小さを無様だと言うように湊は嗤っていた。
感情の起伏が乏しく、喜怒哀楽が本当にあるのかも不明だった少年の見せた初めての笑みだ。
けれど、その歪んだ感情から出た笑みは、どこか痛々しい悲しさを含んだ物のようにも思えた。
（八雲さんが可哀想。ご両親もいないのに、血の繋がりのある人から、そんな風に嫌われているなんて。普通、自分の孫なら愛おしくて仕方ないはずなのに。なんで、お爺さんは八雲さんを嫌ってたんだろう）
湊が悲しい顔をしていると、自分も胸が締め付けられる様に悲しくなってくる。
相手の悲しさを癒したい、孤独でない事を教えてあげたい。そう思ってベッドから降りて抱きしめようと動き始めたとき、急に湊が弓をマフラーに仕舞って立ちあがった。
「そろそろ帰る。また、お前の父親なりから、桐条側のことが聞けたら、勘づかれない程度に聞いておいてくれ」
自分が何をしようとしたのか気付いたのだろうか。
そんな風に、唐突に立ちあがり窓の方へ移動した湊の行動に疑問を持ちながらも、恵は素直に了解と告げて挨拶する。
「あ、はい。わかりました。気を付けて帰ってくださいね」
「ああ。それと、来年になったら俺は一年ほど海外に行って、実戦経験を積んでくる。その間、シャドウ狩りは知り合いに頼んでおくから、無気力症の被害はそれほど広まらないと思うが、お前も気を付けてお

け」
窓の外でタナトスを呼び出し空中に浮きながら、湊は本来、先に伝えておくべき重要な用件を話した。
流石に、帰る前の挨拶でそんな事を言われると思っていなかった恵は、座ったままこけると言う、器用なリアクションを見せて、身体を起こしてから相手に抗議する。
「ちょっ、なんで、先にそれを言わないんですか！　友達のお兄さんを蹴っ飛ばしたことより、そっちの方が何倍も重要でしょう？」
「……？　まぁ、いま言った通りだ。出発まではまだ時間があるから、そんなに気にすることはないだろ」
相手が何故そんな、言及してくるような様子で話してくるのか分からない。そう言いたげな表情を湊は作っている。
そんな表情を見せられた恵は、本当に湊は変なところで天然でボケボケだと、不意に見せる少年の隙だらけな顔に母性をくすぐられながら、しょうがないなと苦笑を浮かべて抗議をやめるしかなかった。
「はぁ……もう、今回はいいです。ただ、次からはもう少し早くに連絡ください」
「善処する。それじゃあな」
「ええ、お休みなさい」
飛び去っていく少年の姿を見ながら、恵はゆっくりベッドから起き出すと、開いていた窓を閉めてクスリと笑みを漏らす。
今日の湊はいつも話してくれない過去の事も話し、さらに、素直に自分の身を案じる言葉をかけてもくれた。
何があって、今日はそれらを話す気になっていたのかは分からない。
けれど、また少しだけ湊の心に近付けたような気がして、恵は充足感を感じていた。
「……いいなぁ、アイギスは。あんな人に想われて」
未だ目を覚まさないお友達に、ちょっとばかしの嫉妬を覚えつつ、自嘲的に苦笑して、恵はそのままベッドに戻り休んだ。

第五十三話　ボクシング部マネージャー

１１月１６日（水）
放課後――ボクシング部部室
三年生の大会も終わり、三年生が全員引退することが決まると、二年生で部のエースであった真田が新たな主将となった。
そうして、新体制でボクシング部もスタートしたのだが、新主将である真田は湊に負けて以来、何かに取り憑かれたように鬼気迫る勢いで練習に打ち込んでいた。
今日もまた、柔軟と準備運動後のロードワークから戻るなり、練習メニューを他の者に言い渡して、本人は黙々とサンドバッグを叩いている。
いつも監督から少しは休めと言われても、一度給水に行くだけで、すぐに縄跳びなどを始めてしまい、しっかりと身体を休めるということをしていなかった。
「真田くん、少し頑張り過ぎだよ。そんな無茶なトレーニングじゃ身体を壊しちゃう」
長い髪を頭の高い位置で大きなリボンによって纏めたポニーテールの女子が、そんな今の真田の姿を見かねて声をかける。三年生のボクシング部マネージャーである時任（ときとう）亜夜（あや）だ。
選手であった三年生の部員らは先に引退したが、マネージャーである彼女は、そのまま試験もなく進める月光館学園の高等部にゆくからと、今もまだボクシング部に顔を出していた。
先輩に声をかけられ、真田は一度視線をそちらに向けたが、直ぐにサンドバッグに向き直し、再び速いテンポで叩き続ける。
「……放っておいてください。俺はもっと、今よりももっと強くならなくちゃいけないんです」
「それは、有里くんに負けたから？　あの子に勝つために、そんな無茶なことをしているの？」
「っ!?」
図星を突かれ、真田は鋭い視線で亜夜を睨み、サンドバッグを叩く

手を止めた。
真田が今のように無茶なトレーニングをするようになったのは、湊に一方的に負けてからである。
それだけで、真田を見ていた誰もが、彼が荒れている理由に気付いていた。
しかし、下手に慰める事は出来ない。これまでずっと無敗で向かうところ敵なし。そうして〝無敗の皇帝〟と呼ばれ、今後も勝ち続けていつかプロ入りすると誰もが信じていたのだ。
そんな皇帝が運動部に所属もしていない一年生に負けた。それも一方的に、ただの一発も当てられずに一ラウンドでＫＯされた。
試合を見ていなかった者は、それを聞いても全く信じていなかったが、翌日に試合した二人が学校にきたとき、真田だけが痣を作っていた事で、言われていた事が事実だと知れ渡った。
「先輩も見ていたでしょう。あいつの強さを。まったく敵わなかった。エースだ、皇帝だと呼ばれ、俺は天狗になって少し浮かれていたんです。そんな間抜けの鼻っ柱を、あいつは心底つまらなそうにしながら、容易くへし折った」
「それは、有里くんは蹴り技もある格闘技を習っていたから、ボクシングで拳だけしか使えない君よりも有利だっただけだよ」
「本気でそう思いますか？　負けた本人が一番分かってる。あいつは例えボクシングのルールで戦っても俺に勝っていましたよ」
気休めはよしてくれ、と真田は亜夜の言葉を否定し、サンドバッグを離れて今度は全身が映る大きな鏡の前に移動した。
そこでは自分のフォームを確認しながら、鋭い拳とステップを繰り返してシャドウボクシングを始める。
だが、まだ亜夜が後を追ってきていたため、鏡越しに相手を見ながら、真田は拒絶の言葉を吐いた。
「先輩、すみませんがトレーニングを続けたいので、あまり構わないでください。この程度、無茶でも何でもありませんから」
「っ、もう好きにすればいい！　身体壊しても知らないから！」
真田の言葉に亜夜は声を荒げて返すと、拳を突き出していた真田の

後頭部にタオルを投げつけ、怒ったまま鞄を持って部室を出て行ってしまった。
校内新聞の企画でお姉さんにしたい人ナンバーワンに選ばれた彼女が、そんな風に他人を怒って怒鳴るなど誰も見たことがなかったので、部員らは何事だと真田と亜夜の去って行った入り口を交互に見つめていた。
トレーニングをしていた真田も、初めてみせた亜夜の態度を不思議には思ったが、後を追おうとはせず、そのままトレーニングを続けることにした。
＊＊＊
本日は珍しく部活やバイトだけでなく、仮面舞踏会（バル・マスケ）としての仕事もない湊は、掃除当番を終えて一人で校舎から出てきた。
他のメンバーは、弓道部のあるゆかり以外、チドリがバイトということで、途中までは一緒だからと先に帰ってしまった。
そうして、ぽっかりと出来た暇な日をどう過ごそうか、イヤホンを耳にかけつつ考えていると、女子が一人こちらに向かって走ってきた。
「っ、きみが……きみが、あんな勝負をしたから！」
興味はなく、そのまま歩いて行こうとしたが、相手は湊の前にくるなり、キッと睨みつけて振り上げた手で湊の頬を張った。
「……」
バシン、と高い威力を有していることが分かる甲高い音が、人もまばらになり始めていた生徒玄関前に響いた。
だが、叩かれた方は突然のことで訳が分からない。避ける事も、受け止める事も可能だったが、湊はポケットに手を入れたまま相手の顔をぼうっと眺め続ける。
相手は確かボクシング部にいた三年生だったか。
周囲が自分たちを見てざわついていることも構わず、湊はそんな風に記憶を手繰りよせている。
すると、怒りで息を荒くして肩を上下していた相手が、ハッとした表情をしてから、慌てたように自分が叩いた湊の頬に触れてきた。

「あっ、ご、ゴメン！　叩くつもりなんてなくて、っていうか、きみは悪くないのにっ」
言いながら、時任亜夜は涙を目に溜めて湊に謝り続ける。
亜夜は本来、穏やかで面倒見のいい性格をしており、叱ることはあっても感情に任せて手を上げる事など誰も見たことがなかった。
それが今回、自分が気に掛けていた少年が、見ていて痛々しいほど余裕を無くした状態になったことで、怒りで部室を飛びだした直後に原因となった少年を見つけたため、つい爆発してしまったのである。
そんな、校内姉にしたい人ナンバーワンの女子に叩かれるという、記念すべき第一号に湊が選ばれた訳だが、退屈な授業から解放され、暇な放課後をどのように過ごそうか考えているときに、そんな事をされて喜べるような被虐趣味を湊は持ち合わせていない。
今も相手はポロポロと涙をこぼしながら、叩かれて赤くなった湊の頬を撫でているが、正直に言えばさっさと解放してほしかった。
「……用がないなら帰っていいですか？」
「ま、待って！　叩いたとこ冷やさないと、赤くなっちゃってるし。あ、私、ハンカチ濡らしてくるね。すぐ戻るから、帰っちゃ駄目だよ！」
言うなり、亜夜はポケットからハンカチを取り出して校舎の中へ走って行った。
相手は帰るなと言っていた。しかし、名前も知らない人間のそんな言葉を湊が素直に聞くわけがない。
そうして、軽く嘆息してから歩き出そうとしたとき、後ろから肩を掴まれた。
今度は誰だと思って振り返ると、そこにはやや呆れた表情をした荒垣が立っていた。
「……何か用ですか？」
「いや、お前そこで帰ろうとすんなよ。さっきのやつが戻ってきたとき、お前がいなかったら探しまわるだろうが」
何故、荒垣がここにいるのかは分からない。何か用事があって残っていたのか、湊と同じように掃除当番に当たっていたのかもしれない

が、一部始終を見ていたことは確かなようだ。
そして、成り行きを見守っていたところ、亜夜が帰るなと言って離れるなり、案の定、湊がそのまま帰ろうとした。
亜夜のことはボクシング部マネージャーの先輩という程度しか知らないが、当事者二人を知っている者として、亜夜が湊に突っかかって行った原因はある程度予想できる。
学校でも憧れの対象として人気の真田を痛めつけたとして、入学当初から不良のレッテルを貼られていた湊の評判はさらに落ちている。
故に、これ以上、湊が周囲に好き勝手に悪く言われないよう、ここで亜夜との問題を解決すべきだと荒垣は湊を止めたのだった。
「お前、最近、自分の評判が悪いの知ってるだろ。ここで帰ったら、さっきの女子を殴って泣かせたとか、周りのやつらに勝手なこと言われるぜ」
「どうでもいい」
「っ、おわっ!?」
自身のことを気遣ってくれた荒垣を、湊は身体ごと振り返り、肩を掴んでいた相手の手を捻りながら足を刈り取る事で一回転させ地面に倒した。
しっかりと足から落としたが、急に投げられたため、荒垣はそのまま地面に座り込む様に倒れてしまう。
驚きのみで痛みは全くないが、それでも突然何の真似だと、すぐに立ちあがって、既に歩き出していた湊に向かって怒鳴った。
「て、てっめぇ、急に何しやがる!」
「柄の悪い上級生が掴みかかってきたので、思わず身を守ってしまっただけですよ」
「テ、テメェが言うな！　お前は入学式の時点でピアス開けて、校則違反のアクセサリーつけまくりだろうが！」
密かに気にしていることを言われ、荒垣はさらに声を荒げるが湊は止まらない。
当事者でありながら、我関せずとばかりに音楽プレイヤーをいじって、そのまま校門へと向かって行った。

だが、荒垣の時間稼ぎは功を奏した。走って戻ってきた亜夜が、校門を出る前に湊を捕まえたのだ。
そして、頬に濡らしたハンカチを当てられ、腕を掴んだままどこかへ連れて行かれる湊の姿をみて、荒垣は心の中で「ざまーみろ」と密かにほくそ笑んだのだった。
＊＊＊
亜夜に強制連行された湊は、途中から主導権を握り、ポロニアンモールにある学校と提携を結んでいる大型スポーツショップにやってきた。
相手もボクシング部のマネージャーをしているだけあって、ここには何度も足を運んだことがあるらしく、店内を進む途中でボクシング用品にちらりと視線を送っている。
だが、黙って進んでゆく湊と離れないよう、自分が見たい物はほどほどにして、そのまま湊の隣に戻ってくると、湊の進む先に視線を送って口を開いてきた。
「弓具？　きみ、弓道部だっけ？」
「……違う」
簡潔に答え、湊はそのまま弓懸（ゆがけ）という、弓を引くときに手を保護する手袋のような物の置かれたコーナーへ歩いてゆく。
湊がここへやってきたのは、英恵が七歌から受け取った百鬼の武器の中に弓があったからで、素手でも引くことは出来るのだが、百鬼の短弓〝暁〟は異常な強さをしていた。
武器美術館館長の車谷に紹介して貰った弓道家でも半分も引くことが出来ず、キロにすれば五十キロを超えているのではないかと言われた。
現代の中高生の弓力は１２～１８キロが普通と言われ、戦国時代では３０～４０キロの強さの弓もあったと言われている事を考えれば、百鬼の弓は現存する弓の中でもトップクラスの剛弓だろう。
怪力の湊はその弓を半分までは引くことが出来る。そこで放しても普通の弓並みの威力を発揮するが、完璧に引くにはまだ力が足らず、また足りたとしても引くときに指を傷付ける可能性があるからと

弓懸を見に来たのだ。
　そうして、置かれている物を手にとって見ていると、後ろで湊を眺めている亜夜が話しかけてきた。
「あの、本当にゴメンね。ちょっと嫌なことがあって、それできみに当たっちゃったの。あ、ていうか、名前もまだ教えてなかったね。私、時任亜夜。ボクシング部マネージャーの三年生だよ」
「……そう」
「え、それだけ？　自己紹介し返したりは？」
「先輩は、誰とも知らない人間を殴ったりするんですか？」
　湊が淡白な返事をしてきたのみで会話が終わりそうになり、亜夜は少し慌てたように聞き返す。
　すると、湊は遠回しに自分を知ってて叩いてきたんだろうと言って、亜夜は少し罰が悪そうにしながら、
「あ、はい。そんな事はしないです」
　と答えた。
　それはそうだ。機嫌が悪いときに周囲の人間にやつあたりをする者もいるが、亜夜はわざわざ自分から湊に駆け寄って頬を張ったのだ。
　これで貴方のことは知りません。ただ目立っていたので、やつあたりの相手に選びました、と言っても誰も信じる筈がない。
　けれど、自分が知っているからと言って、相手から自己紹介して貰う必要がないかと言えば、それは話が別である。
　落ち込みかけていた亜夜は顔を上げると、棚の商品を手にとって眺めていた湊に再び声をかけた。
「あの、名前は知ってるけど、他は知らないからさ。一応、自己紹介して欲しいなって。……駄目かな？」
　相手の様子を窺うようにやや顔を俯け、上目使いに亜夜は尋ねた。
　亜夜にこのように尋ねられれば、ボクシング部員だけでなく、学内の男子生徒のほとんどが素直に様々なことを話してしまうに違いない。
　けれど、今回は相手が悪かった。湊の周囲は亜夜と同レベルかそれ

以上のルックスを持った女性が多数いる。
そして、彼女らは頼みごとをするとき、自分の女として武器をアピールしつつ頼むことで、湊から色良い返事を貰おうとすることも多々あった。
亜夜は天然でいまのポーズを取っていたが、湊にとってはこの程度のおねだり、日常どころか日常にも及ばないレベルなのであった。
「……暇なら帰って良いですよ。そもそも、先輩と遊ぶ気ないですし」
「あの、別に遊ぼうとかって思って一緒に居る訳じゃ……。謝りたいなって思って、何かお詫びもしたいし。何か買うんだったら、私から贈らせて貰えないかな？」
「自分の学費払うくらいにはお金に困ってないんで、そういうのは遠慮しておきます」
亜夜、二度目の撃沈である。
学年ごとに成績優秀者の学費免除制度があるのだが、満点トップの湊は全額免除、二位の美紀と三位のチドリは半額免除となっており。
湊は自分とチドリの二人分の入学金や学費、修学旅行費など諸々を支払っていた。
二人とも成績優秀者なので、合計しても一般学生一人分にも満たない額だが、それでも学費を親に払って貰っている亜夜にすれば、そんな自分が相手に何かを奢るのは失礼なのかもしれないと思わされた。
「あ、その、じゃあ、お茶だけでもご馳走させてもらえないかな？」
「……頭から熱いお茶をかけられたら困るので、そっちも遠慮しておきます。暇なら帰って宿題でもしてたらどうですか？　テスト、三年に満点取ってる人間誰もいなかったでしょう。そんな残念な頭なら、少しはマシになれるよう努力しないと、金出してる親が泣きますよ」
「ざ、残念な頭って、そんなこと言うきみは……って、きみ入学からずっと満点だっけ。すごいね」
失礼な相手に言い返そうとするも、湊はそう言えるだけの結果を出していた。
評判はあまり良いとは言えないが、それでも文武両道でルックスも学内では真田と人気を二分する程度に優れている。

どうしてこんな性格に難ありの相手に、天は二物も三物も与えたのか、亜夜は本気で天を恨みたくなった。
弓懸のコーナーから、今度は矢筒のコーナーに移動していた湊の後に続き、呆れを通り越して感心した亜夜は、湊に素朴な質問をしてみた。
「きみ、末っ子かな？　それとも一人っ子？　なんか、その我儘っぽさが少し弟に似てるんだよね」
「……そう。じゃあ、その弟にでも構ってればいい」
「あ……うん、それはちょっと無理かな。弟はもういないから」
急に声のトーンが暗くなり、少し寂しげな笑みを浮かべて亜夜はそういった。
そこで初めて湊は振り返り相手を見た。泣いているかと思ったためである。
しかし、相手は悲しそうにしてはいても、泣いてはいなかった。
湊が自分の方を向いたことに気付き、どこかぎこちない笑顔を見せるその姿が痛々しい。
「……事故か？　病気か？」
急に口調を変えた湊が、亜夜を真っ直ぐ見つめて尋ねる。
「事故だよ。六年前にここら辺で爆発事故があったの知ってる？　弟はそれに巻き込まれて、建物の下敷きにね」
六年前の爆発事故、それはポートアイランドインパクトのことだろう。ここにもまた一人、あの事故の被害者がいたことに湊は小さな怒りを燃やす。
事故の原因を作った者が死ぬのは自業自得だ。けれど、関係のない者が、こうして今も苦しんでいる。それが湊には許せなかった。
弓懸と矢筒をそれぞれ一つずつ選んで手に取り、湊はレジへと向かいながら、自分の事を話してくれた相手への礼儀として、先ほどの質問に答えるため口を開いた。
「……俺に兄弟はいない。だが、両親が先輩の弟と同じ事故で死んでる」
「っ、ご両親二人とも？　じゃあ、今はあの赤い髪の子の家で一緒に住

んでるの？」
厳密には同じ事故と言っていいのかは分からない。けれど、元を辿れば同じ物と言える。
まさか、湊も自分の弟と同じ事故で大切な人を亡くしたとは思っていなかったのだろう。亜夜は目を見開いて尋ねる。
それに答える湊の声はどこか他人事のように、淡々とした響きをしていた。
「俺だけ車から投げ出されて、二人は炎上した車の中に残され目の前で焼け死んだ。それとチドリは施設にいた孤児だ。いま暮らしている家の人が保護者になってるけど、血の繋がりは一切ない」
「そう、なんだ。ごめんなさい。私、まったく知らなくて……」
亜夜は話を聞き終えると、再び黙りこんでしまった。
レジに向かう湊の後ろをついてきているが、先ほどと違って全く話しかけてくる気配がない。
「いらっしゃいませ。ポイントカードはお持ちですか？」
「いや……先輩、ポイントカードは？」
「え？　あ、持ってるけど、ポイントいらないの？」
ほとんど店にこない湊にとって、ポイントはどうでもいいらしい。
亜夜が財布から取り出したポイントカードを店員に渡し、そのまま会計を済ませる。
「こちら二点で五万四千七百円でございます」
「ええっ!?」
「六万からで」
「はい、六万円お預かりします」
値段を聞いて驚いている亜夜を無視して、湊はブランド物の財布からお札を取り出し店員に渡す。
相手もそれを慣れた手付きで数えると、直ぐにお釣りを返し、一気に大量のポイントが付加されたカードを渡してきた。
お釣りをいれた財布を仕舞ってから、湊は商品の入った袋と共にカードを受け取り、そのまま亜夜に返す。
ついでにレシートも渡して、今回でどれだけポイントが貯まったの

かもしっかり分かる様にしてやる辺りに、一部の人間だけが気付いている湊の優しさが垣間見えた。
（うわぁ、五百ポイント以上、一気にはいってる。こんなの部の備品を大量に仕入れるとき以外、見たことないよ）
ちらりと見えた湊の財布の札入れには、六万円を払ってもまだ大量の諭吉が並んでいた。
確かに、そんなに普段から持ち歩いているのなら、自分のような一般庶民に奢ってもらう必要などないだろう。
むしろ、自分の利用するような庶民の店には行った事がないに違いない。
驚きで先ほどの暗くなった雰囲気も吹き飛び、亜夜は湊の隣に並ぶと、そのまま店を出ていった。
＊＊＊
店を出た湊は、ポロニアンモール中央にある噴水近くのベンチに座っていた。
帰る前にもう少しだけ話をさせて欲しいと亜夜の方から頼み込み、湊がそれに応じたためである。
何も無い状態で会話するのもあれだからと、亜夜は湊の分も自販機のジュースを買って戻ってきた。
「はい。胡椒博士ＮＥＯって珍しい物飲むんだね。好きなの？」
「……比較的」
湊の素っ気ない態度にも慣れたのか、「そっか」と言って亜夜は笑いながら隣に座った。
赤いパッケージのコーラか、胡椒博士という炭酸系を好んで飲む湊とは対照的なチョイス、後光の紅茶の少し固いプルタブを開けて、亜夜は口を付けると細く白い喉をこくりこくりと小さく鳴らす。
その間、湊は相手を観察しているが、相手の視線はどこでもない先を見ており、何やら考えているように見える。
だが、缶から口を離して少しすると、ようやく話す気になったのか、微笑を浮かべた顔を向けて相手は口を開いた。
「あのね。今日、私がきみを叩いたのって、真田くんのことが原因なん

だ。先月に試合で負けてから、真田くんったらずっとハードなトレーニングを続けてるの。主将になったから、後輩とかにメニューを伝えたり、部室の片付けはちゃんとしてるんだけど、それ以外はずっと自分のトレーニングに打ち込んでて……」

ボクシング部の活動日は、ゆかりの弓道部とほぼ同じで、違いは日曜にも休日練習が行われることもあるくらいだ。

高等部になれば活動日はまた変わってくるのだろうが、湊に負けて以降、真田は休みの日も部室に来て自主トレに励んでいる。

試合が近いときならば、最後の追い込みとしてある程度許されるが、当分試合のない真田が今のようにトレーニングをしているのはおかしい。

顧問や引退した元主将から、少しは休めと言われたのだが、部室が使えなくともロードワークなどに出てしまうので、それならば部室という目の届く範囲に居た方がマシだということで、今の状況になっている。

「それで、身体を壊して欲しくないから、休まなきゃ駄目だよって伝えたんだけど。自分に構うなって言われて、ショックで部室を出ていったところで、タイミング悪くきみに会ったから、きみのせいでーって八つ当たりで叩いちゃったの。きみは真田くんに頼まれて試合して、相手より強かったから勝っただけなのに、本当に最低だよね、私」

「……気にしてない。真田先輩を負かしてから、陰で俺に嫌がらせをしようとしてきたやつがいた。それに比べれば、正面から罵倒されたり殴られた方がマシだ」

もっとも、湊への嫌がらせは計画されるに留まり、実行に移した者はいない。

理由は単純で、真田を一方的に叩きのめす実力を持った者からの報復が怖いこと、湊ファンクラブの女子らが目を光らせて怪しい動きをしている者をマークしていたこと、それらのおかげで湊だけでなくチドリや周辺の人間にすら被害は出ていなかった。

「あー、真田くん人気だからね。ファンの子の中には、どうしても相手を恨むっていう理不尽なことしちゃう人もいるんだよ」

「他人事みたいに言うんだな。後輩とか、仲間のためだからって人を殴るまでいった訳じゃないだろ？」
「あ、あはは、ばれちゃったか。えっと、その、うん。私、真田くんのことが好きなんだ。あっ、でも、言っちゃ駄目だよ？　秘密にしててね。誰にもばれてないんだから」
頬を染めて真剣に言ってくるが、そう思っているのは本人くらいなもので、男子らにはばれていないが、鋭い女子の中には勘づいている者もいる。
けれど、湊は交流のなかった人間の周辺情報など全く知らないので、素直に頷いて返し、亜夜から受け取ったジュースに口を付けた。
亜夜はその様子をジッと見て、唐突に声をかけてくる。
「……ねえ、お姉さん欲しくない？」
「……は？」
出会い頭の一撃はともかく、常識人に近い者だと思っていた相手の意味の分からない発言に、湊は胡散臭い者に対する目を向けて聞き返した。
だが、亜夜もめげずに同じ言葉を再びかけてきた。
「だから、お姉さん欲しくない？　真田くんより、きみの我儘さの方が弟に似てるんだよね。それに放っておけない雰囲気？　みたいなのがあるっていうか。叩いちゃったお詫びっていうのもあるし。私がきみのお姉さんになって、まわりの勝手な噂とか消すの手伝ってあげるよ」
「……」
説明されたところで、湊の中では、亜夜の評価は一気に佐久間並みに残念なパーソナリティーの持ち主だと更新された。
他者に死んだ弟を重ねるのは良い。弟のように思って接するのも構わない。
しかし、面と向かって姉が欲しくないかと尋ねるのは、どう考えてもまともな発想ではない。
今まで敬語で接していたことを悔やむほど、湊は残念な相手から解放されて帰りたい気持ちで心が満たされた。

「……晩御飯の時間なので帰ります。さようなら」
「弟くんって電車通学だっけ？　帰るなら駅まで送って行くよ。一緒にいこ」
満面の笑み。死んだ弟を重ねた相手に、姉として世話を焼くのが楽しいらしい。
姉にしたい女子ナンバーワンが自ら姉になることを宣言するなど、今後まずないと言えるため、他の男子が聞けば妬ましさから血の涙を流すだろう。
ただでさえ、学校での湊の周囲は美しい女性で溢れている。
部活メンバーの四人、佐久間、櫛名田、本人は相手にしていないが付き纏っている美鶴。それだけで十分嫉妬の炎で焼かれて殺されるレベルだが、さらに、中・高等部女子の中にファンクラブが既に存在し、その規模は一年早く結成された真田のファンクラブに追い付きそうな勢いだ。
そこに姉にしたい女子ナンバーワンが、姉として加わる。返り討ちに遭う事が分かっていても、暴動を起こす男子も現れるに違いない。
そんな事に欠片も気付いていない亜夜は、飲み終わったジュースの缶を湊の分も捨ててから隣に立ち、ずっと楽しげに笑って湊が歩き出すのを待っていた。
だが、湊が動きだす前に、二人を見ていたらしいある人物の声が聞こえてくる。
「え……有里君、そういう趣味だったの？　うっわぁ……今度、皆に教えてあげよ」
「別にいい。聞こえてたし、見えてたから」
声をした方に湊が視線を向ける。
そこには、ＣＤ屋から出てきたらしい弓道部の道具を持ったゆかりと、眞宵堂から出てきたばかりらしいチドリ・美紀・風花が、何やら微妙な表情で立っていた。
佐久間や櫛名田がいないことが救いだが、面倒なことには違いない。
不思議そうに四人を見ている亜夜と、湊が姉好きだと勘違いしたら

しい四人、どちらに対して先に説明するか考え、
（……どうでもいい）
考える事を放棄した湊は、敢えて誰とも口を聞かずに駅に向かって歩き出した。
「え？　弟くん、友達とお話しないの？」
「お前……」
余計なことを、そう言いたげに湊が低い声で漏らす。全てが疑惑の状態で有耶無耶にする作戦が、亜夜の一言で失敗したためだ。
亜夜が〝弟くん〟と呼んだ際、チドリの視線が鋭くなったが、他の三人は佐久間にむけるような可哀想な人を見る目で湊を見ている。
自分が佐久間と同レベルに思われるなど、屈辱以外の何物でもない。
その原因を作った女を忌々しそうに睨むと、すぐに作戦を変更し、家でどうせ顔を合わせることになるチドリの誤解をまず解くことにした。
「チドリ、この先輩は頭が残念な人なんだ。人を殴っておきながら、勝手に俺を弟と呼称してくるほどにな」
「……そう。私に言わせれば、そんな相手を姉にする方も同じレベルだと思うけどね」
汚物を見るような、冷めきった軽蔑の眼差しで言ってくるチドリが、自身の言葉を欠片も信じていないことが湊には分かった。
（チドリの説得は難しい。なら、ここは別の人間を攻めるか……）
「あ、真田さん。こんばんは」
「え、ええ。こんばんは、先輩」
湊が別の作戦を考えている間に、真田経由で知り合いだったらしい亜夜と美紀が挨拶をしていた。
二人が知り合いならば、ここからなら誤解を解くことが出来るのではないだろうか。
そう思い、二人の会話の様子を見つつ、湊は切り出すタイミングを計ることにした。
「今日はお友達と遊んでいたの？」

「はい。時任先輩は有里君と知り合いだったんですか？」
「ううん。今日初めて一緒に遊んだのよ。ちょっと八つ当たりしちゃって、そのお詫びをしたかったのだけど、彼って自由な感じでしょう？　だから、ついて行って何か出来ればーってね」
照れたように苦笑して、亜夜は「結局、まだ何も出来てないんだけど」と最後に付け加えた。
湊に言わせれば、付き纏うことを止めるのが最高のお返しなのだが、湊の周りに集まる人間は変なところでコントロールの利かない者が多かった。
この亜夜もその一人であり、当然ながら、現在進行形で湊の精神的な負担を増やしていることに気付いていない。
そんな相手に、他の者よりは自分の方が尋ねやすいだろうと思った美紀は、女子ら全員の抱いていた疑問を本人にぶつけた。
「あの、どうして有里君が弟なんですか？」
「弟くんはね、なんていうか、ちょっと死んだ弟に似ているの。だから、なんか構ってあげたいなって思って」
「湊を他人の代わりにしないで。死んだ人間に重ねるなんて、侮辱も良いところだわ」
亜夜の言葉にチドリが鋭く睨みながら返す。
今も生きている他人を、死者の代替えとして扱う。そんな事は、本人とその人物のまわりの者に失礼だと、チドリは真剣に怒っているのだ。
だが、それを聞いた亜夜は、少し儚げに笑って答えた。
「うん、そうだね。だけど、彼のご両親と私の弟が死んだ事故って同じ物なのよ。こういう偶然に、運命を感じちゃいけないかな？」
「っ……どういうこと？」
先ほどの湊を不審者扱いする視線は失せ、チドリは相手の言っていることが事実か湊に尋ねた。
他の者は、それを言葉のまま詳細を訊きたいのだろうと思ったようだが、付き合いの長い少年は瞳から意図を読み、相手の求めている答えを返す。

「六年前、この近くで起こった爆発事故。先輩の弟は建物の倒壊に巻き込まれ、俺の両親は爆発の余波で車が横転し炎上したことで死んだ。場所は離れているだろうが、原因を考えれば同じ事故と言っていい」
湊ら家族の乗った車の横転は、爆発の余波ではなく戦闘の衝撃が原因である。
もっとも、それを伝えたところで説明がややこしくなるだけだ。
よって、湊は多少内容をそれらしい理由にしつつ、両者の家族が死んだ事故は共通のものだという点を肯定した。
それで納得したのか、チドリは短く嘆息してから、普段のやる気のない半目に戻り、湊と亜夜の元に近付いて来る。
そして、亜夜の目の前に立つなり、よく通る声で真面目に言い放った。
「……その変な呼び方で湊を呼んでもいいけど。あなたのこと、これからブラコンって呼ぶから」
「ブラコン？　じゃあ、弟くんはシスコンになるの？」
「シスコンはもういるから駄目よ。周辺という狭いコミュニティー内でキャラクターの重複は認めないわ」
「そうなんだ。それって真田くんの事かな？」
亜夜の問いにチドリはしっかりと頷いて返した。途端、顔を赤くした美紀が、隣に立っていたチドリの腕を掴んで首を振っている。
けれど、チドリは相手の抗議を受け付ける気がないため、そのまま無視し続けた。
そんな一同の様子を見て、湊は自分が誤解を解く必要はもうないと感じ。そろそろ帰ってもいいかと歩き出そうとする。
しかし、今日の湊はとことん邪魔をされる運命にあるのか、足を出しかけたところでゆかりに肩を掴まれた。
誰に邪魔をされるかまでは考えていなかったが、誰かに邪魔をされることは半ば予想していた。
それだけに、湊の方もわずかに諦めモードに入って、普段以上にアンニュイは表情で、肩を掴んだ者へと向き直って口を開く。

「……なんだ？」
「きみ、弓道やってたの？」
「訳が分からない」
「矢筒、袋から少し出てるよ」
にやにやと口元を歪めて、ゆかりは湊の持っていたスポーツショップの袋を指差す。
自分のまわりに弓道をやっている者がいた事が、そんなにも嬉しいのだろうか。
ゆかりの表情を不思議に思いつつ、これ以上ここで足止めを食うのは御免だと、湊はゆっくりとした動作で他の者の視線を集めながら、特に何もない方向を指でさした。
『……？』
全員の視線が湊に釣られてそちらに向いた瞬間、湊は一陣の風になった。
荷物をマフラーに収納しながら全力で駆ける。薄暗く狭い路地に入り、壁を蹴って屋根の上まで跳び上がる。ペルソナをカグヤに付け替え、感知の精度を上げて、ポロニアンモールの買い物客の視線に注意し、そのまま店の屋根伝いに敷地から脱出するため去って行った。
「んー？　ねえ、有里君、何があったの……っていないしっ!?」
湊が何を指したのか訊こうとゆかりが振り返った頃には、時すでに遅し。
まるで初めから誰もいなかったかのように、忽然と湊の姿が、ここに居たという痕跡すら消えていた。
話しの途中で逃げられたゆかりは僅かに怒っていたが、他の者は湊がどこへ行ったかの方が気になったようで、不思議そうに首をかしげていたところ、携帯に「帰ります」とだけ書かれたメールが届いた事で、湊に続く様に他の者も解散という流れになった。

第五十四話　それぞれの備え

１１月２７日（日）
影時間――タルタロス・エントランス
湊が時任亜夜と出会い、彼女の湊に対する呼び名が〝弟くん〟であったため、学校では少しばかり騒ぎとなった。
二人は全く似ていないが、実は生き別れの姉弟なのか。それとも、彼女は湊の知り合いで、昔から実の弟のように可愛がっていたのか、などと様々な憶測がなされた。
もっとも、湊本人は周囲を拒絶する空気を纏っていたため、直接その理由を尋ねに来る者はいなかったが、弓道をやっているのか尋ねようとしたときに逃げられたゆかりが、腹いせのように「この、シスコン番長」と小さく呟き、佐久間に続いて二人目のアイアンクローの犠牲になったことも、新たなニュースとして話題になった。
しかし、二週間もすればそんな話題は風化して、すぐに別のニュースに皆寄って行くようになる。
そうして、元の平穏な学校生活が送れるようになった頃、湊は影時間のタルタロスに、ストレガの面々と会う約束をして集まっていた。
「ミナトー！」
エントランスに入ってきた湊を見て、首に湊とお揃いのチョーカーを付けたマリアが喜色満面の笑みで駆け出し抱き付きに行く。
身体はある程度大きくなっても、内面にまだ幼さが残るマリアは、今でも湊によく懐いていた。
何年もそんな少女の相手をしていれば、湊の方の対応も慣れたもので、首に腕を回して抱き付いてきた相手の腰辺りに腕を回し、抱いたままスタスタと他の者の前まで移動する。
「早いな。近くにいたのか？」
「約束の時刻に遅れれば、貴方に何を言われるか分かりませんからね。影時間になってすぐに入れるようにしていたのですよ」
本日も橙色のシャツの前を全開にしているタカヤが、楽しげに口元を歪めて答える。

もう冬だというのに寒くないのか聞きたくなるが、夏にマフラーを巻いている人間が他人の服装について尋ねるのもおかしいかと、開きかけた口を噤んで他の者に視線を向けた。
ここに集まっているのは、ストレガのメンバー全員だ。
脱走から二ヵ月後に再会した、タカヤ・ジン・カズキ・マリア・メノウ・スミレの計六人。
実際のところ、殺しの依頼などを受けているのは男子三人とサポートのメノウのみだが、マリアとスミレも影時間のシャドウとの戦闘は行っているため、仕事屋としてのストレガは男子とメノウのみ、ペルソナ使いのチームとしてのストレガは六人全員という形になっている。
成長した彼らは、マリア以外は現在も制御剤を使用しているが、ペルソナ使いとしては非常に優秀で、それぞれに得意分野が異なっているため、探知能力持ちのメノウを指揮官に多数のシャドウを屠ってきた。
相手が一体で広間のような地形で戦うことが出来るのなら、かなりギリギリではあるが、彼らだけで死神〝刈り取る者〟と戦うことも可能である。もっとも、倒すとなると話は変わり、いまのところ湊しか達成者はいない。
「ンで、俺らを呼ンでテメェは何をさせてェンだ？」
厚めの白い上着にだぼついたカーゴパンツという服装のカズキが、刃長六十センチほどの片刃の片手剣で自分の肩を叩きながら尋ねてくる。
湊は眞宵堂に来たマリアに口頭で伝え、タカヤには電話で用件を伝えていたのだが、二人ともそれを他の者に話していなかったようだ。
マリアには雑談のように会う約束の時間を教えたつもりなので、それを他の者に伝えていなくとも構わないが、タカヤには依頼という名目で声をかけていた。
だというのに、そういった情報が上手く回っていないのはどういうつもりだ、と抱き付いたままのマリアをあやしながら、湊はタカヤを睨んだ。

「……情報伝達の不備は違約金ものだぞ」
「どちらにせよ、ここで一度説明するつもりだったのでしょう？　ならば、私が話すよりも、貴方の口から直接聞いた方が理解しやすいと思ったのですよ」
「事前情報の有無で理解度は変わってくる。金を貰うのなら、しっかりと自分の責任は果たせ」
湊にそう言われても、タカヤはあまり反省するつもりがないのか、
「ええ、次回から気を付けます」
と、薄い笑みを浮かべたまま答えた。
普段の仕事の相手がこんな態度を取れば、即座に硬いブーツのつま先を腹部へ叩きこみ、相手を地べたに這い蹲らせているところだ。
だが、影時間の発生には制限がある。故に、これ以上は言っても無駄と思考を切り替え、マリアに少し離れるように言って、湊はマフラーから大きなアタッシュケースを取り出した。
取り出したアタッシュケースに皆の視線が注がれるも、湊はそれを気にせず、そのままジンに向かって放り投げる。
「ちょっ、おまっ!?」
自身も小さな鞄を持っていたジンは、湊の突然の行動に焦った。
投げて寄越されたアタッシュケースは、目視でおよそ幅四十センチ、高さ三十センチ、厚み十センチ程と予想する。
中に何が入っているのか分からないが、見るからに頑丈そうで、影時間への適性が通常のペルソナ使いの倍以上の湊が投げれば、それだけで立派な威力を持った投擲武器に変化する。
そんな物を受け損なえば大ダメージは必至だと、自分の持っていた鞄を泣く泣く地面に落とし、向かってきたアタッシュケースを両腕でしっかりと受け止めた。
「うごっ……くぅ、投げる前に何か言うてから投げろや！　ケースの角が腹におもっくそ喰い込んだやないか！」
「よかったな。それが五千万の痛みだぞ」
「……は？」
ぽかん、と口を開けてジンは暫し呆ける。

湊の言っている意味が咄嗟に理解できず、それはジン以外の者も同様であり、楽しげにくすくすと笑っているタカヤを除いた全員が、ジンの手にあるアタッシュケースに視線を注いでいた。
そして、しばらくしても腹部の痛みと湊の発言に固まっているジンに、事態を理解しようとしたメノウが声をかける。
「ジン、そのケース開けてみてよ」
「お？　お、おお、わかったわ」
声をかけられ再起動したジンは、ケースを床に置いて震える手で留め具を外してゆく。
先ほどの湊の発言が本当ならば、中には札束が収められているはずだ。
そう思いながら、ゆっくりと蓋を開けると、確かにケースの厚み半分ほどまで札束が敷き詰められ、動かないようベルトで固定されていた。
大金を目にしたジンは思わず「おおっ」と呟き、このケースいっぱいならば一億円なのかと呑気に考える。
しかし、他の者はジンよりも復帰が早いようで、マリアに再び纏わりつかれていた湊に質問をぶつけた、
「おい、ありゃ何の金だ？　さっきの話を聞いてりゃ依頼みてェだが、あンな報酬の依頼なンざ受けた事ねェぞ」
「ていうか、ミナト君こんな大金をどうやって……」
「自分で稼いだに決まってるだろ。一人殺すのに百万以上払うのが普通なんだ。報酬を俺とチドリで折半してるにしても、一年掛からずこれくらいは稼げる」
その言葉に、メノウやジンは再び衝撃を受けた。チドリは仮面舞踏会としての仕事をしていないが、湊が稼いだ報酬を折半しているなら、実際は年間一億以上を稼いでいることになる。
全てが報酬百万円という訳ではなく、また、人を殺す依頼ばかりではないだろうが、それでも年間にどれだけの人数を殺して金を得ているのだろうか、驚いた者たちは気になった。
「ミナト。お前、今年になってナンボほど殺しの依頼受けたんや？」

「今年になって……六十かそこらじゃないか？　まぁ、学校に通うようになって受ける数も減っているし。今年は仕事を始めた頃並みに少ないくらいだが」
　なんて事はないように話す湊の言葉に、マリアは不思議そうに首をかしげ、タカヤとカズキは相手の秘められた異常性を楽しむように哂っている。
　この人間はそれが仕事ならば機械のように淡々と人を殺せる。冷静で、冷酷で、冷徹な、人の姿をした真性の化け物であると。
　湊の本来の性格を知る者が聞けば、それを否定するだろう。何せ、彼は殺す相手をしっかりと選んでいるのだから。
　そして、そこまで割り切ることの出来る人間ならば、死を理解し得られる魔眼など獲得しているはずがない。
　死を理解出来るということは、命がどのような物であるか、誰よりも深く理解せねばならないのだ。
「さて、依頼の内容だが、俺が海外に行ってる間、タルタロスでシャドウ狩りをして欲しいというものだ。とくに討伐数は決めないが、二週間に百体はこなして欲しい」
「えっとぉ、二週間に百体だから……ノルマは二千六百体以上ってことかなぁ？」
「それぐらい簡単だろ？　満月付近ならフロアを変えつつ戦えば、一日で百体だって殺せるんだから」
　この中で最年少ながら、スミレは一年の週換算を容易くこなして、ハの字になっている眉根をさらに寄せて考えている。
　二千六百という数で聞けば膨大に思えるが、湊は年間で倍以上のシャドウを殺しているのだ。
　学校、裏の仕事、シャドウ狩りとハードなスケジュールをこなしながらでも、一人でそれだけ倒せているのだから、ストレガのメンバーなら自分同様、ノルマの倍以上を倒せるだろうと踏んでいた。
「まぁ、俺も影時間中だけ戻ったりも出来るが、面倒だからな。報酬分は働いて貰うぞ」
「ミナト、どこの国に行くの？　マリアも一緒に行きたい」

「初めは中東のラナフ辺りに行く。地域紛争やら、過激派組織が派遣された大国の軍相手に活動しているから、治安も悪いし丁度良いんだ。だが、マリアをそういうところには連れて行きたくない。マリアはそんな場所じゃなく、こっちに居て俺の依頼した仕事を頑張ってくれ」

幼い子どもに言い聞かせるよう、静かな口調で伝え、湊は抱き付いてきたマリアの頭を優しくポンポンと叩いた。

頭に手を置かれたマリアは、気持ち良さそうに目を細めている。

マリアは精神的に幼いままだが、頭は非常に良い。

よって、湊について行きたい気持ちもあるが、湊のために頼まれたことを完遂した方が良いと理解して、嬉しそうに笑顔を見せるとしっかりと頷いた。

マリアが依頼を受けると決めたからには、元々仕事をしていた年長組の四人と、カズキと同様に戦闘狂タイプのスミレが反対するはずがないので、話しは簡単にまとまった。

話しが決まったその後は、久しぶりに集まったということで、カズキを筆頭に誰がシャドウを最も多く狩れるかという勝負を行い。

湊は新しい武器に慣れようと短弓を使った事で、カズキとマリアに次いで三位という結果で、その日のシャドウ狩りを終えたのだった。

１１月２８日（月）

放課後――巌戸台

最近になって、桐条で美鶴を中心としたペルソナ使いの組織編成が考えられていると、英恵経由で湊は情報を入手していた。

そんな物を考えているということは、美鶴以外のペルソナ使いを既に見つけているか、または目覚める可能性がある者がいると言う事だろう。

最近は回数が減ったが、以前あれほど美鶴が湊に対談を求めていたことから、桐条側に湊の適性の高さは既に知られており。同じようにチドリの適性の高さについてもばれているはず。

候補として最上位に位置する二人以外に、まだ他にも桐条側だけが

知っているペルソナ使いの候補者がいるのかは知らないが、相手の拠点となるであろう元ホテルらしい建物の近くに湊は来ていた。
（四階建てに加えて、屋上へも出られるのか。離れは男女に分かれた大浴場みたいだな。そして、ロビーの地下にも空間があるが、これは完全に物置きのようだし。特に何か手を加えていることもなさそうだ）
道路を挟んだほぼ向かいにある喫茶店の中から、青い工事用の防護シートに覆われた建物の内部をペルソナの力で探ってゆく。
家具の搬入は改装後にするつもりなのか、中には殆ど物がない状態だが、それでも色々と面白いことを知ることが出来た。
風呂のある離れは単にタイルの張り直しなど、ただのリフォームだけをしているようだが、本館の方には窓や扉に細工がなされ、それらはどうやら水智恵の部屋の窓に似た機能を持っているらしい。
つまり、一見普通の窓や扉に見えるが、実際は殴っても割れない様な強化ガラスであり、また機械などで遠隔ロックが可能ということだ。
きっと、シャドウを相手にするため、もしも戦えないときに敵が来た場合には、ホテルに立て籠って安全を確保出来るようにするものなのだろう。
一つ一つ施錠してロックせずとも、機械ならば〝全てをロックする〟とボタン一つで操作できる。
ほぼ唯一と言っていいシャドウへ対抗できる者たちが住む場所なのだ。ならば、これくらいの補助機能は当然と言えた。
（まぁそれも、普通のシャドウが相手だったらの話だが。俺を含めた上位種のシャドウなら、思考制御で機械を動かす事は出来る。それもコンピュータのシステムを介さずに）
そう、桐条側は知らないのだ。シャドウの中には機械類と融合したり、遠隔で動かして操る事も出来る個体が存在する事を。
彼らに出来るのは機械を直接操作することで、ハッキングなどデータ系をいじる事は出来ない。
しかし、鍵も使わずにエンジンをかけて車を動かすことや、スイッ

チを切り替えずに電灯を付ける事も出来るため、応用性は非常に高い。
胸に納められたエールクロイツにより、そんなシャドウと同じことが出来る湊が相手ならば、桐条がやらせているコンピュータ制御はむしろコントロールを奪われる危険を高めていると言えた。
(無知はそれ自体が罪って言うのは本当だな。娘のためにとした事が、お前の娘や娘の仲間になってくれる者を危険に晒すんだ)
コーヒーを飲み終えた湊は、肩にかかる髪を揺らしながら立ち上がり、バイトらしきレジの女性店員が頬を赤らめながら見てきていることも無視して、無表情のまま会計を済ませると店を出た。
切り札を守るにしては思ったよりも大したことのない設備である。それが湊の下した評価だ。
ほぼ同時期に改築中のホテル周辺の土地も買われているため、ペルソナ使いを集めると同時に、別の計画も考えられていそうではあるが、どちらにせよ湊を相手に出来る戦力を桐条側は有していない。
適性の高さは、影時間に付与される力の量にも影響するため、日常の時間内で同じ重さの物を持ち上げられたとしても、影時間には適性の高い者の方が重い物を持てるのだ。
シャドウが怯えて出て来なくなるため、高過ぎる適性をわざと抑えている湊には、三枚の黄昏の羽根の結合したペタル・デュ・クールを内蔵して力の上がっているチドリですら届いておらず。
その抑えた適性の数値を目にして驚いていた桐条では、日常の時間内に総戦力を投入でもしない限り、絶対に勝つことは出来ないだろう。
これならば、わざわざ調べるまでもなかったと、湊がその場を去ろうとしたとき、向かいの道路に一台の黒塗りの高級車が止まった。
(……あれは)
運転席と助手席からスーツに身を包んだ屈強そうな男が出てきて、後部座席のドアを開くと精悍な顔つきをした隻眼の男が姿を現した。
湊はその男を知っている。エルゴ研で目覚めてから今日(こんにち)まで一日だって忘れたことはない。

世界のためという正義を掲げ、身寄りのない子どもたちを生け贄にした男。
研究所には顔を出さず、自分の下した決断による結果を書面で知って、罪深い悪魔の所業だと理解した気になっている湊の最も許せないタイプの臆病な犯罪者だ。
事が全て終わるまで手を出す気はなかった。だが、実際に目にしてしまうと感情が昂り、理性で自分を抑える事が出来ない。
「きり、じょう……武治っ」
怒りによって瞳の色が蒼へと変わる。桐条の乗っていた車にも、桐条自身にも存在の綻びたる光の線が視えている。
あとは、ただその光の線をなぞれば良い。それだけで相手を殺す事が出来るのだ。
相手はＳＰに守られながら、防護シートの中から現れた作業着の男に案内され中へと消えていこうとしている。
ここで逃がしてなるものか。
色が変わるほど拳を握りしめていた湊が、相手へ迫るため車道へと飛び出そうと、ガードレールを越えかけたそのとき、
「あれ、弟くん。こんなところで偶然だね」
不意に横からかけられた声によって、湊はハッとして正気を取り戻した。
声をかけてきたのは、少し前に知り合いになったばかりの月光館学園中等部三年生の時任亜夜。
相手はブラウンの落ち着いた色合いのセーターに、下は膝が隠れる丈のスカートとブーツいう私服姿で、手には食材の入ったスーパーの袋を持っていることから、家に一度帰ってから夕食の食材を買いに出た帰りらしい。
そんな事を、相手のことを見ながら推測した湊が視線を合わせると、何やら相手は驚いた様子を見せている。
何かあったのだろうか。湊がそう考えていると、驚きから今度は心配するような表情に変わった亜夜が駆け寄って、湊の頬に手を添えて話しかけてきた。

「その目、どうしたの？　いつもと色が変わっちゃってるよ。ちゃんと見えてる？　病院連れて行こうか？」
そこで湊は、自分がまだ魔眼の状態であることに気付いた。
機能自体は伝えていないが、日常側で眼の変化について知っているのは佐久間だけであり、部活メンバーやその知り合いにも知られてはいなかった。
怒りでまわりが見えていなかったことが原因だが、姉を自称してくるような、やや過保護な相手に知られたことは失態としか言いようがない。
感情のコントロールは以前よりも上手くなった気になっていたが、自分もまだまだ未熟だと内心で吐き捨て、湊は頬に添えられていた相手の手を掴んで離させると静かに答えた。
「問題ない。色素の関係で、血の巡りがよくなると色が変わったりするんだ。すぐに元に戻るから、放っておいてくれ」
「本当に？　無理しちゃ駄目だよ？」
どうしてこんなにも自分を心配するのだろうか。湊は相手の考えや感情の動きが理解出来ず、ただ黙ってジッと相手の顔を見つめる。
仕事関係の知り合いならばともかく、どうにも日常側において親身になってくれようとする者とは相性が悪い。
チドリならば、相手が誰であっても普段通りの自分で接するため、どんな相手にも対応できる。
だが、その点、湊は〝素の自分〟・〝小狼〟・〝仕事の相手によって演じる仮想人格〟といくつもの仮面を持っているため、このように得手不得手が存在してしまっていた。
これでは、どちらが不器用なのか分からないと大人たちは笑って話していたが、そんな事を考えている暇はない。いまは直ぐにでもこの場を離れるのが先だ。
桐条は既に青い防護シートの中に消えたが、桐条側に万が一にでも湊を知っている者がいて、桐条側のペルソナ使いの拠点を既に把握していると知られては拙い。
そうして、直ぐにここを離れることに決めた湊は、瞳の色を普段の

黄金色に戻し、心配そうに自身を見つめていた相手の手を取ってその場を離れた。

＊＊＊

湊が亜夜の手を取って去って行った頃、桐条武治は作業着の男に案内されながら、自身の娘を中心に組織するペルソナ使いらの拠点の視察を行っていた。

元のホテル自体が古い建物だっただけに、耐震強度などを高める補強工事に加え、壁紙やカーペットの張り替え作業も行っている。

また、元はスイートルームだった作戦室となる四階の大部屋には、影時間にも稼働できるレーダーや通信機械を随時搬入する予定でいる。これで桐条グループのサーバーへ直通のラインを確保すれば、グループによるバックアップもしやすくなるだろう。

「えー、本来のホテルの個室の壁をいくらか取り払いまして。各部屋の広さを十分に確保できるよう手配しておきました。その分、入居者数は少なくなりますが、その場合には一時的に相部屋になって頂き、第二分寮をこの近辺に設立するという手筈になっております」

「うむ。どれだけの入居者が現れるか分からないが、入居者の安全を第一に考えるのだ。浴室や各フロアのリラクゼーションスペースなど、ストレスから解放される場は特に機能面や景観を注意するようにな」

「はい、畏まりました」

桐条の言葉に深く頷き、作業着の男は一礼すると現場の指揮に戻っていった。

ペルソナは精神状態が召喚に強く影響するため、桐条はここに入居する者らには、せめて日常生活にストレスを感じずに過ごして貰いたいと思っている。

そのためならば、本家にいる執事やメイドを健康管理のために派遣してもいい。

むしろ、娘のことを考えるのなら、本家で身の回りの世話を任せている斉川（さいかわ）菊乃（きくの）をこちらに移ってからも置いてやった方が良いかもしれない。

歳も同じで、主従を考えればあまり褒められた事ではないが、お互いに幼馴染として気の置けない付き合いをしているのだ。
娘と菊乃本人に確認して、両者が望むのであれば、すぐにでもそのように手配しようと考えながら桐条はＳＰを引き連れ階段を上ってゆく。
そして、そこで作業員らと話しをしていた、黒のタートルネックの上に白衣をきた男に声をかけた。
「久しいな幾月。改装の進行状況はどうだ？」
「これはご当主、ご無沙汰しています。改装工事は順調ですよ。私の部屋までご用意して頂けるようになっていましたが、流石に自宅があるため、資料置き場に作戦室の隣に書斎を一つ用意して貰うだけにしました。それ以外は特に変更点もなく進んでおります」
作業員と話をしていた幾月は笑顔を浮かべ、やってきた桐条に挨拶をして言葉を交わす。
エルゴ研が湊によって壊滅させられた後、生き残り最古参でラボの主任を務めている幾月は、新たに発足されるペルソナ使いの監督役に任命される事が決定していた。
故に、この拠点の改装工事の時点から関わり、ペルソナ使いによりよい環境を提供する事にも協力している。
既にこちらで暮らすことが確定している美鶴の入寮自体は、改装後である来年の新学期からとなるが、学校関係者でもない者が母体グループの令嬢の暮らす寮に出入りしていては世間体も悪い。
よって、幾月も月光館学園における役職を用意することになっているが、彼が教員免許を持っていない以上、ある程度の自由が利くよう配慮しながら理事側の役職を用意しようと桐条は考えていた。
「お前の役職を用意するという件だが、実は理事会の方に用意しようと思っている。経営自体はこちらで行うが、役職としては最も高い理事長でどうだ。定例会議に顔を出す必要も出てくるが、最低限の知識さえ持って受け答えしていれば、後は秘書役の者に任せればよい」
「理事長、ですか。確かにタルタロスは高等部の校舎ですし、同じ校舎に部屋のあるそちらの方が手もまわし易いでしょう。わかりました。

謹んでお受けいたします」
慎重に桐条から聞かされたことを反芻し、幾月は受ける事を決めてしっかりと頷き握手を交わす。
理事長に就任すれば、ラボに居られる時間が減るため、シャドウに関する研究は他の者に任せることになるだろう。
だが、幾月はそれでも構わないと思っていた。何せ今の段階で、自分たちに研究できることなどほぼ出尽くしているのだから。
湊の齎した情報は偉大だった。五年経ってもラボの研究は湊の話した事を研究し直している程度で、ほとんど進んでいないと言っていい。
岳羽詠一朗の遺言と飛騨データという、別口からデス復活の方法に幾月個人は辿り着いているが、散らばったデスの欠片たちが目覚めるまでは、玖美奈と理の調整以外に何もすることがない。
ならば、自分の手駒となる者らに近い場所に居た方が、相手の信頼を得ることが出来て、より簡単にデス復活へ駒を進めて行けるはずだ。
そうして、役職がほぼ決定したことで、幾月は新たにプランを詰めてゆく事に決めると、その後は桐条と共に話し合いながら、ペルソナ使いらの拠点の改装を進めていった。
＊＊＊
「ちょ、ちょっと、弟くん？　弟くんってば」
急に手を掴まれ今も引っ張られ続けている亜夜は、少しばかり呼吸を乱しながら湊に声をかける。
何故、いきなり手を繋いで来たのか不明で、さらにどこへ向かっているのかも分からない。
あの場に留まっている事が湊にとって都合が悪かったのかと予想してみたが、どうして都合が悪かったのかという点が分からないため、結局、答えは出ず仕舞いだった。
そして、そろそろ荷物を持ったまま湊の少し早いペースで歩くことが辛くなってきたため、亜夜は足と手に力を入れる準備をすると、その場に踏ん張って湊の腕を逆に引っ張り返した。

「……どうした？」
ようやく止まった湊は、不思議そうに亜夜を見て尋ねてくる。
だが、どうしたと聞きたいのは自分の方だ。そう思いながら、亜夜は相手を叱るような目付きで睨み、口を開いた。
「それはこっちの台詞。急にどうしたの？　弟くんが勝手に歩き続けるから、私の家から離れちゃったし。夕食の準備が遅くなる分のお詫びとして、どうしてこんな事をしたのか説明して貰えると思うんだけど」
夕食が多少遅くなるのは問題ない。少し散歩がてら遠回りして帰ってきたと説明すれば済むことだ。
しかし、今日の湊は出会った時点でどこか様子がおかしかった。
瞳の色は、幼い頃に受けた治療の副作用で今の色になったと、美紀を通じて知っているので特に何かを言うつもりはなかった。
だが、それでも、血の巡りで金色が蒼に変化するのは、流石にあり得ないと断言できる。
相手は自分が弟を失った事故で両親を亡くしたらしい。
故に、瞳の色に関しても、治療以上に複雑な事情を抱えているのなら、傷口に触れるような真似はすまいと思うところだが、話せる範囲で自分にも話して欲しい。
そんな意思を瞳に宿してジッと見つめ、亜夜が湊の手を掴んだままでいると、湊は少し考える素振りを見せてから答えた。
「……家まで送って行く。連れ回して悪かった」
「いま、家まで送るなら、もれなく時任家の夕食に強制参加なんだけど、それでも良いかな？　私は別にどっちでも良いよ。弟くんとご飯食べるのも楽しそうだし」
どこで知ったのか不明だが、時任家の方角へと歩き出そうとする湊に、亜夜は目だけ笑っていない笑顔を見せて涼やかに告げる。
話題逸らしや、会話の強制終了が都合の悪い状況での相手の常套手段だと、短い付き合いながら既に経験で知っていた。
そして、その場合はしつこく聞いても効果はなく。むしろ、会話を切った方がデメリットが発生すると退路を塞いだ方が良い。

精神的にまだ幼い美術工芸部のメンバーらは、そのことに気付いていないようだが、お姉さんにしたい女子ランキング一位は伊達ではない。
周囲によく気を配って世話を焼くということは、相手をよく観察しているからこそ出来る芸当だ。
亜夜がそうして湊の前にしっかりと立って視線を合わせ続けると、湊は亜夜の思惑通り、僅かに面倒そうな顔をしてから短く嘆息した。
「はぁ……しつこい女はもてないぞ。ま、あんな脳筋を好いてる時点で男の趣味は酷いもんだが」
「あ、ひっどーい！　脳筋は合ってるけど、顔とか一生懸命な姿とか、真田くんには良いところが沢山あるんだよ？」
「どうでもいい。あれに興味を持った事は一度もない」
湊はそう言って亜夜の荷物を奪って歩き出す。先ほどまでは亜夜が会話のペースを握っていたが、既に湊はそれを取り返していた。
確かに亜夜の話術は相手に合わせて効果的に機能する。
だが、仕事で交渉や脅しをすることもある湊が、ただの中学生相手に完全にペースを持っていかれる事などあり得ないのだ。
結局、湊は家に着くまで亜夜には何も自分の事を話さず。夕食も既に家で用意してあるからと断って帰って行った。
途中までは自分が勝っていたのに、真田を話題に出して自分のペースを乱すなど、とてもずるくて酷い弟だと夕食を食べ終えた亜夜は憤慨した。
そして、その愚痴に電話で一時間以上付き合わされた美紀は、若干疲労を感じながらも、部活のない放課後に会って一緒に帰る程度に、湊も亜夜の事を認めているのだなと一人思ったという。

第二章　―Ｍｅｍｅｎｔｏ　Ｍｏｒｉ―

第五十五話　出立

影時間――真田私室

「なん、だ……これは？」

世界が緑色に塗り潰された非日常で、偶然にも目を覚ました真田。

枕元に置かれた目覚まし時計は、深夜零時丁度で止まっている。つい最近に電池を交換したばかりだというのに、長針どころか秒針も全く動いていない。

三月の終わりと言えど、まだ夜は冬の寒さを感じるはずだが、どこか生ぬるい空気にじんわりと嫌な汗を掻き、真田は必死に状況を理解しようとベッドから起き出し、窓の外を見た。

「っ、あれは学校の方角か？」

窓の外、自身の通う月光館学園のある方角に、途轍もなく巨大な異形の塔がそびえ立っていた。

昨日まではあんな物はなく。寝る前に眺めた夜景だって、今のように周囲を見渡す事の出来る明るさでなかったことは確認している。

しかし、いま外を見ると、妙に大きな月が街を照らし、薄暗くはあるが灯りを必要としないだけの明るさを保っていた。

「……クソッ、トレーニングのし過ぎか？　こんな光景あり得る筈がない。悪い夢でも見ているんだ」

明るさはあるというのに、不思議と街には人どころか生き物の気配が感じられなかった。

そうして、これは激しいトレーニングのせいで、変な夢を見てしまっているのだと決めつけ、真田はベッドに戻ると再び寝なおしたのだった。

２００６年３月１９日（日）

朝――国際空港ロビー

湊が海外へと出発する日の朝。空港のロビーには部活メンバー・佐

久間・桜・渡瀬が見送りでやってきていた。
部活メンバーや佐久間が来ないのなら、五代やロゼッタも湊とイリスが海外へ向かうため挨拶しようと思っていたが、流石に裏の仕事をしている人間が一般人と顔を合わせるのはあまりよくないだろうと、今回は事前の挨拶のみで見送りにはこなかった。
また、ベルベットルームの住人は、マーガレットが依頼としてアンティークなタロットカードや懐中時計、ミュージックボックスなどを海外で見つけて持ってくるように言ってきており。エリザベスとテオドアは何か面白い物があればお土産に欲しい程度に留めている。
そうして、見送りにきたメンバー以外からも様々な言葉を受け取り、偽造パスポートによる搭乗手続きを終えた二人が、チドリらの前に戻ってきた。
「てか、五ヶ国語以上話せるのに海外留学ってあんまり意味ないって先生思うなー」
戻ってきた湊に向かって、やや拗ねたように佐久間が声をかける。どうやら湊と一年間会えないことが不満らしい。
だが、英語だけでなく、中国語・フランス語・ロシア語・ヒンディー語・ドイツ語・アラビア語など、世界で使われている主要言語をいくつも習って、筆記は不完全だが日常会話程度なら出来るようになっている相手が、わざわざ海外で何を学んでくるのだろうかと疑問を持っても不思議ではない。
湊が海外にゆく本当の理由を知っている桜は複雑そうな顔をしているが、チドリ以外の何も知らない部活メンバーは、佐久間の態度に苦笑しながら似たような事を思っていた。
それに対し、普段通りアンニュイな表情で佐久間を見ていた湊は、心底面倒そうにしながら口を開いた。
「……逆だ。海外に行くために色んな言葉を覚えたんだ。キャラバン隊と一緒に色んな場所を回る以上、はぐれたときに頼れるのは自分の能力だけだからな。主要言語は覚えておいて損はない」
キャラバン隊と一緒に回るというのは、湊が学校に伝えた海外留学の内容だ。

一つの国にいるのではなく、イリスが所属しているキャラバン隊と共に、慈善活動をして世界を回る。
もっとも、そんな物はまったくの嘘で、別の国に行くにも複数用意した偽造パスポートを利用してゆくのだが、これを教師経由で聞いた美鶴は、湊を仲間に誘えなくなるために残念に思いながらも、湊は貧困で苦しむ世界の人々を憂うことの出来る心優しい少年なのだと感動したりしていた。
「お土産欲しいなー。バイトしてるしお金いっぱい持ってるよね？外国にしか売ってないブランド物とかを所望するのです。靴とかお財布とかバッグとか……ね？」
「……他のやつらは？　時間があれば見つけて買っておく」
非常に珍しいことに湊は佐久間の要望を断らなかった。これには朝早くで眠そうにしていたチドリも驚きで目を大きく開いている。
そして、本当に良いのかと確かめるように、ゆかりが湊に尋ねた。
「え、本当に先生にブランド物買ってあげるの？　先生って一応私らより一回り大人で、しっかり働いてるんだよ？」
「ちょとー、岳羽さんも最近言葉がキツイよー？」
「毎年、正月のお年玉で保護者と従業員たちから、総額で二百万以上貰ってる。別に土産としてブランド物を一つずつ買ってくるくらいなら問題ない」
「そ、そうなんだ」
湊の発言の真偽を問うようにチドリの方へ向くと、チドリはしっかりと頷いて返した。
これには、母親の実家が金持ちで、自身も富裕層であるはずのゆかりも口元を引き攣らせている。
だが、話しを聞いていた美紀や風花は、いくら湊が金を持っていたとしても、流石に友人にそこまで高額な物をお土産として頼む事は出来ないと遠慮していた。
そうして、ちょっとした小物や、珍しい御香などそういった物で良いとリクエストを聞き終えると、湊は時間を確認して搭乗口へとそろそろ向かおうと思った。

「……それじゃあ、そろそろ時間だから行ってくる。死んだ知らせがない限りは生きてるだろうから、便りがなくても気にしなくていい」
「馬鹿、出発前に見送りの人間が不安に思うようなこと言うな」
海外の危険な場所へとわざわざ行くことが分かっているため、桜たちは心配しているというのに、湊が少々不謹慎なことを言ったためイリスが頭を軽く叩く。
湊が叱られて大人に頭を叩かれている場面など、一度として見たことがなかった部活メンバーは驚いているが、出発時間が迫っているため、イリスは桜へ安心させる言葉をかけた。
「まぁ、アタシもしっかり注意して見張っておくし。こいつが連絡してなくても桜には定期的に連絡入れるから大丈夫だ」
「はい。みーくんのことよろしくお願いしますね。イリスさんもお気を付けて」
深々と頭を下げる桜に笑って返すと、旅立つ二人は手荷物を持ってゲートへと向かって歩き出す。
どこか拗ねたようなチドリ、湊と会えなくなることを寂しそうにしている佐久間、手を振っている部活メンバーらに見送られ、湊はイリスと共に飛行機に乗って日本を立ったのだった。
午後――ラナフ・コベ国際空港
飛行機に乗ること数時間。湊とイリスは中東の小国ラナフのコベという都市の空港に到着していた。
まだ預けた荷物を受け取る前だと言うのに、日本と違い空港内には武装した軍人らがうろついている。
それだけで、ここが日本とどれだけ違った治安の国なのか理解させられ、冷めきった普段通りの表情で周囲を眺めていた湊にイリスが声をかけた。
「もう日本とは別世界だからな、変な行動はとるなよ。この国の軍じゃ、威嚇射撃で腹を撃ち抜いてきたりする。空港はスリが多くて面倒だが、そういうときは相手を一撃で無力化して地面に転がして、周囲の軍人を大きな声で呼んだ方が早く済むから、関節を決めて捕縛なんてするなよ」

威嚇で、何故、致命傷を狙いにくるのか分からない。そう言いたげに湊はイリスを見るが、イリスは「そういう国なんだ」としか答えなかった。
日本の警官がそんな事をすれば、すぐに本人に処分が下るだろう。それを考えれば、本当に文化の異なる土地に来たのだなと実感が湧いてきた。
楽しい旅行などとは思っていないが、未知のことに触れるというのは、学者型である湊には実に好奇心をくすぐられる望むべき事である。
小豆色のパスポートを取り出し、湊はペルソナの探知を使って周囲にどんな物があるのか探りながら、イリスと共に入国手続きの列に並び自分の順番が来るのを待った。
そうして、イリスが無事に通過して湊の番が来ると、入管チェックをしている小太りの女性が英語で話しかけてきた。
「こんにちは、黎紅龍（リー・ホンロン）さんですね。今回はご旅行ですか？」
「ええ、こっちで仕事をしている知り合いがいるので、その人に会いに来たついでに」
「そうですか。審査は問題ありません。それでは、良い旅を」
好青年の爽やかな仮面を被って受け答えした湊に、女性は言いながら旅券とパスポートを返してきた。
日本で五代の知り合いに作らせた偽造パスポートだったが、本当に使える物なのだなと密かに感心しながらイリスに合流する。
今回は中国のパスポートを利用したが、他にも四つほど別の国のパスポートをそれぞれ違う名義で作ってもらい持って来ている。
全て武器などと同じようにマフラーに入れているため、見つかる心配はまずなく、イリスも今回の旅はパスポートや武器を入手し直す必要がなくて楽だと喜んでいた。
湊のようなイレギュラーを除けば、預ける荷物であっても一般客で武器を飛行機に持ちこむ事はできない。
そのため、イリスは過去の渡航時には、ほぼ全てを現地についてから入手しなおし、その度に数十万の出費に悩んでいたらしい。

「さて、荷物を受け取ったらロビーでアタシの知り合いと落ち合うことになってる。仕事中と普段で性格が変わるが、基本的に信用出来る相手だ。ただし、民間軍事会社のボスだからね。部下たちが一緒にいるだろうから、色々と気を付けた方が良いぞ」

二人は初めの二ヶ月の間、湊を海外での仕事に慣れさせるため、イリスの知り合いの元で世話になりつつ仕事や環境に馴染めるようにしてゆく。

それが終われば、順次、別の地域に移って本格的に流れの仕事屋として活動を始める予定だ。

「……どんなやつだ？」

「プライベートじゃなきゃ、鬼軍曹ってのが一番しっくりくる言葉だな。アタシがこの世界に入るときに世話になった相手でさ。厳しさの中に優しさがあって、色んな人間に慕われてるよ」

笑いながらそう話すイリスの顔が、どこか楽しそうだと湊の眼には映った。

イリスの恩人で鬼軍曹というからには、厳つい老兵か、ゴリラのような筋肉の鎧を服で覆った大男だろう。

預けてきたボストンバッグがベルトコンベアで流れてきたのを受け取り、湊は相手が一体どんな人間だろうかと想像を巡らしながら、ロビーへと続くゲートをイリスと共に出た。

「やっと出てきたか。遅かったわね。随分と待ったわよ」

出て直ぐに声をかけられ、湊はそちらに視線を向ける。

すると、そこには禁煙の表示を無視して煙草を吸っていた、ワインレッドのレディースーツを着た白人の女性が腕組みをして呆れ顔で立っていた。

年の頃は四十代半ば、グレーの瞳にウェーブの掛かった腰まで伸びた金髪から推測するに、相手は明らかに中東の生まれではない。

後ろに屈強そうな軍服を着た大男を二人侍らせた、そんな得体の知れない相手へ、イリスが苦笑しながら言葉を返す。

「悪い、悪い。入管で詰まってるヤツがいて順番が中々こなかったんだ」

「そんなトロい豚は、蹴り飛ばして後回しにすれば良いでしょう。時間は有限なの。こっちも暇じゃないのだから、着陸した時点で連絡を入れるなりして頂戴」
「はいはい。ほら、小狼。彼女がさっき話してた相手だよ」
ジッと黙って相手を観察していた湊の背後に回り、イリスは両肩に手を置いて湊を女性の前に押し出す。
押されたときに肩甲骨辺りまで伸びてきた髪が揺れ、その揺れた髪に相手の視線が向いたのを湊は見逃さなかった。
案の定、挨拶よりも前に、女性はやや不可解そうな顔で、イリスに対して口を開く。
「……この子は、男で良いのかしら？　体格的には男みたいだけど」
「ああ、正真正銘コイツは男だよ。美人なせいで分かりづらい顔だろ？　小さい頃はもっと髪が長くて女っぽかったから、これでもマシになったくらいだ」
「難儀なものね。というか、こだわりがないなら髪くらい切りなさい。ただでさえ、日本人（イポンスキー）は年齢が分かりづらいのだから、性別まで判断がつかないと面倒だわ。髪なんて長くても動き辛いだけでしょうに」
女性はそういうと、後ろに控えていた男に携帯灰皿を出させて煙草の火を消した。
自己紹介の前に、こんなにも初対面の相手に駄目出しをされると思っていなかった湊はしばし考える。
湊は自分の見た目に無頓着だ。髪を伸ばしているのは、単に切るのが面倒なのと、切らなくても問題ないためであり、これと言ってこだわりがあるわけではない。
ただし、英恵から受け取った短弓の弦に使われている髪の毛が、自分の髪質に似ていたので、予備の弦を用意するという理由が最近になって生まれたが、湊にとっては些末事であるため、チドリや桜などごく近い人物にしかそれは話していない。
そして、性別の分かりづらい顔に関して言えば、百鬼と九頭龍という容姿の優れた一族の血が濃く出た結果、誰が見ても美人という評価を受ける顔で生まれただけだ。

今の湊は、二次性徴を迎えて身長も一六〇センチを超え、身体も絞り込まれてがっしりとしている。
けれど、歳不相応な陰の差した顔は、成長した事でさらに美しさに磨きが掛かり、恰好良いよりも、〝美人〟や〝綺麗〟という表現がしっくりくる。
男女どちらか分かりづらい中性的な顔立ちにより、性別はどっちだと言われる事は両親が生きているときからあったので、慣れていることもあって大して気にはしていない。
だが、挨拶もせずにというのは、いささか失礼ではないか。
そう思った湊は、礼儀の欠けた人間には同じレベルで接して、己の行いを自覚させようと決めた。
「……イリス、このおばさんは？」
「お、おい、オマエっ」
女性をおばさんと言った瞬間、イリスと女性の後ろに控えていた男たちが焦った顔をした。
これ以上、そんな口を聞いてはいけないと湊を止めようとしたが、それは女性が鋭い視線を三者に送ったことで止められる。
視線で射抜かれた者らが動けずにいると、女性は冷笑を浮かべ、湊に向かって口を開いた。
「あらあら、初対面の女性を〝おばさん〟呼ばわりとは、随分と躾けがなっていないのね。ボウヤ、良い事を教えてあげるわ。例え相手が小汚い物乞いでも、それが女性なら紳士的に接するのがマナーよ」
「そうか。なら、俺も良い事を教えてやる。俺があんたをおばさんと言ったとき、この場にいる人間以外に数ヶ所で不自然な動きをしたやつがいた。柱にもたれて電話している男、二階のカフェで談笑しているカップル、そして、建物を出てすぐの入り口に立っている警備の軍人だ」
湊がそれを口にしたとき、動けなかった三人と指摘された者らは驚愕し、女性は少し驚いたように目を開けたが、すぐに面白い物を見つけたように目を細めて笑みを浮かべた。
相手がそんな反応を見せても、湊はさらに言葉を続けてゆく。

「一般人が拳銃だけじゃなく、キーケースや髪留めに偽装した小型ナイフまで携帯しているなんて不自然だ。それに、あの男の持っている携帯電話もこっちに売ってる機種じゃない。世界中で使える衛星電話なんて、貧困層の多い中東の一般人が使っている訳ないだろう。軍事会社で戦闘訓練はしていても、変装のノウハウはほとんど教えていないようだな」
「ハラショー。この距離でこちらの兵を全て見抜くなんて、ボウヤは千里眼でも持っているのかしら？　そして、実に素晴らしい観察眼よ。先ほどの非礼を詫びさせて頂戴」
　実に愉快だと笑い、女性は拍手をして湊を褒め称えて、すぐに謝罪と共に挨拶として握手を求めてきた。
　ここで断れば、イリスの面子を潰す事になってしまう。それは可哀想かと、やや面倒臭そうにしながら湊は握手に応じた。
　湊の手をしっかりと握った女性は、凛々しさを含んだ綺麗な微笑で、湊に自らの素性を告げる。
「私は民間軍事会社『蠍の心臓（コル・スコルピイ）』の社長をしている、ナターリア・イリーニチナ・メドヴェージェヴァ。名前で分かると思うけど、ロシア人よ。少し発音がしづらいと思うから、ナタリアでもナターシャでも好きに呼んで貰って構わないわ」
「……イリス」
「ん？　ああ、小狼の方で良い。そっちの方がナタリアも呼びやすいだろうからな」
　相手から自己紹介を受けても、湊は今の本名で名乗るべきか、それとも仕事の名前で名乗るべきか考えてしまう。
　依頼人が相手なら、それは仕事中なので小狼で構わない。だが、いまは修行のために外国へきたため、プライベートとも仕事とも言い切れない状態だ。
　そうして、悩んだ末にイリスに尋ねると、イリスは苦笑して湊の頭を撫でつつ答えた。
　子どもらしくないところも多いが、こんな風に判断に困ったときに頼って貰えると、どことなく息子と母親のような気分になって嬉し

い。
　イリスはそんな事を心の中で思いながら、湊にしっかり挨拶するよう促した。
「……仮面舞踏会（バル・マスケ）の小狼」
「貴方の名前はこっちにも届いているわ。極東の島国に、ここ数年で名前の売れてきている仕事屋がいるってね。まぁ、イリスに聞くまでは半信半疑だったのだけど、本当にまだ子どもなのね。あの武神とやりあって生き残るとは、恐れ入ったわ」
　話している間に、先ほどまで一般人などに変装していた者らが、ナタリアの後ろに控えるように集まってきた。
　しかし、相手は会釈などもしてこないので、湊はナタリアの言葉で気になった部分について聞き返す。
「武神って渡瀬さん？」
「それが、ノブアキ・ワタセのことなら違うわ。現役時代の彼には敵として私も悩まされたけど、武神は彼と同門の人間、ミロク・センドウという名前の赤髪の巨漢よ」
　言われて、湊はかつて地下駐車場で戦った敵のことを思い出した。
　目を覚ましてから、イリスから仙道弥勒という敵の名前を聞き。渡瀬からは同じ師から武術を習い、自身の左目の傷を付けた相手だと教えてもらった。
　仙道との戦闘中のことは、相手の拳に頭突きを喰らわせ、拳を破壊したとこまでしか覚えていないが、イリスと力の管理者らの話しによれば、どちらかが死ぬという決着がつく寸前まで無意識状態で戦っていたという。
　さらに、自分の中にその存在は確認できないが、力の管理者との戦いでは、湊は『世界』のアルカナの蛇神のペルソナを呼び出したと聞いた。
　無意識状態で戦えたこと、存在を感知できない蛇神のペルソナ、夢の中で会った母親や茜色の髪の女など、あの日のことは不可解な事が多い。
　自分が海外へ修行に出たのは仙道に敵わなかったことが理由だが、

それでも、ほとんど記憶の無い戦いで生き残ったことを褒められても、湊はなんの感情も湧いては来なかった。
「……どうでもいい。戦った記憶は残ってない。だから、感心されても反応出来ない」
「そうなの？　まぁ、生き残るのに無我夢中だったということかしら。いいわ。それじゃあ、ここで話しているのもなんだから移動しましょう。貴方たちとチャドとヤンは私と同じ車で、あとは皆、ラースの方に乗って頂戴」
ナタリアの言葉で彼女の私兵は全員が頷いて建物の外へと歩き出す。
その際、最初に彼女の後ろに控えていた大男らが、ナタリアだけでなく湊とイリスも庇うように歩いていることで、湊は自分が客として扱われていることを知った。
外に出て、乾いた少し砂っぽい空気と強い日差しの中を歩くと、大きなワゴン車が二台停まっており。
カフェにいたカップル、電話していた男、自分らを庇って歩いていた大男の一人が、運転席に一人座っていた前の車に乗り込む。
続けて、軍人の恰好をした男が助手席に女子が乗っていた後ろの車の運転席に乗り込み、残った黒人の大男が後部座席のドアを開けてくれたので、湊たちはイリスとナタリアが二列目に、湊が一人で三列目に乗り込み、最後に大男が乗り込みドアを閉めて一番後ろの四列目の席へと座った。
「いいわ、出して頂戴。第二演習場へ向かうから、ラースにもそう伝えて」
「了解です。ラースさん、第二演習場です」
《えー、先にメシに行くと思ってたんだけど、それってボスの命令？》
「はい、昼は終わってからですね」
《はぁ……了解。メシのためにアクセル全開で行くんで、そっちも遅れないように》
湊らの乗った車の運転手が無線で通信すると、前の車の運転手と思われる少ししゃがれた男の声が聞こえてきた。

いまの時刻は現地時間で昼を過ぎた頃。確かに昼時には丁度良い時間だが、ボスにも聞こえている通信で、明らかにやる気をなくした調子で答えて良いのだろうか。
そんな風に湊が考えている間に車は発進し、イリスとナタリアが何やら雑談を始めたので、暇な湊は外を眺めつつ目的地に着くのを待つことにした。
そうして、車が発進して空港から離れ、窓の外が草木の無い荒野がしばらく続くようになると、外を眺めている湊の肩を後ろから叩く者がいた。
後ろには一人しかいないので、必然的に大男が呼んでいることになるが、一体何の用だと振り返ってみると、男がニコニコと笑顔を浮かべてカラフルなチョコマーブルの入った筒状の容器をさし出していた。
「小狼君は甘い物は好きかな？」
「……普通」
「そっか。僕の名前はチャド。それで、良かったら食べるかい？」
見た目は身体が大きい事もあって威圧感もあり厳ついが、浮かべている笑顔は自然なもので、このチャドという人物は子ども好きで優しい男なのだろう。
あとどれくらいで目的地に着くのか分からず、特にやることもなかった湊は、頷いて容器を相手の手から受け取ると、蓋を開けて一気に中身を口の中へ流し込んだ。
ジャラジャラと音がしたことで、前に座っていたイリスとナタリアが振り返り、口を少々膨らませてチョコレートを咀嚼している湊の様子に苦笑している。
そして、空になった容器をチャドに渡すと、チャドも湊の少しばかり子どもっぽい姿にさらに優しい笑顔を向けていた。
後部座席の者らが、そのように和やかな空気で包まれた頃、今まで一言も話していなかった黒いキャップ帽を被った助手席の少女が振り返って口を開いた。
「チャドさん、あたしにも頂戴」

「あ、ゴメン。小狼君にあげたので最後だったんだ」
「なら、日本人（ハポン）、チャドさんに貰ったのあたしに寄越しなさ……あなた、本当に日本人なの？」
　言いかけた途中でウェーブのかかったアッシュブロンドに碧眼の少女は、湊の見た目に気付き、自身の知っている日本人の特徴と一致しないため、訝しむ様に目を細めた。
　それも当然で、湊の瞳は金色をしている。暗い場所でなら琥珀色のようにも見えるのだが、明るい場所では、外国人にいる淡褐色のゴールドなどではなく、純金のような惹かれる輝きを持った美しい黄金色なのだ。
　これは世界的に見ても極めて珍しい色であり、学校で定期的に行われる眼科検診では、検診にやってきた医者が、視力や色覚に異常がないかと、他の生徒が待っているのも構わず尋ね続けたほどである。
　そして、湊は髪の色もやや青みがかっており、それも黒髪という日本人の特徴からやや外れている。
　本人は未だに百鬼の家のことについて知らないが、湊の出自を知っている者なら、そもそも百鬼は異国の血を取り入れているため、純粋な日本人ではないからと納得できる。
　しかし、この場でそれを理解しているのはイリスだけだ。そのイリスも、自分が人殺しの一族の末裔だと湊が知らず済むのなら、その方が良いと思っているので、本人がいる場で話す気はなかった。
　そうして、怪しい物を観察するように少女が自身を見続けてきたことで、湊はただ面倒そうに素っ気なく返した。
「チョコレートは全部食べた。もう残ってない」
「はぁ!?　なんで残しておかないのよ！　てか、男のくせに甘い物なんか食べてんじゃないわよ！」
「……静かにしろ。おばさんも呆れた顔をしてるぞ」
　訳の分からない事を言ってくる少女に湊がその言葉を発した瞬間、車内の空気が凍てついた。
　騒いでいた少女も引き攣った表情のまま固まり、ゆっくりと前を向くように自分の席に座り直す。

これでようやく静かになったか。そう思いながら湊が窓の外へ視線を送ったとき、咄嗟に殺気を感じて頭を下げた。
すると、湊の頭があった場所を高速の何かが通り、ワインレッドの軌跡をその場に残していた。
追撃がない事を確認しながら、後部座席へ移動する通路部分に退避していた湊は、車外への脱出を頭の片隅に置きながら、自分に裏拳を放ってきたナタリアへ言葉をかける。
「イリスだって親子ほどに歳が離れているのに、それより年上の人間をおばさんと呼んでも何もおかしくないだろう」
「ああ、確かに何もおかしくはない。だが、私はそう呼ぶなと言ったはず。ここでは私が規律であり法だ。次にまた不用意な発言をすれば、しっかり私の言葉が聞こえるようお前の頭部に耳の穴を増やしてやる。覚えておけ」
「俺はおばさんの部下じゃない。組織として同盟にもなっていない。そんな一方的な命令を聞く義理も義務も初めからない」
運転席の男と助手席の少女は、バックミラー越しに二人の様子を恐々眺め、イリスとチャドは湊にもう止めとけと言いたそうに動けないでいる。
だが、口調を作戦行動中の物に変えた、ナタリアの鋭い氷の視線で射抜かれて尚、湊は動じた様子もなくはっきりと言い返した。
こうなることは、飛行場のロビーでのやり取りでおおよそ予想出来ていたため、ナタリアは嘆息して静かに呟く。
「……小さくとも狼か、犬と違って躾けは面倒だな」
元からの性格か、親代わりの躾けの賜物か、実に胆が据わっていて、その度胸に関しては自分の部下らに見習わせたいと思えた。
だが、組織のトップとしてただ子どもに舐められたままではいられない。故に、お互いに納得のいく方法での解決案を提示する。
「ならば、私と賭けをしろ。私が勝てば今後私の命令には逆らうな。お前が勝てば好きに私を呼んでいい。さらに、こちらのメンバーで最初にリタイアした人間に昼食を奢らせよう」
「内容は？」

「私の私兵とお前とで模擬戦をして貰う。使うのはペイント弾だが、当たれば痛いぞ。まぁ、今の内に謝罪するのなら、呼び名の訂正のみで許してやるが」
「……やる。ただ、好きに呼んで良いって言ったからには、例えどんな呼び方をしようと怒るのはなしだ。怒らないとは言ってないなんて屁理屈でしかないからな」
ここに来ても条件を自分からも出してくる。どこまでもコントロールの利かない相手だ。
そう思いながら、ナタリアは頷いて口調を普段の物に戻しつつ、一応、最低限の釘をさしておく。
「まぁ、流石にこっちの負けはないと思うけど。万が一にも勝った場合、ＴＰＯは弁えなさいよ。滞在する二ヶ月の間、こっちが仕事の話をしているときに雌豚だのアバズレだの呼んできたら、イリスに責任取らせるから」
「ハァっ!?　おい、アタシは別に小狼の保護者じゃないぞ！」
「大丈夫、あなた達はよく似ているわ。その子の生意気な目、拾ってあげたばかりの頃の貴女にそっくりよ。まぁ、実力も似ているのなら、勝ち目なんてないでしょうけど。結果が今から楽しみだわ」
湊の実力を下に見ている訳ではなく、自分の部下の実力を信頼しているからこその自信で、ナタリアは不敵な笑みを浮かべて到着のときを待った。
湊が席に戻り、車が目的地に着くまでの間、誰一人として口を開こうとはせず、一同を乗せた車はただ静かに荒野の中央を走る道路を進み続けた。

第五十六話　蠍の私兵

――第二演習場

空港を出発した車が目的地についたのは、それから一時間三十分ほど経ってからで、時刻は既に二時になろうとしていた。

車から降りた湊は、すぐ目に入ってきた建物に視線を向けてジッと観察する。

中東では、日本にあるような大きな建物は都市部を除いてほとんどない。

にもかかわらず、周囲に殆ど何もない場所に、病院か何かと思われるその大きな施設は、ただぽつんと存在していた。

だが、湊はそれが病院ではないと理解していた。何故なら、その施設は窓をはめる穴は存在すると言うのに、ただ一つとして窓がはめられていなかったから。

その点とナタリアらの話していた名前から推測するに、ここは病院など大きな建物での作戦行動を想定した訓練施設で、窓は模擬戦の度に壊れれば修理費がかさむからという理由で初めから付けていないのだろう。

そうして、場所についての考察を終えると、湊は車を出て少し歩いた先にあった屋根だけの簡易テントに移動した。

「さて、ではまず軽くメンバーたちを紹介しておくわ。彼らは我が社の中でも、私の私兵として選ばれた特別なメンバーよ。他の社員は依頼によって様々な場所に派遣されるけど、彼らは基本的に私と行動をともにしているわ。イリスも昔はここに所属していたのよ」

ナタリア、イリス、湊の三人がテントの日影で並ぶと、その正面に十人の男女が一列に並んでいた。

その中には、先ほどの黒いキャップ帽の少女も混じっており、てっきり付き添いだと思っていた湊は、ナタリアに少女の事を尋ねる。

「一人変なのが混じっているが？」

「え？　ああ、彼女はレベッカ。確かに若いけど、歳は二十歳よ。訓練に一年費やし、それから仕事を始めてもう二年になるわ。実力もここ

にいた当時のイリスを既に超えている期待の新星よ。ちなみに、さっきもう一台の車を運転していた彼の一人娘」
そういってナタリアは湊たちから見て、一番左にいる白髪混じりの短髪の男性を紹介した。
レベッカという少女がルーキーで右端にいるということは、彼がこのチームのリーダーなのかもしれない。
ナタリアに紹介された男性は、一歩前に出ると軽い調子で頭の後ろを掻きながら、ヘラヘラと笑って簡単に挨拶をしてくる。
「ただいまご紹介に預かりましたレベッカの父のラースです。いやぁ、イリスはともかく、こんな美人さんと会うって聞いてたら、しっかりと髭も剃ってきたってのに。ボスも人が悪い」
「うるせえ色ボケ。体格で小狼が男だって分かってるだろ。見え透いた冗談抜かすな」
イリスは彼と既知の間柄なのだろう。湊を男と分かった上で相手が軽口を叩いてきたため、腕組みをしてジトっとした呆れた視線を送る。
すると、ラースはイリスに睨まれても笑ったまま答えた。
「いや、もしかしたらって可能性も残ってるだろ？　ここにいる中じゃ、彼が一番美人だしな。彼が軍にいたら、これだけ美人なら男でも構わないってやつも出てくるはずだ」
顎に手を当て、値踏みするように湊を見つめて言ったラースの言葉に、この場にいた女性陣の表情が険しくなる。
それはそうだ。いくら顔の造形が整っていたとしても、相手が男でそれと比べて自分たちの方が劣っていると言われて良い気はしない。
加えて、その言葉を否定しきれないとなれば、怒りはさらに募る一方だ。
ラースと女性陣双方を見て、他の男性陣が苦笑や呆れの表情を作っている中、興味無さげに並んでいるメンバーを眺めていた湊は、空港からここへ来る間にベルトに取り付けていたプッシュダガーの一つを手に取り、そこでようやく口を開いた。
「……ナイフと拳銃、どちらでも去勢してやった経験はある。男に欲

情するのは構わないが、リスクリターンを考えた上で自分の行動を決めた方が良い。あんたの娘も自分の父親には男のままでいて欲しいだろうからな」
　言い切り、最後に手を横薙ぎに一閃させ、湊の手から放たれたプッシュダガーはラースの股の下ギリギリを通過していった。
　通り過ぎる瞬間、「おわぁっ!?」と相手は軽く飛び上がり、着地した後には自分の男の象徴が無事であるか確かめるよう頻りに股間に触れている。
　先ほどまで苦笑していた他の男性陣は、自分が同じ目に遭ったときを想像し、やや内股になって青褪め、それが女性陣にはいい気味だと思えたのか、場には笑い声が響いた。
　そうして、女性陣の笑い声が止んだところで、途中になっていたメンバーの紹介をナタリアが再開した。
「ふふっ、ラースはこの部隊のサブリーダーをしているの。リーダーは指揮官をしている私よ。そして、彼の隣が空港ではカップルに扮していたセルゲイ、次がチャド、その隣のカルロは空港には来てなかったわ。訓練に使う道具の準備をして貰っていたの」
　青いアロハシャツをきた茶髪の白人男性のセルゲイは、手をあげて湊に挨拶し。車で一緒だったチャドは笑顔を向けてきている。
　その隣の軍服に身を包んで眼鏡をかけているカルロという男性が、湊とイリスに崩した敬礼で「よろしく」と挨拶したところで、ナタリアは空港では彼女の後ろに控えていたもう一人の大男の紹介に移る。
「彼はグリゴリー、部隊で彼と力比べが出来るのはチャドだけね。そして、その隣が」
「どーも、部隊の期待のエース、パトリックです！　いやぁ、ボスやラースからイリスさんの噂は聞いています。うちのキルスコアで歴代二位だとか。ま、俺もこっちの腕には自信あるんで、そっちのガキにも色々と教えてやりますよ」
　ナタリアの紹介に言葉を被せてきた軽薄そうな男、パトリックはライフルで狙い撃つようなポーズを取って楽しそうに笑う。
　髪は背中に届いている湊の方が長いが、パトリックの僅かに癖のつ

いた茶髪も肩にかかる長さをしており、軍服の状態でピアスやネックレスをつけていることから、ファッションでその髪型をしていると思われる。
　自分が部隊にいた頃にはいなかった口先だけに見える馬鹿に、イリスは興味なさげな視線を送ってから、隣で額に手を当てている雇い主に声をかけた。
「あれが本当にエースなのか？　風に香水の匂いも混じってるし、スナイパーって嘘だろ」
「エースではないし、多少人格に難はあっても実力は本物よ。六百メートル以内なら煙草の箱だって撃ち抜くわ」
「へぇー……って、別に威張れるほどすごくないだろ。そんなの専門ならそれなりにいるぞ」
　イリスの言う通り、狙撃手が六百メートル以内の目標を撃ち抜く状況などざらだ。
　むしろ、その辺りの距離での狙撃がベーシックであり、パトリックの実力というのは狙撃手を名乗れる最低ラインと言えた。
　パトリックの実力をあまり信じていない本人は、基本戦術が動き回っての拳銃による撃ち合いなため、六百メートルであっても命中率は七割以下になるが、五代や湊は八百メートルであっても確実に当てる事が出来る。
　加えて、部隊のサブリーダーであり『コル・スコルピイ』のキルスコア歴代トップのラースも、五代クラスの狙撃技術を有しているので、はっきり言って存在意義が不明に思えた。
「コイツ、蜥蜴の尻尾か。まぁ、騒いで敵の注意を集めてくれそうだしな」
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！　ボスが言った紹介はかなり控えめに言ってます。俺の有効射程は八百で、ただ殺すだけなら九百だって狙えますよ！」
「アタシの知り合いは一キロで簡単に当てるさ。それとな、キルスコアなんて何の自慢にもならないよ。国のお偉いさんは命令一つで何万って人間を殺せるんだからな。どうせ語るんなら、こなした依頼か

助けた人間の数で語りな」
人を殺すことをどこか点数稼ぎのゲームのように話すパトリックに、イリスが蔑みの視線を向ける。
人殺しはどこまでいっても人殺し。人命救助のために犯人を処理する依頼であっても、湊は自分の行いは最低に頭の悪い野蛮な解決法だと自分を卑下する。
死を視る眼を持ちながらそんなことを言う少年を見ているからこそ、イリスにはパトリックの軽口が癇に障った。
そして、睨まれたパトリックが肩を揺らして黙ったところで、煙草に火を点けていたナタリアが、話は済んだかと口を挟む。
「……もういいかしら？　それじゃあ、さっき私たちの車を運転していた彼がヤン。空港でカップル役をしていた彼女はジーナ、そして、こっちでカルロと一緒に準備をしてくれていたバーバラで最後よ。レベッカは最初に紹介したから良いわよね？」
「ってか、アタシがいたときとあんまり変わってないな。馬鹿とバーバラとレベッカが加わっただけか」
「私兵でそんなにメンバーを変えても意味ないでしょう。貴女の後釜が戦闘型の似ているレベッカで、バーバラは戦場医と通信兵を兼ねているわ。パトリックはスナイパーがもう一人くらいいた方が良いと思って入れたのよ」
殆ど知った顔だったところで、イリスは多少の懐かしさしか感じないため、先ほどからややぼうっとしている湊の頭に手を置いて撫でつける。
これから湊は一人でこのメンバーを相手に実戦形式の演習をするのだ。今のようなオフの状態を見れば、相手は湊の実力を見誤るだろう。
仮面舞踏会の小狼の情報は、地下協会であってもほとんど把握できていない。
それは組合員である五代や、仲介屋のロゼッタが意図的に記録されないような仕事の斡旋をしていたからであり。情報を基に作戦やフォーメーションを組む集団戦闘のプロを相手にする上で、これ以上

ない優位性だ。
空港では相手メンバーを見抜き、先ほどは投げナイフの腕前を披露してしまったが、ここでイリスに黙って頭を撫でられている姿を見せれば、相手の警戒レベルはさらに下がるだろう。
地味な上にほとんど開始直後しか効果の無い作戦だが、これからしばらく一緒に過ごす者らの記憶に、しっかりと湊の実力を刻み込ませるため、イリスは少しでもサポートしてやろうと思った。
「始まったらしっかり頑張れよ。オマエの勝敗がアタシの昼代にも影響するんだからな」
「……金持ってそうな奴から狙う」
ゆっくりと頷いて、湊は気だるげな視線を並んでいるメンバーに送る。
同じ車に乗っていた者は既に話を知っているが、もう一台の車に乗っていた者と、こちらで準備をしていた者たちは話を理解していないため、知っている者から聞いて少し嫌そうな顔をしている。
「んじゃ、ラースだな。一番古株のオッサンだ。ま、娘のレベッカを倒してもアイツが払ってくれるから、どっちを狙ってもいいぞ」
「おいおい、老後の蓄えを取らないでくれよ。そういう事なら、俺よりもこのセルゲイがオススメだぞ。こいつ、ジーナへのプレゼントを買うために金を貯めてるからな」
「お、おい！　なぁ小狼、俺なんかよりもパトリックを狙うといい。射撃はそこそこだが、体術はお粗末でな。接敵できれば簡単に勝てるはずだ」
にやりと口元を歪め、寝かせた親指でパトリックを指し、セルゲイが標的を自分から移す。
湊にすれば金を出してくれるのなら、別に誰を狙っても構わないのだが、自分の懐を痛めたくない者らは醜い言い争いを続ける。
「なっ、汚えぞオッサン！　ガキをやる前に、オッサンたちから片付けっぞ！」
「バーカ、この部隊であんたが勝てるのなんてサポートのバーバラしかいないっての。けど、バーバラは今回はサポートで不参加だから、

実質、あんたとあの日本人（ハポン）の最弱決定戦ってことになるわね。どうもご愁傷様」
部隊最年少であるレベッカにまで馬鹿にされ、パトリックは悔しそうに色々と言い返しているが、もはや子どもの口喧嘩だ。
流石に、演習を始める前からこの体たらくでは困るので、事態を収拾する意味も込めてナタリアが手を二回ほど鳴らして注目を集めた。
「はいはい、静かに。それじゃあルールを少し変えるわ。彼に最初に討たれた人は、二人に昼食を奢る。次に、彼を討った人には、彼に討たれた二人目以降が割り勘して昼食を奢ること。まぁ、彼が一人も討てずに討たれた場合は、イリスとボウヤで割り勘して奢ってあげなさい。その代わり、貴方は部隊を全滅させなくても奢って貰えることにするわ」
ただし、呼び方などの賭けについては、車内で話していたルールから変わらないとして、ナタリアはメンバーに着替えと各自準備するよう指示を出した。
サポート役のバーバラが簡易テントに用意された通信機の前に着き、メンバーらが準備して建物の中に散ってゆく間に、湊にも本日の演習で使う弾薬などの説明を始める。
「今日の演習で使うのはこのペイント弾（シミュニッション）よ。当たれば先端が割れて塗料が付着するわ。腕や足なら三発、胴体なら二発、頭部や胸なら一発命中した時点で死亡扱い。ペイント弾と言っても、当たれば普通に痛いし、血は出ないけど痣は出来たりするから防具の着用をオススメするわ」
「……防具はいらない。動き辛くなる」
「目に当たれば失明するわよ？」
「当たる前提で準備する気がない」
受け取ったペイント弾を箱から取り出し、弾倉に籠めながら淡々と答える湊の言葉に、長年この仕事をしている者としてナタリアもポカンとしてしまう。
当たっても怪我をしないように、怪我をしても軽微で済む様に備えるのがプロとしての基本だ。

湊はそれを前提が間違っていると断じて、ゴーグルすらも装備せずにただ弾倉に弾を籠めただけで準備を終えてしまった。
確かに、当たらなければ準備の必要はないが、メンバーにはサブマシンガンや突撃銃を持っている者もいる。それを躱す事など人間の反射神経では不可能だ。
イリスの弟子だと思って警戒していたが、少しばかり買い被り過ぎたかと認識を改め、ナタリアは新しい煙草に火を点けながら口を開いた。
「こっちの準備は全て済んだわ。さぁ、演習開始よ。精々、自分たちの昼代くらい稼いでくることね」
「……何かマジックペンとか、代わりになる物はないか？」
「ペン？　一体何に使うの？」
「ナイフの代わりにする。接敵して、相手にペンで印を付けたら被弾と同じように扱って欲しい」
それを聞いてなるほどとナタリアも感心する。確かに、今回の演習ではペイント弾は用意したが、切ったときに塗料が付くような近接装備は用意していなかった。
湊の得意な戦い方がナイフなどによる格闘術ならば、銃だけではかなりのハンデを背負うことになるだろう。
演習は自分の私兵の鍛錬も兼ねているので、自分たちにだけ有利な条件で戦わせては意味がない。
そうして、一度頷いて振り返り、ナタリアは座っていたバーバラに声をかけた。
「バーバラ、貴女、色がいまいちだから早く使い切りたいって言ってた口紅あったわよね？　あれ、この子に渡してもらえる？」
「え？　別に良いですけど、ナイフに比べるとリーチが短いですよ？」
二十代中頃と思われるボブカットの優しそうな見た目のバーバラは、了承して車に置いていた自分の化粧ポーチから口紅を取り出すと、それを待っていた湊に手渡した。
最大まで伸ばしても十センチにも満たないので、リーチはポケットナイフにも及ばぬが、切った印さえ付けられれば問題ない。

小さな声で「ありがとう」と感謝の言葉を伝えると、湊はポケットにそれを仕舞って、建物に向かってジョギング程度のペースで走って行った。
その背中を見ながら、ナタリアとイリスもバーバラと同じように通信機材の置かれた机に座り、メンバーとの通信感度や、建物内に設置された隠しカメラの映像を確認しながら、ナタリアの声で作戦行動の開始が告げられる。
「では、諸君、狩りの始まりだ。獲物は小さな狼が一匹。諸君らの実力ならば、簡単に制圧できるはずだ。存分の働きを期待しているぞ」
《サー、イエッサー!》
司令官の言葉に、居場所を湊に知られないよう小声でだが兵士たちが答える。
自分たちは負けない。完璧な勝利を司令官に届ける、とそんな意思が声に籠もっていた。
＊＊＊
演習施設は四階建てのＬ字型をした大きな建物だ。
だが、Ｌ字の丁度角の部分だけ廊下になっており三階までしかない。
そのため、各屋上にはそれぞれの四階フロア最奥の階段を使ってしか上がることはできず。屋上への入り口にはトラップを仕掛けているため、それぞれの屋上に構えたラースとパトリックは、目視に加えてバーバラから送られてくる情報をタブレット端末で確認して湊の位置を把握していた。
演習はナタリアが湊に開始宣言をした時点で始まっている。だというのに、何も持たずに小走りで施設に近付いてくる湊を見て、ラースはここで狙撃してしまおうかと考えた。
（いやぁ、流石に気を抜き過ぎだろ。というか、そんな長さの髪を括らずにくるのも良くないなぁ）
いくら演習と言えど、自分が教官で相手が新兵なら間違いなく尻を蹴っ飛ばしているところだ。
それほどまでに、湊の行動は既に作戦行動に移っているにしては警

戒心が欠片も感じられず。もしや、建物に入るまで撃たれないと考えているのか、と既にレミントンＭ２４　ＳＷＳで照準を定めているラースに思わせた。
　ここで撃てば自分は昼食を奢って貰える。しかし、それでは実戦経験の少ない娘に経験を積ませることはできない。
　加えて、この距離ならまずあり得ないが、もし仮に外したときには屋上に自分やパトリックがいることを気付かれてしまう。
　相手が建物に入れば狙撃の機会はかなり限られる。それも相手がこちらに気付いていないことが条件であり、相手が警戒して窓枠の下を進むなどされれば、もう何も出来なくなってしまう。
　そうなっては困るので、絶好のチャンスながら、ラースは湊を見逃すことにした。
「あー、こちらラース。いま撃つと奴さんに警戒されるので、演習続行のため見逃す。以上」
《こちら、バーバラ。了解で……え？　撃って良いんですか？　あ、はい。ボスが撃って良いって言っています。屋上の二名はそこから狙撃してください。他の方は、作戦通り待機です》
「ああ？　演習終わっちまうぞ……」
　まだ湊の実力も見ていない。これから二ヶ月はイリスと湊もこの部隊と一緒に行動するというのに、相手に何が出来るか分からないというのは作戦を立てる上で非常に面倒だ。
　けれど、バーバラのいる司令部と通信の繋がったインカムから、パトリックが上機嫌な返事したのが聞こえていたことから、パトリックは既に撃つ気満々なのだろう。
　娘のことや、湊との今後の関わり方など、色々と思う事はあるが、取れる獲物を他人に持っていかれるのは癪だ。
　そうして、思考を切り替えると、ラースは照準を既に合わせた銃の引き金を引いた。
「は？　嘘、だろ？　この距離だぞ」
　パトリックが撃つよりも早く、ラースの銃からは弾丸が発射された。

屋上から湊の居る場所まで五百メートルも離れていない。その距離ならば、引き金を引いて一秒かからず着弾するため、発砲音が湊の耳に届くよりも速く着弾が済む。
故に、気付いたときには終わっているはずだったのだが、スコープの先で、湊は一瞥もせずに軽く横移動するだけで弾を回避していた。
銃のセッティングを間違えたか。そう思わずにはいられない、あまりに衝撃的な結末。
しかし、ラースに続けてパトリックも湊に向かって発砲したことで、先ほどのことが嘘ではないと理解させられた。
「あ、ありえないだろ。どんな反射神経してんだ……」
湊は再び音速以上の速度で飛来する弾丸をかわした。対角線の屋上で、唖然としつつすぐに気を取り直してパトリックが撃ち続けているが、それらも相手は建物に向かいつつ速度の緩急で全て避けている。
それぞれの初弾で狙撃手の位置を把握し、次弾からはタイミングを計って回避している可能性もあるが、一度も屋上を見ていないことを考えると、もはや弾道を予知しているようにしか思えなかった。
「ボス、こいつはちょっと面倒ですぜ」
パトリックの攻撃を全て避けきり建物へ到着した少年を見つめ、苦笑いを浮かべつつ、ラースは司令部にいるナタリアへ自分の感想を伝える。
長年仕えてきた兵として、ラースには自分たちのボスがいまどのような気持ちでいるか、簡単に想像がついていた。
＊＊＊
建物に到着した湊は、屋上の狙撃手から狙われないよう近場の部屋に入った。
中に入る前からアナライズで分かっていたことだが、この施設は窓だけでなく、扉に椅子やテーブルなどの備品類も一切なかった。
何かあれば、それを盾にして進めて楽が出来たのだが、ない物はしょうがないと思考を切り替える。
現在、一番近くにいるのは、敵メンバーで最年少のレベッカだ。

彼女は、いまの湊と同じように、部屋の中で警戒しつつ張り込んでいる。同室内には他に仲間はおらず、傍の部屋に他のメンバーが二人ほど隠れているので、どちらかが囮となってもう片方が隙を突く作戦に違いない。

だが、相手が隠しカメラでこちらの居場所を把握しているように、湊も能力の目で敵の居場所からトラップの位置まで全て把握している。

条件は五分どころか、自身でリアルタイムに把握出来ている湊の方が有利。そうして、腰のホルスターから拳銃を取り出すと、湊は先ほどと同じペースで駆けつつレベッカのいる場所へと向かう。

（……6……5……4）

ブーツの硬い足音をコンクリートの壁や天井に反響させながら、湊は相手のいる部屋までの到着タイミングを計る。

廊下の幅は三メートル強と広いため、タイミングさえ掴めれば、避けるなり受けるなり対処しやすい。

経験の浅い新兵なら、サポート役の指示よりも近付いて来る足音と自分の感覚を信じて攻撃に移るだろう。

（……2……1……0ッ!!）

故に、湊はわざと足音をさせながら接近し、わざと見えるように張られたトラップのワイヤーを跨いで、本命のトラップの発動と敵が出てくる直前のタイミングで天井近くまで跳び上がった。

案の定、ワイヤーと全く関係のない窓枠辺りから風船の割れるような破裂音が響き、湊が直前にいた一帯をオレンジの塗料が濡らしている。

続けて、敵に自分の居場所がばれていると思っていない相手は、本来の相手がいるであろう場所に銃口を向け、

「死になさい、日本人（ハポン）！」

部屋の入り口から上半身だけ乗り出し、ご丁寧に掛け声を発してから二発ほど撃ってきた。

ただし、そこには誰もいない。さきほど散らばったオレンジの塗料が、虚しく床に水たまりを作っているだけだ。

レベッカの銃から放たれた弾丸が誰もいない空間を通過し、そのまま窓のはまっていない穴から出ていくのを眺めながら、未だ空中にいた湊は相手に向けて引き金を二度引いた。
「痛っ、え、嘘っ!?」
ほぼ一瞬の内に二発、それも予想していなかった斜め上からの奇襲、左肩と胸に弾を喰らったレベッカは、痛みを感じた直後、着地した湊と自分の服についたインクを信じられないといった表情で眺めていた。
しかし、死亡者の話など聞く気のない湊は、着地後を狙いにサブマシンガンを構えて別の部屋から出てきたヤンの喉を狙って、着地直前に口紅を投げる。
「なっ!?」
それは敵が引き金を引くよりも先に、フロントサイトで照準を付けようとしていた相手の喉へ命中した。
急に喉に衝撃を受けた相手は驚いているようだが、この場にはあと一人敵が隠れている。
しっかり地に足を付けた湊は、着地時のゼロからコンマ以下のラグで速度に乗り、外からの狙撃を回避しながらヤンの隣を走り抜け、次の部屋の入り口の枠へと目がけて跳躍する。
そこから、枠を足場に強く蹴り出し、軌道を変えながらさらに加速すると、トラップのスイッチの傍らで突撃銃を構えていたチャドの胸に、相手が引き金を引くよりも速く銃弾を撃ち込んだ。
「あ、あんな軌道で加速するだなんて……」
着地しホルスターに銃を仕舞っている湊と、自身の胸についた赤い塗料を交互に見ていたチャドが思わず漏らす。
先にやられていた二人も、湊がどうなったのか確認するため、遅れて部屋へと入ってきた。
そんな者たちを冷めた瞳で眺めながら、湊は廊下に出て落ちていた口紅を拾い上げ。戦利品として相手の武装や通信機を奪うため、この三人以外に周囲に敵がいないことを確認しながら部屋に戻ると、近くにいたレベッカの着ている軍服に手をかけた。

「ちょっ、いやっ、変態！　演習中になにするつもりよ！」
「……五月蝿い」
「おぐっ」
急に服に手をかけてきた男が、さらに身体を弄（まさぐ）ってきたことにより、身の危険を感じたレベッカは騒いで暴れる。
だが、欠片も相手に欲情する要素がないと思っている湊にすれば、同じ金髪でもアイギスとは大違いだと呆れてしまい。
とりあえず、腹に膝蹴りを見舞って黙らせてから、床にへばった相手から目的の物を奪いつつ伝えておく事にした。
「お前の武器と通信機を貰うだけだ。死体は黙って倒れてろ」
「こ、攻撃する前に言いなさいよ……女性のお腹を蹴るなんて、あんた最低ね」
「……」
言われなくとも、湊は自分が最低のクズだと自覚している。
けれど、レベッカの言った『最低』という言葉は、自身の考えている意味合いと違っているように思えた。
そう、相手は単純に負け惜しみで罵倒してきただけだ。プロでこんな無様なことをしてくるなどあり得ない。
ナタリアの紹介では、レベッカはこの部隊在籍時のイリスよりも強かったらしいが、まるでそう思えなかった湊は、相手の存在自体が不快に感じたため、チャドとヤンに心配されながらお腹を押さえて蹲っている相手の背中に向けて引き金を引いた。
「痛っ、痛いっ、ちょっと！　死んだ人間に攻撃して良いと思ってるの！」
「……ちゃんと息の根を止めておかないと危険だからな。プロなら当然だろ」
「演習だっての！」
肩と胸に既に塗料が付着している。それを見せて、ルールで明確にリタイアが確定していると怒りながらレベッカは告げた。
だが、どこまでもこれを訓練とみなし、まるで実戦と考えていないことが言葉から読みとれ、湊の中から急速に感情が消えてゆく。

「そうだな。演習じゃなかったらお前らは全員死んでいた。俺の手を見るためか、トラップでこちらを崩してからの波状攻撃を狙っていたようだが、馬鹿正直に待ち構えた順に攻撃をするという愚行」
今まで自分の内にあった感情が消えて、最後に残っていたのは黒く渦巻く怒り。
仕事中の小狼としての仮面ならば、湊は機械のような冷たさを感じさせていただろう。
けれど、大切な物を侮辱され怒りを発している湊は、殺意を放ちながらどこまでも冷たい蒼い瞳で相手を見下ろした。
「……最初のお前は、引き金を引く前に莫迦なことを口走っていたな。聞こえてきた声で、お前の顔の高さと向きを知ることが出来る。銃にも色々と種類があるが、どうせ手に持って使う武器だ。顔の高さで武器の構える範囲もおおよそ予想できる」
冷淡な声で次々に指摘する湊の変わりように、レベッカは目を見開き震えながら後退りする。
「二人目はタイミングが命の波状攻撃で呑気に狙いを定めていたな。こんな狭い場所だ。サブマシンガンなら、ある程度、適当に撃っても問題ないさ」
これはただの演習のはずだが、目の前にいる人間は、そんなことも構わずに自分を殺そうとしてくるかもしれない。
「三人目も一緒だ。足音で敵が来ていると分かっているなら、物影が見えた時点で引き金を引いておくべきだったんだ。狙い何てほとんどつける必要ない」
本能でそれを理解した男たちも、武器に手をかけ警戒しつつレベッカを守る様に立ち上がった。
「……イリスがこんなやつより弱かったことなんてあるはずがない。例え冗談でも、俺はそんなもの許さない」
既に殺した相手への興味などとうに失っていた湊は、背中を見せて部屋を出る。
そして、別棟の狙撃手からは見えるだろう窓際に立ってまで、簡易テントに座っているナタリアを睨みつけた。

第五十七話　鬼の片鱗

――簡易テント

レベッカの敗北後、湊が彼女の敗因を数点指摘していたのはスピーカー越しに聞こえていた。

それらはナタリアや部隊のメンバーが感情で動く彼女を指導する際に、何度も言ってきていたので、今回もまた馬鹿をやったのかと呆れるしかなかった。

だが、他の二人に対しての指摘も含め、湊の声色がどこか怒っているように聞こえたため、それを不思議に思っていた司令部にある呟きが届く。

《……イリスがこんなやつより弱かったことなんてあるはずがない。例え冗談でも、俺はそんなもの許さない》

それを聞いてナタリアも納得がいった。イリスは湊の言葉を聞いてキョトンとしてから、どこか嬉しそうに笑いを堪えているが、結局、相手はイリスを馬鹿にされたと思って怒っているのだ。

感情や思考の読みとれない相手だと思っていたが、こんな分かり易い弱点を持っているなら、どうにか今後も付き合って行けそうだ。

そう考え、今も口元を嬉しそうに歪めている隣の席の女に、呆れ顔のナタリアが声をかける。

「お宅のお子さん、随分と大人びているけど、まだ親離れが出来ていないようね」

「ん？　ああ、まぁ、可愛いもんだろ？　アイツ、結構キツイ目に遭っててさ。そのせいか、敵味方の区別が極端なんだ。ナタリアを〝オバサン〟って呼んだのも、アタシの知り合いだからって初めからほとんど味方に数えてるからでね。アイツなりの変わった甘え方なんだよ」

「まるで、母親を驚かせて喜ぶ子どもね。柱の陰に隠れて飛び出してきたり、二・三歳くらいの頃にあったでしょ？」

「ああ、あったな。まぁ、それにしては育ち過ぎてるけど、甘え方を知らないやつなんだ。だから、ある程度は大目に見てやってくれ」

ナタリアの例えにその通りだと共感しつつ、イリスは子どものする

ことだと思って欲しいと湊の行動を許してやってくれと頼んだ。
オバサン呼ばわりされた彼女自身、既にそんな怒りは抱いていなかったが、世界でも平和な国とされる日本で幼少期から仕事屋をやっている湊の経歴に興味が湧いた。
これからしばらく世話をするのだから、その分の報酬として少しくらいは聞かせて貰おうと、返事をしてから質問を口にする。
「それはいいけど。ボウヤってどんな経歴の持ち主なの？　あの若さで武神と戦えるなんて普通じゃないわよ？」
仙道という男は銃も効かず、逃げようにも壁を破壊してでも追ってくるような相手だ。裏の世界では、仙道と仕事でかち合うなら、森で熊に遭った方がマシだと話す者もいる。
仕事でのスタイルが敵を撒くことに特化しているなら、逃げに徹して生き延びることも出来るかもしれないが、そんな敵と正面から戦って生き残った稀有な存在が、まさか日本の中学生だとは誰も思うまい。
故に、どういった経緯でこの世界に入り、どのような能力を持っていて仙道と戦って生き残れたのか、ナタリアの興味はそこに集中していた。
「ああ、説明するからちょっと待っててくれるか？　バーバラ、館内放送で向こうと繋いでくれ」
「え？　あ、はい」
ナタリアが湊について聞きたがるのは尤もで、イリスもそれを理解していたので、頷いてから説明する前に野暮用を済ましたいと告げる。
野暮用が何かは分からないが、そんな風にイリスがバーバラに通信を頼むと、隊員に配った通信機ではなく、施設内のスピーカーに直接通信を繋いで、バーバラはマイクを渡した。
「よーし。小狼、聞こえてるか？　全力でやっていいぞ。刀剣類の使用も許可する。ただし、斬っていいのは相手の武装までだ。ちゃんと出来るな？」
《……分かった》

館内放送を聞いた湊が、レベッカから奪った通信機で返事をしてくる。
キレる一歩手前までいっていると思っていたが、ちゃんと返事をしたことでまだ制御可能な状態だと確認できた。
それに満足気に頷き、イリスはマイクをバーバラに返して椅子に座り直すと、その直後、
《――――――――ッ!!》
『っ!?』
湊の持っていた通信機から、絶叫とも咆哮ともつかない雄叫びが響いてきた。
通信機で拾える音量を完全に超えているせいで、インカムまで付けていたバーバラは頭をハンマーで殴られたような衝撃を受け、通信機のスピーカーで音を聞いていたイリスとナタリアも顔を顰めて耳に手を当てている。
離れた場所にある簡易テントにいながらでも、この雄叫びによって空気が震えていることが分かる。
ならば、同じ施設内にいる状態で、バーバラと同じように通信機を耳につけていた他の隊員たちは、こちらよりも酷いダメージを負っているだろう。
最低でも通信機をつけていた側の耳は、しばらく使い物にならないはずだ。
「……通信はしばらく無理ね。バーバラ、相手の位置情報だけは正確に送って頂戴」
「りょ、了解です」
雄叫びが止んだ頃、馬鹿げた方法だがしてやられたと、ナタリアがバーバラに指示を出す。
そして、隠しカメラの映像から位置情報を把握し、それを隊員に送らせているナタリアの隣で腕を組んで笑っていたイリスが口を開いた。
「フフッ、無駄だよ。アイツが本気になったら、アンタが連絡して隊員らが見てる間に着いちまう」

「どれだけ広いと思ってるのよ。そんなのあり得ないわ」
「それがあり得るから言ってるんだ。本人は自分の一族のことを知らないからな、絶対に黙っておいてくれよ」
やや勿体ぶるように、だが、真剣な口調で念押ししてイリスはナタリアを見る。
一族と聞いた時点で何やら嫌な予感がしたが、訝しみながらもナタリアはそれにしっかり頷いて返した。
口の固さについて信用している相手がちゃんと同意したことで、イリスもようやく続きを口にした。
「アイツはな。最後の名切りにして、その正統血統だ」
「っ、名切りって鬼の一族の？　そんな、その血は途絶えた筈よ」
イリスの言葉に耳を疑い、目を大きく開いたナタリアの顔には驚愕の色が浮かぶ。
バーバラは名切りについて知らないのか、首をかしげて不思議そうにしているが、ナタリアは名切りとその一族の結末を知っていたようで、イリスの言葉を信じ切れずにいた。
「アイツの両親は事故に巻き込まれて死んでる。そのとき、アイツも公的には鬼籍に入った。だから、その一族は滅びたと言われてたんだ。ま、実際はある施設に回収されていたんだけどな」
「ある施設？」
「悪いけど、そこら辺はアイツ自身が話さない限り言えない。ただ、アイツが名切りなのは確実だ。まだほんの片鱗しか見せてないけど、きっと驚くぞ。本気のアイツは物理法則も軽く無視するんだからな」
どこか自慢気に、そして楽しそうにイリスはそう言って隠しカメラの映像の映る画面に視線を戻した。
こうまでイリスが人を褒めるのは珍しい。だが、そんな者と私兵を戦わせている身としては、相手の言葉は全て誇張表現であって欲しいと思わずにはいられなかった。
＊＊＊
「――――――――ッ!!」
場の空気だけでなく、建物までも振動させるほどの雄叫びをあげる

湊。
それを近くで聞いていた三名は、耳に付けていた通信機を放り投げて、顔を顰めながら耳を塞いでいた。
このとき、この場の三名以外の隊員らも、湊の声で一時的に耳をやられながら、同じように耳を押さえており、敵の通信を妨害し、相手を分断するという目的は見事に達成された。
後は、突然のことに浮足立っている敵を殲滅すれば良い。
ホルスターの銃の弾倉を新しい物に替え、それを仕舞うと、すぐにマフラーから抜身の刀〝春夢〟を取り出した。
（敵は……次のフロアか）
マフラーから武器を取り出したのを見て、不思議そうにしている者らを横に、湊は敵の位置を捕捉する。
心の中では怒りの感情が黒く渦巻いているが、思考は切り離され、凪いだ水面のように静かで、淡々と敵を確実に殺せる方法を次々と弾き出してゆく。
これは感情によって力を無限に上昇させる少年が、今日までの間に仕事の中で身に付けた技術だ。
さらに、イリスから『全力でやっていい』と言われたことで、本人が無意識にかけているリミッターも解除され、未だ完全にはほど遠くとも鬼の片鱗を見せる状態へ少年は昇華されていた。
（全力で……やる）
敵のいる場所へ向かうため、湊は一歩を踏み出す。
踏み出した足が地面に着くと、その地面を強く蹴り、続けて二歩三歩と蹴る力の増した足を動かしてゆく。
だが、少年が速度に乗るには、たったそれだけで十分だった。
周囲の景色が高速で流れていき、傍にいた者らのあげた驚きの声も後ろに残してすぐに聞こえなくなった。
数十メートルあった廊下も、五秒もかからず走り抜け、そのまま減速もせずに階段の壁を斜めに走って二階へ上る。
階段付近に仕掛けられていたトラップは作動しない。したところで、湊は既にそこを離れているのだから、作動させる意味もない。

（……二人）
そのまま二階の廊下を走っていると、敵の気配が近くなる。
相手は二人、空港でカップルを演じていたセルゲイとジーナだ。
湊の異常な速度での接近に気付いたようで、両者は待ち伏せを止めて、突撃銃による廊下いっぱいの制圧射撃を放ってくる。
しかし、そんな物は射線上である廊下にいなければ問題ない。
すぐに真横に飛んで部屋に入ると、元いた空間に大量の弾幕が張られていることを知覚したまま、部屋の天井に視える光の線を切ることで、上のフロアの床ごと部分的に崩落させ、跳躍だけでその穴から三階へ移動する。
三階に待ち構えている敵は、運が良い事に別棟にいるため、通信手段を一時的に失っている先ほどの二人が湊のフロア移動に気付くことはない。
ならば、後は二人の頭上まで移動し、銃を構えながら窓から飛び降りれば、
「ぐっ、横からだとっ!?」
「一体どうやってっ」
落下途中のすれ違い様に真横からの奇襲という形で、簡単にヘッドショットとハートショットを決める事が出来た。
いつもはそのまま敵が死ぬので反応を見られないが、今日はペイント弾の使用により、こちらの想定外の動きで撃たれた敵の反応を見る事が出来る。
リアクションは驚きばかりで一様だが、それでも珍しい物が見られて気分が僅かに良くなった。
そうして、落下途中に銃を仕舞いながら、空いた手で窓枠を掴んで廊下に復帰すると、別棟の屋上から飛んできた銃弾を刀で弾き。
まるで何事もなかったかのように、三階へ上がる階段に向かって湊は駆けて行った。
＊＊＊
隠しカメラの映像で湊の動きを見ていた司令部は、苦笑しているイリスを除いて、二人ともが信じられないと絶句していた。

特筆すべきは施設内での移動速度だが、廊下を走るのと、階段を上り下りするのとでは、当然速度は変化する。
坂道でさえ速度の加減があるのだから、階段という足場の悪い場所ならば、平地に比べて速度は格段に落ちるのが普通だ。
そのため、建物内で作戦行動を取るときには、階段付近はトラップや敵の待ち伏せを受け易く、慎重に進むか迂回して別の安全なルートを取ることが多い。
しかし、湊は廊下からそのまま壁を走り、まったく減速せずに階段を上りきってしまった。
「速度出ました。平均、時速六十キロオーバー……」
「武器を持ったままで？」
「はい。小狼君はどちらか一方の手で、ずっと刀を持ったまま移動しています」
ナタリアはバーバラから報告を受けて、どんな方法を使えば、そんな世界陸上で未来永劫抜かれることのない記録を出せるほどの走力を手に入れられるのかと頭が痛くなった。
刀を持ったままでそれならば、平地で何も持たずに走れば、時速七十キロというダチョウや狼に匹敵する速度を出せるだろう。
そんな、あまりに普通では考えられない速度で駆け抜けたため、電文を打つ暇がなく、セルゲイらにトラップの発動タイミングを伝えられなかったくらいだ。
通信機が使用できるのであれば、もう少しだけ可能性はあったが、作戦中にＩＦの話などしていられない。
相手はどういう訳か、硬い天井を一振りの刀で切り崩して移動まで出来るのだ。普通の人間の移動方法を基準にして仕掛けられたトラップはもはや意味を為さない。
ならば、自分の兵の力を信じるしかないとして、ナタリアは湊が三階にいる者らの方へ真っ直ぐ向かっていることを電文で残っている兵らに伝えた。
「フゥ……こんな指示とも言えない、ただの連絡しか出来ないなんて、いつ以来かしら？」

「アタシがいたときに、雪山で一回あったろ。高い金出して買った寒冷地仕様の通信機が、なんと初日で壊れたってやつだ」
「ああ、そんなこともあったわね。でも、今回とはケースが違い過ぎるわ。個人の身体能力と技能のみで、少数精鋭の分隊一つを相手にするって普通じゃないわよ」
言いながらカメラの映像に目をやると、グリゴリーとカルロの放つ銃弾を刀で弾きつつ、螺旋の軌道で床・壁・天井を走って接敵し、そのまま武器を両断している湊の姿が映った。
まさか、このまま斬り殺しはしないだろうなと不安が過ぎったが、武器を失って後方に回避しようとした二人の喉へ、ポケットから取り出した口紅で線を引いたことで、湊は素直にイリスの言いつけを守っていることを理解する。
だが、これでもう狙撃手の二人しかメンバーは残っていない。
贔屓目を抜きにしても、自分の兵らの実力は裏の世界でも一級品のはずだが、あんな子どもにここまで一方的にやられては、先ほどのイリスの言葉を信じるしかない。
ジャケットの内ポケットから煙草を取り出し、火を付けてゆっくり煙を吸い込むと、それを静かに吐き出しながらナタリアは呟く。
「ボウヤはどうして真っ直ぐに隊員たちのいるところへ向かえたのかしら。貴女、こっそり教えたりしてないわよね？」
「当たり前だろ。ってか、それもアイツの力だよ。壁の向こうも簡単に把握出来るんだとさ」
「……もはや、驚きを通り越して呆れるしかないわね。あの子が当時の米国にいれば、スターゲイト計画も潰れることはなかったでしょうに」
壁の向こうも見られると聞き。ナタリアは、かつてアメリカが行っていた、軍事作戦に透視能力者を使おうとしていた計画を思い出した。
だが、その視線は、屋上に現れジグザグに走って接近する湊に、応戦する間もなく易々とヘッドショットを決められているパトリックの映る画面に向かっており。口調もどこか投げやりである。

通信担当のバーバラは、湊を超能力者か何かと思ったらしく、素直に驚きながら目を輝かせているというのに、これも若さという名の人生経験の差なのかとイリスは肩を竦めた。
「さてと、あとはラースで終わりだな。別棟には三階に降りなきゃ渡れないし、アイツきっとショートカットするぞ」
「まぁ、渡り廊下の屋根を行く方法もあるしね。その程度じゃ、もう驚かないわ」
いい加減、湊のやることにリアクションを取るのが面倒になってきた。そう言いたげに、ナタリアは足を組んで完全に見物モードに入る。
いくら敗戦の色が濃いと言っても、まだ兵が戦っている状態で司令官がこれでは、名切りの鬼の相手をさせられているラースたちが不憫に思えてきた。
だが、イリスの考えるショートカットとナタリアの思っている物が違っていたため、せいぜい驚いて足を机にぶつけてしまえ、とイリスは悪戯気分で湊が動くのを待った。
そして、
「はあっ!? ちょっと、正気なのっ!?」
カメラだけでなく、肉眼でも湊の動きが見えたナタリアは、驚いて立ち上がる際に机に足をぶつけて顔を痛みで歪めつつ、別棟の屋上に向けて跳躍した湊を目で追っていた。
湊が飛んだ元々パトリックのいた場所と、ラースのいる場所を直線で結べば四十メートルは離れている。
屋上の広さを考えれば、いくら助走をつけて速度に乗ったところで、絶対に届く距離ではない。
湊がいたのは四階の屋上なので、ビル五階分の高さだと考えれば、およそ地上二十メートルほどの位置になる。その高さから落下すれば、いくら何でも死んでしまうだろう。
だというのに、飛んでいる本人は、パトリックから奪ったブレーザーＲ９３を空中で構えて、驚き呆けているラースを撃っている。
不安定な姿勢でありながら、心臓辺りに弾を当てたのは見事としか

言いようがない。
だが、自分だけでなく、施設内にいた他の隊員らも、驚き、窓から身を乗り出すように見ていることから、おかしいのは自分ではなく相手だと断言できる。
そう考えているナタリアの隣にいるイリスが、
「アハハッ、マジで飛んだぞアイツ。やっぱり馬鹿だな」
などと言いながら、どこか優しい目をしているせいで感覚がおかしくなりそうだが、通信が復活していることを確認し、一階にいる隊員の誰かが救助にいけないか指示を出そうとした。
「チャド、ヤン、貴方たちで受け止められる？」
《いや、無茶ですよ。小狼君、刀持ってて危ないですし》
返事を聞いて、そういえばそうだったと心の中で舌打ちをする。
建物の骨組みごと天井を切断してしまう切れ味ならば、受けとめるのに失敗すれば、その人物は真っ二つにされてしまう。
一人の命を救うために、大切な隊員二人の命を懸ける事は出来ない。
そうして、会ったばかりの少年を見殺しにすることに、僅かな罪悪感を覚えながら、対岸まで残り十メートル程のところで徐々に落下を始める湊をナタリアは無言で見つめた。
「……ねぇ、あの子を預かるのすごく嫌になってきたんだけど」
完全に死ぬと思っていた。当然だ。高さ二十メートルの場所から、刀とライフルを持ったまま落下すれば、重力に引かれて着地した足の骨が砕ける筈なのだから。
それも運が良ければの話で、普通なら勢いを殺せずそのまま着地に失敗し、全身を強く打って死に至る。
だというのに、相手は綺麗に着地して何事もなかったかのように歩いて来る。それを見たナタリアがげんなりしながらそう話すと、
「猫みたいだろ？　アイツ、空から降ってきても、普通に着地して歩いてるからな。多分、パラシュート無しにスカイダイビングとかも楽しめるんじゃないか？」
そんな風にイリスは呑気に答えて立ち上がり、戻ってくる湊を迎え

に行ってしまった。
さらにスピーカーを通して、
《いや、あれで無事ってあり得ないだろ……》
《すっげー、ジャパニーズ・ニンジャって実在したんだな》
と、隊員らもどこか呆けている様子が伝わってくる。
戦闘終了は、圧勝して気分が良いか、仕事自体が後味の悪いもので酷い気分だったりと、そんな二択が普通になっていたので、こんな現実感のない気が削がれてしまう終わりなど全員初めてだ。
けれど、最後のラースも撃たれてしまったので、自分たちの負けは決定しているため、これ以上この場にいる意味はない。
そうして、隊員らに戻ってくるよう告げ、ナタリアは溜め息を吐きながら、イリスと湊の二人の元へ向かうためゆっくり立ちあがったのだった。

夜――〝蠍の心臓〟宿舎
演習後、昼食を取ると、湊たちは離れた場所にあった蠍の心臓（コル・スコルピイ）の本部に向かった。
民間軍事会社なだけあって、本部は基地のようになっており。戦闘ヘリや戦車など、日本ではほとんど見なかった物も置いてあったが、到着した時間が遅いということもあって、滞在中に使う個室や、食堂とトレーニングルームの場所だけ教えると、その日は夕食を食べて解散の流れとなった。
そうして、入浴なども済ませて湊が寝たのを確認すると、イリスは部屋を出て、ナタリアの使っているプライベートルームにやってきていた。
相手も入浴を済ませて、楽なバスローブ姿になっているが、ソファーの前のテーブルにはワインやブランデーに、チーズなどの酒のあてまで置かれている。
「どれから開ける？　テキーラからでも別に構わないわよ」
「いや、赤ワインで良いよ。酔うまで飲むつもりはないんだ」
久しぶりに一緒に飲むということで、上物の酒も用意していたのだ

が、相手がそういうのならほどほどに楽しめるものを選ぶことにし。ナタリアは「そう」と答えて、九十年物のワインのラベルを剥がしコルクを抜いた。
綺麗に抜けたのでないとは思うが、割れたコルクが混入しているといけないので、初めに少しだけ空きグラスに注いで確かめる。
光りにかざしても何も問題ないことを確認した後、改めて自分とイリスのグラスに注ぐと、ナタリアはグラスを手に取った。
「それじゃあ、とりあえず再会にってことで」
「ああ、再会に乾杯」
控えめにグラスをぶつけ、甲高い音が静かな室内に響く。
大きなグラスの底に数センチだけ注がれていたワインを二人は全て飲み干し、テーブルにグラスを置くと、再びナタリアがワインを注ぎながら口を開いた。
「貴女、ボウヤと息子を重ねているでしょう。やめといた方が良いわよ。こっちの世界に入った時点で、ボウヤもまともな死に方なんて選べないんだから」
「そんな事は分かってるよ。てか、アイツはロランと全然似てないさ。ロランはちょっとぽっちゃりした父親似だったからな。アイツみたいな天から二物も三物も貰って生まれたようなやつとは比べられないって」
イリスはそういって苦笑しながらテーブルに乗ったグラスを手に取ると、新たに注がれたワインに口をつける。
隣にいるナタリアは相手の表情を見て何か言いたげにしていたが、ここで何かをいうつもりはなかったのか、別の話題に移った。
「さっき、ボウヤのことを少し調べさせて貰ったわ。約六年の活動でキルスコアが千を超えてるって異常よ？　しかも、これはあの子がほとんど利用していなかったギルド経由の情報。実際、傍で見ていた人間の印象だとそれは正しいのかしら？」
一口サイズのチーズの包み紙を剥がし、それを口に放り込んでから、ナタリアはワインを少し口に含む。
調べた情報が間違っているとは思っていない。ギルドはその情報

量で裏の世界で一大組織として成り立っているのだ。多少の誤差はあっても大きなミスはないだろう。
だが、そこにはギルド経由の依頼の実績だとも載っていた。
ならば、湊にはギルド以外の仕事の窓口が存在し、普段はそちらで依頼を受けているに違いない。
流石のギルドも、意図的に素性を隠している人間など、依頼がなければ本格的に調べようとしないので、今後の付き合いのために知っておこうとナタリアは考えていた。
そして、ナタリアの質問から少し間を置き、新しいワインを開けながらイリスはようやく口を開いた。
「全然違うよ。アイツは途中から一人でも仕事をしてるからね。正確な実数は分からないが、とっくに二千は超えてるはずだ」
「は？　そんな、どうやったら個人で殺せるのよ。ばれない方がおかしいわ」
湊の活動はいままで日本国内のみで行われていた。
平和な土地で、警察の捜査能力が優秀となれば、仕事のしにくさでは世界でもトップクラスの国だ。
いくら殺した相手の処理を死体処理屋に任せているといっても、殺した痕跡を普段から完璧に消せるとは思えない。
半数はギルドの協力を得ているので、それで証拠を抹消出来ているにしても、個人でさらに千人も手に掛けているなら、既に警察も不審死について調べ始めているはず。
まさか、その捜査の手から一時的に逃げるため、わざわざ自分たちを隠れ蓑にしようと思ったのではあるまいな、とナタリアが疑いかけた頃、
「大丈夫だって。アイツ、マフィアとか大量に殺してるんだ。一晩で百人とかってときもあったから、そういうデカイのが積み重なってそんな数にな」
イリスがそういって笑った。
本人は警察にばれる可能性がないと笑ったのだろうが、マフィアを殺してきたなら、そのマフィアに狙われている可能性が新たに浮上す

る。
　そちらに気付いていないようなので、ナタリアは自分たちが巻き込まれてマフィアと戦争になることを危惧し、あえて伝える事にした。
「私たちは戦争屋じゃないわよ。アヘン漬けの糞ったれ共と戦争なんてゴメンだわ」
「アヘンっていつの時代だよ……。てか、そっちも大丈夫だ。船底いっぱいの肉塊と血の海なんて見たことあるか？　流石のアタシも吐きそうになったよ。自分が敵なら、二度と関わりたくないって」
　咽るほど濃密な血と死の匂い。その真ん中で、身体中を返り血で汚しながら、蒼い瞳を輝かせて表情一つ変えず湊は立っていた。
　脱出用のボートに移る前に、海に飛び込んで血を落としていたが、長年この業界で仕事をしてきた人間がショックを受けるほどの場面で、よく冷静でいられるものだと、味方であっても恐怖した。
　味方である自身がこうなのだから、敵側の人間は面子を潰されたままであっても、二度と関わるまいと思ったに違いない。
　そして、事実、その後に報復を狙っている者の情報など一切あがってこなかった。
「ま、そういう訳で、いまアイツを狙ってるのは仙道だけだと思うぞ。どこで知ったのか、小狼が名切りって気付いてやがった。近くにずっといたアタシらが知らなかったって言うのにな」
「ちょっと、そんな相手が来るくらいなら、マフィアと戦争する方がマシじゃない」
「仙道は小狼が完全に目覚めるのを待ってる。だから、まだまだ大丈夫だ。アイツは自分の血筋すら知らないからな」
　自分が人殺しの一族であると自覚しない限り、本当の意味での湊の覚醒はない。
　だからこそ、仙道が再びやってくるのは当分先だと、この一年の旅の中で仙道を超える力を付けさせようと考えているイリスは、自分たちの滞在中に仙道がここへ来る事はないと断言した。
　それが本当なのかは分からないが、あの戦闘狂と呼ばれる男がそこまで入れ込むだけの力を湊は見せた。

自分もいい酒が手に入ったときには、ワイナリーで寝かせておいて、特別なときに開けたりするので、仙道の湊に対する認識も同じようなものだろうかと推測し、ナタリアは深く息を吐くと静かに話す。
「はぁ……まぁいいわ。でも、仙道がきたらボウヤに任せるわよ。こっちにあれに対抗できる戦力はないんだから」
「ああ。最悪、アイツに禁の一つを破らせれば負けはない。もしものときは、アタシから頼んで自分を曲げてもらうさ」
その言葉に、ナタリアはまだ湊には隠し玉があるのかと、呆れて文句を言いたくなった。
けれど、湊に禁を破らせるといったイリスの横顔が、どこか悲しげに見えたので、彼女がどれだけ湊にそれをさせたくないのか分かってしまい何も言えなかった。
ずっと会っていなかった相手だが、古い知り合いであり、良き友人だ。
ならば、そんな彼女の我儘も、相手の庇護する対象が中学生の少年ということもあり、出来る限りは聞いてやろうと思った。

第五十八話　幽霊と亡霊

３月２０日（月）
朝――〝蠍の心臓〟宿舎
湊とイリスがやってきて一夜が明けた次の日。
部隊で最年少のレベッカは、朝のトレーニングに向かうため自分に宛がわれた個室を出ると、ピンクのジャージ姿で廊下を歩いていた。
（あー、だるー……せっかく、イリスさんに久しぶりに会えたのに、あのハポンにべったりだし。そのハポンも昨日は訳分かんないキレ方して、近距離でガバメント喰らわしてくるし。ほんと嫌になるわ）
彼女は、幼い頃から父であるラースと共にここで過ごし、まだ部隊にいたころのイリスにもよく可愛がって貰った。
だが、彼女はある作戦に参加し、それを成功させて戻ると、そのまま脱退を申し出て去って行ってしまった。
行き先は彼女の知り合いのいる日本だと分かっていたが、レベッカは会いに行こうとはせず。部隊の者たちに射撃や格闘術を習うことで、イリスがいた場所と同じ頂きを目指す様になる。
そういった努力の甲斐もあって、実際は入社前から訓練に参加させて貰っていたが、入社から二年という異例の速さでナタリアの私兵部隊に所属が決まった。
訓練を始めた時期が早かった事、父のラースの射撃の才能を受け継いでいた事、何より彼女自身の向上心が高かったことで、部隊に入った時点でイリスと同等の実力だとナタリアに認められていたのだ。
（それで、実戦をさらに積んで部隊にいた頃のイリスさんより強くなったっていうのに。あのハポン、認めないとか急に因縁つけてきてホントにムカつく！）
そう。久しぶりの再会で、イリスに自分がどれだけ強くなったのかを見せようと思っていた。
また、イリスにやたらと可愛がられている相手を、一方的にボコボコにすることで、自分の方が遥かに優れていると証明するつもりだった。

それを、防具もつけず、髪も束ねていないという舐めた格好だというのに、相手はたった一人で部隊の全員を倒して見せた。
倒された全員が狐につままれたような顔をしていたが、相手の服には塗料が全く付着しておらず。
撤収前に負け惜しみに背後から撃った弾も躱され、逆に腕を掴んで地面に引き倒されると、胸をブーツで踏まれたまま腹部にサブマシンガンを弾が尽きるまで撃ち込まれる無様を晒してしまった。
その痣はいまも痛々しく残っており、これでは、流石に相手の実力を認めない訳にもいかず。しかし、平和な島国育ちの人間に、幼い頃から銃は身近な物で、さらに部隊の者らを見て育った自分が負けていると認めるのも癪で、一晩中苛々と寝れない夜を過ごすはめになった。
(もう、このストレスはパトリックとかをボコボコにすることで発散しよっと。いなかったら、一般部隊の人らと組手して気分変えれば良いし。その後はシャワーでリフレッシュよ!)
湊には極力関わらない事に決めた。精神衛生的にも、それがベストな選択だと断言できる。
そうして、運動によるストレス発散と、運動後のシャワーで気持ちを切り替えることにして、トレーニングルームに向かう廊下を曲がりかけた、その時、
「きゃあっ」
レベッカが曲がっている途中で横から人が来てぶつかってしまった。
衝撃はあまりなかったが、相手の頭が丁度胸にぶつかる形になったせいで、一瞬息が詰まってしまった。
今後の予定を決め、気分を変えようと思っていた矢先に、なんともタイミングの悪いことだと思いつつ、レベッカは自分の胸に頭が当たるような身長の人間がいただろうかと考え、ぶつかった場所で立ち止まっていた相手に目をやった。
「ヒィっ!?」
目をやった瞬間、レベッカは思わず後退ってしまう。

なんと、そこにいたのは幽鬼のように腕をだらんと垂らした、髪の長い白い着物姿の女だったからだ。
真っ直ぐ立てば身長は同じくらいかもしれないが、相手は裸足である事に加え、腕ごと肩や頭を俯かせているため、身長１６５センチのレベッカの胸辺りに頭がくることになったらしい。
しかし、そのことに気付いたところで、顔が髪で隠れた日本の死に装束姿の女が、何故こんな中東の軍事会社の宿舎にいるのかが分からない。
（な、なによコイツ。確かジャパニーズ映画のサダコ？　とかってやつかしら。ていうか、幽霊がどうして朝から宿舎を徘徊してるのよ……）
誰かが日本に行ったときに憑かれてきたか。それとも、湊かイリスにくっついてきたのか。
表情を引き攣らせながらファイティングポーズを取って、レベッカがそのように考えていると、今まで立ち止まっていた幽霊に動きがあった。
（……行っちゃった。でも、あっちってトレーニングルームのある方で、私もそっちに行きたかったんだけど！）
幽霊は急に動きだしたかと思うと、そのまま廊下を直進し、トレーニングルームの方へとおぼつかない足取りで行ってしまった。
だが、自分の行こうとしていた場所に幽霊が向かったと知って行きたいとは思えない。
けれど、自分はトレーニングをしてストレスを発散するつもりでいたのだ。
幽霊への恐怖とストレス発散。そのどちらを優先すべきか悩んでいると、バタバタと走る複数の足音が近付いてきた。
足音のする方へ顔をあげると、通信担当のバーバラが、大きなロザリオのネックレスを持ったパトリック、『悪霊退散』と漢字で書かれたお札を持ったセルゲイの二名と共に走ってくるところだった。
やってきた三人は立ち止まっていたレベッカに気付くと、どこか興奮した様子で話しかけてくる。

「あ、レベッカちゃん。ねえねえ、帯だけ黒の白い着物姿した幽霊みなかった？」
「え？　ああ、幽霊だったらトレーニングルームの方に行ったけど？」
「トレーニングルームだな！　よっし、行くぞパトリック！」
「おう！　除霊して女の子にモテモテになってやるぜ！」
　幽霊の居場所を聞き出した途端、セルゲイとパトリックはロザリオを振り回して走って行ってしまった。
　クリスチャンに怒られるぞ、とレベッカが二人の去って行った方へ白い目を向けているのを見て、残っていたバーバラが苦笑いを浮かべていたが。彼女は彼女で幽霊を追っていたらしく、巻物のような物をポケットから取り出し、何やらやる気を出している。
「よし、私も幽霊をこの巻物に捕まえて掛け軸にするんだから！」
「は？　え、ちょっと、バーバラ。幽霊の掛け軸は別に本物を閉じ込めた物じゃ……って、行っちゃった」
　巻物に幽霊を閉じ込めたところで、幽霊の描かれた掛け軸になる訳ではない。
　その程度のことは知っていたので、レベッカは彼女を引きとめようとしたのだが、通信担当のくせに足は部隊内でも三番目に速い彼女は去ってしまった。
　先に向かった馬鹿たちも気になるが、バーバラのことも気になる。
　そうして、知り合いが大勢向こうにいるなら、自分も別に怖くないと心を決めると、レベッカは三人と幽霊を追うため、トレーニングルームに向かって駆け出した。
　――トレーニングルーム
　レベッカがトレーニングルームに向かうと、入り口付近に人だかりが出来ていた。
　入り口付近に固まっていた一般部隊の者たちに通して貰い、入り口に到着すると、そこには先にこちらへ向かっていた三人がいた。
　てっきり、先に中に入っているとばかり思っていたため、不思議に思いつつレベッカが三人に話しかける。
「あれ、中に入ってなかったの？」

「え？　あ、ああ、なんか幽霊が変な動きしててな。トレーニングしてたやつらも、びびって出てきてたし。少し様子を見てるんだ」
セルゲイに言われ、彼が指し示した方へ目をやると、確かに体育館ほどの広さのあるトレーニングルームの床の上で幽霊がぐだぐだと寝転がっていた。
たまに足を広げたまま座った状態で、上半身をぐらつかせながら最終的に前屈のような姿勢を取っているが、基本的に床の上で寝返りを打つようにごろごろしている風にしか見えない。
誰に危害を加える訳でもなく、ただ広いところで遊んでいるのなら、不気味ではあるものの、チラリと見える足や横顔が綺麗なこともあって、なんとなく和むような気もするとレベッカは思った。
「……何も危害がないなら放っておけば？　ほら、トレーニングルームの床ってひんやりしてるし。たぶん、涼める場所を探してたのよ」
「待て待て、あいつは宿舎を徘徊してたんだぞ？　暑い日中は涼しいここにいたとしても、涼しい夜に薄暗い宿舎の廊下で遭遇したときを考えてみろよ。俺は思わず失禁する自信あるぜ」
ロザリオを強く握り閉めながら話すパトリック。
女子にモテたいと言って張り切っていたが、実は内心ではかなり怖いようで、今も下に視線を向けると、ガクガクと膝が笑っていた。
そのあまりの情けなさと、失禁する自信があるという発言を聞いたレベッカは、思わず距離を取りつつ汚物を見るような目で相手を見ながら口を開く。
「きたなっ。ちょっとパトリック、あんたやっぱり一般部隊に戻りなさいよ。ボスの私兵にあんた相応しくないって」
「はぁっ!?　あのガキに無様にやられたお前に言われたくないぜ。お前こそ、新兵からやり直してこいよ」
「うっさいわね！　屋上でこそこそしてたから生き残ってただけのくせに、あんただって下で銃撃戦やってたら最初にリタイアしてたわよ！」
「それはねーな！　初めから撃ち合いって分かってれば、俺様お得意の二挺拳銃を披露してガキを仕留めてたさ」

レベッカは二十歳で、パトリックは二十八歳だが、精神年齢は近いらしく、周囲が呆れるような子どもの口喧嘩はずっと続いた。
だが、幽霊の方に新たな動きがあると、今まで二人を止めていなかったセルゲイが声をかけて、二人の喧嘩を止めさせる。
「おい、幽霊が動いたぞ。急に立ち上がりやがった」
「本当だ。どっかに移動するのかしら？」
見ると、ぐだぐだを止めた幽霊が、いまだ俯いたままだが一度立ち上がり、入り口から見て最奥の壁の方へと歩いてゆく。
もしや、そのまま壁を通り抜けるのか、とそんな風にギャラリーの期待が高まったとき、壁の直前で相手は立ち止まってしまった。
「止まっちゃいましたね。通り抜けには勢いがいるんでしょうか？」
「なんで微妙に物理系なのよ……」
「え？　だって、通り抜けるにしても、壁に進んでいくのって怖くない？　ぶつかったら痛いだろうなって思ったりして」
「ごめん、幽霊の気持ちは分からないわ」
バーバラの言いたい事は分かるが、ぶつかって痛いことを想像するのならば、ゆっくり進んでいった方がいいに決まっている。
彼女がどうしてそれに気付かないのか不思議だが、あえて指摘して恥をかかせるつもりはないので、レベッカは話を適当に切りあげ、幽霊の動向を見守った。
そして、壁に向かうこと数分、幽霊はおもむろに上体をだらんと下げると、そのまま床に手をついて逆立ちを始めた。
足は膝を曲げているので、逆立ちをしていても膝より上まで着物がめくれることはない。
ゆっくりと逆立ちに移って行くのを見ていたため、足を曲げて着物の裾がめくれないと分かったときには、セルゲイとパトリックだけでなく、後ろにいた男たちも悔しそうに舌を打ち、嘆く者もいた。
だが、レベッカとバーバラが白い目を向けると、男たちは途端に視線を逸らし出したので、二人は呆れを通り越し、幽霊にまで欲情する変態という烙印を心の中で密かに押す事で気分を晴らすことにした。
そして、再び幽霊に視線を戻すと、先ほどまで逆立ちをしていた幽

霊が、少々ゆっくりだが逆立ちのまま腕立てをしていることに気付く。
逆立ちの腕立て伏せは、バランスを保つことや、自分の体重全てを腕で支えるなど、通常の腕立ての数倍の負荷がかかるハードなメニューだ。
ここにいる者は、普段から自分たちもトレーニングをしているので、それをよく理解しており。黙々と一定のペースで腕立てをしている幽霊は、かなりの熟練者だとその場の全員が思わず認めてしまった。
「うーん、すごいね。いま何回いった？」
「三百を超えました！」
レベッカが尋ねると、開始時点から数えていた一般部隊の兵の一人が答える。
その答えに、自分では不可能な回数だとパトリックがゲンナリし、筋トレに少々のこだわりのあるセルゲイは腕組みをしてジッと熱い視線を送る。
さらに、そこから数十分経ち、幽霊の腕立てが千回を超えたところで、ギャラリーをかき分けて新たな人物が数名やってきた。
「貴方たち、こんなところで集まって何しているの？」
「ああ、ボスおはようございます。いや、ちょっと幽霊が出たんで追い掛けてきたんですけど、その幽霊が急に腕立てを始めちゃって」
「幽霊？　なに馬鹿なこと言ってんだ。セルゲイ、お前までレベッカたちと一緒になってどうすんだ」
やってきたのはナタリア、イリス、ラースの三人で、レベッカの話しを聞いたラースは、部隊の若者組に混じって三十五歳のおっさんが遊んでるなと嘆息する。
だが、現実に幽霊がいるのはこの場の全員が見ていたため、セルゲイはトレーニングルームの中で、今も逆立ち腕立て伏せをしている幽霊を指差し反論した。
「いや、待てって。ほら、今もいるんだ。もう三十分以上続けてる。既に千二百回に突入してるぞ」

「ああ？　……ん、お、あら？　いや、本当に何かいるな」
「ほら見ろ」
　言われてラースも中の様子を窺うと、どこか不気味な雰囲気を纏った着物姿の女が一定のペースで腕立てを続けていた。
　あまりに異様な光景過ぎて、もしや、あの場所に何か埋まっていて、女は必死にそれを掘り出そうとしているのでは、と兵の中で噂され始めるほどだ。
　信じられないが現実に存在している幽霊に、目を細めつつジッと観察するラースの横で、先に見ていた四人の内バーバラを除いた三人がどうだと言わんばかりに勝ち誇っている。
　しかし、それも次のイリスの言葉で唐突に消えた。
「ばーか、ちゃんと見ろよ。あれは、小狼だ。おーい小狼！　充分運動したなら戻ってこい！」
　イリスがそうやって幽霊に声をかけると、幽霊は逆立ちの状態からゆっくりと足を下ろし、最初の腕と頭をだらんと垂らした状態で入り口まで歩いてきた。
　おぼつかない足取りと、そんな風にだらけきっているせいで顔は見えないが、入り口までやってきた幽霊の頭に手を置き、イリスは相手に話しかけた。
「ん？　あ、オマエ、寝ぼけてるだろ。ほら、髪も梳かしてやるから、ちゃんと顔洗いにいくぞ」
　そう声をかけるなり、イリスは半分寝ぼけている湊の手を引いて歩いて行ってしまった。
　後に残された者は、呆れた様子で煙草に火を点けているナタリアと、あまりにオンオフの激しい湊に苦笑しているラースを除き、全員がパクパクと口をあけて言葉を失っている。
　そうして、ナタリアとラースが去ってしばらくしてから、ようやく復活したレベッカ、パトリック、セルゲイの三人は口を揃えて叫んだ。
『ふざけんなぁぁぁぁぁ!!』
　しかし、叫んだところで、それが湊に聞こえているはずもなく。
　顔を洗い、髪をイリスに梳かして貰った湊が、着物のまま朝食を

取っていると、遅れてきた三人が口々に紛らわしいと怒り、それを湊が不思議そうに首を傾げている光景が食堂で見られたのだった。

午後――バーバラ個室

幽霊の正体が就寝用の着物をきた湊で、貞子スタイルで徘徊していた理由が、寝ぼけた状態のまま日課のトレーニングをしに行っていたと判明したことにより、宿舎には平穏が戻った。

その後、一般兵らにイリスと湊の滞在が改めて伝えられ、今日は湊に施設の案内をするということになり、バーバラを案内役としながらイリスと共に館内を回っていた。

だが、ある程度回ると、後は利用しながら慣れていった方が良いとイリスが進言したことにより、空いた時間を利用してバーバラの部屋に二人は招かれることになる。

部屋に向かう途中で訓練を終えて暇そうにしていたレベッカも加わって、最終的に部屋に向かう人数が部屋主含めて四人になったが、案内された者たちは部屋の中を見た途端なにやら微妙な表情になった。

「えへへ、少しごちゃごちゃしてますけど、下手に触らなければ大丈夫なんで安心してくださいね」

部屋主は、部屋を見たイリスらが微妙な表情をしたことで、物の多い部屋に呆れていると思って照れたようだが、実際はそんなことで微妙な表情をしたわけではない。

イリスたちが微妙な表情をした理由、それは彼女の部屋に置かれた怪しげなインテリアの数々のせいであった。

壁に作られた棚には、水晶製と思われる髑髏に始まり、虫の入った琥珀、赤黒く汚れたボロキレにしか見えないものや、暗い紫色の液体の入った小瓶などが並び、黒魔術でも始めるつもりなのかと聞きたくなる。

さらに、他の者は何も気付いていないようだが、湊の目にはいくつかの品に黒いもやも視えており、よくもこんな部屋で生活していられるものだと感心していた。

「……ピオクタニンか」

「何だそれ？　その怪しい小瓶の正体か？」
「ああ、一般には消毒作用のある塗り薬として知られてる。といっても、こんな保存方法じゃ質も変化してると思うが」
湊が棚に置かれていた小瓶を眺めてアナライズにより中身を看破すると、尋ねたイリスは頷いて感心する。
アナライズは一見万能で便利な解析能力のように思えるが、実際は、本人の知識に依存する部分が大きい。
イリス自身はその事を知らないが、とりあえず、謎の毒薬と思われていた物が、普通の薬であると分かって安心していた。
しかし、それとは逆に部屋主のバーバラは、湊の言葉を聞いて顔を青褪めさせてワナワナと震えている。
そんな彼女の異常に他の者も気付くと、もっとも近くにいたレベッカが様子を尋ねた。
「バーバラ、どうかしたの？」
「そ、その小瓶、ただの薬なんですか？　私、悪魔の血だって聞いて買ったんですけど……」
『……は？』
バーバラの言っている意味が分からず、イリスとレベッカが聞き返す。
すると、バーバラは木製の机まで駆けていき、引き出しを開けて慌ただしく中を漁ると、紙の束を取り出して戻ってきた。
彼女は持ってきた紙の束から一枚を取り出し、それを湊の顔の前に突きつける。そこには『商品名：悪魔の血、３６６米ドル』と書かれていた。
「……ピオクタニンは１００ｃｃ辺り１０米ドル程度で買える。完全に騙されたな」
「そ、そんな……はぁっ!?　じゃ、じゃあ、他のやつはどうですか！」
自分が騙されていたことに知り、落ち込むと思いきや、バーバラは悪魔の血が偽物であると見抜いた湊に他の物の鑑定を頼んできた。
骨董品屋でバイトをしていたこともあり、本人の専門は趣味で蒐集している刀剣類の鑑定だが、一応、他の物もある程度は真贋を確かめ

る事は出来る。
　そのため、依頼で品物を取ってくる際に、それが本物であるかを湊に確かめさせているイリスは、バーバラを止める事はせず。
　近くにあった椅子に腰かけて、レベッカにも近くに座るようジェスチャーで伝えて、面倒そうに鑑定を続ける湊を眺めることにした。
「あ、それは市場のお爺さんが拾った隕石で、３０ドルで売ってくれたんですよ」
「石質隕石だな。本物だし、大きさと質を考えれば買った値段の七倍はしても良いくらいだ」
「本当に？　やったー！」
「ただ、未登録だろうから、学術的な標本価値は全くない。売るなら、ちゃんと隕石学会で登録して貰った方が良い」
　未登録のままでは標本価値がないと言われても、本人は自身のコレクションとして持っているつもりらしく、本物だと言われただけで透明なケースに入った石ころを見てはしゃいでいる。
　そんな女性とは対照的に、ほとんどガラクタばかりを見せられている湊は、いつの間にかマフラーから取り出したメモ用紙で目録を作り、真贋及びその商品の価値を淡々と書いていた。
　日本の中学生である湊が、そんな次々と鑑定していることが余程不思議に思えたのか、クッションに座って眺めていたレベッカが、隣に座っているイリスに尋ねる。
「ねえ、イリスさん。あのハポン、なんであんなに鑑定出来るの？　もしかして、バーバラを騙して、いくつか貰って売り捌こうとしてるんじゃないの？」
「アイツ、仕事がないときには骨董品屋でバイトしてたんだ。それ以前に、裕福な家で育ったみたいで、物を見る眼がかなり肥えてる。だから、ああいった鑑定は割と得意らしい」
「骨董品屋？　似合わないわよ。てか、あんなやつがいたら、誰も店に立ち寄らないし」
　明らかに棘のあるレベッカの敵意剥き出しな言い方に、聞いていたイリスはつい吹き出してしまう。

空港から演習場に向かう車内で既にレベッカは湊を見下していたが、さらに、演習で一方的に敗北した事で、完全に湊を敵と見なしたらしい。
普段ならば、十四歳の少年相手に、二十歳の女が何をしているんだと呆れるところだが、あそこまで実力差を見せられても湊を敵と認識し続け、さらに突っかかっていく者も珍しい。
そう思ったイリスは、そんなタイプの人間との関わりも湊には良い刺激になるだろうと、あえて仲を取り持つこともせず、本人たちの自主性に任せる事にした。
「それはですね。なんと切り裂きジャックが犯行に使ったという、曰くのあるナイフなんです」
イリスとレベッカが話している間に、湊らの方もほとんど鑑定を終えていたようで、残り少ない品の中から木製の柄に血の染みがついたナイフを見ていた。
いくら怪しいグッズ収集が趣味だと言っても、流石に殺人に使われていたというアイテムを金を出してまで買う感覚は、イリスもレベッカも分からない。
しかし、本人は否定しているが、この中で唯一、刀剣類の蒐集を趣味にしている少年は、ナイフの柄を素手で掴んだ次の瞬間に瞳を蒼くしていた。
それを見たイリスは、他の者が反応するよりも速く椅子から立ち上がり、ナイフを鞘から抜こうとしていた少年を、後ろから抱きしめる形で腕を拘束した。
「小狼、眼を戻せ。そんでナイフをゆっくり床に置くんだ」
ナイフを抜いたら、湊がそのままバーバラを切り殺すかもしれない。
前にベルベットルームの者たちから、湊が殺人衝動を抱えていると聞いていたイリスは、眼の変化をその予兆として警戒していた。
だが、全く相手を傷付けるつもりの無かった湊は、眼を普段の金色に戻しつつも、そのままナイフを鞘から抜いて答えた。
「……何もしない。眼はこのナイフを持ったとき、俺の中で新しい存

在が生まれたから変わっていただけだ」
「本当だな？　解放したらグサリってのは無しだぞ」
「そもそも、イリスの腕力じゃ俺を止められない。それで何も起こっていない時点で、イリスの考えは杞憂だ」
その言葉が事実であったため、イリスが掴んでいた湊の腕を離したとき、世界は緑色に塗り潰された。
影時間――屋上
現地時間にして午後七時、それがこの国での影時間が発生する時刻だった。
これは湊も海外に出て初めて知った事だが、影時間は世界中どこにいても発生する。
ただし、その発生時刻は日本の午前零時が基準となるため、他の国では時差の分だけ現地時刻の午前零時とずれていた。
影時間の存在を知っているイリスも、適性までは有していないため、湊は目録を最後まで作り終えると、新たに目覚めた力の確認に屋上へと出てきた。
《新しいペルソナ……楽しみ、ね……》
「ああ、こいつも俺じゃないみたいだしな」
座敷童子と並んで話す湊の手にあるのは、『ＩＸ・隠者』のカード。
黒いもやの視えていたナイフに触れた途端、何かが湊の身体に入り込み、それがそのまま力として収束し定着した。
あれが切り裂きジャックが事件で使った凶器でないのは既に確認している。そもそも、作られた年代が事件よりも新しい時点で気付くべきだ。
だが、偽物の中にいくつか本物が混じっていることにバーバラは喜んでいたので、そういった当たり外れの楽しみ方もあるのだろうと何も言うつもりはない。
そう考えながら、湊は過去の怨霊から生まれたペルソナを、カードを砕くことにより召喚した。
「こい、ジャック・ザ・リッパー！」
湊と座敷童子の目の前で、渦巻く水色の欠片の中心に光が集まり新

たな力が顕現を始める。
まず見えたのは、赤いフードを被った前髪で目元の隠れた少女の顔。
続けて、フードと同じ色をしたマントのような外套と、拘束具にも見えるいくつもの黒いベルトで構成された露出の多い衣服。
さらに、両手には湊が部屋に置いてきたものと同じデザインのナイフが、一振りずつ握られており。他にも外套の中にいくつか武器を携帯しているようだ。
そんな奇抜な格好をした、ウェーブのかかった長い金髪の少女のペルソナに、湊は座敷童子と共に近付いて英語で声をかけた。
「言葉は話せるか？」
《ちょっとだけ、話せます》
「日本語は？」
《貴方に入ったときに話せるようになりました》
それを聞いて湊は僅かに安心する。複数同時召喚したとき、座敷童子やジャックのように自我を持ったペルソナには自分の判断で動いて貰った方が戦術の幅が広がる。
けれど、座敷童子は日本語しか話せないので、ジャックが英語しか話せないとなると、二体の意思疎通が出来ず、湊が直接指示を出すか通訳する必要があった。
それも、ジャックが湊のペルソナになった際に解決していたようなので、湊は改めて相手に挨拶をすることにした。
「俺は湊。〝お前〟か〝お前ら〟だったのかは分からないが、俺が魂の残滓だったお前に触れたことで、お前は俺の中に入り込み、今の姿になったんだ。これからは一緒にいてもらう事になるが、お前が望むなら今解放して成仏させる事も出来る」
《大丈夫です。頑張ってお役に立ちます》
ジャックはそう言ってナイフの柄を掴んでいる拳をぎゅっと握り、湊の力になって頑張ってゆくとやる気を見せた。
相手は歳も身長も座敷童子と同じくらいのようなので、湊は普段人にはほとんど見せない僅かに優しい笑みを浮かべ、相手のフードに手

を置いて頭を撫でながら返事をする。
「そうか、ありがとう。ペルソナとしての名称がジャック・ザ・リッパーになっているんだが、名前はどうする？　女性名の方が良いなら、別の物を考えるぞ」
《そのままで良いです。ジャックと呼んでください》
《私……座敷童子……よろしく、ね》
ジャックの呼び名が正式に決まり、今まで待っていた座敷童子が相手に握手を求めて、控えめな笑顔で自己紹介を述べた。
すると、ナイフを腰のベルトについた鞘に戻し、ジャックも照れたような控えめな笑顔でそれに応じる。
そんな、幼い少女二人が仲良くしているという、傍目から見て非常に微笑ましい光景が繰り広げられている横で、ジャックの頭に置いていた手を離した湊は少し考え込んでいた。
（ジャックは確実に俺以外の魂だった存在だ。それが俺に入り、さらに自我を形成した状態でペルソナ化した。自我を持ったペルソナは座敷童子という前例があったし、他者の魂が俺に入ったのもデスという前例がある。だから、別におかしくはないんだが……）
そう。デスはシャドウという心の化け物だが、自我が薄れて怨念など想いの塊になっていた魂も似たようなものだと言える。
そう思えば、ジャックが湊に吸収されてペルソナ化したこと自体は十分に考えられることだ。
しかし、デスのときとは違い、湊はジャックを自分の内に取り込もうとはしていなかった。
そもそも、デスを封印したのはアイギスであり、湊はシャドウを人間に封印する方法などまるで知らない。
（……アベルの影響か？　〝楔の剣〟のせいで力自体を奪い易くなっているのかもしれない）
自らの内に目覚めた三番目のペルソナ、審判〝アベル〟。
翠玉の騎士であるそのペルソナの固有能力は、〝楔の剣〟と言って、他者のペルソナや影時間の適性を切り離し奪う力だ。
エルゴ研時代に、改造を終えてチドリと再会したばかりの湊が、新

しい制御剤が出来なければチドリに使おうと思っていた力の正体がこれであり。去年の六月に能力の説明を聞いたチドリは、最強のペルソナであるタナトスに対し、最凶のペルソナはアベルだと称した。
そんな、対ペルソナ戦で恐ろしい効果を発揮する能力と、魂の取り込みも似た力だと思った湊は、ジャックがペルソナとなったのは、その力のせいかと推測した。
「……まぁいい。ジャック、影時間が明けるまで話しをしよう。俺たちのことを教えるから、お前のことも教えてくれ」
《はい。えっと、生前の記憶はないんですが……》
湊がマフラーから取り出したレジャーシートにクッションを置いて、その上にそれぞれが座ると、三人は影時間が明けるまで一緒に会話を楽しんだ。
自我を持っている座敷童子は、お友達が出来たと喜び、ジャックも同じように嬉しそうにしていたので、湊はこんな出会いも悪くないと、影時間が明けてからイリスたちのいる部屋へと戻っていった。

第五十九話　中学二年生

４月４日（火）

朝――月光館学園中等部

湊が海外での活動を始めて半月ほど経とうとした頃、日本の月光館学園では、入学式を終えて新学期が始まろうとしていた。

新しいクラスの発表に胸を躍らせ、春休み明けで久しぶりに出会う友人らと挨拶をしながら登校してくる生徒たち。

そんな笑顔の集団の中に、新入生同様の真新しい制服に身を包んだ一人の男子が立っていた。

（えーっと、初めにクラスを確認して職員室に向かうんだったよな）

くしゃくしゃになった転入初日の案内プリントを、上着の内ポケットから取り出し眺めている、黒髪を短く刈りあげた少年の名は、伊織（いおり）　順平（じゅんぺい）。

家庭の事情により一人だけ引っ越し、本年度から男子寮での生活をスタートした転入生だ。

初めは知り合いもいない土地で一人暮らしなど面倒だと思っていたが、寮は利用時間さえ守れば食事も風呂もある程度自由であり、部屋も広くはないが自分だけのスペースとしてのびのび出来る。

おまけに、実家のある田舎と違って厳戸台は新開発の進む都会だ。

色々と遊びたい盛りの順平にとって、親の目を気にせず学校帰りにゲームセンターやＣＤ屋を巡ることが出来るなど、まさに夢のような生活である。

寮生活の生徒には各学期の終わりに、実家の方へ成績の記載されたプリントが郵送されるので、その点だけは面倒ではあるものの、電話で小言を言われる程度、都会での自由な暮らしに比べれば安いものである。

「うっし、じゃあクラスを確認しに行きますか！」

そうして、少年はプリントを再び内ポケットにしまうと、この学校で初めての記念すべきクラスを確認するため、生徒玄関へと歩き出した。

＊＊＊

（2年B組、仙八せんせー……って知ってるやついねーか）

自分のクラスが2年B組であることを確認し、職員室に向かって担任に案内されるまま全校集会に参加した順平は、講堂を出てゆく生徒に続いて自分のクラスに向かった。

男女混合の五十音順で出席番号が振られているため、苗字が『い』で始まる順平は、出席番号二番という若い数字を貰っていた。

自分の前にも一人だけ生徒がいるらしいが、その生徒は海外留学をしており、順平にとってはブルジョアな存在なので、きっと「オホホホ」と変わった笑い方をするお嬢様なのだろうと勝手に思っている。

（つーか、若くて美人で胸が大きいって最高の担任だと思ってたんだけどなぁ……）

溜め息を吐きつつそんな風に思いながら、順平は教卓のところで椅子に座ってだれている残念な担任に視線を送る。

順平の下した初期評価ＳＳランクだった、現在はＡＡランクと高ランクを維持しつつも残念な担任こと佐久間文子は、今のクラスに不満があるのか、生徒の目の前で愚痴をこぼしていた。

「つまんなーい。有里君ってば全然メールも電話もくれないし、会いに行こうにも居場所分かんないし。つまんないよー」

（いや、誰だよアリサト君って……）

そんな事を聞いても、新しく転入してきたばかりの順平はまるで話が理解出来ない。

とりあえず、恋人か何かと思われるアリサト君とやらと会えなくて落ち込んでいることは分かるが、教師が生徒の前でそんなプライベートな愚痴をこぼしていいのだろうかと呆れてしまう。

愚痴をこぼしてばかりで一向にホームルームを始めようとしない佐久間に、順平以外の生徒も同じように思ったのだろう。

一人の男子生徒が手をあげて、佐久間に言葉をぶつけた。

「せんせー、仕事してくださーい」

「先生のお仕事は有里君と遊ぶ事ですー。教師は気分でやってるだけなので、こっちが遊びでーす」

「じゃあ、真面目に遊んでくださーい」
「遊ぶ相手の有里君がいないので無理でーす」
自分が教職こそが遊びだと言っておきながら、ではそっちを真面目にやれと言われると、今度は湊との遊ぶことに話題をシフトして返した。
途端に、教室中から深いため息が聞こえてくる。
見た目だけは本当に最高ランクだというのに、中身はどうしてここまで残念なのか。
それを論理的に説明出来れば、ミレニアム懸賞金問題を解く並みの偉業だと生徒たちに囁かれている。
しかし、転入生である順平はその事も知らないので、隣の生徒に佐久間があんな状態である理由を小声で尋ねた。
「なぁなぁ、あの先生って何であんな状態になってんの？　さっきから出てくる〝アリサト君〟って彼氏か何か？」
「え？　ああ、あなた転校生だっけ。有里君は貴方の前の席の人だよ。佐久間先生のお気に入りの生徒で、先月から留学でいないから落ち込んでるの」
「ちょっ、生徒と教師がそういう関係ってありなの？　この学校ってめっちゃオープン過ぎね？」
「ううん、別に二人は付き合ってないよ。ただ先生が彼にベッタリなだけ。まぁ、少し恐い雰囲気だけど、すっごい美人だし。中等部だけじゃなくて、初等部と高等部の生徒にも人気あるんだ」
言い終わるなり、隣の女子は制服のジャケットから定期入れを取り出し、笑顔でその裏面を順平に見せてきた。
そこには一枚のカードが収められ、カードには『プリンス・ミナト』と筆記体のアルファベットで大きく書かれ、下には『会員番号２９４』と小さく書かれている。
相手の数字が若いのか不明だが、それが入会当時の会員数のはずなので、生徒ばかりで構成された非公認組織で最低でもそれだけの人数がいるのは確かに驚きだった。
以前、自分が通っていた市立中学では生徒のファンクラブなど存在

しなかったので、これが都会クオリティかと衝撃を受けつつ、順平は呟く。
「すっげー、ファンクラブってアイドルか何かかよ……」
「学校にくれば会える身近な存在だし、アイドルより断然良いよ。モノレールで痴漢から助けられたって子も多いし、実はすっごい優しいからね。私も彼に会えない先生の気持ちはよく分かるんだぁ」
憂いを帯びた表情で中空を見ながら溜め息を吐く女子の姿に、順平は心の中で「うわぁ……」と呟き若干引きながら会話を終了する。
相手の姿は分からないが、とりあえずの情報収集は出来た。
てっきりお嬢様かと思っていた前の席の生徒は男子で、さらにファンクラブが出来るほどのルックスをしている。
隣の女子が『格好良い』ではなく、『美人』という表現を使ったのは引っ掛かるが、女子から見ても美人に見えると言うのなら、是非とも一度拝んでみたいところだ。
(てか、あの残念な先生も含めて、この学校って可愛い子多いしな。これが都会クオリティってやつですかね)
考えながら、頬杖をついてクラスメイトらを順平は眺めてゆく。
一人やたらと目立つ髪色の女子もいるが、その女子も含めてこのクラスの女子はレベルが高い。
自分の後ろにいるスポーティーなポニーテールの女子に、隣の列にいる委員長とアダ名を付けたくなりそうな上品な雰囲気の女子や、その少し後ろにいるややサバサバしてそうな茶髪の女子。赤い髪の女子の前の席の小動物系の女子に、最初に目がいった赤髪の女子と、学年の可愛い女子は全員このクラスに集まっているのではと思えてしまうほどだ。
田舎から転入してきたばかりの思春期男子にとって、そんな素晴らしいクラスになれたことに喜びを感じ、誰か一人だけでもお知り合いになれないか、などと淡い希望を持ってしまうのも無理はなかった。
(誰が一番話し易そうかねぇ。先に男子のダチ作って、女子らの情報をリサーチするべきか?)
こういった都会の学校では、誰か一人の女子に嫌われると瞬く間に

他の女子からも無視されるとよく聞く。
それだけに、薔薇色の学校生活を夢見ている順平は、普段は使わない脳細胞をフルに活用して、女子と仲良くなるための計画を慎重に練る事にした。
まず、リサーチのために男子と仲良くなるにしても、明らかに情報を持ってなさそうな浮いた存在は避けるべきだと考える。
その点で言えば、最初に佐久間に「仕事しろ」と声をかけた制服をきっちり着ている男子は、適度な軽さが滲み出ているので、自分としても接しやすそうだと思えた。
（えーっと……ああ、友近ってやつか）
すると、相手の名前を確かめるため、順平は机の数を数えて相手の出席番号を割り出し。黒板横の掲示板に貼られている出席番号一覧から相手の名前を調べた。
さらに、いつでもリサーチ出来るよう、クラスで目立っている女子らの名前も覚えておく事にする。
（後ろの子が岩崎さんで、委員長が真田さん。サバサバしてそうなのが岳羽さんで、あっちの二人は山岸さんと吉野さんね。覚えやすそうな普通の名前で良かったぜ。前の席の有里ってやつの下の名前とか読めねえしな。なに、ソウ君とか？）
勉強が不得意で『奏』と『湊』の違いすら分かっていない順平にすれば、かなり惜しいところまでいっているが、正解は〝ミナト〟である。
全くの偶然ではあるが、隣の女子のように、クラスの中にもファンクラブの者が何名かいるため、ここで誤った名前を声に出さなかったのは利口な選択だ。
そうして、チドリの要請で、向こうでは深夜五時ごろにも関わらず、湊から近況報告と真面目に仕事をするようにという内容のメールが佐久間の携帯に届くまで無駄な時間は続き。
メールが来た途端に教師モードになった佐久間が、テキパキと進めたホームルームが終わったのは、結局、他のクラスの授業終了時刻と同じであった。

生徒らの自己紹介を省略していないというのに、どうやれば挽回できるのか。そんな謎を生徒らの心の中に残し、携帯を片手に上機嫌で去っていった佐久間を、順平は悟りを開いた僧のような無心な瞳で見送った。

＊＊＊

本日の授業が終わり、後は帰るだけとなった放課後。

時間はまだ十二時を過ぎたばかりで、部活や帰路に着く生徒以外の何名かが、帰りにどこかで食事でもしてから帰ろうかと相談する声も聞こえる。

そうして、順平が目をつけていた友近も、周囲の席の男子と同じように話していたので、順平は友達作りも兼ねて声をかけに席を立った。

「なぁなぁ、その帰りにメシ食っていくっての、オレも参加して良い？

こっちきたばっかでさ。美味い飯屋とか知らねぇんだよ」

「おお、転入生の伊織だっけ？　いいぜ。ラーメン屋に行く話になってたけど、別に構わないよな？」

「そこ安いのか？」

「ランチのラーメン・餃子・ライスのセットなら、七五〇円。プラス百円でライスは炒飯に変更可能」

やや自信ありげにニヤリと口元を歪めて友近が答える。

その価格を聞いて順平は、財布の中身を思い出す。親からの仕送りは月末にならないと来ないが、寮暮らしを始めることを聞いた親戚から小遣いを貰ってきた。

ほとんどは親によって貯金されたが、諭吉を一人は確保しておいたので、軍資金には何の問題もない。

むしろ、中学生にとって諭吉を一人でも財布にいれているのは、羨望の眼差しを受けるヒーローのステータスの一つですらある。

食事後にカラオケでもゲームセンターでもドンと来い。そんな風に余裕を見せて、順平は他の者に続いて、目的地のラーメン屋へと向かった。

――鍋島ラーメン〝はがくれ〟

店の前に着いた時点で、胃袋を刺激するとても良い匂いがしていた。昼を過ぎた空腹時の腹には一種の兵器であり、席についてすぐに全員が注文を済ませてしまった。

昼時で店員らも忙しそうに料理を作っているが、それでも他人が美味しそうに食べている姿を見ながら、より強くなった料理の匂いでさらに胃を刺激されつつ、料理が来るのを待つのは大変な苦行である。

そうして、雑談をしながらも、テーブルの下では拳を握りしめ、貧乏揺すりをしていた順平らの元に店員がやってきた。

「はい、ラーメン餃子セットおまち！　こっちはラーメン炒飯セットね。器が熱いから気をつけて！」

次々と料理を運んで店員が去ってゆく。

客を気遣って器が熱くなっていることを伝えてきたが、今の順平たちの視線は湯気を立てている琥珀色のスープに釘付けだ。

壁際に座った男子が、箸立てから取った割り箸を他のメンバーに配る。

それを受け取り、まるで訓練されたように見事に揃った動作で行儀よく手を合わせると、全員が大きな声で言った。

『いっただきまーす！』

途端、まわりの客や店員が何事だと顔をあげて見てきたが、料理しか見えていない順平たちは、その事に気付かぬまま一心不乱に箸を進める。

鼻の頭に汗を掻いても、拭う事すら今は面倒だ。全身からそんな気配を漂わせ、順平は麺をすすり、レンゲでスープを口に運ぶ。

「うっは、うめー！　麺もだけど、これスープがとにかくヤベーよ！」

「だろ！　スープも最後まで飲み干せ。そんで少し余韻に浸ったときなんて、胃だけじゃなく心まで満たされるぞ！」

はがくれのラーメンに感動を覚えている順平の言葉に、正面の友近が熱く語って返してくる。

この店で食事をしようとメンバーに提案したのも彼であり、どうやらこの店の味に魅了され、友人らと来る以外にも頻繁に通っているようだ。

しかし、彼がそれだけ店の味にのめり込むのも、実際に食べてみた順平には分かる気がしていた。
ただ美味しいだけではない。また食べたくなる味なのだ。
朝食を抜いてきたせいで、普段よりも空腹に思っていたのも、並んでいる料理を美味しいと感じている要因ではあると思う。
けれど、また食べに来たくなる味というのは、中々出会えるものではない。
こちらに来て早々にこの店を教えて貰えたことに、順平は心から感謝した。
「はぁ……良い店教えて貰ったわ。また学校帰りか、寮のメシに飽きたら食いにこよっと」
「おっ。んじゃ、そんときは誘えよ。地元民だから家で晩飯出るけど、帰宅部で暇してるからな。育ち盛りの男子中学生の腹なら余裕だぜ」
箸を持っていない左手親指を立てて友近が笑いかけてくる。
今日あったばかりだが、待ち時間という同じ苦行に耐えた仲間として彼らと絆が出来た気がしていた。
相手もそれは同じようで、知り合いのいない不安が薄れていることを感じた順平は、コップに口をつけ、水を飲み干してから笑顔で返した。
「ははっ、了解。つか、地元のやつなら、飯屋以外にも遊び場とかも知ってそうだな。ここらでオススメのスポットってある？」
「遊び場って言えば、やっぱポロニかな。ポロニアンモールっていう、色んな店の集まってる大型ショッピングモールだ。ゲーセンとかカラオケに、俺らは入れないけどクラブもあるぜ」
「クラブ？」
クラブと聞いても、実家周辺の田舎にそんな物がなかった順平は、それがどのような場所だか想像がつかない。
若者が音楽に合わせて激しく踊る施設だというのは聞いたことがある。しかし、ダンス自体、テレビの音楽番組でアイドルや歌手がしているのを見たことがあるくらいだ。
そんな偏った知識と貧相な想像力では、都会の遊び場をイメージす

ることは出来なかった。
「よく分かんねえけど、色々見れんのは良いな。実家のある田舎だと、遊べる場所なんて近所の公園かジュネスしかなかったからな」
「ま、ここらも巌戸台付近が都会なだけで、少し外れたら似たようなもんだよ。電車で数駅行ったら、田んぼと山ばっかりだし」
実際、湊とチドリが暮らしている六徳市も、駅にすれば五駅程度しか離れていないが、畑や田んぼに、桔梗組本部のある山など、自然の多い田舎の風景が残っている。
すぐ隣にある市でそんな状態なのだ。昔からこの土地に住んでいる友近の言う通り、巌戸台も港区など一部を除けば、他は住宅地ばかりであったりと、遊ぶ場所がない地域も多かった。
「へぇ、都会つっても、そこまでメチャ広い訳じゃないんだな。あ、そういやさ。オレっち思ったんだけど、ウチの学校って女子のレベル高くね？　これも都会クオリティってやつ？」
そんな現地民の言葉は実にためになるようで、順平は感心して何度も頷きつつ、さらっと自分が知りたかった女子のリサーチに会話を切り替える。
すると、残りの料理を食べていた他の男子が目をきらりと光らせ、どこか悪巧みをしているような顔を寄せてくると、時代劇の悪代官気取りの口調で返してきた。
「おっと、転校早々、そこに気付いてしまいましたか。いや、伊織さんもお目が高い」
「俺ら、そっちの情報についてはちょっとばかし詳しいですよ。さ、何でも聞きたまえ。お好みはどんなタイプだ？」
ふざけながらも、情報を持った相手がこのように聞いてくれるのはありがたい。
順平は顎に手を当て、少し考える素振りを見せると、他の男子らのノリに合わせてニヤリと笑い、わざと芝居がかった口調で要望を伝えた。
「フム……では、諸君らがもっとも美しいと思う女性を教えて頂こう」
「うわっ、それきっついなぁ。自分の好みバラすとか、どんな罰ゲーム

だよ。ま、俺は桐条先輩派なんですけどね」
「んだよ、言ってんじゃねーか。かく言う私は、真田さん推しですけども」
順平と友近の隣に座っていた男子がそれぞれ笑って答え、それを聞いた順平は話に出た二人の姿を思い出す。
桐条先輩とは、三年D組の桐条美鶴のことであり、今日の全校集会でも生徒会長として挨拶をしていたため、姿を見たときには随分と大人びた美人の先輩がいたと驚いたものだ。
次に、真田さんとは、順平が勝手に委員長と心の中であだ名を付けたクラスメイトである。
こちらも美鶴に負けないくらい美人でスタイルの良い、大和撫子といった優しげな雰囲気の女子だった。
姿を無事に思い出せた順平は、二人が最も美しいと思ったのも無理はないと頷いて同意し、最後にまだ答えていない友近の答えを待つ。
「最もなぁ。ウチの学校って年上のお姉さん系が不足してんだよな。会長も何年かしたら良い感じだろうけど、いまはやっぱ学生って感じじゃん？」
「何、オマエ、年上好きなの？　じゃあ、担任のあの人とか先生らは？」
「あの人って、佐久間先生な。いや、美人だけど、あれは大人としては駄目だろ。一回り違うのに俺らと同じノリってどうよ。あれでもっと落ち着いてたら、会った瞬間に告白してたんだけどな」
見た目は良いのに中身が残念。心底惜しそうに溜め息を吐きつつ友近が呟くと、他の男子も深く頷いて同意している。
やはり、順平自身も思っていた、見た目は最高なのに中身で損をしているというのは、在校生らも同意見らしい。佐久間文子、実に惜しい女である。
「あ、それじゃあ保健の先生は？」
「櫛名田先生な。伊織はしょうがないけど、お前ら先生の名前はちゃんと覚えとけよ。つか、あの人も佐久間先生と大差ないって。なんで高等部の制服の上に白衣着てんだよ。似合い過ぎてて逆にビックリだわ」

隣の男子の質問に答える前に、最低限の礼儀は守れと友近は相手を窘める。どうやら、制服の着こなしも含め、妙なところで真面目らしい。
しかし、保険医である櫛名田の評価は、残念な大人代表の佐久間と同レベルという酷評であった。
確かに今年で二十七歳の女性が、普段から女子高生の恰好をしているのは、世間一般の常識として中々にキツイものがある。
しかも、それが大人の色気を纏いつつも、ほとんど違和感なく着こなしているというのだから、どうして普通に美人な保健医でいてくれなかったのか、と友近が文句を言いたくなるもの無理はなかった。
中等部教師陣で2トップの美貌を誇る二人の評価を下した友近は、コップの水をグイッと呷り、瞳に熱を宿して語り出す。
「あのな。二人とも文句なしに美人なんだよ。運動してないのに程良く引き締まってて、足とかも健康的にエロいんだ。佐久間先生なんて、それ加えて巨乳だろ？　いや、櫛名田先生も胸は普通にあるんだけど、佐久間先生のが腰のくびれとか考えるとバランス的にすごいんだよ」
「は、はぁ、それで？」
「あの二人ときたら、美人なのに、優秀なのに、なんであんな変人なんだよ！　つか、生徒の一人に色目使ってる時点でおかしいだろ?!　夏場に上がカッターシャツ姿で男子生徒の背中に抱き付くとか、マジで羨ましいし、妬ましいわ！　イケメン滅びろ！」
『そうだそうだ！　イケメン滅びろ！』
二人を残念な大人と言いながらも、実は嫉妬していた友近の心からの叫びに、他の二人も同調して叫び出す。
最後のカッターシャツ姿で抱き付くというのは、つまり、薄着で抱きつけば、佐久間の豊かな双丘が相手の背中に当たると言っているらしい。
確かに、リクルートスーツのジャケットを着ていても胸が大きいと分かっていたので、薄着でそんな事をすればとんでもないことなるだろう。

順平は、自分がそのような状況になっている場面を想像し、鼻の奥が熱くなりかけたところで、頭を振って妄想をかき消した。
「あぶねぇあぶねぇ。つか、マジであの先生そんなことしてんの？それってイケメン限定イベント？」
「イケメンってか、有里限定な。同じ学年のナルシー入ったサッカー部のイケメンが、有里と同じ美味しい思いをしようと積極的に話しかけに行ってたことがあるんだけど、結果は撃沈。話しかければ答えてくれるけど、絶対に身体に触らせないんだよ」
少し冷静になったのか、叫んでいた友近は肩を竦めて順平の問いに答える。
他の男子も同じように冷静さを取り戻したようで、友近に続けて、当時のことを話しだした。
「ああ、ノリでハイタッチで挨拶しようとしても、完璧に手の方はスルーして『こんにちは』とかって返すだけでな。ソイツ、最後にはやけ起こして背中から抱きつこうとして、先生に思いっきりヒールで腹に蹴り喰らってたぞ」
「あん時は流石にビビったわ。ギャグっぽく怒ることはよくあるけど、そのときの佐久間先生マジギレして、〝有里君以外に触らせるか！〟って大声で叫んだしな。玄関ホールだったし、まわりはドン引きして固まって、偶然購買にいた有里が先生の頭を叩いて引っ張って行ってくれなかったら、誰も動けなかったし」
「まぁ、そういう訳で、伊織も夢を見るのは良いけど、あくまで妄想だけにしておけよ。あの先生、ヒール履いたままで垂直跳び六十三センチとか跳ぶ人間だから、マジ蹴り喰らったら病院行き決定だからな」
垂直跳びで六十センチ台を叩き出すのは、一般人なら成人男性でも難しいことであり、それをヒールを履いたままという不安定な状態で達成したことに、佐久間の脚力の強さが伺える。
いくら思春期男子で、佐久間の身体に途轍もない魅力を感じていたとしても、流石の順平も我が身の可愛さを思えば、そこまで身体を張る気にはなれなかった。
なにより、話を聞いていると、佐久間は留学中の有里君に本当に

ベッタリのようで、他に可愛い女子らがいるというのに、わざわざ玉砕が分かっている相手にアタックをかける意味が分からない。
故に、順平は教師陣を目の保養のみにしようと心に決め、お近づきになるのはやはり同級生にすることにした。
「そんじゃ、ウチのクラスの女子らはどうなんだ？　飛び抜けてんのが四、五人くらいいたけど」
「うーん、そっちはそっちで難しいんだよな。伊織が言ってるメンバーってだいたい真田さん・岳羽さん・山岸さん・吉野さん辺りだろ？」
「あと、岩崎さんとかな」
「はぁ？　なんで、理緒がそのメンバーに入るんだよ。明らかに浮いてるだろ」
友近の挙げたメンバーに順平が補足すると、途端に相手は怪訝そうな顔をする。
順平にしてみれば、素直にルックスの整っていた女子を挙げただけなので、そのように否定される覚えはない。
だが、よくよく相手の発言を思い返してみると、友近が一人だけ名字ではなく名前で呼んでいることに気付いた。
それにより、二人が知り合いである可能性にいきつき、順平はその点を尋ねてみる。
「おたく、もしかして、岩崎さんと知り合い？」
「いや、知り合いって言えば全員と知り合いだよ。初めの四人は去年も同じクラスだったし。ただ、理緒は家が近所でさ。まぁ、腐れ縁って感じかな」
聞いてなるほどと納得がいった。岩崎（いわさき）　理緒（りお）は他の者から見れば十分に美しい少女だが、昔から親交のある友近にはそうは思えなかったようだ。
無論、友近は年上好きであるため、長い付き合いで内面まで知っている相手が、守備範囲外の子どもという認識の可能性もある。
しかし、そういう事ならば、理緒の評価のみ他の者に頼れば良いので、とりあえず、友近が先に挙げた四人について順平は聞くことにし

た。
「んじゃ、他の四人が難しいってどゆこと？　実は性格悪いとか？」
「まぁ、岳羽さんと吉野さんは難しい性格してるな。岳羽さんって結構サバサバしてるし、吉野さんは他人にほとんど興味ないみたいでさ。あ、ついでに言っておくと、吉野さんと有里は一緒の家に住んでんだ。家の事情？　とかってやつで、別に親戚じゃないらしいけど」
「ふーん。そんで他の二人は？」
「ああ、真田さんは一つ上にお兄さんがいてな。すっげぇ過保護で、男子が彼女を遊びに誘うには、ボクシング部エースのお兄さんにスパーリングで認めて貰うしかないんだ。付き合うのなんて、先輩に勝たなくちゃいけないからな」
「なに、その無理ゲー……」
結婚の挨拶で相手の父親に会う訳ではないが、相手のお兄さんに会うのもやや気が引けるというのに、そこにボクシング部エースとスパーリングという情報が追加されるだけで、順平は美紀と仲良くなるのは自分には不可能だと感じた。
小学生時代に地元の少年野球チームに入っていたので、帰宅部の者よりは体力にも自信はある。
だが、無制限に逃げ回れるならともかく、リングのような限られた空間で殴り合いなど御免だ。
殴るのも殴られるのも、普通に生活していて味わう事などほとんどないのだから、自分が当事者になった場合を想像し、順平が純粋な不安を抱くのも当然だった。
「はぁ……で、最後の山岸さんは？」
「山岸さんは普通だよ。これは真田さんも一緒だけど、成績が良いのに皆に優しいって感じで接しやすいし。天然っていうかちょっとずれた部分もあるけど、小動物系で癒されるって隠れファンは多いぜ？」
「おー、他がおかしいのか知らないけど、一気に安心できるわ。なら、オレっちも山岸さんと先ずはお友達になろうかね」
腕組みをして頷きながら、順平は今後の学校生活における指針を作

る。
　もっとも近付けないのは委員長こと真田美紀であり、次点で他人に興味のない吉野千鳥だ。
　サバサバした性格というのは、本人が割とあっさりした人付き合いをしているとも取れるので、岳羽ゆかりに関しては保留だが、他の者が認める安全牌が存在するのなら順平もそれを選択する。
　別に彼女を作ろうという訳ではない。単に親しい異性の友人を作り、その先で当人かその友人とほろ甘いことがあれば、と淡い希望を持っているだけだ。
　故に順平は自ら危険を冒そうとはしない。虎穴に入らなければ虎児を得ることが出来ないのなら、高架下の野良猫で十分なのである。
　胃袋が満たされ、精神的にもリラックスした状態で順平はそのように考えをまとめる。そして、そろそろ会計かと財布を取り出しかけたとき、友近から更なる情報が齎された。
「あ、けど、山岸さんも有里の庇護下にあるからな。さっきの四人に有里を加えた五人と、佐久間先生が顧問で美術工芸部って部活やってるんだ。部員メンバーとお近づきになりたくて入部希望も多いらしいけど、部員を募集してないから誰も入れないって状態でな」
「因みに、その有里は入学からテストで満点以外取った事ないし。ボクシング部エースの真田先輩を一方的に負かした化け物だ。その庇護下の女子に下心を持って近付くなら、ちゃんと医療保険に加入してからをオススメするぞ」
「……は？」
　新たな情報を聞いた途端、順平はポカンと口を開けて呆けてしまう。
　先ほどから思っていたことだが、学園の話をしていると最終的に『有里』という存在が壁となり阻んでくる。
　美紀についてはボクシング部エースの兄がネックだと思っていたと言うのに、さらに大魔王のようなラスボス的存在が後ろに控えていると誰が思うだろうか。
　耐えきれなくなった順平は、ワナワナと身体を震わせると、テーブ

ルに手をバンッとついて抗議した。
「おいおいおい、なんだよそりゃ！　君らのいう美人教師は有里君にベッタリで？　おまけに美味しい想いもしてるっていうのに、他にも学園の見目麗しい女子を何人も囲ってハーレム作ってるってことですかぁ?!　おかしいだろ！　いつから日本は重婚が認められるようになったんだよ！」
　言っていることは意味不明だが、絶対に認められない、そんな強い抗う意思を瞳に宿して順平は叫ぶ。
　自分はただ青春を謳歌したいだけだ。それをたった一人の、まだ姿も知らない男子なんぞに阻まれる訳にはいかない。
　相手は文武両道でファンクラブまで存在する完璧超人だが、涙を流し倒れていった男子（なかま）たちのためにも、他所者であった自分は断固として屈さず、革命を起こして見せる。
　順平はそんな決意を胸に、この地で出会った新たな友たちに宣言した。
「決めたぜ、オレはその有里ってやつの王国をぶっ潰す。何がプリンスだ。日本の侍なめんな。オレが革命を起こして、皆が青春を謳歌できるようにしてみせるぜ！」
『い、伊織……』
　全て自分に任せろ。そう言って強い瞳で笑いかけてくる順平の姿に、諦めていた男子たちの胸にも希望が灯った。
　今日初めて会ったばかりだが、自分たちは出来なかった事をこの男ならやってくれるのではないか。
　そんな期待を持った男子は、感動で目に涙を滲ませながら、少しでも勇敢なる革命家の力になろうと携帯を取り出した。
「伊織、コイツがその有里ってやつだ。去年の文化祭の写真だから仮装してるけど、この顔をよく覚えておいてくれ」
「お、サンキュ。やっぱ、顔が分かってないと戦えないからな。どれどれ……」
　斜め向かいの男子が向けてきた携帯の画面を、順平は身を乗り出して眺める。

文化祭の仮装とやらも気になるが、ファンクラブの会員だった女子が美人と評した相手の顔には授業中から興味を抱いていた。
これでどこぞの歌劇団の男役になれそうなルックスならば、目の敵にしようと思っていた手前、非常にやりにくいのだが、順平の目に飛び込んできた相手の姿は予想の斜め上をいっていた。
「……あらやだ、すっごい美人。てか、佐久間先生も猫耳つけてコスプレしてんじゃん」
そう、順平が目にしたのは、猫耳をつけてナース服を着た佐久間に抱きつかれた、女性物の水色の着物を身に付け紅まで引いた湊の姿だった。
さらに隣には黒づくめの魔女の恰好をしたチドリに、涙目で蹲っているゆかりと、そのゆかりを宥めているらしい美紀と風花も制服姿で写っている。
「ああ、去年は出し物でお化け屋敷をしたんだよ。ほとんど裏方にまわったけど、有里を使わないと勿体ないからって、女子らの提案で雪女役になったんだ。すごいだろ？　アイツ、自分だけでそれ着られるんだぜ。着物だと胸がない分には体型もあんまり関係ないし、事情を知らない父兄にも大人気だ」
「校内販売の写真もかなり売れたしな。一学年で三百枚くらいあるんだけど、ウチのクラスだけで一四〇枚あったんだぜ？　男連中の売り上げに関しては、先生の猫娘と有里の雪女の一騎打ちだったな。吉野さんの魔女はその次って感じでさ」
「えー、なにそれ。オマエら、言ってた割に有里君のこと大好きっぽいじゃん」
『まぁ、写真の中では幻想のままでいられるし』
真顔で声を揃えた三人の言葉に、順平は思わず座ったままこけそうになってしまった。
確かに、髪が肩よりも長く着物で体型が隠れているため、その『美人』と評するのが最も相応しく思える外見から判断する限り、写真の中においては相手を幻の女生徒にしておく事が出来る。
その美しさたるや、思春期男子の感性をモロに直撃してくる、佐久

間の怪しい店のサービスのようなコスプレと売り上げで競ったのも頷けるほどだ。
だが、どれだけ写真の中に幻想が残っていても、現実の湊は脱げば腹筋が割れているれっきとした男である。
その事実から目を逸らし、まやかしに取り憑かれたままで良いのか。
そう思った順平は、姿勢を正し、真剣な眼差しを他の者に向けると口を開いた。
「その写真のデータ貰っていい？」
『え？　あ、どうぞ』
直前までの闘志の籠った瞳はどうしたんだと聞きたくなるほど、順平はスケベ心丸出しの顔で写真のデータを欲しがったため、他の男子は呆気に囚われ素直に頷いてしまった。
「ほっほう……」
赤外線でデータを送って貰うなり、顎に手を当てて鼻の下を伸ばしながら仮装した佐久間と湊の写真を眺めている。
そんな自称・日本の侍の姿に、他の男子たちは「ああ、こいつも馬鹿か」と妙なシンパシーを感じてしまい。革命の失敗を確信した。
だが、多数の女子に想われていることに嫉妬こそすれども、別にこれといって実害を被っている訳ではないので、友近たちも革命の成功は大して気にしていないのだった。

第六十話　海外での誕生日

４月５日（水）

朝――〝蠍の心臓〟宿舎

湊が海外での生活を始めて半月ほど経った頃、日課である朝の鍛錬を終えた湊は裸足に着物姿で一人廊下を歩いていた。

普段、首に巻かれているマフラーは、形状変化させ幅の広い女性用の帯にしてしっかりと巻いている。

目覚めた後はほどいてマフラーにしても構わないが、鍛錬を終えるまで着替えるのが面倒ということで、湊は帯のままにしている。

蠍の心臓に所属している者の中には、着物に男女の違いがあることを知っているメンバーもいるので、湊がどうして女性向けの着付けをしているかという疑問も湧いていた。

だが、これにはれっきとした理由が存在する。

就寝中というのは非常に狙われ易く、それはいくら気配に敏感な湊であっても変わらない。

故に、起き出して対処までの反応が少しでも早く出来るように考え、幅広な女性用帯の方がサッと手を入れて武器を取り出せるだろうと思い付いたのだ。

もっとも、それを知っているのは本人を除けば、マフラーの機能を理解しているイリスしかここにはいないので、顔が中性的だと感覚も同じように曖昧になるのだろうとメンバーには思われていた。

「おっ、姫は今日もちゃんと鍛錬をしてきたみたいだな。感心、感心」

そして、そんな風に思っている代表格であるラースが、前から歩いてくるなり、湊を発見して笑いながら声をかけてきた。

知り合いのおじさんというより、顔馴染みの近所の女子高生にセクハラ発言をかますスケベ親父のようなニヤついた顔の相手に、湊は面倒そうにしたまま返事もせず前を通過する。

ラースの呼んだ姫というアダ名は、ナタリアの私兵の作戦中のコードネームを捩ったもので、チェスの駒が大元となっている。

機動力もあり、銃撃戦も格闘戦も出来る湊は、チェスにおいて最強

の駒であるクイーンを意味するＱ１のコードネームを与えられた。
しかし、クイーンと呼ぶには些か若過ぎるため、Ｑ１というコードネームはそのままだが、メンバーの一部は勝手に姫というアダ名をつけて呼ぶようになり。
部隊最年少で自分が今まで姫のポジションにいたレベッカが、男のくせにおかしいと抗議していたが、レベッカのコードネームはルークを意味するＲ２であったため、大人たちには華麗に流されていた。
当の本人は、そんな呼び方をされたときには基本的に無視しているため、今日もそのまま部屋に戻りかけたとき、ラースが僅かに嘆息しながら再び声をかけてくる。
「おいおい、流石に無視はないでしょうよ。こっちはイリスの伝言預かってきたっていうのに」
「……聞く」
「聞くって……いや、まぁいいか。何かお前さんのこと探してたぞ。用事がないなら食堂に来てくれってさ」
相手から伝言を受け取ると、湊は駆け出して直ぐに跳び上がり、そのまま天井裏に続く点検口の板を蹴り開けて中に消えていってしまった。
確かに食堂に向かうには、入り組んだ廊下を歩くより天井裏を進んだ方が速いものの、他の誰もそんな移動方法を取っていないため、来たばかりの少年がそんな裏技のような移動ルートを利用している事に、施設の警備状況は大丈夫かラースも非常に気になってしまった。
蹴り開けられた点検口は、相手が天井裏を駆け出す前にちゃんとしめ直されているので構わないが、やはりネジを使った留め具をもう一つ増やすべきか、その場に残ったラースは腕を組みつつ悩んでいたのだった。
＊＊＊
ラースと別れた湊は、天井裏を通って食堂へと向かった。
いくら天井裏といっても定期的に点検を行っているため、クモの巣も張っておらず、ネズミや害虫の気配は感じるものの、意識して強い気配を放っている湊に怯えて相手は出て来ない。

そうして、ダクトやパイプの通った狭い空間を駆け抜け、寝巻用の着物もほとんど汚さずに食堂に通じている点検口に到着する事が出来た。
後は点検口の板を開けて下りるだけなので、湊は板に手をかけて開くと、手を離せばきれいに閉じるよう気をつけながら食堂に降り立った。
「うわっ!? ちょっ、あんた、その天井裏を通る移動の仕方やめなさいって言ってるでしょ！ 天井裏なんて綺麗な場所じゃないんだから、気を付けなさいよね」
急に目の前に降ってきた湊に、驚いたレベッカが怒りながら注意する。
確かに、服や湊自身に汚れは見られないが、天井裏が不衛生な場所であることにかわりはない。
そんなところを通って、食堂という他の場所よりも衛生面を気にする場所に来たとなれば、レベッカでなくとも怒るのは無理もなかった。
「……」
しかし、怒られた本人は、相手を一瞥もせずに黙って辺りを見渡し、自分を呼んだ者の姿を探している。
天井から急に現れ、直後にレベッカが大声で注意していたことで、他の者の注目も集めていたらしく、先にイリスの方から苦笑しながら近付いてきたため湊が動く必要はない。
そして、相手が来るのを湊が黙って待っていると、背後で肩を震わせていたレベッカが湊の後頭部に向けて手刀を放ってきた。
こんな不意討ちを受けるのは、初日の演習後から数えて既に二桁に達している。
能力を使わずともある程度の気配を感じられる湊にすれば、襲撃の回数が増えてきたこともあり、相手の攻撃パターンも把握出来ている。
攻撃の軌道を完全に読み切った湊は、右足を引いて振り返る際、腕を捻りながら右掌を突き出し、相手の呼吸を詰まらせるようにレベッ

カの左胸を押し潰した。
「いだぁっ!?」
「……フン」
「こ、こいつ、また私の胸さわった！　踏んだり、頭突きしたり、今みたいに押し潰してきたり、色んな方法で毎日のように触ってくる！」
カウンターで攻撃を喰らったレベッカは、胸部を強く圧迫されたことで、湊の狙い通り一時的に息が詰まったらしく、目に涙を滲ませて叫ぶ。
しかし、カウンターで攻撃を喰らったことよりも、その攻撃を受けた部位の方が気になるようで、相手は自分を抱くように胸を守っている。
湊の元にやってきたイリスは、湊の頭に手を置いて髪を手櫛で梳かしながらそれを聞き、やや呆れたように笑って口を開く。
「男に触って貰った方が育つらしいぞ。部隊のおっさんだとセクハラだけど、小狼は性欲がないからな。安心していいぞ」
「それ迷信！　それ以前に、そいつも男だし。ってか、中学二年とか思春期真っ盛りで性欲の権化じゃない！」
欠片も安心できる要素がない。レベッカはイリスの言葉を切って捨て、警戒心を剥き出しにして、湊を睨みつける。
だが、湊はぼーっとしながらイリスに髪を梳かされているので、話を全く聞いていなかった。
そんな少年のマイペースさに苦笑し、イリスは手を二回ぽんぽんと頭に置いて、さらに答えた。
「本当だって。人間の脳ってのは、性的興奮を感じているときには特定の反応を示すんだ。だけど、コイツには一切その反応が出なかったんだよ。脳に欠陥があるのかって調べてやったけど、そういう問題じゃないらしいな」
「そういう問題じゃないってどういうこと？　生まれつき、生殖機能にでも障害を抱えてるの？」
話しを聞いて、レベッカが訝しむような視線を湊に向ける。
湊の年頃ならば、例えどんなに鈍感な男であっても、程度の違いこ

そあれ身体や思考が性に興味を示す様になるのが普通だ。
これは、二次性徴をむかえ、ホルモンのバランスから起こる現象であり、成長ホルモンが分泌されないなど発達不良を起こしていないでもない限り、医学的に当たり前の反応なのである。
既に二十歳になっているレベッカもそれは分かっているので、ボディタッチはお断りだが、こっそり視線が胸や足に行っていたとしても、まぁ、年頃だからしょうがないだろうと大目に見てやるつもりであった。
けれど、保護者役であるイリスがそれを否定したため、テーブルに着いていた他の者も身体を三人の方に向けて話を聞こうとしている。
ちょっとしたハプニングから、随分と話が大きくなってしまったような気もするが、イリスは一度深く息を吐くと、湊の後ろに回っておぶさる様に抱き付き、さらりと爆弾を投下した。
「コイツさ。本当に中性なんだよ。遺伝子キメラだか染色体モザイクだかってやつ」
『……は？』
「胎児って初期は全員が女で、そこから個体によって男に変化していくだろ？　だけど、小狼は最終的に男として生まれたんだけど、細胞を調べたら部位によっては女の染色体が残ってんだ」
これはイリスがロゼッタと一緒に調べたことなのだが、仕事で遠出した宿泊先のホテルで、暇だからと有料アダルトチャンネルを湊に見せた際、本当につまらなそうに眺めているだけの相手に、二人は湊が不能症なのかと心配したことがあった。
だが、仕事でそういった性的な技術が必要になる場合もあるとして、一線こそギリギリ越えていないが、二人だけでなく紅花（ホンファ）からも色々と仕込まれていたこともあり、男性としての機能がちゃんと備わっていることは確認している。
それだけに、もしや、ストライクゾーンが極めて狭いのだろうかと、様々なジャンルの映像や画像を見せてみたのだが、最後まで湊の身体が反応を示す事はなかった。
仕事を終えて湊と共に戻ってきた二人は、保護者である桜にその事

を相談し、純粋な子どもになんて事をしているんだと本気で怒られ、鵜飼や渡瀬が止めに入り、逆に返り討ちにあったなどということもあったが、鵜飼の伝手を借りて、ある病院で内密に検査をすることになった。

そこで判明したことが先ほどイリスが話した湊の特異体質であり、本人の精神的な成熟度も関係しているのだろうが、部分的に女性の遺伝子を残していることで、脳の構造や性に関する捉え方が人と異なっている可能性が高いということだった。

もっとも、脳や思考が他者と異なっていても、湊に男性としての機能が備わっていることは既に証明されている。桜と共に検査に同席していた二人が、部分的にぼかしながら男性機能があることを確認している旨を話すと、医者からは本人が意図的にコントロール出来るのではという答えが返って来た。

実際、それが正解であり。湊は自分が両性別の遺伝子を持っているとは知らなかったが、裏の仕事をしている女性たちから技術を教わるときには、頭の中のスイッチを切り替えることで身体が反応するようにしている。

切り替えをしないかぎり、湊が性的興奮を覚える事はほぼあり得ず、佐久間からほぼ毎日にように受けていたアプローチを完全に流していたのも、それが原因であった。

「あ、生殖機能ってか身体はあくまで男だからな。あんまり変態っぽいことは考えるなよ?」

まるで創作物(フィクション)のような、生命の神秘を聞かされ、ほとんどの者がポカンと呆気にとられている中、イリスは思い出したように付け加える。

湊が男だと思って諦めていたが、女の可能性が浮上してゴクリと喉を鳴らす者がいたため、イリスはその者たちを完全な殺気を宿した冷たい眼で牽制し、湊の背中を押してナタリアらのいた私兵の集まるテーブルに移動した。

二人はやってくるなり、先にそちらにいたナタリアから、溜め息と共に迎えられる。

「はぁ……あのね、イリス。そういう情報は前もって教えておいてくれるかしら？　仮に貴女がいない場所でボウヤが大怪我を負った場合、どんな風に治療していいか分からなくなるでしょう？」
　またしても自分たちの斜め上をいく湊に頭を悩ませつつも、ナタリアは他の者よりも復帰が早く、子どもを預かる者の立場としてイリスを窘めた。
　ナタリアの復帰が早かった理由は、湊が名切りの出身であると教えられていたためであり。優秀な個体を作るための交配の中で、女性と男性、それぞれの持つ特徴の良いとこ取りも、当然、その過程の中に含まれていたと推測したからだ。
　失敗すれば、それぞれの性別の欠点のみを受け継ぐような、不完全な存在となってしまっていただろう。その事を頭で理解しながらも、生物学の根底を覆すような性質の固定化を、数千年かけて実際に成し遂げてしまっている〝百鬼〟という一族には、執念を超えた狂気を感じてしまう。
　自分の血筋を知らぬ状態でも、湊は子どもでありながら、裏の世界で化け物と呼ばれる者と戦えるレベルまで成長している。
　これで、自分の力の根源を理解し、その狂気に取り憑かれてしまった場合、果たして湊は自分の人格を保ったままでいられるのだろうか。
　ナタリアは、湊とその周りにいる者たちの事を考え、感じた不安を拭えずにいた。
　しかし、それを顔に出さずになんとかいると、しまったと情報伝達のミスに顔を顰めたイリスから謝罪の言葉が届いた。
「あ、悪い悪い。でも、なんとなく分かるだろ？　ほら、運動してきたばっかりなのに、小狼の髪からはシャンプーみたいな匂いしかしないし。男だと汗とかの分泌物の違いから、こんな匂いはしないからな」
　イリスに言われて、ナタリアはすぐ横にきた湊の頬に手を当てると、その時点で女性的な非常にきめ細かい肌をしていることに気付くが、さらに髪や首辺りに顔を近づけて匂いを嗅いでみる。
　湊のトレーニング量は、全隊員の中でもずば抜けて多いため、汗を

かいていないということは先ずあり得ない。
だが、髪が少し汗で湿っているというのに、汗の臭いはまったくせず、イリスの言葉通りにシャンプーのような心を落ち着かせる良い香りが仄かにしていた。
匂いを確かめたナタリアは、湊から離れると椅子に座り直し、正面から見据えて再び確認のため口を開いた。
「……ボウヤ、本当にシャワー浴びてきてないの？」
「部屋に戻る前にラースから伝言を受け取って直接来た。だから、まだ汗は流せてない」
「……便利ね。うちのむさくるしい男たちも、ボウヤみたいに良い香りが出るようにならないかしら？　トレーニングルームの換気扇って結構電気代がかさむのよ。でも、ないと気化した汗で天井付近に雲が出来るし、いっそのこと男は外でのトレーニングを義務づけようかしら」
ボスの決定は絶対である。民間とはいえ、軍の体裁を取っている〝蠍の心臓〟でもそれは当然で、一度決まってしまえば、隊員たちが長期に亘って必死に訴え続けても、ナタリアがその件に正統性や有効性がないと判断しない限り撤回はない。
そのため、この場にいた男性隊員は急に立ち上がると、綺麗な気を付けから深く頭を下げて礼の姿勢を取り、全員が真顔で懇願した。
『勘弁してください』
これには、食堂にいた女性陣だけでなく、ぼーっとしていた湊もやや驚いたような反応を示し、ナタリアは、
「じょ、冗談よ」
と、発言を取り消した。
それを聞いた男性陣は安堵の息を吐きつつ席に座り。それぞれのテーブルで雑談が聞こえ始めると、ようやく食堂は普段の風景を取り戻していた。
天井からの登場に始まり、カウンターで放った攻撃が不慮の事故（ラッキースケベ）であったり、色々と話が飛んでしまっていたため会話が進んでいなかった湊は、やっと話せる状態になったと判断し、後ろにいたイリスに声

をかけた。
「……用事って？」
「ああ、オマエって今日が誕生日だろ？　で、ナタリアたちが良い物くれるってさ。アタシからは本当の誕生日の方に渡すからな。楽しみにしておけよ」
「……そう」
本日、四月五日はエルゴ研の室長であった飛騨が設定した、〝有里湊〟の戸籍上の誕生日だった。
百鬼八雲の誕生日は十月二十五日なので、そちらを知っているイリスは本当の誕生日を祝うつもりでいる。
だが、蠍の心臓のメンバーはそのとき一緒にいるか不明なので、戸籍上の誕生日を祝ってやろうと考えていた。
イリスにそんな呼ばれた理由を聞いた湊は、ナタリアらが何をくれるつもりなのか考えながら、感情の読みとれない瞳で静かに相手を見つめる。
誕生日ならばもっと子どもらしく喜べば良いものを、ナタリアはそんな事を思いながらテーブルに置いていた横に長い革張りの茶色い鞄を湊の前に滑らせた。
湊の前に移動させたまま開こうともせず、ナタリアは何も言ってこないので、相手が自分で開けてみろと暗に告げていると推測し。湊は着物の袖を揺らしながら、鞄の留め具を外して、ゆっくりと蓋を開けた。
「……知らない銃だ」
「あら、シルエットハンティングだと有名な物なのだけど、知らないなら説明するわ。トンプソン／センター・アームズ製のＧ２コンテンダーよ。まぁ、知り合いのガンスミスがいじったカスタムモデルだけど」
楽しそうに話すナタリアの説明を聞きながらも、湊の瞳は初めて見た銃に釘づけになっていた。
中に入っていたのは、一見、小型ライフルのようにも思えるグリップなどがウォールナットで出来た、全長四十センチはありそうな大き

な拳銃であった。
組まれた銃の他に、予備パーツなのか長さの違う銃身がいくつか入っているが、弾倉は一つも入っていない。
それどころか、銃自体にも弾倉を取りつける部位が存在せず、どうやって弾丸を籠めるのかも不明である。
そうして、不思議に思いながらも銃を手に取ると、湊はそれが中折れ式のシングル・ショットピストルであると気付いた。
「一発撃つごとに、手動で排莢と装填をしないといけないのか。面倒だな」
「その分、銃自体がかなり頑丈に出来ているし、精度も信頼できて、熱で銃身が曲がる心配もないわ。さらに、状況に応じて銃身を交換することで、22LR弾からライフル弾まで撃てるのよ。試しに鹿でも狩りに車を出してあげましょうか？　ハンドガンでのハンティングはライフルとは違った興奮が味わえるわよ」
確かに、銃を細かく見てみたところ、排莢と装填の手間に目を瞑れば、グリップの握り易さと重心の位置から、非常に安定した姿勢で撃つ事が可能であり。銃身の交換自体も、パーツはビスなどで固定されているので、手先の器用な湊ならば工具すら使わずに簡単に取りかえることが出来そうだった。
湊は銃を選ぶ際、精度は勿論のこと、弾倉の装弾数と連続射撃がどれだけ可能であるか。また、使用中のアクシデントが起こり辛いなどの信頼性を主として考慮する。
タカヤのように一発の威力をメインに考える者もいるが、そんな物は携帯性を無視すれば拳銃ではなくライフルを使えば済む話しなので、湊にとっては馬鹿な考えだと切って捨てる程度のことだ。
しかし、ナタリアから貰ったG2コンテンダーは構造がシンプルだからこそ、不意の事故の可能性も低く、アクシデントの起こらない銃として高く信頼できるものであった。
ならば、こういった変わり種も一つ所持していてもいいかもしれない。
そう思った湊は、トリガーガードの下のスプールを引いて薬室の

ロックを解除し、前に倒れ込んだ銃身に何度か再装填のモーションを取ると銃を鞄に閉まって、そのまま鞄を腹部に当てるように帯にしていた黒いマフラーに収納した。
「貰っておく。ありがとう」
「……素直ね。というか、前から気になっていたのだけど、ボウヤのその帯とか靴ってどうなっているの？　完全に現代科学ではあり得ない収納や形状変化を可能にしているわよね？」
湊が帯に鞄を仕舞っている場面を見て、どこぞの猫型ロボットが頭を過ぎったナタリアは、他の者が今まで訊けずにいた質問を口にした。
この件について、最初の演習で刀を取り出すのを見ていたレベッカやヤン達も不思議に思っていたため、ついに真相が明らかになると湊の傍にいた私兵らの注目も一層増す。
この場に置いて本人を除き、マフラーと靴の機能を唯一聞かされているイリスは、どこか湊を心配するように眺めているが、尋ねられた本人は普段通りのやる気の感じられない表情のまま、たっぷり一分ほど経ってからようやく口を開いた。
「……シャワー浴びてくる」
「ちょっ、お前それ、誤魔化し方が露骨すぎんだろ！」
「ハポン、あんた世話になってるんだから、少しは他人にも恩返ししたりしなさいよ！」
話しを切り上げ、振り返ったまま部屋に戻ろうとした湊へ、パトリックとレベッカが突っ込みを入れて言葉をぶつける。
部隊の中には、辛い過去を持っている者もいるので、相手が話したくないのならば深く聞こうとしない不文律がある。
だが、湊の装備に関する説明に、何か暗いものがあるとは思えなかったので、レベッカがさらに肩を掴んで相手を逃がさないようにすると、次の瞬間、レベッカは宙を舞っていた。
「うえっ!?　きゃあっ」
レベッカが湊の右肩に手をかけると、湊はそのまま裏拳に近い形で相手の胸倉を掴み、前方に向けて力任せに引っ張りながら払い足で相

手を投げた。
一瞬のことで、他の者もフォローに回る事が出来ず、レベッカは綺麗に空中で一回転して床に落ちる。
投げられたのがチドリだったなら、咄嗟に投げられたにしても空中で体勢を立て直し、受け身なり着地を決めていただろう。
だが、レベッカは自分とほぼ同じ体格でありながら、圧倒的に力の強い者と組手をすることがなかったため、投げられるなど頭にまるでなかった。
そうして、一応は訓練を受けて実戦も経験している軍人でありながら、ドンッ、と盛大な音を立て床に身体を打ちつけ止まると、臀部を痛そうに擦りながらゆるゆると立ち上がった。
「いったぁ、お尻が割れるかと思ったわよ……」
「いや、最初から割れてるだろ。お前のケツは饅頭か何かか」
「はぁ？　あんた、セクハラでブッ飛ばすわよ。ボス、この馬鹿やっぱり外しましょうよ」
自分でツッコミ所満載の言葉を吐きながら、パトリックが呆れ顔で実際にツッコミを入れると、レベッカは痛みで涙目のままナタリアにパトリックを私兵から一般に戻そうと提案する。
大人たちはその様子に怪我も打ち身程度と推測し、大したことがなくて良かったと安堵した。
他人を拒絶するオーラを纏っている割に、何故だか人によく絡まれる湊に突っかかって行ったのはレベッカであるため、湊が正当防衛で彼女を投げたことを責める気はない。
しかし、未だに臀部を擦っているレベッカに、さらに湊が近付いていったため、追撃をしかける可能性を考慮し、イリスは慌てて湊を後ろから抱きとめた。
「ストップ！　それ以上やったら流石にやり過ぎだ。オマエ、普段は振り払うために対処する程度なのに、今日はどうした？」
いつもの湊ならば、相手が女性であるため、対処が済めばそのまま去っていく。
仕事であれば女子供も手に掛けるが、前提として弱者に甘い湊の基

本スタイルがそうなのだ。
だというのに、あれだけ豪快に投げ飛ばしておきながら、まだ追撃をしようとするのは、普段ならば考えられないことだ。
何か気に障る事があって、怒っているのかとも思ったが、顔を覗き込んでも瞳は金色のまま。
そうして、不思議に思いながらイリスが答えを待っていると、湊は静かに口を開いた。
「……尾骨にヒビが入ってる。だから、治療する」
そう答え、湊は抱きとめていたイリスを引き摺ったまま歩き続け、強張った表情で身構えているレベッカの前に移動した。
他の者は湊が何を言っているのか分からないが、怪我をしている本人は、湊の言葉を受けて何か思うところがあったのか、左手でいつでもパンチを繰り出せるよう構えながら、右手で再び自分の臀部に触れた。
「……なんか熱持ってる。え、これ骨折なの？」
「折れてはない。だが、治療が遅れれば、周辺の神経を圧迫して影響が出る。後ろを向け」
普段よりもいくらか真面目な相手の口調に、レベッカも思わず素直に指示に従ってしまう。
まさか、公衆の面前でズボンと下着をずり下げてはこないだろうな、と僅かな不安を抱きつつ、顔だけ後ろを向いて見つめる。
すると、レベッカの腰辺りに手をかざした湊の手から、淡い緑色の光が放出され始めた。
それらは、湊の手からレベッカの臀部に吸収されていき、周囲の人間だけでなく、治療を受けている本人も何が起こっているのかは分からないが、とりあえず痛みが引いていくのを感じている。
そして、治療が始まって一分経ち、湊が手から光の放出を止めた頃には、完全に痛みは消えていた。
「すごい……なに今の？　魔法？」
「……違う。生命力を譲渡して細胞を活性化させ、ヒビの入った部位の回復を早めただけだ。切り傷とか銃創なら、こんな風には治せな

い」
「へぇ、よく分かんないけど便利ね。ねえ、肩コリとかは治せないの？
あんたが人の胸によく触ってくるから、変に肩が凝るようになってるのよ」
生命力の譲渡など、実際はかなりすごい事を言っているはずなのだが、治療を受けたレベッカは痛みが消えた事で満足しているらしく、あまり深く考えていない様子で話しかけてくる。
だが、肩コリの理由があまりに信憑性が低かったため、湊は普段の二割増し面倒そうな顔をすると、相手の肩に手を置いて、緑色の淡い光を纏わせながら軽くマッサージを始めた。
生命力は心地よい温かさを持っているため、さらに、アナライズで相手の状態を把握しながら、絶妙な力加減のマッサージを受けるレベッカの顔は、だらしなく緩んでいた。
「あー……すっごい気持ち良い。何これ、あんたマッサージ屋の方が向いてるんじゃないの？」
「……身体の機能を十全に使うために必要なエネルギーだ。生命力を放出し過ぎれば、俺だって普通に死ぬ」
そう、いくらデスの恩恵で蘇生が可能な湊であっても、生きていくために必要なエネルギーその物が枯渇すれば、他の生物と同じように死に絶える。
ある程度残っていれば、休息と食事によって回復してゆくが、そういった事をするにも最低限のエネルギーが必要であり。それはイメージとして、車のエンジンをかける際のバッテリーに近いだろう。
エンジンをかけるには、最初に回すためにある程度のバッテリー残量が必要で、それを下回っているとエンジンは掛かり辛くなるか、全く反応しなくなってしまう。
レベッカも部隊の活動でそのことは勉強していたので、湊から生命力の説明を受けるとその重要性を理解し、湊の様子を気にしながらマッサージを中断させた。
「そろそろいいよ。かなり楽になったし、ありがとね。シャワー浴びるなら、身体冷える前に行ってきな。誕生日に体調崩したら大変だ

し」
「……わかった」
マッサージを終え、レベッカに自室に戻る事を勧められた湊は、相手の態度をどこか不思議そうにしながらも頷き、他の者に一度視線を送るとそのまま食堂を出ていった。
湊の姿が見えなくなるまで、レベッカが右手を腰に当てて見守っていたため、彼女が皆の元に戻ってくると、急に態度が変わったことを訝しんでイリスが尋ねる。
「あんなに嫌ってたくせに、急にお姉さんしだすなんて一体どういう風の吹き回しだ？」
「んー、なんか扱い方が分かった気がしたっていうか。多分、暇なときにまた会って、私がマッサージしてって言ったら、あいつ面倒そうにしながらも断らないわよね？」
「アタシは小狼本人じゃないから、絶対とは言えないよ。だけど、まぁ、多分そうだろうな」
相手をよく理解しているイリスが腕組みをしながら首を縦に振ったことにより、レベッカは自分の感じた湊という人間の認識がほぼ正しいと確信する。
前々からその予兆はあった。バーバラに鑑定を頼まれたときや、シャワーよりもイリスを優先し呼ばれて真っ直ぐやってくるなど、湊は女性の頼みを基本的に断らない。
それが完全に相手の私欲であったなら、湊も拒否する可能性はあるが、相手がただ頼ってきたなら湊は怪我をした人間を治療したように、その手を掴んで施しを与えるに違いない。
頼んできたのが男の場合の対処も気になるが、レベッカは湊との上手な付き合い方を知ることが出来たので、とりあえず今後は態度を少し改めることにした。
「あいつ、面白い性格してるわね。というか、年上に好かれる感じよね。なんか構ってやったら子犬みたいに付いてきそうだし」
「……あんまり遊ぶなよ。ただでさえ、新しい環境に慣れようとしてる最中なんだから」

「大丈夫、大丈夫」
レベッカの様子にどこか腹黒い物を感じ、湊を心配したイリスがジトっとした目で諌めるも、レベッカは構わず楽しげに笑う。
他の者らは、湊の性別の秘密・不思議なアイテム・生命力の譲渡と、あまりに非現実的なことが続いたことで、話についていけていない中、ナタリアだけはレベッカに振り回される湊を想像し、同情して深いため息を吐いていたのだった。

第六十一話　美術工芸部の客

影時間――真田・私室

毎夜、日本の深夜零時に発生する影時間。

海外では時差が存在するため、その国の深夜零時丁度という訳ではないが、影時間の間、世界は緑色に塗り潰される。

空に月がなくとも、星明かりを超えた明るさに照らされた街を、真田はどこか諦めの気持ちで眺めていた。

（……また、この時間か）

街は静まり返り、生き物の気配が一切感じられず、窓の外、月光館学園のある方角には、空に伸びる異形の塔が聳え立っている。

こんなあり得ない状況に初めは驚いていたが、それも回数を重ねると、いつしか冷静に状況を判断しようと思える余裕が出来ていた。

携帯やテレビの電源を入れようとしてみたり、家族の無事を確かめるように家の中を歩いてみるなど、やっている事は些細だが、それでも色々と知る事は出来た。

まず、この世界では電池やバッテリー式であっても電化製品は起動しない。キッチンのガスコンロの火すら点けられず、原因はガスの供給が止まっているためと推測した。

よって、これは真田家だけの問題ではなく、もっと広い範囲、街全体か世界規模かは分からないが、およそ中学生一人に調べられる規模の話ではないと、それ以上の調査は諦めた。

次に、自分を除き、家族は全員が棺桶を思わせるオブジェに変わっていた。

美紀の部屋に行き、妹が寝ているはずのベッドに棺桶が横たわっているのを見たときには、思わず叫んで取り乱し、どうにかして棺桶を開けられないかと試みたものだ。

だが、ピッタリと閉じた棺桶の蓋は一切開きそうになく、知らず世界が元に戻ったときには、泣きながらベッドの横にいた真田に気付いた美紀が、何故、兄が寝ている自分の部屋にいるのか、若干、訝しんだ目で見ながらも心配してきたこともあった。

その際、昔は純粋に自分のことを慕っていた妹が、そんな不審者を見るような目を向けてきた事に僅かにショックを受け、きっと湊と関わるうちに悪い影響を受けてしまったのだろうと思ったりもしたが、結局、棺桶になっているのは影時間の間だけだと知ることができた。
(何もない。という訳ではないが、このおかしな時間が明ければ元通りだ)
棺桶になっていた妹に、身体に何もおかしな点はないか、何か不思議な時間を経験した記憶はないかとも尋ねた。
しかし、美紀は真田が何を言っているのかよく分からなかったようで、棺桶になっている間の記憶は存在しないことも判明し。それ以降、真田は美紀にこの時間について尋ねることを止めていた。
影時間という名称も含め、自分でも何が何だか分かっていないのだ。そんな奇怪な物に大切な妹を関わらせる訳にはいかない。
そうして、真田はこの時間に目が覚めると、一度部屋を出て妹が棺桶になっている事を確認し、ベッドに戻るようにしていた。
やましい気持ちは一切ない。自分の周りにいる女性の中でも、妹はトップクラスに可愛いと思っているが、そこに異性としての情など全く抱いていない。
美紀が美術工芸部に入ってからは、友達付き合いが増え、どこか以前よりも距離を開けられる様になった気もするが、それもやはり湊が純粋な妹に何かを拭きこんだに違いないと読んでいる。
そう思っているため、真田は幼馴染に過保護だと言われる事もあるが、たった一人の妹を大切にしない兄など存在しないと言い返し、今日も妹がベッドにいることを確認しに、彼女の寝ている私室へ向かうことにする。
(今日も何も変化はなかったな。起きていても変に疲れるだけだ。早めに寝るとしよう)
妹の無事を確認してベッドに戻った真田は、窓の外に聳える塔に一度視線を送ると、掛け布団を肩まで被り、疲労を残さないよう再び眠りに着いたのだった。

４月２５日（火）
放課後――美術工芸部・部室
本日の授業が終了し、掃除当番であるチドリと、職員会議があるという佐久間を除き、他の女子三名は部室に集まっていた。
先週、学校近くで風景のデッサンをしていたため、今週はデジカメの写真と記憶を頼りに水彩絵の具で色を付けている。
「……最近、寝ている間に兄さんが私の部屋に入ってきているときがあるんです。特になにかしている訳ではないんですが、私が驚いて起き上がると、何故だか『無事だな』と頷きながら帰って行って。これってどう対応すればいいんでしょうか？」
湊がいない間、部室は少し広く感じられるが、なんとなく今のメンバーで集まることに親しみを感じているので、学校側に部員を増やさないかと言われたがそれを断っておいた。
何より、部の創設者がいない間に、純粋に美術や工芸に興味がある以外の人間が入部して、この場所を壊すわけにはいかない。
「えー……それ危なくない？　部屋に鍵とかつけれないの？」
「あんまり、事を荒立てたくないと言いますか。そこまでしてしまうと、義父さんと義母さんも不審に思いますし」
入部希望が男女合わせて八十人を超している事実にも驚いたが、そんなにも活動に興味があるのなら、顧問である土我先生がいるのだから、休部中の美術部を復活させればいいと佐久間も言っていた。
それ聞いた教頭は思わず頷いてしまい。実際に復活させたところ、純粋に美術部希望だった生徒と美術工芸部と勘違いした者らを合わせ、三十人ほど入部したと報告を受けた。
もっとも、それを聞いたところで、メンバーはそうなのかと思った程度だが、美術部と美術工芸部は別の部活ということで予算も別に出ている。
そのため、今年は湊の分の備品を買わずに済んでいるので、キャンパスや筆などを、中学生の小遣いでは手が出にくい高級品にするなど、去年よりも実力の上がった自分たちへのご褒美気分で、部員らは新しい筆とキャンパスの描き心地を確かめながら、かなり深刻な顔で

美紀に対する真田の不審な行動について話し合っていた。
「その、先輩は美紀ちゃんが心配だから、トイレに起きたついでに様子を見に来てるとかじゃないのかな？」
「それなら……いえ、でも、やっぱりちょっと怖いです。チドリさんも兄さんをシスコンって言ってましたし。その、シスコンって姉や妹を女性として見るタイプもいるんですよね？」
「よく知らないけど、前に兄が妹に恋して恋人になるって映画やってなかったっけ？　あれ、友達に誘われて観に行ったけど、結構、ドロドロしてたなぁ……」
　去年のことを思い出しながらしみじみ話すゆかりの言葉は、兄の不審な行動に不安を覚えていた美紀にとって不安を煽る効果しかなく、色を塗っていた筆が止まると途端に顔が絶望の色に染まっていた。
「ゆ、ゆかりちゃん」
　美紀の表情の変化に気付いた風花が、慌ててゆかりを諌めるも、時すでに遅し。
　自分が兄に襲われる場面を想像してしまった美紀は、俯いて顔を前髪で隠しながら、ぼそぼそと呟きはじめる。
「……妹に欲情するってあり得ないっていうか……いっそ、彼氏を作って護って貰えば……でも、兄さんに勝てる人なんて、あ、有里君がいました……うふふ、これなら大丈夫ですね」
「ちょ、真田さーん、真田美紀さーん」
　急に暗黒面に堕ちてしまった美紀に戸惑いつつも、ゆかりは声をかけて相手を呼び戻そうとする。
　一部、ここにはまだ来ていない二人が反応しそうな単語が聞こえてきた。仮に二人が聞いてしまったならば、また騒ぎになるのは明白だ。
　別に美紀は湊を異性として意識していないようだが、それでも、自分の兄から護って貰うために形だけでも恋人にしようとするのなら、美紀と湊のファンたちも巻き込んでの大騒動に発展するに違いない。
「……あの日の男の子に似てますし……ええ、本人なら運命と言っても過言ではないです……」

「どうしよう、美紀が帰ってこない」
「ゆかりちゃんが変なこと言うからだよう」
流石の風花も庇いきれず、ゆかりの失言にやや呆れたように眉尻を下げて嘆息する。
たまに不気味に笑う美紀に恐怖を感じるが、今はストレスと愚痴を吐きださせておいた方が良いと判断することにし、そっとしておこうと思った。
そうして、美紀を放置したまま、ゆかりと風花は自分の絵に色を付ける作業に戻ると、少しして部室のドアがノックされた。
普段、部員らが入ってくるときには、誰もノックしたりはしないため、今回の来訪者はそれ以外の人間という事になる。
鍵は開いているので自由に入って貰って構わないが、ゆかりらが何も答えずにいると、相手はもう一度ノックしてきたので、もっとも入り口に近いゆかりが声をかけることにした。
「開いてますから、どうぞー」
「失礼します」
ゆかりが声をかけると、来訪者の女性の声が聞こえ、直ぐにドアノブがガチャリと音を立てて扉が開いた。
入ってきたのは、側頭部にリボンを一つずつ付けた腰に届く長髪の女生徒で、さらにその後ろにショートツインテールの女子と、ツインリングの女子が続いて入ってくる。
それぞれの制服についたバッヂから判断するに、順に三年・二年・一年生の生徒らしい。
部屋に人が入ってきたことで美紀も復活したのか、入り口付近に立ったままでいる相手に、部の代表者として声をかけた。
「えっと、雪広先輩でしたよね。去年はTシャツ作りのときにお世話になりました」
「いえ、他ならぬ皇子の頼みとあらば、この雪広（ゆきひろ）　繭子（まゆこ）、どのような願いも叶えてみせますわ」
とても上品で綺麗に微笑む彼女は、真田と同じ3―C所属の先輩であり、実家がプリント屋をしている関係で、去年の部活動でTシャツ

を作る際に依頼したという繋がりがある。
　他のメンバーは繭子が注文の品を部室に届けに来るまで知らなかったが、湊だけは繭子の実家がプリント屋をしていると知っていたようで、湊の情報網に驚いたものだ。
　だが、今は特に何も注文していないため、彼女がここにやってくる用事もないはずだが、立たせたままではなんなので、三人とも席を立って余っている椅子を対面するような形で準備すると、来訪者に着席を促した。
「立ったままというのもなんなので、どうぞ座ってください」
「ええ、ありがとうございます」
『失礼します』
　美紀に促されると、繭子と一緒に来ていた女子二人も素直に席に着いた。
　一人は同じ二年生だが、同じクラスの生徒ではないため、誰も名前が分からない。
　同じく一年生の生徒も、特に後輩と繋がりを持っている訳ではないため、名前が分からなかった美紀たちは、とりあえず自己紹介をして貰うことにした。
「あの、お名前を伺ってもよろしいですか？」
「ああ、これは失礼しました。こちら、二年Ｃ組の相葉（あいば）さんと、一年Ａ組の米倉（よねくら）さんです。本年度の『プリンス・ミナト』の学年代表を務めております」
『は、はぁ……』
　繭子が二人を紹介すると、二人は制服の上着のポケットから『プリンス・ミナト』の会員証を取り出し、それぞれの学年を表すローマ数字の金色のシールが貼られていることを見せてきた。
　それが学年代表の証なのだろうが、生憎と美術工芸部のメンバーに湊のファンクラブに入っている者はいないため、やや呆けたように頷くことしか出来なかった。
　だが、相手がどこか誇らしげなので、学年代表は一応すごいことなのだろうと推測し、美紀は言葉を選びながらやってきた用件を相手か

ら尋ねる。
「それで、本日はどういったご用件でこちらに来られたのでしょうか？」
「よくぞ訊いてくれました！　ですが、その前に、貴女方は我々『プリンス・ミナト』の存在をご存じでしょうか？」
「えっと、有里君のファンクラブですよね？　非公認の」
　繭子に聞かれて、ゆかりが曖昧な知識のまま自分の知っていることを口にする。
　真田のファンクラブである『真田王国（キングダム）』と同規模の勢力を誇る組織であり、その会員は中等部だけでなく、初等部と高等部、はては教師や他校の生徒にまで及ぶと言われている。
　だが、両ファンクラブとも本人らに認められている訳ではなく、何故だか、学校の同好会にはなって部室を割り振られているものの、真田に至っては自分のファンクラブだというのに存在すら知らない有り様である。
　その点、『プリンス・ミナト』は、繭子が湊に質問のフリをして筆記体で『プリンス』と『ミナト』を別々に書いて貰い、それを会員証の題字に出来ているなど、いくらか実りある活動が出来ていた。
「ええ、その通り。ですが、皇子は我々のことを黙認してくださっています。ですので、準公認組織と呼んでください」
「会員数も四月現在で四百人を超えましたし。いま一番勢いに乗った熱いチームなんですよ。まぁ、有里先輩が海外に行っちゃってるんで、今年はファン会合くらいしかすることないんですけどね」
「おだまり、二号！　我々は、一回りも二回りも成長して帰ってきた皇子と優雅にお話しするべく、英語を勉強するという使命があることを忘れたのですか？」
　軽いノリでケラケラとおかしそうに笑う一年生代表の米倉を、繭子はキッと睨んで黙らせる。
　何故、名前ではなく二号というアダ名で呼んだのかは不明だが、最低学年が二号ならば、二年生の方は一号に違いない。
　だが、そんなよく分からない相手側の事情を考えるよりも、ファン

クラブのメンバーのくせに、湊が日本にいた時点で英語を完璧に話せることを知らないことにゆかりらは疑問を感じた。
指摘すれば自分たちの方が湊を理解しているように思われるかもしれない。けれど、どうせなら、英語以外で話せた方が湊の記憶にも残るのではと思ったため、風花はそれを伝えることにした。
「あの、有里君って英語は日本にいた時点で話せるんです。あと、中国人の知り合いがいるので、中国語も出来ますし。だいだいの主要言語は留学前に日常会話レベルは身に付けてましたから、どうせなら英語とかじゃない方が相手の記憶にも残ると思いますよ？」
「なっ!?　そ、そんな……」
風花の言葉を聞いた途端、繭子は大仰な仕草で立ち上がりながら驚愕の顔を浮かべ、そのまま椅子に戻らず床に膝をついていた。
これには、言った風花だけでなく、ゆかりや美紀も驚いたようで、そこまで衝撃を受けるようなことかと思いつつも駆け寄ろうとする。
しかし、その前に相手は勢いよく立ちあがり肩を震わせたかと思うと、とても輝いた顔で両手を広げ、会員の二人の方へ向き直った。
「聞きましたか、皆さん！　文武両道だけでなく、語学も堪能。あぁ、流石は神に最も愛され、世界を統べるべくこの世に舞い降りた皇子。男性ではあり得ぬ、絹のような透き通る肌。さらに、風にたなびく青き髪に、至高の輝きを持つ金色の瞳。彼の後ろ姿を見る度、わたくしはいつも翼を幻視してしまいます」
繭子は、最後にうっとりした顔で自分を抱きしめ、何を視ているのか天井の隅の方を向いて笑っている。
以前、注文していたTシャツを届けに来たときには、照れて顔を赤らめながらも、丁寧な口調と仕草で湊と会話していたので、数少ない上品で大人な先輩だという認識を美術工芸部のメンバーらは持っていた。
だが、この学校は美形だと変人というジンクスでもあるのか、湊に対する愛という方面に突き抜けてはいるが、彼女もまた佐久間と同レベルの変人であった。
そして、頭のネジでも緩んでいるのか、二号こと米倉はまたしても

軽いノリで、先輩が話していたことも構わず笑って話しだす。
「有里先輩って綺麗ですよねー。初等部時代に中等部見学で偶然にも会って、何で男装してるのか聞いちゃいましたよ。それって校則違反じゃないんですかって。まぁ、そしたら一緒にいた赤髪の人に蹴り飛ばされましたけど、立ち上がるときに先輩が優しく手をかしてくれて、自分は男だって教えてくれましたぁ」
『えー……』
二号の言葉を聞き、美術部工芸部のメンバーは残念な行動を取った佐久間を見るような、微妙な表情で相手を見てしまった。
頭のネジが緩んでいるどころではない。湊のことを知っている中等部の生徒ならば、絶対に彼女の行動を自殺志願だと思うだろう。
そもそも、学校の制服を着ているときならば、湊が鍛えていてがっしりした体格であることにも気付けるはずだ。
かなり重要なその部分をスルーして、さらに隣に連れの人間がいる状態で訳の分からないことを急に言えば、本人が怒らなくとも、ゆかりや美紀であっても相手を注意するところである。
それも、よりにもよって湊と家族や幼馴染という関係にあるチドリのいる場面で口にするなど、よく蹴りの一発で済んだものだと呆れずにはいられなかった。
プリミナの上級生らも、自分たちの後輩の非常識な言動にワナワナと震え、相手を立たせると掴んだ肩を揺らしながら相手を激しく叱責する。
「あ、貴女は一体なにをしているのですか！　皇子が寛大な御心の持ち主であったから良かったものの、古代ローマならば鞭打ちの上に斬首刑に処されているところです！」
「えー、だって誰も先輩が男だって教えてくれなかったじゃないですかぁ」
「おだまり元小学生！　そもそも、体格が違うでしょう！　昨年の文化祭のように着物で体型が隠れていなければ、制服の上からでも逞しい体躯から男性だと誰だって分かります！」
「それ偏見ですよー。世の中にはマッチョ系の女性もいますし」

確かにアスリートだけでなく、ボディビルダーなど、女性にも非常に逞しい肉体をしている者は多数いる。
そして、湊は男性の中ではかなり女性よりなので、男性的な女性と女性的な男性で、どちらが女性に見えるかと聞かれれば、とても難しい問題だと悩むのも無理はない。
湊が女性の染色体も持っていることを知っているのは、一緒に病院に行った桜・イリス・ロゼッタの三人を除けば、つい先日教えられた蠍の心臓のメンバーしかいないので、二号の質問もあながち間違いではないと気付ける者はここにはいない。
そうして、ろくに話も進まぬまま、プリミナのメンバーが騒いでいると、部室の扉が開き、チドリと佐久間が入ってきた。
やってきた二人は、部屋に入るなり見慣れぬ者らがいたので、不思議に思いつつそちらに視線を向けて口を開く。
「およ？　あー、有里君のストーカーの人たちだ！　ついにこの有里ハーレム王国にも侵略してきたな！　でも、残念でした。この部活は部員募集してないもんねー。そんなに入りたかったら、パチモンの美術部にでも行ってらっしゃーい」
「す、ストーカーは貴女の方でしょう！　教師という権力を不正に使い、皇子にいつも付き纏って！　いい歳して恥を知りなさい！」
「うぷぷー、有里君は胸の大きい人が好きなんだもんね。つまり、ペチャパイナポゥな貴女たちはノー眼中！　ファーストキスもまだなお子ちゃまは、お尻の蒙古斑が消えるよう祈って家で大人しく寝てなさい！」
急に失礼なことを言ってきた佐久間に、繭子が額に青筋を浮かべながら反論する。
しかし、腕組みをして自分の胸を強調するよう仁王立ちしながら、佐久間はプリミナのメンバーたちをさらに激しく煽る。
本当に社会人かと聞きたくなるほど、まったく欠片も引かずに、大人げなく生徒と口喧嘩するなど、同じレベルに残念と言われている櫛名田ですらしたことはなかった。
加えて、湊は一度として胸が大きい方が好みだなどと言った覚えは

ない。まわりにいる大人に巨乳が多いだけで、本人にしてみれば自分の心が如何に穏やかでいられるかの方が重要だ。
そんなことも知らず、自身とて、不意討ちで湊にキスしたことでファーストキスを済ませただけだというのに、他の者よりも大人であると佐久間は自信たっぷりに勝ち誇っていた。
現れた途端、人一倍騒いでいる担任兼顧問に嘆息しながら、ゆかりや美紀は状況が分かっていないチドリに先に説明することにした。
「えっと、あの人たちは有里君のファンクラブ『プリンス・ミナト』のメンバーで、なんか用があって来たらしいの」
「その用件を聞いている最中でしたが、先生が来た途端にこれで……」
乾いた笑いを見せる美紀の言う通り、佐久間は部室に入ってくるなり、生徒をストーカー呼ばわりしてひたすらに挑発している。
その後も、相手が言い返してくれれば、さらに捲し立てるように罵倒し、小さな子どもが自分の嫌いな相手にあっちいけと言っているようにしか見えない。
事実、佐久間は自分と湊の居場所に、湊がいることを許可した部員以外の人間がいることが嫌なのだろう。
佐久間は、湊と出会ったほぼ最初から独占欲の強さを周りに披露していた。自分を湊の物にして欲しいと望み、また、湊に自分の傍にいて欲しいと願う。
淡い恋心すら知らずに育った女が、一生の恋の相手に出会ってしまったが故の反動だ。
周囲は佐久間が湊に入れ込む原因を知らないが、チドリは同じように既に才能が開花している天才として、湊がいなかった場合の世界の感じ方を想像出来ているため、佐久間の気持ちをある程度理解しつつ、それでも話を進めるために提案する事にした。
「……クマモン、話が進まないから、用件だけ聞いて帰らせれば？」
「えー、だって絶対に有里君関連だよ？　有里君の作品を売ってくれとか、有里君の近況報告が聞きたいとかさ。私も教師として一生徒のプライバシーに関わるような、そういう行為って出来ないんだよね」
『嘘付け』

完全に湊のプライベートに突っ込んだ行動を頻繁に取っているくせに、シレッと教師の仮面を被って嘘を吐く佐久間に、生徒らは口を揃えて言った。
コントロールが利かず、ただ近くにいるだけで疲れる人間を、湊はよく黙って相手していたものだと、二号以外の生徒は感心を超えて尊敬すらし始めていた。
仮に相手が異性で、自分たちの好みだったとしても、流石に疲れて三日で気持ちも冷めるに違いない。
そうして、部員らが佐久間を宥め、どうにか話しが出来る状態になると、少しばかり疲れた表情をした繭子が美紀たちを見つめながら口を開いた。
「単刀直入に申しますと、実はあるものをデザインして貰いたいのです」
「あるもの、ですか？」
「はい。実は、この度、我々『プリンス・ミナト』で皇子不在の心の隙間を埋めるべく、小さな根付けと言いますか、ストラップを作ろうという話しになりまして」
言いながら、繭子は上着のポケットから一枚の紙を取り出すと、それを美紀たちメンバーの前に広げた。
『……え』
そこに書かれていたイラストをみて、メンバーは思わず言葉を失う。
紙の一番上に可愛らしい丸い字で『仮名・デフォルメ皇子』と書かれていることから、これが相手の用意した設定案で、イラストは湊をデフォルメした姿のつもりに違いない。
だが、美紀たちの目に飛び込んできたのは、顔がアンパンで出来た子どもたちのヒーローが青いタテガミを持ったような存在であった。
それだって、かなり譲歩しての評価であり、普通にみれば、辛うじて目や鼻など顔のパーツの数が合っていることしか判断できない。
いくら芸術方面の才能がないにしても、丸と棒だけで人の顔を書いた方が、まだ湊に近くなるだろう。

しかし、相手は真面目に描いてこのレベルらしく、どこか誇らしげな笑みを浮かべ、上品な口調で言葉を続けてきた。
「フフッ、初めてデザインしたのですがどうでしょう？　これを基に、美術工芸部の皆さんに正式なデザインをお願いしたいというのが、ここへやってきた理由なのです。まぁ、幼少期の皇子の写真などがあれば、それを基にして貰った方が愛らしく出来ると思いますから、そこら辺はお任せしますが」
「え、あの、私たち別に、そういうデザインの依頼とか受けてないんですけど」
「皇子は、わたくしが筆記体で綴りを知りたいと言った際、快くこのように書いてくださりましたよ？」
ゆかりが相手にお引き取り願おうと、デザイン注文は受け付けていない旨を告げる。
だが、相手は気にした様子もなく、どこに仕舞っていたのか、背中から額縁に入ったサイン色紙を取り出して見せてきた。
色紙にはアルファベットの筆記体で『プリンス』『エンジェル』『ミナト』『マユコ』『ラヴ』と色々な単語が書かれている。
先ほど見せてきた会員証の題字と、色紙に書かれている文字が重なるように見えたため、題字はこの色紙の文字をスキャンした物を利用しているのだろう。
相手が知らない人間であっても、困っている女性が頼ってきたときには、湊は暇であれば手を貸してやる人間だ。
しかし、それは変なところで湊の面倒見が良いだけであり、この美術工芸部の活動とは何の関係もない。
今はコンクール用の作品をとくに作ってはいないが、面倒な事は御免だと、チドリも口を開いた。
「面倒くさいから嫌よ。というか、その下書きでデザインを起こせなんて無理。せめて、人間に見えるものにしてもらわないと」
「なっ!?　ちゃんと見えるでしょう！　風にたなびく髪、どこか憂いを帯びた表情！　皇子そのものです」
「……はぁ」

真面目に描いたイラストを貶され、繭子は机に手をバンッと着いて立ち上がり反論してくる。
だが、芸術センスが皆無らしい相手とこれ以上話しても無駄だ。チドリは深く溜め息を吐くと、鞄にいつも入れているスケッチブックを取り出し、いくらかページを捲って、ある絵を開いたまま机の上に置いた。
そこには、上半身裸で下半身が毛布で隠れている座った湊の絵が描かれており、色は塗られていないが、陰影で筋肉の質感なども表現されている。
普段は抽象画など様々な絵を描いているチドリも、たまにはこの絵のような普通の写実デッサンも描く。
そうして、繭子の描いたデフォルメしたらしい湊のイラストと自分の絵を並べ、他の者にも一緒に話しかけた。
「これ、同じ人間を描いた絵に見える？　私は見えないから、もし見える人間がいるなら、その人がリデザインしてあげればいい」
「わー、すごい。本物の写真みたい」
「うん、すっごいリアル。でも、この有里君、なんで服着てないの？」
「着物が脱げてるだけ。別の角度だとこうなってる」
風花とゆかりの言葉に答えながら、チドリは携帯を取り出すと、写真フォルダから一つのデータを画面に表示する。
画面には、確かに絵を別角度から見たような、帯より上の着物が脱げてしまっている寝起き姿の湊が写っていた。
プリミナのメンバーは自分たちが敬い崇めている少年の隙だらけな姿に、思わず生唾を飲み込んで喉を鳴らす。
それは佐久間も同じようで、瞳に真剣な色を宿らせ、ジッと画像を見つめながらチドリに声をかけてきた。
「おー……ねぇねぇ吉野さん、そのデータ頂戴。待ち受けにしたいから」
「……あげる訳ないでしょ。なんで他人に家族のプライベートショットをあげないといけないのよ」
「むぅ、じゃあ、先生も秘蔵の写メあげるからさ。交換なら良いでしょ

？」
言うなり佐久間は、自分の携帯のプライベートフォルダのロックを解除し、彼女曰く秘蔵の写メを表示した状態で画面を見せてきた。
そこに写っているのは、佐久間がたまに腕につけているシュシュで髪を結んで料理を作っている湊の姿で、チドリはこんな姿の湊を見たことがなかった。
何より、料理を作っている場所に見覚えがない。どこかの部屋のキッチンのようだが、チドリは部活メンバー以外の家に遊びにいくことが基本的にないので、画像を見ただけではその場所が分からない。
それは他の者も同じようで、考えても思い付かず、ゆかりがお手上げだと佐久間に撮影場所を尋ねることにした。
「先生、これってどこで撮った写真なんですか？」
「ん？　ああ、私の家だよ。ていうか、アパートの部屋ね。皆はまだ来た事なかったっけ？」
「ええ。というか、先生、そんなに有里君を家に招いてたんですか？」
「んーと、五回くらいかな。遊びにきてた姫子先生が中華が食べたいって呼び出したこともあるし。お家デートしよってお菓子で釣って来てもらったりとか。結構、普通に来てくれたよ？」
佐久間はニコニコと楽しそうに話すが、対照的に、女子たちの顔は微妙な表情で固まり、湊と佐久間の関係に対する疑念が湧いていた。
ただでさえ、二人は佐久間の校内での振る舞いのせいで、もしや教師と生徒でいけない関係になっているのではと疑われているのだ。
それが疑いで済んでいるのは、湊が佐久間をほとんど相手していないからで、佐久間の湊への想いに関しては学校中が知っている。
しかし、ここで湊も佐久間の家に遊びに行っていた事実が発覚してしまった。
これでは、学校では相手していないだけで、湊も佐久間を満更でもなく思っていると周囲が考えてしまってもしょうがない。
このことが広まれば、佐久間も湊も学校に居られなくなる可能性が高いだろう。
故に、この場にいる女子らは、アイコンタクトで意思疎通を図り、一

度頷くと、代表者である美紀が佐久間に進言した。
「先生、こういった写真はあまり人前で見せない方が良いと思います。男子生徒が女性教師の自宅に上がり込んでいたと聞けば、下世話な雑誌記者がやってくるかもしれませんから」
「あー、パパラッチかぁ。確かに先生もちょい有名人だし、そういうのはメンドっちいよね。うんうん、じゃあ今後は普通に惚気るだけにするよ。ストーカーの貴女たちには刺激が強いかも知れないけど、ちゃんと全年齢版の話しかしないから安心してね！」
最後に綺麗なウインクをして見せて、佐久間はチドリとの交渉に入ってゆく。
どこか主婦っぽい調理姿と寝起きのセクシーショット、どちらも入手のためならファンクラブの間で金銭が動きそうな写真だ。
実家では桜が湊とチドリに料理を作ってやりたいという理由から、湊は基本的に料理をしないので、チドリも普段見る事のない湊が着物以外の私服で料理している写真は欲しい。
だが、着物が脱げて事後にも見える貴重な寝起き姿を、明らかに湊を狙っている女に渡したくないという気持ちも存在する。
反対に、佐久間は佐久間で、自分と湊しか知らない二人だけの時間を切り取った写真を、いくら相手の家族とはいえ他者に渡したくないとも思っている。
けれど、チドリの持っている写真には、それだけの対価を払う価値がある。写真集を出すのならば、間違いなく表紙に選ばれるであろう芸術作品だ。
故に、佐久間は表情では笑顔を作りつつも、断腸の思いで他の写真もチラつかせつつ交渉を続けた。
「姫子先生に三つ編みにされた有里君とかどう？」
「弱い。湊は昔はもっと髪が長かったし、理由があって女装させられてたから、髪型で遊んでる写真は沢山残ってる」
佐久間が三つ編みにされた湊の写真を見せると、チドリは髪をお嬢様結びにされて水色のワンピースを着た八歳頃の湊の写真を見せた。
その湊の隣には、同じ髪型で色違いの黄色のワンピースを着ている

チドリが写っている。
　これは湊の変装を手伝ううちに、二人に可愛らしい恰好をさせるのが楽しくなった桜の暴走した結果であり、衣装を提供したロゼッタと、ロゼッタを車で桔梗組まで連れて行ったイリスの携帯にも、これと同じ画像は保存されている。
　普通ならばこのような写真を見せられれば不思議に思うが、日本には文化として、身体の弱い男子を幼少期に女子の恰好をさせて育てることや、悪霊から守るために女装させる習慣が存在した。
　体育を見学していることや、たまに学校を休むことから、実は身体が弱いと思われている湊ならば、とくに不思議にも思われず皆に受け入れられていた。
　そして、普段はクール＆ワイルドな真田に対し、常にクール＆ビターなイケメンという評価を得ている湊の、現在からは想像も出来ないそんな姿に、画像を見た他の者たちは思わず表情が緩んでしまう。
「ブフッ、昔の有里君ってこんなだったの？　チドリと姉妹みたいになってるし、可愛すぎでしょ」
「お、皇子の幼少期がこんなにも愛らしいだなんて……想像以上です。お願いします、吉野さん。どうかそのデータをわたくしにも譲ってください。また部活動で何かをプリントする際、ウチの店でサービスしますから」
「あ、会長ずるいです！　先輩、私にもください。前に蹴られたこと許してあげますからぁ」
　ゆかりが幼い二人の姿に純粋に可愛いと思っている隣で、最初に交渉していた佐久間に加えて、繭子だけでなく二号も一緒になって湊の画像をくれと言い出した。
　ずっと喋っていない一号は、湊の上半身裸の写真を見た時点で鼻血を出し、今も幼少期の湊を見て「ハァハァ」と息を荒くしている。
　そうして、『プリンス・ミナト』のメンバーたちが、当初の目的を忘れて画像に熱中したことにより。話し合いは完全に湊の写真品評会へと様相を変え、それぞれが持っている画像を見せ合い、時には交渉が成立して交換されるなど、下校時刻まで女子八人でかしましく続け

られたのだった。
帰宅後にメールしたチドリからその事を知らされた湊は、帰国後に全員の携帯を潰しにゆくと宣言し、文面から湊が本気であると読みとったチドリは、さらに部員と佐久間に湊が本気で携帯を破壊するつもりでいる事を伝えた。
それにより、全員が驚きつつちゃっかりバックアップを取っていることまでは、流石の湊も知らされていないため、結局、湊の知らないところで本人の抹消したい過去は生き続けることとなった。

第六十二話　武器整備

5月1日（月）

朝――〝蠍の心臓〟・ガレージ

朝のトレーニングと朝食を終えたレベッカは、部屋で雑誌を読んでいるところをナタリアに呼び出された。

呼び出された理由は、昼過ぎに食料や弾薬など物資調達のため、都市の方で少しばかり卸業者と話し、ついでにガンスミスにも会いに行くので、連れてゆくから準備をしておけというものだ。

他に呼び出されていたのは、父のラースと通信兵のバーバラ、さらにチャドも一緒にゆくようで、出発までは時間があるものの、移動の足の準備として四人は複数ある大型ガレージの一つにやってきた。

戦車や戦闘機、車にヘリなど蠍の心臓には様々な物があるが、いまやってきたのは武装されていない通常車両の置かれているガレージである。

なので、ほとんどの者が休日でもない日に、普通の兵士がこのガレージに用などあるはずもないのだが、四人がやってきたときには、何故だか灯りが点いていた。

使っていない部屋の電気は消せとナタリアは兵らに常々言っているので、間抜けな新兵でもなければ、電気を消す事も忘れるほど切迫した状態以外で、ボスの言いつけを破る者はいない。

そうして、不思議に思いながら四人が広いガレージに足を踏み入れると、そこには珍しく髪を縛った私服姿の湊が、一人で床に座って何かをしていた。

「あれ、あんた、こんなとこで何してるの？」

声をかけながらレベッカが近付いてゆくと、湊のまわりには青いビニールシートが敷かれ、その上に銃火器や刀剣類が広げられているのが目に入った。

さらに、蠍の心臓には置いていない大型バイクと中型バイクが一台ずつ置かれており。湊は座った状態で分解された拳銃を手に持っていることから、置かれている武器類とバイクのメンテナンスのため

に、他の邪魔が入らない広い場所を求めてここにいたと当たりをつける事が出来た。
武器のメンテナンスがしたいのであれば、専用の工具類が置かれたメンテナンスルームも存在する。
バイクも別のガレージで車と一緒に整備できる環境が整っており。そこには技師たちもいるので、より綿密な整備が受けられるのだが、湊のまわりにはバイクは二台だけだが、武器は十や二十ではきかないほど大量に置かれていた。
これでは、流石のメンテナンスルームも一時的に湊に掛かりきりになって、業務をストップすることになるだろう。
滞在中は隊員として働いているが、ここが古巣のイリスと違って、湊はまだ客員の扱いが拭えていない。
故に、湊が他の隊員に迷惑をかけないよう、自分だけでひっそりと作業をするのも納得できたため、レベッカは置いてある武器を眺めながら、湊の近くに屈んで声をかけた。
「あんた、一人でこんなに整備できるの？　てか、日本って中学生でバイクの免許とれたっけ？」
「大型で十八、中型でも十六からだ。バイクは大型がイリスのお下がりで、中型が知り合いの伝手で発売前のやつをテスター名目で一台貰った。日本にいるときは、無免許だが足の調達が面倒なときに利用してる」
置かれているバイクは、大型は輝く黒いボディの後部に『ＧＳＸ１３００Ｒ』と書かれているバイクレースでもよく見かける車種で、車体側面に書かれた特徴的な漢字のペイントは、イリスの趣味ではなかったのか上から別の塗装をしたようで消えてしまっている。
だが、確かに車も足の速い高級車に乗っているイリスのチョイスだと思えば、最高時速三百キロを超える最速のマシンは実にそれらしい一台だと思える。
実際、湊は去年の四月の仕事でこのバイクに乗って、制限速度を超えたターゲットの車に簡単に追い付き、運転しながら片手でサイドミラーやタイヤを撃ち抜くという妙技を見せたこともあった。

重心が低いアメリカンならともかく、速度に乗ったスポーツバイクでそんな真似をするなど、本来は自殺行為でしかない。
だが、湊は心臓を包んでいるエールクロイツの影響により、影時間外でもシャドウと同じ力で機械そのものを操作出来るので、アクセルを回さなくとも直接加速させる事が出来る。
そのため、当時は本人が得意とする身体操作によってバランスコントロールし、走行しながらの射撃を成功させたが、両手を放したところでなんら問題ないという、裏の仕事においても非常に有効な能力で、緊急時も対処できるよう考えられていた。
そんな湊とのエピソードを持っている大型に対して、中型の方は大型とは外観が大きく異なっており、形状はネイキッド、色は黒とシルバーで、タンクロゴは大型と同じ『S』というシンプルな一文字が書かれているだけだ。
知り合いの伝手で貰った発売前の物ということで、レベッカは立ち上がって車体を観察し、そこに『GSR400』と車種名らしきものを発見すると、特に興味もなかったのか素直に湊の元に戻ってくる。
「ふーん、そうなんだ。自分らで整備できる隊員もいるから、手伝うよう声かけてこようか？」
「……それで動作不良を起こしたとき、責任を取って死ぬような奴なら、手伝わせても構わない」
「いないから。なんで善意で手伝って、ちょっとのミスで殺されなきゃいけないのよ。戦場でのハプニングは技術や機転でカバーすんのが当然でしょ」
確かに善意で手伝ってくれる相手に、何かあれば責任を取って死ねという湊も極端だ。
しかし、戦場でのトラブルは自分だけではなく、仲間や護衛対象の命も危険に晒す。
多数の武器を持っている湊なら、他の者よりも対処までのラグも少ないが、それでも数秒を浪費することになる。
その数秒があれば、敵が距離五百メートル以内の狙撃手なら確実に着弾してしまうだろう。

攻撃を受けた者が生きていれば非常に幸運だが、生きていれば生きていたで、負傷者をカバーしながらの作戦行動は非常に鈍足で神経を使うことになる。別働隊がいない状態で自分たちがそんな事になれば絶望的だ。

レベッカはその可能性を考えていないのか、分かっていても仲間のことを思って発言したのかは分からない。

「……はぁ」

だが、そこまで会ったばかりの他人に情をかけることも、信頼を寄せる事も出来ない湊は、深いため息を吐きながら解体していたＦＮ Ｆｉｖｅ―ｓｅｖｅＮを組み直し、それを整備の終わった右側に置いて、新たな武器を手に取った。

その態度が気に食わなかったのか、レベッカはムスッとした表情で、湊を見つめながら再び話しかける。

「うわ、ファイブセブンとかだっさい。やっぱ、ハンドガンならシグザウエルＰ２２６でしょ」

「……まぁ、作りは丈夫だからな。お前みたいな粗雑な人間にはお似合いだ。それと、俺は普段はガバメントしか使ってない。ファイブセブンなんて貫通力の高過ぎる武器を、日本で使い続ける訳ないだろ」

先ほど湊が整備していたＦＮ Ｆｉｖｅ―ｓｅｖｅＮは、通常の弾丸よりも弾頭が鋭い円錐型の物を使用する。

そのため、抵抗も少なく初速が速くなり、ライフル弾を防ぐほどのクラス３の防弾ジャケットすら貫通してしまうのだ。

さらに、その弾丸は柔らかい物にぶつかると横転する性質も持っており、ただ貫通するのではなく、傷口を広げて抜けてゆく凶悪さも持っている。

殺すことや相手に傷を負わす事が目的の戦場ならば、そのような高威力の銃でも構わないが、湊の活動していた日本では、貫通した弾丸がまわりの壁などに痕を残すことや、救助する者にまで当たってしまう危険性がある。

そんな不要な危険を孕む武器を使うくらいなら、湊は素手で敵を鎮圧した方がマシだと思っているため、あまりに考えの足りていないレ

ベッカを鼻で笑って整備を続けた。
「あーもう、ムカつく！　こいつ、やっぱり頭おかしいわよ！　人が気を利かせて手伝い呼んでやろうかって言ったのに、ミスしたら手伝った人を殺すとか、いちいちあたしのこと貶してくるとか、絶対まともな育ちしてない！」
　自分も武器を通じて湊を貶したというのに、レベッカはそれを棚に上げて勢いよく立ちあがると、他の者らへと振り返り憤慨した。
　そんな二十歳の少女の様子に、共にいた隊員らは思わず苦笑する。
　だが、これから少しすれば仕事が待っているため、宥めておかない訳にもいかず、メンバーを代表して父親のラースが声をかけた。
「まぁ、落ち着けって。今のはお前の方が悪い。武器の好みはそれぞれだから何も言わんが、命預ける得物なんだ。よっぽど信頼してない限り、それの整備を他人に任せる気にはならないだろ？」
「でも、それで手伝った人を殺すなんて発想がぶっ飛び過ぎよ」
「じゃあ、お前は任せて整備させた武器が本番で壊れて、それが原因で自分が死んでも文句言わないな？　言い方は分かりづらかったが、姫は他人に任せない代わりに、責任を押し付ける気もないんだよ。何にも間違ってないだろ」
　真面目な表情で父にそう言われると、レベッカはばつが悪そうにしながらも黙ってしまう。
　実際、本職の整備士と違って兵らの整備はどこか自己流も混じっている。整備士がメンテナンスしてもトラブルが起こることだってあるのだから、それよりも腕が未熟な者に任せる訳にはいかない。
　自分のミスで死ぬのはしょうがないが、善意で手伝った者が相手の死を知ったとき、自責の念に囚われ、それが原因でその者まで死ぬこともあり得る。
　湊は自分が傷付くことや、敵を殺すことに躊躇ったりはしないが、無関係な第三者が傷付くことは極端に嫌がる。
　だからこそ、湊の発言から真の意図を理解していたラースは、娘を窘めてから湊の傍に屈み、まだ整備を終えていない武器を眺めながら話しかけた。

「ナイフだけで十種以上か。拳銃もオートマチックだけでなく、リボルバーも用意してるんだな。うお、スタースストリークまであんのか。いやいや、なんとも用意周到だねぇ」
湾曲したカランビットナイフや、奇襲向けのスペツナズナイフ。ベルトに取り付けられるように専用のストラップまで用意しているプッシュダガーなど、湊の装備はナイフ類だけでも十種以上存在し、本数は三十ではきかないほどだ。
ナイフは形やサイズごとに用途が違うので、これだけの数を揃えていてもおかしくはない。
しかし、ほとんど長さも形状も違わない日本刀が、組まれた物で五本以上あることは、ラースも思わず苦笑してしまった。
組まれた物でそれということは、近くにある桐箱の中には、まだ組まれずに保管されている物も入っているに違いない。
実際の戦闘で使うのなど、この中の数個しかないだろう。
そもそも、徒手格闘で野生のシカやイノシシを仕留められる人間が、そこまで近接武器を揃えておく事自体、ラースには不思議でならなかった。
「揃えた武器は、姫の不安の表れと見て良いかね？　戦場じゃ、色んな事態を想定して装備ばっかり揃えるやつは忌避される。そういうやつは自滅するばかりじゃなく、味方にまで士気を下げる以外の何かしらミスを残していくんだ」
「……そう。でも、それはそんな奴を組織に入れておく上層部のミスでもあるだろ。適性がないなら、最初から入れなきゃいい。慎重な臆病者には、別の活躍の場がある」
「ハハッ、確かに。けど、姫ほどの実力でそんなに武器を持っているのは不思議でねえ。君が何を見ているのか分からないけど、力を隠しつつ武器なんかで補ったつもりになってると、いつか足を掬われちまうぞ」
ラースはここに来てからの湊をずっと観察していた。別に信頼していないからという訳ではなく、単純に湊がどのような想いを持って仕事をしているかを見極めようと思ってのことだ。

保護者役のイリスは人を見る目は確かだが、湊のことになるとどこか甘くなっている節がある。
子どもを持つ親ならば、それが子に対する情だと言うのも簡単に見抜けた。
だからこそ、情というフィルターのかかってしまっているイリスの意見は一切訊かず、先入観を持っていない自分の目で、ありのままの湊を見て判断しようとしたのだ。
そして、一月以上みていて気付いたのが、湊は自ら能力に制限をかけて仕事の難易度を上げてしまっているということだった。
乱戦で囲まれれば、銃を両手に持って別々の方向にいる敵を撃ち殺すなど、難しいが手っ取り早い方法を取ることもある。
だが、狙撃銃で狙える場面でも、湊はわざわざ銃弾を掻い潜って接近し。敵を斬り殺すこともあれば、相手を地面に引き倒して、胸を踏みつけて銃で頭を撃ち抜くなど、どうにも回りくどい殺し方が多いように思える。
仕事など、要救助者がいる場面でもなければ、ターゲットを迅速に処理して終えてしまった方が良いに決まっている。
だというのに、湊は何かの意図を持って、そのような変な仕事の仕方をしている。ミスは特にない上に、手間な方法を取っている割に常人より仕事はむしろ早いので、ラースとしては別に今のままでも構わないという想いはあった。
だが、これも良い機会だからと、湊がどうして殺し方にこだわっているのか尋ねようと口を開きかけたそのとき、
「……ん？　おっ、あれは⁉」
ラースはまだ整備されていない銃の中にある物を発見し、視線はそちらに釘付けのまま、興奮したように屈んだまま手招きをして、突撃銃のＦＮ　Ｆ２０００を整備していた湊を呼んだ。
「姫、姫、姫っ！　おまっ、あれどっから手に入れて来たんだよ！」
「……五月蠅い、姫って呼ぶな」
「どうでも良いだろそんなの！　なぁ、絶対に壊さないって約束する。だから、触って良いか？」

整備している傍で騒がしくしている相手にイラつきながら、湊が呼び名に文句を付けるも、ラースは興奮した様子のまま、一切話を聞かずに返してきた。
ラースの急な変わりように、レベッカだけでなく、ずっと話している湊らを傍で眺めていたバーバラとチャドも不思議そうにしている。
だが、相手がどの武器をそんなに見たがっているのかは分からないが、ラースの態度が気に入らなかった湊は、ばらしたパーツを磨きながら冷たく言い放った。
「触るな。加齢臭がうつる」
「武器にんなモンがうつる訳ねえだろ！」
「加齢臭がうつるのに武器とか関係なくない？　お父さんとかセルゲイとか、オッサンが触ったのってオッサンの臭いやっぱする気がするし」
「うるせー！　お前の洗濯物、俺らのと一緒に洗うぞ！　それが嫌なら黙ってろ！」
直前まで湊と喧嘩していたレベッカが、変なタイミングで湊側に立った発言をしてくるとは思わず。ラースは武器を見たいあまり声を荒げて娘を黙らせた。
だが、急に興奮して一人で騒いでいるのはラースであるため、この場においておかしいのは父親だとはっきり断言できる。
故に、レベッカは少しむっとした顔をすると、通信機を持って離れて行った。
「なぁ、頼む！　傍で見るだけでも良いから。な？」
自分の娘が去って行ったことにも気付いていないラースは、眼を血走らせ、段々と呼吸も荒くなり、本当に危ない不審者のようになってゆく。
持ち主の許可なく武器に触れないのは、プロとして守るべき最低限のことは忘れていないからしいが、傍らで見ている者には、それが破られるのも時間の問題のように思えた。
そして、武器に釘付けになったまま頼んでいても埒が明かないと思ったのだろう。ラースは振り返って湊の肩に手を置くと、相手が武

器の整備中というのも構わず、顔を寄せてさらに懇願した。
「姫、頼むって。ちょっとだけ、先っぽだけで良いから！　ほら、触らせてくれたら小遣いやるから」
「あの、ラースさん。小狼君も嫌がってますし、そろそろ止めておいた方が……」
流石に、五十になろうという男が、いくら大人びていると言っても実年齢が中学二年生の男子に言い寄っていることに見かねて、表情を強張らせたバーバラが止めた方がいいと後ろから声をかけた。
けれど、ラースは蒼い瞳になっている湊の肩を掴んだまま、視線も湊の方に固定して荒い口調で言葉を返した。
「黙ってろ！　男にはどうしても譲れないときがあるもんなんだよ！」
「ほう……なら、そのために死んでも悔いはないよな？」
ラースが怒鳴った直後、底冷えするような殺気の籠った声が聞こえ、さらに拳銃のスライドを引いて弾丸を薬室に送り込む音まで聞こえてくる。
聞き慣れた武器の音と、先ほどまでいなかったはずの第三者の声に、ラースも冷静さを僅かに取り戻して振り返った。
「い、イリス……」
振り返って自身の置かれた状況を把握したラースは、湊の肩を掴んでいた手を放し、引き攣った顔で急に現れた者を見つめる。
そこには額に青筋を浮かべ、怒りで瞳孔が開いた状態のイリスが、ラースの頭部に銃口を向けて立っていた。
イリスの背後には呆れ顔のナタリアと、通信機を持ってアカンベと舌を出しているレベッカがいることから、先ほど離れて行ったレベッカが二人をここへ呼び出したのは明白だった。
しかし、レベッカが二人を通信で呼んでいたことも、自分が湊に頼みこんでいる姿を見られていることも知らなかったラースは、いつ引き金を引いてもおかしくないイリスを見ながら、ただ恐怖で冷や汗を掻くことしか出来ない。
「あんだけ、小狼は男だって説明したのに襲いかかりやがって。クソ

じじいが、楽には殺さねえから覚悟しろよ」
「本当に残念だわ、ラース。貴方のことは部隊でも特に信頼してたのに、まさか、実の娘の前でボウヤに襲いかかってしまうなんて」
「ご、誤解だ！　俺は別に姫には何もっ」
「ゴカイもロッカイもあるか！　触らせたら小遣いやるだとか、先っぽだけで良いからなんて、盛った猿の常套句並べて掴みかかってただろうが！　まずは、股間についた粗末なそのデリンジャーを吹っ飛ばしてやるよ」
　言うなり、イリスは本当に躊躇いなくラースの股間に銃口を向けて引き金を引いた。
「あぶねぇッ!?」
　だが、ラースも誤解で性犯罪者の烙印を押されたまま、自らの男としての象徴を失う訳にはいかないので、多少筋を痛めることも無視して、湊の後方の何も置かれていない空間に跳んで回避した。
　青いビニールシートに穴を開けて硬い床に当たった弾丸は、そのまま兆弾してしまったので、湊は武器や他の者に当たる前に跳ねた直後を狙って横からナイフで弾く。
　仲間を躊躇いなく撃つ女と、そんな状況でも冷静に神業で対処する少年。第三者の立場であれば、どちらも普通ではないと感じるところだが、緊迫した状況は冷静な判断を周囲の人間からも奪う。
　湊の武器類を傷付けないよう、起き上がって間を縫うように走って距離を取ったラースは、壁際に立ち両手を挙げて弁明した。
「ま、待てイリス。俺は姫の持ってる銃を見せてくれって頼んでただけなんだ」
「間抜け、普通の人間はそんくらいで男を襲おうとはしねぇんだよ。おい、小狼。そこのミニガンでアイツ撃ち殺していいぞ。アタシが許可する」
「ちょ、おまえ、そんなので狙われたら本当に死んじまうだろうが！　冗談じゃ済まないぞ！」
「冗談じゃねえよ。さっさと死ね」
　今度は死ねと言いながら、イリスは連続で二発撃つ。それらは共に

ラースの心臓を狙ってきていたので、今は防弾ジャケットも装備していないラースは、必死で避けるしかない。
咄嗟に跳んで弾をやり過ごし、前方回転受け身でダメージを軽減させつつ、次の弾丸が飛んでくる前に走って距離を取る。
狙撃銃の弾丸の飛来に比べれば十分避けられるレベルだが、距離を考えると音が聞こえてから避けていたのでは間に合わない。
だからこそ、ラースは必死に逃げながらも、イリスの構えた銃の向きと、引き金を引く指の動きを注視した。
「い、イリス、本当に誤解なんだ。ずっと傍で見てたバーバラ達が証人だ」
「……バーバラ、あのクソじじいは嫌がる小狼に掴みかかった。これで間違いないよな？」
「待て！　結果的にそうだったかもしれないが、その話にはそこに至る過程が完全に抜けてるだろうが」
この場においてラースが生き残るには、キレているイリスの誤解を解いて、湊を襲おうとした訳ではないと説明する事が重要になってくる。
だが、イリスの質問では、最終的にどのような状態になっていたかの確認しか出来ない。
それでは、ラースは弁明も何も出来ないので、質問の内容がおかしいと指摘し、相手がまた話を複雑にする前に自分で保証人に説明を求めることにした。
「チャド！　俺は初めから姫の武器を見してくれって言ってたよな？」
「まぁ、そうだね。どれかは分からないけど、小狼君に武器を触らせて欲しいと頼んでいたよ。けど、その前に少し意地悪な質問をしていたから、小狼君に断られていたんだ」
チャドの説明で一応の誤解が解かれイリスは僅かに銃口を下げる。
しかし、性犯罪者ではなかったものの、ラースが湊に何かしたことには違いない。
そうして、銃口をとりあえずは下げたが、イリスは相手を冷たい瞳

で射抜きながら、チャドに質問をぶつけた。
「意地悪な質問ってなんだ？」
「小狼君が沢山武器を持っている理由についてだよ。揃えた武器は不安の表れと見て良いかってね。力を隠しつつ武器なんかで補ったつもりになってると、いつか足を掬われてしまうとも言ってたな」
「クソじじいがっ!!」
日本に住んでいる少年が、この歳で人殺しも含めた仕事屋をやっているなど、普通に考えればまずあり得ない。
食いぶちに困って堕ちたのならまだ分かるが、湊は着ている服も、使っている武器類も高級品や純正品ばかりで、それほど金に困っているようには見えない。
ならば、金銭面以外での理由があるに違いないので、本人が話していないのなら、過去を暴くような質問はここではご法度であり。ラースの質問がそれに抵触するもので、イリスが余計なことをするなと怒るのも無理はなかった。
「ぬおっ!?」
怒鳴って再び構えたイリスの銃から、今度は三発の弾丸が放たれる。ラースはそれを横っ飛びから、続けて地面を転がり続けてなんとか避けきる。
イリスが仕事中のように冷静であれば、一発目を威嚇、二発目を退路の制限、そうして逃げ切れなくなった相手に三発目でヒットさせていたに違いない。
そのことを考えれば、イリスが湊に関する事で冷静さを欠いているのは、ラースにとって非常に幸運なことであった。
しかし、いつまでも知り合いから命を狙われ続けるのは、始まりが性犯罪者だと勘違いされていた事もあって、何とも心にくるものがある。
状況を改善するため、硬い床の上を転がって痛む身体に手を当てて立ち上がったラースは、両手を再び挙げてゆっくり湊らに近付きながら口を開いた。
「本当にすまん。余計なことを言ったのは謝る。だから、どうか銃を

仕舞ってくれ」
「ゴメンで済めば警察はいらないんだよ。謝罪する気があるなら、去勢して誠意を見せろ」
「いや、それもどうよ。ほら、優しい姫はしっかり謝れば許してくれそうな顔してるぞ？」
「ボケ。小狼はそもそも生理的に男が嫌いなんだよ。クソじじいなんて視界に入るだけで吐き気がするって言ってたぞ」
「……マジで？」
心底呆れたように吐き捨てたイリスの言葉に、その場にいた全員の視線が湊に集まる。
本人はまわりの騒ぎに飽きたのか、ラースのせいで中断していた武器の整備を再開していたが、女性に優しい場面を何度も見ていただけに、他の者はイリスの言葉が真実のように思えた。
一同がジッと湊を見つめ、事の真偽を知りたがっていると、本人も周りに見られていることに気付いたのか、顔をあげて静かに告げる。
「……別に吐き気はしない。ただ、性的な意味で、女より男に襲われかけた回数が多いから、男に触れられるのは気分が悪い」
「ほら、オマエや同類のせいで小狼はトラウマ作ってるんだよ。分かったら誠意見せろ。去勢した上で、二度と視界に入りませんって誓約書も書け」
別に襲われかけただけで、男には腕や肩に触れる以上を許した事はないのだが、彼女の中では湊はかなり酷い目に遭わされかけた事があるとなっているらしく。イリスは湊のナイフを一本拾ってラースの傍に落ちるよう放り投げた。
麻酔もなく、この場で直ぐに自分の男の象徴を切れとは、なんとも惨い命令だ。
第三者の立場であるチャドですら、いくらラースが悪いと言っても同情を禁じ得ないほどで、仮に実行に移すならばトラウマになりそうなので別室に行って欲しいと思った。
それはナタリアを除く他の女性陣も一緒で、実の娘であるレベッカなど、両親とも母親になるのは嫌だと、唯一、いまイリスをコントロー

ル出来る湊に助けを求める。
「ね、ねえ、イリスさんを止めてよ。私、親が両方とも母親とか嫌なの。ほら、胸を触ってきたの許してあげるから、お願い」
「……ラースが触りたがってた銃をお前が試射するなら許す。自分は触れない状況で、娘が楽しげにそれで遊んでいたら、さぞ面白くないだろうからな」
「ホント？　それぐらい全然ＯＫよ。じゃあ、イリスさんを止めて」
随分と子供じみた嫌がらせだが、レベッカは自分に特に不利益がなかったので、素直に湊の出した条件を呑んだ。
それを確認した湊は整備を終えたばかりの銃を組み上げ、整備が終わった方へ置きながら言葉を発した。
「イリス、貰ったあのバイクの整備を手伝って欲しい。ラースはナイフを返しにきて、お前が言ってた銃がどれか教えろ」
「整備？　別にいいけど、そんなにイジるとこなかったろ」
イリスには少年の声で、ラースには仕事中のような冷たい声色で話しかけると、すぐにイリスは普段通りの表情で湊のもとにやってきた。
本人も気付いていないような変な甘え方はするが、普段から人に頼らない湊が手伝いを頼むなど珍しい。
だからこそ、イリスは頼られてしまうと、それを叶えてやりたくてしょうがなくなるのだ。
相手の善意を利用して意図を気付かせずに動かす、そんな湊のやり方を腹黒いと感じながら、他の者は二人のバイクをいじる姿を眺め。
ようやく身の危険が消えたラースも、湊のナイフをブルーシートに戻してから、自分が見たいと思っていた銃を湊に伝えて、そのまま湊が整備を終えるのを見ていたのだった。
午前――〝蠍の心臓〟・屋外射撃場
ガレージでの一件を湊が治めると、その後、数十個ある装備の整備を全て終わらせて、湊は他の者も連れて屋外の射撃場にやってきていた。
蠍の心臓の本部は、敷地内に滑走路や訓練施設を多数揃えているた

め、屋外射撃場には狙撃銃用に百メートル刻みに三キロまでターゲットを設置出来る場所もある。
そうして、整備を終えた狙撃銃の照準を確認するため、イリスの命令でラース・パトリック・セルゲイの三人は、車で湊の使うターゲットを設置させられた。
準備が終わって戻ってきても、湊は三人に労いの言葉もかけずに、さっさと銃のセッティングを始めてしまう。
しかし、すぐ後ろにセーフティーを解除した拳銃を持った保護者が立っていたため、三人は「……どうぞ」と場所を譲ることしか出来なかった。
「ふふっ、子どもらが並んで遊んでると微笑ましいねえ」
「……遊びにアンチマテリアルライフル使って、二キロヒットさせる子どもがどこにいるのよ。まぁ、貴女には微笑ましいのかもしれないけど」
お互いに二メートルほどの距離を開けているが、並ぶように寝そべって射撃をしている湊とレベッカを見て、イリスは嬉しそうに笑う。
だが、湊の使っている銃がＤＥＮＥＬ　ＮＴＷ―２０／１４．５という、バレットＭ８２Ａ１よりも凶悪な対物ライフルであったため、ナタリアは双眼鏡で二キロ先のターゲットが吹き飛ぶ様を眺めて、これのどこに微笑ましさがあるのかと聞きたくなった。
確かに、最初は不仲だった二人が、並んで寝そべっている様は仲が良いように見えなくもない。
しかし、レベッカが参加しているのは、湊によるラースへの嫌がらせのためだとナタリアは知っている。
今もラースは、娘が憧れのワルサーＷＡ２０００を使ってお粗末な射撃を繰り返すのを見て、まるでリングサイドのセコンドやビール片手に野球中継を眺めるオヤジのように口汚く文句を言っている。
「だーっ、違うだろ！　なんで、そいつを使って外すんだよ！　才能がないなら俺に代われ、そいつの本当の性能を見せてやるから！」
ワルサーＷＡ２０００は全長九十センチ程度に対し、機関部をス

トック部分に収めるブルパップ方式を採用する事で、銃身を六十五センチも確保しながら取り回しもし易くなっている。
さらに高精度な部品を使うことで、自動式でありながらボルトアクション並みの命中精度を誇る非常に優秀な狙撃銃である。
しかし、軍や警察など公的機関向けに開発したものの、高精度な部品を多数使っていたため、一挺辺りの価格が当時で７０００ドルと高価で、民間モデルの価格はその倍程度となり、ほとんど売れずに１９８５年から１９８９年の間に一五〇挺や一七〇挺しか作られなかったと言われている。
現在では、性能の高さやその特徴的な外観から根強いファンも多くいるため、生産数の少ないこともあって、マニアの間では数万ドルから数十万ドルで取引される事もあった。
ちなみに、このワルサーＷＡ２０００は前期型と改良した後期型が存在するが、生産数はその両方を合わせての数である。
湊が持っているのは実はその両方で、これは前に蛍丸をくれた美術品コレクターの富豪が二挺ずつ持っているからと、銃も扱うなら使うかも知れないだろうと譲ってくれたものだ。
今もそのコネクションは生きており、たまに助けたヒストリアという名の少女の方からメールがくることもある。娘を助けた恩人の願いなら、富豪の男性はいくら掛かっても叶えようとするだろう。
ラースは湊と良好な関係を築けていたなら、ずっと博物館や知り合いのコレクターに見せて貰うことしか出来なかった品を、実機一挺分の値段で両方とも譲って貰えたかもしれない。
だが、余計なことをして嫌われた以上、もうその願いは叶う事はない。目の前に現物がありながら、絶対に触れる事は出来ない絶望を味わいながら、ただ黙って見ていることしか出来なかった。
「あー、この銃つまんないわ。お、Ｍ２じゃん。ねえ、そっち貸してよ」
湊は〝クリック調整〟や〝零点規正〟と呼ばれる照準の設定を数発撃って済ませると、すぐに次の武器の確認に動いていた。
新たに取り出されたのはブローニングＭ２。本来は軍用機や装甲車両を落とすような重機関銃だが、スコープを取り付けセミオートに

設定すれば非常に優秀な狙撃銃に早変わりする代物だ。
　そんな物を準備してスコープを眺めながら湊が調整していると、一キロ先のターゲットにも当てられなかったレベッカが、そっちを試したいと言ってきた。
　一キロ先の物に当てられなかった人間が、それ以上の距離を狙おうという武器を使えるとは思えない。けれど、五発撃って調整が上手くいったことを確認した湊は、素直に場所を譲ってやった。
「へっへーん、しょぼい狙撃銃より、やっぱ重機関銃とかアンチマテリアルライフルの方が燃えるのよねー」
「……後ろで父親が泣いてるぞ」
　場所を換わり、湊はレベッカが使っていたＷＡ２０００二挺の再調整を済まして、試射で調子を確かめた。
　日本とは気候が違うので、土地が変わればまた調整する必要があるが、とりあえずは現在の調整で使う事が出来る。
　そうして、武器をマフラーに戻して別の武器の調整に移ろうとしたのだが、振り返ってみるとラースは娘がＷＡ２０００を貶したことで、歯軋りをしながら怒りに震えて涙を流していた。
　銃に思い入れのない湊には分からない感覚だ。しかし、ラースの隣にいるセルゲイとパトリックがラースの肩に手を置いて頷いていることから、他の男性陣には何か共感するものがあったらしい。
　湊はイリスから、『勝つためなら、武器も技術も使い捨てるぐらいで丁度いい』と教わった。そのイリスの古巣の人間がそうではないらしいので、イリスはここでは異端な存在だったようだ。
「おー、あたったー！　ねえねえ、ほら、ちゃんと二キロ先に当たったわよ！」
「……良かったな。次は世界記録越えの２．５キロに挑戦してみろ」
「うん！」
　言われて素直にレベッカは次弾を装填して、狙いを２．５キロ先のターゲットに移した。
　これではどっちが年上か分からないが、後ろで見ているパシリの男性陣三名以外は、二人のやり取りを笑顔で見ている。

レベッカはスコープを使ってターゲットに当たったことを確認していたが、湊はその瞬間を見ていなければ、現在はバレットＸＭ１０９の準備をしているため、スコープを覗くことは出来ない。
けれど、顔をあげてターゲットの方に視線を向けたことから、驚異的な視力によってちゃんと肉眼で確認はしたのだろう。
ならば、湊も適当に相手をしている訳ではないので、二人の関係が良好なら、ナタリアは一緒に街へ連れて行っても良いかもしれないと、当初の予定を変更して私兵全員で出掛けることを考えた。
「ボウヤ、調整が終わったら街へ行くわ。前に知りたがってたヘリの操縦も教えてあげるから、早く終わらせて着替えてらっしゃい」
「……どうせなら、ヤンに教えて貰いたい。おばさんの説明は正直分かり辛いから」
「はいはい。それでいいから、行動は迅速によ。レベッカはボウヤの手伝い、他の隊員はハンヴィーをヘリに積み込んで。ラース、後でボウヤに試射させてくれるよう頼んであげるから、顔を洗って準備して」
「っ、了解！　ボス、約束ですよ。片方だけじゃなくて、両方ですからね！」
ナタリアの言葉で復活したラースは、作戦行動中のような真剣な瞳で念押しして去って行った。
非常に信頼できる男で、腕も確かなのだが、どうにも癖が強いところがある。長年の付き合いで分かってはいるものの、部隊の他のメンバーも若い世代を中心に負けず劣らず個性的な者が集まっている。
実力と人格を基に自分で選んだ面子だが、こうにもフォローに回る機会が多いと、流石に何かしらの制約なり罰則を設けるべきか悩んでしまった。
そうして、頭を押さえつつ準備に動く隊員と、二人で並んで調整と狙撃を繰り返している湊たちを見てから、ナタリアもイリスと共に宿舎の方へと一度戻って行った。

第六十三話　ラナフの日常

――ハルーフ・市場

ナタリアに言われて町行きの準備を終えた湊を待っていたのは、通常のヘリではなく大型輸送ヘリＣＨ―４７という、背の低いハンヴィーならば二台積み込めるような代物だった。

通常のヘリと大型輸送ヘリでは操縦方法も異なっているので、日本ではまず使わない物の操縦を教えてきたことに、湊は騙されたと小さく機嫌を損ねた。

だが、出発の直前に文句は言えないので、都市部の飛行場に向かう途中にアトラクションのコーヒーカップを思わせる回転により、他の搭乗者も巻き込んでの復讐を成功させた。

副操縦席にいたヤンはシートベルトで席に固定されているので軽症で済んだが、後ろに積まれたハンヴィーに分かれて乗っていた者たちは、操縦席よりキャビンの方が遠心力が強くなるため、飛行場に着いたときにはグロッキー状態となっており。普段は何かと優しい通信兵のバーバラでさえ、青い顔で「当分、恨みます」と告げてきた程だ。

しかし、少し休めば症状も回復したため、湊はレベッカの案内で観光、ナタリア・イリス・ラース・チャド・グリゴリーは兵器類の補充、ヤン・バーバラ・セルゲイ・パトリック・カルロ・ジーナは食料を含めた生活備品の発注へと分かれた。

車は二台、グループは三つ、観光しようにも市場などは空港から離れた場所にあるため、自分たちはどうやって移動するのかレベッカはナタリアに尋ねた。

すると、湊がバイクを持っているのだから、それで良いではないかと告げて、薄情にもメンバーは去って行ってしまう。

そうなれば、タクシーを使うなんて勿体ない事はしたくないので、レベッカは湊にバイクを出す様に言って、後ろに乗ったまま道案内をしてハルーフという町の市場にやってきたのだった。

「ここがこの国ラナフで一番有名な市場よ。ごちゃごちゃしてるけ

ど、活気があるでしょ？」
「……スリが多いんだな」
「あんたが目立ち過ぎなのよ。というか、髪は縛っておいた方が良いわよ。動くときに邪魔になるし」
建物の陰でバイクをマフラーに仕舞って市場に来るまでに、湊は五人のスリに出会った。
相手がポケットに手を入れかけた瞬間、顔面に拳を叩き込んでやったが、鼻血を出してのびている姿を憐れに思ったので、湊は相手の口にこの国の最小通貨である一フェン硬貨を入れておいた。
この国の通貨は紙幣のデルト、硬貨のフェンで成り立っており、『一デルト＝百フェン＝約三十円』となっているため、流石に一フェンを貰ったところでどうにもならないが、命を狙いに来ない限り、湊はそれなりに犯罪者にも寛容だった。
そんなどこかのんびりした考えの湊にやきもきしたのか、レベッカは自分の手に付けていたヘアゴムを一本取ると、そのまま湊の長い髪を高い位置で縛ってエセ侍風のポニーテールにしてしまう。
余程、変な髪型にされない限り、邪魔そうだからと髪を纏められても湊は怒ったりしない。
だが、目付きの鋭さも相まって、そのエセ侍風の姿は、以前に読んだ日本の漫画に出てくる、頬に十字傷のある人斬りの京都時代をレベッカに想起させた。
そして、ストレートと癖毛で髪質は違うが、湊とレベッカは双方ともルックスは整っているため、お揃いの髪型にしたことで余計に注目を浴びるようになった。
けれど、市場の喧騒で周囲のざわつきに気付いていないレベッカは、ずっと気になっていた湊の髪を結べたことにスッキリしたようで、爽やかな笑顔を浮かべている。
「それで、何する？　あんたの趣味とか知らないから、どこに連れていけば良いか分からないんだけど」
「……先に昼食がいい」
「ああ、あんた馬鹿みたいに食べるもんね。動いてない日も食べてる

し、どこに栄養いってんのかしら？　身長いくつだっけ？」
湊が食事を済ましたいと言ってきたため、レベッカは人混みの中を進みつつ、後ろをついてきている湊に身長を尋ねる。
こちらに来たばかりの湊は、レベッカと同じくらいか少し低いくらいであった。だが、一月半も経つといつの間にか背は抜かれてしまっていた。
既に二十歳でほとんど身長の止まっているレベッカに対し、湊は成長期真っ盛り。ならば、よく食べて、よく運動し、よく寝ている湊がすくすくと育つのも頷ける。
そのため、相手が年下であっても身長の差に特に悔しさなど感じず、レベッカは湊が答えるのを静かに待った。
「この前、イリスに測らされたときは一六七センチだった」
「ふーん。成長期だし、そのままのペースだと一七〇後半はいきそうね。あたしの結婚相手の条件は一七五センチ以上だから、憧れのお姉さんに結婚して欲しかったら最低ラインは超えなさいよ」
「……狭い路地は随分と荒れてるな」
フフン、とどこか得意気に話しているレベッカを無視して、湊は建物と建物の間の路地に視線を送って呟いた。
興味のない事や相手に関わるのが面倒なとき、湊は勝手に話題を別の物へと切り替える。レベッカに憧れなど抱いたことはないし、そもそも異性として意識すらしていない。
故に、無駄な話をするよりも、日本とは大きく異なった町の様子に興味を示す方が、実に湊らしい態度に思えた。
たった一月半の付き合いでも、湊と関わる機会の多かったレベッカは表面的には相手のことを理解している。
なので、どうしてこうも自分勝手なのだと呆れつつ、一応、相手は中学生だと諦めて、荒れた様子の路地について説明してやることにした。
「これがこっちでは普通なの。見たまんま貧富の差って言えば分かり易いわね。ここはまだ宗教色が薄い土地だけど、カースト最下層なんて犯罪に手を染めなきゃ物乞い以外に生きていく方法がなかったり

するわ」
活気のある大通りのすぐ脇、たった一本路地に入るだけだ。
それだけで、まるで無気力症の影人間のように、生きているのか死んでいるのかも分からない者らが、力なく壁にもたれて座り込んでいる。
衣服は身に付けているが、一体いつから同じ物を着続けているのかと思うほど、ボロキレにしか見えないそれは、泥や土の色で染め上げられていた。
今にも死にそうな子どももいる。だが、大通りを歩く者たちは、誰一人として見向きもしていない。
助ける方法がないと分かっていて、何をしても無駄だと諦めているのか。レベッカの言う通り、日常の一部として野垂れ死ぬ者を受け入れているのか。
誰も助けようとしていない時点で、子どもだけでも助けられないかと考えている湊がここでは異端だ。
しかし湊は、助けようとする自分、こんな物を現実として受け入れている者たち、そのどちらがおかしいのか、またどちらが正しいのか分からなくとも、これを受け入れることなど自分には無理だと思った。
そんな気持ちが気配として出てしまっていたのだろう。普段の気だるげな表情を強張らせていた湊の手を、前を歩いていたレベッカが掴んでくる。
「助けちゃ駄目よ。あの人たちはあのまま死ぬの。あんたが自己満足のために一度助ければ、相手は〝また、もしかしたら〟っていう希望を持ってしまう。もう誰も助けてくれないのに」
「お前はこの状況が普通だと思っているのか？」
「恵まれた日本の価値観で語らないでよ。これが普通と思ってるか？
そんなの異常だと思ってるに決まってるじゃない。でもね、ここではこれが〝日常〟なの」
ムスッとした表情でそれだけ言って、レベッカは湊の手を掴んだまま前を向いてしまった。

生まれ育った国は違っていても、この国で長く暮らしている彼女ですら、今現在のこの国の状況は異常だと感じている。
だが、そんなものが日常になってしまっている以上、一市民でしかない者たちにはどうする事も出来ないのだ。
助けないのは、せめて苦しまずに死なせてやるため。小さな希望を抱いてしまったばっかりに、より大きな絶望を感じたまま死ぬのはあまりに可哀想だから。
相手の掴む手の強さから、レベッカ自身の苦悩を感じて取って、湊は自分の向けた軽蔑は間違いだったと先ほどの言葉を謝罪した。
「……済まない」
「謝んな、バカ。あんたは正しいわよ。ただ、正しさだけじゃ人は救えないの。復讐代行なんて依頼も受けてるあんたなら、そういうのも分かるでしょ」
そう言ったきり、レベッカは目的地に着くまで黙ってしまった。
湊もあまり自分から話す方ではないため、周りの活気とは対照的な暗い雰囲気が、人混みを進む二人を包んでいた。
＊＊＊
息抜きのため、気を利かせて二人を観光に送り出してやった保護者たち。
二人が手を繋ぎながらも一切喋らず町を歩いているなど知る由もなく、兵器類補充の一行は、イリスの用事を済ませるため、とあるガンスミスの工房にやってきていた。
「なにも、万能な銃を作れって言ってる訳じゃない。それぞれ対極なコンセプトにすることで、隙のない構成に出来るだろって言ってんだ」
オーダーメイドの銃を作って貰おうと、自分の要望を書き込んだ紙を相手に見せつつ、イリスは説明する。
だが、机を挟んで向かいにいる額にゴーグルを付けた鼻の赤い老人は、ゲンナリした様子でそれに返した。
「じゃから、コンセプトを対極にしたところで、ハンドガンでは限界があると言っとるんじゃ。なんじゃ、このハンドキャノンと無限銃と

は。威力と連射性ならそう書かんか」
「分かり易いだろうが」
「フン、それならデザートイーグルとファイブセブンでも使っておれ。お前さんの要望は満たしとるじゃろ」
老人はそう答えて、イリスの要望書をつき返した。
この老人の名はテッド。他の者からはテッド爺さんと呼ばれている、蠍の心臓とは古い付き合いのガンスミスだ。
今日はイリスが新しい銃を作って貰うためにやってきたのだが、いかんせんイリスの要望は具体性に欠けていた。
テッドの言う通り、威力と連射性を考えるのなら、わざわざ新しい銃を作らずとも既存の銃を少しばかり使い易く調整するだけで事足りる。
銃の設計はただ図面を引くだけでなく、使う素材の強度や、実際に作ってみて実用に耐えられるかも調べなくてはならない。
それを個人工房で、注文の品は全くコンセプトの異なる銃だというのに、半年程度で完成まで仕上げろと言っているのだ。
知り合いのよしみで話しは聞いているが、これが新規の依頼人だったなら、テッドは話しも聞かずに追い返しているところだった。
「それじゃあバランス悪いだろ。二挺拳銃で乱戦でも同時に使えるよう、銃自体のバランスも調整して欲しいんだよ」
「ふざけるのも大概にせい！　いくら銃のバランスを整えようが、威力と連射性の異なる銃を同時に使いこなせるはずないじゃろう。そもそも、ハンドガンは片手で構えて撃つようなもんじゃないわい！」
「それが出来る奴がいるんだって。ミニガンだって自分で持って使ってたし。爺さんの言う通り、威力と連射性の違う銃をそれぞれの手に構えて、敵を制圧出来ていたよ」
相手が怒っていても構わず、イリスは後ろにいたチャドにパソコンを持って来させて、画面をテッドに見せながらある動画を再生した。
流れ出した映像に映っているのは、こちらに来てから撮影された、任務中の湊の姿。
仕留め損ねた敵は他の者が片付けるので、単騎で三十人以上いるテ

ロリストの集団を制圧してこいと、なんとも無茶な作戦をナタリアから言い渡されたときのものだ。
　これを撮影しているのは高台に構えた司令部にいたバーバラで、湊は走って敵のキャンプに向かうなり、次々と出てきた敵を拳銃のガバメントと突撃銃のタボールＭＴＡＲ２１で撃ち殺している。
　しかも、突撃銃は牽制のために弾幕を張っている訳ではなく、敵に向けたときだけ引き金を引いて蜂の巣にしていた。
　ガバメントは一射一殺で確実に仕留めているため、同時に別々の方向にいる者を狙えていることから、確かに自分の言っていた条件をクリアできるようにしかテッドは思えなかった。
「むむむぅ……」
「爺さんに頼んでるのはコイツ用の銃の開発だ。バランスの悪い銃を使ってこれだ。最初から二挺で使う事を盛り込まれた銃なら、もはや敵無しだろうよ」
「し、しかし、こんな戦い方をするなら、強度もかなり上げんといかん。使用弾薬も普及品では難しいので、ワイルドキャット・カートリッジになるじゃろう。そんな事をすれば、諸々込みで数百万じゃ済まなくなるぞ。開発期間も足りないわい」
　ワイルドキャット・カートリッジとは、簡単に言えばカスタムメイドの弾丸の事である。
　市販の弾丸を、威力であったり、貫通力であったり、使用目的に合わせて調整して弾を作るのが一般的で、ほとんどはガンスミスが依頼に合わせて作っている。そのため、価格が通常の弾丸よりも高く、また作る側の人数の問題から大量生産も出来ない。
　銃だけでなく、専用の弾丸まで作るとなれば、いくら何でも半年では不可能だった。
　しかし、イリスはテッドが開発自体を前向きに考えていると察知し、不敵な笑みを浮かべて言った。
「爺さんが昔から温めてた銃の設計図があるだろ。それをコイツ用に使えばいけるって」
「なっ!?　あれはわしが生涯最後に手掛けようと思ってる代物じゃ。

そんなどこの馬の骨とも分からん奴に誰が作るか！」
「サイズはデザートイーグルくらいでも良い。アイツなら余裕で使えるからな。完成したらナタリアに渡してくれ。そしたらアタシらに送ってくれる事になってる。じゃあ、絶対に期限を守れよ。遅れたらこの工房にＲＰＧ７撃ちこむからな」
かなり一方的に告げて、イリスはパソコンを回収すると、それをチャドに渡して店から出て行ってしまった。
後ろで黙って見ていたナタリアも一緒に出て行ったことから、イリスらの中では既に依頼したことになっているのだろう。
しかも、イリスは撃つと言ったら撃つ人間だ。
開発して納品するまでに、最低でも数百万掛かる銃を子どもにプレゼントする感覚は分からないが、これで湊に誕生日プレゼントを渡せなかったとなれば、イリスは工房が更地になるまでＲＰＧを撃ち続けるに違いない。
本来は、この人物になら託せるという相手を見つけてから、遺作として自分の持てる技術の全てを費やし製作するはずだった銃の図面を取り出し。
テッドは深いため息を吐いてから、渋々、相手の希望に沿うよう図面の修正を始めるのだった。
――ハルーフ
活気のあるハルーフの市場から少し離れた、通常の店の並んでいるエリアの路地に一人の幼い少女が立っていた。
現地の貧民層の人間らしく、どこか薄汚れた服を着ながら、カフェテラスのような場所で食事をしている人間たちを羨ましそうに見ている。
中でも、先ほどから料理を頼んでは食べ続けている、この地域では珍しい青みがかった髪の相手に視線は集中しており。空腹であるためか、知らず知らずのうちに足はそちらの方へ進んでしまっていた。
そして、相手のテーブルから二メートルほど離れた場所で、ジッと料理を見つめていると、青髪の正面に座っていた女性が少女に気付いてムスッとした顔で何やら話している。

対して、話しかけられた方はあまり気にしていないのか、食べていた手を止めると、振り返って少女を視線で捉えた。
「……そんなに食べたいなら、黙って見てないでこっちにこい。残り物くらいなら恵んでやる」
「いいの？」
「そう言ってるだろ」
少女は相手を見たとき、あまりに綺麗な顔をしていたため女性だと思ったが、声が男の物であったことから男性なのだと理解した。
だが、相手が男でも女でも関係ない。食べ物を恵んでくれると聞き、顔を輝かせて相手の傍に駆け寄った。
「……なんでそこなんだ。椅子があるだろ」
「え？　でも、そこお姉ちゃんとお姉ちゃんのお兄ちゃんが食べてるところだよ？」
「ブフッ！」
少女が青髪の少年を『お姉ちゃんのお兄ちゃん』と呼称した瞬間、向かいに座っていた女性が笑って吹き出していた。
この場合、『誰々の物』という意味ではなく、『女性のような男』という意味でそう呼んだのだろう。
確かに中性的でどっちつかずな顔立ちのため、そのように思ってもおかしくはないが、女性をお姉ちゃんと呼んだのなら、普通にお兄ちゃんでも良いのではないだろうか。
呼ばれた少年は、僅かに眉根を寄せて少女からの呼称を気にしつつ、空いている椅子を引いて少女に着席を促した。
「……座って食べろ。行儀が悪いだろ」
「えっと、おじゃまします」
「ああ、どれでも勝手に食べて良い。飲み物はジュースで良いか？」
「ジュースも飲んでいいの？」
「まぁな」
言いながら、少年は使っていなかった皿に羊肉のケバブの載ったマジャドラライスをよそい、さらにファラフェルを二つ載せて、フォークと共に少女の前に置いてやった。

どの料理もまだ来たばかりのようで、出来たて特有の食欲をそそる香ばしい匂いが鼻腔に届き。我慢しきれなくなった少女は、どのジュースにするかも答えず、料理を頬張り始めてしまう。
「おいしい！　すごくおいしいよ！」
「落ち着いて食べないから顔に飛んでるって。けど、今のうちに沢山食べておきなさいよ。こいつみたいにご飯恵んでくれる人なんて、ここじゃ滅多にいないんだから」
「うん！　ありがとう、お姉ちゃんのお兄ちゃん！」
本当にお腹が空いていたのか、少女が美味しいと言って満面の笑みを浮かべると、女性は苦笑しながら少女の頬に飛んだ肉汁を紙ナプキンで拭いてやる。
優しく顔を拭いて貰った少女は、それにも嬉しそうにしながら、またしても奇妙な呼び名で少年を呼んで礼を言った。
少年は少女の言葉にただ頷いて返し、店員にジュースを持ってこさせると、少女が満腹になるまで一緒に食事を続けていたのだった。
＊＊＊
ハルーフの外れ、薄暗い土造りのとある民家で、髭を生やした男が深刻な表情を浮かべて二十代と思われる青年と話しをしていた。
「……もう限界だ。このままじゃ、小さいバスマも餓死しちまう」
「父さん、覚悟を決めよう。妹を死なせるくらいなら、金持ちを襲って金を奪おう。神だって幼い命を救えというはずさ」
青年と男は親子のようで、二人で話していたのは暮らしていくための資金が底をついたせいで、このままでは暮らしていく事が出来ない事が理由だった。
さらに、この家にはまだ幼い妹が一人いるようで、男である自分たちだけならば働きに出て何とか食い繋げるが、幼い妹を遠い地へ連れていく事は出来ないことから悩んでいるらしい。
「どこにそんな金持ちがいるんだ。この町に来てるやつらじゃ、よくて数日食える程度しか持ってねえ。金持ちはみんなコベやジャマルの方に住みやがるからな」
「観光客を狙うのさ。他のやつらともよく話してたんだ。やるなら全

員で協力しようって。武器だってある」
青年はそういうと、戸棚の奥に隠してあったＡＫ―４７を取り出して見せる。これは、近所の知り合いと一緒に、殲滅されたテロリストのアジトから拾ってきた物だ。
テロリストを殲滅した者たちは、かなり激しい攻撃を加えたのか、ほとんどの武器は壊れてしまっていたが、青年が持っている物のようにいくつかは弾も残った武器も見つかった。
武器が手に入った以上、こんな電気も通っていない町の外れに住んでいるつもりはなく。近所の者同士で、いまの生活から抜けだすため協力して強盗を働く事も話し合っていた。
ただ脅して相手が金を出すとは思えないので、金を奪う以上、青年らは相手を殺すつもりでいる。
しかし、いくら生きるためとはいえ、何の罪もない相手を殺すことは出来ない。青年たちは本当に最後の手段として、相手を殺して金を奪おうと思っていたのだ。
そして、ついに貧窮によって飢え死にの未来しか見えなくなってしまった。周囲も似たような状況であるため、食料を恵んで貰うことはできない。
もう死ぬしかないというのなら、青年は幼い妹のためにも、どんな事でもするつもりだった。
瞳に強い意思を宿して見つめる青年を見て、父親も覚悟を決めたのか、ゆっくりと頷いた。
「……やろう。それしか方法はない」
「ああ、それじゃあ俺は他の皆を集めてくる。父さんはバスマが帰ってくるかもしれないから、家で待ってて」
父親が同意すると、青年は銃を戸棚の奥に隠して、仲間を集めるため家を出て行った。
決めたからには後戻りは出来ない。人を殺す事を恐れているのか、心臓の音がやたらと五月蝿く聞こえる。
時間が経つにつれ揺らぎそうになる意思を必死に押さえこんで、男性はゆっくりと静かに呼吸をすることで、平静を保とうとした。

そして、いくらか心臓の音が静かになったころ、軽い足音と共に少女が家に入ってきた。男性は帰って来た少女を笑顔で迎える。
「おかえり、バスマ」
「ただいま！　ねえ、お父さん。あのね、さっき綺麗なお姉ちゃんのお兄ちゃんがご飯をくれたの！　食べ残しって言ってたのに、新しいのいっぱいお店のひとにもってこさせてたんだよ！」
「ほう、良かったな。優しい人もいるもんだ」
幼い娘と話しをしながら、男性はこれも運命かと感じていた。
自分たちが行動しようという日に、人に施しを与えるほど裕福な人間に娘が出会った。
この町の人間に新しい料理を頼んでまで施しを与える者はいない。そんな事が出来るのは、裕福な外の人間くらいなものだ。
大きな市場が存在するので、観光地の一つにはなっているものの、人混みの中で銃を乱射する訳にはいかない。
ならば、市場から離れた場所にいる金を持った観光客は、これ以上ないほど魅力的なターゲットだった。
息子が人を集めてくるまで時間がある。男性は娘の見た相手の特徴を知るため、話しを続けた。
「バスマ、その人がどんな恰好をしていたか教えてくれるか？」
「いいよ。えっとね、見たらすぐにこの人だって分かるとおもう。青くて長い髪を結んでて、お姉ちゃんかなって思うけど、男の人なの。あと、黒いスカーフみたいなの首にしてた！」
確かにこの温暖な気候の土地で、首にスカーフを巻いている男などすぐに分かるだろう。髪の色と長さも、この地域の男とはかなり違っているので実に特徴的だ。
女性のように見えるというのは引っ掛かるが、それ以外の部分でなんとか見つけられるだろう。
そうして、男性は娘から聞いた相手の見た目の特徴を何度も頭の中で反芻し、他の者にも伝えられるようにしてから、最後に居場所を聞いた。
「そうか。その人はどこにいたんだ？　父さんも見てみたいな」

「シャムスのお店のとこだよ。いっぱいご飯たべてたのしかった！」
「ははっ、良かったな」
「父さん、準備できたよ！　あ、バスマ。おかえり、帰ってたのか」
娘から相手と出会った場所も聞いたところで、先ほど出掛けて行った青年が帰って来た。
外には青年や男性と同じ年頃の男たちが、拾ってきた細かい傷の付いている武器を持って集まっている。
時間をかければ巡回している軍人に見つかって制圧されるため、男性は集まった者らに娘の出会った観光客をターゲットにすることを伝えた。
＊＊＊
昼食を終えた湊とレベッカは、二人で並んで町を散策していた。
日本にいる者たちやベルベットルームの住人への土産として、デザインの異なるアラジンランプや絨毯にチョコレートも買い。さらに、どうせなら記念に買っておけとレベッカに言われて、民族衣装や踊り子の衣装も数着買った。
民族衣装はともかく、湊が踊り子の衣装を着ると腹筋のせいで残念なことになるので、いつ使うことになるかは分からない。
だが、買ったときにゆかりの姿が思い浮かんだので、湊はピンクの踊り子の衣装を『岳羽用』と書いた包みに入れて、他の荷物と一緒に日本へ発送した。
きっと後日、ゆかりは受け取った荷物を見て、顔を赤くしながらどういう理由で踊り子の衣装を贈ったのか聞いてくるに違いない。
他の者にはデザイン違いでアンティークの土産を渡している中、ゆかりだけプラスアルファでそれがあるのだ。主に佐久間辺りとの修羅場は確実だろう。
しかし、なんとなく似合いそうなイメージで贈っただけの物に意味はない。聞かれても湊は、
「……見たときに岳羽が思い浮かんだだけだ」
と、真顔で静かに答えるに違いない。
冗談を言わない湊の言葉だけに、それはそれで新たな問題が起きそ

うだが、日本にいない湊には関係のないことであった。
　そうして、市場は後回しにして、二人は店の並ぶ区画の雑貨屋から会話をしながら出てきた。
「超高級な店があるのはこの町じゃないのよねぇ。ラナフって国の日常を見る分にはベストだと思うけど」
「……来月には別の国にいる。日本への土産はたまに買う予定でいるから、この国だけでそこまで買うつもりはない」
「そう？　ま、好き好んで治安の悪い国にいく神経は分からないけど、どこでも観光向けの町ってのはあるもんよ。値切り方も分かったでしょうから、次のとこでは実践してみなさい」
　そう言って、後ろで腕を組んで楽しげに笑うレベッカ。
　彼女の機嫌が良いのは、日本向けの土産を買うときに、レベッカも湊にチョコレートを買ってもらえたことと、アンティークを買うときに納得いく値段まで値切ることに成功したためだ。
　洋服や化粧品は値切るのは難しいが、土産向けの物は顔見知りであったり、店の人間がノリの良い相手なら少しくらいまけてくれる事もある。
　しかし、今回、レベッカが取った作戦は、自分と湊のルックスを武器に可愛い子ぶることで、店のオヤジのスケベ心を利用してまけさせ、品物を買うとさっさと退散するというものだ。
　次の店で実践しろと言われても、声を出せばばれる上に、普通の洋服を着ている湊はちゃんと男に見える。筋肉質な子なんです、と言われても首を傾げられるだろう。
　どうやっても実践して上手くいくとは思えないが、レベッカが素で言っていると気付いている湊は、軽く嘆息して次の場所へ移動するため一歩を踏み出そうとした。
「……素人か」
「え？」
「店に入っとけ」
「きゃあっ」
　急に低い声で呟いた湊は、前にいたレベッカの腕を引っ張り、近く

の店に向かって背中を押す。
相手は前のめりになりかけたまま、店のドアに手を突いて止まったが、一体なにごとだとレベッカが振り返った途端、フルオートの連続した銃声が耳に届いた。
『ウオオオオオオッ!!』
叫びながら幾人もの男たちが、銃を両手で構えながら走ってくる。
急な銃声に人々は驚き逃げ惑っているが、男たちは真っ直ぐ湊を狙っていた。
逃げる途中にこけた女性がいるというのに、それには目もくれず銃口は湊に向けられ、放たれた弾丸は湊が直前にいた場所周辺に着弾する。
だが、狙いが自分だと分かっているのなら対処も容易い。周囲への被害を最小限に抑えるため、ステップで身体を揺らしながら、頬に一発かすった以外、全ての弾丸を躱し敵へと向かってゆく。
「あたらないっ」
弾丸を当たらないことに驚き足を止めてしまった敵へ、湊は地面を強く踏み抜いて一気に距離を詰める。
「ひぃっ!?」
そのまま敵の前に着地し、湊は全身を捻りながら勢いを乗せた回し蹴りで、敵の頭部を捉える。
攻撃を受けた青年は、人体の可動域を超えた方向へと首がねじ曲がり、独楽のように回転しながら吹き飛んでいった。
さらに湊は、一人を倒すと腰溜めにされていた右拳で、味方がやられて足を止めていた男の胸を真っ直ぐ打ち貫く。
「……おごっ」
岩をも砕く剛腕の一撃は、柔らかい肉に触れ、直ぐにそれらを押し潰しながら骨に当たり、砕いた骨ごと肺と心臓を破裂させる。
若者に続けて、二人目の男も口から血を吐きながら吹き飛んで動かなくなった。
ほぼ一瞬のうちに二人も続けて殺された敵は、どんな存在を相手にしているのかようやく理解したのだろう。顔を青褪めさせながら、射

線上に一般人がいるというのに叫んで銃を乱射し始めてしまった。
「……チッ」
自分が避ければ他人が傷付く。それを認めない湊は、身体で弾を受けながら、マフラーから中華剣〝星噛〟を取り出し、蒼い瞳で敵の身体に視えている光の線に刃を通し斬り伏せた。
一人、二人、三人、袈裟切りで胴を分断し、横薙ぎで首を刎ね、刀身を地面へ叩きつけるよう頭から真っ二つに両断する。
銃創から流れる血か、倒れた敵から浴びた返り血か、湊は全身が血濡れになっていた。
だが、まだ止まる気はない。あと一人。湊は知らないが、今回のこの襲撃を計画した張本人が残っている。
味方が全てやられ、自分一人になったことで、男も後がないと気付いているのだろう。
距離はおよそ八メートル、しかし、逃げても無駄だ。背中を見せた瞬間、湊は手に持った星噛を投げつけ、相手の心臓を容易く貫く。
そうして、ゆらりと湊の上体が揺れて動き出したとき、男も手にしていたＡＫ―４７を鈍器として利用するため、両手で振り上げながら駆け出した。
「う、ウオオオオオオオッ！」
笑ってしまいそうになるほど、お粗末な体運び。武器の持ち方もなっておらず、湊までの距離もほとんど考えずに全力で走って武器を振り下ろすつもりなのだろう。
そんな事では、湊が緩急をつけて走れば、途端に相手は距離感を失い、武器を振り下ろすまでもなく懐に入れてしまう。
「ク、クッソォオオオオッ！」
男は湊が目の前にきた瞬間、死を覚悟しながらも諦めず、叫びながら威力の出ない不安定な状態で武器を振るった。
まだ、死ねない。息子が殺された以上、自分が死ねば残された娘には死しか待っていないのだ。
弾丸を至近距離で躱しながら、何故か急に喰らったと思えば、それでも平気で戦い続けるような、そんな訳の分からない化け物が相手で

も関係ない。
自分が無理矢理に振り下ろした銃を、相手が頭を下げるだけで避けたのを認識しながら、男は最後の瞬間まで娘のために生きることを諦めなかった。
掠った銃で髪を結んでいたゴムが千切れ、視界いっぱいに青い髪が広がるのを見つめる。
そして、頭を下げた勢いのまま回転して振り下ろされた刃が、自分の首を切り落とすまで、男は娘のことを想い続けた。
「……フン」
首を落とされた男の身体から血が噴き出し、ぐらりと揺れてそのまま倒れる。
全ての敵を排除し終えて、湊が周りを見渡すと、明るく賑やかな町並みだった辺りは一面血の海になっていた。
誰も声を出せない。いくらたまにテロが起きると言っても、目の前でこうも凄惨な光景を見せられては、突然の事に思考が停止して頭がついていけないのだ。
だが、そんな膠着状態も一人の少女の声で動き出す。
「お父さんっ、お兄ちゃんっ！」
声がして振り向けば、先ほど湊が食事を奢ってあげた少女が路地から駆け出してきていた。
少女は父と兄に家で大人しく待っているように言われていた。けれど、近所の男たちと一緒に武器を持って町へと向かった事が気になり、密かに後を付けていたのだ。
そして、戦闘が終わり。自分の家族が倒れているのを見て、少女は堪らなくなって路地から駆け出し、倒れている青年と首の無くなった男性に真っ直ぐ駆け寄っている。
少女が動いたことでまわりも動き出し、誰が呼んだのか警邏の兵たちが武装した姿で向かってきた。
武器をマフラーに戻し、涙を流して兄と父を呼んでいる少女とやってくる兵を眺めていた湊は、蒼い瞳のまま静かに口を開いた。
「……残念だったな、武器なんぞ持っていなければ死なずに済んだだ

ろうに」
「っ!!」
少女は湊の言葉にキッと鋭い視線で睨んで顔をあげると、傍に落ちていた父の持っていた銃を手にした。
大粒の涙を流し、怒りで荒くなった呼吸で肩を上下させている。しかし、銃口はぶれながらも湊の方を向いているため、引き金さえ引けば幼い少女でも何発かは当てる事が出来るだろう。
兵らが到着するまで時間がない。視線は少女に向けたまま、まわりの音で状況を把握している湊は、自分の胸に手を当てて少女に向かって言い放った。
「心臓はここだ。絶対に外すな。他の人間に一発でも当てれば、俺はお前を殺す」
「うぅ、ぐ……うわぁぁぁぁぁっ!!」
ギュッと目を閉じて、少女は引き金にかけていた指を一気に引いた。
連射の反動で銃が跳ね上がり、少女の手から離れる。だが、その間に放たれた四発の銃弾は四発ともが湊に直撃、内一発は見事に心臓を捉えていた。
「――――ッ」
「小狼っ!!」
口から血を吐いて崩れる湊に、レベッカが慌てて駆け寄る。
少女に撃たれた以外にも、既に十発以上喰らっているのだ。いくら丈夫な湊でも、蘇生が必要なレベルとなれば立っていることは出来なくなる。
けれど、湊はレベッカに支えられた状態で、蘇生が始まる前まで意識を繋いだまま、銃の反動で倒れた少女を蒼い瞳で見つめていた。
「テロリスト残存一、撃てぇー!」
そして、湊たちの目の前で、到着した四人の兵が、少女に銃を向けて発砲した。
乾いた破裂音が響き、少女の身体が踊る度に鮮血が散る。最初の一発が頭部に当たった時点で、少女は即死だっただろう。一瞬の痛みは

感じただろうが、苦しまずには死ねたはずだ。
働き手の男が死んだ時点で、どうせ生きていても碌な目には遭わない。だから、湊は彼女に復讐の機会を与えた上で、彼女が死ぬように仕向けた。
「撃ち方やめ！　潜伏している残存兵への警戒を継続、被害者の搬送と現場の収拾を行う。お前たちは支部に連絡して人員を送ってもらえ。それが終われば市民の誘導だ」
『了解っ』
四人いた兵の中で最年長と思われる男が、他の者に指示を飛ばす。
それを聞いた兵らはすぐに連絡を取って、周辺にいた民間人を安全な場所へ誘導し始めた。
「容体は？」
「わ、分かんない。こいつ、他の人に弾が当たらないようにって、自分の身体を盾にしてっ」
ここに来るまでにおおよその状況を把握していたらしい兵士は、倒れている湊とレベッカの元へやってきて声をかけてきた。
レベッカは湊の手を強く握りながら答えるが、冷静さを失っているようで、まるで湊の状態を説明出来ないでいる。
いくら訓練を受けて戦闘にも参加していたとはいえ、レベッカはまだ二十歳。運が良かったのか、これまで仲間が死にかける場面すら遭遇してこなかったこともあって、ここまで瀕死の重傷を初めて見て気が動転していた。
「わかった。なら、直ぐに病院に搬送しよう。大丈夫だ。まだ意識はある。きっと助かるよ」
全身に返り血を浴びているせいで、それが湊の流した物なのか、襲ってきた連中の物なのか分からない。
しかし、明らかに心臓を撃ち抜いている弾痕が服についていることで、兵士はもう助からないと思っていた。
それでも、助かると言ったのは、気が動転しているレベッカがこのままでは動かないと思ったからだ。
現場に到着した時点でテロリストが全滅し、その家族らしき少女が

一人銃を持って残っているだけの状態というのは、市民が傷付かず、尚且つ自分たち兵がテロリストを一人は排除したという記録を残せたので、非常にありがたかった。
被害者が異国の風貌をした湊であるのは、観光客がテロリストに襲われて死亡したというマイナスイメージになってしまうだろうが、他の市民を庇って死んだという話しがあるのなら、勇敢な少年の追悼のために人々が訪れるに違いない。
ならば、一時的に観光客が減るだろうが、それほど大した影響は出ないと思われ。兵は早々にこの場を収めるため、応援でやってくる兵に担架を用意させて湊を運ぼうとした。
「ぐっ……はぁ、治療の必要はない。ただ、少し疲れたから、このまま帰らせてもらう」
「え、おい、きみ！」
だが、レベッカや兵士たちの前で、湊は口から大量の血を吐くと急に自分の足で立ち上がってきた。
さらに、血に濡れた服が不快だったのか破いてその場に脱ぎ捨てると、髪についた血を絞って落としながら歩き出し。兵が呼び止めても、振り返らずに町の外へと向かって行く。
「あ、えっと、ここよろしくお願いします！　あいつは私が連れて帰るんで、それじゃあ！」
すたすたと一人で進んでゆく湊を、復活したレベッカが急いで追いかける。
本当に先ほどまで倒れていたのかと思うほどの速度で離れていくので、追いかけるタイミングを失ってしまった兵らは、そのまま見送ることしか出来なかった。
もっとも、テロリストに襲われて無事に済んだのなら良かったとは思う。
これだけの血の海の作っておきながら、テロリストがどのようなグループだったのかという、特定のための事情聴取すらさせて貰えなかったのは痛いが、テロリストが現れるも多少の怪我人だけで鎮圧出来たという方が聞こえはいい。

そうして、湊たちの追跡を諦め、兵たちは急いでこの場を収めるために作業に移っていった。

＊＊＊

湊がテロリストを殲滅して去ってから、兵たちがテロリストの死体を袋に収容していた頃、一人の兵士が物影から現れ。湊が脱ぎ捨てて行った服を、ひっそりと回収した。

服を掴むのに使った手袋ごと密閉出来る袋にいれ、それをさらに外から見えない黒い鞄に仕舞いこんで、何食わぬ顔で路地へと入って行く。

路地に入ると被っていた軍帽を放り投げて、無造作に伸ばされた茶色の髪と顎髭を揺らしながら、逞しい体躯のその男は愉快そうに笑って呟いた。

「へへっ、どうなってやがんだあの小僧。心臓ブチ抜かれて、なんで死なねぇんだ」

全くの偶然だが、この男は事の一部始終を見ていた。

初めは弾丸を躱す湊に驚愕したが、その後の体術にどこか知り合いに似た物をみて、余計に興味が湧いた。

しかし、瞬く間に敵を屠っていたはずが、何故だか避けられるはずの攻撃を喰らいながら敵を殺している。

それを見て、もしや、射線上の人間を守ったのかと、力を持ちながら路傍の石のために命を捨てる相手に失望した。

死んだら終わりなのだ。どんなに偉い人間でも、死んでしまえば関係ない。

そう思って、他の兵たちにテロリストが暴れていると無線を入れ、最後はどんなくだらない事を言い残していくのか眺めていると、どういう訳だか相手は吐血しながらも復活して去って行ってしまった。

服を脱いだときに見えた身体には、一つも銃創がついていなかった。

銃弾が身体を貫通していたのを目にしていたというのに、傷が一つも残っていないなどあり得ない。

「女がシャオランとか叫んでやがったな。ウチのお姫様と仙道の野郎

が狙ってるやつも確かそんな名前だったはずだ。小僧の血がべったりついたコイツを手土産に、ちょいと探りをいれてみるか」
男は新たに獲物を見つけたことで、愉快そうに獰猛な笑みを浮かべ、軍服も路地に脱ぎ捨ててゆくと、物影にあった何かにかけられていた布を取り去った。
布の下から現れたのは、黒いハーレー。
男は持っていた鞄をしっかりとバイクに括りつけ、キーを差し込み、エンジンを吹かした。
そうして、男は湊の血のしみ込んだシャツという手土産を持って、誰にも知られず、この町から出て行ったのだった。

第六十四話　土産と修羅場

――ヨーロッパ・オノス地方

湊が強盗に襲われてから数日後、ヨーロッパ北側に存在するオノス地方のとある屋敷に、あの日の男が手土産を持ってやってきていた。

アポイントを取っている旨を伝え、男は屋敷の中に入ることを許されると、一流の調度品ばかり置かれた広い客間に通された。

案内の女中が男の紅茶を用意し、すぐに退席すると、黒と白のドレスを着た、銀色の髪に紅玉（ルビー）の瞳を持つまるで生きた人形のような美しい少女が、ソファーの後ろに仙道を控えさせて静かに口を開く。

「お久しぶりね、カナード・フォルス。それで、面白い手土産とは何かしら？」

少女が口にしたカナード・フォルスという名。それがやってきた男の名前だが、それは明らかに偽名だった。

カナードは英語の『ｃａｎａｒｄ』、虚報やデマを意味しており。フォルスは『ｆａｌｓｅ』、偽を意味する言葉である。

そんな物を真面目に名前だと言われても、相手の職業が金で簡単に裏切る傭兵であることもあって、普通の人間は誰も信じない。

けれど、名前がないのは如何にも不便だ。本名でないと理解していても、呼び名に困るくらいならば、とこの男に関わる者たちは皆その名で男を呼んでいた。

「へへっ、アンタらが探してたシャオランとか言う小僧の手がかりだ」

そうして、少女に名を呼ばれた男は、何かを企んでいるような笑みを浮かべ、答えながらテーブルの上に黒い鞄を置いた。

それを見た仙道と少女は、普段よりも僅かに瞳を大きく開いてから、少女が鞄を受け取って真空パックに入った中身を取り出した。

「血の付いた布？　貴方、まさか、わたくしの小狼を殺してしまったの？」

袋は開けず、中に入った布を袋越しに手で触れて、布についた血液がまだ乾かずに保存されていることを少女は確かめる。

赤い液体が血であると分かったのは、普段から血という物を見慣れ

ているからだ。
だが、こんなにも布を染めるほど出血しているのなら、致命傷レベルの怪我を負っていてもおかしくない。
少女は、自分の欲しがっていた玩具を、まさか相手が殺してしまったのではないかと思い、責めるような視線を向けて尋ねた。
「いや、俺は戦ってねえ。それにまだ生きてる」
「そう。それでは、これをどこで？」
「中東のラナフにハルーフって町があってな。そこで小僧がテロリストに襲われた場面に偶然居合わせた。ははっ、あの小僧、テロリスト共を一撃で殺していきやがるとんだバケモンだと思ってたら、他の人間を庇って銃弾を喰らいやがったんだ。ま、それでも敵を殺し続けたんだが、最後にはテロリストの家族か知らねえが、ガキに自分を撃たせて心臓ブチ抜かれてな。それでようやくぶっ倒れてたぜ」
カナードはそこまで話し、紅茶のカップに口を付ける。
正面で話しを聞いていた二人は、カナードの言葉から、この血濡れの布の正体が、テロリストに撃たれ負傷した湊の衣服だと気付いた。
だが、心臓を撃ち抜かれてまだ生きているという意味が、少女には分からない。
どんな生物も心臓に大怪我を負えば死に絶える。
全身に血液を送る要の臓器なのだから、それを負傷すれば大量出血は免れず。血を失い過ぎれば、動くことも出来ずに衰弱し、最後には死んでしまうはずなのだ。
だというのに、どのようなトリックを使えば、その状態から生き長らえることが可能なのか。
少女は瞳に疑問の色を宿して、カナードに尋ねた。
「心臓を撃ち抜かれて、どうやって生きているというの？　まさか、機械に繋がれて延命が続けられているなんて言わないでしょうね」
「へへっ、そこが小僧の面白いところでな。なんと、あの小僧、ぶっ倒れて次に起き上がったと思ったらよ」
「身体から全ての傷が消えていた、だろう？」
「あん？　なんだ、テメエ、知ってやがったのか……」

せっかく相手が驚くと思い、今日まで話すのを楽しみにしていたというのに、自分が話す前に二メートル近い赤髪の巨漢の言葉で、それは呆気なく終わってしまった。
こんなにも奇妙なことなど、生きていてそう何度も出会えるものではない。
それを話す機会を失ったカナードは、つまらなそうに深く椅子に座り直し、少女の後ろに立つ仙道に問いかけた。
「そういや、テメェあの小僧とやり合ったんだってな。女みてぇな面してやがったが、相当なたまだぜありゃ。他人がブチ殺すの見て興奮したのなんざ久しぶりだ。殺しの芸術家様ってなもんだったぜ」
「殺しで名切りに勝てる者など、そうおるまい」
「ナギリ？　……っ、あの名切りか！　そうか、通りでぶっ飛んでる訳だ。ははは、こりゃ面白ぇ！」
湊が名切りの出身であることの、何がそこまで男を愉しませたのかは分からない。だが、館の主の前で下品に大声で笑う男を、誰も咎めはしない。
本来ならば、男は仕事で人が死ぬ場面に慣れているため、呆気ないという感情以外を抱くことはまずない。
そんなカナードが、湊の殺しからは目が離せず、さらには一種の芸術性すら感じていた。
仙道のような巨漢の一撃ならば、同じように人が容易く吹き飛び死んでゆくのも分かる。しかし、湊の体格で同じ事が出来る者など、世界にそうはいない。
敵として戦うのは御免だが、観察のし甲斐はある。そうして、男も『小狼』の名と姿をしっかり自分の中に刻み込んだ。
大仰な笑いを止め、不敵な笑みをカナードが浮かべると、話すのを待っていた仙道が口を開く。
「まぁ、そうは言っても、小僧はソフィアよりも一つ下だ。ただの童（わっぱ）でも、その年頃は急成長する。それが名切りで大陸にも渡っていたとなれば、力をつけて完成に至るのも時間の問題だろう」
「フフッ、それは楽しみだわ。成長のための敵は定期的にこちらで用

意します。カナードはそれとは別口で小狼を監視していてちょうだい。貴方もその方がやり易いでしょう？」
「ああ、それじゃあよろしく頼みますよ。〝裏界の姫君〟さま」
男は楽しげに笑ったまま、裏界最大規模の巨大組織〝久遠の安寧〟がトップの一人娘、ソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインに挨拶をすると部屋から去って行った。

――ラナフ・ハンズィール平野
どの町からも離れた、砂漠地帯に近い場所。そこに、湊たち蠍の心臓の部隊は仕事でやってきていた。
内容は反政府ゲリラ組織の殲滅。
依頼主は国で、ラナフ陸軍との共同作戦であり、あまりに多過ぎるテロリストのアジトを定期的に潰してゆくという、ナタリアたちにしてみれば仕事の合間を使って行う一種の小遣い稼ぎだ。
今回のターゲットは、百人規模のそれなりに大きなグループで、新しく仕入れた武器の調子を確かめがてら殲滅するつもりだった。
しかし、実際に現場に着くと、事前に伝えていた作戦を無視して、湊が単独でアジトに潜入してしまう。
フォローしようにも湊の速度について行ける者はいないため、しょうがなくアジトを囲むように部隊を展開し、外に逃げ出してきた者を討ち漏らさないようにする作戦へと変更した。
だが、湊が中に侵入してから十分経っても敵が外へと出て来ない。
いや、正確に言えば、何人も出て来てはいるのだ。
けれど、ラースやパトリックが狙撃しようと銃で狙いを付けている間に、湊が壁を切り崩しながら出てきて敵を殺してしまう。
別の方向から逃げようと関係ない。壁を蹴って屋根の上へと飛びあがり、空中で対物ライフルを構えて撃ち殺す。
そして、着地までに武器を仕舞って、星噛の刃を屋根に突き立てて、天井を崩落させながら内部へ戻る。
そんな、通常では考えられない動きを繰り返し、湊はたった一人で中規模グループを殲滅しようとしていた。

「おーおー、荒れてるねえ。いや、楽が出来るんなら嬉しいけどさ。あれは……ちょっと拙いんでないの？」
少年兵だろうか。湊と同じ年頃に見える男子がＡＫ―４７を肩から下げた状態で走って出てきた。
顔は恐怖で歪み、靴も片方脱げてしまったというのに、構わず走り続けている。
逃げなければ殺される。僅かでも止まってしまえば、鬼に食い殺されると分かっているのだ。
「……言われなくても分かってるよ」
だが、それでも逃げ延びることは敵わなかった。
長い髪を広げながら空から降ってきた鬼は、男子の前に着地すると、武器ごと男子を貫き、引き抜く勢いを利用した回し蹴りで顔面の肉を弾け飛ばしている。
威力が高いのなら骨を砕くことも考えられるが、どうやれば至近距離で爆弾を喰らったかのように、蹴りで骨ごと肉を飛び散らせることが出来るのか分からない。
人が死ぬ事、人を殺す事、それらに慣れている私兵たちも、今の湊の殺す姿はおぞましい狂気に取り憑かれているようにしか見えなかった。
「……あの馬鹿、完全に自分の中の価値観が狂ってる。自分が何をしたいか分からないんだ」
「執拗に武器も壊しているから、ボウヤが何で今の状態になっているかは分かり易いけれどね」
湊がいまの状態になっているのは、数日前のテロリストの調査報告が蠍の心臓に届き、それを目にしたからだ。
テロリストと思われた者たちは、貧困に苦しんで犯行に及んだただの強盗。
そして、彼らが持っていた武器は、湊が以前に殲滅した反政府ゲリラ組織のアジトに残っていた武器だった。
通常、どこどこのグループを潰したと報告すれば、軍の調査団が派遣されて、アジトに残った物資や残されている記録物を押収してゆ

く。
　しかし、同じような任務が頻繁に行われているせいで、軍も仕事を怠けるようになっていた。
　その結果、湊が殲滅したグループのアジトには武器が残り、偶然にもそこを訪れた彼らが武器を手にして、犯行に及ぶのを後押しすることになったのだ。
「悪いのは怠けていた豚であって、別にボウヤが責任を感じる必要はないのにね」
「女の子を殺したのでチェックになってたんだ。そこでズレちまったのが、報告書を読んで完全に崩れた」
「そんなっ、だってあの子を殺したのは警邏兵よ？　あいつが手にかけた訳じゃないわ」
「見殺しにしたろ。生き残っても売られたり、町の男に使われるような未来しか見えなかった。なら、復讐を果たさせて、あの場で死なせた方が良いと思っちまったんだよ。今までのアイツなら、そう簡単には切り捨てられなかったさ」
　あの日、一緒にいて一部始終を目にしていたレベッカは、少女の死に対する湊の非はないと断言した。
　だが、イリスはその少女が死ぬ状況を許している時点で、以前の湊ならあり得ないと返す。
　こちらに来て価値観が揺れていたようには見えなかった。
　だとすれば、たった数時間の観光の中で、湊の価値観を揺るがす事態が起きていたのだろう。
　一緒にいたからと言って何かを出来たとは思えない。それでも、イリスは湊から離れるべきではなかったと後悔した。
「……終わったみたいね。武装した百人を殺すのに二十分ってとこかしら。化け物ね。背筋が寒くなりそう」
「アイツはそんなものじゃないっ」
　ナタリアの冷たい言葉に、イリスは声を荒げて反論する。
　今の湊は少し冷静さを失っているだけだ。あんな狂気に取り憑かれた殺人鬼が、湊の本質であるはずがない。

相手のスーツの胸倉を乱暴に掴み、イリスはナタリアを至近距離で睨みつけた。
「なら、修正しなさい。三日以内に戻らないようじゃ、ウチには置いておけないわ。貴女だって分かるでしょ？　皆、あの子が怖いのよ」
力で敵わないから怖いのではない。自分たちでは理解出来ないから怖いのだ。
普段の湊を知らなければ、いま直ぐにでも総攻撃を仕掛けて討伐してしまいたいほど、本能が警笛を鳴らし拒絶しようとする。
兵としての経験が長いナタリアやラースは表面上はいつも通りだが、他の者はそうではない。
子どもが好きなチャド、ラースに次いで古参のセルゲイ、心優しいバーバラに、普段はお調子者のパトリックですら、言葉を失って呆然としたまま、全身に血を浴びて戻ってくる湊を見ている。
レベッカだけは湊を心配そうに見つめて、ついには駆け出し迎えに行ってしまったが、あれは湊が死にかけた場面を目にしていたことによる例外だ。
ナタリアに言われなくても、他の者の心の中は分かっている。何故なら、イリスも同じよう恐怖を抱いてしまっているから。
そして、イリスは抱いてしまった恐怖を無理矢理に押しこめ。強い光を宿した瞳で湊を捉えた。
「……ああ、すぐに戻すさ。アイツに自分が守るものを見させてな」
それだけ告げて、イリスも装備をその場に置くと、レベッカの後を追って湊の元へと向かうのだった。

5月9日（火）
放課後――美術工芸部
授業が終わり、それぞれの掃除当番なども終えてからの放課後。
部室に集まったメンバーたちは、ラナフから国際便で送られてきた大きな段ボールを床の上に置いて、それを囲むように立っていた。
元々は、桔梗組と眞宵堂に届いたのだが、眞宵堂の物は栗原へのお土産＋商品になりそうな品だったのに対し、桔梗組に届いた物は美術

工芸部のメンバーに向けたお土産も入っていた。
複数ある内の一つがまるまるそうだとメールで連絡を受けていたため、今朝、チドリを学校に送りながら、渡瀬の手で荷物も一緒に学校へ届けられ。現在、メンバーたちの目の前にあるという訳である。
「ラナフってすごいとこ行ってるねー。ここ、観光客がテロリストに襲われたりとか、結構、危ないところなんだよ」
段ボールに貼られた紙で、荷物がどこから送られてきたのかを確認した佐久間は、感心したように他の者たちに話す。
これでも世界史を担当しているのだ。国名を見ただけで、それがどのような地域かくらいは簡単に説明が出来た。
「……湊は実際に襲われたってさ。まぁ、警備の兵士が来る前に倒したらしいけど」
「ちょっ、何やってんのよ民間人が……」
「というか、中学生に負けてしまうテロリストもどうなんでしょう？」
「んー、この場合、有里君が普通の人より強かったって考えるのが正解なんじゃないかな？」
チドリの言葉を聞いたゆかり達は、それぞれ湊の心配をしつつも無事であることは確認出来ているので、やや苦笑しながら呑気に段ボールの開封を始める。
湊が格闘技を習っていることは全員が知っている。それが大人相手でも有効だというのは、去年、盛本という体育教師を殴り飛ばしたことで確認した。
あれだけ体格の違う相手を一撃で沈めることが出来たのだから、相手がテロリストであっても、それが有効であるのは変わらないだろう。
通常ならば危険だからと避難するところで、逆に兵士よりも先に鎮圧しにゆく意味は分からない。
だが、それが湊の行動ならば、避難するよりも鎮圧した方が良いと判断する何かしらの理由があったのだと、湊を見てきた部員らは素直に思えた。
「それじゃあ、開けるよ。よいしょー」

蓋を留めていたガムテープを剥がし終えて、ゆかりは明るい口調で蓋に手をかけた。
中に何が入っているのかは、家族向けの土産を既に見ているチドリも知らされていない。ただ、チョコレートもあるから、早めに渡して欲しいとだけは聞いている。
そうして、皆の期待が高まる中、ゆかりが蓋を開いて最初に目に飛びこんできたのは、通称『プチプチくん』こと梱包材だった。
「……まぁ、そりゃそうよね。壊れたら困るものもあるだろうし」
「うぷぷ、岳羽さんたら『よいしょー』とか言ったのにね」
「い、良いじゃないですか別に。先生にはお土産あげませんから！」
「えっ……酷くない？」
実は、ゆかりは生徒の中でも佐久間にドライに接する方で、チドリや湊の次くらいに佐久間封じの役目を負っている。
これも湊と接する内に、本人の元々のサバサバとした性格が表に出てきた影響なのだが、掛け声を付けてまで蓋を開けて失敗したことが恥ずかしかったのか、ゆかりは佐久間と段ボールの間に身体を割りこませ、中が見えないようにしながら梱包材を取り払った。
「わぁ、可愛いランプ」
梱包材を取ったことで中身が見えた風花が、目を輝かせて中身を取り出す。
中に入っていたのは、細かい装飾のなされたアラジンランプで、他にも中東らしい模様の壁掛けタペストリーなどがいくつも入っていた。
ゆかりは中を見ようとしている佐久間を背中で邪魔し続けているが、その間に、他の三人で箱の中身を机の上に置いてゆく。
そして、ほとんど全て出せたところで、ゆかりは箱の底に一通の封筒が入っていることに気付いた。
「あ、封筒が入ってる。有里君からの手紙かな？」
「……読んでみて」
「ちょっと待ってね……あ、これ、どれが誰に向けてかって内容だ」
手に取った封筒の中に入っていた便箋に目を通す。無駄に達筆な

湊の字でそこに書かれていたのは、それぞれの荷物が誰宛かといった内容であった。
　他に近況報告的なものが書いていないかとも期待したが、最後の一文まで土産の分配しか書かれていなかったため、ゆかりは湊らしいと思いながら顔をあげて、それぞれに指示を飛ばす。
「チドリには家に送ってあるから、全員で食べるチョコレート以外は基本的に私たち宛てみたい。その赤いランプが美紀、白に緑のラインのが風花、細かい柄の銀色は佐久間先生で、青いのが櫛名田先生、白に黄色のは時任先輩のだって。あと、壁掛けは私たちと先輩で、先生たちはマットでしょ。えっと、他には……え、本物の金細工!?」
　慌ててゆかりは、持ち上げるとジャラジャラと音のする中身の見えない袋を開ける。
　そこには、腕輪やネックレスなど金細工の品が一つ一つ小分け袋に収められ入っていた。
　あまり高価な物だと相手が気にすると思ったのか、純度は１８カラットのようだが、それでも十分に高級品である。
　母親の実家が金持ちであるため、こういった物を見慣れているゆかりも、自分の小遣いでこれを買ってくる感覚にはついていけないため。貰えて嬉しいと思う反面、湊のパーソナリティーに新たな疑問を抱いた。
「……ブルジョアめ。ていうか、こういうの普通に税関通るんだ。これとストールも誰って訳じゃなくて適当にだってさ。で、石鹸と香水は先生たち。ティーセットは私たちで……っておい」
　ゆかりの指示で、他の者たちが仕分けをしていると、途中でゆかりが顔の筋肉をひくつかせながら止まった。
　仕分けはほとんど済んでしまい。あとは少し平たい白い包みが残っているのみである。
　だが、それには油性ペンで『岳羽用』と書いているので、相手が何に対して怒っているのか分からないが、風花は素直にそれをゆかり宛ての品を集めた机に並べた。
「ゆかりちゃん、分けるの終わったよ。ちょっと意外だったけど、一つ

だけゆかりちゃん用って書いてるなんて、有里君もよっぽどゆかりちゃんに似合う物を見つけたんだね」
並べ終えた品を見て、どれも綺麗だと思いながら風花はにっこりと微笑む。
ゆかり用と書かれた物が何かは分からないが、それでもお土産に選ばれた品を見る限り、湊は女子ウケが良い物を選ぶセンスを持っている。
女性に囲まれて育ったためか、それとも骨董品屋でのバイトの経験が活きているのか。
どちらともかも知れないが、風花はお伽話に出てきそうな可愛らしいアラジンランプを手に取り、留学先での湊が楽しそうで何よりだと思った。
「……あんのムッツリスケベ！」
『……え？』
だが、土産物を眺める面々のほっこりとした空気をブチ壊す、ゆかりの怒声が部室に響き渡った。
急にどうしたのだと、メンバーが振り返った先で、便箋をぐしゃりと握り潰したゆかりが、自分用とわざわざ書かれた包みに近付いてゆく。
そのまま、包みの脇に紙くずと化した便箋を転がし、やや荒っぽく包みを開けると、そこには煌びやかなピンク色の踊り子衣装が入っていた。
下はロングのパンツスタイルだが、上は露出の激しいビキニタイプ。男が思春期の同世代異性に贈るにしては、セクハラと言われてもしょうがない際どいチョイスである。
「名指しで贈るってどういう了見よ！　なに？　私にベリーダンスでも踊って欲しいの？　しないっつの！」
よくゆかりは一人でノリツッコミをする。きっと根っからのツッコミ気質なのだろう。
そのツッコミも基本は湊に対してのみ行われるので、二人は意外なところで相性がいいのかもしれない。

驚いていた全員の前で大きな声を出して少し気が晴れたのか、一応は貰い物だと広げた衣装を丁寧に畳みながら、包みに入れ直してゆかりは深く息を吐く。
「ふぅ……有里君、こういうの好きなのかな？　可愛いとは思うけど、貰っても対処に困るっていうか。あー、メールしてみるか」
相手が自分に合わせて買って送ってきた事は分かる。
だが、いくら弓道部で身体を絞っていると言っても、ゆかりの周りにいる女性は、皆、同性でも見惚れて羨むようなスタイルの持ち主ばかりだ。
佐久間や櫛名田がその代表で、二人ともスタイルは良い上に、無駄なとこに肉はついておらず、足まで綺麗ときてる。
そんな二人にセクシーな衣装を贈るのならまだ理解も出来るのだが、どうして湊が自分だけを選んで渡してきたのか、ゆかりには分からない。
まぁ、湊のことなので、「特に意味はない」と答えられそうな予感はしているが、一応、確認のためにどういう理由で衣装を贈ったのかを、メールで尋ねておくことにした。
「ん、シンプルな内容でいいよね。『こういうの着て欲しいの？』っと」
メールが送れたことを確認し、ゆかりは携帯をぱたんと閉じる。
向こうとの時差は約五時間で、現在の日本が五時過ぎなので、相手はちょうど昼食を取っている頃に違いない。
ならば、待っていればすぐにメールが返って来るだろう。その間に他の土産の確認をしておくため、ゆかりはチョコレートの箱を手にして皆の方へ振り返った。
「ねえ、これいま食べ……る？」
振り返ったところでゆかりは固まってしまった。
何故なら、普段よりも三割増し不機嫌そうな顔をしたチドリと、明らかにムスッとした佐久間がジッと己を見つめていたから。
「え、えっとぉ……なに？」
湊を除けば学内で最強のスペックを持つ教師と、女子生徒で最高の身体能力を持っているチドリに睨まれて怯えない者はいないだろう。

自分が何かしただろうか。そう考えたところで、ゆかりには身に覚えがないため、恐る恐る尋ねることしか出来ない。
すると、尋ねただけなのにチドリは舌打ちし、佐久間は呆れたようにゆかりを見る目を細めて口を開いた。
「なにって事はないでしょ？　岳羽さんしか貰ってない物あるよね。この様子だと吉野さんも貰ってないみたいだし。どうして有里君が〝貴女だけに〟それを贈ったのか教えて欲しいんだけど」
佐久間の言葉を聞いたとき、ゆかりの中で相手が自分を見る目にしっくりくる言葉が浮かんでいた。
それは、〝この泥棒猫〟である。
冗談でも何でもなく、いまの佐久間は、本気でゆかりを好きな相手を横取りした泥棒猫として見ている。
この歳でそんな目で見られるとは思っていなかった。しかも、その目を向けてくる相手が担任であるとは、想像もしていなかった。
別に貴重な体験が出来たところで感動はない。あるのは、自分の置かれた状況に対する焦りと、異国の地にいながら余計な問題を引き起こした湊への怒りだけ。
美紀と風花は少し離れた場所で心配そうに見てきているので、そんなに心配なら助けて欲しいところだが、自分が二人の立場なら声をかけることは出来ないだろう。
チドリと佐久間、この二人を敵に回して無事でいられるのは湊だけだと理解しているから。
しかし、ゆかりはそんな絶体絶命の状況に置かれても、自分が無事に生き残るため、状況を打開することを諦めなかった。
「えと、今回は私だけってみたいだし。二人にはまた別の民族衣装が届くんじゃないかなぁって」
「……娼婦（ビッチ）」
「はぁっ!?　いまなんつったゴラァッ！」
ゆかり、キレる。
いくら大切な人を取られそうだと勘違いしているとしても、流石に言って良い言葉と悪い言葉がある。

チドリとゆかりは、お互いに積極的に話しかけるということもなく、部活の女子メンバーでは最も関わりが少ないので、他のメンバーほど仲が良いわけではない。
それだけに、二人の友好度による友達割り引きだけでは、チドリの吐いた暴言を相殺できず。
黙っていられなくなったゆかりは、持っていたチョコレートの箱を机にバンッと叩きつけるように置いて、鋭い視線でチドリとついでに佐久間もまとめて睨み返した。
「他の人がちょっと優遇されたぐらいで、そこまで怒るとか余裕なさすぎ。なに？　自分が選ばれる自信無いの？」
「選ばれるって何が？　貴女が何を言ってるのか全然分かんないんだけど」
「あっそう。じゃあ、なんでそんなに不機嫌なの？　先生も大人のくせに、生徒にそんな目を向けて恥ずかしくないんですか？」
「べっつにー。恥を掻くくらいで済むなら、私は全然ＯＫだよ。だって、欲しいもん。有里君が」
あくまで自分の気持ちを認めないチドリに対し、佐久間は不敵に笑って断言した。
生徒の前でここまではっきり言い切ったことに、睨み合っていたチドリとゆかりは驚いて目を見開く。
この部室は上が吹奏楽部の部室で、壁や天井に防音処理がなされているため外には聞こえていないとは思う。
しかし、外には聞こえていなくとも、佐久間が湊を好きだと生徒の前で告げたのは、当人同士だけのときを除き、今回が初めてだ。
それを伝えたからには、佐久間はもう躊躇う気はないのだろう。
チドリやファンクラブの女子だけでなく、ただの異性の友人という関係であったゆかり達にも、湊が絡む事ならば全力で勝ちにゆく。
ノーマークだったゆかりが優遇されたことで、誰がダークホースとなるか分からないと判明したのだから、この対応も一定の理解は示せた。
けれど、湊と男女の関係になるつもりのないゆかりにすれば、それ

でも今の相手の態度は納得できるものではない。
不敵な笑みを今も浮かべている佐久間を見つめ、ゆかりは再び口を開いた。
「先生が彼をどう想うかは勝手ですけど、その気のない私にしたら今の対応は迷惑です。お土産一つでそんなに言うなら、有里君に自分も欲しかったって言えば良いじゃないですか」
「催促して貰うのと、有里君が自主的に選んで贈られるの。それが同列だと本気で思ってるの？」
「じゃあ、自分が貰えるまで待ってたらどうですか？　誰にでも優しい彼のことだから、先生にもチドリにもそのうちくれると思いますよ」
『っ!!』
同じ品物を貰うにしてもシチュエーションで価値が変わる。そう言ってきた佐久間に対する、ゆかりの言葉は正論だ。
自分で催促せずにプレゼントが欲しいのなら、相手のサプライズを待つしかない。
だが、湊が誰にでも優しいと言ったこと、さらに二人もいつか貰えるだろうと吐き捨てるように言ったせいで、言われた者たちは、ゆかりが勝者の余裕で言っているようにしか聞こえなかった。
それが引き金となり、佐久間の顔から笑みが消え、チドリはゆかりを敵と断定したように瞳に敵意を宿す。
「……なによ」
父親の死後、周囲や社会から強いバッシングを受けて幼少期を育ったゆかりは、他人の悪意や敵意に敏感だ。
チドリが敵意を籠めた視線で睨んできたことで、ゆかりも相手が手を出そうとすれば対処できるよう身構える。
さらに、佐久間も無表情で拳を握り締めていることから、勢力は三つだが、ほぼ『ゆかり対チドリ・佐久間』の構図で一触即発の状態だ。
子どもの嫉妬で始まった不毛な言い争いは、既に誰が手を出してもおかしくない、女同士の修羅場と化した。
皆を止めたいと思っている美紀と風花も、流石に武道を嗜んでいる

三人が相手では、身体を張っても止められる自信がない。
そうして、チドリがゆかりに向けて一歩を踏み出した――――そのとき
「……状況が分からない」
『……え？』
急にドアが開き、知った声が後ろから聞こえてきたことで、緊張の高まった部室内の空気は一瞬で霧散する。
全員が驚き振り返ると、そこには出発前より髪も身長も伸びた私服姿の湊が、部室内の状況を不思議そうに眺めて立っていた。
これには、睨み合っていた者らも、驚きを超えて状況が理解できずに戸惑い。冷静さを欠いたまま、佐久間が湊に尋ねた。
「な、なんで有里君がいるの？」
「着物の丈が合わなくなってきたから、直しのために一時帰国したついでに学校に寄った。それより、チドリはどうして手を出そうとしていたんだ？」
一時帰国したと言っても、湊は向こうに開いた扉を残したまま、ベルベットルームを通って戻ってきただけだ。
イリスの勧めにより午前中のうちに戻ってきて、丈の直しは既に終えたため、チドリを家にでも送り届ければ、そのまま向こうに戻るつもりでいる。
しかし、部員同士の喧嘩らしきものを見た以上は、そのまま見過ごす訳にもいかないため、湊がジッとチドリを見つめていると、チドリは小さく呟いた。
「……別に」
貴方のことで言い争いをしていました、などと本人に言えるはずもなく、チドリはばつが悪そうに視線を逸らした。
その対応を怪訝に思いながら、続けて佐久間を見ると、こちらもあからさまに視線を合わせようとしない。
この状況から推測するに、拳を握り俯いて前髪で顔が隠れているゆかりが被害者で、二人は何かしらの理由があって加害者側になろうとしていたに違いない。

「大丈夫か？」
そう読んだ湊は、呆れたように嘆息すると、ポケットに手を入れたまま、黙っているゆかりの前まで進み声をかけた。
声をかけられたゆかりは、俯いて顔を隠したまま、ポツリポツリと話しだす。
「……大丈夫な訳あるか、このバカヤロー！」
そして、顔をあげると同時に湊に体重の乗った全力のボディブローをお見舞いした。
「うぐっ!?」
予想外の攻撃、それにゆかりの細い腕からは考えられないような威力。そんな拳でモロに腹を殴られた湊は、驚き後ろによろめいた。
だが、ゆかりの気はまだ治まっていないようで、湊に向かって駆け出すと、跳躍して掴みかかり、相手を床に押し倒しながら、馬乗りになってビンタを連続で放つ。
「あんたがっ、私だけにっ、やらしい衣装を寄越すからっ、変な勘繰りした二人に狙われたじゃないのっ！　ほら、どういうつもりで渡したか言ってみなさいよっ！」
言っている間、ゆかりは左手で湊の胸倉を掴んだまま、何発も何発も往復で平手打ちを繰り返しており、それで話せる人間などいるはずがない。
加えて、偶然の産物だろうが、ゆかりは湊の腕を膝で踏んで抑える形となっている。
それにも気付かず、自分を守る事もできない湊を一方的に攻撃し続けるゆかりを、動けるようになった美紀と風花が後ろから腕を掴んで止めた。
「ゆ、ゆかりちゃん。それじゃあ有里君も話せないよっ」
「どうせスケベな理由に決まってるわよっ！　女子みたいな顔してる癖に、私が好きなら直接口で言えっ！」
「ぐっ」
掴まれていた腕を振り払うため力んだゆかりの手は、平手から拳に変わって湊の顔面を襲う。

勝手に、スケベな理由で贈ったと決めつけられているが、湊はそんな事を思ったことはないし。衣装がゆかりに似合うだろうからと純粋な気持ちで贈った。
だというのに、何がどう捻じ曲がったのか、ゆかりの中では湊はゆかりに好意を持っているから、あのいやらしくも見える衣装を贈った事になっていた。
他の部分はどうでも良い。だが、流石の湊もゆかりを異性として好きだという部分は否定したかった。
「ゆかりさんっ、やり過ぎですよ！」
「良いのよ、こんなやつ！　ほら、自分はゆかりさんが好きですって言ってごらんなさいよ！　盛大に振ってやるけどね！」
「む、無茶ぶりだよ、ゆかりちゃん……」
このとき風花は、殴られている湊の率直な気持ちを代弁していた。
好きでもない相手への告白を強要しておきながら、自分はその想いを受けとるつもりがない。
いくら学内でもトップクラスのルックスを持つゆかりに憧れを抱いている者でも、このような姿を見れば、こんなにも我の強い女性はちょっとと引いてしまうに違いない。
変人へのツッコミ役と親しくない者にはややドライな接し方から、風花や美紀と同じ常識人側にいたゆかりは今この瞬間に死んだ。
今回の件により、見事に佐久間たちと同じ残念美人の変人側へとクラスチェンジを果たし。この学校ではルックスが良いと変人だというジンクスを、より一層強固な物へとすることに貢献したのだった。
「おーい、あいつの土産を受け取りに来たぞー……って、邪魔したか？」
そんなとき、部室のドアが開いて櫛名田が入ってきた。
しかし、入ってすぐに女子に馬乗りで殴られている湊を発見し、湊がここにいる理由も分からないが、どうしてゆかりに殴られているのかという方が気になってしまった。
チドリと佐久間は、先ほどのことに自己嫌悪しているのか暗い表情で立っているだけで、風花と美紀だけでゆかりを止めようとしている

が、運動部に所属している相手がキレていることもあって、完全には押さえ切れていない様子だ。
殴られている湊は、入ってすぐの場所に仰向けになっているので、きっと高等部の少し短い丈になっている櫛名田のスカートの中身が見えているだろう。
普段の櫛名田なら、この状況を利用して湊をからかうところだが、殴られている湊の瞳が時折、金から蒼へ明滅していることが気になった。
さらに、一応は医者でもある保険医として、生徒が傷付く場面を見過ごせないため、腰を下ろして相手と目線の高さを合わせて正面からゆかりの腕を掴んだ。
「お前は少し殴り過ぎだ。その馬乗りもスカートで隠した着衣騎乗位にしか見えないし、その辺で止めておけ」
「はぁっ!? あんたは関係ないでしょうが！」
「怪我人がいるなら、医者として無関係ではいられないだろ。というか、お前はキレると言葉が汚くなるんだな。将来は泣き上戸か絡み酒タイプになりそうだ」
ゆかりの反応にくすくすと楽しそうにしながら、櫛名田は余裕たっぷりに笑ってみせる。
しかし、それだけの余裕を見せていても、風花と美紀が二人がかりで押さえきれなかったゆかりの腕を、一人でがっちりと掴んで押さえこんでいるため、櫛名田もまた佐久間に近いレベルで超人なのかもしれない。
そうして、どれだけ櫛名田の腕を振り払おうとも、まったく振り解けなかったゆかりは、少しは冷静さを取り戻したのか、抵抗をやめて腕の力を抜いた。
「……もう大丈夫です。放してください。あと、有里君の顔の上からどいてあげてください」
櫛名田が湊の顔を跨ぐように腰を下ろしていたため、ゆかりは冷かな視線を向けて、相手にどくように伝える。
すると、櫛名田はキョトンとした表情を作って、直ぐに含みのある

笑みを浮かべて、さらに腰を落として答えた。
「ん？　ああ、これはこれで喜んでいるはずだから大丈夫だ。お前の腰辺りにきっと硬いナニかが当たっているだろう？」
「なっ、そんなのないです！　というか、わざとだったんですかそれ!?」
　櫛名田の言葉にゆかりは顔を赤くして、勢いよく湊の上から飛び退いた。
　美紀や風花も耳まで真っ赤にしているため、この部活のメンバーは初心な者ばかりなのだろう。
　そんな、穢れを知らない少女たちをいじるのも楽しいが、櫛名田はゆかりを止めるために腰を下ろしてから、一度も湊の呼気が自分に当たっていないことに気付く。
　もしや、殴られ過ぎて気を失ったかと、少し心配になってその場からどくと、口と瞼を閉じていた湊がゆっくりと起き出した。
「……櫛名田。次に同じ事をすれば女でも殴るぞ」
「からかい甲斐のないやつめ。それに岳羽は許すのか？」
「別に初めから怒ってない。まぁ、状況の説明くらいはして欲しいところだが」
　起き上がった湊は、自分の服についた汚れをはたきながら立ち上がり、乱れていた髪を手櫛で多少整えながら他の者を見つめる。
　攻撃を受け続けて赤く腫れた頬が僅かに痛むが、それも少しすれば治まるに違いない。
　そして、ゆかりが攻撃をしてきたこと、それは湊の土産が事の発端として、先ほどのチドリと佐久間が敵意を剥き出しにしていたことに繋がっていたようなので、自分の行動が原因ならば、湊は怒るつもりは全くなかった。
「……あの衣装を贈ったのは、ピンク色も含めて岳羽に似合うと思ったからだ。別に俺個人の趣味で着て欲しいという訳じゃない。気に入らなかったなら謝る。済まなかった」
　湊が謝罪の言葉を口にしたとき、普段と変わらないはずの表情が、どこか申し訳なさそうにしているように見えた。

それにより、湊は本当に自分に似合うだろうと思って選び、自分がそれを気に入らなかったことに落ち込んでいるとゆかりは理解した。
だが、別に贈られたことを嫌がっている訳ではない。ただ恥ずかしかっただけだ。
ゆかりは、純粋な相手の厚意を踏み躙ってしまった自分の愚かさを嫌悪し、すぐに自分の思っていた素直な気持ちを口にした。
「べ、別にそういう訳じゃないよ。着るのは恥ずかしいけど、綺麗ですごく可愛いと思ったし。ただ、他の人にはなかったから、少しビックリしたというか。その……ありがと」
先ほどまでの櫛名田のセクハラ発言による羞恥からではなく、あまりに真っ直ぐな湊の言葉に対し、自分も真っ直ぐ素直な言葉で返したことで、ゆかりは照れて頬を染めてぽつりと礼を述べる。
ただ土産物に対して礼を言うはずが、どうしてこうなったのか分からない。
けれど、しっかりと相手の誤解を解くことは出来ただろう。
そうして、顔が熱いのを自覚したまま、正面にいた自分よりも随分背が高くなっていた少年の顔を、ゆかりはゆっくりと見上げた。
なんと、そこには、
「――――そうか、良かった」
安心したように、微かにだが柔らかい笑みを浮かべた湊の顔があった。
これには真正面にいたゆかりだけでなく、その後ろにいた美紀や風花、部室の奥にいた佐久間とチドリも驚いたように目を見開いている。
「笑った。……ねえ、いま笑ったよね？　もう一回、もう一回見せて！」
「……断る。そもそも笑ってない」
「ぜったい嘘！　お願い、君が笑ったの初めて見たから、また見たいの。ほら、ね？　スマイル、スマイル！」
いつもつまらなそうにしている湊の自然な笑顔。それがこんなにも綺麗な物だとは思わなかった。

偶然にもそれが見れたことに、つい嬉しくなって、ゆかりは湊の頬に両手を添えて笑顔を強請った。
「近い、触るな」
だが、湊は普段よりも数段増しの仏頂面でゆかりの腕を掴み、離れるように言ってくる。
傍目から見て、それは照れ隠しにしか見えないため、テンションが上がっていることもあって、ゆかりは全く引かずに笑顔を強請り続け。
その後の土産物の説明のときになっても、ゆかりはニヤニヤしながら湊のことを見続けていたのだった。
余談だが、湊の後ろにいた櫛名田だけは、貴重な湊の微笑を見る事が出来なかったため、その優位性をネタに佐久間は勝ち誇った顔をしていた。
貴重な物を見逃し、さらに笑顔を引き出したゆかりならともかく、どうして佐久間が勝ち誇るのか分からない。
そうして櫛名田は、その日の夜に居酒屋で佐久間と掴み合いの喧嘩に発展し。学校ではゆかりを止めて湊を救ってやったというのに、二人揃ってその店から出入り禁止を喰らうという、なんとも踏んだり蹴ったりな目に遭ったのだった。

第六十五話　とある昼休みの一幕

――蠍の心臓・食堂

「本当に持ち直したようね。少し驚いたわ」

食堂で紅茶を飲みながら離れたテーブルを眺め、ナタリアがイリスに話しかける。

彼女の視線の先では、銃のカタログを眺めながらレベッカ・バーバラ・チャドの三人と一緒にケーキを食べている湊が座っていた。

「完全にって訳じゃないけどな。ただ、自分が何のためにこんな仕事をしてるか再確認させたんだ。アイツの長所でもあった、弱者を殺さないっていう甘さは薄れたかも知れない。それでも、とりあえず、あんな八つ当たりみたいな戦い方はしばらくしないよ」

たった一日日本に戻していただけで、湊は行く前とは別人かと思うほど、以前の冷静さを取り戻して帰ってきた。

他の者にすれば、どうやって朝に行って夜に戻ってこられたのか不思議でならないが、傍で見ていても恐怖を抱くことはなくなった。

レベッカなど安心して泣きながら湊に抱き付き、父親のラースが娘に男が出来るかもしれないと動転していたが、そんな愉快な光景が、他の者の緊張を解す事に一役買って、今ではすべて元通りになっている。

「……にしても、レベッカの入れ込みようは不思議ね。あの子、ボウヤのことを嫌っていたでしょうに」

「ああ、イラつくよな。昨日、小狼がいないと思って探したら、大浴場の女湯で水着きて小狼の髪の毛洗ってたんだ。ご丁寧に清掃中の札を置いてな」

離れたテーブルで、フォークを使って湊の口にケーキを運んでいるレベッカ。

湊がショートケーキで、自分はチーズケーキなので、別のケーキも食べさせてやろうという、お姉さん的な行動らしい。

しかし、イリスはそれを見ながら、紅茶に入れようとトングで掴んでいた角砂糖を粉々にして、反対の手に握り拳を作り、それを激しく

震わせている。
以前は、並んで狙撃銃を撃っているのを見て、子ども同士が遊んでいるのは微笑ましいと笑っていたくせに、随分な変わりようだ。
静かにカップに口を付けて紅茶を味わっていたナタリアは、旧友の大人げない行動に呆れながら忠告する。
「水着を着てたなら良いじゃない。ラースも貴女も子離れしなさいよ。みっともないわよ」
「アイツはまだ中学生だろうが！」
「昔の日本ならとっくに元服の歳でしょ。別に二人が結婚したいんなら、私は特に反対しないわよ」
「誰がさせるかっ。アイツの保護者にも言われてんだ。変な女に引っ掛からないように注意してやってくれって。だから、最低でもアイツのために生きるくらい言えるようなやつじゃないと駄目だ」
断固として湊とレベッカの交際は認めない。
腕組みをしてはっきり言い切るイリスは、性別は異なっていても、娘を嫁にやらない父親にしか見えなかった。
失意の淵に立ち、この仕事を始めた頃からは想像も出来ない姿だ。
過去の自分に重なり放っておくことが出来ず、彼女をこの仕事に誘った張本人としては、実に喜ばしいことである。
けれど、恋愛は当人同士でやるものなので、そこで大人がしゃしゃり出るべきではない。
そう思いながら話しを聞いていたところ、ナタリアはイリスの出した条件に引っ掛かるものを覚え、実はかなり甘い条件ではないかと思った。
「……意外と沢山いるんじゃない？」
すると、相手もナタリアと同じ考えに至ったのだろう。
何せ、名切りの一族は生物としてワンランク上の存在だ。これより優秀な遺伝子が天然ではほぼ存在しないとなれば、雌は本能で湊を求めるはず。
ミーハーな女子など、湊と結婚出来るのなら、自分の人生くらい余裕で捧げると言い出す者も大勢いるに違いない。

「……本当だな。よし、小狼自身が相手のために生きるって言った場合のみ許可することにしよう。これなら、レベッカはアウトだろうからな」
流石に、それほどまでに条件を達成する者が大勢いるのでは困るので、絶対に少ないだろうと思える物に条件を変えた。
もっとも、変えたところで、既に達成者は数名いるのだが、イリスは居てもどうせチドリだろうと思っているため、満足気に頷いていたのだった。

5月15日（月）
昼休み――2―B教室
昼休み、学生にとっては空腹の辛さからようやく解放される、一日のうちで最も重要な時間である。
四限目の授業が終わってからの生徒の反応は、大きく分けて四つ。
まず、最も多いのは、授業という束縛された状況からの解放感を味わいつつ、自分の鞄から弁当箱や店のレジ袋を取り出して、昼食を机の上に広げる者。
次に、財布や携帯などの貴重品を持って、安くて美味いと評判の食堂に向かって教室を出る者。
さらに、食べればどこか懐かしい気持ちになれる、購買の総菜パンを買いに走る者。
最後が、昼食を用意しておらず、総菜パンを買う金も持っていないため、机に突っ伏して睡眠で空腹を忘れようとする者だ。
順平はこの中の三番目、購買へ総菜パンを買いに走る者で、目当ての焼きそばパンと三食パン・うぐいすパンを手に入れ、飲み物として後光の紅茶も買ってから教室へと戻ってきた。
「おかえりー。いいの買えたか？」
戻ってきた順平を迎えたのは、以前、一緒に鍋島ラーメン〝はがくれ〟に食べに行ったメンバーで、コンビニの袋からオニギリを取り出していた友近が、順平の手に持っているパンを眺めながら尋ねてくる。

昼休みの購買は一種の戦場だ。誰も彼もが人気のカツサンドや焼きそばパンを求め、おばちゃんにパンをくれと叫ぶ。
しかし、おばちゃんは皆に平等、早い者勝ちで次々と生徒の求めるパンを渡し、代金を受け取って次の生徒の所望品を用意するだけだ。
唯一の例外が、買いに来れば自然と他の者が列を開ける湊で、おばちゃんもその時には他の者が彼を通したこともあって優先的に買わせている。
もっとも、湊は桜のお手製弁当を持って来ていたので、買うのは飲み物とお菓子類だけ。他の者たちも、湊が昼休みにパンを買わないと知っていたから通していたに違いない。
そんな一種の名物的な光景を未だに目にしていない順平は、飢えた獣たちとの戦いで得た戦果を自慢げに見せつけた。
「焼きそばパン、ゲットだぜー！　んで、あとは適当に三食パンとうぐいすパンも買ってきた。ま、パンばっかり食っても、すぐに腹減るし。帰りに買い食いすると思うけどな」
「なら、来る前にコンビニでオニギリでも買っとけよ。パンよか腹持ちはいいぞ」
友近は放課後の買い食いには賛成派だが、それでも頻繁に行うのはよくないと思っている。
理由は、単純に自分たち中学生の一般的な経済事情を考えての事だ。
遊びたい盛りでも、バイトが認められていない以上は、親から貰える少ない小遣いをやりくりしてせいぜい楽しむしかない。
なら、最も切り詰める事が出来るのは何だと考えれば、それは食費だと友近は思っている。
育ち盛りでもあるので、すぐにお腹が空くのは分かるが、昼に総菜パンと菓子パンを合わせて三つ食べて、さらに放課後にたこ焼きなど買い食いする。それよりは、学食で四百円のカツ丼でも食べた方が満腹になるだろうし、経済的な負担も少なく済むだろう。
こういった小さな積み重ねが、一月で五百円以上違ってくる結果を生む。

そんな思いも込めて、友近は順平に金の使い方を考えろとアドバイスするも、ノリで生きる中学生にはあまり響かなかったのか、直ぐ前の今は誰もいない席に座って、順平は笑いながら返してきた。
「まぁ、その日の気分ってあんじゃん？　今日はオニギリだとか、カツサンドが食べたいだとか。オレっち、そういうの大切にする派だから、今日は焼きそばパンな訳よ」
「はぁ……月末に泣いても金は貸さないからな」
金銭の貸し借りは友情に亀裂を生む。例え薄情だと言われようが、身から出た錆びである以上、友近は本当に一円たりとも順平に貸すつもりはなかった。
相手も今は親戚から貰った小遣いという金銭的余裕があるためか、友近の言葉を大して気にせず。
「へへっ、わかってるよ」
と言って、三食パンを包みから出し、餡子・チョコレート・クリームのどれかは分からないが、その一角を千切って口に運んだ。
それを眺めてばかりもいられないので、友近も最後に呆れた様子で一度深く息を吐いてから、袋から取り出したツナマヨネーズのオニギリの包装を開けた。
片手で持ちながらかぶりつき、パリッとした海苔の食感と、ご飯の少しひんやりした温度を感じながら、友近は机の中に入れていたＡ３サイズの大きなプリントを取り出し眺め出す。
前の席で椅子に横座りしていた順平は、自身もパンを口に運びながら、相手が何を見ているのか気になり、口の中の物を飲み込んでから尋ねた。
「あれ、ともちー何みてんの？　バイトの求人？」
「友近な。つか、中学生を雇ってくれるのなんて新聞配達くらいしかねーだろ。求人じゃなくて、皇子通信の特別増刊号だ」
「皇子通信？　なんだ、それ？」
全く聞き覚えのない単語に、順平は不思議そうに首をかしげる。
『通信』という名の付いた紙媒体であるため、その後の特別増刊号と合わせて考えるに、何かしらの新聞的な物なのだろうとは思う。

だが、友近が手にしているのは、普通より大きなただのコピー用紙だ。
新聞社の発行する新聞にしては紙が上等過ぎるし、広報版のような地域新聞にしては逆にちゃっちく感じる。
そうして、考えても何も思い付かなかったため、順平はうぐいすパンを口に咥えて、お手上げとばかりに肩を竦めた。
「まったく分からねえ。それどこの新聞よ？」
「プリンス・ミナトだよ。俺は帰ってて知らなかったけど、なんか有里が一時帰国して放課後の学校に来てたんだとさ」
言いながら友近が順平に皇子通信の誌面を見せてくると、そこにはカラー印刷された湊の写真がトップに載っていた。
以前、順平が友近らに見せて貰った文化祭の画像と違い、写真の湊は私服で化粧もしていない。
頬が何故だか腫れているようにも見えるが、それを差し引いてもこの学校のどの女子よりも美麗だ。
同じ写真内で、美術工芸部のメンバー・佐久間・櫛名田という錚々たる面々に囲まれているというのに、それでも尚、圧倒的な存在感を放っていることから、順平は自分の感覚は間違っていないと断言できる。
しかし、女に見えるか、と聞かれたら疑問符が浮かぶ。
肩甲骨よりも長く伸びた髪は、前髪もそれに近い長さで無造作に伸びていて邪魔ではないかと思うし。
校内女子の中では長身に分類される美紀や櫛名田よりも背が高い。三年生や同学年の高身長の男子に比べると、まだそれには及ばないほどではあるが、既に一六〇センチ後半にはなっているだろう。
それだけの身長を持って、尚且つ、眼光が鋭く、身体もかなりがっしりしている。
女子と並べると、体格の差は歴然だ。
声はまだ聞いた事がないので判断材料に出来ないが、少なくとも、順平は私服や制服を身に付けた湊は一目で男と判断できると思った。
「なーんか、文化祭の写真とイメージ違う感じだな。この有里君って

結構キレキレな感じ？」
「キレキレ……ああ、不良かって？　いや、服装以外の校則違反はたぶんしてないぞ。何故だか年中マフラー巻いてるけどな。寒がりなのかもしれん」
「マフラー？　ああ、この黒いのか。確かに五月に巻くには暑そうだな」
どこのブランドの品なのか、この写真からは判断できないが、それでも雰囲気からすると高級品に見える。
きっと値段を聞けば、マフラー一つでそんなにするのかと目玉が飛び出すに違いない。
だが、いくら高級品だとしても、夏へ近付いている五月中旬に巻くには流石に暑いだろう。
薄いスカーフ程度なら許容範囲でお洒落さんだなと思うところだが、いくらイケメンで似合っているにしても、分厚い黒マフラーはない。
もしや、所謂、『厨二病』と呼ばれる思春期特有の精神疾患を患ってしまっているのだろうか。
その可能性が浮上すると、無造作に伸ばされた長髪も金色の瞳も、順平にはもう厨二病の塊にしか見えなくなっていた。
「あー、有里君ってもしかして厨二病か。いやぁ、オレもヒーローとか超能力には憧れっけど、カラコンとか暑いの我慢してヒーローマフラー装備する気にはなれねぇわ」
最後にアハハと笑って、順平は楽しみにしていた焼きそばパンに取りかかる。
できたてではないと言うのに、袋から出すなり、焼きそばソースの食欲をそそる香ばしい匂いが鼻腔に届く。
そのまま、口を大きく開いてかぶりつくと、パンが焼きそばのしょっぱさを丁度良い塩梅に整え、上に乗った紅ショウガがさっぱりとしたアクセントとなり、味に飽きさせずに次の一口を誘ってくる。
たかが購買の焼きそばパンだ。もっと美味しい物は他にいくらでもある。

しかし、順平はこの安っちくも、また食べたくなる懐かしい味が大好きだった。
「ぼっ、おまえっ!?」
だが、食べている途中で、友近が顔を青くして焦っていた。
一体どうしたのか。順平は友近の様子を怪訝に思いながら、最後の一口を飲み込んだところで、周囲の様子の変化にようやく気付く。
「え？　あ、あれ？　どったの？」
戸惑い周囲を見渡す順平の声が、静かにだが教室中に響く。
いまは昼休みだ。誰も彼もが授業から解放され、くだらない雑談をしながら食事を楽しんでいるはず。
そんな状況で、大して大きくもない一人の声が、教室中に響くなどありえない。
結論から言おう。そのとき、教室から音が消えていた。
「……湊の目は、カラコンじゃない。私の髪と同じで、治療の副作用による後天的なものだけど、ちゃんと自前よ。実際、私が湊と初めて会ったときは瞳は黒かったし」
音の消えた教室の後方から、気だるさを残しながらも、耳にすっと届く静かな声が発される。
順平がゆっくりそちらに顔を向けると、風花と一緒に自分の席で弁当を食べていたチドリが、真っ直ぐ順平を見つめてきていた。
女子の友達を作ろうと思いつつも、接する機会がなかったので、順平は今まで彼女を遠目に見るだけだったが、相手の半分しか開かれていないような目に見られると、何故だか視線を逸らすことが出来なくなってしまった。
恐怖は感じていない。けれど、身体が竦んでいると言う訳ではないのに、顔だけでなく身体全体の自由が利かない。
順平は、こんな経験など初めてだった。
「そ、そっか。知らないで適当なこと言ってゴメンな」
どうして自分の身体がこんな状況になったのか分からないが、順平は相手に謝らなければ自分は生きていけないと確信した。
そして、口が動く事を確かめて、相手にしっかりと謝罪を述べた。

頭まで下げるべきかとも思ったが、身体が動かないことには、言葉による謝罪しか出来ないため、順平はそのまま相手の反応を待つ。
すると、意外なことに、チドリは特に気にしていなかったように、自然な態度で返してきた。
「……別にいい」
「あ、ありがとう。それと本当にゴメンな」
相手から許しの言葉を貰うと、順平は自分の身体が自由になっていた事に気付いた。
身体が動くのなら頭を下げる事が出来る。座ったままだが、相手に軽く頭を下げて、許してくれたことへの感謝と改めて謝罪を述べた。
今度のそれにはチドリは言葉を返さず。ただ僅かに頷いただけだったが、他の者も動けるようになったようで、教室に音が戻り始めた。
順平の前に座っていた友近など、本当に安心して腰が抜けたように、椅子に座ったまま力なくへたり込んでいる。
確かに、当事者の順平ほどではなかったにしろ。その正面に座っていたとなれば、チドリや他の者の視線にも晒されていたことだろう。
自分のついうっかり発言によって巻きこんでしまったことで、順平は友近にも謝罪しておく事にした。
「おう、ゴメンな」
「ゴメンじゃないっつの。有里とその周辺を敵に回したら生きていけない。これ、この学校の常識だから」
「いやぁ、まさか教室から音が消えるとは思ってなかったわ」
「あれで済んだのは幸運だ。吉野さんが許してくれなかったら、お前、明日には社会的にも物理的にも席無くなってたからな。プリンス・ミナトは巌戸台中に潜んでるんだよ」
それはそれでかなり怖いことだが、順平としては身近に感じる分、クラスメイトに嫌われる方が怖かった。
口は災いのもと。それはお調子者の自分に母親がよく言い聞かせてきた事だったが、親元から離れて少しばかり浮かれ過ぎていたようだ。

今回のことを戒めに、順平は少しばかり不用意は発言を控える事に決めた。
だが、その前に、友近に言われて気になっていたマフラーについて、クラスメイトで唯一知っているであろうチドリに尋ねておく事にした。
友近の席と距離があるため、順平は言葉に気を付けながら、やや声を張り上げてチドリに話しかける。
「えと、吉野さん、ちょい聞きたいんだけど。有里君て、このマフラーって何で巻いてるの？」
「……さぁ？　年上の女からの贈り物だからじゃないの」
「……へ？」
予想の斜め上をいく答えに、呆気に囚われた順平は間抜けな声をあげてしまう。
だが、ぶっきらぼうな口調の相手の言葉に棘があったことで、自分が地雷を踏み抜いてしまったと確信した。
それと同時に、他のクラスメイトたちも今まで知ることの出来なかった湊のマフラーの秘密に、些かスキャンダラスな事情が絡んでいたため、誰も彼もが直前にしていた雑談を止めて、湊のことについて話しだしている。
順平の隣の席だったプリミナ会員である女子も、立ち上がってやや動揺を見せながら、チドリに質問をしている。
「よ、吉野さん。その女の人っていくつくらい？　綺麗な人？」
「……歳は知らないけど、見た目は二十代だった。綺麗かどうかは個人の好みによるでしょうけど、雰囲気が人間っぽくないし。それらを踏まえれば湊レベルね」
「ちょ、有里君レベルって、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
聞かれたチドリは面倒そうにしながらも、前に力の管理者が家にやってきたときの事を思い出し、客観的な評価を告げた。
相手の女子は驚き過ぎて大変な事になっているが、聞いてきたのは相手なので、チドリは全く気にせず食事を続ける。
しかし、実際のところ、チドリは表面上は冷静を装いながら、心の

中では面白くないと荒れていた。
先ほど述べたエリザベスのルックス評価だが、チドリが今まで出会ってきた中では湊のルックスが最高ランクとなっているため、それと同等ということは、認めたくはないが超絶美人という評価だ。
他にチドリが湊と同ランクと思っているのは四人いて、内二人はエリザベスの姉弟であるマーガレットとテオドアである。
しかし、エリザベスも含めた力の管理者たちは、人とは理の違う世界の住人ということもあって、存在の根っこの部分から違っているとはっきり分かる。
人間よりも高位の存在。絶対に勝つ事ができないからこそ、どこか侵し難い雰囲気もあって、いわば信仰の対象として美しいと感じるような物だと思っていた。
故に、チドリの中でルックスは同ランクでも、信仰の加護を抜きに考えれば、力の管理者よりも湊の方が上という評価だ。
そして、次に湊と同ランクだと思っているのは、湊の絵に描かれていた女。つまりは、七式アイギスだった。
湊の写実画は、本当に写真かと思えるほど緻密で忠実に描くため、あのデッサンが湊によるプラス補正の働いた想像の産物ではないと断言できる。
となると、これも悔しいことだが、同性でもドキリとするような笑みを浮かべていた絵の相手を、客観的に湊レベルと評価するしかない。
けれど、あれは一年以上前に描かれた絵で、湊がチドリと暮らす様になってからは一度もそんな相手を見ていないため、二人が出会う以前の知り合いだと推測できる。
ならば、絵の相手はおよそ十八歳前後だと思われるので、六年以上経った今ならば劣化している可能性もあり得た。
湊は現在進行形で美しく成長しているので、相手が劣化している可能性があるのなら、チドリ的にはまたしても湊の勝ちである。
そうして、これはチドリも特に気にしていない人物だが、最後の一人は湊のペルソナである座敷童子だ。

湊本人は気付いていないらしいが、召喚されたときに姿を見ているチドリや桜は、座敷童子が湊によく似ていると思っていた。
湊の妹、または子ども、にしては湊がまだ若過ぎるが、血縁者と言われれば素直に信じられるほど、髪や顔の造形に似た特徴を持っている。
相手は湊の心の一部のはずなので、湊自身から分岐した存在だと思えば姿が似ていることにも納得できるが、とりあえず、二人が身内レベルに姿が似ているため、同ランクと評価するのは当然だった。
そうして、同ランクと言っても湊がトップなのは変わらない。これがチドリの出した結論だった。
「……ま、当然よね」
「えと、何が当然なのかな？」
「……別に。ただ、湊が変態だって再確認しただけ」
勝手にルックスを評価しておきながら、酷い言い草である。
いまチドリが言った『変態』とは、ゆかりの言う『無駄にイケメン』という言葉と同じ意味だ。
けれど、言葉のニュアンスからそれを読み取る事など出来る筈がない。風花も困ったように首を傾げているので、チドリが何を思って湊を変態だと言ったのか理解出来ていないのだろう。
普段の湊を見る限り、彼が他者の評価を気にするとは思えないが、それでも自分の知らないところで勝手に根も葉もない噂で評価を落とされたくはないはずだ。
よって、いまチドリの話しを聞いていたのが風花だけだったことは、湊にとって非常に幸運なことであった。
「え、えっとぉ、久しぶりに会えて良かったよね。お家の人も喜んでたでしょう？」
「夕食を食べたらすぐに戻って行った。なんか、向こうで次の国に行く準備とかがあるんだってさ」
「あ、そっか。キャラバン隊の人たちと一緒にいるんだもんね。有里君がゆっくりしてたら、他の人が移動できないし。用事を終えたら、またすぐ戻らないといけないんだ」

そう言って風花は、「大変だね」と苦笑してから卵焼きを口に運ぶ。
キャラバン隊云々は湊たちが考えた設定に過ぎないが、チドリの言った次の国に行く準備があるのは本当だ。
治安のよくないラナフに滞在することで、日本しか知らない湊の常識を更新し、気候の違う場所での仕事にも慣れさせた。
砂漠の砂塵によって武器が故障することや、照り付ける太陽で熱くなった砂が陽炎を発生させ、狙撃の照準に狂いが出るなど、日本の都市部で仕事をしているだけではまず味わえない。
近接戦闘を好む湊にすれば、武器の故障は大した痛手ではなかったが、それでもそう言った経験は後に活きてくる。
身体も成長を続け、あらゆる状況に対応できる知識と経験を得れば、湊は来たるべき戦いも無事に乗り越えられるだろう。
そのときには、チドリも一緒に戦うつもりでいるので、湊が必死に頑張っているのなら、自分も相手がいない間に一回りも二回りも成長しようという気になれた。
「……秘密の特訓が必要ね」
「……え？」
急に意味ありげに呟いたチドリの声が聞こえた風花は、きょとんとした顔で相手を見返す。
〝秘密の特訓〟、それの中身は分からなくとも、中々に心の惹かれる響きだ。
クラスの男子たちだけでなく、運動部の者ならば、女子であっても興味を抱く者は大勢いるに違いない。
風花も、映画や漫画に出てくる修行のイメージなら思い浮かぶので、チドリが白装束を着て滝に打たれている姿を想像しながら、相手に素朴な疑問を伝える。
「その、なんの特訓か分からないけど、言ったら秘密にならないんじゃないかな？」
「なら、いま聞いた貴女が黙ってればいい。ばらしたら、去年の夏に湊とデートしたことを湊のファンクラブの人間にリークする」
「だ、だから、あれはデートじゃないよぉ！」

去年のゆかりと同じようなこと言ってくるチドリに、風花は羞恥で耳を赤くし、手を胸の前でブンブンと振ってデートではなかったと否定する。
待ち合わせをして、二人で電車に乗り、並んでソフトクリームを食べて、会話をしながら博物館を回った。博物館を後にすると電車に乗って巌戸台に戻り、一緒に夕食を食べて、家までは湊がしっかり風花を送って帰った。
そう、あの日の二人は、言葉にすればたったそれだけの事をしたに過ぎない。
いくら他者から強烈なツッコミが入ろうとも、風花は断固としてただ部活動の一環だったと言い張る。
「もう、チドリちゃんが変なこと言うから汗掻いちゃったよ」
「事実でしょ。私たちのスケジュールを把握して、上手く日付を調整するなんてやるじゃない」
「ちょ、調整って……。真田先輩の試合と弓道部の大会が重なるのはシーズンだからまだ分かるけど、先生たちの旅行とチドリちゃんが舞台を観に行くのまでは把握できないよ。仮に出来たとしても、有里君が出掛けるかどうかも分からないし。二日前に連絡くれたのも有里君の方からだよ?」
チドリの言い方では、まるで自分が計算高い悪女のようではないか。
などとは、クラスの良心とも呼ばれている心優しい風花は思ったりしていない。
しかし、チドリの考えているような事はしていないと、その点についてはキッチリと否定した。
何故なら、風花にとって、デートとは『二人の内、双方もしくは片方が相手に好意を持っている男女が行うもの』であり。チドリの言うように意図的に二人で出掛けることをセッティングしてしまえば、それは風花のデートの定義に抵触することになるからだ。
山岸風花は有里湊の事が好きだ。けれど、そこに異性としての感情は全く存在しない。

それは同じ部活のメンバーのほぼ全員に言えることで、湊に関わる者のほとんどは湊という個性の塊に対し、あまりに常人から逸脱し過ぎているせいで恋愛対象として見る事が出来なくなっていた。
学内にはファンクラブ会員のように、一目見て恋に落ちている者もいるが、あれは画面の向こうのアイドルに憧れを抱いているようなもので、一種の信仰や崇拝に近い。
本当に湊を異性として好きになるのなら、人の輪の一部である常人では駄目なのだ。
それは真の意味での天才であったり、人とは違う時間や理に生きる者であったり、人の心を持った機械であったり、そのような者たちでなければ湊を純粋に一人の男として見る事は敵わない。
故に、湊と関わる内に無意識にそれを理解している風花は、部活メンバーで湊とデートが出来るのは、チドリか佐久間だけだとそのように思っていた。
「デートって言えば、チドリちゃんは有里君としたりしてなかったの？　昔から一緒にいるなら、二人だけで出掛ける事も多かったと思うけど」
「さぁ？　あんまり近過ぎると、一緒にいることが自然過ぎて、そういう考えって湧いてこないのよね。それなら、マリア……ああ、知り合いのことだけど、そっちの方が普段は一緒にいないから、距離感としては適切なのかもしれないわ」
「そ、そうなんだ。難しいことはよく分からないけど、なんか大人だね」
質問に答え終えると、水筒のお茶をカップになっている蓋に注いで口を付けるチドリ。
直前の台詞とその姿に、人生経験の豊富な仕事の出来る女社長のイメージが合致したため、風花はチドリがとても大人な女性に見えた。
ただいつも一緒にいるだけでは、男女の適切な距離感は測れなくなる。
風花はチドリの言葉からそれを学び、自分もいつかはそんな事を考えて、お互いを想う事が出来る素敵な恋愛がしたいと思った。

そうして、二人は弁当を食べ終えると、昼休みが終わるまで雑談をして過ごしながら、午後の授業も真面目に受けたのだった。

第六十六話　ラナフとの別れ

――???

深い深い闇の中。上も下も分からぬそんな場所に、鬼を象った土面を頭につけた茜色の髪の女が一人座っていた。

瑠璃色の瞳の下から頬にかけて逆三角形をした紫の紋様が描かれており、表情こそ大人びているものの、年の頃は二十歳になるかどうかといったところだろう。

そして、肌にピッタリとした袖のない黒い民族衣装の上から、彼岸花の柄が描かれた光沢のある白い着物を羽織っているが、その女には肩より先の右腕がない。

けれど、それを気にした様子もなく、女が黙って座っていると、女の目の前に淡い光と水色の欠片が集まり一人の少女が現れた。

湊と同じ色の長い髪を持った少女、節制〝座敷童子〟だ。

「……お前か、よく来たな」

女は座敷童子の顔を見ると、柔らかい笑みを浮かべて相手を歓迎する。

座敷童子も相手を知っているようで、女の手が届くほどの距離まで近づくと、その場にペタンと腰を下ろし座った。

「八雲は強くなっているな。本当に、とても強くなった」

「……まだ、目覚めない……八雲は私たちを……知らない……」

普段、座敷童子は湊を現在の名前である〝湊〟と呼んでいるはずだが、いまの彼女は彼の本名である〝八雲〟と呼んでいる。

彼女が何を思って呼び分けているのかは分からない。

しかし、どこか落ち込んだ様子で話す座敷童子の頭に手を置き、女が優しく撫でながら笑いかけた。

「他の者が教えぬようにしているんだろう。だが、周囲の意思に関わらず、奴は我々を受け入れるしかない」

座敷童子が言っている〝目覚め〟とは、湊に眠っている名切りの血のことだろう。

常人を遥かに超えた力を有する湊も、いまのそれが限界値という訳

ではない。
鬼と龍、二つの一族の間に生まれた湊は、『龍の一族を守らなければならない』という、血の盟約からも解放された存在だ。
長きに亘って鬼を縛り続けてきた鎖が解かれた以上、真に名切りの力に目覚めた湊を力以外で止める事は出来ない。
本人は血の盟約とは別に、自分の意思で魂の契約を四つ結んでいるが、それらはむしろ湊に力を与えるためのものだ。
だからこそ、この場にいる二人は湊が己で身に付けた力に、名切りの力を加わる時を心待ちにしていた。
だが、二人がそのように話しているとき、誰もいないはずの闇の中から少年の声が響く。
「こんな深い場所にいたんだ。探すのに時間がかかってしまったよ。それにしても、随分と面白そうな話をしているね。よかったら、僕も仲間に入れてよ」
闇の中から現れた少年は、女よりも明るい水色の瞳で二人を見つめながら、楽しそうな笑みを浮かべている。
囚人服のような物を着た少年、ファルロスが現れることが出来るのは、湊が寝ている間に意識を表出させることを除けば、今はまだ心の世界の中だけだ。
２００９年に近付くにつれ、傷付き失った力が回復していき、そうすればごく僅かな間だけ外に出る事が出来るようになるだろう。
しかし、今はまだその時ではないため、ファルロスが現れた以上、ここは湊の心の中だということが判明した。
「……貴方は……呼んで、ない」
急に現れたファルロスに対し、二人で話していた座敷童子は感情の乏しい表情を歪めて、不快感を露わにしながら口を開く。
女は座ったままだが、座敷童子は立ち上がってナイフ投げのように右手を胸のところで構えていることから、ファルロスが変な動きを見せれば、即座に攻撃するつもりのだろう。
けれど、座敷童子が構えているのを見ながら、ファルロスも負けじと答えた。

「そうだね。でも、僕は友達として彼を守る。ペルソナのフリをして彼の元にやってきた君を、同じ心の住人である僕なら倒す事が出来るから」
子どもらしい笑みを崩さず、しかし、声色は真剣なそれで返したファルロスの背後に力が集まる。
闇の中に在って尚、さらに暗い闇色の靄が水色の欠片と共に収束し、ファルロスの本来の姿であるシャドウ〝デス〟としてその場に顕現した。
力の大半を失っていながらも、他のシャドウやペルソナとは次元を異とする圧倒的な力。
タナトスやアベルに次ぐ力を持った座敷童子も、流石に数多の心の集合体であるデスが相手では不利だと悟ったのか、構えを崩さぬまま表情を強張らせた。
「さぁ、大人しくするんだ。彼は自分を騙している君のことも大切に思ってくれている。だけど、僕は彼の優しさを利用している君たちを許す事は出来ない。だから、ここで消えて貰う」
「人聞きの悪い事を言うな。私たちが八雲を利用するはずがないだろう」
「そう言われて素直に信じると思っているのかい？」
デスを呼び出したというのに、全く焦りもせず座ったままの女が、どこか呆れたように話しかけてきた。
ペルソナである座敷童子がデスを脅威に感じているというに、女が座ったまま余裕を崩さないことにファルロスは違和感を覚える。
だが、仮に相手が座敷童子と同じようにペルソナであったとしても、召喚に力を消費しないで済む心の世界ならば、ファルロスも負けるつもりはない。
二対一という状況は不利だが、それなら先に実力の劣る者を狙っていけばいいだけだ。いつでも攻撃を仕掛けられるようデスに大剣を握り直させ、ファルロスは相手の出方を窺った。
すると、またしても女が余裕を崩さぬまま、凛とした響きのよく通る声で、今度は反対にファルロスに質問をぶつけてくる。

「逆に問おう。お前は我が子を利用しようと思うか？」
「我が、子？」
「ああ、数千年の間ずっと待っていた。ようやく巡り合えたのだ。何よりも愛しく、掛け替えのない我らの愛子（まなご）に」
「そんな……それじゃあ……君たちはまさかっ」
女の言葉にファロスは動揺し、呼び出していたデスの顕現を解いてしまう。
ペルソナである筈の座敷童子が自我を持っていたことを、ファルロスもずっと不思議に思っていた。
己やジャック・ザ・リッパーのように、他者の心とも言える存在が湊に宿ったことで生まれた存在ならば、自我を所持していることにも納得できる。
けれど、座敷童子はイゴールの元で可能性の芽から手に入れたペルソナたちを融合し、そうして生まれてきた湊の心の欠片だ。
そこに他者の心が入り込む要素などなく。また、入り込んだところで、シャドウの王をその身に宿せるほどの器を持った人間の自我に塗り潰されて終わりだ。
いくら二人が血に宿る過去の名切りだとしても、目覚めてもいない湊のペルソナとして外に出られるはずがない。
現に女の方はまだ湊の心の深部で、このように何も出来ずに留まっているのだから。
その考えに至り、ファルロスは僅かに冷静さを取り戻して、座敷童子が過去の名切りである可能性を否定する。
「いや、そんな筈はない。座敷童子、君はペルソナ合体で生まれた力の欠片だ。まだ目覚めていない湊君から、過去の名切りが生まれ出ることはできない」
「……八雲は戦った……戦えば……名切りは目覚める」
「戦えば目覚める？」
自分たちも先ほどまで、湊は名切りを知らないから目覚めていないと言っていた。
だというのに、戦えば目覚めるとはどういうことなのか。座敷童子

が静かに発した言葉の意味を理解しきれず、ファルロスは怪訝な顔つきで相手を見つめる。
　すると、座敷童子に代わって、座ったままの女がファルロスの疑問に答えてきた。
「不思議に思わなかったのか？　お前との戦いで八雲が力の使い方を知っていたことを、親を失って直ぐの幼子が、相手の死角を的確に突き、力を往なす術を知っていた事を」
「まさか、あの戦いの時点で彼は名切りの力を使っていたというのかい？」
「……私が教えた……オルフェウスを通じて……戦い方を……八雲はすぐにそれを覚えた」
「オルフェウスを通じて？　では、君はオルフェウスからプチフロストになり、プチフロストから今の姿になったと？」
　ファルロスの問いに座敷童子はゆっくり頷いて返す。
　俄かには信じられない。だが、座敷童子はオルフェウスを素材に使ったプチフロストを、さらに素材に使って起こった合体事故で生まれたペルソナだ。
　彼女自身が湊の中にいる状態でも、パスのような物がペルソナ越しに通っていたのなら、その知識を無意識に吸収させながら、戦いに身を置く湊の覚醒に合わせて表に出てこられるようになったに違いない。
「自分の心を完全に制御する事は出来ないとはいえ、プチフロストのように完全自律行動を取るペルソナなどいない。座敷童子は私よりも八雲に近いからな。目覚めが浅くとも力を貸せるのだ」
「……こう見えて……幕末生まれ……だから、洋服」
「……生前の姿が元になっていたのか。にしても、若過ぎないかい？」
「十三歳で……出産……死んだのは……もっと後……フフッ」
　何が楽しいのか、座敷童子は少し勝ち誇った顔で笑って小さくピースをしている。
　名切りの血で知識や経験を引き継げるのは、血によって継承する関係から、名切りが父親なら子どもを作ったときまで、母親なら出産で

へその緒を切るまでの物となる。
となれば、血に宿る存在であって死んだ本人という訳ではないことから、座敷童子が出産年齢の姿をしているのもおかしくはない。
けれど、幕末から明治にかけての人間にしても、かなり早い段階で妊娠・出産していることになるが、無事に出産してその後も数年は生きていたようなので、ファルロスは何も聞かないことにしておいた。
座敷童子について少し深く知ると、ファルロスはそう言えば女の名前を聞いていなかったことを思い出す。
別に知らなくとも、〝君〟と呼んでいれば問題はないのだが、一人だけ知らないのもおかしいだろう。
そうして、ファルロスは座っている女の方へ身体を向けると、女に名前を尋ねた。
「そういえば、君の名前を聞いても良いかな？」
「名前？　そうだな、本名もあるが今はペルソナのようなものだ。私のことは〝茨木童子（イバラキドウジ）〟、そう呼ぶがいい」
頭に鬼の土面を付けた茜髪の女、太陽〝茨木童子〟は自らの名を告げると不敵に笑った。

5月21日（日）
朝――ラナフ・コベ国際空港
湊とイリスがこの国に来て約二ヶ月。日本とは違う、治安も気候も過酷な環境下での生活にもほぼ順応する事が出来た。
海外へと来たのは、依頼を通じて自身の技量を高めることが目的であったため、最低限の下地作りを終えた湊は、そろそろ依頼を受けて回ろうと考えていた。
同行しているイリスもそのつもりで、最初から二ヶ月もあれば湊が海外の環境に慣れると思って、ナタリアには二ヶ月の間だけ滞在すると伝えており。期限がきた二人は、ナタリアと彼女の私兵たちに見送られ、別の国へと旅立つため空港へとやってきた。
「ねぇ、もう少しいなさいよ。依頼ならうちに居ても受けられるじゃない」

「……この国の依頼なんて政府から頼まれるローラー作戦だけだろ。そもそも、仮面舞踏会への依頼料を知ってるか？　ラナフの平均年収数十年分だぞ。それでコンスタントに依頼なんてくるはずない」
湊のチームである仮面舞踏会は、日本の巌戸台近辺での活動を主としていたため、海外での認知度はまだそれほど高くはない。
だがそれでも、日本と仕事のパイプを持っている富裕層の人間には知る者も多く。殺し・運搬・調査など、幅広い分野で活躍していたこともあって、その技術と信用に見合うだけの依頼料を貰っている。
ここ最近では三百万以下の依頼などほとんど受けておらず、一月で五千万近く稼ぐ事だってざらだった。
貧富の差の激しいここラナフで、そんな大口の客が多数取れるとは思えないので、仕事がただの反政府ゲリラ組織の殲滅くらいしかないとなると、湊が早期に別の国へ移ろうと考えるのも無理はない。
けれど、最近になって距離が縮まり、仲が良くなっていたレベッカは、親しい相手との別れが寂しいのか、湊の右手を両手で掴みながら説得を続けてくる。
「なら、値下げしたらいいじゃない。お金に困ってる訳じゃないでしょ？　ボランティアだと思えばいいわ」
「……ボランティアに命懸けてられるか」
「大丈夫よ。あんた、死んでも生き返るし。ホームで心臓を吹っ飛ばして実演してたじゃない」
Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ、なんの問題もない。
レベッカは気にした様子もなく、軽いノリでそう言って笑う。
心臓を吹き飛ばした実演とは、あのハルーフで強盗に襲われた日の夜のことだ。
銃で身体中を撃たれたというのに、立ち上がって血だらけになった服を脱ぐと、湊の身体には一切の傷がついていなかった。
けれど、銃弾が身体を貫通するのを目撃し、実際に血も出ていたというのに、そんな事はありえないとレベッカは心底心配して宿舎に戻っても湊に付き纏った。
レベッカから強盗に襲われたと報告を受けたイリスやナタリアも、

戻ってきて湊が食堂で普段以上の量を食べているのを見て唖然としていたが、結局、宿舎内にあるメディカルルームで検査を受けて問題なしと診断されるまでそれは続いた。
だが、問題なしと結果が出たら出たで、では、あのときの出血は何だったのだという話しになり。イリスは口を噤んでいたが、面倒になった湊が誰もいないガレージに私兵らを呼んで、デザートイーグルで心臓を吹き飛ばしてみせた。
一同はそれを見て混乱し、医者を呼んで来いと騒ぎにもなったが、十分もしないうちに湊は口から大量の血を吐いて蘇生した。
その後、自分は頭部を吹き飛ばされない限りは死なないと説明し、先に説明してから実演しろと全員に怒られたのは、極一部の大人以外に怒られたことのない湊にとっては貴重な体験である。
レベッカはその時の事を引き合いに出し、死んでも大丈夫なら、ボランティアに命を懸けるのも問題ないはずと言った。
だが、それを傍で聞いていたイリスは、怒った様子のまま殆ど手加減のない威力で、レベッカの頭を後ろからはたく。
「馬鹿、死んでも生き返れるのと、死んでも大丈夫はイコールじゃないぞ。小狼は普通に痛覚もってんだ。キツイに決まってるだろ」
「いったぁっ。イリスさん、最近何か私に容赦ないんだけど、私なんかした？」
「周囲が甘やかしてるから、アタシが厳しく見えるんだろ。普通だ、普通」
「……絶対違う。なんか、攻撃に私怨が籠もってるもん」
叩く角度、手首のスナップ、相手の死角を突くことで身構えさせないなど、イリスは一瞬のうちにそれらを成し遂げ攻撃を加えていた。
子どもを叱るには過ぎた威力の攻撃は、じんわりと痛みが残るおまけも付いている。
イリスがこのような攻撃をしてくるようになったのは、レベッカが湊の世話を焼くようになってからだ。
トレーニング後にシャワーを浴びた湊の髪を乾かしたり、邪魔にならないよう髪を結んでやったり、食事のトレーを持って来てやった

り、時には頭を洗ってやると言って大浴場に連れて行ったこともあった。
髪の毛に関わる世話が多いのは、普段の湊があまりに髪の手入れを適当にしているためであり、これは桔梗組では桜が担当し、仕事で外泊するときにはイリスがやっていた。
手入れを受けているときの湊は、ただぼーっとしており隙だらけに見えて、普段とのギャップから母性がくすぐられると女性たちには評判だ。
そんな癒しも得られる、湊との数少ないコミュニケーションの機会を新参の小娘が奪った。これは怒るのも当然である。
そもそも、レベッカはずっと湊にきつく当たっていた筈だ。
だというのに、自分が興味を持った途端に世話を焼くなど、湊を傍で見てきた者として認める訳にはいかなかった。
「小狼、こういう女には気を付けろよ。自分が飽きたら簡単に男を捨てるようなタイプだからな。付き合うなら桜やアタシみたいに芯のしっかりした、それでいて子どもにも優しい女にするんだぞ。あぁ、バーバラみたいに物の価値を見抜けないやつもやめとけ。馬鹿はそれだけで駄目だ」
「ちょ、ちょっと、私はちゃんと一人に尽くすタイプなんですけど！」
「私だって別に好きで騙されてる訳じゃないです！　ちゃんと教えてくれる人がパートナーなら、家庭は円満になりますよ！」
湊の人を見る目を養わせようと、イリスが駄目な女についてレクチャーを始めたと思えば、急に飛び火してきたため、バーバラもレベッカと一緒になって抗議する。
急に湊の世話を焼く様になったレベッカと違い。バーバラは元々温和で優しい性格であることもあって、子ども好きのチャドと一緒に湊に気を配っていた。
暇な時間に、湊がエルゴ研で飛騨に貰った医学書を読んでいた姿を見てからは、軍医で現在も研修や学会にも顔を出しているため、細かい専門的な知識や現在の最先端医療について教え。トラップの仕掛け方を教えたチャドや、ヘリや飛行機の操縦を教えたヤンと同じくら

い湊のスキルアップに貢献した人物でもある。
けれど、今のイリスはマイナス面しか見るつもりがないのか、心底馬鹿にした目を向けて、二人の抗議を鼻で笑い、言葉を返した。
「聞いたか小狼。これが駄目女の典型だ。現時点でこんなに駄目なのに、自分にまだ期待値があると思ってるんだ。可哀想にな。いや、本当に同情するぞオマエら。そんな物はまったくないからな」
「あ、あるから！　ていうか、むしろこのメンバー内なら一番良いお嫁さんになるのは私だから！」
視線に力を込めて反論するも、レベッカのその言葉に明確な根拠はない。
家事スキルはいずれ必要になるだろうからと、母国アメリカで祖父母と暮らしている母親や他の隊員に習ってそれなりのレベルでは身に付けている。
けれど、この部隊にいる女性は、ナタリアやイリスも含めて全員が普通に料理を作る事が出来る。
裁縫も難しいものでなければ可能で、部屋が腐海のようになっているという事もないため、この私兵部隊の女性たちは、美術工芸部のメンバーより圧倒的に女子力が高かった。
平均年齢が違うから当然という見方も出来るが、部活メンバーの一部はそれだけではカバーしきれない能力の差があるので、仮に同年代であったとしても総合的に見れば部隊の女性陣の勝ちだろう。
そんな大人の女性陣からすれば、レベッカが一番良い嫁になるのは自分だと言ったところで、男も知らずたかだか二十年しか生きていない小娘が何を言っているんだ、と鼻で笑われてもしょうがなかった。
「随分と可愛い事言うわね、レベッカ。でも、何気に総合ポイントが高いのはボウヤなのよね。料理は上手かったし、他の家事も出来る。自分のことは適当でも仕事や細かい気配りは出来るもの。愛想はないけど、子どもに優しいなら、尽くす妻の理想形といってもいいわ」
「……男じゃん」
「何割かは女よ。というか、嫁として能力の高さの話しでしょ？」
そんな話ではなかった気がするが、自分たちのボスが相手では下手

に反論しない方が良いとレベッカは経験で知っている。
故に、煙草の煙を吐きながら並んでいる自分と湊を見ているナタリアから視線を外すと、そろそろ搭乗手続きが始まる時間なので、レベッカは湊の方に振り返り頬に手を添えた。
「あんた、色々と難しく考えるみたいだから気を付けなさいよ。こんな仕事してたら、胸糞悪いことだって沢山あるしさ。誰も強制なんかしてないんだし、きつかったら日本に帰るなり、私らのとこに来るなりしなさい」
「候補として考えておく」
「……そこは、はっきりと『わかった』って言いなさいよね」
相手の答えが不満だったのか、レベッカはムスッとした表情で湊の頬に添えていた手で、頬肉を摘み横に引っ張った。
普段は無愛想な湊も気を抜いているときには可愛いものだ。男とは思えないほど滑らかな手触りと柔らかな感触に、ただ黙って受け身になっているのも組み合わさって、自分でやっていながら思わず表情が緩んでしまう。
以前の関係ならば、こんな事をしようものなら、湊はレベッカの腕を捻って地面に倒していただろう。
それが少しの間に随分と気を許されたものだと感慨深く思いながら、レベッカは頬を引っ張るのを止めると、手を両頬に添えたまま真っ直ぐ視線を合わせた。
「ま、あんたらしいけどさ。んじゃ、これ幸運のおまじない」
『あ……』
他の者が反応する間もなくレベッカは湊の顔を引き寄せると、僅かに背伸びをしてそのまま唇を重ねた。
十五秒経っても唇を離さず、湊もマナーとして瞳を閉じてはいるものの無反応を貫いているので、レベッカから離れない限り終わる事はない。
「あぁぁぁぁぁっ!?　オマエ、ふざけんなよ！　レベッカ、マジでぶち殺すぞ！」
「全面戦争だっ!!　人様ン家の娘をたぶらかした小僧は、娘の父親が

殺して良いって聖書にも書いてあるからなっ!!」
「……若いわねぇ」
そして、イリスとラースがお互いの子どもが異性とキスしている事に大声を上げ、ナタリアが楽しげに口元を歪めたところで、ようやくレベッカは湊から離れた。
しかし、ただ唇を重ねていただけではなかったようで、濡れて光っている唇を舌で一度舐めてから、頬を染めたレベッカはどこか満足気に笑った。
「フフッ、光栄に思いなさいよ。このレベッカさんのキスなんて、誰も受けたことないし。うちの男どもが聞いたら、血涙流して羨むような名誉なんだからね」
「……そうか」
本当に嬉しそうにニコニコと笑っているレベッカとは対照的に、湊は普段通りの低いテンションでマフラーを使って口を拭った。
周囲の者にすれば、いつも大切そうに巻いているマフラーで拭って良いのかという疑問もあるが、捧げたファーストキスを一切の淀みなく、まったく躊躇わずに拭われたレベッカがあまりに不憫に思えたため、普段は馬鹿にされているパトリックですら空気を読んで黙っていた。
だが、当然そんな事をされた本人は、相手の度し難い行動に目を見開き驚いて、直ぐに肩を震わし怒りを表す。
「あーっ!? なんで拭うのよ! 私のファーストキスって言ったでしょうが!」
「……押し売りだろ。それにファーストキスで舌を入れてくる女なんているか」
「素直に受け入れていたくせにっ」
「受け入れと諦観は別だと……まぁ、どうでもいい。とりあえず、お前と同じ行動をしたやつが既に数人いる。正直、人数が増える度に反応するのが面倒になった」
嘆息しながら答える湊の言う通り、キスの押し売りはレベッカが初めてという訳ではない。

初めては母親が相手で、二人目は美鶴の母親である桐条英恵。この二人は湊自身が幼かったこともあり、相手が喜んでくれるからというスキンシップとして極稀にしていたくらいだ。
そして、名前を変えてからは、酒に酔った桜や、その桜に対抗したチドリなど、何人もの女性からキスされていたため、湊にとってこの程度のことは、既に反応する必要もない些末事であった。
「俺の周囲はどうして了承もなくキスしてくるんだろうな。普通に犯罪だろうに」
「な、なによ、嫌だったって言うの？」
心底呆れた様子で溜め息を吐きながら溢す湊に、ファーストキスを捧げたばかりのレベッカは嫌われたかもしれないと、内心でビクつきながら尋ねる。
湊はそんな物は聞くまでもないだろうと思っていたため、憐れみの視線を向けて返してきた。
「お前は恋人でもない異性が、断りもなく勝手にキスしてきたら嬉しいのか？」
「そ、それは相手によるけど、普通は嫌でしょうね。でも、女性はそうでも男は嬉しいってよく言うじゃない。ほら、自分でいうのもなんだけど、私も結構美人でしょ？　男なら美人にキスされれば普通に嬉しいはずよ」
「……悪かったな、何割か女で」
『あー、そういう事か』
レベッカは同性からも見ても、十分可愛い部類に入る非常に整ったルックスを持っている。
恋人のいない湊が、そんなレベッカにキスされてどうして嫌がるのかと思っていた周囲は、ムスッとした湊の呟いた一言で激しく納得した。
確かに、頬くらいなら同性からキスをされてもスキンシップだと笑えるが、口にされてしまうと拒否反応を示す者もいるだろう。
それは女性の細胞も持っている湊も例外ではなく、スイッチを切り替えて完全に男の思考にしない限りは、同性からキスされているとい

う思考も働いてしまうようだった。
しかし、そういった理由ならば、普段からスイッチを切り替えて男として生活すれば良いのではないか、と他の者は思うだろう。
だが湊の場合は、今のように成長期を向かえて性差が体格にはっきりと出るまで、女よりも男に襲われかける方が多かった。
女性に襲われてもダメージが軽微で済むよう男でいれば、その分、男に襲われかけたときのダメージと怒りが増加する。
そんな理由も同時に存在するため、湊は多少の不便があっても、両性の脳構造の利点も使える両性状態のままでいるようにしていたのだった。
「……そろそろ時間だな。イリス、遊んでないで移動を始めよう」
随分と話していたことで、搭乗手続きの時間が迫っていた。
時計を見てそれを確認した湊が、レベッカを殴ろうとしてチャドに後ろから羽交い締めにされていたイリスに声をかける。
すると、相手も冷静さを取り戻したのか、直前の怒りを消して湊に答えた。
「もうそんな時間か。んじゃ、とりあえずお別れだ。ナタリア達も元気でな。レベッカ、次に会ったら半殺しにしてやる」
とても綺麗な異性を魅了するような笑みで、さらっと半殺しにしてやるなどと脅してくる辺り、イリスは本気でレベッカを許していないのだろう。
だが、それはレベッカの父親であるラースも同様らしく、ニコニコと素晴らしい笑顔で毒を吐きながら湊に別れを告げている。
「それじゃあ、姫もまたな。次に会ったらレミントン使って本当に姫にしてやるよ。レベッカもその方が女友達が増えたって喜ぶだろうからな。なーに、礼は気にするな。娘の〝友達〟のためならお安いご用さ」
それぞれから言われている子どもたちは、レベッカも意外と胆が据わっているか、湊と同じように気にした様子もなく黙って聞いている。
もっとも、完全に他人事で聞いている湊と違い。レベッカの瞳に

は、姑に負ける訳にはいかないという強い意志が感じられた。
現在の彼女のポジションは、時任亜夜と同じ湊の姉に準ずるポジションのようだが、どうやら本当に恋人になってもいいと考えているらしい。
だが、ルックスと収入の高さから、湊は非常に優良物件だと言えるが、イリス・桜・桐条英恵と三人も姑がいるとは思っていないだろう。
両親への挨拶で三人を前にしても、現在のようにレベッカが同じ態度でいられるかは興味深いところだが、飛行機に乗る時間が迫っている。
そうして、この国を立つ二人は、ナタリアと私兵たちに改めて挨拶した。
「……それじゃあ」
「色々とありがとな。また機会があれば会おうぜ」
「ええ、イリスもボウヤも元気でね。集団戦のプロが必要なら連絡してきなさい。少し安く請け負ってあげるから」
「ははっ、どうせなら、必要ないに越した事はないけどな。けど、そんときは頼むよ」
二ヶ月という短い間だったが、親しく接して様々な事を教えてくれた者らに、湊は年相応な仕草で小さく手を振った。
大人たちもそれに笑って手を振り返し、ナタリアらと別れた二人は搭乗手続きのためにゲートに向かって、そのまま飛行機に乗り込むとラナフを後にした。

夕方――パンテル・カニス
飛行機で数時間移動し、パンテルという中東とヨーロッパの境界ほどにある国に到着した二人は、さらに長距離バスに乗ってイリスの知り合いがいるというカニスの街にやってきていた。
国自体が二つの地域の間にあるという事だったが、その町並みはどこかドイツなどヨーロッパ寄りに思える。
だが、ドイツのように雨が降って五月でも寒くなるということはないらしく。雨が降った後だというのに、半袖姿で歩いている者がほと

んどだった。
「……過ごし易い気候だな」
「まぁ、中東に近くても雨がちゃんと降るし。今ぐらいの時期だと、梅雨とまではいかないが、雨の少し多い日本の春の気候だと思えばいい。雨が降った夜は肌寒くなることもあるけど、オマエはマフラー巻いてるから大丈夫だな」
神経毒にすら免疫を持っている湊は、他の者のように風邪など病気になることはない。
けれど、気候の変化で体調を崩すかもしれないと心配することの多いイリスは、湊が防寒具を身に付けているため、安心したように笑って頭を撫でた。
それを湊が黙って受けたまま歩き続けると、目的地に到着したのか、イリスが三階建ての建物を指差し口を開いた。
「おー、あそこの店だ。ほら、酒場の看板が出てる黒い屋根の建物」
案内に従って近付くと、そこには『真夏の夜の夢』と書かれた店の看板が掲げられた店があった。
女性に相手をさせる如何わしい店という訳ではなく、近所の者たちが食事と酒を楽しむような、憩いの場を目指した普通の酒場らしい。
窓から見える店内の様子を窺いつつ、健全な店であることが確認出来ると、湊はイリスに続いて店に入った。
＊＊＊
「あら、いらっしゃーい。って、イリスじゃない！」
「っ!?」
扉を潜って騒がしい店の中に入ると、二人を迎えてくれたのは肩の出ているセクシーな黒いドレスを着た〝男性〟だった。
身長は約二メートル、ほぼ同身長の仙道よりもさらに逞しいボディビルダーを思わせる体型に、そんなドレスを着てねちっこいオネェ言葉で話す相手は、様々な人間を屠ってきた湊ですら恐怖を覚える化け物にしか見えない。
会話をする前から警戒心を剥き出しにして、さらに本人が意識するまでもなく発動していた魔眼の蒼い瞳で化け物を見ながら、湊はイリ

スの背後に隠れた。
湊がそんな風になっていると知らないイリスは、歩いてきた男性に右手を挙げて親しげに挨拶を返す。
「よう、リリィ。七年ぶりか？」
「もうそれぐらいになるかしら？　いやぁ、本当に懐かしいわぁ。貴女も随分とオバサンになったわねぇ」
「うるせー、筋肉の化け物。人の事言えるような立場か」
最近ではそれなりに気にしている年齢について言われ、イリスは顔は笑ったままリリィと呼んだ男にボディブローを放った。
しかし、相手はそれを受けても筋肉の鎧に守られ無事なのか、とても楽しそうな笑みを崩さず、イリスと会話を続けていた。
「それで？　今日はうちに泊まっていってくれるのかしら？」
「ああ。というか、しばらくここを拠点にするから、当分は世話になるよ。大人と子どもの二人部屋で一室頼む」
「二人？　そういえば、貴女の後ろに一人可愛らしい子が……まぁっ!!」
男は湊の姿を見た途端、大声を上げて自分の胸の前で両手をギュッと握った。
それがどのような感情からのリアクションなのかは分からない。
だが、相手がわなわなと身体を震わし、瞳を爛々と輝かせていることから、湊にとってはろくでもないことだろう。
かなり昔に、女装させた幼い湊に襲いかかってきたロゼッタに似た気配を相手から感じ、湊は咄嗟に反応できるよう、自然とリミッターを一つ解除した。
そして、仕事中の状態になった湊に、筋肉の化け物が野太い声で話しかけてくる。
「やだ、可愛いー!!　なーに、この子どこで拾ってきたの？　すっごく綺麗な顔してるわぁ。まつ毛も長いし、髪も手入れが行き届いてる。でも、どちらかというと天然の髪質みたいね。肌もとってもきめ細かいし染み一つなくて羨ましいわぁ。本当に男の子とは思えない肌ね。ねぇ、お姉さんと今夜遊ばなーい？」

湊を一目で男と見抜きながら、一気に捲し立てるように喋り、男は最後に湊の肩に触れようと手を伸ばしてくる。
イリスは男の態度に呆れたように溜め息を吐いているが、本能が警笛を鳴らし続けている湊は、その手に生理的な拒否感を覚え、相手が触れてくる前に拳を突き出し叫んでいた。
「――――俺に触れるなっ!!」
「おぐぅっ!?」
一般人が相手ならば、腹筋に力を入れていようと、受けた腹筋ごと内臓を破壊されてもおかしくないほど強烈な左拳が見事に決まった。
イリスの一撃を受けても笑っていた相手は、流石に仕事モードの湊の攻撃は耐えきれなかったのか、後ろに吹き飛び倒れている。
突然、二メートル近い巨漢が飛んできたことで、客や従業員は驚いているようだが、湊は敵がまだ死んでいないことから、臨戦態勢を解かずに相手を睨んでいた。
そんな瞳を蒼くした湊の反応を見て、イリスは心の準備をさせることを忘れていたと、殴られた男に同情しながら額に手を当て口を開く。
「あー、リリィ悪い。コイツ、男に襲われかけた経験あって、オマエみたいなの駄目なんだ。小狼も説明しないで悪かったな。怖かっただろ？」
言うなり、イリスは倒れた友人を無視して、湊を安心させるために頭を胸に抱えるように抱きしめた。
依頼で戦闘があったときや、他者の行動に許せないことがあって気が立っているなど、興奮状態になったときは、イリスは今のように湊を抱きしめて落ち着かせていた。
今回もそれで落ち着くと思っていたのだが、敵と認識した相手がヨロヨロと立ち上がってきたことで、湊は周囲に敵意を放ちながら男を睨み続けている。
もっとも、常人なら死んでいる威力で攻撃されても無事に見えるのだから、湊でなくとも普通は警戒すると思うが、イリスは湊が再び攻撃しにいかないよう抑えることに忙しいので、細かいことを気にして

いられる状況ではなかった。
「よしよし、大丈夫だ。アイツは別にオマエに危害を加えないから。ほら、ゆっくり呼吸して、アタシの心臓の音を聞くんだ。大丈夫、敵はいないぞ」
「いたたたぁ。もう、私じゃなかったら死んでたわよ？　可愛い顔して暴れん坊さんなんだから。でも、怖がらせてしまってごめんなさいね。わたしは、マダム・リリィ。この店のオーナーよ。別の仕事だと情報屋と仲介屋ってところかしら」
　立ち上がった相手は、初めは痛みで顔を顰めていたというのに、背筋を伸ばしたところで先ほどと同じ笑みを浮かべていた。
　痩せ我慢ではなく、瞳に慈愛の色まで浮かべていることから、相手は途轍もなく丈夫な体で攻撃に耐えられたらしい。
　攻撃力は分からないが、頑丈さで言えば仙道レベルのオカマに、イリスに抱かれたままの湊は殺気を放った。
「まぁ、リリィってのは源氏名で、本名はドミニク・クレマンっていう、元フランス軍人のオッサンだよ。男女問わずアンタみたいな美形の子どもが好きだが、手を出したりはしない。恋愛は大人の男とって決めてるらしいからな。だから、そんなに警戒しなくても大丈夫だ。安心しろ」
　そう言われても、湊は瞳を蒼くしたままリリィを睨んでいるため、落ち着くまで挨拶は無理そうだとイリスはリリィに肩を竦めてみせた。
　すると、相手も酒場のオーナーだけあって、人との接し方は弁えているらしく、カウンターから鍵を一つ取ってきて、それをイリスに渡しながら微笑んだ。
「うふふっ、少し嫌われちゃったみたいね。挨拶は落ち着いてからで良いわ。部屋は空いてるから、好きに使って。言ってくれれば食事も部屋まで運ばせるから」
「ああ、悪いな。多分、食事は部屋で取ると思うから、そっちもよろしく頼む。ほら、小狼も部屋に行くぞ」
　イリスに連れられて移動する湊は、最後までリリィに対する警戒を

解かずにいた。
信用するしないの問題ではなく、脳が対象を理解出来なかったために怖れを感じたらしい。
日本でも中年男性にしか見えないオカマに出会ったことはあったが、流石に、二メートル級のボディビルダー型は御目にかかったことがなかったので、湊が怖れを感じるのも無理はないとは思う。
そうして、部屋に入って鍵を閉めた後も、湊は食事と入浴を終えてイリスに寝かしつけられるまで、ずっと警戒を解かずに魔眼のままでいたのだった。

第六十七話　候補者の勧誘

５月３０日（火）

朝――月光館学園・巌戸台分寮

桐条美鶴は目を覚ますと学校へ行くための支度を整え、軽い朝食を済ませてから登校まで余裕があったので、紅茶を飲みながらある資料に目を通していた。

彼女が今いるこの巌戸台分寮は、対シャドウ特別組織であるペルソナ使いの拠点として改装された元ホテルである。

しかし、元がホテルであると分かるのは外観を除けば、エントランスや別館の大浴場に面影が残るのみで、個室は学生寮の体裁を取っているため内装を若者向けにリフォームされていた。

加えて、一目見ただけでは気付かないが、大切なペルソナ使いを守るために各部屋の扉や窓は特殊仕様で、物が当たった程度では壊れないどころか、拳銃でも貫通出来ないようになっており。四階の作戦室の装置を使うか、桐条のラボに連絡することで遠隔でロックする事も出来る。

それらは防犯にも使えるので、ペルソナ使いや候補者が入寮した場合のセキュリティは万全だ。

さらに、シャドウとの戦いで心身ともに疲労を感じることが予想されているため、入寮者のケアのために各フロアロビーの休憩スペースには自動販売機を完備。

男女で分かれている大浴場にはサウナとジャグジーを備え、キッチンの調理機材も業務用冷蔵庫や大型オーブンなど非常に高価な物を揃えているため、入浴や食事も十分に楽しめるようになっている。

あとは候補者を招き、ここで生活しながら訓練を積んでペルソナに目覚めて貰えば言う事なしだ。

現段階ではもっとも経験を積んでいる美鶴がリーダーを務めることになっているが、それ以上に相応しい者が現れれば、現場の判断で役割を交代してよいことになっている。

美鶴自身、自分がリーダーの器ではないことは自覚していて、普段

は冷静でいようと努めているが、どうしても目的のために非情になりきれないのだ。
シャドウとの戦いは人々を守るためのもの。自分たちペルソナ使いが戦って倒さなければならず。倒さなければシャドウに襲われた者たちが心を喰われて影人間になってしまう。
それを防ぐために、美鶴はなんとしても仲間を増やしてシャドウと戦う必要があるのだが、
（……吉野は相変わらず高い適性を有しているな。有里は今期の測定が出来ていないが、吉野は去年よりも着実に適性が伸びている。ラボで戦闘訓練を始めたというのに、差はさらに広がっているな）
そう、候補者は既にいるのだ。
有里湊と吉野千鳥。この二名は、去年の四月に行った身体測定を利用した適性検査で、それぞれが美鶴の倍以上の適性を有していると出ていた。
去年まで美鶴の適性はほぼ横ばいで、ラボにいる訓練用に調整されたシャドウを使った戦闘訓練を始めたことで、ようやく数値が上がり始めた。
シャドウは影時間にしか出現しないが、訓練用の調整個体は研究員が手を加えたことで、自分の周囲に影時間に似た空間を展開することが可能となっている。
そのおかげで美鶴は影時間以外でも、放課後や休日を利用して訓練を行えていたのだが、厳しい訓練を積んだ美鶴よりもチドリの伸び率の方が上回っていた。
この結果を見たときは、流石の美鶴もショックを隠しきれず愕然とした。
所属しているフェンシング部のトレーニングなど、ただのウォーミングアップではないかと思えるほど、戦闘以外にも体力や筋力をつけるため激しいトレーニングを行ってきた。
実際の戦闘訓練では生傷が絶えず、過労で病院に運ばれたことも一度や二度ではない。
だというのに、友人らとわいわい楽しく学校生活を満喫しているだ

けの学生に成長速度で負けている。これでショックを受けるなという方が無理な話だ。
（私が弱いのか、それとも有里や吉野が強いのか……）
ラボの研究員の仮説では、本人の持っている素体スペックによって伸び代が異なり、チドリはまだまだ上限に達していないために成長速度が速いのではないかと言っていた。
今学期の結果によるとチドリは美鶴の二倍強、湊に至っては去年の一学期ではチドリの三倍だったというのに、夏休み明けの二学期の身体測定の時点ではチドリの四倍になっていた。
冬休み明けの三学期ではそれほど変わっていなかったが、四月から九月の間にいったいなにをすれば、そこまで驚異的に数値が跳ね上がるのかと研究員らも疑問に思っていた。
さらに、このまま湊が成長を続ければ、いつか現行の装置では数値を計測しきれなくなるとも言われていて。数値を振りきれば計測結果はゼロを示すので、どんなに数値が低い者でも生きている限りゼロになることはあり得ないことから、それはそれで分かり易いだろうと研究員らは冗談ぽく笑っていた。
だが、素体スペックの話しが本当だとすれば、成長の遅い美鶴の伸び代が残り少ないということになり、チドリと湊はまだまだ余裕があるからこその成長速度だと、結果がその説の正しさを証明する様相を見せていた。
（個人の資質ならまだ諦めもつくだろう。しかし、これがメンタルの問題だとすれば、彼らはどこでその強さを手に入れた？　家が極道だから胆が据わっている？　いや、それだけでは説明できない。けれど、他に思い付く理由もない。やはり、最低でも彼女と接触を図るしかないか……）
自分とチドリたちの差を知りたい。真似したところで、それが直ぐに数値の上昇に繋がるとは思えないが、ほとんど横ばいの結果しか出せていない現状を美鶴は打破したかった。
話しを聞くからには仲間にも誘うつもりだが、仮に断られても当てはまだある。

その当てとは美鶴と同じ三年生の真田明彦。彼は去年の秋の終わり頃から適性をぐんぐんと伸ばし、適性だけでなくペルソナを得られるラインにすら届こうとしていた。
以前、二年生だったときに湊と野試合をして、かなり悲惨な結果に終わってから、何かに取り憑かれたようにトレーニングに励んでいると美鶴も聞いている。
力を求めるならシャドウとの戦いはぴったりだ。ペルソナは心の力であるため、シャドウと戦うことで心も同時に鍛えられるだろう。
ならば、チドリは湊と同じように断ってくる可能性が高いが、真田の方は誘い方によっては喰いついてくるに違いない。
湊には無視され続けているものの、チドリが自分を認識している事も含め、断られても保険があるという事実に、美鶴はいくらか心が軽くなったことを感じながら資料を鞄に仕舞って学校へと向かうのだった。
昼休み――2―B教室
今朝、チドリとコンタクトを取る事に決めていた美鶴は、四限目が終わると教室を出て、真っ直ぐチドリのいる2―Bの教室へと向かった。
廊下で通り過ぎる生徒の多くが挨拶をしてくるので、それらに笑みを浮かべて応じてゆく。
中には三年生が二年生のフロアにいるのが珍しいのか、共にいる友人に声をかけて視線を向けてくる者もいる。
しかし、美鶴は自分が桐条の娘ということもあり、周囲の者に視線を向けられることに慣れていた。
そういった者たちは、顔を向けて見てくるだけで、声をかけてくることもなければ、自分の行動を阻害するような行為もしてこない。
何もしてこないのなら、その場にいるだけで背景と特に変わらない。美鶴は無意識に彼らの存在を思考の端へ送ると、到着した教室のドアを開いた。
美鶴がドアを開けて教室に入ると、廊下での視線とは違った色が後輩らの目に宿る。

どうして上級生が、桐条美鶴がクラスにくるなんて一大事だ、大概の者らはそんな事を考えていそうだが、教室を見渡して見つけた目的の人物の視線は訝しむような色をしていた。
自分が相手に何かしたかと、視線の意味が気に掛かる。
けれど、来たからには目的を達成しなければ無駄足になるので、美鶴は「失礼する」と短く告げて教室に入るとそのままチドリのいる席に向かった。
「食事中に済まない。私は三年生の桐条美鶴。吉野千鳥さんに少し用事があるんだが、放課後に時間を作ってはくれないだろうか？」
前の席の女子と一緒に弁当を食べていたチドリと視線がぶつかる。
訝しむような色は消え、今は純粋に美鶴が何の用事で来たのかを読みとろうとしているように見える。
もっとも、そのような目で見られたところで、美鶴は影時間に関わる内容を公にするつもりがないので、ここで用件を話せと言われたところで答える事は出来ない。
影時間・ペルソナ・シャドウ、どれも質の悪い冗談かフィクションにしか思えない内容ばかりだ。
それらを信用して貰おうと、存在を裏付けるための資料はちゃんと用意してあるが、その資料とて現在は教室に置いている鞄の中。
取りに行っている間、待たせた相手の大切な休憩時間を消費することにもなるので、相手が素直に応じてくれれば嬉しいのだが、美鶴がジッと相手の答えを待っていると、チドリは視線を弁当に戻して食事を再開しながら答えた。
「……それ、貴女が湊に付き纏ってたことにも関係あるんでしょ」
「そうだ。人前では詳しく話せないが、率直に言えば優先順位は彼の方が高かった。だが、君も無関係ではないので、是非とも話しを聞いてもらいたい。お願い出来ないだろうか？」
「……別にいいわ。けど、部活があるから手短にお願い。それと交渉事みたいだから、決裂した場合、今後一切、私と湊に同様の交渉を持ちかけないで。それが話しを聞く条件」
チドリの出してきた条件に、美鶴は意表を突かれて瞳を大きく開

き、組んでいた腕にも僅かに力が籠もる。
確かに、ずっと湊に話しを聞いてくれと付き纏っていたため、傍でその光景を見ていたチドリでなくとも、美鶴が何かしらの交渉を持ちかけたがっているのは理解出来ただろう。
そして、湊が全く相手にしていなかったとは言え、家族がしつこく付き纏われているのを知って、相手が良い気分などするはずがなかった。
チドリがここでそれらを清算するため、湊と違って話しを聞く事を了承する代わりに、美鶴にとって苦渋の選択を条件として突き付けてきた理由も納得がいった。
そうして、ここでそれを受けるか美鶴は深く考え込み。湊が一度として会話を交わしてくれない現状から、いつか会話をしてくれるかもしれないという希望的観測を捨て、厳しくとも現状ではマシだと思えるチドリの条件を呑む事にした。
「わかった。交渉が決裂した場合、君と有里には同様の件では一切付き纏わないと約束しよう。だが、学内行事で関わることがあれば、そのときには一生徒として普通に接しても構わないか？」
「あくまで生徒同士としての内容ならね。事務的な対応にはなるでしょうけど、行事の準備や進行のために関わるのはしょうがないから。まぁ、交渉がなくなっても湊の対応が変わるかは知らないけど」
「ああ、有里に関しては諦めている部分があるので構わない。では、生徒会室を開けているので、放課後になったらきてくれ。詳しい話しはそのときに」
約束は取り付けた。湊に今まで無視されたことを考えれば、条件を呑むのは難しい選択だったものの前進に違いない。
色良い返事を貰うことはチドリの性格を考えるに出来ないかもしれないが、それでも美鶴は事態が僅かにでも動いたことに喜びを感じた。
去る前に、「では、また」とだけ言い残して教室を出ると、美鶴はそのまま学食で昼食を済ませてから、自分のクラスに戻ってチドリに分かり易く説明する方法を考えていた。

放課後――生徒会室

チドリと約束を取り付けてから、美鶴は授業を受けている間も放課後の事で頭がいっぱいになっていた。

耳で音は聞いていたので、指名されれば直ぐに答える事も出来たが、学生の本分を無視して集中できないなど己の未熟さに自嘲的な笑みが人知れずこぼれもした。

けれど、今日の話し合いはそれほどまでの価値が美鶴にとってはあった。

授業を終えて生徒会室の鍵を開けると、昼休みの間に借りてきていたカセットコンロを使ってケトルにお湯を沸かし、ポットとカップも温めて紅茶を淹れる準備をする。

相手がコーヒー党なら好みのリサーチ不足だと非常に初歩的なミスに嘆くところだが、紅茶嫌いでなければ楽しんでもらえる味のお茶を振る舞うつもりだ。

時計に目をやり、ショートホームルーム終了のチャイムから既に十分が経過していることを確認する。

チドリが掃除当番でなければ、そろそろくる時間だ。条件を出したからには約束をすっぽかす事はないと信じたい。

そうして、本当にやってくるのか不安を感じつつ待っていたとき、控えめにドアを四回叩く音が聞こえた。

ノックのマナーを知っていることに、やはり相手は一般生徒とは異なっていると再確認し、美鶴は気を引き締めてからドアの向こうの相手に声をかけた。

「鍵は開いている。入ってくれ」

「……お邪魔します」

やる気の感じられない目付きで部屋の中を眺めながら、ドアを開いたチドリは生徒会室に入ってくる。

美鶴はその場で立ち上がると、机を挟んで向かい側の席に座るよう告げて、相手が着席した事で笑みを浮かべて口を開いた。

「来てくれてありがとう。あまり時間を取らせる気はないが、何もないというのも味気ないのでな。紅茶くらいはご馳走させて欲しい」

「なら、準備をしながらでも概要を話してくれる？　資料があるなら、先に目を通してもいいけど」
「資料は用意しているが、ただそれを読んでも信じて貰える内容ではないんだ。すぐにお茶の用意を済ませてしまうから、少し待って欲しい。私も君にはちゃんと理解して貰いたいんだ」
チドリからこういった効率重視の発言がくることは予想していた。
相手は美鶴が校内で一目置く四人の内の一人。他は湊・佐久間・櫛名田の三人で、この四人は一般生徒や一般人とは違う切り口から物事を見ている節がある。
だからこそ、マナーをあえて無視した発言も十二分にあり得ると踏んでいたのだが、美鶴は自分の予想が見事に当たった事で、そうくる心の準備をしていて良かったと内心安堵した。
そして、美鶴の言葉に渋々従って大人しくしていたチドリの前に紅茶を注いだカップを置き、美鶴は自分の前に出していたファイルを相手に見せながら説明を始めた。
「質問があればその都度してくれて構わない。だがまずは、君や有里を呼んでいた理由から説明させてくれ」
「ええ、いいわ」
「では、私が君たちを呼んでいたのは、ある検査で君たちが高レベルの適性を有していると分かったからだ。その適性とは、毎日深夜零時に発生する〝影時間〟、その非日常とも言える時間帯に順応し活動するためのものなんだ」
言いながら、そこで美鶴は持っていたファイルの表紙を開いて、簡潔に影時間や象徴化など用語について書かれている書類をチドリに見せる。
相手は美鶴の話しを聞きながら文章にも目を通しているようなので、質問がこないのであれば、そのまま話しを続ける。
「この適性は生物なら誰しもが持っているが、影時間でも活動出来るほどとなると普通に生活していて得られるものじゃない。天然でそれほど高い適性を持つ者がいれば、〝才能〟と言って良いだろう」
「……そう。でも、悪いけど私はそんな不思議な時間なんて知らない

わ。どうやって検査したのか知らないけど、計測ミスでしょうね」
「残念ながら計測にミスはない。君が本当に知らないのだとすれば、深夜零時まで起きていてくれれば体験出来るはずだ。適性のない者は棺のオブジェになり、全ての電子機器が動作を止める影時間をな」
美鶴は会話の合間に紅茶が入ったカップに口を付け、中身を飲みながらチドリの様子を観察する。
書類に目を通し、話しも聞いているようだが、表情が普段通りのやる気が感じられない物なので、真面目に考えてくれているのか判断に困る。
頭の回転が速いのは事前調査で分かっているため、必要な情報は渡した書類を読むことで理解していると思う。
けれど、影時間に対する理解を持ってもらうのが彼女を呼んだ理由ではない。目的はチドリを味方に引き入れることであり、知識など最低限分かっていれば後々に教えても問題はなかった。
「君が影時間を体験したことがないにしろ。影時間は確かに存在する。そして、君と有里は我々が行った検査で、他を寄せ付けないほど圧倒的な数値を叩き出した。影時間の適性だけではなく、ペルソナという異能を覚醒し得る数値だ」
「ペルソナ？　ああ、ここに書いてるわね。心の具現化した存在……これが現実に存在したらとんだファンタジーだわ。あれば楽しいでしょうけど、到底信じられるものではないわね」
「フフッ、それは分かっているさ。だが、君が少しでも信じて、我々に協力してくれるのであれば、直ぐにでも見せる用意がある。そこに書かれている人類の敵、シャドウについてもだ」
ラボには本日、学校が終わってから向かうという連絡は入れていない。
だが、ペルソナ使いの候補者として湊・チドリ・真田の三名の名前と適性数値は伝わっているため、その内の一人を見学に連れてゆくと言えば、すぐに準備をしてくれるだろう。
ペルソナとシャドウを信じさせるには、訓練用個体と美鶴が実際に戦闘を行えばいい。

実戦を目にして相手が怖がって協力を断る可能性も十分に考えられるが、ペルソナ使いとしての活動は命懸けになるのだから、怖がって当たり前だ。
いくら仲間が欲しいと言っても、戦闘訓練も受けていない学生を、不用意に危険に晒すつもりはない。
万全のサポートをしようにもシャドウについては分かっていない部分が多いため、どこまでサポートが出来るか分からない以上、話しを聞いた上で活動に向かないのなら美鶴もすんなり諦める覚悟はしていた。
「単刀直入に言おう。人々をシャドウの脅威から守るため、私と一緒に戦って欲しい。仲間になってくれ」
一度でいいから自分を信用して一緒に来て欲しい。美鶴は真っ直ぐチドリを見つめると、瞳に強い意思を宿して言葉を発した。
相手も書類から顔を上げて見返して来ている。どう返してくるか、美鶴が表情には出さずに緊張しながら待っていると、三十秒ほど経ってからチドリは静かに答える。
「そう言われても、事情が飲み込めないわ。貴女の言っていることが現実にあるという前提で考えるにしろ。どうして貴女とバックにいる組織がシャドウと戦うようになったのか。それ以前に、それらをどうやって発見したのか。そこを伏せた状態では、貴女を信じる以前の問題ね」
「……私が戦う理由は、力に目覚めたからだ。ノブレス・オブリージュという訳ではないが、人々が危険に晒されていて自分に守る力があるのなら、力を持つ者の義務として守らねばならないと思っている。君だって、自分に力があるのなら、困っている人間を助けようと思うだろう？」
「いいえ、思わないわ。確かに知り合いが困っていれば、手を貸す事もあるでしょうけど。それが見ず知らずの他人なら、私は手を貸そうとは思わない」
「なっ……!?」
あまりにきっぱりと言い切るチドリに、美鶴は驚きから暫し言葉を

失う。
難しい性格をしているとは思っていたが、ここまで周囲との関わりを求めようとしないとは思っていなかったのだ。
事前に調べていた湊とチドリの普段の様子には、湊がよく生徒を痴漢から守っていると書かれていた。
さらに、高等部の女子生徒がポートアイランド駅の近くで、数名の不良に絡まれていたときにも、不良の腕を捻るだけで退散させたという報告も受けている。
湊がそれだけ人助けを日常的に行っていたのだから、家族であるチドリもそれに近しい考えを持っていると思っていただけに、想像とのギャップに受けた衝撃は大きい。
言葉を失ったまま、優雅に紅茶を飲んでいる相手を眺めること数秒。美鶴は自分が勝手に相手に幻想を抱いていただけだと思い直し、ならば、相手を改めて理解しようと率直な疑問をぶつける事にした。
「その、君はどうして他人を助けようとは思わないんだ？　有里はよく女子生徒を痴漢から助けていると聞いている。なら、家族である君も、彼に通じる何かしらは持っていると思うのだが」
「……こっちも一杯一杯なのよ。して貰ってばっかりで、私は湊に何も返せてない。だから、助けが必要だと思ったときには全力で助けたい。あの湊に助けが必要なくらいだから、私なんかじゃ命懸けでも足りないかもしれないけど。それでも、救って貰った恩を返せるなら、私は自分の命だって使うわ」
正面にいる美鶴をまっすぐ見たチドリの瞳に、絶対とも言える強い意思が宿っている。
こんな目は知らない。どうすれば中学生でここまで強い決意を持てるのか。
湊がチドリに何かしたことで恩を感じているらしいが、ただ子どもが普通に接しているだけで出来ることではないのだろう。
相手を知ろうとすればするほど、反対に自分の想像を超えた答えが返ってくるせいで、美鶴は酷く混乱していた。
しかし、相手は美鶴の心中などまったく気にせず、自分の想いを言

葉にして続ける。
「既に私は一度助けられなかった。だから、次は絶対に助ける。そういう訳で、私は湊以外のためには基本的に動くつもりはないの。他の事に構って、湊を助けられなかったら一生後悔するから」
助けられなかったと言ったとき、チドリの瞳には激しい悔恨の色が混じった。
チドリが周囲に興味を示していないのは、本人が大勢の者と深く関わろうとしない性格だという以外に、元からそう見える顔つきというのがある。
実際、どこか面倒そうにしながらも、風花や美紀が話しかけてきたときには、チドリは特に嫌そうにはしないで接しているため、周囲が思っているほど無関心という訳ではないのだ。
けれど、普段から似た雰囲気を纏っている湊は違う。
関わろうとしてくるのは殆ど女子だが、チドリよりもよっぽど多くの者と関わっているというのに、湊はそこにいながら別の場所から話しているように見える。
違和感というよりは異質と言った方が正しく。人に囲まれていても孤独に映るのだ。
美鶴も育ちの違いから周囲から浮くことはあるが、流石に家族と一緒にいるときまで孤独に見えたりはしない。
それだけに、チドリの言った『助けられなかった』というのは、湊が孤独でいることに関係しているのだろう。
そう考えた美鶴は、家族を救う事に手一杯だと告げた少女に、少し残念さを感じつつも、どこか納得したように苦笑で返した。
「……それでは、この件は受けられないということでいいかな？」
「ええ、申し訳ないけど、私にも優先順位があるから」
「フフッ、そこまで想う事が出来るとは羨ましい関係だな。将来的には結婚するつもりでいるのか？」
「……さぁ？　でも、湊が誰かを選ぶなんて想像できないわ。そっちは私のせいでもあるけど。とりあえず、湊が自分を赦さない限り、誰かと恋仲になることはないと断言できるわね」

チドリは湊が誰とも付き合わない理由に心当たりがあるらしく。どこか諦めの入った表情で溜め息を一つ溢した。
原因があるのなら、それを解決してしまえば問題はクリアーされ、晴れて恋人になれる可能性が浮上する。
けれど、家族として昔から共にいるチドリが、直ぐに実行に移さないという事は、簡単には解決できない事柄なのだろう。
治療の副作用で、瞳と髪の色がそれぞれ変化した二人だ。生まれてからまだ十数年だが、他の生徒とはかなり違った人生を歩んできたに違いない。
そんな相手に、仲間欲しさに重荷になるような事を頼んでしまったのは申し訳なかったと、美鶴は謝罪の意味も込めて一つ進言した。
「色々と複雑なようだな。あまり話したくはないだろうから、深く聞くつもりはない。だが、私はこれでも生徒会長をしている。何か相談事があれば頼ってくれて構わないぞ」
「相談相手はいる方だと思うけど、必要があればそうさせてもらう。ただ、湊には日常の面でも関わらない方がお互いのために良いと思うわ」
話しが終わったことで、チドリは部活に行くため部屋を出る準備をしながら告げる。
飲み終わった紅茶のカップは美鶴が洗っておくつもりだったので、ファイルと一緒にそのまま置いて行って貰って構わない。
しかし、チドリの言葉の中に気になるものがあったので、扉に向かっていた相手の背中に美鶴は声をかけた。
「ふむ……君は、彼が私を無視し続ける理由を聞いているのか？　知らぬ内に何かしてしまったのなら、どうにか謝罪だけでもしたいのだが」
「私も気になっていたけど、本人に直接聞いたことはない。ただ、湊の両親は七年前に桐条グループが起こした爆発事故で死んだって聞いてる。爆発の余波で車が横転して、外に投げ出された湊の目の前で焼け死んだって」
「なっ、なん……だと……」

チドリの言葉に美鶴は顔面を蒼白にして、机に手を突いて思わず立ち上がっていた。
ペルソナ使い候補者の二人の過去は、桐条の力を使って現在も色々と探っている。
生まれ育った土地、家族構成、家庭環境、交友関係。それらの何がペルソナ使いとして覚醒する要因になるか分からないため、とりあえず候補者のそれぞれのデータをサンプルとしておき、後に覚醒者が現れたときに比較して、どういった条件が重なれば目覚めやすいか調べるつもりなのだ。
けれど、第三候補者の真田明彦と違い、湊とチドリのデータは思うように集まっていなかった。
戸籍の方から両親や生まれた土地を調べたが、いつ両親から離れて桔梗組で暮らす様になったのかがまず分からない。
借金の形(かた)に売られたのかもとも思ったが、特にそう言った形跡もなく、突然二人は桔梗組に現れて未成年後継人になって貰っている。
一応、チドリは親に捨てられて保護された孤児という記録が桐条系の養護施設に残っていたので、色々な施設を転々としているうちにデータが混ざってしまい、訳の分からない状態になってから貰われていったのではという仮説が立った。
けれど、湊の方は戸籍に両親として載っている者が、既に鬼籍に入っているのは確かだが、公的には子どもを授かっていない夫婦だと出た。
両親の記録が存在し、湊に関する文書も公的にはあるというのに、その二つを繋ぐものが存在しない。
そんな事は普通に考えてあり得ないため、桐条グループがそこから導き出した結論は、湊に関するデータは出生時に作成されたものではないという事だった。
美鶴もその報告は受けていたが、知られていなかった湊の情報にこれほど重要な話が含まれているとは思わず、ドアに手をかけたままのチドリの話しをただ動揺して聞く。
「……貴女は桐条の人間。だけど、事故とは無関係。そういう、頭では

理解しても簡単に割り切れない気持ちを抱えた結果、不干渉という距離の置き方を選んだんじゃないかって思ってる」
「彼はその……桐条を恨んでいるのか？」
「聞かない方が良いと思うけど？　貴女にとっては厳しい答えになるもの」
ほとんど答えを言っているようなものだが、振り返って美鶴を捉えたチドリの瞳は、美鶴がいま考えているよりも数段深刻だと告げていた。
両親を事故でただ亡くしただけではない。一人だけ助かり、両親が目の前で焼け死んだとなれば、心の傷は深く恨みはさぞ濃いだろう。
「……」
当時の父親の多忙さや、同日に事故に遭って親友家族を亡くした母親の姿が脳裏を過ぎる。
自分も事故で怪我を負ったというのに、父親は加害者側の人間として連日対応に追われて、何度もマスコミの前で謝罪をしていた。
親友家族の死は爆発事故と関係ないだろうが、被害者側として母親が非常に痛々しい姿をしていたことも記憶に残っている。
両親がそれぞれ加害者と被害者としての姿を見せていたことで、桐条としての責任を意識している美鶴は、当時の事故と自分は無関係ではないと考えた。
そうして、しばらくして覚悟を決めて顔を上げると、黙って見ていたチドリに教えてくれるよう頼んだ。
「それでも知りたい。教えてくれ、彼はなんと言っていた？」
「……桐条武治を殺すって。桐条武治も相手を肯定する人間も許せない。だから、邪魔をするなら誰であろうと敵として同様に対処するって」
「お父様を……殺す……？　そっ、そんな、出来る筈がない。仮に出来たとしても、自分もただでは済まないぞっ」
明らかに動揺しながら、なんとか絞り出した言葉を美鶴は発した。
法治国家の日本で世界的大企業のトップを殺すなど、周辺警備の厳重さから見ても不可能だ。

加えて、仮にそれが成功してしまったらしまったで、湊もただでは済まない。〝爆発事故の被害者〟というのは免罪符にはなりえないのだ。

いくらか情状酌量の余地は与えられるだろうが、それでもトップを失ったことで企業やそれに関わる人間の生活にも影響が出る。

トップを失った混乱で、自分たちでは現在の規模で企業運営が出来ないからと、幹部たちが傘下の子会社や下請けを切り捨てる可能性もあり。路頭に迷った家族から湊は恨まれるに違いない。

そうなれば、出所してきたところを、恨みを持った人間に襲われることも容易に想像できる。

学年トップの成績で、勉学以外の知識に関しても豊富に備えている湊なら、そんな簡単なことが分からないはずがない。

どう考えても聡明な湊がそう言ったとは思えないので、美鶴は何かの冗談だろうと、心臓の鼓動が速くなっていることを感じながら、ドアを開いて出て行きかけているチドリを見つめた。

すると、そんな美鶴と視線を合わせながら、チドリは出て行く前に言葉を残してゆく。

「……そうね、私もして欲しくないわ。でも、湊はそれでもやると思う。だって、湊が知識を蓄え、身体を鍛えているのは――――桐条武治を殺すためでもあるんですもの」

言い終わると同時に、チドリは去りドアは閉められた。

音の消えた生徒会室に独り残された美鶴は、全身を言い知れない恐怖と寒気が襲い、自分の肩を抱いて椅子に座りこんでしまう。

（彼は見た目は派手にしているが、二年生の真田のように根は真面目だと思っていた。だから、学業に置いて非常に優秀であり続けていると思っていた。だが、お父様を殺すために、復讐のために自らを鍛えてきただと？）

自分の中に作りあげていた〝有里湊〟という人間のイメージが音を立てて崩れてゆく。

爆発事故は七年前に起きた事だ。当時、まだ幼かった子どもが事故の原因が桐条であると知り、そこから今日（こんにち）まで復讐のために鍛え続

け、学業は学年トップ、武道はボクシング部エースを一方的に倒すレベルに達している。
才能に恵まれた部分もあるのだろうが、並みの精神力では決して成し遂げられないことなのは間違いない。
故に、有里湊は本気で復讐を果たそうとしていると信じざるを得なかった。
尊敬する父が人から恨まれていることは辛い。自分の知る父は厳格ながらも、自分に深い愛情を注いで傍に居てくれた人物だ。
けれど、有里湊の知っている加害者としての姿も事実だ。
当時の最高責任者という訳ではなかったが、それに準ずる地位にいて関わっていたことは間違いない。事故の直接の原因が父にある訳ではなくとも、地位にはそれ相応の責任も伴う。
それだけに、美鶴は湊の復讐を止めることが出来ない。彼から家族を奪い、復讐に走るよう人生を歪めてしまったのは自分たち桐条なのだから。
「お父様、私は……私は、どうすればいいのですか……」
弱々しく呟いた美鶴の声は、誰もいない部屋に寂しく響いて消えていった。

第六十八話　母との対談

6月11日（日）
午前――高級別荘地・桐条別宅
厳戸台から遠く離れた静かな地方の高級別荘地。そこにある白を基調とした洋風の外観の屋敷の敷地に一台の車が入ってきた。
使用人たちの待っていた入り口前で止まったその車から運転手が降りてくると、運転手は屋敷の入り口側の後部座席のドアを開ける。
そうして、運転手が開けた後部座席から降りてきたのは、緩く巻かれた赤髪の少女、桐条美鶴だった。
「ありがとうございます」
美鶴はドアを開けていてくれた運転手に礼を言って、そのまま屋敷の入口へと向かう。
待っていた使用人らが恭しく頭を下げて、屋敷に訪れた美鶴を出迎えているのを横目に、美鶴は女中が開けた扉から屋敷の中へ入った。
広々としたエントランスを抜け、何度も来た事のある屋敷の奥の部屋へと進んでゆく。
そうして、廊下を歩き続け、目的の部屋の前に辿り着くと、美鶴は軽く扉をノックした。
《どうぞ》
ノックをして直ぐに部屋の主から入室を許可される。
親子なのだから、ここまで丁寧にする必要もないのかもしれないが、それでもこの屋敷は桐条英恵の物で、美鶴は遠くから訪れた客だ。
故に、桐条の教育で身に付けた習慣というのもあって、美鶴は親子であってもこうするのが当然だと考えながら、扉を開いて部屋の中へと入った。
「直接会うのは随分久しぶりね。会いたかったわ、美鶴」
部屋に入るなり、ソファーに座って本を読んでいた英恵が立ち上がって、やってきた美鶴を抱きしめた。
前に会ったのは美鶴の誕生日だったので、実に一月ぶりの再会だ。
といっても、年末年始や各々の誕生日を除けば、保養地にいる英恵

が美鶴や桐条武治に会うことは滅多にないので、そういった事を踏まえれば随分と早い再会だったとも言える。
だが、月に一度の頻度で訪れていた湊も、現在は海外に行ってしまって会えないので。子どもたちと会えない寂しさを感じていた英恵にとっては、たった一ヶ月でも普段以上に長く感じてしまっていたのだった。
「お久しぶりです、お母様。お身体の調子はよろしいのですか？」
「ええ、起きて話しを出来るくらいに大丈夫よ」
抱擁を解いて、美鶴から身体を離し朗らかに笑う英恵。
だが、起きて話すという健康な者なら当たり前に出来ることでも、身体の弱い英恵には体調によって少しばかり難しいときもある。
それだけに、母がわざわざ起きて話せると言ったことを気にして、美鶴は心配した表情で尋ね返した。
「そ、それは大丈夫なのですか？　少し前よりもいくらか体調を崩しているように思えるのですが、体調が優れないのであれば、寝室のベッドで休みながらの方が良いのでは？」
「フフッ、冗談よ。前に貴女に会ったすぐ後ぐらいから体調が良いの。きっと美鶴に会えたからね」
「私が会う事でお母様が元気になられるのなら、もっと時間を作って会いに来れるようにします。お父様もお母様のことをいつも気にしていますし、私もお母様と一緒に居たいですから」
冗談だと、実年齢よりも若く見える悪戯っぽい笑みを浮かべた母に、美鶴もほっとして安堵の息を吐くと明るく笑った。
病は気からというので、普段会えない我が子に会えたことで心の満たされた英恵の体調が、この地で静養しているときよりも良くなる可能性はある。
美鶴も医学的にそういったケースもあるだろうと信じて、多忙な父と揃ってとはいかないが、例え自分だけでも母に会いに来ようと思った。
ただでさえ、英恵は身体があまり強くないのだ。七年前の親友家族の死で心を壊していたときには、本当にこのまま死んでしまうのでは

ないかと美鶴も心配した。
もうあんな姿は見たくないと、美鶴は少しでも母が安らぎを感じられるようにしたいと普段から考えている。
そのためならば、自分の時間を削ってでも母に会いに来ることくらい何の苦労でもなかった。
「それで、今日は話したいことがあると言っていたけど、どういった内容なのかしら？」
「あ……はい。その、自分がどうすべきか分からなくなってしまって」
「難しい話しのようね。貴女がきたらお茶を淹れてくれるように伝えているから、話しはお茶が来てからにしましょう」
てっきり、どうすれば湊と会話出来るかと言った相談だと思っていた英恵は、美鶴の表情が曇ったことで想像よりも深刻な話だと理解した。
普段の彼女を知っている者ならば、美鶴がこのような弱音を吐くところなど想像も出来ないだろう。
しかし、英恵の知っている美鶴という少女は、周囲から渡された『桐条の娘』という仮面を被って必死に立ち回っている、どこか不器用なか弱い少女でしかなかった。
大人が相手でも堂々としているというのも、そういった環境で育ったため、彼女にとってはそれが当たり前なだけだ。
普通の暮らしもしていながら、相手が大人だろうと間違っていれば自分の意見を真っ向からぶつけ、時には力で黙らせることの出来る七歌やチドリといった少女の方が胆力は強いといえるだろう。
だからこそ、自分の娘ということもあって、英恵は他の者ほど美鶴を才能に恵まれた特別な子とは思っていない。
桐条武治などは親馬鹿なところもあって、美鶴が容姿端麗でいくつもの才に恵まれた子どもだと、英恵に会ったときには興奮気味に褒め称えている。
他の者がいる場所ではそんな事は一切言わないが、その反動で妻に娘のことを熱く語るくらいならば、実際に本人に言ってやればいいのにと英恵も苦笑していた。

その事を桐条に言うと、相手はいつも「恥ずかしくて娘に会えなくなるだろう」と照れながら答えている。
美鶴も大概ファザコンだが、桐条もそれ以上に娘を溺愛しているので、両者が人付き合いに不器用でなかったら桐条宗家のイメージはがらりと変わっていたに違いない。
影時間など存在しない平和な世界であったなら、そういった姿でも良かっただろうと考えながら、英恵は美鶴を連れてソファーに向かうと、テーブルを挟んで向き合った。
少し経ってから、女中らがお茶のセットを持ってやってきたので、彼女たちが退室してから英恵は美鶴にもとりあえず紅茶に口を付けるよう言い。
そうして、温かい物を飲んで少し固さの抜けた美鶴は、いまだ表情は暗いままだが、先ほどよりも冷静さを保って話し始めた。
「お母様は前に話した、有里湊という少年のことを覚えてらっしゃるでしょうか？」
「ええ、貴女よりも高い適性を持つ適性者候補の男の子だったわよね。聞いた話では今は海外に留学中ということだったけど、何かあったのかしら？」
「いえ、有里自体は別になにも。ただ、その家族の少女も有里に準ずる高い適性を有していたので、五月の終わりに話しをしたのです」
地方にあるこの屋敷にいると、どうしても都会よりも情報を得るのが遅れてしまう。
美鶴が暗い表情で湊のことを話しだしたので、もしや、海外で何かあって学校に連絡がきたのではと英恵は一瞬不安を覚えた。
だが、それを美鶴がすぐに否定して話題がチドリに移ったため、安堵しつつも表情に出さないよう気を付ける。
本当は美鶴も幼い頃に会っていて、八雲と名乗っていた時代の顔を少しは知っているのだが、色々なことが立て続けに起こったせいで、すっかり忘れているらしい。
ならば、桐条武治が湊と八雲が同一人物であると分かっていながら放置している以上、英恵も自分と湊の繋がりを知られる訳にはいかな

いため、娘を騙す心苦しさを感じながらも隠し通すつもりでいた。
チドリについては、英恵も桐条のサーバにあるデータを桐条に伝えて閲覧していたので、自分が知っていてもおかしくないだろうと既知であることを美鶴に伝える。
「吉野千鳥さんね。私もここでデータに目を通させて貰っているから知っているわ」
「ええ、私はその吉野に仲間になって欲しいと頼んだのですが、有里に何かあったときに備えるので一杯一杯らしく断られてしまいました。確かに、有里は文武共に非常に優秀です。各分野のスペシャリストには勝てないでしょうが、ジェネラリストとしては最高の能力を持っていると思います。そんな彼を助けるつもりなら、どれだけ準備していてもし過ぎるということはないでしょう」
「フフッ、貴女も世間からはそう見られているじゃない」
娘がとても客観的に考察しているので、英恵はクッキーに手を伸ばしながら、つい笑ってしまう。
世間の評価は美鶴の方が上だ。中学生を対象にした全国模試では、美鶴も湊も学校の定期考査と同じように全教科満点を取っているので、そんな化け物が二人とも月光館学園に通っているということで注目を集めているかもしれないが、それ以外に関して湊は無名である。
全国クラスの中学生ボクサーの真田を破ったのも、知っているのは月光館学園の生徒とその知り合いくらいだ。
部活だってコンクールには応募していないため、月光館学園の美術工芸部など知る者は皆無だろう。
その点、美鶴は桐条宗家の娘として社交界にも出席しているため、色んな業界の人間に知られている。
学業の優秀さもそこに加われば、ルックスとスタイルが非常に整っていることもあって、天から二物も三物も与えられた才女として有名になるのも当然であった。
「私は優秀な家庭教師を何人も付けて貰い、幼い頃からそればかりをして今の地位に居る身です。自分なりに努力しているつもりですが、環境も含めて鍛錬に必要な物を全て与えて貰っている自分と、周囲の

助けはあっても自らの力で今の実力まで登り詰めたであろう彼を、比べること自体が失礼に当たると思います」
しかし、美鶴自身は自分が優秀だと思っていないのか、どこか憂いを帯びた笑みを浮かべ首を振る。
確かに、最高の環境を与えられて育った者と、厳しい環境の中で這い上がってきた者を、実力外の格で比べるのは難しい。
何せ後者は大きなハンデを背負った状態で同じ場所にいるのだ。その分の労力を鍛錬に注げたならば、恵まれた環境にいて同じ地位に居る者よりも上にいけた可能性もあっただろう。
だが、金をかければ育つ訳ではないことは、各分野のトップが富裕層ばかりではないことが証明している。
装備にお金のかかる楽器や一部のスポーツでもないかぎり、やはりトップになるには恵まれた環境にいようと努力するしかない。
聡明な美鶴がそれに気付けないはずはないのだが、自身が恵まれた環境に居ることが他者に対する負い目になっているようで、自分は湊に及ばないと美鶴は譲らなかった。
娘のそんなコンプレックスに困ったものだと多少思いつつ、英恵はこの話しを続けても父親譲りの頑固さを持つ美鶴の考えを変えることは出来ないだろうと、脱線しかけていた話しを戻すことにする。
「それで、吉野さんとお話しをして、仲間になることを断られたから相談に来たわけではないのでしょう？」
話しを戻しながら紅茶のカップに口を付けて、英恵は美鶴の様子を観察した。
すると、相手は英恵の言葉に肩をビクリと揺らして、テーブルに置かれた紅茶に視線を落としながら表情を強張らせている。
ペルソナ能力が伸び悩んでいることや、仲間が出来ない事に不安と焦りを覚えているのだろうか？
そんな風に、様々な推測をしようとも正解だと思える物に心当たりはなく。英恵は美鶴が自分から話し出すのをしばらく待つことにした。
ときどき口を開こうとしては再び結び、美鶴は自分がどう切り出せ

ばいいのか悩んでいるように見える。
けれど、ようやく決心がついたのか、沈黙が続いてから五分ほど経って顔を上げ、美鶴は静かに話し始めた。
「……お母様は他人を憎いと思ったことはありますか？」
「難しい質問ね。ないと言えば嘘になるけど、子どもの嫉妬からくる感情であったりもしたから、はっきりと『憎しみ』かと聞かれると違うかもしれないわ」
「では、怒りでもいいです。誰を殺したいと思うほど、強い負の感情を抱いたことは？」
「……強い怒りはあったけど、殺意を抱くほどではないわ。でも、急にどうしてそんな事を聞くのかしら？」
正面から相手を見つめながら聞き返すも、英恵は娘の質問の意図が分からない訳ではない。
質問を聞いたときに真っ先に湊の事が思い浮かんだので、もしや美鶴は、湊が桐条を恨んでいることを知ったのかもしれないと考えた。
だが、それを知るには湊の過去について知らなければならない。
美鶴が湊の正体に気付いているとは思えないので、例え一部であったとしてもどうやって湊の過去を知ったのかと考えたところで、英恵はチドリの存在に思い至った。
それとほぼ同じタイミングで美鶴も質問に答えを返してくる。
「実は、吉野と話しをしたときに、有里が私と話さない理由に心当たりがないか聞いたんです。そして、七年前に我々が起こした爆発事故で、有里は両親を亡くしたと聞きました」
「では、有里君は桐条を恨んでいるから、美鶴を無視していると？」
「桐条を恨んでいる。しかし、当時の事故に私は関係ない。そういった複雑な心境から、関わらないようにしているのではないかと吉野は言っていました。事故と無関係でも加害者側の人間です。恨んでいるのなら手を上げてもおかしくはありませんから、それを耐えている以上やはり彼は優しい人間なのでしょう」
話している美鶴の表情はどこか寂しげで、湊が感情を抑えて耐えるくらいならば、いっそ加害者として貶すなり手を上げてくれて構わな

いとすら思っていそうだった。
　そんな事をしても湊の心が晴れないことは分かっているため、無関係な人間に手を上げてしまったと湊が後になって後悔することも考えれば、二人のために英恵は美鶴を窘めておくことにした。
「美鶴、いま考えていることをしては駄目よ。有里君が貴女の言う通り優しい子なら、貴女に手を上げたことを後で深く後悔すると思うわ。そうなってしまっては、被害者と加害者という関係も曖昧になり。本当に有里君は感情の向ける先を失う事になる。どこにも怒りや悲しみを向けることが出来なくなった人というのは悲惨な物よ」
　感情の矛先をどこにも向けられなくなれば、いつか溜めこんだ物が爆発して周囲にまで危害を加えてしまうかもしれない。
　それも考え方によってはマシな方で、湊の性格を知っている英恵にすれば、むしろ湊は誰も傷付けない代わりに自らの命を絶つだろうと読んでいた。
　デスの恩恵と魂の契約において死ねない以上、湊が命を絶つとすれば全てが終わってからになる。
　当然、湊が命を絶とうとすれば英恵は阻止するつもりでいるが、全てが終わるまで負の感情を抱え込んだままでいれば、湊の心は静かに壊れてゆくだろう。
　自身の軽率な行動で湊が壊れたとすれば、美鶴も責任を感じて己の人生を湊の介護に捧げると言い出すに違いない。
　娘と息子をそんな不幸な目に遭わせたくない英恵は、しっかり美鶴と視線を合わせて念押しした。
「貴女が桐条の罪を背負う必要はないと言っても、きっと貴女は自分を責めて追い込んでしまうのでしょうね。だけど、それなら尚の事、有里君の意思を汲んであげなさい。美鶴が認めるほど優秀なんですもの。例え正解ではなくとも、きっと彼の行動は間違ってはいないわ」
「しかし、彼が今の地位にいるのは復讐のためだと聞きました。あの事故から今日まで、お父様を殺すために知識を蓄え、身体を鍛えてきたのだとっ」

悲痛に顔を歪め、美鶴は膝の上に置かれた手を強く握り締める。
「彼を傍で見てきた彼女が言うからには、そこに嘘はなく全て事実なのでしょう。私たちが彼の人生を歪めてしまったんです。彼のためにもそんな事はさせられませんが、彼の生きる意味を奪う事も私には出来ない。教えてください、お母様。復讐に取り憑かれた彼を救う事はできないのでしょうか……」
今にも泣き出しそうな顔で教えを乞う美鶴に、英恵は相手を納得させるだけの答えを返す事が出来ない。
チドリやアイギスを救うために動いているため、ただ復讐に囚われている訳ではない事は知っている。
だが、桐条武治を殺すと英恵に宣言した湊の瞳を見たとき、あんなにも優しかった少年がここまで憎悪の籠った目をするのかと、変わってしまったことに申し訳なさと悲しさを感じてしまった。
救う方法はある、あると信じたい。そう願っても、英恵も湊を救う事が出来る者がいるとは思えなかったのだ。
「……残酷な言い方だけど、私たちに出来る事はないわ。あの事故と美鶴は無関係。でも、お互いに被害者側と加害者側の立場である事は変わらない。だから、その子を救えるとしたら、家族か同じくらい心を開かれた人だけでしょう」
「吉野は有里の心を救いたがっていました。ですが、自分では出来ないとどこか分かっているようにも見えて。最も近い場所にいる彼女に救えないなら、有里は憎しみに囚われ心の孤独を抱えることになってしまいます」
「自分で選んだ道ならば、それもしょうがないのではないかしら。ペルソナは心の強さ。彼の適性の高さはきっと想いの強さよ。吉野さんでも彼に遠く及ばないということは、彼の憎しみはそれほどということ。まぁ、そんな状態でも理性を保っているのですから、実際はもっと上なのでしょうけどね」
湊は力をセーブしてチドリの四倍という適性値を叩き出している。
セーブはシャドウらが怯えて出て来なくなる可能性を考慮した処置であるが、それをせずに測定すればチドリの十四倍の測定限界ギリ

ギリにまで跳ね上がるのだから、死に瀕した状態でデスを内包した影響は大きいと言えた。
これは桐条側も知らないことだが、ペルソナ使いの適性は大きく分けて三つの成長の仕方がある。
一つは戦闘や訓練で己とペルソナを鍛えること。将来的にノリの良い者が『レベルアップ』などと称するのもこの方法だ。
この方法ならば誰でも地道に力を付けることが出来るが、ある程度までくると伸び悩み、最終的に成長限界を迎えてしまう。
そんな伸び悩んでいる者や成長限界を向かえた者でも力を伸ばせるのが、二つ目の方法である精神的な成長だ。
表面的に自分は変わるんだと宣言するのではなく、何かを強く決意することや、トラウマを克服するなど、真に心に変化が訪れたときにこれは発生する。
中にはペルソナの姿が変わる者もいるので、ただ地道に鍛えるよりも難易度が高い分だけ効果が見込めた。
しかし、それら二つの方法を取っても最終的に成長限界は訪れる。
桐条の行う検査における適性上限は、その成長限界を仮定した物で、人工ペルソナ使いや美鶴から採取したペルソナの成長データから数値を弾き出していた。
故に、どこまで強くなろうと上限には本来達するはずがないのだが、その上限を超えることを可能にするのが湊も知らぬ三つ目の方法だ。
最後の成長方法、それは『死』に近付くこと。
重傷を負って瀕死になることでも、五感や四肢を一つ失うでもいい。仮死状態からの蘇生などかなりの効果が見込めるだろう。
そうして死に近付くことで、生物に元々備わっているリミッターが外され、普段使っていないとされる脳の領域も利用し、最終的にその者は測定限界を上回る力を手にすることが出来る。
本来、自然適合者に劣るはずの人工ペルソナ使いが、初期値から対等以上の力を所持しているのはこのためで、エルゴ研時代はほぼ同等だった成長速度は、制御剤の副作用で寿命が縮むにつれて伸びてい

た。
湊の適性の伸びが速いのも、最初に瀕死の重傷負ってデスを内包した事以外に、飛騨の改造で何度も死んだことや、仕事の中で蘇生が必要なほど重傷を負ったことが理由である。
第三の方法で補ってようやく自然適合者と戦える人工ペルソナ使いと違い、湊は自然適合者でありながら、デスとエールクロイツを内包し、魔眼で普段からモノの死を見つめ、さらに何度も死と蘇生を経験することで適性を伸ばしている。
こんな真っ当でない方法など桐条の研究者も想定してないので、彼らの予測データを湊が上回ってしまうのも無理はなかった。
「気を付けなさい、美鶴。憎しみで人が殺せたらという言葉もあるけど、いまの世界ではそれが現実になり得るわ。自分の人生を捧げるほどの負の感情が具現化したとき、普通の人間がそれに勝てるとは思えない。もし、有里君がペルソナに目覚めても関わっては駄目。敵対するしかないのなら、迷わず逃げなさい。私や武治さんを置いてゆくことになっても」
「そんなっ、私はお母様とお父様を見捨てたりなど出来ません！　勝算がなくとも、必死に生き延びる方法を考えます」
悲しいことだが桐条武治の死は確定事項だろう。自分の意思で人を殺せるようになった名切りに狙われた以上、生き伸びる方法など先に相手を殺すしかない。
けれど、自分たちの行った実験の被害者で両親まで失った少年を、桐条が殺す事はほぼあり得ない。戦うのは美鶴や英恵が狙われたときだけだ。
湊の性格から言って、過去の自分との接点であり母の親友だった英恵を殺すことはなく。実験と無関係だった美鶴を殺す事もない。
故に、桐条が戦うような状況にはなりえないので、湊と繋がりのある英恵が話さなくとも、湊が月光館学園に現れた時点で桐条も自分が狙われていることは察していた。
だが、戦う状況になっても、絶対に両親も生き残れる道を探すことを諦めない。

そう話す美鶴の表情があまりに真剣なので、不謹慎かもしれないが英恵は嬉しさから笑いたくなった。
「ありがとう、美鶴。でも、自らの行いには責任が伴い、その責任において咎を受けるのは当たり前のことなのよ」
「ですが、お父様たちも故意にあんな事故を起こした訳ではありません。ご自分も片目を負傷していらしたのに、ずっと遺族や社会に対して真摯な対応をされていました。それは現在も続いており、総帥として人より多忙ながら、必死に影時間解決の方法を探っておられます」
「それは当たり前のことではないかしら？　確かに私も武治さんを立派な方だと誇りに思っているけど、責任を放棄して辞任する方がおかしいのであって、責任者なら社会に対して与えた悪影響を払拭する義務があるわ。そして、例えそんな事をしても有里君のご両親は帰ってこない」
あの事故によって社会に与えた影響を、桐条が贖罪としてどれだけ払拭しようとも、それは湊には何の関係もない。
湊が復讐する理由は両親を殺されただけではなく、大勢の子どもらが影時間を解決するための人柱にされたためだ。
人工ペルソナ使い計画を持ちかけたのは幾月で、その研究に深く関わっていたのも幾月を始めとした研究員らである。
だが、娘が既に天然のペルソナ使いとして覚醒した状態で、その美鶴を真っ先に被験体として使わずに、他の身寄りのない子どもを使うと、悪魔の実験を承認したのは紛れもなく桐条であった。
組織の責任者として、十を救うために一を切り捨てるのは間違いではない。あの実験に置いて、十は世界であり、一が被験体の子どもたちだっただけの話しだ。
けれど、たとえ世界のためであったと正しさを頭で理解しても、その切り捨てられた人間が判断を下した人間を感情によって恨むのは自由である。
いくら人工ペルソナ使い計画の凍結後に、美鶴のペルソナへ探査能力を開花させる実験を受けたせていたとしても。
「美鶴、貴女は随分と難しく考えているようだけど、これは社会や政治

的な話ではないわ。被害者が加害者を恨むという個人の感情による話しなの。解決法は簡単よ。ただ有里君の心の隙間を埋めてあげるだけでいい」
「あの事故から、お父様への復讐を胸に生きてきた人間の心を救えというのですか？」
「そう。簡単ではないでしょうけど、不可能ではないと思うわ。感情の話しなら別の感情にすることで解決するしかないんだもの。でも、吉野さんが自分では無理だと思っているようなら、他のピースを探すしかないわね」
英恵の考えでは湊の心を救えるのは、最初からチドリかアイギスの二人だけだと思っていた。
湊の両親を殺した張本人はアイギスとデスだが、湊は何故だかそのアイギスを恨んでいない。
その時点で英恵にとっての第一候補はアイギスであったが、家族でもあるチドリが諦めているのならば、自分の予想が真実味を増したと思えた。
話しを聞いていた美鶴は、湊を救えそうな人物に他に心当たりがないのか、腕を組んで難しい表情をしている。
しかし、先ほどまでの泣きそうな顔から、今では困難に立ち向かおうとする強さを瞳に宿し始めているので、とりあえずは立ち直れたのだろう。
父親が大好きな娘に対し、随分と厳しい言い方をしてしまったが、時期がくれば美鶴も自分の父親のしてきたことを知るようになる。
ペルソナの覚醒候補者が現れた以上、今後はその候補者らと共にシャドウと戦いタルタロスの謎に挑んでゆくと思われるので、その時、今回のように被害者と遭遇して動揺していては戦闘にも影響が出るに違いない。
シャドウとの戦闘時に平常心を失っていれば、それは即座に死に繋がりかねないので、心を鬼にしてでも言っておいた方が良いと英恵は判断したのだった。
だが、せっかく来てくれた娘に、たったこれだけしか話してやれな

いというのはあまりに申し訳ない。
なので、湊との約束に抵触するかもしれないが、言ってもギリギリ問題ないだろうというラインで少しだけヒントも与えておく事にした。
「フフッ、美鶴にアドバイスを一つあげるわ。男の子はね。可愛らしい女の子に弱い物なのよ。だから、有里君を変えてくれるのは、きっとまだ見ぬ女の子に違いないわ」
「まだ見ぬ？　……有里のまわりは非常に容姿の整った女子や女性で溢れているのですが、まだ増えるのでしょうか？　そうなると、私だけでは見つけることは出来ないかもしれません」
娘を元気付けるアドバイスをしたつもりが、逆に困ったような顔をして美鶴は眉尻を下げてしまう。
そんなリアクションは想定外であり。またどちらかと言えば母親似だが、両親の良いところばかりを貰って生まれた湊が、中学に一年通った程度で既にそんなにも人気だと聞いておらず、英恵は動揺を隠せず困惑した。
「そ、そんなに多いの？」
「ええ、同好会に彼のファンクラブが存在していまして、教師や学外の会員を含めて既に四百人を超えたと報告を受けています。中には男子で所属している者もおりますが、彼は学外でも人助けをしていたりするので、普通の生徒より出会いは多いかと。実際、彼が外国人の女性と歩いているのを目撃したという報告も受けております」
娘から受けた報告に、英恵は座ったまま卒倒しそうになった。
第三者の立場なら乾いた笑いを漏らして、随分すごいのね、と少年の人気の高さに圧倒されていただろう。
だが、英恵にとって湊は親友の息子であり、また自分にとっても実の息子のように娘と同じだけの愛情を注いでいる存在だ。
そんな少年が大勢の女子だけでなく、大人の女性や男子にまで狙われているという事実。
湊が腕力で捻じ伏せられるとは思えないが、優しい性格が枷となって襲ってきた女子にあまり抵抗できないやもしれない。

大切な子どもを傷物にされる訳にはいかないので、英恵は思考を切り替え、美鶴に裏で守らせようとアドバイスのフリをした指示を飛ばした。
「……有里君の好みはきっと同年齢くらいね。外国人の女性と歩いていたというなら、たぶん金髪碧眼がさらに好きなんじゃないかしら？
その条件に絞って候補を探してみなさい。ああ、それと有里君は優しいから女子からのお願いを聞いてあげていそうだけど、あまり負担をかけて成績が落ちてしまってはいけないわ」
「は、はぁ……？」
返事をしながら美鶴は母の様子を不思議そうに見つめる。
しかし、娘の様子に構わず英恵は言葉に熱を宿して続けた。
「それでね、貴女が目を光らせて過干渉しようとする生徒を取り締まってはどうかしら？　その方が彼からの印象もよくなると思うの。だって、学校の内外に四百人を超える敵……じゃなくて、有里君とお友達になりたいって人がいるのだから、人見知りな彼にとっては心休まる時間がないかもしれないじゃない？」
「い、いえ、別に有里は人見知りという訳ではないかと。実際、用事があれば自分から話しかけているようですし。知らない者から挨拶をされても、ちゃんと聞こえていれば返したりもしているようですから」
急に饒舌になった英恵に気圧されながらも、ちゃんと答える辺りに美鶴も相当大人との会話に慣れていることが窺える。
だが、ここは嘘でもいいから前向きに検討すると答えるべきだった。
子どもを心配する親モードになっている英恵は、美鶴があまりに楽観しているように感じて、貴方の弟が見ず知らずの人間に襲われてもいいのかと少し憤慨した。
「美鶴、真面目に考えなさい。問題が起こってからでは遅いのよ」
「ま、真面目と言われても。そこまで接点のない私が出しゃばる話しでもないような気がするのですが……」
「はぁ……あのね、美鶴。いい女と言うのは殿方に努力の影を見せな

いの。でも、それを続けているとあるとき『もしかして、自分のために？』と少しずつ相手も気にし出すわ。有里君に好印象を与えたいのなら、こういう努力を渋っては駄目。貴女もいずれは恋を知って愛を育むんですからね。これも練習になると思いなさい」

呆れたように溜め息を吐かれても、どう聞いても湊の露払いが自身の恋愛に繋がる練習になるとは思えない美鶴。

そもそも、父親が決めた婚約者がいるというのに、英恵の言うような自由恋愛が経験できるとも思えない。

加えて、そんな事をしたところで湊の心が変わらない限り、多少、好印象を与えたところで美鶴の行動は無駄に終わるだろう。

やはり饒舌な母親には違和感を覚えるのか、美鶴は困惑した表情のまま、とりあえず話しの内容に対する質問を口にした。

「し、しかし、先ほどご自分で有里の心を変えるキーマンは同年代の金髪碧眼の少女だと仰っていましたが」

「それはそれ、これはこれです。その鍵の子が有里君の心を変えた後、貴女は有里君と交流しないの？　するでしょう？　そういうときの事を考えて今から行動しておくの。貴女は頭は良いのに、そういった面には疎いわね。恋愛小説でも読んで少しはお勉強しなさい。姉と弟がお互いを意識してしまい苦悩するけど、実は本当の姉弟じゃなくて……ってお話しもあるし。後学のために読んでおいた方が良いわ」

「あの、私は一人っ子ですよね？」

「ええ、間違いなく。武治さんも真面目な方で側室を設けたりはしていませんから」

母親の考えていることが本当に分からなくなっていたが、少なくとも両親がお互いを愛していることが確認できたため、美鶴は安堵する。

これで実は兄弟がいると言われれば、嬉しい半面、戸惑いもかなり大きかっただろう。

それが回避出来ただけでも重畳だと、美鶴は安心からわずかに明るくなった顔で返した。

「でしたら、兄弟がいなければ、お母様の言われた小説では参考になら

ないと思いますが」
「出来るかもしれないでしょう、義理の弟が。固定観念は視野を狭めるだけよ。もっと柔軟な発想を持ちなさい」
「……わかりました。また菊乃に探して貰い読んでみます」
美鶴、撃沈。
この話題が始まった時点で英恵が押していたが、ついに美鶴は折れてしまった。
どうして英恵が特定層にしか受けなさそうな恋愛小説を知っているのかは不明だが、一度でも頷いてしまえば、今後も同じような物をまた薦められるに違いない。
現時点では、弟か妹がいれば嬉しい程度にしか思っていない美鶴にとって、そんな物を読まなければならないのは苦行だ。
影時間に関わることで悩んでおり、さらに父への復讐を企てる者の存在が明らかになった状況で、何が悲しくてドロドロとした恋愛小説を読まなければいけないのか。
だが、普段は会えない母が自身を想って薦めてくれた書物でもある。
そんなベクトルの違う悩みの板挟みに遭い、耐えられず頷いてしまったが、正面に視線を向けると母が満足気に笑っていたので、考える事を半分放棄した美鶴は、悩みを思考の端に追いやり。
ただ純粋に母とのひと時を楽しむことにしたのだった。

第六十九話　ナギリの一族

夜――宿屋・真夏の夜の夢

湊とイリスがこの国に滞在するようになって三週間ほどが過ぎた。

数日は観光がてら、カニスの街の武器屋にギルドの支部や情報屋も回って、簡単な仕事を受けつつ欧州では低い仮面舞踏会の知名度を上げることに専念した。

元々、世界から関心の強い日本での仕事の実績もあり、仕事の速さと信頼性を数日の仕事で見せつければ、コネがなければ実力が全ての裏の仕事において湊らが依頼に困る事はない。

そうして、今日も新たに舞い込んできた依頼の紙を、イリスは風呂に入りながら眺めていた。

「百年前に失われた首飾りの回収ねぇ。寂れた洋館が取り壊される前にって、中々な愉快なトレジャーハントになりそうだ」

書かれていた依頼の内容に、自分たちよりも専門としている人間がいるだろうにと、イリスは言葉とは裏腹に鼻で笑って、依頼書のコピーを開けっぱなしになっていた扉からバスルームの外に投げ捨てた。

報酬はそれなりに良かったので、依頼に不満はない。

何より、湊に人を殺させないで済むのなら、本来、こういった仕事をさせることに反対していた身としては、むしろありがたいと言えた。

だが、今も人の胸を枕にして顔の半分を乳白色のお湯に浸からせている少年が、どこかつまらなそうにしていたことには、依頼を受けると言った身としては苦笑するしかなかった。

「ほら、機嫌直せって。たまには、こういう遺失物の回収依頼もこなした方が良いんだよ。報酬も良いし、何が不満なんだ？」

お互いにバスタオルも巻いていない完全に裸の状態で、ブクブクと息を吐いて泡を作っている湊をイリスは後ろから抱きしめ顔を覗きこむ。

この宿のバスタブはかなり大きく。大人が二人で入ってもまだ余

裕があるサイズであった。
ならば、普段、髪や身体は綺麗に洗うが、リンスやコンディショナーを付けて髪の手入れしようとしない湊と、そういった世話をしていたイリスが一緒に風呂に入ろうとするのは何もおかしくない。
この宿に泊まった初日に一緒に入るぞと誘われ、湊も特に拒否しなかった。それ以来、二人は基本的に毎日一緒に入浴していた。
「……ギルド経由の依頼は好きじゃない」
普段通りの無表情だが、長い付き合いの者が見ればすぐに分かる拗ねた態度で、湊はポツリと呟く。
成長した湊の身体は既に逞しい男性のものである。けれど、湊の身長が一六七センチ程度なのに対し、イリスは一七一センチと女性にしては長身だ。
故に、一緒にお湯に浸かるという前提の下、イリスが足を伸ばして入浴するには、背の高いイリスが湊を後ろから抱える方が、安定して入れるとイリス本人の意見で現在のようなスタイルとなっている。
話すために浮上した湊は、現在、後ろから抱きしめられイリスの胸を後頭部で潰すような形になっているが、これはイリス本人が抱きしめているせいなので、お互いに全く気にせず会話は続く。
「確かに、仲介料（マージン）を取られるのは気に食わないが、それはロゼッタやジャンに頼んだときも一緒だろ？　依頼人から直接来ない限り、それはしょうがないさ」
「……そっちじゃない。俺がギルドを嫌っているのは、あいつら自体が争いを広げるテロリストだからだ」
「それは前にも聞いたよ。ま、気持ちは分かるが同族嫌悪にしかならないぞ。アタシらがいて救われるやつもいれば、反対に不幸になるやつもいる。むしろ、比率で言えば不幸になる奴の方が多いくらいだ」
水面に広がって浮かんでいる湊の髪を優しく指で梳く。
本当はタオルで包んで頭に巻いておくべきだが、そんな物をすれば湊が自分に体重を預けたとき、頭ではなくタオルが素肌に付くことになる。
せっかく、湊が無自覚に甘えてくる貴重なスキンシップで、そんな

無粋な真似はしたくなかったために、イリスは湊の髪に気を遣いながら話しを続けた。
「でも、やっぱり自分が人として狂ってることを自覚しながらでも、食い扶持を稼ぐ以外の理由も持ってアタシらはこの仕事を続けて行く。首飾りの持ち主は死んでるし、今回は誰も不幸にならない仕事だ。それでもアンタは、ギルドが嫌いだって理由で仕事を断るか？」
湊が本当に嫌だというのなら、違約金もまだ発生しないため、イリスはこの仕事を断っても良いと思っている。
最初から今回の旅は湊のためのものだ。色々とキツイ事もたまにあるが、イリスはそれ以上のものを湊と共に過ごすことで貰っている。
だからこそ、訊き方は随分と汚いが、湊本人の意思に最後は任せようと答えを待った。
すると、しばらく黙っていた湊が、さらにイリスに体重を預けるようにしながら、小さな声でポツリと言った。
「……卑怯な言い方だ」
「フフッ、大人は子どもほど真っ直ぐではいられないからねぇ。卑怯なことも色々と思い付くんだよ。ま、そんなことしなくても、小狼なら依頼を受けると思ったけどな」
誰も傷付かず、ただ自分たちが苦労するだけで依頼人が喜んでくれる。
それを自分の感情を抑えて選べる湊は、やはり心の優しい少年だと、イリスは嬉しそうに笑って頭を撫でてやった。
その後、風呂からあがって、身体を拭いて髪を乾かすと、二人は仕事の準備と移動経路を調べてから、枕の並んだベッドでイリスが湊を抱きしめるように一緒に休んだのだった。

――???
暗い闇ばかりが広がる湊の心の深部。
そこで女はファルロスに名を尋ねられると、自身をとりあえず〝茨木童子〟と呼ぶように言った。

相手の素性が分かれば、湊に危害を加える気がない事も納得出来たため、ファルロスは警戒を解き、未だ自分の中に残る疑念を解消するため二人に問いかける。
「君たちが湊君を守ろうとしているのは分かった。でも、全ての名切りがそうだとは言い切れないんじゃないかな？　現に、彼は満月で意識を乗っ取られていた」
「あれは防衛機構だ。子を守る親の意思と思ってくれていい。むざむざ死なせたくないからな、身体を借りて我々が戦った方が良いと思ったのだ。もっとも、八雲は素体として優秀過ぎて、凡人の我々では十全に身体を使いこなせなんだ。加えて、八雲はまだ僅かに意識を繋いでいた。我々と八雲、二つの意思の混在があの獣という訳だ」
茨木童子は湊が優秀だと話すとき、瞳に慈愛の色を籠めて笑っていた。
座敷童子も同じように誇らしげにしていることから、二人は自分たちの子孫を大切に想い、本当に愛しているのだろう。
しかし、茨木童子の説明でファルロスも一応の納得は出来た。確かに、デスの力によって蘇生された湊があのまま戦っても、仙道に勝てたかどうかは怪しい。
魔眼の力を使おうにも、線を切れるほど接近すれば、それは仙道にとって最も得意な距離なために、湊も自分が殺されるリスクを負わなければならない。
本人は、リスクを負わずに勝つなどと甘い事を言うつもりはないだろうが。それでも、ペルソナや周囲に影響の出る高火力な兵器を使う気がなかった以上、湊に代わって名切りの亡霊たちが戦った方が結果的に良かったと言えた。
「……成程ね。それじゃあ、君たちは彼を守るという意思で統一されていると思っていいかな？」
「概ねな。だが、守るというのは手段の一つだ。私たちは八雲の願いを叶えることを目的としている。よって、八雲が死を望むなら、それを止めるつもりはない」
「そんなっ、死なせたくないんじゃなかったのか！」

直前の発言を覆すような相手の言葉に、ファルロスは大切な友達を死なせたくないという想いから、声を荒げ相手を鋭い視線で睨み反発する。
ファルロスとて湊の願いは叶えてやりたい。だが、それが死を望むものなら、ファルロスは絶対に叶えることはないし。死ぬというのなら、生物としての在り様すら捻じ曲げてでも生かそうとするだろう。
死の先には何もない。魂のコミューンたる心の海、集合的無意識に還ることは出来るかもしれないが、それで救われるとは思えない。
それ故、ファルロスは湊のためなら湊の死すらも許容するという、名切りの在り方を認めることは出来なかった。
意見の違いから、ファルロスが険しい表情で二人を見つめる。二人が過去の名切りと分かって抑えられていた敵意が再び湧きあがり、周囲にプレッシャーを放っている。
しかし、今度はそれを正面から受け止めた上で、暗い表情をした座敷童子が口を開いた。
「死よりも苦しいことは……たくさんある……八雲は優しいから、自分は殺せても……他人は殺せない。だから……心を壊して……自らの命を絶つの」
「彼は既に人を殺している。目的のためなら、心を殺して鬼にもなれる。だから、苦しさから逃げるために命を絶つなんて絶対にない」
湊は自分よりも他者を優先する。そして、今の湊はチドリやアイギスのために動いているのだから、途中にどれだけ苦しい目に遭っても逃げ出したりはしない。
自分の友達の心の強さを知っているファルロスは、そう言って相手の言葉を否定すると、冷めた瞳で二人を見た。
そんなファルロスの反応が余程面白かったのか、嘲笑を浮かべた茨木童子がけらけらと愉快そうに話し出す。
「莫迦者め。八雲の抱える殺人衝動を忘れたか？　そんな物を抱えていた名切りなど、過去に一人も居りはせん。あれは我らが植え付けた感情よ。あの時、敵を殺せなんだら助かりようがなかったからな。八雲の優しさは目的に邪魔だろうと、踏み越えた折により多くの力と共

に与えたのだ」
「そん、な……もしかして、彼が普段から怒りに呑まれ易かったのも？」
彼女らが湊に何をしたのか信じたくはない。
先ほどまで茨木童子たちは湊を心から想っていた。
だからこそ、ファルロスは相手に自分の言葉を否定して欲しかったのだが、返って来た言葉は無情だった。
「よく分かったな。お前との戦いの時点で、怒りと憎しみが育ち易くなるよう細工した。そして、より大きな感情として、いつでも人を殺せるようにと殺人衝動を与えたまでだ。もっとも、八雲はそれを自ら抑え込んでいるがな。流石は我らの子よ、凄まじい精神力だ」
「目覚めれば……記憶はそのままに……与えた感情だけ消える……八雲は苦しむ、けど……生きる事を選べば……完全なるモノになれる。アイギスとチドリ……二人のため……契約において……死ねない。だから、大丈夫」
言いながら、茨木童子と座敷童子は楽しそうに笑っている。
だが、二人の言葉を聞き、ファルロスはこれが自分たちの子孫を想う正常な愛ではないと悟った。
湊が苦しむことを分かっていながら感情を植え付け、自分のしてきた罪の重さに押し潰されようが、契約に置いて死ねないから大丈夫だと安心している。
完全なるモノが何なのかは分からない。それでも、目の前にいる者たちは、名切りという一族は、自分たちの望みをたった一人の少年に背負わせて叶えようとしているだけだ。
ファルロスは再び相手を敵と認識しなおし、いつでもデスを呼べるように構えた。
「……狂っている。そんな君たちの勝手な願いを彼に押し付けるな！」
「ふふっ、あはははっ！　随分な言われようだ。だがな、私たちは初めからそのために生きてきた。完全なるモノを目指し、その悲願を持ってようやく自由を得られるとな。そして、八雲にもその血は流れ

ている。見ろ、名切りの業の姿を」
茨木童子の言葉で背後に強大な力の顕現を感知し、感じた重圧を警戒しながらファルロスはゆっくり振り返る。
振り返ったその目に飛び込んできたのは、シャドウの王ですら、禍々しくもどこか神々しさを感じてしまう漆黒の蛇神の胴体。全体を見なくとも、ファルロスはこれが何かを知っていた。
「これは、あのときの……」
力の管理者ら三人のペルソナの同時攻撃を受けて尚、顕現途中だというのに相殺してしまった、世界のアルカナを持つ蛇神。
自分たちを囲むように、大木よりも太い蛇の身体が静かに蠢いている。銀の角の生えた頭部がどこにあるのか分からないが、この暗闇の中で相手がこちらを見つめていることだけは気配で分かった。
それだけに、ファルロスは下手に動くことが出来ない。実験の中止で欠片たちが散らばり、アイギスらとの戦いで傷付いた、そんな力の大半を失った状態で勝てる相手ではないのだ。
湊の魔眼のように根源から対象を消滅させることも出来る力を相手が持っている筈がないので、ここでファルロスが敗北しようと時間が経てば回復するだろう。
しかし、その間、ファルロスは自己修復にエネルギーを消費するため、湊の蘇生にかけられる力はかなり低下する。
日本にいたときよりも危険な場所にいる以上、怪我に遭う危険度を考えれば、湊のためにもここでやられる訳にはいかなかった。
そうして、ファルロスは嫌な汗がじんわりと背中を濡らすのを感じていると、茨木童子が再び話しかけてきた。
「どうだ？　これが八雲に眠る負の感情だ。名切りは先祖の力と共に負の感情も受け継ぐ。飼い慣らしてこその名切りだが、近年の名切りは女が多く戦いから離れていたからな。知らぬ間に膨れ上がり、こんなおぞましい姿になっていたようだ」
「こんな、こんな怪物を一人の人間が受けとめることなんて不可能だ……」
「……この子は強い……あなたよりも……八雲が、シャドウの王を

……受け止められたのは必然……だって、八雲は既に力の使い方を知っているから」
シャドウの王を上回る力を持った蛇神。
その身は、数千年にも亘って受け継がれ続けた、名切りの怒りや悲しみ、憎しみといった負の感情で出来ていた。
確かに、生まれた時からこんな怪物を心の深部に宿していたのなら、湊がファルロスの器になれたのは必然だと言えよう。
だが、心の傷は他者の愛と時間の経過が癒してくれるとは言っても、いくら湊が深い愛情と優しさを持っていようと、これほどまでに肥大化した悪意の塊を一人で受けとめるのはおろか、飼い慣らすことも不可能だとファルロスは思った。
そして、大切な友人にそれを押し付けた、傲慢な過去の名切りに怒りのまま声を荒げて叫ぶ。
「これじゃあ、呪いだッ！　数千年の間に、何千何百人という名切りらの深い悲しみと憎悪から生み出された、こんな破壊と殺戮の権化を子に受け継がせるなんて馬鹿げているっ」
「お前も蛇神に喰われるか？　いまさらその程度の量が増えたところで変わるまい。いや、むしろ蛇神の憎悪が僅かに薄れるやもしれんな。お前は人の心の集合体なだけで、負の感情という訳ではないのだから」
ファルロスの言葉を受けても、茨木童子は座ったまま余裕のある笑みを崩さない。
相手は子孫に宿り数千年生きてきた怨霊、片やファルロスは生まれて十年にも満たない幼いシャドウの王だ。
茨木童子の実力が不明である以上、蛇神の胴体に囲まれているという状況も合わせ、下手な動きを取る事は出来ない。
蛇神はファルロスから見ても禍々しいと感じてしまうほどの負の感情の集合体だ。
あれに喰われれば大海に墨を一滴垂らす様に、すぐにファルロスとしての自我は蛇神に呑まれ、憎悪を薄めるどころか力を与える羽目になってしまう。

湊が名切りの力に目覚めれば、遅かれ早かれ蛇神を抑えねばならないはずなので、その負担を増やすような真似をファルロスが出来る筈がない。
友のために戦おうにも、それだけの力を持たぬファルロスが己の無力を嘆き膝を折る。
すると、茨木童子は愉快そうに笑って口を開いた。
「ふふっ、まあ八雲自身の力はこいつではないがな。八雲の性質は矛盾すら内包した陰陽の調和だ。故に、蛇神と調和を取る存在をその身に宿している。あれは強いぞ。なんせ、蛇神と同等の神格を有していたのだからな」
「彼自身の力？　彼はワイルドの能力者だ。そんな彼に個人の力なんて……もしかして、本来のオルフェウスだったのか？」
「阿呆め。あれは戦うアイギスを見て目覚めた、死に抗う力の顕現だ。命を持たぬ機械がデス(死)に抗うとは随分と皮肉が利いているが、名切りはそもそも死に抗う必要がない。八雲は完全なるモノだから余計にな」
神話のオルフェウスは、死んだ妻エウリュディケを取り戻そうと冥界に向かい。河の渡し守カローンや番犬ケルベロスを始めとした関門を竪琴を奏でることで潜り抜けた男だ。
もっとも、ハデスから「冥界から抜け出すまでの間、決して後ろを振り返ってはならない」という条件付きで妻を返して貰う事が出来たが、後少しで地上に出るというところでオルフェウスは振り返ってしまい。結局、妻を取り返すことは出来なかったというオチもついている。
デスと戦っているアイギスを見たことで、湊は妻の死に抗おうとしたオルフェウスを覚醒した。
見た目がどことなくアイギスに似ていたのも、湊にとって死に抗う存在のイメージが直前に見ていたアイギスだったためだろう。
だが、それもあくまで〝死に抗おうとする意思〟という、湊の心の海から掬いあげられた欠片の一つに過ぎない。湊本来のペルソナは別に存在すると茨木童子はいう。

しかし、それを知るよりも、ファルロスは名切りが死に抗う必要がないという意味を理解しかねたため、その疑問を先に解決しようと尋ねた。
「死に抗う必要がない？　しかし、彼は僕がいなければ死んでいた。今だってデスのおかげで蘇生されているに過ぎない」
「八雲も……現象としての死は存在する……だけど、私たちのように血に宿り次に伝えられる……もっと言えば……そのまま、記憶を持って子に宿れる……転生が可能という事」
「そ、それじゃあ、本来の子どもはどうなるんだい？　血に宿るというなら、彼が死んで魂ごと転生する訳じゃないだろう？」
「我々が八雲の身体を一時的に奪ったように、八雲の人格が子の肉体を永久に奪うのだ。これだけの魂を持つ者はそういない。真っ白な赤子の人格なんぞ簡単に乗っ取れるだろう。生まれた時点で子を為したときまでの八雲の記憶と意思を持つわけだ。それはもう八雲本人と呼んでも構うまい」
どこか自慢げに笑う座敷童子と不敵に笑う茨木童子。
その二人とは対照的に、名切りの特異体質が生んだ、生命の理を捻じ曲げる悪魔の業にファルロスは言葉を失っていた。
二人の話しでは湊を超える名切りはほぼ存在しないらしい。
それも当たり前だ。湊は鬼と龍の混血児なのだから、母体が名切りの方がより強い子を作れるという条件も踏まえると、湊の実子は湊よりも弱い可能性が高くなる。
さらに、名切りは勿論の事、九頭龍家も一般人よりも頭脳や身体能力で優れた遺伝子をしているため、同等以上の遺伝子を持った番（つが）いとなる者を探すのも難しい。
そういった条件を押さえて、湊よりも可能性を秘めた子どもを作る相手に相応しい者も一応はいるが、残念な事に相手は最凶の姉妹だ。
そもそも、力の管理者が人間との間に子どもを作れるかどうかも怪しい。
身体の構造は殆ど変わらないという話しで、湊も初めてベルベットルームを訪れた際に、エリザベスと入浴したことで見た目に違いがな

いことを確認している。
故に、性行為自体は可能だと思われるが、仮に子どもを作ることが出来たとしても、長女と次女のどちらを選んでも明るい未来が想像できない。
というよりも、三人ともあまりに現実感がないため、湊も含めた本人たちは誰もそういったＩＦの話しを考えたこともないだろう。
ならば、湊の力を上回る子どもはほぼ生まれないため、血に宿った湊の人格に生まれてきた赤子は抗う事も出来ずに塗り潰されるに違いない。
湊が存命中でもそうなるのか。元の湊が死んでから血が目覚めて、徐々に子どもの人格が浸食されてゆくのかは不明だが、どちらにせよ親子にとって幸せな結果にはならないことは明白だった。
「……湊君が自分の子どもを殺すようなことを望む筈がない。君たちの願いは叶わないよ」
「そのときは諦めるさ。だが、これで八雲が死に抗う必要がないことは理解出来ただろう」
「今の話しが真実ならね。でも、オルフェウスが彼の力の欠片でしかないなら、彼本来のペルソナはいまどこに？」
名切りの怨念の集合体たる蛇神に匹敵するペルソナ。そんなモノが個人の人格から生まれるとは信じ難い話しである。
現に心の深部いるファルロスは、蛇神以外にそれに近い力を持った存在を感知できていない。
蛇神は湊の心の根源にいるはずなので、ここにいなければ湊本来のペルソナは既に湊が使役出来る状態にあることになるだろう。
しかし、そんなペルソナをファルロスは知らない。現在最強を誇っているタナトスですら蛇神には遠く及ばないのだ。同類の知覚に長けたファルロスなら、そんなモノが存在すればすぐに気付けている。
そうして、考えても分からなかったファルロスが尋ねると、その問いには座敷童子が答えてくれた。
「……今はいない……後悔が枷となって……八雲は力を分けて封じてしまった。今の蛇神は……八雲のネガティブマインド……そして、本

来のペルソナは……ポジティブマインドだから……大きな後悔は……それを引き裂くことになってしまった、の」
「じゃあ、彼が今使役しているペルソナは、本来は蛇神と同等の力を持った一体のペルソナだったのかい？」
「いいや、タナトスとアベルだけだ。殺すための力と奪うための力。ポジティブマインドにしては些か物騒だろう？　だが、それも合わせてみると興味深い」
　四神やカグヤなど、全てのペルソナたちが本来は一体のペルソナだったのかと質問したファルロスに、茨木童子は否定してから新たな問いを出してきた。
　タナトスもアベルも湊の切り札と言っていい『最強／最凶』のペルソナだ。
　その能力の特性からアベルを呼び出すことは殆どないが、固有スキルである『楔の剣』は力の管理者からでもペルソナを奪える恐ろしい効果を持っている。
　敵がワイルド能力所持者なら通常のペルソナ使い相手ほど効果を発揮できないが、それでも奪われる事を警戒した相手には、牽制として能力を制限させることが出来るため、物理戦闘でほぼ負けることのない湊にすれば、十分過ぎる効果を齎していた。
　そんな対ペルソナ戦に置いて必殺のアベルに対し、タナトスは純粋な暴力として必殺の力を有している。
　座敷童子と茨木童子の言っていることが本当で、二体が心の〝正の面〟であるポジティブマインドから生じた存在だとすれば、確かに負の面寄りの力にしか思えなかった。
　だが、蛇神と調和する存在と言うことは、同じだけの力を持った性質の真反対の存在のはず。顎に手を当て考えるこむファルロスは、茨木童子の言葉をヒントに答えを導き出そうとした。
「殺しと奪う……命を奪う。いや、それでは殺す力と同じだ。なら、死を奪うってことなのか？」
「ははっ、頭の回転は悪くないようだな。正解だ。死なない八雲は奪うための死を持たない。ならば、その死とは他人の物だ。他人の死を

奪う。つまり、守るための力という訳だな」
「反対に……蛇神は滅ぼすための力……でも、その力は目覚めてない。だから……ポジティブマインド側のペルソナで……蛇神が目覚めるまでの間……そっちの力を代用しようとしたのも、分離した原因」
本来の力を失ったポジティブマインド側のペルソナで、ネガティブマインド側のペルソナの性質を代用する。
相反する対極な性質同士でそんなことが可能だとは思えないが、実際に湊はタナトスとアベルという、ポジティブマインドでありながら敵を屠るための負の力を持ったペルソナを操っていた。
襲ってくる敵を殺せば味方は無事でいられるのだから、曲解すればそれも守る力と言えなくもない。
詭弁どころか屁理屈ですらない暴論だが、湊の性質は矛盾すら内包した陰陽の調和だと、先ほど茨木童子も言っていた。
陰陽とは太極から生じた両儀のこと。自然で言えば天と地、火と水。生き物で言えば雄と雌。概念で言えば善と悪。
そんな風に対となる性質を持ったモノらをさす言葉だが、矛盾を孕み本来一人では持ちえない性質までも、湊は自分一人で確かに持っている。
肉体や脳は両性別の細胞が混ざり合った準中性。感情においては炎のような激情だけでなく、心を持たぬ機械のような冷たさを感じさせるときもある。
道教のシンボルとなっている太陰大極図では、陰陽のそれぞれに互いの性質も混じっていて、どちらか片方の性質だけに染まることはないと示しており。
そういった性質を有していると思って湊の行動や内面を見れば、他の人間よりもよっぽど振れ幅は大きいが、その陰陽を驚くほどバランスよく内在させていることがはっきり窺えた。
故に、茨木童子の言った事も、全てを信じることはできないが、まったくの嘘ばかりという訳ではないのだろう。
相手の目的が湊の意思を無視したものであるため、信じることは出来ないと思っているが、それでも湊のために利用する事も出来るだろ

うとファルロスは顔を上げて口を開く。
「……湊君が名切りに目覚めたら、蛇神も一緒に目覚めるのかい？」
「そう単純にはいくまい。コレも心の力だ。他の者と異なる召喚手順を経ているにしても、呼び出すためには相応の感情を寄り代にする必要があるだろう」
「つまり、彼の心が負の感情に染まりでもしなければ、彼の意思を無視した暴走召喚は起きないんだね？」
「まぁ、端的に言えばな。だが、満月には八雲に宿るシャドウの力もざわつき出す。まだ名切りの力に目覚めていないからと言って安心は出来ない。このようになっ」
言い終わるかどうかというタイミングで、女は急に立ち上がると一つしかない腕で座敷童子を抱えて飛び上がった。
釣られてファルロスも上空に移動すると、先ほどまで自分たちがいた場所を、荒ぶった蛇神の胴体が押し潰している。
ずっと静かに蠢いていただけの蛇神が、どうして急に暴れ始めたのか。
何やら理由を知っていそうな茨木童子に、ファルロスは尋ねずにはいられなかった。
「どうして蛇神は急に暴れ始めたんだい？」
「こいつは八雲のネガティブマインドだと言っただろう。八雲の感情に反応したのだ。ただ、今回は普段よりも激しいな。表では丁度満月になる頃か。フフッ、どうやら力の目覚めは進んでいるらしい」
闇の中で銀色の瞳を光らせ眼下で暴れ続けている蛇神を、どこか楽しそうに見つめる茨木童子に、ファルロスは不安を感じずにはいられなかった。
過去には名切りの亡霊に意識を乗っ取られ、この蛇神を頭部だけとはいえ顕現させている。
今回はまだ一部も顕現させていないので、あのときほど危険な状態ではないのかもしれない。
しかし、湊のことが心配になったファルロスは、二人の名切りに鋭い視線を一度送ると、緊急時にすぐさま蘇生させられるよう、表層に

近い意識領域まで戻ることにしたのだった。

第七十話　仕組まれた依頼

６月１２日（月）
早朝――ヨーロッパ・オノス地方
夏に近付きつつも、どこか肌寒さを感じさせる早朝の空気の中、屋敷の建つ敷地内に存在する屋外遊技場には金属同士のぶつかり合う音が響いていた。
広さは陸上の四百メートルトラックほど、長方形のその場所を四メートルの壁が囲っており、中では囚人服を着た二人の男が盾と剣を持って血を流しながら疲れた様子で戦っている。
屋敷の主人である少女は、壁の外側に設けられた観覧スペースに座り、紅茶を飲みながら男たちが戦う様子をつまらなそうに眺めていた。
「……はぁ、まったく楽しめないわ。勝てば無罪にして生かすと言ったのに、どうしてもっと必死にならないのかしら」
戦っている男は二人ともが殺人を犯した死刑囚で、どうせ殺すのならと暇つぶしの道具を探していたソフィアが貰ってきたものだ。
初めは七人いたのだが、生き残った者が無罪となって釈放されると伝えており。これならば、全員が殺人犯ということもあって、それなりに面白い戦闘が見られると思っていた。
しかし、渡した武器の扱いに慣れていないのか、二時間経ったというのに二人も生き残ったまま、へばって決着を付けられずにいる。
ふらふらしながら武器を振っても、全く迫力も緊張感もないため、初めから飽きれば捨てるつもりであったソフィアは予定を早めることにした。
「守護天使さま、あのゴミを片付けてください」
アンティークドールのように美しい顔を妖しい微笑で歪めると、ソフィアの背後に水色の欠片が渦巻き始める。
最初に見えたのは水晶を持った女の腕。続けて古代ギリシアの衣服である銀色のキトン、虹色に変化する単眼の描かれた両眼を覆う黒い眼帯に、首には宝石の付いた金色のアクセサリーが形作られてゆ

く。
そうして、水色の欠片が治まったときには、長い紫髪をした女がソフィアの背後に現れていた。
背後に現れた存在にソフィアは満足そうな微笑を浮かべ、続けて未だ決着を付けられずに男たちに視線を向けると、静かに呟きながら優雅な仕草で右手を横に一閃する。
「……ガルダイン」
ソフィアの言葉に呼応するように背後に現れた女の水晶が光り出す。
直後、固い地面を抉るほどの力を持った大気が、疲労で意識も朦朧としていた男たちを襲った。
一人は地面を転がる間に四肢と首があらぬ方向へと曲がり。別の一人は大気に弄ばれながら壁に叩きつけられ、大きな赤い染みと共にへばり付く歪なオブジェとなった。
ゴミの片付けという仕事を終えた女は、徐々に薄れてそのまま消え去ってしまう。
だが、自分の引き起こした惨状を目にしても、ソフィアは自身が呼び出した〝守護天使さま〟の絶対的な力に喜びを感じているようで、その瞳は無邪気な子どものように輝いていた。
「うふふ……あはは……あはははは！　あゝ、やっぱりこの力は素晴らしいわ。神に選ばれた絶対的な王の力よ。ねえ、ヘルマン、貴方もそう思うでしょう？」
恍惚とした表情を浮かべるソフィアの問いに、静かに控えていた左目にモノクルを付けた長身の老紳士が、礼をしながら恭しく答える。
「はい。裏界の姫君にして、神子（みこ）と尊ばれておられる姫様に相応しい力にございます」
「ふふっ、あの〝神々の黄昏〟に迷い込み、守護天使さまがわたくしの身に宿ったときは驚いたものだけど。そのおかげで千里眼を得て、誰もわたくしに刃向えなくなった。知っているかしら？　昔はわたくしを可愛がっていたお父様も、守護天使さまが宿ってからは、ずっとわたくしに怯えて顔色を窺っているのよ」

「ルーカス様は、姫様や私のように神々の黄昏には入れませんから、アパテー様の力を目にすれば怖れを抱くのも無理はないかと」
ソフィアの付き人、ヘルマン・クラインが話すアパテーとは先ほどソフィアが呼び出した存在のことだ。
二人はソフィアが幼い頃から主従として共に居るが、数年前に二人は〝神々の黄昏〟という不思議な時間に迷い込んだ。
居る国によって発生する時間は違っているが、ギリシアに居て初めて体験したのが午後五時だったので、二人はそのように呼んでいる。
神々の黄昏では全ての電子機器が止まり、世界が緑色に塗り潰される。さらに選ばれた者以外は全て棺のオブジェとなってしまう。
稀に自分たちのように選ばれた人間も見てきたが、ソフィアのように〝守護天使〟をその身に宿す者は一人としていなかった。
守護天使を宿しているソフィアは神々の黄昏では無敵だ。拳銃で撃たれても少し衝撃があるくらいで、むしろ無礼を働いた者の方がアパテーの力を思い知る結果となった。
それは外の世界でも同じで、神々の黄昏ほどではないが、アパテーを呼び出しているソフィアを傷付けることは誰にも出来ない。
さらに、アパテーを宿した恩恵で、ソフィアは屋敷にいながらでも、遠く離れた場所の光景を見ることが出来る〝千里眼〟という力を得た。
ただでさえ、〝久遠の安寧〟という裏界最大規模を誇る組織のトップの娘で手が出せないというのに、守護天使と千里眼の力まで加わると、もはや一国のトップらであっても敵う者はいなくなっていた。
「そうね。お父様は大好きだけど、あの人も所詮は選ばれなかった存在だわ。神々の黄昏に入る資格のない者は、わたくしの寵愛を受ける資格もないのよ」
「では、小狼様は資格をお持ちだとよいですな。今回は小狼様の仮面舞踏会とバルツァーギ兄弟にそれぞれ別口から依頼を送っておきました。バルツァーギ兄弟の方には、他の人間も狙っているので、相手側の面子と共に仕事屋も潰す様にと大目に依頼金を払っておきました」

「バルツァーギ兄弟……切り裂き魔だったかしら？　小狼には変な女がくっついていると聞いているし。小狼に殺される前に邪魔者を片付けてくれればありがたいわね」
名切りの成長には戦いが必要とは仙道の言葉だ。
仙道だけでなくカナードまでもが女性のようだと称した美しい顔をしているのなら、別に湊が成長途中であっても構わないと思っている。
だが、どうせなら海を越えた大陸にまで名が知られ、鬼と恐れられていた名切りの完成形も見たい。
そのような想いから、ソフィアは湊の成長のため、組織の人間を使って依頼の出所を隠しながら、わざとブッキングするよう仕組んでおいたのだ。
バルツァーギ兄弟は兄弟揃ってナイフや鉤爪で相手を切りたがる、根っからの切り裂き魔。
近距離戦の得意な湊の敵ではないが、付属品などいらないソフィアは、バルツァーギ兄弟がどうにかイリスを屠ってはくれないかと少しばかり期待するのだった。

夜――ミュース山・麓
カニスの街から電車に二時間乗り。さらに、バイクでも二時間ほど走ったところに、湊たちの目的地はあった。
ミュース山の標高は約三千メートル。日本の剱岳（つるぎだけ）とほぼ同じだ。
だが、ミュース山は環境保護や野生動物の生態調査のため、国から許可を受けた者しか千五百メートル地点以上へ登ることができない。
もっとも、湊らの目的地である古びた屋敷は、山の麓の森の中に建っているので、今回の依頼に登山許可は関係がなかった。
倒れた門扉の上を通過し、比較的拓けた場所でバイクから降りると、マフラーを畳サイズまで広げてバイクを収納している湊にイリスが話しかける。
「荒れ放題だなぁ。見取り図じゃあ地下まであるらしいが、床が腐ってるかもしれないし。気を配って探し終わった頃には、疲労もだいぶ

溜まってそうだ」
雑草が生い茂り荒れた庭や、雨戸だけでなく窓ガラスもなくなっている屋敷を見て、イリスは想像以上に疲れそうな依頼だと苦笑する。
こんな依頼を受けると言ったのはイリスで、湊はギルド経由の時点で反対していた。
だというのに、依頼を受けた本人が先に愚痴を溢すとはどういう事だと、湊は冷めた視線をイリスに向け皮肉をぶつけた。
「……仕事が終わったらマッサージでもしてやろうか、おばあさん（グランマ）」
「言ったな？　オマエ、絶対にさせるから覚えておけよ」
確かに、三十歳を過ぎてからは動きにキレが無くなり始め、体力の衰えも徐々に感じるようになってきた。
だが、イリスは今年で三十三歳。世間から見れば十分若い部類であり、ハリウッド女優ばりのルックスとプロポーションをしていることもあって、街中では頻繁にナンパにあっていた。
そんな見目麗しい女性を捕まえておいて、お母さんならともかくおばあさんと呼んだ事は、流石にイリスも許す気はない。
マフラーから取り出した中華剣〝星噛〟で入り口までの草を薙いでいる湊の後に続き、絶対にマッサージをさせてやると意気込んだ。
「よーし。そうと決まったら作業分担だ。アタシは上のフロア、アンタは地下フロアをそれぞれ探索する。依頼書にあった通り首飾りの詳細は不明だ。だから、それっぽいのは片っ端から持ってこいよ」
探索場所である屋敷はかなり広い。純粋な敷地面積で言えば桔梗組の方が広いが、こちらは二階プラス地下フロアまで存在する。
湊ならば暗闇でも灯り無しの作業が可能だが、既に日が暮れ始めているので、イリスは懐中電灯で視界を確保しながらの探索だ。
長時間それを続けるのは、精神的にも肉体的にも疲労が溜まるため、安全性は下がるが探索場所を分担した方が早く終わるだろう。
そのような考えからイリスが指示を出すと湊は素直に一度頷き、確認のため間取り図のコピーにもう一度目を通してから、屋敷に入りそのまま地下への入り口へと向かって行った。
＊＊＊

「蝙蝠とかがいるかもしれないから、気を付けろよー」
湊の後に続いて屋敷に入ったイリスは、マスクを装備し、頭に付けたライトの電源を入れて視界を確保しながら、地下への扉へ入って行った湊を見送った。
屋敷の中は荒れ放題で、分厚く積もった埃で歩いた足跡がはっきりと残っている。
床板も一歩踏み出す度にぎしぎしと嫌な音を立てているため、イリスは慎重に二階への階段を目指してゆく。
目的の首飾りの詳細が分かっていないとは言ったが、イリスも湊も経験から置かれている場所の目星は付けていた。
まず、第一候補は今現在イリスが向かっている持ち主の寝室だ。
衣装を置いている専用の部屋を確保していたとしても、歴史的な価値も付加されている装飾品だけは他の装飾品とは別に、盗難されぬようにと身近な場所に置きたがるものだ。
そんな事をするくらいならば、他の物と一緒に保管しておいた方が安全なのだが、所詮は素人の防犯意識、被害妄想に取り憑かれた者は物事の視野が狭くなりやすい。
故に、まだ誰も盗みに入っていないとすれば、寝室にあるであろう隠し収納に目的の物は残っていると思われた。
(ま、首飾りがなくても少しは金になるものもあるだろ。儀式用の装飾ナイフでもあれば、アイツが喜びそうだけどな)
湊は刃物をよく集めている。好きなのかと聞いても首を横に振るが、実用性の高い物から観賞用にしかならない儀式ナイフまで、価値の有無に関わらず気に入れば持って帰っていた。
咄嗟に放つプッシュダガーを除けば、頻繁に使っているのは中華剣〝星噛〟と新新刀〝春夢〟の二振り。
他は手入れしていても使う事は殆どなく。それでも持って帰るのだから、少しばかり物騒だが刀剣類の蒐集は湊にとって唯一趣味と言えるものなのだろう。
ならば、その湊が喜ぶような品があれば、目的の品を見つけるよりも有意義だと、階段を上った先にあった部屋の扉に手をかけたイリス

は考えていた。
「邪魔するよー……って、誰もいないし言っても意味ないか。それにしても随分と荒れてるな」
部屋の中にはいると、マスクを付けていてもカビ臭いと分かる部屋の空気にイリスは眉を顰める。
ボロボロに擦り切れたカーテン、カビだらけになったベッドのシーツ、割れた窓ガラスが散乱した床など、確かにこれはリフォームより取り壊してから、新しく建て直した方が楽だと感じた。
しかし、これだけ荒れていれば隠し収納も探し易い。ザリザリとガラスの破片を踏みしめる音をさせながら部屋の中を進み、ベッドランプが置かれていたと思われる棚に近付いた。
傍に寄ってイリスは、その棚を注意深く暫し観察する。その棚は埃が積もっているだけで特に不審なところはない。
けれど、イリスの仕事屋としての勘が何かを告げているのか、数秒見てからおもむろに棚をベッドと平行な向きに倒した。
「よっし、ビンゴ！」
倒した棚の置かれていた場所ではなく、棚その物の背面に隠し収納らしき小さな戸がついていた。
元はパッと見では判別できないようになっていたのだろうが、歳月の経過によって塗装が劣化し、戸の縁の部分がはっきり見える状態になっている。
それを見たイリスは、一発で当たりを引いた事に顔を綻ばせ、直ぐに隠し収納の中身を取り出した。
（どれどれ……写真の入ったロケットに、指輪、ネックレスに……小さな鍵？）
取り出した中身を見てイリスは首を傾げる。
指輪もネックレスも雨風や日光に触れていなかったため劣化は少ない。ロケットは写真を抜いても大した価値はないだろうが、最後に出てきた小さな鍵がどこの物か気になった。
普通に考えればどこかの扉用のではなく、机の引き出しや小箱を開けるための物に見える。

こんな場所に隠していたのだ。よほど大切な物を保管している場所に違いない。
しかし、鍵を見ただけで種類を特定するスキルは持ち合わせていないので、自分で地道に探して見つからなければ、後は湊に頼るしかなかった。
（まぁ、アイツなら分かるだろ。コレが地下の物の鍵でも、普通にピッキング出来るから心配いらないしな）
湊の地味な特技に『ピッキング技能一級』というのがある。
別にそんな名称の資格は存在しないが、専門の器具を使わずとも痕跡をほぼ残さずに解錠できるのだ。
初めて披露したときにはどこで習ったのか周りの人間にも聞かれたが、本人もまったく習った覚えがないらしく、どこか不思議そうにしていた。
しかし、ピッキングはこんな仕事をしていればかなり有効な技能だ。それ以来、周囲は湊に鍵の勉強をさせて、どんな鍵でも開けられる様に鍛えられた。
その成果が、鍵を見ればどこの物か大体分かるようになり、さらに初めて見るタイプでも時間をかければほぼ解除出来る様になっている。
声紋認証など電子キータイプは流石にピッキング出来ないが、そちらはシャドウの力で動力ごと支配出来るため、ピッキングするまでもなく簡単に開けられた。
故に、戦闘力に注目されがちだが、湊の本領は実はその多岐に亘る特殊技能を活かした便利屋稼業だと言えた。
そうして、鍵は合流後に湊に尋ねるとして、手に入れた品々を腰のポーチに収納してイリスは他の場所を探す。
高そうなネックレスは見つけたが、依頼の首飾りは大きな物らしいと書いていたので、特徴の合わないコレではないはず。
他に部屋の中を見て回っても、棚の背面の隠し戸以外に怪しい収納はなかったため、ならば別の場所を探さねば時間の無駄だ。
ヘッドライトの予備電池は持って来ているが、探索時間が長引け

ば、環境の悪さと暗闇での作業のせいで、電池が切れるよりも先に自身がまいってしまう。
そんな事になれば、身内に優しい湊が大変心配してくるので、子どもに負担をかけたくないイリスは、心配する湊を想像して苦笑しながら廊下へと一歩踏み出した。
途端、甲高いエンジン音と共に風を切る音が聞こえ、イリスは悪寒を感じながら着地も考えず横に飛んだ。
「ぐっ!!」
肩から地面に着地して転がったイリスは、何かが触れて僅かに切られた左腕を押さえながら、すぐに立ち上がり音の正体を見つめる。
暗闇で初めは分からなかったが、ヘッドライトの角度を調整することで相手の全体像が見えた。
そこにいた強襲者の正体は小型のチェーンソーを持った若い男。
といっても、既に二十代中盤にはさしかかっているだろうが、蜂の巣駆除の白い防護服らしき物を着た男は、意味もなく刃を回しながらニタニタと笑って口を開いた。
「あれれ、外しちゃったよドゥイリオ兄さん」
「ハハッ、だから扉が開いた瞬間に正面から切れと言ったじゃないか」
「うん、やっぱり兄さんの言う通りだったよ。でも、左腕を少し切れたみたいだから、これでこの女は片手しか使えないね」
血を流しズキズキと痛む腕を押さえるイリスの前で、軽い調子で楽しげに会話する男たち。よく見ると若い男の後ろには、同じ服装をした男がもう一人立っていた。
チェーンソーしか持っていない若い男に対し、ドゥイリオと呼ばれた男は両手の甲に各四本の鉤爪を付け、腰には短機関銃Ｗｚ６３をストラップで提げている。
二人を相手にするだけでも不利だというのに、こんな足場の悪い暗闇で片腕を負傷しているとなれば状態は最悪だ。
応戦するにしても、とりあえず止血だけはしておきたいが、隠れられる場所まで逃げようと下手に背中を見せれば、兄の方に後ろから蜂の巣にされるだろう。

（クソッ、イカれた服装しやがって、コイツらどこのどいつだよ。どう考えてもブッキングした他所のチームじゃねえか。ブッキングする可能性があるなら、依頼書に書いておけってんだ）

心の中で悪態を吐きながらも、イリスは冷静に屋敷の見取り図を思い出し、どうにか逃走ルートを確保できないか考えていた。

左腕の処置はこの際捨てる。止血しようにも安全の確保が前提なので、痛みは全て奥歯に持っていき、右手一本で牽制しながら逃走を図るしかない。

血は一向に止まる気配がないが、幸いにも指もしっかり動かす事が出来る。

ならば、逃げ延びて止血さえ出来れば、多少ここで無理に使ったとしても、後遺症も残らず回復してゆくだろう。

（小狼が気付いてくれれば勝つ見込みはある。てか、アタシだけじゃ勝てないって方が正しいか）

普段、湊を心配しながらも、こういった有事の際には頼らねばならないのが心苦しい。

出来れば、敵に襲われたが問題なく一人で対処できた、と少しばかり余裕を見せたいところだが、現実はイリスにそんな余裕がない事を突きつけている。

逃走ルートのシミュレートは終わった。後は、足場がちゃんと持ってくれることを祈るだけだ。

そして、イリスは腰の拳銃を素早く抜き放つと、半身の構えで撃ちながら後退を開始した。

「死ね、クソ野郎っ!!」

「あははっ、そんなの効かないよう！」

イリスの銃から飛び出した弾丸は、若い男が持っているチェーンソーを盾にして防がれた。

普通、そんな事をすれば貫通するか、歪んで使えなくなるはずだが、愛用の武器としてカスタムしているのか無事のようだ。

けれど、少しは足止めになっている。その隙を突いて、イリスは屋敷の奥へと向かうのだった。

――屋敷・地下

イリスが二人の男と交戦している頃、地下を探索していた湊のところにも一人の男がやってきていた。

上の男たちの仲間らしく、服装は白い防護服。だが、武器は二振りのククリ刀のみで、湊と相対しながら男は手に持った武器を遊ばせていた。

「随分と若いな。これなら、弟に行かせたお前の仲間の方が当たりだったかもしれん」

「……趣味の悪い武器だな。ククリ刀の流通を考えれば、もっとマシなデザインもあったろうに」

長男らしい男の言葉を無視して、心から同情するといった表情で、湊は相手の持っている武器のデザインについて指摘した。

男の持っている武器の刃は普通のククリ刀の物だ。しかし、グリップはマスタード色で、さらに鍔に当たる部分は濃い紫をしていた。

この悪趣味な配色には、刀剣の蒐集を趣味にしている湊も全く食指が動かないらしい。

むしろ、そんな武器は刀剣類と認めないとして、星噛を構えながら破壊しようとすら考えていた。

「今ならまだ、目的が違えば見逃してやるぞ？」

「フフッ、随分と落ち着いているな。だが、俺たちの目的は首飾りの回収だ。ブッキングする可能性もあると言われ、相手の面子を潰すために仕事屋を殺せとも言われている」

「……そうか。なら、死んでくれ」

言い終わるかどうかのタイミングで瞳を蒼くすると、湊は身体の横で剣の刃を寝かせたまま構え、強く地面を蹴り駆け出した。

相手との距離は十メートル、一本道の通路で逃げ場はお互いにない。

地下の床や壁は上の屋敷と違い、切り出した石を組んだものなので、湊が強く蹴ろうと抜けたりはしないだろう。

ならば、人間の限界を超えた反射神経と、防御不能な力を持っている湊の方が圧倒的に有利。

相手もそんな湊の加速に僅かに驚いたようで、一拍動き出すのが遅れながら、持っていたククリ刀に遠心力を加えた横薙ぎで応戦してきた。
『はあっ!!』
金属同士のぶつかる甲高い音と共に、両者の気合を乗せた声が合わさりながら暗い地下に木霊する。
体格は敵の方が大きいが、一振りに両腕の力を乗せた湊に対し、相手は遠心力を加えようが片腕ずつの腕力しか武器に乗せられていない。
その結果、互いの力は拮抗し、再度力を籠めたことで火花を散らせながら武器が弾け、二人は距離を取った。
(……武器の扱いはそれなり。けど、大して強くない)
一度武器を交えただけで、湊は冷静に相手の実力を判断する。
反応が遅れたにも関わらず、遠心力を加えながらも刃に負担をかけず攻撃を凌いだことで、男は確かにククリ刀を使いこなせているようだが、目立ったのはそれだけでそれ以外の長所はない。
大柄で力が強いのかと思えば、別にそんな事はなく、むしろ単純な腕力ならば湊の方が勝っているくらいだった。
こんなのが相手であれば様子も見る必要もなく、あとは適当に銃を乱射すれば、逃げられない以上簡単に勝てるだろう。
湊は再び剣を構えると相手を切り殺すため、強く蹴り出した靴音を通路に反響させながら接近した。
相手の男も湊が向かってきたことで身構える。左手の剣を前に突き出し、右手の剣を自分の傍に置くという防御の構えだ。
「ハァッ!」
「温いわっ」
両手で構えた湊の袈裟切りを、相手は突き出した剣で打ち落とすように弾いて往なす。
だが、湊の得意とするのは飛騨の改造によって得た反応速度を駆使した連撃だ。そんな湊がたった一撃しか揮わない訳がない。
剣を往なされると即座に片手持ちに切り替え、片足を相手側に踏み

込む勢いを利用して、身体ごと回転させた横薙ぎを払う。
水平軌道の攻撃は往なすよりも躱した方が良いと判断したのか、相手は跳ぶように後退して距離を取るが、湊の剣は男の正面に来た途端に刺突に変化した。
授業で一度だけ計測した湊の立ち幅跳びの記録はセーブして三メートル丁度。仕事中で身体能力の上がった状態ならば、その１．５倍は余裕で、さらに『一歩』という助走まで付けることが出来るのなら、十分な威力を持ったまま男を射程に収めることが可能だった。
「ぐぬぅっ!?」
後退という不安定な状態で回避を取った男は、体勢を立て直す暇もなく受けた追撃を何とか両手の剣で止めようとする。
けれど、それを打ち抜くよう手首の捻りで回転を加えられた星噛は、小さく男の剣を弾き相手の右肩に傷を負わせた。
傷を負い相手が怯んだときこそ、さらに追撃の好機。
剣を引きながら一歩下がった湊は、剣先に付いた血を振り払いながら、無表情で相手に剣を振り下ろす。
それを再び男が防御したことで甲高い金属音が通路に響き。湊はジリジリと相手に近付きながら、何度弾かれても振り下ろし、払い上げ、横から薙ぎ、叩き付けるよう剣をぶつける。
湊は武器が一本なのに対し、男は防御に優れた二刀流だ。湊が一気に攻めようとせず、男が捌く手を誤らなければ当然勝負は持久戦にもつれ込む。
武器で攻撃を受け、力を籠めるたびに肩の傷が痛むのか、男は脂汗を滲ませながら表情を苦痛に歪ませている。
それを見ていた湊は、今日は満月と言うこともあり、普段よりも嗜虐性が増しているのか、攻撃の手はそのままに、珍しく愉しげに口元を歪ませて相手に話しかけていた。
「そんな愉快な格好をしているくせに拍子抜けだ。兄のお前がこの程度なら、弟とやらは今頃イリスに殺されているだろうな」
「ぬかせっ……」
忌々しい。そんな風に思っているのがありありと分かる表情で、男

は息を荒くしながらも反論してきた。
しかし、攻撃を防ぎながら反論出来るということは、まだそれなりに余力があるのだろう。
ならば、少しくらいペースを上げても大丈夫かと、湊は攻撃の手をさらに激しくする。
「口ではなく手や身体を動かせ。せっかく、仮面舞踏会（バル・マスケ）に喧嘩を売ってきたんだ。しっかり踊ってみせろ」
「……フフフ……フハハハハッ！」
「……気でも触れたか？」
疲労と痛みでおかしくなったのか、相手は突如笑い始めた。
攻撃に対応しきれず防ぐのも遅れ出し、徐々にだが傷も増えてきているので、失血で意識が朦朧とし始めているのなら、そういった状態になっても不思議ではない。
相手が突然笑ったことを訝しみながらも、湊がそんな風に考えていると、相手は急に息を吹き返し、湊の攻撃を再び防ぎ始め大声で言った。
「せっかくの招待だ。この命尽きるまで貴様と踊ってやろう！　だが、その引き換えに仲間の命は貰ってゆくぞ。なにせ、弟は二人いるのだからなぁっ!!」
「なにっ」
男の言葉に、湊はすぐ様距離を取ってペルソナを付け替え、召喚せずにカグヤの索敵を発動する。
男の物と思われる複数の足跡はある。だが、一階フロアには誰もいない。
それを追っていくと、二階フロアの一室の前に血痕があった。
さらに辿るよう意識を向けると、男の言った通りイリスが二人の男に追い詰められているのが視えた。
ニヤニヤと笑って追ってきている敵に向け、廊下の曲がり角に身を隠しながら発砲しているが、深手を負っていることに加え、残弾が少ないのか表情には焦りが浮かんでいる。
それだけでなく、このまま逃げたとしてもイリスの向かう先は行き

止まりしかない。
血痕の残っていた部屋からそこまでの途中に、突撃銃を乱射したような痕があることから、どうやらイリスは逃走経路の変更を余儀なくされたらしい。
怪我を負っている状態で窓から飛び降りられるとも思えないので、敵に中近距離タイプが揃っていることも考えれば、状況はかなり絶望的だった。
（こいつを殺して向かって間に合うか？　いや、それじゃあギリギリ間に合わないっ）
「仲間のことが心配か？　だが、助けにはいかせんぞ。俺は兄弟の中で最も攻撃を捌くのが上手いんだ。貴様の仲間が弟たちに殺されるまで、たっぷり時間稼ぎをさせてもらうとしよう！」
イリスを助ける手段を考えている湊に、目を血走らせながら笑って男は切りかかってくる。
自分が生き残る事は出来ないと分かった上での特攻だ。元々、攻撃を捌くことに秀でているなら、死を恐れず時間稼ぎに徹してきたら面倒な事この上ない。
上へ向かうにも、一階と地下フロアを隔てる床は造りがかなりしっかりしており、さらに分厚くなっているせいで魔眼を使用し切り崩している間に、崩落音で上の者たちに気付かれてしまうだろう。
それ以外の方法で確実なのは走って上のフロアに向かうことだが、男の後ろに伸びている通路の先にしか扉はなく、しかし、男を殺して走ったとしても上の敵がイリスに辿り着く方が早いと出ている。
――――ペルソナを使い、天井を破壊するか？
そんな考えが頭を過ぎったが、湊は索敵やアナライズなどの補助を除き、仕事でペルソナを使う事は禁じていた。
この仕事を始めたのは自分の力を高め、ペルソナなどに頼らずともチドリを守れるようになるためだ。
幼い頃は感情の昂りで呼び出してしまったこともあったが、成長した状態で禁を破るのとでは意味がまるで違う。
一度禁を破れば、今後もまた言い訳をして力に頼ろうとするだろ

う。
例え、今まさに大切な者が危機だったとしても、相手もペルソナ使いという状況でなければ、湊は今までの全てを無駄にするようなことを選べなかった。
（ペルソナに頼ろうとするなっ。邪魔な奴を殺して、俺が上の奴らの命も奪ってしまえばっ）
自分が新たに積み重ねてきた過去を捨てるか、大切な者の命を見捨てるか。直前に不可能だと結論の出ていたことを何度も考えながら、湊は葛藤していた。
だが、そんな無駄なことをしている間も、イリスの命は刻一刻と奪われようとしている。
目の前にいる男の攻撃を受けながらでも、能力の眼を持っている湊にはそれが分かってしまう。
「フハハッ！　表情が固いぞ、さっきの威勢はどうした！」
暗い地下通路に剣戟の音が響く。
イリスの命が消されようとしているという経験したことのない状況が焦りを生み。その思考をさらに乱す様に男が不快な挑発を続けてくる。
現状、解決法は一つしかない。助けられる方法があるにもかかわらず、それを使わずに助けようというのは徒の我儘だろう。
しかし、他者がどのように感じたとしても、アイギスとチドリのために戦ってきた湊にとって、ここで自分に課したルールを破るというのは、二人を守れないことと同義であった。
「貴様の仲間を片付ければ弟たちはすぐにこちらに来る。そのときには、貴様も同じ場所へ逝けるだろうさっ。だから、安心して死ぬがいい！」
「――――死ぬ？」
自分の死。それを相手に言われたとき、胸に収められた黄昏の羽根〝エールクロイツ〟が心臓の鼓動に合わせて強く脈動するのを感じ。同時に湊の頭は急激に冷静さを取り戻してゆく。
手足がもげようが、心臓を吹き飛ばされようが死なない自分。

それに対し、イリスも他の者も実に呆気なく死んでしまう。
同じ人間であるのにどうしてだろうか？
ファルロスの言葉によれば、他者が同じようにデスを内包出来たとしても、生命力の総量の違いで臓器を失った状態から蘇生することなど出来ないらしい。
だが、それもおかしな話だ。デスとの親和性が高いからではなく、生命力と言う個体が生まれ持つスペックがそこまで違ったりするものだろうか？
こんな事を考えている状況ではないことは分かっている。しかし、その湧きあがってきた疑問が、湊に一つの考えを齎す。
答えは既に知っていた。力が足りないのなら、足りない分を補える〝その状況〟を作り出せば良い。方法は研究所に居た頃から何度も戦ってきた心の化生たちが示していた。
「――――イリスは殺らせない」
新たな力の発現に共鳴するように、『魔術師』のアルカナを持つ新たなペルソナが自分の内に目覚めたのを感じる。
だが、今はそんな物はどうでもいい。静かに呟いた湊の瞳が、〝全てを見透かす蒼〟から〝鈍い輝きを持った金色〟に変化する。
「……なに？」
瞳が変わった湊の纏う空気の変化に、男も気付いて一度距離を取る。
目の前にいて姿も見えているのだが、その周辺だけが世界からずれているような違和感。
大きく何が変化したという訳でもないのに、知らず全身から汗が吹き出し、武器を持つ手が震えていた。
勝てない。それは最初の剣戟の応酬の時点で気付いていたことだが、今の湊には〝何をしても無駄〟だとすら感じている。
何度も死線を越えてきて一度として味わったことのない感覚だ。体格で劣る年若い少年が相手となれば尚の事。
「ぐっ……うおぉぉぉぉぉぉっ!!」
けれど、だからと言って何もしない訳にはいかない。

弟たちの勝利を信じているが、もしものときを考えれば、少しでも相手に傷を負わせて体力を奪った方が良いに決まっている。
だからこそ、雄叫びと共に駆け出した男は両手に持ったククリ刀で湊に切りかかったのだが、
「――――邪魔だ」
「……なっ」
体重を乗せた必殺の一撃がただの拳に破壊され、砕け散った刃の欠片の中を進むそれが男の最後に目にしたものとなった。
――屋敷・二階
腕を僅かに切られ、足に銃弾を喰らってしまったイリスは、当初予定していた逃走経路を外れ、二階の最奥へと追い込まれていた。
逃走経路から外れたのは、兄の方が持っていた突撃銃で通路への侵入を妨害されたせいである。
兄が牽制している間にチェーンソーを持っていた弟が迫ってきたため、イリスは先が行き止まりになっていると分かっていても、こちらのルートを選ばざるを得なかった。
そうして、ついに行き止まりに辿り着き、予備も含めて銃弾がゼロなったイリスに向かって、弟がチェーンソーを回しながら近付いてきた。
「あははっ、行き止まりだね。随分と逃げるから時間がかかってしまったよ。これじゃあ兄さんは仕事を終えてるだろうな」
楽しそうに笑いながらやってくる弟の後ろで、弟が射線に入らぬ位置に兄が突撃銃を構えている。
ただでさえ女という筋力のハンデを持っているというのに、片腕と片足に怪我を負っている状態で、格闘などまともに出来るはずもないが、それでも兄の方は油断をしない性格らしい。
楽観的な弟と慎重な兄で実に相性のいいコンビだ。さらに上に兄がいるらしいが、兄弟が揃えばかなり良いチームに違いない。
失血で視界も怪しくなってきた状態で、イリスはそんな事を考えつつも、まだ抵抗できるかもしれないと思わせるため、精一杯の余裕を見せながら言葉を返す。

「……馬鹿が、仙道とまともに正面から戦えるヤツだぞ？　オマエら程度で勝てるはずないだろ」
「フッ、仮にそれが本当だとしても、俺たちの兄は敵の攻撃を捌く達人だ。お前を殺して俺たちが向かえば形勢は逆転するだろう」
「そうだね。まぁ、大丈夫だと思うけど、あんまり遅いとウーゴ兄さんに怒られてしまうから、そろそろ終わらせてしまおうか」
壁を背にして立っているイリスと相手との距離は約七メートル。いまから湊が現れても、到達する前に敵の刃が届くだろう。
四肢のどれかを犠牲にしてでも、もう少しばかり抵抗するつもりだが、イリスはこの窮地に置かれた状況でも何故だか内心で笑いたい気持ちだった。
（あー、馬鹿やっちまった。あいつに頼る癖でもついてたのか、完全に油断して初撃を喰らったからな。こりゃ、小狼が不真面目にしてようが怒れそうにない）
あと六メートル、五メートルと距離が縮まってもイリスの顔に恐怖の色はない。
自分が死んだ後の事が気になるが、仕事に出ていることを知っているマダム・リリィがナタリアに連絡して、どうにか湊を日本に連れて行ってくれるだろう。
もう少し傍にいてやりたい気持ちは当然あるが、湊が無事ならそれが一番だ。
湊ならこの二人にも負けることはない。だが、最期に少しくらいは根性を見せて、笑われないようにしなければ。
そんな思いから手に持った拳銃を強く握り締めると、残り四メートルまで迫った敵に向けて投げつけるため、イリスは相手がチェーンソーを振りあげるのと同時に腕を振り上げる。
だが、両者が互いに攻撃しようとしたその瞬間、連続した轟音と共に地面が揺れた。
「うおぉぉぉぉぉぉぉっ!!」
『っ!?』
そして、さらに揺れが激しくなったと感じた時、咆哮が耳に届くと

同時に両者の間の床が弾け、金色の瞳をした湊が飛び出してきた。
先ほどの連続した轟音と床から飛び出してきたという事実から推測するに、湊は地下フロアからここまで天井を打ち抜いて最短ルートで現れたのだろう。
だが、一階と地下を隔てる層は固い石材で出来ていたはず。それを破壊してそのまま一気に上まで登ってくるなど到底不可能だ。
「な、何なんだお前はっ!!」
突然の闖入者に相手も怯んでいるが、もう少しでイリスを殺れるという状況を邪魔された弟は怒り、着地した湊に向けてチェーンソーを振り下ろしてきた。
「小狼っ!!」
持っている星噛での防御が間に合わない。そう思ったイリスが思わず叫ぶ。
けれど、相手の攻撃に対し、空いていた左腕を湊が突き出すと、そこには目を疑う光景が待っていた。
「……は？」
湊の腕を斬り落とすと思われていたチェーンソーが、ギギギィと異音をさせたかと思えば次の瞬間に音を立てて壊れてゆく。
刃が欠け、チェーン自体が千切れてしまっている。これではもうパーツを取替えなければ使えないだろう。
攻撃した男も予想外の状況に思考がついていかず、間抜け面で口を開けて思わず呆ける。
しかし、人間の柔らかい肉を切り付け、どうして固い物を無理に切ろうとしたように壊れるのかが分からない。
もっとも、弟がその答えを知ることはない。何せ、チェーンソーを破壊し、そのまま伸ばされた湊の手が顔を掴むと同時に、相手は頭部を握り潰され息絶えていたのだから。
「き、貴様ぁぁぁぁぁっ!!」
弟が殺されたことで正気に戻ったのか、後ろに控えていた兄が湊に向けて銃を乱射する。
一分間に６５０発撃ち出せる連射速度で迫る凶弾を、たった十五

メートルほどの距離で躱せる訳がない。
その目論見通り、弾は全て湊の身体を直撃した。
「な、なんで銃が効かないんだっ!?」
けれど、今度もまた先ほどの弟と同じように、相手は目の前で起きている事態に困惑し、動揺しながら思わず後退りを始める。
弾丸は直撃しているのだ。だが、それらは湊にぶつかると衣服すら貫通せず、何かの壁に阻まれるように潰れた状態で落下してゆく。
固い壁があるのなら、普通はそこで兆弾する。しかし、潰れた状態で落下するのなら、それは弾丸の持つエネルギーを壁側が完全に受け止めているという事になる。
後ろで見ているイリスですら、今の湊になにが起こっているのか理解出来ていないのだ。敵として相対している男の心の荒れ様はイリスの比ではないだろう。
「や、やめろっ。く、く、くるなぁぁぁぁぁっ!!」
揺れる長髪の間から見えている鈍く輝く金色の瞳に見つめられ、男は発狂しそうになりながら、弾の切れた銃の引き金を必死に引いている。
自分を守る武器は、もう手の甲に付いた鉤爪だけだと分かっていながら、それではどうにもならないとも理解しているからこそ、現状を受け入れられず起こりもしない奇跡に縋っているのだった。
「い、いやだ。頼む、殺さないでくれっ」
そうして、湊が進む度に後退を続けた男の背が壁に付くと、男は必死に床に這い蹲り命乞いを始めた。
土下座など日本など極一部の国の文化だったはずだが、イリスを追い詰めていたときからは考えられないような姿を晒している。
だが、当然そんな物が聞き届けられる訳もなく。湊はゆっくり男の元へ進むと、そのまま頭を踏みつけ、
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」
ミチミチと嫌な音をさせながら踏み潰した。
飛び散った血液と脳漿を冷たい瞳で見下ろしていた湊は、相手の胴体が痙攣をやめ、完全に沈黙したのを確認してからイリスの元へ戻っ

てくる。
瞳の色は先ほどの〝鈍い輝きの金色〟から普段の〝惹かれる輝きを持った黄金色〟に戻っているが、あんな瞳など知らなかったイリスは、マフラーから救急セットを取り出し治療を始めた湊に、何も言葉を掛けることが出来なかった。

第七十一話　シャドウの力

６月１４日（水）
午後――古美術〝眞宵堂〟
湊とチドリのバイト先である骨董品屋、『古美術〝眞宵堂〟』。
そこの女主人、栗原シャルマは表に準備中の札を出して、店の奥で掛かってきた電話の相手をしていた。
《ペルソナを呼び出さずに、適性による防御を展開するなんてあり得るのか？》
栗原と話している電話の相手は、湊と共にカニスの街に滞在中のイリスだ。
彼女はつい先日、あの満月に起こった湊の変化について専門家の意見を聞きたくなり、湊を買い出しに行かせてから宿の電話を使って秘密裏にかけてきていた。
本人に何が起こったのかを尋ねても、湊は何でもないと言うばかりで話そうとしない。
しかし、今まで銃弾を喰らって何度も死んでは蘇生を繰り返していたので、急にペルソナを呼び出した状態と同じように弾丸を防げるようになった以上、それはあの日に初めて出来るようになったことは間違いない。
けれど、話しを聞いた栗原は、影時間外でペルソナを呼び出しても、チェーンソーのチェーンを千切れさせるほどの防御を展開出来るとは思えなかった。
そのため、判断材料が不足していることもあり、もう少し相手に説明を求めることにした。
「話しが分からないから、少し質問させてもらうよ。まず、湊は本当にペルソナを呼び出していなかったのかい？　あいつは腕や尻尾みたいにペルソナの部分展開が出来る。その状態でも適性による能力は僅かに付加されるから、湊の適性の高さを考えれば銃弾も防げるかもしれないんだが」
《いや、全く展開してなかった。というより、アイツが仕事でペルソナ

を呼び出すこと自体があり得ない。不利な状況に追い込まれて自分が殺されても、チドリの前じゃ相手を殺さないヤツだぞ？　そんなヤツがアタシのためにルールを捻じ曲げるはずがないって》

電話の向こうから苦笑したような調子の声が聞こえ、栗原もそれもそうかと納得してしまう。

湊が索敵などの補助を除いてペルソナを使用しないのは、自分がどんなに不利な状況にあってもアイギスやチドリを助けられるよう鍛えるためだ。

ワイルドの力によって複数のペルソナを使える湊は、戦闘に置いてほぼ万能と言っていい。

けれど、その力にばかり頼って、いざというときに力が使えなければ全てを失うことになる。

戦闘力としてのペルソナを封じた状態で仕事をこなし、もしものときには自分だけでも守れるようにしているのだ。

その湊が仕事でペルソナを使うとすれば、アイギスとチドリ、または彼女らの大切な人の身に危険が迫っているときだけ。それ以外で使うなど、湊にとっては自分の力では二人を守りきれないと認めるに等しい行為だろう。

故に、本人が彼女らの命を諦めるとは思えないので、相手がペルソナ使いや適性持ちでもない限り、湊がペルソナで戦う事は絶対にない。

それを理解している電話の二人は、湊がペルソナを使ったという可能性を完全に除外して話しを続けた。

「ナギリの力の可能性はないかい？　鬼っていうくらいだし」

《名切りの鬼はそういう意味じゃない。そも、手足が千切れても、ハラワタが飛び出しても戦い続けたって話しだ。ってことは、怪我は普通に負うんだろ》

言われてみれば、そんな話しもあったなと栗原は黙ってしばし考え込む。

彼女がエルゴ研在籍中に研究していたのはシャドウがメインで、ペルソナについては存在する可能性に行きつき、対シャドウ兵装らにペ

ルソナが目覚めるのを確認する前に研究所を去ってしまった。
だが、そんな中途半端な状態で研究を放り出したものの、湊とチドリを匿う前に飛騨から研究データを受け取り、被害者らへの贖罪のために個人レベルという制限付きで研究を再開した。
現在確認されている最高のペルソナ使いである湊と、三枚の黄昏の羽根が結合した〝ペタル・デュ・クール〟を内蔵することで後天的にペルソナが安定したチドリ。その二人に手伝って貰いはしたが、個人レベルの研究で未だ桐条が手にしていない技術を確立出来たのは、ひとえに彼女が優秀だったためだろう。
もっとも、新たな技術を得たところで影時間関係については解明できていることの方が少ない。
２００９年に事態が動くと聞かされても、栗原がこの数年の間に出した研究成果は、無の武器とペルソナの融合くらいで、色々とイレギュラーなペルソナ使いの生体など専門外であった。
「うーん……ペルソナ使いの身体自体が変化するなんて聞いた事もないしねぇ。一応、鵜飼さんの知り合いの医者に検査してもらって、二人の身体に変化がないかは診ていたんだ。そんときは湊は色々と変な結果も出たが、別に肉体を構成する成分に変化はなかったよ」
《じゃあ、ペルソナや影時間に適合し過ぎて、普段から召喚状態と同じようになってる訳じゃないのか？》
「湊の身体には触れてみたかい？　普通に指が肌に沈んだりしたなら、召喚状態にはなってないよ。影時間外に召喚状態になれば、適性を持ってない人間が触れば少し抵抗を感じるはずだから」
影時間外にペルソナを召喚すれば、影時間には及ばぬものの適性による付与効果は得られる。
その状態で適性も持たない者が召喚者に触れると、何かの膜が張られているような抵抗を覚え、例え相手が赤ん坊であっても若干の固さを感じるのだ。
イリスが湊によくスキンシップを取っていることを聞いていた栗原は、相手が湊に触れていない訳がないと思い。そのときの感触について尋ねると、イリスは思い出しているのか少し間を置いて答えた。

《んー、別に普通だったな。筋肉の固さはあるけど、顔とかは張りと弾力のあるモチ肌だ。素直に羨ましいってか妬ましいことに》
「……まぁ、女でもあるらしいからね。そこはしょうがないとしようじゃないか。けど、柔らかかったなら、常時召喚状態の線は消えた。湊は本当にペルソナを使っていないってことだ」
肉体が変化して常時召喚状態なら、月の満ち欠けで強弱は付くだろうが、そもそもオンオフが効く筈もないので、イリスがモチ肌の柔らかさを堪能したのであれば可能性はないと断言出来た。
もしもの可能性も考慮していたが、イリスの言葉で可能性が潰えたことに栗原も内心で安堵する。
精神に異常を抱えている湊を癒せるのは人の温もりだけだ。普通なら時間もそれに一役買うところだが、時間の経過は湊の怒りと憎しみをより濃くさせるだけなので、ここでは何の役にも立たない。
そのため、肉体的な接触という最も温もりを感じ易いことが出来るのなら、まだ湊を自分たちと同じ人間側に繋ぎ止めておけるだろうと安心していたのだった。
だが、そんな風に考えていた栗原の耳に気になる言葉が入ってくる。
《専門家じゃないアタシには、もう訳が分からないな。だって服にも穴が開いてないんだぞ？》
「……服にも穴が開いてない？」
《ああ。瞳の色も一時的に鈍い金色に変わってたし、ペルソナ以外に考えられなかったんだが、違うとなるとやっぱり名切り関係なのかねぇ》
お手上げだとばかりに気の抜けたイリスの声が聞こえてくるが、それとは対照的に受話器を握る栗原の手には力が籠もっていた。
服にも穴が開いていない。確かにそれは、ペルソナを呼び出したときのように、身体全体が適性の付与効果で守られている状態に間違いない。
そして、その後に続いた瞳の色が〝鈍い金色〟に変わっていたというのが真実なら、栗原にはたった一つだけ思い当たる節があった。

だが、その予想が外れて欲しいと願う栗原は、静かに再度確認を取る。
「……イリスさん、あんたは確かに湊の瞳が別の金色になってるのを見たんだね？」
《ん？　ああ、普段がキラキラした光沢のある輝く金色なら、あのときは濁ったっていうかくすんだ暗い金色だったな。けど、何か心当たりがあるのか？》
相手も栗原の声の様子で深刻な話だと感づいたらしい。
出来る事なら見間違いであって欲しかったが、イリスがそんな状況の湊の様子に関して見間違うはずもないので、栗原は深く息を吐いて答えた。
「はぁ……あいつに何が起きたのか、だったね。他に報告事例がないからこれはあくまで私の推測に過ぎない。けど、ほぼ正解だと思って貰っていい」
《ああ、話してくれ》
先に相手にも聞く準備をして貰うために栗原は間を置く。
これは誰が悪いわけでもなく、湊の適性があまりに高過ぎたことで起きてしまった事故だ。
「あいつはね。桐条が研究で使っていた調整個体のシャドウと同じように自分の周囲に影時間を展開したんだ。けど、シャドウが影時間を展開出来るのは、ヤツらが影時間の住人だからさ。ペルソナも同じで、向こうの存在だからそれが出来るに過ぎない」
湊があの満月の夜にしたこと、それは調整個体のシャドウと同じ、自分の周囲に影時間を展開するというものだった。
影時間のペルソナ使いたちは、その適性値によって付与効果の質に違いはあるものの、身体能力を含めたパラメータが飛躍的に上昇する。
さらに、シャドウに一般人の攻撃が通じないように、影時間の適性を持たない者の攻撃は通じなくなるため、そんな力を得ることが出来れば、湊の仕事内容を考えれば非常に使える能力で良いこと尽くめである。

けれど、根本的な問題として、日常の存在である人間に影時間を展開出来るはずがない、というのが研究者の見解であった。
「ペルソナやシャドウが影時間に似た性質の空間を展開できるのは、こっちの世界で形を保ち存在するためだ。なら逆に、人があっちの世界で自分たち側の性質の空間を展開すればどうなる？」
《自分たちの姿形を保てるようになるから……それが象徴化しないってことか？》
そう。人間は日常の存在なので展開出来るのは日常の性質を持った空間だけ。
それが影時間に象徴化しないという事であり、ペルソナ使いらが付与効果を得られるのは、ペルソナを通じてあちらの世界の性質を僅かに取り込んでいるからだ。
シャドウを調整し、影時間に似た性質の空間を自分の周囲に展開出来るようにする、というのは人間で言えば人工的に適性を得るのと同じだと考えれば良い。
適性持ちもペルソナ使いも自分の意思で象徴化していない訳ではないので、調整個体のシャドウが影時間を展開するのも同じようにコントロールしている訳ではない。
だが、両者に共通する『自分たちの世界を展開する』という性質は変わっていなかった。
イリスと会話しながら、自分の中でも考えを纏めていた栗原は、改めて整理した情報を相手に理解出来るよう言葉を選んで話す。
「ああ、そうさ。人間は日常の存在だからね。影時間で象徴化しないってのがそれに当たるんだ。だけど、湊は人間でありながら影時間を展開した。これが湊に宿ってるデスの力なら構わないが、湊本人の力だと事態は深刻だよ」
《アイツの性質が向こう寄りになってるってことか？》
「ま、結論から言えばね」
影時間を展開していたとき、湊の瞳は鈍い金色になっていたというではないか。
湊の瞳は力の管理者と違いシャドウの力の表れだ。

シャドウらの母たる存在、ニュクスの身体である月の表面が薄く剥がれ地球に落着した物。それが黄昏の羽根であり、湊は結合した黄昏の羽根〝エールクロイツ〟を心臓を包む様に内蔵することで現在の瞳の色に変化した。

そのシャドウに近付いたことを表す瞳が、さらに次の段階に進んだというのなら、湊は間違いなくシャドウたち影時間の存在寄りになっている。

イリスの話しでは元に戻ったらしいので、とりあえずは安心だが、今後さらに進行する可能性を考慮すれば、何も対策を考えない訳にはいかない。

手元のメモ用紙にペンを走らせながら、栗原はイリスに何点か注意事項を告げた。

「イリスさん、湊が戻ってきたら今から言うことを確認しておいとくれ」

《……よし、いいぞ。言ってくれ》

向こうもメモの用意を済ませたのか、イリスはハッキリと答えた。

相手に準備が出来たのなら、栗原もなるべく確認は早い方が良いと思っているので、簡潔に伝えてゆく。

「まず、本当にそれが影時間の展開だったのかを聞いて欲しい。黙秘するなら少し可哀想だが、桜さんやチドリにも話すと言えば答えるだろう」

《……嫌な役だな。まぁ、アイツのためだししょうがないか。それで、次は？》

「影時間の展開をコントロール出来るかどうか。はっきり言えば、私としてはこっちの方が重要だと思ってる。なんせ、私らも調整されたシャドウも展開をコントロール出来ないからね。出来るのなら、湊は自分で人間とシャドウの間を行き来してることになるんだよ」

湊はタナトスでペルソナとシャドウの間の行き来を成功させている。

無論、本来ならそれも出来ないことなのだが、そんな事が可能な湊ならば、さらに踏み込んで自身の性質変化も可能な気がしていた。

そして、影時間の展開をコントロール出来る。つまり、自分の性質変化が可能という話しになれば、栗原はすぐに湊を日本に戻し、精密な検査を受けさせた上で幽閉すべきだと思った。
「もし、湊がコントロール出来ると答えたら、こっちに検査に戻るように伝えて欲しい。湊は既に桐条の測定限界ギリギリの数値に達しているんだ。私もそれと同等の測定器を所持してるが、測定限界ってのは人間が超えちゃいけないラインでもある。仮にそれを超えたら、そいつがどうなるか分からないんだよ」
《け、けど、小狼はデスってヤツを内包してるんだろ？　その分が上乗せされて実数値は平均だって可能性も……》
「関係ないね。ただでさえ高い数値なのに、あいつは半年で跳ね上がったこともある。ホテルの駐車場を崩落させたペルソナの件も有耶無耶になっているし。能力が暴走する危険性を考えれば、副作用は強くても制御剤を投与して施設に隔離しといた方が安全だ」
勿論、栗原とて本心からそんな事をしたい訳じゃない。
飛騨の遺した研究データが真実ならば、制御剤を投与することで湊はさらに寿命を縮めることになる。
最初期の時点で二十歳前後と言われていたので、今存在する制御剤を使えば二、三年は短くなると見ていい。
事態が動くのは２００９年、副作用でさらに寿命の減った湊が活動できる状態かは、実に微妙なところだろう。
しかし、核兵器に匹敵する危険を孕んだ存在が、完全にシャドウ側になってしまうくらいなら、世界のためにも湊の人としての機能を全て奪った方がマシだと栗原は判断したのだった。
「イリスさんや桜さんには悪いけど、私は湊個人の幸せよりも世界を取る。あいつもチドリのために世界を存続させようと戦ってるんだ。説明すれば、そこら辺は受け入れてくれるだろう」
《……アイツの幸せを奪う話しだって聞いて、アタシがそれを素直に伝えると思ってんのか？》
「思ってるよ。湊の今後を左右する重要な話だからね」
《クソッたれっ。元々、アンタらが蒔いた種だろうが！　目の前で両

親が死んだばっかの子どもに戦いを強要して、アイツに全部押し付けておいて、まだ背負わせようってのかッ!?》
淡々と残酷なことを口にした栗原に対し、イリスが声を荒げて激昂するのはもっともだ。
現在、世界が表面的にでも平和を存続していられるのは、あの七年前のポートアイランド・インパクトで、岳羽詠一朗・七式アイギス・百鬼八雲の三名が必死に立ち回ったからである。
自分の身を呈して実験中断を実行し世界に猶予を作った岳羽、大破寸前の状態でデスを封印してみせたアイギス、そのアイギスの戦闘をサポートしてデスを封じる器となった八雲。
この内、誰かが一人でも欠けていれば世界は滅亡していたに違いない。
桐条鴻悦の実験の果てに起こる事態を理解した者ならば、地面に頭を擦りつけて感謝しても良いくらいだ。
だというのに、今もまだシャドウ討伐によって無気力症の拡大を防いでいる湊を、栗原は危険だから鎖に繋いで檻にいれると言ったのである。
イリスとて、湊の力が暴走した場合の危険性を理解していない訳ではないが、流石に影時間を作る原因の一端を担った者が、被害者であり恩人でもある相手に対して、そんな事を口にするのは許せなかった。
声に怒気を孕んだまま、イリスは責める口調でさらに続ける。
《アイツの持ってる力が危険だってのはアタシも分かってるさ。けどな、子ども一人に押し付けてまで、自分が助かろうとは思わない。そうしなけりゃ滅ぶってんなら、そんな世界は滅べばいいんだ》
「……ま、それはね。あの年の世界人口は約六十億人。けど、湊が救ったのは人間だけじゃなく、地球上に存在する全ての生命体だ。歴史上の英雄と比較しても規模が違い過ぎる。まさに救世主様だ。私もそんな相手を幽閉したくはない」
ニュクスの到来は地球上の全生命体の死を意味する。それを防いだとなれば、まさに世界を救ったと言える存在だ。

かつての想い人が可愛がっていただけでなく、死んだ同僚からもよろしく頼むと託された子どもを、栗原だってデスの器としてだけ生かし続けるようなことはしたくない。
そう考えていることが相手にも伝わったのか、冷静さを取り戻したイリスが尋ねかけてきた。
《なら、もっとマシな方法はないのか？》
「あるよ。ようは、桐条の弾き出した〝１００００００ｓｐ〟っていう測定限界が大して重要じゃないって分かればいいんだ。上限はもっと上で、十万どころか百万だって達し得るってんなら、安心してもっと強くなれって言える」
《そんなのどうやって調べるんだよ？》
「そりゃ、専門家に聞くんだよ。イリスさんも会っただろ。あの青い服を着た三人組に」
栗原の言葉が想像の斜め上をいっていたのか、電話の向こうで息をのむ音が聞こえた。
それには相手を試す意味も込めて勿体ぶっていた栗原も、少しばかり楽しくなって笑みを漏らす。
そう、栗原は最初から湊を幽閉するのは最終手段だと考えていたのだ。その前に試すことや調べることがいくつもある。
中でも、桐条の研究者たちが設定した測定限界の数値が、本当に人として超えてはならないラインなのかという情報は、湊の成長速度を踏まえれば直ぐに知っておかなければならなかった。
故に、栗原は自分たちでは分からないのなら、それを知っている者に教えて貰おうと、極めて簡単な解決法を提示したのだった。
「湊ならあの三人といつでもコンタクトが取れる筈だ。だから、湊にさっきメモした内容を尋ねたら、そのままあの三人と連絡を取って、適性の上限について訊く様に言って欲しい」
《分かった。んじゃ、そろそろ帰ってくる頃だから、また答えが分かったら連絡するよ》
「ああ、それじゃあね」
電話が切れると栗原は張っていた力が抜けたように、深く息を吐き

ながら椅子の背もたれに体重を預けた。
栗原の読みでは、上限は十万よりも遥かに上だと思っている。けれど、それが人が超えて良いラインかどうかは判断しかねていた。
湊は結合した黄昏の羽根を内蔵しているので、通常よりも上限はあがっているだろう。チドリもほとんど実戦を経験せずに、そこそこ強くなってきているため、成長速度にもブーストが掛かっているはずだ。
ならば、湊が桐条の算出した測定上限を超えるのはしょうがない。
仮に危険だと判断されれば、それはそのときに考えれば良いので、無駄に心配する必要はないと、栗原は湊たちからの連絡を待つことにしたのだった。

――ベルベットルーム
湊が初めて訪れた日より今なお上昇を続ける青い部屋、ベルベットルーム。
買い物を終えて宿に戻った湊は、イリスからあの満月の日に起きた事の詳細を尋ねられ、チドリと桜へ伝えない事を条件に質問に答えた。
栗原が考え、イリスによって伝えられた質問の内容は大きく分けて二つ。
一つ目は、あれは本当に自分の周囲に影時間と同質の空間を展開したのか。
その質問に対する湊の答えは、イエス。
力の元となった要因が黄昏の羽根だったため、栗原の予想とは異なっていたが、湊は胸に内蔵したエールクロイツに自分の力を注ぐことで、同調性を高めてシャドウの力を得ていた。
黄昏の羽根はシャドウの母たる存在、ニュクスの身体の一部。ならば、パスが繋がっている状態であれば、湊でなくとも部分的に力を得ることは可能であった。
そして、二つ目の質問、影時間の展開を自分の意思でコントロールする事が出来るか。

そちらの質問に対する湊の答えは、またしてもイエスだった。
影時間の展開は、一度エールクロイツに自分の精神エネルギーを注ぎ、エールクロイツの機能を呼び起こす必要がある。
さらに、そこからエールクロイツを基点として、どこまでの範囲に影時間を展開するかを設定し。展開と維持にペルソナ召喚よりも遥かに大量のエネルギーを消費し続けなければならない。
湊は探知型の能力を持ったカグヤを所持していたため、能力の応用で細かい範囲設定が可能でエネルギー消費を最小限に抑えられたが、それがなければ展開範囲を指定出来ず、街一つを呑みこむような巨大な影時間のドームを生成していたかもしれないと話した。
そんな規模の影時間を発生させていれば、いくら莫大な量のエネルギーを所持している湊でも十五分も維持出来ずに力が枯渇する。
疲弊した状態でも、湊ならば殺し屋の兄弟を片付けることは出来ただろうが、腕と足を負傷していたイリスが戦闘後に倒れた湊を介抱出来る訳もなかったので、今回全てが丸く収まったのは実に幸運だったと言えるだろう。
そうして、湊の身に起こった変化について、とりあえずの説明は終えると、その後、イリスからベルベットルームの住人らに、適性値の上限や危険度について聞いてこいと湊は追い出されてしまった。
ちゃんと詳しく聞いてくるまで帰ってくるな。という、何とも子どものお遣いのような話しだが、湊本人も適性値については少し気になっていたので、良い機会だとベルベットルームを訪れイゴールの向かいの席に腰を下ろした。
血走りギョロリとした瞳で見つめてくる部屋の主と視線を合わせ、従者ら三人の視線が集まっていることも感じつつ湊は口を開く。
「……適性の上限について教えて欲しい。桐条の算出した〝１０００００ｓｐ〟というのは、人間の所持できる限界量なのか？」
「フッフッフ、そのような事実はございませんな。十万だろうと、百万だろうと、それはご自身の心の泉より湧き出た心の雫にございます。その方々がどのようなお考えで〝限界〟などと称したのかは分かりかねますが、〝ワイルド〟は無限の可能性を示すもの。お客人には到

底当てはまりますまい」
　自分の心の成長によって伸びる力に限界はない。ワイルドに目覚めているのなら、尚の事だとイゴールは告げた。
　それを聞いた湊は少し安心したように短く息を吐き。強張って鋭くなっていた目付きも、普段の無気力なやる気の感じられない物に戻った。
　イゴールは客のそんな様子が面白いのか、独特な笑い声を上げながら話しを続けてくる。
「ホホッ、確かにお客様には先ほど言った上限は当てはまりません。が、他の方の上限としては、中々に良い読みをお持ちかと」
「……ワイルドだから上限が違うのか？」
「いえ。適性値というのは、心の成長、心の変化、そして〝命〟または〝死〟を理解することで伸びるものなのです」
　上限など誰にも存在しないという、直前の言葉を撤回するような発言に、湊が眉を顰めて尋ね返すとイゴールは適性値についての説明を始めた。
　すると、話しが長くなると思ったのか、テオドアが湊の前に紅茶のカップを置いてきたので、湊は短く礼を言いつつ、イゴールの話しを静聴する。
「成長は経験を積めばどなたでもします。変化は何か切っ掛けがあれば起こるでしょう。ですが、命と死を理解するのはどうにも難しい。人の生き死にと関わる者でも、自分自身のそれらを理解するのは至難の業です」
「十万の壁を超えるには、自分の命か死を理解しないといけないのか？」
「完全に理解する必要はございません。しかし、触れなければ超えられないのもまた事実。〝愚者〟から〝刑死者〟は生者のアルカナにございますからな。容易ではありますまい」
　生きている人間が死を理解することは出来ない。何故なら、誰も死を経験した事がないから。
　そして、近付くことは出来ても超えることは出来ない。超えてしま

えば、それはもう人間ではないだろう。
故に、ワイルド能力者を除くペルソナ使いとシャドウらは、死を表す〝死神〟の直前、生者を表す〝愚者〟から〝刑死者〟までのアルカナにしか目覚めないのだ。
もっとも、湊は既にワイルドに目覚めた上に、死を理解も経験もしている。
そんな状態なら、イゴールのいう条件はとっくにクリアーしていることになるため、存分に適性を高めてゆく事が出来るだろう。
知りたかった適性値に関する事実が分かれば、もうここで訊くことはない。用事を終えた湊が帰るために席を立とうとしたとき、今まで黙っていたエリザベスが口を開いてきた。
「八雲様が望むのであれば、適性値を計測するアプリケーションをＥデヴァイスに追加いたしましょうか？」
「……あるのか？」
「はい。対象をアナライズする際に起動していただければ、対象のアナライズ情報と共に適性値が表示されます。ただし、表示されるのはアナライズ時点での適性値ですので、それまでに消費していてもＭＡＸならば幾らかという数値しか出ませんのでご注意を」
言いながらエリザベスは湊の隣に移動し、湊が左腕に付けている黒いリストバンドをＥデヴァイス状態にして操作を始めた。
彼女も自分のペルソナ全書からＣＯＭＰを取り出し、二つをケーブルで繋いで少しすると、画面には『アプリケーションの追加が完了しました！』とジャックフロストのイラストと共に表示される。
たったこれだけで、今までのようにアナライズすれば相手の適性値やらが分かるのは非常に便利だ。
もっとも、表示されるのはアナライズ時点での適性値なので、本来５０００ｓｐの人間ならば、残量が４０００ｓｐでも５０００ｓｐとしか表示されないようだが、湊にとっては最大値が誰と比べ劣っているかという方が重要なので、細かい点はさして気にならなかった。
そうして、新しい機能を追加して貰った湊は、ＣＯＭＰとケーブルを片付けているエリザベスに礼を言って立ち上がる。

「ありがとう。試しに使ってみても良いか？」
「私共に対して、という意味でしたら表示されませんが？」
どう表示されるか見てみたかった湊が尋ねると、エリザベスはペルソナ全書を抱え直して涼しい顔で告げた。
しかし、自分たちの情報だけ表示されないように設定するなど悪質だ。そんな責めるような視線を向けて、湊はさらに言葉を返す。
「情報秘匿か？」
「蟻に象の全貌は分からない、という事でございます。八雲様がお強くなられれば、いずれは表示されるでしょう」
表示されないよう設定している訳ではなく、強さに差があるから計測出来ない。エリザベスはそう言って妖艶な笑みを浮かべる。
確かに、探査とアナライズは本人の知覚や知識、情報処理能力に大きく依存するため、その本人が相手の強さを測り知れないと思っていれば、機械に情報を送信しても不明だと表示されるだろう。
湊が強いといっても、それは人間の中での話であり、力の管理者が相手ではまだ訓練で勝てた事は一度もない。
蛇神を使えば勝てるような事を言われたこともあるが、湊はその蛇神が自分のどこにいるのかも分かっていなかった。
デスとの戦い後にベルベットルームへ来たときには、湊は自分の中にタナトスが目覚めていることは感じられていた。
よって、召喚したことがなくとも、目覚めてさえいれば感知出来る筈なので、それが出来ないということは、何かの力が働いて呼び出せないのだろう。
そんな物を頼りにして、自分は本当は勝てるだけの力を持っているのだと負け惜しみを言うつもりはないため、まだ勝てないのなら最低でも背中が見えるところまで強くなろうと湊は思った。
「……戦いが終わるまでには、〝そこ〟に行くから」
「ええ、そのときをお待ちしております」
恭しく頭を下げ、礼をしてエリザベスが答える。
そして、他の住人たちにも視線を送ると、湊は自分の通ってきた扉から現実世界へと帰っていった。

ぱたん、と静かに扉が閉まる音がベルベットルームに響く。
すると、今まで静かに控えていたテオドアは空になった紅茶のカップを片付けながら、姉たちの方へと向き直り、本人がいたことで尋ねる事の出来なかった話題を口にする。
「八雲様が以前召喚された蛇神のペルソナですが、私の目測では召喚に３０００００ｓｐは必要だと思いました。通常、ペルソナは適性レベルに応じて呼び出せるかが決まりますから、八雲様の適性値が１０８０００ｓｐしかないというのは、俄かには信じ難いのですが」
湊が今日やってきた際、話題が適性値だったこともあり、丁度良いからとテオドアも湊の適性値を計測していた。
その結果は、桐条の測定限界を超えた『１０８０００ｓｐ』。
力の管理者から見れば、自分たちの一割にも届かないレベルだが、この短期間でまた一万も増やしたというのは、人間でみれば恐ろしい成長速度だ。
けれど、それでも蛇神を召喚する適性レベルには遠く及ばない。
以前、ここに来た最初の日の時点で、湊は適性レベルを超えているタナトスを使役していたが、タナトスの適性レベルは６４、適性レベル１が適性値１０００ｓｐに相当するため、現在の湊ならば完全に使役することが可能だ。
しかし、今度の蛇神は規模が違う。あの中途半端な頭部の顕現だけで感じた印象が、先ほどテオドアが口にした三十万という数値であり、全身の顕現となると想像も出来ない。
眉根を寄せてそんな風に尋ねてきた弟の言い分も理解出来るため、質問を受けた者の中からマーガレットが代表して答える。
「適性レベル１が適性値１０００ｓｐに相当すると言っても、召喚にそれだけのエネルギーを消費する訳ではないわ。心の欠片を御するために必要な実力の目安がそうというだけでね。だから、伸び代として見るのであれば、仮にあの蛇神の適性レベルが３００を越えていようと、召喚自体は出来てもおかしくないわ」
ペルソナを呼び出す際の適性値の消費量は、何もペルソナの適性レベルに応じた数値という訳ではない。

適性レベルはあくまで、それだけの力を持っていなければペルソナを制御出来ない、と言われている最低ラインなだけだ。
その証拠として、ワイルド能力者らのペルソナは、合体で生み出される際にコミュニティの力を得て召喚者以上のレベルになることもあるが、一回の召喚でエネルギーが枯渇するということは起こっていない。
姉から説明を受けたテオドアも、その点に関しては知っていたため、一応の理解は見せるが、それでも伸び代があると言われたところで納得など出来なかった。
「確かに召喚コストの問題はどうとでもなるかもしれません。ですが、八雲様がそれだけの適性値に達すると本当に御思いで？　あの方が力に目覚めてから約七年です。肉体も成熟しつつありますし、伸び代もあまり残っていないように私には思えます」
「……逆に訊きますが、貴方は八雲様の眼についてどういう認識を持っているのですか？」
「眼というと……魔眼のことですか？　別に、死を他者より認識出来るくらいのものでしょう。ハゲタカやハイエナなど、野生動物が持っている他者の死に敏感な力の延長だと思っていますが？」
湊の伸び代について語った自分へ、姉のエリザベスが全く異なる質問をぶつけてきたことにテオドアは僅かに驚いて見せる。
しかし、すぐに平静を取り戻し、確かに変わった能力だが、自然界ならば珍しくもないだろうと薄く笑って返した。
弟のそんな軽い態度が苛ついたのか、エリザベスはブーツの踵でテオドアの靴の爪先を踏みつける。
「うぐっ!?」
そうして、相手が激痛に苦しんでいるのを見ながら呆れたように言葉を続けた。
「はぁ……貴方は本当に無知で愚かですね。あの瞳が捉えているのは死と言う概念そのものです。生命の終焉ではないため、生物に限るといった対象を選びません。そして、概念的な死を与えられる訳ですから、当然、切られれば回復や修復も出来なくなるわけです」

「なっ!? 破壊対象を選ばない上に相手は治せないなど、最強の攻撃ではないですか」
「でも、それはちゃんと『死』を理解していないと出来ないの。まぁ、視て〝それ〟が何か分からないとやりようがないのだから、当然よね。死ぬ直前の瀕死状態にデス(死)を内包したことで覚醒したんでしょうけど。結論を言えば、あの子は既に死を完全に理解しているのよ」
直死の魔眼において重要なのは、眼ではなく『死』を理解する脳の方だ。
死を概念として理解出来るから、湊は対象へ存在の死を与えることが出来る。
もし仮に、湊が一度も瀕死にならず、さらにデスも内包していなければ、死を理解することもなかったので、眼は別の能力を宿していたことだろう。
改めて湊自身の能力について説明を受けたテオドアは、かなりの驚きと共に、新たに浮かんだ疑問について姉に再度尋ねた。
「では、八雲様は死を理解しておられるのに、たったこれだけの適性値しか持っておられないのですか?」
「だから、エリザベスはそれを貴方に教えようとしていたんじゃない。死を完全に理解して十万なんて数値はあり得ないって。少なくとも完全体のデスと同等の適性を持てるだけの素質はあるのよ。まだそれがほとんど目覚めてないだけでね」
あまりの弟の無知さに、マーガレットもエリザベスと同じように呆れた様子で嘆息した。
確かにコミュニティは築いているものの、テオドアだけ湊の担当ではないので、客人に対する理解は不足していたかもしれない。
だが流石に、ここまでイレギュラーな存在を、その辺の野生動物より優れた能力を持った人間という認識でいたことが姉たちには信じられなかった。
次に客人が来れば、その担当となるのは、姉から仰せつかった雑務をこなすだけで暇をしているテオドアだ。
しかし、このままでは客人のサポートがしっかり出来るか不安なた

め、これを機に、力の管理者としての心得を弟に教育をしていこうと二人の姉は固く決意したのだった。

第七十二話　休日の過ごし方

7月5日（水）
早朝――カニス・近郊の森
冷たい朝の空気の中、白い息をゆっくり吐きながら湊は森で佇んでいた。
風に揺れる木々の葉が擦れる音や、鳥たちのさえずりだけが聞こえる、人々の営みからは隔絶された空間。
そんな場所に湊がやってきたのは、自分の力を他人に見せたくないからだ。
人から見られたくないのであれば、影時間に活動した方が簡単だろうが、ペルソナ使いは影時間に身体能力へ適性に応じた補整が付与されてしまう。
普段の身体能力でどこまでやれるかを知ろうとしている湊には、その補整が今は邪魔だった。
周囲に獣たちの気配以外が存在しないことを確認すると、〝魔術師〟のカードを手の上に出し、湊はそれを握り砕いた。
「こい、出雲阿国（イズモノオクニ）ッ」
湊の呼び声と共に現れたのは、腰の帯に刀を差し、神楽舞の衣装のような豪華な巫女服を着た、黒髪の少女にしか見えないペルソナ、魔術師〝出雲阿国〟。
あの満月の日、湊はシャドウの力と共にこの新しいペルソナも手に入れていた。
「出雲阿国、マハジオで俺を狙え」
《フフッ、本気で当てに行くよ？》
出雲阿国は左手に持った扇を広げ、悪戯っぽい笑みを浮かべる。
彼女もまた、座敷童子と同じように自分の自我を持って生まれたペルソナだった。
可能性の芽で手に入れたペルソナたちは、他の者のペルソナのように自我を持っていない。
だというのに、合体事故で生まれた座敷童子、ナイフに宿った怨霊

から生まれたジャック・ザ・リッパー、その二人に続けて、ついに自らの内より目覚めたペルソナからも自我を持つ者が現れた。
その異常事態に、湊は自分の精神が本気で分裂しているのではないかと危惧し始めていたが、顔合わせで呼び出した自我持ちのペルソナたちは仲が良さそうだったので、問題が起こるまでは別に気にしなくてもいいかと様子を見ることにした。
《いくよー、マハジオンガッ!!》
「――――ッ」
殺る気満々の強気な瞳で扇を煽ぎ、出雲阿国は広範囲に強力な電撃を飛ばした。
周囲への影響も考えて弱い魔法をお願いしたのだが、予定が狂っても静かに心を落ち着け、鈍い輝きをした金色の瞳を開くと、湊はその場に残像を残して消える。
迫りくる電撃を躱し、さらに続けて、木々の間を走り抜け、時には木の幹を駆けのぼるなど、並みの人間では目で追い切れない速度での移動を続けている。
《まだまだぁっ!!》
けれど、相手は人間ではなくペルソナだ。湊の動きを目で追い、先を読んで追加の魔法をお見舞いする。
湊はそれも躱し、時にマフラーで打ち払って、火事にならないよう注意しながら、出雲阿国の攻撃を全て避けきった。
通常、影時間の補整を受けて身体能力の上がった状態ですら、このような速さで駆けることは出来ないはずだが、背の高い木のてっぺんから落下して着地した湊は、特に息を乱した様子もなく、静かに落ち着いた呼吸をしていた。
(……身体への負担は殆どないな。エネルギー消費は激しいが、影時間の展開よりは余程楽だ)
先ほどの湊の人間を超えた移動速度。その秘密は湊に目覚めたシャドウの力の利用法にあった。
シャドウはペルソナと同じ、人の心が形を持って抜け出た存在である。桐条の研究によれば、その力は時空間に干渉する可能性を秘めて

いるという。
美鶴の祖父である桐条鴻悦が研究していたのも、シャドウの持つ時空間に干渉する能力を利用して、『時を操る神器』を手に入れようとしたためだ。
けれど、桐条鴻悦はそれを手に入れられないどころか、滅びに魅入られ世界を破滅に導こうとした。そのような弱い心しか持たぬ人間に、心の化生たるシャドウの力を扱える筈がないというのに。
湊がシャドウと同じ力を使うことが出来たのは、何もシャドウの王を内包し、シャドウらの母なる存在の身体の一部を宿していることだけが理由ではない。
二度目の召喚に高同調状態でペルソナを呼び出すなど、通常では考えられないレベルで湊は影時間やペルソナに対して高い親和性を持っている。
それこそが、影時間に関わる数多の事柄の核心に近付くための才能であり、ペルソナやシャドウの力を十全に使いこなすための鍵であった。
(時空間に干渉するというシャドウの力。空間への干渉は影時間の展開。時間への干渉は自己や周囲の時流操作か)
そして、シャドウの力を自分も使えると知った湊は、影時間の展開だけでなく、時間への干渉を試みた。
出来る事なら過去へと跳び。あの七年前の忌まわしい事故を未然に防ぎたいとも思ったが、そもそも過去に跳ぶ方法など不明な上に、既に起こった事象への干渉として、時間だけでなく空間も同時に移動することになってしまう時間跳躍は、湊とエールクロイツだけの力では不可能だとベルベットルームの住人にも言われた。
だが、それだけで諦める湊ではなく。さらに研究を進めることで、影時間の展開と同様にエールクロイツを基点として、時の進みを外界と変化させることが出来ると判明した。
先ほどの湊の高速移動もその応用であり、自分の時間の流れを周囲よりも速くすることで、まるで一人だけビデオの早送りのように倍速になって見えていたのである。

他には自分のいる室内の時の進みを遅らせることで、部屋の中では三時間経っているのに、外界では一時間しか経過していないなどと言った使い方も出来る。
もっとも、自身の時を加減速するのと違い、空間内の時流操作は影時間展開以上の力を消耗してしまう。
さらに、この力もペルソナ能力の派生のようなものなので、仕事で補助以外にペルソナを使わないと決めている湊は、シャドウの時空間への干渉能力を、他者の命を助けるとき以外は使わないと既に決めていた。
桐条鴻悦の求めた『時を操る神器』の簡易版だ。人の身には過ぎた力である事は間違いなく、非常に勿体ないことなのは本人も分かっている。
けれど、自分の力でチドリとアイギスを助けられるようにするのであれば、相手が一般人なら異能を使わずに勝利して当然だと湊は考えていた。
そんな考えと救える命は救いたいという思いの妥協点が、他者の命を助ける場合のみ、という条件下でのシャドウの能力使用であり。それでも、ペルソナは使わないというのが、湊の仕事に対するけじめであった。
《てーいっ！》
（……ペルソナとの同調率も徐々に上げられるようになってきている。完全同調が出来れば、影時間にはペルソナの身体で戦えるようになるだろう）
考え事をしている湊に向けて強力な電撃が放たれる。
しかし、それは自分の腕に重なるようタナトスの腕を顕現させ、真横に伸ばして広げられた掌に防がれた。
攻撃を防がれた相手は落ち込んでいるようだが、湊は全く気にせずタナトスの拳を握ると傍に生えている木を殴りつける。
体重を乗せていないにも関わらず、ペルソナの力が上乗せされた拳は容易く生木の幹を圧し折り、大きな音をたててそれを倒した。
シャドウの力だけでなく、ペルソナの力も完全に使えるよう湊は密

かに研究している。
完全同調とは、高同調状態のさらにその先、湊が完全にペルソナと一体化してしまう召喚方法だ。
出雲阿国を含めた自我を持っているペルソナたちとは、湊と彼女らの自我がぶつかり合ってしまい出来ないだろうと思っている。
だが、『我は汝、汝は我』そう言いながら現れた以上、他のペルソナと自分は元々一つの存在の筈なのだ。
完全に同調した状態の湊がどうなるかは不明だが、それでも自分の身体としてペルソナを操ることが出来れば、自分の持ち得る力の全てを注いで戦える。
思考のラグも存在せず、細かな力の加減も可能。水中や炎の中でも問題なく活動できるかもしれない。
２００９年に始まる戦いは、何が起こるか分からない。故に、己に出来ることは何でも試して備えようと、他の者に気付かれぬよう気を配りながら、湊は無人の森の中でペルソナと共に鍛錬を続けた。

＊＊＊

鍛錬が終わると、湊はそのまま街へと戻り、自分たちが拠点にしている宿に戻ってきた。
イリスがバルツァーギ兄弟との戦闘で負傷したため、最近は湊が単独で仕事をしていたが、一月ほど経ったことで回復したイリスもそろそろ復帰する予定である。
復帰直後は調子の確認もあるので、戦闘になりそうな仕事は受けられないだろうが、別に危険な仕事ばかりという訳でもないため、しっかり選べば特に問題はないだろう。
そうして、酒場になっている一階を通り過ぎ、階段で二階に上がって湊は自分たちの部屋の扉を開いた。
「ん？　おお、おかえり。動けたか？」
「……それなりに」
湊が部屋に入ったところで、ソファーの前にあるテーブルで作業をしていたイリスが顔を上げ笑って迎えてくる。

それに湊は洗面台で手を洗いながら返し、タオルで手の水を拭きとってからソファーに向かうとイリスの隣に腰を下ろした。
「……占ってたのか」
テーブルの上に広げられたタロットカードを見て湊が尋ねる。
ペルソナ召喚に使っているカードとは絵柄も年季も異なる、少しばかり古臭いアンティークなマルセイユ版タロットの完品デッキ。
現在、世界で普及しているウェイト版やライダー版と呼ばれる物の元となったものであり、それらとの大きな違いは『正義』と『剛毅』のアルカナの順番だ。
マルセイユ版はペルソナと同じように八番に『正義』が、十一番に『剛毅』が来ているが、新しく作られたウェイト版たちは、アルカナを十二宮の星座と関連付けるために順番を変えている。
また他にも、マルセイユ版の『愚者』は番号がないか二十二番だったが、ウェイト版では零番が振られているなど、細かい点の違いはいくつもある。
今の世界で広く使われているのはウェイト版の方だが、占い方法や読み取り方が異なるだけで、別にどちらが優れているということはない。
実際、イリスは主にテーブルに広げられているデッキを使って占いをするが、他にもウェイト版のデッキを二つ持っており、そちらの占い方法も知っているので占う事は出来る。
湊もどちらの占い方法もイリスから習っていたが、占いはあまり信じないのかデッキすら持っていなかった。
一応、マーガレットの依頼でアンティークなタロットカードを所望されているが、興味のない物を手に入れるのは後回しにする性格のせいで、その依頼は達成までまだまだ掛かりそうだ。
そうして、湊がテーブルのカードから結果を読み取っていると、他のカードを片付けていたイリスが湊に話しかけてくる。
「朝食を食べたら買い物に行こうか。今日は良い縁があるって占いに出てたからな。小猫の誕生日プレゼントを近々買うって言ってたし。良いのが見つかるかもしれないぞ」

「……占いなんて受け取り方次第だろうに」
「あ、オマエ馬鹿にしてるだろ。占いってのは物事の流れを読み取る学問でもあるんだから、別に完全なオカルトじゃないんだって。第一、アタシなんかよりアンタの方がこれで食っていけるくらい才能あるんだぞ」
完全にカードを片付け終えたイリスは、呆れた顔をしている湊の頭を撫でて立ち上がり、デッキをケースにしまって旅行鞄に仕舞いに行く。
それを目で追っている湊は、イリスに言われた占いで食べていく才能とやらをまるで信じていなかった。
仕事で櫛真智命（クシマチノミコト）の名義で占い師を演じることもあったため、タロット以外にも四柱推命やら西洋占星術など、複数の占い方法は学んでおり、それらしく誰かを占ってやることも出来る。
けれど、湊は本人の性格もあって、占い師に扮している際に一般人から占いを依頼されると、かなり無情な結果の告げ方をする。
例えば、カップルが自分たちの相性と今後について占って欲しいと言ってきたときには、男が浮気をしていると出たと告げ。女にいま直ぐに別れた方が賢明だと言った。
また、不幸続きで悩み相談のような形で現れた四十歳手前の男性に、いつ頃になったら運気が好転するか尋ねられると、同じ生活を続ける限り、現状のまま好転する事はないとばっさり言い切った。
当然、そんな事を言われた客たちは怒ってくる。二度と来てやるものかと言い、信じないなら金はいらないという湊の言葉の通り、何も払わずに去って行った。
「オマエ、栗原の店で占いでも始めたらどうだ？　幸運グッズも一緒に売ったら儲かるぞ」
「……詐欺だろ、それ」
だが、長期の調査で数日後もまだ同じ場所で占い屋をしていると、以前のカップルの女の方が一人で現れた。
なんでも、湊の言葉が気になって彼氏が寝ている間に携帯を見てしまい。そこで本当に浮気をしていることが発覚して別れたらしい。

男の浮気相手は職場の既婚女性で、あのまま付き合っていれば不倫騒動に自分も巻き込まれていたかもしれないと礼まで言われた。

そして、中年男性も同じように後日またやってきて、本当に参ってしまいそうなので好転させる方法があれば教えて欲しいと懇願してきた。

結婚していて、二人の子どもの大学受験と高校受験が重なり、このままでは学費も払えず無理心中するしかなくなるかもしれない。

そんな風に言われても、湊にすれば他人事なので、ただ一言「……どうでもいい」と返したくなったけれど、騒がれても困るので、しょうがなく占って家電量販店の店員にでも転職したらどうかと勧めておいた。

元の仕事が食品加工業だったらしいので、随分と仕事内容が違っていることに相手は驚いていた。

だが、相手は藁にも縋る思いで湊を頼っていたことにより、仕事の合間を使って転職を検討していたらしい。

その結果、なんと転職が決まり、手取りが七万も上がって現在も順調に仕事を続けられ、子どもも無事に第一志望にそれぞれ合格したという。

占った側としては結果を読み取って告げているだけで、何もそれらしいアドバイスはしていない。

転職や進学が上手くいったのだって、本人たちの努力が実っただけだ。

故に、いくら礼を言われたところで、湊は自分に占いの才能があるとは感じていないし。占い自体を信じる気にもなれなかった。

「……食事にいくか」

「オマエ、本当によく食べるよな。満腹になったことあるのか？」

占いの話題に飽きた湊が朝食のために立ち上がると、イリスは薄手の上着を羽織って話しかけてきた。

普段、湊は周囲の人間が食べ終わるまで食べ続けているが、同じ食事時間でも食べる量は倍以上だ。

身長一六七センチに対し、体重は六八キロ。ボディマス指数（BMI）で見れ

ば標準体重ではあるのだが、筋肉達磨になっていないにしろ、やや筋肉を付け過ぎている感は否めない。
本人が大量の食事を必要としている理由は、その身体を維持するためなのかもしれないが、周囲の食事時間に合わせていて、いつもちゃんと満腹になっているのかイリスは疑問に思った。
裏の仕事での稼ぎがある湊に金の心配はない。ならば、空腹で辛い思いをさせては可哀想だからと、自分に食事時間を合わせる必要はないことを告げた。
「満腹になってないなら、アタシとかに合わせないで好きなだけ食べて良いんだぞ？　お腹空いたら辛いだろ？」
「……別に気にしたことない。ただ食べられるから食べてるだけだ」
「そ、そうか。オマエ、丈夫な胃袋してるんだな……」
限界知らずでただ食べ続けていただけという驚きの真実に、イリスは表情を強張らせてやや呆れてしまう。
けれど、相手がひもじい思いをしていないのならば良かったと思うことして。湊を連れて部屋を出ると、一階で朝食を摂って買い物のために出かけることにしたのだった。
＊＊＊
宿を出た二人は、湊が来月にあるチドリの誕生日プレゼントを買うために街を回っていた。
服や装飾品を欲しがるようなタイプではないため、相手が気に入る物となると中々に選ぶのが難しい。
小物入れや化粧品というのも考えたが、小物入れはともかく化粧品は肌に合う合わないがあるので、ちゃんと確かめた方が良いというイリスのアドバイスで却下された。
さらに探している途中である車のディーラーを発見し、ショーウィンドーに置かれていた『Ｋ１２００Ｓ』という美しいシルバーのバイクを、長距離の移動も疲れないという事から湊が現金一括で買ったりもしたが、結局、これと言った物が見つからなかったので、二人は弾薬の調達も兼ねて武器屋に移動していた。
「んじゃ、・４５ＡＣＰ弾と９ｍｍ×１９弾を二百ずつで。小狼は何

かいるか？」
「１２．７ｍｍ×９９弾を三百発」
「うぇ、対物用の弾なんてそんなに在庫あったかなぁ。てか、キミそんななりでバレット使うの？　駄目だよ、あんなの人に向かって撃っちゃ」
　店内を見て回っているとイリスが声をかけてきたので、湊は少なくなっていたバレットＭ８２Ａ１に使う弾薬を大量に購入すると告げる。
　それを聞いた眼鏡をかけた優男風の店員は、在庫リストを取り出し苦笑しながら準備を始めた。
　ここは裏の人間も利用する武器屋だ。男は五代と同じように地下協会の組合員でもあるので、二人が仕事で人を殺していても特に気にしたりはしない。
　それが分かっているので、湊も店内に置かれた銃をショーケース越しに眺めてゆっくりしている。
「あらら、えっと小狼君だったかな？　バレットの弾は二四〇発しか在庫ないみたいだ」
「なら、あるだけでいい」
　誰が使うのか分からないが、悪趣味な金色をしているコンバットマグナムや、可愛らしくデコレーションされたデリンジャーなど、本当に多様な銃が売られている。
　それを眺めていると男が申し訳なさそうに在庫不足を告げてきたため、イリスと男がいるカウンターまで行って、湊はある分だけでとりあえず構わないと返した。
「うん、ごめんね。必要だったら発注しておくから、まだ当分街にいるなら入荷次第連絡するよ」
「……わかった」
「じゃあ、二人の分を用意してくるから少し待っててね」
　言い終わるなり男は店の奥へと入って行った。
　数を用意するので時間はそれなりに掛かる。その間、二人は暇なので新しい銃を何か買おうかと、店内を再び見て回ることにした。

棚ごとに拳銃やショットガンなど、種類が分けられているので、自分が普段は使わない物でもとても見やすい状態で置かれている。
武器を取り扱う店の者にしては随分と優しそうな人物なので、商品の並べ方にも性格が出ているようだ。
そうして、ＧＬの装着されたＦ２０００を眺めていたイリスは、時間潰しの話題として湊の装備について質問をぶつけてくる。
「そういや、オマエってグレネードランチャーは使わないよな。なんか、こだわりでもあんのか？」
「……自分で手榴弾を投げた方が確実だし飛距離が出る。それ以前に、弾丸で各個撃破の方がスタイルとして合ってるから、そういう広範囲に影響が出るのはあまり使う気にならない」
「なるほどね。じゃあ、突撃銃やサブマシンガンでもあんま連射しないってのは、単純に連続戦闘のために装填数で選んでる訳か」
イリスの言葉に棚の商品を眺めていた湊は頷いて返す。
敵が大勢いるのなら、連射の利く武器で制圧射撃をした方が敵の排除は早く済む。
しかし、湊はそういった状況でもセミオートのまま、自分でいちいち引き金を引いて敵を撃っていた。
自分や仲間に被害が出ていないのであれば、そういった変則的な戦い方をしても構わないが、周囲への影響を考えて手間な方法を選択する辺りが実に湊らしかった。
話しを聞いて納得したイリスは、自分が見ていた商品から顔上げて、一際目立つようにディスプレイされたショーケースを眺めていた湊の元に進んだ。
「なーに見てんだ。欲しいのでもあったか？」
「……これ、珍しい」
「ん？　ああ、エングレーブの入った銃か」
ケースを眺める湊の視線の先には、金色の縁取りが為された、ホワイトシルバー色の装飾銃が飾られていた。
ボディ全体には植物の弦をイメージした模様が彫られ、パールグリップには青い薔薇のメダリオンが小さく填め込まれている。

スライドを含めたフレームの縁以外にも、トリガー、セーフティーレバー、マガジンキャッチなど小さなパーツが全て金色になっているため、それがよいアクセントとなって、銃全体の美しさをさらに引き上げていた。
銃器に信頼性と実用性しか求めない湊にとって、それ自体を一つの芸術品にするという発想がなかっただけに、この銃との出会いは衝撃だった。
他の者に言わせれば、湊がちょこちょこ集めている刀剣類にも似たような部分があるはずなのだが、本人の中で刀剣類と銃器は武器として全く別のカテゴリーになっているようで、視線はずっと装飾銃に釘づけになっている。
部分的に深く精通しているが、基本的に広く浅い知識の集め方をしている少年の珍しい様子に、イリスは後ろから負ぶさる様に肩へ腕を回して、少し楽しそうに口を開いた。
「なんだ、これ欲しいのか？」
「……チドリへのプレゼントはこれにする。改造して、新しい召喚器にしたら、きっと似合う」
「ほーん、そういう事か」
綺麗な赤髪のチドリに白い銃はよく映えるだろう。
表情は普段通りだが、納得できる品を見つけられて、どことなく嬉しそうにしている湊を見て、イリスはチドリが随分大切に思われているなと微笑ましく思った。
飾られた銃はＳ＆ＷのＭ６４５をベースとした本物。けれど、手先が器用な湊ならば、黄昏の羽根を収めてマガジンを固定する改造くらい簡単に出来る。
チドリ本人も銃を持ちたいと言っていたので、銃としての機能は排除されるが、手持ちのベレッタＭ９２をベースにした湊作の最初期の召喚器よりもグリップ等が改良されていることを含めれば、十分に気に入って貰えるだろう。
価格は日本にすれば約四十万。殆どは加工費用＋デザイン料で、銃本体としての値段は三万円にも満たないはずだ。

だが、もうこれを召喚器にしてしまおうと決めた湊に、その程度の値段など些末事。
注文した弾丸を箱に入れて戻ってきた店員に対し、振り返って視線を合わせ、ショーケースを開けるように言った。
「……この装飾銃も貰う。代金は合算でいい」
「お、それ気に入った？　それは現代エングレーブの神って言われてるカスパー・ディークマンの作品で」
「どうでもいい。ホルスターもセットでくれ」
「ちょっ、説明させてよぉ……」
エングレーブを彫った人間など誰でも良い。欠片も興味はないと言葉を遮られ、男はしょぼくれながら腰のキーホルダーから鍵を取り出して、ショーケースを開けた。
慎重に、そっと銃を手に取った男は、ジッと眺めている湊に品を確認させるため手渡す。
ショーケース越しに眺めるのと、実際に手に持って肉眼で見るのとはやはり違うのか、湊は普段以上に鋭い瞳で銃を吟味している。
それが大切にしている少女への贈り物だと知っているイリスは、傍らで見ていて笑いを堪えるのに必死だ。
「……買う」
「お買い上げありがとうございます。で、ホルスターだったね。それに合うやつは……この牛皮のやつかな。ホルスターっていうかガンベルトなんだけど」
いそいそと棚下の箱から男が取り出してきたのは、ダークブラウンの右利き用ガンベルト。
ただのホルスターより重量は増すが、衣服のベルトとは別に装備するので、腰回りの動きを邪魔しないなど利点もあった。
ベルト穴の位置的に、腰の細いチドリでも問題なく締める事が出来るだろう。
そちらの確認も終えた湊は、しっかり頷いて返すと銃をベルトに収めた。
その後、弾丸の会計も纏めて済ませると、店を出てから箱と銃をマ

フラーに仕舞い。宿に帰ってからは、チドリに渡せるよう、武器としての機能を排除した召喚器へと改造を始めたのだった。

――???

暗い闇の広がる湊の心の深部。今日もまた茨木童子はそこに独り座っていた。

彼女を敵視していたファルロスは今はいない。だが、彼女の目の前で、淡い光と水色の欠片が渦巻き、二人の少女が現れた。

一人は湊によく似た少女、節制〝座敷童子〟。もう一人は、十七歳くらいの年頃の少女、魔術師〝出雲阿国〟だ。

茨木童子の前に現れるなり、出雲阿国は扇で自身を煽ぎながら、少し砕けた口調で相手に話しかける。

「八雲の目覚めは遠いわねぇ。あの子、一族の力よりシャドウとかペルソナの力ばっかり使えるようになるんだもの。これじゃあ、私たちが話しちゃった方が早いかも」

「なに、気にする事はない。伝えずとも時が来れば目覚める」

出雲阿国の言葉に苦笑して、まだまだ焦る必要はないと茨木童子は相手を宥める。

新たに目覚めたペルソナ、出雲阿国もまた、彼女たちと同じ過去のナギリの一人であった。

歴史上の出雲阿国は、室町から安土桃山時代を生きたかぶき踊りの創始者として伝えられているが、この出雲阿国は室町末期の人間であり、安土桃山時代には既に没していた存在である。

しかし、生きた時代の違いや先祖・子孫の関係があっても、お互いの親交には特に影響しないのか、全員が立場も気にせずタメ口で会話を続けた。

「……八雲の高速移動……あれ、すごい」

「ああ、あれね。目で追う事は出来るけど、反応速度が足りないから攻撃は当てられなかったな。ただ、高速移動じゃなくて、時流操作ね。あれは自分だけ別の時間の流れに乗ってるのよ」

自分よりも幼い座敷童子に、出雲阿国は正しい能力を理解出来るよ

う説明してやる。
　ペルソナへの転生を遂げたのが女性ばかりなのは、次代へ伝える能力が女性の方が強かったためであり、別に男性のナギリがいなかったという訳ではない。
　だが、女性のナギリであっても、湊の母親のように実戦を知らずに育った者は伝える力も弱いので、いくら湊に近い世代であっても自我を確立出来る事はなかった。
「フフッ、やはり完全なるモノは素晴らしいな。極めて尚、無限の進化の可能性を持っている。外宇宙の存在の力すら使いこなすとは、流石に思わなんだ」
「目覚めが……楽しみ、ね……」
「私、八雲が目覚めたら舞踊を教えたい！　この時代には残ってないやつもあるらしいし。八雲ならすごく雅に舞えるよ！」
　言いながら、出雲阿国は扇を使って舞の振付を少しばかり披露する。
　ナギリの力が目覚めれば、血に宿る記憶を継承出来るとは言え、実際に見本を見せて貰った方がイメージも湧くため習得はより簡単になる。
　けれど、出雲阿国はそれよりも、一族に望まれた愛子（まなご）に直接稽古を付けるのが楽しみなようで、他の二人と共に湊の目覚めを心待ちにするのだった。

第七十三話　二年、夏休み直前

深夜――廃工場

海にほど近い静かな町の外れにある廃工場。

寂れていつ建物が崩れても不思議ではないからと、地元の誰も近付こうとしないそんな場所に、けたたましい銃声が響く。

音の発生源はコンテナの物影に隠れている、パーカーを着た小太りの男の持つ銃だ。

ＡＫ―４７、丈夫で取り扱いも簡単だからと、中東のテロリストたちにもよく使われている突撃銃の名機。

優れた性能に対し、銃本体が比較的安価なため、この男も安くて簡単に使える物をと思って手に入れたのだろう。

「く、くるんじゃねーっ」

しかし、いくら素晴らしい武器を手にしたところで、射手が三流ではろくな戦果は期待できない。

隠れながら撃った弾丸は、全て相手に躱されてしまい、トタンの壁にいくつもの穴を増やしただけとなった。

広範囲に広がるように撃った弾丸を全て躱されて、男はさらに焦りで照準をまとも付けられないでいる。

すると、相手はそれを見越したように、大きく迂回する形で工場内を駆けまわって、男と同じようにコンテナの影に隠れてしまった。

「ハァ……ハァ……ぐっ、ちくしょう、あのクソったれが。化け物が相手なんて聞いてねえぞっ」

相手の姿が見えなくなったことで、男はほとんど残弾の入ってない軽くなったマガジンを交換しながら悪態を吐く。

男が受けた依頼は、違法な薬の受け渡しが行われる間の見張り役のはずだった。

何事もなく取引が終了するか、余計な人間が来ても排除してしまえば、仕事の報酬＋違法薬物の小さな袋が貰える。

自分で薬を買う金がない男にとって、非常に好条件な仕事だからこそ受けたというのに、いざ仕事が始まると五分もしないうちに敵が現

れた。
取引をしていた男は真っ先に殺され、薬の入ったアタッシュケースは敵の一人に奪われてしまい。男と同じように見張りの仕事についていた者を、もう一人の敵が今現在狩っている。
自分を含めて七人ほどいた筈だが、自分と敵以外に物音をさせている者がいない。
となると、既に他の者は殺されてしまったのだろう。
今朝は雲一つない青空が広がっていて、良い一日になりそうだと思いながら、つるんでいる連中と一緒に時間になるまで馬鹿をして楽しんでいた。
仕事の時間が深夜だと聞かされても、自分たちが最も得意な時間帯だと笑って返した。
本日の仕事で得た金と薬で、しばらくはハッピーな気分でいられる。そう思っていたのに、一体どこで自分は間違えてしまったのだろうか。
絶対に生き伸びるんだと生にしがみつくことで、無理矢理にでも手足の震えを押さえこむ。銃を掴む指先が充血してピンク色になるほど強く握りしめて、男は恐怖と戦いながら敵の接近に備えた。
だが、そんな男の決意を嘲笑うかのように、別のコンテナの影に行ったはずの敵が頭上から現れた。
「ひあっ!?」
殆ど音もなく降り立った相手から距離を取ろうと男は後退る。
けれど、既にコンテナと背中を密着させていた状態で、それ以上に下がれるはずもなく、男は怯えて目に涙を滲ませながら首を横に何度も振った。
「……じゃあな」
感情の籠もらない呟きが消えるかどうか、そんなタイミングで男の首は宙を舞っていた。
ごすん、と鈍い音を立てて地面に落ちた首から地面に赤い染みが広がる。
その場に残っていた胴体からは勢いよく血飛沫が上がり、それが治

まる頃にゆっくり倒れるように身体は横たわっていた。

＊＊＊

廃工場のすぐ近くに止められた車に、髪を高い位置で縛った湊が乗りこむ。

本日、あの場にいた全員を殺したことで、キルスコアはさらに十二ほど増えたというのに、全く普段通りのやる気の無さで、運転席に座っているイリスに声をかけた。

「……素人だったな。見張りを雇ってるなんて聞いていなかったが、こっちじゃ報告のミスも日常茶飯事のようだし。仕事は問題なく終わったから別に構わないが」

「あー、いや、確かに情報の正確さはピンキリだけど、こうも報告ミスが重なるのは珍しいぞ。一応、違約金で報酬を多めに貰えるけど、アタシらは命懸かってるからな。偶然にしても嫌な感じだし。厄落としにちょっとお祓いして貰った方がいいかもな」

最近、二人でも湊単独でも、受ける依頼の事前情報にミスが増えていた。

湊らも先に情報収集をしてから依頼に臨むのだが、極狭い範囲の人間しか知ることの出来ない情報となると、時には依頼人の情報が頼りになる事もある。

なので、そこに誤りがあっては、湊たちも当然困るのだが、一級の仕事屋である湊は自分の力でカバーすることにより無事に依頼を完遂していた。

情報の伝達ミスは契約違反なので、イリスからはほくほく顔に見える、実際は普段と変わらぬ無表情で、湊はそれぞれの依頼人から違約金として三倍以上の報酬を受け取っている。

もっとも、あの満月の日の依頼についてだけは許せなかったのか。湊はギルド経由で依頼人を直接呼び出し、報酬を受け取らずに相手の全身八ヶ所の骨を圧し折って病院送りにした。

その場にいたイリスとマダム・リリィが必死に止めていなければ、そのまま相手を嬲り殺していたところで、依頼人と共に来ていたギルドの仲介人にも、今度仕事を回してくるときは裏取りをしておけと顔

面に拳を叩き込んでおり。湊の仮面舞踏会は、ギルド側から仕事を回す際は注意せよと密かにマークされてしまっている。
とはいえ、湊が異能持ちでなければ味方が殺されていたのだから、依頼人もギルドの仲介人も殺されても文句は言えない立場だ。
それを病院送りで済ませて貰ったのだから、お互いの信頼関係で人殺しに物を頼んでいるという事を再認識するには、安い授業料だったと言えるだろう。
そうして、最近ではめっきりギルド経由の依頼を受けなくなった湊は、走り出した車の中で、先ほどのイリスの言葉で彼女の宗教観が気になったのか、ドリンクホルダーから取ったコーラの瓶から口を離して話しかけた。
「……クリスチャンだろ？」
「いや、実家はカトリック系だけどアタシは無宗教だぞ。生き残れるなら、神でも仏でも拝むさ。ってか、教会でもお祓いはしてくれるからな？　エクソシストとか日本でも割と有名だし」
「ああ……そんなのもあったな」
確かに日本でも悪魔払いを行う者としてエクソシストは知られており、日本語では『祓魔師』と訳されている。
ただし、神道とキリスト教では宗教観の違いから、払う魔の意味が異なっているので、同じ感覚でお祓いをしてもらうのはどうかという疑問が浮かぶ。
相手はそんな湊の考えをまるで気にしていないのか、前を向いて運転をしながら、楽しげに口元を歪め喋り出す。
「オマエ、司祭服（キャソック）も似合いそうだよな。今度、買って来てやるから着てみろよ」
「あれ、売ってるのか？」
「そりゃ、専門店に行けば売ってるだろ。しっかり仕立ててくれるとこもあるけど、日本の吊るし売りっぽいノリで売ってるところもあるぞ。あれ、言って普段用の仕事着だからな。祭服（アルバ）よりも扱いは軽いさ」
日本では司祭服などコスプレ用を除けば一般流通している物では

ないため、外国ではそれなりに取り扱っている専門店がある事に、湊はそうなのかと軽く感心した。
だからと言って、イリスが買ってきたとしても着るつもりはないが、二人はそのまま雑談を続け、押収した違法な薬物を適切に処理してくれる依頼人のもとへと車を走らせたのだった。

7月21日（金）
昼休み――月光館学園
一学期の期末試験が行われた翌週の週末、ここ月光館学園の中・高等部では、全生徒が総合得点で順位を貼り出されていた。
チドリたちのいる2―Bの教室にも、順位が貼り出されたと報告に来た生徒がいたため、美術工芸部のメンバーは揃って職員室前の廊下へ集まっている。
彼女たちの学年はトップだった湊が留学しているため、上位陣はやや繰り上がる形で、去年とほぼ同じメンバーが名を連ねていた。
「あ、中間と同じで美紀ちゃんとチドリちゃんが一位と二位だね。私は……十二位かぁ。もっと頑張って、十番以内に入りたいな」
人混みの中で一生懸命に背伸びをして順位を見ている風花は、ようやく自分たちの順位を把握できたことで、ホッと息を吐きながら密かにやる気を見せている。
月光館学園は学力の幅は広いが、上位陣は超進学校や難関大学に進むので、そんな中で十位前後の順位に付けているだけでも優秀と言えるだろう。
けれど、現在の地位に甘んじることなく、さらに上を目指すところに風花の真面目な性格が伺えた。
ただし、今後も努力しようという言葉を、本人の意図とは別の受け取り方をする人間もいるので、他の者と話しているときには注意が必要である。
「……風花さ。それ約二四〇人中で八十三位の私に対する嫌味かなにか？」
「ええっ!?　ち、違うよ。私、そんなつもりじゃっ」

去年よりも順位が落ちてきているゆかりは、ほとんど順位に変動がない他の三人との差にかなり落ち込んでいた。
他の三人と違い。美術工芸部がない日でも、ゆかりは弓道部に出ているので、勉強時間は劣っているかもしれない。
だが、話しを聞いてみると、湊とチドリは学校の勉強は宿題以外全くしない人間であり。美紀と風花も、宿題にプラスして当日のノートを清書しながら、翌日の授業の範囲の確認として少し予習する程度だという。
テスト期間になれば、チドリも他の人間と同じように試験範囲を勉強したりもするが、学校で他の者たちと一緒にするくらいで、家ではやはり勉強しない人間だ。
それで常に学費免除圏内に入っているのだから、出来ないなりに必死に努力しているゆかりとしては、何とも言いようのない不満を感じずにはいられなかった。
「ってか、去年と同じように試験前には皆に教えて貰って勉強してるのに、なんで私だけ成績下がるんだろう……」
「それはやっぱり、二年生になって授業内容も難しくなっているからではないですか？　私も授業だけでは理解しきれない部分が増えていますから」
落ち込んで肩を落とすゆかりに、美紀が自分も一緒だとフォローを入れて慰める。
しかし、美紀とゆかりではあまりに順位に差があり過ぎるため、効果はほとんどなく、ゆかりを元気付けるには至らなかった。
全体の人数を考えれば、ゆかりも悪い成績という訳ではないのだ。
ただ、周囲の人間が少しばかり勉学に秀でているばかりに、中の上程度のゆかりが惨めに映ってしまうだけで。
そんな暗い影を落として順位の確認を終えて教室に戻る途中、飲み物を買うことにしたゆかりは、購買に立ち寄っておばちゃんに『後光の紅茶』を注文する。
相手が冷蔵ケースから５００ｍｌのペットボトルを取り出すのを眺めて待っている間、先ほどから何やら静かに考え事をしていたチド

リが話しかけてきた。
「……思ったんだけど、貴女って私たちと学習方法が違うんじゃないの？」
「は？　いや、一緒に勉強してたじゃん。自宅学習のこと言ってるなら、確かに違うかもしれないけど」
「そうじゃなくて、自分に合った勉強法の話し。去年と今年の差異を考えたら、湊がいるかいないかが一番大きな違いでしょ。それで、去年の試験勉強のときを思い出すと、貴女ってほとんど湊と勉強してたのよ」
「……そうだっけ？」
購買のおばちゃんに代金を渡し、後光の紅茶を受け取りながらチドリに言われた事を思い出してみる。
試験勉強は部室で行っていたので、メンバーは佐久間も含めて揃っていたが、よく考えると湊だけは本を読んで試験勉強をしていなかった気がする。
けれど、他の者に質問を受ければ、佐久間か湊が指導に当たっていたので、ちゃんと試験範囲の内容をマスターしているからこそ、他の者の邪魔をしない程度に自分の時間を過ごしていたのだろう。
そして、ゆかりは最も成績が悪いという事で、学年トップである湊の隣に座って試験勉強に励んでいた。
席が隣であるため、質問をするのも自然と湊ばかりに集中していた気がするので、確かにチドリの言っていることは正しいのかもしれない。
今まで気付いていなかった事を気付けたことで、自身の成績が下がった原因と解決法が見えてくる。閃いたとばかりに明るい表情でゆかりは口を開いた。
「あ、それじゃあ、試験勉強のときは彼を借りていけば！」
「岳羽さーん、独占禁止法って知ってるかなぁ？　もしも、有里君が戻って来てから、試験期間の度にそんなことするなら、教師の権限をフルに使って内申点大幅に下げるからね？」
「なにそれ、生徒の成績の方が大切なはずでしょ？　ってか、先生どこ

から現れたんですか？」
急に背後から現れ、ゆかり発案の成績アップ法を絶対にさせないと言い切った佐久間に、ゆかりは眉を顰めて嘆息する。
今日の佐久間は、ブラウスの上に薄水色のサマーカーディガンを羽織っており、都会の夏を過ごすには随分と涼しげだが、それ以上に彼女の瞳は氷の如き冷たさを宿していた。
顔は笑っているが目だけ笑っていない。佐久間は性格はともかく、ルックスは最高ランクなので、美人がそんな表情を作るとそれなりに威圧感がある。
また、彼女本来の性格は仕事中の湊に近く、周囲に欠片も興味を抱かず、冷酷なまでに現実主義だった。
元々、世界は色褪せていてつまらないと諦め、心の中でまわりの人間を冷めた思考でくだらないやつらだと見下していたのだ。
湊との出会いによって、〝孤独な天才〟から〝普通の人間〟の輪の中へと戻った折に、演じていた佐久間文子も自分の性格となった訳だが、素の佐久間文子の性格が消えた訳ではない。
故に、佐久間は本来の自分の性格でもって、少し前から恋愛においては敵であると認識している相手を見つめて言葉を返す。
「確かに、あたしも教師として成績も含めて生徒を大切にしてるけどさ。優先順位ってのがあって、生徒は三番目なのよ。ああ、言わなくても分かると思うけど、一番は有里君で二番は自分ね」
「……湊が言ってた本性ってソレ？」
〝氷の女〟、そう呼称したくなるような、どこか近寄りがたい雰囲気を纏っている佐久間に一同が目を丸くしている中、チドリだけは湊に佐久間の本性が別にあると聞いていたようで、やる気のない瞳でジッと見ながら尋ねていた。
相手はその質問を気にした様子もなく、胸の辺りで腕を組んで薄く笑い答える。
「ん？　ああ、そうね。普段のイメージからすると冷たいっしょ。今はどっちが素って事もないけど、有里君に会うまでこっちが素で、普段のは演技で作った性格だったの。まぁ、貴女たちは有里君の雰囲気

に慣れてるから、今のあたしでも特に問題ないと思うけど。ってか、やっぱり彼にはバレてたか」
別に隠していた訳ではないが、こちらが本来の性格だと気付かれた上で何も言われていなかったことに、佐久間は少しばかり気恥ずかしさを覚え苦笑する。
普段の佐久間がノリの良いお姉ちゃんだとすれば、今の佐久間はクールな美人秘書とでも言いたくなる大人の女性だ。
酒が入っていても誰にも見せていたかったため、そんな友近の好みにど真ん中ストライクな性格を、どうやって湊は看破していたのか。
少しばかり気になる佐久間であったが、湊はたまに人の心を読んでいるのかと思う発言をしてくることがある。
その度にいつも心臓を掴まれたようにドキリとしている訳だが、そういう不思議さもあって、佐久間は敢えて究明しようとは思わず、ゆっくり息を吐いて元は仮面だった普段の佐久間としての性格へと戻った。
「さってとー。ま、岳羽さんが成績に不安を覚えたなら、部活のときでも質問にきていいからさ。有里君を独占しようとするのはやめようね。先生との約束だよ！」
「え？　ああ、はい。……別に独占しようとは思ってなかったけど」
成績アップのために臨時教師になって貰おうと思っていただけで、自分の勉強のみを見て貰おうと思っていた訳ではない。
そう小さく呟いたゆかりだったが、自分の担任の隠された一面を見たせいで、これ以上、何か言い合いになるような事は避けるべきかと、相手の言い分を受け入れた。
それで佐久間は満足なのか、上機嫌で何度も頷き購買へと歩いてゆく。
お菓子と飲み物を買っているようだが、もう教室に帰っても良いのだろうかと一同が考えていると、買い物を終えた佐久間が戻ってきて、チドリに声をかけてきた。
「あ、そうそう。吉野さんさ。有里君の夏休みの予定って聞いてる？
いつ帰ってくるとか、この日は空いてるとか」

「……一応ね。七月中は全く帰ってこないって。で、八月も私の誕生日に合わせて一時帰国するだけで、すぐに向こうに戻るってさ」
学校が公募しているような交換留学ではないため、湊の留学中の情報は知り合い以外にはほとんど入って来ない。
そのため、佐久間は湊がちゃんと夏休みに帰ってくるのか尋ねたのだが、チドリからほぼ帰ってこないと聞いたことで、相手は眉根を寄せて拗ねたように不満を漏らす。
「えー、それじゃあ全然会えないじゃーん」
「知らないわよ。ていうか、夏休みなんだから、元々そんなに会う事もないでしょ」
「会わないのと会えないのじゃ違うんだよぉ。はぁ……今年は二人で温泉旅行にでも行こうと思ってたのに、来年に持ち越しかぁ」
言いながら、佐久間は腕をだらりと下げて脱力しながら落ち込んでいる。
しかし、彼女の口から洩れた秘密の計画の内容は、決して生徒にばらしていいものではなかった。
幸いにも他の者には聞こえていなかったようだが、近くに居たことでしっかり聞いた美術工芸部のメンバー内でオフェンスの二人が、やや相手を軽蔑したような目付きで佐久間に言葉をぶつけた。
「先生、流石に女性教師が男子生徒と二人で温泉ってのは、世間体も含めて問題あると思うんですけど」
「あんた、湊と温泉に行って何するつもり？」
「何って、別に観光したり温泉でのんびりするつもりだけど？　あ、さては、吉野さんったらえっちぃ事を想像したな！　駄目だぞぉ、中学生でそんな事ばっかり考えてちゃ」
最後に「めっ！」とばかりに腰に手を当て、佐久間は人差し指を立てて注意してくる。
確かに、佐久間自身は夏休みに一緒に旅行へ行こうと思っていたと、自分が考えていたことを口にしただけだ。
元々、彼女は男女の交際はちゃんと順序を踏んでからという、最近の若者にしては真面目な貞操観念を持っていることを度々匂わせて

いたので、湊へのスキンシップは多少過度だった時期もあったが、その点に関しては信じても良いかもしれない。
けれど、仮に相手の貞操観念がそうだったとしても、何もしないとは信じきれない部分が存在する。
故に、変なところで大人や教師として振舞われても、二人は引かずさらに返した。
「あっそ。クマモンが無職になるのは構わないけど、湊の経歴に傷がついたら堪らないから、やるなら他所でやってよね」
「ええー、嫌だよ。私は有里君がいいもん」
「マスコミの取材があったら、いつかやると思ってましたって答えますね」
「うへぇ、いつの間にか私のイメージが犯罪者になってるぜい……」
取り付く島もない生徒らの言葉に、佐久間もゲンナリした様子で落ち込んでいる。
そもそも、佐久間の普段の行動が全て原因なのだから、自業自得でしかないが、深く鋭い読みが出来るくせに行動に反映させない彼女は、すぐにパッと顔を上げて不敵な笑みでさらに返してきた。
「けーど、甘いなぁ。私は既に有里君とのキスを済ませてるもんね。貴女たちが青い春を過ごしている間に、私は私で大人な時間を過ごしていたのだよっ」
「……警察って１１０番だよね。あーあ、夏休み前に知り合いから前科持ちが出るなんてついてないなぁ」
「ちょっ、岳羽さんやっぱり私にだけ酷くない？　そんな扱い受けるようなこと何かした？」
ゆかりの自分に対する態度があまりに辛辣すぎる。
佐久間は自分が相手に何かしてしまって、現在のような状況になっているのか考えてみたが、特に思い当たる節がなかったため、携帯電話を持っている相手の腕を掴みながら問いかけた。
すると、尋ねられたゆかりは、先ほどの佐久間に近い冷やかな表情で、相手を突き放す様に淡々と答える。
「いえ、単に男に依存する女性が嫌いなだけですから、気にしないでく

ださい」
「わ、私は自立してるよ？」
湊に付き纏っている部分はあるかもしれないが、依存していると言われるほど、行動を共にしている訳でも、頼りきっている訳でもない。
それ以前に、湊は普段は誰とも関わりを持とうとしないくせに、何か困っていれば無言で手を貸して、勝手に解決していくような不思議な性格をした人間だ。
あとでお礼を言われても、「……そう」と返す程度で、本当にどうして助けてくれたのか分からないと感じる人間が続出する始末。
相手に好意を抱いている身ならば、心の支えにはしているかもしれないが、そんな人間に依存する事など難しい訳で、佐久間は暗い表情をして黙っているゆかりの意図を図りかねた。
それから、しばらく一同の間に暗い沈黙が続き、昼休み終了五分前の予鈴が鳴った事でようやく動けるようになったことで、佐久間は職員室に、他の者は自分たちの教室へと別れて戻ったのだった。
夜――月光館学園・女子寮
部活を終えて学校から帰り。夕食や入浴を済ませたゆかりは、独りベッドに寝転がりながら、昼休みのことで自己嫌悪に陥っていた。
最近の佐久間の態度にイラついていた事は事実だ。何かにつけて『有里君』と、それしか無いのかと言いたくなるほど、佐久間の口にする話題は湊に関してのことが多かった。
授業中は割と真面目で、他の教師よりもよっぽど教え方も上手いので、指導者として非常に優秀なのだろう。
テスト期間には担当外の科目だろうと教えてくれることからも、彼女とスペックで競えるのは湊と櫛名田くらいなものだと実感している。
だが、彼女が笑顔で『有里君』という度に、父の死後、付き合う男に依存していた自分の母親の姿が重なって見えて、昼休みのような冷たい態度を取ってしまうのだった。
（はぁ……なにやってんだろ、私。先生は別に悪くないじゃん。それなのに勝手に八つ当たりして、場の空気まで悪くしちゃって。本当に

最悪だよね）
自分は母親のようにはならない。幼い頃から、死んだ父親のことを忘れてしまったかのように、別の男と付き合ってばかりの母を見て、ゆかりが思っていた事だ。
学校から帰ってくると、家には知らない男がいて、母から「今お付き合いしている方よ」と紹介を受けていた。
最初は、夫の死と社会からのバッシングで沈んでいた母が元気になるならと、複雑な思いをしながらも笑って受け入れていた。
けれど、各地を転々としている間に、付き合う相手を何度も変えていたので、次第に母は誰かに依存したいだけで、死んだ父など既に過去のことと割り切っているようにしか見えず。
父との思い出を今も大切にしているゆかりにとって、母親のように自分の弱さから眼を背け、男性に頼ること自体が嫌悪すべき物という今の考えに至るようになった。
（なんで、そんなに男の人に依存するんだろう。守られたいから？安心したいから？　分からないのは私が子どもだからなのかな）
母親の考えていることが全く分からない。
つい先日にも、母親から電話がかかってきて、夏休みには実家に帰ってくるかと聞かれた。
寮暮らしを始めてから、長期休み以外で会う事など基本的に無いので、久しぶりに会って色々と話したいと。
だが、どうにも母親の言葉に裏があるような気がするので、何か話したいことでもあるか尋ねれば、
「いまお付き合いしている方が、ゆかりにも会ってみたいと言っているの」
と、また別の男と付き合っていることを暴露してきた。
そんな話を聞かされて快く了承出来るほど、ゆかりはまだ大人ではないため、部活の練習と友達と出掛ける用事が入っているから、帰れるか分からないと返しておいた。
母はそれを聞いて残念そうにしていたが、ゆかりが実家へ帰る事を拒否したのには、もう一つの理由が存在した。

母方の実家は桐条の名士会に名を連ねている名家なので、実家に帰れば、桐条家主催のパーティーに出席しなければならなくなる。
しかし、父親の死の原因を知ろうとしている身としては、核心にいる人物らと顔を合わせるのは、どうにも気まずい物がある。
桐条美鶴は一生徒でしかない自分など知らないだろうが、学校の廊下ですれ違うこともあるので、何も調べられていない状態で、顔を覚えられて動きづらくなることは避けたい。
そういった理由もあって、ゆかりは出来るだけ桐条と接触しないよう注意して普段も行動していたのだった。
(爆発事故の新聞記事は色々と読んでみたけど、実験の失敗で装置が爆発したことが原因って書いてるくらいで、真相らしいものは何もなかったな。他に何を調べたら良いのかも分からないし。いっそ、有里君とか被害者に当時の状況を……聞ける訳ないか)
父の死に関係している爆発事故だが、どこで爆発があった、事故発生時に現場にいたのは誰か、分かっているのはそれくらいで、何が原因でどんな規模の爆発があったのかは、ほとんど記録が残っていない。
父親が事故を起こした張本人というのも、当時の父の肩書きが主任だったために、責任者として槍玉にあげられていただけに過ぎない。
何せ、事故原因も詳しく分かっていないのだから、話題の欲しいマスコミとしては、現場に居て死亡した責任者をそう仕立て上げるしかないだろう。
十分な証拠もない状態で、死んだ家族に汚名を着せられた身内としては堪ったものではないが、被害に遭った人々の感情の矛先を向ける受け皿が必要だったというのは、逃げるように各地を転々として生活の中でゆかりも嫌というほど理解していた。
(けど、私だけは真実に辿り着いてみせる。お父さんが大勢の人を犠牲にしようとしたはずがない。お母さんは逃げたけど、私だけは絶対に逃げずにお父さんの無念を晴らしてみせるから)
うじうじと悩んでいてもしょうがない。誰も助けてくれなくとも、自分のやることは変わらないのだ。

ベッドから起き上がったゆかりは、机の置いてある父から貰ったストラップに視線を送ると、しっかりと頷き、決意を新たにした。
そうして、明日からまた頑張るため、とりあえず佐久間に本日までの八つ当たり染みた態度を謝罪する事に決め、ゆかりは歯磨きをしてからゆっくり休むことにした。

第七十四話　誕生日会

８月１２日（土）
朝――チドリ私室

一学期が終了し、現在は夏休みの真っ最中。

しかし、山の上という少し高い場所にあり、風通しもよい桔梗組では、窓を開けていれば昼頃まで冷房をつけずとも快適に過ごす事が出来ていた。

九時ごろまで惰眠を貪っていたチドリは、寝ている間に開(はだ)けたのか、胸元が見えてしまっている随分と色っぽい姿で目を覚まし、のそのそと緩慢な動きで身体を起こした。

「んー……はぁ」

寝ている間に固まった身体を解す様に大きく一度伸びをする。

起きて直ぐに伸びをするかどうかで、背丈の成長にも大きく影響があると言われているが、現在身長１５３センチのチドリとしては別に長身でなくとも構わないと思っているため、単に本人の気分でそのような事をしていた。

しかし、伸びをしても直ぐには目が覚めないのか、ベッドに座ったまましばらくぼーっとしている。

そうして、三分ほど経ってようやく周囲を見る余裕が出来たのか、チドリが自分の部屋の学習机の方に視線をやると、そこには全身黒づくめの服を着た湊が座っていた。

どうして部屋主が寝ている間に入ってきているのか。その服はどういった趣向の戯れなのか。

色々と聞きたい事はあるが、徐々に覚醒しつつあるチドリに相手も気付いたようで、読んでいた本から顔を上げ、視線をチドリの顔よりやや下に落として話しかけてきた。

「……襟元、乱れてるぞ」

「……え？」

言われてチドリは自分の服装に目を向けた。

帯は解けていないが、浴衣の前が大きく開いており、発展途上のな

だらかな双丘がほとんど見えてしまっている。
着物や浴衣を着る時には和装下着を身に付ける事にしているが、寝ているときには苦しいからと付けないようにしていた。
そんな状態で、胸が見えているということは、当然、双丘の山頂までも相手は目にしている訳であり。その事実に気付いたチドリは、直ぐ様襟元を正して、耳まで真っ赤にしながら湊に渾身の飛び蹴りを見舞っていた。
＊＊＊
顔を洗い、歯を磨き、髪を梳かし、着替えなどの身支度を済ませると、鵜飼と渡瀬は仕事で出ているため、チドリは湊や桜と一緒に朝食を摂っていた。
しかし、普段は湊の隣に座っているというのに、今日は湊の正面にいる桜の隣に座って距離を取っている。
原因は先ほど胸を見られたことであり、年頃の女子ならば、恥ずかしさからこういった態度をとるのも当然と言えた。
むしろ、同じ食卓を囲めているだけマシな方だろう。これが真田兄妹であれば、美紀は兄としばらく顔を合わせずに、食事の時間もずらしているところだ。
だというのに、久しぶりに帰って来た家族への気遣いで、耳を赤くしたまま羞恥に耐えている少女の気持ちもどこ吹く風と、見た張本人は普段通りの様子で黙々と箸を進めており。
母親役である桜もどのように慰めればいいのか分からないようで、どうにも異様な朝食風景となっていた。
しかし、自分がこれだけ我慢しているというのに、相手の態度があまりに普段通り過ぎることが気に触ったのか、堪えきれなくなったチドリは小さく呟く。
「……変態性食者」
「……この司祭服（キャソック）はイリスの悪戯だ。夏祭りの会場が神社だと伝えたら喧嘩を売ってこいと言われた」
全身黒づくめの湊の服、それは上着が足の付け根辺りまでの丈をした、改造されながらもシンプルな司祭服であった。

普段巻かれているマフラーはケープとなり、ご丁寧に首からは金色のラテン十字を下げ、世捨て人な雰囲気も相まって厳粛な『聖職者』のようにも見える。
相手がそんな服装をしていたからこそ、チドリも『聖職者』に掛けた同音の蔑称を付けたのだが、言葉の音だけで字面が分かる訳もなく、湊は桜の隣にいるチドリに視線を向けて返した。
だが、そんな服装の説明などどうでも良くなっているチドリは、構わずに不満を相手にぶつけ続ける。
「勝手に部屋に入ってきて、人の胸を見ておきながら謝りもしないとか非常識」
「……何度も謝っただろ」
「誠意が感じられない」
「そういう顔付きなんだ」
確かに、湊はチドリに言われるまでもなく、既に五回以上謝罪の言葉を述べていた。
変な言い訳もせず、どこまで見えていたか聞かれれば、「完全に」と答える正直ぶりである。
けれど、そこは嘘でも良いから角度的に見えていなかった、と返して欲しかったのが乙女心。
チドリは湊が中性であることは聞かされていないが、女性としての思考も出来るはずの湊が、今回どうして相手の気持ちを汲んでやれなかったのか。
それは、正直に答えて謝ることこそが誠意であると考えて行動したためであった。
湊のその想いが今回は裏目に出ただけで、決して、口だけで謝って許して貰おうとした訳ではない。
朝食の準備を終えるまでに、傍らで理由を聞きながら事態の動向を見守っていた桜も、その点は理解しているので、湊がチドリに反論しても何も言わなかった。
もっとも、桜がここで仲介して話しを収めなかったために、へそを曲げてしまっているチドリによって会話は徐々に脱線を始める。

「クマモンが言ってたけど、貴方、胸が大きい人が好きなんだってね。悪かったわね、小さい胸なんか見せて」
「いや、別にそんな性的嗜好は持ってない。それにチドリの発育は中学生なら普通くらいだろ」
「発育って……女子たちを見ながら、普段からそんなこと考えてたの？」
「なんでそうなる。そもそも、俺はアナライズで数値も知って……」
言いかけている途中でチドリが怒り形相に変わっていたため、湊は最後まで言い切らずに言葉を止めた。
索敵とアナライズはチドリのメーディアも使う事が出来る。むしろ、その能力に関してはチドリの方が先輩だ。
けれど、チドリが生体反応を感じ取るタイプの能力者であるのに対し、湊は自分の知覚を拡張してゆくタイプなので、その機能にもいくつか差異があった。
チドリのアナライズに対象の身体情報の数値を読み取る機能など存在しない。
今までチドリが気付かなかったのは、相手の能力との差異を気にしていなかっただけであり、気付いてしまえば怒らずにはいられない。
身長と体重だけならば許せたが、スリーサイズまで知られていると分かれば、女子ならば当然の反応だろう。
湊も自分が口を滑らせたことに気付いたのか、立ち上がって跳躍してきたチドリの蹴りを素直に受けることにした。
「この変態っ！」
「うぐっ!?」
浴衣から覗いた、透き通るような白い肌のしなやかな足から繰り出された蹴りを受けた湊は、全く踏ん張りもしなかったため、畳を転がりながら三メートルほど移動する。
無抵抗を貫く湊へさらなる追撃をしない辺り、チドリも相手に悪気や下心があって身体情報の数値を読み取っていた訳ではないと理解しているのだろう。
そうして、僅かな思いやりを残していたチドリによって、不幸な事

故から始まったいざこざは、この一撃を罰とすることで幕引きとなったのだった。
呼吸を整え、自分の座布団へと戻って朝食の続きを食べるチドリ。
一方、畳の上で仰向けに倒れていた湊は、よろよろと起き上がって同じように席に戻ると、食事を再開した。
何とも不思議な喧嘩の終わり方だが、当人同士がそれで良いのなら自分は何も言うまい。そんな風に思いながら、桜は湊の茶碗にご飯のお代わりをよそって手渡した。
それが終わるのを待ってから、味噌汁を啜っていたチドリは、お椀から口を離して湊に話しかける。
「……そういえば、何で部屋にいたの？」
「起きて直ぐに誕生日プレゼントを渡すつもりだったんだ。まぁ、色々あって流れたけどな」
そういって最後に自嘲的な声色で小さく漏らしながら、湊は湯呑みに口を付ける。
チドリの私室にいた理由を話した本人は、自分の用事を未だに済ませていないことを苦笑しただけで、相手に嫌味を言ったつもりはないのだろう。
それを理解していながら、久しぶりに会ったことで構って欲しいのか、敢えてチドリは嫌味を言われて拗ねたように言い返す。
「得したでしょ。学校のやつらなら悔いなく死ねるくらいよ」
「そうか。……ありがとう？」
「なんで、疑問形でお礼なの？」
「他の人間は悔いなく死ねるんだろ。なら、感謝するのが正解かと思ったんだが、正直、感謝が正しいのか悩んだ。まぁ、確かに綺麗だったよ」
珍しい事に、湊は美しい微笑を浮かべそんな事を言ってのける。対照的に、言われたチドリは再び耳まで真っ赤にして隣にいた桜の膝に顔を埋めて抱き付いた。
もしや、湊はわざとやっているのではないか。そう思いたくなるほど、自分が見た事をはっきり認めた上であっさり褒めてくる。

褒められて嫌な気はしないので、嬉しい事には嬉しいのだが、多感な時期だけあって、喜びよりも羞恥が勝ってしまう。
流石にこれ以上はチドリが可哀想だと思ったため、桜はチドリを抱きしめたまま別室へ連れてゆくと、不思議そうに食事を続けていた湊の元に一人だけ戻ってきた。
そして、隣に座り真っ直ぐ湊を見つめながら、どこか困ったような怒り辛そうな雰囲気のまま、最後には真剣な瞳でもって窘めてくる。
「あのね、みーくん。女の子は男の子に裸を見られると、それが家族相手であってもとても恥ずかしいの。ちーちゃんもそれは一緒で、綺麗って言われて嬉しかっただろうけど、やっぱり恥ずかしさに耐えられなかったみたい。だから、今度からは素直な感想を抱いても、当たり障りのない言葉で濁して別の話題にしてあげてね」
「……わかった」
「うん、お願いね」
ある一定の人格者に対しては湊も素直なものだ。しっかり、こくこくと頷いて返し、今後は発言等にも注意しようと考えている様子も確認出来る。
色々と海外で危険な事をしているとイリスから報告も受けているが、基本的な善性は変わっていない事を確認できて、桜も嬉しそうに顔を綻ばせた。
その後、結局、チドリは心の整理に時間が掛かるからと戻って来ず。傍らで桜に見られながら食事を続けた湊はご飯三合と用意されていたおかず類を完食した。
そして、部活に行く時間だからとチドリが制服に着替えて部屋から出てくるまで、居間で医学書を読みながらゴロゴロと過ごし、二人は揃って学校へと向かうため家を出た。
昼――美術工芸部部室
今日はチドリの誕生日であり、長鳴神社の夏祭り初日でもある。
そのため、部活メンバーらは夕方頃まで部室でチドリの誕生日を祝い。一度帰宅して着替えてから、第二ラウンドとして夏祭りに行く計画を立てていた。

もっとも、着替えるメンバー内で一人だけ隣の市に住んでいるチドリは、家に帰ってから巌戸台に戻ってくるのでは時間が掛かり過ぎてしまう。
他の者の家や部屋で着替えさせて貰うことも考えたが、最終的に荷物を置いておける場所としてバイト先である古美術〝眞宵堂〟で着替えることを選んだ。
祭りで着る浴衣を眞宵堂に置いてからやってきた二人が部室に入ると、先に集まっていた他のメンバー＋佐久間と櫛名田の視線が集まる。
クラッカーを手に持っていた事から、来るのと同時に「誕生日おめでとう」と祝いの言葉をいうつもりだったに違いない。
けれど、主役のすぐ後ろにいる少年の服装が、どこから突っ込めば良いのかというほどツッコミ所があり過ぎるせいで、一同は微妙な表情で固まってしまっていた。
他の者たちのそんな様子に構わず、部室に入った二人は適当な場所に荷物を置いて、部屋の真ん中に置かれた料理の並ぶテーブルへと進む。
上座はチドリが、下座には湊がそれぞれ座り終えたところで、湊の斜め右に座っていたゆかりが口を開いた。
「ひ、久しぶり。えっとぉ……改宗したの？」
「いや、神社の祭りに行くなら喧嘩を売ってこいと、知り合いに着せられたんだ」
「へ、へぇー。まぁ、似合ってて、その、格好良いと思う、よ？」
明らかに引き攣った表情で服装を褒めてくるゆかり。
異様に伸びる速度が速く、もうすぐ腰に届きそうな長髪は縛りもせずに垂らしたままで、瞳は普段通りの何の感情も籠もらない金色。
それが湊から現実感を奪う要因となっているため、日本では馴染みのない司祭服と組み合わせれば、純粋なルックスの良さに神秘性を付加させることとなり、ゆかりの言う通りに不思議な魅力を放っていた。
だが、本人は何度も着替えるのが面倒だからと、制服に着替えずに

やってきただけに過ぎない。
なので、一応、礼は返したものの、自分のことは気にせずチドリを祝ってやれと皆に視線で促した。
他の者もそれで再起動を果たし、湊からチドリの方へ向き直ると、テーブルの料理にゴミが入らないよう気を付けながら、手に持ったクラッカーを鳴らす準備をした。
『Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　Ｙｏｕ，　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　Ｙｏｕ』
続けて、佐久間が櫛名田と共に作ってきたホールケーキのロウソクに火を灯し、「せーの！」の掛け声で定番のバースデーソングを歌い出す。
『Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ，　Ｄｅａｒ　Ｃｈｉｄｏｒｉ，　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　ｔｏ　Ｙｏｕ』
そうして、全員での合唱が終わると、チドリは深く息を吸い込み、自分の前に置かれたケーキに灯ったロウソクの火を一息で吹き消した。
「すぅ……フゥッ！」
『誕生日、おめでとうー！』
見事一発で全てのロウソクを吹き消すことに成功した途端、全員が口々に祝いの言葉を述べてクラッカーを鳴らした。
カラフルな紙吹雪とテープを頭から被り、少し面倒そうにしながらも、チドリも祝って貰っていることに感謝しているようで、素直に「ありがとう」と言って他の者に手伝って貰いながらそれらを取り除いている。
去年は風花が父方の実家に帰っていたこともあり、どうせ翌日の祭りで会うからと、祝いのメールは受け取りつつも誕生日は家族だけで祝った。
だからこそ、こういった友人たちにして貰う誕生日パーティーが初体験だったチドリは、表情にこそ出していないが、内心ではそれなりに喜んでいるようだ。
「さーて、ケーキは最後に食べるから一回仕舞っておくね。部室の飾りつけは岳羽さんと山岸さんにお願いして、料理は先生たちと真田さ

んでほとんど作ったんだ。味は大丈夫だと思うから、ジャンジャン食べちゃって！」
「今日の主役はお前だからな。料理もこっちで取ってやろう。ほれ、どれが食べたい？」
席はチドリから見て右斜め手前から順に佐久間と櫛名田が座り。左斜め手前から奥に向けて美紀、風花、ゆかりの順で座っている。
テーブルはどこからか持ってきた大きな長方形タイプで、湊が大食いなこともあり、敷かれた白いテーブルクロスの上には、十人前は優にあるであろう料理が所狭しと並んでいた。
それだけに、遠くにある料理は届かないだろうと、風花と美紀がコップにドリンクを注いでいる間に、櫛名田が取ってやろうと欲しい物を尋ねてきた。
並んでいるのは、ピザやフライドポテトと言ったパーティーの定番物から、シソや大根の入ったさっぱりとしたサラダ、手鞠寿司、だし巻き卵など、中華を除いた様々な種類の料理たちだ。
中華料理が無いのは、教師二人も大人の女性として、男子生徒に実力で負けている分野の物は作りたくなかったのだろう。
桜や鵜飼の知り合いの料亭での指導により、和食も中華同様プロ級の腕前を持つ湊だが、和食の中でも家庭料理ならば家の味として競わずに済むため、そちらは気にせず作ったらしい。
櫛名田に言われてテーブルの上を眺めていたチドリは、自分が最初に食べなければ他の者が食べ始められないと思ったため、どうせ後でお代わりすれば良いと簡単に何種類か決めた。
「じゃあ、サラダとピザと煮込みハンバーグ」
「ドレッシングはいるか？」
「梅ドレッシングで」
「ん、わかった。……ほれ、好きなだけ食べろ」
料理の盛り付けられた紙皿を受け取り、自分の前に置かれていた割り箸でハンバーグを一口大にして口に運ぶ。
夏で冷房の効いた部屋に置かれていた料理だというのに、料理はまだ温かいままで、口に運んで一度噛むだけで酸味の利いたトマトソー

スの味とジューシーな肉汁が口一杯に広がった。
チドリもレシピがあれば簡単な物は作れるが、このレベルに達するにはレシピ通りに作っていても無理だろう。
そんな風にやや屈折した思考で、教師らと美紀の腕前を認めながら、口の中の物を呑みこんだチドリは一言感想を述べた。
「……美味しい」
「フフッ、お口に合って良かったです。まだ沢山ありますから、チドリさんも有里君もいっぱい食べてくださいね」
「ええ、どうもありがとう」
煮込みハンバーグを作ったのは美紀だったようで、チドリが素直に美味しいと言った事で、安心したようにホッと息を吐いている。
主役が料理に手を付けたなら、続けて他の者たちも各々好きな物を皿に盛って食事を開始する。
これだけあっても誰も残ることを心配して無理をしないで済むのは、誰も湊が満腹で苦しそうにしているのを見たことがないからだ。
学校へ来る三時間程前まで一人で米三合と大量のおかずも食べていたというのに、ここでも気にした様子もなく食事をしている湊に、本当に限界などあるのだろうか。
心の中でそう思いながら、チドリは自分のために作って貰った料理に舌鼓を打った。
「そういえば、有里君はもうチドリにプレゼントは渡したの？」
しばらく料理の感想を言い合いながら食事を続けていると、ゆかりが湊に話しかけてくる。
今日は、この後にお祭りにも参加するという事で、チドリへのプレゼントは誕生日パーティーで渡す事になっている。
けれど、帰りの荷物を増やすのも悪いと思って、もしや家で渡しているのではないかと思い、ゆかりは湊に尋ねたのだ。
聞かれた湊は、ゆかりに紙皿を渡して離れた場所の料理を取って貰いながら、質問に素直に答える。
「いや、渡そうと思ったけど、ごたごたがあって結局渡せてない。まぁ、持って来てないから渡すのは帰ってからだな」

「そっか。有里君って珍しい物くれるから、チドリも楽しみだね」
去年の自分らの誕生日のことを思い出しながら、ゆかりは湊に皿を渡しつつチドリに笑いかけた。
この場に居るメンバーはほぼ全員が秋と冬生まればかりだ。
唯一の例外は夏生まれのチドリで、今の戸籍で四月生まれとなっている湊も元々は秋生まれである。
そちらの誕生日を基準に考えれば、早い順に十月生まれはゆかりが十九日、湊が二十五日、その一日違いで美紀が二十六日。少し飛んで風花が十二月二十二日。年を明けて櫛名田が一月六日、佐久間が二月二十七日といった具合だ。
湊は実にマメな性格で、そのメンバー以外にも高等部一年になった時任亜夜やアイギスの人格形成プロジェクトに参加していた水智恵、マリアたち元被験体の女子らにも、しっかり誕生日祝いとして贈り物をしていた。
去年の誕生日にゆかりが湊から貰ったのは、湊作のウサギの編みぐるみ＋同じピンク色のベルトをしたカルティエのパシャＣという時計で、２００３年クリスマス限定モデルだったのだが、貰った本人はそんな詳しい事は知らず、色とデザインが気に入っているからと今でも愛用している。
因みに、美紀にはパンダの編みぐるみ＋茶色いベルトのティファニーの時計、風花にはビーグル犬の編みぐるみ＋白いベルトのブルガリの時計など、他の女子にも自作の物と一緒に差を付けないようそれなりの物を贈っている。
ブランドにも詳しい教師陣からすれば、入学祝いに最初から高級時計をつけていたチドリも含め、どうしてこの部活メンバーは自分たちよりも良い時計を付けているのかと落ち込んだりもした。
また、身に付けている本人たちが、貰った物の価値を理解していないことも悩みの一つとなっていた訳だが、そういう二人も、湊から誕生日にはブランド物のバッグやパンプスを買って貰っているので、現在ではあまり気にしていなかったりもする。
そういう経緯があって、最近では湊が海外にいたことで、また珍し

い物を買ってきている可能性がありそうだと言った訳だが、サラダを食べていたチドリは気にせず答えた。
「ちゃんと考えて選んだのなら、貰う側だし割と何でもいいわ。まぁ、良識の範囲内っていう制限は付くけど」
「良識の範囲内って、例えば、なんだったらアウトなの？」
「例えば？　そうね。送り主を湊に限定するなら、下着とかは貰っても困るわね。一体どうやってサイズを知り得たのかっていうのも気になるし」
最後の部分だけ声のトーンが僅かに下がり、普段の数割増しで視線に力が籠もった状態でチドリは湊を見つめた。
他の女子はチドリの変化に気付かず、確かにそれはそうだと同意して苦笑しているが、見つめられた湊だけは食事を続けながらも視線を逸らしている。
確かにこの場でチドリの口から、湊が全員の身体データを知っていることが暴露されれば、今後の活動にもかなり影響が出るに違いない。
最低でも、風花との『女教皇コミュ』、ゆかりとの『恋愛コミュ』、佐久間との『塔コミュ』、美紀との『星コミュ』がブロークンしかねず。そこからさらに、学校中に拡散すれば、高等部の亜夜の耳に入ったりもするだろう。
別に嫌われること自体は慣れているので構わないが、方法を聞き出そうと付き纏われるのは鬱陶しい。
他人が思っているよりもずっと優しいチドリが、そんな湊の不利に働くような事をするとは思わないが、それでもチドリにアナライズの機能がばれたのは迂闊だったと、口を滑らせた今朝の自分の愚かさを呪わずにはいられなかった。
だが、不幸というのは時に続けて起こるものだ。
「ほわぁっ!?」
もしも、学校の者らに事態がばれたときの解決法を考えていた湊は、現実世界の情報をどうやってかリアルタイムで把握出来ている者たちの事を思い出し。その内の最凶の姉妹にも自分のことがばれた

ことに気付く。
普段のクールなイメージからは想像も出来ないような変な声を急に出したことで、他の者らの視線が集まっていることも構わず、今現在、自分が最もすべきことは何かを考え、立ち上がった湊は席を離れた。
後ろでは佐久間たちが「どうしたの？」と心配そうにしているが、相手をしていられる余裕はない。
二人同時か一人ずつか、それは相手の気分次第なので分からない。けれど、次に向こうに戻るためベルベットルームを訪れたとき、鍛錬という名目で自分が殺される確信があった。
（クソっ、早く電話に出てくれっ）
他の者にEデヴァイスを使っているところを見られる訳にはいかない。
そのため、緊急時には携帯で連絡が取れるよう、１５ケタ以下と国際的に定められた電話番号計画を無視した、２７ケタというかなりデタラメな番号を教えて貰っていた。
携帯を取り出し、とりあえずエリザベスに電話を掛けた湊は、呼び出し音が五回を超えたところで、壁に突いていた手を焦りから強く握り締める。
すると、八回目のコールに差し掛かった時、電話が繋がる際の「プツッ」という小さな音が聞こえ、受話器から目的の女性の声が聞こえてきた。
《はい。こちら、エリザベスでございます》
「エリザベス、聞いてくれ。悪気も、隠す気もなかったんだ。ただ、昔からそういう物だったから、ずっと気にせずいただけで」
《……一体の何のお話しでしょうか？　ご説明いただかないことには、要領を得ないのですが》
客人の周辺で起きた出来事は把握しているはずだが、エリザベスは本当に湊が何を言っているのか分からない様子の声で返してくる。
知らないのなら好都合。余計なことは言わずに、隠し通せば生き残る道が拓ける。

そう思いかけた瞬間、これが相手の用意したブラフならば、不安が消えて軽くなった心のまま向こうに帰ろうと部屋に着いたところをメギドラオンされるかもしれないと思った。
シラを切ったことでさらに罪が加算される可能性すらある。
浅はかな考えを持った湊は、その愚かな思考を振り払い、生き伸びるために必要なのは誠実さだと、直ぐに真剣な声で続けた。
「アナライズのことだ。鍛錬のときに三人に対して使ったことで、身体データを俺は知っていた。それを謝ろうと思って電話したんだ」
《はぁ、そうですか。しかし、身体データとはどういった物でしょうか？　別に自分の背丈を八雲様に知られたところで、私たちは気にしませんが》
確かに力の管理者の姉弟の限らず、自分の身長を他人に知られても気にしないという者は大勢いるだろう。
だが、湊のアナライズで知ることが出来るのは、たったその程度の情報ではない。
「身長だけじゃない。体重やスリーサイズも同時に把握出来るんだ」
《はて……申し訳ありませんが、よく聞き取れませんでした。ですので、もう一度、大きな声で、ゆっくりと言っていただけますか？》
「だから、俺はエリザベスたちの身長・体重・スリーサイズ等々を把握して……っ」
ほとんど言い切ったところで、湊は自分の周囲の状況を思い出す。
他の者が座っているテーブルは部室の中央に置かれているとはいえ、普通の教室よりも一回り小さな部屋だ。
そんな場所で冷静さを欠き、相手の言う通りにゆっくり大きな声で話せば、当然それは他の者の耳にも届く。
チドリは朝の時点で知っているから大丈夫だろう。
櫛名田も面白がりはするだろうが、彼女は第三者の立場で見物する方が好きらしいので問題にはならない。
佐久間は基本的に行動が読めないのでよく分からないが、しっかり説明して頭でも撫でてやればどうとでも出来る。
問題なのは他の三人で、美紀と風花は距離を取るようになり、ゆか

りは今朝のチドリのような対応を取ってくるに違いない。
取り返しのつかない状況に陥ってから、自分がこうなるよう誘導されたことに気付いた湊は、今日は厄日だと内心で吐き捨てた。
「……お前、嵌めたなっ」
《まぁ、人聞きの悪い。私はよく聞き取れなかったので、もう一度しっかり聞こえるよう言ってくださいとお願いしただけでございます》
確かにそうだ。エリザベスの言う通り、彼女は聞こえなかったから、ちゃんと聞こえるように言ってくれと頼んできただけだ。
部室内で電話をしたのは自分で、まわりの状況の確認を怠ったのも自分。さらに言えば、能力について昔から伝えていれば、こんなややこしい状況にもなっていないはずだった。
原因が己にあるだけに、何も言い返せない湊は、色が変わるほど拳を握りしめて震わせ。ぎりぎりと奥歯を噛み締めた。
《ああ、言い忘れておりましたが、次の鍛錬のときには私と姉上の二人がかりでお相手いたします。久しく多対一ではしていませんでしたから、八雲様も新鮮な気持ちで臨めますでしょう？》
「……ああ、そうだな」
エリザベスとの付き合いは長いので、声の調子から薄い微笑を浮かべていることがありありと想像できてしまう。
しかも、その微笑は自身を嬲るのを楽しみにしているためだ。
そんなドSな姉妹を相手にすることが確定した時点で、湊はファルロスに苦労を掛けると先に謝罪しておいた。
一応、夢から現実に戻った際、肉体にダメージが残らないよう鍛錬を終えれば、鍛錬に参加していなかった姉弟の誰かが回復してくれる手筈になっている。
けれど、今回は姉二人が同時に敵になるため、自身の失敗を痛みで覚える事もときには必要だと言って、テオドアに回復スキルを使わせない可能性がある。
そうなれば、自分でも回復スキルを使いはするが、最低限動けるようになるところまではファルロスの蘇生や治癒に頼る事になる。
治療のエネルギーは湊の生命力が使われるにしても、ファルロスも

全く疲れない訳ではないので、唯一の友人へ心中での謝罪を終えた湊は、まだ繋がっている電話の相手へ低い声で呟いた。
「……そういえば、謝罪はもうしない事にした。そもそも、力を管理しているくせに、餓鬼の能力を防げない方が悪いんだ。姉の方にもそう伝えておいてくれ」
《……ええ、特別にハードな鍛錬をお望みだと伝えておきます。では、私も準備をする必要が出来ましたので、これで失礼させていただきます》
「じゃあな」
静かに通話を切って、湊は最凶の姉妹との鍛錬で時流操作を使ってしまおうと決意した。
自分の時の流れを周囲の数倍にして、あの美しい顔面にタナトスを部分顕現させた拳をしこたま叩き込もうと。
そうして、一つの戦いに向けて覚悟を決めた湊は、続けて背後で待っている戦いにも心の準備をする。
何を聞かれても正直に答える必要はない。風花や美紀には淡々とそれらしい理由を告げて、最後には情に訴えるのが有効だ。
勝つ方法はないだろうが、無事にこの場をやりすごすくらいは出来るはず。湊は自分が仕事で得た技術と経験をフルに使う事に決め、振り返って自分の席に戻った。
まず、他の誰かに話しかけられる前に自分から喋る事でペースを掴みたい。そんな思いから口を開きかけたところで、残念な事にチドリから声を掛けられた。
「墓穴、掘ったわね」
「……まぁな」
やや楽しそうに不敵な笑みを浮かべているチドリに出端をくじかれ、自分を陥れようとする敵はこちらにもいたことに気付く。
その間に何か聞きたそうな他の者たちの視線も集まり、やはり今日の自分は様々な不幸に見舞われる運命にあることを湊は悟った。
「有里君さ。もしかして、本当にチドリに下着を贈ったの？」
「……贈ってない。さっきも言ったがプレゼントはまだ渡してないん

だ」
チドリが先ほど下着を贈られても困ると言ったことが、現状を招いたことは明白だ。
故に、ゆかりは呆れた顔で湊に尋ねたが、本当にそんな物を贈ったことはないので、湊はしっかり否定した。
すると、今度はチドリの傍に座っていた美紀が質問をぶつけてくる。
「では、女性のスリーサイズを知っているという話しは？　もしかして、お付き合いしてる方がいらっしゃったんですか？」
「いない。エリザベスはチドリに会う前に出会った古い知り合いで、今も親交が続いてるだけだ」
「その、エリザベスさんとは、有里君の絵に描かれていたヘッドフォンの女性のことでしょうか？」
「……何で絵の事を知ってるかは聞かない。ただ、彼女の名前はアイギスだ。エリザベスとは関係ない」
絵の事を知っているか聞かないと言いつつも、湊はどうせチドリが見せたのだろうと想像出来ていた。
栗原がわざわざ無関係の人間に見せる筈がないので、そもそも、美紀がそれ以外に知る方法はない。
湊があの絵の人物の名を告げたとき、チドリが僅かに目を見開いていたことが気になるが、今度は風花がおずおずと質問してきた。
「えっと、その、有里君って女の人のスリーサイズとか興味あるのかな？　あんまりそういうの想像が出来ないんだけど、エリザベスさんたちって言ってたから一人じゃないんだよね？」
「興味はない。ただ、そういった情報を知る環境にいただけだ」
これは嘘ではない。湊が相手の身体データを把握したのは、鍛錬でアナライズを発動したとき、勝手に頭に情報として流れ込んできたためだ。
邪まな思いで知ろうとした訳ではなく、むしろ、準中性である湊が考え方によっては同性とも言える相手のそういったデータに興味を持つ事など、よっぽどの理由がない限りあり得ない。

しかし、そんな事は知らない風花は、どこか不安そうにしながらさらに質問を続けてくる。
「も、もしかして、私たちの情報は知らない、よね？」
「知ってるわよ。服の上からでも見ただけで身長・体重・スリーサイズに、その他諸々をおよそで計測できるのが湊の特技ですもの」
「そんな特技はない！」
世の中の男子らが揃って欲しがるような、そんな夢の能力を特技として所持してたまるか。
テーブルに手をついて立ち上がった湊は、自分の名誉を守るため、珍しくチドリに対して声を荒げて反論した。
だが、驚いている女子たちとは対照的に、どこか状況を楽しんでいる様子の櫛名田が、ニヤニヤと口元を歪めて、ある問題を出してくる。
「第一問、四月に計測した岳羽の身長は１５５センチですが、では体重は何キロだったでしょうか？」
「４４．３キロ」
「即答っ!?　てか、細かっ、それになんで知ってんのっ!?」
日本に戻ってきたことで気が抜けているのか、今日の湊は墓穴を掘るのが仕事らしい。
身体測定の数値は小数点一ケタまで確かに記入されているが、身長ならばともかく体重について雑談する際に、わざわざ小数点以下の数値まで口にする者はいない。
まして、それが知るはずの無い女性のものであるならば、尚の事、湊はそれを口にしてはいけなかったのだ。
女性からの質問はなるべく答える癖が悪い方に働き、先ほどのチドリの言葉に真実味を持たせてしまった湊を、体重を暴露された少女が鋭い目つきで睨む。
「本当に見ただけで分かるの？　こっそり、保健室に置かれた用紙を盗み見たとかじゃなくて？　ってか、勝手に人の体重とか言いふらしたら絶交だから」
「……ああ、わかった」
「あ、見ただけで分かるって部分も否定しないんだ」

「否定しても信じないだろ」
　もう全てを話してしまった方が楽になる。そう思った湊は、不機嫌になっているゆかりの言葉を否定せず、深く息を吐いてからペルソナの部分を伏せて、どういった系統の能力かの説明を始めた。
「はぁ……絶対音感のように〝分かってしまう〟タイプの能力で、空間認識能力の延長だと思ってくれればいい。知っている事を黙っていたのは謝る。悪かった。だが、悪用する気も口外する気も全くない。勝手に知られている時点で気分は悪いだろうがそこは信じて欲しい」
「え、えっちぃのはダメだと思います……」
　説明を終えた湊に、今まで顔を赤くして黙っていた佐久間が小さな声で言ってくる。
　彼女は普段からいやらしい事は駄目だと言っていたので、いくら好きな相手だろうと、スリーサイズを把握されているのは恥ずかしかったのだろう。
　というよりも、この場で気にしていないのは櫛名田くらいのもので、湊から説明と謝罪を受けた他の者たちも、許してやりたいが複雑な心境でどう返していいか分からないといった様子だ。
　油断した湊が墓穴を掘り、それにチドリが乗っかってきたからこそ、こんな事態になっている訳だが、このままでは何も好転せず、微妙な空気のまま誕生日会が終わってしまうのは明らか。
　ならば、この状況を打破するには、彼女たちに今以上の衝撃を与えてやればいい。
　湊は深く悩んだ末に、これで相手もいくらか安心するのではないかという期待も込めて、自分の身体についての話しをする事にした。
「……一ついいか？　お前たちは全員俺を男だと思っているだろう。だが、それは間違いだ。俺は半分女だぞ」
『……え？』
　最大級の秘密の一つを暴露すると、案の定、チドリや櫛名田も含めた全員が、何を言っているんだコイツは、という表情でポカンとしている。

これで場の空気の流れは変わった。あとは、予定通りに証拠が存在する事も含めて、素直に話せばいい。
「岳羽、少し匂いを嗅いでみろ」
「ちょっ!?」
そう考えながら湊は、一番近くに居たゆかりの手を引っ張って自分の方へ引き寄せると、以前、蠍の心臓でナタリアがしたように自分の首辺りに相手の顔を寄せさせた。
相手は驚いて暴れようとしているが、首の後ろをキュッと掴んでいるので逃げる事は出来ない。
その間、相手は呼吸のついでに匂いも一緒に嗅いでいると思われるので、ゆかりを傍に置いたまま、湊はさらに説明を続けた。
「桜さんに確認すればすぐ分かる。この身体は染色体に異常があって、男の染色体を持つ細胞と女の染色体を持つ細胞が混在しているんだ。だから、生殖機能等々の肉体のベースは男だが、脳構造も含めて男だとも言えるし、女だとも言える部分も持ってる」
「……本当だ。なんだろう、普通に女の子みたいな良い匂いがする」
「俺が佐久間のスキンシップに反応を返さないのも、そういった事が原因だ。女が女にアピールを受けている訳だからな。それで反応しろという方が難しい。まぁ、一時的に思考を男女どちらかに一元化する事も出来るが、そうしない限りは〝どちらでもある〟状態なんだ」
スンスンと匂いを嗅いで何故かリラックスした表情をしているゆかりを無視して、湊は佐久間の方を向きながら今までの反応の理由を話した。
別に佐久間に魅力が無いわけではない。ただ、湊側に相手を受け入れる気がないだけだと。
それはそれで酷い話しだが、同性からアピールを受けているという前提で考えれば納得出来たため、佐久間は残念そうにしながらも湊のことを知ろうと質問をしてくる。
「じゃあ、有里君は有里ちゃんでもあるの？」
「……呼び方の違い以外の意味はよく分からないが、月経や妊娠以外は女性として過ごす事は可能だ。実際、身体がホルモンのバランスを

整えるために、一月に数日くらい強い眠気やだるさを感じる期間が周期的にある」
「うわ、それ女の子の日と同じ症状じゃん。男子でそれって大変じゃないの？」
「……二次性徴が始まってからなったからな。戸惑いがなかったといえば嘘だ。けどまぁ、痛みと貧血はないから、俺個人としては女性の方が何倍もすごいと思ってるよ」
お互いの顔が数センチしか離れていない状態で尋ねてきたゆかりを解放し、湊は肩を竦めて素直な感想を述べる。
疑似月経は湊のホルモンバランスを保つために必要な、身体が勝手に行っていることなので、湊にはそれを防ぐ方法はない。
仮にその機能がなくなれば、自分の身体のホルモンバランスが崩れて、何かの病気を発症するかもしれないので、様々な薬物に対して免疫を持っているせいで薬が効かない湊にすれば、少し面倒だとしても身体が自然なサイクルで調整してくれるなら、それに任せる方が良いだろうと思っていた。
そうして、保護者である桜に訊けば真実だと分かると説明し、普段の印象からくだらない嘘は吐かないと信頼されている湊だからこそ、体育は見学で学校を休むことが多かったのも手伝い、他の者たちも湊が身体に異常を抱えていると一応は信じたようだ。
突然の湊の身体についての大暴露に驚いたものの、話しが治まればお互いに顔を見合わせ苦笑し、ゆかりが他の者たちに話しかける。
「まぁ、完全には信じられないけどさ。今日はチドリの誕生日会なんだし、この話しはこれくらいにしようか」
「そう、ですね。この件は有里君を信用しますから、くれぐれも私たちの情報は他言無用でお願いします。さっきみたいに問題を出されても、決して答えないようにしてください」
「あ、そうだった。さっきのは別件で扱うから、ちゃんと覚えておいてね」
「……ああ」
美紀に言われて思い出したゆかりに言われ、湊は諦観の表情で素直

に頷いた。
自分が原因で起こった事態にしろ、今日はもう心が休まる事はないに違いないと悟ったのだ。
その後は、ゆかり達が言ったようにチドリの誕生日を全員で祝い。佐久間やゆかりからの無茶ぶりで湊がダンスを踊らされたりなど、祭りの準備で解散するまで一同はとても賑やかに過ごしたのだった。

第七十五話　前篇　夏祭り―開幕―

夜――長鳴神社

食事や余興にプレゼントの贈呈など、チドリの誕生日会を無事に終えて、片付けを済ませてから解散したメンバーたち。

教師二人は祭りには行かず、花火のよく見える店で酒を楽しむためお別れだと、同性ならスキンシップだからセーフと言って湊の頬にキスをして去って行った。

直後、不機嫌な顔をしたチドリが湊にローキックを喰らわせてきたが、湊は両側から押さえられてキスをされた被害者であり、被害者なのにどうしてだと理不尽さを感じずにはいられなかった。

そんな事がありつつ、チドリと湊は眞宵堂へ、他の者は自宅や寮へ戻って着替えてから再集合という流れになった。

本日の祭りの参加者は美術工芸部のメンバー五人に、真田と荒垣、そして現在は高等部一年でボクシング部マネージャーの時任亜夜を加えた計八名。

去年の試合で湊と真田は疎遠になっていたが、どうやら本人・チドリ・ゆかり以外のメンバーはその事を気にしていたようで、今日は少しでも関係修復の切っ掛けになればという事らしい。

『……お前、馬鹿だろ』

だが、湊とチドリ以外のメンバーが先に集まっていると、少し遅れて到着した湊の服装を見た途端、真田と荒垣が口を揃え呆れ顔でツッコミを入れていた。

綺麗に浴衣で着飾った女子らもフォロー出来ずに乾いた笑いを漏らし、亜夜も久しぶりに会った湊に何があったのか驚いているようだ。

「お、弟くんってクリスチャンだったの？　えと、神社のお祭りに参加しても大丈夫なのかな？」

「時任先輩、こいつに信仰心があるなんて本気で思っているんですか？　性根の捻じ曲がったこいつの事だ。どうせ、日本の神に喧嘩を売るためだけに、こんなふざけた恰好をしてきたに違いない」

宗教に詳しくない亜夜が、他宗教の施設や行事に湊が参加していいのか心配していると、真田が腕を組んだまま鼻で笑って言い切った。
だが、流石の湊もＴＰＯを弁えるくらいは出来る。今日の祭りへは浴衣ではなく、普段着用の着物である小紋を着て参加しようかと考えていたくらいだ。
けれど、それは周囲に迷惑を掛ける間違ったお祭り好きのイリスによって、こんな上下合わせて十六万円という無駄に高価な司祭服での参加に変更された。
人混みにくるということで髪は高い位置で縛っているが、靴は普段から履いている編みあげのブーツなので、乗馬ズボンほど太もも辺りは膨らんでいないが、姿勢の良さも相まって少し軍服のようにも見える。
そうして、来るなり喧嘩を売られた湊が、相手にどのように返すか一同が恐々見守っていると、興味なさげな視線で全体を見つめながら少年は口を開いた。
「……荒垣先輩、昨日が誕生日だったらしいですね。おめでとうございます。これ、大した物じゃありませんがプレゼントです。料理をされるので汚れの落ちやすいエプロンにしておきました」
「お、おお、ありがとよ」
完全に真田をスルーしながら、斜め掛けに出来るナップザック型の袋に入れたプレゼントを荒垣に手渡す湊。
中身は先ほど説明した通り、洗えば簡単に汚れが落ち、皺の出来辛い生地で作られた高品質なエプロンである。
荒垣自身も湊の料理の腕前を知ってからは、さらに料理の研究をするようになり、料理の回数が増えてエプロンの汚れも目立つようになってきていたため、良いエプロンがないか丁度探していたところだ。
そのタイミングで料理をする人物が選んだエプロンを貰えたことに、単純に誕生日プレゼントを貰う以上の喜びを感じた荒垣は、受け取った袋を斜め掛けに背負い、表情には出さないものの内心でかなり喜んでいた。

そして、プレゼントを渡した湊は、そのまま亜夜の方へと向き直り。直前の相手の問いにも答える。
「……ああ、そういえば。この服は知り合いに着せられただけなので、別に俺は何の宗教も信仰してません。ですから、祭りに参加するのは何の問題もありませんよ、時任先輩」
「そ、そっか。エへへ、じゃあ今日はいっぱい遊ぼうね。真田くんも後輩をいじめちゃ駄目だよ？　せっかく集まったんだから、空気が悪かったら妹さんも楽しめないと思うな」
「べ、別に俺はそんなつもりは……」
亜夜に窘められた真田はばつが悪そうな顔をして、肩を落としながら視線を背ける。
自分よりも目上の人間で、しかも相手は学校の男子から絶大な人気を誇る女性だ。
文武両道で女子だけでなく男子にも憧れを抱かれている身でありながら、女性とほとんど関わらないような生活を送ってきたため、真田は女性の扱いに不慣れで、どういった対応をすれば良いのか分からないらしい。
しかし、真田がそんな風に対応に困っていると、先ほど喧嘩を売られていた湊が、欠片も興味がなさそうな顔のまま声を掛けてきた。
「俺は気にしてませんよ、お義兄さん」
「お、お前っ!?　だから、俺をお義兄さんと呼ぶなと言ってるだろう！」
「……どうでもいい。というか、さっさと映画代くださいよ。お義兄さんが部活の日に真田を誘いますから」
「させる訳ないだろうがっ」
湊の言っている映画代とは、以前、放課後の試合を受ける際に真田が自ら決めた参加報酬の事だ。
引き攣った表情でかなり無理していることがありありと分かったが、それでも学内でも柄が悪いと言われている男子に、妹との実質デート権を与えるなど、普段の真田を知っていればあり得ないと思うだろう。

映画代も真田が持つと言っていたので、聞いていた者はさらに驚くこととなった。
そして、湊は実際に条件を呑んで試合をして勝ったわけだが、その約束は未だ果たされていない。
試合をした二人が疎遠になっていたこともあるが、どちらかと言えば、湊が美紀と遊ぼうと思っていなかったために、ここまで流れていたという要素の方が強い。
今回は留学中で一時的に帰国しただけなので、湊はまた直ぐ帰らなければならない。
よって、今度もまた映画の約束は果たされそうにないが、その前に真田は湊に言う事があった。
「お前が美紀にふざけた事をしないか監視するのも兄の務めだ。保護者として映画には俺も同伴する」
「別に良いですよ。なら、お義兄さんの経済負担を減らすためにカップル割引の日に行きますから、来年以降になりますが予定を調整しておいてください。ああ、俺たちがカップルなのに一人じゃ居づらいのなら、そうですね……時任先輩、お義兄さんとカップルのフリをしてあげてくれませんか？」
「ちょっ、弟くんっ!?」
急に想い人とカップルのフリをしてやれと話題を振られた亜夜は焦る。
周囲にはばれていないつもりで、それだけに誰にもばらさないようにきつく言っておいたというのに、湊が雑な話題の振り方をしたせいでこの場の女子にばれてしまったに違いない。
真田本人にばれた可能性は、本人が鈍感であるが故にあり得ないと心配していないが、それでも後輩に好きな人がばれたことで、亜夜は顔を真っ赤にしていた。
そうして、一人は怒りで、一人は羞恥で顔を赤くしている状況となり、原因となった少年がこうまで饒舌になって人を煽ることなど珍しいと思っていたゆかりは、先ほどの誕生日会で無茶ぶりの余興ダンスも含めて相手はストレスが溜まっていたんだと気付く。

身体データ等は誰のせいでもないが、余興に関しては自分も煽った側なので、少しばかり責任を感じて場を収めるため湊を強制連行しつつ神社に向かうことにした。
「さーて、全員集まったから移動しようねー。今日は人が多いからここで止まってたら邪魔になるからねー。皆もはぐれないようについて来てくださいねー」
「ん、おい、岳羽……」
やや強引に腕を掴んで引っ張ってゆく相手に、湊は面倒そうな表情で文句を言うが、ゆかりはそれを無視して石段を進み続ける。
今日は本当に人が多い。気を抜けば周りの人に足を踏まれそうになり、はぐれてしまえば再会するのは大変そうだ。
一応、今日集まった大体の者はお互いの連絡先を知っているので、携帯で連絡を取る事は可能だが、今度はどこで集合するかという問題が出てくる。
「君さ、先輩たちでストレス発散しちゃダメでしょ。まぁ、無茶ぶりした私のせいでもあるけど、ダンスもキレがあって上手かったじゃん。恥ずかしがる必要ないって」
「いや、そんな事はどうでもいいが……」
「さっきの様子からすると、時任先輩って真田先輩のことが好きなんだよね？　そっちもからかっちゃ駄目だって。女の子は恋に憶病なんだからさ。君も女の子でもあるなら分かるはずでしょ」
「そんな物、分かってたまるか。というか、少し待て」
肘の辺りを掴まれ腕を引かれている湊は、話しを聞かない相手に苛つきながら静止するよう求めるも、ゆかりは気にせず進み続ける。
境内は屋台も多数あり、どこも人が多いので、参道から外れた場所でなければ待っていることも難しい。
けれど、そうなると暗さでお互いを視認し辛いので、やはり奥の社務所の方までいかなければ再会できないだろうと、境内に入ってちょっとばかり進んでから、ゆかりは皆にはぐれないよう再び注意を促した。
「皆、本当にはぐれたら会えないからね。ちゃんとついて来てよー

……って、あれ？　皆、もうはぐれちゃったの？」
「はぁ……だから、時任先輩が止まっていて、他のやつらもまだ出発してないって言おうとしたんだ」
後ろを振り返らず、とりあえず湊をあの場から引き離すことで場の収束を図ったゆかり。
しかし、湊のせいで顔を赤くしていた亜夜が動き出していなかったため、他の者はそちらに合わせて出発点からほぼ動いていなかった。
それに気付かず、湊の呼びかけも流していたため、ゆかりは湊の手を引いてずんずんと進んでしまっていた訳である。
人の流れは車道と同じように左が奥へ進むように、右が神社を後にするような流れが出来ていて、今から出発点に戻るのは骨が折れるだろう。
「あ、あはは、えっとぉ……二人でまわる？」
はぐれるなと言っておきながら、自分が真っ先に単独行動を取ってはぐれたことに気付き。隣にいる呆れ顔の少年を見上げながら、僅かに汗を掻いて呟いた少女の声は、祭りの喧騒に呑まれていった。
＊＊＊
出発した瞬間にはぐれていった少女と、その相手に腕を引かれて強制連行される少年の後ろ姿を眺めて立っていた者たちは、ようやく亜夜が立ち直ったことで、早速見失ってしまったことをどうするか雑談も交えつつ話していた。
「あいつ、すごいな。有里を引っ張り回せる生徒なんて、吉野くらいだと思っていたぞ」
「んー、でも弟くんってこっちがリードしちゃえば、諦めて普通に付き合ってくれるよ。まぁ、それは女子だからかもしれないけど」
「……そうね。その分、湊の負担になるから止めて欲しいんだけど」
亜夜だけでなく、佐久間も湊の扱い方を最近になって覚えてきたようで、強引に付き合わされている場面をチドリも度々目撃していた。
いまは留学していることで上手く逃げられているが、帰って来てから絡まれれば、また負担を強いられる日々が始まってしまう。
影時間の研究やシャドウとの戦闘で疲れている筈の相手に、そんな

くだらないことで重荷を増やしたくないため、チドリは呆れたような責める瞳で亜夜をジッと見つめた。
「え、えっとぉ、ほら、私もアイスとか買ってあげてるし。弟くんもリフレッシュになってるんじゃないかな？」
「必要ないわ。湊の周りにいる女は多芸なの。マッサージやらアロマテラピーやら、そんな事が出来る人が大勢いるから、オヤツで釣ろうとしないで」
裏の仕事をしている人間や、大きな声では言えない仕事をしているような人間と関わる事が多いため、湊の周りの女性は、チドリの言う通り多芸な者が多かった。その中には湊を癒す事の出来るスキルも勿論ある。
故に、他の女性のように効果的に癒す事も出来ず、疲労も同じくらい与えるリフレッシュなど、何の意味もないので自重しろと少女は上級生を諌めた。
「は、はい。以後、気を付けます」
自身よりも年下ではあるが、相手の家族の少女に注意されたことで、亜夜は反省して肩を落とす。
出会ったのが湊と真田が試合をしてからなので、一緒に遊んだ回数はとても少ないが、相手よりも自分がはしゃいでいる自覚はあった。
世話を焼くのも楽しいが、不貞腐れたように付き合ってくれる相手の姿が母性をくすぐり、ずっと引っ張り回して眺めていたいと思わせる不思議な魅力がある。
そんな相手の優しさに甘えて、自分が負担になっていたなら、やはり申し訳なさを感じずにはいられない。
中等部時代、姉にしたい人ランキングでトップに輝いた時任亜夜は、そんな良識も持ち合わせた女性だった。
「ま、まぁ、とりあえず合流する方法を考えましょう。いま、有里君から岳羽さんと二人で行きは回るとメールがありました」
チドリが亜夜を責めたことで暗くなりかけた雰囲気を払拭するため、美紀が全員に携帯のメール画面を見せながら話しかける。
そもそも、チドリが亜夜を責めたのは、湊がゆかりに攫われたこと

が原因で不機嫌になったからであり、今までの不満の累積もあるのかもしれないが、半分は八つ当たりに近い。
事態のおおまかな原因を理解していた美紀は、せっかく祭りを楽しんで遊ぼうというのに、このままでは駄目だと頑張って流れを変えようとした。
「んじゃ、合流は奥に行ってからだな。ちょいちょい遊ぶなりメシ食うなりしながら、俺らも奥に向かうって返しとけ。参拝は合流後にするから、賽銭箱の近くで待っとけってな」
すると、荒垣も美紀の意図に気付いたようで、話しを合わせて自分たちも境内へ向かうように誘導した。
まぁ約一名、チドリがいるのにどうして湊が自分の妹に連絡を寄越したのか、などと不満そうにしているが、荒垣は妹馬鹿は放っておくことに決めているので、その人物に行くぞと声をかけて人の流れに乗って歩き出す。
境内に近付くにつれ、スピーカーから音割れしたサマーソングが流れているのが聞こえ、人々のがやがやとした話し声も相まって、やっと祭りの雰囲気らしくなってきた。
先ほどまで沈んでいたり怒っていたりした者たちも、場の盛り上がりに当てられたのか、今は屋台を眺めながら会話を弾ませていた。
「チドリちゃん、今年も知り合いのおじさんたちはお店出してるの？」
「ええ、今年は湊も行くって伝えたら全力でもてなしますって。まぁ、財布がいるから別に通常価格でも構わないんだけど」
「そうなんだ。去年のたこ焼き美味しかったから、また今年も食べたいな」
確かに去年食べた屋台の料理はどれも美味しかった。チドリと風花の会話を聞いていた荒垣も、その点には同意する。
しかし、自分の聞き間違えでなければ、チドリはこっちの組にいる男二人を財布と呼ばなかっただろうか？
加えて、風花も相手を諌めるでも窘めるでもなく、その事を流して会話を続けていたように思う。
常識人だと思っていたのだが、変人グループと関わる様になって、

変なメンタルの強さを持ってしまったのだろうか。
祭りで遊ぶために財布にはそれなりの額を入れてきたが、懐だけでなく、頭や胃が痛くなりそうだと荒垣は深いため息を吐いた。
「はぁ……まともな後輩が欲しいぜ」
「急に何を言ってるんだ？　それよりシンジ、射的で勝負しよう！」
「テメェこそ、急に何言ってんだ。つか、やらねーよ。あんなの倒れる訳ねーだろ」
「ハッ、やる前に勝負から逃げるとは、お前もとんだ臆病者になったもんだ。ならば、見ていろ。俺が手本を見せてやる。オヤジ、一回だ！」
威勢よく言いながら、不敵な笑みで百円を片手に真田は屋台へ向かう。
そこの店員がチドリに挨拶をしていたので、今年も早速お世話になるのだろう。
本来なら百円で六発のところ、チドリの友人だからとこっそり十発受け取った真田は、他の者らに見守られながらコルクを詰めた銃口を景品に向ける。
真田が狙っているのは、どうやら北海道土産にありそうな木彫りの熊のようだが、どうして二つ隣のパンダのぬいぐるみにしておかなかったのか。
四本足で置いてある時点で、バランスが安定しているからと避けるべきだ。さらに、木彫りの置き物はああ見えて重量がそれなりある。
以上の二点から、いくら支えが付けられていないと言っても、威力の無いコルク弾では落とす事も倒す事も不可能だと明白だった。
「くっ……何故、当たっているのに倒れないんだ！　まさか、倒れないよう支えたりしてないだろうな？」
「アホか。んな、重くてデケェものがコルクで倒れる訳ねぇだろ。いっぺん貸してみろ。大層なこと言ってた口先野郎に実力の違いってのを見せてやるぜ」
言いながら、荒垣は真田の手から銃を奪うと、残っていたコルクを一つとって銃に籠める。
面倒そうにしていたくせに、相手がやっているのを見てから自分も

やり出すとは、本人が自覚していないだけで荒垣自身も祭りで浮かれているらしい。
そうして、狙うのは木彫りの熊ではなく、もっと小さくて簡単に倒れるサービス用に置かれている景品だ。
例えばキャラメルなどお菓子の箱、合成樹脂で出来た安っぽいキャラクター物の貯金箱、鞄に付けられそうなぬいぐるみのマスコットなど、軽い上に縦長で重心の安定していない物が望ましい。
いくつかある中から、最終的に荒垣は『不死鳥戦隊フェザーマン』のレッドイーグルのソフビ人形に狙いを定め、出来る限り身体を乗り出して銃口を近付けて引き金を引いた。
「おめでとう！　こいつは見事倒した兄ちゃんの物だ！」
屋台のオヤジの快活な声がその場に響く。
荒垣の銃から放たれたコルクは、レッドイーグルの頭部を見事に捉え、景品受けのネットの上に落下させる事に成功した。
別にこれが欲しかった訳ではないが、『倒す』という目的を達成するために狙いを定め、宣言通り成し遂げた荒垣の表情は、普段よりもどこか得意気だ。
「ま、ただの遊びでも結果くらい残さないとなぁ」
オヤジから受け取った景品を隣に居る幼馴染に見せながら、荒垣は少々見下しながら口元を歪める。
たかが子どもの玩具一つだが、それでも幼い頃から競い合ってきた二人にとって、勝者と敗者の差を嫌でも意識させる存在だ。
見せつけられた真田は、悔しそうに歯をぎりぎりと鳴らしながら、今も勝ち誇ってにやついている荒垣を睨みつける。
「ま、まだ勝負は終わってない。あと三発残ってる。結果が大事だというのなら、一発でも十発でも取れれば一緒だ」
「へっ、せいぜい負け惜しみでも言って……」
話している途中で真田は銃を構えて景品を狙い出す。
冷静さを欠いている状態ならば、先ほどよりも意地になって大きな景品を狙う筈だ。
幼馴染の行動パターンなどお見通しだと、視線を景品の並ぶ棚へ向

けるとそこには信じられない光景が待っていた。
「や、やったぞシンジ！　俺は一発で二つも倒した！」
「ちょっ、テメェ、ズリーぞ！」
喜んでいる真田に対し、荒垣はそんな物は反則だと抗議を入れる。
なにせ、真田の撃った弾はほとんど外れていたのだ。
挑発を受けたあの状態で、荒垣の取った物の類似品であるブラックファルコンのソフビ人形を狙ったことは、昔から彼を知る者として正直驚いたが、狙いの逸れた弾は人形の腕に当たった。
そして、人形は立ったまま肩を引く様に回り、バランスを崩して棚の前方に向けて落ちながら倒れる際、下段にあったお菓子の詰め合わせも巻き込んだのである。
店側としては、その隣の支えありの高額商品が巻き込まれなくてホッとしているが、少年たちは相手の様子に気付かず、手に入れた景品について言い合っていた。
「悪いなシンジ。俺はどうやらお前よりも才能があったらしい」
「ふっざけんな！　んな、マグレで勝ち誇ってんじゃねーよ」
明らかな偶然で得た結果を、とても爽やかな笑みを浮かべて自身の勝利と言ってくる真田。
それを才能と認める気がない荒垣が大声を出している様子は、先ほどと立場が入れ換わっただけだ。
途中から、隣の屋台でヨーヨー釣りを楽しんでいる女子らが、三年生二人を子どもっぽいと苦笑しているのも知らず、二人はまだ会話を続ける。
「まぁ、そう熱くなるな。お前にもこの菓子は分けてやるから」
「ちげぇっつの。菓子が欲しくて言う訳ねえだろ。この後、どんだけ食べると思ってんだ」
「なら、こっちの人形か？　別に欲しいのなら構わないが、お前も子どもっぽい趣味があったんだな」
そう言って真田はブラックファルコンの人形を渡してくるが、荒垣もレッドイーグルの人形をどうしようか考えていたところなので、処分に困るものを貰ってもまるで嬉しくなかった。

二つに増えた人形の処分方法に悩みだすと、頭を使いだしたためか冷静さも取り戻す事が出来る。
無駄に熱くなってしまった先ほどまでの自分の態度に反省しつつ、荒垣がぼんやり考えていると、小さな男の子が自身と真田を見ている事に気付いた。
一緒にいた真田も少年に気付いたようで、二人で揃って相手を見返す。
少年は自分たちそのものを見ていると言うよりは、視線が何かをジッと見つめている様子なので、何を見ているのか視線を辿り、それがソフビ人形に向いているとようやく理解した。
見たところ少年は小学生になるかどうかくらいの幼さなので、その年頃の男の子ならば、戦隊ヒーロー物は大好きだろう。
荒垣と真田は不毛な言い争いを止めると、二人で並んで少年の元まで進んだ。
「欲しいのか？」
「……くれるの？」
「ああ、別に俺たちは景品を倒せれば良かっただけだからな。欲しいのなら、二つとも持っていくと良い」
「うわぁ、ありがとうお兄ちゃん！」
真田に言われ、荒垣の手から二つの人形を受け取った少年は、顔を輝かせると満面の笑みを浮かべた。
こんなにも喜んで貰えるのなら、譲った者としてもあげて良かったと嬉しい気持ちになる。
そうして、少年につられて笑みを浮かべていたとき、後ろの方から少年を呼ぶ女性の声が聞こえてきた。
「乾！　ダメでしょう、勝手に行っちゃ！　迷子になったらどうするの！」
「あ、おかあさん！　これお兄ちゃんたちがくれた！」
やってきた女性は少年の母親で、乾（けん）と呼ばれた少年は嬉しそうに貰ったばかりの人形を母親に見せている。
しかし、母親は少年が我儘を言って貰ったと思ったようで、鞄から

財布を取り出し、申し訳なさそうに謝ってくる。
「子どもが我儘を言ったようで、どうもすみません。お代はお支払します」
「いや、狙って取ったものじゃないんで、どうするか困ってたんスよ」
「どうせなら欲しい人間が持っていてくれた方が玩具も喜ぶでしょうから、迷惑でなければ貰ってください」
狙って取ったものじゃないというのは嘘だが、欲しいから狙った訳ではないのは本当だ。
倒し易そうな景品の中で偶然選んだに過ぎず、それを貰って喜んでくれるのであれば、二人は是非とも譲りたいと思った。
二人から揃って言われてしまうと、相手の好意を無下にするのも失礼になると思ったのか、女性は少年の隣に並び綺麗な微笑みで礼を述べた。
「どうもありがとうございます。ほら、乾。もう一度しっかりお礼をして」
「うん！　お兄ちゃん、フェザーマンくれてありがとう！」
「おう、祭りに夢中でなくしたりすんなよ。帰るまで親に預かっててもらえ」
「わかった！　おかあさん、フェザーマンもってて！」
「フフッ、はいはい」
荒垣に言われて素直に言う事を聞く子どもを見て、母親はおかしそうに笑って人形を鞄にしまう。
その後、少年ら親子は祭りを見て回るからと礼を言って去って行き。荒垣達も参拝所まではまだまだ掛かるので、チドリ効果でサービスして貰いつつ、食料を手に入れながら屋台で遊んでもまわった。
＊＊＊
一方その頃、はぐれてしまったために二人で祭りを回っている湊とゆかりは、後ろの組と同じようにサービスして貰いながら屋台をまわっていた。
「若、お久ぶりでございやす！　随分な別嬪さんを連れてますが、もしかして〝コレ〟ですかい？　いやぁ、若ほどの男前にもなると連れて

る女も違いますね！」
「……まぁな」
「否定しろよっ！　ってか、何度目よ、このやり取り!?」
声を掛けてきたベビーカステラの屋台の店員である組員は、にやにやと笑って小指を立てて尋ねてくる。
小指の意味は『恋人』や『愛人』という意味なので、どちらの意味だったとしても間違っているのだが、既に十回近く同じ質問を別の屋台で受けていたので、否定するのが面倒になったらしい湊は興味無さげに返事をした。
ゆかりも言われる度に愛想笑いを浮かべて否定することにも疲れてきたが、面倒だからと肯定すれば、もっと面倒なことが待っていそうな気がしている。
それだけに、いくらこの一時に疲労を感じるはめになろうが、断固として湊の〝コレ〟などというポジションとして紹介される訳にはいかなかった。
「ホンットに違いますからね?!　私と有里君はただの友達ですから！」
「……ただの同級生だろ。友達だと思ったことなんて一度もないぞ」
ベビーカステラ屋の店員の誤解を解こうと、真剣に否定して友達と訂正するゆかりだが、湊が友人と認めているのは、シャドウの王であるファルロスただ一人。
故に、どれだけ親しくなろうとも、相手を友人だと思ったことなどないと冷たく言い放つ。
すると、眉根を寄せてしばらく微妙な表情を作っていたゆかりが、隣に立つ湊を見上げ視線を合わせて口を開いた。
「いや、そんな人の心を砕きにくるカミングアウトいらないから。一方的に友達と思ってるとか、私がみじめじゃん」
「……買ってやろうか、ベビーカステラ」
「君の優しさが心に沁みて泣きそうよ……」
ショックを受けている相手を慰めるため、湊は丁度目の前にあるベビーカステラを買ってやろうかと進言する。

ゆかりもベビーカステラは嫌いではないので、その申し出自体はありがたく思う。
けれど、もっと大切な話をしていたはずなのに、食べ物で誤魔化そうとしてきたことで、ゆかりは先ほどの湊の発言が真実なのか冗談なのか分からなくなった。
お互いの仲は良好で、異性の友人の少ないゆかりにとって、最も仲のいい男子として挙がるのが湊だ。
それに対し、湊はそもそも同性の友人が全くいない。女子で会話する者もいるが、ほとんどは湊との交流を望むミーハーな生徒たちとなっている。
そんな、ぼっち気質な二人がせっかく出会って交流を持ったというのに、本当に友人として見られていないのなら悲しい。
ゆかりが肩を落とし、わざと涙を拭くしぐさをして見せると、湊は淡々とベビーカステラの大袋を店員から受け取りながら返してきた。
「生憎と、女の涙は信じないことにしてるんだ。前にそのせいでナイフで刺されかけたからな」
「……痴情のもつれ？　巻き込まないでよ？」
「はぁ……お前の俺に対するイメージがよく分かる一言だな。ほら、口を開けてみろ」
「え？　んぐっ!?」
言っている意味が分からず、理由を説明してもらおうとしかけたその時、紙袋に手を入れていた湊が、ベビーカステラをゆかりの口に一つ押し込んできた。
ほんわりとした温かさで火傷する心配はないが、それでも急に女子の口に食べ物を押し込むのは問題行為である。
驚きで涙の滲んだ瞳で睨みつけ、一生懸命口の中のベビーカステラを咀嚼し呑みこむと、ゆかりはベビーカステラを食べながら自身を見下ろしている相手へ抗議の声を上げた。
「きゅ、急に何すんのよ！　食べるにしても自分で取るから、そういう事しないでよね！」
「言っている意味がよく分からないな」

「だから、自分で食べるから袋を貸せって言ってるの！」
言い終わるかどうかのタイミングで湊の持っていた袋をひったくり、やけに軽いと違和感を覚えつつ、勢いよく手を入れてベビーカステラを取ろうとする。
だが、いくら手で袋の中を探ろうとも内側の紙の質感しか感じず、不思議に思って中を見てみれば袋は既に空となっていた。
注文して受け取ってから三分も経っていない。だというのに、袋が空っぽとはどういうことか。
キョトンとしながらゆかりは湊に問いかけた。
「あ、あれ？　中身は？」
「……もう食べ終わった」
「あたし、一つしか食べてないのにー！」
その一つも急に口に押しこまれて、抗議のために味わいもせずハイスピードで咀嚼してしまった。
湊とチドリの知り合いの店は、どれも美味しい料理ばかりなので、ただのベビーカステラであっても期待していたというのに、これではあんまりだと嘆げかずにはいられない。
そんな様子のゆかりを不憫に思ったのか、湊は空の袋を丸めてゴミ箱に放り込んでから、珍しく優しい声を掛ける。
「別のやつを買ってやるから泣くな」
「いや、泣いてないから。てか、君の前では泣かないから」
「なんだ、その変な特別扱いは……」
ゆかりが湊の前で泣かない理由は、周囲の人間の中で最も心身ともに強いと思われる相手に、涙を見せるのが単純に悔しいからだ。
男に縋っていなければ何も出来ない母親とは違う。自分は一人でも生きていける強い人間になる。
そう思っているゆかりにとって、強者に自分の弱い部分を見せない事が自分の強さを証明する方法として一番分かり易いと思っている。
けれど、自分がそんな風に考えていることがばれれば、変に鋭い湊から無理に強がっていると言われるだろう。
そうさせないため、ゆかりは小悪魔的な悪戯っぽい笑みを浮かべ、

湊の口にした〝特別扱い〟という話題を拾って、話を逸らすためのネタにした。
「……特別扱いされて嬉しい？」
「さてな。それはどうでもいいが、先に進もう。りんご飴でも買ってやるから」
「あ、私りんご飴って食べた事ない。あれって美味しいの？」
「鼈甲飴（べっこうあめ）みたいなものでコーティングしただけで中は生のリンゴだからな。多少の当たり外れはある。そのリンゴも普通のサイズと小さな姫リンゴがあって、姫リンゴの方が飽きる前に食べ終える事が出来るものの、すっぱい可能性が上がるから一長一短だ」
　奥へと進む人の流れに乗りながら、二人は並んで他の屋台を眺めて歩き出す。参拝所までの道のりはまだ遠い。
「そうなんだ。まぁ、飽きたら君にあげるから、美味しい方にしてよ」
「……他人が口を付けた物は嫌なんだが」
「あ、確かに間接キスか。そんなの期待するとか、君も一応男なんだね。ちょっと引くかも」
　お互いに相手を小馬鹿にしたり、時に流して相手にしなかったり、そんな不思議な距離感で進む二人の歩みは遅い。
　後続の組も遊んでいて中々進まないため、合流まで時間が掛かりそうだが、それぞれの夏祭りはまだまだ続く。

第七十六話　後篇　夏祭り――二人巡り――

――長鳴神社

鳥居から参拝所までのちょうど中間地点辺りの屋台。

そこで伊織順平は一緒に祭りに来ていた友近と、珍しい物が置かれているなと思い、しゃがみ込んで商品を眺めていた。

「すっげぇ、アイドルの写真とかグッズが売ってるのはよく見るけど、学校のアイドルの写真やグッズが売ってるとか初めて見たぜ」

「ああ、俺も初めて見たよ。プリミナも規模が大きくなって、こんな屋台まで出せるようになったんだな」

二人がいる屋台には『プリミナ＆真田王国』と書かれている。

プリミナは湊のファンクラブである『プリンス・ミナト』のことで、後者は真田のファンクラブである『真田王国（キングダム）』のことだ。

両組織は去年の試合の事もあって対立していたはずだが、店員として並んでいる両組織の会長は、特に仲違いした様子もなく椅子に座っている。

それも当然で、プリミナの会長である雪広繭子は真田王国の会長・花島（はなじま）美和（みわ）と幼稚園からの幼馴染であった。

花島の実家は繭子の実家の近所で花屋を営んでおり。二人は町内で自営業を営んでいる伝手で、このような屋台を開くことが出来ている。

繭子が真田と同じクラスで隣の席なため、自分は隣のクラスなのにと嫉妬した美和がねちねちと妬みの言を電話で唱え続けたことや。真田王国の会長のくせに、湊との遭遇率が高くてよく会話をしているのが羨ましいと逆に繭子が怒りのテレフォンをかけたこともあったが、そういった事を除けば両者は商売中でも普段通りの様子で接客をしている。

「お二人とも、この店の収益は全て新たな皇子グッズの開発費となります。ですから、存分に散財していってください」

「うふふ、そんな物よりも皇帝グッズの方が御利益もありますよぉ？

持っていれば女子と話題の共有が出来ますしぃ。今年のオススメ

はこの春の部活紹介時のブロマイドです」
キリッとした良家の娘的な雰囲気の繭子に対し、美和はおっとりした箱入りの御令嬢タイプ。
浴衣を着てそんな二人が並んでいれば、非常に眼福ではあるのだが、生憎と順平も友近もグッズを買うほど母校のイケメン二人のファンにはなっていない。
体型の隠れる服で女子の恰好をした湊だけは別ではあるが、画像データならばともかく、グッズとして所持していると、もしやソッチの気があるのではと思われる危険を孕むため、やはり二人は眺めるだけで買う気はなかった。
そうして、しばらく冷やかしがてら、何か面白い物がないか眺め続けていると、後ろの方からある女子の声と近付いて来る下駄の音がした。
「うわっ、すっごい。ほら、君のグッズが売ってる店があるよ？」
「……先輩の方は後援費か。俺の方は普通に個人収益みたいだな」
話しながらやってきたのは、リンゴ飴を片手に持った浴衣姿のゆかりと全身黒の司祭服を着た湊。
真田王国の商品近くに置かれた『この店の収益は真田選手の遠征や活動備品等の費用に当てられます』と書かれた立て札を眺め、プリミナの方にはそういった立て札がないことで、完全に自分たちの懐に納まるシステムかと嘆息しているが、別に店をやめさせようとはしていない。
本人がそうならば、無関係の自分が口を出すのも変かと、ゆかりも気にした様子もなく置かれている商品を面白がってみている。
だが、新たに冷やかしで訪れた二人と違い。自分たちの崇拝している少年本人が登場したことに繭子は驚愕して席を立つと、そのまま屋台をぐるりと回って湊の横に拝むようにしゃがみ込んだ。
その様はまさに祈りを捧げる修道女。恰好は浴衣だが、あまりに見事な姿勢で司祭服の少年を拝んでいるので、まわりの人間は一瞬修道服と教会を幻視した。
しかし、急に往来でそんな事をされても対応に困るので、湊が相手

を立たせようとしたとき、繭子は一人で懺悔を始めてしまう。
「ああ、皇子。わたくしは以前、放課後に貴方のクラスに忍び込み、勝手に貴方の席に座って喜びを感じていました。どうか愚かなわたくしに罰をお与えください」
「……別に学校の備品ですから、先輩の椅子と交換してたって気にしませんよ。俺が授業等を受ける事に支障が出ないのであればですけど」
「そ、そんなっ、なんと慈悲深いのでしょう。ああ、皇子。どうして、貴方はこんな心の醜いわたくしに慈悲をお与えになるのでしょうか」
「……その後悔が自身への罰となるでしょう。ですから、それ以上の罰は必要ないんです。悔い改め、他者に慈しみの心を持って接しなさい。そうすれば、貴女もいつか己を赦し、罰から解放されます」
「はい。この雪広繭子は、いまこの瞬間より、人々のために尽くしてゆきます。わたくしの懺悔を聞いてくださり。ありがとうございました」
急に始まった寸劇モドキに、湊が合わせるとは思っていなかった周囲は驚いていた。
顔をあげた繭子の表情が憑き物が落ちたようにスッキリしていたことで、もしや本当に湊には何かの力があるのではと思い始める。
けれど、それを直接聞けるのは、友好度の関係からこの場にはゆかりしかいないので、その彼女が笑いを堪えている以上、真実を知る事は出来そうにもなかった。
綺麗な笑みを浮かべて立ち上がった繭子が、元いた店員の席に戻りデジカメで撮影し出すと、一同は普段の調子を取り戻し、急に現れた湊に話しかけてくる。
「ああ、そういえば、今日の皇子は素敵なお召し物を着ていらっしゃいますね。とてもお似合いですが、皇子はカトリックですか？　それともプロテスタント？」
「これは知り合いが神社に喧嘩を売ってこいと着せてきただけです。実家の話しでいうなら、多分、神道だったと思います。よく知りませんが、系譜的に神の子孫になってるんで変な話ですけど」

自分はそもそもクリスチャンではない。繭子に尋ねられた湊は、演技で自嘲的な笑みを作って返す。
すると、一緒にいて話しを聞いていたゆかりが、内容に気になることがあったらしく、不思議そうに尋ねてくる。
「神の子孫ってどういうこと？」
「家系図ってあるだろ。うちの実家には紀元前から俺まで続く物があったんだ。で、辿って行くと龍神の豊玉姫命ってのが直系に存在する」
「りゅ、龍って実際にいないじゃん」
「まぁな。けど、神話における豊玉姫命をさらに遡ると天照やら伊邪那岐や伊邪那美がいるから、仮にそれらが真実なら、俺も日本創世の神々の血を引いている訳で。先祖として敬うならともかく、神として崇める宗教を信仰していたというのは疑問を感じるという話しだ」
言いながら最後に、知っている人間は既に死んでいるから詳細は不明だが、と付け足すも一同は話しのスケールが大きくてよく理解出来ていない様子である。
けれど、湊自身は自分で話しながら神々が実在していた可能性もあると思っていた。
ニュクスが到来したのは四十億年以上前の原始の地球。それから今日まで、ずっとシャドウやペルソナのような存在がいなかったとは言い切れない。
また、エリザベスたちの話しによれば、メッチーのような悪魔も呼び出され地球に訪れていたことがあるというので、仮に神話の神々がそういった存在だとすれば、人との間に子を為した者がいてもおかしくはない。
もしも、本当に神々はそういった存在で、自分のルーツがそこに行きあたるのであれば、自分は純粋な人間とは異なる部分もあるのだろう。
だからと言って自分の生まれを悩むことはないが、それでも、少しばかり気になって考えていると、今まで黙っていた順平が話しかけてきた。

「えっと、有里君だよな？　オレ、君の留学と入れ替わりに転入してきた伊織順平。一緒のクラスで君の次の出席番号だから、こうして会えたのも何かの縁って事で一つよろしくな」
「……有里湊、よろしく」
夏祭りで初対面の挨拶というのも変だが、お互いに会う機会もないので、せっかくの出会いに挨拶くらいは済ませておきたい。
そういった思いで順平が握手を求めると、差し出された手をしばし見つめてから、湊も握手に応じた。
現実離れした雰囲気に、どこか素っ気ない態度を見せていたため、握手に応じて貰えない可能性を考えていた順平は受けて貰えた事に喜ぶ。
過去に少年野球でバットを振って少し固くなっていた手を掴んでも、相手は嫌な顔一つしないので、聞いていたよりも良い人間かもしれないと思った。
なので、少しくらいからかっても大丈夫かと考え、湊の隣にいるゆかりも巻き込み、両者の関係について尋ねてみることにした。
「へへっ、にしても、君ら二人でお祭りってことはやっぱそういう事？」
若い男女が二人で祭りを回るという事は、傍から見ればデートにしか見えない。付き合っているかはともかく、最低でも友達以上の仲ではあるはず。
校内ルックスランキング上位として認識していた二人が、女子は浴衣を着て、男子も私服とは異なった衣装をわざわざ着ているのだ。
これでお互いの間に何もないと言う方が嘘だろう。
そうして、尋ねた順平や友近たちもジッと答えを待っていると、湊が普段通りのアンニュイな表情で、興味無さげに答えてきた。
「……想像に任せる」
「だーかーらぁ、君もわざと誤解される返事すんのやめなさいっての！　違うからね？　ただ、他の人とはぐれちゃっただけだから」
本日の数十回にも及ぶ組員らとの会話によって、ゆかりは湊が口を開く前からどんな風に答えるか半ば予想していた。

案の定、面倒くさがって否定も肯定もしないという、なんとも誤解を受けそうな返しをしたことで、ゆかりは即座に否定し訂正を加える。
だが、ここで湊はさらにゆかりの想像の斜め上を行く言葉を続けた。
「……部活のメンバーや真田先輩らと一緒に来ていたんだが、来てすぐに岳羽が俺の手を引っ張って集団から離れたんだ。俺は何度も止まれと言ったけど聞き届けられず、完全にはぐれてから岳羽は二人で回ろうと言ってきたな」
「た、確かにそうですけど、全然意味合いが違いますから！」
湊の言葉は確かに間違ってはいない。ゆかりは集合して割とすぐに湊の腕を掴んで強制連行した。
さらに、待てと言う湊の言葉も無視して、気付けば完全にはぐれた状態となっており。合流も難しそうだったので、二人でとりあえず回ろうかと提案した。
ここまでは全て真実なので、相手の言葉を完全に否定する事は出来ない。
けれど、故意に誤解を受けそうな説明をしているようにしか思えなかったので、責めるように睨みつけていると、蒼の皇子と桜の王女のゴシップに強く食い付いた友近が、興味津々とばかりに便乗して質問をぶつけてくる。
「岳羽さんって結構アプローチ激しいタイプなんだ。なんか意外だなぁ。なっ、告白ってどっちから？」
「そんな物はしてない……が、前に一時帰国したときに、岳羽が自分を好きと言えと何度も強請って来て大変だった」
「も、もういいから、君は黙ってて！」
「んぐっ」
やれやれと肩を竦めて答える湊の口に、ゆかりは持っていた食べかけのリンゴ飴を突っ込んだ。
強制的に黙らせるための策だが、入れる際強く歯に当たったようで、痛みで顔を顰めた湊が抗議の視線をゆかりに送る。

「はぁ、怒らないとか言ってたのにメチャクチャ根に持ってるじゃん。ってか、本当に私たち付き合ってないから。合流しなきゃいけないから行くけど、変な噂とか広めないでよ。じゃあね」
だが、当人はそれを敢えて流し、順平や友近に他言無用だと釘を刺してから、そのまま疲れた表情で湊の背中を押して去って行った。
人混みに紛れてすぐにいなくなった二人を見ていた順平は、どこか羨ましそうに去って行った方角を見続け、最後には耐えきれなくなったのか大声で騒ぎだす。
「いいなぁ……すんげぇ、いいなぁ！　オレも彼女作ってイチャイチャしてー！」
「お前、自分と有里の顔面偏差値の差を考えろよ」
「ともちーも見ただろ?!　食べかけのリンゴ飴なんて口に入れて貰っちゃってさぁ！　その甘酸っぱさは間接キスの味ですかっつーんだよ！」
「意味分かんねぇよ……」
順平との間にはテンションに差があり過ぎて、もはやついて行けないと友近は肩を竦めて首を振る。
その両者の近くでは、真田が祭りに来ていると聞いて喜んでいる美和と、湊がゆかりと付き合っている疑惑を聞き、白目を剥きながら泡を吹いている繭子が倒れていた。
そんなカオスな状況の屋台へ、数分後、今度はチドリたちのグループがやってくるのだが、順平が先ほど去って行った二人について口を滑らせたために、グループの者らは不機嫌になったチドリに先を急かされ、美和は真田と会話することも出来ず祭りでの邂逅を終えてしまったのだった。
＊＊＊
プリミナと真田王国の屋台を後にした湊とゆかりは、暇つぶしのゲームに興じていた。
入り口付近で真田たちが遊んでいた屋台とは別の店だが、こちらも組員が開いている射的屋である。
コルクを詰めた銃を構え、ゆかりは大きなテディベアを狙って引き

金を引いた。
「あー、ちゃんと当たったのにー……」
弾は見事に命中したというのに、全く動く素振りもなく弾かれてしまったことで、残念そうに口を尖らせるゆかり。
狙ったぬいぐるみは、支えもなくしっかりと座れていることから、ある程度の重さがあり。尚且つ、重心も安定しているのだろう。
これでは何発当てても威力の関係で倒れる事はない。それに気付いている湊は、まだ弾が残っているので、別の物を狙った方が良いのではと進言する。
「……他のやつにしたらどうだ？　あのぬいぐるみは、重心が安定していて倒せそうにないぞ」
「えー、だってあのクマが欲しいんだもん。有里君、頑張って取ってよ」
「だから、コルク銃じゃ無理だと……」
「取ってくれたら、昼間の件はチャラにするからさ」
体重を暴露したことを景品でチャラにする。この交換レートが等価交換になっているのかは不明だが、今後もまた集(たか)られる可能性を考えれば、ここで清算した方が得策だろう。
とはいっても、アナライズを使わずともクマを倒すのに銃がパワー不足なのは明白だ。
湊らが話している間に、何かを察した組員が心配した様子で〝イカサマをしますか〟とハンドシグナルでこっそり尋ねているが、そこで変にゲーム性を崩すのはよくない。
そうして、イカサマをせず銃で倒す方法を考えること数秒。湊はゆかりの残弾を使わず、半額でいいと言っていた店員に百円硬貨を渡した。
「へ、へい。何発用意しましょう？」
「基本は何発だ？」
「二百円で十発です」
「ああ、十分だ」
次の瞬間、湊は背中に手を回すとサイレンサー付きのＭｋ．２２を

抜き放ち、容赦なくゆかりの欲したテディベアやフロスト人形など大きなぬいぐるみを射殺して、全てを棚の後ろのネットに落とした。
ハッシュパピーの異名を持つ暗殺用に開発された銃だけに、サイレンサーを付けていたこともあって、実銃を撃った事は祭りの喧騒に紛れ周囲に気付かれていない。
だが、急に隣にいた少年がコルク銃ではなく本物にしか見えない銃を発砲したことで、ゆかりはパクパクと口を開けたまま言葉を失っている。
それは組員も同じようで、湊が裏の仕事で人を殺していることは聞いているが、学友の前で銃を抜き放つと思っていなかったらしく、引き攣った表情で汗を掻いていた。
しばらくしてから落とした景品を大きな袋に詰めているが、組員が景品を持ってきたところで、ようやくゆかりも復活し、直前のことについて説明を求め湊に詰め寄る。
「ちょ、ちょっと、今の何よ!? 明らかに本物の銃だったじゃない!」
「ガスの圧力で弾を発射するタイプのモデルガンだ。本物があんなに静かな訳ないだろ。その証拠に景品にも穴は開いてない」
説明しながら湊は受け取った景品を袋から出し、ゆかりに手渡して確認させる。
初めは信じていなかったゆかりも、クマを手に持ち全身を念入りに確認したが、湊の言う通りに弾が貫通した穴が見つからなかった。
そのため、疑いつつも一応は信じたらしく。完全には納得していない様子で、ぶっきらぼうに言葉を返してくる。
「……ホントだ。けど、普段からそんなの持ち歩いてたの?」
「外国だと玩具でも脅しになって、強盗が何もせずに逃げて行くんだよ」
実は全くのデタラメである。銃は勿論本物で、穴が開いていなかったのは、単に空包をぶつけたからだ。
空包とは弾頭の詰められていない弾薬の一種で、ほとんど光と音だけと言われつつも、銃の種類や距離によっては痣が出来たり骨折するほどの威力が出る場合もある。

今回は、蠍の心臓に居た頃、サバゲー感覚で実銃を使った遊びに使っていた銃をそのままにしていたので使ったが、仮に愛用のガバメントで空包を放っていれば、今頃、クマは眉間に風通しのよい穴が出来ているところであった。

そんな事は全く知らないゆかりは、湊の危険な持ち物についてもうノータッチでいることにしたのか、受け取ったぬいぐるみを改めてジッと眺めている。

しかし、しばらくして突然眺めるのを止めると、湊の方にクマの顔を向けて自分の口元を隠すよう抱き上げ、小さな子どものような声色で話しかけてくる。

「有里君、ありがとうクマー」

「……フッ、本物のクマは鳴き声でもクマなんて言わないぞ」

「ふふっ、分かってるって。ていうか、また笑ったね。君ももっと笑った方がいいと思うよ？　根は優しいんだからさ。いっつも殺し屋みたいな目付きしてるより、そっちの方が断然良いって」

ぬいぐるみでパンパンに膨れた袋を手に、湊とゆかりは射的屋を後にして歩き出す。

相手はたとえ話で〝殺し屋〟と口にしたのだろうが、正にその通りであることに、湊は内心で苦笑する。

自分は本物の殺人鬼だ。優しさも後に相手を利用し易くするための下準備に過ぎない。

そんな風に己に向けられたゆかりの言葉を心の中で否定するも、本人も気付かぬ内に現在の居場所に未練を感じているのか、今の関係を壊そうとは思わなかった。

「……そう言われても、自分でもどうやれば笑えるのかよく分からないんだ。ふとしたときに気付けば笑っているだけで、怒りなどの負の感情以外は六年前からほとんど湧かなくなった。泣いたのだって両親が死んだ事故が最後で、それ以来一度もない」

「それって……辛くないの？　ご両親が亡くなったこと、やっぱり悲しいんでしょ？」

「悲しかった、とは思う。でも、記憶が徐々に薄れていくんだ。思い出

そうにも、ビデオカメラの録画を見ているようで、はっきり言って他人事のように感じている。写真の一つでもあれば違うんだろうが、事故にあってすぐに施設に入れられたから、昔の自分を表す物は何も持ってないんだ」

桐条英恵と再会後、相手は湊に家族の写った写真を渡そうとしてきたが、それは英恵の物だからと受け取りを拒否した。

湊の母である菖蒲と父である雅らとの思い出の品はもう増えない。だからこそ、菖蒲の親友で今も大切に想っている英恵がそれを持っておくべきだと考えたのだ。

会話を続けている間に、二人は去年チドリたちが食事のときに座っていた本殿近くのベンチに到着した。

大量の景品の入った袋と、少しずつ買い集めていた料理の袋を傍に置き、並んで腰かけて後発組の到着を待つ。

先ほどまでと打って変わり、二人の間に暗い沈黙が降りていると、ゆかりもぬいぐるみの手を動かして遊びながらぽつりと溢した。

「私もさ、お父さんが君のご両親が亡くなった事故で死んでるんだよね。てか、世間的には事故を起こした張本人って扱い。桐条の研究機関の結構偉い人だったっぽいんだ……」

岳羽詠一朗、湊に適性を得る切っ掛けを与え、世界に滅びまでの猶予を作った人物だ。

ゆかりの話している事は湊も知っており、影時間の記憶のすり替えが悪い方向に働いた結果だと認識している。

「でも、私はお父さんが事故を起こしたとは思えないの。そりゃ、無関係ではないだろうけど、そこには何かしらの理由があったはずなのよ」

「……理由があれば許されるのか？」

「ううん、許されないよ。でも、真実や事実が分かっていない状態で、当時のニュースみたいに欲に目が眩んで成功を焦ったって言われるのは可哀想だと思わない？」

尋ねるゆかりの表情は、どこか諦観を含んだ乾いた笑み。

父親が事故を起こした人物としてバッシングを受ける際に、彼女も

相当な仕打ちを周囲の人間から受けたに違いない。
しかし、それでもゆかりは無罪を信じている。欲に目が眩んで人々を危険に晒すようなことを、あの優しかった父がするはずはないと。
「だから、私はあの事故の真実が知りたくてこの街に来たの。お父さんは私の知ってる優しい人なんだって、それを証明したくて」
「……桐条には接触したのか？」
「え？　いや、まだっていうか。やっぱり、そこを攻めないと無理かな？」
急に湊が相談に乗るような形で声を掛けてきた事に驚くゆかり。
けれど、湊もあの事故の被害者であるなら、自分と同じように少しは調べたのかもしれないと思い。素直に答えて会話が続く。
「あの事故現場にいた生存者がそもそも少ないんだ。仮に相手が桐条から離れているにせよ、その後の足取りを追うには知っていそうな人間に接触するしかない。どちらにせよ、そこは避けては通れないだろう」
湊もゆかりが真剣に父の無罪を証明しようとしていると理解したため、彼女が自分の持っている遺言のディスクに辿り着くヒントを与える。
ペルソナに覚醒したなら、相手に受けとめる準備が出来た時点で渡してもよいが、今のゆかりは適性を得ることも出来ないレベルだ。
それでは流石に危険に巻き込むことになるため、影時間についても教える事は出来ない。
故に、今は日常の世界だけでも出来ることに会話の内容を限定する。
「あー、うん。分かってたけど、すごく大変そう。三年に桐条先輩ってグループの御令嬢がいるけど、あの人と接触したらいける？」
「パイプを作る切っ掛けとしては妥当だろうな。ただ、本人が情報を持っているとは思わない方がいい。いくら宗家の人間でも、当時はただの小学生だ」
桐条側の情報は、研究成果も含めて、英恵を通じて湊もしっかり得ている。

それによると、事故現場でデスが生まれた事により事故が起きた事は分かっているが、そのデス自体は湊とアイギスの手によって討伐されたということになっていた。
しかし、日付から逆算すると、それらは人工ペルソナ使いの実験が始まる前に作られた報告書になっており。まだ小さかった美鶴に教えているとは思えない。
湊らがエルゴ研を脱走したときには、実験途中の研究データはほとんど飛んだので、サーバに残っていたデータに、新たに発足したラボでの研究データを足した分が桐条グループの持つ情報だ。
桐条武治が娘や妻に血生臭い人体実験を教えるとは思えないので、実質、ペルソナとシャドウ、そして、あの事故を境に影時間とタルタロスが生まれた、という事くらいが美鶴の知る情報の全てだろうと湊は読んでいた。
「そっか。ていうか、有里君ってそういうの詳しいの？　実は事故の真相も知ってたり？」
「……知ってれば嬉しいか？」
「まぁ、わざわざ大変なことをする手間が省けるからね。そこで調べるのを止めようとは思わないけど、その情報によっては調べて行く方向性が定まるっていうか」
少し恥ずかしそうに笑って、知っていたら教えてくださいと暗に強請ってくるゆかり。
本人もそこまで真剣に言っている訳ではないだろうが、一番最初に尋ねたのが、事の真相を最も知っている人物の一人というのは、彼女自身の持って生まれた運のおかげなのか。
様々な真相を知っていて訊かれた本人は、そのことに内心で苦笑しつつ、表情は普段通りのやる気の感じられない物にして、極めて勿体ぶった言い方で返した。
「……なら、何も教えないでおこう。せいぜい悩んで、何でもするからと泣き付いてくれれば教えてやる」
「うわぁ、性格悪すぎ。本当に何か知ってるの？　それに私に何させるつもりよ？」

せっかく、こうやって夏祭りにやってきたのだ。いつまでも暗い雰囲気を引き摺っていては勿体ない。
湊はわざと上から目線で返すことで、暗くなっていたお互いの間の空気を霧散させた。
だが、中学二年生の少女にそんな気遣いは理解されなかったようで、ジトっとした呆れを含んだ責める視線で一瞥し、ゆかりは湊が何を考えているか聞こうとしてきた。
気を遣ったとばれていないのなら好都合。湊は不遜な態度を続けて、質問に質問で返す。
「……何をさせると思う？」
「えー……なんか、やらしい事とか？」
「それがお前の希望か」
「ち、違うから！」
ゆかりの返事を聞いて湊が浮かべたのは、明らかな含みを持った嘲笑。
誰もが認める美貌を持ち、中学生とは思えない落ち着きをしているだけに、そんな少年が相手を見下したように哂えば、それは邪悪で蠱惑的ながらもいっそその闇に溺れてしまいたい気持ちにさせる不思議な魅力を放っている。
顔を真っ赤にして否定するゆかりも、自分がただ内容の恥ずかしさだけで赤面しているだけではないと理解していて、しかし、ただ顔が良いだけの相手に照れていることが悔しいため、ぬいぐるみの手を使って湊にジャブを繰り出す。
それを手で受けることで軽く流し、湊は同じ空気を纏ったまま会話を続ける。
「なら、他にして欲しいことがあるのか？」
「いや、して欲しいことって……あ、じゃあ、優しくして欲しい！」
「……まぁ、初めては痛いらしいしな。そのくらいの配慮はちゃんと」
「そういう意味じゃねぇっつの！　女子相手に下ネタ振るってどんな変態なのよ」
して欲しいことはないか尋ねてきたことを逆手に取り、ゆかりは閃

いたとばかり顔を輝かせて、自分への態度を優しい物にしてくれと頼んだ。
学園の内外問わず、相手は基本的に女子に優しいと評判なので、それほど不満がある訳ではないが、たまにゆかりにだけ無遠慮な態度を取ることがある。
ゆかりとしては、その部分を他の女子と同じように丁寧に扱って欲しいと頼んだ訳だが、返って来た言葉は明らかな十八禁。
小学校から性教育は始まっているため、ゆかりも一応、そういった行為に対する知識は人並みに持ち合わせている。
けれど、まさか二人きりの状態で、固いイメージのある少年がそんな事を言ってきた事実に動揺を隠せず、ゆかりは頬を染めて自分の身を守る様にクマを胸に抱いた。
「君もやっぱり男の子じゃん。そ、そういう話しがしたいなら、私じゃなくて同じ男子としてよねっ」
「自分の性別も定まってないのに、そんな話に興味がある訳ないだろ。というか、大っぴらにする話ではないが、そこまで初心な反応をされてもな。さっき会った同級生の……親重(ちかしげ)だったか？　あいつが言っていた様子だとお前は恋人を作って無かったんだろ。どうして男を作らないんだ？」
湊もゆかりが校内でモテていることは知っている。
放課後に告白したいからと女子に呼び出されれば、たまにゆかりと彼女に告白しようとした男子とブッキングすることもあり、同じ日に同じ場所を指定した告白する側だった二人が気まずそうに謝罪し合っていたこともあった。
別に告白されたから付き合わなければならないこともないが、それでも誰とも付き合わないのには何か理由があるのではないか。
そう思って興味本位で訊いてみると、ゆかりは視線を泳がせながら、やや恥ずかしそうに小さな声で答える。
「親重じゃなくて友近くんね。それで、えと、私、好きな人いないし。それに男に頼らないで自分一人で生きて行くって決めてるんだもん」
「……お前が抱いてるクマは男に頼って手に入れた物だと思うがな」

本人にその自覚はなかったようで、湊に指摘されたゆかりは、僅かに瞳を揺らしてクマを湊に返そうとしてきた。
けれど、貰ったクマとの別れが嫌だったのか、再び抱きしめて口元を隠すと、俯き沈んだ声色でゆかりは呟いた。
「君は……女の子なんでしょ。だから、セーフ」
「それは詭弁だ。まぁ、事情があるようだから深くは聞かない。ただ、辛くなったら話せ。愚痴くらいは聞いてやる」
「それって君が神父さんだから？」
「いいや、ある人にお前をよろしくと頼まれたからだ」
呼称としては神父よりも司祭の方が正しいのだが、そういった呼び方の違いを相手は理解していないようなので、湊は気にせず自分がゆかりに気を配っている理由を話す。
ベルベットルームの契約には含まれていないが、過去に岳羽詠一朗からゆかりと仲良くしてやって欲しい、守ってやって欲しいとお願いされた。
当時の湊は「出来たらね」と生意気に返して相手を苦笑させたものだが、去年の夢に出てきた彼としっかり守ってやると約束した。
だが、それをまだ話せない湊は、不思議そうにしばらく考えているゆかりにどう答えるか、聞き返される前に既に答えを用意しておく事にした。
「……入学式に席が隣だったからって、お母さんが君に挨拶でもしたの？」
「さぁ、どうだろうな」
「……ケチ、いじわる」
質問しても何度もひらりと躱して、ろくに答えてくれないことに怒ったのか、クマに顔を埋めて不満げに上目使いで文句を言うゆかり。
だが、案外子どもっぽい相手の予想通りのリアクションに、湊は苦笑しながら少し試すようにある提案を持ちかけてみる。
「……知りたいなら対価を払え。キスでいいぞ」
「口に？」

「お前に任せる」
そう言われると悩むのか、ゆかりは何度も湊の方をちらちらと見て考えている。
提案を持ちかけた湊としては、別に頬でも、手の甲でも構わない。
何せ口にされたところで、どうせ答えてやるつもりはないのだから。
そうして、聖職者の恰好をした悪魔に騙されている哀れな乙女は、ついに場所を決めたのか、しっかり一度頷いて答えを返した。
「それじゃあ、投げキッスで」
「……やってみろ」
「ンー……ちゅっ。はい、やった」
湊の言葉をどうせ出来ないだろうという挑発だと取ったのか、ゆかりはわざとらしいくらいの仕草で投げキッスを湊にプレゼントした。
終わった後は、どうよとばかりに不敵な笑みを浮かべて、湊が先ほどの質問に答えるのを待っている。
けれど、この悪魔は約束を破るだけではなく、しっかり対価を払った者に破滅の道まで用意していた鬼であった。
「まぁ、他のやつらに見られたようだがな。言い訳は自分で考えろよ。俺は〝いじわる〟だから、何も弁護しない」
「ちょっ、ウソでしょっ!?」
言われた事に驚き、ゆかりが湊の指差す方へ視線を向けると、確かに、不機嫌そうなチドリや気まずそうな美紀や風花が歩いて来ていた。
その後ろにいる先輩組も、真田は呆れ顔、荒垣は同情的な視線、亜夜は良い笑顔で手に持った携帯を見せてきているなど、どれもゆかりにとって優しくない対応ばかり。
中でも亜夜の表情と携帯を見せていることから推測するに、ゆかりの投げキッスはばっちり激写か録画されているようだ。
「た、たた、助けて有里君っ!!」
以前の土産のときは単純な喧嘩として処理出来たが、今回はいつまでも弄られるネタを皆に提供してしまったことになる。

テストや部活で馬鹿をしたなら、ちょっとした思い出として笑い話に出来るが、流石に男に笑顔で投げキッスをしたというのは黒歴史としか言いようがない。
クマを抱いていない方の手で湊の袖を掴むと、ゆかりは羞恥で混乱しながら涙目になって助けを求めた。
「……安心しろ。きっと生温かい目で見られるだけだ」
「それ一部は小馬鹿にしてニヤついてるだけだから！」
風花と美紀は気を遣ってそうしてくれるだろうが、逆にその優しさが生殺しのようになって、自分自身が場の空気に耐えられなくなる自信があった。
また、冷静になったチドリや話しを聞いた櫛名田は、きっと今回の事をネタにしてしばらく弄ってくるに違いない。
公衆の面前で投げキッスとは大胆だ、などと言って、ゆかりが羞恥に悶えるさまを見てニヤニヤと笑うのだ。
「ほ、他にっ、頭良いんならすごい案を出してよ！」
自分が馬鹿にされる未来が確信に近い形で予想出来ているゆかりは、他に何か解決策はないのか強請る。
チドリらが到着するまで時間がない。せめて、いまこの場を切り抜けられるだけの案が欲しい。
ゆかりが必死に頼み込むも、悪魔はやはり悪魔であった。
「男に頼っていては一人で生きていけないぞ？」
「そういう意味じゃなぁぁぁぁぁぁぁいっ！」
ゆかりの叫びも虚しく。その後は、合流してきたメンバーらに食事中投げキッスの話題で弄られ、どれだけ誤解だと言おうとも、亜夜の携帯に連続撮影された写真が証拠として残っているせいで言い訳が効かず。
また、湊に取って貰ったクマのぬいぐるみを大事そうに抱えていたこともあって、ゆかりは故意に集団からはぐれたという烙印を最終的に押された。
一方で、自分は弁護しないと言っていた悪魔は、大量に取ったぬいぐるみを女性陣に配分したことで聞かれる前にペースを掴み。

その後は、ずっと食事を続けることで、相手が尋ねづらい状況を作って、一人だけ追求を逃れており。最後までゆかりに追求が集中するよう、意図的に場のコントロールを行っていたのだった。

第七十七話　過去、勧誘

――???

強い衝撃を受けて気を失っていた女は、外から聞こえてくる轟音と銃声によって、無理矢理に目を覚まされた。

目を覚ました女は状況を確認しようとするが、何故だか身体が横を向いた状態で下に引っ張られる感覚があることに気付く。

そうか、自分たちの乗っていた車は横転したのか、とそこでようやく理解し、ならばせめて地面に対して垂直になろうと座っていた助手席から抜け出そうとした。

だが、席から抜け出す事は敵わず、それだけではなく身体を動かした際に足に鈍い痛みを感じる。

痛みを感じた足の方へ視線を向けると、変形した車体に女の足は挟まれ、骨が折れているようだった。

「ん……んん……」

足が挟まれた状態で折れてしまっている事で、どうやれば抜け出せるか考えていた時、女の背後で呻く子どもの声が聞こえてくる。

「八雲っ」

女は自分のことなど忘れ、すぐに心配した表情で身体を捻り、自分の真後ろの後部座席に座っている我が子の様子を確かめる。

衝撃を受けた際に頭を窓ガラスに打って気を失っていたようだが、シートベルトをちゃんと締めていたので、割れたガラスで頬を少し切った程度でその他の外傷はなさそうだ。

地面を転がる衝撃は数度あったので、車はぼこぼこになっているだろうが、最終的に運転席側が下になったことは我が子の脱出にはありがたい。

「八雲、大丈夫？　痛いところはない？」

「おかぁ、さん？　えと……多分、だいじょうぶだよ」

状況が把握出来ていないのか、キョトンとしながらも、少年は自分の手足を動かして状態を確かめている。

そうして、特に問題がないと報告してきたので、女は胸をほっと撫

でおろした。
車が何度も転がるような衝撃を受けたのだ。普通の子どもならば、頭と身体を揺さぶられ、最低でもむち打ちになっているところだろう。
だが、女だけでなく少年も本当にそういった怪我を負っていなかった。
ガラスで出来た切り傷や圧力によって骨折はしているものの、この母子は健康状態にそれほど問題はない。運転席に座っている女の夫は、頭から血を流し、女と同じように変形した車体に足を挟まれ、既に息絶えているというのに。
女にとって自分たちの血筋は呪われた一族だと思っていたが、今はその血筋によって得られた身体の頑丈さに感謝せずにはいられなかった。
「八雲、シートベルトをはずして外に出られる？」
「一回下におりて、そこから登っていけばいけると思う」
少年は自分の血筋のことをまだ知らない。少年の祖父であり、女の父だった男は既にこの世を去っているので、自分がそれを少年に教えなければならない。
けれど、車に火が点いて車内の温度が徐々に上昇してきていることもあって、女はその務めは果たせそうにないと悟った。
「良かった……。じゃあ、貴方は先に出ておいてくれる？　このままじゃ危ないんだけど、お母さんたちは時間が掛かりそうなの」
女は足の痛みで額に脂汗を滲ませながらも、それを少年に気付かれぬよう、平静を装いながら我が子に微笑みかける。
自分の父から鬼の一族であることを聞き、桐条英恵から結婚式に招待できないと泣かれたことで、自分の子どもが一族とは無縁に過ごせれば、その方が幸せだと思っていた。
しかし、少年の父方の祖父である九頭龍家当主とその長男は、一族のことを何も知らぬ幼い少年に恐れを抱いているようだった。
確かに恐ろしいだろう。屍の山を築いてきた鬼の一族の者と、それを使役していた龍の一族の者が交わることで、古き盟約から解き放た

れた子どもが生まれてしまったのだから。
恐れを抱く男たちの姿を目にしたとき、女も我が子が一族の呪縛から逃れられないと理解した。
少年がどれだけ心優しくても、世界はそれを信じない。一族が屍と共に築いてきた業が、周囲の悪意を引き寄せ、災いとなって少年に降り掛かるのだ。
「なんか、外がうるさいね。あつくなってきたし、お母さんたちも急がなきゃ」
シートベルトを外した少年は、器用にバランスを取りながら一度地面に降りている。
こんな訳の分からない状況に陥っても、自分たちを心配してくれている我が子に、女は共に居てやれないことや、周囲の悪意から守ってやれないことに対し、申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになった。
ちゃんと無事に生きていけるだろうか。九頭龍か親友の英恵に引き取って貰いたいが、どちらも家が鬼を恐れているため難しいかもしれない。
どうして一緒に居てやれないのか。我が子を一人残していく悲しさから、両足を失ってもいいから、どうにか抜け出すことが出来ないかと、女は必死に足を引き抜こうとする。
だが、何度も車が転がった事で、車の前面が潰れてエンジンが車内の方に押し込まれているらしく、そんな物に挟まれてしまっている足を引き抜く事など、機械を使って慎重にやらなければ不可能であった。
それでも女は諦めず、歯を食いしばって痛みを堪え、ぶちぶちと嫌な音をさせながら片足を引き抜いた。
引き抜かれた右足には膝より下が生えていなかったが、身体が少し自由になった女はシートベルトを急いで外し、身体を乗り出す様に振り返って、登って行こうとしていた我が子を力一杯抱き締める。
「ごめんね、八雲っ。お母さんたち、ずっと一緒にいてあげられなくて、ごめんねっ」
突然のことに少年は驚いているようだが、車の炎上が激しくなって

おり、残された時間はもう後僅かだ。
けれど、せめて最期に少年へ自分が愛されていたことを伝えておきたい。
一族のしがらみで要らぬ苦労を強いられるだろうが、それでも、決して少年は他者に言われるような呪われた鬼などではないと。
「お父さんもお母さんも、八雲のこと大好きだからっ、ずっとずっと、死んでからも愛し続けているからっ。辛い事があっても諦めないで、きっと傍に居てくれる人が出来るからっ」
「お母さん？　なんで、泣いてるの？　一緒ににげようよ、お父さんも、ここはあぶないよ？」
「お母さんたちは一緒にいけないのっ。でも、それでも、貴方だけはどうか――――生きて」
車内が炎に包まれる直前、女は自分の口内を噛み切り、流れ出た血液を少年に口移しで呑ませた。
いつの日か、力に目覚める必要があればこの血が全てを教えてくれる。伝える力の弱い自分の血では、自身の持っている知識しか伝える事は出来ないだろうが、少年に必要なのは血の記憶を引き出す切っ掛けとなるものだ。
本来ならば、一部例外を除き、元服を迎える十四歳の誕生日に、名切りの親から子へ一族のことを伝えることにより血に目覚めるのだが、伝えるだけの時間がない女が籠めたのは、少年にもしもの事があれば発動する記憶の解禁術であった。
そうして、名切りに生まれた親としての務めも果たし、女は涙を流しながらも綺麗に微笑んで、割れて開いた窓から少年を車外へ向かって放り投げた。
少年の運動神経ならば、突然投げられても無事に着地できるだろう。
窓の外へ放り出されてゆく途中、自分たちの事を呼びながら少年は必死に手を伸ばしていたが、炎に包まれた車内に残った女からはすぐ何も見えなくなった。

深夜――宿屋・真夏の夜の夢
「おい、小狼っ！　おい！」
突然、部屋中に響く大きさのイリスの声が聞こえ、湊は何事だと目を覚ました。
少しぼーっとした頭で、イリスが点けたらしいベッドランプのところに置かれた時計で、現在の時刻を確認する。
表示されていた時刻は午前四時十二分。夏で明るくなるのは早いとは言え、流石にまだ外は暗いだろう。
今日の仕事は夜遅くなので、こんな変な時間に起こされるのは正直迷惑でしか無い。
ベッドに寝転がったまま、何故だか心配そうに自身を見ている相手へ湊は声を掛ける。
「……こんな時間にどうした？」
「どうしたって、オマエが苦しそうにしてたんだろうが。大丈夫か？　汗すごい掻いてるぞ」
言われて顔に触れると、珍しい事だが確かに大量の汗を掻いていた。
フルマラソンをしてもここまで汗を掻くことはない湊が、ただ寝ていただけで大量の汗を掻くことなど異常だ。
それにイリスが苦しそうにしていたと言った事も気になる。
タオルを持ってきたイリスに顔や首を拭いて貰いながら、原因は何かと考えていると、湊は自分が久しぶりに夢を見ていたことを思い出した。
湊は普段、夢を通じてベルベットルームで力の管理者らと鍛錬を積んでいるので、夢を見るという事が基本的に無い。
だが、極稀にベルベットルームに招かれず、中学校に入学したばかりのように、昔の記憶を夢として見ることがあった。
イゴール達が招くことを拒否しているのか、それとも何かの力に阻まれて招くことが出来なかったのかは分からない。
だが、見る夢が全て過去の記憶というのは、何かしらの意味があるのではないかと思うようになっていた。

そうして、心配そうに今も見つめてきているイリスに、湊は自分が見た夢の事を話す。
「……夢を見た。ずっと昔の、あの事故が起きたときの」
「事故って……オマエの両親が死んだやつか？」
相手の質問に湊は首肯することで答える。
その際、何故かイリスがビクリと肩を震わせ、悲痛な表情で頭を撫でてきたが、相手が何故そんなにも苦しそうな顔をしているのか湊は理解出来ない。
「辛いか？」
辛いかどうか尋ねられても、昔の事故を想ったところで憎しみ以外の感情は湧いてこないので、それを辛くないと答えて良いのかどうか悩む。
そう言えば、ゆかりにも同じように言われた。別々の生き方をした人間から同じように尋ねられたということは、きっと普通は辛いと感じるべきなのだろう。
質問の答えを考えながら、そんな風にゆかりとの会話を思い出し、湊は中空に視線を送りながら静かに口を開く。
「……分からない。ただ、夢を見たのは夏祭りで昔のことを少し話したからだと思う」
結局、しばらく考えて素直に分からないと答えつつ、自分が夢を見たのはゆかりとお互いの昔話をしたからだと説明した。
それを聞いたイリスは、どうやら話し相手を勘違いしたようで、意外そうに返してくる。
「小猫に話してなかったのか？」
「いや、チドリじゃなくて、岳羽っていう見送りに来ていた茶髪のやつだ」
相手の勘違いを訂正しつつ、思い出せるよう容姿の特徴を説明する。
部活メンバーは全員髪色が異なっているため、茶髪と言われてイリスも何となく思い出せたようだ。
「……オマエ、小猫以外にも自分のことを話せる相手がいたんだな」

しかし、イリスにしてみれば、湊が友人に自分の過去について話すこと自体、かなり珍しいことなのではと思っていた。
自分の両親がポートアイランドインパクトで死んだ事は隠していないが、それ以外は、過去の自分、『百鬼八雲』という存在に辿り着かれる危険を孕むため、湊は必要以上に第三者に情報を漏らす事はない。
それだけに、相手を随分と信用しているのかと思っていると、湊はそんなイリスの考えを読んだかのように、身体を起こしながら情報を補足した。
「岳羽は事故当時にエルゴ研の主任を務めていた男の娘だ。適性も徐々に高まっているようだし、完全に無関係という訳じゃない」
「ああ、栗原の上司か。昔のオマエの知り合いだったらしいな」
「……ああ。まぁ、岳羽に話したのはそういう訳で、あいつも俺と近い経験をしているからだ」
別にゆかりを信用していない訳ではないが、話した理由として最も大きいのは、彼女もポートアイランドインパクトが原因で幼少期に苦労したためである。
過去の新聞やニュースで、岳羽詠一朗がどれだけ社会からバッシングを受けたのかは知っている。
生き残った研究者や桐条も同じように批判を受けたようだが、家族が死んだばかりに、周囲から強烈な批判を受けるというのは、ゆかりの心に深い傷を作ったに違いない。
娘を頼むと頼まれ、それを請け負った湊にすれば、序列こそアイギスやチドリよりも下だが、彼女も同じように守るのが仕事だ。
湊が過去の事故について話す事により、相手に何か得る物があるのなら、それくらいの手助けをするのも当然と言えた。
「そうか。とりあえず、オマエの周りに自分の事を話せる相手がいて良かったよ。そういう相手は貴重だからな。いっそ、自分の女にして傍に置いておけ」
「……好みじゃない」
「え、オマエ、好みとかあったのか？」

「人間だし、親しみなりを覚える要素くらいあるだろ」
そう言って、何を当たり前の事をとばかりに呆れ顔をしながら、寝汗で濡れたシャツを脱いで、脱衣所の洗濯カゴに放り込む湊。
確かに、湊は服装や武器などにある程度の嗜好を持っているので、それが人間に対して向いてもおかしくはない。
けれど、今まで恋愛系はまるで興味がなさそうな態度を取っていただけに、湊にも女性の好みが存在すると聞いたイリスにすれば、それはまさしく青天の霹靂にも等しかった。
「オマエ、好みがあるんなら、普通に恋愛も出来るみたいだな」
「〝普通の恋愛〟は無理だろうが、恋愛自体は出来るだろうな。俺にその気がないだけで」
「因みに、どういった感じがタイプなんだ？　特別好みがないなら、可愛い系と美人系ならどっちが良いかでもいいぞ」
「強いて挙げるなら……美人系の方か。可愛い系はどうしても守る対象になり易い。守る対象とは恋愛なんて出来ないからな」
自嘲的な笑みを浮かべながら答え、シャワーを浴びるつもりなのか、湊は自分の旅行鞄から着替えを取り出している。
そして、そのまま脱衣所の中に入り扉を閉め、少しすると浴室に移動していたらしく、シャワーの音が聞こえてきた。
シャワーだけのときでも髪はしっかり洗えと言われているので、腰に届く長さに達している湊は、あと十五分は出て来ないだろう。
部屋に残ったイリスは湊に聞こえないことを確認してから、ベッドの縁に改めて腰掛けると、先ほどの少年の様子を思い出し悲痛な表情で独り呟く。
「……今でも夢に見るのか。やっぱり、目の前で死なれるってのはキツイよな。誰かが支えになってやれば良いんだろうが、アイツは守る対象との間に線引きをしちまってる。これじゃあ、エリザベスらの言っていた契約で、守る事を確約された小猫じゃどうしようもない」
湊が仙道と戦った翌日、イリスは桜たちと一緒に、湊の本名を知らされると同時に、彼がチドリと結んだ契約の内容も目にしていた。
その内容は、『最期までチドリを守り続ける』というもの。

未来永劫、ずっと守り続けるのではなく、死ぬ最期の瞬間まで守り続けるという辺りに、少年らの妙な現実志向が窺える。
本人たちは、あの時結んだ契約が自分たちの魂同士を繋いでいる絆だと今も思っているだろう。
だが、本人たちの知らぬ間に、その契約がお互いを傷付ける最大の障害に為り変わっていることに気付き、イリスはやりきれない悔しさを感じて拳を握りしめた。

８月１９日（土）
午後――月光館学園・中等部
その日、桐条美鶴は普段よりも緊張した面持ちである人物を待っていた。
現在彼女がいる場所は、様々な運動部の部室が入っている別棟だ。
美鶴自身もフェンシング部に顔を出す際に利用しているが、今日ここにやってきたのは、湊のサブプランであったチドリの、そのさらにサブプランとしてラボでは扱われている、とあるペルソナ使い候補の少年を勧誘するためである。
少年の所属する部活はお互いに殴り合うというルール上、試合後は学園と提携を結んでいる辰巳記念病院で検査を受けることを義務付けているのだが、つい先日、検査に訪れた少年に適性の測定も密かに受けさせると、ようやくペルソナに覚醒しうるレベルに達したと報告が入った。
ラボでは湊が適性限界の十万に達するかもしれないと、新たに巨費を投じて感度と上限を高めた計測器を開発したので、少年の適性値に測定ミスはない。
ならば相手がシャドウに襲われる危険性も考慮し、なるべく早期に説明をした方が良いだろうと思って、美鶴は今回待ち伏せという形を取ったのである。
（入り口の方が先ほどから騒がしいな。相手がもうすぐやって来るんだろう。今回はどうにか上手くいって欲しいものだが）
そんな風に、以前の失敗から少し臆病になっている美鶴が、勧誘の

ために考えてきたことを何度も頭の中で反芻していると、校舎に生徒らが入って来て揉めているようだ。
他校の人間が学費半分という金で少年を引き抜こうと言ったのが聞こえてきたときには、思わず出て行って、ならば我が校は全額免除しようと返そうかと思ったくらいだ。
しかし、最終的に少年がわざわざ準優勝の学校に移る必要性を感じないと、ばっさり切り捨てて追い返していたので、話しに聞いていたよりも面白そうな人物だと小さく笑いながら美鶴は少年の元へ出て行った。
「フフ……あの追い返し方はないんじゃないか？」
美鶴が声を掛けると、疲れた様子で深く息を吐いていた相手は、少し驚いたように顔をあげた。
確かに、ようやく一息ついたところで、突然声をかけられれば誰だって驚くだろう。
声を掛けてからそれに気付いた美鶴は、相手に悪い事をしたと謝罪を述べつつ、改めて声を掛ける。
「失礼、練習後はこうなると聞いていたので、先に来て待たせてもらった。三年Ｃ組、真田明彦君」
そう、今回、美鶴がペルソナ使いとして勧誘しに来たのは、美紀の兄である真田明彦だった。
二年生の三学期の検査と、今年の四月に行った検査では妙な伸び悩みが計測されていた。
しかし、盆明けにあった試合が終わってからの検査では、何か悩みでも解決したのかと思うほど、すんなり適性が１０００ｓｐを超えていた。
自然適応者のペルソナ覚醒条件は未だ不明。
そのため、どうして急に真田の適性が伸びたのかを桐条の人間に調査させると、その時期に夏祭りで真田が一時帰国した湊と接触していることが判明した。
湊の適性値は正直化け物だ。あれが傍にいれば、鈍い者でも適性に目覚めそうなくらいに。

以前から適性のあった真田であれば、適性なしと出ている者よりも、余計に影響を受けた事だろう。
そうして、今回の覚醒条件は強い適性を持つ者に感化されてと結論が出た真田に、美鶴が凛々しい笑みを見せていると、相手は嘆息して立ったまま壁に背中を預けてから口を開いてきた。
「……用件はなんだ？」
「ん……？　私が誰か訊かないのか？」
「必要ない。面倒なしがらみを持って来ないでくれ。俺はただ、自分の力を鍛えたいだけだ」
刺々しいというよりは、ただ面倒事に疲れてうんざりしていると言った風に、相手は美鶴との間に壁を作って言外に帰れと言い放つ。
しかし、事前の調査で『強さに固執している節がある』と書いてあった通り。相手は自分の鍛錬を邪魔するなと言っている印象を受けた。
これならば、活動内容に戦闘が含まれていることもあって、お互いの利害は一致することだろう。
そう考えて、美鶴は腕組みをしながら相手に向き直り、会話を続けることにした。
「面倒じゃないさ。私の頼みごとは、至ってシンプルだ」
「頼み？」
「……倒したい相手がいる」
倒したい相手がいると言った途端、真田は少し驚いたように目を大きく開いた。
きっと彼は、喧嘩の代行か何かを依頼されるのだろうかと思っているに違いない。
しかし、それは誤りだ。美鶴は彼に代行ではなく、仲間になって欲しいと思っている。
「但し、相手は人間じゃない。ボクシングのルールを守る事もない。そして、相手は恐らく……君がこの頃、深夜に体験する〝現象〟と、関係がある」
「なんだとっ!?」
自分と同じ現象を体験している人間が、まさか、こんなにも近くに

いるとは思っていなかったのだろう。
真田は壁にもたれ掛かるのをやめ、どこか値踏みするような視線で美鶴を捉える。
ほぼ初対面の相手。それも男子が女子をそのような視線で見るなど、甚だ無礼なことだが、美鶴も相手の立場ならば同じようにしていたに違いないため、その無礼を特に気にせず苦笑で返す。
「私も同じ身の上なんだ。君と同じく〝あの時間〟が見える。でも君は、あの時間が何を意味するかを知らない。一緒に来るなら私の知る限りを教えよう」
「お前は、誰なんだ」
「私は桐条美鶴。君と同じ三年生だ」
「桐条？　聞いた名前だな」
これでも美鶴は一年生のときから生徒会に所属し。二年生には副会長として、全校集会などで壇上に立って発表を行っていた。
さらに、去年の終わり頃からは会長職を引き継ぎ、生徒会長として生徒の中では比較的頻繁に大勢へ顔を見せていたのだが、相手は本当に知らないようで、なんとなく名前は聞いたことがあるという顔で見てきている。
自分を完全に居ないものとして、視界にすら収めない湊とは異なり。単純に世間の事に疎いから知らないだけのようだが、我が校の有名人男子らはどうしてこうも一癖も二癖もあるのか。
そんな風に、美鶴は少々頭を抱えたい気持ちになりながら、相手に自分の事を思い出して貰えるよう少しばかり自己紹介を続ける。
「これでも生徒会長を務めさせてもらっている。それに、この学校の出資者の家の人間でもあるからな。聞いたことくらいはあるだろう」
「生徒会長……ああ、シンジから聞いたことがある。有里に付き纏って相手にされていないやつ、だったか？」
「……大変不愉快な覚えられ方だが、その彼に付き纏って相手にされていない人間で合っている。ただし、君とも、部の予算会議で顔を合わせていたはずだが、どうやら記憶が飛んでいるらしいな。真面目に参加していないのなら、高等部に上がってからの部の予算はいくらか

減らしても良さそうだ」
湊のストーカーのように言われ、組んでいた腕に力を込めながら、美鶴は目だけ笑っていない営業スマイルで相手の弱所を攻める。
美鶴だって周囲から大人びていると言われても、心はまだまだ幼い中学生だ。
湊と自身の家の間に浅くはない因縁がある事を知り、少し前まで精神的にも参っていたというのに、その傷をピンポイントで抉るような真似をされれば、流石に怒るのも無理はない。
尚且つ、確かに客観的に見ればストーカーの数歩手前だったかもしれないが、中学生という多感な時期に、深く知る訳でもない相手から無遠慮にストーカー呼ばわりされれば、誰だって文句の一つでも言い返したくなるだろう。
そうなると、来年以降も月光館学園のボクシング部で活動しようと思っている相手も、自分たちの活動の生命線を人質に取られると流石に焦ったようで、大きく眼を開き冷静さを欠いて口を開いて来る。
「ま、待て！　俺はただ知り合いからそう聞いただけだ。それにお前自身も認めているのなら、その事で怒ってくるのもおかしいだろ」
「事実であれば何でも言って良い事にはならないな。私は君に彼のストーカー呼ばわりされたことで深く傷付いた。具体的に言えば、衝動に任せて部の予算を三分の一にしてしまいたいくらいに」
「そ、そんな大事な物を衝動に任せるなっ。その理性の無さが周囲からストーカーに見られる原因ではないのか！」
「……随分と言ってくれるな」
同じ学生の立場の者で、ここまで自分に対して堂々と意見してくる者など久しくいなかった。
下級生にはチドリや、ある意味で含まれる湊のような人間もいるが、同輩となると友人とはっきり呼べるような人間も桐条宗家に残っている斉川菊乃くらいしかいないので、こういったはっきり思っている事を口に出来る人間との出会いは新鮮だった。
まだ先ほど言われた〝ストーカー〟という言葉に引っ掛かる物は感じている。

けれど、それ以上に新しい出会いでの妙な高揚感の方が勝っているため、美鶴は脱線していた話しを戻し、本題を切り出すことにした。
「まぁいい、話しを戻そう。君は〝力を鍛えたい〟と言っていたが、それなら戦いに、今よりも大きなものを賭ければいい。そう、例えば〝覚悟〟や〝命〟をな」
言いながらポケットから召喚器を取り出して見せる。
相手は初めて目にした本物の拳銃に驚いているようだが、しばらく待っていると、真田は意を決したように、覚悟の決まった瞳で召喚器を手に取った。
「……俺は銃は使わん。だが、あの時間の事を教えて貰えるのなら、この銃も持ってだけおいてやる」
「フフッ、そうか。まぁ、それは武器としての機能はないんだが。今日はもう遅い。詳しいことは後日話そう。都合の付く日を教えてくれ。指定の場所まで迎えを寄越す」
「明日でいい。迎えなら巌戸台駅まで来てくれ」
「了解した。では、明日の十時頃に駅のロータリーに居てくれ。出来れば汚れてもいい動き易い恰好でな。昼食はこちらで出すから、ご家族に連絡するのならそう伝えておいてほしい」
「ああ、わかった。それじゃあ、またな」
明日のことについての連絡を終えると、真田は荷物でも取りに向かったのか、美鶴と別れて部室の方へと去って行った。
その後ろ姿を見続け、完全に相手が見えなくなってから、
「……よっし」
ようやく一歩前進出来たことに、美鶴は一人静かに喜びの拳を握るのだった。

第七十八話　動き出す世界

８月２０日（日）
午前――桐条ラボ
前日の約束通り、駅のロータリーで真田が待っていると、私服姿の美鶴が商店街の方から歩いてやってきた。
相手の住んでいる場所を知らなかったので、家に帰ってから桐条についてパソコンで軽く調べて実家の大きさに驚いていたこともあり、最初は相手が商店街の近所に住む庶民派なのかと勘違いしたものだ。
しかし、迎えがやってくる間に、商店街を過ぎて少し歩いた先にある分寮に住んでいると聞いたため、御令嬢でも寮生活なんてするんだなと小さく感心した程度で、本日聞かせて貰える深夜のあの時間へ真田の興味は徐々に移って行った。
そうして、約束の時間の十分前にやってきた黒塗りのハイヤーに乗ると、真田たちは巌戸台を離れ、湾岸部にほど近い場所にある病院に似た外観の大きな施設に連れて来られた。
「……病院か？」
「いや、ここはラボと呼ばれる桐条の研究開発施設だ。一般公開できない物も存在するので、好き勝手に歩いて貰う事はできない。中に入ったら基本的に私と行動を共にして貰うぞ」
「トイレくらいは好きに行かせて貰えるんだろ？」
「それくらいはな。部屋のすぐ近くにトイレのある会議室を用意してある。私たちが今から向かうのはそこだ」
言いながら美鶴はパスケースを首に下げて警備員に見せてから中へ入ってゆく。
真田も車内でゲストカードを渡されていたので、同じようにパスケースを首に下げて警備員に見せると、そのまま後に続いて中に入った。
中に入ってみて最初に思ったのは、やはりどこか病院に似ているという感想。
続いて、自分たちの足音が聞こえていなければ、耳鳴りがするので

はないかと思えるほど静かだと言うことだった。
「随分と静かだな」
「研究開発施設だと言ったろう。君は傍で誰かが騒いでいて勉強が捗るか？　ほとんどの部屋はある程度の防音処理がなされているんだ。もっとも、騒音を出す装置のある部屋以外は、何かあったときに気付けるよう完全防音という訳ではないがな」
説明されてみれば確かにと納得する真田。
ここでどのような種類の研究をしているのかは知らないが、真田にとっての研究のイメージは白衣を着て顕微鏡や試験管を使っている大人の姿が思い浮かぶ。
ああいったことは、少しの分量ミスで結果が全く別の物になってしまうらしい。
ならば、出来る限り集中できる環境を用意するのも当然で、こういった場所に慣れれば静か過ぎるというのも、そのうち気にならなくなるのだろう。
エントランスから廊下に入り、少し進んだ先でエレベーターに乗って、降りた先でさらに突当たりまで移動しながら、真田はそんな風に思っていた。
そうして、部屋の前に確かにトイレがある会議室に到着すると、ドアノブに手をかけながら美鶴が入室を促した。
「さぁ、入ってくれ」
「ああ」
言われるまま、美鶴に続いて部屋に入ると、そこは学校にもあるような普通の会議室だった。
移動できるタイプの長机にホワイトボードなど、本当に学校の会議室に似た内装なので、建物の外観から重厚な雰囲気の高級机や椅子の並ぶ作戦室のような場所を想像していた真田は、少しばかり肩すかしを喰らうと共に内心では安堵していた。
ただでさえ、ここは真田にとって未知の場所なのだ。そこであの謎の時間について聞いても、場所に不慣れで集中できず、説明がほとんど頭に入って来ないのでは困る。

最近では、深夜に起きていればほぼ毎夜あの時間を体験するだけに、妹が棺桶のオブジェになっていて影響は本当に無いのかも含めて、しっかり聞かねばならないのだ。
それだけに、慣れているという訳ではないが、少なくとも知った雰囲気の場所で、集中を妨げられないというのは好都合であった。
「やあ、遅れてごめん。少し資料の用意に手間取ってしまってね」
「いえ、我々もいま到着したばかりですから」
説明する者がやってくるのでしばらく待っていて欲しいと言われ、中の椅子に座り五分ほど待っていると、扉が開いて茶色のスーツに黒のタートルネックを着た男性がやってきた。
その手にはファイルやらノートパソコンやらがあり、向かいの斜め前方に座っていた美鶴が席を立って、相手の持っていたパソコンをケーブルでプロジェクターに繋ぐなどのサポートを始める。
手伝ってもらっている男は美鶴に礼を言っているが、ある程度の準備を終えたところで真田に話しかけてきた。
「どうも、はじめまして。僕は月光館学園高等部の理事長をしている幾月修司。桐条グループでは君の体験している影時間についての研究を元々していた人間だ」
「かげ、じかん？」
「そう。毎夜零時に発生するあの時間を、僕たちは日常の影に存在する時間ということで、影時間と呼んでいるんだ」
突然やって来て、自分が高等部の理事長であると告げた幾月は、話しをしながらスクリーンを下ろし、パワーポイントの画像をプロジェクターで映写した。
そこには専門用語らしい、〝影時間〟〝適性〟〝象徴化〟などの単語が並んでいる。
続けて、幾月はスクリーンに映っている単語の詳しい説明が書かれたファイルを渡しながら、それぞれについて噛み砕いて解説し始めた。
「影時間にはほぼ全ての電子機器が止まり。適性を持つ者以外は、象徴化といって棺のオブジェに変わってしまう。まぁ、影時間に適応出

来ないからこそ、日常という殻に籠もっている状態だと思ってくれたらいい。象徴化自体は健康に何の影響もないからね」
一番知りたかった事をまず初めに聞けて、真田は思わず安堵の息を吐く。
ずっと気にしていただけに、これだけで今日はここに来て良かったと心から思える。
真田の様子から、彼がいま何を思って安心した顔をしたのか理解したらしい二人は、微笑を浮かべながら説明を続けてゆく。
「次に、私が君に言っていた倒したい相手というものの説明に移らせてもらう。影時間には実はシャドウという異形の化け物が現れるんだ。やつらは我々のように影時間に迷い込んだ人間を襲い。その精神を捕食する」
「やつらに精神を食われてしまった人は、そのまま生きた屍のようになってしまうんだ。君も聞いた事はあるだろう？　〝無気力症〟という原因も解明されていない病気を」
シャドウは影時間のみに現れる行動原理すら不明の化け物。
やつらは影時間に生きた人間と遭遇すれば、たちまち人間を襲い。その人間の精神を食べてしまう。
襲われて死ぬことも当然あり得るので、精神だけを抜き取られて生きていれば幸運な方だとも捉えられる。
けれど、無気力症は一般的には原因すら解明されていない奇病だ。
人間ならば食べた物は消化されて元には戻らないので、同じようにシャドウに精神を食われた者も二度と元に戻らないのだろうか。
書類に目を通し、説明を受けていた真田は、湧きあがった疑問を尋ねていた。
「精神を食われたらって、無気力症には治療法がないんですか？」
「全くない訳じゃない。まだはっきりと断言は出来ないが、現在の研究では、その精神を食べたシャドウを倒せば、もしかしたら、食われた人に心が戻って回復するのではと言われているんだ」
「もし、そのシャドウとやらを発見出来ず。倒せもしなかったら被害者はどうなるんです？」

「……その場合は、残念だけど一生無気力症のままだ。記憶なら一部が欠けても生きていけるんだけど、精神はとても繊細なバランスで出来ているらしくてね。少しでも食べられたら、危なくて要介助でしか生きられない」
自分でも最低限の日常生活を送れる患者もいるが、しかし、揺ら揺らと不気味な様子で街を徘徊することもあるので、急に道路に飛び出してくる可能性などを考えれば、病院に入院させるなどして誰かが見ているしかない。
また、治安条件によっては、無気力症患者が活発に動けないことや、ろくに話せないのをいい事に、強盗や強姦を働く者が現れないとも限らない。
ある日突然、奇跡的に無気力症から回復した患者から医者が聞いた話では、無気力症になっていた間の記憶は、ほとんど覚えていないらしい。
目覚める前に、何かとても怖いモノに遭遇したような、そういったボンヤリとした感覚だけが残っているようで、記憶が曖昧な件が広まれば無気力症患者を狙う犯罪者が多数現れることだろう。
桐条グループも警察と連携して地域の見回りをしているが、車も入れない狭い路地に連れ込んで、事に及んでいれば発見はどうしても遅れる。
そんな取り返しのつかない事になる前に、根源であるシャドウを狩るというのが、美鶴が真田に依頼したことであった。
「シャドウと戦うにはペルソナという力に目覚める必要がある。少し見ていてくれ」
言って、美鶴は昨日真田に渡した物と同じデザインの銃を取り出し、自分のこめかみへと銃口をあてがった。
武器としての機能はないと言っていたが、それでも何をするつもりなのか見ていると、静かに呼吸を整え、眼を開くと同時に美鶴は引き金を引いた。
「こい、ペンテシレアっ！」
「っ!? これが、ペルソナ……」

驚く真田の目の前に現れていたのは、王冠を頭に乗せ、鉄仮面を被った人型のペルソナ、女帝〝ペンテシレア〟。
話しを聞いても半分は冗談だと思っていただけに、目の前に証拠を突きつけられると信じざるを得ない。
そして、相手が自分にこんな話をするということは、自分にも同じようにペルソナに目覚める可能性があるのだろうと真田は推測する。
昨日渡された銃はちゃんと持って来ている。本物そっくりであるため、動き易い服には収納が少ないこともあって、どうやって持っていこうか今朝も悩んだものだ。
だが、面倒でも持って来ておいて良かった。
今まで感じたことのないような興奮を感じていることがはっきり分かる。
シャドウと戦えば、間違いなく部活で練習をただ続けてゆくよりも強くなれるだろう。
試合で判断を誤りパンチを貰うのとは違う。シャドウとの戦いの場合、少しでも判断を誤れば冗談でも何でもなく本当に〝死ぬ〟のだ。
命懸けの戦い。これで強くなれないと言う方が嘘だと断言できる。
昨日、銃は使わないと言っていたが、真田はポケットから銃を取り出すなり、美鶴の真似をして自身のこめかみに宛がう。
そして、まるで極限の集中力の世界にやってきたように、クリアな思考へと移りながら、自分の頭の中に浮かんだ存在の名を呼び、ゆっくり引き金を引いた。
「こい、ポリデュークスッ！」
引き金を引いた瞬間、頭の中でガラスの割れる音に似た特徴的な音が脳内に響いた。
直後、自分の中から何かが抜け出るような、妙な脱力感を覚えながらも、不思議と先ほどまで感じていた高揚感は一切薄れていない。
無事召喚に成功した真田は、自分の背後に現れたギリシャの英雄にして剣とボクシングの名手、皇帝〝ポリデュークス〟をどこか満足気に見つめていた。

「……驚いたな。まさか、こんなにも容易くペルソナを発現させてしまうとは。だが、これで君には、何としてでも我々の仲間になって欲しくなった」
「こんな面白そうな事だと聞いていれば、最初から承諾していたさ。ようは、このペルソナとやらで化け物退治をすれば良いんだろう？妹やシンジが襲われたら堪ったものじゃない。一人でも俺は戦うぞ」
ペルソナを召喚したことで、余計にシャドウという化け物が存在する事を信じられる様になった。
自分の大切な人間がシャドウに襲われ、心を食われて影人間になってしまうことなど、絶対に御免だと真田は闘志の宿った瞳で一人でも戦うと言い切る。
しかし、話しを聞いていた幾月は、真田があまりにやる気満々なので、少しおかしくなって笑いながら相手を窘めた。
「まぁ待ちたまえ。真田君、ペルソナやシャドウには相性が存在するんだ。君一人では勝てないモノも当然いる。だから、もう少し説明を聞いてくれ。それが終われば、昼食を取って、午後には訓練用のシャドウと実際に戦って貰っても構わない」
話しをするだけなら、別に巌戸台分寮でも構わなかったのだ。
けれど、幾月たちが真田を今日ここへと招いたのは、施設に居る調整個体のシャドウを用いて、シャドウとの実戦をとりあえず見てもらうためだった。
真田が召喚に成功したため、予定を変更して真田自身にも戦ってみてもらう。
だが、ペルソナでの戦闘について真田は素人なので、メインは訓練を以前から行っていた美鶴の戦闘の見学をして、ペルソナ使いとしての戦闘を理解して貰うことだ。
その事について幾月が話すと、相手は少々気になる点があったようで、素直に聞き返してくる。
「訓練用？　普通のとは何か違うんですか？」
「さっきも言ったろう。シャドウは影時間にしか存在しないと。だが、長年の研究によって、捕獲したシャドウに手を加えることにより、

日常でも姿形を保っていられる調整個体を作ることに成功したんだ」
「まぁ、捕獲自体が難しくて、あんまり強い訳ではないんだけど。それでも油断をしていれば命に関わる。訓練の時は僕や桐条君も同席するけど、それは安全上の措置だと思って欲しい」
先ほどの説明よりも、声のトーンを数段落として真っ直ぐ見つめてくる幾月の目は真剣だ。
幾月の傍に隣の座っている美鶴も、全く遊びの無い表情をしていることから、シャドウとの戦いはそれだけ油断できないものだと理解する。
真田もこれで公式戦無敗記録を現在も更新中の身だ。勝手はだいぶ違うだろうが、戦いの中では集中力を切らさぬよう、いつも相手を倒す事を考えて臨んできた。
故に、いくらペルソナに目覚めたことや、未知の敵との戦闘を前にして興奮や高揚感を感じていても、実戦が始まる前にはしっかり思考を切り替えるつもりであった。
「安全のための取り決め等は守ります。ただ、出来る限り初めは俺一人でやらしてください。自分の力がどんな物か。それをしっかり知っておきたいんです」
「ああ、いいだろう。本来は、君も武器を装備して、物理攻撃とペルソナを併用して戦うのがペルソナ使いとしての戦闘スタイルなんだ。けど、今日はまだ召喚の疲労もあってそれは難しいだろう。だから、自分はシャドウと距離を取って、ペルソナだけを敵に向かわすことを守ってほしい」
「ええ、了解です」
しっかり真田が頷いたことで、幾月も満足気な笑みを浮かべた。
そして、その後は昼食の時間になるまで、ペルソナとシャドウについて知ってもらうため、弱点や耐性、召喚時に精神力と言い替える事も出来る適性値を消費するという説明を続けた。
初めは相手も慣れない事で理解し辛いようだったが、アナライズで敵の弱点や攻撃属性を解析するのは能力を持っている美鶴が行うと伝えると、属性の種類をとりあえず覚えて、後はその都度知って行く

ということになった。
昼食を取って休憩してから、真田は調整個体の臆病のマーヤと戦い。改めてペルソナが、自分たちがアニメや漫画の世界にのみ存在すると思っていた異能だと理解することになる。
だが、ペルソナの受けた攻撃のフィードバックダメージの痛みで、嫌でもこれが現実の戦いだとも理解させられ、真田は面白くなってきたと精神力を使い果たして気を失うまで自分の手に入れた力を確かめたのだった。
――ヨーロッパ・オノス地方
ヨーロッパ北部のオノス地方に存在する大きな屋敷。
そこの主であるソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインは、上がってくる報告書に目を通し、イラついた様子で書類の束を目の前の報告者へと投げつけた。
「まだあの女を殺せないの！　わたくしの小狼にいつまでも付き纏って迷惑なのよ。どんな手を使ってもいいから、早く始末なさい！」
「はっ。しかしながら、イリス・ダランベールには小狼様が付いておられますので、小狼様をどうにか引き離さない限り、ただの仕事屋程度ではとても……」
湊がイリスを守っているせいで、並みの仕事屋では返り討ちに遭ってしまう。
最初に差し向けたバルツァーギ兄弟も裏では一等級の殺し屋だったのだ。
それをまとめて屠ったこと自体は、湊の成長を促すためでもあったので予想通りだが、まさか、イリスも片腕を負傷しただけで無事に生きているとは思わなかった。
その後は、イリスが怪我の回復を待って療養していたので、ただ戦闘の多い依頼を回して仮面舞踏会と小狼の知名度と実力が上がるようにしていたが、復帰後もイリスは湊に守られ無事に生存していた。
流石に、いまの湊を殺せる人間など、仙道のような裏界でも化け物と呼ばれる者たちしか想像できない。
男がそう言い返すと、ソフィアは血のように赤い瞳で冷やかに男を

見つめて言った。
「その方法を考えるのも貴方たちの仕事でしょう？　無能な貴方たちでも完遂できるよう、わたくしがどれだけの費用を工面したと思っているの？」
「はい、誠に申し訳ありません」
「……はぁ、いいわ。どうせ何も期待していなかったし。さっさと下がりなさい」
「はっ、失礼致します」
心底つまらなそうに手を払って下がる様に告げると、男は深々と頭をさげて部屋から出て行った。
静かに扉が閉められ、部屋に残ったソフィアは、散らばった報告書を拾っている老執事に声をかける。
「ヘルマン、貴方ならあの女を殺す方法に心当たりがあって？」
「そうですな。戦闘に関しては小狼様の領分故、仙道様のような御方でないと相手になりませぬ。ですので、ここは一つ、搦め手で攻めてみてはいかがでしょう？」
「搦め手？」
「ええ、カナード様ならば、そういった事にも御詳しいかと」
穏やかな笑みを浮かべ、傭兵であるカナードを頼れと進言する執事に、ソフィアも少し考え込む。
戦闘以外の搦め手で殺すと言われ、ソフィアが初めに思い付くのは軍事力に物を言わせた制圧爆撃だ。
彼女の父がトップを務める久遠の安寧は、医療と軍事産業で世界トップの企業である表の顔も持っている。
故に、各国が軍事予算を必死にやり繰りして買うような戦闘機や爆撃機でも、ソフィアが言えば簡単に何十機と用意することが出来る。
流石に大型の戦艦ともなると準備に時間がかかるが、それでも用意できない訳ではない。
けれど、そんな大規模な破壊活動をしてしまえば、傍にいる湊も一緒に殺してしまうので、ヘルマンの思い付いている搦め手には含まれないだろう。

さらに考え、次に思い付いたのは、食料に毒を混ぜるというものだ。
これは昔からよく行われていた手法で、普段は大丈夫だからと油断しているからこそ、とても有効でかなりの効果が期待出来た。
無味無臭の薬品も、製薬工場や新薬の研究施設をいくつも各地に持っているため、用意させるくらいは簡単に出来るだろう。
だが、こちらはイリスが湊と食べ比べなどしてしまえば、湊も同じように被害に遭うため、やはり確実性を考えると容易に決断することは出来ない。
「……難しいわね。いっそ、施設におびき寄せて、分断してから毒でも吸わせてみようかしら。ヘルマン、カナードに連絡を入れて、二人を分断した上で殺せそうな施設を調べさせて」
「はっ、かしこまりました」
先ほどの男と同じように去って行く使用人の背中を見ながら、今度こそ独りになったソフィアは、静かになった部屋の中で一人考え込む。
カナードに調べさせ、湊とイリスを分断できるとして、どうすればイリスだけに毒を吸わせることが出来るか。
まず思い付くプランとしては、施設で別々の場所に依頼の品を用意して、時間短縮のために二人が別行動を取るよう仕向けることだ。
これならば、ある程度の広さのある場所であれば、警報でも鳴らして湊が毒の散布されたエリアに近付かないよう誘導する事が出来る。
また、集めさせた情報によると、イリスは湊を随分と大切にしているようだったので、自分が毒を喰らえば、湊が巻き込まないように退避の指示を出すに違いない。
どうせならジワジワと苦しみながら死なせたいので、用意する毒は神経毒で呼吸が徐々に出来なくなる物にしておけば良いだろう。
(フフッ、少し楽しくなってきたわ。そうよ。小狼の成長と同時にするからいけなかったんだわ。邪魔者を排除して、それからゆっくり調教(てなずけ)していけばいいのよ)
従順な犬など、金と力を見せればいくらでも手に入る。そんな家畜にも劣る存在をペットにしてもつまらない。

ソフィアが欲しいのは、強く、美しく、そして何者にも屈しない気高さを持った者だ。
名切りについては年若いため詳しくは知らないが、使用人のヘルマンも生き残りがいると知って驚いていたため、血統も申し分ないはず。
名切りに似た一族は海外にもいるが、暗殺を生業としている『蛇』と呼ばれる者たちを、久遠の安寧は既に囲い込むことに成功している。
紀元前から続き、一騎当千と謳われた名切りとは違い。『蛇』たちはまだ五百年ほどの歴史しかないが、それでも裏の世界では恐れられる集団戦のプロだ。
個々の力で劣ろうとも、その隙の無い連携は、まるで蛇が絡みつくように対象の自由を奪ってゆく。
イリスを殺した後は、その者たちに頼めば、麻酔等で無力化して湊を連れて来てくれるに違いない。
そこからは、湊がどれだけ抵抗しようと、守護天使であるアパテーの力を見せつけ、絶対的な力関係を理解させた後、鎖に繋がれ悔しがる相手の頭に小水でも掛けてみれば面白いだろう。
未だ男を知らず、性器など風呂係の女中たちくらいにしか見せたことはないが、相手は大切なコレクションだ。余興のついでに見せるくらいのご褒美は与えてやってもいい。
(あれだけの美しさですもの。足でならしてあげてもいいわね。きっと、屈辱に顔を歪めるのでしょうけど、そういった表情ですら美しいに違いないわ)
もう何ヶ月もずっと待っているのだ。早く湊が欲しい。どんな手を使ってもいいから、さっさと自分の手元に置きたい。
そんな待ちきれない感情を抑えこみ。ソフィアは湊を手に入れた後のことに思いを馳せながら、相手に怪しまれず依頼を受けさせるため、裏の仕事をするには随分と情に弱いという、甘さを持った二人ならば受けるであろう依頼内容を考え始めるのだった。

――???

湊の心の深部。深く濃い闇の中で蠢(うごめ)く蛇神の気配を感じながら、茨木童子が独り座っていると、知った気配が傍にあることに気付いたのか、茨木童子は何もいない闇の方を見つめ声をかけた。
「……ユウリ、いつまで隠れているつもりだ？　ばれていることにも気付いているのだろう」
茨木童子が声をかけると、彼女が見つめていた方向に淡い光と水色の欠片が集まりだす。
そして、集まった光が徐々に輪郭を帯びてくると、その光の中から永劫〝カグヤ〟が現れた。
現れたカグヤは光が治まって完全に姿を晒すなり、今度は白い光に包まれ。袖がなく紫の縁取りがされた黒のとても丈の短い着物のような、一見すると〝くノ一〟のようにも見える衣装を身に付けた、白く長い髪をした女性の姿になっていた。
その顔は茨木童子にどこか似ているが、彼女よりも少し柔らかい印象を受ける顔の作りをしている。
けれど、カグヤはその端正な顔を悲しみに染めて、茨木童子へと歩み寄った。
「姉(あね)さま、どうして八雲を苦しめようとするのですか？　あの子は、戦いを望んではおりません」
「フフフ、アハハハハッ！　中々に面白い冗談だ。けれど、お前は随分と勘違いしているなぁ。私は何も八雲を苦しめようとしていない。だがな、望もうと望むまいと、ナギリの血は争いを招くのだ」
カグヤの話しが余程面白く感じたのか、腹を押さえておかしそうに笑い、笑った際に滲んで目尻に溜まった涙を指で拭う茨木童子。
そんな相手の反応に気分を害したのか、カグヤは真剣な表情のまま、眉を顰めて言葉を続ける。
「姉さま方が八雲から感情を取り除けば、争いを嫌うあの子は戦いからは離れましょう」
「ふふっ、随分と甘いことを言ってくれる。いま感情を取り除けば、待っているのは心の崩壊だけだぞ？　崩壊を防ぐには、ナギリの血に目覚める必要がある。自分が人殺しの一族だと知れば、諦観としてや

つにとっても救いとなろう」
本来の湊が争いを嫌う優しい子どもなのは知っている。
けれど、いま茨木童子たちが植え付けた負の感情や殺人衝動を取り除けば、湊は自分の犯した罪の重さに耐えきれず、下手をすれば命を絶つ可能性があった。
勿論、茨木童子自身は、湊はチドリやアイギスのためにそんな事はしないと思っているが、それでもナギリの血に目覚めて、自分が人殺しの一族だと理解した方が、血の業だと諦めることが出来るだけマシだろうと相手に伝える。
それを聞いたカグヤも、自分の姉の言っていることが理解出来たためか、一瞬表情を強張らせるも、すぐに表情を引き締め、血に目覚めるということがどういう事か分かっているのかを相手に尋ねた。
「あの子の母君の施した術は八雲自身の死を持ってしても発動しませんでした。ならば、後は強い感情の発露でしか解禁はあり得ませぬ」
「だろうな。八雲は随分と沢山の物を抱えている。アイギスとチドリだけだったはずが、絆を深めるうちに自分の両手だけでは抱えきれないほどまで増えた。そろそろ、いくつか取り溢すことだろうさ」
茨木童子の言っていることは、湊自身も気付いていながら、それは無いと否定し眼を背けている事実。
今の湊は守る物、守りたい物が増えすぎた。
以前、被験体を助けようとした結果、自分の考えの甘さから、残っていた半数以上の被験体を死なせるハメになった。
そのとき、自分の守りたい物を脅かそうとする者は全て敵だと、ナギリの感情を植え付けられながら殺すことで守る道を知り。邪魔をする者は全て排除してきた。
しかし、今では守りたい物が増えすぎたせいで、湊一人では全員を守ることが難しくなってきている。
湊の身体は一つしかないのだから、そう大勢を守ってばかりもいられないだろう。
イリスも気負い過ぎている湊へ、本当に大切な物以外は全て諦める覚悟をしておけと言っていた。

人は神ではない。自分の命すら必死にならなければ守れないのだから、全てを救う事など出来はしないと。
だが、自分たちの大切な愛子(まなご)が苦しむことを分かっていながら、血の目覚めのために必要なことだと笑っている女へ、カグヤは慈悲の心はないのかと声を荒げた。
「それが分かっていて、姉さまは自らの悲願のために見過ごそうとされるのですかっ」
「歪んでいると軽蔑するか？　だがな、我らをこのような願いのための装置へと変えたのは、お前たち九頭龍なのだ。同じように子孫の血に宿り、九頭龍が我らに強いてきた仕打ちをずっと独りで目にしてきたお前なら分かるだろう。真におぞましきはどちらかが」
「っ……」
茨木童子の言葉に、言われたカグヤは言葉を詰まらせ顔を俯かせる。
そう、茨木童子が血に宿ったナギリの祖であるように、ここにいるカグヤも血に宿り今日まで生き続けた九頭龍の祖であった。
鬼と龍は元々一つの一族だった。だが、旧き時代に存在したペルソナやシャドウとも異なる人にあらざるモノと人の間に生まれたある姉妹が、〝生まれ変わっても再び巡り合えるように〟、と母から受け継いだ権能を使い、姉の子孫が妹の子孫を守るという盟約を結ぶ事で離れぬようにしたのだ。
そして、残っていた権能を使い姉妹は血に宿ることで生き続け、姉は龍を守れるよう一族の者らに変革を求め、妹は一族にただ鬼と共にあれと伝えるようにさせた。
変革を求められた鬼たちは、自身の磨いた知識も技術も全てを伝えるために、始祖と同じく血に宿るようになった。
共にあれと伝えられた龍たちは、鬼に守られるうちに自分たちを鬼の主人と思うようになり、血に宿っている妹は子孫の過ちに嘆いた。
けれど、血に宿った者たちでは生きている者らをどうする事も出来ず。いつしか龍と鬼の伝承が生まれ、鬼の一族だけが人々から恐れられるモノとなったのだ。

そうして、数千年にも及ぶ年月が流れ、平和な世の中になり鬼が解放されたことで、ようやく姉妹の願いは鬼と龍の混血児〝百鬼八雲〟の誕生によって叶う事となった。
「ユウリ、お前はいつまで偽るつもりだ？　力に目覚めた八雲であれば、お前の擬態にも気付くだろう。姿もアルカナも偽っているとなれば、訝しんだ八雲はお前を消すかもしれない」
悲痛な表情で俯き手を震わせている妹へ、姉の茨木童子が声をかける。
ペルソナとなった彼女は、今の人としての物が本来の姿であり。太陽を司る姉に対応するように、〝月〟のアルカナを司っている。
生前の名は、ユウリ。ペルソナとして本当の名は、月〝赫夜比売（カグヤヒメ）〟。それが九頭龍の祖である、彼女の真の姿であった。
「……わたしを殺すことで八雲の気が晴れるのであれば、どのような仕打ちでも受けましょう。子孫の罪は、両一族の仕組みを作った一人としてわたしが全て負います」
一族の増長を止められなかったのは、姉の子孫らが自分の子孫らを守ってくれることをただ喜び、自分の子孫らには共にあれと言うだけで、恩に報いるよう伝えておかなかったから。
故に、湊がナギリの業を背負わされ苦しむのであれば、元凶である自分を好きにして貰って構わない。
そう言って、ようやく俯いていた顔を上げたカグヤは、悲しそうな表情をしながらも、瞳には強い決意の光を宿らせていた。
しかし、またしても茨木童子は気だるげにしながら、カグヤの決意の籠められた言葉を一笑に付す。
「だから、お前は甘いのだ。咎により殺されてお前は満足かもしれないが、蛇神を抱える八雲の憎悪はその程度では治まらない。しかし、優しい八雲のことだ。真面目にお前との約束を守り、九頭龍たちに手を出したりはしないだろう。そうなったとき、八雲は自分の抱える感情を向ける矛先を見失う訳だが……苦しいものだぞ？　どうにも出来ない感情を抱え込むというのはな。まさに生き地獄だ」
罪を背負い、罰は自分が全て受ける。確かに素晴らしい事故犠牲の

如き献身の精神だ。
けれど、それは湊が嫌う桐条武治と同じ、全ての決定を他者に投げ、自分の罪から逃げる行為に他ならない。
憎しみで殺してくれればいいとはいうが、殺して何か変わるのだろうか。
殺したところで心の隙間が埋まることはなく、生活においても何も変わらない。
それで変わることがあるとすれば一点、ただ、殺された者が自分の罪から逃れられるだけだ。
殉教者のような誠実さでカグヤは罪を全て負うと言ったのだろうが、罪から逃れようとする最も卑怯な行為に、茨木童子は薄く嘲笑を浮かべながら相手に手をかざす。
「運命は既に動き出した。我らに見守る以外で出来ることは何もない。ユウリ、お前は血に目覚めた八雲に真の姿を晒す覚悟でもしておけ」
「まっ、待ってください！　姉さまっ……」
かざした手を茨木童子が横に一閃すると、黒い闇が蠢き、そのままカグヤを飲みこんでしまった。
この場よりも、もう少しだけ湊の表層意識に近い部分へ送り帰しただけだが、きっと相手は驚いたに違いない。
完全に闇に飲まれる瞬間まで、驚愕の表情で手を伸ばしていた妹を思い出し、茨木童子は一人ごちる。
「フッ……八雲の優しさはユウリにでも似たのやもしれんな。誰よりも先に、八雲のペルソナ（ちから）となることを選んだやつだ。出来れば殺して欲しくないんだがな」
オルフェウスやプチフロストを通じて、少しだけ湊に力を貸していたのは座敷童子だ。
しかし、最初に自分ごとペルソナに転生し、様々な局面で湊の力となったのはカグヤであった。
余力といった意味で、自分だけが九頭龍の血に宿っていたカグヤに対し、子孫にも血に宿る力を分け与えたことで、ナギリたちの血に宿

る力は小さくなりつつあったのやもしれない。
それでも、血に宿った自分の魂を一部改編してまで、自分たちの子孫を助けようとするのは、やはり彼女自身の優しさだろうと思える。
そんな優しくて愛しい実妹を、どうにか許してやって欲しいと、茨木童子は願わずには居られなかった。

第七十九話　真田の入寮

８月２８日（月）
昼――巌戸台分寮
真田は美鶴に仲間になるよう誘われ、ラボでペルソナに目覚めてから、少しばかり忙しいときを過ごしていた。
ペルソナ使いとしてシャドウと戦ってゆくため、〝特別課外活動部〟なる部活に所属し、本部である巌戸台分寮への入寮が決まったことで、まず、その入寮理由を考えることになり。
元々、ボクシングで優秀な戦績を残していたこともあって、入寮を条件に高等部から特待生として迎えたい意向を理事長である幾月が真田夫妻に伝えることで、入寮自体は許可を取ることが出来た。
だが、問題はその後で、真田は美紀も一緒に入寮するとばかり思っていたらしく。美紀はすでに成績優秀者で特待生扱いとなっているので、自宅通いのままであることを知らされると、
「では、話しは全てなかったことに。フッ……危うく、有里の策略に嵌るところだったが、やつも詰めが甘いな。俺の目が黒いうちは美紀の部屋に上がる事など絶対にさせん」
などと、勝手に全ては湊のせいだという事に脳内変換し、周囲の者をぽかんとさせた。
正直なところ、今回の件に湊は全く絡んでいない。仮に絡んでいるとすれば、それは真田の適性をペルソナに覚醒するレベルまで無自覚に引き上げたくらいなもので、むしろ感謝しても良いくらいである。
最終的に美紀が頑張ってと応援したことで、爽やかに「ああ、行ってくる」と一人でどこかへと去っていったりした一幕もあったが、夏休み終了間際の本日、真田は実家から必要な荷物を桐条グループの引っ越し業者に運ばせ、無事に入寮を迎えた。
「アキ、ダンボールかたしといたぞ」
「ああ、済まない。こっちも終わったところだ」
荷物の運び入れ自体は業者にやってもらったが、箱詰めされた物の荷解きは自分たちで行う事にしたため、入寮日を聞いていた荒垣が手

伝いに来ていた。
無論、ただ働きという訳ではなく、昼にはがくれを奢ることでしっかりと契約を結んでいる。
そうして、午前中から行われていた作業も、丁度昼頃に終わったことで、真田はそろそろ昼を食べに出ようかと提案した。
「結構いい時間だな。休憩が必要ないなら、このままはがくれに行くつもりだが、どうする？」
「問題ねえ。すぐ出れる」
「そうか。なら、一応、桐条に出掛けてくることだけ伝えていこう」
片付けに使っていた軍手を外し、ドライバーなどの工具類を入れている引き出しに仕舞うと、真田は財布と携帯を持って部屋を出る。
真田の入寮日は美鶴たちにも伝えてあり、幾月は仕事があるからと来ていないが、寮生の美鶴には色々と騒がしくなることを先に謝罪しておいた。
謝罪を受けた相手は、引っ越しはバタバタするものだ、と言って笑いながら気にしていないことを告げてきたものの、それでも残り少ない夏休みの一日をゆっくり過ごせないのは面倒に違いない。
なので、最初は手伝いにきてくれた荒垣のみ誘って食事に行くつもりだったが、部屋を出てラウンジに降りて行く途中、真田は美鶴にも昼を奢ってやろうかと考えていた。
階段を下りている時点で、ソファーで本を読んでいる相手の姿はすぐ捉えることが出来る。
女性に興味が無いわけではないが、あまり女性と接する機会のない真田でも、美鶴は同年代の中では突出して優れた容姿をしていると思っている。
もっとも、それが恋愛感情に発展するかと言えば答えはＮＯだが、そうだとしても相手が目立つ容姿をしていることには変わりない。
つい先日、美鶴から声をかけられるまで相手を知らなかったのは、欠片も興味を持っていなかったという、無関心による無知が原因だが、知ってしまえば接してみた印象と見た目に対して素直な評価を下すことが出来た。

故に、部屋の端の方だろうと、そんな相手が座っていれば自然と目を引き、すぐ見つけることが出来るのも当然と言える。
真田は後ろに荒垣を連れてソファーに向かうと、二人がやってきたことで顔を上げた相手へ声を掛けた。
「桐条、引っ越しの片付けを終えたから、これから昼にしようと思うんだが」
「ああ、君たちの分もちゃんと頼んである。少し待っていてくれ、お茶を淹れてから食事にしよう」
『……は？』
真田が「お前も一緒にどうだ？」と続けようとした途中で、美鶴は読んでいた本をぱたんと閉じ、テーブルの上に置いて立ち上がりキッチンへと向かっていった。
後に残された二人は話しの流れについて行けず、ぽかんと口を開けてしばらく佇んでいたが、キッチン側にあるテーブルの方へ視線を送ると、どこか重厚な輝きをした平たい円形の漆器がいくつも置かれていることに気付く。
いくら貧しい児童養護施設の出身とはいえ、それが何であるかくらいは知っている。
実際のところ、真田たちの知っている物は、漆器ではなく安い樹脂製の容器だろうが、それでも中身の料理名は同じだ。
そう、二人の視線の先にある本物の漆器の中には、値段が想像出来ないほど、ネタの輝きが次元を異とする『江戸前寿司』が並んでいた。
「……アキ、お前あんなの頼んでたのか？　随分と奮発したサプライズだな」
「馬鹿をいうな。あんなのお年玉と一年分の小遣いを溜めても一人分がやっとだぞ」
寿司を目にするまで、頭も舌も胃袋も完全にはがくれのラーメンを食す状態となっていた。
常連だけが食べることを許される裏メニューが存在するという噂も耳にしているので、寮生活で自炊しない日に通っていた荒垣は、そろそろ自分も裏メニューにあり付けるのではという期待も持ってい

た。
だが、まるで宝石箱のような色取り取りの眩い輝きを放つ寿司を見た瞬間、本能が思考を凌駕し、自分は今日この寿司を食べるためにここに来たとすら今は感じている。
しかも、白い御屋敷のテラスで紅茶を飲んでいそうなイメージを持つ、見目麗しい桐条グループの御令嬢が自分たちのためにコンロでお湯を沸かし、味が均一になるよう急須で緑茶を注いでくれている。
となれば、いくら硬派を気取っていようと荒垣も思春期の男だ。当然、悪い気はしなかった。
そうして、二人は軽口を叩きながらテーブルまで移動する。
片方の列に二つ、向かいの列に一つ、この場合は男子が並ぶべきかと考えている間に、お茶を並べ終えた美鶴が二人席の正面に誰もいない方に座ってしまった。
「ん？　どうした、ネタが乾いてしまうぞ」
ならば、同じ寮生の真田が美鶴の隣へ座り、来客の荒垣が一人席に座ろうとアイコンタクトを即座に交わして、二人もすぐに席に着くとラップを外し、割り箸を手に取った。
二人や美紀が揃ったときには、児童養護施設時代の癖が出るのか、真田たちは箸を持ったまま手を合わせ、全く同じタイミングで口を開く。
『いただきます』
「ふふっ、いただきます」
美鶴にしてみれば、こんな風に同世代とテーブルを囲んで食事をするのが珍しいのか、真田たちの食事の挨拶を面白そうに眺め、自分も彼らの作法に合わせてみる。
それで料理の味が特別変化する訳ではないが、誰かと共に食事をしているという、一種の共有感は味わえるため。
家では父とは中々時間が合わず、女中らに囲まれながらも独りで食事を取り。学校でも自分の傍には基本的に誰も座らないので、こうやって誰かと食事をするのは本当に久しぶりだった美鶴は、仲間が増えた以上にどこか嬉しそうに見えた。

「ん、なんという名前か知らないが、美味いなこの魚」
「それはイサキだ。春の終わりから夏にかけてが旬だが、産卵期の終わった冬頃も脂が乗っていて中々美味しいぞ」
遠いところから順に食べてゆくという、几帳面なのかズレているのか分からない食べ方をしていた真田が、直前に食べた寿司が美味しかったと感想を漏らす。
すると、ネタの並びを覚えていた美鶴が、隣からネタの名前を教えながら、ついでにどの時期に食べれば美味しいかという情報も与えた。
自分でも料理を結構する荒垣にとっては、自分が普段使わない食材の情報は素直にありがたい。
だが、肉とプロテインがあれば良いといった、少しばかり変わった嗜好を持った男は、魚よりも仲間となる美鶴自身に興味を持ったらしく。口の中の物を飲みこんでから、雑談がてら軽い質問をぶつけた。
「なんだ、桐条は食材にも詳しいのか？」
「父に連れられて食事に行く以外にも、接待等を受けていれば、自然と覚えるようにもなるさ。こちらが訊かなくとも、相手が勝手に旬だから美味いと薦めてくるんだからな」
「なら、時期が重なれば、一ヶ月にカニばかり食べるという事もあり得る訳か」
「カニはあまり食べないな。あれは冷凍技術が進んで年中食べられるからか、旬の方が美味いと分かっていても、家の関わりで会う人たちは大してありがたがらない。それなら経験上、フグの方が重なり易いように思う」
『……』
カニをありがたがらないと聞いた途端、『カニ＝高級食材』というイメージを持った少年らは固まる。
美鶴の言う通り、カニ専門店やカニで有名な観光地などでは、シーズン中に大量に水揚げして、それを冷凍しておいた物を提供していることが多い。
別にそれは悪いことではなく。輸入品の缶詰カニとは比べ物にな

らないほど美味しいので、それを年中安定して提供するための方法だと考えれば、安くて美味しい物を求める消費者からは何の不満も上がらないだろう。
だが、それで希少性が薄れたために有り難がらないとは、随分と我儘で贅沢な考え方だと、庶民派の彼らが思ってしまうのも無理はない。
さらに、フグなど生まれてこの方一度も口にしたことがないので、フグに飽きそうだと肩を竦めるように言外に告げた美鶴に対しても、少しばかり思うところがあった。
それが嫉妬だと気付いていない少年らは、やや言葉に棘を持たせながら会話を続ける。
「俺たちでは一生味わえそうにない感覚だな」
「ああ、飽きる以前にフグなんて食ったことねぇしな」
俺たちとお前は住む世界が違う。暗にそれをアピールしながら、男子二人が一人の女子を仲間外れにしているという状況は、かなり子供染みていて、この場に美紀がいれば二人の頭をお盆で叩いて激怒しているところだ。
けれど、人と少しずれた感覚の持ち主である美鶴は、男子らの小さな意地悪にも気付かず、綺麗な微笑を浮かべて二人にあることを告げた。
「ん？　君たちの器の右端に並んでいるそれはフグだぞ。一般的に冬が旬と思われているが、種類によっては春から初夏までが産卵期であったりするからな。この店では夏フグも提供しているんだ」
美鶴が話し終わるかどうかのタイミングで、荒垣は既に言われたフグの握りを箸で掴んでいた。
透き通るような透明感のある白さでありながら、しっかり噛み切ることも出来るギリギリの厚さに下ろされた身の上には、鮮やかな色のもみじおろしが存在感を放っている。
「……悪ぃな、アキ。俺は一足先に大人の世界に突っ込むぜ」
「ま、待て！　早まるな、シンジ！」
上から順番に食べていた真田はまだそこまで辿りついていないの

で、ランダムに食べていた荒垣の方が当然、先にフグを味わうことになる。
幼馴染に先を越される悔しさと、誘惑に負けてここで順番を変えるかという二択で本人は悩んでいるらしいが、食通でもある荒垣は、真田の声など全く耳に入らないほど意識を味覚に集中していた。
ここまでムラサキウニやスズキ、イワシにカツオなど、どれも旬と思われるネタの寿司を食べてきた。
その全てが荒垣の想像を超えた味で、今まで自分が食べてきた寿司は素人が握ったのではないかと正直思ったくらいである。
実際、回転寿司やスーパーでは、素人どころか、寿司ロボットがせっせとシャリを生産し、それにパートやバイトの人間がワサビを付けてネタと合わせているので、荒垣の想像は当たっていたりする。
けれど、老舗の寿司屋と回転寿司では、客層や顧客ニーズが異なっているため、一概にどちらが優れているとは言えない。
しかし、少年らにとって一生のうちに一度でも食べられれば幸運だと思っていた食材が、さらに高級な『回らない寿司』として現れたのである。
本日食べた寿司はどれも想像を超えた味だったため、これで期待しない方が嘘だろう。
騒ぐ幼馴染を無視し続け、しっかり見た目も楽しんだ後、荒垣はゆっくりフグ握りを口へと運んだ。
「……んだよ、夏でも王様じゃねぇか」
言われてみれば、成程、冬の味覚の王様と呼ばれるのも納得がいく。何せ、相手は夏でも確かにキングなのだから。
あまりの美味しさに知らず口元が緩んでいる荒垣を、傍に居た二人は頭上にクエスチョンマークを浮かべて眺めているが、今の荒垣にはそんな物はまるで気にならなかった。
弾力のあるプリッとした食感、ピリッと辛みの利いたもみじおろしがアクセントとなり、噛んでいても飽きがこず。むしろ、このまま弾力が消えるまでずっと食べていたいとすら思える。
こんな美味しい物に飽きそうになるとは、これ以上に美味しい物を

知っているのか、もしくは、美鶴の舌がお子様で味を理解できていないからだと荒垣は感じた。
　そうして、じっくり咀嚼を続け、名残惜しいが最後にごくりと飲み込むと、人生初体験のフグの余韻を味わいながら、美鶴の淹れてくれた少し濃いめの緑茶で一息つく。
「はぁ……フグ、良いもんだな。大金払ってでも大人が食いに行きたがる気持ちが、今ようやく分かったぜ」
「気に入ったのなら何よりだが、君たちはフグを食べたことがなかったのか？」
　美鶴は二人もよりも量の少ない握りを食べていたようで、完食してお茶を啜りながら荒垣に尋ねる。
　尋ねられた相手は、自分の独り言に返事をされると思っていなかったらしく、少し驚きつつも食事を続けながら、美鶴が何故自分たちもフグを食べたことがあると思っていたのか問い返す。
「逆に、お前はなんで俺らが食べたことがあると思ってたんだ？」
「真田の妹さんがいるだろ。彼女は部の課外活動で天然フグを食べていたようなので、君らも食べていると思っていたんだが、どうやら私の思いこみだったようだな」
『……は？』
　まさかの返答に固まる二人。真田も荒垣も、美紀というより美術工芸部の面々が、たまに課外活動と称して休日に出掛けていることは知っていた。
　けれど、活動内容は美術館や博物館巡りであったり、ゴールデンウィークに行っていたサクランボ狩りのような事も極稀にしているくらいで、基本は芸術鑑賞のような事だと認識している。
　それがどうすれば、天然フグという高級食材を食べることに繋がるのか不思議でならない。
　何より、妹が自分に部のことを話していなかったという事が信じられず、真田は明らかに動揺しながら口を開いた。
「ま、待て。俺はそんな話を聞いてないぞ」
「冬の話しだからな。有里と君が疎遠になっていたこともあって、妹

さんも気を遣ったんじゃないか？」
「有里も一緒だったのかっ!?」
信じられない。そう言いたげに目を大きく開いて、急に立ち上がる真田。
美鶴は相手が突然大きな声を出して立ち上がったことに驚いたらしく、肩をびくりと揺らして真田をジッと見ている。
だが、やけに相手がギラギラとした疑いの視線で見返してきているため、フム、と少し考えてから、
「待っててくれ」
と言い残し、席を立って階段を上がって行ってしまう。
それから三分ほど待つと階段を下りてくる足音が聞こえ、何やら分厚いファイルを持った美鶴が現れた。
テーブルに戻ってきた彼女は、自分の席にあった寿司桶を横にどけると、二人に見えるようにファイルを開いて中身を見せる。
そこに収まっていたのは、美術工芸部の女子らの写る写真と課外活動における報告書であった。
「これは去年の彼らの活動報告をまとめた物だ。本来は学校に保管しておくんだが、報告書として非常に素晴らしい出来でな。私も参考にさせてもらうため、特別に許可を貰って持ち帰らせてもらっている。そしてほら、これが言っていたフグを食べたという証拠だ」
言って美鶴が開いたページには、美術工芸部のメンバーと引率の佐久間と櫛名田で一泊旅行に行ったことが書いてあった。
夕食には下関でフグを食べたらしく、美紀もゆかりに腕を掴まれて、フグ刺しを贅沢に大皿半周分取らされている写真もばっちり残っている。
別の写真では、ポン酢の入った小皿に山盛りになったフグを前に、写真でもはっきりオロオロとしている事が分かる美紀の姿が中々コミカルだが、寿司一貫のフグに騒いでいた事に妙な敗北感を覚えた荒垣は沈黙していた。
しかし、真田の方は自分の妹が湊と一緒に旅行に行っていた事が許せないらしく、生徒会長である美鶴に抗議の声をあげる。

「何故、有里も一緒に行かせたんだっ」
「生徒会に提出された報告書を見る限り、基本的に彼らの課外活動は、彼が計画しているようだしな。どう考えても部の予算で賄える額を超えているし。部員らが会費を払っている様子もないので、多分だが、費用は彼が個人で負担しているんじゃないか？　それで本人に行くなと言うのもおかしいだろう」
一泊する旅行自体はこの冬の一回だけで、他は全て日帰りとなっている。
だが、美術工芸部に配分された予算は、基本的に画材道具などを買い集めることでほぼ使い切っていたはずだった。
発足されたばかりだったので、足りなくなっても申請すれば追加予算もいくらか払われることになっていたにも関わらず、去年は、最後までそんな申請はなされていない。
それで二ヶ月に一度は必ず課外活動を行い、冬には夕食だけで十万円を超える旅行を行うなど不可能。
ならば、どこからその資金が出ているかを考えたとき、引率の教師がポケットマネーから出していないのであれば、これは立案者が自費で賄っているとしか思えなかった。
私立への進学を考えて学費等を準備していたのであれば、全額免除となって浮いた分から払う事は出来るだろう。
そう考えることで資金の出所を納得していた美鶴は、金を払っている人間が参加することの何が悪いのかと真田に聞き返した。
しかし、それでも妹の身の安全から納得出来ない真田は、自身が心配に思っている事を素直に叫ぶ。
「美紀が襲われたらどうするっ！」
「……引率に教師が二人いる上に、参加メンバーには彼の家族もいる。そんな状況で不埒な真似などするはずないと思うがな。さらに言うなら、女性陣は旅館の同じ部屋に泊まっているが、彼は一人で別の部屋に泊まっている。君の考えは杞憂だ」
「一人で、別の部屋？」
てっきり同じ部屋に泊まっているとばかり思っていた真田は、湊が

一人で別の部屋に泊まったと聞いて、ようやく冷静さを取り戻す。
相手が冷静さを取り戻したことで、今なら話しも聞くだろうと、美鶴は聞き返してきた相手に頷きながら、妹のことになると少々過剰に反応する真田を諌めておく事にした。
「ああ。食事は一緒に取っていたようだが、その後は部屋に帰って翌朝まで誰とも会っていない。思い出作りに金銭の話しはしたくないが、君の妹も含めて部員らを楽しませるため、彼は総額数十万を個人で負担している。部屋もわざわざ別に取ったのだから、これ以上を求めるのなら君が払うべきだ」
文句があるなら金を出せと言われても、今までは親から貰った小遣いで過ごしてきた真田に、そんな数十万などパッと出せるはずもない。
今後は、特別課外活動部に協力すれば、危険手当と出来高で報酬を桐条グループが払ってくれることになっているが、まだ何回か召喚しただけでへばってしまうため、その稼ぎも当分宛てには出来ないだろう。
「……まぁ、同じ部屋に泊まらず、他の女子も多数いるなら少しは認めてやろう」
そうして、まぁ、別の部屋ならば少しくらいは許してやるかと、冷静になった真田は小さく溜しながら食事を再開する。
話しが一段落した事で、美鶴は汚さないうちにファイルを片付けに戻ったが、いつの間にか立ち直っていた荒垣が、話しを終えた真田にずっと気になっていたことを訊いてきた。
「そういや、何でまたお前は寮暮らしになったんだ？　いくら特待生つっても、美紀と一緒にいることを優先すると思ってたんだが」
「ああ。まぁ、確かに美紀より優先することはないが、これも美紀のために必要なことでな。お前、深夜零時に変な体験をしたことはないか？」
「深夜零時に、変な体験だぁ？」
問われた荒垣は湯呑みに手を伸ばし、熱いお茶を飲みながら深く考え込んでいる。

突然、こんな変な質問をされれば、何の話しだと聞き返すところだが、真田は自分の命よりも大切な妹のためだと言った。
ならば、この質問にもしっかりとした意味があるのだろうと考え、茶化すことなく、真剣に何かあったか思い出そうとしてみる。
「ん？　荒垣はどうかしたのか？」
ときどきお茶を飲み、さらに腕まで組んで考え込んでいる荒垣を見て、戻ってきた美鶴が真田に何かあったのか尋ねる。
「ああ、俺がここで暮らす理由を聞かれたんでな。深夜零時に変な体験をしたことはないか、少し聞いてみたんだ」
「っ……真田、この事は相手が家族や親友であっても軽々しく口にしないでくれ」
「まぁ、待て。こいつはガキの頃から俺と一緒にいるんだ。なら、同じように適性があってもおかしくないだろう？」
鋭い視線で睨んでくる美鶴に、真田は笑いながら物は試しだと告げる。
ペルソナの覚醒条件は未だ不明だが、確かに同じ生活環境にいた者ならば、通常よりもペルソナに目覚める可能性は高いかもしれない。
真田もそう考えて話したようだが、身体測定等で行った適性の検査結果に目を通していた美鶴は、実際に荒垣もある程度の適性を有していることは既に知っていた。
だが、彼はまだペルソナに目覚めるほど高い数値ではない。
これが切っ掛けで完全に適性を有してしまい。真田が戦っているのなら、自分も戦うと無理矢理に力を引き出そうとしてしまえば、少し間違えればペルソナの制御を失うかもしれない。
そんな事にならないよう、美鶴は数値が上昇してきている候補者であっても、一定のラインを越えた者以外には声を掛けないようにしていたというのに、どうして回りの男はこんなにも話しを聞かないんだと美鶴は頭が痛くなった。
そして、ずっと考え込んでいた荒垣が、ようやく顔を上げて口を開いて来る。
「……変っつうか、夢だったかもしれねえ。だが、妙にリアルな夢で

な。窓の外にデッケェ塔が見えたり、空が緑色っぽくなってる夢を何度か見たことがある。その夢で時計を見たら、深夜零時頃だった気がするが、何か関係あるか？」
「ああ、まさにそれが理由だ！　聞いたか桐条っ。やはりシンジにも適性があったんだ！」
　親友にも自分と同じように適性があった。それはつまり、彼も自分たちの仲間になるという事だ。
　それが余程嬉しいのか、真田は美鶴の気も知らずに、瞳を輝かせて早速仲間に誘おうと訴えかけてきている。
　自分の話した変な夢のことで、真田がどうしてここまで喜んでいるのか分からない荒垣は、美鶴とは違った意味で置いてきぼりをくっている状態だが、美鶴が話さなければ、そのときは真田が勝手に話してしまうだろう。
　にわか知識というのは恐ろしい物で、それが原因で二人の身に危険が及んでも大変だ。
　しょうがなく諦めた美鶴は、深い溜め息を一つ吐いて、真田に氷のような冷たい責める視線を時折送りながら、荒垣に説明する事にした。
「はぁ……まぁ、単刀直入に言うと君が体験したそれは夢ではない。同じ現象を私も真田も実際に毎日体験しているんだ。名前は影時間。毎日深夜零時に約一時間ほど発生する非日常だ」
「あぁ？　かげ、じかんって、何だそりゃ。何でンなもんがあんだよ？」
「七年ほど前に起きたポートアイランドインパクト。あの事故が原因で発生するようになったらしい。その影時間にはシャドウという異形の化け物が現れ、影時間に迷い込んだ人々を襲う。シャドウに襲われた人は最悪殺され、運がよくても心を食われて無気力症になってしまうんだ」
　突然の話しについて行けていないようで、荒垣は見るからに何を言っているんだコイツはといった表情をしている。
　けれど、幼馴染が御令嬢に何も言っていないので、もしや、新手の

宗教か何かに勧誘され、一時余裕を無くしていた真田は嵌ってしまったのではとすら考えていた。
「シャドウには通常兵器が効かない。倒すにはペルソナという力に目覚めなければならない。ペルソナを手に入れる事が出来れば、生身だろうと補整が付与されてシャドウとも戦えるようになるんだ。そして、ここ巌戸台分寮は力に目覚めた者、目覚める可能性のある者たちを集めた特別組織の基地という訳だ」
「……アキ、まさかこんな話を信じてんのか？　化け物を不思議な力でぶっ倒して人を救う。確かにそりゃ格好良いかもしれねぇが、ヒーローごっこに憧れるにしても限度があっぞ」
「君が信じないのも無理はない。だが、こちらには直ぐにでもペルソナを見せる用意がある。ロビーでは外から見えるかもしれないからな。真田、君の部屋で見せてやるといい。実際に見て、存在すると理解してから、さらに詳しく話しをしよう」
「ああ、シンジ来てくれ」
美鶴が指示すると、真田は直ぐに席を立って荒垣を自室へ来るよう誘った。
既に食べ終わっていたことで、荒垣も渋々ついて行ったが、実際にペルソナを見れば直ぐにでも信じるようになるだろう。
残った美鶴は空になった寿司桶を重ねて、お茶を新たに淹れるためにキッチンへお湯を沸かしにゆく。
（まぁ、仲間が増えるのはいい事か。当分は訓練ばかりで実戦は行わないんだ。それまでに、彼も適性が伸びればいいだけだ。何も問題はない）
ペルソナの暴走は、召喚者自身にも危険が及ぶ可能性が指摘されている。
自分たち桐条の尻拭いに協力してくれる者たちを、そんな目に遭わせたくはない。
同じペルソナ使いになったとしても、最も経験を積んでいる自身が、二人を指導する立場になろうと決心した。
先ほどまでは真剣な表情で、肩にも力が入っているようだったの

に、お茶を淹れなおす美鶴はいつの間にか口元を綻ばせている。
新たに仲間が増えることを密かに喜んでいた美鶴は、ばたばたと走って戻ってくる二人が、どうすれば理解しやすいだろうかと考えながら、お茶をテーブルまで運ぶ。
そうして、新しいお茶と共に戻ってきた二人を迎えると、詳しい説明と荒垣の入寮についてを話し。相手が仲間になることを承諾した翌日、すぐに男子寮から分寮への引っ越しを済ませ。
夜には、歓迎の意味も込めて、都内のフグ料理専門店へと二人を連れて行ってやったのだった。

第八十話　潜入

――ヨーロッパ・オノス地方

その日、屋敷の主であるソフィアはやたらと上機嫌で鼻歌を歌いながら紅茶を飲んでいた。

彼女の父親からの依頼を済ませて戻ってきた仙道は、どうしてそんなにも相手が上機嫌なのか気になり、席について使用人のヘルマンからコーヒーを受け取りつつ尋ねる。

「今日は随分と機嫌がいいな。何か新たな玩具でも見つけたか？」

「フフッ、違うわ。でも、近いとも言えますわね」

相手は勿体ぶって直ぐには答えず、けれど、自分の机からあるファイルを持って来て、それを仙道の前に滑らせてから、再び座って紅茶を飲みつつ話し出す。

「実は少し前から、小狼についている虫を殺す場所に最適なところを探して貰っていましたの。それでようやくカナードから連絡が来たから、以前から考えていた作戦を少々変更して、小狼の仮面舞踏会に依頼を出したという訳」

「虫？　もしや、イリス・ダランベールという仕事屋の女のことか？」

「そんな名前だったかもしれないわ。でも、どうせもう死ぬのだから、覚えておく意味もないでしょう。フフッ、研究所を一つ丸々囮に使った大規模な作戦よ。損害は四千万ドルを超えるわ。何の価値もない害虫への手向けとして十分過ぎるのではなくて？」

血のように赤い瞳に狂気と喜びの二色を浮かべ、ソフィアはただ楽しそうに笑っている。

だが、相手がイリスを殺そうとしているなど、依頼で離れていたせいで全くの初耳だった仙道は、先ほどソフィアが渡してきたファイルを急いで開き、すぐさま中身に目を通す。

そこに書かれていたのは、湊とイリスを分断し、イリスの回った方で先に待機させていた組織の人間にケミカルハザードを起こさせるというもの。

ケミカルハザードが起これば、外に毒物が放出されないよう区画を

順次封鎖してゆく。さらに施設には火を放たせる予定なので、仮に運よく毒を吸い込まなかったとしても、逃げられずに焼け死ぬことだろう。
離れた場所にいる湊が、イリスが逃げ遅れたことに気付いて戻ろうとしても、自分も毒にやられてしまうので助けに行く事は出来ない。
また、危険を覚悟で辿り着けても、時間差で別の場所でもケミカルハザードを起こさせるので、逃げている途中でイリスは絶対に毒を吸い込んでしまう。
今回使われるのは複数の薬品を掛け合わせた神経毒で、まず手足の自由が利かなくなり、続いて呼吸がし辛くなっていく効果がある。
つまり、逃げられずに生きたまま焼け死ぬか、ゆっくり苦しみながら窒息死することになるのだ。
短時間で完全に解毒する方法はなく。状態を改善させる前に呼吸が出来なくなり死に至る。
難点としては、超高熱に弱いというのが挙げられるが、それは周囲へ拡散しないように、施設の火事で全てが燃えるよう考えたためだ。
囮に使う施設は、久遠の安寧が所有する本物の薬品研究所なので、これを一つ失うのはそれだけで数百億では済まない損害を将来的に被ることになる。
そこでさらに、周辺の町などに対する補償まではやっていられないので、ソフィアは確実にターゲットを捕えて殺す布陣を組んだのだった。
作戦概要に目を通し、手をワナワナと震わせていた仙道は、全てを読み終わったようで鋭い視線でソフィアを睨みながら声を荒げた。
「お主はナギリまで殺すつもりかっ!!」
「何を言っているの？　ちゃんと小狼が逃げる時間は作ってあるわよ」
「あやつが助けに向かう可能性の方が高いだろうがっ」
「大丈夫よ。二人は作戦中に通信機で連絡を取り合っているの。だから、ケミカルハザードが発生した時点で害虫はきっと小狼を逃がすための指示を出すわ。だって、害虫は小狼がとっても大切なんですも

の。絶対に生かそうとするに決まっているわ」
ソフィアは調査員から齎された情報により、湊とイリス、二人の関係性を正しく理解していた。
二人はお互いを仕事のパートナーとしては見ていない。仲間という言葉では不十分。さらにもっと近しい、家族に似た繋がりを持っている。
だからこそ、イリスは自分がどれだけ辛い目に遭っても、湊の安全を優先するであろうと読んでいた。
「フフッ、可愛い子どもを死なせたくはないものねぇ。なんせ、あの害虫は既に夫と実の息子をテロで失っているのだから」
湊の素性はまだ完全には掴めていないが、イリスについては殆ど分かっている。
まだ若い女が、どうして男も作らず、こんな血生臭い世界で生きているのかを探ってみれば、理由はすぐに判明した。
イリスはナタリアに拾って貰う少し前に、旅行で訪れた街で運悪くテロに巻き込まれ、夫と幼い息子を失っている。
本人もその時の怪我が原因で子どもを産めない身体となり、心を壊し廃人になりかけていたところをナタリアに拾われ。徐々に回復していきながら、どんどんと裏の仕事を覚えていったのだ。
そして、ある日蠍の心臓が請け負った一つの任務を終えると退団したようだが、その任務はとある武器商を工場ごと殲滅するというもの。
イリスと武器商の間には関係性が見られなかったが、さらに詳しく調査すると、イリスたちを襲ったテロは、彼女の旅行先だった国の政府がその武器商と秘密裏に取引をして軍備を増強しようとしていたことに反発して行われたものだった。
軍備が増強されれば、力で脅し、市民は余計に苦しめられることが分かっていた。
だからこそ、その一帯が危険な場所だと世界に広めながら、武器商に手を引かせようと、取り引きが行われる前にテロが決行されたという訳だ。

テロの実行犯は自爆して既に死んでおり。復讐の対象を見つけられなかったイリスにとって、テロを起こす元凶となった武器商が代理のターゲットになったのだろう。
そうして、無事に復讐を遂げたことでイリスは部隊を離れ、知り合いのいる日本へと渡ってから湊と出会ったのだ。
「心優しい小狼は害虫の死にきっと悲しむでしょうけど。その心の隙間はわたくしが埋めてあげるわ」
「……ソフィア、貴様はナギリを甘く見過ぎた。やつらは本来守るための一族だ。大切な物を奪った貴様に欠片も容赦はしないだろう。戦いは最早避けられん。全力で滅ぼさねば、滅ぼされるのは貴様たちだぞ」
知り合いの誼(よし)みで相手の身を案じ、仙道が真剣な口調で忠告するも、何がおかしいのかソフィアは目に涙を滲ませるほど笑いだす。
「ウフフ、アハハハハッ！　守護天使さまをこの身に宿すわたくしをどうやって滅ぼすというの？　それに久遠の安寧は世界一の兵器工場よ。自分たちの作っている兵器を使えば、アメリカやロシアとだって戦争出来るというのに、たった一匹の狼がどれだけ暴れようと、その爪や牙がわたくしに届くことはないわぁ」
自分の宿すアパテーという力に絶対の自信を持ち、さらに久遠の安寧の軍事力を考えれば負けはないと断言するソフィア。
確かに、裏界最大規模は伊達ではなく。軍事力だけでなく、諜報活動や政治面の力も持っているため、いくら湊が潜伏しながら復讐を狙おうとも、すぐに居場所を特定して拘束されるやもしれない。
けれど、そう思い通りにはいかないと考えている仙道は、これ以上言っても無駄と分かっているため、コーヒーにほとんど手を付けないまま席を立つ。
「そうであれば良いがな。わしは小僧の元へゆく。お主が手を回す前に死合うつもりだ。目覚めたナギリとの戦い故、無事に済むとは思わん。もう会う事はないかもしれんから、先に別れを告げておく」
「フフッ、わかったわ。なら、せいぜい小狼の力の礎となって死んで頂戴。でも、生きていれば、また会いましょう」

ソフィアの言葉を背中に受け、仙道は扉を開くと部屋を後にした。
アパテーの力で壁の向こうの様子も視えているソフィアは、全速力で駆け出した相手をおかしそうに笑っているが、実際、ソフィアが手を回す前に戦おうと思うのなら、一秒たりとも無駄には出来ないだろう。
ここから目的地までは一日では着かないのだ。着いたときには、全て終わっているだろうが、それでも湊の完成がより完全になるのなら、どうかその命を捧げてくれと彼女は口元の笑みを深めるのだった。

９月１７日（日）
夜――パライナ地区
数日前、年老いた紳士から、難病に苦しむ孫を助けるため、未だ公表されていないある薬の現物か調合リストを盗んで来て欲しいという依頼を受けた湊。
前金で日本円にして一千万、成功報酬でさらに七千万という超高額の依頼である。
確かに、セキュリティーレベルの高い研究施設に潜り込むので、難易度はそれなりに高いだろう。
加えて、盗むのは一つではなく、薬の副作用を抑えるための別の薬も必要ということで、計二つの薬か調合リストを最低でも盗まなくてはならないのだ。
「……九時過ぎだっていうのに、随分と働き者の研究者たちだな」
二ヶ月ほど前に買ったＢＭＷ　Ｋ１２００Ｓから降りて、ヘルメットを外しながら呟く湊。
ペルソナで研究施設内が視える湊と違い。先にバイクのタンデムシートから降りていたイリスには何も見えていないが、施設の至るところに灯りが点いていることから、施設は現在も絶賛稼働中であることが窺えた。
故に、湊の言葉に同調して、働き者の研究者たちを労いながらイリスも言葉を返す。

「まぁ、世のため人のために頑張ってるんだろ。公表してないってのも、まだ安全性や量産体制が整ってないからだ。孫のために何かしたいってじいさんの気持ちも分かるから依頼を受けたが、別に研究者が悪い訳じゃない」

治療薬をまだ公表していないのは、何も利益を独占するためと言う訳ではなく、単純にまだ未完成であるから。

新薬というのは、ただ一つ出来ただけでは完成とは言えない。全く同じ分量で、全く同じ手順を踏むことにより、完全に同じ物を量産することが出来て、初めて薬として出来あがったと言えるのだ。

さらにそこから、マウスなどを使った臨床実験を行い。最終的には人に対しても治験を済ませて、その薬の効果や副作用までを調べる必要がある。

依頼人の老人もその事は分かっているのだろうが、孫が助かる可能性があるのなら、少しでも治り易いように早く薬を手に入れたいと思ったのだろう。

これで嘘をついていて、本当は未発表の薬のデータを他所に売ることが目的だったなら、相手は即座に湊に首を刎ねられるに違いない。

そんな依頼するには少々危険な相手である少年は、施設の壁に書かれた企業ロゴと思われる文字に視線を送り、潜入の準備をしていたイリスに尋ねる。

「……〝ＥＰ〟って、何の略だ？」

「エターナル・ピース。表向きは桐条並みに色んな部門に進出してるコングロマリット（複合企業）で、中でも兵器と医療の世界シェアは一位だ。けど、裏の顔は〝久遠の安寧〟ってとんでもない巨大組織でな。国を丸々一つ持ってるって噂だぞ」

久遠の安寧は、その影響力の大きさからヨーロッパを中心に名を知られているが、実体も含めてどれほどの力を有しているかは詳しく知られていない。

本部の場所はどこにあるのか。ＥＰ社の顔役をやっている人間が、そのまま久遠の安寧の幹部でもあるのか。

イリスも情報をほとんど持っていないが故に、ただとんでもない組

織であることだけは確実だと説明すると、日本でずっと活動していた湊は耳にした事がなかったようで、そうなのかと数度頷いていた。
「さってと、チャンネルは3に設定、傍受される心配はないだろうが、もしものときは、ペルソナでの通信に切り替えてくれ」
「了解」
今回の依頼では、離れた二ヶ所から目的の物を盗み出さなければならない。
警備はそこそこで侵入は難しくないが、昼夜問わず基本的に人がいるので、安全な時間と言えば影時間しかない。
けれど、未だスキル向上のために依頼をこなしているため、湊はそんな楽な方法を取るつもりはなく、イリスも了承したことから、このように中途半端ながらも遅い時間を選んだ。
装備したインカムの通信感度を確かめ終わったイリスは、湊の頭を撫でながら再び作戦内容を確認するように話しかける。
「アタシは作戦通り西側の区画に向かう。オマエの方が先に手に入れるだろうから、ばれた時の援護のために合流ポイントへ向かっておいてくれ。足はオマエしか持ってないんだ。先に帰ったりするなよ？」
「……数時間も歩けばヒッチハイク出来る場所に出るだろ。ダイエットにもなって一石二鳥だ」
「馬鹿野郎。生まれてこの方、一度たりともダイエットなんて必要になったことはないよ」
ハリウッド女優も驚きのスタイルを誇るイリスは、実際に、幼い頃からスタイルに恵まれており、裏の仕事をするようになってからは、よく動くこともあってさらに引き締まった身体をしている。
それは一糸纏わぬ彼女の姿をよく見ている湊も知っているはずだが、こういった軽口は作戦前で昂ったお互いの精神を落ち着かせるために叩いている。
作戦前の儀式とも言える軽口の叩き合いが出来るかどうかで、湊が無事に依頼をこなせる精神状態かの目安にしていることもあって、イリスは今日も大丈夫そうだなと笑みを浮かべた。
「じゃ、また後でな。見つかっても簡単に殺すなよ？」

「……わかってる」
また後でと別れるなり、湊はマフラーと長い髪を揺らし駆けて行った。
遠ざかる背中が小さくなり、見えなくなってからイリスも動き出す。敵に見つかった場合に撹乱する意味もあるため、侵入はほぼ同時でなければならない。
シャッターで区画を封鎖されれば、手榴弾以上の威力を持った装備を持っていないイリスでは、その頑丈な壁を破壊する事は出来ないのだ。
施設全体の広さは大型ショッピングモール並み、侵入口はイリスの方が近いが、入り組んだ構造をしている分、研究員の位置を常に把握出来ている湊の方がいくら広くともスムーズに進行できるだろう。
だからこそ、先に目標を入手した場合、湊に逃走や追手の排除の手助けをしてもらう手筈になっている。
湊の狙撃の腕前は一流だ。援護には何の心配もないと、イリスも銃のセーフティーを解除してからホルスターに仕舞い直し、そのまま依頼人から受け取っていたカードキーを利用して、施設の中へと侵入した。
＊＊＊
マフラーを上げて口元を隠し、施設内を駆ける湊。
この施設は、その薬が何に使われるかで区画が分かれており、出入り口に近い場所は比較的頻繁に新薬が開発されるような、人々がよく掛かるウィルス病に使う物が集められていた。
怪我はするが病気にはならず。毒を摂取しても、多少鈍る程度で命に別条はない。
そんな異常な身体に改造している湊にとって、現代人がかかる病のほとんどは不思議でならないものだ。
自分でも生き伸びることが出来たのだから、他の者も肉体を改造すれば病気知らずでいられる。
素でそんな風に考える事もしばしばで、現代病向けのこの区画くらいならば、仮に侵入がばれて研究員と遭遇してしまった場合でも、他

にいくらでも類似の研究をしている企業があるのだから、殺したところで医学界にも問題は少ないはず。
そう思いながら、入り組んだ通路を迷わず進み続け、目的の部屋の中に誰もいないことを確認すると、そのままシャドウの力で扉の電子ロックを解除して侵入した。
（ここは……資料ばっかりだな。ということは、現物ではなく調合リストが置かれている訳か）
到着したのは多数のファイルが収められた書庫らしき場所。
棚ごとにどんな薬の調合リストを纏めているのか書かれているが、ファイル自体の背表紙にはアルファベットと番号しか振っておらず、それらの規則性を知らない湊にはまるで分からない。
試しに近くにあった物を手に取ってみると、どうやらそれは痛み止めの調合リストのようであった。
（これは面倒だな。全部持ち出した方が早いが、それは流石に問題になるだろう）
目的の書類を探すのは非常に手間が掛かりそうで、いっそ全てをマフラーに収納してしまおうかという考えが頭をよぎる。
やったことはないが、湊の思考に合わせてサイズと形状の変化が可能なため、入れようと思えば家やマンションだって収納できるのだ。
現在も自分のバイク数台とイリスの愛車を入れている状態で、資料の収まった本棚をいくつも入れるくらいは訳ない。
けれど、そこまで露骨にやってばれるのは後々を考えると面倒だ。仮面舞踏会の評判を下げる事にも繋がるやもしれない。
そう考えて、最初のプランを捨てる事にした湊は、装備ペルソナにしていたカグヤの能力を利用し、部屋内の資料に同時進行で目を通し始めた。
正直に言って、いくら男女両方の脳構造の利点を使えると言えど、湊の並列思考のキャパシティは異常だ。
全方位に知覚を伸ばしたときには、左右の目で別々の方向を見る事の出来るカメレオンのように、全ての像が重なって見える状態に近い。

特定の物を集中して見るときには、防犯カメラの映像のように一つの画面を複数に分割した状態で見るようにも変更可能ではある。
しかし、実際に複数に分割された映像を見てみれば分かり易いが、ほとんどの人間の情報処理能力では、たとえ六分割であっても満足に把握しきる事は出来ない。
だというのに、百冊以上の資料へ同時に目を通して、それらの内容を把握し、さらに理解していることは驚くべき事だろう。
（……見つけた）
恐ろしい情報処理能力は血筋のおかげか、無事に目的物を探し当てて、湊はそのファイルを棚から抜き出し、肉眼でも確認するのを忘れない。
いくら幼い頃から飛騨に貰った医学書を読んでいると言っても、湊が持っているのはほとんど本に書かれた知識だけだ。
蠍の心臓にいるときには、戦場医でもあったバーバラに色々と習ったが、傷の縫合など簡単な外科的処置は器用なので昔から出来た。
しかし、毒を除けば薬品を実際に調合した経験はほとんどなく、この研究施設で行われているような、最先端の薬に対する知識も不足している。
よって、湊は依頼人から聞いていた情報を記憶から引っ張り出しながら、調合リストの情報と照らし合わせて、これが本当に目的の物であるかを確かめた。
（……恐らく合っているな。まぁ、あの老人も薬自体の情報はほとんど持っていないようだったし。本当に正しいのかはいまいち分からないが）
湊が依頼人から受け取っている情報は、ある程度は薬の成分も分かっているようだったが、流石に詳細な部分は手順も含めて分かっていなかった。
それが分かっていれば、わざわざ他所の調合リストを盗んでくる必要など無い訳で、分からないから依頼されたことは湊も理解している。
けれど、材料はほとんど同じだが、細かい手順や材料が一つ違うだ

けで別の料理が出来るように、薬もたった一つ違うだけで別の効能を持つようになってしまう。
まだ他の仕事屋より医学関係の知識を持ち合わせていたため、湊は目的の品を間違える事はなかったが、もしも、依頼を断られていたら老人はどうするつもりだったのだろうかと、そんな風に思いながら湊は調合リストをファイルから抜き取り、持って来ていた封筒に入れてからマフラーにしまった。
（さて、現物が保管されているかも分からないし、今回はリストだけで十分だろう。イリスの援護のために先に出ておくとするか）
ここは研究施設ということもあり、かつていたエルゴ研にどことなく似ている。
あそこでの出会いが切っ掛けで湊は戦う力を得ようと思った。けれど、得た物などそれくらいで、犠牲にした物の方が多いくらいだ。
それだけに、自分の傲慢さが招いた惨劇を想起させる、こういった施設が今でも湊はあまり好きではなかった。
虫の知らせ、第六感とも言うような、ざわついた何かを感じるのは、エルゴ研の出来事が心の傷となっているからなのか。
自分だけでは分からない湊は、とりあえず、何かが起こってもすぐに対応出来るよう、イリスと打ち合わせで話していたポイントへの移動を開始した。
＊＊＊
白衣を着た四十歳頃と思われる男が、部屋の中で独りガタガタと蹲って震えていた。
男のいる部屋は、学校の教室の半分ほどの広さで、液体の入ったガラスケースがいくつも積み重なって置かれている。
（はぁ……はぁ……これで、家族は助かるんだ。僕が、ソフィア様の命令通り、この薬品を混ぜて研究所中に拡散すればっ）
震えている男の手には、妻と二人の子どもが自分と一緒に笑っている写真がクシャクシャなって握られている。
この男は家族を人質に取られただけの、ただの研究員の一人だ。
研究所の所長に呼ばれたときは、一体何事だと驚いたものだが、所

長室に入るとテレビ電話で自分の勤めている企業のトップの一人娘が映っており、さらに驚かされたものである。
赤い瞳に、銀色の髪、染み一つない白い肌に、アンティークドールのようにただ在るだけで美しいと感じさせられる整った顔立ち。
こんな相手が現実に存在するのかと、動いて話している姿を見ても信じられなかったが、それ以上に、相手が男に告げた内容の方が衝撃的だった。
ソフィアが男に告げた内容。それは、家族を全員拉致したというもの。
今はまだ生きているが、命令を聞かない限り、居場所を教える事も解放する事もない。
また、少しでも渋れば、妻と娘は組織の雇っている傭兵らの慰み物にした上で殺し。息子は生きたまま重しを足に結んで湖に沈める、と男が断る道を塞いできた。
そんな風に脅されれば、家族を大切にしている男が断れるはずもなく。侵入者が来るかもしれないという報告が入る前から準備し、今日もこうやって敵が来ればガラスケースを破壊できるよう待機していた。
（うぐっ……はぁ……来るなっ。侵入者よ、来ないでくれっ）
だが、いくら家族を人質に取られていようとも、男は医療の発展のために尽くしてきた身だ。
用意された薬品の種類から、混ぜた場合に発生する毒ガスの効果も予想出来ているため、人を殺したくない男は、どうか来ないでくれと神に祈り続けた。
《ピピピピッ》
「ひあっ!?」
侵入者がくれば、男のポケットに入っている端末から音が鳴る。
研究所に入った時点で、相手の所持しているカードキーがマーカーとなって、相手の居場所を常に報告し続け、移動スピードすら完全に把握出来るのだ。
そんな端末が鳴ったということは、ついに恐れていた侵入者がやっ

て来てしまったという事。
ならば、もう後には引けない。自分と同じように人質を取られた仲間から端末に連絡が来れば、男は部屋にあるガラスケースを全て破壊することになっている。
何度も端末を確認するが、端末に表示されたマーカーは動き続けているため、先ほどの電子音は聞き間違いではないのだろう。
《ピピピッ》
「あ……ああっ……」
二度目の音が鳴った。今度は仲間からの連絡だった。
顔面を涙と鼻水でぐちゃぐちゃにした男は、端末を地面に落とすと、近くに転がっていた銃と鉄パイプを手に持ち。自身を見捨てた神を恨みながら、部屋中のガラスケースを破壊したのだった。
割れたガラスが飛び散り、鉄パイプを持っている手の皮膚を切って血が滲みだす。
それでも男はケースを割る手を止めない。床中に薬品が広がり、発生したガスが異臭を放つ。
マスクも付けていない男は、呼吸もままならず、目に沁みて視界すら確保出来ていないはずだが、構うものかと鉄パイプをがむしゃらに振り続けた。
「ゴフッ……はぁ、ア、レン……ミレイ……ローザ、すま……ない……」
顔が紫色になった男は、力尽きて床の薬品の上に倒れ込む。
カラン、と鉄パイプが地面に落ちて乾いた音をさせた隣で、男は息を引き取りながらも手足をまだ痙攣させていた。
普通の人間が吸いこんで耐えられる物ではない。湊ですら、吸い込んだときには嫌そうに顔を顰める代物だ。
男はそんな物を吸い込みながらも、一分以上耐えて自分の任務を全うしたのである。全ては愛する家族のために。
何よりも大切な家族をおいて死ぬなど、きっと無念だったろう。
けれど、何も心配することはない。何故なら、その愛する家族も既にソフィアの部下の手に掛かって男と同じ場所へ旅立っているのだ

から。
そうして、何も知らずにこの世を去った男の手で事態は動いた。あと数分もすれば、検知器で毒ガスの発生を確認した協力者が部屋の扉を全て開ける手筈となっている。
イリスを狙った死神の鎌は、もうすぐそこまで迫っていた。

第八十一話　イリス

――研究施設・内部

施設に侵入してから、湊の倍近い時間をかけながらも、なんとか目的の場所まで辿り着いたイリス。

彼女は湊のように薬の知識は持ち合わせていないが、副作用を抑える薬の方は詳しい情報を依頼人より受け取っていたため、試薬の置かれた棚から同じ名前の物をくすねるだけと、何とも簡単に済んでしまった。

用事が済めば、もうこんな危険な場所に長居する必要はない。

試薬をポーチにしっかり仕舞い、扉の向こうに人の気配がないかを確認しながら部屋を出た。

廊下には誰もいない。一応、耳を澄ませて急に人が現れないか警戒しているものの、自分の小さな足音以外は静かな物だ。

明かりの点いている部屋は沢山あるというのに、部屋の中にいる研究員らはよっぽど集中して作業に取り組んでいるらしい。

（こんだけ薬の研究とかしてるなら、アイツの延命に使える物もありそうなんだけどな）

廊下を走りながら、イリスは湊の寿命について考える。

チドリは大人たちからも聞かされていないので知らないが、桜やイリスは栗原から湊が短命である事を聞いていた。

長期に亘ってリハビリを行うことで肉体本来の機能を回復させるべきときに、湊は本来以上の性能を引き出すために神経や筋肉に手を加えた。

また、毒への免疫をつけるため、段階は踏んだものの、常人ならば致死量の毒をいくつも摂取して実際にファルロスの蘇生を受けた事もある。

施術は全て成功し、実際に湊は大人と戦えるだけの力を手に入れた。

けれど、無理矢理な能力の底上げは細胞を著しく傷付け。再生力が衰え出す成人頃から一気に細胞が劣化を始めるだろうという、大きな

代償を支払う事を湊へ迫っていた。
（……長生きさせてやりたいな。こんだけ他人のために頑張ってるんだ。少しくらい神様も情けをくれたっていいだろうに）
劣化の始まる明確な時期は分からない。湊は二次性徴を向かえて、肉体自体が中性としての機能を得るなど変化を続けているのだ。
飛騨が予想して出した寿命に、そんな変化は考慮されていないため、もしかすれば、当初の予定よりも生きられるかもしれない。
だが、その逆も当然あり得る訳で、むしろ、頻繁にファルロスの蘇生で細胞を無理矢理に再生させている事を考えれば、寿命は当初よりも短くなっている可能性すらあった。
死を視ることの出来る少年は、その瞳で自分を視たときどのように思っているのだろうか。
彼の寿命と共にその事を考える度、イリスは胸が締め付けられるような悲しさを覚えるのだった。
（……なんだ？）
湊のことを考えながら脱出のため駆けていると、なにやら通路の先が騒がしいことに気付く。
耳を澄ますと何人もの人間が大声で叫んでいるようだ。
（うたく、こんな日になんだってんだ）
自分がばれていないのであれば、自分以上に隠密行動が得意な湊がばれているはずがない。
ならば、この騒ぎは自分たちの存在が相手にばれたことが原因ではないと結論付け。とりあえず、人の気配のない通路に隠れながら、イリスは情報収集も兼ねて周囲の声を聞くため神経を研ぎ澄ます。
これでもイリスもトップクラスの実力を持った仕事屋だ。周囲の比較対象が湊やそれに準ずる化け物たちのせいで実力は低く見られがちだが、単独でも潜入ミッションをこなすだけの能力は持ち合わせている。
《にげ……毒ガス……シャッターは……》
そうして、呼吸を整えながら声に耳を傾けていると、少し遠い場所で叫んでいる声を断片的に聞きとる事が出来た。

信じたくはないが、バタバタと走る足音も聞こえて、どうやら騒ぎが徐々に大きくなっていることからも本当らしい。
「毒ガスって嘘だろ、おい……」
自分のいる場所から脱出口まで辿り着くには、騒ぎの起こっている方へ進む必要がある。
迂回して別の場所から脱出することも出来るが、隔壁であるシャッターが不調を起こしているようで、無事に辿り着けるか分からない。
絶望的なまでの運の無さに、イリスは頭を抱えたくなった。
「……小狼は脱出してるよな？」
現在進行形で危険の迫っている自分よりも、既に安全圏に逃れているであろう少年の方が気になったらしい。
少年の無事を知るため、イリスはどこか安全な場所に退避しながら連絡を取ろうと駆け出そうとする。
『うわあぁぁぁぁっ!?』
だが、そばの通路から叫び声が聞こえてきた直後、イリスの視界は流れ込んできた白い煙に覆われた。
＊＊＊
先に脱出していた湊は、狙撃ポイントとして下見していた小高い丘の上に逃れていた。
反対側までは流石にカバー出来ないが、今いる場所からはかなり広域を射程に収める事が出来る。
イリスが連絡できない状態ならば無駄に終わるものの、例え移動中でも窓から追われているのが見えれば、すぐにでも敵を狙撃してやるつもりでいた。
しかし、そうして待機していた湊は、予想よりもイリスが遅いことが気になった。
いくら見つからないように慎重に動くと言っても、滞在時間が長くなれば、それだけ研究員らに見つかるリスクも高くなる。
それが分からない訳ではないだろうと、湊はそろそろ連絡を一度入れてみるべきか思案する。
《聞こえるか、小狼》

だが、湊が連絡を入れる前に、丁度良いタイミングで相手から通信が入った。
何やら周囲が騒がしい気もするが、とりあえず相手の通信に返事をする。
「……ああ、聞こえる。随分と遅いな。こっちは指定ポイントについてるぞ」
《ははっ、悪い。なんていうか、まぁ、少しドジってな》
「……何があった？」
相手の様子が少しおかしい。通信越しで僅かにくぐもっては聞こえるものの、普段よりも声に覇気がないとはっきり感じる。
まさか、動けない状態になっているのか。そうならば、言えばすぐにでも駆けつけるため、湊は用意していた狙撃銃を片付ける準備をする。
だが、銃をマフラーに仕舞おうとしたとき、湊の視界に夜の闇を照らす明るい炎が映り込んだ。
「おい、研究施設が燃えてるぞ」
《ああ、それもあって、今こっちは大混乱だ。どこかの研究室で薬品の配合を間違えたとかで、施設中に毒ガスが充満してる。隔壁は不具合があって降りてない。まぁ、使った事がなかったみたいだから、どうせ整備不良が原因だろうけどな》
言って、イリスは苦笑気味に笑っている。
そんな余裕はないはずだが、確かに、毒ガスと炎が迫っている状況に置かれれば、弱気になってやけを起こしてしまうのも無理はない。
もっとも、他の者と違って、その両方が効かない者がここにはいる。イリスが動けないのなら、自分が助けに行こうと、湊はカグヤで施設内を索敵しながら会話を続ける。
「どこにいる？　炎も毒ガスも俺には効かない。身動きが取れないなら、こっちから助けに行く」
《いいって。いま、こっちは毒ガスが充満してるって言ったが、抗体を研究するために用意したウィルスとかもケースが壊れてばら撒かれた状態だ。つまり、ケミカルハザードとバイオハザードが同時に起

こってるんだよ。いくらオマエでも、生物兵器への耐性は分からないだろ？》
イリスの言う通り、湊の持つ免疫は薬物に対する物がメインで、ウィルスの免疫は一般的に人がかかるインフルエンザを始めとした感染症のものしかない。
軍で開発されたような意図的に強化された生物兵器は、流石の飛騨も準備をすることが出来なかったため、湊は自分の免疫力でそれらに勝つしかないのだ。
他の者ならば、症状が出ても薬でいくらか改善できるかもしれないが、湊はその薬を使う事が出来ない。
故に、今回に限って言えば、むしろ、湊だからこそ来てはならないとイリスは言葉で強く制した。
相手の言い分も理解出来、自分でも今の施設に侵入するのは危険どころか自殺行為だと分かっている。
それでも、火の勢いが増しているのを見て、湊はイリスの身に危険が迫っていると焦り覚えていた。
このままでは確実にイリスは死ぬ。場所が分かれば救いにいけるかも知れない。そんな風に、湊は施設中に能力の目を向けて、イリスの所在を掴もうとする。
《なぁ、オマエが仕事でペルソナを使いたくないのは知ってるんだけどさ。今回はマジでヤバいんだ。風下には街がある。施設が崩れて、中身が外に出たら一発でアウトだ》
だが、湊の気持ちを知ってか知らずか、イリスは非情な選択を迫ってきた。
《だから、頼む。研究施設を炎で閉じ込めてくれないか。ただの火災じゃ心許なくてな。高温で焼けば、流石に毒もウィルスも消えるだろ？　既に感染してない人間はいないはずだ。誰一人、いまここから逃がしちゃ駄目なんだ。そしたら、街に暮らす人間や助けに来た人間っていう、無関係のやつらが死ぬことになるんだよ》
ここから街までは二十キロも離れていない。吹いている風はそれほど強いとは言えないが、全くの無風と言う訳ではない。

イリスの言う通り、外に漏れ出した毒ガスと病原体がどれだけの犠牲者を出す事か、利口な湊が分からないはずがなかった。
「……イリスも、逃げられないのか？」
それでも、まだ何か一つでも救える可能性が残っていて欲しい。
丘の上に佇み、燃える研究施設を眺めている少年はぽつりと呟いた。
《ああ、毒を結構吸ってな。なんとか、少し密閉された部屋に逃げ込んだが、時間が経つにつれて手足が痙攣して感覚がなくなってきてるんだ。今も立ってられなくて、壁にもたれて座ってるんだぞ。まだ話せてるけど、三十分もすれば舌も麻痺して窒息死するかもな》
「そうか」
少年は相手の居場所をついに見つけた。
他の部屋より壁の分厚い、何か少し特殊な部屋らしい。そこで通信機越しで話していた通り、相手は壁にもたれて力無く座っていた。
一応、右手の傍には護身用なのか銃が置かれているが、今の状態を見るに急に誰かが現れても対処できないだろう。
さらに銃の近くに携帯電話も落ちているが、脱出時に忘れないことを考えるのであれば、すぐに仕舞っているはずなので、置きっぱなしということは、脱出を考えていないのか、もしくは、仕舞うことも出来ないほど弱っているということになる。
普段あれだけパワフルな人間をこうまで弱らせる毒。そんな恐ろしいものが無関係の人間に降り掛かるなど、他者を巻き込むことを由としない湊が認めるはずがなかった。
「……スーツェー、マハラギオン」
カードを握り砕き、煌びやかな尾羽を持つ朱い鳥型のペルソナ、節制〝スーツェー〟を呼び出す。
光を纏って現れたペルソナは、光が治まるかどうかというタイミングで飛翔すると、そのまま施設上空へと移動し、巨大な炎の渦で施設を覆った。
影時間でもないときに、こんな事をすれば大勢の人間から目撃されるだろう。

だが、街の方からでは空へと伸びる炎の柱にしか見えないはずだ。
渦の中心にいるスーツェーを見ることも、施設の中で何が起こっているのかも分からない。
そう、無関係の人間なのだ。なら、そんな人間たちは何も知らなくていい。知ったところで、どうせ彼らは自分らを救うために動いた人間に、何の感謝もしたりはしないのだから。
天へと伸びる炎を見ながら、爪が食い込み血が出るほど強く拳を握りしめている湊の元に、再びイリスからの声が届く。
《ありがとな。徐々にだが、施設内が暑くなってきた気がするよ。こりゃ、随分と痩せられそうだ》
「……ダイエットは必要ないんじゃなかったのか？」
《バーカ、女は見えないところで努力するもんなんだよ。してようとしてまいと、大概の女はしてないって言ったりするんだ》
「フッ、ただの見栄じゃないか」
《ハハッ、見栄って書いて〝オトメゴココロ〟ってルビが振られるように設定されてるんだ。ちゃんと覚えておけよ》
二人は依頼を終えて合流するまでのように、いつも通り雑談を続ける。
イリスはもう助からない。助けたい。死なせたくない。それでも、シャドウの力を使おうとも湊には助ける方法が思い浮かばないのだ。
ペルソナの回復スキルはそれほど万能ではない。同じペルソナ使いには十分な効果が見込めるが、どういう訳かペルソナに目覚めていない人間には効果が薄い。
以前、蠍の心臓本部で骨にひびが入ったレベッカを治療した際、生命力の譲渡で細胞を活性化させて回復を早めるなどと、わざわざ面倒な事をしたのもスキルの効果の薄さが原因であった。
今回も、スキルによる完全回復は見込めない。下手にスキルを使用して毒の進行が遅れれば、余計にイリスを苦しめることになる。
故に、今の湊には苦しまないように殺す以外、何も出来る事は残されていなかった。
どこで間違えたのか。初めからこんな依頼を受けなければ良かっ

たのか。
いや、そもそも、自分のような存在が人と共にいることが間違っていたのではないか。
両親、岳羽詠一朗、アイギス、飛騨、チドリ、被験体たち。これだけの人間を不幸な目に遭わせておいて、今回またイリスが自分と関わったばかりに犠牲となる。
守るのなら傍にいる必要はない。影に徹して、ただ敵となる者を自分が密かに葬れば良いだけだ。
分を弁えず、〝人との繋がり〟に未練を残してしまったばっかりに、イリスを自分の不幸に巻き込み死なせるはめになった。
己の愚かな振る舞いによってまた人を殺す。どうやっても償える事ではない。いっそ、もう誰も犠牲にしないため、湊は我が身を引き裂いてやりたい思いに駆られた。
《ああ、アタシの荷物は好きにしていい。使える物はオマエにやる。いらない物は捨てるなり、誰かにやるなりしてくれ。古いタロットがあっただろ？　あれはいい物だぞ。考古学者をやってたアタシの旦那が持ってたものなんだ。あの年代の完品デッキなんて、数千万出して欲しがるやつもいるはずだ》
「……結婚、してたんだな。なんとなく、そんな気はしていたが」
《ん、そういや話したことなかったか。じゃあ、もう少し時間もあるし。アタシの素性をちょっとばかし教えておこうかね》
彼女のいう時間が、施設と共にイリスが燃えるまでのことなのか、それとも毒が全身に回りきるまでのことなのか、分かるのは言った本人だけだ。
しかし、そんなのはどっちでも良いと湊はシャドウの力で施設内の機械制御を奪い。隔壁を下ろして少しでも燃えるまでの時間を稼ぐ。
ここで彼女の最期の言葉を聞いておかなければ、一生後悔することがはっきり分かっていたから。
《……アタシさ。昔、子どもがいたんだ。ロランって言ってね、生きてたら十二歳になる男の子だった。だけど、三歳のときに、旅行先でテロに巻き込まれて夫のジョエルも一緒に死んだんだ。今はフランス

のシャテーニュ村ってとこの教会に眠ってるけど。二人を同時に失って、怪我で子どもが出来ない身体になったアタシは抜け殻になってたんだ》

普段は服に隠れて見えないが、イリスは丹田の辺りに大きな傷跡がある。

自爆テロで壊れた何かの破片が飛んできて、深々と突き刺さったことによる傷だ。

幸い、テロに巻き込まれた生存者としてすぐに病院に搬送され、破片の除去と傷の縫合が行われたことで一命を取り留めたが、傷は子宮に達していたため、子宮は全摘出されている。

《そんなときに、仕事で同じ街に来ていたナタリアと出会った。彼女もテロリストもどきに自分の子どもを殺されたらしくてね。色々と面倒を見て貰ったんだよ。で、蠍の心臓で仕事をしているうちに、テロが起きる一因を担った相手を見つけて殺した。退役したのは、そんな意味のない復讐を終えたからだ》

本当に抜け殻のようになっていたイリスを、当時、出会ったばかりだというのにナタリアは親身になって介抱した。

同じようにテロリストに息子を殺された過去を持つとは言ったが、ナタリアの息子は要人警護の任務で身代りとなって死んだので、イリスとは条件がかなり異なる。

それでも、同じように子どもを失った経験を持つ人間と聞けば、イリスも心を開き易かったようで、ナタリアの助言で夫と息子を弔うため、住んでいた街の教会に土地を買って埋葬した。

その後は、しばらくは傷が開いてはいけないからと静養しつつ、蠍の心臓で働くために知識を身に付けた。

銃火器の構造や、ミッション時の戦術など、リハビリと同時に出来る事はなんでもした。

傷が完全に癒えてからは、運動神経はあっても実戦経験がなかったため、必死に体術と銃火器の扱いを覚える毎日を送るようになる。

ナタリアの扱きは半端ではなく、何かをしていなかれば壊れていたかもしれないと必死に打ち込んだにしろ。在籍中のイリス並みの実

力を持つレベッカの半分未満の時間で、それと同じ実力まで登り詰めたのだから、イリスのセンスも大したものだろう。
　とはいえ、実力をつけて蠍の心臓のトップチームで仕事をしていたイリスも、意味のない復讐を終えると燃え尽き症候群にかかったように、自分が何をして生きていくかを悩んで、仕事に対する意欲もなくし。そのまま組織を抜けることにした。
《退役したアタシは、とくにやる事もなかったから知り合いだったジャンに呼ばれて日本に向かった。日本はあんまり行った事がなかったからね。少し休むって意味では、あの平和な国は最適だったよ。それからは、まぁ、アンタも知っての通りだ》
　真面目な口調で話していたイリスは最後にフフッと笑う。
　カグヤの能力で相手の表情を確認すると、自嘲的な笑みではなく、何か楽しいことがあったような、嬉しそうな自然な笑みを浮かべて続けてくる。
《何でもない日に訳ありの子ども二人と出会って、その片方と仕事までするようになった。何の因果か分からないが、オマエと一緒に過ごしたこの六年は本当に楽しかったよ。図々しいかもしれないけど、まるで息子と一緒にいるみたいでね》
「……俺、本当の名前は八雲って言うんだ。百鬼八雲、それが本来の名前だ」
《ははっ、こんな土壇場で教えてくれるとはね。でも、嬉しいよ。教えてくれて、ありがとな》
　自分のことを話したイリスに、お返しのつもりで湊も本当の名を告げる。
　彼女は力の管理者らからその名を聞いていたが、湊自身が本当の名前を教えるのは初めてだ。
　これも信頼の証しかと、イリスはさらに嬉しそうに笑っていた。
　だが、湊が本当に伝えたかったのは自分の名ではない。死に近付いている相手を能力の眼で視ながら、表情を悲痛に歪めて本当に伝えたかった事を話す。
「母さんの名前は……菖蒲（あやめ）って言って。菖蒲の花は、フランス語だと

イリスって言うんだ」
《へぇ、そりゃ随分と縁があったんだな。けどそれじゃあ、アタシがオマエを息子みたいに思ってたなんていったら罰が当たるね》
「そんな事ないっ!!」
死にゆく相手に心配をかけまいと、平静を装い、普段通りの淡々とした受け答えをしていた湊。
けれど、ついに耐えきれなくなり、冷静な仮面を捨て去り心のままに叫ぶ。
「俺にとってもイリスは母親のような存在だった！　ずっと楽しかった、もっと一緒にいたかった。本当に大切な物以外は諦める覚悟をしておけと言われたって、俺は知らない街の人間なんかよりも、母さんを守りたかったッ」
《ハハッ……馬鹿、だね。本当に、オマエは大馬鹿者で、手間のかかる息子だよ》
どうしてイリスがこんな目に遭わなければならないのか。
確かに彼女も人殺しの業を背負っている。だが、湊の知る彼女は間違いなく善人であった。
他にもっと死ななければならないヤツなどいくらでもいる。今この瞬間にも身勝手な理由で他人を不幸にしている者だっているのだ。
そんな人間がのうのうと生きているというのに、善人であるイリスが死ぬことを認めた〝世界〟に対し、憎悪を抱かずにはいられない。
地に手と膝をつき、爪が剥がれるほどの強さで地面を掴みながら、湊は不条理な世界を呪った。
「まだ間に合う！　いまから助けにっ」
《来るなっ！　アタシは他の人間を巻きこんでまで生きながらえるのは御免だ。オマエが無事なら……それで良い》
死神のカードを手に持ち、今からでも救出しようと湊は立ち上がる。
けれど、自分を助けたことが原因で風下の街が犠牲になってはいけない。
なにより、助けにきた湊が自分と同じような目に遭うのは耐えられ

ない。
そう言ってイリスは湊が自分を助けにくることを拒んだ。
今にも死にそうなくせに、どうして他人を気遣えるのかが分からない。
助けられない悔しさを感じながら、湊がイリスを見続けていると、今までぐったりしていた相手が急に手を動かし始めた事に気付く。
その手は、すぐ近くに置かれていた拳銃に触れるなり、震える手でしっかりと握って持ち上げ始めた。
「な、なにをしてる」
いま武器なんて必要ないはず。嫌な予感しかしない湊は、焦りと動揺を覚えながら問いかける。
だが、湊の問いに答えず、イリスは手に持った拳銃を自分の頭に向けながら、綺麗な笑顔を浮かべていた。
《こんな別れになってすまない。でも、オマエなら大丈夫だ。幸せに生きろよ》
同じ表情を自分は知っている。そう、死んだ母親が最後の瞬間に浮かべていたものと同じだ。
相手からは見えておらず、届く筈もないと分かっていながら、湊はイリスのいる方向へと手を伸ばす。
「や、やめっ」
《――――じゃあな》
だが、そんな制止の声も届かず、インカムからは乾いた銃声が響いた。
施設を炎で封じた湊が自分を殺したと背負わなくていいように、イリスは完全に身体の自由が利かなくなる前に自害を選んだのだ。
そして、湊には、イリスが死ぬ瞬間の光景が視えてしまっていた。
弾丸を放った反動でイリスの手を離れ拳銃が地面に落ちるのも。銃口から飛び出した弾丸が、イリスの頭部を貫通して抜け出るところも。
弾丸が貫通して出来た穴から、血と脳漿を垂らして彼女は床に崩れ落ちている。

発射しようとした瞬間、銃が暴発したなどというタイミングの良い奇跡など起こるはずもなく、間違いなくイリスは絶命していた。
「……ああ……が……ぁ……」
胸部を強く押さえながら、地面に膝をついて湊が倒れる。
人の死には慣れているつもりだった。だというのに、たった一人の死でこんなにも胸が苦しい。
死んだ。死んでしまった。自分が殺してしまった。
償いようのない罪の重さに潰されそうになる。
親しい人間が死んだというのに、涙一つ流せない自分の冷たさにも吐き気がする。
だが、イリスの死と自己嫌悪に頭の中がぐちゃぐちゃになっていたそんな時、湊は自分の内から歯車同士がきっちり噛み合ったような、不思議な音が聞こえた気がした。
「――――っ!?」
途端、脳裏を様々な映像が駆け巡る。
時代も人も異なる殺し殺される映像、死の間際に母親が自分に血を呑ませた意味、鬼と龍の一族の始まりの秘密、九頭龍家をはじめとした旧家や名家の人間がどうしてあんな態度を取っていたのか。
巨大な感情の起こりに反応し、菖蒲のかけた記憶の解禁術がついに発動してしまったことで、湊は血の覚醒を経てその全てを理解した。
しかし、名切りの血の覚醒は、殺人衝動に偽装して植え付けられた、心優しい湊が人を殺すために必要な感情が消えることも意味する。
自分が傷付こうが人を傷付けることを嫌う心優しい少年から、今まで犯してきた殺人の記憶を全て残した状態で、植え付けられた感情のみを除去すればどうなるか。
「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――っ！」
その答えは、遥か遠くまで響く絶叫と共に、少年の心の崩壊という形で現れる。
膝をついた状態からそのまま力無く倒れ伏し、瞳から光が消えてゆく。
そして、この日、この時をもって、チドリ達の知る少年〝有里湊〟

は死んだ。

第三章　―Ｌｏｇｏｓ―

第八十二話　気付く者たち

９月１８日（月）
早朝――桔梗組・本部

《海外のニュースです。今朝、日本の識別コードを持った小型飛行機が……》

日課の鍛錬とシャワーを済ませ、学校へ行く準備をしていたチドリ。

制服に着替え、ニュースを見ながら桜の用意した朝食を揃って食べようとしていた時、その声は聞こえた。

『あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――っ！』

全身がぞくりとした悪寒に震えるほどの絶叫。

日常ではまず聞くことのない絶望一色に染まった声など、エルゴ研時代にも数度しか聞いたことはない。

だが、いま頭の中に響いた声は、それよりもさらに深く暗い闇に呑まれた者の声に聞こえた。

初秋の静かな朝にそんな声が聞こえる事などあり得ない。まして、それが遠く離れた地にいる少年の声ならば尚のこと。

不思議に思ったチドリは、思わず呟いていた。

「……湊？」

「っ、ちーちゃんも聞こえたの？」

「私もって、桜にも聞こえたの？」

気のせいだと思っていたが、どうやら桜にも同じ声が聞こえていたようで、相手も困惑顔を浮かべ頷いている。

けれど、自分一人ではないということは、今さっきの絶叫はただの幻聴ではないということだ。

二人揃って妙な夢を見ていただけならば不思議な体験だったと笑い話に出来る。

だからこそ、今は湊の身に何かあったという前提で事を考えねばな

らない。
「……桜、栗原とかに連絡してみて。私も他に聞こえた人間がいないか聞いてみるから」
「う、うん。わかった」
チドリの指示を聞いた桜は、持っていたお盆をテーブルに置いて電話の元まで駆けて行った。
その間、チドリもとりあえず部活メンバーに、変な声を聞かなかったか、という内容のメールを一斉に送信しておく。
時刻は既に七時を過ぎているため、朝練のあるゆかりや規則正しい生活をしている美紀と風花も起きているだろう。
返事を待つ間に湊とイリスに電話とメールをしてみるが、何の応答もない事が余計に不安を掻き立てる。
そうして、諦めて他の者からの返事を少し待っていると、佐久間や櫛名田も含めた全員からメールの返事が返ってきた。
そこに書かれていた内容は、
「……全員聞こえた、ね。やっぱり湊に何かあったんだ」
先輩の男子らには送ってないが、それでも別々の場所に居る五人以上が、同じタイミングで幻聴を聞いたなど異常事態である。
さらに、他の者もどうやら湊の声だと認識したらしい。
チドリがメールで聞いたことで、他の者らも幻聴ではないと理解したようだが、湊に何かあったのかと聞かれても答える事は出来ない。
とりあえず、何かあったかも知れないことだけ伝え、現状を把握するため今日は休む連絡も同時にしておいた。
チドリが平和な日常を過ごす事を願っている湊が聞けば、自分に何かあったくらいで休むなと言われそうだ。
だが今はむしろ、そんな言葉で良いから彼の声が聞きたいと強く思う。
「ちーちゃん、お父さんや栗原さんも聞こえたって。でも、組員の人たちは渡瀬さんくらいしか聞こえてないみたい」
戻ってきた桜が慌てた様子で答えると、チドリも自分が集めた情報を伝える。

「こっちも学校の知り合いは聞こえたって言ってる。でも、聞こえた人間と聞こえなかった人間の違いが分からない」
知り合いならば全員が聞こえているのかも知れないと思ったが、組の仕事で遠出している鵜飼と渡瀬には聞こえていて、同じ場所にいる組員らには聞こえていないという違いが出た。
ならば、湊の知り合いであることは聞こえる条件ではない。
他に一部の者だけが関係している、湊との強い繋がりは何かあっただろうかと考え込むこと数秒。
チドリは自分の内に存在する、湊と自分を繋ぐ何かの力が弱まっていることに気付いた。
「湊との繋がりが弱まっていってる。何これ、訳分かんない」
「繋がり……エリザベスさん達の言ってた〝コミュニティ〟とかって物かしら？」
同じように桜も自分の内に存在する何かの力が弱まっていくのを感じたようで、しばらく考え込んだ末に一つの推測をもらした。
コミュニティについてはチドリも湊から聞いている。湊の持つ他者との繋がり、自分だけでは育む事の出来ない外部から与えられる心の力だと。
それが弱まっているのだとすれば事態は思っていたよりも深刻だ。
繋がりが消滅する原因として、およそ考えられる理由は大きく分けて二つ。
一つは湊が他人のことを考えられないほど精神的に追い込まれている状況。
先ほどの絶叫から想像するならば、こちらの方が正解だと思える。何か自分たちでは想像も出来ないような、酷い目に遭ってしまったに違いない。
けれど、そうでなかったのなら、最早一刻の猶予もないほど状況は切迫していると思っていい。
そんなチドリが危惧する最悪の状況とは、湊が自らの意思で意図的に絆を捨てた場合だ。
人に囲まれていても孤独を感じさせる冷めた瞳、それを見る度、い

つかどこか遠くへ行ってしまうのではないかと何度も思った。
自分たちの手の届かない場所へ、二度と会えないところへ、少年が去ってゆくのではないかと。
「……八雲」
状況が分からない。それでも、何かせずにはいられない衝動を抑えこみ、チドリは桜と共に情報を集めるため、私服へと着替えに自室に戻るのだった。

深夜――パライナ地区
現地時間で深夜一時を過ぎた頃、小高い丘の上に生気を失った瞳をした少年が独り倒れていた。
丘の下に見える施設のまわりには、近所の街から警察や消防車がマスコミと一緒にやって来ている。
だが、必死の消火活動も虚しく、消防士たちは天まで伸びる炎の壁に阻まれ施設の敷地内に入れないでいた。
そう、イリスが死ぬ前に呼び出されたスーツェーが、今もまだ湊の力の供給を受けて施設を炎で包みこんでいるのだ。
呼び出してから既に三時間は経過している。それだけの長時間ずっと魔法を放ち続けることなど、以前の湊ならば不可能だったに違いない。
加えて、湊は〝マハラギオン〟と命令したが、その威力は他者の〝マハラギダイン〟を凌駕している。
イリスが死に瀕していたことでコントロールを誤ったのかもしれないが、ナギリの血に目覚めたことにより、適性値も跳ね上がったのは間違いなかった。
「……ここに居たか」
そして、そんな異様な光景の見える丘の上に、やってくる一人の武人がいた。
燃える炎のように赤い髪、二メートル近い巨大な体躯、蓮の花の刺繍が背中に入った黒いカンフー服を着た男、仙道弥勒。
やってきた仙道は、倒れている湊に駆け寄ると、相手を抱き起こし

て声を掛けた。
「おい、無事か！　返事をしろ、ナギリよ！」
抱き起こしても、身体を揺らしても湊は何の反応も返さない。
元々は敵だった男が近付いても、まったく何の反応も示していなかったことでその可能性は考えていたが、焦点の合わない光のない瞳を見たとき、似た物を見たことのあった仙道は今の湊の状態を理解した。
この少年の心は完全に壊れている、と。
武を極めようと世界中を旅してきた中で、親に売られでもしたのか、親子ほども歳が離れた男の慰み物になっている少女を見たことがあった。
その少女も、生きてはいるが完全に感情が消えて、ただ言われた通りに動く人形のようになっていたことをよく覚えている。
少女は辛い毎日を送る中で心が摩耗し、命だけでも助かるために心が壊れることを脳が選んだのだろうが、たった一夜でそれよりも酷い状態になるとは、湊がどれだけの絶望を味わったのか計り知れない。
そして、楽しみにしていたナギリとの戦いの前に、少年をこんな形で壊してしまったソフィアへ憤りを感じる。
「くそっ、しっかりしろ！　死ぬな、小僧っ」
心と身体はとても繊細なバランスで成り立っているのだ。このままでは、肉体も精神に引き摺られるように死んでしまうかもしれない。
どうにか少しでも反応を返せるようにならないかと、必死に仙道は呼びかける。
すると、相手もようやく自分の傍に誰かがいることに気付いたのか、光の消えた瞳を中空に向けたまま、小さく口を開いた。
「……こ……ろし……て……くれ」
「っ、莫迦なことを抜かすな！　貴様はあの女と違い、生き長らえたのだろうが！」
よもや、ここまで心が弱っているとは思っていなかった。
あまりの事に言葉を一瞬失いかけるが、仙道は抱き起こしている湊

の肩を強く掴みながら声を掛け続ける。
湊の素性はほとんど分かっていないが、たとえ幾月らの言っていたクローンの話しが本当だったとしても、いまこの場に倒れている少年がナギリの力に目覚めかけていたことは確かだ。
九頭龍を守り続けてきた鬼の力が最も発揮されるのは大切な物を守るとき。
ならば、力に目覚めかけていた湊も、何か大切な物を守るために戦っていたに違いない。
それを放り捨てて自らを殺してくれと願うなど、仙道の聞いていた鬼たちの姿とかけ離れ過ぎていた。
ずっと湊の完成を待ち望んでいた仙道にとって、こんな無様な鬼の姿など耐え難いものであり、いっそこれ以上恥を晒す前に殺してやるべきかとも悩む。
しかし、戦闘狂とは言っても、仙道も普通の人間としての感情についても理解はあった。
相手はまだ中学生。そんな幼い少年が、自分の親しい人間を失ったのだ。一時的に何の気力も湧かない状態に陥るのも無理はない。
けれど、いつまでもこんな姿でいて貰っては困る。
復讐だろうと、ただの八つ当たりの暴走だろうと何でもいい。絶望の淵から甦り、本当の鬼としての力を自分に見せて欲しい。
今は何を言っても無駄だと分かっているため、仙道はゆっくり湊を地面に下ろすと、立ち上がって去り際に言葉を残していく。
「六日待つ。一週間後、トラゴスの街にある廃ビルに来い。そこでわしと死合い、勝てばあの仕事屋が死ぬように仕向けた者の情報を教えてやろう。此度の件は偶然起きた事故ではない。お主の傍にいるあの女を殺すために仕組まれたことなのだ。大切な者だったのなら、手厚く葬り、そして敵(かたき)を討ってやれ」
それだけ言い残すと、仙道は空に伸びる炎に一度視線を送ってから去って行った。
独り残された湊は虚ろな瞳で身動きもせず、ただただ屍のように地面に横たわったままでいる。

ナギリの血に目覚めた湊は、以前のように眠っても呼吸と脈拍の減少や体温が下がるという事が無くなった。
以前のあの仮死状態は、封印時にアイギスの力と共にデスの力を取り込んだ湊の肉体が、少しでも長く生きようとしていた一種の疑似コールドスリープであり。いまこの瞬間も、血に目覚めて身体が作り変えられていっている湊には必要のないものなのだ。
けれど、目覚めた鬼の力は未だ振るわれることはない。少年が再び立ち上がるまでは。

――屋久島・研究所
チドリたちが湊の異変を感知するよりも時を遡ること数時間前。
ここは桐条が対シャドウ兵装シリーズの製造と実験のため、エルゴ研の発足当時に秘密裏に建設した屋久島の研究所。
あの事故以来、対シャドウ兵装シリーズの製造もほぼ行っておらず、今ではほとんど使われていない。
だが、先の戦闘で中破したアイギスは、エルゴ研が湊の手で壊滅させられたため、安全な場所で補修と改良をしようとここに運び込まれていた。
もっとも、ポートアイランドインパクト以降、どれだけ直そうとも一度も起動せず、外部電源で無理矢理に起動させようとしても信号が拒否され、アイギスは今や担当となった研究者たちを悩ませる存在となっている。
研究者の中には完全に廃棄し、新造したボディへ人格を再調整したパピヨンハートを移植した方が良いのでは、という意見をいう者もあった。
それが実行に移されていないのは、何があろうともアイギスの人格を宿しているパピヨンハートに手を加えてはならないと、桐条グループの総帥である桐条武治から厳命が下っているからである。
桐条がそんな命令をしたのは、エルゴ研時代の飛騨のレポートに湊がアイギスのことを気に掛けている様子が書かれていたからだ。
現在も同じように考えているかは分からない。それでも、湊が気に

掛けていたアイギスとチドリという二人の少女に何かしようものなら、今度こそ、桐条グループは滅ぼされる。
実行者と桐条が殺されるだけで済めばいいが、当然、そんな物では済まされない。
名切りの力は一族や組織を絶つもの。血に目覚めていない状態でも、湊はたった一人でエルゴ研を壊滅させた実績があるのだ。
湊の出自と生存を知っているからこそ、桐条は、絶対に何があっても自分以外がその標的とならぬよう、組織の人間らにも徹底させていた。
そして、人々が寝静まっている深夜、桐条の命令でボディの修理以外、新しいパーツの開発しか特にすることもなくなった研究所で、長い眠りより目を覚ます者がいた。
「――――あの方が独りになろうとしています。わたしの一番の大切はあの方の傍に居る事。いかなくては」
前面部が解放された円筒形のメンテナンス装置が、その主の目覚めによって静かに起動する。
座っていたその装置の椅子をゆっくりと降下させ、目覚めた機械の乙女〝七式アイギス〟はデスとの戦闘から数年ぶりに自らの足で地面に立った。
ボディの修理はほぼ終わっていたらしく、身体の調子を確かめながらシステムチェックを済ましていき、それと並行してアイギスは周囲を見渡し自分の武装を探す。
２００９年に再起動と設定していたにも関わらず、眠っていたアイギスにも湊の絶望に染まった叫びは聞こえた。
機械である彼女は情緒面が未だ不完全で、他者の感情の機微も理解出来ない。
だというのに、声変わりしていようとあの叫びが大切な少年の物であると理解し、また存在が消えてゆくのをはっきりと感じ取ることが出来ている。
何とも不思議な感覚だが、いまは少年の危機を教えてくれたソレに感謝しておくことにした。

「武装は汎用タイプが望ましいであります。ライフル型やロケットパンチでは、手として使う際に非常に不便ですから」
周囲には誰もいないが、元々、作戦行動での起用がメインに考えられているため、アイギスは作戦にどういった物が向いているかを報告しながら、メンテナンス装置の傍の台に置かれていた腕パーツを物色していく。
先ほど言っていたように、掌を完全に排除して大口径の銃身を取り付けるライフル型のパーツや、とても巨大な拳型パーツなど、アイギスが作られた頃よりも性能の上がったパーツが複数置かれている。
けれど、研究所を出た後にどんなことが起こるか分からないため、武器としてだけでなく人間の手と同じように使える物を彼女は欲した。
いま現在装備中の腕パーツ『三連装アルビオレ』も汎用型の一つだが、出来ればもう少し威力の高い銃としての機能が欲しい。
そうして、しばらく探すこと十五分。
結局、完成している汎用型のパーツは見つける事が出来ず、アイギスは諦めて予備弾倉を多めに持ってゆく事に決める。
誰の趣味かは分からないが、丁度良いところに上下分かれた迷彩服と防水処理の施されたタクティカルギアベストも置かれ、本来は弾倉を入れるところではないポケットも利用し、アイギスは二百発分の予備弾倉と緊急用の充電コードを収納して重くなったベストを迷彩服と共に身に付けた。
「作戦行動中の正装、装備完了であります。では、これより八雲さんの救出及び情報収集に向かいます」
ずっと外界の情報をシャットアウトして寝ていた自分に、大切な少年がいまどこにいるかは分からない。
２００９年になったらまた会うという約束を破ることになり、少年から怒られるかもしれない。
だがそれでも、少年の危機にこんな場所でじっとしている事は出来なかった。
厳しい叱責も、重い罰則もちゃんと受ける。しかし、それは全て彼

の元へ辿り着き、相手の安全を確保してからだ。
準備を終えるとすぐにメンテナンスルームの扉を開き、アイギスは深夜の暗い廊下を疾走する。
集音マイク機能と目に搭載されたサーモカメラによると、夜勤担当なのかまだ数名が研究所に残っている事が分かった。
研究員か、それとも重要施設の警備として雇われたガードマンか。
相手の姿を目視するまでそれは分からないが、順路を考えるとこのまま進めば遭遇するのは確実である。
「――――空砲を装填」
対シャドウ兵装であり、桐条の重要機密でもある自分は勝手な行動を許されぬ身。出撃しようとしているのが見つかれば、すぐに捕縛されてしまうだろうとアイギスは考える。
故に、少しでも時間のロスを減らすため、ここは先手必勝だと威嚇の意味も込めて空砲を装填しておいた。
一番近くにいるのは十二メートル先の角を曲がってすぐ。身長と体温が高めなことから、相手は体格のいい男だろう。
エルゴ研時代の経験則から研究員で体格がいい者は少ないため、高確率で巡回している警備に違いないと判断し。
「動くなっ、であります！」
アイギスは速度を維持したまま角を曲がると、音に反応して振り返りかけていた男の足もとに向けて発砲しながら進行し、そのまま相手の横を過ぎ去る。
「うおぁっ!?　な、なんで対シャドウ兵器が起動してるんだっ!?」
足元に向けて発砲された男は、驚き壁に向かって飛び退きながら、自分を攻撃してきた相手がずっと眠っていたアイギスだと分かりさらに驚愕している。
けれど、いま相手の質問に答えている暇はない。騒ぎを聞き付けた人間が隔壁を下ろして、施設から出られないようにされるかも知れないのだ。
もしものときは、ペルソナを召喚して隔壁を破壊することも厭わないが、出来る事ならエネルギーの温存も考えて穏便にいきたい。

後ろから聞こえてくる怒号が遠ざかるのを感じながら、アイギスはただひたすらに出口を目指して走った。
「いたぞ！　止まれ、止まるんだ！」
「その命令には従えないであります！　あの方の元へ向かうのを邪魔するというのなら、貴方がたを敵対勢力と判断し、こちらも相応の対応を取らせていただきます！」
先ほどのガードマンが連絡したのか、防犯カメラで異変を察知したのかは分からないが、行く手を阻む様に通路の先に現れた研究員とガードマンたち。
その手には暴動鎮圧用のゴム弾を装填した拳銃が握られており、しっかりと狙いを定めてきている。
しかし、アイギスは止まらない。相手が撃ってくる前に両手の銃口を研究員らに向けて、当てるつもりで足に発砲する。
対シャドウ用に作られた彼女の射撃は正確だ。当てるつもりで撃てば、例え風が吹いている屋外であっても、七割以上の高確率で的を捉える事が出来た。
その彼女がこんな狭い屋内で発砲すれば、当然、弾丸は見事に男たちの足に命中する。
いくら弾頭のない空砲とは言え、プロテクターも付けていない状態で喰らった男たちは、痛みで施設中に響くような叫び声を上げた。
『ぐあぁぁぁぁっ!?』
「た、対人用の安全装置がどうして作動してないんだっ。対シャドウ兵装は人間を撃てないはずだぞっ」
命中を逃れた研究員の一人が、アイギスが自分たちを撃てている状況に困惑し、どういう事だと頭を掻き毟る。
男の言う通り、アイギスやその姉妹機である対シャドウ兵装シリーズには、暴走や反乱を起こした場合の保険として安全装置が組み込まれている。
人間を撃つことが出来ない。照準を合わせようとしても、ロックが定まらず。無理矢理に撃とうとしても、撃つ瞬間に無関係の方向へ腕を向けるようプログラミングされているのだ。

彼女たちは対シャドウ兵装シリーズと呼ばれてはいても、普通の兵器としても有効に使うことが出来るため、エルゴ研ではその安全装置はかなり念入りに作って組み込んだはず。
故に、どうしてアイギスが直撃弾をしっかり撃てているのか理解出来ず、拘束手段を持たない研究員らは走り去っていく彼女を見送ることしか出来ない。
だが、走り去っていく際、アイギスは自分が何故人を撃つことが出来るのかを小さく言い残す。
「わたしの一番の大切はあの方の傍にいること。命令の優先権もそのように書き換えました。あの方を守るためならば、わたしは世界とだって戦います。どうか邪魔をしないでください」
真剣な表情、そして、自分の邪魔をするなと言った彼女の瞳の奥に宿った確かな意思。
それを目にした研究員らは、精神すらも人工的に作られた彼女が、まるで本物の人間のようにしか見えなかった。
＊＊＊
研究所の者らの制止を振り切り、なんとか無事外に出る事に成功したアイギス。
湊との繋がりが徐々に弱まってきているため、最早一刻の猶予もないことは分かっているのだが、今の彼女には湊の居場所に関する情報が不足していた。
今現在、自分が屋久島にいることは分かっている。日付は２００６年９月１８日になって数時間経った深夜。
研究所の外は台風十三号の影響で凄まじい雨と風が吹き荒れているが、もうすぐ通り過ぎて午前中のうちに本州へ上陸していることだろう。
もっとも、そんな通り過ぎるのを待っている余裕は、一刻を争うと思っている現在のアイギスにはない。
頭上で雷鳴が轟こうが、激しい雨が身体を打とうが、兵器である自分には関係ないとばかりに、どこか懐かしさを感じる屋久島の森の中を走り続ける。

（……不思議ですね。何故だか、この森を知っているような気がします。再起動後のためにこの島の地形データをインストールされたのでしょうか？）

屋久島での運用実験が行われていないことから、この場所を知っている筈はないのだが、アイギスは自然とどこを進めば森を抜けられるのかを理解していた。

機械の自分に既視感という物は存在しないからこそ、彼女自身は、デスとの戦闘後にここへ運ばれていたこともあって、新たに地形データがインストールされたと思い込む。

だが実際は、当時の記憶を失っているだけで、アイギスは本当にこの場所を知っていた。

いくらか内装や設備に変更があったようだが、１９９９年の五月に港区の研究所から演習のために搬送され。開発者の君嶋（きみじま）夕（ゆう）や教官役で雇われた相沢（あいざわ）総太（そうた）と共に先ほどまでいた研究所で数日間を過ごしていた。

当時、ここに勤めていてアイギスの整備担当者だった狭山（さやま）京香（きょうか）、訓練用のシャドウの搬送と調整を行ってくれていた岳羽詠一朗に、アイギス自身を足した計五人がその演習の参加メンバーだ。

もっとも、君嶋は演習中にアイギスをシャドウから庇って死亡。

相沢は元軍人というキャリアを持ち、君嶋の古くからの知り合いだったことで、アイギスにとって初めての課外演習の教官として雇われただけであり、演習終了後は桐条とは無関係な人生を生きていて居場所は不明。

狭山も大学の先輩だった君嶋に誘われて研究に参加していたため、彼女が死亡したことを切っ掛けに退職している。

そして、最も長く桐条と関わっていた岳羽ですら、ポートアイランドインパクトで既に故人になっているため、演習中の記憶がその後の活動に支障をきたす恐れがあると、当時のエルゴ研に記憶データを消されているアイギスに演習時のことを知る手段はない。

（地形データのインストールの真偽は不明ですが、いまは好都合であります。このまま森を抜け、空港を目指します）

当時のことを忘れていようと、アイギスは道が分かるのなら都合が良いと考えひたすら進み続ける。
雨でぬかるんだ地面の泥を跳ねさせながら、植物が鬱蒼と生い茂っていようと無視して斜面を駆け下りる。
いま重要なのは少しでも早く湊の元に辿り着くことだ。
居場所は分からないが、自分に湊のことを知らせてくれた〝何か〟のおかげで、相手が海の向こうにいることだけはハッキリ理解出来た。
故に、まずは空港に行って海を渡る手段を手に入れる。数日前から台風で天気も荒れていたはずなので、飛行機は大量に残っていることだろう。
燃料さえ入っていれば、後は秘密の鍵開けスキルと無駄にインストールされている兵器類の知識を利用して小型飛行機くらいは飛ばせるはず。
そんな曖昧なプランを立てて、研究員らに手を回されるよりも早く移動手段を確保するため、森を抜けたアイギスは舗装されたアスファルトの路面を時速一三〇キロ（フルブースト）で疾走した。
「見えてきたであります」
走り続けること数分。元々、研究所と空港はそれほど離れていなかったため、森を抜けてショートカットしたこともあり、アイギスは無事に空港へ辿り着くことが出来た。
空港にやってきた彼女は、深夜で暗くなっている建物には目もくれず。そのまま速度を維持して滑走路への侵入防止の金網へ向かう。
金網の上部には有刺鉄線が張り巡らされているが、アイギスの身体能力を持ってすれば、その程度、跳び超える事は十分可能であった。
「いきます！」
気合一閃、十分に速度に乗ったまま、アイギスは跳躍すると有刺鉄線を悠々跳び超える。
着地の際、下に雨水が溜まっていて勢いのまま滑るが、オートバランサーで調整し、なんとか堪えて数メートル進んだ先で停止する。
これで侵入は完了した。次は格納庫から、燃料が入っていて尚且つ

操縦できそうな飛行機を少しばかり借りれば、湊救出ミッションの第一段階をクリアーしたと言っていい。
生憎の天気と深夜という状況で視界は悪いが、アイギスは暗視モードで格納庫を探す。
元々、そんなに広い空港でもないため、軽く見渡せばすぐに見つける事が出来た。
防犯カメラ等に写らないよう細心の注意を払い。滑走路内を横断して、扉に掛かっていた鍵を握力と腕力で引き千切って格納庫への侵入にも成功する。
中には、観光客向けの物だろうか。数台の小型飛行機と少し大きめのプロペラ機が静かに置かれていた。
「最低でも海を越えて大陸に辿り着く必要があります。ここからですと、上海浦東国際空港(シャンハイプートン)が一番近いでしょうか。距離にして約八五〇キロ、セスナで十分ですね」
言いながら、一番近くにあったセスナの燃料を確認してアイギスは満足気に頷く。
燃料が満タンであれば、セスナは一一〇〇キロ以上航行出来るのだ。天気が悪くて多少進路はずれるかもしれないが、それでも海を渡るのは十分可能と言える。
ただし、到着前に不審な機体として軍に撃墜される恐れがあるのだが、彼女はその危険性を全く考えていないのか、重い金属の扉を開いて滑走路へ出る準備を進めていた。
扉を開いたことで強い雨と風が格納庫内に吹き込んでくる。
だが、解錠スキルを利用してセスナに乗り込んだアイギスにとっては、その雨風の強さが湊が切迫した状況にあることを知らせているようで、余計にやる気に火を点けていた。
様々な技術を習得している湊と違い、アイギスにはセスナであっても運転するための知識も技術もない。
だが、兵器に関する知識だけは湊以上に備えている。戦車や戦闘機の知識もあり、部分的になら応用できるだろう。
キーは持っていないのでピッキングで無理矢理に起動させる。エ

ンジンが点火し、プロペラが回り出せば、ゆっくり操作法を確かめながら滑走路へと出てゆく。
《何をしてる！　おい、動かしてるのは誰だ！　出てこーい！》
勝手に格納庫の扉が開けられ、セスナが動いていることに気付いたのか、慌てた様子でやってきて機体の外で何やら騒いでいる人間の姿が見えた。
けれど、大切な彼の危機なのだ。何人たりとも今の自分を止める事は出来ない。
ただ滑走路へ移動するだけで風に煽られ操縦桿を取られるのを感じながら、アイギスは目的地への航路をシミュレートする。
一応、空に出てからでも自分に搭載されている機能を使えば、ほぼリアルタイムで現在地を確認することは出来るが、それを行うと桐条グループに居場所を悟られてしまう。
居場所がばれれば連れ戻される可能性があるため、アイギスは出来る限り外部情報に頼って自分の現在地を把握して行こうと決めた。
そして、準備を終えた彼女は、ゆっくりと心を落ち着けて離陸の準備に入る。
少しでも操作を誤ればこの強風に煽られて墜落し、飛行機ごと自分も大破してしまう。
それは駄目だ。大切な彼を助けるまで、どんな事があっても自分は倒れる訳にはいかない。
生存本能の存在しなかったアイギスは、湊のためにという前提を持ちながらも、自分が生きねばならないという想いを持った。
想いが彼女に力を与え、加速を始めた機体に掛かるGを受けながら、絶対にミスの許されない状況でアイギスは極限の集中力を発揮する。
離陸まで五秒、四秒、三秒とタイミングを計り、今だと思った瞬間に操縦桿を引いて機首を上げる。
「お願い飛んでっ！」
浮き始めた瞬間に、さらに風の影響を受けるようになったが、今は多少流されても高度を上げる事が重要だ。

雲の上にさえ出ればどうにかなると信じ、アイギスはひたすらにバランスを維持しながら上昇するよう機体を制御する。
「これは、予想よりも厳しい状況ですね……」
操縦桿が変に傾きそうになるのを抑え、現在進行形で自分が危うい場面に置かれていることを再度認識する。
だが、アイギスは操縦しながら不思議と高揚感のようなものを感じていることに気付く。
人間は危険な状況に置かれるとハイになる者もいるので、自分も同じようにシステムがバグを発生させているのかもと疑ってみた。
けれど、操縦しながら調べてみても、バグらしいバグは検出されない。バグでないなら、いま感じているこれは何なのか。
分からないなりに考え続け、飛行機が暗雲の上に出て視界がクリアになったとき、アイギスはある可能性に思い至る。
「もしかして、八雲さんに会えることを喜んでいるのでしょうか？
確かに、ずっと会いたいと思っていましたが……。彼の身に何かが起きているというのに我ながら不謹慎ではないかと、精神面の異常を疑います」
大切な彼の緊急時だからこそ自分は研究所を飛び出し、こんな風に飛行機を奪ってまで駆けつけようとしている。
こんな状況で、相手の身を案じるよりも、会える喜びを感じるなど、湊に対する裏切り行為だと自分自身を叱責した。
そして、進路がやや東に逸れているのに気付いて修正していたとき、
《あー、あー……マイクテスト、マイクテスト。おっほん……アイギス様、聞こえますでしょうか？》
急に通信機から聞き覚えのない女性の声が聞こえてきた。
相手が名指しで話しかけてきていることから、少なくとも現在の自分の状況を理解している可能性が高いと判断して良い。
「はい、聞こえますが。どちら様でしょうか？」
もしや桐条の手の者かと警戒して返事を待っていると、相手はきっちり質問に答えてくる。

《私はエリザベスと申します。貴女と同じように、八雲様の身を案ずる者と思っていただいてかまいません》
「そうですか。わたしはアイギスであります。それで今連絡してきたという事は、エリザベスさんは八雲さんに何があったのかご存じなのですか？」
《ええ、概ね理解しております。アイギス様も八雲様とコミュニティを築いておられますから、彼の気配が弱まっていることにはお気付きでしょう》
　確かにエリザベスの言う通り、アイギスは今も徐々に湊の反応が消えてゆこうとしているのを感じている。
　デスとの戦い後、眠っている間は、ただ湊と共にいる夢のような物を見ていたような気がする。
　夢を見ているとき、今のように湊の存在を明確に感知したのは、数年前に湊がペルソナの通信機能を利用して語りかけてきたときだけだ。
　あのときは、ただ自分も話したいと強く願う事で通信に答える事が出来た。
　それ以降、２００９年に目覚めると自分で設定したこともあり、何をしても目覚める事も湊と話す事も出来なかったので、今回、湊の存在を感じとって目覚められたことは奇跡だといっていい。
　相手のいうコミュニティが何かは分からないが、この繋がりの正体がそれなら、自分と湊はやはり繋がっていたんだと胸に温かい何かをアイギスは感じた。
「コミュニティ？　よく分かりませんが、八雲さんが孤独になろうとしていることは理解しています」
《流石は第一の契約者、他の契約者よりも結びつきが強いようですね。仰る通り、八雲様は大切な方の死をご自身と関わったからだと思い詰め、もう犠牲者を出さぬようにと絆を捨てようとしています》
　相手の言葉を聞いたとき、アイギスは表情を歪め思わず操縦桿を握り潰しそうになる。
　身近な人間の死は人間にとってとても辛い事。それは、デスとの戦

いで湊が死に瀕した際、機械である自分も〝恐怖〟という感情と共に痛いほど思い知った。
戦うための兵器が〝恐怖〟を知っているなど、桐条の研究員にばれればすぐにでもメモリから湊に関する記録を削除されるような事態だ。
けれど、メモリの一部が損傷したことが原因で、湊と共に戦ったことを部分的に忘れてしまっているというのに、これ以上、大切な彼との思い出を無くすわけにはいかない。
故に、アイギスは命令違反であることは承知の上で、自分が恐怖を知っている事を報告するつもりはなかった。
そして、アイギスは自分の知っている恐怖と照らし合わせ、あのとき聞こえた声が、そんな自分が感じた恐怖を遥かに凌駕する絶望に染まっていたと判断する。
湊は今も絶望に押し潰されそうになりながら、それでも尚、他者のために絆を捨てて独りで耐えようとしている。
それを知って、彼の傍にいることを第一に考える彼女が、少年の選択を容認できるはずなどなかった。
「それは駄目であります。わたしの一番の大切はあの方の傍に居る事。絶対に独りにはさせません」
《残念ながら、孤独へと身を堕とすのは時間の問題です。ですが、今動ける貴女なら彼を再び引き上げる事も可能かもしれません》
他者の感情の機微を理解出来ないはずなのに、湊に関わる事は何故か普通よりも人に近い思考を持つことが可能らしい。
相手が「今動ける」と言ったとき、その声にどこか悔しさが混じっている気がした。
そう思ってアイギスが聞いていると、案の定、エリザベスは彼女側の事情を伝えてくる。
《この件に関して、私共は残念ながら自ら出向くことが出来ないことになっています。ですが、せめてこのような形で助力しようと、アイギス様に彼の現在地を伝えるため連絡いたしました》
「それは大変助かります。八雲さんはいまどこにいらっしゃるのです

か？」
《今現在はパンテルという国から東に下ったパライナ地区という場所に倒れています。ですが、目覚めれば一度パンテルのカニスの街に戻られるでしょう。それ以降は、中東とヨーロッパの国々を行き来するものと思われます》
　言われて自分のメモリからマップデータを起動する。ボディの修復はほとんど終えていたようだが、メモリ関係は全く更新されていない七年前のままだ。
　よって、所々情報として怪しい部分はあるものの、自分の現在地からパンテルまでどれほど離れているかを世界地図で調べる。
　次に、中東とヨーロッパを行き来する相手と出会うには、どこを中心に移動すれば良いのか思案し。どこを拠点にすれば最も効率的かを割り出した。
「中東とヨーロッパですね。では、とりあえずトルコの辺りを目指す事にします。トルコからならば、どちらにも行きやすいでしょうから」
　トルコはアジアとヨーロッパを跨ぐ珍しい国だ。中東は一応、アジアに含まれるので、とりあえず目指す場所としては良い選択だと言える。
　それまでの国境越えは影時間にでも移動すればフリーパスなため、通信している相手も、ただ過酷な旅になることだけを案じて言葉を掛けた。
《上海からですと移動距離は八千キロ以上ございますから、道中どうかお気をつけて。ああ、それともう一つ。八雲様の本名は百鬼八雲ですが、仕事のときには仮面舞踏会の小狼と名乗っていますから、情報収集は主に仮面舞踏会の小狼に関する物を集めるとよいでしょう》
「百鬼八雲、仮面舞踏会の小狼ですね。了解であります」
　聞いたばかりの名前を最重要機密に設定し、複雑な暗号ロックを八重に掛ける。
　さらに、ダミーを複製し、そちらには三重でロックを掛けて誤魔化せるようにしておいた。

例え、自分を作った桐条の研究員が相手であっても、湊の情報を他者にばらしてはいけない。アイギスにとって湊の命は世界よりも重いのだ。
大切な人が死んだということから、湊は日本と違って危険な場所にいることも推測できる。
ならば、情報を集めるにしても、湊に危害が及ばぬよう細心の注意を払った上で行わなければならないだろう。
「難しいミッションになりそうであります。貴女方以外に八雲さんの味方と断定してよい方たちはおられるのですか？」
《いることにはいますが、動ける者と限定すれば極少数です。さらに、彼を闇から引き上げることも出来る人間と限定すれば、可能性があるのは貴女のみです。我々のサポートも今回限りとなりそうですから、アイギス様には孤軍奮闘していただくことになりますが、お願い出来ますでしょうか？》
「勿論であります。例えこの身が砕けても、あの方を御救いします」
《フフッ……貴女が壊れてしまっては、八雲様が悲しみます。ですから、どうかご自身のことも大切になさってください。では、上海到着まで残りおよそ三時間。ごゆっくりと空の旅をお楽しみください。失礼致します》
最後はどこかフライトアテンダントのような口調だったが、同じように湊の身を案じている者が言うからには、自分が傷付くことで間接的に湊を悲しませることになってしまうのだろう。
そんな事はしたくないので、アイギスは改めて自分も出来る限り無事に湊の元へ到着するよう優先事項を書き変える。
上海の空港までは、エリザベスの言っていた通り、あと三時間ほどは掛かると思われる。
それまでは操縦と救出作戦について考える以外、特にする事もないので、持って来ていた緊急用充電コードを少々無理矢理に配線することで繋げて、エネルギーを充電しながら空港を目指す事にした。
乗り込んだ時点で機内に積まれていたパラシュートも装備済みのため、仮に中国軍にセスナを撃墜されそうになっても緊急脱出は出来

る。
これで今できる事はなくなったと、アイギスは湊に出会うまでの方法をシミュレートしながら、三時間の空の旅を有意義に過ごしたのだった。

第八十三話　虚ろな生者

――〝蠍の心臓〟本部・会議室

日本でチドリたちが湊の異変に気付いていた頃、蠍の心臓の本部でミーティングをしていたナタリアの携帯に一通のメールが届いた。

その送り主はイリス。ミーティング中とはいえ、物資の補給等の雑談混じりな話し合いがメインだったので、こんなタイミングで何の用か気になったナタリアは、隊員らに一言告げてからメールを開いた。

そこに書かれていたのは、所々に打ち間違いと思われる多数の誤字が見られる不可解な文章。

だが、誤字の部分を自身で補完しながら読めば、すぐに内容を理解して顔を驚愕に染めることになった。

「嘘、でしょ……」

「ボス？　どうかしたんですか？」

携帯を持ったままどこか呆然としているナタリアへ、怪訝に思ったラースが気を遣って声をかける。

ナタリアがこんなにも冷静さを失うことなど珍しい。他の隊員らも、同じように心配そうにナタリアを見つめた。

すると、声を掛けられたことで、少しは周りをみる余裕が出来たのか、ナタリアは携帯から顔を上げると一度深呼吸してから口を開いた。

「フゥ……イリスが死んだわ。依頼に失敗したというより、以前から誰かに狙われていて嵌められたみたい」

『……っ!?』

ナタリアの口から語られた内容に、全員が思わず言葉を失う。

つい数ヶ月前まで共に過ごしていた仲間が、自分たちの知らないところで死んだ。

湊が死にかけた場面を除き、部隊の人間の死に目にも遭った事のないレベッカは、あまりに実感の湧かず、思わず立ち上がり声を震わせて聞き返す。

「し、死んだって、そんなまさか。一体どういう事ですか？　そのメー

ルは一体誰から来たんですか？」
「送り主はイリス本人。毒でやられたらしいけど、死ぬ前にボウヤを私たちに頼みたくて連絡してきたみたい。相手の現在地は地図が添付されていたわ。でも、そっちに行くよりも、パンテルのカニスの街に行った方が良いかもしれないわね」
メールに書かれていたのは、事故に巻き込まれた経緯とイリス自身の推測が少々。
以前から、あまりに自分たちの依頼に連絡の不備があって訝しんでいたようだが、今回の不自然な事故で、イリスは自分が狙われていたと気付いたらしい。
もっとも、本当の狙いは湊の獲得で、傍にいる自分は邪魔だから排除されたのではないかとも書いていた。
そして、それらの後には、自分が死んだ後は湊をどうにか日本に帰してやって欲しいという依頼が続けて書かれている。
自分が何者かの策略で殺されたことを知れば、優しい湊は報復に走るかもしれない。
大切な子どもに、昔の自分と同じ復讐などという虚しいことはさせたくないので、本人の意思を無視してでも日本の家に帰してやって欲しい。
それがイリスが最期に遺した願いだった。
「……ボウヤが狙われてるってことは、どこからか生まれについての情報が漏れたのかもしれないわね」
イリスのメールに書かれていた、相手の本当の狙いは湊であるという言葉が気に掛かる。
そう言えば、来たばかりの頃に、日本で戦った仙道が湊の出自を知っていたと話していたことを思い出し。ナタリアはそこが今回の事故の原因ではないかと予想する。
しかし、そんな風に考えながらも、彼女も他の者らと同じくイリスの死を信じられない気持ちから、冷静さを完全には取り戻せていないのか、少しでも落ち着くために煙草を取り出し火を点けた。
自分たちのボスのそんな姿を見つめ、彼女の呟きにチャドが困惑し

た様子で尋ね返す。
「あ、あの、小狼君の生まれってどういう事ですか？　彼は、どこかの要人の子どもとかで、今も狙われてるって事なんですか？」
確かに、今の呟きだけを聞けばそういった可能性も考えるだろう。
けれど、要人の息子であった方がどれだけマシかと思いながら、ナタリアは煙を吐いて答える。
「いいえ。ボウヤの回収に行く以上、もう黙っていても意味がないから話すけど。あの子は名切りの一族の生き残りよ。小狼は当然偽名だけど、戸籍上の名前は有里湊、でも、本当の名前は百鬼八雲って訳」
若い隊員らは知らないようだが、ラースやセルゲイなど、長く仕事をしている者たちは〝名切り〟の名を知っていたようで、先ほど以上に驚き言葉を失っている。
海外における名切りの逸話は、現在では一種の都市伝説のような扱いだ。
戦後の平和な日本での暮らしで人間になったとも言われ、そもそも、逸話自体が大いに脚色された物であるという見方も出ている。
しかし、湊の身体能力の高さや、化け物じみた回復速度など、人間ではあり得ない生態も目にしてるため、それらは全て真実だったのではないかと考えながら、ナタリアは名切りを知らぬ若い隊員を少し置き去りにしながら会話を続ける。
「レベッカやバーバラは知らないでしょうけど、数年前に名切りの生き残りが死んだって裏の方で小さく話題になったじゃない？　実はその時、ボウヤだけ生き残っていたらしいわ」
「じゃ、じゃあ、あの身体能力も全て鬼の？」
「半分はね。どういう訳か、あの子は自分の一族の事を知らなかったみたいで、まだ全力は出せてないわ。まぁ、ボウヤを日本に帰して欲しいっていう、イリスの依頼をこなすには抵抗の少ない、不完全な方が都合がいいのだけど」
あの演習の日に見せた力や、ラナフで子どもを見殺しにして荒れていたときに見せていた力でさえ、名切りの生き残りである湊の全力ではない。

それを聞いた隊員らは薄ら寒い物を感じながら、暗い表情で黙りこみ、椅子から立ち上がった自分たちのボスの言葉を待った。
一方、立ち上がったナタリアはメールに添付されていた地図を確認し直し、それをパソコンへと転送してから、ミーティングを中断して隊員らに告げる。
「急で悪いけど、イリスの最期の頼みだし、今から準備をして私はボウヤの回収に向かうわ。ラース、チャド、バーバラ、レベッカは一緒に来なさい。回収の成否に関わらず、一度こちらに戻ってくるから他の皆はそれまで留守をお願い」
『了解！』
「……ボウヤには、イリスからのプレゼントも渡さないといけないしね。なんとしても合流して連れ帰るわよ」
イリスの死を信じたくはない気持ちと、大切な友人を殺した者への怒りで、胸中はかなり複雑だ。
だがそれでも、生存の可能性という小さな希望に縋っている今も、友人が自分の命よりも優先した少年の身に危険が迫っている。
遺言に応えるどころか、正体も分からぬ敵に少年が攫われては目も当てられないため、つい先日完成したからと預かっているプレゼントの事も思いながら、ナタリアはカニスの街へ向かう準備をしに部屋へと戻るのだった。

９月２０日（水）
夜――パライナ地区
ＥＰ社の薬品研究所を囲うように天までの昇る火柱。
その光景は近隣に高い山や建物がないこともあり、十キロ以上離れた街からでも見る事が出来た。
あまりに不思議な光景に、地元のローカル局だけでなく、海外のテレビ局までリポートに押しかけ、安全面から近付くことを禁じている警察と消防も集まっていることもあり。周囲は慌ただしい雰囲気に包まれていた。
「ったく、どうなってんだこりゃ。海の水を使い果たしても消えねぇ

んじゃねえか？」
消火に当たっていた中年の消防士の一人が、二日前から燃え続けている火柱を見てごちる。
どれだけ水をかけようが、消火用の薬剤を散布しようが全く効果が見られなかった。
警察の科学班の推測によれば、研究所の薬品に引火したまま、偶然地下に存在した化石燃料の層にまで熱が達して燃えているのではないかとの話しだったが、中年の消防士は流石にそれはないだろうと一切信じていなかった。
火が消えないだけでなく、消火任務に当たっている際、ずっと周囲でマスコミが騒いでいることも消防士の不満の種となっている。
なるべく近くから撮影しようと思ったのか、撮影用ヘリまで持ってきたテレビ局もあったが、火柱がこのまま安定した形状で燃え続ける確証がないため、現在では国と警察が介入してここを中心とした半径三十キロ圏内は飛行禁止令が出されている。
もっとも、その程度の事ではめげないのがマスコミ魂なのか、警察と消防で作った侵入禁止用のバリケードを越えての撮影を試みようとする者も現れており、既に逮捕者が八名出ていた。
「はぁ……今頃、中はどうなってんのかねぇ。内部の空気と水分は火でほとんど飛んじまってるって話しらしいが」
火柱はよく見ると反時計回りに回転しながら昇ってゆく形で燃えている。
自然発生した火はおろか、人工的に作ろうとしてもこんな炎の渦は作れるものではない。
だが、隙間なく安定した柱型の渦形状で燃えている分、内部の状況も少しは予想出来るようで、あまりの高温で焼き続けていることもあり、内部に存在する物は全て灰化しているか、もしくは融解してまるでマグマのようになっているのではと見られている。
また、渦の上昇に合わせて内部の空気は吸われるように燃焼に使われているので、ほぼ真空状態になっており、仮に空気があっても吸い込めば一瞬で喉と肺が灼かれるほどの高温になっているという。

これでは、火が消えても遺骨を集めるのが大変そうだと、消防士がげんなりしていたとき、野次馬とマスコミの人垣を掻き分けて、なにやら近付いて来る者の姿が目に入った。
長い髪を垂らし、俯いているせいで顔はよく見えないが、力無くゆらゆらとおぼつかない足取りで歩いているせいで、もしや騒ぎを見に来た酔っ払いかと疑ってしまう。
だが、近付いてきた相手の瞳が前髪の間から僅かに見えたとき、周囲に居た警察と消防士らも男と同じように息を呑み言葉を失った。
(な、なんだよ、アイツ。生きた人間がどうやったらそんな目になるんだよ……)
一切の光が消えた虚ろな瞳。死んで瞳孔の開いた人間の方がまだ生きているように見える。
なるべく近い位置で火柱を見ようとしていた者たちが、驚いた様子で慌てて道を開けた事も頷ける。
いま近付いてきている者は何故だか気配を全く感じず、そこだけぽっかりと存在が欠落しているような違和感を抱き、本当にこの世のモノなのかという不安を拭いきれない。
幽霊がいるとすれば、実際にこんな感じなのだろう。自分たちのいる現世と彼らのいる常世の存在は根幹から違っている。
男はやってくる少年らしき物を見つめ、そんな考えに至った。
「……っ!? お、おい、待て待て！ こっから先は通せねえ。誰か知らんが他のやつらのとこまで戻りな！」
存在自体が異質なモノが近付いてきたとき、男はようやく正気に戻り、火柱へと向かっている少年を呼び止めた。
それに反応するように、他の消防士と警官も集まってきて、相手を囲う形で行く手を阻む。
このまま近付けば、火柱の周囲で渦巻いている超高温の熱風で焼け死んでしまうのだ。
ただでさえ、よく分からない状況だというのに、これ以上の問題を起こしたくはなかった。
「……どいて、くれ」

だが、俯いたままの少年は、一度は止まったというのに一言呟いて再び歩き出そうとする。
相手の肩や腕を掴んでいた者たちは、しっかり押さえているのに、どうして何事もなかったかのように歩き出せるのか理解出来ない。
制止する者らを引き摺るような形で進み出す少年を、今度は別の警官が拳銃を構えて止まるよう警告する。
「止まれ！　バリケードよりもこちら側は現在侵入を禁じている。この警告を無視した場合、即座に発砲するぞ！」
「ほれ、警官もああ言ってるんだ。何の用か知らないが、坊主もすぐに戻れって。今なら逮捕も拘束もされないで済む」
足取りはおぼつかない癖に、やけに力の強い少年を全員で何とか止めようとしながら、悪い事は言わないから素直に従うよう説得する。
けれど、やはり少年は説得にも警告にも応じる気がない様で、微かに聞こえる程度の声量で言葉を返してきた。
「……どけ」
「そうはいかねえって。あんまし困らせ」
「ミックスレイド――――百鬼夜行・大紅蓮地獄」
男が言いかけている途中で、少年が両手に出現させた〝節制（座敷童子）〟と〝月（赫夜比売）〟を司る二枚のカードを握り潰すと、突如地面に黒い霧が噴き出した。
少年を中心に拡がってゆく影で出来た霧、それが覆った空間は火柱の余波ごと全ての熱が奪われてゆく。
周囲の者が寒さに耐えその光景に慄いていると、少年は前髪の間から覗いた虚ろな瞳で自分を阻む者らを捉え、右腕を横に振るった。
すると、少年の動きに合わせるように、地面を覆っていた黒い霧から実体を持った巨大な影の腕骨が現れ、少年を阻んでいた者らを薙ぎ倒す。
『ぐわぁぁぁぁぁっ!?』
薙ぎ倒された者らは突然の事に理解が追い付かず、痛む身体を手で押さえながら立ち上がり、再び火柱へと進んでゆく少年をただ見送るしかない。

先ほどまで地面を覆っていた黒い霧は既に消えている。
薙ぎ倒された痛みが今も続いていることで、影で出来た骨の腕が現実に存在していたとはっきり認識出来るが、あまりの事にやはり現実感が湧かない。
「いってー……てか、あの坊主なんで進めんだよ」
周囲の者らがカメラや携帯が動かないと騒いでいるのが耳に届くが、それよりも男は少年が熱風の吹き荒ぶ暴風圏内に入っても、一切歩みが止まっていない事の方が気になった。
自分たちが防火服を着ていながらも近付くことは不可能だと諦めた距離である。
普通の人間ならば、とっくに全身が熱で爛れて死んでいるに違いない。
そして、信じられないと驚いている間に、少年はついに火柱に辿り着いて中に入って行ってしまった。
「……やっぱ、幽霊の類いか？　うえ、触っちまったぞ。こりゃ、明日にでも教会に行くしかねえな」
こんな天に届く火柱という異常な物の近くにいるせいで、自分は疲れて幽霊か幻を見てしまったに違いない。
男はそう思う事にして、気を取り直して警察と一緒に火柱へ一般人が近付かぬよう注意することにした。
だが、立ち上がって火柱に背を向けかけていたその時、男たちがいる一帯を大きな揺れが襲った。
「なっ、なんだっ!?　地震かっ!?」
思わず地面に座り込み、手と足を使ってなんとか踏ん張り耐えようとする。
周りの者も立っていられなくなり、同じように地面に手をついていた。
火柱に続いて地震とは運が無い。これも地球温暖化の影響かと、何ともずれた方向に発想を飛躍させ男が火柱に目を向けたとき、どういう訳か火柱に変化が起こっていた。
「火柱が、消えていく……」

周囲が突然の揺れに戸惑っているとき、男たちの目の前で火柱がほぼ一瞬のうちに霧散して消えた。
そのとき、何やら黒い物体が炎から飛び出し去って行っていた気もするが、揺れも治まったことで警官が火柱の消失を本部に無線で伝え、熱が治まってから消防士らも施設の跡地へ向かうという方針を固めた。
もっとも、施設のあった場所には、ただ巨大な穴が存在しているだけとなっているのだが、それを他の者が知ることになるのは、実に六時間以上経ってからのことであった。

深夜――パンテル・カニス
湊とイリスが宿泊していた『真夏の夜の夢』の店主であるマダム・リリィは、二人が依頼で出掛けた先で火災事故があったというニュースを見て、帰りの遅い二人を心配しながら待っていた。
帰ってくる予定日から既に二日経っている。
その間、どれだけ連絡しても返事は返って来ず。もしや事故に巻き込まれたのではと思い、心配して酒場も普段より早めに閉めて、彼女はカウンターに独り座っていた。
（ハァ……イリスも小狼ちゃんも大丈夫かしら？　事故に遭ってないといいけど）
今でこそ酒場のオーナーとして働きつつ、裏では情報屋と仲介屋を営んでいるが、元フランス軍人という経歴を持つ彼女は、特別部隊の出身で自身の腕前も他人の力量を測る力も優れている。
その彼女の目から見て、二人は一級の実力を持つ仕事屋だ。
まだ年若く、経歴も浅いはずの湊など、オカマでも未だに身体は鍛え上げられた男のままであるリリィでさえ、本気でこられれば一撃で仕留められる力を秘めていると見ていた。
実力もセンスもズバ抜けた二人が、事故に巻き込まれたくらいで死ぬはずがない。
そう信じながらグラスを磨いていたとき、静かに扉が開らき、ついに待ちわびていた少年が帰ってきた。

「っ、小狼ちゃん！　あぁ、良かったわぁ。ずっと連絡がつかなくて心配していたのよ？　でも、帰ってきてくれて本当に良かった」
帰って来た少年を見たリリィはホッと安堵の息を吐き、出迎えるため腰を上げて少年の元まで進む。
どういう訳かトレードマークの黒いマフラーがなくなり、代わりに同じ色の大きな布の包みをまるでお姫様抱っこのように持っている事が気になる。
だが、それよりもイリスの姿が見えない事の方が気に掛かったので、先にそちらについて尋ねようとしたとき、昔、戦場で嗅いだことのある人の焼けた臭いが鼻に届いた。
「小狼ちゃん、その包みの中身はなに？　それにイリスはどうしたの？」
それは間違いなく湊の抱えている包みからしている。リリィは表情を真剣な物にして、すぐに湊を問い質した。
すると、問われた少年は俯いていた顔を僅かに上げ、生気の宿らぬ濁った瞳で見返し、ぽつりと呟いて答える。
「……これはイリスだ。俺が、殺した」
「な、何を言っているの？　冗談を言ってる場合じゃないの。本当の事を話して？」
「……脱出に失敗したから、証拠を消すために施設ごと焼き払ってやった」
湊の話しが真実ならば、ニュースで報道されていた大火災は湊の手による人災ということになる。
けれど、あんな天まで伸びる火柱を人が火を放った程度で作れる訳が無い。
また、完全に感情が消えているというのに、足手纏いだったから殺したと話す少年が、どこか泣いているような悲しい顔に見えたため、リリィは湊の話しは全てが真実という訳ではないと予想した。
もっとも、包みの隙間から僅かに見えた中身が、焦げた肉の僅かに残った人骨なのは本当らしく、相手が大切そうに抱えていることもあって、リリィは長い付き合いだった友人の死に涙を流した。

「ぐすっ……どうして、こんな事に……」
「……知り合いの誼で遺体は回収してやったから、夫と子どもの眠る教会の墓地に埋葬してくる」
「うぅ……フランスの……シャテーニュ村よぉ」
「あぁ、知ってる。教会に連絡したら、どういう訳か自分の墓も二人と同じ時に用意してあったらしい。ここへ戻ってきたのは、もう戻ってこない事を伝えるのと荷物を取りに来ただけだ」
イリスから聞いていた彼女の家族が暮らしていた村の名前を伝えると、湊は小さく頷いて荷物を取りに階段を上がって行った。
現在の時刻は既に日付が変わった深夜といっていい時間である。
そんな時間に教会へ連絡をしているなど、知り合いの誼で埋葬するにしては、あまりに手回しが良過ぎる気がした。
＊＊＊
イリスと共に過ごしていた部屋に戻ってきた湊は、彼女の遺体を包んでいる巨大化させたマフラーごとソファーにゆっくり下ろす。
本当はベッドに寝かせてやりたいが、流石に人の焼けた臭いがシーツやベッドに付いてしまってはリリィに申し訳ない。
故に、イリスには少しばかり我慢して貰い。その間に湊は自分の荷物とイリスの荷物をボストンバッグに仕舞ってゆく。
椅子の背もたれに掛かった上着や、テーブルの上に置きっぱなしになっていた彼女の万年筆と依頼リストを見ると、イリスが自分の名を呼びながら部屋に入ってくるのではないかと思ってしまう。
だが、そんな事があり得ないことは、彼女の死ぬ瞬間を視ていた自分が一番分かっている。
そうして、莫迦な考えをすぐに捨てて、湊は片付けを再開してすぐに荷物をまとめてしまおうとする。
（……イリスの服なんて、もう使い道もないな）
現在の背丈ならば、イリスの着ていた服を着る事も出来る。
しかし、このまま成長していけばすぐに着れなくなるため、彼女に買って貰った服があるのだから、わざわざ相手の服を着る必要もないだろうと鞄に仕舞いながら、これらの処分方法について考える。

（タロット……イリスの夫の形見か）
イリスが自分の持ち物の中でも値打ち物だと言っていた、ケースに入った古いタロットの完品デッキを鞄の中に見つけ手に取る湊。
占い方は彼女から習ったので知っているし、その精度も占い一本で食べていけるだろうと言われた。
元々は趣味だったが本格的に研究し、現在では現実世界の占い師らよりも高精度で占えるマーガレットですら、湊の占いは予知のレベルだと悔しそうにしながら認めている。
だがやはり、運命論を嫌う湊は占いを信じる気にも認める気にもなれず、〝アンティークなタロットカード〟と丁度依頼の条件を満たした、イリスの夫の形見から彼女自身の形見になったタロットをマーガレットに譲ってしまおうと考えた。
（……いっそ、全部燃やした方がすっきりするかもしれない）
必要な人間がいるのなら、その分は譲ってしまい。残った物は形も残らないように処分してしまおうか。
どの荷物を見てもイリスの事を思い出してしまうため、湊は虚ろな瞳でペルソナのスキルを発動しようとした。
幼い頃からの体験により、炎は湊にとって破壊のイメージを持っているのだ。
自分の両親も燃えて死んだ。イリスも自害していなければ、死因は毒ではなく焼死になっていたかもしれない。
同じように他の物も全て燃えてしまえばいい。存在した痕跡ごと、この世から全て消えてしまえばいっそ清々しいだろう。
（……だが、今はイリスを家族の元へ連れて行ってやろう）
遺品の処分は後でも出来る。
だからこそ、それらは後回しにして、今はイリスを出来るだけ早く家族と共に安らかに眠らせてやりたいと思う。
全ての荷物を纏め終わった湊は、イリスの遺体を包んでいるマフラーに全て仕舞って静かに部屋を出た。
＊＊＊
イリスの遺体を包んだ布を大事に抱えて階段を下りてきた湊が外

へ向かうので、リリィもハンカチで涙を拭いながら見送りにゆく。
外はまだ真っ暗で人の姿はなく、日中の賑わいが嘘のように街は静まり返っている。
「ぐすっ……お休みが取れたら、花を手向けにいくわ。でも小狼ちゃん、イリスの弔いが終わったら貴方はどうするの？」
「……分からない。でも、きっともう依頼は受けない」
仮面舞踏会としての仕事は、自分を鍛えることとチドリが一生金銭面で苦労しないよう金を稼ぐことを目的としていた。
チドリは湊が稼いだ金に一切手を触れていないが、その預金は既に五億を超えているので、余程豪遊しない限りは安心して良いだろう。
稼ぎが必要ないのなら、後は自分を鍛える以外に依頼を受ける理由はない。
そして、血に目覚めて現在も細胞が変化を続け、知識と技術も過去の名切りの記憶から引き出せるようになりつつある今、自分を鍛えるという理由も湊は失った。
ならば、もうこんな血生臭い世界に残る必要もないため、リリィも湊が安全な日常に戻るならその方が良いと考えた。
「心が癒えても、貴方は戦いから離れていた方が良いわ。優しい小狼ちゃんには似合わないもの。イリスもきっとそう思ってるはずよ」
「……そうだったら、どんなに良かっただろう」
両腕で抱える包みを強く引き寄せ、湊は星の輝く夜空を見上げて溢す。
「……何も分からない。どうして俺は、こんな世界を助けてしまったんだろう」
「小狼ちゃん？」
「……世話になった」
「っ!?」
別れを告げた直後、湊の背後に異形の黒い化け物が現れ、そのまま空中に飛び上がって去ってしまった。
突然のことに困惑しながら、リリィは先ほどの〝死〟を連想させる存在が何なのか理解しようとする。

だが、理解しようとすることを本能が拒み、そのせいか酷い頭痛を感じてリリィは地面に座り込む。
（あ、あれは、〝死〟その物だわ。どうして、小狼ちゃんはそんな物を抱えて生きていられるのっ）
理解を本能が拒む筈だ。何せ、あれは生物が生きていて理解出来るはずの無い〝死〟その物なのだから。
どうして死が具現化できるのかも、それを湊が使役しているのかも分からない。
けれど、生きたまま死を内包してしまっている少年の身を案じ、リリィはいつまでも不安を心から取り除くことが出来なかった。

第八十四話　葬儀

――桐条コンツェルン・本社

グループの運営をしながら、影時間の研究を進めるという多忙な日々を送っていた桐条武治。

本日もまた分刻みのスケジュールを過ごすため、予定に目を通しながらメールの確認をしていると、夜中のうちに屋久島の研究所からメールが届いていたことに気が付く。

相手は深夜だからと電話ではなくメールにしたようだが、むしろ、夜中でも叩き起こして貰って構わなかったと内容に目を通していた桐条は思った。

（七式アイギスが突然目覚めて脱走しただと？　職員の制止を振り切り、〝あの方〟なる人物の元へ向かった……）

実際にアイギスを止めようとした職員らの証言を元に、このメールを送ってきた代表者は彼女の目的を推測したらしい。

任務時における命令の優先権が書き換えられていることや、対人用の安全装置が解除されていること、桐条の中でも最上級機密である対シャドウ制圧兵装にそのような細工が行われている時点で十分に問題だ。

しかし、メモリに触れないようにしていたはずなのに、彼女が口にした〝あの方〟と呼ばれる人物は、職員の目を掻い潜っていつの間にかアイギスのマスターのような存在になっていた。

内部の者の犯行ならば、修復や改良名目で接触の機会があるため、そのようなプログラムを組み込む事も可能かもしれない。

だが、非常に考えづらいことだが、これが外部の者の犯行であったならば、桐条のサーバも含めてセキュリティを組み直さなければならない。

世界でもトップクラスの厳重なセキュリティを突破し、職員らにばれないようプログラムを書き換えるウイルスを仕込んだ。

アイギスは基本的にネットワークから切り離されていたため、タイミングとしては、システムチェックで一時的に桐条のサーバへとバッ

クアップを取るため繋いだときに感染したのだろう。
近々サーバを増設する際にセキュリティも組み直させるつもりだったので、ハッキングの痕跡等を詳しく調査させるのは構わない。
けれど、メールを読み終えた桐条武治は、プログラムを書き換えた犯人はアイギス本人だろうと推測していた。
(……八雲君は留学中だったか。海外での情報は一切入っていないが、アイギスが慕う相手など彼しかいないはずだ。ならば、彼女の目覚めは何かを感じ取ったと思うべきか)
あくまで個人の推測だが、桐条はアイギスが慕う相手など湊以外にいないと思っている。
接触したのはデスとの共闘時のみ。それでも、破損したメモリから抽出した映像では、アイギスが湊に一種の執着を持っているように見られた。
事故以降に目覚めたという記録は無く。事故以前にも特定の人物をそのように呼んだ報告はないので、アイギスのいう〝あの方〟は十中八九、現在は海外にいる湊だろう。
他のペルソナ覚醒候補者を遠目から監視している桐条の調査員が、一時帰国して監視対象と接触した湊を見つけたときには、急いで応援を呼んで同じようにマークしている。
だが、どういう訳か途中で見失ってしまい。その間に再び出国しているせいで、桐条側は未だに湊がどの国へ留学しているのか把握出来ていない。
地域によっては非常に危険な場所もあるため、湊が何かに巻き込まれたことを感じ取り、アイギスが突然目覚めたことは十分に考えられる。
ペルソナは未だに全容を解明できていない不思議な力だ。共鳴にも似た、能力者同士を繋ぐ何かがあるのかもしれない。
(屋久島から飛び立ったセスナは、中国の黄山市付近へと不時着したという。ならば、アイギスもどうやってか彼が海外にいることを知り。現在もそこへ向かおうとしているに違いない)
とりあえず上海を目指し、エリザベスとの会話で当面の目標をトル

コに決めたアイギスだが、彼女の乗っていたセスナは何故だか上海から大きくずれた場所に落ちていた。
地元の警察と現場に向かった軍が調べても誰も乗っておらず、機体を引き取りに向かった日本側の者が調べても、不自然に配線が壊れている以外、通信記録すら何も残っていないという。
けれど、誰も乗っていないということは、セスナから降りたアイギスは現在も単独で行動している証拠。
ほぼ同時期に、ヨーロッパの方では天まで伸びる謎の火柱が数日発生する事故も起きている。
どう見ても自然発生した炎でないことから、あれを湊のペルソナが生み出したと考えれば、湊の身に何かが起き、アイギスもそこへ向かっていると見ていいだろう。
（抵抗を受けるかもしれないが、これは早期に両者の保護が必要だな）
広い海外で特定の二人を見つけるのは難しいが、セスナの不時着現場と火柱の発生した地点を結んだ範囲から、海外の桐条グループの者らに二人を探させてみようと考えた。
グループとしては機密であるアイギスを優先したいが、戦力として考えるのならば、湊の方が優先順位は高い。
何より、親友の息子が生きていることを妻に黙っている身としては、罪滅ぼしではないが、せめて、彼の身の安全を確保してやりたいと思った。
そうして、今後の方針を決定すると、桐条はその旨を組織の極一部の者らに通達し。桐条グループも湊とアイギスの捜索に乗り出すのだった。

9月21日（木）
午前――真夏の夜の夢
イリスの死を知り、湊が去って行った同日。
どこか沈んだ様子でリリィがグラスを磨いていると、入り口の扉が開きベルの音と共に誰かが入ってくる。
ベルの音が聞こえたリリィは、条件反射で顔を上げてお客を迎える

挨拶を口にした。
「いらっしゃいませ！」
いくら悲しい事があったとしても、彼女もこの仕事を長く続けてきたプロだ。
挨拶の際に浮かべる笑顔には、先ほどまでの影は一切混じっておらず、迎えられた初老の男性も笑顔で返してきた。
「どうも、こんにちはマダム」
「あら、グロスマンさん！」
杖を突いて歩きながら、被っていた帽子を脱いで挨拶した男の名前はエックハルト・グロスマン。
彼は先日リリィが仲介して湊とイリスに仕事の依頼をした人物である。
そう、イリスが死ぬこととなった、久遠の安寧の薬品研究所から薬か調合リストを盗んできて欲しいという仕事の依頼主だ。
グロスマンは歩いてリリィの前のカウンター席に腰掛けると、ホットのコーヒーを頼んで、相手が用意している間に話しかけてくる。
「今日は、先日した依頼の進行状況を聞きたくてお邪魔したのです。小狼さんかダランベール氏はいらっしゃいますかな？」
「え、えっと、それが……今朝、出て行ってしまったんです」
「なっ!?　ど、どういう事ですか？」
状況が理解出来ない。そう思っている事がありありと分かる表情で、カウンターへ乗り出す様に腰を上げた相手へリリィは訳を話す。
「ニュースでやっている研究所の火災事故はご存知でしょうか？」
「え、ええ、それを聞いて不安になって訪れたのですが、もしや、何かあったのですか？」
「はい。依頼自体はどうやら成功したみたいです。でも、あの事故でイリスが……」
リリィの言葉を聞いた相手は息を呑み、ゆっくり腰を下ろして暗い表情のまま俯いた。
自分の依頼が原因で相手が命を落としたのだ。孫のために非合法な手段に頼ったにしろ、ただの一般人がそれに罪悪感を覚えない方が

おかしい。
カウンターに視線を落したままコーヒーに口を付ける相手へ、リリィは相手を気遣いながら静かに言葉を続ける。
「小狼ちゃんは、イリスを故郷で弔うために今朝去って行ったんです。グロスマンさんも今から向かえば会えると思いますが、声をかけるのはどうか葬儀が終わってからにしてあげて欲しいんです」
「え、ええ、勿論です。それで、ダランベール氏の故郷とは？」
「フランスのシャテーニュ村です。墓地は教会にしかありませんから、教会に向かえば会えるかと」
本当はしばらくの間、湊をそっとしておいてあげて欲しい。
だが、グロスマンも孫の病状が悪化する前に、少しでも早く投薬治療に移る必要があるとリリィは理解している。
お互いの事情を察した上での妥協点が彼女の言ったタイミングなので、相手が素直に受け入れてくれたことに感謝した。
そうして、しばらく視線をカップに落とし、無言でコーヒーを飲んでいたグロスマンが立ち上がると、相手は財布から少し多めの料金をカウンターに置いた。
「……分かりました。教えて下さりありがとうございます。コーヒー、美味しかったですよ。孫が元気になったら、一緒にまた来ます」
「はい、是非お待ちしています」
穏やかな笑みを浮かべて帰る相手を扉まで見送る。
この相手なら、きっと湊のことも気遣った対応をしてくれるだろう。
そんな安心感を覚えながら、去っていく相手をリリィは見えなくなるまで見つめていたのだった。
――フランス・シャテーニュ村の教会
首都であるパリから南東に位置する、山や森に囲まれた長閑な田舎。
そこにイリスと彼女の家族が暮らしていたシャテーニュ村はあった。
マダム・リリィの『真夏の夜の夢』があるカニスの街との距離はお

よそ三四〇〇キロ。飛行機ならば数時間で着く距離だが、湊のペルソナでも流石にマッハで飛べる者はいない。
しかし、シャドウの時流操作で自分を周囲よりも加速させ、問題点をクリアした湊は朝のうちに既に到着していた。
教会に向かうと高齢の司祭と若いシスターが、昨夜のうちに連絡していた湊を出迎えてくれた。
僅かに肉の残った骨を包んでいる布を、とても大切そうに抱いた少年の瞳を見た二人は言葉を失い。どこか気遣いながら用意していた棺の元へ案内する。
「……さぁ、彼女をゆっくり寝かせてやりなさい」
眼鏡をかけ長い白ひげを蓄えたニコラ司祭に言われ、湊はイリスを棺に寝かせて布を解いてゆく。
フランスでは火葬も行うようになったが、今でも土葬が一般的だ。
イリスの遺体はほとんど焼けて骨だけになってしまっているものの、彼女をもう炎に晒したくないという湊の意向により、一般的な土葬と同じように棺に納めて埋葬することになっている。
そうして、湊が棺から一歩下がったところで、ニコラ司祭と共に若い修道女であるシスター・アンナが十字を切って祈りを捧げた。
「本当は、ちゃんと届け出をしないと葬儀は出来ないんです」
二人の祈りを虚ろな瞳で眺めていた湊へ、祈りを終えて振り返ったシスターが声をかける。
彼女の言った通り、フランスでも日本と同じように死亡診断書をはじめとした、諸々の書類の提出と手続きを公的機関にしなければならない。
けれど、イリスは自分の夫と息子の墓を建てるとき、自分の名も一緒に刻んでいた。
裏の仕事という危険な世界で生きると決めたのだ。その時点で同じ場所で眠ることは出来ないと諦めていたに違いない。
だからこそ、せめて墓標でだけは家族と一緒にいたい。そんな彼女の想いを聞き届け、当時ニコラ司祭はイリスの名も夫と息子と並ぶ形で刻むことを許可したのだ。

そして、フランスの墓は掘った穴に直接棺を納めるのではなく、縦に長い棚構造のちょっとした地下室のような形で、寝かせた棺をいくつも納めるようになっている。
イリスが依頼した棚は三段なので、墓石をどければすぐに彼女の棺を納める事が出来るため、彼女の仕事を少しばかり聞いていたシスターは今回の届け出は不要な旨を告げる。
「ですが、きっと死亡診断書は発行されませんから、お墓の点検のフリをして棺を納める手筈になっています。事情を知っている村の方々が手伝ってくれるそうですが、彼らも彼女にお別れを告げても宜しいでしょうか？」
時流操作を過去方向に進められたなら、湊はすぐにでもイリスの焼けた肉体を復元してやりたかった。
あんなにも生命力に溢れ美しかったイリスも、今では焼け焦げた黒い肉が僅かに残り、頭蓋骨には貫通する形で二つの孔が開いた、ただの骨だ。
いくら彼女の事情を知っている者だろうと、こんな姿で見せるのは彼女に悪い気がした。
故に、湊はとても小さな声でぽつりと溢す様に返す。
「……この姿を晒すのは、あんまりにも可哀想だ」
「分かっています。なので、棺を完全に閉めた状態で、献花と挨拶のみで我慢していただこうと思っています」
「……それなら良い。俺なんかに見送られるより、きっと喜ぶだろうから」
「そんな事はありません。彼女はここへ連れて来てくれた貴方に感謝しています。見送りにも参加して欲しいと思っているに違いありません」
自分を卑下する言葉を吐いた湊の手を優しく包み、シスターはそんな事はないと微笑みかける。
会話が成立していることが不思議なほど、今の湊からは一切の生気が感じられず、瞳は本当に死んでいるのではないかという濁った色をしている。

そんな状態の人間に必要なのは休養と他者の優しさだ。
今は大切な人の死で自暴自棄になっているだけ、そう思って湊を気遣い。優しい言葉をかけるよう心掛けていたのだが、
「……自分を殺した相手に思うわけないだろ」
そう言い残し、湊はシスターの手を振りほどくと、イリスを包んでいた黒い布を手に持ったまま、マフラーを洗って花を買ってくる、と言い残して教会の二人に背を向けて歩いて行ってしまった。
司祭もシスターも、自分の事を何も話さない相手の言葉が真実かどうかは分からない。
だが、少年がイリスの死に責任を感じていることだけは理解出来た。
全て自分のせいだと思いこみ、他者を拒む姿はあまりに痛々しい。
イリスの棺を閉め、村民に葬儀について知らせる準備をしながら、司祭とシスターは自らを追い込んでいる少年を救うため力をお貸しくださいと神に祈りを捧げた。
＊＊＊
湊が花を買いに出ている間に、司祭とシスターが村民にちゃんと伝えてくれたようで、教会の中には多くの人で溢れていた。
教会の入り口と閉じられた棺のまわりには花が置かれ、黒いマフラーを首に巻いた長髪の少年が現れると、喪主だと説明されていたらしく、中年の女性が何名かやってきて湊を抱きしめてきた。
周囲からその一点のみ存在が欠落しているような違和感を放っている少年を、いくら喪主とはいえ抱き締めるのは勇気がいったことだろう。
けれど、そんな様子を一切感じさせず、女性らは涙を流してイリスの死を悼み、湊にどうか笑顔で送ってあげてと声を掛けてくる。
喪主の到着から少しすると葬儀が始まり、聖歌や司祭の追悼説教、聖書の朗読に讃美歌、途中に村民がイリスとの思い出を語るなど、静かに進行していき出棺という流れになった。
外は生憎のどんよりとした曇り空だが、墓地は教会の裏手から少し歩いた場所にあり、喪主とされながらも湊は手向ける花を持ったま

ま、列の最後尾をシスターに付き添われ歩いていた。
「皆さんにお任せして宜しかったのですか？」
現在、イリスの棺を運んでいるのは村民たちだ。
彼女を弔うために連れてきた本人が、最後まで付き添ってやらなくていいのかとシスターは尋ねる。
しかし、湊は最初から自分が喪主だとは考えておらず、イリスを弔いたいとやってきた村民らが望むのなら、彼らに任せて構わないと考えていた。
「……イリスはもう平和な世界に戻ったんだ。だから、俺は最後に少し挨拶をさせてもらえれば、それで十分だ」
イリスは既に平和な日常側へと還った。湊がチドリやアイギスに居て欲しいと願う場所へ。
故に、見送りも同じ世界の住人らに任せるべきだと話す。
ただ、最後に挨拶を望んでいることが、湊なりの未練なのだろう。
口で言うほど全てを村民らに任せる訳ではなく、自分で見届けた上で、イリスに別れを告げて去るつもりのようだ。
そして、それ以降、式が終わるまで湊は一言も話さなかった。
落ち着いている。達観している。そういった実年齢よりも不自然に大人びた印象の風貌だが、隣で見つめていたシスターからすれば、墓下へ降ろされた棺を眺める横顔はどこか不安げで泣いているように見える。
棺が完全に収容され、蓋をするようにゆっくり墓石が戻されているときなど、花を持っていない手の拳を強く握り締めて何かに耐えていた。
墓石を戻し、土を被せて、司祭が祈りを捧げると、村民らは花を手向けてから湊に声を掛けて去って行った。これで葬儀は全て終了だ。
本来ならば、通夜のように死者との別れの期間を数日設けるが、イリスの葬式が公に出来ない事を皆理解していたため、少し慌ただしくも半日で終わるように手配してくれた。
帰って行く参列者に湊は頭を下げて見送り。小雨が降り出したことで先にも戻っておくと告げて司祭も帰ったことで、イリスたち家族

の墓前には湊とシスターだけが残る。
すると、一歩、一歩進むような、そんな足取りで墓のすぐ前にやってきた湊は、しゃがんで花を手向け、どこか無理をして作った穏やかな笑顔で墓石に語りかける。
「……俺はもう大丈夫だから。仕事はもうしないし。何かあっても独りでやっていける」
仮面舞踏会と小狼の名を捨てる訳ではない。
しかし、もう依頼を受ける気はない。血に覚醒した今、仕事を続ける意味を失ったのだ。
日本に帰ってからどうするかは決めていない。それでも、湊はもう仮面舞踏会として仕事をする気はなかった。
墓石に触れながら眠る相手にそれを伝えることで、心配性だった彼女を安心させようと湊はさらに言葉を続ける。
「もう、戦わなくていいんだ。何かを奪う事も、誰かを傷付ける必要もない。だからイリスも……本当の家族と一緒に……安心して、静かに……眠ってくれ」
言葉を詰まらせながらも最後までどうにか言い終える。
だが、強く降りだした雨に打たれ、手と膝をついたまま顔を俯かせて肩を震わせる少年はもう限界だった。
イリスを弔うまでずっと気丈に振る舞っていた少年の、そんな悲痛な姿にシスターは静かに涙を流し、服が汚れることも気にせず、そっと隣に腰を落として相手の肩を抱きしめる。
「……我慢しないでください。誰も見ていませんから」
「っ……」
優しく掛けられたその言葉に、今まで保っていた湊の心の堤防が決壊する。
「死なせないって、言ったのに……俺はまた守れなかったっ!!
最初から力を使っていれば、こんな事にはならなかったのにっ」
縋るようにシスターに抱き付き、膝に顔を埋めて、自分はまた守れなかったと心のままに湊は叫ぶ。
七年前、両親を失ったことで戦って守る事を選んだ。

しかし、己の無力により、自分を庇ってチドリに怪我を負わせたことで、代償を払ってでも力を得ようと足掻いた。
それでも足りず、被験体たちの多くを死なせたことで、自身の心を捨てて敵は全て殺すと決意した。
そうして、何千という屍を築いて今日まで戦ってきたというのに、自分のくだらない我儘で力を使わず。不要なリスクを負わせてイリスを死なせてしまった。
「ごめん、イリスっ。俺のせいなのにっ、苦しい思いをすることも、死ぬこともなかった筈なのにっ」
仙道から仕組まれた依頼だったと真実を聞いたところで関係ない。守るために全力を尽くしていなかったことに変わりはないのだから。
人によってはイリスの死は自業自得だと言うだろう。彼女自身も数多の人間を殺してきたのだから、その報いを受けて当然だと。
けれど、湊はイリスが狙われた事を知ってしまった。
彼女に恨みを持った報復ではなく、己に何かをすることが目的で、ただ傍にいるのが邪魔だからと排除されたに過ぎない。
つまり、相手は単純にイリスが目障りだから消したのだ。他の理由は特になく、湊がただ一人でいたなら殺されることはなかった。
背負い過ぎる少年にとって、その事実が何よりも辛い。
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」
弱々しい力で縋ったまま俯いて謝り続ける少年は、その後、シスターに付き添われて教会の部屋へと案内され、シャワーを浴びるよう勧められようが、無理にでも食べろと食事を出されようが、眠りにつくまで一言も喋らなかった。
＊＊＊
シスター・アンナは湊と一緒に教会に戻ってから、濡れたままでは風邪を引くからとシャワーへ案内し、彼が泊まる部屋や食事を用意して、少々無理にでも食べさせてから寝かしつけた。
戻ってきて湊がシャワーを浴びている間に、シスターも別のシャワー室を利用として身体を温め着替えたが、寝かしつけてからも教会

の仕事をしていたため、もう一度風呂に入り直し。ネグリジェの上にストールを纏って就寝前に戸締りの確認をしていると、部屋の明かりが点いていたので、司祭に挨拶をしに部屋へと向かう。
控えめにノックをすれば、すぐにどうぞと返事が返ってきたので、シスターはゆっくり扉を開いた。
「司祭さま、まだ起きていらしたんですか？」
「ああ、彼が急に起きてこないか心配でね。ちゃんとまだ寝ていたかな？」
執務机で聖書を読んでいた司祭が心配そうに湊の様子を尋ねてくる。
先に戻っていた司祭は、イリスの墓前での彼の様子を知らないが、シスターに支えられながら帰って来た姿を見て、大体の事情は察したらしい。
鞄一つ持っていなかったので、名前も含めて本来の素性を知ることは出来ていないが、それでも多くの人々を見てきたことにより、湊がまだ未成年の子どもだということは理解している。
そんな子どもが、身近な人間を亡くして全く動じない訳が無い。
教会に来たときからの態度で、かなり無理をしていることもお見通しだったらしく、ずっと世話を焼いていたシスターから見た湊の状態を司祭は聞きたがっていた。
「……あの子は今、身も心もボロボロです。身体もすごく軽くて、手を握ってあげていないと寝付けないくらい弱っています」
「無理もない。あんな幼い少年が他者の死で自分を責めるくらいだ。きっと、とても大切な人だったんだろう」
今の湊は大切な人を亡くし憔悴しきっている。
ベッドに横になっても寝付けず。見かねたシスターが眠れるまで手を握ってあげることで、僅かに不安が薄れたらしく、ようやく眠ったくらいだ。
食事をさせている間に名前などを尋ねても何も答えず、心と一緒に言葉まで閉ざしてしまったと感じた。
あの様子では起きてもすぐには動けないだろう。

少しずつ時間を掛けて、ゆっくり心の整理を付けて傷を癒してゆくしかない。
「司祭さま、あの子をしばらく教会においてあげても宜しいですか？
あの子に必要なのは、心の休養です。あんな状態の子どもを放っておくなど、私には……」
「ああ、いいとも。彼が自分の足で立ち上がれるまで傍にいてやりなさい」
心から訴えるように頼んできたシスターへ、司祭はにっこりと穏やかに微笑んで頷く。
独りでは立てぬほど傷付き、また、自分の進むべき道を見失った迷える小羊を導くのも自分たちの務めである。
今の湊は、数年前、ナタリアに支えられて夫と息子を埋葬しに帰って来たイリスとどこか重なるため、当時の彼女に何もしてやれなかった司祭にとっては、罪滅ぼしとして湊に何かしてやりたいとも思っていた。
なにより、ここ数年、墓参りに一人で帰ってくる度、放っておけない少年がいるとイリスが楽しそうに話していたのをよく覚えている。
彼女から聞いていた特徴と湊の容姿が一致することから、湊がその少年であると感付いていた司祭は、イリスから聞いていた少年の名をシスターに伝えることにした。
「そういえば、彼女は少年を小狼と呼んでいたよ」
「中国の生まれなのですか？」
アジア系の顔付きだと思っていたが、瞳が金色だったことで、湊がどこの生まれか不思議に思っていたシスター。
そして、司祭の告げた名前が中国語であると判断し。ならば、出身も同じく中国なのかと尋ね返す。
日系ブラジル人や中華系アメリカ人など、人種と国籍が違うパターンも考えられるので、生まれ自体はどこでも良いのだが、せっかくなので世話する少年の事を知っておきたいと考えた。
すると、尋ねられた司祭は首を横に振ってから、イリスに聞いていた情報を簡潔に纏めて話す。

「いいや、彼は日本人だ。ただ、あの歳で危険な仕事をしているらしい。小狼という名前は、それ用の偽名だろう」
「日本人なのに金色の瞳なんて珍しいですよね。ハーフやクォーターでしょうか？」
「そこまでは聞いていないな。しかし、長年神に仕えてきたがあんな少年は初めて見た」
流石にそこまで詳しくは聞いておらず、司祭は少し申し訳なさそうに苦笑してシスターに返す。
けれど、すぐに表情をやや引き締め、机の上に置いた手へと視線を落として何やら考え込んでいるため、シスターは何か少年について思う事があったのか問いかけた。
「あの子に何かありましたか？」
「ん、いや、そうだな。どう説明すれば難しいが、あの少年を見ていると光のような物が時折見えてな。侵し難い純白の光だ」
司祭が湊に見た物、それは少年の身体から全身を包むように溢れだす白い光。
現実にそんな物は発生しておらず、他の者からはむしろ、その長い髪とマフラーを巻いていることもあって、黒のイメージを持たれていることだろう。
湊のいる場所だけ、この世からぽっかりと存在が抜け落ちているような違和感は覚えていたシスターも、司祭がどうして白い光を見たのか分からず、首を傾げて尋ね返す。
「純白の光？　むしろ、彼は黒い衣を多く纏っていますし、心も暗闇の中にいるように思うのですが……」
「ああ、私も自分の見間違いではないかと思ったよ。しかし、絶望の中にありながら、彼の光は増し続けている。命の輝きか、それとも希望の光か。何にせよ、私のような未熟な者でも視えたんだ。普通の子どもではないだろう」
信仰の賜物か、司祭は霊視に似た力によって湊に光を見た。
気のせいだと思いたかったが、雨に濡れて帰って来たときにも同じ光を纏っていたため、思い過ごしではないと今では感じている。

司祭と同じように敬虔な信徒であるシスターには何も見えていないが、強過ぎる光はそれと気付かず近付けば深い闇以上に危険だ。
闇を象徴する黒を纏いながら、白い光を内より放つという、相反する物を宿す少年。
今はまだ大丈夫だろうが、彼が再び自分の足で立つとき、少年の力がどちらに傾くか分からない。
神話でも光を象徴する神や天使が、時に裁きとして人を滅ぼそうとすることがあった。
それは、神や天使にとっての正義が、必ずしも人間にとって良い事とは限らないという話しだが、今の湊の光も同じような怖さを孕んでいる。
少年に見た光が人を救うためのものならば良いが、世界を浄化するためのものであったなら……。
そう考えて、期待と共に不安も感じた司祭は、彼の身を案じているシスターに改めて世話を頼むことにした。
「シスター・アンナ。教会の仕事よりも、しばらくはあの少年を優先してやってほしい。私の見た光は、必ずしも人にとって良いものだとは限らない。どうか、彼の心を癒して、彼を人のままでいさせてやってくれ」
「はい、分かりました。では、私もそろそろ戻りますね。おやすみなさい」
「ああ、おやすみ」
部屋を出て自室へ戻るシスターを見送り、司祭も聖書を本棚へと片付けてから、自分の部屋へと向かう。
どうか何事もなく、ただ無事に少年の心が癒えてゆく事を願いながら。

第八十五話　少年のために、少女達のために

９月２３日（土）
午前――シャテーニュ村・近郊

湊が教会に訪れてから三日。イリスの葬儀を終えてから一言も話さなくなった湊は、仙道に言われてイリスを弔う前の状態に再び戻っていた。

世話をしているシスターが声をかけても何の反応も返さず。起こしに行かなければ昏々と眠り続けている。

食事もシスターが口まで運んでやってようやく食べるほどで、傍についていなければ弱って死ぬまで眠っていそうだった。

流石にこれでは拙いだろうと、少しでも日の光に当てるため車椅子に座らせ、シスターは少し肌寒くなり始めた秋の空気の中、湊と共に村の近くの森を歩いていた。

「今日は少し寒いですね。ついこの前までは暑いと思っていたのに、季節が変わるのは本当に早いです」

シスターが話しかけても湊は何も答えない。

着替えさせるときにシスターが少し手を上げて欲しいと言えば、ゆっくりとでも手をあげることから、音は聞こえていて意味も理解している筈なのだ。

成長を続ける湊の現在の身長と体重は一六八センチ、七一キロ程度。シスターは一六三センチであまり身長差はないように見えるが、最初は衰弱して軽いと思っていた身体も、湊が自分の力で全く動いていなければ、実際は寝ている状態から上半身を起こすのに一苦労するほどであった。

これは別にシスターが非力という訳ではない。むしろ、シスターは普段の教会での仕事でそれなりに筋肉はついており、女性的な柔らかさを保ちながらもそれなりに力持ちだ。

では、何故そんなシスターが湊を起こすのにも苦労するのか。それは、湊の鍛えられた肉体が原因だった。

筋肉は脂肪よりも重い。そして、湊の体脂肪率は四パーセントを下

回っている。
筋肉達磨ではないが、体型の隠れる服を着ていなければ服の上からでもがっしりしている事が一目で分かり。湊よりも身長の高い真田や荒垣と比べて一回り以上逞しく見えるのだ。
そんな見た目以上に重い相手を女性が一人で支えられる訳もなく、車椅子に座らせるときも実際は湊が自分で動いて座っていた。
「風邪をひいては大変ですから、ちゃんとマフラーを巻いておきましょうね」
湊が寒い思いをしてはいけないからと、シスターは湊の前に回ってマフラーを巻き直してやる。
動物の毛でも化学繊維でもない光沢を持った謎の素材で出来たマフラーの、少し癖になりそうなモフモフとした不思議な手触りに、シスターは高級なブランド品なのだろうかと想像する。
そんな現実世界には存在しない素材で作られたこのマフラーには、実は湊も知らない〝夜天の棺〟という正式な名前があった。
プレゼントした本人は当然その名前を知っていたが、流石に黒い棺桶という意味のプレゼントを貰って素直に喜べる者はいない。
けれど、不吉な名を補って余りある機能を有しているため、エリザベスは湊に喜んで貰おうと秘蔵の品を渡したのだ。
また、日本には生前葬をしておけば長生きできると言う話しもあり。変な知識をどこからか仕入れてくるエリザエスもその事は知っていた。
危険な事ばかりしている少年ならば、普段から棺桶に包まれておけば同様の効果が得られるのではないか、という希望もマフラーを贈った理由に含まれているのだ。
「小狼さんはどの季節が一番好きですか？」
車椅子を押して再び歩き出したシスターは、湊に話しかけながら森の中を進む。
話しかけられた少年は何も答えないが、本来ならばあのパライナ地区で心が壊れていた筈だったのだ。
それを、仙道に言われてイリスを弔うためだけに力を振り絞り、

しっかりと役目を果たし切ったのだから、湊が廃人のようになっていようとシスターは責めるつもりはない。
心が壊れてしまったのなら、その壊れた心を再び組み上げればいい。時間がかかるのであれば、身の回りの世話は自分がしてやろう。
そんな風に考えながら、シスターは少しでも湊の心が癒えれば良いと、静かな森の中で穏やかな時間を過ごすのだった。

――高級別荘地・桐条別宅
イリスが死んだあの日、湊の絶望に染まった絶叫は高いレベルでコミュニティを築いた者たち全員に聞こえていた。
その中には、巌戸台から遠く離れた保養地で暮らしている桐条英恵も当然含まれており、自分の大切な息子の声を聞き間違えるはずがないと、湊の身に何があったのか心配していた。
電話もメールも通じず。現在の居場所を知ろうにも、パンテルのカニスという街に滞在していること以外は仕事で一時的に離れるという話しも聞いていない。
湊の絶叫を聞いた日とほぼ同日に、海外では謎の火柱が発生したというニュースを見たことで、もしや、あれは湊の仕業ではとも考えた。
しかし、そうして考えても、結局、こんな田舎にいてまともに情報を集める事など出来るはずもなく。
何か少しでも掴めることはないかと、自室でパソコンを操作して桐条のサーバにアクセスしていたとき、少々気になるデータファイルを見つけた。
（これは……七式アイギスが起動して脱走した？）
圧縮されていたデータをダウンロードしてから解凍し、その中身のＰＤＦ形式の報告書に目を通してゆく。
そこに書かれていた内容は、ポートアイランドインパクト以降、一度として目を覚ます事のなかったアイギスが、どういう訳か英恵が絶叫を聞いたよりも早い時間に突如起動して脱走したという物であった。
厳重に掛けた対人用の安全装置が解除され、命令の優先度も書き換

えられ、〝あの方〟なる人物の元へ向かった模様とのことだ。
対シャドウ兵装シリーズの開発に関わっていた訳ではないため、英恵自身はアイギスのことなど殆ど知らないが、それでもアイギスが執着する人物など、英恵が思い付く限りでは湊しかいない。
となると、アイギスは自分よりももっと早い時間に湊の危機を感知し、その上で湊のいる場所を目指したのだろう。
パソコンの近くに置かれたカップを手に取り、少し落ち着く意味も込めて、英恵は温かい紅茶に口を付けた。
(アイギスが動いたと言う事は、それだけ切羽詰まった状況だと判断すべきかしら)
湊の生まれや適性の高さを知っている英恵からすれば、危険な目に遭う事はあっても、命に関わるような事にはなり得ないと思っている。
胴体を切断されようが、心臓を完全に破壊されようが、デスの力によって蘇生と再生が行われるのだ。
治癒に関してそれだけの力を持つ生物など他にいないので、普通の人間では死ぬ場面でも湊ならば助かるはず。
また、戦闘能力に関しても仮面舞踏会の小狼として名を知られており、ペルソナまで使えるとなれば勝てる者はまずいない。
唯一の弱点として、一切躊躇うことなく平然と自己犠牲を選ぶくらい優し過ぎるという事が挙げられるが、今の湊は相手を敵と認識すれば機械のような冷たさで処理できる。
仮に優しさが原因で窮地に立たされようが、蘇生してから改めて敵と判断した者を殺せば済むため、英恵には湊がどんな状況に置かれてあのような絶望に染まった叫びをあげたのか分からなかった。
(……アイギスの乗った飛行機は中国の山奥に不時着していたのね。武治さんも気付いてアイギスの捜索を命じている。だけど、どうして八雲君の捜索も含まれているのかしら?)
アイギスが脱走したという報告書に目を通し終えると、再び桐条のサーバの方に戻り、桐条グループで何か動きがなかったかを確かめてゆく。

すると、脱走したアイギスが奪ったと思われるセスナが、どういう訳か中国の山奥で見つかったと書かれていた。
不時着とは書かれているものの、機体自体は地面にこすったような傷以外は特に壊れた部分はほとんどなかったらしい。
誰も乗っていなかったことで、飛行機を奪った犯人は現在も逃走中だと地元警察の捜索は続いているようだが、それとは別に桐条グループもアイギスと有里湊の捜索に動いていた。
命じたのは桐条武治本人。アイギスの捜索と同じタイミングで湊を捜索する意味が不明なことから、桐条武治もアイギスの脱走で英恵と同じく湊の身に何かあったと勘付いたのだろう。
（武治さんも気付いたのなら、今後もサーバにアクセスすれば桐条の捜索状況は把握出来る。でも、それでは絶対的に情報が足りない。八雲君の身に何が起こったのかを把握せず不用意に近付けば、敵と認識されて殺されるわ）
名切りの血の覚醒について、英恵は湊の母である百鬼菖蒲から十四歳の誕生日だと聞いている。
湊の誕生日までは約一月残っているが、覚醒において重要なのは、日付ではなく生まれてから十四年経つことであれば、湊はとっくに時期を過ぎていることになる。
影時間はポートアイランドインパクト以降、毎日深夜零時丁度に発生するようになった。
つまり、あの事故現場にいた湊は、影時間が定時に発生するようになってから毎日普通の者よりも一時間長く生きていることになる。
閏年を考えなければ一年間で３６５時間、それで七年間過ごしたのなら、日数にしておよそ百六日多い計算だ。
さらに、英恵は知らないが、湊は現実とリンクしている夢の世界でも、ほぼ毎日ベルベットルームで鍛錬を行っていた。
それらを全て計算に含めれば、残り一ヶ月どころか数ヶ月単位で時期を過ぎていることになる。
（……菖蒲さんも自分の生まれを知ったときはショックだと言っていた。なら、自分の生まれを誰にも話せない八雲君は、その苦しみを独

りで抱える事になる）
湊が自分の過去について周囲の者に話しているのは、両親の死を含めて基本的にポートアイランドインパクト以降の事ばかりだ。
相手を信頼していないから話さないのではなく、自分の生まれについて知らないはずなのに、どこか話したがらないような雰囲気を英恵も感じていた。
何が原因で話したくないのかは分からない。それでも、湊はただ話さないだけでなく、他者との間に壁を作って拒絶しているのだ。
（あの壁を他人が越えるには、私と同じく八雲君の過去を知っている人間が仲介するしかない。でも、あの子にとっては両親に冷たい態度を取っていた九頭龍も敵。他の旧家や名家には、生存を知らせることすらできない）
もしも、湊が血に覚醒してしまったとすれば、例え気を許されている相手であっても、心を閉ざした湊に拒絶される可能性が高い。
その状態からまともに話すのであれば、最低でも湊の出自に対する理解を持っていなければならないのだ。
けれど、湊に気を許された状態で、尚且つ過去を知っている人物など一人もいない。
英恵本人を除けば、子ども同士で親交のあった七歌は条件を満たしていそうだが、残念なことに湊の生存を話す事がそもそも出来ない。
（……アイギスに八雲君の出自を伝える事が出来れば、まだ可能性はあるというのにっ）
二つの条件を満たしている者しか心を閉ざした湊を救えないというのに、身体の弱い自分ではどうあっても助けられない事で、英恵は悔しさから拳を強く握り締める。
湊を中心として事態は動き始めている。だが、このまま進めば間違いなく湊には破滅が待っているだろう。
それを回避するための欠片（ピース）は存在するのだ。
目覚めたアイギス、英恵が菖蒲より聞いた名切りの秘密。これらをどうやってか繋ぐことが出来れば、もしかすれば、最悪の事態だけは避けられるかもしれない。

（もう……迷っている時間はないわね）
大切な息子を死なせる訳にはいかない。そう考えた英恵は、席を立つと厳重に保管してある自分の宝箱から、無駄に達筆な字で書かれたとある連絡先の紙を取り出した。
本来これは、周囲に百鬼八雲の生存が確認されるか、湊がペルソナ使いであることが美鶴にばれてから使う筈だった。
なにせ湊は、自分が桐条武治の妻である英恵と親交があったことも、それが現在も続いているとも周囲に話していないはずだから。
それでも、今これを使うべきだと意を決した英恵は、そこに書かれている番号へと電話を掛けた。

――桔梗組・本部
湊についての情報を集め始めてから数日が経った。
桜やチドリでは出来る事も限られており、桔梗組も海外にはそこまで伝手がないことから、情報屋の五代と仲介屋のロゼッタが海外の知り合いから仮面舞踏会の情報を集めることで事態の把握に努めていた。
しかし、ギルドの組合員であり情報屋をしている五代ですら、情報収集を始めて数日経った今でも、湊とイリスについて碌に情報を集める事が出来ていない。
そもそも、基本的に裏の仕事は守秘義務が発生するので、個人の依頼となると依頼人と仕事屋を除けば仲介人しか情報を得る事が出来ない。
湊がギルドに悪感情を持っていた事もあり、仮面舞踏会はそんな個人の依頼をメインに扱っていたが、さらに日本に居た頃からイリスや五代といった周囲の大人が湊を隠す様に知り合いのこねを使って情報の拡散を防いでいた。
そこまでされると、裏界で最大の規模を誇る情報屋組織の地下協会ですら、大勢が知りたがっている小狼の情報をほとんど掴める訳もなく。
桜達も海外のニュースで見た火柱が湊の起こしたものだろうとい

う、そんな偶然拾えた情報しか手に入れられていなかった。
そうして、今日もどこかに情報がないかを調べつつ五代の報告を待っていると、突然知らない番号から電話が掛かってきた。
現在、この家にいるのは桜だけだ。チドリは湊の情報を集めたがっていたが、周囲の説得で進展があるまで学校に通うように言われ登校し。鵜飼と渡瀬は桜たちの頼みで五代とは別の情報屋をあたっている。
故に、掛かってきた電話には桜が出るしかないのだが、知らない番号だけに誰だろうかと思いながら受話器を取って耳に当てた。
「はい、もしもし」
《あ、はじめまして。桐条英恵と申します》
「っ、桐条さん、ですか？」
電話に出ていきなり名乗ってきた相手の名前に桜は思わず驚いてしまう。
彼女の知っている桐条は、世界でも有数の複合企業であり、湊とチドリに人体実験を施していたあの桐条グループしか存在しない。
相手が本当に桐条グループの関係者であれば、湊とチドリのことでこの家について調べていてもおかしくないため、電話番号くらい知っていても不思議ではない。
けれど、どうしてこんなタイミングで接触を図ってきたのかが分からず。桜は訝しむ様に用件を尋ねる事にした。
「あの、本日はどういったご用件でしょうか？」
《はい。八雲君の、いえ、有里湊君のことでお話しがあってお電話させていただきました》
相手の口から湊の本名を聞いたとき、桐条側には湊の素性がばれている事を理解し、もしもの事があれば何を犠牲にしてでも守らなければならないと即座に桜は考える。
湊はこの惑星に生きる全生命に残された最後の希望だ。
たった一人の少年の死で、この惑星から全ての生命が消え去ってしまう。
俄かには信じ難い話しだが、宣告者であるファルロス自身が語った

事なので、それらは紛れもない真実なのだろう。
故に、いま本人がこの場にいなくとも、身柄の引き渡しには断固として応じないと気を引き締めながら、桜は相手に話しの続きを促す。
「お話しとは具体的にどういった事でしょうか？」
《えっと、その前に、貴女は鵜飼桜さんでよろしいでしょうか？》
「ええ、そうですが」
自分の名前を当ててきたからには、この家に暮らす人間のことも調べがついているのだろう。
たまに組員が泊まることもあるが、実際に住んでいるのは五人だけだ。そのうち女性は中性の湊をいれても三人で、大人は桜一人だけ。
ならば、声や雰囲気で当てる事くらいは簡単に違いないと思いながら、相手の言葉を待っていると、話している人物を特定できてどこかホッとした様子で相手が答えてきた。
《そうですか。では、今回は桐条グループや桐条武治の妻ではなく、あの子と昔から親交のある個人として電話させていただいた事を先にお話ししておきます》
「昔から、ですか？」
《はい。あの子の母親と私は中学の同級生で、七年前の事故があるまでずっと付き合いが続いていたんです。そして、湊君とも数年前に偶然再会したことで、夫や娘にも話さないことを条件にたまに会っていました》
湊と桐条家にそんな繋がりがあったとは知らず、またあれだけ憎んでいる家の者と今でも親交を続けていると知った事で、何も話していなかった湊に対し桜は思わず深い溜め息を吐きたくなる。
夫と娘にも話さないことを条件にしているにしろ、相手が話さないと信頼していなければ湊は条件を出したりもしない。
それは桜にも理解出来るため、完全に信用する事は出来ないにしても、相手の話しを聞いてからもう一度判断してからでも遅くはない。
そう考えながら話しを聞くことにした。
「あの子の呼び方は慣れている方で結構です。それで、みーくんについてのお話しとは何でしょうか？」

《いま、桐条グループは極秘裏にあの子の捜索に動いています。原因は、あの子がチドリさんと同じように大切に想っている、対シャドウ特別制圧兵装〝七式アイギス〟が突如目覚めて施設を脱走したから》
「七式アイギス？　それは一体どういったものですか？」
　桜は湊からアイギスのことは聞いていない。チドリは絵で姿を知っており、誕生日会で名前を教えて貰ったが、それ以外に湊の周辺でアイギスを知っているのは栗原だけだ。
《簡単にいえば、ペルソナを扱うため人格を与えられたガイノイド（女性型ロボット）だと思ってください。彼女は八雲君と一緒にデスと戦った事が原因で、事故以降は一度も目覚めることがありませんでした。しかし、つい先日、私が八雲君の叫びを聞くよりも早い段階で目覚め、〝あの方〟の元へ行くと言って脱走したそうです》
　アイギスがどんな物か分からず桜が尋ねると、英恵は素直に答えてくる。
　ペルソナやデスについてお互いに一切隠さないのは、湊という共通の情報源を持っていることから、影時間のことも全て知っていると言う前提で考えているためだ。
　何より、桜が話す前に英恵は湊の叫びを聞いたと告げた。あの叫びは湊と高いレベルでコミュニティを築く必要があるので、桜も相手を信じて話しを進めて良いと判断する。
「その〝あの方〟がみーくんである証拠はあるんですか？」
《アイギスは戦闘時に出会ったばかりの八雲君に対する執着を持っていました。その戦闘以前に、誰かをそんな風に呼んだ記録はありませんから、目覚めた時期も含めれば、高確率であの子の元へ向かったと思われます》
　聞いて桜は成程と納得する。人工的に心を与えられた機械とはにわかには信じ難いが、機械ならば過去のデータも多数残っているはず。
　その中で湊への執着とその他の人間の呼び方から、〝あの方〟が誰かを特定するのは難しくはないのだろう。
　まして、それらを知りながらあの叫びを聞いた人間であれば、アイ

ギスの目覚めを偶然で済ませるはずがない。
「お話しは分かりました。それで、桐条さんは我々に何をさせたいのですか？　みーくんの居場所を教えろというのであればお断りします。あの子を貴女方に渡すつもりはありません」
《そんなつもりはありません。ただ、孤独に耐えている八雲君を救うため力を貸していただきたいんです。失礼ですが、あの子は事故以前の自分について何か話していましたか？　どこに住んでいたかや、実家はどんな場所だったかなど》
「いいえ。月光館学園に通っていたことは聞きましたが、名前も教えて貰っていませんでした。一応、他の伝手から本名と名切りがどんな一族かは少し聞きましたが」
《……やはり、そうでしたか》
面倒だから話さないだけでなく、意図的に自分のことを話さない湊には少し困っていたが、相手もそれを理解していたらしく。受話器の向こうから溜め息が一つ聞こえてきた。
イリスの話しでは、湊は自分の一族の事を知らないようなので、名切りについて語れないのはしょうがない。
けれど、自分の生まれが鬼の一族であることを隠すならともかく、生まれについて何も知らないのに隠す理由が桜には分からない。相手はその理由に心当たりがあるのだろうか。
そんな風に考えていると、先ほどよりも真剣な声色で相手が話しかけてきた。
《では、あの子の母から聞いた名切りの血の秘密についてお話しします。自分で動くことの出来ない私の代わりに、どうかそれを七式アイギスに伝えてください。ただあの子の信用を得ているだけでは駄目なのです》
その後、英恵の口から語られた名切りの血の秘密に桜は言葉を失った。
五代や父から聞いていた龍と鬼の伝承は間違いだった。鬼の業は、それよりも尚深い。
だからこそ、それを知らずに湊を救う事は出来ないと理解する。清

濁を併せ呑む様に、鬼の業ごと受け入れてやらねば、他者に迷惑がかからぬよう平気で孤独に耐える湊が再び心を開くことはない。
接触していることが桐条にばれれば、湊が二度と会ってくれない可能性もあるというのに。そうなっても自分が我慢すれば良いだけだと、大切な子どもために危険を冒しながら伝えてくれた相手へ、桜は心からの感謝を述べてアイギスへ絶対に伝える事を約束したのだった。

――???

深い深い闇の底、本来ならば一切の光が届かぬその場所でお互いの姿など見えないはずだが、不思議なことに闇の中でもお互いの姿だけははっきりと見る事が出来た。
片膝を立てて抱く様に地面へ座っていた湊は、沈んだ表情でポツリとつぶやく。
「……どうして、こんな事になったんだろう」
「お前はどうしてだと思う?」
湊の呟きに正面で胡坐をかいて座っていた茨木童子が問い返す。
問い返された湊は、すぐに答える事が出来ず、しばし考え込んだ。
イリスが死んだ。殺したのは研究施設を炎に閉じ込めた自分だ。
そう思っていたのに、急に現れた仙道がイリスは何者かの策略によって殺されたと言い残して去ってしまった。
あれが本当の事なのか、それとも正気に戻すための嘘を言ったのか、どうにも判断が付かないことで湊は悩んでしまう。
仮に真実だったとすれば、仕組んだ人間の狙いは十中八九自分だと理解出来る。
そうでなければ、イリスを殺しておきながら自分だけを生かす必要が無い。
「……俺が名切りだから、狙われたのか」
「遥か昔から、権力者は我らを欲した。力、技術、容姿と様々な物に恵まれていたからな。その血を誰よりも濃く受け継いで生まれたお前は、善悪の区別なく人を惹きつけてしまう」

優れた物を望むのは生物としての本能。
誰よりも強い肉体と、誰よりも聡い頭脳を目指して交配を繰り返し、親から子へ技術を継承し続けた名切りを人が欲するのも当然だ。
権力者らは、自分自身の力は大したことがなくとも、所持する兵団、所持する財で他者よりも優位に立とうとしてきた。
兵も財も力にはかわりないと、まるで装飾品のような感覚で集めようとしてくる。
茨木童子にしてみれば、大切な愛子(まなご)を従えようなどと妄言を抜かす輩には、身の程を知れと炎の一撃でも見舞いたいところだ。
しかし、湊は自分の持って生まれた肉体や容姿が問題ならば、それをどうにかすれば解決するのかと問いかける。
「なら、顔でも灼けばいいのか？」
「ふふっ、灼いてもすぐに治ってしまうではないか。流石に四肢の一つを切り飛ばせば生えてきたりはせんだろう。だがまぁ、先達として言わせて貰うなら、隻腕は色々と不便だぞ。お前をしっかり抱きしめてやることも出来んしな」
ペルソナのスキルを使わずとも、デスの蘇生や治癒を利用すれば湊の怪我は簡単に治ってしまう。
けれど、流石に腕や足を生やすことは出来ないはずなので、少年の言葉におかしそうに笑って返しながら、自分も上腕の中ほどまでしか右腕がない者として、茨木童子はそのデメリットを口にした。
暗い瞳で相手を見つめる少年は、彼女がどのような理由があって隻腕になったのかは知らない。
生まれたときからなのか、それとも何かの事故や病気が原因なのかも。
だが、例え隻腕であっても相手の美しさが損なわれているとは思わない。
自分に似た顔つき。いや、この場合、子孫である自分が相手に似ていると言うべきか。
そんな風に考えながら、湊は自分が隻腕になったところで、相手と同じように外見はそこまで変化せず、ただ何をするにも隻腕の不便さ

に悩むことになるだけだと、疵(きず)を残すことで容姿を損ねることを諦めた。
「……もう誰も傷付いて欲しくない、死んでほしくないと思っていた。両親も、アイギスも、チドリも、飛騨さんも、被験体たちも、俺と関わったばっかりに死んだり傷付いたりしたんだ。それなのに、俺はイリスを死なせてしまった」
「なら、どうすればあの女は死ななかったと思う？」
「……俺と関わらなければ死ななかった」
胸を締め付けられるような痛みがずっと自分を蝕んでいる。原因はきっとイリスを失ったからだろう。
失う事がこんなにも苦しいのなら、親しくなどなるんじゃなかった。
エルゴ研脱走時に松本に言われた〝呪われた子ども〟という言葉。それは真実で、本当に自分は呪われた鬼の一族だったのだ。
そんな物に近付いたせいで、皆、不幸になってゆく。
両親は、自分の高過ぎる適性に感化されて適性を得て事故に巻き込まれてしまった。
アイギスは、死に瀕した自分を救おうとして甚大なダメージを負ってしまった。
チドリは、足手纏いの自分を守るために大怪我を負ってしまった。
飛騨は、自分たちを逃がすために幾月の罠にかかってしまった。
被験体たちは、自分を信じたせいで逃げられずに殺されてしまった。
そして、イリスも、自分に付き合ったばかりにこんな最期を迎えることになってしまった。
全部全部全部、呪われた自分が人との繋がりを、人並みの幸せを得ようなどと図々しい夢を見てしまったことが原因に違いない。
「――――なら、俺はもう繋がりなんていらない」
自分に巻き込まれて他人が不幸になるくらいなら、自分はずっと孤独でいよう。
紡いできた絆も、育んできた心も、すべて捨ててしまって構わない。

湊がそう決めたとき、他者との間に芽生えたコミュニティが次々と消えていくのを感じた。
ベルベットルームの住人達も、今頃は慌てていることだろう。湊のコミュニティを管理しているマーガレットのペルソナ全書のページが、黒く塗り潰されてゆくのだから。
けれど、絆を捨てる事を選んだ少年は、まるで周囲の変化を何も感じていないかのような空気を纏って、今も先ほどと同じ悲しそうな表情でただ黙っている。
「どうした？　何か、悲しい事でもあったのか？」
尋ねる茨木童子は、自分でも変な事を訊いていると理解して心の中で苦笑する。
悲しい事など沢山あったではないか。むしろ、両親の死に始まり、心優しい湊にとっては悲しいことばかりであったくらいだ。
デスとの戦いでは座敷童子がオルフェウスを通じて力を貸したが、それは元々、誰も死なせたくないという湊の強い想いがあったからこそ出来たこと。
アイギスに力を貸して欲しいと言われ拒んだのも、自分には力がないと思っていて拒んだだけであり。力があるのなら最初から力を貸していた。
普通の人間ならば、デスと対峙することで嫌でも死を連想するため動けなくなる場面で、この少年にはそれがなかったのだ。
生まれながらの異常者、損得勘定もなく他人のために自分を犠牲に出来る者だからこそ、この少年なら完全なるモノへ至るだろうと茨木童子は考える。
少年を気遣って口にしたこの問いも、そんな少年の変革を促すための布石だった。
「……どうして、自分のために人を殺す事が出来るんだろう。誰も傷付けたくない。殺したくもないのに」
「そんな物は簡単だ。いいか、八雲。人間は決して善性の生き物ではない。幼子であっても、好奇心から虫の翅を千切り、池の魚に向けて石を投げる」

名切りの力を得る際、茨木童子らが負の感情を抱き易くなるよう細工をしなければ、人は本来善性の存在であると信じている少年に諭す様に告げる。
「無邪気というのは、視方を変えれば一切罪の意識を感じていないということ。ほれ、人間と言うのは、幼い頃から無自覚に他者を傷付けられるように出来ているんだ。そんな者たちに善性など期待する方が馬鹿げている」
お前は騙されている。人間はそんなに綺麗なものではない。
そんな彼女の発した言葉を聞いた湊の瞳は、さらに悲しみに染まり暗く濁ってゆく。
ずっと信じていたかったのだろう。例え大量殺人を犯した悪人であっても、何かが切っ掛けで変わってしまっただけで、元は善良な人間であったと。
だが、無条件で人の善性を信じるような、子どもでいる時間は終わったのだ。
「八雲、そろそろ気付け。お前が救った者たちは、全てが善人だった訳ではない。そして、紛れていた悪人らによって、いまこの瞬間も罪のない者らが傷付けられている」
「……全部、俺が悪いのか？」
「いいや、初めから世界とはそういう物だ。お前はそれを知らずに大切な者らを守ろうとしたが故に、今回、イリス・ダランベールを失うはめになった。まぁ、世界ではそんな事はありふれた出来事の一つでしかないがな」
誰かを蹴落とすため、憎しみから復讐するため、理由は個々で異なるだろうが、自分のために人を殺す者などいくらでもいる。
だが、死産に悲しむ親や、恋人を事故で失った者など、今の湊と同じくらい悲しい思いをしている者は、利己的な殺人者以上に巨万（ごまん）といる。
だからこそ、善悪の区別なく人々を守ろうとデスと戦ったばかりに、何の罪もない人々が傷付けられていると考えた少年へ、茨木童子はイリスの死はこの地球でありふれた出来事の一つだと告げた。

そんな残酷な言葉と現実を突き付けられた少年は、何もない地面に視線を落としながら呟く。
「……こんな世界を存続させて、俺は助けるべきじゃなかったのか」
「さてな。お前はただ助けを求められたから応じただけだ。その優しさに甘え、裏切ったのは人間たちの方だ。古の神々は心の清い者だけを残し、傲慢になった他の人間を滅ぼしたが、お前はどうする？」
「変えられるのなら、無関係の人間が傷付かない、自分のために人を殺そうとするやつが現れない世界がいい。アイギスにもチドリにも、悲しみのない優しい温かな世界で生きて欲しいんだ」
それはずっと湊が望んでいた世界。
辛い実験を受けていたチドリや、人間を守るために戦う兵器でしかないアイギスに、湊は明るい温かな日常の世界で生きて欲しいと願っていた。
誰も悲しまない。誰も他人を傷つけようとしない。そんな優しい世界が実現したならば、きっと彼女たちは幸せに生きられるだろう。
だからこそ、湊は悲しみに満ちるこの世界を変えたいと願った。もう二度と、イリスのような犠牲者を身内から出さないためにも。
「ふふっ、それは難しいな。人は自らの欲求を満たすために進化してきた種だ。自己中心的な考えで人を殺すのも、言ってしまえばその欲求に従ったにすぎん。さっきも言っただろう。善悪含めて人だとな」
だが、湊の話しを聞いた茨木童子は慈愛に満ちた瞳で、夢を語った少年に言い聞かせるよう話す。
そんな世界は訪れない。どれだけ努力しようと人間の本質は変わりようがないのだ。
少年の願う世界が実現するとすれば、それは神話の神々がしたように今いる人類が全て滅んだときだろう。
人間がいなくならない限り、誰も悲しみを感じず、誰も他人を傷つけない世界になんてなるはずがない。
遥か昔からずっと人間を見てきた者の言葉だからこそ、それが事実であり真理であることを物語っていた。
「……無邪気な子どもに善悪の区別を教えるように、誰かが教えてや

ればいいんだ。お前は間違っていると」
しかし、少年も自分の望む世界の実現を諦めない。
暗い瞳で茨木童子を見返す湊も、完全な実現が不可能なことくらいは分かっている。
それでも、少しでもこの世界から悲しみを消して、大切な少女たちが平和に暮らせるようにしてやりたかった。
「それはいいな。では、どうやって教える？　大人も権力者も自分こそが正しいと信じて疑わない者が多い。ただ言って聞かせるのは容易ではあるまい」
「……俺は母さんから言われた事はないが、他所の家ではよく言うんだろ。〝悪い事をしていると鬼がくるぞ〟って」
「……ふふふ……あはは、あはははっ！」
真面目な話をしていたと思っていたこともあり、湊の言葉が随分と子どもらしく思えた茨木童子は腹を抱えて大声で笑う。
湊の母が一度も言ったことが無かった理由は、単純に自分の苗字に〝鬼〟という文字が含まれ、現在でも鬼の一族と言われていたからだ。
だが、少年は敢えて自ら名乗るつもりらしい。
笑い過ぎて目尻に涙を溜め、それを指で拭いながら楽しげに茨木童子は口を開く。
「ああ、そうだ。私が生きていた時代にはまだそんな話しはなかったが、確かに子に言って聞かせる常套句だぞ。ふふっ、面白い。それなら、確かにちゃんと聞くだろう。聞かない愚か者には痛みで学ばせてやればいいしな」
名切りが再び鬼となれば、長く生きている者たちは皆恐怖から自制するようになるだろう。
鬼が表舞台から去ったのはここ半世紀ほどの話しだ。まだ人の記憶から完全に消えてはいない。
質の悪い冗談だと信じないならそれでもいい。言っても聞かない者ならば、痛みと共に教える事で理解させればいいのだから。
しかし、少年の考えに一応の賛同を示しつつも、茨木童子は相手が

まだ人側に立ったままであることが気になった。
お伽話でも化け物には化け物の役割があるように、人を導くのであれば、人のままでいてもらっては困る。
不完全な覚醒しか出来ていない少年の変化を注視しながら、茨木童子は声を掛けた。
「だが、八雲。今のお前ではまだ足りんな。お前はまだ血に目覚めただけの人間だ。同じ人間に言われたところで、人間どもは鬼の存在を信じない」
「……大丈夫だ」
茨木童子の言葉に答えながら、湊は左耳に付けていたピアスと首のチョーカーを外し立ち上がる。
それらは少年と同じように結合した黄昏の羽根を胸に宿す少女たちとの絆の品だ。
奪おうとするのなら力で捻じ伏せると言っていた、彼女たちとの大切な絆を自ら外した。
少年が示したその決別の証しに、茨木童子は満足気に口元を歪め、相手を真っ直ぐ見つめながら立ち上がる。
すると、両者が腰を上げたことが合図だったかのように、魂を持つ他のペルソナたちも二人を囲むように現れた。
赫夜比売、出雲阿国、座敷童子、ジャック・ザ・リッパー、そして、悲しげな表情を浮かべるファルロス。
「……この世界の者たちを生かしたのはお前とアイギスだ。故に、お前らにはその命を選定する権利がある。やれるな、一五三代目名切りよ？」
「ああ」
どこか悲しみを帯びた冷たい瞳で静かに答える湊。
絆を捨て、鬼となることを決意したことにより、新たな力の目覚めとして〝戦車〟のカードが現れる。
さらに、イリスとの別れで目覚めた〝運命〟のカードも呼び出し、二枚のカードを手に取り眺めている数世代ぶりの正式な当主の誕生に、鬼の一族の者たちは皆嬉しそうな顔をしている。

だが、龍の始祖とシャドウの王だけは、孤独に堕ちた少年の選択を嘆き暗い表情を浮かべていた。
「……湊君、本当にこれで良いの？」
「……俺たちが再び鬼になるよう望んだのは人だ。だから、俺はその望みを聞いてやる」
「君にはまだ大切な人がいる。その人との絆を捨てて、堕ちてまで叶えようとする願いがあるとは僕には思えない」
少女らのために戦う相手の姿をずっと傍で見ていた。
それだけに、少女らを傷付けることになる湊の決断に納得がいかず、本当に後悔しないのかとファルロスは尋ねる。
だが、その問いに湊は背中を向けたまま何も返さず。自らの力の欠片たるペルソナたちに、ただ一言告げる。
「……往こう」
少年が呟くと、彼らのいた世界は白い光に包まれた。

第八十六話　騙った代償

９月２４日（日）
午前――教会
教会の少し固いベッドで目を覚ました湊。
葬儀を終えて以降のここ数日の記憶は殆どないが、シスターが真摯に世話を焼いてくれていたのは覚えている。
ベッドの近くのテーブルには、水差しとリンゴがいくつか置かれ、ここ数日ろくに食事をしていない湊が少しでも胃に物を入れられる様に考えていたらしい。
「カグヤ」
《……はい》
「俺の髪を切ってくれ。もう弓に張るには十分な長さになっただろう？」
部屋の中の物に視線を巡らせてから着替えを済ませるが、起きてからずっと、頭の中に声のような物が聞こえていることが気になる。
しかし、そんな事よりもここを出る準備の方が先だと、人の姿でカグヤを呼び出してエリザベスに貰った短刀を手渡す。
流石にベッドで切る訳にはいかないため、化粧台まで移動してから、切った髪を包んでおく和紙も用意しておく。
短刀を受け取る前からカグヤは悲しげな表情をしていたが、湊が全ての準備を終えて待っている姿を見て、意を決したようにその髪を束にして切った。
《切れました》
「ああ、ありがとう」
切った髪を包んだ和紙を短刀と一緒に湊へ渡すとカグヤは消える。
それを気にした様子もなく、入学当初と同じ肩にかかる程度の長さになった髪を触って確かめ、湊はすぐに切った髪を数本取って名切りの短弓〝暁〟に張る弦を作り始めた。
元々暁に張られていた弦は当時使っていた名切りの女の髪だ。それは湊の髪でも代用が利く。

伸ばしていた理由も、髪質のよく似た自分の毛で予備を作るということだったので、手に取った髪を撚って数本の弦を作り終えると、残りは和紙に包んだまま形状変化によってフード付きの外套になった元マフラーに仕舞った。

――礼拝堂

湊が部屋で目覚めた頃、教会の礼拝堂にはシスターと司祭、そして村に到着したばかりのエックハルト・グロスマンがいた。

グロスマンはマダム・リリィに湊の居場所を聞いてやってきたわけだが、湊がどこにいるか尋ねれば、葬儀が終わってからは基本的に部屋で寝ていると聞かされた。

少しくらい動かなければ身体に悪いので、シスターが付き添う形で教会の裏庭を歩かせたりもしたものの、やはり回復の兆しはなく。部屋に戻ればシスターが起こしにいかない限りはずっと眠りについている。

それがここ数日の湊の生活だった。

しかし、丁度三人が湊について話していたところ、なんと、奥へと向かう扉が開いて、レインコートのようにも見える黒の外套を纏った湊が現れた。

「小狼さん、もう起きて大丈夫なのですか？」

手に一通の手紙らしき封筒を持ったままやってくる湊へ、シスター・アンナが急いで駆け寄る。

傷付いた姿とずっと眠っていた姿を見ていただけに、自分で歩けるようになったのだとしても、やはりまだ万全とはいえないだろうと心配しているらしい。

けれど、シスターの心配は杞憂だと告げるように、湊はどこか神秘的な美しさを宿した微笑を浮かべ答えた。

「ああ、問題ない。心配してくれてありがとう」

「そうですか。本当に、良かったです」

立ち直るまでずっと世話を焼き、今もこうして他人の事に一喜一憂している。

そんな相手の様子を眺めながら、この数日の事に湊は改めて礼を述

べた。
「色々と世話をしてくれてありがとう」
「いえ、私がしたくてした事ですから。本当に元気になられて良かったです。そんな瞳の色をされていたんですね。金色だと思っていたんですが気付きませんでした」
教会に来たばかりの頃は、心が壊れて濁っているようにも見えたが金色の瞳をしていたと思う。
しかし、瞳に光を宿して現れた湊の眼は不思議な輝きを持った蒼色をしている。
その眼を見て変わった色だと思いつつも、シスターは自分が勘違いしていたことにやや恥ずかしそうに苦笑した。
また、髪が短くなっていることにも気付き、せっかく綺麗な長髪だったので少し勿体ない気もするが、今の肩にかかる長さでも似合っていると考え素直に感想を告げた。
「髪を切られたんですか？　長い髪も素敵でしたが、いまの長さもよくお似合いですよ」
「……自分ではよく分からないが褒めてくれてありがとう。シスターに一つ頼みがあるんだが、いま大丈夫だろうか？」
「頼みですか？　えっと、どういった事でしょう？」
出来る限りのことはしてやりたいが、内容を聞かないことには承諾できない。
そう考えていると、湊は手に持っていた封筒を見せながら答える。
「手紙を出して貰いたいんだ。この国でのエアメールの出し方が分からないから、手続き等をお願いしたい」
「住所が書かれて切手が貼られていれば大丈夫ですよ。お急ぎでなければ普通郵便で出しておきますが、それでも良いですか？」
「ああ、問題ない。ただ、なるべく早い方が嬉しい。もうこの村を出ようと思っているから、その前に出してくれたと確認しておきたいんだ」
「では、少し村の方に用事がありますから、今からでも出してきます。ちゃんとしたお別れが出来ないのは残念ですが、またお墓参りに来た

ときにでも顔を見せてくださいね」
「ああ、また時間が出来たときにでも来る」
簡単な挨拶を済ませると、シスターは湊から受け取った手紙を持って、司祭に手紙を出してくる事を伝えて教会を出て行った。
後に残った湊へ、シスターと話している間ずっと見ていた二人は近付いて声をかける。
数日前と違って瞳に光が戻った湊の顔を見た司祭は、瞳自体の色に言いようのない不安を覚えながらも、湊の回復は喜んでいるようで、やってきた湊を笑顔で迎えた。
「元気になったようで良かった。君を訪ねてやってきたグロスマン殿も、ずっと寝ていると聞いて心配しておられたんだよ」
「……もう大丈夫です。ご心配おかけしました」
先ほどシスターに見せたように、湊は今度もまた綺麗な笑顔で答える。
司祭があの日見た白い光はさらに強まって残っているが、世界から存在がずれているような違和感が消えていることで、今の湊ならば大丈夫だろうと僅かに安心出来た。
そうして、どうにか少年が立ち直った事に喜び朗らかに笑っていると、湊は外套のポケットに手を入れて、司祭の隣でにこにこと穏やかに笑っているグロスマンに取り出した大きな封筒を手渡した。
「これ、依頼の品です。イリスの方は薬も一緒に焼けてしまったので、治療薬の調合リストだけですが」
「いえ、それだけでも十分です。この度は本当に残念でした。私がこんな依頼をしたばっかりに申し訳ない。せめてもの気持ちとして、報酬は満額支払いたいと思っているのですが、どうか受け取っていただけますか？」
言いながら男は持っていたケースを開いて中身を見せてくる。中には米ドルの札束が敷き詰められ、総額は日本円にして約七千万円だ。
それだけの大金が支払われるような仕事を、ここ数日まるで死んだような姿をしていた湊がこなした事に司祭は驚きを隠せない。

けれど、少し申し訳なさそうな表情で礼を言いながら、報酬の入ったケースを受け取ることにした少年は、さらに驚くべき事を告げてきた。
「どうも、ありがとうございます。ただ、このお金は教会に寄付しようと思うのですが、それでも良いですか？」
「はい。彼女もそういった使い方の方がきっと喜ぶでしょうから、貴方の望むとおりにしてください」
「ありがとうございます。ニコラ司祭、このお金を教会に寄付します。イリスたちのお墓の代金を引いて、残りは自由に使ってください。寄付の名義は俺ではなくイリス・ダランベールからということで」
ずっしりと重いケースを渡された司祭は思わず手が震えた。今までも寄付として献金を渡してくる者はいたが、さすがにこれだけの額は見るのも初めてだ。
イリスらの墓を永代にしたところで九割以上が残り、それらは教会を全改修してもまだ余るくらいだろう。
こんな額は流石に受け取れないと返そうと思ったが、顔を上げて少年の全てを見透かすような瞳を見ると言葉に詰まって何も言えなくなる。
相手は自分の考えなど全て理解しているのではないか。そう錯覚するほど、少年は吸いこまれそうになる不思議な魔性を宿した瞳で見つめてきているのだ。
そんな風に突然のことで司祭が困惑していると、湊は礼をして別れを告げてきた。
「……では、失礼します。お世話になりました」
「ま、待ちなさい。流石にこんな大金は」
「貴方が正しいと思う使い方をしてください。恵まれない子どもに施しを与えるでも、この村を美しく保つでも、それは自由ですから」
言い終えるなりフードを被って湊は歩き出し、そのまま一度も振り返ることなく礼拝堂を出て行ってしまった。
同じようにグロスマンも司祭に頭を下げてから後を追って出て行ったが、残された司祭は自分に与えられた使命は重大だと考えてい

た。
寄付した者が正しい使い方を望むのなら、司祭は相手の意思を尊重する使い方を考えるだけだ。
最初から自分のために使うような事は欠片も考えていなかったが、子どもを産めない身体になったイリスならば、自分の子どもを亡くしたこともあって、恵まれない子どもの幸せのために使って欲しいと思うだろう。
小さい村だが自然に囲まれた素晴らしい村だと自信を持って言える。暮らす人々もとても温かい者たちばかりだ。
これだけの条件に加えて湊から受け取った献金があれば、国や地方自治体の補助も受けて、教会で孤児院を開く事が出来るはず。
その際には、自身とシスターだけでは手が回らなくなるだろうが、働きたい者を公募すれば人手も十分集まると思われるので、司祭はこのお金はそのために使おうと決めたのだった。
＊＊＊
「小狼さんは、この後どうされるのですか？」
教会を出て村の中を進んでいると、後を追ってやってきたグロスマンが話しかけてきた。
起きてからずっと頭の中で聞こえている声の数と大きさが増したことで、湊はとても不快な気持になっているが、それを表情に出さずに簡潔に答える。
「とりあえず、俺を待っている者の元へ向かいます。俺も相手に聞きたい事が色々とありますから」
「ふむ、ダランベール氏が亡くなられたばかりでも、そう休んではいられないのですね。確かに仮面舞踏会は裏では名が売れていますからな。私のように頼る者も大勢いるのでしょう」
湊の仮面舞踏会は名前ばかり売れていて、湊自身の姿や詳しい実力についての情報はあまり出ていない。
それは地下協会を経由する仕事をあまりしていないからであり。また、対峙した者は基本的に殺されているため、どういった方法で戦うかを伝えられる者が生き残っていないからだ。

けれど、そんな得体の知れない状態であっても、仮面舞踏会宛ての依頼は後を絶たない。
達成率はほぼ百パーセントで、期日もきっちり守ることから非常に信頼できる。依頼の種類も護衛や抹殺、品物の入手や搬送など多岐に亘ることから、頼めば何でも叶えてくれる存在のように一部では語られている。
自分もそんな噂を聞きつけて依頼した一人だと言いながら、グロスマンはあまりに多忙な湊に労いの言葉をかけた。
「お仕事は大変でしょうが、どうかご無理をなさらずお身体に気を付けてください」
「ええ、ありがとうございます」
相手の言葉に素直に礼を言って笑顔で返す湊。
教会でシスターに見せた笑顔も、司祭に向けた笑顔も、今の笑顔と筋肉の動かし方から何から全て同一の物だ。
もっとも、笑みを向けられた者は相手が男だという事も忘れて見蕩れているため、そんな細かな事など考えている余裕はないだろう。
己の美貌を最大限に活かす術をイリスたちに仕込まれていた湊は、当然、その事を理解しながら尚も笑顔で相手との会話を続ける。
「そういえば、お孫さんの名前は何と言いましたっけ？　世間は狭いと言いますし、何かの縁があるかもしれません。もう一度教えて頂いてもよろしいですか？」
「ええ。孫の名前はアルフレッドといいます。娘に似て綺麗な目をしていましてな。将来は自分も医者になって大勢の人を助けるんだとよく言っているんですよ」
「ははっ、そうですか。是非とも会ってみたいです」
孫を溺愛する自分を親馬鹿だと、照れて恥ずかしそうに苦笑するグロスマンに合わせ、湊も目を細めて柔らかく笑う。
だが、続く言葉を話すときには、その顔から全ての感情が消えていた。
「――――まぁ、本当に存在するんだったらの話しだがな」
「うぐっ!?」

話している途中、急に背後からの衝撃を受けてグロスマンは唸る。
衝撃の正体を知ろうと視線を向けている間に、浮遊感を感じたかと思えば、次の瞬間には周囲の景色が高速で流れていた。
そこでグロスマンは、自分が湊の背後に現れた黒い化け物に掴まれ飛んでいると気付いた。
時速何キロで飛行しているのかは分からないが、走っている車を瞬く間に置き去りにしていることから、少なくとも一五〇キロは超えていると推測できる。
そんな速度で連れ去られ、気が付けば見渡す限り森と山しかない知らぬ場所についていた。
どれだけ目を凝らしても、小さな山小屋一つ見つからない緑の深い山奥へとやってきた湊は、急に高度を下げたかと思えば、麓の森の少しばかり拓けた場所へと降りたち、グロスマンを地面へと転がした。
「ぐぁぁぁぁっ」
突き飛ばされたかのような、強い力で地面の上へと放り投げられ、グロスマンは身体中を打ちながら転がってようやく止まる。
普段ろくに鍛えていない六十を越えた肉体にその痛みはかなり堪える。
手をついて身体を起こしたグロスマンは、感情の籠もらない酷く冷たい瞳で見下ろしている湊へ、一体何のつもりだと抗議の声を上げた。
「こ、これは何のつもりですか?!　事と次第によっては然るべき機関へ通報いたしますぞ！」
「……本名、フランク・マグワイア。アメリカで何度も逮捕されている詐欺師か」
「い、一体何を言っているのです？　私は本気で怒って」
言いかけている途中で、グロスマンは湊の傍に控えるよう二人の女が立っている事に気付く。
空から降りてきたときに確認した限り、こんな者たちは疎か兎一匹いなかった。
森の中で自分たちのいる一帯だけ拓けているため、絶対に見逃しな

どありえず、本当に女たちがどうやって現れたのか分からない。
そうして、グロスマンが混乱していると、鬼の土面を被った茜髪の女が口を開いた。
《八雲、その力はあまり使うな。見過ぎると二度と他者を信用できなくなるぞ》
「……深く覗く以外にコントロールが利かない」
《ふむ……どうやらお前は受信する力が強過ぎるらしいな。アイギス程度の力なら、相手の感情を多少読み取るくらいで、後は動物の意思を理解することしか出来ないはずなんだが》
茜髪の女〝茨木童子〟は、湊が相手の心を読んでいると推測して止めさせようとするも、湊は自分の意思で読んでいる訳ではないと返した。
読心能力自体は、高次の精神を持つ全ての生物が発しているイメージを読み取る力の延長であり。人間は言葉に頼った為にその力が退化しているが、アイギスはこれによって動物の意思を理解していたので、デス封印時にアイギスの力を一緒に注ぎこまれた湊が使えてもおかしくはない。
しかし、湊の場合、元々本人も同じ力の素質を十分に備えていた事に加え、アイギスよりも受信する力や読み取る力が強すぎて、見ないようにしても勝手に心を読んでしまうようだ。
その事を知った赫夜比売は、生前から同じ力を持っている者として心配そうに声を掛ける。
《八雲、意識を広げてください。一人を深く視るよりも、周囲の獣の声まで拾ってしまった方が楽になります》
「いや、今はこっちの方が都合がいい――――アタランテ、逃がすな」
湊が二人と話している途中で、男は背を向けて駆け出そうとしていた。
無論、心が読めている相手にそんな不意討ちが効く筈もなく。湊はいたって冷静にカードを握り砕くと、新たに手に入れた戦車〝アタランテ〟を呼び出した。
深緑の衣を纏い、美しい月色(ルナブロンド)の髪を揺らして現れたアタランテは、

呼び出された空中で手に持った弓を引き絞り、逃げようとしていた男の足を射抜く。
「がぁぁぁぁっ!?」
左のふくらはぎに矢が突き刺さった男は、痛みでまともに歩くことも出来ず、叫び声を上げながらその場で転倒する。
刺さったままの矢を伝って流れた血が地面に染みを作り。その様子を眺めている湊の隣に降り立ったアタランテがさらに狙うかとばかりに弓を構えているが、情報収集を兼ねているため湊はそれを手で制して男に問いかけた。
「……フランク・マグワイア、お前は誰から依頼を受けた？」
「わ、私はそんな名前ではっ」
「そうか、三万ドルで俺たちを売ったのか。ああ、気にすることはない。この世界では騙される方が悪いんだからな。でもまぁ、行動には責任が伴うのも分かるだろ？　ミックスレイド〝ヘルヘイム（死者の国）〟」
質問をすれば答えは相手が勝手に教えてくれる。
制御が利かないのは難点だが、実に使えそうな力を手に入れたと、湊は相手が怯えながらも再び逃げ出す隙を窺っていると理解したことで、〝節制（座敷童子）〟と〝死神（タナトス）〟のカードを顕現させ握り潰す。
すると、湊の足もとから地面が凍りだし、瞬く間に周囲は氷の世界へと変貌した。
今回展開したのは直径にして約三十メートルほどの範囲だろうか。丁寧なことに外界と遮断するよう境界から空へと氷壁が伸びて曲線形の天井を作り、外からは氷のドームに見えていることだろう。
以前、座敷童子は氷壁を用いてタカヤの『Ｓ＆Ｗ　Ｍ５００』の弾丸を防いでみせた。今回はさらにタナトスの力も加算して、通常のスキルよりも強力な効果を発揮するミックスレイドで氷壁を作り出したのである。
壁の厚さは数十センチ程度だが、外界と遮断する結界としての機能を有した〝ヘルヘイム〟は、例えアギダインだろうと容易に融かす事は出来ない。
つまり、護身用の拳銃程度しか持っていない男では、もうどんな手

を使おうと逃げ出すことが出来なくなったと言う訳だ。
「……これでゆっくり話せる。質問を続けよう。お前に依頼してきた男は、自分の所属について何か話していたか？」
「し、知らないっ。私は何も聞いていないんだっ」
「他にその男と関わっていた者は？」
「本当に何も知らないんだよっ」
突然訳の分からない場所へと連れて来られ、さらに急に女や氷の壁が現れたことで、男の心の中は全ての元凶である湊に対する恐怖に染まっている。
いつ本名がばれたのか。個人から受けた依頼の報酬をどこで知ったのか。依頼人が男だと何故分かったのか。心が読まれていると信じたくない男は、必死に湊の情報源を考えようとしている。
けれど、これだけ追い詰められている状況で、自分が助かる方法を考えるのならまだしも、自分の情報がどこから漏れたかなど考えるだけ無駄だ。
あまりに混乱し過ぎて冷静な判断が出来なくなっていることが原因だろうが、この程度のメンタルしか持たない弱い人間が、何千人も殺してきた殺人鬼を騙し切れると思っていたことが腹立たしい。
故に、湊は外套から〝無の大剣〟を取り出すと、それを氷の地面に突き立てた。
「知っている事があれば死ぬまでに話せ。いくぞ、ジャック」
《Ｙｅｓ，Ｍａｓｔｅｒ》
呼び出したジャック・ザ・リッパーをカードに戻し、傍に刺していた〝無の大剣〟と融合させる。
「――――拷問刀〝鋸挽き〟」
すると、錆びた古臭い大剣は光に包まれ、光が治まったときには反りのある巨大な片刃の鋸へと姿を変えていた。
相手の呟いた武器の名と形に不安しか感じられず、男は地面に座ったまま無意識に距離を取ろうと、後ろに退がりながら湊に従うことを必死に告げる。
「な、何をするつもりだ？　物騒な物はしまってくれ。話す、何でも話

すからっ」
「……ああ、直接言葉を発する必要はないんだ。ただ頭で考えてくれれば良い。むしろ、口先だけのお前の言葉は酷く不快だ。座敷童子、少し黙らせてくれ」
《……わかった》
湊に呼ばれて姿を現した座敷童子は、腰が抜けたように足を放りだして怯えた瞳で湊を見つめている男を視線で捉える。
そして、感情の読み辛い紫水晶の眼で相手を捉えたまま静かに右手を上げると、次の瞬間には地面から突如現れた氷槍によって、地面に突いていた男の右腕が宙を舞っていた。
「う、うわぁぁぁぁぁぁっ!?」
出現する瞬間には振動と共にゴゴゴッと低い音がしていたが、そんな物は一瞬だけで、驚いて避けようと思ったときには既に鋭い氷槍の先端が腕に突き刺さり、さらに伸びる勢いで腕を完全に千切り飛ばしていた。
座敷童子はこの結界内に置いて、好きな場所へ瞬時に氷を出現させる事が出来る。相手を氷で拘束することも、今のように氷槍で貫くことも可能という訳だ。
痛みによって自分の身に何が起きたのかを理解した男は、バランスを崩して倒れながら、叫び声を上げて痛みに悶え苦しんでいる。
そんな男の様子に、今この場にいる者の中で赫夜比売だけは僅かに顔を曇らせているが、ペルソナに命じた本人は表情一つ変えず淡々と口を開いた。
「……走馬灯か。これは便利だな。知っているか？　死ぬ前に見る走馬灯は、脳が危険を感じて過去の経験から現状を脱する方法を探すために起きるんだ。お前の脳が記憶を探ってくれるなら、俺はそれを読むだけで済む。これなら尋問の手間が省けて都合がいい」
言い終わるかどうかのタイミングで、湊は濁った金色の瞳になると他者の視界から消え、痛みでもがいている男の背中を踏みつけた状態で現れる。
「がはっ」

「次は足でもいってみるか」
急に背中を踏まれて息を詰まらせている男の足へ、湊は手に持っていた巨大な鋸を当てる。
シャドウの力を使っていなければ、常時、魔眼になっている今の湊にとって、わざわざ狙いを付けるような動作は必要ない。
ただ視えている線を切れば良いだけだ。それだけで人間の身体など容易く肉塊に出来る。
ならば、何故こんな無駄でしかない動作を挿むのか？
それは、相手の恐怖を煽り、さらに強く走馬灯の形で記憶を探らせるためであった。
「や、やめっ」
「――――先ずは右だ」
相手の言葉を無視して湊は一気に鋸を引いた。
「がぁぁぁぁぁぁぁ――――――――っ!?」
瞬間、足を切られ熱と激痛を感じた男は喉が潰れそうな程の叫び声をあげる。
柔らかい肉と硬い骨を半ばまで切られ、穿いていたスラックスと下の氷は真っ赤に染まり、今もその染みを広げている。
あまりの痛みで、男は残った腕の爪が割れるのも構わず氷を掻き毟って逃れようとしているが、背中を踏みつけたままでいる湊は、暴れる男をその場から全く逃がさない。
それだけでなく、わざと完全には切り落とさなかった足を見て、表情は欠片も動かさずに口だけで謝罪を述べる。
「ああ、悪いな。手元が狂ってしっかり切り落とせなかった。出雲阿国、ちゃんと切り落としてさし上げろ」
《はーい、それじゃ行くよっと！》
呼び出された出雲阿国は、笑顔で男の足に向かって手をかざし狙いを定める。
何をするのかと思えば、そのまま掌に雷を収束させ、湊に当たらないよう気を付けながら球体のそれを投げつけた。
距離があまり離れていなかったこともあり、見事に命中した雷弾

は、まだ僅かに繋がっていた男の足を無惨に引き千切り遠くへ飛ばした。
「あ、あがっ……あぁぁ……」
《そんなに痛くないでしょ？　ちゃんと雷で神経を麻痺させたしさ》
「逆に麻痺で上手く話せないんだろう。ショック死されても困るが、これはこれで困るな」
　複数同時に召喚していようが離れていようが、自我持ちのペルソナと湊は深い部分で繋がっているため、言葉を介さずに指示を飛ばす事が可能だ。
　それを利用して言葉では恐怖を煽りながらも、男がショックで死なないよう雷で麻痺させるように攻撃させた。
　けれど、細かい調整は難しかったようで、男は切断された足の周囲以外の筋肉も麻痺して痙攣している。
　これでは走馬灯を呼び起こさせるのも難しいため、湊は肩を竦めてジャックを無の大剣と分離させながら男から離れた。
　そして、手と足をそれぞれ片方ずつ失って倒れている男を眺めていた茨木童子は、二体のペルソナと一緒に戻ってきた湊へ苦笑を浮かべながら声をかける。
《フフッ、それでどうするのだ？　この男に依頼した者は、イリス・ダランベール殺しの首謀者から遠く離れた末端の人間としか思えんが》
「……だろうな。そもそも、こいつは依頼人から詳しい事情を聞いていない。相手に踏み込まないことで長く業界でやってきたらしいが、だからこそ自分たちに辿りつけないよう敵はこいつを選んだのかもしれない」
　依頼を利用して仕事屋を陥れるときには、当然、ばれたときに報復を受けるリスクが発生する。
　通常は何人も経由して首謀者に辿りつけないよう細工をするが、相手はさらに経由する人間を選んで足が付かないようにしていたらしい。
　これでは心が読めても必要な情報を得る事が出来ないため、尋問を切り上げて、当初の予定通り仙道弥勒の待つ街へと向かった方が良い

かもしれない。
考えを纏めて座敷童子に氷結界を解かせると、背後に翠玉の騎士・審判〝アベル〟を呼び出し、男を地面に放置したまま他の者らと一緒に空へと浮かび上がる。
そして、ある程度の高さで止まった湊は、男を眼下に捉えたまま相手が中央にくるよう四神のカードを対応する四方へ配置した。
「……ミックスレイド〝黄龍招来〟」
静かに呟いた湊の声に反応するよう、四方に置かれた四神のカードを眩く光る。
すると、それぞれを繋ぐように直径百メートルの八卦陣が空中に現れ、中央から途轍もなく巨大な茶色の岩が出現した。
四方を守護する四神に対し、黄龍は中央を守護し五行の土を司る聖獣だ。このミックスレイドではそれに習い、限定的とはいえ土行の力を引き出す事が出来るらしい。
その黄龍の力で呼び出された岩は、陣よりも小さいとはいえ、控えめに見積もっても百トンではきかないだろう。
巨大な岩の出現に気付いた男は、未だに麻痺が解けていないのか、首だけを嫌々と動かして涙を浮かべている。
しかし、落下を始めたそんな超重量物を途中で止められる訳もなく、冷たく見下ろしている湊の前で、岩は轟音をたてながら無慈悲に地面へ衝突したのだった。
イリスが死ぬ原因となった依頼を持ってきた者を殺したにもかかわらず、湊は一切感情の揺れも起こさず視線を岩から外すと自身のペルソナ達に話しかける。
「……仙道弥勒の待つトラゴスまでは遠い。時を加速させて一気に飛ぶから、お前たちは俺の中へ戻れ」
《……制御出来ない読心を得てしまった者は心を病むと聞く。休めぬ時のことも考え、あまり力を使い過ぎるなよ》
病み上がりで次々とペルソナを呼び出し、ミックスレイドやシャドウの力も使っていたことで、体調を心配した茨木童子が湊の中へ戻る前に声をかける。

常時発動型の読心能力は、人の多い街では常に知りたくもない人間の心の汚い部分を見せられ、人里から離れても動物達の声を拾ってしまうため、本当にゆっくりと休む事が出来なくなる。

今後の活動がどれだけ長期になるかも分からないこともあり、休めない事も考慮してペース配分をもっと気に掛けるよう言われた湊は、茨木童子へ素直に頷いて返すと、彼女たちが自分の中へ戻った事を確認して仙道の待つ街へと飛び立つのだった。

第八十七話　仙道弥勒

夜――トラゴス・廃ビル

湊に伝えた約束の日。どういう訳かまだ電気の通っている廃ビルに、独り瓦礫を椅子にして仙道弥勒は待っていた。

電気が通っていると言っても、全ての電灯が綺麗に残っている訳ではない。

しかし、ガラスの割れた窓から月明かりが入っていることもあり、残っている電灯と合わせれば部屋中を眺めるだけの十分な光量は確保出来ていた。

「……来たか」

そうして、時計の針が二つとも頂点を指す頃、全身を焦がすような圧倒的な敵意を放ちながら部屋へ近付いて来る者がいた。

初めて会ったときや、殺し損ねて名切りの亡霊を呼び覚ましたときですら、空間が歪んでいると錯覚させるほどの重圧を放ってはいなかった。

脅す事が目的でなければ、気配など相手に行動を読ませるだけなので発する必要はない。

動の氣を纏う仙道ですら、戦いでどれだけ高揚しようと気配は自然と内に抑えている。

中学生という若さであっても、既に達人の域に達している湊がそれを知らないはずはないので、仙道はこれを挨拶だと理解し、長大な槍と鞄を傍に置いて哂って立ち上がりながら相手を迎えた。

「フハハハハッ！　名切りよ、よくぞ戻ってきた！」

全身をフード付きの黒いレインコートのような外套で覆い。さらに袖から見えている手には、指の出る黒い革製のシューティンググローブを付けている湊。

編み上げブーツが茶色であることを除けば、ほとんど黒一色にしか見えず、暗闇でなければむしろ目立つだろうと仙道は内心で苦笑する。

部屋に到着したことで相手は気を抑えたようだが、それでもフード

から僅かに覗いている蒼眼に宿る光には一切の曇りもない。
挨拶代わりの気は脅しではなく。明確な殺意を持ってここまでやってきたのだろう。
気を抑えていても、以前、ホテルの地下駐車場で戦ったときよりも遥かに強くなった事を感じる。
十四歳という若さで、よくぞここまで育ったと仙道は極上の死合いを前に心が躍った。
「前回は詳しく名乗っておらんかったな。わしは仙道弥勒。イリス・ダランベールを死へと追いやった『久遠の安寧』の一員だ。もっとも、先の件に関してはわしも雇い主に聞かされるまで知らなかったがな」
ソフィアがイリスを邪魔だと思っていることは知っていたが、まさか、あんな大規模な作戦を使ってまで殺すとは思っていなかった。
故に、相手にとっては仲間の時点で一緒だろうが、イリス殺しに自分は関わっていない事だけは伝えておいた。
すると、仙道のいる場所からまだ少々距離のある部屋の入り口で、湊がフードを脱ぎながら答えてくる。
「……飛騨製人型特別戦略兵装二式〝有里湊〟」
「ふむ、名切りとしての名は何と言う？」
相手が名切りだという事は既に分かっている。名前も以前の戦いに介入していたベルベットルームの住人らが呼んでいた事で把握済みだ。
けれど、今度の闘いでは結果に関わらず確実にどちらかが死ぬ。
伝説だと言われていた本物の鬼がようやく現れたのだ。今後、これ以上の相手と死合う事など二度と出来ないだろう。
故に、仙道は自分と闘う鬼の存在を魂に刻み込むため、相手から直接本来の名前を聞きたかった。
「……第百五十三代名切り。そして、特級五爪守護龍憑きの百鬼八雲だ」
「守護龍憑き……貴様、九頭龍との混血か？」
湊が名切りの末裔だったことは知っていたようだが、流石に名切りではない親の血筋までは詳しく知らなかったようで、仙道は少々驚き

気味に聞き返す。
二人が口にした〝守護龍憑き〟とは、九頭龍の血筋に伝わる等級制度の称号のことだ。
その昔、爪の数が多い龍ほど力を持つと言われていた事があり。九頭龍もそれに倣って、最上位が特級五爪、最下位が四級一爪といった具合に爪の数毎に異なる等級を作ったのである。
どの等級になるかはその人物の持つ力で分類され、『無能の四級、操気の三級、霊視の二級、魔眼の一級』といったように、位が上がるごとに使える力が増えてゆく。
ただし、特級だけは始祖以外に目覚めた者がおらず。その固有の能力も分かっていない。
もっとも、等級制度が存在することは隠していないが、九頭龍はこの分類の詳細について始祖より継いだ異能持ちの血を守るために口外していないので、どちらにせよ仙道が湊の力を知る事はないのだが。
「フフッ、鬼と龍、二つの一族を統べる者が現れるとはな。実に愉快だ」
例え当主の死で空座になろうと、過去の名切りに認められるほどの力を持つ者しか正式な当主になれない百鬼とは違い。九頭龍の当主はその代で最も位の高い者が就くことになっている。
遠く離れた地に居ようと、新たに龍が目覚めれば血の共鳴で感じ取ることが出来るため、日本では今頃誰が血に目覚めたのか大騒ぎになっている事だろう。
そんな事情を知らない仙道は、足元に置いていた鞄を手に持つと、死合う前にそれをそのまま放り投げて湊に渡す。
「中身は、久遠の安寧の幹部の名簿とわしの全財産が入っておる。殺してばかりで使っていなかったからな。勝てば全てお主にやろう」
「本部の場所は書いてないのか？」
「ん？　ああ、わしも所詮は雇われよ。いくつかのビルや工場の場所は知っておるが、本部は極一部の者しか伝えられておらんのだ。イリス・ダランベール殺しの計画者であるソフィアがよく過ごしている屋

敷の場所は分かるが、そこもまた数ある拠点の一つでしかない」
受け取った鞄を開けて中身に軽く目を通した湊の問いに、仙道は自分も組織にとってただの傭兵でしかないと苦笑気味に答える。
本来の雇い主はソフィアの父親だが、どちらにせよ幹部の名と情報がある程度書かれた名簿を渡している時点で、仙道の行動は全て裏切り行為だ。
いま受け取ったそれらが無くとも自力で探し出し、湊は〝選定〟として己の望む世界に相応しくない相手を排除するだろう。
けれど、仙道はイリス殺しの黒幕らの情報を与える条件で湊を呼び出した。
よって、ソフィアらにとって裏切りでしかない行動も、全ては依頼に対する正当な報酬なのだ。
「報酬に不満はあるかもしれんが、わしが用意出来るのはそこまでだ。後はそうさな、仕留めたわしの首を地下協会に持っていくと良い。これでも約七六〇万ドルの懸賞金が掛けられておるからな。先ほど渡した鞄の二三〇〇万ドルの小切手と合わせれば、食うには困らんだろうて」
懸賞金と小切手を合わせれば、少なめに計算しても三十億円ほどにはなる。
世界中の国々が加盟している通称〝国聯（こくれん）〟こと国家聯合（こっかれんごう）や国ではなく、恨みを持った人間達から掛けられた懸賞金の額としては、仙道の七六〇万ドルというのは破格の高さだ。
しかし、それでも一攫千金を夢見て仙道に挑みに往く者はほとんどいない。
遠距離からの狙撃や毒ガスによる搦め手で挑んだ者も過去に居たが、武神と恐れられているこの男は、それらを悉く掻い潜り十年以上に亘って敵を屠ってきた。
そんな者と正面から戦おうと考える命知らずなど、自分の腕に余程の自信がある莫迦か、もしくは幸運頼みの無謀者しかあり得ない。
もっとも、再び瞳に力を宿して甦ったこの相手はそのどちらでもないと、仙道は張り詰めてゆくその場の空気で敵の力量を感じ取りなが

ら、地に置いていた槍を手に取り嬉しそうに哂った。
「わしはお主のような者との死合いを待ち望み生きてきた。師より継いだこの槍を使わせる者はいないのかと、壊すばかりの日々に渇きを覚えていたのだ」
過去を懐かしむような瞳で仙道が持つのは、全長三メートル近い、ハルバードとグレイブを合わせたような穂先をした中華槍。
柄が黒に近い濁った紫色をしており、穂先の形状から大斧刀にも分類されそうだが、仙道が師より受け継いだ中国武術に適した歴とした剛槍である。
「ようやく全力を持って挑む事の出来る者が現れたことが何よりも嬉しい。もっとも、ただの一撃で決してしまうのは残念だがな」
「……お互い、人間を辞めているんだ。それはしょうがない」
「ああ、分かっておる。しかし、簡単には割り切れぬものよ」
湊は仙道から受け取った鞄を外套の中へと収納して、代わりに今まで見せたことのない大太刀を取り出した。
ベルトに差さず左手に持たれた大太刀の全長は約一三〇センチ、太刀鍔、柄糸と鞘は共に黒。
長尺の武器を持つ仙道に対抗して、少しでも間合いを稼げる武器を選択したのかと推測する。
けれど、達人級の実力を持つ者がそんな小細工を弄するはずがないとして、気を引き締めながら仙道は手に持つ槍を握り直す。
二人は湊が言うように人間の限界を超え過ぎた。故に、勝負が決まるとすれば一撃。もっと言えば文字通り一瞬で終わってしまうだろう。
「改めて名乗ろう。仙道弥勒、剛槍〝蚩尤(しゆう)〟」
「百鬼八雲、人斬り包丁〝仇桜(あだざくら)〟」
身の内に氣を留めながらも、己が人生において最強の敵を屠ろうと殺意をぶつけ合い、両者は武器を構えたままじりじりと徐々に距離を詰めてゆく。
武に魅せられ、友であった者に怪我を負わせ好敵手を失ってからというもの、覚えた渇きを誤魔化す様、ただひたすらに強者を求め壊し

続けて生きてきた。
そんな仙道にとって、ようやく一つの答えが出る。
楽しい時間は過ぎるのが速いとはいうが、一秒が何十倍にも感じられるほどの、極限の集中力の世界に入りながら、仙道は勝つために攻めるべき弱所を探す。
一般で言うところの隙などお互いに存在しない。武器を完璧に扱える者にとって、それらは手足の延長であり、当然、自分が長尺の武器を持った状態で間合いの内側に入られようと全て対処できる。
元々体躯に恵まれた仙道が三メートル近い武器を持てば、有効な間合いは十メートルを超える。
それに対し、未だ成長途中で、長いとはいえ大太刀を選択した湊の間合いは七メートルと推測する。
両者は二十メートルほどしか離れていなかったため、少し近付けばすぐにお互いの間合いが重なり合った。
直後、仙道は全身の筋肉のリミッターを外し、常人ならばぶれて見えると錯覚するほどの速度で間合いを詰める。
これまでも敵は全て正面から打ち砕いてきた。ならば、己にとって最強の一撃は全身全霊の力を籠めた突きだ。
「ハァァァァァァ――――――ッ!!」
気合一閃、廃ビルの床が砕けるほどの震脚で地面を鳴らし。回転を加えた弾丸のように鋭い突きが、湊を穿つため放たれる。
突きを放った瞬間、相手はまだ刀を鞘から抜いてすらいなかった。
通常の槍よりも幅の広い穂先は、咄嗟の回避では避けきる事など敵わない。
真っ直ぐ伸びる槍が湊の黒い外套に触れ、仙道は殺ったと確信したため、自分の槍が〝そのまま〟外套へと吸い込まれている事実に気付けなかった。
そして、相手に悟られぬ内に右手で槍に触れていた湊は、逆手に持って刀を抜くと、瞳を蒼く光らせ仙道の首を刎ね飛ばしたのだった。
＊＊＊

時流操作も使わず、常人を超えた動体視力と反応速度で槍に触れた湊は、相手の武器に力を通す事で外套へ収納できるように細工した。
全力で放った突きが相手の装備に触れれば、当然、相手は決まったと思うだろう。
防刃・防弾だろうと衝撃までは殺せない。だからこそ、仮に湊の服が同じ防刃仕様だったとしても、痛みで怯んだところへ追撃を打ち込むことで勝利を完全な物に出来る。
槍を構えた仙道はそんな風に考えていた。
《ただ一つ抱いた願い諸共武人の誇りを踏み躙るとは、お主も中々の悪党ぶりよな》
真剣に武人として死合いを望んでいた相手にとって、そのような小細工によって敗れたなど、化けて出てやりたいほど無念だろう。
真っ向勝負を受けて立つと見せておきながら、表情一つ変えずに相手を騙しきった少年を見て、着崩し胸元が大きく開いた十二単を纏った黒髪の女がからからとおかしそうに笑って話す。
けれど、一歩間違えれば穂先に当たって腕が飛んでいたかもしれない状況で、相手に気付かれることなく得物に触れ、完璧に作戦を成し遂げたのだから、湊も手を抜いていた訳ではない。
「勝手に相手が勘違いしたんだろ」
イリス殺しの原因となった者を殺したことで、新たに〝剛毅〟のカードを手にした少年は、勝手に出てきた運命〝鈴鹿御前（スズカゴゼン）〟へ淡々と返す。
伝承の鈴鹿御前は鬼女や盗賊、また天女と描かれることもある武と神通力の才に溢れた美女だ。
ほぼ同時期に手に入れた、生まれてすぐ親に捨てられたという神話のエピソードを持つ戦車〝アタランテ〟よりも、モデルが鬼である分、見た目も含めて過去の名切りとしては相応しいと言える。
もっとも、この鈴鹿御前は別名として知られる立烏帽子だけでなく、三振りの宝剣や鎧すら身に付けていない訳だが、湊は特に気にした様子もなく手に入れたペルソナを呼び出した。
「こい、大口真神（オオグチノマガミ）」

湊がカードを握りつぶすと、水色の欠片が渦巻き、光の中から牛ほどの大きさがある白い狼が現れた。
仕事をやめると決めた以上、今後、仮面舞踏会の小狼と名乗る機会はぐっと減る。
だというのに、その名を表すような〝狼〟のペルソナを手に入れるとはどういった偶然か。
ペルソナを手に入れたときの自身の状況、そしてそのペルソナたちの司るアルカナの意味も含め、湊はしっかりと考えているのだろうか。
大口真神をカードに戻してから落ちている仙道の首を拾いに行った湊へ、茨木童子や湊に似たどこか冷たい雰囲気のある鈴鹿御前が話しかける。
《復讐は愉しいか？　あの女の死を招いた憎い仇を屠れたことで、何かしら得る物はあったのだろう？》
新たに手に入れた大口真神は、湊自身の心の欠片から生まれたペルソナだ。当然、その覚醒には湊の精神的な変化や成長が関係している。
傍目には感情は消えているように映ろうとその事実は揺らがないとして、鈴鹿御前はわざと煽る様に問いかけた。
「……誰だって降りかかる火の粉は払うさ」
《ああ、そうだ。けれども、お主は此度の変化に名切りを巻き込まなかった。自分だけの感情として我らを拒んだのであろう？》
名切りのペルソナの覚醒条件は、湊にとって必要な力を持った者が力を貸すために呼び出されるシステムだ。
優先度は必要な力を持っているかどうかだが、湊に近い年代や、強い力を持っている事によって呼び出され易いという場合もある。
今現在いるメンバーでいえば、必要な力を持っていて呼び出された者は赫夜比売（探知）・アタランテ（弓）、近い年代で呼び出された者は出雲阿国・座敷童子、強い力を持って呼び出されたのは茨木童子・鈴鹿御前といった具合だ。
赫夜比売は茨木童子と同じく強い力を持った存在としての条件も

満たしているが、逆に始祖らと同じ条件で現れ、鬼の伝承を持つ存在を名乗っている鈴鹿御前の能力の高さは、他の名切りとは一線を画すということでもある。
　それだけに、湊の行動に肯定的な意見を述べる他の名切りと違い。元は当主を務めていた鈴鹿御前は自分の見たまま、感じたままの意見を素直に話す。
《ふふっ、心の中で蛇が蠢いておるな。そんなにも図星を突かれた事が悔しいのか？》
　湊の心と繋がっている彼女には、宿主本人では辿りつけぬ最深部に居る蛇神の様子が分かるらしく。くっくっと愉しげな笑みを零して再び問いかける。
　拾った首を胴体と共に袋に入れて外套に収納していた少年は、そんな相手の問いに対し、欠片も関心を持っていない感情の消えた瞳で見返して答える。
「……俺の指標の一つに、大切な者たちの敵であるかどうかというものがある。だからこそ、俺はイリスの敵である久遠の安寧とテロリストを赦しはしない」
《確かに、あの女を不幸な目に遭わせたのは哀れな殉教者共よ。しかし、女の復讐は本人の手で疾うに済んでおるのだぞ？》
　お前のやっていることはただの復讐だ。復讐とは、どれだけ他人のためだと理由を作ったところで自分のために行うものであり、イリス本人の復讐が終わっていることもあって、尚の事誰も他人のためであるなどと信じたりはしない。
　妖艶な雰囲気を纏いながら言外にその事を告げ、湊の行動は本人の求める〝優しい温かな世界〟などには繋がらないと彼女は否定する。
　本来味方であるはずの存在の言葉を受けた少年は、女の前まで進むと頬に手を添え、相手の金色の瞳と自分の蒼い瞳とを合わせながら口を開く。
「……イリスが仕事をしていたのは、他人が自分と同じ目に遭って欲しくないと思っていたからだ。死んだところでその想いが無かった事になる訳じゃない」

《だから選定と称して殺すのか？　それでは、お主が屠る者らとなんら変わらぬな。畜生にも家族はおる》
「俺は自分が善人であるとも、その行動が正義であるとも考えた事はないさ。ただ〝間違ってはいない〟という身勝手で独善的な考えで動く。だから、俺が殺した相手の家族には、そいつは殺されるだけの罪を犯したんだと受け入れてもらう」
以前の湊ならば第三者を巻き込まないよう、たとえ加害者の家族であっても極力被害を出さないようにしていただろう。
事故で死んだ風に偽装する事や、どこかへ失踪したように置き手紙を偽造したりなど、本来必要のない手間を敢えて取っていた。
けれど、今の湊はその家族の事は考慮しないと口にした。相手は殺されて当然の人間だったと知らせると。
何があって湊がこうなったのかは分かる。鈴鹿御前も顕現していなかっただけで、あの闇ばかりの空間で湊と茨木童子のやり取りを眺めていた。
その事で随分と面白そうな奴だと興味を持っていたのに、蓋を開けてみれば人間と変わらない、ただ憎しみに任せて復讐に走るだけのつまらない子どもといった印象。
そうして、自分の理屈を世界に押し付け現実を見ていない相手へ、鈴鹿御前は我儘をいう子どもに言い聞かせるよう静かに話す。
《どのような理由があろうと親しき者を殺められれば、それをそう簡単に受け入れる事など出来はせん。罪を犯していた女が殺され、現にお主は復讐に走っておるではないか。己に出来ぬ事を他者に強要するのか？》
「俺は受け入れてもらうと言っただけだ。納得しろとも、敵討ちするなとも言ってない。殺された理由を知ってからどうするかは自由だ」
言って、湊は鈴鹿御前から離れるとビルの出口に向かって歩き出す。
鈴鹿御前も相手の斜め後ろを進んで外に向かうが、湊は途中で脱いでいたフードを被り、防刃・防弾装備において最高の性能を誇る守りを固める。

外套型にするのは以前から強化法の一つとして考えていた。それをマフラーとして使い続けていたのは、単純に元がマフラーだったことで愛着が湧いているからである。
それを戦闘に向けて切り替えた辺りに、湊の思考も以前よりは鬼らしくなったのだなと鈴鹿御前は静かに考えた。
《して、今後は如何様に動くつもりだ？》
「……仙道の首を地下協会の支部に持っていく。相手の狙いが俺なら、そこには久遠の安寧の人間が複数名いるだろう」
《数が多いからこそ出来る網の張り方よな。一人は勧誘、他の者は様子見と情報を上へと流す役目に分かれておるじゃろう》
相手は湊の行き先が不明な間、規模の大きさに物を言わせた人海戦術で工作員を配置してくる。
敵の狙いが自分である事を、湊は戦闘前に仙道の思考を覗いて確認したため間違いはない。
相手が渡してきた幹部の名簿などから範囲を推測し、敵の本部や黒幕の居場所を特定できないかとも考えたが、仙道が知っているのはオノス地方の屋敷を除けば地方の工場等であった事も真実だと判明している。
しかし、仙道は最後まで思考を読まれていると気付いていなかっただろうが、覚醒後に初めて殺した詐欺師は拷問のような事までして記憶を洗ったというのに、今度はすぐに殺してしまったことで湧いた疑問を鈴鹿御前は拭えない。
名切りで読心が使えるのは湊だけ、九頭龍でも始祖であった赫夜比売しかいないため、廃ビルから出たところで、外套から大型バイクであるＫ１２００Ｓを取り出した湊へ尋ねかけた。
《何故、先ほどの武人には拷問せんなんだか訊いてもよいか？》
「あいつは最初から嘘を言っていない。それが分かっていて拷問するなんて時間の無駄でしかないだろう」
《ふむふむ、敵であろうと信を置くか。やはり、妾にはお主の思考は分からん》
「俺もお前の事が分からないよ。後ろに乗るな。さっさと戻れ」

いつの間にか、十二単から袴姿になってタンデムシートに座った相手へ、湊は無表情のまま自分の中へ戻れと告げる。
別に後ろに人が乗っていたところで運転に支障はない。けれど、ペルソナは出しているだけで力を消費するのだ。
制御できる読心能力持ちの赫夜比売と、そんな力を持った妹と共に過ごしていた茨木童子は、制御出来ない力を持ったことで湊は今後まともな休息を取るのは難しくなると言っていた。
その言い分も当然で、湊の読心対象は高次な精神を持つ全ての生物となっている。
アイギスが犬や猿の言葉を翻訳出来るように、湊も鳥やネズミなど様々な生物の声を拾ってしまうため、拾った声に眠りを妨げられる可能性が高い。
獣たちよりもさらに発達した思考を有した人間たちのいる町など、今の湊にすればオーケストラの大合奏を耳元で聴かされるような苦行を強いられる場所でしか無い。
よって、心身ともに普段よりも回復が見込めない今、移動は基本的に車やバイクなどを利用し、ペルソナとシャドウの力も極力温存してゆく方針を固めた。
それを完全に無視した相手は降りるつもりも戻るつもりもないのか、バイクに跨ってアクセルを吹かしている湊の腰に手を回してしっかりと抱き付く。
《機械仕掛けの騎馬には兼ねてから乗ってみたいと思っておった。しかし、妾の意識を引き上げる者が昨今は居らなんだで、未だその願いは叶っておらぬ。八雲、大命ぞ。しっかり励め》
「現当主は俺だ。亡霊は黙っていろ」
大命とは君主など身分の高い者が下す命令のことだ。
名切りのシステムでは、いくら元当主であっても現当主には敵わず。相手の命令を聞かなければならない。
いまいる名切りが全員で戦えば勝つのは湊だ。人間とペルソナの違いがあっても、シャドウの力とペルソナすら殺せる魔眼を持っている事は大きい。

それを無視して命令してきた相手へ黙れと返した湊は、バイクを発進させ一番近い場所にある地下協会の支部を目指す。

――ベルベットルーム

外の世界で様々な動きがあった頃、ベルベットルームではアイギスの乗るセスナとの通信を終えたエリザベスが、静かに息を吐いて白金の栞をペルソナ全書に挿んでいた。

以前、湊が仙道と戦ったときには、湊の成長とその後の事を考えてイゴールが手助けすることを許可してきた。

けれど、今回はどちらに転んでも湊が成長する事が確定しているため、必要以上に現世に干渉しない事を掟としていることから、イゴールの決定によりベルベットルームの住人は静観を選んでいる。

力の管理者の姉弟らは、自分たちも湊とコミュニティを築いていることから、主の決定に完全に納得した訳ではない。

その妥協点としてイゴールが許可したのが、誰よりも早く湊の危機を察知し目覚めたアイギスへの通信であり、姉弟らも自分たちでは湊を元に戻せないと分かっているのでその提案に従った。

すぐ傍でアイギスと妹の会話を聞いていたマーガレットは、相手が話し終えたことを確認して、自分のペルソナ全書のあるページを見せながら話しかける。

「……終わったわ。あの子、完全に絆を捨てたわね」

真剣な表情で彼女が開いたページは左右どちらも漆黒に染まっていた。

他のどのページも白を基調とした物であるというのに、その見開きのページのみが完全に黒一色になっている。

これは元々そういう色の紙だった訳ではなく、湊の変化に合わせて紙の色も変化したものだ。

そのページに記されていた内容、それは湊が築いていたコミュニティの一覧であった。

「まぁ、実際のところ、心を閉ざしたと考えるべきなのか、絆を本当に捨てたのかは分からないわ。文字通り何も見えなくなってしまった

んだもの。それでも、絆を拒んだ時点でコミュニティの力は得られない」
「では、八雲様はこれからお独りで戦われるので？」
「そうなるわね。ただ、デスだけでなく、名切りのペルソナやジャック・ザ・リッパーみたいな自我持ちという例外も存在するから。あの子が孤独と言っていいのかは分からないけど」
テオドアの質問に答えながら、マーガレットは開いていたペルソナ全書をパタンと閉じる。
今まで出会ってきた過去の契約者の中には、絆を紡いだ相手を長く放置してコミュニティを破滅させていた者も少なからずいた。
だが、その場合は契約者がコミュニティを破滅させたのではなく、築いた相手が契約者に愛想を尽かして破滅したという形だった。
最も経験の浅いテオドアですらそのことは知っているため、ベルベットルームの住人らは、契約者が自ら紡いできた絆を捨てるという今回の事態を、とても稀有な事例としてどう対応すべきか悩んでいた。
「今の八雲様の持つペルソナは蛇神を含めて十五体。その内、自我持ちは七体です」
湊のペルソナを管理しているエリザベスが、自分の持つペルソナ全書を開き。手に入れた順に記載されている湊の所持ペルソナを他の者らに見せた。
死神〝タナトス〟、
審判〝アベル〟、
節制〝シェンウー（玄武）〟、
節制〝チンロン（青龍）〟、
節制〝スーツエー（朱雀）〟、
節制〝バイフー（白虎）〟、
節制〝座敷童子〟、
隠者〝ジャック・ザ・リッパー〟、
魔術師〝出雲阿国〟、
運命〝鈴鹿御前〟、

永劫〝カグヤ〟改め、月〝赫夜比売〟、
太陽〝茨木童子〟、
戦車〝アタランテ〟、
剛毅〝大口真神〟
ペルソナ全書に登録されない蛇神の名は含まれていないが、蛇神を除いても所持ペルソナは十四体と多く。半数が自我持ちとなれば、絆を捨てた後の湊を孤独と言っていいのか判断に困る。
もっと言えば、人間に限定したとしても湊を想っている人間は今も多数おり。殆どの者は湊の身に何が起きているのかも理解していないので、絆を完全に絶つような事態にはなり得ず。客観的に見れば湊は孤独だとは言えない。
しかし、本人が他者との繋がりを拒んだ以上、いくら周囲が湊に尽くそうとしてもその想いが届くことはないだろう。
絆の拒絶は、コミュニティによって外部から付与される心の力も同時に失うことになり、力を求めていた湊にとってはかなりの痛手のはず。
だが、弱体化の可能性から、名切りの血に目覚めた湊の適性値を調べたエリザベスは、現在も上昇を続ける数値に表情を曇らせる。
「……三十六万を超えて尚も上昇中ですか。絆を捨てておきながら、血に目覚めただけでこうまで変わるとは」
「一月ほど前までは十万八千だったというのに大したものね。まぁ、まだこの程度というべきなのかもしれないけど。成長ではなく変革と呼ぶべきレベルだわ」
エリザベスの調べた湊の三十六万という適性値。それは湊の現在の最大値と言う訳ではない。
湊は今もまだ名切りへと変化を続けており、現実世界でたった一時間経つだけでも数値は数千から数万増えている。
身体的・精神的な成長を除けば、死に近付くか触れることで適性は跳ね上がるため、既に死を完全に理解している事に加え、過去の名切りの殺し殺される記憶を見た湊ならば、この上昇速度にも一応の納得は出来た。

しかし、過去の契約者や他のペルソナ使いではあり得ない馬鹿げた上昇速度に、マーガレットが呆れ気味に鼻で笑うと、他の妹弟はどう反応してよいのか困った暗い表情を浮かべる。
「ですが、あれだけの力を一時に使ったというのに、適性値が全く減っていません」
「測り間違いではないの？」
「いいえ、これはエネルギー残量も知ることの出来るタイプで計測した結果です」
エリザベスは、以前、湊に渡した適性値の計測アプリの改良版をテオドアに作らせ、保有適性値と残量まで計測していた。
湊は詐欺師を殺す際にそれなりの力を使っていたので、相応のエネルギー消費があると思われたが、結果は保有量と共に残量も上がり続けるだけ。
最初は回復量が消費量を上回ったのではとも考えたが、それにしても一瞬たりとも消費した形跡がないのはおかしい。
どういう事だと疑問に感じながら考えていると、隣にいたテオドアが口を開いてきた。
「もしやすると、八雲様は適性値以外の何かを使っていらっしゃるのでは？　極稀に消耗した力の代わりに命を使われる方もいるでしょう？」
適性値を使い果たせば一時的に動けなくなり、スキルの発動はおろかペルソナを呼び出す事も出来なくなる。
だが、足りない分を自らの命を使い補う事で、戦った者が過去にはいたと聞いている。
どうやって命を使うのかはテオドアも知らないが、そういった前例があるのなら、湊もまた何かを代償に力を使っている可能性は十分にあった。
「……あの子は自分の生命力を自在に使えるけど、そういう気配は一切なかったわよね？」
「はい。ですので、生命力や命を消費している可能性は排除して宜しいかと」

「だとすると、他に何か使える物はあったかしら?」
「すぐには思い浮かびませんね。というより、こればかりはご本人や共にいる自我持ちのペルソナしか分からないと思います」
考えても適性値と命以外に消費して力に出来るものが何か思い浮かばない。
姉弟らの傍で部屋の主たるイゴールが意味ありげに笑っているが、最凶の姉妹はどうせ雰囲気で笑っているだけだろうと無視して、今は分からないことに頭を使っても無駄だと別の話題に移った。
「……目覚めたペルソナたちのアルカナが気になりますね。運命・月・太陽・戦車・剛毅の順で登録されていますが、永劫から月へと変化した赫夜比売が入っています。これは八雲様の目覚めに含めるべきかどうか」
会話が途切れたところで、エリザベスは自分の持つペルソナ全書のページを眺めながら呟く。
イリスの死を切っ掛けに、湊は次々と新たなペルソナに目覚めている。元からいた永劫〝カグヤ〟も、以前の姿に戻れるとは言え、今後は月〝赫夜比売〟として湊と居ることになる。
そして、目覚めた者たちのアルカナを順番に見ていけば、湊の変化を暗に示していて実に興味深いと住人らも思わず考え込む。
切っ掛けとなったのは運命〝鈴鹿御前〟だ。運命のアルカナが示すのは、正位置なら変化や転換点、逆位置なら別れや不可避の事態が挙げられる。
そのタイミングで鬼のペルソナが目覚めたのも興味深く、これも運命の導きと思ってしまうのも無理はない。
次は真の姿を晒した月〝赫夜比売〟。月は不安定や悲観的など正位置で負の意味合いを強く持つ。しかし、逆位置であれば過去からの脱却や未来への希望など明るい意味を持つ。
ほぼ同時期に目覚めた太陽〝茨木童子〟。こちらは月とは反対に誕生や成就、兆しなど正の意味を強く持つ。ただし、逆位置では挫折や放棄などの意味を持っている。
そんな始祖らと邂逅し、絆を捨てる事を選んで目覚めた戦車〝アタ

ランテ〟。戦車は独立や解放、行動力に征服などの意味を持ち。湊が自ら鬼として再び立つと決めた事に起因して目覚めたのだとも思われる。

けれど、アタランテは親に捨てられた逸話を持つペルソナだ。絆を捨てる場面で〝捨てられる側〟の存在が目覚めた理由が分からず。また逆位置では暴走の意味を持っていることから不安を感じずにはいられない。

そして、イリスの死を招く元凶となった男を殺して手に入れた剛毅〝大口真神〟。こちらは不撓不屈（ふとうふくつ）など強固な意志に関わる意味を司っている。

逆位置には無謀や力の使い方を誤るなど、他のアルカナに続けて不吉な意味を持っている事に加え。大口真神は人間の性質を見分ける力を有し。善人を守護、悪人を罰するものと信仰されていた歴史がある。これが正位置に働けば良いが、逆位置ならば日本の狼信仰が消えていったように、人々から迫害されることだろう。

「本当に考えるのが嫌になるわね。面倒だからという訳ではなく、単純に得体が知れないからという意味でだけど」

湊がこの部屋を訪れた当初、マーガレットはまだ帰ってきていなかったが、それでもイレギュラーなペルソナ使いであることは聞いている。

それからすぐに出会って、他の妹弟と一緒に戦闘訓練をしてやりながら付き合いを続けてきた訳だが、相手は育む様に言われていた絆を捨てて己が望みのために動き出してしまった。

占いが得意なマーガレットも、可能性の申し子である湊の未来は不確定な事象が絡むため上手く占えない。

故に、こうも自分たちの予想から外れた動きをする少年を想い、マーガレットは頭に手を当てて呆れ気味に溜した。

すると、今まで開いていた本をぱたりと閉じたエリザベスが、普段通りの涼しい表情を作りながら、考え込んでいる姉に尋ねた。

「そう言えば、占いには何も出ていないのですか？」

「あの子は精神が複数あるような物だから、個人の運勢を占う占術で

は扱いづらいのよ。けどまぁ、大勢についてはゞ白の王の目覚めゞとだけは出たわね。相手のペルソナ使いがゞ黒の王ゞなら丁度良いのではないかしら？」

湊は黒い服を多く纏っているが、ソフィアも黒いドレスを好んで身に纏っている。

よって、力の管理者にすればどちらが黒でも構わないのだが、チェスに例えれば白が先攻となるため、正しくは別組織の者ではあるものの久遠の安寧側であったアロイス・ボーデヴィッヒを殺した湊が先攻、イリスを殺したソフィアが後攻と殺した順番から考える事も出来る。

湊は今回さらに仙道弥勒を殺したので、ソフィアも次の一手を打ってくる事だろう。両者の戦争において白の駒は王しか盤上におらず。反対に黒にはポーンやビショップにナイトが溢れているため、不要な殺戮と戦争の拡大を望まぬ白の王は苦戦を強いられるだろう。

そんな風に湊の今後に悩んでいる力の管理者らの心を知ってか知らずか、ベルベットルームの主は実に愉快そうに口元を歪め、あらゆる可能性を内包する少年の行きつく先について言葉を発する。

「ゞ絆ゞと ゞ孤独ゞ。それらは正負が異なるだけで、どちらも心の力には違いない。だが、孤独を力へと変えることが出来るのは、ほんの一握りの方だけだ。フフッ、此度のお客人は果たしてどうなることやら」

力に変える事が出来なければそれまで。けれど、力に変える事が出来てしまっても、それはまた別の問題を生む。

主のように今の状況を楽しむことの出来ない従者たちは、それぞれ複雑な表情を浮かべていたのだった。

第八十八話　報せ

夜――九頭龍家

休日の夕食時、厳戸台や九頭龍・百鬼両家の実家から遠く離れた地方都市にある自宅で、九頭龍七歌は母親の手伝いをしながら、キッチンにエプロン姿で立ち鍋の中身をかき混ぜていた。

「フヒヒッ、イモリの尻尾、蝙蝠の羽、さらに熊の爪を混ぜればぁ……カレーの出来上がりだぁ!!」

怪しげな言葉を呟き、最後に元気よく満面の笑みでカレーの完成を告げる七歌。

テーブルで新聞を読んで待っている父・恭介（きょうすけ）は、七歌の言葉を聞いて戸惑い気味に乾いた笑いを漏らしている。

だが、傍でサラダを作っていた母・和奏（わかな）は、娘の後頭部をぺしりと叩いて、溜め息を吐きつつ呆れた様子で諌めた。

「はぁ……そんな材料は使ってないでしょう？　どうして普通に料理が出来ないの？」

「へへっ、普通ってのは自分の個性を殺すってことだぜマザー。私は自分らしく生きるため、この黒魔術式調理法（マジカル・クッキング）をやめる気はないのさ」

「……はぁ、動きと独り言以外はちゃんと出来てるのに、一体誰の影響でこうなったんだか」

気取った口調と仕草で話す七歌を、母親は心底不思議だとばかりに見つめながらサラダを大皿に盛り付けてゆく。

母親の言う通り、七歌は変な事を言いながら魔女が薬を作るような動きをしつつも、実際は慣れた手捌きでちゃちゃっと料理を作っている。

味も見た目も申し分なく、極稀に独創的な盛り付け方をすることを除けば、料理の腕前はかなりの物なのだ。

けれど、家で料理を手伝うときでも、学校の家庭科の授業で調理実習をするときでも、七歌は一切ブレずに黒魔術式調理法を展開している。

文武両道に加え、ルックスもトップクラス。性格もやや男前な部分

はあるが基本的に誰にでも分け隔てなく元気に接することもあって、学校では大勢から慕われている。
だというのに、ルックス等で有名ながらも交友関係が狭いゆかりと違って、七歌は告白される事があまりない。
その原因は、先の調理法と周囲の想像の斜め上や下を行く行動や言動のせいだ。
見た目はとてもいい。胸のボリュームは少々残念だが、絶壁という訳ではなく、引き締まった美しい足も含めてアスリート体型だと評価出来る。
しかし、一般人では七歌の奇怪な行動についていけず。どうにか受け入れて交際に持っていこうと校内一のイケメンが七歌を放課後遊びに誘うと、翌日には首からロザリオと紐で繋げたニンニクをぶら下げ虚ろな瞳で登校してきたこともあったくらいだ。
選挙で上級生らを破り、一年生の頃から生徒会長を務めていることもあって、教師たちからの信用は厚い。
だが、もう少し落ち着いたり、周囲を驚かすような行動を控える事は出来ないかと、保護者を含めた三者面談ではよく言われていた。
幼い頃からほぼ変わらず育っているので、これ自体が七歌の素の性格であると両親や親しい者らは思っている。
とはいえ、このまま大人になり社会に出て問題を起こされては困るので、一緒に料理をテーブルに運びながら、母は娘に質問した。
「貴女はいつになったら歳相応の落ち着きを身に付けるんですか？来年には受験もあるし、高校になってからも今のままだと謹慎処分を受けたりするかもしれないのよ？」
「んー、まぁ、そのときはそのときってことで。ってか、私の人格の核を作ったのって八雲くんなんだよね。山で迷子になった私を背負ったまま崖から飛び降りたり、車に轢かれそうになった私を抱えてボンネットの上に飛び乗ってやり過ごしたり。ああ、こりゃ正攻法じゃ敵わないなと子どもながらに思った訳でして」
七歌たち一家も湊ら一家も、途中から実家を離れて暮らしていたが、本当に小さい頃は共に実家で暮らし子ども同士はよく遊んでい

た。
　他の赤ん坊よりも成長の速かった湊に比べ、他所の子どもより身体が丈夫でありながら、しかし、成長速度は変わらない七歌を湊はよく助けてやっていた。
　互いに一族の事は知らないが、身体能力の優れる湊の真似をしようしている間に、七歌は何度も危険な目に遭い。
　その度、湊は大人が駆けつけるよりも速く七歌を抱き上げ跳躍し、迫っていた車のボンネットをさらに足場にして屋根に移動して助かったことや。階段の手すりに乗り上げて下を見ようとしたまま落下しかけ、一緒に飛び降りた湊が空中で七歌を確保し、猫の如く無事に着地して助かった事などが何度もあった。
　どんな高さからでも着地して無事に済むのは、湊が幼少期から自然に身に付けていた身体技能と肉体性能の合わせ技だ。
　助けられる側という最も近い場所でそれらを目にしていた七歌にすれば、何をしてでも勝ちたいと思いながらも、どれだけ真面目に頑張っても勝つ事は出来ないと理解出来てしまう。
　だからこそ、七歌は正攻法を諦め、普通とは違う事をしていれば何かしら勝てるのではと思い、奇怪な行動を取る様になったらしい。
　そんな娘の話しを聞いた両親は複雑そうな顔をしているが、装ったカレーとサラダの取り皿をテーブルに並べ全員が席に着くと、七歌はスプーンを持ったまま手を合わせる。
「いっただきまーす！」
　快活に食事の挨拶をすれば、持っていたスプーンでカレーを掬い口へ運ぶ。
　材料を切るのも、ルーを作るのも自分でやったのだから味は分かっている。
　それでも、娘の食べる姿に笑っている両親に見られながら、今日も上手に出来たぜと満足気な表情で七歌は食事を続けていた。
　そう、遠く離れた異国の地で目覚めた新たな龍の誕生を感じ取るまでは。
『――――――――ッ!?』

脳内を一条の閃光が走ったかのような独特な感覚、七歌はこれを体験するのは初めてだったが、弟と娘が血に目覚めたときに既に体験していた恭介は、食べる手を止め驚愕に目を見開いていた。
娘と夫が突然動きを止めたことで、何が起こったのか状況が掴めない和奏が声をかける。
「二人ともどうしたの？」
手を止めてジッとしている二人の表情は真剣そのもの。ただし、七歌の方は考え込んでいる様子なのに対し、恭介は何かに驚き怯えどこか顔色が悪く見える。
心配になった和奏がもう一度声をかけようとしたとき、父よりも早く七歌が口を開いた。
「……八雲くんが目覚めた。特級五爪守護龍憑きか、なるほどね。流石はハイブリッド（特別製）」
「八雲君が目覚めた？　一体何の話し？」
二人と違って和奏は龍の生まれではない。名家の出身であり、嫁いできた際に龍と鬼の一族の話しも聞いているが、龍の階級制度などはあまり詳しくない。
湊の生存についても信じているのは七歌くらいなもので、そちらについては和奏だけでなく九頭龍家の誰も信じていなかった。
だが、九頭龍家の感応現象は個人までは特定できないものの、同じ一族の者が目覚めた事を感じ取る事が出来、隠し子がいなければ条件を満たす者が湊しかいないのだ。
その事から、逆説的に百鬼八雲の生存と覚醒が判明したと聞いても、それを知覚出来ない彼女は勿論理解出来ないだろう。
けれど、歴史上一人として存在しなかった最上級の龍に目覚めた者が現れたことで、七歌は現九頭龍家の当主として不敵に笑い答える。
「九頭龍家の家督が私から八雲くんに動いたんだよ。私は叔父さんと同じ一級四爪だからね。特級五爪が新たに現れたなら、一族の仕来たりに従って長は現行最上位の者が務めるって訳」
「八雲君は事故で亡くなったでしょう。一体何の話しをしているの？」

「だーかーらぁ、その前提が崩れたの。私が言っていた通り、覚醒を感じ取ったことで八雲くんの生存も確定したんだって。これでお爺ちゃんとお父さんも信じざるを得ないよね？」
七歌の祖父と父は揃って二級三爪守護龍憑きだ。両者よりも高位で家督を継ぐはずだった雅が、家督の継承権を破棄することを条件に百鬼へ婿養子にいったため、今までは祖父が引き続き当主を務めていた。
だが、名切りと違って目覚める時期に個人差のある九頭龍では、今年になって七歌がようやく力に目覚め、父たちを超える一級四爪と判明したことで当主となっている。
実家の仕事は学業があるため隠居している祖父にほとんど任せているが、今頃は七歌たちと同じように新たな龍の目覚めを感知し、条件を満たす者が湊しかいないとして生存判明に驚愕しているに違いない。
「いやぁ、これで私も家のしがらみから解放されるね。八雲くん、いつ来るのかなぁ。あ、実家の建物とか売っちゃうのかな？　そこらへんは残しておいて欲しいんだけど」
「……これは何かの間違いだ。そんな訳がないんだ。八雲君は確かに死んだはずだろうっ!?」
くすくすと愉快気な笑みを浮かべている七歌に対し、ようやく話せる状態になった恭介が声を荒げて、今感じ取った龍の目覚めは間違いだと否定する。
自分たちの知る少年は両親と共に事故で死んだ。娘が生存していると言っていたが、確かに葬儀を行った。生きているはずはないんだと。
そんな動揺している父の姿を見ながら、新たな龍の目覚めを感じ取ったならば、それに間違いはないと聞いていた七歌は静かに口を開く。
「八雲くんの生存は確実って言ってたでしょ。そして、改めて証明された。信じたくない気持ちは分からなくもないけど、一族の仕来たりにおいて当主は八雲くんに兼任してもらいます。それまでは私が当

主代行を続けるけどね」
「っ!?　鬼が龍を従えるなどっ」
「じゃあ、お父さんは八雲くんに勝てるの？　八雲くんは鬼であり龍。盟約からも外れた現人神（アラヒトガミ）だよ？　力もろくに使えない二級三爪じゃ立って対峙することすら無理でしょ」
　霊視までしか受け継いでいない半端な龍が、どうやって名切りの最高傑作に勝てると言うのか。
　龍を守っていた盟約は既に消えてしまったのだ。もう鬼を従えることなど出来ず。反対に最高位の龍となった湊に他の龍たちが従うことになる。
　赤褐色から深紅の瞳となった娘に冷たく事実を告げられ、恭介はそれ以上、湊が新たな当主になる事に何も言えなかった。
　そうして、会話が終了すると、食事を続けていた七歌が「ごちそうさま」と言って立ち上がる。
　食事の手を止めていた両親が立ち上がった娘に視線を向けると、食べ終えた食器をシンクに運んで戻ってきた七歌が笑顔で言葉を残してゆく。
「英恵おばさまに八雲くんの生存が確定したって電話してくるね。それじゃ！」
　外部の人間にまで鬼籍に入った者の生存を告げて良いのかは分からない。けれど、龍と鬼の両家と親交のあった彼女ならまだマシだろう。
　両親はそんな風に考えながら、携帯を片手に上機嫌で去っていく娘を、ただ黙って見送るしか出来なかった。

　午前――シャテーニュ村・教会
　イリスたち家族の眠るシャテーニュ村の教会墓地で、シックなスーツに身を包んだナタリアと私兵らは、かつての仲間に花を手向けていた。
　今でも村の人間たちや教会の者が手入れをしてくれているのだろう。特に掃除する必要もなく、彼女が好きだった色の花を置いて静か

に目を閉じる。
（……結局、ボウヤとは行き違いになってしまったわね）
イリスからの連絡を受け取ったナタリアたちは、数日分の出掛ける準備を整えると、翌日、蠍の心臓本部のあるラナフからパンテルのカニスへと向かった。
マダム・リリィとはナタリアも顔なじみであり、イリスの訃報を聞き、最期の望みである湊を日本へ返すため迎えに来た事を告げると、既にシャテーニュ村へ向かったと言われた。
カニスの街へ着いたのが遅かったため、その日は『真夏の夜の夢』に一泊し、翌朝、すぐにフランスのシャテーニュ村へ向かおうとするも、強風によって飛行機が遅れてしまい。
フランスに到着したのが遅い時間だったため、パリの方で一泊してから、朝になってから車を飛ばしてようやく着いたのだ。
到着した一同は、あまり広くない村の中を探しながら教会に向かうも湊を発見出来ず、教会で司祭にこんな少年は来なかったか訪ねてみれば、なんと昨日の昼前に村を去ったと告げられた。
仮に昨日の飛行機が遅れていなければ、かなり際どいがギリギリで行き違いにならずに済んだかもしれない。
その事を思うと、なんとも儘ならないものだと友人の墓前でなければ溜め息を吐きたい気分だった。
「ぐすっ……イリスさんが、どうしてぇ……」
「……こんな事って……あんまりです」
花を手向けながら泣いているレベッカとバーバラ。
他の男性陣はやりきれない暗い表情で俯いているが、ナタリアにとっては大切な者の死に素直に泣ける彼女たちが羨ましく思えた。
ナタリアも男性陣も悲しくない訳ではない。永遠の別れに対する悲しさや寂しさ、殺した者への怒りだって当然ある。
だが、何度も仲間たちの死を目にしてきたことで、大人たちは味方の死に慣れてしまっていた。
昔は、目の前で泣いている二人のように人前でとはいかずとも、仲間の死に打たれ隠れて涙を流していたものだ。

数日はろくに食事も摂れず、どこか集中を欠いていたせいで訓練中に怒られもした。
しかし、悲しい事に人は何度も経験するうちに感情の処理法を覚えて、いつしか仲間の死にすら慣れてゆく。
今回はこいつだったが、明日は自分かも知れない。いや、自分が腑抜けていれば、他の者たちが殺されるかもしれない。
そんな風に死に慣れていきながら、悲しみに暮れている余裕もなく、いつしかこの世は不条理なものだと受け入れるようにすらなってしまう。
だからこそ、大人たちには素直に泣くことの出来る者がどこか眩しく見えた。
「レベッカ、バーバラ、そろそろ行くわよ」
『……はい』
ナタリアの言葉に反応し、目を充血させハンカチを持ったまま立ち上がる二人。
墓地から村へと戻る際、チャドとラースが一応付き添ってはいるが、この平和で長閑な村で襲撃される恐れなどないので、泣いている者同士でいさせても良いだろうと考えながら、ナタリアは湊とどうやって合流するか思案していた。
湊との連絡は未だにつかない。電話もメールも届かず、司祭らに行き先を聞いていないか尋ねても何も聞いていないと言っていた。
カニスの街でマダム・リリィから、湊はもう依頼を受けず仕事を辞めるつもりだと聞いたが、イリスが殺された事を知れば湊は十中八九復讐に走るだろう。
仕事は辞め依頼は受けない。だが、裏の世界から身を引くわけではない。
リリィに語った言葉の真の意味がそうだと考えれば、相手は今も何か行動を起こす準備をしていると思われる。
壁の向こうまで見通すような、千里眼に似た力を持った者に潜伏されれば、近付いただけで逃げられる可能性があるため、ナタリアはいっそ何か大きな動きを見せて探す手間が省けないかと考えた。

もっとも、本当にそんな事になればイリスを殺した黒幕にも見つかってしまうので、本心では潜伏を続けて貰い、何か行動を起こす前に連絡を付けたいと思っている。
「はぁ……何をするか分からないって点では、ボウヤの右に出る者はいないわね」
「ははっ、確かに姫の行動は読めませんからね。実際、何が出来るのかもイリスしか把握してなかった。いや、イリスですら姫の全力は知らなかったんじゃないかと思いますよ」
「名切りなんて都市伝説を未だに信じている人間の方が少ないもの。地上十数メートルから着地したり、心臓を破壊しても生きているのを目にしていなければ、私も完全に信じる気にはなれなかったわ」
ナタリアの呟きに後ろを歩いていたラースが反応し答える。
蠍の心臓にいた時点で、たびたび信じられないような強さを見せられていたが、イリスから聞いていた話しが真実ならば、湊はまだ全力を誰にも見せていなかった事になる。
本人すらも自覚せず力を抑えているのだから、完全体の名切りは随分と恐ろしい存在なのだろう。
いつ目覚めるとも分からないそんな相手を、いくら故人の遺言とはいえ、無理矢理にでも拘束して日本へ送り届けなければならないのだから嫌になる。
とはいえ、送り届けるにしても、行方知れずの現状をどうにか打破しなければならないため、目撃情報がないか調べさせていた蠍の心臓本部へ、その後の状況はどうなっているかナタリアは連絡を取ることにした。
こんな山奥の田舎でも通話可能な衛星電話を取り出したナタリアは、すぐに登録してある番号を選び、相手が出るまで数コール待つ。
すると、三コール目に差しかかったところで、回線の繋がる音がして向こうで待っていたセルゲイの声が聞こえていた。
《こちら、本部》
「私よ、セルゲイ。現在地はフランスのシャテーニュ村。ボウヤとは行き違いになって会えなかったわ。どこへ向かったのかも分からな

いから、そちらで何か情報を掴んでいたら教えて欲しいの。何か進展はあったかしら？」
《ええ、目撃情報が一つ。というか、いま裏の方ではその話題で持ち切りです》
「話題で持ち切り？　どういうこと？」
ナタリアたちはここ数日移動ばかりしていたせいで、表の世界よりも情報の流れが速い裏の話題に疎くなっていた。
それを隠しても意味がないので、素直にどんな話題か尋ねると、セルゲイはどこか動揺を押し殺しているような様子で答えてくる。
《……実は昨夜、地下協会のパンテル支部に小狼が現れたんです。それも、あの仙道弥勒の死体を持って》
「なんですって!?」
あまりに予想外な内容に驚くナタリア。
その後、セルゲイからさらに詳しく話しを聞くと、他の者にも話しを伝え、一同は対策を練るため蠍の心臓本部へと一度帰還するのだった。

――地下協会・パンテル支部

カニスの街より車で北に二時間ほど離れた場所にある街〝プロバトン〟。そこに地下協会のパンテル支部はあった。
街の入り口でバイクを降りて外套に仕舞った湊は、大きな寝袋のような物を肩に担いで深夜の街の中を進む。
後ろをついてくる鈴鹿御前は、バイクに乗る前と同じ胸元を大きく開(はだ)けさせた十二単に再び戻っていた。
二人は静かな街の中を進み、外れの方にある小洒落たＢＡＲの扉を開いて中へと入ってゆく。
一人は大きな荷物を持ちながらフード付きの外套で全身を覆い。もう一人は現代の日本でも珍しい煌びやかな着物姿。そして両者共が妖しい色香を漂わせた麗人となれば、嫌でも人目を引くものだ。
もっとも、湊の本来の性別は男なので麗人という呼称は正しくないのだが、客の男たちが厭らしい視線を向け声をかけてきても、相手をする価値もない下衆だとして無視して奥の扉へと向かう。

「お客様、こちらはＶＩＰルームでございます。申し訳ありませんが、予約のないお客様はご利用いただけません」
「……懸賞金を受け取りに来た」
「畏まりました。ごゆっくりどうぞ」
　扉の前に立っていた男に用件を伝え通る事を許された二人は、ＶＩＰルームに繋がる廊下の途中にある扉から地下へと続く階段を下りてゆく。
　ここは地下協会の支部だが、裏の仕事の受注や斡旋を大っぴらに出来ないために、わざわざＶＩＰ区画から地下へ通す様にしているのだ。
　通るために必要なのは用件を入り口で伝えるだけ。場所によって条件は異なるが、大概はそれで済むのだから、セキュリティも何もあったものではない。
　とはいえ、ただ金を受け取るために寄った湊にすれば、余計な手続きなど手間をかける必要が無い方がむしろありがたかった。
　表のＢＡＲは少々こじんまりとした広さだが、地下にある支部は宿泊施設もついており、総合的な敷地面積は学校の体育館二つ分よりも広かったりする。
　そこには当然、裏の世界で生きている善人とは呼べない者も多数いるため、周囲の人間の心や記憶を勝手に受信して読み取ってしまう今の湊には辛い場所だ。
《見るに堪えん下衆の溜まり場よの。この様な輩を相手に仕事をしていて、お主もよく染まらんものだ》
「……育ちは悪くないんでな」
　階段を下りきって集会場のような場所に出ると、話しかけてきた鈴鹿御前に答えながら被っていたフードを脱ぐ湊。
　端のテーブルで酒を飲んでいた男たちは、肩にかかる艶やかな髪と神秘的な蒼い瞳、そして、後ろに続く鈴鹿御前にどこか似た退廃的ながらも見る者を魅了する美貌が露わになった途端、下品に口笛を吹いて色めき立っている。
　レインコートのような黒い外套で体型が隠れ、美人で性別が分かり

辛くなっているが故の反応だが、酒盛りに誘ってきた男たちを無視して、湊たちはギルドの協会員の待つ受付へ向かった。
「地下協会パンテル支部へようこそ。本日はどういったご用件でしょうか？」
「懸賞金の受け取りを」
「手配書の賞金首でしょうか。始末した証拠となる物はお持ちですか？」
懸賞金と言っても、賞金首の討伐から希少生物の捕獲など様々な仕事がある。
今回は、湊が大きな袋を担いでいたので予想は出来たが、念のために協会員が確認出来る物があるか尋ねてくると、静かに頷いて湊は袋を床の上に置いた。
それを見た協会員は傍にいた別の者を呼びつけ、床に置かれた袋の中身を確認しにやってくる。
死体収容用の袋であるため、同フロアで食事をしている者には不幸な事だが、やってきた若い協会員の男はファスナーの位置を確認するなり、すぐに袋を開けた。
「ひぃっ!?　せ、仙道弥勒っ!?」
袋を開けた男は、裏界でも有名な赤髪の男の生首が胴体の上に置かれているのを見て、慄きながら後退る。
カウンターにいた男も、仲間の言葉を聞いて信じられないとばかりカウンターを回って確認しに走ってきた。
右手には手配書の仙道の写真を持ち、左手には手袋をはめて本人であるかを念入りに確かめる。
最初に確認しにやってきた協会員が大声で仙道の名を叫んだため、現在、この集会場にいる全ての者たちの視線が湊ら一団に集まっていた。
目立つ事は嫌いではない鈴鹿御前はともかく、大きなデメリットも抱えている読心持ちの湊にすれば、人々の好奇心という名の雑音が酷く煩わしかった。
協会員が確かめること十五分。途中で他の協会員が二名やってき

て、念入りに本人であると確認した後、湊に遺体の移送許可を取ってから共に去って行った。
　そうして、随分と待たされようやく遺体が本物だと証明されたことで、協会員はカウンターに戻って湊に話しかけてきた。
「遺体を仙道弥勒本人だと確認致しました。現在、彼に掛けられていた懸賞金は七六六万ドルとなっております。大金ですので指定口座への振り込みか小切手になりますが、どちらになさいますか？」
「小切手で良い」
「畏まりました。では、用意させていただきます」
　言い終わるなり、男は地下協会の発行印の押された小切手に金額を記入し、湊に正しく記入されているかを確認してきた。
　金額にミスはなく、また用紙自体も本物である事は、心を読める者にとって確認する事など造作もない。
　無事に懸賞金の小切手を受け取り。もう用が無くなった湊はカウンターを後にして鈴鹿御前と共に去ろうとする。
　だがそのとき、ずっと様子を窺っていたらしい白髪混じりの中年男性が近付いてきた。
「どうも御機嫌よう。この度はあの〝武神・仙道弥勒〟を打ち負かしたとのことで、少々驚きました」
「……何の用だ？」
「ああ、失礼。わたくし〝久遠の安寧〟という組織の者でして、是非とも貴方様を迎え入れたいとお誘いに上がった次第でございます。実はこの勧誘は我らが姫様直々の申し出なのですよ」
　にこやかに話す相手の言葉に嘘はない。相手は下っ端も下っ端だが、正式に久遠の安寧に所属している工作員の一人。
　湊の勧誘は書簡やメールでの伝達のようだが、実際にソフィアが各国にいる工作員に指示したようだ。
　その指示の内容は、
「……仮面舞踏会の小狼の勧誘。相手の出す金銭的な条件は全て受けいれ、また組織での地位もソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインに次ぐ物を約束する。しかし、交渉に失敗した場合は生きたまま拘

束し、捕縛に成功したときには上層部への連絡の後、さらなる指示を待て」
「っ!? な、なぜ、貴方がその内容を?」
「随分と舐められたものだな。そんな麻酔銃を打ち込まれたところで、指先一つ鈍らせることは出来ない」
驚愕し腰が引けている男に言い切り、湊は鈴鹿御前が投げてきた金糸の柄をした刀を受け取った次の瞬間には振り抜き首を刎ねていた。
刎ねた首が胴体を離れて飛んでゆく。まるでスローモーションのようにゆっくりと落下しながら、動きを制御する頭部を失った胴体も血を噴き出して静かに倒れ出す。
しかし、元は一つだったそれらが地面に触れるよりも早く、湊は唖然としている者らの視界から一瞬で消え、テーブルで酒を飲んでいた者たちの背後に回り込んだかと思えば、その内の一人の心臓へ深々と刀を刺していた。
最初の男に続いて、二人目が殺されるまでの間は三秒にも満たない。ほとんどの者は湊が視界から消えて次に現れるまで、全く知覚出来ていなかっただろう。
そもそも、いくらアウトローな事を扱っている場所と言えど、酒に酔った者同士が殴り合いの喧嘩になることはあるが、急に人を切り殺すような異常者が現れる事など稀だ。
仮にそんな者が現れようと、大概の場合、周囲の者らが一斉に異常者を排除しようと動き出すため、騒ぎは即座に収束をみせる。
だが、排除しようと動き出す前に異常者が別の行動を取ってしまっては、状況を理解出来ない者たちは浮足立ってしまい。まるで使い物にならなくなっていた。
「あ、あいつ久遠の安寧のヤツを殺りやがったっ!?」
「なんで、他のやつまで殺してやがんだよっ。見境無しかあのバケモノっ」
「仙道殺しが他のやつまで殺し出したぞっ、全員銃を取れ!」
先ほどまで酒を飲んでだらしのない顔をしていた者たちですら、一連の行動に慄き、自分たちの理解を超えている存在を排除しようと銃

を手にする。
久遠の安寧の構成員を名乗る者を交渉するまでもなく殺した。
これはその組織に対する宣戦布告であり、ヨーロッパで活動している仕事屋たちにすれば自殺志願以外の何物でもない。
そんな事を考えている間に、次は自分が殺されるかもしれない不安から、銃を持った者たちは一斉に銃口を湊に向ける。
けれど、欠伸の出そうな緩慢な動きを見せる者らを横目に、向けられた本人は再び他者とは異なる時の流れに乗って鈴鹿御前の元に戻り、血を払った刀を彼女に返し口を開いた。
「……振り易い刀だな」
《名をソハヤノツルギと云う。まぁ、史実の物とは異なるが妾の武具は全て一流故な。本来ならば貸し与えることなどせぬが、今後もお主だけは特別に貸してやらんでもないぞ》
「外套にした時点で即時抜刀が可能になった。別に貸して貰う必要はない」
マフラーは首に巻いていたため、一度首に手を持っていく動作が必要だったが、外套にしたことで脇腹だろうが背中だろうがどこからでも手を入れて武器を取り出せるようになった。
鞘を中に置いてくれれば既に抜刀した状態で振り抜ける事もあり、別に武器を貸して貰う必要はないと返す。
子孫のつれない態度に鈴鹿御前は頬をむくれさせているが、殺す度に消えて別の場所に現れる湊に対し、周囲の者が余計に騒がしくなってきたので、湊は身内の相手をする前に拳銃を取り出し、今度はまた別の人間に向けて撃ち放った。
愛用のガバメントから放たれた弾丸は、他の者が反応する暇もなく一人の女の眉間を貫通する。
頭から血を流し倒れてゆく女を見て、僅かに動けるようになった者がまたしても人を殺した湊に向かって恐怖で叫んだ。
「こ、殺されるぞっ!!　全員逃げろぉぉぉぉっ!!」
怯えた者たちが一斉に席を立って階段へと向かおうと駆け出す。
しかし、上には大勢の一般人が客としてやってきているので、突然

百人を超える裏の仕事屋たちが上の店に現れれば混乱が起きてしまう。
混乱が起きれば怪我人が続出し、店自体が摘発されることが懸念されるため、地下協会の者たちは逃げようとする仕事屋たちを止めようとした。
「――――動くな」
だが、地下協会の者らが止めようと動き始めたとき、フロア中の人間の耳に静かだがよく通る低い声が届いた。
まるで耳元で話しかけられたかのような、ゾクリとする悪寒に全員の動きが止まる。
そして、誰一人動けずに固まっていると、声を出した本人は後ろに女を連れたまま悠々と進み、ある男の前で立ち止まった。
「……お前らの上司に伝えろ。殺して殺して殺し続けて、構成員らの屍で築いた山に墓標を建ててやると。当然、自分が殺される覚悟を持って挑んできたんだろう。その覚悟に報いるため久遠の安寧は望み通りに潰してやる。仮面舞踏会の小狼ではなく、名切りの鬼としてな」
《ふふっ、愉しい戦になりそうじゃ。光栄に思えよ、凡骨。この場にいる仲間の内、貴様だけは我らが当主より言伝を授けるため生かされたのだからな》
湊のペルソナになった事で言語能力を逆にフィードバックした鈴鹿御前が、意気揚々と流暢な英語で生かした理由を告げる。
先ほどまで湊が殺していたのは、全員が全員、久遠の安寧の構成員であった。
ただし、潜んでいたため周囲の者はそうと気付いていなかったようだが、心と記憶を読まれては流石に隠し通すことなど出来はしない。
鈴鹿御前に読心能力はないが、湊が現れるまで最も〝完全なるモノ〟に近かった歴代最強の当主であった彼女もまた、周囲が気付かぬほど僅かな反応の差異を驚異的な洞察力で見抜いていたらしい。
氷と華、そう例えたくなる対極な表情を浮かべる両者から言伝を預かった男は、腰を抜かしてブンブンと首を縦に振っている。

それを確認した二人はもうここに用はないとばかりに歩き出し、入り口にいた地下協会の者を手で押し退けて、そのまま静かに去って行った。

第八十九話　仲間たちの会合

深夜――ヨーロッパ・地方都市

とある高層ビルの屋上にいる湊と戦車〝アタランテ〟。秋の訪れを感じさせる冷えた風が、二人の身体へと吹き付け服や髪をはためかせる。

しかし、少年はそれを一切気にした様子もなく、以前は半分も引くことの出来なかった紅緋色の短弓を限界まで引き絞って構えていた。

《風は見えているな。生憎の向かい風だが獲物にこちらの匂いが届かないのは好都合。ビル風は酷く荒れる事もあるが、感知能力で数キロ先の風の動きを知っておけば、そこから予想する事も可能だ》

いま湊が弓を構える先には何もない。ただ道路と歩道があり、深夜という事で人がまばらにだが歩いている事を除けば、ターゲットとなりそうな物は何もないのだ。

けれど、二人は風を読みながら狙いを調整し、そのときが来るのを待っていた。

狙撃ならば対物ライフルによって二キロヒットも可能な腕前を持つ者が、原始的とも言える弓矢を駆使した暗殺を企てている。

敵と定めた者を殺すときには、機械の如き冷徹さで確実性を優先する普段を知っている者であれば、これはどんな趣向の戯れだと正気を疑い問い質すだろう。

だが、いまの湊は一切の遊びもなく、氷のような冷たさを宿した蒼い瞳で、直線距離にしておよそ六百メートル先の高級ホテルから出てきたターゲットを捉えていた。

同じく風に混じる強烈な香水の匂いによって、対象がホテルから出てきたのを感知していたアタランテも風の流れを嗅ぎ分け指示を出す。

《もう少し上だ。其処で待て……よし、放て》

アタランテの指示通り、湊は狙いを付けた矢を放った。

瞬間最高速度で秒速一五二メートルを叩き出す矢は、夜の暗闇の中、鋭い一条の光となって目標へと近付いてゆく。

風に流され、弾丸では考えられないような曲線を描きビルを迂回する。
そんな物が近付いてきているとは知らず、ホテルから出てきた上等なスーツに身を包んだ長身の初老男性は、会食相手なのだろう下品な成金趣味丸出しの中年と共にエントランス前に停められた車に向かっていた。
車まで残り五メートル、四メートル、三メートル……と、男が進めたのはそこまでだった。
風を切る、ヒュッ、という高い音が聞こえたかと思えば、次の瞬間には頭部を矢が貫通し、視界は赤く染まって男は意識を手放した。
硬い頭蓋骨を貫き脳にも深刻なダメージを与えたのだ、これで生きていられる筈もなく、頭に矢が刺さったまま倒れた男を見て、会食相手だけでなく付き人らしき者やホテルのボーイたちも慌てふためている。
その様子を確認して弓を下ろした少年に、風に乗って届いた血の臭いで成功を察した女が声をかける。
《見事。如何に技術が進歩しようと、現存する弓に同じだけの有効射程を持つ物はないだろう。鉄砲と違い弓は放った矢以外に痕跡を残しづらい。故に、どのような捜査機関も射撃点を割り出せず、そなたの仕業だと思おうが決定的な確証を得るには至らぬ》
現代の弓でもただ遠くに飛ばす事だけを考えれば、その飛距離は五百メートルに届くこともある。
しかし、それはただ遠くへ飛ばすために中空に向けて射ち放つという方法であり、湊のように狙った敵を射殺す事は出来ない。
高低差を利用して遠矢に適した状況を作ってはいるが、それでも風を利用し、矢の軌道を上下左右に変化させながら完全な死角となった場所を狙撃する離れ業を、まさかこんな離れた場所からしているとは誰も思うまい。
故に、名切り一の弓使いであったアタランテは、自らと並ぶ腕前を持つ湊を誇らしげに見つめる。
純粋な腕力で今の湊を上回る名切りは存在しない。それを踏まえ

れば、有効射程ではむしろ湊の方が勝っているくらいだ。
実子に弓の才がなかったことで、ついぞ教える事が出来なかった彼女は、時を経て子どもの鍛錬に付き合える事が嬉しかった。
風に揺れる月明かりと同じ色の髪をかき上げながら、女性ながら凛々しさも感じる西洋人風の顔に喜色を浮かべ、アタランテは湊と共に屋上の出口へと向かって歩き出す。
一方、それとは対照的に感情の消えた表情をしている少年は、光や発砲音を出さないことで敵に居場所がばれづらく、さらに曲射という妙技で障害物を避けながら敵を屠る術を得たことを感慨深く思っていた。
(名切りの血のおかげで理論を完全に把握して修練出来るからか、完全に未知な分野の技術も習得が異様に速いな)
過去の名切りらの知識を引き出すのは簡単だ。この知識が欲しいと願えば自然と頭に浮かぶのだから。
それを閲覧して自分の知識として一度落とし、自分の身体で実際にやってみる事で最適化を図る。
その際、肉体のスペックが不足しているという事は基本的にない。
戦闘を知らなかった菖蒲は、筋力などの関係でろくに技術の習得も出来なかったようだが、本格的な実戦で身体を鍛えている湊にすれば、むしろ過去の名切りの大半よりもよっぽど修羅場を潜っていた。
加えて、赫夜比売の探知やアナライズを使えば、どういった動き方をすれば良いのかが自然と分かってくる。
先ほどの射撃にしても、本来は長い経験の中で覚えてゆく風の流れを、能力の目で視覚情報のように完璧に捉えていたのだ。
技術と知識を完璧に把握し、時に最高の師から学び、また実践するときには優秀過ぎる補助機能を持っている。これで無能でいろという方が難しいくらいだろう。
《八雲、教えて欲しい事があれば何でも尋ねよ。遠慮はいらない》
「……今は特にない。また弓を使うときに教えてくれ」
《そうか。そなたは筋が良い。名切り一の弓の名手になれる日も近いだろう。もっとも、私も簡単にその座を渡すつもりはない。心して鍛

錬に励め》
湊の態度は素っ気ないが、また教えて欲しいと言われたことでアタランテの口元が喜びに歪む。
そして、凛とした表情の笑みで激励すると、そのまま消えて湊の中へ戻って行った。
呼び出していたペルソナが消え、独りになった湊は何を考えているのか読み取れない冷たい表情で屋上を後にすると、すぐに次のターゲットの元へ向かうためバイクに跨り街を去ってゆくのだった。

９月２８日（木）
午後――桔梗組・本部
学校も終わり、チドリが帰ってきた頃、桔梗組本部にはチドリを含めた大人たちが集まっていた。
湊を除いた家の者たち、情報屋の五代、仲介屋のロゼッタ、元エルゴ研の栗原の計七名。
組員らとの会合にもよく使っている大きな部屋で机を囲み、一同は重苦しい雰囲気の中で話していた。
「以上が、組合員向けの発表と現場の目撃者から話を聞いてくれた友人が知らせてくれた情報です」
先日の地下協会パンテル支部での湊の行動。それを人伝に聞いた五代が全員に向かって伝えた。
この場にいる者は全員が湊の叫びを聞いた。だからこそ、無事に生きていてくれた事は嬉しいと素直に感じている。
けれど、五代は傍に置いていた鞄から海外の新聞記事のコピーを取り出し、全員に見えるよう机の上に置いてから、さらに言葉を続けた。
「そして、これが小狼君が行ったと思われる事件です。翌日に二人、さらに翌日にも一人殺しています。殺された被害者はＥＰ社の幹部となっていますが、きっと久遠の安寧の幹部でもあったのでしょう」
英語で書かれた新聞記事だが、見出しには大きくＥＰ社の名前が書かれているため、被害者の写真も載っていることから考えれば、湊が宣言通りに構成員を殺して回っているとしか思えない。

裏界最大規模にして表の世界にも大きな影響力を持っている組織が相手だ。
先日の敵対宣言からすぐこんなにも堂々と殺して回っては、全て自分の犯行だと認めているようなものである。
五代の話しを聞いて、今までの湊からは考えられないような、全力で敵を煽る一連の行動を不可解に思った栗原が口を開く。
「……湊はやっぱり復讐のために動いているのかい？　その、イリスさんが殺されたって話しだが」
「そう考えるのが妥当でしょうね。イリスが死んだと言う話しは、二人が滞在していた宿の方に聞いたんです。そして、今回の敵対宣言ですから、彼にとって敵はイリスの仇だと思われます」
栗原の言葉を肯定し、静かに頷きながら五代は答える。
湊は誰かを守るとき以外、基本的に自分から攻撃を仕掛ける事はなかった。
今度の行動も根っこは同じだと思われるので、湊から仕掛けているように見えても、実際に湊を戦いに駆り立てた者が他にいるはず。
そして、かなり信用出来る筋からイリスの訃報を聞いたことで二つの点が繋がり、湊はただ戦争を仕掛けたのではなく、相手に売られた喧嘩を買って復讐を果たそうとしていると推測された。
「……この前、湊からこれが届いた」
と、そこで唐突に桜の隣に座っていたチドリがあるものを机の上に出した。
他の者たちの視線が集まるそこには、フランスから送られてきたらしいシンプルなデザインをした小さな封筒があった。
開けてみない事には中身が分からないので、五代が視線で開けてもよいか尋ねるとチドリは僅かに頷く。
持ち主の許可を得て封筒を手に取り、空いていた封筒の口から五代がそっと中身を取り出すと、それは封筒と同じくらいシンプルな一枚の便箋だった。
五代の両脇に座っていたロゼッタと栗原も横から覗きこみ、便箋に書かれている文字を読みあげる。

「……〝ごめん〟って、これ小狼くんの字よね？　え、これだけ？　他には何もなかったの？」
「その手紙と一緒に、これと同じ湊が付けてたピアスが入ってた」
そう言ってチドリは自分の右耳に付けているピアスを他の者に見せる。
シルバーの台座にはめ込まれた青い石はタンザナイト。高貴や空想という石言葉を持つ宝石だ。
このピアスは二人が入学祝いに買ったものだが、普段は青い石が光りや見る角度によっては赤色になることもあるという事で、青（湊）と赤（自分）が共にある事を表しているとチドリが選んだ物である。
湊経由でベルベットルームの住人に強化加工して貰ったが、チドリは二人の絆だと大切にしながら、頻繁に磨いて手入れもしていた。
そして、それは少年の方も同じで、大切な絆の証しを奪おうとするのなら相応の対応をすると口にしていた。
だというのに、湊は大切にしていたピアスをたった一言〝ごめん〟とだけ書いた手紙と共に送ってきた。これが意味するのは、彼が自らの意思で絆を放棄したということであった。
大切な子どもが今在る絆を捨て、孤独に身を堕としてまで、復讐という哀しい事に手を染めようとしていると知った桜は、顔を俯かせ暗い表情のままぽつりと溢す。
「……桐条さんから、みーくんが血に目覚めたと連絡があったんです。九頭龍家は名切りとは異なる異能を持っていて、既に目覚めている者たちは新たな龍の目覚めを感知出来るんだそうです。そして、みーくんは龍の最高位に目覚めたと」
「桐条って、桐条グループが連絡してきたの？」
桜が桐条から聞いたと口にしたことで、チドリが驚いた様子で聞き返す。
すると、桜は首を横に振って安心してと弱々しい笑みを浮かべて答えた。
「いいえ。桐条さんっていうのは総帥の妻である桐条英恵さんのことで、彼女はみーくんのお母さんのお友達だったらしいの。それで、死

んだと思っていたみーくんと偶然再会して、総帥や娘さんにも話さない事を条件に会っていたんだって」
「坊主の知り合いだってのは分かったが、なんで、その桐条の人間がこのタイミングで連絡を寄越したんだ？」
「桐条さんも叫びを聞いたらしいです。そして、みーくんの危機を感じて、助けるために力を貸して欲しいと言われたの。みーくんを助けるには名切りの事をちゃんと理解しておかなければならないから」
湊が桐条側の人間と繋がっていたことは驚きだが、同じ叫びを聞いたのなら、それが湊に信頼されている証拠になる。
普段、湊は自分の事はあまり話さないので、こういった事で驚かされるのはいつもの事だが、彼の過去を知り、さらに桐条側の情報を持つ者が味方につくのなら心強い。
そうして、英恵から聞いた事を桜が話すのを待っていると、会話に若干ついて行けていないチドリが全員に向かって尋ねた。
「そのさっきから言ってるナギリってなんなの？　湊の事？」
「ああ、小猫ちゃんは話しをしたときにいなかったね。まぁ、簡単にいうと小狼君の生まれた家の事なんだ。名を切る者って意味で名切り、それの当て字で百の鬼と書く百鬼（ナギリ）が小狼君の本当の姓だ。名前の八雲にも意味はあるらしいけど、そっちは分からないんだけどね」
以前、エリザベスたちベルベットルームの人間がやってきたとき、湊の容体が命に別条はないと聞かされ、チドリは学校へ行くように言われ家にいなかった。
そして、少年の役割と命の価値等について知らされていない事もあって、先ほどの様子から察するに、チドリは相手の素性を本人から一切聞かされていないのだろう。
自分側の情報をほとんど明かしていないにもかかわらず、行動や態度のみでこれだけ信用される人間も珍しい。
そんな風に心の中で考えつつ五代が訳を話せば、反対にチドリの視線は鋭くなってさらに質問をぶつけてくる。
「……どうして八雲の名前のこと知ってるの？」
「わたし達はエリザベスさんたちに話しを聞いていたの。そのとき、

貴女が彼と結んでいる契約書で本名を見たのよ」
今度の質問には五代の隣に座っていたロゼッタが答える。
けれど、話す度に聞き覚えのない単語が混じっているため、チドリは不思議そうに聞き返した。
「契約書？」
「〝最期までチドリを守り続ける〟って契約だよ。聞き覚えはないかい？」
「……ずっと前にした約束」
それは消失してしまったコミュニティよりも強固に二人を繋ぎ止めている絆の鎖だ。
コミュニティは完全に消えたせいで感知の役には立たない。だが、残っている契約のおかげで、離れていてもチドリは湊が生きている事だけは把握出来ている。
「ちーちゃんたちの契約は、エリザベスさん達が記録しておいてくれているの。みーくんは全部で四つの契約を結んでいて、それのおかげでみーくんは彼女たちの客人でいられるらしいわ」
「なんでそんなに契約が多いの？」
「それだけの数が必要だったんだろ。湊はペルソナ使いの中でもイレギュラーだからね。契約を複数結ぶことで、必要なだけのサポートを受けられているんだろうさ」
栗原の推測は概ね当たっている。ベルベットルームの住人らと結んだ第二・第四の契約は、湊を正式に客人として認めさせる物と、担当を追加するために必要な物であった。
どこにでも扉を開く機能を追加したのも、それがサポートする上で必要だとイゴール達が認めたためであり、担当者が一人だけならば本来認められる物ではない。
それを、複数名と魂の契約を結べるだけの力を持った湊だからこそ、契約でパスを通す事により特例として二人目の担当者を付けることに成功した。
複数名との契約は魂が衰弱して死に至る可能性がある。その点、湊は名切りの業を宿していることで魂の量が常人を遥かに超えている

ので、魂を引き摺られることもなく正気を保っていられる。
遠くない未来に現れるとマーガレットの占いに出ていた次の客人も、龍の末裔という事で常人よりは魂が強いようだが、流石に複数名と結ぶだけの強さはないのだ。
名切りに生まれた事でいらぬ業を背負わされたが、それのおかげで大切な者たちを救う事が出来る。何とも皮肉な事だが、この場にそれを口にする者はいなかった。
「んで、桜。その桐条のは坊主を助けるためにどうしろって言ったんだ？」
話しが一区切りついたところで、話しを本題に戻すため鵜飼が尋ねる。
英恵と実際に話した内容を知っているのは桜だけだ。一緒に住んでいるチドリたちも、今日まで連絡があったことすら聞いていなかった。
事が事だけに、桜が話しづらかったことも理解出来る。
けれど、謝罪の手紙と共に送られてきた絆の証し、名切りの鬼を名乗って敵対宣言、既に実行に移され出した久遠の安寧の構成員殺し、これら現状を見てもう黙っておく事など出来ないはずだ。
集まっている者らの視線が桜に集中すると、桜も視線をしっかりと受け止め口を開いた。
「いま、桐条グループは極一部の組織の人間を使って秘密裏にみーくんの捜索に動いています。桐条さんの推測では、みーくんの生存を知っている桐条総帥が異変に気付いて、善意から保護しようとしていると思われるそうです」
「どうして桐条グループが八雲の異変に気付くの？　その八雲の母親の友達だった人しか繋がりはないんでしょ？」
「いいえ。桐条側にもう一人だけ、ちーちゃんと出会うよりも前にみーくんと深い繋がりを持っていた人がいたの」
全員が本名を知っているのなら隠す意味はないとして、チドリは湊を本名で呼びながら、何故桐条が異変に気付く事が出来たのか疑問に思い尋ね返す。

すると、桜は桐条側にいる湊の味方は英恵だけではないと、チドリが知らないのも無理はないという意味で、二人が出会う以前の知り合いであることを告げた。
そこまで聞けば〝もう一人〟が誰なのか予想がついたのか、集まった者の中で唯一桐条グループの内情に深く関わっていた栗原が口を開く。
「……七式アイギスかい？」
「はい。ポートアイランドインパクト以降、一度も目覚めなかった彼女が突如目覚めて脱走し、さらに空港で飛行機を奪っていったそうです。その飛行機は中国の山奥で不時着しているのが発見されました。そして、脱走する際、彼女は〝あの方の元へ行く〟と口にしていたそうです」
「その〝あの方〟っていうのが小狼君で、彼の素性とそのアイギスさんの繋がりを知っていた総帥は異変にも気付いた。だからこそ、一度は人柱にした少年を今度は妻のためにも助けようと思ったって訳か」
「概ねその通りだと思います。桐条さん自身も〝百鬼八雲〟の生存を信じているように振舞った事があるそうですから、壊れた妻の姿と良心の呵責に耐えられずの行動だろうと」
実際、桐条だけでなく美鶴にとっても、湊ら一家を襲った事故直後の英恵の姿はトラウマとなっているだろう。
本当の家族でありながら英恵は心を閉ざし、死んだ親友と息子との思い出の世界に閉じこもる様になった。
元々、身体が弱く顔色もよくないというのに、心を病んでいたときにはさらに青白く見えたに違いない。
爆発事故の後処理で多忙に加え、世間や遺族からのバッシング、また影時間への対処も急務となり、そのために希望の種と思われた湊を回収したにしろ。妻が壊れていく姿を見ながら、その治療薬にもなる少年の生存を話せないとなれば、桐条自身もストレスで身体を壊していたはずだ。
湊から爆発事故の真相や桐条が話していないグループの暗部を聞き、英恵は当時の夫の状態も察しているだろう。

だが、英恵は敢えてその話題へと踏み込ませないよう、未だに湊に強い執着を持っていると思わせるために以前の誕生日パーティーでは〝狂気の仮面〟を被ってみせた。
彼女の狙いは見事に成功し。桐条は名切りの武器が運び込まれた倉庫には一切近付かず、湊ら一家に関わる話題も意識して避けるようになった。
娘と問題の少年が同じ学校に通っているのだ。さらに少年は名を変えているにしても、高い適性からグループがマークしている事が耳にはいっているはず。
そんな状態で、少年の生存がいつまでもばれずにいるとは当然思っていないだろう。
だからこそ、桐条は今回のアイギスの脱走から少年の異変を察知し、全てがばれたときには少年と妻が会えるように手を回す事に決めたのだ。
夫と息子、両方の事情を正確に把握しているからこそ、今回鋭い読みを見せた英恵の話しを聞いていた桜は、さらに桐条が動かざるを得ない事情が存在することを話す。
「何より、みーくんと同い年の九頭龍家の娘さんは、影時間への適性があるようで葬儀の時点でみーくんが棺にいない事を不思議に思っていたらしいです。彼女はみーくんの生存を確実視していて、今回の覚醒で九頭龍の本筋の方々は全員感知したので、〝百鬼八雲〟の生存は確定事項として連絡をしてきたそうです」
「九頭龍から坊主の生存報告を聞いたことで、相手はどう動くか言ってたか？」
「今はまだ動かないと。下手に刺激して総帥が事を急いだ命令を下してしまえば、不用意にみーくんに近付いた人は殺されてしまうだろうって」
「まぁ、小狼くんにすれば保護しにきた味方だって言われても、桐条グループ自体が復讐対象ですもんね。彼と久遠の安寧だけの対立図に戦闘意思のない桐条が混ざるとややこしいですし、被害を防ぐためにも懸命な判断だと思います」

七歌が湊の生存が確定したと連絡したのは英恵のみだ。
最も湊ら一家と深く関わり、彼らの死を嘆いた人物なのだから、その生存を教えてやるのも不思議ではない。
そして、今回その選択が湊の救出に動こうとしている者にとっては有り難かった。
まず、桐条は湊が裏の世界で生きている事は知らない。知っていれば不用意にグループ側の人間を近付けることがどういった結果を生むか理解しているはずなので、これは確定事項だと認識して良い。
次に、上記の理由から、当然、湊と久遠の安寧の対立についても理解していない。
久遠の安寧と桐条グループは、表の企業同士では様々な分野で争っているのだから、何も知らないとは言え、目的の少年を横から奪おうとすれば裏で組織同士の過激な対立も起こるだろう。
少年の保護から、何故関係ないはずの組織に喧嘩を売られるのか分からない桐条は、グループの人間に被害が出ても適切な対応が取れない。
ならば、湊と久遠の安寧の争いが激化するまでは、何も知らず、ただ捜索に人員を割いているくらいの対応でいて貰った方が桐条にとってもいいはずだ。
英恵もそのように考え、湊との約束を違え二度と会えなくなっても、時期が来れば夫に話してグループの人間の被害を最小限に抑えるよう手を回して貰うつもりでいる。
だからこそ、桐条グループの動きには注意するものの、何かあれば英恵が連絡してくる手筈になっているため、桜は自分たちが動く上での注意をまず話す。
「現状、攻撃意思を持って接近しても絶対に殺されないのはアイギスさんとちーちゃんのみ。ただし、ちーちゃんの傍にいる私たちも守護対象に含まれるので安全とのことです」
「殺されない事を安全と言い替えるのは危険かと。湊さんが仙道を殺し、さらに久遠の安寧と敵対する意思を見せたのなら、そう遠くない内に相手が何かしらのアクションを起こします。そのとき、湊さんの

素性が割れ、我々が人質として狙われる可能性も十分にあり得ます」
桜の言葉に普段以上に表情を引き締めた渡瀬が楽観視し過ぎだと返す。
助けようとしている味方からのフレンドリーファイアが無いのは有り難いが、湊の敵は裏界最大組織だ。
当然、抹殺か捕獲か不明にしろ湊を放っておく訳もなく、下手をすれば救出に向かった者が湊を誘き寄せる餌にされるかもしれない。
それならばまだマシな方で、この桔梗組本部まで乗り込まれる最悪の事態も想定しておかなければならず。チドリを逃がすことが出来なければ、湊は彼女の前で敵を殺せないので実質詰みとなる。
また敵との激しい戦闘の中で、湊が自分たちに気付いてくれる保証もないので、巻き込まれる可能性を考慮すれば安全とは言い難い。
「さらに言わせていただけば、経験上もっとも可能性があるのは高額懸賞金によって仕事屋たちを使った人海戦術の討伐作戦を取ってくる事です。懸賞金は組織としての敗北宣言だと言われていますが、相手が裏界最大組織となれば、獅子が兎を全力で狩りに来ているとしか思われません」
「確かに、久遠の安寧が相手ですと包囲網を敷いているとしか思われませんね。となると、小狼君の動き次第だが、僕たちが動けるのは戦いが泥沼化するまでの間になるか」
「いいえ。桐条さんが私たちに求めたのは、みーくん自身を保護することではありません。彼女が本当に求めたのは、現在みーくんの元へ向かっているアイギスさんに名切りの情報を伝えることです」
目的を湊自身の救出だと考えている者たちへ、桜はそれは自分たちの役目ではないと否定し言葉を続ける。
「みーくんを止めるにはまず正常化が必要です。ですが、みーくんは決めた事はやり遂げようとしてしまう子ですから、話しを聞いて貰える人物を用意する必要があります」
「……私じゃ駄目なの？」
何故、湊の救出が自分たちの役目ではないのか。それは英恵の情報によると、現在の湊に話しを聞いてもらう事がそもそも出来ないから

だという。
ならば、誰なら話しを聞いて貰えるのかを考えたとき、先ほどの湊にとって大切な二人が当て嵌まると推測したチドリは、自分では駄目なのか尋ねた。
そんな真っ直ぐと見つめてくるチドリに、尋ねられた桜は少し困ったような笑顔を向けて答える。
「名切りの情報を聞けばちーちゃんでも大丈夫よ。でも、貴女を戦場に連れていく事は出来ないの」
「どうして？」
「それを僕たちがしてしまえば、今日までの彼の頑張りが全て無駄になってしまうからだよ。小猫ちゃんが安全な日常の世界で暮らす。そのために彼は戦っているからね」
チドリもアイギスと同じように条件を満たしているため、名切りの情報さえ先に聞いておけば止める役割を果たす事は出来る。
では、何故そのチドリを大人たちは戦場に連れていけないのか。その理由は、まさに五代が話した通りであった。
湊はチドリがタルタロスでシャドウと戦う事も本来は嫌がっていた。
しかし、戦い方を知らなければ自分の身を守る事も出来ない。故に、自分が一緒にいる場合のみ、彼女がタルタロスで鍛錬することを許可していたのだ。
それを湊の考える平和で温かい日常とは正反対な世界へ連れてゆけば、チドリ本人が気にする気にしないに関係なく、彼が頑張ってきた数年の苦労が全て無駄になる。
チドリの身の安全のためだけでなく、彼の頑張りを傍で見てきた者たちとっては、夢を語らない少年の唯一と言っていい望みを手伝い守り続けてやりたいという意味合いの方が強かった。
もっとも、守られてばかりの少女にとっては、相手が自分を守ってくれているからこそ、反対に相手の危機には自分が助けてやりたいと考える。
「私だって八雲のために何かしたい」

「なら、ちゃんと学校に通いながら小狼君が無事に帰ってくるよう祈ってあげて。もしも貴女が彼を助けに行っても、多分、ペルソナを出す暇もなく何も出来ないで敵に殺されるわ。そうなったら、もう終わりよ」
「坊主を人間側に繋ぎ止めてる最後の楔がオメェだ。それが取っ払われたら、坊主は完全に鬼になるぜ。本当に坊主を助けたいなら、今回はそのアイギスってののサポートに回るべきだ」
本当に容赦なく敵を滅ぼすのなら、湊は久遠の安寧の研究施設を消失させたように、ただ全力でペルソナのスキルを放つ力押しの戦法をとれば済む話である。
ただし、それには敵以外の一般市民も巻き込んでしまうリスクがある。理性を保っている湊はそれを分かっているからこそ、地味だと言われようが敵を順に殺して回っていた。
そして、それはチドリが無事だからこそ出来ていることであり。チドリの身に危険が迫れば、湊は簡単に他者を巻き込まない方針を捨てるとロゼッタ達は読んでいた。
集まっている大人たちからそんな風に言われた少女は、ムスッとした不機嫌な表情で席を立つと走って部屋を出て行った。
だが、少しすると一冊のスケッチブックを片手に戻ってきて、とあるページの絵を開いて見せて言い返す。
「でも、アイギスって八雲が描いたこの絵の女でしょ？　八雲に会った時点で私たちより年上だし、そんなおばさんに何が出来るのよ」
『っ!?』
チドリが持ってきたスケッチブックは、以前は眞宵堂に置いてあったアイギスの絵が描かれた物であった。
一同は絵の存在を知らなかった栗原も含め、件のアイギスの姿を知ることが出来る物が存在することに驚きを見せる。
とはいえ、仮にアイギスが人間で当時高校生くらいの年齢ならば、七年経っても二十代中盤だ。
体力も若さもまだ十分にあるはずの年齢をおばさんと称するのは、やはり幼い中学生だからなのかと苦笑しつつ、アイギスの詳細を知っ

ている栗原がチドリに真実を告げる。
「アイギスはロボットだよ。歳は取らないさ」
「なんでロボットが八雲のために動くのよ」
「あんたらと一緒で胸らへんにパピヨンハートって結合した黄昏の羽根を積んでるんだ。あいつの人格はそこに宿っていて、身体は機械だけど人間と同じように心を持っててペルソナも使える。まぁ、情緒面の発達はいまいちだろうから、その分、今はただ一つの大切な存在のために全力で何かしようとしてるって感じだろうね」
　正確に言えばアイギスは首より僅か下辺り、湊は心臓を包む形で、チドリとマリアは心臓内部に黄昏の羽根を宿している。
　チドリとマリアが心臓内部に宿している理由は、飛騨によって手術で羽根を内蔵した湊と違い、二人の羽根は湊がエネルギー状にして吸収させたためである。
　そして、羽根自体が半エネルギー化している湊は心臓を吹き飛ばしても羽根は残り続けるが、他の三人は内蔵部位を破壊されれば、それらと一緒に羽根も出てしまうという違いがあった。
「なんで、八雲はロボット何かを信用してるのよ」
「そりゃ、命の恩人だからだよ。湊もシャドウからアイギスを守ったが、敵にやられて死に掛けた湊に力を分けて蘇生させたのはアイギスだ。あんただって湊に助けられて恩を感じてるだろ。二人も一緒さ」
「八雲はそんなの一度も話してくれなかった」
「話す機会がそもそもなかったんだろ。というか、その戦いが原因であいつは桐条に回収されたんだよ。無事だったら親戚かその桐条さんに引き取られてただろうし。あんたと会う事はなかったはずだよ」
　アイギスがいなければ湊は生きておらず、またエルゴ研で被験体らと出会う事もなかった。
　湊が桐条に回収されるに至った経緯を理解している者にそれを言われてしまえば、チドリはもう黙るしかなかった。
　不貞腐れたように不機嫌な表情をしている少女に、大人たちは苦笑しながら脱線していた話しを戻す。
　全くの偶然だが、まるで写真と見紛うばかりの湊の絵によって、栗

原以外の者らもアイギスの姿を知ることが出来た。
とても繊細なタッチの優しい絵だ。絵の中で笑っている彼女を通じて、湊がどれだけアイギスを大切に想っているのかが伝わってくる。
反対に、事故から眠り続けていた彼女が少年の危機を感知して目覚めた事で、アイギスがどれだけ湊の事を想っているのかも想像がついた。
お互いに想い合っている者同士なら運命が引き寄せるはず。ならば、それまでに必要な事を全て済ませておかなければならない。
表情を引き締め顔を上げた桜が、皆の視線を集めて静かに口を開く。
「これからみーくんの身に起こること。それは完全なるモノへ至るための人間性の消失、もっと単純に言えば〝百鬼八雲〟という人格のフォー(初期化)マットです」
そのまま続けて語られた一族の宿願たる名切りの業。それに至るために起こる少年の変化は、聞く者たちから現実感を奪い、全員がただ言葉を失うしかなかった。
湊の敵は久遠の安寧だけではない。戦えば戦うほど、時間が過ぎるだけでも湊は個を失い続け。いずれは一族が求めた得体の知れない存在に成り果てる。
何を持って名切りがそれを目指したのかは分からない。けれど、一同は既に残された時間が少ないことを理解したのだった。

第九十話　悩み相談室

９月３０日（土）
放課後――巌戸台商店街
本日の授業が終わり、今日は幼馴染の部活もないことから、共に真っ直ぐ帰ろうとしていた荒垣。そこへ一緒に居た真田が、帰りにどこかへ寄って行かないかと良い笑顔を浮かべ声をかけた。
「シンジ、帰りに何か食っていかないか？　海牛で牛丼なんてどうだ？」
「月曜にも行ったばっかだろうが、美紀のやつもお前の食生活を心配してたぞ」
「ぐっ……そ、そうか」
何か食べないかと言っておきながら、本人はかなり牛丼を食べたかったらしく、とても悔しそうな表情で肩を落とし下駄箱へと進む。
近しい者たちからシスコンと認識されている真田は、美紀の名前を出されてしまうと、相手の言い分を否定して完全に我を通す事が出来ない。
隣を歩く荒垣も長い付き合いによってその事を分かっており、敢えて名前を出して相手をコントロールすることがあった。
コントロールされている本人は未だに気付いてないようだが、妹の美紀は無茶な事をよくする兄を諌めてもらうため、自分の名前を使う事を荒垣に許可している。
それらは昔からの付き合いによる信頼関係の賜物だが、下駄箱について上履きから靴へ履き替えながら、食べに行くこと自体は賛成だった荒垣が別の店を提案する。
「たまには、〝わかつ〟で定食でもいいだろ」
「ふむ。なら、スタミナ焼肉定食だな！」
「……そりゃ、行ってから決めればいい。季節物のメニューだってあんだからよ」
紅ショウガやタマネギくらいしか野菜の入っていない牛丼から離す事が出来たと思えば、またガッツリとした牛肉を選ぶ幼馴染に、荒

垣は頭を抱えたい衝動にかられた。
けれど、スタミナ焼肉定食には付け合わせのサラダに味噌汁や漬け物もついている。カロリーは摂取し過ぎだが、バランスはある程度考えられているだろう。
健康を考えられたメニューの多い店だけに、普段の牛丼よりも数倍健康に良さそうだと考える事にして校舎を出ようとしていたとき、先に出ていた真田が荒垣の後ろに視線を送って急に手を挙げた。
「よう、お前たち。今日は部活だと思っていたが、もう帰るのか？」
声につられて荒垣も振り返ってみれば、そこには佐久間を除いた美紀たち美術工芸部のメンバーが揃っていた。
先ほど真田が言っていた通り、土曜日は部の活動日のはずなので、一人二人が用事で休むならともかくテスト期間以外で休みなのは珍しい。
チドリは普段から表情が読み辛いが、他のメンバーの顔を見てみればどこか元気がないようにも見える。
少々気になった荒垣は、真田が何か言う前にメンバーに尋ねる事にした。
「お前ら何かあったのか？」
「ええ……まぁ、ちょっと。その事もあって佐久間先生が部活に出られないので今日は休みなんです」
「そりゃ、俺たちに話せることか？」
「えっと、一応、そうですね。兄さんとシンジさんにも話して大丈夫だとは思います」
どこか話しづらそうにしている美紀が、答える前にチドリに視線を送って許可を貰っていた。
そこから湊に関わることかと推測するが、海外にいる相手に何かあったと聞いても自分たちに何かできるとは思えない。
話す事で楽になる場合もあるが、それは自分や周囲の物事に対する悩みや愚痴がほとんどで、深刻な心配ごとに対してとなると楽になる可能性は低い。
内容が湊についてという時点で、真田の反応も決して良い物にはな

らないだろう。
悩みがあれば相談に乗っても良いと思っていた荒垣も、そこまで考えて今度改めて時間を作って聞くべきか答えかけたとき、部活メンバーの後ろから新たな人物が現れた。
「君たち、入り口に固まっていると通行の妨げになるぞ」
「あ、すみません」
綺麗な微笑を浮かべて女子らを注意したのは、男子二人と同じ厳戸台分寮に住んでいる最後のメンバー、桐条美鶴。
注意された女子らは謝罪してすぐ横に避けたが、そこで男子二人の姿を発見した美鶴は、偶然だなとばかりに先ほどの真田と同じく手を挙げて挨拶をしてくる。
「ん？　なんだ、真田と荒垣じゃないか。君たちもいま帰りか？」
「ああ。時間を潰し夕食も済ませて帰ろうかシンジと話していたら、今のお前みたいに美紀たちと出会ってな。しかし、何か悩みがあるらしく、今から食事がてら悩み相談といったところだ。丁度良い、桐条も先輩女子の立場で答えてやれ」
「って、おい!?」
その場でずっこけそうになるほど驚き、荒垣は思わず自分の幼馴染を殴り飛ばしたくなった。
まず、何故、既に一緒に食事をしながら悩み相談することになっているのかという疑問が一つ。
さらに、普段からどこかデリカシーが欠けている男だとは思っていたが、ここで全く無関係な人物以上に微妙な立場にいる美鶴を何故誘ったのかを強く問い質したい衝動に荒垣は駆られた。
真田自身も美鶴が湊のストーカーと噂されていたことは知っていたはずだ。相談者の中にその家族の少女がいる時点で、美鶴は相談者に相応しくないだろう。
案の定、女子たちの表情は見る見る微妙な物に変わり、良識人の風花ですら真田を少し可哀想な人という目で見ている。
これで美鶴が相談に乗ると答えてくれれば、相手が善意で言っていることに加え、全く親しくない上級生という事もあってはっきり意見を

言いづらい以上、彼女たちも断りづらくなってしまうだろう。
どうか答えを間違えないでくれと心の中で祈りつつ、荒垣は女子らと共に美鶴の返答を待った。
「今日は特に用事がないから構わないが、それは私が聞いても大丈夫なのか？」
「えっとぉ、その……」
「別にいいわよ。桐条グループならどうせそのうち気付くだろうし」
ここで荒垣は再度驚くことになる。なんと、答え辛そうにしていた美紀に代わり、隣に立っていたチドリが同席を許可したのだ。
彼女が桐条グループと口にしたとき、美鶴がどこか表情を強張らせていたことが気になるが、最難関がクリアされたのなら相談を受ける側であった荒垣が口を出す事ではない。
美鶴の列席が決定するなり真田の先導で移動を始め、風花が家でご飯が用意されているからと途中で別れたりもしたが、一同はそのまま「定食〝わかつ〟」へと向かうのだった。
――定食〝わかつ〟
商店街に店を構える定食屋の〝わかつ〟は、この商店街で荒垣がはがくれの次に利用する店だ。
置いているメニューは栄養バランスが考えられており、健康を気にするサラリーマンや、体重やカロリーを気にする女性にも人気の隠れた名店である。
チドリと美鶴は来た事がなかったのか、少し不思議そうに店内を見渡していたが、隣り合う四人掛けの席二つに学年毎に分かれて案内を受け。とりあえず、食べる物を全員注文してから話す事となった。
二年と三年でテーブルは分かれているが、壁側から順にソファーにはゆかり・美紀・美鶴が座り。椅子には同じく壁側からチドリ・真田・荒垣の順で席に着いた。
店員がやってきて両テーブルにお茶とおしぼりを配り、既に決定していた注文を聞いて去ってゆく。
これで話す準備は完了だ。一体何の話しか気になっていた三年生組が視線を向けたところで、美紀ではなくチドリが口を開いてきた。

「悩みって訳じゃないけど、海外にいる湊が行方不明になったの。行方不明になってから一度だけ手紙が来たから生存は確認出来てるけどね」
「行方不明？　彼はキャラバン隊に同行して慈善活動に勤しんでいたのでは？」
「その同行相手が事故に巻き込まれて死んだの。共通の知り合いに情報を集めて貰ったから確実な情報よ」
　美鶴の問いに対して返って来た予想外の内容に上級生たちは言葉を失う。
　ただ連絡がつかないのではなく、湊の旅の安全を保証する人物が事故に巻き込まれ死んでしまった。
　もし自分の立場で同じ場面に遭ったらと考えた男子二人は、英語を話せない事もあって現地でまともに助けを求める事も出来ない確信がある。最初は笑って妹の悩みを大丈夫だと言ってやるつもりだった真田も、これには軽々しく大丈夫だと言える自信がなかった。
「あいつを最後に確認出来た場所は分かっているのか？」
「手紙はフランスからきたわ。ただ、そこは同行者の故郷だから、亡骸を弔いにいっただけみたい。それから一週間くらい経ってるし。どこで何をしてるかも分からない」
　手紙の消印からいつまで滞在していたかは知る事が出来る。けれど、それ以降の足取りは基本的に不明で、五代に色々と調べて貰っているが、ＥＰ社の幹部が殺されたというニュースを全て湊の犯行だとするにしても、集まった情報から推測するにはそれぞれの場所に距離があり過ぎた。
　栗原がイリスから聞いた湊の異能の一つに、「影時間の展開」という物も確認されている。理論は不明だが、内蔵している黄昏の羽根にあり得ない量の力を込める事で可能という話しだ。
　自身には出来ない力の使い方だが、チドリは湊がその力で身体能力を強化して移動を続けているのではないかと読んでいた。
　時流操作を知らないからこその考えだが、当たらずとも遠からずな読みであり。影時間の展開すら知らない者には出す事の出来ない推

測である。
なので、チドリは叫びを聞いた人間に湊が行方不明であることは伝えたが、事件との関連性などは話していない。
詳しい話しを聞かれれば、どうして一般人がそんな場所を訪れていたのかという、裏の仕事についての話しにも発展してしまいかねないからだ。
家がヤクザだということはばれても構わない。湊の本名や桐条との繋がりがばれることは遠慮したいが、それでも七年前に起こった爆発事故の犠牲者以上の人数を既に殺めている事を知られ、湊が他の人間から得体の知れない化け物のように見られるのは嫌だった。
だからこそ、チドリは店員が注文の品を持ってきたことで、自分側からの話しを一度止めて他の者が質問なり意見なりを出してくるのを待つ。話すのは訊かれた事で回答可能なもののみにするつもりなのだ。
「なるほど……学校の経営に携わる者として、留学中の生徒の情報を把握していなくてすまなかった。だが、彼が仮に個人で行動しているとして、銀行などからお金を引き出した記録で移動の痕跡くらいは追えるんじゃないか？」
想像していた以上の難しい問題に、美鶴は教師や学生だけでは確かに解決できそうにもないと思いながら、真剣な表情で謝罪と個人的な意見を一つ述べる。
湊が留学する前にグループの者に行わせていた調査では、度々、尾行をまかれることや見失うことはあったものの、記録として残る物からならば、そこに居たという証拠として追跡の助けにはなるはずだ。
そもそも、どうして手紙を送っておきながら、電話やメール等で連絡を取ろうとしないのかが不思議だが、連絡を取ることの出来ない事情があるのかもしれない。
急に深く追求しても失礼になると思った美鶴はそちらの質問は控えておき。チドリの言葉を待っていると、焼き魚を食べていたチドリが口を拭いてから答えてきた。
「私は違うけど湊は自分のカードを持ってるし、現金（キャッシュ）も百万以上持ち

歩いてる。私たちが把握してない個人の口座も持ってるし。銀行自体が湊の味方についてるから、正直、そっちから追跡することは実質不可能ね」
「銀行自体が味方？　個人情報だから教えて貰えないということか？　警察に相談……は、家庭の事情的にしづらいかも知れないが、相談すれば警察経由で教えて貰う事は可能なはずだぞ」
二人の実家がヤクザであることはちょっとした秘密だ。周囲の者にも話していないようなので、美鶴は隠しておくべきと判断し、途中で言葉を濁しながら教えて貰う事は可能だと伝える。
しかし、それはチドリも勿論知っていたので、個人情報だから教えても貰えない以上の問題が邪魔をしていることを説明した。
「湊がメインに使ってたのが海外のラウルス銀行なの。そこの会長と湊は個人的に繋がってて、湊が私たちのことを相手側に話して無かったから、口座があることを知ってるって伝えても存じませんの一点張りだったのよ」
「ラウルス銀行の会長……アドルフ・ベレスフォード氏か。ベレスフォード財閥のトップなら、私も一度だけ社交界でお会いしたことはあるが、有里はどこであの貿易王と知り合う機会があった？」
「……人攫いにあった娘を偶然助けて、その関係で相手側から変に信頼されてるらしいわ」
湊は元々日本の銀行を大人しく使っていたが、以前に人攫いから娘を助けた縁で親の美術品コレクター改め貿易商と出会い。彼のグループが経営している銀行に口座を作って貰っていた。
貿易商のくせに銀行まで持っているのかと当時の湊も不思議に思ったが、グループが経営しているのは貿易会社のアルブス商会とラウルス銀行のみらしいので、元々金があって貿易会社を設立したのか、逆に貿易で成功し金を持った事で金融業にも手を出すようになったのだと推測された。
そして、会長が用意したラウルス銀行の口座は日本よりも利息が高く、他所の銀行でもラウルス銀行が日本よりも割高の手数料を負担して現金を引き出す事が出来るお得なサービスが付いている。

セキュリティ等も上客扱いが故に、チドリたち家族が情報を知りたいと言っても教えることはないため、裏の仕事で稼いだ金を入れておくには非常に安心且つ便利であった。
美鶴も名前を聞けばすぐ思い出せる程度に相手を知っており、相手が自分を覚えているかはともかく同じ社交界に出席したことで面識もあったため、世界的に有名な貿易王と呼ばれる男と湊に個人的に付き合いがあると聞いて、素直に驚きを隠せなかった。
「……君や有里の普段がとても気になるんだが、訊かない方が良いんだろうな」
「あんな変態と一緒にしないで。私は実家と巌戸台周辺でしか生活していないけど、湊は一人で色んなところに出掛けてるから、こっちの知らない交友関係が山ほどあるのよ」
「ふむ、ならば、欠席が多い理由に病欠以外が多数含まれていると思っても良いのか？」
湊は二週間に一度は欠席しており、その時々で期間は変わるものの一日から三日というのが基本だった。
彼の欠席にがっかりしている者は多いが、学校側に身体が強くないという医者の診断書も提出しているため、虚弱体質も皇子を飾る一種のステータスのように最近では思われている。
だが、家族である少女から放浪癖があると語られた事で、もしやサボっているのではないかと美鶴は推測した。
「病院にはよく検査しに行ってるし、テストでしっかり結果を残している事を理解した上で、さらに貴女が勝手に想像した架空の欠席理由を咎めるならご自由に」
「……それは中々に難しそうだな。まぁ、彼は私の話しを聞いてくれるとは思っていないが、本当に身体が弱いのなら高等部からは課題の提出で出席日数を加算することを伝えておいてくれ」
将来的に組織経営を行う予行演習として、中等部に入ってからは学校の経営に多少関わっているものの、さぼっている程度で湊を罰する権限を美鶴はそもそも持ち合わせていない。
それでもチドリに欠席理由を尋ねたのは、単純にさぼりは良くない

という上級生や生徒会長の立場から諌めようと思ったからだ。
しかし、チドリの言った通り、さぼっているというのは根拠のない推測に過ぎず、湊は美鶴と同じようにテストで満点以外は取った事がないので、真面目に勉学に励んでいると思っている教師の方が多いのは確かだ。
疑いを持たれるような事を頻繁に行なっている湊たちも悪いが、よく知らずに疑った自分も悪かったと美鶴は素直に反省し、以前の経営会議で議題に挙がった「やむを得ない事情により欠席の多い生徒の特例措置」にて決定したことを教えておいた。
私立なので中等部でも退学等はあり得るが、義務教育で進級に出席日数が響かない中等部と違い。高等部に入ってからは必要な出席日数を満たしていなければ留年する。
今の湊の出席のペースから計算すると、成績は足りていても出席日数で二、三科目は落としてしまいそうなのだ。
しかし、テストでは全国模試でも満点を取り続け、桐条グループの娘という最初から大きな看板を背負っている美鶴と違い、一応、湊は一般家庭の子どもという扱いなので、成績が優秀であれば経営者の娘よりも広告塔として宣伝しやすい。
学校もそれをよく理解しているため、湊を他所に取られるくらいであれば、いっそ特別扱いしてでも残ってもらおうと画策していた。
美鶴の発言から、そのような裏の意図を読み取りつつ、それでも湊にとって有利に働くことであれば拒む理由のないチドリは、おひたしを口に運びながら頷いた。
そして、そこでずっと話していた二人の会話が一区切りついたと判断したのか、スタミナ定食の肉を頬張っていた真田は、鞄から取り出したプロテインを水に入れて混ぜながら、以前から抱いていた疑問を当人と当事者の家族の少女に軽いノリで尋ねてきた。
「そういえば、桐条はあいつを追いかけ回していたんだったな。お前があいつにご執心の理由も気になるが、なんであいつはこいつに対して無反応を貫いているんだ？」
「に、兄さん、そういう個人の事情に深く踏み込んじゃ駄目ですよ。会

長や有里君にも失礼じゃないですか」
「しかし、理由があるから桐条はストーカーにまでなっていたんだろう？　まぁ、有里がこいつのそういった強過ぎる執着心を見抜いて最初から避けていたなら納得するが、他に理由があるなら知っておいた方がいいじゃないか」
本人に悪気はない。というより、単純に気になるから訊いているだけなのだろう。
けれど、あまりにも言葉を選ばない真田に、実妹と幼馴染の少年は頭を抱え、再びストーカーと呼ばれた美鶴の額には青筋が浮かび、チドリは我関せずと食事を続けていた。
よって、第三者の立場で話しを聞いていたゆかりは、自分が一番冷静に話しの軌道修正を図れるだろうと、少々強引にでも流れを変えるべく会話に参加する事を選んだ。
「……真田先輩って基本的にデリカシーないですよね。なんでファンの子たちは内面の残念さに気付かないんだろ」
「おい待て、岳羽。俺のどこが残念なんだ」
「女性に対してストーカーとか言っちゃうところですよ。桐条先輩は学内でしか追いかけ回してなかったんですし。ストーカーまではいってないと思います」
納得がいかないと憤慨する真田へはっきり言い切るゆかりだが、同じテーブルにいた美紀とチドリが彼女に向けた視線にはどこか呆れの色が混じっている。
それも当然で、フォローしようとしていたはずなのに、逆に何度も〝ストーカー〟という単語を使う事で美鶴に精神的ダメージを与えていたのだから、一瞬でもナイスフォローと期待しかけた人間にすれば呆れるしかない。
案の定、三年生のテーブルでは先ほどまで額に青筋を浮かべていた美鶴が、今度は顔色を青くして僅かに動揺している。
「い、いや、待ってくれ。理由は話せないが、私が彼に付き纏っていた事は認めよう。だが、君たち下級生まで私をその……彼のストーカーのように認識しているのか？」

「べ、別に、そんな事は……」
「真田妹、気を遣わなくていい。正直に言ってくれ」
「あの、美紀で良いです。それで、そうですね。しつこいめのストーカーだと、思っている人もいます」
すぐ傍にいる美紀ににじり寄り、肩に手を置いてジッと視線を合わせて問い質す美鶴。
顔付きが美人系ということもあって、湊やチドリに荒垣ほどではないが、美鶴も大概目付きはきつい方だ。
そんな相手に逃げられないよう肩を掴まれ、真正面から真剣な表情で見つめられれば普通の生徒は怯えてしまうだろう。
しかし、美紀は上の三人に加え、冷淡な素の佐久間を見ていたこともあって、なんとか言葉に詰まりながらも最後まで言い切ることが出来た。
もっとも、それが質問者にとって良い結果であるかは別の話であり、下級生にまでストーカーだと認識されていることに、美鶴はショックを隠せなかった。
湊が留学から帰ってくる来年には、美鶴は高等部に上がっているので接触することはまずないが、それでも七割以上の生徒がそのままエスカレーター式に進学してくるため、再来年にはストーカー事件を知っている者が再び揃う事になる。
それなりの地位を持つ家柄に生まれ、周囲からは名家の御令嬢と思われている自身が、そんな犯罪者予備群としてカウントされ家名に泥を塗ってしまったことで、美鶴は両親や先祖に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
美紀の肩に手を置いたまま俯き、暗い雰囲気で影を纏った美鶴は弱々しいトーンでぽつりと尋ねる。
「……有里は、被害者として同情的な扱いを受けていたか？」
「それは特になかったと思います。会長さんの耳にも届いていると思いますが、彼は一部の生徒から皇子と呼ばれていますから、桐条グループの御令嬢であっても歯牙にもかけないとして、その孤高さたるや正に真の王族であると」

「美紀、お前まさか有里を……俺は絶対に許さんぞっ」
「ち、違います！　そう言っていた友達がいるだけで、有里君はただの友達ですよっ」
　美鶴と妹の会話を聞いていた真田は、美紀が湊を皇子と呼んだところで眉を顰め、さらに続いた賛美を聞いたところで爆発した。
　自分よりも強い男しか美紀の恋人として認めない。普段からそう言い切っているだけに、一度敗北している真田は条件を満たしている湊を他の誰よりも警戒している。
　恋愛方面に興味のない真田から見ても、この場に揃っている女性陣は見目麗しく、全員が非常にハイレベルだと断言できる。
　その中でも妹の美紀は個人的評価で頭一つ分抜き出ており、湊や他の男子が惚れてしまっても無理はないと思っていた。
　もっとも、告白や交際を認めるつもりはまったくないため、美紀自身が真田の出した条件をクリアした男子に興味を持っていようと、真田は断固として反対する構えを見せた訳だが、本人の口からそれを否定する言葉を得られたため、真田は安堵の息を吐いて額を拭った。
「はぁ、まったく、驚かせおって。岳羽、自分の男くらいしっかり管理しろ。俺の妹に近付かせるな」
「は、はぁっ!?　なんで彼が私の物になってるんですか!?」
　かなり身勝手な理由の籠った突然の流れ弾に驚くゆかり。それも当然で、どうして湊と自分が付き合っていると真田が思っているのか、皆目見当もつかないのだ。
　周囲の者も真田の言っている意味がよく分からないらしく、問い返したゆかりに相手がなんと答えるのか待っていると、本人は聞き返されたことにやや不思議そうな顔をして軽く答えてきた。
「夏祭りにキスしてただろうが。付き合ってもない男にする事じゃないだろ?」
「キスじゃねぇっつの！　したのは投げキッスですから！　しかもあれ、有里君がキスしろって言ったからしただけで、別にそういうのじゃありません！」
　湊はそんな事は言っていない。情報が欲しければ対価を払えと

言って、キスで良いと答えただけである。
しかし、ゆかりの中では湊がキスしろと言ってきた思い出として認識されているらしく、顔と耳を真っ赤に染めて立ち上がった彼女は、誤った真田の言葉に激しく反論した。
「岳羽さんだったか？　ここは店の中だ。真田の方も悪かったようだが、君ももう少し静かにな」
とここで、話しを聞いていた美鶴が大きな声で騒いでいた者らを静かに窘める。
まだ夕食前の早い時間なので店内に客の姿はほとんどないが、大声で騒ぐのはあまりよろしくない。
言われたゆかりもそれで少し落ち着いたのか、「あ、すみません」と言いながら席に座った。
そんな下級生の素直な態度を見つめつつ、話しを聞いているときから何か考える素振りを見せていた美鶴が改めて口を開いてきた。
「ふむ、私は吉野と彼が付き合うとばかり思っていたんだが、随分と複雑な人間関係を構築しているようだな。この分だと先ほど別れた山岸も彼と何かしらの……」
「……去年の夏休みに湊と二人で朝から晩までデートしたことがあるけど」
「そ、そうか。成績上位陣ばかりだから信用していたんだが、彼を中心に随分と風紀が乱れ切っているな。君たちはまだ中学生だ。結婚出来る年齢でもないし、早まった行為に及んだりしてはいけないぞ。何かあったときに泣くのは圧倒的に女性だからな」
見た目は校則違反の装飾品を付けている事もあって不良だが、成績と素行は大変優秀だとして湊を模範生として学校側は扱っている。
けれど、実際に近しい場所で話しを聞いてみれば、何やら怪しい空気を感じ取ったことで、美鶴はせめてここにいる女子らに、自分を大切にするよう言い聞かせておくことにした。
仮に湊から身体などを求められても突っぱねる。自分たちはまだ全ての責任を負えるほど大人ではないとして、しっかりコントロールしなければ泣くのは自分だからと。

もっとも、言われた本人たちにすれば、そのような複雑で爛れた人間関係など存在しないので、頭の上にクエスチョンマークを浮かべて呆けている。
さらに、女子の中でも最も湊に近しいパーソナリティを有した赤髪の少女は、家族を他の思春期男子レベルの自制心しか持ち合わせていないと思われたことが癪だったようで、心底呆れた顔をしながら小さく言い返した。
「……ストーカーに言われてもね。説得力の欠片もあったもんじゃないわ」
「そ、それは置いておけ。第一、君は私が彼と接触を図ろうとしていた理由を知っているだろうが」
「〝将来有望そうな男子を若い頃から自分好みに仕立てるため〟だったかしら？　金持ちは性的嗜好まで倒錯的で理解に苦しむわね」
「ね、捏造だ！　お前たち、吉野の言葉に騙されるなっ。私はそんな事は一言も言っていない！」
あまりに突然の事態に動揺し、反論の言葉を詰まらせる美鶴。
必死にチドリの言葉を否定するも、直前にどもってしまったせいで他の者の目には逆にチドリの言葉が真実であるように映ってしまう。
真田からは呆れた目で見られ、ゆかりは軽蔑の色を混じらせた冷たい瞳、美紀と荒垣は同情的な視線をそれぞれ送ってくる。
そんな目で見られた美鶴は、さらに激しく否定しようとするが、その前にチドリの口から追撃の言葉が発せられた。
「ああ、私のことも欲しいって言ってたものね」
「なっ……吉野、私はお前を倒すべき敵と認識したぞ。中等部においてアンコントローラブル（制御不能）な四人の内の一人だからな。初めから警戒しておくべきだった」
「四人って、私と湊以外に誰がいるの？」
「佐久間先生と櫛名田先生だ。まぁ、君らは基本的に一固まりで動いているから、学校としても注意を割かずに済んで楽なんだがな」
話題が逸れた事で美鶴も僅かに冷静さを取り戻し、肩をすくめて溜め息を一つ零す。

要注意人物として四人は名前を挙げられることもあるが、湊とチドリは教師二人よりも扱い自体は難しくない。
湊は頻繁に休むことがあるにしても、成績も優秀で学外で人助けを行って感謝の電話がくることもあるのだ。
学内では静かに絵を描いたりしているチドリも含め、自分から誰かを害することや騒ぎを起こすことはないので、要注意ではあるものの他の生徒よりも信頼度は高い。
けれど、教師二人はノンアルコールとはいえ学内で酒盛りすることもあれば、特定の男子生徒に抱きついたりするなど、非常に教育上よろしくない行動を多く取っている。
様々な問題行動に対し先輩教師から注意を受ける事もあるが、仕事自体はしっかりこなしており、むしろ、残業がいらないくらい効率的に進めている事で、学校としても助かっている事もあって大きな声で注意することは憚られた。
「……まぁ、有里が留学していることもあって、彼女たちも最近では静かな物だが。その静かさも有里の消息不明が原因なら健全とは言い難い。私も桐条グループの方に連絡して、海外にいるグループの者に目撃証言などを探させてみよう」
「御令嬢だからってそんなこと出来るの？」
「出来なくとも動かしてみせるさ。留学生の消息すら掴んでいないとなれば、外聞も悪いだろうからな。自分たちの面子のためにしろ、捜索の人員はきっと用意されるはずだ。何か分かれば連絡しよう」
総帥の娘だろうと簡単にグループの人間を使う事は出来ない。それは本人だけでなく、チドリらも考えていたようだが、美鶴は使えないなら動くよう仕向ければ良いと笑った。
名を変えた湊の正体を知らぬにしろ。ポートアイランドインパクトを含め、色々と因縁のある湊に対し、何も思うところがないという事は流石にないだろうが、それでも今の美鶴の笑顔には純粋な心配からくる善意しか感じられない。
嫌っている相手を無視するだけで、湊が八つ当たりに暴力を振るうなどしない理由が、いまようやくチドリにも理解出来た。

世間一般の子どもたちとは全く異なる世界で生きてきたからか、物事の捉え方などの視野は随分と狭そうだが、間違いなく人としては好感を持てる部類に入るだろう。
だからこそ、湊はそれを美鶴本人の責任ではないとして、あくまで桐条の人間だからと距離を取っているのだった。
「……そう。じゃあ、期待しないで待っておく」
湊と美鶴の関係を改めて理解したチドリは、相手の申し出を素直に受け取った。
既に桐条は動いているが、それを知らないはずの人間が、行方不明者を探してくれるといわれて断るのもおかしい。
そんな裏のある返事だったが、美鶴自身が嬉しそうに頷いたことで、頼んだチドリも、湊の安否を気にしている部活メンバーも、店に来る前よりもどこか緊張の薄れた表情になっていた。
真田の発案によって突然決まった悩み相談だったが、訊く側と聞く側の双方に意味のある時間として無事に終え、最後は穏やかな空気でその日は解散したのだった。

第九十一話　進む者、追う者、待つ者

深夜――ルーマニア

暗い闇の中、黒衣を纏った少年が独り歩く。

死角となる建物の屋根の上を音もたてず飛び回り、視線の先にある屋敷を警護している者たちから全く気付かれる気配はない。

屋敷の電気はまだ点いているが、それは緊急時にもすぐ対応出来るために点けているだけであり、少年にとってのターゲットは既に就寝しているようだ。

相手はこの国の古い貴族の血を引いている男。貴族制度自体が廃止されてその爵位を疾うに失っているが、それでも伝統的に旧伯爵家などと呼んだりすることもあるので、名家の当主が殺されたとなれば騒ぎにもなるだろう。

だが、それは人々の生活が変わるほどではないと少年は考える。仕える者や仕事で取り引きのある者など、大きな損害を被る者も当然いるだろうが、当主が死んでもまだ妻と子どもが存在する。

当主の兄弟も含めれば、それら仕事の関係者たちとは今後も付き合いが続く筈だ。

ならば、実質、実害を被るのは殺される男の家族のみとなる。

――だが、

(……それが悪だと知りながら、男と同じように甘い汁を吸ってきたんだ。殺されないだけマシだと思え)

親族たちも含めて、皆、男が久遠の安寧で黒い金を手にしていることを知っていた。

昨年殺したアロイス・ボーデヴィッヒの臓器売買にも深く関わっていたと調べがついている。

真っ当な神経をしているのなら、罪のない命を弄ぶような行いに加担することが如何に愚かか分かるだろう。

それを止めもせず、知りながらも見て見ぬふりで自分たちは贅の限りを尽くしていた。そんな者たちに掛ける慈悲など、今の少年は欠片も持ち合わせていない。

冷徹な蒼瞳を屋敷に向け、敷地に最も近い屋根から助走を付けて跳び上がり庭へと降り立つ。
着地時の草の擦れる音や、待機していた犬たちが吠えたことで警備の者らも侵入者に気付く。
けれど、銃を撃ち放ってくる警備が集まってくるよりも早く駆け出した少年は、外套に弾丸を受けながら迫ってくる人と犬を加減速とステップで躱し屋敷へと進む。
一部消えていた屋敷の明かりが全て点いた事で、屋敷の中にも侵入者が現れたことは伝わっているのだろう。
それならば、もう音を立てる事を気にする必要はないと、少年は左手に長大な大太刀を構え。そのまま屋敷の壁へと進み、素早く三閃振るえば、正面にあった壁が容易く切り崩されていた。
(男の居場所は……三階か)
常識外のルートで侵入を果たした少年は、屋敷内にいる人間の居場所を即座に調べる。
屋敷中の人間が既に起きているらしく、頭の中に響く激しい恐怖と混乱を表す声がとても五月蠅く感じた。
(階段を使う必要はないな。このまま三階まで向かう)
庭の警備たちが銃を乱射してくるも、黒い外套を貫通する事など叶わず。少年は相手を無視して天井に向かって跳躍しながら刀を振るった。
すぐ上の部屋は単なる応接室だ。物もそう多くなく、誰もいないので都合が良い。
そう考えながら着地を果たし。さらに上の階層へと向かってもう一度刀を振るって跳ぶ。
「ひ、ひぃっ!? だ、誰かぁ!!」
今度の部屋には人がいたため、急に床が崩れ落ち、出来た孔から刀を持った男が現れたことで相手は半狂乱になりながら壁際へと逃げている。
元々、久遠の安寧のメンバーが各地で殺されていることは、表の世界でもＥＰ社の幹部が殺されているといって報道されていた。

故に、壁際で泣いている青年も、父親の裏の顔も含めて知っていたのなら、当然、件の殺人鬼がやってくる可能性は考えていたはずだ。
だというのに、二十代後半と思われるパジャマ姿の美形の青年は、小型の護身用拳銃しか用意していなかったようで、現れた少年の頭部めがけてなけなしの五発をすぐに撃ち果たした。
当たったのは五発中一発のみ。それも頭部を狙っているのに右肩に掠る程度と、仮に防弾防刃装備を着ていなかったにしろ、まるで敵の戦力を落とせていなかっただろう。
「お、お前っ、何が目的でここへやってきた!? 既に軍と警察が屋敷を包囲する形で動いている。逃げ切ることなど出来んぞっ」
「……お前、莫迦だな。仮にそれが真実であっても、目的を持った人間はそれまでに目的を果たそうとするだろう。さらに、後がないのなら、何人か道連れにしようとも考えるかもしれない。何より、家人は逃走のための人質に使われる可能性も考慮すべきだ」
怯えて声を上ずらせながらも、必死に強がって殺人鬼が逃走するよう仕向ける青年。
だが、フードと前髪の間から覗く蒼眼を向け、殺人鬼の少年は心底呆れたように言葉を返した。
言われた相手は恐怖で頭が回っていなかったのか、少年の指摘の可能性に思い至り、さらに顔色を真っ青にして床にへたり込む。
恐怖に怯えるだけで抵抗や反発の意思を見せないのなら放っておいてもいい。
そう考えた少年は、部屋の前に銃を持った男が数人集まっていることを感知しながら、隣の部屋とを隔てる壁を切り崩して移動を始める。
壁の崩れる大きな音を聞いて男たちが扉を開いて入ってきたが、既に少年は隣の部屋へ移動を済ませている。
いくつもある部屋の壁を破壊しながら駆け続け、追手が銃で狙って来れないよう壁の孔も直線ではなくずらして開けた。
もっとも、撃たれたところで外套を貫くことなど不可能だが、面倒な妨害が入らないに越したことはない。

そうして、いくつもの部屋を進んだところで、ようやく目的地へ到着した。
壁に孔を開けて現れた少年に、部屋の中央に立つ屋敷の主らだけでなく、二人を守るため囲う形で備えていた者らも激しく動揺している様子だ。
だが、殺人鬼の登場がどれだけ現実的でなかろうと、そんな大きな隙を一瞬でも作ってしまったのが彼らの犯した最大の過ちだった。
「――――死ね」
瞳が蒼から濁った金色に変化した次の瞬間、少年は全員の視界から消える。
さらに、声が聞こえたと思い振り返ってみれば、消えた少年が屋敷の主の後ろで刀を振り抜いた姿で立っていた。
ゴトリと音を立てて落ちる頭部、部屋のカーペットを染めるように噴き出す鮮血、そんな状況を作っておきながら一切何の感情も浮かべていない殺人鬼の貌。
恐ろしく、おぞましい光景だと言うのに目を離すことが出来ない。一生この光景を忘れられそうになく、いっそ気でも狂ってしまった方が楽だろうとすら思える。
けれど、そう思っていても、血の雨を黒い外套で受けている少年の姿が、現実感がないからこそ幻想的に映ってしまい。彼が窓から飛び降りて出てゆくまで、誰一人として動くことが出来なかった。
そうしてまた、殺人鬼は次の獲物の元へと向かうため静かに去って行った。

１０月２日（月）
午前――中国・成都市近郊
屋久島からセスナを奪い脱走したアイギス。彼女は道を決めやすいからという理由で選んだ上海行きのルートを、燃料が持つ限り飛んで距離を稼ぐルートへと変更した。
その結果、燃料を使い果たした飛行機は飛ぶ力を失って不時着したが、彼女自身は特に怪我もなく無事に地面に降り立って移動を続けて

いた。
不時着した場所が山や森に、やせ細った荒れた土地しかないような場所だったこともあり、当初は太陽や星の位置を頼りに感覚で移動を続けるしかなかったが、比較的栄えた成都市の近くにやってきたことで、改めてトルコまでのルートを考えられるようになった。
とはいえ、迷彩服を着ている事もあってやはり街の中心部へ向かえば目立ってしまう。
別に人間のように飲食する必要はないので、それならば街へは近付かないようにしようと決めながら、アイギスは成都市が遠くに見える田舎道をキコキコと手回し充電器を回して歩いていた。
（ここが成都市ならば、トルコのイスタンブールまではおよそ六七〇〇キロですね。まだまだ先は長いであります）
元々は新品だった迷彩服はズボンの裾をはじめとして、至るところが汚れてボロボロになり始めている。
黄山市と成都市の距離はおよそ千三百キロ。屋久島からトルコまでは八千キロ以上あり、アイギスは二週間で十分の一以上を踏破したことになる。
ここへ来るまでの途中、軍や警察に拘束されそうになったことはなかったが、それでも山などで道なき道を進んでいれば丈夫な服も傷みはした。
けれど、アイギスは服の傷みなど特に気にした様子もなく、途中にあった軍の駐屯施設に侵入して密かに拝借した手回し充電器を使って、歩きながらも自分のエネルギーを蓄えることに余念がない。
影時間に一般人は棺桶型のオブジェになる。それを利用してストレガたちは過去に窃盗を行っていた訳だが、現在のアイギスがやっていることもそれと同じだ。
最初は国境越えに影時間を利用することを考えていたが、このまま進めばどう計算しても辿り着くまでに大規模なメンテナンスが二度は必要になるほどボディに負担が掛かる。
もしも動けなくなり、偶然近くにいた者が桐条グループを呼んでくれたとしても、当然、メンテナンスのために搬送した後は、施設で厳

重に拘束されるに違いない。
だが、それでは駄目なのだ。大切な彼を救う事が出来なくなる。そう考えたアイギスは道中で簡易メンテナンス出来るキットを欲した。
もっとも、中国の農村部など未だに電気や水道など、生活に関わるインフラがまるで整備されていない場所だって存在する。
人目を避けるように移動するアイギスが通るルートはそういった田舎がメインなので、メンテナンス用具を求めていた彼女も流石に無理かと諦めかけていた。
だが、大切な少年の元へと向かう彼女を天は見放していなかった。
途中で小さな軍の施設を見つけたアイギスは、影時間になるのを待ってから施設に忍び込んだ。
他人の物を勝手に盗むのは悪い事だ。それはしっかりと分かっているが、湊を救えなければ世界が危険だという不思議な予感がある。
ムーンライトブリッジでの記憶をほとんど失っているせいで、どうしてそんな事を思うのかは分からない。
しかし、予感が的中すれば忍び込んだ施設の人間たちも困るはずなので、アイギスは必要な投資だと思ってもらいたいと考えながら、使えそうな物を色々と拝借した。
そうして、服装は屋久島で手に入れた迷彩服だが、現在も使っている手回し充電器の他にも、予備の手回し充電器、身体の節々へ差すメンテナンス用の油、洗浄用の純水等を施設に置かれていた大きなリュックに詰めて貰ってきていた。
（ここはそれなりの都会で観光地のようですね。八雲さんをお助けすれば２００９年までは時間があります。再び眠りにつく可能性もあり得ますが、起きたまま過ごすのであれば、色々な場所を見て回りたいものです）
第一の目的地としているトルコまではまだ遠い。さらに、彼女自身の目的は湊と出会う事なので、情報集めも含めてトルコについてからが本番といった方が正しい。
それでも、アイギスは自分が無事に湊の元へ辿り着くことを考えながら進む冷静さがあった。

焦って何かをしようとしても良い結果は生まれない。あの戦いで迂闊に攻め込みピンチを招いたことで、大切な彼にはいらぬ負担を掛けてしまったのだ。
だからこそ、アイギスは一日に進む距離をある程度定めながら、毎日着実に目的地を目指す様にしている。
焦る気持ちは当然あるが、まだ大丈夫。セスナで通信機越しに会話したエリザベスという女性が〝コミュニティ〟と称した小さな繋がりは消えてしまったが、それよりも大きな〝契約〟と呼ばれる繋がりがまだ残っている。
故に、アイギスは瞳に力強い光を宿しながら、少年へと続く道を一歩一歩進んでゆくのだった。

――ヨーロッパ・オノス地方

十月もまだ初めだが、もうしばらくすれば雪が始めるのではないかという曇天の今日。久遠の安寧の拠点の中でもかなり私的に利用されている屋敷では、またも組織の幹部が殺されたという知らせを受けたソフィアが薄い笑みを浮かべていた。
仙道死亡の報を受け、さらに同日に久遠の安寧を潰すと宣言した者がいたことで、幹部たちは少々驚きつつもあり得ないと笑っていた。
けれど、宣戦布告を受けて約一週間で既に九人の幹部らが殺されている。殺された者の中には、当然、危機感を覚えて護衛を付けていた者もいるというのに、相手は幹部や構成員以外誰一人殺すことなく目的を達成して去って行ったという。
そんな話を聞いてしまった胆の小さい男たちは、敵はそれほどの手練なのかと表情をすぐに引き攣らせることとなった。
しかし、自身よりも二回り以上歳の離れた、権力を持ち普段は踏ん反り返っている者たちが狼狽える中、ソフィアだけは今も誰よりも愉しそうな顔をしている。
屋敷の主に招かれソファーに座っていた客人は、ソフィアのその表情を眺めながら紅茶のカップをテーブルに置いて口を開く。
「ふむ、そんなに仲間が殺されるのが愉しいのかな？　難しいことは

よく分からないけど、幹部というからには重要なポストに就いていた人間なんだろう？」
「別にそんな事はありませんわ。年功序列で椅子に座れたというか、単なる古狸も大勢いますもの。各業界へのパイプ役は生きておりますし。わたくしたちの規模にもなりますと幹部も二ケタではすみません」
自身の執務机から客人の待つソファーへと移動しながら返すソフィア。
その正面に座る科学者然としたスーツの上に白衣を着た女は、どこか退廃的な雰囲気を纏い、肩口で切り揃えられた傷んだ髪に指を絡ませながら、久遠の安寧の幹部向けの報告書に目を通しながら呟く。
「……これは同一犯の犯行なの？　移動経路と速度がまるで割り出せないんだが」
久遠の安寧のメンバーでない女は、初めて見せられた一連の殺人事件に関する情報の不可解な点に少々驚いて見せる。
報告書に書かれているのは被害者の襲われた犯行現場、目撃情報及び死亡推定時刻から割り出した犯行時刻、犯人が殺害に用いたと思われる凶器に関する考察などだ。
書かれている事件は基本的に時間も場所もばらばら。トルコで事件があったかと思えば、その三時間後にドイツで殺されていたり。一日空いてギリシャでまた犠牲者が出たかと思った次の日に、今度はロシアとカザフスタンの国境付近に現れたりしている。
航空機を使えば単純にトルコからドイツへ三時間で移動するのは不可能ではない。
しかし、犯行現場から空港へと移動し、ドイツに到着してから次の犯行現場へ向かうとなれば、出入国の手続きに時間を割かれることもあり実質不可能だと断言できる。
その点をクリアしようとするのならば、出入国を身分証の提示程度でスルーされ、現地移動の時間を稼ぐために音速旅客機などを使用する必要があるだろう。
犯行を可能にする手段の一つとして考えてみたが、女は現実的では

ないと薄い笑みを浮かべて何やら楽しそうにしている。
先ほどとは反対に、相手のそんな様子を眺めていたソフィアが今度は話しかけた。
「不思議でしょう？　現場には一人で現れ、こちらの幹部や構成員のみを殺して去ってゆくの。犯人は仮面舞踏会の小狼。我々を潰すと宣言してきた美しい鬼よ」
「ええ、話しには聞いているよ。名切りの鬼、まだ生き残りがいたんだね。ちょっと興味があるし、もしも手に入れたら貸してくれないかな？」
「フフッ、細胞や血液の提供で良いのなら構いませんわ。でも、それ貴女の〝息子〟よ」
突然の言葉に、言われた女は先ほどよりも大きく目を開けて顔を上げる。
目の前にいる少女は楽しげに口元を歪めているが、決して嘘を吐いているようには見えない。
相手の言う通り女には出産経験が一度だけある。その当時は一度くらい出産を経験しておくかと、丁度良いタイミングに来たクローン生成の依頼である個体から採取した細胞と自らの卵子で受精卵を作り、自らが母体となってそのクローンを産んだのだ。
表の世界では人間のクローニングや遺伝子操作は禁忌で違法とされているため、あまり目立つように研究する訳にもいかず。研究の進みが遅い事もあって、それらの技術は完全に確立しているとは言い難い。
着床してもまともに成長しない場合や、無事に出産することが出来ても、免疫力が異常に弱かったり、またどこかに後天的に障害が発生することもあり得る。
現に、クローンばかりのせいではないかもしれないが、女は着床から五ヶ月程度の早産でクローンを出産してしまった。
異常に成長が速かったのか、生まれた赤ん坊の体重は千グラムほどはあったが、それでも人工保育器に入れておくべき未熟児なことに変わりはない。

だというのに、女は依頼人の要望から自分が産んだばかりの赤ん坊にかなり無茶な成長促進の処置を施し、生後一ヶ月にも満たない期間で、筋肉もろくに発達していないほぼ骨格(ハリボテ)だけな七歳児の姿にしてしまった。

自分たちも違法な研究をしていながら、子どもに対する情はないのかと周りの人間は言っていたが、女にしてみれば何事も経験だと好奇心から母体になると言ったに過ぎない。

何より、依頼を受ける時点で、出産後はなるべく短期間でオリジナルと同じ年齢まで成長させて欲しいと言われていた。

依頼人の要望をただ守っただけだというのに、何故今さらそんな風に道徳について説いてくるのかが理解出来なかった。

そうして、どうにか無事に成長させたクローンを依頼人の日本人に渡した後は、その後の経過が少し気になりつつも、自分の元へ舞い込んでくる他の依頼に掛かる必要があった為、今日まで自らが腹を痛めて産んだ事も含めすっかり存在を忘れていた。

というのも、仕事と研究に忙しかっただけでなく、まさか、あんな無茶な事をした個体が真っ当に成長しているとは思っていなかったのである。

目の前にいる遺伝子操作の成功体の少女と同様、クローンの方でもしっかりと成功体が作れていたとは嬉しい誤算だ。

特に親子としての感情は湧いてこないが、〝普通の母親なら子どもに会いたいと思う〟はずなので、女は立派に成長した我が子に会ってみようという気が少し起きた。

「名前は何ていうの？　小狼は偽名だよね？」

「あら、御自分では名前も付けていなかったんですの？」

「んー、まぁ、日本人らしかったから受精卵を着床させた年から取って〝九十九(つくも)〟って名付けていたけどね。日本語は発音が難しくて呼びづらいから口に出して呼んだ事はほとんどないな」

血の繋がりは一応あるが、その後も自分の手元に置いておくわけでもなし。名前を付けるだけ無駄だと思った。

けれど、無駄な事はしないでおこうと思いつつも、名前が無いのは

記録に残す上で不便だと彼女なりのルールでしっかりと名前を付けてやったのである。
　そんな風に母親としての愛情はないが、科学者としての関心はしっかりと持っていた歪な人間性の相手へ、ソフィアは紅茶に口を付けながら返した。
「当時から既に適当な人間でしたのね。まぁ、名前は仙道の方から一応聞いています。百鬼八雲というそうです。ただし、これは本来オリジナルの名前ですので、正しい名前と認識していいのか分かりませんが」
「お、偶然にも似た響きの名前だ。ふむふむ。てっきり、オリジナルの予備臓器用（スペアパーツ）かと思っていたけど、確かにソレに同じ名前を付けるとは珍しいね。だとすると、別の用途に使われたのかな？」
　遺伝子操作もクローンも技術的な問題点はまだ多数残っているが、いくつかの成功個体が生まれていることもあり、その素晴らしい技術に夢を持って裏に通じた金持ち達から依頼としてはよくやってくる。
　だが、それには法外な費用が必要となり、失敗しても何の補償もされないことから、実際に契約まで行われる事は稀だ。
　女の目の前にいるソフィアとて、久遠の安寧がトップであるルーカス・ライムント・ヴォルケンシュタインが後継者を残すため、信じられない巨費を投じて作らせてきた個体の一つであり。その裏には生きられなかった数十体の失敗作が存在する。
　そんな事が出来るのは極一部の権力者のみで、一般人は一体作る費用を出せたら良い方だった。
　当時のクローンも無事に出産から成長までは漕ぎ着けたが、依頼人のあまりに急いでいる様子から、早急に臓器移植が必要になり提供者を探すよりも確実な方法を選んだのだとばかり思っていた。
　それがオリジナルと同じ名前をつけられ、また無事というよりもむしろ元気過ぎるくらいに暴れまわっているとなれば、依頼人はオリジナルの予備のために作った訳ではないのだろう。
　予備以外の作る理由で最も多いのは死んだオリジナルの代用品としてだが、ソフィアの話しぶりからするとオリジナルもちゃんと生き

ているらしい。
　だとすれば、代用品の線は消えるため、女は他に何か理由はあっただろうかと考え込んだ。
「予備でも代用品でもない。ああ、兄弟を作るとかって感じかも」
「兄弟なら別に赤ん坊でも構わないでしょう。まぁ、わたくしも詳しくはありませんが、仙道が聞いた話しによれば替え玉用だったらしいですわ」
「ああ、その可能性があったか。なるほど、人生何が起こるか分からないし。同一個体が二人いれば有利に働くこともあるかもしれないね。ただまぁ、記憶がないから替え玉はすぐばれるだろうけど」
　幾月は他者を出しぬくため、八雲（オリジナル）と九十九（クローン）を入れ替える事を企てていたのだが、替え玉の意味を詳しく聞いていない二人は、多少の興味を抱いたまま誤った解釈で話しを進める。
　クローンは確かにオリジナルの細胞から作られた、一種のコピー人間である。
　しかし、遺伝子的にクローンと同一な状態にある一卵性双生児を見れば分かるが、例え設計図が同じであっても完全に同じという訳ではない。
　後天的な筋肉の発達具合は当然異なり。両親の細胞を元に出来た子どもへ親の記憶が引き継がれないように、クローンも元の細胞の持ち主であるオリジナルの記憶を得ることは出来ない。
　だからこそ、いくら替え玉をしても、すぐに記憶の有無や癖などで別人である事がばれてしまうだろうと言って女は楽しそうに笑った。
　正面に座ってそれを聞いていたソフィアは、少し考えながら女に自分の考えを交えて話す。
「その保護者が上流階級であれば、オリジナルの能力が保障されていない以上、クローンで他者の目を誤魔化しておく事も必要になります。優雅に見せているのは外見だけで、心の中では如何に他者を陥れるかを考えている者ばかりですから。当然、後継者の弱みは見せられないでしょうし」
「それは確かに言えているかもしれない。私がこんな研究馬鹿の科学

者だから、父もそれなりに苦労していたようだしね」
例えば、オリジナルは運動が得意で勉強が苦手であれば、クローンにはそれを補うように教育を施し、要所要所でオリジナルの利益に繋がるよう働かせる。
頻繁に入れ替わっていればばれるだろうが、それが学校の入試などであれば容姿が同じである以上、クローンは戸籍にも存在しないのでばれる事はまずないだろう。
そんな風に、クローンを使い文武共に完璧であると周囲に見せる事で、上流階級ではよくある蹴落とし合いのリスクを減らす事が出来る。
女もソフィア程ではないにしろ。親がそれなりに力を持った人間であったため、人間たちの醜い部分はよく知っており、当時の依頼人の事情にも理解を示せたことで少しすっきりした。
そこからさらに気分を上げるために、テーブルのクッキーに手を伸ばしたところで、ソフィアが口元を歪めながら軽い調子で声を掛けてくる。
「ああ、そういえば、貴女のお父様を殺したのは小狼ですわよ。仙道と会ったのもその時ですから」
「おや、そうだったのか。確かに会社から犯人の特定がどうとのメールがあったかもしれないが、それは父に悪い事をした。孫に殺されてしまうとは運が無い」
口ではそう言いながらも、顔には薄い笑みを貼り付けてクッキーを食べているこの女。実は去年湊に殺されたアロイス・ボーデヴィッヒの娘で、名前はエルナ・ボーデヴィッヒという。
上に三人の兄がおり、兄妹全員がアロイスの会社役員となっているが、経営は全て兄に任せてエルナは科学者兼医者として趣味と実益をかねた仕事をしている。
そして、口調からも分かる通り変わった性格をしていて、母と兄たちは父の訃報を聞いて悲しんでいたが、エルナだけは「そっか、殺されたのか」となんともドライな感想を抱いたのみだった。
今も自身の父親殺しの犯人が息子であると聞き、「自分の息子はわ

んぱくだなぁ」とずれた事は考えたが、父親に対しては特にこれと言って何も思っていない。
普通の人間からすれば薄情な娘と映ることだろう。けれど、奇才だからこその人間的欠陥だと思えば、彼女はこれで良いのだと考える者もいる。
この場にいるソフィアもそう考える一人であり。自分たち組織の一員ではないが、自身を生み出した張本人で、仕事の付き合いが今も続いている相手の反応を気にした様子もなく、以前から少々気になっていた事を尋ねた。
「そういえば、小狼はクローンのようですが、寿命の方はどうなっていますの？　遺伝子操作をしたわたくしよりも長いのかしら？」
ソフィアの遺伝子操作は、生まれつき高い頭脳や身体能力を持てるようにした物ではない。
彼女に施されたのは、あくまで性能の上限引き上げであり、勉強すれば、鍛えれば、という前提が存在するのだ。
そのために彼女の父親も大金を使って英才教育を施し、湊よりも一つ年上でありながら既に飛び級で英国大学院を卒業したほどの頭脳を持っている。
もっとも、勉強と同じように身体も鍛えていれば、国のオリンピック代表入りも夢ではなかったりするのだが、優雅ではないという理由で本人が運動を拒否しているため体力はない。
そんな彼女は、遺伝子に欠陥がある可能性が指摘されていることで、他の者たちよりも短命であるか、もしくは筋肉や他の器官に障害が発生しやすくなると言われている。
自身の身体について説明を受けた彼女は、美人薄命と言って気にもしていなかったが、自分と似た生まれである湊には人一倍興味を抱いているのか、尋ねるその瞳は笑みの割に真剣だ。
相手側のそんな心中をどことなく理解しながら、クッキーを食べていたエルナは音を立てて紅茶を飲みつつ答える。
「それは何ともいえないね。人間の寿命って本当に予想がつかないもんでさ。病気の進行速度からなら余命を計算出来たりする事もある

けど、普通は何歳まで生きるかなんて分からないし」
「でも、クローンは生まれつきテロメアが短いのでしょう？　テロメアが短い分、老化もオリジナルよりも速いと聞いておりますが？」
「ああ、それは嘘だよ。実際はクローン化の度にテロメアが長くなる研究結果も確認されてるしさ。けどまぁ、私見じゃ……身体の中身はボロボロなんじゃないかとは思ってる」
にやりと不敵に笑うエルナは、表情こそふざけているように見えるが、その目は冗談で言っている訳ではないと告げている。
彼女は湊が飛騨から改造を受けていることは全く知らないが、百鬼八雲のクローンを生み出した科学者として、普通ならとっくに死んでいるのだから生きていても別の問題が浮上していると読んだだけだ。
産みの親にして生みの親でもある彼女の言葉を聞いていたソフィアは、それらはきっと真実なのだろうと理解して少し残念に思う。
湊はソフィアが唯一認めた、同量の金やダイヤよりも価値のある存在だ。
自他共に認める美貌を持つ自身も短命だと言われたが、同じように美しい湊も似た運命を持っている。
ならば、これは生命の禁忌に手を染め生み出された者へ神が与えた罰なのだろう。そして、両者の魔性を帯びた美貌は、愚かな人間によって生み出された被害者でもある二人へのせめてもの慈悲に違いない。
自分たちに待つ運命を受け入れたソフィアは、エルナを置き去りにしながら厳かに祈りを捧げだし。いつか二人で主の元へ向かいますと神に伝えたのだった。

第九十二話　続く争い

深夜――ブルガリア・リノセロス

ブルガリアのスリベンより北へ向かった場所にある地方都市リノセロス。

周囲は森や山に囲まれているが、その街だけは近代化が進み、住居は古くからあるヨーロッパの建築様式でありながら、街の西側には遠くからでも目立つ大きな工場地帯が存在していた。

建物の壁面に描かれているのは、久遠の安寧の表の顔を示す『ＥＰ』の文字。

そう、ここは久遠の安寧が所持する大型兵器プラントの一つであった。

元々、この辺りには森や平原くらいしかなかったが、久遠の安寧が事業拡大を目指し始めた際、この場所に兵器プラントを建設すると決め、一緒に人が住む場所も作ってしまったのだ。

（……久遠の安寧の街。だが、彼らは生きるために工場に勤めているだけだ。構成員とＥＰ社の社員を選び分け、構成員たちを殺す）

街から離れた森の中に潜み、湊は様子を窺いながら機会を待っていた。

工場の敷地は機密を見られることを防ぐためだろうか、高さ十メートルを超える外壁に囲まれており、それを越えなければ正面ゲートを含めた全三ヶ所にある搬入口を突破するしかない。

ペルソナを使えば簡単に飛んで越えられるものの、目立ってしまえば敵の集結も早まってしまう。そうなれば乱戦は必至なので、構成員ではない工場従事者が工場を守るためにやってきてフレンドリーファイアで負傷することも想像は容易であり、久遠の安寧以外を基本的に巻き込まないつもりの湊が出来る限りそれらの被害を避けて動くのも当然であった。

（高速での正面突破か、死角をついて壁面から侵入するか……まぁ、ゲートの警備が構成員である可能性が高い以上、そこを避ける事は出来ないか）

わざわざ構成員の一人を伝令役として残し、組織自体を潰すと宣戦布告したことで一連の事件は全て湊の犯行だと思っている筈だ。
以前から敵に恨みを持っていた者が今回の騒動に便乗して行動を起こし、その罪まで擦り付けている可能性も何件かはありそうだが、それで無関係の者を傷付けていなければ湊は気にしない。
今はまだ準備段階。相手に自分という存在をはっきり『敵』であると認識させながら、徐々に動くために必要な部位を削いでゆくのだ。
敵の本拠地は不明で、最後に殺そうと思っているソフィアがどのような人間であるかも分からない。
だからこそ、炙り出すために湊は自分の存在の痕跡を事件現場に残す。工作員が包囲してきたならば、全員の記憶を覗いて情報を得る事が出来るから。
また、宣戦布告時には鈴鹿御前もいたが、現在続けている襲撃を単独犯として見せていることにも理由は存在する。その理由はイリスを通じて出会った者らとの繋がりを隠すことが出来るためだ。
今の湊に誰かを守っていられる余裕はない。だからこそ、湊は独りで敵を攻め続けて自分に注意を集める。
組織を巻き込んだ湊とソフィア二人の戦争において、関係のない者たちが情報を得るために拷問されることや、誘き寄せるための人質にされるなどあってはならない。中でも湊にとって一番恐ろしいのは〝現在〟の素性がばれて、桔梗組本部を襲撃されることだ。
鵜飼と渡瀬はまだ戦えるが、敵が銃器を使って一斉に襲ってくれば一溜まりもない。さらに、非戦闘員である桜とチドリを守って戦い続けるなど不可能。
チドリがペルソナを使えば、敵の第一波を退けることは出来るかもしれないが、彼女を人との戦闘に参加させるなど到底許可できるものではない。
敵が強大な力を持ち、尚且つ手段を選ばぬ相手だからこそ、一見無謀にも見える襲撃を湊は続けるのだった。
（……行こう）
時刻は現地時間で深夜の二時になった。一度戦闘が始まれば臨機

応変に対応してゆくが、中に入るまでと敷地内に侵入してからしばらくの間のプランは最低限立てた。
左手にはガバメント、右手には刃渡り十八センチのナイフをそれぞれすぐ取り出せるよう準備しておく。敷地内を走り回って構成員と責任者たる幹部の一人を狩るのだ。大きな得物を持って走るのは無駄でしか無い。
バイクに跨りエンジンを始動させると、湊は森を抜け最高速度を維持したまま正面ゲートへ近付いてゆく。静まり返ったレンガ通りはどこか風情があると感じられるものの、風を切って景色を置き去りにしてゆく今の湊はそんな事に気を割いてはいられない。
街が静かだからこそエンジンの音が余計に響く。そして、音と共にライトの明かりが高速で接近してくれば、当然、ゲートの警備たちも異変を感知し、高さ四メートルほどの鉄門を閉めながら銃を乱射してきた。
タイヤは防弾性の強化タイヤに変えてあるが、エンジンがほぼ剥き出しの構造上、まともに喰らえば容易くスクラップになってしまう。
それを避けるため、湊は時速二百キロのスラローム走行で弾丸を躱しながら、警備らの記憶と心を読み取り選定を開始する。
警備は五人、内二人が構成員と断定。敵まで残り三十メートルを切ったところで素早く銃を抜いて二人を射殺。速度は一切落としていないため、相手が倒れるよりも速く警備らの間を通過する。
しかし、足場となるものがなければバイクで跳躍することは出来ない。故に、湊は門の直前でターンを決めると、その際にナイフで門の死の線を切りつけ鉄くずの山へと変える。
オフロード以外のバイクで障害物の上を通過するのは危険だが、強化タイヤならばパンクすることはまずないので、湊は器用にバランスを取って通過すると敷地への侵入に成功した。
(問題はここからだな。本当に、どこにそれだけの数を集めておく暇があったんだか)
ゲートからしばらくはただの道が続いている。兵器を扱っている以上、いくら街と隔てる壁があっても何かあれば街にも被害が出る。

そのリスクをなるべく減らすため、壁からそれぞれ定めた距離をとって工場が立てられているという訳だ。
そして、湊は道の先に待っている完全武装した集団の存在を感じ取り、ここまで度が過ぎた臆病者は久しぶりに見たと内心で嘆息した。
湊がここへ来たのはリストに載った幹部の中から適当に選び、その所在がここだったに過ぎない。
敵側がそれを予想している訳もないので、仮にあのリストに沿って殺している事がばれていたとしても、山を張って大規模に兵を配置することなど出来ないはず。
敷地内に配置された集団は四十を超える。それぞれが中隊規模だとすれば、明らかに個人の護衛軍でないことから、久遠の安寧には組織が保有する一国家並みの規模を誇る軍が存在するのだろう。
でなければ、自分たちの重要施設や幹部の護衛のためだけに、旅団規模の兵をそれぞれ全てに配置することなど出来はしないのだから。
「……はぁ、俺を欲しいのか殺したいのかはっきりして欲しいな」
相手の熱烈な歓迎に思わず愚痴を零し、途中でバイクから降りて外套に仕舞う湊。その視線の先にはこの工場で作られた物なのか、大量の兵器を用意して待機している二個中隊がいる。
入り口だからと人数を多めにして守りを固めたのかもしれないが、相手は根本的に湊と名切りの一族を理解していないが故に、久遠の安寧の者だけで護衛するという愚策を犯した。
(ソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインの策かは分からないが、兵を配置した優秀な指揮官に感謝しよう。これで――――)
名切りは殺害を目的としたシリアルキラーではない。無関係の者を争いから守り、敵と断定した者のみを殺す一族だ。
だからこそ、敵は護衛に無関係の者(一般人)を紛れさせておくべきだった。
(――――無関係な者を巻き込む憂いが無くなった)
生かすべき対象の含まれない護衛など、記憶さえ読み取ってしまえばペルソナのスキルで一掃して構わない。
一切感情の見られない表情のまま、湊は外套からミニガンを取り出すと集団に向けて掃射を開始する。

静かだった夜の闇に響くのは、けたたましい射撃音と撃たれた兵たちの悲鳴。一秒間に最大百発撃てるミニガンから放たれた弾丸は雨となって怒涛のように降り注ぎ、忽ち(たちま)戦場に血で出来た別の雨を降らせながら相手を肉塊にしてゆく。

どれだけ上等な武器を用意していようと関係ない。それらを使われるよりも速く敵を殺せばいいだけだ。

動く者のいなくなった戦場に静けさが戻ってくると、湊は再びガバメントとナイフを手に持ち、血だまりの上を越えて敵を屠りに駆け出した。

＊＊＊

正面ゲートに配置された部隊は一方的に殺されたものの、いざ戦闘が始まってみれば、戦局はそれほど一方的ではなくなっていた。

「弾幕を張れっ、やつを近付かせるな!!」

工場の建物内に侵入されないよう、それらを守りつつ戦火が及ばぬ距離に配置された部隊たち。

拳銃とナイフを持って信じられない速度で戦場を駆けている殺人鬼に向け、隊員らに絶対に近付けさせるなと怒号を飛ばしながら、隊長の男が控えている隊員に対戦車榴弾発射器であるパンツァーファウストを使うよう仕草で指示を出した。

指示を受けた隊員は、弾幕で誘導されている湊の進路を予測し発射する。激しい発射音と共に煙を拭きだし飛び出した弾頭は、そのまま高速で湊に向かって進み直撃する。

戦車を正面から破壊する威力を持った武器だ。誰もが勝利を確信するが、上がった爆炎から五体満足の相手が吹き飛びながら出てきて地面を転がっている。

防弾性の外套によって銃弾ではダメージを与えられなかったことを思えば、いまの攻撃は相手の足を止めたという点も含めて有効だったと言える。

しかし、相手の肉体に欠損がないという事実が隊員らに与えた衝撃は、攻撃が通ったという結果よりも遥かに大きかった。

「くっ……攻撃を集中っ、第三班は続けて榴弾を撃ちこめ!」

転がった先で相手が立ち上がりかけているのを見た隊長は、本当に人間なのかという不安を抱きながら、苦々しげに表情を歪めつつも指示をとばす。
命令された隊員らも、胸中の不安を抱えたままでも攻撃の手は休めない。立ち上がったばかりの湊へ新たに発射された四発の榴弾が迫り、直前のダメージが抜けきっていないのか直撃して、さらに遠くへ吹き飛び転がってゆく。
湊がこれまで数百人規模の敵を殺してきたのは、基本的に屋内で行われた作戦行動でのことだった。
閉鎖された環境では逃げ場が少ないこともあり、味方が倒れてゆく事に余計に危機感を覚える。そこに銃撃の音や悲鳴などが加われば、恐怖を誘発し、冷静さを奪われた者はパニックに陥る。
平時ならば確実に当てる事の出来る距離でも、平静な状態でなければ狙いも呼吸も乱れ、原因が自分側にあるにも関わらず、どうして相手には攻撃が当たらないのだと余計に敵戦力を強大に感じてしまうのだ。
それだけの心理的要因がある事に加え、屋内では通路や部屋の広さの関係で取れる陣形が限れてくる。
自分たちの被害も考慮すれば、先ほど使われた榴弾など使う事は出来ない。つまり、持って走り回れるマシンガンが主武装ということになる。
ただの弾丸の雨であれば、マフラーを外套にする前からでも湊は切り崩した壁などを使って防いでいたので、なんら脅威ではなかった。
敵の攻撃に構う必要がなければ、湊は壁や天井を使って立体的な動きで走り回る事が出来る。一般的な兵士や仕事屋がそんなデタラメな存在を想定した訓練をしている訳もなく。デタラメな軌道とあり得ない速度で敵は次々と狩られていった。
だが、ここはだだっ広い平地だ。工場や事務所を兼ねた建物もあるが、それぞれが離れているため、一つの場所に侵入して各個撃破に持ちこめても、相手が乗って来なければ別の場所に移動して戦う必要がある。

ならば、相手がきても物量で勝てるようかなりの人数を集め、一つの部隊がやられても被害が飛び火しない陣形を組んで待機していた兵士たちの方が圧倒的に有利であった。
「狙撃班前へ！　敵と距離が開いている間に、他の者は弾薬の補給をしろ！　第三班は各自の間隔をあけて榴弾を撃ち続けるんだ！」
放った全弾が命中した訳ではなかったが、既に三発の榴弾の直撃を受けている。
双眼鏡で確認すれば、相手の転がっていた場所に血液が付着していることもあり、流石に無傷ではなかったことに安堵する。
それでもまだ動けるのだから恐ろしいが、隊長は相手を人間ではない別の何かだと自分に言い聞かせ、この戦線を維持できるよう兵らの補給を急がせた。
「マシュー、他の隊に連絡しろ。敵は恐ろしい機動力に加え防弾仕様の装備を持ち、榴弾の直撃を喰らってもまだ動き続ける耐久性も有している。だが、榴弾の直撃であればダメージは通り。相手の機動力を奪えると」
今は足が止まっているからまだいい。先ほどまでは本当に攻撃がろくに通らず、弾幕という小さな力を集めて大きな威力に変えた戦力で敵を押し戻していたに過ぎなかったのだ。
あのまま榴弾も効かなければ、いずれ弾幕を無視して迫ってきた相手に自分たちはやられていたに違いない。
互いの戦力差からそのように分析した隊長は、副隊長に他隊との連携のために通信を送らせると、補給を終えた兵に様子を見ながら再び弾幕を張るよう命令する。
このまま時間を稼げば敗北はない。施設の護衛に当てていない中間地点に待機している部隊が、いまこの瞬間も回り込みながら湊を包囲するように動いている。
如何に化け物と言えども、榴弾の威力で吹き飛ぶと分かったのだ。あとは、包囲陣で死ぬまで嬲り続ければ勝てるだろう。
そう考えた隊長は、直後、自分の認識の甘さを後悔することになる。何せ、周囲にいた兵たちの身体がばらばらになって吹き飛んでいたの

だから。
「……は？」
仲間たちの血と肉が飛び散ったところで男は気付く、倒れていたはずの少年が起き上がり対物ライフルを撃ってきたことに。
武器をいつ取り出したのか、着弾する瞬間まで相手が立ち上がっていることに気付けなかった事もおかしいが、それよりもバレットＭ８２Ａ１を拳銃並みの速度で連射できるなど聞いた事もない。
武器の構造上、そんな速度で連射できるはずがないのだ。やろうとすれば反動で銃口は暴れ、まともに照準を付ける事も出来ずに明後日の方へ弾は飛ぶ。
さらに熱で銃身が歪んでしまい、最悪、暴発して射手が手や指を失う事になるだろう。
だというのに、相手はどう考えても無茶だとしか言えない速度で連射して来ていた。
一発撃つ度に数人が吹き飛びながら死んでゆく。恐怖に怯えながらも榴弾で殺そうと試みた者がいたが、相手は飛来する榴弾を撃ち落としながら射手の兵を殺してしまった。
味方がついにいなくなった頃、自分に迫る凶弾をスローモーションのように感じながら隊長だった男は一つ悟った。
化け物に対して、どのような事でも絶対などと思ってはいけない。理解出来ないからこそ、理解を超えるからこそ化け物なのだと。
「ああ……じゃあな、化け物」
自分の想像を遥かに超える存在。それを知ってしまった男は、勝てる訳がなかったんだと自嘲的な笑みを浮かべたまま、飛来した弾丸によって胴体を二分されて死んでいった。
そうして、誰もいなくなった戦場から殺人鬼は去ってゆく。まだこの場所には殺すべき敵が沢山いるのだ。全員を殺すまで止まる事は出来ない。
＊＊＊
全身の痛みに耐えながら戦場を駆ける湊は、降り注ぐ弾丸の雨を無視して敵陣へと突っ込んでゆく。

榴弾を何発も喰らったことで肋骨が折れた。けれど、足を止めれば確実に殺されてしまう。
時流操作で先ほどは対処したものの、力の消耗を考えれば多用は出来ない。
（はぁ……はぁ……あと、二千くらいか）
先ほどの部隊から有効な攻撃だと連絡を受けていたのか、正面から榴弾が撃ちこまれる。
走りながらでも見えていた湊は、蒼眼を向けてナイフで弾を切り捨て爆発を防ぎ、お返しとばかりにガバメントで射手の顔面を撃ち抜く。
ヘルメットを被っていようと守られているのは頭部だけで、それ以外の顔の大部分は素肌を露出したままだ。
蠍の心臓にいたころ山岳での戦闘を経験していた湊にとって、乱戦状態とはいえ遮蔽物のほとんどない戦場ならば、その程度を撃つ事はさして難しくもなかった。
そして、虎の子の兵器が無効化された上に射手まで殺された敵兵に動揺が走る。弾幕は維持されているが、それは引き金を引き続けているだけで実際に殺そうという意思を持って撃っている訳ではない。
本気で殺しに来ている格上を相手に、そんな油断とも言えるような隙を晒すなど自殺行為だ。
「オオオオオオオオオオオオッ!!」
案の定、湊が雄叫びを上げながら迫ってくれば動揺は戦慄に変わり、本能に従い逃げるべきか葛藤している兵らから完全に冷静さを奪う。
「撃て、撃ちまくれぇぇぇぇっ」
「止まれ、化け物っ」
隊長の指示も無視して全員が一斉に攻撃を激しくする。兵器の放つ熱と火薬の臭いで周囲よりも空気が淀んでいるが、そんな物を気にしていられる状況ではない。
ここで少しでも手を抜けば化け物の爪で引き裂かれてしまうのだ。逃げたい気持ちを押さえて引き金を引き続ける兵らの表情が悲痛さ

に染まりきっていた。
しかし、冷静に進路を誘導して効果的な兵器を叩き込むでもしなければ、防弾防刃装備に身を包んだ湊を止める事はできない。
右手に持っていたガバメントを仕舞い。代わりに刃渡り二十センチほどのナイフを手にした湊が敵陣へ到達すると、そのまま対人格闘に移ろうとしていた兵らを切り刻んでゆく。
持っていた武器ごと腕を三分割し、胸にナイフを突きたて顔まで一気に切り上げる。
振り返り様に後ろの兵の喉笛を切り裂き、その勢いを利用して別の人間を袈裟切りで身体を斜めに切断した。
仲間を殺されたことに憤怒の形相を見せた男がナイフで切りかかってくれば、頭を下げながら右肩を後ろに引く様に振り返る形で躱した勢いを利用し、背中から地面に倒れるような姿勢のままで伸びきっていた相手の腕を切り落としてやる。
渾身の一撃を避けられた上に腕を切られた男は一瞬で驚愕の表情に変わっているが、倒れかけていた湊はそのままオーバヘッドキックで敵の顔面を蹴り砕いた。
血と共に飛び散る脳漿。味方のそんな物を被ってしまった者らは戦意を完全に喪失する。
戦う意思のない者を斬るは武人の恥というが、兵たちが相手をしていたのは殺人鬼だ。当然、そんな戦いの中に存在する矜持を守る訳もなく、むしろ、戦意がなくなったのなら殺し易いとばかりに速度を上げて切り伏せていった。
(これで一気に減らすことが出来た。乱戦状態の今、残党を殺すのは簡単。逃走される前に優先して頭を叩いておくべきか)
考えながら湊は離れた場所にいる別の部隊へ、両手に持った対物ライフルをお見舞いしてゆく。
戦場の空は上がった火によって赤く染まり、硝煙と炎により空気が澱んでいるせいで、相手からは湊の姿がほとんど見えていないだろう。そんな状態で突如飛来する物体を避けられる訳もなく、撃ちこまれた凶弾に数百人いた兵は次々と倒れていった。

離れた場所にいる部隊を排除し終えた湊は、弾倉を新しい物に取り換えてから外套に仕舞い直すと、再びナイフと拳銃に装備を切り替えて一気に敵本陣を目指す。
そこまでの間にどれだけの兵がいるかなど関係ない。先ほど自身が行ったように対物ライフルで敵から撃たれようと、何度も榴弾に吹き飛ばされようと、湊はただ排除し敵幹部のいる本館へと進み続ける。
たった数時間で既に千人以上殺めた。ナイフも、外套も、既に血で汚れきっており、湊が駆けた後には血の線が続いている。
敵幹部のいる建物に来るまでに、湊自身も細かい怪我の他に火傷や骨折という怪我を負ってはいたが、本人の怪我はファルロスが優先的に回復を施してくれたのか既に完治していた。
茨木童子も語っていたことだが、顔を灼いたところで簡単に治ってしまうという話しは真実であったらしい。
（もう、少し……ここにいるやつらを殺せば……少し休める……）
感情の読めない顔に僅かな疲労の色を見せながら建物に入った湊は、索敵と読心能力で敵の所在を突きとめる。
相手は自分を守るＳＰ程度は残しているようだが、あとは全て施設の防衛に回らせていたようだ。
特に妨害されることもなく、静かに建物の中を歩き続けると、相手の恐怖と怒りに染まった心の声が聞こえてくる。
兵たちから一向に湊を殺した報告があがらず、逆に通信の途絶えた部隊が半数を超えたことで、相手の不安は最高潮に達したらしい。
廊下で警護に当たっている者たちは、口先ばかりで偉そうにしている相手へ内心でうんざりしているようなので、湊は音もなく武器を構えると廊下の端から五人纏めて対物ライフルを使って撃ち抜いた。
（これで、盾はなくなった）
静かな建物内に響く一発の銃声。まさか屋内で対物ライフルを撃ってくるなど予想もしていなかったのだろう、五人は全員共が防弾ジャケットごと胴体が千切れて死んでいた。
湊はその様子をただ眺めて武器をナイフと拳銃に再び戻し、部屋の

前に出来た廊下の血溜まりの上を水音を立てて歩いてゆく。
部屋の中にいるのは幹部を除いて三人、既に拳銃を構えて待っているが、そんな事をしても視えている者には意味がない。
持っていた拳銃を貫通力の高い物に替えて、扉を開けずに壁ごと貫通して三人を撃ち殺した。途端、中では生かされた男の悲鳴があがる。
もう戦闘力を有した者はいないので、何も心配する必要はないと考えた湊は扉の前に倒れている遺体をどかすよう、力を込めて扉を開けた。
「な、何故だ！　私が貴様に何かしたというのか！」
部屋に入るなり幹部の男は顔を真っ赤にして怒鳴ってくる。
相手の言い分も当然で、組織で汚い事はしていても、この男は湊となんら関わりのない人生を生きてきたのだ。
それを組織の人間だから殺しますと言われれば、単なる逆恨みの八つ当たりではないかと激昂しても無理はない。
だが、湊はイリスの復讐だけで戦っている訳ではない。これはもう『仮面舞踏会』と『久遠の安寧』という組織同士の戦争なのだ。
「……これは俺とソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインが始めた戦争だ。だから俺は、やつの持っている力を奪っていく」
「そんなくだらない事に私を巻き込むな！　あんな小娘のせいで殺されてたまるか！」
最凶の鬼一匹と裏界最大の組織、構図はシンプルだが、単純な性能のみを頼りに単独で暴れているからこそ対処のしようがない。
今回、ここにいる男の采配によって、ある程度の人海戦術を用いれば湊側にもダメージと疲労を与える事が可能と判明した。
しかし、どれだけの人数を用意すればいいかは不明で、尚且つ、仮に必要な戦力が数万人と出た時、それらをどこに配置するのかも考えなければならないのが最大の難点だ。
「私はあの小娘の側にはつかず、お前の邪魔もしない。それで良いんだろう。さっさと消えろ！」
「……ああ、じゃあな」

ソフィアの味方にも湊の障害にもならないことを誓った男は、身体を震わせながら立ち去るよう命じてくる。
偉そうな態度は気に入らないが、相手は本気で言っていたようなので、湊は別れを告げた去り際に拳銃で相手の心臓を撃ち抜く。
乾いた銃声の響いた部屋の中で、撃たれた男は驚愕の表情を浮かべて苦しそうに倒れた。
その瞳には「何故だ」という疑問と怒りがありありと浮かんでいたが、撃った本人は何も答えず扉に手をかけてそのまま部屋を後にする。
即死出来なかった男は、痛みと失血によって意識を朦朧とさせながら約一分後に息を引き取り。その三時間後、戦闘音の消えた施設に様子を見に行った者の報せで、兵器工場の防衛に当たった約四千人の兵が全員死んだ姿で発見されたのだった。

１０月７日（土）
――久遠の安寧・カペル支部
ヨーロッパ全土にある支部の中でもかなり大きな規模を誇るカペル支部。その中に存在する巨大な会議室に、久遠の安寧らが幹部たちは集まっていた。
そこまで出向くことの出来ない者の中にはモニターで参加している者もいるが、ほとんどの者が集まったことを確認した中年の男が木槌を叩いて視線を集める。
「突然の招集にも関わらず集まってくれたこと感謝する。諸君らも既に知っているとは思うが、ここ数週間の内に幹部が大勢殺されている。構成員も含めれば既に数千人にも及んでいる」
幹部や構成員の死亡は一般のマスコミにも取り上げられニュースにもなっている。
構成員の全てがＥＰ社の社員としても登録されている訳ではないが、幹部は全員がＥＰ社の方でも幹部となっているため、流石に隠し切れる訳もなく報道した。
世界でも軍事と医療で世界シェアトップ企業の幹部が次々と殺さ

れていることで、会社に恨みを持つ人物の犯行として警察たちも動いている。
だというのに、相手はそれらを全く気にしていないかのように、今もまだ潜伏を続けながら次の標的を仕留めるため狙ってきているのだ。
「そして、また今朝も一人の幹部が殺された。リノセロスの武器工場を任されていた男だ。彼と工場を守るため四千人程の兵を配置していたのだが、深夜に襲撃を受けてたった一晩で全員が殺された。それも、たった一人の男の手によってだ！」
語気を強めて机に拳を下ろして言えば、聞いていた幹部たちの表情も驚愕と困惑に染まる。
状況によっては、たった一晩のうちに四千人が死ぬことはあり得る。戦争中ならば大型兵器を使った大規模な戦闘が起これば、多いとはいえ発生し得る被害人数の範疇ではあった。
けれど、それを起こしたのがたった一人の男の手によってだと言われれば、半分聞き流していた者ですら気を引き締めて傾聴せざるを得ない。
「この度集まって貰ったのは他でもない。その男、〝仮面舞踏会の小狼〟を屠るため、皆にギルドへの要請を許可していただきたいのだ」
「しかし、敵は本当にたった一人なのですか？」
「戦場に現れるのは常に一人だ。他にも裏に仲間がいる可能性はあるが、仮面舞踏会は元々一人のチームと聞いている。そして、実動部隊が小狼のみであるなら、その唯一にして最大の障害を潰せば調べる時間などいくらでも出来る」
仮面舞踏会に仲間がいたところで湊以上の戦闘力を持っているとは考えられない。
故に、幹部らが思っている以上に事態を深刻に見た男は、湊の排除は急を要すると告げて仲間がいても後回しでいいと答えた。
幹部らの前に立つ久遠の安寧がトップを務める男の名は、ルーカス・ライムント・ヴォルケンシュタイン。年齢は五十近いがソフィアの父親であり、血筋ではなく泥臭い努力によって現在の地位まで登り

詰めた者だ。
　だからこそ、ルーカスは自身が培ってきた経験や直感から、湊を久遠の安寧の存在を揺るがしかねないとして、最大級の警戒を抱いていた。
「この小狼という男は自身を名切りの鬼と称したそうだ。発言の真偽はともかく、それを信じさせるだけの力を示してきた。それらを鑑みて率直に言わせてもらえば、小狼は組織を壊滅に追い込みかねない危険因子だと認識している」
「流石にそれはあり得んよ。ルーカス君、君は仲間が大勢殺されて過敏になっているんだ。少し休んではどうかね？」
「確かに過敏になっているところはある。だが、私は客観的な視点からも同じように申し上げる」
　既に引退して名誉職についている老人がへらへらと笑ってくれば、ルーカスは鋭い視線を送り老人の言葉を切って捨てた。
　一人で数千人を殺す相手が恐いから、対処法に良い案が浮かばないから、そんな状況で弱気になっていないとは言えない。
　けれども、弱気になっていて妙案が浮かぶ訳でもなし。ルーカスは湊に関する情報と、被害にあった幹部や構成員の情報を集めて個人でも分析していた。
「幹部も含め被害者は全て久遠の安寧の構成員だ。そう、ＥＰ社のみに勤めている幹部は誰一人まだ殺されていない。これを偶然だと考えるのは、あまりに楽観的過ぎるだろう」
「では、相手は我々側の情報を持っていると？」
「どこまでかは分からないが恐らく。そして今回、兵器工場正面ゲートの警備の内、構成員のみが殺されたことを考えれば、敵は久遠の安寧の構成員のみを狙っていると推測出来る。故に、私はただ敵を排除するのみだけでなく、敵がどこまでの人間を我々側と捉えて殺すのかを調べる意味も込めてギルドへの要請を行いたいのだ」
　今回の調査が上手くいけば、構成員以外は殺さない甘さを持った敵に対して、苦し紛れの防衛策だろうと出来る対処が増えてくる。
　このまま黙って消耗戦を強いられれば、弱った状態で湊ではない他

所の組織が久遠の安寧を潰そうと現れるかもしれないのだ。
よって、いち早く対策を練るためにも、十分な戦力の残っている状態で調査をする必要があった。
ルーカスが真意を含めてその事を告げれば、幹部たちからは反論も上がらず、仕事屋たちが勝手に戦ってくれるのなら自分たちの兵が温存できることもあり、すぐにギルドへの要請は許可された。
そうして、この日、仙道や数千の兵らを殺した実力を考慮し。『仮面舞踏会の小狼』討伐の懸賞金依頼が初期値一千万ドルという驚愕の値段で地下協会から世界各国の仕事屋たちへ発表されたのだった。

第九十三話　賞金首の受難

１０月１４日（土）

深夜――厳戸台・〝ストレガ〟アジト

エルゴ研から脱走後、タカヤたちは湊に与えられた家にしばらく住んでいたが、年長組の四人が裏の仕事を始めたことや二次性徴を迎えて身体が出来上がってきたこともあって、現在では家を売り払って複数のアジトを転々とする生活を送っていた。

定住生活のときよりも色々と不便なことは多いが、恨みを持った者に強襲されても面倒だ。

影時間に仕事を行っているので、そんな事はほぼ起こり得ないとは思うが、安全のためなら多少の不便さは許容できる。

故に、裏の仕事をしていないマリアとスミレも文句を言わず。タカヤたち年長者の言う事を素直に聞いていた。

そして、そんな複数あるアジトの一つで、依頼の確認がてらパソコンで情報収集を行っていたジンは、地下協会が全仕事屋に向けて発表した依頼を見つけ、その内容に目を見開いた。

「なっ、なんやコレっ!?　タカヤ、ミナトが偉い事に巻き込まれとるっ！」

ジンが今いるのはリビングのような場所だ。パソコンを操作しているジンの他に、ソファーで拳銃の手入れをしているタカヤと収支帳簿を付けているメノウもいた。

年少組の二人は既に眠っており、カズキは暇つぶしに夜の街に繰り出して不良と喧嘩でも愉しんでいる事だろう。

そんな誰も言葉を発していなかった状態で、急に慌てた様子で大声を出せば普通は何事かと気にするところだ。

しかし、湊とは別のベクトルで独自のペースを持っているタカヤは、焦った様子のジンを放置しながら拳銃を組みたて、それらが終わってからようやく振り向いた。

「彼に何かありましたか？」

「何かどころちゃいますよっ。見てくださいこれ、アイツ一千万ドル

の懸賞金かけられて全国手配されとんや」
「ウソっ、どこの組織がそんな金額で懸けたの？」
説明しながらパソコンに開いていたページを見せると、あまり気にしていなかったメノウもノートを置いて詳細を見に来た。
そこには確かに、〝仮面舞踏会の小狼〟に一千万ドルの懸賞金を懸ける旨が書かれている。
タカヤ達も湊の仕事用の名前は知っているので、本人が海外に行っていることもあって、これは間違いなく湊に懸けられたものだと認識する。
対象の生死は問わず。複数人で依頼を行った場合は、個々に一千万ドルではなく山分け方式だとか。
おおよその潜伏場所はヨーロッパ全土と書かれているため、本当におおよそでしか分かっていないのだなと思いつつ、タカヤは依頼主の名前を目にして興味深そうに笑う。
「〝久遠の安寧〟ですか。そういえば、ここ一ヶ月ほど表の会社の幹部が殺されていると話題になっていましたね」
「じゃあ、あれの犯人はミナト君ってこと？　それにしても初期設定に一千万ドルだなんて……」
湊はあまり他所の組織に興味がなかったようだが、万能型の能力を持っている湊と違ってストレガのメンバーは個々で補い合って依頼をこなしている。
その上で下調べや情報収集は生命線とも言える物なので、ほとんどはジンに任されているが、タカヤも裏界で主要な組織の名前くらいは知っていた。
最近のテレビや新聞で何度も有名企業の幹部殺害のニュースを目にしていた事もあり、メノウもすぐに二つを繋げる事が出来たらしく。未だ犯人不明とされている事件の真相に至っていた。
そんなメノウが今考えているのは、設定された懸賞金のあまりの高額さについてだ。
国聯などが懸ける懸賞金と違い。個人や組織規模で懸ける懸賞金依頼は、達成されずに多数の仕事屋が犠牲になれば金額が上がる事も

ある。
　つい先日殺された仙道も、初期値は三百万ドルにも満たなかったはずだが、複数の依頼主が現れた事で額が統合されて七百万ドルを超えていた。
　けれど、今回の湊に懸けられた懸賞金は、単一組織からいきなり一千万ドルという形式も金額も前例のないものだ。
　何でも屋の仮面舞踏会は、復讐代行であるタカヤたちストレガとは比べ物にならないほど名前が売れていると言っても、ここ数年で頭角を現した新興チーム。メンバーの素性はともかく、所属はたった一人だという噂も広まっており、長くこの業界で生きてきた者たちは、無敗記録を誇っていた武神・仙道の相手よりも勝率は高いとみて依頼に乗り出す者もいるに違いない。
　一千万ドルもあれば大勢で山分けしても十分な額が手に入る。同じ考えに至った者が現れる事は当然予想されるため、この依頼に乗る者は複数のチームで構成された連合軍として動くだろう。
　いくら湊が強いと言っても、ペルソナを仕事で使わないと聞いている事から、メノウは胸が締め付けられるような不安を感じた。
　だがそこで、すぐそばにいた半裸男の口から、直前のメノウの発言に同調するような形で、実際は正反対の考えが飛び出してくる。
「ええ、安過ぎますね。これでは依頼を受けようとする者はいないでしょう」
「はぁ？　え、一千万ドルですよ？　一生遊んで暮らせる額で安いっちゅう事はないやろ」
「では、貴方は一千万ドルで命をくれと言われてその依頼を受けますか？　この依頼はそういう事です」
　タカヤが含みのある言い方をするのはいつもの事だが、どうして一千万ドルが安いのか疑問に思っていた二人は、彼の言葉を聞いて少し考えるとようやく意味を理解した。
　被験体番号０００、通称エヴィデンス。非公式の天然適応能力者の第一号であり、複数同時召喚が可能なワイルド能力者の中でも異端な最凶のペルソナ使い。

仮に、通常のペルソナ使いが戦車など近代兵器一台と同等の戦力だとすれば、湊だけはその能力の多様さと強大さからイージス艦に例える事が出来る。
普通の人間がＲＰＧ７等の強力な兵器を用いようとも、イージス艦を落とすことなど敵わない。戦車並みの力を持つペルソナ使いでも、余程上手く立ち回らなければ攻撃を通す事も出来ないだろう。
故に、そんな化け物を人間の力で倒してこいなどと言われても、タカヤにしてみれば質の悪い冗談にしか思えず。一種の度胸試しのつもりなのかとすら考えていた。
当然、仲間を多数殺された久遠の安寧にそんな意図は全くないが、既に冗談の一種だと思っているタカヤは、ジンに見せて貰った懸賞金のページを再び読みなおし。依頼内容はともかくとして、中々愉快な話だと軽いノリで感想を一つ漏らす。
「フフッ、しかし、十四歳にして世界を敵に回すとは恐れ入ります。人類史において実際に個人で世界を敵に回した者などそう多くはないでしょう。会えない事を少々寂しく思っていましたが、この様子ですと彼も海外生活を愉しんでいるようでなによりです」
「タカヤはミナト君が数の暴力に負けて殺される事は考えないの？」
「ええ、まったく。カズキに尋ねても同じように答えると思いますよ。むしろ、私はどうすればミナトを殺せるのか知りたいくらいです。今回の依頼がその調査実験になると考えていますしね」
肩を竦めて答えるタカヤの表情を見る限り、相手は本気で湊の敗北はあり得ないと信じているらしい。
ストレガのメンバーは湊の役割やデスの恩恵等は知らないというのに、根拠らしい物もなくそれだけ高い評価が出来るのも、エルゴ研脱走時の鬼神が如き彼の強さを目にしたからだろう。
彼らが湊とデスに関わる事を知らないのは、話しても意味がないことに加え、タカヤとカズキの二人がその胸中にエルゴ研での模擬戦の続きをいつかしたいと願っていることを湊も理解しているからだ。
あの模擬戦が続けば誰かしら命を落としていたはずなので、それを望んでいるからには彼らは湊と殺し合いたいのだろう。そんなくだ

らない物に付き合う湊ではないので、本人は二人の願望を感じ取りながらも接触を控え、同窓会がてらのタルタロスでの共闘時も自分の力をろくに見せずにいた。
　ただし、湊と会っていないときにはストレガたちも新しい力や、自分の得意な戦い方の研究などを行っているので、手の内を隠しているのは湊だけではない。
「二人はいつかミナトと殺し合うつもりなんか？」
「機会があれば是非、とは考えています。エルゴ研での模擬戦闘は三対一と我々が有利な条件でしたが、決着は次に持ち越しということになりました。生きてきた中で最も生を実感できた時間でしたし。再び戦う事が出来るのなら、私もそのときは全力で挑みます」
「あの時、全力じゃなかったの？」
「これでもミナトの兄弟神を宿している身です。個人的な興味からあの時は湊を観察する方に回っていましたが、本気で戦えるのなら私も全力を出しますよ」
　模擬戦で全力を出すほど当時は好戦的という訳ではなかった。あの時の誘いを受けたのは、あくまで湊に関心を覚え始めていたからであり、湊に対しての興味を完全に自覚したのはあの戦いを経験したからである。
　それを不敵に笑って話すタカヤだが、話しを聞いていたジンとメノウは彼らのペルソナだけが兄弟神という訳ではないことを今では知っていた。
　ギリシア神話において、夜の女神ニュクスからは十柱以上の神が生まれており。湊のタナトス（死）、タカヤのヒュプノス（眠り）の他、ジンのモロス（死の定業）、カズキのモーモス（嘲り）も同じくニュクスの息子である。
　他にソフィアの持つアパテー（欺瞞）、メノウの持つデュスノミアの母親であるエリス（不和）、復讐を司るネメシスなどニュクスの娘も多数いる。
　そんな中でタナトスとヒュプノスだけが兄弟神としてよく挙げられるのは、彼らが揃ってタルタロスの地下の館で暮らし、己の司る役割を果たしていたからだろう。
　鉄の心臓と青銅の心を持つ非情な兄タナトス、それに対し、穏やか

で心優しい弟ヒュプノス。そんな兄弟神を身に宿す二人も、昔はともかく、現在ではその神たちの性格に表面的に近付いているようであった。
「それじゃあさ。タカヤとカズキってどっちが強いの？」
「おや、我々の力に興味が御有りですか？　そうですね。体術ならばカズキでしょうが、ペルソナ能力は私の方が上だと思います。私のヒュプノスは全属性を扱えますので」
カズキのモーモスは電撃属性と斬撃系物理スキルを有するペルソナだ。電撃無効と疾風弱点の耐性を持ち、敵のステータス低下や状態異常のスキルも覚えているバランスタイプ。
それに対してタカヤのヒュプノスは、物理スキルを覚えていない代わりに光と闇を除く全属性魔法スキルを有し。光反射に闇無効と弱点を一切持たない特徴を持っている。
ペルソナ使い本人の身体能力や戦闘技術を除けば、適性の高さと弱点を突けることからタカヤが勝利するだろう。
もっとも、体長約三十メートルの超巨大ペルソナ〝テュポーン〟を持っているスミレには、相手の頑丈さもあって流石のヒュプノスでも単機では勝つのは難しい。けれど、相手の弱点が電撃属性であるため、電撃属性で高い攻撃力を誇るモーモスならばヒュプノスよりは単機でも勝ち易い。
このように、他のメンバーも火炎や氷結など、それぞれに特化した能力を持っている事で、ストレガは相性による優劣はあれど誰が最強とはっきり言う事は出来なかった。
アナライズ能力を持つジンとメノウがそれに気付けない訳はないのだが、〝ペルソナ〟ではなく〝ペルソナ使い〟としての強さの話しをしたかったのだろうとして、タカヤは口元を歪めたまま立ち上がると出掛ける準備を始める。
「さて、私は少々出掛けてきます。出掛けるついでに湊の情報も仕入れてくるので、何か面白い事が分かったら伝えますね」
「あ、うん。よろしくね」
「ええ、では、行ってきます」

腰のベルトに抜き身の愛銃を差し込み、準備を終えたタカヤはジンとメノウに見送られアジトを出ていった。
影時間も既に終わった深夜に何の用事かは分からない。しかし、湊の情報を仕入れてくるというのは本当に違いないので、タカヤとカズキほど湊の無事を信じきることの出来ない二人は、かつての仲間の身を案じ、何か少しでも気の軽くなる情報をタカヤが持ち帰ってくれることに期待するのだった。
夜――マラキア
ヨーロッパのスロバキアとハンガリーに隣接する小国マラキア。
内部紛争などもあり、あまり治安が良いとは言えない国だが、今日はいつにも増して怒号や銃声が街中に響き渡っていた。
「そっちに行ったぞ！」
「屋根の上に跳んだっ、グレネードで吹き飛ばせ！」
銃火器を手に街中を数十人の男たちが駆けまわる。彼らの風貌から判断するに国籍等はバラバラで、単に目的のためにチームを組んでいるだけなのだろう。
そんな男たちが追っている黒い外套で表情を隠した一人の少年は、銃で撃たれようが、手榴弾を投げられようが、一切反撃せずに街中を逃げまわっていた。
土を固めて作られた家の屋根に向かって手榴弾が投げられる。ここで爆発すれば天井が崩落し、家人は生き埋めになってしまうだろう。
爆発まであと数秒……というそんなとき、既に駆け抜けていたはずの少年が濁った金色の瞳で一瞬にして戻ってきたかと思えば、転がっていた手榴弾を思い切り蹴りつけ空中へ飛ばしていた。
下にいた男たちは、突然移動した少年を見上げる形で視線を奪われていたため、少年が蹴った手榴弾の爆発をまともに見てしまい、一時的に視力を奪われながら何とか敵を追いかけようと涙目で姿を探す。
「くそぉ、どこに行きやがった⁉」
「遠くには逃げてない。すぐ近くにいるはずだ。探しだせ！」
完全に見失ってしまったが屋根の上を走りまわっていた事を考え

れば、車などを使ったような移動速度を出せるはずもないので、数十人で目を凝らせば見逃す事はまずない。
即席チームの中でも中心的な立場にいるらしい男が、各人の探索範囲を割り振りながら指示を飛ばせば、仕事屋たちは湊を逃がさぬよう町中に散ってゆく。
そんな様子を陰から窺っていた湊は、敵の位置を把握しながら、下からは見えず自分からは屋根に上がってくる者がいればすぐに分かる位置に腰を下ろし、休憩を取りながら現状をどう脱するかを思案していた。
《時流操作を使えば一瞬だぞ？　まぁ、お前からすれば普通に移動する以上に疲れるだろうが》
「……それは分かってる。ただ、ここで力を無駄に使いたくない」
周囲からは見えない霊体に近い半顕現状態で出てきた茨木童子が、別の時流に乗って離脱してしまえばいいと手っ取り早い解決法を提案してくるも、湊は誰かを殺す訳でも助ける訳でもない状態で力を消費することを嫌がり拒否した。
提案を拒否された相手は残念そうにしたかと思えば、子どもの我儘に困ったようなどこか慈愛の混じった笑みで少年を見つめている。
しかし、召喚者の少年は相手がそんな落ち付いた様子を見せていても、ここ数日いく先々で追われ続けているせいで、流石に疲労の色をその顔に浮かばせていた。
もっとも、裏界最大組織を相手にすると決めたときから、こんな事態が訪れる事は覚悟していたため、本人にしてみれば現状に何かの不満を零す事はない。
《ここを離れて森で休めば少しでも違うんだろうに、お前は本当に自分を蔑ろにするのだな》
記憶と力を継承してからというもの全く休もうとしない子どもへ、茨木童子は母親としての顔で心配しながら嘆息する。
『仮面舞踏会』と『久遠の安寧』という、規模から何から全く異なる二つの組織が、ただお互いに邪魔だからと相手を排除しようとしているのが今回の戦争だ。

相手はたった一人の少年を殺せば終わる簡単な仕事だが、湊はただトップを殺すだけでは組織の力を奪う事が出来ないため、各方面とのパイプ役を狙って排除しながら機能を徐々に奪っている。
数や情報に軍事力と言った完成した組織としての力を持つ敵に、突出した個の力で対抗する湊にとって、最大のアドバンテージはたった一人の少年という小さ過ぎる目標の動きを相手が完全に把握しきれていないことだ。
ある国に現れたかと思えば、数時間後には全く別の遠く離れた地に現れ犯行に及ぶ。その報を受けたかと思えば、既にその地から完全に去っているため追跡することも出来ない。
こんな相手にイタチごっこを続けていれば、すぐに味方を狩り尽くされてしまうため、久遠の安寧は追う事よりも主要な人物や施設に護衛をつけていた。
《相手もお前の脅威を明確に理解し、歩兵だけでなく戦車やミサイルポッドなど対人戦とは思えぬ兵器の投入を始めているぞ。如何に鬼とて、疲弊した状態ではまともに戦えんだろう》
「……こっちも同じ兵器を名乗っているんだがな。むしろ、相手が戦術兵器なのに対して、こちらは戦略兵器だ。勝てない筈がない」
《ふん、生身の癖によく言えたものだな。お前の身体をいじった男はペルソナを戦力として見なし、それによって戦略兵器と呼称したに過ぎん。今はお前も兵器を使って力を補っているが、このままいけば死ぬぞ？》
〝人型特別戦力兵装二式〟とは言うが、湊の身体は黄昏の羽根以外は全て生身の身体だ。
飛騨が行った改造は電気刺激と投薬がメインであり、骨を金属製に変えるなどといった事は行われていない。
手足や腹部を開いたこともあるが、それも患部に直接処置を施すためであり、何かを移植したりはしていないのだ。
唯一の例外である黄昏の羽根にしても、湊のペルソナ能力の底上げと影時間に機械を動かす力を持たせるために移植しただけで、肉体の強度や筋力を高めてくれる効果など欠片も持っていない。

副産物として手に入れた影時間の展開と時流操作を使えば、疑似的に強度と速度を高める事も可能ではある。
だが、それには膨大なエネルギーが必要であり。連日の移動と戦闘によって疲弊している湊は、さらに疲労を溜める事になる能力の使用を躊躇っていた。
大切な者を殺した相手への復讐と、この戦いの先にある望みを目指すことで、湊は周りが見えなくなっている。
そう感じた茨木童子は、このままでは彼女にとっても良い結果には繋がらないとして、相手の視野が狭くなっている事は指摘せずに親の顔で少々助言をすることにした。
《八雲、欧州は相手の陣地だ。お前が暴れれば暴れるだけ網を巡らせ、その糸にお前が触れた途端に持ち得る戦力を大量に投入してくるだろう》
「……そうされないよう、俺は相手の力を削いでいっている」
《間に合うものか。お前が百の頭で考えられたところで、相手は凡夫にせよ千を超える頭が揃っている。分割して策を弄し、一つでも当たれば儲けものだと思って相手も動いているはずだ》
如何に湊が優秀であったとしても、相手は幹部だけで三ケタを超えており、構成員を含めれば数万では済まないのだから、思考の数で勝てる訳もなく先手を打たれることは避けられない。
それでも湊は構わず敵と定めた者を排除しにゆくのだから、傍目から心配している茨木童子にすれば、愛しい我が子が罠に跳び込んでいく愚か者に見えてしまうのも無理はなかった。
とはいえ、ただ莫迦者と諌めたところで言う事を聞く相手ではないので、感情の読み取れない瞳を向けてくる少年に、茨木童子は先手を打たれているなら別の方法を取るべきだと進言する。
《だからこそ、ここらで此方も策を変えるのだ。敵は次にどこにくるかと焦りながら待ち構えている事だろう。そこで、お前が〝どこにも向かわない〟という選択をすれば敵はどうなると思う？》
「混乱するだろうな。何かアクシデントがあったのか、それとも攻められないから逃げたのか。色々と可能性を考えてみるも、結局答えは

分からない」
《ああ、そうだ。この策によって敵は疑心暗鬼に取り憑かれ自滅する。別に正面から挑んで叩き潰そうなどと青いことは考えていないのだろう？　ならば、お前が本来得意とする心理戦を愉しんでみろ》
「……読心能力者が心理戦を愉しめる訳ないだろ」
心が読めてしまうというのに、読み合い騙し合いに興じる心理戦を愉しむも何もあったものではない。呆れた様子で返した湊だったが、茨木童子の提案が策として悪くない事は理解していた。
ここ最近屠ってきた組織の者たちは、誰が狙われるのか、いつやってくるのか、そういった事を湊が実際に来るまで考え恐怖に怯えていたようだった。
恐怖は思考を鈍らせ、正常な判断力を奪い、組織内に不和を発生させ易くなる。
また、反応が一時的に消えたからといってすぐに護衛を引き上げることは出来ないため、相手が大規模に布陣を展開していればしているほど、維持費と兵たちの体力や精神力の消耗が期待できた。
湊は敵を自分で殺す事には拘っているが、茨木童子が言った通り、別に正面から正々堂々挑むようなスポーツマンシップに則った戦いなど初めからするつもりはないので、相手が勝手に自滅して弱体化するのなら、彼女の案に乗るのも良いだろうと考える。
そうして、周囲の者たちの位置を把握しながら考えること数秒、湊はようやく方針を変えることにしたらしく、遠くの高台から飛んできた弾丸を素手で掴み取りながら立ち上がった。
狙撃手の男は完全に気付かれず殺れたと思って引き金を引いたらしく、立ち上がった湊が狙撃手のいる方向へ鋭い視線を向けるなり、転倒しながらも慌てて逃げ出す後ろ姿が見られた。
高台に居た狙撃手に気付かれていたなら他の者にも居場所は伝わっているはず。周囲の者の心の声を聞いてみれば、案の定、なるべく音を立てずに包囲するよう話し合っているようだ。
「一時的に中東へ向かう。今度はテロリストを掃討する」
移動を決めた湊は向かう方角の確認作業と並行して、ペルソナ展開

の準備もしながら口を開く。
半顕現状態の茨木童子は、湊が移動すれば離れようとしない限り自然と付いてゆく事が出来るため、相手の言葉に残念そうに嘆息しつつ宙へ浮き上がりながら言葉を返す。
《ふむ、本来ならばしばしの休息をとって貰いたかったが、地域清掃の慈善活動に従事するとは、中々の好青年ぶりだな》
「別に住み良い街づくりに貢献するつもりはない。ただ、何もせずに身体を休めるほど、こっちも時間が残っているとは思っていないから、動けるうちに仕事を済ませておくだけだ」
イリスを殺したのは久遠の安寧だが、イリスたち家族を不幸にしたのはテロリストである。
実際に犯行を行った者は自爆して既に死んでいる事は知っている。けれど、湊がテロリストを掃討するのは、誰もイリスと同じ不幸な目に遭わぬよう先に危険を排除しておくためであった。
《ふむ、時間か……八雲、後どれだけ残っている？》
「さてな。余計な事を話している時間はない。飛ぶぞ――――タナトスッ」
茨木童子の問いをはぐらかして答えず、湊はタナトスを背後に呼び出すと共に空へ飛びあがる。
その際、蒼眼は濁った金眼へ変化していることから、召喚の直前で既に異なる時流に乗っていたのだろう。
包囲していた仕事屋たちが一斉に屋根へ上がって銃を構えた時には、屋根の上には誰もおらず。標的を見失った者らは悔しそうにそれぞれの拠点へ帰っていった。
そして翌日より、ラナフをはじめとした中東の国々でテロリスト等ゲリラ組織のメンバーたちが次々と殺され、各組織のトップらの死体が、血で組織名の書かれた布と共に政府議会場の前に置かれていたことで大きなニュースとなり。イリスの過去を知る者たちは、すぐにそれが湊の仕業だと気付くのだった。

第九十四話　狼狩り

１０月２５日（水）
午後――ラナフ・ハンズィール平野
日本であれば、秋が深まり徐々に冬の訪れを感じる十月の末。
中東の小国であるラナフに秋など関係なく、強い日差しと熱せられた地面の熱気で、気温は日本の真夏よりも暑い四十度近くを記録していた。
そんなすぐにでも干物になりそうな場所にハンヴィーでやってきていたナタリアは、通信機を用意しながら連絡がくるのをジッと待っていた。
同じ車内にいるラースやレベッカも、緊張した面持ちで座っており、これが遊びではないことを表している。
そして、さらに待つこと三十分、用意していた通信機に仲間からの連絡が入った。
《こちらチームガンマ、バイクで移動している目標を捕捉。移動速度がかなり速いですね。推定一五〇キロ、難しいですが誘導弾を発射します》
「了解。すぐにヘリを飛ばすから、他のチームと共に目標を追い込め。ただし、絶対に近付くな。あの狼は容易く我々の喉元へ喰らいついて来るぞ」
《了解、ポイントＣへの誘導を開始します》
通信が切れた直後、遠方からミサイルの発射音や爆発音が響き、先ほど通信で言っていた誘導弾の正体がそれであることを知らせてくる。
座っていたレベッカが音を聞いて何かに耐えるように手を強く握り締めているが、部下のそんな様子に構わず、ナタリアは続けて別の部隊に指示を飛ばした。
「目標が現れた。ポイントＣへの誘導を開始している。〝グレイプニル〟搭載機及びアパッチは直ちに発進せよ。距離には十分注意しろ。目標は対物ライフルで確実に二キロヒットしてくる化け物だ。下手

をすれば接近と同時に墜とされるぞ」
相手の戦力を高く評価し、数で勝っていても自分たちの勝利はかなり際どいと睨み作戦を立てる。
なにせ相手はつい先日、一人で武装した四千人の兵を殺した実績があるのだ。ナタリアたちのように戦闘ヘリや大型ランチャーを配備していなかったにしろ。壁や天井を容易く切り崩す剣戟を持っている者に、兵器の装甲がどれだけの意味を持つかが分からない。
ならば、いっそのこと近付けないように十分な距離を保ち、そこから相手を制圧するよう攻撃を加えた方が鹵獲しやすい状況に持ちこめると踏んでいた。
「……ラース、車を出して。私たちもポイントCに向かうわ」
「了解。しかし、ミサイルと地雷で誘導なんて下手をしたら姫は死にますぜ？」
車のエンジンを始動し、ラースは他の隊員たちが無事に湊を指定ポイントに誘導していることを祈りながら、静かに車を発進させてナタリアに話しかける。
本日の作戦は、ここラナフをはじめとした中東地域で過激派ゲリラ組織を、ほぼ連日壊滅させ続けている湊の捕獲が目的だ。
毎日のように色んな場所のアジトに現れているため、再びラナフに来る事は可能性として高いと言われていた。
しかしまさか、本当にこのルートを通るとは思っていなかったラースやレベッカは、ナタリアの鋭い読みに感心しつつ、対人には随分と物騒な兵器類の使用について少々の疑問を感じている。
その事についてラースが運転しながら尋ねれば、険しい表情をしている相手は淡々と答えた。
「それで死なないからわざわざグレイプニルを用意させたのよ」
「ゾウ捕獲用のスパイク付き合金鎖網なんて、下敷きになった途端に潰れて死んじまいますよ」
「ボウヤの耐久力を舐めちゃ駄目よ。あの子、素手で石造りの床を打ち抜いたり出来るんだから」
「……そりゃ、イリス情報ですかい？」

「ええ。だから、相手を人間だと思っていたら負けるわ。一個旅団を相手に勝てるんですもの。本気で殺すつもりくらいじゃないと捕まえるなんて不可能よ」
非常識に常識で挑んでも負ける。故に、ナタリアは割に合わない出費と理解しながらも、湊を捕獲するためだけに日本円にして一千万以上もする合金製の網〝グレイプニル〟を取り寄せたのだ。
グレイプニルは本来上空からヘリで落とし、落下で加速した勢いを利用して縁についたスパイクを地面に打ち込み、大人のアフリカゾウをほとんど怪我もなく捕獲するための物である。
地面にスパイクが打ち込まれたグレイプニルから逃れるには、一つ辺り六千キロを持ち上げるだけの力がいる。
本体の重量が四千キロを超えるので回収などは面倒だが、麻酔弾を撃ち込んで効くまで追う手間が省けるとあって、密漁者の中にはグレイプニルで拘束してから麻酔弾を使用する者もいた。
これを取り寄せると決めたナタリアは、それに倣って湊の拘束に成功したときには、ゾウに使うような強力な麻酔を使って湊を無力化しようと考えている。
湊が中性であるとイリスから聞いた同日、怪我の治療法について詳しく訊いた際、幼少期の人体実験によって毒や薬品に対する異常な耐性を持っている事を知らされたが故の処置だ。
作戦は参加する隊員ら全員に伝えたが、使用する薬品等は私兵にしか伝えていない。
それを伝えたときには、戦場医であるバーバラから当然の如く反対意見が出たものの、イリスから聞いた人体実験のこと、完全に破壊した心臓を再生させるほどの回復力を持ってすれば一時間も掛からず回復すると話せば、相手も同じように考えたようで黙ってしまった。
「レベッカ、貴女もそろそろ現実を見なさい。もう事態は動いているの。ただ失敗に終われば良いけど、下手をすれば私たちを〝敵〟と認識したボウヤに全員殺されるかもしれないのよ」
「……分かってます。でも、あいつが私たちを殺すなんてあり得ません」

「殺されないだけかもしれないわ。二度と戦場に出られなくなる可能性だってあるもの」
今の湊の詳しい状態が分からない以上、相手は狂気に取り憑かれた復讐者として考えるべきだろう。
感情の針が振り切れてしまった者は、見る者に生理的な不快感を覚えさせ、脳が認識を拒否しようとして逆に壊れてしまう可能性もある。
ただでさえ面倒な状態の相手は、一個旅団を単騎で殺し尽くす鬼だ。捕えるにしても一筋縄ではいかないはず。
ナタリアは普段以上に気を引き締めると、指定のポイントを目指しながら隊員たちへ細かい指示を飛ばし続けた。
＊＊＊
過激派ゲリラ組織を潰してきた湊は、別の組織を潰しに行くべくバイクで移動していた。
ペルソナで空を飛んだ方が速いのは分かっているが、長期戦が想定されることで力を温存しているため、時間は倍以上掛かってしまうが、湊は以前カニスで買ったバイクに乗っての移動を選らんでいる。
そうして、今も一五〇キロを超える速度で荒れた路面を進んでいた訳だが、少し離れた位置から見られていることを感知し、湊は相手が動き出す前に道路を外れて荒野を進むルートに変更した。
（……こんな場所でミサイルだと？）
進路変更した直後、先ほどまで進んでいた道路の傍にミサイルが着弾していた。
あのまま進んでいても直撃はしなかっただろうが、爆風に煽れれば下手をすれば転倒していたかもしれない。
どこの組織の人間か不明だが、随分と過激な事だと内心で思っていると、自分の進む先を索敵していた湊はさらに驚愕することになる。
（こんな誰が通るかも分からない平野に地雷をっ）
ミサイルの来る方角から離れた方へ進路を取ったが、その先にはいくつも地雷が仕込まれていた。
上を通過したところで確実に爆発する訳ではないものの、真っ当な

相手ではないと判断して、湊はエールクロイツによる遠隔操作で全ての地雷を爆破してゆく。
湊が到達する前に爆発した事で、先ほどから小さく聞こえていた心の声たちにはっきりとした驚愕の色が混じった。
相手は複数、装備はかなりの物を用意しているようで、自分をどこかのポイントへ誘導したいらしい。
そこまで読み込んだところで、どこかで見たようなエンブレムの描かれたヘリが数機やってきた。
たった一人を相手にアパッチを二機も用意してくれているとは、ナタリアも随分と派手な歓迎だと内心で嘆息する。
相手が何の目的で自分を狙っているのかはまだ不明だが、ナタリアたちの策に敢えて乗るために、ヘリの機関銃が火を噴く直前でさらに加速して進路を指定ポイントへ向ける。
突然の加速にヘリのパイロットは反応が遅れたようだが、誘導係はしっかりと対応してくるようで、さらにミサイルが何発も落とされてゆく。
(目的は何だ。相手は直撃だけは避けてきている。なら、俺を指定ポイントに誘導しても殺す気はないんだろう)
ミサイルと戦闘ヘリの機関銃に追われながらも、湊はナタリアたちの目的を探ろうと意識を広げてゆく。
広範囲の者の声を聞くときは、相手の深いところまでは読めなくなる。
しかし、一人でもこの作戦の目的を知っているのなら、その目的によっては相手と接触する必要はないとして、湊はただちにこの場を離れるつもりだった。
けれど、ここは相手のよく知る土地だ。兵器類と相手の目的を読むことに集中していた湊は、指定ポイントの直前にある天然の落とし穴への反応が遅れた。
(ぐっ……このルートへの誘導はこれを狙っていたのかっ!?)
地下水が抜け出て地中に空洞が出来てしまっていたのだろう。バイクの重量に耐えきれず崩落する地面に前輪が落ちかけるのを、強引

に引き上げて飛びながら回避した湊は、相手が先に用意していたと思われる激しい凹凸の出来た地面に着地し、バランスを維持する事が出来ずに転倒してしまった。
騎手を失って勢いのまま遠くへ滑ってゆくバイク、投げ出され凹凸の出来た固い地面の上を転がる湊。
隊員らの目的が指定ポイントへの誘導だったことで、そこに何かの仕掛けがあるのだろうと勝手に思ったが故の初歩的なミスだ。
以前の湊であれば、相手の心など読まずに地形の把握を最優先に行い、安全圏に移動してから相手の対処をしただろう。
戦闘力は上がっているが、ここ最近は能力に頼った戦いを続けていたせいで、どうにも以前の慎重さや危機感が薄れていたらしい。
身体の痛みと共にそれらを反省していた湊が止まった頃、頭上に先ほどのアパッチとは異なる大型ヘリがやってくると同時に、黒い金属製と思われる大きな網を投下していった。
「がぁぁぁぁっ」
縁についた槍の穂先型のスパイクが、網本体の重量と落下の加速によって深々と地面に突き刺さる。
その際、本体の網は湊の身体を押し潰す様に上からのしかかってきた。あまりの衝撃と痛みに思わず声をあげるが、同じ型のヘリがさらに二機やってきたかと思えば、続けて網を投下していったため、湊は合計三つの超重量の鉄網に捕えられてしまった。
丈夫な百鬼の身体を持つ湊と言えど、上からの圧力で流石に臓器がいくつか潰れたらしく、口から血を吐きながら抜け出そうともがく。
けれど、積み重なった鉄網はびくともせず、腕もろくに動かせないせいで死の線も切れないことで、湊は遅れてやってきた元凶の女を目を動かす事でどうにか睨みつけた。
「……何のつもりだ」
「あら、まだ話す余裕があるのね。貴方、大型車を上に載せられているようなものなのよ？　呆れた丈夫さだわ」
鉄網から二十メートルほど離れた位置に立つナタリア。それとほぼ同じ距離で他の隊員らが武器を構えて湊を囲んでいる。

上空にはアパッチが待機し、さらに離れた位置には対物ライフルを構えるパトリックや、ミサイルをいつでも発射出来るようにしている隊員の姿も確認出来た。
「そんな事はどうでもいい。さっさとこれをどけろ」
しかし、まだ相手の思惑が理解できないため、憤りを感じて冷静さを失っているように見せながら、湊は相手側の情報を引き出そうとした。
少年のそんな様子を見つつ、薄い笑みを浮かべて煙草を吸っていたナタリアは、仕草で指示を飛ばして他の隊員らに何かを撃たせた。
飛んできた大きな弾は、鉄網にぶつかるなり煙を噴出し始める。僅かに吸い込んだ時点で、それが麻酔ガスだと理解し、相手は自分を捕えるつもりだと湊も気付く。
ガスが出ていたのは十数秒ほどだが、風向きをしっかりと計算していたらしく、マスクも付けずに立っていたナタリアは、煙が晴れると静かに口を開いた。
「まだ意識があるのね。鬼がどれだけの物かと思っていたけど、念入りに準備して正解だったみたい。まぁ、それはともかく、その合金鎖網は薬が効くまでそのままにさせて貰うわよ。じゃないとまともに話しも出来なさそうだし」
ゾウをも眠らせる麻酔を吸っても瞼がほとんど落ちていない湊を見て、ナタリアは呆れたように笑っている。
他の隊員たちはただ驚いて警戒しているようだが、周囲の隊員たちの様子に構わず、ナタリアは言葉を続けた。
「随分と暴れてくれたわね。初期の懸賞額が一千万ドルなんて前代未聞よ。久遠の安寧に喧嘩を売るなんて、そんなにママを殺されて悔しかったのかしら？」
「……何を言っている」
湊は知り合いに自分がイリスを殺したと告げていた。だからこそ、どうして彼女が死ぬように仕向けた犯人が久遠の安寧だと知っているのか理解出来ない。
もっとも、本人からメールで事情を聞いていない人間だったとして

も、イリスと湊の関係を知っている者なら、イリスの死と重なるタイミングで突然湊が久遠の安寧に対し宣戦布告したことにより、彼女の死に久遠の安寧が何かしら絡んでいることは容易に想像できた。
　自分が周囲の親しい人間にどう思われているか知らない少年は、そんな単純な事にも気付かないまま、相手が何を知っているのかを疑い能力で探っている。
「イリスの復讐なんてやめなさい。ろくな結果にならないわよ」
「……違う。イリスを殺したのは俺だ」
　表情が以前よりも分かり辛くなっているように思ったが、蒼い瞳を僅かに伏せて静かだが苦々しげに呟いたことで、ナタリアは相手がまだまともに感情を動かすことの出来る状態にある事を理解する。
　どうして自分が彼女を殺したと言い張るのかは不明だが、ただ復讐に囚われて暴走している訳ではないのは実に僥倖だった。
「あらあら、随分と面白くない冗談ね。こっちはあの研究所で意図的なケミカルハザードとバイオハザードが発生した事を知っているの。そして、イリスはそれに巻き込まれた。仮に貴方が火を放った張本人だったとしても、死ぬように仕向けたのは久遠の安寧の人間だわ」
　まともに話せるのなら下手に会話を長引かせる必要はなくなる。
　しっかりと諭し、イリスの遺志を伝えてやれば、最初は渋るかもしれないが、本来優しい少年はイリスの遺志を尊重して従ってくれるはずだ。
　そう信じて、グレイプニルに囚われながらも強い光を瞳に宿す少年に視線を向け、ナタリアは自分がイリス本人から伝え聞いた事を話す。
「火を放ったのはイリスの命令でしょう。近くの町に被害が及ばないように、貴方にそうしてくれるよう頼んだって最期のメールに書いてあったわ」
「……例え、どんな理由があろうと、イリスの逃げ道を奪い、研究所にいた無関係の者たちを焼き殺したのは俺だ。その事実は変わらない」
「じゃあ、司祭たちの確認した遺体の頭蓋骨にどうして弾痕があったのか説明して頂戴。彼女は私の大切な友人だった。そして、そんな彼

女の死に偽りの理由を述べるのなら、例えイリスの息子だろうと私は絶対に許さない」
少年の言葉を聞いて理解する。自分がイリスを殺したと言い張るのは、彼が相手の死に責任を感じているからだと。
けれど、会った事もない他者を守るために火を放つよう指示し、さらに湊が自分を殺したと罪に苛まれぬよう自害を決断した彼女の尊い想いを、如何なる理由に置いても偽ることは許されない。
偽りを述べることで彼女の決断をなかった事にするのなら、相応の覚悟を持ってそれを口にしてみろ。
そう告げるように強く鋭い視線を少年へ向けたナタリアは、相手が何も言って来ない事でようやく認めたかと安堵し内心でホッと息を吐きながら、純粋に相手を気遣う物に態度を変えて本題をぶつけた。
「ボウヤ、私たちはイリスの最期の願いを叶えに来たの。イリスが送ってきたメールに、貴方を無事に日本へ帰してやって欲しいと書いてあった。だから我々は、無理矢理にでも貴方を日本へ送り帰すわ。馬鹿な復讐を止めて一緒に来なさい」
麻痺した身体で必死に打ったに違いない誤字や脱字だらけの彼女の遺書。自分が狙われていたことや、本当の狙いが湊であるという報告を除けば、その内容は湊の身を案じるものばかりであった。
湊が久遠の安寧を相手に動きまわったことによって、メールが届いたときよりも状況は格段に悪くなってしまっているが、それでもまだ最悪の状況にはなっていない。
素性を隠し、仮面舞踏会の小狼として仕事をしてきたことで、活動拠点が日本であることはばれているだろうが、日本という平和な土地でなら敵も表立って襲ってくることはない。
拳銃の所持が認められている国ですら騒ぎになり易いのだ。所持の認められていない日本では、襲撃にその何倍も注意を払う必要があるため、非武装での戦闘力を考えれば湊なら十分に対処できるはずだった。
だからこそ、どうか言う事を聞いてくれ。そう祈りながら言葉を掛けるも、ナタリアが馬鹿な復讐という言葉を吐いた途端、全身の皮膚

がひり付くような強烈な敵意を放ち湊が睨み叫んできた。
「子どもを殺された復讐に組織を作ったお前がそれを言うのか。奪われた腹いせに未だ意味のない殺人を続けている人間が、高いところから見下して偉そうに言うなっ」
「……っ」
叫び立ち上がろうとしたのか、湊が動くとガシャンと音を立てて僅かに持ち上がる合金鎖網。
まさか僅かでも持ち上げられると思っていなかった者たちは、一斉に銃を構えて自分たちのボスの指示を待つ。
しかし、網が持ち上がりかけたことよりも、自分が組織を作った理由を言い当てられたナタリアは、どこで自分の事を知ったのか不思議に思いながら、ずっと蓋をしていた記憶による苦い物を胸中に感じてそれを表情に出さないよう努めて静かに言葉を返した。
「どこで私のことを知ったのか分からないけど、復讐の先輩だからこそ言っているのよ。日本という戦闘行為の難しい土地なら、静かに表の世界で生きている限り、貴方を隠しておけるかもしれない。隊員を使って海外に偽の目撃情報を作ったりもするし。お願いだから言う事を聞いて」
「……どうでもいい。俺は自分の意思で殺すんだ。敵を、邪魔する者を、この手でっ」
「こんな事を続けてもイリスは帰って来ない！　彼女はお前の無事を願い、平和に生きる事を望んでいた。何故、それが分からない！」
冷静に見えたのは表面上だけだった。輝く蒼眼の奥に黒く濁った憎しみの炎を見てしまい、かつての復讐ばかり考えていた自分を見ているようで余計に苛つき、ナタリアはつい語気を荒げてしまう。
けれど、言っている事は本心だ。どれだけ復讐しても何も戻りはしない。終わった後はただ虚しさだけが残り、もっと別の道もあったのではと考えてしまう。
長い間、八つ当たりの復讐に生きてきたことで自分は既に生き方を変えられなくなっている。だが、湊はまだ引き返して、イリスの望んだ生き方を選ぶ事が出来るのだ。

「……どうして邪魔をするんだ。アンタも俺の敵なのか」
だが、イリスの遺志もナタリアのその想いも、今の湊には届かなかった。
蒼い瞳で敵と定めた者をみつめた湊が、隊員らの目の前で全身に力を込めて立ち上がろうとする。
一つでもゾウを捕えられる合金製の網を三つも使ったのだ。強力な麻酔ガスを吸った人間でなくとも持ち上げられる訳がない。
しかし、湊は口から血の泡を吐き、外套の袖の中から血を滴らせながらも、諦めずに身体を起こそうとし続けている。
その瞳が何を映しているのかが分からず、出血してもまだ諦めずに不可能なことに挑む姿は常軌を逸しているようにしか見えない。
「小狼、ダメっ。無理だからっ」
見ていられなくなったレベッカが思わず制止の声を掛ける。
彼女にとって出血する湊の姿はトラウマの一つだ。自分たちのせいで怪我を負ったとはいえ、この行動は全て湊とイリスのためを思ってである。
故に、グレイプニルを外そうとは思わないが、せめて、湊がこれ以上怪我をせずに大人しくしていて欲しいと願った。
「無関係な者がイリスのような不幸な目に遭わないように、チドリとアイギスが平和に暮らせるように、俺はそのために戦うんだ。この願いを阻む者がいるのなら名切りとして絶つ。その間に降り掛かる火の粉は全て振り払う。お前たちも邪魔をするというのならっ」
少女の願いも虚しく、瞳孔の開いた少年を中心に突如黒い炎が地面を走った。
「一体何なの？　全員下がれ、警戒態勢は崩すな！」
事態が飲み込めないナタリアは隊員らを下げて距離をとって様子を見る。
湊から拡がる黒い炎は少年を中心に静かに渦を巻く様に揺らめいている。揺らめく炎は徐々に高さを増して湊の姿を隠してしまった。これでは相手の状態から判断して対処する事が出来ないが、渦状になった炎の中から少年の声が響く。

「ミックスレイド――――百鬼夜行・無間地獄」
炎の中にいた湊が〝太陽(茨木童子)〟と〝魔術師(出雲阿国)〟のカードを同時に砕いた途端、炎は実体を持った巨大な影の腕骨へ変化する。
地面から突き上がる様に現れた腕骨によってグレイプニルは千切れながら吹き飛び、遠く離れた場所での落下音を聞きながら、少年はゆっくりと立ち上がった。
あまりに現実離れした信じられない光景に周囲の者が動けずにいると、感情の消え去った顔を敵将に向け、湊は両腕を広げ未だに燃え続けている黒い炎に命令した。
「――――喰らい尽くせ、亡者共っ!!」
鬼を統べる当主の命を受けた炎は、黒い影で出来た身体を持った獣や人型へと変化してゆく。
身体と同じように影で出来た剣や槍を持つ者や、古代生物のアンドリューサルクスを思わせるような身体に対して巨大な頭部という歪な姿の四足の獣など、何十体も現れたそれらは形を成すなり隊員たちへ襲いかかった。
「ぐっ、総員、応戦しながら後退せよ！　チームガンマは目標へミサイル発射、上空ヘリ部隊も攻撃を開始しろ！」
反応が遅れ獣に食われ飲み込まれる者、斬り掛かられ咄嗟に転がり避ける者など、隊員らが襲われる姿を見てナタリアは反応が遅れたと顔を苦々しげに歪ませ指示を飛ばす。
自身も湊に向けてサブマシンガンを掃射するが、弾丸は湊を守る様に地面から生えた巨大な腕骨によって全て防がれてしまった。
しかし、相手が攻撃を防いでいる間は移動していないことで、すぐに無事な者たちを引かせると、離れた場所から湊の立っているポイントへ向けてミサイルが飛んでくる。
先ほどと違い直撃狙いのようだが、交渉が決裂して味方が襲われれば殺すつもりで来ていたようなので、湊は自分を守っていた腕骨を消すと背中から何本もの腕骨で形成された異形の翼を広げ、天に右腕をかざしたまま飛び上がるなり、飛来するミサイルに向けて天にかざしていた腕を勢いよく振り下ろした。

「大威徳明王ッ!!」
湊の腕に連動するよう天から現れたのは、三十メートルを超すのではないかと思われる剣や矛を持つ巨大な六本の腕。
手をかざしていた場所に拡がった像の歪んだ灰色の空から現れた腕は、次々とミサイルを叩き落とし破壊すると、続けて飛んでいる湊にガトリングの銃口を向けていたアパッチに狙いを定め、持っていた矛を投げつける。
先ほどのミサイルを凌駕する速度で迫る巨大な物体を避けられる訳もなく、投げられた矛にそのまま貫か
「影骨っ!!」
れるかに見えたとき、地面に広がったままの黒い炎から腕骨が飛び出し。飛んでいたアパッチを掴むとそれを地面付近まで下ろし、荒く地面に放り投げて転がした。
掴んだ時点でプロペラが圧し折れローターは止まっていたので、放り投げて地面を転がしたところで爆発等の恐れはないが、操縦士たちは揺さぶられ当分使い物にならないだろう。
天から現れた腕は攻撃を外すとすぐに消えてゆき、それを見届けた湊は、今も暴れている影の亡者たちに部隊を壊滅させられ座りこんでいたナタリアの前に降り立つ。
「……どれだけの戦力を集め策を練ろうと、人間が鬼に敵う訳ないだろう」
一切の感情が消えた冷たい瞳で告げる少年は、もはや自分たちの知っている存在ではない。
それをようやく理解したナタリアは、俯き地面に視線を落したまま、見下ろしている少年に懇願する。
「分かった。もう、邪魔はしない。だから、これ以上は、やめてくれ……」
地面に倒れ伏す隊員たち、暴れる巨大な影の獣に食われた者がどうなったかなど想像したくもない。
けれど、これ以上の犠牲を出したくなかったナタリアは、少年に欠片ほどの情けが残っている事を祈り頼んだ。

「……」
彼女の頼みを聞いた湊は無言でミックスレイドを解除し、望み通り影骨と亡者を全て消してみせた。
相手に優しさが残っていたのか、それとも単なる気まぐれなのかは分からない。だが、願いを聞いて貰えて良かったと安堵するナタリアが顔をあげた時、影の獣がいた場所に自分の部下たちが生きたまま倒れているのを見て思わず目を見開いた。
「そんなっ」
よく見てみると、人型に襲われていた者たちも怪我は負っているが全員が生きている。
骨折や出血がある者もいるが、それらは命に関わるものではなく、自分で起き上がれていることから後遺症が残る可能性も低いように見えた。
何より、自分自身と傍にいたレベッカなどは一切の危害すら加えられていない。
圧倒的な戦力差のあった状態で、兵の負傷率が非常に低いことに加えてこの状況だ。相手が意図的に殺す事を避けていたとしか思えなかった。
「貴方まさか、一人も殺す気がなかったというの？」
「……元々、話し合いが目的だったんだろう。敵として阻むのなら排除する事もあるが、ただ俺を止めるつもりなら殺す気はない。それに、イリスの死を悼んでくれた人たちを殺めたくなかった」
その言葉を聞いたとき、ナタリアの傍にいたレベッカが駆け出し湊に抱きついた。
変わってしまった。自分たちの手の届かない場所へと堕ちていった。そう思っていたのに、湊の中には自分たちの知っている〝小狼〟の姿が確かに在ったのだ。
抱き締められた湊はペルソナの姿をしたカグヤを呼び出し、相手が適性持ちですらないため効果の薄い回復スキルを気休めと思って掛けてやっているが、応急処置以上の効果はあったようで、隊員たちはお互いの無事を確認しあっている。

そうして、戦闘が終わり戦った相手に仲間の治療まで受けた組織のボスは、色々と相手に言いたい事はあったが、自分たちが乗ってきた車まで移動し、そこに積まれていた大きなアタッシュケースを持って湊の元に戻ってきた。
「……これ、イリスからの預かりものよ。ボウヤの誕生日に間に合うよう造らせた、貴方のための世界に一組しかない二挺拳銃。十月だとは聞いていたけど、詳しい日付を聞いていなかったから遅れてしまったのなら御免なさい」
「いや、今日が丁度その日だ。届けてくれてありがとう」
ナタリアの手からイリスがガンスミスに造らせていた銃を受け取った湊。顔からは感情が消えていて何を思っているのかは読めないが、どこか悲しそうにしながら笑っているように感じ、ナタリアもレベッカも、少年が母からのプレゼントを喜んでいるように思えた。
抱き締められていた状態から解放され、受け取った荷物を外套に収納していた湊に、レベッカは純粋に身を案じて今後の事を尋ねる。
「あんた、まだ久遠の安寧と戦い続けるの？」
「……ああ。俺が殺されるか、俺が相手を滅ぼすか、もうその二択しか残ってないんだ」
「こんな事を続けて、それであんたは幸せになれるの？」
「……自分の幸せを考えたことはないな。でも、大切な人が無事に暮らせるのなら、それが一番嬉しい」
転倒した際に滑っていったバイクの元へ向かいながら、湊は自分の幸せは大切な少女たちが幸せである事だと話す。
それを聞いたレベッカらは複雑な表情を浮かべているが、車両の状態を確かめている湊は、さらに静かな口調で続けた。
「今のままじゃ駄目なんだ。変えないと、認めさせるだけの力を示さないと、人間じゃない彼女が平和に暮らす場所を作ることが出来ない」
その言葉には今まで以上の決意の重さが宿っていた。
〝人間じゃない彼女〟というのが誰を指しているのかは分からないが、無理をして戦い続けてでも守りたい相手なのだろう。

バイクのエンジンが損傷して駄目になっていたことで諦めた湊は、バイクを外套に仕舞うなり、遠くの彼方へ敵意の籠った視線を向けた、
「……だから、今も俺を見ているアイツらを俺は全員殺し尽くす。大口真神ッ」
〝剛毅〟のカードを握り潰して現れたのは、牛よりも一回り大きな巨大な白狼。
呼び出したペルソナに跨るなり、湊は彼女らに別れも告げず睨んだ方角へと去っていった。
信じられない加速で走る白狼に追い付くには、先ほど破壊された戦闘ヘリの全速力を出さなければならないだろう。
壊れたヘリにそんな事は出来ないため、追跡を諦めたナタリアは、隊員らに怪我の具合を尋ねながら隊列を組み直させると、本部に応援を求め、迎えにやってきたヘリと車を利用し、自分たちのホームへと帰ってゆくのだった。
――ラナフ・ナミル
その男、カナード・フォルスは焦っていた。
「やべぇ、やべぇ、やべぇ！　クソッ、五キロは離れてたってのにどうやって気付きやがったんだあのガキ！」
ソフィアからの命令を受けて湊を監視するつもりだったが、その不規則な移動と異常な速度によって早々に追跡を断念し、古巣である蠍の心臓と湊が接触する事に賭け、ここ一ヶ月ほどラナフのナミルの街を拠点に滞在していた。
蠍の心臓を監視していると、急に何やら大規模作戦でも行うのかという動きを見せたため、もしや、湊の捕獲にでも乗り出すのかとカナードも監視を強めてみれば、予想は見事当たり、連中がグレイプニルという対人にはまず使わない装備を利用して捕獲している現場を目撃した。
もっとも、監視は念には念を入れて五キロ以上離れた場所から、サーモや赤外線カメラに映りにくい特殊な布を被り、百万近くする超遠距離まで見通せる望遠鏡を駆使して行っていたのだが、遠く離れた

場所の湊と目が合うという信じられない事が起こった。
直前に黒い巨大な腕が地面から生えたり、天から出現した謎の存在がミサイルを迎撃するなど、確かに非現実的な物をカナード自身も目にしていたのだが、それだけに〝目が合う〟という現実的な体験と〝五キロ以上離れた人間に気付かれた〟という非現実的な事が合わさったことで、ただあり得ない物を見る以上に相手の異常さをカナードも理解出来てしまう。
「冗談じゃねえぞ。ありゃ、裏界の姫さんと同じ化け物の力じゃねぇかっ」
だからこそ、カナードは湊の力が自分の知るソフィアの能力と同質の物だと理解し、そんな力を持った者に追われている現状に焦りを覚えているのだ。
気付かれたと思った瞬間にバイクに乗り、いくらかフェイントを入れて拠点にしている空家へと戻ってきたが、扉を締めて部屋が静かになってもカナードはまるで安心出来ずにいる。
ソフィアが能力を使って人を殺す場面を初めてみたときは、こんな相手が裏界最大規模の組織を持っているとは何と恐ろしいのだ、と他の依頼人を相手するように裏切ってはならないと固く誓ったものだ。
それがまさか、日本でのみ活動していたにも関わらず、海の向こうにまで名が知られていた鬼の一族が末裔にも、同じ恐ろしい力を持った者がいるなど質の悪い冗談であって欲しかった。
「クソッ、姫さんに連絡しねぇとっ」
自分の命が危険に晒されている状況だが、ソフィアへの連絡を怠っても今度は組織の人間に消されることになる。
相手は気分屋なので連絡の遅れを許す事もあれば、一分でも遅れたら死刑だと言って組織の人間を差し向けてくることもある。
故に、このような状況でも連絡はしなければならないと、スリープ状態にしていたパソコンを起動させ、ソフィアへのテレビ電話用プライベートラインを繋ぐよう操作した。
応答に関しても気紛れな相手は、呼び出しのランプが点滅したとて、すぐに出るとは限らない。

置かれた状況が状況だけに早く出てくれと苛ついていると、カナードの背後で、閂をしていた扉が激しい音を立てて吹き飛んだ。
周囲からは空き家と思われている場所への来訪者など普通はいない。だからこそ、カナードは来訪者の正体に確信を持ちながら、努めて明るい表情を繕いながら振り返り、来訪者の少年へ話しかけた。
「よ、よう、大将。やっぱり、俺が見ていた事に気付いてたみたいだな。いやぁ、珍しい物があると思ってよ。つい盗み見なんてしちまったんだ。他言はしねぇからよ、どうか許してくれねえか？」
パソコンから離れ、咄嗟に逃げられるよう窓際に移動しつつ、傍のテーブルの上に置いてあったキャラメルで麦を固めたバー状のお菓子を手に取り、それを湊に放り投げてカナードはさらに言葉を続ける。
「大将は遠目に見るより随分若いな。お菓子は嫌いか？　町の方じゃ結構人気のもんなんだ。良かったら食ってくれよ」
「……バドゥル・ザイド・ハーディー、久遠の安寧に雇われている傭兵か」
「っ!?　テメェ、どこで俺の名をっ」
放り投げたお菓子を手に取り、それをそのまま外套にしまった湊が蒼眼を向けて口を開いた時、カナードは相手が自分の本名を口にしたことに驚愕する。
何十年も前にその名は捨て、過去の知り合いであろうと自分を見て名を思い出せるはずがないのだ。
それだけに、湊がどこで自分の素性を知ったのかが分からず、カナードはいざとなれば銃を抜けるよう用心しながら会話を続けるため問い返した。
「俺のことを調べたのか？　いくら払った？」
「……お前のことは今日初めて知った。そして、もう二度と思い出すことはない」
言いながら湊が構えたのはデザートイーグルよりもさらに一回り大きな二挺の銃。
輝く白銀のフレームに青い縁取りの威力強化銃〝ファルファッラ

〝、漆黒のフレームにゴールドの縁取りがされた装弾数・連射力強化銃〝カラブローネ〟。
イリスの死を招く一因を担った者を、イリスから贈られた対極の見た目と性能を誇る銃で葬る。
これで死んだ彼女が喜ぶとは欠片も思わないが、銃を向けられ焦った様子の相手を冷たい瞳で見つめ、湊は引き金に指を掛けた。
「ま、待て待てっ。見逃してくれれば俺が持ってる情報は何でもやる。ほら、何が知りたい？　組織のトップの名前か？　それとも重要拠点の場所か？」
全身に嫌な汗をかきながら、それでも愛想笑いを浮かべて交渉を続けるカナード。
銃を構える湊に隙がなく、銃を抜こうと手を下ろしかけた瞬間に撃ち抜かれる未来しか見えないため、見逃して貰えそうな情報を提示することで相手の注意を引くのが先ほどの条件を出した一番の目的だ。
これで食い付いてくれれば裏切りとして粛清されない程度に情報を教え、相手が満足したところでこの場を即座に離脱し、ソフィアに湊が同じ異能を持っている事を伝える。
かなりギリギリの綱渡りになるだろうが、表にほとんど出て来ない巨大組織の内部情報は、その組織を狙っている者にとって喉から手が出るほど欲しい物だろう。
どうか食い付いてこいと願いながらカナードが湊の言葉を待っていると、湊は一分以上経ってからようやく口を開いた。
「……本部の場所を知らないなら用はない」
「ああ？　何を言って……っ!?　テメェ、まさか他人の記憶や心を読め――――」
カナードの言葉を途中で遮るように響く一発の銃声。
その反響が部屋から消える前に、窓際に立っていた男は眉間に風穴を開けられ床に倒れていた。
一方、初めて撃った銃の感覚を確かめていた少年は、男が完全に死んでいることを横目で確かめ、持っていた銃を外套に仕舞うと部屋を去ろうとする。

《あら、これはこれは、随分な場面を目撃してしまいましたわ》
だが、湊が部屋に入ってくる前にカナードが操作していたパソコンの画面に、遠く離れた異国にいるソフィアの姿が映り、愉快そうに口を手で押さえながら笑っていた。
おまけにそれはリアルタイムで相手の方と繋がっているようで、パソコンについたカメラで湊の姿を見ていたソフィアは、床に倒れて死んでいるカナードに構わず、パソコン越しに話しかけてくる。
《はじめまして、というべきかしら？　貴方が小狼ですわね？　写真では拝見していましたが、噂に違わぬ美しさだわ。わたくしはソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタイン。貴方が潰そうとしている組織のトップの一人娘です》
くすくすと楽しそうに笑うソフィアは、立ち止まりパソコンを見ている湊を見つめ、自己紹介に続けて雑談がてらつい先日懸けられた懸賞金について語る。
《ああ、懸賞金を掛けたのはわたくしの父です。けれど、貴方がわたくしの物になるのなら、直ぐにでも撤回させてあげるわ。だから、わたくしの物になりなさい》
人の上に立つことを約束されて生まれたソフィアは、どこまでも上からな物言いで湊に自分の元へ来るように話す。
画面に映る彼女の表情は、湊が絶対に拒まないという確信を持っている事がありありと分かるほど、自信に満ち溢れた余裕の笑みとなっている。
「……悪いな豚の言葉は分からないんだ。それと話しは変わるが、内面の醜さが姿にも現れているぞ。試験管で造られたらしいが、現代の科学力では才能を伸ばすだけで造形まではデザインできなかったようだな」
だが、人の上に立つことを約束されて生まれたのは何もソフィアだけではない。
カナードの記憶から知った相手の出生の秘密を内容に混じらせながら、心から相手に同情すると言った風に湊は言い返す。
《……なんですって？》

途端、ソフィアの表情から笑みが消え、切れ長な瞳に怒りを宿し、鋭い視線で湊を睨んできた。
それを正面から受けながらも、やはり、まったく意に介さずに湊は相手を煽る言葉を発し続ける。
「豚にしては小奇麗に着飾っているが、それは飼い主の趣味か？まぁ、着飾ったところで豚は豚だが、飼い主は出荷が待ち遠しいだろうな。そのままよく肥え太るがいいさ」
《随分とおかしな目と趣味をしているようね。このわたくしを豚呼ばわりした愚か者は貴方が初めてよ。けれど、ペットが騒いでもそれを窘め躾けるのが飼い主の務め。しっかりと調教して二度とふざけた事を言えぬようにしてあげるから、そう気にしなくていいわ》
双方の顔の造形に似た部分はない。けれど、両者共に見る者全てを魅了する美貌を持っているが故に、ソフィアが感情の消えた瞳をすれば、紅玉と蒼という対極な色ながら、それは湊と同じだけの冷たさを宿していた。
「人間の言葉に反応して鳴くとは多芸なんだな。豚の生態には詳しくないんだが、犬のように色々と芸を覚える事も出来ると聞いている。見た目はともかく頭だけは良いようだから、しっかりと芸を覚えて飼い主を愉しませてやれ」
しかし、最凶の姉妹や先祖らと付き合いのある湊にしてみれば、自身の物には数段劣る同種の視線など慣れた物である。
相手の視線を受け止めた上で言葉だけは受け流し、表情を同情的な物から嘲るような笑みに変えたことで、画面の向こうで目を見開いているソフィアの中で何かが変わった事を湊は確信した。
案の定、相手は先ほどまでとっていた余裕の態度を一切捨て、椅子の肘置きに置いていた手を震わせながら、殺意すら宿った怒りの瞳で語気を荒げて話してくる。
《……もういい、気が変わったわ。お気に入りとして飼ってあげるつもりだったけど、貴方にはきついお灸が必要なようね。組織の者を使って徹底的に追い込み、捕まえた後は肉体の自由も人としての尊厳も貴方から全て奪ってあげるわっ》

「そうか。なら俺は、お前らがどれだけの数を揃えようと、必ずお前に辿り着き、生まれてきた事を後悔させてやる。それまでゆっくり自分の駒が減っていく様を眺めていろ」
言い終わると外套からファルファッラを抜き、通話状態のパソコンに向けて引き金を引く。
弾丸が液晶に触れた途端、パソコンが浮き上がりながら空中でばらばらとなり、弾丸の威力が凄まじい事を物語っていた。
最後に殺すつもりであった者と言葉を交わし、直接宣戦布告をする事が出来た湊は、壊れたパソコンと床に倒れているカナードの亡骸をそのままに町を出ると、再び久遠の安寧の者らを屠りに行くべく中東地域を後にするのだった。

第九十五話　さらなる動き

――ヨーロッパ・オノス地方

「アパテー！　ガルダイン！」

ソフィアの背後に現れた銀色のキトンを纏う女神は、呼び出されるなり手に持った水晶に魔力を集中させ、召喚者の見つめる先に暴風を巻き起こす。

アパテーの放った暴風は、美しく手入れの行き届いた庭の植え込みで作業をしていた庭師を襲い、庭師は風に弄ばれ空高く舞うと、手足をあらぬ方向に曲げて落下し、地面に大きな血の染みを作り出した。

何の罪もない庭師を殺めた少女は、しかし、それでもまだ気が昂っているようで、アンティークドールのように美しい顔を激情に歪めながら、次なる獲物はいないかと庭中に視線を送っている。

彼女がこれほど怒っているのは、先ほどパソコン越しに行った湊との会話が原因だ。

裏界の姫君や神子と呼ばれ、例え親であっても刃向う者などただ一人していなかった。

守護天使という絶対的な力を手に入れてからはさらに敬い尊ばれるようになり、名うての殺し屋であろうと地面に額を擦りつけて命乞いをしてきたものだ。

だというのに、自分が目に掛けてやった少年は、あろうことか自身を『豚』と呼び、侮辱の限りを尽くしてきたかと思えば、生まれてきた事を後悔させてやるとのたまってきた。

己という神に愛されたこの世の王がいなければ、きっと相手が自分と同じ椅子に座っていたはずなので、突然自分よりも上の存在が現れたことに動揺し、今まで通りの態度を取ってしまっても無理はないとソフィアは考える。

しかし、それを許すのは二度までだ。三度目からは反省のために躾けてやる必要がある。

そして、三度を超えてもまだ言うのであれば、主従の立場を分からせ、絶対の忠誠を誓うまでとことん調教しなければならない。

「ヘルマン！　お父様に連絡しなさい。カナードが言っていた情報をお父様や組織の人間にも伝えるのよ」
〝千里眼〟の力により、周囲に憂さ晴らしの攻撃対象がいないと分かったソフィアは従者を呼びつける。
相手をたかが狼一匹と考え、今まで好きにさせていたのが悪かった。これからは、自分が悪かったと泣きながら地に伏し謝るまで追い詰めるつもりだ。
そのためにまず、カナードが死の直前に言いかけていた情報を組織の者に伝える事にする。
やってきた従者が傍に控えると、ソフィアは紅玉の瞳に静かな怒りを宿し言葉を発した。
「――――仮面舞踏会の小狼は、他者の記憶または心を読む力を有しています。効果範囲やどれだけの情報を得られるのかは不明。また、それに対する対抗策も不明です。ですが、あのカナードの本名を暴いたのであれば、対象を個人に集中しさえすればかなり深い記憶まで読めるものと推測されます」
「それはまさか、ソフィア様に宿るアパテー様のような守護天使の加護でしょうか？」
従者のヘルマンはソフィアの千里眼がアパテーが宿った事で目覚めた力だと知っている。
詳しい原理等は不明ではあるものの、遠く離れた地の光景を見る事が出来るとソフィア自身が話していたこともあり、守護天使の加護を得た者はただ守護天使に守られるだけでなく、何かしらの不思議な力を得る物なのかもしれないと思っていた。
だからこそ、湊が読心能力を有している可能性があると聞いたとき、ヘルマンの頭には湊も同じように守護天使を身に宿しているのではないかという不安が湧いた。
「……可能性は捨てきれないわね。わたくし達以外に神々の黄昏へ入ることの出来る者がいれば、その者を調査に向かわせ探る事も出来たのでしょうが、いないものを言っても時間の無駄でしかないわ。だから、とりあえず、そちらは保留にして読心能力についてだけお父様た

ちに知らせて頂戴」
腕を組み顎に手を当てながら考え込むソフィアは、湊の読心能力が何に由来するものなのかは追々調査する事に決め、先に構成員たちへ注意喚起のために相手の所持する凶悪な力の情報を本部へ伝達する事を選ぶ。
仮に同じように守護天使を宿しているのなら戦いは避けられない。他の誰であっても自身に宿る守護天使を傷付けることは敵わなかったのだ。
ならば当然、相手側の守護天使にも不思議な加護が働き、通常兵器による攻撃を通す事はないだろう。
自らが動くことを面倒だと嫌うソフィアだったが、躾けのなっていないペットを調教して従順にするのは飼い主の義務だ。
そう考えることにして、本当に湊が自分と同じように守護天使を宿していたとしても力で捻じ伏せることに決め、ヘルマンに連絡させるだけでなく、自分もそろそろ本国の方へ戻る準備をしようと屋敷へ戻ってゆくのだった。

――巌戸台港区・喫茶店〝フェルメール〟
桔梗組本部に集まり、桜から湊に残された時間が少ないことを聞いた五代。
彼は旧友であったイリスの死を知った日から、湊を迎えにいかなければならない事態を想定し、様々な準備を進めていた。
もっとも、今の湊を連れ帰ることが出来るのはチドリかアイギスのみだという話しを聞き、チドリを戦場に連れてゆく事が出来ないことから、現在では自分がアイギスと接触して情報を伝えようと方針を改めている。
（……懸賞金がかけられたことで、世界中が小狼君を狙うようになってしまった。噂では彼を狙う仕事屋たちが町への被害を考えずに攻撃を加えることから、争いを呼ぶ元凶として国家聯合も彼を仕留めるために動くのではないかと言われている。まったく、十四歳の子どもにする事とは思えないね）

店の二階にある事務所でパソコンを操作しながら、現在の湊を取り巻く状況について考え思わず苦笑してしまう。
裏の世界でも名うての者たちはまだ様子見で情報収集に徹しているようだが、懸賞金目当ての仕事屋だろうと久遠の安寧の者以外は殺さないでいることが分かれば、彼らもすぐに参戦してくることだろう。
現在の湊が殺すのは、久遠の安寧の構成員と過激派ゲリラ等テロリストのみだ。
以前の湊であれば、自分の命を狙ってくる者は殺していたはずなので、どうして他の者を殺さなくなったのかが分からない。
相手は命を狙ってきているのだから、排除できる者は早々に排除してしまった方が逃走を続けるにしても何倍も楽になるはずなのだ。
(マダム・リリィの話しでは彼はもう裏の仕事はしないと言っていたとか。だとすれば、今の小狼君は復讐のためという自分の意志で動いている事になるから、復讐には他人を巻き込まないってとこか。優しい彼の考えそうなことだね)
復讐という冷静とは言い難い行動を取っているにも拘らず、その行動の端々に湊本来の優しい性格が見え隠れしている。
本来なら苦笑にしろ笑っていられる状況ではないが、現在の自分に取れる行動が非常に限られていることもあって、五代は落ち着いた様子で考察を続け、一息吐くために置いていたコーヒーに手を伸ばす。
お茶の時間にはミルクと砂糖を入れた物の方が好みではある。けれど、こうやって仕事や考え事をしているときには、頭が冴えていた方が良いという考えからブラックで飲む様にしていた。
顔を顰めたくなるような濃い苦みが舌の上に広がり、それが引き金となって五代の頭の中で今後どう動くべきかがシミュレートされてゆく。ブラックのコーヒーを飲むという行動は、一種の自己暗示のような物でしかないが、仕事屋はそれぞれ何かしら験担ぎやジンクスを気にする傾向にある。
イリスや湊は、師であるイリスが「勝つためなら技術も道具も使い捨てるぐらいで丁度良い」という思考の持ち主だったために気にして

いないが、情報屋のロゼッタは雨の日に来た依頼を受けないなどの経験則からの決まりを作っているので、狙撃手として海外で仕事を行っていた経験もある五代も当然同じように自分なりのこだわりを持っていた。
「ふぅ……さて、どうしたものか」
現在、五代は海外に行ったときどうやってアイギスと接触するかについて考えている。
相手が中国から湊のいるヨーロッパ及び中東地域に向かっているのは判明しているが、どのようなルートを通っているのかも分からず、信用出来る友人に目撃情報を聞こうにも、あまり大勢に情報が広まって桐条グループに気付かれても面倒だ。
だからこそ、結局は自分でポイントを絞って、話しを聞いて貰えないにしろ先に湊に接触した方が早いのではないかと考えたそんなとき、近くに置いていた固定電話に海外からである事を示す番号が表示された。
ディスプレイに番号が表示された一拍後、面白みのないデフォルトのコール音が鳴り響く。これはどこの国の番号だったかと考えつつも、友人の知り合いなどが何か珍しい情報を教えに連絡をくれる事もあるので、今回もそういった者からの連絡かと考えつつ受話器も持ち上げ耳に当てた。
「はい、もしもし」
《どうもはじめまして。そちらは情報屋の五代さんで良いかしら?》
「ええ、五代は僕ですが」
電話の主は女性で、どことなく日本語の発音に不慣れな様子があることから外国人だと思われる。
五代とて仕事屋と情報屋として過ごしてきた年数を合わせれば、二十年近く裏の世界で生きている事もあり、英語やフランス語など主要な国の言語は習得している。
なので、相手に慣れている言語で結構だと言いかけたとき、電話の女は自らの素性を報せてきた。
《私は民間軍事会社〝蠍の心臓〟の社長を務めているナターリア・イ

リーニチナ・メドヴェージェヴァよ。イリスの古巣、ボウヤの海外生活最初の拠点といえば分かり易いかしら？》
　蠍の心臓という組織については、イリス自身から自分の古巣だと聞いていたため、すぐに思い出す事が出来た。
　さらに、湊をボウヤと呼んでいることから相手は湊をよく知っており、彼を取り巻く状況とこの連絡のタイミングを考えれば、きっとイリスの死か湊に関わることで連絡してきたのだと推測できた。
　日本に居るためどうしても海外の情報の入手が遅くなってしまう事から、もしや、湊に何かあったのではないかと不安を抱きつつ、とりあえず話しの内容を聞くため相槌を打って返す。
「ええ、話しは聞いていますが」
《それは良かった。実は、イリスからボウヤの保護者との仲介役に使えと連絡先を教えられていてね。少し話したい事と訊きたい事があったから電話させてもらったの。盗聴等の心配はないと思って話していいかしら？》
「あ、ちょっと待ってください」
　電話に取り付けてある回線への割り込みを感知する装置を作動させ、通信の傍受があったときにはすぐに分かるように設定する。
　基本的にないとは思うが、仮に何者かが五代をマークしていたとすれば、現状から考えるにそれはほぼ高確率で久遠の安寧の手の者になる。
　そして、ここまで監視が回ってきたのなら、チドリたちに辿り着くのは時間の問題であることから、保護者たちは有事の際にチドリを英恵の暮らす桐条別邸に匿うことに決めていた。
　久遠の安寧の人間は知らないだろうが、湊が死ねばこの惑星に生きる全ての命が終わってしまうのだ。その少年の最大のウィークポイントは何があっても守らなければならない。
　故に、五代は割り込みの反応があればすぐに桜に知らせられるよう携帯を傍に置き、それからナタリアに話しても構わないと告げる。
「……どうぞ」
《ありがとう。さて、先ず何から話しましょうか。とりあえず、つい先

日、ボウヤを拘束して話しをしたわ》
「拘束？　いま、小狼君は貴女方といるんですか？」
《いいえ。よく分からない能力で拘束に使ったグレイプニルを引き千切られてしまってね。部隊は壊滅状態に追い込まれたわ。ただ、私たちを殺すつもりはなかったようで、力を解除したときには隊員は全員生きていたけど》
　グレイプニルは特殊な製法で鍛えられた合金製の網だ。それを引き千切る事の出来る能力などペルソナを除いてあり得ない。
　まさか、湊が一般人を相手に能力を使うようになったとは知らず、五代はただ驚くことしか出来なかった。
　けれど、隊員が全員無事だという話しを聞いて疑問が浮かぶ。殺す気がなかったのは構わない。復讐に他人を巻き込まないようにしている事を考えれば、そちらの行動の方が彼らしいと思える。
　ならば、どうして拘束を逃れた後も力を行使して相手を壊滅まで追い込んだのか。ペルソナを使う時点で相手の考えや精神状態が分からず、答えの出なかった五代は今は素直に話しを聞いておく事にした。
《まぁ、あの力が何かってことも訊きたいのだけど。話したい事というのは、そのときのボウヤの様子よ。あの子は復讐のためだけに動いている訳じゃないわ。視野は狭くなっていそうだけど、頭はかなり冷静なままね。自分の行動の結果を理解して動いているみたい》
「復讐だけじゃない？　では、小狼君は何のために動いていると？」
《……どうやら女のためみたいね。〝人間じゃない彼女〟と聞いて心当たりはあるかしら？　その子の存在を世界に認めさせ平和に暮らせる場所を作るんだそうよ》
　湊の目的をナタリアの口から聞いた五代は、思わず机に肘をついて頭を抱えてしまう。
　これならばただ復讐に走っている方がマシだった。湊は目的があればそれのために何を犠牲にしても突き進む性格だ。大切な少女たちが悲しむと分かっていても、それが相手のためなら無視して目的を果たす。

それだけに、復讐という明確なゴールが決まっている方が、無事に終わりさえすれば帰って来てくれたはずなので、待っている者にとってありがたかった。
しかし、目的がアイギスの居場所を作るために彼女の存在を認めさせるとなれば、力によって他者を支配することにも繋がりかねない。
そこに明確な終わりなどなく。どうすれば居場所を作ることが出来たと判断するのかも不明だ。
五代は疲れた表情で一度深く息を吐くと、心を落ち着けて心当たりはあるかというナタリアの問いに答える。
「……七式アイギスという人型ロボットです。その子が、彼を救うための鍵で、我々も名切りの情報を彼女に届ける方法を探っています」
《人型ロボットって……それに、救うための鍵？　名切りの情報を渡すってどういう事？》
「我々も小狼君のお母さんの知り合いの方から教えて頂いたのですが、小狼君は名切りの中でも特別な地位にあるそうなんです。過去の名切りたちが目指した〝完全なるモノ〟。そこに至ることの出来る唯一の個体だと」
数千年にも及ぶ歳月を経てようやく誕生した鬼と龍の混血児。先祖が鍛え極めてきた知識と技術の全てを与えられた愛子。それが二つの一族を統べる資格を持った少年〝百鬼八雲〟だ。
誰一人として成し遂げることの出来なかった名切りの悲願も、本来は一つであった鬼と龍が再び合わさることで叶えることが出来るようになった。
血に宿り、シャドウの王すら喰らうほどの業を生み出してまで叶えたかった名切りの願いとは、人から神へと至る〝完全なるモノ〟を生み出すことであった。
《よく分からないけれど、その〝完全なるモノ〟とは一体何なの？》
「詳しくはその方も聞いていなかったそうですが、どうやら小狼君を別の何かに作り変える事で生まれる存在だそうです」
完全なるモノは湊という人格のフォーマット化が終了してようやく目覚める。

五代や桜が気にしているタイムリミットは、そのフォーマット化の完了のことであり。全てが完了するまでにアイギスをぶつけて正気に戻さなければ、皆の知る湊はこの世から消えてなくなってしまうという。

《では、あの力はその副産物という訳？》

「あ、いえ、それはまた別の力です。あれは名切り以外にも使える子どもがいますから。ただ、彼が裏の世界で生きるようになった原因でもありますので、あの力に関しては詮索しないでいただけるとありがたいです」

相手がペルソナをその予兆だと考えたようなので訂正を加え、さらに踏み込んでくれれば厄介なことになる事を暗に伝えつつ、五代はコーヒーで喉を潤させてどこまで話すべきかを考える。

ペルソナの事を含めて、湊がどのような人生を歩んできたかを伝えた方が相手も理解し易いのは確実だ。しかし、楽さにかまけて彼を裏切るようなことを出来るはずもなく、五代は話せる事をかいつまんで話し始める。

「彼は元々、先ほど言ったアイギスさんとある少女のために戦っています。二人が平和で温かな世界で生きていける事が彼の望みなんです。ですが、彼は今の自分では守る事も出来ないからと鍛えるために海外に行ったんです」

《随分と格好良い色男っぷりね。その裏で女が泣いている事にも気付いているでしょうに》

「ははっ、そうですね。少女は小狼君が裏の仕事をすることにも反対していましたが、自分たちを守るために人を殺させたこともあって何も言えなかったみたいです」

正確に言えばチドリだけでなく、一緒に脱走する被験体たちを守るために人を殺したのだ。

単独やチドリを伴って逃げるくらいなら湊は簡単に行う事が出来た。他のペルソナ使いと異なり自由に召喚し飛ぶ事が出来るのだから、影時間でろくに使用できる機材もほとんどないエルゴ研から脱走するなど朝飯前だったに違いない。

けれど、あのままエルゴ研にいても緩やかに死んでいく未来しかなかった被験体たちを、心優しい少年は見殺しにすることなど出来なかった。
《……最初は望んで殺した訳じゃないのね。でも、自分で選んだからこそ罪が重くのしかかる》
「はい。僕やイリスが出会ったときは、昼間だっていうのにまるで夜中の山を歩いているのかと思うくらい周囲を警戒していましたから」
《よく潰れなかったわね。でも、そういう事ね。イリスはそれを見たから余計に放っておけなかったんでしょう》
自分が助けようとしたせいで多くの被験体たちが死んでしまった。被験体たちを守るためとはいえ、待つ人もいた研究員や警備の者たちを大勢殺し続けた。
小学生の幼い少年にその罪は重くのしかかり、ただチドリを周囲から守ろうとする以上に精神的に追い詰められていたに違いない。
ほぼ同じ年頃の息子を亡くしていたイリスにとって、湊のそんな姿はとても痛々しく映り、どうにかしてやらずにはいられなかったようだ。
彼女の優しいところを知っているナタリアは、当時の彼女の様子が容易に想像出来た事もあって、受話器の向こうで納得したようにくすくすと笑っている。
《なるほどね。ボウヤがこの業界にいる理由はわかったわ。では、今度はどうしてその人型ロボットに名切りの情報を渡す必要があるのか教えて貰えるかしら》
「彼を連れ戻してもらうためです。小狼君は孤独に身を堕として久遠の安寧を討とうとしています。今まで持っていた絆を捨て、敢えて独りになる事を選んだんです」
少年は大切にしていたお揃いのピアスを、ただ「ごめん」とだけ書かれた手紙と共に送ってきた。
どうして絆を捨てたのかは分からない。重荷だったのか、それとも巻き込まないためなのか、真相を知るのは本人のみだ。
《自分で選んだのならしょうがないと思うけど?》

「名切りの血には過去の名切りが宿っています。彼らは小狼君を完全なるモノにするために、彼の精神に干渉して変革してゆくように仕向けるそうです。質の悪い怨霊に取り憑かれていると言えば分かり易いでしょうか」

裏の世界で生きているのなら、子どもだなんて言い訳は通用しない。選択の責任は全て自分自身に返ってくる。

故に、本人がそれを選んだのなら誰も文句は言えないとナタリアが言えば、五代は本人だけで選んだ訳ではない可能性があることを指摘した。

湊の母親の菖蒲は血に目覚めて先祖の声を聞く程度しか出来なかったが、それでも彼女らの目的と湊に何をしようとしているかは理解していた。

力をほとんど目覚めさせることが出来なかった分、菖蒲は名切りとしての意思が希薄で、自分に何かあったときに子どもを守る保険として英恵にも湊の事を話していたのだ。

それが実際に活かされる事態になるとは英恵も思っていなかったようだが、それでも少年を助けるために動いている者たちが本気であると理解した相手は、電話の向こうでは何やら考え込むような息遣いをさせ、溜め息まじりに厄介事に巻き込まれている少年に同情を寄せてくる。

《現状はボウヤの意志のみで起こっている訳ではないと……難儀な物を背負って生まれたものね。人型ロボットやら久遠の安寧やら変な物にも好かれるみたいだし》

「まぁ、それだけの魅力を持った子ですから。それで、僕たちが彼女に名切りの情報を渡す理由は、彼女に名切りも含めて彼を受け入れて貰うためです。自分の欠点まで受け入れてもらえたら、男はコロッと落ちますから」

軽口を叩いて理由を告げる五代だが、アイギスに知っておいてもらう意味としては間違っていない。

名切りを知らない状態で受け入れるといっても、知れば離れていくという疑心暗鬼に掛かるかもしれない。

だが、最初から知っていて、それでも受け入れると言われれば、こんな自分でも受け入れてくれるのかと心のガードが僅かに弱まるはずなのだ。
しかし、五代が言った〝男〟という言葉が気になったナタリアは、先ほどの五代に合わせるように軽口のノリで問い返してくる。
《ボウヤは女でもあるみたいだけど、女を落とす方法は考えているのかしら？》
「女を落とす訳ではないですが、もう一人の少女が言うには、小狼君はその……マザコンらしいので、自分を受け入れてくれる女性には弱いと」
《マザ……コン？　フフフ、アハハ、アハハハハッ！》
軽口を交えながらも真面目な話をしていたつもりだっただけに、ナタリアは予想外の単語が聞こえてきて大声で笑い出す。
あれだけ抜き身の刀のような鋭さを見せていた少年が、味方ですら寒気を覚えるほどの力を戦場で見せた鬼が、まさか母親を求めているとは確かに思うまい。
実際にその単語を口にした五代も、電話の前で苦笑を浮かべて待っていると、笑いを堪えながらも声を震わせ相手が同調してくる。
《確かに確かに、そうね、あの子はそんな感じね。まわりが構っているから気付き辛いけど、善意で寄ってくる女性には大抵されるがままでいたわ。あれは子どもがお母さんの膝に座って大人しくしているのと同じだったってことね》
その言葉を聞いて今度は五代がすんなり納得してしまう。初めて会ったときにあれだけ周囲を警戒しながらも、どうしてイリスに大人しく頭を撫でられていたのか。
成程、親を早くに亡くしただけでなく、その後も周囲に頼られてばかりだったことで、甘えたい盛りの少年は余計に親の愛に飢えるようになっていたらしい。
ならば、今回イリスを殺されたことも、湊にすれば再び得た母親を奪われたことになる。怒りも悲しみも憎しみもさぞ深いことだろう。
そんな風に考え、尚の事、早く少年とアイギスを会わせてやらなけ

ればならないと五代が思ったところで、電話の向こうの相手が軽い調子で言葉を投げてくる。
《ＯＫ、とりあえず話しは理解したわ。ボウヤの力とか、名切りの詳細についても聞きたかったけど、我々はボウヤの追跡と平行して〝七式アイギス〟とやらの捜索を開始します。その子の写真か何かはあるのかしら？　もしあるなら、今から送るアドレスに送信してくれる？》
「え、あの、良いんですか？」
　相手は民間軍事会社だ。湊の捜索も救出も何の得にもなりはしないはず。
　それをさらにアイギスの捜索もするとなれば、相手は完全に赤字にしかならないだろう。
　多数の隊員を抱える組織のトップがどうしてそこまでしてくれるのか。疑問に思った五代は思わず尋ねていた。
　すると、ナタリアは先ほどよりもどこか吹っ切れたように、声に優しさと決意の色を込めて答える。
《イリスに遺言で頼まれてしまったの。ボウヤを日本へ帰してやってくれって。でも、私は一度失敗した。なら、今度は失敗しない方法を選ぶだけよ》
「……どうもありがとうございます。写真というか彼が描いた写実画ならありますから、持ち主に連絡して画像を送って貰い転送します」
　少数精鋭で捜索するしかないと考えていただけに、それなりの規模の組織の助力が得られるのならありがたい。
　相手から姿は見えていないにも関わらず、五代は電話の前で頭を下げて礼を言い。今後のことに向けて話しを進める。
「僕たちも何人かで彼と彼女の捜索に向かおうと思っています。その間、日本での連絡係は仲介屋のロゼッタという女性が引き継ぎますので、また彼女の方から連絡してもらえるよう伝えておきます」
《ええ、わかったわ。でも、いま国聯がボウヤの排除を検討しているって噂もあるから、捜索するなら国聯軍と鉢合わせないように気を付けて》

「はい、僕の方にもその話しは回ってきてます。他にも、彼、小狼君は、他人の心が読めるとかって噂話もありますけど」
広範囲の索敵能力をはじめとしたペルソナ能力を有しているのは知っているが、流石に読心能力まで有しているはずはない。
一応、疑問に思ってチドリや栗原に尋ねてみたが、湊がそんな力を持っているとは聞いた事がなく、また、ペルソナでそんな事が出来るとは思えないとの返事が返って来た。
それだけに、国聯が動いている可能性はあり得るだろうが、少年の力についての噂はあの蒼い眼で見られて全てを見透かされていると勘違いした者が流したデマだろうと五代は思った。
だが、五代のそんな考えの籠った言葉に対する返答は、先ほどと打って変わって真剣な色を帯びていた。
《……そっちは噂でもないかもしれないわ。どういう訳か、ボウヤは私の過去を知っているようだった。イリスには話していたけど、イリスが他人の古傷をボウヤに話すとは思えない。私の経歴を深く知っているのなんて母国の知り合いくらいなのよ。だから、心というか記憶を読んだ事で知ったとも考えられるわ》
「しかし、記憶を読むなんてどう考えても」
《あり得ない訳ではないでしょう。ボウヤはあれだけ変な力を持っているのよ？　いまさら心を読めると聞いたところでそこまで驚かないわ》
それを言われてしまうと五代は何も言い返せない。ペルソナは心の力だ。ならば、他者の心に干渉する術も持っている可能性はゼロではない。
ここであり得ないと考える事を放棄するのは簡単だが、可能性がわずかにでもあるなら、五代はそれに備えて動いた方が良いと判断し、相手の言葉を素直に聞いておく事にした。
「そうですね。なら、彼がそういう能力を持っていると考えて僕たちも動いてみます」
《ええ、お互い無事に済むよう祈っておくわ》
「はい。では、また連絡します」

通話を終えると、五代は自分のパソコンのメールボックスに知らないアドレスからメールが来ている事に気付いた。
先ほど言っていたメールかと確認して見れば、予想通り件名や本文に彼女であることを証明する内容が書かれている。
ならばと五代もしっかり届いている事を知らせるために返信し、その後、桜やチドリに事情を話してアイギスの絵を写真で送って貰うなり、すぐにナタリアへ転送した。
転送した画像を確認したナタリアから、
《ボウヤのガールフレンドだって隊員に伝えておくわ》
という反応に困る返事が来たが、とりあえずの情報交換は無事に終了した。
ロゼッタの方にも連絡を入れて、ナタリアと直接連絡を取り合えるようにして貰い。これで日本で済ませておく事はほぼなくなった。
そうして、出来る限りのことをしておいた五代は、自身も海外へと渡るべく、湊のことで協力してくれるであろう仕事屋へ連絡を取るのであった。

11月5日（日）
夜――インド・ルディヤーナー
中国成都市から約二七〇〇キロ離れた場所にあるインドのルディヤーナー。
ほぼ一ヶ月歩き続けたアイギスは、目的地のトルコまで残り半分ほどまで来ていた。
最初は人目を避けて森や山を歩いていたが、よく考えれば人目を避ける隠密行動で時間を割かれるよりも、素早く町を抜けてしまった方がロスが少ないと気付いた彼女は、メンテナンス器具の入った大きなリュックを背負った迷彩服姿で町の中を歩いていた。
（ここも日本の都市部には劣るものの十分都会ですね。八雲さんと回りたい場所がまた一つ増えました）
最近の彼女の日課は、歩きながら町の雰囲気や発展度をリサーチし、どのような特徴があるのかをまとめることであった。

一般的な観光客の観点とは異なるかもしれないが、まとめられたデータはランキング形式に順位付けされ、湊との合流後に出来れば一緒に見て回れたらと思っている。

湊が観光に興味がないとなれば別の事を考えるつもりではいるものの、アイギスの中の湊像はとても親切で優しい人なので、仮に興味がなくても自分に付き合ってくれる予感があった。

（八雲さんは何がお好きなんでしょうか？　旅行に行って楽しむ代表的な物は、風景・歴史的建造物・食事・買い物といった物が挙げられます。また、旅先での風俗サービスなるものを楽しむ男性もいるというデータもありますが、八雲さんには不要な物のようですのでデータを削除しておくであります）

誰が入れたのかは不明だが、旅行で楽しむ物というデータの中にあった項目を一つ削除するアイギス。

八雲がそんな物を利用する必要はなく、また、青少年の健全育成の観点からみても不適切であることから、アイギスは削除した項目を『八雲さんには不要な物』というカテゴリを作成し移しておいた。

このカテゴリにデータを移しておけば、仮に相手が利用してみたいと今後言ってきても、それは貴方には不要であると教えてあげる事が出来る。

幼い頃から非常に聡明だった少年に、起動してすぐに寝たままになっていた自分が何かを教えてあげるというのは不思議な感覚だが、決して悪い気分ではないのでそんな時が来ればいいなとすら思ってしまう。

機械である自分にこんな人の心のような、感情に似た物がインストールされているとは知らなかった。

町の中を歩きながらそんな風に考えていると、電気屋らしき店のショーウインドウに置かれた街頭テレビが目に入った。

（そういえば、八雲さんに関する情報も集める必要があるのでした。生憎、日本語と英語以外の言語ソフトはインストールされていないようですが、辞書データにいくつか代用出来そうな物があるようなので、それを使って情報収集もするであります）

戦闘に関わるようなデータは大量に搭載されているが、基本的に日本での運用くらいしか考えられなかったことで、アイギスは日英の二ヶ国語しか話す事が出来ない。
しかし、言葉の意味を理解しやすいようにと辞書データも搭載されていたことで、それを利用すれば日英以外の言語もいくらかは理解する事が出来そうであった。
言葉が理解出来るのなら情報収集は行えるため、早速開始だとアイギスは街頭テレビの前まで進む。
そこには、ブルガリアのシュヴァルという都市からのライブ映像と思われるテレビ中継の様子が映っていた。
《これは映画ではありません！　今まさに、ＥＰ社の幹部を狙っていた犯人が大勢の者から狙われ逃げ続けています！》
街が見下ろせる高台から英語で話すリポーターの背後で街が燃えている。何やら怒号のような物が響き、ＲＰＧ７の弾頭と思われる物が夜の空で炎の尾を引き飛んでいた。
日本では先ず見ることはなく、本当に映画のようにしか見えない奇跡のライブ中継だ。
リポーターの話しでは偶然現場の街に居合わせて、急遽世界中を騒がせている犯人の様子を撮る事にしたらしい。
屋根の上を跳び回り逃げる黒い人影をカメラが大きく映し出す間に、こんな危険な地帯もあるのかと呑気に考えていたアイギスは、フードを被った犯人の姿が僅かに画面に映ったとき硬直した。
「八雲、さん……」
素早い動きでカメラが追いきれず、フードを深く被っていることで顔もほとんど見えない。
しかし、僅かに覗く素顔が映った途端、アイギスはその人物がずっと探していた少年であると確信した。
「八雲さんっ!?」
画面の中で逃げ回る少年にＲＰＧ７の弾頭が直撃する。爆炎に包まれながら吹き飛ぶ少年を目にしたとき、アイギスは目の前のガラスを思わず破壊しそうになる。

だが、空中で体勢を立て直した少年が着地する様子が映ったことで、呼吸機能はないというのに心から安堵の息を吐き。ガラスに手をついたまま食い入るようにニュースを見続けた。
《恐ろしい犯人です！　直撃を奇跡的に回避したのか、吹き飛ばされながらも逃げ続けています。この街に住むＥＰ社幹部が雇ったと思われる護衛の方々が追い詰めていますが、非常に軽い身のこなしで護衛の方々はあと一歩追い詰める事が出来ません》
「何を馬鹿な事を言っているのですか！　大勢で八雲さんを追い詰め傷付けるだなんて、即刻やめさせるであります！」
夜の闇の中、熱で赤く光る大量の弾丸が、少年の纏う黒の外套に浴びせられている。
少年はそれでも構わず市街地から離れようとしているが、いくら防弾装備だろうと衝撃を完全にゼロに出来る訳ではないので、外套の下で骨折していてもおかしくないとアイギスは睨んでいた。
それだけに、大切な少年を傷付けられることに我慢しきれず、相手に聞こえないことも忘れ思わず叫んでしまう。
今すぐあの場所に行きたい。行って少年を守りたい。そんな焦燥感と共に、改めて自分はあの少年の傍にいなければならないという強い想いが湧いてきた。
少年の様子を注意深く観察しながら、アイギスはどうすれば出来るだけ早く彼の元へ辿り着けるかを考えだす。
（乗り物を奪取すれば早く着くことは可能。しかし、手に入れても動かす事の出来ない影時間以外では奪取するのも難しいです。屋久島では台風を利用することで上手くいきましたが、気候の違うこの土地で同じ状況を狙うことは出来ません）
その辺に止められているような車を奪う事は出来ない。気付かれれば自分にも追手が発生し、それを撒いていれば余計な時間をくってしまう。
人目を避けて進んできたのは、何も桐条の追手を恐れていただけではない。誰にも迷惑を掛けないことで追われるリスクを冒さない事も考えていたのだ。

だが、偶然にも自分の最も大切に想う少年が襲われている姿を目撃したことで、アイギスもなりふり構っていられる状況ではなくなってしまった。
（奪う中で最も追われるリスクが低いのはバイク。しかし、わたしの足の構造上シフトレバーを上げる事が出来ないのでミッション車は除外。スクータータイプのオートマ車ならば力加減を間違えなければアクセル操作だけでいけますね。まったく、わたしを開発した方はどうして人の足と同じ形状に脚部を作ってくれなかったのでしょうか。スクーターでは出せる速度が限られてしまいます）
ビッグスクーターでもなければ、オートマ車のバイクは大きくてもせいぜい１２５ｃｃのエンジンとなる。
その排気量では出せても百キロ程度が限界なので、どうしてシフトレバーを上げるだけの引っ掛かりがついた脚部になっていないのだと、アイギスは自身のパーツ開発者に文句を言いたかった。
心の中ではそんな風に思っていても、アイギスの目はテレビに釘付けであり、少年の一挙一動を見逃さぬよう自分のアイカメラとメモリに焼き付けている。
しかし、そうやって見ていたその時、
「あっ！　こら、映すであります！　八雲さんはどうなったか見せてください！」
《おや、中継が切れてしまったようですね。ジャイロ記者、ジャイロ記者！　……駄目なようです。再び通信が回復次第さきほどの続きをお送りしたいと思います》
「そんな……」
なんと見ている途中で機材の故障なのか中継が切れてしまった。
先ほどの場所がどこなのかは記憶しているが、今から向かったところで会う事は出来ないだろう。
中継がいつ回復するか分からない以上、ここで待っていてもしようがない。アイギスは再び歩き始めると、気落ちした様子で移動手段の確保をどうするか考え続けるのだった。

第九十六話　捜索に向けて

１１月１２日（日）
朝――国際空港ロビー
その日、朝早くから空港にはチドリをはじめとした、湊に関わる事情を知っている者たちが集まっていた。
彼女たちが空港へやってきた理由は、湊及びアイギス捜索のために海外へ渡ってくれる者たちの見送りのためである。
捜索する場所や発見する可能性がある場所は、基本的に賞金首の湊を狙う者が大勢いる戦場だ。
危険な戦場に大勢でいっても隊全体の動きが鈍くなるため、実力や経験等を考慮して、今回派遣されるメンバーは情報屋の五代、元傭兵の渡瀬、幼少期の湊と互角の体術使いである紅花の三人となっている。
桔梗組最強の渡瀬が一時的に抜ける事で有事の際の防衛力はかなり落ちる。その間に久遠の安寧に攻められては一大事だからと、チドリは一時的に栗原の家で暮らすことが決定しているが、本人も今の自分が湊の弱点にしかなり得ない事を理解しているようで、これといった文句もなくすんなりと意見が通った。
また、普段は美術館館長の秘書と実家の中華料理店で働いている紅花が、滞在期間の不明な仕事にゆくこともあって、真っ当なレートならば一千万以上の報酬が必要になるのだが、紅花本人だけでなく、その家族や館長の車谷も手伝ってきてやれと快く送り出した事もあり、紅花への報酬は掛かった経費＋百万という格安に納まっている。
桜は自分の貯金などから正当な報酬以上の額を出そうともしたのだが、紅花は馬鹿な弟子を助けるのに憧れていたと明るく笑って申し出を断った。
これら全て、湊が今まで築いてきた絆の賜物だと思えば、それを捨ててまで成し遂げようとする少年の決意の固さに、桜は胸を締め付けられる様な感覚を覚えた。
「……皆さんもどうかお気を付けて。無理だけはしないで無事に帰っ

てきてください」
「あははー、それはちょと約束できないな。湊がいるの戦場だからね。攻撃してこない名切りの鬼なんて誰も怖がらないよ。その分、無茶する馬鹿も多いから、話しするにも命懸けかもな」
ここ数週間の内に湊に関する噂はほぼ真実のように語られ広まっていた。
曰く、仮面舞踏会の小狼は真正の名切りの鬼である。如何なる攻撃を受けようとも敵を殺すまで止まらず、狙われた者は確実に命を奪われる。
しかし、鬼は敵と定めた者以外を攻撃することはない。心を読む事で久遠の安寧の者かそうでないかを見分け、違うと解れば例え命を狙いに来た者であろうと見逃してくれる。
俄かには信じ難い話しだが、久遠の安寧の構成員が既に数千人殺されているというのに、命を狙いに来た賞金稼ぎの仕事屋たちは、流れ弾等で怪我をした事を除けば、ほとんど無傷で全員が帰還していることもあり、かなり高い確率でこの話しは真実であると考えられている。
「確かに、街中でロケット弾を発射するような者もいるみたいですしね。湊さんがそれらを捌いていることもあって目立った被害もなく済んでいますが、流石に国聯も見過ごせなくなっているようで、近いうちに騒ぎの中心である湊さんを排除しようとしているみたいです」
「まぁ、騒いでる馬鹿らを黙らせるよりも、騒ぐネタになってる坊主を仕留めた方が収拾すんのも楽だわな」
「国聯の動きはそうですが、僕の情報屋仲間たちは、被害を最小に留めてくれるからありがたいと彼を称賛している者が多いですよ」
以前は動くかもしれないと噂程度に言われていた国聯も、湊が抵抗しないからと増長を続ける仕事屋たちの行為が目に余るため、市民の安全のためにも早急に対象を排除して事態を鎮圧すべきという流れが生まれ始めていた。
久遠の安寧を狙う湊を仕事屋たちが追いまわし、さらに国聯軍が排除に乗り出してくるとなれば、今後、どのように情勢が変化するのか

予想もつかない。
「彼が久遠の安寧の幹部を狙って色んな場所に出没しますから、戦闘行為に巻き込まれないよう活動を自粛している者が多い事もあって、ヨーロッパを中心に犯罪率は低下傾向にあります。ですが、治安が良くなっても、小狼君の情報を求める仕事屋たちがよく来ますから、情報屋たちは適当な事を言っているだけでお金が手に入り夢のようだと笑っていました」
「……そいつらに湊の口座へ仲介料を振り込むように言っておいて。誰のおかげでおまんま食べられてると思ってるんだか」
「あ、あはは。まぁ、一応伝えてみるよ。多分、彼が来たら匿って食事くらいは奢るような連中だから」
しかし、国聯が動くとすれば大規模な軍隊でくるはずなので、今回の遠征隊の三人は自分たちだけで動くのならば巻き込まれないよう逃げるのは可能だと踏んでいた。
故に、そちらの動きは情報屋のネットワークで耳に入るようにしておき、湊を金儲けに利用されていると不機嫌になっているチドリへ五代は苦笑で返す。
情報屋とは他人の情報を売って金を得るような商売なので、情報を売られた者の知り合いにしてみれば、彼らを死肉に集るハイエナのように思うのも無理はない。
元は暗殺も請け負っていた凄腕の狙撃手であった五代も、現在は彼らと同じハイエナとして生きている。
それだけに、チドリからは軽蔑の色が混じった視線を向けられるかと思えば、少女は腕に下げていた大きめのハンドバッグから、背中にほぼ密着するように身に付けるタイプのショルダーバッグを取り出してきた。
「……これ、アイギスってやつに会ったら渡しておいて。多分、使うような状況になるから」
そういって、取り出したショルダーバッグを五代に渡してくるチドリ。
受け取ってバッグの生地越しに中身の形状を探ってみるが、何やら

筒状の固い物が入っていることくらいしか分からない。
少女がもう一人の少女に渡してと言ったため開けたりはしないが、物によって受付カウンターで預けることも出来ない可能性があるので、五代は先に中身について尋ねておく事にする。
「これは？」
「一回限りの秘密兵器。詳しい事が聞きたいなら私の方へ電話してくれれば本人に直接伝える」
「爆弾みたいな危険物じゃないよね？」
「ええ、それは安心して良いわ。まぁ、何もしなければ防具みたいなもんだから、持ち物検査も普通にパス出来ると思うし」
秘密兵器というからには湊に対して有効な物なのだろう。中身については本人に伝えると言っているが、五代らが先に湊と遭遇して心を読まれてしまい、せっかく用意した秘密兵器の存在がばれることを彼女は危惧しているのかもしれない。
ならば、作戦の成功率を少しでも上げるため、五代は彼女の言葉を信じて詳しくは聞かないで置くことに決める。
「わかった。直接渡せるかは分からないけど、イリスの知り合いの人たちも捜索してくれているし。彼らの協力を得れば渡せると思う」
「もし渡せなくても、アイギスと連絡が取れる状況になったら知らせて。相手の知らない今の湊の情報を伝えるから」
顔の作りの問題だが、普段はやる気のない表情をしているように見えるチドリが、珍しく瞳にも力を籠めてジッと五代を見つめる。
五代やナタリアたちの働きによって、湊救出の成功率が大きく変わってくるのだ。湊本人のために助けに行く事が出来ない少女にしてみれば、己の無力を悔やむからこそ、少しでも可能性を上げようと何かせずにはいられないのだろう。
しかし、湊の無事を祈る少女のそんな純粋な思いも、少女らの過去について殆ど聞いておらず、かつ裏の世界で色々な人間を見てきた紅花にすれば、特に心が打たれるということもないようで、一人の少年のために動いている少女二人の関係へ興味を抱き話しかけてきた。
「あははー、前妻と現妻の修羅場みたいで楽しそうな。出来れば私も

傍で話し聞かせて欲しいよ」
「……絶対にイヤ。ていうか、どっちが前でどっちが現よ」
向いている方向が同じであれば手を組めそうだが、その中心に男がいることもあって、紅花はチドリとアイギスが友人になる可能性は低いと見ている。
これは、ここにいる他の大人たちも同様に考えているので、まだ話したこともないアイギスの性格によっては、絶対に湊に見せる事が出来ないような展開もあり得た。
実際、軽口で「前妻、現妻」という言葉を使っただけだというのに、チドリは鋭い視線で睨みながら紅花がどう答えるかをジッと待っている。
問われた本人が顎に手をあて考えている間、出発前に少女を怒らせないでくれと他の者が心の中で祈っていると、少ししてようやく相手は口を開いた。
「んー、難しいな。出会いを考えればそのアイギスさんが前でチドリが現だけど、いま湊に会いに行てるのアイギスさんですから。チドリを前にしてアイギスさんを現にしておくかな」
「……厳戸台も桔梗組の縄張り圏内だから」
「やぱり、チドリが現だな。お似合いの二人思いますよ。目付きの悪さも脅すときの汚さもそっくりですし。日本のヤクザは限度知らないことを改めて教えてくれる貴重な存在おもてます」
高速の手のひら返し。所々に嫌味が混じり、最後など全く褒めてすらいないが、流石の紅花も大勢のヤクザを敵に回すと商売を続けていられないと思ったらしい。
湊は若、チドリはお嬢と呼ばれ慕われているので、実際、二人が誰々に何かされたと言えば、組員たちは独自のネットワークを駆使して相手を追い詰める方法を探し始める。
いくら従業員のほとんどに武術の心得があったとしても、人海戦術で黒い噂などを流されてしまえば戦わずして負けるだろう。
故に、紅花が大人しく謝罪代わりの言葉を述べれば、チドリは普段通りのやる気のない表情だが、どことなく嬉しそうに見えなくもない

雰囲気をその上から纏って話しを終わらせにかかった。
「あっそ。まぁ、そんな事はどうでもいいけど」
「催促しておきながら、湊の口癖を真似して流す辺りあざといな。湊はあざとい子は嫌いよ。私の妹が証人ですから信じてよいです」
とてもいい笑顔で紅花が忠告するとチドリは黙る。
湊は紅花の実家でバイトをしていた訳だが、その容姿や料理の腕前もあって店員らの人気は高い。
中でも入れ込んでいたのが紅花の妹の鈴音であり、彼女は度々お気に入りのチャイナドレスを着て湊にアピールを行っていた。
けれど、湊は客としてアポなしに来る日と、バイトで入るのが決まっている日とで彼女の着ている物が異なることに気付いていた。
二度三度ならば偶然と捉える事も出来るが、流石にほぼ毎回だと鈍い者でも気付く様になる。
そうして、自分が来る事が確定しているときだけ上物の衣装を着ている事に関して、仕事中に身内の店員に媚を売るなら客商売など辞めてしまえ、と湊ははっきり言い切った。
基本的に面倒くさがりだが、それでも湊は仕事に対して一定の真摯さは持っている。それだけに、他の者が頑張っているときに不真面目と取れる態度を見せていた事が許せなかったのだろう。
言われた本人は、顔を真っ赤にして涙を目に溜めながら湊の頬を張って走り去ったが、本人の母親と姉は湊へお前は間違った事は言っていないとフォローし、後に頭が冷えて戻ってきた鈴音も湊に謝罪して和解している。
そんな事があったため、湊はアピール自体はしても何も言わないが、ＴＰＯを弁えた上で正面からしてくる相手の方が好ましいと思っていると紅花は読んでいた。
「まぁ、子どもの内に色々と恋愛で失敗学ぶはよい思いますよ。湊は死に場所求めてる嫌な感じするですから、繋ぎ止めるために身体使うも一つの手思いますし」
「フォ、紅花さん！　子どもになんてこと言うんですか！」
「あははー、初潮迎えてる時点で立派な女よ。これ真面目な話で湊は

私たちの手を離れていく未来しか見えないです。仮に連れ戻しても桔梗組に戻る思わない方が自然な」
湊は絆の証しだったピアスを手放し謝罪の手紙を送ってきた。それに加えコミュニティも全て壊れたとなれば、無事に帰って来たとしても以前と同じようにはいかないだろう。
仕事で得た金は十分持っているので、今の湊ならば色々と裏で手続きをして一人暮らしを始めることくらいは出来る。
「だからこそ、手放す惜しかったら自分の身体使ってでも繋ぎ止めるべきよ。湊は甘いから何も言わないでしょうが、私は同じ女としてチドリに忠告するです。本気で欲しいなら対価を払うことを厭うなと」
故に、帰ってくれれば元の生活に戻ると考えている表の住人二人へ、紅花は顔だけ笑顔のまま言葉から遊びを消してはっきりと告げた。
気付いてはいても考えないようにしていた事実を突き付けられ、少女とその養母は表情を強張らせる。
だが、二人とてただぬくぬくと温室で育ってきた訳ではない。むしろ、待つ女として生きてきた期間は紅花よりも長いのだ。
気だるげな表情をしていた少女は、忠告してきた相手の瞳をまっすぐ見つめ、相手の言葉を受け止めた上で言い返す。
「……頭の片隅には置いといてあげるわ。結婚適齢期の負け組が偉そうに恋愛を語ってたって」
「おお、随分と人の傷抉ってくる言葉な。まぁ、悩むにしても無事に帰すことが先決ですから、今は私たちがアイギスさんと接触できるよう祈っててください。私も初弟子を殺すはよい気分ではないですしね」
明るく笑う紅花の言葉は本心なのだろう。彼女は以前も風花に親切心で色々と話していたので、裏の仕事もしているといっても根は女子に優しい親切なお姉さんだ。
それを分かっているからこそチドリも相手の言葉を一応は受け取り、湊を助けるために頑張ってアイギスに会いに行ってくると言えば、しっかりと頷いて応援した。
そして、話しが一区切りついたところで、搭乗手続きが始まる時間が迫っていたこともあり、時計を確認していた五代が見送りに来てい

た者たちへ別れを告げる。
「それでは、そろそろ手続きが始まりますから行きます。オーストリアの空港に着けばロゼッタに連絡しますから、以降の連絡もロゼッタを介して行ってください」
彼らが最初の目的地に設定した場所はオーストリア。
ヨーロッパと中東を行き来しようとトルコを目的地にしているアイギスと同じように、五代たちもヨーロッパの国を巡るとりあえずの拠点として最初にオーストリアを選んだ。
向こうについてからは五代が情報屋仲間を訪ねたり、紅花が中国人街の知り合いを訪ねたりして湊とアイギスを探す予定でいる。
「おう、気い付けてな。渡瀬、しっかり他の二人を手伝ってやれい」
「はい、どうかお任せください」
オーストリアに行くまでは安全だろう。しかし、その後の活動や向かう地域を考えると彼らも命懸けだ。
チドリから受け取った秘密兵器をボストンバッグに仕舞い。五代はすぐに他の二人と共に荷物を預けて搭乗券を受け取ってくる。
出国手続きもこの後に控えていることから、五代たちは別れの挨拶も十分済ませた事でそのまま礼をして、チドリらに見送られながらゲートの方へ去っていったのだった。
午後――イラン・チャールース
ここはイランのチャールースの街。カスピ海の近くに市場街として栄えたこの場所は、夏の保養地としてよく人々が訪れるとても綺麗な街だ。
そして、そんな街の市場の近くにある大型トラックの並ぶ広い駐車場に、また一台赤い塗装の大型トラックが入ってくる。
後ろのコンテナにはトマトやトウモロコシの絵が描かれていることから、野菜を卸しにこの市場までやってきたのだろう。
何台もトラックが並ぶ駐車場でも慣れた様子で進み続け、空いている場所を見つけると一度で完璧に駐車する。
トラックが駐車するなり、助手席のドアが開いたと思えば、なんとそこから迷彩服を纏った少女、七式アイギスが軽やかに降りてきた。

「なるほど、あの遠くに見えるのがカスピ海ですね。湖なのに海とは不思議であります」
「ハハッ、俺たちの国にとっては湖でいて欲しいんだがな。他所の国は埋蔵資源のために海ということにしたいらしいぜ」
遠くに見える世界最大の塩湖のカスピ海を眺めるアイギスへ、運転席から降りてきた野球帽とサングラスを身に付けた太った中東系男性が笑って話しかけてくる。
彼のいう埋蔵資源のためというのは、海ならば排他的経済水域を海岸線から測る必要があるが、湖ならばそれを囲う国同士で均等に分割するため、イランの海岸線が少ない事を知っている多国は自国の排他的経済水域を多く取ろうと、カスピ海を湖ではなく海と国際的に定めたがっているという話しだ。
そんな国々の抱える事情を知らなかったアイギスは、感心したように頷いて、こんな綺麗な景色を前にしても人々は様々な事を考えるのだなと思っていた。
「わたしは国々の抱える事情は知りませんが、国民の生活のためにはそういった事も考えなければならないのですね」
「まぁ、俺たちみたいな一市民が出っ張ることはないがね。さて、俺が送ってやれるのはここまでだが、この後の事は考えてるかい？」
ここイランのチャールースとインドのルディヤーナーは約二三五〇キロ離れた場所にある。
アイギスがたった一週間で何故それだけの距離を移動できたかというと、森や山を進むような隠密行動を止めたのなら多少人に見られても一緒だと考え、長距離トラックなどをメインに地道にヒッチハイクを繰り返してきたからだ。
迷彩服を着た白人美少女という容姿もあって、道端でサムズアップしているアイギスはよく目立つ。
車やトラックが来る度、サムズアップと共に「ヘイ、タクシー！」という台詞を真顔で吐くのは開発者のインストールした知識の影響かも知れないが、とりあえず、ほとんどの車が止まってくれたことで、アイギスは大切な人のためにトルコを目指していると話して、何人もの

気の良い運ちゃんに乗せて貰うことに成功したのであった。
もっとも、中には善人を装ってアイギスを車に乗せ、しばらくしてからいやらしい事をしようとしてきた者もいたのだが、不穏な動きを察知したアイギスに指先の銃口を無言で突き付けられると、その後は黙って運転を続けてアイギスを限界いっぱいまで運んでくれたため、アイギスの記憶の中では全員が親切な方として認識されている。
「今後は情報収集をしながら少し歩いてみようと思っています。最近、ＥＰ社の幹部さんが狙われているという話しも聞きますから、海外のそういったニュースも知っておいた方がいいと思いますので」
一週間前のテレビで、アイギスは湊がＥＰ社幹部を殺して回っている犯人だと気付いた。
具体的にほとんど説明をしていなかったにも拘わらず、親殺しの犯人であった自身へ力を貸してくれた心優しい少年が、どうして人を殺めるようになったのかは分からない。
一般常識を知らぬアイギスですら人を殺すのはいけない事だと知っており。あの少年が自ら進んで手を汚す道に走ったとは思えないので、辛くもシャドウを倒す事が出来たムーンライトブリッジの一件の後で、彼を歪めてしまう何か起こったのかもしれないと考えた。
もしも、この推測が正しければ、少年が悪の道へ堕ちることになったのは紛れもなく自分の責任だ。戦いに巻き込まれなければ彼は今も両親と共に普通の生活を送っていたはずなのだから。
そう考えてアイギスはその事実を強く受け止め、もうこれ以上彼が手を汚さなくて済むよう、人間に危害を加えてはいけないという最高ランクの安全装置を完全に外し、彼の代わりに自分が全ての敵を排除しようとすら考えている。
少年を想うが故に固められた彼女の決意は、少年の望みとは対極であり、あの日から続いている彼の戦いを無意味にする行為だ。
しかし、両者は相手がそれぞれ自身のために動いていることなど欠片も知りもしない。知っていればそこでまた一悶着あるのだろうが、相手のためにと突っ走る二人なので議論は平行線を辿る事だろう。
まだそんな事までは考えていない少女に、トラックの運転手はここ

数日のニュースの話題を思い出しつつ、参考になるかは分からないそれを伝える。
「ＥＰ社の事件か。ここらにはそんな話しはないが、もっとヨーロッパに近い国じゃ大変らしいな。ま、一般人が巻き沿いにならないだけマシだが、あんたも近くに寄るんなら気を付けな。ガソリンを積んだ大型タンクローリーが盗まれる事件とかも起こってるらしいし。あんたが乗ったトラックが狙われる可能性もあるからよ」
「お気遣い感謝します。では、メフディーさんもお仕事がんばってきてください」
「おう。あんたも大切な人とやらに無事会えるといいな。諦めずに頑張ってこいよ」
　あっさりとした別れを済ませるなり、運転手は注文書と思われる紙の束を持って賑わう市場の方へと去って行った。
　ずっと後ろ姿を見送っていたアイギスも、相手の姿が見えなくなると運転手に貰った周辺地域の地図をリュックから取り出し行き先を考え始める。
　先ほどは情報収集をすると答えたが、今話題の事件だけあって人に話しを聞くよりもニュースや新聞を見た方が早いのだ。
　ならば、直接湊を目指して追いつけないなどという結果になるよりも、騒ぎの地域に接近するだけ接近してから、未だに襲われていない幹部のいる場所へ向かい待った方が出会える可能性は高い。
（トルコを目指すのは良いのですが、八雲さんはトルコにはほとんど行っておられないようであります。ドイツやハンガリー、ルーマニアにロシアなど範囲が広過ぎて絞り込めません。ＥＰ社の幹部がいるのはほぼヨーロッパ圏ですが、裏のお仕事をされている方に尋ねるには情報料が発生すると聞きます。無一文のわたしには使えない手段ですね）
　これまでテレビや新聞、ラジオなどで集めた情報をまとめるため、アイギスは地図に印をつけてゆく。
　その印は湊が襲ったＥＰ社幹部のいた場所であり、表のニュースになっているものだけだが、それでも三十ヶ所ではきかなかった。

これがただの事件であれば犯人の潜伏場所を割り出す重要な情報になるのだが、湊は単純に敵の元へ向かって騒ぎを起こしているだけなので、付けた印の箇所へはもう訪れないと考えていい。
となると、いよいよ裏の仕事屋たちから情報を集めなくてはいけないのだが、道具は無断で拝借してきても金銭には手を触れないできたアイギスに、情報をくれた者に支払うだけの所持金などありはしなかった。
(桐条グループの追手も気になります。わたしを探していないはずはありませんが、ここまでそれらしき人物も見てない事を考えると、わたしを捕まえるために目標の八雲さんをマークしている可能性もありそうです)
アイギス自身は八雲の情報など一言たりとも漏らしていない。
しかし、シャドウとの戦闘後にメモリを解析されていたとすれば、桐条グループに自分が湊に一種の執着を覚えている事を知られている可能性がある。
グループが現在も湊の事を捕捉し続けているかは不明ではあるものの、仮に捕捉し続け待ち構えているのなら、アイギスは戦闘に突入する事は避けられないと踏んでいる。
少年の両親を奪ったのは自分だ。ペルソナの発現を促したのも自分だ。少年を自分と同じ戦場に立たせたのも自分なのだ。
ならば、その少年を戦場から救い出すのは自分に科された使命である。それを邪魔するというのなら、例え自らを作り出した開発者であったとしても、倒して湊の元を目指すとアイギスは決めていた。
「桐条グループがどう動いているにせよ。現状で有効な作戦がないのなら、このままトルコを目指す方針でゆくことにしましょう。イスタンブールまでは残り約二千キロ。上手くいけば一週間で着くことも可能であります」
地図を確認してトルコまでのルートを大方決めたアイギスは地図をリュックへと片付ける。
ヒッチハイクにも慣れてきたので、上手くいけば彼女の言った通り一週間ほどで到着する事も可能であった。

もっとも、それには上手く長距離移動する車に出会わなければいけないのだが、しばらくは歩いて進むつもりの彼女は気にせず市場の駐車場を出てゆこうとする。
だが、出てゆく途中でアイギスは自分と似たような戦闘服を身に付けている一団を発見した。二台の大型車の近くで十人弱の男たちが通信機と双眼鏡を持って話しをしている。
この地域はどちらかと言えば長閑な場所なので、特定の軍や民間軍事会社は存在せず駐留していることはまずない。
何か事件があったのかとも考えたが、先ほどの運転手の話しではここらには湊も現れていないため、警察ならともかくわざわざ兵士が来るほどの事態はあり得ないと判断した。
(怪しい一団であります。胸のエンブレムは蠍座を模した物でしょうか？　とりあえず、関わらないに越したことはないと判断し、すぐにこの場を離れます)
普段ならば近付いて何者か尋ねているところだが、急いでいる今、訳の分からない物には近付かない事にしている。
故に、ナタリアがアイギス捜索のためヨーロッパ周辺にも派遣した部隊の者らを、その探されている本人は怪しい者たちと判断し、見つかって絡まれないよう物影を通って離れて行ってしまった。
事情を知らないからこその不幸だが、アイギスと湊の再会はまだまだ遠い。

第九十七話　掴んだ可能性

夜――バーラエナ・〝久遠の安寧〟本拠地

各国の政府や他所の組織から隠された場所にある、裏界最大規模を誇る組織〝久遠の安寧〟の本拠地。

その中にある一室でトップを務める白髪混じりの男、ルーカス・ライムント・ヴォルケンシュタインは、各地方から寄せられた同組織の構成員たちが殺されたという報告書を片手に憤っていた。

「おのれ、相手は小僧一人だと言うのにまだ始末出来んのかっ」

幹部と構成員を合わせれば、既に殺された人数は七千人を超えている。犯人のこれまでのキルスコアにそれを足せば、たった一人で一万人近い者を殺めていることになる。

娘の話しを信じるのであれば相手はたかだか十四年しか生きていない少年一人だ。

それを本職のプロたちが集団で掛かっても仕留められないとは、向かった者たちはプロのフリをした素人ではないのかと疑ったほどである。

このまま構成員が殺され続ければ、いずれ本拠地の場所を知る者にも出会う事だろう。

本拠地を知れば当然向かってくるはずなので、相手が攻め込んでくれば敷地内に存在する全ての兵器で応戦するつもりだ。

建物内部に侵入されればそれこそ終わり。現状、最強の駒であった仙道を超える戦力となる者は組織にいないので、その仙道を殺してしまった敵を屠るのは中々に難しい。

「クソっ、蛇共を遣わせようにも敵の動き方が不規則なせいで配置できん」

「あら、それでは特定の施設へ向かうよう誘導してはいかがですか？」

ルーカスが執務机で苛ついた様子を見せていたとき、客用のソファーに座って優雅に紅茶を飲んでいたソフィアが一つの提案を告げる。

ここは久遠の安寧でもごく限られた幹部にしか知られてない場所

だ。ソフィアは外の拠点に出ていたが、外部の者に居場所を知られぬように他の者たちは基本的にこの場所を出ることはない。
ルーカスも表の会社であるＥＰ社の顔役として出る事もあるが、基本はここからテレビ電話などで会議も済ませることで、この拠点が湊をはじめとした敵対勢力にばれずにいた。
流石の湊も、まさか久遠の安寧が小さいとはいえ国一つをほぼ掌握し、それを自分たちの隠れ蓑に使っているとは思うまい。
そんな事も知らずに現在も幹部を殺し続けてこの場所を探している相手を滑稽だと、ソフィアは口元を歪めながら報告書をテーブルの上に置いて、先ほどの話しの続きを父に話す。
「部下たちに重要拠点だと報せ、そこに行かせては絶対にならないと厳命を出すのです」
「ふむ、やつが心を読むのを逆手に取り、部下たちには施設のおおよその場所と重要な場所であることだけ伝えておくのか」
施設の詳しい場所や用途など部下に知らせておく必要はない。上層部が部下たちに命令してでも守らせたいと相手に思わせることが重要なのだ。
拠点防衛に当たっていた者の内、久遠の安寧に所属している者のみが殺されていたことから、湊が他人の記憶か心を読む力を持っているのはほぼ確実だ。
だからこそ、この偽の情報を知ったならば、こちらの戦力を削ぐ事を目的に動いている相手は乗らざるを得ない。
例えそこに優れた個の力を誇る名切りと対極な、徹底的に集団戦闘に特化することを目指した暗殺者一族〝蛇〟の者が待ち構えていたとしても。
とはいえ、ソフィアの考えた案の有用性は理解したが、もしそれを実行に移すとすればどこかしらの施設を囮に使う必要が出てくる。
ソフィアが過ごしていたような屋敷では囮にはならないので、消去法で海外の支部か研究所を使う事になるだろう。
下手な施設を囮に選んで破壊されれば甚大なダメージを負う事になるため、ルーカスは難しい表情で考えながらソフィアに言葉を返し

た。
「しかし、誘い込むのに適した場所など我々は持っていないぞ。ある程度の規模を持つ施設でないとすぐにばれるだろう。だが、規模が大きい場所は何かしら重要な役割を持っている施設という事になる。以前、ソフィアがしたような施設一つを囮に使う作戦などそう出来る物ではない」
「ええ、分かっておりますわ。ですから、我々のではなく他所の施設を使います。蛇を置いておけば重要施設だとカムフラージュも出来ますし。問題はありません。心配ならさらに時間差で仕事屋が向かうようにしておけば良いのですわ」
涼しげな顔でくすくすと笑って答えるソフィアには、ルーカスたち上層部とは別の思惑があるのだろう。
ルーカスにとっては自分の娘だが、遺伝子操作のおかげで才能を早期に開花させ、さらに数年前に守護天使なる力を手に入れてからは意見一つ返すにも気を遣っているため、機嫌が良いのならそれを下手に損ねぬよう、裏の思惑を尋ねることを彼は避けることにした。
組織のトップはルーカスが務めているものの、実際に権力を持っているのはソフィアなのだ。
故に、大人として親として情けないと思われようが、自らの安全のために彼はソフィアの提案を聞きいれ、彼女の言う通りの場所に湊を誘導する作戦を実行に移すのだった。

12月1日（金）
午前――高級別荘地・桐条別宅
湊を救うため名切りの情報を伝えようと桜と連絡を取った英恵。
彼女は現在も保養地の桐条別邸にいながら、桐条の保有するサーバから湊やアイギスに関わる情報を桜たちに伝える役目を負っていた。
交換条件として桜から彼女たちが得た湊の情報を教えて貰えるが、今のところ湊を巡る情勢がどんどんと悪くなっていることしか分かっていない。
そんな流れを変えるために、一部の事情を知る者たちがアイギスを

捜索して情報を渡せるように動いていることも聞いてはいるが、残念ながら捜索は難航しているようであった。
(桐条グループも彼女を見つけられないでいる。八雲君の知り合いの方と違って、アイギスの向かっている先を把握出来ていないのだから当然ね。だけど、八雲君が力に目覚めて既に三ヶ月が経とうとしている。時間はほとんど残っていないと思っていいわね)
　今日もまた桐条のサーバにアクセスして捜索状況に目を通すが、探している地域が広いだけでそれぞれが離れ過ぎていることもあり、実際に調べている範囲はかなり穴だらけであった。
　アイギス本人は、飛行機が不時着した地点から湊のいるヨーロッパ方面を目指しているというのに、桐条グループは支部のあるロシアやアフリカの方まで探していることもあって、事情を知っている英恵はもどかしい気持ちから真実を夫に伝えてしまいたい衝動に駆られる。
　しかし、それは無駄にグループの者を死なせることに繋がりかねないので、傍に置いていた紅茶を飲む事で心を落ち着かせると、英恵は深呼吸して自分が取れる手段を改めて整理することにした。
(アイギスと通信が出来れば八雲君の知り合いの方と合流して貰う事が出来る。けど、彼女は自分が連れ戻されることを危惧して通信を意図的に切っている)
　桐条側から強制的にアイギスへ通信を繋ぐ方法がないか調べてみるも、サーバには彼女の設計図等は保存されていないため、断片的に残っている彼女の運用試験データから情報を拾うしかない。
　もっとパソコン関係に明るければ、重要機密として隠されているデータを見つけて復元や閲覧することも可能なのかもしれないが、残念なことに英恵にはそれだけのスキルはない。
　現在のこの調べ物とて夫やグループの情報部に怪しまれぬよう、娘と特別課外活動部に入ったという少年二人の訓練の進捗状況と進歩状況や、新たに発足されたラボでの影時間やシャドウの研究を閲覧することで、娘の活動を心配して調べているという体を繕っている状態だ。
(私のアクセス頻度が急激に上がっていることに気付かれれば、私が

〝有里湊〟という少年を気にしていることを武治さんに知られてしまう。サーバには適性者候補として八雲君とチドリさんの顔写真も幹部以上が閲覧できる上位機密として在ったし。写真を見て疑っていると思われてしまうでしょう)

グループ総帥の命令で湊とアイギスの捜索が秘密裏に行われていなければ、勘の良い者なら英恵の調べ物の頻度がここ数ヶ月だけ異様に高まっていることに気付くはず。

そして、それが桐条の耳に入れば、サーバにある湊の写真を偶然見た英恵が、少年を百鬼八雲ではないかと疑っている可能性を考えることだろう。

妻と百鬼親子の深い繋がりを知っている桐条にすれば、英恵が湊のことで必死になるのは容易に想像がつくため、気付かれた時点で英恵の行動が全て湊のための物であることもばれてしまう。

ばれてしまえば英恵はグループの力をもっと効率的に使う事が出来るようになるが、代償として湊との繋がりを失うことになる。

いざとなれば息子のために自分の全てを犠牲にしても構わないと思っているが、有効な打開策もない状態で息子との縁が切れる事が確定してしまうことだけは避けたかった。

(屋久島での運用試験……シャドウの暴走に偽装した開発者の独断行動……シャドウの攻撃から七式を庇った彼女の死、及び彼女の言葉による人格への影響を考え、その後の運用へ支障をきたす恐れがあることから全情報をメモリから抹消……)

何か情報があるとすれば湊と出会う以前の運用データの中だと思われる。

よって、英恵はポートアイランドインパクト以前に記録された運用データに目を通していき、アイギスと連絡を取れる手段や、彼女がどういった行動指針を持って動く傾向にあるのかを調べた。

(開発者の女性はその運用試験で既に亡くなられているのね。同じ研究室にいた方もグループを離れている。岳羽詠一朗さんをはじめとした当時の研究者もほとんどは七年前の事故で……)

最も情報が得られる可能性が高い物として、開発者本人にコンタク

トを取れないか期待していただけに、既に相手が亡くなっていたと知り英恵は肩を落とす。
同じ研究室にいたという女性は、アイギスのメンテナンス等を行っていただけにハード面には詳しいかもしれないが、機能などソフト面は知らないと思われるので、英恵としては当てにするのは難しいと考えた。
その後も休憩を挿みつつ調べ物を続けるが、運用データから得られるのは彼女の最大速力が時速一三〇キロオーバーであることや、兵器として運用する際に桐条グループの者を襲わない安全装置が備わっているなど、機械としての彼女の性能に関する情報ばかりで目的の物は一切見つからない。
(絶対どこかにあるはず……重要機密なら外部保管だけでは災害事故があったときにデータが失われる恐れがあるのだから、高度なプロテクトをかけてネットワーク上にもデータその物を保管してあるはずなのよ)
キーボードに指を走らせ、開いたファイルに目を通してゆくが目ぼしい情報は欠片もない。
残された時間も少ないというのに、どうしてここまで情報がないのかと英恵は過去にデータを採っていた研究者たちを恨んだ。
今日中に見つからなければ、グループ総帥である夫に頼って情報を開示してもらうしかない。
桐条たちもアイギスとの連絡手段がないか探しているかもしれないが、タイムリミットの存在を知っている英恵とでは真剣さが違うので、他の者が調べるよりも該当する資料を早く見つけられる可能性はあった。
そんなことを考えながら英恵はさらに虱潰しに調べていると、途中でアイギスの人格を生み出す実験についてのファイルを発見する。
(……7式特別兵装開発計画?)
確かにソフト面の情報は探していたが、ＡＩ作成にも似たアイギスの人格形成の話しまで行ってしまうと分野が異なってくる。
これならば先ほどまでの機体性能に関する情報の方が探している

物と分野的にも近かっただろうと思いつつも、何かしら参考になるものはないかと資料はしっかり読む事にした。
　そこに書かれているのは想像通りといえばいいのか、やはり被験者たちの脳波パターンなどを記録し、それらを元にＡＩを形成するよう人格データを作り出して、出来たデータをパピヨンハートにインストールすることで七式アイギスは完成したという話であった。
　他には安全面から感情の起伏が乏しい方がいいのではないかという研究者の考察や、被験者たちから採取した脳波をどのように組み合わせれば命令に忠実な人格に出来るかなどの仮説も書かれている。
　被験者たちの個人情報も載っているが、こちらの方は既にアイギスとは関係がないと思って読んでいたとき、英恵はある一人の少女に関する記述に目を見開く。
（アイギスとの脳波リンク……彼女が起動している状況に限り、アイカメラやマイクで拾った音声を共有でき、さらに専用に設定された回線を用いて通信する事が出来る……見つけた、これなら、これならアイギスと直接話しをする事が出来るわっ）
　あり得ないと思っていた場所に小さく書かれていた情報が、まさか自分が求める全ての条件を満たしているとは思わず、英恵は柄にもなく拳を握りしめて喜びに身体を震わせる。
　被験者の内、ある事情を抱えたその少女だけがアイギスと脳波リンクで繋がっており、リンク自体は七年前の戦いでアイギスが中破し機能停止したことで途切れているとある。
　さらに、開発に関わっていた者は当時の事故で殆ど亡くなり、アイギスが再起動しなければ再びリンクを繋ぐ事が出来ないため、今まで一切起動の兆候が見られなかったこともあって少女のことも含めてグループ内ではこの機能自体が忘れ去られていたらしい。
　通信は少女のプライバシーを考えて専用回線が用意されており、機能自体を知らない現在のグループの者では気付くことはほぼ出来ないだろう。
　少女の父親は桐条の名士会に籍を置いているが、娘の事を除けば影時間に関わっていない人物のようなので、密かに接触すれば夫やグ

ループにばれる可能性は低いと思われた。
（菖蒲さん、どうにか八雲君を救えるかもしれないわ）
ようやく掴んだ希望に英恵は感謝し、生前から息子の未来を案じていた親友へ祈りを捧げる。
まだ大丈夫だと決まった訳ではないが、救える確率が大きく高まったことだけは確かだ。
だから、どうか上手くいくよう祈っていて欲しいと願いながら、英恵は被験者の少女〝水智恵〟に接触を図るべく、彼女の両親と密かに連絡を取るのだった。

――屋敷
去年の夏、湊と出会ったことで全身麻痺が完治した水智恵は、病院でのリハビリ入院を終えて、現在では自宅の屋敷で生活しながら週に一度だけ経過報告のために通院する生活を送っていた。
リハビリ入院が終わったと言っても、まだ走り回ることや激しい運動をする事は出来ない。
しかし、普通に歩く程度ならば支えがいらない程度に筋力が付き、文字の読み書きもそこそこに出来る状態になったことで、あとは自宅で学習とリハビリを続ければいいと退院の許可を頂いたのである。
自宅でありながら自由に回った事がなかったので、退院して帰って来てから、家族三人で住むには大き過ぎる屋敷の全貌に驚いたりもしたが、今では家の中で迷うということもなく風呂にもトイレにも一人でいける。
そんな彼女は、数ヶ月前に湊のものと思われる叫びを聞いた事で、現在も連絡の取れない彼の身を案じ、一人で部屋にいるときには暗い表情を浮かべていた。
（……もう三ヶ月近く連絡がない。今までは長くても二週間とかだったのに、これだけ連絡がないなんて何かあったんだ）
海外に行ってからも湊からは不定期にメールで連絡が来ていた。リハビリの経過を気にして尋ねてくることや、海外でこんな物を見つけたなど内容はその都度違っていたが、文章の雰囲気から元気にやっ

ていることは伝わってきた。
稀に気落ちしている様子が見られる事もあったが、少しすれば調子を取り戻していたようなので、今回のように完全に連絡が途絶えた事は異常事態としか思えない。
けれど、相手をいくら心配したところで、恵は携帯電話を通じた連絡手段しか持っていない。
桐条の情報を流す役目を負ってはいるものの、親が名士会に籍を置いているだけなので、機密情報を入手することなど出来ず、グループの力を借りることすら出来ない立場だ。
故に、恵はしっかりとリハビリと勉強をこなしつつ、たまに湊の携帯に連絡を入れて繋がらないか確認するのが最近の日課となっていた。
(危ないことばっかりしていたし。大怪我を負って動けないのかも。海外のニュースで少しでも良いから八雲さんに関わる情報がやっていればいいのに)
外国で何か大きな事故や事件があれば、日本人の被害者や犠牲者がいないかを報道してくれることがよくある。
相手の無事を祈りながらも、そういった情報でもいいから何か彼に関する情報を得たいと思うほど、今の恵の心は不安に占められていた。
《恵、貴女に電話よ》
湊のことを考えてばかりで集中力が続かず、漢字の書き取りをしていた手も止めてぼんやりしていると、扉がノックされて母親が扉越しに話しかけてくる。
自宅と病院でしか過ごしていない恵に電話をくれるような相手などいないはずだが、それでも自分宛てと言うからには出ない訳にはいかない。
相手は誰だろうかと考えつつ椅子から立ち上がり、パタパタと小さく駆けて入り口まで向かうと、扉を開けて母親から電話の子機を受け取る。
その際、通話口を手で押さえながら小声で相手は誰か尋ねるが、母

親も名士会の連絡役の男性らしいとしか知らないようで、どうして名士会の連絡役が自分に電話をかけてきたのか疑問に思ったが、あまり待たせても悪いと考え扉を閉めると恵は電話を耳にあてて話しかけた。
「はい、代わりました」
《どうもはじめまして。水智恵さん、でよろしいでしょうか？》
「ええ、水智恵は私ですけど」
母親から相手は男性だと聞いていたが、実際に聞こえてきた声は大人の女性のものであった。
流石にこの声を男性の物と間違えるとは思えないため、母親と自分の相手をしている人物は別人なのかと推測する。
ただし、推測したところで、何故そんな事をするのかという新たな疑問が浮かんでくるが、とりあえず相手の用件を聞かないことには話しが進まないため、恵は相手に名を問いかけた。
「名士会の連絡役の方とお聞きしたんですが、お名前を伺ってもよろしいですか？」
《はい。私は桐条英恵と申します。先ほどは執事に協力してもらって貴女のお母様に連絡役と自己紹介させていただいたけど、桐条に関わる内密な話をするために嘘をついてしまったの。ごめんなさいね》
相手の名を聞いた途端、恵は心臓が強く跳ねたような感覚を覚えるほど驚愕する。
影時間の密会を除けば、湊の仕事用の携帯としか連絡を取っていない自分と湊との繋がりは気付かれていないはずだが、桐条家当主夫人が直接連絡を取ってくるなどただ事ではない。
桐条家には御令嬢が一人いるだけなので、政略結婚を目的とした縁談話を持ちかけてくることも考えられず。本当に何が目的か見当もつかない。
何より、相手が自分などという公の場に出た事もない存在を認知していたこと自体が驚きだ。
桐条夫人は身体が弱くて都市部から離れた土地で静養していると聞いているが、そんな相手でも自分を知っているのだから桐条家の情

報網は侮れない。
そう考えて少しでも冷静さを取り戻そうと努めていると、英恵の方から再び話しかけてきた。
《失礼だけど貴女は身体に麻痺があって話せないと聞いていたから、こうやってご本人とお話しが出来るとは思っていなかったわ》
「あ、去年くらいに突然治ったばかりなので、まだ長時間動きまわったりも出来なくて自宅に籠もり気味なんです。ですから、お医者さん以外はまだ私が全身麻痺のままだと思っている方も多いと思います」
《そうなの。身体の自由が利かないのは辛いものね。理由は何にせよ治って健康に過ごしているのなら良かったわ》
英恵も身体が弱い事で自由に動いたり出来ない身なので、身体に麻痺のあった恵の境遇を少しは理解出来るのだろう。
窓の外にも世界は広がっているのに、手を伸ばす事も出来ない無力感。ベッドという限られた空間が自分の居場所で、ベッドの置かれた部屋が自分の世界の全てだった。
アイギスを通じて一度は外の世界を知る事も出来たが、一度外の世界を知ってしまったことでリンクが切れてからは余計に自分の世界が狭く感じるようになっていたと今では思う。
湊と出会い、治療を施して貰っていなければ自分はどのような人生を送っていただろうか。そんなＩＦの世界を考えながら、恵は相手に改めて用件を尋ねた。
「あの、内密なお話しとはいったいどういった事でしょうか？　生憎、まだ文字の読み書きや計算もろくに出来ないので、あまりお役に立てるとは思えないのですが」
《その、実は貴女の持っているある装置を譲っていただきたいの。七式アイギスとの脳波リンク装置はまだ残っているかしら？》
「っ!?」
相手の名を聞いたとき以上の衝撃が恵を襲う。脳波リンク装置は湊の指示で現在も定期的に稼働させて壊れていないかを確かめているが、それを桐条側が今さら回収しようとしてくるとは思っていなかった。

契約の上では装置は恵の物なので拒否する事は出来る。けれど、既に健常者となっていることで、影時間に関わる情報の秘匿を盾に強制徴収される可能性もあるのだ。
父親が名士会に籍を置いて桐条グループの恩恵を受けているだけに、ここでグループトップの夫人の頼みを無下に断る事も出来ない。
だが、大切な友達との唯一の繋がりであり、その友達の大切な人の役に唯一立てる条件がアイギスとのリンクが可能である事なのだ。
それを失えば湊の役に立てない。何の力も持っていない自分ではリンク出来ること以上に役に立てることなどないと言っていい。
どんな理由があって相手が装置を求めたのかは分からないが、まだ自由を得たばかりの少女にとって、恩人のために使うと決めた物をやはり簡単に手放す事は出来なかった。
「装置は、まだあります。ですが、あれをお譲りする事は出来ません」
《……麻痺は完治したと言っていたけど、まだあれを何かに使うの？》
「使うかもしれませんし。使う事はないかもしれません。ですが、それでもお譲りしたくありません。契約の上でもあれは私個人の物ですから、両親を通じて徴集しに来た場合は法的措置を検討します。あれは私がアイギスと繋がっていたという唯一の絆の証しなんです」
かなりきつい態度を取ってしまったが、相手の方が力を持っているだけに断固とした拒絶の意思を示しておかなければならない。
子どもが法的措置を取ると言ったところで、両親がそれを止めさせてしまえば、相手は何の障害もなく装置を回収する事が出来る。
仮に奪われたくないからと破壊するにしても、破壊すれば自分も使えなくなるのだからぎりぎりまで実行に移せる訳がない。
グループトップの妻がそんな簡単な事を察せないはずはないので、これは脅しなどが目的ではなく、単純に自分が本気であると相手に伝えることが目的であった。
ただし、アイギスとの絆の証しとは言ったものの、本人に会わせてやると言われれば必要はなくなってしまう。無論、まだ彼女が目覚めていないことは知っているので、〝いつか〟の話しをされればそれまで断ることも可能ではある。

それでも恵は自分に譲る意思はないと示したことで、相手がどのような態度を取ってくるだろうかと次の言葉を待った。
すると、相手は何かに堪えるような、自分の想像とは全く別のベクトルの感情が乗った言葉が返してきた。
《どうしてもあの装置が必要なの。譲っていただけないなら、少しの間だけ貸しては貰えないかしら》
「……アイギスの機能が停止してから今まで放置していたのに、どうして今になって装置が必要になったんですか？　アイギスに何かするつもりなんですか？」
装置を使えばアイギスの意識に介入出来るが、それはあくまでメインの電源が点いている状態に限り、リンクを利用した介入と本体へのダイレクトアクセスでアイギスを目覚めさせようとしているのなら、アイギスを戦わせたくない湊の意思に反するので協力は出来ない。
桐条家の御令嬢が対シャドウ対策チームに所属してシャドウと戦っているため、アイギスが目覚めれば護衛や戦力として投入する可能性が最も高いだろう。
人々のために戦っている御令嬢には申し訳ないが、優先度はお友達と恩人が圧倒的に勝るため、二人を不幸にすることに協力など出来る筈がなかった。
そうして、棘のある言い方になっている自覚を持ちながらも、理由があるのならちゃんと話して欲しいと告げてみれば、英恵はどこか言葉を濁しながら答えてきた。
《人を助けるために彼女の協力が必要なの。でも、今の彼女と話しをするには貴女の持っている装置を使うしか方法がなくて》
「今の彼女って、アイギスが目覚めているんですか？」
《ええ、三ヶ月ほど前に突然目覚めたの。彼女も私と同じ目的で動いてるはずだけど、今の彼女ではその人を助けることが出来ない。事態は既にただ助けたいという想いだけじゃ救えないところまで来てしまったから》
アイギスがまさか起動しているとは思っておらず、恵は装置の動作確認だけでなく装着してリンクの方まで確認しておけば良かったと

後悔する。
しかし、それよりも気になるのはアイギスが目覚めた時期だ。三ヶ月前、丁度湊との連絡が途絶えた時期と一致するのは偶然とは考えづらい。
恵が聞いた湊の叫びを彼女も聞いたことで目覚めた。そう考えるのが自然だろう。
口元に手を当てて思案していた恵は、アイギスが現在も湊と不思議な繋がりを持っていると考え、その彼女と同じ目的であると言った相手を試す言葉を口にした。
「……英恵様は九月十八日に叫び声を聞きましたか？」
《っ!? どうして、貴女がそれを知っているの……？》
その言葉に恵は確信する。やはり、あの叫び声は勘違いや偶然聞こえたものではなかった。
条件は不明だが湊と何かしらの繋がりを持つ者には聞こえていたらしい。
桐条家の人間が湊と繋がっていることは驚きだが、湊の旧姓である百鬼家について密かに調べてみると、桐条家とも面識のある由緒正しい旧家であると分かった。
ならば、桐条家全体を湊が憎んでいたとしても、極一部の者を自分のように密偵として利用していてもおかしくはない。彼は過程よりも結果を求める主義だから。
（にしても、流石に桐条家当主夫人を自分側に引き込んでいるとは思わなかったなぁ。八雲さんの人脈ってどうなってるんだろう）
湊の危機にアイギスの目覚めなど驚いてばかりだが、それ以上に本丸も本丸な桐条家当主の妻を湊が味方につけている事実には驚き過ぎて溜め息しかでない。
これならば自分など密偵にする必要はなかったのではとすら考えてしまう。
もっとも、湊と半年以上付き合ってきたことで、恵は自分が密偵に選ばれた本当の理由を今では分かっていた。
与える役目など本当は何でも良かった。湊は不自由な身の己を憐

れんで施しを与えたに過ぎない。湊にとって弱者を救う事は当たり前であり、それ以上の意味はないのだ。
しかし、それでは恩を感じた自分の気が済まないことも見越していたため、密偵というそれらしい役目を与えた。
助けられた上に気を遣われたと気付いたときには申し訳ないとも思ったが、感謝の言葉を贈ろうにも天邪鬼な相手は受け取ってくれない。
だからこそ、恵は相手の危機に与えられた自分の役目を果たそうと心に決める。自分に出来る事、自分にしか出来ない事で湊を助けるために。
「去年の夏の影時間に偶然出会って、私の麻痺を治してくれたのは八雲さんなんです。それからもリハビリを続ける私によく会いに来てくれて。でも、三ヶ月前からずっと連絡が来なくて……」
《あの子がしている仕事については聞いてるの？》
「人を殺したりとかって事ですよね？　それは知ってます。最初に会ったときは私も殺されそうになったんで」
苦笑して答える恵だが、実際はかなり危ないところまでいっていた。
湊がアイギス関連のことで情報を得にきた人物でなければ、動けないのを良い事に下手をすれば犯されていた可能性だってある。
だが、相手は危害を加えるどころか身体の麻痺を治療してくれたので、恵にすればあの日の事は良い思い出であった。
そう考えて、相手も自分のように何かして貰った事で協力者となっているのか疑問を持ち、恵はベッドまで移動して腰かけながら尋ねた。
「英恵様も八雲さんに何かして貰ったんですか？」
《私はあの子の母親と親友だったの。八雲君も忙しい夫と娘の代わりによく会いに来てくれてね。事故で家族全員死んだと思っていたけど、偶然再会してからは影時間にこっそりと会っていたわ。だから、私にとってのあの子は本当の息子のような存在なの。ただ親友の忘れ形見であるというだけではなくてね》

英恵の言葉から伝わってくる湊への想いに、この人物は本当に湊の味方なのだと恵も理解する。
ただ付き合いがあるだけじゃなく、湊のことをしっかりと想っている者だけがあの叫びを聞けたに違いない。
《それで、今回のこの件に関しても私や今の八雲君の保護者の方と一緒に秘密裏に行っているの》
「桐条グループは何も掴んでいないんですか？」
《表の顔としての八雲君が行方不明という事は知っているわ。でも、アイギスが八雲君の元を目指していると気付いているのは武治さんだけでしょうね。他の方たちはアイギスの目標は〝あの方〟なる人物としか理解していないわ》
湊は語学の勉強をしながら慈善活動を行うために留学に出ていることになっている。
けれど、月光館学園は海外の学校と姉妹校提携を結んで交換留学なども行っているので、湊のように個人で留学先を見つけてきた場合には完全に行動を把握出来ていないはず。
それでも行方不明だと分かっているのはすごいと、恵は相手の情報収集能力の高さにただ感心させられるばかりだ。
「それは良かったです。桐条グループの方が近付いたら、仕事中の八雲さんなら多分殺してしまうでしょうから」
《それが少し事情が変わっているみたいなの。今の八雲君はＥＰ社でも裏の仕事に関わっている者や過激派のテロリスト以外は殺さないみたいで》
「ＥＰ社にテロリストって、最近のニュースでずっと話題になってる犯人が八雲さんなんですか？」
《あの子とずっと一緒にお仕事をしていた方が殺されてしまったの。今の八雲君はその復讐で動いているわ。でも、もう時間がないの。急がないと八雲君の記憶は全て消えてしまう》
「記憶って、アイギスが八雲さんに会えれば状況は変わるんですか？」
記憶が消える理由は分からない。けれど、仮にそれが何かの病気の進行であるとすれば、アイギスが助けに向かったところで意味がない

のではと恵は考える。
すると、相手もどこか自信のなさそうな声色で返してきた。
《可能性はある、と言った方が正しいかしら。私もあの子のお母さんから聞いただけなの。でも、話してくれた本人も一族の事をよく分かっていなかったみたいでね。まぁ、数千年かけてようやく生まれた特別な子らしいから、分からなくても無理はないと思うけど》
数千年、言葉にすれば大した事はないが、それだけ長く続いてきた一族など恵は知らない。
長い年月の積み重ねが湊というペルソナ使いの中でも異端な存在を生み出したのなら、確かに現代人では分かる事も少ないだろう。
しかし、それでも自分たちのやる事に変更はない。アイギスと連絡を取り、湊と再会させて彼を救ってもらうだけだ。
思考をシンプルにまとめた恵は瞳に力を宿し、部屋の隅にカバーをかけて大切に保管してある機械を見つめながら口を開いた。
「分かりました。アイギスとの通信は私がやります。彼女に何を伝えるか、彼女にどこへ向かって貰えばいいのかを教えてください。必要なら私の携帯に直接連絡して貰って構いません」
《本当に、どうもありがとう》
「いえ、私はただ受けた恩を返すだけですから。それに大切な〝お友達〟が王子様に会いに行っているなら、やっぱり手伝ってあげないと」
《ふふっ、そうね。でも、今回は八雲君が助けてもらうお姫様側じゃないかしら。あの子はお母さんに似てとても美人だから、お姫様も十分似合うわよ》
「なるほど、両方こなせるなんてお得な方ですね」
自分たちのやるべき事をしっかりと理解し、冗談を言い合う二人に初期のような暗い雰囲気は一切ない。
湊を救うために必要な欠片を、彼が紡いできた絆同士が結びつき揃えようとしている。束ねられた絆はより強固となって大きな力を生むのだ。
湊とアイギスが出会うまで、あともう少し。

第九十八話　少女発見

１２月８日（金）
午後――ルーマニア・クラヨバ
一ヶ月ほど前にイランのチャールースにいたアイギスは、現在は約二五〇〇キロ離れたルーマニアの都市に来ていた。
前は一週間でほぼ同じ距離を移動することが出来たのだが、ヨーロッパの方に近付くほど湊の事件の影響から、警察や軍が慌ただしく動いていることもあり、怪しまれぬよう身を隠しつつ進んだことでこんなにも時間が掛かってしまった。
最初期の目的地であったトルコにもしっかりと立ち寄ったが、残念ながらそちらでは大した情報は得られず。そもそも、湊の出没地域はもっとヨーロッパに近い場所であった事で、アイギスはほとんど通り過ぎる形でトルコでの活動を済ませている。
長距離トラックのヒッチハイクも、やはり湊の件で知らない人間を警戒しているのか上手くいかず、最近の移動はもっぱら徒歩である。
そうして訪れた街の中を進むアイギスはというと、集音マイク機能で人々の会話に耳を傾け情報収集を行っていた。
（なるほど、最近の事件はこの国よりも西の方へ集中しているのですね。しかし、ＥＰ社の本社を襲っていないことを考えると、八雲さんは一体何をしようとしているか疑問が残ります）
湊がＥＰ社幹部殺しの犯人であるならば、復讐の対象は当然ＥＰ社に関わる者なのだろう。
けれど、全ての社員が殺されている訳ではなく、もっと言えば本社ビルがそのまま無事に残っていることで、本当に湊の狙いはＥＰ社の者なのだろうかと不思議に思うのも無理はない。
歩きながら顎に手を当てアイギスは考え込むが、彼女が持っている情報はエリザベスから教えて貰った、湊が仮面舞踏会の小狼という名で裏の仕事をしていることと、偶然テレビを見て知ったＥＰ社幹部殺しの犯人が湊であるということのみだ。
殺された湊の大切な人がどのような人物であったのかも知らなけ

れば、現在の湊がどれだけの実力を持っているかも分からない。
耐久力に関しては、ＲＰＧ７の弾が直撃しても常人を超えた速度で移動していたため、自身と同じ対シャドウ特別制圧兵装シリーズすらも超えているのではと考える。
流石の鋼鉄のボディも対戦車用に使われる弾頭をまともに受ければ甚大なダメージを負う。仮に対ショック性の防護服を着ていたとしても、衝撃を完全に殺しきることは不可能なので、自分が同じ場面に出くわせば無様に地面を転がっていたはずだと、人間では考えられない耐久力にアイギスは素直に感心していた。
（あの黒いマントにも秘密がありそうです。わたしも同じ物を頂けないか出会ったときに訊いてみましょう。もしも、あの耐久力がマントのおかげならば、わたしも装備すれば戦力が三十パーセント向上します。防御が如何に大切か分かる数値でありますね）
正しくはフード付きのコートと呼ぶべきなのだが、確かに湊はマントのようにはためかせてもいたので、アイギスがあれをマントと思ってしまっても無理はない。
そして、彼女の推測通り、湊の耐久力の約半分は外套のおかげであった。
負った怪我は湊の生命力を使ってファルロスが治してくれるが、名切りの身体は頑丈であるだけで限度を超えれば怪我は負うのだ。
それをあの外套は圧力と言い換えても良い衝撃以外は全て防ぎ。爆発の炎も弾丸の貫通力も全て防いで衝撃もいくらかは軽減させるため、湊はただ歯を食いしばって耐えるだけで良いレベルまでダメージを抑えられている。
外に出ている掌や顔は守りきることは出来ないが、そちらも身体を捻る事で湊は上手くやり過ごしているため、外套のガードを抜くには物理的な力で押し切る他なかった。
兵器類の情報を多数インストールされているアイギスだからこそ、それらの情報を元に湊の装備の機能もおおよそ予想出来た訳だが、そんな事を考えながら街を歩き続けていた彼女の頭の中に突如声が響いてきた。

《アイギス……アイギス、聞こえる？》
「っ!?　これは直接わたしに通信を繋いでいるのですか？」
突然聞こえてきた少女の声に困惑するアイギス。
桐条との通信機能は完全にカットしているため、今の自分に直接通信してくることなど出来ないはずだが、通信が繋がっているのは事実なので自分も知らない秘匿回線が残っていたのかと、ここまで来て桐条グループに居場所を捕捉されたことに思わず歯噛みする。
どうにかこの回線を維持している回路への電力供給を絶てないか、自分のボディに関するデータをアイギスが検索していると、先ほどの少女の声が再び聞こえてきた。
《良かった、繋がった。お願いアイギス、八雲さんを助けるために貴女の力を貸して欲しいの》
「八雲さんを？　すみません、貴女は一体誰ですか？」
《私は水智恵。あの日、八雲さんの叫びを聞いた一人よ。それと、この回線はプライベートラインだから桐条グループは貴女の居場所を感知してないの。だから安心して》
携帯電話すら持たずに一人で話しをしていると周囲の人々が怪訝な顔をして見てくる。
目立つのは避けたいアイギスは、少し早歩きで路地の方へ向かい再び相手に問いかけた。
「貴女も八雲さんの声を聞いたのは分かりましたが、貴女と八雲さんの御関係は？　あの声はコミュニティと呼ばれる繋がりを持つ者だけが聞くことが出来ると、以前お話ししたエリザベスさんが仰っていました。このような秘匿回線を持つ桐条に関わる方と八雲さんの繋がりが想像出来ないのですが？」
《関係っていうと難しいけど、八雲さんは私の病気を治してくれた恩人なの。あと、これは秘密にしておいて欲しいんだけど、八雲さんは元々桐条家とも付き合いのあった旧家の御出身みたいなの。だから、その関係で桐条英恵様も八雲さんに個人的に味方しているわ》
桐条英恵が現桐条グループ総帥夫人だという情報はアイギスにも入っている。

影時間の自然適合者である時点で只者ではないと思っていたが、大切に思っている少年がやんごとなき身分でもあったことに流石だとアイギスは敬服の念を抱く。
「なるほど、では桐条グループも実質八雲さんの物であるということでありますね」
《え？　いや、それは違うけど》
「しかし、夫は妻に勝てぬとは昔からの常識だとデータにもあります。そして、グループ総帥の奥方が八雲さんの味方ならば、間接的に八雲さんがグループを牛耳る事も可能ではないのですか？」
《えっと、個人的な才能とか能力の話しなら企業運営も出来るでしょうけど、八雲さんは桐条グループを恨んでいるから牛耳る前に潰してしまうと思う。貴女が眠っていた間も八雲さんには色々とあったみたいだから》
その言葉を聞いてアイギスはハッとする。
彼はあくまで桐条グループの被害者だ。戦闘に巻き込まれたのは不運としか言いようがないが、彼の両親を死に追いやったのは間違いなく桐条グループである。
そしてさらに、自分は彼の両親が死ぬ直接の原因を作った張本人。意気揚々と救うなどと口にしていたが、相手を不幸にした者がそんな事を言うのは非常におこがましいのではと思ってしまう。
なにより、人をシャドウの脅威から守るために生み出された自分が、救う前に人を殺めてしまっている事実がある以上、本来ならば機能停止している内に廃棄されるべきである。
故に、自分に与えられた任務すら満足にこなせない自分は、彼に会わせる顔がないと暗い表情をしながら、アイギスは己の胸の内に湧いた不安を相手に打ち明けた。
「では、わたしも八雲さんに恨まれているのでしょうか。彼を助けたいなどと思って出てきましたが、あの方のご両親を殺したのはわたしです。そんなわたしに八雲さんを助ける資格など……」
《それは大丈夫。八雲さんはアイギスのことをずっと心配していたもん。貴女が屋久島の研究所で眠っていると聞いて、未だに修理も出来

ない人間に預けていて良いのかって怒っていたし。攫いに行くべきかとも言っていたんだから》
「八雲さんが……わたしを？」
　実際の修理はほぼ完璧に行われており、目覚めていなかったのは湊に言われた２００９年に再起動の時期を設定していたからだ。
　シャドウとの戦いがなければ自分は不要。だからこそ、アイギスは自分を必要なとき以外は封じておく意味も込めて再起動まで外部からの干渉をシャットアウトする設定を自らに行った。
　もっとも、それらの設定を上回るほど強固な繋がりによって湊の危機を察知し目覚めた訳だが、親を殺した犯人の自分を少年がそんな風に想ってくれることが信じられず、アイギスはやや動揺を見せながら返す。
「し、しかし、あの方の人生を歪めたのはわたしです。あの日の事がなければこんな事にだってならなかったはずであります」
《そうかも知れないけど、八雲さんは貴女に会えた事には感謝してたよ。自分は貴女に救われたから、自分も貴女のためになることをしてあげるんだって。多分、どれだけ復讐に囚われようとその想いだけは無くしてないと思う》
　相手の言葉を通じて湊の想いに触れたアイギスは、先ほどまで感じていた不安が全て晴れるほどの喜びに胸が詰まりそうになる。
　相手に救われたのは自分の方だ。いまここに自分がいるのは、少年が共にシャドウと戦ってくれたから。
　彼がいなければシャドウを倒すことは出来なかった。戦いの記憶はほとんど失われているが、そのことだけは自信を持って断言できる。
　にも拘らず、少年は己が救われた側だと思い込んで、人々を守るために戦うだけの機械の自分にその優しさを分けてくれた。
　ならば、今度こそ本当に自分は相手にその恩を返さなければならない。義務や使命ではなく、自分自身の意思で彼女はそれを選ぶ。
　そうして、アイギスは瞳に強い光と想いを宿して顔を上げた。
「あの方に恨まれることを想像すると、何と言えばいいのでしょうか。

その、怖い……です。しかし、それでもわたしはあの方を助けたい。その気持ちがどんどん強くなってゆくんです。ですから、どうすればあの方に会えるのか教えてください」
《わかった。まず、現状について伝えるね。いま、八雲さんは〝久遠の安寧〟って組織と彼らが懸けた懸賞金によって世界中の仕事屋の人たちに狙われてるんだって》
「久遠の安寧？　ＥＰ社ではないのですか？」
《そのＥＰ社の裏の顔が久遠の安寧って組織らしいの。アイギスがＥＰ社の件を知ってるのはちょっと驚いたけど、全てのＥＰ社の社員が殺されている訳ではない理由は、八雲さんの狙いはあくまで久遠の安寧の構成員だからなんだって》
　アイギスがＥＰ社幹部殺しの犯人は湊だと気付いたのは偶然だ。恵がそれについて驚いても不思議ではない。
　しかし、彼女の説明を聞いたことで、アイギスもずっと疑問に思っていたことのいくつかが解消され、一見不可解な湊の行動にも納得が出来た。
「なるほど、表の企業だけに勤めている方は対象外ということでありますね。ですが、世界中が敵となると敵の元まで辿り着くことすら難しいのでは？」
《それ以前に相手の本拠地が不明だから、八雲さんはそれを探りながら幹部を殺しまわっていると見られているの。八雲さん救出チームの方でもそれを探しているんだけど、どういう訳か全然尻尾が掴めてないのが現状ね》
　久遠の安寧の本拠地は国一つを隠れ蓑に使っている。それを知っているのは本国にいる幹部くらいなものなので、映画やドラマでよく見るような怪しい物流の動きを追ったところで彼らの本拠地を見つけるのは難しい。
　こればっかりは物流のスペシャリストを頼らなければ、運を味方に付けて虱潰しに各国のそれらしい場所を探ってゆくしかない。
　だが、湊救出チームにそんな優秀なカードはないため、出来ない事を悔やむよりも何が出来るかを把握した方が賢明であるとアイギス

は質問を続ける。
「その救出チームはわたしの他にも海外へ来ているのですか？」
《日本から出ているのは三人、さらに中東の民間軍事会社も捜索に協力してくれているの。あ、私や八雲さんと日本で暮らしている方たちは今も日本にいるけど。桐条グループが貴女と八雲さんを捜索してるから気を付けてね》
　アイギスが絶対に出会う必要があるのは五代たちの探索チームだ。彼らと出会いチドリからの贈り物を受け取った上で、英恵から話しを聞いた桜に名切りの情報を聞かねばならない。
　また、その後にはチドリも現在の湊の情報を話すつもりなので、会って何が起こるか分からない以上は、より多くの情報を得て対処法を考えておいた方が良いだろう。
「お気遣い感謝するであります。それで、わたしはそのチームと合流すべきなのでしょうか？　無一文なのでこちらから連絡することは出来ないのですが」
《私が中継してあげるから大丈夫。とりあえず、最寄りの街にいる人と合流して、そこから本隊に合流することになると思う。八雲さんを助けるには貴女に知って貰う事があるらしいから、絶対に合流して話しを聞いてね》
「知って貰うこと？　何の話しかは分かりませんが了解であります。それでは、最初のナビゲートをお願いするであります」
　元気よくしっかりと答えたアイギスは、その後、恵の指示に従って蠍の心臓の隊員のいる街へと向かい隊員との合流を果たした。
　脳波リンクでアイギスと通信を行っていた恵は英恵に桜たちと中継してもらい。その桜もロゼッタに五代たちと蠍の心臓の両者へ中継して貰うというかなり面倒なやり取りをしていたのだが、この情報伝達方によって湊救出チーム全体にほぼリアルタイムでアイギス発見と合流の報せが届いた。
　五代たちはナタリアと直接連絡を取る事ができるため、蠍の心臓が桐条グループよりも先にアイギスを確保した以上、ほぼ確実に合流は可能となった。

そして、アイギス・五代・ナタリアのそれぞれのチームは合流場所を改めて決めると、救出作戦に向けて合流場所へと集まるのだった。

影時間――オーストリア・郊外の森

今日もまた武装した兵に守られた久遠の安寧の幹部を殺し、追ってくる仕事屋たちの攻撃が市民を傷付けぬよう注意しながら逃げていた湊は、影時間に入り追手が消えたことで、身体を休めるため街のはずれにある森へと移動していた。

外套には血と火薬の匂いが染み込み、嗅覚も優れている湊にとってはキツイはずだが、当の本人はそんな事に構っている余裕もないのか、一歩一歩ゆっくり進んでいたかと思うと突然地面に倒れ込んだ。

倒れたまま起き上がる様子もなく荒い呼吸を繰り返している少年を気遣い、彼に宿るシャドウの王が霊体に近い状態で出てくる。

《湊君、一度しっかり休もう。教会を出てから睡眠も食事もろくに取ってないじゃないか。このままでは敵の元へ辿り着く前に死んでしまうよ》

教会にいたときはシスターが湊に食事を与えていたが、それ以降、湊は敵を殺すためだけに動き続け、ファルロスの言う通り食事も睡眠もまともにとっていなかった。

そんな状態でも一月以上活動出来るのだから大したものだが、それも今まで摂っていた食事の栄養を名切りの身体が自然に蓄えていたからこそ、少しずつ消費することで続けられているに過ぎない。

《僕の蘇生効果が落ちてきているのは理解しているんでしょ。エネルギー源として使っている君の生命力は、食事や睡眠によって回復するんだ。このままだと蘇生どころか傷の治療すら出来なくなるよ?》

最初は超速再生が可能だったファルロスの回復補助も、今では生命力の減少によって傷の完治に数分から数十分を要するようになっている。

完全に枯渇して死んでは困るので、一定値よりも少なくなればファルロスも補助その物を停止するつもりでいるが、今度は怪我の治療もしないまま戦闘を続ける事が懸念されるため、ファルロスは根本的な

問題の解決を提案していた。
ただまともな食事と睡眠をとれば良い。実に簡単な解決法であり、これで作業効率があがるのであれば湊にとってもプラスになるはず。
しかし、倒れたままでいた少年はフードの端から蒼い瞳を覗かせ、傍らにしゃがみこんでいた相手へ言葉を返してきた。
「……そんな、余裕はないって、言ってるだろ」
《たった一日だ。それだけ休養に当てれば君の回復力なら六割は回復する。僕の力も十分使えるようになるし。目的を叶えるには必要なことだよ》
「もう、時間がないんだよ」
言いながら少年は地面に手を突いてゆっくり身体を起こす。
戦闘時の姿からは想像出来ないような弱り具合だが、なんとか立ち上がったことで湊は背を預けて座れそうな近くの木を目指し歩き出した。
その隣にはまだ霊体状態のファルロスがいるが、湊の身体の変化の詳しい理由を知らない相手は、心配そうにするばかりで詳しく尋ねられずにいる。
すると、木の幹に背中を預けて腰を下ろした湊の左側に同じく半顕現状態で霊体化した鈴鹿御前が姿を現し、一切の遊びのない真剣な表情で口を開いてきた。
《八雲、あとどれだけ残っている？》
「……とりあえず、両親の顔は思い出せないよ」
今はまだ歩くのも厳しいのか、顔を俯かせて体力の回復を待っている湊が吐いた言葉を聞いたとき、鈴鹿御前は苦々しげに表情を歪め瞳に怒りを宿す。
彼女がどうしてその様な表情を作ったのか分からないファルロスは、直前の問いの意味も含めて彼女に尋ねていた。
《残っているって、どういう意味だい？》
《……今の八雲はペルソナの行使に適性値を一切消費しておらぬ。その代わりに此奴は己の人格、いや、記憶を消費しておるのじゃ。忌々しい亡霊共のせいでな》

ふんと鼻を鳴らす様に吐き捨てる鈴鹿御前。
全身から怒りと嫌悪感を出し。彼女は本気でその〝亡者共〟を嫌っていることがはっきりと伝わってくる。
けれど、話しを聞いていたファルロスにすれば、彼女もその亡者の一人に他ならず。これまで湊の精神世界で言葉を交わしたことがなかったにしろ、同じ名切りならば彼女も茨木童子らと同じ考えを持っているとしか思えない。
故に、湊がこんな状態になっているのは自分たちのせいではないかと、視線を険しい物にして言葉をぶつけた。
《記憶を消費してるって、その原因が過去の名切りたちにあるのなら、君たちが湊君をこんな目に遭わせているんじゃないかっ》
《たわけ。妾を他の下衆共と一緒にするな。殺人衝動の植え付けも、此度の神降ろしも妾は一切関与しておらぬ。妾は八雲に次ぐ力を持つ名切りじゃぞ？　他の亡霊共の精神干渉など全て撥ね退けられるわ》
相手が言葉を荒げてきても、鈴鹿御前は不遜な態度を崩さず。むしろ、相手を冷ややかな目で見ながらその発言を切って捨てる。
名切りは血に過去の者たちが宿り、そこから知識や技術を引き出す関係上、力を引き出す側は過去の名切りらの意思に精神を引き摺られるようになっている。
だが、湊の母親である菖蒲のように力をほとんど引き出せていない者や、鈴鹿御前のように強い力を持っている者は、前者はそもそもほとんど干渉しておらず、後者は他の意識を捻じ伏せる事で引き摺られることを避けていた。
そんな精神の在り様は血に宿るようになってからも継続され、今も鈴鹿御前は名切りの総意からは外れて行動する事が出来ている。
もっとも、多くの力を引き出しておきながら、始祖である茨木童子が束ねた名切りの総意を撥ね退けられるだけの精神力を持った者など、数千年にも及ぶ名切りの歴史上、たった二人しか確認されていない。
その一人が、歴代最強の当主にして最も完全なるモノに近付いた存

在と呼ばれた、生前名〝百鬼（なぎり）　紫乃（しの）〟こと鈴鹿御前であり。もう一人が、今代百鬼家当主にして完全なるモノへと至る事の出来る鬼龍の混血児〝百鬼　八雲〟である。

ただし、鈴鹿御前の時代と湊の時代では名切りの業の規模が異なっているので、仮に鈴鹿御前が現在の規模の業を撥ね退けようとしても呑み込まれる可能性が高い。

それだけに、血に目覚めるまで殺人衝動を植え付けられながらも普段は抑えこみ、現在も度々ペルソナを使わせようとしてくる茨木童子の意見を拒否し続けている湊の精神の強さを、鈴鹿御前は素直に大した物だと感服していた。

《やれやれ、随分な言われようだ。名切りの全てを継ぐと言うのは、即ち〝完全なるモノ〟に為るということだぞ？》

そんな風に霊体状態の二人が言葉を交わしていると、そこにまた新たな参加者が姿を現した。頭に鬼の土面を被った隻腕の鬼、名切りの始祖である茨木童子だ。

彼女も他の二人と同じく半顕現状態で現れると、湊の正面にしゃがんで子どもの様子を確かめながら、他の二人へ言葉を続ける。

《八雲の望んだ平和な世界とやらは、この神降ろしが達成されれば成就する。我ら一族の悲願と八雲の願いが叶うのだ。何も問題あるまい》

《戯言を抜かすな山姥め。貴様ら何ぞに八雲はやらん》

《やるも何も八雲は初めから私の子どもだ》

《貴様の血よりも妾の血の成分の方が多い。八雲の剣戟の才は妾が一代で築いたものだぞ？　一方で、貴様は八雲に何の才を残したのだかな。ああ、見た目か？　まぁ、其方は九頭龍の血でもあると思うがな》

相手が現れた途端に嫌そうな顔をした鈴鹿御前は、元の身長差と履き物で相手よりも顔半分ほど高くなった目線から、立ち上がってきた茨木童子を見下して嘲りの表情を作る。

実を言えば、名切りは全員が優れた才を持って生まれた訳ではない。血に目覚めてもろくに過去の名切りの力を使えず、ただ子に名切りの血を継がせるだけの存在となった者も中にはいた。

鈴鹿御前はそんな者もいる中で特に優れた才を持ち、名切りの武芸の才はほとんど彼女一人で完成させたと言っても過言ではなかった。
もっとも、彼女よりも後の時代の名切りは彼女の才を血から引き出そうとしたが、当主でありながら名切りの一族を嫌っていた彼女は、深い層に潜り誰にも自分の才を分け与えずにいたため、後世の名切りたちは他の名切りの力を引き継ぎ自分たちでその高みを目指すことになったという裏話もある。
にも拘らず、鈴鹿御前は生まれた当初から湊を個人的に気に入っていたようで、彼には自分の才を分け与えており。下位互換でしかなかった約七百年分の名切りたちの武術の結晶を上書き保存してしまった。
血に目覚めた現在ならば、その七百年分の記憶も全て湊は引き出せるが、湊自身の武術の基礎は鈴鹿御前から贈られたものだ。
それがあったから生き延びられた場面も一度や二度ではないため、先祖を敬わない不遜な態度を続ける彼女に、茨木童子は小さく嘆息しながら言葉を返す。
《はぁ……自らを血に宿らせ、子孫らはその宿った力を引き出せるよう術をかけたのは私だぞ。人を超えた耐久度と回復力を誇る肉体もそうだ。まぁ、それらは全て私の母上が神族の龍人種だったが故の恩恵だが》
《己が半神として生まれたならば、その時点で諦めれば良かったものを。意地汚く神の位なんぞ求めおって》
《子により良き物をと望んで何が悪い。人を超え鬼となり、鬼は畏怖の念を抱かれ神の位へと至る。そうして、漸く願いが成就するときがきたのだ》
話す彼女の顔には来たるべき願いの成就の時を思う歓喜しか無い。
自分たちの願いが叶い、愛子(まなご)は人を超えた上位存在である神へと至る。これを喜ばずにいられようか、という彼女の考えは心を読める湊でなくとも容易に想像がついた。
相手のそんな顔を鈴鹿御前は忌々しいとばかりに睨み、ファルロスは以前精神世界でも感じた狂気の先にある願いの一端を理解したこ

とで、彼女たちが今ここにいる湊を生贄とするつもりなのだという事実に表情を暗くしていた。
「……本人の前でごちゃごちゃと五月蠅い」
《八雲っ、だが、お主は此奴らのくだらぬ願いを叶える、哀れな生贄にされようとしておるのだぞ》
「茨木童子たちが何を願っているのかは詳しくは知らない。けど、俺の記憶は簡単には奪わせない」
ペルソナとシャドウがそのような会話をしていると、先ほどまで弱り切っていた姿を見せていた少年が突然立ち上がり、光の宿った蒼眼で三者を射ぬいた。
座っていた時間は十五分にも満たないはずだが、それでも呼吸が整うだけの体力は回復したようで、湊は支えもなく真っ直ぐ立っている。
自らの記憶を奪わせないと凄絶な色の瞳で吐いた相手を、誰が直前まで死に体だったと思うだろうか。
《奪っている……という表現は正しくないが、確かに古い記憶から消えてゆくと言うのに、ある事柄に対する記憶というか感情だけはまだ失っていないようだな》
人格の初期化は最初から〝そういう仕様〟になっているだけだ。鬼と龍が再び一つになれば姉妹に分けて与えられた力も一つに戻るようにと組み込まれたプログラムに過ぎない。
失うのは一般的に〝思い出〟と呼ばれるエピソード記憶のみで、意味記憶と手続き記憶に関しては保持したままとなる。
仮に、既に失った記憶の中で出会っていた者と遭遇しても、湊はエピソード記憶の他に人物の情報をプロフィールのように意味記憶としても保持していたため、相手との思い出話は語れないが名前や自分及び知り合いとの関係性についてだけは覚えているので対応は出来た。
だが、茨木童子は赫夜比売と同じように他者の記憶を覗くこと出来るのか、湊の中である物に関わる想いだけ失われていないことに気付き、不敵に口元を歪めて言葉を続ける。

《なるほど、記憶に基づく感情の保持に力を削がれているが故の余計な体調の悪化か。そうまでして守るとは、その想いだけは余程忘れたくないと見える》
《……七式アイギスと吉野千鳥か》
《流石に解るか。尤も、それらに関わる想いか精神の均衡を失えば、水の低きに就くが如し、時間を置かずして八雲は阿眞根（あまね）と為るだろう》
自分の体調が悪化しようと湊が守る想いなど、大切な二人の少女に関わる物以外にないと鈴鹿御前たちもすぐに気付く。
話していた彼女自身も二人に隠すつもりなど欠片もなかったようで、探査能力を利用し目を閉じて周辺の地形を探っている少年に関する事を容易く暴露した。
ただし、隠すつもりがなかった理由は、どれだけ湊が抵抗しようと時間の問題だと思っているからのようだが、地形を把握しながらも話しを聞いていたはずの当人はその事に一切触れず口を開いた。
「北西へ向かう。あいつらの上層部が守るよう伝えていた拠点の一つがそこにあると言っていた。規模は分からないが、重要拠点であれば守りにも人数を割く筈。一気に狩るには丁度良い」
言い終わるなり少年は三人をその場に置いて一人歩き出す。
今日会った敵たちは、上層部からドイツにある研究施設へ行かせるなと命令を受けていた。ドイツはここオーストリアの隣にあるので、すぐ近い拠点に来るのを防げと上層部も命令したに違いない。
そう考えた湊は、場所の詳細はまだ分からないがおおよその場所は敵の記憶から読み取っているため、移動の手間を省けることもあってその場を目指すことにした。
しかし、時間経過で記憶が失われようとファルロスの言う通り休むことで、思考の余裕を取り戻せていれば気付けていただろう。湊の読心能力を理解している敵がそんな拠点の場所をばらすような命令の仕方をする訳がないと。
けれど、イリスの復讐と少女たちの平穏を目指し続ける少年は、それに固執するが故に己の視野が狭まっていることに気付かず、自ら己を窮地に陥らせてゆくのだった。

第九十九話　救出班の合流

１２月１３日（水）
――オーストリア・ウィーン
ウィーンの街にあるホテルのミーティングルームらしき内装の部屋。そこで、蠍の心臓の社長を務めるナタリアはある人物の到着を待っていた。
すぐ傍には私兵たちが控え、部屋の外の廊下にも同じように私兵や隊員たちが控えており、何者かが襲ってきても警備体制は万全だった。
「……そろそろ来る頃ね」
私兵たちは立ったまま警護しているが、ナタリアはドレススーツに身を包み既に会議用のテーブルについている。
そして、同じように座って待っている五代たち三人に話しかけながら、腕時計で時刻を確認して派遣していた部下が目的の人物を連れてくるのを待つ。
本来ならばこのように時間をかけている暇はないが、直接会って話さない事には対湊用の作戦を立てるのも難しい。
故に、湊の目撃情報があった場所の近くを集合場所に指定する事で、集まる間にロスした時間を少しでも短縮して次の行動へ移れるようにしていた。
ナタリアと同じように湊とアイギスの捜索に海外へやってきた三人も、冬の装いでアイギスの到着を心待ちにしていると、それから二十分ほど経ってからようやく扉がノックされた。
何かあればノックすらせずに隊員が入ってくるので、ノックしたからには目的の人物が到着したのだろう。
そう思って一同が待っていれば、予想した通りに軍服の上から隊員に借りたらしい冬用のコートを羽織ったアイギスが扉を開けて入ってきた。
「お待たせしました。対シャドウ特別制圧兵装シリーズラストナンバー〝七式アイギス〟、ただいま到着したであります」

入ってきたアイギスは真面目な顔で敬礼しながら部屋の中にいた者たちへ挨拶をする。
国や軍隊によって敬礼の構えは微妙に異なるので、ソ連陸軍式の敬礼を隊員らに教えているナタリアは苦笑するが、しかし、これでようやく役者は揃った。
敬礼を解いてアイギスがテーブルまで近付いてくると、他の者も立ち上がり彼女を迎えた。
「はじめまして、蠍の心臓の社長を務めているナターリア・イリーニチナ・メドヴェージェヴァよ。言いにくいでしょうから、ナタリアでいいわ。ボウヤのガールフレンドと聞いていたけど、ボウヤより少し年上みたいね」
「ボウヤ、とは八雲さんの事でしょうか？　実年齢は異なりますが、確かにわたしは十七、八歳ほどの見た目で作られましたので、八雲さんよりも年上に見えるかもしれません」
湊の年齢は影時間やベルベットルームの鍛錬分で経過した時間を加えても、せいぜいが十六歳ほどなのでアイギスの方が僅かに見た目の年齢は上になる。
年齢についてアイギス自身はとくに気にしていないが、それでも湊を止めるために母性を感じさせる要素が少しでも多くあった方が良いと考えていたナタリアは、黙っていれば年上の落ち着いた女性といった雰囲気を持つ彼女に満足気な表情を浮かべている。
そんな風にナタリアとアイギスが会話をしていれば、傍に来ていた五代たちも話しを円滑に進めるために自分たちの自己紹介をしてきた。
「どうも、はじめまして。僕は五代。そして、こちらは渡瀬さんと紅花さん。僕たちは小狼君と貴女を探しに日本からやってきたんだ。彼の名前については情報が漏れる恐れがあるから、このまま小狼君と呼ばせて貰うよ」
「了解であります。エリザベスさんからは動けるのはわたしくらいだと聞いていたので、八雲さんを探しに日本からやってきている方がいて素直に驚いています」

「エリザベスさんと話したのかい？　なるほど、だから貴女は彼がいるヨーロッパの方へ向かえていたのか」
話しを聞いて納得したように頷く五代。
彼だけでなく、ナタリアたちもアイギスがどうやって湊がヨーロッパの方にいると知って、そのまま近付いていたのかがずっと気に掛かっていた。
ペルソナについて知っている者は、理由が不明だったことで、彼女も湊と同じようにペルソナの特殊な力で居場所を感知しているかと考えていたが、エリザベスに会った事のある五代と渡瀬は、今回もベルベットルームの住人が客人のため力を貸していたのかと理解する。
以前はホテルの駐車場を丸ごと崩壊させる力を発揮した湊を止めてくれたが、今回は自分たちが動かない代わりに、最重要人物であるアイギスが少年の元に辿り着くようサポートしてくれた。
これがなければアイギスを飛行機に乗せて移動させられない関係上、救出作戦も間に合わなかった可能性があるので、住人たちの素晴らしいサポートに感謝せずにはいられなかった。
心の中で彼女たちへの感謝を祈りつつ、時間を無駄にしないようあらかじめ決めていた説明を五代は始める。
「小狼君を助けるに当たって、僕やナタリアさん達が出来るのはせいぜい貴女を彼の居る場所まで連れてゆくことくらいだ。僕の情報屋のネットワークと隊員の集めた情報によって、彼がいる場所を割り出して貴女に伝える。だから、それが終わるまでにアイギスさんには日本にいる彼の味方と話しをしておいて欲しいんだ」
「それが八雲さんの生まれの話しなのですね？」
「ああ。多分、驚くような事も沢山あるだろうけど、復讐に走ってからも彼は心の奥底に優しさを残している。だから、アイギスさんの知っている彼の姿を信じてやって欲しい」
日本にいた頃からの通算で、既に一万人以上の人間を殺している化け物を、理性は残っているので怖がるなと言ってもそれは難しい話しだ。
けれど、それは敵に対しての姿であって、味方が知っている彼の不

器用な優しさは健在である。
イリスが教えた思考と感情を切り離す特殊技能によって、仮に湊が敵を前に激昂していたとしてもアイギスやチドリの言葉なら届く筈なのだ。
だからこそ、再会した湊がどれだけ変わり果てていようと、自分の知っている彼だと思って欲しいと五代は願う。
すると、
「ご安心ください。そもそも、わたしは八雲さんが人間ではない事を知っておりますので、例えペルソナやシャドウだったとしても驚きはすれども拒絶する気など微塵もないであります」
『……え？』
そんな五代の心配もどこ吹く風と、どこか堂々とした佇まいの機械の乙女は、にっこりと笑いながら一同が驚くような事を平然と言ってのけた。
警護していた隊員も、仕事中はほとんど隙を見せない渡瀬すらも、アイギスの言葉にやや呆然としている。
盗聴や情報の拡散を防ぐためにナタリアは湊の素性を極一部の隊員にしか話していない。アイギスをここへ連れてきた隊員らは、その対象外の何も知らない者たちなので、誰も湊の素性を彼女に教えているはずはないのだ。
けれど、五代たちが話す前にアイギスは湊が人間ではない事を知っていると言った。
まさか、桐条家は名切りの詳しい事情を知っていて、それをアイギスにもインストールしていたのかと考えた五代は、彼女の知る情報の情報源を突きとめる事にする。
「アイギスさん、小狼君が人間じゃないというのは？」
「より正確に言えば、八雲さんはホモサピエンスに酷似した生物であると知っているであります」
「どこでその情報を知ったのか聞いても良いかな？」
「知ったのは七年前のムーンライトブリッジであります。当時は影時間に自然適合する者がまだいなかったため、用心のために幼い八雲さ

んをスキャンした際、人間としての照合率が七十パーセントほどでした」
当時はまだ影時間に関する研究が進んでいなかったため、影時間への自然適合者も発見できておらず、アイギスは相手が人型シャドウの可能性もあると考えデータ照合を行った。
その結果が人間である可能性が七十パーセントという数値であり、ちゃんと遺伝子や血液を検査すれば百パーセント人間であるという結果が出るかもしれないが、当時の照合率しか知らないアイギスは湊を人類の可能性は高いが現代人類ではないと判断していた。
「通常、性別や年齢に関係なく、データベースに存在する生物であるのなら九十五パーセント以上の値で照合します。よって、人間でない可能性が三割あるという事は、非常に人間に酷似した別種の生き物ということになり。八雲さんは現代人類である学名ホモサピエンス・サピエンスではないと断言できます」
「えっと、多分、それはまた少し違った話しだね。エリザベスさんたちも、名切りは現代人類から進化した種だと言っていたし。その照合結果はきっとそっちの話しだね」
「そうなのですか？　どちらにせよ、わたしの一番はあの方の傍にいること。仮に八雲さんが猫の身体になろうと、それが八雲さんであるならわたしは気にしませんが？」
普段、あれだけ抜き身の刀のような鋭さを見せているだけに、湊が猫でも構わないとアイギスが言ったことで、他の者はイメージとのギャップから笑いそうになる。
戦闘時の湊は味方ですら恐怖を抱くまさに鬼神のような力を見せており、鬼神でなかったとしても、仕事用の名前である狼のイメージが強いのだ。
そんな相手が対極なイメージの愛玩動物になれば、人間時で既に周囲の女性よりも頭二つほど抜けて美人なため、ギネス記録の世界一可愛い猫の記録を抜く素晴らしい猫になりそうな予感が一同にはあった。
もっとも、この場でそんな事を言えば不真面目に取られるので誰も

口にはしないが、全員が黙っていることを不思議に思ったアイギスが真顔で首を傾げているので、話しを進めるためにナタリアが口を開いた。
「まぁ、無駄話はこれくらいにしておきましょう。奥の個室にパソコンがあるわ。設定は既に済ませてあるから、そこで話しを聞いてきなさい」
「皆さんは聞かれないのですか？」
「彼の生まれの話しなら聞けるんだけどね。彼と戦うことになった場合の話は、小狼君の読心能力対策のために僕らは聞けないんだ。アイギスさんは機械の身体だから、もしかしたら彼の読心能力が効かないかもしれない。そういう訳で、日本にいるもう一人の少女からこの〝贈り物〟の使い方も聞いてごらん」
言って五代はアイギスにショルダーバッグを手渡し、そのままパソコンの置かれた奥の個室へと案内する。
中は執務机や本棚などが置かれ、一見事務室のような内装をしているが、アイギスが中に入ると五代は静かに扉を閉めて去って行ったので、言われた通りパソコンの前まで進み、アイギスはマウスを動かすことでスリープモードを解除した。
スリープモードが解除された画面の真ん中には、ディスプレイの横に受話器が描かれたアイコンがあり、それ以外にテレビ電話用の物がないことから、アイギスは素直にそれをクリックして起動した。
《あ、繋がった？　えっと、こっちの映像と声は聞こえてますか？》
「はい。映像、音声、ともに良好であります」
テレビ電話が起動したことで、画面には着物姿の若い女性が映っている。
アイギスは相手が誰かは知らないが、少女と呼ぶ年齢でないことから、この人物が湊の生まれについて話してくれる相手であると推測した。
「はじめまして、七式アイギスであります」
《どうも、はじめまして。鵜飼桜と申します。えっと、八雲君って呼んだ方が良いのかしら？　とりあえず、わたしは今の彼の保護者をして

います》
柔らかく微笑む桜を見たとき、アイギスの心の中には少々の安堵があった。
自分が両親を殺したことで身寄りをなくした彼は闇の世界で生きているとばかり思っていた。けれど、こんな優しそうな女性の下で暮らしているのなら、闇の世界でも生きていると言った方が正しそうだ。
影時間がある限り平和な世界とは言い難いかもしれない。それでも、心休まる日常にも彼の居場所はあった。彼を想うアイギスにとって、その事実が何よりも嬉しい。
《わたしからは彼の生まれの話しをさせてもらいます。これは彼のお母様が自分にもしもの事があったらと、親友だった桐条英恵さんに伝えていたお話しなの》
そう言って桜は、九頭龍の生まれに関する伝承に始まり、実際に名切りで行われた優れた血を取り入れる交配に関すること、血に宿り直系の子孫に知識と技術を継承する秘術、血に目覚めた者を守るための防衛機構など、名切りの業と呼ばれる亡霊たちに関することも全て話した。
話しを聞いていたアイギスは時折目を大きく開いて驚いていたりもしたが、元々、戦闘を知らぬはずの湊が非常に高い戦闘センスを見せていた事に疑問を持っていたこともあり、それが名切りに由来するものであると知った事で納得しているようでもあった。
そうして話しが一区切りすると、アイギスは何度も頷きながら桜に言葉を返す。
「なるほど、八雲さんは先代たちから自我への干渉を受けている可能性があると。現在の八雲さんが八雲さんではないかもしれないとはそういう事でしたか」
《ええ。でも、重要なのはここからなの。名切りの先祖たちが目指した完全なるモノ。それは人の位に堕ちた自分たちを、もう一度神の位に押し上げるために生み出される存在なんですって》
「神の位に押し上げる？　……よく分かりません。生物は生まれた時

点でその生物としての一生を全うするのではないのですか？」
《普通はそうかも知れないけど、名切りと九頭龍は神の血が混じっているから、普通の人間とは異なる力を持っているみたいなの。神の位に押し上げるというのも、多分、その血の力を使ってするんだと思うわ》
　鬼と龍の両家の先祖に神がいるという話しだが、その点に関しては桜たちもよく分かっていない。
　神と呼ばれ崇められていた人物なのか、はたまたペルソナやシャドウといったこの世の存在ではない別の何かなのか、当時の歴史的な資料を手に入れるのも難しく。現状では異能を持った特異存在と仮定して話しを進めるしかないのだ。
《とりあえず、その神の位に押し上げる儀式の名前が『神降ろし』。〝百鬼八雲〟という人格をフォーマットすることで、神としての人格をインストールする器を作るみたい》
「インストールされた後の八雲さんはどうなるのですか？」
《インストール前のフォーマットの段階でわたし達の知る彼は消滅するわ。儀式は器を作るためのフォーマット、完成した器へのインストール、十全に力を使うための最適化、という全部で三段階あるの。それらしいニュースは聞かないから、今は第一段階フォーマットの途中みたいね》
　名切りたちが目指した完全なるモノは、二つに分かれた力を再び一つにして生み出される神だ。
　人の脆弱な肉体では神という上位存在を受け入れるだけの器になりきれず、仮に受け入れられたとしても、魂の強さ以外何の力も持たぬのでは神とは呼べない。
　だからこそ、名切りは神を呼び込むだけの強靭な器を用意し、生身で人を凌駕するだけの力と技を備えさせた。
　異能は受け継ぐ力を己のみに課していた九頭龍の始祖が持っており。名切りの力に九頭龍の異能が合わされば、それだけで既に人を超えた神に近しい場所に至っているといっても過言ではない。
　だが、それが自分たちの知る少年を生贄にして行われると知れば、

当然、アイギスが黙っていられるはずがなかった。
「そんなっ、それでは一刻も早く八雲さんの元へ向かわなければ！」
《落ち着いて。フォーマットが完了間近になれば、契約者である貴女たちなら契約が切れかかっているという形で多分感じ取れるわ。その兆候がないのなら、まだもう少しだけ猶予があると思っていいはず。焦って失敗すれば全て終わってしまう。だから、どうか冷静さを失わないでね》
焦る気持ちは分かる。桜とて大切な子どもを訳の分からない存在に変えられたくはない。
だが、ここでアイギスが焦って出て行ってしまっては、本当に湊を助ける事が出来なくなるのだ。
幸いなことに、アイギスも、日本に残っている少女も、契約が切れかかっている気配など感じていない。
コミュニティという繋がりが消えた事は感知出来ていたので、それよりも強固な絆であるならば、二人も確実に感知できるはずだと桜が伝えれば、腰を浮かしかけていたアイギスも一応の納得はしたのか、黙って椅子に座りなおした。
カメラを通じてその様子を見ていた桜は相手の様子に満足気に頷くと、今度は画面の向こうで相手が席から立ち上がり声を掛けてきた。
《わたしからの話しはこれでおしまい。それじゃあ、次に代わりますね》
《……貴女がアイギス？》
桜に代わってパソコンの前に現れたのは長い赤髪の少女だった。
事前に湊を救える人物が自分も含めて二人いることを聞いていたアイギスは、いま画面に映っている相手がその人物だろうと予想して、本日何度目になるか分からない自己紹介を口にする。
「はい。わたしの名前は七式アイギスであります」
《そう。私は吉野千鳥、チドリでいいわ》
「チドリさんでありますね。どうもはじめまして」
丁寧に画面の前で礼をするアイギスに対し、チドリの視線はアイギ

スのヘッドフォン型ユニットなど〝人ではない〟部位に注がれている。
　現在は軍服によって関節部が隠れているが、そこが隠れていればアイギスを一目でロボットだと看破する事は難しい。
　だからこそ、本当に人間にしか見えないロボットが、しっかりと自分の意思で話している事が相手には驚きのようだ。
　けれど、それでは話しが進まないため、少しすればチドリも視線を戻して口を開いた。
《挨拶は省くわね。私から話すのは八雲との戦い方のことよ。まぁ、どう頑張っても本気の八雲には勝てないんだけど》
「大丈夫です。わたしは対シャドウ用に造られた兵器ですから、生身の人間には負けません」
《……ペルソナ能力の事を考えてないの？》
「……八雲さんは強いです」
　現在の湊の強さについては知らないはずだが、初めて召喚した時点で既にペルソナを自在に操っていた事をアイギスも記憶している。
　それから戦いの中で能力も鍛えてきたのなら、相手の能力は既に自分を超えていると仮定してもよいかもしれない。
　そう考えなおして、アイギスが湊の強さを認めると、チドリも同意するように頷いて答えた。
《そうね。飛べるしね》
「生身で飛べるのですか？」
《そんな訳ないでしょ。ペルソナの召喚方法の違いとかで、ペルソナを飛行装置代わりにして飛べるのよ。まぁ、そんな風にペルソナを思いっきり使ってきたら諦めて。上空からメギドラぶっぱしてきたら誰も防ぎようがないし》
　湊の最大の脅威はその無尽蔵とも思えるエネルギー量ではない。もっと単純に、制空権を取れる飛行能力こそが彼の持つ絶対の優位性なのだ。
　飛行速度はチドリが知るだけで時速二百キロを超える。それは移動を目的とした際の速度なので、戦闘時になればさらに高速で飛行す

る事も可能かもしれない。
　そんな相手が上空から広範囲殲滅攻撃を放てるとなれば、まだ固定砲台にすらなれない一般のペルソナ使いたちでは為す術もなく一方的にやられてしまうだろう。
　だが、アイギスにはチドリの砕けた言葉使いがいまいちよく分からなかったのか、首を傾げて聞き返してくる。
「メギドラぶっぱ？　すみません。専門用語には疎いもので、一般的な言い方で説明して頂いてもよろしいでしょうか？」
《……こっちの攻撃が届かないような上空から、強力な攻撃をされたら防ぎきれなくて負けるって意味よ》
「戦い慣れているのなら、最初からそういった戦法を取ってくる可能性が高いと思うのですが。やはり、戦闘は短期決戦を選んだ方が消耗も少なく済みますし」
　言い直して貰った事で意味を理解したアイギスは、真剣な表情で相手がその戦法を取る可能性が高いと予測する。
　戦闘は長引けばそれだけ消耗を強いられる。温存して攻撃にエネルギーを使わずとも、その間に敵から攻撃を受ければ防御や回避にエネルギーを割く羽目になるのだ。
　戦い慣れている湊ならばそれを承知のはず。故に、消費を抑えるつもりだとすれば、当然、相手は短期決戦で事態の収束を図ってくるはずだった。
《いいえ、私や貴女が相手ならそれは百パーセントないと考えていいわ。むしろ、あり得るのは戦闘を放棄して飛んで逃げること》
　しかし、現在の彼をよく知る少女は淡々とした口調でその可能性を否定する。
　〝優しい〟湊だからこそ、そんな自分たちに余計な怪我を負わせる事など出来る筈がない。本当にあり得るのは傷付ける事を躊躇って逃亡を図る事だと話す。
《だから、そうさせないための作戦を教えてあげる》
「八雲さんを逃がさないための策ですか？」
　走って逃げるだけなら自分でも追いつけるはずだが、流石に飛ばれ

ては追いつく前にエネルギー切れになる。
アイギスはそう考えて、そもそも逃がさない方法があるのなら、それはすごい事だと画面に映る年下の見た目の少女へ尊敬の眼差しを向けた。
《ええ。理論は昔から考えていたけど、肉体の限界から私には不可能だった作戦よ。でも、機械の貴女ならきっと出来る。というか、貴女にしか出来ない戦い方ね》
「わたしにしか出来ない戦い方、でありますか？」
《そう。貴女には戦闘中ずっと八雲に舌戦でも挑んで貰う。倒すために戦うんじゃなくて、言い負かすために戦って貰うの。人の意見は聞かないけど、話しは聞いてくれる相手だからこそ有効な馬鹿げた作戦よ。それを達成したときにこそ私が送ったプレゼントが活きるわ》
そういって不敵に笑った少女は、湊救出の実働部隊として動くただ一人の少女へ、自らの考案した策と共に少年を救う想いを託すのだった。

12月16日（土）
夕方――ドイツ・ヴォルフ
ミュンヘンを北に行った場所にある雪の降る街ヴォルフ。
昔からの古いドイツの町並みを残す長閑な場所であるはずのその街が、今は鬼と暗殺者たちの戦う戦場と化していた。
街に近付いた時点で人の気配がないことを不思議に思っていた。雪が降っているため家に籠もっているのかとも考えたが、そうではなく現実に街から人の姿が消えていたのだ。
雪の降る音すら聞こえてきそうな静まり返った街は、さながらゴーストタウンのようで薄気味悪く感じる。
だが、誰もいないのなら敵がどこかに潜んでいるはずだと、湊が警戒しながら目的の遺伝子研究所を目指していれば、その者たちは現れた。
全身をタイトな黒い戦闘装束で包み、素顔が分からぬよう覆面で顔を覆い隠した男女混合の数十人からなる集団だ。

（その辺の軍隊よりよっぽど集団戦闘に慣れているな）
白い息を吐きながら両手に白金と漆黒の拳銃を構え屋根の上を走る湊は、手に武器を構えて追い掛けてくる者たちと距離を取る。
振り返らず腕だけで真後ろへ貫通力特化のカラブローネの一撃を撃ち込むが、相手はそれを躱して、逆に別の屋根の上にいた仲間が湊に向けてワイヤー付きのナイフを投擲して牽制してくる。
ナイフの刃には御丁寧に毒を塗ってあるらしく、横から来た琥珀色になった刃を遥か上空へ跳び上がる事でやり過ごした湊は、ナイフを投げてきた者の進行方向の屋根へ空中からファルファッラの一撃を撃ち込んだ。
着弾した屋根は、まるで小さな爆弾が爆発したかのように瓦と木片が吹き飛び、飛来する破片を回避するため敵は追跡を諦めて湊とは反対側へと降りて行った。
（一人消えたところで状況は変わらないな。ここはやっぱり）
敵を一人追い払った湊は、相手が集団戦のプロであるならば対処法を考えるよりも直接叩いた方が有効だと結論付け、屋根の上に着地するとそのまま振り返り蒼い瞳を敵に向けた。
「悪いな、お前らの相手をしている暇はないんだ――――カグヤ、浄玻璃鏡で敵を全員捕捉しろ」
ペルソナの姿のカグヤを呼び出すと、湊の足もとで中央に太極図の描かれた八卦羅針盤の紋様が展開する。
普段はただペルソナと知覚情報を共有する形で索敵能力を行使しているが、カグヤの持つ索敵能力は元々この〝浄玻璃鏡〟という固有スキルから派生したものだ。
遠見の能力だけでなく、大気や地脈の流れすらも捉える能力の眼からは、如何に隠密に優れたアサシンだろうと逃れる事は出来ない。
突然の事に驚いた敵がナイフや手榴弾を投げてくるが、ペルソナを呼び出している最中の能力者は、たとえそれが現実の時間だろうと補整を得る事が出来る。
故に、ナイフも手榴弾も湊の身体を一切傷付ける事が出来ず、ただ弾かれて瓦の上を滑り落ちていった。

そうして、敵の干渉を一切受けず悠々と居場所を探っていた少年は、隠れていた最後の一人まで見つけ出し。口元を歪め嗤った。
「――――捕捉完了、タナトス」
《ヴォオオオオオオオオッ!!》
カグヤに代わって雄叫びを上げながら現れたのは、禍々しいシャドウの姿をした黒き死神。
超常の存在の出現を危険だと判断したのか、敵は湊の討伐を諦め逃走を始めるが、既に捕捉されている以上、逃げきる事は出来ない。
「マハンマオンで全員殺せ」
少年が静かに命じればタナトスの赤い瞳が光り、街の至る所に白い閃光の柱が現れる。
つい先ほど屋根から飛び降りて行った敵も、下の道を駆け出したところで白い光に拘束され、そのまま光に包まれると光が消えたときには地面に倒れ動かなくなっていた。
倒れている遺体には外傷もなく、医者に死因を調べて貰ったところで心臓麻痺や不整脈としか出ないだろう。
全ての光の柱が消えた事を確認した湊はタナトスを消し。屋根から降りると戦闘の疲れを解す様に首を鳴らしながら、再び目的の研究所を目指して歩き出した。
――遺伝子研究所
長閑な古い街並みに相応しくない、近代的な冷たい印象を受ける外観の建物。
そこが湊の目指していた場所であり、久遠の安寧の構成員たちが近付かせるなと命令を受けていた所だった。
けれど、湊も表のプレートを見て知ったのだが、ここはＥＰ社の研究所ではなく以前殺したアロイス・ボーデヴィッヒの会社の持ち物であるらしい。
アロイスは依頼があって殺したが、それ以外の社員や研究者は久遠の安寧の構成員でもなければ殺す気はない。
故に、明かりの点いてない建物の中を進んでいた湊は、奥に感じる人の気配を目指しながら、これで何もなければ時間稼ぎに嵌められた

のだと思う事にしようと考えていた。
（……それにしても嫌な空気の場所だ）
夜の病院を思わせるような不気味な廊下を進みながら、湊は言いようのない不快感を覚えていた。
何が原因でこんな物を感じているのかは分からない。遺伝子研究所というからには、実験動物などを使ったり作ったりしていると思われるので、犠牲となった動物たちの怨念がこの地に留まっている可能性も考えたが、それらしい黒い靄を見ていないことでその考えはすぐに否定された。
（奥に誰かいる……なんだ、頭が痛い……）
廊下の先にある研究室らしき場所から人の思念を感じる。
人数は一人、性別は女性。街も含めて他に誰もいないので読心能力は相手の声しか拾っていないが、どうやら相手は湊の到着を心待ちにしているようだ。
けれど、部屋に近付くにつれて湊は脳の奥から響くようなズキズキとした頭痛を覚え始める。
ここまでに蓄積してきた疲労の影響を疑うも、そういった種類の痛みとは思えず、さらに近付けば今度は言いようのないざわつきを胸中に感じた。
慣れぬ身体の異変と感覚に、虫の知らせのような第六感に語りかける何かを湊は感じ取った。
だが、この先にいる者は己を待っている。久遠の安寧の構成員でもないくせに、ソフィア達はわざわざ自分をここへ誘き寄せた。
今から外に出たら建物が囲まれているという、原始的な時間稼ぎの罠の可能性も否定しきれないが、それでも奥の人物が湊に会いたがっている事実は変わらない。
ならば、仮にここをまるごと爆破して己を屠る算段であったとしても、少しくらい奥にいる者が待つ理由を聞いてから離脱しても遅くはないはずだ。
長く続いた廊下の終着点。女の待つ部屋の前に着いた湊は、静かのその扉を開いた。

「おや？　やぁ、そろそろかなとは思っていたけど、予想よりも早かったみたいだね。外には蛇とかいう一団が居た筈だけど、彼らではまるで相手にならなかったかな？」
部屋に入るなり、スーツの上に白衣を着た退廃的な雰囲気の女が笑顔で出迎えてきた。
奥の机の前に座っている女以外誰もいない事は分かっているので、湊が何かトラップがないか調べていると、何も答えない湊の様子を不思議に思ったのか、女は続けて口を開き話しかけてくる。
「どうかしたかな？　ああ、ここは久遠の安寧とは関係ない場所だから罠の類いはないよ。キミをここへ呼んだのは単純に私が会いたかったからさ。コーヒーでも飲むかい？　それとも紅茶の方がお好みかな？」
ごちゃごちゃと物が溢れかえっている部屋の広さはおよそ学校の教室程度、ここは女が個人で使用している研究室のようで、大きな研究機械は全て別の部屋に置かれているようだ。
相手の言う事も真実で部屋に罠など設置されておらず、お茶に誘われても受ける気は欠片もないが、それでもただ話しがしたくて自分を呼んだ事だけは湊も理解する。
「何の用があって俺を呼んだ」
「え？　何の用か……ふむ、会って様子を知りたかったというのは理由になるかな？」
年齢は二十代後半から三十代前半、身嗜みを整えれば見れそうな素質を持っているというのに、相手は美に関して無頓着らしく、部屋の隅のゴミ箱には伝線したストッキングが無造作にいくつも捨てられている。
それでも白衣だけは綺麗に洗濯されているようなので、相手は飛騨と同じく研究狂いの科学者なのだろうと湊は結論付ける事にした。
そういったタイプの人間の記憶を深くまで読み込むのは色々と負担も大きい。別に今さらグロテスクな生物の死体を見たところで、夕食に肉が食べられなくなるようなか細い神経はしていないが、理解し難い行動を見なければならないというのは、それなりにストレスも溜

まる。
殺人衝動を抱えていた昔のように、他者を屠る事でストレスを発散させる事が出来なくなった今の湊にとって、ストレスは負の感情として名切りの業の餌になるだけだ。未だに制御の仕方すら分からない化け物を余計に強化するなど、面倒を嫌う湊が選ぶはずもない。
よって、相手の記憶を読むのはある程度会話で情報を引き出してからする事に決め、遥か遠くまで意識を広げる事で、湊は相手の表層意識のみを読むに留める事にした。
「様子を知ってどうする？」
「別にどうもしないよ。出来れば身体について検査させてもらいたいけどね。成長促進剤の影響で君の身体はボロボロだろう？　そもそも、クローニングで生まれた時点で十歳までに障害や遺伝子疾患で死ぬと思っていたから、こうやって会えるとは思っていなかったのさ」
「……何の話しをしているんだ？」
相手から会話で情報を引き出そうと決めた矢先、湊は女の言葉の意味を理解して怪訝な表情を浮かべる。
自分の身体がボロボロなのは事実だ。久遠の安寧に宣戦布告してからというもの、ろくに食事も休息も取らずにただ戦い続けてきた。教会で再び目覚めてから今日までの間に取った睡眠時間を足したところで三日にも満たないだろう。
だが、それを相手が知っている筈がない。移動のペースから逆算するにしても無理がある。
何より身体にガタがきている理由が、〝成長促進剤〟の影響というのが腑に落ちない。
湊は飛騨の改造を受けた時にだって成長促進剤など投薬されていない。自分の寿命が人より短いのは細胞に刺激を与えて強化したことで、染色体等に傷が付き劣化が人よりも早く来るというのが理由だ。
それは施術した飛騨本人から説明を受けたので、成長促進剤やクローニングなどが原因では決してない。
要領を得ない事を話す相手をジッと見つめ、湊は再び言葉の意味を

聞き返した。
「成長促進剤やクローニングとはどういう意味だ。お前は何の話しをしている？」
「あれ、依頼者は伝えていないのかな？　ま、いいか」
　尋ねられた女は椅子から立ち上がると、本棚まで進んで何かのファイルを探し始める。
　それを眺めている間、湊は心臓が嫌に強く鼓動している感覚を覚えるが、女の探し物はすぐに終わったようで、黒い一冊のファイルを持って近付いてきた。
「これはキミを造ったときの資料だよ。クローニングは違法だから、当然、依頼者は本名ではなかったけど窓口を担当した人からは相手は日本人の男性だったと聞いてるよ。彼からの依頼はキミを造って出来るだけ早くオリジナルと同じ年齢にすること」
　ファイルの中身は確かに対象の細胞からクローン用の受精卵を造り。それを母体に戻して通常の赤ん坊と同じように出産した際の経過報告や、さらにその後の投薬についても書かれていた。
　書類と一緒に挟まっていた写真には、ムーンライトブリッジの戦闘から目覚めたばかりの湊そっくりな、筋肉がまるで発達していないガリガリな少年が写っている。
　そんな驚愕の内容に手を震わせながらファイルの中身に目を通している湊の様子に構わず。女は部屋の中を歩きながら楽しげに言葉を続ける。
「私はそのクローンの受精卵を実際に造った人間であり、それを着床させた母体であり、成長促進剤を投与してオリジナルと同じ年齢に仕立てた者だ。だから別に、〝お母さん〟と呼んでくれて構わないよ」
「ふざけるなっ。こんな物、俺の精神的動揺を誘うためにといくらでも捏造して用意出来るっ」
「なるほど、そういう考え方も確かにあるね。しかし、記憶を覗けるキミなら分かるはずだよ。私の記憶の中に〝キミ〟を造った記憶が確かに存在する事がさ」
　声を荒げる湊に対し、女は極めて冷静に返す。この女も久遠の安寧

や他の仕事屋たちのように湊の能力を知っていたのだ。
不敵に口の端を歪めていることから、いくらでも自分の記憶を覗いてくれて構わないと考えているのだろう。
過去の記憶を既に失っている湊にとって、自分の生まれについて確認するには相手の記憶を覗くしか術はない。
本人の意識がなかった間の外の情報は、血に宿る過去の名切りたちですら知りようがないのだ。
だからこそ、湊は相手の言葉を否定し、自分が生み出されたクローンなどではない事を証明するため、当時の記憶を表層まで浮上させているであろう女の頭の中身を覗きこんだ。
「これ……は、そんなっ……」
「残酷かも知れないけど事実だよ。ま、クローンでも人間に変わりはないさ。キミが望むのなら、もっと詳しい話しをして――――――ごほっ」
〝百鬼八雲〟のクローンが実際に生み出されたという、信じ難い記憶に湊が顔面を蒼白にしている目の前で、さらに信じられない事が起こった。
科学者としてか母親としてか、優しい笑顔で湊に自分の知る情報を伝えようとしていた女の胸から、真っ赤な血に染まった左腕が生えていたのだ。
女の胸を貫いた腕の先にはまだ鼓動している心臓が握られている。これでは女は助からないだろう。
貫いていた腕が引き抜かれると、女は膝から崩れ落ちるように床に倒れ込み、弱々しい呼吸を繰り返しながら自らを殺した者の姿を見ようとする。
「だ、れ……が……」
《やれやれ、我々の可愛い八雲をあまり虐めないで貰おうか》
女を殺した張本人、太陽〝茨木童子〟は嘲笑を浮かべて握っていた心臓を握りつぶすと、血に濡れた腕を振るい血を払い落とした。
以前、仙道を殺したときには鈴鹿御前が勝手に出て来ていたので、他の自我持ちのペルソナが同じように出て来られても不思議ではな

い。
　しかし、どうしてこのタイミングで現れ、自分の出生の秘密を知っているであろう女を殺したのか、今の湊にはまるで理解出来なかった。
　女を殺し終えて近付いてきた茨木童子は、優しい慈愛の笑みを浮かべて湊の前までやってくると、湊の持っていたファイルに手をかざし炎で燃やした。
「っ!?　何のつもりだ!?」
　炎が燃え移った時点でファイルから手を放したが、茨木童子のおかげでスキルの炎が効かなくなっていたためどちらにせよ怪我はない。しかし、高温の炎で一気に燃やされた資料は即座に黒い炭へと姿を変えてしまった。
　自分にはまだ知りたい事があった。女の記憶もクローンが生み出された事は分かったが、その後の経緯などは読んでいる最中であった。
　だというのに、突然現れそれらを阻むなど、一体どんな理由があってのことか鋭い視線を送って問えば、茨木童子は尚も深い笑みを浮かべたまま答えた。
《何、そんな物はお前には必要ないからな。あの事故から目覚めるまでの間の事は我々も知らないが、名切りの血に目覚めたのはお前なのだ。それ以外に何を知っておく必要がある？》
「自分の出生に関する事かも知れないんだぞっ」
《気にしたとて既に生を受けているのだ。特段困ることもないだろう。それに、お前の肉体が神を受け入れる機能を有しているのだから、我々の悲願にとって何の憂慮もないではないか》
　今度はクスクスと冷たい表情で笑っている相手を見たとき、ようやく湊はその異変に気付いた。
　目の前にいる名切りの祖の瞳に、自らが呑まれかけた底知れぬ闇が宿っている。これは自分の知っている彼女ではない。茨木童子自身の人格を、数千年の永きに亘って蓄積された名切りの業が支配しているのだ。

相手の様子がおかしい事に気付いた湊は、即座に相手を自分の中に戻そうとする。
だが、鈴鹿御前と同じく強い力を持った相手は、今の弱った湊の命令を撥ね退け悠々と言葉を続ける。
《フフフッ、八雲の心を惑わし余計な真似をしてくれたと思ったが、感謝するぞ名も知らぬ者よ。お前のおかげで八雲の心の隙間は拡がった。これならば、開けるかもしれん》
「……何の話しだ？」
《安心しろ八雲。これは云わばお前の肉体を神の力に慣らすだけだ。上手く馴染めばもう一度くらいは人に戻れる》
言いながら距離を詰め、相手は隻腕だと言うのに湊を壁に押し付け拘束する。
急な事態の変化に呑まれていた湊も、流石に自身のペルソナが突然の暴挙に出た事で、両腕を使って腕を離させようとする。
しかし、女の細腕とは思えないほどの剛力を発揮する茨木童子はびくともせず、湊の胸に血に濡れた手を当てたまま、その手から眩い光を発し始めた。
「や、やめろっ。俺に触れるなっ!!」
この光は危険だ。脳が全力で逃げろと警告している。
相手が自分のペルソナであることも構わず、湊はタナトスを頭上に呼び出し相手の腕を切ろうとした。
だが、その刃は湊を中心に二人を包む形で展開した光の膜に阻まれた。光の膜を出しているのは彼女ではない。相手も少々の驚きを見せて口元を吊り上げている。
そんな自らの意思を離れた現象に湊自身も困惑するが、その助力によって、茨木童子の思惑は遂に為った。
《さぁ、此度は憤怒を呼び水に力を引き出してやろう。その存在を私に見せてくれ。目覚めろ、阿眞根産巣日神(あまねむすひのかみ)ッ!!》
「ぐ、が、あああああああああああああっ!?」
始祖の手がより一層眩い閃光が放ったとき、少年の意識は強大な別の存在の意思に呑まれた。

そうして、新たな神の誕生の余波により、〝百鬼八雲〟のクローンが生み出された研究所は極光に包まれ崩壊した。

第百話　神降ろし

夜――ドイツ・ヴォルフ

桜とチドリとの話しを終えたアイギスは、蠍の心臓と五代の情報屋仲間の力により、湊が久遠の安寧の策によってドイツのヴォルフの街に誘いこまれた事を知った。

彼女たちが得た仕事屋向けの情報では、湊を誘き寄せた上で、時間差で仕事屋たちに情報を流す事で相手を包囲するという話しだった。

雪の降る寒い街では湊は普段以上に力を発揮できないはず。ここは街同士を繋ぐ道路が十分に整備されている事で、車を使えば簡単に向かえる特徴を持っているため、大勢の仕事屋がくれば長期戦は必至。

さらに、莫大な金を使って街の人間を避難させた事で、仕事屋たちだけでは湊を仕留められないと判断すれば、街一つを空爆で焼き払うつもりでいるらしいとの情報まで入ってきている。

その、街一つを焼き払うというのが久遠の安寧の部隊が行うのか、それとも遂に動き出したという情報のある国聯軍なのかは未だ不明だ。

しかし、どちらの軍が出てくるにせよ。ここで少年を押さえておかねば、確実に間に合わなくなるとして、彼女たちは蠍の心臓の所有する車を利用し街へ訪れていた。

「これは……っ」

到着した車から降りたアイギスは、目の前に広がる光景に目を疑った。

今いるのは住宅地の固まるエリアとは反対側の、工場や研究所の並ぶエリアにほど近い丘の上だ。

湊がいると思われる場所まではまだ距離があるが、それでもこれ以上車で接近するのは危険だと、車から降りてその光景を目撃した者たちは理解した。

数キロ離れたここでさえも、足に力を込めていなければ真っ直ぐ立っていられないほどの強風が吹き荒れ、降った雪を捲き上げながら

上空で渦巻く暗雲、時折、雷のような紫電の閃光が走り、それは遠く離れた場所から別の仕事屋チームが撃ち込んだと思われるロケット弾を破壊している。
　さらに、それらの中心では背中から光の触手にも似た何かを天に伸ばす極光に包まれた人型の物が存在しており。その人型が居る周辺の建物は完全に崩壊してしまっていた。
「あれは一体何なの？　まさか、あのふざけた何かがボウヤだなんて言わないでしょうね」
　以前、湊の力の一部を見ていたナタリアも、流石に天候に影響を及ぼすほどの力を見て、これがたった一人の少年によって起こされた事態だとは信じられず。否定の言葉を求めて、誰にでもなく問いかけた。
「そんなっ、契約は、時間はまだ残っている筈なのに、どうしてっ」
　だが、ナタリアの問いに誰も答えられずにいると、アイギスが悲痛に表情を歪めて地面に座り込んだ。
　他の者では何が起こっているのか分からないが、契約者である彼女だけは何かに気付けたのかと、五代が彼女の傍に駆け寄り状況を尋ねる。
「アイギスさんっ、小狼君はどうなったんですか!?」
「……八雲さんは、何かに呑まれています。でも、これはっ」
「お願いです、しっかりしてください！　今、彼を助ける事が出来るのは貴女しかいないんですよ！」
　何かに怯えるように身体を震わせながら、目の前の光景と少年の身に起きた事態に動揺しているアイギス。
　しかし、いま現状を最も理解出来ている相手が正気に戻らなければ、彼を救うどころか他の者が対処に動く事も出来ない。
　少女の肩に手を置き、五代がしっかりしろと声を荒げれば、ようやく自分の目的を思い出したのか少女の瞳に力が戻ってくる。
　どうにか正気を取り戻したアイギスは、地面に手を突いて立ち上がると、瞳に強い光を宿し他の者たちへと向き直った。
「すみません、状況を説明します。現在、八雲さんは心が怒りに占めら

れ。その感情を呼び代にペルソナに似た別の何かを召喚してしまっているであります。ですが、こんな規模の力を人が扱い切れる訳がないんです」
湊に近づいた事により契約で繋がったパスを通じて情報が送られてきているのか、アイギスは対シャドウ兵器としての観点と合わせて相手の現状をおおよそ把握していた。
いま、眼下の街に顕現しているのは、ペルソナやシャドウに近いがそれよりも高次の存在である〝ナニか〟だ。それを喚んでいるのは湊の怒りであり、その核には当然湊がいる。
「わたしには対象のおおよその適性値を計測する機能が搭載されています。改修される際にそちらは最新の物に交換されていたようですが、あそこにいる存在の数値は最低でも〝１０，０００，０００ｓｐ〟。これは力を集めるだとか、限界を超えるとか、そういう規模で出せる数値ではないんです」
この機能は云わば簡易適性測定器だ。人間の適性を測るよりも、ペルソナやシャドウを視ることで相手の適性値から強さを測定するためにある。
機能停止以前よりも遥かに高性能化したそれによれば、喚び出されている存在の数値は最低でも一千万。周囲に特異な力場を発生させているようで、それ以上は接近しなければ詳細に測る事は出来ない。
もっとも、より詳細な数値を計測したところで、一千万という馬鹿げた数値の時点で真っ当な挑み方をしても勝ち目がないことは明白だ。
「桜さんの話では八雲さんの人格のフォーマットが完了してから、空になった器に神の人格をインストールするという事でした。わたしには神という存在は分かりませんが、これが神の力だというのなら、あそこに八雲さんの意思が残っていて良いはずがないんです」
「良いはずがないって、小狼の意思が残っていたらどうなるの？」
「異なる規格の信号でコントロールしようとする訳ですから、当然、コントロールしきれず力は暴走します」
ペルソナについて詳しい説明を受けていないレベッカにも分かる

よう、アイギスは原因と結果のみを簡潔に告げた。
あそこにはまだ湊の意思が存在している。怒りを呼び代にしているのだから、湊が核となっている以上、力の行使は湊が主導して行う筈だ。
けれど、意識を怒りで満たされ、それを発動ギミックに不完全に神の力を引き出しているせいで、コントロール出来る力の規模を完全に超えて漏れ出した余波が天候や周囲に影響を及ぼしてしまっている。
今はまだこの程度で済んでいるが、湊にさらに変化が起こればこの小康状態は一気に崩れる可能性すらあった。
「ナタリアさんに見せて頂いたハンズィール平野での映像で八雲さんが使用していた力は、数値にしておよそ二万といったところでしょうか。コントロールしたことでそれだけの数値があの規模で抑えられた訳ですから、その五百倍以上の力が一切セーブされることなく解放されれば、ドイツ国土の三分の一以上が焦土と化してもおかしくありません」
蠍の心臓の湊捕獲作戦の映像を見たときにはアイギスも驚いたが、湊の適性は既に既存のペルソナ使いでは遥かに及ばないレベルに達していた。
チドリから聞いた話では、何度も死ぬような目に遭い。実際に何度か死んで蘇生された事で跳ね上がったとの事だが、死に近づくことで適性が上がるなどという情報は桐条にはなかった。
これが〝ワイルド〟という複数のペルソナを持つ能力者だけに当て嵌まる話しなのか、それとも全てのペルソナ使いに当て嵌まる事なのかは分からない。
それでも、暴走しかけている強大な神の力は、流石の湊でも受け止めきる事は出来ないらしく。このままでは世界規模の大災害に発展する恐れがあった。
「また、それは全てが炎のように大地の上を拡がったと仮定しての話しですから、爆弾の爆発のように地下や上空にも力が及ぶと考えれば、気流等にも大きな影響を及ぼし地球規模で何かしら甚大な被害を出すものかと」

「気流って、風って言うか雲の流れくらいにしか影響ないんじゃないの？」
「極単純に言えばそうですが、爆発で土砂や灰が巻き上がり気流に乗って世界中の空を覆う可能性もあるんです。そうなれば、当然太陽光は地上へ降り注ぎませんから、赤道直下の国々でさえも大寒波に見舞われ。作物は育たなくなり、餌を失った動物は死に絶えてゆきます」
　これはよく仮説として話されている、富士山が噴火した場合における環境への影響の話しと似たようなものだ。
　富士山の場合は噴火した際に出た火山灰が百キロメートル以上まで飛ぶと言われている。火山灰にはガラス繊維が含まれているため、人間は全身を覆うように服を身に付ける必要があり、太陽光を遮られる事で農作物は光合成が出来なくなり枯れ始める。
　また降灰が見られた場合、国によってはたとえ少量であってもその空域は飛行禁止となるため、空の便に多大な影響が出るだろう。地上も降り注いだ灰と土砂を撤去しなければ通行できなくなる可能性もあるので、陸路であっても交通の麻痺は避けられない。
　川や湖も同じように灰に覆われて、水質の変化に適応できない水生生物たちは死ぬと予想されている。
　そして、これはあくまで火山などの話であり、それよりも大規模な爆発の可能性もあり得る力が暴走すれば、その被害は周辺地域に留まらないとアイギスは冷静に話す。
　当然、聞いていた他の者たちは彼女のように冷静ではいられず、中でもレベッカは本当に訓練を受けた軍人なのかと思うほど取り乱していた。
「そ、それじゃあ、人間だって絶滅するじゃない！」
「かなり高確率でそうなるとの計算結果が出ていますね。まぁ、そちらは今考えなくとも構わないのですが、それよりもこのまま行くと高密度に圧縮されたエネルギーによりプラズマが発生し、そのまま八雲さんも融かされ消滅するかもしれません。人類の滅亡よりも、そちらの方が事態は重大かと」

レベッカの言葉を流して街の方を見るアイギスの視線を追えば、確かに湊の上空で稀に眩い光の球のような物が発生しては弾けている。
あれが発生したプラズマだとすれば、そもそも人間では接近すら危ういのではないだろうか。
話しを聞いていたナタリアはそんな事を考えつつ、人類の絶滅を別に構わないと言ってのけた人型ロボットの少女へ、ロボット三原則にも引っ掛かりそうな意見を持ってもよいのかと本人に尋ねた。
「……貴女にとってボウヤが大切なのは分かるけど。人類の絶滅を構わないというのはロボット三原則的にどうなのかしら。貴女、世界とボウヤを天秤にかけてもまだボウヤを取るの？」
「ＳＦ小説の設定の話しをされても困ります。それに質問の意図を理解しかねます。八雲さんの命はこの星よりも重いです。その事実が存在する以上、星を犠牲にしてでも八雲さんを守るのは当然であります」
湊の命は星よりも重い。これが大前提であるため、星を多少犠牲にしたとて湊を救うのは当然である。そういって力強く頷く少女に、ナタリアは軽い立ちくらみを覚えて頭が痛くなった。
人の話しを聞かない所と、どこの常識だとつっこみたくなる謎の理論にデジャヴュを感じ、とある少年の姿がそこに重なる。
他の者も同じように思っているのか、危機的状況にもかかわらず、一同を縛っていた緊張感は僅かに薄れていた。
「ごめんなさい。ボウヤの命が星より重いと言う話しがまず初耳だわ。そして、それがさも常識のように語られても、多分、それは貴女だけの常識よ」
「では覚えておいてください。あの方が死ねば世界は滅びると。何故だか分かりませんが、それが事実である事だけは分かるんです」
ムーンライトブリッジでの記憶はメモリの損傷で部分的に失われている。
そのため、どうして自分がこんな事を思うのかは分からないが、アイギスは個人的感情とは別に少年の死は避けねばならないという確信があった。

「だから、止めてみせます。例え相手が神であろうと八雲さんを渡したりしません。あの方の身柄はわたしが貰い受けます」
力強く拳を握りしめ少女は宣言する。絶対に少年を救って見せると。
その姿と言葉にナタリアは思わず笑みを漏らした。笑っていられる状況ではない事は分かっている。
それでも、二人なら大丈夫かもしれないという不思議な安心感があった。
最初から少年を救うのは少女の役目だったが、今なら完全に任せる事が出来る。ナタリアは戦場に向かおうとする少女に声を掛けた。
「わかったわ。あそこに向かうまでの援護は必要かしら？」
「いえ、皆さんは出来る限り何もしないでください。今は小康状態を保っていますが、いつ力が暴発して攻撃され」
途中で言葉を遮るように背後で大気を震わす轟音が響く。
一同が咄嗟に目をやると、少年に向けて放たれたロケット弾やミサイルがレーザーのような一撃で全て撃墜されていた。
攻撃の発射口は核である少年にほど近い場所だった。そこから斜め上空に向けて放たれ、遠くの雲が消え去っているのが確認出来た。
それを見たアイギスは、先ほど途中まで言いかけていた言葉を改めてナタリア達に伝える。
「……予測を遥かに超えた威力ですね。放たれたのが空に向けてで良かったです。しかし、ご覧の通り。自動迎撃と思われる攻撃であの威力です。援護射撃の発射台である皆さんを直接狙ってくる可能性もありますから、皆さんは緊急時に逃げる用意をしておくことをオススメします――――ペルソナ、レイズアップ！」
一同から離れた場所で召喚シークエンスに移ったアイギスの周囲に、青白い光と共に水色の欠片が回り始める。
彼女の頭上に顕現したのはアテナを模して作られた青銅色の女神像。顔と兜が分かれて展開したかと思えば、そこから回転する破城槍が現れた。
禍々しい湊の力を見ていた者にとっては、ただ普通に召喚されただ

けだというのに、その姿がどこか神々しい物に感じた。
そんな感想を抱いている目の前で、アイギスは呼び出したペルソナの背中に飛び乗り掴まると、まっすぐ湊の居る場所を見つめ命じる。
「パラディオン、八雲さんの元まで飛ぶであります！」
吹き荒れる暴風を切り裂き、少女を乗せたペルソナは少年を目指し飛び立つ。神を降ろし人から堕ちようとしている者の元へと辿り着くために。
＊＊＊
茨木童子によって無理矢理に神を喚ばれた湊は、現在、その心を怒りに支配され荒神と化していた。
背中から生えた翼ともつかぬ光の触手が、再び湊の怒りを体現するかのように振るわれ、飛来するミサイル群を全て叩き落とす。
【満たせ、満たせ、満たせ】
『殺すっ、邪魔する者は全てェッ!!』
銀色に変化した瞳を空に向け、五月蝿い羽虫を払うかのように手を横に薙ぐ。
先ほどまでは湊の知覚に引っ掛かる物を触手で叩き落とし迎撃していたが、ここでようやく自分の力の方向性を定める術を覚えたのか、湊は力を収束させるとそれをレーザーの如く空に向けて放った。
大気が鳴動し、射線上にあった物を全て蒸発させ、無謀にも挑もうとしていた者たちの戦意を根こそぎ刈り取る。
カグヤの浄玻璃鏡を使わずとも無限に拡がってゆく知覚で万物の気を感じ取っていた湊は、戦意の削がれた敵が逃げてゆくのを感じながら、未だにこの地を離れぬ者たちの存在にも気付いていた。
【満たせ、器を、全て満たせ】
『消えろ、消えろ、消えろォォォォッ!!』
邪魔をする者を屠るため、触手が鞭のように大地を打ち叩き街を破壊してゆく。
その間も湊の心に何かが語りかけ、さらなる怒りを呼び起こし尽きる事の無いエネルギーを無限に生み出し続ける。
本来ならば神の力を濃く受け継いだ始祖の子ども同士を結び付け

れば、それだけで神の器を生む事は可能だった。
けれど、茨木童子はより良き物をと願い。知識を蓄え、技術を磨き、人を超えた肉体を得る事を目指した。
そしてその長い旅の中で、彼女はある一つの発見を得た。
それは人の持つ精神の力の有用性だ。
人は心が壊れぬ限り無限に感情を生み出し続ける。強弱や正負はあれど、それでも人は何らかの感情を生み出し続ける。
茨木童子は自分と妹だけでなく、真正の神であった母の力も回復はすれども一度に保有できる量は有限であると知っていたため、その枷を外す手段として彼女は生きた人間の魂を無限炉として活用する事を思い付いた。
魂の無限炉への改竄の実現を目指し、血を媒介にして感情を植え付け、より強大な心の力を生み出す様に細工した事も一度や二度ではない。
その甲斐もあって、名切りはシャドウの王を超える力を持つ業を宿せるほどに成長した。
まさか、ようやく生まれた器の資格を持つ者が名切りの業と対等な心の力を持つとは思わなかったが、少年はペルソナに目覚める事でより心の力を生み出し易くなってくれた。
さらに、少年の心の力はペルソナを扱ってきた事でエネルギーに変換され易くなっており。この事実には計画を企てていた本人ですら、あまりに出来過ぎだと笑いが止まらなかった。
【感情を力へ、己の全てを捧げよ】
『ああああああァァァァァァァッ!!』
心が怒りで満たされてゆく。怒りは憎しみとなり、憎しみは殺意へと変わる。
際限なく膨れ上がる感情は力に変わり、少年の怒りに呼応するように天へと放たれる。
エネルギーに変換されただけの純粋な力の塊が、眩い光を発しながら遥か上空で球体となり緩やかに回転を始めた。
この力が解き放たれればこの地は焦土と化す。だが、心を支配され

ている少年は感情という力をただ生み出し続けることしか出来ない。
集められた力は密度を増し、強力なプラズマを発生させながら、周辺に特殊な力場を生み出して少年の分解を始めた。
今の湊は己にペルソナを降ろしているようなシンクロ状態にあり、人間の身でありながらペルソナたちのように不安定な存在でもある。黄昏の羽根のように云わば情報と物質両方の性質を持っているのだ。
儀式の完了まではまだ時間が掛かりそうだったが、茨木童子は動揺して心が不安定になっていた湊を見て、意識が完全に呑まれて人格を失い一気に神降ろしが進むと考えたらしく、慣らしと称して神の一部を湊に降ろしてしまった。
けれど、名切りの業を宿したまま、それに匹敵する心の力を有している者が、そう簡単に意識を呑まれるはずがなかった。
感情に心を支配され自我を失いかけてはいるが、少年が人格を保ち続けることで儀式は失敗し、集められた力によって意識よりも先に肉体が消滅しようとしていた。
『滅べっ、滅べぇぇぇぇぇぇっ!!』
感情という無尽蔵のエネルギーを生み出す装置となった少年は、自分の肉体の消滅が始まっても力の生成を止めない。
上空に集められた力は、既にドイツの国土の半分を焦土に変える程に高まり。少年の消滅と共に解き放たれようとしていた。
「――――八雲さんっ!!」
だが、そこへペルソナの背に乗った一人の少女が現れた。
敵を排除しようと暴れる光の触手を空中で回避し、人間ならば地面に縫い付けられ即座に意識を失うような重力を受けつつも、それらに耐え続けこんな危険な場所までやってきたらしい。
今の湊はすぐにでも臨界に達しようとしている原子炉のようなものだ。そんな危険な物へ近付いてくるなど自殺行為としか思えない。
「八雲さん！　お願いします、正気を取り戻してください！」
『邪魔を、するなァァァァァっ!!』
少年の意識を取り戻させようと声を掛ける少女を、少年が放った無数の触手が捕えようと動き出す。

一つ一つの威力が鉄筋入りの建物を一撃で粉砕させるほどだ。僅かに掠っただけでも大破は免れない。
しかし、少女はそれらの軌道を予測し、一つは空中で急制動をかけながらやり過ごし、続けて迫った物はスキルの発動で加速して回避する。
全てが湊の完全な制御下にあるならともかく、小さな敵を捕えようと単調な動きで大振りに振るわれるだけでは、弾丸すら見切るアイギスにとって避けるのは容易いらしい。
触手を避けきったアイギスは、少年の上空を迂回するように飛びながら呼び続ける。
「貴方の帰りを待っている人がいるんです！　そんな物に負けないでください！」
『黙れェっ!!』
「黙りません！　八雲さんの身体を奪おうとしている方に告げます。即刻、八雲さんの身体から出て行ってください！」
言いながらアイギスは空中で腕のガトリングを湊に向けて撃ち放つ。
特殊な力場が発生しているため弾丸は当たる前に地面に落ちるが、少年の銀色の瞳はしっかりとアイギスの姿を捉えた。
彼女の狙いは相手にダメージを負わせる事ではなく、最初から湊に己の姿をもっと明確に認識させる事だった。
現在の少年の瞳は銀色になっているが、これは自分の知る物でも、他の者たちが知る物でも、魔眼と呼ばれる物でもない事は分かっている。
ならば、少年は未だに自分の人格を完全に失っていないが、何かしらの干渉をして肉体の支配権を奪おうとしている存在も同時にそこにいるのだろう。
「パラディオン、一度離れてっ」
話しでは相手は神という事だが、たとえ神だろうと他人の家に土足で上がり込む様な無礼な輩に、礼儀を尽くした真っ当な対応をする気はない。

何より自分は心を与えられた機械。人類の創造主である神に真っ向から喧嘩を売る存在なのだ。
故に、彼女は少年の肉体を奪い返すため、覚悟を決めて少年と共に神に挑む。
「パラディオン、最大速力で電光石火であります！」
そうして、アイギスは一度距離を取ったかと思えば、突如ペルソナを急加速させて少年に真っ直ぐ特攻をかける。
到達するまでに触手に打たれることや、ミサイルを迎撃したレーザーに撃墜される事も考えない。いや、もはや考える必要がないのだ。
「はぁぁぁぁぁぁっ!!」
少女はただ真っ直ぐ、誰よりも速く彼の元を目指す。
閃光と共に風を切り裂き、音と景色を置き去りして、自分を見つめる左だけ〝蒼い瞳〟の少年の元へただひたすらに真っ直ぐに進む。
少年まで残り十メートル、アイギスはペルソナを消し、慣性のみで少年に向かって飛んだ。
「八雲さんっ!!」
『――――アイギスっ!!』
少女の呼び掛けが遂に少年に届く。両腕を広げ文字通り飛んできた少女を、両目とも蒼くなった少年はしっかりと受け止めた。
だが、少年が自我を完全に取り戻した事で、上空に集まっていた膨大なエネルギーが少年の手を離れ解放されようとしていた。
球体に近かった力の塊は、制御下にあったときよりも既に三倍ほどまで膨れ上がっている。
「八雲さん、このままではっ」
「大丈夫だ、君を死なせたりはしない――――タナトス！」
アイギスから身体を離すと湊は外套から抜き身の仇桜を取り出し、タナトスを呼んで力の塊に向けて一人飛び上がった。
湊が何をするつもりか分からないが、少しでもショックを与えれば力は全て解放されてしまう。
だが、今は少年以外に頼れる者がいないことで、アイギスは全速力

で球体へ向かっている少年がどうか無事でありますようにと天に祈った。
そして、間に合えと全速力で球体へ向かった少年は、その手に持った一振りの刀で〝神の力〟を――――斬った。
「はぁぁぁぁぁぁっ!!」
下段から斬り上げ降り抜かれた刀は、今まさに解放されようとしていた〝神の力〟を切り裂く。
街の外から双眼鏡を使って眺めていた者たちも、少年の奇行に目を見開き死を覚悟するが、何と切り裂かれた力の塊は、そのまま力を失い霧散した。
これには少年の無事を祈っていた少女も信じられず、仕事を終えてゆっくりと降りてくる少年をただ茫然と見上げている。
ペルソナと共に降下し、ようやく少年が地面へ降り立ったときには、少女は相手に一体何をしたのか尋ねた。
「あの、先ほどのは一体？」
「いくら神が引き出した力といっても、膨大なだけでエネルギーの塊である事に変わりはない。なら、死者の魂すら殺せる俺の眼なら力その物を殺す事も可能という訳だ」
言って少年はゆっくり歩き出しながら刀を外套へしまう。
彼が行った事は実に単純で、昔、孤児院の火事で炎を切り裂いたように、上空で解き放たれようとしていたエネルギーの死の線を切って殺しただけだ。
殺されたエネルギーは力その物を失うため、後には何も残らず、ただ余波の風を受けて巻き上がっていた瓦礫等が落ちてくるのみ。
しかし、力を発生させていた中心部という台風の目ともいうべき地点にはそんな事は関係ないので、瓦礫となった研究所跡から道路に出ると、湊は振り返りついて来ていた少女へ向き直った。
「……それで、どうして君がここにいる？」
「わたしは三ヶ月ほど前に貴方の危機を感じて、それでどうやってかお救いしなければと」
「……誰に連れて来てもらったんだ？」

「最初は屋久島でセスナを奪って中国まで飛びました。それからは徒歩でインドまで行きましたが、途中からヒッチハイクを行い車に乗せてもらうなどして進み。ルーマニアに着いた頃に脳波リンクによる通信を使って水智恵さんという方が、同じ目的の方たちのいる所まで案内すると言って蠍の心臓の方たちに会わせてくれたんです」

そこまで聞いた時点で後の事は想像出来たのか、湊は複雑そうな難しい表情を浮かべて溜め息を吐いている。

そもそも、セスナを奪って海を渡ること自体かなり危険な行為だ。通常ならば不審な飛行機だとして領海内に入った時点で軍に撃墜されている。

運よくそれをクリアして大陸に渡れたようだが、その後も今着ている目立つ戦闘服で歩いていたとすれば、不審な人物として警察に職務質問を受けてもおかしくない。

見た目は西洋系だが、当然パスポートも何も持っていないため、密入国者として警察に保護されればロボットであることもばれていただろう。

自分の危機を感じたのが三ヶ月ほど前というからには、イリスの死によって心が壊れたのを契約かコミュニティを通じて察知したのだと思われる。

それで身を案じてわざわざ来てくれた事には感謝するが、流石に無謀過ぎると湊は相手の行動を諌めずにはいられなかった。

「無茶し過ぎだ。辿り着く前に事故や事件に遭ったらどうする」

「それはお互い様です。八雲さんも相当の無茶をしていると聞き及んでいるであります。今回もわたしが間に合い、八雲さんの眼の力で無事に済みましたが、一歩間違えれば地球規模の大災害になっているところでした」

それは全くの正論であり、少年がしてきた無茶のレベルを考えれば、彼だけは他者を責める資格がないほどだ。

真剣な顔で相手に図星を突かれ、全く反論の余地がないことで不利と判断したのか、少年は少し間を置くと話しを逸らすために別の話題に移った。

「……まぁいい。俺に会う目的は達成したんだろう。なら、直ぐに日本へ帰るんだ。パスポートの準備や飛行機の手配はしてやる」
「八雲さんもご一緒してくださるのですか？」
「俺はまだ帰らない。そもそも帰るつもりがない」
「なら駄目です。わたしは八雲さんがご一緒してくださらない限り帰りません」
　相手の反論を予期してなかったのか、湊は再び瞳を普段より僅かに大きく開いて驚きを見せる。
　しかし、相手が自分も一緒でなければ帰らないと言ったところで、彼は自分の目的はまだまだ達成まで遠い事を知っている。
　その間中ずっと連れ回す事など出来ないため、表情を冷たい物に変えて少女に言葉を返した。
「……ここは戦場だぞ。君みたいな女の子がいていい場所じゃない」
「わたしは対シャドウ用に生み出された兵器です。戦場での運用がメインに考えられていますので、そういった気遣いは無用であります」
「……っ」
　アイギスが自分を兵器だといったとき、拳を強く握り締めて湊の表情が一瞬怒りに歪む。
　相手の言った事は事実だ。それはどうあっても変えられない現実でもある。
　だが、少年が抱いた願いはそれを否定し、兵器として生み出された少女がただの少女として世界に存在を認められる事だった。
　だからこそ、彼女自身の口からそれを聞いた湊は、気を抜けばすぐに消えてゆく記憶に改めて己の願いを深く刻みつけ。これだけは絶対に忘れないと誓いを立てる。
　自らの願いを再確認したことで、湊はもう一度少女に平和な日本へ帰る様に告げる。
「……アイギス、言う事を聞いてくれ」
「命令によります」
「日本に帰れ」
「貴方と一緒ならば」

「一人で帰れ」
「それは嫌です」
『……』
両者の意見は正反対なので、どちらかが譲らなければ当然こうなる。
お互いに相手の事を考えている事で余計に頑固になっているため、自分の意見を曲げる気も譲る気もないのだろう。
そうして、一メートルほど離れた位置でお互いに真顔で見つめあって沈黙が続いていると、精神的に大人である湊の方が先に折れ、ちょっとした譲歩を見せた。
「……なら、日本までは一緒に行ってやる。そこからは一人だ」
「またこちらに戻ってくるつもりであれば、わたしは再び八雲さんの元を目指します」
僅かな譲歩を見せたかと思えば、湊の案はアイギスが譲らないと決めている部分にまるで変更のないものであった。
よって、湊がそう来るのであれば、自分もまた再び湊を目指すと宣言する。
すると、これでは話しが終わらないとして、湊は別の切り口から攻め始めた。
「どうして俺にこだわるんだ？」
「わたしの一番の大切は、貴方の傍にいることですから」
言いながらアイギスは一歩詰めて湊の胸に手を当て、下から見上げるように湊の瞳を見つめる。
彼女自身の瞳の色とどこか似ているが、死を視る少年の瞳はここではない別の場所を見ているようで、視線を交わしていていながらアイギスはどこか寂しさを感じた。
チドリからこの眼は自分と共に戦ってから目覚めた物だと聞いている。ならば、彼が死を知ったのはあの日の戦いでのはずだ。
しかし、アイギスにはあの日の戦いに関する記憶がほとんど残っていない。少年を変える切っ掛けになったというのに、どうして自分はその大切な事を覚えていないのかと自責の念に駆られる。

「……どうしても言う事を聞いてくれないのか」
「はい。わたしは貴方を日本へ連れ帰るために来ましたから」
だがそれでも、せめて今からでも少年のために自分は生きたい。そう決めて、アイギスは彼のためにも絶対に譲れないと湊の要求を拒否した。
その言葉に少年はどこか寂しそうな顔をして、胸に置かれていたアイギスの手を離させると距離を取った。
「これ以上話し合っても無駄だな」
「そうですね。お互いの望みが真っ向から対立しているため、双方に譲る気がないのなら話しは平行線かと」
会話をしながら両者はお互いに武器を構えだす。少年は両手に対照的な色合いの銃を、少女は袖を捲って弾倉を真新しい物に取り換える。
「俺は自分の望みを通させてもらう」
「消耗している状態でわたしに勝てるのですか？」
アイギスが心配する通り、今の湊は誰が見ても分かるほど消耗している。
元々、この三ヶ月ろくに休まずに戦い続けていたのだ。そこへさらに神の器にされかけ、感情をエネルギーとして放出し続けていたとなれば、普通なら病院へ搬送されているところだ。
けれど、そんな消耗している状態でも我を通すためなら意地でも戦うのが湊だ。
相手に問われた湊は質問には答えず、反対に聞いた自分こそ戦えるのかと問い返した。
「君こそ人間相手に戦えるのか？」
「こうならずに済めば良いと考えていました。ですが、心のどこかでこうなる予感はありました」
「……そうか」
その答えを聞いてなるほどと思う。相手も何の策も無しに自分に会いに来たわけではないらしい。
頑固な部分があることには先ほどのやり取りで既に気付いていた。

ならば、最終的には力づくで連れ帰ることも考えていたのだろう。
今の湊はアイギスとチドリが大切だという想いはしっかりと覚えている。だが、両者と初めてあったときの記憶は既に失っているため、相手の戦い方はまるで分からない。
さらに、自分のペルソナや通信越し以外で読心能力が効かない相手は初めてだが、それでも湊は自分の方が使える戦術の幅が広いことは確信していた。
「ルールは簡単だ。勝った方が相手を従わせる。ただそれだけだ」
「一生涯の隷属ですね。了解であります」
「……拡大解釈しないでくれ。願いは一つだけだ」
相手を守るためにそれを阻む本人を倒す。
お互いに自分の行動が矛盾を孕んでいる事は分かっているが、それでも最早やめる気はない。
「では、一生涯の隷属を誓えと命令するのは？」
「君は俺に隷属して欲しいのか？」
「いえ、一緒に居ていただければそれで満足です」
「なら、別の願いを考えておくんだな」
「分かりました。負けたときは、言い訳も恨みっこも無しでお願いします」
「ああ、当然だ」
軽口を叩くようにルールを確認し合い両者は準備を済ませる。
二人の間には敵意も殺意もない。そこにはただ純粋な相手への想いがあるだけだ。
「アイギス（八雲さん）」
それでも、少年と少女は相手を守りたいからこそ決意を固める。
「俺は（わたしは）」
戦いを前にした真剣な表情の仮面（かお）の裏に、今にも泣き出しそうな本当の顔を隠して。
「君を（貴方を）」
そして、二人は重なる様にその言葉を口にした。
「倒す！（倒します！）」

絶対に引けない。引く事の出来ない戦いが始まる。

第百一話　少年の戦力分析

――ドイツ・ヴォルフ

当たれば片腕の自由を奪われるであろう、迫りくる正確無比な弾丸。それをアイギスは曲げた左腕を僅かに上げ、身体を捻るという最小限の動きだけで回避していた。

（八雲さんの射撃の正確さはわたし以上……なるほど、確かに狙いが分かっていればブレがない分だけ避けるのも容易いですね）

相手の弾道を見ればアイカメラによって着弾点は予測できる。しかし、本来ならば反応する前に弾丸がアイギスへと到達する筈だった。

それを彼女はチドリからの助言によって最初から狙われるであろう部位を絞り込み、そのポイントを狙ってくればこういった回避行動を取ると予め決めていた。

ほとんどすり抜けるように弾を回避したアイギスは、そのまま距離を詰めながらお返しとばかりに右手のガトリングで湊の胴体を狙う。

けれど、相手はそれを瓦礫群の上を駆けまわりながら全て避けた。山を張って回避したアイギスも大した物だが、平坦な場所から敢えて足場の悪い場所へ移動することで、瓦礫を使った立体的な回避運動を取る湊もそれに匹敵する妙技である。

戦闘が始まってからというもの、いくら攻撃しても攻撃を回避されてばかりで、お互いにどうやって状況を変えるべきかと焦れて来ていた。

だが、ここで攻めを急いては隙を突かれ、一気に不利な状況へ持ちこまれてしまうだろう事をアイギスは理解していた。

故に、相手に攻撃を放ちながら、彼女はチドリの言葉を思い出していた。

――オーストリア・ミーティングルーム奥の個室

《改めて説明するけど、八雲の最大の脅威はその飛行能力。だけど、戦闘が始まればきっと飛ぶ事は殆どないと思う》

画面越しに真剣な表情で話すチドリは、アイギスに湊の戦い方の癖や相手が取ると考えられる戦法を説明する。
彼の脅威は自由に飛べる事だが、それは回避や移動のために使うのが主なので、下手に攻撃してアイギスを傷付けられないとなれば、湊はもっと確実な手段を取ってくると見られた。
《飛ばないとなれば射撃か格闘になるけど、基本的には射撃で来るでしょうね》
「ペルソナは使われないのですか？」
《ええ、今の八雲は疲弊してる。そこで大技になるペルソナを使えば消耗も激しいし、何より精密射撃みたいに与えるダメージをコントロール出来ないから下手に使えないのよ》
アイギスの持つ最大のアドバンテージは湊が彼女を傷付けられない事だ。攻撃の威力はセーブされ、さらに言えば人間でいう急所を直接狙うようなこともない。
戦いとなれば湊も本気で来るだろうが、それでも全力は出せない。疲弊した弱った状態で全力を出してこないとなれば、アイギスが注意するべき点も限られてくる。
《八雲の射撃はかなり正確よ。話しによると二キロの狙撃も余裕らしいわ。だから、狙いが分かれば逆に躱す事は容易なはず。注意するのは肩や腕、それから膝より下ね》
「わたしの身体はチタン製です。普通の銃で撃たれても損傷は軽微かと」
《八雲は貴女を兵器ではなく女の子として認識しているの。さっきから言ってる傷付けられないって話しは、身体に傷が残らないようにって意味もあるのよ。だから、貴女は八雲の銃口から狙いを予測して身体を捻って躱せばいい》
湊は相手が女子であれば男子が相手であるよりも対応が優しくなる。これは男女差別ではなく、単純に弱者に手を差し伸べるのは当然だと思っているからこその行動だ。
女子よりも弱い男子も中にはいるが、その場合は相手が不利な状況とみれば湊も助けたりするので基本的に吊り合いは取れている。

そしてまた、逆にあまりに酷い行動を取っている女子がいれば、湊は平然と顔面をグーで殴ったりするので、罰を与える面でも吊り合いは取れていた。
そんな湊だからこそ、大切に想っている少女が相手ならば、普段以上に優しい、甘いと言っても良い行動を取ってくるはず。
戦いの中で湊が甘さを見せるなど稀だ。最後の結末に甘さが混じることはあっても、戦闘が終わるまでは湊は戦闘機械となる。
だからこそ、チドリは折角相手が見せてくれた甘さを存分に突いてやれば良いと話す。なにせ、戦闘中にそんな物を見せる方が悪いとは本人の言葉なのだから。
けれど、戦闘に慣れている相手が、攻撃が当たらないと分かってからも同じ行動を続けるとは思えない。
相手の戦い方は知らないが、アイギスは一般的な話としてその点を尋ねた。
「ですが、わたしに狙いが読まれていると分かれば対処されるのでは？」
《そうなった場合、八雲は貴方の頭部や胴体を狙ってくる。もしもそこを狙ってきたら下手に動かないで。それは自分は急所も狙えるんだぞって脅してきてるだけで当たらないから》
「……すごいですね。八雲さんの思考パターンから相手の戦法を予測するなど、相手をよく理解しておられないと出来ない芸当であります」
《まぁ、伊達に七年も一緒に暮らしてないからね》
相手を普通の少女だと思っていたアイギスは、彼女の立てた対処法を聞いて素直に感心させられる。
本来ならば戦闘中はイレギュラーな事態が多々起こるので、当初に立てた作戦通りにはいかない事もよくある。
だが、相手は湊の戦闘技量や思考パターンから取る行動を予測し、行動を縛り過ぎない範囲で的確な助言をしていた。
アイギス自身も湊を傷付けるのを躊躇っているので、相手の攻撃を躱すという防御面の作戦を第一に教えて貰えた事もありがたい。

話している相手も湊に傷付いて欲しくない気持ちは同じはずだ。共通の目的を持ち、気持ちが一緒ならば目指すべき結果も同じになる。

今のアイギスにとって、チドリはまさに最高のパートナーだった。

「チドリさん、八雲さんのペルソナについても教えて頂きたいであります。わたしへの攻撃が通じないとなれば、戦局を変えるための切り札として使うはずでしょうから」

《……そうね。八雲が冷静な状態でペルソナを使ってくるとすれば、それは貴女にとって最悪なタイミングと考えるのが普通。いえ、最悪な状況にするために使うというべきかしら？》

「八雲さんのオルフェウスはアギ系の魔法スキルを使えます。対して、わたしのパラディオンは補助を除けば基本的に物理スキルしか使えません」

過去の湊のペルソナは魔法スキルを使用できた。対して、アイギス自身のペルソナは接近しての物理攻撃がメインだ。

耐久性にはそれなりに自信があるものの、やはり強力な魔法スキルを放たれれば戦況は一変するだろう。

相手のペルソナがどれだけ強くなっているか気になったアイギスが尋ねると、彼女の予想に反して画面の向こうの少女はその質問に対し怪訝な顔をしていた。

《オルフェウス？　悪いけど、私はそのペルソナを知らないわ》

「八雲さんがペルソナを使った場面を見た事がないのですか？」

《あるわよ。でも、八雲が一番使ってるのはタナトスっていう黒い死神なの。他にも四神とか人間にしか見えないペルソナも持ってるから、オルフェウスは既に使わなくなったペルソナじゃないの？》

その言葉を聞いて、今度は反対にアイギスが疑問符を浮かべる事になった。

ペルソナが変化するのは構わない。事例はないが心の変化で、同じように心の化身であるペルソナも変化する可能性はある。

しかし、今のチドリの言葉によれば湊はペルソナを複数所持しているように聞こえた。本当にそんな事があり得るのかとアイギスは疑

問を禁じ得ない。
「既に使わなくなった？　すみません、八雲さんのペルソナは一体ではないのですか？」
《……そういう事ね。質問の答えはイエスよ。八雲は〝ワイルド〟っていうペルソナを自由に付け替える能力を持ってるの。武器みたいに多数所持して、状況によって使い分けると考えてくれればいい》
　相手が炎を使うなら火炎耐性のペルソナを、氷結が弱点なら氷結魔法を使えるペルソナに状況ごとに使い分ける。
　湊はこの能力を〝ワイルド〟と呼んでいたとチドリは続ける。
《加えて、八雲は〝同時召喚〟のスキルも持ってるの。一度に多数のペルソナを呼び出して、それぞれを扱えるっていうワイルドの奥義ね。まぁ、エリザベスとかの話しだと八雲しか使えないらしいけど》
「ワイルドに同時召喚……やはり、八雲さんは恐ろしいほどの可能性を秘めておられたのですね。ペルソナは心の力、名切りの力にあの方自身の力も加わるとなると、正直勝てる気がしません」
《それでも勝って貰わないと困るのよ。第一、まだ最凶のペルソナの話しをしてないわ》
　相手との戦力差に顔を俯かせ弱気になるアイギス。
　湊と戦えるのは彼女しかいない。自分もそっちに行けるなら加勢するが、湊のためにそれは出来ないチドリは、相手を叱咤しながら彼の所持するペルソナはこれだけではないと告げた。
「最凶のペルソナ？　最も強いではなく、最も凶悪なのですか？」
《ええ。ペルソナの名前は審判〝アベル〟。翠玉の鎧を着た騎士型のペルソナよ》
　言ってチドリが画面から一度消えたかと思えば、スケッチブックを持って再び現れた。
　彼女はスケッチブックのページをいくらか捲ると、曰く最凶のペルソナであるアベルが緻密なタッチで描かれていた。
《殆ど使った姿を見たことはないけど、アベルには固有スキル〝楔の剣〟があるの。その能力は斬った対象のペルソナや適性の切り離し。相手がペルソナ使いならペルソナを、適性持ちなら適性を奪われてし

まう》
「ペルソナや適性を奪う？　そんな、それらは相手の精神の一部とも言えるものなのですよ。切り離して奪えるはずが……」
《それが出来るから最凶なのよ。まぁ、ペルソナを奪われたペルソナ使いが、もう一度楔の剣で斬られても適性までは奪えないみたいだけど。それでもペルソナを持っている事で得られていた耐性とかは失うわ》
説明しながらチドリはアベルの手にある赤い光を宿した剣を指差す。形状は少し古い時代の西洋剣だが、描かれている赤い光が実際に存在するなら見分けることは可能だろう。
ペルソナ使いはペルソナまでしか奪われないという話しだが、最大の切り札であるペルソナを奪われれば敗北は必至。
さらにチドリは湊がペルソナの部分展開も可能と話して来たため、咄嗟に剣だけ出されて斬られてしまう可能性もあった。
仮に奪われても最後の瞬間まで諦めるつもりはないが、奪われた力はそのままになるのかが気になる。少し考え込んでいたアイギスは顔を上げると真剣な表情で尋ねた。
「それらは奪われたらもう還って来ないのですか？」
《適性は無理ね。八雲の力として吸収されてしまうから、そうなれば適性を分け与えられないように返す事も出来ない。一般人になった相手は影時間に関わる記憶も失うし。頑張ればもう一度適性を得る事も可能かもしれないけど詳細は不明ね》
「では、ペルソナは？」
《ペルソナは八雲が返してくれれば大丈夫よ。持ち主本人がペルソナの宿るカードを砕けばいいの。奪われてる間は八雲や他の人が砕いても使えてしまうけど、持ち主以外が砕いたときはペルソナが消えれば再び八雲の中に戻るから問題はないし》
アベルの能力で奪われたペルソナはカード化する。カードの具現化自体は湊にして貰う必要があるが、元の持ち主が壊せば持ち主の中に戻る。
また、他者がそれを壊せば、湊だけでなく適性を持たぬ者でも呼び

出す事が出来るのだ。
湊や持ち主以外が呼び出しても、他のペルソナと同じように役目を終われば一時的な所有者である湊の中にカードは再び戻る。
よって、アイギスが相手なら奪われても後で返して貰える筈なので、その点は気にしなくていいとチドリは話す。
「八雲さんや他の方が使用している際のエネルギー源や、ダメージのフィードバック先はどうなるのですか？」
《前提としてペルソナは持ち主の物でないときは八雲の物という事になるから、奪われている間は他の者が召喚しても八雲がエネルギーを消費するし。ダメージも肩代わりすることになってた》
「チドリさんは実際に見た事があるのですか？」
《能力の説明は何度か聞いたけど。実演して貰うためにマリアっていう知り合いのペルソナ使いと一緒にタルタロスで試したわ。アベルの能力は本人とエリザベスたちを除けば、私とマリアと貴女しか知らない。だから、八雲の安全のためにもこの情報は桐条に与えないで》
対ペルソナ使いの能力でこれほど凶悪なものはない。湊は桐条グループを憎んでいるので、この能力を持った彼が復讐に走る恐れがあると気付かれれば、相手は美鶴たちのペルソナを奪われないよう湊の排除を検討するだろう。
チドリに言われずとも、アベルの能力を聞いた時点でその可能性を考慮していたアイギスは、しっかりと頷いて宣誓するように胸に手を当てた。
「了解しました。八雲さんの情報と共に最上級のプロテクトを組みます。プロテクトが破られれば、その情報が自動で消去されるよう罠も仕掛けますのでご安心を」
その言葉にチドリも安堵の息をそっと漏らしている。
ただでさえ少年は色々な勢力から狙われる立場にあるのだ。今回は彼の人徳で仲間が奔走した事で救える希望が出てきたが、こうも運良く物事が進むのは稀だ。
今の湊を救う事が出来たとしても、まだ久遠の安寧や懸賞金の問題が残っている。

そこにさらに桐条グループまで加わるとなれば、流石に仲間の力だけでは彼を守りきれないだろう。
むしろ、相手が憎しみの対象であることで、理性の箍が外れペルソナを使用して敵を屠りに往くかもしれない。
少年を危険から守りたい気持ちは当然あるが、それと同じだけ少女たちは彼が心を捨てて人を殺めるのも止めて欲しかった。だからこそ、湊が狙われる可能性の排除を二人は当然のこととして実行するのだった。
アイギスは話しをして自分と相手は湊に関することにおいて、基本的に同じ思考を有していると不思議な繋がりを感じながら、さらに彼の事を聞くため他に気を付けるべき事はないか尋ねる。
「八雲さんの戦力について他に特記事項はありませんか？」
《……あるわよ。アベルは対ペルソナ使い最凶だけど、八雲はそれをさらに強化したような〝直死の魔眼〟っていう眼を持ってるの。万物の持つ存在の綻びを切ることで、八雲は対象に概念的な死を与える事が出来る》
「概念的な死？」
機械であるアイギスにとって死は生物に齎される現象だ。体温が消えてゆき、心臓の鼓動が止まり、いずれは肉体の腐敗が始まる。
対して概念的といえば、死後の世界など宗教や哲学の分野の話しだろうかと推測した。
けれど、それを対象に〝与える〟という意味が理解出来ない。何よりアベルの力を強化したような能力という話しで、学術的な死の意味など考えたところで何の意味もない。
結局、理解の外にある異能とやらの概要すら分からず聞き返すと、チドリは今まで通りの淡々とした口調で詳細について伝えてきた。
《そう。生物は言うに及ばず、無機物だっていつかは朽ちるでしょ。八雲はその存在が生まれた瞬間から内包している死が視えるの。死の線って言って赤く光る疵みたいに視えるって話しだけど、それに指やナイフを通せば死を発現させられて治ることも直すことも出来なくなる。まぁ、簡単に言えば防御と回復不可みたいな感じ》

上位の龍はその瞳に不思議な力を備えていたという。その伝承の通り、九頭龍では一級以上の者はそれぞれ異なる異能を持った魔眼を発現させる。

通常は血に目覚めてから魔眼も目覚め、徐々に能力の扱い方を覚えてゆくが、湊の場合は名切りの特性によって戦いを体験した事で肉体自体は覚醒を始めていた。

それにより、肉体の変化である魔眼も先に目覚め、死を体験した上にデスを身に宿した事で、死を視る能力を持った魔眼を発現させたという訳だった。

チドリはその能力を防御と回復不可と説明したが、それらはあくまで湊が敵に対して力を使った場合の話しだ。

実際は、霊体や炎など存在するが実体のないものでも殺せてしまう。本人は試した事はないが、室内の空気を殺して真空にすることも出来れば、それが理解出来る物なら、記憶や感情、ペルソナに適性すらも殺せる可能性だってあった。

チドリが対象を万物といった時点でその可能性に気付きつつあったアイギスは、先ほどよりも表情を強張らせて言葉を返す。

「そんなにも強力な能力なら、アベルよりも死の線を切られる可能性の方が高いのでは？」

《死の線の使い方には、対象に治せない傷を与える事と、一撃で存在に死を与える二種類がある。普段、八雲がシャドウを切るのに使っているのは前者よ。存在を消去するんじゃなくて、相手にダメージを与えまくって倒してるの》

だが、チドリも魔眼ならばペルソナを殺せる可能性があることに気付いていた。

湊はタルタロスで魔眼を使ってシャドウをよく殺している。シャドウは人から抜け出てしまった心の一部なので、殺せばそれっきりの能力で倒してしまえばシャドウは戻らず、持ち主は一生影人間になるとチドリも考えていた。

しかし、それを本人に尋ねたところ、シャドウを切っているのはダメージを蓄積させるためだと彼は話していた。

ペルソナはダメージを受け過ぎると存在を維持できなくなり、そのまま消えて持ち主の中に戻ってしまう。湊がシャドウに対して行っているのは、つまりこれと同じ事だ。
《それと同じように、ペルソナに使われても完全に存在の死を発現させられなければ、再召喚したら元通りになって消えた時点では精神力の消費だけで済んでしまう。八雲自身、ペルソナっていう相手の心の一部を殺して相手を廃人にする気はないでしょうから、また呼び出されるリスクを考えて対ペルソナはアベル優先でくるはずよ》
「……話しを聞くと、さらに突破口が見つからなくなります。わたしに勝てるのでしょうか？」
湊のバトルセンスは初めて会った時点でずば抜けていた。さまざまな戦略や戦術論をインストールされているアイギスでさえ、相手の一瞬の閃きには驚かされてばかりだった。
それが七年も懸けてさらに磨き鍛え抜かれてきたとなれば、正面から挑んでも勝てるとは思えないと弱気になるのも無理はない。
勝てなければ終わり。少年を救う事は出来なくなり、もう二度と会えなくなる。
己の肩に掛かったあまりの重圧に、恐怖に呑まれ逃げ出したいと思ったところで、それを責められる者はいないだろう。
けれど、今の彼女は一人だが孤独ではなかった。同じ目的を持った最強の助っ人が付いている。
《だから、貴女には舌戦でも挑んでもらうの。相手の得意分野で挑んでも負けるんだから、こっちは相手の苦手な女の我儘で挑めば良い。相手も自分勝手なことばっかりしてるんだし。何か言われても〝馬鹿〟って言ってやればいいわ》
「そんな、八雲さんを罵倒なんて出来ません」
《違うわ。これは罵倒じゃなくて本音をぶつけてるの。八雲に言いたい事とか色々あるんでしょ？　下手に遠慮してたら今の八雲には届かないわよ。一方的に思ってること伝えまくる。これが八雲戦の鍵よ》
そういって不敵に口元を歪めて笑うチドリにつられ、アイギスも自

分にも出来るかもしれないという自信が湧いてきた。
情緒面が未熟なので頭の良い湊を言葉で言い負かす事は難しい。それでも自分が伝えたい事を一方的に告げるのなら十分出来る。
２００９年の目覚めを待つ中で少年と共にいる夢を見ていた。少年を目指す旅路の中で新たに芽生えた感情があった。彼の傍にいたい。彼に傍にいて欲しい。そんな風に会って話したい事は沢山あるのだ。
ならば、助言の通りにこれを伝えよう。話しを聞いてもらうのではなく、一方的に告げるだけでも良いのだから。

――ドイツ・ヴォルフ
チドリに言われた事を思い出したアイギスは、ここで正面から撃ち合う〝正攻法な戦い方〟を変更する。
両手の銃は実弾を込めたまま、距離をとって市街地の方へと走り出す。
それを怪訝そうな顔をして湊は見つめていたが、逃げられて見失えば余計にペルソナの索敵能力を使って探す必要が出るので、相手の誘いに乗る形ではあるが素直に後を追ってゆく。
湊が追ってきている事を集音マイクで感知しながら、アイギスはさらに走り続け、跳び上がって上へ行けそうな雑居ビルを発見した事で、真っ直ぐそこへ向かい雨樋や窓枠を足場に四階の高さにある屋上へ着地した。
着地してすぐに振り返ってみれば、湊はアイギスの動きを警戒して道路脇の街灯の傍から見上げてきている。
ここで湊に先に動かれては終わりだ。アイギスはまだ何を話すか決めていなかったが、本来必要のない息を大きく吸い込む動作をして、相手よりも先に言葉のジャブを打ち込む事にした。
「すぅー……わたしは八雲さんと再び会えて嬉しかったであります!!」
「……は？」
予想だにしていなかった突然の言葉を聞いたとき、戦闘状態に切り

替わっていたはずの湊が思わずの素の反応を見せる。
それも当然で、戦ってる最中に再会を喜ばれても何と返せば正解なのか分かる者などいるはずがないだろう。
だが、アイギスは相手が見せた大きな隙を見逃さず、屋上から飛び降りつつ空中で湊に向けて銃弾の雨を降らす。
「……チィッ！」
もっとも、状態が普段の湊に戻ったところで、相手の戦闘力が対シャドウ兵器とタメを張れる程である事に変わりはない。
相手の言葉に隙を見せたことで、苦々しげな表情を浮かべながら湊は大通りから狭い路地へと後退して弾丸の雨を全て回避する。
けれど、アイギスの口撃はまだ続く。地面に降り立ち、路地を通って逃走する湊を追いながら、アイギスはその背中に言葉をぶつける。
「わたしは、わたしの一番の大切があなたの傍にいることだと告げました！　今度は八雲さんの目的や願いを教えてください！」
「戦闘中に、話す事じゃないだろう！」
路地の途中にあった大きなバケツを蹴って湊が跳び上がる。先ほどのアイギスと同じように、壁や窓枠を蹴って建物の屋上や屋根まで出るつもりのようだ。
それを見てアイギスもすかさず続く。
「話す前に戦いになったから今話しているんです。戦闘中が嫌なら、戦闘を一時中断してわたしとお話ししてください」
「する訳ないだろう。こっちは遊びでやってる訳じゃないんだっ」
「わたしも大真面目であります！」
それぞれ路地を挟んで別々の屋根の上に着地すると、湊はカラブローネをアイギスの足に向けて、アイギスはベストに付けていた手榴弾を湊に向けて放つ。
お互いに攻撃をしながら屋根の上を転がって回避行動に移っていたため、攻撃はそれぞれが元いた場所を虚しく通過する結果となった。
アイギスが投げた手榴弾が破片で攻撃するタイプなら、余波で飛んだ破片によって多少の怪我を負わせられたかもしれないが、彼女は湊

の怪我を考えて爆風でダメージを与えるタイプを選択していた。
けれど、今回はその選択が功を奏し、爆風で屋根に積もっていた雪が動き、転がって回避運動を取っていた湊の上に被さる様に雪崩れ込んでゆく。
爆風で飛んだ雪が当たったところで痛みなどないが、相手に読心能力が効かない上に索敵能力もオフにしていたことで、視界を雪によって遮られたのは現在の湊にとって地味に痛手であった。
「さぁ、八雲さんがこんな戦いを続ける理由を教えてください！」
視界が遮られた一瞬を狙ってアイギスが湊に飛びかかる。
湊の前から雪がなくなったときには、既にアイギスがあと三メートルほどの距離まで迫っていた。
腕や身体を掴まれて力比べになれば、血に目覚めて人の限界を超えた湊でも勝てるかどうか分からない。
そうして、湊が選んだのは瞳を濁った金色に変え、異なる時流に乗ってその場を離脱することだった。
「っ!?　そんな……わたしのアイカメラで追い切れないなんて……」
目の前で人が消えるという信じられない現象。実際は湊だけが周囲よりも速く動けただけだが、アイギスは己のアイカメラから湊の姿がブレて消えた事しか確認出来なかった事で、相手の敏捷性は既に生物の域を超えていると認識した。
だが、まだ相手を追いかけ回す必要がある。幸いなことに湊が移動したであろう足跡が雪の上に残っている。
相手の逃走の痕跡を発見したアイギスは、すぐに追跡するためその先に視線を送った。
「……っ!?　八雲さん！」
足跡の先に視線を送ったアイギスは驚愕し、思わず倒れている相手に駆け寄ろうと屋根を飛び降りる。
異なる時流に乗ってアイギスから逃れた湊は、そのまま屋根の下の大通りに降りて危機を脱する事が出来た。
けれど、戦闘前に自分の持つ力以上のエネルギーを感情から無理矢理に引き出された事で、今の湊は立っているのもやっとというくらい

に消耗していたのだ。
そこへさらにほぼ一瞬とはいえ力を消費する時流操作を使えば、限界が早まり立っていられなくなるのも無理はない。
着地して少ししたところで足元がふらつき、路肩に止められていた車に背を預ける形で苦しそうな呼吸を繰り返す相手と、アイギスはそれ以上戦う気にはなれなかった。
心配した顔で少年の傍に駆け寄り、相手の左手を両手で包みこむ様に握りながらアイギスは声を掛ける。
「やめましょう、八雲さん。今の貴方の状態では」
「……確かに時流操作を一瞬使っただけで倒れるとは思ってなかったよ。だけど、自分の消耗具合を改めて理解したなら、今度はそれを踏まえて上手くやるさ」
「わたしが、こんな苦しそうな貴方を戦わせると思っているのですか？」
「勝敗は決してない。それに、俺が消耗しているのは始まる前から分かっていた事だ。戦わせたくないなら、今すぐにでも俺の意識を刈り取ればいい」
顔色は悪く、呼吸も苦しそうだが、少年の瞳は蒼いまま闘志を失っていない。
彼をよく知る者たちには彼の頑固さは有名なので、闘志を失っていないのなら、まだこの状態からでも戦って勝つつもりなのだろう。
しかし、戦いをやめさせるためにと、弱った湊に暴力を振るって気絶させるのも罪悪感から憚られる。
そうして、アイギスが困った顔で考え込んでいたとき、急に湊が身体を僅かに起こして口元に嘲るような笑みを浮かべてきた。
「さて、問題だ。君が握っていない方の手には、どうして拳銃が握られているんでしょうか？」
「拳銃？」
言われてみれば、確かに湊の右手には白銀のフレームに青い縁取りがされた銃が握られている。
先ほどまで倒れていたとはいえ、銃を握っている理由など戦いを諦

めていなかったからではないかと考えるが、湊が邪悪さすら感じる笑みで口元を歪めている理由が気に掛かる。
何か見落としているのかもしれないと顔を上げたとき、アイギスは自分たちが何の傍に居るのかに気付いてしまった。
「……ッ!? 駄目ですっ、八雲さん!」
「正解。この拳銃で車のガソリンタンクを撃ち抜くためでした」
咄嗟にアイギスが銃を奪おうとするも間に合わず、湊は手首を返す様に右腕を振りあげ、そのまま車に向けて引き金を引いた。
空気を震わすほど強烈な銃声と共に銃口から飛び出した弾丸は、容易く車の装甲を貫通し、そのまま内部を突き破りながらガソリンタンクを直撃した。
その直後、一瞬眩い光が見えたと思ったときには、アイギスは湊共々、爆発に巻き込まれたのだった。

第百二話　譲れぬもの

――ヴォルフ・市街地

車の爆発に巻き込まれ吹き飛ばされたアイギス。固い地面の上を転がるかと思ったが、運良く雪かきで集められていた雪の山に飛ばされたことで、ほとんどダメージもなく止まる事が出来た。

（流石に、あのような自滅覚悟の手段を取ってくるとは予想外でした……）

爆発に巻き込まれる直前、コンマ以下の余裕しかなかったあのタイミングで、アイギスは湊に手で肩を押され身体を僅かに浮き上がらせた。

その行動の意味を理解したのは雪の山につっこんでからだが、湊が身体を押していなければ固い地面を転がり、今頃は身体のどこかしらに不具合が出ていた事だろう。

自分を爆発に巻き込んだのは湊だが、助けたのもまた湊なので、複雑な想いを抱えながら雪の山から抜け出し、頭を振って服に着いた雪も手で払い落としてゆく。

十数メートル離れた場所にはまだ燃えている車があり、傍に湊の姿がない事から相手も自分同様吹き飛ばされたのだろうと容易に推測できた。

一度は自分のペースに持っていきかけたが、なるほど、チドリの言っていた通り、相手は存在自体がデタラメなのだと再認識する。

「……八雲さん」

視線を上げた先、車道を挟んで向かいの歩道に湊は怪我した様子もなく立っていた。

しかし、彼の傍らにある街灯の根元付近が大きく歪んでいることから、爆発で吹き飛んだ湊がそこへ衝突した事は一目瞭然だった。

生身の人間が丈夫な金属が歪むほどの威力で衝突して無事な時点で驚きだが、それ以上に今の湊は先ほどまでとは異なる威圧感を放っている。

右手にはカラブローネを、左手には仇桜を持ち、二挺拳銃から戦法

を変えるつもりのようだ。
湊の近接戦闘の脅威はチドリに聞いて頭に入っているため、相手が接近してくるなら銃で迎え討たねばならない。
そう考えアイギスが銃を構えかけたとき、向かいの歩道にいた湊が口を開いてきた。
「待ってくれたお礼にさっきの質問に答えよう。俺の目的は久遠の安寧のトップが一人娘、ソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインを殺す事だ」
「それだけのためにこの復讐を?」
「他にも願いはある。だけど、まずはそれを成し遂げるっ」
言った直後、湊は傍らにあった街灯を切り崩して筒状の鉄の棒を何本も作り出す。続けてアイギスに背中を見せたかと思えば、そのまま回し蹴りで空中にあった鉄の棒をアイギスに向けて飛ばしてきた。
「くっ……!」
咄嗟に横に飛んで第一波を回避するも、追撃のように二波、三波と迫ってくるため、アイギスは側転に宙返りと連続の回避行動を余儀なくされる。
アイギスがそのように避けている間に、湊は地面を強く蹴って駆け出すと左手に仇桜を持ったまま迫ってきた。
装備の問題から接近戦は不利、そう判断したアイギスは飛んできた最後の一本を正面から受けとめ、一四〇センチほどのそれを丸太回しのように振り回して応戦する。
「貴方の願いは一人でないと叶えられないのですか?」
地面に叩きつけるように振るわれた鉄の棒を、湊はバックステップのみで躱す。
「誰かを連れて叶えられるほど簡単な夢じゃない」
躱した湊は、そのまま再度接近を試みてアイギスに袈裟切りに斬りかかった。
だが、アイギスは叩きつけた棒を使って、まるで棒高跳びのように空中へ飛び上がり湊の攻撃圏から離脱する。
着地直後は狙われ易いため、地面が近付いてくれれば、アイギスは頭

から落下しながら空中で湊に狙いを定めて左手のガトリングを放った。
「八雲さんにとって他者は枷でしかないのですか？」
「守りながら戦えるほど俺は強くない。それだけだ」
弾丸が迫ると湊は武器を背中側に回して、攻撃は全て外套で受けとめる。
一応は防御姿勢と言えなくもないが、湊が守ったのは自分ではなく武器だった。
ならば、この攻撃は湊にとって受けたところで何の問題もないレベルという事なのだろう。
「わたしは守られてばかりの存在ではありません。シャドウという異形の存在と戦うために作られ、むしろ、それを存在意義としている兵器であります」
空けていた右手を地面に突いて、片手のハンドスプリングで体勢を立て直す。
いまこの街には自分たちしかいないので、周囲の被害を気にする必要がないことから、アイギスは駆け出すとパン屋らしき店の前に止められていた中型バイクを湊に向けて投げ飛ばした。
突然の妙手に湊も僅かに驚くが、いくら二百キロを超える物体が高速で飛来しようが、こんな物は避けてしまえば問題ない。
そのまま飛んでくるバイクの射線上から左に二メートルほど移動すると、湊はアイギスに向けてカラブローネを三発撃ちながら接近を試みる。
しかし、アイギスはそれを読んでいたかのように、横への回避を取りながら〝バイクに向かって〟両腕の銃を撃ち放った。
直後、弾丸の雨にさらされたバイクは、先ほど湊が弾丸を撃ち込んだ車のように空中でガソリンに引火して爆発を起こす。
「……チィッ!!」
爆発をもろに受けかけた湊は忌々しいとばかりに表情を歪め、アイギスへの接近を中断して横に飛び退く。
爆発で飛んでくるパーツを手で払い落し、外套に掛かった引火した

ガソリンは外套をマントのように翻す事で消火してしまう。
けれど、湊が対処に時間を割かれている間に、アイギスは近くにあった建物の外部非常階段から屋根の上を目指していたため、湊はそれとは別の建物の窓枠を足場に跳躍して屋根の上へと戻った。
雪が積もり、わずかに傾斜のある屋根の上での戦闘は足場の悪さからとても危険だ。動きが制限されるため、どうしても実力を出し切る事が出来ない。
それでも、相手も不慣れな状況なら自分にもまだ勝機はあるかもしれないと、アイギスはこの街というフィールドの中で試せる事は何でも試す気でいた。
「わたしは八雲さんが持っているその銃と同じです。兵器として、道具としてでも良いです。だから、わたしを貴方のお傍に」
「ふざけた事を言うなッ！」
「っ!?」
表情を怒りで歪めて湊がアイギスの言葉を遮り、銃をファルファッラに切り替えて彼女の傍の屋根に二発着弾させてくる。
着弾地点では小型の爆弾が爆発したかのように瓦や屋根板が吹き飛び、飛んでくる物から腕で顔を守りながらアイギスは自分が何か間違った事を言ったのかと考えていた。
すると、踏みしめた屋根の表面を砕きながら駆け寄って、湊はアイギスに斬り掛かってくる。
「心を持っているのに、人々を守るために自分を犠牲にだって出来るのに、そんな君がただの兵器であるものか！」
「ですが、わたしの心は作られた物です。採取された人格データを組み合わせ、そうしてわたしという人格は生み出されました」
迫ってくる湊へアイギスは手榴弾を一つ投げ、右手の銃を撃ちながら距離を取って接近を阻む。
だが、湊は今度の爆発は避けようとせず、刀を横に一閃するだけで炎ごと消し去ってしまった。
やはり、あの魔眼の力は脅威だ。弾丸とペルソナを除けば手榴弾程度しか持たないアイギスにとって、それらを後出しで消し去られると

いうのは、ジャンケンで二つの手しか使えないような物である。
どうやってか魔眼を解除させる方法はないか。戦いながら思考を巡らせていると、湊が距離を詰めてくる。
アイギスが回避しながら至近距離で銃弾を放ったというのに、身体を捻るだけでそれらを避けて、新しい弾倉の収められていたタクティカルベストのポケットを一つ切り裂いた。
「何によって作られようと、そこに心があるなら君は人だ。だからこそ、俺は世界に君が一つの命である事を認めさせる」
切り裂かれた布地と共に弾倉が落下してゆく。けれど、アイギスは攻撃のチャンスだと刀を振り抜いた事でがら空きになった相手の脇腹へ蹴りを見舞った。
「それは不可能です。心を持とうとこの身体は機械。生身でないのなら、誰もそれを人とは認めません。お気持ちは嬉しいですが、世界がわたしを兵器として扱うのはしょうがない事かと」
蹴りを受けた湊は咄嗟に同一方向へ跳ぶ事でダメージを軽減させる。
着地点の雪でブレーキが利かず、そのまま少々滑ったようだが、バランスを取って耐えきりアイギスへと向き直った。
「しょうがないなんて……そんな言葉で諦め切れるか！」
消耗している身体を、戦闘状態へ脳を切り替える自己暗示紛いのことで誤魔化し、無理矢理動かしている湊に普段のようなキレはない。
それでも、自分が叶えたいとする願いを否定する事は、例えその本人であろうと認める訳にはいかなかった。
湊は武器を完全に仕舞うと、中国拳法の構えを取って再びアイギスへと向かってゆく。
「俺やソフィアのような人類にとって害でしか無い存在を人というのなら、人々のために生きる心と優しさを持った君も人と呼ばれるべきなんだ。日の当たる温かな世界で、当たり前の幸せを受ける資格が君にはある。それを世界が認めないというのなら、力で脅してでも俺は認めさせるっ」
震脚で踏み鳴らした屋根を弾けさせると、湊は右手を腰溜めに構え

たまま空中を滑るように移動してくる。
確かに、雪で滑る場所を移動するよりも空中を行った方がエネルギーロスは少ない。中国拳法の足捌きならではの攻略法だ。
アイギスの目の前に震脚で着地した事でさらに威力を上乗せした湊は、真剣な少年の言葉に衝撃を受けて顔を俯かせ動きを止めていた相手へ向け、真っ直ぐその拳を打ち放った。
「八雲さんは――――」
だが、少年の放った拳はしっかりと正面から受け止められていた。
攻撃を放った湊は片手なのに対し、受けたアイギスは両手なのでタイミングを間違えなければ受ける事は可能だ。
とはいえ、いくら機械の乙女であっても、岩をも砕く剛腕の一撃を受けて無事に済む筈がない。案の定、肩や肘の辺りから過負荷によって煙を出ている。
けれど、少女はそんな事は気にせず、俯かせていた顔をしっかりとあげるなり、怒った様子で拳を掴んだまま相手に頭突きをかました。
「――――大馬鹿者であります！」
「ぐあっ」
石よりも硬い鋼鉄製の頭による頭突きだ。それを逃げないよう拳を掴まれたまま受ければ、当然、湊でも多少は怯んでしまう。
しかし、大切な少年が痛がっている状況でも気にせず、アイギスは片手で相手の拳を掴みながら、左手で顔を殴りつける。
「わたしがいつそんな事を望みましたか！　わたしは貴方と共にいられれば、それだけで十分幸せなんです！　他の方がどう思おうと何を言おうと気にしません！」
「ぐっ……それじゃあ、俺が嫌なんだっ！」
相手の腕を振り払うと、湊はアイギスの胸を蹴って後方に跳び、そのまま屋根から落ちて距離を取る。
すると、アイギスも即座に後を追って空中から湊の着地点を囲うように手榴弾をバラ撒く。
本来、インファイトは湊の距離だったはずだが、今の湊には戦鬼と恐れられたときほどの力は残っていない。

ならば、遠距離でも威力の変わらない銃火器を使われるよりも、多少のダメージを負いながらも攻撃を受け止める事も出来る接近戦の方が勝率は高いと睨んだ。
着地とほぼ同時に爆発に囲まれた湊は外套での防御を取っている。そこへ間髪入れず、空中で縦に回転して威力を高めた踵落としをアイギスは振り下ろした。
「ハァッ!!」
「っ……こんのぉ!!」
アイギスの踵落としを湊は両腕を頭上に掲げたクロスガードで受け止める。落下の加速と回転で増した威力を受けたことで足元の路面が砕け、受けた湊自身も骨に伝わる衝撃に歯を食いしばり耐えた。
そして、ようやく威力がある程度消えたところで、湊は相手を押し返して遠くへと投げる。
投げられたアイギスは器用に空中で体勢を制御して着地したかと思えば、再び湊にインファイトで挑むため人ではあり得ない加速で接近してきた。
「わたしが気にしないというのに、何がそんなに嫌なんですか！」
「君がただの兵器として扱われる。それが俺には耐えられない。君がどれだけ傷付いても、どれだけ苦しんでいたとしても、そいつらは君の心を無視して使おうとしてくるんだ」
「だから力で押さえつけて、他者を心ごと従えようとするのですか？
しかし、それでは人々の心は何も変わりません。独裁者に怯え、ただ表面的に逆らおうとしないだけです。八雲さんのいうわたしの心を無視してくる方々と何が違うというのですか」
アイギスが相手の顔面を捉えようとすると、半身で躱して湊がアイギスの腹部に膝蹴りを入れる。
ガンッ、と硬い音をさせながら身体が浮き上がった相手の顔へ、湊はさらに遠心力を加えた裏拳を放って、傍の雪の山へ吹き飛ばした。
だが、アイギスが高く積まれた雪の山に埋もれると今度はそこから銃弾の雨が飛んでくる。姿が見えていなかった事で反応がギリギリになり、咄嗟に横っ飛びに転がって回避した湊へ、雪から脱出したア

イギスが全速力のタックルをお見舞いした。
タックルを受けた湊は、傍にあった高級宝石店のガラスを突き破り店内に飛ばされる。ガラスが割れた事で防犯装置が作動したのか、ジリリリッ、と五月蝿いベルが鳴っている。
「八雲さんの願いは矛盾だらけであります。人々を、世界を、わたしのために変えるのでは、それは八雲さんの考える本当の温かな世界とは言えないのではないのですか」
騒音で耳を封じられた湊は、さらに続けて撃ちこまれた弾丸への対処が再び遅れ、両腕のガトリングを撃ちながら追ってきたアイギスが、湊を逃げ場のない壁際に追いこもうとしながら退路を塞いでゆく。
そんな状況を湊は外套から取り出した刀で壁を切り崩す事でクリアし、再び店の外に出てから相手の問いに斬撃を繰り出しながら答える。
「言われなきゃ気付かない莫迦に言って聞かせるだけだ。一部の力を持った人間が今の世の中をコントロールしている。そのコントロールする人間が変わるだけだと考えれば、人々への影響は少ない」
「わたしは此処に来るまでに色々な国を見てきました。矛盾する願いに気付かないフリをして、御自身を誤魔化している。そんな人に変えられるほど、この世界は単純ではありません」
湊の斬撃の軌道を読み切り、先ほどの湊の裏拳の動きをトレースしてアイギスは刀を弾く。
続けて刀が逸らされ泳いだ身体へ、これまた先ほどの湊の動きで膝蹴りを腹部に向けて放つ。
しかし、自分の動きならば読む事も容易かったのか、刀を片手持ちに切り替えていた湊は、独楽のように回転しながらアイギスの蹴りを片手で受け流して、刀を持った腕の肘を彼女の後頭部に打ち込んだ。
片足を膝蹴りとして上げていた状態で後頭部を打たれれば、当然、バランスを崩して前のめりに倒れてしまう。それをアイギスは咄嗟に残った足で地面を蹴る事で宙返りに持っていき回避した。
その動きは流石に予想外だったのか、追撃しようとしていた湊は中

断して距離を取る。
「世界を見て感じたなら、君にとってはそうなんだろうさ。だが、人の善意や優しさという可能性を信じた結果、俺は大切な人が傷付くのを何度も見てきた。誰も傷付かない方法なんて子どもの見る夢でしかないんだよっ」
「貴方がそれを諦めれば誰も傷付きません。貴方の傍にいて、貴方が傍にいてくれればわたしの世界は平和で幸せです」
「君を俺という閉じた世界にいさせるつもりはない！」
　湊はアイギスに自分のいる場所とは対極な世界にいて欲しいと願っている。それだけに、自分を基準とした狭い世界に縛られたままでいさせるつもりは毛頭なかった。
　湊は再び武器を二挺拳銃に切り替えると、道路を挟んで並走しながらアイギスと撃ち合う。外れた弾丸や、空中でぶつかり合った弾同士が兆弾となって、二人の通った通り沿いの店の壁やガラスに戦闘痕を残してゆく。
「だから、アイギス。君はチドリたちのいる光の世界に戻れ」
「嫌です」
「俺なんか居なくたって」
「無理です」
「生きていればもっと相応しい人間にだって出会え」
「お断りします」
　アイギスは、湊が何を言っても真顔のまま即座に切って捨てる。最後など言葉を遮ってまで先に言い切ってやった。
　すると、苦々しげに表情を歪めていた湊は耐えられなくなったのか、足を止め距離を開けたまま叫ぶ。
「我儘ばっかり言うなっ！」
「どっちがですかっ！」
　お互いに相手の意見を聞かずに自分の意見を押し通そうとしているため、確かに、二人は相手にだけは言われたくないだろう。
　そして、両者ともやや冷静さを欠いたまま心の化身を呼び出した。
『ペルソナっ!!』

現れたのは青銅の女神像と黒い死神。呼び出された二体は敵へ向かってゆくと、槍と剣で鍔迫り合いを始めた。
二体の力は拮抗している。少しでも気を抜けば押される状況で、二人は尚も言葉をぶつけあう。
「貴方は誰かのために自らの手を汚し。弱者のために、救われぬ者のために小狼という仮面を被って力を振るってきたのではなかったのですかっ」
「他人を犠牲にして生き残ったんだ。俺一人を生かすために片手では足りないほどの人間が犠牲になった。なら、彼らの分まで誰かを助けるのは当然の事だろうっ」
七年前の事故では両親やアイギスに救われ、タルタロスではチドリに助けられた。それからも湊は様々な人間の力を借りて、こんな危険な世界で生き延び続ける事が出来たのだ。
だからこそ、自分を助けるために命を落とした者や傷付いた者の分まで湊は他者を助けなければならない。
それが生かされた者としての責任であり、自身が出来る唯一の贖罪であると少年は考える。
しかし、それを聞いた少女は彼の考えを真っ向から否定する。
「八雲さんを助けた方たちは、誰もそんな生き方をして欲しいだなんて望んでいません！　どうか無事に生きて欲しい。誰よりも幸せな一生を生きて欲しいと願って貴方を助けたはずです！　他者を救わねばならないという強迫観念に突き動かされ、自らの幸せを蔑ろにした先に貴方が得る物はなんですか！」
「俺が求めるのは君とチドリが平和に生きられる世界、ただそれのみだ。今さら、自分の幸せを願うほど図々しくはない」
「やっぱり、八雲さんは大馬鹿者であります！　発動、オルギアモード！」
もうこの相手には何を言っても無駄だと、アイギスは作戦を考えてくれたチドリに心の中で悪いと思いながらも、力技で捻じ伏せるため自身の機関中枢にエネルギーを送りリミッターを解放する。
人間でいう耳のある位置に付いたヘッドフォン型のクラッチユ

ニットが高速で回転を始め、彼女の機体性能が〝オーバーヒートするまで〟という時間制限付きで上昇する。
アイギスの能力が上昇したことでパラディオンがタナトスを押し始めた。それを横目で見ながら、アイギスは先ほどの倍速以上で駆け出し、湊をその場に縫い付けるため両腕の機関銃を掃射する。
「パラディオン、キルラッシュ！」
相手を押し始めたパラディオンは、そのまま槍を高速で回転させタナトスの剣との間に火花を発生させながら、ガラスと壁を破壊して相手を近くの店舗に押し込んだ。
まさか圧倒的なレベル差のあるパラディオンに力負けするとは思っていなかったのか、タナトスの受けたフィードバッグダメージを喰らった湊は、複雑な表情で膝を突きながらフードを深く被ってアイギスの銃弾から身を守っている。
相手はもう既に走って逃げ回るだけの力を残していない。ならば、チドリから受け取った秘密兵器を使うのは今しかないだろう。
そう考えたアイギスは、傍に止めてあった車と店の二階の窓にある手すりを足場に、再び屋根の高さまで跳躍した。
急に高い位置に移動した相手に湊は訝しんで武器を取る構えを見せている。けれど、湊が何をしようと関係ない。彼女が受け取った秘密兵器は湊自身の力なのだから。
空中で背中に付けていたショルダーバッグを外し、その中身を取り出しながらアイギスは店舗の中に潜んでいた自身のペルソナに命令する。
「パラディオン、電光石火！」
轟音と共に店の中で爆発を起こしてパラディオンが現れる。タナトスを倒した時点で消えていたと思っていた湊は、転がる様に避けると旋回して再び戻ってきた相手へ、喚び出した赤い光を宿した剣（楔の剣）ですれ違い様に切り付けた。
途端、パラディオンは水色の光に包まれ消えてゆき、最後にはカードとなって湊の中に吸収されていった。
あれがチドリから聞いていたアベルの剣かと、ペルソナを奪われた

事を痛手に思いつつもアイギスは全ての準備を終えていた。
バッグから取り出した、美術品と見紛うばかりの黒い翼のついた紫色の手甲型大砲を両手で構える。大砲の名は〝ウィオラケウス〟、以前、湊がチドリに見せた無の銃とタナトスを融合させた武器である。
湊はペルソナを力の管理者に頼んで呼び出し直す事が出来るため、万能属性に似た特殊な攻撃を放てるウィオラケウスをチドリは一つ貰っていたのだ。
アイギスの手にある武器がそれだと分かった湊は、目を大きく開いて外套を伸ばして何重にも自分に巻き付けている。この攻撃だけは外套でも防げるか分からないのだ。
そして、
「これで……終わりであります！」
彼女の持っていたウィオラケウスが火を噴いた。赤と黒の禍々しい光が湊を呑み込み、周囲の建物を崩壊させ、攻撃の余波で巻き起こった暴風でアイギス自身も吹き飛ばされる。
「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
光に呑まれる少年の声を聞きながら、吹き飛ばされたアイギスは大砲に力を吸われ全身に虚脱感を感じる。チドリから一発限りの必殺技だとは聞いていたが、流石にこれほどの威力だと思っていなかった。
残っていた精神エネルギーを全て消費しきり、仮にペルソナを奪われていなくとも呼び出せなくなっていただろう。
発射の勢いと余波で飛ばされたアイギスは、店の壁にぶつかって地面に落ち、なんとか武器を手放さずには済んだがよろよろと立ち上がる。
そして、更地と化していた街の惨状と、その中心にいるであろう少年の安否が気になり、少年の元へと駆け出したのだった。

第百三話　少年の吐露

様々な物が焼け焦げた戦場特有の臭いがする。目を覚ました湊はぼんやりと考えて瞼を開けた。

赤と黒の奔流に巻き込まれたところまで覚えていた湊は、全身に感じる痛みに顔を歪ませながら、自分に膝枕をしてくれている少女を見上げて声を掛ける。

「……俺は、どれくらい寝てたんだ？」

「わたしが発見したときからの計測でしたら、およそ十分ほどであります」

「……そうか」

起きたばかりで意識がはっきりとしない中、湊は自分の状態を確かめていた。

あれだけの攻撃を受けたというのに身体はほぼ無傷。多少の擦り傷などはあるが、それも時間を置かずにファルロスの力で治癒するだろう。

しかし、防御のため身体を何重にも覆っていた外套はなくなっていた。自分を守るために焼失したのかもしれないが、あの中には大切な物がいくつも入っている。

イリスの形見や岳羽詠一朗の遺言など、なくなっては困る物があったというのに、どうか欠片だけでも残ってはいないかと身体を僅かに起こしかけたとき、アイギスが目の前に黒いボロキレを見せてきた。

「あの、わたしの攻撃でマントがこんな風になってしまったのですが……すみません」

受け取って広げてみれば、ほとんどが焼け焦げて子ども用のマフラー程度の生地しか残っていなかった。

けれど、これは力を手に纏わせてこねてやれば綺麗な状態に戻り、さらに元の大きさ以上にすることも出来る。

そうして、湊は一度丸めてから再度広げて大人用のマフラー状態にすると、小さな笑みを浮かべてアイギスに貸してやった。

「ほら、これで元通りだ」

「これは……自由に伸縮させる事が出来るのですか？」
受け取ったアイギスは自分の首に巻いてみて、ボロキレがちゃんとしたモフモフとした感触のマフラーになっている事に驚いている。
その様子に湊は優しげに目を細めて頷くと、ポツリポツリと言葉を紡ぎ始めた。
「俺の負けだな。でも、ソフィアをどうにかしないと日本には帰れない。復讐とかじゃなくて、敵組織の影響力の関係で、この件を終わらせないと日本でも逃げ隠れながら生活するしかないんだ」
「……では、それが終わったら帰りましょう。貴方を連れ戻すとチドリさんとも約束しましたから」
「ああ、そういえば、ウィオラケウスを持っていたっけ。二人が手を組んでいたなんてな。俺が勝てないはずだ」
アイギスが相手だと思っていたら、実際は自分の弱点である二人の少女が手を組んで挑んで来ていた。これでは勝てないと湊はどこか嬉しそうに苦笑を浮かべている。
そして、傍らに置かれていたウィオラケウスをコツンと叩いてカードを取り出すと、美術品のような見た目をした武器はただの薄汚れた手甲のような姿になっていた。
タナトスは既に湊の中にいるのでカード自体は消えていったが、元に戻った無の銃をアイギスの巻いているマフラーに仕舞いながら湊は言葉を続ける。
「……自分が間違ってる事は分かってたんだ。他人を傷付けない。誰も傷付かない。そんな世界になればいいと思って、力と恐怖で人間たちを押さえつける抑止力になればいいのかなって考えた。でも、大勢の心を読んでいる内に、こんな欲に塗れた者たちに本当に救う価値なんてあるのかと疑問を覚えた」
人の心が読めてしまう湊は、当然、人々が仮面で隠している負の感情すらも視えてしまう。
読心に目覚めたばかりの頃、茨木童子や赫夜比売も言っていたが、僅かにでもこの力を持った者は人を信じられなくなる。
湊の場合は、読まれた本人すらも覚えていないような生まれた時か

らの記憶を、本人の主観的な視点だが全て覗けるだけの力を有しているのだ。
感情を読み取るのは当たり前で、記憶を読む事に関してもそれだけの物を持っていれば、当然、人間の見たくない部分を見る事も一度や二度ではきかなかったに違いない。
「けど、疑問を持ったところで一度決めた事はそう簡単に変えられない。それじゃあ、俺が殺してきた人間は殺され損だ。彼らももっと生きていたかっただろう。だから、俺は久遠の安寧を潰して力を示し。アイギスを認めさせると共に抑止として存在する……はずだった。実は、さっき俺がいた研究所みたいな場所で、研究員の女に俺は百鬼八雲のクローンだって言われた」
「八雲さんが、クローン？」
「ああ。神降ろしのせいで俺はここ一年くらいの記憶しかもう覚えてない。意味記憶はあるけど、エピソード記憶がないから両親の顔も昔の事も思い出す事が出来ないんだ。だから、俺は相手の記憶を覗いた。そしたら、本当に相手は百鬼八雲のクローンを産んでいたんだ」
覗いた記憶に読み間違いはない。相手は提供された細胞と血液を使って受精卵を作り、それを自分に着床させて出産までしていた。
出産後ほぼすぐに成長促進剤の投与なども始めていたので、あれでよく死ななかったものだとも思ったが、結局、クローンは生まれてから一ヶ月も経たずに七歳ほどの身体になっていた。
「そんな、一体誰が？」
「日本人の男らしい。でも、実際に応対したのは別の人間だし。非合法な依頼だから本名でもない。だけど、何かしら手掛かりがないかと思ったところで、業に支配された名切りの祖が女を殺して、女の持っていた資料も焼いてしまった。曰く、俺には不要な物なんだとか」
どこか信じられない様子でアイギスは尋ねるが、反対に湊はアイギスを見上げながら冷静さを保って淡々と答える。
「恥ずかしい話だけど、自分がクローンかもしれないと言われて俺も動揺してしまった。そして、名切りの祖にそこを突かれて、神降ろしの簡易版とでも呼べばいいのか器慣らしを決行され暴走したって訳

だ」
「何も恥ずかしくないであります。誰だって御自分がクローン体だと言われればショックを受けるはずです」
「そうかな。でもまぁ、自分がクローンだとすれば、自分は何のために戦ってきたのかなって思ってしまって」
　気落ちした暗い様子で僅かに視線を伏せる湊。大切な少年のそんな姿にアイギスは悲しい気持ちになりながら、膝に乗せた相手の頭を優しく撫でる。
「女の話が真実なら俺は紛い物だ。俺は自分の子どもに血を介して乗り移って人格を上書き出来るらしいから、名切りの血でオリジナルの記憶と人格を得たのかもしれない。きっとクローンを造るよう依頼した人間も双方がオリジナルと変わらなくて驚いただろう。けど、それでもクローンはオリジナルのコピー品でしかない」
　例えオリジナルの記憶と人格を持っていようが、茨木童子たちが自分を名切りの当主だと認めようが、クローンである事実は変わらない。
　オリジナルとの性能差は不明だが、必ずどこかしらに異常を来たすであろう人工的に生み出された劣化複製品（デッドコピー）。
　遺伝子操作を受けた人工的な天才であるソフィアを嘲ったが、自分はそれ以上に罪深い生きた人間の複製品だ。そんな存在が普通の人間のように夢や願いを持っていいのかと悩まずにはいられない。
「二人のために戦って来たのは本心だ。幸せでいて欲しい。平和に暮らして欲しい。そう思ってずっと戦ってきた。これだけは絶対の真実で、神降ろしにもこの想いだけは奪わせない。でも、そんな俺が他者の幸せを願って良いのか悩んだ。君たちの傍にいても良いのかとも」
「……やっぱり、八雲さんは大馬鹿者であります。わたしは今ここに居る〝貴方〟の声を聞いてやってきました。そこにオリジナルやクローンなんて関係ないんです。だから、わたしは勝者の権限で命令します。わたしを〝貴方〟の傍にいさせてください」
　少年に対する慈愛に満ちたアイギスの笑みに、湊は暫し呆けて目を

奪われる。
情緒面の成長がまだ不完全で、彼女自身も自分は兵器である機械だと言っていた。
しかし、優しく笑いかけてくれる少女を見たとき、湊は彼女が本物の人間にしか見えなかった。
「けど、君が本当に大切に思っているのはオリジナルの方なんだぞ？」
「まだ八雲さんがクローンだとも確定していませんし。もう一人の八雲さんとお会いしたらちゃんとお話しますから、特に問題はないでしょう」
確かに湊が知ったのは百鬼八雲のクローンが実際に作られた事だけだ。どちらも本物の記憶と人格を持っている可能性があるので、真実を知っているのは依頼者の男しかいない。
街中でばったりという事はないだろうが、仮に湊がクローンだったとしても、オリジナルの八雲には会ったときにでも挨拶をすればいいとアイギスは簡単に言ってのけた。
しかし、湊は同一の人格を持つなら思考や嗜好も同じだろうとして一つの懸念を話す。
「いや、相手も君と一緒に居たいというかもしれないだろ。オリジナルとクローンが鉢合わせなんて」
「……相手〝も〟？　なるほど、八雲さんもわたしと共にいることは嫌ではなかったのですね。これは僥倖であります。勝者の権限は別の機会に使うことにしましょう」
少年がうっかり口を滑らせたことで、アイギスは想いが同じなら命令する必要はないと嬉しそうに頷いている。
けれど、やらかした少年は顔をやや赤くしながら、自分の発言を訂正しようと相手に言葉を返す。
「っ、違う！　今のは言葉の綾で」
「では二択でお答えください。八雲さんはわたしのことが好きですか？　嫌いですか？」
「いや、それは、好き……だけど。その二択は卑怯だろ」
「わたしも八雲さんの事が好きであります。これは所謂、〝両想い〟

というやつですね。カップル誕生であります」
年下を膝枕している少女と年上に膝枕されている少年、この時点で両者の力関係は決まっているようなものだ。
少女の出した問いに、最後は消えゆくような声で顔を真っ赤にして答えた少年は、そのまま拗ねたように寝返りを打って横を向いてしまう。
けれど、問いを出した少女は気にした様子もなく上機嫌で少年の頭に手を置いた。
もっとも、アイギスの言った〝好き〟は英語にすればライクの方であり、湊もそれは分かっているのだが、自分の気持ちを相手に伝える事があまりないので恥ずかしがっているのだ。
そして、しばらくして顔の熱が引いた湊は、色々と変な知識を手に入れてきたらしい相手に、その情報源はどこか尋ねた。
「……誰が君にそんな俗っぽい知識を教えたんだ？」
「ナタリアさんたちであります。あっ、ラースさんが八雲さんを姫と呼んでいたのですが、八雲さんは女性なのですか？」
「え？　ああ、うん、まぁ。染色体キメラだからある意味両性ではあるけど、生殖機能は男の方しか持ってないよ」
「なるほど、女性的な顔立ちではなく本当に女性の顔でしたか。実を言いますと、わたしの顔認証センサーでは八雲さんは性別アンノウンと表示されていまして、桐条の技術でも八雲さんの謎を解明出来ていないのです」
「……見て分からないなら、そんなセンサーは切っておけ」
「いえ、ニューハーフの方でも本来の性別を判定出来ますので、この場合、八雲さんがイレギュラーなだけかと」
湊は別に自分のやや女性寄りの中性的な容姿にコンプレックスは抱いていない。他の女性陣より頭二つほど抜けて美人なだけで、鍛えられた肉体は勿論の事、服装や髪の長さによってちゃんと男性に見えるのだ。
その容姿は紛れもなく百鬼一族の系譜であり、少し桜に似たぽやっとしたところのあった母親の顔にもそっくりで、英恵などはそこに

凛々しさを足した美人さんだと湊を褒めている。
けれど、からかうように美人だと褒められるのは嫌っている。誰でも馬鹿にしたように笑いながら褒められたところで良い気はしないので、この反応もおかしくないだろう。
しかし、別にからかっていないアイギスに素っ気ない態度を取ったのは、桐条グループの作ったくだらない機能に性別不明と判断された事がどことなくイラッとしたからだ。
誰がそんな機能を彼女に搭載したのか分からないが、ニューハーフですら判断出来るなら、骨格などでも判断出来るようにしておけと小さく嘆息した。
それからしばらくの間、器慣らしと戦闘で疲れているであろう湊を休ませると、アイギスはそろそろ他の者たちの元へ向かおうと相手を起こして自分も立ち上がる。
「では、とりあえず皆さんの元に戻りましょう。久遠の安寧の本拠地についても情報を集めている最中ですし。一緒にいれば皆さんで貴方を守れます」
「少し休めば力は十全に使える。守って貰うほどでは……っ」
言いかけている途中で湊は何かに気付いたように言葉を止めた。さらにすかさず運命と剛毅のカードを呼び出し握り砕くと、呼び出した二体のペルソナに命令する。
「鈴鹿御前！　大口真神に乗ってアイギスを皆の所へ！」
「八雲さんっ!?」
現れた鈴鹿御前は驚いているアイギスの腰に手を回すと、牛ほどの大きさの白狼・大口真神に跨って去っていった。
敵の狙いが自分であると判断してアイギスたちを離れさせたが、彼女たちが離れたのを確認すると湊も痛みを堪えながらその場から走り出す。
直後、爆発音が聞こえたかと思えば、先ほどまで二人がいた地点に戦車の弾頭が着弾して辺りを吹き飛ばしていた。
（……これは、国聯軍か）
狭い路地に入って屋根に上がれそうな場所を見つけると、湊はすぐ

に状況を確認するため屋根の上に移動していた。
そこから見えたのは、国聯軍のマークが入った戦車やハンヴィーが歩兵と共に何台も街へ入ってきている様子だった。
湊が屋根の上にいることが分かったのか、国聯軍は建物が壊れることも構わず戦車の砲撃やミサイルを放ってくる。
相手は自分と共にいたアイギスも狙った者たちだ。全て殺しても構わない。そんな心の奥底から聞こえる黒い声を無視しながら、湊は屋根を伝って逃げ回りながら対処法を考えていた。
武器類の入っているマフラーはアイギスが巻いたまま持って行ってしまった。故に、今はベルトに付けている刃渡り十八センチのファイティングナイフと、同じく特注のストラップでベルトに付けているプッシュダガーが十本ほどしかない。
「タナトス、剣を借りるぞ！」
それ以外に使えるのはペルソナの持っている武器くらいだ。最も使い易いのは鈴鹿御前の持つ刀だったが、名切りのペルソナで唯一信頼出来そうな相手が鈴鹿御前しかいなかったので、彼女にはアイギスの護衛を任せてしまった。
飛んできたミサイルが爆発しないよう死の線に刃を通す事で切り裂くと、湊はどこから逃げ出すべきか狭い路地を選んで通りながら考え続ける。
しかし、そんなときだった。国聯軍とは別に、遠く離れた場所からこちらへ向かってくる軍用機の存在に湊は気付く。
（なんだ？　ドイツ軍……違う。これは、久遠の安寧か？）
まだ僅かに距離があるとは言え、十数分もしないうちに軍用機の一団はこの街の上空に到達するだろう。
けれど、国聯軍に襲われているこのタイミングで、どうして久遠の安寧まで出張ってくるのかは分からない。
相手の狙いは自分の筈だ。進路から考えて目的地はここでまず間違いない。
湊、仕事屋の集団、国聯軍、これだけの人間が揃ったある意味で混戦状態な場所に来てさらに彼らも戦うつもりなのだろうか。

そう考えたとき、湊は敵の本当の狙いに気付いた。
「まさかっ……奴ら、国聯軍を足止めに使って街ごと吹き飛ばすつもりか!?」
人間を超えた視力によって近付いてくる軍用機の姿を確認する。独自開発の機体なのか名称までは不明だが、そのフォルムはどうみても爆撃機であった。
相手からは国聯軍の戦車や車が街に入っているのは見えているだろう。けれど、それでも進路を変えないということは、敵は国聯軍諸共この街を爆撃して湊を殺すつもりのようだ。
どれだけの規模を吹き飛ばせるのかは分からない。だが、あんな物がここにくれば大勢の人間が死ぬ。
国聯軍の人間だけではない。街のすぐ傍にいるアイギスや共にいる者たちも巻き込まれるだろう。
自分を救うために集まってくれた者たちが、むざむざそんなくだらない理由で殺されていい訳がない。
爆撃機はもうそこまで迫っている。もう迷っている暇はなかった。
「……守るよ。絶対、死なせない」
今の自分にどこまで出来るか分からない。それでも可能性があるのならと、アイギスによって一度は閉じられた扉を湊は自分の意思で開いた。
＊＊＊
鈴鹿御前に抱えられたアイギスは、大口真神によって街の中を疾走してナタリアたちの元に戻っていた。
数百メートルをたった一度の跳躍で移動した大口真神が空から降ってくると、跨っていた鈴鹿御前はアイギスと共に降りて、大口真神に消えるように命令する。
そして、頭を撫でられた白狼が光になって消えてゆくのを見ながら、アイギスと共に突然やってきた鈴鹿御前へナタリアたちは状況を訪ねた。
「一体何があったの？」
《国聯軍とやらが攻めてきおった。元々、近場に待機していたんじゃ

ろう。器慣らしと二人の戦闘が終わったことで、もう近付いてもよいと判断したらしい》
「というか、貴女は誰なの？」
《生前名なら百鬼紫乃、ペルソナとしての名なら鈴鹿御前。別にどちらで呼んでも構わぬが、およそ七百年前に当主を務めていた八雲の先祖じゃ》
　ナタリアの質問に答えながら、鈴鹿御前は戦場の様子を眺めていた。彼女も湊と同じように数キロ先を肉眼で確認出来るらしい。
　ハンヴィーに乗った兵士や戦車が街が壊れる事も構わず攻撃しているが、湊はどうやら逃げ続けられてはいるようだ。
　しかし、そこで彼女はある事に気付いたため、傍に立って心配そうに街を眺めているアイギスに尋ねた。
《おい。何故、貴様が八雲の首巻きを持っているのだ。八雲の装備は全てそこに入っているのだぞ》
「これは八雲さんが貸してくれたのですが、お返しする前に貴女に抱えられてしまって……」
《くっ……拙いぞ。今の八雲では戦力としてペルソナを呼べん》
　今はまだなんとか逃げ回っているが、戦力としてペルソナを呼べないなら外套を失っている以上、攻撃を防ぐ事も出来ないという事だ。
　既に呼び出されている鈴鹿御前も、援護としてここから万能属性スキルを放つ事は出来ない。
　そもそも、そんな事が出来るのなら鈴鹿御前は湊の命令を無視してでも愛子（まなご）の敵を屠っていた。それをしないのは単純にエネルギー源の湊にそれだけの余力がないからであった。
《……なんじゃ、何かが来る》
　このままではジリ貧で湊が殺される。そう思って状況の打開策を考えたとき、鈴鹿御前は遠く離れた空にこちらに向かってくる機影を発見した。
　一応、湊の持っている知識をわずかにフィードバックしているので、近代兵器類に関しても知ってはいるが、ここには彼女以上に詳しい人間が多数いる。

湊とアイギスの戦闘を見ていたことで双眼鏡を手にしていたナタリアたちは、鈴鹿御前の言った方角の空を見つめ驚きの声を上げた。
「爆撃機っ!?　そんな、既に国聯の陸軍部隊が街にはいるのよ。それほど大きくないこの街に投入するには過剰戦力だわ」
「いや、あれは国聯軍の機体ではないです。しかし、あんな物をドイツ軍が持っているとも……久遠の安寧か！」
ナタリアに続けて五代も近付いて来る爆撃機を見ながら、それが久遠の安寧の手の者であるとあたりを付ける。
けれど、ナタリアの言う通りそれほど大きくない街に既に国聯軍が来ているのだ。
相手も湊の暴走と戦闘が治まってから来たのだろうが、いま攻撃すれば国聯軍も巻き込むことになってしまう。
いくら裏界最大規模の組織だろうと、世界中の国々が加盟する組織が派遣した軍を攻撃して大丈夫な訳がない。
「まさか、敵は国聯軍ごとボウヤを吹き飛ばすつもりなの？　自分たちも潰されるわよ」
「彼らは一国とやりあえるだけの力を持っています。経済や産業で彼らに逆らえない国もありますから、なぁなぁで済まして金で解決するつもりかもしれません」
久遠の安寧は色々な国に工場や研究所を持っている。それで経済が支えられている土地もあるので、全ての国が彼らに逆らえる訳ではない。
よって、ここで国聯軍の兵士を殺したとしても、その分の補償金なりを払って後は政治的な話しで解決に持ってゆくに違いなかった。
《おい、冷静に話しておる場合か？　あれが来ればここも巻き込まれるぞ》
「……残念だけど、今さら逃げても無駄なのよ。逃げる前に相手は到達して爆撃が始まる。だから、私達に出来るのは神に祈るくらいね」
《アイギス、貴様のペルソナで何とか出来んのか！》
「パラディオンは現在八雲さんが所持しています。加えて、ウィオラケウスを使用したことでわたしの精神エネルギーは枯渇しています

ので、どちらにせよ戦力にはならないかと」
《どいつもこいつも使えん奴らめっ》
爆撃機がやってきたというのにのんきに話している者らを鈴鹿御前が叱咤してみれば、ナタリアたちはやや諦めの表情で笑っていた。
こんな所で死ぬなど御免だろうに、自分に出来る事はもうないと諦めている姿を見て、鈴鹿御前の怒りはさらに増す。
けれど、確かに逃げ出す時間などもうないのだ。やってきた爆撃機は湊と国聯軍が戦っている上空に来ると、大量の爆弾を投下していった。
外套を纏っていた湊ならば無事に済む可能性もあるが、何も持たない状態ではどれだけ耐えきれるか分からない。
そして、彼女たちが少年の身を案じていると、こちらにも風に流された数発の爆弾が近づいてくるのが見えた。
咄嗟に鈴鹿御前もスキルで迎撃しようとする――――だが、そのとき空に黒い炎が走った。
「これは……ペルソナでしょうか？」
「影で出来た蛇の骨？」
街とアイギスたちの元に爆弾が落ちてくる直前、突如現れた炎が巨大な黒い蛇の骨を形作り皆を守っていた。
時折、表面が炎のように揺らめいていることから、この蛇骨も湊のミックスレイドの腕骨と似た類いかと推測する。
しかし、それにしては規模が違い過ぎた。現れた蛇骨は地上百メートルのほどの位置に浮き、小さいとはいえ街全体を覆って守っているのだ。
現在進行形で爆撃機は攻撃を繰り返している。けれど、それらは全て蛇骨に阻まれ街を一切傷付けられずにいた。
いまの湊にこれだけの力が残っているはずがない。そう思って鈴鹿御前が湊の姿を探すと、それを見つけてしまった。
《莫迦なっ。何故じゃ、どうして阿眞根になっておるっ!?》
蛇骨の間から見えた空にそれはいた。
背後にタナトスでもアベルでもない、甲冑を着た白銀の天使のよう

な輪郭のぼやけた存在を控えさせ、身体に白い光を纏った銀眼の少年が浮いている。
先ほどの暴走状態とは異なり、少年の様子は随分と安定している。
だが、瞳の色から察するに、あそこにいるのは、少年の肉体を器に呼び出された神のはずだ。
今の湊は鈴鹿御前をただ呼び出しているだけでもかなりギリギリで、他の名切りを呼び出すことなど出来ない。
故に、茨木童子が再び神降ろしを敢行するなど不可能であり、少年に再び神が降ろされている理由が鈴鹿御前にも分からなかった。
「鈴鹿御前さん、八雲さんは一体？　それにアマネさんとは？」
《阿眞根産巣日神は八雲の神としての名じゃ。そして、どういう訳か八雲に神が降りておる》
「そんなっ、八雲さんとの契約はまだ」
今の湊に神が降りているのは紛れもない事実。同じ一族だけに鈴鹿御前はそこに間違いはないとはっきり断言した。
しかし、アイギスはまだ八雲との契約は切れていないと反論した。桜たちから聞いた話しが正しければ、神が降りるのは湊の人格が完全に消え去ってからだ。
人格が消えれば契約が切れるので、契約が残っているのならあそこにはまだ湊としての人格があるはず。
契約に関しては契約者しか感知出来ないので、その点は鈴鹿御前も反論も否定もできないが、では、今の湊には何が起こっているのか、空にいる少年を見つめる事で彼女は明らかにしようとする。
《……まさか、いや、そういう事かっ》
突然現れた蛇骨、誰も見た事のない天使型のペルソナらしき存在、そして神が降りている湊。
それらから今の湊の状態を理解した鈴鹿御前は、驚愕の表情を浮かべた直後にどこか怒りを堪えるように拳を握りしめている。
他の者はまるで状況が分からないため、何か分かったのであれば教えて欲しいと五代が代表して尋ねた。
「すみません。一体何が分かったんですか？」

《八雲は器慣らしで得た感覚から神の存在を感じ取り、今度は自ら神を呼びこんだのじゃ。まぁ、呼ぶには強い想いが必要だったようだが、それ故に、八雲が呼び代に使った想いを遂行するための存在として不完全に神は顕現しておるという訳だ》
「そんな事をして八雲さんは大丈夫なのですか？」
《そんな訳なかろう。蛇骨は名切りの業、天使は八雲本来のペルソナが出てきておるようなものだ。神が不完全な分、八雲の力で補填しているらしいが、それが八雲の力なら当然人格の消去は進行する》
　爆撃機はこれ以上攻撃をしても蛇骨に阻まれると判断したのか、旋回して街の上空に戻ってくるとサブ兵装の機関銃で湊に攻撃を加え始めた。
　しかし、背後から迫ったそれらは、湊の背後に居る天使が両手を広げ薄緑の光の盾を出す事で防いでいる。
　鈴鹿御前の話しが本当ならば、未だに頭上で街を守っている蛇骨とあの攻撃を防いでいる盾によって湊は今も記憶を失いつつあるという事だ。
　自身を守るために展開した盾はともかく、己を殺そうとしてきた者たちも守るために蛇骨を呼び出す必要性がアイギスには理解できない。
　少年に一番近しい存在である女性に、どうして湊は蛇骨を出し続けているのか尋ねた。
「どうして……どうして、八雲さんは国聯軍の方たちまで守っているのですか？　相手は八雲さんを殺そうとしてきた者たちだというのに」
《巻き込んだと思っておるんじゃろ。あやつらが来たのは八雲を殺すためじゃ。八雲を殺す必要がなければ、そもそも久遠の安寧の攻撃にさらされることもなかった。故に、八雲は〝無関係〟な者たちを守っておる》
「八雲さんは見知らぬ方に殺されるような事はしてません！」
《そんな事は知らん。八雲とて金で雇われ人を殺めてきた。あやつらも似たような理由で、いやむしろ、民の生活を守るために八雲を殺す

つもりなんだろうさ。優れた名切りは戦いを呼ぶからな》
そうやって話すアイギスたちの頭上で蛇骨が身体をくねらせ動き出す。
あまりに大き過ぎて全長は把握しきれないが、頭部はしっかりと存在していたようで、角らしき物が生えた巨大な頭骨が大口を開けて爆撃機を追っていた。
爆撃機の飛行速度はマッハを超えているというのに、それに徐々に追いついているのだから追われている機体のパイロットはパニックに陥っているだろう。
しかし、攻撃に移っているのは蛇骨だけではなかった。湊の背後にいる輪郭のはっきりしない天使も金色の捻じれた二又の槍のような物を手に出現させると、振り被ってそれを爆撃機に向かって投擲した。
途端、音速の壁を超えたのか風船が弾けるような音をさせながら、一瞬にして空に金色の尾を引いて一同の視界から消え、その直線状にいた二機の爆撃機を爆散させた。
そのあまりの光景に街の国聯軍の兵士らも外に出て上空の戦闘を眺めているが、彼らに湊の力を見られるよりも、不完全な顕現を果たしている〝世界〟のアルカナを持つペルソナたちを行使し続けていることを鈴鹿御前は危険だと思っていた。
《やめろ、八雲！　このままでは力を失うだけじゃない、人間に戻れなくなるぞ！》
鈴鹿御前が必死に声を張り上げ叫ぶも、蛇骨も天使も力の行使をやめようとしない。
湊の気を逸らすためか爆撃機が他の者を狙えば光の盾と蛇骨の身体で即座に守り、逃げようとすればどこまでも追って敵を屠る。
大きく開けられた蛇骨の口に禍々しい黒い光が集まり、直後、解放された光はウィオラケウスと同じ赤と黒の奔流となって飛んでいた爆撃機を跡形もなく消し去った。
手甲程度の大きさのウィオラケウスで街の一角を更地にしてしまえたのだ。その数百倍の大きさの蛇骨が放った攻撃など避けきれる

はずがない。
「鈴鹿御前さん、八雲さんと話しをする方法はないのですか？」
《あればやっておるわ。しかし、もう時間がない。出来るかは分からぬが、妾は直接八雲の中の蛇神に干渉してみる。何か動きがあれば、貴様は絶対にそれを見逃すな》
命を削ってでも味方を守り、敵には殺戮の限りを尽くす名切り本来の姿を晒す神。
それは役目を終えれば消える存在だが、それまで少年が持つとは思えなかった。
故に、鈴鹿御前は湊の心の深部に眠っている蛇神に直接干渉することで、燃費の激しい蛇骨だけでも消せはしないかと考えた。
成功すれば湊の方にも何かしらの変化あるはずなので、それを見逃すなとアイギスに伝えて鈴鹿御前は光になって消えていった。
彼女がどれだけの力を持った存在なのかはここにいる誰も知らないが、それでも湊を止められる可能性があるのは彼女だけだ。
「……八雲さん」
アイギスたちが祈る様に見守っていると、そこで蛇骨と天使の両方に変化が現れた。
どこか不安をかき立てるような不気味な咆哮を上げて消えてゆく蛇骨、入れ替わる様にタナトスとアベルへ交互に姿を変えている天使、どうやら阿眞根としての変化も解けかかっているらしい。
「言ってすぐに成功させるなんてすごいわね……」
「ですが、八雲さんの様子がまだおかしいです」
鈴鹿御前の狙いは成功したようだが、最終的にアベルを呼び出したままにしている湊の様子がどこかおかしい。
敵機はほぼ全滅させ、残っていた機体も蛇骨たちが消えた隙に逃げていった。なので、もう狙われる心配はないのだが、湊は手足をだらりと下げたまま空中で動かなくなっている。
「もしかして、飛んでいるだけで精一杯なのかしら？」
「……八雲さんは同調率を高める事でペルソナと一体化し飛んでいるはず。まさか、人間に戻り切れていない事で自我が戻ってきていない

のでは」
「いや、待ってくれ。小狼君が動き出した」
空中で動かなくなっていた湊の状態を不思議に思って皆が原因を考えていたとき、湊の身体がびくりと一度跳ねて動き出した。
背後にアベルを呼び出したまま、胸を強く押さえて湊はどこかへと飛び立ってゆく。彼の向かう先は、アイギスたちの居る方角でも、久遠の安寧の爆撃機が逃げた方角でもない。
「駄目っ、八雲さんが行ってしまいます！」
「ちょっと待ちなさい！　どうやって飛んでる相手を追うっていうの！」
今の湊がどこへ行こうとしているかは不明だ。けれど、このまま見失えば仕事屋たちに殺される事は目に見えているため、アイギスはそのまま駆け出そうとする。
だが、相手は飛んで移動しているのだ。同じ速度で移動出来たとしても、陸路では途中に森や山があればどうやっても追いつけない。
ナタリアたちはここまでは車で来たので、アイギスが走って追い掛けるよりかはマシかもしれないが条件はほとんど変わらない。
相手の言っている事とその正当性を理解しながらも、アイギスはどんどん離れて姿が小さくなってゆく湊を見つめ拳を握りしめた。
「せめて、わたしのパラディオンがあれば」
「エネルギーがないって自分で話していたでしょう。残念だけどボウヤを追う事は……ヘリの音？」
大切な少年を追う事も出来ない自身の無力さに悔しがっているアイギスを宥めるナタリア。
しかし、ナタリアは自分たちの後ろからヘリのプロペラ音が近付いて来ている事に気付き振り返る。
国聯軍も久遠の安寧も、湊の暴走と湊とアイギスの戦闘が治まるのを待ってからやってきたようだった。
確かに、あんなものに巻き込まれれば、最新鋭の近代兵器も瞬く間にスクラップに変えられてしまうだろう。
それを忌避して待っていた者の中には、出遅れて先ほど蛇骨と天使

が消えるまで再び待機していなければならなくなった者もいるはず。
いま聞こえているヘリは、そういった鈍臭い事で最高のタイミングで湊を狙いに行ける幸運を勝ち取った強運の持ち主なのだろう。
どこのだれかは知らないが、後から来たくせに美味しい所を持っていこうとする泥棒猫を、ナタリアはロケット弾で撃墜してやろうかと考えそちらを向いた。
「あれは……ベレスフォード侯爵家の紋章？」
「うっわ、めっちゃ金持ちじゃないですか。それでまだ小狼狙って金取りにいくとか、どんだけ金に汚いんだか。アイギスだっけ？　あれ撃ち落としていいわよ。小狼を狙ってる敵だから」
「了解しました」
「ちょっと待ってくれ、アイギスさん！」
「はい。ですが、どうやらここへ降りてくるようですが？」
ヘリの扉に描かれた紋章から、相手がイギリス貴族のベレスフォード侯爵家の者であると判明するなり、レベッカはアイギスにヘリの撃墜を命じた。
相手が湊を狙う敵ならばアイギスも墜落させることは構わないと判断しそれを了承した。もっとも、相手が貴族の人間だけあって、ここで撃ち落とせば国際問題に発展する可能性もある。
よって、大人たちは止めようとしたのだが、アイギスが両手の機関銃を構える前にヘリが近づいてきてゆっくりと高度を下げるのが見えた。
アイギスたちのいる場所の周辺には他の仕事屋などはいないため、ここへ来るという事はアイギスたち一団に用があるという事になる。
だが、貴族の金持ちに知り合いがいる者など誰一人いないので、皆が何の用だと首を傾げていると、五代や渡瀬が何かを思い出したらしくハッとした表情をした。
「渡瀬さん、ベレスフォード家は確か」
「ええ、あの方のバックについている方たちかと」
五代と渡瀬が話しているという事は、きっとそれは湊に関わる内容なのだろう。

けれど、話しの流れは理解出来ても中身までは分からないので、着陸態勢に入ったヘリを見つめ軍服のベレー帽子が飛ばないよう手で押さえながらナタリアが尋ねた。
「そちらだけで分かっていないで、こっちにも情報を共有していただけないかしら？」
「あ、すみません。ベレスフォード家は小狼君を個人的にサポートしている方たちなんです。彼が仕事で人を殺しに行った際、偶然その相手に御令嬢が拉致されていたらしくて、彼は捕まってた馬鹿をついでに助けたと言っていましたが、そういう経緯があってベレスフォード家は全面的に彼の味方です」
　話している間に着陸したヘリの扉が開き、黒服の男性が防寒具を着こんだ少女に手を貸して降りるのを手伝っている。
　ヘリから降りてきた輝くような金髪に翠玉の瞳を持つ少女は、アイギスたちの姿を発見するなりにとても綺麗な笑顔と柔らかな物腰で話しかけてきた。
「はじめまして、ワタクシはヒストリア・ベレスフォードと申します。小狼様が蠍の心臓で活動していた事は聞いているのですが、現在も皆さんは小狼様にお味方くださる方と判断して宜しいでしょうか？」
　どういう経緯で近付いてきたのか不思議に思っていた者たちは、彼女の言葉でなるほどと納得する。
　彼女に自分の滞在場所を伝えていたのは湊のようだが、それを覚えていた彼女は車に描かれた蠍の心臓のエンブレムを見て、自身と同じ目的を持つ同志に声をかけてきたという訳だ。
　水智恵のときもそうだったが、女性とマメに連絡を取る湊の性格が良い方向に働いたらしい。彼を想う少女たちにとってはやきもきする原因かも知れないが、五代たちは今は少年のそれらの行動に感謝した。
　そして、尋ねたままにっこりと微笑を浮かべて答えを待っている相手に、アイギスが堂々と言葉を返す。
「当然であります。わたしの一番の大切はあの方の傍にいることですから」

「それは良かったですわ。では、小狼様の現状を教えて頂いても構いませんか？　ワタクシ達も小狼様を賊からお守りするためずっと追っていたのですが、先ほどこちらの方で天変地異が起きていたようで状況が掴めていないのです」
　困った表情を浮かべる少女の守ってあげたくなるような雰囲気から、一部の男性陣はついつい懇切丁寧に全てを教えてあげたい気持ちに駆られる。
　けれど、五代や渡瀬にラースといった裏世界でのキャリアを持つ者たちや、ここにいる女性陣は優先順位をしっかりと理解しているので、少女に答える前にナタリアが全体に指示を飛ばした。
「申し訳ないけど、説明している時間はないわ。アイギスさん、貴女は彼女たちに同行してボウヤを追いなさい。五代さんたちは一度日本に帰って改めて連絡役を、私たちは少しコネを使ってボウヤを狙う依頼の方をどうにか出来ないかやってみるわ」
「確かに、このままでは八雲さんを見失ってしまいますね。ヒストリアさん、移動中に説明しますので同行しても宜しいでしょうか？」
「……何か切迫した状況になっているようですわね。分かりました。すぐに出発致します。どうぞお乗りになってください。詳細は中でお聞きしますわ」
　ナタリアやアイギスの様子から悠長に話している時間はないと察したのか、ヒストリアは真剣な表情で頷くとアイギスの同行を許可し、黒服たちに出発の用意を頼みだした。
　湊を追える手段を持っていなかっただけに、ここで彼女の助力を得られたのは僥倖である。
　ヒストリアの後に続いてヘリに乗り込む直前、アイギスは世話になった者たちの方へと振り返った。
「皆さん、ここまで大変お世話になりました。このご恩はいつか必ずお返しするであります」
「お礼はいいから早く行きなさい。それより、ボウヤのこと頼んだわよ。日本に帰る手段が必要になったら、私や五代さんたちに連絡しなさい」

「アイギスさん、僕たちは先に日本で待っています。どうか最後までお気を付けて」
「はい。必ず、八雲さんを日本へ連れて帰ります。どうか報せを待っていてください」
別れる者たちに敬礼をしながらアイギスが乗り込むと扉は閉められ、ヘリはすぐに離陸して湊の去っていった方角へと飛び立っていった。
少年の状態は心配だが、アイギス以上に湊を任せられる者は他にいない。
故に、ナタリアたちもまだ残っている自分たちの仕事を果たすため、車に乗り込むとこの街を後にしたのだった。

第百四話　雪原の戦い

１２月１７日（日）
――ドイツ・ルックスの森

ヴォルフの街から北へ百キロ以上離れた場所。湊をヘリで追っていたアイギスたちは、大雪が降っていたことでヘリを途中で下ろすと、森の方へ何かが降りてゆくのを見たという周辺の村に住む者の言葉に従い深く雪の積もった森へとやってきていた。

一歩進む度に足は膝辺りまで雪に沈み、これではまともに探す事も出来ないだろうと、移動中に湊の状態などをアイギスから聞いていたヒストリアも困った顔をしている。

「これでは小狼様を見つける前にワタクシたちが遭難してしまうかもしれませんわ。雪上車の準備や地元の方に案内していただく事は出来ないでしょうか？」

「ただいま村人に協力を要請して参ります。ですが、この辺りは狼や大型の熊が出没しますので、それらへの準備も含めますとお時間が少々かかるかと」

ヒストリアの言葉を聞いて黒服が数名村へと駆けていったが、大雪という天候に加え、冬で腹を空かせている獣が出るため、協力を取り付けられても準備には時間がかかると年長の黒服の男性が説明する。

そもそも、こんな大雪の森の中に侯爵家の一人娘を連れて歩くこと自体反対に違いない。

けれど、それでは納得しない性格だと理解しているので、せめて、万全の準備が整うまで待っていて欲しいと言外に告げてきているのだ。

腕を組んで片手を顎に当てていたヒストリアも、自分たちが遭難する危険性は当然理解しているため、相手の言葉に少々落ち込みながらも首肯した。

「しょうがありませんわね。準備もせずに入れば小狼様を見つけられても、お助けする事が出来ないかもしれませんから」

「では、ヒストリアさんたちは準備をしてから捜索に移ってください。雪山での活動に特別な装備を必要としないわたしは先に捜索を始め

させていただきます」
「まぁ……お一人で大丈夫ですか？　狼や熊が出るらしいんですよ？」
「わたしのボディは金属で出来ていますから、例え噛みつかれても問題ありません。それよりも、防寒具を持っていない八雲さんが心配であります。出来るだけ早くこのマフラーをお返ししなければなりません」
　言いながらアイギスは自分の首に巻かれた湊のトレードマークと化したマフラーに触れる。
　今の湊はヴォルフの戦いの直後と同じ格好をしているはずだ。ならば、薄手のトレーナーと長ズボンに編み上げブーツという薄着で、真冬の森の中を歩いているということになる。
　戦闘中は指部分のないシューティンググローブなども付けていたが、それもウィオラケウスの攻撃に呑まれた際に焼失した。
　故に、アイギスは一刻も早く湊に装備の入ったマフラーを返して保護しなければと、先行して捜索を始めるとヒストリアに告げる。
「……分かりましたわ。では、こちらの通信機をお持ちください。通信圏外であっても発信機として居場所を特定出来ますから、合流の際にも役に立ちますわ」
「了解であります。それでは、皆さんも捜索には十分にご注意を」
　受け取った通信機を戦闘前まで弾倉を収めていたベストのポケットに入れ、アイギスは敬礼すると雪の中を進み始めた。
　それを見送った者たちも一度近隣の村に戻ってから捜索に加わるつもりだ。
　いまの湊がどんな状態にあるかは分からないが、契約が解かれようと諦めるつもりのない少女は、瞳に強い光を宿し大切な少年の姿を探すのだった。
＊＊＊
　アイギスたちよりも先に森に来ていた湊は、光が弱々しく消えかかった蒼い瞳を半分ほど閉じながら、力なく森の中を歩いていた。
　教会で名切りの血に目覚めてからというもの、魔眼を常に発動し続

けてきた影響か、弱った今の湊は普段以上に世界に死の線が視えており、ズキズキと頭の奥の方に痛みを感じている。
吹雪いているというのに防寒具を一切身に付けていない寒々しい格好で、白い息を吐きながら、膝まで雪に埋まった足を懸命に動かし前へと進み続ける。
（寒い……ここは、どこだろう……俺は、なんでこんな場所にいたんだ……）
自分で力を振るう事を選び皆を救った少年は、その代償として直近の記憶まで失っていた。
どうやって自分がここにきたのかも分からず、自分が何をしようとしていたのかも分からない。
けれど、久遠の安寧という組織を潰さねばならないという事だけは不思議と覚えていた。
相手は自分とその大切な者たちの敵、組織を実際に牛耳っているソフィアという遺伝子操作を受けて生まれた女を殺すのが自分に与えられた使命。
ならば、それを果たすためにこの森を抜けて相手を殺しに行かねばならない。
（……女を殺す……生かしておいては、いけない……自分の敵）
倒れそうになりながらも、近くの木の幹に手を突いて身体を支えてなんとか踏ん張る。
まだ完全に自我は消えていないが、瞳が虚ろになりかけていることを考えれば、自我の消滅よりも生命活動の停止の方が先に訪れるだろう。
しかし、今の少年には自分の置かれた状況や自身の状態を正確に把握するだけの余裕は残っていなかった。
ただ殺す女の元を目指すという意思のみで歩み続けていると、少し先の木の根元が赤くなっている事に気付く。
森を進んでいる間、白い雪と木の幹の茶色しか見ていなかったので、他の色が随分と目立って感じられた。
色の原因が何か分からず、少年がその理由を確かめるために近付け

ば、ようやくそれが獣の死骸とその血であると分かった。
（野犬……じゃない。これは、狼か？）
無惨に食い散らかされ千切れた毛皮と骨になっていたことで分かりづらかったが、湊はそれが毛色から狼だと理解する。
日本では既に絶滅している狼も、品種は異なるがドイツでは野生でまだ現存しているのだ。
この狼は冬場で食べ物がないことで、飢えている家族や群れの者たちのために何か獲物を取ってこようと巣から出たのだろう。
けれど、同じように腹を空かせた獣に出会い。力が及ばず反対に食べられてしまったという訳だ。
（雪がまだ積もっていない。なら、これの犯人はまだ近くにいるのか……）
毛皮と周りの血の上にあまり雪が積もっていない事で、食べられてからあまり時間が経っていない事が分かる。
相手が何かは分からないが、大人の狼をこうも無惨な姿に出来る事から、この一帯の王者的な存在なのかも知れない。
弱っている湊は出会う前にこの場を離れようと動き始めて顔を上げたとき、少し離れた木々の間から己を見つめる相手の存在に気付いてしまった。
「なっ……熊が……どうして冬に起きて……」
湊が驚くのも無理はない。普通、熊は冬になれば冬眠して出会う事は殆どないと思われているのだから。
けれど、実際は上手く寝付けずに起きだしてくる個体や、寝ぼけたり空腹に耐えきれずに冬でも活動している個体もいる。
今、湊の視線の先で毛皮を血に汚して座りこんでいる熊も、きっとそういった個体の中の一頭なのだろう。
「グオオオオッ！」
深く雪の積もった森の中で熊に出会った湊が状況に混乱していると、相手も湊が気付いた事を察知したようで、しっかり四本足で地を蹴って駆け出してくる。
熊には自分の獲物に対する独占欲のようなものがあり、それが食べ

終わった後の残骸だろうと、他の者が近付けば自分の物を奪う敵として襲いかかってくるのだ。
雪の中だというのに信じられない加速で駆けてきた相手は、狼の亡骸だった物の近くに立っていた湊へ牙を剥き出しにして突進を見舞ってくる。
「チィッ!?」
乗用車でも吹き飛ばすような存在が相手だ。弱っている自分がまともぶつかられれば一溜まりもないと、湊は必死に横へ跳躍してなんとか逃れる。
けれど、ここは膝辺りまで埋まってしまうほど雪が積もっている。少しブレーキをかければ、雪も勢いを殺す事に一役買って、咄嗟の回避による着地で雪に足を取られていた湊に、方向転換した熊が威嚇と共に立ち上がり両手を広げてきた。
ただでさえ大型だというのに立ち上がって両手を広げれば、この銀世界でなくとも相手がこの一帯の王であると直感で分かるほどの迫力がある。
種類は雄のヒグマ、体長約三メートル、重さは七百キロ級といったところか。わざわざ身体を大きく見せるため相手が立ち上がっている間に体勢を立て直していた湊は、腰のナイフを左手に持って構える。
（ハァ、ハァ……こんな相手にナイフ一本で勝てる訳ないだろ）
ナイフを構えたのは武器がそれしかなかったからであり、こんな物を使ったところで現在の自分が相手と対等に戦えないのは分かっている。
それでも、ただ食われるのは癪なので、手傷の二、三でも負わせてやろうと考えている間に、再び四足歩行になった相手が、吠えながら突進して向かってきた。
「ガァァァウッ！」
「ぐあぁぁぁっ!?」
今度の突進は距離が離れていなかったせいで避けきれず、ナイフを取り落とし吹き飛ばされる。

ただの体当りがハンマーで殴られたかのような威力を有しており、湊は雪の上を転がりながら、あばらを数本圧し折られた事を口の中に滲む血の味と共に理解した。
だが、この程度で相手が済ませるはずもなく、膝と手を突いて起き上がりかけていたところへ、熊は走る勢いを利用しながら前足の爪を振りおろしてきた。
巨大な掌の一撃だけで背骨も容易く折れるというのに、鎌のように鋭い爪も加わり湊の背中が引き裂かれる。
「八雲さんっ!!」
「がっ!?」
と思われたそこへ、横から飛びこんできたアイギスが湊諸共雪の上を転がった事で、熊の一撃は空を切り、積もっていた雪を僅かに抉るだけの結果となった。
突然の乱入者に熊は白い息を吐き、涎を垂らして怒っているようだが、自分の大切な少年を殺されかけて怒っているのはアイギスも同じだ。
骨折した状態で鋼鉄の乙女のタックルをまともに受けた少年は、体調も含めてあまり状態が思わしくないのか苦しそうに表情を歪めているが、まだもうしばらくは耐えられそうなので、今は我慢して貰いアイギスは先に敵の排除に挑む。
「どうか引いては貰えないでしょうか」
「グルル……」
「この方を食べようなどとは笑えない冗談であります。反対に貴方を熊鍋にして八雲さんに栄養を摂って貰う事にしましょう」
相手が威嚇の唸り声を上げたことで、その意思を読み取ったアイギスは険しい表情のまま湊から僅かに離れて戦うための構えを取る。
本当ならマシンガンで射殺して排除したいところだが、湊との戦闘に加えてウィオラケウスの一撃を放ったとき腕にだいぶ負荷をかけてしまったらしく、この土地の寒さも相まって腕の銃は使用不能になっていた。
無理に使おうとすれば数発は撃てるかもしれないが、狙いも威力も

想定を下回ることは確実で、下手をすれば暴発して腕が吹き飛んでしまうかもしれない。
　替えのパーツがない以上、ペルソナに関しても今の湊に言って分かるか不明なので、大きな隙を作るくらいなら、最初から機械のパワーと丈夫さを活かした白兵戦を挑むべきだと、アイギスは迫ってくる熊を冷静に見つめながら横っ跳びで回避し、受け身を取りながら立ち上がるなり方向転換しかけていた相手へ渾身のローキックを放つ。
「ハァッ!!」
「グォウ!!」
「……くっ」
　しかし、膝辺りまで雪に埋まっているせいで思ったほどの威力が出ず、多少のダメージは与えたようだが熊は怯みもしなかった。
　流石の桐条もこんな雪原での戦闘は想定していなかったに違いない。雪という環境を利用した作戦の立案も戦術シミュレーションも上手く機能していない事にアイギスは内心で苦い顔をする。
　そんな彼女から三メートルほどの距離で両手を広げ立ち上がった熊は、先ほどの湊と同じように雪に足を取られて上手く回避に移れていない彼女に向け、その大きな掌と爪を横薙ぎに振るった。
　人間とは比べ物にならないほどの量の筋肉から繰り出される一撃は、威力も速度も並みはずれている。
　だが、それ以上の速度を知っているアイギスは、思わず両腕による防御の姿勢を取っていた。
　ただでさえ過負荷で戦闘には耐えられない状態になっているというのに、熊の一撃など受けたら肩ごとパーツを持っていかれるかもしれない。
　それを理解しながらも、アイギスは直撃さえしなければ腕がなくなってもまだ戦えると、瞳に強い意志を宿したまま攻撃に備えた。
　しかし、少女も熊も忘れていた。この場にはまだもう一人居た事を。
「アイギスっ」
　熊の爪がアイギスに届こうとした刹那、アイギスは横から突き飛ば

され、熊は代わりに彼女を突き飛ばした事で躱し切れなかった少年の右目を爪先で抉っていた。
ドロッとした肉片と血で爪の先を汚した熊は、さらにそこから今度は反対の左前脚を使って同じように連続で攻撃を放ってこようとする。
「グォウッ!!」
対する抉られた右目から血を流した少年は、激痛に襲われているにもかかわらずそのまま右足を一歩出して踏ん張り、残った瞳で敵を睨みつけると、左手を腰のベルトのところで半握りの形にし、右手もその延長線上で同じような形にして構えた。
突き飛ばされ雪に倒れ込む間にそれを目撃したアイギスは、右目を失ったというのに武器も持たず何をしようというのだと、少年の突然の行動に混乱しながらその一瞬の出来事を目撃した。
「――――ハァァァァッ!!」
熊の爪が再び湊を襲うと思ったとき、吠えた湊の身体が僅かに沈んでブレたかと思えば、次の瞬間、右手を振り抜いていた湊によって熊の左前脚が斬り飛ばされていた。
湊の手には何も持たれていない。加えて、魔眼の力を使おうにも、熊の脚は湊の腕が完全に振り抜かれてから飛んでいる。魔眼の力を使ったのなら、飛ぶのと攻撃の完了はほぼ同時でなければならないはずだ。
少年が何をしたのか分からず、アイギスがただ混乱していると、右手を振り抜いていた少年は一度右手を腰へ戻し、さらに敵に背を向けながら振り返る勢いも利用して、再び自身の右手のみで敵を斬り上げていた。
「――――ッ!!」
「グオ――――」
今度は相手の右前脚の脇から首まで一気に斬っていた。それにより、熊は先ほどの左前脚だけでなく右前脚と頭部まで失い、血を噴き出しながら後ろに倒れ絶命する。
重傷を負った直後、それも素手で大型の熊を切り殺すなど人間業と

は思えない。
けれど、とりあえずの脅威は去ったとアイギスが安堵しかけたとき、右手を振り抜いた姿で固まっていた少年が、ゆっくりと力を失い倒れた。
「八雲さんっ!?」
慌てて少年に駆け寄り、アイギスは相手の容体と傷の状態を確認するため、相手を抱き起こすと上を向かせる。
「これはっ……」
己を庇った際に負った傷を見てアイギスは機械でありながら息を呑む。再会したとき、死を見通す魔眼を輝かせていた右目は殆どなくなり、そこは血の噴き出す窪んだ穴になっていた。
チドリの話しではどんな傷もすぐに治ってゆくとの事だったが、湊の右目は流血が僅かに治まってきた程度で、それ以上治る気配がない。
転んで掌や膝を怪我しても大概は治るが、目などの怪我は完全には治らないのはよく聞く話だ。
それと同じように、眼球を半分以上持って行かれたことで、その驚異的な再生力を持ってしても失った右目を治す事は出来なかったのだろう。
「そんなっ、八雲さん、どうしてわたしなんかを庇ってっ」
大切な少年に取り返しのつかない怪我を負わせてしまった。守るはずが反対に守られ、敵の排除だって湊がいなければ自分には不可能だった。
その事実が深く心に突き刺さり、アイギスは思考に多数のエラーを出しながら少年に尋ねた。
けれど、少年は気を失っているのか何も答えない。
それも当然で、湊は木に手を突きながらようやく歩いていられたのだ。一度や二度なら回避行動も取れたが、名切りの身体能力があって初めて使える不視ノ太刀を、人間よりも硬い筋肉の持ち主相手に二度も振るったとなれば、残っていた体力も全て使い果たしてもおかしくない。

自身の腕の中で段々と冷たくなってゆく少年を見つめ、アイギスは必死に相手の意識を繋ぎ止めようと声を掛け続ける。
「駄目です！　八雲さん、貴方には待っている人がいるんです！　お願いですから目を開けてください！」
声をかけても反応はなく、体温の低下も止まらない。心臓はかろうじて動いているようだが、このままでは十分も持たずに死んでしまうだろう。
大切な少年が自分を守ったせいで死ぬ。それを自覚したとき、アイギスの心には不思議な既視感があった。
自分は前にも似たような事を体験している。そのときもアイギスは少年を助けて欲しいと天に願った。
けれど、今この場には自分しかいない。ヒストリアたちがやってきたところで、命が尽きかけている少年を救えるとは思えない。そもそも彼女たちの到着を待っている間に湊は死んでしまうだろう。
――――少年の死の原因は何だ？
混乱している思考系とは別に、心の奥から冷静な声が尋ねてくる。
医療系のデータはほとんどインストールされていないので、専門的な事は分からないが、それでも熊との戦闘で負った怪我が直接の原因ではない事は理解出来る。
――――少年には生き永らえるだけの力が残っていないのか？
怪我が直接の原因でないと考えると次の問いが投げかけられた。
言われてみればそうかもしれないとアイギスも納得する。怪我は死を加速させただけで、その前から湊は死にかけていたのだ。
今までの戦いで衰弱していたところへ、神の力の行使と激しい戦闘で限界は疾うにむかえていた。さらに先ほどの攻撃をした事で、意識を繋ぎ止めていた最後の糸も切れてしまったのだろう。
ならば、アイギスは今の自分のすべきことはたった一つしかないと湊を抱き寄せる。
「……オルギアモード、発動」
静かに呟いたアイギスのヘッドフォン型クラッチユニットが高速で回転を始める。自分もエネルギーはあまり残っていないが、それで

もありったけを湊に譲れば彼の命を繋ぎ止める事が出来るかもしれない。
彼の無事を最後まで確認出来ないのは心残りだが、大切な少年を自分の力で救えるのならそれは何よりも嬉しい事だと、気を失っている相手の顔を見て、アイギスは柔らかな笑みを浮かべた。
「八雲さん、貴方は死なせません」
そして、アイギスは少年と唇を重ねた。
パピヨンハートから生み出されるエネルギーが、オルギアモードと少年を死なせないという少女の想いにより増幅し、二人を淡い水色の光で包み込みながら少年へと譲渡されてゆく。
お互いに宿るパピヨンハートとエールクロイツが共鳴し、譲渡されたエネルギーは生命力へと変換され、湊の顔に生気が戻ってきた。
けれど、少年の命を繋ぎ止めるにはまだ足りない。自分に残っている全てを譲るため、アイギスは口付けをさらに深くする。
（わたしの力で出来るのはここまでであります。後はヒストリアさんが通信機の反応を追って見つけてくれるのを祈るしかありません）
全てのエネルギーの譲渡を完了した事で、アイギスは身体が待機モードへの移行を開始した事を把握する。
だが、生命力が回復した湊は先ほどよりも血色が良くなり、呼吸も安定している。これならば、オルギアモードで発熱している自分が湯たんぽの代わりになって、ヒストリアたちが来るまで湊も凍えなくて済むだろう。
一先ず少年の無事を確認出来た事で安心したのか瞼が重くなってきた。倒れる際に少年を潰してしまわないよう気を付けながら少年の横に寝転がり、まだ動く手足で傍らの相手を抱き寄せると、アイギスは眠る様に機能を停止した。
『グルル……』
二人のすぐ傍に狼の群れがやってきていた事にも気付かぬまま。
＊＊＊
アイギスが湊の捜索に向かってから遅れること三十分。ヒストリアは地元の人間の協力を得て、雪上車でアイギスの持っている通信機

の反応を目指していた。
村の男たちの話しによれば、この森には冬眠せずに冬の寒さで弱った獣を食べて越冬する〝リーズィヒ〟と呼ばれる巨大なヒグマがいるということで、過去に村人が数人犠牲になっていることもあり、いくら大切な人がいるとしても捜索はやめた方がいいと止められた。
しかし、そんな事で諦められる訳もなく、ショットガンなどを大量に用意して渋々ながら二時間だけ捜索に出てくれる許可が下りた。
そうして、ヒストリア・ＳＰ・村の男数名を乗せた雪上車が森の中を進んでいたとき、運転していた男が何かを発見したらしく声を上げた。
「お、おい、狼の死骸が転がってるぞ。こりゃ、リーズィヒの野郎が近くにいやがるんだ。お嬢さん、本当にあんたの知り合いはこっちにいるのか？」
「はい。反応はこの先ですわ」
「にしたって、リーズィヒに遭遇してたら今頃は腹ん中だぜ？」
「大丈夫、そう信じていればお二人は無事ですわ」
熊に遭遇したくない男が先を進むのを諦めさせようとするも、ヒストリアは綺麗な翠玉色の瞳で見つめて彼らは無事だと優しく微笑んだ。
どこにそんな保証があるのか分からないが、これは言っても聞きそうにない。そう考えて、諦めさせる事を諦めた男は再び森の中を進み始めた。
ヒストリアも何か根拠があって無事だと言った訳ではない。ただ二人が既に死んでいる事を想像したくなかったので、その可能性から目を背けたに過ぎない。
実際に貴族の生まれでもあるが、良家のお嬢様といった見た目をする彼女も、その内面は幼さを残す湊より一つ年下の少女だ。
窓の外を見つめながら、膝の上では手を強く握り締めて不安な心をどうにか抑え冷静さを保つ。
それからさらに進み通信機の反応の傍に来たところで、運転手の男が先ほどの比ではないほどの大声を上げた。

「なっ、狼の群れだ?!　なんで、狼がこんな所に群れでいやがるんだ。それにあいつらの周りの雪が赤く染まってるぞ」
その言葉を聞いたとき、ヒストリアは嫌な予感がして思わず止まっていた雪上車から飛び出していた。
他の者たちの制止の声も聞かず、少し先にいる狼の群れの元へと近づいてゆく。
男が言っていた通り十数頭の狼が赤く染まった雪の傍で固まり、彼女の持っていた探知機はその群れの中心を示していた。
自分は間に合わなかったのか。絶望し膝を折りかけたとき、彼女の接近に気付いた一頭が吠えた。
「アオーンッ！」
その声に反応し、今まで雪の上で寝そべっていた狼が起き上がり後ろに下がってゆく。
自分たちを襲うつもりならば不自然としか言いようのない動きだ。不思議に思ったヒストリアが目を凝らすと、狼たちのいた場所にそれを発見した。
「っ!?　小狼様、アイギス様！」
なんと、狼たちがいた場所には寄り添い合うように倒れている湊とアイギスがいた。
どうして狼が彼らを囲っていたのかは分からない。けれど、この寒い雪の中で二人が凍死しないよう狼たちは温めてくれたらしいことは分かる。
あまりの事態に驚きを隠せないが、ヒストリアがゆっくり近づいても狼たちは襲ってくる気配がなく、むしろ、二人を連れて行けとばかりに待ってくれているようにすら見えた。
ヒストリアを追って雪上車から降りてきた男たちも困惑しているようだが、絶対に銃を向けないようヒストリアが手で制しながら二人の元へついたとき、湊に息がある事を確認していたヒストリアの所へ三匹の狼が何かを咥えて寄って来た。
「ワフッ」
「これは……熊の腕と頭部？」

狼たちが持ってきたのはとても大きな熊の頭部と両前脚だった。それが何を意味するのか分からず、ヒストリアが首を傾げていると、後ろで見ていた事情を理解したらしい村の男が彼女に訳を話した。
「お嬢さん、そいつはさっき言っていたリーズィヒだ。多分だが、二人かどっちかがリーズィヒを殺して、こいつらは仲間の仇を討ってくれた相手に恩を感じて死なせないようにしてたんだろうさ」
「そうでしたの。……すみませんが、爪だけ取っておいて頂けますか？　他の部位は狼さんたちに全てお譲りします。お二人も助けて頂いた恩返しにそうすると思いますので」
「爪を？　確かにお守りにする事もあるが、まぁいいぜ。それじゃあ、お嬢さんは早いとこ二人を車に乗せてやりな。坊主の方は顔面血だらけにして重傷だぞ」
「……右目を失われてしまったようです。ですが、既に血は止まっている様子ですので、村に帰り次第ヘリで屋敷に向かいそちらで治療しますわ。オブライエン先生に屋敷へ来ていただくよう連絡を。狼さん、お二人を助けて頂きありがとうございました」
狼が持ってきた頭部と両脚を見るに、鋭利な刃物で斬り飛ばしたようだ。アイギスは刃物類を持っていないと話していたので、右目を失うような重傷を負いながらも湊がやったに違いない。
命の恩人が片目を失う怪我を負ったのはとても辛いが、それでも生きていてくれた事が何よりも嬉しい。
村の男がナイフで熊の爪を全て取ると、ヒストリアは受け取ったそれをハンカチで包みコートのポケットにしまった。
爪さえ取れれば後は不要なので、狼たちにどうぞとさし出せば、持ってきた狼たちがしっかりと咥えて群れの元へと運んでいった。
そうして、彼らに別れを告げるとヒストリアは二人を雪上車に運び、村に戻ればすぐに乗ってきたヘリで屋敷へと向かったのだった。

第百五話　裏方の仕事

１２月２０日（水）
早朝――ベレスフォード家・屋敷
スイス南部の長閑な田舎にベレスフォード家所有の屋敷の一つが建っていた。
本家は今もイギリスにあるが、そこに運んでいては湊の体力が持たない。そう判断したヒストリアは、両親に電話で事情を説明した上で湊とアイギスをスイスの屋敷に運び、先に連絡して呼んでいた医者に湊の処置を任せた。
そうして、医者の処置が終わってからも丸一日以上眠り続けていた湊は、いまようやく目を覚ましゆっくりと瞼を開けた。
（ここはどこだ？　それに俺は……っ）
目を覚ました湊は現状を把握しようと、自分の直近の記憶を思い出そうとしたことで、雪の降る森の中でアイギスと共に熊と戦った事を思い出した。
あのとき、なんとか熊は殺したはずだが、大切な少女はいまどこにいるのだと慌てて身体を起こし辺りを見渡す。
「アイ、ギス……よかった。無事だったのか」
すると、自身の寝かされていたベッドの傍に置かれた椅子に座る少女の姿を見つけ、深い安堵の息を吐いて胸を撫で下ろす。
相手は今も目を瞑ったままだが、特に身体に損傷があるようには見えないので、自分がいつまでも寝ていた事でスリープモードになっているのだろうと考えた。
あの日から何日経ったのか分からないが、湊は腕に付けられた点滴の針を引っこ抜くと、ベッドから抜け出してアイギスの元へと歩み寄る。
起きるまで待たせてしまった謝罪と、熊に殺される直前に助けてくれた礼を言おうと相手の肩に手を置き。湊は彼女に話しかけようとしたところで、彼女の異変に気付いた。
「……アイギス？　おい、どうしたんだ。目を開けてくれ、アイギス

！」
仮にスリープモードになっていようと、動作できる状態ならば内部機関の駆動による微細な振動を感じ取る事が出来る。
しかし、肩に手を置いてもそれらを一切感じ取れなかった湊は、アイギスの身に何が起こったのか分からず、必死に声をかけ続けた。
声をかけても、身体を揺らしても、エールクロイツの機械に干渉する能力を使おうとしても反応が全くない。
自分が気を失ってからの間に何かがあったはずだが、それが分からない湊はただただ混乱した。
と、そうやって湊が騒いでいたのが部屋の外にも聞こえていたのか、扉が開いて上質なドレスを着たヒストリアが二人の女性を連れて部屋に入ってきた。
アイギスの事を気にしていても、部屋に他の者が入ってくれば流石にそちらに注意がゆくのか、湊もヒストリアたちへ視線を向け、目が合うなり口を開いた。
「ヒストリア！　アイギスはどうしたんだ？　何度呼びかけても、直接干渉しようとしても全く反応がないんだっ」
「落ち着いてくださいまし。アイギス様はエネルギー切れになられただけですわ」
「エネルギー、切れ？」
普段は見せないような狼狽える様子を見せる少年に、静かに近付きながらにっこりと微笑んでヒストリアは事情を話す。
それを聞いた湊は頭がまだあまり働いていないのか、珍しく年齢相応の表情でキョトンとしている。
ヒストリアも後ろにいる女性たちも、世界を敵にまわして生き残ってきた相手がそんな顔をするのが意外だったのか、楽しげにくすくすと笑いながら傍まで寄って来た。
一人はヒストリアによく似た顔立ちの美しい金髪の女性。もう一人は浅黒い肌で目と鼻立ちがすっきりとした凛々しさも感じさせる美しい長身の女性だ。
二人を見た湊は、前者はヒストリアの母親であることを知っている

が、もう一人は誰か知らないので素性を探ろうと記憶や心を読もうと考えたとき、起きてからずっと読心能力が発動していないことに気付く。
「っ……読心能力が止まってる。発動は出来るけど、オンオフを切り替えられるようになってる」
「へぇ、他人の心を読めるって噂は本当だったんだねぇ。ま、私としては骨折が勝手に治っていった方が驚きだけど、あんだけ衰弱した状態から二日で目覚めて意識もはっきりしてるようで安心したよ」
常時発動型だった読心能力が切り替え型になったことに驚いていると、長身女性の方が興味深げに湊の様子を観察している。
湊が衰弱していた事を知っていて、起きてからの経過が良好であると安心している事から、きっとこの女性は湊の治療を行った医者に違いない。
そう当たりをつけて話している相手を見ていれば、女性は自分が自己紹介していない事に気付いたようで挨拶をしてきた。
「ああ、私はシャロン・J・オブライエン。機械だとか薬だとか色々な研究もしてるけど、本業は医者だよ。お隣のドイツにいたんだけどヒストリアに呼ばれてね。死にかけだったあんたを治しに来たってわけ」
「……そうか、治療してくれてありがとう」
「怪我人や病人がいたら治すのが仕事だからねぇ。別にそこまで感謝されるほどじゃないさ」
どこか飄々とした軽いノリで話すシャロンに、湊はこんな相手と会った事があるような不思議な懐かしさを感じた。
もっとも、神降ろしで記憶が消えている事で、知っていたとしても思い出せないだろうと諦めかける。
だが、湊はそこで自分が忘れていたはずのアイギスやヒストリアの事を、過去の出会いも含めて思い出している事実に気付きハッとした。
「それに私は点滴を投与して、折れたあばら付近にコルセットを巻いたくらいしかしてなくてさ。栄養を得たら勝手に骨はくっついたし、

結局、その右目も治せなかったから別に私でなくても治療は出来たよ。ま、代わりにそっちの機械のお嬢さんの腕が壊れてたからバラして破損してる部品を交換して直しておいたから許してねぇ」
湊の反応に気付かず話しを続けていたシャロンの言葉で、湊は自分の視界が半分しかない事にもようやく気付く。
先ほどから自分の変化に気付いては驚いてばかりだが、起きて直ぐアイギスへ意識を割いていたからといって、流石に視界の右半分が欠けている事に気付かないとは鈍感にも程があった。
自分は精神状態によってこんなにも視野が狭くなり易い人間だったのかと、太い帯と半月型の生地で目を覆う黒い眼帯に触れながら、湊は改めて相手に礼をいった。
「右目の事は気にしてない。弱って相手の攻撃を躱せなかった自分の責任だ。それより、アイギスの腕を直してくれてありがとう。正直、桐条の人間以外で直せた事に驚いてる」
「ああ、あれ桐条製なんだ。面白い設計だと思ったけど、私も医療用に義肢とか研究してるからねぇ。実験用に機械義肢とかも作った事あるから、バラして消耗してる部品の交換するくらいは簡単よ。ま、彼女の腕パーツの改修版なら材料集めればもう作れるけどさ」
相手は別に自惚れで言っている訳ではないのだろう。機械系にもしっかりと精通していることで、アイギスの三連装アルビオレを素材の細かな違いはあれど再現できるらしい。
アイギスは七年前に作れたので、科学の進歩により当時よりも強度や軽さの面で優れる素材がいくつも出来ている。
それを使って作ったパーツは、ウエイトバランスの見直しが必要になる事を除けば彼女自身の強化にも繋がりそうであった。
しかし、それを作れるからと言ってアイギスの存在を公表されては困る。心を持った機械が存在すると知られれば、世界中から彼女を研究しようとする者が押し寄せてくるはずなのだ。
学者や研究者たちのくだらない目的にアイギスを巻き込ませたりはしない。そう思っている湊は、今の内に相手に釘を刺しておく事に決めた。

「出来れば彼女の事は黙っておいてくれると嬉しい。色々と表沙汰に出来ない事情を抱えているんだ」
「別に構わないよぉ。患者の情報は漏らさないのが信条だし。修理させて貰ったおかげで、色々と新しい義肢のアイデアも浮かんだしね。っていうか、ばらそうとしたら私を殺す気でしょ？　流石に逃げ切れる気がしないし。そんなの御免だからさぁ」
「……理解が早くて助かるよ。俺も殺したくて殺してる訳じゃないから」
「単純に敵だから殺してるんだろ。無関係な人間を巻き込まないって姿勢は、命を救う仕事をしている身としちゃ好感が持てるよ。裏の仕事をしてる連中はそこらの配慮が足りないやつが多いからさぁ」
シャロンとてまともな方法で全てを救う事が出来るとは思っていない。そのために違法なことだろうと研究して、それにより人を救おうと考えたことがある。
故に、人の命を奪い合うような事でも、それによって金を得るような仕事だろうと、納得は出来ないが理解は示せた。
そんな者たちの中でも、ここ数ヶ月間の湊は命を狙ってくる者だろうと目的に関係がなければ命を取らずに来たと聞いている。
また、巻き込まれそうになっている者を助け、わざわざ自分が不利な状況に追い込まれたことすらあったというではないか。
自分の目的のために命を取り合うような馬鹿は嫌いだが、傍から見れば異常にしか映らないそういう考えは嫌いではなかった。
笑ってそう話す相手に湊も苦笑で返し、自分にはまだ目的が残っていることもしっかり思い出した事で、エネルギー切れで動けない大切な少女を味方である少女に任せたいと頼む。
「……ヒストリア、俺が戻るまでアイギスをここに居させて貰ってもいいか？」
「それは構いませんが、久遠の安寧の元へゆくのなら少々お待ちください。お父様の持つ物流ネットワークで相手の本拠地は既に調べがついています。ですが、いま小狼様に懸っている懸賞金を外すよう働きかけてもいますので、それが済むまで待って頂きたいのです」

少女の言葉に湊は驚き目を見開く。確かに貿易王と呼ばれるヒストリアの父親ならば、時間をかければ世界の物流の全てを把握するくらい出来るかもしれない。

怪しいと思われる場所を探ってきた情報屋や蠍の心臓では出来なかった、搦め手による所在の特定をまさか彼女たちがしてくれていたとは思わず、湊は自分に味方してくれる者たちの持つ力へ素直に驚かされるのだった。

――アメリカ・国聯本部議会場

湊がようやく目覚めヒストリアたちと話している頃、アメリカにある国聯本部の議会場では加盟国の代表や事務総長を務めるロシア人のボリス・ヴィクトロヴィチ・アスモロフ、さらには地下協会のトップについている老人ラドヴァン・ハマーが集まっていた。

彼の話す議題は、先日の小狼討伐作戦やそれまでに各地で起こっていた諸々の戦闘行為についてであった。

五十歳を超えていながら三十代後半にしか見えないボリスは、小狼討伐作戦時に国聯軍が久遠の安寧に襲われた件について話す。

「先日の小狼討伐作戦時、やはり彼は国聯軍の兵士には一切手を出して来ませんでした。ですが、国聯軍が進攻した際、同じタイミングで彼を狙っていたと思われる久遠の安寧所属の空襲部隊によって、兵士たちは彼と街諸共殺されかけました」

「それを不可思議な現象を起こした小狼に救われ、さらに空襲部隊も壊滅させてくれた……と。随分と信じ難い話しですな」

それぞれの座る席についたパネルと大きなスクリーンに当時の映像や画像が表示され、まるで映画のようだとある国の代表は鼻で笑った。

異能の存在など信じられない。最新のＣＧ技術を使ったジョークであると言われれば素直に信じるが、いくら街の破壊が現実に起きていようと、いい年をした大人がこれをすんなりと信じるには常識が邪魔をした。

話しを進めていたボリスとて皆と同じように全てを信じている訳

ではないが、それでは話しが進まないので、国聯軍が久遠の安寧の攻撃に巻き込まれたところを湊に救われたという結果を中心に話しを進める。
「信じられないのは私も同じです。ですが、現場にいた兵士らは彼に助けられたと話していました。久遠の安寧に襲われ、討伐対象であった小狼に救われたのは事実です」
「では、アスモロフ事務総長はこの一件のみで、彼を討伐すべきではないとお考えにでもなったのですか？」
「彼が危険な存在なのは理解しています。ですが、彼の犯行はＥＰ社ではなく久遠の安寧を狙っているというデータがあるのです」
情報部に調べさせた被害者のリスト。それとさらにもう一枚、彼があるルートで手に入れた湊の持つ物と同じ久遠の安寧の幹部のリストを配られた者たちは、二枚のリストの照合率の高さに驚愕し、議会全体がざわついている。
しかし、彼らの様子に構わず、ボリスは現場に居ながら襲われなかった者がいた件も交え、湊の狙いが久遠の安寧である証拠をさらに固めに掛かる。
「ブルガリアでＥＰ社の兵器工場が襲われた事がありましたが、入り口の警備をしていた者の中に生存者がいました。兵器工場を護衛していた四千人を超える兵が一夜で皆殺しにされた事を踏まえれば、ＥＰ社の警備部門所属と話した生存者が見逃されている事は異様としか言えません。なにより、ＥＰ本社が一切狙われていないという事実がある以上、彼の狙いは久遠の安寧とその構成員と判断していいでしょう」
彼の言葉にざわめきはさらに増す。ＥＰ社の人間が殺されるのと、久遠の安寧の人間が殺されるのとでは、国聯として取るべき立場が変わってくるのだ。
大勢の人間が殺され、それを一人の男が為しているため湊自体の危険度は変わらない。今後も国聯においては危険度最高のＳランク監視対象として扱われる。
けれど、被害者が一般人ではなく裏の世界の人間ならば、お互いに

殺し合ったとて組織間の抗争でしかないのだ。
　各国の政府や国聯の人間たちも裏の仕事屋たちが存在している事は知っている。毎日のように違法行為を行い、知らぬところで人が殺されている事も。
　裏界での仲介・情報屋として、最大規模を誇る〝地下協会〟のトップが、今日この場に呼ばれている事が何よりの証拠だ。
　そして、国聯としてはそういった組織間のいざこざは、一般人が巻き込まれない限りは基本的に静観する構えを取っている。
　なぜなら、国聯としては同士討ちや残った方の力が減ってくれた方がありがたいから。
　けれど、この場には秘密裏に取り引きをして久遠の安寧の恩恵を受けている国の人間もいる。その人間にすれば、現代に甦った鬼の討伐を狙う存在が減るのは避けたいのか、ボリスの主張に対して意見をぶつけてきた。
「仮に小狼の狙いがＥＰ社ではなく久遠の安寧だったとしても、彼がその過程で市民に大きな恐怖と不安感を与えている事に変わりはない。すぐにでも部隊を編成し直して再度討伐に乗り出すべきだと私は思いますがね」
「……確かに恐怖や不安感を抱いている市民は多いでしょう。ですが、それは本当に彼が原因でしょうか？」
　意見をぶつけてきた相手へ向き直り、ボリスは正面から視線をぶつけて問い返す。
　ボリスの言葉の意味が理解出来ない男は、怪訝な表情を浮かべるとその意味を尋ねた。
「それはどういう意味ですかな？」
「彼は無差別な殺人鬼ではありません。先ほど言ったように特定の対象のみを殺し、それ以外は自分の命を狙ってきた者だろうと見逃しているのです」
「だからと言って、その事実を知らない市民は大量殺人犯としか思わないでしょう」
「はい、それは否定出来ません。ただ、彼に関する事件がこれほどまで

大きくメディアに取り上げられたのは、彼を狙う仕事屋たちが周囲への影響も構わずに街中で戦闘を行ったためでもあります」
湊の犯行は全てピンポイント攻撃だ。隠密行動で接近し、敵のいる施設は破壊する事もあるが、それ以外には被害を極力出さない。
だというのに、メディアに取り上げられ戦闘中の様子まで中継されたのは、湊を狙って仕事屋たちが街中で銃火器を使ったからだ。
「手を出さなければ久遠の安寧以外は誰も傷付きません。そこへ余計な勢力が加わり、相手が反撃しないと理解したことでさらに増長した事で、これほどまでの事件になってしまったのです」
そう、湊と久遠の安寧が衝突するなら、それほど大きく取り上げられる事はなかった。
それがここまで大きくなってしまったのは、地下協会が久遠の安寧の依頼を受けて、箍の外れた無法者たちを焚きつけたからに他ならない。
「ハマー氏、依頼を受けて彼に懸賞金をかけたのは貴方がたの組織のはずだ。受けた依頼を仲介しただけとはいえ、貴方がたは仕事屋たちの出した被害に対して何の責任も取らない。このまま仕事屋たちが被害を拡大するのであれば、私は貴方がたをテロを幇助する危険組織として扱い対処するつもりでいる」
ボリスは鋭い視線で老人を見つめ、はっきりと言い切る。
今まで表舞台に上がらず、影ながら犯罪に手を貸し、市民に被害が出るような事も多くしてきた死肉に集るハイエナを、彼は国聯の代表として今度こそ逃がすつもりはなかった。
老人の組織が今まで築いてきた情報網を駆使して得ている情報には、当然ここにいる者たちやその母国の公表できない情報も数多くある。
しかし、仮に脅されてもボリスは直接的な軍事力を持たない彼らを、テロリストの元締めとして国聯軍を使い殲滅しに掛かる。
相手の性格から下手な脅しが効かないと分かっている老人は、相手の言葉に表情を強張らせた。
それを見てボリスは、各国の代表たちに国聯として取るべき方針を

話す。
「私の得た情報によれば小狼は十四歳の少年らしいです。そう、今世界を騒がせている事件は、馬鹿な子どもが一人で裏界最大組織に喧嘩を売っているだけ。そんな事に兵や資金を使ってまで付き合う必要などないでしょう。裏の人間同士で勝手にやって貰えばいいんです」
小狼の情報は本人たちが意図的に隠してきたので、地下協会でも国聯や各国の情報部でも中々得られなかったものだ。
だというのに、年齢というかなり重要な情報をボリスが得ていたことで周囲は驚き、また、仙道弥勒を殺し、さらにたった一人で数千人を屠ってきた裏界最強のルーキーがまさか成人も迎えていない子どもだという情報に言葉を失った。
裏界最大勢力を誇る組織と名切りの鬼の少年。これがぶつかったとて、普通は前者がなんの苦も無く勝利すると考えるだろう。
故に、結果は分かりきっているというのなら、我々はそれをただ黙って見ておこうとボリスは締めにかかった。
「よって、私は小狼への対応レベルを警戒に落とし。被害が市民に及んだときに改めて動くべきだと考えます。そして、ハマー氏には今この場で地下協会がどう動くのかを決めて頂きたい。市民の安全のため、賢明な判断をよろしくお願いしますよ」
依頼者に何の落ち度もない状態で一度受けた依頼を断るなど、裏の世界で生きている者として信用に関わる問題だ。
さらに、今回の久遠の安寧が地下協会に払った金額は懸賞金と同額であり、受けた依頼をキャンセルして違約金まで上乗せして返すとなるとかなりの痛手となる。
しかし、表の勢力である国聯にテロ幇助組織として認定されれば、今後の活動に支障が出るどころの話ではない。
額に脂汗を滲ませ拳を握りしめた老人は、不敵な笑みを浮かべる男を忌々しく思いながらも、相手の要求を呑まざるを得ないのだった。
＊＊＊
国聯の湊に対する対応が警戒に落ち着き、地下協会が久遠の安寧の依頼をキャンセルし湊の懸賞金を撤回すると決めた後、解散して議会

場を出たボリスは、同じ施設内に存在する小さな会議室に待たせていた人物に会いに向かった。
落ち着いたデザインの木製の扉を開くと、その中にはシックなスーツに身を包んだナタリアが待っていた。
彼女はボリスがやってきた事に気付くと、席を立って彼の元へと近づいて口を開く。
「議会はどうなりましたか？」
「彼の危険度はSランクから変動はありませんが、国聯としての対応は市民に被害が出ない限りは警戒に留めることに決まりました。また、地下協会もテロ幇助組織と認定されたくないらしく、久遠の安寧の依頼をキャンセルして、世界中に懸賞金を解除する旨をすぐに通達するとの事です」
その言葉を聞いてナタリアは胸に手を当て安堵の息を漏らす。
仮に湊が久遠の安寧を滅ぼしソフィアを討とうとも、一千万ドルの懸賞金を懸けられ国聯にも狙われたままでは、日本で平和に暮らすことは難しくなっていただろう。
懸賞金がなくなっても、元一千万ドルの賞金首として腕試しに挑んでくる者もいるかもしれないが、久遠の安寧を滅ぼした後は湊も自衛のために狙ってきた者を殺すはず。
手を出してこないからと増長してきた者らも、殺された者が出たと聞けば、名切りの鬼などという災厄に自ら進んで関わる者がいなくなる事は容易に想像がついた。
ある一件から相手が自分に弱い事を知っていながらの卑怯な頼みだったが、頼んだ無茶を現実に変えてくれた相手へ、ナタリアは改めて礼を言った。
「無茶な頼みを聞いて頂き本当にありがとうございました」
「いえいえ。メドヴェージェヴァさんの頼みならどんな事でも、と言いたいところですが、今回は色々と政治的な判断も絡んでいますので、本当に気になさらないでください」
苦笑しながら話すボリスがナタリアに弱い理由、それはナタリアの息子が護衛対象だった彼を庇って死亡したからだ。

当時はまだ親の七光と影で言われていた若い政治家でしかなかったが、ナタリアの息子は彼に敬意を払って接し、親の政敵が差し向けた殺し屋から身を呈して守った。
政治家同士のくだらない足の引っ張り合いに巻き込まれ、任務といえど未来ある若者だった息子を失った事で、ナタリアは政治家や権力者に恨みを持ち、祖国を離れて力ある者を殺せる自分の軍隊を作った。
ナタリアがそうしている間、ボリスは自分を庇って死んだ者に報いるため、政治を学びコネクションを持ち、あんな悲劇を繰り返すまいと平和な世を作るために国聯の事務総長にまで上り詰めた。
もっとも、軍隊を作ったナタリアは時を経て自分の行為に意味がない事に気付き。ボリスも地位を得たことで余計なしがらみに囚われる事になってしまったが、ナタリアが意を決して面会を求めてきたため、ボリスは彼女と会って話しを聞いたのだった。
ナタリアと合流したボリスは、彼女を会議室から連れ出すと廊下を歩きながら施設の奥へと向かってゆく。
「我々も、一部の国を除いてですが、強大な力を持つ久遠の安寧を煩わしく思っていたのです。世界を動かす存在は少ないにこした事はありませんから」
「では、今回の件で手を引いたのは小狼に久遠の安寧を陥して貰うためだと？」
「というより、暴れるだけ暴れて力を削って貰おうと考えていると言った方が正しいですね。流石に、たった一人の少年が奴らに勝てるとは誰も思いませんから」
相手は先進国とも戦えるだけの軍事力を持つ組織だ。医療と軍事の分野で世界シェア一位を誇っているのだから、自分たちで作った兵器を使えばそれくらいは出来るのだろう。
各国の権力者ともコネクションを持ち、その者たちを裏から操ることで自分たちの力をさらに強めている。
これをたった一人で相手して勝てという方が無理な話で、当然、ボリスも他の者と同じく湊が途中で力尽きると考えていた。

「地下協会も似たようなものです。彼らは情報を制することで力を持ち過ぎた。真っ向から潰そうにも握られた弱みで動けない者も多数います。ですから、今回は仕事屋たちを扇動したと理由を付けて、彼らに牽制させて貰ったのです」
「表にも影響力を持つ裏の人間は厄介ですからね。責める理由があれば利用しようと考えるのは何もおかしくありませんわ。まぁ、出来れば友人の息子を利用して欲しくはありませんでしたが」
小さくナタリアが付け加えると、ボリスは苦笑して申し訳なさそうに「すみません」と謝ってくる。
もっとも、ボリス側に別の思惑があろうとも望んでいた状況にはなったのだ。懸賞金が解除されたことで仕事屋たちからは狙われなくなり、国聯軍も湊を殺そうと出てくることはない。
余計な茶々を入れてくる者たちが消えれば、湊も敵であるソフィアらとは随分戦い易くなるだろう。
いままで逃げる事や市民を守ることに割いていた分も集中できるようになった事で、今後は久遠の安寧を滅ぼすためだけに力を使う事が出来る。
本気の湊を止める事など人間には不可能。彼の力を間近で何度も見た事でそう思っているナタリアは、この戦いの結末はボリスたちの想像とは異なるだろうと睨んでいた。
そうして、話しながら進んでいくと、二人は事務総長に与えられた執務室に到着した。
民間軍事会社の社長という、一般人とも言い切れない立場の人間が入っても良いのかと悩んだが、扉を開けてボリスが入室を許可してきたので、ナタリアは言われた通り部屋の中へと入った。
するとそこには、上品な空気を纏った一人の紳士がソファーに座って待っていた。整った顔立ちに、一目で上質な物だと分かる衣装、さらにコートの胸に刺繍された紋章によって、ナタリアは相手の正体に気付く。
「貴方は、アドルフ・ベレスフォード侯爵……」
「実は、メドヴェージェヴァさんに頼まれる前に、ベレスフォード侯爵

からも同じ事を頼まれていたのです。国聯に対し十億ドルの寄付をするので、小狼に懸った懸賞金を解除し、手を引いて欲しいと」
「じゅ、十億ドルっ!? 自分の子どもでもないのに、どうしてそんなっ」
国聯の通常予算は二年単位で設定されるが、十億ドルと言えば約四分の一にあたる金額だ。
いくら莫大な資産を有していると言っても、流石に赤の他人のためにそれをポンと出せる感覚がナタリアには理解出来ない。
ナタリアもイリスと湊本人のためにわざわざ国聯本部まで出向いてきたが、その上を行った人物が何を思ってそんな行動に出たのかが知りたかった。
聞いた話しに驚愕してナタリアが相手を見つめていると、アドルフは穏やかな笑みを浮かべて答えてくる。
「小狼君は娘の命を救ってくれました。ですから、彼が窮地に立たされたなら、今度は我々が彼を救わねばと考えたのです。お金は失ってもまた稼げますが、彼を失えばそこでもう終わりですから」
「……小狼を失えば世界が滅びると言った者がいました。貴方たちも同じように考えていらっしゃるのですか?」
一人の死によって世界が滅びるなどありえない。だが、相手の言葉が、死ねばもう会えなくなるという意味だけだとは思えず、ナタリアは考えるまま尋ねていた。
隣で聞いているボリスは不思議そうな顔をしているが、尋ねられた紳士は変わらず穏やかな表情で返す。
「同じかどうかは分かりません。ですが、私たち家族は彼の優しさに救われました。助ける必要も送り届ける必要もなかったというのに、彼は私たちの元まで素性も知らない娘を連れてきてくれたんです」
裏世界で生きている人間が、自分の素性や情報がばれるリスクを冒してまで人助けをするなど稀だ。
相手の素性を聞いて利用できるなら利用し、まるで使えないと分かれば目撃者の口封じとして始末するのが普通である。
けれど、もし気まぐれで誘拐されていたヒストリアを助けるのな

ら、攫った人間を皆殺しにして縛られていた手足を自由にしてやった時点で十分だった。
十分だったはずなのに、湊はヒストリアに名前と元々いた場所を尋ねると、そのまま抱えて移動し、元々いたというホテルまで連れて行って両親に返したのである。
口では、攫われるなど間抜けだとか、大切な子どもなら知らない場所では目を離すな、などと色々きつい事を言っていたが、それは平和脳であったヒストリアと両親を諌めていただけなので、言われた本人たちは湊に対して感謝しか感じなかった。
「確かに、彼は大勢を殺めてきた悪人かもしれない。いや、実際に悪人と呼ばれる人間なのでしょう。しかしそれでも、彼の持つ優しさによって救われる人間も大勢いるんです。私が彼のために使ったお金は、その未来のための投資でもあるんですよ」
湊の犯してきた罪は知っている。その事に思わぬ事がないわけではない。
それでも、貿易王と呼ばれ数多の人間を見てきたアドルフには、少年は信ずるに値する者だと映った。
故に、アドルフはこの程度の金で少年の安全が買えるのならと、とても優しい声と表情で笑ったのだった。

夜――喫茶店〝フェルメール〟
アイギスやナタリアと別れた後に帰国した五代は、日本時間の夜七時ごろ、フェルメール二階の事務所で連絡を待っていた。
相手の話しによればそろそろ結果が決まってもいい時間のはず。そして、会員制である地下協会のサイトにある情報掲示板で、もう一つの情報の更新がないかを待っていたとき、携帯からメールの着信を知らせるメロディが流れた。
「来たっ」
ずっと待っていた五代は慌てて携帯を手に取り、届いたメールを開きにかかる。送信者の名前はナタリア、件名は『おめでとう』となっている。

これでは中身を見るまでもないと喜びに顔を歪め、しかし、それでも詳細を知らねばと中身に目を通してゆく。
曰く、国聯は小狼への対応を警戒に落とす事に決定した、地下協会のラドヴァン・ハマーは久遠の安寧の依頼をキャンセルすることを約束した、ナタリアがボリスに頼む前に既にアドルフ・ベレスフォードが国聯に十億ドル寄付することで小狼から手を引くように要請していた、との事だ。
湊とベレスフォード家の繋がりは五代も知っていたが、まさかそんな大金を使ってまで少年一人を守るとは思わなかったので、住む世界が違うと思わず苦笑いを浮かべる。
けれど、メールにはまだ続きがあり、地下協会の情報掲示板の方でも小狼の懸賞金を解除すると発表された事を確認しつつ読み進めると、目を通し終わった五代は驚きから立ち上がっていた。
「ベレスフォード家が久遠の安寧の本拠地を見つけていた!? それに保護していた小狼君が意識のはっきりした状態で目覚めたらしいって、そんなっ」
あれだけ弱っていた状態で神の力を明確に使ったのだ。湊の人格は既に失われる直前であると覚悟していただけに、どうして湊の意識がはっきり存在しているのかと五代は疑問を感じずにはいられなかった。
しかし、問題はむしろそちらではない。あれだけ世界中で大勢が探していた久遠の安寧の本拠地が見つかったのだ。
貿易王と呼ばれる物流のスペシャリストならば、物流から怪しい点を見つけ出して、久遠の安寧の本拠地を突きとめる事も可能だったのかもしれない。
もっとも見つけられる可能性が高いと知りつつも、五代たち情報屋やナタリアたち蠍の心臓には欠けていたカードなので、それを持っている者が見つけられたのはなんら不思議ではない。
しかし、敵の居場所が分かっている状態で湊が目覚めたのなら、事態は一気に動き出す。
湊の性格を考えれば、相手が対処しようとする前に全てを終わらせ

にかかるに違いないので、決戦はいつ始まってもおかしくない状態だった。
「そ、そうだ。桜さん達に連絡しないとっ」
桔梗組本部では情報を得るのが遅くなる。味方の中でもっとも情報が早く集まるのは五代のところだ。
だからこそ、彼女たちに湊の情報をいち早く知らせるため、今からこの店に集まって欲しいと一斉に連絡を送るのだった。

第百六話　前篇　久遠の安寧―交戦―

――スイス・エーゼル飛行場

現地時間で午後二時を過ぎた頃、久遠の安寧の本拠地と自身に懸けられていた懸賞金が解除された事をヒストリアから聞いた湊は、敵の元へ向かうと告げたことで、セスナなど小型機向けの飛行場に連れて来られていた。

アイギスはヒストリアの母親と医者のシャロンに任せ、右目は失ったが貸していた黒いマフラーを首に巻いて戦闘の準備を整えた湊を待っていたのは、これまで貯めてきた全財産を使っても手が出ない最新鋭の戦闘機であった。

その横に立ったヒストリアは、湊へ向き直るなり笑顔で口を開いて来る。

「足がないと不便でしょうから、今回はこちらの戦闘機をご用意させていただきました。操縦はセスナと似たような物だと思いますので、小狼様なら大丈夫ですよね？」

「……セスナと戦闘機はまったく操縦方法が違うぞ。そもそも、訓練を受けていないと長時間の高速飛行は無理だ」

「まぁ、そうなのですか？　でも、小狼様ならきっと大丈夫ですわ」

にっこりと一切の邪気のない笑みを向けられても、そんな根拠のない信頼をされたところで湊の持つ技能には何の効果もない。

無邪気だからこそ質が悪いのは本当だと呆れつつ、戦闘機を見た事で蘇って来た記憶を整理しながら会話を続ける。

「その変な信頼はやめろ。それに、操縦できないとは言ってない。蠍の心臓で一通り教わったから操縦くらい出来る」

「なら、問題はありませんわね。こちらは小狼様に差し上げます。別に壊しても構いませんので、どうぞご自由にお使いください。ミサイルもちゃんと積んでありますから」

言われて確認すると確かにミサイル装備に設定されている。

しかし、航行距離を考えるとミサイルよりも燃料を積んだ方が良いのではないかと思った。

もっとも、片道であれば問題なく飛べるはずなので、帰りは別の手段を考えればミサイル装備でも問題ないだろう。
戦闘機の装備に対する懸念がなくなった湊は、そのまま近付いてゆくと開いていた搭乗席に乗りこんでしまう。
それを見たヒストリアはニコニコと笑ったままだが、付き人の一人が慌てた様子で駆け寄ってきた。
「しゃ、小狼様、乗り込む前に対Gスーツとヘルメットや酸素マスクを身に付けてくださいませ」
「いらない。普通の人間とは身体の強度が違うんだ。最高速度で数時間飛んでも問題ない」
そんな装備を身に付ければ向こうについてから戦闘に移り辛くなる。
ならば、なくても多少の我慢で済むので、湊は最初からいらないと言って付き人を下がらせた。
蠍の心臓で乗った事のある機体とは種類が異なるが、基本的な構造や操縦方法は同じようなので、最終的にはエールクロイツで操る事が可能な事もあり、湊はすぐにでも出発することに決めた。
ここへ来る前にヒストリアが連絡してくれたことで、この飛行場は貸し切り状態だ。これからいくつもの国の領空侵犯を行うので、証拠を残さないために管制塔とのやり取りも必要ない。
服装は私服にマフラーを巻いただけだが、シートベルトだけはしっかりと締めて、湊は天蓋を閉めつつヒストリアに離れるように言った。
「このまま出る。離れていろ」
「はい。アイギス様のことはどうぞお任せを。ですから、小狼様はご自身の思うままにお進みください」
「……ああ、ありがとう。行ってくる」
いつまでもにこにこと笑って手を振っているヒストリアを、お付きの者たちが引っ張って離れさせている。
その光景に思わず苦笑しながらエンジンを点火させると湊は操縦桿を握った。

目的地はギリシャとアルバニアに挟まれた小国バーラエナ。まさか小さいとはいえ国一つを隠れ蓑にしているとは思わなかった。
だが、隠れ蓑にしていたということは、その国の政府も久遠の安寧の手の人間だと考えていい。
ならば、国を多少焼いたところで何の問題もない。
そう考えて、滑走路を進みだしたとき、内に宿しているシャドウの王がテレパシーで話しかけてきた。
《やぁ、身体の調子も少しは戻ったみたいだね。それに神降ろしも不発に終わったみたいだ》
「万全とは言い難い。点滴を受けて寝ていただけだからな。でも、記憶の消去が止まった。むしろ、関係のある物に出会うたびに蘇ってくる」
《君は自ら神を呼びこんだとき、人格の変異はあれど神との共存を果たしていた。アイギスさんの力を借りて僕を吸収したように、器になるはずが相手の力を取り込もうとしたんだ。だからもう、君が神の力を引き出すことはあっても、君が神の器にされることはないと思うよ》
茨木童子たちが目指した神の誕生は、シャドウの王を取り込んだことのあった湊が器になりかけたことで、その性質を大きく変異させていた。
その最大の違いは神が湊を取り込むのではなく、湊が神を取り入れるようになった事だ。
神を喚び出すには呼び代となる高純度な想いや感情が必要となる。それを用意すること自体が困難なので、湊も自由に神を喚ぶ事は出来ないだろうが、人格の消去と肉体が奪われる心配がなくなったのは朗報だ。
一時は力を使い過ぎた反動で弱り切っていたが、点滴を受けて睡眠を取ったことで回復した湊は、失われた記憶を取り戻しつつあり。このままいけば完全に記憶を取り戻すことも可能だろう。
ずっと心配していただけに、友人の一先ずの無事が確認出来たことでファルロスは嬉しそうにしている。

《そうそう、君の読心能力が切り替え可能になったのはアイギスさんのおかげなんだ。生命力が尽きかけた君に自分の全エネルギーを譲渡したんだよ……口移しで》
「ごふっ!?」
機体が加速を始め、離陸体制に入ったときに口移しの件を聞いた事で湊は思わずむせてしまう。
自分が意識を失っていた間のことなので湊には判断がつかず、かといって似た能力を持った存在はアイギスしかいないので、力が安定した理由を考えれば彼女の力を貰ったからだと考えるのが自然だ。
けれど、やはり機械である彼女がエネルギーの譲渡とはいえ、自分に口付けをするとは思えなかったので、湊はからかわれていると考える事にした。
「……適当な事をいうな」
《いやぁ、愛の力って素晴らしいよね。王子様のキスでお姫様が目覚めたのが数日後ってのが残念だけどさ》
「……本当に口移しだったのか？」
《君の身体に関する力の流れは雰囲気で分かるんだ。あれは間違いなく口から流しこまれた感じだったよ。急に力が流れ込んできたから驚いたけど、そのおかげで君の命を繋ぎ止める事が出来たんだ》
普段から生命力を使って蘇生や治療を行っている相手だけに、そういった力の流れに敏感であっても不思議ではない。
だが、意識がなかったときの話しなので、湊もいまいち信じきる事が出来ず、少し恥ずかしい気もするがアイギスが目覚めたら真相を聞こうと思った。
そんな事を考えながら、離陸に成功して進路をバーラエナに向けて取った湊に、ファルロスはいくらか真剣な声色で再び話しかけてくる。
《さて、それじゃあ本題を話そう。いまの湊君は点滴と睡眠のおかげで力が少し回復している。けど、万全にはほど遠いし、点滴くらいじゃその身体を動かすのに十分な栄養を摂る事は出来なかったんだ》
「いまの状態で蘇生や治癒は出来るのか？」

《完全な蘇生は多分出来ない。出来て傷を塞いで命を繋ぎ止めるくらいだと思う。だから……絶対に死なないでね》
敵の本拠地に乗り込むというのに蘇生が使えない。怪我の治療は出来るだろうが、重傷となれば止血が限度で完治は難しい。
自分が今まで無理と無茶をしてきたせいだが、それでも休んだ事で思考は冷静さを取り戻し、身体もある程度は自由に動かせるまで回復している。
ならば、死ねないというのは他の人間と同じ条件になっただけだ。自分は生き延びて、相手をただ殺せば良い。
残った左眼を蒼く輝かせながら、湊はイリスの仇の少女との邂逅を想い薄く笑った。

――バーラエナ・久遠の安寧本拠地
数日前の暗殺者集団〝蛇〟と爆撃機部隊を派遣した湊殺しが、超常現象が起こった事で失敗したという報を受けた久遠の安寧では、湊を見失ったこともあり少々慌ただしくなっていた。
仕事屋の一団に紛れさせていた構成員に超望遠で撮影させた映像には、光の触手にも見える羽根状の物を背中から生やした存在や、街を覆うほど巨大な黒い蛇の骨に、湊を守る様に飛んでいる天使の姿が映っていた。
それを確認した幹部やソフィアも、相手がソフィアと同じ能力者であると確信した。
けれど、湊はいままで銃火器や刀で構成員たちを殺してきている。超常の存在の力を使って殺害したらしき痕跡は出ていない。
その理由が力を制御出来ていないからなのか、力を使わずとも殺せるという自信からなのかで、久遠の安寧も対応を変えねばならない。
だというのに、あの日から今日まで湊に関する情報が一切上がって来ない。構成員が殺されていないことから、そもそも活動自体が行われていないようだが、力を持った相手の動きが読めない事で、久遠の安寧のトップを務めるルーカスは言いようのない胸騒ぎを感じていた。

（小狼め、一体どこに隠れている。力を使い果たし死んだのか？　いや、名切りの鬼は手足を失っても戦い続けると聞く。あの程度で死んでいるはずがない）

相手の存在は許し難いが、それでも仙道を超える化け物であることは認めざるを得ない事実だと考えている。

映像にあった力を自在に使えるのなら、湊の相手は同じ力を持つソフィアにしか出来ない。

しかし、相手は生身で戦車を破壊するような化け物だ。仮に異能が互角であれば、肉体の性能の差でソフィアに勝ち目はない。

どうして名切りの生き残りが自分たちを狙ってきたのか最初は分からなかったが、つい先日、機嫌の良かったソフィアに尋ねればあっさりと理由を教えてきた。

仙道から話しを聞いたソフィアは湊に興味を持ち、姿を確認したことで自らの物にしようと考え、共にいた仲間を罠に嵌めて殺したらしい。

それが真実だとすれば、仲間が殺された真相をどこかで知った事で、相手は復讐のために挑んできているのだろう。

被害総額は爆撃機や施設を破壊された事で三十億ドルを優に超え、殺された構成員の数も一万人に達しようとしていた。娘の軽率な行動が原因で始まった戦争なので、挙がってくる被害報告書を見る度、自分の娘ながら余計な事をしてくれたものだとルーカスは思わず頭を抱えた。

そうして、執務室に一人で今後の湊に対する対応を考えていたとき、内線の呼び出し音が突然鳴り響いた。

緊急性によって点灯するランプの色が変わるようになっているのだが、現在光っているのは最大の緊急性を表すレッドランプ。滅多な事ではレッドランプは使わないので、ルーカスは何事だと通信を繋いだ。

「私だ。一体何があった？」

《ルーカス様、現在所属不明の戦闘機がまっすぐこちらに向かっているとの報告が入りました。既にいくつもの国の上空を通り過ぎてい

るため、相手の目的地はここの可能性が高いと》
「馬鹿なっ。この場所の情報が漏れるなど考えられん」
《はい。我々も信じられず、困惑しております。ですが、相手はミサイルによって武装しておりますので、ルーカス様の指示を仰ぎたく連絡いたしました》
連絡員の声の様子から察するに、所属不明機はもう少しで到着してしまうのだろう。
この場所がばれたこと自体が驚きだが、敵と思われる者が攻めてきたならこちらも対処するしかない。
タイミングを考えれば相手は湊の可能性が高いが、どちらにせよ墜としてしまえば関係ない。
ルーカスは連絡員にそちらに向かうと告げ、部屋を出ると司令部へと急いだ。
＊＊＊
久遠の安寧の本拠地である基地は、山岳部に近く冬は積雪もあるような寒い地域に存在する。
地上部にはカムフラージュも兼ねた居住スペースとして広大な土地を持つ豪華な屋敷が建ち、土地の至る所に迎撃装置を配備して、それらを地下の作戦司令部で一括管理しているのだ。
有事の際には迎撃装置を使って相手を屠るが、仮に内部に侵入されても建物内にも迎撃ギミックや区画を細かく閉鎖するシャッターを多数用意し、さらには武装した兵士も大量にいるため守りは固い。
けれど、ここへ攻め込んできた者は過去一人もいなかったことで、ルーカスは兵士以外は全て地下区画に移動させ、兵士もほとんどを自分たちのいる本棟の警備に当たらせる守りの布陣を敷いた。
「来ました。やはり、まっすぐこちらに向かっています！」
「迎撃ミサイル用意！　相手が動く前に先に撃ちこめ！」
司令部の大型モニターに望遠カメラで捉えた敵機の姿が映し出される。最高速ではなく普通の巡航速度で飛んでいるようだが、相手は最新の戦闘機であるため二分も経たずに到着してしまうだろう。
ミサイルを装備しておいて、敵対の意思はありませんなどと言って

くるはずもなし。ルーカスは相手よりも先に撃ちこんで撃墜するよう命じた。
相手の速度とミサイルの着弾時間を計算し、命令を受けた者たちは次々とミサイルを発射した。
着弾地点はしっかりとほぼ重なる様にしているが、弾道を微妙にずらすことでミサイル群は面で戦闘機へと迫ってゆく。
いくつかは迎撃出来るにしても、お互いに向かいあって高速で飛んでいるため、回避が間に合うはずがない。
呆気なかったなと思わず口元を歪めかけたそのとき、モニターに映っていた戦闘機が一瞬にして消えた。直後、ミサイル群の後ろに再び出現したという反応がレーダーに表れ、何もない空間でお互いにぶつかって爆発するミサイルを眺めながら、ルーカスたち司令部の人間は騒然とした。
「何が起こったのだ!? どうやってやつはミサイルを回避した?」
モニターで見ていた限り、戦闘機は一瞬にしてミサイル群の背後に移動したようにしか思えなかった。
急な加速や、神業的な回避を取った訳ではなく、突然消えて別の場所に現れたのだ。
瞬間移動などというふざけた事を現実に起こせる筈はない。何かしらのトリックが存在すると、迎撃を続けさせながら別の者に解析させれば、驚くべき結果が機器に表示された。
「け、結果が出ました……」
「どうした? 早く答えろ」
「は、はい。機器の計測によりますと、あの戦闘機は消えたと思われた瞬間にマッハ五〇以上の速度で飛行し、それぞれの距離が詰まる前にミサイル同士の間をすり抜けたようです」
「そんな、馬鹿なっ」
既にマッハで飛んでいる物が、どうやって一瞬でそこまで加速出来るのだろうか。
百歩譲ってコンマ以下でそこまで加速できるとしよう。しかし、今度は対Gスーツを着ていようと乗っている人間がかかる負荷に耐え

きれない。
　また、見た目が通常の戦闘機と変わらないことから機体強度が同じだとすれば、空気抵抗に機体が耐えられずに空中でばらばらになるはず。
　他にも不可能であるとする様々な理由は挙げられるが、相手はあり得ない事を実現させたのだから、それを可能とする能力を持っていると推測出来た。
「……小狼は仕事屋たちから逃げる際にも、一瞬にして別の場所に現れた事があると聞いている。だとすれば、相手には自分と触れている物を空間移動させる能力か、または加速させる能力を持っている可能性がある」
「そ、そんな力を持った者を相手にどう対処すればっ」
「このまま撃ち続けろ。やつがあの能力を長時間使用したという情報はない。ならば、少なくとも発動限界と連続使用に制限があるはずだ。それを見極めるためにも最大火力を維持し、ここへ近付かせるな」
「了解しました！」
　ルーカスの命令を受けた者たちは火器系統を操作して、次々とミサイルや対空バルカンを放って戦闘機を落とそうとする。
　けれど、先ほどよりも発射までに時間があったことで、戦闘機は上空に向けて進路を取り高度を上げて逃げている。
　ミサイルならばある程度は追えるが、バルカンの射程にも限界があるので高度を上げながらの相手には当たりそうもなかった。
　逃げている間はこちらへの接近を阻めているが、どうすれば相手を墜とせるかが分からない。そうして、ルーカスが対処法の他に施設内の兵士の配置も変えておくべきかと考えたとき、相手が装備していたミサイルを一斉に屋敷部分に向けて放ってきた。
　地上部の対空戦力を考えれば落とせない事はない。指示を出すまでもなく、部下たちも一部の火器を迎撃に回して撃墜してみせた。
　しかし、一部の火器が迎撃に回ったことで、戦闘機に向けられた弾幕が薄くなり、相手はその隙を突いて次の行動を取っていた。

「じょ、上空に大型タンクローリー出現！　地上部の敷地境界付近に落ちてきます！」
慌てた様子でレーダーを確認していた男が声をあげる。
急に戦闘機が上下反転させたかと思えば、突如、そこに大型タンクローリーが出現し落下を始めていた。
タンクローリーの側面に描かれた文字と絵を見るに、中身は大量のガソリンだろう。
そんな危険物が敷地外とはいえほど近い場所に落下すれば、地上部は爆発に巻き込まれて大きな被害を被ってしまう。
あんな物をどうやって上空に出現させたのかは不明だが、ルーカスは相手の本当の能力は物体を別の地点に移動させるものだと確信した。
「絶対に落とさせるな！　引火したガソリンが撒かれてもいい。直撃だけは避けろ！」
「了解っ、ミサイルを敵機に、対空バルカンをタンクローリーに集中させます！」
「総員、衝撃に備えろ。爆発の余波はここへも来るぞ！」
ルーカスが言い終わるかどうかのタイミングで、地上に迫っていたタンクローリーをバルカンが撃ち抜き大爆発が起こった。
ミサイルが着弾するのとほぼ同じ規模の爆発の余波で、地下にある基地にも衝撃が伝わり少々揺れ、地上のカメラは閃光に包まれ視界を失ってしまう。
とんでもないデタラメな手段を取ってくる敵だと、机を掴んで衝撃に耐えていたルーカスは表情を歪ませる。
直撃を避けたことで地上に引火したガソリンが撒かれるだけで済んだが、高温のガソリンがあるせいで、それがフレアと同じ効果を発揮し、傍に配備されている一部のミサイルの熱源感知機能を使えなくなってしまった。
それを使わずとも発射時点でデータ入力して撃つ事は出来るが、やはり高速で飛んでいる相手を狙うにはミサイル自身で軌道修正を行い追尾して貰う必要があった。

熱源追尾型にはフレアを、レーダー型にはチャフを使われれば追尾が難しくなることから、その二つに加えてカメラによって認識した物を追うタイプも配備していたが、今回はそれが仇となった訳だ。
相手がこの効果を理解してタンクローリーを落としてきたのなら、忌々しいが兵器に関する知識を持ち合わせているのだろうと、回復してきたカメラの映像を見ながらルーカスは別の防衛手段を取らねばと思った。
しかし、ルーカスも構成員たちも回復したカメラの映像を見て背筋が凍った。
相手の狙いは熱源追尾型の無力化など、そんな生易しいものではなかった。今から迎撃しようにも間に合わない。
そう、爆発によって基地の視界が封じられている間に、相手は時間差でさらに十台ものタンクローリーを投下していたのだ。それも敷地内のほぼ一ヶ所にまとめて落ちるように。
「総員、耐ショック姿勢っ!!」
ルーカスの声で硬直が解かれた構成員たちは、一斉に近くの物に掴まり対ショック姿勢を取る。
そして、数秒後、先ほどの比ではない大きな揺れが基地全体を襲った。
＊＊＊
二回目のタンクローリー投下を果たした湊は、その爆発で地上部の屋敷と迎撃装置の一部を破壊出来た事を確認しながら、旋回して残っていたミサイルを屋敷に向けて撃ちこむ。
敵側はまだ爆発の衝撃によって動ける状態ではない。故に、発射されたミサイルは簡単に大きな屋敷の一部をさらに破壊してみせた。
これで相手の敷いた布陣も完全には機能しないはず。向かう場所に敵がいないことを確認しながら進路を取ると、湊は途中までは戦闘機で向かい、最後は飛び降りて戦闘機を広げたマフラーに収納して地上に降り立った。
美しい外観をしていた屋敷の一部は見るも無惨な瓦礫と化し、爆発で燃えうつった炎でさらに焼かれている。

その中を刀一本持った状態で進みながら、湊は近付いて来る者たちの反応を感知して哂っていた。
(時間稼ぎとは涙ぐましい努力だな。だが、生憎と俺は正規のルートだけで行こうとは思っていないんだよ)
蒼い左眼を光らせ、湊は足元の床を数度切りつける。
すると、切られた床はいとも容易く抜け落ち、地下への入り口を作り出していた。
地下には地下で兵士たちが配備されているようだが、そんなイレギュラーな登場を見せた者に突然対処しろという方が難しい。
湊は通路だった一つ下のフロアに着地すると、銃を構え掛けていた四人の兵士に向かって駆け出し、すれ違い様に一瞬にして首を切り落とした。
血飛沫を上げながら倒れゆく者をそのままに、歩き出した湊はこの基地の構造を把握するべく召喚せずにカグヤの探知能力だけを使用する。
(ソフィアがいるのはもっと奥の別の棟か。司令部や幹部が逃げ込むシェルターなどもそちらという事は、敵の心臓部は別棟に集中しているらしいな)
今後の方針をまとめながら、湊はマフラーからファルファッラを抜いて引き金を数度引く。
ハンドガンとは思えない威力と射程で、正面に現れた武装した男たちの四肢や頭部が吹き飛ばされ倒れてゆく。
続けてファルファッラを戻し、代わりに手榴弾を一つ取り出せば、ピンを引き抜きながら一七〇キロを超える剛速球で投げ込み、背後から迫っていた一団を爆殺した。
(ミサイルの回避とタンクローリーの投下で時流操作を使い過ぎた。治癒の分を考えると、時流操作はもう使えないな)
能力を使わずとも人の気配が複数近づいて来ている事が分かる。
両手で刀を構えたまま駆け出した湊は、通路の角を滑る様に曲がった先にいた鬼の出現に戸惑う敵を見つめて口元を吊り上げる。
これが人として正しい反応だ。対峙しただけで全身の毛が逆立つ

ような、戦ってはならないと本能が告げる存在。それを前にして手に武器を持ちながらも攻撃を忘れてしまうのは、力を持たぬ弱き者として当然だった。
ここに来るまで湊は意識して自分の気配を抑え、不要な犠牲を出さないために攻撃手段も選んできた。
いまは体調が万全でない事で攻撃手段を選ばざるを得ないが、敵しかいないここならばもう何も抑える必要はないのだ。
殺意を瞳に宿し、殺気を全身から放ちながら、現代に蘇った鬼は刀を振るい人間たちを肉塊に変えた。
そして、出来たばかりの血溜まりの上を進み、敵を煽るためわざと傲慢な態度を演じて湊は口を開く。
「フフフ、フハハハハッ！　聞こえているか豚ども。名切りと敵対する道を選んだ以上、お前たちに待ち受けているのは死のみだ。何故、我ら鬼が大陸の向こうにまで名を轟かせたのか。その理由、身を持って知るがいい」
この施設にはカメラやマイクが至る所についている事に気付いていた。
それを使って湊は敵へ再度の宣戦布告をしておいた。ここまで来た以上、怯えて隠れていた主要な幹部たちを逃がすつもりはない。
すると、敵はちゃんと話しを聞いていたらしく、湊を進ませないようにと隔壁のシャッターを次々と降ろし始めた。
これでは敵兵も分断されてしまうはずだが、指揮を取っているのはそれを理解していない戦いの素人のようなので、湊は目の前の合金製シャッターを刀で斬り崩しながら、特に驚いた様子も見せずに言葉を続けた。
「そして、ソフィア。貴様には以前言ったな。生まれてきた事を後悔させてやると。すぐにそちらに行ってやる。精々その醜い顔を見れる状態にして待っていろ」
こんな小細工をしたところで鬼の歩みを止める事は出来ない。隔壁を斬り崩し、中にいる敵を殺して、備え付けられた迎撃装置を次々にスクラップに変えてゆく。

戦闘時以外に走らないのは敵の恐怖を増大させるため。あらゆる手を尽くしても止める事の出来ない死神が徐々に近づいてくる恐怖は、相手から冷静な思考を奪うのにとても有効なのだ。
そして、恐怖で気が狂いそうになりながら命乞いをしてきた相手を、湊はじわじわと嬲り殺してやるつもりだった。
ソフィアだけは、ただの雑魚と同じように一瞬で死なす気など毛頭ない。何度も痛めつけ、死ぬ前に治療を施し、再び痛めつけてはまた治療する。
そんな生き地獄を味あわせなければ、イリスを殺された怒りと憎しみは欠片も治まりはしないのだ。
通路を進みながら湊は密かに思う。アイギスが共に来なくて良かったと。いまの自分を大切な少女に見せたくはなかったから。
＊＊＊
湊の侵入を許したことで久遠の安寧側は大混乱に陥っていた。
老人たちは自分は死にたくないとシェルターに逃げ込み、ある者はここから離れようと脱出艇の使用許可を求めてきた。
シェルターに逃げ込むのは構わないが、この状況で脱出艇を使って自分だけ逃げるなど許される筈がない。
使用は許可できないと返し、相手をシェルターにぶちこんでおくよう兵に命令をして、ルーカスは湊を殺すため様々な手段を試していた。
「やつの五ブロック先の隔壁を一時解放、六ブロック先に毒ガスを充満させろ。やつが侵入してから五ブロック先の隔壁を再び閉じて閉じ込める。さらに八ブロック先に放水開始」
「隔壁解放。毒ガス、放水共に開始します」
閉じ込めた敵を殺すため、最初から配備している迎撃システムの他にも隔壁内にガスや水など送るギミックが備え付けられていた。
水は一度に放水出来る量が限られているので少し先のブロックに設定し、毒ガスはある程度満たしておいて最後に閉じ込め直すことで殺傷能力を上げるつもりだ。
いまもカメラの向こうでは隔壁内に取り残された兵士が容易く肉

塊に変えられていた。
施設に侵入して三十分も経たないうち既に百人以上が犠牲になっている。これ以上の犠牲を防ぐため、また、自分たちと娘を守るためにルーカスはここで墜とすと真剣な表情で画面を見つめた。
「対象、毒ガスエリアに侵入します」
「やつが通ったばかりのエリアに毒ガスを送れ。挟撃した後、改めて隔壁を落とす」
「了解、毒ガスを送ります」
湊が隔壁を斬り崩して現れた。刀一本で切れるような強度ではないのだが、相手は戦車を斬ったこともある男だ。いまさらシャッターを斬ったところで驚かない。
そして、部屋に入った湊は僅かに表情を変えたことから異変に気付いたらしい。けれど、既に背後からも毒ガスが送られてきている。
吸えばすぐに効果が出始め動けなくなるような毒だ。急いで前のブロックに戻ろうにも移動中に倒れるだろう。
今は口を閉じて息を止めているのかもしれないが、それも時間の問題だとルーカスは今度こそ成功を確信した。
だが、画面に映っている相手は、それを嘲笑うように口元を歪めていた。
《この程度じゃあ駄目なんだよ。致死量の毒を血管に流しこまれようが、倒れてすらやれないんだ》
言って湊が刀を振るうと、ブロック内の状態を確認していた構成員の一人が驚きの声を上げる。
「なっ!? ぶ、ブロック内に充満させていた毒ガスが消えました!」
「馬鹿な、刀を振るっただけだぞ!?」
刀を一度振るっただけで充満していた毒ガスは消え去り、ブロック内の空気は正常値を表していた。
追加で送られている毒ガスの部分は表示されているため、センサーが壊れた訳ではなく、先ほどの攻撃らしきものによって相手は毒ガスを無毒化したようであった。
さらに、相手は言った通り毒ガスを吸っていたにもかかわらず、先

ほどと変わらぬ確かな歩みで進み続けている。
今度は放水されたブロックに到着した。先ほどまでは隔壁を切れていたが、今度は水の圧力が加わって切る事など出来ないはず。
そう信じていたのに、相手は先ほどまでと違う事を感じ取ったのか、隔壁に向けて刀を突き出していた。
すると、刀は深々と突き刺さって隔壁を貫通し、貫通した刀の切っ先が水に触れると水が霧散してしまった。
蒸発しただとか、空間移動させたなどという話しではない。ルーカスたちが画面越しに見ている目の前で、跡形もなく消え去ってしまったのだ。
「あれは武器の力なのか？」
「いえ、スキャンしたところ強度が高いだけで普通の刀のようです。むしろ、異常なのは対象の方で、何かの高エネルギー反応が邪魔をしてスキャンが通りませんでした」
「つまり、やつはソフィアとは全く異なる力を持っているというのか。ぐっ……化け物め」
ソフィアが使える千里眼のように、相手も何かしらの力を持っているとは思っていた。
あんな超常の存在を身に宿すのだ。常識に当てはめられると考える方がおかしい。
けれど、ソフィアから相手が読心能力を持っていると聞いていたため、ソフィアの千里眼にあたる能力がその読心能力なのだとばかり思っていたのだ。
その前提が崩れるとなるとルーカスたち普通の人間では取れる手段がなくなってしまう。ソフィアに相手をさせようにも、先ほどの毒ガスや水を消失させた能力や、物質転送を使われればソフィアですら勝てるか分からない。
額に脂汗を滲ませながら苦悶の表情を浮かべていたルーカスは、これ以上の侵攻を許す事は出来ないとして、肉を切らせて骨を絶つ大きな決断をした。
「東棟を破棄する。東棟の隔壁を全て解放、ただちに自爆させろ。や

つを地下四階まで叩き落とし瓦礫で押し潰せ」
「ひ、東棟にはまだ兵士たちが」
「いま墜とさねば、やつはここまで辿り着くぞ！　貴様も名切りの鬼に殺されたいのか！」
相手が余裕を見せている今だからこそ効果があるのだ。これ以上近付かれれば、相手がいる東棟以外にも破棄しなければならなくなる。
本丸に切り込まれるまで残された時間が少ないことから、ルーカスは男を怒鳴りつけて命令の実行を急かした。
すると、他の者たちも自分たちがどれだけ追い込まれた状態にあるのかを認識したようで、取り残される仲間に悪いと思いつつ、館内放送のマイクをオンにして東棟を除く全ての人間に通達した。
「し、失礼しました。緊急連絡、緊急連絡。ターゲットへの対処のため東棟を直ちに破棄する。館内の者は速やかに衝撃に備えよ」
続けて別の男が東棟の自壊コマンドを入力して、あとはエンターを押せば起動出来る状態にした。
そのまま押せばこのフロアにいる人間が対ショック姿勢を取れないので、男は自分も対ショック姿勢に移りつつ他の者にカウントを伝える。
「カウント取ります。5、4、3、2、1、デッド」
直後、基地全体が大きな揺れに包まれた。離れたここまで骨組を爆破する音と倒壊する東棟の衝撃が伝わってくる。
通信が途絶える直前のカメラの映像には、床が崩れ落下してゆく湊の上に地上部の瓦礫が降り注いでゆくのが映っていた。
激しい揺れに必死に耐えながら、ルーカスはようやく滅びたはずの名切りの亡霊を討伐する事が出来たと密かに安堵の息を吐くのだった。

第百七話　後篇　久遠の安寧―復讐―

夜――喫茶店〝フェルメール〟

ナタリアから湊がすぐにでも攻め込む可能性があると聞き、それを五代が桜たちにも伝えたことで、店の事務所には五代の他、チドリ、桜、渡瀬、ロゼッタ、栗原が集まっていた。

桐条英恵や水智恵も情報を知りたがっていたが、残念ながら彼女たちは湊との繋がりを隠すためそれぞれの屋敷から出られず、テレビ電話を使うことも出来ないので、桜の方からメールで速報を伝えることになっている。

そして、湊と思われる所属不明機がスイスから飛び立ち、いくつもの国の領空を通過して、バーラエナにあるアラブの富豪が建てたと〝公的には〟言われている大豪邸に攻撃を開始したという情報までが五代たちに伝わっていた。

傍にいた情報屋仲間にそれは久遠の安寧の本拠地で、小狼が攻め込んだと伝えれば、瞬く間に情報は拡散したようで、小狼に懸けられていた懸賞金が解除された事と共に地下協会の人間が利用する情報掲示板は大きく盛り上がっている。

「続報、来ました。戦闘機の破壊は確認出来ず、反対に屋敷から火の手が上がっているそうです。どうやら侵入に成功したようだ」

「八雲の状態について、攫って行ったヒストリアとかいう女から連絡はないの？」

「済まないけど連絡先を誰も交換してないんだ。小狼君の保護に関しても、ベレスフォード侯爵とナタリアさんが偶然出会って聞けただけだしね」

五代が新たに来た情報を読みあげると、いらついた様子のチドリが現在の湊の状態について尋ねた。

湊が無事なのは嬉しいが、国聯軍やアイギスらを敵の攻撃から守るため神の力を使ってしまったとなれば、その後の消耗具合はかなりのもののはずだ。

保護してから治療を施したにしろ、たった二、三日で回復するレベ

ルでは当然ない。
懸賞金が解除されてから早期に決着を付ける事が求められたにせよ、無理をして限界を迎えてしまえば元も子もないのだ。
「もう、二時間が経ちますね。このままだと影時間に……」
そんな大切な少年のことで不安そうにしているチドリの肩に手を回しながら、桜は時計を見て戦闘開始から既に二時間が経過し、さらには零時を迎えそうだと思わず声に漏らす。
平時なら影時間は少年やチドリに適性に応じた補整を付与してくれるが、現在の湊にとって能力が上がるというのはその分だけ力を引き出されてしまうという事。
力を使い過ぎれば人格のフォーマットは進み、また生命力も枯渇して死んでしまうかもしれない。
さらに、今日は新月だ。満月よりも付与される力が落ちるというのに、力だけ無駄に引き出されるという悪条件が重なっている。
普段ならば有利になることが、疲弊した今の湊にとっては逆に能力を制限させる鎖となっていた。
他の者たちも桜の言葉を聞いて、影時間に入った場合の湊の身を案じていると、ノートパソコンを操作していた五代が皆の方に画面を向けてきた。
「現場近くに向かってくれた友人からの中継が繋がりました。映像は荒いですがリアルタイムです」
「敷地内が燃えてるわね。小狼君はいまどこらへんに？」
「それは分からないが、この崩れている辺りから侵入したと思われているよ」
かなり離れた場所から撮影しているのだろう。途轍もなく広い敷地全体がなんとか見渡せる状態で映っているが、画面手前側の庭園とそこに近い屋敷の一部が崩れて燃えていた。
庭園の方は大規模な爆発があったようで、地面が抉れてそこを中心に円形に燃えた後が広がっている。
これも湊の仕業だとすれば、庭園への攻撃を陽動にして、相手の注意を逸らしたところへ戦闘機のミサイルでも撃ちこんでそこから侵

入したのだろう。
海外で湊がどんな事を体験してきたのか一部しか知らない者にとっては、湊が戦闘機を操縦できるという事も驚きだが、戦闘機の破片らしき物は見つからないので、相手の姿が見えないことから既に内部にいるという情報を真実だと思えた。
しかし、そうして、何かちょっとした情報でも得られないかと一同が画面を注視したとき、最も近い場所にあった屋敷の一部が、炎を上げながら轟音を響かせ倒壊した。
『っ!?』
内部で何かが爆発して倒壊したのかと考えたが、建物の瓦礫がそのまま真下に落下しているように見える。
他の隣接する別の棟は何事もなく無事な様子なので、今の倒壊は意図的に引き起こされたものだと推測できた。
しかし、この状況で意図的に屋敷の一部を壊す必要性が理解出来ない。いや、本当は理由など最初から分かってはいるのだ。
けれど、少年の無事を祈っている者として、脳がその事実を認める事を拒否していた。
「あ、あぁ……っ」
そのとき、映像を見ていたチドリに異変が起きる。顔面を蒼白にさせ、爪が食い込むほど強く自らの腕を掴んで抱きしめている。
少女の突然の変化に心配して桜が声をかけようとするが、その前に少女は絞り出す様に呟いた。
「……八雲が……八雲の反応が、消えていく……」
他の者には何が起こっているのか分からない。
だが、少年と契約によって繋がっているチドリには、契約を通じて相手との繋がりが弱まってゆく事が感じ取れていた。
神に存在を消されていったときとは感覚が異なる。例えるなら、ロウソクの火が消えかかっているような、ゆっくりとだが確実に消滅に向かっている感じだ。
チドリはこの感覚に似た物を知っていた。エルゴ研時代、死にゆく被験体たちから徐々に力が抜けて、動かなくなったとき何かが確実に

失われたと理解出来たあのときの感覚にそっくりだ。
あの当時は何が失われたのかはっきりと分からなかった。だが、今ならば分かってしまう。
あのとき被験体から失われた物、それは命。
「駄目っ、死なないで！　おねがい、八雲――――――」
そうして、世界は緑色に塗り潰された。

＊＊＊

《湊君っ!!》
建物が倒壊し、瓦礫と共に地下へと落とされた湊は、シャドウの王の呼び掛けによって目を覚ました。
気を失う前は影時間ではなかったので、空気の変化からいまが影時間であると気付いた湊は、自分がどれだけ気を失っていたのかと思いつつ身体を起こそうとした。
しかし、僅かに身体を動かしただけで腹部や足などに激痛が走る。また、どういう訳だか右腕が全く動かなかった。
一度動くのを諦め、自分の置かれた状況を理解しようと、暗闇の中、目だけ動かして辺りを見渡すとファルロスが話しかけてきた。
《良かった。目を覚ましたんだね》
「……なん、とかな。だが、だいぶ酷い状態のようだ」
痛みに耐えつつ自分の状態を確認した湊は、どうして自分がろくに動けなかったのかを理解する。
まず、今いるのは先ほど居た場所の地下に位置する空間だ。そして、湊は大小様々な瓦礫に囲まれ、運良く大きな瓦礫同士が支え合って出来たスペースにいた事で潰されずに済んだようだ。
もっとも、左足の骨は折れており、太い鉄骨のような物が心臓のギリギリ真下である鳩尾から背中にかけて貫通している。
さらに、全く動かないと思っていた右腕は、上腕の辺りから大きな瓦礫の下敷きになって潰れてしまっている。
一応、まだ薄皮一枚程度で繋がっているような気もするが、蘇生もろくに出来ない状態では足の骨折も治せないので、組織がぐちゃぐ

ちゃに潰れて千切れかけている腕をくっつけるなど出来るはずもなかった。
「……治療してくれていたのか」
《ごめん、細かい傷と腹部の出血を抑えるくらいが限界で、これ以上はいまの君の生命力では無理だ》
ペルソナを呼んで治療しようにも、ここは人が一人いるだけで精一杯という狭い空間なため、呼び出す事など出来ない。
また、仮に呼び出して治療したところで、数百トンに達する量の瓦礫をどかすことなど不可能だ。
スキルの威力の関係上、上部をどけた途端にその周りから雪崩れ込んできて生き埋めになって今度こそ死んでしまう。
相手を殺すと言って大勢に迷惑をかけたにしては、なんとも間抜けな最期だと湊は自嘲的な笑みを浮かべた。
「なぁ、ファルロス。俺が死んだらすぐに封印が解けてニュクスが降臨するのか？」
《諦めちゃ駄目だ！　まだ、まだ何か生き延びる方法があるかもしれないっ》
そんな事を言われても、ペルソナも使えないのでは出来る事など限られている。
腹に刺さった鉄骨なら死の線を切って分割すれば抜けるだろうが、抜けば傷を塞げないので失血で死が早まってしまう。
これで自分にどうしろというのだと思いつつ、ぼんやりと傍の瓦礫を見つめていると、ファルロスが再び声をかけてきた。
《湊君、君は生きなきゃ駄目だ。ここから抜け出して、敵を倒して、アイギスさんと一緒に日本に帰るんだろ！》
「っ!?」
その言葉で湊の瞳に力が戻ってくる。
そうだ、自分は大切な少女と共に帰ると約束した。敵を倒して、全部終わらせて日本に帰ると。
足が折れているからどうした。腕が千切れているからどうした。自分はまだ生きている。そして、殺すと決めた相手もまだ平然と生き

残っているではないか。
湊は身体を僅かに起こすと、残った左手で鉄骨の線をなぞり分割して引き抜く。
「うぐっ……はぁ、はぁ」
鉄骨を抜いたことで傷口が拡がり、そこから血が抜けていく感覚を感じながら湊は口を開く。
「ファルロス、肉体をそのままエネルギーに変換する事は出来るか？」
《肉体をエネルギーに？　分からない。生命力への変換というなら、少し異なってるから難しいかもしれない》
「もう治療はいらない……。治せないなら、治るまで待てばいいんだ。その間に必要な分のエネルギーを肉体の方から補えるかが知りたい」
《っ!?》
ファルロスやペルソナで治療出来ないなら、誰もいない今身体が元々持つ治癒力に頼るしかない。
確かにそれはそうだが、いくら回復の速い湊でも、生命力も減っていてファルロスの力が使えない状態では完治に何ヶ月かかるか分からない。
聡明な少年がそれを分かっていない筈はないので、相手の真意は何だと考えこみ、少年の真意に気付いてしまったファルロスは驚愕しながらも、相手に本当にやるのかと確認を取った。
《本気で成功すると思っているのかい？　下手をすれば、失敗してそのまま君は死ぬよ？》
「待っていても死ぬだけだ。なら、俺は自らの時計の針を進めて生き残る方に賭ける」
湊の考えた作戦は、自分の肉体の時を加速させて失血で死ぬよりも速く傷を塞ぐというものだ。
しかし、時を加速させれば成長する身体は栄養を欲するので、ラクダがコブに蓄えた栄養を徐々に消費するように、湊は筋肉などを消費して補おうと考えた。
聞いたファルロスも、一応は相手の言っている事の意味は理解出来ている。確かに、時を加速させる部位に気を付ければ、出血する速度

よりも速く傷口は治ってゆく。
けれど、いまの状態でそれほど緻密なコントロールが可能なのか。また、身体中の筋肉から栄養を貰ったところで完治するのに足りるかも分からない。
なにより、湊だからこそ抱える一番の問題点が残っていた。
《時を加速するということは、それだけ君の身体は歳を取るということだ。何度も無理な蘇生や治癒を施しているから、君の寿命は飛騨さんが言ってたよりも短くなっているかもしれない。それでも、寿命を削ってでもやるのかい？》
「……ああ。足りないっていうなら、この薄皮一枚で繋がっている右腕を全部使ってもいい。だから、サポートは任せた」
再び瞳に力が戻った湊は、生きるためにこんな馬鹿げた作戦を本気で成功させようと思っている。
ここで待っていても死しか待っていないので、僅かにでも助かる可能性があるのならファルロスもそれに賭けたい。
そう考えれば、少年に対する返事は決まっていた。
《はぁ、しょうがないね。いいよ。やってみよう》
「ああ、ありがとう」
《気にしないで。それじゃあ、右腕と身体全体から数パーセントずつ筋肉を貰うよ。腕はもう千切っても大丈夫。君の肉体だからこの距離なら十分エネルギー変換出来るんだ。身体が熱くなったら、湊君は時の加速を始めて》
言われて湊はブチブチと音をさせながら瓦礫から右腕を引き抜く。切断面から腹部と同じように熱い血液が流れ出るが、今は時の加速に意識を集中させる。
すると、身体と千切れた腕が淡い白光を纏って熱を帯び始める。エネルギー変換が始まったことで、言われた通り湊も左眼を濁った金色に変えて時の加速を始めた。
変化はすぐに現れ、時の加速に応じて傷が塞がり、湊の背丈や髪が伸び始める。
（……ああ、これだけじゃ駄目だ。傷が塞がっても、ここから出られな

ければ意味がない）
傷口が熱を帯びて細胞分裂を繰り返し塞がってゆくのを感じながら、湊は続けてここからの脱出法に意識を向ける。
（馬鹿な餓鬼が暴走して、大勢に迷惑をかけながら助けて貰って、そのくせ約束の一つも守れないようじゃ合わせる顔がない）
肉体の成長に合わせて、その風貌も影のある少年の物から、憂いを帯びた麗人と見紛うばかりの美しさを持つ青年の物へと変わってゆく。
（俺は、帰るんだ。アイギスと一緒に……）
千切れて上腕までとなった右腕を、天井のあった方向へと向ける。
歯を食いしばり、失った右腕で何かを掴もうとしながら、心を怒りと殺意という負の感情で満たしてゆく。
（ペルソナを呼ぶだけの力が残ってないからどうした。絆を捨てて、大切な人たちを傷付けて、それでも敵を殺すと決めたんだろうがっ）
残っている力と肉体を削って得たエネルギーで時を加速させ治療している訳だが、それではただ延命されるだけで自分の状況はほとんど何も変わらない。
ここに来るまでに、力を得るために育んだものを捨てておきながら、ただ弱くなったのでは何の意味もない。
あの決断にはちゃんと意味があった。絆という支えを失ったことで、孤独という自分だけで立って歩く力を得たのだ。
（心を怒りで、憎しみで、殺意で満たせ。俺はまだ何も成し遂げちゃいない。あと少しなんだ、もう少しで相手に届くところまで来たんだっ）
かつてペルソナを呼び出す際に見せていた光とは対極な、赤い光と黒い欠片が渦巻き、何もないはずの右腕の先で黒い炎が揺らめき出す。
無い腕を懸命に伸ばしながら遥か先を掴もうとする湊のまわりで、光は輝きを増し続け黒い欠片は何かを形作ろうと螺旋を描き舞っている。
そして、赤い光が地下の空間全てを照らすほど強まったとき、心を

負の感情で満たし湊は叫んだ。
「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」
瞬間、黒い炎が波紋のように燃え拡がり、湊の腕の切断面から銀色の双角と瞳を持つ蛇神が現れた。
《グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――――――――ッ!!》
その咆哮に大気と大地が振動し、周囲の瓦礫を触れる前に塵へと変え、空間が歪ませながら現れた蛇神は大口を開けながら地上を目指し昇ってゆく。
何百トンという瓦礫が積み重なろうが関係ない。蛇神の呼気と共に漏れる黒い炎が雪崩れ込んでくる瓦礫を融解させ、まるでそこが侵してはならない神域であるかのように、湊を中心とした半径数十メートル圏内の空間からは円柱状に全ての物が消滅していた。
力の管理者たちに言われても、自分の心の深い部分へ意識を向けても、ずっと見つける事が出来なかった。
それも当然だ。何せ、相手は最深部にある心の境界線のその先、負の感情の眠る場所にいたのだから。
地上に到達し、天まで昇ってゆこうとする蛇神を消しながら、相手の発生させた影で出来た黒い炎で右腕を形作り、拳を何度か握って調子を確かめた青年は、地下から遥か頭上に広がる空を見上げ、どん底から這い上がるのも悪くないと呟った。

＊＊＊

東棟倒壊の衝撃も治まり、北棟の地下二階にある自室に従者のヘルマンと共にいたソフィアは、〝神々の黄昏〟と本人たちは呼んでいる影時間に入った事で、面倒なタイミングで来てくれたものだと心の中で湊に対する愚痴の言葉を吐いていた。
相手は先ほどの倒壊に巻き込まれて死んだからいいかもしれないが、自分たちは基地にダメージを負った事で、普段以上に不便なまま影時間が明けるまでの一時間を過ごさねばならない。
影時間でエレベーターが止まっているため、普段過ごしている地上

部の私室へ階段で昇ってゆく気のないソフィアはここで過ごすはめになる。
また、適性を持っているのはソフィアとヘルマンだけなので、誰かを遣いにやって何かを持ってこさせる事も出来ず。
最期まで人をイラつかせてばかりの人間だったと、ソフィアは湊の評価をかなり下の方まで下げたのだった。
そうして、気を取り直したソフィアは、電気は使えないが影時間になる前に淹れた紅茶はあるため、いまはこれで我慢しようとヘルマンにお茶を注ぐよう命じようとした。
だが、口を開きかけたそのとき、轟音と共に激しい震動がソフィアたちを襲った。
「きゃあっ!?」
「お嬢様!!」
椅子から倒れて落ちそうになるソフィアをヘルマンが支えて助ける。紅茶の入ったポットとティーカップは床に落ちて割れてしまったが、それよりも二人は今の衝撃の正体に意識を向けていた。
いまは影時間だ。だからこそ、適性を持たない人間は棺のオブジェと化して動く事が出来ない。
また、全ての電子機器が使えなくなるため、東棟を倒壊させたときのような衝撃が起こる要素などないはず。
だからこそ、先ほどの揺れは、適性だけでなくソフィアと同じく守護天使（ペルソナ）をその身に宿している者しか起こしえない。
揺れが治まり自分で立てるようになったソフィアは、椅子から立ち上がり扉の方へと向き直る。その間に、ヘルマンは警戒した様子で拳銃を構え、いつでも主を守れるよう傍に控えた。
「……やっぱり、小狼も力を持っていたみたいね」
「お気を付けください、ソフィア様。やつは力を持った上に、生身で仙道様に勝てるほどの腕前を持つ者にございます」
他に音を立てる物がないので、耳を澄ますと何かが大きな音を立てつつ近付いて来るのが分かる。
さらに、ソフィアは千里眼の力で相手の居場所を察知する事が出来

た。相手の状態を把握しようと能力の知覚を伸ばし、どこまで近づいているかを探る。
まだ北棟には来ていない。では、東棟に隣接する南棟にいるのだろう。
そうして、能力の知覚をさらに伸ばしたところで、隔壁のシャッターを黒い腕で殴りつけて破壊している相手を見つけた。
だが、その姿に違和感を覚えたソフィアは思わず呟く。
「どういう事？　髪と身長が急激に伸びているわ。それに、あの黒い右腕は一体……」
司令部で見ていた監視カメラの映像は、ソフィアが命じた事でこの部屋でも見られるようになっている。
相手が来た時点でソフィアも少しは注意していたので、カメラの映像はずっと見ていたのだが、以前はなかった眼帯を右目に付けていたことはともかく、髪は肩に届く程度で身長は一七〇センチほどのはずだった。
それがいま確認した湊は、腰よりも長い髪を垂らし、身長はどう見ても一八〇センチを超えている。極めつけは一撃で隔壁をひしゃげさせて吹き飛ばす黒い右腕だ。
見えている手首より先から判断するに、左腕は以前と同じ人間の肌の色をしている。
だというのに、右腕は上腕辺りで袖が破れ、そこから先には時折揺らめく漆黒の腕が生えていた。
服がところどころ血で汚れているので、もしや、倒壊に巻き込まれた際に右腕を失って能力で補っているのだろうか。
そう推測を立てたソフィアは、音が近づいてきた事でヘルマンにも相手の異常を伝えておく事にした。
「ヘルマン。相手の様子がおかしいわ。髪と身長が急激に伸びているの。それに能力らしきものを使った右腕を持っているわ」
「……ソフィア様、もしものときは奥の扉からお逃げくださいませ」
「その必要はないわ。だって、わたくしのアパテーが負けるはずがないもの」

己の能力に絶対の自信を持ちながら、アンティークドールのような美しい顔を冷笑で歪め、ソフィアはヘルマンと共にやってくる者を出迎える事にした。
音が徐々に大きくなり、もう傍まで迫っていると思ったところで、二人の見ていた扉が音を立てて木っ端微塵に吹き飛んだ。
破壊された扉の破片から主を守る様にヘルマンは前に立ち、筋肉を消費したことで以前よりも線の細くなった青年へと変貌を遂げていた湊と二十メートルほどの距離で対峙する。
相手の放つ冷たい殺気に空気が張り詰めてゆく中、距離を開け向かい合う者たちの中で最初に口を開いたのはソフィアだった。
「随分と行儀の悪い登場の仕方ね。この〝神々の黄昏〟に入る資格を持っていると言っても、やはり、極東の島国から来た人間には期待するだけ無駄だったかしら」
「……お前はただでは殺さない。惨めさと絶望を感じながら死んでゆけ」
「っ……アパテー、ガルダイン！」
ソフィアの頭上に現れたアパテーは、水晶玉を光らせ収束した暴風を湊に差し向ける。
車だろうと容易く吹き飛ばす威力を有した攻撃だ。いくら能力者だろうと直撃すれば無事では済まない。
それを、湊はその場に立ったまま黒い腕を横に薙ぐだけで、何事もなかったかのように霧散させた。
これには多くの人間をこの技で屠ってきた本人も、それを傍で見てきた従者も驚きを隠せない。
けれど、アパテーの持つスキルは疾風属性だけではない。四属性に限って言えば弱点である氷結属性を除いた三属性を扱う事が出来るのだ。
「今度はマハジオンガよ！」
故に、驚きこそしたけれど、今度は広範囲に放つ事でガードもさせないと、ソフィアは電撃スキルを放ってくる。
先ほどまで座っていたテーブルや絨毯などを焦がしながら、正面だ

けでなく上や左右からも迫りくる電撃は、今度こそ直撃を果たした。
先ほどの攻撃を防がれたのは相手が疾風属性に強かっただけ。二度目の攻撃が当たったソフィアは無言で喰らい続けている相手を見つめて、ようやく満足気な笑みを浮かべた。
「……お前、本気で俺に勝てると思ってたのか？」
だが、強力な攻撃を喰らいながらも効いた様子はとくになく、湊はどこか呆れた瞳でソフィアを見返した。
さらに、再び右手を僅かに上げて横に薙ぐと、マハジオンガも消え去ってしまう。
ソフィアがその事態に忌々しげに表情を歪めていると、続けて湊はソフィアとヘルマンを見つめたまま右腕の肘を曲げて後ろに引いた。
何をするのかは分からない。けれど、本能が危険だと告げている。かつては特殊部隊にいたヘルマンは、主を横に押し退けながら盾になるよう飛び出した。
「お逃げください、お嬢様っ!!」
「――――死ね」
呟き右腕を突き出しながら一歩踏み出すと同時、黒い腕が炎のように揺らめき肥大化しながら巨人の腕と化し、二十メートル離れていたヘルマンを殴りつけた。
その速度と威力により、ヘルマンは頭部と胴体を弾けさせ、四肢と血液を撒き散らせながら吹き飛んでゆく。
横に突き飛ばされたソフィアは、飛び散った血を顔に浴びながら、目の前の光景に目を見開き顔面を蒼白にしていた。
「な、そんな、い、いやっ……こんな、いやあっ?!」
化け物の力を目の当たりにしたソフィアは、恐怖を感じて部屋の奥の扉から逃げ出した。
背後で扉が吹き飛ぶ音が聞こえるが関係ない。逃げなければ殺されると、ようやく自分が相手にしていた存在の力を理解したことで、ソフィアは死にたくないと暗い廊下を全力で走り続ける。
（ア、アパテーの力が効かない相手にどうやって対抗するっていうのよっ）

長い廊下を進み奥のエレベーターに辿り着いたソフィアは、上階に向かうボタンを連打しても反応がないことで、いまが影時間である事を思い出し、少し先にある階段で上階を目指そうと再び駆け出す。
今まで影時間に活動している者は極稀に見かけたが、ペルソナを持っている人間とは出会った事がなかった。
しかし、ペルソナは心の強さがペルソナ自体の強さにも大きく影響する。その点に関していえば美貌も才能も権力も持っていたソフィアは、他のペルソナ使いよりも己に自信を持っていた事で、シャドウとすら戦った事がなかったというのに美鶴たちだけでなくチドリやタカヤたちをも上回っていた。
もっとも、初めて出会った記念すべきペルソナ使いが、その彼らの力を足し合わせても一撃で屠れる化け物であった事は、同情すべき点であり彼女にとって唯一の不幸だったとしか言いようがない。
（い、嫌よ。死にたくないっ、こんなところで死にたくないっ）
階段を駆け上がり地下から地上フロアへと移動してゆく。今は千里眼を使って相手の居場所を探っている余裕はないが、階段を上っている途中で下から固い靴音が聞こえてきたため、相手も同じ階段を上り始めた事を理解する。
走り辛い靴とドレスに苛つきながら、こんな事なら運動もしっかりしておくんだったと、ソフィアは面倒くさがって身体を鍛えて来なかった事を後悔する。
けれど、ようやく一階に辿りついたことで、すぐさま廊下へと駆けこもうとしたとき、言いようのない悪寒が走り、ソフィアは受け身も考えずに前方に飛んだ。
すると、彼女が上って来た階段を破壊しながら、黒い火柱が立ち上ってきていた。
それを見たソフィアは痛みを我慢して立ち上がると、先ほどよりも必死に駆けて逃げ出そうとする。
どうみてもあれは変化した相手の黒い腕だ。物質を掴んだり殴ったり出来るだけでなく、見た目通りに炎として燃やす力まで有しているとなれば、一直線の廊下に相手も来たとき逃げようがなくなる。

身体が酸素を求めて激しく呼吸が乱れ、脇腹の辺りが痛み、足の筋肉が張ってくるが、それでもソフィアは死にたくないと必死に走り続けた。
けれど、湊の持つ力はペルソナだけではない。廊下を走っている途中で〝パンッ〟と小さな破裂音が聞こえたかと思えば、ソフィアは左肩に激痛を感じて倒れ込んだ。
「あぐぅっ!?」
倒れたソフィアは身体の至るところをぶつけながら床を転がり、痛みで涙と脂汗を滲ませながら、先ほどの激痛を感じた箇所に手を当てた。
触れたとき最初に感じたのは温かい何かで濡れている事だった。それからすぐにそれが自分の血であり、先ほどの破裂音は銃声で自分が撃たれた事を理解する。
(痛い、痛い、痛いっ。嫌だ、まだ死にたくないっ)
痛みと血によって自らの死をより具体的に想像してしまい。ソフィアは死にたくないと無事な右腕で匍匐前進するように倒れながら前に進む。
豪華なドレスは何度も転倒した事でボロボロになり、自慢だった銀髪も先ほどこけた際に左肩の傷口から出た血で汚れたのか部分的に赤く染まっている。
普段の彼女がいまの自分の姿を見れば汚いと冷笑を浮かべて罵るだろうが、死の恐怖に怯えるソフィアには自分の姿など気にしている余裕はなかった。
「……いい格好だな、ソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタイン」
「っ!? あ、ああ……っ」
そして、ついにソフィアは追いつかれてしまった。背後から声と靴音が聞こえ、ソフィアは目に涙を溜めて嫌だと首を横に振りながら上体だけ振り返る。
肉体を成長させる際、湊はエネルギー源として筋肉を使ったといっても、ほとんどは千切れた右腕で賄われ、身体の方は付け過ぎていた筋肉を正常値に近いレベルまで削った程度に過ぎない。

加えて、正常値に戻ったのは量だけの話であり、血に目覚めたことで質が変化した湊にすれば、量が減った状態でも血に目覚める以前よりも遥かに運動性能は上がっていた。
それだけの運動性能を有し、さらに背丈が伸びて歩幅も広くなっていた湊にすれば、ろくに運動もしていなかった少女が全力で駆けたところで追いつくのは容易かった。
ようやく追いついた湊が見たのは、床に這いつくばりドレスと髪を汚してみすぼらしくなった相手の姿だった。
ただ殺すだけでは済まさないと言っていた湊は、振り返った相手の顔に恐怖が浮かんでいたことで、望んでいた通りになったと酷く冷たい眼で見下ろし哂う。
「さて、四肢の骨を順番に折ってやろうか。それとも爪を剥ぐのが先か？」
「い、いやっ。御免なさい、お願いします、何でもしますから殺さないでっ」
「断る」
相手の言葉を切って捨てた湊は、未だに逃げ出そうとずりずりと下がってゆく相手に駆け寄るなり、ブーツの爪先を相手の脇腹に叩きこんで、鈍い音をさせながら少女を蹴り飛ばした。
蹴られ床を転がった少女は、勢いが止まるなり血の混じった吐瀉物を口から吐いている。
「おぐっ、ごほっ……おえっ」
撃たれた肩と蹴り折られた脇腹の痛みで目に涙を溜めて、ドレスが自分の吐瀉物で汚れても、ソフィアは死にたくないと顔をあげて湊に懇願してきた。
「お、お願いしますっ。貴方に忠誠を誓います、奴隷として扱って貰って構いません、ですから、どうか殺さないでっ」
「……同じように、人としての尊厳を捨ててでも生きたかったやつは他にもいただろうな」
言いながら湊は冷たい瞳のままゆっくりと近づいてゆく。
相手が近付いてきた事でソフィアは身体をビクリと揺らしたが、今

度は逃げるのではなく、反対に身体を引き摺りながら湊に近付き。立ち止まった湊の靴に顔を近付けると、そのまま舌を出して舐め始めた。
　あれだけ傲慢だった人間が、完全にプライドを捨てて隷属を誓いながら相手の靴を舐めるなど、彼女の以前の姿を知っている者なら驚くだろう。
　けれど、湊は感情の消えた顔のまま、靴を舐めていた相手の顔を蹴りあげた。
「うぐっ……」
「俺もお前も造られた存在のくせに殺し過ぎたんだ。望んだ通りの最期なんて迎えられるはずがない」
　鼻血を出して仰向けに倒れる相手に近付き、しゃがんだ湊は黒い腕で相手の首を掴んで起こす。
　腕の状態にしていれば、ミックスレイドの影と同じ物で作られたこの腕に炎としての熱はない。
　掴み起こし、恐怖に顔を歪めた相手に顔を近付けながら、湊は徐々に力を込めつつ言葉を続ける。
「悪戯に殺されてきた人間の気持ちが少しは理解出来たか？　誰も助けてくれない状況に絶望しているか？　自分が選ばれた存在ではないと気付けたか？　教えておこう。お前の命に特別な価値などない」
　窓からさす影時間の光に照らされ、恐怖と絶望に染まる相手を見ながら湊は復讐の終わりを感じる。
　イリスを殺した人間を絶対に許さないと憎しみに動かされここまで来たのだ。
　馬鹿な事を続けた自分をイリスならば叱るだろう。それでも、湊は自分から母親を奪った相手を、悪戯に人々を殺してきた者を、自分と同じ殺人鬼をこのままにしておくつもりはなかった。
　徐々に強まる力で、自らが死に近づいている事を理解し恐怖しながら死んでゆけ。そう思って湊は腕に力を込め続ける。
「……死にたく、ない……誰も、わたくしを見てくれなかったのに……まだ、死にたくない……」

すると、この状況でソフィアは泣きながら小さく声を漏らした。
相手の過去を知らない湊は何を言っているのかは分からない。アイギスのおかげで切り替えが出来るようになったというのに、こんな人間の心を今さら読む気もない。
だというのに、血に染まり赤くなった長い髪を見ていると、湊は相手を殺すことに躊躇いを覚え始めていた。
こんな少女を知っている。消えてしまった記憶の中に、アイギスと同じように大切な少女が確かにいた。
けれど、その少女とこの少女は別人だ。こいつはイリスを殺した。身勝手な我儘で大勢の人間を不幸にした。生かしておく訳にはいかない。
そうして、決心が鈍る前にひと思いに殺してしまおうと手に力を籠めかけたとき、
「お願いします……八雲、様……殺さないで……」
ソフィアは偶然にも記憶にあった湊の本当の名を呼んだ。
「っ……チド、リ……」
赤い髪の少女に名を呼ばれたことで、湊はまるで霧が晴れたように失っていた全ての記憶を思い出した。両親の顔も、アイギスと始めて出会ったときのことも、チドリと過ごしてきた毎日も、全てが蘇ってきたのだ。
だが、記憶が蘇ってきたことで、今のソフィアの姿が泣きながら死にたくないと言っていた被験体たちや、大切な少女の姿を想起させ、湊の手を完全に止めてしまっていた。
「くっ……なん、で……っ」
こいつを許す事は出来ない。今でも殺したいくらいに憎んでいる。
だというのに、力を籠めようとしても湊の身体は言う事を聞いてくれなかった。
ここまで来たのに、どうしても救えなかった人間の姿が重なってしまい殺す事が出来ない。
思考と感情を分けて人を殺せるようになった湊にとって、こんな経験は初めてだった。

殺せない悔しさと自分に対する怒りに表情を歪ませた湊は、固まった身体を無理矢理に動かすために叫んだ。
「……くっそぉぉぉぉぉっ!!」
叫んで身体が僅かに動くようになった途端、湊は相手の首を掴んでいた右手を離す。解放されたソフィアは背中を床にぶつけ咳き込みながらも、首を掴まれていた事で絶たれていた空気を求めるよう深い呼吸を繰り返している。
しかし、殺せなくなったからと言って相手に対して何も出来ない訳ではない。蛇神を召喚した余力なのか召喚に必要なエネルギーを僅かに得ていた湊は、ペルソナ状態のカグヤを呼び出し相手を治療するなり、左手で相手の顔を掴む様に口を押さえ、残った右手でドレスの胸元を掴んで力任せに引き裂いた。
「んんんーっ!?」
治療を受け痛みから解放された事で心の余裕が生まれた直後、口を塞がれ服を破られたことでソフィアは驚きと恐怖から声を上げようとする。
けれど、ただでさえ力で負けている上に、体力を消耗している以上、いまのソフィアに抵抗する術はない。
「生まれてきた事を後悔させてやると言っただろう」
「あぐぅっ」
抵抗しようと暴れる相手の頬を、口を押さえていた手で殴りつけて黙らせる。
生まれてきた事を後悔させてやると言ったのだ。殺せないなら同等かそれ以上の苦痛と恥辱を与えてやればいい。
そう考えた湊は、相手が暴れたり声をあげたりする度に殴りつけては黙らせ、影時間が終わる直前まで、何度も何度も、相手が一切の抵抗を見せなくなってもその身体を蹂躙し続けたのだった。

第四章　―Ｒｅｃｅｓｓ―

第百八話　得た物、失った物

深夜――喫茶店〝フェルメール〟

画面の向こうで敵の本拠地の一部が倒壊するのが見えた。それからすぐに影時間に入ったため、チドリは湊の命が消えてゆく気配を感じ取っていた事で、唯一適性を持っていた栗原に宥められながら不安な時間を過ごした。

しかし、影時間が明け、他の者たちの象徴化が解けてパソコンの画面が回復すると、チドリと栗原の目には信じられない光景が飛びこんでくる。

建物が倒壊したのは影時間の直前だ。ならば、映像には影時間の前と同じ光景が広がっていなければおかしい。

けれど、影時間が明けたそこにあったのは巨大な穴。建物が倒壊して出来た瓦礫のほとんどが消え、代わりに角度の問題から深さは不明だが、大きな縦穴らしきものが出来ていたのだ。

それを見たチドリと栗原は一目で湊の仕業と気付き、続報を待っている間に他の者たちに事情を説明した。

「建物が崩れたとき、確かに八雲の命が消えていくのを感じたけど、今はそれがなくなってる。で、映像が回復したら瓦礫が消えて穴が出来てたの。どう考えても八雲がやったとしか思えない」

「なら、みーくんは無事なのね？」

「そう考えていいと思う。むしろ、消えかかってた契約の反応も戻ってるから、もしかすると体調とかも回復してるのかもしれない」

チドリの言葉を聞いた一同は揃って安堵の息を吐く。

湊の人格がヒストリアの屋敷で目覚めてから回復傾向にあった事を湊本人は自覚している。

しかし、他の者が神降ろしのことを知っていると湊は分かっていなかったので、誰にも話さなかったこともあり、他の者はいまも人格のフォーマットが進んでいると思っていた。

それを、契約で繋がったパスの状態からチドリが回復を感じ取ったため、神降ろしが止まったのなら最大の懸念材料が一つ減ったと他の者が安心するのも当然であった。
それからは特に映像等にも動きがなく、向こうで一体何が起こっているか一同が少々の不安を感じながら何時間も待っていたとき、地下協会の組合員として五代が使っているパソコンにメールが届いた。
いま情報屋や仕事屋たちは、今まで知られていなかった久遠の安寧の本拠地に小狼が攻め込んだらしい、という情報で盛り上がっている。
そんなタイミングで何の連絡が来たのかと、他の者に断りをいれて内容を確認した五代は、驚愕に目を見開き声を上げた。
「なっ、これは、一体どうしてっ!?」
「ジャン、何があったの？　どこからの連絡？」
急に一人で驚いている五代に、ロゼッタが落ちつけという意味も込めて声をかける。
仕事用のデスクトップパソコンに連絡が来たのだから、少なくとも仕事関連の相手から来た情報である事は確かだ。
だが、情報屋をしている五代だからこそ、付き合いが広くて他の者では相手が情報屋なのか普通の知人なのかも判断がつかない。
ロゼッタに声をかけられた事で五代も冷静さを取り戻し。混乱していた事を謝りつつ質問に答えた。
「ごめん。連絡は地下協会からだった。でも、組合員というより仕事屋全体に対する報告として発表しているようだ」
「その内容は？」
「久遠の安寧のトップが現トップの娘であるソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインに替わるらしい。さらに、組織再編として久遠の安寧は仮面舞踏会の傘下に入るとも」
『っ!?』
五代の口から齎された情報に一同は言葉を失う。
裏界最大規模を誇る組織のトップが入れ替わることも大ニュースだが、それ以上に、その最大組織が他の組織の傘下に入るという情報

に普通の仕事屋たちは驚きを隠せないだろう。
しかし、ここにいる者たちは、復讐に走っていた少年がどのような心変わりをして敵を支配下に収めたのかが分からなかった。
仮面舞踏会は小狼と名乗っている湊と、仕事はしていないが小猫名義のチドリの二人のチームであり組織だったはず。
それが突然、最大組織を傘下に収めて新たな最大組織へと変貌した。何の話しも聞いていないチドリや他の者たちが混乱するのも無理はない。
同名の別組織ではないかと五代も内容を改めて確認したが、久遠の安寧を傘下にした新生〝仮面舞踏会〟の盟主として小狼の名が書かれている。組織名と個人名が共に合致した以上、認め難くとも事実として受け止める他なかった。

――久遠の安寧・本拠地

久遠の安寧のトップ交代の報が地下協会から世界中に届く数時間前、影時間が明けた直後、司令部にいたルーカスは部下たちに被害状況を確認させていた。
東棟をまるまる倒壊させて相手を瓦礫ごと地下へ閉じ込めたのだ。まさか相手が生きているとは思わず、影時間の記憶補正によって瓦礫類が消えていることにも違和感を覚えぬまま、あがってくる報告に頭を抱えていた。
今回の被害は庭園に設置した迎撃装置に、東棟まるまる一つ。さらに他の棟の隔壁シャッターがいくつも壊れていたが、東棟倒壊で逃げ場を失った空気が圧力をかけて破壊してしまったのだろうと思われた。
それ以外にも地下のソフィアの部屋や非常階段にも破壊の痕跡があるのだが、影時間の補正効果かその点にはあまり意識が向かず、ルーカスは本拠地が世界にばれたことも含めてどのように動くか考えていた。
迎撃装置が壊れたと言っても半数以上は生きており、兵士たちも十分な数が内外に残っている。

どこかの国や組織が襲ってきたとしても、今回の湊のように準備期間も設けず単機で強襲するでもなければ、ルーカスたちも防衛のための布陣を敷くため、ここを守りきり相手を撤退に追い込むくらいは出来る。

ならば、今は基地の修繕を第一に考えるべきかと思ったところで、娘のソフィアだけが使える館内放送用のコードが通信に割り込んできたと画面に表示された。

ソフィアには表示されてから数秒間は通信を繋ぐためのラグだとして話せないと伝えているが、実際は相手が何か突飛な行動を取ったときにこちらで通信を切れるよう、対応出来る時間を設けてあるだけだ。

今は忙しいので相手がまた何か思い付きの行動を取るのなら、それは後にして欲しいと考えるルーカスだが、機嫌を悪くしたソフィアを宥めるのは非常に時間が掛かるため、しょうがなく放送させる事にした。

すると、画面に割り込みが表示されて六秒ほど経ってから、館内全てのスピーカーから娘のソフィアの美しい声が聞こえてくる。

《館内にいる全ての者に告げます。この度の襲撃事件は収束しました。もうこれ以上の被害が出る事はありません。よって、今後の組織としての方針を話し合うため、幹部はシェルターに逃げている者も含めて今すぐ全員一階〝福音の間〟へと集まりなさい。他の者は引き続き被害状況の確認を行うように》

福音の間とはパーティーなどで使われる事もある大きなホールとなった部屋だ。そこにはソフィアのみが座る事を許された玉座があり、幹部たちは女王の機嫌を損ねぬようにしながら余興で彼女を喜ばせてきた。

自分の娘ながら我儘に育て過ぎたと思わなくもないが、今のソフィアは力を持っているせいで父親であるルーカスも下手に怒る事が出来ない。

元はただのホールだったというのに、過去に異国の王族が使っていた玉座を手に入れて設置したのも、豪華なシャンデリアや絵画を置い

たのも、全ては彼女の機嫌を損ねぬように必死に命令に従ったに過ぎない。
今回の放送もそのときと同じく〝命令〟の意味が込められているのだろうとして、ルーカスは司令部を離れる事に不安を覚えながらも、部下たちに被害状況の確認を進めておくよう伝えて、ソフィアの言う通りにすぐ福音の間を目指す事にした。
＊＊＊
司令部から福音の間へと移動したルーカスや他の幹部は、部屋に到着するなり玉座に座っている人物を目にして驚愕する。
本来ならば、そこには上質な黒いドレスに身を包んだソフィアが座っていなければならない。
しかし、その少女は昼間とは異なる紫紺色のドレスに身を包んで、僅かに顔を強張らせながら玉座の横に立っていた。
そして、彼女が座っているべき玉座には、冷たい瞳をした隻腕の青年が堂々と足を組んで座っている。
相手はどう見てもここへ攻め込んできた人物だ。カメラの映像で見た姿と異なっている点があるとすれば、それはあったはずの右腕がなくなっていることだとか、髪や身長が異常に伸びていること。また、大人びてはいたが中性的で少年や少女と呼べそうな若干の幼さを残していたはずの顔が、視線を向けられただけで心拍数が上がるような、憂いを帯びた麗人ともいうべき大人の顔付きになっていることなどが挙げられる。
後から来た者たちも同じように驚愕していることから、ルーカスは集団の中から二人の前へ進み出ると、どうして死んだはずの人間がここに我が物顔で座っているのかを尋ねた。
「ソフィア、一体どういう事だ。何故、この男がここにいる？」
「控えなさい。王の御前です」
「なっ、王だと？」
「全員が集まれば話しをします。それまでは下がっていなさい」
玉座の置かれた壇上に上がってこようとするルーカスを、ソフィアは下がれと言って拒んだ。

彼女の視線は父親に向けるものではなく、まるで親の仇を見るように酷く冷淡で敵意すら混じっているように感じる。
機嫌が悪く構成員や女中を八つ当たりで殺したときですら、今のような態度を父親であるルーカスに取った事はなかった。
何があって、自分こそが世界で最も優れた存在であると信じていたソフィアが、他者を王として崇めて自分が従者のように控えているのか分からない。
けれど、今のソフィアを悪戯に刺激しない方が良いと判断した幹部たちは、全員が集れば説明があるのだからと大人しくしている事にした。
それからさらに十分ほどしてからようやく幹部が全員集まった。途中で従者や女中が何人か入ってきて机と数枚の書類を置いて行ったが、それが何の紙であるか見えなかったルーカスは、湊に一礼してから一歩前に出て話し始めたソフィアに視線を注いだ。
「まず、わたくしは貴方がたの質問全てに親切に答えるつもりはありません。既にやるべき事は決まっていますから、貴方がたには言う通りにして頂きますわ」
集まった幹部たちを見つめるソフィアの表情はどこか怯えていて、さらに瞳には何か鬼気迫るものが宿っている。
自信家で怖い物など何もないとばかり生きてきたソフィアを知っているだけに、他の者の疑問は余計に膨らむばかりだ。
「では、お父様。お父様にはトップの座を明け渡して頂きます。久遠の安寧もＥＰ社もどちらも今後はわたくしがトップを務めますわ。そのための書類も用意させましたから、いまこの場でサインをしてください。これだけの幹部が集まっていれば、承認も簡単でしょうから」
「そ、そんなこと出来るはずないだろう！　ソフィア、何があったのかを言いなさい。その男に脅されているのか？」
「やるべき事は既に決まっていると言った筈ですわ。トップが交代次第、我々は仮面舞踏会の傘下に入ります。そして、盟主として小狼様をお迎えして、小狼様にはＥＰ社の最高顧問に就任して頂くまでが現

在決定していることです。組織としての表の顔はわたくしがこなし、小狼様が裏の顔として実質的な運営を行っていく。これが久遠の安寧の新たな体制です」
ルーカスの質問を撥ね退け、ソフィアは壇上のすぐ前に置かれた机に書類を置いてサインするよう促してくる。
だが、湊は組織を潰そうとして過去最大の被害を齎した人間だ。そんな男の傘下に入り、表の企業であるＥＰ社の方にまで影響がいくとなれば素直に頷く事は出来ない。
他の幹部たちも口には出さないが、顔にはありありと不満と疑念の色が浮かんでいる。
そんな幹部の様子に加え、既に決定事項だと言ったにもかかわらず、中々父親が動こうとしないことでソフィアは苛立ちを見せているが、そのとき今まで黙っていた湊が口を開いてきた。
「……ソフィア、先に幹部共に承認書を書かせろ。必要なのはＥＰ社の新たなトップをお前にすることと俺を最高顧問にするという幹部の承認だけだろ。ここに集まっている全員が承認すれば椅子にしがみ付いている無能の意見など関係なくなる」
「分かりました。では、他の方はこの承認書に署名をお願い致します。組織内の人事についてはわたくしと小狼様の事以外はそれほど変更はありませんから、どうぞご安心を」
ルーカスに近い場所に置かれた物とは別の長机に、ソフィアは数枚の書類と万年筆を等間隔で並べていく。そこに書かれているのは、ＥＰ社及び関連企業の総帥としてソフィアを、オブザーバーである最高顧問に〝小狼〟を新たに迎え入れる事を認めるという内容だ。
書類の上半分には上記の内容が書かれているが、下半分には数十名分の署名欄があり、ここに集まった幹部全員が書けるだけの枚数は用意してある。
自分の父と同じように書き渋る者もいるかもしれないと思ったソフィアは、新体制ではトップが替わりオブザーバーが就くだけと伝える事で、お前たちの守りたい椅子は無事だから安心しろと言外に告げた。

もっとも、現トップはルーカスであり、ルーカスとはそれなりに長い付き合いがあることで、金や権力に汚い者たちでも自分から動く事は出来ない。
ここで真っ先に動いてしまえば後で何かあったとき、ヤツは強い者にすり寄ってゆく人間だ、などと勝手な事を言われかねない。例え全員がルーカスからソフィアに乗り換えるつもりであっても、完全には信用ならない者らに責める口実を与えたくはないのだ。
そうして、ルーカスだけでなく幹部たちも動けずにいると、玉座に座っていた湊が立ち上がり一同の視界から消えた。
突然姿が消えたことでルーカスたちは慌てるが、周囲を見渡す事で湊がいつの間にか入り口の扉の前に立っている事に気付いた。
ソフィアが近くにいた事で今までは何も出来なかったが、この誰もいない位置ならば殺す事が出来る。同じように考えた幹部数名はスーツの内ポケットに手を入れ、拳銃を抜こうとした。
だが、そのとき部屋にいる幹部全員が自分の首を何かの液体が垂れている事に気付く。いまの季節は冬で、部屋には暖房もついているが汗を掻くほどではない。
ならば、これはなんだと嫌な予感がしながら触れてみれば、触った手には赤い血がしっかりと付いていた。
自分の首から僅かとはいえ血が垂れていることに幹部たちは驚く。さらに周囲に目をやれば、自分だけでなく他の者たちも同じように首から一筋の血を垂らしていた。
何が起こったのかは分からない。けれど、この原因を作ったのが全て湊である事だけは全員が理解出来た。
自分たちの理解を超えた存在であり、佇むだけで目を奪われてしまう美貌を持ちながら、敵対する者には得体の知れない不気味さも同時に感じさせる青年は、酷くつまらなそうにしながら言葉を紡ぐ。
「……お前たちが俺とソフィアの側に付くこと自体にはそれほど抵抗がない事は分かっている。ただ後で責められる口実を作りたくなくて躊躇っているんだろう。だから、俺は一瞬で全員を殺せるだけの力を見せた上で、脅してお前らに署名をさせよう」

そう言った湊は再び一瞬で姿を消すが、今度は玉座に近い場所に現れ、机の近くにいた幹部数名を指差して書類の前まで来るよう命じた。
「殺されたくなければ署名しろ。十秒待つので、その間に決断するといい。他の者も同じだ。殺されたくなければ列を作って待っていろ。署名が終われば通達が済むまで部屋の中で大人しく待機だ」
一瞬で全員の首に傷をつけて回ったことから実力は本物だ。相手は命令に従わなければ文字通り一瞬で幹部らを殺す事が出来る。
さらに、言う事を聞かなければ殺すとまで言った。ならば、指名を受けた者も列を作って待っていろと言われた者も、〝殺されたくない〟ので署名をしなければならない。
「……ルーカス殿、悪く思わないでください」
「我々も死にたくはないのです」
「今までも影の最高権力はソフィア様でした。それが公的にもなるだけで、これ以上の被害が出ないのであれば受け入れた方が得策でしょう」
十秒などあっという間に過ぎてしまう。指名された者たちや後ろで列を作る者たちは、ルーカスに詫びや慰めの言葉をかけながら次々と署名をしてゆく。
その間に玉座に戻った湊へソフィアが深々と頭を下げているが、手間をかけさせられた事など気にしていないと手で制して頭を上げさせている。
元々、権力や金で繋がっているだけの幹部はまだしも、自らを神に選ばれた存在だと言っていた娘までもが相手を王として崇めている。
自分が何十年もかけて積み上げてきた物が、たった一夜の内に奪われようとしている事に、ルーカスは怒りを超えて憎しみと殺意を抱いた。
けれど、命懸けの特攻をしかけたところで、仙道を葬った化け物相手には一矢報いることすら出来ないのは分かっている。
故に、黒い感情を胸の内に渦巻かせながらも、どこか諦観した様子でルーカスは目の前に置かれた書類にサインした。

幹部らの署名が終わる前に自分の父親がサインしたことで、娘のソフィアは安堵の息を吐いている。
いくら凡人程度の能力しか持たない者でも父親は父親だ。昔ほど大した思い入れはないが、まったく情がない訳でもない。
あのままサインせずにいれば、幹部の承認を受けて強制的にトップの座から引き摺り降ろす事になっていた。
ここで反論を許さず進めているのも結果的には同じ事ではあるが、ルーカスが娘のソフィアに代表を譲る意向を示さねば、公的には代表のリコールがあって降ろされただけになってしまう。
組織がここまで大きくなったのは、ルーカスが様々なコネを駆使して奔走したからでもあるので、最後に余計な汚点を残して代表を辞めさせるのは流石に気の毒だった。
無事にルーカスもサインしたことで、幹部たちも何の憂いもなく署名を続け、始めてから三十分ほどでようやく最後の一人まで書き終わった。
書類をぱらぱらと捲って確認したソフィアも満足げに頷き、それらを束にすると従者を呼んで机と書類を回収させる。
ＥＰ社及び関連企業の手続きだけでなく、メディアや地下協会に対する対応に関しても先に伝えていたのか、従者は回収前に再度の確認を取っただけで去って行った。
手続きと発表が全て終わるまでは幹部たちはこの部屋から出る事は出来ない。
そちらは署名に費やした三十分程度では済まないことは容易に想像できるので、幹部たちは時計を確認しつつ小さな声で話していた。
小さい声ながらも、王の前で断りなく話していることでソフィアは眉を顰めて何かを言おうとしているが、その王自体が興味なさげに残った左手で器用に本を読んでいるので、本人が良いのであれば敢えて口を挟むまいとソフィアは湊の傍に控えておくことにした。
そうして、従者が去ってから二時間後、ようやく全ての手続きが終わったと従者が一枚の書類を持って現れた。
「ソフィア様、小狼様、全ての手続きが終わりました。現在、メディア

などから問い合わせや取材の許可を求められていますが、そちらはどのように致しましょう」
その書類は先ほどの承認書が正式に受理され、ソフィアがグループ全体の総帥に、〝小狼〟が最高顧問に就任すると決定した旨が書かれている。
ＥＰ社は大きな組織ではあるが、経営方針などは全て久遠の安寧で決めていたので、表の会社だけに所属している幹部からも特に意見などは出ていないようだ。
ならば、会見など面倒でしかないので、ソフィアは時間が出来ればいくつかの取材に応じるつもりではあるが、今現在は組織再編で忙しいので全て受け付けないと答えるように指示する。
「当分は無駄な事に時間を割いている暇はありません。発表した事が全てだと答えて断りなさい。ＥＰ社に関しては引き続き現在の業務を続けるよう通達を」
「かしこまりました。小狼様からは何かありますでしょうか？」
「……特にない」
「分かりました。では、失礼致します」
丁寧な仕草で去ってゆく従者を見送りながら、幹部たちは湊とソフィアの次の行動に注意していた。
既にこの子ども二人が久遠の安寧とＥＰ社のトップになってしまったのだ。以前から逆らう事など出来なかったが、アパテーという異能を宿したソフィアを超える存在がさらに現れたことで、一同は下手な行動を取る事が出来ない。
そもそも、ソフィアは千里眼とアパテーの魔法という力を示してはいたが、それ以外は特に何か特殊な力を持っている様子はなかったのだ。
だというのに、湊は空間転位のような能力だけでなく、読心能力に物体を消失させる謎の能力まで持っている。
宿る存在によって能力が異なるにしても、元々達人クラスの戦闘技能を有している湊がそれらを持てば、ここにいる人間たちはソフィアも含めて逆らう事など出来る筈もなかった。

よって、全ての手続きが終わってからも相手の指示を待っていると、一同を代表するようにソフィアが湊に尋ねる。
「小狼様、この後はどう致しましょう？　お休みになられるのであれば部屋を用意させますが？」
「……先にゴミ掃除だ。ソフィア、アパテーを使ってこいつらを全員殺せ」
『っ!?』
青年が言葉を発した瞬間、幹部たちだけでなくソフィアも目を見開き驚愕する。
彼は命を保障する代わりに署名しろと言っていた。ソフィアも同じように聞いていたので、何故、今になって青年が考えを変えたのかが分からない。
突然の命令に理解が追いついていないソフィアは、困惑しながら相手の真意を尋ねる。
「しゃ、小狼様？　この者たちが何か気に障る事を致しましたでしょうか？」
「いや、こいつらは要らないと思っただけだ。殺しても問題ないだろう？」
凍てつくような冷たい瞳で返しながら、湊はさっさと殺せと促してくる。
確かに湊にとっては不要かもしれないが、ソフィアにすればその中に父親も入っている。
また、彼らの持つコネクションは馬鹿に出来ない。ただ殺すよりも使い潰してやった方が湊にとってもいいはずだ。
動揺を完全に消せぬまま、それでもすぐに伝えねばならないと、ソフィアは玉座に座る相手に近付き改めて自分の考えを伝えた。
「小狼様、この者たちの持つコネクションは十分に利用出来ます。我々の主な産業は医療と軍事ですが、そのコネクションを利用すれば、その他の産業に進出する事も容易です」
「……だから生かしておくべきだと？　なら、お前が死ぬか。こいつら程度の代わりも出来ないならわざわざ生かしてやった意味がない」

自分が死ぬかと言われたとき、ソフィアは心臓が一瞬止まったかのような錯覚を覚えた。
あれだけ恨んでいたというのに、湊は直前になってソフィアを殺さずに生かすことを選んだ。
いつ相手の気分が変わって殺されるか分からないものの、駒としてだろうが、女としてだろうが、使える内は傍に置いてもらえる上に命を保障される。
しかし、それでも父親を自らの手で殺すのは躊躇われた。なんでもすると言って、既に心だけでなく身体も湊には捧げた。それでもゲーム感覚の遊び半分で殺してきたことしかないソフィアにとって、自分と親しい者を殺すには覚悟が必要だった。
だが、影時間に殺されかけたときの事を思い出し、さらに親しい者を殺めることを想像して顔を青くして震えるソフィアに、青年はよく通る声で静かに問いかけた。
「――――なぁ、ソフィア。お前は使える人間か？」
「わ、分かりました」
「や、やめろソフィア。やめてくれ?!」
主の言葉によってソフィアの瞳に力が戻ってくる。身体はまだ震えているが、心は既に決まっているようで彼女の頭上で水色の欠片が回転を始めた。
それを見たルーカスや幹部たちが怯えながら制止の声をかけるがもう遅い。逃げ出そうと扉に向かってゆく者も射程内に収め、ソフィアは声を張って命じた。
「アパテー、マハガルーラ!!」
叫ぶような声で命令を受けて呼び出されたアパテーは、水晶を光らせ広範囲を疾風魔法で蹂躙してゆく。
父親も、よく挨拶していた幹部の男も、自分の趣味に合うドレスの仕立屋を教えてくれた女も、絶叫を上げながら首や四肢をあらぬ方向に曲げながら血を吐いて倒れてゆく。
「うわぁぁぁぁっ!?」
「ソフィア様っ、ソフィアさまぁぁぁぁっ!!」

「嫌だっ、死にたくないっ」
一度の攻撃では全員を殺せないと思えば、さらにガルダインで直線上にいる者を一纏めに壁に押し付け圧殺する。
煌びやかな内装でこの屋敷の中でも最も上等だったホールは、全ての風が治まったときには見るも無惨な血の海になっていた。
むせ返るほど濃密な死臭にソフィアは吐き気が込み上げてくる。けれど、王の御前でそのような醜態をさらす訳にはいかないと耐えていれば、表情一つ変えずに惨殺劇を見ていた湊が口を開いた。
「……よく父親を殺せたな。そこまで生き汚いと逆に尊敬するぞ。ああ、吐きたいなら勝手に吐いていい。別にお前の生理現象なんか制限した覚えはない」
お前が殺せと言ったんだろうとソフィアは思わず相手を責めたくなる。
自分は父親を殺したくなどなかった。母親の記憶など欠片もないが、父親は遺伝子操作を受けた成功体としてだけでなく、血の繋がった娘としても愛してくれていた。
アパテーという力に目覚めてからはやや疎遠になっていたが、それでも親子らしい付き合いも一応はしていたのだ。
だが、命令を受けたなら殺さなくてはならない。どう言われようと絶対に死にたくないから。
湧き上がった怒りと殺意を静めてソフィアは笑みを繕い、相手の気遣いらしき物に礼を返す。
「い、いえ、大丈夫です。お気遣い感謝いたしますわ」
「そうか。従者たちにここの掃除をするよう言っておけ。それが済めば休んでいい」
「小狼様はどちらでお休みになられますか？」
「当分はここにいるから気にするな。俺がいても気にせず掃除をして構わない」
「分かりました。お部屋が必要ならばお申し付けください。不要ならばわたくしの部屋をご自由に使って頂いてかまいませんので」
そう言って最後に失礼しますと告げるなりソフィアは部屋を出て

いった。
＊＊＊
部屋の掃除に関して相手はしっかり伝えたらしく、ソフィアが出て五分も経たずにやってきた従者や女中たちは、部屋の惨状に顔を青くしながらも湊に一礼して掃除に励んでいた。
死体の肉や骨に身に付けていた衣服に装飾品、集めたそれらを大きな容器に入れて運び出し。血をせっせとモップや高圧洗浄機を使って落としてゆく。
途中で魔眼とナイフを使って血溜まりを消してやったが、それを含めても大勢で手分けしながらやったにしろ、数百人分の死体処理は三時間にも及んだ。
けれど、従者たちの頑張りもあったことで、全てが終わったときには血の匂いもほとんどしない煌びやかで豪華なホールに戻っていた。
誰もいなくなったホールで独り玉座に座りつつ、残った左腕を同じく残った左眼で見ながら湊は考えに耽る。
（……戦争には勝った。ただ復讐で終わるだけではなく、今まで俺が持っていなかった〝権力〟と〝組織〟を手に入れる事が出来た）
個として最高の力を持ちながらも、湊が活躍するのは戦闘に関わる事ばかり。
政治に経済など、テーブルについて話し合うものに関しては、そもそもテーブルにつく権利すら持っていなかったのだ。
しかし、今回の件で湊は事実上トップだったソフィアを押さえた事により、彼女を利用しつつ組織だけでなく自分の社会的地位も獲得する事が出来た。
マイナスをゼロに戻すための戦争だったが、終わってみればプラスと見る事も出来ると言うのは結果的に良かったと思うべきなのだろう。
イリスの死は今でも悲しいし、殺したソフィアと殺される原因となった自分自身を赦す事は出来そうにない。
それでも、血に目覚めたことで海外に行く前よりずっと強くなれた。神降ろしもどうにか回避することに成功して記憶も戻ってきた。

旅の終わりとしては十分に及第点と言える。
ただし、それらは肉体の欠損と〝ペルソナ能力の消失〟に目を瞑れば、の話しではあるが。
(影時間の終了と同時に黒い右腕が消えた。そして、自分の中にいたペルソナの存在を感じなくなった)
影時間中に右腕になっていた影は影時間の終了と同時に消えてしまった。
それだけでなく、タナトスやアベルなど自分で目覚めたペルソナだけでなく、茨木童子たち自我持ちのペルソナも含めて全てのペルソナの気配が自分の中から消えていた。
ソフィアが風呂に入って着替えている間に召喚を試みたが結果は不発。どれだけやっても存在を感じ取ることすら出来なかった。
(飼い慣らしてもいない蛇神を無理矢理に引き出した代償か。あのときの召喚光は赤と黒、普段の水色と白とは対極だ。つまり、資格もない状態で呼び出したことで、正負のペルソナで対消滅を起こしてしまったんだろう)
エネルギー残量の関係でペルソナをほとんど呼び出せない状態であったはずなのに、蛇神を呼び出してから影時間終了までは右腕とペルソナを使う事が出来ていた。
あのエネルギーがどこから齎されたのか謎だったが、ペルソナ達が蛇神と共に消えてゆくまでの僅かな間に能力を使わせて貰えただけだったらしい。
幸いなことに時流操作や魔眼に読心などは健在だが、適性だけ残って肝心なペルソナ能力を失ってしまうなど馬鹿にも程があると湊は自嘲的な笑みを漏らした。
(まぁ、アイギスのパラディオンは残ったから、彼女に返すまではパラディオンで戦えるか。自分の能力の特性と彼女に助けられたな)
さらに幸運なことにアイギスのパラディオンは湊のペルソナではないため消滅せずに残っていた。そちらは自由に召喚とカード具現化が可能だと確かめているので、アイギスに返すまでは無能力にならずに済むと安堵の息を吐く。

湊が失ったのは自分のペルソナではなくペルソナ能力。能力自体が消えたのでベルベットルームで再召喚して貰ってもペルソナは消えていってしまう。

しかし、アベルの能力で奪ったペルソナは、ペルソナ使い以外でも召喚する事が出来る特性を得る。

契約者の鍵の具現化や、エールクロイツの機械類を操るための力を纏うことは今でも出来るので、自分の中にありさえすればカードの具現化も可能と知り、湊はアイギスに小さく感謝した。

そうして、独りよがりな願いと復讐のために暴走し大勢に迷惑をかけた青年は、戦いの果てに力を失ったことで自身の愚かさを嗤い。座る玉座の冷たさから空虚な想いを感じるのだった。

第百九話　帰国

１２月２３日（土）
夕方――スイス・チューリヒ空港
地下協会をはじめとして、ＥＰ社の方からも正式にソフィアの総帥就任と小狼の最高顧問就任が発表されてから約三日が経った。
つい先日まで幹部が正体不明の男に殺され続けていた中でのニュースに、世界中は一体何が起こったのかと関心を寄せていたが、ＥＰ社からは犯人は前総帥と幹部に恨みを持つ人間だったため、彼らは責任をとって退陣したと答えたきり取材には応じなかった。
けれど、裏世界の事情にも通じている人間にすれば、仮面舞踏会の小狼が久遠の安寧に単独で戦争を仕掛けたのはあまりに有名だった事で、名切りの鬼が一人で裏界最大組織を陥落させたと瞬く間に情報は駆け巡った。
出来る限り久遠の安寧の力を削いで湊が死んでくれる事に期待していた国聯も、このニュースには驚きを隠せず、考え得る中でも最悪の事態が現実になったと悲観している者も多い。
とはいえ、湊の関係者にすれば色々と訊きたい事はあるが、相手が無事で良かったと一先ず安心した事は確かだ。
湊からは二十二日の昼頃に一度「スイスに寄ってから日本に帰る」とチドリやヒストリアに連絡があり、その後は何を送っても返信はなかったが、ヒストリアはアメリカにいた父親にも連絡を入れて、そこから傍にいたナタリアから蠍の心臓にも連絡がいったことにより、チューリヒ空港の要人用ゲート近くのロビーには湊の知り合いとプラスアルファが集まっていた。
集まっているのはヒストリアに水色のワンピースを着せられ機能停止したまま車椅子に座るアイギス、それを押すヒストリアたち一家と湊の経過を気にしていた医者のシャロン、アドルフ経由で連絡を聞いたナタリアと私兵たちに、国聯事務総長のボリスと護衛としてヴォルフの街で湊に救われた国聯軍の兵士たちの一部とかなりの人数に上っていた。

ベレスフォード家と蠍の心臓については理解出来るが、どうして湊を殺そうとしたボリスと国聯軍の兵士がここにいるかというと、ボリスが久遠の安寧を下した少年と是非会ってみたいとアドルフとナタリアに話したからだ。
小狼名義とはいえＥＰ社という世界的グループ企業で役職を得た湊は既に一仕事屋ではない。
今回のような大事件を起こしたら国聯も動くかもしれないが、そうでなければそう簡単に手出しされる事はないのでどうか安心して欲しいと言ったボリスを、どこかおっとりとしたアドルフが結局連れてきてしまった。
今まで影で生きてきた者にとって姿を見られること自体大きな問題なのだが、その事をナタリアが言えるはずもなく、それぞれがグループごとに分かれながら、全員が大人しく久遠の安寧の自家用機が来るのを待っていた。
そうして、詳細な到着時刻を知らされていなかったことで待つ事二時間。決して小さくはない久遠の安寧の自家用機が着陸してきたことで、一同はタラップを使って降りてくる人影がロビーに入ってくるのを待った。
『……っ!?』
エスカレーターを上がってフロアに到着し、ゲートを潜ってロビーに現れた湊の姿を見て、彼を知る者たちは言葉を失う。
右目を失った事まではヒストリアたちは知っていたが、さらに右腕がなくなっているだけでなく、髪と身長が一気に伸びて顔付きから残っていた幼さが消えていた。
湊の斜め後ろを従者のようについてゆくソフィアに関しても驚きだが、変わり果てた姿で近付いてくる湊に、レベッカは茫然としながら声をかけた。
「ア、アンタ、その眼と腕……」
「……流石に建物一つを倒壊させて殺しに来るとは思ってなくてな。右腕はそのときに瓦礫の下敷きになった。右眼はヴォルフを去った後に雪山で熊に襲われて抉られた。まぁ、そっちはヒストリアたちも

知ってる」
「ふふっ、この三日ほどで随分と背が伸びましたのね。お顔付きもより美しくなられたようで、お話しするだけで照れてしまいますわ」
二人が話しているところへ、車椅子を押したヒストリアがやってくる。
彼女も湊の腕がなくなったことを気にしていない訳ではないだろうが、本人がどうでも良さげにしているため、あえて触れずに見た目の変化についてのみ感想を述べたのだろう。
大人たちは彼女らよりも複雑な表情を浮かべて話しかけて来ないが、医者であるシャロンは患者がさらに容体を悪化させているのを見て、どこか呆れ気味に声をかけてくる。
「あんた、右眼だけじゃなく利き腕まで失って今後はどうやっておまんま食べていくんだい？　てか、ＥＰ社に就職したんだっけ？」
「俺は両利きだ。それに生涯年収くらい既に持ってるから金の心配はない」
「あっそぉ。んー、でも必要なら機械義手つくってあげようか？　そのお嬢さんとお揃いので良ければさぁ」
そういうシャロンの視線は機能停止したアイギスに向いている。元々、シャロンは義肢製作を行っていたので、アイギスの腕を修理したことで彼女の高性能は腕部パーツを作れても不思議ではない。
別に片腕がなくとも構わないと思っていた湊も、あればそれにこした事はないので、ＥＰ社の技術を利用しつつ製作を依頼する事にした。
「作れるのなら頼む。必要な施設や機材があればＥＰ社に用意させる事も出来るから、俺の連絡先を教えておこう」
「ていうか、あんたのとこに行ってやろうかぁ？　そっちの医療と軍事の技術ってすごいらしいじゃない。開発資金もたっぷりなら今非常勤だし雇われてやってもいいわよぉ」
「……ソフィア、こいつの事は知ってるか？」
「シャロン・Ｊ（ユング）・オブライエン。インドの血も混ざっているようですが、ドイツ系アメリカ人の医療技術開発者ですわね。元々は神経内科

の分野で優れた功績を残していたはずですが、外科医や義肢製作者としても知られています。本人の奔放な性格で医学界から異端児扱いは受けていますが、能力を考えれば雇って損はないかと」
功績を残し、高い技術を持っておきながら、何故か非常勤でいることに疑問を覚えたが、本人が奔放な性格をしているのならあり得るかと湊も納得する。
企業経営も行ってきたソフィアも業界の著名人として相手を知っているようなので、雇うこと自体はなんら反対する気はない。
ただし、湊がソフィアから話しを聞いている間に、白衣のポケットからメジャーを取り出し腕の採寸を測るのは如何なものかと、湊は訝しむ視線を相手に向けて口を開く。
「……雇うのはいいが採寸は先に一声かけろ」
「はいはーい。ああ、うちの研究室に助手が一人いるからそいつも連れて行っていいかしらぁ？」
「ああ、詳細はまた後で伝えるが、先に言っておくと勤務地は東京だ。助手にもそう伝えておけ」
「りょうかーい。んじゃ、採寸も出来たし神経接続部をちょいと作らないといけないけど、来月中には出来るから待っててねぇ」
言うだけ言ってシャロンは離れてすぐに電話で話し始めた。きっと助手とやらに義手製作や新しい就職先について伝えているのだろう。
一ヶ月で神経と繋ぐ部分まで作れる技術は驚きだが、駄目でも大して気にするつもりはないので、湊は近付いてきていたナタリアの方へ向き直った。
「随分と酷い姿になったわね。復讐は完遂出来たのかしら？　そちらのお嬢さんを連れている時点で、私たちにはボウヤの考えていることが分からなくなったわ」
「……痛み分けってところだ。代償は払ったが得る物もあった。俺はイリスともあんたとも別の道をゆくと決めたんだ」
青年の話す二人とは別の道がどのような道なのかは分からない。湊の精神の在り方は幼少期から一般とは逸脱していたのだから、当

然、今回も同じように悪い方向にシフトしている可能性がある。
けれど、本人も言った通り、海外での活動は湊に多くの物を与え、また失わせてきた。
本人が平和な世界にいさせたいと思った少女を戦場へと駆り出す原因を作ったこともあれば、少女に刀と銃を向けて戦いもした。
いくら無茶をする人間でも、再び大切な少女を人同士が殺し合う戦場には向かわせないため、今後は暴走とも取れる行動は自粛するに違いない。
ナタリアは相手がただ無茶はしないと言っても信じないが、湊がアイギスらを大切に思っていることは認めているので、少女らに免じてここは信用しておく事にした。
「……そう。なら、せいぜい今後は周りに心配かけないように気を付けることね。貴方が窮地に立てば、貴方以外が代償を払ってでも助けようとするんだから」
「ああ。それで、何故ここに国聯の人間が？」
「事務総長が貴方に会いたかったらしいわ。他の兵士はその護衛よ」
最初から国聯軍の兵士がいることが気にかかっていた。今さら相手が自分を殺せる訳がないとは思っていたが、それでもいる理由は気になる。
ここ二、三日は久遠の安寧の本拠地で食事と睡眠も取っていたため、湊はペルソナを除く能力は十全に使えるまで回復している。
余計な動きを見せればすぐ対処できるよう構えながら、ナタリアに紹介されて歩み寄ってきた男を湊は高くなった視点から見下ろした。
「はじめまして、ミスター小狼。私はボリス・ヴィクトロヴィチ・アスモロフ。今回は君に兵士の命を救ってもらった礼を言いに来たんだ。命を狙ったというのに助けてくれてどうもありがとう」
「……助けたのはついでだ。次に狙ってくれれば全員殺す。命令を下したお前らごとな」
「ははっ、こちらとしても君と敵対しない事を祈っているよ」
ボリスは楽しそうに湊を見ながら笑っている。離れた位置に待機している兵士らは湊に向けて敬礼しており、きっと助けたことに対す

る感謝のつもりなのだろう。
けれど、こんな者らに付き合っていても時間の無駄でしかない。話しを早々に切り上げた湊は、ヒストリアからアイギスの乗る車椅子を受け取って、補給が済み次第ここを発つ事に決める。
「ヒストリア、アイギスを連れて来てくれてありがとう」
「これくらいお安い御用ですわ。それと、こちらを小狼様にお渡ししようと思っていたんです。どうか受け取ってくださいまし」
笑顔のヒストリアが小さなハンドバッグから何かを取り出し渡してくる。
それはネックレスのようだが、一体何で出来ているのかと観察したところで、ようやく素材が熊の爪であることに気付けた。
天然石の群青色ビーズとデザインメタルビーズを規則的に並べて通し、ビーズの列と交互になるようによく磨かれ紐を通せるよう加工された黒い爪が五つとも配置されている。
良家のお嬢様がお守りアクセサリーのために熊爪を入手するとは思えないので、これはきっと湊が殺した熊の爪で出来ているのだろう。
しかし、どうして両手分ではなく片手分しか爪がないのかが気になる。差し出されたネックレスを受け取りつつ、湊は相手に尋ねた。
「片手分しか取らなかったのか？」
「いいえ。右手の分を小狼様に、左手の分をアイギス様にお渡ししましたの」
説明するヒストリアはアイギスの着ているワンピースの襟元を僅かに広げて、服の中に仕舞っていた同じデザインのネックレスを出した。
サイズ以外に違いがあるとすれば湊の方が群青色の石であるのに対し、アイギスの方は黄色の石を通してあるところくらいか。
色が異なることにも意味があるのだろうと湊が推測していると、ヒストリアはアイギスのネックレスを仕舞って襟元を整えながら笑顔で話してくる。
「小狼様の物にはラピスラズリを、アイギス様の物にはアンバーを通

させていただきました。どうかお二人を守ってくださるようにと」
「……そうか。一応、貰っておこう。俺はこのまま日本に戻る。機会があればまた会おう」
「はい。どうかお元気で」
嬉しそうにしている作った本人に見られながら、受け取ったネックレスを首にかけて、アイギスに倣って湊も服の中に仕舞う。
他にここでやらなければならない事はないので、湊は左手で車椅子を押しながらソフィアに声をかけた。
「出発の用意は出来ているか？」
「もう間もなく終わる頃かと。行き先は屋久島で宜しいのですね？」
「ああ、屋久島に寄ってから東京の空港に向かう」
このままアイギスを自分の手元に置いておく事も考えた。久遠の安寧の技術を持ってすれば、アイギスのメンテナンス装置を作るくらいは出来る。
しかし、桐条の最高機密であるアイギスを傍に置いておくのは危険だ。充電したところで彼女はタイマーの設定された二〇〇九年まできっと目覚めない。
ならば、湊はその間にアイギスと桐条の関係を断ち切れる何かを作ろうと思った。
迎えに行くのはそれからでもいい。それまでは彼女には戦いのない屋久島で眠っていて貰いたい。
そう考えて、湊は英恵から聞いていた桐条武治のプライベート携帯へ、日本時間の明日にアイギスを連れてゆくので屋久島の研究所前で待っているようにとメールを送った。
パソコンなどに送っていれば悪戯として迷惑メールフィルターに弾かれるだろうが、プライベート携帯ならば無事届くと睨んでいた。
案の定、相手からは君は誰だと問われつつも了承の意を受け取れたので、湊は名を明かさぬまま屋久島の研究所に向かい、ボディの修理のみするよう命じてアイギスを引き渡すつもりでいる。
相手に会ったときに冷静さを保っていられるかという心配はあるが、補給が終わったという連絡が来たため、湊は集まった者たちに別

れを告げながらロビーを離れ、車椅子ごとアイギスを飛行機に乗せると、すぐに出発して屋久島へと向かうのだった。

１２月２４（日）

――屋久島

数日前に匿名のメールを受けた桐条は、相手の指定した日付の朝には屋久島に到着していた。

メールのアドレスには覚えがなく、どこから送信されたものかを調べようかとも思ったが、相手はアイギスの名前と屋久島の研究所について知っている。

桐条のプライベート携帯に連絡する事が出来、アイギスや屋久島の研究所という機密事項を知っている者などグループ内部を除けば心当たりなど全くない。

しかし、桐条は不思議な予感を感じていたことで、あえて相手について探ろうとはせず、自分を護衛しようとしていたＳＰも研究員も全員下がらせ、一人研究所の入り口に近い場所で相手を待っていた。

（……彼はここについても知っていたか。アイギスから聞いたのか、それとも独自に調べたのかは分からない。けれど、もしも彼が来るのならグループの者を会わせる事は出来ない）

冷たい風を受けながら佇む桐条の頭を過ぎるのは、今から六年前に起こったエルゴ研の生き残りほぼ全員が殺された凄惨な事件。

当時小学二年生でしかなかった少年が、ペルソナを使わずに鋭利な刃物で百人以上を一夜で殺したのだ。

今の相手の力は不明だが、娘と同じ学校で日常生活を送っている以上、自分たちが一度は奪ってしまった彼の日常を壊したくはない。

故に、桐条は殺される可能性があるからではなく、グループの目が少年に向き過ぎないようにするため、彼と他の者とが接触しないように自分一人で待っていた。

相手が来る正確な時間は知らされていない。空港に平時と異なる飛行機がくれば分かりやすいが、そんな分かりやすい手段で来るのかも分からないので、桐条はただ相手が来る事を信じて待っているしか

ない。
　すると、相手を待ち始めて昼を過ぎた頃、その人物は車椅子に座るアイギスと共に他の者の知る姿と大きく異なる見た目となって桐条の前に現れた。
（い、一体何があったというのだ!?　彼は本当に百鬼八雲君なのか？）
　腰よりも長く伸びた艶やかな縹色の髪、母親である百鬼菖蒲によく似た老若男女問わず魅了する美しい顔立ち、一度研究所で姿を消してから再び現れたときには既に変化していた金色の瞳、それらは学校に通う彼の様子を監視させていたグループの人間からの報告で桐条も把握していた。
　実際のところ湊は一度髪を肩辺りの長さで切っているのだが、その間の姿を桐条やグループの人間は見ていないので、以前とほぼ変わらぬ長さであることで桐条が何も不思議に思わぬのも無理はない。
　しかし、夏に一度帰国したときから十センチ以上も伸びた身長や、どことなく線が細くなり幼さの抜けた顔もそうだが、前髪で隠されていようと右眼に付けられた黒い眼帯に、風で揺れる中身のない右袖がそれら以上に注意を引いている。
　そんな変わり果てた青年に左腕一本で押される車椅子に座っているアイギスも、目を閉じたまま一切動いていないことから、壊れてしまったのか電源が付かない状態になっているのだろう。
　自分たちが姿を見失っていた間に二人に何が起こったのか。そんな疑問を感じつつも、相手が近付いて来るのを見ながら、桐条は混乱する頭をどうにか話せるレベルまで落ち着かせることしか出来なかった。
　やってきた青年は三メートルほどの距離を開けたところで立ち止まり、一切の感情が消えた酷く冷たい瞳で桐条を見つめながら口を開いて来る。
「……エネルギーが切れて待機モードになってる。ボディに細かい損傷はあるが大きな破損はない。お前らはそれを直すだけでいい。彼女の記憶は彼女だけのモノだ。お前らが見る必要はないし。身に付けている物も彼女が次に目覚めるまでしっかり保管しておけ」

それだけ言うなり青年は背を向けて去って行こうとする。
相手がメモリの解析を拒むのであれば、贖罪の意味も込めて言う通りにするのはなんら問題ない。
下手をすれば桐条グループの人間を殺されるかも知れないのだ。リスクを考えれば相手の要求を素直に呑んだ方がいいに決まっている。
だが、嘗ての姿を知っている相手のあまりの変わり様に、桐条は去ろうとする青年を思わず呼び止めていた。
「ま、待ってくれ八雲君！　君に、君たちに一体何があったんだ？」
「……両親の死の原因を作った一人であるお前が気易くその名で俺を呼ぶな。アイギスに余計な事をしてみろ。お前や研究員だけじゃなく、その家族と友人も全て殺してやる」
呼び止められ振り返った青年の左目が金色から蒼へと変化する。そこに宿るのは測り知れないほどの憎悪。
睨まれた桐条は蛇のように纏わりつくどす黒い殺意に呑まれ、動く事はおろか呼吸も出来ずただ苦しさと恐怖から額に脂汗を滲ませる。
これが伝説となった鬼の末裔の力なのか。生物としての格の違いを本能で理解した。
そうして、興味を失ったかのように相手の視線が外されると、桐条はようやく動けるようになり、全身からどっと汗を噴き出しながら荒い呼吸で地面に膝をついた。
「っ……はぁ、はぁ……はぁ」
あのまま殺意に当てられていれば窒息するよりも先に心を壊されていただろう。
静養する妻の元へ何度も訪れてくれた優しい少年を、これほどの化け物にまで成長させてしまったのは、心と力の制御法を教えるはずの母親を奪ったことが原因に違いない。
鬼の本来の役目は守護者だ。大切な者たちを守るため、己を殺して敵を屠る。
けれど、湊は力を持っていなかったが故に守ることも敵を殺すことも出来なかった。

結果、少年は己を殺して誰よりも貪欲に力を求め、大切な者だけでなく大切な者にとっての世界を守ることに固執し、それを脅かそうとする敵を一切の容赦なく滅ぼすという、極端な愛憎の感情によって動くシステムに近い存在になってしまった。

七年前の事故で多くの家族を不幸にした事で、グループの犯した罪に対する贖罪に努めてきたが、これほどまでに嘗ての人格が壊れ、心を狂わせてしまった被害者を目にしたことで、自分はまだ何一つ償えていないと思い知らされる。

「……すまないっ」

去ってゆく背中に向け、桐条は絞り出す様にただ一言漏らす。

彼を救う術はない。相手は既に手を血で染めてしまったのだ。取り返しがつく筈がない。

ムーンライトブリッジで発見した時点で養子にして英恵に預けておけば、お互いにもっと別の未来もあっただろう。

しかし、初の自然適合型天然覚醒者として発見されてしまった以上、影時間を消しシャドウの脅威から人々を守るため、桐条には私情を挟んで相手を保護する事が出来なかった。

力に目覚めた以上、遅かれ早かれ相手は影時間の戦いに巻き込まれる。ならば、妻と娘の情が相手に移り戦わせぬよう働きかけてくる前に、最初から死んだ事にして会わせなければいい。

半年間眠り続けていた少年を調べる事で判明した事はいくつもある。それが人工ペルソナ使いを生み出すことに繋がった事も否定できない。

七年前の事故は桐条グループの罪だが、それ以降に行った数々の実験は己の罪だ。

いま生きる者の中で最たる被害者である青年へ、桐条はただ謝ることしか出来ないのだった。

――桔梗組本部

湊から帰ってくるという連絡が来た事で、チドリと桜は桔梗組本部に戻って少年の帰宅を待っていた。

イリスが死んでからは一度も連絡が取れなかったのだ。それを相手から再び連絡してきたということは、彼の中では既に連絡を取ってもいい状態になったという事だろう。
何時の便で帰ってくるだとか、迎えは必要かなどを尋ねたが、今日帰ってくる以外に連絡はなかったので、チドリたちは諦めて家で待っている訳だが、昼を過ぎて時刻は既に三時ごろになっている。
このまま夜まで帰って来ないのだろうかと考えていたとき、玄関の扉がガラガラと開く音が聞こえてきた。
他の者が「帰って来た」と口を開くよりも速く反応していたチドリが席を立って玄関へと走ってゆく。
その様子に桜たちは苦笑するも、早く相手に会いたいのは同じ気持ちだと後を追って相手の姿を確認したとき、あまりに変わってしまったその姿に息を呑んだ。
少女も同じように驚いているはずだが、驚きを呑み込んで冷静に振る舞いつつ青年に声をかける。
「……八雲、その眼と腕はどうしたの？」
「なくなった。眼は攻撃を避け損なって抉られて、腕は瓦礫の下敷きになって潰れた」
言葉を返すと湊は靴をアンクレットに変えて自室へと向かって歩き出す。
失った右眼と右腕以外にも聞きたい事はある。けれど、相手が勝手に進んでいってしまうので、後を追いながら続けて話しかけるしかない。
「ねえ、敵だったやつらが仮面舞踏会の傘下に入るってどういう事？」
「そのままの意味だ。今後、久遠の安寧の人間には俺の駒として働いて貰う」
「そういう意味じゃない！　仮面舞踏会は私と八雲の二人のチームだって言ってたじゃない！」
廊下を進み部屋の前についたところで、チドリは湊の左腕を掴んで止めた。
腕を掴まれたことで湊は振り返ったが、湊を見つめるチドリの瞳に

は怒りの色が混じっている。
　後ろをぞろぞろと付いて行くのもあれかと桜以外は応接間の方に戻っていたが、チドリの後ろで二人の会話を心配そうに見ていた桜も湊に話しかけてきた。
「うちに来たときにみーくんも話していたでしょう？　実力を付けるまでちーちゃんにお仕事はさせないって言ったときに、仮面舞踏会は二人のチームだって」
「……ああ、そんな事も言ったかもしれないな。でも、もう過去のことだろ？」
　言って湊は掴まれていた腕を振り解き部屋へと入る。埃が溜まらないように掃除はされていたようだが、元々それほど物が置かれていた訳でもないので、部屋は綺麗なものだった。
　部屋に入るなり湊は机に向かい。器用に片手で引き出しを開けては中から必要な物を取り出してマフラーに仕舞っている。
　引き出しの中から物を取り出し終わったかと思えば、今度はクローゼットから学校の制服を取り、本棚からは教科書類を取り出して、次々と部屋から物をなくしているのを目にしていた桜は、その様子に違和感を覚えて思わず尋ねた。
「み、みーくん？　そんなに色々とマフラーにしまってどうしたの？」
「……この家を出ていく。だから必要な物を取りに戻ってきた」
「え、ちょっと待って。出ていくって、急にどうして？」
　無事とは言い難いがようやく帰って来たというのに、戻ってすぐにこの家を出てゆくとはどういう事なのか。
　突然の事態に桜も思考が追いつかず、仮面舞踏会の事でショックを受けて固まっていたチドリも再起動を果たして相手に詰め寄る。
「仮面舞踏会のことは百歩譲っていいとしても、出ていくってどういう事？　敵を倒して帰って来たんじゃなかったの？　ちゃんと説明して」
「……ここにいる必要がなくなった。だから出ていく」
「説明になってない！　どうしている必要がなくなったのかを話しなさいよ！」

湊がどこか自分たちの手の届かない場所に行ってしまう不安は以前から抱いていた。
しかし、本当にここから離れていくことはないと信じていたのに、相手は戻ってくるなり別れを告げてきた。
ずっと一緒に暮らしていた家族に対し、納得させるだけの説明もなしに出ていくなど認められない。
おろおろと狼狽える桜と違い、チドリは真剣な表情で湊に説明を求める。
すると、尋ねられた湊はどこか面倒そうな冷めた表情で淡々と返してきた。
「俺がここに居たのはチドリを桐条や外部の敵から守るためだ。だが、俺が一年離れていても問題がなかったことで必要ない事が証明された。敵がくれば勿論守るが、傍にいる必要がないなら一緒にいなくても構わないだろ？」
「本気で言ってるの？　守るとか、必要だとか、そんな義務感だけで一緒に暮らしてきたの？」
相手の言葉がナイフのように深く胸に突き刺さり、チドリは怒りよりも悲しさが心に広がってゆくのを感じる。
湊が自分を守るために一緒にいてくれている事は分かっていた。しかし、そんな義務感だけの冷たい繋がりではなく、幼馴染や家族としての繋がりもしっかりと存在すると信じていた。
施設からエルゴ研に移されて家族の愛情を知らずに育ったチドリにとって、湊は勿論のこと桜や鵜飼のことも一緒に暮らしている中で家族だと思うようになっていた。
表情や言葉には出さないが、いまの暮らしに幸せを感じているし、そんな温かい繋がりをくれた者たちに感謝もしている。
けれど、ずっと隣にいた相手は自分とは違う気持ちを胸に、これまでの日々を過ごしていたというのだろうか。
静かに尋ねチドリが答えを待っていると、準備を終えて部屋を出ようとしていた湊は嘲るように口元を歪め言葉を発した。
「当たり前だろ。そんな理由がなければ、メリットもないのに俺がお

前らと一緒にいるはずないじゃないか」
『……っ!?』
言い終わるなり湊は部屋を出てゆくが、あまりの言葉にチドリだけでなく桜も絶句する。
信じられない。信じたくない。あの優しかった少年の言葉としてはあまりに違和感だらけで、受け止められないという個人的感情よりも前に不自然さを覚えてしまう。
だが、確かに親しい者と一緒にいるときでも湊は常にどこか孤独さを抱えていた。
その原因がいまの言葉の通りであるとするなら、自分たちは家族と共にいるつもりでも、湊にすれば義務感のみで他人に付き合っていたことになる。
仕事の関係よりももっとドライで、それこそ情を抱く以前の問題だ。
答えを聞いたばかりだが、すぐには信じられない。チドリと桜は玄関に向かっていた湊を追いかけ、今度は湊が帰って来た時点で感じていた疑問についてチドリは質問をぶつけた。
「八雲。貴方、ペルソナはどうしたの？　今の八雲からはペルソナの気配を一切感じない。気配が消えるほどまだ消耗した状態なの？」
「……いや、体力とかは回復してる。ただ、倒壊した建物の瓦礫を消すときに力を使い過ぎたせいで能力を失った。だから、俺はもうペルソナ使いじゃない」
玄関でアンクレットをブーツに戻しながら、湊は何でもないことのように力を失ったと答える。
しかし、それを聞いたチドリは今まで以上に驚いた様子を見せる。
湊は力を得るために海外に行っていたはずだ。大切な人を失い。戦うための力を一つ失ったというのに、どうしてそんなにも他人事のように淡々と答えられるのかが分からない。
何より、ペルソナという心の力をどうやれば失えるのか、力を使い過ぎて能力を失うという部分も含めてチドリは尋ね返す。
「そんな、ペルソナは心の力なのよ？　それを使い過ぎたから失うな

んてっ」
「今まで〝絆〟を基にした正の力を使ってきたが、俺はそのとき〝孤独〟を基にした負の力を使った。そして気付いたんだ。枷を外して孤独でいた方が俺は強いって。だから、〝絆〟はもういらない。俺は独りで再び力を手に入れる」
だが、聞かれた湊は玄関の扉を開けて外に出ながら、独り言のように言葉を紡ぎ出す。
その言葉に不穏さを感じたチドリは裸足のまま段差を下りて、玄関を出て数歩進んだところで振り返った湊に手を伸ばした。
「待って!!」
「今までありがとう。世話になった」
伸ばした手が湊に触れると思った瞬間、湊の姿が消えチドリの手は空を切った。
前のめりに倒れそうになるのを踏ん張って耐え、チドリはすぐに湊の気配をペルソナで探そうとする。
けれど、家の周囲はおろか、厳戸台の方まで知覚を伸ばそうとも湊の気配は捉えられなかった。
悔しそうに拳を握りしめたチドリは、そのまま石畳みの上に座り込み、地面を一度強く殴りつけた。
「嘘吐きっ、いなくならないって言ったくせにっ！」
エルゴ研で再会した日の夜、彼はいなくならないと少女に約束した。
その言葉を信じていたからこそ強くなるために海外へ行く事も許可したというのに、相手は少女の信頼を裏切り去って行ってしまった。
力を取り戻すためにどこかへゆくのならそう言えばいい。だが、湊は不必要な嘘は吐かない。
ならば、去るまでに話した事は全て彼の本心から出た言葉なのだろう。
自分たちは相手の事を何も理解していなかった。相手も自分たちの事を何も理解していなかった。

その事が心に重くのしかかり、いつまでも座ったままでいるチドリを心配して桜が出てきても、チドリはしばらくその場から動かずにいたのだった。

第百十話　それぞれの話し合い

夜――ホテル〝クラルス東京〟

桔梗組本部を離れた湊は、港区周辺で土地の視察を行っていたソフィアと合流し、目黒区にある超高級ホテルのスイートルームにチェックインしていた。

部屋に入ってすぐにそれぞれで入浴を済まし、少し落ち着いたところで部屋に食事を運ばせると、二人は同じテーブルで食事をしながら話しをしていた。

もっとも、話しをしているといっても、基本的にソフィアが湊に視察をした際の事を報告するばかりで、その内容は実に事務的な物に偏っている。

「やはり、人工島のポートアイランドだけでなく巌戸台周辺も桐条の影響力が強いです。辰巳記念病院という桐条資本の病院もありますから、干渉を避けるのであれば少し距離を取った場所に建設した方がよろしいかと」

「港区内である方が望ましいが、湾岸部に近いところで押さえられそうな土地はピックアップしているのか？」

「中央区にやや近くなりますが、旧工業地帯と呼ばれる場所の中に工場を閉鎖したままの土地がいくつもありますので、まとめて買い上げれば十分な広さは確保できそうです」

言いながらソフィアはテーブルの端に置いていたノートパソコンを操作し、開いた地図の中から巌戸台の中心部からは北に外れた場所にマーカーを付け、分かり易いよう縁で囲って見せる。

そこまでして貰わなくとも湊は理解するだけの頭を持っているが、別に丁寧な仕事に文句をつけるほど天邪鬼ではないので、画面を見ながらコップの水に口を付けてから言葉を返した。

「旧工場地帯ということは、海から離れた西側の開発が中途半端に行われている範囲か」

「そうです。あの辺りは地盤があまり強くないようで、開発時には残ったままの工場を取り壊すだけでなく、安全面を考慮し地盤改良が

必要となります。ですから、地盤が比較的マシな西側の開発ばかりが進み、湾岸部の方は買い手がついていないようです」
説明の最中に地質データの入ったファイルを開き、ソフィアは地図と並べて表示する。
旧工場地帯の工場は高度経済成長期などに作られた物がいくつもある訳だが、それらの建っている土地は、地震で液状化する恐れがあると表示されているような場所がほとんどだ。
二人は現在、巌戸台周辺にＥＰ社の研究施設などを作ろうとしているため、そんな土地では運用に支障をきたすと少々考え込む。
元々、久遠の安寧と共にＥＰ社を手に入れた湊が、海外ばかりに研究所があっては不便だからと、堂々と桐条グループの影響の強い土地の近くにＥＰ社の研究施設などを作ろうと考えてこの計画は始まった。
ソフィアは恐怖の対象である湊の考えに基本的に反対しないが、湊自身の命令で仕事に関わることで湊の考えや意見に疑問を覚えれば、素直に意図を尋ねるか論理的に反対して欲しいと言われている。
というのも、いくら様々な知識を有している湊であっても、今まで関わって来なかった企業経営に関してははっきり言って素人だ。
その点、ソフィアは積極的に久遠の安寧の業務に関わり、自分でもＥＰ社の経営方針などに口を出していたので、土地の違いはあれど湊に対して適切なアドバイスをする事が出来る。
彼女はここ数日で湊の習得の早さを理解しているため、幹部を数百人失ったことで人手が不足している今、湊にも仕事を覚えて貰った方が企業的に助かると考え、怯えつつも素直に湊の命令通りに意図の確認や反論などを行うようにしていた。
そして、湊が日本にＥＰ社の研究施設を作ると言い出したとき、初めは急に何を言っているのだと疑問を覚えたりもしたが、言われた通りに意図を尋ねて議論を重ねると、その計画は会社の利益に繋がるとソフィアも納得出来たため、ただ湊が帰国するだけでなく、今回のように別行動を取りつつも二人は施設建設に向けて行動していたのだった。

「地盤改良にはどれくらいの期間が必要なんだ？」
旬の魚であるヒラメの身を箸でほぐして摘まみつつ尋ねる湊。
今回の施設建設には殺した幹部たちが貯め込んでいた私財を使う予定なので、いくら経費が掛かろうとも組織の懐は痛まず、旧工場地帯の全てをまともな土地にしても良いとすら考えていた。
実際のところ、そんな無駄なことをするなら研究費に回した方が良いので、流石に関係のない土地までは整備するつもりはないが、期間と範囲について自分よりも詳しいソフィアに見立てを尋ねることで、湊は彼女から知識を学ぼうとしていた。
尋ねられたソフィアも、相手が純粋に知りたがって尋ねた他、得られる知識はなんでも得ようと考え尋ねていることは理解している。
なので、相手に一般的な知識を伝えつつ、一般的からは外れたＥＰ社の話しも一緒に伝えることで、自分たちの会社についても理解を深めて貰うことにした。
「地盤改良だけでしたら一ヶ月もかからないと思います。うちの人間を使えば期間はさらに短縮されますから、建設自体は一月の下旬頃からいけるかと」
「開発はかなり広範囲だぞ。病院、研究施設、それぞれの従業員に貸し出す社員寮も必要になる。研究施設は分野で建物を完全に分ける必要があるため、全体の完成には一年以上かかりそうだ」
「いえ、そこまではかかりません。業者の手配や手続きで本来なら時間が掛かるのですが、我々は全てグループ傘下の者を使えますし。そもそも、周辺に民家はありませんから、わざわざ説明会を開く必要もほぼありません」
ＥＰ社を裏で動かしていた久遠の安寧は、大規模な工場を作る際に街一つを作ったこともあるような組織だ。
国や地方自治体に対する手続きなど、それ専門に扱う部署を設けているため、建設予定地が決まりさえすればすぐにでも動く事が出来る。
建築物のデザインや細かな設計などは、地盤改良を行っている間にこちらも分担して専門部署に任せれば良いので、大まかな方針や必要

な施設の提案を除けば、湊やソフィアが関わるのは細かい部分の話し合いくらいしかない。
ＥＰ社の専門部署をまとめたリストを新たに開きながら、ワインに口を付けてソフィアはさらに話しを続ける。
「二月の下旬から基礎工事が始まるとして、過去の工場建設などを参考に考えると工事は六月か七月には終了します。というのも、人数や資材を十分に確保出来るので、全てを平行して別チームに任せる事が出来るのです」
「なら、問題点は一斉に完成する各施設の責任者や従業員の確保か」
「はい。理事や代表はわたくしか小狼様が務めてもいいのですが、やはり規模を考えるとかなりの人間を雇用する必要があります。ＥＰ社から派遣するにも限度がありますから、完成が近付いてから募集をかける必要が出てくるかと」
ＥＰ社の抱える人材は豊富だが、ヨーロッパが活動拠点だったので従業員に日本人はそこまで多くない。
研究施設の方は外国人ばかりでもいいかも知れないが、病院の方はやはり患者が日本人であるため、患者の安心感を考えると医者も同じ日本人を中心に集めた方が良いのは確実だ。
ソフィアがその事を説明してくると、湊はオマールエビのビスクをスプーンで混ぜながら考え込む。
湊が最初に作ろうと考えたのは病院と義肢や兵器類を開発するための研究施設だ。
病院は今後増えていくであろう影人間となった無気力症の人間を、大勢収容するための施設が必要だと考え。義肢や兵器類の研究施設は、純粋に自分の義手や戦闘補助に使えそうな物を開発するためである。
しかし、それだけでは勿体ないので、研究施設には新薬や新たな医療器具の開発を行う部門を用意することになっている。
従業員の社員寮を作るのは、ただでさえハードな仕事だというのに、通勤で体力を奪われるのも大変だろうという、湊の気紛れな思いやりから生まれたアイデアだ。

ソフィアはそれを不思議そうにしていたが、職場と家が近ければ緊急時に応援を呼べるので、企業側としてもメリットがあるのなら構わないと最終的に認めている。
もっとも、従業員の中には仕事帰りに飲みに行くのを楽しみにする人間もいるので、そういった人間からすれば家が近過ぎるのは問題かもしれないが、ここで話し合っている二人も別に強制で社員寮に住まわせようとは考えていない。そこらへんの事情は雇用が決まってから好きに本人が選べばいいのだ。
スープを混ぜながら従業員の募集について考え込んでいた湊は、ようやく考えがまとまったのか顔をあげると、食事を続けて言葉を待っていたソフィアに話しかける。
「それぞれに必要な人数はおおよそ分かるか？」
「病院でしたら入院用ベッドの数を基準に看護師の必要数は大体分かります。ですが、日本はまだ外国人医師の受け入れがあまり進んでおりません。組織には日本の医師免許を持っている者もおりますが、早期開設を望むのなら医者と看護師はほぼ国内から集めると思ってください」
「……やはり制度の壁は面倒だな。まぁ、分かってはいたんだが」
面倒くさそうに湊が溜め息を吐けば、向かいにいるソフィアは苦笑しながら再びワインに口を付けている。
戦場や知り合いの中で無免許ながらも医療を行っていた湊にとっては、必要なのはお上が発行する紙ではなく本人の持つスキルだという考えがある。
一流医大を卒業して大病院に勤務が決まった期待の若手よりも、紛争地域で長年無免許でも大勢の人間を治療してきた人間の方が、実績と経験等で圧倒的に勝る分だけ腕も信用し易いのだ。
それだけに、制度の必要性は分かっていても、海外で多数の実績を持っている人間を即座に雇用出来ないのは面倒だとして、もう少し日本の外国人医師の雇用制度が緩和されないものかと現状を憂いた。
「……出来ないものは仕方ない。後で俺の方でも確認するので、ＥＰ社の人間で日本に勤務できる人間をピックアップしておいてくれ」

「それは病院だけでなく、他の開発部の方も含めてでしょうか？」
「ああ。国内で募集するときには俺も別室なりから面接の様子を窺う。この距離でライバル企業が土地開発を行うんだ。桐条グループが何も動かないはずないからな」
湊としてはそれなりに大きく動いてくれた方が面白いと思っている。
読心能力を使えば相手が産業スパイかどうかなど一発で分かるのだ。わざと雇用し泳がせておき、桐条グループか仲介人かに報告しようとしたところで、エールクロイツの機械を支配する能力を使って通信を妨害するのも楽しいだろう。
証拠などいくらでも押さえられるのだから、それを使って桐条グループに対し抗議文を送れば、相手は嗅ぎつけてきたマスコミによって動きを封じられ、桐条自身もしばらく余計な動きを取れなくなるに違いない。
相手の性格を考えれば、おおまかな動きのみを警戒して踏み込んではこないだろうが、彼のまわりの人間も同じように考えるとは限らない。
臆病者にも種類があり、現状を崩す事を嫌がる者は行動を起こさないが、自分の地位や財という局所的な平和を求める者は、他を蹴落として椅子にしがみつこうとする傾向が強いので、湊やソフィアのような搦め手を得意とする者にとっては格好の獲物なのである。
「相手も長く生きて経験を積んでいるんだろうが、潜ってきた修羅場の数は僕たちの方が……」
食事をしながら話していたかと思えば、急に湊が驚いた表情で言葉を止めた。
今食べていたのは先ほどと同じヒラメなので、料理が原因で言葉を止めたとは考えづらいが、どこか難しい表情をしている相手を心配し、ソフィアは声をかける。
「どうかされましたか？」
「……いや、なんでもない。それより、細かい部分は後で詰めてゆくとして、土地の落札と手続きは早期に終わらせよう。それが済み次第、

お前は一度大陸に戻って準備を進めてくれ」
「了解しました。あの医者の方には何か伝えておく事はおありですか？」
ソフィアのいうあの医者とは、現在湊の義手を作ってくれているシャロンの事だ。
アイギスの装備である三連装アルビオレの改良型をリサイズして湊用に作っているので、現段階で用意できる最高の義手が手に入るといってもいい。
湊としては物を掴めて強度がそれなりにあれば十分ではあるが、相手がノリノリで作ろうとしていただけに、きっとマシンガンの機構も再現するつもりだと思われる。
雪の降る森では疲弊していた事もあるが、武器がなくて熊相手に苦労した。それを踏まえて考えると、隠し武器としてはあっても困らないので、正式な設計図のコピーを相手に渡した方がいいと判断し、湊はマフラーに手を入れるとソフィアにＵＳＢメモリを一つ投げて渡す。
しかし、取り出す場面とゆっくり下手投げの仕草を見せてから投げたにもかかわらず、ソフィアはあたふたとお手玉して、ＵＳＢメモリは床へと落ちた。
落とした本人は申し訳なさそうな顔をして急いで拾っているが、一連の行動を見ていた湊は相手の運動性能に思わず溜め息をこぼす。
「もう少し運動しろ」
「……申し訳ありません」
「まぁいいが、それに設計図のコピーデータが入ってる。相手は既に構造を覚えたと言っていたが、あっても困らないだろうから渡しておいてくれ」
「かしこまりました」
受け取ったものをソフィアは化粧ポーチに仕舞って食事を再開した。
けれど、作業開始をなるべく急いでいることから食事を終えてからも話しは続けられ、影時間に入る前になってようやく二人の話しは切

り上げられた。

――桔梗組本部

湊とソフィアがホテルで食事をしている頃、遠く離れた桔梗組本部では大人たちが集まり話し合いをしていた。

チドリは湊が去った後から部屋に籠もって出てこないが、彼の身を案じていた者たちに何も話さない訳にはいかないため、桜が来てくれるよう呼びかければ夜には栗原・五代・ロゼッタの三人がやってきた。

そうして、大人だけでテーブルを囲んで話している訳だが、その内容は帰国した湊の変化と不可解な対応についてである。

ついこの間まで海外に行っていて湊の姿を見ていた渡瀬と五代は、桜とチドリが見たという成長した湊の姿を聞いて違和感を覚えた。

「僕たちが見た彼は、中学校に入学したときより背丈が伸びたくらいの姿でした。どことなく他者を寄せ付けない雰囲気や常に目が蒼かった事などはありますが、それ以外に大きな変化はありません」

「それは私も確認していますので、急激な成長や髪が伸びた事に加え、右眼と右腕の欠損は我々の帰国後に起こった事は間違いないかと」

湊の怪我の時期自体は大して重要ではない。それでも、本人がほとんど何も話さずに去って行ってしまったことで、大人たちは自分たちの持っている情報の中で彼の状態を予測するしかないのだ。

帰って来た湊は右眼と右腕を失ったことをあまり気にしていないようだった。

ならば、相手の性格から察すれば、本人は大怪我と呼べるレベルの怪我を本当に気にしていないのだろう。

もっとも、本人が気にしていないといっても、周囲まで同じように考えられるかは別の話であり、デスの恩恵による治癒と蘇生で湊の安全を信じていた桜たちの表情は暗くなっている。

「……ファルロス君の力が働いてないってことは、みーくんの眼と腕は治らないんですよね？」

「シャドウの力については分かっていない事も多い。というか、分かっている事の方が少ないくらいだ。私も湊に聞くまで治癒や蘇生

効果を得られるなんて知らなかったしね」
　尋ねられた栗原は緑茶の入った湯呑を手に持ちながら、静かに自分の知っている情報を相手に伝える。
「だが、湊の化け物じみた適性値を持ってしても治癒されていないって事は、まぁ、残念ながらそういう事なんだろう」
「……そうですか」
「ただ、可能性がゼロって訳でもないよ。湊はペルソナ能力自体を失ってしまったんだろ？　なら、そっちの恩恵も失っているかもしれない。だとすれば、力を再び手に入れたら治る可能性も残っているさ」
　相手の状態が分からないだけに、栗原は自分でも気休めでしかないと知りつつ、あくまで可能性としてはゼロじゃないと桜を励ます。
　聡い桜は相手の言葉がなんの根拠もないものだと勘付きながらも、しかし、栗原の気遣いが嬉しかったのか小さな笑みを返して感謝の言葉を口にした。
「ありがとうございます。でも、ペルソナ能力の消失なんてあるものなんですね。わたしはてっきり生涯持ち続けるものだと思っていたのですが」
「私だけじゃなく研究員も全員そう思っているだろうさ。しかも、それが現状で最高の適性値を持つ人間に起こったんだから始末が悪い。どんなに強大な力を持っていたとしても突然か切っ掛けが必要かは不明にしろ、能力自体が消失し得ると証明されてしまったんだからね」
　青年が能力を消失したという事実は、影時間やシャドウに対する最強のカードを人類が失ってしまったことと同義だ。
　デスの封印が解けなかったのは不幸中の幸いだが、来たるべき戦いの時に青年を戦力として当てに出来なくなった。
　敵は姿も能力も多様で、その異なる性質に対応するためには、大勢のペルソナ使いを集めるか青年のワイルドのような力を持った者が必要になる。
　しかし、ペルソナ使いはそれほど多くはない上に、影時間を消すた

めに戦っている桐条側のペルソナ使いの練度はそう高くはない。
ベルベットルームの住人を除いて、栗原たちが把握している範囲では、桐条側にいるペルソナ使いは現在三人、被験体の生き残りであるストレガは六人、そして、そこに湊とチドリにアイギスを足した十二人が彼女らの知るペルソナ使いだ。
ストレガに関してはたまに店に遊びにくるマリア以外は面識もないので詳しくないが、湊たちから得た情報を踏まえて順位付けすれば、桐条側の三人だけかなり出遅れている印象が拭えない。
もっとも、美鶴は違うが、真田と荒垣は実際に今年に入って目覚めたばかりの新人である。美鶴も目覚めたのは湊に次いで二番目という古株だが、桐条宗家の御令嬢ということで危険な実戦訓練などはほとんど行われてこなかった。
自分たちが生きるために命懸けの修羅場をいくつも潜り抜け、積極的にシャドウとも戦ってきた湊やタカヤらと普通の学生である者たちを比べるのも酷だろう。
彼女たちとてまだまだ成長の伸び代は残っているのだ。今後もしっかりと鍛錬を続ければ、適性で勝る分だけストレガたちを上回る可能性は十分にあると栗原は考えていた。
「湊が力を失ったことで今後起こり得るのは、無気力症の拡大というか影人間の増加だね。今はあいつが留学前に依頼してたことでストレガの連中がシャドウを狩ってくれているけど、期限が過ぎれば誰も倒さなくなって無気力症が治らなくなる」
「それは拙いですね。彼が言った事態が動くまでまだ二年以上あるというのに」
今でも小さくだが無気力症についてメディアで取り上げられるようになっている。
報道では、悩みや環境の変化などのストレスが原因の精神病と見られているが、言葉も話せないレベルの患者は保護が必要になる。
近場で最も大きな病院は桐条資本で建てられた辰巳記念病院だが、その病院のベッドの数にも限りがあるので、今から影人間が増え続ければ二年後には社会問題にまで発展しているかもしれない。

湊はまさにそれを危惧して戦い続けてきた訳だが、相手を頼れない状況になったことで、大人たちは今さらながら自分たちがどれだけ彼に頼っていたのかを思い知らされた。
湯呑を両手で包む様に持ちながら苦笑を浮かべたロゼッタは、暗くなる一同に向かって口を開く。
「小狼君ってしょっちゅう依頼をこなして飛び回ってたのに、毎日のように化け物狩りもしていたんでしょ？　それで学校にも通って学年主席を取ってるんだから頭が下がるわよね」
「昔から頭は良かったよ。というか、頭が良かったからうちの主任も興味を持ったのさ。ま、それが原因で適性が目覚めてしまったから、本人と家族には悪い事をしたと思ってるけどね」
あんな子どもが多い場所で研究していたのだ。誰かしら適性を得てしまってもおかしくなかった訳だが、幸か不幸か主任である岳羽詠一朗と面会していた湊の他には、美鶴という人工的に適性を得ていた父親や研究員らと面識を持っていた者くらいしか目覚めていない。
さらに、その二人の片方がアイギスとデスの戦いの場にいて、デスの器となることで滅びを免れたのだから、人類にとっては幸運だったとはっきり言えるだろう。
しかし、それはあくまで事情を知る者にとってであり、ほとんどの者はあの事故の日から今日まで何も知らずに日常を過ごしている。
本人も事故を起こした桐条グループに対して憎しみを抱いてはいるが、自分が誰かを助けたとは思っていないようなので、相手が両親を失っていることもあり、周囲はその功績を褒めたりはしていなかった。
だが、力を失ったことで戦いに関わらなくなるのであれば、今まで頑張ってきたことを褒められてもいいのではないかとロゼッタは個人的な感想を漏らす。
「ほとんど事情を知らない私から見ても、彼は十分に褒められるだけの事もしてると思うけど。小狼君って何となく人を救う事を義務っぽく捉えてる節があるわよね」
「みーくんは幼い頃から頭が良過ぎたことで、ご両親の死や知り合い

が傷付く事を自分のせいだと思い込んでいます。それが強迫観念となり、歪な形でメサイアコンプレックスを抱えるようになったんだと思います」

メサイアコンプレックスとは、簡単に言えば他者を救う事を己の義務のように見なし、救われた者を見る事で間接的に自分の幸せを感じて心を満たそうとする状態のことだ。

本人は自分自身が精神的に追い込まれていることに気付くことなく、追い込まれれば追い込まれるほど他者を救って達成感や心の安寧を得ようとする。

湊が達成感や心の安寧を求めて無自覚に人を救っているのかは分からないが、救う事を義務だと捉えていることは確かなので、桜もロゼッタの言葉を肯定しつつ話しを続ける。

「死を理解しているという事は、命がどういった物であるかも分かっているはず。甘いくらいに優しいあの子にとっては生きづらい世界だと思います。命の取捨選択も出来てはいますが、基本的に救える者は救うスタンスですから、この世界に生きる全ての者が彼の重荷であり枷になっています」

背筋を伸ばし真剣な表情で話す桜は、その中でも最たる重荷は自分だろうと思っていた。

湊にとって大切なのはチドリとアイギスだ。アイギスは桐条グループの方にいるようだが、チドリの傍にいて彼女の世界の一部となっている以上は、湊は桜のことも当然全力を出して守りにくる。

英恵と大して変わらないレベルで身体が弱いというのに、チドリの母代わりや姉代わりだというだけで守られるのだ。普通の者より身体が弱い分だけ守るのも大変だろう。

危ないことはして欲しくない。自分の安全を第一に考えて欲しい。そう考えて伝えたとしても、桜の身に危険が迫れば湊はチドリの世界を守るために命懸けで助けようとする。

守られる存在であるため相手の窮地に助けにいけないことをチドリは悔しんでいたが、桜も彼女と同じくらい自分の置かれた立場に苦悩するしかなかった。

「ま、本人のいねぇところでぐだぐだ話しても無駄でしかねぇし。わしらが今後どんな方針で動くだとか、そういった建設的な話しをしようや」
　そんな娘の胸中を察して、他の者も同じように暗くなって話し合いが中断するのを避けるためか、今まで黙っていた鵜飼が湯呑に口を付けてから鋭い視線で言葉を発する。
「理由があるにしろ無いにしろ、坊主は嬢ちゃんや桜に家族じゃねぇつって出てったんだ。自分で守るって言ってた相手を泣かせておいて、冗談でしたじゃすまねえよな。きっちりけじめ付けねぇ限り、坊主にはこの家の敷居は跨がせねぇってのがわしの考えだ」
　情に厚い昔堅気な男である鵜飼は、口では色々言いつつも湊とチドリを孫のように可愛がっていた。
　子どもを産めない身体である桜にとって、二人は弟妹のようであり実の子どものようでもあった。
　そして、家族というものを知らずに育ったチドリも、そんな者たちの下で暮らすうちに自分たちを家族だと思うようになっていたのだ。
　今回の湊の言葉と行動はそれらを全て否定する行為であり、本当ならばぶん殴って二度と顔を見せるなと怒鳴りたいくらいだ。
　けれど、今までの湊の行動を考えると今回の件も何かしらの理由があることは容易に想像がつくし、悲しんでいる二人が相手に帰ってきて欲しいと思っているだけに勘当することも出来ない。
　故に、傷付けた本人が二人にしっかりと謝って、今回の行動の理由を話す事が帰ってくる最低条件だと鵜飼は決めていた。
「影時間だとかは元々桐条がやるべきことだし。わしらに出来るとすれば坊主の行方を捜しつつ、ＥＰ社の動きを今後見ていくくらいだろ。あとは、部屋に籠もってる嬢ちゃんのフォローくらいしか出来ねえしな」
「そうですね。僕ら男性陣だと難しいと思うので、小猫ちゃんのフォローは桜さんと栗原さんにお任せしていいですか？」
　湊が久遠の安寧を傘下に収め、ＥＰ社のオブザーバーに就任したことから、今後ＥＰ社が何か日本で動きを見せたとすれば湊の指示であ

る可能性が高い。
その事を理解している五代は鵜飼の話しに同意しつつ、家族で唯一の女性である桜と適性を持っている栗原にチドリのフォローを任せたいと話す。
言われた二人も最初からそのつもりでいたので、五代に笑顔と首肯で返した。
「はい、大丈夫です」
「まぁ、影時間に一人でいたら何するか分からないしね。とりあえずは見張っておくよ」
出来る事が限られている以上、現段階で決められる方針はこれくらいだ。
夜も遅いので話しが終わった五代たちも帰ろうとすると、立ち上がりコートを着ていたロゼッタが苦笑気味に呟く。
「好きな子を泣かせちゃうなんて、小狼君も大人なんだか子どもなんだか分からないわね。まぁ、今も色々と抱え込んじゃってるんでしょうけど。誰も諌められないってのは大人としてはもどかしいわね」
正しい意味で湊を諌められていたのはイリスだけだ。桜も英恵も湊と共に過ごす時間はあったが、正面から向き合う形での関わり合いの深さでは彼女に及ばない。
それだけに、相手としっかりと向き合って間違いを正してやれないのは、大人としては悔しいと同時に相手に申し訳ない気持ちになった。
どうにか因縁を終わらせ日本に帰って来たものの、湊の行動の変化を通じて、今後もイリスの死を引き摺ることになりそうだと一同は無言のまま感じ取るのだった。

第百十一話　夜の来客

１２月２７日（水）
午後――巌戸台中央区
日本にきてから連日土地の視察を行っていた湊とソフィア。
二人は直接土地の様子を見ながら、裏ではＥＰ社の力を使って桐条の影響力があるかどうかを念入りに調べ、最終的に以前ホテルで話していた旧工場地帯をまるごと買い上げるという方向で話しが決まった。
本来ならば既に仕事納めで業者も休みに入っていることから契約は難しいが、そこは世界的なネームバリューを持つ企業であるため、相手の提示していた額に少々上乗せすることですぐに契約を済ませてしまった。
土地を手に入れれば後は公的機関に届け出を出し、日本に近い場所から機材と資材を運び込んで地盤改良を行うのと同時進行で建物の設計をしてしまえばいい。
というより、計画が持ち上がった時点で必要な施設の建物のデザインは始めさせていたのだ。
細かい部分はともかく外観や大雑把なイメージは先に作っておく事が出来る。
そして、今回のことで正式に土地の広さが決まったので、帰国前にソフィアは電話とメールで社員に各施設の土地の割り当てを伝え、一月に入ってから工事を始められるよう準備を命じた。
それを受けた会社からも了解したという返事が来たため、今回の計画の指揮を取るソフィアは湊から預かったＵＳＢメモリをシャロンに渡す任務を帯びつつ先に帰国していった。
一方で、日本に残った湊はホテル暮らしをするのも馬鹿らしいと、昨日、自分の名義で中央区にあるマンションを一部屋買ってそこに残っていた。
どこが良いという希望はそれほどなかったが、仕事や学校の関係から港区に近い方が都合が良く。さらに、背丈が伸びたことで風呂は足

が伸ばせるような大きな物が望ましい。
　そんな条件のもと不動産屋に探させ、２００４年に出来た十二階建てマンションの最上フロア、バルコニー付き３ＬＤＫの角部屋を紹介された。
　明らかにファミリー向けで一人暮らしには広すぎる気もしたが、そのときはソフィアも共にいたので、相手は二人暮らしから子どもが増える事も想定していたらしい。
　勘違いを受けつつも、他にもいくつか紹介され実際に見に行ってみたのだが、買った部屋の風呂が一番大きく、湊とソフィアが服を着たまま一緒にバスタブに入ってみても余裕があるくらいだった。
　ゆったり風呂に浸かることが好きな湊は即決で六二〇〇万円の部屋の購入を決めたところ、滞在中のホテル代を出してくれていたお返しにとソフィアがポケットマネーで買ってくれたこともあり湊の懐は全く痛んでいない。
（……はぁ、少し疲れたな）
　そうして、電気にガスや水道といったライフラインも通し、いくつも買って適当にマフラーに入れっぱなしにしていた家具類を最低限部屋に置いた湊は、自室のキングサイズベッドに寝転び考え事をしていた。
　あの日から相変わらずペルソナの気配は感じられず、同じようにファルロスまで反応が消えてしまったため、今の湊は久しぶりに独りだ。
　事務系の仕事は苦手ではないし、人を動かす事もどちらかと言えば得意といえる。それでも、慣れない仕事というのは知らずに疲れを溜まらせるらしい。
（とりあえず、好きに使えるＥＰ社の拠点をこの土地に建てるだけの目処は立った。だが、いくら後方支援のための戦力を得ても、俺自身がシャドウらを相手にするには今のままではいられない）
　ペルソナ使いとしての力は失っても、影時間に対する適性は残ったままで、さらにアイギスのパラディオンもいるので戦う事は出来る。
　しかし、パラディオンをアイギスに返したときにどうなるのかが分

からない。
仮に他人のであってもペルソナを持っていることで適性を持っているのだとすれば、それを返した時点で湊は影時間の適性すらも失うかもしれない。
ペルソナがなくてもシャドウと戦える自信はある。徒手格闘だけで他のペルソナ使いよりも十分強いのだ。さらに銃火器も扱えるとなれば鬼神の如き強さを発揮することだろう。
何より時流操作と魔眼は健在だ。消耗は激しくなるが加速して接近し、死の線を斬ってしまえば敵はその耐久力を無視して消えてしまう。
だが、能力を失う前と比べてしまえば火力の差は埋めがたく。総合的な戦闘力で判断して、その差は大人と子ども以上に存在した。
(力を失ったのは俺が無茶なことをし続けたからだ。あのときは負の感情から蛇神を呼び出せたが、アレはそもそも人が扱えるような力じゃない)
蛇神の正体は茨木童子の時代から積もり積もった名切りの一族の負の感情。
怒り、悲しみ、憎しみなどが二千年以上に亘って積み重なり、記憶を取り戻したシャドウの王であるファルロスですら明確に勝てないと認めたほどだ。
通常、血の力に目覚めた名切りは干渉を撥ね退けられず、蛇神から漏れ出した感情と茨木童子の手によって完全なるモノを生み出そうとする使命にかられる。
過去にそれを拒絶出来たのは鈴鹿御前のみで、湊を守るために動いた母の菖蒲は覚醒度が低かったことで干渉をほぼ受けずに済んだだけだ。
湊はその干渉を精神力で押さえこんで神降ろしの進行を遅らせたりもしたが、久遠の安寧の本拠地で蛇神を使った湊は、感情のままろくに扱えもしないものをただ呼び出してしまった。
エリザベスたち曰く、自分の力を超えたペルソナを呼び出そうとすれば、力だけ消費して失敗に終わるか、コントロールしきれず暴走し

て最悪の場合は殺されることもあるという。
しかし、あの時の湊は幸か不幸かしっかりと自分の意思で呼び出し、望んでいた結果を残して最後は影にして無事に消す事が出来た。
暴走していたら巻き込まれて死んでいたところなので、そんなこともなく無事に終わったのは喜ぶべきことだ。
もっとも、扱えないはずの力を使った代償として、まるで過負荷で回路が焼き切れるかのように、湊はペルソナと自分を繋いでいた何かを失った。
（……ペルソナは本当に消えたんだろうか。他のペルソナはともかく、名切りたちは元々血に宿っている存在だ。それを俺がペルソナとして掬いあげて呼び出していたに過ぎない）
自分の心の中で茨木童子たちと邂逅したこともあったが、あれは現実で寝ている間に夢を通じてベルベットルームに行くようなもので、己の精神内にある種のフィールドを作り出して意識体だけで会っていただけだ。
彼女たちが本来宿っているのは血の方であり、別に湊が先祖の霊に取り憑かれている訳ではない。
まぁ、結果的には取り憑かれて自我を消されかけたようなこともあったが、ファルロスはもう神降ろしは出来ないはずだと言っていた。
血に宿る力を持った鬼と龍の混血として生まれ、七年前にはアイギスによってデスを封印され、ベルベットルームの鍛練中に他人のペルソナや適性を奪う力を持ったアベルが目覚め、蠍の心臓で過ごしていたときはナイフに宿る怨霊だったジャック・ザ・リッパーを己が力にしたことにより、湊には他者の力を取り込む下地が出来ていたのだ。
茨木童子が先走って器慣らしとして神を降ろしたときに耐性を持ち、今度は自ら神を呼びいれた事で、既に湊は神に操られるだけの存在ではなくなっていた。
そうして、神降ろしという最大の危険が消えた以上、茨木童子らが名切りの業に支配され湊に干渉を試みようと何も怖くはないのだが、名切りの血の力が残っているというのに血に宿る彼女たちだけが消

えたのはおかしいと寝返りを打ちつつ湊は考え込む。
（何かが引っ掛かる。ペルソナも時流操作も使用するエネルギーは同じ物だ。時流操作が出来る以上、適性力はほぼ完全に残っていると見ていい。ならやはり、俺は能力を失ったのではなく――――）
そのとき、湊の心臓が強く跳ねた。
痛みを伴うほど強烈な刺激に、湊は顔を顰めながら心臓の辺りを左手で強く掴む。
けれど、強い鼓動は治まらず、反対に息苦しさと全身の筋肉にも痛みを感じ始めるほどだ。
（これ、は……時の針を進めた反動かっ……）
この全身を刺すような痛みと心臓の鼓動の原因を考えたとき、真っ先に頭を過ぎったのは傷口を塞ぐために行った時流操作だった。
元々、湊は飛騨によって肉体に様々な処置を施しており、処置の中で細胞が変質し傷付いてしまったせいで、常人よりも細胞分裂の限界が早くなっている。
限界がくれば細胞は分裂を止めて徐々に朽ちてゆくが、あのときの湊は傷が開かない程度に留めたにせよ、約四年近く時を進め十八歳ほどの姿になってしまった。
さらに、それ以前も無茶な治癒と蘇生を繰り返していた事もあって、成長した湊はファルロスの言っていた通りに飛騨の見立てよりも早く肉体の限界を迎えたのかもしれない。
痛みと苦しさから額に脂汗を滲ませ、胸を強く押さえながら浅い呼吸を繰り返す湊は意識が遠のいてゆくのを感じる。
（ぐ……くそっ……）
自分はまだ何も成し遂げていない。戦いの準備を始めたばかりで、これからだというところで終わってしまうのが何よりも悔しい。
日本に帰ってきたあの日、力を失った自分では相手を守り切れず共にいれば危険な事に巻き込まれるかもしれないと思い。遠ざけるためにわざと大切な少女を傷付ける言葉を吐いた。
だというのに、影ながら守ることも出来ず、ただ少女を傷付けただけになりそうだと、己の愚かさと少女への申し訳なさを感じながら湊

は静かに意識を手放した。

夜――巌戸台港区

二学期が終わり学校も冬休みに入った。湊が行方不明になったとチドリに聞いてから、先輩である桐条美鶴がグループの方に手伝って貰い探してみると言ってくれたものの、年の瀬の今日まで何の情報も美紀たちの元に届いていなかった。

去年はクリスマスに忘年会も兼ねたパーティーを部活メンバーでしたものだが、今年は顧問である佐久間が湊の行方不明を聞いて以降、暗い表情のままほとんど口を利かない寡黙な性格になってしまったので、クリスマスを祝うような空気にならず開催は見送られた。

また、それならせめて初詣に共に行くのはどうかと考え、部活メンバーに電話やメールをしてみたのだが、チドリだけクリスマス・イヴから一切連絡が返って来なくなってしまった。

体調を崩しているのか、それとも旅行か何かで連絡の取れない海外に行っているのかは分からないが、どうにもバラバラになってきていると、お遣いの帰り道を歩いていた美紀は寒さで白くなった溜め息を一つ零した。

(はぁ……兄さんやシンジさんは最近になってむしろ元気そうだっていうのに、私たちは少しバラバラになってきている気がします。まぁ、そもそも有里君が中心となって集められたメンバーですから、その本人が行方不明で全員が不安に思っているというのが大きいんでしょうけど)

理由はよく分からないが、最近の真田と荒垣はどこか充実した明るい表情をしている事が多くなっていた。

別に彼らにも湊の事を心配して欲しいと望んだりはしないが、部活の仲間たちとこうまで対照的な姿を見せられると、自分たちの現状に対して愚痴の一つも溢したくなるというものだ。

一応、何かいい事でもあったのかと尋ねたりもしたが、返ってきた答えは「より実戦的なトレーニング法を見つけた」という具体性のないもので、兄と違って運動にそれほど興味のない美紀は、説明されて

もよく分からないだろうとただ気を付けてとだけ返しておいた。
真田もボクシング部の主将にしてエースだ。一時期はハードワークでまわりに心配をかけたりもしたが、今では乗り越えたらしく無茶なことはそれほどしないだろうと思っている。
さらに、その隣には冷静に物事を見る事の出来る真田のストッパーともいうべき男がいる。何か起こる前に彼は真田を止めるはずなので、兄の心配はほどほどに美紀は現状の打開策を考える。
(やっぱり、有里君に関する情報が入ってきて、彼の無事が確認できればそれが一番なんでしょうけど。そもそも、どこで消息を絶ったのかも不明なんですよね)
チドリから聞いた話しでは事故に巻き込まれて一緒にいたキャラバン隊の人が死んでしまい。湊もそのときから行方不明になったということだった。
共にいた者が死んだ事から推測すれば、湊もそのときに死んでしまった可能性が最も高いと言える。
しかし、海外で何か事故があったときは、日本人の被害者がいたかどうかについて報道されることが多いため、本当にそれらしい報道が何もなかったことを思えば湊が死んだとは考えづらかった。
(あのときに聞こえた絶望に染まりきった叫びが彼のものだとすれば、状態はともかくとして生きてはいるのでしょう。チドリさんは言葉を濁していましたが、部活の皆さんも同じように聞こえていたことからただの幻聴とは思えませんし)
聞いただけで背筋が寒くなり恐怖すら抱くような絶望に染まった叫び。
イリスが死んだあの日、チドリだけでなく部活のメンバー全員が同じものを聞いた。
最初は幻聴だとも思ったが、聞いてすぐにチドリから変な声を聞かなかったかとメールで尋ねられたことで、空耳ではなくあれが現実のものだと気付けた。
もっとも、チドリ以外の人間は湊の叫び声など聞いたことはなかったので、湊の声に似ていたかもしれないという程度に思っただけで断

定までは出来ない。
他の者から見た湊は、いつもどこかつまらなそうにしていて、例えすぐ傍にいようと人々の輪から外れたところに立っているような雰囲気を纏った少年だ。
彼は多くの人間に手を貸し助けたりもしているが、本人は一切人を頼らず全て自分だけでしてしまい。友達らしい人物と一緒にいる場面を見た事もない。
そんな事を言えば、自分たちは友達ではないのかという疑問を抱かれるかもしれないが、一方が相手を友達だと思っていても、もう一方の者も同じように思っているとは限らない。
これが部活メンバーの場合だと、美紀と風花とゆかりは湊を友人だと思っているけれど、湊曰く三人は〝同級生のクラスメート〟や〝チドリの友人〟というカテゴリーであって、湊本人の友人というカテゴリーではないそうだ。
確かに、家族の誰かの友達と自分は他人かもしれないが、学校では普通に会話し、課外活動という名の旅行にも一緒に行っているというのに、そんな風に壁を作られているのは少し寂しく感じる。
家族という関係である湊とチドリの組み合わせを除き、一対一での部活メンバー同士の仲の良さを見れば、実は意外なことに一番仲が良いのは湊とゆかりだ。
社交的で交友関係の広い美紀に、優しく誰にでも親切に接する風花を押さえ、さばさばとした性格のゆかりが二人よりも特定の個人と仲良くなるのは珍しい。
しかし、現実に湊とゆかりはお互いにさばさばとした態度のまま、どこか不思議な距離感で上手くやれている。
まわりが苦笑いするような湊の態度をゆかりは呆れつつバッサリ切り捨てたり、ゆかりのやる事を眺めていた湊がどこか小馬鹿にした様子で間違っていると指摘したり、言葉自体は選んでいるようだが、お互いに対する二人の態度は遠慮のない素のように見受けられた。
湊は自分から積極的に他人と関わることが少ないだけに、そのように誰かをからかう姿は貴重だとして記憶に残るのも無理はない。

（あの叫びを聞いた後に一度だけ手紙で連絡が来たとチドリさんも言っていました。なら、生きているのに連絡を取らないのは理由があると見るべきでしょう。第一候補は携帯電話の故障及び紛失。彼の携帯は海外でも使えますから、携帯ではなく手紙を使ってきた時点で一番可能性が高そうです）

夕食の材料の入った買い物袋を持ったまま、暗い帰り道を歩き続けて美紀は考察を続ける。

行方不明になるまでにたまにメールでやりとりをしていたので、湊の携帯が海外でも使えるモデルであることは部活メンバーならば誰でも知っていることだ。

けれど、湊はそれを使わずに手紙というアナログな手段で連絡を送ってきたらしい。

普通に考えれば携帯を使った方が早いので、使わなかったこと自体に何かしらの意味があるに違いない。

第一候補は〝使わない〟のではなく〝使えない〟状況に相手が置かれていた可能性が挙げられる。

携帯の充電が切れていた、電波の届かない国や地域にいた、携帯が壊れていた、携帯をなくしてしまった、咄嗟に思い付くのはこの辺りだろうか。

だが、中東のあまり名前の知られていない国からでもメールが届いていた事を考えると、電波の届かない場所にいたという可能性は低いとみていい。

さらに、充電が切れていたといっても、手紙が送れる場所ならば電気もあるはずなので、少し待てば使えるくらいにバッテリーも溜まるだろう。

携帯が壊れたりなくした場合も似たようなもので、パソコンの作業も簡単にこなせる技術を持っている湊なら、海外の携帯でも普通に使えるはずなので、その場しのぎだろうと買って事情を説明して連絡だけは取れるようにするはずだ。

第一候補と思いつつ相手の技術と性格から考えて考察してみたが、どれも可能性は低そうで、むしろ、相手が怪我をしてあまり連絡を取

れる状況になかったと思った方がしっくりくるくらいであった。
（有里君の性格から考えると連絡が取れない状況を放置するとは思えないです。そこから逆に考えれば、彼が意図的に連絡を絶っていたか、何者かが彼を連絡を取る事の出来ない状況に追い込んでいた可能性の方が高いです）
前者ならどうして連絡を絶ったのか、後者なら誰がそんな事をしたのかという疑問が新たに浮かぶ。
しかし、何の情報もない状態ではやはり全て想像の域を出ないと、美紀は頭を振って考えることを諦めた。
そして、考えている間は自然と歩く速度が遅くなっていた気がしたため、少し急がねばと顔を上げて正面を向いたとき、前方に一人の男性が立っているのが見えた。
（あれ？　あの人……）
相手は道路の真ん中に立ち、とある一軒家をただ眺めている。
腰よりも長く伸びた艶やかな暗い青髪、どこか高級感を感じさせる黒いマフラーに、遠くを見つめているような不思議な金色の瞳、これらの特徴は自分の知るとある男子と一致している。
だが、その男子よりも相手は長身で大人びており、さらに右眼を覆う黒い眼帯を付けていた。着ているフード付きのオリーブドラブ色のコートは、自分が知らないだけで彼も持っていたかも知れないが、知り合いの男子と似ていながらどこか雰囲気が異なっているせいで判断がつかない。
そんな風に考えながらゆっくり近づいていくと、相手も美紀に気付いたのか振り返るなり口を開いてきた。
「あの、すみません。ここらへんに〝ナギリ〟って家はありませんか？」
「え？　ナギリさんですか？　えっと、どういった字を書くんでしょう？」
「百の鬼って書いてナギリって読むんですけど」
声を掛けられたとき、美紀は相手が隻腕であることに気付く。長袖で隠れているが、振り返った際に右袖が勢いのまま揺れていたのだ。

袖に腕が通されていればああはならない。
また、見れば見るほど知り合いの男子にそっくりだと感じ。話し方はどこか幼い印象を受けるが、声までそっくりだったことで美紀には相手が湊本人にしか見えなくなっていた。
けれど、相手が湊であればこの初対面の相手に対するような話し方はおかしい。
相手は百鬼さんとやらの家を探しているようだが、まったく覚えがなかった美紀は素直に知らないと答える事にした。
「すみません、この近くでは見た事がないです。良かったら近くの交番まで案内しますが？」
「あ、そこまではいいです。どうもありがとうございました」
交番までの案内を申し出ると、相手は頭を下げて礼を言うなり、そのまま歩いて行ってしまった。
湊によく似た相手は去り際に小さな声で、
「そうだ。おばさんの家にいってみよ」
と呟いていたが、七年前の事故で両親を失った湊に祖父母や親戚はいないと聞いている。
ならば、やっぱり今のは非常によく似た別人だったのだろうか、とどこか納得しきれない気持ちを引き摺りつつ美紀は家まで急ぐのだった。

――高級別荘地・桐条別宅
夜も更けてきた頃、桐条別宅の自室でパソコンを操作していた英恵は、桐条のデータベースに機能停止したアイギスが屋久島の研究所に収容されたという情報を見つけ、アイギスも無事で良かったと安堵の息を吐いた。
桜を通じて久遠の安寧と湊の戦いの結末を聞いていたが、湊が帰ってくるという話だった三日前に、湊が別れを告げて家を出ていってしまったとだけ連絡が来て、どのような状態だったか詳しく聞けていなかったのだ。
復讐に走ったはずの湊は相手を自分の傘下に収め、今まで持ちえな

かった組織としての強さを手に入れた。
その矛先はきっと自分たち桐条に向けられるのだろうが、そんな事よりも英恵としては家を出ていったという湊の事が心配だった。
(機能停止状態だったアイギスは屋久島に、チドリさんとは自ら別れを告げて離れていった。あの子は一体どこへゆこうとしているのかしら)
何よりも大切に想っていた少女から離れる。単純に別行動を取るという意味ならば、これまでも何度もあったし、その最たるものが修行も兼ねた海外への遠征だった。
しかし、それは全て二人やそのまわりの世界を守るための行動であり、十分な力を手に入れれば帰ってくると言っていた。
それがどういう訳か、湊は傍にいなくても大丈夫だと言って家を出ていったという。
湊にとってチドリたちは枷であると同時に彼を人側に繋ぎ止めておくための楔だった。
鬼の血に目覚めてしまった少年がそれを自分の意思で捨てたというのなら、やはり彼は絆や繋がりを捨てて孤独の道を行くということなのだろう。
確かに守るだけなら傍にいる必要はないかもしれない。けれど、そんな守るだけのシステムと化してしまえば、それを行う少年には何の救いもないと思ってしまう。
(名切りは守るための一族。究極的には抑止となり、守護するためのシステムと化す存在。でも、他者のために自らを捧げる事の出来る優しい彼らは、一体誰に守って貰えばいいの？　誰があの子たちを救ってくれるというの？)
紀元前より続く由緒正しき血筋と家柄でありながら、人々は彼らを恐れて遠ざけてきた。
彼らを使役し、自分たちの手を汚さずに甘い汁だけを啜ってきた九頭龍ですら、忌むべき血筋として見下していたのだ。
平和な時代になって守って貰う事のなくなった現代の龍の一族にすれば、守って貰っていたのは先祖たちであって、何もしてもらって

いない自分たちが恩を感じる必要はないと思っているのかもしれない。
けれど、それは鬼の一族にも言える事だ。人を殺していたのは過去の名切りたちであって、湊の祖父も母親も人を殺した事などなかった。
元を辿っていけば龍の一族にも人を殺した人間はいただろう。戦国武将の末裔と言われる者たちだって人殺しの子孫だ。
しかし、同じように先祖に人殺しがいても、龍の一族や戦国武将の末裔たちが人殺しの子孫として迫害を受ける事はない。
ならば、平和な現代になってからも、名切りだけが鬼の末裔として迫害されるのはおかしいではないか。
鬼の一族の目指した在り方は、単なる自己犠牲の域を超えている。
これではまるで、人ではなく神の視点だと考えたとき、控えめなノックの音が英恵の意識を現実へと引き戻した。
《夜分遅くに申し訳ありません。新川でございます》
「少し待ってください」
ノックの後に聞こえてきたのは落ち着きのある静かな男性の声だった。
英恵はパソコンの画面に開いていたアイギスに関するデータファイルを消すと、ストールを羽織って席から立ち、扉を開けた。
そこに立っていたのは白髪混じりながらも、きっちりと整った身なりをした老紳士だった。
新川と名乗った彼は英恵が実家にいた頃から仕えてくれている執事で、桐条家に嫁ぐ事になってからも仕えている主の傍にいるといい、今もこの屋敷で色々とお世話をしてくれている英恵が信頼する人物の一人だ。
その彼が就寝前のこの時間に部屋を訪ねてくる事など珍しい。一体何の用かと不思議に思った英恵は、素直に思ったまま尋ねていた。
「新川さん、何かありましたか？」
「はい、実はいま屋敷に訪ねてきた方がいらっしゃいまして」
答える相手の様子がどこかおかしい。困っているような、何か言い

にくそうな、とりあえず普通とは言えない様子だ。
時計を見ると時刻は十時を過ぎようとしている頃。確かにこんな時間に訪ねてくるなど非常識ではあるが、それなら屋敷の主である英恵は既に寝ていると言って、また日を改めて貰えばいい話しである。
それをせずに呼びに来たという事は、相手が無下に出来ないような人物なのか、他に何か理由があるのかもしれないと考えた。
「訪ねてきたというのは一体どなたかしら？」
相手が言いにくいのなら自分が訊いてやればいい。
英恵がストレートに問えば、新川はどこか抑えた声量で答えた。
「はい。その、〝八雲〟様と名乗られる青年にございます」
「っ!?」
新川の口から予想だにしていなかった名を告げられた途端、英恵は驚愕の表情を浮かべる。
何故、いまここに公的に死んだことになっている湊が堂々と正面からやってきたのかが分からない。
彼は家を出てここで暮らすつもりだったのか。それともここにも別れを告げにやってきたのか。
頭の中に様々な疑問が浮かんでは消えてゆき、英恵は冷静な思考を取り戻す事が出来ない。
すると、相手は英恵が混乱するのも無理はないと思ったのか、続けて口を開いてきた。
「幸いな事に、この屋敷には七年前に起きた八雲様ご一家の事を知る者は私の他にいません。ですので、最初に応対した女中には口外しないよう言いつけ下がる様に言っておきました」
「そ、その子はいまどこに？」
「私の部屋にて待っていただいております。どことなく菖蒲様の面影がありましたので、八雲様を名乗ったこともあり無関係とは思えず、勝手な事をいたしました」
「いえ、どうもありがとう。今から私も会いにいきます」
桐条に自分と湊の繋がりがばれるのはまずい。だが、それも昔から仕えてくれていた新川のファインプレーにより、どうにか無事に済み

そうであった。
どうして湊が正面からやってきたのかは分からないが、いまは会うのが先だと気を取り直し、英恵は新川に案内されるまま彼の私室へと向かった。
＊＊＊
住み込みで働いている使用人たちの部屋は一階奥の方にあり、屋敷の主が頻繁に彷徨いていては使用人らも休まらないだろうと、英恵はあまり近付いたことはなかった。
通路を挟んで左右に個室の扉がある様子はどこかホテルのようでもある。
新川の部屋はその中の一番奥にあり、既に寝ている者もいるはずなので、二人は音をたてないよう静かに進み部屋へと入った。
「あ、おばさん！」
二人が部屋に入った途端、ソファーに座っていた湊が英恵の姿を見つけ、嬉しそうに立ち上がり駆け寄ってきた。
その言動と行動に違和感を覚えるが、英恵は数ヶ月ぶりに見た湊の姿に唖然とする。
身長がかなり伸びて顔付きが大人びたことは成長期だという事で構わない。しかし、右眼に付けられた半月状の黒い眼帯、動いた勢いのまま揺れる中身のない右の袖、それらが湊の過ごしてきたこの数ヶ月間の凄まじさを物語っていて英恵は何も言えなかった。
大事な人を殺されたことで復讐に走り、湊はその間だけで一万人以上を殺した。その報いが右眼と右腕の喪失というなら、まだ犠牲としてはマシな方かもしれない。
だが、十四歳の少年に背負わせるにはあまりに重く大きな十字架だった。
英恵は瞳を揺らしながら何も喋らず湊の頬に手を添え、痛々しい姿となってでも帰って来てくれた息子の存在を確かめる。
手を通じて感じる相手の体温に、ちゃんとここにいて生きている事を実感できた。傷を負った姿に対して込み上げてくるものはあるが、それでも生きていてくれてよかったと心を喜びが占める。

そうして、湊に話しかけようとしたとき、英恵が口を開くよりも早く湊の方から話しかけてきた。
「あのね、おばさん。お母さんとお父さんがどこいったかしらない？」
「……え？」
「家にかえったんだけどね。別の家があってぼくの家がなくなってたの。でも、なにかあったらおばさんのところへ行きなさいって言われてたから、ちゃんと電車にのってここまで来たんだ」
不思議そうな顔で両親の居場所を尋ねたかと思えば、今度は親に言われていた通りに一人でここまで来た事を誇らしげに笑っている。
両親の死後、湊がこんな風に無邪気に笑う姿を英恵は一度も見た事はなかった。
けれど、英恵は湊が久しぶりに見せた無邪気な笑顔を前に、その言葉が意味するところを理解してしまった。
「あ、ああ……っ」
信じたくないあまりに残酷な現実に、英恵は否定するように首を横に振り、目に涙を溜めて肩を震わす。
何故、どうして、何があったというのか、英恵の頭の中を理解しがたい状況への問いが占める。
その間も湊は幼い笑顔で無邪気に笑っていて、英恵は堪らず相手を抱きしめていた。
「あれ、おばさんどうしたの？　どこか痛いの？」
何も分からない湊は、涙を流して自分を抱きしめてくる相手を心配して声をかける。
こんな状況になっても変わらぬ優しさに、英恵はさらに悲しみが込み上げ、湊を抱きしめる腕に力を籠めた。
「八雲君っ……八雲君っ……」
「おばさん、泣かないで？　何かいやなことがあったならぼくがなんとかするから」
どこかおろおろとしながらも、泣いている英恵を心配して湊は声をかけてくれるが、その行動がさらに涙を溢れさせる。
自分たちの知る彼のまま日本に帰って来たと聞いていたことで、神

降ろしによる人格の消去は回避されたと思っていた。
傷を負った姿になっても、それでも生きて帰ってきてくれた事が嬉しいと一時は喜びを感じた。
だが、英恵が再会した湊は心が壊れてしまっていた。
自分の両親が七年前の事故で死んだ事も、今まで自分が大切な少女たちのために戦っていた事も、全て忘れて事故以前の記憶と人格に戻ってしまっている。
右腕がないことや、自分の方が背が大きくなっていることには違和感や疑問を抱かず、まるで影時間中に起こったことへ記憶の補整が掛かっているかのように、相手は〝事故以前の八雲〟そのものの行動ばかり見せていた。
これが彼の犯してきた罪への本当の罰だとするならば、英恵はそんな罰を与えた神を呪い一生赦さないと激しい憎しみを覚えた。
英恵はその後、年末年始を宗家で過ごす予定だったのを体調が優れないからと言ってキャンセルし、湊を自分の部屋につれてゆくとしばらく部屋には誰も入らないようにと使用人たちに厳命した。
彼女のあまりの様子に共にいた新川も思うところがなかった訳ではないが、七年前の湊たち一家の死を悲しみ病んでいた姿と今の姿がどこか重なり、何も言うことが出来なかった。

第百十二話　母親たちの苦悩

２００７年1月6日（土）
午後――高級別荘地・桐条別宅

湊が英恵のもとを訪れてから、年末年始を間に挿み約十日が経った。

体調を崩しているといって宗家に戻る予定をキャンセルしたことで、夫の桐条や娘の美鶴は何度も心配して連絡してきた。

桐条は年末年始の社交界などに出席しなければならないが、美鶴は絶対に出なければいけない訳ではないので、自分だけでも英恵のもとへ向かおうかとも言われた。

けれど、体調を崩しているというのは嘘であり、夫にも娘にも会わせることの出来ない青年を匿っていることで、英恵はその申し出を断り多忙な父の傍にいてやって欲しいと告げておいた。

父親のことが大好きな美鶴は、母のことを心配しながらも、確かにあまりに多忙そうな父を見て自分に手伝える事があるのならと思ったらしく、年末年始は自分に出来る範囲で桐条を手伝い傍で過ごしていたようである。

一方、ずっと屋敷の中にいた英恵と湊は、英恵の最も信頼している従者である新川が運んできた紅茶とお菓子で現在はオヤツの時間を楽しんでいた。

隻眼・隻腕となったにもかかわらず、湊は一切の不便さを感じさせないような動きでクッキーを手に取り頬張る。

見た目こそ大人びた麗人であるが、記憶と中身が幼くなっていることで、食べる仕草も表情も久しく見ていなかった子どもらしいものとなり、紅茶を呑みながら眺めていた英恵は優しい表情で苦笑した。

「フフッ、沢山あるから好きなだけ食べていいわよ」

「でも、お母さんは夜ごはんが食べれなくなるから、オヤツは出された分だけって言ってたよ？」

「八雲君は晩御飯も沢山食べているからいいの。今日は何か食べたい物はある？」

「おばさんと同じものがいい！」
何でも好きな物を頼んでもらって構わないというのに、幼いながら気を遣っているのか、湊は満面の笑みで英恵と同じ物が食べたいと答えた。
けれど、健康を考えたヘルシーな料理を普段は作って貰っている英恵と同じ物では、育ち盛りで数人前を一人で食べきる湊には物足りないだろう。
よって、湊の方には肉料理も付けて貰う事に決めながら、英恵は湊に「わかったわ」と笑みで返す。
湊が来てからというもの、英恵は基本的に湊から目を離さずに過ごし。屋敷の外に出す事は出来ないがなるべく相手のしたいようにさせていた。
ここには新川をはじめとした使用人らが何人もいるため、風呂やトイレにいくことを考えれば湊の存在を隠しておく事は出来ない。
また、見た目は女性以上に美人であっても、今の湊は身長一八〇センチを超えた男だ。
実年齢はともかくとして、十代後半にしか見えない大人びた顔付きの男を部屋に連れ込んでいると思われれば、そのまま悪い噂に繋がりかねないので、英恵は使用人たちに心を病んでしまった友人の子どもを預かることになったと告げておいた。
相手はそれなりの家柄の子息なので、跡継ぎが心を病んでしまったと知られれば外聞も悪くなる。
そのため、人目を気にする必要のない都市から離れたこの屋敷で静養させて欲しいと頼まれたので、口外は厳禁であり、例え桐条や美鶴など桐条家やそれに関わる者に訊かれても、何も話してはいけないと厳命した。
普段はあまり主従の関係を持ちださない英恵が強く命じてきただけあって、長く仕えてきた屋敷の者たちは姿勢を正して了承してくれた。
よって、突然の来訪者が来ようと、屋敷に招き入れるまでの間に湊をどこかの部屋に匿っておく事は出来るようになったが、英恵本人と

しては湊の状態が今後どのようになるのか不明なだけに、出来る限り傍から離れようとしていなかった。
（いまの状態は神降ろしの反動と見るべきかしら。人格のフォーマットが中途半端に止まった事で、こんな風に記憶を失い。精神的に幼くなったのかもしれない）
最初は影時間の適性を失ったことで、適性を得る以前の状態まで記憶が消えてしまったのだと考えた。
けれど、湊を部屋で寝かしつけてから簡易補整機である指輪をつけて影時間を迎えたところ、相手はすやすやと穏やかな表情で寝ていたので、影時間の適性はまだ持ったままだと判明した。
桜から追加情報として湊がペルソナ能力を失ってしまったという話しも聞いたので、影時間の適性も一緒に失ってくれればもう戦いに巻き込まれずに済んだのにと残念に思う。
守るために力を求めてずっと戦い続けてきた。本当は誰も傷付けず、殺したくもなかったはずなのに、彼を取り巻く環境がそれを許さなかった。
ならば、辛い記憶を全て忘れている今の状態は、己が平和な世界で生きる事を罪だと思っている青年を唯一平和な世界にいさせる方法なのかもしれない。
彼はずっと人々のためにシャドウと戦ってきたのだ。あとは影時間を消す研究をしている桐条グループの者らに任せて、このまま戦いから離れて休ませてやってもいいだろう。
（アイギスを屋久島の研究所へ送ったことで、八雲君が日本に戻ってきた事を武治さんは知っている。でも、学校にいつまで経っても通って来なければ、右眼と右腕を失ったこともあって何かの事情を抱えていることに気付くかもしれない）
桐条や美鶴もこの屋敷を訪れることがあり、逆に英恵が屋敷を離れて宗家に行かねばならないこともある。
そのため仮に戦いから離れたところで、出自や桐条家との関わりにおいて微妙な立場にいる湊を、桐条家の者にもばれずにここで匿い続けることは難しい。

いまの湊は精神と記憶は小学一年生ほどになっている。両親がいないことを不思議に思いつつも、頻繁に会っていたもう一人の母親である英恵がいるからこそ大人しくしているが、英恵から引き離してしまった場合、精神も含めて湊がどのようになるのか予想もつかない。

無邪気な笑みを浮かべてクッキーを頬張っているが、ここにいるのは最強のペルソナ使いであり、世界から狙われても生き残った真正の名切りの鬼なのだ。

扱いを誤れば、暴走した鬼の力が猛威を振るい、この世に地獄が具現する可能性も十分にあり得る。

だからこそ、湊だけでなく世界のためにも、例え夫が相手だろうが大切な息子は守ってみせる。そう決意を新たにした英恵が紅茶のカップに手を伸ばしたとき、控えめに扉をノックする音が響いた。

やってきた人物と用件は想像がついているが、相手が話すのを待っていると、二拍ほど置いて新川が扉越しに用件を口にしてきた。

《英恵様、鵜飼桜様がお見えになられました》

「ありがとう。そのままこの部屋に御通しして。それから、桜さんの分も含めた紅茶とお茶菓子のおかわりをお願い」

《かしこまりました》

返事をすると扉の前から足音が遠ざかって行った。

湊にはその気配が分かっているらしく、気配の動きを追うように壁の向こうへ時折視線を向けているが、ただの子どもに戻っている湊には不要な力だ。

よって、それを止めさせるためだと気付かれないよう注意しながら、英恵は少し椅子を湊の方へ寄せると相手の頭を優しく撫でた。

撫でられている湊は何故英恵が撫でてきたのかは分からないようだが、その行為自体は嬉しい様で照れたような笑みを浮かべている。

英恵も湊の笑顔に慈愛の籠った笑みで返すが、この後の事を考えると胸中には不安が広がっていた。

現在の保護者である桜に湊の現状を何も知らせない訳にはいかない。故に、湊を保護している旨を伝えた上で、正月三が日を過ぎてから一度屋敷に来て欲しいと住所を教えた。

再び行方を晦ました青年が英恵の許で保護されているとの情報に桜も戸惑ったようだが、事情があって今の湊を屋敷から出す事が出来ないと伝えれば、相手は素直に信じて来訪可能な日を返してきたこともあり、お互いの予定のあう日を決めるのは容易だった。

ただし、湊の状態が状態だけに、屋敷に入るのは桜だけ、チドリのことは連れて来るのも遠慮して欲しいと言ったときには、あちら側で色々と悶着があったようである。

影時間関係や裏の仕事関係については英恵もよく知らないが、自分の大切な家族に何かあったと聞けば詳細を知りたがるのは当然だ。

それを、詳しく話す前から特定の人物にしか話さないと理不尽な事を言われれば、相手を想っている気持ちの分だけ比例して憤りを感じるというものである。

最終的に、自分しか会わせられない理由があるのかと桜に尋ねられ、今の湊は両親と暮らしていた当時の記憶と性格まで退行している事を英恵は伝えた。

湊の退行の理由は分からない。けれど、記憶を失っていようが、湊の持つ適性値が残ったままならば、ちょっとした事が切っ掛けとなって能力の暴走が起きる可能性がある。

関わりが深ければ深い分だけ影響を及ぼし易くなるのだから、影時間に関わる者であり、湊の戦う理由の根幹に位置する少女が最も警戒すべき対象となるのも当然だ。

そうして、今回は我慢を強いることになったチドリに申し訳ないと思いつつも、湊のことで一杯一杯だった英恵は事情を説明したあとの宥める仕事を桜に丸投げして、あらかじめ決めておいた日付までは連絡を控えて今日を迎えた。

《英恵様、お客様をお連れしました》

「どうぞ」

ノックの音と共に新川が入室の許可を求めてきたので、英恵は湊の手を握りながら答える。

チドリほどではないが桜も湊の家族として長い時間を過ごしてきた相手だ。出会った途端に湊にどのような変化が起こるか分からな

いので、手を握って落ち付かせておくと、ゆっくり扉が開き黄色の着物にストールを羽織った姿の桜が現れた。
本来ならば家人としてお客は立ち上がって出迎えるのが礼儀である。
だが、そうするには湊と手を離さなければならないので、申し訳ないと思いつつ座ったまま対応することにした。
「座ったままですみません。どうぞこちらにお越しください」
「はい、失礼します」
部屋に入ってきた桜は、不思議そうな顔できょとんと自分を見つめる湊に僅かに驚いている。
いくら話しを聞いていても、やはり、自分のことを忘れて他人に対する視線を家族から送られては冷静でいる方が難しいのだろう。
やや強張った複雑な表情のまま湊の向かいに桜が着席すると、女中が二人ほど入ってきて紅茶の新しいポットとお茶菓子を並べてゆく。
桜の前にも持ってきたカップを置いて最初の一杯を注いでゆき、
「失礼します」と言って女中らは静かに去って行った。
さぁ、これで話しをする場は整った。だが、どのように話し始めたものかと考えたとき、湊が新しく置かれたお菓子の一つに視線を向けていたので、英恵はそれを皿に取り分けて湊の前においてやった。
「八雲君、新しいお菓子も食べていいから、おばさんたちが話している間はお行儀よくしていてね」
「うん！」
元気に返事をするなり、湊は左手でフォークを持って器用にこぼさず食べ始める。
ときどきフォークを置いてカップを手に取り紅茶を飲んでいるが、その動きにぎこちなさはないため、見つめていた桜は湊の両利きは昔からなのだなと感じているようである。
そして、とりあえず桜と接触しても湊に変化がなかったことで、英恵は改めて相手に挨拶をすることにした。
「今日は来て頂いてありがとうございます。私が桐条英恵です。この子の母親の同級生で、その縁でこの子と親しくさせていただいており

ました」
「お招きいただきありがとうございます。鵜飼桜です。本日はみーくんの事をお話してくださるということでしたが、確かに何も覚えていないようですね」
隻眼・隻腕となり、見た目も随分と大人びたものに変わってしまっていたが、お菓子を口に運ぶ湊の顔には幼さの残る笑みが浮かんでいる。
触れれば切れるような鋭さも、世界から隔絶されたような孤独さも、今の湊には一切見られなかった。
昔の姿を知っている英恵にすれば、この湊こそが彼本来の性格であり人格であるという認識が強い。
エルゴ研で目覚めた頃から既に性格の変異は始まっていたが、一度感情の針が完全に振りきれてしまったエルゴ研脱走の日を境に、湊は明るく笑う事がなくなってしまったので、そこから付き合いの始まった桜は戸惑いを隠せないようだ。
「いまのこの子はおおよそ六歳になったばかりの状態です。事故のことも、その後に過ごしてきた時間のことも何も覚えていません」
「……そうですか。彼は力を失ったと話していたんですが、適性は残っていましたか？」
「はい。私も簡易補整機の指輪をつけて確認しましたが適性は残っています。といっても、本人は退行していますから、その時間にはすっかり寝てしまっているのですが」
ここで話していれば湊にも聞こえてしまうので、話すときには相手の記憶を刺激するような単語を極力避けて二人は会話する。
桜はここに来るまでに訊きたい話題を考えていたのか、能力は失っても適性が残っていると聞いて考え込んでいるが、その姿を見て英恵は強い人だと思っていた。
お互いに湊の保護者の立場で話している訳だが、英恵と桜では年齢が一回り以上も離れている。
さらに、桜には出産経験もなく、それでいて突然現れた訳ありの子ども二人を引き取って育てているのだから、この人が湊の保護者に

なってくれて良かったと思わずにはいられない。
自分が同じように美鶴や湊から忘れられてしまえばショックで倒れるだろう。
しかし、桜はショックを受けながらも、湊の状態や原因について理解しようと懸命に頭を働かせている。
辛い状況に追い込まれれば逃げ出してしまう自分は、彼女のこういった強さを見習わなければならないと内心で自嘲的な笑みを小さく漏らし、紅茶に口を付けながら話しを続ける事にした。
「現在、桐条グループでは〝有里湊〟の捜索規模を縮小させて行っています。屋久島でこの子に会ったのは武治さんだけのようで、あの人もこの子を巻き込んだ責任を感じていますから、下手に適性や力を持っているとグループの人間には伝えないようにしているみたいです」
「ですが、グループとしてはみーくんとちーちゃんをマークしているんですよね？　何度か監視するような動きをする人を見かけましたし。それらはどういった理由で行われているんですか？」
今までに何度か出先まで尾行されることがあった。相手は気付かれていないと思っているようだが、護衛も兼ねた運転手として同行していた渡瀬や、探知能力を持っているチドリにはしっかりばれていた。
下手に撒いてしまえば尾行に気付いたことがばれるので、撒くときにはコンビニやドラッグストアなど小さめの駐車場の店に立ち寄ることで、ある程度の自然さを装いながら相手がついてこれない状況を作り出した。
最初の一件や二件ならば同じ店に入ることもあり得るが、流石にそれが続けば小さな駐車場だけあって、一般人でも何度も見た車種やナンバーを無意識に記憶し違和感を覚え始める。
その違和感の正体に気付かれれば、相手は極道だけあって何をされるか分からないため、尾行していた人間も途中で断念して日を改めるしかなくなるのだ。
これらは全て渡瀬が自然と行ってくれたことだが、実害が出ていな

いにしろ監視されるのは気分が悪い。
それも子どもたちを狙っているとなれば、保護者として尚の事黙ってはいられないとして、桜は桐条グループが二人を監視している理由を知りたがった。
「二人を監視しているのは適性値の問題ですね。月光館学園が桐条グループの物だという事はご存知でしょうか？」
その言葉に桜は首を縦に振って答える。それを確認して英恵は言葉を続けた。
「グループとしてはこの子や美鶴が力に目覚めたことで、同年代の子どもが目覚めやすいと考えています。勿論、それは可能性や確率の話しですから、データとしては大人の物も採取していますが、グループでは傘下の企業や団体の健康診断を利用して個人の適性値も調べているのです」
説明を受けた桜は成程と納得した表情を浮かべる。
子どもたちの保護者が聞けば怒るだろうが、桐条グループもシャドウの被害拡大を抑えるために戦力を欲している。
適性値の測定自体は全く健康に影響があるものではないし、勧誘も最終的には個人の判断に任せるので拒否が可能だ。
桐条武治も子どもたちを巻き込む事は心苦しく思っているが、現状で力に目覚めているのは子どもだけであるため、新たな適性者を見つけて少しでも個々の負担を減らせるよう、グループの人間と月光館学園の子どもたちに黙って測定する事を許可していた。
「グループのデータベースに測定結果のリストが存在するのですが、力に目覚め得るほどの適性を持っているのは、二人を除けば美鶴の所属する〝特別課外活動部〟に男の子が二人いるだけです。ですが、男の子たちは既に所属していますから、グループとしては二人を勧誘したくてしかたがないんだと思います」
「検査は適性の強弱も分かるようですが、みーくんとちーちゃん以外の子はどれくらいなんですか？」
桐条は湊の危険性を考慮して、研究員らに正体がエルゴ研を壊滅させたエヴィデンスだと明かしていない。

研究員の一部には少数だが旧エルゴ研の生き残りも含まれているため、その正体が解れば絶対に近付こうとは思わないだろう。
しかし、正体に気付いていないせいで、貴重な高い適性を持った対象として接触したがっているのだから困りものだ。
桜は栗原から湊とチドリの強さを聞いてはいるが、他のペルソナ使いや一般的な強さの数値に対する理解は低い。
よって、上が接触を許可せず監視に留めると命令していながら、研究員らが密かに接触する機会を窺うほど二人が特別なのかを知るべく、桜はまっすぐ見つめて英恵の答えを待った。
「そうですね。力に覚醒する数値が〝１０００ｓｐ〟なのですが、確か、男の子たちは二千くらいで、美鶴が四千だったかと」
「それは強いんですか？」
「男の子たちは目覚めてまもない感じみたいです。美鶴もようやく戦闘に慣れ始めたくらいでしょうか。同じ頃の検査で測ったチドリさんが七五〇〇ですから、まだまだ弱いんだとは思いますけど」
特別課外活動部のメンバーは、最初はペルソナの扱いに慣れるために桐条のラボでシャドウの調整個体との戦闘訓練を行っていた。
それが終わると今度は街中のイレギュラーシャドウを狩る様になり、徐々にだが実力を伸ばしてきている。
しかし、シャドウの巣であるタルタロスには数えるほどしか上っていない。
というのも、現状では探知型の能力を持っているのが美鶴だけで、彼女のその力は補助用の機械を使ってようやく使い物になるレベルなのだ。
敵がいて危険だというのに、毎日構造が変化するため安全に探索するには補助は必須。だが、機械を持って歩きまわるなど出来ないので、補助をするなら美鶴はエントランスに残るしかない。
流石にペルソナの扱いに慣れてきたばかりで、ペルソナ使いとしての戦い方までは習得出来ていない者らを二人で探索に行かせる訳にはいかないのだ。
よって、一人でタルタロスを訪れ戦闘を行えるチドリにはまだまだ

及ばないと、英恵は苦笑混じりに説明した。
「では、そちらで把握してるみーくんの最新データはどうなっていますか？」
英恵の話しを聞いた桜は、比較対象を得たことで適性値と実際のペルソナ使いとしての強さの関係を想像しやすくなったのか、今度は桐条グループの掴んでいる情報を尋ねてきた。
グループの持つ最強の駒は適性値四千の美鶴なのだ。それを上回るチドリよりも、さらに力を持っていてマークが厳しかった湊の力を相手はどれほどだと思っているのかが知りたい。
接触は受けていないが、それでも子どもを付け回されている事実は存在するので、保護者ならばその原因である物をちゃんと把握しておきたいのも当然だろう。
相手の意志をしっかりと理解していた英恵は、本来は重要機密であるそのデータをまったく隠すつもりもなく告げた。
「留学していたので一年生の三学期の健康診断が最新データになりますが、それによりますと三万千となっています。ただ、本人も普段は力を抑えていると言っていたので、実数値はもっと高いかと」
「確かにそうですね。栗原さんという元研究員の方がいらっしゃるのですが、その方の持っている測定器では一年生の時点で九万八千を記録していました。その後に血の力に目覚めていったようですから、既に十万を超えている事までは確定しています」
「なるほど、だから新しい測定器が開発されたんですね」
グループとしては一年生の頃のデータで湊の数値は止まっていたが、仙道と地下駐車場で戦った際に名切りの力が一部目覚めたことで、適性が一万以上上昇したことがあった。
間に夏休みを挟んでいたものの、二学期の健康診断のときに計測した数値を見た研究員らは、僅か数ヶ月でどうやってこれほど上昇するのかと驚いた。
その後も湊は抑えたままでありながら、美鶴やチドリよりも遥かに早いペースでの成長が確認されていたので、いつか測定上限に達するかもしれないと思った研究員らは新型の開発を行ったという訳だ。

「実はこの子が海外に行っている間に最新の測定器が作られたんです。以前は上限が十万だったのですが、最新型の方は巨費を投じて作ったので今のところは上限がないらしいです。まぁ、あまり高い数値だと本当に正しく測れるのかまだ分からないという問題もあるようですけど」
「みーくんを捜索しに行った方から聞いた話ですが、みーくんに降ろされた神の力は一千万を優に超えているとアイギスさんが話していたそうです。なので、その辺りまでは信用出来るんじゃないでしょうか」
「一千万……想像もつかないですね。そんな存在の受け皿になる事が出来るこの子の力も」
厳密には湊はエネルギー生成の動力炉にされたのであり、湊自身が神の受け皿になった訳ではない。
しかし、湊の人格をフォーマットし、その魂を動力炉として取り込んだ神は空になった肉体に宿ることになったので、ある意味で湊の肉体は上位存在を宿すだけの機能を有している。
それらは全て半神半人であった茨木童子と赫夜比売の血によるところが大きいが、詳しく知らない英恵たちにとっては、力を持って生まれたせいで様々な事に巻き込まれる湊を不憫に思った。
今もテーブルの上に置かれたお菓子を食べて喜んでいるが、彼が過ごしたこの幸せな時代は既に終わってしまっている。
記憶を取り戻し、人格が蘇れば、彼はまた戦いに身を投じるだろう。大切な少女とその世界のため、自身の幸せを放棄して戦い続ける。
そんな彼の暗い未来を思えば、桜もこのままでいる方が幸せではないのかと思ってしまった。ワッフルを手に持ち、口のまわりを汚しながら食べている湊に向き直り、桜はどこか悲しさの混じった笑みで問いかけた。
「……八雲君は将来の夢って何かあるのかな？」
「夢？　えっとねー、たぶんあると思う」
問われた湊はワッフルを皿に置いて考え込んでいる。
その間に英恵が汚れた口周りを拭いてやれば嬉しそうに笑い、この

笑顔が疾うに失われたものであると知っている分だけ見るのが辛く感じる。
　そして、しっかりと数十秒考えこんで考えがまとまったのか、湊はまるで太陽のようなまわりの人間の表情まで照らすほど綺麗な笑みで答えた。
「ぼくの夢はねー、みんながしあわせでいられるようにすること。嫌なことがあったら聞いてあげるし、困ったことがあったら手伝ってあげて、それでみんなしあわせだったらぼくもうれしいんだ」
「っ……じゃあ、もし自分に困ったことがあったり嫌なことがあったらどうするのかな？」
「ちゃんと自分でなんとかするよ？　お母さんはちゃんと相談しなさいっていうけど、いつも相談できる人がそばにいるわけじゃないし。がんばったら自分でできるからいいんだぁ」
　あまりに純粋な笑みから齎される言葉に桜は動揺する。
　将来の夢を尋ねたのは幼少期の湊を知ることで、彼本来のパーソナリティを理解しようと思ったからだ。
　理由などなく、ただ憧れだけで宇宙飛行士やサッカー選手になりたいと聞ければ十分だった。沢山の人を元気にしたいから医者になりたい、といった風に理由まであれば尚良かっただろう。
　そんな、本当にただ相手のことを理解するためだけに尋ねたことが、反対に桜の胸中を複雑に掻き乱していた。
　顔をあげて英恵の方に視線を向けると、相手はやや視線を俯かせて暗い表情をしている。
　そこから察するに、英恵は湊がこんな風に答える事を知っていたようだ。
「英恵さん、この子は本当に昔からこんな風に考えていたんですか？」
「分かりません。ただ、菖蒲さんはこの子の将来をよく心配していました。当時は血筋のこともあってまだ子離れ出来ていないのだとばかり思っていましたが、彼女は当時から既にこういった子どもだと理解していたのかもしれません」
　誰かの幸せを心から願う優しさは、褒められるべき長所であり美徳

ですらある。
湊は素っ気ないどころかどこか近寄りがたい雰囲気を纏っていながら、登下校中のモノレール内で痴漢から女子を助けるなど、街中で度々人助けを行っていたが、どうやらその優しさは生来のものだったらしい。
けれど、六歳当時の人格の時点で己よりも他者を優先してしまう考えを持っていたとすれば、確かに親は子どもの将来を心配せずにはいられないだろう。
ただ他の人の幸せを願うだけならば構わない。自分がそのために協力するのも別にいい。だが、湊はそこに〝自分の事を考えず〟という要素が加わってしまう。
自分が幸せになるという考えではなく、他者の幸せな姿をみて自分の喜びとする。こんな事を平然と答える子どもなど普通とは思えなかった。
「無償の愛、神の視点、みーくんはやっぱり……」
湊が神の器として選ばれたのは必然だった。そう考えた桜の胸中を英恵も理解していた。
ただ、このまま退行状態が続けば湊は〝百鬼八雲〟として人の輪の中にいる事が出来る。
ここには湊の幸せを願う者しかいないのだ。湊が他者の幸せを願うのなら、湊は自分が幸せになる必要がある。
ならば、傍にいられない事は悲しいが、桜は湊をここに居させるべきだと考えた。
「……この状態がいつまで続くか分かりません。ですが、ここでならみーくんは幸せでいられるんですよね？　戦いから離れて、傷付く事も傷付ける事もなく、ただ静かに暮らせる。そんな未来も今なら選べるかもしれないんですよね？」
「そのための最大限の努力はします。この子が人々のためにしてきた事を考えれば、休んだところで誰も文句は言えませんから」
「ありがとうございます。みーくんのこと、どうかよろしくお願いします」

立ち上がった桜は深々と頭を下げて英恵に湊の事を頼んだ。
本当は傍にいてやりたいのだろうが、今の湊に桜やチドリと過ごした間の記憶はない。
赤の他人の中に放り込まれた彼がどのような状態になるか分からない以上、懐いている英恵に託すのが最も湊本人のためになる。そんな彼の幸せを願ったが故の決断だった。
そうして、湊をこのままここに残すと決めた桜は、二人に挨拶をして別れを告げると、また連絡を取り合う約束だけをして桔梗組へと帰って行った。

第百十三話　エントランスでの邂逅

1月13日（土）
影時間――タルタロス
手に持った斧に繋がる鎖を揺らしながら、チドリは独りタルタロスの中を進む。
動き易い私服の腰にはダークブラウンのガンベルトが巻かれ、その中には彫刻装飾（エングレーブ）の入ったホワイトシルバーの銃が収められていた。
メーディアを召喚せずとも探知能力でおおよその敵の場所は分かっている。
静かな空間にいることで研ぎ澄まされた神経が、世界にとっての異物である心の化生たちの気配を感じ取り、敵まで随分と近いことを知らせていた。
戦闘にすぐ移れるようチドリは武器を握り直すと、地面を蹴って駆け出し、曲がり角の向こうにいる敵まで一気に距離を縮める。
《グララッ》
そこにいたのは二体の魔術師〝マジックハンド〟。火炎属性を得意とするメーディアとは相性が悪いが、チドリは相手が突然現れた自分に驚いている間に、持っていた斧の片方を投げつけ仮面を叩き割った。
強襲からのクリティカルで大ダメージを負った敵は、そのまま黒い靄となって霧散する。
もう一体もまだ完全には戦闘態勢に移っていないため、チャンスだとばかりにチドリは誕生日に湊から貰った新しい召喚器を頭にあてて引き金を引いた。
「メーディア、ムド！」
《ルルゥ！》
水色の光と共に現れたメーディアが手をかざすと、敵を囲うように闇の魔法陣が発生する。
命を奪う呪殺の魔法。それは心の化生であるシャドウにも効果を発揮し、魔法陣の黒い輝きが最高潮まで高まると敵は黒い靄となって

消えていった。
目の前の敵を倒したチドリは思考を戦闘状態のままにして周囲の気配を窺う。
別のシャドウがまだどこかに隠れているかもしれず、一人のときにそんな不意討ちを喰らってしまえば死は免れない。
故に、チドリは最も近い敵でも数十メートル離れていることを確認してから、ようやく一息ついて召喚器をガンベルトに戻した。
(……これで今日は十四体目。でも、体力も精神力も十分残ってる。まだいける)
自己判断だが冷静に状態を把握し、チドリは探索をこのまま続行すると決めて歩き出す。
彼女は今までもタルタロスを探索することはあったが、それは基本的に湊が付き添っており、このように一人で訪れたことは一度もなかった。
しかし、英恵の暮らしている桐条別邸から帰って来た桜に湊の状態を聞き、その日からチドリは何かに取り憑かれたようにタルタロスに通うようになった。
原因は実に単純だ。今までの無理がたたって心が壊れて戦えなくなった湊に代わり、自分がシャドウと戦うことでその被害を減らそうと考えたのである。
湊は裏の仕事をしながらでもほとんど毎日のようにシャドウを狩っていた。全てのシャドウがそうという訳ではないが、敵として現れるシャドウは誰かの心から抜け出てしまったものだ。
ならば、当然その持ち主は影人間になっており、長く放置すると倒されたシャドウが戻ってきても完全には治らなくなる。
チドリも街中で影人間と呼ばれる無気力症患者を見たことがあるが、夜中に暗い路地にいればゾンビそのものだと思うほど、〝生きた屍〟という言葉が当てはまる酷い有様だった。
ペルソナごと能力を失った湊もああなっていた可能性もあったと思うと、チドリは以前のように他人事とは考えられなくなり、湊の代わりという理由が最も強いが真剣にシャドウとの戦いに臨むように

なった。
（……もう八雲は戦えない。だから、私が代わりに戦う。今まで守って貰ったお返しに、今度は私が八雲の守ってきた世界を守る）
進む先に新たな敵の姿が見えてきた。相手はまだこちらに気付いていない。ここからならば魔法での先制が有効だろうと、チドリは召喚器を頭にあててペルソナを呼ぶ。
「おねがい、メーディア。アギラオ！」
現れたメーディアが手に持つ杯から巨大な火球を飛ばす。
ごうごうと音を立てながら直進したそれは、迫り来る攻撃に気付きながらも逃げ損なった法王〝トランスツインズ〟を呑み込み、そのまま燃やし尽くした。
いくら湊に守って貰っていたと言っても、チドリとて何もせずに過ごしていた訳ではない。
学習能力と身体能力は湊も認めるほどであり、本人のやる気が伴えば数多の分野で一流になるだけの素質を持つ天才だ。
その彼女は天災と比喩され恐れられた一族の生まれである湊の隣に立つため、相手が裏の仕事に行っている影で密かに努力を続けていた。
二次性徴を迎えて身体が出来上がってきたこともあり、渡瀬からは八極拳を、鵜飼からは剣術を本格的に学び今でも鍛錬を積んでいる。
並びたい人物が遥か遠くにいるため、チドリの目指す場所も自然と高くなり、非力な少女の身でありながらその実力は人を殺められる域に達している。
だが、チドリはそれを自覚していることで、力を振るう量と時をしっかりと見極めることが出来るので、鍛錬を見てきた者以外に彼女の本当の実力を知る者はいない。
（……宝箱。一応、中身は確認しておくべきかしらね）
敵を倒して進み続けると、分岐した通路の奥に宝箱が置かれているのが目に入った。
エルゴ研時代や湊と二人で来たときには中身を確認していたので、奥に宝箱しかない行き止まりだと理解しつつ、今までの習慣からわざ

わざ向かってその蓋を開けた。
（長い刀。分類的には大太刀でしょうけど、八雲が欲しがるかどうか……）
中に入っていたのは黒い柄糸と鞘の大太刀が一振り。
手に取って鞘から抜いてみると、長い上に反りが強めでそれほど身長の高くない自分では扱いづらいだろうが、中々に切れ味が良さそうな業物であると眞宵堂のバイトで鍛えられた審美眼で見抜く。
タルタロスでは度々このような武器を手に入れることがあるため、今回のシャドウ狩りにも斜め掛けで背中に背負うタイプの刀入れは持ってきていた。
手に持った感じからすると一キロ以上はあるようだが、持って振り回しでもしなければ学校の鞄の方が重いくらいだ。
いまの湊に武器は不要だが、相手は幼い頃から刃物を集めるのが趣味だったので、退行していても欲しがるかもしれないと持ってゆくことにした。
（余計な荷物があると戦いづらい。今日はここまでね）
そして、体力等々はまだ余裕があるが、大太刀を背負っていては動き辛いので、安全を考えて本日のシャドウ狩りを終了する事に決める。
本当の実力を持つ者は目的のために引く事も出来るものだ。チドリは湊の代わりに連日シャドウを狩っているが、多少の無理はすれども限界までは戦おうとはせず、しっかりと明日以降に繋がる様に引き際も見極めている。
その見極めに関しては正直に言って湊よりもチドリの方が上だ。
湊は大概の事は出来る上に、目的のために自分が犠牲になる事を厭わない。
本人の肉体の性能があるからこそ百体以上のシャドウを狩った次の日でも戦いに赴けるが、性能頼りの戦い方など本来は褒められた物ではない。
エルゴ研時代に被験体らでチームを組んで探索していた状況を考えれば、湊には集団を指揮した上で生存させる能力が備えられてい

る。
　その日の探索で湊はまったく戦闘を行わずとも、指揮をしたチームが討伐数で他を圧倒的に引き離す結果を出しているのだから、彼が十分な指揮官としての才を備えている事は確実だ。
　しかし、指揮官として天賦の才を持っていながら、引き際を見極める能力が自身よりも劣っている事がチドリは腑に落ちない。チームの人間という能力的に劣る枷を付けなければ才能が発揮されないなどあるはずがないのだ。
　彼が引き際を見極められないのは、やはり単純に己のことを全く考えていないからだろう。
　何度自分のことを大切にしてと言っても聞かない馬鹿な相手に少々の怒りを感じつつ。刀をしっかりと背負ったチドリは敵の位置と脱出装置の場所を把握し、途中にいる敵を屠りながら進むと脱出装置を起動してエントランスへと戻った。
＊＊＊
　不思議な光に包まれ一瞬の浮遊感を味わうと、辺りの風景が変化して転送が無事に済んだ事を確認する。
　エルゴ研時代から何度も利用しているが、誰も上ってすらいない階層にどうしてこういった人工物があるのかは不明だという。
　解体してでも装置を持ってくることは出来ないかと言った研究員もいたが、マッサージチェアを抱えて歩くようなものだぞ、と湊が返すと相手は黙った。
　もっとも、後で本人にそんなに重いのか尋ねれば、面倒だから適当なことを言っただけだと答えていたので、実際にどれだけの重さになるのかは分からない。
　けれど、この装置に使われている技術はシャドウらの時空間に干渉する能力と同じ物らしい。
　どうして湊がそんな事を知っているのかは分からないが、訊いても答えなかったので現在も真相は謎のままである。
　そうして、転送の余韻も消えたことでチドリが歩き出すと、顔を上げた先に珍しい人物を発見したことで足を止めた。

「……何か用？」
彼女から十数メートル離れた視線の先にいたのは、分厚い本を脇に抱えた青いエレベーターガールだった。
視線が合っても相手は薄い笑みを浮かべており、その笑みが癇に障ったチドリは言葉に棘を含ませて声を掛けた。
すると、立ったままでいた相手はチドリの方へと近付きながら、静かに口を開き言葉を返してくる。
「いえ、ことさら何か用があって参った訳ではないのですが、ここ連日、随分とシャドウとの戦いに精をお出しになっていると思い。少々興味を抱いたので待っておりました」
何故相手が自分の行動を把握しているのかは分からない。
だが、相手は普通の人間とは違う理で生きる存在だ。異質さという意味では湊の上をゆく。
これといって嫌いになる要素はないが、だからといって湊と無関係のところで会っていたとしても交友は持っていなかったと断言できる。
それゆえ、距離感が少々掴み辛いが、相手は湊が力を得るのに協力してくれていた人物の一人なので、多少の面倒臭さを感じながら相手をすることにした。
「別に……ただ、八雲が戦えないから私がやってるだけよ」
「なるほど。いつ力が戻るかも分からなければ、シャドウ討伐には他の方が出向くしかありませんものね」
「……力を取り戻す方法を知ってるの？」
「いえ、存じません。私どもはお客人の様子を視ることが出来なくなりましたから、そもそもどのような状態かも詳しくは分かっておりませんので」
相手の言葉に僅かな期待を感じるも、即座に否定されてチドリは苦い表情を浮かべる。
現実世界の理の外にいるエリザベスたちならばもしやと思ったのだが、湊の状態をしっかりと把握していなければ確かに解決法も分からないだろう。

だが、直前の相手の言葉に引っ掛かるものを感じたチドリは、顔を上げて相手に尋ねた。
「様子を視ることが出来なくなったってどういう意味？　今まではしっかり視えてたの？」
「完全に視ることは出来ませんが、以前はおおよその流れと申しましょうか、八雲様の置かれた状況を中心に大局を視ることが出来ておりました。しかし、戦いの終わった日、影時間が明けてからは八雲様の存在を感知出来なくなってしまったのです」
　戦いの終わった日とは、湊が久遠の安寧と決着を付けた日のこと。その影時間が明けたときに何かあったかと考えると、湊がペルソナを失ったのと同時期だとチドリは気付く。
　エリザベスたちがどのような手法で現実世界の様子を見ていたのかは不明だが、仮に湊のペルソナを通じて現実の様子を窺っていたとすれば、能力消失が一応の原因だと見る事も出来た。
　とはいえ、チドリはその推測が間違いだと分かっている。なぜなら、湊のペルソナを通じて状況を理解していたとすれば、海外にいる間は離れた場所にある日本のことまでは分からないはずだからだ。
　以前、お互いに探知型の能力を持ったペルソナを有している事で、どこまで遠くを探る事が出来るのか湊と二人で話したことがある。
　そのとき、細かい部分まで見るなら集中力の関係で街一つくらいが限度だが、ただ風景を眺めるだけなら隣の県までいけるかもしれないとチドリは語った。
　対して湊は、その発言にどういう意図があったのかは当時分からなかったものの、
「まぁ、屋久島くらいまでなら少し集中すればいける」
　と信じられない事を言ってのけた。
　アイギスという少女と知り合った今はその言葉の意味を理解したけれど、理由が女だったとしても湊の索敵範囲は少しの集中でそれくらい。かなり集中して沖縄県辺りまでといったところだろう。
　東京から沖縄まではおよそ一五〇〇キロ離れている。
　細かい索敵ではなく、あくまでただの望遠能力としてだが、湊の索

敵範囲がそれくらいだと仮定すれば、三〇〇〇キロ以上も離れた場所にいる湊を介して日本の様子を視る事は不可能といえた。
　そんな風に、湊の能力の消失と相手が湊の様子を視れなくなった関係性について、チドリが顎に手を当てて考察していると、正面に立って薄い笑みを浮かべていたエリザベスが言葉を続けてくる。
「そちらの原因は分かっておりますので、チドリ様が気にされる必要はございません。それより、八雲様が力を取り戻す方法ですが、もしかすればという考えはあります」
　言ってチドリの前から離れるなり、エリザベスは上階への階段向かって右側まで進み。何やら本を開いて小さな声で呟いている。
　相手が何を言っているのかは聞き取れないが、少しすると本が光を放ち、彼女の前方の地面に魔法陣が展開した。
　光は段々と強さを増し、あまりの眩しさに目を開けていられなくなると、腹の底に響くような、ゴゴゴッ、という音が聞こえて光はいつの間にか治まっていた。
　相手は一体何をしていたのか、先ほどの音は何だったのか、そんな風に考えながら目を開けた先には、大きな白銀の扉が現れていた。
「この扉は〝ヘブンズ・ドア〟。タルタロスの地下階層である〝深層モナド〟への入り口です」
　扉から離れて戻ってきたエリザベスは、先ほどよりも笑みを深めて話しかけてくる。
「中には強力なシャドウたちがおりまして、適性値〝８８０００ｓｐ〟、レベルという言い方をすればレベル８８以上の者たちが彷徨いている危険なエリアです。現在のチドリ様は〝７８４０ｓｐ〟、四捨五入してもレベル１４と言ったところですから、その差から強さを読み取って頂けると思います」
　どうして相手が自分の適性値を知っているのかは今さら聞かない。桐条側に適性値を計測する機械があるのなら、湊にＥデヴァイスというオーバーテクノロジーの塊を授けた者らが、それと同じ機能を有した何かを持っていても不思議ではない。
　ただ、今の自分では勝てないような強力なシャドウらのいる階層へ

の入り口を、何故このタイミングで作ったのかが分からず、扉に数秒視線を送った後、チドリは訝しむようにエリザベスへ尋ねた。
「それで、そんな危ない場所のことを何で教えてくるの？」
「この中に八雲様の力を取り戻す効果を持ったアイテムが存在するかもしれないのです」
「っ!?」
相手の言葉にチドリは目を見開き驚愕する。
ベルベットルームの住人は湊を観察することが出来なくなった。故に、現在の状態もよく分かっていないとのことだが、原因が分からずとも治療出来るような魔法の品が存在するというのか。
流石にその言葉を素直に信じられるほどチドリは単純ではない。
そもそも、湊が失ったものを取り戻せればいいとは思っているが、それとは別にもう戦って欲しくないという想いもある。
湊はずっと頑張っていた。彼は自分の願いのためだからと、他者から見れば苦行に近いものを苦労ですらないと言ってこなしていた。
血と硝煙の臭いをさせて帰ってきたことや、実際に上着に穴が開いて血に染まっていたこともある。
彼は一見不死身だが、実際には痛覚もあれば死にもする。ただファルロスによって蘇生されているから現在も生きているだけだ。
そして、相手は己の身に何があっても弱音を吐いたりしない。
切られても、撃たれても、肉が炭化するほど焼けても、それ以上に辛い目を知っているから我慢出来ると、全てを自分の中に押し込めて外に出さないのだ。
身体の傷は治るから我慢するのはまだいい。もっとも、眼と腕を失って帰ってきたことから、ファルロスの蘇生や治療も万能ではないと判明したが今は置いておく。
問題は心の傷の方で、そちらは身体の傷と違って目に見えないので、本人が黙っていると誰も気付けない。
一緒に暮らす様になって六年近くになるが、湊が自分の過去や家族について話した事はほとんどない。
ベルベットルームの住人らから〝名切り〟という特殊な家の生ま

れと聞いたことで、だから何も話さなかったのかと思ったが、当時の湊は自分の生まれた家について何も知らなかったという。
では、どうして何も話さないのかと考えたとき、チドリは過去に言っていた湊の言葉を思い出した。
曰く、苦労話は誰の得にもならない。
確かに苦労話をしたところで、聞いた側は相手を労うなり同情するのが限度で、それ以上に生産的な話しには普通ならない。
しかし、本人は誰かに吐き出すことで楽になることもある。
チドリたち湊の周囲にいる人間は、そういった彼の抱える想いを理解したいと思っているし、共有することで負担を減らしたいと思っている。
けれど、自分の抱える負の感情を伝えるのは、相手の重荷になると本人は考えているらしく、未だに素直な相手の弱音を聞いた者はいなかった。
今回の退行も本当はそういった負の感情を溜めこみ過ぎた事で、湊の心がついに折れてしまったのではないかとチドリは思っている。
敵を滅ぼすまではイリスの敵討ちの復讐を原動力に動けていた。それが終わったことで、緊張の糸が切れるように、今まで溜め込んでいたものやイリスの死という哀しい現実に対する想いが溢れてきたのかもしれない。
普段は誰よりも強いように見えるが、本当の湊は誰よりも甘くて優しい戦いに向かない人間なのである。
ならば、湊が戦わずに済む現状はむしろ維持されるべきではないかとチドリは思った。
「……そのアイテムを手に入れて八雲が回復したとする。でも、それって八雲を戦う道具として見るのと同じことよね。八雲は本当は戦いたくないのに、無理矢理に戦場に戻すんですから」
「私はあの方に戦いを強要したことは一度もありませんが？　力がなければ何も守れない。失ってから悔やんでも遅い。そう考え、私どものところで鍛錬を積む様になったのは彼の意志です」
最初に湊にペルソナの扱いを教えようとしたのはイゴールたちだ

が、それはあまりに幼い年齢でペルソナに覚醒した湊を想ってのことだ。
そして、その後の戦い方の指導や実戦形式の鍛錬は本人から頼んできたことであり、客人が強くなる手助けをする者として、エリザベスたちも了承して行っていたのである。
本人が強く希望して始めたというのに、まるで自分たちが湊を使って何かしようとしていると思われるのは心外だ。
表情は薄い笑みのままだが、エリザベスははっきりと相手の言葉に反論した。
「じゃあ、貴女は八雲に何も望んでいないのね？」
けれど、反論を受けてもチドリは正面から相手を見据えて言葉を返す。
「私たちは八雲に頼りきりよ。自分たちでは出来ないから、最終的に八雲に頼る事しか出来ないの。どれだけ綺麗な言葉で繕っても、私たちが八雲を戦う道具として利用している事実は揺るがない。愛想を尽かされてもしょうがないって思ってる」
湊が桔梗組を去って行った日は、裏切られたと思って彼を責める言葉を吐いた。
幼い頃にしたといっても、相手が言ってきたことであり、彼からしてきた約束だったのだ。それを反故にされれば恨み言の一つでも言いたくなる。
だが、それ以前に自分が相手にしてきた事を思えば、愛想を尽かして出て行っても無理はないと思った。
大人たちは彼に技術を教えていたが、チドリは守られてばかりで自分からは何も与えていない。
自分が平和に暮らせることが彼にとっての幸せらしいが、それは相手の犠牲の上になりたっていることだ。
無関係の人間が巻き込まれることを嫌ってシャドウを倒し無気力症の拡大を防ぐ。これには、無気力症の人間が増えて社会機能が麻痺し、チドリたちの生活に影響が出る可能性の排除という裏の目的もある。

結局はチドリやアイギスのためであり、人々のためにやっていることで、そこに本人の幸せは含まれていない。
それらを分かっていても、チドリや事情を知る大人たちは湊を頼らねばならないのだから、重荷に感じてもう嫌だと湊が投げ出しても誰も責めることは出来ないし、無理に連れ戻すのは自分たちのエゴでしかない。
湊に対する想いは違っていても、そこに利己的な理由は絶対に含まれないと断言できるか。チドリは相手を見つめて問いかけた。
「……そうですね。八雲様に何も望んでいないと言えば嘘になります」
真剣な相手の視線を受け止め、エリザベスも少し考え込んでから静かに口を開く。
「私は、あの方が私を倒し得るほどまで成長することを望んでおります。そして、いつの日か敗北を齎し、自分が何者なのかという問いの答えを教えていただきたいのです」
「負けても答えは出ないかもしれないわよ」
「ええ。ですが、その敗北で何かを得られる予感がするのです」
敗北から何かを得ようとしているというよりは、湊に敗北することに意味があるようにエリザベスは語る。
確かに、相手は普通では絶対に勝てないほどの実力を持っているとチドリでも分かる。
ペルソナを失う直前の湊の実力を把握していないため、どちらが優れているのかは分からないが、それでも普通の人間では対抗し得ないことは確実だ。
そんな相手が〝普通ではない〟湊に目を付けるのはある意味当然で、純粋に相手を心配する想いもあるのだろうが、それと同時に自分の望みを叶えてくれる存在の復活も願っているのだろう。
エリザベスの話しを聞いて色々と思うところはある。けれど、過去に湊を利用しようとしていた汚い大人たちとは種類が違っていたので、願いを持つのは自由だとチドリはそれを否定したりはしなかった。

そして、しばらく考えた後、静かに口を開く。
「……貴女の話しはわかった。けど、自分では取りにいかないの？」
「色々と制限がございますので残念ながら」
「自分が何者か知りたいなら、自分の意思で規則や法則を無視した方がいいんじゃない？」
「そうですね。いつかはしてみたいものです」
ここで〝いつかは〟と言った事から、相手は今回の件で自分が動くつもりはないのだろう。
超常の存在でありながら、相手もまた何かに縛られているとは面倒なものだとチドリは溜め息を小さく吐く。
「はぁ……まぁ、話しはわかったわ。行くかどうかは分からないけど、覚えておく」
「向かわれる際はシャドウの力が最も弱まる新月をお選びください。それ以外の月齢では実力の不足している者では扉を開けられませんのでご注意を。また、目的のアイテムは金色の宝箱に入っている宝玉とのことですので、その点もご注意ください」
「ええ。それじゃあね」
簡単に挨拶を済ませるとチドリは背中を向けて去ってゆく。
エリザベスはその後ろ姿に礼をするが、元の姿勢に戻った彼女の顔には先ほどよりもどこか含みのある笑みが浮かんでいた。

1月19日（金）
影時間――タルタロス・エントランス
それから約一週間後の新月の夜。どこかやる気のないような態度を取っていたチドリは、今日もまた背中に刀入れの袋を装備した姿でタルタロスにやってきていた。
両手には鎖付きの手斧、腰には白い召喚器、応急処置のための道具が入ったポーチも持ってきているが、それがどれだけの役に立つのか疑問に思いながら、彼女は目の前に佇む白銀の扉の前にいた。
（色々と考えたけど、一度でも手に入れた力は八雲のものだから……）
力を取り戻せば彼を戦いに駆り出すことになるかもしれない。そ

れでも、様々な犠牲を払い。苦労して手に入れてきた力は彼自身のものだ。
自ら望んで力を捨てるのならともかく、如何なる理由であっても本人以外の何かが彼の努力の結晶を奪う事は許されない。
だからこそ、チドリは彼の力を取り戻すためにやってきた。今まで受けてきた恩に報いるために。
（出てくるシャドウは海外に行く前の湊に近いレベル。戦闘になれば確実に勝てない以上、索敵で敵を避けて宝箱を狙っていくしかない）
冷たい扉に手を触れてチドリは心を落ち着かせる。
エリザベスから聞いた話しが真実であれば、出てくるシャドウに自分の攻撃はほとんど効かないと見ていい。
海外に行く前の湊の適性値は〝９８，０００ｓｐ〟。ここにさらにワイルドや魔眼が加わるので湊の強さは数値通りとはいかないだろうが、モナドのシャドウはそれに近い強さを有していると思われ、チドリは遭遇すらも避けるべきだと考える。
強い敵は気配察知も得意な場合が多い。刈り取る者という最強のシャドウをチドリも知っているが、あいつは的確に自分たちの居場所を目指して進んで来るのだ。
メーディアの力で敵の居場所が分かるといっても、相手も同じようにチドリの居場所を感知できるとすれば、それのみでは何の優位性も得られない可能性すらあった。
（……それでも、少しでも可能性があるのなら）
タカヤたちに応援を頼もうかとも考えたが、大勢でいけばその分敵に気付かれる危険性も増す。
また、集団行動ではどうしても動きが鈍くなるので、チドリは生存率を十分考慮して敢えて単独で向かう事に決めた。
そうして、改めて決意を固めたチドリは重い扉を開き、強力なシャドウの蠢く迷宮へと足を踏み入れるのだった。

第百十四話　エリザベスの企み

影時間――深層モナド・２Ｆ

どこか冷たく不気味な雰囲気の廊下を、少女が一人赤髪を揺らしながら駆け抜ける。

壁や天井に靴音を反響させ、いまはまだ敵が傍にいないことを感知しながらチドリは目的の物を目指していた。

（相手の言ってたアイテムが入っているのは金色の宝箱。開けてみるまで中身が分からないのは面倒ね）

先ほどまでいた地下一階には金色の宝箱がなかったので素通りしてきたが、このフロアには金色の宝箱があるようなので、敵と遭遇しないような道を選びながら進んでゆく。

だが、通常の宝箱と金色の宝箱の区別はついても、その中身がなんであるかは実際に開けてみなければ分からない。

目的の宝玉でなければタイムロスにしかならず、敵が迫ってくることを考えると即座に離れなければならないが、次のフロアに続く階段への通路を塞がれてしまえば一巻の終わりだ。

視線の先に煌めく金色の宝箱を捉えながら、速度を緩めず接近したチドリは逃走経路について考えながら重い箱の蓋を開けた。

（……ハズレっ）

中に入っていたのは一振りの大太刀だった。この前も似たような物を見つけたが、状況が切迫しているだけあって、チドリは箱の中身に思わず舌打ちをする。

けれど、中身が湊の好きな刀剣類であったことで、チドリはそれを乱暴に掴むと走りながら背負っていた刀袋に入れてその場を離脱した。

索敵によれば敵がそれなりに近くまで来ている。相手の姿を確認していないので攻撃が効くかどうかも分からないが、危険な物には近付かないに限る。

チドリは比較的安全な道を選んで次のフロアへ続く階段へと急いだ。

――高級別荘地・桐条別宅

湊が屋敷に訪れてから約三週間が経った。

滞在中、相手の記憶と精神が幼稚園児のころまで退行しているため、英恵は見張る意味も込めて湊を自分と同じ寝室に寝かせていた。

いつ何があってもいいようにと簡易補整機の指輪を身に付けて、影時間にも対処できるようにしている。

しかし、湊は九時ごろに寝付くとそのまま朝まで寝続けるので、英恵も相手が眠って一時間もすれば自分も就寝していた。

けれど、その日、何やら眩い光を感じた英恵は、一体何事だと少し慌てて目を覚まし起き上がった。

「……八雲君？」

光の発生源に視線を送ると、空中に浮かぶ鍵を眺めている私服の湊が部屋の真ん中に立っていた。

黒いマフラーは部屋にある椅子の背もたれにかかったままだが、寝かし付けた時点ではパジャマを着ていたというのに、いつの間に着替えたというのか。

そんな疑問を頭に浮かべつつ、それよりも空中に浮いて青白い光を発している鍵が気になり、英恵は寝巻の上にストールを羽織りベッドに手を突き立ち上がると湊の元まで近付く。

「八雲君、一体どうしたの？　その鍵は何？」

「わかんない。でも、何かがくる」

鍵を見つめながら湊は答えるも、その場からは一歩も動かず。視線も鍵から離していない。

相手は何かの到来を感じ取っているようだが、英恵はその現実ではあり得ない光景から、もしや湊に引き寄せられてシャドウが現れるのではないかと考えてしまう。

今の湊に戦う力はない。腕と目を片方ずつ失った状態でも英恵よりは強いだろうが、ペルソナ能力を失って適性持ちになった時点で、他の適性持ちと同じようにシャドウにダメージを与えられなくなっている可能性があるのだ。

湊の元まで近付いた英恵は、後ろから湊に触れるとそのまま引っ張

り鍵から距離を取らせた。
すると、湊が鍵から距離を取るなり光の強さが増し出す。
初めは暗い部屋の中で鍵を中心に周辺が光っている程度だったが、強さを増した事で今では部屋中を照らすほどになっている。
あまりの強さに目を開けていられない英恵は、手をかざすことでなんとか薄目で鍵を見ようとした。
けれど、英恵が見ようとしている間に輝きは頂点に達し、白い光が部屋中を包んだ。
「一体何が……っ!?」
光が治まったことでようやく目を開けられるようになり、英恵は少々眩んでいた目で鍵のあった方を見つめて驚愕する。
直前までそこには光る鍵が浮いていただけだったというのに、光が治まってみると沈黙する鍵を手に持った女性が一人立っていたのだ。
分厚い本と鍵を手に持ち、青いスカートと帽子を身に付けた銀髪の女性は、自分が見られている事に気付くなり頭を下げて礼をしてくる。
「夜分遅くに失礼致します」
「貴女は誰？　どこから現れたの？」
相手は丁寧な仕草で挨拶をしてきたが、得体のしれない人間であることに代わりはない。
英恵は湊を守る様に傍に引き寄せつつ相手に素性を尋ねた。
尋ねられた相手は英恵の態度を特に気にしていないのか、下げていた頭を元の高さに戻すと涼やかな声で質問に答えてくる。
「私はエリザベスと申します。ペルソナや影時間などの事柄に関して八雲様に影ながらご協力させていただいておりました」
突然現れたエリザベスは言って手に持っていた鍵を湊に投げて渡す。片腕の湊はそれを苦も無くキャッチすると、鍵は青い光になって消えていった。
それらの光景から察すれば、確かに相手は湊を狙う賊ではなく影時間などの超常に関わる筋の人間のように思える。
しかし、今の湊は適性を持つだけの準一般人だ。以前どのような付

き合いをしていたかは分からないが、精神的に幼くなっている湊に相手が何をしようとしているのか不明なため、英恵は今の距離を保ちながら会話を続ける。
「エリザベスさんは一体何の用があってここへ来たのかしら？」
「本日は、八雲様の力を少々御貸し頂きたくお願いに上がりました」
「この子は力を失いました。もう戦うことは出来ません」
相手と湊の関係を聞いた時点で考えていた予感が見事に当たる。
今の湊はペルソナを失ったことで戦闘力だけでなく、治療や索敵に関する力も失っている。
具体的に何の力を借りようと思っていたのかは分からないが、記憶も含めて退行していることもあって、今の湊に助力を願う事はほぼ出来ない。
だが、結局相手のいう力はそのまま戦闘力だろうと当たりを付け、湊を再び戦いに巻き込みたくない英恵は相手の願いを拒んだ。
「なるほど。ですが、このままではチドリ様が死ぬことになりますが宜しいですか？」
すると、エリザベスは涼しい顔をしながらとんでもない事を言ってくる。
相手の表情からは嘘をついているようには思えない。ならば、本当にチドリの身に危険が迫っている可能性はある。
チドリは湊にとってとても大切な人だ。彼女を失えば湊の精神にも多大な影響があるだろう。
空間を超え数ヶ月前に聞こえた絶望に満ちた湊の叫びは、イリスという母親代わりの女性を亡くしたことが原因だという。
湊にとって母親とは特別な意味を持つが、今現在、最も大切に思っている少女を失えば湊の心は今度こそ完全に砕け散ってしまう。
今回のような退行などで済むはずもなく、自ら命を絶つ可能性すらあると英恵は危機感を覚えた。
しかし、いくらチドリに危険が迫っていたとしても、湊を再び戦いに向かわせたくはない。もう一度戦えるようになったとしても、今回の湊の変化を見てしまえば、やがて心が摩耗して精神の死を迎える未

来しか見えないのだ。
故に、英恵は湊を守るため、相手の言葉が真実である証拠はないと反論した。
「貴女の言葉が真実であると証明する事は出来ますか？　この子を戦いに巻き込むための虚言ではないと誓えますか？」
「私の言葉が嘘かどうかは八雲様が一番理解されていると思います。チドリ様の危機を察知しておられるはずですから」
言われて湊の方を向いてみれば、湊は先ほど光になって消えたはずの鍵を胸の前で握り締めて難しい顔をしている。
その顔からは困惑や不安といった感情を読み取る事が出来るが、もっとも占める割合が強いのは焦りのように思える。
まさか、本当にこの場にいながらチドリの危機を察知しているとでもいうのだろうか。様子のおかしい相手に英恵が声をかけようとしたその時、
「――――失礼します」
パンッ、と甲高い音が部屋に響いた。
突然の事に思考が停止し、一瞬何が起こったのか分からなかったが、いつの間にか移動していたエリザベスが湊の目の前で右手を振り抜いたポーズで立っていたことで、相手が湊の頬を張ったのだと理解する。
「なっ!?　貴女は一体何をっ」
とても大切な可愛い息子の顔を赤の他人が叩くなど許せる訳がない。頭に血が上るのを感じ英恵が思わず怒鳴りかけたところで、叩いた張本人が薄い笑みを浮かべた顔で口を開いた。
「目は覚めましたか？」
「……ああ、あまり良い目覚めではないがな」
青年の口から発された声から幼さが完全に消えている事に英恵は気付く。
声も口調も、百鬼八雲ではなく有里湊になってからの物だ。
「少々手荒い方法になった事はお詫びします。ですが、時間が押しているのでご勘弁を」

「全部お前のせいだろうに」
言って湊が上腕しかない右腕を横に突き出すと、そこに蠢く影が集まり黒い右腕を形成した。
力を失っていたはずの青年が、どうして異能を再び扱えるようになっているのか分からない。
だが、英恵は青年が再び戦いに赴くつもりだと察して、反射的に相手の左腕を掴んでいた。
「だ、駄目。せっかく戦いから離れられたのに、貴方はもう戦わなくていいのっ」
「……世話をしてもらっていた間の記憶はある。守ってくれてありがとう」
自分の腕を掴む英恵の手に、湊は黒い手を重ね優しい笑みを浮かべ感謝を述べる。
一歩間違えれば裏世界の住人に殺されていたかもしれず。桐条グループの人間に保護されて大人の言う事に素直に従い適性を詳しく検査されていた可能性だってあった。
前者は論外であり、後者も力を隠している以上は後々面倒に巻き込まれていたかもしれないので、そんな物とは無関係な平穏を過ごせたのは尽力してくれた英恵のおかげである。
身体への負担も大きい簡易補整機の指輪をつけ、影時間でも自分の身を案じて傍にいてくれた相手を湊は抱きしめた。
「大丈夫。俺は心が壊れていたんじゃない。肉体と共に精神にも最適化を施されていただけなんだ。目覚めるのが遅れたのは、多分、おばさんと一緒にいるのが心地良かったからだと思う。本当にありがとう。チドリを助けたら、ちゃんと話しにくるから待ってて欲しい」
言い終わると身体を離し、湊は左手に持っていた鍵に淡い光を纏わせ十字を切った。
英恵の目からは何も見えないが、湊とエリザベスには何かが見えているようで、鍵を空中で回すとまるで扉を開くように空中で手を動かしている。
すると、今まで目の前にいたはずの二人の姿が突然消えていなく

なってしまった。瞬きをしている間に消えたのではなく、本当に一瞬の内に消えてしまったのだ。
どういう理屈かは分からないが、それでも相手が何をしに向かったのかは分かっている。
胸中はとても複雑だが、一度決めたら誰に言われても止めない子だ。この頑固さは母親譲りだと考えつつ、英恵は深く息を吐き出すとベッドに腰掛けぽつりと溢す。
「……ばか」
親の心配も知らず、女の子を助けるために去って行った息子に対する愚痴は、誰もいない影時間の部屋に静かに響いて消えていった。

――深層モナド・４Ｆ
チドリは走っていた。背後からはガチャガチャと硬い鎧同士が擦れる音が追いかけてきており、その距離は徐々に近づいて来ている。
一つ上のフロアまでは上手く敵との遭遇を避けて探索出来ていたのだ。
しかし、このフロアに降りてきた場所に運悪く鎧武者のシャドウがいたことで、チドリは逃走を余儀なくされた。
自分の武器である鎖付きの斧は走るのに邪魔だからと、敵にぶつけるように同フロア途中の通路で捨ててきた。
もっとも、敵はそれを避けていたので何の時間稼ぎにもならなかったが、それでも同年代では湊とマリア以外に負けた事のない健脚により、何とか追いつかれずに済んでいる。
（刀を構えたままのくせに何て速さなのよっ）
十字路を鋭いコーナーリングで右に曲がりつつ内心で愚痴を吐くチドリ。
鎧武者は刀を両手で握ったまま走っている。湊のような存在自体が世界のバグである者以外、そんな状態では高速で走る事など出来ない。
相手はシャドウなので人間とは違うのかもしれないが、骨格は同じようなものなので、武器を構えずに走力を優先して追って来られれば

追いつかれているだろう。
それを思えばこの状況はむしろ喜ぶべきかもしれないが、追いつかれないよう曲がりながら逃げているせいで、チドリは他の敵への警戒が疎かになっていた。
全身の毛が逆立つような悪寒を感じ、チドリは前方に視線を向けるとそれは突如現れた。
（戦車型シャドウっ!?）
チドリの走っている通路の先に、戦車〝洗礼の砲座〟が砲身を向けた状態で現れる。
この通路に合流する通路を偶然徘徊していたのだろうが、現れるタイミングは最悪であるとしか言いようがない。
後ろからは鎧武者が迫っており、前方には戦車がいる場所まで横道が存在しない。
最低でも戦車が放つであろう砲弾をどうにかする必要がある上に、それをどうにかしても追いついた鎧武者の攻撃を躱さなければならないだろう。
覚悟を決めれば戦車の一撃くらいは耐えられるかと考えるが、爆発で吹き飛んだところを鎧武者に切りつけられる未来しか浮かばなかった。
（なら、戦車の攻撃をギリギリで躱すことで鎧武者にぶつけさせる）
通路は幸いなことにそれなりの幅がある。大きさのある戦車の脇をすり抜けるのは難しそうだが、その敵の放った砲弾ならば上手くやれば躱すことも出来るかもしれない。
重要なのはタイミングだ。躱すのが早ければ照準を調整されて直撃する。遅ければそもそも躱しきれない。
こういったタイミング合わせはチドリよりも攻撃の予兆を感知する湊の方が得意だが、今はどうかその力を貸して欲しいと心の中で祈った。
背後から鎧武者の接近を感じつつ、速度を落とさず視線だけはしっかりと敵の砲身に固定してチドリはタイミングを計る。
砲身に光が集まり奥が熱で赤くなり始めた。発射は間もなくだと

思われるが、その瞬間の爆音に怯む訳にはいかない。
砲弾に注意しつつも音に対する心の準備も終えたところで砲身の光が最高潮に達し、チドリは斜め前方に向かって転がる様に飛び込んだ。
直後、床や壁まで振動するほどの爆音が響き、先ほどまでチドリがいた場所を真っ赤な砲弾が通り過ぎていった。
（これで……!!）
飛び込んだ地点で受け身を取りながら、チドリは砲弾の向かった先に視線を向ける。
そこにはチドリを追ってきていた鎧武者がおり、今にも砲弾と接触すると思われた。
だが、
（回避したっ!?）
鎧武者のシャドウは兜の奥の赤い目が光ったかと思えば砲弾を寸前で回避した。
今まで逃げる事に集中し、ろくにアナライズも出来ていないチドリは知らないが、鎧武者のシャドウである剛毅〝天神の武者〟は「真・貫通見切り」という貫通属性の攻撃を回避し易くなるスキルを有していた。
敵はさらに打撃と斬撃に対する回避スキルを持っており、チドリが斧をぶつけるように投げ捨てたときも同じスキルの効果で回避出来たのだ。
しかし、敵がどのようなスキルを持っているかという情報よりも、一切のダメージを受けずに迫ってきている事実の方がチドリにとって今は重要だった。
受け身の状態からすぐに立ち上がり駆け出すが間に合わない。戦車は次弾の準備体勢に入り、鎧武者は後方七メートルほどまで追いついていた。
まだ湊を治すアイテムを手に入れていないというのに、自分はこんなところで終わるのか。
まだ何も相手に返せていない。エルゴ研で命を救われてから今日

まで自分が彼に何をしてやったというのか。
この命は彼に救われた。ならば、こんなところで死ぬことは出来ない。この命は彼のために使わねばならないのだ。
諦めかけていた心を奮い立たせ、チドリは右手で背中から刀を抜きながら、左手で引き抜いた召喚器を頭にあてると引き金を引いた。
「メーディア、砲弾にアギラオ！」
《ルルゥ！》
現れるなりメーディアは火球を前方に向けて放ち、遅れて発射された砲弾にぶつけて誘爆させる。
その成果を音と空気の振動で感じつつ、召喚器をガンベルトに素早く戻したチドリは両手で刀を構え振り返った。
敵はあと五メートル、刀を持っている者にすれば二歩で十分に射程圏内に入る距離だ。
（力も速度も相手が上。なら、狙えるのは理解の外の一撃っ）
助走を付けなければ非力な自分が強力なシャドウを仕留める事など出来ない。チドリは一歩踏み込むとその場で天井に向け跳躍した。
接近してきた敵は射程に収めた空中のチドリを斬り付けようと、鋭い振りで刀を切り上げてくる。
天井付近まで飛び上がり落下を始めていたチドリは、刀の来る方に自身の持つ刀を構え、お互いの刀が接触する瞬間になんと相手の刀を軸に横回転し受け流した。
自身の斬撃を受けても敵が刀を振り抜けると信じた上で、タイミングを計り身体を倒すセンスがなければ出来ない芸当だ。
とはいえ、ほとんど捨て身の策だったために太ももを僅かに切られ、長かった髪も肩甲骨辺りの長さになってしまった。
それでも被害は想定よりも軽微。敵が切り上げた体勢になっているこのチャンスを逃す訳にはいかないと、赤い髪が宙を舞うのも構わず着地したチドリは立ち上がる勢いも乗せた刺突を敵の頭部に向けて放った。
「はぁっ!!」
風斬り音をさせるほどの速度で真っ直ぐに繰り出された刺突は、兜

に守られていない敵の顔面を捉える。
先ほど赤い目が光っていた場所を直撃し、流石の相手も堪らなかったのか後方に吹き飛びながら、黒い靄を傷口より出していた。
しかし、今の自身に出せる最高の一撃で殺しきれなかった。その事実にチドリは表情を苦渋に歪ませ、間に合うかと思いつつ追撃のため敵に向かって駆ける。
相手はまだ起き上がっていない。これならばギリギリで同じ場所に斬撃を与えることが出来る。刀の柄を握り直したチドリがそう考え構えたとき、背後から絶望を知らせる爆音が響いた。
（マズイっ）
忘れているつもりはなかった。敵は二体いて自分はまだまだ危険な戦闘区域にいると分かっていた。
ならば、どうしてチドリは戦車が発射体勢に移っている事に気付けなかったのか。
それは、先ほどの第一射と第二射のインターバルが、そのまま相手の連射可能速度だと思ったのだ。
何せ一直線の道だ。撃てば基本的には当たるのだから、敵がまさか連射タイミングをずらしてくるとは思わない。
追撃は諦めることになるが防御か回避に動くべきか。ほぼ一瞬の内にチドリは思考する。
――――止まるな、前の敵だけを見ろ
だが、そのとき心の中で湊の声が聞こえた気がした。彼女はいまさら間に合わない事に気付いていた。発射前や発射の瞬間ならばまだ躱すことも出来るが、流石に放たれ背後から迫る攻撃を避けられるとは思わなかった。
だからこそ、チドリは内より聞こえた声に従い。せめてこの目の前のシャドウだけでも倒してみせると地面を強く蹴る。
鎧武者は地面に左手を突き立ち上がるモーションに入っていた。こちらが攻撃する前に牽制を放ってくる可能性を考慮し、狙うのは先の先を取れる最速の一撃。
自分の走る動きに合わせて腕を振るタイミングを計る。止まって

振れば敵の攻撃を受けるだろう。
先の先を取るのなら動きながら振り始め、敵と交わる瞬間には寝かせて構えた刃の切っ先を振り抜かねばならない。
「はぁぁっ!!」
立ち上がるために手をついていた敵の左側へ大きく踏み込んだ一歩が地につくまでに、振り始めていた刀が敵の頭部を捉える。
固い兜に当たり弾かれそうになるが、ここで振り抜けなければ立ち上がりかけた敵の反撃を受けるのは確実だ。
ここで仕留める。チドリはその想いで、踏み込んだ足を予定よりも外側に落とし、後ろに残していた足を踏み込んだ方へと僅かに捻ることで、テニスのバックハンドのように腰の回転を加えた。
腰の回転がさらに加わった事で止まりかけていた刀に威力が上乗せされ、先ほど突きを当てた箇所をなぞる様に切っ先が通り、敵はそのまま仰向けに倒れると黒い靄となって消えて行った。
(……やった)
強敵とは言え、たった一体のシャドウを倒しただけだが、何も出来ずに死ぬよりは何倍も良い。
最後に一仕事終えたチドリは、心の中に不思議な充足感が広がるのを感じながら、自分を屠る砲弾の到着を待った。
しかし、あと数メートルで砲弾がぶつかるというとき、ダンジョンを激しい揺れが襲った。
「な、何なの?」
激しい揺れに耐えきれず、地面へと倒れながら振り返ったチドリは信じられないものを見た。
「うおぉぉぉぉぉぉっ!!」
本来、タルタロスは階段を使うか転送装置を使わなければ移動が出来ない。ずっとそう考えていたし、それが当たり前だと他の者も思っているだろう。
だが、チドリはこの日、床や天井を打ち抜くというデタラメな移動法があることを知った。
このフロアの天井を崩落させながら雄叫びを上げて現れた湊は、フ

ロアを打ち抜いたであろう黒い右腕を着地直前に砲弾に向けた。
「――――アザゼル!!」
そして、『ＸＸ・審判』のカードを具現化するなり握り砕き、赤い光と渦巻く黒い欠片の中心から仮面を付けた逞しい体躯の青い天使が現れる。
迫っていた砲弾がその天使を直撃し轟音と爆発が巻き起こる。けれど、それらの煙が晴れたときには、両腕を身体の前で交差し防御姿勢を取っていた天使が無傷で佇んでいた。
「殺せ」
敵の攻撃を防いだ直後、凍てつくような冷めたい視線を相手に向けていた湊は静かに命ずる。
その命を全うするため防御姿勢を解くと、青い天使は戦車に向けて右手をかざし力の集束を始めた。
力が集束するにつれて輝きが増し、少し離れた場所に座りこんでいるチドリですら、周囲の空気が張り詰めてゆくのを感じる。
そして、目を焼くほど眩い光が通路を照らしたとき、
「アザゼル、メギドラオン!」
青年の声に呼応して集束していた力は解放された。
極光の奔流が通路を埋め尽くし、天井や床をその熱量によって融解させてゆく。進路上にいた戦車を呑み込んでも攻撃は止まらず、通路の最奥にでも到達したのか、今度は攻撃の当たった衝撃でフロア全体が揺れ始めた。
以前見たタナトスと無の銃を融合したウィオラケウスの一撃でも、ここまでの力は持っていなかった。
ならば、これが絆を捨てた湊の実力なのかと、圧倒的な力を見せた青年の背中がチドリにはとても遠く感じられた。
少しすると攻撃も徐々に弱まり。完全に消えたときには床や天井が融解したことで、その一帯を熱気と焦げ付いたような臭いが包む。
攻撃の余波である揺れも消えたことで立ち上がったチドリは、刀を袋の中にある鞘に仕舞いながら、背を向けている青年に歩み寄った。
「……元に戻ったの？」

「ああ。少し時間はかかったけど、力も取り戻した」
光になって消えてゆくアザゼルを見ながらそう話す湊は、近付いてきたチドリの方を見ようとしない。
ペルソナ能力と元の人格も取り戻したというのに見ないということは、やはり相手は自分から離れて行ったのかと、心に悲しみが広がり胸に痛みが走る。
相手の行動に暗い表情で俯いていたとき、落としていたチドリの視線に自分の方へ向いた彼のブーツが映った。
「……え？」
直後、チドリは優しい感触に包まれていた。
咄嗟の事で何が起こったのか分からなかったが、顔を僅かにあげると自分の目の前に彼の胸元が見える。
立った状態でこんな風に見るのは初めてだが、今の自分たちの身長差だとこうなってしまうのかと何とも不思議な気分になった。
そして、そんなどうでもいい思考が頭を過ぎってから、チドリはようやく自分が湊に抱きしめられている事を理解する。
離れて行ったと思っていた相手が今度は自分から寄って来た。随分と自分勝手なものだと怒りたい気持ちもあるが、それよりも今はこの懐かしい感触に身を委ねていたい。
チドリは目を閉じてその場で深く息を吸い込むと、自分も彼と同じように相手の背中に手を回して抱き返した。
「……嘘吐き」
ぽつりと呟き、深く息を吸い込むと湊の匂いがした。自分でやっていて変態かと思ってしまうが、リラックス出来てしまうのだからしょうがない。
自分を包む感触から優しさを感じ、ここにいるのは自分の知っている家族として共に暮らしていたときの湊だと理解する。
強く、強く、手を回し、どこにも行かぬようしっかりと相手の存在を確かめながら、顔をうずめてチドリは再度口を開く。
「どこにも行かないって言ったくせに出て行った」
「ごめん。でも、もう大丈夫だから」

海外に行く前は湊の目線の高さと自分の身長がほぼ同じくらいだった。だが、今では相手の肩の方が僅かに高い位置にあり、身長差ですっぽりと相手の胸に納まる形になってしまった。
失ったはずの右腕の感触が存在する事や、得体の知れないペルソナの気配を多数感じる事など、チドリは湊に訊きたい事が沢山あった。
だが、懐かしい相手の匂いに包まれた事で心は安らぎで満たされ、そんな事は全て後で聞けばいいと思ってしまう。
しばらくの間チドリはそうして味覚以外の五感で相手の存在を確かめ、ようやく少しは落ち着いたのか顔を上げて相手を見た。
そこにあったのはどこか影を背負いながらも優しい笑顔。短くなったチドリの髪を左手で梳きながら、最後に二回ほど頭の上にぽんぽんと手を置くと湊は抱擁を解き身体を離した。
チドリとしてはもう少し今のままでいて欲しかったが、身体を離した湊は新たなカードを具現化して握りつぶす。
「バアル・ペオル、チドリに治療を」
新たに呼び出したカードは『ＸＩ・運命』。
そして、アザゼルと同じ赤い光と黒い欠片に包まれ現れたのは、肩や背中の出た闇色のドレスを着た湊に似た雰囲気を持つ黒髪の美女、もとい、どう見ても鈴鹿御前だった。
《ふん、その程度ならば唾でもつけておけば治るだろうに》
「……ペルソナが喋った」
《喋って悪いか。八雲から離れろ、小娘が》
不機嫌そうな顔をしながらも、二人の前に現れた鈴鹿御前は回復魔法でチドリを治療する。鎧武者に切られて出来た太ももの傷はそれにより痕も残らず綺麗に治った。
未だに血は付いているが傷が完全に癒えたのならシャワーで洗えば綺麗になる。
よって、カグヤ以外にもこれだけ強力な回復スキルを持ったペルソナを所持していたのかと所持ペルソナについて驚きながら、チドリがバアル・ペオルと名を変えた洋装の鈴鹿御前と湊を交互に見ていれば、事情を察したらしい湊が苦笑を浮かべて答えてきた。

「こいつはバアル・ペオル。まぁ、普段は鈴鹿御前という名前だが、呼び出した時期によって能力と共に名と服装が変わると思ってくれたらいい」
「なんで話せるの？」
「自我を持っているからな。生前名は百鬼紫乃、俺の遠い祖母だ」
《やめろ、老婆のように言うな》
　湊と同じ輝くような金色の瞳を細めて鈴鹿御前は睨んでくる。
　見た目は確かに二十代中盤という若々しい美女のものだが、実年齢は生年から数えれば七百歳近い。加えて祖母というのも間違いではないのだが、本人はその響きが気に入らなかったようで、そんな呼び方はするなとさらに不機嫌になった。
「遠い祖母……確かに似てるけど、幽霊なの？」
《貴様のような小娘に話す事などありはせぬ。帰るぞ、八雲。影時間が終われば山姥どもが復活する。次の十六夜まで奴らがいるかと思うと気が滅入る》
「山姥って誰？」
　地面につきそうなほど長い艶髪に、同じ女であっても傍で見れば照れてしまうほどの色香と凛々しさを感じさせる美貌、さらに相手は高いヒールを履いているがそれを含まずとも一六〇台後半はあると思われる長身など、湊との共通点は複数確認出来た。
　だからこそ、相手が湊の先祖だと言われれば素直に納得できたのだが、どういう訳か苛々しているようなので、知らない言葉を発した本人ではなく湊に尋ねれば、湊は答える前に新しい『ＸＶ・悪魔』のカードを呼び出して握り砕いた。
「こい、ベリアル」
　新たに赤と黒の召喚光から呼び出されたペルソナは、炎の車輪をしたチャリオッツに乗った鎧の天使。
　表情等は兜で見えないが、今度のペルソナは自我持ちではないのか何も話しかけてこない。
　そんな事を思いつつ、敵もいない状態で何故ペルソナを呼んだのかチドリが疑問に思っていると、立ったままならば三、四人は乗れそう

なチャリオッツに鈴鹿御前が乗り込んだ。
湊もそれに続くようにチドリをエスコートしてきたので、どうやら移動の足として召喚したようだった。
三人が乗り込むとチャリオッツは僅かに浮かび上がりダンジョン内を進んでゆく。
途中でチドリが投げ捨てた鎖付きの斧を回収しつつ、通路の先に敵が現れてもベリアルが炎の槍を投げつけ殺してしまい。必死に走って逃げながら先を目指していた自分は何だったのかと思ってしまう。
しかし、今はそれよりもずっと知りたい事があったので、それらを訊いても良いのか相手に尋ねてみた。
「何も話してくれないの？」
「……色々と傷付けたし。迷惑もかけ過ぎた。いまさら話しても以前の関係には戻れないと思う」
「じゃあ、家族じゃないってのは本気だったの？」
「……半分は本気だった。けど、チドリたちが悪いんじゃない。単純に俺が家族になる事を怖がっていたんだ。俺が大切に想った人は傍にいると危険に巻き込まれたり、死んでしまう。だから、突き放せば死なずに済むと思った。力も失っていたし、守りきる自信がなかったんだ」
半分でも本気だったと言われたときには胸に痛みが走ったが、どこか泣きそうな表情で語られた後の言葉にチドリは思わず呆れてしまった。
どれだけ見た目や雰囲気が変わっても、相手の本質は自分の知る優しい彼のままで、青年は他の者を守ろうとして自分が悪者になることを選んだのだ。
辛いのなら最初から相談すればいいのに、変なところで不器用でこんな誰も救われない方法しか思い付かなかったのだろう。
話しを傍で聞いている鈴鹿御前も進路に視線を向けたまま溜め息を吐いているので、これは名切りの人間だからという訳ではなく、単純に百鬼八雲という個人の性格によるものらしい。
身内も呆れるほどとはどれだけ人との接し方に不器用なのだと、チ

ドリは改めて相手が普通からはずれていると思った。
「はぁ……不安なら最初から言えばいいじゃない。わざわざ人に嫌われようとして何がしたいのよ」
「君たちを安全な場所にいさせたかった」
『……はぁ』
湊の言葉を聞き、チドリと鈴鹿御前の溜め息が重なる。
相手の言葉に嘘は無く、本気で言っているからこそ質が悪いのだが、他人の事を考え過ぎていて一周回って馬鹿なのだろうとチドリは思う事にした。
「八雲、今回の事も含めて海外で貴方の身に何が起こったのか。それから今後はどうしようと思っているのか。それを皆に話して。理解されないとか、自分だけが分かっていればいいとか考えず。とりあえず、正直に話して」
「……特に面白い事なんてないぞ」
「私も含めて他の人は貴方の事を知りたいの。知っていれば知恵を貸す事も出来るし、悩みを共有出来るかもしれない」
「別に共有しようと思ってない」
「駄目。話さないと絶対に許さない。だけど、話したら少し許すかもしれない」
湊の左腕を掴んでチドリはジッと睨みつける。湊にすれば恨まれたままでも問題ないかもしれないが、それでも許される可能性があると聞けば少しは心も揺らぐだろう。
というのも、許す許さないというのは、結局は相手の心の問題だ。加害者がここにいる外道のように許されなくても別にいいと思っていても、被害者は何かしら心の整理をつけて相手を許せた方が楽だったりすることもある。
なので、被害者の負担を減らすという意味で、湊はこの提案に惹かれるはずだとチドリは読んでいた。
すると、同乗者の鈴鹿御前も湊の対人関係は良好であった方がいいと考えているのか、ここではチドリの側について援護してくる。
《八雲、面倒だから話しておけ。別に聞かせたところで何が減る訳で

もなし。どうせ此奴らも知ればそこで満足するじゃろう》
「……話した分だけ時間が減るだろ？」
《……まぁな》
「減る物もあるんじゃないか」
だが、何も減らないと訳ではないと湊も反論する。本人にすれば周囲と時の流れをずらせば大したロスでもないのだが、力を使う本人以外はそういった事に気付き辛かった。
時流操作に考えのいかない二人は、この男はやはり変なところで頑固で扱いづらい、と少々面倒に思いつつ次の作戦を考える。
揃って腕を組んでいる光景を興味なさげに見ていた湊は、転送装置が見えてきた事で話しを一度切り上げるべく口を開いた。
「……悩みを共有しようと思っていないと言っただけで、別に話さないとは言ってないんだけどな」
『っ!?』
そんな予想の斜め上を行く発言に二人は唖然としながら、転送装置に到着したことでチャリオッツから降りると、湊は鈴鹿御前とベリアルを消してしまい。起動した転送装置でエントランスへ戻ると桔梗組へと帰っていった。

第百十五話　再会から一夜明けて

１月２０日（土）
朝――桔梗組本部
湊の心が壊れ英恵の元にいると知って以降、チドリが毎日のようにタルタロスでシャドウ狩りを行っていることに桜も気付いていた。
戦う力を失っただけではなく、記憶と人格が退行してしまったことで戦えなくなってしまったのだ。
それを知った少女が彼の意志を継ぐように、人々を守るためシャドウ狩りという行動に出る気持ちは理解出来なくもない。
しかし、それは少女に平和な暮らしをして欲しいと願っていた湊の想いに反する行動でもある。
（ちーちゃんは帰ってるかしら……）
玄関にチドリの靴があるかを確認しに来た桜は、彼女が運動時に履いているスニーカーが通学用のローファーと並べて置かれているのを見てホッと息を吐く。
影時間の適性を持たず象徴化してしまう身なので、影時間に少女が何をしようと止める事は出来ない。
だが、湊の願いだからという理由だけでなく、危険な事をして欲しくないという純粋な親心からも、そろそろチドリに無茶な戦いを止めるように言わねばと桜は彼女の私室に向かった。
今は朝の六時を過ぎた頃だ。普段のチドリならばタルタロスに行った翌日でも朝の鍛錬に起きている頃である。
よって、相手を起こしてしまうという事は大して気にせず、部屋の前に着くと桜は扉を三回ノックした。
「ちーちゃん、起きてる？　少し話しがあるから入るよ？」
ノックして相手の返事を待つが反応がない。どういう事だと疑問に思いつつ耳を澄ますも、そもそも物音が聞こえて来なかった。
もしや、既に道場のいるのか。トイレや朝風呂に行っている可能性もあるが、とりあえず起きているか確認してから探しに行っても遅くはない。

「ちーちゃん、開けるよ？」
そう考えた桜はゆっくりレバータイプのドアノブを下げて扉を開けた。
「……え？」
扉を開けて部屋の中を見た桜は思わず目を丸くする。
まず目に入ったのはベッドの周りに脱ぎ散らかされたように散乱する衣服。少女の物に加えて男物のコートやらシャツやらが落ちており、これだけならば泥棒に荒らされたのかと疑う事も出来るのだが、どういう訳かゴミ箱には血のついたレギンスが放り込まれている。
まぁ、初潮を迎えている少女なので時期によってはレギンスに血が付くことも考えられなくはないのだが、そのまま視線をベッドに向けた桜はその可能性を脳から排除していた。
「な、なんで、みーくんが、というか二人とも……」
なんとそこには、英恵の元にいるはずの湊がチドリを抱きしめるようにして寝ていた。
どうして湊がいるのか分からないが、眼帯も付けている事から本人であるのは確実だ。色々と訊きたい事はあるけれど、仮に記憶やらが戻って帰って来たのならめでたい事である。
しかし、毛布から出ている湊の腕や肩を確認する限り、どうみても彼は服を着ていなかった。
年頃の少女と同じベッドで寝ることも問題ではあるものの、そこは家族としてずっと暮らしていたので目を瞑ろうと思うが、流石に裸でベッドに入るのはマナー違反である。
ただ、その彼の胸元で抱かれるように眠る少女の方も少しおかしい。長かった髪が肩甲骨辺りの長さになっているという疑問がまずあるが、こちらは大した問題ではないのでこの際置いておく。
それよりも問題と思われるのは少女が現在どのような服装であるかだ。
部屋に散乱している服を確認してゆくと、少女の物はトレーナー、その下に着るシャツ、スカート、ゴミ箱に放り込まれたレギンス、靴

下が落ちていた。
コートはしっかりとハンガーにかけられているので除外するとして、彼女が普段着ている物から先ほどの物を引いてゆくと下着しか残らないはずである。
まさか、男子の方は裸で、女子の方は下着姿で寝ているのではあるまいな。そう考え部屋に入ってゆくと、桜は相手を起こさないよう静かに二人を包む毛布を捲ってみた。
「……お赤飯炊かなきゃ」
二人の姿を確認した桜は素早く毛布を元通りにすると、どこか茫然とした様子で出て行く。
いつまでも可愛い子どもだと思っていたが、どうやら自分たちが思っていたよりもずっと大人になっていたようだ。
中学二年生では早過ぎるとも思いつつも、二人は桐条の被験体となり世間の子どもたちより精神的に成長している。
ならば、そういった事に興味を持って同意の上でしたのならしょうがないのかもしれない。
大人として、親として、ひっそりと子どもの成長を祝ってやろう。そう考え、父や渡瀬には話せないが、自分は応援しているという意味も込めて、桜は朝食にお赤飯を出すべく台所へと去って行った。
――チドリ私室
扉が閉まり桜の足音が遠ざかってゆく。その音に反応して目を覚ましたチドリはぼんやりとした頭で身体を起こした。
「……さむっ。ていうか、なんで裸なんだっけ？」
起き上がって毛布から出たチドリは、朝の冷たい空気に触れて身体を震わせる。
自分と隣に寝る男がどうして下着一枚で寝ているのかは不明だが、状況を確認するため腕で胸を隠しながら周囲を見渡した。
そして、寝ているといっても湊がいるので今のショーツ一枚という服装はまずいと考え、ベッドの下に落ちているシャツに包まれていたブラを拾い、湊に背中を向けた状態で身につけてから暖かい毛布の中に戻って改めて記憶を辿ってゆく。

（えっと、タルタロスからアザゼルで飛んで帰ってる途中で眠くなって、そのまま寝たらベッドが汚れるからって服を……脱いだからほとんど裸だったのか）

自分が服を着ていなかった理由を理解したチドリはまだ僅かに眠気が残っているのか、欠伸をしながら湊の腕の中に潜り込む。

昨夜、タルタロスを後にしたチドリは、アザゼルで飛んでいる湊にお姫様抱っこされながら帰路についた。

しかし、連日のシャドウ狩りにモナドでの戦闘で疲労がピークに達し、湊が戻ってきたことによる安堵と抱かれている心地良さに途中で眠りかけてしまう。

そのまま寝てはまずいと自分でも分かっていたので、湊に声をかけて貰いながらギリギリ眠らず家に到着出来たのだが、自分の部屋に着くなりベッドにダイブしかけた。

けれど、服は戦闘で汚れていたし、足を斬られたことでレギンスには血まで付いていた。そんな状態で寝る訳にはいかず、かといって風呂に入ることや着替えるのも面倒だったので、寝るときはブラを付けない事もあり、ぱぱっとショーツ一枚になってすぐにベッドに入ったのだ。

（あれ？　でも、なんで八雲まで裸なんだっけ？）

自分が裸の理由は理解した。しかし、どうして湊まで同じ下着一枚という状態で寝ているのか分からない。

相手に一緒に寝るように言った記憶はあるが、ほとんど寝呆けていたせいで記憶が曖昧だった。

何か手掛かりになる物はないか、湊に背を向け相手の腕を自分のお腹のところで組ませつつチドリは見渡す。

そして、落ちている衣服を見ていたときあることに気付いた。

（……あ、マフラーがない。そっか、服を入れてるマフラーをどっかに置いてきたから着替えがなかったんだ）

湊のトレードマークである黒いマフラーが部屋にはなかった。帰国した日には付けていたので、きっと英恵の屋敷に忘れてきたのだろう。

それに気付けば、チドリも昨日の曖昧な部分の記憶を僅かに思い出す事が出来た。
早く寝たかった自分は服を脱いでベッドに入るなり、湊にもさっさとベッドに入れと催促したが、マフラーを忘れて着替えのない相手はベッドが汚れるからと床に座って寝ようとした。
以前のままならば彼の部屋に服の置きがあったのだが、残念なことに海外生活中に十センチ以上も背が伸びた湊が着れる服など置いていない。
よって、ベッドを汚さぬために床で寝るのは間違っていないのだが、眠さで不機嫌になっていたチドリは同時に我儘にもなっていたため、自分と同じように汚れた服を脱いでおけばいいと言って行動を急かした。
勿論言われたところで、年頃の男女が下着一枚になった状態で同衾するのはまずい、と湊は拒否していたのだが、チドリの方が一向に譲らず、あまり五月蝿くしていると他の者が起きてしまうので、最後には湊の方が折れてこの状態に落ちついたのだ。
事情が分かれば何ということはない。学校に行く時間までまだまだ余裕のあるチドリは、寝返りを打って湊の方を向くと彼の胸にある大きな傷跡に手で触れる。
（……酷い傷跡。今までは全部治ってたのに、こんな状態になっても敵を殺そうとしたのね）
自分を抱いている彼の黒い右腕もそうだが、胸に出来た大きな傷跡もイリスを殺された復讐で負った怪我だ。
試しに相手の背中に手を回してみると、胸の傷跡からややずれた場所だけ手触りが異なっている。そこから推測するに、これは何か大きな物が斜めに貫通して出来た傷なのだろう。
ギリギリで心臓や背骨から外れてはいるが、あと僅かにずれていれば心臓か背骨を破壊されているところだ。
傷跡まで完全に治癒するファルロスの力が効いていない事を考えれば、この怪我を負ったときに心臓や背骨を負傷していれば死んでいた可能性もある。

そんな怪我を負ってでも復讐をなそうとするほど彼にとってイリスは特別で、失った絶望と殺された怒りや憎しみはさぞ深かったに違いない。
静かに眠っている湊の頬に触れながら、そこまで彼に想って貰えるイリスへ僅かに嫉妬している自分がいることにチドリは酷い自己嫌悪に陥る。
（……あ、そうだ）
故人に嫉妬する自分を浅ましいと思い。暗い気持ちになりかけていたとき、チドリは彼の耳に何もついていない事を思い出した。
相手はもう大丈夫と言っていたので、徐々にではあっても以前のような関係に戻れるのだろう。
ならば、その証しとして彼には付けていて貰わねばならない物がある。ベッドから抜け出したチドリは自分の机に向かい、鍵付きの小物入れからタンザナイトのピアスを取り出すと、ベッドに戻ってそれを彼の左耳につけた。
（……うん、格好良い）
自分が右耳に付けている物の対であるピアス。彼は絆を捨てるためにイリスの故郷から手紙でこれを送ってきた訳だが、帰ってきたのなら付けても構わないはずだ。
まだ孔が塞がりきっていなかったので、そこに通して付けてみると以前よりも似合っていてとても格好良く見える。
別にチドリが誇らしげにする事でもないのだが、そこは身内のそれという事でチドリにすれば何もおかしくないらしい。
そして、ピアスを付けた青年の姿に満足して頷いていたチドリは、昨日は風呂にも入っていないので学校に行く前に入浴を済ませてしまおうと準備を始める。
ベッドから出てまず部屋着に着替えると、散乱していた湊の服は畳んでベッドの傍に置き、自分の服は洗うために持っていく事にする。朝風呂にいってくるという書き置きを残し、寝ている青年をそのままにしてチドリは部屋を出てゆくのだった。

――月光館学園・2―B教室

チドリが入浴を済ませて部屋に戻ると湊は起きて着替えを済ませていた。

起きているのなら丁度良いので学校に一緒に行くかと尋ねれば、義手を付けるための手術などがあるので、すぐにヨーロッパの方に戻る予定だと言われた。

そういった話しを全くしていなかった事もあり、湊が既に義手の準備をしていた事は驚きだが、機械で出来ていようと彼に自由に動かせる右腕が戻るのはいい事である。

相手は自分たちに話しをすると約束はしたが日取りまでは決めていないので、細かい予定等を決めて来ないということは、湊は色々と作業を済ませてから皆に話すつもりなのだろう。

チドリは相手のそんな考えをある程度理解すると、湊が話す場を設けるつもりだと他の者に伝えておくと言っておいた。

それを聞いた湊は素直に礼を言い。お返しにとシャドウに切られて少し歪な長さになっていたチドリの髪を整えてくれた。

髪を切り終わった湊は朝食も食べずに去って行ったが、チドリとしては色々と事態が良い方向に動き出したことで、今日の朝食の米が赤飯だった事にも疑問を抱かず、普段よりも軽い足取りのような気分で登校してきた。

すると、風花の席で話していたゆかりが、チドリの姿を見るなり僅かに驚いた表情で話しかけてくる。

「うわっ、かなりバッサリいったね。心機一転とかそういう感じ？」

「……別にそういう訳じゃないわ。毛先が少し傷んでたから切ったの」

腰まであった髪が肩甲骨辺りの長さになれば誰だって驚く。ゆかりもその一人であり、切った理由は何か心境の変化かと睨んだのだが、まさかシャドウに切られたからなどと正直に言える訳もなく、毛先が傷んでいたなどともっともらしい理由を答えておいた。

そして、風花の前にある自分の席に向かい教科書類などを整理しているチドリに、新しい髪型を見ていた風花も笑顔で声をかけてくる。

「その長さもとっても似合ってて可愛いね。リボンは自分で結んだの？」
今のチドリはサイドから前に垂らしている髪に白いリボンを結んでいた。そちらはシャドウに切られていなかったが、そこだけ長いと歌舞伎の獅子のようになってしまうので、長さを調節して切った後、チドリの持っているヘアアクセの中から白いリボンを選んで湊が結んでくれたのだ。
自分なら適当にゴムやヘアピンで纏める程度なので、上から下までに数か所でクロスするようにして纏めるのは新鮮である。
相手も髪が長いので色んな結び方やアレンジを知っていたのかもしれないが、可愛らしくして貰って機嫌の良いチドリは、表情はいつも通りだが心持ち普段よりも高めの声で風花の問いに答えた。
「湊にやってもらった。髪を切ったのも湊よ」
「え、有里君帰って来たの？」
「昨日の夜中にフラッと帰って来た。まぁ、まだやる事があるからヨーロッパの方に戻るって、私が登校する前に家を出たけど」
行方不明になっていた湊が帰って来たと聞いて二人も驚いている。
彼女たちもかなり心配してくれていたので、連絡が取れる状態になったことを早速教える事が出来て良かったと内心思う。
本当は十二月の時点で帰国してはいたのだが、あのときは連絡を取れるような状態ではなかった。
けれど、今後は連絡すればちゃんと返事をするとも約束してくれたので、彼女たちが電話やメールをしても問題ないだろう。
そんな風にチドリが考えていると、呆れた表情で眉間にしわを寄せていたゆかりが携帯を取り出すなり操作をして耳に当てている。
まさか、発見の報を聞いた直後に相手に電話をかけているのだろうか。そう思って見ていると、電話が繋がったようでスピーカーから漏れた相手の声が聞こえてくる。
《……なんだ？》
「いや、なんだじゃなくてさ。私ら君に何回も電話とかメール送ったよね？　なんで無事なら連絡してこないの？」

《佐久間だけで着信が百件、メールが三百通をそれぞれ超えててちょっとしたホラーだったからな。今朝も定期連絡なのか電話がかかってきて電源を切ろうか悩んだ》
なるほど、確かにそれはちょっとしたホラーだ。同じように話しを聞いていた風花も微妙な表情を浮かべている事から、今回のことに関しては湊の感性は普通であると断言できる。
話しているゆかりも「お、おっふ……」と僅かに怯んでいるので、この場合は佐久間の行き過ぎた行動を後で咎めるべきだろう。
しかし、家族であるチドリたちや病みかけている佐久間はそうでも、他の部活メンバーらはそこまで電話やメールをしていないはずなので、そちらの方には連絡できたはずだとゆかりは言い返す。
「先生にはそうでも、他の人には空港から実家に戻る移動中にちょっとメールするとか出来るでしょ？」
《……お前のメールも百件を超えているんだが》
「そ、そんだけ心配してたのよ」
《無事なら連絡しなさいよ馬鹿、心配掛けるな馬鹿、大丈夫だよね？本当に連絡してよ馬鹿、などなど罵倒したいのか心配してくれているのかハッキリしない内容が多くてな。しかも、ほとんどがこんな一行程度の短文で数だけ多いから、正直佐久間と変わらないレベルで重い》
その言葉を聞いて思わずチドリと風花は視線を逸らした。
佐久間は意気消沈して笑わなくなっていたこともあり、部活メンバーに限らず危険な状態だと理解していた。
友人である櫛名田も彼女を心配して授業のないときに保健室で休ませたりしていたので、倒れたりしなかったのは彼女の元々の体力と櫛名田のフォローのおかげだろう。
だが、そんな周囲が気付くほど危険な状態だった女と同じレベルに重い行動をとっておきながら、普段通りの生活を送っていた少女の方が実は危険なのではないかとチドリたちは考える。
チドリと風花がサッと視線を逸らしたのを目撃した相手は、
「ちょっ、違うから！　誤解だから！」

と必死に言い繕っているものの、現実にメールを送られた者がいるのだから誤解でも何でもない。
以前からゆかりは佐久間にきつめの態度を取っていたが、実は単なる同族嫌悪だったのではないかと考えている間も、ゆかりと湊の会話は続いている。
《前から思っていたんだが、岳羽って俺のこと結構好きだろ》
「ハッ、自意識過剰なんじゃないの？」
言われたゆかりは小馬鹿にした表情で鼻で笑う。
過去に少し親切にした程度で自分に好かれていると勘違いし、両想いなら付き合わないかと告白してきた男子が何人もいたが、今の湊の発言はそれを軟派なノリにしたようなものだ。
そんな勘違い男はお断りだとバッサリ切り捨て、むしろ相手が自分を好きなのではないかとすら思えていた。
けれど、切り捨てられたはずの湊は尚も食い下がって質問をしてくる。
《なら、嫌いなのか？》
「いや、嫌いではないけどさ……」
嫌いかと言われれば嫌いではないと断言できる。
湊からは〝同級生〟や〝クラスメイト〟という関係だと言われているが、ゆかりの主観では他の男子と違ってはっきりと友達と言える相手なのだ。
美紀のように交友関係が広くないゆかりにすれば、そこまで仲の良い人物というのは希少である。
故に、眉尻を下げながらやや嘆息するように相手の言葉を否定した。
《じゃあ、好きか嫌いではどっちかはっきり言ってくれ》
「な、なんでそんな二択で言わないといけないのよ」
《岳羽の言葉で聞きたいんだ。好きなら好きと、嫌いなら死ねと言ってくれて構わない。どうか頼む》
選択肢が極端ではないかと考えている間に、湊から真剣な声で言われたゆかりは困惑しながらも照れから耳を赤くする。

傍で聞いていた風花も頬を染めているので、一般的な女子は湊からあんな風に尋ねられると恥ずかしく思うのだろう。
何やらモゴモゴ言いながら自分の髪の先に触れて悩んでいるゆかりを、椅子に座ったチドリが冷めた目で眺め続ける。
そもそも、相手の口調は真剣だったが別に本気で訊いている訳ではないだろう。本気で訊いていないのなら、適当に誤魔化すか答えたくないと言えばいいだけである。
サバサバとした性格をしていながら、意外と面倒見がよく義理固い性格であるゆかりだからこそ、真剣に訊かれたと思って悩んでいるようだが、まだまだ湊のことを分かっていないなとチドリは思った。
「あーもうっ！　一回しか言わないからね！」
そして、ついに答える決心をしたのか、ゆかりは悩みをふっ切るように大きな声を出す。
今のゆかりは悩んでいるときよりも目に力が宿っている。だが、耳だけでなく頬も朱に染まっており、先ほどまで片手持ちだったというのに携帯のマイク付近にもう片方の手を添えて、僅かに首を傾げている事もあってどことなく乙女チックな持ち方だ。
頬を染め、瞳を僅かに潤ませ、両手で携帯を持っていたゆかりは、若干言葉につまりつつもポツリと呟くように言葉を紡ぐ。
「そ、その、好き……だよ？」
《そうか。ちなみにこの会話は録音しているんだが、朝からよくそんな恥ずかしい台詞を吐けるな。逆に尊敬するぞ》
「っ!?　死ねっ!!」
真剣に悩んだ時間を返せ。そんな想いをぶつけるように怒鳴ったゆかりは、電源ボタンを押して数ヶ月ぶりの湊との通話を終えた。
もしも、面と向かって話していればボディブローをお見舞いしているところである。そんな風に怒りで目付きを鋭くさせ肩を上下させていたゆかりは、乙女の純情を弄んだ外道に対する愚痴を漏らした。
「さいっあく！　根性ねじ曲がってるどころの話じゃないっつーの！」
「あ、あはは、有里君も元気そうな感じみたいだね」

「余裕で元気でしょ。むしろ、なんかいけすかない感じが上がってるし」
以前からどことなく性格の悪さや腹黒さを感じていたが、海外生活を経てさらに質の悪さが上がったように感じる。
やはり湊は自分の天敵だと再認識し、苦笑している風花へゆかりは腕組みをしながら吐き捨てるように言った。
すると、そんな様子を傍らで見ていたチドリが、呆れた様子で言葉をぶつける。
「……貴女も貴女で難儀な性格だと思うけどね。好きか嫌いか尋ねられたなら簡単に答えればいいのに、今みたいに真剣に悩んでいると本気だと思われるわよ」
先ほどのやり取りでは湊の方が相手をからかっていたので、それに対して被害者が愚痴をこぼし、加害者の湊を非難しようが何も言うつもりはない。けれども、雑談の中の質問に本気で悩み過ぎではないかとチドリは指摘する。
ゆかりは以前から湊をそういう対象として見ていないと言っていた。相手のルックスの良さは認めるが、浮世離れした雰囲気を纏っているせいで恋愛対象として見ることが出来ないというのだ。
本人がそういうのであれば、チドリはさして部活メンバーの恋愛事情に興味がないので追求したりはしないが、先ほどのように真剣に悩んでいる場面を見ると嘘ではないかという疑念が強まっていた。
やる気の感じられない瞳でジッと見つめられながら、チドリよりそんな指摘を受けたゆかりは、先ほどの怒りも忘れてゲンナリした様子でバッサリと否定してくる。
「ないから。ないない、そういう対象じゃないっての」
「でもルックスは認めるんでしょ？」
「……まぁね。てか、久しぶりに会ってなんか変わってた？」
「それなりに、ね」
本当はそれなりどころではない。絶対に中学生ではないだろうというほど身長も伸び、顔付きも大人びていた。腕も目も片方失くしていたことや、身体に酷い傷跡が多数残っていることを含めれば変わり

すぎと言えなくもないだろう。
腕に関しては機械義手を用意しているらしく、また、それがなくとも一時的に人間の腕を生やす裏技もあるらしいので、何も知らない彼女たちに敢えて話す気はないが、目に関しては誤魔化しようがない。
それ故、チドリはどうせ会えば分かってしまうのだからと、湊が考えた連絡を取れなかった嘘の理由も含めて伝えておく事にした。
「……湊が連絡を取れなかった理由だけど、ずっと怪我の治療をしていたらしいわ。同行者が死んだって話したでしょ。あれのせいで湊も死ぬような怪我を負ったんだって」
「そ、そうなんだ。チドリちゃんが会ったときは包帯とかまだ巻いてた？」
「包帯は巻いてない。ただ、右眼がなくなって眼帯はしてた。胸や背中には大きな傷跡があったし、他にも火傷や切り傷に刺し傷、銃創とかの痕もあったから、シャツの下を見るときはそれなりに心の準備をしておいた方がいいわね」
一般人である少女たちにはちょっとした脅しになってしまうと考えながらも、チドリは彼の身体に残った戦いの痕について話す。
手術をすれば消せる物もあると思うが、そんな状態になってでも成し遂げようとした事があるという証しを、無関係な人間がどうこう言っていいとは思わない。
チドリや桜たちが言えば気を遣った湊は傷跡を消してしまうため、事情を知っている者たちは、服の下に隠れた彼の傷について何も言わないでいようと裏で密かに話し合っていた。
この二人や部活メンバーなどが湊の傷跡を目にする機会はほとんどないだろうが、チドリの話しを聞いて僅かに息を呑んでいるため、彼の傷跡については本人に言わないで欲しいと頼んでおく。
「……本人は怪我を気にしていないようだけど、同行者の死については複雑みたい。だから、仮に身体の傷跡を見ても何も言わないであげて」
「うん、わかった。といっても、有里君の身体を見ることってないと思うけどね。真田先輩と試合したときくらいしか見た記憶ないし」

女子だけではプールに行った事もあるが、湊は用事で一人だけいないこともあったので、服の下を見る機会はほとんどないだろう。
チドリの言葉に頷きながらも、苦笑してゆかりがそう話せば、怪我の話しを聞いて暗い表情になっていた風花も笑顔を取り戻し同意する。
「フフッ、そうだね。でも、右眼が見えないって事は日常生活とか不便だったりするのかな？　手伝う事があるなら何でも言って欲しいな」
「そこら辺は大丈夫よ。目を瞑っていても音と気配で黒板の板書も分かるんですもの」
「え、なにその無駄な超技能……」
「有里君って忍者か何かなのかな？」
存在自体がチートである青年の特技にゆかりと風花も流石にリアクションに困ったらしく、眉尻を下げて微妙な表情を作ると揃って嘆息した。
それから三人で話しているといい時間となり、チャイムがなってそれぞれが自分の席についていると、ここ数ヶ月のテンションの低さが嘘のような満面の笑みを浮かべた佐久間が教室に現れた。
事情を知っている者にすれば、ちょっとしたホラーだと思いながらも湊が電話に出たのだろうと簡単に推測でき、佐久間が元気になったことは喜ばしくとも、あの騒がしいキャラが復活したことには胸中で複雑な想いを抱くのだった。

第百十六話　変化した力

――ポロニアンモール・裏路地

早朝でまだ開館前のポロニアンモールに訪れた湊は、古美術〝眞宵堂〟の店主である栗原から受け取っていたスタッフ用のパスで中に入ると、ベルベットルームへ続く扉のある裏路地に来ていた。

しかし、扉を潜ろうと思っていたときにゆかりから電話が来たので、長話になっては面倒だからとからかう事で話しを短めに切り上げることに成功する。

ただし、ゆかりに言っていた通話を録音しているという話しは本当で、通話が切れた事を確認した湊は、携帯を少し操作すると一つの音声ファイルを作り、カーソルを合わせて再生ボタンを押した。

《そ、その、好き……だよ？》

再生ボタンを押すと携帯からは僅かに緊張した様子のゆかりの声が聞こえてくる。先ほど録音したばかりの通話音声から、この短時間で一部を切り取り音声ファイルに編集したらしい。

テスト再生を行って問題がない事を確認した湊は、そのファイルに『岳羽ゆかり―告白編―』というふざけたタイトルを付けて保存すると、ゆかり宛のメールに添付して昼休みに届くよう送信予約をかけておいた。

昼休みの食事中にメールを受け取ったゆかりは、きっとファイル名から嫌な予感をひしひしと感じつつも音量を最小にして再生するに違いない。

内容を確認した後は電話やメールで大量の文句が来る事が予想されるが、その頃には携帯の電源を落とせばいいので、湊は携帯をポケットに入れるとベルベットルームの扉を開いた。

――ベルベットルーム

ポロニアンモール側の扉を潜り、モノクロタイルの境道を進んだ先にあるもう一枚の扉を開き中へと入る。

すると、そこにはいつもと変わらぬ様子でベルベットルームの住人たちが待っていた。

昨夜もここを通ってタルタロスへ直接向かったが、そのときは話す暇もなかったので、今回の来訪が改めての再会となる。
テーブルの向こうで不気味な笑みを浮かべ椅子に座っている部屋の主も、客人が来た事に気付き向かいの席に座るよう手で指し勧めてきている。
しかし、そちらに視線を送った湊は椅子に座るかと思いきや、湊の鍵で自由に出せる扉へと向かい、そのまま扉の向こうに消えて行った。
『!?』
これには部屋の主だけでなく従者たちも僅かに驚くが、少し待っていると扉が開き黒いマフラーを巻いた湊が戻ってきた。
どうやら英恵の屋敷に忘れていたマフラーを取りに行っていたらしく。今度こそ再会の挨拶が出来ると、湊が椅子に座るのを確認してイゴールが口を開く。
「フフッ、お客人とこうして語らうのも随分と久しく感じますな。しばらく会わぬうちに随分と強くなられたご様子。新たな土地での経験はお客人に様々な変化を齎したようだ」
「……そうだな。得たもの、失ったもの、それらが釣り合っているかは分からないが、自分でもかなり変わったと思っている。能力の性質が変化したことは気付いているか？」
尋ねた湊は自分のペルソナを管理しているエリザベスに視線を向けるが、エリザベスは首を横に振って自分たちは何も分かっていないと答える。
彼女は左手で抱えていたペルソナ全書をテーブルに持ってくると、湊の所持ペルソナを登録しているページを開きみせてきた。
そこに書かれているのは以前と変わらぬ十四体のペルソナたち。半数は自我持ちであり、純粋なペルソナとは言えないかもしれないが、どれも強い力や変わった力を持った優秀な心の欠片だ。
けれど、そこに書かれているのは十四体だけで、昨夜、湊が呼び出したアザゼルやベリアルの名は存在していなかった。
ここベルベットルームでペルソナ合体をしたときだけでなく、現実

世界で力に目覚めて新たなペルソナを得ても自動で登録される設定なので、何故それが機能していないのかと考えたとき、ベルベットルームの住人は湊の存在を感知出来なくなった理由の影響を一度は疑った。

だが、もしもそうであれば対処しようがない。よって、彼女たちは湊が来たときに理由を知っていれば尋ねようと考えていたため、早速のチャンス到来にエリザベスが相手の黒い右手に自身の左手を重ねながら率直に尋ねた。

「八雲様は、昨夜のペルソナについて御存じなのですか？」

「……手を重ねてくる意味は分からないが、自分の扱うペルソナについては分かっている。あいつらは蛇神の欠片である負の心、つまりネガティブマインドのペルソナたちだ」

湊が答えれば部屋の主は色々と理解出来たようで、何度か頷いて確認するように言葉を返してくる。

「なるほど、性質の変化した状態でも力を使えるよう、強過ぎる蛇神の力を扱える規模に分けたのですな」

「そういう事だ。復讐を終えた日からペルソナを出せなくなったのは、あのときは蛇神しか使えない状態になっていたからだった。しかし、能力を使えないとまずいと思った事で、肉体と精神の最適化が行われている間、ずっとネガティブマインドのペルソナを扱えるように心の中で研究していたんだ」

七年前に起きた事故以前の記憶と人格になっていたのは、英恵たちが心配していた神降ろしの影響で心が壊れていたからではなく、名切りの血に目覚めた肉体や精神の変化が最終段階に入ったせいだった。

神降ろしは〝完全なるモノ〟である湊のためだけに数千年かけて作られたシステムだが、それとは別に名切りの血の覚醒にも段階がある。

まず、親から十四歳の誕生日に一族について聞かされ血が目覚めれば、血の記憶を視ながら自分の一族について理解し、血に宿る過去の名切りの存在をぼんやりとでも感じるようになる。

次に肉体の変化が起こり始め、筋肉だけでなく五感を司る器官に臓

器、電気信号のやり取りをする神経まで強化されるのだ。
そして、肉体の強化が順調に進めば、肉体や頭脳など能力を問わず力を持った伴侶となる者を探しながら、自分たちの力も子孫に伝え完全なるモノを生み出そうという精神の変化が起こり出す。
茨木童子や名切りの業が干渉するのはこの段階であり、血の目覚めが強ければ強いほど干渉を受けるので、覚醒する前から干渉を受けてきた湊の血の濃さはまさに別格であった。
このように肉体と精神の変化が徐々に起こる訳だが、最終段階として最適化というものが存在する。
途中の変化はいわば全機能を平均的に上げるだけで、力が強い者も足が速い者も各機能の強化される程度は一緒だった。
それを一気に仕上げるのが最適化で、力が強い者は他の部位より腕や背中の筋肉が発達し、足が速い者は足の筋肉と心肺機能がより強くなるという風に、動物たちが長い年月と数世代かけて行う進化を限定的にだが個人レベルで起こすのだ。
肉体の最適化が起きているときには同時に精神の最適化も始まり、そこでは各個人の才に合わせた記憶や技術の伝承が行われる。
力を持った名切りならば血から欲しい知識や技術を掬い上げて得ることが出来るが、そこまでの力を持った者は稀で、ほとんどは何かに特化した才能を持っている事が多かった。
精神の最適化は、そのような自分では血から情報を拾えない者への救済措置であり、彼らにとって必要な情報を精神世界で授けるのだ。
だが、名切りの最高傑作である青年は、集大成であるが故にその能力に特徴を持っていなかった。
力は強い、足は速い、手先は器用で、身体の柔軟性もある。つまり、湊は全能力特化ともいえる万能型なのだ。
飛騨の改造では速度特化で機能強化を施したが、あれは大人とも渡り合えるように子ども時代の能力を補強しただけで、肉体が成長すればそもそも補強など必要ないのである。
そうして、特化させるべき部位が見つからなかった肉体は、全能力に特化した肉体の性能をさらに向上させるという荒技に出た。

いくら健康状態が回復した湊であっても、頭の先から足の先まで全てが造り替えられれば、その多大な負担に脂汗を滲ませ意識を失うのも無理はない。
「他の名切りは部分的に強化するので筋肉痛に近いレベルで済むそうだが、俺の場合はフルチューンでな。完了まで時間が掛かったし、体力が回復してなかったら死んでいたところだ。まぁ、その分、精神の最適化では色々と出来たが」
肉体の最適化が始まった湊は、元々全ての情報を自由に引き出せる状態にあったことで、精神の最適化ではペルソナ能力が消失した原因を探す事にした。
しかし、己の内面世界で目を覚ました湊がいたのは、以前、茨木童子らと邂逅した空間とは異なる淀んだ空気の場所だった。
そこで湊は自分がネガティブマインド側にいることに気付けたが、少しすると鈴鹿御前が現れて湊がどのような状態にあるのかを教えてくれた。
彼女曰く、湊は今まで正の力の領域しか使っていなかったが、蛇神の力を自ら引き出したことで境界が曖昧になり、負の力の領域も使えるようになったのだとか。
けれど、蛇神の持つ力が強大過ぎることで平時の湊ではそれを引き出すことが出来ず、負の領域が主体となっているときはペルソナを使えなくなってしまうのだ。
「元を辿れば蛇神だから記録されないのは理解しましたが、能力の性質の変化周期などは把握しておられますか？」
「ああ、そこに載っているポジティブマインドのペルソナを使えるのは、新月の翌日から満月の日の影時間が終わるまで。反対にネガティブマインドのペルソナを使えるのは、満月の翌日から新月の影時間が終了するまでだ」
「つまり、月が満ち始め満月となるまでは正の力を、月が欠け始め新月となるまでは負の力を扱えるということですね。しかし、鈴鹿御前はどちらでも呼び出せていたようですが？」
「あいつは蛇骨を消そうと干渉した事で性質が混ざったらしい。ま、

イレギュラーな存在だ。他のペルソナたちは出したままにしない限りは、それぞれの期間にしか呼べない」
鈴鹿御前がネガティブマインド側にいた理由だが、湊が阿眞根になっていたとき蛇骨を消そうと干渉を試みた際、少しばかり蛇神の影響を受けて性質が混ざってしまったからしい。
湊の精神は正の領域がタナトスとアベルに分かれている湊本来のペルソナの領域で、負の領域は完全に蛇神のものである。
他のペルソナたちは湊の心から分かれたものなので、正の領域に間借りしている存在であり、名切りの業で精神に影響を受けていても性質までは混ざっていない。
よって、姿や能力に若干の変更は見られるが、性質の混ざった鈴鹿御前だけは彼女自身の人格を維持した状態でどちらでも呼び出せるようになっていた。
それぞれの期間が終わる影時間の時点で出しておけば、他のペルソナも期間を無視して顕現していられるが、一度消せば再び呼び出せる期間になるまで出せないので、そういった意味では鈴鹿御前しか安定した戦力がいないと捉える事も出来た。
時期で力がまるきり入れ替わるとは中々にイレギュラーな力の在り方だが、湊から説明を受けた住人達もちゃんと理解出来たようで、何度か頷いた後新たなサポートの仕方について考えている。
それを湊が眺めていると、まだ隣にいたエリザベスが重ねていた手を離し再び声をかけてきた。
「話しは理解しましたが、ネガティブマインドのペルソナを記録する方法はないのでしょうか。流石に何体のペルソナがいるのかも分からなければ、ペルソナを管理させていただいている身としてサポートのしようがありません」
「……そうだな。ペルソナ全書に空いているページはあるか？」
「新しいページを足す事は出来ますが」
言うなりエリザベスはポジティブマインドのペルソナの書かれたページに白金細工の栞を挿み、手袋をはめた手で栞をなぞるとペルソナ全書が光りに包まれ、そこに新しいページが追加された。

どういった技術なのかは不明だが、隣に新しいページが出来たのなら並べてみる事が出来て丁度良いだろう。
そんな風に考えて黒い右手を出した湊は、新しいページの上で拳を握り、そこに黒い雫を一滴落とした。
黒い雫がページに触れると落ちた箇所を中心に黒い炎がページ全体に走る。けれど、それは現実の炎ではないため、見ている者らも慌てず眺めていれば、炎は徐々に治まり最後には消えていった。
真新しい白紙だったページも、雫を落とされ走った炎が消えて見れば姿を変えており、そこにはしっかりと数体のペルソナの名が記されている。
ミックスレイドで同じような物を出す事は出来るが、今の湊の黒い腕は蛇神の影なので、その雫を落としたことで力自体を読み込ませたらしい。
これでお客人のペルソナを管理するという職務を全う出来そうだと、ペルソナ全書を手に持ったエリザベスも記された名を眺めながら口元に笑みを浮かべ元の位置に戻った。
「……見事に悪魔や堕天使ばかりね。別にネガティブマインドとはそういった物ではないはずなんだけど」
エリザベスが元の位置に戻ったことで、傍にいたマーガレットも彼女にペルソナ全書を見せてもらい内容を確認して口を開く。
そこに記されていたのは、
審判〝アザゼル〟、
悪魔〝マスティマ〟、
審判〝ルシファー〟、
女帝〝レヴィアタン〟、
審判〝サタン〟、
運命〝バアル・ペオル〟、
刑死者〝マモン〟、
悪魔〝ベルゼブブ〟、
戦車〝アスモデウス〟、
悪魔〝ベリアル〟、

審判〝グザファン〟、
永劫〝セルピヌス〟、
といった具合に神話や伝承において悪魔や堕天使と呼ばれる者ばかりであった。
アザゼルやベリアルに、ベルフェゴールの別名であるバアル・ペオルを呼び出していた時点で薄々予想は出来ていたようだが、よくもまぁこれだけ揃えてきたなと逆に感心してしまう。
また、ベリアルもバアル・ペオルもマーガレットたちの知る同名や同一存在のペルソナとは姿が異なっていたため、通常の方法では全書に記録できない事も含めてややこしくも思う。
そんな風に姉たちが見ていると、弟のテオドアも力の管理者の一人として確認しておこうと思ったのか、姉たちに「すみません」と一声かけて眺めている。
湊としてはアルカナと名前からでは能力や容姿までは伝わらないので、別にいくら見てもらっても構わないのだが、話しが進まないので早めに切り上げて欲しいと思っていたとき、少々不思議そうにテオドアが質問をしてきた。
「おや？　このセルピヌスは神話において善性存在として描かれているはずですが、どうして悪魔や堕天使の中に紛れているのですか？」
セルピヌスはカンヘルと呼ばれる龍人の天使の一柱である。元はアステカの神であったが、キリスト教を布教させる際に、現地の神と結び付けて創世神話を話すことで原住民にも受け入れられるようにしたことで、蝙蝠の羽根や鋭い爪という悪魔のような特徴を持ちながらもキリスト教の天使の一柱とされている。
よって、立場的には悪魔や堕天使とは正反対な存在であるはずだが、しっかりと記されていることで、どうしてセルピヌスがここに含まれているのかをテオドアは知りたがった。
「……マーガレットも言っていたが、別に負の感情だからといって悪魔や堕天使を揃えた訳じゃないんだ。力を分割していくとそこに記されたペルソナで固定されただけで、俺自身の意志はあまり反映されていない」

「なるほど、そういう事でしたか。因みに、この中に自我持ちのペルソナはいますか？」
「自我持ちは鈴鹿御前であるバアル・ペオルのみだ。しかし、自我持ちがいると何かあるのか？」
「ええ、我々は登録されているペルソナの複製体を呼べるのですが、八雲様に宿っている自我持ちだけは呼ぶ事が出来ないのです。なので、姿などを確認出来るのならこちらでもしておこうと思い質問致しました」
　力の管理者たちは正確に言えばペルソナ使いではない。彼女たちはペルソナ能力を持っておらず、自分自身ではペルソナを呼ぶ事は出来ない。
　それを補うのがペルソナ全書であり、彼女たちはペルソナ全書の力によってそこに記録されたペルソナを複製して呼び出す事が出来るのだ。
　しかし、湊の自我持ちのペルソナのような魂を持つ存在の複製体は作れない。姿かたちだけをコピーしたものも呼べないので、そもそも魂を宿した者は記録できないようだった。
　彼らの能力やペルソナ召喚の秘密を知らなかった湊としては、そういったシステムだったのかと感心したりもしたが、わざわざ客人のペルソナを確認しておくなどマメな性格だなとも思ってしまう。
「別に確認してもいいが大して面白くもないだろうに」
「いいえ。セルピヌスなど初めて目にするので非常に興味があります。試しに呼び出してみてもよろしいでしょうか？」
「……止めはしないが、でかいから気を付けろよ」
　湊の許可を得るとテオドアは嬉しそうに頷いて、エリザベスにセルピヌスの複製を頼んでいる。
　全書からカードを顕現させ、それをエリザベスが弟に渡している間、湊の方は何をしているかというと席を立って壁際まで移動していた。
　三姉弟はカードの複製などをしていて気付いていないが、湊が移動するのを見ていたイゴールが不思議そうに首を傾げていると、自分の

ペルソナ全書を取り出したテオドアが、本のページでカードを挟み砕いた。
「ゆきます。ペルソナッ！」
カードを砕いた瞬間、テオドアの足もとには赤と黒の召喚光が輝き、その頭上に力が集束してゆく。
一体どのようなペルソナが現れるのかと、どこか好奇心を抑え切れていない瞳でテオドアは見つめ、姉たちは少し離れた場所から眺めている。
けれど、いつまでたっても力の集束が終わらず、だんだんと集まる光が大きくなってきていることに途中で気付いたテオドアは、冷汗を掻き表情を強張らせて焦る。
「い、一体どうしたというのです？」
湊は確かにでかいから気を付けろと言っていた。それをテオドアも聞いてはいたが、湊の知り合いであるスミレという少女が、全長三十メートルという巨大なペルソナ〝テュポーン〟を持っていたことで、きっとそれぐらいの大きさなのだろうと思っていた。
だが、いま集まっている力はその規模を完全に超えてしまっている。
ベルベットルームは大きなエレベーターだが、流石に全長三十メートルを超えるような物が顕現出来るほどの広さはない。
かといって、自身のペルソナではないので、一度呼び出そうとしたものをキャンセルするも出来ず。ただその存在が現れるのを黙って見ているしかなかった。
そして、
《グオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――――――――ッ!!》
大気と共にベルベットルーム全体を振動させるほどの咆哮をあげてセルピヌスが現れる。
テオドアが見たのは、片膝を立てながら背中を丸めて座っていても天井に頭をぶつける巨人だ。
相手の脚と脚の間にいるため翼や尻尾がどこにあるのかは分から

ないが、黒い肌に、関節や胴体を群青の色の鎧のような外殻で覆い、鮫を思わせるような鋭い牙と黄色の目をした頭部が天井に頭をぶつけテオドアの方を向いていた。
この巨大過ぎるペルソナは明らかにこの部屋の積載重量の限界を超えている。先ほどから上昇速度が遅くなっているだけでなく、ミシミシと不穏な音が壁や天井からしている。
また、セルピヌスが現れた際の衝撃でイゴールが椅子やテーブルと共にどこかへ吹き飛んでしまった。
姉たちは幸いなことに立てていない方の脚の横にいて無事なようだが、明らかに怒りの表情を浮かべており、この事態を無事に治めても自分の命はないとテオドアは心の中で涙を流す。
部屋の耐久限界を迎える前に、どうやってこのペルソナを消そうかと考えたとき、部屋の隅に避難していた湊が突然駆け出し、跳躍したかと思えば振り被っていた黒い右腕を巨大化させてセルピヌスを殴り飛ばした。
殴られたセルピヌスは勢いのまま上を向いて消えてゆくが、部屋の耐久限界ギリギリの状態に数フロアを貫通出来るほどの威力を有した拳を叩き込んだことで、限界を迎えた天井が音を立てて崩れてくる。
様々な破片や歯車が落下しているのを眺め、どこかぼんやりとした瞳で上を向いたテオドアはぽつりと呟く。
「ほう、天井の向こうはこうなっていたのですね」
「言いたい事はそれだけかしら？」
「……申し訳ありませんでした」
ドスの利いた声を後ろからかけられ、テオドアは即座に振り返って頭を下げる。
すると、目から星が出るかと思うような衝撃を後頭部に受け、耐えられなかったテオドアは床の上に倒れ込む。
軽く脳震盪を起こしつつ上を見ると、ペルソナ全書を持ったマーガレットが肩を震わせているため、先ほどの衝撃はあれで殴られたのだろう。

そんな風にテオドアとマーガレットがやり取りをしている横では、ふきとばされた上に天井の瓦礫に埋まっていたイゴールを、湊とエリザベスが救出している。
本来なら大人の男性が数人がかりでやる作業も、腕力に自信のある二人ならば問題ないのか、数十キロの瓦礫を片手で持ち上げポイポイと投げ捨てる。
いくつもの瓦礫をどけてようやく救出されたイゴールは、汚れたスーツを手で払いながら礼をいった。
「どうもありがとうございます。お手数をおかけして申し訳ありませんでした。しかし、規格外のペルソナでしたな。召喚だけで適性値を十三万も消費するなど聞いた事もない」
「蛇神はその上をいくぞ。だが、天井が壊れても上昇を続けるんだな」
「フフッ、上から紐一本で吊り下げている訳ではございませんからな。天井の一部が崩れただけでは落下したりはしません」
壊れた天井の向こうにはまだまだ暗闇が広がっており、最上階に着くまでどれだけかかるのか分からない。
湊がエリザベスと並んで天井の先を眺めている間もマーガレットによるテオの折檻は続いており、イゴールは扉の一つから新しいテーブルと椅子を持ってきたので、瓦礫類を隅に積み上げて改めて席についた。
それを確認したマーガレットの方も折檻を中止したようで、テオドアに瓦礫の撤去と崩れた天井の修理、少し傷んだ壁や床の補修を命じて涼しい顔で戻ってくる。
「愚弟がお見苦しいところをお見せして、どうも申し訳ありませんでした」
「……いや、よく似てると思ったぞ。マーガレットたちもたまにポカするだろ」
「ミスして腕を失ったような貴方には言われたくないけどね。まぁいいわ。それで、行く前に依頼していた物は持ってきたのかしら？」
最初はベルベットルームの住人として振舞っていたマーガレットも、流石にベルベットルームを破壊するほどのミスをしたことはな

かったので、よく似ていると言われてムスッとしながら皮肉で返し、出立前に頼んだ依頼の品を見せてくれと頼む。
エリザベスとテオドアは何か面白い物があれば持ってきて欲しいということだったが、マーガレットはアンティークなタロットカードや懐中時計にミュージックボックスなどを所望していたはずだ。
その事を覚えていた湊は黒いマフラーに手を入れると、取りだした物をテーブルの上に置いた。
「これは百年ほど前のスイスで作られた懐中時計。こっちも同じ年代に作られたドイツ製のディスクオルゴール。そして、このタロットは年代はよく分からないがかなり希少な完品デッキらしい」
湊がテーブルに置いたのは美しい細工のなされた金色の懐中時計に、横幅五〇センチはありそうな大きなオルゴール、そして、イリスの夫の持ち物だったという形見のタロットカードだった。
言われた順に手に取って確認してゆくマーガレットは、湊の持ってきた物が確かな品であると理解した上で、自分の気に入る物かどうかを見ている。
幼い頃からいい品をみて育っているのだ。審美眼はかなり鍛えられており、骨董品屋のバイトでさらに磨きをかけていたのだから、アナライズもそこに加われば世界トップクラスの鑑定士にもなれる。
彼の経歴を知っているマーガレットもそこは疑っていないので、品物を念入りにチェックすると頷いてテーブルに置いた。
「いい品ね。依頼は見事達成よ。ただし、この品は受け取れないわ。ちゃんと自分で保管して頂戴」
そう言ってマーガレットが返してきたのはタロットカードだった。
依頼は達成という事だったが、何か気に入らない点でもあったのかと不思議に思いつつ、返されてはしょうがないとマフラーに片付ける。
その間に相手は懐中時計とオルゴールを翡翠の栞に仕舞いこみ、代わりに細長い木箱を取り出していたのでマーガレットに視線を向けて湊は理由を尋ねた。
「何か気に入らない点でもあったのか？　イリスはかなりの値打ち物

だと言っていたんだが」
「貴方、本当に理解していないの？」
「何をだ？」
かなりの年代物だが保存状態も良好でカード全てが揃っているため、古い占い師にでも見せれば一財産築けるような品だ。
同じレベルの物などオークションでもなかなかお目にかかれないというのに、何が気に入らなかったのかと、どこか哀れみの籠った瞳で見つめてくるマーガレットに湊は首を傾げて返す。
だが、そんなリアクションに対する相手の返答はとても深い溜め息だった。
「はぁ……あのね、それは依頼の品として受け取るには重すぎるのよ」
湊が本気で理解していないと分かったマーガレットは、呆れつつも子どもに言い聞かすようゆっくり丁寧に理由を話す。
「貴方の大切な人が本当に大切にしていた物なんでしょう？　なら、彼女の形見として貴方が持っていないと駄目じゃない」
「俺には誕生日プレゼントで貰った拳銃がある」
「それでもよ。納得いかないならその形見を生涯持ち続けろって依頼を出してあげるから、売ったり譲ったりしないで貴方が持っていなさい」
確かに湊は自分のためだけに作られた品をイリスから貰っていた。
ガンスミス・テッドが生涯を掛けて作ろうとした最高傑作であり、普通の人間では扱いきれない無茶な設計でありながら、装飾など細部までこだわり抜いた至高の逸品。
昔から温めていた設計図を流用したにもかかわらず、開発や調整など諸々込みで日本円にして七百万以上かかっており。二挺揃った状態の価値はガンマニアならば一千万出そうとする者もいるはずだ。
そんな大層な品を自分専用に作って貰ったのだから、受け取った湊が他にはいらないと言う気持ちも分からなくはない。
けれど、形見の品は一つでなくとも構わないはずだ。故に、マーガレットはわざわざ依頼として出してでも、タロットカードを手放さないようにと言い含めた。

湊も別に進んで手放そうとは思っていなかったので、そこまで言われれば言う通りにしようと頷けば、マーガレットはようやく話しを進められると小さく嘆息して先ほど取りだした木箱を湊の前に置いた。
「これが依頼の報酬よ。開けてみなさい」
置かれた木箱は細い縦長で、縦三十センチ横六センチほどと推測する。
雰囲気から察するにナイフかと期待して箱を開けてみれば、そこには紅緋色の管をした長煙管が入っていた。
途端、湊の表情が何だこれはと嫌そうなものに変わる。
未成年だからという最大の理由もあるが、それ以外にも、肉体を弄っているせいで、湊は酒も煙草も全く気分が高揚せず楽しめないという理由があった。
楽しめないのに貰ったところでゴミか箪笥の肥やしにしかならないため、手に取ったりもせず落胆したような興味のない表情を湊がしていると、長年の付き合いでそのリアクションも分かっていたのか、僅かに口元を怒りでひくつかせながらもマーガレットは品物の説明を始めた。
「それは煙管の形をしたマジックアイテムよ。その火皿に液体の物を注げば、温度はそのままに霧状というか煙化して楽しめるの。まぁ、喉用の加湿機に飴やガムとしての楽しむ機能がついたと考えたら分かり易いかしら」
「……入れた分だけ楽しめるのか？」
「そうよ。味に飽きたら吸い口を右に捻って逆さまにすれば火皿から液体のまま出せるわ。左に捻って吸えば液体で飲めるし。水筒代わりに使いなさいな」
マーガレットが渡して来た長煙管は、本来刻み煙草を詰める火皿から液体を注ぐことで、その飲み物を煙草を吸う感覚で楽しめるというものだ。
液体を注げるのは吸い口を真ん中にした状態のみで、吸い口を左右のどちらかに捻っていると入ることはない。
洗うときにはそのように吸い口を捻っておけばいいため、手入れも

簡単で保温機能もあることから地味に高性能なアイテムであった。
そういう事なら自分でも使えそうだと手に取り湊が眺めていると、いつの間にか扉を通じてどこかへ消えていたエリザベスが戻ってきて、テーブルの上にコーラの瓶を三本置いた。
彼女は湊がコーラや胡椒博士が好きだと知っているため、早速使えるように気を利かせたらしい。
「ありがとう。早速やってみる」
持って来てくれた事に礼をいい、湊がコーラの瓶に手を伸ばしかけたとき、何を思ったのかエリザベスは置かれた内の二本を手に取り、湊のマフラーに向けて手を伸ばした。
しかし、湊のマフラーには生き物やナマモノは入れられないようになっている。それはジュースなど飲み物類も例外ではなく、何を考えているのかと思っていれば、なんとエリザベスの手と一緒に瓶はマフラーの中へと入ってしまった。
これには湊だけでなく入れた本人も僅かに驚いており、しばらく無言で見つめ合っていると、手を抜いたエリザベスが興味深そうにしながら呟いた。
「どういう訳か機能拡張されていますね。どうやら食べ物などを入れられるようになったようです。空間内は時間凍結されますから、腐敗等食材の劣化の心配はないかと」
「……知らないで試したのか？」
「いいえ。私がお贈りしたときよりも光沢が増していましたので、何か変化があったのではと思い試してみたのです。元々は別世界の生物の革から出来ていますから、手を入れる際に纏っている力を吸収して成長したのやもしれません」
自分のマフラーがメイドイン異世界という情報よりも、革を加工した後でも力を吸収して成長すると聞いた衝撃の方が大きかった。
まさか、このまま成長を続ければ元の生物になったりはしないだろうなと思いつつ、湊は残っていたコーラの瓶を開けて、器用に中身を火皿の中に全て注いだ。
だが、そこで湊は違和感に気付く。いま自分が入れたのは１９０ｍ

1のコーラだ。対して、煙管の方は直径二センチもない全長三十センチ弱の細い管である。
これではどう頑張っても一瓶全てを注ぐ事など出来る筈がない。
そう思ってマーガレットに視線を向けると、作業を見ていた相手は湊の疑問に気付いたようで尋ねる前に答えてきた。
「それ、理屈は分からないけど数百リットルは入るわよ」
「試したのか？」
「ええ、私のは黒い管だけど、説明書がないから色々と試してみたの。本来の煙草として使えるかも試したけど、火皿が汚れただけで煙は吸えなかったから完全に飲み物専用ね。強度は大したもので、管でモナドのシャドウの攻撃を受けても無事だったわ。貴方がエリザベスから貰った短刀と同じレベルと言っていいかもしれない」
湊からすればどちらも製作者不明の品だが、マーガレットが上機嫌で僅かに得意げにしていることから、エリザベスから貰った短刀はかなりの名品で、それに匹敵する強度というのは途轍もないことらしい。
別に煙管で戦おうとは思っていなかったが、そこまで試しているのなら緊急時の防御に使えそうだと少々感心する。
容量の謎も解けたことで、煙管を咥えると早速注いだばかりのコーラの味を確かめてみる。
マーガレットが言っていた通り、飲み物は確かに霧状になっているのだが、炭酸の刺激らしき物も僅かに感じるため、コーラ味の飴やガムを食べているというより本物のコーラを飲んでいる感覚の方が近い。
確かにこれは水筒代わりにもなり得るなと思ったところで、湊は煙草のように口に含んだコーラの煙を吐いたらどうなるか気になった。
丁度いい事に座っている湊の隣にはまだエリザベスが立っている。もしも、吐いた煙もコーラのままならば、相手も味や匂いを感じるだろう。
通常であれば煙草の煙を顔に向かって吹きかけるなど失礼極まりないが、コーラならば問題ないはずと考え、湊は口に煙を含むとそれ

をエリザベスの顔に向かって吹きかけた。
吐いた直後、煙が白いことに少し驚いたが、まるで本物の煙草の煙のように広がると徐々に消えていった。
けれど、そこには煙草のような匂いはなく、むしろコーラの少し甘い匂いがしていたので、味まで伝わるかはともかく香りは伝わるのだろうと推測する。
ならば、味の方も伝わっているのだろうかと、湊はエリザベスに尋ねた。
「……どうだ？」
「お気持ちは嬉しいのですが、流石に姉や主の前で誘ってこられるのは如何な物かと」
「……ん？」
話しが噛み合わない事で湊は頭上に疑問符を浮かべる。
湊が訊いたのは味は分かったかという事だ。だというのに、エリザベスはマーガレットやイゴールの前で誘ってくるのはどうかと思うと返して来た。
別に湊は何かを誘ったつもりはないのだが、顔に煙を吹きかけるという行為がエリザベスには何かに誘ったという風に伝わったらしい。
意味は分からないが、マーガレットの方に視線を移すと汚物を見るような冷たい視線を向けて来ていたので、あまり宜しくない意味として取られる行動だったようだ。
知らなかったとはいえ誤解は早々に解くべきだと、湊はエリザベスがどういった意味として捉えたのかを尋ねる。
「すまない。吐いた煙でも味や匂いが伝わるかを訊きたかったんだが、顔に煙を吹きかけるというのは何か意味があるのか？」
「……なるほど、無自覚な行動でございましたか。では、順にお答えしますと、味も僅かに感じましたが、吹きかけられた煙ではほとんど匂いしか伝わりませんでした。ですが、顔がべたついたりはしていないので、煙になった飲み物を直接かけているのとはまた違っているようです」
言ってエリザベスは湊の左手を掴むとそのまま自分の頬に触れさ

せる。陶器のように美しい白い肌は、なめらかな手触りでありながら瑞々しい弾力があり、いつまでも触っていたいと思わせる不思議な魔力がある。
だが、相手は顔がコーラでべたついていないかを確認させただけなので、少しすると腕を離して言葉を続けた。
「では次に、煙草の煙を顔に吹きかけるという行為の意味ですが、相手を見下し挑発するという意味とは別に、夜のお誘いという意味もございます。分かり易く申しますと、〝今夜お前を抱く〟といった意味がございますので、異性は勿論の事、八雲様は同性に対しても行わない方が宜しいかと」
最後に同性に対してもやらない方が良いと言ったのは、湊の顔の作りが母親の菖蒲に凛々しさを加えたような、異性だけでなく同性までも魅了する美しいものだからだろう。
意味も知らずに挑発として顔に煙を吹きかけていれば、その隠された意味を知っている者の中に勘違いして襲ってくる者がいるかもしれない。
一般人だけでなく、裏の人間に襲われようと簡単に返り討ちに出来るが、相手は湊に誘われたと思って襲いかかっているので、そういった誤解から悲しい事件を起こさないために、湊は挑発だろうと煙を吹きかけたりしないと心に決めるのだった。
そうして、マーガレットから依頼の報酬を受け取った湊は、性質の変わった能力の説明なども終えた事で、シャロンたちの待つＥＰ社の研究所に向かう予定があると住人達に告げ、ベルベットルームを後にした。

第百十七話　特別開発室

――カペル・ＥＰ社研究所

カペルという国にあるＥＰ社所有の研究所。ソフィアやシャロンが現在そこにいると届いていたメールで確認した湊は、以前ヒストリアに貰って燃料を補給し直していた戦闘機で途中まで移動し、燃料が空になってからはタナトスで飛ぶ事でようやく到着する事が出来た。

連絡があれば空港まで迎えにゆくとも言ってくれたが、残念なことに湊は不法入国者である。

とりあえず、戦闘機や戦車を作っているＥＰ社の兵器開発工場の敷地に戦闘機を置いて、その場にいたスタッフに身分を明かして補給と整備を頼むとそのまま隣接した研究所に向かった。

「お待ちしておりました」

「……何故、ヒストリアがいる」

研究所に向かった湊を入り口で出迎えたのは、なんとＥＰ社と何の関係もないヒストリアだった。

一応、彼女の隣にはソフィアとシャロンもいるが、部外者を彷徨かせてよいのかと視線で尋ねれば、ソフィアが肩を竦めて首を横に振ってきた。

相手とは別に親しくないのでその反応の意味は読み取れないが、ヒストリアが関係者ではない事は理解出来る。

よって、無関係なら用はないと無視して他の二人に話しかける事にした。

「それで、俺の義手は出来ているか？」

「一月の頭には出来てたわよぉ。っていうか、あの機械の子の設計図なんて持ってるなら早いとこ言って欲しかったわ」

どことなく甘ったるい癖のある話し方をするシャロンは、義手は完全に出来上がっていると得意げに言ってくる。

彼女はアイギスの腕を修理しただけで構造やら作り方を理解したようだが、それでも設計図があった方が開発は捗るようで、ソフィアに持っていかせたのは正解だったと、退行前に動いておいた自分自身

を湊は褒めたくなった。
「桐条グループの最高機密だ。あれだけ人がいる場所でそれを持ってるなんて言える訳がない」
「ま、なんでもいいんだけどねぇ。とりあえず、こんな寒い場所で話すのもなんだし。奥に行きましょうか」
「わかった。ああ、ヒストリアは用がないなら帰れ。ここは子どもを遊ばせておく場所じゃない」
ばっさりと言い切り、湊は動物を追い払うように手を二回振る。
言われたヒストリアは驚いた顔をした直後、頬を膨らませて抗議の視線を向けてきた。
けれど、湊はさっさと手術をして義手を付けてしまいたいと思っているのだ。一歳しか違わないと言っても、相手が年下である事実は変わらないので、冷めた目で見つめて再び帰る様に告げる。
「子どもは学校の時間だろ。サボってないでちゃんと行ってこい」
「さぼってなんかいませんわ！　それに小狼様とソフィアさんもワタクシと一つ、二つしか違わないのなら学生でしょうに」
「わたくしは既に英国大学院を卒業しています」
「俺は留学扱いでまだ復学していないから登校義務はない」
ヒストリアも普段は学生をしているのだが、平日だと言うのに今日はさぼらずここに来ていると話す。
そんな訳がないだろうと思いつつも、ソフィアが自分は学生ではないと話したので、湊も復学するまではいくらでも休み放題であると返した。
すると、何故だかヒストリアよりもソフィアの方が目を見開いて驚いているが、相手は自分が学生だと知らなかったのかと湊は不思議に思った。
「……ソフィア。お前、俺が学生だと知らなかったのか？」
「え、ええ、年齢は聞いておりましたが、裏の仕事をしながら学校に通っていらしたんですか？」
「まぁ、職業の一つでしかないがな。裏の仕事をしつつ、中華料理店や骨董品屋のバイトをしたり、中学に通ったりしていたが、本業はやは

り仮面舞踏会の方だ」
こんな事を聞けばチドリや桜に英恵なども怒るだろうが、湊は学校よりも裏の仕事に重きを置いている。
よって、学校はチドリやゆかりの護衛に、桐条グループへの牽制がメインで、あとは息抜き程度にしか思っていない。
話を聞いていたソフィアも、学生であることやバイトの部分は不思議そうにしていたが、本業が裏の仕事ならそういった隠れ蓑もあり得ると判断したのか、先に行っていたシャロンを追うように歩き始めた。
その後ろには何故かヒストリアが続いているものの、相手もなかなか頑固なので、同年代のソフィアと一緒にいさせればウロチョロしないだろうと、追い払うことを諦め好きにさせることにした。
そして、病院に似た雰囲気の長い廊下を進んだ先で待っていたシャロンと合流し、特別開発室と英語で書かれた一室に案内された。
中は学校の教室よりも二回りほど広い部屋で、デスクが並んでいるゾーンの奥に、試作品のパーツや描きかけの設計図が見えた。
ここはシャロンに与えられた研究室だが、最後尾の湊が部屋に入った事を確認したシャロンは、部屋の奥にある倉庫と思われる扉の方に向かって大きな声で呼びかける。
「武多ー！　私らの上司が来たよー！」
「は、はい。いま行きます！」
部屋の奥から帰ってきたのは少し高めの男性の声で、その声の主の名前は武多というらしい。
シャロンが助手を一人連れていきたいと言っていたので、それが武多という男かと思っていれば、奥の部屋の物音が止んで何やら丸く巨大な物体が出てきた。
まるで、中に入って遊べるバルーンアトラクションのようだ、と相手を見た湊はそう思った。
身長は一七〇センチほどだろうが、湊が二人並んでもまだ相手の方が上回る横幅、平均サイズの眼鏡が随分と小さく見えてしまう肩にまで頬や下顎の贅肉が乗る頭部、胴体や頭部の肉付きのよさに対して一

般人とあまり変わらない太さの手足、何から何まで今まで出会った事のないタイプだと湊は未知との遭遇に驚いた。
明らかに体重は百キロ以上あると思われるが、重さを感じさせない軽快な足音で一同の前に現れた肉はハンカチで汗を拭いつつ笑顔で挨拶をしてきた。
「どうも、どうも。僕は先生の助手をしています武多（たけだ）　克平（かっぺい）と言います。国籍はアメリカですが、こう見えてちゃんと日本でも働ける医師免許も持っているのですぞ」
言いながら相手が渡してきた名刺を見ると、今まで〝タケダ〟という音だけで聞いていた湊は、その漢字を見て〝ブタ〟と読んでしまう。
しかし、特段気にすることでもなかったので、それをすぐに思考の端に追いやると、湊は随分と馴れ馴れしい話し方をしてきた相手を観察した。
そもそも、ソフィアと湊はＥＰ社で最も偉い人間であり、仮にそれを知らなかったとしても、相手の上司であるシャロンが自分たちの上司として紹介していた。
普通の企業では、相手の方が年下だったとしても、立場が上ならば先ずは敬語で接するのが普通だ。
武多はギリギリで敬語のようなもので話していたが、流石に〝ですぞ〟というふざけた語尾は如何なものかと思う。
そうして、しばらく観察していた湊は考えを纏めると、冷めた目で相手を見つめて口を開いた。
「……もう少し普通に喋ってくれ」
「おっふ、男性だと分かっているのに、美人過ぎて冷たい視線で見られるとゾクゾクと込み上げてくるものがありますな」
言って、ハァハァと危険な息遣いでやらしい笑みを浮かべる武多。
だが、対照的に湊の顔からは表情が完全に消えていた。
「ソフィア、こいつは除名しとけ」
「かしこまりました」
「ちょっ、マジすんませんしたー！」

湊は自分に対して劣情を催してくる男が嫌いだ。一応は社員というか部下なので手を出すのを堪えたが、こんな危ない人間を傍にはおいておけないとソフィアにクビにしておくよう告げる。
ソフィアの方も同じように感じていたらしく、すぐに了承して携帯を取り出してどこかへ連絡しかけると、武多は二人の脚元に飛び込みそのままジャンピング土下座をしてきた。
それを見下ろしている二人は視線だけで殺せそうなほど冷たい目をしているが、こんな馬鹿でも自分の助手だからと、傍に立っていたシャロンは嘆息しつつ二人に声を掛けた。
「申し訳ないけど、うちの助手はこういう奴なのよ。だけど、腕は確かだからさぁ。雑用としてでも置いといてくんない？」
「……こいつは俺の経歴を知ってるのか？」
「いや、上司としか話してないね。丁度良いや。武多、そこのボウヤってさぁ、綺麗な顔してるけど個人で一万人以上殺してる化け物なのよ。ほら、ＥＰ社幹部殺しって話題になったでしょ。あれ、犯人はこの子だから。てことで、止めはしないけどふざけるなら命懸けでやりなよぉ」
よく考えればあまり説明していなかった事を思い出し、シャロンが湊を殺人経験のある危険人物だと伝えれば、武多は湊らの前で正座しながら顔を青くして震えている。
新しい知り合いと友好を深めようとフランクに接した訳だが、実際は殺人鬼に挑発紛いの事をしていたのだから、真実を知ってしまえば如何に自分が危険な事をしていたかと恐怖を感じるのも無理はない。
しかし、これでお互いのことを改めて理解したので、武多も立ち上がって色々と説明に移ろうとしたとき、研究室の扉が勢いよく開いた。
「ちーっす、エマさんが来たっすよー」
軽いノリの挨拶と共に現れたのは、長く伸ばされたボサボサの茶髪をしたぽっちゃり体型の女性。
流石に武多ほどではないが、現れた女性もそれなりにふくよかでぶっちゃければ肥満と言える。

それを見た湊が、この研究室はシャロン以外ノリの軽い肥満しかいないのかと思っていると、研究室に自分の知らない人間がいる事に気付いたエマという女性は、太めの黒縁メガネの位置を手で直し口を開いてきた。
「おっと、こんな端っぺの研究室にリア充オーラたっぷりの美人さんが……お客さんっすか？」
「いや、私らの上司だよ。ってか、グループの総帥と最高顧問とベレスフォード財閥の御令嬢」
「どうもはじめまして。新設されたこの研究室に配属されたエマ・ビットマンと申します。このような研究室に貴方がたのようなお人が来られるとは思わず。随分とお見苦しいところをお見せしました。あまり片付いておりませんが、どうぞご自由に見ていってください」
エマ・ビットマンと名乗った女性は、湊たちがお偉いさんだと知るなり背筋を伸ばして丁寧な対応をしてきた。
既に先ほどの軽いノリを見ているので無駄なのだが、本人もそれは分かっているらしく、顔色は青く笑顔が引き攣っている。
しかし、上司にふざけた態度を見せて首を飛ばされる事を思えば、いくら無茶だと思っても挽回しようと必死にならずにはいられないのだろう。
エマが半分涙目になっているのを冷めた目で見ていた湊は、相手が泣きだす前に訊いておくかと質問をぶつけた。
「話し方はある程度我慢してやるから質問に答えろ。エマ、それと武多、お前ら今年でいくつだ？」
「え、えっとー、女性に歳を尋ねるのはマナー違反といいますか……い、いえ、嘘です。いま二十六で、今年で二十七です」
「僕は三十三になりますが……」
「ああ、ついでに言っておくと私は誕生日きたら二十八だから」
凍てつくような視線を向けられ怯えたように質問に答える二人に対し、シャロンは気にした様子もなく飄々と自分の年齢を教えてきた。
武多はシャロンの助手ということだったが、年齢はシャロンの方が

下なのかと、彼女たちについてよく知らない湊は、新たな情報を覚えておく事にする。
「俺は今年の四月で戸籍上は十五になる」
「え、社長その見た目でティーンなんすか？」
「社長は俺じゃなくてソフィアだ。それと俺は実年齢と肉体年齢にずれがあるから、そこら辺は放っておけ」
湊が若いのは見れば分かるが、どこか浮世離れした雰囲気と憂いを帯びた表情のせいで二十代に見えない事もない。
それだけに、相手が十代後半にすらなっていないと聞いたエマは目を丸くして驚いている。
言われた湊としては、肉体年齢は十八なので実年齢より老けて見られる事は理解していたが、流石にアラサーの女性に遠まわしに老けていると言われたくはない。
よって、年齢と見た目のずれについて軽く説明しつつ話しを続けた。
「俺よりも一回り以上年上なんだから、もう少し落ち着いた行動をとってくれ。シャロンには俺の義手製作を含めてかなり重要な仕事をしてもらうことになる。そんなとき、さっきみたいな態度で仕事をされては安心して任せられない」
『……すみません』
「別にお前らの個性を否定するつもりはない。公の場では勿論困るが、そういった口調の方が話し易いなら普段はそのままで構わないし。無茶な仕事を振る分、多少の事は大目にみる。だが、自分たちでもＴＰＯを弁えてセーブしてくれ」
『……はい』
会ったばかりの初対面の人間にこんな風に言われるのは嫌だろうが、湊の義手はこの研究室にいる人間を中心に今後も研究と開発を進めてゆくことになる。
湊の義手は戦闘にも使う事になるので、先ほどのような軽いノリばかり見せられると作った物の方にも不安を覚えてしまう。
故に、会ったばかりだからこそ、しっかりオンオフを切り替えるの

は勿論、円滑な人間関係のために空気を読んだ行動を心掛けて欲しいと釘を刺しておいた。
そんな様子を傍から眺めていたシャロンは、室長の自分が部下を諌めなくても、さらに上の上司がやってくれるなら任せておくかというスタンスなので、話しが終わって正座していたエマたちが立ち上がるのを確認して声を掛けてきた。
「話しは終わったぁ？　んじゃ、早速あんたの腕に接続部を付けるからさ。武多とエマは手術の用意始めておいて。結構時間かかるからヒストリアとソフィアはどっかでお茶してきな。終わったらまた呼んだげるから」
この研究室は現在は三人でやっているらしく、メンバーが揃ったなら手術が始められるとシャロンは楽しそうに準備を進め出す。
指示を受けた二人も、先ほどのことを挽回するチャンスだと張り切って動いているので、お互いに嫌な気分になりながらも言った意味はあったと感じ、湊は別室に移って義手の接続部を腕に取り付ける手術を受けるのだった。
＊＊＊
義手接続部の取り付け手術はおよそ三時間で終わった。
機械義手はまだまだ研究の進んでいない分野で、腕と繋げても上手く電気信号が伝わらなければ動いてくれない。
湊は仕事柄かなり無茶な使い方も予想されるので、後々新しい物と付け替えるにしても、ちゃんと神経と繋ぐ必要があるため作業はかなりの精密さを要求されるものとなった。
けれど、専門家のシャロンと助手を務めた二人のおかげで手術は無事成功し、手術室の隣の部屋へ移った湊は右腕の上腕に取り付けされた黒い接続部へリサイズされた三連装アルビオレを繋げた。
ガチャン、と繋がる音がしたとき、湊は文字通り神経を刺すような痛みを覚える。だが、それがしっかり神経が繋がった証しだと考え、ゆっくりと手を動かしてみた。
「……すごいな。普通の腕のようにラグもなく動く」
「いや、普通はリハビリっていうか訓練が必要なんだけどね。あんた

の身体は本当にどうなってんだか。ま、いいけどね。パーツに関しちゃ桐条の設計はかなり進んでたからさ。人が付けても生身同様に動かせるって本当にすごいよ。んで、重さとか動きとかに違和感はない？」
訓練もせずに最初から生身同様に動かしている湊をみて、シャロンは呆れつつも慣れてきたのか純粋に問題点がないか尋ねてきた。
言われた湊は、腕を振ったり拳を握ったり開いたりして、アイギスとお揃いの機械義手の感触を確かめてゆく。
ＥＰ社製の腕の正式な名前はＥＰ００〝三連装アルビオレ改〟らしいが、重要なのは性能であって、名前などあまり変な物でもなければ大して重要ではない。
日常生活や軽い運動程度の動きをしてみた湊は、続いてその場で逆立ちしてみたり、マフラーから取り出した棒を器用に回してみたり、腕にやや負担のかかる動きもしてみる。
結果、生身の腕との重さの違いは僅かに感じたが、普通に武器を振り回すだけならば問題ないと相手に答えた。
「生身より少し重く感じる。それを踏まえて動けば問題ない程度だが、ウエイトバランスで調整できるか？」
「最初は想定より少し重めにしておいたのよ。軽いと生身より動くと勘違いするかもしれないしね。それで、動きは割と良かったけど、戦闘には耐えられそう？」
「現段階じゃ何とも言えない。武器を振り回すのは出来そうだったが、敵を殴ったり、武器で攻撃を受けたときの負荷はやってみないと分からないんだ」
「んじゃ、サンドバッグを殴ってみようか。武多、持って来てー」
かなりの難手術を終えても疲れを見せず湊と話していたシャロンとは対照的に、武多とエマは椅子に座り込んで休んでいた。
だが、シャロンがサンドバッグを運んで来いと言った途端、武多はシュバッと素早く立ち上がって廊下に消えていく。
少しするとズリズリと音をさせて戻ってきて、シャロンと湊の前に懐中電灯を立てたような形状のサンドバッグを置いて再び椅子に休

みに向かった。
いまのやり取りだけでシャロンと武多の関係が分かった気がするが、義手の性能テストには何ら関係ないので、湊はこちらに集中することにする。
腰を落として握った右手を腰溜めに構え、左手は突き出す拳の向かう方向を定めるレールのように対象に向けた。
腕の引きに腰の回転、踏み込みの際の体重移動に対象のその先を打ち抜くという心構えなど、それら全てを調和させる事で最高の一撃は繰り出される。
呼吸で内功を練り上げながら湊は、目の前のサンドバッグを拳で貫いてしまおうと考えた。
火器モードでは銃身も兼ねる指が、強く握られるにつれギシギシと音を立て始める。傍らにいたシャロンはその音にも勿論気付いているが、あえてやらせてみようと止めたりしなかった。
そして、内功を練り上げた拳を限界まで握り締めた湊は、床板が割れるほどの震脚で地面を打ち鳴らし、目の前の空気を押し退けるように、ゴウッ、と音をさせて鋭い拳を突き出した。
「はぁっ!!」
人間が喰らえば一撃で死ぬであろう剛腕の一撃は、真っ直ぐ進みサンドバッグの表面を捉える。
途端、ドンッ、と腹の底に響くような重い音が部屋中に響き、サンドバッグが衝撃に押され動いてしまった。
しかし、深く踏み込んだことでサンドバッグを移動させながらも対象から離されていなかった拳は、次の瞬間に音を立てて崩壊していた。
「うぐっ!?」
殴り付けた拳から衝撃が伝わる様に、手首から肘にかけてのパーツもばらばらと崩れてゆく。
桐条の設計図に書かれていた物よりも新しい素材を使うことで強度は上がっているはずだったが、完璧にスクラップになってしまった義手だった物を見つめ、接続部から血を流し痛みで顔をしかめていた

湊は製作者にどういう事だと尋ねた。
「……おい、もろすぎないか。拳一発で壊れたぞ」
「うーん、あんたの打撃力に耐えきれなかったみたいね。こりゃ、素材の方から見直しかなぁ。まぁ、日常生活には使えるっぽいから、スペアの方でしばらくは過ごしておいてよ」
言って、湊の腕から壊れた義手を外して接続部の血を拭うと、シャロンは先ほどと全く同型のスペアをウエイトバランスのみ調整し湊の腕に取り付けた。
傷は取り付けられている間に治ったので構わないが、義手が耐えきれなかった衝撃は接続部を取り付けた生身の部分にもダメージとして伝わってしまう。
これでは戦闘用として使う事は出来ないと、期待を下回る性能に湊は落胆した。
「はぁ……生身の方が高性能とはな」
「そりゃ、あんただけだから。というか、問題は強度じゃなくて、衝撃吸収だとか衝撃を分散させる機構の方になるかもしれないわねぇ。いま壊れたのは殴った対象から返って来た衝撃に耐えきれなかった自壊だからさ。それを吸収なり分散させられればいくらかマシになると思うのよ」
研究用として床に散らばったパーツを回収して白いトレーに入れながら、シャロンは単純な強度だけを上げようとしていた事を反省する。
そもそも、湊が人間の限界を超えた威力の拳や蹴りを放っても骨が無事なのは、上手い具合に筋肉や関節で衝撃を吸収し、身体全体で吸収しきれなかった分を受け流しているからである。
そのクッション性を排除した状態で攻撃すれば、いくら湊でも衝撃に耐えきれずダメージを受けてしまう。
だが、戦闘にも耐え得る義手を作る上で、避けられない問題が初日から判明したのは僥倖だ。
研究のし甲斐があると上機嫌でトレーを置きに行ったシャロンが離れると、座っていた武多がサンドバッグを回収して元あった場所に

片付け、他の者たちが動いている事でエマも休憩を終えてやってきた。
「ってか、小狼さんって何で戦ってるんすか？　うちの最高顧問になったってことは、年収は一千万ドル超えますし。裏の仕事辞めて悠々自適なブルジョアライフを送ってた方が楽でしょうに」
「……まぁ、そこら辺の話しはまたしてやる。俺やソフィアの持っている異能も関係するんだが、開発に協力して貰う以上は話さない訳にはいかないからな」
　この研究室は湊の義手を初めとした、医療用義肢の開発を表の目的として設立されている。
　しかし、実際は戦闘用義手に新装備の開発、影時間の活動のサポート等を兼任させるつもりなので、医療用義肢はあくまで副産物として作られる物だ。
　室長のシャロンにはメインは自分の装備開発だと湊は伝えており、副産物だろうと高性能な義肢が作れるなら構わないと了解も貰っているが、ペルソナやシャドウなど影時間に関わる事についてはまだ説明していない。
　そこについては中途半端にしか力を理解していないソフィアにも説明する必要があるので、改めて説明の場を設けると返せばエマは「了解っす」と軽いノリで言った。
　期待していた性能には及ばなかったものの、日常の腕を新たに手に入れた湊は服を着直し、何度か未装填状態での空撃ちを試していると、シャロンと武多が戻ってきた。
「そっちのテストは終わってるわよ。ま、撃った衝撃が腕にどう伝わるかは分からないんだけどさぁ」
「後で試しておく。日常生活で使っていて気付いた点もまとめてレポートにしておくから、書類かデータファイルになるかは分からないが目を通しておいてくれ」
「りょうかーい。んで、話しは変わるんだけどさ。見せたいもんがあるからついて来てくんない？」
　おいでおいでと手招きをしてついて来いと言ったシャロンは、白衣

のポケットに手をいれたまま廊下へと出てゆく。
その後ろに湊が続き、さらに後ろを武多とエマがついて来るが、シャロンが案内したのは一番初めに訪れた研究室であった。
中に入ると暇そうにファッション雑誌を読んでいるソフィアと、そのソフィアに笑顔で話しかけているヒストリアが目に入る。
一応、雑誌を読みながらでも相槌を打っているので話しは聞いているようだが、歳が近いくせに別に仲良くするつもりはないのだなと、湊は不本意ながらソフィアが自分に似たタイプであると思った。
そんな似たパーソナリティを持った少女は、湊たちが帰ってきたことに気付くと、雑誌を閉じて湊を迎えた。
「手術は無事成功したとのことで、誠におめでとうございます」
「ああ、ありがとう。ＥＰ社の技術をいくつか使っているらしいが、まだ戦闘に使えるレベルではなかった。日本に場所を移してからも開発を進めてゆくから、そのつもりでいてくれ」
「はい、かしこまりました」
恭しく頭をさげてソフィアが了承している間に、研究員の三人は奥の部屋へと入って行った。
なので、湊はソフィアとヒストリアにもついて来いと合図を送り、シャロンらのいる部屋へ向かう。
最初に見せたい物があると言ったとき、シャロンは悪戯を思い付いた子どものような表情をしていた。
そこから推測するに、シャロンは何かを見せて自分を驚かせようとしているのだと湊は考える。
別に世界中のことを知っている訳ではないので、シャロンの性別が実は男だと言われればそれなりに驚く自信はあるが、研究室の奥の部屋でわざわざそんな話しはしないだろう。何より、彼女は歴とした女性だ。
ペルソナを使った索敵や、周囲の生物の心の声や記憶を読む読心能力を使えば、部屋に入る前でも相手が何を見せようとしているのか知る事は出来る。
だが、サプライズをそんな裏技で潰すなど無粋でしかないので、湊

は素直に部屋に入って中を見た。
「っ……これは、対シャドウ兵器……」
部屋に入った湊はそこに居た少女を目にして思わず唖然とする。
座っているのは普通の椅子だが、首の辺りにいくつものケーブルが繋がった黒いレオタード姿の少女が目を閉じて寝ていた。
髪の色や容姿はアイギスと異なっているが、肩や足の付け根など共通している部分もあることから、湊はその少女がここで作られた対シャドウ兵器だと一目で理解した。
普段は冷静な湊が驚きから言葉を失っているのを見て満足したのか、シャロンはエマと武多に少女とケーブルで繋がっているパソコンの操作を命じながら話しかけてくる。
「あんたから設計図を貰ったからさ。ノウハウを理解するために一台作ってみたんだよ。最初はあの機械の子と同じ容姿にしようと思ったんだけど、そんな事したらあんたに殺されそうだから、こういうのが上手い武多に自由にさせたんだよね」
眠っている少女を観察してみると、髪は少し癖のあるアッシュゴールドで肩甲骨辺りの長さ、身長はアイギスより少し高めで、プロポーションと言っていいのか分からないが、アイギスよりも胸が大きく腰の辺りはくびれていた。
機械なので触ったところで金属の固さと冷たさしか感じないだろうに、それでもここまでしっかりと美少女の造形を作る武多のこだわりには舌を巻くしかない。
けれど、ボディは作れても、ＯＳとも言える精神は宿す黄昏の羽根がないので、いくら飛騨の遺したデータで構築法が分かっていても作る事はできないはずだ。
その点はどうしたのか尋ねようと湊が口を開きかけたとき、眠っていた少女が目を覚まし、アイギスとは異なる深海色（ディープブルー）の瞳を向けてきた。
「おはようございます」
「……アイギスと同じ声だ」
「まぁ、中身はだいたい同じだからね。けど、作れたのはボディだけで

さ。今のだってパソコンで打ち込んだのを喋らせただけなのよ」
少しトーンは違っていたが、少女の声がアイギスそっくりだった事で湊は僅かに動揺する。
しかし、パソコンで打ち込んだメッセージを信号として送り、信号を受け取った事で少女は喋っただけだと残念そうに嘆息しながら話すシャロンの言葉を聞いて、あくまでもこの少女は対シャドウ兵装シリーズのボディを持った機械だと認識出来た。
湊にとってアイギスはとても特別な存在だ。ノウハウを知るためと言えど、それと同じ容姿の機械を作っていれば、湊は容赦なくシャロンらを殺していただろう。
故に、ざわついていた心をどうにか落ち付かせた湊は、声は同じでも目の前の存在は機械でありアイギスではないと自分に言い聞かせ、冷静な仮面を被りシャロンに話しかけた。
「名前はあるのか？」
「あんたの腕と一緒で桐条製のリメイクだからね、型式番号はＥＰ００—Ｘ１だよ。ただ、アイギス改なんて付けたら怒るだろ？」
「そうだな。とりあえず四肢は切り飛ばしていただろうな」
「だーから、どうせだしあんたに付けて貰おうと思ってたのよ。なんかいい名前なぁい？」
シャロンという人物は飄々とした性格で掴みどころがないように思えるが、意外と他人の事を想っており、湊が嫌がるだろう事を理解してしっかりと避けていた。
そういった能力を持った上で仕事の腕も確かな人材というのは大変貴重だ。彼女と自分を巡り合わせてくれたヒストリアに心の中で感謝しつつ、湊は起動された状態の少女を見つめて名前を考える。
目を開いたことで顔の印象もしっかり把握出来るようになったが、こちらの少女はアイギスよりも少し目付きがきつい。さらに全体的に色素が薄い様でロシア系にも見える。
だからと言ってロシア系の名前を付けたりはしないものの、そもそも、そこまで凝った名前を付ける必要があるのかと思った湊は、分かり易さを重視して名付ける事に決め、それを口にした。

「……イヴだ」
「イヴ？　んじゃ、あんたはアダム？」
「いや、俺は二人の息子のアベルだよ」
「人類最初の殺人の被害者ねぇ……ま、いいけどさ。それじゃあ、この子はＥＰ００―Ｘ１〝イヴ〟ってことでよろしくねん」
　復讐に憑かれ三ヶ月の間に一万人も殺した人間が、どうして人類最初の殺人の被害者を名乗ったのかは分からない。
　けれど、踏み込めば深みに嵌まると判断したシャロンは、思考を切り替えてＥＰ００―Ｘ１の設計図にイヴの名を書き足した。
　名前が決まった事を他の二人も伝えれば、パソコンを操作していた武多らもサムズアップで返して来たので、しっかりと把握したようである。
　そして、改めて名前の決まったＥＰ社製対シャドウ兵装シリーズの少女〝イヴ〟について、シャロンは説明を始めた。
「さっきも言ったけど、私らはイヴのボディしか作れてないのよ。ま、ボディ作るのも一苦労で、こんなのを七年前に作ってた桐条のテクノロジーには驚かされたんだけどさ。問題はＯＳの方で、精神を宿らせるとかっていう〝黄昏の羽根〟ってのが、どんだけ調べても分からなかったんだけど、あんた何か知ってる？」
「……ああ。いくつか所持しているし、俺の心臓のところにも入ってる。黄昏の羽根は現代科学では解明できないオーパーツだ」
　言ってマフラーに手を入れると、湊は青白く光る一枚の羽根を取り出した。
「情報と物質の両性質を持っていて、アイギスを初めとした人型の対シャドウ兵装シリーズは人格をインストールしたこれを全員内蔵していた」
「オーパーツと来たか。そんなの利用したロボットを作るとか桐条グループは未来に生きてるわねぇ。でさ、それってもらえたりする？」
「研究用に譲るのは構わないが人格の構築やインストールは認めない。それは命を作る事と同義だ。俺はそんなの許さない」
「なるほど。ま、そういう事ならしょうがないか」

真剣な瞳で人格構築は絶対にさせないと語る湊を見て、シャロンは口でいうより納得したように素直に諦める。
元々、彼女は色々な人間の助けになろうとして義肢の開発と研究をしていたのだ。それだけに、命を作るのと同義だと言われてしまえば、医者としても人としても諦めざるを得ない。
「けど、そしたら動作確認は当分見送りね。この子を動かせるような複雑なプログラムなんて作ってないし」
「……それは俺が代わりにやろう」
言うなり湊がイヴに手を向けると、今まで椅子に座っていたイヴが一人で立ち上がった。
これには製作者の三人は目を見開き、一体どうやったのだと視線で説明を求めてくる。
後ろにいる少女たちはよく分かっていないようだが、イヴは身体を動かすためのシステムが積まれていないのだ。
外部から電気信号を送れば、それによって話したり手を上げ下げするくらいは出来るが、立って歩いたり、話しながら手を動かすといった複雑な事は出来ない。
しかし、いま湊は手をかざすだけでイヴを立ち上がらせてしまった。もしや、遠隔操作装置が組み込まれていて、湊はそれを操作する方法を知っているのかと考えかけたとき、立ち上がったイヴは首のコードを引っこ抜いて、スタスタと湊たちの前まで移動するなり話しかけてきた。
「こんな感じですがどうでしょうか？」
「いや、こんな感じってあんた遠隔操作できんの？」
話しかけてきているのは正面にいるイヴだが、その内容を考えているのは斜め後ろにいる湊である。
そのせいで色々とややこしいが、ここは湊に話すのが正解だろうと振り返って尋ねれば、その質問には背後の少女が答えた。
「別に対シャドウ兵器だけという訳ではないですけど、内蔵している黄昏の羽根が特別なので機械を遠距離から支配出来るんです。ただ、出来るのは動作の支配なので、データに手を加えたりなどは出来ませ

んが」
「ややこしいから本人が喋ってくれる？」
「……まぁ、こんな感じに自由に動かせる。調べた感じだと特に問題もなさそうだ。今後は、俺の腕の開発と並行して対シャドウ兵器の研究も進めて欲しい。少しやりたい事があるんだ」
ここに来てからシャロンは毎日が楽しかった。七年前に完成していたという明らかにオーバーテクノロジーのデータを見た時点で、その裏に何か途轍もなく大きな物が広がっているとは思ったが、今までの義肢研究が何ステップも進んだのだ。
まだまだ実用化や一般に普及させるには多くの課題が残っているものの、それも湊の戦闘用の義手という馬鹿げた品を研究していれば解決出来そうな気がしている。
研究に多大な協力をしてくれるそんな青年が、何やら面白そうな事をまだ考えているというのなら乗らない手はない。湊のやりたい事とやらに興味を覚えたシャロンは悪戯っぽい笑みを浮かべて快諾した。
「やりたい事？　んー、なーんか面白そうな匂いがするわね。いいよ。んじゃ、概要が決まったら書類かデータで頂戴」
「ああ、感謝する」
「さぁて、それじゃあもう少しイヴの動作確認をさせてもらいましょうか。あんたってどれくらいの距離まで操作出来るの？」
「……調べた事はないが、動かし続けるなら離れて行っても問題ないはずだ」
「それじゃあ、服を着せて外を歩かせてみようか。実験開始ぃ」
楽しそうに実験の開始を宣言するシャロンを見ながら、湊はなんとかこのメンバーとも仕事を続けていけそうだと内心で安堵した。

第百十八話　語る青年

２月４日（日）
午前――桔梗組本部
まだまだ冬の厳しい寒さが続く二月初旬の日曜日。その日は、午前中から湊の事情を知る大人たちが桔梗組に集まり、話題の中心となる青年の到着を待っていた。
いま広間に集まっているのはこの家で暮らす四人と栗原、五代、ロゼッタの計七人だ。
湊が記憶を取り戻してチドリと再会したあの日、彼はチドリに言われて皆に自分が何をしようとしていたのかを話すと約束した。
ただし、湊の方にも今後に向けた準備が色々とあるので、話すのはそれらが一区切りついてからだと今日まで伸びていたのである。
先日ようやく時間が空きそうだと連絡が入り、他の者も問題なく集まれると答えたことで、今日の集まりが決まった。
そうして、昼には到着するという連絡を受けて早めに待っていた一同は、湊に話をして貰う前に、こちらでも彼に尋ねる事をある程度はまとめておこうという話になり、湊が今現在どのような力を持っているのかを把握する事が主題となった。
留学前の湊は、ペルソナ能力の他には魔眼とエールクロイツの機械支配くらいしか力を持っていなかった。生命力の譲渡なども異能には含まれるが、それを入れてもＥＰ社との戦争中に流れていた他人の心を読めるなどの噂の真偽も確かめておきたいところである。
故に、いくつかの異能を書いたチェックリストを用意し、それを湊に答えてもらう事で先ずは情報の整理をしようという流れでとりあえずは固まった。
チェックリストに書かれた内容には〝他者の思考を読める〟〝他者の感情を読める〟〝他者の記憶を読める〟など、一部重複しているようにも見える物もあるが、それは湊の能力の適応範囲を細かく知っておくためにわざとそうしたものだ。
この内容を考えた栗原は元々研究畑の人間なので、そういった細か

く条件を変えたアプローチで対象の全体像を把握する事が得意だった。
　五代やロゼッタは人を相手にした商売をしているので、相手から情報を引き出すことや反応から隠された思惑を読むのは得意だ。けれど、湊は一部の感情が死んでいるせいでそういった駆け引きが上手く働かない。
　よって、今日は隠さず真面目に話してくれることにはなっているが、自分の事を話すのが苦手な青年が相手であるため、その部分を補ってくれる栗原の役割はとても重要だった。
「……来たみたい」
　一同がチェックリストなどを作成し終えて待っていると、お茶を飲んでいたチドリがポツリと呟いた。
　他の者は言われるまで分からなかったが、彼女はペルソナの力で索敵の網を張り巡らせていたことで、ステルスをかけていなかった湊の接近を感知出来たらしい。
　出迎えるためにチドリが立ち上がると、それに続いて桜も立ち上がって他の者には待っていて欲しいと告げて玄関まで小さく駆けてゆく。
　玄関についたチドリと桜は少し外へ出るとき用の草履を履いて扉を開くと、外の石畳のところでベリアルのチャリオッツから桐条英恵と水智恵が降りるのを手伝っている青年の姿が目に入った。
　チャリオッツから降りる際に湊に手を借りている恵は、どこか疲れた様子でゲンナリしている。
「これは乗り物だったから少しマシですけど、八雲さんはよく支えも無しで怖がらずに空を飛べますね」
「そうね。生身では馬くらいしか乗った事がなかったから結構怖かったわ」
「……人は飛べるだろ？」
『飛べません』
　ベリアルの乗っているチャリオッツは、ベリアルの他に大人が三、四人くらい乗れるだけの広さがある。

後方の一ヶ所は乗り降りのために何もないが、側面には鳩尾ほどの高さのあるしっかりとした壁や掴める場所があるので、ペルソナで飛ぶ事になれていない者には優しい仕様だ。
けれど、昔から湊に運んで貰っていたチドリは慣れたものだが、一般人がいきなり雲よりも高い位置で飛ぶのは怖いだろう。
そして、昔から当たり前のように飛んでいた青年が不思議そうに首を傾げて話すと、即座に二人から突っ込まれているので、それを傍らで見ていた桜がクスクスと笑い声を漏らす。
その声でチドリたちが出迎えに来た事に気付いた英恵たちは、湊を除いて二人に挨拶をしてきた。
「ご無沙汰しております」
「どうもはじめまして。あの、アイギスと脳波リンクしていた水智恵といいます。今日は八雲さんに急に連れて来られたんですけど、私も来てよかったんですかね？」
「ようこそいらっしゃいました。今日はみーくんが話を聞かせたいと思っている人を呼んでいるから、誘ったという事は恵さんにも聞いてもらいたいってことだと思うの。だから、よければ聞いてあげてね」
英恵が来る事は湊に誘われたと本人から連絡があって知っていたが、アイギスが蠍の心臓と合流する際の功労者である恵を連れてくるとは聞いていなかったので、そういった事はちゃんと連絡しておいて欲しいと桜は困ったような苦笑を浮かべる。
だが、二人を連れてきた本人はいつに間にか姿を消しており、チャリオッツから降りたばかりの二人も辺りを見渡しているので、一体どこへ行ってしまったのだろうかと思った。
「あれ、みーくんは？」
「多分、ベルベットルームに行った」
どこへ行ったか知らないかと尋ねれば、その場で消えるのを見ていたチドリがベルベットルームに行ったはずだと答える。
他の契約者だと、ベルベットルームに行っている間は扉のある位置の前でぼーっとしているように見えるのだが、湊は完全に空間を行き来するため部屋に入るとその場で消えてしまうのだ。

契約者以外は扉を見る事も出来ないので、まさに人体消失マジック並みの驚きだが、最近の湊は時流操作で去っていくときにも同じように忽然と姿を消すため、完全にステルスをかけられれば気配を追えない事もあってチドリは小さくストレスを感じていた。
「……あ、出てきた。また女連れで」
湊がベルベットルームに行ったのであれば、現れるのは扉を出した位置からなので、四人がその場に残って少し待っていると、湊がエリザベスとマーガレットを伴って現れた。
前回は末っ子のテオドアも一緒だったので、どうして今回は連れてきていないのかという疑問はあるが、湊が女性ばかりを連れて来た事をチドリが指摘したため、他の三人は苦笑いを浮かべている。
「八雲、その二人で最後？　青いのってもう一人いなかった？」
「テオドアはベルベットルームの天井修理があるから欠席だ」
「天井の修理？　どんな場所か知らないけど、台風でも来て壊れたの？」
エリザベスらのいる場所がベルベットルームという名である事は知っている。
しかし、どのような場所かは具体的に聞いていないため、何があって天井が壊れたのか分からないチドリは首を傾げ尋ねた。
それに答えたのはエリザベスで、彼女は一歩近づいて他の者らにも礼をするとベルベットルームの構造を説明してくる。
「現在のベルベットルームは上昇する巨大なエレベーターとなっております。そして、天井が壊れた理由は、愚弟が八雲様の忠告も聞かずに室内でペルソナを召喚したからでございます」
「エレベーターの中で召喚するとか馬鹿じゃないの？」
巨大なエレベーターと聞いたチドリはデパートにあるような物を想像し、そんな場所でペルソナを呼べば壊れて当然だろうと呆れた顔をする。
これといって大型でもないメーディアですら人間よりも遥かに大きいのだ。重量に関しては空中に浮いているため判断し辛いが、それでも普通に立っているだけで天井に頭をぶつける事は容易に想像が

ついた。
「ええ、まったくその通り。そして、そのような事が起こった直後に、真顔で夜のお誘いをしてくる八雲様の胆力には大変驚かされました」
そんな微妙な食い違いの発生しているチドリの言葉を肯定したエリザベスだが、彼女はあろうことか当人以外は女性しかいない場所で、涼しい顔のまま爆弾発言を落としてくる。
いまの湊は幼さの完全に消えた、年齢性別問わず他者を魅了する妖しい美しさを持った青年の姿だ。その彼が浮世離れした美貌を持つエリザベスを誘ったとしても、両者のレベルはほとんど釣り合っているので違和感はない。
だが、実年齢は中学校に通う十四歳の少年なので、そんな子どもが年上の女性にそういった誘いをかけるのはどうなのだと、二人の女性は困った表情を浮かべ、二人の少女は真相はどうなのだとジッと湊を見てきている。
完全に油断していた状態で攻撃を喰らった湊は、どうしてエリザベスはわざと状況をかき回すのだと僅かに疲れた表情で、自分に集まっている視線の主たちに弁明した。
「煙草の煙を顔にかけただけだ。そんな意味があるなんて知らなかった」
言ってマフラーからマーガレットに貰った長煙管を取り出し、咥えて吸いこむと誰もいない方向に煙を吐いて見せる。
それを見ていた他の者は、湊の説明よりも彼が煙管を吸っている事の方が気になってしまったようで、英恵は湊の前まで進むと彼の咥えている煙管を取ろうとする。
しかし、取られる前に相手が届かないよう手に持って湊が上にあげた事で、英恵は少しムッとした顔で煙管を取る事を諦めつつも諌めてきた。
「八雲君、煙草なんて子どものうちから吸っては駄目よ。それに副流煙や呼出煙はとても身体に悪いの。だから、煙を吹きかけるなんて絶対にしては駄目。約束して頂戴」
「……マーガレット」

「自分で説明なさいよ……」
英恵は湊の身体の事を思って諌めてきている。だからこそ、それを無下には出来ないのだが、前提がそもそも間違っているため、湊は彼女たちへの説明を全てマーガレットに任せた。
傍で見ていただけで急に説明を丸投げされた彼女は、面倒そうな顔で無責任な青年に呆れている。
とはいえ、彼に煙管を渡したのは彼女なので、原因を作った者としての責任は負わねばならないかと溜め息を一つこぼしてから青年の保護者らに向き直った。
「まぁいいわ。この子が吸っているのは煙管型のマジックアイテムで煙草ではありません。刻み煙草を入れる火皿から飲み物を注ぐ事で、煙化したそれを楽しめるのです。ですから、喉用の加湿器に飴やガムのような味を楽しむ機能がついたものだと思ってくだされば分かり易いかと」
マーガレットが説明している間に、湊は自分が持っていた煙管をチドリに咥えさせ吸ってみろと促す。
急に口に入れられた事にチドリは少々怒っているようだが、本物の煙草でないなら吸ってみても問題ないはずと考え、僅かに躊躇うような素振りを見せながらも最後はゆっくり煙管を吸いこんだ。
しかし、吸いこんだチドリは途端に表情を険しくして湊にジトっとした視線を向ける。何かおかしな点でもあったかと、相手の口から抜いてすぐに自分で吸い直してみたが特に問題は感じられなかった。
一体何がお気に召さなかったのか不思議に思っていれば、チドリは少し口をもごもごさせてから話しかけてきた。
「……薬臭い。これ何味？」
「胡椒博士だ」
「それ嫌いだって前に言ったでしょ。変なの吸わせないでよ」
「……薬臭いといってもサルサパリラという植物由来の物なんだがな」
胡椒博士は湊が赤いパッケージのコーラと同じくらい愛飲している飲み物で、二十種類以上のフレーバーを混ぜて作られた独特な味わ

いのある知的飲料だ。
中にはチドリのように薬臭いと嫌う者もいるが、その原因はフレーバーの一つであるサルサパリラという植物の味と香りのせいである。
元々、薬としても使われている薬草なので、摂取量に気を付ければ身体にもいいのだが、匂いが苦手ならば仕方がない。
わざわざ布教しようとするほどジャンキーやフリークではないため、とりあえず煙草ではないと理解して貰えればそれでいいと湊は気にした様子もなく煙管を吸い続けた。
＊＊＊
いつまでも外で話している必要はないため、湊たちは家に入ると他の者たちが待っている広間に向かった。
そのとき部屋に入ってきた湊を見てロゼッタや栗原は目を丸くしていたが、色々と事情があって今の姿になったと告げれば他の者も話を聞く姿勢を見せたことで、桜がお茶の用意をすると湊はすぐにイリスの死の原因とその後どんな事をしていたのか話し始めた。
弔ってしばらくは廃人となって教会で保護されていたことや、そのときに血に目覚めて正式に名切りの名を継いだこと、イリスの復讐で久遠の安寧を滅ぼすと決めたが、その裏には無関係な人間を傷付ける者が現れないよう抑止になるつもりがあったことも全て話した。
名切りは既に滅んだはずの伝説ともいえる存在だ。それが再び蘇って裏界最大組織を相手に一人で立ちまわったことで、実際に恐れた者たちが活動を自粛してヨーロッパの方では一時的に犯罪率が低下していたというデータがある。
単純に復讐のみを狙っていると思っていた一同は、そのような状況になっても他人の事を考えている青年に思わず呆れたが、復讐や抑止の他にまだ隠された理由があったと湊は語った。
その隠された理由は、心を持った機械であるアイギスを人として認めさせる事。
初めは誰もその意味が分からなかったが、心を持っているのに兵器や機械として扱われ、心ない言葉をぶつけられる可能性を考えれば、彼女が他の者と同じように平和な世界で生きていくために、力で捻じ

伏せてでも現在の支配構造を変え、世界に彼女を〝人間〟だと認めさせる必要があると思ったそうだ。
けれど、それを本人に言ったら気持ちは受け取って貰えたが、そんな事をしては駄目だととても怒られたのでもうやるつもりはないという。
離れた場所からとはいえ、実際にアイギスと湊が戦っているのを見ていた五代と渡瀬は、本気の殺し合いにしか見えない二人の戦いがそんな極めて個人的な理由で行われていたと知り、なんとも微妙な表情で何も言えないでいる。
他の者たちも同様で、復讐という個人的な事情かと思えば人々のためであり、人々のためだと思えば結局は一人のためであったりと、どちらにしろ他者のためではあるがこの青年は結局チドリかアイギスの事が根幹にあるのだと思い知らされた。
そうして、アイギスに諭された後は目的を日本に帰る事に絞り、久遠の安寧を攻め落としたことで戦いを終える事は出来たが、今度は力の性質変化に最適化の時期が重なり精神と記憶が退行してしまう。
「あの退行は最適化といって、血に目覚めた者の才をより活かし易くするために、身体や精神を変革することで起こる現象だ。普通は筋肉痛や風邪でぼーっとする程度に身体や意識に影響が出るらしいが、俺は名切りの最高傑作だけあって全能力を強化するために一時的に省エネモードになったみたいだ」
退行しても英恵の屋敷を訪れる事が出来たのは、湊にとって百鬼の実家よりも母と度々訪れていた英恵の屋敷の方が思い出に残っていたことと、何かあれば英恵の元へ向かいなさいと母に言われていたからだ。
そもそも、百鬼家は湊を除けば既に全員死んでいるので親戚はいない。父方である九頭龍家は祖父母と伯父一家が存命であるが、祖父には頭を撫でて貰った記憶もないので、湊にすれば近所の人間よりも遠い存在である。
従姉の七歌とは遊んだり話したりもしていたけれど、英恵と七歌ではどっちの方が好きかと言われれば迷わず英恵と答えるくらい懐い

ていたため、結局、母の言う通りに英恵の元へ向かった。
「まぁ、その最適化も済んだから今のところは何の心配もないと思う。一応、次に記憶に問題が生じたときの事を考えてデジカメで色々と記録するようにし始めたが、特に何もなければただ趣味で写真を撮るだけになるな。とりあえず、俺からの話は以上だ」
実際に使い始めたらしいコンパクトデジタルカメラをマフラーから取り出して見せ、右隣に座っていたチドリを一枚撮ると湊は収納し直す。
急に撮られたので油断した表情の写真となったが、チドリが消させようとしてもマフラーの中身を取り出せるのは湊とベルベットルームの住人しかいない。
何も出来ない事でムスッとした表情で手を振りあげたチドリは、湊の右腕に向けてビンタを放った。
直後、部屋に金属に物がぶつかった甲高い音が響き、ビンタを放った少女が目に涙を滲ませ手を押さえて肩を震わせる。
他の者は、見ていたにもかかわらず一体何が起こったのか分からなかったようだが、湊が咥えていた煙管をテーブルに置き、上着を全て脱いで上半身を見せた事で事情を察した。
「……右腕は既に機械義手を付けてる。まだ研究を始めたばかりで性能は生身の俺に負けるが、硬度に関して普通の拳銃の弾を防げる。だから、攻撃するなら右腕以外にした方がいいぞ」
上腕二頭筋の中頃にある黒い接続部とその先にある機械の腕。装甲の表面はアイギスと同じように白い布張りになっており、黒と白のコントラストが余計に生身ではない事を意識させる。
本人はアイギスとお揃いであることに喜んでいるようだが、他の者にすれば生々しく残る身体の傷跡と共に青年の戦いが全て現実にあった事を証明するもので、どうやって受け止めるべきか悩んでしまう。
他の者が黙っている間に湊は服を着直したことで話は流れたが、もしも、いま湊が他の人間の思考を読んでいたら、自分たちが同情してしまっている事もばれているはずだと五代は思った。

湊は同情されても別に気にしない性格のようにも思えるが、思ってしまった側は相手に失礼な事をしたという自覚がある。
故に、湊の話が一段落したのであれば、ここらで能力についての話に移ろうと先ほどのチェックリストをテーブルの上に広げ提案した。
「話は変わるんだけど、小狼君が今どんな能力を持っているか教えて貰ってもいいかな？」
「……よくこんなのを作ったな」
咥えた煙管を口の動きで上下させて遊びながら、湊は手に取ったチェックリストを眺めて感心している。
聡い青年の事だ。ところどころ重複したような項目がある事で、その意味も理解しているだろう。
相手は自分のことを話さないので、誰も訊かなかったから話していなかったと後でなる場合も考えられる。
それを避けるため詳細に能力を把握しておこうと用意したのだが、湊は一頻り目を通すなり、チェックリストを五代の方へ返してきた。
「悪いけど能力に関してはあまり教える気がない」
「それは僕たちを信用していないからかな？　それとも、君の情報を持った僕たちが狙われる危険を避けるためかい？」
「……これだけ話して前者を問うのはいまさらだろ。まぁ、後者は若干ある。だけど、それよりも単純に話すのが面倒くさい」
話さない理由は面倒くさいから。その斜め上の発想に、ベルベットルームの住人を除いた女性メンバーは座ったままこけそうになり、危うくテーブルに顔をぶつけかけた。
けれど、そう言えばこういった人間だったと思い出してきたことで、桜がやや引き攣ったような笑みで話して貰えないかと頼みこむ。
「い、いまなら、ここで一度話すだけで済むから、後でその都度色々と訊かれる面倒を考えれば話した方が楽だと思うんだけど、どうしてもダメかしら？」
「……影時間の展開が出来る、他人の心を読むことが出来る、時の流れを限定範囲内に限り加減速させる事が出来る。まぁ、これだけ知ってれば充分だろ？」

「う、うん。ありがとう……って、時の流れ？」
随分とざっくりした説明になったが、本人が認めた事で最低限の事は分かった。
せっかく色々と用意したというのに、それが全て無駄になったことに栗原などは眉間に皺を寄せている。
しかし、桜が礼を言い終わる直前、チェックリストにまるで含まれていなかった能力が話の中にあったことで、詳しい説明を求める一同の視線が湊に集中した。
「……だから、時間を加減速させるんだ。空間内と外界とどちらに主観を置くかによって加減速の定義も変わるけど、いまやっているのはこの部屋だけ外よりも速く時を進めてる。一度切るから腕時計と居間の時計を見比べたらいい。正しい時間は居間の方だ」
言って湊は催眠術を解くかのように指を一度鳴らした。その音が合図のように、一同は部屋を出て時間を確認しにいったが、湊と同じように残っていた力の管理者二人のうち長女が湊に話しかけてくる。
「詳しく知らないけど、別に指を鳴らす必要はないわよね？」
「ああ、分かり易さを優先しただけだ」
聞いたマーガレットは「サービス精神旺盛ね」と呟きほうじ茶をすする。
影時間の展開と時流操作はベルベットルームの住人にも扱えない力だ。湊と同じように黄昏の羽根を内蔵したところで出来るかは不明で、そもそも時の流れを概念として理解し知覚しなければ加減速させようがない。
ベルベットルームは現実とは異なる時の流れの中に存在するものの、それは言ってしまえば異界にベルベットルームがあるだけで、住人らが異界を作っている訳ではないのだ。
しかし、湊の能力は極狭い範囲とはいえその異界を現実世界に作っている。影時間も異なる時流の空間も、黄昏の羽根の恩恵で作り出せているにしろ、現世の理に縛られた人間に出来る範囲を超えていた。
青年に流れる古の神の血がそれを可能とするのか、異界の神を降臨させ得る器にすればその程度は出来て当然なのか、色々と興味は尽き

ないところではあるがマーガレットは今調べる気はないので大人しく他の者が戻ってくるのを待つ。
そして、少し経つと複数の足音が近づいてきて、出て行っていた者たちが帰って来た。
「昼前に話し始めて二時間以上は経っているはずなのに、まだ正午にもなってなかった」
部屋に戻ってきた者たちは先ほど自分が座っていた場所に腰を下ろし。実際に時間を確認してきたばかりのチドリが湊に報告する。
「でも、時間を加減速するって、どういった理屈なのかしら？」
言葉の意味と現象としては理解出来たが、まったく方法や理屈が分からないとしてロゼッタは顎に手をあてて首を傾げている。
他の者たちもそれは同様で、青年が実際に時間の流れを操作できるのは分かったけれど、それが何を使って行われているのかも理解出来ない。
何せ、部屋に入ってからいつ時間を操作し始めたのかも気付いていなかったのだ。能力を切る際には指を鳴らして合図してくれた事で分かったが、何の予備動作もなく能力を行使できるのなら気付く事はおろか対処しようがない。
ただ影時間を展開するだけでも適性を持たぬ者は湊に手を出せなくなるというのに、時まで支配されては太刀打ちできるはずもなく、五代やロゼッタなど裏の仕事に関わる者らは彼と敵対する者らに思わず同情した。
「……理屈に関しては、影時間や時間を概念として理解出来ない者には説明しようがない。それがどんな物であるか理解出来れば干渉する事も出来る」
「なるほどね、桐条の先代当主が目指していた〝時を操る神器〟の一つの答えがあんたって訳か」
栗原はエルゴ研にいたときから桐条鴻悦の目指している物を知っていた。
シャドウについて研究し、時を操る神器が手に入れば、自分たち桐条グループが世界を支配する事も出来ると彼は言っていた。

普通ならばそんな妄言を大人たちが信じるはずもないが、桐条の研究者たちはシャドウや黄昏の羽根によって、自分たちの生きる世界とは異なる理が存在する事を知ってしまう。
今でこそ影時間は毎日深夜零時に発生するようになっているが、ポートアイランドインパクト以前は研究途中にたまに発生するくらいで、そういった異界のような物が存在するのであればと余計に研究者たちに神器の存在を信じさせる要因にもなっていたのだ。
だが、その研究の結果、実験失敗によって多数の犠牲者を出す大事故を起こしてしまった。
分からないからこそ知るために研究していたのだが、二次元の存在に三次元を知覚できないように、異なる次元の物を理解しようなど最初から無理だったのだと今では分かる。
この青年のようにそれが何であるか分かる特殊な者が一人いれば違っていたのだろうが、今さら言ってもあの事故を無かった事にはできない。栗原はテーブルに視線を落とし、自分たちの間違いを悔いた。
その様子を見た湊は栗原から視線を外して、他の者にも説明するように自分の神器としての力を話す。
「まぁ、近い様で中身は全くの別物だろう。桐条鴻悦が求めたのは言ってしまえば事象観測機とタイムマシンだ。過去と未来に起こる事を把握し、五年後にある男によってグループが危機に立たされるなら、先にそいつを潰しておけば五年後の危機は起きない。そんな風にあいつは時の支配者となって世界の頂点に立つつもりだったんだ」
過去と未来に起こる事を知り、それらを自由に操作できれば世界を支配する事など簡単だ。
抵抗しようとすれば、両親が出会うのを邪魔する程度で消されてしまうのだから、誰も相手に逆らえなくなる。
だが、それも結局は叶わぬ夢の一つでしかなかった。自分の義父が求めた物を、可愛い息子が手に入れたことに運命の悪戯を感じながら、英恵は湊に問いかけた。
「じゃあ、八雲君は何が出来るの？」

「時の流れに少し干渉出来るだけで他は何も出来ない。時を加減速させるだけで完全に停止させることや過去への時間跳躍だって出来ないんだ。能力を解除すれば結局は元の流れに合流する。もっと規模が大きければ他の事も出来るんだろうが個人規模で起こすのはそれくらいが限界だ」
湊ほどの力を持ってしても時を支配する事など出来ない。そう断言されてしまえば、英恵もあの研究の失敗は必然だったと思うしかなかった。
「……さて、俺に関する話はこれくらいだな。今後、ＥＰ社としては旧工場地帯に病院や研究施設を作ろうと思ってる。今のペースを考えると無気力症の拡大は防げない。そうなると今ある近隣の病院だけではベッドの数が足りなくなるから、患者を受け入れる準備をしておくことにした」
「病院を作るって八雲さんのお金でですか？」
「いや、前幹部たちの私財だ。馬鹿みたいに貯め込んであったから、全部回収して建設費と運営費に回すことにした」
流石の湊もデスティニーランドとデスティニーシーが、まるごとすっぽり収まってもまだ余裕があるような広さの東京の土地を買う金はない。
水智恵は湊の個人資産は知らないが、裏の仕事で稼いでいても病院を個人のお金で建てるほどはないと思っていたので、相手から否定されて自分の考えが合っていた事に少しホッとした顔をしている。
だが、続けて言われた相手の言葉には思わず目を丸くしてしまった。
「それで、ものは相談なんだが、水智、お前うちの病院で働いてみる気はないか？」
「……へ？　病院で働くって私なんの資格も持ってませんよ？」
「それは働きながらとればいい。待遇の欄にも資格取得補助は記載してる」
急に仕事に誘われて目を丸くしている恵の前に、湊はマフラーから取り出した書類を並べる。

そこには久遠総合病院というＥＰ社の病院の完成予定図と共に、社員募集要項が詳しく書かれていた。
完成予定は六月上旬だが、開業は六月下旬から七月上旬なので一ヶ月ほど研修期間が設けられており。社員寮に入居する者は研修期間中の家賃は無料。勤務し出すのが夏前なので一年目の夏のボーナスは出ないが、冬からは働きに応じて上乗せもされるボーナスを出すという。
有給は勤続半年経ってからしか出ないが、社員ならば格安で受けられる習い事のラインナップが数十種類あり、さらに要望に応じて増設も可能と非常に豊富だった。
また、病院の建っているＥＰ社の土地の中にスポーツジムもあり、社員であれば予約は必要ではあるものの無料で施設を利用できるなど、流石の桐条グループでも採算の関係でここまでの好待遇は出せないと読んだ全員が思っていた。
「あの、八雲さん？　本気でこんなの作るつもりですか？」
まさか、本気でこんな馬鹿げた採算度外視の病院や研究施設を建てようとしているのか。誘って貰えたことよりも、そちらの方が気になってしまい恵は表情を引き攣らせながら尋ねる。
「実際に建設は始まってるぞ？　どう考えても赤字だと思っているんだろうが、回収した金は数百兆円に上っていてな。全部そこから出しているから、社員の分を企業が出してもなんら懐は痛まないんだ」
「それ、人のお金じゃないですか……」
「ただ飯より美味い物はないってよくいうだろ」
青年の言葉になんか違うようなと首を傾げずにはいられない。けれど、それだけ潤沢な予算があれば書類に書かれている事も実現可能だろう。
恵は湊やチドリの一つ上で今年の三月で中学校卒業の年齢だが、一昨年の夏まで全身麻痺で、それから一年以上リハビリをしていたので高校に通う予定はない。
一年必死に勉強し浪人して高校に入ろうかとも考えたが、これと言ってやりたい事はなく、また同年代の知り合いも湊やアイギスくら

いしかいないので、湊と同じ学年になるよう月光館学園高等部を受験するならともかく、特に知り合いのいない他校で学ぶ気もなかった。
ならば、何か仕事でもするのかと訊かれれば、そちらは学校以上に何も考えていないとしか答えられない。
現在は家で問題集を使って色々と学んでいるが、まだその程度しかやっておらず社会に出てゆくことなどまるで想像がつかないのだ。
一応、実家は裕福なので一生働かずとも暮らしていけるとは思う。けれど、そういった暮らしに対して引け目を感じてしまう恵にすれば、恩人の元で働けるというのは非常に魅力的に映った。
とはいえ、いまこの場ですぐに返事をするほど思いきる事は出来ない。かなり心が惹かれている自分がいると感じつつも、恵は申し訳なさそうに考える猶予を求めた。
「あの、もう少し考えさせて貰ってもいいですか？　その、すごく嬉しいんですけど、やっぱりすぐには決断出来ないといいますか……」
「別に構わない。やや強行日程になるが他の社員の募集は三月以降から始めるし、お前の答えもそれくらいでいい」
「ありがとうございます。でも、働くとなったら自宅からだと遠いし、ここに書かれてる社員寮に入ることになりますよね。けど、先にこっちに慣れておきたいときはどうしたら良いでしょう？」
同時期に建設の始まる病院が六月に出来るのなら、社員寮のマンションも同じ時期に完成するものと思われる。
しかし、港区周辺の土地勘が全くない恵にすれば、もう少し早くから住んで土地に慣れておきたかった。
社員寮をもっと早く完成させる事は出来ないのかなどと聞く事は出来ないし、完成までホテル暮らしをするのも不安がある。
やはり、ぶっつけ本番のように行くしかないだろうかと不安げに尋ねれば、冷めた表情で相手の話しを聞いていた青年が淡々と返して来た。
「……そうだな。別にお前がいいなら俺の家に泊めてもいいぞ」
「八雲さんの家？　こちらのお家ですか？」
「いや、中央区にあるマンションだ。十二階建て最上フロア、バルコ

ニー付き３ＬＤＫの角部屋で値段は六二〇〇万円。まぁ、俺じゃなくてソフィアが買ってくれたものだが」
『貢がせたのっ!?』
湊が他所に家を買っていたことも驚きだが、それを年上とはいえ一つしか変わらない女の子に買ってもらったという情報の方が驚きで、桜や英恵にロゼッタなど、複数の女性の驚愕の声が重なった。
さらに右隣りからはとても不機嫌そうなオーラを漂ってきており、チドリが言外にこっちを見ろと言ってきていることで、湊は自分が何か悪いことをしたのだろうかと不思議に思った。
どちらにせよこのままではいられないので、先に恵の話しを処理してしまおうと、チドリを無視しながら湊は再度尋ねる。
「それで、家に来るのか？」
「えーと、そうですね……今度一回遊びに行ってもいいですか？」
「別に俺は暇をしている訳じゃないんだがな」
「いや、どんなところか知らないと泊まるかどうかも決めづらいので」
「……そういう物なのか？　まぁ、時期が決まればメールで知らせて来い。こっちの予定と合わせて返事をする」
湊の言葉に恵はこくこくと首を縦に振り頷く。裏の仕事はもうするつもりがないので以前よりもスケジュールに余裕がありそうなものだが、実際はＥＰ社の仕事を色々としなければならないので、それほど暇という訳ではない。
貴重な時間を割いてでも恵が遊びに来ることを許可する辺り、やはり湊は身内に甘いと言わざるを得ない。
しかし、それはそれとして、未だに横から睨みつけてきている少女をどうにかする必要がある。湯のみを手に取って喉を潤し一息ついてから、改めて向き直ると湊はチドリに声を掛けた。
「さて、言いたい事があるならはっきり言ってくれ」
「……帰ってくるんじゃなかったの？」
「ここに帰ってくるとは言ってないな。というか、仕事と学校のことを考えると、今暮らしているマンションの方が行き来し易い」
モナドで再会した日、湊はもう大丈夫だとは言ったが桔梗組に帰っ

てくるとは言っていない。
チドリもそれは認めるが、自分と共に居ることよりも利便性を取った事に対して怒りを感じ、尚且つ家族を一度も招いていない状態で、年頃の女子を家に泊まらせようとすることが納得出来なかった。
表情はいつも通りだが、言葉に棘を含ませながらチドリは相手を嫌味で糾弾する。
「早速、女を連れ込もうとするんだ？」
「最初の一日目にソフィアが泊まって行ってるけどな。というか、俺は一人であって一人じゃない」
言われた湊は〝運命〟のカードを握り砕き、〝バアル・ペオル〟の装いをした鈴鹿御前を呼び出す。
呼び出された彼女は、バアル・ペオルのときだけ形の変わる尖った長い耳をピコピコと動かしながら、愛子の他に有象無象が居ると知って顔を顰めている。
《なんじゃ、随分と多いな》
「えっとお、みーくん？　どちら様かな？」
「ペルソナ名だと鈴鹿御前かバアル・ペオル、生前名なら百鬼紫乃といって俺の遠い祖母だ」
《だから、祖母はやめろと云うておるじゃろうが！》
以前にも注意した事を再び口にした事で、鈴鹿御前は座っている湊の頭をぺしりと叩く。
イリス以外にそんな事を出来る者がいることで他の者らは僅かに驚くが、既に没している遠い先祖とはいえ身内には変わりないので、親としてなら出来るのも普通かと納得する。
ムスッとした顔で腕を組んでいた鈴鹿御前は湊の後ろに腰を落とすと、そのまま彼の広い背中に抱きつくように首に腕を回して話し出す。
《まぁよい。妾は八雲が生まれるまで名切りにおいて歴代最強を誇っていた者よ。実子より生意気じゃが魂がめんこいのでな。八雲には生まれる前から妾の才を与えていた。よく似ておるだろう？》
二人の顔を並べて見比べれば、髪の色こそ湊の方が青みがかってい

るが、輝くような金色の瞳や年齢性別問わず魅了するような妖しい色香も含めて共通点は多い。属性を女に振り切れば鈴鹿御前に、中性に設定すれば湊となるように見える。
湊を母親の菖蒲によく似ていると思っていた英恵ですら、起源はこの女性だったのかと思わずすんなりと認めた程だ。
五代と渡瀬は鈴鹿御前の装いのときに会っているものの、あのときはしっかりと相手の姿を確認する暇などなかったので、改めて見てみると彼女の言う通り二人は親子か姉弟というくらいに似ていると感じた。
一同が彼女の言葉が真実であり両者の間に血縁関係があると認めたところで、湊は脱線していた話を戻して説明する。
「まぁ、そういう訳で時期に関係なく出せる鈴鹿御前は基本的に俺といる。勝手に出てくることもあるから、チドリが邪推するような事は起こり得ない」
《いや、妾は出歯亀するような趣味は持ち合わせておらぬぞ。八雲がそこな娘と交わろうというのなら、その間は出ぬようにするから安心するといい。嫁を娶るでもなければ、妾はそういった事には寛大だ。各地に女を作ろうと構わぬ》
嫁や恋人は許さないが遊ぶ女ならばいくらでも作るがいい、とどこか得意げに語って鈴鹿御前は不敵な笑みを浮かべる。
湊の言葉を丸っきり否定する発言に一同が呆気にとられる中、エリザベスだけが楽しげに笑っている点がやや気になるものの、自分の発言を潰された本人は僅かにご立腹だ。
普段はどこかつまらなそうに見える表情に険しさを混じらせて、青年が指を鳴らすと途端に鈴鹿御前はその場から消えていた。
ペルソナとは指を鳴らした程度で消せるのかという疑問を皆に抱かせつつ、どこか清々した表情になった青年が口を開く。
「……さて、莫迦にはお帰り頂いた訳だが」
《八雲、親を無下に扱うとは何事か！　愛子といえど度が過ぎれば許さぬぞ！》
と思っていたら、話している途中で再び鈴鹿御前が現れた。湊は

まったく呼び出す素振りを見せていなかったので、彼女は湊が言っていた通り勝手に出て来られるのだろう。
　しかし、せっかく消したというのに、また戻ってきて話しを中断させられた湊の方は明らかに苛ついていた。
「……お前に茨木童子やファルロスのように勝手に出てきて消えない奴らがいるからな。最適化の間に俺も対策としてロック機構と強制返還を編み出したんだ。こちらこそ、度が過ぎるのであればロックをかけて外界の情報を得られず、俺が呼び出さない限り出て来れなくするぞ」
《ネガティブマインドの時に索敵能力を持っているのは、蛇神のバックアップを得て力の増している状態の妾だけじゃ。妾を封じるというのであれば、当然、その助力は得られぬものと知れ》
「そうか。では、お帰りいただこう」
《ぬぅっ!?　ま、待て！　少しは躊躇ってもよいだろうに！》
　鈴鹿御前の状態ならば索敵能力は持っていないが、バアル・ペオルのときは蛇神の力の一部を受け取っていることで能力が強化され、索敵能力や赫夜比売に匹敵する回復魔法を使えるようになる。
　そのどちらも使えなくなれば困るはずだが、湊が一切躊躇わずに指を鳴らそうと構えてきたことで、鈴鹿御前は慌ててその手を掴んで相手を止めた。
　片手で腕を掴んだまま、もう片方の腕で湊の頭を撫でて多少謝りつつ、鈴鹿御前は相手を宥め続ける。しばらくそうしていると湊が手を下ろしたので、ようやく機嫌が直ったかと安堵の息を吐いて彼女は脱力した。
《はぁ、どこで育て方を間違えればこのような我の強い捻くれた者に育つのか……》
「……お前らも大概だがな。まぁいい、水智の事に関してはそのときに決めるとしよう。チドリも今はそれで納得してくれ」
　湊は自分のクズさや性格の悪さを自覚しているが、先祖らを見ていると自分は割とマシではないかと思うレベルで我の強い者ばかりが揃っていた。

ならば、これは性格の傾向が遺伝しているのではないかと考えつつ、一先ずその話しは終えて、恵が遊びに来る話しとチドリに対する説明を済ませておく事にする。
それを聞いたチドリは、先ほどの湊と鈴鹿御前のやり取りで気が削がれていたので、ちゃんと言ってくれるのであればと頷いて矛を収めた。
子どもたちの間に生じていた不和が解消されたことで、親たちはホッと胸を撫で下ろし。話しが一区切りしたところで青年に関して気になっていたことを英恵が尋ねた。
「そういえば、八雲君は学校はどうするの？　そろそろ留学を終えて復学する時期でしょう？」
「そうだな。仕事はしばらくデータのやり取りで済むことばかりだし、別に明日から復学しても構わないが」
「……言っておくと明日から期末テストよ」
ずっと日常から離れていた青年が、ようやく復学を検討したかと思えば、何ともタイミングの悪いと英恵と桜が困った表情を浮かべる。
背が伸びて以前の制服では丈が合わなくなった湊は、新しく制服を買い直す必要もある。さらに、テストを受けようにも範囲も知らなければ教科日程も分からない。
復学するにも色々としなければならない事があることから、青年の復学はもうしばらく先になるかと二人の母親は残念そうに溜め息を吐いた。
そうして、久遠の安寧との戦いや今後の方針などを聞いたことで、一先ず今回の集まりの主目的を終えた一同は、揃って昼食を食べると力の管理者はベルベットルームへと帰り、英恵と恵は湊が家まで送り届けることで解散の流れとなった。

第百十九話　復学

２月１０日（土）
午前――月光館学園・２―Ｂ教室
静まり返った教室の中に、筆記具を走らせる音とプリントの擦れる音だけが響く。
今日は期末テスト最終日、さらに科目も最後の一つという事で、否が応にも生徒らの意気込みは最高潮に達するというものだ。
これが終われば来週にはテストの返却と順位の貼り出し、寮生活をしている者はさらに保護者への結果の送付などのイベントも控えているが、テスト期間独特の重苦しい緊張感漂う空気がなくなれば、その程度のイベントは多少落ち込むだけで大した苦でもない。
そして、ある者は残り時間を気にしながら必死に記憶を辿って答えを思い出そうとし、またある者は諦めて夢の世界へ旅立ちながら、鳴り響くチャイムと共に終了の時を迎えた。
「そこまで！　出席番号が若いのが上に来るように後ろから前に送ってこい」
監督官を務めていた男性教師が指示を出し、生徒たちは言われた通りに答案用紙を各列の先頭に送る。
送られてきた答案は出席番号順になるよう回収し、ちゃんと順番が合っているか、名前が書かれているかを確認してファイルに挿むと、教師は日直の生徒に視線を向けた。
「起立、気を付け、礼」
『ありがとうございました』
「おう、お疲れさん。すぐホームルームになるからトイレに行くやつ以外は教室から出ないようにな」
テストが終わった解放感に笑みを漏らしている生徒たちに、笑いかけながら教師が去っていく。生徒らは席を立って仲の良い者たち同士で集まり、テストの出来や放課後の予定について話し合っている。
チドリも前の席にいる風花から先ほど受けた社会科の問題について尋ねられ、相手と同じ答えを書いた事を報告して担任が来るまでの

時間を潰す。
「今回は結構出来た感じかなぁ。有里君も無事って分かって勉強も集中できたし」
「……それはそれ、これはこれじゃない？」
「え、でもチドリちゃんも結構気にして、前まであんまり勉強出来てないみたいだったけど……」
「私は一度も順位を落としてないもの。結果が全てを証明してるでしょ」
二年生になってからトップの湊がいなかったことで、上位陣の順位は一つずつ上がる形になった。
一位は美紀、二位はチドリ、三位は今まで四位に付けていた他のクラスの女子だが、二位と三位の間には二十点近い差があるので、実質二人の独走状態である。
テストの度に美紀とチドリの差は変動するが、順位が入れ替わったり、同点で両者が一位になったこともあるので、二人の学力にほとんど差はないと思っていい。
湊が行方不明でも順位は落とさずに維持し続け、今回の期末も無事に終えたので、結果を見れば自分はなんら動揺などしていなかったとチドリは返した。
相手の言葉を受けた風花はそうなのだろうかと首を傾げたい気もしたけれど、ここで何かを言えば三倍以上になって返ってくるため、愛想笑いを浮かべてお茶を濁す作戦を取る。
そうして、しばらく話していれば予鈴が鳴ったことで、トイレに行っていた者たちも戻ってきて席に着く。
あとはホームルームで連絡事項を聞けば今日は終わりだ。部活動によっては今日の放課後から再開する部もあるらしいが、美術工芸部はわりと緩い部活なので、テストが終わった日は好き好きに過ごすため休みとなっている。
テスト自体はそれほど苦に想っていないチドリも、こなすべき作業が終わったという点では開放感を求めていた。
故に、さっさと来てホームルームを終わって欲しいと、未だに姿を

見せない佐久間に心の中で愚痴をこぼした。
「やぁやぁ、遅れてごっめーん！」
いつになったら来るのだろう。そう思いながら予鈴が鳴って二分ほど過ぎたとき、ファイルと筆箱を持った佐久間が笑いながら教室に入ってきた。
普段は黒いビジネススーツにカーディガンなどを合わせて着ているが、冬だと流石に寒いのかゆったりとしたタートルネックのニットとスカートを合わせ、柔らかい雰囲気と共に健康的な色気を感じさせて男子たちの目を引いている。
だが、続けて教室に入ってきた者がいたことで、生徒たちの視線は佐久間からそちらの人物へと強制的に移された。
「へっへーん、サプライズだよ！　なんと、月曜日から有里君も復学していたのだ！　でも、有里君がいたら皆はテストに集中できないからね。彼だけ別室でテストを受けてようやく皆の前にお披露目という訳なのです」
教卓の横まで進んで佐久間の隣に立つ湊を教室中の生徒らの視線が射抜く。
腰よりも長く伸ばされた艶やかな青髪、輝くような金色の左眼と右眼を覆う半月状の黒い眼帯、トレードマークとなった黒いマフラーを巻き、服装はフード付きのオリーブドラフ色のコートを着た私服姿だが、久しぶりに見た生徒たちが何よりも驚いたのはその身長についてだ。
（デカっ!?）
留学前は佐久間と変わらないくらいか少し大きい程度だったというのに、横に並んだ佐久間の身長は湊の肩より少し高いくらいになっている。
首と頭の分だけ湊の方が高いのだから、その憂いを帯びた美しい相貌と共に本当に同じ中学二年生かと疑わずにはいられない。
湊を見て驚いている生徒らを眺め、サプライズが見事に成功した事を確信した佐久間は、満面の笑みで湊と腕を組みつつ一同に話しかける。

「ねー、驚くよね。外国で生活してると身体の大きさも外国の人みたいになるのかな？」
「……俺の父親は一八〇近くあったからな。単純に遺伝だろう」
「なるほど、遺伝子が仕事したんだね！　センセー的にはこれくらいの身長差はむしろＯＫだから、有里君も安心していいからね！」
　生徒の前で急に何を口走っているのかと言いたくなるが、全身から桃色のオーラを出している佐久間とは対照的に、青年はコートのポケットに手を入れたまま冷めた表情をしているので、誰も佐久間の発言に突っ込みを入れたりはしない。
　それよりも、湊が何故私服なのかや右眼の眼帯についての方が気になるのだ。佐久間に任せていては話しが進まない。そう思った女子生徒の一人が手を上げた。
「先生、有里君に質問してもいいですか？」
「いいよー。でも、有里君が疲れちゃうから全員で三つだけね。相談の時間は一分、さぁ、皆で質問を考えよう！」
　佐久間が開始だと手を叩けば、生徒たちは席の近い者らと色々と話し合い、教室中がざわめきに包まれる。
　その間、湊は左手に持っていた紙袋の一つから各列の先頭にお土産の小物を配布して、それを受け取った者たちは笑顔で礼を言っている。
　復学したばかりの湊がクラスメイトと仲良く出来ている様子に佐久間も満足して頷き、設定した一分はあっという間に過ぎ去った。
　配布したお土産も全員に行き亘り。湊が佐久間の隣に戻ってきたところで、司会役の佐久間が生徒らに尋ねる。
「じゃあ、最初の質問いってみよーか」
「はい！　恋人はいますか？　また、留学中にはいましたか？」
「……両方ノーだ。付き合う気がないから断っていた」
　湊の答えに大勢の女子が安堵の息を吐く。その中にいくらか男子の声が混じっていた気もするが御愛嬌だ。何せ、ほとんどの男子は外国でも告白自体はされていたのかと嫉妬を覚えていたのだから。
「次、二つ目の質問！」

「失礼だけど、右眼はどうしたのか教えて貰えますか？」
一つ目の質問を終えたことで佐久間が次に移るよう進めれば、ずっと気になっていた眼帯についての質問が飛んできた。
別に他人の怪我などどうでもいいだろうに、何をそんなに気にしているのか。心の中でその様に考えて湊は淡々と答える。
「普通に怪我だぞ。雪の積もった森で熊に襲われて人を庇ったときに抉られた」
「うえ、よく右眼だけで済んだね。その熊さんはどうなったの？」
予想の斜め上をいった答えに教室中がざわつくも、青年と腕を組んだままの佐久間が困ったような表情でありながら、本当はあまり気にしていないだろうという軽いノリで尋ねているせいで一同の気が削がれる。
しかし、相手も相手で一般からはずれた思考をしているのか、右眼を抉ってきた熊の末路を何でもない事のように正直に話す。
「両腕と頭を斬り飛ばして殺してやった。先に喧嘩を売ってきたのは向こうだからな」
「おっとぉ、まさかの白兵戦だったかー。でも、今度からは猟銃とか使った方がいいよ？　じゃないと危ないしさ」
『先生、突っ込みそこじゃないです』
普段は服の中にしまっている熊の爪のネックレスを湊は取り出して見せ、爪の大きさから熊がとんでもないサイズだった事に驚きつつ、佐久間は呑気にアドバイスをする。
だが、今度からなどとまた熊に遭う前提でアドバイスするのもおかしいが、それよりも相手の言葉が真実なら負傷した状態の白兵戦で熊に勝てている事にまず突っ込むべきだ。
このとき、教室中の心は間違いなく一つになっていた。
「はい、最後！」
けれど、言われた佐久間はどこがおかしかったか分からないようで、首を一度傾げるとすぐに流して最後の質問を述べよと言う。
元から人の話を聞くタイプではないが、ホームルームを終えて自由になりたいからと言って重要な突っ込みどころを流すのは如何なも

のか。
だが、テストを終えた事で早く自由になりたいのは生徒も同じ。よって、最後の質問としてとても普通の問いが投げられた。
「留学先で一番印象に残った国と、その国のどこが良かったかを教えてください」
「……フランスの田舎かな。自然が豊かで人も温かかった。老後はあいった場所で穏やかに暮らすのもいいだろう。まぁ、若い人間が観光でいくならドイツやスイスの方がいいかもしれない」
「有里君も普通に若い人間だよね？」
「お前より十も若いはずだが？」
「見た目的にはお似合いだから大丈夫、大丈夫」
年齢の話しをされても佐久間はニヘラと笑って、外見的には歳の差を感じないので問題ないと返す。
この場合、佐久間が特別若いという訳ではなく、湊の方が中学生とは思えないほど大人びている、悪くいえば老けているからこそ釣り合いが取れているのだ。
いまの湊は肉体的には十八、十九歳といったところで、そこに同年代とは比べ物にならないほどの修羅場を潜ってきたことで纏った空気が足され、既に成人を迎えている雰囲気を醸し出している。
よって、間近で肌の艶を見るでもしなければ、下手をすれば佐久間より湊の方が年上に見られる可能性すらあった。
「ってことで、質問はこれくらいでしゅーりょー！　来週からは普通の授業に戻るから、各教科の問題用紙も忘れずに持って来てね。日直さん、挨拶！」
「起立、気を付け、礼！」
『ありがとうございました』
最後の質問に湊が答えたことで質問タイムは終了だ。佐久間が終わりの挨拶を日直の生徒に頼み、生徒らが起立して締めの挨拶を行うと、今学年最後のテストからようやく全員が解放されたのだった。
＊＊＊
ホームルームを終えると生徒たちは教室を出てゆき、皆が思い思い

の放課後を過ごしに向かった。
ずっと湊にべったりかと思われた佐久間も、実はこの一週間ほどは教室に訪れないようにしていた湊と放課後ひっそりと会っていたので、いまさらべったりする必要もないと素直に職員室に帰って行った。
生徒たちはやっとテストから解放されたが、教師たちはむしろこれからが本番なのだ。何十人、何百人分という答案用紙の採点を行い。それらを各生徒の成績としてつけて、三学期の通信簿の方に反映させなければならない。
成績を付ける作業が遅れると、成績や素行で割り振るようにしている来年度のクラス分けの作業が遅れてしまう。
湊らが入学した年には、問題児や天才児を同じ天才に任せればいいとしていたが、この二年で湊とチドリは見た目が派手なだけで素行はそれほど問題ないという結果が出ている。
クラスに成績優秀者がいれば担任の査定にも影響が出るため、一クラスだけ異常に成績優秀者が集まっていたものを分解するとなれば、どの生徒のいるクラスを担任として受け持つか教師側も荒れそうである。
よって、来年度のクラス分けと担当教師の会議をしっかりと行うために、校長や教頭は採点と成績記入をなるべく早く終えて欲しいと教師陣に頼んでいた。
その事を生徒で知っているのは、経営に関わっている美鶴と、別室でテストを受けて早く解き終わった際に試験官の採点作業を手伝っていた湊だけである。
本来ならば生徒にそんな物を手伝わせては不味いのだが、試験官は別学年の教師であり、湊が他人の成績をばらすこともないだろうという信頼によって手伝いは実現していた。
そして、手伝いをした本人は約束通り誰にも漏らすことなく放課後を迎え、部活メンバーと共に一階の購買近くでたむろっていた。
チドリは何度か見ているのでいい加減慣れてきていたが、数ヶ月ぶりに会った他の少女たちは、青年のあまりの変化に慣れない様子であ

る。
「有里君、すごく大きくなったねー」
「……山岸は縮んだな」
「ち、縮んでないよう！」
　現在、風花の身長は一五〇センチでまだ成長は止まっていない。けれど、湊からみれば以前よりも小さく見えたので正直な感想を述べたのだが、言われた方はあまり成長してないが縮んではいないと驚きつつ反論した。
　他の女子たちは風花のそんな反応に笑いながら、改めて湊の全身を眺めてそれぞれの感想を漏らす。
「身長が伸びたこともありますけど、随分と顔付きが大人になりましたね。成長することで薄れると思っていた女性的な部分も残っている事には驚きましたけど」
「まぁ、遺伝子が混ざっているからな。完全に消すのは無理だろう」
　以前の湊はまだ歳相応の幼さを残していた。しかし、帰ってきた湊は本当に大人びていて、同学年の中では大人っぽいと言われる美紀でさえ、相手が知り合いでなければ同い年だと信じられない確信がある。
　さらに、成長すれば普通にルックスの整った美男子になると思っていたのだが、どういう訳か湊は美形であり美人なまま成長しており、所作のところどころに気品があることもあって思わず見惚れてしまいそうだった。
　勿論、だからといって相手に恋心を抱いたりはしないが、それでも美しさに憧れる少女としては、例え相手が男であったとしても羨む気持ちはあった。
　しかし、全ての女子が羨望の眼差しを彼に向けるかというとそんな事はなく、成長した湊の姿を眺めていたゆかりは素直に見て思った疑問を相手にぶつけた。
「ってか、髪伸びてるけど切らないの？　ぶっちゃけ邪魔じゃない？」
「……そこまで邪魔ではないな。一応、伸ばしたままにしている理由もあるし」

「なに、恋愛のジンクス的な理由?」
入学したときには肩にかかる程度だったが、それから湊が髪を短くしている場面を一度も見たことがない。
留学する際は腰に届くくらいの長さだったが、常人よりも速く伸びることから逆算すると地面についているはずなので、腰を越えた程度ということは長さを調整するために切っていると思われる。
よって、相手が長くしている理由があるのなら、それは恋愛などのジンクスを気にしてのことかとゆかりは悪戯っぽい笑みを浮かべ尋ねた。
訊かれた青年はすぐには答えず、自分の髪に触れながらどこか遠い目をして言葉を返す。
「いや、イリス……ああ、留学中の同行者が俺の長い髪が好きだったんだ。多分、短くしても似合うと言ってくるんだろうが、よく洗ったり梳いたりして貰っていたこともあって、一度は切ったんだが伸びてきて何となくそのままにしてる」
「あ、その、ゴメン。軽く言ったりして」
流石のゆかりも遠い目で話す湊の言葉を聞いて茶化す事は出来なかった。
同行者が事故に巻き込まれて死んだ事は聞いている。湊がその事に複雑な感情を抱いてまだ処理しきれていないようだとチドリも話していた。
あまり物事に執着しないような湊が、わざわざ相手が好きだったからと髪を伸ばしたままにしていることからも、チドリの話していた事は真実であり、彼は相手の死をまだ引き摺っているのだろう。
ゆかり自身も父親の死をまだ引き摺ったままなので、そういった他人に気安く踏み込んで欲しくないデリケートな部分を自分が侵してしまったことを後悔した。
しかし、触れていた髪から手を放してゆかりを見た湊は、普段通りのどこかアンニュイな表情で返してくる。
「別に気にしてない。他にも髪が長いと母さんに似ているらしくて、喜ぶ人がいるっていう理由もある。まぁ、邪魔なときは縛ったり纏め

たりするから問題ない」
「そうなんだ。あ、じゃあ、いま結んであげよっか。見てて邪魔くさいし」
「……お前、少しは言葉を選べよ」
ゆかりは先ほどの事を反省したらしいが、湊に対しては普段より口が悪くなるのか色々と酷かった。
謝ってすぐそれかと湊が非難の目を向けるも、ゆかりは気にした様子もなく購買のおばちゃんに空いている椅子を借りて湊をそこへ座らせる。
女子たちが羨む艶やかな青髪は、本当にどうやって手入れをすればここまで綺麗になるのかと、羨ましいを超えて妬ましいという気持ちをゆかりに抱かせた。
とはいえ、自分から髪を結ぶと言っておいて嫉妬で八つ当たりする訳にもいかない。気を取り直して鞄からブラシを取り出し、髪を梳いてからどのような髪型にしてやろうかと考え始める。
「んー、やっぱり最低でもアップにしたいよね。うなじらへんが見えてないとスッキリしないし」
「あ、お団子ヘアとかどうかな？　マーガレットとかも上品っぽくていいけど」
「……普通にしてくれ」
湊の髪型に悩むゆかりに風花が楽しそうにアイデアを出す。その傍らでは美紀とチドリもヘアピンやヘアスプレーを鞄から出して真剣に考えているようなので、湊はとりあえず遊ばないで欲しいと頼んだ。
なにせ、五人は帰る前に購買でジュースを飲みながら雑談をしていたのだが、場所が靴箱に近いせいで湊に気付いた生徒が何人も騒いでいる。
そんな場所でおかしな髪型にされれば変な噂が広まりかねないので、うなじが見えるような髪型でも構わないから目立つ髪型にはしないで欲しかった。
結局、ヘアピンなどもなるべく使わないようにして欲しいという要

望を加えた事で、ポニーテールを巻いてアレンジしたアップにする方向で話は決まった。
一歩間違えれば若いキャバ嬢のような髪型だが、そこは育ちの良さと纏う気品によってカバーされ、随分とスッキリしたと髪を結ったゆかりも満足げに頷いている。
彼女の頑張りを見ていた他の三人も小さくパチパチと手を叩いて仕上がりを褒めた。
椅子を貸してくれた購買のおばさんも美人さんになったと褒めてくれたことで、湊としては色々と複雑な気持ちでありがとうという言葉と共に椅子を返す。
そうして、髪も結ったことでこの後はどうするか話し合おうとしかけたとき、
「ちょっと、そこの人、何勝手に校舎に入ってきてるんですか！　ちゃんと許可証なり取ってますか？」
腕に生徒会の腕章を付けた一人の生徒が歩み寄ってきた。
だが、言われた湊たちは相手が誰かも知らなければ、ここには生徒しかいないので何を言われているのかも分からない。
全員が不思議そうな顔をしていると、湊の前まで来た真面目そうな男子は目付きを鋭くして再び言葉をぶつけてくる。
「だから、貴方ですよ。生徒の知り合いでも許可証を取って貰う必要があるんですけど、取ってないなら事務室で貰ってくるか校舎から出て行ってください」
「……ここの生徒だが？」
「はぁ？　なら、なんで制服着てないんですか。っていうか、ピアスにチョーカーってアクセサリー類は中等部の校則じゃ禁止されてるんですよ！　あとカラコンもヘアカラーも禁止！」
湊はマフラーも標準装備の私服姿だが、左耳にピアス、首にチョーカー、服の中には熊の爪のネックレス等々のアクセサリーを身に付けている。
それらはとてもよく似合っているのだが、華美な装飾品は禁止という中等部の校則には違反しており、男子は湊の金色の瞳とチドリの赤

い髪についても事情を知らないようで普通の色にしてこいと注意をしてくる。
湊の眼とチドリの髪の色が自前であることなど湊らの学年では常識だ。プリンス・ミナトを通じて上級生にも事情は伝わっている筈なので、本気で知らない様子から察するに相手は一年生の後輩なのだろう。
一年生の中にも湊の事を知っている者はいるが、それは初等部から上がってきたものであり、中等部から入ってきた者は学校見学の日に湊が休みだったことで知らなくとも無理はない。
よって、湊とチドリを除く女子らは、事情を知らないらしい相手に心の中で苦笑しつつ、湊がどのような反応を見せるのか見守った。
すると、湊はコートのポケットに手を入れながらつまらなそうにシレッと事実と嘘を混ぜて来る。
「……そうか、ろくに学校に来ていなかったからアクセサリーが駄目とは知らなかったな」
「制服着用の義務くらいは分かるでしょうが！」
「久しぶりに着ようと思ったらサイズが合わなくなっていてな」
「嘘を吐くならもっとマシな嘘を吐けー！」
あまりに湊が適当な態度で相手をしてくることで、男子は湊の発言を嘘だと思ったらしく肩を震わせながら怒鳴ってきた。
しかし、悲しいことに男子は小さかった。一年生という事を含めても、もうすぐに二年生になるこの時期に風花と変わらない程度しかないのだ。
そんな生徒が必死に怒ってもまるで迫力など感じられず、湊はとても冷めた表情で見下ろしながら口を開く。
「……少し待っておけ」
ただ一言だけ言い残し、湊はコートとマフラーをチドリに預けると、教室に現れたときから持っていた紙袋を持って校舎の方へ去って行った。
受け取ったチドリはサイズの合わないコートを勝手に着てマフラーを巻いているが、少しすると制服姿になった湊が現れた事で誰も

突っ込まずに終わる。
　そして、久しぶりに見た湊の制服姿に女子らは思わず苦笑した。七分丈ほどしかない袖の短いジャケットに、腰パン状態にしなければ丈の足りないズボン、誰がどうみてもサイズが合っていない事は明らかだった。
「なんだか、制服を着崩している有里君って新鮮ですね」
「確かにね。なんか、他の腰パンは微妙だけど有里君のはしょうがないって点で許せるわ。ていうか、着れなくなってたから私服だったのね」
「まぁな。というか、前に欲しがっていたから雪広先輩にあげる予定だったんだが、またクリーニングに持っていかないといけなくなった。人を嘘吐きと決めつけてきた生徒会役員のせいで……まったく、生徒の言葉も信じないとは」
　言いながら湊はチドリが巻いているマフラーに手を伸ばし、煙管を取り出し咥えると下級生の男子を冷たい目で見つめる。
　その瞳には軽蔑の色が混じっており、見つめられた男子は相手が本当の事を言っていたこともあって怯みかけるが、湊が何を咥えているのか理解したことで再び大きな声を出してきた。
「ちょっ、あんた、堂々と何吸ってるんですか！　普通に停学ものですよ！」
「あ、ホントだ。それは流石に駄目だって、身体にも悪いし。てか、君って喫煙の習慣とかあったの？」
　湊があまりに堂々としているせいで気付くのが遅れたが、しっかりと物を認識したことでゆかりが眉を顰めて湊の口から煙管を引っこ抜いた。
　だが、携帯灰皿など持っておらず、ついでに言えば煙管などどのように処理していいのか分からない。
　よって、手に持ったまま困った様子を見せていたゆかりから湊は奪い返すと、ペン回しのように左手で遊ばせながら相手の問いに答える。
「これは煙管の形をしているだけで煙草じゃない。教師にもちゃんと

説明して理解して貰っているから停学にはならないな。まぁ、また嘘だと決めつけられては敵わないから証拠を見せよう」
「んむっ!?」
証拠を見せると言った湊は遊んでいた手を止めるなり、傍にいた風花の口に煙管を突っ込んだ。
完全に油断して傍観者になっていたことで、突然の事態に驚いて離れようとするも、後頭部を押さえられた状態で煙管を口に入れられているので逃げる事が出来ない。
押さえられた状態で無理矢理に口に突っ込まれている風花は若干涙目になり、それを冷めた目で見つめて拘束したままでいる湊は、まわりからは小さな女の子を大人の男が虐めているようにしか見えない。
あまりに悪過ぎるその絵面に気付いた他のメンバーが湊を止めさせようとしたとき、涙目だったはずの風花に変化が起きる。
「あれ？　んー、メロンソーダ味？」
「……正解」
風花は急に不思議そうな顔をしたかと思えば、湊を見上げて合っているか確認を取った。
事情の飲み込めないまわりの人間にすれば何の話しだと思うところだが、湊が手を放しても風花は自分で持ちながら不思議そうに煙管を吸っているので、怪訝な表情を浮かべてゆかりが相手に問いかける。
「えっと、風花？　それ吸って大丈夫なの？」
「うん。最初は驚いたけど、これ本当に煙草じゃないの。なんかメロンソーダの味がする霧っていうか煙みたいなのが入ってて美味しいよ？」
「メロンソーダ？」
見た目は明らかに煙管なので、それとメロンソーダ味を上手く結びつける事が出来ない。
そう思って難しい表情で見ていれば風花が渡して来たので、ゆかりも恐る恐る咥えて吸ってみた。

すると、風花の言っていた通り、冷たいメロンソーダ味の煙のような物が喉を潤してくる。爽やかな香りと共に炭酸のシュワシュワとした感触もあり、ゆかりも美味しいと感じながら隣の美紀に渡しつつ感想を述べる。
「……本当だ。シュワシュワするメロンソーダ味のなんかが入ってる。これって何なの？」
「飲み物の味を付けられる喉用の加湿機みたいなものだ。飴やガムに近い感覚で水分補給も出来ると思って貰っても構わない」
「前から思っていたんですけど、有里君って色々と変わったものを持ってますよね。そういうのってどこで見つけてくるんですか？」
「そういうのを取り扱っている知り合いがいるんだ。まぁ、機会があれば会わせてやるさ」
ゆかりに続いて体験した美紀も驚いた顔をしてからしっかり味わうと、それで満足したのかチドリに渡そうとした。
けれど、チドリは既に知っていたことで拒否したため、そのまま持ち主に返せば湊は煙管を咥え直して男子に向き直る。
「さぁ、誤解も解けたところで解散といこうか。帰っていいぞ下級生」
「いや、何にも解決してないでしょうが！　制服は新しいのを買って、アクセサリーは外す。あとそっちの人も髪の色をちゃんと黒に戻してきてください」
「……これ地毛だし、生まれつき髪は茶色で黒かった事なんてないけど」
「俺の眼も自前だな。幼い頃の治療の副作用で色が変わったんだ。ちゃんと医者の診断書も提出して学校に事情を話してある」
一年生のときにはそれで校長や教頭が揃って謝罪に来る事態に発展した。勿論、それはしっかりと教師全員で情報を共有していなかった学校側が悪いのだが、生徒にまで伝える義務はないので、一年生の男子が知らなくても無理はない。
案の定、湊の話を信じていない相手は呆れた様子で言葉を返してくる。
「そんな副作用なんて聞いた事ないですよ。というか、そういった目

立つ格好されていると他の生徒にも迷惑がかかるんです。一人が問題行動を起こして月光館学園の生徒全体が風評被害を受けたら責任取れるんですか？」
「……さぁな。学校から黙認されている以上、そのときは庇ってくれるんじゃないか？」
「随分と無責任なこと言いますね。学校に来てなかったらしいですけど、テストもまとも受けてないんじゃないですか？」
「よくわかったな。一学期の中間から二学期の期末まで全教科最低得点で見事に最下位だ」
「開き直ることじゃないです！」
湊が言っている事は嘘ではない。そもそもテストを受けていないのだから、全て〇点で最下位と捉える事も出来る。
もっとも、学校に留学の許可を取っていたので、その間のテストを受けておらずとも〇点で成績を付けられる訳ではない。
しかし、それらの事情を知らずに言葉通りの意味で捉えてしまっている男子は、堂々と最下位だと言ってきた湊に軽蔑するような視線を向けると、続けて冷めた目を傍にいた美紀に向けて話しかけてきた。
「そちらの方は二年主席の真田先輩ですよね。貴女みたいな模範生がどうしてこういった人と付き合いがあるのか不思議です」
「私は別に自分を模範生であるとは思っていませんが、ちゃんと相手の人柄を見て判断しています。確かにチドリさんも有里君も見た目は派手かもしれません。ですが、人柄も知らずに偏見で判断していると損しますよ」
「損ってどういう風にですか？　別に僕はこの人と関わらなくても問題なく学校生活を送れますけど」
友人を軽く見られたことで美紀が静かな怒りを秘めた真剣な口調で注意するも、相手は完全に舐めきっているのか嘲る様に吐き捨てる。
女子ばかりとはいえ、上級生五人が固まっている場に一人で注意にこれる度胸もすごいが、男子は自分が正しい事を言っているからこそ、これだけ自信たっぷりに言い切れるのだろう。

そうして、あまりに失礼な物言いに、部活メンバーらが男子に対して僅かに不穏な空気を発し始めたとき、ずっと男子を観察していた湊が相手に話しかけた。
「……下級生、学校生活において生徒の出来を判断する最も簡単な物は何だと思う？」
「下級生って呼ばないでください。生徒会庶務、１―Ａの木戸（きど）　武蔵（むさし）です。それで、生徒の出来を判断する物でしたっけ？　まぁ、普通に考えれば成績じゃないんですか。ていっても、貴方は今まで最下位だったんでしょ。なら、一番不出来な生徒じゃないですか」
「ちょっと、君っ」
いくら親しくないとはいえ、流石に先輩に対してその口の利き方はどうなのだと、ゆかりが木戸を諌めようとするも湊が肩を掴んでそれを止める。
あんな失礼な事を言われて何故止めるのか。そう言いたげにゆかりが湊に抗議の視線を送ると、湊は真っ直ぐ木戸を見たまま言葉を返す。
「今までがそうだったからと言って今回もそうだとは限らないな。一年間に学んだ事をどれだけ覚えているかを確かめる集大成のテストだ。一学期の中間や期末よりも、そこで優秀な成績を残した者の方が優れているとは思わないか？」
「確かにそうですけど、なら今回のテストでは最下位じゃない自信でもあるんですか？」
「ああ、授業はろくに受けてないがそれなりに解けたつもりでいる」
「根拠のない自信ですね。じゃあ、勝負でもします？　学年は違うようですけど順位でなら公平な勝負になると思いますが？」
今まで最下位だった者がそれなりに解けたと言ったところでたかが知れている。加えて、彼は真面目そうな雰囲気の通り、期末に向けてしっかりと勉強していたのか、自分が順位で負ける事はないという自信が滲み出ていた。
ゆかりとチドリは、相手のその見下したような発言と生意気な表情に怒りを覚え睨みつけているが、勝負を持ちかけられた湊は冷静に

淡々と相手の申し出を受けた。
「そうだな。では、俺が勝ったら自分の目が節穴だったと認めて貰おうか」
「なら、僕が勝ったら校則通りの服装にしてその長い髪も切って貰いましょうかね。ついでに校内ではその煙管も吸わないでください」
「随分と注文が多いな。それなら、こっちも一つだけ足しておこう。お前が負ければ俺はお前の上司が無能であったと思わせてもらう。自分のことも満足に出来ないやつを役員として使っているんだからな。これは十分に問題と言えるだろ？」
　無能な部下を使っている上司も同じく無能である。こんな物は完全な言いがかりでしかないが、相手にとっては効果覿面なようで驚きに目を見開き、すぐに声を荒げて言い返して来た。
「なっ、会長は関係ないじゃないですか！」
「だが、自ら望んで高い役職に就いている人間は責任も同時に負うんだよ。自己管理出来ていないのは部下本人の責任だが、それを一年も見過ごして来たのなら上の管理責任を問わざるを得ない」
　本人の責任とは別に、上司ならば部下の状況も把握して問題があれば対処すべき。その点については反論できないのか、木戸が黙れば湊は薄い笑みを浮かべてさらに続ける。
「別にこの時期になってリコールする訳じゃない。単純にお前の上司もお前と一緒で人を見る目がないと思わせて貰うだけだ。勝手に思っていればいいのにわざわざ確認するんだから誠実な対応だと思うがな」
　そう、湊はこれといって美鶴に対して何かの行動を起こすつもりはない。今話題に出したのも、単純に相手を煽るためだけに上司にまで言及しただけだ。
　相手は何か言いたそうにしながら必死に抑えているので、彼にとって美鶴はそれなりに特別な存在なのだろう。
　ならば、目論見は成功したと内心でほくそ笑んで、湊は正式に勝負するのか相手の答えを待った。
　堪えるように拳を握って睨みつけてきていた木戸は、少しすると感

情を抑えて冷静なように振る舞いながら口を開く。
「貴方の名前は？　名前を聞いておかないと確認出来ません」
「２―Ｂの有里湊だ。掲示は来週の金曜日の放課後にして貰っておくから、そのときまで確認しなくていいぞ」
「有里先輩ですね。そういう勝手な事も今後はしないで貰いますから、ちゃんと来週の金曜に学校に来ておいてくださいね。それじゃあ、失礼します」
　それだけ言うと相手は礼をして校舎の方へ去って行った。
　基本的な部分では真面目でいい子なのだろうが、随分と視野が狭く感情的になりやすい印象を持つ。
　そんな子どもっぽい後輩の遠ざかってゆく背中を見つめ、ゆかりは隣にいる青年にわざわざ勝負する必要などあったのかと尋ねる。
「あんなの勝手に約束して良かったの？　ていうか、あの子って成績いいのかな？」
「さぁな。別に興味もないしどうでもいい」
　それなりに自信ありげだったことから、相手の成績は悪くはないはずだ。けれど、どうせ来週の金曜日には結果が出るのだから、気にするだけ無駄だと湊は切り捨てた。
　だが、さらに続けて淡々と語られた言葉にチドリを除く全員が驚愕する。
「それと今さらだが、お前らよく俺が咥えてた煙管を回して吸えたな。もう少し男子との距離感を意識した方がいいと思うぞ」
『っ!?』
　完全に意識していなかったが、指摘を受けたことでゆかり・風花・美紀の三名の顔が真っ赤に染まった。
　中でもダイレクトに二次接触を行った風花は耳まで赤く染まり、このままではのぼせて倒れてしまうのではないかと心配になってくるほどだ。
　湊が言わなければ意識する事もなかったというのに、どうして最後の最後で爆弾を落としてくるのか。言われた一同は、久しぶりに再会した青年の無意識に周囲を巻き込むトラブルメーカー気質に僅かな

懐かしさを覚え、それ以上に再び騒がしい毎日が帰ってくる事に対して頭を痛めるのだった。

第百二十話　結果発表

２月１６日（金）

放課後――月光館学園・職員室前廊下

先週の土曜日に約束した勝負の日がやってきた。

約束の日まで静かな日常が続くかと思われたが、湊の方はバレンタインというイベントがあったことで、余計な騒動を避けるために一昨日は教室一つを貸しきって急遽イベント会が行われた。

バレンタインのプレゼントを直接受け取って貰える上に、握手まで出来るということで中等部の生徒だけでなく高等部や初等部の生徒まで訪れていたが、イベント自体はプリンス・ミナトのメンバーが上手く捌いてくれたので、湊は座ってプレゼントを受け取り握手するだけという流れ作業で済んでいる。

訪れた生徒の中には男子も若干混ざっていたが、ファンクラブ会長の雪広繭子に聞けば男子の会員もそれなりにいるらしいので、プリミナの人間としてはむしろ想定内の出来事だったらしい。

イベントの終了時には、手伝ってくれたお礼に湊から運営スタッフのプリミナメンバーに小分けのチョコクッキーが配られ、さらに湊の制服が不要になったら譲って貰えないかと言っていた繭子には、先週の土曜日に着てからクリーニングに出し忘れていた制服が贈呈された。

初めはクリーニングに出すのを忘れていた事で改めて渡そうとしたのだが、繭子は何故か目を血走らせながらそのままが良いと言ってきたので、不思議に思いながらも要望通り譲ったという裏話もある。

また、隠れて制服を譲ってくれるように言っていた事で、他のメンバーからブーイングがありオークションか裁断して配布すべきという声も上がった。

けれど、制服の入った紙袋を抱えた繭子は陸上部もびっくりのスプリントを見せ、どうやら家まで逃げ切ったことで制服は現在も彼女の元にあるようだ。

余談だが、プリンス・ミナトと同規模の勢力を誇っている真田の

ファンクラブ〝真田王国〟の方はというと、真田がボクサーで減量等々に気を遣っていることもあり、これといってイベントは行われなかったようである。
　そうして、そのような騒がしいイベントをこなしつつ、約束の日、約束の時間を迎えた訳だが、掲示板に貼られた順位を見たゆかりとチドリは冷めた目を、美紀と風花は眉尻を下げて困った表情をして、隣に居た煙管を咥えている男を見つめた。
「す、すごいね。授業も受けてないのに全教科満点って」
「そうですね。ただ、正直色々と自信をなくします」
「どんだけチートな頭脳してんのよ君は」
「……バグキャラ」
　女子たちから何を言われようと湊はどこ吹く風と気にせず表を眺め続ける。
　期末テストは全部で十教科あり。そして、約二四〇人いる第二学年の順位は上から順に全教科満点の湊、九八六点のチドリ、九八一点の美紀という風に並んでいた。
　チドリと美紀はほぼ同じ実力なので、今回はチドリの方が高い順位に着いていても本人らは大して気にしていない。
　けれど、授業も受けていなかった人間が満点トップを取るのは流石にどうなのだと、美紀や風花ですら若干呆れた顔をしていた。
　ちなみに、風花の順位は十三位、ゆかりの順位は七十一位であったりする訳だが、部活メンバーがそんな風に眺めていると、突然後ろから驚きの声が上がった。
「う、嘘だっ、ありえない！」
　急に何だと振り返れば、後ろには驚愕で顔を若干青くしている木戸が立っていた。
　彼の視線は第二学年の順位表に向けられており、どうやら書かれている結果を受け止められていないらしい。
　だが、書かれている事は全て真実だ。湊は別室受験だったが、試験監督は二メートルほどの距離を開けた場所に座り、筆記具は全て学校に用意して貰っていたので不正のしようがない。

書かれた結果はまぎれもなく本人の実力であるため、相手を見ていた湊は薄い笑みを浮かべて話しかけた。
「三十三位の木戸じゃないか。どうしたんだ。そんなに顔を青褪めさせて」
「ど、どうしたんだじゃないです！　一体どんな不正を使ったんですか?!　明らかにおかしいです。どうせテスト前に問題用紙を盗み見たりしていたんでしょう！」
「ほぉ、よく分かったな。実はここに入学する前にこっそりと高等部までの学習内容を盗み見ていたんだ。他のやつよりも先に見ていたからな。勉強する時間は十分にあったぞ」
「期間と範囲はすごいけど、それって普通に予習だよね……」
一方的な言いがかりでしかないが、湊の順位はカンニングによる不正なものだと木戸は怒鳴ってくる。
それに対し、相手の発言を認めた湊に一同は驚きかけるも、最後まで聞いた風花は思わず突っ込みを入れていた。傍にいるゆかりや美紀も、湊がそんなにも早くから勉強していると知って思わず苦笑いを浮かべている。
ただ、木戸が本当に何の情報も知らないようなので、誤解を解く意味も込めてゆかりは事情を説明してやることにした。
「あー、あのさ。君は知らなかったみたいだけど、有里君が最下位だったっていうのはついこの前まで海外留学してててテストを受けてなかったからなんだよね。学校にまともに来てなかったのも同じ理由だし」
「それに加えて、彼は入学テストからずっと満点しか取っていません。私が学年主席になっていたのも、単純に彼が不在だったからであって、本当は有里君が私たちの学年主席なんです」
「そ、そんな……」
ろくに相手の事も調べずに勝負を持ちかけたのは本当だったようで、木戸は愕然としながら肩を落としている。
彼も決して悪い順位ではないのだ。優秀というには些か中途半端ではあるが、それなりに上の順位であることに変わりはない。

だが、今回は相手が悪かった。見た目の派手さから不良だと決めつけていたことで、木戸は湊とチドリの学力を低いと誤認した。
勝負を受けたのはテストが終わってからなので、どちらにせよ順位や結果は変わらなかっただろうが、それでも見た目に惑わされずに情報を集めていれば勝負など持ちかけなかったはずである。
ゆかりと美紀から齎された情報を、事前に入手していればこんな事にはならなかった。木戸がそう落ち込んでいると、その正面に立っていた湊が誰が見ても営業スマイルだと分かる爽やかな表情で声を掛ける。
「まぁ、大したことじゃないから気にしなくていいさ。それよりすごいじゃないか。約二四〇人中三十三位なんて木戸はとても優秀なんだな」
「……そうね。私もどういった勉強の仕方をすればそんな順位になれるのか是非教えて貰いたいわ」
湊が相手を褒めるとチドリも真顔のままそれに乗っかって会話に参加する。言葉通りの意味ならば褒めているように聞こえるのだが、そこに彼らの順位の方が上だという情報が加われば、途端に意味が正反対に変わる。
意訳すれば、どうすればそんな悪い点数を取れるのか、と丁寧な口調でチドリは尋ねている訳だ。
しかし、周囲からは純粋に木戸を褒めているようにしか聞こえないので質が悪い。
「なっ、どんな嫌味ですか！　お二人の方が明らかに上の順位なのに！」
二人の言葉の本当の意味も理解している木戸は当然怒ったように言い返した。
怒って睨んで来ても、相手はチドリよりも背が低いので欠片も怖くないが、すぐ感情的になる事に肩を竦めて湊は余裕を感じさせる口調で言葉を返す。
「俺もチドリも他の生徒に悪影響を及ぼす不出来な生徒だからな。生徒会に所属する模範生に是非ともご教授願いたいだけだ」

勿論、湊は嫌味として相手の言葉を混じらせる事を忘れない。
言う度に相手の目がつり上がってゆくけれど、最初に二人をそう評価したのは木戸自身だ。よって、評価の訂正という自分の非を認めるのが癪だった木戸は、怒気を含んだ声で湊の質問にすぐ答えた。
「勉強なんて普通にしかしてませんよ！　宿題がてら復習して、終われば翌日の授業の教科書を見て予習するくらいで、あとはテスト前に提出課題をこなしてノートの内容確認をしながら勉強するくらいです！」
「そうすれば貴方みたいな順位になれるのね。私は宿題と部活メンバーで集まったときに勉強するくらいしかしていなかったから、今後は参考にさせて貰うわ」
「しなくていいですよ！　本当になんなんですかあんたらはっ」
それだけやってて自分にも勝てないのか。そう言いたげに小馬鹿にしたような薄い笑みを浮かべるチドリに木戸は顔を真っ赤にして怒鳴り返した。
だが、チドリがこんな風に饒舌に話すことなど珍しい。しかも、その内容が相手を煽るものなので、他人などどうでもいいと思っていそうな普段の彼女を知っている部活メンバーは、チドリの意外な一面に驚くしかない。
もっとも、チドリにも逆鱗とも言える怒るポイントがある事を思い出せば、今の彼女の状態にも納得がいった。
そう、彼女は見ず知らずの他人が偏見のみで湊を馬鹿にしたことに怒っているのだ。湊が綺麗だと言ってくれた髪についても因縁を付けられたので、その分も纏めて返してやろうと意気込んでいたことも加わり言葉は余計に鋭さを増す。
勝負に至るまでの経緯を見ていた部活メンバーは、当然悪かったのは木戸の方だと思っている。
ただ、学内で最も敵に回したくない二人から遠回しにネチネチと口撃を受けている姿をみれば、一八〇センチ越えの男と風花並みに背の低い下級生という絵面もあって、どうにも木戸の味方をしてやりたい気持ちが芽生え始めていた。

他の者がそんな風に考えている間も湊たちは言葉を続ける。
「ああ、そういえば、勝負のことは気にしなくていい。お互いにベストを尽くしたんだからな。上司共々無能かもしれないが、努力することに意味があるんだからどんな結果でも胸を張るといい」
「よかったわね。心の中では節穴って呼ばせて貰うけど、勝負自体は湊の情けで無効になったみたいだから気にしなくていいわ」
「思いっきり貶してるでしょうがっ」
営業スマイルではあるが、さらっと貶しつつ周辺に光のエフェクトを幻視するほど綺麗な笑みを浮かべて湊が頑張った木戸を称えれば、続けてチドリが辛辣な言葉で相手の心を抉りにかかる。
色々ときつい事を言ってくる事もある人間だとは思っていたが、二人揃うと威力は加算ではなく乗算だったかと、よく湊にいじられていたゆかりはゲンナリしつつ木戸に同情的な視線を送った。
だが、部活メンバーの他にテストの順位を見に来た他の者が見ていたとしても、それらをただの背景として気にせず、湊は役者ばりの演技で本当に不思議がっているように見せながら木戸に質問をしている。
「貶してる？　意味がよく分からないな。済まないな不出来な生徒にも分かる様に言ってくれないか？」
「三十三位さんの言葉は難しくてあまり理解できないの。もう一度分かる様に言ってもらえる？」
「もういい加減にしてくださいよ！」
本当に嫌なら逃げ出せばいいのだが、真面目な性格とプライドの高さが邪魔をして、彼は話が一区切りするまで去るつもりはないようだ。
顔を真っ赤にして肩を震わせ拳を固く握りしめていることで、相手の限界が近いのは一目瞭然であり。魔王と魔女のコンビがあまりに一方的に少年を攻めていることで、今まで介入出来ていなかった美紀たちも流石にそろそろやめてやれと止めようとした。
しかし、それより速く魔女の口から容赦のない指摘が入る。
「……貴方もしかして泣きそうになってる？　これだけ大勢の前で泣

けるってすごいわね。流石は三十三位だわ」
「だが、泣く理由が分からないな。ああ、そうか。テストの結果を不甲斐なく思っているんだな。三十三位でも慢心せずに上を目指すとは流石だ」
その言葉が止めとなり木戸の目から涙がボロボロと零れ落ちる。涙を袖で拭い、鼻をすすりながら、それでも木戸は相手に言葉を返した。
「本当にいい加減にしてくださいよぉ！　なにか恨みでもあるんですかぁっ!?」
「恨み？　そんなのないわよ。だって、歯牙にもかけてないもの」
「ああ、路傍の石にそんな感情を抱く訳がない」
少年が頑張って言い返してもこれである。何を馬鹿なと言いたげな表情をしながら、二人は本当に興味なさげな目で相手を見ており、必死に自分を奮い立たせて言い返していた木戸は、もう何が何だか分からないと袖で目を覆い、ついに何も言えなくなってしまう。
少年は規則を破っている上級生を正義感から注意しただけだ。その後は生意気な年頃ということで、少々喧嘩を売る形になってしまったが、元を辿れば規則を破っている湊らにも非はある。
だというのに、ここまで相手の心を折りにかかるとは酷過ぎではないか、と風花がチドリの袖を後ろから掴み、ゆかりが湊の背中を軽く叩いて、両者の間に入る形で美紀が口を挟んだ。
「あの、お二人とも流石に可哀想なので止めてあげた方が……」
「ふむ、どうやらお前は周囲から可哀想な人間に見えるらしい。よかったな同情して貰えるのもお前の人徳や人柄あってのことだぞ」
だが、女子らに止められても湊は追撃を放った。今度のそれは彼のプライドまで粉々に破壊し、木戸は目を袖で覆って泣きながらその場にしゃがみ込んでしまう。
今まで一緒になって口撃を加えていたチドリは湊がそうした事を何も責めようとしないが、最早これは弱い者いじめだとして、ゆかりや美紀だけでなく風花ですら怒ったように湊へ厳しい視線を送る。
そんな視線を受けても本人はつまらなそうに木戸を眺めているが、

人の集まる場所でこんな事をしていれば当然目立ってしまう。生徒らも湊たちを囲うように立っているので、騒ぎの中心は見つけやすく、そこにある女生徒が現れた。
「貴方たち、一体何を騒いでいるのかしら？」
「副会長おっ、この人たちをどうにかしてください！」
人ごみを抜けて現れたのは、どこかツンとした冷たい雰囲気をした長い黒髪のスタイルの良い女子だった。
知り合いの声を聞いて顔を上げた木戸から副会長と呼ばれた彼女の名は、高千穂（たかちほ）　楓（かえで）。２―Ａに所属する生徒会副会長である。
やってきた彼女は片手を腰に当てた状態で一同を見渡すと、知り合いであり生徒会の後輩でもある木戸が泣いている事に気付いて、彼にハンカチを渡しながら立たせるために手を貸す。
「なんで貴方は泣いてるの？　というか、有里君じゃない。木戸君と知り合いだったの？」
「……いや、先週の土曜日に彼がテストの順位で勝負を挑んで来てな。まぁ、結果はご覧の通りで悔し泣きしてしまったらしい」
「そうなの？　木戸君も随分と無謀な事をするわね。というか、貴方って初等部から上がってきたのに有里君の事を知らなかったのかしら？」
同じクラスになった事はないが、湊の同級生である彼女は湊の事を当然知っていたようで、よくこんな相手に勝負を挑んだなと若干呆れ気味に淡々とした口調で問いかけた。
すると、自分の味方になってくれる人物が来た事で僅かに立ち直った木戸は、借りたハンカチで涙を拭きながら正直に答える。
「ぐすっ……知りませんよ、こんな人。テストの順位にだって一度も名前出てなかったですし。校内では一度も見てませんでしたから」
「一応、彼は中等部の広告塔になっているのだけれどね。出資者の娘である会長よりも、一般枠の生徒の方が宣伝にも使い易いから」
「だからって優遇し過ぎですよ。こんなにアクセサリーとかカラコンとか付けて……」
「有里君の眼も、吉野さんの髪も天然よ？　この学校だとその話しも

有名なのだけど、あんまり噂とかは聞いたりしないタイプだったのね」
　アクセサリーについては擁護出来ないが、彼らの眼や髪の色は完全に自前である。味方であり信頼している先輩がそういえば信じない訳にはいかず、湊らの説明を完全に適当な嘘だと思っていた木戸は驚いた表情をしていた。
　生徒の声を聞くべき生徒会役員でありながら、そんな校内でもそれなりに有名な話しも知らなかった後輩に嘆息する楓。
　しかし、彼女はすぐに思考を切り替えると、湊の方に向き直って不敵な微笑で話しかけてきた。
「それより、復学していきなり一位ってすごいわね。おかげでまた四位になってしまったわ」
「チドリや真田とそれほど差はないだろ。とりあえず、その二人に追いつけるように頑張ればいいさ」
　生徒会の副会長を務める楓だが、彼女は木戸よりも遥かに成績優秀な生徒で、湊もいる状態なら常に四位につけており、美紀やチドリに僅かに及ばないながらも徐々に差を縮めてきている。
　美紀のように完全に努力の人間なので、尊敬している美鶴と同じようにテストで満点しか取らないくせに不良にしか見えない湊を最初は嫌っていたが、真面目に授業を受けて部活も頑張っていると知ってからは、同じように教師からの評判がいいチドリも含めて偏見を持たずに接する事が出来るようになったという過去がある。
　木戸も喧嘩を売る前にリサーチしていればこんな事にはならなかったはずだが、その少年を放置しながら楓は湊の言葉にくすりと笑って答える。
「ええ、その内追いつくつもりだから、貴方も今の地位を維持しておくといいわ。それじゃあ、私は部活があるから行くわね。また今度留学中の話を聞かせて頂戴。私も少し興味があるから色々と参考にしたいから」
「……ああ、アジアと中東とヨーロッパ辺りの話しになるが、それでよければ教えよう」

「十分よ。それじゃあ、他の方もまた。木戸君は貸したハンカチは今度返してくれればいいわ」
それだけ言うと順位を確認しに来ていた楓は去って行った。
後には泣きやんだ木戸と部活メンバーが残るも、既に彼に対する興味を失っていた湊はチドリを連れてその場を離れてゆく。
一緒にいたゆかりらは彼に何も言わないのかと考えたけれど、今日の湊とチドリは少年の心に一生もののトラウマを植え付けかねないので、これ以上の被害が出ないのであればと黙っている事にした。
ポツンと独りになった木戸は、二年の順位表に視線を向けると改めて湊とチドリの名前を記憶する。そして、二度のあの二人を忘れないと心に誓いながら、ムスッとしたどこか拗ねた表情で鞄を取りに教室へと戻ってゆくのだった。

夜――中央区・マンション〝テラ・エメリタ〟
木戸との勝負を終えた後、部活が休みだったことで湊は久しぶりに眞宵堂のバイトを行った。
海外で手に入れてきた骨董品を栗原に渡す用もあったので、それを兼ねてのバイトだったが、商品の整理などもあったことにより、帰るのが十時を過ぎる頃になってしまった。
最寄り駅までの迎えや夕食の準備がされているチドリと違い。一人暮らしの湊は全て自分でやらなければならない。
家事自体は慣れているので問題ないが、遅く帰って来た日は自分のことだからと、つい食事などの手を抜きたくなってくる。
そもそも、湊は筋肉などにエネルギーを蓄えているため、常人と違って軽い食事だけで一週間以上持たせることが出来るのだ。
よって、食事の準備が面倒だった湊は、夕食は食べなくてもいいかと結論付け。パソコンに届いていた仕事のことを考えながらエレベーターを降りたとき、最奥にある自分の部屋の扉まで続く廊下の途中に人が倒れているのが目に入った。
今は二月の中旬で、その時期の都内は夜には五度を下回る。おまけにここはマンションの最上フロアである十二階なので、地上よりも風

が強く余計に寒く感じてしまう。
　どのような理由で倒れているのかは分からないが、下手をすれば凍死しかねないので、自分の部屋までの通り道であることもあり、湊は倒れている人間の元まで向かった。
（……女か）
　近付いた湊は相手が月光館学園の制服を着た女子だと気付く。バッヂの色から判断するに中等部一年生のようだが、身長は高めで首の下辺りには豊かな双丘があるので一年生には見えない。
　だが、残念ながら湊は引越しの挨拶も含めてご近所付き合いなどしていないので、この隣の部屋の扉の前でリュックを枕に丸くなって寝ている少女が家人かどうかも分からなかった。
　とはいえ、家人であろうとなかろうと、このまま放置すれば明日の朝にはコールドスリープを超えて永眠してしまうのは目に見えている。故に、色々と面倒だと思いつつも、相手の肩を揺らして声を掛けた。
「おい、起きろ。こんなところで寝たら凍死するぞ」
「ふぇ……？　えっとぉ……おかまいなくぅ……すぅ……すぅ」
「寝るな、莫迦！　寝るなら家の中にしろ！」
「んんぅ……ズズーっ……頭痛い」
　声をかければすぐに起きるかと思いきや、少女は再び夢の世界に旅立とうとしたので、湊は名前も知らぬ少女の頭に躊躇いなく手刀を落とす。
　寝呆けている相手でも、流石に頭部に攻撃を受ければ意識が覚醒したのか、もぞもぞと身体を起こして伸びをしたかと思えば、鼻をすすってガタガタと身体を震わせながら頭痛を訴えてきた。
　エルゴ研時代から飛騨の持っている医学書を読んでいた湊にすれば、アナライズも駆使して大概の患者の病名を看破する事が出来る。
　しかし、いまこの場に置いては、その様な医学の専門知識など全くの不要で、単純に一般常識さえ持っていれば少女の病名を言い当てることが出来た。
　そう、その病名とは、

「……風邪だ。この時期に制服とコートだけで寝ていれば誰だってそうなる。お前はこの家の人間か？　どうしてここで寝ていた？」
「えっとぉ、学校に鍵を忘れちゃって。でも、気付いたときには学校しまってたんだけど、パパもママも家にいないから、学校が開くまでここで寝てようかなって思ったの。でね、起きたら頭が痛いしクラクラもして変だなぁって」
「だから、それは風邪だ。両親はどこに行ってるんだ？」
「アメリカでゲーム作ってるよぉ」
　少女の両親の居場所を聞いたとき、湊も頭が痛くなるような感覚を覚える。別に彼女の親の職業を否定する気はないが、仕事で海外に行くのなら娘も連れていけば良かったのではないかと思ってしまう。
　こんな真冬に家の前だろうと野宿しようとする娘だ。喋り方も少し間延びしてゆっくりなため、一人で置いてゆくには色々と危ない印象を持つ。
　彼女の親も彼女に似てゆっくりしていて気付かなかった可能性もあるが、どちらにせよ風邪を引いて熱まで出している人間を放置する訳にもいかない。
　鍵がなくともピッキングスキルで開けてやれるが、今の彼女に自分で色々する気力はないと思われるので、湊は相手を抱き上げると自分の部屋に運び込むことにした。
「寝床を提供してやる。だから野宿はやめろ」
「んー、でもぉ、知らない人の家には行っちゃいけないってママが言ってたからぁ」
「お前の家の隣に住む有里湊だ。文句があれば訪ねてくればいい」
「えっとね。わたしは羽入（はにゅう）　かすみって言うんだよ？　湊君の家ってお隣なの？　えへへ、すごい偶然だねぇ」
　何にもすごくないし偶然でもない。部屋に向かう途中に相手が倒れていたのだ。幅二メートルほどの廊下でゆかりよりも少し背の高い女子が寝ていれば嫌でも目に入る。
　抱き上げた感覚だと発育はとても良いが太っている訳ではなく、むしろ、軽い部類に入るとすら思う。二―ソックスが僅かに食い込んだ

白い太腿には健康的な色気を感じ、顔もぽやっとした性格通りにどこか気の抜けた愛嬌というか可愛らしさがある。
正常な男子であれば、相手が風邪で弱っているのをいい事に、部屋に連れ込めばいやらしい事をしていたのだろう。
だが、湊はその正常からずれた存在だ。枕にされていたリュックと共に相手を抱き上げれば、そのまま自分の部屋の扉を開けて、少女を自宅へと招き入れる。
玄関では靴を脱がし、とりあえずリビングのソファーまで連れて行って寝かせると、一度離れてどこからか持ってきたタオルケットをかけてやった。
ずっと外にいた彼女にはそれだけで幸せなのか、嬉しそうな顔で何やらヌクヌクしている。
「わぁ、あったかいねー」
「……少し待ってろ。風呂にお湯を張ってくる。溜まったら入って身体を芯からあっためてこい」
「えっとね。タオルもパジャマも下着もないよ？」
「タオルとパジャマ代わりの物は貸してやる。下着はお前が風呂に入っている間に洗って乾かしておくから、それを付けろ」
「んー、でもなぜか頭がぼーっとして一人じゃ入れないかなーって」
確かに相手は話す事は出来ているが自分では動けていない。この状態で風呂にいれれば、様子を見に行ったときに下手をすれば浴槽に浮かんでいるかもしれない。
人を殺める事は問題なく出来るが、流石に何の罪もない少女を監督不行き届きで殺す気はない。
今の湊は読心能力を常にオフにしている訳だが、それでも動物の声は副音声のように意味を理解出来るし、周囲の人間が自分に対して好意と悪意のどちらを向けているかは自然と理解出来てしまう。
その能力に当てはめれば、この少女は幼い子どものように純粋で、知り合ったばかりだというのに湊を完全に信頼して好意を向けてきている。性質は異性に対する物ではなく、友人などに向けるようなライクの方だが、それでも自分を頼ってきた善性存在を理由もなく突き

離すなど、甘過ぎるくらいに優しい青年に出来るはずもなかった。
「……はぁ、とりあえず待っておけ」
一度深い溜め息を吐くと湊は少女から離れてゆく。荷物などマフラーに入れているので持ち歩いていないが、コートなどいくつか部屋に置いて来たい物はあった。
よって、それらを部屋に置いて彼女に貸すためのパジャマなどを用意すれば、時流操作で外からは一瞬のうちに溜まったように見せながらお湯を張り。自分も濡れてもいい服装に着替えてから、かすみの元に戻ってきた。
「それじゃあ風呂にいくぞ」
言いながらソファーで寝ている少女の背中と膝の裏に手を入れて抱き上げる。彼女は未だにコートを着たままだが、どうせ脱衣所で裸になるのだから一度に脱がせても問題はない。
リビングから移動し、脱衣所では寄りかかる様に立たせた状態で次々と服を脱がせ、その際に相手がまったく恥ずかしそうにしていない事を不思議に思いつつ、相手を風呂場のバスチェアに座らせればシャワーでお湯をかけてやる。
「ふふー、あったかいよぉ」
「……自分で身体を洗う気はあるか？　それとも俺が身体に触れても問題ないか？」
「洗ってくれるの？　ありがとー」
質問に答えていないが意味はきちんと伝わっていたようなので、湊はスポンジでボディシャンプーを泡立てると、ふんわりとした柔らかい泡で少女の白い肌を傷付けぬように洗う。
雫が珠のように肌の上を滑るほどの瑞々しさと張りをした肌だ。湊も少女以上にきめ細かな若い肌をしているが、相手が女子であればそれは高級なガラス細工のように丁寧に扱わねばならない。
「えへへ、くすぐったいよぉ」
「……前も自分で洗わなくていいのか？」
「いいよぉ。あのね、おっぱいは谷間とかに汗をかくから綺麗にしなきゃいけないんだって」

「……洗う前にわざわざ言うなよ。というか、お前は男に触られることを気にしろ」
右手で出しっ放しになっているシャワーを持ち、左手のスポンジで少女の鎖骨や胸を撫でるように洗う。
相手は年下だがその戦力はチドリやゆかりよりも圧倒的だ。小玉スイカやメロンとでも言えばいいのか、掌から僅かにこぼれそうになるほどの質量を持った胸が、彼女がくすぐったさに身を捩る度に揺れている。
とはいえ、湊はイリスと普通に風呂に入っていたので、相手が見られたり触られて嫌がるのではないかと気を遣いはすれど、見慣れている事もあって全く欲情などしていなかった。
男性や思春期男子としてはむしろ不健全だが、残念なことに湊は身体は男でも遺伝子上は両性であるため、順平や友近が泣いて羨ましがるような桃色イベントも、単純な病人の介護として認識されていた。
そうして、胸などのデリケートな部分も全て洗い終え、再び相手を抱き上げると大きな浴槽にゆっくりと座らせる。
湊は服を着ているので入らないが、相手がバスタブの縁に置いた腕に頭を乗せて惚けた顔で何やら言っている。
「じゅわ～ってするねぇ」
「……入浴剤はいれてないがな」
「身体の内側がぽかぽかするよぉ。湊君も一緒に入ろう？」
入浴剤も入れていないのにじゅわっとすると言われて何の事かと思ったが、彼女の言葉選びが特殊なだけでじんわりとお湯の温かさが沁みてくるという意味らしい。
上機嫌にお風呂に入っている相手はほとんど動いていないので、このまま放っておいても溺れたりはすまい。
身体が冷えていたので風呂に入れたが、風邪を引いている人間に長風呂は禁物だ。風呂というのは血管が収縮して血流がよくなることもあって、本人が思っているよりもかなりの体力を消耗する。故に、十五分ほどお湯に浸かればあがらせた方が良いだろう。
「やらないといけない事があるので遠慮させてもらう。しばらく大人

しくお湯に浸かっててくれ。寝室の準備やお前の服を洗濯してくる」
「そっかぁ。うん、いってらっしゃーい」
彼女が一人で入浴出来ていればその間に準備が進められたが、身体を洗ってやっていたことで準備は何も出来ていない。
相手に大人しくしているように言いつけ、湊は風呂場を出ると寝室に加湿器と暖房を入れ、再び脱衣所に戻って来れば彼女の衣類を下着だけ別にして、二回に分けて洗濯した。
＊＊＊
少女の身体を十分に温めたことで、あがらせて身体を拭き、髪もドライヤーで乾かすとショーツにバスローブだけ着させて寝室へと運んだ。
他の衣類は先にベッド横のナイトテーブルに畳んでおいており、バスローブを着た相手はキングサイズのベッドを見て感動したように声を漏らす。
「わぁ、王様のベッドだぁ。えっとね、パパとママが言ってたけどわたしもお姫様なんだよ？　湊君もどこかの国の王子様？」
「……血筋的には神だな。学校では皇子と呼ばれているが」
「一緒だねー。あのね、ママが言ってたけどお姫様は王子様としか結婚しちゃ駄目なんだって。だから、パパは駄目なんだよ？」
「……お前の母親は父親の夢を一つ壊したな。きっと言って貰いたかっただろうに」
父親の夢の一つとして娘に「お父さんと結婚する」「パパのお嫁さんになる」と言ってもらうというのがある。
全ての父親がそう考えている訳ではないが、娘を姫と呼んで溺愛している両親のようなので、きっと相手の父親は言ってもらえる事を夢見ていたに違いない。
そんな事を考えながら、言葉の意味が理解出来ないらしく首を傾げている相手をそのままベッドに運び、湊は相手の着ているバスローブの帯を解くと脱がせてベッドにうつぶせる様に指示を出す。
「風邪を治してやる。シーツの上にタオルを敷いているから、そこにうつぶせで寝転がれ」

「湊君はお医者さんなの？」
「まぁ、大概のことはできるよ」
素直に指示を聞いて相手が寝転がれば、湊はナイトテーブルに置いていた器具を取り出した。そこにあったのは鍼灸治療用の鍼だった。
本来ならばちゃんとした資格を持っていなければ違法だが、この男は相手が誰にも話さないと分かっているので、手っ取り早く鍼で治してしまおうと思ったのだ。
風邪で意識が朦朧としていながらも、湊が何をするのか興味深そうに見ていたかすみは、その手にあるのが鍼だと分かって驚いたように目を大きく開く。
「針？　チクチクして危ないよ？」
「まぁ、少し痛いかもしれないが上手くやる。風邪の症状を緩和するのなんて鍼治療じゃ一般的なんだぞ」
「そうなの？　お薬とどっちがすごい？」
「体質によるな。ただ、相性がよければ三十分もせずに楽になるさ」
言いながら湊は相手の背中を触診してどこに鍼を刺すかを探ってゆく。胸が大きいせいで肩こりもあるようなので、そちらもついでに治してやるかと考えつつ、湊は鍼を取り出すと慎重に刺し始めた。
刺す瞬間はやはり刺激を感じるようだが、何本も刺している内にびくびくしていた相手の身体から緊張が抜けていた。
重ねて腕を枕代わりにしていた相手の顔は緩みきっており。時折なにやら声を漏らしている。
「ふぁ……んふふー……うーん」
「……どうした？」
身体さえ動かしていなければ、別に相手が歌っていようと手元を狂わせたりはしないが、ずっと声を漏らしていると何かあったのかと思ってしまう。
アナライズと長年の勘で治療が上手く行っている事は確認しているけれど、何か自分の気付かない事があるのなら言って欲しい。
そう思って湊が尋ねれば、かすみは涎を垂らすほど蕩けた顔で答えてきた。

「きもちぃ……身体のふらふらも頭が痛いのも治ってきたよぉ。湊君は王子様なのにお医者さんにもなれるんだねー」
「まぁ、一般向けの職業は学生だがな。俺は月光館学園に通う二年生だ」
「そうなの？　じゃあ、一緒にいけるね」
家は隣で通う学校は同じ。湊の所属する部活に朝練はないので、相手も朝練に出ないのであれば一緒に学校に行く事は出来る。
しかし、満面の笑みを向けてきているこのポヤポヤとしたのと一緒に行くのは、主に精神的な意味で疲れそうだと内心で遠慮した。ただし、それを口に出せば相手が傷付くような気がしたので、誘われたときに理由を付けて断ると決めるだけに留めておく。
湊はその後も治療を進め、処置してしばらくしてから相手をパジャマに着替えさせると、スポーツドリンクを飲ませて寝かしつけた。
鍼治療は相性が良ければ確かに症状を緩和させるなど効果があるが、やはり体力が落ちている状態では睡眠も必要なのだ。
相手がしっかりと眠ったことを確認した湊は、治療に使った器具を片付け、シーツの上に敷いていたタオルとバスローブを洗濯機に放り込むべく部屋を後にした。

２月１７日（土）
早朝――湊自宅
一晩ぐっすりと寝た羽入かすみは湊のベッドで目を覚ました。起き抜けでぼーっとする頭で辺りを見渡し、自分の部屋でないことに気付くが、特に気にしたりはしないのか不思議そうに首をかしげつつベッドからモゾモゾと抜け出す。
ベッドの横のナイトテーブルには自分の携帯とブラ・キャミソール・ニーソックスが畳んで置かれ、制服とコートはハンガーにかけられて吊るされており、リュックはベッドの脇にそのまま置かれていた。
けれど、携帯で時刻を確認すればまだ五時半にもなっていない早さなので、いつも七時以降に着替えているかすみは、携帯の近くに置か

れていた誰の物か分からないフリースをパジャマの上に着させて貰うと、トテトテと歩いて部屋を出た。
ここは自分の家ではないが、こちらの方が少し広いだけで家の作りは大体同じであった。部屋を出たかすみはトイレを借りて用をたし。ちゃんと手を洗って出てくるとリビングに向かう。
冬の五時台ともなればカーテンの外は真っ暗だ。しかし、廊下からでもリビングから明かりが洩れていることが分かったので、誰かしらいるのだろうとリビングと廊下を隔てる扉を開けてそろそろと中に入った。
「……起きたのか。体調はどうだ？」
中に入るとそこには湊がいた。いつもはゆかりなどにアレンジされ結っている髪をシンプルなポニーテールにして、ソファーで英文が書かれた書類を眺めながらノートパソコンで作業していたらしい相手は、かすみにも向かいのソファーに座る様に手で示し、身体の調子を尋ねてくる。
「えっとね、お腹は空いたけど元気だよ？」
「そういえば、お前は夕食を食べていなかったのか。外食はしなかったのか？」
「昨日はね。レトルトカレーを食べようと思ってたから、外食はしなかったんだ」
その日の夕食をこれと決めていたので、かすみは他の物を食べようと考えていなかった。
別に絶対に決めた物しか食べない訳ではないが、夕食について考える前から扉の前で寝ていたことですっかり食べるのを忘れていたらしい。
夕食を食べる前から寝ていたとすれば、少なくとも三時間以上はあそこにいたことになるが、よくその間に不審者に襲われたり近所の人間に会ったりしなかったなと湊は純粋に驚く。
そうして、見ていた書類をファイルに仕舞うと、パソコンを閉じてから席を立ち、かすみをその場に残したまま湊はキッチンに向かう。
このマンションは建ってからまだ新しい部類に入るが、部屋の広さ

に十分過ぎるほどの余裕があるためカウンターキッチンではなくキッチンで一部屋とってある。
　カウンターキッチンは料理の配膳がしやすくお洒落で人気は高いのだが、収納等で不便な部分もあるので、料理をする湊はキッチンはキッチンとして一部屋取っている方が好みだった。
　ソファーにかすみを残してキッチンに消えていた湊は、一度戻ってくるとコップとスポーツドリンクを彼女の前に置いてゆく。身体を冷やすといけないので室温保存のものだが、喉が渇いていたかすみは笑顔で礼を言ってこくこくと喉を小さく鳴らしながら飲んでいる。
　相手が大人しく待っている間に、時流操作も使いつつパパッと料理を作ってしまえば、ダイニングの方に移動するよう手招きし、テーブルの席についた彼女の前に料理を並べた。
「うわぁ、おそばと稲荷寿司だ。食べていいの？」
「……ああ、お茶も持ってくるから食べていろ」
「えへへ、いただきまーす」
　お箸を手に持ったかすみは手を合わせて礼をすると、ざるに盛られた蕎麦を湯気のたっている汁につけて口へと運ぶ。
　どうして温かい汁と蕎麦が分かれているか不思議に思ったが、たっぷりネギと鶏肉らしきものが入った汁につけたそばを味わったかすみは、そんな事はどうでもいいと思うほどの幸せを感じた。
「これ美味しい。このお肉はなぁに？」
「それは鴨肉だ。鴨南蛮や鴨せいろと言われたりする蕎麦で、冬に脂ののった鴨肉を使うといい出汁が出て上手く作れる」
　説明を受けたかすみは早速旬の鴨肉を頬張っていた。醤油ベースの少し甘いつゆとよく絡んだ柔らかい鴨肉は、噛む度にジューシーな肉汁とつゆが溢れだし、蕎麦だけでは少しボリュームが足りないかと思っていた彼女の意識を一八〇度変える。
　これだけで十分ご飯のおかずになりそうな鴨肉だが、一緒に入っている細く切られた長ネギや三つ葉と一緒に食べれば、口の中をさっぱりとさせて味の変化で飽きるのを防いでいた。
「ふふーん、こっちの稲荷寿司も美味しそぉ」

山型ではなく俵型に包まれた稲荷寿司を箸で掴み、二口に分けて食べてゆく。蕎麦の汁も少し甘いものだったが、こちらの方が甘さは強いので差別化は図られている。
ほんのりと温かい酢飯の爽やかな口当たりの中に、何やら別の風味と食感が混じっている事で何かが混ぜられている事に気付く。
かじった部分を見てみると、雑穀らしき物が混じっているようなので、雑穀米で作った酢飯なのだろう。
かすみは料理に関しては素人だが、テレビで雑穀米は身体にいいと聞いていたので、蕎麦にたっぷりとネギが入っている事も含めて風邪に良いメニューなのだろうと思った。
「これって風邪の人に作ってあげるの？」
「別に風邪でなくても作るぞ。最初は洋風の雑炊というかクッパのような物を作ろうかと考えていたんだ。ただ、体調が良さそうなので肉でボリュームを出せるこちらにした」
「クッパ？　亀の料理？」
「ん？　いや、韓国料理の雑炊みたいなものだ。というか、亀なんて簡単に手に入らないだろ」
ゲームをよくするかすみはクッパと聞いて有名ゲームの敵キャラを思い浮かべた。けれど、ゲームをしない湊は意味が分からなかったようで、それ自体が料理名だと教えてやる。
ちなみに、亀の肉は中々手に入らないとは言ったが、桜や鵜飼らの行く顔馴染みの高級料亭で和食を教わった湊は、スッポン料理も普通に作る事が出来る。
ただし、血の処理が面倒なのと臭いが残るので自宅でする気はさらさらなかった。
そんな事はまったく知らないかすみは敵キャラと同じ名前の料理名に興味を抱きながら、湊が作ってくれた料理に舌鼓を打つ。
相手は中々の健啖家らしく、たった一夜だけだったとしても風邪が治ったばかりで食べれないと思っていた湊は、途中で席を立って追加のつゆに蕎麦と稲荷寿司を持ってきた。
新たに追加されたそれらを食べているかすみを見ながら、湊は彼女

にこの後の事について説明しておく。
「食べたらもう少し寝ておけ。朝食にサンドウィッチを持たせてやるから、そっちは学校で食べるといい」
「お昼のお弁当は？」
「……お前、意外と図々しいな。まぁいい。起きるまでに鍵は取りに行ってやるから、一度家に寄って今日の授業に必要な物を持っていけ」
　そういいながらも、実は既に学校に侵入して鍵は取って来てある。彼女のクラスはリュックに入っていたノートの名前欄で容易に確認できたので、ピッキングやスニーキングミッションが得意な湊には造作もないことだった。
　鍵を学校に行ったときに持って帰ろうと思っていたかすみは、今日の授業に必要な物に関して頭からすっぽり抜けていたようで、言われて思い出したことでウンウンと頷いて答える。
　それを見た湊は心など読まずともこいつは忘れていたなと看破し、食べ終わってもう一眠りしに行った相手を見送ると、食器を片付けて朝食のサンドウィッチと昼の弁当に水筒まで用意しておいた。
　プリンス・ミナトのメンバーでなくとも羨むような品々だが、かすみも木戸と同じように湊について知らない人間だったようで、送り出されてから学校で食べるときには、美味しいなと思って自分の席で一人ぱくついていたのだった。

第百二十一話　美鶴たちの中等部卒業

３月２２日（木）
朝――巌戸台分寮
その日、桐条美鶴は少しばかり早めに起きて学校に行く準備をしていた。
今日は平日だが中等部の卒業式だ。都内の学校ではほとんどが同じ日に行っているので、別に平日に行われる事は珍しくもないのだろう。
忙しいはずの父も、静養している母も来てくれると言っていた。行方不明だった有里湊も片目を怪我していたが、五体満足で復学していたので、憂いの消えた今の彼女はとても充実していた。
（はぁ……とはいえ、卒業するとなると少し寂しい気持ちになるな）
中等部を卒業しても、四月にはお隣の高等部に入学する。説明ガイダンスや入学前の学力テストなどで来週も同じ通学路を歩く事になるので、校舎が変わる事や同級生が増えること以外それほど変化はないだろう。
それでも、三年間通っていた校舎から去るというのはしんみりとした気分になる。
生徒会は来年も立候補すると役員の後輩全員が言っていたので心配していない。
もっとも、能力がある者が役員になるべきだと他薦でも候補者になるシステムなので、来年度の生徒会長は自分の後輩ではなく他薦で立たされる湊になる可能性は大いにある。
どういう訳か一年生の木戸庶務が彼を嫌っていたので、来年も立候補するつもりならば通れば部下になってしまうのだが、その辺りは本人らの判断で自由に任せるつもりだ。
（適性者候補は今のところは有里と吉野しかいない。彼らの周辺で数値が高まってきている動きはあるが、今の有里の数値が分からないので、その辺りも来月の健康診断で分かるだろう）
湊とチドリの勧誘はチドリとの約束によって出来ない。高等部に

なれば再チャレンジしてもいいかもしれないが、根が真面目な美鶴は相手の許しが出ない限りは、高等部になろうが社会人になろうが勧誘するつもりはなかった。

それでも仮に勧誘するときが来るとすれば、あまりにシャドウの被害が深刻化し、自分たちだけでは手に負えなくなってしまったときがその時だろう。

桐条グループも必死に研究を続けてどうにか影時間を消せないか探っているが、いまのところは何の糸口も掴めていない。

つい先日、久しぶりにタルタロスを見に行ったとき、いつの間に増えたのか白銀の扉が階段の横に現れていた。

真田と荒垣も一緒にいたので、二人にも協力してもらい調べてみたが、扉は全く開く気配もなく冷たく佇んでいた。

しかし、心の奥深くに眠る本能のようなものが警笛を鳴らし、この扉は危険だと直感で知らせていた。

他の二人も同じように感じていたらしく、どこへ続いているのかは不明だが、とりあえず今の自分たちの実力では扉が開いても行くべきではないと判断し、それ以降はタルタロスを見に行った日に調べる以外は何もしていない。

今後もまた扉が増えてゆく可能性もあるが、それが何に起因するのか分からなければ法則も掴めず、毎日確認しに行くしか調べる方法はない。

普通ならば監視カメラをセットすれば済む話であっても、影時間のこととなると調査機材に黄昏の羽根を積んだり、頻繁に回収しにいけないこともあって長寿命バッテリーを用意する必要がある。

美鶴たちの行けない日は、桐条グループの人間が行ってくれるのならバッテリーは気にせず済むが、街中にはイレギュラーシャドウが出ることもあるので、戦う力を持たぬ者らにそんな危険を冒すような真似はさせられない。

やはり、高等部に入ってから新しい仲間を探してタルタロスを攻略する必要があると考えながら、美鶴は湯気のたっている温かな紅茶に口を付けた。

「……フゥ、上手く淹れられたな」
これは先日、幼馴染で宗家ではお傍御用を勤めている斉川菊乃に教えて貰った茶葉だが、スッと引くような後味で、朝や作業をしているときに飲むと頭が冴えるような気がするので、自分の中ではちょっとしたブームとなっている。
年末年始に宗家に戻った際に、自分が何やら悩みを抱えていると思った菊乃は、紅茶党の美鶴の事を考えてこの茶葉を探して来てくれたらしい。
仲間が二人も増えたことで影時間の活動も充実しつつあるというのに、自分をよく知る者には胸中に抱える今後への不安を簡単に見抜かれてしまう。
仮に自分がこのまま特別課外活動部のリーダーとして仲間を纏めるとすれば、そんな風では仲間にまで不安が伝染してしまいそうだ。このままではいけないと、今日が丁度一つの区切りであるため、美鶴は本心を隠す術を身につけ、もっと皆を纏められる強さを手に入れようと思った。

昼――月光館学園・中等部
卒業式を無事に終え、卒業証書や卒業アルバムの入った鞄を持った真田と荒垣は、美鶴から今日は両親と過ごすと聞いていたことで、特に声をかけたりもせずに校舎から出てきた。
校舎から校門までの道は生徒と保護者で溢れているが、自分たちの知り合いは一人とても目立つ髪色の少女が混じっていることで見つけやすかった。
長かった髪を急にばっさり切っていたことには驚いたものだが、少しすれば自然と慣れていった。
もっとも、少女の家族である青年の変化には未だに慣れない。今までは身長差で見下せていたのが、反対に相手に見下されるようになったのは非常に腹立たしいものがあるのだ。
一体何センチになったのだと尋ねれば、煙管など吹かして一八三センチだと答えた。他の女子も詳しくは知らなかったようで、一八〇越

えはスペック高いと言いながら楽しげにはしゃいでいたため、その中に妹がいたこともあり真田はまだ止まっていない身長を伸ばす努力を密かに始めていた。
　ついでに言えば、荒垣も湊に見下されるのが癪に障ったのか、最近では身長を伸ばすためのレシピを研究し自炊している。
　二人ともまだまだ成長期で背は伸びるので、今から意識的に取り組めば夢の一八〇台に届く可能性は十分にあった。
　とはいえ、今日はその青年は来ていないようで、在校生として卒業式に出席していた面々の元に向かった二人を、彼と教師を除く美術工芸部のメンバーたちが迎えてくれた。
「先輩、卒業おめでとうございます」
「おう。つっても、四月からは隣の敷地に移るだけだけどな。通学路も何も変わりゃしねえ」
　ゆかりから祝いの言葉を言われた荒垣は、隣の高等部に移るだけなので、駅から少し近くなる以外は通学路も殆ど変わらないと嘆息する。
　ここにいるのは半年だけ初等部に通っていた湊を除き、全員が中等部から入学して高等部に進学する予定の者ばかりだ。
　湊のように一年間ほど留学するでもしなければ、小学校と同じ期間の六年も同じ通学路で通う事になる。
　それで今さら新鮮さを感じろというのも無理な話で、校舎が変わり装飾品等の校則が緩む以外に変化はほとんどないと、折り返しでしかない中等部の卒業自体にもあまり感動しないのはしょうがないのかもしれない。
「……これ、湊から二人にって手紙預かってる」
「なんだ、参列できないからってわざわざ手紙を寄越すとは変なところで律義なやつだな」
　二人がやってきた事で鞄をごそごそとしていたチドリが、手紙の入った封筒を真田に渡した。そこには『卒業されるお二人へ』と書かれており、無駄に達筆なこともあって後輩からそんな物を貰った真田らは不思議な気分になる。

けれど、チドリに預けてまで届けられた手紙であるため、せっかくだから読んでみようと封を開けて中身を取り出した。

――――荒垣先輩、真田先輩、御卒業おめでとうございます。お二人の新たな門出の日に、このような手紙での見送りとなることを先ずはお詫びさせて頂きます。

お二人との出会いは四月初旬の昼休みでしたね。〝敗北記念日〟と呼ばれるようになったあの日の事は、今もまるで昨日の事のように覚えています。つい先日まで小学生だった後輩に喧嘩を売ったくせに、全く歯が立たずに無様に負けた真田先輩の茫然とした表情はいい思い出です。

それから時が経ってからした試合のことは覚えていますでしょうか？　〝惨敗記念日〟との呼び名で親しまれておりますが、あの日の真田先輩は自分が知る中でも最もいい表情を浮かべていました。口からだらしなく涎を垂らし、白目を剥いてリングに寝そべっていたときの先輩は、これぞ負け犬という姿を私たち後輩の脳裏に刻んでくださいましたね。自分ならあんな姿を晒せば恥ずかしさに人前に出ることなど出来ませんが、常人とは異なる胆力を持つ先輩はいまも堂々とされていて素直に尊敬します。

あれからしばらくの間、私たちの学年では密かにビッグマウス真田と呼ばれていたのですが、そのあだ名を広めたのは自分です。先輩もリングネームが欲しいだろうと思って親切心から行ったのですが、残念なことにシスコンボクサーが先に定着しつつあったようなので、潔く身を引いておきました。どうか後輩たちの考えたリングネームを大切にしてあげてください。

荒垣先輩との思い出は、正直それほどありません。呼べば来る犬のような根っからのパシリストである先輩は、自分よりも女子たちに呼ばれていいように使われていた姿がとても印象的でした。

ああ、この人は恋人や妻の尻に敷かれる運命にあるんだな、と明るい未来を思わず幻視してしまうほど板についた小間使い姿は流石の一言です。

その姿を見た男子の何名かは、自分たちも先輩のように女子らに

使って貰いたいと鼻息を荒くしていました。彼らはまだまだ未熟ですので、先輩の手が空いているときには、一流パシリストとしての心得などをご指導していただければと思っております。後進の成長のためどうか御一考ください。

話が長くなりましたが、瞼を閉じれば思い出す先輩たちの雄姿を一生忘れません。先輩方の逸話を今後も後輩たちに伝えてゆくとともに、私自身もそれを反面教師として己を高めて行きたいと思います。

お二人のこれまでのお導きに心から感謝し、両名の安らかなご冥福をお祈りいたします――――

読んでいる途中で肩をわなわなと震わせていた二人は、律義に最後まで読み終えると湊からの手紙を握り潰して地面に叩きつける。本当は破り捨てたかったが、ゴミを出すのはどうかと思い耐えたのだ。

男たち二人のそんな行動に女子らは驚きつつ、クシャクシャになった手紙を美紀が拾い上げると他の女子も一緒になって目を通す。

そして、彼らが手紙を捨てた理由が分かったようで、困ったような苦笑を浮かべると手紙を送られた二人に同情的な視線を向けた。

別に荒垣も真田も湊の手の込んだ悪戯には慣れているので電話で怒鳴りこんだりはしないが、わざわざ全てに目を通して無駄にした時間を返せと疲れた表情で溜め息を漏らす。

「祝電のふりして弔辞を送ってくるとか悪質にもほどがあんだろ。ってか、暇人かあいつは」

「吉野。あいつ、面倒くさがって来てないだけで実は家で寝てるだろ」

「……湊はいま一人暮らししてるから普段の行動は把握してないけど、手紙の他にプレゼントも預かってるわよ」

言いながらチドリはごそごそと鞄から預かっていたプレゼントを取り出す。真田には両手で軽く抱えるほどの大きな箱を、荒垣には週刊漫画雑誌ほどの箱を、それぞれにしっかりと手渡す。先ほどの手紙のことがあって警戒しているようだが、包装されている事で紙を破いてみなければ分からないため、二人は視線を交わすと同時に開けた。

「これはっ!?」

袋を破いてパッケージとなっていた箱を見た瞬間、真田が目を見開

き驚きの声をあげる。彼の方は荒垣と比べて大きな箱だったが、そこにはボディビルダーらしき外国人の写真と派手な色とポップな書体の英文が書かれている。

他の者はそれが何か分からないが、真田は箱を地面に下ろすと真剣な表情で箱を開けて中身を確認し、中に入っていた六つの袋を全てじっくりと見終わると納得したように頷き口を開いた。

「このパッケージは間違いない。その日の気分に合わせて選べる六種の味、冷たい水だろうとサラッと解け、極めて高い吸収性から飲んですぐにウォーミングアップを始められるという、現ライト級世界チャンプも愛飲しているという高級プロテイン。その名も〝ディーププロテイン・サード〟！」

商品名を声高に宣言する際、真田は拳をぎゅっと握りいい笑顔（グッドスマイル）を浮かべる。

それを見ていたゆかりは、お前は深夜のテレビ通販の人間か、と突っ込みをいれたい衝動に駆られたが、今の真田を下手に刺激すると延々とプロテインの素晴らしさを語りかねないので、面倒を嫌ったゆかりはぐっと堪える。

そして、今度はその隣の荒垣に視線を送れば、彼は彼で出てきた箱の中身を確認して何やら驚きを見せていた。

「こいつは、ダイヤモンドシャープナーにペティナイフとキッチンバサミのセットか。っておい、〝芳貞（よしさだ）〟のじゃねえか!? 一体いくらしたんだこれ……」

荒垣の言った〝芳貞〟とは、高級料亭の板前も愛用するほど優れた品質を持つ包丁ブランドの事だ。

専門の職人たちが一本一本作っており、今では海外のシェフたちもわざわざ買い求めに日本へ訪れるほどだと言われている。

箱に入っていたペティナイフは全長二十五センチほどの物だが、キッチンバサミとダイヤモンドシャープナーまでセットになっているので、同メーカーの和包丁を一本買うのと変わらないのではと思ってしまう。

以前から湊の金銭感覚は庶民と若干ずれているとは思っていたが、

今回は卒業祝いだとしても貰い過ぎな気がした。荒垣がその点について悩みながら品物の良さを眺めていると、プレゼントを渡して軽くなった鞄を持ち直していたチドリが湊から聞いていた事を荒垣に伝える。

「……値段は同じくらいになるようにしたって言ってたけど？」

「贈り物でこういうのを聞くのは野暮かもしれねえけど、流石に知っとかねえとマズイだろ。アキ、そのプロテインっていくらくらいするんだ？」

「これは各一キロで六種一セットになっているが高いぞ。税込みで九万近くする。俺もどれか一つでも試してみたかったんだが、セット売りしかしてないせいで諦めていた」

「きゅ、九万ってマジかよ。あいつ、知り合いの卒業祝いにポンとそれだけ出すとか、中学生のくせにどんな経済力してたんだ……」

プロテインを貰ってホクホク顔の真田に対して、荒垣は後輩から貰うにしては高額過ぎるプレゼントに少々動揺している。だが、傍で話を聞いていた女子メンバーは多少の驚きを見せた程度で荒垣ほど気にしてはいなかった。

というのも、湊とチドリが極道の家の子どもという事は学校側の人間しか知らないが、それでも女子たちは二人がお年玉で数百万貰っている事を知っている。加えて古美術〝眞宵堂〟と中華料理店〝南斗星君〟のバイトもあるため、学費全額免除も合わせて考えればこれぐらいの経済力はそれほど不思議ではないのだ。

卒業する男子二人は、湊にバイト以外の収入源がある事を知らないからこそ驚いていた訳だが、ずっと袋や箱の説明書きを読んでいた真田が顔を上げたかと思えば、急に何やらスッキリした表情を他の者に話しかけてきた。

「まさか有里のやつがこれを知っているとは思わなかったが、なるほど、やつのあの見事な肉体はこれによって作られたらしいな」

突然何の話かと他の者は頭の上に疑問符を浮かべる。どうやら真田は湊がこの高級プロテインを知っていた事で、自分よりも二回りほど逞しい体躯はこれで作られたと考えたようだ。

真田は湊のことを妹に近付く害虫のように思って警戒しているが、その鍛えられた肉体については見事だと認めている。
復学した後の身体は見ていないものの、線は少し細くなった気がするけれどリーチが格段に伸びている事は確かだ。身体を後ろに倒してブリッジ状態から足を振りあげ、自分の背後に蹴りを放てるほどの柔軟性にリーチが加われば、鞭のように敵を寄せ付けぬ鋭い攻撃を繰り出す事も可能だろう。
柔軟性を活かした湊のスタイルは自分ものとは異なるが、そういった自分の肉体の長所を活かしたワンランク上の強さを求めていた真田は、悔しくても認めざるを得ない湊の強さにこのプロテインで近付けそうだと不敵な笑みを浮かべた。
だが、湊がそんな汗臭い男たちが飲んでいそうな代物を愛飲していた事実がない事を知っている少女が、ばっさりと真田の発言を切り捨てる。
「湊の筋肉は天然よ。プロテインとかサプリメントは全く摂取していないわ。栄養は純粋に食材に含まれているものだけで、あとは飲んでも市販のスポーツドリンクくらいね」
「なに？　いや、しかし、やつの食べる量を考えれば可能かもしれんな。人間が一日に必要なビタミンを摂取するにはカゴいっぱいの野菜を食べる必要があるという。常人ならそれだけで腹が膨れてしまうが、有里は毎食常人の三倍以上食べていた。あれだけ食えるなら後はバランスを気にするだけで摂取量は十分になるという訳か」
真田はボクサーとして減量に関わってくる食材に含まれる栄養の知識を持っていた。お腹いっぱいに好き放題食べることはあるが、他の日には炭水化物を控えめにするなどして調整しており、湊の大食いを見ていた彼は羨むよりもそのエネルギーが何に使われているか不思議に思ったものだ。
結果としては、全て肉体の成長に使われたようだが、真田は湊のように大食いになって身長を伸ばそうとは考えていない。
二次性徴の一年差というのは大きい物で、湊と同じ二年生のときならば大食いで身長を伸ばすことも考えたけれど、身長の伸びが緩やか

になってきた中学三年生の終わりから同じ方法で伸ばせるとは思っていなかった。
故に、身長というリーチで相手が上を行くなら、自分はスタミナやアクセルを伸ばす事で打倒湊を目指すと真田は一人で燃えていた。
「あー、あとでこっちからもメールなり電話なりをしとくが、吉野の方からも俺らが感謝してたって伝えといてくれ」
幼馴染がそんな風に一人で何か考えていた事で、荒垣が代表して代理人の少女に伝言を頼む。荒垣たちも一応湊の連絡先は聞いているので、勿論、自分でも礼を言うつもりではいる。
しかし、実際に届けてくれた少女にも伝言を頼んでおけばより安心だ。受け取ったキッチン用品セットを鞄に仕舞い。未だに何度もプロテインのパッケージに視線を送っている幼馴染を見ながら、伝言を頼み終えた荒垣は今後の予定について一同に尋ねることにした。
「んで、この後はどうすんだ？　アキの方はボクシング部で送別会でもあんのか？」
「いや、卒業式の当日は保護者と過ごす者もいるからと先週に済ましている。夜は美紀と両親と一緒に食事へ行く事になっているが、それまでは昼食も含めて予定は空いているぞ」
「そうか。俺んとこは夜も含めてフリーだ。んじゃ、とりあえず昼でも食いに行こうぜ。お前も早速そいつを試したくてしょうがねえんだろ？」
長い付き合いでなくとも今の真田を見ていれば彼の考えなど簡単に分かる。湊から貰ったばかりのプロテインを飲んでみたくてしょうがないのだ。
図星を突かれた方は面白くない表情をするも、それを見た女子たちもおかしそうに笑っているので、この場は分かり易い態度を取っていた真田の負けだろう。
そうして、卒業式を終えた面々は夕方まで二人の卒業祝いに遊び倒すため、まずは腹を満たそうと街へと繰り出すのだった。

夜――港区赤坂・ホテル〝モルゲンレーテ〟

卒業式を終えた後、美鶴は両親と合流して久しぶりに家族で過ごしていた。母親の英恵の体調を考えればあまり無理はさせられないが、デパートに行けばＶＩＰルームに通され、ふかふかのソファーに座りながら商品を持って来てもらえるので、英恵に無理をさせずに買い物をすることが出来た。

娘や夫と一緒に買い物をすることなどほとんどない英恵はとても楽しそうにしていて、それを見ていた美鶴も朝に感じていた不安が吹き飛び、純粋に両親との時間を楽しめていた。

その時に買った物の内、私服は巌戸台分寮に送って貰い。ドレスは今日の夜に着るからと一着だけ包んで貰って、他は全て宗家の屋敷に送って貰うように手配した。

買い物を終えたときにはいい時間になっていたことで、美鶴たちはリムジンを走らせると予約していたホテルのレストランへ来て。ドレスルームを借りて着替えた美鶴は母に髪を整えて貰うと、先に席についていた父の元へ少し恥ずかしそうにしながら近付いた。

「お、お父様、お待たせしました」

「武治さん、どうかしら？」

新しいドレスを着た娘はどうだと隣に並んでいた英恵が桐条に尋ねる。本当は美鶴が自分で尋ねたかった事なのだが、そういった親子のコミュニケーションに慣れていない彼女は訊けずにいたので、事情を察した英恵がフォローした。

すると、ゆっくりと視線を上げて娘を見た桐条は、二拍ほど置いて静かだがよく通る声で答えてきた。

「ああ、よく似合っている。やはり、男児に比べて女児の成長は早いな。会う度に大人びて成長している美鶴を見ていると、自分が老いてゆくことを実感する」

「あら、それは私もおばさんになっているということですか？」

「い、いや、そういう意味ではない。しかし、美鶴も中学校を卒業する歳になったのだ。あまり傍に居てやることは出来ていないが、十数年の年月を思えば感慨深い物がある」

英恵が悪戯っぽい笑みで尋ねれば、桐条は少し慌てたように否定す

る。随分と珍しい父の姿に美鶴が目を丸くしていれば、やってきたボーイが椅子を引いてくれたので二人は着席した。
予約しているのはコースメニューなので、桐条は二人分の食前酒と美鶴にはノンアルコールカクテルのシャーリー・テンプルを注文する。
今日は娘の卒業祝いという事をレストラン側にも伝えてあったことで、食前酒とカクテルはすぐに届けられた。
「では、美鶴の卒業を祝して、乾杯」
『乾杯』
窓に近い東京の夜景を一望できる席で桐条が音頭を取り、三人は手に持ったグラスを掲げてから口を付ける。
中学を卒業したとて、社会的に見れば美鶴はまだまだ子どもだ。けれど、大人に一歩近づいたということで、大人が酒を飲むとき子どもが共に飲めるよう作られたカクテルを頼んだのは、桐条なりの心遣いだった。
ノンアルコールと言えどカクテルに明るくない美鶴はそれに気付いていないが、こっそりと意味を理解している英恵は、夫の可愛らしい行動に小さく笑みを漏らしている。
それを見た桐条は妻に自分の考えがばれている事に気付くも、丁度いいタイミングで料理が運ばれてきたことで、そちらに手を付けつつ会話をすることで誤魔化した。
「美鶴、寮での生活で困っている事はないか？　菊乃君が身の回りの世話をするため寮母として住み込みで働くべきかと心配していたぞ」
「いえ、それほど困っている事はありません。寮の掃除に関しても他の男子二人と当番制にして分担していますし。二週に一度は業者がハウスクリーニングを行ってくれていますから」
食事は料理した事がないので外食に頼っていたりするが、元ホテルである大きな寮の掃除は当番制でしっかりと出来ている。自分たちでは気付かないところも、桐条グループの掃除業者に頼んで二週に一度の頻度でやっているので、風呂場やトイレにカビは生えておらず、窓も壁も綺麗なものだ。

洗濯に関しては自分の他が男子しかいないので、下着などを干すときには気を遣ったりもするが、面倒なときにはクリーニングに出すことで済ましている。
よって、幼馴染の斉川菊乃が住み込みで働く事を希望しても、現状では仕事もほとんどないと思われた。
勿論、普段は一緒に学校に通って、放課後は寮母として掃除等々を行ってくれるというのであれば拒むつもりはないが、彼女の性格を考えると学校には通わず寮母としてだけ傍にいようとする気がする。
今でも学校から帰ればすぐに女中としての仕事をしていて、年頃の女の子らしいことなどほとんどしていないのだ。自分の傍にいるのなら、幼馴染にそんな事はさせられないので、美鶴は父に先に伝えておく事にした。
「お父様、菊乃が住み込みの寮母になる事には反対しませんが、そのときには彼女も月光館学園に生徒として通う事を条件として付けてください。私が言うのもなんですが、彼女はあまりに年頃の女子としての思い出作りを放棄しすぎています」
「ふむ、確かに学校から帰ればすぐに仕事に取りかかり、彼女は他の誰よりもよく働いてくれている。お前が彼女を案ずるのも無理はないな」
海藻の使われたサラダをフォークで上品に口に運びながら考え込み、桐条も菊乃の仕事ぶりを認めると共に彼女自身の少女としての幸せについて悩む。
本人は好きで女中をしているらしいが、それは親にほとんど捨てられるような形で桐条家に来たことで他の生き方を知らないからだ。学校で他の子と同じようによく学び、よく遊べば、もっと自分の幸せを願うようになるだろう。
娘を心配して菊乃を仕わせようとしていた桐条も、美鶴の言葉で思い留まると、菊乃の申し出はもう少し慎重に答えを出すべきかと考えた。
「菊乃君についてはもうしばらく考えるとしよう。では、特別課外活動部の方では何か困ってはいないか？　装備や機材で入用ならば幾

月かラボに言えばすぐに手配させるが」
「そうですね……。ああ、通信機材についてなのですが、もう少し小型化は出来ないでしょうか？　もしくは、持ち運びが出来るように車やバイクなど移動させられる物に積むことが出来ればいいのですが」
問われた美鶴は、最近の活動で不便に感じていた能力補助の通信機材の新型を用意できないかと尋ねた。
美鶴は元々戦闘型のペルソナ持ちだが、索敵能力に応用出来る力を備えていたことで、訓練を経て後天的に索敵能力を手に入れている。
とはいえ、その能力も美鶴本人は知らない事だが、他の索敵能力持ちに比べれば索敵可能範囲も読み取る強さも半分以下でそのままではまるで話にならない。それを何とか実戦で使えるレベルに引き上げるのが能力補助も兼ねた通信機材だ。
そもそも、彼女のペルソナの能力は攻撃の効果範囲を精密に予測する能力であり、それはざっくり言えばこれから攻撃しようとしている先を把握するだけの能力と言える。故に、情報を知覚出来る範囲はそれほど広くはないし、テレパシーのような通信機能などないので仲間に伝えるには通信機が必須であった。
だが、通信機材は能力補助になると同時に美鶴やメンバーを縛る枷にもなっている。
まず、美鶴が使う本体がとにかく大きいのだ。送受信のためのアンテナでもあるので大きくのなるのは分かるが、外で使おうとする度に台車や分担して運ぶ方の身にもなって欲しいと思わずにはいられない。
次に、前線メンバーの持つ子機だが、戦闘で激しく動くときには邪魔になる。なくせば美鶴からのバックアップが受けられなくなるが、激しい動きをしているときに気にしてなどいられないし。ちょっとした重さが戦闘では感覚を微妙に狂わせたりするのだ。
それらを解消するために、移動可能な物に自然な形で積めるようにして、本体も子機も今より小型化して欲しいというのが美鶴の願いだった。
「高校生、というより、十六歳になればバイクの免許を取る事が出来ま

す。バイクは現場急行時の足にも使えますから、通信機材と子機を小型化し、尚且つバイクに積めるようになれば我々の活動も楽になると思うのですが」
「むぅ……しかし、バイクとは危険な乗り物だ。ただでさえ、シャドウとの危険な戦いを強いているというのに、さらに日常でもお前に危険なことをさせるのはな」
一人娘の父親として、バイクという危険な乗り物に自分の娘が乗ると言えば素直に賛成する事は出来ない。
車と違ってバイクは安定性の悪い二輪であるし、運転者は生身で時速数十キロから百キロを味わうことになるのだ。
ちょっとした事故で一生物の傷を負う可能性を考えれば、やはり桐条は美鶴にバイクに乗って欲しくなかった。
それは英恵も同じ考えのようで、彼女は湊が無免許でバイクに乗っていることは知っているが、流石に娘と息子では危険な事をさせるにも同じように考えることは出来ず、心配そうな表情で会話に参加してくる。
「お友達で免許を取ろうとしている子はいないの？」
「うちの学校はバイク通学が禁止されていますし。まだ誰も十六歳になっていませんから、そういった話は聞いていないです。ただ、男子の中にはバイクや車が好きで雑誌を読んでいる者もいました」
勉強に関係ないものではあるが、生徒の趣味を制限するのもおかしいという事で、授業中に読みさえしなければ学校に雑誌を持ってくる事は何も禁止されていない。
美鶴のクラスメイトだった男子の中にも、高校生になったらバイトして免許を取ればバイクを買いたいと言って、バイク専門誌を持ってきて友人らと見ている者がいた。
ただ、そういった話をしている者がいたくらいで、実際に免許を取ってバイクを買うと美鶴に話した者は知り合いにはいなかった。
元々、学校中に顔を覚えられてはいるが、美鶴は桐条グループの御令嬢という事で一般の生徒との間には壁や距離がある。
そのため、親しくしている者など特別課外活動部の二人を除けば、

生徒会の人間やフェンシング部の者くらいで、彼らの中にバイクに興味がありそうな人間がいないので、そういったバイクなどの乗り物が話題に出ることすらなかった。
「そうなの。でも、バイクと言っても色々と種類があるのでしょ？　十六歳で取れる免許だと原付、小型、普通二輪だったかしら。貴女はどれを取ろうと思っているの？」
「出来れば普通二輪を取って、十八になってから車と大型二輪も取りたいと思っています」
「だけど、貴女ってヒールのない靴を持っていたかしら？　私は車の免許も持っていないけど、ヒールのある靴じゃ危ないから運転してはいけないのよ？」
　通学靴に指定はない。だが、ほとんどの生徒は革靴やローファー、もしくは運動靴などスニーカー系を履いている。
　そんな中でヒールのあるブーツを履いているのは美鶴くらいなもので、同類として校内でただ一人編み上げブーツを履いている青年もいるが、ヒールのある靴しかないのにどうやって運転するのかと英恵は尋ねた。
「……ライダーブーツという物があるらしいので、そちらを買おうと思います。雑誌を読んでいた男子が話していたのを聞いたのですが、有里が履いているブーツも似たような物らしいので、日常使い出来るデザインの物もあるようです」
　湊のブーツは外からは分からないが鉄板入りな事を除けば普通のブーツだ。別にライダー用という訳ではないが、制服にも合わせることが出来るデザインなので、そういった物があるのなら美鶴も頑張って探してみようと考えていた。
「有里って、あの有里君？　彼ってブーツで登校しているの？　随分とお洒落な子ね」
「校則違反ですがピアスやチョーカーも身に付けていて、少しばかり装飾過多ではありますが女子からはお洒落だと言われ人気は高いです。ただ、夏でも黒いマフラーを巻いていて、その点はファンの女子たちも少し不思議がっていました」

「寒がりなのかしらね。もしくは、首の辺りに傷があってマフラーで隠しているとか」
そんな傷がない事を英恵は知っている。傷があるのは腕や胸に背中の辺りだ。右眼の傷は眼帯で隠れているので誰も見た事はないが、身体の方は屋敷で匿っていたときに着替えで服を脱いだときに確認している。
あれはあれで痛々しいと思ったけれど、首のマフラーについては無限収納以外の意味を知らなかった。
大切な息子の話であるため、視界の端で夫が僅かに緊張した顔をしているのをあえてスルーし、英恵は自分の知らない事を美鶴が知っているのなら聞きたいと思って相手が話すのを待った。
「一年生の頃に当時二年だった真田と格闘技の試合をしたようですが、首や身体に傷跡があったという話は聞いていません。一説では女性からの贈り物だから手放さないとも言われていますが」
「……女性？　有里君は吉野さんと一緒に暮らしているのだから、その吉野さんからの贈り物ではないの？」
「どうやら違うようです。彼には学外の交友関係もあるらしく、吉野も全体は把握できていないみたいですので。ああ、そういえば、有里はアドルフ・ベレスフォード氏と個人的な付き合いがあるようです。なんでも、攫われた御令嬢を偶然助けたとか」
「偶然で助けるってすごいわね。それにベレスフォードさんと付き合いのある中学生というのも」
攫われた相手は貿易王と呼ばれる者の娘であり、現代まで続くイギリス貴族の人間だ。それを誘拐しようとしたからには、かなり綿密な計画を立てて実行したに違いない。普通の中学生が阻むなど不可能で、武装していても一人で解決するのは難しいだろうと思ってしまう。
だが、ヒストリアはいまも社交界に出ており、実際に誘拐があったのだとすれば湊が救ったという話を信じることが出来た。
彼が裏の仕事している事はグループ総帥の桐条ですら知らず、ペルソナ使いであることや桐条家とも交流のあった百鬼家の生き残りで

あることを美鶴は知らない。
よって、全ての事情を知る英恵は純粋な体術で解決したと思い。夫の桐条はペルソナ能力で解決を図ったのだろうと推測したところで、逸れていた話題を戻してゆく。
「ふむ、それで通信機材の話だったな。私の方からラボに小型化を急がせるようにしよう。子機の小型化と軽量化も技術的には可能なはずだ。ただ、バイクに乗ることに関してはもう少し考えてみなさい。最後にはお前の考えを尊重しようと思うが十六になるまでまだ時間がある。お前の身を案じる者の事をしっかりと考えた上でまた結論を聞かせてくれ」
「はい、わかりました」
桐条とて娘の言う通りにした方が活動しやすくなる事は分かる。だが、それには危険も伴うので、結論はしっかりと考えてから出すべきだとこの場では保留にしておいた。
美鶴も両親やグループの者たちが自分の身を案じてくれている事は理解している。故に、父に言われた通り十六歳になるまでしっかりと考え、そのときになってから改めてバイクについて頼むかどうかを決めようと思った。
そうして、特別課外活動部に関する話が終わると、運ばれてくる料理に舌鼓を打ちながら、三人は久しぶりの家族の時間を楽しみ過ごすのだった。

第百二十二話　依頼と報告会

３月２６日（月）

朝――フランス・シャテーニュ村

イリスたち家族の故郷であるシャテーニュ村の教会は、彼女の最期の仕事で得た金により建物の修繕と補強が行われ、それからすぐに孤児院を始めた。

元々は司祭とシスターの二人で管理していたけれど、流石に子どもたちの世話まで行うとなれば人手が必要だ。

そこで司祭は教区長と地方自治体に届け出をすることで、新たに五人のシスターを派遣して貰い。村の人にも協力して貰いながら事故や事件で身寄りをなくした十四人の子どもらの世話をしていた。

五人のシスターは一人だけシスター・アンナより二つ下だが、他は全員が五歳以上年上で孤児院で働いていた経験もあったので、子どもたちの母親代わりは彼女たちに任せることが出来ている。

もっとも、働く人数は増えたが暮らす子どもたちが増えたことにより、シスター・アンナの仕事の忙しさはほとんど変わっていない。

他の者が子どもの朝食作りや朝の祈りをしている頃、彼女も分担で当たっている墓地の見回りにやってきたとき、ある墓の前に誰かが立っている事に気付いた。

それは半年ほど前にイリス・ダランベールという女性を埋葬した墓だ。廃人と化していた喪主の少年が教会を去ってから、彼女の知り合いだった者らが何名か花を手向けに来ていたので、こんな早朝に来ている相手も同じように裏の仕事に関わる人間なのかもしれない。

そんな風に思いながらシスターが近づけば、相手の首に覚えのあるマフラーを巻かれているのが見えた。

「小狼さん？」

身長だけでなく髪まで伸びていたことで気付くのが遅れたが、シスターが声をかければイリスの墓参りに来ていた湊が振り返った。

振り返った彼の右眼に付けられた眼帯を見てシスターは僅かに驚く。白い医療用の物ではないということは、あの下の眼はきっと見え

なくなっているのだろう。
　たった半年の間に何があったのかは分からない。それでも顔付きを見る限りはどうやら元気そうなので、眼帯に対する疑問を頭の端へと追いやり、振り返った相手の前に立った。
「……おはよう、と言えばいいのか？」
「はい、おはようございます。半年ぶりですね。随分と大きくなられていたので最初は気付きませんでした」
「まぁ、まだ十四歳だしな。半年もあれば背も伸びるさ」
　シスターは今現在で二十六歳だが、目の前の青年が自分より丁度一回り若いという事実に衝撃を受ける。若い事は知っていたが十代後半だと思っていたのだ。
　半年で随分と成長したことで、今では十代後半から二十代前半にしか見えないというのに、まだ十代前半だったことでシスターは人体の神秘を見た気がした。
「随分とお若いんですね。大人びていらっしゃるので少し驚きました」
「シスターだってアラサー手前でまだ若いだろ？」
「あの、アラサー手前は褒め言葉ではないと思います。結婚適齢期だと指摘しているようなものですから」
「カトリックのシスターは処女未婚が基本なんだから気にする必要ないだろ」
　アラサーではなく、そのさらに手前だから十分に若いと言える。そういって褒めた湊にシスターは何やら素直に喜べないといった微妙な表情を向ける。
　確かにカトリックのシスターは性交も結婚もしてはいけないので、見習いを終えて既に正式なシスターになっている彼女には結婚など関係のない話だ。
　しかし、女性に対してそう無遠慮に言わなくてもよいのではないかと思ってしまう。相手が年下であるため多少の事は目を瞑るつもりであっても、失礼なことを言い続けるのならシスターにも考えがあった。

「小狼さん、一度教会で懺悔をしてみませんか？　心の穢れを浄化することも出来ますよ？」
「……日本の神道の主神は知っているか？」
「え？　えっと、ミス・アマテラスでしたっけ？」
「ミスは付けなくて良いが天照で合っている。さて、その天照は日本を作ったという伊邪那岐単身から生まれた娘なんだが、伊邪那岐には伊邪那美という伴侶がいた。二人の間にいた子どもの一人に大綿津見という神がいて、その娘である豊玉姫命というのは実在した俺の先祖なんだ」
　日本神話には全く詳しくないものの、シスターも神道の主神くらいは知っていた。それ故、素直に答えたのだが、急に青年がその主神の父親と伴侶から生まれた別の神の系譜に自分が属していると言ってくる。
　偉大なる父を信仰する者として、他国の者であっても神話の神を実在しないものとして完全に否定する事は出来ないけれど、自分がその子孫だと言われると流石に面食らう。
　だが、シスターが何も言えずにいると湊は言葉をさらに続けた。
「さらに言えば、その豊玉姫命の伴侶は天照の子孫であり、そんな二人を先祖に持つ俺は止ん事無き血筋ということになるんだが、そちらの偉大なる父よりも古い歴史を持つ他教の神の子も受け入れて貰えるのかな？」
　浮世離れした雰囲気で妖しい色香を漂わせ、その美麗な貌に蠱惑的な笑みを浮かべられると、神に仕える身でありながらシスターは思わず頬が熱くなるのを感じる。
　こんな十四歳がいてたまるものか、そんな言葉が頭を過ぎる。しかし、これは神が自分の信仰心を試しているのだと思う事にしたシスターは、すぐに笑顔を見せて青年の問いに答えた。
「え、ええ、主は何人（なんびと）であっても等しく受け入れてくださいます」
「だから、神の血が入っているから純粋な人間じゃないと言ってるだろ」
「しゃ、小狼さんはどうみても人じゃないですか」

「神の奇跡を見せようか？」
「……遠慮しておきます」
この青年は言った事は絶対にやる。第六感か知らないが、自分の未知なる感覚がそう告げてくるので、シスターは見せなくていいと返しておいた。
異国の青年が起こす神の奇跡を見たところで揺らぐほどやわな信仰ではない。それでも、見てしまえば彼を他の者と同じように扱う事が出来なくなる。
他教の神をどうもてなせばいいのかは不明だ。そもそも、もてなして良いものかも分からない。
シスターは自分の未熟さを感じ、もっと強くあらねばと決意しながら、神の奇跡を披露出来ずつまらなそうにしている青年を教会へ案内することにした。
＊＊＊
シスターに連れられて教会に向かうと一騒動あった。湊の姿を見た子どもたちがシスター・アンナが彼氏を連れてきたと騒いだのだ。
教会の孤児院の子どもは下は七歳から上は十六歳までいるので、年齢的には湊とほとんど変わらない。
田舎にいることもあって話題に飢えているらしく、女子たちがキャーキャーと声を上げれば、幼い子どもたちも女子らの真似をして声を上げ、年齢が高めの男子たち以外は他のシスターたちがやってきて静かにするようにいうまで治まらなかった。
シスター・アンナは子どもたちがすみませんと謝っていたが、別に気にしていないと湊が返したことで、申し訳なさそうにしながらも一緒に朝食を食べないかと誘った。
湊はそれに対して飲み物だけ頂くと答え、シスターに食堂に案内されて彼女たちと同じテーブルにつく。
他の者らは一緒になって配膳を手伝い。湊を席に着かせたシスターも湊のコーヒーを用意すれば手伝っていたので、全てが終わるまで大人しく待つ。
その途中でやってきた司祭には久しぶりだと挨拶し、全員が席に着

けば感謝の祈りを捧げて食事が始まった。
「小狼さんは今日で帰られるのですか？」
「ああ、墓参りとシスターに会いに来ただけだからな」
「っ!?　ごほっごほっ」
　コーヒーを飲みながら真顔で言ってくるせいで、不意討ちを喰らったシスターは咳き込んでしまう。
　隣に座る中年のシスターが背中をさすってくれたことで被害は軽微で済んだが、むせて涙目になった彼女は僅かに怒った顔で湊を諌めた。
「そういった冗談はやめてください。また子どもたちにからかわれてしまいます」
「冗談じゃないさ。今日は貴女に話があってきたんだ」
「お話ですか？　一体何でしょう？」
「俺と一緒に日本に来て欲しい。貴女が必要なんだ」
　他の者たちが二人の会話に耳を澄ませていたことで、湊のその声は食堂中に響いた。
　あまりの出来事にシスターは頭が真っ白になり、直後、他の席にいた子どもたちから歓声が上がる。
　結婚だ、プロポーズだ、シスター・アンナおめでとう、そんな風に口々に騒ぎ出す子どもらに他のシスターが静かにするように言っているが効果は薄い。
　だが、少し経ってようやく再起動した彼女は、顔を真っ赤にさせながら本気で湊に怒りの声をぶつけた。
「わ、私は神に仕える身です。それを口説くなどどういったつもりですかっ」
「口説く？　いや、うちの教会で働いて欲しいだけだ。カトリックのシステムは知らないが、別に宗派が一緒なら外国でも働けるんだろ？」
「……へ？」
　子どもたちの騒ぐ声やシスターの叱る声が食堂中で響き、カオスな状態になっていたにもかかわらず、湊の声だけはしっかりと全員の耳

に届いて、騒ぎは一瞬にして治まる。
先ほどの青年の言葉は明らかに口説いているようにしか思えなかったが、表情を見る限りでは本当にそんなつもりはなかったようで不思議そうにしている。
紛らわしい。本当に紛らわしい事この上ないが、食堂が再び静かになった今なら問題なく訊けるだろうと、シスターは改めて相手の意図を尋ねた。
「は、働く？　その、うちの教会というと小狼さんのご実家はカトリックの教会なのですが？」
「そうじゃなくて、俺はＥＰ社の最高顧問なんだが日本に病院や研究施設を作っているんだ。研究施設の従業員は海外からの転勤も多くてな。そういった者たちや入院患者のために、敷地内にカトリック系の教会を作っているんだが、シスターに来てもらいたいんだ」
話を聞いてシスター・アンナだけでなく他のシスターや司祭もようやく理解出来たと頷く。
確かに海外から転勤してきた者にとって、日本は教会の数がそれほど多くないこともあって、日曜礼拝や宗教行事の習慣を行うのは難しいかもしれない。
それをカバーするために教会をまるごと作ってしまうのは驚きだが、ちゃんと届け出をすれば教会として活動する事は可能である。
目の前の青年が、ＥＰ社というこんな田舎でも知られている大企業の重役であることにも驚かされたが、人々の願いを叶えるために教会を作ろうとして自分に協力を要請したことも理解出来た。
シスター・アンナはしっかりと相手の言葉を受け止めた上で、自分の意見と規則の両方の面から簡潔に答える。
「申し訳ありませんが私の一存ではすぐお答えできません。いえ、お話は大変ありがたいですし、祈りを捧げたい方たちがいるのであれば私もお手伝いさせていただきたいのですが」
「一応、パンフレットを持ってきたんだ。教会は独立しているから建物が完成するのは他より早く五月中旬から六月上旬になると思う。教会として使えるように地方自治体や教区長の方に届け出はしてお

くから、もしも来れるなら連絡してくれ。まずは見学でも構わないから」
言いながら湊は大きな封筒と自分の仕事用の携帯の電話番号を渡して来た。
彼の言うパンフレットとやらを封筒から取り出すと、海に近い都会の教会ということで、長閑な田舎であることは対照的だ。
彼女は今まで日本に行ったことはないが、元々勤勉なこともあって日常会話くらいならば現地の言葉もすぐに覚えられるだろう。
また、目の前の青年も普段は日本にいるようなので、困った事があれば相談できる。
慣れ親しんだ村や子どもたちと別れるのは辛いけれど、こういった人生の転換期とは突然にやってくるものだ。
未熟な身である自分に選ぶチャンスを与えてくれた神に感謝し、受け取った封筒と電話番号をしっかりと仕舞ってシスターは青年にも礼をいった。
「私のような未熟な者に選ぶ機会をくださってありがとうございます。すぐには答えを出せませんが、必ず近いうちにお答えします」
「いや、こちらこそ急に済まない。もし来てくれるのであれば、住居や引っ越しの手配は全てこちらでやるので、そういった心配は何もしなくていい」
「フフッ、重ね重ねありがとうございます」
敷地内の教会だろうとシスターは社員ではないので、そんな転勤の手伝いをする必要はない。道案内は欲しいが、それだってパンフレットに住所が書いているのだから自分で探す事は可能だ。
だというのに、住居まで用意してくれると言われては、あまりに至れり尽くせりで申し訳なく思えてくる。
それがオファーしてきた彼なりの誠実さなのだろうが、子どもがそこまで気を遣わなくて良いのに、とシスターは思わず苦笑してしまった。
その後、用事を終えた湊は飲み物だけで朝食に付き合ったが、まだ他にも仕事があるからとすぐに村を去って行き。話を聞いていた司

祭からは、よく考えて答えを出したなら自分はシスターの考えを支持して応援するという言葉をかけられた。
大好きなこの村にいたいという気持ちもあり、自分を頼ってくれた青年の力になってあげたいという気持ちもまた存在する。どちらを選んでも不幸にはならない。むしろ、やりがいすら感じられて、随分と贅沢な悩みだとシスターは自分の置かれた境遇を幸福に思うのだった。

影時間――タルタロス
シスターと別れた湊は一度シャロンたちの研究室に寄ると、衝撃吸収材を搭載した新しい義手〝ＥＰ０１〟に換装して、性能テストを少しすると日本に戻っていた。
この短期間で改良型の義手を開発するのはすごいが、まだ全力の拳撃に耐え得るほどではなく、日常なら出せて６０％、影時間で補整を付与されて力が上がれば４０％が精々といったところだ。
武器を振る分にはほとんど問題ないのが唯一の救いで、蹴り技を主体とした武術や武器で戦うのをメインにしていればシャドウとの戦闘も問題ない。
そうして、本日のシャドウ狩りに向かった湊は、チドリを連れてタルタロスのエントランスにやってきた。
「おや、本日はチドリも一緒なのですね。どうもお久しぶりです」
エントランス中央に向かって歩いてゆくと、そこにいた前を開けた薄手の上着を素肌に着た男が声を掛けてくる。
会うのは留学前に依頼したとき以来で約一年ぶりだが、ストレガのリーダー・タカヤは背丈や眼帯など見た目が随分と変わった湊を見ても気にしていないようだ。
しかし、他の者は違っているようで、成長した湊の姿に唖然としながら目を丸くしている。
「……依頼の報告を聞こうか」
「ええ、シャドウ狩りに出た日と討伐数は記録してあります。ジン、ミナトに報告書を渡してください」

久しぶりの再会だというに挨拶もろくにせず仕事の話を始める湊。言われたタカヤもすんなり受け入れてジンに持って来させていた報告書を出す様にいう。
普通はもっと再会を喜んだり、どうして久遠の安寧に狙われていたのかを尋ねたりするものだろう。
ジンはそんな事を考えながらも鞄からファイルを取り出し、それを湊に手渡しながら話しかけた。
「ほれ、報告書や。しかし、お前随分と成長しよったなぁ。一千万ドルの賞金首になっとったのに一人で久遠の安寧を墜としとるし。海外で一体どないしとったんや？」
「……別に。喧嘩を売られたから買っただけだ」
留学前は自分の方が大きかったというのに、今では拳一つではきかないほど負けている。普段は身長など気にしていないジンも、年下の湊に背で負けるのは少し悔しかった。
ただ、一年分の報告書に素早く目を通しながら答えているが、そこに詳しく話そうという気配がまるで感じられなかったため、ジンは雑談も含めて詳細を知るのは不可能かと諦める。
タカヤはそれを見て僅かに口元を歪めていることから、湊が何も話さないと分かっていたようだ。
少しすれば湊も報告書を読み終え、それをマフラーにしまうと今度は何やら携帯より二回りほど大きな何かを取り出して来た。
一体それが何か不思議に思っていれば、湊はそれをタカヤたちの後ろに立っていた茶髪の少女・メノウに投げ渡した。
「わわっ、あ、危ないよミナト君。投げる前に一言いって欲しかったな」
「お前なら取れると思って投げたんだ」
「そういう信用は嬉しいけど心臓に悪いからやめてね。それでこれって何なのかな？　携帯？　それとも小さなパソコン？」
見た感じでは腕に取り付けられるウェアラブルコンピュータのようだが、湊はたまに変な道具を持っているので説明を聞かない事には電源を付けることも出来ない。

とりあえず、巻くためのベルトがあるので左手首に取り付け、湊をジッと見つめてメノウは返答を待った。
「……それは追加報酬の適性測定器だ。アナライズが出来る人間が付けていれば、読み取った対象の適性値が表示される。画面がソーラーパネルのようになっていて、光を当てていれば月明かりでも充電出来るからバッテリーは気にしなくていい」
「へえ、便利だね。ねぇねぇ、ボクたちの適性も測ってみていい？」
「それはもうお前たちのだ。自由に使ってくれて構わない」
言われたメノウは早速とばかりに電源をいれると召喚器を頭に当てて引き金を引く。すると、渦巻く水色の欠片の中から、鎖で繋がった〝鋼鉄の処女〟を手に持った長髪の女性型ペルソナ・正義〝デュスノミア〟が現れた。
ペルソナを呼び出したメノウが誰の適性から測ろうと考えていれば、ダボダボのパーカーを着てカーゴパンツのポケットに手を入れていたカズキが口を開く。
「メノウ、オレから測れ」
「うん、わかった。えっとねぇ……〝１４９００ｓｐ〟って出たよ。これって強いのかな？」
アナライズをかけると〝ピピッ〟と電子音が鳴って画面に数値が表示される。しかし、彼女は数値と強さの関係を理解していなかったので、首を傾げてどう見たものかと悩んでいる。
「オレが知るかよ。ミナト、どうなンだ？」
「エルゴ研にいた頃は三千から四千の間くらいだったことを思えば、それなりに成長してるんじゃないか。レベルって言い方をすればレベル２９弱ってとこだ」
エルゴ研時代から考えれば三倍から四倍ほどまで成長している。それを聞いたカズキは自身の成長を数値化したことでより実感出来たのか、愉快そうに凶悪な顔で笑みを浮かべた。
湊がメノウに渡した適性測定器は、Ｅデヴァイスの簡易版のようなもので、栗原が以前作った物をＥＰ社の技術で進化させたものだ。黄昏の羽根を内蔵し、バッテリーは光に当てるだけで充電されるので切

れる心配はほぼない。
　テオドアの開発したアプリを入れたＥデヴァイスと違って、この測定器ではまだ対象のＭＡＸ数値しか測る事は出来ないが、それでもアナライズするだけでおよその強さが分かるのだから便利なものだ。
　後々改良を続けて適性の最大値と残量を共に測れるようにする予定だが、とりあえず出来ている状態でこれを五つほど作らせ、シャロンの研究室、栗原、チドリ、メノウの四人に今のところは渡してある。
　チドリが受け取った日に自分を調べてみたところ、モナドに挑む前は７８４０ｓｐ（レベル１４弱）だった適性は１２１１０ｓｐ（レベル２３強）まで上がっていた。
　過去の経験からするとほとんどはあの一夜の戦いで上がったのだと思われる。本気で死を覚悟して、さらに限界まで神経を研ぎ澄ませて勝利を勝ち取ったのだ。それくらい上がっていてくれなくては困るとも思ったが、流石に一年間実戦を続けていた者には勝てなかったようで、チドリは小さくつまらなそうな顔をした。
　その間もメノウはアナライズによる測定を続けており、今度は自分の数値を測っている。
「えっと、ボクは１２５００ｓｐ（レベル２４）だってさ」
「メノウ、次はマリアがやる！」
「了解。マリアはね、１４５００ｓｐ（レベル２８）だからカズキと大して変わらないね」
「メノウちゃん、メノウちゃん、わたしは？」
「スミレは……あ、すごい。１７０００ｓｐ（レベル３３）でトップだね」
　幼い喋り方の金髪の少女・マリアとおっとりした雰囲気の少女・スミレは、自分たちの適性を知って楽しそうに笑う。
　マリアは元々エルゴ研にいたときから、カズキやタカヤたちトップクラスの人間に近い強さを誇っていた。それだけにカズキと近い数値でもおかしくはないが、普段あまり戦っていないスミレが自分より強いことが気にくわないのかカズキが口を挟んできた。
「おい、おかしいだろうがよ。なンで、ろくに戦ってねェヤツがトップなンだ」
「……スミレのテュポーンは元々規格外だ。体長三十メートルのペル

ソナを扱えるんだから、他のやつより高めでもおかしくない」
　スミレ本人はおっとりしているが、そのペルソナである刑死者〝テュポーン〟は規格外の超大型ペルソナだ。拳の一撃が中級スキル以上の威力を有しており、耐性の相性を突かなければ一対一でまともに戦えるのは湊くらいなものである。
　素早い動きや戦闘が苦手で、ペルソナで自分を守りながらなんとか戦えるようにしようと考えた末に辿り着いたのが今の姿だ。ある種の進化を果たしているそんなペルソナを所持している者が、並みのペルソナ使いより弱い訳がない。
　湊の言葉を聞いたカズキも、それでようやく納得したのか、つまらなそうに舌打ちすると黙ってメノウの測定結果の続きを聞いた。
「ジンは１３４００ｓｐ（レベル２６弱）だね」
「まぁ、わしは後方支援やからな。前衛のカズキやマリアには負けるわ」
「タカヤはえっと、１５２００ｓｐ（レベル３０弱）で二位だよ」
「フフッ、一年間戦っていたことでそれなりに強くなったようですね」
　元々、ストレガの面々はタルタロスに来てシャドウを狩ったりはしていなかった。
　街中でイレギュラーシャドウに遭遇すれば倒していたが、柵があって上層には行けないとエルゴ研時代に知っていたのだから、湊のように意識してシャドウを狩るでもない限り、そもそもタルタロスに訪れる理由がないのだ。依頼がなければ一年もタルタロスに通う事など二度としないだろう。
　それでも、チマチマと雑魚としか言えない敵を倒し続けたことで少しでも強くなれたのなら、依頼をこなした甲斐があったとタカヤは楽しげに口元を歪める。
「それで、ミナトはこの一年でどこまで強くなったのですか？」
　だが、彼が本当に知りたかったのは自分たちの強さではない。世界を敵に回しても生き延びた真性の化け物、この世に蘇った伝説の鬼、神の血を引く青年が世界を巡ってどれだけの力を得たのか。
　本来は力試しでもして測ろうと思っていたのだが、適性測定器とい

う丁度いい物があるのだ。先ずはそれで数値として理解しようとタカヤは考えていた。
　言われたメノウは一度湊に視線を送って測ってもいいかと言外に尋ねるも、青年はコートのポケットに手を入れたまま冷たい表情で黙っている。
　それがどっちの意味か分からず彼女が困っていれば、小さな溜め息が聞こえて、直後にチドリが召喚器を使いメーディアを呼び出した。
　メノウが受け取った適性測定器は黒だが、それと色違いの白い測定器をチドリも右手首に付けていたので、呼び出したメーディアで湊にアナライズをかけて適性値を測っている。
　アナライズなどジャミングやステルスをかけていなければすぐに終わるため、少しすればチドリの測定器から〝ピピッ〟という電子音が鳴った。
　一体どれほどの数値が表示されたのか。一同が黙って待っていれば画面を見たチドリが僅かに目を見開いて、ベルトを解いて測定器を外し画面を他の者に見せながら数値を口にした。
「……湊の適性値は１００００００（レベル１００）ｓｐよ」
「ハァっ!?　ンなの、おかしいだろうがっ！　一人だけケタぶっとんでっぞ！」
「因みに一年ほど前はいくらだったのですか？」
「留学前に測ったときは３１０００ｓｐくらいだったわね。まぁ、最初から絶望的なほどに差があったんだから気にするだけ無駄よ」
　この場の誰よりも遥かに強いとは思っていたが、ケタ違いの数値に他の者は唖然とする。
　しかし、この数値は擬装用に普段から抑えたものであり、チドリも留学前に９８０００ｓｐだった事を覚えているので気付いている。
　もっとも、本来の状態であっても力の管理者には遠く及ばず。未だに彼女たちの数値を測定できていない湊は全く表情を変えていなかった。
　それが強者の余裕に見えることでカズキは敵意を剥き出しにしているが、攻撃してくれれば即座に対処できるので、湊は構わず適性に関

する知識を一つ他の者に教えておく事にした。
「適性は鍛える以外にも死に近づけば増えるらしい。俺は右眼を失ったからな。それで余計に加速したってのはあるさ」
「我々が眼や四肢を失ったところで貴方に届くとは思いませんがね。それはそれとして、せっかく再会したことですし、少しばかり力試しをさせて頂きたいのですが？」
腰のベルトから大型リボルバーを抜きつつタカヤは笑みを浮かべ尋ねる。
ジンやメノウらは湊に命を救われた経験があり、彼からアナライズや索敵の手解きを受けていたことで挑むという発想を持っていない。
しかし、カズキやタカヤにとって湊は挑むべき壁だ。絶対的な強者であるが故に、それに挑んでいるときには己の生というモノを実感できる。
湊は黙ったまま背を向けると一定の距離で立ち止まった。それが挑戦を受けるという合図であると悟った面々は、カズキとタカヤを除いてエントランスの端まで退避する。
「タカヤ、オレは突っ込むぞ」
タカヤに声をかけながらカズキは腰に付けた鞘からカットラスを引き抜く。予備にサバイバルナイフも持っているが、今の彼の得物はこの海賊が使っていそうな反りのある片手剣だ。
戦い方は我流だが高い身体能力によって一般人に負けることはない。とはいえ、相手は殺しのプロだ。単体で挑めば即座に敗北する事は分かっている。
故に、悔しい気持ちはあるが仲間に援護を任せれば、タカヤは了解だとばかりに頷いた。
「お好きにどうぞ。私は拳銃も使いますから当たらないでくださいね」
リボルバーの弾丸を確認しながら、いつでも撃てるように用意をしてタカヤは集中力を高める。
この一年で相手にしていたのは雑魚たちだが、それ以外にもたった一体だけ湊に匹敵する実力を持った最凶のシャドウがいた。

倒す事は一度として出来なかったが、総力戦で挑むことで何とか押さえこみ、逃げ延びた経験が何度かある。
相手はシャドウとは思えないほど知能が発達し、こちらの弱点を突くようなスキルを放ってくることや、攻撃を喰らって怯んだ者を集中して狙ってきたことで、何度も死を覚悟したものだ。
それに比べれば相手は人の姿をしているだけマシである。実力はあの死神を超えているだろうが、今から挑むというのに心が昂って仕方がない。
やはり、命を持たぬシャドウなんぞよりも、人間同士での命の奪い合いの方が愉しい。タカヤは心の中で最高の笑みを浮かべた。
そして、
「きやがれ、モーモス！」
ペルソナを召喚しながら駆け出したカズキは、首から下が黒一色の大鎌を持った男性型ペルソナ・隠者〝モーモス〟と共に湊へと迫る。
互いの距離は十五メートルほどだ。俊敏な彼のペルソナならば一瞬にして距離を詰めてしまう。
「モーモス、利剣乱舞！」
距離を詰めたモーモスが鎌を高速で数度振る。光を反射させる鋭利な刃は空気を切り裂き、湊に向けて見えない斬撃をいくつも飛ばした。
タイミングを計っていたタカヤも軌道が被らぬよう移動して引き金を引く。空気を震わす破裂音を響かせ、炎と共に銃口から飛び出した必殺の凶弾は、視線の先にいる青年の退路を塞ぎ屠らんと迫り続ける。
左前方からは多数の斬撃が、右前方からは大型の獣を一撃で仕留める凶弾が、それぞれの逃げ道を制限させながら近付く。
仮に避けてもペルソナと共に駆け出してきたカズキが勢いを乗せた攻撃を放ち、後方支援のタカヤもカズキがダメージを受けない属性のスキルで追撃してくるに違いない。
現在の実力がばれないうちに、少しでも攻撃を当てるための短期決戦型のフォーメンションのようだが、それを見た湊はよく育ってい

と素直に感心した。
とはいえ、全てを素直に喰らうなど御免である。ポケットの中で素早く〝太陽(茨木童子)〟と〝魔術師(出雲阿国)〟のカードを握り潰した湊は、足元から黒い炎を走らせ呟いた。
「――――ミックスレイド・無間地獄」
湊の足元から広がった炎はエントランスの床を覆うと、そこから人間大の黒い腕骨がいくつも現れる。
ある骨は凶弾を受け止め握り潰し、ある骨は斬撃を散らせながら進み敵のペルソナを掴む。
掴まれペルソナの動きが封じられれば、持ち主もフィードバックダメージで動きが鈍くなり、速度が落ちたところを地面から新たに生えてきた複数の骨に襲われ、カズキは両腕ごと胴体を拘束されてしまった。
一方、少し離れた場所にいたタカヤも、黒い炎に覆われた地面から次々と生えてくる腕骨の対処に追われていた。
地面を走る黒い炎と同じ物で構成されているようだが、骨の方には実体があって、捕まえられそうになったところを蹴って距離を取る事が出来た。
だが、距離を取ってもまた複数の骨が出てきて限りがない。これは地面を覆う炎ごとペルソナで吹き飛ばすしかないと、タカヤは精神を高めて己の分身を呼んだ。
「ヒュプノス、メギドラ!」
血管を束ねたようなグロテスクな翼を持つ男性型のペルソナ、運命〝ヒュプノス〟は羽ばたき上空から広範囲を極光で薙ぎ払う。
地面を覆う黒い炎もスキルのような物だと認識していたが、予想は的中し、スキルで薙ぎ払った部分は元の床が覗いていた。
腕骨も流石に炎がない場所からは現れることが出来ないようで、迫る腕骨から逃げるため、転がる様に何もない床へと飛び込むと、タカヤは続けて拘束されているカズキに向けてスキルを放った。
「マハジオンガ!」
再び羽ばたいたヒュプノスは、カズキとモーモスごと骨と炎を散ら

せてゆく。
　モーモスは電撃無効の耐性を持っているため、カズキには一切のダメージがない。拘束を解かれたカズキは地面に足が着くなり湊から距離をとって、炎の消えた床へと移動しペルソナを呼び出し直す。
「モーモス、ジオンガだ！」
　再び現れたモーモスは湊に向けて一直線に閃光を放つ。効果範囲の違いはあれど、ほぼレベル差のないヒュプノスの放った攻撃と本来は同じ威力を有するスキルだ。
　だが、一目見ればモーモスの一撃の方が威力で勝っているとはっきり分かる。空気中で爆ぜる音、目を焼くほどの眩さ、走る青白い雷の太さ、どれもが魔法を得意とするヒュプノスよりも遥かに強力で、それを見た湊は相手が特定属性の威力上乗せスキルを習得していると見抜いた。
「受け止めろ、白虎（バイフー）。大口真神はモーモスを烈風撃で仕留めろ」
　相手のスキルが着弾する前に、湊は〝節制〟と〝剛毅〟のカードを握り潰し、牛ほどの大きさのあるマルタタイガーと白狼を呼び出す。
　呼び出された白虎は電撃吸収でジオンガを防ぎ、脇を走り抜けた大口真神はスキルを放っていたモーモスに風を纏って接近し、応戦のために敵が振り被った鎌が背中に刺さるのも構わず、生木すらも噛み砕く鋭い牙で噛みついた。
「がぁっ!?」
　烈風撃は疾風属性が付加された斬撃スキルだ。疾風が弱点のモーモスは、一撃で胴体を噛み千切られ消えていった。
　弱点のフォードバックダメージを負ったカズキは、離れた場所で額に脂汗を滲ませて膝をついているが、まだ目には力が宿っている。
　こういう手合いはすぐに片付けねばしつこく立ち上がってくるものだ。後衛のタカヤも色々と狙っているようなので、相手が反撃してくる前に、湊は一気に決めにかかった。
「アタランテ、刹那五月雨撃っ!!」
　砕いた〝戦車〟のカードを上空へと投げれば、月色の髪を揺らして深緑の衣を纏った女狩人が現れる。

彼女はそのまま湊の頭上で限界まで弓を引き絞り、滅するべき敵を鋭い眼光で射抜くと、光で出来た無数の矢を大雨の如く降らせた。
たった一張の弓から放たれたとは思えぬほどの矢が、一切の逃げ場を作らぬように降り注ぎ、飛んでいた眠りの神も、その召喚者らもまるごと呑み込んでしまう。
傍らからその光景を見ていた者たちには、それはまるで光の滝のようにすら見えた。
人間がいくら挑もうと自然には勝てない。この一戦は、ここに居る者たちにそんな当たり前の事を教えるために行われたのではないかと思わせるほど、圧倒的な力の前にあっさり幕切れとなったのだった。

＊＊＊

矢の攻撃が止むと、ひび割れクレーターと化した床の上に血だらけの二人が倒れていた。
幸いなことに致命傷は避けられていたが、全身を太い針で刺されたようになっていたため、そのままにすれば失血死は免れない。
だが、彼らを完治させるほどの回復スキルを誰も持っていなかったことで、ジンやメノウに助けを求められた湊がカグヤを召喚し、傷跡も残さずに完璧に治してみせた。
彼らの武器と召喚器は無事だったが、服はボロキレになっていたため、マフラーから出した似た服をジンに渡して一人で着替えさせた。そのとき文句を言われたけれど、湊はストレガの一員ではないので味方の男がやるべきだと返した。
相手が普通の病人や怪我人であれば、湊だって老若男女問わずに介護してやる。だが、カズキとタカヤは自分から力試しをしたいと言ってきたのだ。
ぼろ負けした人間が勝者の男に着替えまでして貰ったと聞けば、あまりの屈辱に怒りで血管が切れるかもしれない。
普段は大人しいタカヤならばそれはあり得ないだろうが、直情的なカズキならあり得ない話ではない。
言われたジンもそう思ったらしく、二人の血をボロキレとなった服

で拭いてしまえば、新しく貰った服に黙って着替えさせていた。
そして、気を失っていた二人も少しすれば目を覚まし、自分たちの服が変わっていることとエントランスの惨状を見て直前の記憶を思い出したようで、どこか悔しそうに溜め息を吐いている。
「はぁ……少しは近付いたと思っていたのですが、どうやら正面から戦っても勝ち目は皆無のようだ」
「知らねえペルソナまで増えてやがったしな。ミナト、テメェいま何体持ってンだ？」
「……さぁな。さっきので全てかもしれないし。百体を超えているかもしれないぞ。お前らに教える気はないが精々悩むといいさ」
復讐代行という仕事柄、依頼や状況によっては知り合いであっても敵となり得る。故に、そんな人間に自分の情報を明かす気はないと、湊は見下した嘲笑を浮かべて回答を拒否した。
湊のその態度にイラついた様子でカズキは舌打ちし、タカヤは肩を竦めて武器の状態確認に移ってゆく。
ジンやチドリにメノウらは、戦っていた三人それぞれがある意味で自己中だと理解しているので、相変わらずだと呆れたように嘆息する。
そうして、二人が動けるようになってから少しばかりシャドウ狩りを行うと、学校の校門のところで別れ、湊はチドリを桔梗組に送ってから自分のマンションへと帰って行った。

第百二十三話　中等部三年、開始

４月９日（月）
朝――月光館学園
今日は月光館学園の始業式。新一年生らの入学式を週末の内に終えて、全学年が初めて揃う記念すべき日だ。
三月に真田たちが卒業したことで、二年生だった湊たちも今日から晴れて最高学年である。
普段はばらばらに登校してくる部活メンバーも、今日はクラス発表もあるということで時間を合わせて集まった。
中等部は各学年六クラス。部活メンバーは担任になる可能性のある佐久間を入れて六人なので、余程のことがなければ全員バラバラになったりはせず、誰かしらは同じクラスになるはずだ。
ただ、同じクラスになれた者同士はいいかもしれないが、運悪く一人だけ別れてしまう事も十分に考えられるので、生徒玄関で靴を履き替えた一同は少しばかり緊張した顔でクラス表の貼られた掲示板の前に進んだ。
そして、約二四〇人分の名前の中から自分の名を探そうとしたとき、誰もまだ見つけていない内に青年が自分のクラスを言ってしまう。
「……俺は３―Ｄだな」
「はやっ……ってそうか、有里君はア行だから各クラスの最初らへん見てけば良いんだもんね」
出席番号は男女混合の五十音順なので、名字が『ア』で始まる湊は出席番号一番から五番辺りを見ればすぐに見つかる。
同じように名字が『ヤ行』であるチドリと風花も、末尾の方を見ていけばすぐに自分の名前を見つけることが出来た。
「……私、３―Ｃだってさ」
「あ、私は３―Ｄだ。これで有里君とは三年間同じクラスだね」
湊と別のクラスになったのが不満なのか、不貞腐れたように自分のクラスを他の者に伝えるチドリに対し、風花は部活メンバーが同じク

ラスにいることが嬉しい様で満面の笑みを浮かべる。
だが、すぐ隣にいたチドリが別のクラスになってしまったことを言った直後に、彼女が本来なりたかったクラスであることを笑顔で報告してくるのは如何なものか。
無論、単なる八つ当たりでしかない訳だが、それでも胸中のもやもやをぶつける先がなかったチドリは、とりあえず風花の頬を摘まんで横に引っ張る事にした。
「い、いひゃいよヒドリひゃんっ」
「……気のせいよ」
被害者が痛いと言っているのに加害者がそれを否定するのも変な話だ。けれど、チドリがそんな行動を取った理由を理解している他の二人は苦笑いを浮かべる程度で、止めもせずに自分のクラスの確認を続けた。
ゆかりも美紀もその年によって出席番号が五、六個変わったりするので、各クラスの頭から順番に見てゆくしかない。
この探す作業も楽しみの一つと言えばそうなのだが、六クラス中三人で二クラスにメンバーが分かれているので、同じクラスになれない可能性の方が高い事を思えば不安も膨らんだ。
「あ、あった！　けど、私だけ3―Aってクラス離れてるし……」
「私はチドリさんと同じ3―Cでした。でも、ゆかりさんのクラスの担任は佐久間先生ですから、先生も含めれば均等に分かれただけマシですよ」
自分のクラスを発見するも一人だけクラスが離れており、ゆかりが肩を落としてガッカリしていれば、チドリと同じクラスだった美紀が担任は佐久間であることを指摘する。
クラス表は生徒の名前が書いているのだが、その一番上には担任と副担任の名前も書かれていた。
それによればゆかりのA組の担任は佐久間、チドリたちC組の担任はおじいちゃん先生と呼ばれている理科教師で、湊たちD組は一年生のときに湊が殴り飛ばした体育教師の盛本だった。
あの一件以来、盛本は素行の悪い生徒に対して高圧的な態度を取ら

なくなり、まずは相手の話を聞いてから自分の考えや規則について説明するようになった。
顧問をしている男子バスケットボール部の指導の方にもその影響が出て、生徒たちと意見をやり取りしてより良いメニューの考案にも取り組んでいるらしい。
部活の成績の方は残念ながら県には届かない地区大会上位レベルだが、力は徐々に付けてきているので今年こそはと言った感じのようだ。
まぁ、それはそれとして、いくら佐久間が担任であろうと、ゆかりが一人だけ部活メンバーの誰とも同じクラスになれなかった事実は変わらない。
彼女には彼女のコミュニティがあるので、弓道部の知り合いや同じ寮で生活している友人もいるにはいる。
だが、一番深く付き合っているのはここにいる美術工芸部のメンバーであるため、三年目にして離れたことにショックを隠せないようだった。
落ち込んでいるゆかりのそんな姿を見かねたのか、今までコートのポケットに手を入れて立っていた湊が、マフラーから取り出した煙管を咥えながら淡々と話しかける。
「……俺と別のクラスになったくらいで泣くなよ」
「仮に泣いてもそんな理由じゃないっつの。君は私にどんなキャラを求めてるのよ？」
話しかけられたゆかりはすぐに相手の言葉を切り捨て、呆れた顔で湊に尋ね返す。傍らで見ていた者たちにとっては湊の発言は衝撃だったが、声をかけられたゆかりの様子を見れば、落ち込んでいたときの暗い雰囲気が霧散していたので、とんだ特効薬だと逆に感心した。
しかし、落ち込んでいた本人は湊がわざと変なことを言ったと気付いていないらしく、軟派な男はお断りと冷めた目を向けている。
湊はそれを正面から受け止め、少しばかり考える素振りを見せてからゆっくり口を開く。

「家に帰ったら子どもを抱きながら笑顔で迎えてくれるような良妻賢母キャラかな」
「……有里君って家族愛にでも飢えてるの？　ちゃんとチドリらと家で喋ってる？」
普段の湊からは考えられないような台詞は当然冗談だ。けれど、ゆかりは真面目に捉えたらしく、真顔で湊を気遣っていた。
学校の男子たちにアンケートを取れば、仕事からの帰宅時に子どもを抱いたゆかりに笑顔で出迎えて欲しいと答える者は大勢いる。
深い理由などなく、仕事で疲れて帰ったときに美人の嫁と可愛い子どもが出迎えてくれれば、それだけでまた頑張れるほどの幸せだという話だ。
湊もそういった男子らの夢を知識としては知っていたので口にしてみたのだが、残念ながら冗談にしても湊のキャラからズレ過ぎており。さらに彼には両親や親戚がいないという条件も重なったことで、ゆかりは先ほどの発言が湊の本心から出た物と考え、寂しいのではないかと心の方を真剣に心配していた。
「前に言ったでしょ。いま、湊はマンションに部屋を買って一人でそこに住んでるって。私らに相談もなしに勝手に一人暮らし始めておいて家族愛に飢えてるとか言われても困るわよ」
そんなゆかりに答えたのは青年ではなく彼の家族の少女の方で、勝手に一人暮らしを始めた事にまだ納得していないのか不機嫌な表情をしている。
場所は港区ではなく中央区だと聞いている。ただし、正確な住所は知らされておらず、合鍵も渡されていない。
変なところで適当な湊は鍵をそもそも掛けていないので、家に行きさえすれば誰でも簡単に部屋に侵入できるのだが、それを知っているのは本人と彼の中にいる者たちくらいなものだった。
話を聞いていた風花も勿論そんな事は知らないので、単純に疑問に思ったことを口に出して尋ねていた。
「部屋を買ってって、有里君はそんなお金どこから持ってきたの？」
「女に買わせたのよ」

「誤解を招くような言い方はやめてくれ。俺が自分で出そうとしたらホテル代を払ってたお返しにって相手が払ったんだ」
　ここで否定しなければ、また女に貢がせたと勘違いされる。そう思った湊は即座に否定するも、今度は別の方向に勘違いされたようで、美紀と風花は顔を赤くし、ゆかりは驚いた表情のまま問い詰めてくる。
「ちょっ、ホテル代って、私らに無事も知らせずにいたくせして、裏ではいかがわしいことしてたの!?」
「……お前らの心は穢れてるな。都心にある高級ホテルだ。一泊で数百万飛ぶようなとこもあったからな。払った以上に奢って貰う形になったが、同じ部屋に泊まった以上の事はしていない」
　馬鹿ばっかりだ。そう言いたげに嘆息して湊は煙管の煙を無意味に吐き出す。
　本人の目の前で勝手に勘違いしていた少女たちは、確かに自分たちの早とちりだったと反省し、やらしい想像をしていたとばれている恥ずかしさに耳まで真っ赤に染めて俯く。
　本来はそんな方面に発想が行く事などないのだが、湊が女性とホテルに行ったと聞けば、中学生に見えない見た目と大人びた雰囲気のせいでアダルトな想像をしてしまうのだ。
　顔の熱が中々引かず、いつまでも話が進まないと茹ってしまいそうだと考えた美紀は、少し強引な話題転換かもしれないと思いつつ、本心でも気になっていた女性について聞いてみる。
「ちなみに相手の方はおいくつか訊いてもいいですか？」
「俺の一つ上だが？」
「そ、そうですか。随分と裕福な生まれのようですね」
　彼がいくらのマンションに住んでいるのかは分からない。だが、マンションなどの値段に詳しくない美紀でも数千万はすることを流石に知っていた。
　自分たちより一つ年上がそんな大金を出せるなど異常だ。一般家庭で育った庶民の感覚ではない。表情をやや引き攣らせながらも、どうにか返事で笑顔を崩さなかっただけ美紀は頑張った方だ。

もっとも、それに対する青年は親しい者らと一緒にいるにしては冷たい表情で淡々と返す。
「まぁ、年収は日本円で百億じゃきかないだろうからな。待ち時間にファッション雑誌を読んでいたが、ゴスドレスと寝間着以外を着ている姿を見たことがない。似たようなのがもう一人いるが、流石に冬には普通の洋服にコートを着ていたし。あいつは俺以上に世間からずれていると思う」
ソフィアは湊が思っている通り、私服がすべてドレスになっている。色は暗色が多く、所謂ゴスドレスに分類される物ばかりだ。
値段はそこらの物とは比較にならないほど高価ではあるものの、一般人の私服と同じような感覚で着ているので、外に出るときにはストールを羽織ったり、上からコートを着て普通に街中を歩いている。
同じレベルの富裕層であるヒストリアも家の中ではドレスを着ているが、流石に外では動き辛いことや保温性の関係から普通の洋服に着替えているため、外でもドレスを着ているソフィアは金持ちの中でもかなり特殊な存在だろう。
そんな相手とパーソナリティーが似ているのは非常に不服だが、一般人ばかりの学校でも普通に過ごせていることで、あれに比べれば自分の方がマシだと湊は考えることにした。
「……君って世間からずれてる自覚あったんだね」
彼のそんな胸中など知らずに、言葉を聞いて苦笑いを浮かべたゆかりが僅かに意外そうに話しかけてくる。
風花は湊と美術館に行ったときに聞いていたが、他の者はチドリを除いて湊が異端者である自覚を持っている事を知らなかった。
とはいえ、本人が奇行や怪言を繰り返して異端に走るという訳ではなく、当たり前のように人助けやらしていれば、周囲から浮いているという意味で異端に見られていると言った方が正しい。
皇子という扱いも、性別を越えた美しいルックスによるところが大きいが、ちょっとした人助けを繰り返してきたことで弱者の味方や聖者のように思われ、人々が勝手に作りあげた偶像を彼に投影して見てしまっているところがある。

湊は自分が異端であり異常であることの自覚はあるが、それは決して聖者のような善性のものだとは思っていない。復讐のために万を超える人間を殺す聖者がどこにいるというのか。
「これだけ周囲から騒がれていて、自分を一般的と認識していたら頭の病気だぞ」
一部の人間からは聖者と思われながらも、血を流す野蛮な手段を行使し続ける己を愚者だと思っている青年は、それだけ答えるとそろそろ移動すべきだと言って各クラスの教室へ向かい歩き出した。
教室についた湊らは荷物を置くと講堂へと移動し。始業式を受けてから本年度初めてのホームルームを受けたのだった。

夜――中央区・マンション〝テラ・エメリタ〟
始業式やホームルームを受けた湊は、今日の部活が休みだったこともあり、今まで忙しくて行けていなかった日用品やらの買い出しをしてから帰って来た。
新しいクラスには風花の他にも、去年同じクラスだったらしい伊織順平や友近健二に岩崎理緒などもいたが、湊は彼らと話したことはないし。そもそも誰だお前らといった認識だった。
実際は去年の夏祭りで会って挨拶や言葉を交わしているのだが、興味無い相手のことなど街中ですれ違った人間程度にしか考えていない。
すぐ後ろの席になった順平に「今年も一年よろしくな」と言われたときには、少々素っ気なくも返事をしておきながら、買い物から帰って来た時点で既に頭の片隅へと記憶を追いやってろくに覚えていなかった。
荷物は全てマフラーに入れているので基本的には手ぶらだが、部屋のあるフロアにエレベーターが到着したことで降りた湊は、顔を上げて部屋の方を見るなり深い溜め息を吐いた。
「……はぁ」
「あ、湊君。にゃっちー」
湊が部屋の方を見ると自分の家の扉の前に一人の少女がいた。扉

に背を預けるように座って携帯ゲームをして遊んでいた相手は、湊がやってきた事に気付くと独特な挨拶をしてくる。
ただし、視線はゲーム画面に固定されたままで、湊がすぐそばまで来れば扉の前からどいたが、去っていくつもりはないようで湊が扉を開けるのを待っているようだ。
鍵は掛けていないのでいつでも入れるのだが、そこで勝手に入らない程度の常識や良識は持ち合わせている事が唯一の救いか。
そんな風に考えて、ドアノブに手を掛けた湊は待っている少女・羽入かすみに話しかけた。
「……一応聞いておくが何で待っているんだ？」
「あのね、湊君とあそぼうと思って。あと、ご飯も一緒に食べた方がおいしいんだよ」
この少女は隣の部屋の住人で、親が仕事で一時的にアメリカに行っていて現在は一人暮らしをしており、風邪の看病をしてくれた湊にやけに懐いていた。
年齢は湊の一つ下で同じ月光館学園に通う後輩。身長は美紀や佐久間には及ばないが、ゆかりたちよりも高く、母性の象徴たる双丘は中学二年生にして制服のブラウスをピンと突っ張らせるほどの存在感を放っている。若干ずれたような人と違った独自のテンポを持っているものの、頭はそれほど悪くはないようで、あまりに純粋すぎることを除けば付き合い易い人間だろう。
とはいえ、湊は人付き合いがそれほど好きではない。まるで子犬や子猫のように懐いて来る後輩を冷たく突き放す気はないが、こんな時間でも遊ぼうとして家の前で待っているのはどうなのだと色々と突っ込みたくなった。
「……遊ぶって何をしてだ？」
「何が良いかな？　えっとねー、ゲームは沢山持ってるから何でもいいよ？」
「ゲームである事は確定なんだな」
「湊君のお家のテレビおっきぃから楽しいよね。うーんと、マリオカート持ってくるね」

話し始めてようやくゲーム機から視線を上げた彼女は、専用のポーチに入れてからリュックに仕舞い直している。
彼女の使っているリュックは薄ピンクの卵型で、デフォルメされたような金色の翼が側面から生えており、彼女がいうには『天使のたまご』という海外の女児向けブランドの限定品らしい。
同じように履いている黒のエナメルシューズにも外側に金色の翼のイラストが描かれており、そちらは別の『エンジェル・ロリータ』というブランドの品らしいが、女子のファッションなど知らない湊にすれば、そうか、としか返しようがなかった。
ゲーム機をリュックに仕舞い直したかすみは、今度はポケットから鍵を取り出して自分の部屋に向かおうとする。どうやら湊の部屋にゲームを本体ごと持ってくるつもりのようだが、それはさせないと後ろから彼女のリュック上部にある引っかける紐を掴んで止めた。
「……待て。食事は一緒にしてやるから、七時になろうとしてる今から人の家にゲームを持ってくるな」
「ご飯？　何がいいかなぁ。焼き肉かなぁ？」
「……焼き肉が食べたいのか？」
別に相手の好みを否定する気はないが、明日も学校だというのに平日から焼き肉を所望する女子がいるとは驚きだった。
食事のお金は相手も親から沢山貰っているようで、今までも何回か自分で払ってくれている。さらにアイスを食べようとコンビニに連れて行かれたときには奢ってくれたので、学校での立場的には先輩後輩の間柄ではあるが、一方ばかりが負担を強いられるような関係ではない。
別に金など普段は使わないので全て払ってもいいと思っている湊も、奢って貰うことが当たり前という間違った感性を相手が持っていない事には好感を覚えていた。
＊＊＊
かすみが焼き肉を食べたいと言ったことで、湊は彼女を連れて自分の知っている高級焼き肉店へと訪れていた。
チドリや桜とも何度も来ており、いくら食べても胃がもたれない上

質な国産牛と、それだけで店を開けそうなスープやご飯物と言った美味しいサイドメニューの数々が置かれていることから、湊は桔梗組で暮らすようになってから焼き肉はほとんどこの店でしか食べていなかった。
「わぁ、七輪だよね？　これで焼くの？」
テーブルごとに仕切られた席に通されたかすみは、炭火焼用の七輪を見て珍しそうにしている。この店は提携している農家から肉を直接買っているが、同じように上質な肉を独自のルートで買っている店は他にもあるだろう。
だが、そういった食材の条件が同じであれば、鉄板やガス火で焼く肉よりも炭火で焼いた方が絶対に美味い。
遠赤外線が強い炭火は短時間で中まで火が通るので、うま味である肉汁をほとんど逃すことなく焼き上げることが出来る。さらに肉汁が焼いている内に網の下に落ちても、炭にかかって発生した煙で燻され香ばしくなる。
湊だけでなくかすみもかなりの健啖家なので、焼き上がりが速いのは非常にありがたく、また待っている間も炭火で焼ける肉のいい香りが食欲を増進させるため、ここなら相手も満足するだろうと湊は思っていた。
店員からおしぼりと水を受け取り、手を拭きながら湊は塩タンとカルビを三人前ずつ頼む。後は来るまでに決めればいいので、とりあえず注文を一度済ますとかすみにもメニューを渡してやった。
「……それで、何を食べるんだ？」
「ウインナーが食べたいなぁ。あとね、ハラミとハツとセンマイとご飯」
「レバーとかはいらないのか？」
「レバーはね……オエッてなるからいらないの」
普段はぼんやりとした表情をしているかすみは、レバーの話をするときだけ眉を寄せて真剣な表情で話す。どうやら独特の味が苦手らしい。
別に湊も進んで食べている訳ではないので、いらないのなら構わな

いと店員を呼んで彼女が食べたがっている物の他にサラダとスープも追加注文をした。
少し待てば最初に注文した分とご飯が一緒にやってきたので、湊はトングで肉を網にのせながら会話を続ける。
「そういえば、お前は何組になったんだ？」
「わたしはね、２―Ｄだよ。湊君は？」
「俺は３―Ｄだ」
「そっかぁ。えへへ、一緒だねぇ」
クラスのアルファベットが同じなだけで嬉しいのか、かすみは割りばしを手に持ちながら頬を緩ませ笑みを浮かべる。
二年と三年ではフロアがそもそも異なっているので、そこまで学内で会う事はない。さらにいえば、かすみは休み時間には寝ているかゲームをしているので、トイレに行くときやジュースなどを買いに行くときしか教室から出ない。
湊が復学して一ヶ月以上が経ったけれど、今まで学内では一度も出会っておらず。変則設定で上から順に一年、三年、二年、文化部部室という構造の校舎で、例えかすみらの教室の真上に湊のクラスがあったとして、学内での生活スタイルが変わらない限りは今後もほぼ会うことはないだろう。
まぁ、普段よく遊ぼうと言って家に訪ねてきているので、学校でくらい離れていてもいいはずだ。そんな事を考えながら、湊は焼き上がった肉をかすみの取り皿に置くと自分の皿にも置いて箸を取った。
「おいしそぉ。それじゃあ、いただきまーす」
箸で肉を摘まんだかすみは、透き通ったレモン汁に厚切りタンを半分ほど潜らせる。ここで全てを潜らせてしまえば肉にふられた塩を落とすことになり、ただのレモン味になってしまう。
せっかくの美味い肉がそれでは台無しだ。シンプルであるが故に素材の味を引き出す塩、それを殺さず僅かなアクセントを付けながら支えるためにレモン汁はある。
どこぞのモニュメントにも刻まれていたはずだ。〝調和する二つは、完全なる一つに優る〟と。

塩とレモン汁、二つの味が調和した最初の一切れを、少女はゆっくりと口に運んだ。
「んー、おいひー！」
噛んでまず驚いたのはその弾力だ。食べ放題の店ではほとんど置かれる事がない厚切りのタンは、ホルモン系にも似たコリコリとした食感と確かな弾力があった。
だが、噛み切れないほどではなく、噛むたびに肉汁を溢れさせながら徐々に解(ほど)けてゆく。溢れた肉汁もレモン汁の爽やかさで中和され、飲み込んだときには一切のくどさを残さず、食べた余韻と空腹が次の肉への欲求をさらに高めさせた。
その様子を眺めながら自分も食べつつ肉を焼いている湊は、どうやら気に入って貰えたようだと僅かに安堵しながら彼女の取り皿へ次々と肉をのせてゆく。
「おいしいねー。どんどん焼けるから待たなくてよくて嬉しいなぁ」
「……炭火の火力はすごいからな。燻す効果もあってより美味くなる。個人的には霜降りのような脂の多い肉よりも赤身の方が好きだ。俺は肉を食べに来ているのであって、別に脂を食べに来ている訳ではない。肉をより美味しく食べるために米や野菜を挿むのは分かるが、脂を有り難がるのは未だに理解できない」
「そうなの？　じゃあ、マグロは？」
「赤身がやはり一番いい。脂がのっているにしてもトロで十分だ。中トロや大トロはくどい」
「なるほどぉ。でも、大トロもおいしいよね？」
「……まぁな。嫌いじゃない。ただ、赤身の方が好きなだけだ」
好き嫌いがなく何でも食べられる湊も、別に好みがない訳ではない。裕福な家庭で本物の味を知りながら育ってきたので、審美眼同様に舌もかなり肥えている。
そして、そんな湊が好んで食べるのは一般的な赤身の部位で、霜降りや脂がのっている部分はあまり食べていなかった。
別に肉が不味い訳でも、食べたら胃がもたれるという訳でもない。そも、トリカブトをふんだんに使ったシェフの気紛れスープを出され

て飲んだところで死なないのだ。普通の動物性の脂を接種したところで体調に異変が出る訳がない。
湊が赤身ばかりを食べるのは、単純に本人の嗜好の問題なのでそれ以外の理由はなかった。
かすみと雑談しながら塩タンを焼き終え、今度はカルビを焼いていると、店員が盆に料理をのせてやってくる。
「こちら、サラダとテールスープになります。スープの器が熱くなってますのでお気を付けください」
新たに運ばれてきたのは細切りの大根や水菜等の生野菜を使ったサラダと、もう一つは濛々と湯気を立たせている器の中央に骨付きの大きな肉が入ったスープ。
かすみは両親と焼き肉に行くときは、いつもたまごスープかわかめスープしか頼んだ事がなかったので、見慣れぬ料理を興味津々に覗きこんだ。
「テールスープ？　尻尾なの？」
「ああ、煮込むといい出汁が出る。肉も柔らかくなっているから、スペアリブのようにかぶり付いて食べるといい。熱いから持つときは気を付けろ」
言いながら湊はテールを別の器に移して、その上からスープをかける。スープに入っている肉は大きなこの一つだけだが、湊は別に気にしていないのか全てをかすみに譲った。
肉の入った器を受け取ったかすみは、おしぼりで手をもう一度拭いてから肉にそっと触れる。今までずっとスープに入っていたのだ。かなり熱いが、何度か掴めそうな場所を探している内に慣れてきて、どうにか安定して持つ事が出来た。
パッと見では少しゴツゴツしたスペアリブのような印象。スペアリブとの違いはこちらの肉は煮込まれた以上の色がついていない事だろうか。
スープ自体は様々な具材や調味料が入って色が付いているが、それは肉を染めるほどではない。
では、味もそんなについていないのかと言えば、かぶり付いた瞬間

にそんな事は全くないと否定出来た。
長時間煮込まれてほろほろと柔らかくなった肉は、出汁の利いたスープがよく染み込んでおり、口の中を濃厚なスープの味で満たす。続けてスープも飲んでみると、塩と黒胡椒ベースの味に生姜と鷹の爪のピリッとした辛さがアクセントとなり、肉から溢れるものとは別の味わいを楽しませてくれる。
様々な調味料が使われていると思っていたが、味付けは塩と黒胡椒、さらにスパイスとして摩り下ろした生姜と細く切られた鷹の爪とネギくらいなもので、あとは主役であるテールから染み出した濃厚な出汁でこのスープの風味は作れているようだ。
シンプルだからこそ最大限に素材の旨味を感じさせてくる見事な逸品を楽しみ、肉と同じく熱々の少し辛いスープを飲んだかすみは、身体の内側からぽかぽかとしてきて、顔や背中に汗を掻き始めていた。
テールを全て食べ終えた彼女は、新しいおしぼりで手を綺麗にすると、制服の上着を脱いでリボンを外し、さらにシャツのボタンもいくつか外して手で顔を扇いでいる。
「あついねぇ。身体ぽかぽかだけど汗かいちゃった」
「……タオルを貸そうか？」
「いいの？　ありがとー」
マフラーからこっそり出したフェイスタオルを渡してやる湊。冷たい水を飲んで身体を冷やしつつ汗を拭こうとするかすみは、異性である湊が目の前にいるにもかかわらずシャツを捲くって下着を見せながら身体を拭き始めた。
席自体はテーブルごとに仕切られているので、通路を移動している人間を除けば見えないかもしれない。
だが、流石に下着を見せて平気でいるというのは年頃の娘として如何なものか。初めて会った日に全裸を見て、洗うためとはいえ大事なところも触っているので、それを考えれば今さらかもしれないけれど、一般常識として彼女のためにも湊は言っておくことにした。
「羽入。流石に男の前で服を捲くって下着や腹を見せるのはやめろ。

お前だって身体はほとんど大人なんだ。よからぬ事を考えるやつがいない訳じゃない」
「んー、でもね。そうしないと身体を拭けないし。湊君はいい人だから大丈夫なんだよ？」
「……俺だから気にしていないのか？」
「そうだよ？　あのね。流石にわたしも男の子におっぱいを見せたりしちゃダメなのは知ってるんだよ？　でも、湊君はお医者さんだし優しくていい人だから心配してないの」
　常識の欠如を指摘されたかすみは、馬鹿にし過ぎだと抗議の視線を湊に送る。だが、すぐにそんな物は消して彼女は別の話題に変えてきた。
「そう言えばね。廊下とか歩いてると他の男の子がよくわたしのおっぱいらへんを見てるの。ダメなんだよーって教えてあげたいんだけど、どうしたら良いのかな？」
「……あまりに露骨で酷い場合は女性教師に相談しろ。そうでなければ、武士の情けで許してやれ。一般的な男子が女性のそういった部位を見てしまうのは遺伝子に刻まれた本能で、ある種の病気みたいなものだ」
「湊君は別に見てないよ？」
「別に興味ないからな。身長も含めて平均的な同年代よりも発育がいいとは思ったが、それくらいなもので劣情を催したりはしない」
　湊から見れば同年代など全員が子どもだ。それは肉体的な話ではなく主に精神的な意味でだが、見たくもない人間の汚さを何ヶ月も見続けてきたことで、湊はさらに他人との関わりに距離を開けており、劣情を催すどころか存在の認識すらも拒絶していた。
　そんな状態で渋々でもかすみには構ってやっているのは、彼女が純粋な善性存在だからだろう。
　人間の汚さを知っている湊にすれば、世間知らずで危うさすら見せている相手を放ってはおけない。精神は子どもでも身体は立派に成長してきている。他の下衆な男たちがかすみに劣情を催して近付いてきても何ら不思議ではないのだ。

「発育かぁ。身体測定のときに他の子から大きいねって言われるの。でも、平均とかそういうの分からないから、ご飯いっぱい食べたら背も伸びて大きくなるよって教えてあげたんだぁ」
「普通に食べてもお前ほどになるには遺伝的なものが関係しそうだがな。ただ、そいつらも高校生や大学生になれば今より胸も大きくなってくるさ」
「んー、でも最近なんか下着がきついんだぁ。今は〝Ｅ６５〟ってい うの付けてるんだけど、もう少し大きいのにしたい。いつもはママと一緒に買いに行くんだけど、まだもうちょっと帰れないって言ってたから、湊君と一緒に買いに行きたいな」
「……知っていたか？　俺も戸籍上は男であって、下着のサイズを言われても反応に困る。さらに言えば、一般的な女子は知り合いでしかない男子と下着を買いに行ったりはしないんだ」
　現在付けている下着のサイズを聞いて立派な物だとは思う。それがきついとなれば尚更だ。
　けれど、それを友人ですらない自分に言われても困ると湊は微妙な表情を浮かべる。相手は湊をとっくに友人としてカウントしているようだが、どちらにせよ異性の友人と一緒に下着を買いに行く者などほとんどいない。
　相手にその事を教えてやるも、微妙に会話が噛み合っていないらしく、肉を食べながらかすみはぽやっとした笑顔を見せた。
「大丈夫だよ？　たまにね、女の人と一緒に買いに来てる男の人もいるから、一緒なら問題ないんだよ」
「そうか、俺の話をちゃんと聞いていないようだな。いい事を教えてやるがその女と男は恋人か夫婦だ。だが、俺とお前は先輩と後輩でしかない。互いの関係という条件が違うのであれば、当然、お前のいった〝大丈夫〟とやらも変わってくる」
　湊は子どもが苦手だった。自分の内面も大概幼稚だと思っているが、それ以上に人の話を聞かずにすぐに感情でものを言ってくる。
　感情論を別に全否定する気はないが、湊からすればそれは全体像を見ていない極狭い視野で物事を語っているようにしか思えない。そ

れよりも一ランク程度の低い感情だけでものを言うなど、聞くに値しない単なる我儘だ。
　それを考えればまだ感情でものを言ってきていない相手はマシだが、その精神が子どものそれであることに変わりはなく、もぐもぐと口をさせながらかすみは眉を寄らせて困った顔で返して来た。
「湊君って難しそうな話し方だよね。よく分からないけど、買いに行くお店の行き方は知ってるから、今週の日曜日に一緒にいこうね」
「……なるほど、話し方のせいで言葉が伝わっていなかったのか。では、分かり易く言ってやる。俺は一緒にはいかない」
「でも、湊君が一緒じゃないと遠くにお出かけ出来ないし。小さい下着だと苦しいから一緒に行って欲しいな」
　かすみは現在中学二年生。親に溺愛して育てられたみたいで、色々と世間知らずなところが目立つ分だけ、両親に頼れない状況に時折不安を覚えているようだった。
　そんなときに出会った優しい青年にやや依存するのも当然で、心を読まずとも湊は相手が自分を完全に味方として認識していることを理解していた。
「ダメかな？」
　しょんぼりと落ち込んだ様子で尋ねてくる様子は、心細そうにしている捨てられた子猫のようだ。
　動物の言葉が副音声のように自動で変換され理解出来る湊は、かすみの声にも副音声のように自分の名前を呼ぶ声が重なって聞こえた気がした。
　そうして、弱者にはどこまでも甘い青年は不安そうな少女の頼みを断り切れず、憮然とした態度を取りながらも折れて聞きいれた。
「……俺は店には入らないぞ」
「やったぁ、ありがとー。ねぇねぇ、湊君は何色が好きかな？　わたしはピンクが好きなんだけど、湊君にも可愛いの選んで欲しいな」
「……おい、店には入らないって言っただろ。少しは俺の話を聞け」
　一緒に行ってもらえる事になったかすみは満面の笑みを浮かべる。だが、そこから自分も一緒に店内まで来てくれると思っている事が分

かった湊は、話を聞かない少女に分からせるよう何度も説明をするのだった。

第百二十四話　美鶴たちの適性

４月１５日（日）
午後――厳戸台分寮

三月に中等部を卒業した美鶴は、そのまま高等部へと進学して高校生としての生活をスタートしていた。

けれど、暮らしている寮も通学路も変わらず、生徒の人数は増えたが中等部からエスカレーター式に進学した者が全体の半分以上を占めているので、教師の顔ぶれが変わった事を除けばそれほど大きな変化はない。

勉強に関してもしっかりと予習して授業に臨んでいるため、いくら内容が難しくなったとしても今まで通りに教師の話を聞いて板書を写すくらいで、やはり大きな変化は見られなかった。

それは影時間に関する研究などについても同じで、未だに消す方法が存在するのかどうかも分かっていない。シャドウやペルソナの研究も、進めれば進めるだけ新たな謎が見つかるせいで、一部の研究の虫とも呼べるような没頭する者らを除けば、モチベーションの低下も懸念され始めていた。

とはいえ、仲間が増えて街中に現れるイレギュラーシャドウを狩る様になった美鶴は、ペルソナを使った戦闘にも慣れてきたことで、戦闘を通じて自分が強くなっていることを実感するようになり、以前よりもずっとやる気に満ち溢れていた。

（ふむ、ゆっくりとだが私たちも着実に強くなっているな）

美鶴は桐条グループのラボから届いたばかりの書類に目を通し、そこに書かれている内容を見て満足気に頷く。

彼女がいま見ているのは先日学校で行った身体測定のデータだ。身長、体重、座高、スリーサイズは女子だけだが、それに加えて密かに適性値測定も行っており、新たに開発したという新型の測定器でより正確な数値が表れるようになっている。

適性値測定のデータはグループ内でもトップレベルの極秘資料だが、美鶴は適性持ちのスカウトも行っているので閲覧を認められてい

る。
　ただし、桐条グループは全ての傘下企業と学校の健康診断で適性値測定をしているが、残念ながら美鶴が閲覧できるのは月光館学園に通う生徒のデータのみである。
　今のところは月光館学園の生徒からしか適性持ちが現れていないこともあり、むしろ他のデータは見る必要がないのではと研究者たちは思っていた。
　彼女がいま見ているのは高等部の生徒たちのデータで、残念なことに自分と真田と荒垣以外に適性持ちはいなかったが、以前の測定時より数値が上がっているので美鶴に不満はない。
（私が〝４３５０ｓｐ（レベル８弱）〟、真田が〝２６１０ｓｐ（レベル４強）〟、荒垣が〝２５９０ｓｐ（レベル４強）〟か。戦いにも慣れてきたし、あと一人くらいメンバーが増えればタルタロスの探索に行けるかもしれないな）
　以前の測定から言えばレベル換算で一つほどしか上がっていないが、たまに現れるイレギュラーシャドウしか狩っていない事を考えれば、成長ペースとしては速い方だろう。
　真田と荒垣は自分たちが数値で負けていると知っているため、どうにか美鶴よりも強くなろうと必死になっている気配がある。美鶴としてはそんな少年たちの負けず嫌いは微笑ましいと思っており、どうせならば大きな壁の方が越えたときの感動も大きいだろうと、数値が追い付かれない様に自主練も行って常に彼らの先にいるようにしていた。
　ただし、実際のところは本人が自覚していないだけで、美鶴も二人と同じくらい負けず嫌いな性格をしているので、無意識にＳ．Ｅ．Ｅ．Ｓ内トップであり続けようと追い付かれぬようにしているのが真相だったりする。
　二人の壁であろうとする気持ちもなくはない。そのため完全な嘘ではないが、比率的には八対二で負けたくない気持ちの方が強かった。やはり大人とも正面からやり合うにはこれくらいの気の強さが必要なのだろう。
（さて、では問題の中等部のデータを見るとしよう）

今まで見ていたファイルを閉じると、美鶴は次のファイルを手に取り眺めてゆく。１―Ａから出席番号順で並ぶデータは、どれも似たような数値ばかりが書かれていてほとんどが〝適性無し〟という結果だ。

これは最初に見た初等部や、次に眺めていた高等部のファイルでもそうだったので今さら気にしない。

しかし、このファイルの終盤には、一昨年まで最高値だった美鶴の適性を大幅に上回る逸材がいる。少女と約束したので彼らを勧誘する事はもう出来ないが、それでもシャドウと戦闘している自分たちよりも圧倒的な成長速度を見せていることもあって、どんな生活の仕方をすればそんなに強くなれるのだという興味があった。

逸材である青年らと共にいる部活メンバーも、適性を得るには至っていないが他の生徒より高い数値を見せている。ここから推測するに高い適性は周囲の人間にも影響を及ぼす可能性があった。

これが真実ならば適性の高い者は一つのクラスに集め、相互作用で成長させながらクラスメイトから新たな適性者を発掘することも出来るかもしれない。

順にページを見ていってそんな事を考えていた美鶴は、いよいよチドリのページだと僅かに緊張しながら、意を決して彼女のページを開いた。

（吉野千鳥、身長一五三センチ、体重四十二キロ……適性値〝１２４４０ｓｐ（レベル２４弱）〟だとっ!?　馬鹿な、彼女は二年の三学期初めでは７５００ｓｐほどしかなかったはずだっ）

チドリの数値に目を通していた美鶴は、驚愕のあまりファイルを手から落としてしまう。

以前、湊も数ヶ月の間に一万以上数値が上昇したことがあったが、今回のチドリの成長速度はそれに迫る勢いだ。

徐々にではあるものの、美鶴はチドリたちに近付けている気になっていたというのに、今回の結果を見る限りでは差は開く一方だった。

落としたファイルを持ち直し、チドリの数値をジッと見つめながら美鶴は原因について考える。

彼女の実家である桔梗組をたまにマークしているグループの者からは、チドリが影時間に家を抜け出してタルタロスに向かっているという報告はない。
監視していない日に行っている可能性も否定できないが、現時点ではペルソナに目覚めているどころか適性を持って影時間に活動している証拠もない。
数値上は影時間に適応して活動できるだけの十分な数値を叩きだしてはいる。しかし、実際に活動している現場を見ていないので、やはりそこは不明としか言えないのだ。
（二年生の三学期から三年生の一学期までに起こった事……有里の復学か？）
冬休み明けの一月から今月までの間にあった事について思い出してみる。一番影響しそうなのは湊の復学だ。
湊の適性は留学前の時点で三万を超えており、現在のチドリとS・E・E・Sメンバーの数値を合わせても勝てない程だった。
そんな彼が一年の海外生活を終えて戻ってきたのだから、以前よりも数値が上がっているとすれば、周囲への影響力も増大して最も近くにいたチドリの適性値が上昇するのもしょうがないと言える。
元々高い適性を持っていたチドリにさらに影響を与えるほどの数値を想像すると恐ろしいが、見ない訳にはいかないので美鶴はさらにページを捲る。
チドリは3―Cの末尾なので、3―Dの先頭である湊は一枚捲るだけであった。
（有里湊、身長一八三センチ、体重七十四キロか。一年で随分と成長したな）
復学した湊の姿は遠目から見た事があったので長身になっている事は知っていた。けれど、実際の数値を見れば、自分より十センチ以上も高かったのかとさらに具体的なイメージを抱く事が出来た。
真田と荒垣も学校ではそれなりに長身の部類に入るが、湊と並ぶと拳一つ分は差がある事になる。
二人がどこか悔しそうにして、牛乳や背を伸ばすのに効果があると

言われる食材を買って来て密かに摂るようになった理由を美鶴は理解した。
そして、いよいよ問題の適性値の欄だと視線を向ければ、美鶴は一瞬桁を間違えているのではないかと我が目を疑った。
（馬鹿な、〝１０００００ｓｐ（レベル１００）〟などあり得ない。一体彼は留学中に何をしていたと言うんだっ）
美鶴はそれが抑えられた数値だと知らず、驚愕を越えて機器が故障していたとしか思えずにいた。
湊自身、普段から力を抑えるようにしていたが、以前、桜が英恵の屋敷に訪れたときに健康診断を利用して適性を計測していると聞いた。
自分たちがグループの人間にマークされていることや、真田や荒垣といったメンバーがＳ．Ｅ．Ｅ．Ｓに加入している事で、どこかしらで適性を計測しているのだとは思っていたのだ。
それを英恵と桜経由でしっかりと理解した事で、湊は力を以前の測定限界ギリギリまで抑えて敢えて計測させてみようと計画する。
この数値を見たグループの人間は間違いなく驚く筈だと、そういった悪戯心でやってみたのだが、湊の狙い通りに桐条グループでは大騒ぎになっていた。研究者たち曰く、適性値十万は既に人間の限界に達しているのだとか。
（一年の終わり頃の彼は三万一千だったというのに、たった一年で三倍以上に跳ね上がったのか。いや、単純に数倍になったと考えるべきではないな。我々が三倍になるのと有里が三倍になるのでは文字通り規模が違う）
事実を事実として受け止める事で冷静さを取り戻した美鶴は、どうすればこれ程の速度で成長するのか不思議に思った。
湊が最後に測った当時の美鶴の数値は三千だったが、これが三倍になれば一年で六千増えた事になる。青年の成長速度で考えれば、これだけの増加など下手をすれば一ヶ月も掛からずに達成出来るのだ。
シャドウとの実戦を行っていても、美鶴たちの成長速度はもっと緩やかでしかないというのに、シャドウの存在が確認されていない海外

にいても成長する理由が美鶴には分からなかった。
手に持っていたファイルを一度机の上に置き、美鶴は湯気のたっている紅茶のカップをそっと掴み、そのまま口元へと運び喉を潤す。
温かい飲み物にはリラックス効果があるので、考え過ぎて頭の中がぐちゃぐちゃになっていた美鶴は、一度思考をリセットしてから再び湊の適性値について考え始める。
（……彼に何かあったとすれば行方不明になっていた間の事が鍵だろう。事故に巻き込まれて同行者の方が亡くなり、有里自身も生死の境を彷徨っていたという話だ。それとは別のタイミングかもしれないが、右眼を怪我で失った事も適性値の上昇に関係しているかもしれないな）
九月下旬に行方不明になり、その後、一月下旬に湊が見つかったという報が入ってくるまで四ヶ月以上の空白期間がある。
もっと言えば、湊は佐久間や部活メンバーに留学中の様子を、メールや電話で伝えて来ることはあったが、学校に対してはどんな活動をしているかの途中報告を全くしていない。
それを含めれば佐久間と櫛名田が他の教師らに伝えていた情報を除き、湊には約一年の空白期間があることになる。
治安の悪い中東の国でテロリストに襲われた事や、雪が深く積もった森で熊に襲われたなど、一般人が普通では遭遇しえない事態も切り抜けていると聞いている。なので、もしかすると、シャドウと戦う以上に危険な事を現実世界で行っていたことも可能性としては考えられた。
（ペルソナや適性はシャドウと戦わずとも成長させる事は出来る。そもそも、それらは心の強さと言い換えられるものだ。適性持ちになるまでは影時間への適合率や親和性の問題でしかないが、完全にペルソナ覚醒値を超えている以上は心の強さとして考えるべきか）
湊もチドリも既にペルソナを覚醒している可能性が高い。相手は極道の家の者なので迂闊に近付き過ぎる事は出来ないが、タルタロスへ訪れる事や影時間に活動している証拠を掴むため、もう少しグループの人間に二人をマークして貰えないか頼んでみようかと美鶴は悩

む。
もしもそれで白だと分かれば、二人は本当に心の強さだけで現在の適性値まで成長した事になるのだ。
チドリに対しては、影時間やペルソナにシャドウといった基本的な話を勧誘時に伝えている。ファイルなどの資料はその場で返して貰っているが、彼女が湊にも話している事は容易に想像がついているので、その事が切っ掛けとなって目覚めている事も十分に在り得る。
美鶴としては九割方二人はペルソナ使いだと踏んでいるが、どちらにせよ勧誘出来ないのであれば、彼らも別途でシャドウを倒してくれる事を期待するしかない。
それだけの強さを得る秘訣も聞きたい気持ちは当然ある。しかし、チドリは湊の高い適性の影響を受けているだけとも思われるので、湊に話を聞いて桐条武治やグループへの憎悪で力を得たと言われてしまう可能性を思えば、美鶴はあの二人には踏み込まずに現状を維持しようと思った。
(彼のまわりでは適性値が上がってきている者がいる。有里と吉野を勧誘する事は出来ないが、友人らに声を掛けることくらいは許してくれるだろう)
佐久間を除く部活メンバーの適性は徐々にだが上がってきている。美紀だけはほとんど変わらずにいる事から、適性持ちにはなれてもペルソナ使いにはなれそうもないが、美紀の安全を第一に考えている真田が仲間にいるので、彼女がペルソナ使いになれないことはむしろ都合が良かった。
他の二人であるゆかりと風花は、まだまだ適性持ちにも届かないレベルではある。けれど、他の一般的な生徒よりは順調に数値が伸びてきているため、適性者候補の候補者といった程度にグループ内でも注目され始めている。
本来ならば無関係の人間を巻き込むべきでないと分かっていたが、心の深い部分で自分たちと共に戦ってくれる仲間を求めていたことで、美鶴はいつか彼女たちを勧誘出来ればと思っていた。
ファイルに目を通し終わった美鶴は、真田と荒垣にチドリや湊の

データを見せる訳にはいかないため、鍵付きの引き出しに全て片付けると紅茶のカップを洗うために部屋を出ていった。

――巌戸台・某所

巌戸台のはずれに密かに作られた研究所。そこで幾月は桐条グループから隠れ、独自にシャドウやペルソナに関する研究を行っている。

エルゴ研時代からシャドウの研究を主体に行っていた幾月にとって、研究用のシャドウさえ捕獲出来れば一人でも研究を進める事は出来た。

いま彼が行っている研究は主に二つ。

一つは結城理の強化実験で、これは手術を依頼していた会社の代表であるアロイス・ボーデヴィッヒが何者かに殺されたことにより一時は中止に追い込まれかけたが、何とか再開の目途が立って先日無事に終了した。

何度か死にかけたりもしたが、理は自分の居場所を奪った贋作に対する憎しみと強靭な精神力で耐えきり、その身体能力と適性は当初の限界とされていた数値を大きく上回るほど成長していた。

「酒呑童子、空間殺法！」

体育館よりも二回りほど狭い訓練用の大部屋。そこにいた入学当初の湊がそのまま成長したような僅かに幼さの残る少年の顔をした理は、左手に槍を持ったまま右手で召喚器をこめかみに当てて引き金を引く。

すると、彼の頭上に歌舞伎の獅子のような着物に長い赤髪をした男性型のペルソナ、愚者〝酒呑童子（しゅてんどうじ）〟が、刀を何度も振りながら現れる。

その姿に歌舞伎の獅子との違いがあるとすれば、頭から生えた鬼の黒い二本角と、縦向きの第三眼が額にあることだろう。

湊の茨木童子よりも余程鬼らしく、他のペルソナよりも二周りほど大きな酒呑童子が攻撃を放てば、訓練用に部屋に放たれていた魔術師〝マジックハンド〟は、細切れになりながら最後は黒い靄となって消えていった。

敵を全て倒し終えた理は、酒呑童子が消えてゆくのを見ながら呼吸を整え、腰のホルスターに召喚器を仕舞うと後ろで長椅子に座って見ていた幾月と玖美奈の元へ歩いてゆく。
「流石にこの程度のシャドウじゃ準備運動にもなりませんね」
「やっぱりかい？　しかし、タルタロス上層階への入り口はまだ閉ざされているみたいだからね。このくらいのシャドウしか手に入らないんだよ」
戻ってきた理の言葉に幾月は苦笑で答える。まるで相手にならない事は分かっていたが、それでも街中に現れるイレギュラーを含めてもこの程度のシャドウしか今はいないので、もうしばらくは我慢して貰う必要があった。
真ん中に玖美奈が座り、右側にはパソコンで作業している幾月が座っているので、理は空いていた左側に座って槍を床へ置く。
すると、玖美奈がタオルとドリンクのボトルを渡して来たので、軽く礼を言いながら受け取って水分補給をしていれば、二人の会話を聞いていた玖美奈が父に向かって話しかけた。
「お父さん、実験体のシャドウはまだ出来ないの？」
彼女が言った実験体のシャドウとは、幾月のもう一つの研究である〝デス・アバター〟の作成過程で生まれる複合体シャドウや改造シャドウの事だ。
シャドウの王であるデスは現在湊の中にいる。その事は幾月も理解しており、終末が近付くまではデスの役目はないので湊がそのまま所持していても構わないとすら思っている。
だが、もしものときのための保険を用意して置くのは当然だ。そのために自分たちもデスを持っておくべきだと考え、幾月は桐条鴻悦が進めていた研究をより安全に行えるように修正しながら、複数のシャドウを掛け合わせてデスをもう一体作ろうとしていた。
「ああ、まだ上手くいかなくてね。下手に融合させてしまってもただのデカブツにしかならないから、そういったもので良ければ鍛練用に回すが、動きが鈍かったりして大きな的にしかならないと思うよ」
シャドウ同士を融合させる事にはどうにか成功している。だが、ペ

ルソナの合体のように掛け合わせる事で、新たに強い個体が出来る状態にはまだ至っていなかった。
幾月はデスをもう一度作り出そうとしているが、そもそもデスとは自然に生まれるものだ。
人々の滅びを求める心が高まり、そういった人間から抜け出たシャドウが合わさってゆく事で、最終的にニュクスを呼ぶための宣告者が生まれるのである。
終末思想に取り憑かれた晩年の桐条鴻悦は、時を操る神器の建造から人為的にデスを作り出すことに研究をシフトさせていったが、大量のシャドウを集めて融合していった結果、実験を中断されながらもデスを生み出す事自体には成功した。
しかし、岳羽詠一朗の妨害がなかったとして、彼の望んでいた通りにニュクスが降臨していたかは分からない。
飛び散ったデスの欠片たちは実験中断でダメージを負っているにしても、ベースとなった個体自体がまだ力をそれほど持っていなかったのだ。やつらが再び姿を見せるには、他のシャドウを吸収して力を得る必要があるだろう。
そんな不完全な者たちをデスが取り込んでいたとしても、やはり力の不足でニュクスを呼ぶには至らなかったのではないかと幾月は考えている。
だからこそ、幾月は確実に強い個体を作っていき、さらに近い力を持った個体と合わせ人為的に強化することで、湊の中にいるような不完全体ではなく真正の宣告者を作り出そうとしていた。
「そうそう、そういえば本年度の適性検査の結果が出たよ。留学に出ていたエヴィデンスの数値も一年ぶりに判明したんだ」
「私は〝８４０００ｓｐ〟（レベル８４）で、理は〝１６００００ｓｐ〟（レベル１６０）くらいだけど。それより上なのかしら？」
「エヴィデンスの数値は十万だから結城君の方が高いね。ただ、向こうは同時召喚のスキルを持っているから、エネルギー保有量である適性値だけじゃ強さまでは判断できない」
幾月の言葉に玖美奈は少しつまらなそうに眉を寄せる。

一年前の結果では玖美奈は六万ほどで、理は十一万強といった具合だったのだ。それから実験と訓練を行った事で、瀕死状態にもなった理などは大きく数値を伸ばしたが、以前は自分以下だった湊が理並みの成長速度で越えていったと聞かされれば、やはりまだ高校二年生でしかない彼女にすれば面白くないのだろう。

桐条グループでは適性を上げるには精神的に強くなるか、ペルソナを使った戦闘を行っていくしかないと言われている。

それに当てはめれば日本にいなかった湊がそれほど強くなることなどないはずだが、玖美奈は相手が何か自分たちが知らない方法で強くなったのではないかと考えた。

「お父さん、あの偽物が急激に強くなった理由ってどんな物が考えられるかしら？」

「そうだな……。これはまだ仮説でしかないんだが、死を意識すると適性値が急激に伸びるかもしれないんだ。ペルソナは死を意識することで呼び出せるだろ？　だから、その源である適性も同じように死に関連している可能性がある」

「ああ、だから僕の適性も一気に上昇したんですね」

玖美奈から受け取ったボトルを床に置いて、理はどこか納得したような表情で頷く。

少年は自分でも何故急に適性が伸びたのか不思議に思っていたのだが、幾月の仮説が事実ならば肉体の改造手術で何度か死にかけたことで上昇したと考える事が出来た。

その事には玖美奈も思い至っており、彼女も理ほどは身体をいじっていないが、ワイルドの能力を得るため少しばかり実験を受けたことで、桐条グループ擁するペルソナ部隊のＳ．Ｅ．Ｅ．Ｓメンバーよりも遥かに高い数値になっているのだろうと読んだ。

素直に話を聞く子ども二人の様子を見ながら作業をしていた幾月は、彼らが自分の仮説をある程度信憑性が高いと判断していると思い、さらに言葉を続ける。

「復学したエヴィデンスは右眼を失っていたらしく。その怪我が原因で適性が跳ね上がったと考えられているんだ。どうやら重要部位の

欠損は効果絶大みたいだね」
「だからって僕はしたくありませんけどね。そんな事をしなくても力を付ける方法はいくらでもある」
適性を増やすために怪我を負うなど、戦力の低下を考えれば本末転倒でしかない。右眼を代償に力を手にしたという贋作を無様だと哂って理は槍を手に立ち上がった。
「デスを宿していながらその程度なんて、自分のクローンながら情けなくなります。素体としては他よりも優秀でしょうに」
「フフッ、確かにそうね。でも、体術に関しては向こうの方が上かもしれないわよ。どうやら色々と学んでいるみたいだから」
「僕も身体は鍛えているんだけどね。ここじゃ技を教わったりも出来ないし。格闘技能で負けていることは認めるよ」
長椅子から離れると理は槍を振り回して調子を確かめる。ヒュンヒュンと風切り音をさせながら、攻撃が来ても全てを払い落して敵を貫かんという意思が目には宿っていた。
彼の持っている武器は〝戟(ゲキ)〟と呼ばれる中国の槍で、槍の穂先の根元から真横にナイフ程度の長さをした刃が伸びており、矛と戈を組み合わせたような特徴的な形状をしている。
突くときには先端の穂先を使い、その根元から伸びた援という刃で切る事も出来るため、使い手は少ないが色々と応用が効く武器だ。
最初は片手剣を使っていた理も、途中からは敵を近付けずに中距離で戦える武器の方が強いと考え、数ある武器の中から戟を選んだという経緯がある。
一気に敵へと肉薄し切り殺すという、近距離で絶対的な優位性の速さを誇る湊とは対照的な、どちらかといえば守りに主体を置いた戦闘スタイルといえるだろう。
本やインターネットで情報を集めて独学で身に付けたそんな武術は、本業の人間から見ればまだまだ未熟に映るはず。
それは理自身も理解しているが、ここではろくに学ぶ事も出来なければ実戦で試す事も出来ない。そう話す彼の言葉の裏には、外に出てしっかりと武術を学べば自分は湊に負けないという自信が見え隠れ

していた。
「んー、そうだね。いつまでも君をこの狭い研究所に居させるのは悪いとは思っているんだが」
理の言葉を受けた幾月は顎に手を当てて考え込む。外では湊がそれなりに有名になっているせいで、同じ顔をしている理を自由に出歩かせる事は出来ないのだ。
ただし、湊が身長一八〇センチ越えの妖艶さを感じさせる影を背負った美人なのに対し、理は身長一七〇センチほどの表情には幼さが残っている少年といった具合で、理にだけ泣き黒子があることも含めれば、似ているとは思われるだろうが同一人物と認識されることはまずない。
しかし、理の存在がばれれば面倒な事になるため、しばらく考えた幾月はある一つの提案をする事にした。
「それじゃあ、結城君も海外でちょっとした武者修行をしてみるってのはどうだい？　エヴィデンスはアジア・中東・ヨーロッパの方に行っていたみたいだから、そことは別の地域になりそうだけど」
「あら、それなら私も留学名目で一緒に行ってみようかしら。理も流石に一人では不安でしょう？」
「そうだね。僕も姉さんが一緒に来てくれた方が安心かな」
幾月の提案に子どもたち二人は笑って同意する。海外での武者修行と言っても、湊を知る者がいないどこかに定住して格闘技を習うだけでもいいのだ。
独学で身に付けた武術を基礎からしっかりと鍛え直す。その目的さえ忘れなければ、ようやく望んでいた自由な生活を送れるのだから、恋人関係である二人に文句などあるはずがなかった。
「わかった。それじゃあ、玖美奈の留学の手続きと一緒に二人が暮らす場所の手配もしよう。それが終わるまでに、二人も英語の日常会話くらいはマスターしておいてくれよ？　私はこっちに残るから留学先で助ける事は出来ないからね」
「分かっています。幾月さん、僕の我儘を聞いてくれてありがとうございます」

礼を言って頭を下げる理に、幾月は気にしなくていいと笑顔で返した。

事態が動くまでは幾月のシャドウ研究くらいしかする事がない。理も玖美奈も十分な力を既に持っているのだから、それまでは二人に自由にして貰おうと幾月は考えるのだった。

第百二十五話　生徒会選挙

４月２０日（金）

朝――月光館学園・生徒玄関

その日、朝から生徒玄関は人で溢れていた。下駄箱と購買部の中間あたりに可動式のタイヤ付掲示板が置かれ、そこに本年度の生徒会役員候補の名前が貼り出されたのだ。

生徒会の役職は中等部と高等部で異なっているが、中等部では『会長一名、副会長男女一名ずつ、会計一名、書記一名、庶務一名』という風になっている。

役員候補の選出は自ら名乗りを上げる立候補こと通称〝自薦組〟と、五人以上の推薦による通称〝他薦組〟の二通りの方法がある。

毎回ほとんどは自薦組で全役職の候補が埋まるのだが、今年はどうも違うようで幾人か他薦組が混じっていた。

偶然と言っていいのかは微妙だが、モノレールのダイヤの都合により改札辺りで出会った部活メンバーも、靴を履き替えて掲示板の前までやってくると、そこに書かれた候補者の名前を見て思わず噴き出す。

「ぶふっ、あ、有里君ってば他薦で生徒会長候補にされてるじゃん」

笑いを堪え切れずに肩を震わせながら、ゆかりは掲示板左端に書かれた生徒会長候補の一人目を指差す。

そこにはデカデカと『推薦・３―Ｄ有里湊』と書かれている。隣には昨年度生徒会会計を務めていた三年生男子の名前が書かれているが、見に来ている生徒たちは湊の近くに寄って来ては、

「先輩、私ぜったいに先輩にいれますから！」

「応援してます。頑張ってください！」

などと、本人にすれば全くありがたくない応援メッセージを伝えて去っていく始末。

他の候補者はどうかと視線を動かして行っても、他の部活メンバーの名前は書かれていない。

これは一体どういう事か疑問に思った湊は、学年次席の美紀に声を

掛けた。
「真田、どうしてお前は名前が書かれていないんだ？」
「さ、さぁ？　推薦は五人以上にされないと候補になりませんから、きっと推薦されていたとしても人数が不足していたからだと思いますが」
「待ってろ。お前ら全員を推薦してきてやる……っ」
　面倒なことに自分だけ巻き込まれるのを嫌がった湊が職員室に向かおうとすると、それをさせまいとしてチドリとゆかりが湊のマフラーに手を掛ける。
　最低でも三周はしている長いマフラーを引っ張られれば、当然、ほどける前に首が絞まる。おまけにチドリとゆかりは湊の肩辺りまでしか身長がないので、斜め下に向かって引っ張られた湊は、僅かに顔を顰めて振り返るなり二人の頭に手刀を落とした。
『いたっ!?』
「莫迦か。文句を言いたいのはこっちだぞ」
　手刀を喰らった二人は攻撃してきた相手に抗議の視線を向けるが、先に危険な止め方をしたのはチドリたちの方だ。文句を言うのはおかしいだろうと湊が口にすれば、機械義手の手刀を喰らった事で冗談抜きに痛かったチドリが小さくローキックを繰り出してから喋り出した。
「人気者は辛いわね。精々馬鹿みたいな所信表明でもして落選する事を祈っておくといいわ」
「私、有里君に投票してあげるから頑張ってね」
　湊も大概だが、この二人もいい根性をしている。揃って小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、嫌がらせで湊に投票して面倒なことを押し付けてやるという魂胆が見え見えだった。
　だが、今後は学校だけでなくＥＰ社の仕事もしなければならないというのに、学校に縛り付けられる生徒会活動など御免だ。
　どうにかして回避してやろうと頭を働かせた湊は、チドリのいう通りに〝馬鹿みたいな〟所信表明を行う事で落選しようと画策する。
「……やる気は欠片もないが、俺が生徒会長になったら赤点のライン

を引き上げて六十点にしてやろう。追試、追々試で九十点以上取れなければ強制で夏期と冬期に補習を受けさせてやる。当然、そいつが所属している部活の人間も連帯責任で補習に参加だ。生徒会役員を除いてな」
「……脅すつもり？」
「言っている意味が分からないな。俺は生徒の学力低下を憂いて改善策を掲げただけだが？　勿論、当選してしまったら民意が支持したと見なして一学期の中間テストから始める予定だ」
チドリが尋ねれば湊は嘲笑を浮かべてしらを切る。ここで生徒会役員を除いてと告げたのは、以前、湊らに喧嘩を売ってきた木戸という少年が今年も庶務として立候補していたからだ。
彼の他に庶務に立候補しているのは一年生の女子なので、きっと二年生の彼が当選するはずである。学年三十三位は順位としては良い方だが、一気に転落する可能性もあるので、巻き込まれることを嫌がった湊は最初から役員を例外にしておくつもりであった。
「尚、最近は地球温暖化が騒がれているから、エコのために補習中エアコンはつけさせない。ブレーカーごと落としておくので、もしもを期待するだけ無駄だぞ。精々苦しむといい」
そして、最後にこれが嫌がらせ以外の何物でもないことも暴露する。途端に部活メンバーは嫌そうな顔と困り顔の二つに分かれた。
もっとも、湊はこれを所信表明で言うつもりらしいので、言った上で当選すればそれは生徒らに支持されたということになる。
嫌ならもう一人の候補者に投票すれば良いのだから、仮に湊が通ってしまい赤点のボーダーが引き上がっても文句をいうのは筋違いというやつだ。
このままでは純粋な人気だけで湊が当選しかねないと睨んだチドリは、自分が湊に投票しないだけでは身を守れないと判断し。巻き添えを喰らわぬよう部活で最も頭の悪い少女に声を掛けた。
「……貴女、しっかり勉強しなさいよ。もし、補習を受けさせられることになったら、期間中は毎日ジュースやアイスを奢らせるから」
「ゆ、ゆかりちゃん、ファイト！」

「私たちも教えられるところは教えますから、一緒に頑張って勉強しましょうね」
部活メンバーで最も成績が悪いのはゆかりだ。彼女だけ平均八十点を下回る成績を取っている。
他の女子らはそんなゆかりが赤点を取らぬように応援したのだが、実際のところ湊が掲げた新たな赤点ラインをゆかりはクリアしていた。
よって、応援は嬉しいのだが、越えているのに応援されると自分はそんなに馬鹿だと思われているのかとゆかりは不安になる。
「い、いや、応援はありがたいけど全教科六十点以上は取ってるからね？　そこまで馬鹿じゃないから。ってか、オイコラ有里。そういう私だけに悪意が集まるのやめなさいっての」
「……じゃあ、生徒同士の相互理解を深めるため、学力テストと同じように身体測定の身長・体重・座高も貼り出すか。それも所信表明に組み込むから選ばれれば民意は我に在りだ」
邪悪さすら感じるような不敵な笑みを作って、湊は顔の高さで左拳を握る。それはまるで世界を手中に収めんとする魔王の如き風格を纏っていたが、言っていることは普通に女子にとって最低最悪だった。
言ったからには本当に所信表明で発表するつもりに違いない。だが、この青年のカリスマを持ってすれば、いくつも私欲にまみれた校則の改正などを盛り込んでも通ってしまうのではないかと思わせた。
分かれて教室に向かう間、どうかこの学校にまともな人間が大勢いますようにと、チドリたちは心の中で祈るのだった。

放課後――月光館学園・会議室
放課後、候補者は会議室に集まる様に言われて湊は会議室に来たのだが、上座に座っている教師から見て会議室は二つに割れていた。
窓側に座っているのは、続投するために今年も立候補した現役生徒会役員メンバー及び立候補した一年生が二名。それと対立する形で廊下側に座っているのは、新たに立候補及び推薦された新規メンバー

の二年生と三年生だ。
　現役メンバーが立候補したのは会長に三年の男子が一名、副会長に三年女子が一名、書記に二年男子が一名、庶務に二年男子が一名といった具合である。
　それに対して新規メンバーは会長に他薦された三年男子が一名、副会長に立候補した三年男子が一名、会計に他薦された二年女子と立候補した一年男子が一名ずつ、書記に立候補した三年女子が一名、庶務に立候補した一年女子が一名だ。
【会長】他薦：有里湊、現役立候補：三年男子
【副会長女子】現役立候補：三年女子
【副会長男子】立候補：三年男子
【会計】他薦：二年女子、立候補：一年男子
【書記】立候補：三年女子、現役立候補：二年男子
【庶務】立候補：一年女子、現役立候補：二年男子
　この時点で副会長二人は対立候補なしで当選になる訳だが、庶務に立候補している現役メンバーの二年男子・木戸武蔵は、足を組んでやる気なく煙管を吸っている新規メンバーの会長候補にいらついた様子で絡んでいた。
「なんで、やる気がないくせにここにいるんですか？　面倒なら辞退すればいいじゃないですか」
「……辞退していいのか？　まぁ、こっちも勝手に推薦されて連れてこられて迷惑していたから、辞退できるのならありがたいが」
　以前泣かされたこともあって湊をよく思っていないようだが、絡まれている湊は気にした様子もなく携帯を取り出していじりながら返事をする。
　その不真面目な態度が余計に木戸をいらつかせるも、木戸が再び言い返す前に湊の隣に座っていた副会長候補の男子と書記候補の女子が馴れ馴れしい態度で話しかけてきた。
「えー、会長そりゃないっすよ。オレ、会長が会長になるからって副会長に立候補したのに」
　男子の方の名前は渡邊（わたなべ）　凛太郎（りんたろう）、ゆかりと同じ3―Aの生徒で短め

に揃えられた黒髪と身長一七〇台中盤と学年では長身の部類である事が特徴だ。
「そうだよ、ミッチー。私もミッチーが会長なら楽しそうだなって立候補したんだから、他の地味メンの下になんか就きたくないよぉ」
対して、女子の名前は西園寺（さいおんじ）　円（まどか）、小さめの身長と肩甲骨辺りまで伸ばされた緩いウェーブのかかった黒髪が印象的な湊と同じクラスの生徒なのだが、お嬢様のような見た目でありながら、ぶりっ子とでも言おうか小悪魔チックな雰囲気で男を手玉に取る事で有名であり〝女王蜂〟や〝悪女〟の異名を持つ。
相手は湊という名前に因んだ〝ミッチー〟という愛称で呼んできているが、実を言えば言葉を交わした事は一度もない。それで湊を愛称で呼ぶのだから恐ろしい女である。
「……誰だ、お前ら。変なあだ名で呼ぶな。というか俺は会長じゃない」
湊は馴れ馴れしい人間が嫌いだった。よって明確に拒絶の意志を見せるも、二人は気にした様子もなく笑いながら、
「うわっ、会長つめてー」
「そんなクールなミッチーも格好良いよ！」
などと言っており湊の理解の外にいる人種だった。
そんな馬鹿たちとの相手に疲れて嘆息していると、湊側の席に座っていた暗い雰囲気の会計候補の二年女子が小さく手を挙げて発言の許可を求めていた。
皆が好き勝手に話している事を考えればとても礼儀正しい事である。教師がどうぞと許可すれば、女子は膝の上に手を置いてボソボソと聞こえづらい声で話す。
「……あの、辞退していいんですか？　だったら、その、私も誰かに勝手に推薦されただけなんで帰りたいです」
暗い茶色の前髪で目がほとんど隠れてしまっている女子の名前は宇津木（うつぎ）　香奈（かな）、２―Ｄの生徒で湊と全く接点はないが彼女も湊と同じく他薦によってここにいた。
自分で立候補した人間ならばやる気に満ち溢れているのだろうが、

彼女も勝手に推薦されて呼ばれただけなので、湊と同じくやる気は欠片もないらしく鞄を持って立ち上がりかけている。
普段ならば辞退も認められるのだが、実は今回はある理由があってそれを認めることが出来ない。ただし、理由を話すとややこしくなるため、男性教師は辞退できない事だけを率直に伝える。
「いや、他薦でも辞退は出来ないんだ。有里君も宇津木さんもここに居ておいてくれ。それと渡邊君と西園寺さんは誰じゃなきゃ嫌とか言わない。選挙なんだから民主主義に則って多数決でやるからね」
「えー、でも、そこのチビスケは何か会長に思いっきりガン飛ばしてますけど？」
「うんうん、ミッチーが長身のイケメンだからって嫉妬しちゃダメだよ？」
今時の若者らしい軽いノリで話す二人はお互いに知り合いらしく、仲の良いコンビプレーで木戸のコンプレックスをモロに攻撃する。
木戸はまだ二年生になったばかりだが、周囲が二次性徴でどんどんと成長している中で彼の身長は伸び悩んでいた。女子の中でも小さい部類の風花とどっこいなので、湊との身長差は三十センチ以上あるのだ。
一度も話した事のない上級生に身長について触れられた木戸は、肩を震わせて立ち上がると教師に抗議した。
「先生、こいつらやる気なさ過ぎとおちゃらけ過ぎしかいないですよ！」
「木戸君、先輩もいるからね。こいつらとか言って指をさしちゃ駄目だよ」
湊と宇津木は他薦だが、自ら生徒会に立候補するだけあって我の強い者が揃っている。それを一人で纏めなければならない生徒会顧問の男性教師は、頭を抱えたい衝動に駆られながらも耐えて説明に移ってゆく。
「でまぁ、対立候補がいなくても来週月曜の五限目に全員に所信表明演説して貰うことになる。終わってから投票して、放課後に教師と選挙管理委員で開票して、翌日の放課後に当選者に集まって貰う事にな

る。だから、全校生徒に新生徒会をお披露目するのはさらに翌日の水曜日の朝だね」
去年の選挙で既に経験している現役メンバーは静かに聞いているが、立候補した新規メンバーの三年二人は興味なさげに「へぇー」と気の抜けた返事をする。
彼らは本当に湊が上司になるからと立候補しただけのようで、湊がやる気を見せていない事で興味が薄れているようだ。
そこへさらに、他薦で面倒を押し付けられてイラついている湊が、教師に冷たい視線を送りながら言葉を発する。
「……所信も何も、他の生徒らの生活になんて興味無いんだが。ああ、あと、去年までは辞退も出来たはずだ。多分、俺がいるから急遽変えたんだろうが、ふざけた事をした以上は俺も学校側に色々と要求するから覚悟しておけ」
「いやぁ、そのね。君を推薦するって声が女子を中心に五十人分近く来ているんだよ。それを全て突っぱねるのは学校側として出来なかったんだ」
「そうか、数の暴力で個の声を封殺する訳だな。なるほど、そちらがそういうつもりなら俺も遠慮せずに行かせて貰おう」
去年の選挙など留学していた湊は知らないはずだった。けれど、情報なんていくらでも集めることが出来る。
まさかばれるとは思っていなかった教師は諦めて事情を説明したが、学校側の事情など湊には関係のない事だ。
アクセサリーの着用許可や私服での登校、高校に入ってからのバイク通学など相手側がすんなりと認めそうな事をいくらかリストアップして叩きつけようと考えながら、湊が氷の視線で教師を射ぬいていたとき、今まで黙っていた現時点で副会長女子に当選が決まっている生徒・高千穂楓が湊に似た冷たい声色で淡々と話しかけてくる。
「有里君、別に先生が貴方を推薦した訳ではないわ。そもそも、教師には推薦権も投票権もない。選挙管理委員も教師はあくまで立会人よ。不正が行われて貴方を強制的に会長職に就かせることは出来ないのだから、ここで先生を責めるのは間違っていると思うの」

「……それを言うなら、他薦という制度が間違っているんだ。俺やそこの二年女子のように勝手に推薦されて迷惑している者もいる。おまけに去年までは出来たはずの辞退が出来なくなっているとなれば、学校が一部の生徒と協力して職務を押し付けに来ている可能性も否定できない」

正直に言えば湊の推測はある意味当たっていた。湊は見た目から不良に思われがちだが、秀でたルックスと学力の高さから中等部の広告塔に使われている。

以前は美鶴や当時の生徒会長を使っていたのだが、美鶴と違って普通に入学してきた一般の生徒なので、学校経営グループの御令嬢よりも湊の方が使い易かったのだ。

さらに湊は一年の留学を経験し帰ってきたので、海外の学校と姉妹校提携を結んだり、交換留学等の事業にも力を入れようと考えている学校側としては、実際に海外で学んできた一例として取り上げ易いというのもある。

そんなルックス・学力・経歴と揃った生徒が、生徒会長という肩書きまで手に入れれば、桐条美鶴以上の広告塔になるだろうとして経営母体の桐条グループからも彼を生徒会長にして欲しいと頼まれているのだ。

高千穂も湊の指摘した学校側の思惑はある程度存在すると睨んでいるので、その点については否定しない。だが、肩書きに憧れやすい中学生がそこまで会長職を拒否する理由がいまいち理解出来なかった。

「それは確かにそうね。でも、何をそんなに嫌がるのかしら？　貴方は文化部に所属しているだけだから、運動部と文化部を掛け持ちしている生徒と違って生徒会に来る事は可能よね？」

「学校だけで見ればそうだな。しかし、本来は自由であるべき放課後まで学校側の都合で縛り付けるのか？　生徒総会などで全員が参加するなら納得も出来るが、生徒会はある意味で部活のようなものだ。限られた生徒だけで行う活動に望まぬ人間を巻き込むなどあまりに横暴だろう」

「役員は誰かがやらなくてはいけないのよ。貴方はそれを他人に押し付けて、自分だけは恩恵と自由の両方を手に入れようというの？」
「莫迦か。既に必要人数は揃っている。やる気を見せている者がいるというのに、わざわざ他薦まで認める必要はない」
やりたい人間を押し退けてまで他薦をねじ込む必要はない。それは対立する事になる立候補者の全員が思っている事だろう。
しかし、高千穂はそれよりも湊の言葉に聞き捨てならない物が混じっていた事で、目を大きく開くと立ち上がって言葉を返してくる。
「あ、貴方、いま馬鹿って言ったわね⁉　自分をどれだけ偉い人間だと思っているのか知らないけど、人の悪口を言ってはいけないと親に言われなかったの！」
「さぁな。両親は数年前に死んでいて親戚もいないし、ここへ入学するまで学校にも通っていなかったから世間とはずれているかもしれないな」
湊が話し終わった途端、会議室の中からは音が消えてシンと静まりかえっていた。別に湊は隠しているつもりはなかったのだが、両親が既に他界している事を他の者は知らなかったらしい。
先ほどまでは明るく笑っていた西園寺も、真面目な表情で気になる点について尋ねてきた。
「ミッチー、お父さんとお母さんいないの？　でも、授業参観のときとか着物の綺麗な人と一緒にいなかった？」
「あの人は俺とチドリの今の保護者だ。あの人たちに出会わなければ、きっと俺たちはここにいなかっただろうな。だから、とても感謝している」
湊とチドリが学校に通って普通の生活を送れているのは鵜飼と桜のおかげだ。衣食住を保障されて、戦う力を付けることが出来た。
自分一人ではチドリを光のあたる温かな世界で暮らすようには出来なかっただろう。
だからこそ、湊は彼らに感謝しているし。どうやってかその恩を返そうとも思っていた。
遠くを見つめるような、どこか黄昏た雰囲気の穏やかな顔でそう話

す湊を見ていた渡邊は、相手の境遇に色々と思う事があったのか感動して涙ぐみながら口を開いてくる。
「か、かいちょー、めっちゃ苦労してきたんすね。昔、女子に囲まれて羨ましいんじゃクソ野郎死ねとか思ってすんませんしたっ」
「……素直に謝ってきた事は評価するが、わざわざ口に出す必要はなかったな」
湊も普段は他人の心や記憶を読んだりしない。それは他人に興味がないからしないだけなのだが、言わなきゃ知る事もなかったような事を伝えてまで謝ってくる辺り、この一見軽い男でしかない渡邊はそれなりに素直で真面目なやつらしい。
「ミッチー、癒して欲しかったら言ってね。他のイモ野郎たちはダメだけど、ミッチーならデートでキスまでＯＫだからねっ」
「……お前に癒して貰うくらいなら山岸に頼むさ」
「えー、山岸ちゃんってまどかと身長変わらないし可愛いけど地味くない？」
「一人称が名前のお前よりはずっとマシだよ。それと地味とかいうな」
それに対して西園寺も気を遣ってくれているようだがどこかずれていた。自分が女であることを最大限に武器にしようとしている点は異なるも、素の性格はどこか佐久間に似ているようにすら感じる。
自分の事を客観的に見ても可愛いと自覚しているようだが、一応、他の女子に対しても公平なジャッジは下すようで、風花の容姿を可愛いと認めつつ華がないとばっさり告げた。
この辺りははっきり物を言う性格なのだろうが、湊にすればそんな人間に癒しなど感じないと思っている。
チドリやゆかりなどはっきり物を言う人間は傍にいるが、風花のように他者を受け入れて包み込んでくれるような優しさを感じさせる人間は少ない。
本人は無自覚だが、よく知る者からみれば立派なマザコンである湊は、マザコンだからこそ風花のように母性を備えた人間を実は苦手としていた。

嫌いだとか受け付けないのではなく、どういう風に接していいのか分からないのだ。
早くに親を亡くしたというのに、湊は力を与えられて精神が急激に成長してしまった。
そして、力を持っていたことで周囲から頼られるようになり、心の奥底では甘えたいという気持ちがあったにもかかわらず、それを押し殺して来たことで、母親の愛を求めながらも甘え方を知らない歪な育ち方をしてしまった。
イリスなどは彼の歪さを理解して、それに沿う形で湊と小狼の両方に母親としての愛情を与えて甘えさせていたが、学生としての〝有里湊〟しか知らない人間に甘えたり頼る事など出来ない。
よって、湊は風花のことを本能で好いてはいても、踏み込んで関わろうとはせず他の部活メンバーと接する以上に心の壁を作っていた。
「あー、君たち？　所信表明の原稿用紙を配ってもいいかな？」
湊が西園寺らと話していると教師が苦笑いを浮かべながら、手に原稿用紙を持って話しかけてくる。所信表明は原稿を持ちこんでいいことになっているが、時間の関係で四百文字詰め二枚が上限だ。
生徒らに一応確認を取るような形を見せつつ、誰も答えなかったので教師が紙を配ろうとしていたとき、新規メンバーの二・三年生組の列から手をあげて口を開く者がいた。
「あ、オレ素面で話すんでいらねーっす」
「まどかも原稿とかなくても余裕だからいらなーい。ミッチーとそっちの暗い子はいる？」
「……いえ、その、別に話す事ありませんからいらないです」
「俺は赤点のライン引き上げと、身体測定の結果の貼り出しを公約に盛り込むだけだからな。あとは適当に話して時間でも潰すさ」
現役メンバーと一年生の立候補者たちは原稿用紙を受け取るが、湊の列の人間は誰も必要ないとして受け取らなかった。
その態度が不真面目に映ったのか木戸が睨んできているが、彼より先に高千穂が冷たく感じるようなよく通る声で質問してきた。
「赤点のライン引き上げ？」

「ああ、定期試験で六十点以下の場合は同じ問題の追試を受けて貰う。そこで九十点を越えなければ追々試を行い。そちらでも九十点を越えなければ、節電のためにエアコンの効いていない教室で夏期と冬期に補習を受けさせる」
「うはっ、エアコン無しとかキツイっすね」
「因みに同じ部活に所属している人間も補習に関しては連帯責任で受けさせる。ただし、生徒会役員は部活に所属していても免除だ。赤点を取れば個人で受けさせるがな」
　現状では三十点が赤点のラインとされているが、それを六十点まで引き上げれば一教科でも赤点を取る生徒は全体の約半数に上るだろう。
　しかし、ここにいる人間はそのラインを余裕でクリアしている者ばかりなのか、大して気にせずむしろ賛同する者すらいた。
「なるほど、確かに赤点のラインは私も低いと考えていたから賛成するわ。ただ、エアコンに関しては集中力の低下を招くんじゃないかしら？」
「その場合は設定温度を夏は高めに、冬は低めにしておこう」
「ええ、その辺りが妥当かしらね。それと部活の連帯責任制度については納得しかねるわ。不真面目な生徒が真面目に両立させている生徒の足を引っ張る形になるし。それが原因でどうしても不和を生むと思うの」
「あ、それまどかも思った。女子だと割と多いんだけど。せっかく楽しくやってるのに、一人だけノリが悪い子がいると冷めちゃったりするんだよね。で、そういう時にどうなるかっていうとノリ悪い子をハブっちゃうの。その子を抜けば円満解決みたいな感じでね。部活でも足の引っ張りあいでそういうの出るんじゃないかなぁ？」
　言われてみれば成程と湊も一理あると考える。面倒な人間関係を嫌う湊にすれば、学生の本分を疎かにしておきながら権利を主張するのはおかしいのではないかと考え、付いて来れない人間は切り捨てればいいとすら思っている。
　だが、知識を学ぶだけなら塾にでもいけばいい。学校は他の生徒と

の交流や部活動などを通じて様々な事を学べる場所なのだ。
連帯責任という枷を付ければ一部の生徒のせいで不利益を被る者が出てきて、そこで生じた不和が組織全体に致命的なダメージを与えることになるだろう。
本来は学業を疎かにしている者が悪いのだが、それで規則を設けた側に文句を言われても面倒だ。そう思い、湊も連帯責任については保留しておく事にした。
「……なら、連帯責任については保留しておこう。だが、部活をしている者が赤点を取った場合は大会よりも補習を優先させる。補習の日程は大会と被らないようにして、尚且つ午前中のみに設定してやれば練習の時間も取れるだろう」
「そうなると体育館を使用する部活の利用時間が重なってしまうんじゃないかしら？」
「ああ、そこらへんは大丈夫。オレ、男バスの副キャプやってるんだけど、夏休みは初等部の体育館も借りれるんだわ。体育館を縦に使うオールコートは人いたら無理だけど、半分に仕切れば二面出来てハーフコートで二組出来るし問題ないっす」
彼らはまだ副会長を除いてメンバーは決まっていない。まだ投票すらも行われていないのだから当たり前だが、それでも場を明らかに支配して話を進めているのは特定の者たちであった。
それだけで対立候補の者は勝つのは難しいのではないかと思わされ、同じく教師も湊から会長就任を条件に色々とふっかけられそうだと頭を悩ませた。
その後も湊が落ちるつもりで掲げた所信表明の具体案について議論は進み、ほとんどの者が置いてきぼりになりながら、候補者説明会は最終下校時刻になるまで続けられたのだった。

第百二十六話　ベルベットルームからの呼び出し

４月２５日（水）

放課後――月光館学園・生徒会室

生徒たちがそれぞれの放課後を過ごしている中、湊は生徒会室に置かれたテーブルの上座に座って暇そうに本を読んでいた。

そして、少しすると少々騒がしくしながら、二人の生徒が両手にお菓子やジュースを抱えて部屋に入ってくる。

「会長、食料調達してきましたよー！」

「あ、まどかミッチーの隣の席が良い！」

部屋に入ってきたのは副会長に就任した渡邊と書記に就任した西園寺だ。二人はテーブルにお菓子とジュースのペットボトルを置くと、紙コップを並べて適当に注いで他の者に配ってゆく。

他の者はそれを黙って見ているが、一人だけ肩を震わせていたかと思えば立ち上がると声を上げた。

「貴方たちは生徒会を何の集まりだと思ってるんですか！　桐条先輩のときは活動初日からこんなふざけたお菓子パーティーなんてしませんでしたよ！」

紙コップを配ったり、お菓子の袋を鋏で開けていた三年生二人を見て、庶務に就任した二年生の木戸がイラついた様子で叫ぶ。

今日、ここに湊たちがいるのは、生徒会役員が決まったので就任初日に集まる様に言われてだ。

湊を含めたメンバーは六人で、残りのメンバーは副会長女子に就任した三年生の高千穂楓、会計に就任した宇津木香奈となっている。

宇津木は他薦されただけで本人にやる気がなかったので、所信表明では他薦されただけなので就任してやりたい事はないですとはっきり言っていた。

けれど、意見ははっきりしていたのだが、彼女は長めの前髪で両目が隠れている上に話すときは聞きとりにくいボソボソとした話し方だったことにより、生徒らにはよく聞こえていなかったようで、対抗馬の一年生よりも学年が上な分だけしっかりしていそうだと思われ

選ばれてしまったという経緯がある。
無事に落選したと思っていた彼女は、当選したと知ってショックだったようだが、普段から暗いので暗さが増した以上の変化は他の者では感じることが出来なかった。
「甘いな、おチビ。今日からここは我らが会長のテリトリーとなったのだ。過去の会長さんがどうだかは関係ないのだよ」
「っていうか、トップが替わったら方針が変わるなんて社会でも普通なんだよ？　今からそんな風に好き嫌いしてたら将来苦労するって思うな」
広げたお菓子を食べつつ渡邊は木戸に言い返す。上座に座っていた湊の隣へ無理矢理やってきた西園寺も、ニコニコと笑いながら至極真っ当な意見で木戸を封殺しにかかった。
けれど、どうみてもノリだけで生きているようにしか見えない頭の悪そうな二人に言われるのは癪だったのか、木戸はテーブルに手を突いて湊に文句を言ってきた。
「有里先輩も、会長になったんだったら部下の行動をもっとコントロールするとかしてくださいよ！　この人たちやりたい放題じゃないですか！」
「……別に今日は顔合わせだけだろ。雑談で親睦を深めたいというなら、飲み物とお菓子くらいあっても普通だ」
それを湊はさらっと流して受け取った紙コップに口を付ける。
別に今日はこれといってやる事はないのだ。顧問の教師も来る予定はなく、集まったのは役員同士が改めて顔合わせをするためでしかない。
だというのに、メンバーが集まってすぐに渡邊と西園寺が食料調達に出た時点で、木戸は苛々とし始めついに爆発してしまった。
相手が他の者の態度に不満があって怒っているのは分かる。しかし、ろくに会話も交わしていない状態で喧嘩腰に言われると、仮にそれが正論であったとしても素直には聞き辛いものがあった。
先ほどの木戸の発言はその正論にもなってもいないので本来は聞くに値しない。そう感じながらも後輩だからと甘く見て湊が言葉を

返してやれば、木戸はまだ納得していないのか言葉を続けようとしてくる。
「だからってこんなっ」
「木戸君、貴方は少し桐条先輩のことを引き摺り過ぎじゃないかしら？　西園寺さんも言っていた通りトップが替われば色々と変わるものよ。ここにいるメンバーは民意によって選ばれたの。それを桐条先輩と違うからって否定するのは随分とずれているわ」
　木戸がさらに反論してこようとしたとき、今まで黙っていた高千穂がばっさりと切り捨てた。
　彼女は木戸と同じく美鶴の下についていた人間だ。成績も学年四位と優秀であり、そんな彼女から言われれば黙るしかないのか、木戸は納得できない表情をしながらも黙って椅子に座りなおした。
　すると、話が一段落したようなので、今までポテトチップスをパリパリと食べながら眺めていた渡邊が、後輩の態度から気付いたあることを指摘してくる。
「つーか、おチビってオレらの会長のこと桐条先輩より下に見てるだろ。そういうのって良くないぜ？」
「じゃあ、有里先輩の方が上だって言うんですか？　桐条先輩は全体の九割の票を取って当選しましたけど、有里先輩は八割でしたよね。数値で比較すれば優劣は簡単に付くと思いますけど」
「誰も有里君の方が上だなんて言ってないわ。というより、まだ何もしていないのに比較する方がおかしいもの。大勢に支持されて選ばれただけでは人気があることを証明しただけで、それと優秀かどうかは別の話でしょう」
　やたらと美鶴贔屓な後輩に他の者たちは呆れている。西園寺などは木戸が美鶴に抱いている淡い感情を察知してニンマリしているが、ずっと会話に参加せず俯いてテーブルに視線を落としていた宇津木に湊は声を掛けた。
「……何か取るか？」
「え？　あ、その、じゃあクッキーを……」
　声をかけられた宇津木は最初ぼんやりとしていたが、湊に焦点を合

わせるといつも通りのボソボソと聞きとり辛い声で返して来た。
　人と会話をするのが苦手なのか、知らない人間ばかりで緊張しているのかは分からない。この程度で他人の心を覗こうとは思わないので、相手の表面上から読み取ったもので立てた推測になるが、置かれたクッキーを相手に取ってやりながら湊は告げる。
「生徒会が嫌なら別に無理に参加する必要はないぞ。全校集会とかでは生徒会の席にいて貰う必要があるけど、それ以外では仕事もそんなにないし五人でも十分回せるはずだ」
「いえ、別に、面倒なだけなので。選ばれてしまったなら我慢します」
　湊は就任前に学校側へ色々と条件を突きつけている。成績上位である事が前提条件だが、常にテストで学年三位以上なら、アクセサリーの着用や私服での登校を許可されたのである。
　その他にもいくつか条件を付けて〝業務契約〟のような形で会長へ就任した湊と違い。宇津木は何のメリットもなく貧乏くじを引かされ就任させられた立場だ。
　よって、弱者に甘い湊は彼女を生徒会に縛る気はなかったのだが、どうやら真面目な性格をしているようで嫌そうにしながらも参加を告げてきた。
　物事の好き嫌いははっきりしていそうなのに、規則に従順なのでは随分と生きづらそうだ。相手を観察しながら湊がそう思っていれば、宇津木の話を聞いていた木戸が、どこか呆れた表情で彼女に話しかけた。
「あのさ。もっと普通に話せないのか？　所信表明のときもぼそぼそ言ってて聞こえなかったし。話す気があるなら口開けて相手に伝える努力をしろよ」
「……別にお前と話す気はない」
「なっ!?　話す気がないって仕事の打ち合わせや連絡があるだろ！」
　やや俯いたまま前髪で隠れた目だけを動かし木戸を見やって、宇津木はボソッと拒絶の意志を示した。
　先ほど湊が話しかけたときは、言葉を紡ぐ事に手間取りながらもしっかりと返して来たというのに、相手が同学年であったり格下と認

識した場合には、結構はっきり言うものだなと三年生らは素直に驚く。
木戸もその反応は予想外だったのかムッとして言い返すが、宇津木はどこか面倒そうに相手を睨んでいるので、このままでは二人が口喧嘩を始めそうだと思った湊は静かに声を発した。
「――――五月蝿い」
たった一言で場を支配するように、湊のよく通る低い声はそれぞれの耳に真っ直ぐ届いた。
感情的になりかけ睨み合っていた二年生二人も、少し驚いた様子で声の主を見てきたことで、丁度いいと湊はさらに話を続ける。
「宇津木、あまり相手を睨むな。木戸も少しは落ち付け。とりあえず、今後の予定について話そう。飲み物とお菓子に手を付けながら聞け」
生徒会としての活動もせず雑談で進めるのが嫌なら、木戸の希望通りにそれらしい話をしてやればいいのだ。
湊が場を仕切れば、渋々従って木戸はジュースを飲みながら話を聞く姿勢を見せてくる。
宇津木は好き嫌いがはっきりしているが序列や規則には従順、木戸は真面目過ぎて柔軟な対応が出来ない面倒くさい性格をしている、そう二人の内面を把握しながら、席を立ってホワイトボードに『今後の予定』と書いて湊は話し出した。
「もうすぐゴールデンウィークに入るが、本格的に活動するのはそれ以降だ。俺が所信表明で言っていた赤点のライン引き上げ等は先生方にも許可を頂いた。もっとも、学力向上を掲げても生徒の俺たちがする事はないので、生徒会は各月毎にテーマを決めて何かに取り組むことにしようと思っている」
教師は生徒が思っているよりもかなり多忙だが、それでも学力の向上自体は学校として取り組むべきだと考えているようで、定期試験で〝六十点未満〟ならば追試と追々試を行うことに賛成して貰う事が出来た。
追試と追々試の問題は定期試験のものをそのまま使うので、教師側は放課後に一時限分の時間を監督官として付き合う必要はあるが、新

たにテスト問題を作成する労力を割かずに済む。
夏期と冬期の補講は以前から行っていたので、学校側は新しく何かをする必要がほとんどないこともあり、湊がここにいる三年メンバーと練り直したアイデアはすんなりと承認された。
ただし、相互理解のためにと言っていた身体測定のデータ掲示は却下されてしまった。理由は単純にそんなものを貼り出すほどスペースがないという事だったが、別に職員室前でなくとも良かった湊は、民意は得ていると言って密かにデータだけは貰っていたりする。
アナライズで部活メンバーの身長・体重・スリーサイズ等は知っているが、全生徒のデータを持っていれば使えることもあるかもしれないので、データを入手した時点で今回の選挙はある意味湊の一人勝ちだった。
「それって冬とかにある、〝風邪予防強化月間として手洗いうがいをしましょう〟って感じのっすか？」
「ああ、そんな考え方でいい。遅刻ゼロ月間だとか校内美化月間だとか、そういうテーマに沿った活動を生徒にさせつつ掲示物もやっておけば活動してるっぽく見えるだろ」
学力向上の取り組みは学校側に任せるとして、生徒会は生徒会で何かしなければならない。様々な学校行事の運営は実行委員がすることになっているが、生徒会も裏方で動く必要があるため年中暇という訳ではない。
けれど、それ以外に何もしないのでは便利屋と変わらないので、湊は外部から何かしているように見える姿勢だけは見せておこうと考えていた。
渡邊が挙げた例を肯定しつつ、湊が来月以降のテーマや実際の掲示物の案などを考える際の注意をホワイトボードに書き足すと、チョコプレッツェルをポリポリと食べながら西園寺が声を掛けてくる。
「じゃあ、五月は何にするの？　いきなりイジメ撲滅とか大きいテーマ掲げちゃう？」
「それにしたいならそれでいいんじゃないか。イジメをしてる生徒を退学にしたりはしないが、まぁ、見つけたら相応の罰を受けて貰う事

にしよう」
ノリは軽いがテーマ決めなど適当だ。五月のテーマはイジメ撲滅強化月間に決定し、昼休みや放課後に校内を見回るという意見を一つ書いて、湊は他の者にも活動内容のアイデアを出す様に言った。
すると、渡邊が嬉々として席から立つなり、マーカーを持って自分の考えたアイデアをホワイトボードに書き始める。ノリは軽いがどうやら頭の回転は悪くないようだ。
「うっは、何かマジで生徒会っぽくなってきましたね。ほれ、おチビよ。オレらの会長はクールに実績を作るタイプなんだぜ」
「実績ってまだ何もしてないじゃないですか。あと、ちゃんと名前で呼んでください。っていうか、この学校にイジメとかあるんですか？
一年間過ごして来ましたけど聞いた事無いですよ」
渡邊は生徒会と保健室にイジメの相談窓口を設置すると書いて、そのままマーカーを座っていた木戸に手渡す。
受け取った少年は呼び名に不満げだが、作業自体にはやはり真面目に取り組む様で、しっかりと自分が考えた案を記入し始めた。
けれど、木戸がこの学校でイジメなど聞いたことがないと言ったとき、湊の視界の端で宇津木が僅かに身体を固くしていた。
他の者は木戸が書く内容に視線を送っていて気付かなかったようだが、メンバーの異変に気付いてしまったのなら何もしない訳にはいかない。
とはいえ、彼女がイジメにどのような立ち位置で関わっているのか不明であるため、被害者・加害者・目撃者のどれかを知るまでは気付いていないフリを続ける事にした。
「……ないならそれでいい。あれば解決していくと言うだけの話だ」
心や記憶を読んだりはしない。それは相手が他人に知られたくない事まで暴く事になる。情報などいくらでも人から集められるのだから、湊はプリンス・ミナトの会員を使って早速明日からでも情報収集を行おうと決めた。
そして、全員の案が出されると、実行可能なものや細かな仕様を詰めてゆき、最終下校時刻になるまで話し合いは続けられた。

――ベルベットルーム

学校から帰って一度自分の部屋に寄った湊は、羽入が待っていない事を確認すると、鍵を使って扉を呼び出し、ベルベットルームを訪れた。

モノクロタイルの境道を通り抜け、もう一枚の扉を潜ると上昇するエレベーターの中へ抜け出る。

以前来たときには天井の一部にブルーシートが張られ、雨漏りの応急処置のようになっていたのだが、どうやら修理を無事に終えたようで部屋は以前の姿を取り戻していた。

「ようこそ、いらっしゃいました。本日はどのようなご用件でしょう？」

部屋の中を進み椅子に座るなり部屋の主が話しかけてくる。湊としては別に用などないのだが、Eデヴァイスのメールボックスにマーガレットからの呼び出しがあったので今日は来たのだ。

連日の作業で疲れているらしい目の下にクマが出来たテオドアが寄ってくると、丁寧な仕草で湊の前に紅茶を置いて後ろに下がったので、それを話し始める合図と捉え湊は口を開く。

「……マーガレットが会いたいと言ってきたんだ。まぁ、ここでは若い男との出会いもないだろうから、息抜きも必要だろうと思って誘いに乗ってみた」

「素敵な勘違いをしているようだけど、気を遣って頂いた事は感謝しておくわ」

湊の言葉を聞いた妹が意味ありげに口角を上げているのを視界の端に捉えながら、何を馬鹿なことを言っているのだと呆れたようにマーガレットは溜め息を溢す。

とはいえ、自分から呼び出して客人に足を運ばせたのは事実なので、マーガレットは感謝の気持ちを伝えつつ仕事時の口調で改めて話しかけてきた。

「今回御呼びしたのは、お客様のコミュニティについてお話させて頂こうと思ったからです。現実時間で昨年の九月下旬、御自身がどのよ

うな事をしたかは覚えていらっしゃいますよね？」
そういった彼女は持っていたペルソナ全書のあるページを開いて見せてきた。他のページは白を基調としているのに、いま開かれているページだけ漆黒に染まっている。
エリザベスやテオドアの全書がそんな色をしているのを見た事がなかったので、開かれているページが何を示しているかは分からないが、彼女がいった湊が九月下旬にした事が関係しているのだろう。
直前にコミュニティの話をしたいと言っていたので、普通に考えればコミュニティに関わる何かをしたんだと思われる。
だが、絆を捨てたくらいで他に何かした覚えないため、湊は身に覚えがないとはっきり答えた。
「……分からない。血に目覚めて絆を捨てたりはしたが、コミュニティに細工をしたりはしてないはずだ」
「お馬鹿、その絆を捨てたのが原因でコミュニティがこんな風になったんでしょうが」
何を天然でずれた発言をしているのか。そんな風にマーガレットは見た目より子どもな相手を諌めながら、改めて湊に漆黒に染まったページを見せて話を続ける。
「これまでもコミュニティを築いた相手に愛想を尽かされ絆を失う者は居りました。ですが、お客様のように自ら絆を捨てた方は初めてでして、一方的に貴方が繋がりを断ったためにこのような状態になっております」
「……それで？」
「現在、お客様のコミュニティは凍結状態になっており、その恩恵を受けられません。ですので、恩恵を受けたいのであれば、この凍結状態を解除しなければならない事をお伝えするため本日は御呼びした次第でございます」
説明を受けて成程と納得する。以前は何となく外部から力を集めるような感覚も持っていたが、今は自分一人で力を発現させているだけだった。
それがコミュニティの恩恵を受けていないからだと言われれば、確

かに絆とやらの力も侮れないなと考える。
しかし、今の湊は普通に戦闘していればエネルギー切れの心配はない。ベルベットルームの住人と本気で戦うのなら、流石にどれだけ力があっても困らないだろうが、最凶のシャドウである死神〝刈り取る者〟ですら湊の敵ではないのだ。
ならば、面倒でしかないコミュニティを再開する必要はないのではと思い、それを率直に相手に伝えてみた。
「……別にいらなくないか？　なくても適性は足りてるだろ」
「フフッ、コミュニティの力はそれだけではありませんな。絆を束ね生まれる力は、我々の想像を遥かに超える可能性を秘めておりますゆえ。〝孤独〟な力を手にしているお客人であれば、その対極の力についても想像していただけるかと」
湊は自分を縛っていた絆を捨てたことでネガティブマインドのペルソナを手に入れた。自在に使いこなせるほど名切りの業は軽くないが、それでも力を分割する事で扱えるようにはなっている。
名切りたちの悲願。〝完全なるモノ〟という個としての極致を目指して生まれたのが湊だ。誰に頼る必要もない。ただ万能であれと数千年積み上げてきた歴史によって造られた現代人類から進化した存在。
その存在一つで桐条の掲げる〝調和する二つは、完全なる一つに優る〟という理念を真っ向から否定し、どんなモノよりも優っているからこそ〝完全〟と言えるのだと、圧倒的な強さでエルゴ研を壊滅させ桐条武治にも知らしめた。
並ぶモノのない力を持って生まれた湊は、幼い頃から我が身を顧みず他者を優先してしまう特異な考えを持っていた。誰かに染められた訳ではなく、初めから〝そういうもの〟として生まれたからこそ、湊が一族の悲願であった〝完全なるモノ〟なのだと母・菖蒲も理解したほどだ。
自分を人の環から外して考えている湊は、どれだけ人に囲まれていようと心は孤独である。近しい場所にいて、彼を家族や子どものように思っている者たちですら湊を〝特別〟だと認識してしまっている

のだから、本当の意味で理解することなど出来るはずがない。
そしてそれは、現実と夢の狭間に存在するこのベルベットルームにいる、〝人にあらざる者たち〟にも同じことが言えた。
彼らも生い立ちや内包する力が人間と異なっているため、どんな者よりも湊に近しい存在ではある。
しかし、湊は人として生を受けて人の中で暮らして来た。最初から人を超越した存在として生きてきた者と、人の中から生まれた超越者ではその性質が違っている。
故に、真の理解者を持たない青年は、今まで誰とも真の絆を得ることが出来ておらず。これからもきっと得る事はなかった。
「……真の絆に必要なのは相互理解だ。俺は他者を完全に理解出来るが、他者は俺を理解する事は出来ない。一生極まる事のないコミュニティを見たいなら勝手にすれば良いさ」
湊は読心能力で完全な記憶の読み取りが出来る。相手が当時抱いた感情も、五感で感じ取った事も、全てを完璧に読み取って追体験出来るのだ。
それは本来本人しか分からないはずの心の痛みなども理解することになるため、湊が言っていた通り、彼は他人を完全に理解することが可能だった。
だが、そんな事が出来る者など他にはいない。生前から湊と同じ読心能力を持っていた赫夜比売も、相手の思考や感情を読み取る事は出来るが、記憶は断片的に読み取るのがやっとで記憶の中に眠っている対象の経験した感覚など読み取れはしない。
だからこそ、完全に他者を理解可能な異常者を他の者では理解できないのだった。
そうして湊はテーブルに置かれたペルソナ全書に手を伸ばすと、漆黒に染まったページに指先を当てて全書に力を送りこんだ。
途端、ページ全体に白いヒビが広がり、そこから光が漏れ出してくる。最初はページの表面を照らす程度だった光は、徐々に全書が置かれたテーブル周辺を照らすほどまで強まり、ひと際強く輝いたかと思えばページを覆っていた黒が砕け散って消えていた。

色が元に戻った事を確認したマーガレットは、「失礼します」と声をかけて全書を手に取ると内容に目を通している。
現実の時間にして約半年ぶりに見たコミュニティは、先ほど本人が言っていた通り、一つのコミュニティも極まることなくいくつかが消滅していた。
少年だった彼の平穏の望みながら死んでいった研究者も、本当の親子のように過ごしていた仕事屋の女も、そのコミュニティはランク９で止まったまま対象者死亡により消滅している。
対象に愛想を尽かされコミュが消滅するときには相手の名前だけが残るが、対象者が死んだときにはコミュランクなどは書かれたまま文字の色が薄いグレーになる。飛騨の魔術師コミュ、イリスの運命コミュ、ついでに壊し屋・仙道弥勒の剛毅コミュも全て文字がグレーになっているため、三名とも死んでいる事は確実だった。
しかし、戦いを通じてお互いを理解する特殊なコミュだった仙道はともかくとして、あれだけ心を許していた者であっても最期まで絆が満たされない事が事実であると分かり、マーガレットはどこか悲しげで憐れむ様な視線を青年に向けた。
「……寂しくはないの？　誰にも〝本当の貴方〟を理解されないだなんて、存在を肯定されないことと同義よ？」
青年は理解されようとは思っていないとよく言っているが、彼の場合は他者に〝分かって貰えない〟のではなく、人間では百鬼八雲という存在を〝把握出来ない〟のである。
自分が何者であるかを探しているマーガレットも、主や妹弟という理解者はいるので、それすらいない孤独な青年に同情を覚えた。
「理解出来なくても、理解しようとしてくれる者たちがいた事を俺は知っている。それに愛情は確かに感じていた。だから、それ以上を望むのは贅沢だ。俺は十分に恵まれてる」
だが、マーガレットの言葉に湊は静かな声で答えた。
理解出来ることと想うことは別だと、そういって青年は歳相応のどこか照れたような顔で笑ったのだ。
彼の経験してきた辛い過去を思えば、たったそれだけで相殺できる

はずはない。
けれど、そんな小さな事でも彼にとっては何より尊いものなのだろう。マーガレットは彼の強さの本質を僅かに垣間見たような気がした。
「ところで、訊いても宜しいでしょうか。八雲様に降ろされた異界の神はその後どうなったのでしょう？」
マーガレットの話が終わると、今までやり取りを見ていたエリザベスが話しかけてきた。エリザベスとマーガレットには桔梗組に集まった際、血に目覚めてからの話を聞いてもらっていたが、確かに神降ろしが中断して結局どうなったかは詳しく話していなかった。
途中まで話していたこともあって、訊かれたのならば答えようと湊が口を開きかけたとき、突然水色の欠片が渦を巻いて茨木童子が現れる。
《阿眞根の事であれば、八雲との間に繋がりを残したまま異界に存在している。己の内という心の世界から呼び出すのがペルソナだ。阿眞根もそれと同じように異界から呼び出すことで現れる事が出来る》
「あら、随分と呼び出されておられない御様子だったので、てっきり八雲様が編み出された〝ロック機構〟によって封印されているものだと思っておりました」
涼しい顔で嫌味をぶつけるエリザベス。そして、そんな言葉を気にした様子もなく湊の隣に立った茨木童子は、久しぶりに現れたのだが僅かに見た目に変化が起こっていた。
今の湊と同じように上腕の中頃までしかなかったはずの右腕に、陶器のような真っ白な義手らしき物が生えている。彼女の肌が白いとは言っても純白ではないため、純白な上に球体間接であることでその右腕が生身でない事は一目で分かる。
これは湊が義手を手に入れてから起こった謎の変化であり、湊の機械義手と違って彼女の腕は本気で物を殴っても壊れたりはしない。
召喚者の変化に応じてペルソナも同じような変化を起こしたと見られているが、とりあえず、生身と同じように自在に使える右腕が手に入ったことで本人は喜んでいた。

《八雲はそのような矮小な男ではない。何より、我らとて八雲が八雲のままであるならその方が良いのでな。一族の悲願によって業に憑かれもしたが、神をも取り込む器であったことに皆驚き喜んでいる》
「八雲様は彼女たちを許されたのですか？」
「……消されかけたが終わってみれば別に何ともなかったしな。茨木童子たちも人から神に昇華できるのなら最初からそうしていたらしいし。イレギュラーとは言え俺がそれを為せる存在だと分かって前以上に過保護でべったり状態だ」
　エリザベスの質問に答える湊が言った通り、茨木童子たちも湊の人格を消したくて消した訳ではない。最優先事項として名切りの悲願という自分たちも母と同じ神の座に辿り着くことがあり、それを実現するために神の器を作って異界の神と融合させ、名切りから神の座に至る者を作り出そうとした。
　人格を消し去るのは肉体の中で本来の持ち主と異界の神の意識がぶつかり合い、力が暴走して肉体が壊れるのを防ぐためであり、人格を消去される者にも感情からエネルギーを作り出す炉としての役割を与えていた。
　だが、子孫の肉体を無事に残しつつ神に至る手段がそれしかないと思っていただけで、人格を消去せずとも神に至れる手段があるのなら、茨木童子たちも全力でそれを行うつもりはあった。
　名切りの肉体、感情によって無限のエネルギーを生み出す、その二点を押さえながら湊は自我を残して神を取り込み、自らが意志決定の主導権を持ったまま神になることに成功する。
　それを知った茨木童子たちは、最愛の愛子（まなご）が自分たちの想像を完全に超えていた事に喜び、以降は業に憑かれる事無く以前よりもさらに親馬鹿になって湊の事を見守っていた。
「殺されかけたはずなのですが、八雲様が宜しいのであればこれ以上は触れずにおきましょう」
「まぁ、エリザベスがチドリを罠に嵌めて危険にさらしたことも不問にしてやっているしな」
　普段の湊ならば、チドリやアイギスを囮として使うような作戦を考

える者がいれば、即座にその作戦に異を唱えて最悪相手を行動不能に追い込み、二度と愚かな考えを持たぬようにしたりする。
あの日のエリザベスはさらに悪質で、一歩間違えれば実際にチドリが死ぬような計画を実行に移していた。
時間がなかったので湊はそのままベルベットルームを通ってタルタロスに向かったが、もう少し余裕があれば顔の形が変わるほど顔面に拳を叩き込んでいたところである。
もっとも、あの日からかなり時間が経っている事や、英恵との暮らしが心地よくて覚醒を遅らせていたのは湊自身だったので、いつまでも目覚めない自分のために強硬策に出た彼女だけを責める事は出来なかった。
そんな風に、湊がエリザベスの独断行動を責めずにいれば、彼女は「ありがとうございます」と言って深々と頭を下げて礼をしてから再び話し始める。
「私の思い違いでなければ、八雲様の神としての名が阿眞根様だと仰られていたように記憶しているのですが、呼び出される上位存在の名も同じ名なのですか？」
《そも、異なる世界ということはこの世とは違った理の中に存在するという事だ。であれば、この世で称する名など存在せぬのが実情ではある》
湊の身に降ろされた神は異界の存在である。この世界の存在よりも高次に位置するため神と定義しているが、そもそも神と呼んでいい存在なのかも不明であり、それ故この世での名前など持ってすらいないのだ。
神の血を引く茨木童子などは、相手が自分の母と同じ上位存在であることは把握出来ているが、それ以上の情報は持っておらず、相手本来の容姿はおろか性別があるかどうかも分かっていない。
もし仮に相手の情報を少しでも持っている者がいるとすれば、それは相手を自分の身に降ろし、さらに一度は閉じた扉を再び開いて干渉した湊だけなのだが、残念なことに湊は神について何も語ってくれはしない。

《けれど、呼び名がないのでは如何にも不便であろう？　故に、便宜上は八雲の神としての名で其方も呼び習わしているのだ》
「人である内から八雲様にも神としての名を与えていたのですか？」
《別におかしくもあるまい。私とて幼名でもあるキサラという名の他に、生まれたときから天津日像比売神（あまつひがたひめのかみ）という神としての名も持っていた》
　神を母親に持つ茨木童子と赫夜比売は半神人のハーフだ。よって、幼名というより彼女たちが普段呼ばれていた人として名の他に、茨木童子ことキサラは天津日像比売神（あまつひがたひめのかみ）、赫夜比売ことユーリは綿津日矛比売神（わたつひぼこひめのかみ）という神としての名もしっかりと持っている。
　名切りと九頭龍の生まれで他に神としての名を持っているのは湊だけだが、最初から神になる存在として生まれた以上は、人としての名と一緒に神として名も用意しておくのは当然だ。
　茨木童子がその事を伝えるとエリザベスも納得したのか感心したように頷いている。
《再び阿眞根が降臨するには、八雲の心が強い感情で占められなければならん。だが、八雲が阿眞根となれば街は火の海に沈む事になる。以前のように蛇骨で守るかどうか分からぬ以上、お前たちが実際に目にしたいのならベルベットルーム内の扉から何もない世界へ行くしかないだろうな》
　呼び出された阿眞根の行動は直前の湊の意志に左右される。以前は皆を守り、敵を殺すために蛇骨で街を守っていたが、次も同じように街や誰かを守るとは限らない。
　それでも気になるのなら、被害が出ない場所へ湊を連れていって、外部から干渉する形で感情を刺激し無理矢理に呼び出させるしかなかった。
「フフッ、お客人は〝固有存在〟に至った御方だ。それが神の姿となり猛威を振るえば一週間で世界は滅ぶ。好奇心で触れるには些か度が過ぎておりますな。お前たちもお客人と戦闘訓練を行うときには強い感情を呼び起こさぬよう気をつけなさい」
　茨木童子の言葉を聞いたイゴールは愉しそうに笑っている。アイ

ギスが計測した阿眞根の適性値は不完全体で一千万を超えていたのだから、阿眞根が暴れればイゴールの言う通り一週間で世界は滅ぶのかもしれない。

湊は既に対人・対シャドウで十分な力を持っている。けれど、力の管理者にはまだまだ勝てないので夢を通じた戦闘訓練を最近になって再開しており、その際に精神に干渉するような状態異常スキルを使って眠れる獅子を起こしてくれるなとイゴールは釘を刺した。

いくら現実世界に影響のない空間で戦おうと、その空間にいる者や扉で繋がった場所にいる者の安全までは保障できない。力の管理者たちも親しい客人に殺されたくはないので部屋の主の言葉に頷くと、本日の用事は済んだことで帰ると告げた湊を見送り、再び彼が訪れたときのためにそれぞれ備えておくのだった。

第百二十七話　聖剣の鞘

影時間――深層モナド・５Ｆ

どこか異様な空気の流れる、不気味な雰囲気の廊下を青髪の青年と赤髪の少女が歩いていた。

以前来たときはこの階層まで降りて来なかったが、今日は湊が余計な敵を殺しつつチドリのレベルアップに付き合っている事で、敵から逃げ回ることなく探索を続けることが出来ている。

「……敵だ」

長い廊下を進んでいると前方から三体の敵がやってきた。宙に浮いた台座の上で座禅を組んだ女性型のシャドウ、女教皇〝狂乱のマリア〟。

敵の姿を見た瞬間にチドリは苦虫を噛み潰したような嫌そうな表情を浮かべる。その理由は相手の持つ耐性にあった。

「ほら、敵だぞ。頑張れ」

「……相手に炎も闇も効かないって分かってるくせに、よくもそんな事が言えたわね」

敵が近付いて来ているというのに、湊は上着のポケットに手を入れたまま感情の籠もっていない声援を送る。

けれど、狂乱のマリアは火炎と闇の反射耐性持ちだ。物理スキルを持たない魔法特化型のメーディアでは、火炎と闇を封じられれば毒を与えるスキルくらいしか使えるものがない。

幸いな事にチドリの持っているハンドアックスは斬撃なので、物理耐性は貫通反射しか持っていない相手に有効ではある。

だが、氷結魔法というチドリが耐性を持っていないスキルを使ってくる相手が複数いて、攻撃を喰らわずに接近するなど彼女には不可能だ。

アナライズが使える湊は当然それらを分かっているはずなので、先ほどの応援はわざと言ってきたに違いない。

そう判断したチドリはイラついた様子で湊にローキックをかまし、背後に回るとハンドアックスを構えた状態で睨みつけてきた。どう

やら馬鹿にした罰として戦えという事らしい。
少女のそんな無言の抗議を受けた湊は、カードを具現化すると右手で握り砕いた。
「……ペルソナ」
赤と黒の召喚光が通路を照らし、その中から鋭い鉤爪を持った双頭の黒いグリフォンが現れる。
呼び出されたペルソナの名は、刑死者〝マモン〟。蛇神の力を分割して生み出されたネガティブマインドの存在である。
現れたマモンが羽ばたき天井付近で滞空すると、召喚者の青年は敵を見つめながらポツリと呟いた。
「あ、呼ぶペルソナ間違った」
その言葉にチドリは驚き目を大きく開く。何をどう間違えたのか分からず、敵の射程圏内に入るまで時間がまだあったことでメーディアを呼び出し、マモンにアナライズをかけてみた。
「メーディア、おねがい」
《ルルゥ!》
水色の欠片の中から現れたメーディアは、滞空しているマモンを見つめてチドリに読み取った情報を伝えてくる。
マモンは打撃耐性と火炎、闇無効というステータスをしており。氷結の耐性は持っていないが、別に弱点という訳でもないので問題はなさそうだ。
では、何が問題なのかを調べ続け、召喚者が閲覧許可しているスキルの情報を見たときにチドリは思わずゲンナリとした表情を浮かべた。
状態異常付与スキルに特化した性能なのは問題ない。ただ、攻撃が貫通・火炎・闇に偏っており、斬撃スキルも持ってはいるが、上級スキルまで習得している他の攻撃スキルと比べ威力の劣る剛殺斬やポイズンカットしかないのだ。
ダメージの通る斬撃スキルを持っているので戦えない事はない。けれど、もっと有効なペルソナを持っている中で、どうして明らかに不向きなペルソナを呼び出したのか。

青年が耐性の分かっている敵に対して判断ミスをするなど珍しいが、とりあえず敵が迫っている状況は変わっていないので、チドリは呆れた表情で忠言しておいた。
「はぁ……調子が悪いなら先に言いなさいよ」
「特に考えていなくて鈴鹿御前が選んでくれたんだが謀られたな。まぁ、せっかく呼び出したから足にでも使うさ」
チドリの言葉にそう答えた湊は、マフラーから中華剣〝星噛〟を取り出して敵に向かって駆け出す。
湊の接近に気付いた敵は止まってスキルを放つ体勢に移るが、走りながら僅かに身体を沈めた湊は突如加速し、敵が攻撃を放つよりも速く到達したかと思えば、すれ違い様に一太刀ずつ浴びせて相手を黒い靄へと変えていた。
敵まで到達する速さだけでなく、一撃で屠るだけの鋭い攻撃を繰り出せる青年の実力にチドリは軽い羨望を覚える。
彼の体術は力で敵を砕く雄々しい剛の型もあるが、速さや鋭さに特化させた閃の型というものも存在する。チドリは鵜飼や渡瀬から剣術や中国拳法を習っているが、それらを扱う上での理想形を湊の閃の型だとして目指していた。
敵の攻撃を掻い潜り、流れるように相手の弱所を切りつける。如何に相手が硬くとも、呼吸を合わせ最適な角度で切りつければ殆ど抵抗を感じることなく攻撃を通せるのだ。
それには敵の呼吸を読み取り、弱所を見抜いた上で、素早く的確な攻撃をする必要がある。今の自分ではまだ技量も速さも足りていない自覚のあるチドリは、相手の強さへの憧れを抑えて戻ってくる湊に労いの言葉をかけた。
「お疲れ様……ってほどでもないわね」
ペルソナを呼び出したが無駄に終わったので消費はほとんどない。倒すときには魔眼を使っていたようだが、それ以外純粋な体術のみで倒したならば疲れは皆無だろう。
戻ってきた湊を迎えながら思ったままをチドリが伝えれば、湊は苦笑しながら滞空していたマモンを着地させ、チドリをお姫様抱っこし

ながらその背に跨った。
「グリフォンって何の合成獣だっけ？」
「鷲とライオンだな」
「……ライオンにしては大きいわね。馬くらいあるんだけど」
二人が乗るとマモンはゆっくりと歩き出す。ベリアルと違って敵が出てすぐ攻撃に移ることが出来るのか不安はあるが、手綱がないため横座りで乗っているチドリは湊の腰に片腕を回し、落ちないようにしながら通路の先を見つめて敵の居場所を探りつつ考える。
鷲とライオンの合成獣ならば大きさはライオン基準になるはず。けれど、二人が乗っているマモンは馬くらいの大きさがあった。
以前見た白虎や大口真神は牛くらいあるので、それを思えばマモンの方が少し小さく感じるが、やはりライオンのサイズにしては大き過ぎるだろうとチドリは疑問を感じた。
不思議そうな顔でチドリが漏らした言葉を聞いた湊は、マモンの背を撫でながら率直な意見を一つ伝える。
「双頭のグリフォンに見えるが元は悪魔だしな。上半身が鷲で下半身が馬のヒッポグリフという架空の生物もいるが、一応、ライオンの身体のようなので能力の強さが影響して大きいんだと思う」
「ふーん……敵、来てるわよ」
話していると正面からキャタピラで走る音をさせながら、近代兵器の戦車型シャドウである戦車〝洗礼の砲座〟が向かってきていた。
相手は既に湊たちに狙いを付けているので、防御や迎撃をしなければならないが、青年もまさか自分たちが乗っているマモンに戦闘をさせるつもりはないだろう。
少女がそんな風に考えながら対応を待っていると、湊は〝悪魔〟のカードを握り砕いてペルソナを呼び出した。
「こい、ベルゼブブ！」
二人の視線の先で赤と黒の召喚光が発生し、その中から髑髏の杖を持った巨大な蝿の王が現れる。
空気が重くなったと錯覚するかのような威圧感を放ち、召喚されただけでその力が途轍もなく強大である事を嫌でも理解させられる。

だが、敵にそんな物は関係ない様で、召喚光が消えきる前に砲弾を放ってきた。
「あっ!?」
それを見たチドリは思わず声を上げてしまう。
ベルゼブブが顕現し終えるのと攻撃が到達するのはほぼ同時だろう。だが、ペルソナは召喚時が最も弱いのだ。
顕現が中途半端な状態では力を十全に発揮出来ず、さらにいえば、自我持ちや高同調状態で呼び出さなければ普通のペルソナでは自分で咄嗟に防御や回避をする事も出来ない。
目の前に現れたベルゼブブが回避してしまえば、攻撃は後ろにいる自分たちに直撃するので防御して貰わなければ困るのだが、青年がフィードバックダメージを負う事になると思えばチドリの心は複雑だった。
そして、ベルゼブブが完全に顕現した直後、敵の放った砲弾がその身体に直撃した
「……は?」
ように思われたのだが、目の前の光景にチドリはポカンと呆ける。
以前自分が必死に回避や迎撃した敵の攻撃は、どういう訳かベルゼブブに当たる直前に半透明な光の壁に遮られてシャドウの方へと跳ね返ったのだ。
壁に当たれば砲弾は爆発するはずなので、あの光の壁は物理障壁とは異なる性質を持った魔法由来のものなのだろう。
しかし、反射耐性以外に攻撃を跳ね返してしまうスキルがあるなど知らなかったチドリは、とりあえず便利なスキルもあるものだと感心した。
跳ね返って敵の元まで飛んでいった砲弾を見ながら、そのまま自分の攻撃で沈めとチドリは心の中で念じる。
けれど、敵に攻撃が当たると思った瞬間、先ほどベルゼブブが見せた光景があちらでも再現されていた。
「また返って来た……」
「あいつ、物理反射か。まぁ、ベルゼブブは打撃無効だから敵の通常攻

撃は効かないんだが」
敵の攻撃は砲弾という見た目に騙されがちだが、物理三属性に分類すると打撃になる。先ほどはハイパーカウンターというたまに発動する自動防御スキルで返したが、別にそれがなくとも無効耐性を持つベルゼブブには効かないとして、湊は再び返ってきた攻撃をベルゼブブに受けさせた。
直撃した砲弾は爆炎と煙を出しているが、湊が言っていた通り耐性を持っていたベルゼブブは一切のダメージを負わずに佇んでいた。
その様子にチドリがホッと胸を撫で下ろすと、今度はこっちの番だと湊はベルゼブブに命令を下す。
「ベルゼブブ、マハジオダイン」
《ヴヴヴヴヴヴヴヴッ!》
背中の翅を高速で動かしながら、ベルゼブブは杖を掲げて激しい雷を敵へ向けて放つ。
通路を埋め尽くし、時折爆ぜながら進む雷は壁や床を焼いてゆく。あまりの閃光にチドリはほとんど目を開けておく事が出来ず、攻撃が治まるまで湊の胸に顔を埋めて待った。
ほどなくして音が消えたことで顔を離すとベルゼブブは既におらず、チドリは敵がいた場所に視線を向け、焼け焦げた跡が残っているのを発見した。
「……焼き消したの?」
「まぁ、そんなところだ」
完全に敵の気配が周囲から消えた事でマモンは再び歩き出す。本当はチドリのレベルアップのために訪れていたのだが、湊の補助を受けながらでも既に何体か倒しているので、チドリ本人としては別にこれ以上戦う必要はない。
湊もそれを理解しているのかマモンから降りようとせずに進み続けると、転送装置と金色の宝箱を発見した。
宝箱は通路の奥にあるので、湊は通路入り口でマモンに待っているように告げて、チドリと二人で並んで宝箱まで歩いてゆく。
「……開けてみてよ」

「ああ」
前にチドリが一人で回っていたときには太刀が入っていた。今度も似たようなモノが入っているのだろうと思って湊が開けるのを見ていれば、宝箱の中には金色の鞘が入っていた。
「……綺麗」
湊が箱の中から取り出したのを見てチドリは思わず呟く。
純金で出来ているのではないかと思わずにはいられぬ上品な輝きを見せる黄金の鞘。表面には見事な細工が施されており、これだけで美術品として大層価値のあるものだと推測するが、きっとこれには収められていた剣が別に存在するはずだった。
けれど、宝箱の中にはもう何も残っていない。それを見たチドリは少し残念そうにしながら湊に言った。
「中身がないわね。もしかしたら別の宝箱に入っているのかもしれないけど、それまではお預けだわ」
「いや、そうでもない。特殊アイテムみたいにこの鞘自体にも付与効果があるみたいだ。光・闇無効、それにあまり強くはないが傷の治癒促進か」
驚くべき事に手に入れた鞘は特殊効果を持っていた。対象は所持している者のみに限られるが、敵の放つハマ系とムド系スキルの無効化、それに加えて時間経過で負傷を治癒させるスキル〝治癒促進・大〟と同等の効果を有しているらしい。
ペルソナを付け替えられる上に、ファルロスのおかげで傷の超速再生だけでなく、死亡からの蘇生までされる湊には大した効果ではない。
だが、他の者ならば即死系スキルに怯える必要がなくなり、怪我をしても休むだけで治ってゆくので多少の無茶が可能になる。普通の特殊アイテムでは一つくらいしか効果が付与されないので、それを考えればまさに破格のアイテムと言えた。
「鞘だけでってすごいわね。何の鞘なのかしら？」
「……上で何かしているあいつらに聞けば分かるだろ」
チドリが鞘について尋ねると、湊は探知能力でエントランスに誰か

がいることに気付いたようで天井を見上げた。
こんな特殊な装備について知っていそうな者などそういないはずだが、知っている者がいるというのなら聞いた方が早い。
湊の後に続いてマモンと合流すると、二人はそのまま転送装置の元まで進み、ある人物の待っているタルタロスのエントランスへ向かった。
――タルタロス・エントランス
転送特有の浮遊感が消え、光が治まるとチドリは目を開けてエントランスに視線を向ける。
すると、階段を挟んで丁度反対側に力の管理者三人が立っており、そこで何やら黄色の安全帽を被って作業していた。
と言っても、実際に何かしているのはツルハシで白と黒の床の一部を破壊している三姉弟の末っ子テオドアだけで、マーガレットとエリザベスは偉そうに指示を飛ばしているだけなのだが、一日も経てば自然に修復される床に何をしているのか気になり、チドリは湊の隣に並んだまま進み声をかけた。
「……何をしてるの？」
「モニュメントの設置よ。ある程度の深さの場所に陣を刻んで呼び出すの。そうしないとタルタロスの修復機構に巻き込まれてしまうから、テオドアの作業に成功の可否がかかっているわ」
答えたマーガレットは愉しそうに口元を歪めており、自分の作業にかかっていると言われた弟が緊張した様子でツルハシを必死に振り下ろすのを見て楽しんでいるようだ。
しかし、そんな作業も一メートルほど穴を掘れば終了し。出来た瓦礫は全てエントランス周辺に広がる深淵に落として片付けてしまった。
この後は出来た穴に陣を刻むとの事だが、以前、エリザベスがヘブンズ・ドアを呼び出すのを見ていたチドリは、それと似たような事でもするのだろうかと思いながら見守った。
「それでは、僭越ながら私めが陣を刻ませて頂きます」
そういって手に持ったペルソナ全書を開いたエリザベスは、手に力

を纏ってページに書かれた文字をなぞってゆく。
なぞられた文字は輝き始め、全てをなぞり終えたエリザベスが揃えて伸ばした右手中指と人差し指を穴に向けると、光っていた文字が浮かび上がり穴の底に魔法陣を描きだす。
円や六芒星など複雑な紋様を組み合わせて作られた魔法陣は、今も輝き続けておりまだ作業が続いている事を理解させる。けれど、エリザベスは魔法陣が完成した時点で本を閉じてしまったので、最後の締めは長女のマーガレットがやるようだ。
「では、締めに取りかかるわよ。少し離れていて」
マーガレットの言う事を素直に聞いて、妹弟と湊らは少し離れた場所まで下がっておく。皆が距離を取った事を確認した事で、マーガレットはペルソナ全書を開いて聞きなれぬ言語を呟きだした。
詠唱らしき呟きが続くと本が輝きだし、それに呼応するように穴の底の魔法陣も目を眩ますほどの光を放っていた。
あまりの眩しさに目を開けておく事が出来ず、チドリは湊の広い背中を壁にしてやり過ごそうと思ったとき、エリザベスも同じように考えていたようで動いた二人の肩がぶつかった。
肩がぶつかったエリザベスは薄い笑みでチドリを見つめてくるも、この背中は自分が使うのでお前は自分の弟の後ろへ行けとチドリはジェスチャーで伝える。
だが、エリザベスは薄い笑みのまま首を横に振って、貴女がどうぞとばかりに丁寧な仕草で手で指し示し返して来た。
女同士によるそんな無言の戦いが起こっている事に当然気付いている湊は、右腕に蛇神の力の欠片である黒い影を纏って、それを広域展開して後ろの二人を包んでしまった。
別に背中を光を遮る壁にするくらい構わないが、流石にごちゃごちゃとやられると鬱陶しく感じたらしい。
湊らがそのように色々としている間に作業は終わったのか、光が治まると穴のあった場所に剣が刺さった石の台座が出現していた。
影を消して包んでいた二人を解放した湊は、本を閉じて安全帽を脱いでいるマーガレットに声をかけた。

「……それがこの鞘の中身か？」
「ええ、〝剣が抜けないなら台座ごと引っこ抜けばいいじゃない〟という考えのもと、鈍器としてしばらく使われていた聖剣エクスカリバーよ。鞘だけモナドに流しておいたのだけど、貴方たちが手に入れたみたいだから本体も出しておこうと思って」
「そんな使い方でよく折れなかったな」
「異世界産だもの。貴方の短刀や煙管と同じ入手経路だから品質は保証するわ。まぁ、私たちにも抜けなかったから使い勝手は分からないのだけど」
言いながらマーガレットは刺さっている剣を抜こうとしてみる。しかし、言っていた通りビクともしないことで諦めて苦笑しながら彼女は戻ってきた。
それを眺めていたチドリが今度は自分がやってみるとばかりに柄に手をかける。
「ふっ……!!」
全身の力を伝えるように一気に力を込める。だが、一向に抜ける気配はなく、諦めたチドリは手を離すとつまらなそうな顔で刀身に一発蹴りをいれて戻ってきた。なんとも足癖の悪い少女である。
「……あれ、壊れてる。別の剣でも入れて鞘だけ使いましょ」
「別にそれでもいいが、少し出っ張り過ぎて危ないから押し込んでおこう」
台座に刺さっている剣は台座から三十センチほど刀身が出ている。これでは横から触れてしまったときに切れてしまうので、危ないと思った湊は近付くと上から押し込み台座から柄と鍔だけが出ている状態にしてしまった。
それを見ていたチドリは安全な状態になったことで頷いているが、反対に力の管理者たちは少し驚いた顔をしていた。
「これは……押して駄目なら引いてみろ、の反対でございますね」
「何を馬鹿な事を言っているの。というか、貴方も試す前に押し込むなんて何を考えているのよ。押してでも動かせるなら引っ張れば抜けるに決まっているのに」

今までエリザベスやマーガレットが試したときには引いても押しても駄目だった。それを簡単に押し込めたのなら、それすなわち動かすことが可能という事になり、湊はエクスカリバーを手にする資格を持っているという事になる。

妹のずれた発想と同レベルでずれた行動を取った青年に頭を痛めながら、マーガレットは早速抜いてみろと言ってきた。

傍で見ているテオドアは聖剣が抜けるのをわくわくした様子で待っており、チドリも湊が選ばれし者のみが持つ事を許される聖剣を手にすると知って少し誇らしげにしている。

そうして、一同の視線が台座の前にいる青年に注がれると、それらを一身に受けた青年は静かに口を開いた。

「……聖剣ってキャラじゃないだろ」

瞬間、全員が納得し過ぎて空気が凍った。

名切りの鬼である彼は、裏の世界では一部の人間に〝死神〟や〝魔王〟と呼ばれているのだ。そんな青年には、確かに聖剣よりも魔剣が似合う。

本人に抜く気はないようで、フード付きコートのポケットに手をいれたまま湊は入り口へ向かい出したため、チドリも後を追うとタルタロスを去っていってしまう。

残された力の管理者らは少々残念に思いながらも、青年にやる気がないのではしょうがないと諦め、青い扉を潜ってベルベットルームへと帰っていった。

5月7日（月）

昼休み――月光館学園・2―D教室

生徒会会計である宇津木香奈は移動教室から帰ってくると、陰鬱な気分で自分の鞄を漁る。探している物は弁当箱。特に珍しくないシンプルなアルミ製のものだ。

包みに入ったそれを見つけると、鞄から出す前に軽く持ち上げて重さを確かめる。

（……そう、またやったのね）

持ち上げた弁当箱は軽かった。理由が分かっている彼女は心の中で溜め息を吐きながら、財布や携帯など貴重品を持つと教室を出た。

教室を出ていく彼女を見て一部の生徒がくすくすと笑っていたが、流石に何度もされていると慣れてきて反応するのも面倒になる。

弁当の中身を捨てた犯人は女子三人と男子二人の計五人のグループ。昼休み前の四時限目が移動教室のときに他の者がいなくなるまで教室に残ってわざわざ宇津木の弁当の中身を捨てているのだ。

女子らは全員が帰宅部で、男子らは今年から野球部のレギュラーだと話していたが、こんなくだらない事をしている人間でも教師の前では猫を被っているので評価はそこそこ良いらしい。

彼女が特定グループの人間にいじめられるようになったのは一年の頃からだ。前髪で目元が隠れていて暗い彼女は、名字にかけた蔑称として〝鬱木〟と影で呼ばれている。

呼んでいる者らはそれを漢字で書く事など出来ないだろうが、誰とも話さずに休み時間は一人で本を読んでいる彼女は、調子に乗り易い人間にとって格好の獲物だった。

最初は机に入れていた筆箱が鞄に入れられているなど、少し困る悪戯程度しかされていなかったが、徐々にエスカレートして教科書への落書きや弁当の中身を捨てられるようになっていった。

相手も有名私立に通っているだけあって頭は回るようで、弁当箱自体を捨てるような事や、定期テストで提出するようなノートやプリントには一切何もしてきていない。宇津木はこれでも学年次席の成績をテストで収めているので、そんな彼女の提出物に何か痕跡を残そうものならすぐに学校から処罰を受けてしまうと分かっているのだ。

（この時間に食堂へ行くのも面倒ね）

今から食堂へ向かうのは席の確保を考えると難しいだろう。ならば、残るは購買部でパンを買うくらいしか選択肢はないので、階段を降りながら宇津木はどんなパンが残っているだろうかと考える。

出来ればお腹に溜まりそうな焼きそばパンやコロッケパンが良いが、そういった総菜パンは人気メニューであるためすぐに売り切れてしまう。

そうすると菓子パン系になるのだが、餡子が苦手な彼女はどうかチョコやクリーム系のパンが残っていますように願いながら一階に到着したところで、校内で最も目立つ男子生徒に遭遇した。
「……どうも」
相手は現生徒会長である有里湊。手首に袋をかけつつ紙パックのジュースを飲んでいる事から購買帰りなのだと思われる。
べらべらとよく喋る他の生徒会メンバーは苦手だが、この青年は気を遣ってたまに話しかけてくるだけなので、友人が一人もいない宇津木としては学内で唯一付き合い易い人間に分類されていた。
「……これから購買か？　パン類は既に売り切れてしまってお菓子か飲み物しかないぞ」
「え……あ、その……そうですか。じゃあ、帰ります」
まさかこんなにも早く売り切れるとは思っていなかった。連休明けで弁当作りを面倒に思った家庭が複数あったことを計算に入れられていなかった彼女は、僅かにショックを受けた顔をすると、すぐに踵を返して元来た道を戻ろうとする。
だが、階段に向けて一歩を踏み出しかけた彼女に、湊が普段通りの淡々とした口調で再び声をかけてきた。
「……パンを買うつもりだったのならいくつか譲るぞ。どうせ放課後に小腹が空いたら食べようと思っていた買い置きだからな」
声をかけられて宇津木が振り返れば、相手は言っていた通りに袋からコロッケパンや焼きそばパンなど競争率の高い総菜パンをいくつも出して来た。
買い置きというからにはこれとは別にお昼にも何かを食べているのだろうが、相手は身長一八〇センチを超える長身だ。
制服のジャケットの代わりにオリーブドラフ色のフード付きコートを着ているが、それの上からでも身体を鍛えていて体格がいいのが見て取れる。
そんな身体を維持するには人よりも沢山食べなければならないのだろうと思いながら、宇津木は相手の申し出をありがたく思いながらも断った。

「いえ、それは先輩のものですから」
「なら、俺はこのままパンを捨てるぞ」
「……は？　放課後に食べるんじゃなかったんですか？」
「気分が変わったんだ」
　言いながら湊は近付いてくると袋から出したパンを三つほど宇津木に押し付けてきた。
　焼きそばパン、コロッケパン、ミックスサンド、どれも人気のメニューである。これらを全て手に入れている辺りに相手の変な能力の高さが窺えた。
　しかし、流石にタダでこれらを貰う事は出来ない。何より三つも食べきるなど不可能だ。
　どれか一つを返品した上で、譲って貰った分の代金を払おうと顔をあげたとき、既に相手の姿はなかった。
　周囲を見渡しても影も形もなく、けれど、手に抱えた三種類のパンが実際に彼がいたことを証明している。
（……なんなの、あの人）
　訳が分からない。そんな思いが胸中を占めるのを感じながら、宇津木は今度会ったときに代金を払う事にして昼休みの内にパンを食べてしまおうと教室へと戻るのだった。

第百二十八話　生徒会活動

５月１８日（金）
昼休み――月光館学園

湊を会長として新たに発足された生徒会は、毎月何かしらのテーマを設定して学校全体で取り組むようにしていた。

今月のテーマは書記である西園寺円が適当にいった『いじめ撲滅』であり、生徒会のメンバーは相談窓口の開設と共に昼休みや放課後に見回りも行っていた。

別にこの見回りでいじめ現場を発見しようとしている訳ではない。これはあくまで人の目が存在すると印象付けているだけだ。

いじめというのはやる側は人目を避けようとする。直接的な暴力だけでなく、窃盗やら所持品に細工をするなど、加害者の行うことには種類があるが、それらは無関係な人間に見られて自分の行為が露呈することを何よりも嫌がる。

故に、湊は見回りをすることで学内に死角はないのだと印象付け、強化月間の間だけでもそういった犯行を自粛するように仕向けているのだ。

憎しみやストレスの捌け口など強い感情で行っている者はこの程度で止めはしないが、遊び半分でやっている者は期間が開くと飽きて勝手に止めていく。

そういった消極的な事態の収拾も狙いつつ、湊らは昼休みの十分間の見回りを終えて生徒会室に戻ってきた。

「……それぞれの報告を聞いておこうか」

ホワイトボードの前に立った湊はメンバーに視線を向けて発言を促す。校内の見回りは二人一組の三チームに分かれて行われていた。

一班は湊と会計の宇津木、二班は男子副会長の渡邊と書記の西園寺、三班は女子副会長の高千穂と庶務の木戸。渡邊や西園寺などは湊と同じ班になりたがっていたが、湊の班以外は生徒会に入る前から知り合いだったようなので、そういった相手との方が気持ち的に楽だろうと判断して湊が独断でチーム分けを行った。

それぞれが分かれた後はちゃんと見回りをしていたようで、渡邊が笑顔で手を挙げて報告をしてくる。
「はいはーい、二班は体育館の方を見回ったんですけど何もなかったッス」
「三班は職員室のある別館の方を見回ったけど何もなかったわ」
渡邊に続いて高千穂も自分たちがそれらしきものは見ていないと答える。湊も別に現場遭遇を考えていた訳ではないので、各班の報告を聞いて日誌に簡単に書きとめると解散する事にした。
「それじゃあ今日の見回りは終了だ。後は好きに昼休みを過ごしてくれ」
「りょうかーい。ミッチー、一緒にクラスに帰ろ！」
「俺は少し仕事があるから昼食は生徒会室で取る」
解散を告げると早速湊と同じクラスの西園寺が一緒に帰ろうと腕を絡ませ組んでくる。
湊はそれを真顔のまま外して置いていた鞄から昼食を取り出し、他の者は湊のいう仕事が何か気になったようで尋ねているが、特に他の者が手伝うような物ではないと聞いて宇津木は「失礼します」と言って生徒会室を後にした。
＊＊＊
生徒会室を後にした宇津木は自分の教室に向かって歩いてゆく。見回りは集合と報告を含めれば昼休みの開始十五分だけだ。約一時間あるので十五分くらいならば使っても問題ないと他のメンバーからも文句は出ていない。
宇津木は中等部から入った生徒なので、去年一年間の留学でいなかった湊の事はよく知らない。
しかし、面倒そうにしながらも仕事はしっかりとこなし、何かさせるにも他の者から不平不満が出ないように調整しているところを見ると優秀な人間ではあるのだろうと思っていた。
もっとも、いじめ撲滅を掲げていながらも、直轄の部下が受けている行為に気付いていない事を考えれば少し滑稽に映る。
助けて欲しいと自分から言った覚えもなければ、そんな周囲が気付

くレベルで目立つ被害を受けている訳でもないので気付けなくとも無理はない。
それでも、実際はすぐ近くの事も気付けない普通の人間でしかないのに、天才だ優秀だと大勢に持て囃されていることが、離れた場所から見ている宇津木には不思議でならなかった。
（今日は移動教室だったから、多分お弁当はない）
移動教室だったので、そのまま生徒会室に向かった宇津木は自分の弁当が既に捨てられているだろうと読んでいた。
昼休み前の四時限が移動教室の科目なのは月曜日と金曜日の二日だけ。月光館学園は土曜日まで授業があるので金曜日を週末とは言えないかもしれないが、週初めと週末の二日を我慢すれば、それ以外は教科書や机への落書き程度で済む。
そんな風に考えながら四時限で使った教科書や筆記具を持って教室に戻った彼女は、入ってすぐ窓際最後尾の自分の席に視線を送って驚愕した。
「なに……これ……」
いつもなら弁当の中身が捨てられているだけのはず。それなのに、教室に戻った宇津木が目にしたのは、図書室から借りていた本のページが無惨に破かれ自分の席周辺に散乱する光景だった。
目を見開いてゆっくりと自分の席に向かう宇津木を、他の生徒たちはちらちらと見てきている。
こんなのは普通ではない。明らかに嫌がらせを越えた悪質な行為であるというのに、誰一人して近付かないようにしていたというのか。
誰かに助けて貰おうとは思っていなかった。ただ我慢していれば飽きて自然になくなっていくと考えていた。
だが、いじめを行っている者らはこういった周囲にもはっきりと分かるレベルで手を出してくる人間で、他の者は異変に気付いても見て見ぬふりをする者しかいない事が今日で分かった。
〝敵がいる〟という認識が、今日この瞬間に〝味方がいない〟という認識に切り替わったのだ。

自分の席に到着し、ボロボロになった本の表紙に触れながら宇津木は虚ろな目で机の天板を眺める。そこには〝調子に乗るなブス〟と書かれていた。

どんどんと思考が暗く沈んでいっていた宇津木は、それを見て自分のどこが調子に乗っているように見えたのだと思わず笑いたくなった。

もしかすると、生徒会の見回りで有名人である有里湊と一緒に歩いていた事が犯人には調子に乗っているように映ったのかもしれない。

だが、彼女を生徒会に推薦したのは犯人たちだ。所信表明演説で恥を掻かせてやろうと仕組んだ事は分かっている。

それで対抗馬の生徒が一年だったことで、学年が上の宇津木が偶然にも通ってしまい。所属することが決まってからは、仕事で彼と一緒に居ただけだというのに逆恨みもいいところである。

（本当に……くだらない……）

持っていた物を机に置いて、散らばっている本の残骸を集め始める。他の者は見てきているがやはり誰も手を貸そうとはしない。

床に座り込んで必死に掃除をしている宇津木を犯人たちのグループはニヤニヤと笑って眺めているので、他の者も誰がこんな事をしたのかは気付いているはずだ。

相手は明るく学年でも目立つ生徒たち。そういった輩に目を付けられると今度は自分たちが被害に遭う。それが分かっているので他の者は何もしないのだろう。

今まではただ面倒だと思っていたが、味方がいないことに気付いてしまった宇津木は、どんどんと暗い気持ちが膨れ上がり自分が酷く惨めに思えてきた。

別に彼らに何かをした覚えはないし、暗いのだって人とのコミュニケーションが少しばかり苦手なだけだ。

それなのに、どうしてこんな目に遭わなければならないのか。大学教授を務める親の薦めで進学校であるここへと来たが、こんな事なら小学校の友人らと同じ普通の公立に進めば良かったと、今さらな後悔を感じて視界が徐々に歪んでゆく。

（もう嫌……だれか、助けて……）
溢れてきた涙は集めていた紙片に落ちていき、今まで耐えてきた彼女もそれが切っ掛けとなってついに限界が訪れる。
友達も作れずに孤独な学校生活を送ってきた彼女は、人に助けを求める事が出来なかった。
そもそも、誰かが味方であると考えたこともなかったので、助けを求めるという事に頭がいかなかったのだ。
だが、彼女が初めて助けを求めたとき、その心の声を聞き届けた者がいた。
「ああ、任せろ」
よく通る低い声が教室中に響く。その声を聞いてハッとして顔をあげれば、宇津木が入ってきた教室の後ろ側の扉の所に生徒会のメンバーがいた。
最初に教室に入ってきた湊はハンカチを取り出すとそれを宇津木に渡して立ち上がらせる。
「貴重品は持っているか？」
「え、あの……持ってますけど……」
「高千穂、宇津木を連れて廊下に出ていてくれ。気分が悪いようなら保健室へ連れていっていい。渡邊と木戸は持ってきた手袋をはめて、散らばっている本のページを袋に回収」
『了解』
湊の指示を聞いたメンバーはそれぞれ動き出す。木戸はどこか不満そうにしているが、学校の備品が傷付けられた事に怒っているのか細かい欠片も逃さず集めている。
対して、渡邊は笑みを浮かべており、一人の生徒が泣いていたというのに少々愉しげだ。
そんな二人の男子の横を通って高千穂は宇津木に寄り添うと、優しい口調で「もう大丈夫よ」と言いながら廊下へと連れだした。
廊下に出た彼女は突然のことに涙が止まっていたが、どうして急に生徒会のメンバーが現れたのか分からず、保健室に行くか聞かれたが拒否して何が始まるのかと聞き返した。

すると、高千穂は普段通りのどこか冷たく見える美しい顔に苦笑を浮かべ、作業中の男子二人を眺めている会長に視線を送り静かに答えた。
「なんというか。まぁ、公開処刑よ」
＊＊＊
他の役員に指示を飛ばした湊は、ポケットに手を入れながら破かれた本が回収されるのを待っていた。
本の値段は既に調べているので弁償させる事は可能だ。今は会計の宇津木が席を外しているので、領収書の発行は書記の西園寺に代行させるが、そんな事は後回しでいいので湊は静かに作業の終了を待つ。
そして、しばらくして作業が終わったのか、渡邊と木戸が立ち上がると二人は手に持った袋に集められた本だった物を掲げて見せてくる。
「会長、本の回収終わったッス」
「ああ、それは証拠品だから無くさないように持っていろ。木戸は袋を渡邊に預けて、宇津木の机と同じサイズの机を屋上前の踊り場から一つ持ってきてくれ。ちゃんと雑巾で拭いて綺麗にした状態でな」
「なっ……分かりました。ですが、庶務って雑用という意味ではないので、それは覚えておいてください」
「すまないな」
新たに用事を申しつけられた木戸は、少し面倒そうにしながらも落書きされた机を見て察したのか、渋々新しい机を取りに向かった。
それを見届けた湊はポケットから手を出すと、普段以上に冷たい瞳をしながら結ってある髪を掻き上げて口を開く。
「最初に言っておくがお前らに拒否権はない。出席番号八、十一、十七、二五、三一の生徒はこっちへ来い。丁度そこにかたまっているお前らだ」
湊が口にした出席番号と指した生徒らは、まさしく宇津木をいじめていたメンバーであった。
彼らは湊にばれていることに驚愕しているようだが、有無を言わせ

ぬ気配に黙って言う通りにやってきて少し怯えた様子で話しかけてくる。
「あ、あの、私たちに何かご用でしょうか？」
「ああ、お前ら二千円は持っているか？」
言われた生徒らは頭の上に疑問符を浮かべる。てっきりばれて怒られると思っていたのだが、急に何で金の話になるのかが分からなかったのだ。
しかし、二千円なら持っていたので、全員がポケットから財布を取り出すと札入れのところから二千円だけ取り出し、それを湊に見せた。
直後、湊は素早くそれらを奪って懐から出した封筒に収めてしまう。突然のことに抗議しようとしかけたところで、湊が先に話し出したのでそれらは不発に終わる。
「西園寺、彼らに領収書を」
「はいはーい。それじゃあ、これ貴方たちがビリビリにした本の代金を受け取ったって証明ね。よりにもよって一万円する本を破くだなんて頭悪いんだねー」
二千円を奪われた直後に領収書を渡され、さらに綺麗な先輩から満面の笑みで罵倒されたことで再起動した生徒らは、一体何のつもりだと改めて抗議をしてくる。
「ちょ、急になんなんですか。お金返してくださいよ。本を破いたとか俺ら知りませんよ」
「そうです。移動教室から帰ってきたらああなっていて、私らもどうしたのかなって話してたんですから」
「……最初に拒否権はないって言っただろ。お前らが宇津木の弁当を捨てていた事も、教科書や机に落書きしていた事もこっちは分かっているんだ。証拠もしっかり存在するし、何より回収した本からお前らの指紋が出てくれば一発でアウトだ。何せお前らは一年時の学校案内でしか図書室を利用していないんだからな。大事にしたくないなら黙っていろ」
湊は上着のポケットから何枚かの写真を取り出し、それを加害者の

生徒らに見せる。そこに写っていたのは、宇津木の鞄から彼女の弁当箱を取り出している加害者たちの姿であった。
教室どころか廊下にも誰もいない事を確認して犯行に及んでいたというのに、どうしてそんな写真があるのか分からず、加害者たちは顔面を蒼白にさせる。
彼らが犯行に及んだとき、確かに教室や廊下には誰もいなかったが、残念なことに湊には索敵能力があり、その知覚した情報はEデヴァイスを使えば動画や写真として保存しておく事が出来た。
湊の索敵範囲は首都圏全域を余裕でカバーできる。そんな規格外の存在にマークされれば、一般人である彼らにプライバシーなど存在しないのだ。
仮に本を破いていないと言ったところで、他人の鞄から弁当を取り出している時点で問題行為になるため、その証拠を押さえられている加害者らは言う通りに口をつぐむ。
領収書を持ったまま黙る相手の様子を見つめながら、続けて湊は上着の内側から四百文字詰めの原稿用紙を複数枚取り出して彼らに渡した。
「それじゃあ、一人最低千文字で一人の女生徒を複数名でいじめていた事に対する反省文を書いて来い。提出は五月二十一日、来週の月曜日だ」
「……へ？　あの、退学とかじゃないんですか？」
取り出した原稿用紙を一人三枚ずつ渡され、加害者の生徒の一人がキョトンとした顔で聞き返す。
それも当然で湊は先ほどまで人を殺せそうな冷たい表情をしていたのだ。ピリピリと空気を張り詰めさせるほどの怒りを発してそんな表情をしていれば、加害者らも半殺しや退学を覚悟するというものだ。
けれど、問われた湊はマフラーから取り出した煙管を咥えると、聞き返して来た生徒にどこか呆れた様子で答える。
「なんだ。退学にして欲しかったのか？　だが、残念な事に生徒会にそんな権限はない。何より、生徒の更生を促すのも仕事の内だ。もう

二度とするなよ」
「は、はい。どうもすみませんでしたっ」
『すみませんでした』
一人の生徒が謝ると他の者も同じように頭を下げる。顔では申し訳なさそうにして反省しているようだが、実際はこの程度の処分で済んで良かったと安堵しているらしい。
そんな相手の内面を読み取りながら呆れた顔をしていた湊は、とりあえず生徒会としての処分は下したとして、木戸が持ってきた机へ落書きされていた机の中身を移しかえると、証拠品の机を木戸に運ばせながら教室を去る事にした。
＊＊＊
高千穂に寄り添われながら廊下に出ていた宇津木は、湊がしっかりと証拠を固めた上で相手を裁きに来ていた事に驚いた。
だが、公開処刑という割には事務的な処分を下したのみで、随分と目立つ人間だがやはり一生徒の権限ではこれが限界なのだと、助けに現れたときに感じた不思議な胸の高鳴りは静かに治まっていった。
彼と一緒にいた生徒会のメンバーも廊下に出てきて、湊が教室を出ようとしていたことで解放されたと思った加害者たちも自分たちの席に戻ってゆく。
弁当を捨てられた事で代わりの昼食を買うはめになったり、教科書に落書きされたことで勉強に僅かな支障が出たが、やはり被害者の救済よりも事態の収束を学校側は重要視するようだ。
助けて貰ったことは非常にありがたいが、どこかやり場のない気持ちを胸中に残しながら宇津木がやってくる湊を見つめていたとき、彼は教室から出る直前で立ち止まり席に戻りかけていた加害者の一人に向かって口を開いた。
「……話は変わるんだが、君の父親は警察官らしいな。警察官の子どもが女子を集団でいじめて泣かせたのか。そんな事が周りに知れればさぞ肩身の狭い思いをするだろうな」
その言葉を聞いても宇津木は意味がよく分からなかった。しかし、男子の一人が驚愕に目を見開いていることで、彼の父親が警察官なの

は真実らしい。
人を助ける仕事である警察官の息子がそれと対極な行為をしていたとすれば、確かに普通のサラリーマンの子どもが人をいじめていたというより問題になるかもしれない。
けれど、何故そんな事を湊が知っているのか分からず不思議に思っていると、湊は加害者の女子の一人を見つめて言葉を続けた。
「君の父親は今年の四月から部長に昇進したらしいな。おめでとう。しかし、娘が野球部の男子複数名を使って一人の女子をいじめたとなれば、その後の昇進は絶望的かもしれないな」
再び相手の家庭事情を湊は芝居がかった仕草と口調で話し、そこに脅すような言葉を付け加えた。
野球部の男子複数名を使って一人の女子をいじめたと聞くと、どことなく襲われて性的暴行を受けたように聞こえてしまうのは気のせいだろうか。
言っている事は事実かもしれないが、意図的に第三者が受け取る印象を捻じ曲げているように感じながら見続ければ、湊は瞳だけ冷たい色のまま顔には薄い笑みを浮かべ別の加害者に声をかける。
「君のお兄さんは大学四年で就活生らしいな。今は本命の第二面接までいっているとか。あと二つの面接で無事に内定だ。生徒会の長として生徒のご家族には是非とも夢を掴んで貰いたいと願っているよ。まぁ、身内に集団で一人をいじめていた者がいると分かれば、内定が取れても取り消される可能性はあるがな」
それを言われた女子はガチガチと歯を鳴らしながら震えている。他の加害者たちも同じように怯えており、どちらが加害者なのか分からなくなりそうなほどだ。
残っていた二人の生徒も似たような内容を告げられ、加害者一同は湊に駆け寄り頭を下げて懇願する。
「お、お願いします。どうかお父さんの会社だけにはっ」
「何がお願いしますなんだ？　生徒がいじめを行っていて反省文を書くとなれば、その事はご両親に説明するのは当然だろう。そのとき、務め先に電話をして取り次いで貰うには〝御社にお勤めの誰々さん

のお子さんが女生徒を複数人でいじめていた件でお電話させていただいたのですが〟って説明しなきゃならないじゃないか」
「父の携帯番号を教えます。ですから、連絡する際にはそっちに直接っ」
「いや、学校として電話するからには相手側も会社から取り次いで貰う方がいいんだ。君の気遣いはありがたいが番号を聞くのは遠慮しておこう」
相手の言葉をあっさりと聞き流した湊の顔に浮かぶのは、怖ろしく冷たい氷の微笑。明らかに中学生が浮かべられる表情ではない。
傍らで見ている宇津木は、既に彼が自分と同じ中学生だと思えなくなっていた。
「すみません、自分が悪かったですっ。だから、どうかお願いします。父の会社には連絡しないでください！」
「断る。反省するのは結構だが、俺は何も悪くないからな。別に後ろ暗い事なんかないのに、どうして連絡一つにコソコソとしなければならないのか理解出来ない」
「そんな事されたら、父は職を失って家の家族はっ」
先ほどとは別の生徒が涙と鼻水で顔面をぐちゃぐちゃにしながら土下座をして謝っている。だが、またしても湊は相手の言葉をばっさりと切り捨てて要求を拒否した。
自分をいじめていた者たちが、人前だというのにあんなにも無様な姿を晒している事に宇津木は驚く。
しかし、それよりも言葉だけで簡単に恐怖のどん底まで叩き落とした、生徒会長〝有里湊〟という人間に強い興味を抱いた。
どこで生徒らの個人情報を掴んできたのかは分からない。それでも、同じ情報を持っていても自分ではここまで相手にダメージを与える事が出来ないと、宇津木ははっきり理解している。
彼がどうして圧倒的な票を獲得して生徒会長に推薦されたのか分かっていなかったが、こういった他者の心に干渉する話術や仕草によって、他の者の記憶に強烈な印象を残して来たのだろう。
「やれやれ、まるで俺が酷い事をするような言い方だな。勘違いして

いるようだが、俺は事実を伝えるだけだ。じゃあ、その伝えるべき事を実際に行ったのは誰だ？　そう、お前たちだ」
純然たる事実を突きつける湊を前に、許しを請う者たちは一切反抗しようとしていない。普段は多少の無茶も強引さで押し通して来た者たちなのに、ここまで従順だと少し違和感すら覚える。
野球部レギュラーである男子二人はそれなりにいい体格をしているのだが、湊はそれよりも十センチ近く長身で、手足の長さから細く見えるようで実際は武道系の部活をしている者よりしっかりとした身体をしている。
加えて、宇津木は噂で聞いただけだが、湊は一年生の頃にボクシングチャンプだった上級生を非公式の試合で破ったらしい。そんな者が相手では力技でどうにか黙らせる事も出来ず、今のように大人しく許して貰おうとするしかないのかもしれない。
「お前らが余計な事をしなければこんな事にはならなかったんだ。父親が職を失い、兄がどこにも就職出来なくなったとしても、全部自分たちのせいなんだよ。覚えておけ、お前らが罪を犯したとき、その報いを受けるのは自分だけとは限らないことを」
どこか実感の籠ったその言葉には恐ろしいほどの重みがあった。彼の事をよく知らない者であっても、その言葉は彼がどこかで身を持って知った事なのだと理解出来てしまうほどだ。
心の中で呟いた〝助けて〟という言葉を聞き届けた青年の姿を見て、宇津木は治まっていったはずの不思議な胸の高鳴りを再び感じる。
加害者や他の者には彼の姿が悪魔や魔王のように映っているかもしれない。しかし、教室の窓から差し込む光を背にした圧倒的な存在感と絶対的な強者としての姿を目にした事で、宇津木は彼が自分たちとは異なる天上の存在なのだと思った。
「というか、そもそも俺に言うのが間違いなんだ。謝る相手は俺じゃなくて被害者だろ？　もしも、宇津木がお前らを赦すのであれば俺は何もしないさ」
その言葉で加害者たちは宇津木に向き直ると、即座に廊下までやっ

てきて彼女の足元で土下座をしてくる。
「ごめんなさい、宇津木さん！　もう二度こんな事はしません、赦して貰えるのなら何でも貴女の言う通りにします。だから、どうか会長に連絡しないようにいってください！」
　彼の一言で力関係が完全に逆転してしまった。相手の謝罪は反省よりも自己保身ばかりに走っているように感じられたが、今の宇津木は自分がいじめられていた事も含め、彼らの事などどうでも良かった。
　土下座する者らを避けながら隣にやってきた青年が「どうするんだ？」と尋ねてきたことで、宇津木は前髪で隠れた瞳を潤ませ、頬を上気させながらぽつりと呟く。
「――神」
「……ん？」
「いえっ、あの……会長に全てお任せします。この人たちに興味はないので、近付いて来なければ後はどうでもいいです」
　普通に返事をしようと思っていたのに、つい心の中で思っていた呼び名で相手を呼んでしまった事で、宇津木は少し慌てながら言葉を返した。
　今までの人生の中で神仏に対する信仰心などあまり持っていなかったが、人の姿を借りて現れ自分を救ってくれた存在を崇めずにはいられない。彼女は自分が崇めるべき存在を見つけたのだ。
　そんな心境の変化を起こし、今までよりも饒舌になった上に〝先輩〟から〝会長〟呼びになった彼女の姿は、嬉しそうにブンブンと振られる尻尾と犬耳を幻視してしまうような従順な態度にまわりには映った。
　そのとき読心能力を展開していた湊も、急に自分を神と呼んで熱視線を送ってきた宇津木に若干驚きつつ、それでも彼女の負った心の傷が自分に対する信仰心とやらで埋まっていくのなら別にいいかと好きにさせる事にした。
「そうか。お前ら宇津木に感謝しろよ。お前らとその家族の命が首の皮一枚で繋がったのは、宇津木の優しさのおかげなんだからな。ちゃ

んと月曜日に反省文を出せば、自宅への電話連絡による事情説明だけで済ませてやる」
「あ、ありがとうございます！　本当にすみませんでした！」
『すみませんでした！』
本気の涙を流して赦しを請うてきていた者たちは、安堵から腰が抜けて立てずにいる。だが、昼休みの終了まではまだ時間があるので、証拠品やらの移動のために生徒会メンバーは加害者をそのままに生徒会室へと移動した。

――生徒会室
生徒会室に移動する際、捨てられた弁当の代わりを買って来いと湊に言われ素直に従った宇津木は、席について総菜パンの袋を開けつつ、それぞれ昼食を食べ始めていた他のメンバーや報告書を書いている湊に感じていた疑問を尋ねていた。
「あの、どうして来てくださったんですか？」
「んー？　ああ、あれは会長の指示でな。生徒会活動をしに行くぞーって袋やら手袋やら領収書やらを準備させて、自ら先陣をきって君のいる教室へと向かわれたのだよ」
「ってか、いじめ撲滅キャンペーンやってるんだから、宇津木ちゃんもわたしいじめられてますって言えば良かったのにー」
笑いながら弁当を食べつつ事情を説明する渡邊に対し、西園寺はドーナツを頬張りながら中々の無茶を言ってくる。
宇津木は他人に助けを求めるという発想がなかったパターンだが、そうでなくても被害者が他の者に助けを求めるのは勇気がいるものだ。
いじめられている事を知られるのが恥ずかしい、助けて貰えなかったときの事を想像すると恐い、理由など様々だが難しい上に気力と体力が必要な行動ではある。
その事をいじめに関する知識として知っていた高千穂は、無茶な事を軽いノリで口にした西園寺をジトっとした視線で見つめて諌めた。
「西園寺さん、少しは宇津木さんの事も考えてあげるべきよ。誰しも

が貴女のように強くはいられないのだから」
「えー、まどかの心はガラス製だよ？　可愛さに嫉妬した他の子にもよくいじめられてるし。ミッチーみたいなイケメンに守って貰う必要のあるか弱い乙女だよー」
「会長、そいつの心は強化ガラス製なんで助ける必要ないっスよ」
　諌められても飄々としながらちゃっかり湊にすり寄る西園寺、そんな彼女と以前から知り合いだった渡邊がばっさりと切り捨てて相手をしなくていいと湊に進言する。
　それに頬を膨らませて西園寺は反論し、上級生二人がふざけあっているのをスルーしながら行儀よく弁当を食べていた木戸も、眉を寄らせて呆れた表情で宇津木に話しかけて来た。
「西園寺先輩じゃないけど、お前ももっとサイン出すとかしろよ。匿名で意見箱にどこどこのクラスでいじめがあるって投書することも出来ただろうに」
　彼の言う事はある意味もっともだ。いじめというのは加害者か被害者が大きなアクションを起こさない限りは周囲も気付く事が出来ない。
　故に、直接言うことが出来ないのなら、周囲の目が向き易くするなど自分で出来る範囲で小さなアクションを起こした方が解決する可能性も高まる。
　指摘されたことでそんな方法がある事に気付いた宇津木が僅かに顔を俯かせたとき、報告書を書き終えて提出用ファイルに挿んでいた湊が会話に参加してきた。
「……サインなら出してたぞ。五月のテーマを決める時点でな。だから、俺はいじめ撲滅をそのままテーマとして採用した。それで加害者がやめればそのままにするつもりだったが、部下を泣かせた莫迦をすんなり赦せるほど俺は大人じゃない。抑止のための周囲へのアピールも含んでいたとはいえ、お前らまで付き合わせて悪かったな」
　湊が今回動いたのは宇津木の限界を感じ取ったからだ。ここで止めておかねばエスカレートして彼女に直接危害が及ぶ可能性もあり、証拠も揃っていたので動いたのだが、教室に到着した時点で彼女が泣

いていた事で湊はキレた。
本当は生徒会で動く事で学園中に目が届いている事をアピールし、大勢の前で反省させた上で謝らせることにより別件の加害者らもやめていくように仕向けるつもりだった。しかし、大勢でか弱い女子をいじめて泣かせたとなれば、弱者を救う事を義務として考えている湊がそんな真似をしたクズを許しはしない。
「マジで？　うわ、オレ気付いてなかったわ。ゴメンな宇津木ちゃん。てか、部下のために怒るとか会長カッケーっすね！」
「うんうん、まどかが泣いたときは抱きしめて慰めてねミッチー！」
湊が怒った理由を聞いて渡邊たちが笑みを浮かべる。彼は条件が揃えば他の者が被害にあったときにも今日と同じように他の者たちも助けてくれる。それが分かっているからこそ、渡邊たちは安心感を覚え嬉しくて笑っているのだ。
それを見ていた宇津木は、他者に慕われていてやはり神様はすごいと尊敬の眼差しを送り、これまで見せた事のない熱の籠った視線で湊を見ながら昼食を取っていた。
加害者たちも今日の事がトラウマとなり二度と他者をいじめたりはしないだろう。被害者の宇津木も少々特殊だが別のことで心の傷が塞がっていっているようなので、この件はとりあえず解決と判断していいはずだ。
そうして、初めて大々的に行われた生徒会活動は無事に終了し、いじめ案件という非常に難しいものを解決した事で教師からの信頼を得る事も出来た。今まで消極的にしか参加していなかった宇津木も本格的に参加するようになったことにより、生徒会はようやく全員が揃った形でのスタートを切ることが出来たのだった。

第百二十九話　班決め

6月1日（金）
午前――3――D教室

生徒会会計である宇津木が受けていたイジメを解決し、翌週の中間テストを全教科満点でクリアした湊は、机の上でまるでパソコンのキーボードを叩くような仕草をしながら、フレームから上着の内ポケットまでコードが伸びている眼鏡をかけて授業を受けていた。

他の者はその仕草や眼鏡などがとても気になるようだが、英文の書かれた書類を時折見ていることで、なにやら忙しそうだと誰も話しかけられずにいた。

しかし、今はホームルームの時間であり、今日のホームルームはそれなりに重要な話をする回なので、担任の盛本は一応湊に声をかけてから話を進める事にした。

「あー、有里？　話を始めてもいいか？」

「……ええ、勝手にどうぞ」

「そ、そうか。お前も忙しいのかもしれないが一応聞いておいてくれな」

話しかければ湊はしっかりと顔をあげた。そのとき、正面から湊の目を見た教師は、眼鏡のレンズに何やら画像や文字のようなモノが映っている事に気付く。

詳しくは分からないが、あの眼鏡がパソコンの画面の役割を果たし、キーボードを叩くような仕草はどういう技術かは不明だが、ちゃんとあれで文字を打てているらしい。

ちょっとした未来テクノロジーだなと思いつつ、湊が話を聞いていることを確認した盛本は気を取り直して、各列の先頭にプリントを配ってから黒板に今日のテーマを書きだした。

「よーし、それじゃあ今日は来月にある修学旅行の班決めとそれに合わせて席替えもするぞ。一班は基本的に男女各三人の計六人だ。一部は男子が四人の七人班になるが、決め方は自由。お前らの思い出作りだからな。好きなやつと組め」

盛本がそういった途端、クラスの女子半数以上が獲物を狙う肉食獣が如き瞳でデスクワークに励んでいる湊を見た。
同じクラスになった時点で、中学最大のイベントである修学旅行で愛しの彼と同じ班になるのを夢見ていた。旅行先は沖縄で期間は二泊三日、ここは友情に亀裂が入ろうとも他の女どもを蹴散らして同じ班になってみせる。
と、そんな欲望百パーセントな心の声がそこかしこから聞こえてきそうな、一触即発の空気が教室内に漂い始めていたことで男子らはドン引きしていた。
教師が好きなやつと組めと言った時点で自由に班を決めていい時間になっているはずだが、女子らがお互いを牽制し合っているせいで誰も動く事が出来ない。
このままでは精神が持たなくなる。そう思った男子の数名が、とりあえず男子らだけでも組んでおこうかと動きかけたとき、湊の後ろに居る順平のさらに斜め右後ろに座っていた一人の女子が口を開いた。
「ミッチー、一緒の班になろうね」
「……勝手にしろ」
「わーい、一緒に楽しもうね！」
お互いに牽制し合って誰も動けない状態の中、その均衡を破ったのは湊と同じ生徒会役員である西園寺だった。
別に誰と同じ班になろうが気にしない湊は彼女の申し出を受けてしまい。その時点で湊の班は男女各二人ずつしか空いていない状態となる。
湊は女子の大半と一部の男子から絶大な人気を誇るが、西園寺もかなりの男子人気を誇っている校内女子ランク上位メンバーの一人であるため、二人と同じ班というのは一種のプレミア席だ。
そんな残りのプレミア席を手に入れようと男女双方が大きく動き出そうとしたとき、またしても西園寺がニコニコとした笑顔のまま話し出した。
「それじゃあ、えっとぉ……あ、山岸ちゃんもおいでよ。可愛いから山岸ちゃんも入れてあげるよ」

「え？　あ、うん。ありがとうございます」
自分を可愛いと思っている西園寺は、可愛い自分の傍にいていいのは自分が認めたルックスの女子だけと考えている。そして、風花は少し地味だが癒し系で守ってあげたくなる愛らしさがあるため、湊と親しいこともあって班員に相応しいと判断し勧誘した。
どこの班になるかまるで決まっていなかった風花は、彼女からの誘いを素直に受けたが、これで残る席は男子二人と女子一人である。
プレミア席をゲットする最大の障害は西園寺になりそうだが、逆に誰でもいいと考えている湊や風花に取り入れば西園寺はスルー出来るかもしれない。将を射るために馬を射ようと思っていたのに、これでは逆に馬が邪魔をしてくるので改めて将を直接狙わなければならない状況になってしまったようなものだ。
もっとも、どちらにせよ湊との会話は必要だったので順番が前後しただけと思う事も出来る。問題はどのタイミングで切り出すかという事だが、他の者が悩んでいる間に湊と西園寺は話を進めていた。
「ミッチー、他はどうする？　まどか的に男子はミッチー一人で良いんだけど」
「無茶を言うな。そうだな……伊織、うちの班に入るか？」
と、ここでまさかの事態が起こった。なんと湊が自ら後ろの席に居る順平を班に誘ったのだ。
効率を重視する彼の事だから、班などさっさと決めてしまった方がいいと考え、丁度自分の席の後ろに居た者に声をかけただけなのだろう。
しかし、湊・西園寺・風花の三名以外はまだ誰も班が決まっていない以上、大勢が羨むこの誘いを順平が断る可能性は極めて低かった。
案の定、順平はあまり話した事がなかったため湊に誘われた事を不思議に思いつつも、ニカッと楽しげに笑って返事をした。
「お、いいの？　んじゃ、ともちーも一緒に入っていいか？」
「誰か知らないが別にいいぞ」
「あー……一応、去年も同じクラスだった友近健二くんなんスけどね」
順平としては仲の良い友人も班員にして貰おうと言ってみたのだ

が、去年も同じクラスだった者を知らないとばっさり告げた事で微妙な空気が漂う。
　もっと正確に言えば、友近は風花と同じく中学三年間を湊と同じクラスで過ごした希少な人間であるのだが、流れ弾的な感じでショックを受けている友人を後でフォローしようと思いながら補足説明を加えれば、湊は眼鏡の位置を直しながら二列隣にいる友近に向き直り挨拶した。
「その名前なら分かる。友近も宜しく」
「お、おう、よろしく」
　あまり正面から見られて話す事がなかったので、急に挨拶された友近は僅かに照れながら言葉を返す。
　相手は男だが変に色気があるせいで妙な返しになってしまった。自分が好きなのは女で、さらに言えば年上のお姉さんが最高である、とそんな風に心の中で言い聞かせながら、友近は自分を落ち着かせる意味も込めて話題を別の物へ変えた。
「それじゃあ後は女子一人か。理緒、お前こねえ？」
「え、別にいいけど。有里君とか西園寺さんもいいの？」
　友近に理緒と呼ばれた少女の名は岩崎理緒。順平の後ろの席であり、西園寺の隣の席でもあるのだが、彼女は友近と家が近所で幼馴染という関係であった。
　長い髪をポニーテールにしている彼女は、生徒会副会長の高千穂と同じ女子テニス部に所属していて身体が絞られており、背が高めなこともあってスタイルは抜群である。
　そんな彼女が元々の班員であった湊と西園寺に確認を取れば、ニコニコと笑顔を浮かべていた西園寺が愛想よく答えた。
「岩崎さんも綺麗系だから、まどか的にはＯＫだよ。ミッチーも別にいいよね？」
「ああ、班長は伊織だ。お前らも自分のプリントにそう書いておけ」
　西園寺だけでなく湊も理緒の加入を認めた事で班員は全て揃った。後一人だけ男子を足す事も可能だが、面倒を嫌った湊が班長に順平を指名すると他の者らが配られたプリントに班長と班員の名を書いて

ゆく。
　しかし、指名された側としては湊こそが班長だと思っていたので、驚きの声をあげて尋ね返していた。
「ちょっ、普通そこは有里君が班長じゃねーの？」
「あのね、私とミッチーは生徒会の仕事があるの。修学旅行実行委員の補助とか、ミッチーは開会と閉会の挨拶とかもあるし。班長会議の後には先生との打ち合わせもあるから、班員への連絡を考えるとどうしても無理なんだ」
「ああ、そういう理由ね。そういう事ならしょうがねえな。先生、オレっちが班長っす！」
　生徒会の仕事で班の仕事が疎かになることを申し訳なさそうに言われれば、順平は理由があるのならしょうがないと笑い、盛本に自分が班長に決まった事を伝えた。
「おう。お前らの班だけやけに早く決まったが、他のやつらも似た感じで話し合って組んで行け。異性を誘うのが難しいなら、後でくじ引きで組み合わせるから同性の班員だけ決めておいてもいいぞ」
　班決めは旅行の主役である生徒らの自由だが、多感な時期というのもあって異性を誘うのが難しい者もいるだろう。故に、ちゃんとその場合の事も考えておいた盛本は、簡単なあみだくじを既に用意しているのを見せた。
　生徒の一部はその事に安堵するも、大勢の者が狙っていた特定人物と同じ班になる夢は既に断たれてしまった。
　そうして、一度は限界まで高まっていた教室の空気は、どこか試合後のような気の抜けたものになりつつ、それぞれ仲の良い者同士で班を決め始めたのだった。
＊＊＊
　各班が決まると今度は席替えが行われた。湊たちは窓側後方の二班というとても良い場所に当たり、前から順に窓側一列目が順平・湊・友近、窓側二列目が風花・西園寺・理緒という席に決まった。
　盛本はそれぞれの班員をメモし、それを旅のしおり係の元へ届けてくるので、その間に自由行動時間にどのような場所を回るか話してお

けと旅行会社のパンフレットを各班に配って教室を出ていった。
　もっとも、話しておけとは言われたが細かく決めるのはしおりが配られてからだ。よって、今は新しい班員と共通の話題で話し合い、旅行前に親睦を深めるための時間という意味合いが強い。
　生徒たちもそれを分かっているので机を組み替えて合わせてはいるが、パンフレットを見ながらも自由時間のコース等を決めるより普通の雑談で盛り上がっている。
「ねー知ってる？　オニイトマキエイの事をマンタっていうんだって」
「水族館で見れるんですよね。私、沖縄って行った事ないから水族館もすごく楽しみにしてるんです」
　美ら海水族館で見ることが出来るというオニイトマキエイの別名を西園寺が言えば、風花が子どものよう――湊以外は実際に子どもではあるのだが――に目を輝かせ、パンフレットの水族館紹介を眺める。
　彼女は今まで両親の実家への帰省ぐらいで、ホテルに泊まるような旅行をほとんどしてこなかった。美術工芸部に入ってからは日帰りも含めて色々な場所に行くようになったが、それでも沖縄には行った事がなかったので非常に楽しみなようだ。
　そんな微笑ましい女子らの会話を聞いていた順平も、この流れならいけると踏んだのか、ここぞとばかりに知識を披露しようと会話に参加してくる。
「じゃあ、これ知ってっか？　マグロの事を英語でシーチキンっていうんだぜ！」
　良い笑顔を浮かべて自信満々に告げる順平。この知識は先日コンビニのシーチキンマヨおにぎりを買った際、裏の原材料に『シーチキン（マグロ）』と書かれていた事で得たものだ。
　それまでシーチキンが何の肉であるかなど意識した事はなかったが、自分が知らなかった事なら同級生も知らない可能性はある。
　そうして、仕入れたばかりのネタを言ってみたのだが、彼に集まっていた他の者たちの視線はどこか死んでいた。

話を聞きながらも作業を続けて無反応な湊はまだいい。だが、ニコニコと笑って話していたはずの西園寺など汚物を見るような蔑む視線で数瞬見るなり、まるで何事もなかったように再び笑顔で風花たちに話し始めた。
「……あ、それでね」
「ちょ、ちょ、反応薄くね？　そこは伊織君って英語も出来るんだねって意外性を褒めるとこだろ」
時が止まったままよりはマシだが、それでもスルーは悲し過ぎる。常識だったなら常識だろと突っ込むでもいいから反応が欲しかった。
順平が腰を半分浮かせて慌てたように言えば、湊を挟んで向こう側にいる友近が嘆息してから頬杖をつき言葉を返した。
「お前、自分で言ってて虚しくないか？　それにマグロが英語でなんて言うかは知らないけど、シーチキンじゃないってことは分かるぞ」
「え、マジで？　でも缶詰のシーチキンってマグロだろ？」
「いや、まぁ、それはそうだけどさ。ってか、留学してた有里君がいるんだし。そういうのは有里君に聞けば一発だろ」
そこでどうして自分を巻き込むんだと一瞬湊が嫌そうな顔をする。けれど、班員らの期待するような視線が集まっていたことで諦めたのか、湊はディスプレイ代わりの眼鏡についているオンオフのスイッチを押してから口を開いた。
「……一般的にマグロは英語でツナだ。ネイティブにいうならトゥナの方が近いが、ツナ缶とかっていうだろ。まぁ、正確に言えばツナはマグロだけでなくカツオなども含めた総称で、もっと細かくそれぞれの呼称がある。カツオなんてボニートやスキップジャックなんて言ったりもするしな」
普段あまり話さない湊も仕事や説明のときは饒舌になる。説明したがりという訳ではないが、相手にしっかりと教えてあげる面倒見のいい性格からの行動なのだろう。
他の者が感心したように聞いているのを確認しながら、湊は先ほど順平が言っていた『シーチキン』に関しても捕捉で説明をいれてゆく。
「そして、シーチキンは固有の商品名だ。さらに言えばツナがマグロ

やカツオの総称であるように、シーチキンには原材料にカツオが使われている場合もある。まぁ、カツオの方はシーチキンマイルドという商品の方に使われているから、ただのシーチキンならマグロだと考えて貰っていい」
そこまで話すと説明は終わりだとばかりに眼鏡のスイッチを入れ、湊は再びキーボードを叩くような仕草を始めた。
しかし、知りたい事はちゃんと教えて貰えたので、西園寺はパチパチと小さく拍手をしながら湊を称賛した。
「わぁ、ミッチーたら博識だね。伊織君も頭脳派アピールしたいならこんな風にためになる知識もちゃんと言えなきゃね」
「は、はい。今後は気を付けます」
間違った知識を自信満々に披露してしまったが、湊がマメ知識のように解説してくれた方に皆の意識がいったので恥はほとんどかかずに済んだ。
普段ならば寮の部屋に帰ってから恥ずかしさに悶絶するところなので、ほとんどダメージを負わずに済んだのは僥倖だろう。
そして、がっくりと肩を落として反省する順平に他の者たちがクスクスと笑う中、気を取り直した順平はせっかく同じ班になったのだから交友を深めようと、相手が作業中であるにもかかわらず湊に話しかけにいく。
「んじゃ、有里君さ。なんか知ってたら人に自慢出来そうな話のネタってないか？　出来れば覚えやすいやつで」
「どんなくだらない事でも、知らないよりは知ってる方が自慢できるだろ」
「そういうのじゃなくて、こう、いつか合コンとかするときに女の子の興味引けそうな話題とかさ。有里君クラスになるとモテテクの一つや二つはあるだろ？」
まだ中学生なので合コンなどしたことないが、高校生になったらせっかくの都会という事もあり、一度くらいは参加してみたいと思っている。
女子のセッティングが大変そうだが、そこら辺はサッカー部などに

所属している寮仲間に頑張って貰おうと思っているので、順平は今の内にスキルを磨いておこうと考えていた。
それ故、間違いなく女慣れしていそうな湊に掴みの要素だけでも教えて貰おうと思ったのだが、作業をしている相手から返ってきたのは淡々とした疑問の言葉だった。
「……そんなその場限りの相手にモテてどうするんだ？」
「え、いや、そういう場で運命の相手と出会う可能性もあるだろ？」
「運命の相手ならモテようとしなくても親密になったり再会できるだろ」
ぐうの音も出ないほどの正論に順平は思わず沈黙する。
確かに運命の相手ならば途中に何があろうが最終的にくっつく事になるだろう。どれだけ仲良くなろうが、交際などに至らなかったのなら、結局は運命の相手ではなかったという事だ。
実際は合コン中に女の子に興味を持たせたい程度に考えていたのだが、『運命の相手』という言葉を使ってしまったせいで、これ以上会話を続けられなくなった順平は、まるで燃え尽きたボクサーのように寂しく椅子に座っていた。
しかし、その様子があまりに不憫に映ったのか、今まで二人の会話の聞き手に回っていた友近から救いの手が入る。
「あ、あのさ。前から聞きたかったんだけど、有里君のまわりって女子ばっかりだけど本命っているの？」
「ちょっと、友近。そういうプライベートな事にずかずか突っ込んじゃ駄目だよ」
「いや、単純な興味だって。別に聞き流してくれていいんだけどさ」
理緒に注意されながらも恐々と相手の機嫌を窺うように言っている本人は、実に間抜けな質問だと内心で自嘲していた。
相手のまわりに校内でもハイレベルな女子が集まっている事は周知の事実だ。年上趣味である友近でも、女子らに囲まれている青年を年頃の少年として羨む気持ちは当然あった。
彼を囲っている女子の中に成人を迎えている教師が数名混じっている事も、彼を羨む理由としては挙げられる。

だが、それらを脇に置いておいても、友近は純粋な好奇心から誰が本命なのか気になっていた。
最本命は家族でもありよく一緒にいるチドリだろう。相手も傍から見ていて色々と複雑な想いを湊に抱いているのは分かるので、湊が少女を大切に思っている事もあって可能性は一番高い。
次点で有力なのは祭りを二人でまわっていたゆかりだ。お互いに他の者よりも遠慮のない態度で接しているので、距離感から言えば最も恋人らしく映る。
他の部活メンバーなどはどっこいと言った感じだが、それでもただの同級生よりも親しいようなので、風花がいることを気にしつつも友近は好奇心を優先して尋ねた。
すると、尋ねられた本人は新たにドイツ語らしき書類を手に取り、それらの内容を確認しながら淡々と答える。
「……普通、そういう話は旅行の夜にするものだと思うけどな」
「ああ、確かにそうか」
言われてみればその通りだ。修学旅行の夜に行われる好きな人の暴露大会は、定番中の定番である。
しかし、それを口にしたのが湊となれば話は別だ。彼もそういった事に理解や興味があったのかと、燃え尽きていたはずの順平が再起動し、他の誰よりも食い気味に距離を近付けた。
「え、てか、有里君もそういう話にノってくれるの？　うっわ、オレっち、なんか急に旅行の夜が楽しみになってきたんだけど！」
「誰も乗るとは言ってないし。他人の恋愛事情に興味なんてない。さらに言えば、本命も何も周りの者たちを特別異性として意識してもいないさ」
今まで遠く感じていた存在が恋愛話に乗ってくれるとなれば、順平は急に距離が縮まったように感じて旅行の楽しみが増えると喜ぶ。
しかし、湊は一般論で友近に言葉を返しただけであり、もっといえば自分の性別すら定まっていないのに恋愛も何もないと思っていた。
そこへジッと彼を見つめて話を聞いていた西園寺が、以前した会話の内容と齟齬を感じ、率直に疑問としてぶつけてくる。

「でもぉ、この前に山岸ちゃんを可愛いって言ったら同意してくれたよね？」
「え、そ、そんな話をしてたの？」
急に話題にあげられた風花は頬を染めて慌てたように二人に尋ねる。影で悪口を言われるよりはいいが、学内でもルックスが整っている者らに褒められていると聞けば、自分に自信のない彼女は嬉しさよりも恥ずかしさが勝ってしまうのだ。
そんな照れている少女の質問に西園寺がにっこりと笑って頷き、湊の方も西園寺と同様に話していた事は否定せずに眼鏡のスイッチを切りながら会話を続ける。
「同意したんじゃなくて否定しなかっただけだ。西園寺の言う通り山岸の顔の造形は整っているため、一般的に見て可愛いと言える部類に入るのは間違いない。柔らかい雰囲気や優しい声質も含めて癒し系と呼ばれるタイプだろう」
言いながら湊は眼鏡に繋がっていたコードを外し、左手中指で眼鏡の位置を直しながら風花の方を向く。
そして、一拍置いて再び口を開いた彼は、
「先ほど言った通り、俺は山岸を異性としては見ていない。だが、チドリの友人である事を別にしても〝山岸風花〟という個人を俺は好いているよ」
優しい声色で言って最後に穏やかな微笑を浮かべた。
「えっ、あの?! あ、あうぅ……」
途端、微笑を向けられた少女は首まで真っ赤すると、膝の上にぎゅっと握った拳を置いて俯き。他の者たちは非常に珍しい青年の笑顔の浮世離れした美しさに見惚れ、男子までもが頬を薄く染めて照れながら口を僅かに開けて暫し呆ける。
普段笑わない人間の笑顔のギャップは凄まじい物がある。青年は演技で笑顔を浮かべる事はあるが、極稀に引き出される天然の笑みの破壊力はその比ではない。とある社会科教師曰く、「本気で鼻血が出そうになる」ほどだとか。
それをまともに受けた初心な少女は、彼の優しい微笑と素直な言葉

に心を乱されこの時間中は使い物にならないだろう。
流れ弾でも十分なダメージを負った順平は、彼は男で自分はノーマルだと心の中で何度も繰り返す事でようやく復活すると、先ほどの湊の言葉と表情に対する感想を述べる。
「……うっわー。なんていうか、うっわー。これすげぇな。仮に狙ってだとしても、イケメンって平然とこういう事を言えるからモテるんだろうな。自分が女子ならキュンときてる自信あるわ」
「キュンどころじゃないよ！　まどか、自分が言われたんじゃないのに危うくキュン死にしそうになっちゃったもん。いいなー、山岸ちゃんったらいいなー！」
「これで告白じゃないって不思議だね。私は自分が不意討ちにこんな風に言われたら、それまで何とも思ってなくてもその後から意識しちゃうかも」
「理緒でもそうなるなら、他の女子もそんな感じかね。素で駆け引きまで出来ちゃうとか、有里君ってホントに女の子ホイホイだな」
順平らは口々に先ほどの湊の発言と笑顔について楽しそうに話しているが、対照的に湊のテンションは低いままだ。
両親の死後から感情の一部が麻痺している湊は楽しい事や嬉しい事に対し、感情の起伏が人よりも起こり辛くなっている。そのため笑顔など滅多に出るものではなく、普段の表情がつまらなそうな物であったり冷たかったりするせいで、貴重な湊の笑顔を見た人は今の彼らのように騒ぎ出す。
しかし、少し笑ったくらいで騒がれた方は、笑う度に大騒ぎされるのでは鬱陶しい事この上ないとして余計に笑わなくなるのはある意味必然だった。
騒いでいる者たちを見て溜め息を吐いて立ち上がると、湊は自分の席を離れて風花の元に向かい。彼女が倒れないように注意して椅子を引くなり、貴重品や弁当の入っている相手の鞄を肩にかけ、そのまま風花の背中と膝の裏に手を回して抱き上げた。
「……山岸が極度の緊張で貧血を起こしたようなので保健室に連れていってくる。お前らはそのまま雑談しておいてくれ。どうせ次は昼

休みだから、この授業中は多分戻らない。教師が帰ってきたらその事を伝えておいてくれ」
「あらら、山岸さん大丈夫なん？」
「症状自体は普通の貧血だ。仮に何かあっても櫛名田はあれで優秀な医者だし、何も心配はいらない」
それだけ言うと湊は教室中の注目を集めながら教室を出ていった。扉が閉められ少しすると先ほどの湊について他の班の者たちも騒いでいるが、理由は風花がお姫様抱っこで運ばれて行ったからだろう。
お姫様抱っこは女子の憧れと言われる事がよくあるが、実は男子の方でもする側として憧れを抱いている者は大勢いる。
憧れている男子らの理想とするシチュエーションは様々で、今のように貧血になった女子を保健室に連れていくのは、トップ3に入るほどの人気シチュだった。
実際は、女子らの平均体重が男子に比べれば軽いにしても、それなりの重量を持ち上げているのだから筋力が重要であったりする。
教室から保健室までは階段を下りなければならないので、ただ重い物を持って道を歩く以上に大変だが、そこは湊がやっているのだから補助すら必要ないと全員が謎の信頼を寄せていた。
そうして、湊のお姫様抱っこについて一同が盛り上がっていれば教師が帰って来たため、西園寺らが頼まれていた言伝を伝えて無事に授業を終了し。昼休み中ずっと休んで風花も気分がマシになったのか午後の授業から復帰した事で、クラスメイト達も安心して午後の授業を受けたのだった。

第百三十話　それぞれの放課後

6月9日（土）
放課後――月光館学園

土曜日は四時限目までしか授業がないため、平日ならば昼休みにあたる時間から生徒たちはそれぞれの放課後を過ごしている。

三年生は修学旅行に向けて実行委員が話し合いをしていたりもするが、実行委員でない者や他の学年の者たちには関係のない事だ。

生徒会長などという面倒な役職に就いている湊もそれは同様であり、各自が夏休み中に締め切りのある別々のコンクールに作品を応募するという事で、六月に入ってから分かれて活動している美術工芸部への出席をさぼり帰ろうとしていた。

普段部活をさぼろうとすると佐久間やゆかりにチドリといったメンバーが五月蝿いのだが、幸いなことに今年は風花以外別のクラスなので顔を合わせずに帰ることが出来る。

さぼる理由も「ちょっとアイデアにつまったから街の風景を見てくる」と風花に伝えれば、彼女は笑顔で「いいアイデアが浮かぶといいね」と見送ってくれるので、高等部にあがってからも彼女とだけ同じクラスになるようにクラス分けに細工をしようかと考えたりしていた。

そうして、コートのポケットに手を入れたまま階段を下りて一階までやってくると、階段を下りて直ぐの壁際にいた生徒会会計で後輩の宇津木が、湊がいることに気付いたようで顔を輝かせて挨拶をしてきた。

「会長、お疲れ様です」

「……ああ、お疲れ。宇津木も今から帰るところか？」

「いえ、あの、最近友達が一人出来て……その子とお昼を食べにいく約束をしているんです」

いじめの件が解決してから目を覆っていた前髪を少し切った彼女は、友人が出来て一緒に遊べるのが嬉しいのかはにかむような小さな笑顔を浮かべている。

一年の頃から友人が一人もおらずいじめを受けていた彼女にとって、いじめから解放されて新たに友人まで出来た今が幸せなのだろう。
以前よりも少しだけ明るくなって歳相応の笑顔を見せる彼女に、湊もよかったなと心の中で祝福しながら優しい表情で返した。
「そうか。今日は一日晴れる予報だったから楽しんでくるといい」
「はい。あ、でも、その友達を会長に紹介したいのですがお時間宜しいでしょうか？」
どこか照れくさそうに尋ねてきた彼女は、友達を湊に紹介したい気持ちと、友達に湊を紹介したい気持ちの二つを持っているらしい。
湊としては後輩が楽しい学校生活を送れるようになって良かったとは思うが、正直、相手の交友関係までは別に気にならない。
流石にポートアイランド駅の路地裏にたむろっているような相手と知り合いになっていれば気にしたりもするが、彼女の様子を見る限りでは学校で出来た友達に違いない。
それならば紹介して貰う必要はないと言いかけたのだが、湊が口を開くよりも先に宇津木の友人とやらが湊たちの許へ到着してしまった。
「香奈ちゃん、おまたせぇ。お掃除おわってきたよー」
「会長、この子がさっき話していた子です。羽入さん、この方が以前話した会長よ」
ぱたぱたと走ってやってきたのは、中学二年生にして美紀を除く部活メンバーより身長が高く、胸に関しては美鶴と同等か僅かに勝るほど豊かな羽入かすみだった。
確かに二人は同じクラスだったが、タイプの異なるこの二人の組み合わせは中々に珍しいと思って眺めていれば、宇津木に言われて不思議そうに湊を見ていたかすみが口を開いてきた。
「はじめまして会長さん。羽入かすみって言います。えっとぉ、よろしくね」
「……ああ、よろしく」
住んでいる部屋が隣で、何度も家に遊び来たり食事にでかけたりし

ているというのに、どうして相手がはじめましてと挨拶してきたのか湊には分からない。
しかし、目の前にいる人とずれた思考の持ち主は、宇津木から〝会長〟として紹介された事で、ここにいる湊を〝会長〟という人物として認識している可能性があった。
〝会長〟と〝有里湊〟をイコールで結ぶ事は可能だというのに、どうしてそんな偏った認識になるのかは分からないが、とりあえず挨拶した後も不思議そうに首をかしげているので、顔に見覚えがあるとは思っているようだ。
この後はどのような反応を見せるのか湊が黙って観察していれば、急に「うんうん」と何かに納得したように頷いた相手が、湊を見上げながら手招きを始めた。
「ねえねえ、ちょっとしゃがんで」
「……こうか？」
何をするつもりか分からないけれど、しゃがんで欲しいのなら言う通りにしてやるかと、湊は腰を屈めて相手と目線を合わせる。
傍らで見ている宇津木もかすみが何をしたがっているのか分からないようだが、屈んだ高さはそれで丁度良かったらしく。「ありがとぉ」と笑ってお礼を言った彼女は、おもむろに湊の顔へ両手を伸ばすと、そのまま頭の後ろまで手をやり突然眼帯の留め具を外して解いてきた。
今いるのは階段を下りてすぐの廊下の壁際で、湊の左側に宇津木が立っており、正面には階段を背にしたかすみが立っている。
よって、階段を下りてきた生徒はかすみが壁となり、本人の左側にいる宇津木も位置の関係から右眼を見る事は出来ない。
しかし、留学中に怪我を負って眼帯をつけている話は有名なので、その傷を隠すための眼帯を外すという奇行に宇津木は顔面を蒼白にして叫び声をあげた。
「きゃぁぁぁぁぁっ!?　だ、ダメ！　羽入さん、会長にそれを返して！　申し訳ありません、会長！　この子少し変わっていて本人に悪気はないんです。ですから、どうか、どうか重い処罰だけはっ」

「……お前、俺が誰にでも罰を与える人間だと思ってるだろ。別に気にしてないからいい」
ぶるぶると震えながら土下座で懇願してくる宇津木に言いながら、湊はかすみの手から眼帯を取り返すと髪を挟まないように付け直す。そして、長い前髪で眼帯を軽く隠すと宇津木に手を貸して立たせた。
立ち上がった彼女の顔色はまだ青いが、騒ぎを起こした本人は状況を理解していないのか、にっこりと笑って湊に話しかけてくる。
「会長さんのお目々の色って綺麗だね。あのね、わたしのお友達に湊君って人がいるんだけど、湊君も黒い眼帯でお目々を隠してるの。予想ではあれは多分隠された力を封印してるんだと思うんだけど、会長さんも同じなのかな？」
「別に力は隠してない。というか、お前と友達になった覚えもない。ただの近所の住人だろ」
「え？　わたしと会長さんの家ってご近所さんなの？　あのね、さっき言った湊君もご近所さんなんだよ」
「……そうか。俺がその有里湊本人だと説明しているつもりだったんだが、お前ははっきり言わないと理解しないタイプだったな。いいか、羽入。俺はお前の知っている有里湊だ。そして、月光館学園の生徒会長でもある。ちゃんと覚えておけ」
確かに湊の話し方は少し回りくどい物があるが、要点も押さえているので基本的な意味は伝わるはずだ。
だが、受け取り手が全員同じように意味を理解出来る訳ではなく、ここにいる羽入という少女ははっきり説明しないと湊の言葉を理解しないタイプだった。
頭は悪くないはずなのに理解出来ない理由は、湊と話すときには〝会話をしている事〟が楽しいという風に意識の何割かが裂かれているようで、話の内容にいまいち集中していないからしい。
要するに親しい者と一緒にいてはしゃいでいる子どもという訳だが、その子どもの相手をしている方は疲れるばかりである。はっきりと告げた事で湊が本人だと認識したかすみは、感心したように頷いて宇津木に話しかけた。

「そうなんだぁ。ねぇねぇ、香奈ちゃん。湊君って会長さんなんだって、すごいね」
「会長がすごい方なのは常識だけど、会長は羽入さんとお知り合いだったのですか？」
「家が近所なんだ」
「仲良しだからよく遊ぶんだよ。この前はね。下着を買いに連れて行ってもらったの。どれがいいかなぁって思って、湊君にも選んでーってお店に入って黄色い猫さんのを買ったんだぁ」
かすみが楽しそうに先日二人で行った買い物の話をすると、宇津木は制服のジャケットの内ポケットからメモ帳と筆記具を取り出し、なにやら熱心にメモを取り始める。
チラッと湊が見たところ、メモ帳には『会長は黄色い猫柄の下着が好き』と書かれていた。話を聞いていればそう勘違いするのも無理はないが、実際のところ別に湊に好きな下着の色や柄などはない。
身に付けている者に似合っていれば、別に風花が布地の少ない大人びた黒い下着をつけてようが構わないし。逆に美鶴がファンシーなクマがプリントされたパンツを穿いていようと気にしない。何せ脱がす機会どころか見る機会もないのだから、勝手に好きな物を身に付けろとしか言いようがないのだ。
故に、後々に変な誤解を生みそうだと思った湊は、しっかりとこの場で誤解を解いておくため、マフラーから取り出した煙管を咥えながらうんざりした表情で間違いを指摘する。
「……言葉の順序がおかしいぞ。俺の腕を引っ張り無理矢理に店へと入らせ、どれがいいか考えた末に自分で選んだ下着を買ったんだろ。お前の言い方では俺が選んだようじゃないか」
「一緒にお買い物して楽しかったね。また行こうね」
「……暇だったらな」
素っ気なく返す湊は、ＥＰ社の仕事があるので基本的に暇なときなどないが、それでも時間を作って付き合ったりする甘さを持っている。
そんな青年だからこそかすみも信頼して懐いている訳で、また一緒

に遊べる事に嬉しそうに頷いた。
傍らにいる宇津木はそんな二人の会話を少し羨ましそうにしており、気付いている湊としては別に二人を相手にしようが一緒なので、遊んで欲しいなら素直に言ってくれればいいものをと考える。
だが、性格的にそこまでまだ踏み込めないようなので、機会があれば自分の方から声をかけてやるかと考えつつ、そろそろいい時間だったので学校を出ようと二人に声をかけた。
「二人は昼を食べに行くんだろ。俺も用事があって学校を出ないといけないから、そろそろ帰ろう」
「そっかぁ。それじゃあ、湊君またね」
「はい、それでは失礼します」
廊下から生徒玄関まで移動して靴を履き替えると、宇津木とかすみはモノレールに乗るらしく駅に向かって去っていった。その後ろ姿を見送った湊も、学校の近くにいると探知能力でチドリが探そうとしてくるため、早々に立ち去ろうと歩いてムーンライトブリッジの方へと向かうのだった。

――巌戸台分寮

その日、学校を終えて早々に寮に帰って来た美鶴は、制服から私服に着替えると落ち着かない様子でラウンジにいた。
同じように学校から帰って来た荒垣はその様子にトイレでも我慢しているのかと考えたが、そんなデリカシーのない事を尋ねられるのは真田くらいなものなので、キッチンに近いテーブルで一人昼食を取りつつ今も時折眺めている。
お互いに会話のないまま時間だけが過ぎていき、昼食を取り終えて荒垣が洗い物まで終わらせた頃、寮に車の整備士のようなつなぎ姿の男が一人はいってきた。
「失礼します。〝桐条美鶴様〟へ単車のお届けにまいりました」
「ご苦労様です。桐条美鶴は私です」
「あ、本日はよろしくお願いします。早速確認をお願いしたいのですが、駐車場所はどちらでしょうか？　そちらまで私どもの方でお運び

します」
「どうもありがとうございます。それでは案内しますので一度外へ」
やってきた男にそういうと、美鶴は玄関から出て行って回り込むように別館の方へ歩いて行ってしまった。
男は単車のお届けと言っていたので、ここへはバイクを運んできたのだろう。けれど、話を聞いていた荒垣は、美鶴が二輪免許を持っていると知らなかったので、最近のお嬢様はバイクも乗るんだなと純粋に感心していた。
＊＊＊
厳戸台分寮は各自の私室や作戦室のある本館と、風呂やオープンキッチンのある別館に分かれている。寮の駐車場もその別館側にあるので、運送屋には車ごとぐるっとまわって貰ってそちらでバイクを受け取ることになった。
駐車場まで入ってきたトラックが止まり、先ほどの男ともう一人が運転席から降りてきてコンテナの扉を開けている。
そして、一人がコンテナの中に入ってスロープを取り付ければ、下にいた男がサポートしながらバイクが現れた。
（……美しい）
コンテナから現れた白いバイクを見つめ、美鶴は心の中で拍手を送る。このバイクは情報誌やパンフレットを眺めて美鶴が自分で決めたものだ。
ボディはイタリアの名門ドゥカティ社のドゥカティ９００ｓｓのものだが、所持している免許の関係からエンジンを同社ドゥカティ４００ｓｓの物に乗せ換えて排気量を下げており、彼女の持っている普通二輪免許でも乗ることが出来る。
エンジンを乗せ換えるという面倒な事をするくらいならば、最初から４００ｃｃ未満の車種に乗ればいいのではないかとも周りからは言われたが、美鶴はドゥカティ９００ｓｓのデザインに一目惚れしてしまったのだ。
それ故、自分でも我儘を言っていると自覚しながら、基本ボディはそのままにエンジンを乗せ換え、マフラーをセンターアップマフラー

にし、細々とした各部のパーツなども好みの物に換えて貰ったのである。
ただでさえ高級なバイクのエンジンを乗せ換え、それに合うようにパーツを交換した事で総額五百万近くかかっている。
彼女が選んだセンターアップマフラーというのは、一般的に車体の左右どちらかから出ているマフラーが、車体の真後ろから出ているため空気抵抗などは少ないのだが、その分車体の下を通るように伸ばしてマフラーが長くなるので重量も増すし、何よりタンデムで乗った者の足のすぐ近くにマフラーが来るので熱くて二人乗りに向かないといったデメリットがあった。
タンデムに関しては後ろには通信補助機材を積むという話なので、そちらは無視しても構わないかもしれないが、車体重量の増加は宗家御令嬢の安全のために何としても防がねばならないと、桐条グループの総力をあげて軽量パーツを使うなどしてクリアしていた。
そうして、そんな特注も特注なカスタムバイクが車から下ろされると、美鶴の前まで運ばれスタンドで止められた。
「えー、工場の方で操作や各部の扱いなどについて説明を受けておられると聞いていますが、もう一度説明しておいた方がよろしいでしょうか？」
「いえ、結構です」
「かしこまりました。それではガソリンは満タンまで入れております。キーはこちらに一本と、予備にもう一本ありますので、別々に保管するなどしてなくさないようにご注意ください」
「ええ、ありがとうございます」
革製のキーホルダーがついたメインキーと何もついてない予備のキーを受け取り、美鶴は喜びを我慢しきれず僅かに口元を歪める。操作などは男が言っていた通りカスタムを請け負った桐条系の工場の方で聞いていたが、工場で跨ったりするよりも、こうやって自分の生活拠点で愛車の鍵を手にした方が実感も湧いてくるものだ。
説明をちゃんと聞いておかなければならないのは分かっているが、早く実物に触りたいという気持ちが急かしてくる。こんな事では事

故を起こすぞと叱咤しても、やはり自分が待ち望んでいた物を手にするときには美鶴でも自分をコントロールしきれない。
　しかし、そんな心の内を悟られるのは流石に恥ずかしいため、なんとか笑顔以外は普段通りを装う事で男の話を乗りきった。
「それでは自分たちはこれで帰らせていただきます。何かありましたらお電話ください」
「どうもありがとうございました」
「いえ、こちらこそありがとうございます。失礼します」
　それだけ言うと男たちはトラックに乗って駐車場を出ていった。そして、相手が完全にいなくなった事を確認するなり、美鶴はやってきた愛車に近付き美しいボディを手で撫でる。
　普通は車用ワックスなどがついているので触れない方がいいのだが、あまりの美しさについ手が伸びてしまったのだ。
　どことなく古い新幹線を想起させるような全体的に丸みを帯びた可愛らしいデザイン。同型機だけあって４００ｓとよく似ているが、ライトの形など細かい点が異なっているため、やはり無理を言って９００ｓのボディにして貰って良かったと改めてその出来にうっとりする。
　シートからハンドルまで距離があるので、乗るときにはきつめの前傾姿勢になるが、美鶴は女性にしてはそれなりに身長がある方であり、多少上半身を寝かす形になろうとバイクと一体になれるような気がするのでむしろプラスだと思っている。
　普段は大人びた表情ばかりしている美鶴も、こういったときには歳相応の顔で喜んだりする。ニコニコと傍から見れば珍しい表情でバイクを様々な角度から見続け、十分ほど経ってようやく満足したのか、フフッ、と笑って顔をあげたとき、
「きゃっ!?」
　美鶴はすぐ傍に荒垣が立っていること気付き、驚きの声をあげて飛び退いた。
　ジャケットだけ脱いだ制服姿で立っていた相手は、美鶴が驚いて可愛らしい声をあげるのを初めて聞いたため驚いた様子だが、一方の美

鶴はずっと見られていた事と変な声を出してしまった羞恥で顔を赤くしている。
だが、ここで感情に任せて行動すればバイクに傷がついてしまうので、何とか踏みとどまると怒りを抑えながら口を開いた。
「……いつから居た？」
「オッサン達がお前に色々と説明してるときからだ。バイクなんて乗るんだなと思って見に来たんだが、どうやら邪魔したらしいな。俺は寮に戻るから好きなだけ続けてくれ」
つまり、相手はほぼ最初からいて、バイクを眺める美鶴を十分以上も黙って見ていた訳だ。好きに続けてくれといって荒垣は背を向けて本館に帰ろうとするが、どう見ても笑いを堪えて肩を震わせており、しっかりと気付いていた美鶴は相手を呼び止める。
「……おい、肩が震えているぞ。笑いたければ素直に笑ったらどうだ？」
「ぶふっ……いや、これは思い出し笑いだから気にしないでくれ」
「そんな見え透いた嘘が通じるか！」
そんなにタイミングよく思い出し笑いなどするはずがない。美鶴がそう指摘する間も荒垣は笑いを堪えており、美鶴がした何らかの行動が彼のツボにはまったようだ。
「どっちだ。バイクを見ていた事と驚いた事、どっちで笑っている？」
自分では判断できないなら本人に尋ねるしかない。腕を組んでやや睨むように質問をぶつければ、ようやく笑いが治まったらしい荒垣は素直に答えてくる。
「バイクを見ていたのは別になんともねえ。アキが新しいプロテインを買ったときも似たような感じだからな。欲しかったモンを手にしたら誰だって似たようなもんだ」
「なら、驚いたのを見て笑ったということか。しかし、それはずっと黙って見ていた君のせいだろう。見ていたのなら声をかければいいじゃないか」
正直、新しいプロテインを買った真田と似たようなものだと言われ、そんなにも落ち付きのない姿を自分は晒していたのかと美鶴は若

干のショックを受けた。
新しいプロテインを買ったばかりの真田は、筋肉をつけたいのかプロテインを飲みたいのか、はっきり言ってどちらが目的なのか分からない状態になっている。
それよりも目的が明確な分だけ美鶴の方がマシだが、傍から見れば似たような反応に映るといわれればやはり内心のショックを隠しきれなかった。
驚かされた事や侮辱に等しい評価を受けたことで頭に血が上っていた美鶴は、腹いせでしかない棘のある言い方で嫌味八割の質問をぶつける。
「君はあれか。女子を影ながら眺めるような陰湿で下衆な趣味でも持っているのか？　文字通り、悪趣味な事この上ないな」
「は、はぁっ!?」
急にそんな事を言われた荒垣は当然驚き、それと同時に何故そんな事を言われなければならないのだと憤りを感じた。
何せ異性を影ながら眺めるという一種のストーキング行為は、目の前にいる相手の専売特許だったはずなのだから。
冗談にしてもお前にだけは言われたくないと思った荒垣は、普段真田と口喧嘩するときのように声を荒げて言い返す。
「そりゃ、オメーの趣味だろうが一緒にすんな！」
「ば、馬鹿を言うな！　有里の件は誤解だと言ったはずだ！」
「残念だったな。加害者がどう言おうが被害者がそう感じたら犯行成立なんだよ！」
「異議あり！　それならばお前の行動も、私の主観でストーキングやピーピングと判断していいはずだ！」
「執行猶予期間中のお前の言葉なんざ何の信憑性もねぇよ！　人を覗き魔呼ばわりする前にテメェの行動を顧みてから言いやがれ！」
お互いに不名誉なレッテルを貼られまいとして声を荒げて反論し合う。ここに真田がいれば呆れたように二人とも馬鹿だろと言っていただろうが、言い合っている二人は真剣そのものだ。
それから小半刻ほど言い合って息を乱し肩を上下させながら睨み

合う二人。
　さらに一分ほど睨み合っていると、突然美鶴がフッと力を抜いて静かに口を開いてきた。
「……やめよう。言い争っても疲れるだけで何の得にもならない」
「ん、ああ。まぁ、黙って見てて悪かったな。お前が免許を持ってるって知らなかったから、ちょっと興味があって見に来ただけなんだ」
　急に冷静になった美鶴に荒垣も面食らうが、確かにこんな不毛な言い争いを続けたところで疲れるだけだ。
　話し合うだけの冷静さを取り戻したのなら、自分も謝っておくべきかと謝罪を口にし、それを聞いた美鶴は普段通りの綺麗な笑みを浮かべた。
「そうか。実はこれは通信補助機材を運ぶためのバイクなんだ。結構な大きさがあるものを運んで歩くのは効率が悪いだろう？　だから、いっそ移動手段も兼ねてバイクに積めるようにして貰ったんだ。当然黄昏の羽根も積んでいるので影時間でも動かせる」
　このバイクは以前美鶴が父に話していた通り、通信補助機材を運ぶための役割を担っているため影時間でも稼働するよう黄昏の羽根を積んでいる。
　現場に急行する移動手段にもなるので、美鶴としてはイレギュラーシャドウの出現を今から心待ちにしていたりもするのだが、実際のところバイクに乗れる美鶴はいいが他の二人は走るか自転車で追いかけるしかない。
　美鶴一人が行ったところで戦いを始める事は出来ないが、負けず嫌いな真田のことだから、きっとバイクの速度に勝てる訳がないと思いつつも、全力で追いかけて戦いにも参加するだろう。
　しかし、そんな事を繰り返せば戦う前に体力が切れて真田たちが潰れてしまう。その事に気付かないまま、通信補助機材の運搬手段と聞いて荒垣の方も納得したように頷く。
「なるほどな。しかし、御令嬢がバイクに乗るなんて言って周りは反対しなかったのか？」
「フフッ、当然今も大反対さ。だが、我々の活動には〝必要な物〟だろ

う？」
「へっ、確かにそうだな。荷物を抱えてシャドウから逃げる訳にもいかねえし。御令嬢の安全を考えたらバイクのがマシだ」
今まで敵から逃げるような事はほとんどなかったが、通信補助機材にも大切な黄昏の羽根を積んであるため、逃げるときには機械を置いていったりは出来ない。
本当に死にそうなときには道路脇に置いて影時間が終わってから回収する事になるだろうが、それでも抱えて逃げるという間抜けな姿を晒すよりは、バイクで逃げる方が安全ではあるだろうと荒垣も同意した。
「それで、今からちょっとしたツーリングにでも行ってくるのか？流石に初めて公道走るのが影時間って訳にもいかねえだろ？」
「そうなんだがな。あまり道も知らないので、正直どこへ行こうか悩んでいる。近場で比較的交通量も少なく楽しめそうな場所はないか？」
美鶴がいつ免許を取ったのかは分からないが、見たところ公道を二輪で走った経験はないと思われる。そんな状態で影時間に初走行など危険過ぎてさせられないので、荒垣が試しにどこかへ出かけて来るのか尋ねれば、美鶴は地元民である荒垣に良い場所はないかと聞き返してくる。
巌戸台は都会の湾岸部にあるので、交通量が少ない場所というと住宅街寄りになってしまう。けれど、そんな場所を初心者がバイクで走ればどんな事故を起こすか分からないので迂闊には勧められなかった。
「公共の交通機関除けば徒歩かチャリでしか移動しないやつになに聞いてんだ。だがまぁ、タルタロスに行く事を考えれば、やっぱ学校を目指すのが一番なんじゃねえか？　知らない道よりも知ってる方が落ち着いて運転出来るだろ」
「確かにその通りだ。いいアドバイスをありがとう。では、準備して学校へ向かってみるとしよう。荒垣も後ろに乗るか？」
学校までのツーリングに誘う美鶴の顔には笑顔が浮かんでいる。

彼女の私服は乗馬するときのような格好なので、これからすぐに行ってくるつもりなのだろう。
今日はこれと言って用事もないし、名家の御令嬢の初ツーリングに同乗させて貰えるのは非常に名誉な事だが、荒垣は小さく笑うと首を横に振った。
「遠慮しとく。初めての公道運転で二人乗りとかあぶねえだろ。何より、お前と二人乗りしたらどんな噂がたつか分かったもんじゃねえ」
「フフッ、それは困るな。では、君も出掛けるなら戸締り等は頼む」
「おう。こっちは気にしねえで楽しんでこいよ」
そういって話しながら二人は一度寮に戻ると、自室からグローブとヘルメットを持ってきた美鶴は出てゆき。すぐ後に別館の方から聞こえたバイクの音が遠ざかるのを荒垣は静かに感じていたのだった。

第百三十一話　ＥＰ社のお仕事

６月１６日（土）
午前――港区・新興開発地区
港区の北のはずれ、中央区にほど近く以前まで旧工場地帯と呼ばれてその場所は、ＥＰ社の手が入り開発が進んだ事で新興開発地区と呼ばれるようになっていた。
真新しい病院や工場、オフィスに大型スポーツジムなどＥＰ社関連の建物が建ち並ぶ広大な土地の前に、四月から路線が増設された都営バスがやってくるとキャリーバッグを持った女性が一人降りてくる。
歩く度ふわりと揺れる肩まで伸びた金髪、袖を前で結んだ薄いカーディガンを肩にかけた半袖の花柄膝丈ワンピースを着こなし、黒のハイソックスとブラウンのヒールサンダルを履いて可愛らしいお洒落な服装で現れたシスター・アンナは、初夏の日差しに目を細めながらＥＰ社の建物を見やった。
（広い場所ですね。色んな建物がありますが、公園なども敷地内にあるようで他よりも自然が豊かなようです）
都会だと聞いていたので自然がないのは寂しいと思っていたが、花壇や植え込みだけでなく、広い公園もあるようで近辺の土地の中では最も自然が多いのではないかと思われる。
来る途中には海も見えていたので、立地としては最高の場所だと感じながらパンフレットの地図を確認して、シスターは約束の場所を目指し敷地内を進んでゆく。
（小狼さん……ではなく、湊さんの話では公園まで行ってから海の方へ歩けばあるんでしたよね）
彼女が目指しているのは敷地内に建っている教会で、今後の彼女の務め先となる場所だ。
暮らす場所はＥＰ社の社員寮だが、先にこちらに来て欲しいと言われているので、湊から普段の名前を教えて貰ったシスターは聞いていた順路を進んで教会を探す。
ＥＰ社の敷地は奥が海側として見たとき、一番左が広大な工場区

画、その横に手前からオフィス、スポーツジム、食堂が並び、広い公園と教会を間に挿んで一番右側に病院が建っている。
社員寮などはここから徒歩十五分ほどの場所にあり、少し歩いた場所にはＥＰ社が土地を提供しているショッピングモールや遊戯施設などもあるので、ポートアイランドや巌戸台が桐条の街ならこちらは既にＥＰ社の街といっていいほどＥＰ社の力が及んでいた。
病院が始まるのは七月二日の月曜日からなので、病院にはまだ研修中のスタッフしかいない。それでも公園では近所の人たちが温かい日差しの中でのんびりと過ごしており、少し離れたオフィスの方ではやる気に満ち溢れた顔のサラリーマンたちが歩いているので、随分と活気のある街だとシスターは公園の中を歩きながら思った。
そして、公園に生えている色んな種類の木や、置かれているプランターの花などを眺めながらゆっくり進んでいると、あるとき急に荷物が軽くなって何事だとそちらを見る。
すると、いつの間に現れたのか、学校の制服らしき物の上からフード付きのコートを着た湊がいて、彼女の持っていたキャリーバッグを持ち上げていた。
「あ、湊さん。どうもお久しぶりです」
「……日本語が上手いな。というか、シスターとは思えないお洒落な格好に少し驚いた」
「昔より規則が緩んでいて休日は私服で過ごしても問題ないんですよ」
「そうなのか。まぁいい、迷っているのかと思って迎えに来たんだ。荷物は持つから教会へ行こう」
久しぶりに会ったシスターはしっかりと日本語をマスターして流暢に話して来た。元々勤勉な性格のようなので、現地の人ともコミュニケーションが取れるように頑張ったのだろう。
彼女の荷物を持ちながらそう考えた湊は、近辺にどんな店や建物があるかを話しながら教会へと向かった。
＊＊＊
「大きな教会ですね……」

教会の前についたシスターは、自分がいたシャテーニュ村の教会の数倍の大きさの建物を見てしばし呆ける。
暮らしている人口が違うからというのがその理由だが、こんな大きな教会を一人で切り盛りするのは流石に無理だと思い、自分以外に働く者はいるのかを青年に尋ねた。
「あの、私以外にも働く方はおられるのですか？」
「シスター一人だが？」
「え、流石にそれは……」
以前いた教会でも街の人に少し手伝って貰ってどうにか掃除などが出来ていたのだ。聖職者としての業務を行いながら、その倍近い大きさの建物を一人で掃除したりするなど絶対に不可能。
そもそも、司祭がいないのでは教会として活動できないのではと思って、やや困惑した表情で隣の青年を見上げると、相手は煙管など咥えて軽い調子で口を開いてきた。
「まぁ、本当は司祭が一人とブラザーとシスターが四人ずついる。ブラザーは二人が外国人、シスターは一人が外国人なので、司祭とシスター・アンナを含めれば男女比は五対五だな」
「んんっ、もう！　そういう冗談で人の反応を楽しまないでください！」
「信じる方がどうかしているだろ。疑う事を知らないのは純粋ではなく無知というんだ」
からかわれた事を怒ってシスターが抗議するも、湊はまるで相手をせずに扉の方へと歩いてゆく。
以前、廃人状態から復活したばかりの頃はもう少し優しげな感じだったというのに、再会してからは年上である自分にもタメ口で話して敬意の欠片も払っておらず、シスターは湊の変化に未だに慣れずにいた。
年齢を考えると一回りほど違うので、生意気盛りの子どもと思えばおかしくはないのだが、やはりシスター以上に大人びた雰囲気を纏っている事で、実は年上で年下の自分をからかっているのではと疑っている。

もっとも、疑ったところで湊が戸籍上は十五歳になった青年である事は覆しようのない事実である。肉体年齢は十八・十九歳である事を考えてもシスターよりは若いので、湊が大人びているのはそんな雰囲気を纏ってしまうような人生を生きてきた以外に理由はなかった。

そうして、先をいく湊に置いて行かれぬよう後に続き、彼が開けた扉から聖堂内に入ったとき、目に飛び込んできた光景にシスターは思わず言葉を失った。

そこに広がっていたのは、色取り取りのステンドグラスを通して指し込む光に照られた幻想的な空間。まるでパリで見たサント・シャペルのようだと、感動のあまり一筋の涙を流し、彼女は感謝の祈りを捧げずにはいられなかった。

「主よ、私をこの場へとお導きくださった事に感謝致します」

ポケットにいれていたロザリオを取り出し祈りを捧げたシスターは、顔をあげると広い聖堂の中を進み、どのような柄のステンドグラスなのかを見ていく。

教会のステンドグラスには柄自体に意味が込められているものや、何かの場面を切り取った絵を象ったものなどがある。

この聖堂のステンドグラスは青を基調としながら様々な色を使って複雑な柄を描いているので、きっと何かの意味が込められているのだろう。教会を建てた企業の者ならば意味も知っているのではないかと、後ろにいた湊に尋ねようとしたとき、奥の扉が開いて一人の老人が現れた。

「おお、着いていらしたのですね。はじめまして、シスター・アンナ。私はこの教会を任された司祭のアンデレといいます。どうぞよろしく」

「はじめまして、修道女のアンナです。こちらこそ、よろしくお願いします」

現れた老人は少し背の低い白人男性で、白髪を短く切り揃え身なりに気を遣っているようだった。優しげな雰囲気はシャテーニュ村のニコラ司祭に少し似ていると感じながら、シスターは司祭にステンドグラスについて尋ねる。

「とても素敵な教会ですね。ステンドグラスから差し込む光に照らされた聖堂を見て、あまりに幻想的過ぎて感動しました」
「ふふっ、我々も同じですよ。他の者たちは感動のあまり涙を流していました。とても神聖で侵し難い場所だと、皆、時間があるとここへ来て祈りを捧げています」
「お気持ちは分かります。それであの、こちらのステンドグラスにはどのような意味が込められているのですか？」
「それは作ったご本人に聞いた方がよろしいかと。やはり製作者自身の言葉の方が伝わる物もありますから」
　言いながら司祭はシスターの隣にいる人物に微笑みかける。そこには彼女も知る青年が一人いるだけだが、まさか彼が作ったのかとシスターは驚きながら尋ねた。
「え、湊さんが作られたんですか？」
「俺はデザインしただけで作ったのは職人だ。地震大国だから割れないように強化ガラス製だぞ」
「それでもすごいです。どういった意味を籠められているのか教えてください」
　言いながら湊に近付き、シスターは瞳を輝かせながら教えて欲しいと頼み込む。
　青年はデザインしただけで作ったのは職人だというが、彼がデザインしなければそもそも作れてないのだ。彼と職人たちの力が合わさり、見ただけで人を感動させる素晴らしい作品が生み出された。デザイナーと職人どちらか一方だけが想いを籠めたのではこうはならない。
　やはり彼もきっと口では色々と言いつつも確かな想いを持って作品作りに臨んだはずだと、シスターは彼の言葉が返ってくるのを待った。
「……安らぎだ。もっといえば、ここを訪れた者に癒しを与えようと思った。こんな俺が他者に癒しを与えようなんて笑えるだろ？　馬鹿な餓鬼の勘違いから生まれた作品だと考えていいぞ」
「そうやって自分を卑下しないでください。貴方はとても立派な方で

す。私はそれを知っています」
自虐的な言葉を吐いて己に対する嘲笑を浮かべる彼に、シスターはそんな事はないと優しく笑いかける。
初めて会った日の彼の姿をシスターは今も覚えている。心身ともに弱りきっていて、しかし、大切な人をちゃんと弔ってやらねばという気持ちだけで動いていた。
いくら裏の仕事をしながら生きてきたといっても、頼れる者のほとんどいない異国の地で大切な人を亡くしたばかりの少年が出来る事ではない。
無事に葬儀が終わった後には涙を流し、張り詰めていた糸が切れたように心を壊してしまったが、他者をそんなにも強く想える湊は年齢不相応に立派過ぎるくらいだとシスターは評価する。
「湊さん、貴方もカトリックに入信しませんか？　他者にまで主の存在を感じさせるこんなにも素晴らしい作品を作られるのなら、貴方も主の存在を感じていると思うのですが？」
「……いや、遠慮しておこう。俺がやるなんて真剣に祈りを捧げている者に対する侮辱にしかならない」
「そんな事はありません。誰にでも祈りを捧げる権利はありますから」
シスターは湊が人殺しだという事を知っている。だが、どんな大罪人であろうと祈る権利はある。
彼の人となりを見れば理由もなく人を殺すような人物でない事は明白だ。依頼を受ける時にも報酬よりも依頼者から理由を聞いて納得して受けていたに違いない。
そんな人物ならば、祈りを捧げ続ける事で今まで犯してきた罪を清算し、これまでとは別の生き方を選ぶ事も出来るはず。
罪人である事を理由に遠慮する必要はないとシスターが優しく微笑みかければ、湊は少し申し訳なさそうな表情で口を開いた。
「……俺は人工的に生み出された試験管ベビーなんだ。存在自体が教義に反している以上、悪いがカトリックにもクリスチャンにもなる事は出来ない」

宗教ではよく信徒にいくつかタブーを課しているが、カトリックでは生命は崇高なものであるため自然な営みによって生まれるべきだという考えがある。
それ故、不妊治療だろうと人工授精なども本来は禁止しており、湊やソフィアのような存在は生まれからして教義に反しているのだ。
生まれた命に罪はないといっても、そういった者はやはり立場的に難しいものがあるため、事情を知らずに強く誘ってしまったシスターは湊に頭を下げて謝罪した。
「あ、その、すみません。湊さんの事情を全く知らず困らせてしまって」
「気にしなくていい。誘ってくれた事は嬉しかった。ありがとう」
善意から誘ってくれた事に気を悪くしたりはしない。湊は気にするなと返し、気持ちは嬉しかったと礼を言った。
その後、やってきた他のシスターやブラザーと挨拶を交わし、教会の場所も分かった事で湊は彼女を用意した社員寮の部屋へと案内した。
知らない街ということでしばらくは慣れない事も多いかもしれないが、教会で働いている者たちは基本的に近くに住んでいるので、湊がいなくても相談する事は出来る。
新しい生活への不安もそれで少しは薄れたのか、後は色々と自分でもやってみると張り切っていた彼女と別れ、湊は何かあれば電話しろと言い残し、彼女の部屋を後にした。

午後――ＥＰ社工場・研究室
シスターを新居に案内し終えた湊は、食堂で昼食を取ってから工場の地下にある研究室へとやってきた。
グループの総帥をしているソフィアは頻繁にこちらへ来る事は出来ないが、湊の義手開発を担当しているシャロンたちは全員既に来ており、こちらに移った事で本格的に影時間に関する研究などにも取り組み始めていた。
影時間についてはあまり話を広めることが出来ないので限られた

人数で頑張って貰う事になるが、シャロンたちは特に気にしていないらしく、湊が部屋に入ってきた事に気付くと見ていた設計図から顔をあげて気安く挨拶をしてくる。
「あら、いらっしゃーい。お昼食べたぁ？　私はまだぁ」
「……なら食べに行けばいいだろ。別に制限した覚えはないぞ」
特殊な研究をしている部署だが、一応、他の部署と同じように出社や昼休憩などの時間を決めている。
作業を切りのいいところまで行っていたのなら、その分だけ昼の時間をずらせばいいので、三時になろうという時間に昼食がまだだと言われても湊は何も出来ない。
そもそも、何をしていて昼を食べれていないのか分からず、湊は部屋の中を進み適当なパイプ椅子に腰かけてから理由について尋ねた。
「なんで昼を食べていないんだ？」
「今朝、有里さんに貰ったペルソナだとかについて資料を、シャロンさんだけずーっと読んでたんスよ。私らは昼に行かないんスかって聞いたッスけど、後でって言われまして今に至ると」
表の企業としても活動する以上、彼らに仕事屋としての名前で呼ばれると困るので名前を教えたのだが、ぼさぼさの長髪に太い黒縁眼鏡をかけたぽっちゃり研究員のエマが早速戸籍名で呼びながら説明すれば、湊は呆れたように嘆息する。
確かに研究大好き人間にとってペルソナやシャドウという超常の存在は興味深いだろう。義手製作のために対シャドウ兵器の設計図を先に渡したが、そのときにはシャドウ等について詳しく話していなかったので、日本での活動を開始した現在になって渡したのだが、こんな効率の悪い事をされるのであれば先に渡しておけばよかったと僅かに後悔する。
「……栄養補給した方が効率良いだろ」
「ほら、私って集中してる間は疲れないタイプだからさぁ。ま、それはそれとして、ご飯は後で行くから先にアンタに訊きたい事がいっぱいあったのよね。いま質問しても大丈夫？」
「答えられる事ならな」

「んー、そう言われるとどんな質問には答えられないのかって興味が出てくるわねぇ。今はペルソナの方が興味あるからソッチ聞くけどねん」
変な語尾で楽しそうに笑うシャロンは湊の近くまでやってくると、同じようにパイプ椅子を一つ広げて腰掛ける。
先ほどまで一緒に設計図を見ていたエマや武多らもやってきたので、渡した資料には全員が既に目を通していたようだ。
他の者も座った事を確認して、シャロンは白衣のポケットからメモ帳を取り出し、先に用意していた質問事項を尋ねてくる。
「そんじゃ、一つ目ね。ペルソナは精神の具現化らしいけど、その精神の定義って明確に存在するの？　動いている姿は見てないけど、アンタと一緒にいた金髪の子も持ってるって資料には書いてたんだけど、ＡＩでも発現させる事が出来るなら高性能なパソコンにデータコピーしたら大量生産できたりする事にならない？」
「重要なのは自我だ。自己を確立できなければペルソナは発現しない。そして、データコピーした場合の話は研究していないので分からないが、ペルソナを使っている身として言わせて貰えば多分自己認識が不足して出来ないと思う。コピーされた内の一つなんて知れば自己価値を抱き辛いだろうしな」
ベルベットルームの者たちも言っていたが、ペルソナとはもう一人の自分だ。そんな存在を目覚めさせるには、まず自分というものを認識し定義する必要がある。
しかし、見た目・人格・名前・記憶に能力まで自分と全く同じ存在がこの世にいた場合、その人物はしっかりと己を定義する事が出来るだろうか？
絶対に不可能とは言いきれないが、一度はペルソナを手に入れた者でも自分の完全同位体を前にすれば自己認識が揺らぎペルソナを呼び出せなくなる可能性はあった。
よって、完全同一では運用出来ず、完全同一のままでいられないのならコピーする意味もなかった。
「それと、アイギスたちはＡＩではなく独立した自我を持っているん

だ。人間の人格サンプルを基に彼女らの人格を形成したにしろ。ちゃんと自分の考えと感情を持っている。限りなく人間の思考に近付けたとしても〝０〟と〝１〟で作られ心を持たないＡＩとは異なるものと思って貰っていい」
「んー、そこで出てくるのが黄昏の羽根ってわけね。機械にも心を与えるって人類の技術だと何百年後に出来るのかしら？　未来の技術に触れてるって探究心とインスピレーションをくすぐられるわぁ」
　ケタケタと楽しそうに笑ってノリは軽いが、彼女は一度見ただけの対シャドウ兵器の構造を把握するほど優れた頭脳を持っている。
　一般的な科学者が信じないような事でも気にせず研究するタイプらしく、シャロンは湊の話を聞いて自分の考察もメモしながら続けて次の質問を口にした。
「じゃ二つ目、ペルソナとシャドウの境界ってあるの？　例えば暴走してコントロールを外れたペルソナがいたとしたら、それって制御下にないからシャドウって事になるわよね？　でも、資料にはペルソナの暴走って書いてある。これって矛盾してない？」
「いや、暴走したペルソナとシャドウは別物だな。暴走はどちらかと言えばシャドウに近付きつつある状態だ。完全にシャドウ化してしまったらシャドウが戻るまで持ち主は影人間になる」
「でーも、資料にはペルソナをシャドウに戻しコントロールした被験体もいたって書いてるんだけど。そこら辺はどうなのか本人の口から聞きたいわねぇ」
　言いながらにやりと口角を歪めてシャロンは湊に視線を送る。
　湊が彼女たちに渡したのは、エルゴ研脱走時に飛騨から貰った研究データを印刷したものだ。それらは基本的に当時の内容であるため、ペルソナをシャドウに変えて操っていた被験体番号０００、通称〝エヴィデンス〟についても当然載っていた。
　聞かれた湊は椅子に深く座り直すと、煙管を手で遊ばせながら淡々と答える。
「……シャドウってのは、ある意味人の心の本来の姿なんだ。〝死〟をトリガーとして能力を発現させる者なら、死を視続け、死を想えば、

その本来の姿を解放する事も出来る。まぁ、ワイルド以外がやれば影人間になると思うけどな」
「んー、よく分かんないけど、制御するために掛けているリミッターを解除するみたいなもんって事なのね。そんで、アンタはリミッター解除してても別の力があるから影人間化しないしコントロールも可能と」
彼女が要約すればその考え方で概ね合っていると湊は頷いて返す。
強力なシャドウは人間のような高い知能を持っていると思わせる動きを戦闘中に見せてくるが、本来のシャドウは獣のような本能で動く存在だ。それは思考が極単純で一つの事だけを考えているとも言い換えられる。
色々と考えて動くよりも集中した方が強いのは当たり前で、湊のシャドウ・タナトスも敵の殲滅を目的として顕現させる事により、戦闘時には普段のタナトス以上の力を発揮できるようになっていた。
ただし、シャドウ状態ではリミッターを外して出力が高くなっている分、細かなコントロールが難しく。下手をすれば自分から抜け出て行ってしまう事も考えられるので、様々な力を手にした湊はタナトスのシャドウ化を最近では控えるようにしている。
「あのぉ、僕からもいいですかな？」
湊がシャロンからの質問を受けていると、ずっと傍で話を聞いていた武多も挙手して質問したいと言ってきた。
彼は空気を読む事も出来るが、テンションがハイになると面倒なタイプなので、湊は僅かに嫌そうな顔をしつつ一応質問を認めてやる。
「……ふざけないならな」
「え、ええ、勿論ですぞ。えー、では、ペルソナとは心の力で精神の強さが関係すると書いておりましたが、僕たちのような一般人も条件を満たしていれば手に入れる事は可能なのですか？」
「まぁ、才能というか親和性も関係してくるが、ある一定以上の適性を持てば理論上は猿や犬でも持てる」
本当に動物がペルソナを持てるかなど知らないが、生物ならばニュクスの欠片たるシャドウを宿しているため、理論上は制御する事によ

りペルソナを獲得する事も出来る。
　人間よりも動物の方が死に敏感なので、適性があれば目覚めるのは人間よりもむしろ簡単かもしれない。動物の言葉を理解出来る湊とアイギスが二人で頑張って探していけば適性持ちの動物を見つけられる気もするが、現在動ける湊に探す気がないので世にも珍しいペルソナ使いの動物は当分見つかりそうになかった。
「もう一つお聞きしますが、ペルソナの姿とかは何によって決まるのですか？　本人の姿との関連性はあるのでしょうか？」
「前提としてペルソナは神話的存在や妖怪などの姿を取るんだが、その存在に対し本人の持つイメージが部分的に反映されているような気はする。ペルソナがどんな存在になるかは本人との共通点とでも言えばいいのか、熱血漢だと闘神や太陽神が目覚めたりといった感じで後はほぼランダムかもな」
　例えば湊のタナトスは死神〝デス〟をあの日に見ていた事で、同じ死の神であるタナトスも似たような物だろうとイメージが反映され似ていたりする。
　もっとも、イメージが反映されるにも二パターンあって、一つは先ほど湊が話したペルソナの元ネタに対するイメージが反映されるのが一つ。もう一つは戦う存在のイメージがアイギスだった事で、戦う力として目覚めたオルフェウスの姿がどこか彼女に似たように、本来は無関係のはずの物が〝戦う〟など本人の考える共通点で結びついて反映されてしまうパターンもあった。
　けれど、何事にも例外というものがあり。その代表が名切りのペルソナたちだ。
　彼女たちの姿は最終的に湊に続く血筋の子どもを産んだ当時のものであり、湊のイメージなどは一切反映されていない。
　さらに、名切りとは別にもう一人いる自我持ちのペルソナ、隠者〝ジャック・ザ・リッパー〟も手に入れた経緯からして特殊だった。彼女について話すためにカードを握り砕いて湊が呼び出せば、水色の欠片の中から姿を現した赤いフードとマントを身に付けた少女を見て、急に武多が立ち上がって鼻息荒く叫び出した。

「フォー!!　ロリッ子キター!」
「ロリッ子？　ジャックは俺と二つくらいしか違わないぞ」
　この男は突然何を言っているか。相手の気持ち悪い視線から逃れるようにジャックは湊の後ろに隠れ、本気で言っている意味が理解出来なかった湊は怪訝な表情を浮かべて相手を見る。
　とはいえ、シャロンらも聞いているのにこのままでは話が進まないので、武多がジャックに何かしようとすれば蹴り飛ばす用意をしながら続きを話す。
「まぁいいが、さっきのは一般的な話だ。このジャックみたいに、元は残留思念や怨霊のような人の想いの塊だったモノからペルソナになった者もいる。その場合は自分との共通点は関係なくなるぞ」
「で、では、いつか我々の妄想もとい理想のおにゃの子をペルソナに出来る可能性もある訳ですな！」
「……可能性だけはな」
　言われてみれば生霊という言葉もあるので、呪いレベルに想いを籠めれば人工的にペルソナの元になるものは作れるかもしれない。
　急にやる気を漲らせている武多ならば、執念によって本気で自分の理想の女の子をペルソナとして具現化させるような気すらしてくる。
　しかし、相手がジャックと同じように自我持ちだとすれば同情を禁じ得ない。理想の女の子というくらいだから、きっと武多は相手がペルソナであっても欲情したりするのだろう。
　ペルソナは普通に触れることが出来、湊の持つ自我持ちのペルソナにいたっては体温を感じるだけでなく飲食まで出来る。
　だとすれば、湊は自分のペルソナたちが見た目的に年下であったり、本当に血縁者だったのでしょうと思った事すらないが、キスどころか性交までも可能かもしれなかった。
（……そのときはペルソナを切り離すか）
　いくらペルソナのマスターだったとしても、自我を持っている相手の意志を無視してそんな事をするのは許されない。
　それ故、湊は武多が馬鹿な事をしでかそうとしたときには、アベルでペルソナを切り離して呼び出せなくしようと心に決めた。

そうして、その後もシャロンらの質問にいくつか答えると、湊は無理矢理に時を進めた自分の身体が現在どういった状態なのかを調べて貰うため、細胞や血液のサンプルを採取してシャロンに預け。既に遅い時間になっていたことでシスターを誘って夕食を取り、そのまま自分のマンションへと帰って行ったのだった。

第百三十二話　助っ人依頼

7月2日（月）
昼休み――生徒会室
生徒会長になったことで新たに部屋を手に入れた湊は、美術工芸部の部室より近い生徒会室をほぼ私物と化し、生徒会メンバーだけでなく部活メンバーや知り合いと一緒にときどき昼食をとっていた。
この日、生徒会室には部活メンバーと宇津木と羽入が集まっており。お互いに面識のなかった部活メンバーと後輩らは、湊が紹介する事で挨拶も済ませて雑談を交わしながら食事を続けていた。
もっとも、湊はＥＰ社の仕事があるので、パソコンで作業をしながら総菜パンをかじって会話に参加していなかったが、昼休みが始まって十五分ほどしたとき扉をノックする音が聞こえてきた。
昼休みに湊が生徒会室にいることはそれなりに知られており、用事があれば生徒会室に行けば会えるように思われている。
しかし、湊には湊の用事があり、もっと言えば昼を食べているのに邪魔されたくはない。
よって、召喚せずにバアル・ペオルの索敵を使い、扉の前にいるのが渡邊だと分かった湊は画面に顔を戻しながら返事をした。
「……定休日だ。帰れ」
「ちょ、そりゃないっすよ会長。生徒会は毎日がお客様感謝デーっしょ？」
湊の返事を聞くなり扉を開けて入ってきた渡邊は、どこぞのデパート（ジュネス）のキャッチコピーを真似した台詞を吐いて来る。
湊は一度としてそんなキャッチコピーを掲げた覚えはないので、嘆息しながら至極真面目な疑問を一つぶつけた。
「……お前は従業員側だろ？」
「業務時間外に利用しにくれば従業員も客としてカウントってことで」
「そうか。まぁ、今日も営業している役員がそっちにいるから、何か用事なら頼めばいいさ」

羽入と話していたときに突然話題を振られた宇津木は、湊に頼られたことに喜びを感じて顔を輝かすが、直後、相手が渡邊であると知って普段通りの暗い表情に戻る。
とはいえ、湊に言われた以上は仕事をこなすのが自分の使命。そう思う事でモチベーションを保った彼女は、嫌そうにしながら渡邊に話しかけた。
「どんな用件ですか。帰りの扉はあちらですが」
「いや、来たばっかだし。宇津木ちゃん、会長とオレとで反応違いすぎね？」
自分も湊と同じ先輩のはずなのに、と渡邊は後輩のあんまりな対応に大げさに肩を落として見せる。
だがその直後、宇津木の隣に座っていた人物の方へ視線を移したとき、後輩とは思えぬその圧倒的な胸のボリュームに目を奪われ、さらに視線を下げたときニーソックスがほどよく食いこんでいる白い太腿を見てしまった彼は、突然ハイテンションになって羽入に話しかけていた。
「つか、宇津木ちゃんの友達すっげぇスタイル良いじゃん！　お名前なんてーの？」
「え？　えっとねぇ、知らない人に聞かれても教えちゃいけないってママに言われてるの。あとね、わたしは変な男の人に狙われ易いから注意しときなさいって湊君も言ってて、おっぱいばっかり見てくる人とはお話しちゃダメなんだ」
女性は男が思っているよりも邪まな視線に気付いている。ぽやっとしている羽入もそういった視線を何度も向けられてきたことで、今では見られていることにもすぐ気付くようになっていた。
下心の籠ったいやらしい目で見られていい気分などするはずもなく、コロネパンを食べていた羽入が嫌そうな顔をすれば、室内の温度が僅かに下がったような錯覚を覚えるほど冷たい部屋の主の声が響いた。
「……渡邊、去勢されたくなきゃ失せろ」
「ま、待ってくださいよ。マジで用事あって来たんスから。てか、男子

だったらこんな抜群のスタイルした子を前にしたら少しくらい胸に視線いきますって！」
「悪いがまるで共感出来ないな」
「いや、それ確実に会長が佐久間先生とかで見慣れてるだけっスから。思春期男子のパッション舐めないでくださいよ。オレらが一年の頃に会長と先生がお化けのコスプレしてた写真とか、ほとんどの男子が買って行きましたからね？」
　校内で羽入より胸が大きいのは佐久間くらいしかいない。湊はその佐久間と一般の教師と生徒の関係以上に親しげだったことで、他の男子よりもスタイルがいい女性に対する免疫がついているのだと相手は指摘する。
　本当はもっと別な理由で性欲がないだけなのだが、遺伝子の異常など大勢に広めるような話ではない。
　なので、わざわざ訂正する必要性を感じなかった湊は、相手が同性の仮装写真を買ったと聞いて変わった物を見るような視線を向けて言葉を返した。
「お前、バイだったのか。別に個人の趣味や性癖を否定したりはしないが、今後は半径五メートル以上近付かないでくれ」
「いやいやいやっ！　バイじゃねーですって、別に会長のケツとか狙ってませんし！　オレの好みはこう出るとこ出てる同い年くらいの黒髪女子ですから」
「……食事中の人がいるのに下品な話をするな」
　女子たちはまだ食事中だというのに、ケツだなんだと何とも下品な事を言ってきた渡邊に嘆息しながら、湊は自分で淹れた熱いほうじ茶に口を付ける。
　同性愛だろうが露出等の変態的な性癖を持っていようが、それは相手の勝手だと思って湊も認めている。しかし、他人を傷付けるような場合と自分がその対象に含まれるのであれば話は別だ。
　幼い頃は変装として女子の格好をさせられていた湊は、仕事の中で何度も下衆な男に襲われかけたことがあり、相手の性別を女に変えてやったのも一度や二度ではない。

写真を眺めて楽しんでいるくらいなら実力行使に出たりしないが、それでも他人から性の対象として見ていると言われればいい気分はしない。

故に、自分にあまり近付くなと言ったのだが、やたらと高いテンションで騒いでいる相手が気に障ったのか、今まで黙っていたチドリが口を挿んでくる。

「湊、そいつウザい」

「……用は済んだろ。さっさと帰れ」

「まだ本題すら話してないっスから！　マジで困ってるんでせめて話を聞いてから判断してください。依頼人もいま呼びますし」

まだ用件すら伝えていないのに帰れるわけがない。そういって食い下がる渡邊は、焦りながらもすぐに本題に入る事で会話を進めてしまおうと考えた。

一度生徒会室の外に出た相手は、今度はスポーツ刈りの少年を一人伴って現れる。先ほど言っていた依頼人が彼らしいが、他の者は渡邊が連れてきた相手が誰か知らないようで、少し不思議そうに眺めている。

その様子から空気を敏感に感じ取ったらしい渡邊は、先ずは自己紹介をさせようと彼に湊を紹介することで話し易い場を作り出す。

「ヤマ、こちらがウチの会長だ」

「昼を食べてるときにすまん。俺はバスケ部のキャプテンをしてる3—Bの山井だ。さっきナベが言ってた依頼っていうのは率直に言うと有里にバスケ部に入って欲しいんだ。実は今週末に試合があるんだが、休日練習中に捻挫してしまってな。試合には多分間に合うが、療養で休んだ後だと普段通りの動きが出来るか分からないんだ」

「ウチの部活ってあんま強くなくて三年が三人、二年が二人、一年が四人しかいないんすよ。んで、一年もまだ慣れてきたってとこですし、キャプテンのヤマが万全じゃないとなると交代含めて厳しいなぁって」

バスケットボールの試合人数は各チーム五人。試合に登録できる人数は大会によって増える事もあるが基本は十二人以内で、中学バス

ケだと交代は何度でも自由となっている。
普通はその最大数である十二人をフルに登録するのだが、生憎と地区大会上位レベルでしかない月光館学園男子バスケ部の部員数は定員未満だった。
別に定員に達していなくてもコートに立つ人数を満たしていれば問題ないので、最悪部員が五人しかいなくても試合には出られる。
とはいえ、約半数が未熟な一年生であり、キャプテンが万全でないことを考えれば、渡邊たちバスケ部は深刻な人員不足と言えた。
「勝てた方がいいでしょうけど、別に負けたところで何もないじゃない」
話を聞いていて彼らがかなり困った状態である事は理解したが、別に負けて何を失うでもなし。大事な試合の前に怪我を負った自分が悪いのだから、今回の試合は諦めたらどうだとチドリは話す。
その言葉を受けた山井は、チドリの言う通りなため悔しそうな表情を作る。しかし、改めて顔をあげて真っ直ぐ見返すと、週末の試合がただの試合ではないと真剣な顔で告げてきた。
「練習試合じゃなくて夏の公式大会なんだ。最初の地区大会はブロック内で総当たり戦だから一日に何試合もする。ブロックで一位なら翌日もだ。本人らも言っていたが、とてもじゃないが一年生が連日で何戦も出来るとは思えない」
地区大会は週末の二日間を使って行われる。月光館学園が属している地区では、各ブロック三校で四ブロックに分かれ、各ブロックの成績一位だった学校が翌日に勝ち上がり戦で準決勝と決勝を戦う。
バスケットはただでさえ疲労の激しいスポーツだ。試合独特の空気に加え、負けたらそこで三年生の夏が終わるというプレッシャーまで掛かってくるとなれば、まだ体力が付き始めた程度の一年生たちでは戦い抜くのは難しいだろう。
「だけど、俺たちにとってこれが中学最後の大会なんだ。先輩らが抜けてしまってからやっと強くなってきて今年こそは上の大会に進むって皆で頑張っていた。そんな時にキャプテンの俺が怪我をしてしまってチームのやつらには本当に申し訳ないが、こうなったら自分

に出来ることは何でもするしかない」
「んで、一年より体力ありそうな運動部に入ってない助っ人を急遽探す事にしたんスけど。会長、お願い出来ませんかね？　依頼料が必要ならうち八百屋なんで野菜くらいならあげれますけど」
普段よりもいくらか真面目なトーンで渡邊も頼んでくる。彼の実家は商店街にある八百屋なので、湊が依頼として受けるとなれば本当に野菜を持ってきそうではある。
だが、野菜の価格が高騰してきているといっても、別に買う金に困っていない湊としては報酬に魅力を感じなかった。
そして何より、湊には本人以外ここにいる全員が知らないある重大な問題があった。
それは、
「……俺、バスケットボールなんて触れた事もないぞ」
『……は？』
青年の予想外の発言に、羽入と宇津木を除く全員がポカンと口を開けてしばし呆ける。
これはこれで珍しい光景だが、意味が分からなかったのならば改めて説明しようと湊は再び口を開いた。
「だから、生まれてから一度もバスケットボールに触れた事がないんだ。体育でバスケをするときだってさぼ……見学していたしな」
そう。湊はこれまでの人生で一度もバスケットボールに触れた事がなかった。
普通は小学校の体育の授業で習ったりもするのだが、湊は小学校には一年生の途中までしか通っておらず。中学校の体育は医者の診断書を学校に提出して見学という名のさぼりで済ましていたため、これまで一度としてボールに触れる機会がなかったのだ。
湊と似たような人生を歩んできたチドリも、中学校の体育は真面目に受けていたのでバスケはした事があるし。野球、サッカー、バレーボール、ソフトボールなど他にも色々と球技を経験している。
けれど、見学に加えて留学までしていた湊は、幼稚園の頃にドッヂボールをした他には両親とキャッチボールをしたくらいであった。

半分は人と違った人生を歩んできた弊害だが、もう半分は面倒くさがった湊の責任である。そんな美鶴とは異なったベクトルで世間知らずの青年が放った先ほどの言葉に、少しばかり聞き流せない単語が混じっていたことにゆかりが食い付く。
「有里君、いまさぼってたって言いかけたよね？　何、本当は身体とか別に問題ないの？」
「吹けば倒れるような病弱な青年を捕まえて何を言うんだか。岳羽は少し妄想癖があるようだな」
「いや、君って一年の頃に真田先輩と試合して勝ってたじゃん。病弱な青年はボクシングチャンプに余裕勝ちしないから」
「逆だな。病弱な青年に負けるほど、そのボクシングチャンプが弱かったんだ。仮に妹がいればきっとシスコンの変態になっているに違いない」
　唾えていた煙管の煙を意味もなく吐きながら湊が言えば、近くで弁当を食べていた美紀が気まずそうな顔で視線を逸らしている。
　真田の実力は本物であり、高校生を相手にしても勝っているので決して弱くなどない。しかし、シスコンであることは事実なので、美紀は兄のフォローよりも自分が巻き込まれない事を選択したのだ。
　他の者は美紀のそんな反応に気付きつつも特に触れず、湊のしょうもない発言にジトっとした視線を向けていたゆかりが、咀嚼したミックスサンドを飲み込んでからさらに言葉を返した。
「ってか、君の病弱設定について学校もかなり疑ってるよ？　真田先輩との試合もそうだけど、服を着てても体格いいの分かるし。体調不良で倒れた女子とか簡単に抱き上げて運んでるから、少なくとも筋力はあるって思われてる」
「設定とかいうな。岳羽の二面性に比べれば許容範囲だ」
　ゆかりの言う通り学校側も疑っている湊が病弱だという話はただの設定でしかない。
　子どもたち二人を学校に通わせる際、湊は裏の仕事で休む事もあるので信憑性を高めるのに役立つだろうと桜も認めて偽造診断書を提出したのだが、湊は平気で人助けを行っているせいで病弱どころか超

人のように思われている。
入学してすぐに大柄な教師を一撃で殴り飛ばした事や、中学のボクシングチャンプだった真田をＫＯした事でさらに噂は加速し、今では学内で最も強い男として認識されてすらいるのだ。
その事をゆかりは指摘したのだが、湊が己の二面性よりもマシだと言い返して来たので、ゆかりは僅かにムッとした表情で何の事か尋ねた。
「私の二面性ってなによ？　部活関係では学外でも会ってるけど、本当にプライベートな状態の私のこと知らないでしょ？」
「……そう思うのは岳羽の自由だ」
「すかしちゃってムカつくなぁ。人のこと言ってるけど有里君の方が二面性とか酷いじゃん。私と他の女子でも態度違うし。好きな子に意地悪する系って女子からするとポイント低いよ？」
好きな子にちょっかいをかけるという話はよく聞くが、実際にそれをやっているとガキっぽく映るので女子たちからの評価は悪くなる。女子は男子より精神的に早熟であるため、多少のガキっぽさは苦笑して流しもするけれど、それで相手の子が不快に感じているとなれば話は別だ。
ゆかりに対する湊の態度は一部ではそのように思われており、ゆかり本人も相手が自分にだけやけに突っかかって来ると感じている。
そのため、完全に本気という訳ではないが、仮に好きな子にちょっかいをかけているのだとしても、ゆかりだけでなく他の女子からもよく見られないので控えるべきだと窘めた。
だが、言われた方は全くそんなつもりはなかったので、勝手な妄想で話を進められるといい気持ちはしなかった。
やる気のない表情でジッとゆかりを見つめ返し、吸い込んだ煙をゆっくりと吐き出せば、湊は光のエフェクトを幻視するほど爽やかな笑顔を作って口を開いた。
「よくいるよな、〝勘違い女〟って」
「そうだね。自分は分かってるつもりの〝勘違い男〟とかもいるよね」

対するゆかりも周囲に花のエフェクトを幻視するほど綺麗な笑みで言い返す。初心な男子ならば完璧に騙されコロッと堕ちるであろう最高の作り笑顔で。
美男子と美少女がお互いに笑顔で会話しているので、第三者から見ればきっととても絵になっている事だろう。
けれど、こうなる経緯を見ていた者にすれば、両者の背後に黒いオーラを感じて、さらに激しい火花が散っている事も理解している。
二人ともキレれば相手が誰だろうと拳を叩きこみにいく性格なので、徐々に室内の空気が張り詰めていく事を感じた渡邊がバトル勃発を防ぐため口を挿んだ。
「あのぉ会長、話を戻していいっすか？」
「失せろ。俺はそこの女と話をつける必要がある」
「先に喧嘩売ってきたのはそっちでしょ？　いいよ、話をつけるっていうなら放課後だろうとトコトン付き合ってあげるわよ。その代わり喫茶店の会計とか全部そっち持ちね」
「ああ、それぐらい出してやる。〝自称・男に頼らない〟さんに頼られるのには慣れているからな」
「なんですって?!」
ゆかりが男に頼らないという話をしたのは湊だけだ。その事を出してきて皮肉を言われたゆかりは怒りからキッと睨んで立ち上がる。
最初に喧嘩を売るような引っ掛かる物言いをしてきたのは湊だが、その後はゆかりも言い返していたので過失は〝7：3〟か〝6：4〟ほどだろう。
けれど、頭に血が上っている二人は白黒つけねば収まらない。絶対に相手に間違いを認めさせて謝罪させてやると睨み合っていたとき、今まで黙っていた赤髪の少女がテーブルを叩いて声をあげた。
「人がご飯食べてるときに二人とも五月蝿い！　幼稚園や保育園の子どもじゃあるまいし、周りからすれば両方変人なんだから食事中くらい静かにしなさいよ！」
テーブルを叩いて発したチドリの怒鳴り声は部屋中に響いた。湊とゆかりの喧嘩にオロオロしていた他の女子や、ビビって口を挟めな

くなっていたバスケ部の二人も驚いたようだが、喧嘩が止まった事にはどこか安堵しているように見える。
チドリは桔梗組で暮らす様になって以降、桜からどこの社交界でも通じるマナー等を教わっていたが、流石に学生同士で食事をするときに五月蝿く注意をしたりはしない。
しかし、くだらないことで口喧嘩をされては周りも落ち着いて食事出来ない。そんな事を続けるのであれば、これ以上は外でやれと険しい目付きで睨んでいれば、まだ頭に上った血が下がり切っていなかったゆかりが聞き逃せない単語が混じっていた事で一つ反論した。
「へ、変人って赤髪半目のアンタも大概でしょうが！」
「はぁ？　階段登るだけで下着が見えそうなスカート丈で男を誘ってる露出狂と比べれば普通の範囲内よ。ウチの学校の変人トップ５はクマモン・櫛名田・シスコン・桐条美鶴・貴女だから」
「シレッと有里君を抜くな！」
両方変人と言っていたくせにトップ５になれば湊だけが消えている。上位五人の順位付けなので六番目に湊がいるのであれば入っていなくてもしょうがないが、ゆかり個人としては発表された面子に湊がおらず自分が入っている事に納得がいかない。
どう考えても身内だから判定が甘くなっていると思ったゆかりが異議ありとばかりに言い返せば、チドリも文句あるかとばかりに睨み返して来た。
せっかくチドリによって湊とゆかりの喧嘩が治まったというのに、今度はゆかりとチドリの喧嘩が始まってしまった。傍から見れば仲が良さそうだと思っていたのに、実際は美紀と風花以外は喧嘩もするという事実を知ったバスケ部の二人は、酷いタイミングで依頼に来てしまった事を深く後悔した。
そうして、誰が収拾をつけるんだと他の一同が思ったとき、
「……後輩が見ている前でよく言い争いが出来るな。もう少し最高学年としての自覚を持ったらどうだ？」
いつの間にかパソコンでの作業に戻っていた湊がシレッと二人の少女を諌めた。

そのとき誰もが思った事だろう。最初に始めたお前がいうなと。
しかし、いくら言った本人が真正のクズであったとしても言っている事は正論だ。湊に注意を受けた事で二人は席について食事を再開すると、心の底から呆れた表情でボソリと呟く。
「……誰よ、こんなの生徒会長にしたの」
「本当にね。こんなのが学園代表とか私らまで頭おかしいと思われそう」
「これは噂なんだが、そんな頭おかしいやつより成績悪いやつがいるらしいぞ」
『……うざ』
共通の敵がいれば手を組める。ゆかりとチドリは相手をするのも面倒だと、青年に向かって丸めたレシートなどを投げつけて黙って作業していろとこれ以上の会話を拒否した。
喧嘩までは一気に発展していったように見えたというのに、治まるときには急激に治まってしまい部活メンバー以外は少々面喰らう。
とはいえ、喧嘩の当事者だった三人の様子を見て風花や美紀がくすくすと苦笑している事から、部活メンバーにすれば日常の一部なのかもしれない。
文字通り部外者では知る事のなかった一面を見て、意外と彼らも年相応の精神年齢で学校生活を謳歌しているのかもしれないと思いながら、渡邊は中断していた依頼の件で再度湊に話しかけた。
「それで、えーっと……ああ、クソッ。会長らが喧嘩してたせいで、どこまで話してたか忘れちったよ」
「俺がバスケットボールに触れたこと無いってとこまでだ。ちゃんと覚えておけ」
「ああ、そうでした。んで、練習したら出来るようになります？」
ボールにすら触った事がないと言っても一年より体力があり体格にも恵まれている。中等部に湊より身長が高い生徒はいないので、その長身を活かすだけで戦力になりそうだと渡邊は睨んでいた。
大会は勝ち上がれば八月の終わりまで続くため、その間に何度も練習していれば何かしら得意なプレーも覚えるに違いない。

そんな期待を籠めて尋ねた渡邊に、パソコンの画面を見ながらほうじ茶を啜っている湊は肩を竦めて返した。
「さぁな。人より才能に恵まれずに生まれてきたから、交代要員としてレギュラーを休ませるくらいしか出来ないかもな」
「……武術習ってたんだからボール奪うくらい出来るでしょ」
「ああ、中東ではスリからスリ返した事もあったから、その応用で良ければ出来るかもしれない」
蠍の心臓にいた頃、たまに街にいくと観光客がスリに遭っているのを目撃した。そんなときにはスリ返して持ち主に財布を渡していたので、激しい動きをしている相手からでもボールを奪える可能性はあった。
チドリの指摘にそう話した湊の言葉を聞けば、渡邊は少々考えて湊の運用方法についてキャプテンに意見を話す。
「ヤマ、そういう事なら点数取るのはオレらでやって、会長にはスティールとパス回しに集中して貰えばいけるんじゃね？」
「実際に見てみないと分からないが、確かにそれならいけるかもしれない。むしろ俺たちチームの攻撃力が上がる事も考えられる。有里、どうか頼む。夏の大会中だけバスケ部に入ってくれ！」
点取りに期待できないとしても、相手からボールを奪って仲間にパスしてくれるのであれば、それは攻撃の基点となり得る貴重な戦力だ。
総合力では他所の強豪に勝てない渡邊たちにとって、湊のような尖った性能の選手はバランスタイプと渡り合う上で重宝する。
試合まで残り時間が少なくスカウトを行ってばかりもいられないバスケ部の二人は、湊の前まで進むと頭を下げて助力を頼んだ。
「……条件その一、シューズ選びについて来る事。条件その二、ユニフォームを用意して高等部の雪広先輩の家ですぐにナンバーとネームをプリントして貰う事」
バスケ部の二人が頼みこむと急に湊が喋り出す。条件とやらを色々と掲げてきているが、それをクリアすればいいのかと考えている間も湊の話は続く。

「条件その三、知り合いに病気で学校生活をした事がないやつがいるんだ。今は完治しているがそいつに少し学校生活を体験させてやりたいから、特別にマネージャーとして入れて欲しい。これらの条件を顧問の教師も含めて呑めるのなら大会期間中だけ参加してもいい」
「わ、わかった！　ナベ、いますぐ盛本先生に許可貰いにいくぞ！」
「了解！　会長、絶対許可貰ってきますから今日の放課後シューズ買いに行きましょうね！　練習日もその時に教えますから！」
それだけ言い残すと二人は嬉しそうな顔をしながら駆け足で部屋を出ていった。キャプテンは足を捻挫していたはずだが、無茶をすれば怪我が長引くのではと思いながら湊はパソコンでの作業に戻る。
すると、今まで青年とバスケ部らのやり取りを見ていて不思議に思ったチドリが、普段通りのやる気のない表情で先ほどの話について尋ねてきた。
「珍しいわね。すぐに話を受けてあげるなんて。頑張ってる凡人に対する同情？　それともそのマネージャーのため？」
「必死に頼む相手に僅かに同情した事は否定しないが、普段から他人を凡人と見下すほど捻くれてないさ。まぁ、比率的には水智に学校生活を送らせてやりたい方が強い」
湊が先ほど言っていた学校生活を送った事がない人物とは、アイギスの人格モデルの一人だった水智恵の事だ。
彼女は一ヶ月の研修を受けて病院で働き始めたが、朝のシフトにいれれば放課後に部活のマネージャーをするくらいは出来る。
病院に務めている看護師らは、夫のＤＶから逃げて子どもと二人で暮らしている者や、湊たちと同じ年頃の子どもがいるような人まで様々だが、別室から面接を見ながら湊が選んだので性格のいい者ばかりだ。
彼女たちは研修中に恵ともよく話していたので、彼女が病気で学校に行っていなかった事なども知っている。
よって、夏の間だけ少しシフトを融通してやって欲しいと頼めば、お安い御用だと笑って了承して貰える確信が湊にはあった。
もっとも、最大の問題は本人に許可を取る事なのだが、拒否しよう

とすれば仕事として割り振るだけなので恵に拒否権はない。スタッフを従業員、患者を客と呼んでいる若干十五歳の病院理事長は独善的なのだ。

そうして、恵は本人が知らぬ間にマネージャー就任が決まり、湊も最も数字の若い背番号十番を貰ってバスケ部への助っ人入部が決まったのだった。

夜――月光館学園女子寮

湊のバスケ部入部が決まった日の夜、ゆかりは寮の自室で写真を見ながらスケッチブックに鉛筆で絵を描いていた。

美術工芸部はずっと一緒に作品作りをしていたが、コンクールへはそれぞれ得意なジャンルで応募することになっているため、三年間でほぼ初めての自分だけの作業となっている。

風花は写真、美紀は油絵、チドリは指定なしの絵画、湊はグラスリッツェン、そしてゆかりは水彩絵の具による風景画のコンクールに応募する予定だ。

部活で一度もしたことのないグラスリッツェンを湊が選んだときには少し驚いたが、選んで個人作業になってからは写真を撮りに行く風花よりも部室に来ない日が増えているので、自分たちが知らないものを選んでそれを言い訳に使っているのではないかと読んでいる。

(有里君って風花の優しさに結構甘えてるよね。というか、〝彼はそういう人だから〟って周囲が我儘を受け入れてる現状がちょっとおかしい気がする。ま、断った方が面倒なパターンもあるから負担の少ない方を選んでるのかもしれないけど)

まだどこの風景を描くか決めていないゆかりは、とりあえず写真の風景をスケッチして感覚を養いながら湊への不満を漏らす。

彼の事は別に嫌いではない。文武両道でルックスも最高ランク。趣味なのかは知らないが人助けをよくしているので評判もいいため、勉強を教わったり親しくしているゆかりが彼を嫌う要素はない。

だが、どうしてか自分にだけやけに突っかかって来ることが気になる。好きな子をいじめるのとは異なっているように思うし、じゃあ、

なんで自分だけそうなのかという疑問が湧くのだ。
一年生の頃に美紀が彼を知っているような気がすると話していたが、ゆかりもどことなく似たような人物を知っている気がしており。もしかすると、相手は入学前にゆかりと会っていて知り合いだからと無遠慮に絡んできているのかもしれない。
けれど、あれだけ目立つような人間であればゆかりも覚えているはずだ。流石に桐条家主催のパーティーですれ違っていたとかいう話であれば別だが、心当たりがないゆかりは長時間座っていたことで固まった筋肉をほぐす様、両腕を頭上に上げて背伸びをしてから休憩を取ることにした。
「んー……はぁ」
ゆかりの絵は正直上手いとはいえない。それでも三年もやっていれば授業で他の生徒から上手だねと言われるくらいにはなる。
後は色彩センス等でいくらかは誤魔化せるが、小手先の技だけではどうにもならないのがコンクールだ。選ばれる可能性は低いだろうが駄目で元々、自分が気に入った風景をのびのび描いて思い出にしようとデジカメで記録してきた風景をいくつか見ていき場所を考えていると、ベッドに置いていた携帯が鳴った。
(あ、電話……お母さん)
こんな時間に誰だろうかとディプレイを見れば、そこには母親の名前が表示されていた。たまにメールや電話が来る事もあるが、それほど頻度は高くないため少し身構えてしまう。
けれど、このまま出ない訳にもいかないので、深く息を吐いて心を落ち着かせてから通話ボタンを押すと携帯を耳に当てた。
「……もしもし」
《あ、ゆかり？　いま電話しても大丈夫かしら？》
「うん。まぁ、寝るだけだから大丈夫だよ」
コンクールなどについて考えていたときの楽しい気持ちは萎み、どこかイラついたような素っ気ない声で話すゆかり。
母親は思春期の娘だからこんなものなのだろうと気にしていないが、少女の態度は思春期とはまた別の問題だった。

《ちょっと夏休みの予定を聞きたくて。今年は実家に帰って来る？》
「分かんない。部活とかも忙しいし帰らないかも」
《そう……》
　後一月もすれば中学最後の夏休みにはいる。弓道部と美術工芸部を掛け持ちしているゆかりは、大会とコンクールがあるので暇という訳ではない。
　とはいえ、大会は勝ち進まなければ七月中に終わる可能性もあり、コンクールに出す絵も夏休みで描く時間が増えれば八月の中旬には終わるだろうと本人は思っていた。
　だというのにゆかりが帰らないと言ったのは、父親の死後、母親の梨沙子の生活態度等に苛立ちを感じて関係がぎくしゃくしてしまっているからだ。
　愛していた夫を失って悲しいのは分かるが、それを他のもので埋めようと男に依存する理由が分からない。結婚や婚約には至っていないが、付き合っては別れるという事を何人もの男と繰り返していることをゆかりは知っている。
　弱っていた時期を支えてくれた相手と再婚というくらいならば、ゆかりも実父のことを想えば多少複雑ではあるが理解を示して祝福も出来た。
　しかし、今の母は支えてくれる者ならば誰でも良いようにしか見えず、そんなものは祝福できないとしてゆかりは嫌悪すらしているのだった。
　だが、娘にそういった感情を抱かれていると気付いていない母は、ゆかりが帰って来ない事を残念に思いつつも、自分が電話した最大の理由を話して来た。
《あのね。もし帰って来れるならの話なんだけど、少し紹介したい方がいるの》
「……は？」
《えっと、お母さん今お付き合いしてる方がいて、その方にゆかりの事を話したら一度会ってみたいって》
　母親の言葉を聞いてゆかりは拳を強く握り、またか、と呆れ果てる。

自分が会いたいのではなく、娘と恋人を会わせたいだけなのか、と少々思い込みが混じりながらもゆかりにとってはそれが真実となり、素っ気ない言葉が口から出る。
「悪いけど忙しくて帰れないから会えない」
《そう。それなら帰って来れそうなら連絡頂戴ね》
「うん。じゃあ、寮の消灯時間になるから切るね。バイバイ」
《ええ、おやすみなさい》
これ以上話していたくなかったゆかりは、消灯時間というもっともらしい理由を告げて通話を切った。
通話を終えた携帯を充電器に繋ぐと、描いていた絵などをそのままに部屋の電気を消してベッドの上へ身体を投げ出す。
明日の学校の準備等しなければならないこともあるが、今はただ面倒くさくてやる気が起きなかった。
少女の胸の奥に渦巻いているのは、男に依存する弱い母親への嫌悪感と反抗心。あんな父への裏切り行為を繰り返すような者に自分はならない。一人でも生きていくと強く心に誓い。彼女は枕を引っ張り寄せて頭を乗せると自分を抱きしめるように小さくなって眠るのだった。

第百三十三話　前篇　九尾切り丸―準備―

7月7日（土）
午後――市内体育館
外では蝉たちの合唱が聞こえ始めるようになった七月上旬。本来ならば学校で授業が行われているのだが、大会があるという事でバスケ部の部員らは公欠を取って試合に臨んでいた。
現在試合が行われているコートの中には湊の姿もあり、彼も他の部員らと同じように袖のない白いユニフォームを着て参加している。
復学した湊は右腕が上腕の中頃から機械義手になっているので、夏でも長袖のフード付きコートを着ていたのだが、ライン際でドリブルしている相手とのすれ違い様にボールを奪った彼の右腕は機械ではなく生身の人間のものになっていた。
「会長、いっけー！」
相手からボールを奪ったのを見た渡邊が、声援を送りながら自身もゴールに向かって走り出す。
湊も味方の位置を確認しながらドリブルで走り出し、スリーポイントライン辺りで進路を塞ぐようにディフェンスの選手が現れると、相手の目の前で急停止してから後方に逃げるように跳躍しながら空中でボールを放った。
手を離れたボールは山なりの軌道を描いてバックボードにぶつかり、跳ね返ってそのままゴールに吸い込まれる。
「有里、ナイッシュー！」
「今日トータルで四十点超えたッスね。よっしゃ、オレらも点取っていくぞ！」
『おおー！』
キャプテンや他の選手らからシュートを褒められ、それに手をあげて答えながら湊はコート中央へと戻ってゆく。
先ほどから使っている右腕はどうみても人間のものだが、別にデスの治癒能力を使って生やした訳でもなければ、シャロンたちにＥＰ社で開発させている義手が人間のものとそっくりの見た目になった訳

でもない。
　実はいまの湊は、ペルソナの部分顕現と完全同調を組み合わせる事により、右腕だけ鈴鹿御前（バアル・ペオル）と融合しているのだ。
　ペルソナの力の行使は召喚者に主導権がある。けれど、自我持ちの場合は完全に独立した自我を持っているので、湊の指示を聞いて動いてはいるが実際は完全独立行動である。
　そんな存在と完全同調という自身をペルソナ化する秘術を使えば、当然、支配権は本来の身体の持ち主であるペルソナ側になってしまう。
　だが、今の湊が必要なのは鈴鹿御前の身体ではなく、義手である事がばれないようにするための生身の右腕なので、部分顕現と完全同調を併用することで自分が主導権を持ったまま鈴鹿御前の右腕を自分の腕のところで召喚したのだった。
　ただし、いくら鈴鹿御前が長身の部類に入るとは言っても、それは女性の中での話であり、長身な上に身体を鍛えている湊とは長さや筋肉の付き方も含めて似ても似つかない。
　助っ人を受けた湊も腕の問題は後になって気付いたので、今は間に合わせで鈴鹿御前の腕を使っているが何かしらの対策を考えなければならないと思っていた。
「有里！」
（試合中は動きまわっていれば気付かれづらいが、止まってしまうとバレ易くなる。というか、長い爪に真っ赤なマニキュアなんか塗っているのも理由の一つだな）
　キャプテンから飛んできたパスを受け取って、センターラインからドリブルで左サイドに走り込みながら敵を引きつける。
　初日は各ブロック三校なので二試合する訳だが、無名だった湊は二試合目の現在で二試合トータル四十点をあげている事もあってマークがきつくなっていた。
　駆け寄ってきた二人の選手がパスもシュートもさせないとばかりに、大きく両手を広げて両方のコースを塞いでいる。
　今いるのはライン際で先ほどのスリーポイントラインより距離が

あるため、ここからシュートを狙うのはバスケ初心者の湊には厳しいものがある。いい場所にいる味方は敵がマークしているせいでパスも通り辛そうだ。
そうして、ボールを持っていられる残り時間が少ないと考えた湊は、ディフェンスに触れられないよう大きくその場で跳びながら、バックボードめがけて左手で思いきりボールを投げつけた。
ほとんどストレートな軌道で投げられたボールは絶対にゴールには入らない。敵だけでなく味方までもがそう思っていると、皆の予想通りボールはバックボードに強くぶつかって跳ね返って飛んでゆく。
だが、跳ね返ったボールの落下地点に視線を向けると、そこには完全にフリーな状態で渡邊が立っていた。
「ナイスです、会長！」
飛んできたボールをキャッチした渡邊は、そのままシュート体勢に移って悠々とスリーポイントを決める。
それで点差はさらに開き。６８対４６で勝利した湊たちは、ブロック一位通過により翌日の準決勝への切符を手にしたのだった。
＊＊＊
「皆さん、お疲れ様でした！」
試合終了後の礼が終わって戻ってきた選手らを労い、夏大会限定マネージャーの水智恵がタオルとドリンクを渡してゆく。
受け取った二年生の選手はタオルで身体を拭きつつ、汗として出てしまった水分を補給しながら緩んだ顔で三年生や他の部員らに向かって話しかけた。
「いやぁ、マネージャーがいるって最高っすね！　今までは一年と盛本先生からしかタオルもドリンクも渡されませんでしたから、水智さんの笑顔が最高に眩しいっす！」
「勝ったのはいいが気を抜いてるんじゃないぞ。お前さっきの試合で三回もファンブル（お手玉）してただろ。一年生もバンバン使っていくから、大会中にスタメンが変わる事もあるんだからな。もっと気を引き締めていけよ」
今までいなかった女子マネージャーにベンチで迎えてもらえる事

で、二年生の男子は緩みきった表情をしている。
だが、顧問の盛本はその男子が試合中にパスを受け取り損なっていたのを見ていたので、今日の反省会と明日の打ち合わせの前に窘めておいた。
「は、はいっす。けど、先輩らもマネージャーが入ってくれて喜んでますよね？」
「そりゃ嬉しいけど、応援して貰ってる分だけ気合入るからファンブルとか初歩的なミスは減らすっしょ。会長は入ったばっかだからオレらが練習じゃしてないプレイもしてくるし、ああいうのにも咄嗟に対応できるようにプロの試合ビデオ見てイメトレとかしといた方がいいぜ？」
言いながら肩にタオルをかけたまま渡邊は荷物を片付け始める。普段はおちゃらけた軽いノリの渡邊も、部活関係になると切り替えて真面目モードになったりするのだ。
彼は本来バスケ部のキャプテンになるはずだったのだが、湊が生徒会長になると聞いて生徒会役員になるために副キャプテンにして貰ったという経緯があり。そのため、部活中の彼はしっかりとオンオフを切り替える優秀な選手として他の部員らからも慕われている。
顧問の盛本だけでなく、そんな彼からもちゃんとしろと言われた事で男子はしょんぼりと肩を落として本日のミスを深く反省した。
そのあまりの落ち込みぶりを心配したのか、空になったボトルを元々入れていたクーラーボックスに片付けていた恵は、男子に近付いていき励ましの言葉をかけた。
「確かにミスしちゃってましたけど、今日ミスした所は次までに直せばいいんです。相手の攻撃に移ったときには誰よりも速く守りにいってましたし。相手の得点を抑えられたのは貴方の活躍があったからですよ！」
「う、うぅ……俺、頑張って明日も点取られないように走って守りまくります。メチャクチャ頑張るんで見ててください！」
顧問と副キャプテンから厳しく当たられてへこんでいた男子は、恵の励ましの言葉に感動の涙を流してやる気を取り戻す。

別に顧問らも相手が嫌いで厳しく言った訳ではないのだが、反省した上でやる気も出しているようなので、男子の様子に笑いながら運営に結果の報告と明日の予定を聞くと、そのまま割り振られたロッカールームへと場所を移して反省会と打ち合わせを始めた。
「有里、渡邊、最後のプレイよかったぞ。即興なのによく合わせられたな」
「あれはほとんど会長のおかげっスよ。ドリブルでディフェンスを引きつけて行ってくれたんで、ボール来てからホントにフリーで打てました」
選手は各チーム五人なので湊が二人を引きつければ味方は一人フリーになる。顧問から褒められた渡邊も当然それを分かっているため、二人にマークされながらでもパスを通した湊のおかげで決められたシュートだと言って笑った。
だが、彼の言葉を聞いた盛本は、謙遜するな、と言って彼のプレイのどこが良かったかを詳しく説明してくる。
「試合終盤のあそこで冷静にしっかりキャッチしてシュートに持っていくのも集中力がいるんだぞ。だからあれは、有里の機転とお前のこれまでの努力があって成功したプレイだ。明日の試合も今日みたいに落ち着いていけよ」
「は、はい！」
味方がフリーで打てる状況を作り出したのは湊だが、そこでしっかりと決めたのは渡邊の実力である。彼の努力を見てきた盛本から純粋な称賛の言葉を受ければ、渡邊は少し照れながら嬉しそうな笑みを浮かべ返事をした。
「よし、全体の反省をしてから個人の評価もしていくぞ」
今まで地区大会上位レベルの成績しか残せていなかった男子バスケ部も、ようやく努力が実を結び始めてきた。そこへさらに驚異的なフィジカルを持った有力選手の湊が入ってきた事で、攻守ともに戦術の幅が出来かなりの戦力アップが期待できる。
助っ人として参加するまでボールに触れた事すらなかったという話は本当のようで、確かにボールの扱い等にぎこちなさは残っている

が、試合が進むにつれてパスもシュートも精度も上がっていた。
盛本はバスケ部の顧問となってから選手らの成長する姿を何度も見てきたが、湊ほどはっきりと成長する選手はこれまで見た事がない。これは化ければ化けるかもしれない、と密かに選手としての大成を望みながら、彼は選手らに個人の評価として良かった点と注意点を説明してゆくのだった。
そして、出場した選手の評価を終えて明日の集合場所と時間を伝え終えると、盛本は車に積んで帰る荷物を持って選手らに向き直った。
「それじゃあ、今日はこのまま解散するが明日もあるししっかり休めよ。水智さんも今日はありがとうございました。また明日もよろしくお願いします」
「いえいえ、私も楽しくやらせていただいてますから。こちらこそ、明日もよろしくお願いします。皆さん、明日も怪我なく勝って次の大会に進みましょうね」
『うーすっ！　おつかれっしたー！』
挨拶を終えると盛本に続いて恵も部屋を出てゆく。ユニフォームから制服やジャージに着替えた選手らも一緒に出ると、それぞれバス停や駅に向かって別れて帰っていった。
――湊自宅
恵を社員寮まで送った湊は自宅に帰ってシャワーを浴びて着替えると、自分の右腕についてどうするか考えていた。
シャロンに人間の腕に見えるような偽装を施すことが可能か尋ねれば、戦闘用の義手に人間の肌のように見える偽装を施しても一回り大きくなるのでばれてしまうと言われ、さらに言えば時間的に明日までに用意するのは難しいとの事で義手の偽装は諦めるしかなかった。
けれど、明日は日曜日で学校の人たちが応援に来る事もあって、左右の腕が別人の物であることに誰かしらは気付いてしまう。
見に来ている人間の目だけならば騙す方法もあるのだが、それだとビデオカメラなどは騙せない。機械の支配権を奪えばビデオで撮られる事はないが、記念として他の保護者たちが撮影しているものまで停止させるのも申し訳ない。

そうして、どうにも上手い方法が思い付かない湊は、ソファーに深く座りこむと溜め息を溢した。
「……はぁ」
《大分困っておるようじゃな。妾の腕を貸してやったというのに、それで不満とは随分と贅沢な悩みだ》
言いながら背後に現れたバアル・ペオル状態の鈴鹿御前は、ソファーの背もたれ越しに湊の首に腕を回して立ったまま抱きついてくる。
他の自我持ちと違って彼女だけはネガティブマインド側の期間中も出られるので、大切な愛子が何か悩んでいるときには話を聞いてやっていた。
それ故、勝手に現れたことも慣れたものとばかりに、湊は特に気にした様子もなく右腕の義手をあげて見せながら言葉を返した。
「肌の色はともかく長さと太さが違うからな。ばれれば大騒ぎになる事は確実だ」
《まぁ、背丈が違っておるからな。それも無理からぬことよ》
「……名切り式パンプアップ術で腕が肥大化したりしないか？」
《名切りにそんな珍妙な術などないわ。仮にあったとしても、妾の白く美しい細腕を太い筋肉の塊になどさせはせん》
パンプアップとはトレーニングなどにより筋肉が一時的に肥大化する事をいう。数千年の歴史を持つ名切りの一族であれば、そういった一時的に体型を変化させる技術もあるのではないかと睨んだのだが、鈴鹿御前は呆れた顔でばっさりと湊の言葉を切り捨てた。
そもそも、名切りは肉体を最高の状態に持っていきパフォーマンスで万能を目指した一族だ。隠密行動でばれないための変装術はあるが、それは服装や声色などで騙す技術であって体型を変化させるようなものではない。
正式に当主となって名切りの全てを受け継いだ湊ならば、自由に血から情報を引き出せるはずなので、鈴鹿御前は相手が諦めモードに入って考える事を放棄しているのだろうと思った。
見た目は美しい大人の姿に成長したが、こういったところはまだ子

どもだなと可愛く思いつつ、彼女は少し間をおくと勿体ぶった口調である事を話す。
《とはいえ、何も心当たりがない訳ではないがな》
「あるのか、パンプアップ術」
《そんな珍妙な術などないと云うとろうが！》
せっかく有力な情報を教えてやろうと思ったというのに、まだパンプアップというふざけたネタを湊が引き摺っていた事で、思わずずっこけそうになりながら鈴鹿御前はツッコミを入れる。
彼女だけでなく他の者も感じていることだが、ときどきこの青年が本当に賢いのかどうか分からなくなるときがあった。
知識量は相当なもので、頭の回転も他者の数倍速く、各分野のスペシャリストには一歩譲る程度の能力を持った究極のジェネラリストが彼だ。
だが、本当に極稀に大真面目に斜め上の発言や行動を取ってくる。本人は一切ふざけているつもりはないのだ。桜や英恵など母親たちから見れば、母性をくすぐられ苦笑しながらも可愛い可愛いと頭を撫でてあげたくなる萌えポイントなのだが、真面目に話していた方にすれば「このお馬鹿」と言って頭を叩きたい衝動に駆られた。
ツッコミと同時に出そうになった手をなんとか我慢しつつ、一度深く息を吐く事で冷静さを取り戻した鈴鹿御前は飛び上がり湊の正面に立つと、次はおふざけなしだぞと視線で釘を刺しながら先ほどの続きを話す。
《名切りには、殺して以降ひっつき続けている化け狐がおるのじゃ。ジャックをペルソナ化出来たのであれば、きっと其奴もペルソナとして手に入れられるはず。もっとも、ペルソナになれば陽の領域に居付くだろうから、負の領域期間でも呼べる仕組みを考えねばならないが》
「だが、ペルソナ化したとしても化ける能力なんてあるか分からないぞ？」
《いや、それは確実にあるとみてよい。時が経って力が衰えているやもしれんが、あれで元は都を騒がせた存在じゃからな。化けるのは得

意中の得意だ》
いつ頃の話かは分からないが、当時から既に変化の術で人を化かしていたとなれば、相手は本物の妖怪や心霊の類いと思われる。
名切りのルーツも人外なので、悪魔等がいることを考えれば別に妖怪がいても不思議だとは湊も思わないが妖怪に会うのは初めてだ。
退魔刀を所持していた名切りならば、そういった悪霊や物の怪として恐れられた存在も依頼で狩っていたのだろうが、狩られても怨霊として存在し続けるとは大したものである。
ただ、会いに行ったら「積年の恨み！」と呪われる可能性もなくはないが、名切りの記憶から陰陽術の知識を引っ張りだせば呪詛返しも出来るので気にしたりはしない。
「それで、その化け狐はどこにいるんだ？」
《フェアティルゲンという大剣にひっついておる。別名だと九尾切り丸（くびきりまる）じゃが、その名の由来となった切られた九尾が化け狐のことよ》
「日本の九尾と言ったら玉藻前じゃないか。同名さんか？」
《詳しい事は知らぬ。妾よりも一五〇年近く古いからな。時代的には百鬼アウラ（アタランテ）の孫か曾孫の時代じゃから、詳しく知りたければ化け狐自身か彼奴に聞けばよい》
戦車〝アタランテ〟の生前名は正しくはカタカナ表記だが漢字で書くと百鬼翁羅となり、異国の鍛冶師だった父と名切りの鍛冶師だった母という二人を両親に持つため名前も異国風となっている。
名切りは相手が外国人だろうが罪人だろうが、個体として何か優れていれば招き入れていたので、ハーフ自体は別に珍しくない。そんな一人である彼女は平安中期の人間であり、鈴鹿御前は室町初期の人間なので、玉藻前が日本にいたという平安末期にはお互い存在していなかった。
血に宿って以降の事は子孫が知覚した事は情報共有出来るので分かるが、先祖の持っている記憶も含めた情報は血から取り出すのに才能がいる。武芸の才を持っていた鈴鹿御前は個体としては優れていたが、先祖の持っていた情報を取り出すのは得意ではなかったので詳

しくはない。
故に、九尾討伐の真相を知りたければ、自分で血から情報を取り出すか、九尾討伐以前から血に宿っていた者に聞けと言って、今はネガティブマインドの期間で会えないと分かっていながら鈴鹿御前は言ってきた。
「……それで、その九尾切り丸ってどこにあるんだ？」
《龍の者たちが何もしておらぬのなら、多分、名切りの屋敷に眠ったままじゃろ。まぁ、管理状況も含め一度英恵に訊いてみればよいのではないか？》
彼女の言う通り、湊は屋敷の管理状況などを一切知らないので、連絡が取れる中で知っていそうな人物に尋ねる必要がある。
そうすると該当するのは英恵しかいないので、携帯を取り出してソファーから立ち上がりながら湊は英恵に電話をかけた。
携帯を耳に当てたまま窓際まで進み、コール音を聞きながら巌戸台の景色を眺めてしばらく待つ。すると、五コール目になろうかというとき、プツッ、と音が鳴って電話が繋がった。
《八雲君？　急に電話してきて何かあったの？》
「いや、名切りの武器に用があるんだけど、屋敷も含めて管理状況が分かったりしないか聞きたくて」
《そうなの。詳しくは分からないけど、お屋敷は今も残っているわ。武器の置かれているような蔵は危なくて帰省したときに掃除している七歌さんしか近付いてないようだけど、他の母屋とかは業者に頼んで定期的に掃除もしているみたい》
名切りは守護していた九頭龍家の者が勘違いを起こした事で、永きに亘って下僕のように扱われてきた。血の盟約で始祖の妹の血族を守護しながら完全なるモノを目指した彼らは、そのような不当な扱いにも黙って耐えていたが、本来の役目ではない戦に投入された事も多々あった。
元々富裕層だった九頭龍家は彼らを戦に貸し出す事で権力者からさらに報酬を得ていたが、報酬の内いくらかは名切りにも支払われていたので、現存する屋敷は田舎の古い武家屋敷の形ながら敷地面積は

桐条宗家よりも広いくらいである。
　そして、それよりもさらに広いのが隣接する九頭龍家の屋敷であり、そこで暮らしている湊と七歌の祖父である先々代九頭龍家当主は、湊が生まれた事で血の盟約が解かれた名切りを恐れ、未だに彼らの屋敷へほとんど近付こうとはしていなかった。
　名切りの屋敷には表に出せば騒ぎになる国宝級の文書や武器が多数眠っているが、下手にその蔵に足を踏み入れれば名切りの怨念なのか業者の者たちが大怪我を負ってしまうので、名切りを敬っていた先代当主だった七歌だけは帰省したときに蔵の掃除をしていたりする。
　よって、何か必要な物があるのなら屋敷に残っているはずだが、武器に用があると聞いた英恵は湊がまた危険な事に顔を突っ込んでいるのではないかと心配した様子で尋ねてきた。
《武器に用があるって、また危ない事でもするの？　裏のお仕事はやめたって言っていたけど》
「別にそういう訳じゃない。武器といってもその内のフェアティルゲンだか九尾切り丸って大剣に憑いてる妖孤の悪霊に用があるんだ」
《九尾切り丸？　それだったら桐条宗家に置いてあるわよ。前に私の誕生日パーティーで七歌さんが弓や退魔刀と一緒に持ってきたけど、百キロ以上あって運ぶのが大変だから美術品とかを置いている保管庫にそれだけ持って行ってもらったの》
　面白い名前だと思って名切りの大剣の銘を覚えていた英恵が所在を話すと、湊もそういえばそんな話もあったなと記憶から掘り起こす。
　あのときは受け取れなかった武器の名を聞いていなかったが、そういう話なら実家に帰るよりも楽に済みそうである。湊は桐条宗家の見取り図を頭の中に思い浮かべながら、家人である英恵に許可を求めた。
「……忍び込んでもいい？」
《え、ええ、別に構わないけど大丈夫？》
「問題ない。何か良さそうな物があったら一緒に持って帰ってくる」
《目録があるからばれてしまうと思うけど、八雲君が好きそうな物は

確かなかったと思うわ。それなら宗家近くに研究所があって、そっちにはエルゴ研の遺産が保管されているから使える物もあるんじゃないかしら？　当時の試作品だとか事故後のごたごたで放置されている物もあって、色々といじると危ないのだけど》

英恵はあくまで嫁入りした身であるが、桐条宗家が湊に事故後の賠償金を一切支払っていない事を知っているので、高級な調度品や美術品を多少チョロまかしても気にしたりはしない。仮に桐条に許可を求めたとしても、代々伝わる家宝でもなければ被害者であり恩人でもある湊の願いは聞き入れるはずなので、順番が前後するだけで大きな問題にはならない。

とはいえ、湊は目利きが出来るので嫌がらせのためだけに高い物から順に盗んでいきそうだが、彼の好みが偏っていることを理解している英恵は、保管庫にあるものよりもエルゴ研の遺産の方が役に立つと思ったので場所だけ伝えておいた。

それを聞いた湊はしばらく黙って考え込み、結局何があるか見てみないと分からないと結論付けたのか、出掛ける準備をするためリビングから私室に向かいながら返事をした。

「……とりあえず行ってくる」

《ええ、気を付けてね。宗家の使用人たちは貴方を知らないから見つかったら大変だけど、意識を刈り取ったりはしないであげて頂戴》

「わかった。あと、関係ないけど生徒会の部下に頼まれて、夏大会中だけバスケ部に入る事になった。悪霊に会うのは義手の偽装のためだけど、明日も勝ったら七月末に都大会に出る事になる」

《そうだったの。バスケットボールのユニフォームは腕が露出するから大変だものね。せっかく八雲君が試合に出るなら私も応援に行きたいのだけど行ったらばれちゃうかしら？》

以前幼児退行していた湊を匿っていたことで、英恵の屋敷にいる使用人たちは今も湊が屋敷に出入りしていることを誰にも漏らしていない。それどころか精神が元に戻ったことで回復を喜んでくれるほどだった。

相手の記憶の封印や消去も考えていた湊としては意外だったが、心

を読んでも彼らが本心から湊の回復を喜んでおり、また主の命を守って桐条や美鶴にも話すつもりはないと分かり信用してそのままにしておいた。
英恵に昔から仕えていた執事の新川は、死んだはずの湊が生きていたことで裏に複雑な事情があることを察して何も訊かずにいてくれている。
それ故、英恵の屋敷に訪れたときには百鬼八雲として過ごしている湊が試合に出ると言えば、英恵本人が応援に行く事はできなくとも、使用人の誰かがビデオで録画するかテレビ電話でリアルタイムに試合の映像を英恵に届けることだろう。
応援に来たがってくれることはありがたいが、お互いの繋がりがばれるリスクを考えた湊は申し訳なく思いながら我慢してくれるよう頼んだ。
「試合が進むと母校の代表を応援する名目で桐条美鶴も会場に来るかもしれない。そうすると見つかってしまうから、使用人かその家族に撮影を頼むくらいで我慢して欲しい。リアルタイムがいいならパソコンでテレビ電話を繋いでもらうとかの方法もある」
《それは確かに拙いわね。わかったわ。残念だけど直接行くのは我慢するから、試合の日程や会場が分かればまた教えて頂戴》
「了解。月光館学園のホームページでも見れるとは思うけど、分かったら連絡する」
《ええ、ありがとう。それじゃあ、気付かれないように気を付けてね。いってらっしゃい》
話を終えて英恵との通話が切れると、湊は髪を結いあげて動き易くする。別に縛っておかなくとも問題はないのだが、今回はかなり私的な理由とはいえ潜入ミッションなので出来る限り動き易くしておくのだ。
日が暮れるまではもう少し時間がある。それならば、ベルベットルームで正負のペルソナを月齢の時期に関係なく呼び出せるようにする方法がないか聞いてから行こうと考え、契約者の鍵を呼び出して十字を切った湊は、現れた扉を潜ってベルベットルームへと向かっ

た。

――ベルベットルーム

機械義手の偽装のため、人を化かす力を持つという化け狐が宿る九尾切り丸を手に入れようと潜入ミッションを計画した湊は、日が暮れるまで時間があったので先にペルソナの召喚時期の問題をクリアするべくベルベットルームを訪れた。

今なお上昇を続けるエレベーターの中央、そこに置かれた竪琴の意匠を象った椅子に座るなり、青年は部屋の主たるイゴールに質問をぶつけた。

「時期に関係なくもう一方のペルソナを呼び出せるようにする方法はないか？」

「フフッ、今日はまた突然ですな。そもそも、お客人の能力はペルソナ使いだけでなくワイルド能力者としても異質。月齢によってペルソナが切り替わるなど聞いた事もありません」

「そうか。邪魔したな」

湊のような特異なペルソナ能力について知らないのであれば、当然、そこから発生する問題の対処法など知るはずもない。

今日は対処法を知っているかどうか訊きに来ただけなので、知らないのなら長鼻の老人に用はないと席を立った。

すると、急に来て質問してきたかと思えば、すぐに帰ろうとする忙しい青年の反応に驚きつつイゴールが呼び止めてくる。

「お待ちくださいお客様。この部屋は現実世界と異なる時の流れの中にあります。そう急がれず、話を最後までお聞きになってから出られても遅くはありますまい」

力の管理者たちもそうだが、ベルベットルームの住人は基本的に話が回りくどい。そのせいで意味が伝わり辛く、率直に言えば、と改めて説明して二度手間になることもしばしば。

自分のペースを乱される事を嫌う青年は、話が長引きそうなときには会話を誘導して結論を先に言わせたりもするが、この老人は他の住人よりも抽象的で曖昧な表現を多用するため、中身のない会話をする

ようなら帰るぞという空気を全身から出しながら湊はストレートに尋ねる。
「……結論から言ってくれ」
「ええ、結論から言わせて頂けば方法はあります。といっても、これはお客人のアベルの能力の補助に使えればと用意させておいた物です」
そう話してイゴールが目配せをすると、傍に控えていたテオドアがペルソナ全書を使って十二芒星の魔法陣を展開し、テーブルの上に何かを呼び出し始める。
そして、白い光を放つ魔法陣が回転し出せば、そこから金属製のカードフレームらしきものがいくつも現れた。
テーブルに置かれたそれは四辺を覆うような形状ではなく、カードを入れるスリットの入った上部と反対側の底辺だけがカードの辺を覆うようになっており、上部と底辺を繋ぐようカード背面側にもX字にフレームがあるだけで側面の部分にはフレームが存在しなかった。
つまり、カード背面側から見ればX字の上下に横一本のフレーム部が存在するのだが、正面から見れば上下の二辺のみ覆っているようにしか見えないのだ。上部のフレームには一体となった小さなリング型の金属も付けられているが、そこには紐やチェーンでも通すのだろうかと思って眺めていれば、長鼻の老人はカードフレームを手にとって楽しそうに説明をしてくる。
「ペルソナの宿ったカードをこのホルダーに入れた状態で召喚しますと、ペルソナが消えたときには再びカード状態で戻ってくる仕組みになっております。側面を覆っていないのは握るなどしてカードを砕き易くするためです」
言われて試しに一つ手に取ると青年はカードを具現化してセットしてみる。ほぼぴったりのサイズだがカードを入れづらいという事はなく、多少振り回しても抜け落ちないのでホールド力は中々のものらしい。
先ほど説明にあった握り砕き易いようにと空けられた部分も、確かにパッと掴んでカードに力を籠める事が出来るので丁度いい塩梅だ。作った者のこだわりを感じる仕上がりに湊も満足していると、老人は

ホルダーの説明をしながらそれ以外にも召喚時期を無視する方法がある事を伝えてきた。
「召喚したままにしておく事や、無の武器と融合させておき必要なときにカードを抜き出すことで召喚時期をやり過ごす方法もありますが、お客人が他者にペルソナを貸し出す場合を考え、誰にでも扱えるよう用意させて頂きました」
「……という事は、結構前から用意していたのか？」
先ほどイゴールはアベルの能力の補助に用意していたと言っていた。湊がアベルを手に入れたのはエルゴ研で肉体の改造を施し始めた頃であるため、当時はまだ固有スキルである〝楔の剣〟で他者のペルソナや適性を奪っていなかったにしろ、能力は判明していたので補助の道具を用意すること自体は可能だ。
現実ではあれから六、七年ほど経っているが、それだけの期間があって尚、今日自分の方から尋ねなければ渡すつもりがなかったのかと湊は老人に呆れた視線を向ける。
しかし、彼の問いに答えたのは老人ではなく、先ほどホルダーを呼び出した従者の方であった。
「咄嗟にも召喚出来るよう使い易さに重点を置きながらも、日常でもアクセサリーとして所持していられるデザインの折り合いが難しく、設計を終えて実物が完成したのは八雲様が日本に戻られてからです」
以前からテオドアは姉たちに頼まれて、適性値測定アプリの開発や鍛錬に使う道具の準備に天井の修理など、アナログもデジタルも関係なく色々な物を作ってきた。
それらは全て手が込んでいて使い易いので、物作りに携わるようになって彼なりのこだわりが出てきたのだろう。
湊も武器や道具の整備だけでなく、自分でも色々と作ることがあるので、機能美を究めるだけでなく意匠にもこだわりたい職人としての考えは理解出来る。
けれど、テオドアとしては渡すのが遅くなった事を申し訳なく思っていたようで、深々と頭を下げて謝ってきた。
「普段、契約者ではない私の事も気遣ってくださって頂いているので、

修業に向かわれると聞いてから、感謝の気持ちも込めて帰って来られたときにお渡ししようと思っていたのですが、お渡しするのが遅れ大変申し訳ありませんでした」
「いや、必要なときに完成しているんだから十分だ。いいデザインだと思う。作ってくれてありがとう」
青年の心からの感謝の言葉を受け、テオドアは感激のあまり笑顔のまま瞳に涙を滲ませている。貰った側が嬉し泣きするのなら分かるが、送った相手に喜んでもらえて泣くなど完全に職人になってきているなと苦笑しつつ、湊はテーブルに置かれたホルダーを一つ残して他はマフラーにしまっておいた。
使わない分をマフラーに仕舞い終えると、残していた一つにマフラーから取り出した茶色い革の紐を通して首に下げる。
普段の湊は、右眼に眼帯、左耳にピアス、首にはマフラー・チョーカー・熊の爪のお守り、左腕に待機モードでリストバンドになっているEデヴァイスを付けているので、さらにカードホルダーまで首に下げては装飾過多になってしまう。
だが、首につけている物は基本的にマフラーで隠れている上に、熊の爪のお守りはシャツの中にいれているので普段は見えない。
よって、シャツの胸元に来るようなカードホルダーのネックレスを付けたところで、今さら気にするような者はいなかった。
「素材に使用している金属が大変希少なものでして用意できたのは七つだけです。ホルダーに入れたカードはホルダーから出さなければ八雲様の中に戻れませんから、くれぐれも取り扱いにはご注意ください」
「わかった。また何か面白いものを見つけたらお土産に持ってくる。今日はありがとう」
ホルダーから出さなければカードが湊の中に戻って来ないということは、ホルダーを奪われたり無くしてしまえば、そのままそのペルソナを失うという事だ。
ペルソナ全書で再び呼び出せるものならばまだ良いが、自我持ちのペルソナでそうなれば偶発的にカードが砕かれて召喚されない限り

は、一生孤独にカードのまま過ごす事になる。
　既に本人は死んでいるといっても、彼女たちは湊の中で自由に過ごし会話もしているので、ある意味生きているようなものだ。そんな者たちを地獄のような苦しみの中に落とす訳にはいかないので、ホルダーの扱いには何よりも気を付けると約束し、湊はベルベットルームを後にした。

第百三十四話　後篇　九尾切り丸―潜入―

深夜――桐条宗家

仮面舞踏会の小狼として裏の仕事をしなくなった湊は、久しぶりの任務に僅かな気持ちの昂りを感じていた。

シャドウとの戦いで銃を抜き、刀を振るってはいるが、任務には特有の緊張感のようなものがある。それを感じたのはイリスと行った最後の依頼だったかと、少しばかり懐かしく思いながら、安全な影時間での侵入をわざと避けて深夜に決行する事にした。

ペルソナは索敵以外には使わない。時流操作も影時間の展開も無しだ。イリスと依頼をしていたときとほぼ同じ条件に揃え、エールクロイツで機械制御を奪いセキュリティーが働かないようにしながら敷地を囲っている高い柵を蹴り上って跳び越える。

久遠の安寧の構成員を殺してまわっていたときには、庭に番犬が放たれていたパターンもあったが、流石に平時からそんな事をしている所など稀だ。

少し離れた場所に警備の人間や使用人の気配はするが、他は防犯カメラ等のセキュリティーでカバーしているようなので、それらをスルー出来る湊は音も立てずに庭を走り抜けると、誰もいない部屋の窓の鍵を外から開けて侵入する。

（ここは……ただの客間か。保管庫は部屋を出て左にずっと行ったさらに先だな）

保管庫は貴重な品を多数置いているので、防犯のために屋敷の奥にあり出入り口も廊下に繋がる扉一つしかない。

そこは夜でも夜勤の使用人が定期的に見回っているため、中に入るには邪魔な使用人を排除するしかないが、英恵から意識を刈り取ったりしないで欲しいと頼まれている。

敵の武力的排除が駄目となればそれなりのハンデを背負う事になるが、それを言えば影時間に来ていれば楽々クリア出来ていたのを、イリスと過ごしていた頃を懐かしむためにと敢えてしなかったのは湊なので文句を言う気はなかった。

静かに扉を開けた湊はセキュリティーや部屋から人が出てくる事を警戒しながら進んでゆく。時に天井付近まで上って息を殺してやり過ごし、またあるときは近くの部屋に入って索敵で経路を確認しながらついでに部屋の中を物色する。

ある部屋で桐条武治や美鶴を描いた肖像画を発見したりもしたが、別に桐条家の人間だからと無条件で復讐や嫌がらせをする訳ではないので、本人たちにしか価値のない品は無視して一目で高級品と分かる壺や皿ばかりをマフラーに仕舞い。総額で三千万以上も失敬しながら保管庫の近くにやってきた。

(見回りは一人、女か)

この時間の当番らしきメイドが廊下の掃除をしながら一人扉の近くに待機している。それほど長くない黒髪を頭の左右で縛り、フリルのついたヘッドドレスで髪をまとめ、コスプレ衣装のような丈の短いスカートではなく、清廉さすら感じさせる黒のエプロンドレスを身に付けたその姿は、まさにプロの使用人たるヴィクトリアンメイドに他ならない。

とはいえ、湊はソフィアやヒストリアに英恵の家と言った場所で和洋どちらのメイドも見慣れており、沢山あるからと何故か渡されたメイド服が何着もマフラーの中に眠っているので、今さら生のメイドを見たところで何の感動もありはしない。

何より、保管庫の門番となっている女は目的の邪魔をする敵でしかないのだ。相手は美鶴と同じ年頃のようだが、それなら早寝早起きしていろと思いかけたところで明日が日曜日であることに気付く。

(普段は学校に行っているから休日前に夜勤をしている可能性がある な)

別に相手の素性など欠片も興味はないが、自分が雇っている水智恵のように周囲の人間が協力して少しシフトを融通してくれているのだろう。

本人は同じように扱ってくれて構わないと思っていても、自分の子どもと同じ年頃の少女には他の使用人たちもどうしても甘くなり世話を焼きたくなるに違いない。

その分、自分の仕事が回ってきたときには他の者よりも真剣に取り組むため、こういうときには厄介なのだが、相手を観察しているとき、以前英恵が見せてくれた一時的に影時間の適性を得られる簡易補整機の指輪をつけている事に湊は気付いた。
（あれを持っているという事は影時間を知っているのか。となると、桐条かその娘に近い場所の人間なんだろう。まぁ、影時間の関係者なら少し小突いても問題ないな）
彼女の名前は斉川菊乃と言って、美鶴のお傍御用を勤める幼馴染でもあるのだが、相手の素性よりも影時間の関係者である事の方が重要なので、排除を決めた湊は上着のフードを被りマフラーで口元を隠すと、天井付近まで上って行って扉への接近を開始した。
常人ならば上れないような場所であっても、指先が引っ掛かるだけのスペースがあれば湊は上れてしまう。そして、そのまま壁と天井を伝って相手の頭上まで移動した湊は、そのまま相手の正面に着地するよう飛び降りた。
「っ!?」
突如上から人が降ってきたことで、相手は驚きのあまり声を出せずにいる。大声を出せないのなら好都合。
「怪しいやっ、コキャッ!?」
相手が一拍置いて声をあげかけた瞬間、湊は相手の肩を掴んで強引に後ろを向かせるなり、腕を使って首を絞めてそのまま変な方向へと曲げることで意識を刈り取った。
首を変な方向に曲げたとき、相手は出してはならないような声を出していた気もするが、アナライズで確かめたところ軽く首を痛めた程度で全治一、二週間ほどの怪我でしかない。
これならば意識が戻った後も大して業務に影響は出ないだろうと、ぐったりとした相手を肩に担いで近くの女子トイレの個室まで運び。スカートを捲いてショーツを足首まで下ろした状態で便器に座らせ、あたかも用を足している最中に眠ってしまっていたように偽装した。
もちろん、そんな偽装に意味はほとんどなく、仕事で警備をしていただけなのに邪魔だからと力技で意識を刈り取られ、さらに意味のな

い偽装のために下着を脱がされ秘所まで見られた彼女にとっては災難でしかない。
目を覚ましたときには首の痛みに違和感を覚えながらも、自分がトイレにいることで用を足しているうちに眠ってしまったのかと反省するに違いない。だがその直後、意識を失う寸前の記憶を思い出し、下着が脱がされている事から意識を失った後にトイレに連れ込まれて暴行を受けたと勘違いしてしまうだろう。
相手は美鶴と同じ高校一年生だ。そんな年頃の女子が気絶している間に誰とも分からぬ不審者に純潔を奪われたとなれば、下手をすれば自殺してしまうほどの心の傷になる。そうでなくとも一生物のトラウマで男性不信に陥る可能性すらあった。
久しぶりの潜入が愉しくて警備への対処が雑になったことによる弊害だが、有里湊という男は何かすると新たな問題を発生させるトラブルメーカー体質なのかもしれない。
そうして、被害者視点ではうら若き乙女の純潔を奪ったことになった青年は、悠々と扉の前に戻ってくるとマフラーからピッキング道具を取り出して簡単に鍵を開けてしまう。
分厚く重い扉を開けた先には、現在では輸入が禁止されているような動物の剥製や大きな彫像、さらにアンティークの柱時計に有名な画家の絵画など、数多くの美術品や高級品が綺麗に並べられ保管されていた。
（……一応、貰っておくか）
英恵が言っていた通り、この保管庫にはあまり湊好みの品は置かれていなかった。けれど、好みではなくとも価値があるのなら貰っておいて損はない。
入ってすぐ目に付いた五百万はする柱時計、棚に整理しておかれた総額一四〇〇万はいくグラスやティーカップのセット、多数の宝石がちりばめられたティアラやネックレスなど、今日一日で青年に盗まれた被害総額は一億円を軽く超えていた。
それだけの品を盗み警備のメイドの意識を刈り取っただけでなく、保管庫以外でも物品を多数盗んでいた事で、犯人の特定には至らぬも

のの青年の犯行は当然ばれることとなる。
以前の彼ならばばれぬようもっとスマートに犯行に及んでいただろうが、本人も気付かぬうちに桐条家に嫌がらせをしてやろうという気持ちが働いた事でこんな事になってしまった。
後で母親の一人に怒られることになる青年は、そんな事に気付かぬまま部屋の最奥に安置されていた鈍い輝きを放つ鉄の箱へと近付いてゆく。
箱まで残り三メートルほどの距離になると、そのタイミングでバアル・ペオル姿の鈴鹿御前が勝手に出てきて話しかけてきた。
《ふむ、随分と気配が弱いな。眠り過ぎて霊魂が錆び付いておるのやもしれぬ。偽装くらいには使えるだろうが、本来の力を取り戻すには時間がかかりそうじゃな》
「……まだ起こしてもないのに分かるのか？」
《まぁ、怨霊になろうと九尾は大妖じゃからな。妾が生きていた頃は使わぬときには札と鎖と陣を使って厳重に封印せねばならなかった。それが今では何の変哲もない鉄の箱と鎖で保管できておる。居るには居るようだが、この距離で危険を感じないとなれば魑魅魍魎と変わらぬ程に衰えているということじゃろう》
彼女が生きていた時代は九尾が狩られてから一五〇年ほどしか経っていなかった。それならば、現代まで語られる大妖の怨念も相当なものだったろう。
だが、今は見る影もないほど衰えているようなので、湊はそのまま箱まで近付き鎖を外すと重い蓋を開けた。
「……これが九尾切り丸か」
姿を現した名切りの武器を前に湊はジッと視線を向ける。それはまるで巨大な金属の塊だった。
鍔のない金色の柄が直接白銀の刀身と繋がるそれは、六尺三寸（一九〇センチ）、三十貫（一一二キロ）という大剣にしても異色の長さと重量を誇っている。また、これ自体は両手剣に分類されるが、名切りの家に残る書物によれば片手持ちの剣だというのだ。
現代よりも手に入れるのが困難であった希少なレアメタルを惜し

げもなく使い、名切りが長年培って編み出した技術の粋を集め一振りの剣として仕上げたオーバーテクノロジーの塊。アタランテの母であり、名切り一の鍛冶師であった百鬼千香の最高傑作にして歴史に残る怪作がこの九尾切り丸こと〝フェアティルゲン〟であった。

西洋剣はあまり趣味でない湊もこれほどの逸品となると欲しくなる。何より、正式な当主となった以上これは湊の物なので、返して貰うと心の中で呟いた湊は左手で剣を掴んだ。

《……ほう》

湊が剣の柄に触れると、まるで正統な所有者をずっと待っていたかのように剣が淡く光った。今まで何もなかった刀身に光の紋様が走り、剣自身が湊を所有者と認めているようである。

己を含めこれまで何人もの名切りがこの剣を手にするのを見てきた鈴鹿御前も、このような不思議な光景を目にするのは初めてだった。

これも完全なるモノに至った愛子へ過去の名切りからの贈り物だと思えば、随分と粋なことをしてくれると口元を歪めずにはいられない。

一一二キロの鉄の塊を片手で軽々持ち上げて眺めている青年に近付き、鈴鹿御前は箱の底にまだ何かが残っていることを教えた。

《八雲、箱の中になにやら残っておるぞ》

「ん？　ああ、本当だ。これは……極小の鎖で編んだ手甲か？」

武器の納められた箱ごと桐条宗家へ持ってきた七歌も気付かなかったようだが、女性用のネックレスチェーンよりもさらに極小の鎖で編まれた黒い手甲が剣の下敷きとなり入っていた。

オープンフィンガーグローブのようにそれぞれの指を通す穴はあるが、掌と手の甲から前腕ほぼ全てを覆う形になっており、基本的に防具を身に付けない湊もこれならば動きを阻害されずに済むので良いかもしれないと、左手首に付けていた待機状態のEデヴァイスを上腕まで上げてから手を通してみる。

締めるための紐もないというのにサイズはピッタリで違和感がなく、こういった鎖を編んで作られた手甲は防刃用に使用されるが、ど

うやって作るのか分からないほど小さな鎖を丹念に編み込んでいるため、もしかするとライフルは無理でも普通の拳銃の弾くらいならば防げるかもしれないと思えた。
無論、銃弾に対しては弾くか避けるかするので受ける事などないだろうが、今まで武器を使って弾いていた物が手甲で弾けるのなら非常に楽になる。
これら名切りの装備を作った者たちは、自分たち一族の者がどのような戦いをするのかをよく分かっていたのだろう、時を超えて受け継がれた装備の製作者に湊は深く感謝した。
《ん、やはり出たか》
良い物を手に入れたことで親しい者しか分からぬほくほく顔を湊が浮かべていると、その頭上から一枚のタロットカードが降って来たのを見た鈴鹿御前が小さく呟く。
降ってきたカードのアルカナは〝ＸＩＩＩ・死神〟。持っていた九尾切り丸をマフラーにしまってから手に取り、それを首から下げたホルダーにいれて青年はペルソナの名を呼ぶ。
「こい、シトゥンペカムイ！」
ホルダーに入れたカードを握り砕き呼び出せば、渦巻く水色の欠片の中心に力が集まりペルソナが姿を現す。
最初に見えたのはもふもふの大きな尻尾、さらに艶のある毛並みに琥珀色の瞳など、その姿は紛れもなく大人の狐である。だが、珍しいことに尻尾の先が白い以外その狐の毛色は全て黒だった。
尻尾は一本しかない上に、白面九尾の異名とは大きく違った毛色に湊も驚きを隠せない。とはいえ、ただの黒狐にしか見えない目の前の存在も一応はペルソナだと、湊が抱き上げようとしたとき、相手の身体が一瞬輝いたかと思えば次の瞬間には姿が変化していた。
《おおぅ、急に起こされたかと思えばまさかのイケメン登場。何やらにっくき鬼っころの子孫まで隣に居りますが、そこなイケメンさんにお名前を伺っても宜しいでしょうか？》
狐の姿から変化してフランクに話しかけてきた相手は、かなり短い丈の黒い改造着物を着た黒髪の美女だった。瞳は琥珀色だが頭の上

に狐状態と同じ毛色の狐耳が生えており、さらにはどうやって着物から出しているのか不明な尻尾も生えているので狐の化けた姿なのは分かる。
　しかし、鈴鹿御前よりも昔の存在であるのに、言葉使いがあまりに現代的過ぎやしないかと思いながら、湊は相手の問いに答えてやった。
「……戸籍名は有里湊。本名は百鬼八雲だ」
《なぬっ!?　そ、その姓から推測しますに、もしやそこにいる女郎の子孫だったり？》
「ああ、当代の名切り当主だ」
《なんと……おのれ、鬼っころめ。こんな好みどストライクなイケメンで、三つの国を落としかけたこの私を懐柔しようとは》
　相手のいう〝鬼っころ〟はどうやら鬼の異名を持つ名切りのことのようで、死んでから八〇〇年は経っているというのにまだ恨みは消えていないらしい。
　けれど、その末裔である青年がモロ好みにヒットしているため、過去の事は水に流して歴史的和解をするべきか悩んでいるようだ。
　三つの国を落としかけた話が真実であれば、相手はその土地毎で名と姿を変えても傾国の美女と謳われ続けた玉藻前という事になる。
　そんな相手を逆に落とそうとしている青年の美貌はやはり大したものだが、話を聞いていて険しい表情をしていた鈴鹿御前が我慢できなくなったのか口を挿んできた。
《戯け。貴様のような獣如きのために愛子である八雲を用意する訳があるか》
《あぁ、はいはい。死人は黙っててくれます？　私はいまこちらのイケメンとお話するので忙しいんですよ。さぁ、八雲さん。私、妖術や呪術とか得意なんで鬼っころたちに掛けられた洗脳を解いてあげますからね》
　言いながら女は白く細い指を伸ばし湊の頬に触れようとするが、傍にいた鈴鹿御前が裏拳で弾いて触れさせまいとする。
　確かに血に宿った名切りは、子孫へ完全なるモノを生み出させよう

と洗脳に近いものを施すことがあり。湊が持っていた殺人衝動もその一つであるため、封印されていた割に名切りに詳しいのだろう。
目の前で二人の女が殺意の籠った視線で睨み合っているのを眺めていた湊は、そんな事を考えながら他に疑問に思っていた事を尋ねることにした。
「……白面九尾じゃないのか？　一尾な上に毛色が黒のようだが」
《え？　うっわ、マジだ。なんか寝てる間に感覚鈍ったみたいですねぇ。そのうち思い出してゴージャスな黄金の毛色になるんで楽しみにしててくださいね》
《何が黄金なものか。貴様の毛など馬糞色じゃろうが》
《これだから鬼っころは言う事がいちいち下品で嫌だわぁ。つーか、死人ならマジさっさと成仏しろっての》
女は鈴鹿御前を死人というが、それを言うならお前の方が先に死んでいるだろうと湊は突っ込みたい衝動に駆られる。
だが、ここはまだ桐条宗家の屋敷内なので、話を切り上げて移動する前に相手が現状をどの程度把握しているか確認しておく事にした。
「……お前ら五月蝿い。それより、狐の方は今の自分の状態を把握してるのか？」
《狐のって……なんとも距離を感じる言い方をされますね。まぁ、この弱体化した姿で玉藻とか言われても微妙なんで、昔の名前の若藻って呼んでくださいまし。それで状態ってなんかペルソナとかいう式神っぽいのになって八雲さんと主従契約結んでる感じですよね？》
人間で言えば〝そこの人〟呼ばわりされたようなもので、なんとも微妙な表情を浮かべて若藻は呼び方を指定してくる。
それから続けて湊の問いに答えた事で、相手が一応の状況把握は出来ていた事に青年も安堵するが、召喚時に頭に思い浮かんだ名と指定してきた名に齟齬が存在した事に湊は首を傾げて問い返す。
「状況認識は合っているが、ペルソナ名はシトゥンペカムイだぞ？」
《いや、そんな事をいわれても北海道とか行ったことないですし。狐ですけど強いて言えばホンドギツネであってキタキツネじゃないですし》

「……そうなのか。まぁ、言いづらいしな。シトゥンペカムイって」
《噛みそうですよね、シトゥンペカムイって》
アイヌの人々には申し訳ないが、言い慣れぬ言葉に湊も別の名前でいいかと思ってしまう。若藻も湊と一緒に発音してみて何とも言えぬ表情を浮かべているので、シトゥンペカムイと呼んでも反応してくれなさそうな気配があった。
呼び出すときに重要なのはカードを破壊する事や、自分の内から相手の存在を引き上げることなので、名前など言い易いもので構わないはずだと青年も別の名で呼ぶ事に決める。
「それで若玉」
《はい、混ざった。なんか混ざってますよ八雲さん。若藻、もしくは玉藻。どっちかにしましょう。貴方もヤナトとかミナクモとか呼ばれたくないでしょう？　まぁ、若玉より格好よさげですが》
早速別の名前で呼んだかと思えばどういう訳か混ざっていた。発動した青年の天然ボケボケスキルに若藻もお姉さんぶった笑顔をにっこりと向けてきているが、その瞳は次はねぇぞと一ミリも笑っていない。
相手は変な名前が嫌なのだろうが、あまり他人の名前を覚えたりする気のない青年は華麗にスルーして話を進める。
「まぁ、それはいいがお前の変化の力を借りたいんだ。俺の右腕を生身のように偽装する事は出来るか？」
《偽装ですか？　まぁ、衰えた状態でも自分の姿か八雲さんの姿を変えるくらいは出来ますけども。万全なら村や里一つくらい余裕で作れたんですけどねぇ。てか、いま気付いたけどペルソナになった私、攻撃スキルほとんど持ってねえし》
攻撃スキルの少なさで改めて弱体化を感じてしまい。ゲンナリした顔で肩を落としながら話す若藻は、そのまま湊の右腕に触れると光になって腕を覆い尽くす。
自分の腕が覆われても特に何の感触も感じず、不思議なものだと思いながら光が治まるのを待てば、そこには手甲を装備した生身の腕が確かに存在した。

この状態でも指先から銃弾を放てるのか試しにやってみると、見た目はそのままだというのに弾は発射できた。保管庫の天井に弾痕を残してしまったが、偽装している若藻にもダメージはないようなので、湊は手に入れた右腕を握って見せて鈴鹿御前の方へ振り向いた。
「……よし。右腕を手に入れたぞ」
《そんなものはちょん切ってしまえ。可愛い八雲に獣臭さが移っては敵わぬ》
せっかく他の名切りのペルソナと違って自分だけが時期に関係なく共にいられるというのに、偽装のためとはいえ他の自我持ちが四六時中一緒なのは気に入らない。
そんな風に鈴鹿御前が不機嫌な顔をしても、今の湊は義手を隠す必要がなくなったことで機嫌がよくなっており、九尾切り丸の入っていた箱の蓋を締めて鎖で巻きながら饒舌に話す。
「分離した状態で召喚してるから召喚時補整が付与されないし便利だな」
通常、影時間外でペルソナを召喚すると、影時間中には及ばずとも僅かに補整が付与されてしまう。基本的には多少防御力が上がる程度だが、湊の適性レベルだと身体能力も向上してしまう。
加えて、ペルソナは特殊な波長を出しており、桐条グループはそれをペルソナ反応として捕捉出来てしまうので、自身から切り離したホルダー状態での召喚ならば補整も波長もカットされ双方の心配がいらないと湊はご機嫌だった。
普段あまり嬉しそうな顔を見せない湊がそんな風にご機嫌だと、子どもに甘い鈴鹿御前はしょうがないなと苦笑して若藻と共にいることも許可してやるしかなくなる。
《とはいえ、駄狐が傷を負えば八雲にその痛みは還る。十分に気を付けるのじゃぞ》
「ああ、分かってる」
鈴鹿御前たち名切りのペルソナも湊が右眼と右腕を失ったのを悲しく思っていた。機械義手という形で新たな腕は手に入れたが、それでも周囲に隠してというのは生きづらいはず。

だが、これで少しは彼も光のあたる世界に戻れるだろうと、若藻自体は気にくわないが殺した一族の末裔だというのに力を貸してくれる事には彼女も感謝した。

――旧研究所

若藻と九尾切り丸を回収した湊は、すぐに桐条宗家を出て英恵から教えてもらった研究所に来ていた。

今もかすかに使われている痕跡はあるが、基本的には倉庫のような扱いらしく、人は誰もいないのでセキュリティーのみカットすれば自由に見て回ることが出来た。

旧エルゴ研の遺産と呼ばれる物はそれなりに数があり、英恵や先ほどのメイドが付けていた簡易補整機の指輪のストックや小規模空間に影時間を展開する装置など、湊が思っていたよりも様々な実験を行いそれなりの成果も出していたらしい。

「……この装置で展開出来る広さは言って建物一つ分くらいか」

《八雲の力の方が上じゃな。しかし、それでも影時間を生み出せるほどに研究が進んでいたとは驚きじゃ》

桐条鴻悦の実験は空間を操る段階には踏み込んでいた。まだ足の先が入った程度ではあるが、そのまま実験を進めればもしかすると時間を操る事も出来たかもしれない。

しかし、それはあくまでＩＦの話だ。湊という一個人で持つには大き過ぎる力を最大限使ったとしても、時の針を進めるのがやっとで戻す事など出来はしない。

時を概念的に理解出来る者でそうなのだから、事象を観測して過去と未来に干渉するなど、世界中の人間から力を集めても出来たかどうか。

そんな風に過去の遺物に触れて、身に余る大望を抱いた果てに死んだ哀れな男について考えていると、今まで黙っていた若藻が変化したまま話しかけてくる。

《あのぉ、八雲さん？　影時間ってぶっちゃけ丑の刻みたいな常世と繋がり易い時間って考えでＯＫですか？》

「説明しようとすると難しいがニュアンスは近い。現世と常世が混ざ

り合って成り立っているのがこの世界だとすれば、影時間はこの世界と表裏一体のもう一つの世界だ。本来ならば背中合わせで交わることなどなかったが、シャドウを集めた桐条の実験により歪みが生じて限定的に交わるようになってしまったんだ」

桐条グループでは影時間は事故の影響で生まれたものだと思われている。だが、それは半分正解なだけで全体の認識としては間違っていた。

そもそも、シャドウたちの世界である影時間は遥か昔から存在しており、この世界の裏側に常に在った。

伝承などに存在する神隠しは、そういった裏側の世界に偶然落ちてしまって戻れなくなった事件の一つであり。妖怪などもこの世界に紛れ込んでしまったシャドウを見た人間が噂しただけだろう。

勿論、中にはメッチーのような魔界から来た悪魔や、湊の祖先である豊玉姫命のような古の神、または若藻のように偶発的に生まれた本物の妖怪などもいただろうが、それと同じくらいシャドウや影時間の歴史は古い。

そんな常に傍に在りながら交わることのなかった世界が交わる様になったのは、ニュクスの肉体の欠片である黄昏の羽根がこの世界に紛れ込んでしまったからだろう。

シャドウよりもニュクス自体の力を強く宿している羽根は、影時間側の性質を強く持っているせいで二つの世界の境界を揺らがせ易かった。

そのため、以前は極稀に発生していた影時間の頻度が増し、黄昏の羽根を偶然手に入れた桐条鴻悦が実験を進めシャドウらを捕獲する事で境界は曖昧になり、ポートアイランドインパクトで周期的に繋がる様になってしまったのだ。

「この装置や俺はあちら側の情報を持つ物を利用して、両方の世界を隔てる壁に小さな穴を開けているに過ぎない。だから、仮に全てが終わって影時間が発生しなくなっても、それは元通りの背中合わせに戻っただけなので、限定的になら似たような方法で影時間を引き出す事は出来るだろう」

《なるほどぉ、なんか難しいんですね》
「お前にも後でペルソナや影時間など世界が置かれている状況を教えてやるさ」
せっかく説明したのだがペルソナ等について詳しくない若藻には理解しきれなかったようで、それを悟った湊は順序立てて説明するから今は気にするなと返す。
分からないのに分かったフリをするのは恥ずかしい事だが、難しくて一度で理解出来ないのは別に恥ずかしい事ではない。
湊はあくまで若藻に力を貸して貰う側であり、力を貸して貰う以上は詳しい事情を説明する義務がある。さらに、対価として顕現するエネルギーを分けることで、若藻は現世で活動する肉体を与えるのでこの時代の事も知りたければ教えるつもりだった。
もっとも、どういう訳か若藻は話し方だけでなく、思考も色々と現代風なので日常生活面ではあまり教える事はないかもしれない。
そんな風に思いながら研究所の奥へ進めば、湊はなにやら機械で出来た大剣のようなものを発見した。壁に掛けられたそれを手に取り、アナライズで構造を解析してみる。
「これは……可変機構付きの武器か。しかし、推進器なんて付いていても普通の人間じゃコントロール出来ないだろ」
解析した結果、それは機械制御で変形して大剣や斧にもなる推進器付きの謎の武器だった。
しかし、普通の人間では機械制御の武器を使用中に変形させる事などほぼ無理で、推進器を使った移動など完全に不可能に思えた。
だとするとこの武器は人間用ではないのか、そう思ったところで湊はすぐ近くに他よりも強い黄昏の羽根の反応を感じて顔をあげた。
「この反応は……対シャドウ兵器か？」
反応のした方へ近付いてゆくとそこには立てて置かれた大きな金属の箱があった。縦長のその箱は九尾切り丸が入っていた物よりもさらに大きく、サイズから計算すると長身の湊ですらすっぽりと入れてしまうほどだ。
傍から見ると金属の冷たい質感もあって棺桶のようにも見える。

羽根の反応は箱の中からしており、さらにアナライズしてみると中には先ほどの武器と同系統の武器を背負った、アイギスとは異なる型番の対シャドウ兵器の少女が入っているらしい。
能力で箱の中を見ているとは言え、外身を見る限りでは相手は完成しているように思える。
黄昏の羽根を搭載しているという事は、少なくとも初期稼働させたかその準備は進められていたはず。脚部パーツの底、人間でいう足の裏を確認すれば歩いて付いたと思われる細かな傷があるようなので、アイギスがラストナンバーであることから察するに、この機体は彼女の姉にあたる存在だと思われた。
「……アイギスの姉がどうして研究所に。よく分からないが、こんなとこに居させるくらいなら連れていくか」
こんな倉庫のような場所に置いていれば、この箱の中で眠る少女が再起動される可能性はかなり低いだろう。黄昏の羽根を搭載した心を持った相手を、そんな状態で放っておく訳にはいかない。
湊はマフラーを首から外すとサイズを変えて大きくしてから箱に被せる。すると、箱はそのまま見る見るうちにマフラーに入っていき、最後には完全に消えてしまった。
とても大きな箱だったので、次に研究員が何かの用事で訪れたときに箱がなくなっていることに気付くだろうが、髪の毛一本落としていないので湊に辿り着く可能性は極めて低い。
そもそも、圧力をかけて公安にも捜査させないようにしているので、ここで盗難があろうと桐条グループはグループの力以外に使う事は出来ないのだ。
先ほど触れた可変武器もついでに回収し、大量に置かれていた簡易補整機の指輪も数ダース単位で失敬すると、時間も遅いので今日は帰る事にして、また少ししたら見に来ようと湊は場所を覚えておくことにした。
そして、日曜日に行われたバスケの試合では、腕を気にする必要がなくなったことで本来のパフォーマンスを発揮し。まだ慣れていないとはいえ前日以上の活躍を見せて無事に次の大会への切符を手に

したのだった。

第百三十五話　前篇　修学旅行初日―出発―

7月9日（月）

朝――月光館学園

雲一つない青空の下、月光館学園中等部の三年生たちは、それぞれ大きな鞄を持って校舎前に整列していた。

整列している彼らを見ていけば、ほとんどの者が落ち付きのないそわそわとした態度をしており、顔には期待感の籠った笑みを浮かべていた。

そんな者たちと相対する形で立っていた湊は、話を終えた校長からマイクを受け取り開会の挨拶のフリをした諸注意を述べる。

「無事に帰るまでが旅行らしいのでいくつか注意事項を伝えておく。まず、ホテルの部屋の冷蔵庫は好きに使っていい。普段はジュースや酒が入っているが、追加料金が発生すると支払いで混雑して時間を食うので最初から撤去して貰った」

湊の言葉を聞いた生徒らは苦笑してしょうがないねと笑い合う。

部屋にジュースが置かれていると買いに行かなくて楽ではあるが、オレンジジュースやコーラなど決まった銘柄しか置かれていないことが多いため、結局は自分の好きな飲み物を買いに出ることの方が多い。

それならば最初から撤去して貰い、好きな物を入れておけるスペースを確保されている方が生徒らにしてもありがたかった。

「ただ、自動販売機はホテル内にいくつもあるし、一階には売店もある。売店の営業時間が過ぎても歩いて七分ほどのところにコンビニがあるから自由に買い物していい。ただし、ジャージ等でコンビニに行くのはいいが、パジャマ等の寝間着でしかないものや部屋に置かれている浴衣やスリッパで行くのは禁止。見つけたら教師だろうと自由行動時間はバスに缶詰めだ」

今度の言葉には教師らの数名がギョッとする。立場的には監督官の教師が上なのだが、最初に公平なルールを敷かれては教師も従わざるを得ない。

普段、ホテルの浴衣を着たまま近所を少し散策することもあった者も、相手が湊では武力的に勝てないので、ならば大人しく着替えて出掛けるかと僅かに肩を落とした。
「ああ、止めても何人かは隠れてやるだろうから先に言っておく。飲酒は別に止めない。年齢確認不要の酒の自販機も置いているしな。ただ、部屋では飲むな。フロアをまるごと貸しきっているので、フロア内にある談話室でなら許可する。それ以外での飲酒は発覚で自由行動時間にバスに缶詰め、さらに戻ってから反省文だ」
こんな事は中学校の修学旅行では前代未聞だ。だが、確かになるべく同じフロアになるようかなり前から予約していた事で、月光館学園御一行だけでホテルのフロアを二つ貸しきっていた。
貸しきったフロアは宿泊フロアなので宿泊部屋以外は自販機コーナーと談話室くらいしかなく、カラオケやアミューズメントスペースへ行くような他の客も基本的には来ない。
ならば、隠れて飲まれるよりは、管理し易いよう場所を決めて限定的に許可すれば問題も起こり辛いだろう。
コンビニでは年齢確認があるので中学生は買えず。酒類の自販機にはビールと日本酒のワンカップくらいしかない。これでは子どもは楽しめないので、結局、ほとんどの者は一口二口飲んで後はジュースに移るという訳だ。
この事は教師側に事前に話しており、話した当初は反対もあったものの、どうせ何人かはこっそりと飲もうとすることは教師も分かっていたので、最終的には貸しきったフロアの談話室だけでならと渋々認めていた。
「消灯時刻は点呼を取るので部屋にいろ。それが終わったら出歩いていいが、ホテルの前にビーチがあると言っても泳ぐのは禁止だ。夜の海は危険な上に、沖縄の海には毒のある生物が多数いる。助けるのは非常に困難なのでビーチを歩くくらいにして波打ち際にも行くな」
これは純粋に生徒の安全確認のための決まりだ。誰かが行方不明になった場合、何時まで所在を把握出来ていたかはとても重要になる。

それに加え、せっかく沖縄に来たのだから泳がなければ損だと考え、夜になって泳ごうとする馬鹿には事前に釘を刺しておかねばならない。

日中でも溺れている者を助けるのは大変だというのに、夜の暗い海ではまず見つけようがない。

また沖縄の海には魚やヒトデなど毒を持つ生物が多数いるため、どの生物の毒を喰らったのか分からなければ対処が遅れて最悪死ぬ。暗い水の中で素人が生き物の種類を判別出来るはずもないので、この決まりは脅しでも何でもなかった。

「あとは、そうだな。異性の部屋に行くのはいいが、女子が男子の部屋で寝るのは禁止だ。もし女子が男子の部屋で寝ていれば、不埒な目的で男子が無理矢理に部屋へ連れ込んだものとみなす。その場合は停学や退学もあり得るから覚悟しておけ」

この発言には生徒たちがざわついた。女子が男子の部屋で寝るのは禁止と言ったとき、ほとんどの者は普通は逆ではと考えた。

だが、その後の発言で、禁止なのに女子が男子の部屋にいれば、確かに無理矢理に連れ込んだ可能性も想像できた。

もっとも、逆パターンで男子が女子の部屋に無理矢理に押し入ることも考えられるのだが、今年の引率は学校一のマッチョ教師である盛本、トップアスリートクラスの身体能力を持っている佐久間と櫛名田が揃っている。

さらに、生徒側にも上級生のボクシングチャンプに余裕勝ちした上、生徒の親や兄弟などの情報まで詳しく把握しているという湊がいる。

これでそのような犯罪行為に走れば、再びこの地へ帰ってこられるか分からないので、男子たちは全員絶対にそんな命を投げ出すようなことはしないと固く心に決めた。

だがそのとき、Ａ組の列から命知らずな一人のバスケ部員の声が飛んでくる。

「会長、そのルールだと個人的に一番会長が危ないと思うんですけど？　なんか、会長の部屋って朝になったら普通に女子がいそうなイ

メージっす」
「……朝までに女子から女になってるから安心しろ」
「はぁっ!? ちょっ、そんな抜け道ありっスか!?」
湊は〝女子〟は禁止だといったが、確かに〝女〟が禁止とは言っていない。彼の部屋で一晩過ごし朝を迎えるとすれば、そのときには無垢な少女は快楽の味を知った女になっているだろう。
大勢の前でそんな宣言をした湊を、男子生徒は嫉妬と羨望の眼差しで見つめ、女子たちは頬を染めてどことなくそわそわしている。
だが、いくら思い出作りの旅行といっても、子作りまでは駄目だろうと渡邊が抗議すれば、一同を見渡して呆れた表情を浮かべた湊が煙管を咥えながら言葉を返す。
「無しに決まってるだろ。お前だけじゃなく他の生徒もだが、俺に勝手なイメージを抱き過ぎだ。旅行効果で異性との距離を縮めるのはいいが、キスの先はもっと大事にとっておけ。何かあったとき泣くのは女だぞ」
言った青年の表情は興味なさげなやる気の感じられないものだが、その声は生徒たちのことを思う優しさが籠もっていた。
浮かれきって暴走直前になっていた者も、その声で少し冷静になると余裕を取り戻し馬鹿な行動に走ることはないだろう。
旅行の楽しさでまた夜になったら暴走するかもしれないが、女子の大半は自分の身は自分で守らなければと目が覚めたようなので、いくらムードがあろうと雰囲気に流されたりはすまい。
男は駄目でも女がしっかりしていれば大丈夫。強い女性を何人も知っている湊は、これで最低限の危険は回避できるだろうと挨拶を締めることにした。
「まぁ、注意事項はこれくらいだが、お前ら以外も観光客はいる。ただでさえこの人数で動くのは難しいんだ。馬鹿な事をして迷惑をかけたり、そのことで時間を取らせたりしないでくれ。以上で挨拶を終わる。A組から順にバスへ移動しろ」
話を終えるとマイクを見送りの教師に渡して、湊も生徒の列へと戻ってゆく。言われたA組がバスに移動すると他のクラスも順に移

動し、一同は空港へと出発するのだった。
――東京国際空港
空港に到着すると大きな荷物を預けてそれぞれ搭乗手続きを済ませてゆく。多数の金属を身に付けている湊は、金属探知機のゲートのセンサーを一時的にカットする事で問題なく通過し、その先で預けた携帯などをポケットにしまってから班員と合流した。
飛行機に乗り込むまではまだ時間があるが、それでも滑走路を移動する飛行を窓から見ることが出来るので、搭乗までの時間が迫っていることもあり、風花は既に緊張した様なぎこちない笑顔を浮かべる。
「なんか飛行機って緊張するね。私はじめてだからちょっと不安なの」
「……乗る前に言っておくが、靴を脱ぐ準備をしておけよ。バスや電車と違って飛行機は搭乗橋までは土足ＯＫだが、機内は衛生面のことを考えて土足を禁止しているからな」
「そ、そうなんだ。やっぱり空を飛ぶから車とかとはルールが違うんだね。スムーズに脱げるか不安だなぁ」
残念ながら土足禁止などまったくの嘘である。純粋な少女は信じてしまったようだが、彼女を騙した悪魔のような青年は気にせず携帯をいじっており訂正する気など微塵も感じられない。
そのせいで近くで話を聞いていた伊織順平という少年も、初飛行機だったことで湊の嘘を信じてしまい。不安そうにしている風花に自分の思い付いた名案を教えてきた。
「それならいっそ早めに脱いでおけば良いんじゃね？　裸足で歩くのって気持ちいいし。オレっち早めに脱いでおく事にするぜ！」
それを聞いた風花は感心したように順平の案に頷いている。
旅行中は基本的に制服着用だが、歩く事もあるので革靴やローファーではなくスニーカーなど歩き易いもので来るように言われている。
スニーカーなら型崩れも気にしなくていいので、二人は早めに脱ぐ準備をすることに決めて搭乗時間を待った。
そして、順に乗り込むように言われチケットを読み取らせた一同が

搭乗橋を歩き始めると、飛行機の入り口が見えた時点で順平がやる気に満ちた声を出す。
「うっし、そろそろだな」
飛行機までは二十メートルもない。この人数が入り口直前で脱ぎはじめたら混雑するだろう。
それを避けるため、自分たちは先に脱いでスムーズに乗ろうと靴を脱ぎ始めたとき、順平の後ろにいてニコニコと笑っていた西園寺が声をかけてきた。
「一応言っておくと飛行機は土足ＯＫなんだよ。ていうか、裸足で歩いてると不審者扱い受けるパターンもあるから気を付けてね」
『……え？』
衝撃の事実を告げられた途端、順平と風花は西園寺の隣に立っていた湊に視線を向ける。
すると、ポカンとした表情の二人に見つめられた湊は、結った髪をかき上げながら、シレッと悪びれた様子もなく口だけの謝罪を述べた。
「……悪い。お前らがあんな馬鹿な冗談を信じるとは思ってなかった」
「あっぶねー！　そのキャラで真顔で冗談言われてもマジ分かんねえから！」
「西園寺さん、その、教えてくれてありがとうございます」
「いいよ、いいよー。私も馬鹿な人を憐れんで教えただけだからさぁ」
湊の横を陣取っている彼女は綺麗な笑みを浮かべている。しかし、その裏にとても黒い物を見た気がした順平たちは、心の平穏のために何も見なかったことにして座席へと移動した。
席を見つけると荷物を上の棚に仕舞い。チケットに書かれた席へと座る。湊の席は窓際三人席の真ん中だ。
窓側から順に風花、湊、西園寺となっており、後ろの列には理緒、友近、順平というよく分からない配置になっている。
もっとも、湊は身体が大きいので背の低い女子に挟まれている方が楽ではあるが、友近に断ってから少しリクライニングを倒している

と、隣のクラスであるためすぐ前の列にいたチドリが椅子に膝立ちになって話しかけてきた。
「湊、この人信じて靴脱いだわよ。そっちにもいた？」
この人とは誰だろうかと立って確認すれば、そこには耳を赤くして俯いている美紀がいた。この少女も飛行機初体験だったのかと思いつつ、湊は席に座りなおして先ほどの事を話す。
「もう少しで二人引っ掛かったんだが、西園寺が先にネタばらしをして未遂で終わった」
「そう。やっぱり常識知らずの馬鹿っているのね。海外発祥の航空事業で土足厳禁とかある訳ないのに」
ニヤリ、と悪どい顔をしてチドリが笑えば、風花は気まずそうに窓の外を眺め続け、後ろの席からは「二人とも似た系統だったか……」と湊とチドリが同じ行動を取っていた事に衝撃を受けたらしい声がぼそりと聞こえた。
本人たちは別に周囲が思っているほど真面目な性格をしているとは思っていないので、たまにはこういった事もするのだが、先入観と固定概念は覆すのが難しいらしく、こんな風に直接被害に遭わない限りは近寄りがたいイメージのままなのだった。
だが、今回の旅行を通じてそういった部分も少しは変わるかもしれない。時間が来て飛行機が動き出すと、一同を乗せた飛行機は那覇空港へ向けて飛び立っていった。

午後―沖縄・美ら海水族館
沖縄についた湊たちは、バスに乗って首里城やガマをまわって昼を挿むと、本日最後の観光場所である水族館へとやってきていた。
ここはそれぞれ見たい物も違うだろうという計らいから、集合時間にバスに戻っておくようにだけ決めて館内では自由行動となっている。
湊の班も部活の友達に誘われて理緒が離れ、回るペースが違うだろうからゆっくり見てくれと友近や順平が離れていき。湊の姿を発見したチドリと美紀がやってきて、同じ班だという渡邊と高千穂を連れ

てゆかりもやってきたので、いつの間にか部活メンバーと生徒会メンバーが集まる形になっていた。
「……ジンベイザメって食べれるのかしら？」
「漁はしていないが網に偶然掛かったものが死んでいたりすると、解体して肉として市場に流れる場合がある。基本的にアンモニア臭くてオススメはしないが、全体がそういう訳ではないので食べれない事はないな。ただ、別に旨みがある訳でもないから美味しいとはいえない。今度寿司屋に連れて行くから好きなネタを食べた方がいい」
　巨大な水槽を悠々と泳いでいる巨大なジンベイザメを見ながらチドリが呟く。他の者たちはそれを聞いて、一人はこういう味の疑問を持ったりするよなと苦笑していたが、まさか湊が食べた事があるとは思っていなかったので、彼の普段の生活に対する疑問が新たに湧き上がった。
「会長、それじゃあマンボウって食ったことあります？」
「……三重県の道の駅で普通に食べられるぞ。食感は鳥肉とイカの中間くらいの不思議な感じで、少し濃いめに味を付ければそれなりにいける」
「すげー、会長って何でも食べた事あるんすね！　あ、じゃあ女ってどんな味っスか？」
「……流石に人肉を食べた事はないな。噂では臭くて食べられたもんじゃないとか、逆に雑食で野菜も食べているから美味しいとも聞く。個人的に食べたいとは思わないが、味に関しては興味があるので食べたら感想を聞かせてくれ」
　そう話す青年の顔には綺麗な笑みが浮かんでいる。彼の笑顔を見た渡邊は、この男は尋ねた意味を理解していながら、わざと食人という恐ろしい話に持っていったのだと瞬時に悟った。
　この話を続けるのは危険過ぎる。渡邊は愛想笑いを浮かべてお茶を濁すと、あたかも珍しい物を見つけたかのように傍の水槽へと駆けて行った。
　相手が下品な話をしてきたから恐ろしい話題で返した湊も、それ以上相手が話さないのであれば続ける気はない。

移動していた他の者を追って進み、トンネルゾーンでジッと魚を見つめているゆかりに近付くと声をかけた。
「……水族館は嫌いか？」
「え、急に何？」
「いや、少し暗いからな。悩み事か父親との思い出に浸っているのかと思ったんだ」
最近のゆかりはどこか暗いところがあった。母親と色々と複雑な関係のようなので、その方面で何かあったのではないかと思っていたが、改まって聞く事など出来ないので、状況を利用し水族館に父親との思い出でもあるのかと茶化して尋ねたのだ。
すると、同じ親を失った立ち場であることを明かしている相手には話し易いのか、ゆかりはしょうがないなと苦笑しながら返してくる。
「お父さんとの思い出に浸ってるなら、そこは気付かないフリするのが優しさってもんでしょ」
「去年自分で言ってただろ。俺は〝いじわる〟だって」
「はいはい。君のそういう分かり辛い優しさにも一応感謝しておきますよ」
意地悪な人間が気を遣って声をかけてきたりなどするはずがない。もっといえば、周囲にばれないように普段通り振舞っていたのに、普段と違うことに気付いて声をかけてきたとなれば、相手はしっかり自分を見てくれていたことになる。
態度は適当で対応はぶっきらぼうだが、そういう細かな心配りが何人もの女子のハートを捕えてきたのだろうと、彼なりの優しさを感じてゆかりは普段通りの笑みを浮かべた。
「てか、別に思い出に浸ってた訳じゃないんだよね。どっちかっていうと遊園地とか動物園の方が行ってたし。水族館の思い出はそんなにないの」
「じゃあ、悩み事か。消灯後、ビーチにいれば悩み相談くらい聞いてやるぞ」
「暗い場所で君と二人って身の危険を感じるんですけど。朝までいたら襲われちゃうらしいし」

「その後に言ってただろ。キスより先は取っておくって」
「いや、キスもお断りだから」
軽口を言いながらもゆかりは彼がそんな事を本当にするとは思っていない。この旅行には家族であるチドリもいて、さらに相手は自分に恋愛感情を抱いていないのだから、そんな事をしてくる可能性ははっきりゼロだと言い切れる。
ならば、一人で生きていくと決めている身として、愚痴も弱音に入るので吐くことは出来ないが、自分の母親の様子を他の人がどう思うのか聞いてみるくらいは良いかもしれないと思った。
悩み相談に誘ってきた以上、相手はゆかりが行っても行かなくてもビーチで待っていることだろう。悩み相談をしないのなら、相談はないので帰っていいと伝える必要があるので、一応消灯後にビーチに行く事に決めながら、ゆかりは湊と並んで他の者たちを追って水族館エリアを出た。
建物の外に出ると風花たちがマナティー館へ行こうと手を振ってきている。背が小さい事もあって、楽しそうにはしゃいでいる彼女の姿は自分たちよりも年下のように見える。
そんな和まされる友人の姿に笑いながらマナティー館に入ると、先に入っていた風花やチドリたちが胸辺りまである柵から五メートルは下にある水槽にいるマナティーを眺めていた。
「うわー……反応に困る見た目」
「夢のないやつだな。あんな不細工な動物でも山岸は可愛いと言ってはしゃいでるぞ」
言いながら湊が指をさした先では、風花が美紀らと一緒にデジカメで写真を撮りながら可愛いと何度も言っていた。
隣にいるチドリも呼吸のために浮上してくるマナティーをジッと見つめているが、その視線は肉の味について考えていそうなので、あえてスルーしながらゆかりは言葉を返す。
「いや、君も不細工って言ってるじゃん。まぁ、愛嬌はあるから可愛いって思う人がいても不思議じゃないし。別に風花の反応もおかしくないと思うよ」

「……前から思っていたが、女子の〝可愛い〟の定義ってよく分からないよな」
「同意求められても、私も別に女捨ててる訳じゃないんですけどね。花の女子中学生ですから、女子のいう〝可愛い〟の用法くらい分かってますし」
「そうか。ノリと感覚で本人が思えば何にでも使えるとは万能言語だな。底の浅さが素晴らしい」
ゆかりでも分かるという事はそういう事だろう。そう言いたげに湊が薄い笑みを浮かべれば、ゆかりは花の女子中学生がしてはいけないような表情で湊の脇腹を肘で小突いた。
だが、非力な少女の攻撃などまるで効いていないようで、諦めたゆかりは柵の上に腕を置いて顎を乗せながらのんびりとマナティーを眺める。
あまり可愛いとは思わないがやはり愛嬌はあり、ゆったりとした動きが見ていて心を落ち着かせた。午前中の観光はあまり集中できていなかったが、湊と話をして少し気が紛れたことでようやく彼女は旅行を楽しむだけの余裕を取り戻したのだ。
そうして、来た記念だからと後でお土産にマナティーのストラップでも買おうかなと考えていたとき、ばたばたと騒がしい足音が後ろから聞こえて何かが柵に突進してきた。
「マナティー！　ヘイヘイ、こっち向いてー！」
「ちょっ、七歌、まわりの人に迷惑だからやめなって！」
柵に突進してきたのは他校の制服を着た茶髪の女子だった。後から追いかけてやってきた別の女子に七歌と呼ばれた少女は、連れが止めるのも気にせず柵から身を乗り出してマナティーに手を振り呼んでいる。
「ブサカワー！　マナティー、お肉さわらせてー！　ヘイ、ジャンプ！　さぁ、カモっ――うぉあっ!?」
突然やってきた騒がしい嵐のような少女は、身を乗り出して両手を叩いていたままバランスを崩し、そのまま柵の向こうへと落下してゆく。

連れの少女が驚き足を掴もうとするが間に合わず、マナティーのいる水槽に頭からダイブするかと思ったとき、傍に立っていた青年が飛び降りながらマフラーを解いて投げた勢いだけで柵の手すりに巻きつけると、そのまま少女に追い付き足を掴んで水面まで残り一五〇センチのところで落下を防いだ。

これらが僅か数秒の内に起こったせいで誰も反応出来なかったが、湊が掴んでいた相手を片手で軽く投げて正面から抱きしめるように持ちかえたところで、全員の意識が再起動を果たす。

「ちょっ、有里君大丈夫!?」

「会長、いま引き上げるんで待っててください！」

「やめろ馬鹿。マフラーが解けるから触るな」

マフラーを掴んで渡邊が引き上げようとすると、解ける事を心配した湊がそれを止める。

だが、そのままでは落ちてしまうのではないかと全員が心配してると、湊は少女に掴まっているように言って両手を空けるなり、足も使わず腕だけでするすると上ってきた。

柵に手がかかるとそのまま上に飛び上がり、皆のいたフロアに無事に着地してから少女を解放し、巻き付けたマフラーを解いて首に巻き直しながら口を開く。

「……馬鹿かお前は。興奮するのは勝手だが、それで周囲に迷惑をかけるな」

「いやぁ、面目ない。というか、助けてもらってありがとうございました！」

注意を受けた相手は冷静になったのか、恥ずかしそうに頭の後ろを掻いて謝罪すると、そのまま丁寧な仕草で頭を下げながら礼を言ってくる。

一歩間違えれば大事故となり、少女だけでなく水槽のマナティーまで死んでいたかもしれないのだ。これでヘラヘラと笑って謝りもしなければ殴っていたところだが、ちゃんと謝罪とお礼を言ってきたことで湊の中では話が終わったらしく、少女から離れていこうとする。

だが、湊がチドリたちの方へ一歩踏み出しかけたところで、頭をあ

げた少女が首を傾げて湊を見てきた。
「んんー？　ふむー、おお！」
時折目を細めたりしながら変な声を出していたかと思えば、少女は突然納得したように手を叩いて頷きだす。
傍から見ればただの変人でしかないが、少女は湊に近付いて来ると笑顔のまま手をあげて挨拶をしてきた。
「やぁやぁ、久しぶり！　こんなところで会うとは奇遇ですな！」
「え、久しぶりって、有里君この子と知り合いなの？」
「有里？　いやいや、彼の名前は百鬼八雲だよ？　何を隠そう八年前に行方不明になった私の従弟なのさ！」
久しぶりという挨拶に反応したゆかりが尋ねれば、バラエティ番組ならば〝ババンッ！〟という効果音が鳴っていそうな、得意げな顔で胸を張って自分と湊の関係を相手は発表してくる。
だが、高いテンションの少女とは対照的に、従弟と呼ばれた青年は普段と変わらぬ低いテンションのまま学生証を見せて言葉を返す。
「……誰と勘違いしているのか知らないが、俺の名前は有里湊。お前とは初対面だ」
「〝月光館学園中等部、有里湊〟……んー、もしかして記憶喪失なのかな？　八年前に辰巳ポートアイランドってとこのムーンライトブリッジでご両親が亡くなったのは覚えてる？」
月光館学園に通っていて辰巳ポートアイランドとムーンライトブリッジを知らない者はいない。加えて、ここにいる者たちは湊の両親が事故で死んでいる事を知っていた。
相手が湊の本名を口にした時点で危険だと思っていたチドリは、このままでは湊の素性がばれてしまうと思い。湊と少女の間に立つと相手を睨みつけながら会話に割って入る。
「アンタ、ベラベラと訳分かんないこと言ってなんなの？」
「なんなのって私は九頭龍七歌。八雲くんの従姉なんだけど記憶喪失ならしょうがないね。あ、でも、桐条家の英恵おばさまが八雲くんの無事を知りたがってたから、連絡取れたら取ってあげて欲しいな」
百鬼家と九頭龍家の関係を知っていたチドリは、相手が名乗ったこ

とで七歌が本当に湊の従姉であると確信する。
だが、会話を止める前に桐条家の名前が出てしまったことで、内心では苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。
案の定、今まで訳が分からず会話を聞いていたゆかりが、知っている桐条家の名前を拾い上げて湊に質問をぶつけだす。
「桐条家って、え、有里君って桐条家と繋がりあったの？」
「もう一度言っておくが、俺は有里湊であってお前のいう八雲という人物ではない。桐条家は知っているが御令嬢に一時期ストーカーされていたくらいで、それ以上の繋がりはないな」
しかし、湊は七歌の方へ向いたまま改めて別人である事を主張し、学校で美鶴との面識はあるが桐条家自体との繋がりを否定した。
その姿を見ていたチドリは自分が冷静さを欠いていた事を反省し、自分の態度から他の者に湊のことが伝わらぬよう、変な人間に湊が話しかけられて不機嫌になっているように装う事にする。
幸いな事に学校の者たちはチドリの様子の変化に気付いていなかったようで、湊がいつも通りであることから七歌が湊を誰かと勘違いしていると思ってくれたようだ。
もっとも、七歌だけはどういう訳か八年ぶりに再会した湊を、従弟の百鬼八雲であると確信しているみたいだが、修学旅行先で偶然出会うだけでも奇跡だというのに、東京に戻ってからまた再会するなどあり得ない。
よって、この場をやり過ごしさえすれば大丈夫だとチドリが内心安堵すれば、湊と美鶴が出会っていたことを不思議がっていた七歌が何やら一人で納得して頷いていた。
「あれ、美鶴さんと会ってたの？　ってああ、月光館学園って美鶴さんの通ってる学校か。なるほどなるほど、んー、高校からそっち行くのも楽しそうだね。今日は時間がないからこれでさよならだけど、連絡先教えておくからまた電話とかしてきてね」
そう言うなり、七歌は背負っていたリュックからメモ帳とボールペンを取り出し、自分の名前・携帯番号・メールアドレスを書いたページを破って湊に渡した。

連絡先を渡した側と受け取った側の性別が逆ならばナンパとしか思えないが、いくら美人であっても湊は男であり、かなりの変人でも七歌は美少女なのでナンパとは思われない。
そうして、湊に連絡先を渡せたことで満足したのか、ボールペンとメモ帳を片付けてリュックを背負い直した七歌は眩しい笑顔で手を振りながら突然別れを告げてきた。
「叔父様と叔母様のお墓は百鬼のお屋敷にあるから、またお盆にでもお墓参りにきてよ。それじゃあ、八雲くんとお友達の皆さん、アデュー！」
「あ、あの、うちのが迷惑かけてすみませんでした。失礼します」
走って去っていく七歌を追いかけるべく、連れの少女も湊たちに謝ってから去っていった。
登場から退場まで非常に騒がしい者だったが、彼女から受け取った連絡先の紙を湊が握り潰していたのを見たチドリは、とんだ偶然で生存と居場所がばれたことに苛ついているのを察し。ペルソナを召喚せずに先ほど気配の居場所を特定すると、彼女と会わないように気を付けながら湊の手を引いて残りの施設を回るのだった。

第百三十六話　後篇　修学旅行初日―星空の下で―

夜――ホテル前ビーチ

水族館で遭遇した七歌に自分が生きているとばれて苛ついていた湊だったが、ネガティブマインドの期間で表に出て来られないカグヤから伝言を預かってきたとバアル・ペオルが話しかけてきた事で、彼の精神は平静を取り戻していた。

なんでも、龍の一族は既に力に目覚めている者ならば、新たな龍が目覚めると個人の特定は無理だが、誰かが力に目覚めた時点で階級を含めて目覚めを感知できるのだとか。

九頭龍家に分家は存在せず、龍の血を引く子どもは七歌と八雲しかいないので、七歌よりも後に目覚めた者がいた時点で生存はばれていたらしい。

流石に居場所まで分かるほど高性能ではないが、七歌だけでなく一族の生まれである彼女の父と祖父も湊が最上級の特級五爪であることは把握しているため、それならば七歌が勝手に居場所を広めなければ問題はほぼないと思われた。

そうして、一応、受け取った連絡先を携帯に登録してからビーチにやってくると、隅の方で星空を見上げて立っているゆかりを発見した。

暗い夜のビーチに一人でいるなどナンパしてくれと言っているようなものだが、生憎とここはホテルのプライベートビーチなのでナンパ目的で彷徨いている連中など居はしない。

なにより、どこか沈んだ雰囲気の少女に下心を持って近付くなど、男の風上にも置けない下衆である。湊がその現場に出くわせば相手を夜の海に放り投げるところなので、彼が見ている範囲内でゆかりをナンパする者がいなかったのは、ある意味で双方にとって幸運であった。

ブーツの底をビーチの砂に沈ませながら一歩一歩近づいた湊は、砂を踏む音に気付いて振り返った少女に声をかける。

「……ホテルから離れると危ないぞ」

「うん。でも、あんまり近いとビーチに出てきてる他の生徒が声かけてきたりするしさ。静かに景色を眺めたかったから、これくらいなら大丈夫かなって程度に離れたの」
振り返ったゆかりはTシャツの上にグレーのパーカーを羽織り、下はピンクのラインが入った紺色のジャージというラフな格好だった。
湊も髪は結い直したが既に入浴を済ませているので、マフラーやアクセサリーは付けたままだが、普段着ているコートはマフラーに仕舞って、今は七分丈のシャツにジーンズという格好である。
点呼を終えて消灯時間になっているので後は寝るだけだが、修学旅行一日目の夜という事もあり、一部の生徒はどこかの部屋に集まって罰ゲームありのトランプに興じたり、または数人でベッドに寝転がりながら好きな人の話をして楽しんだりと過ごし方は色々だ。
中には湊たちと同じようにビーチに出ている者もいたりするが、二人がいるのはホテルの照明があまり届かない場所なので、ほとんどの者はもう少し明るい丁度反対側へと集まっている。
人がいない方が静かに話すのには好都合なので、湊はビニールシートを砂の上に広げると、そこに腰を下ろしてゆかりにも隣に来るよう促した。
「とりあえず、座って話そう」
「んー、座っちゃうと長話しちゃいそうだけど。まぁ、バスの移動時間で寝れるし、いっか」
少し風は吹いているが温暖な気候なだけあって寒くはない。加えて二人とも丈のある服を着ているので、長話をしても風邪をひく心配はなく、睡眠時間については一考すべきだが、それも移動のバスで寝る時間があるので、そこまで考える必要はないかとゆかりは笑いながら湊の隣に座った。
離れた場所にいるため他の者の声は聞こえず、ただ寄せては返す波の音だけが二人を包む。
そうして、しばらく無言のまま月明かりに照らされる夜の海を眺めていれば、ゆかりの方から静かに話しかけてきた。
「あのさ。悩み相談じゃなくて、ちょっと他の人から見た感想が聞き

たいんだけど、そういうのでもいい？」
「俺の意見が参考になるか分からないが、それでもいいなら聞こう」
残念ながら湊は一般人と感覚がずれているので、ゆかりが望む様な答えを返せるかは分からない。
けれど、自分なりに真剣に答えようとしているのが伝わったのか、短くありがとうと礼を言ってからゆかりは話し始めた。
「前に、私が事故の真相とお父さんの事を調べるためにこっちに来たって話したのは覚えてる？」
「……ああ」
「まぁ、それはまだ進展ないんだけど。月光館学園に来たのには実はもう一つ理由があって、それがお母さんのことなのよ」
やや暗い雰囲気のままそう言ったゆかりは、体育座りで海を眺めながら月光館学園へとやってきたもう一つの理由を話す。
湊には母親と少しばかり溝があると話しているので、月光館学園に来た理由の一つだと教えた時点でおおよそ察したに違いない。
それでも、本題はここからなのでゆかりは視線を海に固定したまま、自分と湊にしか聞こえない程度の声量でぽつりぽつりと言葉を続ける。
「お母さんね。お父さんが死んでから色んな人と付き合ったりしてるの。二股とかそういうのはないけど、別れたら新しい男作ってって感じで男に依存しっぱなし。自分で立とうとしないで、男に支えてもらってるの」
付き合っている男から経済的な援助を受けている訳ではない。ゆかりの母である梨沙子は桐条の名士会に名を連ねている良家出身なので、岳羽詠一朗の死後はその実家からの援助と死んだ父の保険金で主に生活していた。
しかし、金銭的な支えが必要ないという事は、梨沙子が男性と付き合っているのは恋愛感情や精神的な依存が理由ということになる。
今も死んだ父親のことを大切に思っているゆかりとしては、夫のことを忘れて他の男に走るくらいならば、お金のために付き合っている方がまだマシに思えた。

「別に付き合うのは悪いと思ってないよ。真剣に考えたなら再婚とかもありだろうしさ。でも、あの人はそういうんじゃないの。ただ自分の弱さから目を背けて、居心地がいいから男に逃げてるだけ」
母親もまだ四十歳になろうというところなので、後の人生の長さを考えれば再婚してもおかしくない。
娘が小学生になって少しの頃に夫を亡くし、その夫が事故を起こした張本人だと周囲からのバッシングを受けて苦労していた事を思えば、本当に信頼できる人との再婚ならば祝福しようとゆかりも思っていた。
だが、いまの彼女は相手が好きで付き合っている訳ではない。恋愛に関して詳しい訳ではないが、それでも愛し合っていた両親の姿を知っているだけに、母親と交際相手の関係が依存で成り立っている歪な物に見えて仕方がなかった。
そして、ゆかりは膝を抱えている腕に力を籠めながら、声に怒気を含ませ険しい目付きで吐き捨てるように続ける。
「あんなのお父さんへの裏切りでしかない。親としても、妻としても本当に最低な人。だから、私はあんな風にはならない。自分の足でしっかり立って、一人でだって幸せを掴めるって証明してみせる」
自分の母は父の事を捨てた。苦しい現実と自分の弱さから逃げるために、残された者の記憶の中でしか生きていけない相手を自分の中から消したのだ。
本当に大切だったならそんなこと出来るはずがない。だからこそ、ゆかりは母親の生き方を軽蔑し、間違っていると否定するために一人で生きて幸せを掴むと心に決めていた。
こんな事を誰かに話すのは初めてだったが、相手も親を同じ事故で亡くしているので話し易く、他の者と違って変に同情を向けて来ないのも分かっているので気持ちが楽だった。
もっとも、他所の複雑な家庭事情を聞かされた上に、母親が最低だと思うだろうと同意を求められても、娘の目の前で否定するのも気が引けて普通はすんなりそうだなと頷く事は出来ない。
「それで、えっと、有里君は私のお母さんの生き方をどう思う？　やっ

ぱり、最低だよね？」
　そのことに気付かぬまま、自分が感情的になって長々と話してしまったことを少し恥ずかしそうにしながら、ゆかりは隣に座っている湊の方を向いて感想を尋ねてきた。
　答えを待つ彼女の顔には、母親への不信感と湊も同じように感じているという確信の色が窺える。
　だが、少しの間を置いて開かれた彼の口から出た言葉は、そんなゆかりの予想とは全く異なる物だった。
「……話を聞いてる限りだと、お前も十分ガキだと思うけどな」
「……なんでよ？」
　母親の事をどう思うか訊いたというのに、返ってきたのは自身を否定する言葉だった。
　その言葉の意味が分からず、さらに納得がいかなかったゆかりが聞き返せば、湊はまるで実際に目にしてきたかのような様子で理由を話してくる。
「確かに岳羽のお母さんの生き方は褒められたものじゃない。一番身近で見てきた娘が嫌悪感を抱くくらいだから俺が考えている以上なんだろう」
　目にしてきた者とそんな相手から話を聞いて想像することしか出来ない者では、やはり相手に対する考え方にもかなりの差が出来てしまう。
　とはいえ、話を聞いただけの湊も、ゆかりの母親の生き方は後で後悔する事になりそうに思えて、さらに娘を傷付けていることからも正しいとは思っていない。
　だが、今の母親の生き方を否定するゆかりは、どうして自分の母がそこまで男に依存するようになったかを本当に理解していないと湊は返す。
「けどな。大切な夫を失って傷付いていたとき、おじさんのことで酷いバッシングも受けたんだろ。外へ出れば陰口どころか誹謗中傷に、下手をすれば危害まで加えられそうになっていたはずだ。だが、彼女はそれに負けて折れる事はできなかった。なぜなら、父を失って傷付

いている幼い娘がいたから」
愛しい娘。それは折れそうになっていた彼女を、最後の一歩で踏み止まらせてくれた存在であると同時に、苦しい現実から逃さぬよう縛り付ける鎖でもあった。
愛しい人との愛の結晶である娘は、何があっても守り抜いて育てなければならない。折れそうになっていた彼女は、ただそれだけを考えて事故後は過ごしていたはずだ。
「自分だって泣きたいのに、頼られて守らないといけないから弱音も吐けないってのは地獄だぞ。いっそ全部放り出せたらどんなに楽なことか」
隣で話す青年の言葉を聞いていて、ゆかりは母を擁護する彼に小さな怒りを感じながらも、どうして相手の言葉に実感が籠もっているのか不思議に思った。
確かに彼は普段から人に頼られてばかりいる。だが、相手がそんな辛そうにしているのなど見た事がないので、もしかすると、両親を失った後に何かあったのだろうかと考えた。
そんなゆかりの母と似た守るものを背負う苦しみを知っている青年は、改めてゆかりの方へと向き直り視線を合わせると、一方的に母親を悪だと決めつけている彼女に諭す様に告げる。
「岳羽は失う辛さは知っているが、背負う辛さを知らないんだ。それが大切なら大切なだけ重くのしかかってくる。押し潰されそうになって誰かに支えて欲しいと思うのは何も不思議じゃないさ」
「じゃあ、有里君はお母さんが正しいっていうの？」
「そうじゃない。だが、相手と同じ状況になってもいないのに弱いと決めつけるのは卑怯だ」
言われてみれば、確かに自分は父親を失っただけで母親という頼ることの出来る人間がいた。だが、母は幼い娘を抱えて今後どうやって生きていこうかと不安に思ったに違いない。
そこまで考えがいかずに、今の姿だけを見て一方的に弱いと決めつけたのは悪かったかも知れないが、そんなすぐに赦せるほど単純ではいられない。

何より、母親が今も男に依存している事実は変わらないので、ゆかりは改めて母のことを考えてみようとは思うが、湊がいうように同じ状況になるのは不可能だと返した。
「子どもなんていないのに、同じ状況なんてなれるはずないじゃない」
「……相手の今の状況なら再現できるだろ。普段、岳羽は友人に囲まれていても一歩引いて〝独り〟でいる。だが、そんな自分の味方でいてくれる人がいて、お前はその相手に依存せずにいられるか？」
「それって誰かと付き合えって事？　ふざけないで、私のことを何も知らない上辺だけ見て近付いてくる人に味方でなんていて欲しくない。そもそも、そういう〝普通〟の家庭で育った人に理解出来るとも思わない」
夫を失い一人で娘を育てていく妻の状況ではなく、頼れる者のほとんどいない状態で自分の味方でいてくれる存在がいる状況になってみろと青年は言う。
敵だらけの状況で信頼出来る味方が現れれば、その相手に頼ってしまうのはある意味当然である。なにせ、人は孤独を恐れる生き物だから。
しかし、ゆかりは男に頼る弱い女になることだけでなく、何も知らないくせに分かったような顔をしてくる人間も同じくらい大嫌いだった。
今までも散々そんなやつを見て生きてきたのだ。分かって欲しい訳でも、同情されたい訳でもない。なのに一方的に〝可哀想〟というレッテルを貼られ、それに憤っても今はまだ気持ちの整理がついていないのだと決めつけれる。自分が何を言っても無駄なのだと諦めるまでに、どれだけ悔しい思いをしてきたか相手には分からないのだ。
故に、父親が事故で死んだと聞けば同情してくると分かりきった人たちとは、絶対に付き合いたくないとゆかりは怒り気味にきっぱり拒否した。
しかし、次の瞬間青年から返ってきたのは、ゆかりの予想の遥か斜めをいくぶっとんだ言葉だった。
「俺なら似た境遇で生きてきたから、岳羽のことも少しは理解出来る」

「……は？」
誰かと付き合えという話をしていた状態で、自分ならゆかりのことも理解できると言われると、まるで理解者になれる自分こそがゆかりの恋人に相応しいと言われているようだ。
そんなはずはない。湊はゆかりに対して恋愛感情を全く持っていない。そもそも、相手は等しく優しいが故に個人に想いを向けることはほとんどないはず。
頭の中にそんな様々な否定の言葉を並べつつ、相手の言葉を何度も反芻して意味を理解しようとしたゆかりは、結局、最初に考えた意味以外に取れないと判断し、これは自分をからかっているのではないかと心に予防線を張りながら訝しむように言葉を返した。
「急になに変な冗談言ってるの？」
「別に冗談で言ってる訳じゃない。今まで誰とも付き合ったことがなかったから、一度くらい経験しておいた方がいいかとは少し考えていたんだ」
普段通りやる気のない表情のまま話す相手の言葉を要約すると、俺と付き合えということになる。
突然のことにゆかりは思考がストップしかけたが、話を聞いていくとゆかりのためというより、彼自身が恋人がどんなものか興味があって試しに付き合ってみたいと思っているように感じた。
眼帯の付いていない相手の左眼をジッと見つめ、彼が己に恋愛感情を抱いているのかを改めて感じ取ろうとゆかりはしてみる。
その結果、相手は恋愛感情以前に自分を異性として見ていないとはっきり理解出来た。
自分でもいうのもなんだが、非公式の女子ランキングで常にトップクラスであり続け、毎月何度か告白やラブレターを受け取る程度には人気がある。
そんな女子と旅行の夜に綺麗な星空の見えるビーチで二人っきりだというのに、異性とすら認識してないとは失礼過ぎやしないかと、ゆかりは先ほどまでの怒りも忘れて呆れてしまった。
彼はゆかりのそんな胸中に気付いていないのか、自分と付き合う上

でのメリットを説明してくる。
「お互いに知らない仲じゃないし。恋人体験だと割り切ってる分、気持ちとしては楽だろ？　まぁ、お前は居心地の良さに負けて依存するようになるかもしれないが、そうなったら母親のことを言えないってだけで別に不利益はない」
「何よそれ。恋人のフリしてる内に本気になると思ってんの？　馬っ鹿みたい。そんなのあり得ないっつーの！」
ゆかりのことを馬鹿にしているのか、それとも自分の魅力に相当な自信を持っているのかは分からないが、湊はゆかりが途中から本気になって依存してくると思っているようだ。
それを一〇〇パーセントあり得ないと断言し、ムスッとした表情で睨みつけてみれば、青年は不思議な輝きの瞳でまっすぐ見つめながら挑発だと分かる言葉で尋ねてくる。
「なら受けるか？」
「……期間とルールは？」
これを確認するという事はもう受けると言っているようなものだ。
しかし、相手の挑発に乗せられている訳ではない。いや、もしかすると最初から乗せられているのかもしれないが、相手と同じ状況になっていないのに決めつけるのは卑怯だと言われたときに、一理あると思ってしまったのだ。
故に、ゆかりは母親と同じような状況になっても同じにはならないことで、やはり相手は弱かったのだと改めて言ってやるつもりだった。
同じ状況になってからならば、普段から他人を見下したような態度を取り続ける青年も文句を言うまい。
だからこそ、ゆかりはルールをちゃんと聞いて納得が出来れば、ある意味青年との一対一の勝負であるこの申し出を受ける気になっていた。
「恋人としての実感がどの程度で湧くのか分からないが、とりあえず半年くらいでいいんじゃないか。それ以降は岳羽が別れを切り出すまでだ。だが、別れを切り出せなければ関係が惜しくなったとみな

す」
「確かにあんまり短いと簡単に別れられそうだしね。それじゃあ、少し短くして今年一杯が期限にしようか。別れたくないって言っても聞かないから」
「ああ、契約成立だ」
仮初の恋人契約を結ぶためにゆかりが手を差し出せば、湊は僅かに笑って握手に応じた。
これで期間限定とはいえ恋人という事になる。浮気などすれば期限内でもその時点で別れるつもりだが、まさか初の彼氏がこの男になるとは人生何が起こるか分からないと苦笑しかけたところで、ゆかりは突然唇に何かが触れるのを感じた。
「――――っ!?」
あまりの事態にゆかりは目を閉じてから身体を硬直させる。混乱している状態でも目を閉じたのは、キスするときには目を閉じるのがマナーだと知っていたからだ。
しかし、そんな事を考えている時点で自分が湊にキスされていると認識している訳で、自分とは別の体温が唇越しに伝わってくるのを感じながら、ゆかりはじっと動かず相手が離れるのを待った。
実際は十秒にも満たない時間だろうが、少女の体感で一分以上経過したところで湊が離れると、彼の正面には顔だけでなく耳や首まで真っ赤になった少女が恥ずかしそうに俯いていた。
それを見た湊は急にキスしたことで怒られると思ったが、こういった事には免疫がなかったようで部活メンバーは初心な少女の集まりかと内心で苦笑する。
俯いている相手の顔を上げさせようと、生身の左手で頬に触れるだけでゆかりはビクッと身体を揺らし、けれど、まだ思考能力が戻っていないのかそれ以上の反応は見せず、湊が顔を近づけていけば緊張した様子で再び目を瞑った。
「――――んっ」
大浴場に置かれていたシャンプーの香りだろうか。柑橘系の甘い香りが鼻に届き、湊は口付けを交わしながら相手の髪を指で梳く。

視覚を封じられると他の五感が鋭くなると言うが、確かに触れあった唇から相手の熱と柔らかさを感じて不思議な感覚だ。
この状態で相手を抱きしめればどうなるだろう。湊の感覚としては抱きしめられると落ち着くのだが、緊張している少女にやっても逆効果な気がする。
もっとも、そう思っていても湧いた疑問の解を得るために実行に移すのがこの青年だ。空いていた右手を相手の腰に回して抱き寄せ、髪を梳いていた左手でゆかりの後頭部を押さえて逃がさぬようにする。
急に抱き寄せられた少女は驚いたのか両手を胸の前に持ってきたが、その状態で抱き寄せられたせいで、湊の胸に両手を触れさせたままお互いの身体に挟まれてしまう。
密着状態から腕で押そうとするのはそれなりにコツが必要で、まともな思考も働いていない状態のゆかりでは、仮に離れたいと思っても抜け出すことは出来ないだろう。
青年が少女を抱きしめたことで、お互いの体温を全身で感じられるようになった二人は、少女が苦しくなって身体を離そうとするまでずっとそのままでいた。
そうして、そろそろ時間も遅くなってきた頃、湊は呆けていた相手に手を貸して立ち上がらせると、泊まっている部屋に戻る様にいって先に帰らせた。
相手が焦点の合わぬ熱の籠った潤んだ瞳をしていたので、少し心配になり一人で帰れるか尋ねたところ、小さな声でぽつりと「うん……大丈夫」と答えたので問題はないはず。
遠ざかってホテルへと無事に入っていた背中を見送った湊は、広げていたビニールシートをマフラーに片付けると、もう少し散歩でもしておくかと人のいない方へと歩いて行ったのだった。

第百三十七話　前篇　修学旅行二日目―夢オチ―

７月１０日（火）
朝――ホテル
（……なんだ、夢か）
修学旅行二日目の朝、泊まっている部屋のベッドで目を覚ましたゆかりはホッと息を吐いて、汗も掻いていないのに額を腕で拭った。
いくらなんでも自分が湊と付き合うなどリアリティが無さすぎる。質の悪い冗談にしか思えない夢の内容に、もしかして欲求不満なのかと小さな不安を感じつつベッドを抜け出して身支度を整えた。
昨日は同室の二人がそれぞれ別の部屋の友人のところに行くからと鍵を預かっていたが、彼女たちはその部屋から食堂に向かうと聞いているので、着替えて貴重品を持ったゆかりは鍵をかけて部屋を出る。
貸しきっているフロアは二つだが、上から順に女子だけのフロア、男子だけのフロア、さらに一つ下の他の客も泊まっているフロアに一部の男子と引率教師の部屋があり、湊の班は他の客も泊まっているフロアなので食堂に行かなければ顔を合わせることはまずない。
あれは夢だったので相手には関係ないかもしれないが、最も身近にいる男子と付き合う夢を見てしまったゆかりとしては少々顔を合わせづらいものがある。
よって、どうかはち合わせたりしませんようにと祈りながら到着したエレベーターに乗り込むと、そのまま部活メンバーにすら会わずに食堂に着けたゆかりは、心の中で小さなガッツポーズを浮かべた。
朝食は班ごとにテーブルの決まったバイキング形式で、自分の班のテーブルを見ると渡邊以外の男子と高千穂が既に座って食事をしていたので、ゆかりもトレイに乗せた皿に料理を盛り付けると、ホテルオリジナルのシークワーサージュースなるものを取ってテーブルに向かった。
「あら、おはよう岳羽さん」
「うん、おはよう。部屋の鍵は閉めてきちゃったから、食べ終わって先

に帰るなら鍵渡すから言ってね」
「ええ、ありがとう。そのときは言うわ」
特に組む相手もいなくて席が近かっただけで同じ班になることに決めた相手だが、成績優秀で真面目な性格をしていることもあり、見た目は少し冷たく見えるがゆかりとしてはむしろ付き合い易いタイプだった。
そのまま今日の予定などについて軽く話しながら朝食を取っていると、急にばたばたと足音が聞こえて、同じ寮や弓道部の友人たち数名がやってくる。
食事中だというのに騒がしいなと思いながら立っている相手らを見上げれば、そこには何やら噂好きのおばさんのような好奇心の色で染まった少女たちの顔があった。
だが、相手がなぜそんな顔をしているのか分からず不思議に思っていると、寮で暮らす眼鏡をかけた友人が胡散臭い口調で話しかけてきた。
「ゆかり選手ー！　見ましたぞぉ。抜け駆けして昨日は男子と逢引きしておりましたな！」
「うぇっ、ちょっ、はぁっ!?」
突然変な事を言われたゆかりは慌ててしまい返事を上手く返せない。湊とのことは夢だとばかり思っていたが、もしや現実だったのかと考えている間も相手は言葉を続けてくる。
「ビーチ側の出入り口のところですれ違って声かけたのに、ゆかりってば乙女な顔してそのまま帰って行っちゃうんだもん。顔も真っ赤だったし。男子と会ってたんでしょー」
「ほれほれ、難攻不落の〝桜の王女〟のハートを射止めたのは誰だぁ？　サッカー部の遠藤君？　それとも水泳部の田代君か！」
眼鏡の女子の隣に立つおさげ髪の弓道部仲間が挙げたのは両部活のイケメンエースの名だ。
蒼の皇子こと湊や赤の女帝こと美鶴のように、人気ランキング上位で桜の王女という異名を持つゆかりと釣り合うとすれば、そういった運動部エースのイケメンくらいしかいないだろうという判断だった

ようだが、ゆかりはそんな相手とは特に話したこともなかったので必死に否定する。
「ち、ちがうから！　本当に、そういうんじゃなくって！　てか、その二人とは特に面識ないし！」
「ほっほう、その二人とはねぇ。こりゃ黒ですぜ、姉御」
「ああ、こりゃ絶対に男だわ。あーあ、まさかゆかりが旅行中のカップル第一号になるとはね。旅行マジック恐るべしっすわ」
スキーやスノボーでよく言われるゲレンデマジックのように、学校行事ではカップルの誕生率が普段よりも格段に上がる。さらに修学旅行ともなれば当社比三倍といった具合にブーストがかかり、確実に五組以上のカップルが誕生するのだ。
ゆかりの友人たちはそういった話題を逃すまいと小まめに情報交換していたので、ゆかりたち以外のカップルが誕生していない事を知っており、まさかゆかりがその第一号になるとは思っていなかったと苦笑する。
「まぁ、お祝いは向こうに帰ってからするとして、さぁ、吐きたまえゆかり君。ネタは既にあがっているのだ！」
だが、恋バナ大好きな女子中学生として、カップル誕生を聞きつけたからにはお相手が誰か聞かねばならない。
実際は一方的にゆかりが情報を吐かされるだけだが、友人らがお互いに隠し事は無しにしようぜと席を囲って逃げられないようにしてくるため、ゆかりは両手でグラスを持ちながらジュースをちびちび飲むことで黙秘を続けた。
しかし、ゆかりの抵抗も虚しく、少し離れた3―Dの人間たちが集まる席の方から、
「会長！　見たっスよぉ、昨日の夜にビーチで岳羽さんとキスしてったっしょ！」
食堂中に聞こえる大音量で副会長・渡邊の声が聞こえてきた。
「ブフーッ!?」
そして、聞こえてきた次の瞬間、ゆかりは口に含んでいたジュースを噴き出し、正面に座っている男子二人の顔に思いっきりかけてし

まった。
行儀が悪いことをしてしまい、さらに被害者まで出したゆかりはすぐに男子らに謝るが、二人は「大丈夫だから気にしないで」と言って、おしぼりで顔を拭きながら愛想笑いを浮かべる。
ゆかりは知らないが、男子たちは密かにゆかりに憧れを抱いていたので、口に含んだジュースをかけられたのはむしろ御褒美だと思っていたのだ。
そんな変態チックな趣味をしている二人はともかくとして、食堂中に湊と付き合いだしたことをばらされたゆかりは、勢いよく立ち上がるなり駆け出して友人らの包囲網を突破する。目指すは食堂中にばらした馬鹿のいるテーブルだ。
＊＊＊
湊たちの班が全員揃って朝食を食べていると、遅めに食堂にやってきた渡邊が湊を発見するなり寄って来て先ほどの発言をかました。
話を聞いた他の班員たちは目を丸くしてポカンと口を開け、順平など驚き過ぎて箸を床に落としている。
そんな中、誰よりも早く再起動を果たした西園寺は、皆が固まっている間も食事を続けていた隣の席に座るマイペースな青年の方へ椅子ごと身体を寄せて、腕を絡ませながら事の真相について尋ねる。
「えー、うそぉ！　ミッチー、岳羽さんと付き合ってたの？　まどか全然聞いてないよ？」
「……何でお前にいちいち報告しないといけないんだ」
「それはそうだけどぉ、まぁ、まどか的には別に愛人っぽいのでもＯＫだから、今度デートしようね！」
彼氏持ちでも構わずデートに誘うあたり強かな女だ。再起動が遅れていた者たちも、西園寺の言葉に苦笑いを浮かべてようやく気を取り直すと、順平が皆の代表となって変な口調で湊に声をかけた。
「あのぉ、有里君？　その、いつ頃から交際されてるのか聞いてもよろしいですか？」
「……昨日の夜からだな。もっと言えば渡邊が見たキスの何秒か前だ」

「マジかよ。付き合って数秒でキスまで持っていくとか有里君パネェな」
男子に対して常に壁のようなもの作っていたゆかり相手に、まさかそんな短時間でキスを達成してしまうとは恐るべし。普通なら下心で近付いてきたのかと怒られ、そのまま付き合った時間は僅か三分といった具合に破局してしまうところだ。
けれど、時には強引さも必要なのかと湊の恋愛テクニックに感心しつつ、集まっていた男子たちは自分に彼女が出来れば様子を見て試してみようと無謀な事を考えていた。
そんな風に、湊が他の者からの質問に軽く答えていたとき、ゾクリと背筋が寒くなるような一切の感情が籠もらぬ声が耳に届く。
「――――湊、ちゃんと説明して」
何事だと一同が視線を向けると、そこには美紀を連れだってやってきたチドリが立っていた。
渡邊の発言からまさかのビッグカップル誕生が食堂中に知れ渡った訳だが、月光館学園の生徒は同じ食堂で朝食を摂ることになっているため、当然チドリたちも別のテーブルで食事をしていたのだ。
沖縄の食材を使った郷土料理に舌鼓を打っていたというのに、質の悪い冗談にしか聞こえない話が聞こえてきたとあらば、家族として真相を確かめなければならない。そう、家族として当然のことだ。
顔から感情が全て消えまるで人形のように見えるというのに、背後に黒いオーラのようなものを幻視してしまうほど、今のチドリは謎の迫力がある。
一緒にきた美紀は連れて来られたのではなく、チドリの様子を心配していざというときは止めようと思って同行したに違いない。
そうして、チドリが湊の椅子の真横まで近付いてジッと視線を合わせると、ナプキンで口を拭いてから湊が静かに言葉を返した。
「お互いに利害が一致したから、恋人がどんなものか体験するために付き合ってみる事にしただけだ。とりあえずの期限は今年一杯。あとは岳羽の気分で延長も在り得る」
「そう。恋愛感情じゃなくて理由(ワケ)ありで仮の恋人になるだけなのね

？」
「まぁ、学生らしいこともしてみようと思っただけだな」
学生らしいことをしてみるのであれば、まず格好から普通にしろというツッコミは誰も入れない。下手をすればビジュアル系一歩手前なのだが、所作の端々に気品を感じる美人さんなので同性からしても眼福だったりするのだ。
それはともかくとして、湊からゆかりと付き合う事にした理由を聞いたチドリは、一応納得することが出来たのか普段通りの気だるげな表情に戻る。
場に走っていた張り詰めた空気も霧散したので、チドリが来てからもいつも通りの笑顔を浮かべていた西園寺以外の面々は、安心したように深く息を吐いて食事を再開し始めた。
「わかった。そういう事なら何も言わないでおく。桜とかには伝えるけど」
「……一番教えちゃいけない人たちだろ」
桜に情報がいけばママ友状態の英恵にも当然話は伝わる。さらに栗原たちにも伝わる事はほぼ間違いないので、後でゆかりの容姿や性格等の詳しい説明を求められたり、恋人との関係が良好かなどお節介を焼かれそうだと湊はホテルの自家製パンに齧り付きながら嫌そうな顔をする。
一方の少女は、とりあえずの問題が解決した事で、既に隣のテーブルの班が全員食べ終わって帰っていることを確認してから、そこに移動して食事をしながらより詳細を湊に聞こうとした。
だが、チドリたちが席に座った頃に、3—Aの席から人垣をかき分けてダッシュで近付いて来る人影があった。そう、交際どころかキスしていたことまでばらされたゆかりだ。
「ちょっと、食堂中に聞こえる声で何言ってんのよ！」
「あ、岳羽さんオーッス！　いや、昨日の夜に偶然みちゃってさ。岳羽さんは帰ったのに会長はどっか行っちゃって声かけらんなかったから、食堂で会ったら話を聞こうと思ってたんだよね。まぁ、理由はよく分かんないけど、旅行中のカップル第一号おめでとうッス！」

やってきたゆかりに説明し終えると、渡邊はおめでとうと言いながら拍手を送る。それにつられて他の者も拍手をするが、祝福された少女は食堂中の生徒に知られた事に頭を痛めてゲンナリとした表情を浮かべて返す。
「いや、拍手とかいらないから。てか、昨日のその……あれは、有里君が不意討ちでやってきて避けられなかっただけで、付き合いだしてすぐにキスとか本当はさせないんだからねっ」
昨日のことを思い出したゆかりは頬を染めながらも、本当はそこまで許した覚えはないと少し怒ったように訂正した。
もっとも、既にしてしまったことはしょうがないとゆかりも半分諦めてはいる。ファーストキスだったので不意討ちで失った事は少しショックだったが、それはもっとムードが欲しかっただとか、緊張し過ぎて柔らかかった程度の感触しか覚えていないだとか、何でも思い出にしたがる少女特有の心の問題なので別に湊とのキスに嫌悪感を抱いた訳ではない。
そも、相手は肉体的には男性だが遺伝子異常で両方の性別を持っている。長身と鍛えられた体躯に加え、つまらなそうな表情と影を背負っているせいで近寄りがたい雰囲気の青年に見えるが、顔付き自体は女性も羨むほどに美人なのだ。
それで男にいきなりキスされたとは思う事が出来ず、キスされたのが既に付き合いだしてからだった事もあり、今後は簡単に許しはしないが昨日の事はもう怒るつもりはなかった。
ゆかりのそんな反応を見ていた一同は彼女があまり怒っていないことを察し、口では色々と言ったりしているが結構湊に心を許しているのだなと笑っていた渡邊が感想を述べる。
「会長、ツンデレ系の彼女っスね」
「ツンドラ？　よく分からないが岳羽の心が永久凍土みたいってことか？」
「ミッチー、ツンデレってのは普段はツンツンとした態度だけど二人っきりのときはデレデレしたりとか、とりあえず中々素直になれなくて好きな相手にきつく当たったりもしちゃう面倒くさい子のこと

なんだよ」
　湊は漫画やアニメにゲームと言った所謂サブカルチャーと呼ばれるものを基本的に嗜んだりしない。それは忙しさやあまり興味がないからなのだが、そちら方面の知識がなく渡邊がいった『ツンデレ』という言葉の意味を理解出来ず首を傾げれば、西園寺が若干の毒を吐きつつ説明してくれた。
　すると、ゆかりや家族のとある少女の過去の反応に心当たりがあった事で、どんな物がツンデレなのか理解した湊は納得したように頷いて薄く笑みを浮かべる。
「……なるほど、じゃあ今のは照れ隠しか」
「違うっての。一体私がいつ君にデレデレしたっていうのよ」
　ツンデレ扱いは納得がいかない。そういってムスッとしながらゆかりが反論すれば、湊はポケットから携帯を取り出すなり、いくつかの操作をしてとある音声ファイルを再生した。
《そ、その、好き……だよ？》
「ぎゃーっ!?　ちょっ、それ前に携帯奪って消したのになんで残ってるの!?」
「音声データを添付したメールを自分宛てに送っておけば、そこから添付ファイルを何度でも再取得出来るんだぞ。だから、ファイルだけでなく添付元のメールも消さないと無駄だ」
　湊が再生した音声ファイルの名は『岳羽ゆかり―告白編―』、再びペルソナ能力を使えるようになってチドリと再会した翌日に録音した通話内容の一部を編集したものだ。
　昼休みにそのファイルが添付されたメールを受け取ったゆかりは、後日、湊から携帯を奪い取ってマスターデータを消すことに成功したのだが、湊がバックアップを取っていないはずもなく、部活メンバー以外にまで恥ずかしい台詞を聞かれたことで顔を真っ赤にしている。
　ゆかりの反応と台詞の内容から、他の者はそれを昨夜の告白時の台詞だと認識したようで、冷たいお茶を飲みながら友近と順平が自分の想像通りだったと笑って言ってきた。
「あー、やっぱ岳羽さんの方から告った系だったか」

「告白してない！　いまのは今回のとは関係ないやつだから」
「ま、なんにせよクラスメイトが付き合うってんなら、ちょっとくらいお祝いしないとな。ってことで、今日の夜に談話室に集まらね？　とりあえずはここにいる面子で」
　正確にはゆかりは元クラスメイトだが、西園寺以外からすれば元クラスメイトと現クラスメイトである。生徒会の二人はノリが明るく話し易いので、渡邊とは初対面だが順平としては参加してくれて全然構わないため誘ってみた。
　昨日の夜に湊を遊びに誘えなかったこともあり、友好を深めるべく企画した二人の交際記念祝いに託けたイベントだったが、しかし、順平が皆に参加不参加を問う前に理緒が申し訳なさそうに謝ってきた。
「あ、ゴメン。私は部活の子たちと先に約束があるんだ」
「急に決めたことだしそっち優先でいいぜ。んじゃ、岩崎さん以外はＯＫ？」
　大事な旅行の夜だ。以前から約束があってもおかしくないと思っていた順平は、それならしょうがないと笑って返す。
　だが、他の者たちは大丈夫かと尋ね直しほとんどの者が頷いたところで、主役であるはずのゆかりが嫌そうな顔をして不参加を表明してきてしまう。
「……ＯＫじゃない。全然お祝いとかいらない。だって、悪乗りして皆の前でキスしろとか絶対に言ってくるの分かってるもん」
「大丈夫だろ。誰だって命は惜しいはずだから」
　言いながら青年が美しい笑みを浮かべると、実際にキスコールをしようと計画していた男子たちは、首筋にナイフを当てられているかのような悪寒が走り、全身から嫌な汗が噴き出すのを感じた。
　他の女子たちも男子たちほどではないが、下手に触れると自分の身に危険が及ぶと本能で理解する。
「……まぁ、夜に談話室でちょっとしたレクリエーションをするのは構わない。入浴等を済ませた後、消灯から十分経ったら男子フロアの談話室に集合で良いだろう。飲食物は好きに持って来ていい。一応、財布や携帯など貴重品は持ち歩いておくようにな」

それだけ告げた湊は席を立ち、本日予定しているイベント等の最終確認があるからと去って行った。後に、悪寒から解放された男子たちはぐったりした様子でキスコールだけは絶対にしないと固く誓うのだった。

午後――瀬底ビーチ

午前中に紅芋チップス作りや染め物体験などを行った生徒たちは、本日のメインイベントである海水浴に来ていた。

普段は学校指定の水着しか見る機会はないが、今日は自前の水着を持ってくるように言われているので、男子たちは女子たちの眩しい水着姿に感動の涙を流す。

しかし、ハイレベルな女子たちが揃っているにもかかわらず、その中で最も注目を集めているのは、3―Aのクラス担任である佐久間文子だった。

ストレートの長い髪を一つに結んで肩から前に垂らし、桃色のビキニの腰にパレオを捲いて、他の女子よりも全体の露出は少ない様に見えるが、腰のくびれと豊かな胸によって芸能人顔負けの美しさを誇っている。

芸能事務所に所属する者たちが出ているような、有名大学のミスコンでグランプリに選ばれただけあって、男子生徒だけでなく女子や男性教師らも時折ちらちらと見てきている。

だが、その本人は何をしているかというと、海に入らずパラソルの下に敷かれたビニールシートで少しだるそうな湊に膝枕をしてやっていた。

「こんなときに生理になるなんてタイミング悪いね。冷たい飲み物貰ってこようか？」

「……別にいい。最初から海に入るつもりはなかったから気にしてもいない」

一応、他の者が水着になっているので膝辺りまであるトランクスタイプの水着を穿いてはいるが、上半身はTシャツと防水パーカーで完全にガードしている青年は、ホルモンバランスの調整で月に一度起こ

る擬似月経でダウンしていた。
　別に本当の生理ではないので少し眠気が強くなったり、全身が倦怠感に包まれる程度なのだが、他の者と同じようにはしゃぎ回る気にはなれないので休んでいたところ、体調不良に気付いた佐久間がやってきて看病しているという訳である。
　佐久間も沖縄の海を楽しみにしてはいたが、別に泳ぎ回ったりするつもりはなかったので、透明度の高い綺麗なエメラルド色の海を眺めているだけで十分楽しめている。それが好きな人と一緒となれば喜びも増すというものだ。
　もっとも、今朝入ってきたゆかりとの交際の報は驚きだった。本当の恋人ではなくお試しの恋人ごっこのようなものらしいので、まぁ、中学生だし妥当かなと広い心で許してやることにはしたが、そういった経験をしたいのなら何故自分に相談しないのかと小一時間問い詰めたい気持ちもあった。
　流石に時間がなかったのでそんな事はしなかったが、紅芋チップスを作っているときに軽く訊いてみたところ、本気の相手に頼むのは残酷だと思ったからゆかりにしたらしい。
　なんだかんだ言っても、湊は湊で佐久間のことも真剣に考えてくれていたのだ。
「有里君の身体ってさー。歳とっても今のままなのかな？　歳取ると本人の性別のホルモンが多く分泌されたりするでしょ？」
「……さぁな。未来のことは分からない」
「まぁ、そりゃそっか。大変かもしれないけど、人類の半分は経験してることだし。のんびり付き合っていくといいよ」
　貧血がない分だけ女性よりはマシだ。その他に女性にはない問題点や悩みもあるかもしれないが、そのときには相談に乗ってあげる事も出来る。
　サラサラとした青年の髪を指で梳きながら笑いかけると、青年は静かに目を閉じて仮眠に入ろうとした。
　だが、この二人が一緒にいると周囲からはかなり目立つ。パレオを捲いていると言っても、水着という普段以上に薄着な状態で膝枕をし

ていれば、男子からは彼女持ちになったくせにまだ女を奪うのかと妬みの視線を向けられ、女子からは膝枕なら自分がしてあげるよといった欲望混じりの熱視線が飛んでくる。
湊の遺伝子異常は部活メンバーと佐久間と櫛名田しか知らないのでしょうがないことだが、体調不良で休んでいるときにそんなモノを向けられると鬱陶しい事この上ない。
いっそのこと、着替えてバスで待っていようかと思い始めたとき、砂を踏む足音がいくつも近付いてきたことで、湊は瞳を開けて足音の主たちの姿を見た。
「……早速浮気とはやるわね」
そう口にしたのは、フリルのスカートが付いたボトムスとホルターネックの薄水色のビキニを着たチドリだ。
ここ数年で身体もますます女性らしくなり、運動していて身体が絞られていることもあり、赤い髪の映える白い肌が実に眩しい。
「……看病される事が浮気になるなら、俺も躊躇い無く浮気をすると断言しよう」
言い切る姿は実に男らしいが、言っている事はそれなりに残念だ。もっとも、今の湊は本当に体調が悪くて休んでいるだけなので、それに教師が付き添っていることを浮気というのはあんまりかもしれない。
カラフルな花柄のタンキニを着た風花が傍らにしゃがみこめば、湊の頬に触れて体温を確かめながら体調を尋ねてくる。
「有里君、体調悪いの？　大丈夫？」
「ただの生理だから大丈夫だよー。有里君のことは先生がバッチリ見ておくから、皆は海で遊んでおいで！」
「……まぁ、そういう事だから気にせず行ってこい」
佐久間が笑顔で生理と言ったとき、ゆかりなどは男がなるかと突っ込みたかったが、前にチドリの誕生会をした際に話を聞いていたので、運悪く時期があたってしまったことを察する。
同じ女性かどうかともかく、そういったときの苦しみは分かるので、あんまり気を遣って構われても辛いだろうからと荷物をおいて海

へと駆けていった。
　他の生徒らと同じように楽しそうにはしゃぐ彼女らを見ながら、佐久間はつい先日まで思っていたことについて湊に話しかけた。
「最近ね。岳羽さんがちょっと暗くなってたんだ。まぁ、理由は分かってなかったんだけど、彼女って私と同じ母子家庭だし色々とあるのかなって少し様子を見てたの。そしたら今日は元通りになってて驚いちゃった」
　ゆかりが暗かった理由は分からない。しかし、湊が解決してやったのだろうということは何となく分かる。
　本当は担任である自分が聞いてやらなければならなかったのかもしれないが、父親を亡くして母子家庭になったとなれば事情も複雑だ。
　両親が離婚して母子家庭になっていた佐久間でも、母子家庭が何かと問題を抱えやすいのは知っている。
　それだけに動くのが遅れ、湊に解決まで任せてしまったことを申し訳なく思い、謝罪と共に礼をいうと青年からは厳しい言葉が返って来た。
「……ただの離婚な上に、就職前に母親を置いて出てきたくせに同じとかいうな」
「おっとぉ、いつの間に先生の個人情報を調べたのかなぁ？　そういうのは良くないよー？」
　まさか湊が自分と母親の関係についてまで詳しく知っているとは思わなかったので、佐久間は本当に心から驚きつつ、家庭内の不和を知られている恥ずかしさから照れたように笑う。
　もしかすると、ここは勝手に人の家庭事情を調べた事に対して怒っていいのかもしれないが、佐久間は実の両親であっても他者にほとんど興味を持っていなかった。
　湊と出会って世界に色が戻ってからは櫛名田など気の合う友人も出来たが、それ以前に付き合いがあった者には未だに興味や関心を持っていない。
　再会すればそこから改めて関係を築いてゆけるかもしれないけれ

ど、実の娘を自分の夢や望みを叶えるための道具のように思っていた母親とは会うつもりがなかった。
それ故、過去は過去だと思って個人情報を調べられていたことも特に気にせずにいれば、湊はどうやって佐久間の個人情報に辿り着いたかを教えてくる。
「霊感少女の篠田ふみと言えば、昔はそれなりに有名だっただろ」
篠田ふみとは佐久間が霊感少女として売っていたときの芸名だ。篠田は父親の名字、ふみは文子をもじっただけである。
当時は週に二、三度は姿を目にするほどバラエティ番組や心霊特番に出ていたので、今でも名前で検索すれば小学生だった頃の佐久間の姿を拝める。
しかし、佐久間が芸能界で仕事をしていたのは小学生の間だけだ。中学に上がる頃には出演依頼もこなくなって田舎に引っ越していた。
二人は一回り歳が離れているため、自身が中学に上がる頃に君は生まれたはずではと佐久間は首を傾げた。
「うーん、けどそれって有里君が生まれる前のはずなんだけどなぁ。やっぱり年齢詐称してる系？」
「年齢詐称はしてない。戸籍はいじってるけどな」
「おおぅ、まさかのカミングアウト……」
現代日本でも結婚などいくつかは戸籍が変更される事はある。ただし、青年の年齢ではほとんどないはずなので、〝いじってる〟という言葉から察するに真っ当な理由ではないのだろう。
どうしてそれをばらしてきたのか疑問に思ったが、一方的に個人情報を調べていたことに対する謝罪代わりだと考えればすんなり納得できた。
戸籍を改竄した理由によっては情報漏洩で自分に危険が及ぶというのに、わざわざ条件をフェアにしようと教えてくれた青年の正直さに佐久間も思わず笑ってしまう。
彼女は優しい顔で海の方を眺めながら湊の額に手を置くと、安心させるように撫でながら言葉を続けた。
「まぁ、詳しくは聞かないけどね。どう考えたってさ。普通の子が極

道の家に貰われるってことはないと思うの。おまけに二人ともそれぞれ髪と目が治療の副作用とかで色が違うでしょ？　そっから推測したら、人に言えない事情を抱えてるってすぐに分かるもんね」
「……色々と考えてたんだな」
「フフッ、酷いなぁ。これでもちゃんと教師もやってるんだよ？」
その言い方では自分が何考えずに思い付きで行動する脳筋のようではないか。青年の言葉に苦笑した佐久間は、教師の仕事もそれなりにちゃんとこなしていると笑って言い返す。
彼女は彼女なりに生徒のことを見てはいる。湊と会ってから興味の有無はともかくとして、人を人としてみることが出来るようになったのだ。
最初は何となくで選んだ職業だったが、色んな生徒と接する内にこの仕事の楽しみ方というのを覚えてきた。
色々と面倒なことやどうしてそんな事で悩むのかと理解出来ない事もあるけれど、理解出来ないなりに考えてしたアドバイスで生徒が喜んでくれれば、こんな自分でも生徒の悩みを解決する事が出来たと充足感を得ることが出来る。
最も解決してあげたい生徒については、相手がこの世界をどのように見ているかしか分からないので相談を聞くことすら出来ていないが、彼が弱っているときにはこんな風に少しなら支えてあげることも出来るのだ。
彼と出会えたことも含めて、佐久間は教師を自分の天職だと思えるようになっていた。
「……少し寝る。もう少しだけ、膝を貸しててくれ」
「うん、おやすみなさい」
おやすみと言って佐久間が彼の手を握って、反対側の手で頭を撫でてやると、湊は年相応な可愛らしい顔で寝息を立て始めた。
以前までの彼であったなら、いくら体調不良でもこんな風に他人の膝の上で寝たりはしなかっただろう。
余程疲れていたのか、自分のことを信用してくれているから寝られるのかは佐久間には分からない。

ずっと他者との間に壁を作って踏み込ませないようにしていた青年が、どういう心境の変化か関わりを持とうと歩み寄ってきたのだ。

もしかすると、それが岳羽ゆかりという少女を救うために必要だったのかもしれないが、佐久間や他の者にとっても彼を〝人の間(ま)〟に居させてやることの出来るまたとないチャンスだと思っている。

色褪せた世界でゆっくりと心が死んでいくのを感じながら生きていくのはつらい。それを知っているからこそ、少しの間だけでもいいから彼に安らげる時間をくださいと、佐久間は心の底から祈るのだった。

第百三十八話　後篇　修学旅行二日目―交際祝賀会―

夜――ホテル・談話室

沖縄の海を満喫してホテルへと戻ってきた一同は、夕食をとってから最終日の予定について教師から連絡を受けると、入浴等の寝る準備を済ませて消灯前点呼を取った。

その後、教師らは地酒の美味い店で酒盛りをするとのことで、何かあれば旅のしおりに書いてある緊急連絡先の携帯にかけてこいと言われており。海水浴中、湊を膝枕して肌が艶々になっていた佐久間が上機嫌で「飲むぞー！」と先頭をきってホテルを出ていった。

生徒としては教師のそんな姿になんだかなと思わなくもないが、実際に何か起きれば教師よりも湊を頼った方が確実なので、ロビー横の一階売店にいた生徒らは「いってらっしゃい」と素直に見送っていたりする。

そうして、九時を過ぎた頃に何やら色々な物を持って順平や友近が男子貸し切りフロアの談話室にやってくると、そこには既に寝間着のジャージ姿の女子らと着流し姿で煙管を咥えた湊が貸し切り状態でくつろいでいた。

「うおっ、有里君ってば寝るとき着物なのか。ホテルの浴衣じゃなくて自前でってすげぇな」

普段は結っている長い髪をただのポニーテールにし、着物で煙管を吹かしている姿は実に様になっている。

だが、その格好を初めてみた順平が驚きの声をあげれば、同じ部屋なのに知らなかったのかとゆかりが不思議そうに尋ねた。

「君ら、同じ部屋で見てたんじゃなかったの？」

「いや、有里君ってば昨日とか部屋に帰って来てねえもん。朝食食べに下りたら食堂にいたし。どんな服装で寝てるかとか分かんねえって」

「……貴方、昨日は何してたの？」

「佐久間と櫛名田に誘われて一緒にバーみたいなとこにいたぞ。俺はコーラ以外はサンドリヨンとかサラトガ・クーラーしか飲んでないが」

実は昨夜、ゆかりと別れた湊は携帯に電話を貰って、ホテルから少し歩いた場所にあるバーに行っていた。

地元の人間だけでなく観光客などもいてそれなりに繁盛しているお洒落なバーだったが、低いテンションで酒呑みに付き合うのはかなり辛い。

三時を過ぎた頃になってようやく一段落ついて、二人を連れ帰りホテルの部屋に放り込んでおいたが、今度は談話室でビールを飲んでいてグロッキーになった生徒が出たと言われ、湊がその生徒らに適切な処置を施し終えて状態が落ち着いた頃には既に四時を回っていた。

もう後は何もすることはないなと部屋に戻って少しでも休もうと思ったところ、沖縄の海で日の出を見ようとビーチに出ていた生徒が波打ち際で遊んでいた際、深くなっている場所に落ちて波にさらわれてしまったと呼び出された。

潮の流れには向きがあり、そこは沖に出る流れだったためにさらわれてしまったようだが、横に泳いで流れから出れば戻ってくる事も可能だ。

海に来たならそれくらいの知識は持っておけと思いつつ、貴重品を全てマフラーに収納してから薄暗い海の中を泳いで救出し、飲んでいた海水を吐かせた後はシャワーを浴びさせて水分補給をするように言って部屋まで運んでおいた。

それが終わったときには六時前になっていたことで、もう休む暇もないなと風呂に入り直し、食堂で朝食を摂っていたところを下りて来た順平たちが目撃したのである。

生徒の健康管理に同行している櫛名田が酒を飲んでいたせいで湊ばかりが働くことになったが、これらの話は教師に報告されずに直接湊に言いに来ていたので、実際は教師のせいではなく生徒が湊を頼り過ぎて起きたことだった。

「えっとぉ、談話室以外の飲酒って禁止じゃなかったん？」

「サンドリヨンとかはノンアルコールカクテルだ。酔っ払いの外国人もいたし、まぁ、二人が変なのに絡まれないように一緒にいただけだな」
そんな事を知らない彼らは、カクテルの名前を知っているなんて相変わらずお洒落だなと思いながら、全員で輪になる様に琉球畳の上に腰を下ろす。
湊を基準に時計周りでゆかり、風花、チドリ、美紀、友近、順平、渡邊、西園寺という順で、男子らは持ってきた遊び道具を広げながら湊らに話しかけた。
「男女混合で遊ぶって事でお菓子とジュース以外にも色々と持ってきたッスよ」
「まぁ、オレとともちーはトランプとＵＮＯしか持ってなくて、ほとんどはナベが持って来てくれたんだけどな」
ここに来るまでに打ち解けたらしく、順平は渡邊のことをあだ名で呼びながら、拳サイズのサイコロやら割りばし立てのような物や謎のカードの束などを並べてゆく。
気になった湊が手を伸ばして試しに一枚めくってみたところ、カードには『ＡがＢに膝枕』と書いてあった。
そのカードを他の女子らに見せると、途端に微妙な表情を浮かべてカードと割りばし立てが、所謂〝王様ゲームセット〟であることを察した。
湊が引いたカードを女子に見せていると気付いた渡邊は、パッとカードを取り返して山札に戻してシャッフルし始める。
「あ、フライングはダメっすよ会長。これは引いてのお楽しみなんですから」
「この王様ゲームセットって三千円するんだってさ。オレっち、売ってるのも見たことないぜ」
「これは巌戸台の隣の駅からちょい歩いたとこにあるトイザウルスで買ったんさ。こっちの赤裸々トークサイコロは何種類かあるんだけど六百円でオレ的に超オススメ」
彼が手に持っている拳サイズのサイコロには、各面にトークテーマ

のようなものが書かれている。きっと、転がして出た面のトークをしなければならないルールなのだろう。
湊の感性ではサイコロや王様ゲームセットといった、こんなパーティーグッズにお金を使う意味が分からない。けれど、友人の多い彼は大勢で楽しむためにわざわざ買い集めたに違いない。
変わったやつだと思いつつも、こういった場を楽しませるために全力を使う者は嫌いではなかったので、湊は他の者たちに缶ジュースを配りつつ彼らが準備を終えるのを待った。
そうして、全員が飲み物を手にした状態で準備も完了したようで、順平が音頭をとってカップル誕生祝いが始まる。
「んじゃ、とりあえず有里君と岳羽さんの交際を祝してカンパーイ！」
『カンパーイ！』
こんな学生同士の催しにテーブルマナーもなにもない。それぞれが持っていたジュースの缶をぶつけてから飲んでゆく。
食堂にいた人間に知られた時点で学校中に広まるのは避けられないと諦めたのか、ゆかりもやや迷惑そうにしながらも、友人らの祝ってくれる気持ちはありがたいのか素直にジュースを飲んで置かれたお菓子を食べている。
湊はどことなくボンヤリとしているが、別に眠そうという訳ではないので、パーティーゲームを始める前にトークをしたいと西園寺が湊らに話しかけた。
「ゲームとか始める前に、まどか二人の話とか聞きたいなぁ。ていうか、付き合う事になったのに名字呼びのままなの？　私とミッチーみたいに親密な呼び方とかしないの？」
「あー、そういや有里君って吉野さん以外は基本的に名字呼びだよな。同じ部活の女子たちは名前で呼び合ってるのに、なして名字呼びのまま？」
西園寺と同じように疑問に思った順平も便乗して尋ねてみる。部活メンバーは佐久間を除いて女子同士は基本的に名前呼びだ。チドリは名前よりも〝貴女〟や〝アンタ〟といった呼び方をしていたりもするが、名字と名前ならば名前で呼ぶので条件は一緒である。

けれど、湊はチドリ以外の誰に対しても名字呼びばかり。西園寺は名前で呼んでと最初に言ったが無視され、〝湊君〟と名前で呼んでいる羽入のことも名字で呼んでいる。

付き合う事になったのなら呼び方も一緒に変えればどうだと思ったのだが、湊が答えた他者を名字で呼ぶ理由に一同は驚愕した。

「……結婚したら名字で呼べなくなるだろ？」

『そんな理由だったの!?』

「いや、ただ大して親しくないから名字で呼んでるだけだ」

チドリも含めた全員が驚いたが、青年はシレッと冗談だと言ってジュースに口を付ける。女性陣など、〝結婚〟という単語が出てきて頬を染めたというのにいい度胸である。

ここ数日で何度も騙されていた男子はまたかと疲れた様子だが、逆に今度は部活メンバーでも大して親しくない人間に含まれてしまうのかという疑問が湧く。

もしかすると地雷かもしれないが、恋人を同じ親しくない人間ポジションに置いておくのは第三者から見ても可哀想に映る。

故に、意を決した風花が大切な友達のために湊に尋ねた。

「えっと、恋人は親しくないってカテゴリに含まれないはずだから、ゆかりちゃんの呼び方は変えるんだよね？」

「……お前らの事を名字で呼んでるのは慣れが理由だぞ？　いまさら、名前で呼ぶのも違和感あるからな」

「え？　あ、そうなんだ。それじゃあいいかな？」

長年呼んでいた名前を変えると確かに違和感があるかもしれない。別に親しくないと思っている訳でもなくそういった理由ならば、風花としても納得できるので別にいいかなと引き下がる。

しかし、ここで話を聞いていた渡邊がグイッと前に出て、湊とゆかりのことを見ながらカップルなんだからあだ名で呼ばなければと力説する。

「いやいや、ここはいっちょ親しげなあだ名とかで呼ばなきゃ。岳羽ゆかりだから……そう、ゆかりっちとか！」

「なんであだ名の方が長いんだ」

呼び易くするためのあだ名ではないのか。それで文字数が増えては本末転倒だと湊が聞き返すも、腕組みをしながら頷いて順平も悪ノリで渡邊の考案した名に賛同してくる。
「オレはいいと思うぞ、ゆかりっち。ほれ、呼び易いじゃん？」
「ならお前らが呼んでやれ」
そんな馬鹿みたいな名前で呼びたくない。気に入ったなら自分たちだけで使え。湊から冷たくそう言われれば、順平たちは残念がりながらつまらなそうにする。
「えー、せっかく考えたのにー。なぁ、ゆかりっち？」
「ちょっと、変な名前で呼ばないでよ」
「彼氏の許可は貰ってるよ？」
「本人に無許可でしょうが！」
彼氏となった湊がいいと言っても、ゆかり本人が全く許可してないのに呼んでいいはずがない。
しかし、順平たちは自分らで考えた呼び方が結構しっくりきて気に入ったのか、さらに調子に乗って他の女子のあだ名も考え始めた。
「このノリだと吉野さんはチドリンだな」
「……セクハラ」
「へ？　い、いや、チドリンってあだ名考えただけ」
「セクハラ、首吊るか切腹して死んで」
けれど、すぐさま彼らは悲しい現実に引き戻される。そう、湊は他の女子と親しいが順平たちはそこまで親しくなかったのだ。
あだ名で呼んだだけで冷たい視線を向けられ、自害せよ、と言われた順平と渡邊は二人揃っていじけながらチビチビとジュースを飲む。
哀愁漂うその姿に心優しい風花と美紀は同情的な視線を送り、唯一、あだ名の話に乗っかっていなかった友近が助け船を出すべく、輪の真ん中に置かれていたサイコロを手にとって話題転換を行った。
「ま、まぁ、呼び方は本人同士で決めるってことでゲームとか始めようぜ。赤裸々トークサイコロだっけ？　それ順番に転がしていこうか」
友近が手にした赤裸々トークサイコロの面は全部で六つ。
初恋の思い出、

恥ずかしい話、
忘れられない恐怖体験、
激おこスティックファイナリアリティぷんぷんドリーム、
感動ヒストリー、
大人の世界、
といった風に、それぞれにトークテーマが書かれており、転がした本人が出した面の話をしなければならないシンプルなルールだ。
大体のものは意味が分かるのだが、何やら変なものが混じっていることで湊が首を傾げていると、サイコロの持ち主である渡邊が親切に説明してくる。
「激おこスティックファイナリアリティぷんぷんドリームってのは、まぁ、簡単に言えば激おこぷんぷん丸の最上級って意味っすよ」
「……誰だ、それ」
そんな愉快な名前の人間など知らない。そもそも人間かどうかも怪しい名前だ。話を聞いたせいで余計に意味が分からなくなっていれば、渡邊の代わりに今度はゆかりが意味を教えてくれた。
「激おこぷんぷん丸ってのは、すごく怒ってる状態を表す言葉なの。常用語じゃなくて一種のギャル語だから、あの面が出たらすっごくムカついたエピソードを話せばいいって感じかな」
「……なるほど」
また無駄な知識を得てしまったと僅かに後悔しているのか、湊が暗い表情を浮かべて無感動な声で理解した事を告げると、説明したゆかりは湊ならばそう思うだろうなと苦笑する。
けれど、それぞれの面の意味を理解したならゲームを開始できる。誰からやろうかと持っていた友近が尋ねれば、元々の持ち主である渡邊が挙手してトップバッターに決まり、ジュースやお菓子にぶつからないよう気を付けながらダイスロールした。
「おーし、感動ヒストリーだな。それじゃあ、オレが会長を慕うようになった感動の物語を皆に話そう」
自分がどうして同級生である湊を会長と呼んで敬語モドキまで使って敬っているのか、その理由を話そうと普段よりも真剣な様子で

皆の注目を集めた渡邊は、背筋を伸ばして静かに話し始めた。
曰く、それは一年生の二学期まで遡る。当時まだ恐いもの知らずのやんちゃボーイだった渡邊は、放課後の部活帰りに山井らと一緒にマイボールをドリブルしてふざけながら帰っていたらしい。
帰宅時刻のポートアイランド駅前でそんな事をしていれば迷惑でしかない。だが、当時の彼らはそんなことも考えずにドリブルで切り返したりしていた。
人が多い上に微妙な凹凸があるアスファルトの道で、技術的に未熟な一年生が完璧にボールを扱い切れる訳がない。
案の定、人にぶつかって飛んでいったボールは、歩いてきた人間の足に当たってさらに遠くへと転がり路地裏の方まで行ってしまい。渡邊は蹴った人間らに文句を言いながら走ってボールを取りに行った。
しかし、そこは地域でも有名な不良の溜まり場だ。うす暗くなり始めたばかりだというのに、大勢の不良らがたむろして、その一部の者が渡邊のボールを蹴って遊び始めていた。
それを見た渡邊は内心ではかなりビビりつつも、そのボールは自分の物だから返してくれと不良たちに告げる。
相手は急に来た中学生に面倒くさそうにしていたが、小さな声で何か話して笑いだすと、次の瞬間、ほら返してやると言ってボールを蹴って渡邊にぶつけ始めた。
大人が蹴ったボールを至近距離で受けられる訳もなく、ぶつけられた渡邊はバランスを崩して転倒するも、不良たちは返って来たボールを再度蹴って渡邊にぶつけるのをやめない。
何度もぶつけられる内に顔面に当たり鼻血が出ても相手は一向にやめようとせず、痛みと恐怖に丸まって泣き続けていると突然ボールが飛んでこなくなり、直後、男の絶叫が路地裏に響いて何事だと思った渡邊は顔をあげた。
するとそこには、今までボールを蹴っていた不良の頭を掴んで壁に叩きつけている湊がいた。仲間をやられてキレた不良が襲いかかってくるも、後ろ回し蹴りでこめかみを捉えて一撃で沈める。

相手が鉄パイプで殴ってこようと躱しながら腹にひざ蹴りを入れ、木製バットで襲いかかられれば拳で圧し折りながら相手をそのまま殴り飛ばす。
そんな風に次々と仲間がやられ、途中で勝てる相手ではないと逃げようとする者には、近くにあったドラム缶を蹴り飛ばしてぶつけ逃がさぬようにし、その場にいた十数名の不良を全員捕えてしまった。
そして、湊が不良らを倒している内にボールを回収していた渡邊の元へやってくると、ハンカチを手渡して大丈夫かと尋ねてきた。
「あんときはまだ不良系の生徒としか思ってなかったからさ。助けてくれた上に、病院に行った方がいいとか言ってタクシー呼んでマジびっくりしたんだよね。不良たちは会長が呼んでおいた警察に回収して貰って、オレは会長に付き添われて病院で検査したら鼻の骨にヒビ入ってたんだよ。ああいうのって、医者に言われると自覚して痛くなり始めるもんなんだよな」
駆けつけた警察に不良たちを任せると、湊は先に病院へ連れていくと言って渡邊をタクシーに乗せて病院に向かった。
検査の結果、鼻血は止まっていたが鼻の骨に僅かにヒビが入り、身体の打ち身も内出血が酷いので早期に病院へ連れてきたのは正解だったと医者に言われ。そのまま家に帰ろうと思っていた渡邊はまたしても湊に感謝することになる。
「まぁ、最終的には不良たちに払わせたけど、そんときはタクシー代も治療費も会長が立て替えてくれて、連絡聞いて駆けつけた親と揃って土下座する勢いで感謝しまくりでさ。後で会長の話を色んな人に聞いてみると、会長ってオレ以外にも何人も助けてて、こういう人をヒーローって呼ぶのかなってそれ以降ずっと尊敬してるってわけ」
あのまま助けて貰えていなければ、自分はこの場にいなかったかもしれない。死ぬまではいっていなくとも、バスケが出来なくなっていた可能性は十分あったので、それも含めて渡邊は湊のことを尊敬して今でも感謝していた。
だが、他の者が話を聞いて感心していても、助けた本人は一切覚えがないのか首を捻って静かに呟いた。

「……覚えてないな」
「湊は普段から人助けし過ぎなのよ。謝礼を払いたいって電話がよくかかってきて困るってクマモンが言ってたわよ」
「悪いな。知らない人に物を貰うなと親に躾けられているんだ」
湊は人を助けても名乗らずに去っていくが、助けられた人は湊が月光館学園の制服を着ているのを見ている。そのため、学校には頻繁にお礼の電話や謝礼を払いたいといった電話がかかってきており、対応に追われる職員室では相手が好意で言っているだけあって断ることに疲れていた。
けれど、湊は別に礼が欲しくてやっている訳ではないので、基本的にそういったものを受け取るつもりはない。
助けられた側はそれでは気が済まないのだろうが、本人がこういった性格をしている以上、もう何も言えないので、他の者も苦笑するだけで次のトークに移ることにした。
「じゃあ、次は会長の番ってことで」
「順番は適当なんだな」
最初にトークをした渡邊がほとんど正面にいる湊にサイコロを渡したことで、湊は時計周りとかではないのかと不思議に思いつつサイコロを転がす。
男子らは〝大人の世界〟という十八禁な話を聞きたそうにしているようだが、彼らの希望通りにはいかず。サイコロは〝恥ずかしい話〟の面を上に向けて止まった。
「……恥ずかしい話か。特にないな」
「ミッチー、子どもの頃のちょっとしたエピソードでもいいんだよ？」
「幼少期から近所でも評判の優良少年だったんだ」
確かに湊の言っていることは嘘ではない。他の子どもよりも精神年齢が高く、人助けを頻繁に行っていたので近所の住人からはいい子として認識されており、田舎で子どもが少ないこともあって湊はチドリと一緒に非常に可愛がられていた。
一応仕事での失敗は多く経験しているが、日常でのポカはあまりしたことがないので話せるようなエピソードもない。

そのことを正直に告げるもゆかりなどは信用していないらしく、青年の家族である少女に相手が隠している恥ずかしい話はないかを尋ねた。
「こんなこと言ってるけど、チドリはなんか有里君の恥ずかしエピソード知らない？」
「……こんな風にすかしてるけど、こう見えて湊はマザコン。自分の知る中で一番綺麗な人を聞かれたら迷わず母親をあげるレベル」
「そうなの？　お母さん大好きとかミッチー可愛いよ！」
楽しそうに言いながら西園寺が湊の右腕に抱きつくが、対象的にマザコンと呼ばれた青年の表情は暗い。
チドリに両親のことを聞かれてどんな人だったか話した覚えはあるものの、自分の知る中で一番綺麗な人は誰かなど訊かれたことなど一度もなく、仮に訊かれてもアイギスか母親で悩むので迷わずという訳ではない。
そのため色々と言いたい事はあったのだが、青年が口を開くよりも先に、湊がマザコンであると聞いて苦笑していた風花があることに気付いて不思議そうな顔をする。
「あれ？　でも、有里君のご両親って事故で……」
「死んでるぞ。まぁ、墓の場所は知らないからお参りしたこともないが」
少女の質問に答えるように話すが、実際は墓の場所は知っている。エルゴ研を出るまでは知らなかったが、英恵と再会してから実家の土地の端にある一族の墓地に眠っていると聞いたのだ。
さらに昨日水族館で会った七歌も実家の墓にいるのでお墓参りに来いと言っていたため、仮に英恵から聞いていなくとも知る運命にあったのだろう。
青年の持つ両親に対する想いか、それとも両親が息子に来て欲しいと願っているのかは分からない。それでも、親子を結ぶ何かしらの縁がまだ存在する事に、湊がちょっとしたおかしさを感じて心の中で苦笑していれば、クッキーに手を伸ばしていた美紀が墓の場所を知らない理由を聞いてきた。

「何で場所を知らないんですか？」
「俺は事故から半年間意識不明で寝続けてな。気付いたら自分の物を何も持たずに施設にいたんだ。実の祖父や伯父からは忌み子として死を望まれるほど嫌われていたし。そんな相手に連絡を取れる訳もなく、ずっとそのままで生きてきた」
青年が答え終えると場の空気が重く沈む。両親が目の前で死んだだけでなく、事故後も色々と周りに翻弄されながら生きていたと言われてしまうと、流石に普通の少年少女では何と声をかけていいのか分からない。
まして、血の繋がりのある祖父や伯父に死を望まれるなど、正常な一般家庭ではまず起こり得ない事だ。
湊の本来の実家がそれなりに由緒ある家柄だというのは聞かされているが、詳しく聞けば聞くほど謎が深まって行くようで、知らぬ方が身のためという言葉が頭を過ぎった事で他の者たちはこれ以上聞くのを控えることにした。
そうして、重くなった場の空気を何とか変えるため、順平は湊の話を気にしていない風を装いながら明るい口調で場を仕切り直す。
「そ、そっか。けど、有里君が自信持って綺麗だっていうそのお母さんには興味あるな。写真とかあれば見てみたかったぜ」
「……あるわよ、写真」
『……え？』
自分の物など何も持たずに施設で目を覚ましたと湊が話していたので、てっきり写真などないとばかり思っていた。
だが、その期待をいい意味で裏切ったのは、青年本人ではなくその家族の少女であった。
予想外の言葉に皆がキョトンとしている目の前で、チドリは貴重品を入れているポーチからスケジュール帳を取り出し。一番後ろのメモなどを少し挿める収納部分に挿んでいた写真を抜き取って皆に見せた。
そこに写っているのは幼い湊と共に幸せそうな笑顔を浮かべる両親。綺麗な庭園のような場所で、色取り取りの花をバックに写る美男

美女と可愛らしい少年の姿に、写真を見た者たちは呆けたように賛美の言葉を口から漏らす。
「うわぁ……有里君のお母さん本当に綺麗……」
「やっべー、両親揃ってマジで美形じゃん。てか、え、二人ともめっちゃ若くね？」
「ミッチーってお母さん似なんだね。でも、お父さんにも似てて両親のいいとこ取りなんだぁ」
柔らかな笑みを浮かべ優しそうだがどこか芯の強さを思わせる長身の男性と、胸部が豊かな可愛らしさと美しさを絶妙なバランスで合わせ持った溢れんばかり生命力を感じさせる女性。
その二人の愛の結晶たる少年は、瞳の色こそ現在と異なっているが、紛れもなく二人の子であると誰が見ても分かるほど両親のいいところを受け継いでいた。
こんな人が母親ならばマザコンになるのもしょうがない。一番美しいと思うのも納得だと感じながら一同が写真を見ているとき、輪から少し外れていた湊は、自分の両親が写っている写真をチドリが持っていたことを疑問に思って尋ねていた。
「……なんでチドリが持ってるんだ？」
「前に貴方のおばさんが家に来たときに貰ったの。湊に譲ろうとしても受け取ってくれないから、それなら私が貰っておくって言ったら普通にくれたわ」
「まぁ別にいいが、あんまり人に見せないようにしてくれ。変なのに目を付けられたら困る」
昨日は七歌と出会って生存と居場所がばれてしまった。彼女経由で九頭龍と桐条に情報が行く事も考えられるので、何があっても白を切り通せるよう、持っておく分には構わないが人に見せないようにしてくれと頼んだ。
言われた少女はそれに頷いて返し、他の者から写真を返して貰うと丁寧に扱いながら大切にしまった。
トークテーマである恥ずかしい話に合致した内容だったかはともかく、ここにいるメンバーにはお母さん大好きっ子と認識されたこと

で湊の番は終了だ。
次は誰がやるのかと周りを見渡したところで、丁度視線が合った美紀にサイコロを渡せば、彼女はどの面が出るか不安そうにしながらサイコロを転がした。
「初恋の思い出、ですか。えっと、初恋というか今でも心に残っている男の子の話でもいいですか？」
彼女が出したのは〝初恋の思い出〟の面だった。けれど、まだ初恋と言えるようなはっきりとした感情を男子に抱いたことがないので、とある思い出の男子とのエピソードについて語り始める。
「相手の名前は知りませんし、顔もほとんど覚えてないんですが、昔、私や兄がいた孤児院が火事になったことがあるんです。もうすぐ夜中という時間もあって寝ていたんですが、建物が燃えているから逃げろと突然起こされ、何が何だか分からないまま、子どもたちは煙で前が見えない中を必死に走って外に出ました」
その男子との出会いは七年前に遡る。当時の美紀は一人でお人形遊びをしているような人見知りする少女で、気を遣った兄と荒垣に誘われなければ人とほとんど会話することもなかった。
両親が死んで知らない人の沢山いる慣れない施設にいたことが原因だが、そのせいか美紀は施設に来た頃よりも段々と恐がりで臆病な性格になっていた。
「でも、私は恐くて逃げられなかったんです。皆が出ていって一人取り残され恐怖に震えていると、炎が私のいた部屋にまで来て自分は死ぬんだと思いました。暑さと煙で意識が朦朧として、ああもう駄目だと思ったとき、一人の男の子が炎の中を突っ切って現れたんです」
兄や荒垣に手を引かれなければ外に出ることも出来ない少女が、火事だから逃げろと言われたところで逃げられるはずもなく。案の定、取り残されて死を待つだけとなった。
だが、幼い命が失われようとしていたとき、まるでヒーローのように一人の少年が現れたのだ。
「自分と歳の変わらない子が炎の中を進んで助けにきたということが信じられなくて、死ぬ直前に変な幻を見ていると思いました。です

が、その子は私にもう大丈夫だと言ってくれて、恐かった私は安心したことと助けに来てくれた嬉しさから涙を流してしまいました」
どうやって少女の元まで辿りつけたのか分からない。けれど、幻でも何でもなく少年は確かに存在して、死を待つ恐怖に怯えていた少女に安心させる言葉をかけてくれた。
もしも人の持つ運の総量が決まっているのだとしたら、あの日に全てを使いきってしまっていてもおかしくないほどの奇跡。
そんな奇跡と遭遇した少女は、そのまま助けに来た少年に背負われて無事に助け出される事となる。
「彼はその後、私を背負ったまま二階の窓を突き破って脱出し。近くにいた大人に私の状態を告げて救急車を呼ぶように言うと去って行ってしまいました。彼がいなかったら私は死んでいたでしょうし。助けてもらったお礼も言えてないので、その思い出の男の子にいつか会ってありがとうと伝えたいというのが私のお話です」
初恋の思い出と言ったら普通は幼い頃の可愛い恋愛話を想像する。けれど、思いの外ドラマティックな美紀の話に他の者らは驚き、彼女がいまここにいるのはその少年のおかげなのかと何とも不思議な気持ちになった。
中でも風花は彼女が無事にここにいることを喜んでいるが、思い出の少年についても大変興味があるらしく、美紀の方へ近寄って目を輝かせながら詳しい話を聞いている。
「美紀ちゃんはとっても大変だったみたいだけど、危険を顧みずに男の子が助けに来てくれるなんて素敵なお話だね。その子って格好良かったのかな？」
「そうですね。意識が朦朧としていたのであんまり覚えていませんが、助けに来てくれたというシチュエーション補整を除いても結構格好良かった気がします。そう考えるとやっぱりあれが初恋なのかもしれないですね」
機会がなかったというのもあるが、今まで誰にも話した事のなかった自身の初恋の相手のことを話すのは恥ずかしいのか、美紀は照れたように頬を僅かに染める。

その様子を見て順平らは、その男子も惜しいことをしたな、と言って学内でもトップクラスの才色兼備な少女とのフラグ未回収なことを笑って茶化した。
だが、他の者がそんな風に美紀の初恋について話していたとき、赤髪の少女が顎に手を当てて何やら考え込んでいた。そして、何か気になることがあったのか、顔をあげて美紀と視線を合わせると火事の詳細について質問してくる。
「……ねえ、その火事って七年くらい前の話？」
「え？　えっと、そうですね。大体それくらいになります」
確かに火事はそれくらい昔にあった。しかし、どうして彼女がそれを知っているのか不思議に思っていると、チドリはさらに質問を続けてくる。
「場所は厳戸台で、時期は秋頃？」
「はい、そうです。当時のニュースや新聞にも結構大きく取り上げられたらしいですよ」
子どもたちが暮らしていた都内の孤児院で火事があっただけに、そのニュースは地方ローカルではなく全国区のニュースや新聞で取り上げられた。
よって、チドリが身近で起きた火災事故としてそのことを知っていても不思議ではないのだが、質問して答えを聞いていたチドリの視線が、とある青年の方へ向いていったことで美紀は何やら嫌な予感を感じていた。
そう、他の者も美紀とチドリの会話で薄々感づき始めているようだが、自分たちのよく知る者の中に平気でそんな事をしそうな者がいるのだ。
ただ、もしもその予想が正しければ、美紀は本人の前で相手を褒めて自分の初恋だと言ってしまったことになる。
これは恥ずかしい。顔から火を噴き、穴があったら入りたいレベルである。そうして、美紀は笑顔が引き攣ってきていることを感じながら待っていると、誰にも話していない少年の詳しい容姿についてチドリが口にしてきた。

「……その男子って長い髪で黒い着物きてたでしょ」
「あの、もしかして、そういう事ですか？」
「ええ、近くで火事が起きてるって知ったら急に車から飛び降りて行っちゃったのよ。私や桜が危ないことするなって怒っても、一人助けたって満足気にしてて話を聞かなかったのを覚えてるわ」
呆れ気味に話すチドリに対し、美紀はまさかの本人登場に恥ずかしさから手で顔を隠してしまう。
湊を見ていると似ているような気はしていたのだが、あのときの少年は蒼い眼をしていたと記憶していたのだ。
意識が朦朧としていたことによる記憶違いの可能性にも気付いてはいたが、本人の前で幼い頃に抱いた淡い恋心を伝えてしまった事実は変わらない。
耳や首まで真っ赤にして照れている美紀と、そんな様子を普段通りの表情で眺めている湊を見ながら、友近やゆかりはこの世界は意外と狭い範囲で回っているのだなと思わず感心する。
「すげぇ、世間って狭いとかってマジであるんだ」
「確かにすごい事はすごいけど、そんな小さい頃から命懸けで人助けたりとかおかしいでしょ……」
「いやいや、やっぱヒーローになる人ってのは昔から逸話を持ってるもんしょ。会長、マジかっけーっスわ」
周りの者はそんな風に好きに言っているが、気になるのは湊が美紀を助けた相手だと認識していたかどうかである。
美紀はまだ復活していないので、ならば代わりに自分が訊いておくかとチドリが尋ねる。
「湊は知ってたの？　この人が自分の助けた相手だって」
「まぁ、入学式で会った時点で気付いてたな。ついでに、一年の夏休みに真田先輩が試合を挑んできたとき言っていた、〝守る者にとって弱さは罪なんだ〟ってのは当時真田を抱きしめて泣いていた先輩に俺が言った言葉だ。まぁ、ちゃんと覚えていてボクシングチャンプになるほど強くなっていたのは少し驚いたな」
当時の説教臭い台詞を真田がしっかり覚えていたのは意外だった。

さらに、その言葉を胸に刻みながら、あの事故のような無力に泣くことは二度とすまいと鍛え続け、無敗のまま中学のボクシングチャンプになっていたのは素直に感心した。
苦笑してそんな風に語る姿からすると、本当に湊は入学当初から気付いていたらしい。気付いて言わなかった理由は不明だが、きっと恩着せがましくなると思っただとか、もしくは美紀が事故のことを思い出さないように気を遣っていたのだろう。
助けてもらった上に気まで遣わせていたとなれば、これは日を改めてお礼をしなければならないかもしれない。顔を覆っていた手を離して、昼食を御馳走するなどでいいのだろうかと美紀が考えていれば、何やら名案を思い付いた顔をして渡邊がヒソヒソと話しかけてくる。
「真田さん、チャンスだぜ！　ほら、ここで告っちゃいなよ！　この感動の再会ってシチュを考えたら会長もＯＫ出すって！」
「いや、あの、あくまで昔の話ですし、この集まりの主旨を忘れていませんか？　有里君とゆかりさんが付き合うからお祝いで集まったんですよ？」
ヒソヒソと小さな声で話しかけてきたが、全員が近い位置に集まっているせいで丸聞こえである。
こんな事で付き合い始めた二人がギクシャクしてはまずいからと美紀がフォローを入れるも、今度は順平も渡邊の言葉に乗っかって美紀と湊が付き合うべきだと茶化し出す。
「うわ、そうだった。こんな美味しいタイミング二度とないんだけどなぁ。有里君、こっそり真田さんとも付き合っちゃいなよ！」
「……お前ら、妬ましいからって破局するように仕向けるのはやめろ」
『あ、ばれた？』
けれど、そんな二人の馬鹿な考えは青年にお見通しだった。ゆかりと付き合いだしたというのに、美紀の初恋の相手にまでなっていれば、同い年の男子として嫉妬せずにはいられない。
本気で言った訳ではなく冗談半分で茶化しただけだが、ばれればしょうがないとばつが悪そうに頭を掻いて二人は笑う。

そんな分かり易い反応を見せた二人に湊は嘆息しながら、助けて貰った恩人と再会して戸惑っているらしい美紀の方を向くと自分から話しかけた。
「……真田、今度映画に行こう。真田先輩との試合の特典のやつだ。お礼だとかはまたそのときにゆっくり聞く」
「あ……はい。では、その時にまたお礼させて貰いますね」
お礼はまた聞くから今は旅行を素直に楽しめ。言外にそう告げていると察した美紀は、青年にまたしても気を遣わせてしまったことを申し訳なく思いつつも、今はその言葉に甘えておこうと笑顔で頷いた。
命の恩人との数年越しの再会という感動的なシチュエーション。その状況で二人が日を改めて会う約束を取り付けるのは自然だ。
だが、二人は年頃の男女で、助けられた少女は助けてくれた相手に恋心を抱いていた。これで二人で出掛けて何も起こらないと思わない方がおかしい。
一応、二人のことは友人として信用しているので、早まった行為に走ったりはしないとは思うが、自分を無視されているようで面白くないと、とある少女が青年をジトっとした視線で見つめながら他人行儀な口調で言葉をぶつけた。
「仮とは言え彼女の前で他の女子とデートの約束ですか。随分といい御身分ですね」
「これは浮気に入るのか？」
「さぁ？　自分で考えたら？」
聞くまでもなく分かるだろう。そう思ってもゆかりが考える時間を与えれば、青年から返っていた言葉は彼女の思っていたものと違っていた。
「……まぁ、セーフだな」
「自分に甘い男って最低よね」
「他人にも甘いってよく言われるよ」
「……否定出来ないのが悔しい」
彼は確かに他人にも甘い。厳しいときには冷たいと思うほど突き

放すが、基本的には平等に優しく青年ばかりが苦労を負っているようにすら思える。

そう考えると美紀とのデートも、相手に気持ちの整理をつかせるために行うのだろう。これではデートしては駄目だなどと言えないではないかと、ゆかりは青年との交際は大変な気苦労を負うことになりそうだと今さらになって後悔し始めるのだった。

その後、他の者たちも順にサイコロを振って出た面のエピソードを話し終えると、湊を除く男子たちが心待ちにしていた王様ゲームへと移行し。四つん這いになった風花の上に座るという命令を下された順平が相手を潰さぬよう空気椅子で耐えたり、命令を実行に移すべきかどうか悩んだ末にゲームだから別にいいかと湊が美紀の胸に手の甲で触れたり、渡邊のリークにより実は西園寺には二つ年上の草食系のび太系男子の高校生彼氏がいることが発覚するなど、夜遅くまで修学旅行の夜を一同で楽しんだ。

第百三十九話　修学旅行最終日

7月11日（水）
昼――国際通り
午前中はバスで岬などの観光を行った生徒たちは、本日最後のイベントである国際通り巡りを行っていた。
決められた時間にバスに戻ればいいだけなので、各々好き好きに土産屋を見て回ったりしている。
湊たちは班員の内、友近と理緒が親から買って来て欲しいと頼まれているものがあるからと別行動を取っているが、他の者は全員一緒でさらに他のクラスだが部活メンバーと渡邊も合流してきたので、昨日の夜に遊んだメンバーと大して変わらない顔ぶれであった。
現在は女子たちの買い物をメインに行動しており、風花が店先に並んだお菓子の箱を手に持ちながらチドリたちの意見を聞いていた。
「やっぱりお土産は黒糖を使ったちんすこうとかが良いかな？　それとも紅芋タルトとかかな？」
「ちんすこうって雰囲気で食べるけど言うほど美味しいって感じしなくない？　それならちょっとお腹にたまるオヤツになりそうなタルトの方が私的にいいと思うけど」
「……こっちに黒糖を使ったショコラクッキーの試食があるわよ」
「あ、本当だ。すみません、試食させて貰いますね」
美味しいことは美味しいのだが、それほど印象に残るかと言えば個人的に微妙だとゆかりが言えば、チドリが見つけた黒糖を使った別のお菓子の試食をして楽しんでいる。
綺麗どころの女子が並んで楽しそうに買い物をしている姿は眺めているだけでも眼福だが、隣の店に移動するたびにこうやって足が止まると中々進むことが出来ない。
おまけに湊は生徒会メンバーの二人に絡まれているせいで、非常に面倒くさそうにしていた。
「会長、このハブ酒ってやつ精力増強にいいらしいッスよ。ゆかりっちとの夜のために買っておいたらどうっスか？」

「……ハブ酒やマムシドリンクを飲むくらいなら、ウナギを食べたりレバーを食べた方が効果ある。というか精力なんかいらない」
「ミッチー、この海人のTシャツ一緒に買おうよ！」
「……それ、東京にあるアンテナショップでも売ってるぞ」
恋人との夜の生活に口出しなど余計なお世話以外の何ものでもなく、それ以前にすぐにシモの話に持っていくのはやめろと湊は相手を諌める。
だが、入れ替わる様に西園寺がペアでTシャツを買おうと言ってきたため、彼氏とペアでなくていいのかと思いつつ、沖縄から余計な荷物を増やしていかなくとも東京で同じ物が買えるぞと教えてやった。
同じ物だろうと観光地で買うことに意味があるのだが、青年はその辺りの人の気持ちを理解出来ず。西園寺が湊の言葉に頬をむくれさせていれば、記念のストラップを買って出てきた順平が何も買っていない湊に話しかけてくる。
「つーか、有里君はお土産とか買わなくていいんか？　オレたちの買い物ばっか付き合ってくれてるけど、見たい物あるなら好きに行っていいんだぜ？」
「……知り合い用と職場用にいくつか買ったから十分だ」
「しょ、職場？　有里君ってば中学生なのに何かお仕事してんの？」
「まぁ、色々とな」
本業は久遠の安寧を傘下に治めて裏界最大組織となった仮面舞踏会の盟主。表向きとしてはEP社の最高顧問で、新たに設立したジャパンEP社の代表でもあり。系列の久遠総合病院の理事長の他には、栗原が店主を務める『古美術〝眞宵堂〟』、紅花の実家である『中華料理店〝南斗星君〟』のバイトもたまにだが行っている。
経済的には余裕があるというのに、未だにバイトも続けているのは湊なりの誠意らしく。チドリや桜たちがちゃんと表の世界でも生きろと言ってくるので、学生の他に普通のバイトもすればそれっぽいのではないかという単純な考えによるものだ。
とはいえ、中学生ではバイトをしている者も少数なので、湊が仕事をしていると聞いた順平は口を開けて呆けていた。

傍にいた渡邊は友人のそんな顔を見て、間抜け面を携帯のカメラに収めて笑いながら、先ほどの順平と同じように買い物をしていない湊に後輩らへのお土産について尋ねてくる。
「会長、チビスケとか宇津木ちゃんとか宇津木ちゃんのお友達の子にお土産買いました？」
「木戸には菓子、宇津木には染め物のハンカチ、羽入には水族館で大きなぬいぐるみを買っておいたから問題ない」
「え、お友達ちゃんにぬいぐるみ買ってあげたんスか？　てか、会長って行きのバスも含めて旅行中ずっと手ぶらだったような気がするんですけど」
「気のせいだろ。あと、遊園地やそういった大きな施設ではお土産の配送も出来るんだ。子どもへのプレゼントはぬいぐるみが基本だしな。とりあえず大きいのを選んでおいた」
「ん、んー……一個しか違わないんで子ども扱いとかオレには出来ないですけど、確かに大きなぬいぐるみは喜ばれるって聞きますね」
宇津木と羽入の身長はそれぞれ一六一センチと一六〇センチ。これは部活メンバーでは佐久間と美紀以外の三人より大きいことを意味する。加えて、二人はスタイルもそれなり大人びていて、羽入にいたっては桐条美鶴よりも出るとこは出ているのだ。
顔付きや本人の雰囲気で後輩と認識できているが、そういった身体面では完全に同級生以上であるため、渡邊が湊のように後輩を子ども扱いするのは難しいが、確かに羽入の性格を考えればぬいぐるみを喜びそうではあった。
お土産を買って出てきた女子たちも丁度話が聞こえていたようで、おまたせと言ってやってくるなり、チドリが湊を見上げて喋りかけてきた。
「……湊、やけにあの馬鹿っぽいのに甘いけど何かあるの？」
「あれで二年の学年主席だぞ？　というか別になにもない。まぁ、相手が懐いて来ているのは、親が仕事で海外にいて単純に寂しいからだと思う。八月には一段落して戻ってくるらしいから、それまでは多少面倒をみてやるつもりでいるが」

湊の言葉を受けた羽入を知る一同は、天然で呆け呆け娘な彼女が湊と同じ学年主席と聞いて目を丸くして驚いている。
だが、彼女が学年主席なのは事実であり、馬鹿っぽく見えるがゲーム攻略で脳が鍛えられて、基本五科目の習った部分は攻略法含めて暗記しているらしい。
その他の副教科と呼ばれるものは覚えられるものは教科書やノートを見て覚えて、テストでは覚えた物をそのまま書いているため、それがどういった物かは理解していないことを考えると、彼女は典型的な〝勉強が出来る〟だけのタイプであった。
勉強が出来る、知識がある、頭が良い、これら三種は似ているようで完全に別物であるため、将来はかなり苦労することになるだろうが、一応心配した湊が暗記した事柄をちゃんと知識に落としこめるよう勉強を見てやっているので、改善されつつあることを思えば希望は見えていた。
とはいえ、面倒くさがりな湊が可哀想だからと色々と世話を焼いている話を聞くと、昼食を取るために県庁前通りに移動を始めたチドリたちは呆れた様子で湊を見てくる。
「……貴方、やっぱり子どもに甘いわね。将来娘が生まれたら苦労するわよ。父親を異性として好いて来そうだもの」
「あ、なんかそれ分かる。有里君って激甘で子どものこと叱れなさそうだよね。娘ならすごいファザコンになりそう」
「でも、優しいお父さんとして娘に好かれそうですけど。反対に息子には大きな壁としてライバル心を持たれそうな気がします」
「確かに有里君がお父さんだと、子どもは他の家庭より特別に意識しちゃいそうだよね」
湊は人類最優の遺伝子を持つ鬼と龍が交わって生まれた現代人類から進化した新人類だ。子どもにこれ以上の遺伝子を求めようと思えば、湊は力の管理者であるエリザベスかマーガレットと子を生すしかない。
しかし、湊にそのつもりがない以上は相手は普通の人間の女性ということになり、普通の女性から生まれた子どもは自動的に湊より遺伝

子的に劣ってしまう。
息子ならば自分よりも強い雄にライバル心を抱き、娘ならば雄として優れている上に自分に特別な愛情を注いでくれる父を異性として好いてしまう未来は確かにあり得た。
「……結婚相手が可哀想よね。夫が子どもに甘いから叱らないといけないのに、叱ると子どもからは恐い母親として見られるんだから」
「でも最近はそういう家庭も多いらしいよ。父親が娘に激甘だからって、母親が子どもを叱る父親としての役目もしなきゃいけないんだって」
「子どもの将来を考えて叱っているのに、お腹を痛めて生んだ子どもから嫌われるって可哀想ですね」
「自分が結婚する相手には、自分が嫌われてでも子どものことを考えて欲しいね」
子どもからすれば自分を叱らずに愛情を注いでくれる親は、とても優しい最高の親に見えるだろう。けれど、父親がそうなれば母親は子どものことを考え、時には心を鬼にしなければならなくなる。
父親が甘ければ、厳しい母親はその分余計に厳しく見えるに違いない。すると、思春期になれば甘い父親ばかりに懐いて、母親のことは厳しいから嫌いだと言ってくるかもしれない。
子の将来を思って心を鬼に出来る母親だ。お腹を痛めて産んだ我が子が愛しくないはずがない。
だが、子どもが親のそんな愛情に気付くのは大人になって子どもの頃を振り返ったときである。それまで憎まれ役を続ける母親はとても辛い思いをするだろうと、女子たちが子を叱れない夫と結婚した妻に同情すれば、その後ろを歩いていた湊が眉を顰めて口を開いた。
「……お前ら、妄想の話題で批難するようにこっちをチラチラ見ながら話すのはやめろ。仮にそれが現実になろうとお前らは部外者だろうが」
「……親しい異性なんだから相手がこの中の誰かの可能性はあるわよ」
チドリの言う通り、部活メンバーは湊と親しい女子ばかりなので、

両者の関係を考えれば将来結ばれる可能性は他の者よりも高い。
彼女になったゆかりや家族だが戸籍上は他人で結婚可能なチドリなど、他の誰よりも結婚に近い位置にいると言っていいため、仮の話ではあるが部外者かどうかは分からない。
しかし、チドリがそういうのであれば、先ほどまでの話から考えるに女子たちも結婚相手が苦労しそうなのは分かっているはずだと湊も反論した。
「これだけ言ってきておいて、それで一緒になったならある程度は覚悟の上だろ」
「うわ、開き直ってる。有里君ってば子持ち家庭の夫としては最低だわ」
「……お前ら、自分が俺より家事が出来ないってこと忘れてるだろ」
『あ……』
好き放題言われてもある程度は我慢していたが、妄想の話で最低とまで言われれば現実を見ろと言い返したくもなる。
学業・仕事・家事をちゃんとこなして一人暮らししている湊は、ここにいる女子たちよりも圧倒的に家事スキルが高い。料理に関しては和食と中華はプロ級で、他の物だろうと基本が出来ているため十分美味しく作れる。
掃除・洗濯・裁縫は再会する被験体たちに教えようと桔梗組に来た当初に習ったので、勉強を教えるのが得意で家庭教師を出来ることもあって、現在ではプロの執事（バトラー）として働けるレベルだ。
いくら湊が子どもに甘かろうが、彼は子どもの家庭環境を整えて勉強を教えることも出来る。そんな彼よりも家事スキルを初めとした複数の項目で劣る者が偉そうにいうなど笑止千万。子どもの話をする前に自分のことを最低限出来るようになれと湊が言えば、女子たちは落ち込んだ様子で肩を落とし目的の店までトボトボと歩いて行った。
＊＊＊
国際通りを離れて県庁前通りにやってきた湊たちは、事前に調べていた定食屋で昼食を取ることにした。

四人掛けのテーブル二席に部活メンバーと湊＋その他で分かれ、店の一番人気と書かれた沖縄そば定食といくつかの郷土料理を頼んで料理がやって来るのを待つ。

沖縄そば定食は『ソーキそば、炊き込みご飯、スパムとサラダ、もずく』で税込六五〇円と観光地に近いことを考えれば十分に良心的な値段だろう。

単品で頼んだゴーヤチャンプルーやてびちが運ばれてくると、続けて定食も一人分ずつ盆に乗せられてテーブルに置かれる。

運ばれてきた時点で漂っていたスープの香りが食欲をそそり、全員の分が揃ったことを確認した一同は手を合わせた。

『いただきます！』

作ってくれた者と食材への感謝を胸に、白い湯気の立つ熱々のスープに浸かる麺に箸を伸ばして口へと運ぶ。

ずるずると良い音をさせながら啜った麺を口に含むなり最初に感じたのは、透き通った色のスープからは想像も出来ないような、だしの旨味が凝縮された濃厚な味わいに対する驚きだ。

カツオと昆布のだしをベースに、醤油と地元沖縄の塩を使った極めてシンプルな味付けだが、そこによく煮込まれて身がほろほろになったソーキを入れることで、ソーキに沁み込んだ味がスープに溶けだし、何時間も煮込んだラーメンのスープに負けない旨味を持った味付けになっている。

あまりの大きさにスープから半分以上顔を出してしまっているソーキに、麺は食べごたえがありスープと絡み易い太麺、その他にはネギと紅ショウガがトッピングされ、薬味のトッピングそれぞれが口の中をさっぱりとさせるため、麺やソーキを食べる間に挿むことで最後まで飽きなくそばを堪能する事が出来る。

しかし、定食はソーキそばだけではない。冷房の効いた店内でそばのスープに負けないくらいホカホカと湯気を立てている炊き立ての炊き込みご飯は、鶏肉やひじきにこんにゃくといった具材をご飯と一緒に炊いているのだが、なんとソーキそばと同じだし汁も一緒に入れているのだ。

具材と調味料の配合が異なるため味わいは全く別だが、ベースとなるだしを同じ物にすることで二つの料理の食べ合わせは最高だった。
ソーキを口一杯に頬張り、ご飯の盛られた茶碗を手に持ってガツガツとかっ込みながら、順平が満面の笑みでそれぞれの料理を褒め称える。
「うんめー！　オレっち、大のラーメン党だったんだけど、こんなでかい肉が入った沖縄そばならマジでタメ張れるっつーか、炊き込みご飯とのコンボで満足度はこっちのが上かも」
「このスパムってやつも美味いよな。ちょいきつめに塩味付けたジューシーなハムみてぇ」
もりもりとサラダを食べながらスパムも口に運び、普段食べない料理との出会いに渡邊は楽しそうに食事を続ける。
どちらかと言えば優しい味付けのそばとご飯に対し、がっつりと味のついたスパムは育ち盛りの男子や仕事を頑張っている者たちにも満足なボリュームを与える。
しょっぱい味に飽きれば身体にも良いもずくで口直しをすることができ、定食以外にも豊富なメニューが揃っていることでこの店は客に飽きさせることがなかった。
湊たちのテーブルで男子らが忙しそうに箸を動かしているとき、隣のテーブルではチドリたちが同じように料理の感想を言い合いながら満足そうな笑みを浮かべている。
だが、その中でただ一人だけ普段通りの感情の読み取れない表情で食事を続けている者がいた。
「……ジーマーミ豆腐、落花生を使っているということはごま豆腐みたいに甘いのか？　まぁいいか。すみません、ジーマーミ豆腐とチキアギーとグルクン唐揚げ追加で」
「ミッチー、沢山食べるんだね。まどか、お腹一杯だからこのスパムあげる。はい、あーん」
表情は普段通りだが、彼は彼でアナライズを使いつつ料理の調理工程から隠し味まで調べ尽くし、密かに本場のレシピを盗んで料理のレパートリーを増やしながら料理を堪能していた。

それを見た西園寺は一杯食べる男の子は好きだよと言いながら、自分の皿のスパムを箸で湊の口へと運んでゆく。
いくら沢山食べると言っても、どこか潔癖症っぽい雰囲気の彼は流石に他人が口を付けた箸で触れた物は食べないだろう。周囲がそう思いながら、湊相手に押せ押せな態度を崩さない西園寺も大したものだと苦笑していれば、次の瞬間湊の口の前に運ばれたスパムが西園寺の箸から消えていた。
『……ん？』
今、何が起こったのか理解出来なかった一同は首を傾げて青年の顔を見る。すると、青年がいつもと変わらぬ表情のまま、もきゅもきゅと口を動かして何かを咀嚼しながらメニューを眺めていた。
彼の前には空になった皿や器が並んでいる。皆まだ食べている最中だというのに、追加で色々頼んだ分まで食べ終えているとは、随分と食べるのが早いのだなとちょっと驚く所ではあるが、皿や器が空になっている状態で彼がどうして口を動かしているのか分からない。
彼の元には食べるものがなく。先ほど西園寺が持っていたスパムは一瞬で消えた。そこから推測するに、もしや他の者が目で追えない速度でスパムを口に入れたのだろうか。
カエルが虫を食べるときですら残像くらいはあるぞと、ミステリーを超えてちょっとしたホラーの域に入っている青年の食事について、隣のテーブルにいたゆかりが恐る恐る尋ねる。
「え、えっとぉ、有里君さ。いま、西園寺さんのスパム食べた？」
「……メニューを見るのに邪魔だったからな。それに箸では触っていたが、食べさしでないなら別に気にしないし。残すのもあれだろ？」
人の食べさしは遠慮するが、別に箸で触れたくらいならばそれほど気にしない。そもそも、他人の口に触れた物をそんなに気にするのであれば、湊は今までに何度も不意討ちで女性からキスされているので、その度にうがいや歯磨きをしなければならなくなる。
いくら湊でもそこまで潔癖症ではないため、別に誰かが口元に料理を持ってくれれば食べることもあるぞと返した。
他の者たちはそれを聞いて意外と普通なんだなとも思ったが、家族

の少女が大して驚いていないことから、彼は元々そういったことをあまり気にしない性格だったのだと認識を改める。
今回の旅行で湊の意外な面を多数見ることが出来たが、それは他の者が湊をどこか特別視して固定概念を抱いているせいだった。
彼と仲良くしようと接してみれば、初っ端からくだらない悪戯をしたり、レクリエーションのゲームにも参加してちゃんと罰ゲームまがいのこともやってくれる普通の人間だ。
人とずれたところや住む世界が違うと思わされるような部分も確かに持ち合わせているが、よくよく考えてみると湊の方は親しくない者相手でも分け隔てなく接している。
チドリや部活メンバーなど親しい者を優遇する点はあっても、それは他の者だって友人を優先するのでなにもおかしくないため、お互いの間に壁を作っているのは湊ではなく実は自分たちではないかと思い、チドリを除く他の者たちは湊に偏ったイメージを持って接してしまっていた事を少し反省した。
中でもゆかりは、彼と友人としてだけでなく仮初の恋人としても付き合っていくなら、やはりちゃんと彼自身を見て知っていく必要があると考え、港区に帰ったら二人で遊んでみようと先に約束を取り付けておくことに決める。
食事を終えて熱いお茶を貰って喉の調子を整えると、早速とばかりにゆかりは湊の方へと向き直って声をかけた。
「有里君さ。向こうに戻ったら一回デートしてみよっか」
恋人になったからには二人でデートをするのも普通であるはず。別に何もおかしくはないと思いながらゆかりが提案すれば、食事を続けていた湊は一度箸を止め、何やら探るようにジッと見つめた後、ゆかりの向かいに座っていたチドリと視線を交差させてお互いに頷いてから口を開いてくる。
「……これは裏があるパターンだな」
「……そうね。気を付けないと絵とか壺を買わされるわよ」
『おー、こわいこわい』
最後に揃って身を竦ませる小芝居をする二人。

いくら他人を小馬鹿にしたような態度を度々取ってくると言っても、流石にここまでおちょくられるのは初めてだ。
ただでさえ一人でもイラッとするというのに、似たようなやる気のない表情をした二人が揃って馬鹿にしてくれれば、感じる怒りは数倍に跳ね上がっていた。
せっかく付き合うことになったからと遊びに誘った少女は、肩をわなわなと震わせ周囲の迷惑にならない程度に声量を抑えながら、おちょくってきた二人に語気を荒げて言葉を返す。
「おのれらは私にどんなイメージを持っとるんじゃ！　別に裏とかなくて、よく考えたら有里君のことを深く知らないなって思ったから誘っただけよ。普段と違う状況の方が気付くこともあるでしょ？」
「……さてな。今まで気付けなかったことを急に気付けるようになるとは思わないが」
「注意してみれば何かしら気付けるわよ……たぶん」
食事を終えた湊は熱いお茶を頼むついでに、二つのテーブルの伝票と財布から取り出した黒いカードを店員に渡しながら皮肉げに言う。
ゆかりも約二年の付き合いがあって知らないことが多いことに気付いたので、確かに改めて注意して見ていても気付けない可能性は分かっている。
だが、今までがそうだったからといって、今後も同じかどうかは分からない。故に、多少自信なさげな返しになったが大丈夫だと言ってみせた。
彼女のそんな根拠のない台詞を聞いて青年がどこか楽しげに口元を歪めていれば、カードとレシートと共に店員が本人確認の署名を求めてきたので、受け取ったボールペンでサインを済ませて返してもらったカードを財布にしまう。
すると、今までの一連の流れを見ていた西園寺が、突然瞳を輝かせながら湊に身体を寄せて話しかけてきた。
「ミッチー、ミッチー。今のシックでエレガントな色のカードってなぁに？　まさか、一部のリッチマンしか持てない最上級ステータスだったりしないよね？」

「……それを訊いてどうするんだ？」
「まどか、ミッチーが浮気してもちゃんと謝れば許してあげるよ？　毎日愛してるって伝えるし。経験はまだないけど夜だってミッチーが求めるなら毎日頑張る。だから、ね？　岳羽さんじゃなくてまどかと一緒になろ？」
「……欲望に忠実過ぎだろ」
人畜無害そうなのび太系男子の彼氏のことはいいのか、そう言いたくなるも湊は言葉を呑み込んで席を立つ。
他の者も苦笑いと呆れ顔で反応は分かれているが、続いて席を立つと湊が代金はいらないと答えたので「御馳走さま」と礼を言って店を出て、残りの時間は再び国際通りの方で観光がてら土産を色々と買って過ごした。
そして、時間になり他の者もバスに戻れば、一同を乗せたバスは那覇空港へとそのまま向かい。長かったようで短かった南の島での滞在を終え、元の日常に戻るべく月光館学園一行は飛行機で沖縄を後にしたのだった。
夜――東京国際空港
夕方に那覇空港を出発した飛行機は無事に東京へと到着し。ベルトコンベアで流れてくる荷物を受け取った生徒たちは、ロビーを出て少し行った場所にある、既に業務時間を終えた受付カウンターに近い場所へと移動していた。
ここでは点呼を取って全員いることを確認すれば、そのままバスに乗り込んで月光館学園に帰るだけなのだが、湊たちが部活メンバーでだいたい固まって集合場所へ移動していると、そこには何故だか真田が荒垣と美鶴を伴って待っていた。
待っている時間暇だったのか、真田は制服姿で赤いグローブを装備してシャドウボクシングをしていたが、美紀たちがやってくることに気付くと笑顔で手をあげて挨拶してくる。
「よう、お帰り。沖縄は楽しかったか？」
「え、ええ。でも、どうして兄さんたちが空港にいるんですか？　迎えは空港ではなく学校でするように保護者向けのプリントにも書いて

いたはずですけど」
空港まで保護者が迎えに来てしまえば、ただでさえ人数が多くて団体での行動が大変だというのに余計に混雑して空港にも迷惑がかかってしまう。さらに、締めの解散式などをせずに生徒に帰られてしまうので、迎えに来てもバスに乗せて学校まで連れて帰りますとお知らせのプリントに書かれていた。
見たところ真田たちは三人で来ているようなので、車で送るために迎えに来たという訳ではないようだが、高等部の生徒三人がわざわざ出迎えに空港に現れるとも思えないので、美紀は兄が空港まで迎えに来ていると他の生徒にも気付かれ恥ずかしそうにしつつも問いかける。
すると、彼女の質問には兄ではなくその後ろで呆れ気味に立っていた美鶴が答えてくれた。
「無事に帰ってきた後輩たちを出迎えに来たという理由もなくはないが、私と荒垣は真田が暴走しないように止めるために同行したんだ。なんでも、殺さなければならない男がいるらしくてな」
「昨日の夜にな。吉野や岳羽からアキの携帯に有里が美紀の胸を触ったってメールが来て、それを見た馬鹿は真実を確かめに行くっつって学校が終わってから空港まで来たんだ。流石に暴走した馬鹿を一人にすんのはやばいが、桐条だけで止められるとも思えねえ。つーわけで、俺まで揃って来たって訳だ」
彼らがわざわざ空港まで来ていたのは、赤裸々トークサイコロの後に行った王様ゲームで、湊が美紀の胸を触ったとチドリたちがリークしていたことが原因だった。
いくら王様の命令は絶対だと言っても、家族や彼女の前でその友人の胸に触れるのはアウトである。よって、その場でセクハラ野郎となじるだけでなく、姫を守っている皇帝にもしっかり連絡しておいたのだ。
美鶴と荒垣が美紀たちにここへ来た理由を話し終えると、真田はグローブをつけたまま湊の前まで歩み寄る。
他の者は大きな荷物を持っているというのに、湊は飛行機から降り

てから買った胡椒博士のペットボトルを持っているだけのほぼ手ぶら状態で、普段通りのやる気の感じられない表情を浮かべている。
身長差でやや見上げる形になりながらも、しっかりと正面から視線を合わせた真田は静かだがどこか威圧感を放って湊に話しかけた。
「有里、嘘もいい訳もいらん。真実のみを話せ。貴様、美紀を傷モノにしたのか？」
「……その言い方には語弊があるが、夜に行ったレクリエーションの中で服の上から胸部に触れたのは事実ですよ」
「そうか。最期の思い出作りは楽しかったか？　その思い出を冥土の土産にここで果てるがいいっ」
言い終えるかどうかのタイミングで構えた真田は、そのままさらに距離を詰めて左手で高速のフックを放つ。
一度負けている男が相手だ。それも余裕を残した状態で実力の底すら見せて貰えていない。ならばと真田は不意討ちであっても一撃で決めにはいかず、相手が防御や回避で動きを止める瞬間に本命の拳を全力で叩きこもうと考えていた。
ヒュッ、と空気を切り裂く音が聞こえ、拳が湊の頬へと迫る。まわりの者たちが驚きながら制止しようと駆け寄ってくるが、それよりも真田の拳が届く方が確実に早い。
拳が迫ってきた事で湊も右肩を後ろに引きながら身体を捻って回避に移り始めたが、それを見た真田は狙い通りだと反対の拳を握りしめていつでも打ち込めるように準備する。
相手が左拳を警戒して右肩を引けば、隙が出来た左の脇腹を右拳で捉えるだけのこと。さぁ、右肩を引いたまま一歩後ろに足をついてみろ、と思った瞬間、回避行動を取っていると思っていた湊が迫る左拳を受け流す様に身体を回転させ左手を添えていることに真田は気付く。
通常、敵が左手で殴りかかってくれば、相手は右肩を引く動作と連動して右手で攻撃を受け流し背中を向けるので、そのときを狙い渾身の右拳を背中に叩き込むことが出来る。
しかし、湊は後から動き出しておきながら、真田の攻撃に追い付い

て左手で受け流していた。狙うべき背中は真田自身の左腕の方を向いており、この状態では中途半端な体勢で一周回ってみせた相手の右脇腹を殴ることしかできない。
それだけでなく、湊は左足を軸に駒のように回転しながら真田の攻撃を受け流しきると同時に、真田が攻撃を受け流されると認識してからコンマ以下の反応で、そのまま引いた勢いを乗せた右腕の肘を真田の顎にぶち当てていた。
不意討ちの高速フックにカウンターを合わせられると思っていなかった真田は、攻撃を受け流され身体が泳いでいた状態でクリーンヒットを喰らったことにより、脳を揺らされそのまま斜め方向に倒れてゆく。
勢いのついた肘を顎に受けたことで、倒れる側にも勢いがついていて危険だと思われたが、床にぶつかる前に駆け寄ってきていた荒垣が受け止めたことでどうにか無事に済んだ。
足に力が入らず立てないことで真田はそのまま床に寝かされ、それでもなお焦点の合わぬ瞳で見上げているのを見た青年は、いつもと同じ感情の読み取れない冷たい表情で淡々と言葉だけで気持ちの籠っていない謝罪を述べてくる。
「すみません。丁度いい位置に顎があったのでつい」
台所で美味しそうな料理をみつけて少しつまみ食いするような、かなり軽いノリで青年は話すが先ほどの一瞬の攻防はそんな生易しいものではなかった。プロでも褒めるほど非常にハイレベルなやり取りだったが、一歩間違えれば首が飛ぶような環境で生きてきた青年にすれば、試合用グローブを付けた高校一年生の拳など数発受けても問題ないのだ。
それゆえの軽さだったが、シャドウとの戦闘を経て実力を上げ続けている幼馴染の強さを知っていた荒垣は、実戦を積んでいる自分たちに背中すら見せない青年の実力に軽く脅威を感じて、驚嘆と共に素直な感想を口にする。
「カウンター一撃って、えげつねぇな、おい」
牽制で放った攻撃にカウンターを完全に合わせられては回避も防

御もしようがない。青年はさらっとやってのけたが、見た目以上に高度な技術を必要とする恐ろしい技なのは間違いない。
荒垣がそうやって感想を述べれば、同じように傍で一連の流れを見ていた美鶴も、実戦に加えて部活でフェンシングを嗜んでいる身として、抱いた疑問を率直に尋ねていた。
「そもそも、あの速度を相手に咄嗟でカウンターを合わせられるものなのか？」
「普段から練習に付き合ってるだとかで、アキの攻撃テンポに慣れてりゃ出来るだろうが、不意討ち気味な攻撃となるとガードを合わせるのがやっとだろ」
「なるほど、偶然ではなく狙って出したのなら相当な実力差が存在する訳か。まぁ、それほど騒ぎにならずに済んだのは良かった。悪いが荒垣は真田を背負って運んでやってくれるか？　私は先生方にバスの空席を聞いて月光館学園まで乗せて貰えないか話してくる」
真田は最初から美紀を学校で出迎えるつもりだったと聞いている。ならば、少しすれば回復するはずなので、行き先が一緒ならば補助席でもいいので同乗させて貰おうと美鶴は考えた。
ただし、席が空いてなければろくに歩けもしない人間を連れて移動するのは面倒なので、このままタクシーで寮に帰ってしまおうとも考えている。
心配していた真田と湊の衝突はまさかの初撃決着で収束したため、美鶴は迷惑をかけた人間の連れとして、教師の元へ向かう前に湊に一声かけてゆく。
「有里、連れが突然襲いかかって悪かったな。後はバスで帰るだけだが生徒会長として最後まで他の者に目を配ってあげてくれ。ああ、それと今さらだがおかえり。無事に帰って来てくれてよかった」
いくら日本の航空会社のパイロットは優秀だと言っても、ちゃんと帰って来たのを確認しないと少しは心配してしまうものだ。美鶴は相手が自分の方を見てもくれないと分かっていながら、それでも無事に帰って来てくれて嬉しいと優しい笑みを浮かべた。
彼女と湊のやり取りを見ていた他の者は、チドリを除き、彼がどう

して美鶴を無視しているのか知らないので、心配してくれていた相手も無視してしまうのかと不安げな表情をしている。
話しかけられても湊は美鶴を視界にもいれないで寝かされている真田の方を見続けているが、理由を知らないため返事くらいしてあげてもと軽い気持ちで言うことは出来なくとも、やはり無事を喜んでくれている相手に何の反応も返さないのは可哀想に思う。
そして、美鶴が少し悲しげに笑って教師の元へ向かおうとするので、風花や美紀が我慢できずに湊に声をかけようとしたとき、今まで黙っていた湊が口を開いた。
「……荒垣先輩。先輩たちにも一応お土産を買って来たんで、また寮に帰ってからでも食べてください。選ぶのは真田にも手伝ってもらったので、真田先輩も安心していいですよ」
そう言い終わるなり湊はマフラーをごそごそと漁って、白いレジ袋に入った箱のお菓子を取り出した。
美鶴に話しかけられたのに、それには何も返さず真田の介抱をしている荒垣に話しかけるとは露骨に無視しているようで、他の者から見ればただのいじめのようにしか映らない。
いくら理由があろうと、いじめ撲滅キャンペーンをしていた人間がこんな事をするのはおかしい。あまりにも子ども染みた嫌がらせだと、先ほど話しかけるタイミングを外された二人が改めて口を開こうとすれば、湊は教師らの待つ集合場所に向かってそのまま歩きだした。
そして、その途中にいた美鶴に袋を渡すと、ついでに中に赤いハイビスカスの模様が入った雫型の琉球硝子のストラップを一つ載せて、視線も合わさぬまま去ってゆく。
確かに荒垣は真田の介抱で手が塞がっているので、荒垣たちへのお土産だとすれば何も持っていない美鶴に渡すのが正解だが、子どもが親の持つ買い物カゴにお菓子を入れるくらいの気軽さで、あまりにも普通に渡していったのでチドリや美鶴も含めた全員が目を丸くしてしばらく動けなかった。
けれど、再起動を果たすと美鶴は両手で受け取った袋の上に置かれ

たストラップについて考える。袋にはお菓子の箱が一つ入っているのみで他には何もない。ストラップは赤いハイビスカスというデザインからどうみても女性向けだ。荒垣の生活している寮には美鶴しか女性はいない。以上から察するにお菓子は寮生に対してで、ストラップは美鶴個人に贈ったと判断して良いだろう。

「あ、有里！」

考察を終了した美鶴は、初めて湊に認識して貰えたことが嬉しくて、貰ったストラップを大切そうに握って去っていく湊に呼びかけた。振り返ることはなく、返事をして貰えないことも分かっているが、それでも美鶴は礼を言いたかった。

「君に貰えたことが何よりも嬉しい。どうもありがとう、大切にする。またお返しをするので、吉野経由でもいいから受け取って欲しい。本当にありがとう」

反応はないが声は届いたはず。喜びからか瞳を僅かに潤ませて湊の背中をジッと見つめていた美鶴は、受け取ったストラップをハンカチで丁寧に包んでからポケットに入れると、そのまま歩きだして教師らにバスへの同乗について尋ねに向かった。

去っていく二人をそれぞれ見ていた女子たちは、やはり湊が美鶴を無視するのには理由があるが、それは悪意を持って彼女を傷付けようと思ってしている訳ではないのだと理解し。美鶴自身もお土産を喜んでいたので、二人のことについては口出しせずにいることにした。

そうして、チドリたちも集合場所へと向かうと、点呼を終えた一同はバスに乗り込み。美鶴たちも空いていた席に同乗させて貰って月光館学園に到着すれば、そこで解団式を行い。それぞれの暮らす場所に帰って、ようやく修学旅行を無事に終えることが出来たのだった。

第百四十話　最も死から遠い存在

――???

物が燃える臭いと埃っぽい淀んだ空気の流れる荒廃した街の中を、黒いマフラーをはためかせながら青年は走っていた。

ひび割れたアスファルトの路面、周囲にはひしゃげて倒れた鉄塔や瓦礫と化したビルが横たわっている。まるで人の気配のしないこの場所も、かつては大都会として栄えていたに違いない。

もっとも、走っている青年にそんな事を考えている余裕などなく、上空から彼を中心とした広範囲に雷が降り注いでくる。

グレーの地面を黒く焦げ付かせ、倒れながらも形を保っていたビルを完全に瓦礫へと変貌させながら、雷は目を焼くような眩い閃光となって青年を襲う。

だが、青年は己に直撃する雷を蒼い瞳で睨むと、両手にナイフを持って切りつけてゆく。ナイフで切りつける度に雷はまるで弾けるように消え、一条、二条と消していき、果ては両手足の指を使っても数えきれないほどを切りつければ、辺りには濛々と砂埃が舞い上がりながらも静寂が戻っていた。

今まで雷を迎撃していた青年は、この攻撃が止んだ隙を逃すまいとナイフを仕舞って、〝戦車〟のカードを握り砕く。

「アタランテ、イノセントタック！」

呼び出された深緑の衣に身を包んだ女性は、地面に降り立つなり鋭い視線で黒い弓を引き絞り。上空から青年を狙っていた大天使に向かって、白い光と化した矢を射ち放つ。

舞った砂埃の中を抜け、空気を切り裂きながら速度を上げ続ける矢は、高い場所から偉そうに見下ろしていた大天使の左肩と翼を射抜き。強大な力を持った大天使を人と同じ地へと落として見せた。

けれど、あれはただの使い魔のようなものだ。使役していた本人には多少のフィードバックダメージがあるだけで、行動不能に陥るどころか足を止める程度の効果も期待できない。

青年は呼び出した女性を消すと、マフラーから中華剣を取り出しな

がら、真横から高速で飛来してきた数枚のカードを素早く切り落としてゆく。
「ハァっ!!」
先ほどアタランテが放った矢には劣るが、飛来したカードは砂埃を切り裂いていた。その分、視界が開けてカードを投げてきたベルボーイの姿も六十メートルほど離れた廃ビルの影に確認できたのだが、ここから召喚して攻撃していたのでは間に合わない。
途中から剣を左手に持ち替えて片手でカードを切り伏せてゆくと、青年は義手のセーフティーシャッターを解除し、指先からベルボーイ目がけて銃弾の雨を降らす。
赤い炎の尾を引き放たれた弾丸は、相手の隠れていたビルの壁の表面を削ってゆく。しかし、居場所がばれた以上は移動するはずなので、敵の攻撃が止むなり青年もセーフティーシャッターを戻し、剣をマフラーに仕舞うと敵に狙われぬよう移動を再開した。
先ほどのエリアは崩れた建物や瓦礫が多かったが、五分も移動すればいくらか形の残った廃墟が並ぶ場所に辿り着く。
道路を馬鹿正直に走っていれば、高台にいる敵からはすぐ見つかってしまうため、青年は一つの廃墟に入るとそのまま屋上を目指して駆けあがった。
(……テオドアは逆方向に行ったか)
入り口には『世――ラジ――――葉原』と所々文字が欠けた看板のようなものがあったが、昔は商業ビルだったらしい建物の屋上にやってくると、青年はペルソナの索敵によって敵の位置を把握する。
廃ビルエリアとでも呼べばいいのか、まだ数多くの建物が建物としての形を保っているエリアへと青年はやってきた。先ほど攻撃をしかけてきた相手は逆方向へ移動したようで、当面の警戒は必要なくなったと呼吸を整えながら他の敵の位置を探ろうとする。
敵の数は全部で三人。まだ誰一人として全力を見せていないが、ただの一撃で街の一部を灼く攻撃を放つ末弟が一番弱いというのだから嫌になる。
彼は姉たちの様子を見てタイミングが被りそうなら攻撃を控えた

りもするため、オーバーキルになる攻撃をしかけてこない分だけマシだが、他の二人は片方が攻めていればついでに自分もとメギドラオンをブチ込んでくるから質が悪い。
相手の居場所を探りながら青年がそんな事を考えていると、遠くに見える赤い電波塔の頂きが眩く輝き、間に高層ビルが建っていようと無視して途轍もなく太い極光が全て融解させながら真っ直ぐ青年の元へと迫ってきた。
直径にすれば二十メートルは優にあるのではないかと思われる万能属性の光など、スキルで防ぐことも避けることも出来ない。
よって、青年は信じられるのは自分の力のみだと、マフラーから刀身に光の紋様が浮かび上がった長大な西洋剣を取り出し、迫りくる極光に向けてそれを構えた。
「ぐっ――オオオオオオオオオオオオッ!!」
正面に構えた金属の塊たる名切りの剣が、到達した極光とついに衝突する。
先ほどテオドアがミカエルに放たせた雷のような攻撃ならば、弱所を切りつければそれぞれを殺して消し去れる。
しかし、電波塔の天辺から笑顔で攻撃を放ってきているエレベーターガールは、何本もの光が束ねられて一条に見える攻撃を撃って来ているため、束ねている部位を殺して自身に迫るもののみを力技で防ぎながら残りを全て受け流すことしか出来ないのだ。
魔眼によって視えた赤白い傷のような線に刃をぶつけ、剣とぶつかり線を切られた部分から消滅しても、如何せん相手の放った攻撃のエネルギーが膨大過ぎたため一撃全てを消し去ることが出来ず。剣を中心に真っ二つに分かれた光が青年の後に広がる景色を更地へと変えていった。
防いでいる青年からすれば永遠に続くのではないかと思われた攻撃も、実際の時間にして十数秒経ってようやく治まりを見せ始める。
建物は既に青年の足元と背後に僅かな幅のみしか残っていなかったが、それでもあの力の奔流を正面から防ぎ切ったのだから称賛に値する。

だが、攻撃が完全に止んで青年が剣を下ろしたそのとき、
「――――がはっ」
青年は背後から貫かれ、血を吐きながら自分の腹部から突き出た槍の持ち主を見やった。
そこにいたのは銀槍を手に持ち、白い鎧を身に纏った長髪の美男子。ケルト神話の英雄、クー・フーリンだった。
青年が先ほどの攻撃を防いだことで残った床を足場に、わざわざ剣を下げるタイミングを狙って上って来たらしい。
随分と厭らしい手だが命の奪い合いに卑怯も何もない。敵が三人いると言うのに、正面からの攻撃に手一杯で他の者のことを頭から消していた青年が悪いのだ。
本人もそのことは当然分かっている。心の中で悪態を吐こうと負けたときの言い訳にしようとは思っていない。
けれど、貫かれた事への怒りは無論あった。腹から血が流れ出ているというのに、沸騰したように熱を持った血が頭まで上って一時的に痛みを忘れさせた。
青年は即座に剣を右手に持ち替え、腹から生えた槍を生身である左腕で掴んで抜けないようにする。相手も人間を遥かに越えた力を持ったペルソナだが、足場のほとんどない場所では無茶な動きも出来まい。
「グッ――――オオオオオオッ!!」
敵を逃さぬよう左手で槍を掴んだまま剣をマフラーに仕舞い、代わりに青い縁取りのされた白銀の銃（ファルファッラ）を引き抜き、そのまま腕だけを後ろに向けて相手の顔前で引き金を引いた。
文字通り銃口から火を噴き放たれた弾丸は、美男子の鼻っ柱にぶち当たり、頭部をまるごと吹き飛ばす。首から上がなくなってしまえば流石に立っていられず、槍から手を離して倒れると相手は徐々に透明になって最後には消えていった。
「ぐっ……はぁ、はぁ……」
ペルソナが消えれば相手の持っていた武器も同じように消えてしまうため、今まで血が流れるのを防いでくれていた槍が消え、青年の

腹部から大量の血が流れ出る。
一般人ならば致死量の失血でも彼は死なないが、流石に血を失い過ぎれば激しい戦闘は続けられない。
額に脂汗を滲ませながら傷口を押さえ、具現化したカードを握り砕くと青年は月〝赫夜比売〟を呼び出した。
「カグヤ、治療を頼む。傷を塞ぐだけでいい」
《分かりました。ですが八雲、敵が迫っています。早々にこの場から離脱を》
回復魔法で傷を塞ぎながら、赫夜比売は索敵も同時に行って敵の接近に気付く。先ほどのクー・フーリンはマーガレットのペルソナなので、三人がそれぞれ直前にいた場所を考えれば、迫っているのは最も近くにいたマーガレットだと思われる。
しかし、彼女は直接格闘戦を挑む様なタイプではないため、仮にマーガレットが迫っているにしても戦闘自体はペルソナで来るはずだった。
《八雲、来ますっ!!》
青年が敵の出方を予想していれば、赫夜比売が居場所を感知して報せてくる。
そちらに視線を向ければ、四百メートルほど離れた場所の上空にインド神話の両性の神、審判〝アルダー〟がその手に極光を収束させ、いつでも放てるぞとばかりに不敵な笑みを浮かべて狙ってきていた。
先ほど遥か遠方から放たれた同じ攻撃を防いだばかりだというのに、たった四百メートルしか離れていない位置から攻撃されれば足場も崩壊し防ぎきる事は敵わないだろう。
事前に話し合ってこの展開に持っていったのなら、姉妹揃ってなんと性格の悪いことだと青年は愚痴を吐きたい気持ちに駆られる。
とはいえ、今にも攻撃が放たれようとしている状況でそんな事は言っていられない。青年は〝死神（若藻）〟と〝運命（鈴鹿御前）〟のカードを呼び出し同時に握り砕いた。
「ミックスレイド〝幽玄回廊〟」
青年が呟くと同時、彼を中心に謎の力が広がってその場に奈落の塔

〝タルタロス〟が現れる。アルダーの放った攻撃は出現したタルタロスの外壁に衝突し、一部を破壊するのみに終わる。
相手を逃してしまった両性の神はどこか不満げにしているが、現れたのが本物のタルタロスならば相手がどのエリアにいるのかも分からないため、攻撃しようと一部しか破壊出来ないのであれば無駄撃ちは出来ないと諦めるしかなかった。
＊＊＊
赤い電波塔の頂からタルタロスの出現を見ていたエリザベスは、自分の立つ場所よりも高い塔が現れたことで僅かにムッとした顔をする。
直後にその塔へ向けてマーガレットのアルダーがメギドラオンを放っているが、一部しか破壊できていないため、あれは現実に存在するものであると同時に強度も本物に近いのだと察する。
(先日手に入れたばかりの妖孤の力を使った幻術だとばかり思っていましたが、物理的防御力を有した実体を持ったものでしたか。となると、あれはミックスレイドを用いて創り出したか呼び出したと思っていいようですね)
力が衰えていると言っても、大妖の九尾である若藻の幻術は力の管理者すら欺く一種の魔法である。自我持ちは詳細な能力がペルソナ全書に記載されないので、そのことも手伝って留学で強くなって帰って来た湊の鍛錬の相手がより一層大変になっていた。
(詳細をつきとめるため少し近付く必要がありますね)
心の中でそう思いながらエリザベスは塔から飛び降りつつ、ペルソナ〝ピクシー〟を呼び出してタルタロス目がけてメギドラオンを撃たせる。
近距離で放ったアルダーでも破壊出来なかったのだから、離れた位置から撃ったところで効果が薄いのは分かっている。
しかし、もしかすると片面のみ実体で反対側は幻術で作ったハリボテかもしれないため、それを確かめるためにエリザベスは攻撃を試みたのであった。
ただし、結果は先ほどのアルダーと大して変わらず。むしろ距離が

遠い分だけ破壊規模は小さい。
(両側から攻撃を加えても結果はほぼ同じ。ということは、高い確率で実体を持ったものという訳ですね)
地上三百メートルを超える高さから飛び降りてもすんなりと近くのビルの屋上に着地してみせ、分厚い本を小脇に抱えながらエリザベスはビルの屋上や信号機に飛び移りながらタルタロスを目指す。
近付けば近付くほど本物そっくりだが、不思議なことにそのタルタロスからはベルベットルームの扉の気配を感じなかった。
出入り口の場所はどこであろうと分かるはずなので、それがないということは本物を呼び出したのではなく、よく似た偽物を創り出した可能性が高いと思われる。
「姉上!」
タルタロスまで残り二キロほどのところまでくると、弟のテオドアが別の方向からやってきて声をかけてきた。
相手もエリザベスと同じように偽タルタロスの調査に来たのだろうが、ここで二人揃ったなら一つ試したい事があると、彼女は弟を少し高めのビルの屋上へ誘った。
「テオ、あのタルタロスに同時に攻撃をしかけてみましょう。せっかくの鍛錬だというのに引き籠もられても困りますから」
「それは構いませんが、たまには三人一度に相手をしてみましょう、と姉上たちが無茶を仰ったのが守りに入られた原因ではないでしょうか?」
留学から帰って来てから湊は再びベルベットルームの住人と戦闘訓練を行っていたが、それは基本的に一対一で行われ、極稀に二対一でスパルタ訓練をするのが通常のパターンだった。
けれど、二人の女性は思い付きで無茶な条件での鍛錬を発案し、実際にそれをさせるのだから青年には同情を禁じ得ない。
今日も本来ならば荒野のような何もないフィールドでテオドアとの実戦訓練だったところを、突然、別世界の〝トーキョー〟と呼ばれる場所のコピーフィールドで三対一でやってみようと言ってきたのだ。

いくら湊が通常のペルソナ使いを遥かに超えた力を有していると言っても、鍛錬中は時流操作を禁じられていることもあって、インファイトでの速度や攻撃手段の多さを除けば、攻撃の威力や火力では力の管理者にはまだまだ及ばない。

だというのに、自身よりも圧倒的に強い者らをまとめて相手にしろと言われれば、誰だって守りに徹して隙あらば攻める戦法を取りたくなる。

テオドアですら姉二人を同時に相手するのは嫌なのだ。一対一ならばもしかすればラッキーで勝ちを拾えることもあるが、二人まとめてならば絶対に勝てないと断言できる。

同じ力の管理者でこうなのだから、テオドアは相手が引き籠もろうが誰も責められないと返して、ペルソナ全書からベルゼブブを呼び出す。

「来なさい、ベルゼブブ！」

「マサカド、メギドラオン」

呼び出された二体のペルソナが同時にメギドラオンを放つ。遠くに聳え立つ塔へと目がけ、二体の攻撃が融合した光が大気を灼きながら迫った。

しかし、後少しで到達とすると思ったとき、突如タルタロスは姿を消してしまう。

『……あ』

気付いたとしても既に放ってしまった攻撃は止められない。タルタロスがあった場所を通過した極光は、そのまま更に向こう側に広がる街を焼き尽くして瓦礫も残らぬ更地へ変えてゆく。

記憶が正しければあちら側にはマーガレットがいたはずだが、もしもこれを狙ってタルタロスを呼び出してタイミングよく消したのなら中々の策士だ。

自分では火力が不足していても、同じ力の管理者の攻撃ならば十分に通る。それが二人分となることまでは予想していなかっただろうが、一人は確実に接近してから再び攻撃をすると睨んで可能性に賭けてきたに違いない。

姉には悪いが今回は湊の方が一枚上手だった、とペルソナを消した二人は自分たちが鍛えている客人の策を心の中で素直に褒めた。
とはいえ、現実問題として姉を攻撃してしまったという事実は消えない。戦闘訓練のノリであれば互いに攻撃しようと問題ないが、今回は不意討ち気味に二人の合体攻撃を喰らわせてしまったことになる。
いくら湊の策が素晴らしかったと説明しても、実際に攻撃を喰らったマーガレットには理由など関係なく、単純に自分を思いっきり攻撃してきた者が敵だという判断になるはず。
それなら先に責任の所在を決めておくべきだと、エリザベスは本を持っていない空いていた手を頬に当て、どこか芝居がかった口調で言葉を発した。
「テオ、貴方は姉上に対してなんということを」
「え、ええっ!? 攻撃を放とうと仰ったのは姉上の方ではないですかっ」
「私はタルタロスに攻撃をしかけてみましょうと言ったのです。姉上に攻撃をしなさいとは一言も言った覚えがありません」
言っていることは確かにそうだ。しかし、言われてタルタロスを狙った結果、それがマーガレットを巻き込むことになったのなら、エリザベスにもいくらかの責任はあるだろう。というより、エリザベスも攻撃しているのだから最初から同罪のはずだ。
しかし、二人はどちらかが責任を取るという考えしか頭にないようで、お互いに罪を擦り付け合うという見苦しい行いを続けていた。
「揃っていつまで言い合いを続けているの」
すると、突然頭上から声が聞こえてくる。その声は攻撃に呑まれて街と共に消えたはずの姉のものだったので、二人は少々驚いた様子で見上げる。
そこにはタナトスで飛んでいる湊に抱きあげられた無傷のマーガレットが共にいた。
降下してきてエリザベスたちのいたビルの屋上に着地すれば、湊はマーガレットを下ろして立たせている。
湊の隣に立った彼女はペルソナ全書もしっかりと持っていて、街の

中を駆けていたことによる服の汚れはあるが、それ以外には傷らしい傷もなく健康そのものだ。
一緒にやってきたということは、湊が彼女を救出したのだろうが、詳しいことを知らないエリザベスは姉の無事を喜びつつ何があったのかを尋ねた。
「姉上、御無事で何よりです。先ほどのテオの攻撃は当たらなかったのですか？」
「射線上にいたから〝貴女たちが〟放った攻撃は本来直撃だったわ。まぁ、その前に時流操作で駆けつけたこの子に助けて貰ったから無事というわけ」
同士討ちを狙った湊もまさか二人一緒に攻撃するとは思わず、マーガレットの命に関わると思って禁じ手の時流操作を使用して救出に向かった。
その点について湊が謝罪すると、攻撃や回避に使用した訳ではないので、助けてもらったこともあり罰則を課すつもりはないと彼女は答えた。
ただし、責任を押し付け合っていた妹弟については少しばかり説教する必要がある。今日の鍛錬はここまでなので、湊はその説教に付き合わなくともよいが、別れる前に先ほど見せたタルタロスについて訊いておかねばならないので、他の者が揃っているうちにマーガレットは湊に質問をぶつけた。
「それで、先ほどのタルタロスはどういった物なのかしら？　てっきり目眩ましの立体映像のようなものだとばかり思っていたのだけど、私たちのペルソナの攻撃を防いでいたわよね？」
「幽玄回廊は若藻と鈴鹿御前で発動するミックスレイドだ。鈴鹿御前に関しては同名の別人だが、伝承では二人とも幻術や変化の法が使えたらしい。だから、二人のミックスレイドは虚実入り乱れた状態で風景を描き出すことが出来る」
説明を聞いた力の管理者たちは素直に驚嘆する。虚実入り乱れたという部分の程度は分からないが、言ってしまえば実体を持った幻を創り出してしまえるという事なのだろう。

マーガレットたちはベルベットルームの入り口の気配の有無で偽物と気付けたが、それがなければ攻撃を受けた部分が崩れていたこともあって、本物だと信じて簡単に消す事の出来る幻だとは欠片も思わなかったに違いない。

もっとも、彼女たちは本気で攻撃していたが、全力で撃った訳ではないので、あれが破壊可能だと分かれば全力攻撃によって物理的に突破し、今後は篭城すらさせるつもりはなかった。

「ワイルドの奥義であるミックスレイドだけあって面白い能力だけど、タネが分かれば攻略のしようがあるわ。次回はまた一対一に戻るけれど能力を過信しない方がいいわよ」

「……流石にあんな不意討ちが何度も通じるとは思ってない。今日は同士討ち狙いが上手く嵌まっただけだ」

「それならいいけど。まだ全力は見せていないようだし、そろそろお互いに全力でやってみるのもありかもしれないわね」

万能を求めた人類の一つの答えである青年は、持てる力を駆使して力の管理者らにその刃を届かせようとしていた。

彼女らよりも強い存在はいるけれど、下から這い上がってきた者がようやく追い付いて、全力を出して戦えるときが迫っているとなれば感慨深いものがある。

全力を出すにはまだ足りないが、欠片も勝負になっていなかった最初よりはずっといい。次はどんな策を見せてくるのだろうと心躍らせてくれる青年の成長を、力の管理者たちは戦いを通じて実感しながら来たるべき日に想いを馳せた。

7月26日（木）

午後――ＥＰ社工場・研究室

七月の下旬、学校は既に夏休みに入り。たまに部活や生徒会の仕事で学校に行かねばならないときはあるが、基本的には休みなので湊もＥＰ社の仕事に少し集中する事が出来ていた。

午前中は病院の方で事務処理を済まし、午後はシャロンからちょっとばかし来て欲しいと言われていたので水智恵を連れて工場の地下

にある研究室へとやってきた。
本来は病院勤務である恵を連れてきた理由は、彼女が純粋な病院の職員ではないからである。
影時間関係の研究は内容が極秘だけあって担当する一部の職員にしか教えていない。研究は忙しいというのに人員は限られているとなれば、当然、最初から影時間に関わっていた恵も手伝いとして働いて貰う必要があった。
彼女にそのことを話すと、研究成果の一部は一般人が使える義肢などの開発に活かされるのだから、湊に治療して貰った人間として病気や怪我で苦しむ者たちのために是非手伝いたいと言ってくれた。
その一般人向けの義肢は見た目も性能もまだまだ生身には程遠いレベルだが、医療と軍事で世界シェアトップの企業だけあり、製品の性能は現時点でも桐条グループすら抑えて数世代先をいっている。
アイギスらを開発した桐条の技術が世界一だと思っていた恵は純粋に驚いていたが、開発者のシャロンによれば義肢には桐条の技術を一部流用しており、あとは向こうが専門に作っていないから勝っているだけらしい。
とはいえ、若くして義肢製作に置いて世界一と呼ばれるシャロンがＥＰ社側にいるので、桐条グループが全社をあげて取り組んでも今から追い付くのは中々に難しいとも彼女は言っていたため、両社の純粋な技術力を詳しく知らない恵にすれば、どちらもとんでもない科学力を持っていることしか理解できなかった。
「こんにちはー」
「いらっしゃーい。待ってたわよぉ」
そんな極めて一般人に近い恵と共に研究室を訪れれば、ソフィアと話していたシャロンが笑顔で二人を迎えてくれた。
普段は海外の本社で仕事をしているソフィアがいるのは意外だったが、ＥＰ社の持つ工場で最も技術の進んでいる工場や研究室の視察も業務に含まれるため、彼女がここへ来ていても不思議ではない。
「……ソフィアも来ていたのか」
「はい。好条件の立地などの影響もありますが、こちらでの業績が恐

ろしく素晴らしいので、今後の新地開拓の際のモデルケースの一つとしてデータ収集に来たのです。まぁ、整地込みで半年ほどしか経っていませんから、ほとんどはそのデータを流用できるのですが」
「ここは前幹部の私財を使って馬鹿みたいな好待遇を職員に用意出来ているし。条件としては非常に特殊だろ」
いくら優良企業と言えど最初から採算度外視な条件で施設を作ったりはしない。それが出来たのはソフィアに殺させた前幹部たちの私財で建設費から何からを賄ったからだ。
元手に必要な額がゼロならいくら無茶な条件だろうと資金回収しなくて済むので、余程の失態を犯して社会的信用を失わない限りは黒字経営のままでいける。
こんな事は普通ではあり得ないだろうと湊が苦笑すれば、ソフィアは涼しい表情で笑いながら首を横に振った。
「そうでもありません。確かに施設の充実という点では突出していますが、一種のアミューズメントパークのような複合商業施設として固めて作った際の有用なデータを取れましたから、もっと土地を用意することが出来て、客が車での移動をメインにしている海外の方が条件的に向いていると社の分析チームも言っていました」
湊が日本に作らせたＥＰ社の施設は、近所に作らせたショッピングモールや遊戯施設なども全てを含めると、東京デスティニーランドとデスティニーシーを足したよりも広くなる。
中には宿泊施設もあるため、テーマパークでないだけでアミューズメントパークと呼べる部分も確かにあった。
休日だけでなく平日だろうと家族連れが大勢利用してくれるのであれば、駐車場や交通整理は大変そうだが、ソフィアのいうように海外の方が向いている造りではあるだろう。企業経営や新店舗拡大などは専門外でまだ詳しくない湊も、素人考えながら必要と思う施設を作らせただけで企業に有益に働いたのならばよかったと安堵する。
「なるほど、そういった知識は不足しているから詳しい事は分からないが、素人の考えた極端なサンプルとしていいデータを提供出来たのならよかった」

「逆に消費者のニーズに最も近いからこそ収益に繋がったのだと思います。企業規模が大きくなり過ぎますと、サービスの安定供給と効率化という点に置いてどうしても最低限の規格の統一が図られますから、湊様の提案はマンネリになりかけていた体制を打破するいい起爆剤となりました」

湊が用意させた施設は、そこに行くだけで基本的に何でも楽しめるといった具合に、本当に何でもありだったことで消費者からは絶大な人気を誇っている。

逆に何でもありすぎてブランド価値を下げるからと一部有名ブランドからは出店を避けられたが、ＥＰ社も色々なジャンルに手を出しているので、出店する店がなければ日本初上陸と銘打って同じ市場を扱っている傘下企業の店を出せばよかった。

今までは他ブランドに出店させ契約料を貰い。自分たちの懐が痛まないローリスク方針を取っていたが、今回のことで傘下企業をメインで回しても十分に旨味が出ると判明した。この結果は新しい物好きの日本人相手だけが理由ではないと専門家も考えているため、今後は、多少のリスクを背負ってもハイリターンが期待できる、〝小狼方式〟の出店方法を先進国向けに優先展開していくのだと、ソフィアは今の多忙さをどこか楽しんでいるように話してきた。

そうして、しばらく企業の経営方針や改善案などについて二人が意見を交えていると、湊たちのコーヒーを武多に用意させたシャロンが話しかけてきた。

「お話中ごめんねぇ。ちょっとボウヤの身体のことで検査結果が出たから話をしておきたくてさ。結構急ぎだから先に話していい？」

「ええ、湊様の健康に関わる事なのでしょう？　構いませんわ」

二人が重要な話をしていることは理解していたが、シャロンもこれは早期に伝えねばならないと思っていたことで、割り込む様ですまないと謝ってから湊らを隣の会議室に移動させる。

他の研究員らは続けて作業をしていたが、エマと武多は検査に関わっていたことで一緒に移動し。その二人が検査結果の書類をファイルから取り出すなり、上座のシャロンの後ろにあるホワイトボード

に貼り付けてゆく。
全て貼り終わったのを確認したシャロンは、並んで座っている湊たちに視線を向け、普段の飄々とした態度を一切なくした医者としての顔で口を開いて来た。
「まず最初に言わせて貰うけど、ボウヤが持ってる治癒っていうか自己蘇生能力と時流操作はもう使わない方がいいよ。アンタ、いつ死んでもおかしくない状態だから」
その言葉を聞いたソフィアと恵が目を見開く。すぐ隣にいて健康そうにしか見えない彼が、いつ死んでもおかしくないとはどういう事なのか。細胞に傷が付いていて短命だとは聞いているが、もしや既に劣化が始まっているのかと不安に思いながら恵は尋ねた。
「いつ死んでもおかしくないって、湊さん、どこか悪いんですか？」
「んー、悪いっていうか全身の細胞が異常起こしちゃってるのよ。単刀直入にいえば採取した細胞全てが不死化してたわ」
湊の健康状態を調べる際、顔や腕に足など全身数十ヶ所から細胞を採取し、最後に血液を提出して調べさせた。
それで調べて〝全身の細胞が〟と言ったからには、採取した細胞全てが同じように異常を起こしていたのだろう。
けれど、病院ではまだ手伝いしかしてないため、〝不死化〟という単語に聞き覚えのなかった恵はそれがどのような物なのか聞き返した。
「不死化？　って、湊さんは死なない身体ってことですか？」
「言葉だけ聞くと勘違いするッスけど、不死と細胞の不死化は完全に別物ッス。細胞ってのはテロメアの長さの分だけって感じに分裂回数が決まってるんですけど、細胞の不死化はその分裂回数の制限が取っ払われた状態のこと言うんス」
今度の質問にはエマが答えたが、彼女はホワイトボードに『テロメア＝残機・リトライ回数』と書いてゲーム的な考え方で説明してきた。
テロメアは細胞分裂するたびに短くなるが、完全に使いきれば細胞分裂を出来なくなってただ朽ちて終わる。
一部の細胞がそうなっても他の細胞があるので突然死んだりはし

ないが、かなり単純に言えば発想は似たようなものだと、シャロンや武多も否定してこない。
　しかし、不死化が不死とは別だということは分かったが、分裂回数の制限がなくなれば長生きできそうなので特に問題はないように思える。
　そう思ったソフィアは素人からは問題なく見えても、専門家から見れば問題があるのかと首を傾げた。
「分裂回数の制限がないのなら良い事ではなくて？　わたくしも遺伝子の異常で短命と言われていますが、細胞が元気に分裂している間は大丈夫でしょう？」
「まぁ長生きするにはいいかもね。ただ、それって癌細胞と酷似した状態なのよ。っていうか、通常の細胞が癌細胞に変異する条件の中に不死化も入ってるっていうか」
「じゃあ、湊さんは全身が癌に蝕まれているってことですか？」
「そうじゃないから困ってるのよねぇ。不死化してるけど癌細胞みたいな異常増殖はしてないのよ。というか、老化すらしてないし」
　シャロンの言葉に、質問した二人の少女はポカンと口を半開きにして目を点にする。
　人に限らず生物は時間経過で老化する。その中には成長も含まれているので、老化が全て悪い事ではないが、人の身で老化しないなどあり得ないと彼女たちはシャロンの言葉を信じられなかった。
　すると、言った本人もそれはそうだと苦笑してから、再び真面目な顔になると検査で判明した湊の身体の異常について語る。
「ボウヤの身体は七歳児くらいの細胞のままどういう訳か現状で固定されているの。これがどれだけ異常か分かる？　ＤＮＡの中には本人の設計図があるんだけど、怪我したりしてもそれを基に細胞が勝手に治してくれる訳なの。けど、それって細胞も歳を取ったからそれを使って歳を取った状態で治してくれるのに、ボウヤは細胞が若いまま歳を取った状態で治されている」
　七歳児というとペルソナに目覚めた歳ということになる。つまり、戦闘を経験し名切りの血が覚醒を始めた頃だ。

湊は恵だけでなくチドリらにも自分がクローンの可能性があることを話していないが、湊は目覚めて割とすぐにタルタロスでの戦闘を経験しているので、戦闘が血に目覚めるきっかけであれば、ムーライトブリッジでのデス戦を経験していないクローンでも、同じ七歳児で固定されていておかしくはない。

別に細胞が若くても別段便利さなど感じない湊にすれば、そういえば母親たちや知り合いの女性陣にやたらと肌が綺麗と褒められていたが実際に若かったのかと思ったくらいだ。

「でね、今の状態で治されているのは良いんだけど、逆を言えば設計図が更新されて姿が現状で固定化されてしまっているとも言えるの。それで細胞が不死化を起こしているとなれば何が起こるか分かる？」

「……今のまま歳を取らないし、細胞分裂に制限もないから寿命じゃ死ねないってことですか？」

「だいせいかーい」

かつて時の支配者たちが夢想し求めてきた不老。誰よりも強靭な肉体に、誰よりも賢しい頭脳を持てるように造られて生まれた青年がそれを手に入れた。

死を理解している青年が、死から最も遠いとは何とも皮肉な話である。

湊が二十歳まで生きられないと聞いていた恵は、彼が細胞の変異によって常に死ぬ可能性を孕みながらも、二十歳を越えて生き続けられる可能性もあると分かって素直に嬉しかった。

しかし、他の者たちが老いて死んでも彼だけは生き残る。大切な少女たちを死なせないと言っても流石に寿命には勝てない。故に、彼がどれだけ頑張ろうと最後には二人の死を見なければならないと考えたとき、世界はどれだけ残酷な仕打ちを彼に与えるのだろうと神を恨みたくなった。

「まぁ、寿命以外なら死ねるからその点は個人的には流せるんだけど、不死化まで起こしてる細胞がいつ癌細胞に変異するか分からない方が問題なのよね。一ヶ所でも変異を起こせば多分全身への転移はすぐよ。頭の天辺から足の先までぜーんぶが癌になったら流石に治療

できる訳ないし。ボウヤは投薬が効かないから切除できない部位に回れば終わりだし」
死ぬ方法は残っている。これは彼にとってはむしろ救いだろう。老いることも死ぬことも出来ないのでは苦し過ぎる。
死が救いなど本来ならばあってはならないことだが、今回ばかりはここにいる全員が認めるしかないと思っていた。ただし、青年を除いての話だが。
「……話は分かった。傷の回復はスキルがあるし、治癒能力と時流操作は控える事にしよう」
「随分とあっさりというか素直ねぇ。っていうか、あんまり驚いてないみたいだし」
「俺は死を理解しているからな。人とは死生観が違うんだ」
生きていながら死を理解するなど本来は不可能だ。現象として発現する死を見ることは出来るが、それは死からどういった現象が起こるのかを理解するだけであって、どういった概念であるかを理解することとは異なる。
前者はナイフで刺したり首を絞めることで結果的に死を起こすが、後者は存在に干渉し死を直接発現させられるのだ。
万物は生まれた瞬間から概念的な死を内包しており、生物でなくとも朽ちるという意味では寿命が存在する。それらを視ることの出来る眼を持っている者にすれば、地面は今にも崩れそうで天井がいつ降ってくるかも分からぬ恐怖と常に付き合っていかねばならない。
そんな者が一般人と同じような死生観を持つ訳もなく、自分が不老と聞かされても湊は気にした様子もなく肩を竦めるだけだった。
本人がこれではまわりが気にしてもしょうがないため、シャロンは改めて湊に治癒能力と時流操作の使用を控えるように念押しすると、その後は現在開発中の義手についての話に移り、他の者たちも自分たちの仕事へと戻っていった。

第百四十一話　前篇　都大会―開始―

７月２９日（日）
朝――電車内
まだまだ厳しい暑さが続くある日、湊は少々混雑した電車に乗って少し離れた場所にある運動公園の体育館を目指していた。
本日はバスケ部の都大会二日目、準決勝が行われた後に三位決定戦と決勝が行われる予定だが、月光館学園の男子バスケ部は見事に準決勝へ駒を進めていたため、今日も朝から試合という訳である。
今日までに他の運動部は既に敗退し、ゆかりも都大会で入賞までではいったらしいが次の大会へは進めないので、弱小部だった男子バスケ部は広告塔の湊がいることもあって現在学校からかなりの期待を寄せられていた。
とはいえ、それはそれ、これはこれということで、湊は少し離れた場所で痴漢されている少女がいることを発見し、通報していたりしたら試合に遅れるなと考えつつも、そこまで移動すると痴漢の腕を掴んで捻り上げた。
「いだだだっ!?　こ、こら、離せ！　急になんだお前は!?」
「……痴漢の現行犯で逮捕する。次の駅で降りろ」
「はぁっ!?　急に何を言って」
「梅田正志、五十七歳、埼玉在住のくせに痴漢のために東京まで出てくるとはご苦労なことだな」
日に焼けた肌をした男が抵抗しようとするので、湊は記憶を読んで相手の個人情報を次々と口にしてゆく。相手は自分の個人情報を何故知っていのかと驚いていたが、電車に乗った時刻まで正確に言われてしまうと諦めたのか肩を落として沈黙した。
今日は休日ということもあって人も多く、次の駅まではもう少しかかるので手を離しても逃げようがない。
そうして、湊は男を入り口の扉の前へ行かせると、先ほどまで痴漢されていた少女に声をかけた。
「助けに入るのが遅れて悪かった。体調は大丈夫か？」

「は、はい。助けてくださってありがとうございました」
腰に届く長い髪を揺らしながら頭を下げてきた相手は、胸に響ヶ峰中学と書いたスポーツ用のジャージを着ていることからほぼ同い年だと判明する。
身長と胸のサイズは羽入かすみとほぼ同等だが、こちらは少し大人びた雰囲気があるため明るい美人系と評す事が出来る。このスタイルの良さならジャージでも痴漢されたのは頷けると、湊は美術工芸部の女子メンバーたちのスタイルを思い出して格差社会だなと一人失礼なことを考えていた。
すると、顔を上げた相手が湊のことを改めて見るなり少し驚いた表情をしている。こんな知り合いなどいない方にとっては、どこかで自分を見たことがあるのかと少し不思議に思い、驚いた理由について尋ねることにした。
「……どこかで会った事あるか？」
「え、あの、月光館学園の有里君ですよね？　私、響ヶ峰中学の男子バスケ部のマネージャーをしてて、決勝で当たる可能性が高いチームの有力選手としてチェックしてたんです」
「俺はお前なんてチェックしてないぞ」
「そ、それは普通だと思います。他校のマネージャーをチェックしてるのは一部の男子だけだと思いますから」
イケメンだからとチェックしている者も中にはいるかもしれないが、マネージャーが他校の選手をチェックしておくのは普通であっても、選手が他校のマネージャーをチェックしていたらただの女好きである。
故に、自分を知らないのは普通だと少女が苦笑を浮かべれば、湊はバスケ部関係でも名前が売れ始めているのは面倒だなと思いつつ、相手が自分を君付けで呼んだことで同い年だと判断し、他の同級生と同じように接しながらこの後の事について説明することにした。
「次の駅で痴漢を駅員室に連れていって警察を呼んで貰うが、お前にも被害者として証言して貰いたいから同行して貰っていいか？」
「はい、電話で先生に事情を話せば遅れても大丈夫だと思います。そ

れより有里君は試合に遅れてしまってもいいんですか？」
「まぁ、助っ人で入っただけでスタメンじゃないしな。そもそも、バスケ歴一ヶ月の人間が一人抜けた程度で負けるならそれまでの実力だったってことだ」
　主力選手であるはずの湊が抜ければ月光館学園はかなりの痛手のはず。女子がそのことで心配そうにすれば、自分がボールを触ってまだ一月も経っていない初心者だと暴露しつつ、痴漢を警察に引き渡すまでは一緒にいることを約束した。
　けれど、少女には主力選手が遅刻を気にしていないことよりも、相手がただの初心者であるという情報の方が驚きだったらしく、信じられないとばかりに目をパチクリとさせている。
「ば、バスケ歴一ヶ月っ!?　えと、それってミニバスとかストリートを含めずにって話ではなくてですか？　ていうか、助っ人ってのもよく分からないんですけど」
「……同い年だろうから別に敬語じゃなくていいぞ。それで、バスケットボールに初めて触ったのが今月の頭で、助っ人というのは本来は美術工芸部で運動部ですらないって話だな」
　確かに運動部ではないが、武道系の部活よりも余程厳しい鍛錬を行いつつ実戦で身体を鍛えてきたので、身体の丈夫さと運動能力に関しては成人男性どころか世界トッププレイヤーとも余裕で渡り合えるレベルである。
　もっとも、湊は『日常・戦闘・小狼・名切り』といった感じに身体能力を段階的に解放するため、日常に設定されているバスケ部の試合では、単に身体能力が高い細かな技術では他の者たちに劣る選手となっていた。
　それでも部活の練習と試合で徐々に成長し、他校のエースと張り合えそうなところまで来ているのだから成長著しいが、彼の普段を知らない者にとってはこんな金の卵が今まで放置されていたのかという驚きの方が強いらしい。
「あれだけのフィジカルで運動部じゃないって、今まで勧誘とかなかったの？」

「身体が弱いことを理由に基本的に体育は見学してるからな。何より入学してすぐに部活を作ったから他所も声をかけるタイミングを失ったみたいだ」
敬語じゃなくていいと言われて早速タメ語になった相手の質問に返しつつ、湊はそろそろ駅に着くなと降りる準備を始める。
痴漢は既に諦めているようで自主的に降りる準備をしているため、女子にもう少しで着くぞと教えれば、相手はエナメルバッグを肩にかけながら降りる用意をした。
「確かに今まで有里君の名前は聞いたことなかったなぁ。一応、都大会までに地区大会の優勝校は調べておいたんだけど、君の情報は地区大会のものしかなかったから、昨日観戦するまでほとんどノーマークだったの。実際に見たら筋肉の質の良さと運動性能の高さに驚いたけどね」
「……筋肉フェチか？　悪いがそういった特殊な性癖には付き合わないことにしてるんだ。夏にはボディビルの大会もあるし、そっちで好みなのを見つけてくれ」
「そ、そういう作った筋肉には興味ないですから！」
雑談をしながら二人は到着した駅で降りると、捕まえていた痴漢を駅員室まで連行し、駅員に警察への通報と監視を頼んでそれぞれの顧問への連絡を済ませた。
女子の方はマネージャーだったので直接の影響はほとんどないが、湊は実際はスタメンだったのでかなりのダメージだったらしく、渡邊たちはかなりの苦戦を強いられて準決勝に臨むことになった。

昼――都立運動公園・体育館
痴漢を警察に引き渡し、急いで会場に向かった湊たちが到着したのは試合終了間際の昼前だった。
今から走っても結果は変わらないからと関係者用の通路を歩いて移動していると、廊下の先から知った顔が何人もやってくる。
「あー、会長！　ほんっと、急に遅れるとかマジでやめてくださいよ！　ギリギリ勝ったから良かったっスけど、四点差でかなり危なかった

んですからね！」
「痴漢の逮捕に協力してたんだ。市民の義務だし許せ」
「いや、先生から聞きましたけどね。ったく、どこのオッサンか知らないけど、休日に痴漢なんかしてんじゃねーっつの」
　相手も準決勝に来るだけあって強かったはずだが、湊がいない状態でも勝利を収めたようで渡邊は文句を言いながらもどこか嬉しそうにしている。
　やはり湊という助っ人の力に頼って勝ってきたとどこか引け目を感じていたようだ。今回の勝利でそれも少し薄れたはずなので、湊だけのチームではないと今後は胸を張っていえるだろう。
　そうして、他の部員らも疲れた様子だがどこか満足気に試合の様子を話していれば、彼らの後ろから別の試合を終えたらしい他校の選手らが現れた。
「ミヤ、大丈夫？」
「あ、ああ、少し痛むだけだから三決の試合には出れるって」
「クソっ、あいつら本当にきたねーよ。審判から隠れたところで思いっきりファールしやがって」
　マネージャーと思われる日焼けした肌の女子に心配されながら、一人の男子が他のメンバーに肩を借りて歩いている。膝にアイシングを装着し左足を床につけないでいるため、もしかすると試合で怪我をしたのかもしれない。
　その一団が通れるように道を開けると、湊と一緒にやってきた女子がどこか暗い表情で視線を逸らしていた。
　月光館学園の相手は彼女の学校ではなく、先ほどの一団の学校名が響ヶ峰中学ではなかったことから推測するに、悪態を吐かれていた〝あいつら〟というのが彼女の学校のはずである。
　湊は他校の情報など何も持っていないので他所の戦略等は知らないが、先ほどの一団の言うことが真実ならば反則上等なラフプレーをするチームという事なのだろう。
「……さっきのお前の学校の話か？」
「……うん、多分そう。ていうか、絶対」

「まぁ、ばれないように小細工するのも一つの技術だしな」
「あんなのは違うよ。真っ向勝負じゃ格上には勝てないからって、卑怯な手段で相手の戦力を落として。昔はもっと普通にやってたんだけどね」
どこか諦めたように話す少女は悲しげな表情を浮かべる。格上を殺すために策を弄するのは悪い事ではないと思っている湊にすれば不思議に感じるが、湊は自分の感覚が他の者とずれていると自覚があるので口を挿んだりはしない。
すると少女は、自分の学校の者たちがラフプレーをするようになった経緯について語り始める。
「東京にはね。早瀬君ってすごいプレイヤーがいるの。今年は開催地枠で全国大会への出場が決まってるから出てないけど、彼のいる学校は全中バスケで連覇してるんだ」
「あー、早瀬ってのはすっげー色黒のやつッスよ。つか、あいつの地元って巌戸台らへんだから本当なら月光館学園と地区が被ってんスよ。ま、今年は全国の舞台でぶっ潰せるんで開催地枠で出場が決まってて丁度よかったッスけどね」
早瀬という名に聞き覚えのなかった湊が首を傾げれば、渡邊が身振りで相手の身長などを伝えつつどんな人物か教えてくる。
先ほど渡邊が言った通り、相手は巌戸台が地元なので中学の間は地区が被っており、最初の大会から優勝候補とぶつかるため今まで月光館学園は上の大会に上がることすら出来なかった。
高校からは推薦で他所の地区の私立に行くようなので、大会で会うとすれば都大会になるだろうが、その前に全中三連覇の偉業を阻む機会が出来たので渡邊はどこか嬉しそうにやる気を漲らせている。
その様子が面白かったのか少女はくすくすと笑っているが、少しすると再び暗い表情になってしまった。
「最初はうちもそんな風だったんだけど、早瀬君にはどうやっても勝てないって私の幼馴染の忍足君が審判にばれないファールの研究とか始めてね。今じゃチームでそんな事して相手の選手を潰したりしてるの。確かに試合には勝つようになったけど、こんなの絶対おかし

いよね」
勝つためには手段を選ばないのは湊的に好印象だ。自分もそういったタイプなので、性格の捻くれ方に関しては気が合いそうではある。
けれど、捻くれ者というのは同族嫌悪が他より酷い人種だった。エゴの塊で自分が卑怯なことをするのは気にしないが、他の者がしようものなら様々な手段を講じて二度と出来ないようにする。さらに青年にとって、他人を害する存在は排除すべき対象だった。
少女の話を聞いて少し考える素振りを見せていた湊は、顔をあげると踵を返して一人ですたすたと歩き出す。
昼休憩を挿むので試合までに戻ってくればどこかに行ってもかまわないが、これから昼を食べながらミーティングを行う予定だった事で渡邊が慌てたように呼び止めた。
「あ、会長どこ行くんスか？　オレらこれから昼メシ食べますよ？」
「……さっきの選手のところに行ってくる。あんなアイシングじゃ三位決定戦なんか無理だ。運営が用意した医者でも多分難しいだろうし、テーピングとマッサージで応急処置だけしてくる」
「そんなの出来るんスか？」
「出来なきゃ言わないさ」
それだけ言うと湊は行ってしまった。学校でも怪我人が出れば完璧な応急処置をしてみせ、保険医の櫛名田が仕事が減ってつまらないというほどだ。
部員や共に来た少女も、彼なら本当に選手の治療が出来るのではないかと不思議な安心感を覚え、去っていく背中をただ見送った。
午後――体育館
昼を挿んでからまず最初に三位決定戦の試合が行われた。決勝戦はそれが終わってからなので、試合が終わって両校の選手らと入れ替わりに湊たちはコートへと入ってゆく。
「有里！」
他の者と同じように湊も自分たちのベンチに荷物を持って移動していれば、先ほどの試合に勝利した学校の選手が一人手を振って声を

かけてきた。
左膝にテーピングと黒いサポーターを付けた、宮本（みやもと）　一志（かずし）という少年だ。
彼はペースはゆっくりとだが嬉しそうに歩いてやってくると、手を上げて湊に礼を言ってくる。
「有里、テーピングあんがとな。おかげで夏最後の試合に勝てた」
「……そうか。まぁ、ただの応急処置だから閉会式が終わったらちゃんと病院に行け。それ、今の内に治さないと長引く上に癖になって走る事も出来なくなるぞ」
医療関係の知識を持っている上にアナライズが出来る湊の診断は正確だ。本来ならば専用の機械を使わなければ発見できないような小さな腫瘍や血栓でも発見出来てしまう。
けれど、少年はテーピングで足の負担が減っていることもあり、怪我がそれほど深刻だと感じないのか不思議そうに首を捻った。
「最初は痛かったけど今は多少張る感じがするってレベルだぞ？　そんなに酷いのか？」
「ああ、昼に診たときに分かったが一歩間違えたら靭帯をやっていた。重度とはいえ打撲と炎症で済んだのは幸運だったとしかいえない。今日はもう歩かない方がいい。顧問かマネージャーに言って、施設の案内所から車椅子を取って来て貰ってくるべきだ」
▪
もう少しで靭帯をやっていたと言われれば、流石の素人でも怪我の酷さを理解出来る。ニュースでプロスポーツ選手が肘の靭帯をやって手術後に何ヶ月もリハビリするという話はよく聞くため、そんなにも酷くなりかけていたのなら、ここは大人しく言うことを聞いておこうと彼は少し顔を青褪めさせながら近くにいたマネージャーを呼んだ。
「あ、西脇！　わるいけど、ちょっと案内所から車椅子借りてきてくれ」
「車椅子って、そんなに膝酷いの？　先生に言ってすぐ病院行った方がいいんじゃ？」

「いや、有里が今日はもうあんまり歩かない方がいいっていうからな。病院は閉会式の後でいいらしいから、決勝とかは観ていきたいし。ちょっと頼まれてくれ」
車椅子を借りて来て欲しいなどと言われ、マネージャーの西脇（にしわき）結子（ゆうこ）は心配そうな顔をする。
彼の膝は試合が終わったときには内出血で紫色になり腫れていたのだ。三位決定戦にすら本来は出られなかったはずなので、湊のテーピングがあっても試合をした事で限界を越えてしまったのではと思っても無理はない。
けれど、試合で無茶をすることで本当にそうなる可能性があったなら、湊は医者として無理矢理にでも宮本を病院へと連れて行っていた。
準決勝のように相手が膝を狙ってきたのなら危険だったが、そんなチームばかりが出ているはずもなく、病院に行くまで足の負担を減らすためだと説明すれば、西脇は安心したように頷いた。
「わかった。有里君、これから試合なのに色々とゴメンね。私もミヤも応援してるから頑張って」
「なんでお前が俺の分も言うんだよ。ま、応援してるのはホントだけどな。気を付けろよ、有里」
付き合いが長いらしい二人は夫婦漫才のようなことをしつつも、自分たちによくしてくれた湊を心から心配しているようだった。
湊はそれに手を上げて返すと分かれてベンチに向かい。荷物を置くと周りで準備をしていた部員らと同じようにストレッチを始める。
相手は反則を使わずともそこそこの実力のようだが、湊は試合を見ていないのでどんな風に攻撃してくるか分からない。
記憶を読めば分かるのかもしれないが、助っ人として呼ばれてきた以上は他の者と同じように異能に頼らず自分の力で挑むようにしていた。
異能を使えば簡単に勝てる。身体能力だって小狼にならずとも戦闘状態に切り替えるだけで誰一人勝てなくなるだろう。
しかし、渡邊が頼ってきたのは生徒会長である有里湊だ。裏社会で

生きていくために付けた力は必要ない。
もしかするとトッププレイヤーだという早瀬なる人物には負けるかもしれないが、それでも湊は〝有里湊〟として最後まで勝負しようと決めていた。
「助けた子が敵側ってやり辛くないッスか？」
湊が開脚して身体を伸ばしていると、屈伸をしながらニヤニヤと笑みを浮かべた渡邊が話しかけてくる。
確かに相手側のベンチには先ほどの少女が座っているが、湊にすれば名前も知らないその他大勢の一人だ。相手は湊が怪我をしないように心配していたので、反則を使うようになった現在のチームの勝利に関してはそれほど執着がないように思われる。
それなら何ら気に病む必要はなく、ただ全力で勝ちに行くだけだと淡々と返した。
「……別に。全国に行くまでに何百人も泣かせるんだし一緒だろ？」
「うわ、カッケー。ヤマ、オレたちもついに女泣かせになれるぞ」
「ばーか、試合前にくだらないこと言ってんな」
渡邊はバスケットを通じて同じ地区の他校生と知り合いになったりもしていたが、いくら仲が良くとも試合になれば話は別だと全力で勝ちに行っていた。
だが、湊はまだ素人でおまけに知り合いになった相手は女子だ。女子に優しいと言われている湊ならば、情に流され動きが鈍る可能性も十分あり得たため、返事を聞いた渡邊は心配無用だったかと湊の妙なドライさに苦笑した。
もっとも、湊がしっかり戦ってくれるにしても相手が危険なことに変わりはない。一年生は身体が十分出来ていないので投入はタイミングを計る必要があり。レギュラーを潰されたら夏が終わるため誰を出すにしてもリスクがある。
他の者よりも身体が出来上がっている湊だけは唯一対抗出来そうではあるが、素人を潰される危険のある軸に使える訳がないので、顧問の盛本と話し合った部長が部員らにしっかりと念押しした。
「相手はラフプレーしてくるからな。細かくパス回していくぞ。ゴー

ル下でリバウンドを取るときも注意しろよ」
『ウースッ！』
「ジャンプはナベだ。序盤からラフプレーなんてしてこないだろうから、ボール取ったやつは速攻を仕掛けろ。最初にどれだけ点を取れるかで後半の危険度が変わってくるから集中していくぞ」
キャプテンが注意事項を述べるとグループに分かれて軽くウォーミングアップに移ってゆく。ドリブルで軽く走ってみる者や、シュートの練習をする者などグループでることは異なるが、一人だけ集団から離れ、湊が両チームのプレイヤーの動きを見ていると相手チームの選手が一人歩いてきた。
身長は湊より低めだが目測が得意な湊が見たところ、一七八センチくらいで中学生では十分に長身の部類に入るだろう。髪は耳が隠れるくらいと長めだが、雰囲気は好青年といった感じで相手は爽やかに挨拶をしてくる。
「君、有里君だよね？　俺は忍足（おしたり）　義人（よしと）、響ヶ峰のキャプテンやってるんだ。試合前に悪いかなって思ったんだけど、うちのマネージャーを助けてくれたお礼を言いたくてね。どうもありがとう」
「気付いたから助けただけだ。気にしなくていい」
「まぁ、これも一つの礼儀ってことで。じゃあ、いい試合をしようね」
気にしなくていいと言われた相手が苦笑するが、ラフプレーをする人間とは思えないほど礼儀正しく爽やかな少年だ。湊と忍足が相対すれば、試合をするというのにピアスを付けたままの湊の方が不良に見える。
もっとも、実際の性格の捻じれ具合を考えれば湊は十分不良かもしれないが、試合中はちゃんとスポーツマンシップに則ったプレーを心掛けているため、見た目はともかくとして二人の選手としての在り方は対極だ。
道を外れても勝ちにこだわる姿勢は評価するが、それで他人の選手生命を終わらせる一歩手前まで行くのはやり過ぎだと、相手の雰囲気はともかく実際の行為自体を認める気は湊にはなかった。
お礼を言い終えた相手がベンチに帰っていくのを見送り、湊もベン

チに座っておくかと戻りかけたとき、
「あ、そうそう」
帰っていく途中で立ち止まった相手は、振り返って湊を見るなり口元を大きく歪めて嘲るような笑みを浮かべた。
「体育館に入ったとき俺らに負けたやつと話してたよな？　なに言われたか知らねぇけど、さっきの雑魚と同じようにしっかり潰してやっからせいぜい必死に頑張ってくれよ」
「……お前、素の方がいいぞ。遠慮しなくて済みそうだからな」
好青年から一転、口が悪く人を見下したような態度になった相手に、湊は面白いと思って小さく笑う。
先ほどの好青年の雰囲気は少々やり辛いものがあったが、こっちが相手の本性だとすればやり易い。
別に喧嘩でぶっ飛ばす訳ではないにしろ、ただ陰湿なやつよりも殴りたくなるほど性格が悪い奴の方が倒して楽しいというモチベーションの話だ。
今まで出た試合ではただ試合に勝つ事を目的としていたが、今回の試合では〝こいつを潰して勝つ〟という具体的な目標を立てる事が出来る。こっちの方が随分と楽しそうだと湊が試合自体に興味を持てば、忍足も同じように〝相手を潰す〟ことを主目的にしているようで試合開始を待ち遠しそうにしながら笑みを深めて返す。
「遠慮とかいらねぇよ。必死こいて頑張ってる馬鹿を潰すのが愉しいんだ。やる気がないやつは潰し甲斐がないから、やるなら出来るだけ本気で頼むぜ」
「ああ、わかった」
それだけ言い返せば二人は自分たちのベンチに帰ってゆく。朝助けた少女は二人が話していたことで何やら心配そうに見てきていたが、月光館学園のベンチでは戻ってきた湊の表情を見た水智恵が不思議そうに首を傾げる。
「湊さん、なんか楽しそうですけど、都大会決勝だとやっぱりやる気が違うんですか？」
「……いや、ただ点を取って勝つことしか考えてなかったんだが、この

試合で何か別の物が見えそうなんだ。それでようやくこのスポーツにも興味が持てるかもしれないと思ったら、ちょっとだけやる気が出てきたって感じだ」
「なるほど、楽しみ方が分かってくるとモチベーションも上がってきますよね。見つかるように応援してますから頑張ってくださいね」
何事も興味を持って楽しんだ方がいいに決まっている。基本的に何に対しても興味なさげな青年が言っているだけに、恵は湊がバスケを好きになれるよう心から応援することにした。
そうして、ウォーミングアップの時間が終わると全員がベンチに戻り、声かけをして気合を入れ直す。
勝てば関東大会に進めるのだ。創部から一度として進む事の出来なかった場所へ、ついに手が掛かるところまで来ている。目標は全中制覇だがそれもここで勝たなければ叶わない。円陣を組んで気合を入れたメンバーたちはスタメンだけがコートへと進んだ。
ジャンプボールを担当するのは渡邊、その他のメンバーはコートに広がっていくが、湊が相手コートに視線を向けると、先ほど挨拶してきた忍足もちゃんとスタメンで出ている。これならば、最初から勝負が出来そうだと湊が考えている間に試合が始まっていた。
「うおぉぉぉぉっ!!」
ジャンプボールで跳んだ相手のチームの選手と渡邊の身長はほぼ同じ。けれど、僅かにジャンプ力で勝った渡邊の手が先に触れてボールが弾かれる。
緩い放物線を描いて落下していくボールの先には、運悪く誰もおらずキャプテンが最初に言っていた速攻は難しいかと思われた。
だが、ボールが床に着く前に横から影が滑り込んでボールを手にする。
「会長!」
完璧に回り込んで湊がボールを手にしたのを見た渡邊は、着地するなりゴールに向かって走りながらパスを求めた。確かにゴールにはジャンパーだった者が一番近いが、その分敵に囲まれているのでパスは通しづらい。

しかし、湊ならば通せると信じて渡邊や他の味方も走り出せば、湊は何を思ったのかボールを両手持ちから左手持ちに切り替え、そのまま片手だけでゴール目がけ投げていた。

『っ!?』

最序盤からそんなプレーをするなど事前の打ち合わせにはなかった。確かに速攻は速攻だが、自陣からそんな投げ方で入る訳がないと思って観客含めて全員がポカンとしている。

だが一同のそんな予想に反し、投げられたボールはそのままゴールに向かって真っ直ぐ飛び、バックボードに跳ね返りつつ綺麗にネットに吸い込まれていった。

試合が始まって僅か四秒。都大会決勝は湊の片手スリーポイントから始まった。

第百四十二話　後篇　都大会―曲芸―

――体育館・観客席

中学男子バスケの都大会決勝、母校のチームが出場すると聞いて中等部だけでなく高等部の者など学校関係者が多数応援にやってきていた。

チドリたち部活メンバーは生徒会メンバーやプリンス・ミナトに美鶴たちといった、大勢の湊の関係者に囲まれて観戦している。

試合開始直後の湊のシュートには会場中が驚いたが、その後の試合展開は相手有利で進んでおり、第二Ｑが始まって一分の時点では〝１９対２４〟と離されている。

妹にくっついて試合を観戦しに来ていた真田は、二年生の選手に向けたキャプテンのパスが忍足にスティールされているのを眺めながらぽつりと呟いた。

「有里ってチームスポーツも出来たんだな」

「……まぁ、かなり苦手なのは間違いないわよ。ルール含めてどうしても湊に不利な部分が多いし」

スティールされたボールを手にした敵チームの選手がドリブルで駆けてゆく。それを行かすまいと渡邊が立ち塞がるが、避けるために急減速した瞬間を狙って渡邊がボールを奪おうとしたとき、相手選手はあたかも手を叩かれたようにバランスを崩してボールを手放した。

実際は渡邊の手は相手には触れていない。しかし、審判の位置からではバランスを崩したことも含めてファールしたようにしか見えず、渡邊のファールとしてホイッスルが吹かれた。

この展開は第一Ｑから何度かあり、相手チームはリバウンド狙いのゴール下では肘や膝で攻撃をしたり、今のようにファールされたように見せかけて月光館学園の攻撃を防いでいた。

中学生で審判にばれないよう反則を繰り返すテクニックは素晴らしいが、その被害を受けている方は堪ったものではない。

自分は触れていないと渡邊が抗議しても、巧みに計算されたプレーは審判からはファールにしか見えていなかったため聞き入れられず、

これ以上の抗議を続けるとさらにファールを取られるため渋々引き下がっている。
観客席からは一部始終が見えていたので、アンフェアなプレーに美鶴は眉を顰めるが、直前のチドリの言葉に気になった点があったので試合を見ながら訊き返した。
「ルールは公平に課されるものだが、そのルールが彼に不利とはどういう意味だ？」
「得点だとか最低限の枠組みみたいなのは確かに公平だけど、スポーツのルールは一部弱者救済のために作られているでしょ」
「なるほど、ルール改訂で禁止になるようなプレーの一部は、確かに一部のチームや選手しか出来ない強力なプレーだったりするな。最初から出来なかった者には関係ないが、それを武器にしていた者からすれば、出来ない者がいて不公平だから禁止などおかしな話だ」
特定のスポーツに限定した話ではないが、強力な技ばかり使うと試合がワンパターンになるため、スポーツの発展や選手たちの創意工夫を促すために禁止などと言って、一部のプレーをそれらしい理由で禁止しているパターンがある。
けれど、オフェンスに有利だから、ディフェンスに有利だからと、そんな風にルールを改訂して被害を被るのは強者側である事が多い。弱者はそんなプレーは止められないし自分たちでは出来ないので、禁止になれば何のデメリットもなく恩恵だけ受けられるという訳だ。
もっとも、ルール改訂もそれが全てではないので美鶴も完全に同意した訳ではないが、一応、チドリのいう湊に不利だという話に納得できたため、持っていたペットボトルの水に口を付けながら視線をコートに戻す。
試合は進み、味方の二年生の放ったシュートが外れ、湊と相手チームの選手二人がゴール下でリバウンドの確保を狙っている場面になっていた。
敵はほとんど密着して飛ばせないようにマークして来ているが、実際は一人が湊の片方の靴の爪先を踏みながら膝で足に蹴りを入れ、もう一人が肘で腕や脇腹を攻撃している。けれど、ファールは取られて

いないのだから、見えている方としては現状に納得がいかないのも無理はない。
「ちょっ、思いっきり肘とか蹴り入れて来てるじゃない！　なんで審判は反則取らないのよ！」
　意識しているのか分からないが、他の選手よりも内側でプレーしている湊はかなり集中的に狙われている。その分、味方が攻撃されないのでプレー出来ているが、ゆかりが怒って観客席から抗議すると近くにいた車椅子の男子が反則を取られない理由を語った。
「あの坊主の選手が壁になってんだよ。間に人がいたら見えづらいし、ちゃんと見えないと審判も反則を取ってくれない。なにより、有里は攻撃されても全く表情を変えてないからな。気付くのは難しいって」
　湊たちと審判の間に相手チームの選手が割り込み、攻撃する瞬間を審判から隠しているため反則を取られない。これで湊が痛がっていれば少し違うのかもしれないが、どういう訳か湊は全く効いた様子もなくジャンプしてボールを確保したため、余程注意して見ていない限り気付くのは難しい。
　一度敵と戦って反則の仕方を見ているだけあって、しっかりと分析して宮本がそう語れば、ゆかりは相手が三位決定戦に出ていた選手だと気付いて、午前中に同じ敵と戦ったのなら実力も知っていそうだとついでに尋ねた。
「あ、えと、さっき試合してた学校の人だよね？　やっぱり相手の反則って上手なの？」
「褒められたもんじゃねえけど、中学生のレベルは完全に超えてる。というか、それをメインに持って来て練習してるっぽいから、合間の点取りも含めてそういった意味じゃかなり巧い」
　素の実力もそこそこある方ではあるが、響ヶ峰の選手らは上手なのではなく巧みであった。ドリブルやパスのテクニックより、ばれずに反則をするような純粋な技とは別の部分を鍛えているのだ。
　そして、それらで相手を翻弄しつつ、合間合間にパスを奪って点を決めに行くなど、着実にしっかりと得点を取りに行く安定感も持ち合

わせている。
派手な攻撃力はないが、その分だけ相手の土俵に上がれば抜け出すのは難しいと宮本が言えば、再び肘や膝で攻撃されている湊を見てゆかりは心配そうな視線を送った。
「……さっきから気になってたんだが、なんかパスが通ってねえな。有里の動きもぎこちないっつーか」
第二Ｑも終わりに近付きつつあるが、その中で荒垣は月光館学園のパスの成功率がかなり悪い事に気付いた。それは味方のミスというより、相手にスティールされまくっているのだ。
加えて、素人であることを除いても湊の動きが悪く見える。あんなに彼は遅かっただろうかと違和感を覚えるほど、真田との試合を見た者からは湊の動きにキレがないように映る。
それを聞いた風花が今まで攻撃されている場面を目にしていた事で、彼も他の選手同様に怪我を負ったのではと不安な顔をする。
「やっぱり、有里君も怪我しちゃったのかな？」
「あんなの全くダメージないわよ。攻撃を喰らう瞬間に衝撃を吸収して、残りは足の裏から地面に逃がしてるから肩に手を置かれるとかってレベルの接触でしかないわ」
「そうなのか？　んじゃ、なんで動きがぎこちないんだ？」
世界最高ランクの達人技量によって、肘鉄や膝蹴りがそんなダメージとも言えないレベルに抑えられるのはすごいが、だとすれば湊の動きの悪さに余計に疑問が湧く。
他の者も彼の動きの悪さが不思議でしょうがないのか、チドリに視線が集まると、少女は少し面倒そうにしながら理由を口にした。
「味方が足を引っ張ってるからよ。さっき湊はチームプレイが基本的に苦手って言ったけど、その原因は味方が枷でしかないからなの」
「協力した方が勝つのも楽じゃないんですか？」
「湊は他の選手の本気に反応できるけど、他の選手は湊の本気に反応出来るレベルに達してないのよ。だけど、必然的にチームは湊に頼るし、敵も主力の湊を強力にマークしてくるからやり辛いでしょうね」
その説明をしている間もゴールに向かっていた味方が、湊にパスを

出して敵に阻まれている。
　他の選手間のパスも奪われているが、味方から湊へのパスが最も奪われているように見えるため、少女の説明はそれなりに説得力があった。
　それをさらに裏付けるよう、チドリは今のプレーに関していくつか指摘する。
「ほら、今のパスで言うなら二メートル先に投げておけばよかったの。湊なら追い付けるし、それなら相手のスティールも届かなかった。だけど、他の選手は湊がどれだけ動けるか把握出来ていないから、他の選手と同じレベルのパスしか出せない」
「ふむ、しかし、突出した天才にだけ合わせると全体のチームプレイが出来なくなる。彼が駄目なら他の者で勝ちに行くしかないのだから、練習期間が短いことも含めて、この場合は仕方がないのでは？」
　いくら他の者が湊の身体能力等を把握していないとしても、現状、湊へのマークが強過ぎるのでパスをしようとボールを奪われる事を考えれば他の者で勝ちにいくしかない。
　これでまだ湊を使おうとすればもっと酷い事になるぞと美鶴が言えば、チドリは嘆息して首を振りながら言葉を返した。
「既に正規バスケ部の力はほとんど通用してないのよ？　なら、既存の戦術を捨てて勝てるようにするしかないじゃない。というか、湊にとってあんなのマークの内に入らないわよ。敵も味方も湊を舐め過ぎだわ」
　言いながらチドリがコートに視線を戻したところで、〝３６対４７〟という結果で第二Ｑが終了した。
　一発逆転がないからこそ、差が広がるのを見た観客たちを重い空気が包んでいた。
＊＊＊
「有里、身体は大丈夫なのか？」
　ハーフタイムで戻ってきた選手らを迎えた顧問の盛本が、手にアイシングの用意を持ちながら心配した様子で尋ねる。
　他の選手らも何度か足を踏まれたり膝で蹴られたりしていたが、湊

は他の者の倍ではきかない回数の攻撃を受けていたのだ。相手は湊への攻撃が効いていないと思ったのか、試合が進むにつれて攻撃を激しくしていたこともあり、湊に抜けられるのは戦力的に厳しいが盛本は交代も視野に入れていた。

しかし、ベンチに座って汗を拭きながらドリンクを飲んでいた湊は、身体を冷やさぬようにジャージを羽織って淡々と答える。

「……素人の攻撃で怪我するほどやわな鍛え方はしてないです」

「ここで無理をして膝でも壊せば走れなくなるんだぞ？　本当に大丈夫なんだな？」

「ええ、むしろ相手の方がダメージ溜まってると思いますよ」

攻撃を受ける際、湊は衝撃を吸収しながら受け流してもいた。それに対して敵は鍛えられた硬い肉体に攻撃を繰り返していたことで、少しずつダメージを蓄積しているはずだった。

今すぐにそれが効果を発揮するとは思わないが、試合が進めば足か腕に限界が訪れることは間違いない。被害者よりも加害者の方がダメージを受けているとは流石に誰も思わないだろう。

自滅の未来が確定している馬鹿は放置しておくとして、ボトルから口を離した湊は味方が攻め切れていない方が問題だとして、全員に聞こえるよう話しかけた。

「悪いけど少し戦い方変えて良いか？　他のやつには味方含めて誰もいない場所にパスを出して貰いたい。そして、パスを出すやつ以外はここからなら自分は攻めていけるってポジションに移動してくれ」

「え、誰もいないってそれじゃ取れないじゃないッスか」

「俺が取る。ほとんどコート外に出るようなボールでもいい。投げれば俺がパスとして受けて中継する」

それはパスとして投げたボールに後からスタートして追いつくという話だった。

山なりのボールならそれも可能かもしれないが、ほとんど高さを変えずに真っ直ぐ放られるボールに追いつくなど無理に決まっている。

コート内ならバウンドしたボールを取っても構わないため、転がるボールを追いかけるように取るつもりなのかもしれないが、キャプテ

ンの山井は腕組みしながら難しい表情を浮かべる。
「さっきからスティールされまくってるから、こっちのパスパターンは読まれているのかもしれない。それなら有里の言う通り異なるパターンで攻める必要があるが、流石にそれは……」
パスパターンなど急に変更出来る物ではない。こんな風にパスが来るから次にこう動く、と言った具合に練習で身体に沁み込んだ動きをするからその後のシュートやパスも上手くいく訳で、ただでさえ素人で練習外の動きをする湊に合わせるのがやっとだというのに、ここからさらに難度の高いプレーなど月光館学園の選手たちのキャパシティを超えている。
準決勝では見事に自分たちだけで勝利を収めた選手らも、実際は都大会がやっとの実力ばかりで、次のブロック大会への切符をかけて戦えるほどではないのだ。
それでもここまで来れたのは、助っ人による戦力の底上げと試合の組み合わせに救われた部分が大きい。既にいっぱいいっぱいだと分かっている山井が、キャプテンとしてやはり賛成出来ないと首を振りかけたとき、普段以上に真剣な様子で湊が言葉を発した。
「今まで黙っていたが正直お前たちとのパスはやりづらい。俺からすればパスが短すぎるんだ。移動する分も含めてさらに数メートル先に投げるくらいで丁度いい。逆にこっちはお前たちが少し離れていようとパスを通してみせる」
眼帯をしていない左眼が力強い光を発している。その様子に他の者は先ほどの言葉を本気で信じてしまいたい気持ちに駆られるが、部員らが最後の一歩を踏み出せずにいれば、話し合う部員らを見ていた盛本が口を挿んできた。
「有里、お前五十メートルは何秒で走れる？」
「日本記録は余裕で」
「ははっ、お前が言うと冗談に聞こえないな」
本人は冗談のつもりはなかったのだが、体育の授業に参加していなかったことで走力を正確に把握していなかった盛本は、湊の自信たっぷりな言葉を聞いて信じてみる事に決めた。

「よし。それじゃあ、山井、渡邊、お前らが軸になって有里へのパスを出せ。他のやつらはそれで距離を掴め。勿論、受ける側として自分が安全圏に走り込んでおくのを忘れるなよ」
「いいんスか？　失敗したら崩れて終わりッスよ？」
「お前も他のやつらも有里を信頼してるんだろ。なら、ここで取ってくれってパスを投げこめ。そうすれば期待に応えてくれるさ」
　他に取れる作戦が無い以上は時間切れで負ける未来しかない。ならば、湊を信じてやれるだけやってみよう。
　背中を押された部員らはどこか吹っ切れた表情を浮かべ、まだまだ逆転を諦めないぞと円陣を組んで気合を入れ直す。
「こっから逆転するぞ！」
『オウ!!』
　諦めている者は一人もいない。ハーフタイムを終えた選手らは逆転を誓ってコートへと戻って行った。
＊＊＊
「え、有里君ってば何してるの？」
　ハーフタイムを終えて第三Ｑが始まろうとしているのだが、選手らがコートに広がりつつ戻る中で湊だけ誰もいない自陣コートの隅に向かっていた。
　そこからでは味方のパスを受けることも、相手の選手を止めに行く事も出来ないだろう。
　味方は誰も気にしていないようだが、敵チームや観客は全員が意図を理解出来ず不思議そうにしている。
　すると、傍に座っていた赤髪の少女がそれを見て呆れながらも、どこか楽しげに口元を歪ませて答えた。
「……バスケをやめたんでしょ。変えてくるとは思ったけど、ここまで本気でやるとは思ってなかったわ。全員馬鹿なのね」
「バスケをやめたって諦めたってこと？」
「見てれば分かるわ」
　言っている間に味方のスローインで試合が始まった。二年のボールを受けた渡邊がドリブルで上がってゆく。味方はそれを見て先回

りするように走り込むが、ボールを持っている渡邊を阻むように二人の相手選手が寄ってくれば、渡邊は無理に抜きに行かずに急停止から一歩下がって逆サイドの誰もいないエリアにボールを投げ込んだ。
片手で投げられたボールは勢いよく飛び、そのままコート外へと出ていこうとする。明らかなパス失敗だ。
負けているせいで攻めを焦ったのか。会場中が自滅していく選手に溜め息を吐きかけたとき、突如現れた黒い影がボールへと迫り、ライン際で踏み切って跳躍すると、そのまま先にコート外に出ていたボールを空中でキャッチして後ろ向きのまま放り投げた。
突然のことに敵は動けずにいたが、ボールの飛んでいく先にはスローインをした月光館学園の二年生が丁度構えて待っている。
気付いたときにはもう遅い。敵が慌てて動き出すも、完全にフリーだった二年は悠々とシュートモーションに入って、そのままスリーポイントを見事に決めた。
ミスと思われたボールからのアクロバティックなパスに、綺麗な放物線を描いた見事なスリーポイントシュートを見た場内は、決勝開始直後の開幕スリーポイントと同等の盛り上がりを見せる。
しかし、それに乗り切れなかったピンクの少女は、目を丸くしながら傍にいたバスケ経験者の少年に質問をぶつけた。
「え、空中キャッチってセーフなの？」
「いや、まぁ、サッカーとかと一緒で選手も空中ならセーフだけど。ジャンプの滞空時間なんて一秒くらいだし、弾くならともかくキャッチしてパスとか誰もできねーよ」
衝撃のプレーに半笑いのような微妙な呆れ顔をしながら、ルール上はセーフだが物理的に出来ないので普通はやらないと宮本は答える。
彼の隣にいるマネージャーも頷いているため、バスケをよく知っている者からすれば、常識外れのあり得ないプレーなのは明白だった。
「な、なんか今の有里君って動物っぽいね」
風花が視線をコートに向ければ、ドリブルで上がっていく相手選手にスプリンターのような走り方で追い付き、追い抜く瞬間に高速スピンでボールをぶん取っている湊がいた。

しかし、湊はスピンからそのまま振り被ったようなパスに移行し、相手ゴールの傍にいた山井にボールを送る。あんな獣じみた荒々しい存在にまともに反応出来る訳もなく、ボールはまたしても味方に届いてフリーでシュートが決まった。

相手選手にすれば恐ろしいだろう。前半に散々痛めつけたはずの相手が誰よりも元気に動きまわっているのだから。

ちまちまとしたパスやドリブルでは獣に取られる。そう思ったのか相手選手はスローイングを一番近い場所にいた味方に渡すと、そのままロングパスに移っていた。

これならば流石の相手も追い付くまい。パスは見事に届き、そのままドリブルでゴール下に向かうとジャンプしながらレイアップでボールを放り投げようとした。

「マジであいつ何なんだよ……」

しかし、げんなりした宮本の視線の先では、相手選手の手を離れたボールがリングの高さに届きそうなところで、後ろから追い付いて空中片手キャッチしている湊がいた。

このままではゴールにぶつかるのではないかと思われたが、空中で頭を引っ込めつつ右手で取ったボールを左脇腹越しにバックパスまでしている。

受けた渡邊は大爆笑してドリブルで上がっていくが、反対に相手選手たちはどう受け止めればいいのか複雑そうな表情になっている。観客でも一部を除いて「アレは何だ？」と不思議に思っているのだから、相対している者たちの衝撃はその比ではないだろう。

先ほどまでゴール下で攻撃を受け続けていた相手が、ここまで高機動型の選手だと思っていなかった者たちは、全員が度肝を抜かれた。

＊＊＊

当初の湊の話ではあり得ない高機動でパスを受けて、それを中継することで相手にパスコースを読ませず味方へのファールもさせないという話だったが、高機動どころか変態機動でボールまで奪いに行っていたことで、第三Ｑを終えて最終Ｑに入ってからもコート内の響ケ峰の選手らは大混乱に陥っていた。

「ふざけんじゃねーぞ！　んなもんがバスケなもんかよ！」
「……お前らがいうなよ」
ドリブルで上がっていた渡邊が囲まれると、彼はそのまま誰もいないエリアに向けてボールを投げた。
それを見た忍足たちはまたこのパスかと進路変更し、ボールの飛んだ方向へ駆け出すが、さらに後ろからやってきた湊が全員を追い抜いてジャンプしながらボールを確保する。そのままライン際で着地した直後、湊は敵を引き寄せてからコート外に飛んで空中から味方にパスを出した。
こんな湊の身体能力頼りのパスにコースもなにあった物ではない。後半に湊の動きが変わってから響ヶ峰はほとんどパスをスティール出来なくなっていた。
要所要所ではショートパスで湊を振り切って点を取っているが、湊たちの追いあげるペースの方が速くて逆転を許してしまう。
ゴール下での反則プレーも攻撃対象が動き回っていては出来る物ではない。これで本人は身体能力を一般人レベルに抑えているのだから、事実を知れば相手は悪い冗談にしか思えないだろう。
「全員あがれ！　馬鹿一人を振り切ればこっちのが上だ！」
相手の選手らの実力は、確かに湊を除く他の選手よりも僅かに高い。ドリブルを最小限に抑え、長距離でのパスを多用し、湊が来ればショートパスで回して誰か打てる者がシュートに持っていけばいいだけだ。
逆転を許しはしたがまだ四点差で追い付く事は出来る。このとき、忍足は勝つために必死になっていることで、自分たちが久しぶりにまともなバスケをしていることに気付いていなかった。
忍足たちが必死に再逆転を目指せば、それをさせまいと渡邊たちもボールを奪ってパスとドリブルでゴールを目指す。
残り時間は二十秒をきった。ここをしのぎ切れば湊たちの勝ちだ。ボールを受けた渡邊はドリブルしながら湊とアイコンタクトを取って、彼にゴールに向かうように伝える。
湊が動けば相手はそれにつられるので、ディフェンスでやってきた

相手の視線が湊に向かった一瞬の隙を狙い、渡邊は切り返して躱すとゴールに向かって投げながら、ゴール下に到着した湊に声を飛ばした。

「会長、決めちゃってください！」

その声に反応するように青年が跳ぶ。ギリギリでゴールを外れかけたボールをキャッチし、そのままリングへと叩きこんだ。

中学生の試合では滅多に見れないアリウープに場内は沸き、響ヶ峰の選手がスローインしたと同時に都大会決勝の終了を告げるブザーが鳴った。

「試合終了！」

審判の声に響ヶ峰の選手が数人膝を折る。卑怯な手を使っていたが、最後の瞬間は正々堂々と試合に臨んでいたのだ。マネージャーによれば元々は勝つために反則をするようになったとのことなので、人一倍勝利に執着していたに違いない。

けれど、結果は〝８１対７５〟で月光館学園の勝利。これまで都大会へ出場すらしたことのなかった学校が、一気に関東大会への出場を決めたのだった。

試合後の礼を終えると、湊らは一列に並んで観客席にも礼をする。観客席では大興奮と言った感じのプリンス・ミナト会員たちが、『籠球皇子』と書かれた横断幕を揺らして勝利を喜んでくれている。

せっかく大勢が応援に来てくれたため、他の部活が都大会までに消えたこともあって、部員らは期待に応えられてよかったと最高の笑みを浮かべた。

そうして、挨拶も終えて閉会式の前に一度撤収しなくてはならないため、ベンチで荷物を片付けていれば、早々に支度を終えたらしい響ヶ峰の忍足が憎々しげに湊を睨みながらやってきた。

「お前ら、いまみたいな馬鹿頼みの曲芸が早瀬らにも通用すると思うなよ。さっきの手が使えたのはコート内で有里だけが突出してたからだ」

そう、先ほどのワンマンプレーが通用したのは、湊以外の選手が並みの選手であったからだ。速さと体力を武器にコート内を掻きまわ

し、純粋な身体能力のみで他の選手の実力を上回っていたからこそ、響ヶ峰の選手は完全に封じられて負けたのである。
「あいつらは全員が高校行ってもレギュラーレベルで、その中でエース張ってる早瀬は同世代に敵無しのバケモンだ。身体能力では有里が上かも知れねぇが、身体能力で一歩劣るだけで技術じゃ同世代最高の早瀬のが現状お前よりも強ぇよ」
　しかし、中学最強の早瀬率いるチームは、レギュラー全員が強豪校のエースレベル。そんな者らが相手ならば、バスケの技術に関して素人な湊では手も足も出ないはずだと、小馬鹿にしたように笑って相手は告げてきた。
　いくら身体能力が高かろうが、テクニックがお粗末ならばボールを奪うチャンスはいくらでもある。対戦する事になればせいぜい気を付けろと言って去ろうとする相手に、湊は普段通りの何を考えてるのか分からないやる気のない表情で返す。
「……そうか、それは少し楽しみだ。お前も試合を観に来るといい」
「なに上から目線で調子乗ったこと言ってんだボケ！」
　負け惜しみのような台詞を吐いて去ろうとする相手に言い返せば、湊の言葉が気にくわなかったようで、相手はわざわざ戻ってきてまで暴言を吐いてきた。
　忍足が負けた腹いせに何かするのではと、痴漢から助けた少女が後ろで心配そうに見ているが、相手にそんな気がないことが分かっている湊は、忍足にお互いの立場を教えてやる。
「俺は勝者、お前は敗者。現実は厳しいな」
「こんのクソ野郎がっ……次にやったらテメェだけは絶対に潰してやるからな」
「……俺、本業は美術工芸部で、バスケ部は今大会のみの助っ人だからもう出ないぞ」
「……は？」
　予想外の発言にポカンと口を開けて呆ける忍足。だが、バスケをするのが今大会中のみというのは事実だ。
　マネージャーの少女も今朝電車で聞いた湊の情報について、これく

らいなら話しても問題ないと思われる部分まで幼馴染に教えてやる。
「忍足君、有里君って助っ人で出場してるだけでバスケ歴も一ヶ月しかないんだって」
「お、おい。お前ら、まさかマジでそんな文化部から引っ張ってきた助っ人を、中学最後の大会でエースに置いてるとかふざけたこと抜かさねえだろうな？」
「んのなのオレらの勝手だろ。つか、会長は会長だから文化部とか運動部とか、そんな狭い括りに納まる御方じゃねーんだよ」
　マネージャーからも告げられた信じたくない事実に、忍足は肩を震わせながら渡邊たち正規部員を問いただす。
　すると、渡邊は湊は特別だから何部だろうと関係ないと胸を張って自慢げに言い返すも、それが余計に気に障ったようで、忍足は語気を荒げてバスケ部としての矜持はどうしたと言ってきた。
「プライドの問題だろうが！　この馬鹿におんぶに抱っこで恥ずかしくねえのか！」
「隠れてファールしてるお前に言われたくないっつの。つか、負けたならさっさと帰れよ。もうやることないだろ？」
「これから閉会式があんだろうが！　くっそ、格好から何から、どこまでもふざけやがって！　テメェら中途半端なとこで負けたら許さねえからなっ。いくぞ、櫻井！」
「あ、待ってよう」
　怒って去っていく忍足を追いかけて少女も去っていく。閉会式の前に荷物を置きに行っただけだろうが、急に話しかけて去って行った相手を渡邊は不思議そうにみていた。
「なんなんスかね、あいつ」
「……久しぶりに真剣にやって楽しかったし、それで負けて悔しかったんだろ。まぁ、最後の言葉が全てだと思えばいいさ」
「応援なら素直にしろってのの。ま、それはそれとして、今日は関東大会出場を祝して盛本先生の奢りで焼き肉ッスかね。よーし、くうぞー！」
　渡邊の言葉に部員らが大はしゃぎで喜べば、そんな事は一言も言っ

ていなかった盛本は、食べ盛りの男子らを引き連れて焼き肉など悪夢でしかないとギョッとしている。

しかし、初めての関東大会出場ということもあり、何も御褒美なしは可哀想だと思ったのか、「食べ放題の店でもいいか？」と譲歩案で約束してくれ、閉会式を終えた一同は、湊と恵の社員割引が効くＥＰ社系列の店で祝勝会を開くのだった。

第百四十三話　不良医師

８月８日（水）
深夜――久遠総合病院
一日は二十四時間ではない。これは影時間を体感している者にとっては常識だが、桐条グループが観測した初のペルソナ自然獲得者である青年にすれば、一日は二十四時間どころか三十時間や四十時間を超える日もあった。
その理由は、彼の心臓を包むように内蔵されている結合した黄昏の羽根〝エールクロイツ〟を利用して時流操作を行っているからだ。
時流操作を使えばそれだけ疲労が溜まるにもかかわらず、湊は時間を有効に使おうと自分だけ周囲よりも速く動いて人の三倍以上の仕事をしている。
もっとも、ファルロスの治癒能力と時流操作は、不死化を起こしている細胞をいつ癌細胞化させるか分からないため、現在は封印して自力で他者の数倍の仕事をこなしていたりする。
そして今日も、宿直の従業員らと同じように病院に残って仕事を片付けながら、時折やってくる夜間診療を受けに来た者の相手も彼はしていた。
留学中に戦場医として治療を施していたと言っても、本当は無免許なので診察などしていいはずがない。病院に務めている者らは湊が未成年だと知っているので、彼が日本の医師免許を持っていない事は理解している。
けれど、医療系世界シェアナンバーワンを誇るＥＰ社の病院ということで、開いたばかりだというのに難病患者が何人も訪れ、その一部は異能持ちの湊にしか治せない者もいた事で、患者に様々な誓約書を書かせた上で同意を得ながら秘密裏に医療行為も行っていた。
もっとも、忙しそうなときには一般の患者の診察も行うので、公的機関の審査が入れば一発でアウトな事も平然としているが、それらは、公的機関の者が監査にくれば心と記憶を読んで、すぐに気付くだけの自信があるからこその大胆な行動だった。

「小児喘息だな……吸入の用意をするから、奥のベッドに靴を脱いで横向きに寝ろ。普通に仰向けに寝るよりその方がマシだ」
やってきた患者の問診表を眺めてすぐに湊は診察を終了する。
相手は小学生の女の子で、名前は宇津木（うつぎ）　千佳（ちか）。どこかで聞いたような名字だが、そういえば妹がいると言っていたので目の前でゼェゼェと苦しそうな呼吸をしている少女がそうなのだろう。
幼い子どもが夜になって喘息の発作を起こしたので、夜間診療をやっている最も近い病院に連れて来たとの事だが、初めて来た患者に触れもせずに偉そうな口調で診察を終えた湊に母親が訝しむ様な視線を向けてくる。
しかし、アナライズを使用した診察に間違いはなく、処置も吸入を吸わせるくらいしかないので文句を言われても困ってしまう。
それならば、何かを言われてしまう前に処置に移ってしまおうと、宇津木の妹を診察室の奥から行ける隣の部屋へと案内し。看護師に用意させた吸入器をベッドの傍に持って来て、消毒済みのホースを寝ながら咥えておくように伝えた。
「しばらく煙が出るから深呼吸するようにゆっくり吸うんだ。別に咳き込んでもいいから、苦しいときは無理するなよ」
「うん。せんせー、千佳よくなる？」
「心配しなくても身体が成長して丈夫になるにつれて治まっていくものだからな。それに今日は少し俺が手伝うからすぐに苦しくなくなるはずだ」
ベッドに横になりながら心配そうに尋ねてくる少女の頭を優しく撫で、湊は心配せずに吸入を始めるように勧める。
その言葉で僅かに安心したのか、少女は言う通りにホースを咥えて時々咳をしながらも大人しくしていた。
ベッド脇の椅子に腰かけた母親や立っていた看護師がその様子を黙って見つめていると、湊が突然少女の上に左手をかざし出す。一体何を始めるのだと思っていれば、かざした左手が淡い緑光に包まれ、掌から放出されたその光が少女に吸収されだした。
「あ、貴方は一体何を!?」

あまりに不可思議な光景に危険を感じた母親が止めさせようと腰をあげかける。しかし、湊は光を放出させたまま金色の瞳を母親に向けて、相手が邪魔をしないように説明した。
「一般人でも分かる様に言えば気を送っているんだ。吸入は発作を落ち着かせる効果しかないが、気を送れば身体の調子がよくなって発作が起こり辛くなる。両方やれば喘息が治まるのが速くなると思ってくれればいい」
「気って、そんな非科学的なものっ」
「論より証拠だろ。吸入薬はどこの病院でも扱ってる一般的なものだ。それでこんなに速く発作が落ち着いた事は過去にあったか？」
湊に言われて少女に視線を向けると、吸入を始めて三分も経っていないのに呼吸が落ち着いているようだった。
今日の発作が軽度だったという事はない。それならば家にある携帯用の吸入器で十分だったのだから。
発作が普段通りのレベルで薬も一般的な物なのだとしたら、確かに湊の言う通り気を送った事で効果があったと思うしかない。
けれど、大切な子どもに関わる事なので、母親は完全には納得せずに椅子に座り直すと、娘が吸入を終えるのを黙って見ていた。
それからさらに数分経って、煙が出なくなったホースから少女が口を放せば、看護師がホースを取り外して『使用済み』と書かれた容器に片付けに行く。残った湊は少女の呼吸音を聞きながら様子を観察して、もう大丈夫だと判断したのか戻ってきた看護師に声をかけた。
「呼吸が落ち着いているからもう大丈夫だと思う。ただ、時間も遅いし。何かあればすぐに対処できるよう一晩泊まって貰ってくれ」
「お部屋は病棟に用意しますか？　それともルームの方に？」
「ルームでいい。朝食券を出しておくから、そっちの説明を頼んだ」
二人が話していた『病棟』と『ルーム』とは、病棟は普通に他の患者たちが入院している場所で、ルームはキッチン・トイレ・お風呂付きのワンルームの宿泊室の事である。
ルームは元々入院用の部屋ではなく、母子家庭など片親の社員が夜勤になった際に利用するもので、家に子どもを置いて来るよりも安心

だろうと、子どもにも泊まる用意を持ってこさせ、何かあればすぐに会いに行けるようにと作られたものだ。
社員ならば別に子どもがいなくとも利用可能なため、宿直室で休むより疲れを溜めずに済むと社員たちからの評判は上々であり、これならば夜勤でも大丈夫だとほとんどの者が夜勤のシフトにも入ってくれている。
そして、そのルームは夜間診療に訪れた小さな子供連れの家族にも貸し出し、サービスで朝食券も渡していたりする。
ここ久遠総合病院の診察券にはバーコードがついており、それを食堂の機械に読み込ませるとカルテから患者のアレルギー食品のデータが送られ、アレルギーがあればそれが含まれていない料理のメニューを持って来てくれるのだ。
食堂は一般人も利用可能なため、アレルギーで食べられる物が少ない子どもを持つ親からは、メニューが豊富で子どもも喜んでいるので助かっていると大人気だった。
「それでは宇津木さん、お部屋に案内しますのでどうぞこちらへ」
「せんせー、ばいばーい」
「ああ、ちゃんと寝ろよ」
看護師に案内されて診察室を去っていく宇津木の妹が手を振って挨拶してくる。母親も娘の発作が早期に治まったことで少しは信用する気になったのか頭を下げてから出ていった。
今日の夜間診療はこの程度で済んでいるが、時には交通事故で重傷の患者が運ばれてくることもある。
そういったときには研究所にいる者にも応援を頼んで全力で当たり、いまのところ死者ゼロという記録を維持し続けている。だからこそ、それに縋って助けてくれと遠方からはるばる頼ってくることもあるのだが、救える命は救うことにしている青年は負担が増えることも気にせず命を救い続けていた。
昼――院内
夜勤を終えてからも病院に残って事務仕事をしていた湊は、ようやく一段落ついたことで昼食を食べに行こうと廊下を歩いていた。

診察中は他の者に合わせて白衣を着ているが、それを普段着にするほど愛着を持っている訳ではないので、マフラーを形状変化させてネクタイにしつつ、ソフィアから貰った高級スーツを仕事中は着ている。

これが研究所や工場での仕事ならば完全に私服で過ごすのだが、病院の理事長がカジュアルな私服で歩いていると印象がよろしくないので、湊なりに気を遣っての判断だった。

「あれ、湊さんまだ病院に残ってらしたんですか？」

「……ああ、仕事が多くてな。時間を確保出来なくなったから忙しいんだ」

廊下を進んでいるとシーツの乗ったワゴンを押している恵が前からやってきた。彼女の後ろには使用済みシーツを入れたカートを押している若い看護師がいるため、二人はベッドメイクで回っていたのだろう。

若くてイケメンな理事長に看護師は緊張しているようだが、湊はスタッフを社員、患者を客と呼んでいるので、本人にすればそこまで距離があるとは思っていない。

そもそも、いくら肩書き上は偉いと言っても、ここで働いているのは全員湊よりも年上なのだ。一番近いのが一つ上の恵であり、それ以外は全員が十八歳以上である。

第三者の目もあるのであまり舐めた態度は困るが、年功序列を考えればもっと普通に接してくれて構わないのに、と青年は考えながら看護師にも一応の挨拶をしておいた。

「……お疲れ様」

「お、お疲れ様です。あの、これを片付けたらお昼を食べに行くんですが、有里先生もご一緒にどうですか？」

「丁度行こうと思っていたからいいぞ」

「本当ですか！　それじゃあ、すぐ片付けてきます。水智さん、急ぐよ！」

「は、はい！」

一緒に食事が出来るのが嬉しいのか、看護師は走って駄目なら競歩

で行くとばかりにハイスピードでシーツを片付けに行った。
追い抜いて先をゆく看護師を追いかける恵は大変そうだが、待つ時間が減るのならば人も歩いていないし、あれくらいの速さで進んでも別にいいかと湊も注意しないでおいた。
そうして、三分ほど待っていると貴重品をいれたバッグを持ち、休憩中のバッヂを付けた二人がやってきたので、湊は一緒に外の食堂兼レストランを目指していく。
廊下ですれ違う人々から挨拶され、時折看護師が仲間からずるいと言われているのを聞き流し、もう少しで一階に到着するというところで、湊の会社用の携帯に電話がかかってきた。
「はい、有里です」
《有里先生、お疲れ様です。脳神経外科の宮前です。すみません、いま院内か敷地内にいらっしゃいますか？》
「もうすぐ一階ロビーですが、何かありましたか？」
仕事中だろうと休憩中だろうと、学校などでこの時間にはいないと伝えていなければ頻繁に電話がかかってくる。
ある程度は他の科の医者に連絡して自分たちで解決してくれるのだが、開業して一月ほどしか経っていないにもかかわらず、ここが医療系世界シェアトップ企業の病院だからと、難病患者が多数訪れて判断が難しいケースも出ていた。
医者たちはしっかりと経歴をあらった上で面接して雇っており、人柄と実力は非常に高い事は湊も認めている。
しかし、いくら経験があろうと、最新の設備でも病気の原因を見つけるのが難しいこともあれば、治療が困難なこともある。
湊が呼ばれるのは大概がそういった厄介なケースであるため、昼食を一緒に食べるはずだった二人に長くなるから先に行けと手振りで伝えれば、電話の相手がいる二階に向かいながら話を聞いた。
《いま小児癌の患者さんが来られているのですが、少々難しい状態なんです。先生にも診て頂きたいのですが、第二診察室までお越しいただけないでしょうか？》
「分かりました。いま向かっていますから待っていてください」

電話を切ると人がいない場所でジャケットを脱いで元マフラーのネクタイに収納し、代わりに白衣を取り出して袖を通す。
小児癌で脳神経外科に来院しているとなれば、十中八九、脳に腫瘍が出来ているのだろう。難しいというのが患部の切除なのか、それとも抗がん剤等を使えないという話なのかは分からないが、思ったよりも簡単に済みそうだと青年は安堵する。
二階までエスカレーターで上がり、白い廊下を進んで診察室を目指す。相手の言っていた第二診察室の前に到着し、かかっている担当医の札の名前を確認すると、湊はノックをしてから部屋に入った。
「すみません、遅くなりました」
「いえ、突然お呼びしてすみません。こちら、桃井雛さんとお母さまです」
「はじめまして、当病院の理事長をしております有里です」
診察室にいたのは一目で富裕層と分かる品の良い女性、そしてウェーブがかった金髪の少女だった。
けれど、少女の方は可愛らしいブランド物の服を着ているというのに、肌の血色が悪くどこか疲れた様子をしている。
母親の方は挨拶をした湊に頭を下げたが、少女はほとんど動きもせず、本当に大丈夫なのか心配になるほどだ。
いつまで入り口にいてもしょうがないため、医者の隣まで進むとようやく少女の顔が見えた。頬が少々こけており、目の下にはくっきりと隈が出来ている。そして何より、濁ったような何もかもを諦めた瞳が湊は気になった。
「それで、難しいというのは？」
「はい、この写真を見てください。これは先月の頭に他所で撮られた彼女のＭＲＩなのですが、ここが白くなっているでしょう」
「ええ、間違いなく腫瘍ですね。切除は難しいと思いますけど、抗がん剤かレーザーってところでしょうか」
子どもは大人に比べ細胞の成長が活発なため、ただでさえ他よりも活発に成長を続ける癌細胞を取り除くのが非常に難しい。切除して内部を抗がん剤の混じった液で洗浄しようと、少しでも残っていれば

再発してしまうのだ。
それを考えると抗がん剤治療はほとんど効果がないため、切除できないならレーザーしか選択肢はないのではと考える。
もっと初期の段階ならば放射線治療も選択肢に入ったが、少女の腫瘍はかなり成長しており放射線治療では治しきれない。
故に湊は治療法を限定して淡々と話を進めたのだが、それを聞いていた少女の母親が口を挿んできた。
「あの、レーザー治療だと髪の毛はどうなるんでしょう？　それに再発のリスクは？」
「頭骨を切って器具を入れるので、そのスペース分の髪は剃ります。まぁ、他の部分で隠せる程度ですが。再発のリスクはやはりありますね。ご年配の方ですと癌の進行が進まなかったりするのですが、子どもは細胞分裂が活発に行われていますから、どうしてもリスクは残ります」
担当医師の宮前が説明すれば、患者が女の子ということもあり髪を剃るのは可哀想だと母親の表情が曇る。再発のリスクもあるとなれば尚更だ。
「一〇〇パーセント除去することは出来ないんですか？」
「正常な細胞が後に癌化することもありますし。脳だと幹部を取るだけでも障害が残る可能性がありますから、一〇〇パーセント除去するために周辺を多めに取ってしまうと重度の障害が残ってしまうかと」
転移を恐れて多めに摘出することはあるが、それは胃や食道などただちに命に関わることのない部分での話だ。
癌が発症しているのは脳なので、それでそんな事をすれば身体に麻痺が残るなど、重度の障害と一生付き合っていくことになってしまう。
他所でも同じような説明をされたらしい母親は、最先端の医療を扱っているＥＰ社の病院でも駄目だったかと肩を震わせている。
だが、少女はそれと対照的に、子どもらしからぬ淡々とした口調で言葉を発してきた。
「……どうせ、貴方もわたくしをなおせないのでしょう？　もう何人

ものお医者さまに言われましたから分かっていますのよ。どうせこのまま死ぬんですから、無駄なことをする必要はないですわ」
「雛さん、そうやって生きることを諦めては駄目だ。貴女に治す気がないと私たちもちゃんと治療してあげられないんだよ?」
「できるのなら初めから言っているはずですわ。それができないから、わざわざ病院の偉い人まで呼んでなおせないと説明するんでしょう?　子どもだからって甘くみないでくださいまし」
この病院に来るまでの間に、他所の病院でも同じ事を言われ続けた結果、彼女は自分の病気が治らないと悟ったらしい。
普通に過ごしているだけでも突然頭が割れるような痛みを感じたり、酷いと眩暈からの嘔吐や手足の麻痺が出る事もある。
彼女がやつれて目の下に隈を作っているのは、そういった症状で疲弊して、夜も満足に寝られていないことが原因に違いない。
幼い子どもがそういった辛い状況を味わい続ければ、こんな風に諦めてしまうのも仕方がないと担当医も同情的な視線を向ける。
だが、治せないと説明するために病院の理事長を呼んだ訳ではない。そもそも、治せないならはっきり告げるのも医者の役目だ。そんな事で理事長を呼んだりはしない。
担当医は少女の話を聞いて顔を上げると、傍らに立つ青年に視線を移して期待するように尋ねた。
「有里先生、治療できますか?」
「……まぁ、大して難しくありませんから」
彼の言葉を聞いた親子は目を見開いて湊を見てくる。
それはそうだ。さっきあれほど難しいと説明していたのだから、急に来た若い男が治療難度の低い症例だと言えば、どちらの言葉を信じて良いのか分からなくなる。
自分の言葉に驚いている相手の胸中をしっかりと理解しながら、けれど、訊かれる前に説明をしてしまおうと湊は話し出す。
「単刀直入に言わせて貰いますと再発のリスクもなく治療は出来ます。切除もしないので障害が残ることもありません」
「え、でも、さっき」

「宮前先生が言われたのは一般的な治療法での話です。しかし、自分が行うのは特殊な鍼治療です」
　言いながら湊は白衣のポケットから治療用の鍼の入ったケースを取り出し、実際の鍼がどんな物かを患者に見せながら説明を続ける。
「人は身体を動かす際に脳から信号を送り、それが神経を通って伝わることで動かしますよね。もし、それを鍼で止めてしまえば信号は伝わらず動かせません」
　鍼を使わずとも似たような事は出来るため、湊は母親の腕の一点を指で押さえながら、掌を閉じたり開けたりしてみろという。
　言われた母親は状況をよく分かっていないようだが、言われたとおりにしてみるも掌を閉じられず驚いている。
　鍼治療では血行を良くしたり身体の機能を高めたりするが、逆に身体の機能を停止させる方法もあるのだと理解して貰ったところで、湊は手を離して本題について語る。
「それと同じように細胞にも分裂するための指令を出すような部位があるんです。そこへ鍼を刺すと指令は送られなくなり、癌細胞なら時間経過で正常な状態へと戻ります。脳細胞全体の分裂がストップすることを心配されているなら、腫瘍部分は細胞的に他と繋がってはいますが、別ブロックのように分かれているので心配はありません」
「でも、脳に鍼を刺すなんて……」
「髪を剃ってメスを入れるよりマシでしょう。それに安全に出来るから俺が呼ばれたんですよ。治療はすぐに出来ます。終わったら三日ほど様子見で入院して貰いますが、病室ではなくアパートのワンルームのような部屋ですから、好きに過ごして貰って構いません」
　感染症という訳でもないので、親子で泊まれるルームの方を利用して貰って構わない。全ての診察室に置いてあるガイドブックを親子に見せ、こんな普通の部屋で入院するなど聞いた事もないと驚いているところで改めて治療の意志を確認する。
「……それで治療はどうします？　もしも、施術後に何かあれば勿論補償しますが、大切な子どもの命ですから金で解決できるとは思っていません。しかし、こちらで用意できる最もリスクの少ない治療法が

今お話した鍼によるものです。ご本人と保護者様の同意を得られなければするつもりはありません」
ゴッドハンドと呼ばれる名医たちでも、リスクなく脳の外科手術を行うことは出来ない。それをノーリスクで行えるのは、青年の持つ魔眼のおかげだった。
患部が体内にあろうとソコに繋がる線や点を魔眼で視て突いたり切ってしまえば、それだけで腫瘍に死を発現させられる。死ぬのは腫瘍としての機能なので、脳が部分欠損したりはせず、時間経過で見た目的にも正常な状態に戻る。
流石に医者や看護師たちに魔眼の話など出来ないので、どうやって腫瘍を殺しているかは患者に対する説明と同じものしかしていないが、論より証拠、百聞は一見にしかずという訳で、メスも入れずに体外から鍼を一発刺すだけで出来るのは本人の経験と勘によるものだと納得して貰っている。
ただし、何件も治るのを見ている医者と違い。患者はほとんど言葉だけの説明で納得して治療するかを決めてもらうので、ここで無理に頷かせる事は出来ない。
諦めた目をしていた少女と湊が視線を合わせれば、相手は瞳の奥に本当に小さな希望の光を宿して縋る様に見てきた。
「……ほんとうになおりますの？　たくさんのお医者さまが無理だと言ってましたのよ？」
「出来ないのなら最初から期待を持たせたりはしない。失敗すれば一緒に死んでやるから心配するな」
「あったばかりの方に一緒に死なれてもこまりますが、一人でないのは少しいいかもしれませんわね。わたくしは小学二年生の桃井雛です。あらためて貴方のお名前をうかがってもよろしくて？」
「有里湊だ」
「そう。では、みーちゃまと呼ばせていただきますわ。みーちゃま、わたくしをなおしてください」
これで最後。彼に治せないのなら、諦めて治療もせずに死のうと彼女は思っていた。

心の奥底では生きることを望みながら、しかし、苦しみながら生き続けるのは嫌だと進行を遅らせるような治療もする気はない。
彼女の瞳からその意思を読み取った湊は、母親の方を見て彼女にも意思の確認を取った。
大切な子どものことだけあって、相手はまだ決めかねていたようだが、諦めていたはずの娘が治療に前向きになったことで意を決したのか、最後には深々と頭を下げて頼んできた。
本人と保護者から許可を取ったなら何も躊躇うことはない。湊は相手に動くなよと声をかけてから、頭を掴むとすぐに左眼を蒼く光らせ一本の鍼を頭に刺した。
「……終わったぞ」
「え？　た、たったこれだけですの？」
何か大層なことでもすると思っていた少女は目を丸くする。それは母親も同じようで、一本の鍼を刺して抜いただけで終わりと言われて面食らっているようだ。
「ああ、一刺しだけだ。頭痛が消えたりしてないか？」
「そういえば、なんかすっきりしていますわ。頭のおくの響くかんじもなくなっています。ですが、こんな急によくなったりするものなのですか？」
「実際によくなってるだろ。治療費はいらないぞ。正規の治療じゃないから健診料以外の治療費を請求できないんだ。その代わり、一瞬で癌が完治したとか誰にも話さないで欲しい。これでも多忙で普段から病院にいる訳じゃない。それで噂を聞いた人間に殺到されれば追い返すはめになるから、変な期待を持たせて傷付けないためにも約束して欲しい」
湊は様子見で数日入院して貰うと言ったが、魔眼に医療ミスはないので本当に一瞬で完治しているのだが、相手には一時的に痛みが消えていること以外まだ実感がないはず。なので、病院で数日健康的な生活をして貰い。改めてＭＲＩで腫瘍が消えていることを確認して貰うまでがこの治療の流れだった。
治療したことを口外しないというのは、湊も言った通り正規の治療

ではない上に患者の殺到を防ぐ意味で重要な意味を持つ。後で誓約書を書いてもらうが、それは腫瘍が消えて完治したと確認し終わった後で構わないので、とりあえずの口約束だけ取り付けておいた。
少女と母親がそれに頷くと宮前に看護師を呼んで貰い。二人が泊まる部屋まで案内を頼む。母親はまだ娘が治ったと思っていないようだが、鍼を刺しただけで痛みが消えて娘が久しぶりに明るい表情を浮かべているので、今は何も言うつもりはないようだ。
「先生、どうもありがとうございました」
「何かあればベッドにナースコールのボタンがありますし、内線が使えるようになっていますから、〝＃９９〟を押してナースステーションにすぐに連絡してください」
「ええ、分かりました」
診察室を出て湊は廊下で二人を見送る。本当は宿直明けで帰るつもりだったが、仕事が合ってこんな時間まで残るはめになったものの、自分にしか治せない患者が来たタイミングに居合わせたのは幸運だったと言える。
生きることを諦めていた少女が部屋を出る頃には歳相応な笑顔を見せていることで、湊も少し柔らかい表情で彼女を見やった。
「みーちゃま、またお会いしましょうですわ」
「医者になんて二度と会わない方が良いんだがな。まぁ、ここは色々と設備が整ってるから、病気で落ちた体力を取り戻すリハビリとかを受けに来てもいいぞ。子どもスポーツ教室なんてのもあるから、今まで学校に通えていなくても友達も作れる。院内学級で勉強も見ているから何か受けたいのがあれば両親に申し込んで貰え」
そういってＥＰ社の敷地内でやっている習い事のパンフレットを渡す。こういった地味な収入源は馬鹿に出来ないので、湊は社員全員に隙あらば勧誘ないし宣伝しておけと言っている。
受け取った少女は楽しそうにそれを見ているので、本当にリハビリ等で何かを受講するかもしれない。
そんな事を考えながら看護師に案内されて遠ざかって行く背中を見ていると、母親と手を繋いで歩く少女が話していることが湊の耳に

も届く。
「お母さま、わたくしみーちゃまのいるこの病院の近くで暮らしたいですわ。どんな病気でもきっとなおしてくださるもの。お父さまにもお願いしてお引っ越しさせてくださいまし」
「う、うーん、急には無理だけど言ってみるのは別にいいわよ。二学期から学校にもまた通うなら、どこか探さないといけないから色々と考えていきましょうね」
相手は見るからに富裕層なので引っ越しくらいは簡単かもしれない。だが、何かあったら頼れる病院の傍に住みたいとは、子どものくせに年配者のような考え方だなと思わず苦笑する。
相手が廊下の角を曲がって見えなくなると、湊は宮前に昼食に行ってくると別れを告げ、恵たちのいる食堂で昼食を取り終えれば、そのまま本日の業務は終了だと自分の家へ帰って行った。

第百四十四話　初デート

８月１５日（水）
午前――巌戸台駅前

まだまだ夏真っ盛りのある日、岳羽ゆかりはクリーム色のシフォンブラウスにショートボトムスと踵のあるサンダルという涼しげな格好で駅前を目指していた。

左手を反しながら腕時計で時刻を確認すれば待ち合わせの十時まで二十分ある。まだまだ余裕だなとのんびり歩く彼女は、ようやくお互いの都合がついて実現したデートをそれなりに楽しみにしていた。

前日から悩んで決めた服で寮を出るときには、普段よりお洒落な姿を見た何人もの寮生に妬ましいと言われたが、仮にだろうと付き合っているのだからデートしても文句を言われる筋合いはない。

そも、最初は修学旅行と期末テストを終えたら一回デートする予定だったものが、相手が助っ人で出ているバスケ部の大会で順調に勝ち進み、八月末に行われる全国大会出場を決定するほどになったせいでここまで伸びたのだ。

いつデートが出来るか電話で尋ねたときなど、部活以外にも仕事だなんだと多忙アピールされキレかけて電話を切ってしまったが、湊が色々と普通ではないことは理解していたため、もう一度電話をかけ直していつなら会えるかを聞き直してデートへ漕ぎ着ける事が出来た。

どうしてデート一つに自分がこんなにも苦労しなければならないのかと疑問を持ちはした。

普通は男性の方から誘うのではないか、などという自分のイメージもあったので余計に思った部分はあるものの、夏休みに行った女子会では彼の家族であるチドリですら男から誘うものと答えたので、やはり世間一般の女子はそう思っているに違いない。

だが、相手は年中無休で人助けをしているような人間だ。幼少期の時点で、火事で燃えている建物に侵入し、そのまま人を抱えて二階から飛び降りてくるという、異常とすら言える行動を取っている。

どうして彼が人を助けるのかは分からない。本人に訊いたときに

は「目の前で困っていたら助けるだろ」と返されて思わず頷いてしまったけれど、青年の場合は頻度と内容の度が過ぎている。
こんな事を続けていれば、いつか彼自身が取り返しのつかない事故に遭うのではないか。そんな不安を覚えてしまう。
しかし、今日はただお互いの新しい一面を知るためのデートを楽しむだけだ。駅前に到着してみれば、既に青年が到着してベンチで読書しているのが見えた。
強い日差しの下で本を読むと紙面に反射した強い光で視力が落ちると聞くが、真夏なのにやはり黒いマフラーは外さないのかと突っ込みたい衝動の方が強かったので、ゆかりは相手の前まで向かうと先にお決まりの台詞で話しかけてみた。
「ゴメン、待った？」
「……徹夜でな。十二時間の遅刻だぞ」
「うぇっ!?　いや、私ちゃんと朝の十時ってメールしたよ？」
夜の十時から待っていた。疲れた表情で恨めしそうに言ってくる湊へ、ゆかりは送信履歴から待ち合わせ時間の連絡メールを探して相手に見せる。
そこには本日の午前十時に駅前集合と書かれており、どうすれば前日の午後十時と勘違い出来るのかと首を傾げるしかない。
相手が勝手に勘違いしたにしろ、ゆかりが遅刻したと思いながら十二時間も待ってくれていたことはありがたい。が、それなら電話の一本でもくれれば正しい時間を教えてやれた。
変なところで融通の利かない青年に、ゆかりが少々呆れていれば、湊は本を閉じてマフラーに仕舞いながら立ち上がりつつ口を開いてくる。
「ただの冗談だ。夏らしい涼しげな服だな。岳羽の髪色にもよく合っている」
「え、あ、ありがとう。君は……黒いマフラーって暑くないの？」
突然の冗談に驚く間もなく、服装を褒められたゆかりは戸惑ってしまう。友人と遊んだときに服装を褒められる事はよくあるが、彼氏に褒められると何だかこそばゆい気持ちになる。

自分たちが付き合っているという自覚がまだ湧いていなかった彼女は、恋人とはこういうものなのかと不思議に思いながら、話しかける前から抱いていた疑問を湊にぶつけた。
すると、湊は光沢のあるマフラーを撫でつつ素直に答えてくる。
「暑ければ外してるさ。それで、今日の予定は考えてるのか？」
「買い物してお昼食べて、少し遊んでオヤツ食べて、また買い物して晩ご飯食べて帰宅って感じ」
途中に食事を挿んでいるのは休憩という意味も含んでいる。身体能力だけでなく体力も化け物じみてそうな相手だが、病院の診断書を学校に提出しているのは事実だ。
さらに、修学旅行から約一ヶ月後ということは、周期を考えると相手はホルモンバランスを整える時期のはず。完全に同じかどうかはともかく、そういった女性特有の辛さを知っている身として、湊の体調の事も考えて大まかなプランを提示したのだが、返ってきた相手の反応はどこか呆れが含まれていた。
「なるほど、具体的な内容はないのか」
「むっ、デートプランは彼氏に考えて貰いたいっていう、この乙女心が君には分からないかなぁ」
「食事の場所も含めて考えてないとは言ってない。ただ、岳羽が何かみたいものがあるなら、普通にそちらを優先しようと思っただけだ」
「そうなの？　へー、やるじゃん」
相手の体調を考えて休憩を挿みつつのプランを考えていたが、それを素直に話すのは恥ずかしい。そう思ってノープランを指摘されたゆかりが小馬鹿にした表情で誤魔化せば、なんと湊はちゃんとデートプランを考えて来ていた。
相手はマメな性格をしているため、なんとなく考えていそうな予感はしていたのだが、実際に考えてくれた上で自身のしたいことを優先してくれていたのは嬉しい。
そんな事を思いながらゆかりは、せっかく考えて来てくれたのなら湊のデートプランに従うと答え、彼に渡されたバス券を受け取ると駅前から移動した。

――ショッピングモール〝ミルキーウェイ〟
中央区にかなり近いがギリギリで港区にある大型商業施設〝ミルキーウェイ〟。
ここはＥＰ社の土地であり、入るテナントの決定も含めて湊も経営に関わっているので、ほとんどの者が案内板や無料のパンフレットを見ながら目的地を目指していても、彼は問題なく最短ルートで辿り着く事が出来た。
知らない場所へ行って調べたり迷ったりで時間を使うくらいならば、自分がちゃんと案内できる場所で相手の興味ありそうなものを見て貰った方が良い。
そんな風に意外と真面目に考えて湊がここへ連れてくれば、夏前にオープンした事は知っていたが、近場にポロニアンモールがあるせいで来た事のなかったゆかりは、パンフレットを片手に目を輝かせた。
「うわっ、ここマリ・アンジュが入ってる！　それにＪＪピーリスが日本初出店って聞いたけど、ここだったんだぁ。ポロニがあるからノーマークだったけど、知ってたら開店セールとか狙ったのになぁ」
「……詳しいな。俺はファッションブランドはさっぱりだ」
「えっとね、マリ・アンジュは私が好きな服のブランド。革物の小物とかも結構扱ってて、そこのレザーケアセットは安いのにすごく質がいいの。今まで関東は渋谷と銀座、関西は神戸にしかなかったから渋谷に行ったときに見てたんだけど、近くに出来たのはかなり嬉しいなぁ」
実家が金持ちと言っても、ゆかりも月々の小遣いをやりくりしている立場なので、好きなブランドの開店セールがあると知っていたなら、一人でだって来たのになと少々残念がる。
しかし、今までは渋谷まで行かなければならなかったのが、バスで十五分ほどで行けるようになったのは非常に嬉しいと楽しそうに笑う。
それを見た湊が柔らかい表情を浮かべて歩き出すと、ゆかりも隣を歩きながら先ほど口にしたブランドについて説明を続けた。
「ＪＪピーリスは海外のブランドで、日本初出店でニュースにもなっ

たんだけど、そっちは二十代後半とか大人の女性向けかな。ただ、日本限定品もあるらしいからちょっと見てみたいかも」
「岳羽は普段からファッションに気を遣っているが、海外のブランドまでチェックしてるんだな」
「んー、やっぱ入ってくる情報量も考えると日本のがメインになるけど、雑誌で海外ブランドの特集ページとかもあるから、気になったのとかはメモしたりはしてるかな。てか、有里君も基本的にブランド物ばっかりだけど、興味無いならそれって誰が選んで買ってるの？」
「……保護者」
「Ｏｈ……」
皇子と呼ばれる青年は普段からブランド物ばかり身に付けている。裕福な家で暮らしてるらしい事は、入学式で運転手付きの高級車から降りてきた時点で分かっていたが、服は親に選んで買って貰っていると聞いてゆかりは複雑な表情を浮かべる。
確かにモテたいと思っている者や最初からファッションに興味があるでもなければ、男子中学生は自分で選んで服を買ったりしない者も多い。
けれど、大人びたこの青年もそういうタイプだとは思っていなかったので、意外だなと驚きながらゆかりは隣を歩く相手の服装を改めて眺めた。
黒いマフラーは置いておくとして、下は黒とグレーのチェックのズボンに茶色のレザーベルト、上は薄ピンクのシャツに深緑のネクタイを締め、白い縁取りがされた濃紺のジャケットを着ている。
彼はある中で選んで着ただけかもしれないが、とても似合っていて格好良いため、元々この服を選んだ人物は湊の魅力をしっかりと理解している人物なのだろう。
だが、よく考えたらこれは春先か秋の服装だ。まだまだ暑さの残る八月中旬にここまでキッチリとしては暑いに違いない。そんな暑さも無問題な彼は現在一人暮らしなので、本当にファッションに無頓着なのだと、青年の意外な弱点を発見したゆかりは相手が少し可愛く思えて口元を緩ませる。

「フフッ、有里君もちょっとファッションの勉強しなきゃ駄目だね。季節感とかちゃんと意識するともっと良くなるよ？」
「元々の私服は着物だからな。着物ならちゃんと季節に合わせて柄と生地を選べる」
　湊の持っている着物は基本的には無地の黒ばかりだが、柄のあるものや女性用の着物だって持っている。それらは季節や気候に合わせて選んで着るため、洋服のファッションに疎いだけだと青年が答えれば、ゆかりは彼の保護者もそういえば着物だったなと思い出していた。
「あー、なんか保護者の人も着てたね。やっぱり実家は和風の造りなの？」
「実家がどちらを指しているのか分からないが、生家は田舎ということもあって広い武家屋敷みたいなもんだ。チドリが暮らしている家も少し山の上にあるが、立派な山門のある武家造りの日本家屋だぞ。まぁ、ちゃんと洋室もあるが」
　和室ばかりの桔梗組にも洋室は存在し、実際にチドリや湊の部屋は洋室になっている。トイレやキッチンも完全に洋式なので、和風ではあるものの昔ながらの伝統的な暮らしをしているわけではない。
　とはいえ、百鬼の実家も桔梗組も馬鹿みたいに広いので、そんな場所で生まれ育った彼は、母方の実家を知っているゆかりからしても相当の金持ちに思えた。
「君って真面目にいいとこの坊ちゃんなのね」
「……初デート記念のプレゼントは一つまでだぞ」
「いや、集るつもりで言った訳じゃないから」
　興味を引かれる店が沢山並んでいる場所へ連れて来て貰ったのだ。こういうのは見るだけでも楽しいので、何かを奢って貰うつもりなどゆかりはなかった。
　だというのに、育ちの良さを指摘しただけで集り目的と思われては心外だ。
　ゆかりが抗議もかねて眉根を寄せて彼を見れば、相手は一度視線を合わせただけですぐに正面を向いてしまう。

交際開始直後にキスしてきた人間が視線を合わせて照れることなどないはず。ならば、何故相手が視線を外したのか疑問に思って正面を向けば、少女はその理由をすぐに理解した。
「わぁー・　テナントだから狭いのかなって思ってたけど、ここのマリ・アンジュって独立店舗のワンフロアより広いくらいじゃん」
二人の進む正面に見えていたのは目当てのファッションブランド〝マリ・アンジュ〟だった。店舗の広さも十分にあり、これはかなり期待できそうだと自然とゆかりの歩く速度が速くなる。
隣を進む青年は彼女のそんな様子に小さく笑い。速度を合わせながら店へと入ってゆく。
夏休みということもあり人は多いが、湊はかなり目立つので人は自然と避けてくれる。一緒にいるゆかりはそれに気付かず、ただスムーズに店内を見て回れて気分は上々のようだ。
「あ、この上着可愛い。今年の秋冬はグレーが流行色なのね」
「……どこで流行色なんて判断するんだ？」
「んとね。一番目立つ場所でディスプレイされてる物があるでしょ。そこをパッと見た感じで何色が多いかっていうのが一番分かり易いけど。流行色ってファッション系の団体が決めてるものだから、そこのホームページみたら来年とかのも分かるよ」
ゆかりが秋物のトレンチコートを見ていれば、湊が不思議そうに流行色について尋ねてくる。何でも知っていそうな彼が訊いてくるなど珍しいが、ファッション系に疎い事は先ほど分かっていたので、ゆかりはディスプレイされた商品をいくつか指しながら丁寧に教えてやる。
デザイン等は異なっても置いてあるのは彼女の言う通りグレーが多い。同じ色だから固めて置いていると思っていた湊は感心したように頷いているため、ちょっとずつでもファッションについて学び始めているのだろう。
彼ならば独自路線に走っても何も言われないとは思う。実際、制服の時点で多数のアクセサリーを身に付けていたり、ジャケットの代わりにフード付きコートを着ていたりと半分私服状態だ。

それでも特に何も言われず、むしろ着こなしが格好良いと評価されているので、素材が良い人は何を着ても似合うから得だとゆかりは小さく嫉妬を覚えて苦笑する。
「フフッ、まぁ、流行色は頭に入れておくくらいで意識し過ぎる必要はないけどね。人によって似合う色っていうのがあるし。ファッションの勉強するなら、自分の髪や肌の色で何色が似合うかを考えた方が良いよ」
「そうか……なら、これとかは岳羽に似合いそうだ」
言いながら青年が手に取ったのは、小物の棚に置かれた白いチョーカーだった。レザー生地で出来たそれは、ベルトの太さよりも大きなハートがついており、派手さはないがその分色んなファッションに合わせ易そうである。
手渡されて商品を眺めるゆかりも、元々ハート柄が好きなのもあって、非常に心惹かれるデザインだと熱い視線でジッと見ながら感想を述べる。
「これ、すっごくいい！　渋谷店じゃ見たことないけど新作なのかな？」
「店舗限定物っぽいな。そこに書いてある」
言われて視線を向ければ、チョーカーの置かれていた棚のポップに『ミルキーウェイ店限定！売り切れ次第終了！』とカラフルなペンで書いてあった。
店舗限定物で売り切れ次第終了というのは、高確率で再販されない本物の限定品であったりする。
後に再販するときには、リニューアルバージョンといって微妙にデザインが変わる事もあるので、気に入ったならここで買っておかなければ次に来たときにはなくなっているだろう。
商品を確保しつつ値段を確認することにしたゆかりは、元々チョーカーの置かれていた場所にあるプレートを手に取った。
「よ、四千円＋税ってことは四二〇〇円かぁ。うー、微妙に高い。有里君、クーポンとか持ってない？」
「……施設内の店なら基本的に十五パーセントオフの会員証ならあ

る」
「それ使うといくら？」
「三五七〇円だな」
「よし、買おう」
　縫い目や金具など細かな部分まで吟味し、デザインと造りの良さが値段と釣り合っていると判断したのか、ゆかりは店内を見ている途中だというのに購入を決定した。
　かさ張る物ではないので別に構わないのかもしれないが、中々に思いきりのいい性格だなと湊も感心していれば、チョーカーを持ったままゆかりはさらに店内を見て回り、二十分経ってからようやくレジへと向かう。
「すみません、会計お願いします」
「ようこそ、いらっしゃいませ。こちら、すぐに付けられますか？」
「んー、どうしようかな。まぁ、合わせれるし、それでお願いします」
「かしこまりました。こちら、四二〇〇円になります」
　店員がレジを打って値段を言いながらタグを外すのを眺め、湊は横から会員証とクレジットカードを出す。
　その際、店員と目が合って相手が少々驚いた顔をした後、隣のゆかりを見て何やら口の端を歪めているので、やはりこの施設内の従業員らには顔を覚えられていたかと内心で溜め息を吐いた。
「お値段変わりまして三五七〇円になります。カード一括でよろしいですか？」
「……ああ」
「では、カード一括でお預かりします。こちら、サインをお願いします」
　会員証価格になった後、湊はペンを受け取りサインしようとする。しかし、自分が買うつもりで財布まで出していたゆかりは、驚いた表情で湊の腕を掴んで相手を止めた。
「え、ちょっ、私これ自分で買うよ？」
「初デートの最初に買った物がプレゼントっていうのも良いかと思って、俺が岳羽に贈りたいんだが駄目だろうか？」

「な、なんかずるい……。どこでそんな女子のツボを押さえるテクニックを学んだんだか」
青年が真っ直ぐ見つめて尋ねてくれれば、ただ頷くと負けた気になるのか目を逸らして口を尖がらせながらも、記念や思い出を大切にしたい少女としては、最終的に照れながら頷くしかなくなる。
そんなやり取りを目の前でされた店員は目元が緩むほどの笑みを浮かべているが、仕事もちゃんとこなすらしく、サインを受け取るとカードを返して来た。
「カードのお返しとお客様控えでございます。それとこちらレザーケアセットを現在サービスしていまして、〝彼女さん〟にお渡ししておきますね」
「わ、すごいラッキー！　どうもありがとうございます」
「いえ、また〝彼氏さん〟と一緒にいらしてくださいね」
プレゼントにオマケまで貰えたゆかりは、店員に礼をしてご満悦で店を出てゆく。
だが、レザーケアセットのサービスなど本来はしていない。どこにもそんな事は書いておらず、渡した後こっそり湊にウインクを飛ばされれば如何なニブチンでも気付く。
そう、渡されたオマケには「応援してますよ、有里さん」という意味が籠められていた。
これで次に会議等で会ったときには、この店の店員からゆかりとの関係について色々と訊かれるに違いない。
人を寄せ付けない雰囲気を纏っているようで、実際には人助けをして大勢に慕われている弊害だ。もっと厳格なオーナーとしての顔を見せておけばよかったと、湊はテナントの従業員らとのこれまでの付き合い方を今さら後悔した。
そうして、湊もゆかりの後を追って店を出ようとしたところ、先に出ていたゆかりが背中を向けて何やらゴソゴソとしていたかと思えば、突然得意げな顔で振り返ってくる。
「じゃーん！　どう？　似合ってる？」
振り返ったゆかりの首には白いチョーカーが巻かれていた。確か

にすぐに付けると言っていたが、店を出るなり付けたことに湊は少々驚く。
　とはいえ、白いチョーカーはゆかりによく似合っていた。ハートのデザインも彼女のイメージにピッタリで、感想を求められた湊は小さく笑いながら頷いた。
「ああ、やっぱり岳羽の髪色に合ってる。普段から身に付けてくれると嬉しい」
「フフッ、白だから合わせ易いしね。まぁ、ファッションによっては付けれないときもあるけど、優しいゆかりさんが彼氏の頼みをちゃんと聞いてあげますよ。ていうか、プレゼントありがと。大切にするね」
　レザーケアセットの入った袋を持つ手とは反対の手でチョーカーに触れ、ゆかりは悪戯っぽい表情を浮かべてから、すぐに嬉しそうに笑顔を弾けさせる。
　時々暗い表情を浮かべることもあるが、やはり年頃の少女には歳相応の笑顔がよく似合っている。
「さて、それじゃあ優しいゆかりさんは次は何を見たいんだ？」
「えっとね、ここのティンクル・フェアリーに行きたい。あ、ティンクル・フェアリーっていうのは雑貨屋さんなんだけど、ファンシーなインテリアとかも置いてる店でね」
　ゆかりがパンフレットを指して次の行き先を告げると、湊は相手に歩調を合わせて隣を歩く。
　チドリだけでなくその友人であるゆかりたちにも笑っていて欲しいと思っている青年は、今の相手の顔をしっかりと記憶に焼きつけ、彼女らがこんな日常をいつまでも送れる様に影時間の戦いへの決意を新たにした。

影時間――巌戸台駅裏
　分寮を出て少し行った場所にある商店街を抜け、駅の改札口から線路を挿んで反対側にある個人商店の並ぶ路地の交差点。そこでは、今まさに戦闘が行われている最中であった。
「ポリデュークス！」

赤いベストを着た少年、真田が走りながら召喚器を額に当てて引き金を引く。
彼の呼び掛けに答えるよう、渦巻く水色の欠片の中から金髪を揺らし現れた人型ペルソナ〝ポリデュークス〟は、上空へと飛びあがると敵目がけて雷を落とす。
攻撃は見事命中し、巻き上がった砂埃が晴れる前に会心の手応えを感じて真田が口元を吊りあげれば、次の瞬間、砂埃の中からカブト虫型のシャドウ・皇帝〝死甲蟲〟が飛び出してきた。
「ぐあっ!?」
翅を羽ばたかせて飛び出した死甲蟲は、そのまま先端が仮面になった角でポリデュークスの腹部に突進を仕掛け、相手を街灯のポールへと叩きつける。
敵の突進と背中からぶつかったダメージがフィードバックし、真田がその場に蹲れば、敵を挿んで少し離れた場所から情報を探っていた美鶴が声を飛ばした。
「このシャドウは雷に耐性を持っている！　お前たちは物理スキルで攻撃を仕掛けるんだ！」
バイクに積んだ補助機材を使いながらアナライズを使用した美鶴は、敵の持つ耐性を看破するなり、自身も戦線に参加しようと左手に剣を持ち、右手で召喚器を掴んでペルソナを呼び出す。
「こい、ペンテシレア！」
冠を戴き、鉄仮面を被ったアマゾネスの女帝〝ペンテシレア〟は、呼び出されるとポリデュークスを街灯へ押さえつけている敵へと接近し、両手の剣で素早く敵を切りつける。
いくら背中が甲羅のように硬いと言っても、飛んでいるときにはその部分は開いている。そこさえ避ければ、下にある透き通った翅など簡単に切り裂く事が出来た。
《ギギギィッ!?》
翅を切られ飛ぶ力を失い、背中から敵が落下すればその瞬間に最大の攻撃チャンスが生まれる。真田はまだ完全に復帰できておらず、自分は召喚したばかりだった美鶴は、このまま敵を倒してしまえと右の

路地にいた荒垣へ指示を送った。
「決めてくれ、荒垣！」
「まかせろ！」
斧を持って走り込んできた荒垣は、起き上がろうとジタバタもがいている敵を見つめ、召喚器をこめかみに当てると躊躇いなく引き金を引く。
「ぶっつぶせ、カストール！」
一本足の黒い騎馬に跨り現れた、法王〝カストール〟は大きく跳躍すると上空から敵に向かって勢いよく落下する。
相手越しに路面が割れるほどの威力で踏みつけられた敵は、手足をピンと伸ばすと最後は耐えきれなくなったらしく、黒い靄になって消えていった。
それを見た美鶴は、今日もどうにか敵を倒すことが出来たと安堵の息を吐き。ペルソナをまだ消していない荒垣に近付き、もう敵の反応がないことを伝える。
「荒垣、今日のイレギュラーシャドウは今ので最後だ。ペルソナを消していいぞ」
「っ……ああ」
声をかけられた荒垣は、目を瞑って何やら集中するような様子でペルソナを消している。光の粒になって消えてゆくペルソナを見てホッとした顔をしているが、別にそんな事をせずとも消せるはずだ。
昔からペルソナ召喚の訓練を受けている己と違い。呼び出せるようにはなったが、まだ召喚に慣れていないのだろうかと美鶴が不思議に思っていれば、先ほどまで地面に蹲っていた真田が不貞腐れた顔でやってきた。
「まったく、ラストの敵が雷耐性とはついてないな。もっと早く分かっていれば拳で挑んだものを」
「それについては悪かった。まだアナライズの勝手に慣れていなくてな。もう少し訓練を積めば解析までの時間も短縮できるだろう」
敵の耐性さえ分かっていれば、最初から雷で攻撃せず敵の反撃を受けることもなかった。活躍出来なかった真田がそんな風にいえば、未

だに敵の能力解析に時間が掛かっている美鶴は困ったような表情で謝罪するしかない。
美鶴のペンテシレアは本来戦闘タイプのペルソナだ。しかし、アナライズや索敵に応用出来る能力も備えていたため、調整と補助機材の使用によってなんとか実戦で使えるようにしているのだ。
S・E・E・Sの活動は去年から始まったが、最初は真田たちがペルソナの召喚に慣れるために、ラボの方で調整個体の訓練用シャドウ相手に戦っていた。
それが一段落して今年になってからは、街中に現れたイレギュラーシャドウと戦うことで、アナライズ等も実戦で使うようになり。まだまだ不慣れなことで時間はかかっているが、戦闘では美鶴のこの能力に助けられている部分も多々ある。
だというのに、自分の判断ミスを棚に上げて八つ当たりする真田に、話を聞いていた荒垣は幼馴染として呆れた顔を向け、何かと背負い易い性格の美鶴のフォローへと回った。
「様子見の段階で突っ込んだ馬鹿の不注意だ。お前が気にすることじゃねえ」
「いや、私自身も現状に満足していないんだ。あと一人くらい増えればタルタロスへ行くようにもなる。その際、今の解析速度では迷宮のようなあの場所の攻略を進めるのは難しいだろう。感知型のペルソナ使いが仲間になってくれればいいが、それまでは私が何とかするしかない」
イレギュラーシャドウを狩るのも大切な仕事だが、最終的な目標はタルタロスの謎を解明し、影時間を消すことにある。
外では逃げ場があるので戦えているが、逃げ場のない迷宮での戦闘になれば今の解析速度では間に合わない。
専門家が加われば、そちらに任せるが、仲間が増えても感知型がいなければ美鶴がサポートに回るしかないので、美鶴は誰に言われずとも能力を向上させるつもりでいた。
フォローしてくれた荒垣に感謝しながら美鶴がそんな風に言葉を返していれば、何やら名案を思い付いた顔で真田が口を開いて来る。

「探し物が得意な人間をスカウトすればいいんじゃないか？　ペルソナは自分の分身なんだろ。なら、探し物が得意な人間なら感知型のペルソナに目覚めるはずだ」
「その可能性はあるが、まず影時間の適性を持っている人間がいないんだ。そこからさらにペルソナに目覚める者など極一部。狙った能力を持つ者をスカウトするのは難しいな」
　真田の言いたい事は分かる。力自慢の人間のペルソナがパワータイプになるように、感知型も探し物が得意な人間に目覚める可能性は確かにあるのだ。
　けれど、それ以前に影時間への適性を持っている者がまずいない。
　湊とチドリという中等部に入学した時点で馬鹿げた適性値を叩き出していた者もいたが、チドリとの約束で二人を勧誘出来なくなった以上は他を当たるしかなく。現状、その〝他〟にあたる人物が発見されていない。
　そういう訳で、狙った能力を持った者のスカウトなど夢のまた夢だと美鶴は答えた。
「つか、アキはそんな人間に心当たりはあんのか？」
「そうだな。やはりそういった事は本職の人間の方が得意なはずだ。黒沢さんとかどうだ？」
　真田がいった黒沢さんとは、ポロニアンモールの交番に勤務している男性警察官だ。孤児院の火事があった後、色々とよくして貰い。真田夫妻に養子に貰われた後も付き合いが続いている。
　彼のような警官なら本職だけあって探し物は得意なはず。真田の言葉に納得した荒垣は感心したように頷いた。
「あー、確かに警察や探偵なんかは探し物も得意そうだな。けど、警察って探し物が得意っていうより、経験則に基づいて見つかるまで探してるだけじゃねえか？」
「……一理あるな」
「フフッ。まぁ、候補者探しはグループでもしている。何か進展があれば君たちに伝えるから、今日は一先ず帰ろう。ご苦労だった」
　二人のやり取りに思わず笑ってしまった美鶴は、戦闘で疲れている

二人を労いつつ寮への帰還を促す。
大きなダメージは負っていないが、影時間での戦闘は慣れるまでは余計に疲労が溜まるのだ。
また明日にでもイレギュラーシャドウが現れるかもしれないので、休める内に休んで貰おうと美鶴もバイクの元へ向かえば、徒歩で帰る二人は先に行くと声をかけてから寮へと歩き出していった。

第百四十五話　全中バスケ

８月２２日（水）
午後――都立運動公園・体育館
八月の頭にブロック大会で優勝した月光館学園男子バスケ部は、全国大会初日の予選を突破し、二日目の本戦では見事に勝ち進みベスト８への入賞を決めていた。
本日最後の試合を勝てば明日の準決勝に進むことが出来る。都大会と同じ会場である体育館には大勢の応援が駆けつけており、選手らもここまで来れば目指すは全中制覇と気合十分であった。
そう、対戦相手が全中三連覇を狙っている早瀬護のチームでなければ。
「カバー！　誰か、早瀬を止めろ！」
パスのボールを奪った色黒の少年がドリブルでコートの中央を疾走する。
相手を止めようにもそれぞれがエース級の実力を持った敵チームの選手らが壁となって接近を阻み、彼らを振り切って早瀬の前に出ても切り返しで躱され触れる事も出来ない。
「ナイッシュー！」
全員を躱してゴールに辿り着いた早瀬は、レイアップシュートで悠々決めるとチームメイトと観客席に手を挙げて応えている。
必死に止めようとして何も出来なかった渡邊たちは、都大会決勝で対戦した忍足が、どうして反則を使ってでも勝ちにこだわろうとしたのか今になって理解した。
以前、地区大会で戦った事のある彼らとは実力がまるで違っている。彼らは怪我や疲労を考えて、地区大会などではスタメン選手をほとんど温存して実力もセーブして戦っていたのだ。
第二Ｑの開始から三分で〝１４対３７〟と大差がついている。これがようやく都大会上位程度の実力になれた月光館学園男子バスケ部と全中連覇を狙う早瀬たちとの実際の差だった。
「お前ら、去年よりも上手くなってるよ。けど、勝つのは俺たちだ」

言いながらニカッと歯を見せて早瀬が笑う。同じ地区だけあって彼も月光館学園の選手らをちゃんと覚えてくれていた。
しかし、覚えてくれていたところで何だというのだ。仮に相手の人数が一人少なくても勝てる気がしない。
純粋な個人個人の実力差は当然として、会場中が熱気に包まれ雑誌記者やテレビカメラまで入っている全国大会独特の雰囲気、戦ってきたチームの実力が高いせいで今までよりも蓄積した疲労、全中三連覇を目指し圧勝を続けている格上が相手という重圧、そういった要因がいくつも重なったことで、渡邊たちは本来の実力を出しきれないまま心が折れかける。
だが、
「……指先で押す様に……叩きつける……」
まだ一人会場の空気に一切呑まれず、何かを呟きながら鋭い視線で早瀬を見続けている男がいた。
長い髪を縛り、右眼に眼帯を付けているものの、彼だけは身体能力で早瀬たちに劣っていない。
これまでは早瀬に抑え込まれていた。けれど、それは技術等で劣っていたため、相手に上手く躱されてきただけのこと。
心が折れかけた味方は、助っ人の湊がまだ諦めずにいる姿を見て、自分たちが先に諦めてどうすると奮起する。
「まだまだこれから！　声出していくぞ！」
『オーッス！』
大差がついて諦めるチームはこれまでいくつもいた。だが、このチームはまだ諦めていないと分かった早瀬は、何やら嬉しそうに口元を歪ませている。
それを見た渡邊はスローインに向かいながら、その余裕面を二度と出来なくしてやる、と左サイドに向け強くボールを投げた。
「会長！」
ボールは明らかにコート外に向かっていたため、敵チームは誰も取りに向かっていなかった。焦って取りに向かったところ、手で弾いてコート外に出たらそれだけで相手が儲けるのだ。必要のないところ

でリスクを負う必要はない。
そう考えていたせいで、早瀬たちは逆サイドからコートを横切る選手がいることに気付くのが遅れる。
『っ!?』
コート外に出る直前で追い付いた湊は、片手を伸ばした状態で受け止め、ボールを掴んだまま後ろ回し蹴りを繰り出してゴールの方へと向いた。
まわりに選手がいればファールになっていただろうが、誰もいないところでなら文句を言われる事はない。敵チームより動き出しの速かった湊は、そのままドリブルでゴール目指して駆けていく。
ディフェンスに身長一八七センチの相手チーム一の長身選手が正面にやってくるが、上半身の動きで右に抜くフェイントを入れ、ボールを背面でドリブルして左に送りながら、フェイントに引っ掛かり相手の身体が泳いだところで、再度右側へと切り返し完全に抜き去った。
左から抜くのが本命だったと思って無理に動こうとした相手は、まさかの二重フェイントに対応しきれず尻もちをつく。
だが、相手を後ろへと置き去りにしてゴールへ向かう湊の前に、戻ってきていた早瀬が立ち塞がった。彼を抜けば誰もいないが、その彼が現在の中学バスケの頂点にいるのだから質が悪い。
「お前、面白いな!」
チームで最も大きい番号を付けていながら、実力は素人が見ても分かるほどチーム内で飛び抜けている。これまでは早瀬が単独で止めたり、他の選手が数人がかりで止めてきた。
つまり、裏を返せばエース級のメンバーが集まるチームでも、早瀬以外は単独で止められない事を表している。
先ほどのスローインをキャッチした際のアクロバティックな方向転換に加え、難易度の高い背面ドリブルにフェイントを組み合わせてもミスしないボールコントロール、こんな選手がいて話題にならないはずがない。
けれど、こんなにも目立つ見た目をしていながら話題はおろか名前

も聞いた事がなかった。転校生か知らないが、こんな選手がいるのならもっと早く戦ってみたかったと、早瀬は湊との直接対決に獰猛な笑みを浮かべて挑む。

「――――っ」

「させん！」

先ほどの選手を抜いたときのように、今度は左に抜くフェイントを入れてボールだけ右側へと送る。

しかし、直前のやり取りを見ていた早瀬は湊の体重移動とボールの行方に意識を集中させ、フェイントに一切引っ掛からずに湊の進行を阻んでいた。

二回目のフェイントのために一時的に手放したボールを狙って相手の手が伸びてきて、湊は奪われないよう素早くもう一度背面ドリブルで左側へと戻し、ボールと相手の間に自分の身体を挿んで奪われることをなんとか防ぐ。

一応の危機は回避したがここで足止めを喰らっていれば相手チームの選手が戻ってくる。仮にボールを奪われなかったとしても、ボールを持っていられる時間に制限があるため、どちらにせよ攻めあぐねていれば相手ボールになることが決まっていた。

（強く叩きつけて、俺がボールに合わせるっ）

相手ボールになることが決まっているなら、その前に仕掛けてシュートへ持っていくしかない。

湊は相手の動きに集中しながらボールが後ろに飛ぶように強く叩きつけると、あっけに囚われている相手の目の前で自分も後方に跳んだ。

「後ろに跳びながら空中でキャッチに持っていくのかっ!?」

バウンドして跳ね上がったボールを追うように跳んだ湊は、ボールを空中でキャッチするとそのまま放り投げた。

ボールを叩きつけた時点では後ろの様子など正確に分かっていないはず。けれど、湊は誰もいない方向にボールが行くように調整し、自身も空中で追い付くタイミングと速さで跳んで空中でのシュートに持っていった。

そんな不安定な体勢からのシュートが決まるのかと会場中がボールの行方を目で追えば、ボールはバックボードに触れることなくリングをくぐっていた。

＊＊＊

湊たちバスケ部が全国大会出場を決めた事で、応援席には大勢の学校関係者が集まっていた。

本日は桜も応援に来ており、初めて会ったゆかりが彼女として挨拶をする一幕もあったのだが、今は会場中が静まり返り全員が試合の展開に目を奪われていた。

第二Ｑ残り二分、点差は〝２２対４１〟と僅かに縮まっている。だが、先ほどの湊の空中シュート以降、試合はほとんど動いていない。

その理由は両チームのエースが正面からぶつかりあっているからだ。

スローインでボールを貰った湊がコートを駆ける。それを追うように早瀬も駆けていき、ボールを持っていない早瀬が先に回り込めば、奪われまいと湊はバックロールターンで躱してシュートに持っていこうとする。

けれど、抜かれる時点で動き始めていた早瀬は、シュートのボールが湊の手を離れた直後には追い付いてコート外へと弾き飛ばす。

そうしてまた、スローインから試合が再開しようと、お互いがお互いのシュートを阻んでほとんど点が入らなくなっていた。

「あの早瀬という男、信じられん反射神経だな」

バスケに関しては素人だが、抜かれてもすぐに立て直して追い付いている姿を見て、真田は早瀬のとんでもない反応速度に思わず唸る。

自分より速い湊とほぼ同等、格闘技をやっていれば野試合という形で手合わせしてみたいほどの逸材だ。

「あいつ、ストリートもやってるんすよ。まぁ、それ言ったら有里の動きもどっちかっつーとストリートっぽいけど」

「ありゃ、早瀬から動き奪ってるだけだろ。それ以外は回し蹴りとか完全にバスケではねぇな」

偶然会って解説役にと近くに座らされた宮本が早瀬の情報を教え

れば、その真後ろに座っていた忍足が呆れ気味に淡々と呟く。
　都大会でのことがあったので最初は剣呑な空気が漂っていたが、それぞれの幼馴染が試合が始まるから後にしろと言った事で、今は大人しく試合を観戦していた訳だが、忍足の言葉に疑問を覚えたのか美鶴が質問をぶつけてきた。
「動きを奪うとはどういう事だ？　有里は元々テクニックで秀でていたように記憶しているんだが」
「あー……あいつは素人だから相手躱すときの動きだとかは、ほとんど感覚で後は見よう見真似でやってるみたいなんですよ。その証拠にこれまでの試合だと走って逃げれなきゃジャンプでシュート打つばっかで、ドリブルで敵を躱すのはほとんどしてないんです。理由は躱す技を持っていないから」
　年上で何やら圧倒的なオーラを纏っている美鶴が相手だとやりづらいのか、忍足も素直に質問に答えてしまう。
　だが、そのおかげで理解出来た美鶴が納得したように頷けば、ジッとコートを見つめていたチドリが口を開いた。
「……湊はまだまだ素人なのよ。身体能力頼みで足りない分はセンスで補ってここまで来れてしまった。だから、圧倒的に経験が不足してるの」
「でも、有里君ってちゃんと部活の練習に参加してたでしょ？」
「チームとしての練習はしてたでしょうけど、ああいうテクニックみたいなのは教えてないはずよ。時間が足りなくて湊を入れた状態でチームが機能するようにするのがやっとのはずだし」
　チドリの言う通り、湊が参加している間、部活で行ったのは基礎的なメニューとチームでの連携の練習ばかりであった。
　それは都大会で判明した、味方のパスが湊の長所を殺しているという課題をクリアするためであり、練習の甲斐もあってチームメイトらは部員と湊でパスを使い分けられる様になった。
　おかげでブロック大会やこれまでの試合では、湊を軸に攻めて点を取って来られたが、ここに来てついにそれが通じない相手と当たってしまう。

「本人たちには悪いけど、湊以外の選手はいいとこ二流ばっかり。これじゃあ一流の中に超一流が混じってるチームに勝てるはずないわ」
「そんな、他の皆さんも頑張って練習してたんですよ？」
「いや、正しいと思うぞ。月中（つきちゅう）は山井と渡邊が他より上手いくらいで、その二人だって都大会レベルでブロック大会の選手らと比べたら平均ってとこだ。俺や忍足の方がまだ上手い」
「まぁ、有里頼みで勝ち上がってきたツケだな。人間どうしても楽な方に逃げやすい。あいつらは途中から勝ちパターンに乗っかって自分らのスキルアップを怠ってたんだよ」
　嘲る様に告げる忍足に宮本が眉を顰めているが、彼の言う通りどんなに頑張って練習しようが現実は非情である。必死に練習しても渡邊たちの実力が劣っているということは、相手の方が才能に恵まれていたか、もしくは渡邊たち以上に努力してきたのだろう。
　経験者の目から見ても、湊以外の選手は都大会からほとんど成長していない。それは大会が進むにつれて彼らの力が通用しなくなり、勝つには湊に頼らなければならなかった事が原因だ。
　おかげで湊に出すパスの精度等は向上しているようだが、チームスポーツは突出した選手がいようと数で押さえる事も出来る。
　今はエース同士が次元の違う戦いを行っているので試合は動いていないが、もしも均衡が崩れれば試合は一気に進むことが予想された。
「でも、ようやく湊は同格の選手と出会えた。フィジカルは湊が上、テクニックは相手が上、この二人の対決の方が今までの試合より余程面白いわ」
　ボールを持って必死にゴールを目指す少年と、それをさせまいと喰らいついて阻んでいる青年を見て、チドリはとても楽しそうに口の端を吊り上げる。
　彼女以外の者たちもきっと同じように思っているのだろう。声援を送るのを忘れ、ボールがつかれる音と二人の足音だけが体育館中に響いていることがそれを証明していた。
＊＊＊

「一年、ドリンク持ってこい！」
第二Ｑが終わりハーフタイムに入るなり、顧問の盛本が指示を飛ばした。現在の点数は〝２９対４５〟でまだ負けているが、湊と早瀬の一騎打ちになったことで点数はほぼ入らなくなり、若干だが追い付きつつあった。
言われた一年が急いでボトルを持ってくると、湊はそれを一気に飲み干してタオルで汗を拭いている。
反対側のベンチも同じような動きをしており、休憩時間だというのに鋭い視線で闘気を放っているエースに、チームメイトたちは声をかけづらそうにしていた。
ただし、盛本だけはその間も湊の身体を冷やさぬように上着を羽織らせたり、タオルを交換したりと忙しく世話を焼いている。
「有里、体力はまだ大丈夫か？」
「……大丈夫です。ただ、それは向こうも同じかと」
「相手が中ばっかりでお前がスリー中心だったから点差は縮まったが、シュート数自体は一本しか違わない。簡単にひっくり返るから集中切らすなよ」
「はい」
顧問が一人にかかりきりになっても他の選手らは文句を言わない。彼一人がどれだけ激しく動いていたかを見ていて、ここで何かを言える者などいなかったのだ。
だが、後半に向けて何も作戦を考えないわけにはいかない。ドリンクとレモンの蜂蜜漬けを渡して湊の体力回復の処置をある程度終えると、盛本は渡邊たちに二人の対決から絶対に目を離すなと告げる。
「お前ら、二人の対決をしっかり見とけ。これだけの対決なんて大学やプロでも滅多に見れないからな。間近で見て学べるチャンスを無駄にするな。いつ均衡が崩れるか分からないから、コートの中では他の選手のマークも忘れるなよ」
これほどの試合など滅多に見れる物ではない。今はまだ無理でも今日見た試合がいつか活きるときが来る。
そして、もし二人の対決に決着が付けば一気に試合は動くのだ。他

の者たちはその瞬間に反応する必要があるため、コートに立っている間は絶対に気を抜くなとも注意を受けた。
ベンチの選手も含めて全員がそれを胸に刻むと、ハーフタイムが終わる頃になって円陣を組んで気合を入れ直し。試合再開のためにコートに戻る途中、渡邊と山井が湊に声をかけた。
「こぼれたボールはオレらで拾いますから、会長はあいつに勝つことだけに集中してください」
「……悪いな。助っ人なのに勝ててなくて」
「早瀬とタイマンしてる姿見て、そんな事を気にしてるやつはいねぇよ。こっちこそ、お前に頼りぱなしでゴメンな。でも、お前なら早瀬に勝てるって信じてる。だから、絶対勝てよ」
二人の信頼を受け取った湊は静かに頷くと意識を切り替えて、先にコートで待っていた少年だけに集中してゆく。
周りから頼られてばっかりの人生だが、命のやり取り抜きでこんな風に頼られ、自分の勝利が味方の勝敗にまで影響することなど久しくなかった。
やる事は単純だ。ただ全力で相手に勝ちにいけばいい。味方の信頼が重荷になる事など一切なく、湊は闘気剥き出しの少年の前に立つと正面から向き合った。
「有里、お前の名前しっかり覚えたぞ。出来れば、お前とは決勝でやりたかった。こんなに楽しい試合は初めてだ」
「……ああ、俺もお前との対決が一番燃えてるよ」
「それは良かった。けど、決着は付けなくちゃな。悪いが勝って三連覇の夢を果たさせて貰う」
「こっちも負けられない理由がある。だからその夢は諦めてくれ」
これまでの試合で自分を本気にさせる者と出会う事のなかった二人は、心の中でずっと戦っていたいと密かに思っていた。
しかし、それ以上に目の前の男に勝ちたいという想いがある。決勝という大舞台ならばさらに熱い戦いとなっただろうが、準決勝への切符をかけた試合だという現実は変わらない。
第三Q開始のホイッスルと早瀬チームのスローインで試合が再開

すると、二人はボールに向かって駆けだした。
味方からのボールを手にしたのは早瀬。覆いかぶさる様にディフェンスを仕掛けてくる湊を腕で止めながら、躱して強引にドリブルでゴールへと向かってゆく。
だが、湊も完全に振り切られること無く、すぐに反転して追いかけると相手がゴール前でレイアップシュートを打ちにいこうと片手持ちになった瞬間を狙い、早瀬の手からボールを掻っ攫って反撃だとばかりにドリブルでゴールを目指す。
横から伸びてきた手にボールを奪われた早瀬は、着地するとそのまま湊を追いかけ、ボールを持ってない分速く動いてペイントエリアで相手の前に回り込めば、これ以上は進ませないと立ち塞がった。
けれど、まだこのとき早瀬は湊の身体能力を甘く見ていた。
「うおぉぉぉぉっ!!」
「っ!?」
ボールを持った湊は吼えながら強く地面を蹴るとゴールリングに向かって跳躍する。
早瀬は自分がペイントエリアと呼ばれるフリースローレーンにいたことで、ペイントエリア外の微妙な距離にいる湊は、躱してシュートを決めにくるか、もしくはスリーポイントを狙って距離を取ると思っていた。
だが、湊はそのどちらでもないフリースローラインからの跳躍で、早瀬の頭上をいくという選択を取ってきた。中学生どころかプロでも簡単に出来る事ではない。
彼の行ったプレイの名は、
「人越え、レーンアップ……」
衝突を恐れて思わず頭を下げてしまった早瀬が、ダンクを決めた湊を見てポツリと呟いた。
ダンク自体は珍しいことではないが、フリースローラインで踏み切って跳ぶレーンアップは、驚異的な跳躍力を持っていなければ出来ない技だ。
それをさらに人越えというアメリカのプロでも早々出来ない大技

と組み合わせてきた。早瀬の身長は現在一七八センチで僅かに頭を下げたにしろ、そんな技を中学生が全国の大舞台で決めたのだから、会場中からどよめきの声と共に多数のフラッシュがたかれるのも無理はなかった。
「は、ははは、あはははは！　すげー、すげーよ有里！　お前、最高だ！」
目の前でそんな大技を見せられた少年は怯むかと思えば、彼は反対に目を輝かせて大きく笑う。
試合中にどんどん自分の技を盗んで成長しているかと思えば、後半が始まったばかりで彼の長所である跳躍力を活かした技を決めてきた。
一体どこまで驚かせれば気が済むのかと、早瀬は底の知れない好敵手に夢中になっていた。
「……正直、成功するかは賭けだった。ぶつかる可能性のある技をして悪かった」
「ああ、いいさ。決めた以上賭けはお前の勝ちだ。けど、それなら俺だって見せてやる」
言いながら走り出した早瀬は味方からボールを受け取るとゴールを目指す。湊が回り込もうと切り返し、フェイント入れ、早瀬も相手を振り切ろうとしながら、少しずつゴールに近づきフリースローラインに到達すれば、そこからゴール目がけ片手でボールを投げた。
明らかに入る軌道ではない。案の定、ボールはバックボードに当たって跳ね返ったが、湊がそれを取る前に駆け寄って跳んだ早瀬が、空中でそれを手にしてダンクで決める。
空中で味方のパスをキャッチしてダンクするアリウープは湊も決めた事があるが、バックボードを利用しての一人アリウープは決めた事がなかった。
先ほどの湊のレーンアップ同様、早瀬のアリウープも中学生が簡単に決められる技ではないが、いまこの場所ではどんなプレイでも成功するような気がしてならない。そんな空気が会場を包んでいた。
「どうだ。これが俺のとびっきりだ」
「フッ、ダンクコンテストじゃないんだぞ？」

「先に人越えレーンアップを決めたお前に言われたくないんだがな」
レーンアップに対抗して奥の手を見せてきて得意げな顔をする早瀬に、湊は呆れ気味な苦笑を思わず浮かべて返す。
しかし、先にダンクコンテストのような大技を決めて来たのはお前だと反論された事で、湊は自分と相手の技は種類が異なるときっぱり言い返した。
「俺のは純粋な身体能力の賜物だ。お前の曲芸紛いの大技と一緒にするな」
「曲芸紛いっていうな。ＮＢＡの試合ビデオで見てから一人で練習したんだぞ？　上手くいったのだって今ので四回目だ」
本当に今日初めてあった敵同士なのかと思うほど、今の二人は楽しそうに会話をしている。同じチームの者でも、彼らがこんなに楽しそうにプレイしている姿は見た事がない。
かと思えば、試合が再開すると両者は鋭い目つきになって、互いに自分の持っている全てを出し尽くしてゴールを目指し戦っている。
これまで全力を出せなかった二人は、ようやく全力を出して戦える者と出会えてきっと楽しいのだろう。
もしかすると二人の邪魔になるかもしれない。だが、コートに立っている選手たちは、このまま見ているだけなんて嫌だと、それぞれの全力でエースを支え、時に点を取りに行き、自らこの素晴らしい戦いに参加していった。

８月２３日（木）
午後――都立運動公園・体育館
《優勝は東京都の市立森岡第二中学校》
全国大会最終日の午後、全ての試合を終えた閉会式では、早瀬が皆の前で中学バスケット連盟会長から大きなトロフィーを受け取っていた。彼の隣にいるキャプテンは優勝旗を手にしており、全中三連覇の喜びに涙を流している。
あの後、湊たちと早瀬らの試合は〝６３対６７〟で早瀬たちが勝利した。序盤の点差を考えれば怒涛の追い上げであり、エース対決は湊

が僅かに上回ったことになる。
だが、試合結果は湊たちの敗北だった。
試合中に成長して相手のエースを打ち破ろうと、他の選手の地力で負けている以上、エース一人が頑張ろうが差を完全に埋める事は出来ない。
今まで二十点以上の差で勝利を続けてきた早瀬らを苦しめたとして話題になったが、それだけに湊以外の選手層の薄さが敗北の原因だとはっきり表れる形となった。
各校一列に並び閉会式に参加しているが、トロフィーを手にしている早瀬を見て拍手している渡邊は目が充血して腫れていた。
キャプテンの山井も同じようになっており、それは湊を除く全メンバーに共通している状態だ。
《続いて、優秀選手の表彰に移ります。呼ばれた選手は前へ来てください》
自分たちの実力不足で負けた事など、周りに言われずとも本人たちが一番分かっている。
湊は相手を上回ったというのに、自分たちのせいで負けてゴメンと泣きながら謝るなど、普段の飄々としている彼からは想像もつかない姿だった。
《平松附属平松中学校、五番・大島徹くん、桂馬学園中学校、六番・内藤勉くん》
最終日の準決勝と決勝で早瀬たちと当たった学校は、共に十五点以上の差をつけられており、早瀬たちと本当の意味で渡り合えたチームは湊たちしかいなかった。
自分たちと競った相手が優勝して誇らしい部分もあると言えばあるが、勝てていれば優勝も十分狙えたという事実の方が重くのしかかり。そこまで割り切っていられる選手は一人もいない。
《森岡第二中学校、四番・白木光一くん、森岡第二中学校、五番・早瀬護くん》
自分たちを負かしたチームから二人も優秀選手に選ばれ前に出ていく。その姿を目で追っている渡邊など、口に出さずとも自分たちの

エースの方がすごい選手だと思っているのが丸わかりだった。
しかし、最後の選手が呼ばれた瞬間、
《月光館学園中等部、十番・有里湊くん》
彼の表情は一変した。
「ちょっ、会長スゲー！　優秀選手ッスよ！　これ、ウチのバスケ部創立以来の快挙っしょ！」
「……最高でも都大会前で消えてたことを思えば、全国ベスト８も十分に快挙だろ」
「いや、個人成績はまた別の話ッスから！　うっひょー、今夜は打ち上げじゃー！」
山井らと一緒になって飛び跳ねて喜ぶ渡邊に、別にお前が選ばれた訳でもないだろうにと冷めたことを考えながら湊が列の先頭まで出れば、早瀬がニカッと笑って拳を突き出して来たので、隣に並んで拳をぶつける。
その瞬間に会場の至るところからフラッシュがたかれ、目がチカチカしそうな状態の中、選ばれた選手らは記念の盾を受け取った。
チーム成績、全国大会八位入賞。個人成績、優秀選手賞・有里湊。そうして、月光館学園男子バスケ部の夏は終わった。

第五章　―Ｐｒｅｐａｒａｔｉｏｎ―

第百四十六話　三年、二学期開始

９月３日（月）

朝――月光館学園・校門前

中学最後の夏休みを終え、新学期開始の月曜日。

今日は朝練がないということで遅めに寮を出たゆかりは、駅でチドリたち部活の女子メンバーと出会い。どうせなら一緒に行こうと改札を出てから並んで歩いていた。

ゆかりと湊は運動部で大会に出場し、美術工芸部は全員が別々のコンクールに応募して、コンクールの方はまだ結果が出ていないが充実した夏だったと言える。

だが、年頃の女子ということもあり、大会やコンクールよりも恋愛関係の方が気になるのか、チドリが駅の階段を下りながらゆかりに尋ねてきた。

「それで、夏は湊とどれだけ遊んだの？」

「え？　んー、なんか向こうが忙しいとかってあんまり会えなくて、デートとして二人で会ったのは一回だけかな」

答えながらゆかりは首に付けた白いチョーカーに触れる。初デートの思い出の品として大切にしているが、結局、その後は一回もデートしておらず、会ったのは部活メンバーで集まるときだったこともあり、未だに恋人としての実感はあまりない。

それを聞いたチドリは呆れたように溜め息を吐き、他の二人は同情的な視線を送ってくる事で、青春真っ盛りのカップルとしては駄目な夏休みの過ごし方だったなとゆかりも反省する。

とはいえ、相手が忙しくて会えないと言っている以上、家の場所も知らないので自分から会いに行く事は出来ず。カップルで過ごす最初の夏が寂しく終わったのは八割方湊のせいであった。

「ってか、部活と生徒会で忙しいのは分かるんだけど、大会が終わってからも忙しいって会えなかったんだよね。もしかして、浮気とかして

るのかな？」
「本人に訊けば答えるんじゃない？　浮気しても言い訳せずに開き直りそうなタイプでしょうから」
「隠さないのはいいけど、開き直ってたら十分に悪質だと思うけどね」
家族であるチドリの意見だけに、確かに湊は言い訳せずに事実を認めてきそうだと素直に納得出来てしまう。
浮気していたら少々お話する必要があるが、けれど、あの青年が自ら女子に近付いて行くとは考えづらい。
きっと、浮気も相手に言い寄られて、「抱いてくれなきゃ自殺する」といった風に脅されてしょうがなくするのだろうなと、一年の頃から彼の人となりを見てきたゆかりも一応の信頼はしていた。
そうして、雑談を続けて校門へと近付いたとき、何やら人が集まっているようで、それに気付いた風花が不思議そうに口を開いた。
「あれ、なんか人が集まってるね。何かあったのかな？」
「よく分かりませんが、学生以外の姿も見えますね」
「うわ、あれテレビ局じゃない？　なんか大きなカメラ持ってる人とかいるし」
「……どこかの有名人が転校してくるとかかしらね」
新学期早々、学校にテレビ局が来るようなニュースなどなかったはず。よって、何やら大勢の女性やテレビ局の人間と思われる人たちが集まっているのは、きっと有名人か有名人の子どもなどが転入してくるのが理由だろう。
そんな風に当たりを付け、四人は警備員が工事現場にあるようなカラーコーンを置いて作ってくれている道を通り、マスコミと集まった女性らの前を通過して校門の内側に入ったとき、リポーターの女性がカメラに向かって話している声が耳に届いた。
「こちら私立月光館学園では今日から新学期。バスケ界のニューヒーロー、〝籠球皇子〟こと有里君も登校してくるということで、彼の姿を一目見ようとこんなにも沢山のファンの方たちが集まっています。まだその姿は捉えていませんが、他の生徒さんの話によりますと来る時間は幅があるということなので、もう少し待っていたいと思いま

す」
朝から爽やかな声で話すリポーターは、よくプロスポーツ選手にインタビューしている若い女子アナだった。
正確には芸能人ではないが、生の美人女子アナがいるということで生徒らが携帯のカメラを向けており、都会に住んでいながらも年頃だけあって結構ミーハーな者が多い事が分かる。
そして、売り出し中の美人女子アナを送ってくるとは、テレビ局もかなり本気で〝籠球皇子〟ブームを狙っているのだなと、とても分かり易い業界の流れにチドリは肩を竦めた。
「……ついに湊も全国デビューね」
「学園のアイドルが随分と出世したわねー。ていうか、皇子って称号は変わらないんだ」
「そもそも、〝籠球皇子〟って呼び始めたのは湊のファンクラブだもの」
「あ、そっか」
普通ならば〝皇子〟ではなく〝王子〟と表記されるはずだが、プリンス・ミナトでは高貴っぽく見えるからと、あえて〝皇子〟の方を採用していた。
バスケ部の応援のときには、バスケの漢字表記である〝籠球〟と、彼の称号を組み合わせた〝籠球皇子〟という横断幕を作って応援に行っていた。
テレビ局はそれをしっかりと確認していたため、彼をアイドルのように持て囃す際に利用しただけで、元々の考案者はプリンス・ミナトだとチドリが教えれば、ゆかりも思い出したようで納得したように頷く。
しかし、二人と一緒に歩いていた美紀は、湊がテレビで騒がれるようになったのが意外だったのか、テレビ局が来ていてもあまりに普段通りの少女らの様子に面食らっている。
「いや、あの、お二人とも驚かれないんですね」
「大会が終わった日の夕方のニュースで、三連覇を達成した学校を最も苦しめた選手として紹介されてたもの。あのルックスと全中での

優秀選手賞の受賞で、話題に飢えてたテレビ局が食いつかない理由がないわ」
「私も寮にいたときに有里君がテレビに映ってるって他の子から聞いてたから、まぁ、話題が大きくなればあり得るかなとは思ってたの。流石に新学期早々こんな風になるとは思ってなかったけどね」
苦笑して答えるゆかりだが、湊がテレビで騒がれ出したのは昨日今日の話ではない。
全中バスケが終了した日の夕方の時点でニュースで取り上げられ、次の日には朝のニュースや昼のワイドショーでも早瀬との一騎打ちを何度も流して紹介していた。
あるニュースで解説に呼ばれた元プロ選手など、湊と早瀬をどちらもすぐにプロに呼びたいほどの逸材とべた褒めし、実際に二人にはバスケ強豪校の高校以外にも、国内外のプロチームから練習に参加してみないかとの誘いも来ている。
もっとも、湊はそもそもバスケ部じゃないからと誘いを断り、早瀬も高校は実家から通える範囲で選ぶことにしているので、プロチームの練習には参加してみたいが色々と難しいと保留にしているのが現状だ。
とはいえ、冷静に自分の生活のことも考えている子どもたちと違い。桜や英恵は大喜びでその特集を録画しまくっていたりする。サインはまだ用意していないのかと直接電話で訊いてくる辺り、もしかすると二人は湊が芸能人になるのもありだと思っているのかもしれない。
だが、湊本人は外を歩くのも大変だからと、現在はＥＰ社の研究所に引き籠もっており、食事もマフラーに入れている食材を使っての自炊生活で食堂にも顔を見せていなかった。
助っ人を終えて時間に余裕が出来たので、本当は研究所と病院を行ったり来たりする予定だったが、病院にいると大勢に見つかって大変だったことで、とんだ災難だと湊はバスケ部で活躍したことを後悔していた。
『他の生徒の迷惑になりますので校門から離れてくださーい。テレビ

局の取材は本人が学業に専念したいからとお断りしています。申し訳ありませんがお引き取りくださーい』

チドリたちが湊のことについて話していると、バスケ部顧問で湊のクラス担任である盛本と数名の教師がやってきて、校門前に集まっているギャラリーをどかせ始める。

以前は湊に助けてもらった人からのお礼の電話に対応するくらいだったが、今度はその比ではない苦労に新学期早々疲れが見て取れた。

しかも、リポーターは盛本がバスケ部の顧問だと知っていたようで、急遽インタビューされてしまっている。

生徒玄関に向かいつつ風花はその様子を心配そうに見つめながら、これでは湊が学校に入れないのではと素直な疑問を口にした。

「先生たちも大変だね。でも、有里君ってこんな状態で学校来れるのかな？」

「もしかすると学校が送迎を用意して裏口からってことも考えられますね。というか、有里君が大会後も忙しかったというのは、取材を求めたマスコミの対応をしていたからかもしれませんね」

学校には騒ぎが治まるまでしばらく休むと伝えているが、美紀の想像は見事に当たっており、湊がゆかりと会えない原因はマスコミやブームに乗って騒ぐ人間を避けるためだった。

もしも、皇子に彼女がいるという情報が流れ特定されれば、当然、ゆかりは日常生活に支障をきたす。

それくらいで済めばいい方で、ファンになった者たちから誹謗中傷や危害を加えられる可能性もあるとなれば、チドリやゆかりらが傷付くのを由としない青年は、ファンクラブを使って恋人関連の情報について緘口令を布いて距離を置くしかなかった。

プリミナの会員たちの情報網や統率は素晴らしい物があり、現在のところどのテレビ局にも恋人関連の情報はばれていない。

普通なら口の軽い生徒がばらしてしまいそうなものだが、以前、いじめを解決した際に湊が生徒らの個人情報をかなり詳しいところまで知っていた事で、リークした人間はすぐに分かってしまうと生徒ら

も認識している。
　そのため、湊が引き籠もっている間、情報窓口として機能しているプリミナから改めて生徒らに緘口令について説明すれば、生徒らも自分の命惜しさに黙るしかない。
「あ、プリンス・ミナトの会長さんたちが入会受け付けとグッズ販売はじめた」
「……商魂逞しいわね。まぁ、湊からちゃんと許可貰って活動するようになったから、別に何か言ったりはしないけど」
　とはいえ、真田のファンクラブである〝真田王国（キングダム）〟と勢力を争っているプリミナにとって、このブームは世界中に自分たちの崇める皇子の存在を知って貰うチャンスでもある。
　以前のバレンタインイベントでも発揮されたチームワークを見せ、会員たちが長机と段ボールを何箱も持ってやってくるなり、校門の外でグッズの販売と入会受け付けをし始めた。
　一応、プリミナは湊の公認ファンクラブなので、彼女たちの販売するグッズが現在のところは唯一の公式商品である。
　〝プリンス・ミナト〟は組織してすぐに、〝籠球皇子〟もバスケ部に助っ人として入部すると決まってすぐに商標登録の申請を行っているなど、学生ながら彼女たちもかなり本気で入れ込んでいるので、そこまでの熱意を持ちながら規律に従って動く人間を排除しようとはチドリも思っていなかった。
　だが、それは家族であるチドリが彼女たちの存在や活動を認めているだけで、学校側まで彼女らの活動を認めているという訳ではない。
「おー、警備員連れて桐条先輩まで出てきた。こりゃ、当分は騒がしいままかもしれないわね」
　生徒玄関前についてからもゆかりらが校門の方を眺めていると、高等部の方から大勢の警備員を連れて桐条美鶴が現れた。
　テレビ局や集まったファンに湊が今日は学校を休むことを伝えているのか、テレビ局のクルーががっかりしたように撤収していっている。
　そしてさらに続けて、学校の前で商売しているプリミナたちにも注

意しているようだが、新発売の『鞄にも付けられる〝籠球皇子〟マスコット（全長八センチ）』を握らせて、会長の雪広繭子が美鶴の説得を試みているみたいだが、実際はただの時間稼ぎで他の会員らが入会受け付けとグッズ販売を続けていた。
　あの桐条グループの御令嬢である美鶴を前にしても引かず、反対に説得して認めさせようとするのはすごいが、美鶴と繭子は一応同級生なのでゆかりたち後輩よりも距離は近いのかもしれない。
　そんな様子を途中まで眺めながら、チドリたちは生徒玄関の中へ入ると靴を履き替え、そのまま各自の教室へと別れて向かった。

　午後――ＥＰ社・研究室
　世間では皇子ブームで騒がれていても、研究室の方では最初に少々からかわれた程度でその後は普通に業務を続けていた。
　現在行っているのは対シャドウ兵装の新型ボディの開発で、最初にアイギスの設計図を基にイヴを製作してからは、研究を進めてＥＰ社独自の技術を組み込んだ新型ボディの開発にも成功している。
　もっとも、それらは全て湊の義手と彼の計画に必要だから作っているだけで、アイギスのような自我を持った対シャドウ兵装を生み出そうとしている訳ではない。
「あー、ちょっと壁にぶつかったかなぁ」
　コーヒーを飲みながらパソコンで何やら作業していたシャロンが、急に頭を掻きながら難しい表情を浮かべて独り言を呟く。
　その近くでエマや武多からプログラミングや設計などを習っていた湊は、研究主任である彼女が何に詰まっているのか気になり、教えてくれていた二人に断って彼女に声をかけた。
「何か問題が発生したのか？」
「やっぱり、ボウヤがいないとイヴの動作テストが出来ないってのがネックなのよねぇ」
「……どういう意味だ？」
　ＥＰ社製の対シャドウ兵装であるイヴは、バージョンアップを重ねて既に三世代目まで製作されており、性能を向上または維持しながら

見た目はかなり人に近くなっている。
自分の義手開発にも繋がるイヴの研究を進める上で、湊が優先事項として挙げた条件は、〝外見を生身の人に近付ける事〟、〝兵器としての機能を維持する事〟の二つだった。
チタンボディに布張りしていると言っても、戦闘時のアイギスはある意味で素っ裸の首元にリボンを結んでいるだけだ。
服を着ればほぼ人間にしか見えないが、真夏でも関節部など機械であることが分かってしまう箇所を隠すような、丈のある服や厚着ばかりするなど不自然でしかない。
真夏でも黒いマフラーを首に巻いて、丈の長めの上着を着ていた湊だからこそ、周囲の人間がそういった者をどんな目で見るかを知っている。
湊は機械義手である右腕を隠すためで、途中からはペルソナを使って偽装を施せるようになったが、アクシデントで偽装が解除されたときのことを考え、七分袖ならともかく半袖を着る事は今でもない。
本人は服装に無頓着で、ゆかりに言われて今は少しだけ勉強しているものの、基本的にファッションなどどうでもいいと考えている。
だが、アイギスは女の子だ。それも超が付くほどの美少女である。そんな彼女が身体のせいで自由にお洒落を楽しめないなど認められない。
とまぁ、たったそれだけの理由で、湊は研究員らにかなりの無茶な要求を突きつけたのだ。
ほとんどの研究員はパーツの換装によって、日常と戦闘用を切り替える様にしてはどうかといったが、湊は「お前らは自分がいつ事故に遭うのか普段から知っているのか」と言って黙らせた。
いつ何が起こるか分からないからこそ、突然の事態にも対処できるように二つの条件を両立するように言ったのである。戦闘時のパーツ換装など最初から考えており、それをしなくても人を超えた戦闘力を持てるようにというのが湊の注文だ。
話を聞いたシャロンはそれを過保護と言って笑ったけれど、湊の世界の中心は二人の少女であるため、この先の計画の土台となる対シャ

ドウ兵装の開発に妥協は許されなかった。
「そのままの意味よぉ。パーツの耐久力だとか、実際の運動性能を計りたいと思っても、アンタがいないと動かせないんだもん。義手や新造ボディなんて動作チェックしまくってナンボだから、正直、今の状態はすごく効率悪いの。アンタの彼女のコアを盗んできて積み直すとか、他に残ってる対シャドウ兵器とかいたら協力して貰いたいんだけど、そういう子いないの？」
湊が尋ねるとシャロンは溜まっている動作チェックの項目一覧をパソコンに表示し見せてくる。その数は千を超えており、如何に作業の効率が悪いかを物語っていた。
イヴの仕様はアイギスが元となっているので、高機動を活かし相手を撹乱し、両腕のマシンガンで制圧することを主体としている。
球体関節人形を参考に、関節部の仕様変更で見た目を人に近付けたことで、イヴには脚だけでなく踝より先の足が追加された。
湊捜索中のアイギスも、足部分がないのでシフトレバーが操作出来ずＭＴバイクに乗れないとぼやいていたため、これを知れば彼女はきっと喜ぶ事だろう。
ただし、高機動は関節部に負荷がかかる。足部分を追加した事も含めて、耐久度を上げるだけでなく衝撃の吸収等にも気を付けなければならない。
短時間しか使えない上にオーバーヒートで動けなくなる、〝オルギアモード〟の改良版も第三世代のイヴには搭載されているので、毎日何かしらの動作チェックを行っているくらいでもなければ、開発ペースは今後急激に落ちていく事は明白だった。
「そも、正式シリーズはラストナンバーのアイギスくらいだろうし、それ以前のテストベッドの機体は実際に稼働した機体がそんなにいないはずだしな。効率が悪いって、もし協力する対シャドウ兵装の機体がいたら、どれくらい開発速度が上がるんだ？」
「最低でも四割はあがるわね。こっちはシフトの組み方を調節して、常に誰かが研究と開発している状態に出来るのよ。けど、アンタは会社の仕事もしてるし、朝は学校行ってたりとかでしょ？　だから、ア

ンタがいないときは、九時に来て五時に帰るみたいな規則正しい就業時間くらいしか無理なのよ」
「なるほど、けど、そんな機体なんて……」
開発ペースが最低でも四割上がるのは確かに魅力的だ。しかし、イヴを動かせる湊がいないときにも動作チェックするために、わざわざアイギスの宿ったパピヨンハートを盗んできたり、残っているかも不明な対シャドウ兵装の機体を探すのは無理があると湊は考える。
アイギスはそもそも寝ていて起きないと思われ、本人の同意も無しに別のボディへ移し替えるなど湊が認めない。
よって、現状ではシャロンの要望に応えられないと言いかけたとき、湊は以前桐条宗家の近くにあった旧研究所で見つけた機体のことを思い出した。
「ああ、そういえば一人いた。マフラーに入れたっきり忘れてた」
「アンタのマフラーって時間凍結された無限収納じゃなかったっけ？　そんなとこに人を入れて大丈夫なの？　ほら、メンタル的な意味で」
「……まぁ、封印されてたようだし大丈夫のはずだ」
言われてみると不安になってくる。相手は封印されていて意識はないはずだが、アイギスは寝ている間に夢を見ていたというような事を話していた気もするので、仮にマフラーに収容されている相手もそうならどうなっているか想像もつかない。
けれど、やってしまったことはしょうがない。問題があれば謝ってから許しを請い、最悪湊の力を使ってその部分の記憶を一時的に封印してしまうことも出来ると持ちかければいい。
湊がそんな風に色々と穴のある解決策を考えて自信満々な顔をすれば、シャロンは嘆息しつつも希望が通りそうなので何も言わずに話を進める。
「ま、なんでもいいわぁ。それで、すぐ会えるの？　それとも、その子用の新型ボディを用意してから？」
「……ボディを用意してからにしよう。載せ換えるかは本人の意思を尊重するが、桐条製のボディで運用してると信号の送受信でここがば

れるかもしれない」
顎に手を当て、少し考えてから湊は答える。相手が今のボディがいいと言えば現状維持だが、出来ることならＥＰ社製の新型ボディを使って貰いたい。
パーツは互換性を持たせるアタッチメントを開発しているので、それを付ければ桐条製ボディにも使えるが、やはり全体のバランスというものがあり、桐条グループからの干渉を防ぐためにも、湊個人としては交渉してすぐに新ボディにコアである黄昏の羽根とメモリのデータを移したいと考えていた。
「りょうかーい。ま、そういう信号は遮断する構造になってるんだけどねぇ。アイギスちゃんより前の機体なら、比較して桐条グループがどんな風に改良していったのかが分かるから、ただ作るだけでも収穫ありそうだわ」
青年の言葉を聞いたシャロンは、さっそく新型ボディを試せそうだと嬉しそうな笑みを浮かべながら、新ボディ製造のための部品の在庫チェックを始める。
しかし、流石に一人では色々と手が回らないため、自分の部下たちにも指示を飛ばす。
「エマ、武多、ＥＰ０３の仕様で新しいボディ作るわよ」
「は、はぁ……でも、それって設計図はあるんすか？　前に湊さんから渡されたのはアイギスさんので、換装用の腕部パーツとかのデータはちょっとありましたけど、旧世代機の情報なんてまるっきりないっすよ？」
「その人の黄昏の羽根を積み替え、メモリのデータをスパコンを使って移すにしても、新ボディと旧ボディで外見が違っていたら混乱するでしょうしな。心を持っているのなら、かなり忠実に再現しないと自我崩壊を起こすやもしれませんぞ？」
開発するのはかまわないが、相手の仕様も分からなければ外見も知らないと、部下である二人は困った顔をする。
湊が飛騨から貰った対シャドウ兵装の設計図は、アイギスと彼女用の換装パーツ等の設計データと運用実験データばかりで、旧世代機の

情報は全くなかった。
一応、話としては一式から三式までは戦車として作られ、四式以降は人型で作られるようになったが、ペルソナを獲得するために黄昏の羽根を搭載しているのは五式以降の機体だけらしい。
湊は自分の心臓を包んでいる黄昏の羽根の共鳴で、相手が黄昏の羽根を搭載している事は確認済みだ。
よって、七式はアイギスしか作られていないことを考えれば、相手は少なくとも五式か六式の機体だと思われるが、データが無いでは済まないので、湊は相手の入っている箱の中身をアナライズで解析し、手ずから設計図を書き上げることにした。
「……少し時間をくれ。アナライズを使って設計図を書き上げる」
「それならガワだけ先に教えてくれれば作っておきますぞ？　武装やスペックが異なるのは中身の正確な設計図が必要ですが、顔や髪などは言ってしまえば外装パーツですから、色やそれぞれの幅や高さの数値が分かっていれば型を先に作っておけるのです」
「分かった。お前のパソコンにデータを送っておく」
イヴの外見をデザインして作りあげたのは武多だ。彼は自分でフィギュアを作ったりしているそうなので、細かい部分にまでこだわって職人レベルの素晴らしい仕事をしてくれる。
医者や研究者としては努力で一流までにはなれたが、シャロンや飛騨のような超一流になるだけの才能やセンスは持っていない。
本人もそれを早期に自覚していて、シャロンとは別の分野の才能を今の仕事に活かす様になったらしいが、湊としてはアイギスたちの新型ボディの開発には欠かせない人材であるため、彼も立派な戦力として才能ともども認めていた。
「……ああ、そういえば、相手が持っている物と酷似した武装を持ってる。設計図が書き上がるまで時間が掛かるから、先にそっちの解析をして貰っててていいか？」
言いながら湊はマフラーに左手を入れると、そこから推進器の搭載された人の身の丈ほどもある大剣を取り出した。
貴重な研究資料であることもあり、流石に床に突き立てる訳にはい

かないので、傍にいた武多に両手を出す様に言って寝かせた状態で剣を置いて渡した。
すると、
「ふんぬぉおおおおっ!? ちょちょ、持って、これ持って!!」
顔を真っ赤にして腕をぷるぷると震わせながら、武多が一度剣を持ってくれと必死に頼んできた。
額からは脂汗を滲ませ、呼吸も荒くなっているので近付きたくなかったが、あまりに必死に頼んでくるので無碍には出来ず。湊はもう一度左手で柄を握って持ち上げた。
剣から解放されるなり武多は床に座り込んで腕をマッサージして、少々恨めしそうに湊を見上げてくる。
「はぁ、はぁ……おえっぷ……いや、マジで腕が千切れるかと思いましたぞ。そんな馬鹿みたいに重い物を普通に渡さないで欲しいでござる」
「……悪い。けど、そんなに重いか?」
「奥に大きい物の重さを量れる秤があるから、それで試せば一発で分かりますぞ」
ここでは対シャドウ兵装のボディのデータを取るため、相手を運ぶ道具に載せたままでも重量などを量れるよう、大きな電子秤なども用意されている。
相手がそんなに言うなら実際に計量しておこうと、湊は台車に剣を載せると台車の重量を引いた状態で計量を始めた。
シャロンやエマも見守る中、画面に表示された数値は〝約九三キロ〟、シャロンは小数点以下の数値も含めてすぐにそれをメモしているが、三十貫(一一二キロ)の九尾切り丸に比べれば軽い物だと湊は肩を竦めた。
「……名切りの武器より軽いな」
「いやいやいや、僕の五分の三の重さですぞ。一般ピーポーにとっては十分重すぎるくらいです。というか、こんなの重量で叩き斬られますから、普通の武器では受け止められませんしな。流石はロボット用の武器といったところでしょうか」
人を超えた力を持ったロボットの武器なら頷ける仕様に、武多が台

車を秤から下ろして移動させながら感心する。
武器が武多の体重の五分の三ということは、彼の体重は一五五キロということになり。湊にすればある意味でそちらの方が衝撃だったが、アイギスの最大積載量は三百キロを超える。
そのデータを知っていれば装備の重量も別段おかしくないため、武器の研究を彼らに任せた湊は、研究所内の一室に移動してアイギスの姉妹機が封印された箱を取り出し、そこで設計図の製作に取りかかって行った。

第百四十七話　五式の少女

9月8日（土）
朝――ＥＰ社・研究室
アイギスの姉妹機の新型ボディの開発が始まって五日が経った。湊が設計図を二日で書き上げたことで、予定よりも早く製作に取り掛かれることになり、予定では二週間後には完成するとみられている。
設計図を書き終えた湊は、そのまますぐに桐条宗家近くの元研究所に向かって彼女のことが書かれた研究資料が無いかを探し。あまり目ぼしい物がないと分かれば、今度は英恵の元へ向かって、彼女の家のパソコンから桐条グループのサーバーにアクセスして情報を探した。
その結果、封印されている少女の名前は〝五式ラビリス〟。屋久島の研究施設で実験を行っていたところ、施設を破壊して脱走しようとしたため封印されたらしい。
もっとも、当時行われていた実験は、性能データの収集と精神への負荷を与えることを目的とした同型機との戦闘実験だったようなので、詳細は分からないものの、姉妹と戦わせられることに嫌になって逃げ出したのではと湊は自分の推測を他の者に話していた。
自我と心が与えられていたのなら、確かにその線はありそうだとシャロンも考えたが、推測を話していたときの湊の瞳が蒼くなっていたことで、刺激するのは拙いかと何も言えなかった。
「おっはよー」
そうして、設計図を受け取って実際に開発が始まってから四日目の朝。社宅から出勤してきたシャロンは、夜勤組と既に出勤していた部下たちに挨拶をしながら研究室に入る。
彼女は割と時間ぎりぎりに出勤してくるため、部屋には既に全員が揃っているが、夜勤組から引き継ぎをしているならともかく、誰も開発室に行かずにこの部屋で事務作業をしているのはおかしいと思い。怪訝な表情を浮かべながら自身の助手に声をかけた。
「武多、なんで全員こっちにいるの？　ラビリスちゃんの新ボディ開

発は？」
「い、いやぁ、それがその……」
「何か問題が発生した？　そういうときは夜中でもいいから電話で呼べって言ってたはずなんだけどねぇ。事と次第によっちゃあ、ぶん殴ることもありえるんだけど、何かあったのなら報告してくれる？」
夜勤組で引き継ぎを終えれば帰る予定の武多に声をかければ、パソコンに向かいキーボードを叩いていた彼は肩をビクリとさせて何やら言い淀んでいる。
対シャドウ兵装はかなりの精密機械なので、ちょっとのミスで修正に時間を取られるのだが、相手の様子からすると最初から作り直しレベルのミスを犯したのかもしれない。
完全に手遅れになる前に呼べばシャロンなら修正出来ただろう。彼女は飛騨のようなオールラウンダーな天才ではないが、医者としての腕と義肢製作に応用できそうな工学系のことであれば同等の能力を持っている。
真の天才は万に通じるというのは本当であり、武多も彼女の実力は知っていたはずだが、とりあえず報告を聞かない事には始まらない。
シャロンが改めて夜の内に何があったのか尋ねれば、武多はやや言いづらそうにしながらも話し始めた。
「はい。えっとお、ラビリスさんのボディがほぼ完成してしまいました」
「はぁ？　開発に約三週間、つまりあと二週間はかかる予定が、どうなればそんなに早まるのよ？」
「湊殿がですね。僕たちに聞きながら手伝って、途中からはほとんど一人で作ってしまったんです」
確かに湊が研究員らに教わって熱心に勉強していた事をシャロンも覚えている。最初にアイギスの設計図の見方を教え、イヴの新ボディを作る際に細かく教えることで、彼も作業を手伝えるようになってきていた。
彼がアナライズを使ってラビリスの設計図を書き上げられたのもそのためで、もしも、設計図の見方から教えていれば開発のスタート

は九月下旬になっていたに違いない。
しかし、いくら作業を手伝えるようになってきていたにしても、流石にこの短期間に一人で完成まで持っていくのはあり得ない。
ラビリスにはアイギスに搭載されていない機能に使うらしい装置が積まれていた。逆にアイギスにはあって彼女に積まれていない装置もあったので、彼女が備えている全機能を残したまま、改良版オルギアモードを搭載させて設計し直したのがラビリス用の新ボディである。
彼女にしかなかった機能分だけ装置が増えているため、当然イヴよりも開発に時間がかかってしまう。しかも、ラビリスはアイギスよりも背が低いので、積む装置が増えているのにボディは小さくなるという開発者泣かせの仕様だ。
シャロンはそういった事を気にせず、むしろ装置の小型化を目指して楽しそうにしていたが、半年前は素人だった青年が設計図を完成させたばかりの小型装置まで作ってしまったのなら、なんとも面白くない話だと拗ねたような顔をした。
すると、武多と同じく夜勤組で近くにいて話を聞いていたエマが、椅子に深く座りなおしてだらけた様子で補足の説明をいれてくる。
「最初は普通っぽかったんすけど、何かどんどん集中していって、途中からは主任に止められてた時流操作まで使ってたんす。時流操作を始めたら私らは下手に干渉できませんから、休憩もせずに一人で作業続けるのを見てるしかありませんでした」
その説明を聞いてシャロンもようやく短期間で完成に至った理由を理解した。時流操作を使えば時間を圧縮する事で、現実の一日を一週間や一ヶ月にする事も出来る。
青年の学習能力が高い事は知っていたが、不自然なほどに成長が速すぎると思っていれば、実際は異なる時流の中、一人で少しずつ作ったようだ。
あれだけ脅しておいたというのに、使う必要のない場面で時流操作を使う馬鹿さ加減には呆れて何も言えないが、シャロンがインスタントのコーヒーを淹れながら空いている席に座ると、エマがさらに言葉

を続けてきた。
「つーか、知識や技術の吸収力もヤバいっすけど、ラビリスさん達への執着具合って言えばいいのかあの人なんか異常っすよ。正直、私ら人間よりもアイギスさんやラビリスさんの事を優先してる節があって恐いっていうか。今も一人で開発室にいますけど、何考えてるのか分からないっす」
使えば自分の死期が早まるかもしれない異能を使い。さらに、誰も寄せ付けない空気を放ちながら、休憩もろくにせずに一人で黙々と作業を続ける姿は異様に映る。
芸術家など作品を作る事に没頭する者はいるが、湊はそういった者たちとはどこか違っている。異常なほどの執着といえばいいのか、何を考えているのか理解出来ず不気味だとエマが眉を寄せれば、彼の事情を他の者より少しばかり知っているシャロンは苦笑を浮かべた。
「なるほどねぇ。私も詳しくは知らないんだけどさ。まぁ、アイギスちゃんは命の恩人らしいからねぇ。その子のために世界征服みたいなの計画しちゃうくらいだし。ボウヤにすればアイギスちゃんたちが世界の全てなんじゃないの？　ねえ？」
笑いながらシャロンが振り返れば、そこには開発室から出てきた湊がぼんやりとした顔で立っていた。
休まずに作業を続けていたせいか、珍しく疲れているというか眠そうに見えるが、訊かれた本人は何の話か分かっていないようで首を傾げている。
「……何の話だ？」
「べっつにぃ。それで完成したの？」
「ああ、後は最終チェックをして貰うだけだ。今から頼めるか？」
「いいわよぉ、アンタのおかげで暇になっちゃったもの。最終チェックが終わったら第二演習場がいつでも使えるようになってるからさぁ。そっちでラビリスちゃんの再起動の準備もしておいてくんない？」
開発の手伝いをしていた湊は、教えた事はしっかりと出来る様になっていったので、武多やエマが間違った事を教えていなければラビ

リスの新ボディはちゃんと完成しているはずだ。
しかし、初めて作ったタイプのボディのため、念入りにチェックするつもりのシャロンは、並行してラビリスの起動準備をさせておくことにした。
彼女の言葉に頷いた湊は研究室を出ていったので、自分は準備を進め、開発室での最終チェックは完全にシャロンに任せるらしい。他の研究員なら一緒に立ち会って勉強していくのだが、青年はアイギスの姉であるラビリスに早く会いたいのだろう。
彼は相手がずっと封印されていることも気にしていたので、そんな集中を欠いている状態なら居ても変わらないと、シャロンは見学する者は一緒に来いと誘って開発室で最終チェックを行うのだった。

午後――第二演習場
屋久島の桟橋で研究員らに拘束され、主電源を落とされ封印されていた少女は、突然体中を信号が駆け廻るのを感じた。
封印されている間は夢のような物を見ていた気がするが、とりあえず身体が動くのでゆっくりと目を開ける。
「んっ……」
久しぶりに起動したからか、目に搭載された光感知センサーがすぐには動かず、眩しそうに目を細めてセンサーが部屋の明るさに慣れるのを待った。
ようやくセンサーが対応した事で部屋の中を見ることが出来るようになると、ラビリスは自分がとても広い部屋にいる事に気付く。学校の体育館よりも一回り広く、けれど、床や天井は耐衝撃性の素材で出来ている。
二階と思われる高さの場所には、特殊強化ガラスがはめ込まれ、そこから白衣を着た人間たちがこちらの様子を伺っており、広さ等は異なってもここは自分が実験をしていた耐衝撃チャンバーと同じ用途の部屋なのだと察した。
そして、五メートルほど離れた場所で左手をポケットに入れて立っている青年が、今日の実験の相手なのだと推測する。

レオタード姿のようなラビリスと違い。相手は首にマフラーを捲いたカジュアルな私服姿だが、搭載されている黄昏の羽根が共鳴して相手も同じ物を積んでいるのが分かる。
もっといえば、ポケットに入れていない右手が明らかに機械なので、ラビリスは彼が自分よりも後に開発された新型なのだと考えた。
「新型さんなんかなぁ？　ウチ、再起動されたばっかりで実験のマニュアルデータも受け取ってへんねんけど、今から何したらええん？」
「……関西弁なんだな」
「ああ、なんか言語インターフェースの初期化が正常に行われてへんかってんて。分かり辛かったら堪忍な」
研究員や〝機体番号０２４〟にも最初に同じ事を言われたので、やはり初めて会った相手は気になるのかと苦笑して事情を説明する。
しかし、以前の実験では始まったら会話する事が出来なかったので、新型の青年とちゃんと会話が出来ている事にラビリスは少々安堵した。
これならば、現状をいまいち理解出来ていない自分の質問にも答えて貰えそうだと、彼女は改めて質問を口にした。
「訊いてもええかな？　ここってどこなん？」
「ＥＰ社の工場地下にある研究エリアの第二演習場だ。住所という意味なら東京都港区の端、ぎりぎり中央区に入っていないくらいの場所だな」
「東京？　ってことは、島やなくて本州におるってこと？」
「東京にも島はあるけどそうだな。思いっきり首都圏だ」
淡々と情報を教えてくれる青年に対し、その話を聞いたラビリスは自分が本州にいると聞いてチャンスだと考えていた。
凍結封印される前に逃げ切れなかったのは、あそこが四方を海で囲まれた屋久島だったからだ。
船にこっそりと乗り込むのも難しく、これでは逃げ切れないと諦めて、自分の後に生まれてくる者たちの願いが叶うようにとだけ祈って眠りについた。

けれど、ここが本州ならばいくらでも逃げられる。自分が会いたいと願った相手がどこにいるのかは分からないが、それでもまた戦わされ続けるくらいなら、起動したばかりで相手も油断しているであろう今逃げた方が成功率は高い。
(新型さんは何の武器も持ってへんけど、ウチは背中に戦斧しょっとる。入り口はまだシャッターも閉められてへんみたいやし。これやったら逃げられそうやね)
自分の脱走のために相手を攻撃するのは気が引けるが、現状、もっとも厄介な追手になりそうなのは新型の青年だ。
基本スペックは自身と同等かそれ以上のはずなので、武装してくる前に斧の平べったい部分で殴り飛ばし、一時的に行動不能に追いやって部屋を脱走しようと決める。
チャンスは一度きり。ここで相手を行動不能に出来なければ脱走は失敗するため、ラビリスは心を鬼にして背中の斧に手を伸ばすと、それを掴みながら相手に向かって駆けだした。
「ゴメンなっ!」
両手で掴んだ斧をテニスラケットのように振り抜く。普通の人間が喰らえば重傷だろうが、自身と同じ機械の身体なら小破で済むはずだ。
突然の攻撃に相手は驚いているが、自分には託された願いと叶えたい夢がある。故にここで止まってはいられないと、ラビリスが相手を殴り飛ばそうとすれば、
「――――急に攻撃とは随分な挨拶だな」
「そんなっ」
その攻撃は相手がマフラーから取り出した、光の紋様が刀身に浮かんだ大剣で受け止められていた。
一体どういった原理で武器が現れたのかは不明だが、遠心力を加えて威力の上がった攻撃を喰らっても、多少押された程度で相手はほとんどその場から動いていない。
ガードの瞬間に刀身をぶつけに来て威力を相殺したのか。そう考えるも、仮にその方法で相殺していれば斧が弾かれているはずだ。

相手の基本スペックが分からない上に、武装の数も不明となれば状況は圧倒的に不利。これは即時離脱を選択し、逃げる途中に新型の青年を撒く作戦にシフトするべきだろう。
作戦を決めたラビリスは横っ跳びで距離を開けると、入り口に向かって駆けだした。
「隔壁閉鎖！　絶対に外に出すな！」
ラビリスの狙いを読んだ青年が叫ぶ。それを聞いた上の研究員らが操作したようで、即座に入り口の扉をシャッターが四重に覆って封鎖した。
だが、もしかしたら破壊できるかもしれないため、ラビリスは振り上げた斧を勢いよくシャッターに叩きつけた。
「っ――――硬過ぎる、せやったら強化ガラスを！」
ぶつけると同時に金属同士の鈍い衝突音が響く。攻撃をしかけたラビリスは、返ってきた衝撃からシャッターの強度を逆算して自分のパワーでは破壊出来ないと判断。
そして、周りの壁や床も同じだけの強度を有していると推測し、もっともマシだと思われる二階の高さにある強化ガラスを破壊しようとそちらを向きかけたとき、ラビリスは機械の駆動音を聞いて転がる様に回避行動を取った。
直後、先ほどまで彼女が立っていた場所に銃弾の雨が降っている。受け身を取りながら立ち上がったラビリスが銃弾の飛んで来た方を見れば、青年が右手の指先を向けて立っていた。
「火器制御系の搭載モデル……やっぱ、飛び道具はずるいわ」
流石は新型、自身が作られたときには完成していなかった火器制御系を搭載し、見事な射撃を見せてきたことにラビリスは僅かな嫉妬を覚える。
けれど、強化ガラスへの攻撃に移ろうとした際に攻撃してきたということは、そちらは破壊できる可能性があるということだ。でなければ、扉の隔壁へ攻撃を繰り出す時点で相手が攻撃していなければおかしい。
脱走への希望が見えてきたことでラビリスはやる気を燃やし。一

番の障害である敵の無力化を最優先事項に決定しながら、斧を両手で握り直すと攻撃のために地面を強く蹴り駆け出してゆく。
「はぁぁぁぁぁっ!!」
もう自分と同じ機械たちを殺したくない。本当は戦い傷付けるのも嫌だが、脱走するには相手を無力化するしかないので、四肢のどれかのパーツを切り飛ばして大人しくして貰うしかない。
故に、元の場所から動いていなかった新型へ突進しながら、ラビリスは巨大な戦斧を振り下ろす。
相手はそれを片手で持った剣でいなし、武器に引っ張られて体勢を崩しかけたラビリスが諦めずに今度は横薙ぎに振るえば、青年はサマーソルトキックで躱しながら顎を蹴りあげてきた。
「うぐっ」
重い斧をコントロールしている最中に蹴られたことで、ラビリスは完全にノーガードで攻撃を喰らってしまい、背中を打ち付けながら仰向けに倒れる。
武器を手放さなかったのは偶然だが、体重を乗せた戦斧の一撃を軽くいなしてくるような相手に、まさか素手で対抗できるとは思わないため、ラビリスは偶然に感謝しながら起き上がり、再び突進すると細かく斧を振るって牽制しながら戦力の分析を続ける。
(ウチの斧を凌げてるいうことは、あの剣の強度は斧より上の可能性が高い。武器の破壊は実質不可能。後から動き出して対処できる反応速度を持ちながら、こっちの攻撃範囲を完全に読みきって躱してるみたいやし。基本スペックが違い過ぎるわ)
細かく振るった斧を剣で小さく弾きながら相手は後退してゆく。壁に着かないよう部屋の中で円を描く様に動いているため、ラビリスが諦めるか相手が攻勢に出ない限りは決着がつかない。
しかし、ラビリスは圧倒的な性能差によって自分が勝てる可能性がほぼ無い事に気付いていた。
自分の人格の元になった少女に会いたい。仲間殺しなんてしたくない。たったそれだけの願いが、この新型の青年一人に阻まれる。
「お願いやから、ウチを外にいかせて! 会いたい人がおるんよ!」

同じ立場である青年ならば、研究員ではなく自分に味方してくれるのではないか。そんな淡い希望を抱いて語りかけるも、相手は表情一つ変えずにラビリスの攻撃を防ぎ続けている。
前回の脱走時に掴みかけていた謎の力を使えば勝てるのかもしれないが、今の彼女はその感覚を完全に忘れてしまった。
もっとも、研究員が〝ペルソナ〟と呼んでいた不可思議な存在を、目の前の新型の青年が使えるのなら自分が出せたところで勝ち目はない。
だがそれでも、もうあんな辛い実験を行うのは嫌だった。
「もう……もう殺すんはイヤや。もうあんな事したないねん！　戦わせんといて！」
〝エモーショナル・ティアー〟、そう呼ばれる涙を、彼女たち対シャドウ兵装も感情の昂りによって流す事が出来る。
ラビリスは哀しみによって涙を流しながら必死に訴え続け、大きく振り被った戦斧を相手に向けて振り下ろすと、
「――――わかった」
青年は両手を広げてその攻撃を真正面から受けてしまった。
振り下ろされた戦斧は、相手の左肩から腰辺りまで袈裟切りに一気に切り裂く。着ていた服と肉だけでなく、硬い骨までも叩き斬ってしまった感触が武器越しに伝わってくる。
そうして、相手が武器を手放して床に倒れるまでに、全身に生温かい液体を浴びたラビリスは、戦斧を取り落として赤い液体に濡れた自分の手を見た。
「な、え、なんで？　これ真っ赤って……ま、まるで血みたいやん……」
自分の腕部パーツよりも鮮やかな赤色の液体は、まるで血のようではないか。
しかし、自分と同じ機械の青年から血が出るはずはない。もし、これが血であったなら、彼は機械ではなく人間だったということになってしまう。
そんなはずないと自分に言い聞かせ、ラビリスは自分の腕から滴り落ちる液体と、青年を中心に広がり続ける床の赤い水たまりを茫然と

見つめた。
すると、少しして部屋の入り口を覆っていた隔壁が解除され、白衣を着た長身の女性と何人かの人間が慌てた様子で入ってくる。
先頭にいた女性は自分の服が汚れるのも構わず青年の横に膝をついてしゃがみ込むと、相手の首や頬に触れながら呼びかけている。
「ちょっと、声を聞こえてる？　……ダメ、意識が完全に飛んじゃってる。武多、すぐに動ける人間を呼んで工場の手術室の準備、エマは手術室までボウヤを運んでくれる人間を呼び出して！」
女性の様子から事態が一刻を争う事が伝わってくる。指示を受けた二人が携帯でどこかへ連絡を取りながら部屋を出て行ってからも、女性は青年の服を破って傷の状態を確認して苦い表情を浮かべている。
上手く状況を飲み込めないラビリスは、嫌な予感を感じながらも状況を把握しているであろう研究員らしき女性に声をかけた。
「な、なぁ、これどういう事なん？　ウチ、新型の子と戦ってたんやないの？」
「詳しい事は後で説明するけど、このボウヤは一応は人間よぉ。ただ戦闘力を得るために心臓に黄昏の羽根を積んでるし、右腕を失ってから機械義手を付けてるけどね。それ以外は普通に生身だから傷付けば痛みを感じるし、怪我が酷ければ死ぬってわけ」
女性は普通に会話するような口調で答えてくれたが、表情は強張っており、予断を許さない緊迫した状況であることが見て取れる。
今も広がり続けている赤い水たまりを見て、ラビリスは背筋に言いようのない悪寒が走った様に感じる。
黄昏の羽根を積んでいて、火器の付いた機械の右腕を持っていて、何よりあれだけの戦闘力を持っていながら、倒れている青年は人間だったというのか。
あり得ない、絶対にそんなはずはない。自分に言い聞かせようとするが、機械ではあり得ない鮮やかな赤色が彼女に現実を突きつけてくる。
そしてさらに、敵だとばかり思っていた青年について、彼の様子を

見ている女性が新たに伝えてきた。
「ラビリスちゃんは勘違いしてたようだけど、この子は桐条グループを恨んでて全面的にアンタの味方だったのよ。ただ、急に脱走しようとしたから、そのまま外に出すのは危険だと思って、貴女が話を聞ける状態になるまで足止めしようとしたみたい」
「そ、そんならウチは、人を、人を殺して……」
かつて大勢の同胞を殺し、今度は自分たち兵器が守るべき人間までも手にかけてしまった。その事実が重くのしかかり、青年の血で汚れた手が激しく震える。
「骨は繋がってるけど、なんでそれ以上の治癒が働いてないのよ。ああもう、不眠不休で作業なんてするからっ!! ちょっと、本気でヤバいわよ! 担架でもストレッチャーでも良いからボウヤを運び出して!」
女性は破いた彼の服を傷口に当てて出血を抑えようとしているが効果は薄い。床に広がった血だまりから出血量を計算し、このままでは本当に死ぬぞと声を張り上げて救助隊を急がせれば、ようやく到着したらしい男たちがストレッチャーを持って駆けこんできた。
青年の大切な武器は置いて行くと大変だが、普通の者では一緒に運ぶ事など出ないので今は置いて行くしない。
やってきた男たちが四人がかりで青年をストレッチャーに乗せる際、青年から再び夥しい量の血が流れ出る。それを見たラビリスは自分のしてしまった事の重大さに耐えきれず、血のついた手で頭を抱えるとその場に崩れ落ちた。
「イ、ヤ……イヤ……イヤァァァァァァァァ――――ッ」
青年が運び出されていく中、少女の叫びは無機質な部屋に虚しく響いていた。

第百四十八話　改めての対面

９月１０日（月）
夜――ＥＰ社・救護室
公安など外部の者にばれぬよう秘密裏に作られた工場区画地下にある救護室。
そこは窓もろくにない閉鎖的な空間だったが、静かさという点においては優秀で、目を覚ました湊は左肩から腰までに激しい痛みを感じながら瞼を開け、自分の状況を確認するため目だけを動かし辺りを見た。
すると、ベッドのすぐ横でパイプ椅子に座った銀髪ポニーテールの少女を発見する。
少女は膝の上に置いた手をギュッと握りしめて俯いているが、何故だか泣いている様に見えたので、湊は生身である左手を伸ばすと相手の頭に優しく手を置いた。
急に触れられた相手は驚いたようだが、湊が目を覚ましたことに気付くなり、立ち上がって心配そうに調子を尋ねてくる。
「目、覚ましはったん？　痛いところない？　気分はどうやろか？」
「……一度に色々と訊かれても困る。とりあえず、左肩から腰辺りにかけてが痛い。それ以外は気分も含めて別に悪くない」
こんな風に永い眠りから目を覚ますのは初めてではないので、湊は順に身体の調子を確かめていけば、左肩から腰にかけて出来た傷以外には特に不調はなさそうだと答えた。
戦いたくないと叫んだ相手の要求を聞き入れ、戦いの中で最も威力の乗った攻撃を受けて骨まで切られてしまったが、ファルロスが最低限の治癒をかけて既に骨はくっついている。
肉の方はシャロンが縫合し、上から特殊なフィルムを貼って傷を塞いでから包帯で覆われており。一応の出血は抑えられているが、これでは痛みで思考にノイズが入るかもしれない。
湊が内側に意識を向けてファルロスに呼びかけ、肉だけをくっつけてくれるように頼めば、すぐに反応が返ってきて傷口は塞がった。

時流操作と同じく治癒も使用を控える様に言われているため、最低限に留めたことで傷跡は残っただろうが、別に今さら傷跡が一つ二つ残ったところで気にしたりはしない。
そうして、傷を治し終えたことで湊が身体を起こそうとすれば、ラビリスが慌てた様子で肩を掴んで制止してくる。
「まだ、起きたらアカンて。ウチが斧で斬り付けた傷がまだ塞がってないんやから、あんま無理すると開いてまうよ」
「いや、もう塞いだから大丈夫だ」
心配してくれるのはありがたいが、本当に傷はもう大丈夫なのでそこまでして貰う必要はない。
それを証明するために入院着の上を脱ぎ、巻かれた包帯を解いて傷口を相手に見せる。特殊なフィルムも剥がし、治癒でくっつけたことで肉に埋まりかけた糸は爪を使って抜いた。
糸を抜いた事で少しだけ血が出てしまったが、それ以外は大きな傷跡が残ったくらいで傷自体は既に塞がっている。
ラビリスはあれだけの重傷が昨日の今日でほぼ完治していることに驚いているが、とりあえず身体を起こしても問題ないと分かって貰えたはずなので、湊は改めて起き上がりベッドに座ると状況を把握するため質問を口にした。
「……今はいつだ。俺はどれくらい寝てた？」
「今は九月十日の午後十時を過ぎたくらいやね。丸一日以上寝てはったけど、本当に、もう目覚まさへんかと思って、ウチずっと怖かってん……ホンマに良かった……」
入院着を着直しながら尋ねた湊に、ラビリスは心の底から安堵の表情を浮かべて笑いかけてくる。
別に死んでもファルロスが蘇生してくれるため、そもそも完全な死などあり得ないのだが、彼女はその事を他の者から聞いておらず知らなかったのだろう。
心配をかけたのは申し訳なかったと思い。湊は怪我も含めて自分の落ち度だとして相手に気に病む必要はないと告げる。
「ずっと寝てたのは疲れてたからだ。作業に没頭してて何日も寝るの

を忘れていた。別に君の攻撃が原因じゃないから気にしなくていい」
「多分、そういうやろうってシャロンさんたちが話してたわ。あ、そういえば、挨拶まだやったね。ウチは対シャドウ特別制圧兵装五式〝ラビリス〟いいます。君のことは手術終わってからシャロンさん達に聞いててん。今がいつかっていうのも合わせてな」
「そうか。俺は飛騨製人型戦略兵装二式〝有里湊〟、本名なら百鬼八雲で、戸籍名は有里湊だ。面倒だから名前で呼んでくれていい」
「あ、うん。ほんなら、湊君でええかな？　人前やと八雲君って呼んだらマズいんやろ？　水智さんにちょっとだけ事情とか聞いたわ」
彼女たちがどういった説明をしたのか、眠っていた湊には分からない。
しかし、最低限の状況説明は行ってくれていたようなので、実際にこうやって普通に話せる状態になっていることもあり、湊は彼女たちの働きに感謝した。
お互いに自己紹介を終えたことで話せるようになり、湊は部屋の中を見渡してベッドの脇のテーブルにお見舞いの果物セットを発見すると、そこからリンゴを一つ取って齧りついて食べ始める。
大量の血液を失ったことで空腹を感じたのだが、健康的な歯でシャクシャクと食べ続けていれば、何やら暗い雰囲気になっていたラビリスが目を伏せながらポツリと呟いてくる。
「……ゴメンな。ウチ、勘違いして湊君のこと殺してまうところやった。湊君はなんも悪ないのに、勝手に敵やと思って、また実験させられる思って人に武器を向けてしもた。ウチは兵器失格や。人を守るためのものが、守るべき相手を殺そうとするなんて欠陥品にもほどがあるわ」
自嘲的に笑う彼女は自分のしてしまった事を後悔しているようだった。
彼女たち対シャドウ兵器はシャドウを倒すことを目的として作られたが、そこには〝人を守る〟という条件も織り込まれている。
自分が破壊されるような状況にでもならなければ、基本的には無抵抗原則が適応されてラビリスの方から手を出す事は出来ない。

それを、黄昏の羽根の共鳴と右腕部が機械義手だったことで勘違いし、彼女は湊を殺しかけてしまった。仮にエラーやバグによって引き起こされた行動であったとしても、これでは安全面に疑問が浮かび流石に運用していく事は出来ない。
「湊君が目を覚ますまで居させて貰ったんは、ただ謝りたかったからやねん。湊君の無事を確認して、謝ることも出来たから思い残すことはないわ。もう遠慮せずにスクラップにしてもうて構いません。我儘聞いてもろてありがとうございました」
椅子に座ったラビリスはどこか吹っ切れた顔で頭を下げて礼を言う。
本来ならばすぐに機能を停止させられ、そのまま直前の行動を取った原因の検証が行われる。それが済めば分解するなり、そのままスクラップにされるため、こんな風に怪我を負わせた相手が目を覚ますまで自由にさせて貰えるなどありえない。
お願いしてここに居させてもらったラビリスも、まさか許可されるとは思っていなかっただけに、目覚めるのを確認して謝罪まで出来てよかったと満足気だった。
しかし、謝罪と礼を受けた青年は、笑顔の彼女とは対照的に視線を鋭くしてラビリスに質問をぶつける。
「……誰かが俺が目を覚まし次第、君をスクラップにすると言ったのか？」
「ううん、誰も言うてへんよ。でも、こんな事してしもたら廃棄しかないやん。ウチもちゃんと納得済みやし。すぐにしてくれて構わへんよ」
どこか諦観の混じった苦笑でラビリスがその言葉を口にした途端、湊はやや乱暴に相手の腕を掴んで引き寄せ、ベッドの上に仰向けに倒した。
「きゃっ」
突然のことに驚きラビリスが反応出来ずにいれば、瞳が蒼くなった湊が彼女を組み伏せて、言葉に怒気を孕みながら今のは本気で言ったのかと尋ねる。

「スクラップにされる事に納得済みだなんて本気で言ってるのか？
会いたい人がいるって言ってたのに、君はそれを諦められるのか？」
「あ、会いたい気持ちはまだあるけど、自分がしたことの責任は取らなあかんやろ。ウチは湊君を殺そうとした。生きてたんは結果論でしかないやん」
湊は確かに生きていたが、それはシャロンたちのような腕の良い医者がいたことに加え、患者である彼自身の生命力が人よりも強かったためだ。
もしも、どちらかの条件が欠けていれば、患者は絶対に助からずに死んでいた。
客観的に見てそういった検証結果がある以上、ラビリスが相手を殺そうとしたという事実は変わらない。犯した罪を償うのは当然で、機械である自分には廃棄処分が妥当であるとラビリスも納得している。
自分たちの人格モデルとなった母親に会いたい気持ちはあるが、罪を犯した自分に被害者へ謝罪する機会をくれただけでも十分過ぎる配慮だ。それ以上を望むのは我儘でしかない。
だから、もういい。彼女が言外にその事を告げれば、覆いかぶさる形になっていた湊が身体を起こし。馬乗り状態になるなり着直した上着を脱ぎ捨て、そのまま左手で勢いよく自分の胸を貫いた。
「な、なにしてはるのっ!?」
驚愕に顔を染めるラビリスの目の前で、手首まで完全に突き刺さった彼の胸から鮮血が吹き出す。
顔や身体中に血を浴びながらも、ラビリスは身体を起こして慌てた様子で彼の傷口を手で押さえて、少しでも出血を抑えようとする。
彼が一体何をしようと思ったのかは不明だが、彼女にとって湊の身体から血が出るというのは一種のトラウマだった。
「ああ、もうっ」
流れ出る温かな鮮血に、ラビリスはどうすればいいと思考を巡らせる。
機械でも温度を感じる事は出来る。人のような主観で変動するものではなく、搭載された温度センサーによる結果として認識するだけ

だが、戦斧で切りつけたときも今も顔や身体にかかった血液の温度がデータとして表示されるのだ。
表示されている数字は〝３６．８〟、これが彼の体温であり血液の温度でもある。鮮やかな赤と共にこの数字が表示されるだけで、ラビリスの身体は切りつけたときの感触を思い出し震えてしまう。
だが、自分が震えていれば彼が死ぬ。そう思ってラビリスが彼の胸に刺さった腕の脇を両手で押さえていれば、彼はブチブチと嫌な音をさせながら手を引き抜いた。
「あ、ああ……っ!?」
引き抜かれた手には綺麗な紅緋色をした脈動するものが握られていた。
ラビリスは一目でそれが心臓だと理解し、脈動しなくなったそれを慌てて彼の手から奪い取り胸に戻そうとする。
しかし、胸に戻したところで元通りになる訳ではなく、かといって自分では血管を繋ぎ直す事も彼女には出来ない。
助けたいがどうすればいいか分からず焦っている様子がおかしかったのか、青年が少女を見ながらくすりと笑うと、彼女の手から心臓を取ってそれを握り潰した。
助けようと思っていたラビリスは当然驚くが、直後、彼の胸の傷口が自然に塞がるのを目にして、どういう事か尋ねたそうにしている。
その意思を読み取った湊は、傷が完全に塞がった胸に彼女の耳にあたる集音マイクの搭載された部位を密着させ、自分の心音を聞かせながら理由を説明した。
「……俺はこうやって心臓を破壊しても死なない。四肢は失えば治らないが、臓器系は完全に抜き出しても体組織から新たに作り出せるんだ。つまり、俺の生存は確定事項だった。君は俺を傷付けはしたが、殺そうとしたわけじゃない」
シャドウの王であり死を司るデスを内包した恩恵、それは生物の治癒能力を超えた蘇生能力だ。
一般人ならば生命力が足りずここまでのことは出来ないが、青年はそれを可能とするだけの生命力を持っていた事で、ラビリスとの戦闘

でも死ぬことは絶対になかった。
彼の身体の特殊性を知らずに困惑していた彼女にそれを伝えれば、胸から耳を離してラビリスは瞳を揺らしたまま見上げてくる。
「な、なんでなん？　ウチ、話も聞かんと切りつけたんよ？　普通やったら怒るとこやろ。せやのに、なんでウチのこと庇うんよ」
「君に罪を背負わせたくないし、死なせたくないからだ」
「……訳が分からへん」
会ったばかりで怪我まで負わされながら、どうして彼が自分にここまでしてくれるのか分からない。
ラビリスが難しい表情でベッドに身体を倒せば、湊もその横に寝転がり、話が出来る様になれば聞きたかった事を尋ね始めた。
「君について調べる中で、当時の実験について少しだけ知った。ペルソナの獲得だなんてくだらない事のために、心を持った姉妹同士を殺し合わせていた。これは、本当にあったことなんだろ？」
「……うん」
「当時のことを君の口から直接聞きたい。思い出したくなかったり、話したくないなら構わないから、少しだけでも教えて貰えないか？」
興味本位という訳ではなく、ラビリス達が受けていた仕打ちなど、当時のことをちゃんと知っておきたいという意思が彼の瞳には籠められていた。
話して楽しい話題ではなく、ラビリス自身も自分のしてきたことを知られて拒絶されるのは怖いが、シャロンや恵たちからこの青年は何があろうと自分の味方だと聞いていたため、意を決すると静かに話し始めた。
目覚めてすぐに大量の姉妹機と戦った事、戦った相手の黄昏の羽根を回収してデータのフィードバックを受けた事、自我の発達を促すため施設の外で自由時間が設けられていた事、そのときに出会った〝機体番号０２４〟と仲良くなった事、自我の発達が進むにつれて姉妹機の破壊が嫌になっていった事、正式に自分が五式に選ばれてすぐに最も仲の良かった〝機体番号０２４〟と戦って操られる彼女を破壊した事、そして彼女や他の姉妹機たちの〝記憶〟を不要だと切り捨てて

簡単に消そうとした研究者に怒りを感じて脱走しようとした事など全てを話した。
　封印されていたラビリスにすればつい先日のことであるため、話している途中で悲しさから涙を流していたが、それを見た湊は優しく頭を撫でて、彼女が話し終えるまで黙って聞いていた。
「とまぁ、そんな感じやね。あはは、なんか自分のこと話すって恥ずかしいな」
　話し終えた彼女は自分の方が設定年齢的にお姉さんなのに、年下の男の子に慰められて優しくしてもらったことが恥ずかしかったのか、自分の過去を話して照れた振りをしながら笑う。
　だが、青年は彼女のそんな態度を気にせず、頭を撫でていた手を彼女の後頭部に回して、反対の手を彼女の腰に回すなり自分の胸へと抱き寄せた。
「うわっ、ちょ、湊君？」
「済まない、人間の勝手な都合で君たちを傷付けて」
「そんな、湊君のせいちゃうやん」
「俺は君の妹である七式アイギスに命を救われた。彼女は君たちの犠牲がなければ生まれていなかった。逆を言えば俺は君たちの犠牲によって生かされたと言える。だから、ありがとう。そして、済まなかった」
　ラビリスが受けた実験と彼は何の関係もない。研究者たちには怒りを覚えたが、それで全ての人間に復讐してやろうとは彼女も考えていなかったのだ。
　故に、彼が人間を代表するように謝ってきたときには驚いたが、続けて語られた言葉によって、自分や犠牲になった姉妹機たちの命にも意味があったと感じられた。
　データ以外に何も得られるもののないと思われた実験が、時を超えて妹に繋がり、目の前の青年を助けていた。ちゃんと、人々を守る役に立てたのだ。
　その事実が何よりも嬉しい。無駄な犠牲ではなく、繋がる形で命に意味があったと気付けたことで、ラビリスは喜びの涙を流しながら彼

の胸に顔を埋める。
「ウチらも、役に立ててんな。あんな実験でも、しただけの意味があってんな……」
「ああ、そのおかげで俺は生きてる。君たちの命を貰ったようなものだ」
「そっか。うん、それは良かったわ。きっと０２４や他の姉妹たちも喜んでるはずや。ホンマにありがとう――――ッ」
　そのとき、ラビリスは自分の中で何かの力が目覚めるのを感じた。屋久島の実験施設を脱走したときに目覚めかけていたような曖昧な形ではなく、確かな一つの存在として大きな力が目覚めたのだ。
　突然の力の発現に驚いて二人が顔を上げれば、そこには、鎧にも機械にも見える身体を持った銀髪の女神がいた。
「これ、ウチのペルソナ？」
「……運命〝アリアドネ〟か。強いな。きっと君が他の姉妹から受け継いだ想いも籠められているんだろう」
「あはは、せやったら責任重大やね。多分、皆は湊君を助けたりっていうてるんやと思うわ」
　彼の言葉によって自分たちは報われた。相手は妹に助けられたことで、その元になった五式のテストベッド機体たちにも恩を感じているようだが、彼が恩を感じるべきなのは助けた妹本人だけに対してであって、自分や他の姉妹機は関係ない。
　だから、自分は自分たちを認めてくれた青年の助けになろうと思う。きっと他の姉妹機たちも同じ想いのはずだから。
　そんな風に考えたラビリスから目覚めた力の使い道を聞いた青年は、大切な二人の少女と同じく守るべき対象が、またしても自分の助けになろうと言いだしたことで微妙な表情を浮かべる。
　せっかく自由の身になったのだから、旅行でも何でも好きな事をすればいいというのに、ペルソナに目覚めた女性は皆構いたがりにでもなるのだろうか。青年はペルソナ覚醒者のパーソナリティーの変異や共通項について改めて考えることにしつつ、ラビリスに伝えなければならない事があったので、今の内にそれを伝えておく事にした。

「……ラビリス、君が当時受けていた実験の情報などはあまり手に入らなかったが、人格モデルとなった少女については情報を得ている。だが、申し訳ない事に彼女と会わせる事は出来ないんだ」
「あ……やっぱ、脱走しようとしたから危険や思われとるんかな？　その、ウチを無力化出来る湊君が一緒でも全然構わへんのやけど、ちょっとだけでも会わせてもらわれへんやろか？」
「そうじゃない。君の人格モデルとなった少女はもう……死んでるんだ」
　影時間を終わらせる以外に個人的な目的のためにも動いていた湊は、ラビリス自身の情報と同じくらい人格モデルになった人物についても調べていた。
　その結果、相手が既に死んでいるという事実に行きあたった訳だが、ラビリスの願いがその少女と会いたい事だったと知り、願いを叶えてやれない湊は申し訳なさそうに暗い表情を浮かべる。
「……それ、ホンマなん？　って、湊君がうそつく理由ないもんな。そっか、ウチ、遅かってんな」
　最初の脱走時に自分が孤島にいると知り、姉妹たちから受け継いだ想いと自分自身で決めた願いを叶えることは出来ないと一度は諦めた。だが、再び目覚めたことで希望が見えたというのに、悲しい事実を告げられたラビリスは落ち込んだように目を伏せる。
　封印されていなければ会えたという訳ではないが、もしかしたら、というＩＦについて考えるとどうしても割り切れない物があった。
　自分たち五式シリーズの母である少女にもう会えないと知り、哀しみや悔しさが入り混じった複雑な感情をどう処理すればいいのか分からず、ラビリスが暗い表情で黙っていると突然顎に手をあてられ強引に顔を上げさせられる。
　顎に手を当てて上を向かせるという今の行動もそうだが、ベッドに連れ込むときも抱きしめてくるときも、この青年は女性に対して随分と強引な感じにグイグイと引っ張って行くタイプなのだなと、真っ直ぐ視線をぶつけて見つめ合う形になったラビリスは彼について新たな情報を得た。

この情報を使うときが来るかどうかは不明だが、彼がこんな風に行動を起こして来たときには何かしらの意味がある。そう考え、彼の次のアクションを待っていれば、湊はしっかりとラビリスの目を見ながら話しかけてくる。

「……会って話をさせてやる事は出来ないが、一緒に墓参りに行かないか？　ちゃんと調べてあるんだ。生家は関西のようだが、こっちの病院に入院していて家族もこっちで暮らしていたから、そのまま墓もこっちに作ったらしい。気休めにしかならないかもしれないが、それじゃあ駄目だろうか？」

「ううん、十分嬉しいわ。フフッ、湊君は優しいなぁ」

墓参り。それがどんなものかは知識としてはインストールされているが、少女が既に死んでいると聞いた時点で、ラビリスは自分の願いは叶わなくなったと思っていた。

だからこそ、そういった会い方もあると教えて貰えたことで、言葉は交わせないが伝えたいことを墓前で話す事は出来ると、彼女は別の方法で願いが叶えられることを嬉しく思い笑った。

その後、意識を取り戻さない湊の様子を見に来たシャロンたちが、血塗れでベッドに寝ながら会話している二人を発見し。何があればそんなカオスな状態になり、そのまま普通に会話していられるのかと二人の精神構造を本気で心配して検査を受ける事を勧めるという一幕があった。

もっとも、二人は色々あって自分たちが血塗れだと忘れていただけで、別に血塗れでも平気などという変わった思考をしている訳ではない。

馬鹿な事をいうなと返した湊は他の者に掃除を任せ、ラビリスと共にシャワールームに向かうと、別々の個室で汚れた身体を綺麗にしてから、合流してラビリスの新型ボディの置かれた開発室へと向かった。

――開発室

湊が目を覚ましたことで、研究員らは忙しそうに動き回ってラビリスの新型ボディの最終調整などを行っていた。

スパコンの準備を終えて戻ってきたエマも、こちらでの作業を手伝おうと部屋にやってくれれば、全員が忙しそうにしている中、ラビリスと並んでパイプ椅子に座っている青年が、見舞い品の果物セットを膝の上に乗せてメロンを手に持ち齧っているのが目に入った。
ある意味で開発責任者であるはずなのに、作業を眺めるだけで女子と駄弁って一個一万円以上するメロンを食べているとは何事か。そんな事を思いつつも、相手の変な食べ方の方が気になり近付いたエマは思わず尋ねていた。
「……湊さん、それどんな食べ方っすか」
「剥くのが面倒だったんだ」
「いや、だからって皮ごとメロン食べるとかワイルド過ぎっすよ」
呆れながらエマが言った通り、青年はリンゴを齧るようにメロンを皮ごと食べていた。
健康な歯をしていれば確かに食べれるだろうが、メロンの皮など青臭いだけで美味しくないだろう。
血を大量に失った上に、ラビリスの新型ボディを作っていたときには、時流操作で総時間数にして一ヶ月以上をほぼ不眠不休で過ごしていたため、身体が栄養を求めて食べているのだろうが、もっと他にあったのではないかとエマは突っ込みたい衝動に駆られる。
けれど、これからラビリスに色々と説明して新型ボディへ移ってもらうため、ここで変に疲れたくなかった彼女は、突っ込みを放棄して他の研究員の手伝いに去って行った。
「なぁ、新型ボディになったら何が変わるん？」
去っていくエマの後ろ姿を見ていたラビリスは、自分の新型ボディが用意されている事を聞いていた。
最初は廃棄にされると思っていたので半分聞き流していたのだが、このまま活動を続けていくのならあまり整備されずに封印されっぱなしだった現在のボディよりも、最新の技術が組み込まれた新型ボディにした方が色々と都合がいいことは分かる。
しかし、詳しい仕様などはまだ説明を受けていないため、隣で洋梨を食べだした青年に話を聞いておく事にしたらしい。

「外見は基本的に同じだが、腕や関節などが今よりも人間に近い見た目になる。擬装用スキンもあるからより人間社会に溶け込みやすくなるはずだ」
「そうなんや。あ、でもウチらって擬装用の機能が搭載されてるんよ。なんや潜入用とかって話やねんけど」
　言いながら彼女が目を閉じて何かを稼働させれば、ラビリスの身体がノイズに包まれ、次の瞬間には見た目が人間そのものになっていた。
　耳も腕も完全に人のそれで、服装が元々着ていたレオタード姿という際どさなので男性陣にすれば目の毒だが、その機能について知らなかった湊は驚きながらも感心したように彼女の手や耳に触れていた。
「これは……対象に認識を誤認させる能力か。ホログラフィではなく一種の催眠術だから、かかっている相手は感触も含めて気付かないみたいだ」
「詳しい理論はウチも知らんけど、これも搭載してもうたら便利やと思うんよ。けどまぁ、やっぱり難しいんかな？」
「いや、設計図がなかったから積んでる装置は君の身体をベースにしてあるんだ。そこに火器制御やオルギアモード用のものを加えただけだから、新しい身体でも多分使えるはずだ」
　桐条グループの技術は一部が未来的過ぎて、工学系の知識を持っているＥＰ社の研究員でも何の装置か判断するには設計図と解説が必要だった。
　アイギスのボディについては飛騨のデータがあったので良かったが、ラビリスに関しては湊が書き起こした純粋な設計図しか存在しない。
　そうなると、ラビリスにしか搭載されていない装置は用途が分からないので、下手にいじっては拙いと判断した研究員らは、近年開発された部品での各部の改良と機能追加以外はノータッチでいるしかなく。現行ボディで出来ていることは基本的に新型ボディでも出来るはずだった。
　現在のボディと同じように使えるのなら安心だと思い、説明を受け

たラビリスが小さく笑みを浮かべる。すると、幻惑機能により人間の見た目になったのが不思議なのか、ぺたぺたと顔や胸を触っていた湊が急にラビリスのポニーテールに近い何もない空間に拳を放ってきた。
「アイタッ、ちょ、実体部分が消えた訳やないんやから、もうちょい気を付けて触ってくれはる？」
「ああ、いや、というか君の幻惑機能は半分くらいしか効いてなくてな。実体の方を叩いたらどうなるのか気になったんだ」
幻惑機能は誤認識させる機能なので、何もないように見えても実体はそのままで、その部分に攻撃を受ければ当然当たり判定がある。
相手がそれを理解せずに叩いたと思ったラビリスが、幻惑機能を解除して恨めしそうに説明すれば、返ってきたのは分かっていて殴ったという衝撃の言葉だった。
確かにラビリス自身も自分にも作用するように幻惑機能を使えるので、使っている間は自分の姿は人間そのものであり、肌に触れれば人間の生身と同じように感じたりしている。
だが、やはり目に見えなくなっていても実体はそこに存在するので、確かめるなら普通に触れて確かめて欲しかったと少々呆れた様子で青年を見た。
「いや、そんなわざわざ叩かんでも……。ていうか、半分しか効いてないって故障しとるいうこと？」
「そうじゃない。俺が幻術や催眠術に耐性があるだけだ。俺のペルソナに専門家がいるのと、本来の魔眼が似た能力だったんだ」
「へぇ、幻術タイプのペルソナって凶悪な能力やね。けど、マガンってなんなん？」
彼女が装置の故障を疑い心配そうにすれば、湊は所持しているペルソナなどの関係から、自分が他の者よりも耐性があって幻術にかかり辛く、薄らと実体の方も見えているだけだと説明してくる。
幻惑機能という便利な機能を搭載しているため、それの悪用方法などを理解しているラビリスは、幻術タイプのペルソナは下手な戦闘タイプよりも厄介だと、まだ見ぬ青年のペルソナの力に密かに感心し

た。
　しかし、そちらよりも彼が口にした〝マガン〟という言葉が気になり、データベースを参照しても該当する単語がなかったことで首を傾げれば、湊はバナナを房から千切ってラビリスにも一本渡して食べながら魔眼について話す。
「別名だとイーヴィルアイとも言うんだが、神の血を引いてる九頭龍家の一部の者に現れる特異体質で、透視や魅了など人によって能力は異なるが眼に異能が宿るんだ」
「神様が実際におったとか初めて知ったわ。あ、それで湊君は催眠術が使える眼なん？」
「正確に言えば対象の脳に干渉する能力だな」
　そういって青年は右眼に付けていた半月状の眼帯を外して、少女に自分の右眼を見せた。
　てっきり怪我をして隠しているのだとばかり思われたそこには、紫水晶（アメジスト）色の妖しい輝きを宿した右眼が存在した。
　湊が手で一瞬隠せば右眼も左眼と同じ金色になったが、すぐに紫水晶色に戻ってしまったため、本来は金色の眼が魔眼状態のときは紫水晶色になっているようだ。
「こっちの眼は一回抉り取られたんだが、体力が回復したら臓器と同じように再生させられたんだ。でも、肉体の最適化が行われたときに本来の魔眼だった〝暗示の魔眼〟が目覚めた。原理等は分からないが、多分、視覚を通じて信号を送り受け取った相手の脳に干渉するんだと思う」
「干渉したらどうなるん？」
「脳に直接命令を送って相手を操ったり、認識を歪めて幻術を見せたりも出来ると思う。目の前に実際は何もなくても、脳がリンゴがあるって錯覚すればリンゴがあるように見えるだろ？　幻術の見せ方はそんな感じだが、まぁ、悪用し易い能力だな」
　湊が自身に備わった本来の魔眼の能力について説明する間、受け取ったバナナをどうすればいいか悩みながら話を聞いていたラビリスは、とりあえず湊と同じようにしてみようと皮を剥いて頬張ってみ

る。
　テストベッドの機体だった彼女にも、成分分析が出来る様に食べ物を口から取りこむという食事にも似たオプション機能は搭載されていたらしく、租借した物を飲み込むと初めての体験にちょっとした感動を覚えているようだ。
　そうして、自分が物を食べられると知った彼女は、初めて自分が食べた物は〝湊のバナナ〟だと記念の記録をメモリに残して貰ったバナナを食べながら話を続ける。
「はむっ、ん、じゃあ、湊君が眼帯してはるのって暗示の魔眼を使えんようにってことなんや？」
「ああ。先に直死の魔眼っていう物の死を視る魔眼が目覚めてたんだ。なのに、最適化で急にこっちが本来の魔眼ですって感じに目覚めて、しかも、強力で中々制御出来ないから、しょうがなく目が治った後も眼帯を付けたままにしてる」
　魔眼というのは徐々に使い方を覚えて練度を上げていくものだ。しかし、強力な力を持った魔眼の中には、最初はオンオフの切り替えすら制御出来ない物も存在する。
　湊が先に手に入れた〝直死の魔眼〟も、どちらかといえば明確なオンオフのない切り替え不可能なタイプなのだが、そちらは死を視ない様に意識を強く持つことで擬似的にオフにする事が出来る。
　けれど、暗示の魔眼は能力が複雑な上に強く、まだ手に入れて日が浅いために制御が出来ていない状態だった。
　切り替えが可能になれば眼帯も外せるが、それまではふと考えただけのことが命令となって、周囲の人間を巻き込んでしまうことが危惧されるため、湊は制御出来ない右眼を眼帯で覆ったままにしている。
「なぁ、それってウチにも掛けられるん？」
「……秘密だ」
「そこで秘密とかずるいわ。実は使えるけど、ここぞって時にウチに変な事させるとかやないよね？」
「新ボディは外部からの遠隔操作機能を排除しているのに、そうした本人が君らを操るはずないだろ。というか、暗示の魔眼について教え

たのは君が初めてだ。まぁ、羽入っていう後輩の女子には、眼帯を取られた際に右眼があることがばれてるが、そいつ以外はここの研究員でも俺の右眼が治ってることは知らないんだ」

以前、湊が階段の近くで宇津木と話している際、羽入は生徒会長として紹介された湊を自分の知る湊本人だと認識出来ず、しかし、どこか見た事があるようなと違和感を持った事で、湊の眼帯を外してその下を見ていた。

もっとも、湊の眼帯の下を見た事が無い状態で何故そんな行動を取ったかは不明だが、噂通り本当に怪我の跡があれば彼女は驚いて謝っていただろう。しかし、眼帯の下に紫水晶色の瞳があったことで、それを見た彼女は綺麗な色の目だと褒めていた。

そういったイレギュラーな行動で湊の右眼を見た羽入は例外として、以前、ヒストリアの屋敷で湊の怪我の治療を行ったシャロンですら知らない右眼の秘密を、会ったばかりで教えて貰った事は光栄だとは思うが、他の者もいるこの場で見せたら意味がないのではとラビリスは首を捻った。

「でも、いまさっき眼帯取ってはったやん。それでばれてもうたと思うけど？」

「取るときには能力を使ってたさ。こういうのは奥の手だからな。一部の人間にしか教えないようにしてる。それに直死の方は他に知っている者もいるが、暗示の方はまだラビリスにしか教えてない。ベルベットルームの住人は覚醒後の俺の様子を見れなくなったから、知ってるのは本当にラビリスだけだ」

「ベルベル？　よう分からんけど、じゃあ二人だけの秘密やね。フフッ、秘密作ってもうた」

機械である彼女には本来報告義務があるため、研究員に対して秘密を持つという事は出来ない。

ただし、それは桐条グループで兵器として扱われていた時の話で、他の者から一個人として扱われ、記憶データの閲覧等はラビリスの許可がなければ認めないと公言している湊がいるこちらでは、話したくなければ素直にそう返していいと言われている。

故に、今までの自分では考えられない秘密を作るという行為を、彼女は悪戯をしているような気分で楽しんでいた。
「ラビリスちゃーん、準備出来たわよぉ」
「はーい、すぐ行きます」
二人がお喋りを続けていると、ボディの移行準備を終えたシャロンが手招きしてラビリスを呼んだ。
呼ばれた彼女は素直に椅子から立ち上がって向かい。メンテナンス装置に座って寝ているようにしか見えない新型ボディと対面する。
ルックスという意味での外見はソックリだが、頭部のユニット等が排除されて代わりに耳などが付いている。腕や関節も同じように人ソックリだが、擬装用スキンを施してあるため、それを外せば機械的な部分も少しはあるのだろう。
火器制御系を搭載済みではあるが、初期の仕様は現行ボディと同じで、腕はチェーンナックルを改良した強化ワイヤーによる有線式ロケットアームとなっている。ただ、人と同じ見た目を目指す上でナックル部分の強度が課題として挙がり、人に近付ければどうしても強度が落ちることは避けられなかった。
強度が落ちた状態でロケットアームを放てば、チェーンナックルほどの威力は見込めず逆に自壊も考えられる。それを解決するため名切りの特殊製法で製作されたのが、指先から肘辺りまでを覆う現在の腕と同じ色をした深紅のガントレットだった。
手首から肘にかけては完全に覆っているが、手首より先は手の甲側のみを装甲で覆い、掌側は防刃繊維の特殊布で保護するようにしているので、強度及び威力の向上だけでなく装備した状態でも細かな作業を可能としている。
「流れを説明するけど、最初にするのは記憶データの転送。それが終わったらラビリスちゃんのコアである黄昏の羽根を積み替えるわ。記憶データはコピーじゃなくて完全に移し替えるだけだから、作業が始まる前にラビリスちゃんには眠って貰うけど、破損データとか断片ファイルも全部しっかりと移すから安心してねぇ」
「はい、どうもありがとうございます」

今よりも性能が上がりながら見た目は人間により近付いている新型ボディに感動を覚えつつ、説明を聞いていたラビリスはシャロンらの気遣いにも感謝した。
パソコンであれば破損データや断片ファイルなど、容量を無駄に消費するだけなので空き容量を増やすために削除されるが、ラビリスのメモリに入ったそれらは全て記憶の欠片だ。後で修復や補完がなされて〝思い出す〟ことがあるかもしれないため、改めて言わずともそういったデータもきちんと移して貰えるのは嬉しかった。
データをコピーするのではなく移し替える理由も、個人の記憶だから同じ物を別の何かに残すなどあり得ないといった考えからに違いない。ボディの交換は機械なので仕方がないが、そういった作業の中での細かな部分に心配りが感じられたラビリスは、研究員にもちゃんと優しい人がいると分かって今後の作業に何の不安も抱いていなかった。
しかし、相手はラビリスの仕様を完全に把握出来ていないため、気になる点を先に解決してから作業に移りたいらしく、質問を口にしてくる。
「ただ、どういう訳かラビリスちゃんって記憶領域が二つあるのよ。片方はサブっぽい感じなんだけど、アイギスちゃんモデルには無かったのよねぇ。ラビリスちゃんはどうして自分に二つあるか分かる？」
「えと、多分、ウチがテストベッドとして開発されたからやと思います。五式〝ラビリス〟っていうのは元々ウチのことやなくて、五式モデルの中で最も優秀やった子が選ばれるものやったんです。その正式機を選ぶまでに、同系機を戦わせて負けた方のデータを勝った方にインストールして、戦術とかの学習と精神の成長を目指してたんで、片方はその姉妹機のデータの受け皿やと思います」
「なるほど、それなら正式機として作られたアイギスちゃんに無いのも頷けるわね。でも、だとすると、貴女ってもしかすると二重ＯＳってことになるかも。もしも自分の中に別の存在を感じたり、思考等で違和感を覚えたりしたらちゃんと相談してねぇ」
最大の謎だった記憶領域が二つある理由が解決し、シャロンはスッ

キリした顔を浮かべるとラビリスをメンテナンス装置に座る様に言ってくる。
桐条製とは少し異なるようだが、基本的な仕様は同じみたいで不思議な懐かしさを感じた。
メイン電源を落とせば、後は全てシャロンや湊たちがやってくれるため、次に眼を覚ましたときには新ボディになっている。
複雑で容量も多い記憶データはスパコンを使って移し、黄昏の羽根は扱いに慣れてる湊が移し替えるらしい。新ボディでの目覚めはどんな気分か興味を抱きながら、ラビリスは他の者に「よろしくお願いします」と告げてゆっくり意識を手放していった。

第百四十九話　少女との墓参り

９月１１日（火）
午前――ＥＰ社・研究所
夜のうちに新型ボディへの移行を完了したラビリス。
彼女は目を覚まして新しい身体の身軽さにまず驚き。旧型ボディとの最大の違いである踝より先の足パーツがある状態での歩行に感動を覚えた。
以前の脚部は言ってしまえば円柱状で、ほとんど備えられたバランサーによって器用に歩行出来ていたに過ぎない。
しかし、足首を柔軟に動かせるようになったことで機動力が増し、軽量化がなされていなくとも、たったそれだけの違いで戦闘力が二割は向上するのではないかと思われた。
「えと、着替えたけど、おかしいとこあらへんかな？」
いいながら奥の部屋から出てきたラビリスは、グレーのワンピースに黒のスキニーパンツとロングブーツという出で立ちで尋ねる。
この服を用意したのは湊で、ちゃんと流行色を押さえている辺り、ゆかりに言われて彼もファッションを勉強していることが窺えた。
「……よく似合ってる。ちゃんと可愛いぞ」
「か、可愛いって、湊君の趣味はよう分からんわ」
褒められたラビリスは恥ずかしそうに照れながら、湊が持っていたハンドバッグを受け取る。
今日はこれから墓参りに行く。けれど、流石に服を着ずに行くのは拙いとして、予め用意していたおいた服を湊が与えたのだ。
旧型ボディの彼女はチタンボディに布張りでレオタードのように見せていたが、新型ボディは擬装用スキンでコーティング出来る様に布張りなどしていない。
擬装用スキンを剥がせば、首より下は白色に塗装された金属の外装が露出する。その塗装は強度を上げる効果もあるが、旧型ボディにおける布張りと同じ効果を発揮するため、戦闘等で擬装用スキンを解除したところで裸に見える事はない。

とはいえ、擬装用スキンは肌色な事もあって裸のように見えてしまうので、最初は患者衣を着せてボディの移行作業を行い。それが終われば湊が用意しておいた下着と運動着を着て動作チェックなどを行った。
男である湊が女性用の下着を何故持っていたのか、研究員らは首を傾げつつも尋ねる事はなかった。ただ、色々な柄やサイズの新品を店の袋のまま大量にマフラーに入れていたため、誰かの着替え用などに自分の服以外も普段から用意しているのかもしれない。
「それじゃあ行こう」
「うん。あ、でも、移動はどうするん？　ここから近いんかな？」
「……ここからはちょっと距離がある。移動手段は既に裏に用意してあるから気にしなくていい」
研究所の中を並んで進みながら外を目指すと、湊に気付いた職員らが頭を下げて挨拶をしてくる。
その光景を見たラビリスは、自分とそれほど歳の変わらない青年が、本当にここでは最も偉い立場なのだと改めて理解した。
代表で責任者でもある湊に対し、ラビリスのここでの立場は現在のところは何もない。
影時間に関わる研究は一部の職員にしか伝えていないのだ。最重要機密に分類される対シャドウ兵器の少女のことも同様に口外出来るはずもなく、見た目が人間とほとんど差異のないものになっていることから、関係のない職員には湊の連れとしか思われていないだろう。
二人が完全に私服である事も手伝い。一部は恋人と邪推するかもしれないが、どちらにせよ一般の職員が深く付き合うことなどないため、二人は好奇の視線を時々受けながらも、視線の種類に全く気付かないで地上部の工場を通って裏手の出入口に到着した。
「あ、バイクや。これで移動するん？」
「ああ、車を用意するより自由に動けるからな。ほら、これを被ってくれ」
出入り口の前に置かれていたのは、湊が以前から乗っていた黒とシ

ルバーで塗装されたＧＳＲ４００だった。
白いフルフェイスのヘルメットを受け取ったラビリスは、被ろうとしたところでポニーテールが邪魔で被れない事に気付き、髪を解いて襟足の辺りで結び直してから被った。
以前は頭部にパーツがいくつもついていたが、新型ボディではそれらは取り払われ首から上は人と変わらない。髪の毛も本来は臀部に届くくらいのストレートヘアで、ポニーテールにしているのは単純に慣れているからという理由だ。
彼女以上に長い髪をしている青年も、普段はアップにしている髪を解いてシャツと上着の間に入れた状態で、さらにマフラーを巻く事で走行中に風で暴れないようにしている。
タンデム走行すれば分かるが、運転者の髪が長くてそれが風で暴れた場合、当たった側は結構痛いのだ。湊はしっかりと髪が納まっていることを確認してからバイクに跨り、ラビリスにも後ろに乗れと合図を送る。
自分でも車並みの速度で走れるラビリスにすれば初めての体験だが、タンデムシートに腰を下ろすとしっかりと湊の腰に腕を回して抱きついた。
「けど、ウチが封印されてる間に色々変わってんな。中学生でバイク運転出来るとか国の偉い人らも思いきった事しはるわ」
「……そうだな」
「……今の間はなんなん？　もしかして、湊君ってば無免許運転しようとか思てはらへんよね？」
ラビリスの持っているデータでは、普通自動二輪、所謂中型バイクは満十六歳以上でなければ免許が取れないとなっている。
湊は戸籍上、中学三年生の十五歳だと聞いていたため、封印されている間に法律も結構変わったのだなと思ったのだが、青年の返事には随分と怪しい間があった。
その点について言及するため腰に回している腕に力を籠めると、青年はやけにはっきりとした口調で言葉を返して来た。
「大切なのは資格（ライセンス）じゃなくて技術（スキル）だと思わないか？」

「いや、それでも決まりは守らなあかんて」
間があった時点で察していたが、青年は本当に無免許運転しようとしていた。
ＥＰ社での役職は最高顧問であり、ジャパンＥＰ社の中では代表取締役として働いている青年が、無免許運転で捕まりでもしたら会社がどうなるか分からない。
別にタクシーでも何でも用意できるはずなので、そんなリスクをわざわざ負う必要もないだろうと思っていれば、真面目なラビリスに規則破りを納得させるべく湊が真剣に説得して来る。
「俺はそもそも鬼籍に入っていて、有里湊としての戸籍すら偽装なんだ。大丈夫、死人を裁く法律はない」
「い、いやぁ、それはそうやけど。色々と間違ってる思うんはウチだけかな？」
「ああ、君だけだ。ここには二人しかいなくて、俺はそうは思っていないからな」
「聞き取り対象少なすぎるやろ……」
二人しかいないので、湊が違うと思えばラビリスに同意する者はいなくなる。実に単純な話ではあるものの、聞き取り対象がたったの二人では調査しても有意な結果とは言い難い。
だが、これ以上言っても湊が意見を変えるとは思えなかったため、短い付き合いの中で彼の性格を理解していたラビリスは諦めて安全運転で頼むとだけ伝えた。
午後――霊園
数時間かけて都心から離れ目的地に無事に着くと、湊はバイクとヘルメットをマフラーに仕舞った。
代わりに今度は墓掃除用のセットとお参りの花を取り出し、花をラビリスに渡せば置かれていた桶と柄杓を借りて水を溜めてから墓まで歩いてゆく。
霊園の中を進むにつれてラビリスの顔が緊張で強張っていく。湊はそれに気付きながらも無言で歩き続け、目的の少女の墓を発見した。

墓の前に立ったラビリスはジッと見つめ、数秒ほど経ってから静かに刻まれた名を読み上げた。
「これは……〝ひじり〟でええんやろか？　間宮（まみや）　聖（ひじり）、それがウチのお母さんの名前なんやね」
自分の人格モデルとなった少女の名前を確かめたラビリスは、湊と一緒になって墓の掃除をして、花も綺麗に供えると線香をあげてから合掌する。
墓参りという単語の意味は知っていたが、実際にやってみることで知識が経験に昇華されていく。なんとも不思議な感覚だが、ラビリスは顔を上げると墓石に向かって話し始めた。
「えと、はじめまして、ウチはラビリス言います。貴女のおかげでこの世界に生まれてこれました。外に出れるようになったばっかりで、まだ世界のこともよう分かってへんけど、優しい人に出会えてこれからは色々勉強しながら生きていこう思てます」
ラビリスは相手がいつ死んだのかは知らない。知っておいた方がいいのかもしれないが、もしかすると自分が作られる前に亡くなっている可能性もあるので、既に亡くなっているという事実以外は知ってもあまり意味がない様に思えた。
しかし、だからと言って相手を軽視しているつもりはない。少女が自分たちに宛てて残したメッセージをしっかりと聞いたのだ。
少女は自分たちの幸せを心から願っていた。機体番号０２４と同じように、そのメッセージを聞いたラビリスも心の中に温かい何かが広がるのを感じた。
生んでくれて、愛してくれてありがとう。会ってそう伝えたいと０２４は言っていたが、ラビリスも同じように思いながら、自分はこれから幸せに生きていくので安心して欲しいと少女に伝えることにする。
「あ、０２４の記憶と封印前の夢で、お母さんがウチらに〝幸せになって欲しい〟って願ってくれたんはちゃんと聞きました。学校とかは無理やと思うけど、湊君とかＥＰ社の人らは皆優しいし。これからは幸せに過ごせる思うんで安心してください」

照れて恥ずかしそうにこそばゆいと言いながらも、自分から生まれたラビリスたちの事を考えてくれていた相手の事だ。きっと色々と心配していたに違いない。
だから、ラビリスは昨日話しにくると決まった時点で、彼女が安心できる様に自分は大丈夫だと伝えるつもりでいた。
少女が行きたがっていた学校には自分も興味あるが、それは機械の身であることを考えると難しい。よって、その点は目を瞑って貰うことになるが、他にも幸せに生きる方法はいくらでもあるため、安心して見ていてくれと言ったところで、後ろにいた湊が少々不思議そうな顔で話しかけてきた。
「……学校に行きたいのか？　別に戸籍を用意した後なら通えるように手続きくらいするぞ？　まぁ、時期が中途半端だから、これから勉強して普通に高校受験で俺と同じ学校に通う感じになると思うが」
「え、あの、ウチって機械やで？　学校通ってええの？」
まさかの発言に立ち上がって彼女は詰め寄り尋ねる。
いくら人間に近い見た目と言えど、その身体は紛れもなく機械だ。本気で殴れば人など簡単に殺せてしまう兵器であり、命令だったとはいえ過去には同系機を何体も殺めている。
今はそんな命令を拒める様になったが、自分のような兵器が本当に学校に通ってもいいのかと訊けば、湊は普段通りのやる気のない表情で淡々と答えた。
「不正している訳でもなし、試験に合格出来たら別に問題ないだろ。願書はこっちで出しておくから、ちゃんと勉強するんだぞ」
「あ、あはは、夢みとるみたいや。えと、そういう訳で学校に行けることになるかもしれへんです。合格したら報告に来るんで、どうか合格するよう祈っててください。あー、アカン、嬉しくて顔がにやけてまう……」
憧れていた学校に行けるかもしれないと分かったラビリスは、表情が緩むのを抑えきれず両手を頬に当ててにやけるのを我慢しようとしている。
だが、自分たちの母親である少女も抱いていた望みが叶いそうなの

だ。喜びを我慢しろという方が無理な話である。
インストールしたら簡単に知識は手に入るが、そんな卑怯な手を使って合格しても意味がないため、人と同じように繰り返しによって学習出来るようになっている彼女は、湊に勉強を教えて欲しいと頼んで許可を貰うと、それもまた母たる少女に嬉しそうに伝えた。
そうして、学校に行ったらこんな事をしたいと色々な話をしばらくしていると、墓の掃除用具を持った初老の女性が歩いてきた。
少女の墓に用があるらしく、歩いてやってくると先にいたラビリス達に頭を下げて挨拶をしてきたため、ラビリスも立ち上がると挨拶を返した。
「あ、えと、すみません、ご家族の方ですか？」
「ええ、はじめまして聖の母です。綺麗にしていただいたようで、どうもありがとうございます」
湊の母親の世代より少し年上のようだが、身嗜みも綺麗で所作の端々に上品さが見てとれる。
アイギスの人格モデルとなった水智恵の家が、桐条の名士会に名を連ねていることを考えれば、ラビリスの人格モデルになった少女の家も似たような感じなのかもしれない。
挨拶してきた女性は墓が綺麗になって、花や線香が供えられているのを見て、二人が自分の娘とどういった関わりのある人物か気になったのか尋ねてきた。
「失礼ですが、本日はどういったご用件でこちらへ？」
「その、なんて説明したらええんやろ」
尋ねられたラビリスは言い淀む。擬装用スキンでコーティングした新型ボディを、さらに幻惑機能で偽装して完璧に人間にしか見えない状態になっているが、少女の家族である女性に嘘は吐きたくない。
けれど、桐条グループから脱走したような立場であるため、情報が広まる事を考えれば下手に真実を話す事も出来ない。
何も言わなければ余計に怪しまれるが、ラビリスがどう説明しようか悩んでいると、傍に控えていた湊が助け船を出した。
「貴女の娘さんが関わっていた桐条グループの研究を覚えていらっ

しゃいますか？」
「桐条グループの研究？　まさか……」
「はい、ここにいる彼女は研究で生み出されたロボットです。そして、俺は彼女の後継機によって命を救われ、今もこのように彼女たちの研究成果の恩恵を受けています」
　驚く女性に湊は若藻による偽装を解いた自分の右腕を見せた。ラビリスのボディは擬装用スキンでコーティングされているが、湊は戦闘でマシンガンの機能も使うので、邪魔でしかない擬装用スキンは付けておらず白い外装が剥き出しとなっている。
　明らかに人とは異なる機械の腕を見た事で信じる気になったのか、相手は戸惑いながらも真剣な様子で質問を返して来た。
「実験は上手くいかなかったと聞いていたんですが、その後も続けられていたんですか？」
「上手くいかなかったというのは、多分、彼女が脱走しようとして封印処置を施されたからでしょう。実在する人間の人格をコピーした分、自我の確立や精神の成長も早く、非道な命令を受ければ拒否したくなりますから」
「そうだったんですか……」
　実験の成否については微妙なところだ。最後の最後でペルソナ獲得の可能性が見えたが、ラビリスを使っての実験継続は脱走した時点であり得ないと判断された。
　そこだけを見れば確かに上手くいかなかったと言えるが、収拾されたデータはしっかりと後継機に利用されたため、テストベッドの機体だったこともあり最終的には及第点といったところだろう。
　とはいえ、極秘裏に孤島で行われた実験の詳細まで話せる訳もなく、今日まで実験は失敗したと思っていた女性は真実を知ると、自分の娘から生み出された機械の少女に笑いかけ名を訊いた。
「お名前を、伺ってもよろしいかしら？」
「はい、ウチは対シャドウ特別制圧兵装五式ラビリスっていいます」
「……戸籍を用意するから、今後は考えた名字＋ラビリスが本名だぞ」
「あ、そうなん？　えと、そういうことみたいです」

まだ名字は何にするか決まっていないが、姉妹であるアイギスも同じ名字を使う予定なので、無難に〝五式ラビリス〟という名前にする訳にはいかない。
一応、開発チームが異なるので、そういった意味で腹違いの姉妹という設定にしてアイギスが目覚めれば同学年にしてしまおうとも湊は考えており、名字が違っても問題ないようにするプランもあるが、流石に〝五式〟と〝七式〟などという似通った名字はないだろう。
それ故、やっぱり名字は共通にしようと思って湊がラビリスに名前の事を言えば、二人のやり取りが面白かったのか女性は穏やかな表情で笑った。
「フフッ、ラビリスさんとお話してると娘と会話しているみたいで懐かしいわ。娘は貴女達のことをよく心配していたの。だから、これからもよければ会いに来てあげてくださいね」
「はい。さっきも高校に受かったら報告に来るっていうてたんで、時間が出来たらちょくちょく話に来させて貰います」
母である少女本人に会う事は出来なかったが、不思議な縁によって少女の母親、ラビリスから見れば祖母になるのかもしれないが、その人物と会って話す事が出来た。
突然の出会いに最初は拒否されるのではと不安も抱いたが、女性はラビリスのことを受け入れてくれた。
湊の存在により自分たちの生まれた意味や実験に価値があったと思えるようになり、母親の家族である女性に受け入れて貰えたラビリスは、今の自分は間違いなく幸せだと心の中で母親に伝えるのだった。
「……ラビリス、ちょっと道具を返しに行ってもらっていいか？　それと自販機があったから、そこで缶ジュースでも買って来てくれ。種類は任せる」
ここで出会ったのも縁だと連絡先を交換し、しばらく話していると、湊が借りてきた桶と柄杓をラビリスに預けながら財布から千円札を取り出して渡して来た。
ここまで連れてきて貰ったのでお遣い自体は構わないが、返す場所

は霊園から出る際の通り道だというのに、どうしてわざわざ頼んできたのか不思議に思い彼女は尋ねる。
「別にええけど、帰り道やないの？」
「ジュースはお供えするんだ。だから、炭酸系以外で頼む。君が飲む分も買っていいから頼んだぞ」
　言われてみれば線香と花はあるが、ジュースや食べ物などのお供え物は持って来ていなかった。
　女性は気にしなくていいと言ってくれたが、手ぶらで会うのも失礼かと思ったラビリスは、お金と道具を受け取ると少し待っていてくれと駆けていった。
　残った二人は遠ざかる彼女の背中を見送り、会話が聞こえない距離になったところで女性の方から口を開いて来る。
「彼女には聞かせられないお話かしら？」
「別に聞かせてもいいですけど、不必要に期待を持たせたくないんです」
　ラビリスは気付かなかったようだが、女性は湊がお遣いを頼んだ理由を察しており。聞かせてもいいとは言っているが、実際は聞かせたくないに違いない。
　青年がどういった経緯で対シャドウ兵装の少女に助けられたのか、何があって右腕が機械義手になったのか、聞きたい事はそれなりにあるが、彼がラビリスたちの事を大切に想っていることは雰囲気で伝わってくるので、今はただ彼女を遠ざけてまで彼が何を語るつもりなのか知ろうとする。
「貴方は優しいのね。それで、どういったお話ですか？」
「貴女の娘さんの遺伝子を採取出来る物は残っていませんか？　血液や細胞など何でもいいんですが」
「遺伝子を採取？　よく分かりませんが、将来のことを考えて健康な内に卵子と血液を冷凍保存したものが、まだ病院に残っているはずですが、一体何に使われるんですか？」
　突然の言葉に驚いたが、女性は自分の娘の卵子と血液が冷凍保存された状態で病院に残っている事を素直に伝える。

未成年の女性が卵子を冷凍保存など一見珍しく思えるが、遺伝的に癌になりやすいことが分かっている者や、病気の治療による影響を懸念して、仮に将来卵子を作れない身体になっても子どもを作れるようにと、若いうちに健康な卵子を保存しておく者は年々増加傾向にある。

ラビリスの母の少女も、それまで生きられるか分からなくとも、後悔しない様にと残しておいたのだが、生きた細胞が残っていることを聞いて少しホッとした顔をした青年は、女性に問われて真剣な声色で静かに答えた。

「……その細胞を使ってラビリスを人間にします」

「人間にって、そんなどうやって？　クローンでも作る気ですか？」

「違います。正確には生体パーツを使ったサイボーグで純粋な人間ではないですが、人格モデルとなった人物の細胞を加工して彼女の肉体を作ります。黄昏の羽根というオーパーツが存在するのですが、記録媒体として使えるそれにラビリスの身体データを保存して細胞と組み合わせれば、元は人格モデルの人物の細胞だった物がラビリスの遺伝子情報を持った細胞に変化させられるんです」

湊がシャロンに言って進めていた計画、それはアイギスたち対シャドウ兵装の少女たちの人間化だった。

黄昏の羽根はまだ解明されていない事が多いが、それ自体にデータを記録する事が出来る。今でこそ自我が育ち心を手に入れているが、アイギスたちの人格も言ってしまえばデータを入力して作られたものだ。

青年はそれと羽根が情報と物質の中間の性質を持っている事に注目し、身体データを保存した羽根を遺伝子の代わりに出来ないかと考えた。

生きた細胞の核を取り出し、代わりにデータの記録された極小サイズの羽根を入れることで、保存されたデータを遺伝情報とした細胞を作り出す。

けれど、その細胞を培養したところで、保存されたデータの見た目の人間が生まれるだけではないか。そう思った女性は真っ直ぐ青年

を見つめて尋ねる。
「その細胞を使ったところで、ラビリスさんと同じ遺伝子情報を持った人間が生まれるだけでは？」
「基本の骨格はこっちで用意するんです。言い方は悪いですが、作った細胞はそれを覆う肉でしかありません。現在、我々が対シャドウ兵装の研究をしているのは、その骨格になるものを作る下準備に過ぎません」
「細胞の遺伝子情報の書き換えは成功しているんですか？」
「ええ、既に成功しています。ただ、骨格になるものが研究段階で出来ていないので、先に細胞を確保しようとお願いしに伺おうと思っていました」
女性の疑問はもっともだが、湊はそこにもう一つ工程を加えることで、ラビリスたちの遺伝子情報を持った人間が生まれる事を防ごうと考えた。
それは人工骨格をベースにして彼女たちの細胞を培養するという方法だ。受精卵が育っていくように、自然な形で細胞分裂させていけば人間になるかもしれないが、人工骨格を覆うように細胞を培養すれば人の身体はできても人間は生まれない。
真っ当な人間ならそんな発想を思い付く事はなく、核を取り換えた細胞が正常に培養出来るとも思わない。
しかし、青年は生命の誕生という神の領域に手を出し、適合する人工骨格さえ見つかれば人造人間を造れる段階まで成功させてしまった。
彼はシャロンたち研究員にクローンなど人為的に命を作ることを禁止し、アイギスたちのような黄昏の羽根に心を生み出すことも、命を弄ぶ行為だとして禁止していた。
だが、彼の行っている研究は魂を持った命こそ作りだしていないものの、それらに並ぶほど罪深い生命への冒涜であることは言うまでもない。
「どうして彼女を人間にしたいのか聞いてもよろしいですか？」
何がそこまで青年を駆り立てたのか。どこか浮世離れした雰囲気

を纏っているが、静かに佇む青年の瞳の奥に狂気の混じった執着を見た女性は、彼が一体何を望んでいるかを知りたがった。
命を救われたと言っていたが、それだけでここまでするとは思えないのだ。
女性に問われた青年は、偽装を解いたままの自分の右腕に視線を落としながら、普段通りの淡々とした口調で自分がこの研究をしようと思った理由を話す。
「彼女やその姉妹機には人としての心があります。ですが、身体が機械であるため、親しくなった者が老いたとしても自分たちはそのままです。老朽化などは当然ありますが、コアやメモリの移植でボディを替えたら、半永久的に生き続けられます」
命はなくとも人と同じ心を持っていれば、それは青年にとっては紛れもなく一つの生命だ。
「姉妹がいるうちはいい。だけど、もし事故で片方が死んだら理解者は消えて完全に孤独です。親しい者の死を何度も見続け、理解者もいないなんて地獄だ。人の心がそれに耐えられるはずがありません」
人と同じように笑い、泣き、誰かを想う事が出来る。自分を犠牲にしてでも他者を助けようとする姿は、人間以上に人間らしく彼の瞳に映った。
「俺はそんな残酷な生き方を彼女たちにさせたくない。これが生命に対する冒涜だなんて分かってる。それでも、人間が身勝手な理由で心を与えて生み出したなら、彼女たちを救うのは当然の義務なはずでしょう」
人の心を持っているのなら、それは人の身体に宿っていなければ、いつか自己矛盾に悩み崩壊する。最初は小さな違いとして認識していたものが、積もり積もって決定的な差として、自分たちは〝機械〟であり〝物〟であると残酷に告げてくるのだ。
どうやっても変えられない現実に悩むことは人間にもある。けれど、人間たちの勝手な都合で人の心を与えて生み出された彼女たちが、そんなどうしようもない事で傷付き悩むのなら、神の領域に手を出して変えられない現実を変えてしまおうと青年は考えた。

彼女たちを作った者と同じ人間であり、彼女たちに実際に命を救われた者として、当然の義務であると思っているから。
「……貴方は彼女たちの事が好きなんですね。大人たちがやった事が許せなくて、他の誰にも出来ないなら、自分がその運命を変えてやるって考えているのでしょう？」
その話を聞いた女性は、やはり彼は優しい青年だと思った。誰よりも優しいから、誰よりも彼女たちに対して罪の意識を持ってしまっている。
大人たちのやったことに怒りを感じるまでは分かるが、彼女たちが将来抱く悩みの解決法として、〝彼女たちを人間にする〟という最もシンプルだが最も難しい事を、具体的なところまで思い付いて実行に移している。
普通の子どもが出来る事ではないけれど、きっと彼にとっては当たり前で、それを当たり前だと思ってしまうような性質で生まれたのか、もしくはそういった環境で育ってきたのだろう。
機械であることで人より多くの苦労を負う事になるラビリス達も心配だが、少し話しただけで青年が一人で全て背負おうとするタイプだと分かった女性は、優しく微笑んで彼の頼みを聞いてあげることにした。
「血液と卵子をお譲りしても構いません。娘は誰かの役に立ちたがっていましたから、自分の娘のような存在であるラビリスさんたちのためなら喜んで協力するでしょう。ですが、それには条件があります」
「……条件ですか？」
「はい。まず、絶対にクローンを作らない事。次に、もしも研究中に手違いで命が誕生してしまってもその命を殺めない事。最後に、ちゃんとラビリスさんに話してから研究を続ける事。これらが守れるのであればお譲りします」
女性の提示した条件を聞いて、一つ目と二つ目に関しては湊も理解出来た。最初からそんな事をするつもりはなかったが、作った肉体に魂が宿ってしまったときには、戸籍をしっかりと用意して何不自由なく普通の人間と同じように暮らしていける様にするつもりだった、

しかし、最後の条件だけは別だ。聞かせても構わないと言ったがそれは言葉の綾で、まだ成功するかも分からない計画全てを正直に伝えるつもりはない。
細胞を譲って貰えるのなら条件は呑みたいが、それを素直に呑んでしまうと大切な少女を傷付ける事に繋がりかねないため、湊は苦悶の表情を浮かべて言葉を返した。
「でも、まだ成功するか分からない。下手に期待を持たせて、それで無理だなんて事になったら彼女を余計に傷付けることになってしまう」
「貴方は全部自分で背負いこんでしまうタイプのようですね。でも、もっと相手のこと信じてあげてはどうかしら？　大丈夫、ちゃんと伝えればきっと分かってくれます。ねえ、そうでしょう？」
女性に言われて嫌な予感がした湊は勢いよく振り返る。そこにはジュースの缶を両手で抱えたラビリスが、困ったようなどこか複雑そうな表情で立っていた。
青年の欠点の一つにチドリやアイギスたちのことで真剣に話していると、感情が昂って来るのか話に集中して周囲への警戒が疎かになるというのがある。勿論、戦場など危険のある場所なら別だが、襲ってくる敵のいない場所で女性と話す事に集中していたことで、湊はラビリスの接近に気付かず会話を聞かれたことを悟った。
会話を聞かれた湊が自分の迂闊さに苦虫を噛み潰した顔をすると、少し離れた場所に立っていたラビリスが近付いて来て、母の墓前に持っていたジュースの缶を置かせて貰ってから、改めて湊の方へ向き直ってくる。
「湊君、そんな事考えてくれてはったん？　ウチ、別にこのままでもええんよ？　確かに人間に憧れてない言うたら嘘やけど、今の状態で十分過ぎるくらいやもん。湊君が悩んでそない傷付く方が辛いわ」
何でも背負い過ぎる青年に対して苦笑と共に告げたこれは、彼女の紛れもない本心だった。
人間に対する憧れはあるが、今のボディの時点でほとんどの者には機械だとばれない。幻惑機能も組み合わせればほぼ完璧で、青年が無理をしてまで人間化の研究をする必要はないと思ってしまう。

だが、いまの自分を見て少女がそんな顔をする必要はないと、青年は先ほどよりもどこか辛そうな表情で必死に返してくる。
「違う。これは、俺が勝手に決めたことなんだ。君たちが兵器として扱われるのが嫌で、一度は今のままで世界に君たちを人と認めさせようとした。だが、力で押さえつけて従えることなど駄目だとアイギスに言われて、それなら君たちを人間にしてしまえばいいと思って」
復讐のためだけでなく、アイギスを人として世界に認めさせようともして、恐怖による支配のため青年は世界を敵に回して大勢の人間を殺した。日本に帰ってからその話を聞いた者たちは、常軌を逸しているとしか思えない彼の行動に対し、〝狂っている〟と感じてそれを止めてくれたアイギスに感謝した。
しかし、アイギスやチドリも含めた全員が一つの思い違いをしていた。アイギスに否定され恐怖による支配を目指すのを止めてからも、彼は今日までずっと狂い続けていたのだ。
「黄昏の羽根という情報と物質の中間の性質を持つ物があるのなら、君たちの身体データを保存することで遺伝子の代わりに出来ると思った。その段階の実験は成功したけど、それを定着させる人工骨格がまだ適合素材の選別すらできなくて、せめて母親の細胞だけでも入手しておきたかっただけなんだ」
最初の方法が駄目なら、別の方法でアイギスたちの居場所を作る。世界に彼女を人として認めさせるなら、いっそのこと人間にしてしまえばいいと、彼は目的を一切変えず別のアプローチを取った。
ラビリスの存在を知ってからは、彼女の事も人間にしようと考え、仮に今日ここで女性に出会わなくとも、調べて病院に卵子と血液が残っていると分かれば会いに行っていた。
だから、これは全て自分が勝手にやっていることで、ラビリスが自分に対して何か負い目を感じる必要はない。
機械の腕で右眼の眼帯を押さえながら、僅かに動揺した様子で湊がそう言えば、ラビリスは青年に歩み寄って背伸びしながら彼の首に腕を回して抱きしめた。
「……ありがとう、それとゴメンな。ウチらが湊君のことそんな追い

詰めてしまったんやね。大丈夫、心配せんでええよ。湊君ならきっと出来る。駄目でも長生きした分思い出を沢山作れるやもん。ウチはなんも怖ないよ？　だから、湊君はそんな気張らんと肩の力抜いてええねん」

ラビリスは彼の過去を詳しくは知らない。桐条グループの起こした事故で両親を亡くしていることや、その事故で死んだ事になっており新しく作った戸籍の名前で暮らしていることなど、本当に最低限のことは恵やシャロンから聞いたが、それ以上は本人のいないところで勝手に話せないと言われ未だに聞けていない。

それでも、彼がアイギスに助けられたことで自分たちに恩を感じ、赦されざる行為と理解しながらも神の領域を侵してしまった事は分かる。純粋な青年をそこまで追い詰めてしまったのは、間違いなく少女たちだ。

だからこそ、ラビリスは青年が誰かのためにしようとする行為を咎めたりはしない。

道徳や倫理の観点からすれば間違っているのかもしれないが、青年は自分のためではなく他者のために道を外れようとする。そんな相手を否定してしまえば、今回のように余計に目的に固執して突き進んでしまうのだ。

心優しい青年にもうそんな事はさせたくないラビリスは、抱きしめた相手を安心させるよう、ゆっくりと頭を撫でながら、彼の傍に居てあげようと心に決めるのだった。

夜――海岸

「海やー！」

「危ないからあんまり波打ち際に行くなよ」

墓参りを終えて夕食を食べに行った二人は、まだ時間があったことで海へとやってきた。

あの後、ラビリスに抱き締められた事でどこかスッキリとした表情になった湊は、女性の家に書類を送るので、それを記入し病院に渡してくれれば後は病院同士で行うと説明した。

余計なお節介を焼いてしまったと女性は謝罪してきたが、むしろ伝えるいい切っ掛けになったと湊は女性に感謝を伝え、また今度一緒にお茶でもしようと再会を約束して別れた。
「ウチ、海って一回しか見た事なかってん。あんときは明るいうちに外出て初めて海見たけど、脱走する方法考えててあんまり楽しめんかったから、ここじゃ星はあんま見えへんけど自由やし夜の海でも全然ええわ」
夜の海にやってきたラビリスは、波打ち際にしゃがみ込んで、届いた波にパシャパシャと手を付けてはしゃいでいる。
屋久島と違って街が明るいので星は見えづらいが、それでものんびりと自由に海を眺める事が出来て彼女は満足しているようだ。
「あそこに小っちゃい島みたいのあるけど、なんやろ？」
街が明るいと言っても、沖の方は暗くて見えづらいはずだが、高性能な彼女のアイカメラには余裕で見えているらしく、ある方向を指さして湊に尋ねる。
言われてそちらを見た青年は、彼女と同じように島を発見したことで、どうせなら近くまで行ってみるかと提案した。
「後は帰るだけだし、時間もあるから行ってみるか？」
「ボート借りるん？　夜で波も高いから危ない思うけど」
「いや、ペルソナの力を使えば大丈夫なんだ――――レヴィアタンッ」
〝女帝〟のカードを呼び出した湊は、カードを靴に当ててペルソナの名を呼ぶ。すると、無の鎧本来の機能が発揮され、ペルソナを取り込んだ靴は光に包まれ膝までを覆う薄水色の脚部鎧に変化した。
先ほどまで編み上げブーツだったものが、突然金属の脚部鎧に変化したことでラビリスは驚くが、そんな驚いている彼女をお姫様抱っこで抱き上げるなり、青年は海に向かって歩いて行く。
そのまま進めば濡れてしまうが、ラビリスがその事を告げようとしたところで、なんと彼は水の上を歩きだした。
「ほわー……これ、どないなってるん？」
「俺の靴は〝無の鎧〟と言って、ペルソナと融合させれば姿が変化して能力が付与されるんだ。そして、レヴィアタンと融合させると〝水

神の具足〟になって、自在に水の上を歩ける特殊効果が付く」
「ペルソナの能力ってホンマに色々あって便利やなぁ。ウチのペルソナも何か特殊な力があるんやろか」
ラビリスは波打つ海面を気にせず歩き続ける青年の姿に目をぱちくりとさせながら、目覚めてからまだ一度も召喚していない自らのペルソナも同じように特別な力があるのだろうかと思案に耽る。
こんな特殊機能を引き出せるのは彼くらいなものだが、彼女のペルソナにも彼女のペルソナにしかない特殊な力はあるため、使いこなせば湊とは異なる場面で活躍出来ることだろう。
そうして、青年が少女を抱いたまま波の上を歩き続けると、砂浜からは小指の先ほどの大きさにしか見えていなかった小島が段々と見えてきた。
人が住んでいる気配はないが、無人島なら無人島で面白そうなので、近付くにつれラビリスは期待に目を輝かせている。
だが、歩くペースを考えるともうしばらくかかりそうだ。黙って歩くのも暇なので、会話が途切れたタイミングで湊は新しい話題を切り出した。
「……なぁ、君の戸籍での名字を考えたんだけど、〝汐見〟じゃ駄目か？」
「ん？　シオミってどんな意味なん？」
「さんずいに夕方の夕で〝汐〟って書くんだが、夜の海の事なんだ。だから、夜の海を見た記念的なもので〝汐見〟ってどうだろう？」
「へぇ、別にウチは湊君と同じ有里とかで良かってんけど、そういう思い出の名前って素敵やね。そんならウチは今日から汐見ラビリスやな。改めてよろしゅうな！」
湊が考えた名字を気に入ったらしく、ラビリスは嬉しそうに改めての挨拶をしてくる。
〝汐見〟という名字ならば、ラビリスでもアイギスでも語呂はそれほど悪くない。彼女が言った湊と同じ有里にしていれば、少しばかり語呂が悪くなっていたので、記念という意味をしっかりと籠めてよかったと青年は安堵の息を吐いた。

そして、戸籍の名前が決まったのなら、次は暮らす場所も決めておこうと湊はもう一つ考えていた事を口にした。
「後もう一つ、君が良かったらで良いんだけど、俺と一緒に暮さないか？」
「一緒にって、ウチって研究所で暮らすんやないの？」
「いや、研究所はメンテナンスと動作チェックとかに通うだけで、暮らす場所はまた別に用意するさ。君が研究所で暮らしたいなら部屋を用意するけど、そっちの方がいいのか？」
研究所にも宿泊出来る部屋はあるし、湊やシャロンのように個人の研究室を持っている者もいるため、ラビリスに一室用意するくらいは簡単である。
けれど、研究所はあくまで会社の一部なので、一緒に暮さないにしても、彼女には社員寮に部屋を用意するつもりであった。
本人が研究所で暮らす方がいいのなら希望通りにするが、そちらの方がいいのかと湊が尋ねれば、ラビリスは慌てた様に首を横に振った。
「あ、別に湊君と暮らすんが嫌とかやないんよ。ただ、研究所暮らしやとばっかり思ててん。けど、一緒に暮らして大丈夫なんかな？　家事とかできへんし、一般常識とか全然ないんやけど」
「家事がしたいなら、最初は朝の洗濯とか簡単なことから覚えていけばいい。一般常識なんて人の中で暮らすうちに覚えていける。俺もちゃんとフォローするしそこら辺は問題ない」
「そっか。それやったらウチもお邪魔させてもろてええかな？」
「ああ、よろしくな」
ラビリスの同居が決まると湊も嬉しそうに笑う。部屋は倉庫代わりにしている一室があるため、そこを空ければ彼女の部屋も用意できる。
ベッドは寝室にキングサイズのベッドがあるため二人でも余裕で寝ることが可能で、インテリアはショッピングモールに行ったときにでも買えばいい。着る物は下着含めて女性物も大量にマフラーに入っているので問題ない。

これなら仕事が入っていても当分はラビリスに不自由させる事はないだろう。必要な物が足りていることを頭の中で確認した湊が小島に向かって歩き続けていると、ポケットに入れていた携帯がマナーモードで震えた。
「……悪い、知り合いからメールだ」
「全然ええよ。急ぎの用事かもしれんし、ちゃんと見とき」
水の上で立ち止まった湊にラビリスがそう答えれば、湊は彼女をお姫様抱っこから背負う形に変えて、ポケットに入れていた携帯を取り出しメールを確認する。
すると、メールを確認していた湊は、画面をスクロールさせるにつれて表情を怪訝な物へと変化させていった。
「どないしたん？　誰からのメールやったん？」
「山岸っていうクラスメイトからのメールだった。今日、文化祭の出し物が〝シンデレラ〟の劇に決まったらしい」
「へえ、文化祭なぁ。ウチ、見た事ないけど皆でお祭り作るやなんて楽しそうやん。湊君も劇に出るんやろ？　なんの役になるとかはまた決めるんかな？」
文化祭という言葉はラビリスも知っている。クラスや学校が一丸となって様々な出し物をして作りあげる学生たちのお祭りだ。
その中でも劇は大勢の前でやるだけあって、一種の花形と言えるだろう。シンデレラはメジャーなタイトルであるし、ラビリスから見ても湊の容姿は非常に整っているため、舞台衣装に身を包めばどんな役でも映えるに違いない。
彼の役が既に決まっているのか気になったラビリスが返事を待っていれば、かなりの間を置いてから湊は静かに答えた。
「……配役はシンデレラらしい。王子役と意見が分かれてシンデレラになったと」
「え、その……が、頑張ってな」
「文化祭、休もうかな……」
一瞬、ラビリスは湊が主役に抜擢されたことを祝おうと思ったが、よく考えればシンデレラはある意味お姫様とも言える女性の役だ。

いくら髪が長くて美人だと言っても湊は男であるため、全配役の性別が逆転しているならともかく、彼一人だけが女性の役に選ばれていたとしたら迂闊に祝う事は出来ない。

けれど、何か声をかけねばと思ったことで、ありきたりな応援の言葉をかければ、青年は愁いを帯びた表情で溜め息を吐いて肩を落としながら無人島へと歩いて行った。

第百五十話　新説・シンデレラ

夜――お屋敷

むかしむかし、あるところにシンデレラ（有里湊）というとても美しい貴族の娘がいました。

彼女の母親は病に倒れて早くに亡くなりましたが、父親が再婚した事で継母と二人の姉が出来ました。

けれど、一家揃った新しい生活も長くは続かず、父親も病に倒れて亡くなると、継母と二人の姉たちが本性を現しシンデレラにきつくあたるようになったのです。

父親の遺した遺産で暮らしているというのに、継母たちはシンデレラに掃除、洗濯、お風呂やご飯の用意まで頼んでまるで召使の様に扱います。

でも、シンデレラは強い子だったので、継母と姉たちのいじめに屈しず、見る者すべてを魅了するほど大変美しい女性に育ちました。

腰よりも長い艶やかな黒髪、青いバラを象った右眼の眼帯、そして豪華な紫色のドレスを身に纏って優雅に紅茶を飲みながらリビングで読書をしていると、廊下の方からばたばたと足音が聞こえて誰かが部屋へと入ってきました。

「シンデレラ！　ちょっとシンデレラ！　お風呂を用意しておいてって言ったのにお湯が張られてないじゃない！　どういう事なのよ！」

バスローブにスリッパ姿で現れたのは、義理の次女であるマドカ（西園寺円）でした。

シンデレラには劣るが彼女もそれなりに美しい容姿をしているものの、気の強い性格とＰＡＤ偽装を施した貧乳であることがネックとなり、持ち上がった縁談話は顔合わせの会食の時点で毎回破談となっています。

今日も破談になってぷりぷりと怒りながら帰って来たのですが、先に電話でお風呂の用意をしておけと言っておいたというのに、服を脱いで風呂場に入ると新居のようにピカピカな風呂があるだけで、そこには一滴のお湯も溜まっていませんでした。

電話で話したときには「了解です」と答えていたというのに、一体どういう事なのかと問い詰めれば、シンデレラは面倒くさそうに本から顔を上げてクッキーに手を伸ばしながら答えました。
「……ちゃんと洗ってからお湯を張りましたよ」
「嘘をおっしゃい！　じゃあ、なんでお湯が無いのよ？」
屋敷にはお風呂は一つしかないので、お風呂の栓を閉め忘れていたのでなければ、最初からお湯を張っていなかったとしか思えない。
けれど、クッキーを食べてから優雅に紅茶のカップに口を付けるシンデレラが、あまりに淡々と普段通りの様子で答えるので、嘘を吐いているのなら承知しないぞと脅して次女は問い質しました。
「お湯が張れたので、いい時間だったしせっかくだから一風呂浴びたんです。で、上がったときにお湯を抜いて綺麗に掃除しておきました」
「抜いてるじゃない！　一番風呂は百歩譲っていいとして、そこはちゃんとお湯を残しておきなさいよ！」
シンデレラが綺麗好きな事は知っているため、帰ってくるまでに風呂に入っておく事をとやかく言うほど次女の心は狭くない。
しかし、どうしてお風呂に入ってその後にお湯を抜いてしまったのか。まだ姉たちと継母が入浴するというのに、自分が入ったらその日の風呂は終了だとでも言いたげなシンデレラに怒りを表しながら、次女はしょうがなく自分でお湯を張るためお湯張りのスイッチを押しに部屋を出て行きました。
その後ろ姿を見送ったシンデレラはようやく静かになったと嘆息し、少し温くなってしまった紅茶を飲みきってしまおうとカップに手を伸ばしたとき。
「シンデレラ！　ご飯はまだなのシンデレラ！」
またしても彼女の時間を邪魔するように、今度は黄色のドレスを着た義理の長女であるリオ（岩崎理緒）が怒った様子で部屋に入ってきました。
いちいち人の名前を大声で呼びながらやってくるなと感じつつ、シンデレラが時計に目をやると既に午後八時を過ぎています。
普段の夕食は六時から七時の間には始まるというのに、この時間ま

でよく我慢したなとシンデレラは薄い笑みを浮かべながら長女に言葉を返しました。
「嫌ですわ、リオお姉さま。ご飯なら今朝食べたじゃありませんか」
「いや、そんなボケたおじいちゃんを相手するみたいな反応止めなさいよ。確かに朝ごはんは食べたけど、晩ごはんの話をしているんだけど？」
「贅沢は敵ですよ。大丈夫、塩と水があれば数日は死にませんから」
水だけなら危険かもしれないが、塩分も摂っておけば二、三日は大丈夫。ダイエットにもなって丁度いいだろう。
シンデレラがそんな事を言いながら、どこから取り出したのかテーブルにペットボトルの水と岩塩を塊のまま置いて本に視線を戻せば、〝せめて粉末にしろよ〟と空腹を我慢している長女は肩と拳を震わせて末妹を睨みつけます。
そんな視線を意に介さず空腹の人物の前でクッキーを食べながら、シンデレラが読書を続けていれば、またしても大声で彼女の名前を呼びながらやってくる者がいました。
「シンデレラ！　ちょっとシンデレラ！　私のクローゼットから服が減っているんだけどどういう事なの！」
歩幅も大きく怒った様子で部屋に入ってきたナイトワンピース姿の女性は、シンデレラの継母であるトモティカ（友近健二）。
彼女はシンデレラの前までやってくると、どうして自分のクローゼットが随分とスッキリしているかとシンデレラに尋ねます。
すると、シンデレラは空になったカップに紅茶のおかわりを注ぎ、その紅茶の香りをゆっくりと楽しんでから、やる気の感じられない表情を継母に向けて口を開きました。
「傷んでいた物やサイズ的にもう着れない物があったので、新しい物を買ったときに入れれるように処分しておいたんです。いけなかったでしょうか？」
「思い出の詰まった物もあるんですから、そういうときはちゃんと言いなさい」
確かに既に着なくなっていた物もあったので、自分で整理するのが

面倒な継母は、そういった理由なら納得出来ると頷きます。
ただし、次からちゃんと言ってからやる様にと言っておくことも忘れない。他人から見ればただのボロかもしれないが、本人にとっては初めて恋人に買ってもらった大切なドレスかもしれないのです。
本人以外が思い出の品かどうかを判断できると思わないので、継母がしっかり言い聞かせるとシンデレラは紅茶を飲みながら素直に頷きました。
それを見た継母は満足して部屋に戻ろうとしたとき、何か引っ掛かると思ってシンデレラの方へ振り返ります。
何かがおかしい、一体この違和感はなんだ。ジッとシンデレラを見つめて違和感の正体を突き止めようとしていると、彼女の着ているドレスが目に入りました。
「ちょっと、シンデレラ。貴女そのドレスはどうしたの？」
「これですか？　お母さまのドレスやアクセサリーを売ったお金で買ったんです。今年の新作らしいですよ」
「人の服を売ったお金で買うな！」
優雅に椅子から立ち上がって一回転してドレスを見せてくるシンデレラに、継母は人の物を売って得た金で自分の物を買ったのかと激怒します。
今年の新作だけあってとても美しいドレスだ。シンデレラの美貌を引き立てており、このドレスを作った者もシンデレラのような女性に着て貰えて満足しているでしょう。
だが、勝手に服を処分されていた方にすれば、何で自分の物になるはずの金を懐に入れているんだと怒らずにはいられない。
お湯張りのスイッチを押して戻ってきた次女も、食事の用意もせずほったらかしにされている長女も、継母と同じようにシンデレラに怒っていますが、彼女たちがシンデレラの行動に振り回されるのは今に始まったことではありません。
様々な家事を押し付けて召使のように扱っていますが、シンデレラはとにかくゴーイングマイウェイな性格で、街に買い物に行く姉にコーラをダース単位で買ってきてと頼んだり、継母たちの写真を板に

貼り付けて流鏑馬をしたり、突飛な行動を取っては継母たちを疲れさせるのです。
父親が生きている頃は素直で従順そうな少女だったというのに、亡くなってからは本性を表していじめようとしていた継母たちを逆に驚かせたのだから、彼女と継母たちの関係はある意味いまのままで良いのかもしれません。
＊＊＊
そんなこんなで、それから数日が経ったある日。継母たちが化粧や他所行き用のドレスを着て忙しそうにおめかししていました。
もう夕方になるというのにどこへ行こうというのか。のんびりとピザを食べながら眺めていたシンデレラに、準備を終えたらしい継母たちが声をかけてきました。
「シンデレラ、これから私たちはお城の舞踏会に行ってきます。その間、貴女は一人で家に残って掃除をしておきなさい。それとピザ臭いからちゃんと換気もしておくんですよ」
「ええ、行ってらっしゃい。お母さまとお姉さまにはちゃんと保険をかけてあるので、お城に行くまでに何かあっても心配しないでください」
ピザと一緒にコーラを楽しんでいるシンデレラは、とてもいい笑顔でそんな事を言ってくる。三人は複雑そうな表情を浮かべたが、ここで無駄に言い合いをして疲れたくないので、言葉を飲み込むとそのまま屋敷を出て行きました。
広い屋敷に一人になったシンデレラは、席を立つとオーディオのところまで行き、お気に入りのクラシックを流し始める。
美しい音楽、美味しい料理、一人の留守番を存分に楽しんでいるこのシンデレラは、なんと欠片もお城の舞踏会に興味がなかったのです。
そも、お城の舞踏会とは言ってしまえばこの国の王子の結婚相手の選定会。本物のオーケストラの演奏を聞きながらのタダ飯は魅力ですが、街を歩くだけで町民や貴族の男たちに交際を申し込まれるシンデレラにすれば、一国の王子だろうと下心を持って自分に近付いてく

る一匹の雄に過ぎず。
今も父親の遺産で悠悠自適に生活しているシンデレラにとって、わざわざそんな者に会いに行くなど余計なトラブルを招く元。姉たちのように婚期を気にしているならともかく、気に入った相手が見つからなければ、生涯お一人様でもいいと思っている彼女には何の魅力もありませんでした。
《おお、一人だけ留守番をさせられるなんて可哀想なシンデレラ》
しかし、シンデレラが一人で留守番ライフを満喫していると、突然声が聞こえてきて光と共に人が現れました。
小さな星の杖を持ち、深緑のローブを纏った姿はまさに魔法使い。突然現れた女性はシンデレラの傍に降り立つと、優しい笑顔で彼女に話しかけました。
「泣くのはおよし、シンデレラ。私が来たからにはもう大丈夫ですよ」
「……さて、警察の番号はっと」
「ま、待って！　怪しい者じゃないの！」
女性に話しかけられたシンデレラは、冷静に携帯電話を取り出して通報しようとします。いくら相手が女性だからといって、突然家に入ってくれば怪しい不審者でしかありません。
女性は通報されそうになって慌ててシンデレラを止めようとしますが、シンデレラは一八〇センチを超える長身と長い腕を活かして、邪魔をさせまいと相手の頭に手を置いて近付かせませんでした。
まぁ、シンデレラも本気で通報するつもりはなかったのですが、あまりに女性が必死に通報しないでくださいとお願いするので、しょうがなく話くらいは聞いてやるかとテーブルについて相手の素性と訪問理由を尋ねる事にしました。
日本刀のような鋭く凛とした美しさを持つシンデレラに対し、膝の上に置いた手をぎゅっと握りしめている女性は縮こまっているので、傍から見たら叱る親と叱られている子どものようにも見えます。
「それで、お名前は？」
「えっと、魔法使いです」
「ほう、それがご両親に貰った名前なんですね。随分と変わった趣味

をしていらっしゃる」
「あ、すみません。フーカ(山岸風花)です」
女性の名前は魔法使いのフーカ。名前を聞いたのにしっかりと答えなかった事で、シンデレラの手がテーブルに置かれた携帯に伸びたため、フーカは頭を下げながら今度こそ自己紹介をしました。
呆れた表情で嘆息するシンデレラからは、最初からそうやって答えろよとフーカの態度を弾劾する意思がありありと見てとれます。
それでもまだ会話を続けるあたり、シンデレラも意味もなく怒ったりするタイプではないのでしょう。それをフーカも理解したので、今度からはちゃんと答えようと彼女の言葉にしっかりと耳を傾けます。
「それでフーカさんは、本日は何をしにいらっしゃったんですか？」
「シンデレラが一人で家に残されて可哀想だから、舞踏会に行けるようにしてあげようと思って来たんです」
「別にブトウ会に行きたいなんて一度も思っていませんが？」
サプライズは計画した本人が一番盛り上がる。そして対照的に、受けた側が冷めているのはよくあることだ。
一般的な女子と感覚のずれているシンデレラは、タダ飯とＢＧＭには惹かれなくもないが、催し物自体に興味無いことを淡々と告げました。
「……すみません」
自分がとんだ勘違い野郎だったことに気付いたフーカは耳まで真っ赤にして俯き、消え入るような声で謝罪しました。
相手が自分のことを考えてくれたのはシンデレラもありがたく思いますが、正直、今まで一度も喋ったことのない相手にやられても、なんで自分の事を知っているんだと不気味なだけです。
勘違いに気付いて謝っているため、別に悪い人ではないようですが、色々と不明な点の多い相手の事を知るためシンデレラは質問を続けます。
「失礼ですがご職業は？」
「えと、魔法使いをやっています」
「魔法と一口に言っても治癒であったり、呪いであったり様々な種類

がありますが、どういった事を専門にしていらっしゃるので？」
「得意なのは変化の魔法です。ネズミを馬にしたり、カボチャを馬車にしたり、そんな風にしてシンデレラをお城に連れて行ってあげようと思っていたんです」
　話を聞いたシンデレラはどこから取り出したのか、バインダーに挿んだ紙に相手の情報を書いています。
　これではまるで面接のようですが、フーカが気になって紙に視線を送ったところで、シンデレラは書く手を止めて口を開いて来ました。
「必要な物がないときには代用品を用意出来て便利かもしれませんが、特に不便さを感じていないときには必要ない能力ですね。それしか出来ないんですか？」
「あの、はい、すみません」
「いえ、別に責めている訳ではありませんから。では、その変化の魔法はずっと使えるのですか？」
「一応時間制限があります。制限を超えると元に戻っちゃうので注意が必要なんですが、それさえしっかりしてれば色々出来て便利なんです」
　使用する魔法の程度によって制限時間に差が出るが、ちょっと使うには十分でまぁまぁ便利な魔法だとフーカは力説する。
　伊達にこれを専門として仕事をしている訳ではない。貴女がお城の舞踏会に行くのもばっちりサポートしてみせますと説明すれば、返ってきたのは先ほどの比ではないほど大きな溜め息だった。
「はぁ……時間を気にしなきゃいけないのにブトウ会に行かせるつもりだったんですか？　もし、向こうで時間が来てしまったら、帰りはカボチャとネズミを抱えて徒歩で帰る事になるじゃないですか。それなら普通に馬を借りてお城まで行った方が楽です」
「はい、仰る通りです。出しゃばってすみませんでした」
　せっかくお城の舞踏会で楽しい気分になれても、帰りにカボチャとネズミを抱えて歩かなければならないなど惨め過ぎる。
　フーカも指摘されて初めて気付いたようで、考えが足らず申し訳ないと深々と頭を下げた。

相手の事を考えていたつもりだったが、逆に相手が後々困るような事をしていたなど、未遂とは言え許される事ではない。
本当に御免なさいとフーカは謝り、何か罪滅ぼしをさせてもらえないかと言おうとしたとき、テーブルを挟んで正面に座っていたシンデレラが突然立ち上がった。
「まぁ、良いでしょう。ブトウ会には興味ありませんが貴女には少し興味が湧きました」
立ち上がったシンデレラはテーブルから離れ、優雅な仕草で指をパチンと鳴らしました。
すると、どういう訳か彼女の身体が黒い炎に包まれ、炎が治まるとそこには彼女の姿はなく。代わりにベルばらの軍服のような豪華な黒い衣装を着て、髪をアップにした美麗な青年が立っていました。
魔法使いは自分のはずなのに、一瞬で服装や髪型が変化した相手にフーカは驚きを隠せません。
「え？　あ、あの、え？」
「私の本当の名前はサンドリヨン・ヒュッケバイン・フォン・アシュリゲーテ。先代ガルバン・フォン・アシュリゲーテの一人息子です。幼い頃から容姿と頭脳に恵まれていた私を、父は跡取りとばれれば命を狙われかねないと女児として育てていました」
息子ならば跡取りになるだろうが、例え一人っ子でも娘ならば家督を継ぐことはない。それ故、自分たちの息子をシンデレラの婿にしてアシュリゲーテ侯爵家を乗っ取るか、当代の当主が死ねばアシュリゲーテ侯爵家は終わりだと、サンドリヨンは他所の貴族から嫌がらせを受けずに育つ事が出来ました。
父親の作戦が見事に成功してここまで立派に成長したサンドリヨンは、久しぶりに纏った衣装や腰に差した剣の柄に触れて調子を確かめつつ、フーカに自分が本当の姿を晒した訳を話します。
「そのおかげで貴族の醜い蹴落とし合いにまきこまれずに済みましたが、父が死んで家督を継いだので、そろそろ身を固めねばと思っていたのです」
「身を、固める？」

「ええ、貴女の事がそれなりに気に入りました。少々抜けていますが、ちゃんと気を遣える性格のようですし、容姿も悪くない。金銭面では苦労させません。まずは婚約という形になりますが、私と共に人生を歩んでくださいませんか？」
　座っていたフーカの手を取って立たせると、サンドリヨンは微笑を浮かべつつ相手を口説きました。
　突然プロポーズを受けたフーカは、相手があまりにも綺麗なこともあり、緊張で頭が混乱してしまい。どことなく満更でもない雰囲気ですが、頬を染めながらも返事に困ってしまいます。
「えと、急にそんな事を言われましてもすぐにお答え出来ないっていうか、そもそも台本とかなり違ってるんだけど、これで大丈夫なのかなって色々と心配になってたりなんかしちゃってたりして」
　〝ダイホン〟とやらが何なのかは分かりませんが、左手を掴んだまま熱い視線を送ってくるサンドリヨンに、フーカはテンパってよく分からない事を返して来ます。
　それを面倒に思ったのか、サンドリヨンは腕を引いて相手を抱き寄せると、右手を腰に回して、左手を相手の顎に添えて上を向かせるとよく通る低い声で呟きました。
「――――黙って俺の物になれ」
「は、はい……」
　フーカ、陥落。強引だが男らしく、真剣な瞳で情熱的に相手が言ってくるものだから、フーカは完全にとろんと惚けた様な乙女な瞳になって頷いてしまいました。
　対して、よい返事を貰えたサンドリヨンは満足げに口の端を歪ませ、一度フーカを解放すると彼女の細い腰に腕を回して隣に立ちながら今後について話を進めます。
「どうもありがとう。とても嬉しいです。では、早速これから共に暮らす新居を探しに出かけましょう」
「新居って、ここで暮らすんじゃないんですか？」
「ええ、せっかくですから一番良い家に住みたいでしょう？　なので、これからお城に行こうと思います」

てっきりこの屋敷で暮らしていくと思っていたフーカは首を傾げます。侯爵家の屋敷だけあって、ここもかなり広くて調度品も豪華で不満などなさそうなのです。

実際に暮らしている者からすると違うのかもしれませんが、どんなにいい家でも何か一つは不便なところがあるものですから、住み慣れた家の方がよいのでは考えながら、とりあえずどうして家探しにお城へ行くのかフーカは尋ねました。

「えと、よく分からないですけど、王子様に良い場所がないか聞くんですか？」

「いえ、お城を明け渡して頂こうかと。せっかくの武闘会ですから、勝って総取りです」

「え、勝ってって、〝ブトウ会〟って声に出したら一緒ですけど、戦う方じゃなくて踊る方ですよ？」

「細かい事は気にしない。さぁ、貴女もそんなみすぼらしいローブからドレスに着替えて行きますよ」

同音異義語であるとフーカが指摘するもサンドリヨンは気にしません。せっかくのおでかけにローブ姿など無粋であると、彼女をドレスに着替えさせるためサンドリヨンはフーカと共に私室へと向かったのでした。

＊＊＊

サンドリヨンたちがそんな事をしている頃、お城では盛大な舞踏会が開かれていました。王宮お抱えのオーケストラたちの生演奏で、参加している貴族たちが楽しそうに踊っています。

しかし、他の者たちの踊る姿を眺めていた、赤と黄色の派手なカボチャパンツに白タイツ姿の王子〝ジュー（伊）ン・ペイラン（織）・ド・タイツホワイト（順）（平）〟は、専用の豪華な椅子に座ってつまらなそうに頬杖を突いていました。

「あー、マジだっりぃ。そんなダンスばっかり何曲も踊ってられないっつの」

「殿下、ご婦人方に聞こえますぞ。この度の舞踏会は殿下の伴侶を探すために開かれたもの。ダンスで相手の教養などを見ながら、お互い

の相性を知るのはとても理に適っているのです」
「いやいや、面接とかして少しはそっちで選定しておいたらいいじゃん。それを国中から人呼ぶってどういうことよ。明らか母親世代のマダムが色目使って来るとか聞いてないし」
何人もの女性とダンスを踊った王子でしたが、中々にティンと来る女性に巡り合えず舞踏会自体に飽きてしまった様子。
中には結構いいかなと思った相手もいたのですが、話してみると腹の黒さが透けて見えてしまったり、化粧で上手く誤魔化してるけどアラフォーですよねと騙されかけたことで、今回の舞踏会では結婚相手を選ぶ気が殆どなくなっていました。
けれど、まだしばらく舞踏会は続くのでこの場にいなければなりません。他人の踊っている姿を眺めたり、挨拶にやってくる貴族たちの相手が面倒になっていた王子が、何か面白いことでも起きないかなとボンヤリ考えていたとき。
「アシュリゲーテ侯爵、御入来！」
入り口のところで警備をしている兵が、大きな声で新しい客がやってきた事を告げました。
一目で上等と分かる黒衣を纏う美青年、そんな相手にエスコートされる新緑色のドレスで着飾った愛らしい少女、そんな二人が登場した瞬間に会場の至る所で女性たちの熱の籠った溜め息が聞こえてきます。
同性である王子ですら青年と少女に見惚れてしばらく動けなかったのですから、貴族と言っても成り上がり者も多数混じっている他の者たちが魅了されるのも無理はありません。
現れた二人は青年が堂々と会場の真ん中を進んでいくため、他の者たちも道を開けて真っ直ぐ王子の元までやってきました。
近くで見ると思っていた以上に綺麗で格好良い。自分なんかかぼちゃパンツに白タイツだぞと、内心で愚痴りたくなりながらも王子はやってきた二人を歓迎します。
「ようこそ、我が舞踏会へ。私はジューン・ペイラン・ド・タイツホワイト、この国の王子です」

「はじめまして、殿下。私はサンドリヨン・ヒュッケバイン・フォン・アシュリゲーテと申します。本日はアシュリゲーテ侯爵家の当主として、妻のフーカと共にお願いがあって参りました」
「え、妻？　山岸さん、いつから奥さんになったの？　てか、シンデレラから名前変わってるけど、なんかそっち格好良くね？　オレっちなんか服も名前も白タイツなんだけど」
　王族に生まれたからと言って服装や見た目が格好良いとは限りません。ダンスで疲れてしまった王子が何を言っているのかは分かりませんが、傍からみればこっちが王子だろうという気品を漂わせているサンドリヨンが口を開きます。
「殿下、本日は武闘会です。是非、私と戦って頂きたい。私が勝てばこの城と国を貰います。殿下が勝てば継母と二人の義姉をあげましょう」
「え、なして、舞踏会で戦いになんの？　てか、勝ってもそれ不良在庫処分でそっちが得するだけじゃね？」
　王子の言葉に何も返さずサンドリヨンは玉座から離れると、フーカに下がっておくように言って禍々しい黒剣を抜き放ちました。
　かの剣こそは、一度抜き放たれれば、生き血を浴びて完全に吸うまで鞘に納まらぬと語られた魔剣〝ダーインスレイヴ〟。
　その剣の持ち主と死合うのなら、王子も相応の剣を持たねばならないと側近が煌びやかな剣を持ち、恭しく王子にそれを手渡します。
「殿下、王家に伝わる宝剣〝エクスカリパー〟に御座います」
「ちょっ、んなもん用意してるとか聞いてないって!?　つか、それパチモンじゃねえか！　おい、お前らグルだろ！　山岸さんも驚いてるってことは、オレとか一部の人には別の台本渡してやがったな?!」
　王子に剣を渡した側近はすぐに離れて行きます。古来より決闘は誇りを賭けて行うもの。余人が入る余地などないのです。
　剣を受け取り戦いを前に王子は興奮した様子のようですが、対してサンドリヨンは氷よりも冷たい殺気を放ち、ゆっくりと剣を構えて王子へと向かっていきます。
　六メートル、五メートル、四メートルと距離が縮むにつれて、サン

ドリヨンから放たれる殺気が重さを増していきますが、残り三メートルになったところで彼の姿が突如消えました。
「……はへ？」
彼の姿が消えたと思ってから数瞬後、カランッ、と甲高い音が聞こえた事で下に視線をやると、王子は自分の持っていたエクスカリパーの刀身が半分になっている事に気付きました。
一体何が起きたのか分かりませんが、とりあえずサンドリヨンによって斬られた事だけは理解します。
そうして、恐る恐る王子が振り向けば、先ほどまで自分が座っていた玉座に自分が付けていたはずの王冠を冠したサンドリヨンが座っていました。
とても高貴な見た目をしている彼によく似合っていますが、持っている剣も含めて魔王にしか見えません。
ただ、圧倒的な実力差によって敗北したことを理解した元王子は、持っていた剣だった物を床において潔く土下座をしました。
「わたくしの負けです。ですから、どうか、どうか命だけはお助けください」
「かまわん、その方を許そう。今この瞬間より城は余と妃であるフーカの物だ。代わりに貴様にはアシュリゲーテの屋敷と余の継母と二人の姉妹をくれてやる」
「え、すみません、後半はいらないです」
新たにこの城の主となったサンドリヨンは、寛大な処置によって元王子に引っ越し先の家をあげました。おまけに三人もの女性まで貰えて、元王子は感動のあまり涙を流さずにはいられません。
元王子の側近だった男は城の主に付くようで、サンドリヨンが手を払う仕草をすると兵士を呼んで元王子を連れて行かせました。両側から腕を組んで後ろ向きに引き摺られていく姿は、中々にユニークでサンドリヨンも口の端を歪ませます。
連れて行かれた元王子が扉の向こうに消えれば、危険だからと下がらせていたフーカを呼んで、サンドリヨンは彼女の手を取り音楽に合わせてステップを踏み始めます。

これまでダンスなど踊った事のないフーカは慌てますが、サンドリヨンがしっかりリードしてやると、相手の動きに身を任せて徐々にそれらしくなっていきます。
自分の妻の初々しい姿を見たサンドリヨンは、ゆったりとした動きで踊りながらフーカに話しかけました。
「フーカ、余はお前を幸せにする。共に生き、この国を平和で豊かな物にしてゆこう」
「え、その……はいっ」
リードされて踊る彼女はとても幸せそうな笑みで頷きました。
そうして、二人は舞踏会を楽しみ。次の日からは新たな王として民を導きながら、国を繁栄させて幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし。

9月22日（土）
午後――月光館学園
湊たち3―Dの舞台が担任の盛本のナレーションで締めくくられると、場内から拍手が鳴り響いて幕が降りて行く。それを見ていたチドリは、普段以上にやる気のない半目になってポソリと呟く。
「……私、こんなシンデレラ知らないんだけど。てか、何もしてない魔法使いが玉の輿に乗ってるじゃない」
彼女の言う通り、湊たちの劇である『新説・シンデレラ』の魔法使いは原作と違って何もしていない。それで侯爵家の当主と婚約、その後は革命を成功させて新王になった者の妃に自動でコンバートしているため、これでは魔法使いのシンデレラストーリーではないかと突っ込みがはいるのも無理はない。
傍に座って一緒に劇を見ていた美鶴も、その辺りは超展開だと思ったようだが、魔法使いのシンデレラストーリーということでタイトル詐欺でもないかもしれないと考え、とりあえず劇の内容についての感想を口にした。
「随分と斬新な設定だったが、小道具もしっかり作られていて良かったじゃないか。有里がどうやって着替えたのか不思議だが、まぁ、魔

法使いがいる世界のようだから、魔剣を持っていた彼も魔法が使える設定だったのかもしれないな」
「……湊の衣装だけファンクラブからの寄贈なのよ。会員が増えたからそういう技能持ちもいたみたいね」
「なるほど、ふむ、まぁいいか」
劇をやるクラスは演劇部に衣装を借りたりすることもあるので、そういった衣装のプレゼントも別に禁止してはいない。なので、美鶴は双方が納得しているのなら何も言うまいと黙った。
これで劇は終了で、後は有志が色々と交代で出し物をしていくだけになる。そちらまで見る気のないチドリらは他の観客と同じように荷物を纏めると、色々な意味で面白い劇だったと講堂を後にして残りの時間も文化祭を楽しんでいった。

第百五十一話　八年の月日を経て

９月２５日（火）
午前――霊園

秋らしい気候になりつつある九月の下旬。本日は平日で学校の授業もあるが、岳羽ゆかりは父の命日ということもあって休んで墓参りに来ていた。

傍らには母親もいるが彼女は紹介したいと言っていた恋人を連れてきておらず、そのくらいの分別はあったかとゆかりを安心させた。

掃除用の道具を借りて整備された霊園の石畳を歩いて、母親と並んで父の眠る墓の前まで進む。

ゆかりが母の今の状態を快く思わず、一方的に関係をギクシャクさせているが、この日は亡くなった父を悼んで普通でいられる。

母が供える花と線香などを持ち、ゆかりが水の入った桶や供えるお菓子などを持って到着すれば、どういう訳か既に墓は綺麗に掃除され、真新しい花まで供えられていた。

「あれ、もう誰かが掃除してくれてる。一体誰が来たんだろ？」

「分からないけど、それなら、お花とお供えをしてからお線香をあげちゃいましょうか」

掃除が既に終わっているのなら、確かに母の言う通りにするしかないため、ゆかりは母から花を半分貰って挿してゆく。

墓の掃除をしてくれた人物も花を供えているが、挿すスペースは残っているので、ゆかりたちが持ってきた花も一緒に挿せば随分と立派な物になった。

花を供えたら続けて持ってきたお菓子類を置いていき、それらも終わると取り出した線香に火を点けてあげていく。

屈んで静かに目を閉じて手を合わせながら、ゆかりは心の中で父に久しぶりと挨拶をして近況報告などを語った。少々照れくさかったが彼氏が出来た事も報告したときには、線香の煙が変に揺れた気もするが風が吹いただけだろう。

そうして、長いこと父に話をしてようやく彼女が立ち上がれば、母

も同じように立ちあがって持ってきた荷物をまとめて帰る準備を始めた。
「ゆかりはこの後はどうするの？　お母さんとお昼食べて行く？　それとも午後から学校に行くなら寮まで送っていくけど」
「ん、今日は学校はいいや。まぁ、お昼食べたら寮に帰るけど」
「そう。何か食べたい物はある？　ここの近くだとお蕎麦屋さんとかならあるわよ？」
　都心から離れた場所にあるので、近所には個人でやっている小さなお店ならあるが、若い子が好きそうなお洒落なお店やファミレスは二十分ほど車を走らせたところにしかない。
　例年の流れでゆかりもその事は知っているため、それほどお腹が減っている訳でもないし丁度いいと母の言葉に同意で返す。
「じゃあ、そこでいいよ」
「ええ。なら、借りた物を返したら行きましょうか」
　持ってきた物を入れていた袋と借りた道具を母が持って歩き出す。ゆかりも隣に並んで進んでいくが、途中で母が隣にいるゆかりを見てきたかと思えば、彼女の首元に視線をやって興味を持ったように口を開いてきた。
「そういえば、そのチョーカーはどうしたの？」
「これ？　えと、前に買ったの。うん、買ったの」
　今日は大人しめの私服でいる彼女の首に巻かれたハートチョーカーは湊からの贈り物だ。
　だが、前に買ったという情報は嘘ではない。支払いは湊だったにせよ、一緒に買い物をして〝買った〟のだから。
　素っ気なくも自然に返したつもりのゆかりは、この話は終わりだとばかりに前を向いたまま歩く。
　けれど、娘の態度に不自然なものを感じた母は、彼女の態度にピンと来る物があったのか、ニッコリと笑みを浮かべて一つの単語を口にした。
「……彼氏さん？」
「うぇっ!?　ちょ、ちが……わなくもないけど、別に好きとかそういう

んじゃないからっ」
　母は彼氏からの贈り物かどうかを聞いただけだ。誰も踏み込んだ話などしていないというのに、ゆかりは一人で慌てて恋愛感情など持っていないと否定する。
　大人からすれば彼女のそれは照れ隠しにしか見えない。寮生活になってからは年に数えるほどしか会わなくなり、電話やメールもあまりしないので寂しく思っていたが、意外なところで成長と青春を謳歌している証を見ることが出来て、母は娘の態度を微笑ましく思っていた。
「ゆかりも恋愛に興味を持つ歳になったのねぇ。可愛いのにそういう話を聞かないから心配してたんだけど、ちゃんと男の子とも仲良くやっているみたいで良かったわ」
「ぐ、うぐぐ……」
　管理所に借りていた物を返しながら笑いかけてくる母に、ゆかりは頬を赤らめたまま何も言えず悔しそうにする。
　これでも彼女は花の女子中学生だ。恋愛に興味がなかったなどと枯れた事を言うつもりはないが、貴女を否定するために付き合う事になりましたなどと真相を話す事も出来ない。
　それを照れていると判断したのか、駐車場に向かう途中、母はさらに踏み込んで訊いてきた。
「彼氏さんはどういう人なの？　お名前は？」
「な、なんで、そんなに訊いて来るの？」
「初めてお付き合いする相手なんでしょう？　やっぱり、娘がどういう人を好きになったのかなって気になるの。相手は同級生かしら？」
　突然発覚した娘の恋愛話だけに、相手が初彼なのは間違いない。親子では男の趣味は似るか正反対かのほぼ二択であるため、興味津津とばかりに瞳を輝かせて待っていれば、ゆかりは頑なに視線を合わせようとせずにポツリと呟いた。
「……同級生だけどクラスは違う。部活仲間の有里君って人」
「へぇ、有里くん。あら、有里？　あなたの学校に有里くんっていっぱいいる？」

「よくいる名字でもないし、月光館学園全体で一人しかいないけど？」
珍しい名字ではないが、それほど多い名字という訳でもない。よって、生徒だけでなく教師や警備員も含めて、有里という人物は一人しかいないはずだった。
訊かれたゆかりがそんな風に答えれば、母はその人物に心当たりがあったらしく、頬に手を当てて緩んだ笑顔を見せた。
「あら、あらあらあら。へぇ、籠球皇子とあなたがねぇ。お母さんもテレビで見たけど綺麗な子よね。そうなんだぁ、ゆかりはああいう感じのちょっとミステリアスな子がタイプなのね」
「ちょっ、彼に迷惑が掛かるから絶対に誰にも言わないでよ？　今でも登下校中にマスコミとかが来てたりするんだから」
言われてからゆかりは自分の失言を悟った。
相手は今もテレビで特集を組まれ、超有名所の芸能事務所からもスカウトがくるほど人気の人物。月光館学園中等部の生徒会長で全国模試一位、助っ人として入った部活では初めて出た全国大会で三連覇を目指していた早瀬たちを苦しめ、個人成績でも優秀選手に選ばれたと話題に事欠かないまさに時の人である。
娘の通っている学校の生徒が話題になっていれば、保護者も当然それを目にしているため、名前を言ったくらいでは姿までは分からないだろうと思っていたゆかりは、何でタイミング悪く有名になっているんだと心の中で湊に八つ当たりをした。
そんな複雑な胸中の娘とは対照的に、母は娘が父とは全く異なるタイプの男子を好きになったことを少々意外に思いつつ、一度くらい会って話がしてみたいなと楽しそうな表情で口外しない事を約束する。
「フフッ、はいはい。けど、そっかぁ、へぇ」
「ああ、もう、この人ってば面倒臭いっ!!」
こんな風に絡まれるのなら、今日はチョーカーを付けて来なければよかったと後悔するゆかり。
しかし、既に付き合っている相手までばれてしまっているため、昼食を食べている間にさらに詳しく訊かれることを思い気分が重くな

るのを感じながら、彼女は断固として話さないぞと心に決めながら車に乗り込むのだった。
昼――ムーンライトブリッジ
ゆかりたちがそんな風に話をしているのとほぼ同じ頃、一台のリムジンが都心から離れ人工島の方へ向かっていた。
乗っているのは桐条武治と娘の美鶴。そして、運転手と二人のＳＰ。
朝からポートアイランドインパクトの追悼行事に参加し、午後からは桐条鴻悦や被害者の墓参りに向かう予定である。
美鶴に関しては学校があるので参加しなくていいと言われていたのだが、祖父の墓参りには確実に行くので、どうせなら一緒に行きたいと結局追悼行事から参加していた。
しかし、昼食を終えて墓参りに行く前に、寄りたい場所があると桐条が言ったことで、車は霊園とは反対のムーンライトブリッジに向かっている。
車が目的地に近付いてくると供えるための花束を持ち、桐条は何も話さず窓の外を見つめている。
普段以上にどこか思いつめた顔をする父に美鶴は声をかけようとするが、その前に目的地についたようで車が橋の中頃で停車した。
「ん、あれは……？」
停車した車の外を見ると、美鶴は歩道に誰かがいることに気付く。相手は橋の欄干を掴んで海を眺めながら電話しているようだが、その足元には仏花と思われる花束が置かれており、今日が何の日かを考えれば、ここが何の場所であるかすぐに分かった。
「美鶴、お前は乗っておきなさい。他の者も降りる必要はない」
窓から外にいる人物を眺めていた美鶴に桐条が声をかける。用心のために一緒に降りようとしていたＳＰたちにも車に残れと言って、彼は花束を持って一人車を降りて扉を閉めた。
「ああ、ちゃんと待っておく。道に迷わないようにな」
車を降りると既に声変わりを終えた青年の声が耳に届く。電話は終わったようで、相手がズボンのポケットに携帯をしまっているのを

眺めながら、桐条はゆっくりと近付いた。
すると、電話を終えた青年は近付く者の存在に気付いていたらしく、酷く冷たい声色で話しかけてきた。
「……何のつもりだ」
声をかけられた時点で立ち止まった桐条の方へ青年は静かに振り返る。右眼に半月型の眼帯を付け、首には黒いマフラーを巻いた青年・有里湊だった。
右手を上着のポケットに入れながら振り向いた彼は、近付く事を拒むように寒さすら感じる瞳で桐条を見つめ、ここへ来た理由について尋ねてくる。
彼ら家族にした仕打ちによって恨まれている事を理解していた桐条は、その場に立ったまま真っ直ぐ見つめて返した。
「君のご両親に、花を手向けさせて貰おうと思ってきた」
「いらない、帰れ」
相手がはっきりと拒絶の言葉を吐いてきた事で、桐条は僅かに目を伏せて花を手向ける事を諦める。
今日、英恵は使用人数人を連れて百鬼の実家に墓参りに行っているが、仲の良かった彼女ならここでも花を手向けさせて貰えたのだろうか、と意味のないことを考えながら桐条は顔を上げて青年に話しかけた。
「……君は、今も影時間に関わっているのか？」
「聞いてどうする？　身体測定に託けて候補者を探し、適性があれば娘に勧誘させておいて白々しい事を抜かすな」
身体測定での候補者探しを気付かれていた事に対する驚きはない。
エルゴ研時代、青年は探知型のペルソナを持っていた。カグヤというウサギのようなペルソナとの報告だったが、補助機材を使わなければならない美鶴よりも能力は上だ。
同じくチドリという少女も、彼に匹敵する被験体トップクラスの索敵能力を持ったペルソナの使い手だったので、美鶴がペルソナ使いであることは入学時点で気付いていただろうし、身体測定で自分たちの力が計測されていることにも気付いていたに違いない。

気付かれていた事には驚かないが、しかし、隠れて候補者を探していたことで探られていると感じ、相手が不快に思っていたのなら申し訳ないと桐条は謝罪を口にする。
「子どもたちを騙すような真似をしていることは詫びよう。だが、シャドウの脅威から人々を守るため、我々にはどうしてもペルソナ使いの協力が必要なのだ」
「その結果が人工ペルソナ使いという人柱か。あれだけの事故を起こしておきながら、世界や人々のためと謳って、平気で無関係な子どもたちを生贄に出来る神経が俺には分からない」
瞳の色が蒼へと変わった青年は、激しい憎悪を宿しながら桐条を睨みつけてくる。
アイギスを連れて屋久島に現れたあのときに比べればマシだが、桐条は嫌な汗が背中を伝うのを感じながら、自分が許可して行われた実験という罪過を想って彼の言葉を素直に受け止める。
「……ああ、言い逃れはしない。あれは責められて当然の愚かな選択だった。償いきれぬ桐条の罪だ」
召喚器の開発に制御剤の研究、ペルソナの多様性に加えて特定の能力の伸ばし方など、人工ペルソナ使いのおかげで進んだ事や分かった事は沢山ある。
だが、影時間を消す方法は未だ判明しておらず、タルタロスについての調査も途中から上階に上がれなくなっていることしか分かっていない。
ポートアイランドインパクトという大事故で多数の犠牲者を出しておきながら、さらに無関係な子どもたち約百名を犠牲にして得た成果として、これで釣り合っているとはとても言えず。シャドウの脅威から人々を守るためという大義名分を掲げようと、自分たちがした行いは決して赦される事ではない。
そんな風に桐条が言い訳もせず、悔いる様に己の罪を認めれば、
「そうやって、お前は……殉教者にでもなったつもりかっ!!」
色が変わるほど拳を強く握りしめていた青年が、堪えられなくなったように叫んだ。

「罪だ責任だと言いながら、お前は被害者を見捨てたじゃないかっ。主任は確かに岳羽詠一朗だった。だが、研究を進めさせていたのはお前の父親だろ。どうしておじさんの責任のままにして、世間の悪意に晒される岳羽たちを守らなかった?!」

主任として自身も研究に関わっていた岳羽詠一朗にも罪はある。それを桐条個人に押し付けるほど湊も愚かではないが、当時の報道では主任だった岳羽と桐条グループにバッシングが二分しており、岳羽は〝成功に目が眩んだ男〟や〝成功を焦って大事故を起こした人間〟として批難された。

代表を引き継いだ桐条も事故で怪我を負い、父の死を悼む暇もなく対応に追われて大変だっただろう。グループは日本の就労人口の二パーセントを担っているのだから、その者たちを路頭に迷わせぬよう殆ど休まず働き続けたに違いない。

だが、グループの力を使えばゆかりたち親子を守るくらいは出来たのではないか。逃げるように各地を転々とするという生活を送らなくてもいいよう、桐条鴻悦が主導していたと公表し、岳羽個人へのバッシングを少しでも緩和することも出来たのではないかと、過ぎた事ながら思わずにはいられない。

「お前たちのせいで岳羽たち家族はメチャクチャだ。おじさんの死を悼んでいる暇もなく誹謗中傷を受け、心に傷を負った母親は他者に依存するようになり、娘はその母親を忌避するようになった。それだけ他人の人生を踏み躙っておきながら、いつまで可哀想な自分に酔っているつもりだっ」

湊は岳羽詠一朗と約束を交わしていた。ゆかりのことを守ってあげて欲しいと言われていたのに、最も辛い時期に傍にいて守ってあげられなかった事を悔いてもいる。

幼い頃にしたものとは言え、約束を忘れて過ごしていた自身の愚かさに怒りを感じている湊は、過去を変えることは出来ないと分かっているからこそ、相手が罪を背負ってばかりで、死に場所を求める様に贖罪に人生を費やそうとしているのを見て苛立ちを覚えた。

子どもたちを死なせた研究は間違っていたと思っているし、許可を

出した者を赦すことは当然出来ないが、相手は父親の犯した罪まで背負って今も人々を守るために尽力しているはず。
　それなのに、何故そうまで自分を責め続けて、当時の状況や苦労も知らぬこんな子どもの言葉すら黙って受け止めているのか。湊はそれが〝背負い過ぎる者〟への同族嫌悪だと気付かぬまま、黙って聞いている相手へ八つ当たり染みた言葉をぶつけ続ける。
「お前は償うと言ったが、どうやってだ？　失われた大切な物は帰って来ない。プラスからマイナスにまで落ちた以上、お前がどうやって償おうとも、ゼロに近付きはすれどプラスになることは絶対にないっ」
「……済まない」
「お前のそんな安い言葉なんていらないんだよ！　済まないと思うなら、今すぐに奪った物を返せ！　両親を、被害者を、子どもたちを、チドリの寿命を返せっ!!」
　嘘でもいいから、「犠牲となった者に報いるために影時間を終わらせてみせる」と、それくらいは言って欲しかった。
　だが、青年から両親を奪い、大切な少女の寿命を削り、仮初の恋人の父親と家族の平穏を奪った加害者でしかない桐条は、そんな事を言えるほど図々しく楽観的な性格ではなかった。
　無責任な事は言わないというのは、大人としては誠実で正しい対応だろう。けれど、それが余計に青年を苛つかせて、蓋をしていた思いまで言葉にして出してしまう。
　そう、それは閉じていた扉を再び開くほどの感情の発露だった。
「……ぐ……がっ」
「一体どうした？　大丈夫か？」
　突然、胸と右眼の眼帯を押さえて苦しそうに膝をつく湊。桐条は相手が急に倒れた事で近付きかけるが、苦しそうにしながらも湊が睨むことで制してきたので立ち止まる。
　相手の出自を知っている桐条も、百鬼がどのような一族か知っているだけで、その詳しい生態については聞いていない。
　だからこそ、学校に提出されていた医師の診断書は本物だったので

はないかと考え、救急車を呼ぶべきかと携帯を取り出す。
　すると、
「がっ……あ、出て……くるなっ」
　苦しそうにしていた湊が、何かを抑え込むようにしていたとき、彼を中心として何かの力が広がり始める。
　目に見えないが、空気の密度が増したような感覚を覚え、桐条がふと空を見上げればそこには街の上空を覆い尽くすほど巨大なナニカがいた。
「これは……」
　太陽が雲で隠れたかのように街全体が薄らと暗くなる。上空にいるソレは半透明な身体をしていてはっきりとは見えないが、長い胴体を持った龍に似た存在のように見える。
　もしや、これが彼のペルソナかと考えたが、そのとき道路に止めていた車のドアが開き、心配した様子の美鶴が降りてきて湊に駆け寄ってきた。
「有里！」
　相手が湊だと気付いた時点で心配でずっと見ていたのだろう。青年が急に苦しそうに蹲ったことは予想外だっただろうが、ずっと見ていただけあって反応は速かった。
　今の危険な湊に近づこうとする娘を桐条が止めようとするも、彼のことしか目に入っていない美鶴は横を走り抜けて傍にいこうとする。
　けれど、心配して駆け寄ってくる少女を、青年は銀色になりかけた瞳で睨みつけ声を荒げて拒んだ。
「俺に近付くな！」
「しかしっ」
　怒鳴られたことで五メートルほどの距離で立ち止まる美鶴は、明らかに様子のおかしい相手が心配だった。
　荒い呼吸で額に脂汗を滲ませ、苦しそうに眼帯と胸を押さえたまま何かに耐えている。これで大丈夫だと思う方がおかしい。
　だが、彼がそうやって何かに耐えている間も何かの力は拡がり続けていた。

そして、その力を通じて、突然覚えのない光景が映像として美鶴たちの頭の中に無理矢理に流れ込んできた。
「これは、何かが流れ込んでくるっ」
影時間に横転して炎上している車、見た事もない髑髏のシャドウと戦う二体のペルソナ、建物の中で次々と切り殺されていく大人たち、頭を銃で撃ち抜いた女性。場面は飛び飛びのようだがいくつもの恐ろしい光景が〝自分の視点〟で流れていく。
どうしてそんな物が見えたのかは分からないが、状況を考えれば先ほどの光景がなんであるかは美鶴にも想像がついた。
「有里、君は一体……」
「湊君っ!!」
先ほどの光景が彼に繋がるのが信じられず、美鶴が呆然としながら青年に近付こうとしたとき、急に背後から声が聞こえて銀髪の少女が駆けこんできた。
少女は苦しそうな湊の隣にしゃがみ込んで様子を確かめるなり、顔を上げ険しい表情を向けて激しい怒りをぶつけてくる。
「アンタ、湊君に何しはったんよ!」
「違う、私は何もっ」
状況から見れば一番近い位置にいた美鶴が、湊をこんな目に遭わせたようにしか見えない。
けれど、相手は父と話していたら苦しみ出したので、自分は何もしていないと首を横に振って否定した。
相手は青年が心配でそれを最後まで見ていなかったが、横にしゃがんだまま背中に手を回して不安な表情で声をかけている。
「湊君、マズイて、このままやとっ」
「俺を、海に捨てろ……阿眞根が……出てくる前に、早くっ」
湊の様子から察するに時間は残されていないのだろう。胸と眼帯を押さえたまま、青年がほとんど銀色になった瞳を少女に向けて叫べば、少女はとても辛そうな顔で一度下を向いて、
「……ゴメン、湊君っ」
そう言うなり、何を思ったのかその細腕で湊を抱えるように立ち上

がると、一気に飛びあがって欄干の向こう側へ一緒に飛び降りていった。
ここから海面までは数十メートルある。おまけに陸にぶつかって戻る海流と沖から入ってくる海流がぶつかり、橋の下は激しい海流が流れるポイントとなっていてまともに泳ぐ事など出来ない。
少女と湊が飛び降りるのを見て慌てて欄干に駆け寄った美鶴は、小さくなっていく二人が最後は白い泡を立てながら海の中へと沈んでいくのを見ているしかなかった。
だが、二人が海に消えていったおかげか、先ほどまで一帯を覆っていた何かの力は霧散し、上空にいた見えない龍のような存在も消えていた。
太陽の光に照らされた海面を見ていた美鶴は、父がグループの者に電話をかけて飛び込んだ二人の捜索の指示を出し終えるのを待ってから声をかけた。
「お父様、今のは？」
「……分からない。だが、今の事は忘れろ美鶴。彼には関わるな」
「しかし、彼は……」
問われた桐条は車に向かいながら淡々と返して来た。しかし、忘れろと言われても安否不明な状態でそう簡単に忘れられるはずがない。
なにより、銀髪の少女は初めて見る顔だったので分からないが、今日という日とこの場所の事を思えば、流石の美鶴も過去のデータが存在しない青年の正体に気付けてしまう。
「あの日、ムーンライトブリッジで亡くなられたのはある家族だけです。そして、その家族の件以外にムーンライトブリッジでは事故は起きていません。つまり彼の、有里湊の本当の名は……百鬼八雲ではないのですか？」
「お前も調査部の報告には目を通したのだろう？　彼は有里湊だ。それ以上でもそれ以下でもない」
「ですが、お父様っ」
八年前、ムーンライトブリッジの事故で親友家族を失った母の姿を今でも覚えている。英恵にとって八雲という少年は実の娘である美

鶴と同等、血の繋がりなど関係なく大切な息子として可愛がっていた。
自分の母親が他の子どもに愛情を注いでいることに嫉妬を覚えなかった訳ではないが、宗家にいて自分と会えない母を元気付けてくれていると思えば、ほとんど会った事のない少年にも感謝できた。
その息子と親友を一度に亡くしてしまった英恵は、絶望に染まって本当に死んでしまうのではないかと不安だった。
今でこそ自然な笑顔を見せてくれるようになったが、数年前まではまだどこか無理をして笑っているようで、彼女の時計はあの日から止まっていたのかもしれない。
一昨年の誕生日パーティーで、七歌から八雲がきっと生きていると聞いたときは狂気の片鱗を見たが、もし今生存していたことを知ったらどうなるか。
危険な賭けではあるが、父が真実を話そうとしないなら外堀から埋めていくしかない。話すのは海に落ちた二人の安否が判明してからにするが、美鶴は母親のためと真実を知りたい自分の気持ちを優先し、車に乗り込んでシートベルトを締めるなり父に自分の考えを伝えた。
「……お母様には報告させて頂きます。八雲が見つかったと」
「……好きにしろ」
帰ってきた言葉は美鶴の主張を否定する物ではなかった。つまり、遠回しに湊の正体が八雲であると認めたことになる。
父が何を隠しているのかは分からないが、先ほど流れ込んできた恐ろしい光景が青年の記憶であるなら、自分は初のペルソナ自然獲得者ではなく、百鬼一家を襲った事故はただの事故ではなかったという事だ。
そんな事を考えながら美鶴は、ショッキングな光景を見た衝撃と、予想だにしなかった有里湊の正体に胸中複雑な思いを抱えながら、発進する車の外を眺めて心を落ち着かせようとするのだった。

――海岸

苦しんでいた湊と共に海に飛び込んだラビリス。海に入ったことで状態が沈静化した湊を抱えながら、彼女は潜水でムーンライトブリッジから五キロほど離れた場所にある海岸に辿り着いていた。
「ごほっ、ごほっ」
「苦しい思いさせてゴメンな。けど、見つかったらマズイ思たから気付かれんように移動してん」
まだ日が落ちていないため、ほとんど人の寄りつかないような場所を選んだが、その分距離が伸びてしまい。呼吸を必要とする湊にはきつかったようで、苦しそうに咳き込んで水を吐いている。
しかし、潜水で長距離を移動したおかげで、遠くに見えるムーンライトブリッジの下に今頃到着した捜索隊と思われる桐条グループの船に見つからずに済んだ。
流石にあの場に留まっていればソナーに引っ掛かっていたので、海に潜ってすぐに海流に逆らうよう泳いで移動して正解だったと、ラビリスは湊の背中を擦ってやりながら考えていた。
湊は湊で飲んでいた海水を吐き出し、呼吸できるようになって少し落ち着いたのか、砂浜で片膝を立てて俯いているため、情報を整理したいラビリスは彼の背中を擦りながら先ほどの事を尋ねる。
「なぁ、さっきの変な力はなんやったん？」
「あれは……阿眞根、俺と繋がってる異界の神が顕現する予兆だ。感情の昂りに呼応して顕現し、俺を〝望みを叶える存在〟に変える」
研究所で魔眼の話を聞いたとき、神が実在していた事はラビリスも聞いていた。
なので、異界の神とやらがいると聞いても特別驚きはしないが、湊を別の存在に変えるという部分の意味は分からず、首を傾げつつも気になっていたもう一つの事柄について訊く事を優先することにして話を続けた。
「あのとき力を通じて映像が見えてんけど、影時間に横転した車とか研究所みたいなとこで沢山の人が死んでたのって……」
「俺の記憶だろうな。君は命令されて姉妹機を殺してきたと言ったけど、俺は自分の意志でそれよりも大勢の人間を殺して来たんだ」

少々躊躇いがちに尋ねるラビリスに、湊は顔を上げずに俯いたまま答える。
彼女は湊の過去については事故で両親を失っているなど、簡単なことしか聞いていなかったため、その手が血で汚れていると聞かされ驚く。
「事故では両親を見殺しにして、研究所では脱走に巻き込んで被験体たちを殺した。脱走を阻もうとしてきた桐条グループの人間たちを一晩で一六〇人以上殺して、それからは人を殺して金を得る仕事を始めた。だけど、外国に行ったときにもう一人の母親を巻き込んで殺して、それから憎しみだけでテロリストと久遠の安寧のやつらを殺し続けたんだ」
だが、少女のそんな様子に構わず、青年は俯き前髪で目が隠れたまま、弱々しくも言葉を続けて話すのを止めなかった。
そこでラビリスは彼が自分にこの事を知られたくなかったのだと察する。いや、もっと言えば、自分だけでなく、あの力に包まれた場所にいた他の者たちに見せたくなかったのだろう。
感情の昂りを引き起こしてトリガーを引いたのは、あの場所にいた男性と少女のどちらかに違いない。
少女の方は誰か知らないが、ラビリスは男性の方はデータとして知っていた。あの男の名は桐条武治。現在の桐条グループ総帥にして、ラビリスの実験と湊の両親の死亡事故にも僅かに関わっている者だ。
あの男が一緒にいたのなら、桐条グループを恨んでいる湊が、憎しみと怒りで感情を昂らせるのはある意味当然。
仕事が終わって街を散策しながら合流場所を目指していたが、こんな事になるならタクシーで真っ直ぐムーンライトブリッジに向かっていれば良かったと後悔する。
しかし、起こってしまった事は変えられない。だからせめて、話したくないなら話さなくていいと青年に告げた。
「……もうええよ」
「ははっ、驚いただろ？　俺は既に二万人以上殺してる化け物だ。君

たちを人間にしようとするのも、チドリの世界を守ろうとするのも、他者を幸福にする事できっと無自覚にそういった罪から逃げようとしてるんだ」

長い前髪の隙間から見えた彼の瞳は蒼く輝き揺れていた。自嘲的に口の端を吊り上げ、乾いた嗤いを漏らす青年はとても小さく見える。

対シャドウ兵器を圧倒するほどの戦闘力を持ち、自分の望む未来のために進み続ける姿を見ているせいで忘れそうになるが、彼も一人の人間であり、まだまだ子どもと言える年齢だ。

だというのに、この青年は全部背負い込みながら弱音も吐かず、ずっと独りで我慢して心の痛みに耐え続けている。

「ゴメン、ゴメンな湊君っ」

その事に気付いたラビリスは、助けを求める事も知らない青年に憐れみを覚え、しっかりと正面から抱きしめると、彼の頭の後ろと背中に腕を回しながら気付いてやれなくて済まなかったと謝罪した。

この青年は誰よりも強い。だがその強さの奥に誰よりも危うい脆さが隠れていた。

彼は誰にも弱さを見せないため、阿眞根が顕現しかけて衰弱していなければ、ラビリス自身彼の脆さに気付けなかったと断言できる。

よくこんな繊細な心で対シャドウ兵器を上回るほどの強さを手に入れられたものだと思ったが、その考えはむしろ逆で、心の痛みを無視してでも進み続けなければ目的を果たせなかったのだろうと彼女は察した。

目的を果たした彼は、自分がどれだけ傷付いていようと得られた結果を見て満足するに違いない。

しかし、一人の青年だけに代償を払わせ、彼という犠牲の上に成り立つ平和など、本当に守っていかなければならないのかラビリスには分からなかった。

深夜――巌戸台分寮

影時間を過ぎた深夜、二階のとある一室で少年が一人、額に脂汗を

滲ませながら苦しそうに発作に耐えていた。
「ぐっ……出てくるんじゃ、ねえっ」
歯を食いしばりながらベッドの上に蹲り、勝手に出てこようと半透明な状態で現れている自身のペルソナを抑え込む。
力に目覚めたばかりのころはそれほど問題にならなかったが、戦闘を続けて力を付けてくると、徐々にコントロールが利き辛くなり、たまに暴走が起きて勝手にペルソナが出ようとしてくるようになった。
今のまま力を付けていけば、近いうちに完全に暴走して制御できなくなる事態に陥るだろう。
けれど、まだ大丈夫のはず。ペルソナは心の力だ。屈服しなければ、まだもうしばらくは抑え込んでおける。
「おわった、か……はぁ、はぁ……」
ようやくペルソナが落ち着いたことで、荒垣真次郎はうつ伏せでベッドに倒れ込み、乱れた呼吸を整える。
このままペルソナが強くなり制御を離れるようになれば、暴走したペルソナに取り殺されぬよう、桐条グループが開発したという制御剤の世話になる必要が出てくるだろう。
だが、制御剤は劇薬であるため、内臓の機能や自律神経に影響が出て寿命を削るという怖ろしい副作用がある。
死を意識してペルソナを召喚しているだけあって、荒垣は普通の高校生よりは死の恐ろしさについて知っているつもりだ。
だからこそ、ペルソナが暴走する危険があっても、寿命を削る薬を服用する気にはなれない。ペルソナの暴走はまだ起きない可能性もあるが、制御剤は飲めば確実に寿命が縮まってしまうのだ。
呼吸が落ち着いた荒垣は用意していたタオルで汗を拭きとるなり、消耗した体力を回復させようと目を閉じて眠りに落ちていった。

第百五十二話　暴走

１０月４日（木）
放課後――月光館学園
本日の授業と清掃活動を終えた放課後、自由の身となったチドリたちは、夏のコンクールへの応募を終えたことで実質引退状態になっているため、部活メンバーで集まって買い物にでも行こうかと階段を下りて生徒玄関を目指していた。
部活の顧問である佐久間は、皆が活動するなら暇つぶしに自分も手伝うといったスタンスで参加していたので、全員が引退状態として行かなくなっても、卒業までに部室の私物を撤去していけば、後は本人たちの判断に任せると気にしていない。
そういう訳で、部室に集まるときには彼女に声をかけるが、基本的に部活はもうないものとして考え、改めて伝える必要のないチドリらは階段を降りてくると真っ直ぐ靴箱に向かう。
だが、エントランスに到着したところで、職員室のある方から桐条美鶴が現れ、何故中等部に彼女がいるんだと四人は首を傾げた。
相手もエントランスに来た事でチドリらに気付いたらしく、顔見知りということで挨拶をしに近付いてきた。
「やあ、お疲れ様。君たちは帰るところか？」
「そうだけど、なんでこっちにいるの？」
「少し先生方に聞きたい事があったんだ」
チドリの問いに答える美鶴は少し疲れた表情をしている。
〝籠球皇子〟ブームでのマスコミ対応は、仕事に支障を来たすとして桐条グループが学校に専用ダイヤルと担当者を用意したので、彼女や教師が疲れることはもうなくなったはずだ。
ならば、一体何に疲れているのか。チドリらが彼女をジッと見つめていれば、突然美鶴はフッと表情を真剣なものに変えて、どこか躊躇いがちに口を開いて来る。
「その、君たちは最近有里に会ったか？」
「……また付き纏ってるの？」

「違う。ただ、彼の安否が知りたいんだ」
美鶴が湊について尋ねてきたときには、高確率で付き纏っているイメージなため、チドリは呆れた表情を浮かべた。
しかし、美鶴としてはそういったふざけた話のつもりはない。ただ彼が今も無事でいるのかが純粋に知りたくて、最も学内で親しい者たちに情報も求めたのだ。
胸の下で腕を組みつつ、溜め息まじりにチドリの言葉に美鶴が否定で返せば、今度は彼女の言葉に反応したゆかりが一歩前に出てチドリの隣に立ち問い返す。
「安否って有里君に何かあったんですか？」
「……先に聞かせて欲しい。君たちが最後に彼と会ったり、連絡を取ったのはいつだ？」
湊と仲の良かった者たちなので、質問に答えること自体は構わないのだが、美鶴は彼についての情報を先に整理しておきたかった。
九月二十五日の午後になってからの目撃情報があれば、相手は海から上がって移動していることになる。
数十メートルの高さから海に飛び込んでいるため、生きているにしても普通ならば骨折などの重傷を負っているはず。それでまともに動けるとは思わないが、目撃情報があればとりあえず生死不明という状態からは脱する事が出来る。
そのための問いだったが、彼と同じクラスである風花から返ってきた言葉は、美鶴の望んでいた物ではなかった。
「先週の月曜日に学校で会いましたけど、それからはメールとかもないですね」
「やはりか……。その、先週の火曜日、九月二十五日に彼と会ったんだが、様子が変だったんだ。突然何かに耐える様に苦しみだして、限界が近いと思ったのか彼は急にやってきた銀髪の少女と一緒にムーンライトブリッジの上から海に飛び降りた」
美鶴の話を聞いた部活メンバーは一斉に美紀に視線を集める。彼女の髪の色は、兄である真田明彦と同じく銀髪っぽくも見える変わった色だ。

別に異国の血が混じっている訳ではないが、色白な事もあり色素が薄めの家系なのかもしれない。
そのため、チドリたち三人が身近な銀髪の少女を見るのは仕方ないにしても、ムーンライトブリッジからの紐無しバンジーという、全く身に覚えのない話の人物として見られた方は、当然、人違いだと慌てて否定した。
「わ、私じゃないですよっ」
「ああ、美紀よりも背は小さく赤い目をしていた。関西弁と言えばいいのか、方言だったし完全に別人だ」
どちらかと言えばお嬢様系美人である美紀に対し、美鶴が出会った少女は活発そうな明るく可愛らしい容姿をしていた。
まぁ、湊に何かした人物として怒りの感情を向けられたので、その容姿を観察する余裕はあまりなかったのだが、それでも非常に整った容姿であった事と方言で話していたことは記憶に残っている。
銀髪と赤い瞳であることから日本人ではないと思うが、流暢な方言から推測するに関西での暮らしが長かった外国人かハーフなのかもしれない。
外国人の女性と歩いていたとの目撃情報を度々聞く湊だけに、今さら学外の知り合いがいることに驚きを見せたりはしない。
だが、チドリたちも知らない人物のようなので、もしかしたら少女に対する情報を得られるかもしれないと期待していた美鶴は、有力な情報は結局得られなかったかと心の中で肩を落とした。
「……湊に何をしたの？」
会話が途切れると今度はチドリの方から美鶴へ問いかけてくる。
口調は普段通りの淡々とした物だが、瞳の奥には曖昧な答えは許さないという意志が見て取れる。
湊がチドリを大切に想っている様に、チドリも彼を助けるためなら自分の命を使っても構わないほど湊のことをとても大切に想っているのだ。
そんな相手を前にして曖昧な事を話したり、何かを誤魔化すつもりなどない美鶴は、真っ直ぐ視線をぶつけたまま返した。

「私は何もしていない。車から彼と父が話しているのを見ていたら突然苦しそうにするのが見えて、心配になって車を降りたんだ。そうしたら、先ほど言った通りに」
「どうして話なんかさせたのよ。両親の命日に事故現場で桐条の人間と会って、湊が正気でいられる訳ないじゃない」
湊の両親を殺したのは桐条武治ではない。けれど、実験の深い部分に彼が関わっていたことは事実。
後の人工ペルソナ使いの実験に関しては、幾月の発案、桐条の承認によって行われているため、チドリの寿命が常人よりも短くなっていることや、大勢の子どもたちが死んだ元凶と言える。
そんな相手と両親の命日に事故現場で会えば、当然、感情が揺さぶられて冷静さを保つ事など出来ない。
普段は静かな青年が、父に対して怒りと憎しみを向けて声を荒げていたのを見た少女は、自分の認識が甘かったことを認めて謝罪した。
「ああ、本当に済まない。私の中で彼とムーンライトブリッジが繋がらなくて、彼が〝そう〟だと気付くのが遅れてしまった。分かっていれば、父を止めたんだが」
美鶴はチドリから湊が桐条を殺したいほど憎んでいる事を聞いていた。ただし、それは両親をポートアイランドインパクトで失ったことで、その原因となった桐条グループのトップに恨みを持ったのだと思っていた。
だが、相手が百鬼八雲であったのなら少しばかり話は違ってくる。美鶴は幼少期に彼と話したことはあまりないが、それでも大きなパーティーなどでは出席している姿を何度か目にしている。
そのパーティーには七歌やゆかりも出ていたけれど、顔見知りの人間に両親を殺されたとなれば、相手がどんな人間か知っているだけに、「何故そんな事をした？」と個人への怒りと憎しみはより深くなるかもしれない。
美鶴が湊の過去について知った事を匂わせても、話を聞いたチドリは表情を変えなかったため、きっとチドリも彼の過去についてある程度は知っているのだと推測し、美鶴はこれまでの状況について説明を

続けた。
「すぐに父が捜索隊を手配したが二人とも見つかっていない。潮の流れから考えられる範囲にはおらず、流れに逆らう範囲も探す様にしたんだが結果は同じだ。もし、捜索隊が出る前に岸に上がっていたなら、学校に来ているんじゃないかと毎日確認しているんだが、吉野たちにも連絡がないとなると最悪の事態も……」
いくら湊が超人的な身体能力を有していても、相手を常人として認識している美鶴は、彼の生存の可能性は低いと考える。
青年の家族である少女の前だったことで、美鶴は最後まで言葉を続けなかったが、暗い表情を浮かべた彼女に対し、チドリは普段通りの様子で声だけ真剣な調子で返して来た。
「……それはないわ。死んだら地球の裏側にいようと分かる様になってるの。だから、最悪のパターンは考えなくていい」
「では、何故誰にも連絡を寄越さないんだ？　彼は休むときには学校や君たちに連絡を入れていたんだろう？」
「海に入って携帯が壊れてから、まだ機種変更とかしてないんじゃないの？　あとは、連絡できる状態ではないとか」
死んだら分かる様になっている理由は、オカルト的な要素が混じってくるため説明出来ないが、チドリがはっきり断言した事で相手も特に疑問を挟んでこなかった。
とはいえ、生きているなら連絡してこない理由が分からない。ムーンライトブリッジから落ちたのだから、生きているとすれば岸にたどり着いているはず。
生存を桐条に悟られぬように潜伏していることも考えられるが、美鶴がチドリたちと出会っている時点でチドリや部活メンバーに連絡を取ればいずれ生存が伝わるため、そんな一時的に不安を煽る程度の効果しかないことはしないだろう。
だとすれば、連絡してこない理由として最も可能性が高いのは、生きてはいるが連絡できる状態ではないという事だ。
飛び込み競技の選手でも、数十メートルの高さから波と流れのある海に飛び込めば、流石に無事では済まない。

二人は少女が大柄な青年を抱えた状態で飛び込んでいたので、入水時の抵抗をほとんど殺せずにいたと思われる。
考えれば考えるほど悲惨な想像ばかりしてしまう美鶴は、色々と聞かせてくれたチドリたちに礼を言って別れを告げると、連絡のない青年の安否を気にしながら、中等部の校舎を後にして寮へと帰っていった。
影時間――巌戸台分寮
学校から帰った美鶴は寮に戻ると夕食や翌日の学校の準備を済ませ、作戦室に籠もって作業しながら先日の事を考えていた。
街中にイレギュラーシャドウの反応がないか、装置を操作する手を動かしながらも、あのときに見えた映像と街を覆い尽くすほど巨大な龍のような存在についての思考を続ける。
(巨大過ぎて全体像が掴めなかったため、長い胴体を見て龍だと思ったが実際は蛇など爬虫類の可能性もある。まぁ、姿がなんであれ間違いなくペルソナだろう。適性値十万ともなるとあの規模になるのか。恐ろしいな)
学期ごとの身体測定で適性も計測しているが、湊の適性値は十万から変動がなかった。ラボの人間の話によれば人間の限界値らしいので、それより上昇しないのはラボの研究データ通りと言える。
だが、美鶴は仮に自分が同じだけの適性値になろうと、街一つを覆うほどの規模の力を発現させられるとは思っていなかった。
あれでは動くだけで周囲を更地にしてしまうので地上では召喚出来ず、かといってタルタロスでも通路の広さを超えているので呼べばタルタロスが崩壊するか自分が圧死してしまう。
ペルソナの大きさは自在に変えられないため、力を持っていてもあれでは戦えないだろうというのが美鶴の判断だった。
(しかし、あれが彼のペルソナだとすれば、見えた映像の中で戦っていたペルソナは誰の物なんだ?)
上空に現れた存在は間違いなく湊のペルソナだ。名前も強さも分からないけれど、ペルソナであることだけは美鶴にも分かった。
けれど、あれが彼のペルソナなら流れ込んできた映像の中で見たペ

ルソナが、一体誰の物なのかという疑問が浮かぶ。
ボロボロのローブに身を包んだ髑髏のシャドウ、作り物の身体をした竪琴を持った男性型のペルソナ、そして僅かに見えた女神像のようなペルソナ。
傍には燃え盛る車があったことを考えれば、シャドウとの戦いがあったのはポートアイランドインパクトと同日。むしろ、あのシャドウが原因で百鬼一家の事故が起きたと考える方が自然だ。
シャドウに両親を殺された後、八雲はペルソナ能力に目覚めて何者かと一緒に戦った。つまり、あの場には八雲以外にもペルソナ使いがいたはず。
もしこれが真実だとすれば、桐条グループ内のデータに存在する、初の自然適合型ペルソナ獲得者が美鶴だという記述は誤りになる。
シャドウの出現は桐条グループの行った実験が原因のはずなので、当時既に研究に関わっていた桐条武治がムーンライトブリッジの戦いを知らないはずはない。
影時間に起きた事故が原因で百鬼夫妻が死亡し、一緒にいた八雲も同じように事故に遭ったことで、記憶の補整が働いて死体が無くとも八雲も死亡したことになったと考えれば、七歌が言っていた八雲の棺は空で何も入っていない骨壷を墓に納めたという話も納得できる。
故に、適性を持たぬ者が気付かなくとも無理はないが、桐条は英恵と一緒に百鬼一家の葬式に出席していたのだ。適性を持っていた彼は八雲の死体がないことに気付いていたのだろう。
（七歌も不自然な点をはっきり認識するほど高い適性を持っていたことは驚きだが、彼女の生まれを考えれば納得も出来る。それよりも、百鬼一家の事故は不審な部分が多過ぎる。有里が八雲なのはほぼ間違いないが、どうしてお父様は彼の生存について秘密にしていたんだ？）
鬼と龍、その正統血統である子どもらが、揃って適性を持っていたことを考えれば、両家に関しては最早血筋のなせる業だと思う他ない。
他者よりも優れた頭脳と身体能力を持っている二人だ。桐条の教

育を受けて現在の地位にいる秀才からすれば、羨ましい気持ちより〝やはり〟という納得の方が強い。
力を持たない美鶴にはそれがどんなものか分からないが、七歌は所謂〝幽霊〟というモノが視えるらしく、ある程度の力を持った一族の人間ならば標準装備の異能だとか。
よって、霊視能力を持つ彼女たちならば、ペルソナや影時間など現世とは異なる理の存在も、何かしら感じ取ることが出来るのだろう。彼女が適性を得ることはある意味で当然だと言える。
そう考えて美鶴は、七歌が適性を持っていても多少驚く程度で気にしていないが、問題なのは気付いていたはずの桐条が、どうして八雲の生存について何も言及せずにいたのかという点だ。
適性を持っていて気付いた桐条が伝えれば、英恵も棺と骨壷に八雲がいないと気付く事が出来た。親友と息子を同時に失った彼女に、息子だけはまだ生きているかもしれないと希望を与えておけば、病んで狂人のようになることもなかったはず。
彼の生存を伝えた場合のメリット・デメリットを美鶴も考えてみるが、英恵が八雲を養子にしようとするくらいで、桐条家が鬼を招き入れたという周囲の目を除けばデメリットはほぼない。
百鬼家は富裕層で一生遊んで暮らせるだけの遺産を湊が継ぐため、遺産目的で養子になったという見方をされることもなく、そも湊が桐条家の遺産相続を放棄すれば、分家の人間たちも桐条家の財が彼に流れる心配をする必要もない。
美鶴も昔から弟妹がいればいいなと思っていたので、英恵の暮らす別邸に遊びに行って八雲と仲良くするような未来があったなら、今よりも楽しい毎日が送れていたのではと思ってしまう。
実際はそう単純ではないだろうが、妻と娘からすればメリットの方が大きい選択を敢えてしなかった理由は何故かと考えたとき、美鶴は彼がペルソナ使いとして覚醒していたからではないかと推測した。
(覚醒してすぐに戦闘可能なペルソナ使いなど、当時の桐条グループにすれば喉から手が出るほど欲しい人材だ。もし、養子にしていればお母様や私は八雲にシャドウに対抗する力があると聞いても、人々の

安全より彼の幸せのために戦いから遠ざけていただろう。だからお父様は真実を隠し……個人より世界を優先した）

美鶴は自分の中で全てが繋がる感覚を覚えた。

ペルソナに目覚めた美鶴は、攻撃範囲の予測という能力を探知に応用するため、自分自身も研究に協力し実験体となったが、美鶴しかペルソナ使いがいない状態でどうやってその研究法は確立されたのだろうか。

美鶴の能力を細かく計測して研究し、こういった使い方も出来るのではと仮説を立てられたとしても、それを実用レベルにするまでに臨床実験なりが必要なはずなのだ。

つまり、美鶴が能力の拡張実験を受ける前に、研究法確立のためのデータサンプルを提供したペルソナ使いが桐条グループにはいた事になる。

（……以前から疑問には思っていた。ペルソナの制御剤、私はそんなものを使った事はない。では、ラボの人間たちはどうして薬の効果と副作用を知っていたのか。考えれば簡単な事だ。私以外に制御剤を使っていた者が過去にいたんだ）

事故で大勢の犠牲者を出しながら、世界を影時間とシャドウの脅威に晒すことになった以上、組織のトップとして桐条は人々を守るための決断をしなければならなかった。

その結果が八雲や名前も知らぬペルソナ使いによるペルソナの研究。シャドウに対抗するため、規模は分からないがペルソナ使いや素養を持った者を集めて、適性が低い者には制御剤を服用させながら美鶴が行った実験などの研究法を確立していったという訳だ。

制御剤は寿命を縮める劇薬である。仮に先日の湊の症状がペルソナの暴走だとすれば、十万という破格の適性を持っていても御しきれないほどのペルソナを宿しているため、彼も制御剤を服用していて副作用の影響から休みがちなのかもしれないとも考えられる。

世界のためを思っての苦渋の決断を下した父を、感情で批難するほど美鶴も子どもではないが、両親を殺されただけでは説明が付かない湊の憎悪の原因に至り、美鶴は余計にどうすればいいのか分からなく

なってしまった。
治療の副作用で瞳の色が変わったと言っていたが、チドリも同じ治療で髪の色が変わったと聞いている。ならば、彼女も同じく桐条の被害者なのかもしれないと考えたところで、突然機械からブザーが響き、美鶴はハッとして顔をそちらに向けた。
(シャドウ反応、それほど大きくないが住宅のある辺りか。被害者が出ては困る。急いで出動するか)
場所を確認した美鶴は、すぐに館内放送の呼び出しボタンに手を伸ばし、男子二人を作戦室に呼ぶと状況を説明して出動の準備に移った。

――ポートアイランド駅・路地裏
煙草の吸殻や空き缶などの転がる薄汚れた路地を通った先にある駐車場。そこにシャドウの反応を感知して美鶴たちが向かうと、鉄球の付いた鎖が首に繋がれているライオン型のシャドウが一体いた。
これまで見た事のない姿のシャドウに一同は警戒し、美鶴はアナライズに専念、他の二人は牽制しながら美鶴のアナライズが終わるまでの時間を稼いでいた。
「やれ、ポリデュークス!」
走りながら額に銃口を当てて、真田が召喚器の引き金を引く。硝子の割れるような音が響き、眩い光と共に現れたポリデュークスは左手を振り上げて、ライオン型のシャドウ・剛毅〝ハンドルアニマル〟に鋭い一撃を打ち下ろす。
しかし、敵は素早い身のこなしで回避し、拳の一撃で小さな石の敷き詰められた地面を抉っているポリデュークス目がけ、ステータスダウンの魔法スキルを放ってきた。
《グルァァァァッ!》
「くっ、攻撃力を下げられた。こいつ、シャドウのくせに小賢しいことを」
敵が放ってきたスキルはタルンダ、〝力・魔・耐・速・運〟と五つに分類されるペルソナの能力値の内、力の値を一時的に下げるスキル

である。
攻撃型のペルソナであるポリデュークスにとって、自分の長所を潰されたことは非常に痛い。
「こいつの弱点は光と闇、貫通には耐性を持っている！　それ以外の攻撃で仕留めるんだ！」
だが、真田は一人で戦っている訳ではない。美鶴がアナライズを完了して指示を飛ばし、真田が敵の注意を引いている間に相手の背後に回り込んでいた荒垣は、強く地面を蹴って接近し横薙ぎに斧を振るってシャドウを斬りつけた。
「おらぁっ!!」
ヒュンッ、と空気を切り裂く鋭い音をさせながら振るわれた斧は、相手の胴体を直撃して真横へと吹き飛ばす。
途中、力負けして斧を離しそうになるも、こんなチャンス逃せば次にいつ来るか分からない。故に歯を食いしばって振り抜いた荒垣の一撃は、見事相手に傷を負わせることに成功した。
地面を転がってから起き上がった敵は、右の脇腹辺りから黒い靄が漏れ出している。荒垣の攻撃によって出来た弱点だ。攻撃を喰らったばかりで敵の体勢が崩れている以上、そこを突かない手はない。
丁度、敵も含めて正三角形の位置取りにいる真田と荒垣は、アイコンタクトを取ると二人同時に召喚器を頭に当ててペルソナを呼び出した。
『ペルソナっ！』
白と黒、対となる色の兄弟神は同時に敵へと迫る。
ポリデュークスが素早く接近し拳を打ち放ち。それを躱すため敵が跳躍して駐車場の周りを囲うフェンスに跳び移れば、すかさずカストールが追って突進をしかける。
だが、敵はフェンスの上という高低差を利用し、獣らしく俊敏な動きでカストールの頭上を越えて再び回避した。
それだけでなく、相手の動きに反応出来ずフェンスにぶつかったカストールの背後を取り、前足に力を溜めて攻撃を狙ってくる。
タフさが売りのカストールが一撃で沈められるとは思わないが、そ

んな攻撃を素直に受けてやる訳にはいかない。
身体を屈めて敵がカストールに飛びかかった瞬間、初撃を躱され待機していたポリデュークスが真横から敵に突っ込み殴り飛ばした。
《グラァウっ》
『よっし!』
それぞれの初撃は敵を誘いこむための囮。攻撃する瞬間という最も無防備な状況を作り出すため、二人はわざと一撃ずつ単発の攻撃を繰り出して敵を誘導したのだ。
ポリデュークスの渾身の攻撃はクリーンヒットし、相手を駐車された軽ワゴン車へ叩きつける。
シャドウにぶつかられたドアはベッコリと凹み、車の持ち主には申し訳ないが補償等はきっと桐条グループがしてくれると信じて、真田はフィニッシュを決めにかかった。
「ポリデュークス、ジオ!」
空中にいたポリデュークスの身体が光ると、それに呼応するように上空から敵に向かって電撃が降り注ぐ。
目を焼くほどの眩い閃光は敵をその場に縫い付け、動けない相手の身体の表面を徐々に焦がして屠る。
荒垣の付けた傷と体表から黒い靄を漏らしていた相手は、ついに耐えられなくなったのか最期は弾けるように消えていった。
「フッ、勝ったな」
初めて見た相手だったが、無事に勝利を収めた真田が拳を握って仲間たちの方へ振り返る。
しかし、その直後――――彼の背後で爆発音が響いた。
「うおっ!?」
影時間であることも手伝い薄暗いはずの路地裏が爆発の炎で照らされる。音と爆風の衝撃で真田は転倒し、少し離れた場所にいた荒垣と美鶴は突然の事態に呆然とした。
「くっ、敵か!?」
地面に倒れた真田は素早く起き上がると辺りを警戒する。影時間にあれだけの規模の爆発を起こせる存在など、シャドウをおいて他に

ない。
　感知した反応が小さくて見逃しただけで、出現したシャドウは複数体だった可能性もあるのだ。
　燃え盛る車を視界に入れながら真田が警戒を続けていれば、後ろから近付いてきた荒垣がその後頭部を引っ叩いた。
「いてっ。おいシンジ、作戦行動中だぞ！」
「敵はもういねーっつの。さっきのはお前のジオが車のガソリンに引火しただけだ」
「何？　……まぁ、シャドウ討伐のためだ。車の一台や二台、犠牲になるのはしょうがないよな」
　先ほどの敵は車に衝突して、真田はその場に縫い付ける様に攻撃した。ならば、当然車にもジオは直撃しており、少し時間差になったがガソリンに引火して爆発するのも分かる。
　けれど、安い軽ワゴン車でも弁償するだけの金を持っていない真田は、表情を引き攣らせながらも尊い犠牲だったと、あくまで敵を倒すためにしょうがなかった事を主張した。
　車は爆発したのに敵が倒れていなければ真田の責任だが、彼は確かに同じ攻撃で敵をしっかりと倒していたので言い分は通る。
　元より彼に補償をさせようとは考えていなかったが、罪悪感等を感じるなら隠蔽にも限界があることを知っておいて貰おうと合流した美鶴が口を開いた。
「一般人には記憶の補整がかかるにせよ、戦いの中で出た被害については桐条グループの方で上手くやっておくが、被害は少ないに越したことはない。目的はシャドウの討伐だが、被害を抑える事も頭の片隅に入れておいてくれ」
「ああ。今後は気をつける」
「うむ、荒垣もよろしく頼む」
「ああ。まぁ、俺は魔法攻撃スキルは持ってねえけどな」
　真田や美鶴のペルソナと違い、荒垣のペルソナは属性を持った魔法攻撃スキルを持っていない。
　そのため先ほどのような事は起こせないが、それでも衝撃波を放つ

ような物理スキルも存在するため、被害を抑えることについて一応は覚えておくと頷いた。
　男子二人がしっかり返事をしたことに満足した美鶴は、今回の件で出た被害箇所を軽くメモしてから踵を返してバイクの元へ歩き出し。男子らに撤収の指示を出した。
「さて、敵の反応もなくなった事だし、今日は引き上げよう」
「よし。シンジ、どちらが先に寮に着くか勝負しよう」
「んな疲れる事、わざわざやらっ……!?」
　駐車場から出て元の駅の方へ向かおうとしていた途中、急に荒垣は言葉を止めてシャツの胸元を押さえ出す。
「おい、シンジ！　どうした!?」
「くるなっ」
　何やら様子がおかしいため真田が心配して駆け寄るも、腕を横薙ぎに振るって荒垣は接近を拒む。
「ぐ、が……あっ……」
　脂汗を掻きながら、苦しそうに胸を押さえて少しずつ離れる荒垣。彼の頭上には半透明な状態のカストールが浮かび上がっており、美鶴はこれに似た症状を先日見ていた。
「これはまさか、ペルソナの暴走か!?　落ち付け、荒垣！　ペルソナに呑まれるな！」
　あの日、ムーンライトブリッジで見たほどの規模ではない。けれど、暴走したペルソナがどのような事態を引き起こすか不明であるため、美鶴たちも迂闊に近付く事が出来ない。
　駅に向かう路地側に立っている美鶴と真田に対し、荒垣は少しずつ後退して距離を取っているが、そんなとき、荒垣の背後から人の声が聞こえた。
「い、一体何なの？」
「影時間に人？　くっ、こんなときに！　ダメだ、来るな!!」
　そこにいたのは一人の女性だった。適性を持っているのか、影時間に偶然迷い込んだのかは分からないが、物音を聞きつけてやってきたらしい。

普段ならば保護すべき対象だが、今このときに現れるというのは、考えられる中でも最悪の展開だった。
訳の分からない状況に置かれた女性は、美鶴の制止も聞かずに近付いて来ると、そのタイミングで荒垣に限界が訪れる。
「う……ぐ……があぁぁぁぁっ!!」
荒垣の叫びに呼応するように、召喚時と同様はっきりと顕現したカストール。だが、その双眸は怪しい赤光を宿しており、制御を失ったカストールは暴れて近くの建物を破壊し始めた。
「きゃあぁぁぁっ」
崩壊した建物の瓦礫が降り注ぐ。突然の事態に動けずにいた女性の真上にも落ちていき、女性を下敷きにした瓦礫を中心に赤い液体が飛び散った。
目を背けたくなるような光景。けれど、女性が瓦礫に押し潰される瞬間を、その場にいた四人はしっかりと目にしていた。
「お、かあ……さん?」
『!?』
近くにある家の扉が開いていた。女性の現れた方向、そして突然現れた幼い少年の発言から、美鶴たちは正確に事態を把握する。
荒垣の暴走したペルソナの起こした事故によって、偶然居合わせた女性を子どもの目の前で死なせてしまったのだ。
親子揃って影時間に活動しているということは、きっと遺伝的に高い適性を有していたのだろう。
影時間に遭遇しただけなら保護で済んだ。暴走しても誰もいない場所なら建物の一部倒壊で済んだ。ただ、それらは偶然にも重なってしまった。
「あ、あぁ……うあぁぁぁぁぁぁっ?!」
人の死を目撃し、急速に冷静になった荒垣の暴走が治まれば、薄暗い路地に少年の叫びが響く。
その後、少年はショックから気を失ったが、美鶴たちは影時間が明けるまで誰一人動く事が出来なかった。

第百五十三話　罪の重さ

１０月１１日（木）
夜――巌戸台分寮・作戦室
あの日から一週間が過ぎた。影時間に起きたことは記憶に補整がかかるため、女性の死亡原因は飲酒運転の車が突っ込んだ事故として処理された。
母子家庭だったらしく、月光館学園に通う小学三年生の一人息子〝天田（あまだ）乾（けん）〟という少年は、親戚に貰われるか、母の保険金と親戚からの援助で寮に入って学校に通い続けるか、現在はそのことで色々と揉めているらしい。
最終的には少年の判断に委ねられるだろうが、美鶴にとってはあの日からほとんど部屋に籠もりきっている荒垣のことが心配だった。
「彼とはまだ話せていないのかい？」
「ええ、事故……と言ってしまっていいのか分かりませんが、自分の引き起こした件についてまだ心の整理が付いていないようです」
作戦室のソファーに座り、コーヒーを飲みながら先日の報告書に目を通した幾月が美鶴に尋ねる。
荒垣は自然適合型の天然ペルソナ獲得者ではあるが、その適性に関しては美鶴や真田ほど安定しておらず、弱点を持たない強力なペルソナを彼は完全には制御しきれていなかった。
今までの活動中は問題なく召喚して制御出来ていたが、実戦を積んで力が増すにつれて抑えるのが難しくなり、あの日の戦いを経てついにキャパシティを超えてしまったらしい。
幾月に答える美鶴自身も、自分たちの活動が原因で犠牲者を出してしまった事を激しく悔いている。危険だと思いつつもペルソナで攻撃を仕掛けて止めておけば、あの女性が逃げるくらいの時間は稼げたのではないか。
既に事が起こってしまった以上、考えても不毛なことかもしれないが、それでも防げる可能性があったことは確かだ。
突然の事態に冷静さを欠いて動けなかったのも、起こるべくして起

こったペルソナの暴走を事前に予想出来ていなかったのも、全ては自分の見通しの甘さが起こした事だったと美鶴は猛省した。
紅茶のカップに視線を落として黙る美鶴を見て、幾月は思い悩むのも無理はないと同情的な視線を送り、気を遣うように言葉を選びながら話しかける。
「今回の件で桐条グループが君たちに処罰を与えることはない。元々、君たちにしか出来ない事だからね。巻き込んでしまっている私たちにそんな事をする権限はないんだ」
「ええ、その事は聞いています。むしろ、カウンセリング等で心のケアをするので必要ならいつでも言うようにと」
学校の部活という体面を取っているＳ．Ｅ．Ｅ．Ｓ．は、桐条グループ内の私設組織ではあるが軍隊という訳ではない。
ペルソナという強大な力を私的に利用したり、余計な混乱を招くような行動を取れば謹慎や拘束なりを課したりする事もあるが、明確に規約を設けて規約違反は処罰するといったような事はしていない。
そも、この活動は全て大人たちの尻拭いなのだ。サポートしか出来ない大人に代わって、美鶴や真田たちが戦ってやっているというのに、それで大人が偉そうに命令や罰則を課してくる方がおかしい。
無論、美鶴たちにも個々人で戦う理由は存在する。大切な人をシャドウの脅威から守りたい、どんな困難も覆すだけの力が欲しいなど戦う理由は様々だ。
そんな者たちにすれば、代わりに戦ってやっているという意識はないかもしれないが、大人たちとしては巻き込んでしまっている負い目からか、今回のことでショックを受けている子どもたちのケアをするため、辰巳記念病院の精神科にくればカウンセリングをすると言ってきていた。
「ペルソナは心の力だ。君や真田君のように安定した適性を持っていても、精神的に不安定な状態であれば、力を発揮出来なかったり、制御できなくなったりもする。何より多感な時期だからね。心に負った傷というのは治りにくい。私たち大人としては君たちのそんな姿は見ていて辛いのさ」

「お気遣いありがとうございます。荒垣にもまた伝えておきます」
教師ではないが、幾月は理事長として子どもたちを見守る立場にある。しかし、前線という目の届かない場所で今回の事故が起きてしまっただけに、子どもたちには申し訳なく思って色々と気を遣っているのだろう。
美鶴も相手のそういった思いやりを理解して微笑み、今は心の整理が付かず引き籠もっている荒垣にもちゃんと伝えておく事を約束した。
――荒垣自室
目を閉じれば瞼の裏に鮮やかな血の色と少年の絶望に染まった表情が映り込み、耳を塞げば人の潰れるグチャリという音と少年の絶叫が聞こえてくる。
壁に背中を預けてベッドに座りこんでいた荒垣は、苛立った様子で舌打ちをして枕を乱暴に殴りつけた。
「ああっ、クソがっ!!」
八つ当たりで枕を殴ったところで気持ちなど一切晴れない。
自分が殺した、殺してしまった、幼い少年から母親を奪ってしまったのだ。ペルソナの制御が危うくなっていることを伝えていれば避けられた事故だった。
それを制御剤の服用を勧められるかもしれないと恐れた事で、無関係の人間の命を奪って人生を滅茶苦茶にしてしまった。
ペルソナは心の力であり自分自身だ。自分のこともまともに制御出来ない半端な人間が、我儘で恐いことから逃げた結果がこの様だ。
どれだけ謝罪しても赦されることではなく、また償う方法など一つも思い付かない。
幼馴染が心配で、特別な存在というものに少年として僅かな憧れを覚え、そうして力を手に入れたというのに、力を持ったことで発生する責任についてまるで理解していなかった。
「どこまで図々しいんだ、テメェは!」
そして、あれだけの事故を起こしていながら、荒垣はまだ制御剤の服用を恐れて踏ん切りがつかないでいた。

死を恐れるのは生物として当然だ。恐れない者がいるとすれば、それはどこか壊れてしまった者だけだろう。
だが、荒垣はもう二度と暴走を起こさないよう、制御剤を服用するのが自分の義務だと考えていた。
死を恐れて服用しなければ、またいつか暴走を起こして誰か犠牲者を出してしまう。女性を殺して、少年の人生を滅茶苦茶にしておきながら、自分の命惜しさに人々を危険に晒すなど、そんな甘えたことは許されない。
力を捨てることが出来たならそうしたが、制御剤を服用し続けることでの封印しか出来ないのなら、彼はこの力を封印して捨てた事にしようと思った。
仲間たちには止められるだろう。そんな薬に頼らずとも、次に暴走が起きれば自分たちが止めてやると。
けれど、暴走したペルソナはリミッターが外れているようなものだ。さほど強さの変わらない彼らのペルソナでは、リミッターが外れた状態で暴れるペルソナを、完璧には押さえられないかもしれない。
何より、今回は自分の事もまともに制御出来なかったことで起きたのだ。それで他人の力に頼っても何の解決にもなっていない。
暴走しても大丈夫なように対策するのではなく、そもそも暴走しないようにする必要がある。
だから荒垣は、自分の力を制御剤で封印し、近いうちにこの寮を去ろうと考えていた。
――中央区・湊自宅
中央区にある高級マンションの最上階、その最奥の角部屋である湊の家の広いバスルームでラビリスはお風呂に入っていた。
アイカメラのレンズ洗浄液である涙は出るが、人間と違って汗などの代謝物の出ない彼女は、別に数日お風呂に入らなくとも臭くなったりはしない。
しかし、外に出れば空気中に存在する塵や埃が付着するので、身体を清潔に保つにはちゃんと毎日お風呂に入る必要があった。
何より、彼女はお風呂に浸かってゆったり過ごす時間が好きで、バ

スタブのないＥＰ社のシャワールームにはがっかりしたが、一緒に暮らす事になった湊の部屋のお風呂は二人で入っても足を伸ばせるほどの広さがあった事で、彼女は一日の終わりのお風呂を楽しみにするようになっていた。
普段はポニーテールにしている長い髪を解き、バスチェアに座りながらよく泡立てた花の香りのシャンプーで丁寧に頭を洗っていた彼女は、バスタブの方へ振り向くと少々呆れた顔で口を開いた。
「……なぁ、それやっぱ間違っとる思うんやけど？」
ラビリスの視線の先、とても大きく広いバスタブの底には、全裸の湊が目を開けたまま寝転がって沈んでいた。
普段は沢山付けているアクセサリー類はマフラーに収納され、そのマフラーをフェイスタオルサイズにしてバスルームに持ちこみ、今はバスタブの縁に引っ掛けて置いている。
いつ敵がやってこようと戦えるように武器を傍に置いておくための癖だが、別にラビリスはサイズ変更したマフラーをお風呂に持ちこんでいる事を変だと言っているのではない。
普通お湯に浸かるときは、座って肩や首辺りまでをお湯に浸からせ、顔や頭は水上に出しておくはずなのだ。
だというのに、青年はぼーっと中空を見つめる様にお湯の中で目を開けて、ラビリスがシャワーで身体を洗い始めたときから、既に十分近くは沈んだままでいる。
一緒にお風呂に入るようになったのは使い方を教えた初日からで、幻惑機能で胸や性器まで人間そっくりの見た目になっている身体を湊に見られようと、相手が同性でもあると教えてもらったラビリスは気にしていない。
だが、その変な入浴スタイルは色々と心配になるので、もっと普通に座って入ってくれといった視線を送れば、湊はぷくぷくと口から空気の泡を吐きながら上体を起こした。
「あーあ、貞子みたいになっとるよ？」
「……誰にそんなの聞いたんだ」
入浴中は湊も髪を解いているため、お湯の中で揺らめていた長い髪

が顔に張り付いて、お湯から出た彼はホラー映画の登場人物のような姿になっていた。
ラビリスからそんな指摘を受け、顔に張り付いた邪魔な髪を整えて背中側に送っていた湊は、一体どこの誰がそんな俗っぽい知識を彼女に与えたのだと嘆息しながら尋ねる。
すると、リンスとコンディショナーを洗い流し終えたラビリスが、湯船に入って湊と正面から向き合うようにお湯に浸かってから答えた。
「シャロンさんが教えてくれはってん。貞子っていう湊君に似たようなのがおるって」
「普段は髪を結ってるし、髪が顔にかかってることなんて滅多にないぞ」
「なんやよう分からんけど、貞子ってのも湊君みたいに男で女らしいわ。あ、湊君に似てるっていうのは、湊君が準中性やって話のときに出てきてん」
「……見た目と登場作品しか知らなかったから、プロフィール含めてそこまで突っ込んで言われたのは初めてだ」
湊は本をよく読む方だが、映像作品や話題になった小説などは余り目を通していなかった。そのため、貞子の姿や出てくる作品のタイトルとジャンルは知っていたが、女性だとばかり思っていた相手が男でもあると聞いて少々驚く。
ラビリスも同意するように頷いているため、彼女もきっと話を聞いてから姿を見て驚いたりしたのだろう。
とはいえ、そんなホラー作品の登場人物と共通点があったところで別に嬉しくはない。変な事をラビリスに教えたシャロンに今度文句を言おうと心に決めつつ、足を伸ばした状態で背中を壁側に付ければ、足の間に入る様にラビリスが座って背中を預けてきた。
昔、イリスと一緒に入浴するときは体格差で男女のポジションは反対だったが、身体が大きくなった湊とそれほど身長の高くないラビリスでは、湊が椅子役になって後ろから腕を回すのが最も安定したスタイルになっている。

お尻を置くポジションも定まり、ベストと思われる体勢になったラビリスは足の先まで伸ばし、少し熱めのお湯の中リラックスして全身の力を抜いてだらしない表情を浮かべた。
「ほわぁ……一日の疲れが取れていくわぁ」
「昼まで寝てただろ」
「湊君はな。ウチはちゃんと朝に起きて部屋の換気してから、洗濯物を干したり、ベランダの花のプランターにお水あげたりしとったよ」
失礼なことを言ってくる青年に、少女はジトっと責めるような視線を送り、そんなだらしない生活をしているのはお前だけだと告げる。
両親の命日に事故現場で桐条と遭遇した事で、湊は感情が昂り阿眞根を呼び出しかけた。完全な召喚はやってきたラビリスが湊を海に放り込んだことで防がれたが、あの日から湊は学校に行かないで部屋でゴロゴロしたり、ＥＰ社で研究を進めたりと自由な毎日を送っていた。
捜索に出た桐条グループに発見されず、水没で壊れた学校用の携帯は買い換えてデータを移したっきり電源も付けていないので、学校側にすれば突然の長期無断欠席に驚いている事だろう。
ちゃんと学校に行かなければ駄目だとラビリスも言っているのだが、学校に行かなくても成績で困ることはなく、ＥＰ社での研究や難病患者の治療を行う方が人の役に立っているため、彼女としてはあまり強く言う事が出来ていない。
学校に行かなくなった理由がはっきりとは分からず、ペルソナという心の化生を通じて起こった感応現象であの場にいた人間に記憶を見られたことが原因かと推測するも、湊は別に自分が人殺しであることを隠していないので、心配しているラビリスとしてはよく分からなくなってくる。
一応、ラビリスが動作チェックやメンテナンスという研究協力のために出社するときには、湊も起きて準備して会社か病院に顔を出して仕事をしている。
今日のように昼まで寝ているのはラビリスが休みの日くらいなもので、起きてからは在宅で仕事をしつつ、ラビリスに高校入試に向け

た勉強を教えたり。料理や掃除に裁縫といった家事を教えていることもあって、別に何もせず家でゴロゴロしているようなプー太郎という訳ではない。
だが、やはり本業は学生のはずなので、ラビリスとしてはちゃんと学校をメインに考えた生活を送って欲しいのが本音だった。
「あ、そういえば、ニュースでやってたポートアイランド駅近くの路地裏であった事件やけど、あれって変やなかった？　車が突っ込んだいう話やったけど、映った事故現場の様子が車がぶつかった程度じゃ無理っぽい壊れ方してたように思うんよ」
「……まぁ、影時間に発生した案件だからな。桐条側のペルソナ使いが暴走を起こしてしまったらしい」
バスタブの傍に置いていた洗面器に入れていたアヒル隊長とアヒル隊員たちを湯船に浮かべ、手で波を作って遊びながら尋ねるラビリスに湊がすんなり答えを告げる。
学校に行かなくなっていると言っても、シャドウ狩りは続けており、影時間にはタルタロスへ訪れてシャドウを狩る合間にラビリスにペルソナを使った戦闘指導をしたりしている。
そして、事故発生時刻もタルタロスに籠もって戦闘を行っていて、感知型のペルソナを所持している湊は、不自然なペルソナの波長を感知して何があったのか一部始終を能力の目で視ていた。
時流操作はチドリやアイギスたちの事以外では基本的に使わなくなったため、飛んでも間に合わないと思った湊は被害者の女性を見捨てる選択をしたが、久遠の安寧との戦争中に人間の汚い部分を視続けていた事で、彼は〝人類は本当に救うに値する存在か？〟という疑問を今も持っている。
そんな疑問を持っている状態でも、手の届く範囲で人を救い続けているのだから、自分の寿命を縮める可能性のある異能の使用を拒んで、自分とは無関係な事故の被害者を見殺しにしたところで、誰からも文句を言われる筋合いはないだろう。
そう、その事故の加害者が自分の知り合いであったとしても。
「桐条側のペルソナ使いって湊君の学校の先輩ちゃうの？」

「ああ、ただの先輩だ」
「ああ、うん、その人らに興味無いんやね……」
目の前で困っている人がいれば助けるくせに、この青年は基本的に他者に関心がない。例えば、同じクラスになって名前やプロフィール等を把握しても、関心がない相手なら別に転校しようが事故で死のうが気にしないのだ。
部活メンバーと集まるときに一緒に遊んだり、お互いに連絡先を交換していたりしている相手であっても、極端な青年の感性にすれば分類上はただの知り合いでしかないらしく、ラビリスとしては乾いた笑いで返すしかない。
一応、街中で遭遇する事もあるだろうからと、ラビリスは湊から確認されているペルソナ使いの情報を聞いている。
桐条側が美鶴たち三人、ストレガ側がタカヤたち六人、仮面舞踏会側がアイギスも含めて五人。そして、ベルベットルームの住人は正確にはペルソナ全書使いでペルソナ使いではないが、イゴールも含めて四人といった具合だ。
もっとも、ベルベットルームの住人である力の管理者三人は、湊に案内されて出てくることはあれど、影時間だろうと彼女たちが現実世界で戦う事などまずなく。客人である湊と思想の違いから敵対することもない。
彼女たちはあくまで客人のサポートをしながら、どういった道を進んでいくのかを見守るのが仕事だ。観測者が盤面に降りてきてはゲームは正常に進行しなくなる。湊の行き着く先を見たがっている彼女たちがそんな事をするはずがないので、彼女たちのことは勢力としては考えなくていいだろう。
そうすると、仮面舞踏会側に属してはいても基本的に海外にいるソフィアや、湊にペルソナを盗られたまま屋久島で眠っているアイギスも戦力には数え辛いため、仮面舞踏会側は湊・ラビリス・チドリの実質三人で、この街の周辺にいるペルソナ使いは十二人となっていた。
「暴走を起こしたってことは、適性が足りてなかったんかな？」
「暴走は精神が不安定な状態でも起こり得るが、今回の場合はそうだ

な。荒垣先輩のペルソナは弱点を持たないタイプで、力と耐久に優れている強いペルソナだったんだ。もっと適性が高ければ強引に押さえつけられただろうが、ギリギリの適性で目覚めてこの様って感じだな」
「人が亡くなってはるのに、そういう言い方はアカンやろ」
最後に嘲る様に口元を歪める湊をラビリスが注意する。
彼が桐条グループを嫌っている事は知っているが、それでも無関係の人間が死んでいて、加害者も桐条側に属しているだけの元々は関係のない少年である。
相手のことを心配してやれとまでは言わないけれど、馬鹿にするのは人として駄目だと諌めれば、湊は後ろから回した手でラビリスのお腹を撫でて遊びながら興味なさげに返して来た。
「……しっかりと駒の健康管理でもしてれば防げた事故だろ。それを怠って実際に犠牲者を出す事故が起きて落ち込んでるのを見れば、誰だって莫迦だと嗤いもするさ」
「そんなん湊君だけや。普通は亡くなった人が可哀想やなって思ったり、ちゃんとしてたら事故は起きんかったのにって加害者側に憤りを感じたりするくらいやろ」
「個人の感じ方に対して、数が多いだけの大衆の意見で諭そうなんて不毛だ」
「……屁理屈捏ねる湊君に口で勝つのは諦めるけど、言いながら人のお腹とか胸触って遊ぶのやめてくれはるかな？」
知識が豊富で知能も高いのに捻くれている青年に口で勝つには、人生経験によって培われた強かさが必要になる。
イリスや英恵に桜といった大人の女性たちは、彼の優しさと身内への甘さを利用して言いくるめる事も出来るが、残念ながら少女には女性たちほどの策はないので、諦めて皮肉で返しつつ、胸とお腹を撫でている彼の腕を掴んだ。
変質者のような厭らしい手つきで触れていた訳ではなく、子どもが変わった感触の物を触るような感じで、一切下心がないことを理解していたラビリスも別に不快には思っていなかった。

ただ、それはそれ、これはこれはということで、身体を離して正面から向き合う形になって、ラビリスはどう言ったものかと考えながら、とりあえず相手が胸が好きなのかどうかを確かめることにする。
「胸触って楽しいん？」
「別に……手持無沙汰だっただけだ」
「まぁ、この身体を作ったんは湊君やし、触れた事のない場所なんて無いやろうから今さらかもしれんけどさ。ウチの体型データが微妙に変わってるんは湊君の趣味なんかな？」
ラビリスの現在のボディは八割以上湊が一人で作った物である。外身のフレームだけでなく、中身やコアである黄昏の羽根まで、湊が触れていない場所などないと言ってもいい。
それを思えば暇だからと胸で遊んできたところで、自分の方が設定年齢的に年上である事も手伝い、〝まぁ、変な子だしな〟と寛容な心で赦そうと思える。
けれど、元の五式ボディと現在の新ボディで体型に差異があるのは、やっぱり青年も男の子で自分の理想を反映してきたのかと彼女は考えた。
だが、言われた方にすれば初めて聞いた情報であり、どういう事かを詳しく尋ねた。
「体型データが変わっているとは？」
「胸とお尻が少し大きなってて、腰辺りが細なってくびれて見えるようになってて。まぁ、数センチ程度の違いやけど、湊君が作ったんやから湊君が数値変えたんやろ？」
確かに作ったのは湊だが、外装のリメイクを担当して型を作ったのは武多である。趣味でフィギュアを自作するだけあって、彼の造形センスは優れており、五式とほとんど変わらないまま、より美人に見えるように五式ボディでは造りの甘かった部分に修正を加えていた。
よって、数値が変わっているとすれば自分のせいではない。その事を湊ははっきりと告げた。
「……俺はちゃんとミリ単位で正確に設計図に書き起こしたぞ？　数値に変更があったとすれば、シャロンか武多あたりが五式の設計図を

ＥＰ０３タイプにするときに、より人間らしく見えるように全体のバランスを調整したんだと思う」
「あ、そうなんや。てっきり湊君は胸が大きい方が好きなんやと思ってたわ」
「……前に他のやつにも同じような事を言われたんだが、何をもって豊かな胸の方が好きだと判断しているんだ？　俺は一度としてそんな性的志向について口にしたことはないんだが」
　チドリや佐久間からも言われた事があるが、湊は一度として大きな胸が好きだと言った事はない。本人に似合っているかが重要だと思っているため、彼好みな女性になろうと思っている女性たちが可哀想だが、逆をいえば誰でも自分磨きをすればチャンスはあるのでラッキーとも言える。
　それはともかくとして、部活で関わりのあるチドリたちが別のタイミングで言ってきたのなら、多分、集まっているときに話題が出たのだろうと考えることが出来る。
　しかし、彼女たちと会った事のないラビリスまで同じことを言ってくれれば、周囲の人間からそのように思われる理由があるはずだ。
　勝手に胸の大きい女性が好きなどと不名誉な噂を流されると困るので、ここでそう考えた理由を聞いて、改善できるのなら改善して二度と言われないようにしようと湊は考える。
　尋ねられたラビリスも湊が不思議そうにしている事から、そう思った理由をしっかり答えるべく、自分の判断した理由を整理しながら話を進める。
「んー、何をもってって聞かれると難しいけど、湊君って人に触れたりすることを避けてるんは自分で気付いとる？」
　訊かれた湊は首を横に振る。面倒な他人との関わりは避けているが、他者と触れ合う事を意識的に避けていた覚えはない。
　それを聞いたラビリスは、やはり自分では気付いていなかったかと笑って続ける。
「まぁ、ポケットに手を入れてたり、誰かが触ろうとすると避けたりで、人との接触を無意識にしろ避けてるみたいなんよ。やけど、シャ

ロンさんとかが触れても気にしてへんし。お隣のかすみちゃんが抱きついても放っておいてるやろ？　で、お風呂に入ったらウチの胸とかお腹を触って遊んでるから、割と胸がある人やったら気にせんのかなって思ててん」

シャロンは全体的に細めで長身のモデル体型だが胸は大きめでスタイル抜群だ。そして、ここで暮らす様になってからラビリスも出会って遊んだりしている羽入かすみは、湊の一年後輩にも関わらず美鶴よりも胸が大きく、ニーソックスが軽く食い込む魅力的な太腿をしている少女である。

さらにそこへ中々のスタイルを誇るラビリスも加えれば、湊はスタイルがいい女性との接触は拒まないと考えることが出来、逆説的に湊は大きな胸好きだと判断出来るとラビリスは結論付けた。

ラビリスが知っている範囲でそれで、彼女がまだ知らない英恵や桜に佐久間といった大人の女性陣を見れば、彼女はきっと自分の考えはやはり正しかったと思う事だろう。

しかし、湊は自分の周囲の女性のスタイルがいいことは認めるが、別にそんなところを基準に関わりを持っている訳ではないと、相手の考えを否定した。

「シャロンは俺の主治医だし、羽入は子犬みたいにじゃれついてくるから放っておいてるだけだ。君の胸や腹部を触ってるのは、君が俺の足の間にいるから他に遊べるものがないだけだ」

「隊長はアカンけど隊員やったら貸したげるよ？」

「……それは羽入が持って来て置いてるんだが、浮かべて何が楽しいんだ？」

ラビリスとの同居が始まるよりも前、湊がまだ一人で暮らしていた頃、寂しいのか遊びたいのか知らないが、たまに羽入が勝手に泊まりに来ていた。

すぐ隣なのでお泊まりセットを置いておくような事はしなかったが、お風呂での遊び道具だけは現在も残ったままになっており、それが大小二種類のサイズがあるアヒルの玩具だった。

ゲーム会社に勤める羽入の両親は、メインの仕事は海外で行ってい

るらしく、製作が一段落して夏に帰ってきたが、今もよくアメリカに戻っているので、その間に羽入が泊まりにくることもある。
泊まりに来て湊の家でお風呂に入るときは、今のラビリスと同じようにお湯にアヒルを浮かべているので、それが正しい遊び方だと思われるのだが、湊としてはその遊びで何が得られるのか分からなかった。
「荒波の中でも泳いでる隊長の雄姿を想像したり、遭難した隊員らが隊長の元を必死に目指すのとか想像したり、そういうドラマを楽しむ物やと思うけど？」
「……そうか」
訳が分からない。だが、羽入も「頑張れ隊員一号、もうちょっとだよぉ」というような事をよく口にしていたため、彼女もそういったドラマを妄想して楽しんでいたに違いない。
求める理想を思う事はあっても、娯楽的な夢想や妄想はしない湊は、彼女たちのような遊びは自分は出来ないと理解し、貸してくれるという彼女の申し出を断ると、いい時間だったのでお風呂から上がり。少し涼むと寝室に向かって休んだのだった。

第百五十四話　自室デート

１０月２１日（日）
午前――巌戸台女子寮
その日、岳羽ゆかりは朝から大急ぎで部屋の掃除をしていた。
下着や肌のケア用品など見られたくない物を優先的に片付け、床に直接物を置いていない状態を目指して必死に収納へと物を放りこんでいく。
（ああ、もう！　細かい物はケースに入れて全部クローゼットの中でいい！）
テスト期間明けでゆっくり出来るはずの休日の朝から、何故、彼女がこのような事をしているかというと、早朝から空気を読まない彼氏の電話に起こされたからだ。
九月の終わりから音信不通の消息不明だった男は、中間テスト初日にシレッと学校へやってきた。
どうして連絡がつかなかったのかを尋ねれば、水没した携帯を買い換えに行ったあと、面倒で電源を一度も付けていなかったという。
そこは彼の性格を考えるとあり得るので百歩譲るとして、では、なんでテスト初日まで学校に来なかったのかを尋ねれば、仕事が忙しかったからと答えた。
学生の本分は勉強だ。それを疎かにしてまでバイトに打ち込む必要があるとは思えない。
まぁ、それはチドリを除く事情を知らないメンバーが、湊の言う仕事を勝手に眞宵堂や中華料理屋のバイトだと思っていることが原因で起こった勘違いだが、どちらにせよ中学生が学業より仕事を優先していればいい顔をする者は少ないだろう。
だが、それは湊が学業を疎かにしていればの話だ。
残念なことに天は青年に二物も三物も与えてしまった。ろくに授業を受けておらずとも、自主学習でテストの満点を取れてしまう程度に彼は優秀なのだ。
成績が良ければ広告塔に継続利用出来るため、結果を残せば出席日

数については余り問わないと密約を交わしている学校は何も言えず、学校が言わないのなら生徒たちも強く言う事は出来ない。
(服もこのままだとマズイ！　流石に彼氏が来るのにジャージじゃ呆れられる！)
　そうして、シレッと学校に復帰した青年はテストを受けると、放課後は滞っていた生徒会の仕事を片付け、他の者よりも明らかに勉強をせずにテスト期間を過ごしていたのだが、テスト期間明けの今日になって、突然ゆかりの部屋に遊びに行くと電話してきたのだ。
　彼曰くテスト期間で誕生日を祝えなかったので、テストが終わってゆっくり過ごせる今日に二人で祝うのだとか。
　しかし、何も女子寮であるゆかりの部屋で祝う必要はないのではと言ったのだが、彼は十時頃に伺うとだけ言って電話をきった。
　あまりに勝手過ぎるとは思ったが、相手は言った事は実際にやる男だ。ゆかりは自分の誕生日祝いにどうして自分が苦労せねばならないのだと怒りを感じたが、彼がやってくるまでの二時間の内に何とか部屋の片づけを終えることが出来たのだった。
　そうして、濃紺のシャツとオレンジの七分丈パンツに着替え、彼が到着するのを待っていれば、九時五十五分、約束の五分前に部屋の扉がノックされた。
「はーい！」
　返事をしながらゆかりは扉を開けるため入り口に向かう。普段の彼ならば約束の十五分前には来ているはずだが、急なアポだったことで早くいけば迷惑がかかるだろうと、いつもより遅らせたらしい。
　そんな気遣いが出来るのなら、別の場所で誕生日を祝うようにして欲しかったと思ってゆかりが扉を開ければ、そこにはカジュアルな服装の湊と案内したらしい女子たちが立っていた。
「ゆかりー、お主は独占禁止法をしらんのかー！」
「皇子を部屋に連れ込んでなにするつもりか！」
「有里先輩、ウチらと遊びましょうよー」
　彼の周りにいた女子たちは青年のファンなのか、ゆかりに嫉妬の言葉をぶつけて二人きりにはさせんと怒ってくる。

さらに後輩の女子らが、湊の袖を小さく掴んであざとく遊びに誘って行かせまいとしており、女子寮に初めて彼氏を連れ込む者が現れたことは、やはり瞬く間に女子寮中のニュースになったかとゆかりは面倒そうな表情を浮かべた。
「あー、はいはい。別に私が誘った訳じゃなくて、朝っぱらに電話かけてきて急に部屋に来るとか言う非常識なやつが原因なんで、文句はそっちに言って貰えませんかね」
「有里君、私の部屋ならいつでもＯＫだよ！」
「皇子、実はこの前美味しい紅茶を貰ったんです。一緒に部屋で飲みませんか？」
ゆかりの言葉を聞いた女子らは、すぐに最高の笑顔を作って振り返り、彼女の目の前で彼氏を遊びに誘うという暴挙に出た。
こいつら一遍本気で殴っても構いませんかね、と心の奥から囁く声が聞こえていたが、一応は友達であったり見た事のある顔だったりするので、何とか湧き出る感情を抑え込んで手を出さずに済む。
しかし、自分の彼氏にだったら文句として手を出してもいいはず。心の中で対応を区別しながら、誰にでも甘い青年が女子らにどんな対応をするか見ていれば、彼は袖を掴んでいた後輩の手を離させ、そのまま全員を視界に入れながら静かに返した。
「……また時間があれば食堂でお茶くらいしよう。ただ、今日は岳羽の誕生日を祝うために来たんだ。悪いが引いてくれ」
少し申し訳なさそうな笑みでそんな事を言われてしまえば、ファンの子たちは大人しく引き下がるしかない。
去って行く女子らは、帰る前に挨拶したいので、帰るときには食堂に寄ってからにして欲しいといって湊を開放して帰って行った。
解放された湊は静かに扉を閉めるなり、先ほどまで浮かべていた表情をやる気のない普段通りのものにしてしまう。
部活で一緒にいただけあって、あれが完璧に作られた表情であると分かっていたゆかりは呆れた顔をするが、扉の鍵をかけてから用意されていたスリッパに履き替えた湊は、先ほどの女子らについての意見を述べた。

「テスト明けのせいもあるのか、随分と姦しいな」
「そりゃ、半分芸能人の君が急に来ると知ればファンは騒ぐでしょうよ。私は部屋の片づけで忙しかったから、ファンの子の相手ばっかりしてられなかったけどね」
ゆかりが湊からの電話を受けたのは、食堂で朝食を食べているときだった。
そのため、彼が部屋に来る事は他の女子にもばれていて、部屋の片づけをしている最中にファンクラブの女子やただのファンの女子らが何名か部屋を訪れ、一緒にいては駄目だろうかと聞いてきた。
最初はゆかりもまともに相手をして断っていたのだが、人数が増えていけば、掃除で忙しい事もあって鬱陶しくなってくる。
最後は、お前らは彼氏とのデートに友人や家族を同伴させるのか、と大きな声で怒鳴って追い返した。
ゆかりは女子の中でもトップクラスの運動神経を誇っており、キレた彼女が相手だと普通の女子は一方的にぶちのめされる。
せっかく、少しでも皇子に会えるというのに、顔に痣を作った状態では会いたくない。
そうして、他の女子らも今のゆかりに近付くのは拙いと、途中からは一切の干渉がなかったことでゆかりは無事に掃除を終えられたのだ。
その事を聞いた湊は苦笑するが、自分が急にアポを取った事が原因だと分かっていたので、とりあえず謝罪し、持っていた大きな保冷バッグをテーブルの上に置いた。
「急に来て悪かった。とりあえず、ケーキ屋が開く前だったからケーキは自分で作ってきた」
「おっと、まさかの手作り……。君のその無駄な女子力にはいつも驚かされるわ」
置かれた保冷バッグの中を見れば、白い紙箱の上に沢山の保冷剤を置いて冷やしてあった。これならば、しっかりとバッグの口を閉じていれば数時間は保つだろう。
色々と芸の細かい青年のことだから、市販の手作りケーキセットな

ど使わず、スポンジからクリームから全て自分で用意して作ってきたに違いない。
父の死後、家に母親がいないときもあったので、少しは自分でも料理をしていて、最近では湊に負けているのが悔しくて料理を勉強しているゆかりも、手作りの誕生日ケーキを準備してくるような女子力を発揮する男にはまだまだ追い付けないなと思いながら、ケーキは後で頂くと言って簡易キッチンの方へと移動させた。
そして、何も出さないのは悪いからと、先に湊をクッションに座らせてお茶だけ用意し、お茶が出来てゆかりもテーブルにやってくれば、上着を脱いでくつろいでいた湊が話しかけた。
「昼はどうする？　料理は俺が作ってもいいし、行ってみたい店があるならそこにするが、時間は先に決めた方がいいだろ？」
「んー、中途半端だし十二時か一時ごろでいいんじゃないかな。それまでは部屋で適当に過ごす感じで。ってか、今日は何時までいるつもり？」
「明日は学校だしな。夕食を一緒に食べるかどうかで変わるが、食べても八時前には帰るつもりでいる」
現在の時刻は午前十時過ぎ。それから午後八時までとなるとたっぷり十時間も一緒にいることになる。
夏休みのデートでは六時頃に別れていたので、部活の旅行を除けば過去最長といった感じだ。
時間を聞くと一緒にいることを強く意識してしまい。私室という自分の空間に恋人がいる状況が落ち着かないゆかりは、両手でお茶のカップを持ってちびちび飲みながら、少々上擦った声で湊に喋りかけた。
「て、てか、君は女子の部屋に来たってのに落ち着いてるね。こっちは自分の空間に彼氏がいて落ち着かないってのに」
「女性の中で過ごして来たし。チドリと一緒に暮らしてたからな。同年代の女子の部屋にいることには慣れてる」
「ああ、そういうこと。私は一人っ子だからよく分かんないんだけど、そういうときって相手を姉とか妹として見るの？　それとも異性と

して見るの？」
「……女性扱いはするが、基本的には家族扱いだな。俺も一人っ子だから兄妹ってのは分からない」
正式な誕生日的にはチドリの方が年上だが、人生経験の差で湊は自分の方が年上だと思っている。
ただ、それでもチドリを妹のような存在として見た事は一度もない。自分の命よりも大切な少女のことは、新たに得た〝家族〟として見ているのだ。
ゆかりが問うた〝異性〟として見ると言うのは、そのままストレートに彼女を一人の女として見ながら接するのかという話だろうが、脳の機能を効率的に使うために性的興奮を覚える部位の機能を遮断している湊にすれば、そういった本能に基づいた考え方は無縁のもの。
裸体を見れば綺麗だという感想を抱きこそすれ、そこで自分の物にしたいなどと下卑た事を思ったりはしない。
だが、ゆかりがそんな事を聞いてきたということは、本人は純粋な疑問で尋ねただけだろうが、深層心理では湊がチドリを性の対象である異性として認識していると考えたのだろう。
別に心の中でどんなイメージを持とうと相手の勝手だが、そういった邪推は迷惑であるため、湊はやる気の感じられないアンニュイな表情で話題を変えた。
「……そういえば、恋人って部屋で二人きりだと何をするんだ？」
「え？　んーと、ＤＶＤで映画みたりとか？」
聞かれたところで少女だって湊が初彼なので分からない。だが、漫画やドラマでよく見るパターンでよければと、部屋でのんびり過ごすタイプの行動を瞬時にピックアップしてみた。
もっとも、今日はそんな予定ではなかったので、ＤＶＤを観るためのノートパソコンはあるが、二人で観て楽しむ様なＤＶＤは手元にない。
今日は湊も特に外に出て過ごすつもりは無いようなので、ちょっと探してみるかと立ち上がってＤＶＤの収納ボックスに向かい。ゆかりは湊が観ても楽しめそうな物はないかを探す。

彼女が探している間、テーブルのところでお茶を飲みながら待っている湊は、他人の部屋ですることもなく暇なようで雑談を続けた。
「岳羽はどういうジャンルが好きなんだ？」
「私はとくに好きなジャンルとかってのはないなぁ。あ、でも、泣ける恋愛系とかはストレス発散のために観たりする。他は話題作とか友達のオススメを借りてくる感じかな。有里君はどんなの観てるの？」
別に特定のジャンルにこだわりはないが、泣いてスッキリしたいときなどに純愛系の映画を観る事はある。
リアルな恋愛への憧れは持っていなくとも、恋愛や純愛をテーマとした一つの作品ならば問題なく楽しめるため、レンタルショップに行けば『女子のための映画コーナー』の棚にとりあえず寄るくらいには、そういったジャンルの物を観ていた。
ただ、そのジャンルが好きかと訊かれるとはっきりは答えられない。嫌いではないが感動したくて見るため、どちらかと言えばストーリーよりも雰囲気を楽しんでいるような気がするのだ。
なので、やはり特定のジャンルよりも流行り物を観るパターンの方が多いと答え、ゆかりは反対に湊がどういった物を観ているか尋ねた。
「……とくに観たりはしないが、羽入が人の家で勝手にアニメのＤＶＤとか観てるのを傍で眺めてたりはするな」
隣同士であることは知らないが、羽入と湊の家が近い事は聞いているので、別に遊びに行っていたところで浮気だなんだと叫ぶほどゆかりの心は狭くない。
学校でも携帯ゲーム機で遊んでいる姿を目にしており、湊の家でアニメのＤＶＤを観ている姿も容易に想像がつく。
そして、自分の彼氏はきっとオヤツとジュースを用意してやって、後ろの方でパソコンの作業をしながら時折羽入のことを眺めているに違いない。
面倒臭がりだが、実際は年下に甘くて面倒見がいいため、余計に懐かれることになっているのだろう。
少し年の離れた兄妹のような関係の二人を想像して笑みをこぼし、

ゆかりがさらに続けてＤＶＤを探していれば、そういえば、と言って湊は思い出したように追加情報を述べてくる。
「他は貞子の情報収集でリング系を見たりもした」
「なにゆえ、貞子の情報収集なんか……」
「知り合いが知り合いに俺の類似品として紹介したんだ。俺も聞くまで知らなかったが、貞子も両性らしい。まぁ、だからと言って名前が貞夫に変わったりはしないが」
「ま、そりゃね」
ゆかりとしてはホラー映画と今後縁が出来る事はないと思っているが、自分の好きな作品の登場人物が本当の性別を明かしたところで、変装時の名前は本名をもじっただけというのが大概なので、仮に貞子の本名が貞夫だろうと別に気にしたりはしない。
ただ、姿とセットで貞子としての名前が広まっている以上、別の名前が一般人にまでわざわざ広まる様にアピールしたりはしないはずだ。
性別の設定がなんであれ貞子は貞子。作品を代表するキャラクターの名前はそのままでいい。
湊の言葉にそんな風に返して、良さそうなＤＶＤがないためゆかりが諦めて収納ボックスを片付けると、元の状態に戻し終えたところで急に背後から抱きつかれた。
「ひゃあっ⁉　ちょ、な、なにっ⁉」
完全に気を抜いていたせいで変な声が出てしまい照れるゆかり。だが、それよりも急に抱きしめられたことで、心の準備が出来ていないと顔を赤くしながら大いに焦る。
対して、収納ボックスの棚の前で正座していた少女に背後から近付き、とある年代の女性の憧れであるあすなろ抱きを敢行した湊は、彼女の身体をしっかりと抱き寄せて相手の肩に顎を置いて耳許で呟く。
「……付き合って三ヶ月なら、どこまで許してくれるんだ？」
「ど、どこまで、許す？　……はぁっ⁉　ちょ、ダメ！　部屋に来たからってそういう事はき――――っ」
最後まで言い終える前に顔だけ振り向かせて唇を奪う。

彼女は〝禁止〟と言いたかったのだろうが、言わせなければゆかりが何を考えていようと効力を発揮しない。
唇を奪われたゆかりは緊張した様子で身体を固くし、対照的に湊は相手を身体ごと自分の方へ向かせて、片手を頬に添えながら背中にも腕を回す。
そうして、強くなったゆかりの心臓の鼓動だけが聞こえそうなほど静かな部屋の中で、時間にして十秒ほど経ってから離れれば、ゆかりは恥ずかしさから瞳を潤ませて顔を俯かせた。
「……だめって言ったのに」
「何がダメとは言われてない。それに岳羽も本気では抵抗してなかった」
「抵抗したら有里君が傷付くじゃん」
「別に照れ隠しで抵抗されても傷付いたりはしないな」
言って湊は再びゆかりに顔を近付ける。それを察知した彼女は肩をビクリと跳ねさせて固まるが、今度の口付けは優しく頬に落とされた。
ほんの少しだけ触れる小さな感触。けれど、逆にそれが意識させる事になり、ゆかりはキスされた部位だけがやけに熱く感じた。
「な、なんか慣れてる。絶対に中学生じゃない」
自分がこんなにも緊張と照れでテンパっているというのに、青年は顔色一つ変えずにジッと見つめてきている。
それが何故か悔しくて、ゆかりは変なのは絶対に湊の方であると指摘するも、言われた方は皮肉気に口元を歪めて返した。
「緊張して歯をぶつけるよりいいだろ」
「それは……確かに嫌だけど、君みたいに小慣れた感じだと信用出来ない」
「はぁ、随分と我儘だな」
キスどころかその先の経験もあるため、湊が慣れているというゆかりの指摘は正しい。
だが、それがどうしたというのか。技術は依頼の中で男を惑わし女を騙すために培われた物であっても、今はそこに親愛の情を乗せてい

る。
相手を自分に近付けてもいい。今この瞬間ならば拒絶したりはしない。そんな思いをしっかりと態度で示しているのだ。
下手なキスは御免だが、慣れている態度も気に入らないという我儘な姫に、湊は溜め息を吐いて返すと再び顔を寄せて唇を奪う。
一度目は身体を強張らせていたゆかりも、頬にしたのも合わせて三回目になれば少しは余裕が出る。
身体の横でギュッと握っていた拳を解き、恐々と上げた腕をそのまま湊の背中へとまわしてゆく。
少し触れただけで手を引っ込めたくなるが、ゆっくりと少しずつ移動させた事で、最後はちゃんと抱き返す形にする事が出来た。
「はぁ、んっ」
最初は触れるだけだったキスも、息継ぎの様に度々離れ、回数が増すにつれて啄ばむ様な形になり、さらに回数が増えれば湊の舌が唇と歯を分け入ってゆかりの口内へと侵入する。
自分のものではない熱が入って来て、驚き思わず身体を離そうとするも、背中と頭の後ろに回された手がそれを阻む。
ゆかりも腕を伸ばしている分、二人の身体は余計に距離を縮めていたが、こうなってしまうとお互いの距離はゼロを超えてマイナスと言っていい。
身体の中に自分ではない異物が入って粘膜の内側を蹂躙して行く。歯茎をなぞる様に舐められ、舌を使って追い出そうとすれば、反対に絡め取られて唾液を流しこまれる。
身長差の関係で少し上を向く形になりながらも、ゆかりの口からは溜まった唾液がこぼれおちそうになる。
今着ているのは室内着なので大人しいデザインだが、彼氏が来るからとお洒落な物をしっかりと選んだ。このままでは溢れた唾液で濡れてしまい。せっかく選んだ服から着替えなければならなくなる。ゆかりはそれが嫌だった。
何か解決法はないかと考えれば答えはすぐに思い付いた。思い付いたらすぐ行動に移すとばかりに、舌を絡ませ口の周りを濡らして

も、口内の唾液は溢すまいとゆかりは喉をコクコクとならしてそれを飲んだ。
「ん、ふぁ、あっ」
キスを繰り返すにつれて頭が惚けて思考力が低下していく。このまま進むとマズイという危機感は先ほどから抱いているが、キスで得られる充足感と快感によって止めようと思えなくなってくる。
身体の奥をくすぐられているような、深い場所から湧き上がってくる不思議な快感。その正体が何であるか分からないゆかりは、徐々に頭が真っ白になっていくのを自覚しながら、その先を知りたいと向き合ったまま湊の足の上に座って身体を寄せて、自分からも積極的に舌を絡めに行った。
そして、
「――――――」
完全に頭が真っ白になり、急激な虚脱感を感じてゆかりは後ろに倒れかけた。
その前に湊が肩を掴んで支えてくれたので床にぶつからずに済んだが、焦点の定まらない瞳で中空を見つめながら、荒い呼吸に合わせて肩を上下させていれば、身体を離した湊がゆっくりと床の上に彼女を寝かせた。
「はぁ、ん、はぁ……なんか、疲れちゃった……」
「……そうか。俺は厨房を借りて昼食を作って来るから、岳羽は少し休んでおくといい」
「わかった。任せちゃってゴメンね」
「気にしなくていい」
言いながら立ちあがると湊は部屋の鍵を借りて出ていく。扉が閉まるとすぐに外から鍵がかけられたので、キスのし過ぎで疲れているゆかりが他の女子の相手をしないで済むよう気を遣ったのかもしれない。
彼のちょっとした気遣いに嬉しく思いながら、ゆかりはゆっくり身体を起こすととりあえず冷めたお茶を飲み干して口の中をさっぱりさせた。

キス自体の不快感はなかったが、なんとなく普段よりも唾液の粘度が高い様に感じて、終わった後はちょっと口の中が気持ち悪かったのだ。
それもお茶を飲むことで解決したため、少し火照った身体を冷ます意味も込めて、窓を開けて換気しようと立ち上がりかけたとき、ゆかりは下腹部の辺りが冷たい事に気付いた。
（え、なに……？）
見てはいけない。見たらとんでもない事になる。本能が警笛を鳴らしてやめておけと制止してくる。
しかし、言いようのない不快感と何か冷たい物があると気付いてしまった以上、それを見逃すわけにはいかない。
別に見たところで死ぬわけでも無し、ゆかりは自分の内からの呼びかけを無視して、穿いていた七分丈のボトムスを見た。
（あ、れ……？）
そこにちゃんとボトムスがあった。セールで安くなっていて掘り出し物だと喜んで買ったオレンジのボトムスが。
けれど、ゆかりの穿いていたボトムスはオレンジ一色だったはずで、ファスナーの周辺だけが濃い色などというグラデーションは施されていなかった。
これは何だとゆかりがそっと触れてみれば、濃い色の部分はどういう訳か濡れていた。
キスのときに唾液がこぼれていたのかと考えるも、そうならないように飲んでいたので可能性はほぼない。
というか、ファスナーの周辺だけでなく、そこからさらにお尻に近い部分まで濡れている以上、口から垂れた唾液が原因とは思えなかった。
では、向き合う形で抱き合ってキスしていたのに、どうして少女が穿いていたボトムスは濡れているのか。
嫌な予感がしたゆかりは、湊が帰って来ても気付けるように部屋に近付いて来る気配を警戒しながら、そっとボトムスの中に手を入れてみた。

（あ、ああ……やらかしたぁぁぁぁぁぁぁっ!!）
ボトムスに手を入れたゆかりは原因を理解した。と同時に、湊が少し早めに昼食を作るため部屋を出ていった理由にも気付いてしまった。
よく思い出してみれば、去っていく湊が来ていた服の前面も一部が濡れて変色していた気がする。そこは丁度座っていたゆかりの下半身が押し付けられていた辺りだ。
戻ってきたら洗ってあげた方がいいのだろうか。というか、着替えを買いに走った方がいいのだろうか。
自分が恥をかくだけならよかったが、恋人にまで被害を出してしまった以上、謝罪のために顔を合わせない訳にはいかない。
（キスしかしてないのに、キスだけでって、っていうか、そんなつもりなかったのに、うわぁぁぁぁぁぁぁっ!!）
この日、ゆかりはいくつか段をすっ飛ばして大人へ近付いた。キスしかしてないが、そのキスが原因で起こった二次災害で階段を上らざるを得なかったのだ。
汚れた服を着替えてから本当は相手に文句を言いたかったが、途中から自分もキスにどハマりしていたので何も言えず、料理の載った盆を持って帰って来た青年の上着が変わっていたことで、やっぱり相手にも被害を出していたかと深く反省した。
そして、この日のことを教訓にゆかりは湊にキス禁止令を出した。子どもキスでも回数をするうちに理性が飛んでダメになるので、キスは一切禁止だときつく厳命しておいたのだ。
青年は最初は相手の反応を見て楽しむためにキスしていたが、途中からはただ相手を気持ちよくさせるためにしていただけなので、禁止令を出されても特に気にした様子もなく「わかった」と短く答えていた。
少女は相手があまりにもあっさりしていたので、それはそれで寂しいかもと〝よく分からない感情〟の処理に困りながら、とりあえず大人しく彼氏に誕生日を祝って貰って、手作りのケーキの味に大満足でその日の自室デートを終えたのだった。

第百五十五話　特別課外活動部からの離脱

１０月１４日（日）
夜――巌戸台分寮
ペルソナの暴走事故から十日が経った日の夜、荒垣真次郎は必要な物をまとめた鞄を背負って部屋を出ようとしていた。
行く当てはない。だが、止められたところで彼はもう学校に行く気も、ここに残るつもりもなかった。
部屋を出て、扉に鍵をかけ、廊下を進んで階段を下りてゆく。一階のラウンジには明かりが点いており、ソファーに座っている真田と美鶴の姿が見えた。
相手も荒垣が来た事に気付いたようだが、二人が来るより先に荒垣の方から近付いて、美鶴の前に召喚器と腕章に加えて部屋の鍵を置いた。
「こいつを返す」
「これは……まさか、出ていくつもりなのか？」
「ああ。俺はもう戦うつもりはねえ。なら、ここにいる理由もねえだろ」
それだけ言って荒垣は出入口の扉へと向かっていく。
けれど、そんな言葉だけでは納得できない真田が立ち上がり、出ていこうとする荒垣を追って肩を掴んだ。
「待て、シンジ！　あれは事故だ。別にお前の責任じゃない」
「じゃあ、なんであのガキの母親は死んだ？　俺のペルソナの暴走に巻き込まれてだろうが。それでテメェの責任じゃねえだなんて逃げが許されると思うか？」
荒垣とて故意にペルソナを暴走させたわけではない。心神喪失や心神耗弱状態での罪が軽くなる様に、先日のことはあくまで事故だと真田が説得すれば、荒垣は肩を掴んでいた手を払って言い返した。
自分の責任ではないと言ったところで、荒垣のペルソナの暴走が事故を引き起こした原因である事実は変わらない。
元々、暴走の予兆はあったのだ。荒垣はそれを隠し、桐条グループ

は彼の適性では暴走の可能性があると知りながら、上手くコントロールして戦えているという結果のみで安全だと判断してしまっていた。
ペルソナには不明な点が多いため、桐条グループの研究員が判断を誤ったのはしょうがない。報告書の上ではコントロール出来ていたのだから。
けれど、それと荒垣本人の話は別だ。確かに、暴走と暴走したペルソナの破壊活動は彼の意志とは関係ないが、ペルソナの力が増すにつれてコントロールが利き辛くなっている時点で言っておけば、前線に出さないという選択肢も取り得た。
本人は暴走の兆候があればすぐに制御剤を服用しなければならないと、そんな風に考えたのかもしれないが、命を削るほどの副作用のある劇薬を、そう簡単に呑ませるほど今の桐条グループは非道ではない。
これ以上ペルソナが強くならないよう戦闘から離れ、カウンセリングを受けて意志の力でペルソナを制御する方法を探していけば、暴走を起こさない程度のコントロールは可能になっていたかもしれないのだ。
事故が起きた今となっては考えても無意味かもしれないが、そういった事故が起こらなかった可能性がある以上、周囲がどれだけ言おうが荒垣は事故の責任からは逃げられないと分かっていた。
荒垣がその事をはっきりと告げれば、真田は悔しそうに拳を握りしめて何も返せなくなる。
だが、傍で話を聞いていた美鶴は、客観的な立場から今後について彼がどのように考えているか尋ねた。
「特別課外活動部を抜けたとして、これからどうするつもりだ？　一般寮に戻るというのなら二、三日待ってもらえれば部屋は用意するが」
「部屋は勝手に用意する。しばらくすれば休学届を出すつもりだからな」
訊かれた荒垣はすぐに答えた。その答えの速さから、予め決めていた事は容易に想像できた。

彼は普通の高校生だが、危険を伴う特別課外活動部での活動の成果に応じて、桐条グループから手当てが支給されていたため、学業と両立してバイトをしている一般的な高校生よりは経済的に余裕がある。
部屋の契約は高校生だけでは難しいかもしれないが、知り合いの紹介などであれば、家賃の先払いで古いアパートを借りるくらいは出来るだろう。
そこまでしっかりと考えての決断ならば、相手が頼ってこない限り自分から干渉したりはしないでおこうと決め、美鶴は素直に相手の言葉を受け入れ頷いた。
「そうか、わかった」
「おい、シンジが出ていこうとしてるんだぞ。そんな簡単にっ」
「本人の意志は固い。これでは私や理事長が説得したところで無駄だ」
相手を引きとめるとばかり思っていた美鶴が、あっさりと荒垣の退部を認めたのは意外だった。
彼に去って欲しくない真田が、もっと引きとめるべきだろうと抗議するも、同じ寮で生活し、仲間として戦ってきた中でお互いのことをそれなりに知っていれば、引きとめたところで無駄なことくらいは分かっていた。
「一生の別れという訳じゃない。あんな事があったんだ。荒垣にも色々と考える時間が必要だろう」
仲間になってからの付き合いしかない美鶴でも分かるのだから、兄弟同然で育った真田にそれが分からないはずがない。
認めたくないのだろうが、少し距離を置いて考える時間を与えてやれと、美鶴は真田を諌めてから改めて荒垣に向き直った。
「君の考えは分かった。だが、召喚器だけは持っていけ。君が望もうと望むまいと必要になる状況は突然にやってくる。そのとき、傍に守らねばならない人間がいても、これがなければろくに守ることも出来ないだろ。保険という訳ではないが、備えくらいはしておくべきだ」
あんな事故を起こした事で、荒垣はペルソナという能力その物を捨てたいと思っているかもしれない。

けれど、それが出来ない以上、自ら戦いに向かうかどうかはともかく、巻き込まれたときに身を守るくらいの備えはしておいてもいいはず。
自分一人なら彼は逃げられるだろうが、もし、影時間に迷い込んだ人間がシャドウに襲われていれば、荒垣は葛藤しながらも助けようとするだろう。
召喚器はそういったときのための保険。使わないなら弾も出ないオブジェでしかない。
美鶴のそういった気遣いを理解したのか、荒垣は少し考えてから差し出された召喚器を手に取った。
「……わかった。世話になったな」
受け取った召喚器を鞄に仕舞い、荒垣は背を向けると寮を出ていった。
美鶴はそれを黙って見送り、真田は悔しそうに壁を殴りつけると自室へ戻って行った。

１０月３１日（水）
影時間――ポートアイランド駅・路地裏
寮を出た荒垣はマンスリーのアパートを借りて、バイト先を探しながら新しい生活を始めていた。
学校には休学届を出し、たまに真田から電話やメールがくるがそれを適当に返しながら、最近では事故現場近くの路地裏によく来るようになっていた。
ここは不良のたまり場として有名だが、ガタイもよくシャドウとの戦闘を経験していることで雰囲気も出ている彼に近付こうとする者はほとんどおらず、たまに会話する程度の関係を維持しながらいつの間にか場に溶け込んでいた。
もっとも、いくら溜まり場にくる不良と知り合いになっても、影時間では彼は基本的に一人だ。
迷い込む者も稀にいるらしいが、荒垣は自分の目の届く範囲ではそういった人間を見た事がない。

それだけに、駅前と溜まり場を繋ぐ通路の方から砂を踏む様な物音がしたときには、イレギュラーシャドウかと思わず身構えてしまった。
「おや、これは珍しい。ターゲット以外の方とこの時間に出会うのは久しぶりですね」
警戒して座っていた階段から腰をあげた荒垣が通路の方を見ていれば、そこから数人の人間が現れた。
荒垣の姿を見て楽しげに口元を歪める上半身裸の男、頑丈そうな鞄を持って彼の後ろを歩く男、ダボダボなパーカーとカーゴパンツ姿の男、そしてニットのセーターとスカートという唯一まともな格好をしているせいで逆に異様な集団の中で浮いているおかっぱのような髪型の女。
そんな四人組は上半身裸の男を先頭に荒垣の元までやってくると、どこか観察するような視線を向けて話しかけてきた。
「どうもこんばんは。突然ですが、貴方はこの時間がどういった物かご存知ですか？」
「……そういうお前は知ってんのか？」
「ええ、それなりに知っていますよ。その反応を見る限り、どうやら貴方も知っているようですが」
荒垣は知っているとも知らないとも答えていないが、むしろ、平然と返事を返せていることが答えだとばかりに、男はくすくすと楽しげに笑う。
異様な雰囲気ながら対応自体は丁寧で、これまで会った事のないタイプの相手に荒垣は距離感をいまいち掴みきれない。
けれど、そんな荒垣側の事情など気にもせず、男は薄い笑みを口元に浮かべながら自身の名を告げてくる。
「挨拶が遅れました。私の名はタカヤ、彼らは私の仲間でジンとカズキとメノウです」
「俺は荒垣だ。それはいいがお前らこんな時間にぞろぞろと何してんだ？」
「仕事ですよ。影時間の方が色々と都合がいい事もありますから」

言いながら右手を腰に当て、左手で肩を竦める仕草をするタカヤ。
影時間は日常の間にひっそりと存在する隠された時間だ。人よりも一時間多く一日を過ごせるというのは色々なメリットがあるが、黄昏の羽根を積んでいない機械は止まってしまうので、その恩恵を受けられる仕事というのは限られてくる。
だが、荒垣は相手のベルトに差された大型リボルバーを見つけた事で、その仕事が決して真っ当ではない事を察した。
人を殺してしまった事を後悔し、影時間の記憶の補整で真実は葬られ罪に問われないことに荒垣は苦しみを感じている。
だというのに、目の前に立っている者たちは、気付かれず罪に問われない事を利用して人を殺しているらしい。
影時間での殺人という条件は同じだが、考え方が対極であるため、荒垣はタカヤたちとは根本的に相容れない事を理解した。
「この時間に順応しているという事は、貴方は適性を持っているのでしょうが、ペルソナという存在はご存知ですか？」
「知ってたらどうなんだ？」
「質問に質問で返すのは感心しませんね。まぁ、今の返事を聞く限りでは貴方もペルソナ能力者のようですが」
思想が相容れないと分かった事で荒垣の返しは棘のあるものとなったが、タカヤはそれほど気にした様子もなく、彼がペルソナ使いだと分かって笑みをさらに深める。
だが、タカヤの言った〝貴方も〟という部分に引っ掛かるものを感じ、自分たち以外にペルソナ使いがいないと聞かされていた荒垣は驚いた顔をした。
「お前らもペルソナ使いなのか？　こっちが聞いた話じゃ、俺以外は先に見つかった二人しかいないって事だったんだがな」
「なんや、桐条グループのペルソナ使いのくせに何も聞いとらんのかい。召喚器や制御剤が開発されとって、三人しか見つかってないはずないやろ」
桐条グループが確認したペルソナ使いは見つけた順に美鶴、真田、荒垣の三人だけ。それが荒垣や真田が聞いていた情報である。

彼らしかペルソナ使いがいないから、人々をシャドウの脅威から守るために戦い続けていたのだ。
しかし、何も知らない彼に呆れた表情を向けたジンの言う通り、荒垣よりも先に目覚めた二人のペルソナの制御は薬など必要ないほど安定しているというのに、臨床実験を済ませておかねば副作用すら分からないはずの薬が存在するのはおかしい。
少なくとも、薬でペルソナを制御できると確信を持てるほどの治験を繰り返し、命を削るほど重大な副作用があると分かる程度に被害者を出したに違いない。
説明してくれた美鶴や理事長に騙されていたのか、それとも美鶴ですら聞かされていない桐条グループの暗部なのか、この場で判断出来るほどの情報を荒垣は持っていなかった。
「お前ら、制御剤のことも知ってんのか」
「制御剤に興味がおありですか？　あの薬は副作用が強く命を削りますが、ペルソナを抑える力は確かです。もっとも、特殊な薬ですから一般の病院では調合すら出来ませんが」
言われて荒垣は当然だなと納得する。ペルソナというオカルト染みた異能の存在など世間に知られていない。それでどうやって一般の病院で専用の薬の調合法が分かろうか。
薬どころか人体に対しても詳しい知識を持ち合わせていないため、制御剤がどういった理屈でペルソナという異能をコントロール可能にするのか荒垣には分からない。
可能性としてはペルソナは心の力だというので、鎮静剤のようなもので精神の昂りを抑え、ペルソナの能力を部分的に制限しながら扱えるようにするのかもしれない。
もっとも、鎮静剤は興奮作用のある物質の分泌を抑える薬だと思われるので、それで寿命を削るほどの副作用を出しては、普通の人間は廃人や影人間の様な状態になってしまうのではという疑問が浮かぶ。
やはり、こういった頭を使う専門的なものは自分には向かない。そう考えたところで、荒垣は色々と知っていそうな彼らに制御剤が手に入る場所に心当たりがないかを尋ねることにした。

「……どこなら手に入る？」
「テメェの情報もろくに寄越さねェヤツに教える訳ねェだろ。情報はタダじゃねェンだよ」
「そうですね。最低でも制御剤を欲する理由くらいは情報料として教えてもらわなければ」
　聞いて即座にカズキが嘲笑を浮かべて教えることを拒否してきた。それにタカヤも頷いているため、彼らの生きている世界では何事にも対価が必要であるらしい。
　相手が先に聞いてきたから自分も少しは話していたというのに、こちらが聞けば何も教えないとは随分と自分勝手なやつらだと、改めて相容れない性質であることを認識しながら、荒垣はタカヤのいう情報料を払う事にした。
「ペルソナが制御出来なくなったんだ。元々、ペルソナの強さに対して適性ってやつがギリギリだったらしい。それでこの前、ついに暴走が起きた。暴れたペルソナが建物を破壊して、影時間に迷い込んだ一般人を巻き込んじまった。だから、もうあんな事が起きないよう、力を封印するために制御剤が必要なんだ」
　話しながらあのときの光景がフラッシュバックする。暴走するカストールを見て恐怖に顔を引き攣らせながらも、女性は身体が竦んで逃げられず瓦礫に押し潰された。
　潰される直前の悲鳴、押し潰される瞬間の生々しい音、そして母親の死を目の当たりにした少年の絶叫。それらが耳の奥にずっと残っていて、荒垣は今でもあまり寝られていなかった。
　もうあんな事は沢山だ。そのためなら自分の寿命を削ってでもこの力を捨てたい。それが荒垣の純粋な望みだった。
「なるほど、自分が生きるためではなく、力を捨てるために制御剤が欲しいと。随分と贅沢な悩みですね」
　荒垣の正直な願いを聞いたタカヤは一転変わって、どこか呆れたような薄い笑みを彼に向ける。
　どうして相手がそんな顔をするのか荒垣には分からないが、荒垣に対して感じた想いは他の者も同様らしく、それぞれが冷めた瞳で荒垣

を見ながら口々に言う。
「相手するだけ無駄だ。こンな野郎はアイツにでも回しとけ。あの救いたがりなら丁寧に世話するだろうよ」
「せやな。薬屋は一般人の紹介を嫌うもんやから、必然的にわしらが薬を横流しすることになるけど、こない面倒なやつの相手ばっかしとれんわ」
「彼も別に暇って訳じゃないけど、ボクたちよりここの近くに来る機会は多いだろうから、確かに薬の安定供給を考えたらそっちの方がいいかもね」
彼らの話に出てくる〝アイツ〟や〝彼〟なる人物がどんな人間なのかは分からない。
けれど、その人物も彼らと同じようにペルソナや制御剤について知っており、尚且つ、裏稼業で生きる者たちに一定の信頼を得ているくらいには、親切であり信用出来る人物なのかもしれない。
荒垣としては情報が得られれば誰から聞こうが構わないので、その人物を紹介してくれるのなら、それだけでありがたかった。
タカヤたちの方もその人物を紹介する方針でまとまったようで、改めてその旨を伝えてくる。
「そういう訳で、薬を横流ししてくれる人物なら紹介出来ます。まぁ、相手側の都合もありますので、都合がつかないときには我々が取り引きしても構いませんが、それでもよろしいですか？」
「ああ、問題ねえ。それで頼む」
「分かりました。では、相手と連絡を取っておくので、また三日ほど経ってからこの場所で落ち合いましょう。薬の準備には時間がかかりますから、期間が伸びるときにはまた伝えます」
それだけいうとタカヤたちはその場から去って行った。
後に残った荒垣は薬が手に入り力から解放されることに安堵しながらも、自分の寿命を対価として払い続ける不安に強く拳を握りしめるのだった。
＊＊＊
荒垣と別れてその日の仕事を済ませに行ったタカヤたちは、影時間

が明けると携帯を取り出しある人物に電話をかけた。
影時間明けということで既に時刻は午前零時をまわっているが、相手がこんな時間に寝ているとは思わないので、遠慮なく電話をかけて繋がるのを待つ。
呼び出し音が数回鳴り、そろそろ出る頃かと思ったところで、プツッ、と電話が繋がる音が聞こえてタカヤは自分から話し始めた。
「どうもお久しぶりです。お時間はよろしいですか？」
《……用件を言え》
電話の相手は酷く冷たい反応を返してくる。電話の向こうではバイクのエンジン音らしきものが聞こえているので、どうやら相手は移動中に呼び出された事を迷惑しているらしかった。
彼がバイクを移動手段に使っているなど知らなかったので、せっかくのツーリングを邪魔して悪かったと、小さく笑いながら本題に入る。
「ええ、桐条側のペルソナ使いである荒垣という少年はご存知ですか？」
《一応な》
「先ほどポートアイランド駅の裏手にある溜まり場で会ったのですが、彼が制御剤を欲しいと言ってきたのです。まぁ、手間はかかるものの、対価を頂けるなら、横流しするだけですし受けても良かったのですが、他の者たちの反応があまりよくなくてですね。貴方に任せろという意見が出たのです」
相手に伝えた通り、タカヤとしては貰える物が貰えれば、頻繁に会う訳ではないので小遣い稼ぎとして横流しくらい構わなかった。
ただ、仲間たちが相手に対してあまりいい感情を持っておらず、チームで動いている以上彼らの意見を蔑ろに出来ない立場としては、自分の意見よりも他の者たちの意見を優先しなければならなかったのだ。
その事を伝えれば、面倒がると思っていた相手は意外にも他の者たちの意見に理解を示してくる。
《まぁ、生きるために薬を使っている者にすれば、力の責任から逃げる

ために薬に頼ろうとしている奴はムカつくだろうな》
「ええ、まさにその通りでカズキとジンは嫌悪感を一切隠していませんでした。人を巻き込んで殺した程度で怯え、せっかくの力を手放そうとするなど理解出来ません。ですが、個人的にはそういった希少な考え方は興味深くもあります」
桐条グループによって無理矢理に力を発現させられ、生きるために寿命を削り続ける制御剤の服用が必須となっていながらも、タカヤはペルソナと影時間の適性を得た事自体には感謝していた。
誰もが知覚出来る訳ではなく、限られた者、言い換えれば選ばれた者しか入る事を許されていない神聖な場所に入る事を許されたのだ。
それだけではなくペルソナという超常の力まで手に入れた。その力を振るっているときには、タカヤは確かな生の実感が得られていた。
大切なのは生きる事ではない。何を成し、どのように生きるかが重要なのである。
薬の副作用で着々と確実に死に向かっているからこそ、曖昧な未来よりも、今という瞬間を生きることに価値を置いているタカヤにとって、自分とまったく異なる考えの荒垣は理解の外の存在ではあるが、どういった結末を辿るかという観察対象としては興味をそそられた。
「ですので、我々は貴方の紹介と、貴方の都合が悪いときに代理で取り引きをする方針で行く事にしました。三日後に同じ場所で会う事になっていますが、薬を用意してその時間に来る事は可能ですか？」
《……まぁ、可能だが、随分と面倒な事を押し付けてきたな》
「こちらは貴方ほど金銭的に余裕がある訳ではないですからね。小遣い稼ぎ程度にしかならない事より、もっと稼ぎの大きい依頼のために時間を使いたいのです」
制御剤の横流しなど言って一、二万程度の稼ぎにしかならない。自由に価格を設定し直せるといっても、信用が大切なので制御剤の価格は最初に見せるつもりでいるし、横流しのときには事前に四割増しの価格を請求するなどの説明もする。
発注はまとめてになるので、数週間から一ヶ月ほどは新しい注文も

こないと思われ、そんな地味な小遣い稼ぎに時間を使うくらいならば、タカヤは自分たちの本業である復讐代行に専念したい思いの方が強かった。
もっとも、金銭的に余裕がある訳でもないというのは嘘だ。一年間チマチマと大して強くもないシャドウを狩るだけで、電話の相手から五千万円もの大金を報酬として貰ったのである。
仕事に使うものを色々と新調しても八割以上が残っており、自分たちの元々の稼ぎと合わせればそれなりに裕福な暮らしが出来るだけの蓄えがあった。
無論、そんな事は裏に通じている相手も分かっているだろうが、その点については特に触れずに返して来た。
《とりあえず話は分かった。三日後、土曜と日曜の日付を跨ぐ影時間にポートアイランド駅の裏路地に向かう。仲介屋としての責任は果たせよ》
「ええ、ちゃんと立ち会いますとも。では、またそのときに。失礼します」
電話を切ったタカヤは携帯を仕舞いながら三日後のことを思って口元を歪める。
被験体であるタカヤたちよりも、電話の相手だった彼の方が桐条グループに抱いている憎しみは大きい。
何がそこまで憎しみを募らせたのかと不思議に思ったが、死を齎す存在となったときの彼は、命に執着を持たないタカヤですら見ただけで呑まれて自然と全身に汗を掻くほどだ。
そんな彼が桐条側のペルソナ使いと出会ってまともな対応をするはずがない。知り合いだというのなら、相手の精神を揺さぶるような言葉を吐くはず。
言われた者がそれでどんな表情をするのか、想像するだけでタカヤは三日後が待ち遠しくなった。
立ち会いはする。彼が来ると言えばマリアも会いたがるだろう。なら、復讐代行屋ではなくペルソナ使いとしてのストレガメンバーで当日は出迎えることにしようと、タカヤは三日後の事を他の仲間にも

伝えた。

第百五十六話　仲介人

１１月３日（土）
影時間――路地裏
世界が緑色で塗り潰され一種の異界と化す影時間。
一般人では存在を知る事も出来ぬそんな時間に、荒垣真次郎はポートアイランド駅の近くにある溜まり場で人を待っていた。
目的の人物は名前も知らぬ男だが、仲介してくれた怪しげな男タカヤも本日は同席するらしい。
そうして、元はバーだったシャッターの下りた店の前の階段に座り、目的の人物らが来るのを待っていれば、先に到着したのはタカヤたちの方だった。
「どうも、お久しぶりです」
「ああ。それで、お前らが言ってたやつとは連絡がついたのか？」
「ええ、場所も知らせましたし、制御剤を実際に持ってくるとも言っていました。彼は約束を守る人物なので信用していいですよ」
裏稼業の人間のいう信用とは仕事が絡んでくるため一般人のそれより重い。薬を譲ってほしいと言っているだけの荒垣を騙す可能性も低い事から、待っていればその人物もすぐに現れることだろう。
薄い笑みを浮かべているタカヤを見ながら、ぼんやりとそんな事を考えていれば、タカヤの後ろにいる人数が先日よりも増えている事に気付く。
前回はタカヤを入れて男三人と女一人だったというのに、今日は男女三人ずつになっている。
増えたのは幼い顔付きながら発育のいい金髪の少女と、どこかおっとりした雰囲気のハの字眉毛の少女。
見た感じでは自分よりも年下で中学生かと思われるが、そんな年齢の少女も目の前の男と同じように人殺しをしているのかと、荒垣はあまりに現実離れした世界に軽く眩暈がした。
とはいえ、今からやってくる人物も裏世界の住人だ。少女らの様に見た目では判断できない存在かもしれないため、改めて気を引き締め

て待っていれば、駅前へと続く路地の方から静かな足音が聞こえてきた。
同じくその音が聞こえたらしい他の者たちも小さく反応を示し、もうすぐ現れると思ったところで、フードを被ったパーカー姿のカズキが召喚器を抜いて、自分のこめかみに当てながら唐突に引き金を引いた。
「来やがれ、モーモス！」
水色の欠片と光の中から飛び出した大鎌を持ったペルソナは、溜まり場へとやってこようとしていた人物へと突進して行く。
真田のポリデュークスよりも速く、アナライズ能力を持っていなくとも、見ただけでそのペルソナが自分たちよりも遥かに強い事を荒垣は理解する。
あれほどのペルソナの強襲を受けた方は無事では済まない。薬を都合してくれる人物を紹介すると言いながら、その人物が現れた瞬間に亡き者にしようなど、最初から制御剤を渡す気がなかったと思ってしまうのも無理はない。
けれど、驚き腰を上げて荒垣が立ち上がった次の瞬間、それを上回る驚愕の光景が飛び込んできた。
「パラディオン！」
聞き慣れぬ名を呼んだ声が響けば、今まさに大鎌を振り下ろそうとしていたペルソナが吹き飛び、その勢いのまま溜まり場の方へ戻ってくる。
いや、正確には吹き飛んだのではない。モーモスはその腹部を現れたペルソナから生えた突撃槍に突かれ、力負けして押し返されたのだ。
押し返したペルソナはそのまま相手を壁へと叩きつけ、突撃槍を高速回転させて貫き、最後は靄のようにして相手を消し去った。
ペルソナを消されたカズキは腹部を押さえて忌々しげに路地の方を睨み、やってきた蒼い瞳の青年に言葉をぶつける。
「テメェ、また訳の分かンねえペルソナ増やしやがって」
「……ペルソナで相手してやっただけマシだろ」

声の主を見て荒垣は言葉を失った。瞳の色や纏う空気は明らかに違うが、その声も姿も、荒垣は今まで何度も目にしてきた。
彼がこんな場所にいるはずがない。幼馴染の妹の同級生で、助っ人で入ったバスケ部で活躍したことで有名人となった表の世界の住人が、こんな人殺しを生業とする裏稼業の住人らと関わりを持っている訳がない。
頭の中で何度も否定するが、首に巻かれた黒いマフラーや編み上げブーツなど、彼と合致する特徴があり過ぎて、ソックリさんと言い張る事も出来なくなってしまった。
そして、後ろに銀髪ポニーテールの少女を連れながら、蒼い瞳の青年が溜まり場に到着すると、今まで黙っていた金髪の少女が顔を輝かせて青年に駆け寄り抱きついた。
「ミナトー！」
「急に抱きつくと危ないぞ」
「うん！」
注意されて頭に手を置かれた少女は嬉しそうに笑って顔を擦り寄せている。
だが、その少女の呼んだ名前を聞いた荒垣は、その名が自分の知る青年と同じであったことで、認め難い現実を受け入れなくてはならなくなり、深くため息を吐きながら青年に声をかけた。
「はぁ……有里、お前どういう事だ。ペルソナ使いだってずっと隠してたのか」
「隠すも何も訊かれてませんよ」
訊かれたところで正直に答えはしなかっただろうが、訊かれていないのに自分から話さなくてはならないなどおかしな話だ。
それならば、荒垣の方こそ湊たちに自分がペルソナ使いで、巌戸台分寮に住んでいる者はそういった活動をしていると話していなければ筋が通らない。
けれど、知り合いの青年が裏稼業の人間と繋がっていた事が信じられないのか、荒垣は少しの距離を空けた場所で立ち止まり、真剣な瞳で湊を睨みながら言葉を続ける。

「会ったばっかで詳しくは知らねえ。だが、こいつらがどういう仕事をしてるかは想像がつく。お前、そういうやつと関わりを持つって意味を分かってんのか？」
「自分から接触を持とうとしてきた先輩に言われる筋合いはないですね。それに貴方も先日女性を殺したばかりじゃないですか。幼い子どもの目の前で」
青年の言葉に荒垣は心臓を掴まれた錯覚を覚える。あのとき現場にいたのは荒垣たち三人と被害者の女性とその子どもの五人のみ。
先日テレビで放送された事故の真相がペルソナの暴走だと気付き、被害者の女性が死んだという情報まで入手しているのはいい。
だが、その現場に少年がいて、彼の目の前で母親を殺したことを青年が知っているはずがないと動揺しながら荒垣は叫んだ。
「な、んで、どうしてテメェがその事を知ってんだ！」
「……どうしてって、能力の目で視てたからですよ。そっち側のペルソナ以外にも索敵能力を持ったモノがいたっておかしくないでしょう」
「見てたならなんで止めなかった?!　テメェは人助けばっかしてる人間じゃなかったのかよ！」
怒鳴りながら詰め寄った荒垣は、湊に抱きついていたマリアを押し退け、湊の胸倉を両手で捻り上げる。
荒垣自身、自分が理不尽なことを言っているのは分かっているのだ。
いくら見てようが彼は無関係の第三者。助ける義理も義務もない。
それでも、自分の幼馴染を上回るほどの格闘術を身に付け、自分が敵わないと思ったカズキのペルソナを力で押し返すほどの強さを持った彼ならば、あの悲劇を回避させられたのではないかと考えずにはいられなかった。
頭に血が上って全身を震わせながら荒垣が詰め寄っていれば、湊の後ろにいた少女がやってきて荒垣の手を弾いて湊を解放させる。
そして、そのまま湊を背後に庇うように立ち、真っ直ぐ赤い瞳を荒垣に向ければ、あの事故の日のことについて話し始めた。

「ウチらそのときタルタロスにおったんよ。ここで起きた事故を止めるんは物理的に無理やわ。それに仲間が傍に居てはったんやろ？暴走したペルソナが危険やいうても、二人がかりでそこの広い駐車場に押さえつけたらなんとかなった思うよ」

湊を背後に庇った少女は特に怒っておらず、淡々と当日の自分たちの状況と、荒垣らだけで事故に対応出来た可能性を指摘する。

突然の事態に冷静に対処できる者ばかりではないため、湊たちは別に美鶴や真田の対応を責めたりはしない。

ただ、いくら精神的に不安定になっていると言っても、そんな八つ当たりで責められては敵わないと、傍で眺めていたタカヤが呆れたように首を振った。

「やれやれ、貴方が呼んだというのに随分な態度ですね。我々の仕事内容を理解しているのなら、裏の世界には裏の世界のルールがあることを理解するべきだ。貴方の今の態度では交渉決裂とみなして口封じに殺されても文句を言えません。いまは影時間、見ている者は誰もおらず、死因は勝手に作られますから」

言いながらタカヤはベルトから抜いた銃を荒垣に向ける。

影時間の怪しい月明かりに照らされ、余計に不気味に光る銃口に、向けられた方は嫌な汗が背中を伝うのを感じる。

銃なら荒垣も持っているが、それは弾の出ない召喚器だ。タカヤの持っている物とは迫力から何から全く異なり。銃口を向けられた状態では下手に動く事も出来ない。

指の動きに注意して、引き金が引かれる瞬間に回避すれば無事に済むだろうか。

そんな事を考えながら周囲の状況にも気を配れば、荒垣は自分が敵に囲まれている事に気付く。

後ろには湊と彼を庇う銀髪の少女。そのすぐ傍には湊の胸倉を掴まれたことに対して憤って殺気を放っている金髪の少女。荒垣から見て斜め右の方向にはカットラスを持ったカズキ。斜め左にはメノウとハの字眉毛の少女。そして正面には銃を構えたタカヤとその後ろに控えるジン。

湊の強さはこの中でも上位なのは先ほどの交戦で理解したが、他の者がカズキと同程度の力なら荒垣に勝ち目はない。
感情で動きながらも、頭では自分の馬鹿さを分かっているつもりだったが、住む世界が違えば常識も違うと理解していなかった彼は、今さらになって感情的になったことを後悔した。
「……やめろ。この人は人を殺してまだ精神的に不安定なだけだ」
しかし、荒垣が絶体絶命だと生き残る方法を必死に考えていれば、コートのポケットに手を入れて立っていた湊がタカヤに銃を下ろすように言った。
聞いていた荒垣は、何故彼が自分を庇うのか理解出来なかったが、言われたタカヤは素直に銃をベルトに差し直したので、もしかすると本気で撃つ気はなかったのかもしれない。
銃が下ろされたことに安堵して荒垣がどっと疲れを感じていれば、腕に付けた機械を見ていたメノウが仲間たちに画面を見せて口を開いてきた。
「その人の適性は〝４０２０ｓｐ（レベル７強）〟だって」
「なんや、昔のわしらと同程度かい。天然覚醒者いうても大したことあらへんな」
荒垣は初めて見る機械に目を凝らす。影時間に稼働するという事は黄昏の羽根を詰んでいるのだろうが、あんな小さな機械で適性を測れることが驚きだった。
そしてさらに、ジンの言葉を信じるのであれば、彼らはかなり小さい頃からペルソナに目覚めており、荒垣や真田の実力はそれと同じくらいという事になる。
先ほど見たカズキのペルソナの強さを思えば納得だが、自分たちしか戦える者がいないと言われていた事を思えば胸中は複雑だった。
彼の適性を聞いてジンたちがつまらなそうな表情を浮かべていれば、腕を組んで立っていたタカヤが銀髪の少女に視線を向ける。
「メノウ、そちらの女性の数値はどうです？」
「そっちの人は……へぇ、〝１５６００ｓｐ（レベル３１強）〟だって」
今度の数値を聞いたタカヤたちは、少々驚いた様子で興味深げな視

線を少女に送る。
湊とタカヤたちは以前からの知り合いだが、彼が銀髪の少女を連れて来たのは初めてだ。
てっきり赤髪の少女を連れてきたのかと思っただけに、青年と一緒にいる新顔がどんな人物なのか興味を持っていたのだろう。
自分たちとほとんど変わらぬ適性を持つと知り、どことなく楽しそうな薄い笑みを浮かべてタカヤは改めて少女に挨拶をした。
「挨拶がまだでしたね。私はタカヤ、ストレガというチームで一応リーダーをしています」
「ウチはラビリス。話は湊君から聞いとるから、そっちの人らの顔と名前は一致しとるよ」
「そうでしたか。しかし、これだけの適性を持ったペルソナ使いをよく見つけてきますね。この時間に迷い込んだ者は稀に見ますが、我々がペルソナ使いと遭遇したのはそこの彼が初めてです」
「まぁ、ウチも純粋なペルソナ使いやないけどね。桐条グループの実験で目覚めかけて、湊君と出会ってからちゃんと覚醒したんよ」
〝自分も〟と少女が口にしたことで、タカヤは顔と名前以外の情報も少女には伝わっているのだと察する。
別に人工ペルソナ使いであること自体は弱点でも何でもない。非人道的な実験を行っていたという動かぬ証拠なので、桐条にとっては弱所となり得るが、タカヤにすればそんな物は過去の話でしかないのだ。
故に、少女に自分たちの情報を話した湊を、タカヤたちはどうこうしようというつもりはないが、突然現れた近い強さを持ったペルソナ使いの実力に興味を示していたとき、彼らのいる溜まり場に招かれざる客が訪れた。
それに気付いたストレガのメンバーは面倒そうな表情を浮かべ、タカヤは肩を竦めて来客の方へと振り向く。
「おや、珍しい事もある物です。我々の力に引き寄せられでもしたのでしょうか？」
「へっ、この程度の雑魚じゃ。何体来たところで楽しめもしねェよ」

やってきたのは複数のイレギュラーシャドウ。魔術師〝臆病のマーヤ〟、女教皇〝残酷のマーヤ〟がそれぞれ六体ずつ。
ご丁寧に駅前に続く路地と、反対側の路地から挟みこむ形で集まってきていた。
シャドウは本来タルタロスにしか現れない存在だが、ポートアイランド駅というタルタロスと駅一つ分しか離れていない場所に、力を持ったペルソナ使いが複数人集まっていた事で惹かれたイレギュラーシャドウらが集まって来たらしい。
タカヤは銃を、カズキはカットラスを装備して戦いに備える。それを見てジンも召喚器を用意しながら、ハの字眉毛の少女であるスミレに声をかけた。
「スミレはそっちの男の傍におり。お前のペルソナやとここじゃ戦いづらいやろ」
「えー、別に建物を壊してもいいなら戦えるよ?」
「それやっちゃうと面倒だから今回は休んでて。どうせすぐに終わるし」
大して広くもない場所でスミレの巨大なペルソナを出されては困る。メノウもジンと同意見だったことで、召喚器と両端に菱形の刃がついた槍を準備しながらスミレを荒垣の方へと送り出した。
仲間から言われては渋々従うしかなく、シャドウに囲まれたことで自分も戦うべきか迷っていた荒垣の傍にいけば、スミレは他の者たちを笑顔で応援する。
その応援を聞きながら湊に抱きついていたマリアもククリ刀を構え、ラビリスは深紅の手甲を装備して湊から戦斧を受け取り敵を睨んだ。
男子三人は駅側を、女子三人は反対側の敵と対峙し、スミレと荒垣と湊はその真ん中で戦いを見守る。
そうして、全員が戦いに意識を切り替えると、
『――――ペルソナ!』
全員の声が重なり一斉に六体のペルソナが現れた。
迫りくる臆病のマーヤを、モーモスが大鎌で二体同時に切り裂き、

ヒュプノスが電撃を放ち、モロスが火炎で焼き払う。
反対側では残酷のマーヤを、デュスノミアが氷結で凍てつかせ、ティアマトの槍とアリアドネの糸が形作った大剣で敵ごと砕いて消滅させた。
あまりに一方的な戦いに荒垣はレベルの違いをはっきりと理解する。これが本物のペルソナ使いの戦いかと、これまでの自分たちの戦いぶりとの違いに愕然としながら、ふと上を見上げれば、そこに新たな敵の姿を発見した。
「上だ！」
上空からやってきたのは三体の女帝〝ヴィーナスイーグル〟、咄嗟に叫んで荒垣は召喚器を構えるが、先日の暴走がチラついてしまい引き金を引けなかった。
敵が迫っている状況でそれは命取りだ。敵を倒した他の六人が荒垣の声に反応して振り返り、敵のいる上空を見上げるも、彼らが動いたところで間に合わない。
自分が召喚を躊躇ったばかりに一緒にいた他の二人を巻き込んでしまった。その事を後悔しながら、せめて直撃を避けさせるため荒垣が二人を押そうとしたとき、今までポケットに手を入れていた青年が、上空に向かって黒くなった右腕を突きあげた。
「消えろ」
直後、彼の腕が黒い炎となって上空にいた敵を呑み込んだ。
雑居ビルよりも高く立ち上った黒い炎に一同は唖然とし、敵の反応がなくなったことで腕の炎を霧散させた青年は、元通りの人間のモノになった手を何度か握りしめ、その調子を確かめるようにしながら静かに口を開いた。
「……敵の反応は消えた。だが、突然のシャドウ反応とその消滅を感知して、桐条側のペルソナ使いが来るかもしれない。薬の受け渡しはこちらでしておくから、今日はここで解散しよう」
「先ほどの攻撃について色々とお訊きしたかったのですが、確かに鉢合うのは面倒ですね。分かりました。後はお任せします。それでは、また縁があれば会いましょう」

別に会ったところで美鶴たちを撒くのは簡単だ。しかし、後でつけ回されるのは勘弁したい。
桐条グループが本気で捜査網を引けば、近隣の街に潜伏している人間くらいは一月もかからず見つけられるはずだ。
相手の能力の網くらいなら潜りぬけられるだろうが、人海戦術と防犯カメラの映像等で追われれば逃げ切れない。
裏の仕事を続けていく上でそれは不都合なので、ここは大人しく帰ることにすると言ってタカヤたちは去って行った。
＊＊＊
ストレガたちと別れた湊は、その場にいては拙いからと場所を変える事を提案し移動した。
相手が何か言ってくるかも知れないと思ったが、荒垣は素直に言う事を聞いて湊とラビリスに同行し、今はテーブルの向かいに大人しく座っている。
「んー、ウチは塩チャーシュー麺にするわ」
「……荒垣先輩は？」
「あ？　俺は……普通のラーメンでいい」
「じゃあ、ラーメンと塩チャーシュー麺と麻辣担々麺の餃子天津飯セットで」
注文を聞いたラーメン屋の店員はメモを取って厨房に戻って行く。
その姿を見送ったラビリスはおしぼりで手を拭き、湊は出された水に口をつける。
溜まり場を離れた三人は、夜食でも食べようと思っていた湊とラビリスの発案により、深夜までやっているラーメン屋にやってきていた。
てっきり、人のいない場所で話すのだとばかり思っていた荒垣は少々面食らう。けれど、薬を融通して貰う立場として拒否権はないため、大人しく座っている。
先ほどはシャドウとの戦闘という非日常なことがあったが、並んで座っている湊とラビリスはどこにでもいる普通の中高生にしか見えない。

こんな者たちが、人殺しを生業にしている裏稼業の人間と繋がっている事が信じられず、荒垣は尋ねていいものか迷いながらも、意を決して周りに聞こえない大きさで二人に尋ねた。
「お前らもあいつらみたいな仕事してんのか？」
「……してませんよ。一口に裏稼業といっても内容は様々で、仲介屋や情報屋なんてのもいれば、運び屋に殺し屋なんてのもいます。ストレガは年長の四人だけが仕事をしていますが、彼らの仕事は復讐代行といって、対象を懲らしめる程度で済ませる事もあれば殺したりもしますから、職種としては結構特殊なんです」
ストレガの請け負っている依頼はかなり幅の狭い物である。
それはリーダーのタカヤがターゲットの生の感情を見たがっている事も影響しているが、実際は彼らだけでは多種多様な依頼をこなせないことと、恨み辛みというのはいつの時代も誰かしら抱いているため仕事がなくならない事が、復讐代行などという仕事を選んだ主な理由だ。
依頼者の希望と報酬から報復の内容を決定し、軽ければ全治数週間の怪我を負わす程度のこともあるが、大体は報酬が高額な依頼を中心に受けるので殺しになってくる。
彼らの元に届いた依頼の中には湊への復讐依頼もまぎれているそうだが、どう考えても数百万では割に合わないので無視しているらしい。
湊はストレガがその依頼を受けたところで何も言ったりはしない。依頼者がいるからこそ仕事がある訳で、彼らが誰の望みを叶えようと湊には関係ないのだ。
しかし、それは彼らが誰かの望みを叶えるために協力し、素直に殺されてやるという意味ではない。
知り合いや恋人でも敵であれば殺す。そういった思考をしている彼を殺そうというのだから、やる以上は自分が殺される覚悟を持って挑まねばならない。
最新鋭の兵器を配備した軍事施設すら墜とし、数千人規模の軍隊を一人で殺し尽くす化け物。その戦力の強大さを畏怖して付けられた

異名が〝個人要塞〟。
〝死神〟というのは彼の存在その物を示した名に過ぎず、裏の世界に関わっている者たちにすれば、彼の戦力をそのまま言い表している〝個人要塞〟の異名や、裏界最大組織の久遠の安寧を壊滅させた〝名切りの鬼〟の名の方が恐れられていた。
「俺がやっていたのは仕事屋といって所謂なんでも屋です。護衛や物資の入手などもありましたが、色々と危険な事もありましたね。まぁ、今はやっていませんが」
小皿に餃子のタレとラー油を入れてかき混ぜながら話す青年の表情は普段通り。けれど、その色々と危険な事とやらが、一般人では想像もつかないレベルの内容であることは荒垣も察する事が出来た。
中等部への入学当初の時点で身体が鍛えられているとは思っていたが、まさか本職の人間を相手にした実戦の中で鍛えられているとは思わず、ほとんど才能の一言で片づけてしまっていた過去の自分の思慮の浅さを荒垣は小さく悔いる。
とはいえ、ラビリスとは今日会ったばかりでよく知らないが、やってきた餃子を仲良く分けて食べている二人が、まさかペルソナやシャドウに関してかなり深い部分まで知っているとは思わないだろう。
まして、裏稼業に関わる人間が昼間は普通に学校に通っているとは夢にも思わない。おかしいのは自分ではなく相手の方だと、冷静さを取り戻しながら荒垣は再度質問した。
「お前がそういう仕事してるってまわりのやつは知ってんのか？」
「学校関係者以外は大体知ってますよ。学校の方だと佐久間や櫛名田は家庭の事情の方から、薄々勘付いているようですが、部活や生徒会の人間だと山岸が少しだけ触れた程度ですね。勿論、どの程度の事をしているかは知らないでしょうけど」
そも、湊が桔梗組で暮らす様になったのは、初仕事でマンションの部屋を事務所にしていた桔梗組の人間を立ち退かせるため、桔梗組本部に乗り込んだことが切っ掛けである。
エルゴ研を抜けてから築かれた人脈は仕事を通じて得た物ばかりなので、学校関係で出会った者や街中で助けた者でもなければ、大概

の知り合いは湊が人殺しである事も知っていた。
話を聞いて教師だけでなく風花の名前も出た事で荒垣は表情を険しくしたが、風花が少し触れたというのは、以前、武器博物館で湊が武器を扱う姿を見たという程度のことである。
紅花とのキャッチナイフも大道芸的な危ない遊びでしかないので、荒垣が心配するような事は何もないのだが、念のためか彼はラビリスにも尋ねた。
「そっちの、ラビリスだったか？　お前も有里と同じようなことしてんのか？」
「ウチは何もしてへんよ。湊君と会ったんは湊君がお仕事やめた後やし」
「じゃ、なんで今日は一緒に来たんだよ？」
「なんでって、はよ終わったらタルタロスに行くかもしれんかったから一緒に来とっただけやで」
湊のシャドウ狩りはほぼ毎日行われている。翌日に朝から仕事があるときはラビリスだけ休んでいるが、仕事が昼からであったり休みならば、前日は湊に同行してタルタロスに赴いて訓練を積んでいる。
今日は仕事の話が終わらなかったので諦めたが、早く終わっていれば湊もそのつもりだったため、ラビリスが一緒にいるのは裏稼業とは全く無関係であった。
「……まぁ、そういう話はいいでしょう。こっちは依頼のためにきただけだ。別に俺たちの情報を貴方に渡す義理はない」
これ以上の質問は受け付けない。はっきりと湊がそう告げれば荒垣は黙るしかなくなる。
相手は見るからに怪しいタカヤたちほど危険な雰囲気ではないが、非日常の存在が日常の中に溶け込むからこそ危険だと荒垣は本能で理解している。
自分より遥かに強いカズキを上回る実力、上空のシャドウを一掃した黒い腕など、有里湊には謎が多過ぎた。
学校での彼のことはそれなりに信用していたが、裏の顔があると知ってしまえば、その危険度も含めてタカヤたち以上に信用ならない

と荒垣は判断する。
　そうして、しばらくは会話もなく運ばれてきた料理を食べていると、ほとんど食べ終わった頃になって、湊が薬の入った瓶と銀色の携帯用タブレットケースをテーブルに置いた。
「これが制御剤です。一日に一錠、もし二錠飲むなら間に六時間は開けてください。飲むタイミングはなるべく食後で、風邪を引いたときなど体調が悪いときは飲まないでください。ビタミン剤など栄養補填のサプリメントとは一緒に飲んでも構いませんが、例え鼻炎薬や酔い止めであっても他の薬とは一緒に飲まないように。優先順位は他の薬の方が上ですから、体調不良時は飲むのを止めていいです」
　出された瓶を受け取って荒垣は中の錠剤を見つめる。
　丸い形をした一センチほどの小さな白い錠剤。こんな物でペルソナが制御出来るとは到底思えないが、実際に服用している風だったタカヤたちのペルソナはとても力強かった。
　ならば、彼らが紹介した人物の持ってきた物も同一の薬なのだろうととりあえずは信用して、いくつかをタブレットケースに移してから、両方をポケットにしまい込んだ。
　荒垣が薬を受け取ったのを見た湊は、
「後は――――これも預かっておきます」
　そういって、荒垣が瞬きをした間に〝法王〟の描かれたタロットカードを持っていた。
　彼が何をしたのか分からない。だが、荒垣は自分の中に存在したはずの力が消えていることに気付いた。
「お前、いま何した？」
「何ってペルソナを抜いただけですよ。ああ、俺が持ってる間は先輩はどうやってもペルソナを召喚出来ませんから、もしシャドウと出会ったら逃げてください。ただの適性持ちと違って、ペルソナがいなくても武器とかでダメージは通せますけど、先輩のレベルだとタルタロスの第一層にいる低級シャドウしか倒せないと思うんで」
　そんな事が可能だとは初耳だ。影時間が消えれば能力も消えるかもしれないが、当面その見通しが立たないので、荒垣は力を封じて擬

似的にペルソナを捨てるために制御剤を求めたのだ。
しかし、湊がやったように他者にペルソナを預ける事が出来るのなら、毎夜影時間を体験しなければならないことは変わらないが、とりあえずは暴走の危険を考えず力を放棄できることになる。
桐条グループにも同じ事が可能かは不明だが、どうして他者のペルソナを奪える湊が制御剤まで用意したのか荒垣は尋ねた。
「ペルソナを抜いたら制御剤は必要ないんじゃねえのか？」
「より安全策を取っただけですよ。抜いても結びつきが完全に消える訳じゃない。制御が弱まれば先輩の中に戻ってしまいますから、制御剤を服用するかは先輩の判断に任せます」
この青年はペルソナを抜いたと言っただけで、奪ったとは言っていない。なら、彼の言う通り制御が弱まればお互いを呼び合って戻るのかもしれない。
もっとも、それはただの嘘で、本当は制御剤を飲む必要がなくても、飲む必要があると言われただけで〝寿命を削る毒〟を飲み続ける覚悟があるかを試している可能性もある。
目の前にいる青年の表情からは一切内面が読めないので真実を知ることは諦めるが、ここは彼の言った事が真実であると仮定してより安全策で行こうと、瓶から取り出した薬を荒垣は水で流しこんだ。
「フゥ……代金はいくらだ？」
「とりあえず、貸しにしておきます。近いうちに何か頼むと思うので」
受け取った薬の代金を払おうと財布を取り出した荒垣に湊は薄い笑みで返す。
裏稼業の人間は全員がこんな人を馬鹿にしたような笑みしか浮かべないのかと尋ねたくなるが、対価は金とは指定されていなかったので荒垣に選択権はなく、ただ完全に言いなりになる気はないという意思表示だけはしておく。
「そっちの仕事なんざ頼まれてもやらねえぞ」
「そういうのじゃなくて、まぁ、俺が影時間に動き易くするための仕込みです」
「……そうか。俺は先に帰らせて貰う。代金は置いて行くぞ」

「ええ、さようなら」
テーブルの上に千円札を置いた荒垣は席を立って店を出ていった。料金は七百円だというのに、丁度出すのが面倒だったのかお釣りにこだわらないのかは不明だが、置かれたお札を回収してから食事を再開する湊にラビリスが尋ねる。
「なあ、アベルって盗ったペルソナは戻らへんいうてなかったっけ？」
「ああ、本人がカードを砕かない限り戻らない」
湊がアイギスのペルソナを持っていると聞いたときに、ラビリスはアベルの能力について説明を受けていた。
現在はネガティブマインドの期間だが、若藻やアベルのような特殊能力持ちのペルソナはホルダーに入れて時期に関係なく呼べるようにしてあるため、湊があの一瞬だけ時流操作で加速しながら〝楔の剣〟を呼び出してカストールを奪ったのだとラビリスも気付いている。
しかし、人を殺めた後悔から力を捨てたがっている者の望みを、リスクなく叶えるだけの力を持っていながら、どうして嘘を吐いて制御剤という劇薬を飲ませたのか彼女は理解出来なかった。
「せやったら、なんで嘘吐いて制御剤なんて飲ませたんよ？」
「罪には罰を、そうじゃなきゃ背負う人間は救われない」
「よーわからんけど、影時間の記憶補整で罪に問われんから、それで苦しんでるあの人に罰を与えたっていうこと？」
荒垣が人を殺めたのは事実。けれど、記憶の補整で別の事件として置換わった罪は一生問われる事がない。
自分の犯した事に少しでも罪悪感を覚える人間であれば、そういった状態は罰を受ける以上に辛いのだ。
罰を受ければ、その代わりに赦される可能性がある。だが、存在する罪をあやふやにされれば、赦される機会を失い、ゆっくりと心が蝕まれ最後は壊れてしまうだろう。
そんな状態はあまりに可哀想なので、わざと逃げ道を用意しながら薬を飲むという辛い方を選ばせたのかとラビリスが問えば、レンゲで天津飯を口に運んでいた湊は頷いて返した。
「ああ、よく分かってるじゃないか」

「あんま分かりたないけどね。それって気持ちはマシになるだけで、結局は自殺に追い込んでるだけやろ？」
「薬を飲むのを強制した覚えはない。やめるかどうか自由だ。というか、あんなのいくら飲み続けたって体調が悪くなる程度で死にはしないさ」
罪悪感を薄める効果があればそれで十分であって、最終的に薬を飲み続けるかどうかは本人次第。
さらに言えば、渡した薬を飲み続けても、説明した服用方法を守っていれば死にはしないと、食べ終わった湊は水を飲みながら淡々と告げる。
ＥＰ社の方で制御剤についての説明を聞いていたラビリスは、青年の言葉の意味を理解しかねるが、もしかして天然ペルソナ使いと人工ペルソナ使いでは効果が違うのかと考える。
「制御剤て寿命削る劇薬やろ？　天然覚醒者やと効果が違ってたりするん？」
「身体の構造が一緒なんだから、効き目に違いはあっても身体に負担がかかるのは一緒だ。ただ、あれはカルシウムのサプリにバイアグラやグリメピリドを少量混ぜた物で本物じゃないんだ」
「え、バイアグラってその……大丈夫なん？」
渡した薬が偽物と聞いて少し安心するが、その偽物の薬の種類を聞いて、ラビリスは視線を泳がせつつたまに湊のズボンの方をちらりと見る。
彼女も一応子どもの作り方くらいは知っており、バイアグラがどのような効果を持っているかも知っている。
故に、そんな物を飲んでしまったら、荒垣の真次郎が大変なことになってしまうのではと思ったのだが、ラビリスの視線に気付き、顔を掴んで見るのをやめさせながら湊は彼女の問いに答えた。
「何故そっちだけ心配するのか分からないが、どっちも少量だし混ぜてはいない。バイアグラ入りの錠やグリメピリド入りの錠があるから、血圧が上昇することもあれば、血糖値が下がる事もある。飲んだ錠によって効果がランダムで出るため、先輩は制御剤の副作用だと思

うだろうな」
　そも、バイアグラを飲んだところで、性的な刺激がなければ何もなく効果時間を終えることもある。その場合は血圧の上昇で少し苦しくなる程度だろうが、血糖値を下げる効果のあるグリメピリドと効果がランダムで出る事により、薬を服用した本人はそれが副作用だと思うはずだった。
「せやから、食後とか他の薬と併用したらアカンって言ってたんや」
「そういう事だ。空腹時にグリメピリドの方を飲んだら血糖値が下がり過ぎて倒れるかもしれないからな。一応、医者として最低限の気遣いはしてるさ」
「湊君のそういうちょっと意地悪やけど優しいとこ好きやわ」
「別に優しさでやってる訳じゃない。あれには今後は駒として動いてもらうんだ。使える物は使う主義だからな」
　言いながら湊が伝票を持って立ち上がるとラビリスも後に続く。
　ただのサプリメントではなく薬を混ぜたのはどうかと思うが、それも本物の制御剤だと信じさせる仕込みと思えば納得できる。
　薬の販売をしているＥＰ社にいて、本人も薬の知識があるからこそ出来る裏技だが、傷付く人がいないのであれば何も言うまいと、会計を終えて店を出た湊の隣に並ぶラビリスは笑みを浮かべていた。

第百五十七話　女子会

１１月２５日（日）
午前――教習所
その日、荒垣真次郎は朝から自動車学校にいた。
「それじゃあ、とりあえず押していこうか。ゆっくりで良いからね」
「……うっす」
自動車学校と言っても、彼が取りに来たのは車ではなく普通自動二輪のＭＴ免許だ。
教官に言われてバイクのハンドルをしっかりと握ると、一段階のコースをゆっくり押して歩いて回る。
学校に休学届を出した彼が、何故急にバイクの免許を取りに来たのか。それは先日、有里湊という青年に急に呼び出されたことが原因だった。
呼び出された場所に向かうと彼は一人で待っており、少し話をしようと近くの喫茶店に入った。
彼も初めて入るという店だったが、秘密の多い彼の言葉などどれだけ信じられるか分からない。
けれど、制御剤を融通して貰っているため、話くらいは聞こうとコーヒーを注文して待っていれば、青年は荒垣にバイクの免許を取るように言ってきた。
何故、急にバイクなのか。そもそも、荒垣がバイクの免許を取ったところで彼に何の得があるのか。
訊きたい事は沢山あったが、質問を返す前に湊の方から理由を説明してきて、彼が言うには荒垣が免許を持っていることで湊が動き易くなるのだとか。
「よーし、じゃあ発着点に着いたら跨ってみようか。ちゃんと乗る前に安全確認をするようにね」
「……うっす」
荒垣がバイクの免許を持っていることで彼が動き易くなるというからには、きっと湊は荒垣のフリをしてバイクを使った活動をするの

だろう。
勝手に名前や姿を使われる方にすればたまったものではないが、なんとなく、これまでの付き合いから彼は荒垣のことがなくても同じ行動を取る気がしたので、別に荒垣に免許の取得を強制するつもりはないに違いない。
なので、ちょっとした恩から彼の言う事を聞くのも吝かではなかったのだが、古いアパートの部屋で一人暮らしを始めた荒垣はそれほど金銭的に余裕がある訳ではなかった。
分割払いが可能と言われても十万近くの出費はでかい。これでは流石に二つ返事で了承する訳にはいかないため、今は金銭的に余裕がないと返せば、驚く事に費用は全て湊が持つと言ってきた。
「最初はクラッチをしっかり握ったまま、アクセルを回しつつゆーっくりクラッチを離す様に発進だよ。走り始めたらクラッチを再度握ってすぐに二速にあげてコースを周回して慣れて行こう」
後輩にそんな大金を奢ってもらうことは出来ないと返すも、湊は駒に必要な物を与えるのは当然の事だとのたまった。
既に自動車学校への申し込みも済んでおり、荒垣は行ける日に住民票と印鑑を持って入学しに行けばいいだけ。
そこまで用意された上に、最初の制御剤の代金は免許を取得する事だと言われてしまえば、荒垣に拒否する事は出来なかった。
別にバイク自体には特に興味も何もなかったが、いざ乗ってみると悪くない。美鶴が暇なときに整備していたのを目にしていたため、彼女もこういった不思議な解放感にハマってバイクを好きになったのかもしれないと、バイクを走らせながら荒垣は久しぶりに事故の事を忘れて他の事に取り組めていた。

昼――ファミレス〝Ｊｏｎｎｙ’ｓ〟
中央区にある全国チェーン店のファミレス〝Ｊｏｎｎｙ’ｓ〟、お昼の混雑時で店の中は客で溢れているが、今日集まった女子四人は注文を終えてドリンクバーを飲みながら雑談をしていた。
「……それで、湊とはどこまで進んだの？」

四人掛けのテーブルに、ゆかりと美紀、風花とチドリで分かれて座り、チドリは斜め左に座っていたゆかりに視線を向けるなり、ズバッと他の女子たちも気になっていることを尋ねた。
訊かれた少女はある程度予想していたらしく、嫌そうな顔を一瞬しつつもすぐに呆れた表情になって言葉を返す。
「そういうのって、やっぱりプライバシーとかあるし、あんまり踏み込んで訊かないものだと思うんだけどね」
「芸能人のプライバシーなんてあってないようなものよ」
「本人はまだ一般人のつもりみたいですけど」
全国レベルで籠球皇子ブームを起こした湊は、一般人でありながら世間からは芸能人のような扱いを受けている。
本日部活メンバーで集まった中に彼がいないのは、純粋に予定が合わなかっただけだが、彼の話によると年末年始の特別バラエティ番組への出演オファーが来て、一回きりなら良いかと十一月の初旬に撮影を行ったのだとか。
内容については局との約束でまだ秘密らしいが、そうやって一度でもテレビに出演した以上は、周囲の扱いも一般人から芸能人という扱いに変わりだす。
彼が番組出演について話したのは周囲の人間だけだが、既に話は広まっておりファンクラブがさらに宣伝しているので、周囲の対応の変化についてあまり意識していない本人以外に結構な影響が出ていた。
もっとも、部活メンバーから見れば湊は周囲が変化しようと我が道を行くタイプ。仮に本当に芸能人として活動を始めようとも、きっと今と同じように人助けを続けつつ人付き合いを面倒がる彼のままでいるに違いない。
とはいえ、湊が芸能人になりかけているのは事実であるため、チドリは芸能人のスキャンダルは大衆に暴露されるのが常だとゆかりに説明を求めた。
そんな少女の熱心さに呆れた表情で返しながら、ゆかりは話す事に恥ずかしさを覚えつつ、まぁ、訊かれるのは予想していたと簡単にだけ報告する。

「まぁ、どこまでって言っても別にデートとかも特にしてないし。付き合いだしてからとほとんど変わってないんだけどね」
「え、ゆかりちゃんデートしてないの？　有里君から誘われたりとかは？」
「前にテスト期間明けに誕生日祝いも兼ねて寮の部屋に来たけど、それ以外はこの前一回買い物に行ったくらいかな。なんかやたらと仕事がーって言ってて会えないし」
　てっきり週に一回くらいはデートをしていると思っていた風花は、諦め気味に苦笑するゆかりを見て可哀想だと暗い表情を浮かべる。
　湊はテレビ出演の仕事は一度きりで、それ以外には雑誌のインタビューすら受けていない。
　ということは、彼のいう仕事は風花たちが知っている眞宵堂のバイトか中華料理屋のバイトということになる。
　実際はＥＰ社や病院の仕事なのだが、知らない彼女たちでは想像しようもないので、金銭的に余裕があるにも関わらず、バイトばかりに力を入れて彼女を放っておいている湊の彼氏としての評価は、風花や美紀の中では落第点ぎりぎりまで下降していた。
　けれど、他の女子がそうやってゆかりに同情し、湊に対して僅かな怒りを感じている中、ただ一人両者の今の状態に何も感じず質問を続ける者がいた。
「……部屋に連れ込んで何したの？」
「連れ込んでって、有里君の方から朝っぱらに部屋に行くって電話が来たんだけど」
「結局部屋に入れたんでしょ」
「いや、来たら入れるしかないでしょ。ケーキ屋が開く前だからって手作りケーキ持参だったし」
　チドリの口調は普段通りの淡々としたものだが、集まっている女子の中で誰よりも興味津津だということを他の女子は理解する。
　何が彼女をそこまで突き動かすのか。こう見えて恋バナ等に興味があって大好きなのか、それとも自分の家族である青年が他の女子とどういった付き合い方をしているのか知りたいのか。

相手の表情からは何も読み取る事は出来ないが、多分、後者なんだろうなと本人以外は共通の認識を持っていた。
故に、彼女ばかりがズバズバと聞いて来ぬよう、ゆかりは反対に他の者に質問してみる事にする。
「あー、そういえば他の人に逆に聞きたかったんだけどさ。皆と二人きりのときの有里君ってどんな感じなの？」
「私はそもそも有里君と二人きりになったことがほとんどないので分からないですね。一応、普段と変わらないように見えましたが」
「私もあんまりないけど、学校にいるときより親切っていうか優しい気はしたかな。といっても、普段周りの人に気を遣ってるのが、二人だから集中してるのかもって程度の違いだけど」
聞いて成程とゆかりも納得したように頷く。確かに普段の湊の優しさは一緒にいる者だけでなく、そばを歩いているような他人にも発揮されたりしている。
それが自分の周囲の全方位に対して気を配っており、何か気付いたら反応しているのだと考えれば、二人のときは全方位までは気を配っていないことで、共にいる者に優しさが集中し易くなっているのかもしれない。
人助け中の彼も、二人きりのときと同じように、助け終わるまでや切りのいいところまでは親身に接しているため、困ったときにとても良くしてくれたという補整が掛かり、今もファンを増やし続けているのだろう。
ゆかり自身、部活メンバーでいるときよりも、デートなど二人でいるときの方が湊が甘い気がするので、てっきり恋人効果によるものだとばかり思っていたのだが、実際は意識を割く比率によるものだったかと少しがっかりした。
「はぁ……やっぱ、有里君って恋人には不向きな性格してるんだよね。人助けを当然のように行うのは格好良いけど、優先順位を付けるときに他人の比重が大きくて、知り合いの比重が普通の人より小さいっていうか」
普通の人間であれば『知り合い８：他人２』といった具合に、困っ

た状況に陥っているのを見ても、知り合いを優先して見て見ぬふりをしたりする。
人助けとは自ら余計なトラブルに首を突っ込みに行く行為なので、知り合いが一緒にいるのであれば、自分だけの問題では済まなくなる可能性がある以上、知り合いを優先して他人を見捨てるのは別におかしくはなかった。
けれど、有里湊という人物は『知り合い６：他人４』くらいの割合で意識を割いているようで、デート中に会話をしていても、急に少し待っててくれと迷子の元に向かったりしていた。
小さい子が泣いていたので、湊がすぐ行動に移ったのも分からなくはない。だが、相手が若い男だろうと湊は普通に助けるため、他の人よりも特別に見て欲しいと思ってしまう彼女にすれば、湊の性格はやきもきさせられる悩みのタネであった。
良い事をしてるだけに怒るのも変で、どうしたものかと溜め息を吐いてからゆかりがストローでジュースを飲めば、彼女の言葉を聞いたチドリが淡々と湊について話してくる。
「……あれは精神疾患だから、治療自体は可能よ」
「精神疾患て、心の病気であんな風に人助けしてるってこと？」
「ええ、昔よりはマシになってきてるけどね」
他の者は湊が医者の診断書を貰っていることは知っているが、それがどういった病気に関する物なのかは知らない。
医者から診断書を貰う程のことなど気安く訊いていいものではなく、チドリも過去に病気を治療した経歴があると聞いているため、もしトラウマや過去の辛い気持ちを思い出してしまった場合の事を思えばチドリにも迂闊に聞く事は出来なかった。
そうして、話が一度途切れたところで店員がやってきて、彼女たちの前に料理を並べていく。風花はエビとトマトのクリームパスタ、美紀は和風おろしカツ、チドリはきのこハンバーグ、ゆかりはシチューの煮込みハンバーグ。全員がばらばらの物を注文したけれど、別に仲が悪いということではなく、自分が食べたい物を好きに頼んだだけだ。

料理が並べられると、美紀が食器の入ったカゴからフォークなどを取り出して全員に配っていく。受け取った少女らはお礼を言ってから手を合わせて行儀よく挨拶をする。
『いただきます』
自宅などではしっかりとやるが、外で友人たちと食べるときなどには忘れがちになる挨拶も、真面目であったり、家でしっかりと躾けられているこの少女たちには関係なく、当然の事として行う。
そして、挨拶を終えれば、鼻孔をくすぐり食欲を刺激する香りを楽しみながら、フォークを伸ばして一口大にした料理を口へと運ぶ。
チェーン店であっても、調理する人物の腕で味は結構変わるもの。今日の料理は特に問題がないことから、調理を担当したのは新人ではなくベテランなのだろう。
そんな風に料理を作っている人物のことを考えつつ、出来たての料理に舌鼓を打っていると、会話を再開するべくゆかりは全員に話しかけた。
「あのさ、皆ってキスしたことある？」
「と、突然だね。私はないよ。男の子と付き合ったことないし」
ゆかりの唐突な質問に動揺しながらも、一回水を飲むことで落ち着いた風花が答えを返す。
舞台で行った劇の中で婚約や結婚の話は出たけれど、風花の身の安全を考えてキスシーンは存在しなかった。
劇の一環だということになってしまえば、いくら彼女がいようとキスをするのが湊という青年だ。
よく分からないがクラスのほぼ全員がその共通認識を持っていた事で、女子たちはお互いを牽制し合って、最終的に誰がヒロインになろうと大丈夫なように脚本からキスシーンは削除された。
故に、良くも悪くもキスシーンを体験せずに済んだ風花は、自分はまだファーストキスも済ませていないと照れたように笑う。
「美紀ちゃんも、お兄さんが厳しい方だからまだだよね？」
「はい。付き合っていない方とするつもりもありませんし、そういった事はしっかりと順序立ててと考えています」

一人の少女として恋愛に憧れの様なものは抱いているが、残念ながら風花も美紀も恋というものがどんなものか分かっていない。
映画やドラマで俳優を見て格好良いなと思ったりはするが、それを言えば身近にぶっ飛んでイケメンな青年がいるため、同年代のイケメン少年らを見ても顔は整っているなくらいにしか思わなくなっている。
恋をする様なドキドキも、同じく青年からちょっとした親切を受けた際に感じられるので、それでも青年に惚れていないということは彼女らの恋はまだ当分先なのだろう。
実際は青年と親しくしているうちに感覚がおかしくなっているのだが、その事に誰も気付かずに笑っていれば、残った赤髪の少女が口に運んだライスを飲み込みながら答えた。
「……私はあるわよ。小学校五年生くらいのときに湊としただけだけど」
「家族なのに？」
以前、湊が部屋に来たときにゆかりが質問すれば、彼はチドリのことを女性とは認識しているが扱いは家族だと言っていた。
家族でも親愛のキスなどをする者はいるが、小学校五年生の男子と女子がするのは親愛のそれとは違っているように思える。
家族なのに異性としてキスするのは問題があるのではと、ゆかりが不思議そうに尋ねれば、チドリは淡々とした調子で返して来た。
「別に血は繋がってないもの。結婚だって出来るんだし、キスしようが一線を越えようが倫理的にも問題ないわ」
聞いて他の者はなるほどと思った。『家族』と『同年代』という二つの単語で二人を結びつけて考えていたが、無意識に『兄妹』という関係を連想していたようで、そこを『他人』に置き換えれば先ほどの話もスッと入ってくる。
真田と美紀がキスや一線を越えようとすれば、近親ということでタブーに抵触するが、同じ家族であっても湊とチドリは問題なく結婚出来るため、二人さえ良ければ周りに反対されようが問題ないのだ。
ただし、問題がないこととキスしたことへの興味は別で、過去の二

人の行動になんら問題はなくとも、どうして家族であった二人がキスするに至ったのかゆかりは知りたがった。
「なんでしたのか訊いても大丈夫？」
「別にいいけど、半分くらいその場のノリよ。最初にお酒で少し酔った桜が湊にキスして、なんで湊にキスしたのかって思って、とりあえず上書きしておいたって感じ」
「ゴメン、意味分かんない……」
母親であり姉でもある保護者の女性が、お酒に酔って可愛い湊にキスをしたのは分かる。留学前の湊は格好良さと綺麗さと可愛さの三種を備えていたので、もっと幼い頃は可愛さの比率が高かったに違いない。
ならば、大人へと変わりつつある少年を愛おしく思い、お酒で感情が表に出やすくなった状態であれば、ついキスしてしまう者もいるだろう。
だが、幼い少女では相手が少年にキスした理由を理解出来なかったにしろ。次に取った行動が斜め上の発想でゆかりたちは意味が分からなかった。
少年にキスした相手を諌めたり、感情を爆発させて怒りをぶつけたりするなら分かった。幼い少女の可愛い嫉妬だ。それを見た周りもきっと生温かい視線で怒れる少女を見るに違いない。
しかし、何が起これば、不思議に思って自分のキスで上書きを敢行するという発想になるのだろうか。
普段から青年のことを自分の所有物と見なしており、他人が勝手にマーキングしてはならないとでも考えていたのか。それとも自分も同じ事をすれば相手の気持ちを理解できると思ったのか。
何にせよ自分たちでは答えは分からないので、本人に行動の理由を尋ねてみれば、チドリは口を紙ナプキンで拭きながら当時何を思ってそんな行動を取ったのかを語った。
「……特に理由なんてないわ。家族でもそういう事をしていいんだって思って、桜がいいなら私も良いわよねって感じでキスしたの」
「ああ、ノリってそういうことなんだ」

「ええ、長く一緒にいるから今さら急に男を感じてキスしたりってのはないわよ。雰囲気に流されてキスするにはお互い冷めてるし」
話を聞いた他の者たちは、少女の言葉に納得し過ぎて苦笑する。
湊もチドリも入学当初から他の生徒よりも大人びて冷めていた。孤立しなかったのは二人が一緒にいたからであり、話しかければ答えてくれる程度に反応を返してもいたからだ。
入学時点でそんな反応を見せていたなら、二人がそういった性格なのは幼少期からということになり、子どものくせに子どもらしく感情的に動くことは少なかったに違いない。
そんな二人が雰囲気に流されてキスする場面は確かに想像出来ないので、当時のチドリは家族の新しいコミュニケーションを試した程度の認識だったようだ。
ゆかりたちがチドリと湊の関係に改めて納得した事で、料理を食べ終わっていた少女らは追加でデザートを注文し、それらがやってくるのを待つ間もさらに会話を続ける、
「それで、どうしてキスについて訊いてきたの？　湊のキスに何か不満でもあった？」
「え、いや、そういう訳じゃないけど。ってか、キスに不満ってどんなのよ」
「下手だとか場所を選ばずにしてくるとかあるでしょ？」
急にキスについて尋ねてきたからには、彼氏である湊と何かしらキスでトラブルか悩みがあるはず。そう予想してチドリが質問すれば、ゆかりはアイスティーをストローで混ぜながらポツリと呟いた。
「なんていうか、嫌じゃないんだけど駄目なのよ。その、キスされると、その間だけ思考力が落ちていくっていうか」
言いながら思い出されるのは誕生日祝いのときのキス。
いつもキスは湊からだが、繰り返すうち次第に考えられなくなりながら自分からも求めて、最後は頭が真っ白になって身体中の力が抜けてしまった。
あれが何であるかはゆかりも理解しているが、どうしてあんな状態になっていったかを自分ははっきりと知っておかなければならない。

そんな決意を瞳に宿しながらゆかりが皆から意見を求めれば、雑誌の懸賞クイズを解くくらいの気軽さで考えていた風花が、思い付いた様子で自分の推測を口にする。
「それって有里君とのキスに夢中になってるだけじゃないのかな？」
「上手な人が相手ですと没頭してしまうとも聞きますから、ゆかりさんもそういったパターンな気がしますね」
二人の少女が言った通り、キスして思考力が低下するなど究極的にはそこに落ち着いてしまう。
もっと論理的に別の理由を求めるのなら、キスを繰り返すうちに酸欠になって判断力等が低下するなど、少しくらいはそれらしい理由もある。
だが、風花たちの言った事に比べると説得力が欠けているため、やはり理由はそれしかないのだろうかと、ゆかりは彼のキスを知っているもう一人の少女にキスの感想を尋ねた。
「え、えっと、チドリは有里君とキスしたときどうだったの？」
「どうって……別に。普通に小慣れてて上手かったけど？」
訊かれた少女は珍しく一度視線を逸らして答えた。昔の事とはいえ、流石に友人たちも知っている青年とのキス事情など、改めて詳しく話すのは恥ずかしかったらしい。
とはいえ、彼とのキス自体は何の問題もなく、むしろ安心感やら幸福感やら色々な物に包まれる素晴らしい体験だったと、記憶を掘り起こした少女は頬を朱に染めながら告げれば、質問した少女がずっと気になっていたんだとばかりに質問を続ける。
「あ、そうだ！　それだよ。有里君ってなんであんなに慣れた風なの？」
「……知り合いに習ったからって言ってたわ。イリスとロゼッタと紅花あたりから、一線は越えてないけど女性の悦ばし方をみっちり教わったって。だから、湊に性交渉の経験があるかはともかく、仮に今日これから処女の女性を抱く事になっても、問題なくリード出来るでしょうね」
相手が一般人であるため裏の仕事について説明する事は出来ない。

保護者が極道であったり、湊の実家が暗殺者の一族であることも秘密にしているが、彼が裏稼業をしている事の方が重要度は高いのだ。
ただし、裏稼業をするために身に付けた技術であるため、一番重要な部分を隠して話そうとすると、色々と不自然になってしまい当然周りからは突っ込まれる。
「え、あの、チドリちゃん。なんで有里君はそんなの習ったの？」
「……さぁ？　覚えておくと便利だからって話だったと思うけど、本人がそういった男女のあれこれに興味を持っていないから、別にファンの子たちを食い散らかすとかは心配しなくていいわよ」
別に風花はそんなところは心配していない。彼がそのつもりならば、月光館学園の女子は半数以上が純潔を散らすことになるのだ。
そんな状態になれば、いくらなんでも学校側も気付いて、擁護しきれず彼を転校させているはず。
まぁ、女子たちが気にしていないと嘆願書を学校に出せば転校まではさせられないかもしれないが、どちらにせよそんな話は聞いていないので、風花も湊の人となりは信用していた。
しかし、だからこそ意味が分からない。確かに覚えておけば後々役立つだろうが、中学生が入学前から大人の女性たちに性の手解きを受けるなど普通ではない。
一線を越えていなくとも、お互いの裸を見せ合ったり、性器に触れるなどはあったに違いない。
風花にすればそれだけで十分に爛れていると思え、話を聞いていた美紀も同じように感じていた。
「浮気の心配はともかく、技術習得のために大人の女性からそういった事を教わっている男子も、正直あまり信用出来ないと思うのですが……」
「出来ないより出来た方がいいじゃない」
青年の事を悪くいわれて怒っているのか、チドリはムスッとした表情で正論を言うが、決定的に何か間違っている。
事故で両親を失ってから色々と苦労して過ごして来た彼が、同年代の者たちとは違った人生を歩んできた事はなんとなく察しているが、

流石にそういった方面の技術は必要ないはずなのだ。
仮に生きるために必要だったなら、湊は子どもの頃から如何わしい店で働かされていたことになってしまう。
幼少期から非常に美しい顔立ちをしていたので、そんな少年で遊べるのならと歪んだ性癖を持った大人が、奪い合うように彼との時間を買おうとしたはずだ。
だが、いくらなんでもそんなはずない。以前、部室でチドリに見せて貰った写メで、小学校低学年の頃には既に現在の保護者の元で二人とも暮らす様になっていたと把握している。
ゆかりたちが会った女性はとても上品で優しい人物だったので、彼女の元にいて湊がそんな過酷な仕事についていたはずがなく。だとすれば、湊がそんな技術を習得する理由など丸っきり存在しないはずだった。
「ねえ、なんで有里君はそういう技術を身に付けようと思ったの？便利って言っても使う場面て限られてるし、彼の性格を考えるとそっち系の行為とかって興味無さそうなんだけど」
「……私に訊かれても知らないわよ。ただ、昔の湊は一人で何でも出来るようにしようとしてたから、そういう技術も使う場面があるかもしれないって考えたんじゃないの」
チドリだってその話は後から聞いたのだ。彼がどんな技術を習得しているかなどほとんど聞かされていないため、どうして習得しようと思ったのかなど、過程の部分をチドリは一切知らない。
それでも、湊は日常生活で習得した技術を悪用しないでいるので、他の者が不安に思うのは分かるが、あまり踏み込んで聞いてやるなと釘を刺した。
すると、少女たちは完全には納得していないようだが、本人がいないところで訊いても答えは出ないため、話題をゆかりと湊についてのことに戻した。
「ねえ、ゆかりちゃん。ゆかりちゃんは今も仮の恋人だと思って有里君に接してるの？」
「え？　そりゃまぁ、そういう設定だし」

「ですが、仮の恋人に対してでしたら、簡単にキスを許したりはしないと思いますし。そうやってキスのこと一つで真剣に悩んだりもしないと思いますよ？」
　言われたゆかりは他の者たちの言葉について考えてみる。自分と湊は仮の恋人。期間が定められていて、それが過ぎればゆかりの意志で自由に解消する事が出来る関係だ。
　そんな相手に真剣に悩むなどおかしいと言われ、ゆかりは心の中で何やら複雑な思いが渦巻くのを感じながら、表情は素っ気なくを意識して返す。
「ふーむ、そう言われてもね」
「……誤魔化してると、後で気付いたときに後悔するわよ。最短であと一ヶ月なんだし。それくらいはちゃんと湊を見てみれば？」
　青年の事を大切に思っている少女が、二人の関係についてアドバイスをしてくるなど意外だった。
　彼女なら別れるように仕向けてきて、大切な青年に悪い虫がつかないよう頑張るとばかり思っていたのだ。
　けれど、そんな少女からちゃんと相手を見ろと言われてしまえば、ゆかりも自分の中で渦巻いている不思議な感情をしっかりと見つめ直さなければと思えてくる。
「うん、まぁ、やってみる」
　自信はない。だが、残り約一ヶ月。それくらいはちゃんと相手を見て、逆に相手にも自分を見て貰うのも良いかもしれない。
　友人らのアドバイスを素直に受け取ったゆかりは、やってきたデザートを食べながら、今後の彼との接し方について真剣に考え出すのだった。

第百五十八話　理想の少女

午前――ゆかり自室

その日、ゆかりは自室のベッドに寝転がって一人考えに耽っていた。

湊との恋人期間は今年一杯で、それ以降はゆかりが別れを切り出すまでは自動で延長される。

ゆかりとしては、相手が別れたいと言ってきても期間終了でいいと思っているが、変なところで律義な相手の事だから、きっとゆかりが言って来るまでは今の関係を続けるのだろう。

（……真剣に考える、か）

自分が湊の事をどう思っているかなど分かっているつもりだった。

不良みたいな見た目で、だけど色んな人に親切。面倒臭がりで、だけど色々と世話焼き。そんな天邪鬼な性質の彼はゆかりにとって大切な友達。

しかし、言われてみると、少女は自分の考えと行動はとてもチグハグだと思った。

ゆかりと湊は恋人である。仮初だろうと現在の関係はそれで通っている。

恋人ならキスをしても問題ない。だから、ゆかりは湊からキスされても拒まなかった。

（けど、肩書きが恋人でも友達だと思ってたら拒むよね）

そう、ゆかりが一番おかしいと思ったのはそこだった。

自分は湊を友達だと思っているのに、関係の上では恋人だからとキスを受け入れた。

周りからすれば恋人なのだからキスくらいして当然と思うだろうが、主観では友達のままなはずなのに、受け入れてしまっているのはおかしい。

ゆかりが誰彼構わずキスを受け入れるような人間であれば、別に友人の男子と簡単にキスしてもおかしくはない。

だが、彼女にそういった趣味は無く、むしろスキンシップで触れら

れるのも拒む程度にガードが固い少女であった。
　そんな少女が肩書き一つでキスを受け入れるだろうか。他の者より信用しているというプラス効果が働いたのかと考えるが、同じように信用していても荒垣や真田からのキスを受け入れる気にはならない。
　自分の過去や家庭環境について聞いていて、尚且つ相手も自分と同等かそれ以上に辛い目に遭っているから、同じ目線で物を見ていることにシンパシーを感じて近付く事を許可しているのかもしれないと考えるも、だからと言ってそれだけではまだ条件が不足しているように思えた。
（有里君は優しい。色々と気を遣ってくれるけど、同情とかじゃないって分かるから安心して話せる。お母さんのことを話したら、単純に同意するんじゃなくて、どうしてお母さんがそんな風になったのかも考えた上で自分の思った事を正直に話してくれた）
　同意して貰えるとばかり思っていたのに、ゆかりも十分ガキだと言われたときには少しムッとした。
　おかしいのは母親で、誰だってそう考えると思っていただけに、全くの予想外だった彼の言葉は今でもしっかりと覚えている。
　しかし、今では彼の言葉はむしろ自分のことを考えて言ってくれたのだろうと、そんな風に思えるようになっていた。
　母親の生き方が許せなくて、盲目的に嫌うようになってしまっていたゆかりの目を覚まさせてくれた。
　そのおかげで、今も苦手意識や母親の生き方に対する不信感などは残っているが、少なくとも原因などについても意識を向けられる程度に余裕が出来た。
（彼は優しい、あったかい、一緒にいると……嬉しい）
　そんな自分にも色々と変化を齎してくれた青年と一緒にいると嬉しく感じる。楽しかったり、安心したりもするのだが、最も適していると思える言葉が〝嬉しい〟なのだ。
　どうして彼と一緒にいると嬉しくなるのか。仰向けになって天井を見つめながらゆかりはチョーカーに触れる。

（嫌いじゃない。むしろ……好き）
最初は苦手だった。自分勝手で、人を馬鹿にしたような皮肉屋で、どういった環境で育てばこんな風になるのかと親の顔が見てみたいとすら思った。
きっと甘やかされて育ったのだろう。何不自由なく、望めば全てその通りになるような、そんな環境で周囲の人間に我儘放題で接してきたに違いない。
そう思っていたのに、彼の過去には自分以上の傷跡と闇が広がっていて、安易な気持ちで訊く事が躊躇われて、ほとんど何も知らずに今日まで来てしまった。
接してみて、人と接する彼の姿を見ているうちに、自分の心の中に彼という存在がはっきりと残って、今では一部の領域を占有するほどに大きくなっている。
他の友人たちはどうか、チドリや美紀や風花の存在は彼ほど自分の心の中に残っているか。考えてみると結果はあっさりと出た。
（風花たちより有里君の領域の方が広いし深い。もう、多分、心の中から消せそうにないくらい、有里君の存在が大きくなってる。そっか。これが恋なのか。やだな、有里君のこといつの間にか好きになってた）
気付いてしまうと愛おしさが湧いてくる。彼に会いたい。彼に触れてもらいたい。どんどんと欲望が湧いて来て、自分が自分でないようにすら感じる。
目元を腕で隠しながら彼の顔を思い浮かべれば、途端に一人でいることが寂しく思え。こんな事なら気付くんじゃなかったとゆかりは後悔する。
（あー……失敗したな。うん、これはダメだ。自分がどんどん弱くなっていくみたい）
腕で目を隠しているはずなのに視界が滲んで歪む。
期間はもう一月もない。自分たちの関係はそれで終わり。もっと早くに気付いていれば思い出も作れた。完全燃焼といった感じにパッと火が点いて、後腐れなく燃え尽きてしまう事も出来たかもしれ

ない。
しかし、ゆかりはずっと気付かないフリをして時間を無為に過ごしてしまった。気付かなければ傷付かなくて済むと無自覚に分かっていたから。
（先生たちはすごいな。素直に自分の気持ちを表に出せて）
大切な人と一緒にいるだけで、自分の過ごす普段の日々に色が増えた気がした。当たり前の日常が輝いて見えて、そういった小さな幸せに包まれていることが心地よかった。
これを失うのは自分の一部を失うのと同義だ。母親もきっとその欠けてしまった自分の一部を、別の何かで埋めようとして色んな男性と付き合っているのだろう。
ようやく、本当の意味で母親のことを理解出来たゆかりは、湊が佐久間やファンの子ではなく何故自分を〝仮初の恋人〟として選んだのかも同時に理解する。
本物にはなれず、彼から真に愛される事もない。未来のないこの関係は、本気で彼を好きになった者にとって非常に残酷な制度だ。
（……別れたくないよ）
無自覚に少しずつ惹かれていたため、きっと仮初の恋人になっていなくとも、いつか自分の恋心を自覚していたに違いない。
ゆかりとしてはその方が良かった。それなら他の者と同じスタートラインから恋人を目指す事が出来たから。
けれど、ゆかりは既に仮初の恋人になってしまった。終わることが決まっている関係であるが故に、報われない恋心を自覚した少女は一人涙を流した。

１２月１２日（水）
夜――ＥＰ社・第四研究室
工場の地下に存在するＥＰ社の研究区画。その中でも普段誰も使っていない予備のような扱いである研究室で、シャロンの助手である武多が一人灯りも点けずにとある作業に没頭していた。
席についてノートパソコンで一心不乱にキーを叩く彼の傍には、分

厚いノートやプリンターに缶コーヒーなど色々な物が置かれている。
本日はシフトが組まれておらず、休日となっている彼が何故ここにいるのか分からない。湊らも彼が会社で作業をしていることは把握していないので、今の武多は完全に個人の作業のために空いている研究室を使用していた。
（もう少し、もう少しで僕のアリスたんに会える!!）
鼻息荒く武多の作業しているパソコンの画面にはいくつものファイルが開かれており、いま彼がキーを叩いて文字を入力しているのは文章ファイルで、そのファイル名は『アリスプロジェクト』となっている。
言葉だけ聞いても意味不明だが、そこには身長や体重など人間のプロフィールらしきものが書かれていた。
（ハァ、ハァ、呼び方はどうしようか迷いますな。ここはベーシックにマスターか、それともアリスたんの性格を考慮してお兄ちゃんも捨てがたいでゴザル）
考える間、武多はマウスを操作して別のファイルを開いてそれを眺める。今度のファイルには、白のフリルのついた水色のドレスを着た金髪の少女の絵が表示されていた。
頭には黒い大きなリボンが結われており、カールの巻かれた長い金髪と合わせるとお嬢様といった雰囲気を感じさせる。
手には魔法の杖の様な可愛らしいステッキを持ち、武多が操作する度にポーズや表情の違う画像が次々と表示されていく。
そうして、緩んだ表情で画像を見ていた武多は、意を決したように文章ファイルを開き直し、〝呼び方〟と書かれた欄に『普段はマスター、たまに間違えてお兄ちゃん』と入力しエンターキーを強く叩いた。
「で、できたー！　ついに完成したでゴザル！」
作業を終えたらしい武多は椅子から立ち上がって飛び跳ねて喜ぶ。ここがマンションなど集合住宅であれば、下の階の人間が怒鳴りこんでくるほどの暴れっぷりだ。
一頻り喜びの舞を踊って満足したのか、少しして冷静になった武多

は椅子に座り直すと再びマウスで操作して行く。
新たに立ち上げるのは二つの画像ファイル。片方はペルソナのタロットの背面が描かれた画像、もう片方は〝恋愛〟のアルカナが描かれた画像、そこに先ほどの少女の画像を加えて印刷画面を出し。少女と背面、恋愛と背面という二つの組み合わせで両面印刷の実行を選べば、パソコンと繋がっていたプリンターが稼働し、二枚のカードが出てきた。
恐る恐るそれらを手に取り、印刷ミスがないかをしっかりと確認した彼は、約半年ほど掛けて製作した自らの理想の少女ペルソナであるアリスの完成に歓喜の叫びをあげた。
「しゃー！　おっしゃー！　あとはこれで召喚したら僕もペルソナ使いの仲間入りですぞ！　やっふー！」
武多が『アリスプロジェクト』なる自らの理想の少女を、ペルソナとしてこの世に具現化させる計画を思い付いたのは約半年前。
湊からペルソナの説明を聞いた際、ペルソナは人の心から分化して表出するものだが、例外もあって人々の強い念が思いの塊となってペルソナ化すると言われたからだ。
実際、湊の持っているジャック・ザ・リッパーは古いナイフに宿っていた、使用者と複数の被害者の怨念が混ざり合った怨霊ともいえる存在がペルソナ化したものである。
さらに、普通のペルソナならば持ち主のイメージが反映されたり、その存在に関係したような姿を取るけれど、強い思念から生まれた存在はそういった制約から外れる。
そのため、武多は姿からプロフィールまで緻密に設定し、他の外的要因が混ざりようのない状態で理想の少女〝アリス〟を作りあげた。
ペルソナにも同名の者が存在し、そちらは〝死神〟のアルカナだったりするのだが、武多はそんなペルソナがいるとは知らないし、可愛い少女には可愛いイメージのアルカナが似合うといって〝恋愛〟のアルカナに設定した。
湊のペルソナも一部はアルカナが異なった同名存在だったりするので、別に武多の設定したアルカナが同名存在と違っていても問題は

ない。
しかし、理想の少女を具現化させるためだけに、湊からカードを借りて全アルカナのスケッチを取ったり、高価な紙とインクを買ってきたり力の入れどころが色々と間違っていた。
というのも彼は、年末にある一大イベント『コミックフェスティバル』こと通称『コミフェ』に、この理想の少女を連れて行こうと必死に頑張っていた。
自分の理想とした超絶美少女を連れていけば、周囲からの羨望と嫉妬の入り混じった視線が心地いいに違いない。
女子と一緒にコミフェに行ってみたいという夢も同時に叶い。まさに一石二鳥だとして、グフフ、と厭らしい笑いを漏らしながら武多はアリスのカードに優しい視線を落とすと、隣に置かれた恋愛のアルカナの描かれたカードを取って立ち上がった。
成功するかは分からない。だが、湊に言われた通りに魂を籠めて武多は理想の少女を作り続けた。
当初は理想の少女というだけだったが、半年という期間を共に過ごしてきたことにより、彼にとってアリスは妹や娘のような存在にもなっている。
ようやく、その少女と対面できるということで目頭が熱くなり、武多は泣きながら湊の様にカードを握り潰した。
「ペルソナ！」
ぐしゃり、と音を立ててカードが握り潰される。ガラスの割れるような音も、水色の光も現れたりはしない。
カードを握り潰した格好で固まっていた武多は、今のは気合を入れ過ぎたのがいけなかったんだろうとして、くしゃくしゃになったカードを一度伸ばすと再び召喚を試みる。
「ペルソナ！　ペルソナ、ペルソナ、ペールッソナー！」
何がいけないのか。訳が分からず武多は発音を変えたり、ポーズを変えたりして何度も試すが、結局一度も成功せず、そのまま哀しみの涙を流しながら床に膝をついた。
すると、丁度四つん這いになったそのタイミングで部屋の入口が開

き、誰かが入ってくるなり部屋の灯りを点けた。
「……気配がすると思ったらお前か。今日はオフだったはずなんだがな」
「ああ、武多さんやん。ここで何してはるの？」
部屋に入ってくるなり、休日だったはずの男が四つん這いで泣いてる姿を見て呆れた顔をする湊。
さらに、彼に続いてラビリスと水智恵、シャロンとエマ、それから日本に来ていたソフィアも一緒に部屋の中に入ると、机の上に置かれたパソコンやプリンターを見て不思議そうな顔をする。
休日だった彼はここで隠れて何かの作業をしていたようだが、床に転がったくしゃくしゃの紙を前に泣いている巨漢というはちょっと不気味に映った。
とはいえ、私的な理由で勝手に施設を利用されては困る。彼がスパイである可能性はないが、一応何をしていたのか確認するべくソフィアがパソコンの画面を見れば、そこにはよく分からない単語が羅列していた。
「えっと、『アリスプロジェクト』？　身長一五五センチ、体重四六キロ、声は木之本凛子たん……誰ですのこれは？」
「木之本凛子ってのはアイドル路線で売り出してる声優ッスよ。一大ブームを巻き起こした〝カードキャプチャー・サフラン〟の主役のサフランの声とかしてるッスから、まぁ、武多さんみたいな大きいお友達に今も大人気ッスね」
日本のアニメ文化やオタク文化に詳しくないソフィアに、この中で唯一武多とタメを張れるほどそっち方面の知識を持っているエマが教えてやる。
彼女はソフィアに場所を変わってもらうと、開かれていたファイルにも次々に目を通して、机の上に置かれた〝アリス〟のカードと床の転がったカードを見て、彼がここで何をしていたのかを理解した。
「なーるほど、武多さんはどうやらペルソナを作ろうとしてたみたいッス」
「ペルソナを作るて、そんなことできるん？」

「湊さんの話じゃ強い思いの塊がペルソナ化することもあるって言ってましたし。その話を聞いてから設定やら姿やらをしっかりと作り込んで本気で呼び出そうとしてたみたいッスね」
尋ねたラビリスにエマは難しくても可能ではあるはずだと答える。パソコンに表示されていたファイルの他にも、設定やらをまとめたらしい専用フォルダもあったので、武多がどれだけ本気だったかが伺える。
シャロンもエマに場所を換わってもらい。自分の部下がどんな内容を設定に組み込んでいたのかを眺めつつ、試み自体は面白いなと興味深げにしながら、視線を四つん這いの男に移して口を開いた。
「ま、私としては仕事もきっちりしてれば文句ないんだけどさぁ。ペルソナが自由に出せるなら研究も捗るし」
「せ、拙者のアリスたんを研究なんかさせませんぞ！」
「いや、研究するも何もアンタ失敗したんでしょ。それじゃあどうやったって無理よ」
成功していれば貴重な存在として研究したかった。人工ペルソナ使いならぬ人工ペルソナとは大変希少だ。
湊のジャックの場合は、人の魂と感情が寄り集まって一つの念の塊になっていたため、名切りのペルソナと同じように霊がペルソナ化した存在である。
対して、武多のアリスは完全に武多の想いのみから生み出されようとしていた。必要なのは生み出す人物の執念であり、揺らぐ事のない強固なイメージ。
それだけで他のペルソナと同じように戦闘力を有し、考えた設定通りの性格等を持った自我持ちのペルソナが生まれていれば、武多はある意味で人工的に魂を作り出したことになる。
アイギスやラビリスのように人から採取した人格パターンから人格を作るよりも一歩先、人類が未だに到達していない神の領域に指の先をかけるほどの偉業といえた。
もっとも、それは失敗に終わったので、やはり神というやつは後を追う人間にそう簡単には背中を見せたりはしないらしい。

「う、うぅ……湊殿ぉ、一体何がダメだったんでしょうか。本気で魂込めてたのに、カードをいくら握り潰してもウンともスンとも言わなかったでゴザルぅ」
大の男がぼろぼろと泣いたところで、湊としては見苦しいという感想以外抱かない。
しかし、これでも能力は確かで重要な部下の一人である。彼の研究自体には興味はないが、とりあえず原因を究明するべく彼の傍に腰を落とすと転がっていたクシャクシャのカードを拾い上げた。
「……お前が握り潰したのはこのカードだな？」
「はい。アルカナを〝恋愛〟に設定したので、湊殿が召喚時に使っているカードのレプリカを作ってそれを利用したんですぞ。でも、結果はこの通り……うぅ」
「……そうか」
召喚時にカードを握り潰すのは間違っていない。湊は回し蹴りやナイフで切りつけて破壊して呼び出したこともあるが、カードを具現化出来るのならカードを壊せば召喚出来る。
ただ、いくら緻密なスケッチから精巧にカードを作ろうと、武多が握り潰したのはペルソナカードのレプリカであるただのタロットカードでしかない。
製作者自身もこのカードには握り潰せる程度の愛着しか持っていなかったはずなので、こんな物をいくら握り潰そうが召喚出来る可能性はゼロだった。
武多の話を聞きながら湊は拾い上げたカードをゴミ箱に捨て、彼から離れるとシャロンたちが見ていたパソコンの方へ向かい眺め出す。
少しは慰めたりするのではと思っていたのに、湊が完璧にスルーの方向にいったことで、呆れた表情を浮かべたラビリスは恵と一緒に武多の傍にしゃがみ込んだ。
「武多さん元気出しって。今回は失敗やったみたいやけど、このまま研究続けたら成功するかもしれへんやん」
「そうですよ。ほら、このカードの女の子すごく可愛いですし。ペルソナに出来なくっても、ちゃんと価値はありますよ」

恵はテーブルの上にあったアリスのカードを手に取ると、まるで売り物みたいだと完成度の高さを褒める。隣のラビリスも同意するように頷いているため、ペルソナ化させられなくても武多の生み出したアリスの価値は無くなったりしないと彼女は断言した。

そんな二人の少女の優しさに感動したのか、武多も身体を起こすと涙を袖で拭いながら少女たちに礼を言った。

「ラビリス殿、恵殿……うぅ、温かい言葉ありがとうございます。そうですな。ここで諦めては試合が終了してしまいますな。うむ、一度の失敗で諦めるのなら研究者にはなっておりませんでした。拙者、今後もアリスたんをこの世に呼び出すべく頑張っていくでゴザル」

言い切り武多は元気よく立ちあがると天に向けて拳を突き上げた。

研究者とは誰よりも失敗を繰り返して、この世の謎を解き明かしてゆく者である。これくらいの失敗など日常茶飯事、諦めの悪さなら自信があると、今後もこの個人研究を続けていくと宣言した彼の瞳には力が宿っていた。

そうして、復活を果たした武多にラビリスたちは小さく拍手を送り、武多が照れたように「どーも、どーも」と返していたとき、今までパソコンを見ていた湊が振り返るなり三人に話しかけた。

「いや、その必要はない。水智、そのカードをかせ」

「え？　はい、どうぞ」

湊は普段通りの感情の読み取れない表情で話し、言われた恵は自分が持っていたアリスのカードを素直に相手に渡す。

カードを受け取った湊は絵柄をジッと眺めているが、何やら嫌な予感がした武多は慌てて青年に制止の声をかけた。

「ちょ、まさか、お待ちくだされ湊殿ぉぉぉぉっ!!」

彼の元まであと三メートル。しかし、武多の叫びも虚しく、彼の手が届くよりも速く湊はカードを握り潰した。

「ペルソナ」

瞬間、建物が小さく揺れた。

ガラスの割れるような音が響き、青年の頭上に水色の欠片が渦巻いて、カードに描かれていたのとソックリな姿をしたお人形さんのよう

に可愛い少女が光と共に現れる。
　最初からペルソナにすることを前提として劇画調で描かれていたため、少々ファンシーな服を着ていても違和感はない。
　現れた少女が床の上にゆっくり降りてくると、本当に武多の生み出したアリスがペルソナ化したことに目を丸くしていたラビリスが呆けながら口を開く。
「ほわぁ、ホンマに武多さんのアリスがペルソナになってもうた」
「確かに驚きですわね。湊様、一体何が違っていたのですか？」
　傍で見ていたソフィアもこれには驚いた。武多の試み自体は面白いと考えていたが、自分もペルソナを所持しているだけあって、超常の存在をそう簡単に生み出せるとは思っていなかったのだ。
　けれど、アリスは実際に呼び出されて、床に降り立ち目を開けると、周囲に立っている人間たちへ不思議そうに視線を向けている。
　呼び出したのが武多と湊で差はあったかもしれないが、それだけが理由とは思えなかったソフィアの問いに、湊は他の者にも説明するよう簡潔に答えた。
「武多の想いが籠められていたのはアリスの方だったんだ。部屋に入ってアリスのカードを見た時点で、人のどす黒い執念らしき物で包まれていたから不気味に思っていたんだが、床に転がってた方には何も感じなかった。つまり、アリスの方を握り潰していれば良かったという訳だ」
　説明を聞いた者たちはなるほどと納得する。武多は大切な少女の描かれたカードを握り潰すことができないため、湊がアルカナの描かれたタロットカードを握り潰しているから、と理由を付けてタロットカードを握り潰していた。
　しかし、本当に魂を籠めたのはそちらではない。それではいくら潰したところで、召喚出来るはずもないのは当然だった。
　もっとも、少女を生み出した本人は頬を染めて照れながら少女を見つめており、湊の説明など一切聞いていない。
　彼の瞳には少女しか映っていないようで、意を決すると自分が生み出した理想の少女に話しかけた。

「あ、その、どうもはじめまして。僕は武多克平と申します」
《どうもはじめまして！　ワタシはアリスです！》
「ふ、ふおぉぉぉぉ!!　凛子たんボイスキター！」
　元気一杯に明るく笑った少女の声は、武多の設定通りアイドル声優そっくりのものだった。
　受け答えがしっかりできるという事は自我も所持しており、武多の執念によって人工的に自我持ちのペルソナを作ることは可能だと立証され、さらにその能力や容姿もデザインできる事も判明した事になる。
　これには様々な業界で天才と呼ばれているシャロンも素直に驚き、自分には無理だと助手の努力が実った事をしっかりと称賛した。
「すごいじゃない、武多。アンタのおかげで、人工的に自我持ちのペルソナを作ることが可能だと証明されたわよ。ま、執念というか魂込めなきゃ無理みたいだけどさぁ」
「確かにこれは大変貴重なデータになりますわね。個人の精神から生じる物と違って、本人の能力や性格等の影響を受けずに作れるようですし。戦力の補充を考えれば前向きに検討すべきかもしれません」
　執念ともいえる魂を籠める事が最も難しいはずだが、その点をクリア出来れば人工的にペルソナが作れると分かった。
　影時間の戦いはまだまだ続くので、戦力は少しでも多い方がいいと考えているソフィアも、武多のデータを参考に、組織の方でも研究を始めてみようかと考える。
　しかし、またしても武多は話を聞いていないようで、先ほどから無視されている三人の上司はデレデレとした表情を浮かべる男に冷たい視線を向けた。
「ア、アリスたん。拙者と一緒にケーキを食べに行きませんか？　うちの食堂のケーキは絶品で大人気なのです」
《マスターも一緒ならいきます！》
「当然一緒ですとも！　さぁ、早速行きましょう！」
　武多の考えたアリスの大好物は甘いケーキ。ＥＰ社の敷地内にある食堂には絶品スイーツが多数揃っているため、彼女にも満足して貰

えることは請け合いだ。
美味しいケーキがあると聞いて嬉しそうにする少女を見て、武多も負けず劣らず嬉しそうな顔をしながら少女の手を引いて部屋から出ていこうとする。
だが、あと数歩で部屋を出ようというとき、少女は武多の手を離して不思議そうな表情で振り返り口を開いた。
《あの、マスターは来られないんですか？》
『……え？』
その一言に部屋にいた全員が首を傾げた。
アリスを生み出したのは武多だ。想いの塊がペルソナ化すると聞いて、自分の自由な時間のほぼ全てを費やして、アリスという少女の存在を作りあげてきた。
パソコンに表示されているファイル以外にも、かなり多数のイラストや設定のファイルが存在しており、サブカルチャーに興味のない者でも、よくもまぁこんなに細かく考えたなと感心するほどだ。
けれど、そんな武多が想いを籠めて生み出した少女は、生み出した本人ではなく、金色の隻眼を輝かせている青年をジッと見ている。
アリスの様子から薄々理解しているが、まさか、と思っていたところで湊が静かに言葉を発した。
「……武多、一つ伝え忘れていたが想いの塊をペルソナに出来るのは高い適性を持った人間だけだ。想いの塊を取り込んで自らの精神に落とし、それをペルソナという形式に作り変えて召喚するには、相応の適性が必要になる」
言いながら指を一度鳴らすとアリスがその場から消えていなくなる。恵は以前これと同じ光景を青年の実家で見た事があった。
「そして、そうやって生み出されたペルソナは、取り込んだ時点で作り変えた者の精神と繋がっているので、当然、その人物の所持ペルソナになるんだ」
「そ、そそそ、それでは、つまりっ」
全身から汗をだらだらと流し、身体をぶるぶると震わせながら武多は止めてくれと懇願するような瞳で尋ねる。

それだけは嫌だ。あまりにも残酷すぎる。そんな悲痛な思いが伝わってくるが、尋ねられた青年は邪悪に口元を吊り上げながら、具現化したカードを左手で握り砕いた。
直後、水色の欠片が渦巻き先ほど消えたアリスが再び現れ、青年の隣に並んで立つと武多に笑顔を向け、青年は淡々と事実を告げる。
「ああ、このアリスは俺のペルソナだ」
「うぼっ、現実でネトラレとかマジ勘弁……がくっ」
受け入れがたい事実を聞かされた武多は、倒れる音まで口で言いながらその場に沈む。
それを眺めていたラビリスと恵とエマは武多に同情的な視線を送り、シャロンとソフィアは冷めた目で見ながら、研究に活かすため武多のパソコンのデータは研究所のサーバに転送していた。
武多にとっては不幸な事件だったが、〝恋愛〟のアルカナを持つ珍しい〝アリス〟を手に入れた青年は、マフラーから薄い毛布を取り出すと武多にかけてやり。他の者に行くぞと声をかけて部屋を出て行った。

第百五十九話　すれちがい

１２月１５日（土）
放課後――ゆかり自室

二学期の期末試験を終えた日の放課後、普段なら友達とお疲れ様会のような形で食事に出かけたりするところを、今回はパスすると言ってゆかりは湊を自室へ招いていた。

昼食自体は寮に来る途中にワイルドダックバーガーで済ませていたので、先に部屋に入って私服に着替えてから湊を部屋に入れると、ゆかりは用意した紅茶とお茶菓子をテーブルに運びクッションに座った。

「ようやくテストも終わったね。これで中学ではあと一回、三学期の期末でテストからは解放されるよ」

「……エスカレーター式でも高等部のクラス分けも兼ねた実力テストはあるぞ。まぁ、定期考査と変わらない程度でしかないが」

定期試験は一学期と二学期は中間と期末で二回ずつ、三学期は期間が短いので期末のみで、年間で計五回となっている。

本日で二学期の期末試験を終えたので、残るは三年間の集大成ともいえる三学期の期末だけだとゆかりが楽しそうに言えば、彼女を素の状態に戻す夢も希望もない発言を湊はかました。

別にゆかりだって実力テストの存在を忘れていた訳ではない。留学していた湊より長く学校にいるのだから、先輩の様子から学年末の動きくらいは把握していた。

しかし、ようやく期末テストを終えたことで開放感を楽しんでいたゆかりにすれば、実力テストの事など今は考える必要のないものであり。わざわざ現実に引き戻してくる彼氏には、空気読めと冷ややかな視線を向けるしかない。

「いいよねー。勉強しなくても点数取れる人はさー。こっちは気持ち切り替えてようやくテスト前に勉強に臨めたりするってのに」

「ちゃんと授業を聞いてその場で理解してれば勉強なんてそもそも必要ない。自分の不真面目さを棚にあげて図々しい事を言うな」

「いや、不真面目さについては君に言われたくないわ。風花から聞いたけど授業中に変わった眼鏡かけてなんか作業とかしてるらしいじゃん。そっちの方がおかしいでしょ」
お皿に並べたクッキーを手に取りかじりながら、ゆかりは湊の悪い噂は聞いているとジトっとした視線で責めるようにみる。
ゆかりは別に不真面目な訳ではなく、彼女の理解力で必要な勉強量が足りなくてテストで満点を取れていないだけだ。
湊やチドリのように知識をすぐに吸収して我が物にするタイプにすれば不思議だろうが、一般人は自分の中に情報を落としこんで、それを自分でも使えるように勉強が必要になる。
スポーツと同じように何度も何度も反復練習して、ようやく情報も効果的に使えるようになるため、出来ていないからといってイコール勉強していないと思われるのは心外だった。
勉強不足かもしれないが、自分も一応はやっていて、授業を聞く必要がないからと内職している湊に比べれば十分に真面目であるとゆかりが言えば、湊はマフラーをゴソゴソと漁って一枚の紙を取り出した。
「俺は成績を落とさない限りある程度の自由が認められてる。広告塔として宣伝してやる対価としてな」
湊が取り出した紙は学校と交わした契約書。定期試験だけでなく全国模試や部活動などで優秀な成績を修め、学外に月光館学園をアピールし続ける事で広告塔のような役割をする代わりに、出席日数の不足や授業態度を他の生徒の迷惑にならない範囲で認めるといったような事が書かれている。
実際、学校の出資者グループの令嬢である桐条美鶴を広告塔にしていたときよりも、一般の生徒である湊を広告塔にしてからの方が宣伝効果は出ており、彼が籠球皇子としてテレビでも話題になってからはオープンハイスクールなど、受験者向けの学校説明会の参加希望人数は跳ね上がっていた。
少子化の時代に置いて、いくら都内の有名進学校であっても受験者の確保は大変だ。

色々な中学校に出向いて合同説明会の開催やパンフレットを置かせて貰ったり、新聞や公共交通機関の車内広告で地道に宣伝するしかない。

しかし、今年は湊のおかげで受験者の方から集まって来て、このままいくと今年の高等部の倍率は四倍を超えるのではと、学校と桐条グループの方では嬉しい悲鳴を上げている。

もっとも、全中バスケで優秀選手に選ばれたことで、学校に直接強豪校からスカウトの電話がかかってきたり、取材やテレビ出演をして貰えないかと専用ダイヤルに電話もかかってきているので、無駄なところに金と労力を割かねばならない事だけは少々困りものだった。

湊本人がそのまま高等部に進学すると公言しているため、他校からのスカウトを断るのは簡単ではある。

しかし、彼が持っている契約書に書かれている通り、無償で広告塔になる代わりに出席日数や服装に目を瞑り、高等部進学後はバイク通学の許可など、彼個人に対して学校も色々と気を遣わないといけないため、桐条グループから大概の事は許可するように言われている現場の人間としては、他の生徒と平等に扱わないといけないこともあって心労は絶えなかった。

そうして、現場の人間の尊い犠牲の上に存在する契約書を見た少女は、それを手に取りじっくり読み込むと肩を震わせて叫んだ。

「ちょっ、これ絶対におかしいわよ！　いくらなんでも有里君ばっかり優遇し過ぎてるじゃん！」

「……俺の宣伝効果はすごいからな。同じだけのことをＣＭや広告でやろうとすれば一千万じゃきかない。対応に追われたりと一部混乱は見られたが、母体である桐条グループとしては経費を節約しながら、普通にやるよりも大きく宣伝できることで俺を他所にやりたくないわけだ」

湊のＣＭギャラは一千万ではきかない状態になっている。別にどことも契約していないが、最低二千万からで様々な企業が交渉を持ちかけてきたので、当然学校もそのことは把握している。

彼を広告塔に使うという事に企業はそれだけの価値を見ていると

いうことであり、様々なＣＭを流している桐条グループも当然彼の価値については分かっていた。
　それ故、学校も桐条グループも、服装やバイク通学を許可する程度で彼を確保出来るのなら、他の生徒よりも優遇していると取られようが安い物だと契約書にサインした。
「じゃあ、相手が断れないって分かってて条件付けたの？」
「ああ。元々、義務教育までしか学校に通う気はなかったんだ。別に金にも困ってないから行く意味が薄かったしな。だが、学校側が是非そのまま高等部に進学して欲しいと言ってきたところに、こちらでも通う必要が出た事もあって、丁度良いから条件を付けさせてもらった」
　湊がいう進学する必要が出たというのは主にラビリスの事だ。
　それまでは進学するならといった感じで、あまり具体的に条件などについて考えていなかったが、夏休み明けに目覚めた彼女から湊は願いを聞いた。
　彼女を学校に通わせること自体は問題ないが、不慣れな場所にやや常識に疎い彼女を一人で通わせる訳には行かない。
　お隣に住む羽入かすみとは既に仲良くなっているが、ラビリスが高校に通うとき羽入はまだ中等部。これでは知り合いがいないのと一緒なので、少なくとも一年は傍で見守り、彼女のフォローをしてくれる友人が出来るのを待つしかない。
　同性も羨むほどのスタイルとルックスに加え、誰にでも分け隔てなく接する性格、部活メンバーならば誰でもラビリスの友人になってくれそうだが、そうでなくても周囲は彼女を放っては置かないだろう。
　なので、湊は彼女が孤立する事は心配していないが、相手が条件を飲むというのならお言葉に甘えるだけだった。
「うっわ、なにそれ。別に相手が何もしなくても進学したくせに詐欺じゃん」
　その事を聞いたゆかりは口を尖がらせてずるいと言ってくる。何がどうずるいという具体的な意見はないが、とりあえず人の善意に付けこんでいるのがあくどいと思ったらしい。

彼女も湊が学校の宣伝の役に立っているのは分かっており、最近では彼と同じ学校に通っていることがステータスの様に思われているようで、制服を見た他校の生徒から羨む声が聞こえてくるので、月光館学園が一種のブランド扱いを受けていることは理解している。
つい先日、母親からきたメールには、ゆかりが月光館学園に通っていると聞いて名士会主催の婦人会で羨ましがられたと書いてあった。
別に生徒たちは何も変わっていないのだが、少しの切っ掛けで周囲からの扱いが変わるというのはよくある事だ。
今回はそれがいい方向に働いたため、恩恵を受けているゆかりも湊には感謝しているのだが、やはり素直に納得する事は出来ないらしく、頬杖を突きながら責めるような瞳を向けてくる。
「……別に岳羽がどれだけ不満を言おうが変わらないぞ」
「むー、それは分かってるけどさぁ。なんか納得できないっていうか」
「俺だから……ってことで納得してくれ」
言いながら湊は手を伸ばしてゆかりの頭に手を置く。
急に触れられたことで少女は驚くが、彼の大きな左手と男子にしては少し高めの体温が心地よく落ち着いた気分になる。
こんな事をされては子どもっぽくずるいと言い続けることなど出来ず、ゆかりは惚れた弱みかと苦笑しながら話題を切り上げ、本日の本題に移ることにした。
「ま、いいけどさ。それよりクリスマスはどうする？　何か予定とか決めてる？」
「別にクリスチャンじゃないから特別な予定はないが」
「そういうんじゃなくて、デートとか食事の話」
彼が特定の神を信仰するはずがないのは分かっているため、何をずれた事を言っとるんだと青年の天然さに呆れながら、ゆかりはクリスマス特集と書かれた雑誌をいくつかテーブルの上に置いた。
カップルにとって外せないイベントの一つであるため、素敵な思い出作りのためにもノープランは避けたい。
別にお洒落なレストランで豪華な食事とは思っていないけれど、流石にクリスマスの夜に恋人とラーメンや牛丼は嫌だった。

なので、ゆかりは育ちの良い相手のセンスを信頼しつつ、雑誌に載っているお勧めスポットを参考にしながらクリスマスデートの予定を立てるつもりでいた。
「クリスマスはデート出来るんだよね？」
「まぁ、予定を空けることは出来る」
「空けることはって、また仕事のつもりだったの？」
恋人と過ごす大事なイベントの日なので、大丈夫だと思って尋ねたのだが相手の言葉に引っ掛かるものを感じるゆかり。
予定を空けるということは、元々入っていた別の用事の時間をずらして休日にするということだ。
普段のデートならともかく、一年に一度しかないクリスマス、それも恋人になって最初のクリスマスに他の予定を入れていたとはどういうことなのか。
彼が特定の何かに執着する事がほとんどないことは知っている。しかし、いくらなんでもこれはあんまりだろう。
前々から言おうと思っていたこともあり、我慢出来なかったゆかりは鋭い視線で湊を睨むと、怒りで早口になりながら彼に問い質した。
「あのさ。前から言おうと思ってたんだけど、有里君って別にお金に困ってる訳じゃないよね？　それなのにデートに誘ってもその日は仕事がーって断って来て、なんでそんなに仕事ばっかりしてんの？」
「なんでって、大量の仕事があるからに決まってるだろ」
「だから、そんなに大変ならバイトの掛け持ち減らせばいいじゃん。知り合いのやってる骨董品屋さんと中華料理屋のバイトなら、中学生なんだしもっと時間に融通利かせてもらったり出来るでしょ」
デートに誘っても仕事、仕事。ではいつなら空いているかと訊いても、当分は時間を作れそうにないと言われて、大会のあった夏休みが終わってからもあまりデート出来なかった。
彼が籠球皇子として有名になったことで、一緒に歩いている場面を見られれば一緒にいる女子が危ないからと会わないようにしていた事は分かる。
幼少期に父親の件でマスコミに追われていた事もあったので、そう

いった職種の人間のしつこさや厄介さはゆかりも理解しているが、最近はそれも落ち着いてきたはずだった。
周囲を嗅ぎ回っているパパラッチなど湊はすぐに見つけて、相手の視界から一度消えると背後から近付き名刺を貰ってすらいる。
そういった人間は興信所と一緒で顔を覚えられる事は致命傷だ。上手く周囲に溶け込んで尾行するには技術が必要で、出版社やテレビ局もそう何人も抱えている訳ではないため、二人もばれれば諦めるところが大半だった。
故に、そろそろ普通にデートが出来るとばかり思っていたのに、また仕事と言ってクリスマスのことを考えていなかった事が納得いかず、ゆかりが珍しく本気で怒って責めれば、どうして彼女が怒っているのか分かっていなかった湊が納得したように言葉を返した。
「……なるほど、山岸たちから仕事も大事だろうが岳羽をもっと優先してやれと言われていたんだが、お前らは俺が眞宵堂と紅花の実家の店のバイトをしてると思ってたのか。それなら珍しく山岸が怒り気味だったのも納得だな」
確かに現在どんな仕事をしているかを伝えていなかったが、まさかバイトでゆかりとのデートを拒否していると思われていたとは考えもせず、湊はこれならもう少し伝えておくべきだったかと苦笑した。
ただ、仕事の内容がなんであっても、そちらを優先してゆかりとの時間をあまり作れていなかったのは事実。
その事は素直に反省し、配慮が欠けていて申し訳なかったと謝罪する。
「わかった。今後はもう少し時間を作ろう。蔑ろにして悪かった」
「ん、まぁ、気を付けてくれるんならいいけどさ。今からそんなんじゃ、将来結婚してから大変だよ？　生活して行く上で仕事も大事だとは思うけど、仕事ばっかりして家庭を顧みない夫って愛想尽かされても文句言えないし」
「……結婚を意識した事はないな。大人になれても結婚するつもりもない」
謝罪を受けたゆかりは、そんなに素直に謝られると許すしかないで

はないかと困ったような表情を浮かべる。
だが、ただ許すのではまた繰り返す可能性があるため、将来の事も少しは考えて反省するべきだと伝えておく。
それを聞いた青年は自分が結婚する年齢になるところを想像出来ないのか、自分に結婚願望はないと返して来たが、少女としては予想通りなので軽く流して会話を戻した。
「まぁ、別に今はそれでもいいけど。それで、クリスマスは結局どうするの？　午前中から遊んだりするの？」
「逆に岳羽はどういったものを見たいんだ？　イルミネーションは夜にしか見れないし。買い物は場所によっては人が多くてまともに見て回れないぞ」
「んー、そこなんだよね。結局は買い物とかになるだろうけど、そこら辺は後にして夜だけ先に決めちゃおうか」
午前中から遊ぶにしても、カラオケやボウリングなど普段出来る遊びで時間を使ったりするつもりはない。
クリスマスにはシーズン限定の店や品が並ぶので、ゆかりとしてはそういった物を覗いて回りたかった。
けれど、湊が言う事も事実。時期が時期だけにゆかりと同じ発想の者は多数おり、その者たちが同じ場所に群がれば、当然混雑で身動きが取れなくなってしまう。
イルミネーションを見たり、夜の食事がメインイベントであるため、日中にそんな疲れるような事をするのは正直嫌だ。もう少し情報を整理してからそこは考えるとして、ならば、先に考えておくことの出来る夕食について決めてしまおうとゆかりは提案する。
「やっぱりクリスマスだし、普段とはちょっと違うお洒落なレストランとか行ってみたいな」
「……そういった場所は要予約だぞ。時期的にかなりギリギリかもしれない」
雑誌を見れば目が飛び出るほど高額なレストランもあれば、少しお高いだけで中学生でも行けそうな店もある。
当日に待ち時間なく行くのであれば、湊の言う通り予約をしておく

べきで、約一週間前だと中学生でもなんとかいけそうな値段のお洒落な店は予約が出来るか微妙なラインだ。
　ゆかりも母方の実家が裕福なので、そういった店に予約が必要で時期的に一週間前だと難しいことは知っているので、それならいっそ別の方面を攻めてみるかと尋ねた。
「クリスマス向けにお金少しは貯めてるし。どっかのホテルのディナーでも予約しちゃう？」
「それくらいは普通に出すから金銭面は気にしなくていい。しかし、ホテルのディナーだと帰りが遅くなるが大丈夫か？」
　ホテルのディナーであればコースメニューになるだろう。料理を出すタイミングが決まっているため、二人だけの食事だろうと二時間くらいかかるかもしれない。
　食事より先か後かは分からないが、イルミネーションを見る時間を考えると寮に帰るのは十時を過ぎてしまいそうなので、門限的にその辺りは大丈夫かと湊が聞けば、ゆかりは一瞬視線を逸らしてから照れたように呟いた。
「ん、まぁ、そのときはホテルに泊まったりしちゃっても別にいいかな……なんて」
　頬を僅かに染めて話すゆかりは、俯き気味に目だけ湊の方へ向ける。
　彼がどういった反応を返すのか心配なようだが、少女の予想とは違った反応を青年は示して来た。
「……岳羽？」
「な、なに？　泊まったりするのイヤ？」
「そうじゃない。どうしたんだ、お前」
　普段は無表情に近い湊の顔に疑問の色が混じる。先ほどの発言がどうやら気になるようだ。
　しかし、訊かれたゆかりは彼が何の事を言っているのか分からず、何について尋ねているのかを聞き返す。
「どうしたんだって何の事？」
「普段の岳羽なら冗談でもそういう事は言わない」

「普段の私って……別にクリスマスなんだもん。特別な日くらい普段と違ったことをしたりもするよ」
確かに平時のゆかりならばこんな事は言わない。今回こんな事を口にしたのは、自分の気持ちを自覚して、丁度良くクリスマスというイベントがあったからだ。
けれど、そういった普段との違いを、冗談めいた一言で看破されるとは思っていなかった。
「岳羽、お前まさか……」
そして、青年は全てを見透かすような金色の瞳を彼女に向けると、理解出来ないとばかりに表情を歪めた。
「どうしてだ。他の女子と違って、岳羽は俺にそういった感情を向けることはないと思っていたのに」
隠していた心がばれた。その事にゆかりは動揺するも、それ以上に湊がそういった想い自体を否定する理由が分からず、自分は相手が思っているほど特別な人間ではないと言い返す。
「なにそれ。私は別に他の子と違う特別な考え方してる訳じゃないもん。自覚するのに時間が掛かったりとか、そういう面倒な部分はあるかもしれないけど、普通にその……人を好きになったりする事もあるよ」
「違う。お前は何があっても俺にそういった感情を抱いてはいけなかったんだ。お前ならそうはならない。期限が来たら終わると思っていたから、母親のことを冷静に見れるように今の関係になったのに」
「何でダメなの？　私が君を好きになったら迷惑なの？　それならそうって、ちゃんと言ってよ……」
付き合えないというのなら、そのときは潔く身を引く。元々はお試しで始まった関係なのだから、湊が本気で付き合うつもりはなかったとしても責めはしない。
ただ、そうなのであれば正直にそう言って、自分を振る形でこの関係を終わらせて欲しい。
ゆかりが弱々しい声で頼めば、湊は瞳を閉じてしばらく考える様子

を見せ、長考を終えると立ち上がりテーブルから離れた。
そして、
「……分かった。岳羽、ちゃんと見ておけ」
そう口にすると彼は上着を次々に脱ぎ始める。
一体何のつもりだとゆかりが見ていれば、言葉を失うほど生々しい傷跡が残った上半身が露わになった。
左肩から腰まで斜めに走る切り傷、胸のほぼ中心にある大きな傷、目を引くそれら以外にも火傷や銃創などいくつも傷として残っているが、何より目立っていたのは上腕から先に着けられた右腕の機械義手だった。
彼が事故に遭って服の下は酷い傷跡が残っているとはチドリから聞いていたが、まさか片腕を失うほどの怪我を負っていたとは思わず。ゆかりは青い顔をする。
それをジッと見つめたまま、湊は自分の身体に機械義手で触れて静かに語り出した。
「……俺は人を殺した事がある。一人や二人じゃない。直接的には二万人以上、間接的には十万人以上殺している。この身体の傷はそういった活動の中でついた物だ」
「な、何言ってるの？」
言っている意味が分からない。けれど、先ほどまでと違って、テーブルを挟んで少しの距離にいる相手が嫌に遠くに感じる。
「最初に人を殺したのは約七年前。俺とチドリがいた施設から脱走する際、邪魔してくる大人を百人以上殺した。その事はとあるグループ傘下の製薬会社のガス管の事故として報道された。それから俺は知人に聞いていた場所に行って、そこで所謂、裏の仕事をしている人間と出会い。俺自身も裏の仕事を始めて何人も殺し続けてきた」
湊とチドリが古い知り合いで病院の様な場所で出会ったとは聞いている。お互いに治療のためそこにいたという話だったが、それがどうすれば脱走して大人たちを殺すことになるのかが分からない。
ゆかりは相手の言葉は耳に入っているが、内容まではしっかりと落とし込めていないようで、ただ視線を合わせて話を聞いている。

「去年留学で海外に行ったのも実際は裏の仕事だ。ある男に目を付けられて、今のままでは勝てないからと力を得るために海外でより危険な仕事をして経験値を積んでいた。まぁ、その途中でさらに厄介なやつに目を付けられたせいで、俺と一緒にいたイリスという女性は殺すことになったが」

その女性の名前は何度か耳にした。空港での見送りの際に湊と一緒にいた綺麗な人だったと記憶している。

海外にいて何者かから狙われて、それで女性が死ぬことになるのなら分かるが、いま湊は殺すことになったと言った。

つまり、それは彼が自らの手で大切な人を殺めたということなのだろうか。

話を聞けば聞くほど訳が分からなくなり、しかし、湊の表情と声が冗談を言っている雰囲気でないため、ゆかりは精一杯内容を理解しようと努める。

「イリスが死んでから俺は復讐ばかり考えていた。そいつとその仲間は全員殺す。それが世界中で話題になったＥＰ社の人間が殺されていた事件の裏側だ。殺して、殺して、殺し続けて、復讐に憑かれながら敵のいる場所を見つけて。殺しに行ったところで侵入した建物を崩壊させて殺されかけた。この胸の傷はそのとき鉄筋が貫いた痕だよ」

言いながら青年が浮かべるのは自嘲的な笑み。そんな自嘲だろうが笑える内容ではないはずなのに、どうして彼はそんな顔をしているのか。

話を聞くにつれてゆかりは青年を遠い存在に感じながらも、相手は黙っているゆかりに話し続ける。

「そうなっても俺は何とか生き延びて、相手の元に辿り着き。生かす形になったが復讐を遂げた。一時期お前たちと連絡を取っていなかったのはそういう理由だ。俺はお前たちに会う前からまともな人間じゃない」

話し終えたらしく湊は服を着直すが、代わりにマフラーからナイフと拳銃を取り出してみせてきた。

普段からそんな物を持ち歩くような一般人はいない。薄ら寒く感じる鈍い光が余計に不安を煽り、彼が語った事が真実であるように思えてくる。
けれど、ここで全てを信じて頷く事など出来ない。身体の傷も失った腕も、そんな危険な話ではなく事故に巻き込まれただけかもしれないのだから。
動揺と混乱で青くなった顔色のまま、ゆかりは話を聞いた自分の素直な気持ちを相手に伝えた。
「そ、そんな話を急にされたって信じるはずないじゃん」
「……ああ、俺一人から聞いても信じられないだろうな。だから、他の人間に訊いてもらって構わない。日本に戻ってからは俺ももう裏の仕事はしてないが、チドリは最初から裏の仕事に関わってない。施設からの脱走時にも何もしてないから、彼女から話を聞くといい」
急に言われても信じられないのは分かる。影時間に会った荒垣ですらタカヤたちストレガの存在があったからこそ、繋がりを持っている湊も裏の住人だと納得できたのだから。
別に今すぐに信じて答えを出してもらおうと思っていない湊は、荷物をまとめて立ち上がると部屋から出て行こうとしながら言葉を残していく。
「チドリから話を聞いて、それからよく考えてどうするか選べ。連絡し辛いならチドリ経由でもいい。俺はしばらく学校に顔を出さないから安心しろ。それじゃあな」
言って青年は部屋から去って行った。
一人部屋に残ったゆかりはやけに部屋が静かに思えて、そんな中で先ほど聞いた話の内容を整理しようとする。
だが、冷静さを取り戻せていないため考えがまとまらず、俯いてカップのお茶に視線を落としながら静かに呟く。
「……訳分かんない」
どうしてこんな事になったのか。訳が分からず少女はしばらく動く事が出来なかった。

第百六十話　確認事項

１２月１７日（月）
放課後――月光館学園・生徒玄関
湊から彼のこれまでの経歴について聞いたゆかりは、一日置いて少し冷静さを取り戻すと、やはり彼の言ったことが本当なのか確かめる必要があると考えた。
昼休みに彼のクラスを覗くと本当に学校に来ていなかったので、ゆかりが何かしらの答えを出すまで学校に来ないのだと思われる。
答えを出さずに延々と悩み続ける可能性もあるというのに、変なところで相手の意志を尊重してくる甘さを残しているせいで、話を聞いても彼がただの人殺しだとは思えなかった部分はある。
もっとも、彼が語った話の真偽だけでなく、色々と経歴に不明な点が多かった部分も今日で少しは明らかになるはずなので、ゆかりは目的の人物が来るまで生徒玄関で待っていた。
そうして、待つこと数分。目的の人物である赤髪の少女が美紀と並んで歩きながら靴箱までやってきたことで、ゆかりは手をあげて相手を呼ぶと話しかけた。
「あのさ、チドリと少し話がしたいんだけど、今から二人でちょっと話せない？」
「……湊から話は聞いてるから別にいいわよ。他の人から聞かれる心配のない場所があるから、とりあえず駅の方まで行きましょうか」
用事があると言われれば日を改めるつもりだっただけに、事前に湊から説明は受けていると言われて少し拍子抜けする。
こっそりと話をする場所まで考えている辺り、チドリも一般とは異なる感覚や経歴を持っていそうだとゆかりは思った。
許可をもらえたことでゆかりはローファーに履き替え、チドリも風花を待つという美紀を置いて同じように靴を履き替えると生徒玄関を出ていく。
外に出て駅に向かう途中、会話らしい会話はほとんどなく、交わした言葉は今から行くのがどういった店かという確認程度だった。

駅について定期券で改札を通過し、やってきたモノレールに乗り込むと、二人の少女は隠れ家的な店である喫茶店〝フェルメール〟へと向かって行った。

＊＊＊

モノレールを降りると少し歩くと言ったチドリの案内に従い、ゆかりは港区外れの狭い路地を通った先にあるこじんまりとした喫茶店へとやってきた。

こんな場所に喫茶店があったのかと、今まで通った事もない初めて訪れる場所だった事で、中はどんな雰囲気なのだろうかと興味を抱きながら店に入る。

扉に付けられた来客を知らせるベルがカランと鳴り、カウンターにいた中年の男性と紅茶を飲んでいたドレス姿の女性が視線を向けてきた。

「やあ、いらっしゃい。彼抜きで来るなんて珍しいね。そちらの方は学校のお友達かな？　僕はここの店主をしている五代だ。まぁ、自由に座ってよ」

ぼさっとした黒髪に無精ひげを生やした男・五代に言われ、ゆかりはチドリの後に続いてカウンター席に座った。

この場所では五代や女性客に話を聞かれてしまうのではと思ったが、チドリに動く気はないようで、座った少女らの前に水とおしぼりを用意して五代がメニューを渡してくる。

話を聞きたいと言ったのはゆかりであるため、教えてくれる者の希望や指示には従うつもりであるが、これで本当にいいのだろうかと思いつつ注文を決める。

「えと、それじゃあチーズケーキとホットのダージリンをお願いします」

「……私はアールグレイとワッフル」

「かしこまりました。用意するから少し待っててね」

注文を聞いた五代はお湯を沸かして紅茶を淹れる準備をしながら、チドリの注文したワッフルを焼く準備も進める。

目の前でやってもらう事に新鮮さを感じて眺めれば、まだお茶も来

ていないというのにチドリが話しかけてきた。
「それで湊からはどんな話を聞いたの？」
「え、その、ていうか、ここで話して大丈夫なの？」
「大丈夫よ。二人とも知ってるから」
言われて驚いたゆかりは五代と女性客の方を思わず見てしまう。
仮に湊の話が全て真実だとして、それらを全て知っているとすれば、この二人も真っ当な世界の住人ではないということだ。
優しそうな男性と少し高貴な雰囲気のある女性。別にどこもおかしいところはなく、むしろ善人というか親切そうな空気すら感じる。
そんな二人が所謂裏の世界に通じる人間だと聞かされたゆかりは、チドリの言葉を信じることが出来ず目をぱちくりとさせた。
すると、チドリの言葉が聞こえていたらしく、何かに感づいた様子の女性客が声をかけてくる。
「わたしはチドリちゃんの知り合いのロゼッタ。よろしくね。それより、もしかして、籠球皇子じゃなくて小狼君の方の話でもしにきたの？　学校のお友達にするような話じゃないと思うけど」
「湊が自分で話して、信じられないなら他の人間に聞けって言ったらしいの。こっちはどこまで話したか分からないから、先ずはそこを聞かないと話しようがないわ」
ロゼッタが口にした小狼という言葉にゆかりは首を傾げる。けれど、直前に籠球皇子ではなくと言っていたことから、それが湊のことだというのは理解出来た。
仕事用の名前、そう考えるのが自然だろう。本名で堂々と仕事をするには彼は若過ぎる。学校生活など日常にも籍を置いているので、全国模試でトップを取り続けていることや、今回の籠球皇子フィーバーなど周囲が騒げばすぐに見つかってしまう。
その点、偽名を使っていれば仕事中に呼び名に困らないだけでなく、自分の素性がばれるリスクを抑えることが出来る。
他の者たちが騙している雰囲気はないため、ゆかりは軽く話を聞いただけで湊の言ったことが本当の様に思い始めていた。
そして、真偽を確かめるために彼から何を聞いたか言う必要がある

のなら、すべて話して早く教えて貰おうと考え、ゆかりは先日聞いたことを掻い摘んで伝える。
「有里君は自分が人殺しだって言ってた。二万人以上殺してるって。最初に殺したのは施設から逃げるときに大人を百人以上殺して、それからは知り合いの紹介かなんかで裏の仕事を始めて。海外に行ったのは修業目的だったけど、知り合いの女の人が死んでからは復讐でＥＰ社の人を殺して回ってたって」
本当はもっと詳しく言っていた。だが、あのときは彼の身体に残った傷跡に目が行ってしまい。続けて聞かされた話に衝撃を受けてあまり内容が頭に入って来なかった。
そのため湊が話したときよりも掻い摘んだ説明になってしまったが、これで何となくは理解して貰えただろうかと思いながら尋ねる。
「……ねえ、この話ってどこまで本当なの？」
水の入ったコップを両手で掴みながら尋ねる少女は不安そうな表情を浮かべる。
聞きたいのは否定の言葉であり、彼の家族である少女にはいつも通り彼のふざけた行動に対して呆れた溜め息を吐いてもらいたい。
だが、ゆかりのそんな思いも虚しく、紅茶のカップを少女たちの前に置いた五代があっさりと肯定してしまう。
「かなりざっくりとした説明だけど全部本当だよ。彼、一時期は一千万ドルの賞金首として世界中から狙われてたんだ」
「小狼君を殺すためだけに国聯軍が派遣されたりもしたものね。表じゃ噂にも出ないでしょうけど、裏の方じゃ一番の有名人よ。世界を敵に回しながら裏界最大組織を単独で墜としてしまった化け物って」
一千万ドル、時期によって変わるがおよそ十億円。そんな数字を聞いても一般人ではまるで想像出来ず、むしろ、世界中から狙われて国聯軍が派遣されたという話の方が印象に残った。
たった一人を殺すためにそれほどの戦力を投入する必要があるとみなされ、それでも青年は生き延びて目的を達成した。
目的を達成するまでにいくつもの犠牲を払ったが、ゆかりからすれば、一人で桐条グループに潜入して父親の死の真相を暴くのと同じく

らい無謀な事なのだろうと想像する。
もっとも、少女の想像は青年の冒した復讐劇には到底及ばない難度だが、彼が人殺しだという話が真実であれば、どうして彼が人を殺すようになったのかが知りたい。
そう思ったゆかりは顔を上げるとチドリに尋ねた。
「ねえ、チドリと有里君がいた施設ってなんなの？　どうして逃げ出す必要があったの？」
「……そうね。まず、湊は八年前に桐条グループの事故で両親を亡くして、自分も半年ほど意識不明だったって話は覚えてる？」
「修学旅行の夜に話してたやつだよね？」
「ええ、それで湊は施設に保護されたというか回収されていたの。私たちよりも先にね」
始まりの少年エヴィデンス。それが研究所で彼が与えられた名前。
両親を亡くした直後にペルソナに覚醒し、アイギスと共にデスと戦い勝利をおさめた。
詳しい戦闘の記録はデータが破損して分かっていないが、シャドウから人々を守るための鍵だとして回収された当時の彼は、そのまま目覚めることなく半年も眠り続けた。
その事を何も知らない少女に素直に話すわけにはいかない。五代たちには協力を要請するという立場から、信用して貰うために全てを話したが、徐々に適性値が上がっていようとまだ適性持ちにすらなっていない彼女に話すのは危険と判断し、チドリは重要な箇所をぼかしつつ話し始める。
「詳しく話しても分からないでしょうから簡単な説明になるけど、公にはされていないある病気のようなものがあって、それは現状被害の拡大を防ぐ方法もなく、最悪だと人が死んだりもする危険な物なの。抗体となる物が存在するということは仮説として分かっていたのだけど、ずっと発見されずにいた天然の抗体を湊は持っていた」
病気とは影時間とシャドウ、抗体とは即ちペルソナだ。
重要な部分はぼかしても本筋はちゃんと伝わる。チドリは一度紅茶で喉を潤すと、真剣に耳を傾ける少女に当時の自分の立場について

も説明する。
「私はその抗体を受け止める可能性を持っているからと集められた孤児。天然で持っていた湊と違って、抗体を与えられた私のような被験体は、その抗体の副作用で死なないために寿命を縮めるような劇薬を飲み続ける必要があった」
実際は与えられたのではなく、強制的に覚醒させられた訳だが、生きるために命を削る劇薬を飲むとはふざけた話だ。飲まなければすぐに死に、飲んでも遠くない未来に死が待ち受けている。
大人たちの勝手な都合で集められた子どもたちは、戦闘訓練と実験を受けさせられながら、そんな到底まともとは思えない生活を送っていた。
「副作用で死なないための寿命を縮めるような劇薬って、じゃあチドリは今もそれを？」
「いいえ。飲んでいたから普通の人より寿命は縮んでいるでしょうけど、湊が副作用を中和する新しい抗体を見つけて来たからもう飲んでないわ。まぁ、そのおかげで髪は赤くなってしまったけど」
「え、でも、有里君の目の色も治療の副作用って言ってなかった？」
「ええ、同じものよ。ただ、湊は自前の抗体の力をさらに強めるために新しい抗体を入れたの。人によって副作用がどこに出るか不明なんだけど、湊は瞳の色が変わって、私ともう一人は髪の色が変わったわ」
チドリが今も寿命を削る劇薬を飲んでいると思ったゆかりが心配そうに尋ねれば、チドリは苦笑しながら自分の髪に触れて、ちょっとした副作用はあったが現在は大丈夫だと返す。
湊とチドリでは黄昏の羽根を内蔵した理由が大きく異なっており、湊は搭載せずとも触れているだけで搭載時と同じ効果を発揮するエールクロイツの力を得るとともに、黄昏の羽根の適性を強化する特性を得ようと心臓を包むようにエールクロイツを内蔵した。
対して、チドリとマリアは黄昏の羽根の適性を強化する特性によって、彼女たちの足りていない適性を補い、それによって制御剤を使わずに済むようにと一度光の粒子に分解して心臓の内部に内蔵させたのだ。

湊とエールクロイツは既に同化して生身では触れられず、心臓とその周辺を吹き飛ばそうが取り出せないが、チドリたちは未だに半物質状態なので心臓から抜きだすことは出来る。
ただし、一度内蔵したことで適性が安定したため、いまチドリたちから黄昏の羽根を抜いたところで、彼女たちの適性値から強化された分が減るだけでペルソナが暴走する心配はもうない。
流石にそこまでは理解出来ないだろうが、ゆかりはチドリが今も劇薬を飲んでいる訳ではないと分かり安堵の息を吐くと、話に出てきた〝施設〟に対する嫌悪感を露わにしながら返して来た。
「ねえ、その病気の研究って違法じゃないの？　人体実験してたってことだよね？」
「当然違法よ。ただ、病気の存在自体は国にも伝わっていないし。研究していた組織は表に影響力を持っていたから、色々とカモフラージュして上手い事やっていたって訳。ま、それも湊が壊滅させてしまったけどね」
あの施設はもうない。逃げ損なった被験体や操られていた被験体がどうなったかは知らないが、少なくとも人工ペルソナ使いの研究は一度終わりを迎えた。
ペルソナやシャドウに影時間の研究といった物は新しい研究所に引き継がれたようだが、少なくとも以前美鶴に勧誘された様子からすると、今は真っ当に美鶴や真田のサポートと並行して研究しているだけのようだった。
故に、もう自分たちのような被害者が出ることはないとワッフルを食べながらチドリが伝えれば、ゆかりは紅茶のカップに視線を落としながら小さく呟いた。
「言われて少し調べたの。七年前に、人が沢山死んだガス管の破裂事故ってやつ。そしたら、桐条グループ傘下の製薬会社地下でガス管が破裂したって記事を見つけた。チドリたちが居たのってそこなの？」
「よく調べたわね。というか、湊が情報を教え過ぎたのかもしれないけど、私たちがいたのはそこで合ってるわ」
「じゃあ、有里君が桐条先輩を無視してるのは、親を殺されて、さらに

自分は実験体にされて、桐条グループを恨んでいるから？」
湊が美鶴を無視しているのは有名な話だ。ただでさえ目立つ者たちが揃っていれば嫌でも注目を集める。
美鶴は一時期ムキになって湊に話を聞いてもらおうとして、湊が無視し続けていることもあり周囲の生徒からはストーカーなのかもしれないと思われていた。
その状態ならばただのネタにしか思わないし、まさか裏にここまで複雑な事情が絡んでいるとは考えもしなかったろう。
事情を知った彼女が、湊の無視する理由をそう考えてしまったのも無理はない。チドリは相手がそう考えた理由を理解しながら、しかし、それは違うと首を振った。
「……湊は自分に対してされた事で怒りを覚えることはあっても、恨んだり憎しみを抱いたりはしないわ。欠陥人間だから自分の存在を勘定に含めることが出来ないの」
「じゃあ、彼の両親のこととかチドリたちのことで怒ってるってこと？」
「ええ、簡単に言えばそう。ただ勘違いしないで欲しいのは、湊は桐条美鶴に対して何の感情も抱いていないわ。憎んでいるのは桐条グループで、だけど単純には割り切れないから無関係の相手とは不干渉でいるってだけなの」
世間はグループだけでなくその家族も揃ってバッシングしていたが、美鶴はあの事故とは無関係で、むしろ巻き込まれて辛い思いをしている分被害者だと言える。
いくら加害者の関係者だろうが、それだけで相手に危害を加えれば、危害を加えた者は加害者と同じレベルまで落ちることになる。
その事実がある以上、関係のない者を巻き込みたがらない湊にすれば、美鶴が纏わりついて来ることは不快だが、自分と桐条グループの因縁に美鶴を巻き込むつもりなど到底ないのだ。
「……訳分かんない。そんな、人ってそこまで完璧に区別したり出来ないでしょ。感情のコントロールなんて、自分にとって大切なことなら余計に難しいはずなのに」

表面的には彼の事を知っているつもりだったが、その表面の部分すら理解できていなかったとゆかりは表情を歪ませる。
彼のことが分からない。どういった育ち方をすればそんな精神性を身に付けられるのか。理解しようとすればするほど、〝理解する事が出来ない〟という事実を突きつけられるのだ。
俯き気味に溢すゆかりを見て、五代たちは普通の人間の感性ならば当然だと、悩む少女に僅かな同情を覚えつつ一つのアドバイスを齎す。
「僕たちからすれば全く逆の意見だけどね。彼は感情と思考を切り離す訓練を受けているから、相手が知り合いでも敵なら引き金を引ける。でも、表に出さないだけで傷付いたりはちゃんとしてるんだよ」
「小狼君が上手く出来ているのは感情と思考の切り離しだけ。感情の処理は笑っちゃうくらい不器用でかなり下手よ。人との接し方をみればすぐ分かるわ」
彼は一見まるで理解出来ない存在のように思えるが、シンプルに考えると全体像を捉える事は出来た。
そう、湊は感情と思考を切り離した上で行動しているに過ぎず、機械的に物事を処理しているようで、実際は己を殺すという一種のやせ我慢でこなし続けているだけなのだ。
大人が甘やかさないと自分からは甘えて来ない不器用さも含め、湊はまず自分が負担を負うことで物事を処理するのが最善だと考える傾向にある。
他の者がなんのリスクも負わなければ、自分が損していてもトータルでは誰も損しないと考え、湊はそれをプラスだと捉える。
自分を勘定に含めないからこその思考であり、その思考の根本には生き残った者としての贖罪が含まれているのだろう。
一般人がそんな思考を理解出来るはずがないので、その部分を除いた結果と行動パターンから彼がどんな人間かロゼッタが説明すれば、チドリもそれを補足するようにゆかりに話しかけた。
「湊は自分を愛せないの。自分みたいな人間は幸せになっちゃいけないんだって思ってる。だから、自分が無条件に受け入れられることに

は戸惑うし、愛されることを極端に恐がり遠ざけようとするの」
「でも、チドリは傍にいるし。五代さんたちとも親しくしてるんですよね？」
普段から人助けをしまくっているというのに、他者との関わりに拒否感を覚えているというのは意外だ。
ただ、そんなにも人との関わりを嫌がるのであれば、チドリを家族と言っているのはおかしいし、五代たちに色々と自分の事を話しているのも不自然に感じる。
そのようにゆかりがカウンター越しに尋ねれば、グラスを磨きながら話を聞いていた五代は苦笑して返す。
「僕らは仕事上の付き合いが始まりだからね。仕事の信用もあるから一般的な関係の参考にはならないかな」
湊が五代たちと会ったのは、住む場所を手に入れる仕事を求めてだった。依頼は達成したものの結局報酬は現金で受け取り、二人が揃って桔梗組で暮らす様になってから五代たちは再会したが、それ以降は裏の仕事の仕方を教わるということで付き合いは続いた。
普段、一緒に行動していたのはイリスだったが、五代やロゼッタも彼に技術指導の一環で同行する事があった。
仕事での信用に加えてそれなりの時間を積み重ねてきたことで親しくなれたが、真っ当な繋がりではないので一般人の参考にはならないだろう。
そんな風に五代から言われたゆかりは、今度はチドリの隣の座るロゼッタに視線を向けて遠慮がちに尋ねた。
「えと、ロゼッタさんは有里君とその……肉体関係があるって聞いてるんですけど」
「フフッ、情報源はチドリちゃんかしら？　まぁ、一線は越えてないんだけどね。彼とのことを心配してるなら大丈夫よ。初めての子でもちゃんと優しくリードできるから」
ロゼッタは何を勘違いしたのか、ゆかりが湊とのそういった行為に興味を持ったと思ったらしく、お節介にもほどがある助言をしてきた。

アナライズによる相手の弱所を見抜く力と読心能力に習得した技術を組み合わせれば、理論上は湊に堕とせない相手はいない。
本人すら気付かぬレベルの心身の状態を完璧に把握した上で、最も敏感な部分を最上の技術でもって嬲るのだから、下手をすれば脳内麻薬の過剰分泌で依存性すら出てしまう。
流石に経験のない少女にそんな事をするとは思えないが、そういったときには湊はとても紳士なので何の心配もなく極上の快楽を得られるはずだった。
しかし、ゆかりが聞きたいのはそういう事でなく、相手の言葉に乾いた笑みで返しながら、具体的に質問を口にした。
「えっと、そうじゃなくて、どうしてまだ子どもだった彼とそんな事をしようと思ったんですか？」
「ああ、最初は美人で可愛い子どもだったんだけど、成長するにつれて男らしさっていうか色気が出てきたの。まぁ、最初からルックスで売り出す事も出来たんだけど、成長したらそういう部分も活かした方が仕事しやすいだろうからって、本人にそっち方面の技術も習得しておくかって訊いたのよ」
確かに湊にそういう事を教えたのは中学校への入学前で、成人女性が未成年の少年とそんな事をするのは同意があろうと犯罪である。
普通の感性を持ったゆかりが疑問に思うのも当然なので、ロゼッタが当時を懐かしみながら答えれば、ゆかりはチドリと一緒になって真剣に耳を傾ける。
「有里君はなんて？」
「覚えて損はないだろうから習得するってすぐ頷いたわ。まぁ、最初は私とイリスっていう彼のもう一人の母親代わりだった人と二人で教えたの。ほら、やっぱり二人きりだと色々と危ないじゃない？　二人ならお互いを監視出来るから一線は越えずに済むってね」
ロゼッタには前科がある。幼いころ変装として少女の格好をしていた湊に発情し、色んな服に着替えさせている途中で襲いかかったところを、戦闘状態に切り替えた湊に沈められたというあまり人に聞かせられない前科が。

イリスもその事を覚えていたので、彼女よりも高いレベルで技術を持っているロゼッタが教えることに反対はしなかったが、最初は一緒に教えるということで場所はイリスが滞在しているホテルになっていた。

ある程度経験を積めば、指南役に紅花も加えて異なる相手にも技術が通用するかを試したり、複数人を同時に相手にしたりと様々なシチュエーションに対応できるようにした。

とはいえ、どんな理由があろうと爛れた世界の話なので、流石にそんな詳しいところまで説明する気はなく、ロゼッタはにっこりとほほ笑んで一つ助言する。

「まぁ、彼の生き方を見てきた人間として率直なアドバイスをさせてもらえば、彼の事は信用していいし信頼を寄せてもいいと思う。でもね、真っ当な幸せを掴みたいなら隣に居ようとするのはやめた方がいいわ。そのときは幸せでも、絶対に悲惨な別れになってしまうから」

「ロゼッタさんもそういう経験があるんですか？」

聞き返したゆかりにロゼッタは笑顔で返す。それが何を意味しているのか本当のところは分からないが、彼女のアドバイスは経験則によるものだということはゆかりも理解した。

まだ若い女性が裏の世界に関わっているのだから、その人生は当然普通ではないのだろう。

自分が好きになった相手も彼女と同じか、それ以上に闇に染まった人生なのはゆかりにも分かった。

そうして、湊の語った事が真実だと理解し、彼が語らなかった人生の一端を知った彼女は、財布を取り出すと五代に会計を頼んで支払いをしながらチドリに礼を言う。

「今日は色々教えてくれてありがとう。もう少し自分で考えてみる。聞きたい事があったら聞いてもいい？」

「ええ、話せないこともあるけど、貴女が聞きたい事は多分大丈夫な範囲内だから心配しなくていいわ」

「うん、ありがと。お二人もどうもありがとうございました。今日は帰ります」

会計を済ませて鞄を持つと席から立ち上がり、ゆかりは五代とロゼッタに挨拶をして扉へと向かう。
「気を付けて帰ってね。二人の知り合いならサービスするからまたおいで」
「はい、ごちそうさまでした。それじゃあ、失礼します」
最初に来たときは思いつめた表情だったが、今はどこか落ち着いた様子だ。自分たちの話が参考になったのなら良かったと、五代たちは笑顔で出ていくゆかりを見送った。
夜――ＥＰ社・研究室
ゆかりに自身のこれまでの生き方について語って以降、湊は言っていた通り学校に行っておらず、ＥＰ社の方で新しい義手やラビリス達の人間化の研究を進めていた。
生体ボディの骨格となる素材はまだ完成していないが、その間により人間らしい見た目と感触にマイナーチェンジしたパーツが完成した事で、湊は自分の義手を付け替えラビリスと共にデータを取っていた。
だが、途中で湊の携帯がバイブレーションで震えたため、何かの連絡だろうかと一時中断して携帯を確認していた湊がぽそりと呟いた。
「……なるほど」
「どないしたん？　誰からのメール？」
電話なら一言断って話しているはずなので、携帯の画面を見ているだということは先ほどの着信はメールだったのだと判断する事が出来る。
メールを読んだくらいで湊が言葉を漏らすのは珍しいため、ラビリスが誰からのメールだったのかと尋ねれば、湊は携帯を仕舞って淡々と返す。
「ただの知り合いからのメールだ。契約終了の連絡だった」
「お仕事やめたんやなかったん？」
「別口だ。まぁ、その報告を聞くために二十四日は出掛ける。何時に帰るか分からないから先に寝ておいてくれ」
「ん、わかったわ。鍵閉めとくからちゃんと鍵持っていきよ」

湊が大したことではない風に話すからには、きっとそれほど重要な事ではないのだとラビリスは判断する。
裏の仕事は既に受けていないので心配する必要もなく、帰りが遅くなっても大丈夫なよう忠告すると、ラビリスは湊を誘って中断していた実験へと戻って行った。

第百六十一話　少女との別れ

１２月２４日（月）
夜――ポートアイランド駅
今日はクリスマス・イヴ、日本では恋人や家族と少し特別な日を過ごすといったイメージが強い。
肌を刺すような寒気に白い息を吐きながら、普段よりも落ち着いた印象の服でお洒落をしてきたゆかりは、待ち人が来るのを静かに待っていた。
「……意外と早いな。メリー・クリスマス、と言っておくべきか？」
「それよりも久しぶりって挨拶すべきじゃない？　まぁ、とりあえず私からもメリー・クリスマス」
駅前の街灯のところで待っていると、高級そうなスーツとコートにいつものマフラーを巻いた青年がやってきた。
その見た目は中学生とは思えず、どちらかというと若手社長やインテリマフィアのようでもある。
しかし、部屋で別れてから一回メールのやり取りをしただけで、電話も何もしていなかったゆかりは、彼がいつも通りの様子でやってきた事を嬉しく思いながら挨拶を交わした。
「それで、答えは決めてきたのか？」
「会ってすぐにそういうこと聞くかな普通」
「悩んでいる状態で義務感から恋人イベントの消化に来ていたらお前に悪いからな」
最初に予定していたからと義務感でやってきたなら、そんな事をする必要はないので答えを決めてきた方がいいと湊は告げる。
呆れたように嘆息しながら答えたゆかりの様子から察するに、彼女は既に答えを決めて彼を呼び出したのだろう。
一メートルほどの距離で向かい合っていれば、ゆかりは真っ直ぐ湊を見つめながら口を開いた。
「……チドリから話は聞いた。それから五代さんとロゼッタさんって人からも君の事を聞いた。君がただ自分勝手な理由でそんな道に進

んだ訳じゃないって分かって安心した。だけど、うん、やっぱりそういうのは良くないって思う」
「当然だな。一応言っておくとチドリや桜さんも俺の選択には反対したし、その点においては俺を軽蔑してもいる。まぁ、完全に悪だと、犯罪者だと言い切らないのは身内への甘さだな」
青年の味方であり家族である者たちも、無条件で彼の事を肯定している訳ではない。
正常な善悪の判断力を持っていて、彼のこれまでの行いは悪であると思った上で、それを除いた部分では善性だと認識しているのだ。
本人は自分を救いようのないクズな殺人鬼として見限っているが、彼が一定のルールに則って仕事を受けていたことを知っている者からすれば、復讐に駆られる以前の彼は悪を持って巨悪を討つ力を持たぬ者の味方だった。
故に、身内への甘さを抜いても、彼をただの悪人とみなすことはないだろうが、青年のこれまでの生き方を聞いた少女は、以前挨拶したときの桜の様子からそれを理解していると返す。
「話を聞いてから何となくは分かってたよ。有里君がバスケ部で大会に出てたり、私と付き合ってるって聞いた保護者の人が、やけに嬉しそうにしてたのを覚えてるから。あれは君が真っ当な生活を送っていることに喜んでたんだよね？」
「ああ、俺が芸能人になることを推しているのも、そういった世界との関係を切って生活して欲しいと思っているからだろうな」
「んー、そこは多分、純粋に親馬鹿なんだと思うな。他の人にも君の良さを知ってもらいたい的な」
桜の茶目っ気やノリの良さを考えると、湊の芸能界入りを望んでいるのは湊の活躍をテレビで見たいといった素直な気持ちからだと思われる。
似た感性を持っている美鶴の母である英恵も、やはりテレビに映る湊に喜んでいたため、裏との繋がりを断って欲しいという思いも混じっているだろうが、本心では純粋に非常に魅力的な青年を世間の人にも知ってもらいたいという子ども自慢が主な理由と推測された。

笑いながらゆかりがその事を伝えれば湊も苦笑して返し、しかし、いつまでも雑談ばかりしていられないと本題について切り出した。
「ま、そういう話はいいだろ。岳羽の選んだ答えを教えてくれ」
「……うん」
街灯や周囲の店の看板の光が反射し、輝いて見える不思議な透明感を持った金色の瞳。
そこから相手の感情を読み取ることは出来ないが、ジッと見つめる彼をしっかりと捉えたまま、ゆかりはこの一週間考えて出した自分の答えを告げる。
「私は君と別れる。今日でこの関係を終わりにする。ただ、仮初の恋人として最後にデートしたい。それくらいの我儘はダメかな？」
「……いや、予定は空けておくって言ったろ。それくらい問題ないさ」
「そっか、良かった。じゃあ、イルミネーション見てそれから晩ご飯食べに行こ！」
惜しい気持ちもなくはない。初めて好きになった相手と仮初でも恋人でいられるのだから、歪な関係であっても続けてもいいじゃないかと囁く部分はあった。
けれど、未来のない関係で彼を縛るのは嫌だった。自分の気持ちだけで相手を振り回したくはない。
だからこそ、ゆかりは今日これからのデートを最後の思い出として、半年に及ぶ仮初の恋人という関係をお仕舞いにしようと思った。
――都心・ホテルレストラン
それから二人は並んで歩いて色々な場所のイルミネーションを見て回った。
巌戸台周辺だけじゃなく電車に乗って移動し、デコレーションされた巨大なツリーを見たり、特別な色でライトアップされた東京タワーを見たりして、気付けば時刻は八時になっていた。
既に夕食の時間は回っているので、コースメニューを提供する様な店はどこも満席だろう。
だが、時間は遅くともせっかく都心の方まで出てきたのだから、周辺でいい店がないかとゆかりが携帯で調べようとすれば、ついて来い

と言って湊が彼女をある場所まで連れてきた。
彼が連れてきたそこはゆかりでも知っている超有名ホテルで、海外の要人もよく泊まるという中学生カップルとは縁のない場所だった。
しかし、湊はそのまま中へと進み、フロントで名前を伝えるとボーイがやってきて二人を上層階にある広い個室へと案内した。
「な、なにここ……」
「何って普通に食事用の個室だが？」
「いや、こんなとこ来るって聞いてないし。ていうか、なんで名前伝えただけで案内されたの？」
「予約しておいたからな。岳羽の行動は予想済みだ」
部屋の中に入ると湊はコートを脱いでボーイに預けて席に向かい。状況に困惑していたゆかりも、彼に続いて部屋に入ると同じようにコートを脱いでボーイにかけて貰う。
そして、夜景の見えるテーブルに移動すると、湊の方はボーイが、ゆかりの方はやってきたギャルソンが椅子を引いてくれたので、礼を言ってそのまま座った。
二人が席に着くとボーイは礼をして部屋を出ていき、そこからはギャルソンが二人をもてなす。
「本日はお越しいただきましてありがとうございます。私は給仕を担当させて頂きます東山でございます。どうぞよろしくお願いします」
「あ、えと、岳羽です」
「……丁寧なことは結構だが自己紹介は返さなくていいんだぞ」
「……そうだね」
状況に困惑してつい自己紹介し返してしまったが、よく考えればする必要はなかったと思ったところで、目の前に座る青年が呆れ気味に指摘してきたため、ゆかりは目を細めて失敗しただけだと睨む。
若い二人のそんなやり取りをギャルソンの男性は微笑ましそうに眺めながら、二人にナプキンを渡して今日の料理について確認を取る。
「本日はクリスマスディナーの肉のコースとお伺いしていますが、お間違いないでしょうか？」

「ええ、合っています。食前に俺はサンドリヨンを、彼女にはサラトガ・クーラーをお願いします」
「かしこまりました。では、本日はごゆっくり楽しみください。失礼します」
　湊が頼んだのはどちらもノンアルコールカクテル。別にアルコールを飲んだところで少しも酔いはしないが、目の前の少女にも気を遣って、ルールを守りながら大人っぽい雰囲気を楽しめる物を選択した。
　相手も湊が頼んだのはノンアルコールカクテルだと分かっているらしく、御品書きを眺めてどんな料理が出てくるのかを確認すると、すぐ傍の窓の外に広がる絶景に目を輝かせた。
「うわぁ、すっごーい。イルミネーションしてるとこもあって、なんか普段以上に綺麗に見える」
「お前の方が綺麗だよ、とか言った方がいいのか？」
「気持ち悪っ、鳥肌立つからやめてよ」
「ああ、鳥料理も出るぞ」
「いや、そういう話じゃないけどね……」
　青年なりのジョークなのかもしれないが、相手は素で女たらしな台詞を吐くと格好良いのに、わざと言ってくると途端に胡散臭くなる。
　このアンバランスさが極一部には受けているらしいが、とりあえずゆかりにとっては気持ち悪いだけで嬉しくもなんともない。
　その事を素直に伝えると彼はそのまま流して来たが、これ以上言って何か言われると面倒なので、少女は膝にナプキンをかけながらドリンクと前菜が運ばれて来るのを待った。
　そして、景色を眺めつつ、横目でフォーマルなスーツ姿の青年を見ていると、扉がノックされて先ほどのギャルソンともう一人男性がやってきて、二人の前にドリンクとこじんまりとした料理を置いた。
「こちら本日のアミュールの手まり寿司でございます。黄色がパプリカ、赤がローストビーフ、緑がホウレンソウとなっております。周りの白いソースはサワークリームでしてお好みでお付けください」
「わぁ、可愛い！　クリスマスカラーになってるんだ」

アミュールとは前菜の前に出される所謂〝お通し〟や〝つきだし〟と同じ物である。客を楽しませるための一品で、これの出来によってシェフの実力が試されるという者もいる。
今日のこの品は一口サイズの可愛らしい手まり寿司で、クリスマスカラーということもあり、ゆかりは食べるのが勿体ないなと困った笑みを浮かべた。
それを見てギャルソンたちは嬉しそうな顔をして、礼をすると再び部屋を出て行った。
「……とりあえず乾杯しよう」
「うん。じゃあ、今日の思い出に乾杯」
「乾杯」
二人しかいない場所なら多少のマナー違反も許される。手に取ったグラスを小さく鳴らし、二人はドリンクに口を付けて味わう。
ちゃんとフルーツを絞って作ったカクテルは非常に爽やかな口当たりで、グラスを置いた二人はアミュール用の箸を使って料理を口に運ぶ。
ゆかりはパプリカの寿司は初めてだったが、柔らかく甘みもあって非常に食べ易く、寿司というよりはサラダに近い感じだと思った。
続けてローストビーフの寿司には少しサワークリームを付けて食べるが、これもお肉が柔らかくソースの味がとても絡んでいて美味しかった。
最後のホウレンソウに包まれた物はどうだと期待を寄せて口に運べば、中に隠れていた酢飯にゴマが混ざっていて、ほんのり香ばしく先の二つとは異なる味わいが楽しめた。
一品目からこれほどとなると、弥が上にも前菜や他の料理への期待が高まる。
「有里君、連れて来てくれてありがとう！」
特別な日にこんな素敵なところへ連れて来てくれた青年へ、ゆかりは心からの感謝を伝えた。
すると、ドリンクのメニューを眺めていた相手は、不思議そうに視線を向けてくると斜め上の発言で返してくる。

「……もう帰るのか？」
「いや、帰らないから。どういう流れで帰ると思ったのよ」
「食事の礼は食べ終わってからされることが多いからな。まぁ、可能性として聞いてみただけだ。楽しんで貰えているなら良かったよ」
「君との会話は時々疲れるけどね……」
相手との時間は楽しい。だが、人とずれた感覚の持ち主である湊は、ときどき変な発想で返してくるので、割と常識人で突っ込み属性持ちのゆかりとしては、突っ込みどころ満載の青年の相手には少々体力がいった。
とはいえ、彼も今のは確認として聞いてきただけなので本気ではない。ならばこれ以上は何も言うまいと、ゆかりは次々と運ばれてくる料理に舌鼓を打った。
＊＊＊
美しい夜景を眺めながら美味しい料理を堪能し、途中で催しとしてヴァイオリンの生演奏を聴いて感動したりと、ゆかりは今日のディナーに大満足だった。
本日最後の料理であるクリスマスデザートの盛り合わせと、二人が頼んだコーヒーと紅茶が置かれてギャルソンたちは出ていく。
ブッシュ・ド・ノエルのまわりに色とりどりのフルーツとバニラアイスが盛られ、これだけでもお腹がいっぱいになるのではと思える豪華さだ。
だが、そんな見た目も綺麗で可愛らしいデザートを前にしても、ゆかりの表情はいつの間にか暗くなっていた。
これを食べ終わったら今日のデートは終了で、後は寮の門限を大幅にオーバーした電車で帰るだけとなる。
楽しい時間が過ぎるのは速いというけれど、子どもである少女にはあっという間過ぎて、今日のこのデートが夢なのではないかとすら思えていた。
しかし、これは紛れもない現実だ。なら、最後の料理を食べる前に彼に言わなければならない事がある。
彼女が料理に手を付けていない事で、どうしたんだという視線を向

けながらコーヒーを飲んでいる青年を真っ直ぐ見ると、ゆかりは意を決したように姿勢を正して口を開いた。
「あの、ね。聞いて欲しいことがあるの」
「……それは食べ終わってからじゃ駄目なのか？」
「うん。食べ終わったらデートが終わっちゃうから」
正確には帰るまでがデートかもしれないが、彼女にとっては今日のイベントが終わるという意味では、ディナーの終了がデートの終了とイコールだった。
だからこそ、このデートが終わるまでに伝えようと思っていた事を正直に伝える。
少女の様子からくみ取って話を聞く姿勢になってくれた青年に、ゆかりは湧き上がってくる恐怖を抑え込んで自分の気持ちを言葉にした。
「私は有里君の事が好きです。だから――――私と付き合ってください」
ゆかりの突然の告白に湊は目を細める。それはまるで相手の真意を探るようであり、遠回しにゆかりの考えが分からないと言っているようでもある。
「……別れるんじゃなかったのか？」
「うん、仮初の恋人は今日でお仕舞い。それで今度は正式に付き合って欲しいって告白したの」
そして、湊がストレートに尋ねれば、彼女は視線を逸らすことなく答えて見せた。
ゆかりが待ち合わせ場所で言っていた〝今日でこの関係を終わりにする〟というのは、今の歪な関係の清算宣言。
何も言わなければずっと付き合ったままでいられただろうが、自分の我儘で相手を縛り続けるのは嫌で、真剣に彼を想っている他の子たちに悪いと思った。
故に、ゆかりは一度別れてから改めて告白した。一度無関係になってから、今度は正式な恋人にして欲しいと。
「俺が今まで何をしてきたかを聞いておいて、出した答えがそれか？」

「そう。有里君がしてきたことは悪い事だと思う。それはきっと一生赦されないこと。でも、そんなのは関係ないの。好きだから一緒にいたい。考えて最後に残ったのはその気持ちだった」
恋に恋する少女では彼と一緒にいられない。湊の事を知った上でその罪について考え、罪も彼の一部だとちゃんと理解してゆかりは答えを出した。
甘い考えだということは分かっている。自分の気持ちを優先して、湊の事をちゃんと見れていないと言われたらそうかもしれない。
だがそれでも、ゆかりなりに真剣に考えて出した答えだ。可否を問わず湊の返事が聞きたい。
そう思って待っていれば、
「……はぁ、理解出来ないな。岳羽はもう少しまともな人間だと思っていたよ」
返ってきたのは無慈悲な言葉だった。
深いため息を吐いて呆れた顔をした湊は、メニューの傍に置いてあった呼び出しのボタンを押す。
拒絶の言葉で返し、ギャルソンを呼んだという事は、湊はもう帰るつもりなのだろう。
せっかくのデザートが勿体ないという気持ちと一緒に、一人で盛り上がって結局は振られてしまったという気持ちが混ざり、ゆかりは滲む視界で少しでも食べてしまおうとフォークを皿に伸ばす。
そして、彼女が鼻をすすりながら食べていると、呼ばれたギャルソンがすぐにやってきた。
「何かございましたでしょうか？」
「すみません、頼んでいた物を持って来ていただけますか？」
「はい、かしこまりました」
湊に言われた相手はすぐに出ていく。てっきり帰るとばかり思っていただけに、デザートを食べるまではいてもいいのかと考えていれば、戻ってきたギャルソンは六つのリングがはめ込まれた指輪置きをゆかりの前に差し出した。
「こちらがお選びいただいていたリングでございます」

「岳羽。三種類までは絞ったから、後はお前の好みで選べ」
「……は？　え、え？」
突然指輪を見せられた上に話しかけられ、ゆかりは充血した目をぱちくりとさせながら指輪と湊を交互に見る。
そんな彼女に湊はおしぼりを渡して涙を拭けと伝え、とりあえず彼女が言う通りにすると、目元を拭き終えたおしぼりをテーブルに置いたところでギャルソンが話しかけてくる。
「ご説明させて頂きます。こちらがホワイトゴールドにピンクダイヤ、こちらがシルバーにカナリーイエローダイヤ、そしてこちらがプラチナにダイヤモンドをあしらった物になります。男性の方のリングは石がブルーダイヤ、グリーンダイヤ、ブラックダイヤとそれぞれなります」
指輪置きにはめ込まれていたのは対になった三組の指輪。
どうみてもペアリングにしか見えず、実際に色が男女で違うだけでデザインはそれぞれ共通している。
だが、男女用のペアリングはカップルではめる物。先ほど振られた自分には関係がないはずだと、状況が飲み込めないゆかりは混乱しながら尋ねた。
「これ、あの、え？　だって、さっき振られたのになんで？」
「別に振ってないぞ。ただ、お前が度を超えた馬鹿で呆れたと言っただけでな。まぁ、予想はしていたんだ。だから、ジュエリーショップもあるこのホテルをディナーの場所として選んだ。最後にサプライズとしてペアリングを渡せるように」
「なっ、なによ、それ。ずるい、すっごくずるい。私、泣き損じゃん」
あんな言い方をされれば誰だって振られたと思うはず。もし、もっと素直に受け入れてくれていたら、自分は悲しい涙など流さずに済んだ。
さらにいえば、せっかくの美味しいデザートをしょっぱくする必要もなかった。
乙女心を弄び、紛らわしい返事をしたクズをぶん殴ってやりたいところだが、クリスマスにペアリングを贈られる事が嬉し過ぎて、ゆか

りは口元を緩ませながら指輪の方へと向き直る。
「あー、えと、どうしようかな。ていうか、どれも綺麗だし。こんなの付けていいのかな？」
「岳羽に似合うと思って真剣に選んだんだ。貰ってくれるなら付けて欲しい」
「そ、そっか。んー……じゃあ、このダイヤモンドのでお願いします」
ゆかりが選んだのはプラチナにダイヤモンドがはめ込まれた指輪。色つきのダイヤも綺麗だが、ペアリングはシンプルで洗練されたデザインの方がいいと思えたのだ。
彼女が指輪を選ぶと、それを聞いたギャルソンはしっかりと頷き、サイズの確認をするかと問うてくる。
「かしこまりました。こちら、試着はされますか？」
「ええ。岳羽、一応サイズが合ってるか付けてみてくれ。よければ磨いて包んで貰うから」
試着すると答えた湊は女性用の指輪を取ると、ゆかりに手を出す様にいう。
恋人とのペアリングなど初めてなゆかりは、これは左右のどっちに付けるのが正解なのだろうかと悩むが、左手薬指は婚約指輪や結婚指輪用なので、カップルなら右手薬指にしようと右手をおずおずと差し出した。
ゆかりがちゃんと手を出してくれれば、湊は彼女の手を取って優しく右手薬指にリングを通す。関節で引っ掛からないよう気を付けてはめた指輪は、サイズも丁度良いようで彼女の指で可愛らしく輝きをみせる。
「だ、大丈夫だよ。うん、ぴったり」
「じゃあ、これでお願いします」
「かしこまりました。では、すぐにご用意いたしますので少々お待ちください」
サイズに問題がなければ、後はちゃんと磨いてからケースとチェーン付きで戻ってくる。
リングを預かったギャルソンが去っていくと、ゆかりは先ほどの事

が嬉しいのか口元だけ緩んだまま、しかし彼に聞いておかなければならない事を尋ねた。
「ね、ねえ、右手に付けちゃったけどいいの？　その、有里君の右手……あれ？　今日は生身っぽい？」
「前回は擬装用スキンを付けてなかったんだ。というか、普段はチェーンで首にかけるから問題ないし。そのうち生身の腕が出来るから大丈夫だ」
「生身の腕が出来る？　腕って生えるの？」
「いや、会社でそういう研究をしてるんだ。生体パーツを使った義肢のな。俺が以前から言ってた仕事っていうのはバイトじゃないんだ。色々あってＥＰ社の最高顧問になってて、ジャパンＥＰ社の代表をやってるから仕事は本当に仕事なんだよ」
　失った四肢がそんな簡単に生えてたまるか、と言いたい気持ちになったが湊はグッと堪える。
　ゆかりは湊に気遣って聞いてくれているのだ。ならば、ちゃんと説明できていなかった仕事の事も含めて、ここで説明しておく事にした。
　それを聞いた彼女は目を丸くするも、恋人よりバイトを優先していた訳ではないと分かって少し安心したらしく、社長さんならしょうがないと一定の理解を示した。
「そ、そうだったんだ。あ、あとさ、あとさ。私たちってその正式な恋人になったって事でいいの？　有里君、そういうの作らないって言ってたのに」
「……正直に言えば俺は誰も愛せない。異性として好きという気持ちも理解出来ない。ただ、大切っていう気持ちはちゃんとあるんだ。死なせたくないとか、守るとか、そういう物騒な方向性の気持ちだし。チドリみたいに何を犠牲にしてでも守らなきゃいけない人もいる。それでもいいならとしか俺は言えないんだがどうだろうか？」
　恋人となる上で湊の人としての欠陥は致命的だ。人を愛せないし異性として好きにもならない。大切だと思う事は出来るが、それがどういった意味で大切なのか他人には理解出来ない。

さらに、チドリやアイギスにラビリスなど、大切だと思っている桜や英恵を見捨ててでも助けようと決めている少女たちもいる。
優先順位が最初から明確に決められているのは、やはり年頃の少女としては悩むのだろう。ゆかりは少し複雑な表情を浮かべると湊に尋ねた。
「その何を犠牲にしても守らなきゃいけない人って何人いるの？」
「……最重要は今のところ三人」
「最重要ってことは次点とかもいるって事よね？　割とぶっ飛ばしたいんだけど、君にとっては自分の命より大切なんだろうね。……まぁいいよ。後から割り込んだのは私の方だし。ただ、ちゃんと私の事も見てよね」
彼が真っ当な道から外れたのは、きっとチドリたちを守ろうと思ったからだろう。大切な物を守るために敵を殺すような人物ならば、そういった人との違いもちゃんと受け入れて行かねばならない。
胸中は複雑だろうが、自分の事も大切に思ってくれるようなので、ゆかりはしょうがないと苦笑して彼の歪な在り方を認めた。
そうして、ゆかりがそれでもいいと答えた事で、二人は仮初ではなく正式な恋人となった。
青年の方は相手を愛していないし異性として好いてもいない。それでも、彼の言う〝大切〟という言葉は、そこらへんのカップルの「愛してる」よりも気持ちが籠もっているような気がする。
なので、ゆかりは特に不満はなく、むしろ幸せだと断言できるほどの嬉しそうな表情で、改めてデザートを食べ始めた。
それを見た青年もデザートを食べ始めたが、まだ伝えていないことがあったと少女に話しかける。
「……そういえば、一応ここのホテルで一部屋取っておいたんだが、せっかくだし泊まって行くか？」
「えっ、ほ、本当に予約したの？」
「岳羽が告白してくると予想してたって言っただろ。そしたら、その後にどっかに泊まるとか言い出すかもしれないと思って、ＶＩＰルームが空いてたから一部屋押さえておいたんだ」

この男は先回りの達人だった……という事は特になく、別にそんなスキルは持っていないが、久遠の安寧との戦争中に人や動物の心の声を聞き続けていた事で、読心能力を使わずとも相手の考えを予測出来るくらいに他者の思考について理解しているのだ。
ゆかりとはそれなりに付き合いが長いので、どういった人物か把握している分、その思考も読みやすい。
それ故、告白してくれれば、その後に時間も遅いしクリスマスだからどこかに泊まろうと言い出すに違いないと思っていた。
彼の予想はまさにその通りで、浮かれている少女はここを出たらそんな事を言おうかと少し考えていた。
けれど、よく考えれば何も持って来ていなかったので、その事を湊に伝える。
「私、泊まる用意持って来てないよ？」
「部屋にバスローブはあるし、洗濯機もあるから服は大丈夫だぞ」
「そ、そうなんだ」
ＶＩＰルームは伊達ではない。ホテルのクリーニングサービスも無料で使えるが、部屋にはキッチンや洗濯機など普通に生活できる設備があるのだ。
一般人でも金を出せば泊まれるスイートルームと異なり、ＶＩＰルームはホテルから信用を得ている超一流でなければ泊まることは出来ない。
少女はそこまで知らないだろうが、彼と恋人になれた特別な日に、一生にそう何度も泊まれないだろう有名ホテルの、さらにＶＩＰルームという特別な部屋に宿泊出来るなんて夢の様である。
こんなチャンスは逃せないとばかりに覚悟を決めたゆかりは、頬を薄らと染めながらぺこりと可愛らしく頭を下げた。
「あの、その、よろしくお願いします」
「ん？　まぁ、よく分からないが分かった」
何故彼女がそんなに丁寧に言ってきたのか分からず湊は首を傾げる。
しかし、相手の同意を得た事で、完成した指輪を持ってきたギャル

ソンにフロントに連絡して貰い。鍵を持って来てもらうと二人はＶＩＰルームに移動し長い時間を過ごした。

１２月２５日（火）

朝――ホテル・ＶＩＰルーム

翌日、寝室に置かれた大きなベッドの上でもそもそと目覚める者がいた。

半分寝惚けたような状態で起きたゆかりは、現在の時刻を確認しようとベッドランプの傍に置いていた携帯を手に取った。

（んー……まだ七時前か。チェックアウトは十一時って言ってたからもう少し寝れる）

時間を確認してまだまだ余裕があると分かったゆかりは、携帯を先ほど置いていた場所に戻して、伸ばした手の薬指に輝くリングを見て、途端に表情を緩ませる。

（やっぱり可愛い。素敵なクリスマスプレゼント貰っちゃったなぁ）

誰かと付き合う事に興味のない青年が、大切には思っているからと交際の申し出を受け入れてくれた。

それだけでも十分嬉しかったというのに、憧れていたペアリングまでプレゼントされて彼女は幸せすぎて今日死ぬんじゃないかと思ったほどだ。

もっとも、それはある意味で現実となり、部屋に行ってからゆかりは本当に死ぬような思いをした。彼女の隣で既に起きていて携帯をいじっている男のせいで。

「……起きてるなら服着とけばいいのに」

「自分は生まれたままの姿なのに、先に起きていた恋人が着替え終わってたら寂しくないか？」

毛布の中でヌクヌクとしているゆかりも、その隣で起き上がり腰辺りまで毛布をかけている湊も、衣類を一切身に付けていなかった。

ディナーを終えた後部屋に移動した二人は、泣いたなら顔を洗うついでにお風呂に入って来いと湊が言った事で、ゆかりが先に入浴する事になった。

そして、入浴を終えてバスローブ姿で彼女が出てくると、今度は湊がお風呂に入って部屋着のようなラフな格好で出てきた。
すると、何故だかゆかりがベッドの上で正座しており、湊が傍によると初めてなので優しくしてくださいと頭を下げたのだ。
湊としてはそういったつもりは一切なかったのだが、覚悟を決めた少女に恥を掻かせる事は出来ないと、青年も相手の言葉を聞き入れて一線を越えた。
「なんか、まだ下腹の辺りに違和感残ってる。私、優しくしてって言ったのになー」
「俺は意地悪で有名なんだ」
「でしょうね。気持ち良くされ過ぎて意識飛びかけてるのに、そのまま続行して強制的に意識戻すとか初めての子にやることじゃないし」
少し怒ってますよといった表情でゆかりが睨むのには実は理由がある。
そういった技術を習得しているだけあって、湊はリードするのも相手に快感を与えるのも上手かった。
快感に慣れていない彼女の身体を徐々に慣らし、十分に受け入れられる状態になってから繋がったことで、ゆかりは破瓜の痛みもほとんど感じずに初めてを経験できた。
下腹部に感じる彼の存在に愛おしさを抱き、全身を包まれる事でこれ以上ないほどの充足感を覚えた。
そうして、最高の思い出として初体験を終えるはずだったのだが、二回戦から彼はその卓越した技術をフルに発揮し、ゆかりを気持ち良くしてやろうと頑張ったせいで、快感で気を失い、快感で強制的に起こされるという拷問に等しい攻めを受け続けたのだ。
彼女は途中で全身に力が入らなくなっていたし、絶頂をむかえて失禁したりもしてしまった。
確かにもっと愛し合いたいと受けいれた自分も浅はかだったが、それでもあそこまでやる必要はなかっただろうと、ゆかりはうつ伏せでベッドに肘を突いて彼をジッと見つめた。
「……胸、見えてるぞ」

「へんたい。初めての子にあんなことするんだもんなー。皆が知ったら幻滅するだろうなー」
肩まで毛布をかけていても、うつ伏せで上半身だけ起こせば胸は見えてしまう。
湊がそれを指摘するとゆかりは毛布を身体に巻く様にして隠し、頬を染めて照れ隠しに昨日の彼の行いについての文句を言った。
だが、悪魔の様な男がそんな言葉を意に介するはずもなく、皮肉っぽい笑みで口元を歪ませて言葉を返す。
「お前の乱れっぷりに比べたら問題ないレベルさ。あれは他人様に見せられるような姿じゃなかったからな」
「……有里君にしか見せないもん」
けれど、今回は少女の方が上手だった。恥ずかしそうに枕で口元を隠し、視線を逸らして言った彼女の言葉に、湊は少し驚いた様子を見せると、天然で中々の殺し文句をいった少女の頭に手を置いて優しく撫でた。
生身である彼の左手から伝わる温もりをしばし堪能し、彼の手が離れるときには名残惜しそうな顔をした少女は、彼の膝にかけられた毛布の上に頭を置いて、膝枕状態で彼を見上げると口を開く。
「これからは恋人だけどさ。その、え、えっちはたまにしかダメだからね！」
「……そうか」
「あー、なんか返事が適当だ。昨日はあんなにいやらしく触ってきたくせにさ。このムッツリ」
彼と恋人となり、愛しい人と繋がったことで、ある意味浮かれている状態の彼女は、普段抑圧されている甘えたい衝動が発動しているのか、彼氏の素っ気ない態度にむくれて割れた腹筋をぺしぺしと叩く。
チドリや羽入も遊んで欲しいときには触れてくるので、一部の女子にとってボディタッチは構って欲しい合図なのだろう。
そのサインをしっかりと受け取った湊は、直前にムッツリと言われてイラッと来た事もあり、携帯をベッドランプの傍に置くと、その場で身体を捻って直前まで膝枕していたゆかりを組み伏せる形になっ

た。
「……チェックアウトまで約四時間ある。身支度やシャワーに一時間かかるとして、三時間も余裕があるな」
「え、な、なに？　朝だよ？　もう外も明るいし皆も起きてる時間だよ？」
　毛布をかけているので外からは見えないが、ゆかりを組み伏せた湊は左手で彼女の脇腹を撫でつつ徐々に手の位置を下げていく。
　相手が何をしようとしているか既に理解している少女は、朝のこんな明るい状態でするのは恥ずかしいと抵抗を見せようとするも、
「そうだな。朝からなんて岳羽は随分と不良だな」
「ちょ、タイムタイっんむ!?」
　喋っている口を相手の唇で塞がれ、腹部や胸を撫でてくる相手に身体を捩じらす。
「ん、はぁ、ダメだってぇっ」
「安心しろ。昨日の疲れを取るための全身マッサージだから」
「や、あんっ」
　一応の抵抗は見せるも触れられる事は嬉しい。そんな少女が彼を拒み続けることなど出来る訳もなく、二人は再び長い時間を過ごした。

第百六十二話　年末特番

１２月３０日（日）
夕方――桔梗組本部
その日、鵜飼桜は張り切っていた。
先日、年末年始の予定を湊に聞いたところ、三十日に帰ると言われたのだが、そのとき一緒に連れて行きたい人がいると言っていたのだ。
聞いた瞬間にピンときた桜は即断即決でＯＫを出し、彼が帰ってくる今日までに組員にも手伝ってもらいながら大掃除を終えて、料理の下準備まで済まして彼の到着を待っていた。
「相手の子が驚いちゃうから、皆さんは広間の方で待っててくださいね」
『ヘイ！』
湊とチドリの実家がヤクザだとは、学校側である教師や美鶴以外誰も知らないので、やって来てすぐに大勢のチンピラに出迎えられれば驚いて怖がってしまうはず。
相手の家に挨拶に来て緊張している女の子に、そんな可哀想なことはさせられないと、桜は宴会に来た組員たちに広間で大人しく待っているように告げた。
子ども好きの多い組員たちも事情は把握しているため、勿論分かっているといい笑顔で頷いて返す。
それを確認した桜も満足げに笑い返し、玄関の引き戸が開く音がしたことで玄関に走って向かった。
「お帰りなさい、みーくん！　そして、いらっしゃい。たけ――」
玄関に向かうと青年の姿が先ず目に入り彼が帰ってきた事を喜ぶ。
もっとも、桜にとってのスペシャルゲストは彼の後ろにいる少女だとして、桜はゆかりの名前を呼ぼうとした。
「――たつ、さん？」
だが、そこにいたのは予想していた茶髪の少女ではなく、銀髪に赤い瞳という共通点を持った二人の少女であった。

「……誰の事だ？」
途中まで言いかけて別人だった事で、桜はポカンとしながらよく分からない名前を口にした。
それに湊が首を傾げてブーツをアンクレットに変えて上がってくれば、彼の後ろにいたラビリスとソフィアも靴を脱いで青年の隣に並んだ。
「えと、どうもはじめましてウチは汐見ラビリスいいます」
「ソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインです」
「あ、どうも、鵜飼桜です。えっとぉ、岳羽さんは？」
随分とまた綺麗な子を連れてきたなと、桜は彼の対人関係の何パーセントが美女および美少女なのか知りたくなったが、それよりもメインゲストの姿がないことで、まだ入って来てないのかなと扉の方をちらりと見る。
聞かれた青年は彼女の言葉の意味を理解出来ないようで、とても不思議そうな顔をしたが、聞かれた事には素直に答えた。
「岳羽なら実家に帰ってると思うが、何か用でもあったのか？」
「ううん。特に用事はなかったけど、みーくんが連れて行きたい人がいるって言ってたから、てっきり岳羽さんのことだと思ってて」
「別に呼ぶ用事もなかったから誘ってすらいないな。二人は年末年始に暇らしいから連れてきた」
正式な恋人になった事はゆかりが部活メンバーにメールで知らせている。
湊が他者を愛せないし、異性として好きにもならないという事はチドリにだけ伝えたらしいが、彼の言う大切に想うというのが一般人のそれにあたるとして、本人的にはそれほど問題だと考えていないとか。
その連絡が回ってすぐに部活メンバーや佐久間から湊の方へ連絡が来たが、肩書きが変わる程度の違いでしかないという何とも冷めたコメントを返した事で、とりあえず彼の思っている恋人と他者の考える恋人は異なっていると察したらしく、周囲は様子見の立場を取ると決めたようだ。

そして、桜はチドリから湊とゆかりが正式に付き合うことになったとだけ聞いていたので、今回来ないのは残念だと思いながら、やってきた三人を中へと案内しながら話しかける。
「えっと、ラビリスさんは珍しい響きのお名前だけど、もしかしてアイギスさんの妹さんかしら？」
「あ、すみません、姉です」
「ご、ごめんなさい」
「……ちっちゃいからな。しょうがない」
身長もスタイルもラビリスの方が負けている。精神の成長度はモデルの人格をそのままコピーしたラビリスの方が上だが、そんな物は最終的に個体差でしかないので、生体パーツを手に入れるまでは、ラビリスの方が妹のように見られるのはしょうがない。
だが、それを彼に指摘されるのはムカついたようで、ラビリスはムスッとした顔で湊の背中を叩いた。
二人のやり取りを見ていた桜は、どこで彼女と出会ったのか疑問に思っていたが、それよりも二人のさらに後ろを歩いている少女の事が気になったので、先にそちらについて訊く事にする。
「それでえっと、ソフィアさんは……ＥＰ社というか久遠の安寧の方じゃなかった？」
「はい。今はわたくしが両組織の顔役として運営させて頂いております」
「あ、えっと、そういう事じゃなくて、みーくんと色々あったんじゃ……」
大陸にまで名を轟かせた最凶の暗殺一族である名切りの鬼と、裏界最大組織である久遠の安寧の実質的なトップであった裏界の姫君の戦争。
世界中で話題となったそれは、久遠の安寧側に一万人以上の犠牲者を出して名切りの勝利で終わった。
今まで世界を裏から操っていた組織が墜ちたことで、世界のパワーバランスが崩れるのではないかと噂されたが、組織を墜とした張本人が組織を自分の傘下に治めてトップに君臨した事により、組織の力が

以前よりも増した状態で裏界最大で在り続けることが可能となった。
そうして、両者の戦争が終わったことで世界は元通りになっていったが、年末に暇でも因縁のある相手を実家に連れてくる神経が桜には理解出来ない。
最終的に二人は互いを殺そうとまでしていたはずだ。それをどう間違えれば仲良く帰省になるのか、桜は湊の方にも表情だけで尋ねた。
すると、それを見て彼女の言いたい事は何となく理解したらしく、湊はどうして連れて来る事になったのかを語る。
「こいつを独りにしたのは俺だからな。年末年始に独りもあれかと思って、本人も日本の正月に少し興味があると言ってて丁度良かったから連れてきた」
「その事はもう気になさらないでいいとお伝えしたのですが、極東独自の文化は以前から興味がありました。ライスを叩くだけでオモチが出来るのが未だに信じられませんし。コタツという暖房器具にも興味あります」
ジャパンＥＰ社を作るまで日本にはあまり来た事がなかったソフィアは、ほとんど家に籠もって過ごすような生活をしていた事で、今回の同行はちょっとした旅行気分だった。
洋室もあるが基本的には武家造りの大きな屋敷で、内風呂の他に天然の温泉を引いた露天風呂まであるため、田舎の景色も相まって下手な旅館よりも豪勢である。
料理は湊と桜が日本食に関してプロ級の腕前を持っており、宴会に呼ばれた組の幹部だけでなく、湊から今回は本気で料理を作ると聞いているソフィアとラビリスも非常に楽しみにしていた。
「ああ、そういえば今朝ラビリスと釣りに行ってきて土産用に真鯛を釣ったんだ」
「本当に？　わぁ、素敵な御馳走になりそうね。いっぱい釣れたの？」
ソフィアがオモチという食べ物について話した事で、湊は土産があったんだと黒いマフラーを撫でながら桜に伝える。
湊の力を吸収して成長したマフラーは、食材など生モノも収納して

おけるようになった。内部は時間凍結されているので、数年後だろうと入れたときの鮮度のままとなっており、ちゃんと下処理をして入れておけば、簡単に調理して食べられるという訳だ。
　真鯛は春の桜鯛が有名だが旬は秋頃と言われている。けれど、真冬の真鯛は越冬のために蓄えた脂が少し落ちて、代わりに味と身が引き締まり、そちらの方が好みだという人もいるくらいの逸品である。
　料理は色々と用意しているが、まるごと一匹の鯛は用意していなかったので、桜は素敵なお土産だと顔を綻ばせ釣果を尋ねた。
「湊君は八匹くらい釣ってはったけど、ウチは一匹しか釣れんかってん。でも、ウチの釣ったのが一番大きかって、まわりのオッチャンたちもすごいねって褒めてくれはったんよ」
「七十センチ前後も小さくはないんだがな。九十センチなんてサイズを釣られたら勝てないさ」
　湊の釣果も大したものだが、ラビリスの釣った九十センチは人によっては一生に一度釣れるかという大物である。
　それと比べられては勝てないと湊が苦笑で返せば、サイズを聞いて驚いていた桜は、これは腕がなると真剣に調理法について考えだす。
「きゅ、九十センチは大物ね。うーん、でもそれだと何がいいかしら。大き過ぎると味が薄いっていうから、旨味を凝縮させるために塩釜焼きとかかなぁ」
「いっそ、タレで食べさせるしゃぶしゃぶや鍋でもいいかもしれない。最初は尾頭付きの舟盛りで出して、そこから鍋に入れて行く形で」
「あ、それいいね！　うん、やっぱりすごい大物って見て貰いたいものね。味付きの出汁でしゃぶしゃぶにしましょっと」
　現在この家にいる者は組員も含めてほぼ全員料理は出来る。チドリも面倒だからしないだけで、普通に食べられる物は作れるし、ラビリスは湊から料理を習っているので家庭料理は得意だ。
　ソフィアは専ら食べる側だが、紅茶を淹れることやお菓子作りは嗜んでいたので、レシピさえあれば料理は出来た。
　しかし、実際にプロの下で和食を学んだ湊や、湊の料理の師から太鼓判を押されるほどの腕前を持った桜に及ぶ者は一人もいない。

その二人が楽しそうに決めた料理ならば、きっと美味しい物になるに違いないと、案内されて廊下を進む二人は夕食が楽しみだった。

＊＊＊

六時から始まった宴会はかなり盛大に行われた。

本来、極道の集会は後継者争い等で裏ではドロドロとするものだが、忘年会にそんなものを持ちこむのは無粋だとして、組員らは湊と桜の作る美味しい料理と極上の酒を楽しみ、ただただ大騒ぎで宴会を楽しんだ。

湊たちも途中までは付き合っていたが、流石に酒も飲まずに食事で何時間も騒いでいるオッサンを見ているのは苦痛なので、八時過ぎには子どもたちと桜は抜けてリビングに移動していた。

他の者たちはまだ飲んだり食べたりしているが、祭りの屋台で鍛えた腕があるので、湊と桜が抜けても料理を作るのは問題なかったりする。

そうして、酔っ払いの相手をせずに済んだ湊たちだが、いまリビングにはラビリスを含めた五人の人間と九体の自我持ちのペルソナが揃っていた。

「……なんか知らないのがいっぱいいるんだけど」

「逆に誰なら知ってるんだ？」

「座敷童子と鈴鹿御前とそっちのアタランテだっけ？　それは前にタカヤたちと戦ったときに出してたから知ってる」

現在はネガティブマインドの期間だが、テオドアに貰ったカードホルダーと無の武器に融合して置いたカードを抜き取る事で時期をやり過ごし、呼び出されたペルソナたちは湊の保護者である桜に挨拶をすると自由に過ごしている。

その内、チドリは数人しか名前を知らなかった事で、いつの間にこれほど自我持ちが増えたのかと湊に説明を求めた。

「フェイスペイントが茨木童子、白髪がカグヤの人間形態で赫夜比売、狐耳は若藻、巫女服っぽいのが出雲阿国、フードがジャック・ザ・リッパー、金髪がアリスだ。若藻は妖怪、ジャックは怨念の集合体、アリスは部下が自分の理想の少女を生み出そうと魂を籠めて作った人工

ペルソナで、その他は俺の遠い祖母だ」
カグヤは九頭龍の血筋から合流した存在だが、茨木童子の妹なので結局は直系と大して変わらず、むしろ、一族全員に血に宿る力を与えて己の力が弱まった茨木童子よりも、読心能力や魔眼など太古に失った人間の能力を湊に与えたという点では素晴らしい功績を残している。
その本人は桜の隣に座ってお茶を飲みながらテレビを見ているが、湊の膝の上に座っていた見た目は少女なペルソナは紹介が気に入らなかったのか、湊に体重をかけて抗議の視線を向ける。
《私は……そんなに遠く、ない……》
「祖父の曾祖母は遠くないか？」
《幕末から……明治に生きてた……だから、ちゃんと洋服着てる》
座敷童子こと本名〝百鬼雪菜〟は湊の五代前の名切りである。人に戻る前の力を持った名切りではあるが、平均的な能力は名切り内でそれほど高くない彼女は、湊に近い時代の中で力を持っていたためにペルソナ化している。
よって、本人もそれなりに若いつもりで、この立派な洋服であるドレスを見ろと湊に言った。
傍から見ればどう見ても年の離れた兄弟だが、実際は少女の方が祖母であるためチドリは紛らわしいと視線をテレビに移す。
するとそこには、サングラスをかけたスーツ姿の男たちから逃げる湊が映っていた。
「やっぱ湊君って足速いなー。鬼の人ら追い付けてへんやん」
《追い付けそうで追い付けぬ絶妙の距離じゃな。此れならば相手の体力を消耗させ味方に余裕を与えられる》
他の者たちが見ているのは年末の特別バラエティ番組『逃亡者』。一度くらいは出演してもいいかと湊が十一月に撮影してきたものだ。
ザックリ言えば鬼ごっこのようなゲームで、二十人の参加者が東京ドーム三つ分のエリア内で一三〇分鬼から逃げ続ければいいだけ。独裁を目指す政府が反政府勢力の者を捕えるために開発したサイボーグという設定の鬼と、政府の野望を砕くために活動を続ける反政

府勢力のメンバーという設定の湊たち逃亡者による本気の鬼ごっこだ。
　片手だろうと鬼がタッチすれば捕まえたことになり、一秒につき二百円、逃げた時間だけ獲得賞金が増していき、途中に出される課題をクリアすると賞金が上がったり、逆にクリアしないと不利になったりする。
　フィールドは普通の街中だが、建物の中へは課題に挑戦する以外では侵入禁止。スタート時点で鬼は四人いて時間経過で増えることもあるが、湊は鬼に追われる途中でさらに二人の鬼に見つかり、現在は三人から追われているものの、上手い具合に他の者がいない方向に逃げながら追い付かれるのを防いでいる。
　その様子にラビリスとバアル・ペオル姿の鈴鹿御前は楽しそうにしているが、桜やカグヤは湊が捕まらないかハラハラといった表情だ。
《皇子、挟まれた！　この先は川のところへ出てしまい、そこからは右折して川沿い一本道を行くしかありません！　しかし、鬼の一人が既に先回りしている。皇子はここで終わるのかー!!》
　逃げている湊の先には、舗装され四メートルほど低い位置を流れる川が横切っている。落下防止のガードレールまで行けば右折して川沿い一本道だが、追っていた鬼の一人が先回りしていたため、これで挟みうちだと実況が視聴者の不安を煽る。
　道路の幅は車がギリギリすれ違える程度と狭いので、身体能力が高くガタイの大きな成人男性ならば、かなり余裕を持って捕まえられるポジションだ。
　いくらバスケで敵を躱すテクニックを身に付けているとはいえ、これは流石に厳しいかと思っていれば、なんとテレビの中の湊はそのまま直進してガードレールに足をかけると跳躍した。
《飛んだー！　皇子、ここにきて幅六メートルの川の上を飛んで行きました！　二ヶ所ある橋を使わずにショートカットされ、流石の鬼たちも唖然としています！　恐るべき身体能力!!》
　見事に鬼の包囲網を突破すると桜やアリスが嬉しそうに拍手している。

この番組は勿論録画予約済みで、美鶴の母親である英恵もちゃんと録画予約しましたと放送前にメールを送ってきている。
保護者や湊たちと同年代の精神年齢の少女ペルソナたちは楽しそうだが、パソコンで仕事のメールの確認をしながらテレビを見ていたソフィアは、小狼や名切りの鬼に切り替えなくてもこれだけの身体能力が出せるのかと素直に感心していた。
「忍者みたいですわね」
《マスターは壁走りも出来ますから現代の忍者です》
《まぁ、そういった事をしていた時代もあったからな。忍者の末裔と言っても間違いではない》
素早さと隠密性の高い暗殺者タイプなジャックが、湊はペルソナ顔負けの身体能力だと自慢げに話せば茨木童子がそれを肯定する。
高いところから飛び降りたり、三次元的な動きで敵を惑わしたり、一般人の想像する忍者の動きは優れた名切りの者なら可能なのだ。
もっとも、今の湊は身体能力をかなり抑えているので、先ほどの動きは湊なりの一般の範疇内だが、男子中学生の走り幅跳びの記録は七メートル越えなので、多少のアップダウンな動きが入ろうと六メートルなら許容レベルだろう。
そうして、場面が湊から他の出演者である芸人やアイドルに移れば、桜は今のうちだとみかんの沢山入ったカゴを持ってきてラビリスの前に置いた。
「あ、どうもありがとうございます」
「いっぱいあるから気にしないで食べてね。ソフィアさんもパソコンが汚れるかもしれないけど、コタツにみかんは伝統の組み合わせだから是非堪能してね」
「ええ、もうすぐ終わりますので、後ほどいただきますわ」
元のソフィアを知らない桜にとっては、湊との出会いで改心した状態のソフィアは、他の子よりも大人びているだけでいい子に思えた。
それ故、過去の事はここでは掘り返したりせず、湊が連れてきた友達として普通にもてなすことにし、コタツに入ってテレビを見ている二人にみかんを渡せば、ラビリスは早速一つ剥いて半分を若藻にあげ

ながら食べている。
《おっと、ここでサーヤが鬼に見つかった！　距離はあるがこれは厳しいかー！　このまま進むと皇子と合流する事になります。皇子は果たしてどう動くのか！》
　四人いる内の鬼の一人が、柴田さやかというアイドルを追いかけて走り出す。
　その先にはショートカットして移動した湊が歩いているが、両者とも存在を確認したようで、徐々に距離を詰められているアイドルが、走りながら湊に状況を説明した。
《ゴメン、有里君！　鬼に追われてるから逃げてー！》
　鬼とアイドルの距離は四十メートルほど、湊の足ならば今から逃げれば余裕だが、アイドルは走力の差もあって捕まってしまうだろう。
　湊が囮になって近距離で回避しながら時間を稼げば生き残る可能性もあるが、果たして彼がどう動くのかテレビも効果音を付けて盛り上げる。
　そして、逃げてくるアイドルを見ていた湊がアイドルの方へ駆け出すと、
《……しっかり掴まってて》
《きゃあっ!?》
　相手と合流した途端にお姫様抱っこして鬼から逃げ始めた。
《お姫様抱っこです！　皇子、まさかのお姫様抱っこでサーヤを抱えたまま鬼から逃げます！　しかし、速い!!》
　アイドルは湊より二つ年上だが、体格的にはゆかりやチドリと変わらない程度だ。
　よく人助けで動けない人を背負ったりしてやっている湊にすれば、少女一人くらい抱き上げたところで何の問題もない。
　人を抱えているとは思えぬほど普段通りの走りを見せると、上手く曲がり角を利用して鬼を撒こうとしている。
「……これって放送して大丈夫なの？　アイドルをお姫様抱っこって普通に事務所やファンからクレーム来るんじゃ」
　しかし、大人気アイドルの少女を、時の人となっているイケメン青

年がお姫様抱っこするのは如何なものか。
桜とアリスはキャーキャー嬉しそうに騒いでいるが、チドリは純粋に問題があるのではと指摘する。
一方、言われた青年は膝に乗せている座敷童子に剥いたみかんを食べさせながら、ちゃんと放送されている時点で大丈夫だと答える。
「いや、ちゃんと相手の事務所からＯＫ貰ってる。ダメだったらそのシーンはカットしてたしな。多分、ここらへんが瞬間最高視聴率を叩き出すんじゃってスタッフが言ってたよ」
チドリに言われなくても問題になりそうな事はテレビ局だって分かるだろう。だが、ちゃんと事務所に許可を取れば、湊は別に放送されても問題ないので放送可能という訳だ。
《なんとか鬼を撒きました。ここで皇子とサーヤは一度別れるようです》
アイドルを抱えた状態で鬼を撒いた湊は、周囲に鬼がいないことを確認すると相手を下ろす。
別れる前にさりげなく鬼のいる方へ湊が行こうとするのは、走力で劣るアイドルが逃げられる様にという配慮である。
《助けてくれてありがとう。疲れさせちゃってゴメンね》
《いえ、追手から女性を守って逃げるなんてドラマみたいで楽しかったです》
《フフッ、ホントだね！　じゃあ、鬼がまだ近くにいるかもしれないから気を付けて。有里君も無事に逃げきろうね！》
湊がそちらに行くのならと別の方へ去っていくアイドル。お互いに爽やかな別れとなったことで、これならば事務所が許可を出したのも頷けると、チドリはテーブルに置いていたお茶に手を伸ばしながら呟いた。
「……へぇ、アイドルだけあって助けられたくらいじゃ靡かないわね」
「俺の方が年下だし、顔がいいやつなら芸能界なら捨てるほどいるだろ。あの人、話して分かったがかなり真面目で頭もいいぞ」
今回はバラエティ番組に出演しているが、相手は歌だけでなくドラマにも出演する、人を元気にさせる明るい正統派路線のアイドルであ

る。
お馬鹿系と違って知的な役もこなすためイケメン俳優との共演も多いが、仕事にはとても真面目で誇りを持ってアイドルをしている。
色々な俳優や業界人からアプローチもかけられているようだが、それでも相手との関係を悪くせずに躱し続けている事から、アイドルを卒業すればそのまま女優になるに違いないと湊は思っていた。
そして、そのまま番組を見ていると、ズボンのポケットに入れていた携帯にメールの着信があり、相手を確認すると渡邊や順平など主に男子の知り合いからだった。
「学校のやつらからだ。〝今度サーヤを紹介してください〟……する訳ないだろ」
「連絡先は交換したの？」
「まぁ、お互いに仕事用の携帯だが、せっかくのコネクションだし交換はしておいた」
真面目で頭もいい相手ならば、話題性のために湊を利用する事もないはずなので、別にプライベート用の方でも構わなかった。
けれど、プライベートで交流があると分かれば、ゴシップ誌に熱愛報道をされかねないので、そういったリスクを減らすために二人は撮影終了後に仕事用の携帯で番号を交換した。
なので、今も相手と連絡を取ることは可能だが、一ファンでしかない邪まな男子らをアイドルに会わせてやるほど、湊は男子らと仲良くないしアイドルを軽く見てもいない。
似た内容のメールを送ってきた者全員に一斉送信で設定すると、すぐに「相手の仕事の邪魔になるから無理だ」と返しておいた。
女子の方からは彼ならこういう事をやりかねないと認識されているのかメールはない。信用されている様な、逆に最初から諦められている様なで湊としては複雑な気持ちだ。
《残り時間七十三分、ここでヤンバルの石見が鬼に捕まりました。これで残る逃亡者は十二名です》
頑張って走るも鬼に捕まった芸人が悔しそうにしている。残り時間はまだまだあるというのに、これで約半数の逃亡者が捕まった事に

なる。
　各自に支給された携帯に味方が捕まったとメールの連絡がくれば、相方の男が敵は取るぞと決意を新たにした。
　そして、鬼に見つかった逃亡者が何とか逃げたりしながら時間がさらに進み、残り六十五分となったところで全員の携帯に課題のメールが送られてくる。
「へぇ、残り五十五分になるまでにミッションクリアで秒給が倍にアップやて。湊君も挑戦したん？」
「……先の展開聞いて面白いか？」
「あ、そやね。ならこのまま見とくわ」
　このまま見続ければ答えは分かる。それを先に聞いたら楽しさが半減してしまうだろうと湊が言えば、ラビリスはみかんを食べてお茶を啜りながらテレビに視線を戻した。
　出された課題はサイボーグである鬼の生産工場に潜入して、その生産ラインをストップさせるスイッチを押してくるというもの。
　ただし、体育館ほどの広さの工場の中には警備用の鬼たちが六人配備されており、機械が置かれているのでそれほど自由に走り回る事が出来ないようになっている。
　秒給倍アップは賞金が一五六万円から三一二万円まで上がるので大変美味しい。しかし、課題をクリアしなくてもデメリットが発生しないタイプなので、ほとんどの者は「これはスルーで」と保守的な姿勢を見せた。
　参加することに決めて工場へ向かっているのは三人。先ほど相方が捕まった芸人、熱血系のピン芸人、そして割と工場に近い場所にいた湊だった。
《皇子やん！　皇子もミッションしに来たん？》
《はい。なるべく挑戦しようと思ってたんで、場所も近いし丁度良かったです》
《ヨッシャ、これは百人力やで。あっ、鈴宮さんや。鈴宮さん！　ミッションしに来られたんですか？》
《うん、川辺と皇子も？》

ピン芸人と湊が出会うと芸人もそこにした合流し、三人は周囲に鬼がいないか注意しながら工場へと向かっていく。侵入するのは裏口からで、中に入るとそこには部品の流れるベルトコンベアと巡回する鬼たちがいた。
《うわ、これ無理やろ》
《え、ベルトコンベアの上って走ってもいいのかな？》
三人がいるのは二階の通路。そこから階段で直接生産フロアに下りて、一番奥にある階段を上ってそこにあるスイッチを押せばクリアとなる。
ピン芸人と芸人は思ったより逃げられる場所が少なく、仮にベルトコンベアの上を移動してもいいルールだろうと、階段に辿り着くまでに捕まってしまうと諦めムードに入る。
これをクリアするにはもう一人くらい人数が必要で、三人が囮になっているうちに一人が突破するという形になる。
それをすれば囮役はそこでゲームオーバーなので、仲間の賞金アップのために自分の命を使えるかどうかが試された。
《……一応、鬼の巡回ルートは決まってるみたいですね》
《うん。多分、フロアに下りて見つかった時点で捕獲モードになる感じだと思う。それまでは決まったルートを一定のペースで行くから、突入するならタイミングを計った方がいいね》
《お、追加報告や。ベルトコンベアの上は走ってＯＫやって》
作戦を立てている三人の元へ追加でメールが送られてくる。フロアにあるベルトコンベアは番組が設置したものなので上を走っても大丈夫ということらしい。
これで少しは成功確率があがったと芸人たちはやる気を燃やし、ジッと鬼たちの動きを観察していた湊は、タイミングを計り終わったのか他の二人に告げた。
《もう少しで鬼たち全員が階段に背中を向けるタイミングになります。その瞬間に突入するので、良かったら応援しててください》
言うなり湊は十数段ある階段を一気に飛び降りて、着地と同時に強く地面を蹴ってフロアに侵入した。

湊が言っていた通り、侵入の瞬間には鬼たち全員が背中を向けていたことで相手の反応が遅れる。
侵入者を告げる警報が鳴ってからようやく湊の方へ集まるが、壁際を進んでいた湊は正面から鬼がやってくると、さらに加速して壁を数メートル走って跳躍する。
距離を稼ぎながら鬼を一人振り切った湊が着地したのは、目的の方向へ進むベルトコンベアの上。近くにいた鬼二人が駆け寄ってくるが、鬼とは反対方向に転がって下りながら、再び階段を目指した。
《皇子、後ろ来とる！》
《さっきのやつが右から来るよ！》
二階は安全圏なので、そこから全体の動きを見ている芸人達がナビゲートすれば、湊は二人の言う通りに右から来る鬼と後ろから来る鬼を警戒し、とりあえず誰もいない正面へと走ってゆく。
入り口付近で既に二人の鬼を完全に振り切っていたので、追ってきている鬼たちとベルトコンベアのところで捕まえようとしてきた鬼たちを突破すれば、このまま湊の勝ちだ。
しかし、左後方から二人、後ろから一人、右後方から一人が同時によってくれば、湊は階段への通路もふさがれ追い込まれてしまった。
《ああ、アカン！》
鬼の一人が湊に迫る。万事休すかと思ったそのとき、
《……手でタッチされるか掴まれなきゃ捕まった事にはならない、ですよね？　すみません、投げます》
伸びてきた鬼の右手首を右手で掴むなり、湊は相手の掌に触れないように注意しながら、掴んだ右手をやや下向きに強く引いて相手のバランスを崩す、そして前のめりになりかけた相手の足を同時に刈り取り、ほとんど片手だけで放り投げた。
投げられた鬼は迫っていた鬼二人の方へと飛んでいき、ややふんわりとした投げられ方だったことで、無事にキャッチされて怪我はないようだ。
《うわ、すっご?!　鬼を投げるとかありなん？》
《掌で触られてないからセーフみたい。これルールの穴を突いた攻略

法だけど、皇子ってばよくやるなぁ》
見ていた芸人達が話している通り、これがルール違反ならば全員の携帯に湊が捕まったと連絡が行く。
しかし、鬼の包囲網を突破して階段を上がって行った湊がスイッチを押せば、ミッションはクリアとなりベルトコンベアが停止したことで、復旧のために警備にあたっていた鬼たちは去って行った。
映像を見ていた番組側はきっと際どいラインだと判断に困っただろう。けれど、スローで見ても掌どころか指先ですら触れられておらず、彼がいた方が番組も盛り上がると判断してＯＫを出したに違いない。
全員の携帯に湊の活躍により賞金アップの連絡が行けば、上でナビゲートしていた芸人達が湊と合流し、背中をバシバシと叩いて褒めている。
そして、そんな光景をテレビの前で見ていたチドリは、呆れた顔で湊に話しかけた。
「なんで本当に壁を走ってるのよ」
「……ただの三角飛びでも良かったが、少しでも前進したかったんだ」
《八雲は……すごく、身軽……皆の役にたって、えらい》
小狼状態ならそのまま壁を駆け上がってスイッチに辿りつけたが、普段の状態ではそれだけの身体能力は発揮できないので、先ほどの動きがほぼ限界だった。
それでも発想の転換で危機を脱してクリアした湊を、とても素晴らしいと言って膝に座った座敷童子が頭を撫でた。
年齢的には合っているが、見た目的には幼女が大人を撫でているようにしか見えない。もっとも、他の者たちは名切りのペルソナが子どもである湊を甘やかすと知っているので、特に気にしたりせずテレビを見る。
さらに時間は進み、先ほど湊と一緒にミッションに向かった二人は、途中で鬼に遭遇し捕まってしまった。
残り十七分の時点で残っているのは湊を含めて四人。湊、アイドル、元陸上選手の外国人タレント、若手お笑い芸人といったメンバー

だ。
　そして、残り時間が十五分になったところで、最後の課題がそれぞれの元に届く。画面に映っているアイドルは携帯を取り出すと内容を読み上げた。
《〝残り少ない反政府勢力のメンバー一斉検挙のため、政府が五人の鬼を放つ計画を進行中だという事が分かった。それを阻止するため味方と合流し、装置に暗号を入力して妨害のためのハッキングプログラムを起動せよ〟だって》
　携帯には暗号を入力する装置の場所も書いてある。地図を見て場所を確認したアイドルは、入力するための暗号キーを見て首を傾げた。
《暗号キーはそれぞれの携帯に一文字ずつ送られて計四文字、私はアルファベットの『O』。通信は傍受されている可能性があるから禁止ってことは、最低でも誰かと合流しないと予測出来ないじゃん！いそがなきゃ！》
　味方同士は携帯で連絡を取り合う事が出来る。だが、今回の課題では使用不可なので、アイドルは装置を目指しながら味方との合流を考えた。
　すると、画面が他の逃亡者のものに切り替わり、カメラマンと合流した湊は携帯電話の画面をカメラに向けた。
《暗号キーはアルファベットの『H』ですね。後、一斉検挙に向けて現在徘徊中の鬼のバージョンアップが図られ、鬼の身体に触れた時点で相手を麻痺させる電気ショックが流れる仕様になったらしいです。多分、さっき俺が投げちゃったからですね。もうあの手は使えないみたいなので、とりあえず行きます》
　湊が装置の置かれている広場の方へ向かうと、他の逃亡者たちも同じタイミングでそちらへと向かい出す。
　現在鬼は四人、残り僅かだというのにさらに五人も追加されれば逃げのびる事は出来ない。
　そうして、湊が広場に向かって走り続ければ、比較的近くにいたアイドルが湊の姿を発見し、二人は合流しながら先を急ぐ。

《あー！　有里君、暗号キーおしえて！》
《アルファベットのＨです。柴田さんは？》
《私はアルファベットのＯだよ。ＯとＨで出来る四文字って何だろ》
二人ともアルファベットということは四文字で作れる英単語なのだろう。しかし、その二つが入った四文字の単語などいくつもある。
これは後一人くらい合流しなければ難しいかと思ったとき、考えていた湊が口を開いた。
《……政府の野望を砕くための反政府勢力ですから、多分、希望って意味の『ＨＯＰＥ』じゃないですか？》
《あ、それっぽい。有里君って頭良いね。よし、一緒に行こう！》
世界観が設定されているゲームであるため、こういった問題はそれに関連した答えを用意しているはず。
そこから湊が予想を立てれば、アイドルも納得がいったようで笑顔で広場に向かって駆けた。
入力するための装置が置かれている広場には、先に捕まった者たちを入れた檻がある。中にいる者たちは逃げきる者を当てれば賞金一万円というゲームをしており、二人に賭けている者や純粋に二人に頑張ってほしい共演者が声援を送った。
《皇子、あともう少しや！　君に賭けたから頑張ってくれ！》
《サーヤちゃん、女の子は後一人だけど頑張ってね！》
《ありがとうございます！　あ、あったよ！　暗号キーは『Ｈ・Ｏ・Ｐ・Ｅ』でホープ！　やった正解した！》
檻の中にいる者に手を振り返して装置に辿り着けば、先ほど湊が予想した答えをアイドルが入力した。
すると、画面にコンプリートの文字が表示され、すぐに携帯へ二人の活躍で課題は達成されたとメールが送られてきた。
先ほどの課題がラストなので、これで何とか残り時間を逃げきれば三一二万円の賞金ゲットとなる。お互いの健闘を祈って課題をクリアした二人が急いでここを離れようとしたとき、アイドルが広場に入ってくる鬼の姿を確認した。
《やばっ、鬼だ！》

《……とりあえず、時間を稼ぐので逃げてください》
鬼は既に二人を視界に捉えたようで走ってくる。街中ならばお姫様抱っこで走りつつ、複雑な路地を利用して撒く事も出来るが、見通しのよい広場ではそれは難しい。
よって、湊が選んだのは自分が囮となってアイドルを逃がす作戦だった。
湊を心配するアイドルにさっさと行けと手で追い払う仕草をすると、湊は鬼に向かって駆け出す。
鬼は二人の身体能力の差を当然理解しているが、片方が圧倒的に近い場合はそちらを捕まえようとする設定になっている。
そのため、アイドルを捕まえる絶好のチャンスだが、自分に向かってくる湊を捕まえなければならないと、鬼はフットワークを駆使して湊を捕えようと動いた。
正面から来る湊に向かって走りながら手を伸ばす。横に飛んで躱した湊を追って、鬼も方向転換するが、勢いを殺さぬよう着地と同時に転がって立ち上がった湊は、再び伸ばされた手を躱しながら相手の横を抜けるように飛んで翻弄する。
《躱す、躱す、躱すー！　皇子、近距離でアクロバティックに鬼の手を躱し続けます！　鬼は確実に追い付けるサーヤを追いたいでしょうが、目の前に逃亡者がいる以上はこの場を離れられません！》
相手の身体に掠るだけでアウトなので、余裕を持って躱す必要のある湊の方が運動量は多い。
ただし、勝負は一対一なので隙を突いて距離を取れば、湊もそれなりの余裕を持つ事が出来た。
だが、番組を盛り上げるために製作側が連絡したのか、やってきた鬼がもう一人広場へと入ってきてしまう。
来る途中に捕まったらしい若手芸人が歩いているので、残りは湊も含めて三人になったようだが、携帯を見ている余裕のない湊は、今度は二人の鬼を相手に回避劇を続けることになる。
《鬼が二人に増えました！　けれど、皇子は必死に躱しています！
四人中二人の鬼を足止めしていることで、残りの逃亡者たちにとって

非常に大きな助けとなっているでしょう！》
前方から一人接近中だが、後ろから来る者の腕を頭を下げながら斜め後方に滑り込むことで避けて、優先度の高い危険を回避する。
しかし、前から進路修正して来た鬼の追撃をしかけてきたため、横っ跳びで避け片手の側転で立ち上がるも、一人目の鬼が再び来た事で、バスケの大会で見せた助走をつけた頭上越えで振り切る。
先に広場にやってきた鬼は、湊を捕まえようとしてずっと動いているので動きにキレがなくなってきていた。つまり、後から来た鬼をより注意しておけば、このまま残り時間を過ごす事は十分に可能だった。
そして、
《3・2・1……終了ー!!　皇子、何と二人の鬼を相手に残り時間全てを躱し続けました！　これにより皇子・サーヤ・ベンヤミーンさんの三人が逃亡成功です！》
激しく動いていたことで汗を垂らしながらも、十分以上も相手を躱し続けて湊は逃亡を成功させる。
湊を捕まえようとしていた鬼たちは体力の限界が来たのか、その場に座り込みそうになっているので、番組的にサイボーグ設定の相手が疲れている画はまずかろうと、湊は檻が背景になる位置に移動した。
檻の中にいた者で逃亡成功した三人に賭けていた者は喜び、さらに躱し続ける湊を見て応援していた者は盛大な拍手を送る。
少しすればアイドルや元陸上選手の外国人タレントもきて、悪逆政府を倒すことに貢献した三人に褒賞金が支払われた。
三人が喜びのコメントを言えばエンディングとなり、ずっと、番組を見ていた桜たちも湊が無事に逃げたことで拍手して大喜びしていた。
「みーくん、すごいすごい！　三人とも初参加で逃げ切りって番組史上初だってさ。ＤＶＤも発売されるっていうし買わなきゃ」
《あちらの女子からは収録後にも非常に感謝され、二人が話していると八雲を応援していた芸人の方たちがやってきて、一緒に打ち上げをしに行こうと夕食を御馳走になったのですよ。八雲は貰ったお金で

支払おうとしたのですが、子どもは素直に御馳走になれと言われとても気持ちのいい方たちでした》
湊の中にいて収録中やその後のことも知っていたカグヤが言えば、テレビで見ていても分からない出演者たちの素の姿に桜が感心する。
彼らは話題の皇子とお近づきになろうとした可能性も否めないが、それでも会ったばかりの子どもを焼き肉に連れて行ってくれた事は事実で、湊としても貴重な体験だったと思っている。
テレビを見終わったことで桜が湯飲みなどを下げ始めると、出雲阿国やアタランテたちも手伝い。
いい時間だったことで子どもたちは風呂にでも入ろうかと、ずっと座っていた身体を伸ばしながら立ち上がった。
「んー……はぁ。そろそろ時間も遅いしお風呂に入らな」
「内風呂と露天があるぞ。今日は晴れてるし、最初は少し寒いが露天でもいいと思う」
「露天風呂まであるって豪華やな。まぁ、オススメなんやったらそっちにしとくわ。どこにあるん？」
「準備したら案内しよう。タオルはあるから着替えを持ってこい」
「了解！」
自分の食べたみかんの皮を片付けると、ラビリスは着替えを取りに荷物を置いた湊の部屋へと駆けて行った。
少しすれば着ていたフリースなどを置いてきたラビリスが、髪を解いたTシャツ姿になって現れ、その手には寝巻のジャージと下着があった。
「湊君、準備できたで」
「わかった。じゃあ、俺たちは風呂に行ってくる。何か用事があったらそっちに来てくれ」
それだけ言うと二人はリビングを出て行き露天風呂へと去って行った。
リビングにはパソコンを操作しているソフィアとチドリの他に自我持ちのペルソナも何体か残ったが、ペルソナたちはテレビを見ていたりコタツで寝たりしているため、先ほどの二人に誰も反応しなかっ

たことで、チドリが時間差で突っ込みを入れる。
「……は？　え、なんであの二人一緒にお風呂に行ったの？」
「なんでと言われても一緒に入浴するからでしょう。わたくしも日本に滞在しているときは湊様とたまに入浴しますし。あの方は一人で入浴することの方が少ないですわよ」
「一緒にって歳の近い男女よ？」
「あの方は女性でもありますし、ラビリスさんはロボットです。もっと言えば、わたくしは湊様に何度も抱かれた事がありますから今さらでしょう。では、わたくしもメールの確認が終わったのでお風呂へ行ってきます」
パソコンの電源を落としたソフィアが立ち上がり、ラビリスと同じく荷物を置いている湊の部屋に寄ってから露天風呂へ行ってくると告げて出て行った。
一緒に入浴していたという事実だけでも衝撃だったというのに、戦争までして復讐しようとした相手と肉体関係を持っていた事が驚き過ぎて、チドリは何も考えられなくポツリとこぼした。
「……そんなの聞いてない」
大変なショックを受けた彼女はそのまま彼が戻って来るまで機能停止し、戻ってくるなり掴みかかって事情を聞き出したのは言うまでもない。

第百六十三話　前篇　テスト勉強―建物探訪―

２００８年２月１７日（日）
午前――巌戸台駅前
まだまだ寒さの残る二月中旬、吹きつける冷たい風の中、岳羽ゆかりは勉強道具の入った鞄を手に駅前へと向かっていた。
明日からは中学最後の期末試験。有終の美を飾りたいねと部活の女子メンバーと話していたところ、生徒会副会長である渡邊が会長である湊の家で勉強会をしようと誘ってきた。
湊本人はとても嫌そうにしていたが、今まで彼の家に一度も行ったことがないだけでなく住所も知らされていないチドリやゆかりが真っ先に賛成し、近くで話を聞いていた順平も行きたいと言ってきた事で、最終的に美術工芸部＋生徒会役員＋順平というメンバーが彼の家に集まり勉強会をすることになった。
渡邊や西園寺などノリの軽い者や湊を崇拝している宇津木は分かるが、それ以外の生徒会メンバーが参加を表明してきたのは、テストで満点しか取った事のない湊の勉強法に素直に興味があるかららしい。
そうして、首にマフラーを巻いたコート姿で駅前に到着すると、そこには湊を除く参加メンバー全員が揃っていた。
「うわっ、多いねー」
今日のメンバーは合計十人になる。この人数で遊びに行くなど、騒がしいのが嫌いな青年がよく許可したなと思っていれば、企画した本人が笑顔で手を挙げて挨拶しながら返して来た。
「おっす。いやぁ、これで全員揃ったな。つーか、人数多過ぎてヤベー。でもま、なんかメッチャ高級マンションらしいから、この人数でも問題ないっしょ」
確かに湊の住んでいるマンションはファミリー向けの高級マンションである。よって、この人数だろうと十分に座るスペースはあるだろうが、他のメンバーに視線を送れば、女子副会長の高千穂と庶務の木戸が何やら呆れた顔で渡邊を見ていた。

部活メンバーは彼がマンションに一人暮らしだと知っていたが、他の者はチドリと家族だと聞いていたので、てっきり一軒家に住んでいると思っていたのだ。
しかし、実際に話を聞くと彼は現在マンションに離れて暮らしているため、渡邊は参加メンバーが決まってから大丈夫かと不安な様子を見せる一幕もあり。彼が金持ちでファミリー向けの部屋に住んでいたことで事なきを得た。
だが、改めて参加メンバーを見てみると約一名参加しそうにない者がいる。そうして、野球帽を被った少年の方を向くとゆかりは声をかけた。
「なんでいるの？」
「え、酷くね？　オレっちもちゃんと勉強するんだぜ？　いやまぁ、半分くらいは有里君やナベと遊ぼうって感じだけどさ。こんだけ成績上位がいたら勉強も捗りそうだろ？　短い時間で効果的に成績アップを狙いに来たって訳よ」
以前まで三十点以下が赤点ラインだったのだが、湊が所信表明で宣言した通り赤点ラインが六十点未満に変更された。
赤点ラインに引っ掛かっても定期テストと同じ問題の再テストが二回行われ、そこで九十点以上を取れば補習も免れるのだが、順平はそれでも駄目だったようで二学期の期末では四教科の補習を受けていたが卒業する三年生は期末の補習がない。
とはいえ、最後くらいはビシッと決めたいのが男心。修学旅行で友人になった渡邊が面白そうな事を企画していたので、順平は他の者よりもやる気満々で参加を希望し、渡邊もそれを了承した。
実を言えば、渡邊は最初学校の教室を借りて勉強会をしようと思っていたのだが、そういえば湊の家に行った事もないので、これは丁度いいと開催場所が変更されたのが今回の裏話だったりする。
ゆかりとしては本当の恋人になってからデートは数回したが、一人暮らししている家の場所も知らなかったので、こんな事で知ることになって少々複雑な気分だ。
「私、彼の家に行ったことないんだけど、誰か行ったことある人いる

？」
全員に尋ねるがチドリも含めて誰も手を挙げる者はいない。
ならば、いくら住所を聞いていても近所に住んでいる者がいないので、初めての土地で探すのに少々時間がかかりそうだなとゆかりは疲れた顔をした。
彼女のそんな胸中などまるで知らぬ西園寺など、湊の家に行くのが楽しみなのか、普段以上にニコニコと笑みを振りまいて宇津木に話しかけている。
「宇津木ちゃん、ミッチーの家に遊びに行くの楽しみだったんだよね？」
「え、あ、はい。会長のお家を汚さないために新品の靴下を三足持ってきました」
宇津木は自分をいじめから救ってくれた湊を心酔している。プリンス・ミナトの会員たちも偶像視して崇拝しているが、彼女の場合は個人で神として崇めているので、似ているが宗派が異なると言えば分かり易いだろうか。
そんな存在の家に行けると言うことで、自分のような人間が訪れていいのだろうかと悩んだようだが、結局、彼がどのような家で普段生活しているのか知りたい欲求が勝ち。絶対に家を汚さないように真っ白な新品の靴下三足を勉強道具と一緒にトートバッグに入れて持ってきたのだった。
別にそこまで気を遣わずとも湊は気にしないはずだが、自己評価の低い彼女ならばこんなものかと他が苦笑しているとき、同じ二年生の木戸が呆れ顔で溢した。
「履き替えるにしても一足で十分だろ。馬鹿じゃないのか？」
「黙れ、チビ。お前は会長の家の空気を穢すから帰れ」
「なっ!?　お前の陰鬱さの方が空気を淀ませるだろうが！　あと、他人の身体的特徴を指して悪口言うなって親に言われなかったのか！」
木戸の身長は一五三センチ、対して宇津木の身長は一六一センチ。身長差は約十センチあるため、学力でも劣る木戸を宇津木はチビと呼んで下に見ながら嫌っている。

彼が無謀にも湊にテストで挑んで敗北した話を聞いたときなど、身の程を弁えないクズ、と呼んで氷のように冷たい視線を送っていたものだ。
最初から二人は相性が悪かったが、湊に対して持っている感情が正反対なことで溝は余計に深まった。
自分たちが卒業するまでに少しは改善されないかと思って湊ら三年生も見ていたが、これはまだまだ先は長そうだと既に諦めており、渡邊は喧嘩を始めようとする二人の仲裁に入る。
「はいはーい。喧嘩してないでチャッチャと行くぞー。全員オレについて来い！」
そうして、渡邊を先頭に一同は電車で湊の暮らす中央区のマンションを目指した。
――中央区・マンション〝テラ・エメリタ〟
「うわー、でっけー」
マンションの前に到着するなり順平が呟く。
周辺の建物の中で最も綺麗で大きいのが湊の暮らすマンションだ。高級マンションというだけあって、駐車場には高級車や普通車の高いグレードの型などが並んでいる。
エントランスへは普通に自動ドアで入れるため、ポストで湊の部屋があるかを確認してエレベーターで最上階の十二階まで上がってゆく。
エレベーターに乗っている間、皆がなんとなしに静かになると、その空気に耐えられなくなったのか順平がやらしい笑みをしながら話し出す。
「なぁなぁ、ゆかりっち。もし有里君が女の子をこっそり部屋に連れ込んでたらどうする？」
「どうするって、別に、話し合いじゃないの？」
「お、意外と冷静ですな。てっきり彼をボコボコにするとか、相手の子を裸足で追い出すとかいうと思ってたぜ」
「人にどんだけ余裕ないイメージ持ってんだっつの。殴るとしても最初に一発くらいで、後は普通に経緯とどこまで浮気してたか聞くぐら

いよ」
浮気するやつはクズなので、ゆかりはどのような理由があっても一発は殴る気でいる。けれど、全く話を聞かないつもりはなく、むしろ、彼と浮気相手に全部喋らせて内容が共通しているか確認するタイプであった。
感情的になって即行で別れるタイプより、一周回って冷静になるゆかりのようなタイプの方が恐ろしい。
ここにいる女性陣はそれを瞬時に理解するが、男性陣は勘が鈍いのか気付けなかったようで、到着して開いた扉から出ていく順平と渡邊は、怒っても理性的なタイプだなとゆかりのことを褒めていた。
「えっとぉ、いっちゃん奥だな。それじゃあ、呼び鈴ならしまーす」
ぞろぞろと大勢で歩きながら通路の最奥まで向かうと、表札に『有里』と書かれた扉の前で一同は立ち止まる。
通路からは街が一望でき、随分と良い場所に住んでいるのだなと、改めてここが高級マンションである実感が湧いてくる。
しかし、いつまでも扉の前で止まっている訳にはいかない。一同を代表して渡邊が手を挙げると、そのままインターホンのボタンを押した。
すると、
《はーい》
『……ん？』
プツッ、と繋がる音が聞こえたかと思えば、応対してきたのは明らかに女子の声だったことで全員が首を傾げる。
部屋を間違えたかと思って表札を確認し直すも、そこには『有里』と書かれており間違いはない。
では、どうして一人暮らしのはずの湊の家に来て女子が応対に出るのか？
先ほどのエレベーターでの冗談が現実味を帯びてきて、順平はゆかりに謝りながら顔を青くしているが、もしや、同じ名字の人の家に間違ってきたのかもしれないと思った渡邊は、ここに有里湊がいるかどうか先に確認しようと考えた。

「あ、すみません。遊ぶ約束していた渡邊ですけど、有里湊君はいますか？」
《湊君？　湊君はお茶淹れてるよ？　あっ、香奈ちゃんだ！　香奈ちゃん、にゃっちー》
「……羽入さん？」
《うん！　ドア開けるから待っててね》
　インターホンのカメラから渡邊の後ろにいる者らも見えていたのか、友人の宇津木がいることに気付いた羽入かすみが嬉しそうに挨拶をしてきた。
　どうして彼女が湊の家にいて家人でもないのに応対に出ているのか不明だが、ドアを開けてくれるというのなら待っていよう。
　全員が扉からドアから少し離れれば、カチャン、と鍵を開ける音がして扉が開いた。
「うわぁ、いっぱいだねぇ。香奈ちゃん、いらっしゃーい」
　ピンクの猫耳フードロングパーカーを着た羽入が笑顔で現れると、一同はその油断しきった服装に少々ギョッとする。
　冬だというのにファスナーが胸元までしか上がっておらず、下着らしきものと谷間が僅かに見えており。下は下で超ミニ丈くらいまでパーカーで隠れている以外は完全に素足だ。
　男の一人暮らしの部屋で発育のいい彼女がそんな格好でいていいはずがない。男子の視線が谷間に固定される僅かな間に、近付いた高千穂は素早く彼女のファスナーを上まで上げた。
「羽入さんだったかしら？　暖房しているからといって、あまり露出を多くするのは良くないわよ」
「そうなの？　あ、それよりね。お客さんいっぱいだけど、わたしはまだお勉強中だから遊べないの」
「……別にアンタと遊びに来た訳じゃないわよ」
　とりあえず、家の中には入れて貰えたが、今も勉強中だという羽入は遊べないと残念そうな顔をする。
　しかし、チドリたちからすれば羽入の登場はイレギュラーであり、当初から羽入と遊ぶつもりではなかったので、別に勝手に続けて貰っ

ていて構わない。
　さらにいえば、渡邊の発案でメンバーを集めた際に彼女はいなかったので、イレギュラーな登場とはいえ彼女が既に勉強中だというならタイミングはむしろ良かったと言えた。
　羽入を先頭に広い廊下を進んでリビングへの扉を開くと、弱めに設定した暖房の暖かい空気が全員を包む。それと同時に何やら甘い匂いまでして、扉を入ってすぐ左に視線を向ければ、キッチンでお茶を淹れている湊がいた。
　ぞろぞろと人が来た事で視線を向けてきた湊は、トレーにポットを載せてキッチンを出る際に羽入に声をかける。
「……羽入、お前は別に出なくてもよかったんだぞ」
「うん！　あ、でもね、丁度切りがいいところだった大丈夫なんだよ？」
「そうか。まぁいい、入り口に固まってないでお前らも中に入れ」
　キッチンを出た湊と羽入に続いて一同がリビングとダイニングの方へ行けば、まずその部屋の広さに驚いた。
　玄関からしてとても広かったが、リビングとダイニングが繋がった空間は、置かれている調度品が一目で高級と分かる事もあって、ここは実はスペシャルなホテルなのではないかという錯覚を覚える。
　しかし、部屋の中を見渡していると、湊と羽入が進んで行ったテーブルのところに銀髪赤眼の美少女が座っていて、彼女の事を知らない順平や渡邊は羽入が登場したときよりも驚きの声を上げた。
「おおっ!?　メッチャ美少女の外人さんがいる！」
「あの、はじめまして！　オレ、渡邊凛太郎って言います！　あ、マイネーム・イズ・ワタナベ、ナイス・トゥ・ミートゥー」
「いや、普通に日本語で大丈夫やで？」
『関西弁だっ!!』
　とても肌の白い外国人の美少女がまさかの関西弁だったことで、順平と渡邊は変なテンションで盛り上がる。
　女子たちは二人の様子に微妙な表情を浮かべるが、ラビリスの隣の席に座った羽入が他の者に彼女を紹介した。

「えへへ、ラビちゃんっていうんだよ」
「いや、自己紹介は自分でするて、ウチは汐見ラビリス。よろしゅうな」
「彼女は来年から月光館学園の高等部に行くんだ。既に試験に合格してて、今は羽入の試験勉強と一緒に彼女も進学に向けて勉強していた」
私立の一次試験は公立よりも早い。そして、ラビリスは既に合格を決めており、その事は自分の人格モデルとなった故人の少女とその母親にも報告済みだ。
そして、湊から彼女の入学決定を聞き、来年から美少女が一人追加されることにハイタッチしている順平らを無視して、生徒会の宇津木がおずおずと湊に話しかけた。
「あの、会長？　どうして羽入さんがここに？」
「本人に聞いてないのか？　羽入の家はここの隣なんだ。ご両親が仕事でよく家を空けることもあって、遊びに来たり食事に来たりはしょっちゅうだぞ」
彼の説明に羽入本人もニコニコと笑顔で頷いて他の者はまたしても驚かされる。ゆかりやチドリなどは、家が近所と聞いていたが、部屋が隣なら最初から隣の家だと説明しろと突っ込みを入れたいに違いない。
しかし、ここへは勉強をしにきたはずだ。湊はラビリスと羽入に紅茶を淹れてやりながら、他の者たちも自由に座れと二ヶ所あるテーブルを指差した。
「まぁ、雑談はこれくらいでいいだろ。座布団やクッションは好きに使っていい。適当に分かれて座れ。俺は人数分のお茶を用意してくる」
言われて荷物を置いた者たちは手を洗ってきてから二つのテーブルに分かれ、準備を整えると試験勉強を開始した。
＊＊＊
とりあえずお昼までは集中して勉強しようということで、一同は湊が各教科五種類ずつ用意した対策プリントを解いていた。

窓際のテーブルには生徒会メンバーと順平、部屋の真ん中のテーブルには部活メンバー、ダイニングのテーブルには最初から家にいた三人が座っている。
解き方が分からなければ質問して教えて貰い。順平はこんなに勉強したのは初めてじゃないかと思いつつ、自分が問題を理解して解けるようになっていく感覚に感動を覚えていた。
そして、それは成績上位陣も同じで、これほど分かり易く教えてくれるのは学校では佐久間くらいではないだろうかと、湊がただ勉強出来るだけではない事に改めて驚かされた。
人に教えるというのは非常に難しいもので、情報を正確に伝えるだけでは不十分。そこからさらに、相手がどう理解していないかを把握し、こうすれば理解出来るだろうと導かねばならない。
マンツーマンの個別指導ならばそれも可能だが、湊は十人全員にそれを出来るので、彼がこのまま教師になったら世の中には天才が溢れかえるのではないかと思えるほどだ。
上位陣は最初からポイントでしか訊いていなかったが、何ヶ所も訊いていたゆかりや順平に木戸と言ったメンバーも、プリントをこなしているうちに基本的な考え方が身についたらしく、徐々に質問の回数が減っていき今は全員が黙ってペンを走らせている。
そう、今日の勉強を終えて静かに読書しているラビリスと別の勉強をしている羽入以外は。
「湊君、湊君。お昼ご飯食べたいな」
「……確かにもうすぐ昼だが、朝食を食べるのが遅かったのに大丈夫か？」
湊の作るご飯は美味しい。それをよく知っている羽入はニコニコと笑ってお昼をねだる。
時計を確認すればもうすぐ十二時なので、お昼ご飯を食べること自体は構わないが、起きるのが遅くて朝食を摂ってから三時間しか経っていない状態で大丈夫か湊は尋ねた。
「うん。朝はパンだったからお昼はご飯がいいなぁ」
「……分かった。炊飯の準備をして少し食材を買い足してくるから

待っておけ。他のやつらも切りがいいところまで進めたら休憩しておいてくれ。俺はちょっと買い物してくる」
集中して勉強したことで、午前中の勉強はそろそろ終わりでもいいだろうと他の者も思っていた。
長時間したところで集中力が持続するはずもないので、こういった物は短い時間でいかに濃く出来るかが重要なのだ。
そして、他の者に教える回数も減っていたことで、湊はコートとマフラーを身に付けると買い物に出て行ってしまった。
荷物持ちについて行こうとした者もいたが、本人に断られれば素直に待っているしかない。
残った一同は湊が出て行ってからも大人しく勉強し、切りのいいところまで進め休憩に入る者が増えてくれば、座りっぱなしで固まった身体をストレッチで解しながら順平が口を開いた。
「……そろそろ良いかな渡邊君？」
「……そうだね伊織君。十分も待てば大丈夫なはずだよね」
同じようにストレッチをしていた渡邊と一緒に順平は変な口調で笑い合う。他の者は何の話だという顔をしているが、既に休憩時間に入っている事で、順平と渡邊はダイニングのテーブルでゲームをしていた羽入の元へ向かう。
「よっし、それじゃあ建物探訪と行くか！」
「ねえねえ、羽入ちゃん。会長のベッドってどこにあるか知ってる？」
「湊君のベッド？　眠いの？　ベッドはこっちのお部屋にあるよ」
訊かれた羽入はゲームをスリープモードにして素直に案内する。彼女も湊の家で眠くなるとすぐにベッドに向かうので、他の人が眠いのなら案内しようと思ったのだ。
扉を開けて廊下に出ると少し進み、閉められていた扉を開けると部屋の中に置かれた大きなベッドが目に入る。
案内した羽入は笑顔でダイブしてビョンビョンと跳ねているが、ベッドの上で跳ねると中のスプリングがダメになるので他人の家でやるのは本来ＮＧである。
もっとも、同じようなベッドを湊は何個もマフラーに入れているの

で、今のベッドがダメになったところで軽く羽入に注意をする程度で怒りもしないだろう。
　ロングパーカーを着ているだけの彼女が跳ねると、生足やらその奥に隠された布地やらが見えそうになるが、順平たちはそれをチラ見するだけで目的を達成するため部屋に足を踏み入れた。
「ちょっ、ベッドでかくね?!」
「つか、なんで枕三つもあるんだろ。ま、いいや。さーて、会長の秘密の本はどこぞなもしっと」
　二人がやってきた理由は湊の持っている十八禁本を探すためだった。普段の彼からはそういった俗っぽい物を想像出来ないが、可愛い女子や綺麗な女性に囲まれているなら、彼も思春期男子として性欲があるはずと睨んだのだ。
　順平たちの後ろからはラビリスもついて来ているが、羽入と一緒で最初から家にいた人物なので、何かあれば答えるためについて来ているのだろうと考え、二人は特に気にせずベッドの下を携帯のライト機能を使って覗きこむ。
　綺麗に掃除されていてベッドの下には埃一つない。その分、目的の物もなさそうだが、熱心にベッドの下を見ている二人を不思議に思ったのかラビリスが声をかけた。
「ベッドの下なんてなんもない思うけど、なに探してはるん?」
「いや、男の子の秘密っていうか所謂アダルトブックっす。ベッドの下は定番過ぎて今日日隠してるやついないんだけどね」
「あー、ねーわ。こりゃ部屋の方かな。ゴメン、有里君の部屋ってどこか分かる?」
「湊君の部屋やったらこっちやけど、あんまいじったら怒られるで?」
　ベッドの下は定番過ぎて隠している者はいない。そういうのは机の引き出しの裏であったり、そういう物だとばれないよう本棚に仕舞っていたりするのだ。
　寝室ではこれ以上探しても無駄だと判断した二人はラビリスに湊の部屋を聞き、案内されると扉を開けて中を見る。
　すると、中は落ち着いたデザインの家具が置かれ、机の上に置かれ

た付箋のついた外国語で書かれた医学書や、株でもやっているのか複数のディスプレイがあるパソコンなど、この部屋の主は社会人ではないかという印象を受けた。
「うわ、なんかすっごいインテリっぽいなぁ。ま、ちょっと本棚覗くだけだから許してくれるよね！」
　順平がそういって先に入れば渡邊も後に続く。見るからに高そうな物が置かれているので、パソコンなど気になる物はあるが基本的に手を触れない方針で行く。
　寝室と同じように二人が色々と探している姿を眺めていたラビリスは、ベッドで跳ねるのに飽きて出てきた羽入と一緒にリビングに戻っていったが、少女たちがいなくなったことで二人は本格的に本棚の捜索に移った。
「おっ、隊長！　ヌードデッサンのポーズ集を発見しました！」
「なにっ!?　それは部活関連の品に偽装した物に違いない。すぐに検品だ！」
　探すこと約三分、順平は美術のデッサン練習用ポーズ集の中にヌード編を発見した。表紙の時点で裸の女性が写っているので、これは期待できそうだと渡邊を興奮気味に見せるように言う。
　やはり湊も男だった。これで彼の嗜好が分かれば色々と男だけで話し合う事が出来る。
　そんな期待を抱いて、本棚の前に座った二人は肩を寄せ合うように本を眺めていたのだが、ページを捲るにつれて表情を曇らせていった。
「うへぇ、こういうのって結構モロにヌードなのね。際どいポーズもあるけど色気は感じねえなぁ」
「あー、普通に服着たポーズ集もあるから、こりゃマジで部活関連っぽいな。あんまいじっとバレるからここはこれくらいにしとくか」
「そうだな。んじゃ、もう一つ部屋あったし家のこと知ってる二人に聞いてからそっち行くべ」
　ヌード編を発見したときにはコレだと思ったものだが、シリーズ物のようで普通に服を着ている女性のものだけでなく、男性や動物のも

のもあるので、本当にただの部活関係で買った品のようである。
色々と触るとまずそうな物もあるので、これ以上は止めておこうと切り上げた二人は、部屋を出て扉を閉めるとダイニングの方に戻っていた羽入とラビリスの元へ行き、残る一部屋について尋ねた。
「羽入ちゃん、ラビリスさん、もう一つの部屋って何の部屋？」
「もう一つの？　ああ、あそこはウチの部屋やで。見たいんやったら別に入ってもええけど」
『……は？』
一瞬ラビリスが何を言ったのか分からず、二人は口を開けて間抜けな表情で呆ける。
それも当然だろう。二人はラビリスも羽入と同じようにここへ遊びに来ていると思っていたのだから。
他の者もいる場所で話していたことで聞こえたのか、年末に湊が帰省したときに聞いていたチドリはムスッとした表情をするだけで驚かないが、何も知らなかった他のメンバーも順平たちと同じように驚いた顔をする。
そして、ようやく再起動した順平が彼女の話を信じられず聞き返した。
「え、ウソ、どゆこと？　ラビリスちゃんってここで暮らしてんの？」
「湊君に聞いてなかったん？　かすみちゃんも泊まったりするけど、ここに住んどるのはウチと湊君だけやで」
くすくすと笑って話す彼女に嘘を吐いている様子はない。隣に座ってゲームをしている羽入も否定しないので、きっと全てが真実なのだろう。
信じがたい衝撃の事実を告げられ、青い顔をした順平は渡邊と一緒に数歩下がると、振り返ってラビリスに背中を向けながらその場にしゃがんで小声で後悔の言葉を吐きだす。
「っべーよ、マジやべーよ！　家の人の前で思いっきり家探ししちゃったじゃん！　それもエロ本探してるって言っちゃったし！」
「詰んだわ。これ絶対に詰んだわ。つか、会長一人暮らしじゃなかったのかよ！　女の子と同棲してるとか聞いてないし！」

途中からは他の者にも聞こえる音量になっていたが、順平と渡邊はまずい事をしてしまったと頭を抱える。
ラビリスが羽入と同じ遊びに来た人間であったなら誤魔化しようもあったが、この家で暮らす住人なら絶対に二人が家探ししていたことを伝えるだろう。
わざわざ湊が家を出てから少し時間を置いて、忘れものなどで湊が急に戻って来ないよう細心の注意を払ったというのに、住人が残っていた以上はそれも全て無駄だったということになる。
多少の事は呆れて許してくれる湊も、流石に家に来てベッド周辺と私室の本棚をエロ本探しで荒らされたと聞けば怒るだろう。
彼の怒りを恐れて二人が震えていれば、同棲しているなんて聞いていないという渡邊の叫びに言葉が返って来た。
「……実家から離れて暮らしてるとしか言わなかっただろ。一人暮らしとは言ってないぞ」
「いや、普通そこは一人暮らしって思うじゃないッスか！　……って、え？　か、会長？　なんで家にいるんスか？」
「自分の家にいても別に問題はないと思うが？」
聞こえるはずのない声が聞こえ、渡邊が振り返るとキッチンから出てくる湊がいた。
さっきキッチンの前を通ったときには誰もいなかったというのに、どうしていないはずの湊がそこから出て来るのか分からない。
そもそも、いつ彼は帰って来たのだと知りたがった渡邊は、窓際のテーブルで生徒会メンバーとお茶を飲んでいた宇津木に問いかけた。
「な、なぁ、宇津木ちゃん。会長っていつ帰って来たの？」
「先輩達が会長のベッドルームを荒らしているときです。さらに、私室に侵入するという罰当たりな行いをしていた頃は、キッチンで買ってきた食材を冷蔵庫に仕舞われていました」
それを聞いて二人は全く気付かなかったと頭を抱える。
近所のスーパーに行っていただけなので、二人がベッドの下を覗き込んでいるときに湊は帰っていたのだが、湊は扉の開け閉めも歩くときも基本的に音を立てない。所作の端々に気品が感じられる通り育

ちがいい事に加え、日常から動き方に気を遣う訓練を受けているのだ。
別にそれを解除して普通に歩いたりも出来るが、普段からしておかないと勘が鈍るため、仕事屋時代からの歩法などを実践していたことで二人は湊に気付けなかったという訳である。
そして、二人が部屋に戻ってきたときに湊がキッチンにいなかった理由だが、この家は角部屋でバルコニー付きとなっており、繋がっているベランダから行くかキッチンの奥にある扉から行くか二種類方法がある。
買ってきたものを仕舞い終わった湊は、そのままキッチン側の扉からバルコニーに出て洗濯物の乾き具合を確認して、ついさっき部屋へと戻ってきたのだった。
バルコニーへの行き方を知っているラビリスと羽入は何も驚かないが、順平たちにすれば湊が一時的にキッチンから消えて再び現れた感覚だろう。
彼に怒られると確信している順平は、怒りへの恐怖に状況への混乱も合わさり声を震わせて湊に話しかけた。
「あ、有里君、冷静に話し合おうぜ。ちょっとトイレを探して部屋を間違えただけなんだ。初めて行った場所ならよくあることだろ？」
「静かに座ってろ」
『……はい、すみませんでした』
話し合うまでもない。冷たい瞳を向けてテーブルに戻っておくよう言われた二人は、素直に頭を下げて謝ると、肩を落としてしょんぼりしながら戻っていった。
余計な事をしていた二人が大人しくしているのを確認した湊は、髪を短めに結い上げてキッチンに戻っていくと、少し経ってからキッチンの方からいい匂いが漂い始め、頭を使って空腹になっている一同は、部活メンバーとラビリスと羽入以外は食べた事のない彼の手料理に期待を寄せるのだった。

第百六十四話　後篇　テスト勉強―食いしん坊万歳―

昼――マンション・湊の部屋

窓際と部屋の中央辺りに置いていた二つのテーブルをくっつけ、一つの大きなテーブル状態にすると、キッチンからお盆を持って出てきた湊が、窓に近いところに座っていた順平と渡邊の前に料理を置く。

「ほら、鯛茶漬けと鳥皮串だ」

一つは丼でホカホカと湯気を立てる鯛茶漬け、もう一つは小皿に載った塩とレモンで味付けされた鳥皮。

友人宅でこんな料理を出されるのが初めてな二人は、出汁の香りと鳥皮の香ばしい匂いに唾液が分泌するのを感じながら、箸を手に取り食べていいかを尋ねた。

「お、メッチャ美味そうじゃん！　休日の昼っていえばチャーハンとか焼きそばが定番だけど、サラッと食えてこういうのも良いよな」

「会長、これマジで食べて良いんスか？」

「ああ、汁を吸うから先に食べ始めておけ」

『お先ッス！　いっただっきまーす！』

ご飯が汁を吸ってしまうと不味くなる。そういった食べ方もあるが、出汁を注いだばかりなので早く食えと湊がいえば、二人は他の者にお先に失礼しますと言って食べ始めた。

「うお、うめぇ！」

「出汁からちゃんと取ってる茶漬けとか初めて食ったけど、こりゃ贅沢な味だわ！」

普段自分が家で食べる様な茶漬けとは違う。出汁で作った物を茶漬けと呼んでいいかは不明だが、お茶漬けの素をふりかけてお湯を注ぐだけのものと異なり、立派な料理だと思って二人は上品な味の茶漬けと途中に鳥皮を摘まみながら食事を続ける。

そして、他の者の料理を取りにキッチンに行っていた湊は、今度は大きな盆に載せた二つの皿を持って来て順平と渡邊以外の前に置い

た。
「……トリュフ入りチーズリゾットで作ったライスコロッケだ。先にこれを摘まんでてくれ」
置かれたのは一口サイズのライスコロッケ。高級食材と言われているトリュフ入りのチーズリゾットを、さらに加工してライスコロッケにしてしまうとはお洒落感が半端じゃない。
「あ、あれ？　そっちなんかお洒落じゃね？」
「え、会長？　オレらにはライスコロッケなるものはないんスか？」
しかし、それが自分たちの前には置かれず、取り皿も他の者にしか配られていない事で、順平と渡邊は食べる手を止めて自分たちの分はないのかと尋ねる。
すると、出てきたコロッケを二つほど皿に載せていた女子副会長の高千穂が、二人の方へと身体を向けて話しかけてきた。
「貴方たちぶぶ漬けって知ってる？」
『ぶぶ漬け？』
「京都の方言でお茶漬けのことを指すのだけど、帰って欲しい客に出すって言われているの。まぁ、実際にそういった文化が存在したかは不明らしいけど、有里君は百パーセントそれを理解して貴方たちにお茶漬けを出してるわね」
この扱いの差はそれしか考えられない。サラッと告げてチーズのいい匂いをさせたコロッケを頬張る高千穂。
男子二人はそんなまさかと信じられないようだが、再びキッチンから現れた湊は、とても大きなお盆に載せたいくつもの料理並べていく。
「生ハムとラディッシュとミズナのサラダに、ゴボウやレンコンにニンジンなど根菜で作った食感を楽しむオムレツだ。こっちは仔牛のフィレステーキのマッシュポテトとフォアグラ添え、牛タンと三種のチーズを使ったピザ、スズキとハマチのカルパッチョ、ラム肉のハーブ串焼き、ホロホロ鳥の蜂蜜焼き、エビとキノコのトマトクリームパスタになる。ご飯もあるがパンがいいなら焼く準備をしてあるから言え」

最初のコロッケも入れて九品、ご飯やパンを付ければ合計十品という、中学生の男子が一人で作ったとは思えぬ豪華さのランチだ。
この有里湊という青年は料理に対して手を抜かない。調理工程の短縮など効率化を図ることはあるが、野菜の切り方すら一切の妥協を許さずにこだわる。
教えるとき以外は他人の料理に口出ししたりせず、出された物を黙って食べるありがたい消費者だが、他人の手が入らず己だけで料理をするとなれば、キッチンは戦場となり彼は調理器具を持って食材へと挑む。
手抜き料理と呼ばれる物を作る事もあるが、あれは実際に手を抜いて作っている訳ではなく、異なるレシピで似た味を作るという所謂再現料理の一種だ。
そういった物を作るときでも手を抜かない湊は、他者の口に入り血肉となる物を雑に扱うというのを嫌って、再現料理ですら真に迫り時には凌駕する物を作りあげる。
こんな料理は高級なレストランやパーティーでしか見た事がないという他の者たちは、匂いだけで美味しいと分かる彼の料理の腕前に素直に感嘆し、以前、寮に来たときに手料理を振る舞って貰った事のあるゆかりが、まだこれだけの腕前を隠していたのかと彼のレパートリーに驚き尋ねた。
「うわ、すっごーい。これ一人で作ったの？　有里君って和食と中華が得意料理じゃなかったっけ？」
「得意料理はな。別にイタリアンや洋食が作れないとは言ってない」
「ミッチー、お金持ちの上に料理も出来るとかイケメンポイントがカンストしてるよ！」
プロ級で作れるのは実際にプロの下で学んだ和食と中華だが、他の料理だって作ることはあるし、作った事がなくてもレシピを見ながら味を調節して作って仕上げる事も出来る。
特殊な調理法は練習が必要だとしても、ここに並んでいる料理は火加減等に注意すれば、後は下拵えを丁寧にすれば作れるため、作った物を内部では時間凍結されるマフラーに入れておけば、この通り全て

出来たての状態で提供することも簡単だった。
それぞれからご飯とパンのどちらにするか聞き、湊が全員の分を用意すると他の者たちも料理に手を付け始める。
最初にカルパッチョを食べた風花は、新鮮な魚の脂の甘みに感動を覚え、作った青年に感謝の意味も込めて美味しいと伝える。
「このカルパッチョすごく美味しい！　とっても脂がのったハマチなのに全然くどくない」
「ハーブのマスタードを少し混ぜてるんだ。サッパリの中にもアクセントを付けた方が素材の味が引き立つからな」
「蜂蜜焼きなんて初めて食べましたけど、深いコクのある照り焼きみたいですね」
「砂糖の代わりに蜂蜜でタレを作った照り焼きなら近い味になるぞ。まぁ、普通の肉でやるとカロリーが高くなるから、そこらへんの注意は必要だが」
普段は生意気な庶務の木戸も、これらの料理には流石に文句のつけようがなかったのか、ホロホロ鳥の蜂蜜焼きとサラダを一緒に食べている。
チドリや宇津木もピザやステーキを食べては次の料理を試しているので、湊は口の周りを汚している羽入の顔を拭いてやりつつ、自分も食事をして他の者から料理について質問があれば答えていた。
だが、そうやって一同が楽しくランチタイムを過ごしていると、
『申し訳ございませんでした!!　オレたちにも料理を恵んでください!!』
順平と渡邊が湊の近くへ滑り込むようにやってきて突然土下座をし始める。
湊は一度視線を送ったがすぐにテーブルの方を向いて、ラビリスに黒ウーロン茶を注いでやりながら二人に言葉を返した。
「……お茶漬けと鳥皮を出しただろ」
「これも美味いっス。美味いっスけど、そっちの料理も食べたいんです」
「悪気はなかったんだ。ちょっとしたジョークのつもりで、別に見つ

けても女子にいうつもりはなかったし」
湊も男の子なのでアダルトブックの一冊や二冊持っていると思った。仮にそれを見つけても女子には何も言わず、ただ後でお互いの趣味について語り合って、持っている本を貸し借り出来ればと軽い気持ちで考えていたのだ。
集まっている人間の約半数は、そんなくだらない事をして何が楽しいのか理解出来ず、勝手に家捜しされて怒った湊が料理に差を付けるのも当然だと思っていた。
けれど、そんな呆れた様な冷たい視線で他の者から見られても、少年たちは豪華な食事を食べたい一心で頭を下げ続けた。
すると、湊はとても深いため息を吐いて、憐れみの色が混じった瞳で土下座している二人を見る。
「……はぁ。お前らが探していたような物は持ってない。そもそも、そんなの見てどうするんだ？」
「え？　いや、それは……芸術鑑賞っスよ。ええ、はい」
「綺麗な女性は見ているだけで癒されるんだぜ」
そんな本を見る理由など、エロい物が見たいからという男の本能でしかない。改めてそれを可愛い女子たちのいる場で言う事など出来ず、二人は目を泳がせながらもそれっぽい理由を何とか答えた。
だが、そんな一般的な男子とは脳構造からして違う湊は、相手が何を言っているのか全く分からないと返す。
「欠片も理解出来ないな。別に食べてもいいが次に勝手な真似をすれば、お前らは裸足で帰ることになるから気を付けろよ」
『あざーっす！』
悪戯心が湧いても悪さをするな、余計な事をすれば放りだす。その事を肝に銘じておくよう言って、湊は二人にも取り皿を渡した。
皿を貰った二人は満面の笑みで料理を皿に盛って、それらの味を堪能しながら、座っていろと言われた事で聞けずにいた事をラビリスに尋ねる。
「お、串焼きめっちゃジューシー。でさ、なしてラビリスちゃんって有里君と一緒に暮らしてんの？」

「んー、どう説明したらええやろ。とりあえず、ウチって元々は特殊な施設におったから湊君と会ったときは頼る人とかおらんかったんよ。外での暮らしとかも分からんかったし。しばらくは湊君と会った施設におったらいいやろうけど、その後はどないするかなって感じやってん」

実際には、湊を同じ対シャドウ兵装だと思って切りつけ殺しかけ、そのまま廃棄されるだろうと思っていたのだが、湊本人が絶対にそんな事はさせないと彼女を守る側に回ったことで運命が変わった。

ＥＰ社の研究所にいる人間はラビリスをロボットだとは考えておらず、接するときは他の者と同じように普通の少女として扱っている。

桐条の研究所にいた頃は、命令と報告という形でしか研究員から話しかけられなかったので、昨日のテレビの話をしたり、どこどこの店に可愛い小物が置いてあるなど、そういった兵器にとっては無駄で人間にとってはごく当り前なコミュニケーションとしての会話を楽しめる今をとても幸せに感じている。

「そしたら、湊君が部屋も余っとるし一緒に住まへんかっていうてくれて。その前に、学校に憧れとったら受験の申し込みもしてくれるって言うてくれはって、色々とお世話になりっぱなしやから、家やとウチが家事とかしとる感じかな」

そして、そんな日々を送れるように取り計らってくれた青年に恩を感じ、ラビリスは彼の下で暮らす様になった。

会ったばかりの頃は、何でも出来て迷わずに行動する青年の姿に、人はこうまで強く生きられるものなのかと感動を覚えた。だが、近くで過ごし彼の事を知っていくにつれ、ラビリスは彼の脆さや抱えている問題を理解して目が離せなくなる。

彼が強い理由は強くなければ生きていけないから。迷わないのは自分が出来ないこと知っているから。そんな弱者としての思考であり続けながら、大切な物のために何かを成そうと足掻いている青年をラビリスは放っておく事が出来ない。

故に、最初は誘われて一緒に暮らしている形だったが、今では自ら

彼の傍にいようと思いながら、ラビリスは彼から教わった家事に精を出して、出来る事が増える楽しさを感じつつ彼のお世話をしていた。
順平の質問にラビリスがそんな風に答えると、他の者は複雑な事情があって暮らす様になったのかと感心し、湊の隣に座って家事が楽しいと話す彼女を順平はとても眩しく感じている。
しかし、そんな彼女に家事を任せる青年の家での姿にも興味が出たらしく、ピザを一ピース取りながら順平は続けて尋ねる。
「おー、なんか結構訳ありって感じなのね。けど、ラビリスちゃんが家事とかしてるって、有里君って家では何もしないタイプなんか？」
「一人で暮らしていたときは自分でしてたが、ラビリスが来てからはあまりしてないな。まぁ、別に今でも出来るが、本人が鼻歌を歌いながら家事をしてるし任せてる」
「湊君は普段は学校行っとったり、在宅時でも仕事があって忙しいからしゃあないんよ。手が空いたら手伝ってくれはるし。勉強とか色々と教えてくれて役割分担はちゃんと出来てるで。それにまぁ、湊君って色々と危なっかしいからウチが傍にいたらなアカンなぁって」
この家で家事の大部分を任されている彼女は家事を苦に思っていなかった。掃除して綺麗になれば気持ちがいいし、ベランダで育てている植物が少しずつ成長する様は見ていて感動すら覚える。
料理が美味しく出来たときは手ごたえを感じ、さらにもっとレパートリーを増やしたいとも思えて挑戦の毎日である。
真面目で負けず嫌いなとこもある性格のおかげか、そういった主婦業が性に合っているとラビリスは自分でも思っている。だが、家事自体の楽しさもあるが、やはり一番の理由は強さの奥に脆さを隠した青年には誰かがついておかねばという使命感だと考えていた。
ラビリスの新型ボディを作ったとき、湊は時流操作を使用して最低でも一ヶ月はほぼ不眠不休で作業をしており。その事をシャロンたちから聞いたラビリスは、ちゃんと世話をしていないと彼はまた無茶をするとして、研究所にいるときも家でもなるべく彼の傍にいて身の回りの世話をしていた。
どこか苦笑するように彼女が言った事で、裏にそこまでの意味があ

るとは思われなかっただろうが、周囲から完璧超人のように思われている青年にそこまで言って世話を焼く彼女の姿に、渡邊は感動を通り越して尊敬の念を抱いた。
「すげー。会長を相手にこんな世話焼きな正妻属性を発揮する子がいたとは。これは家族と彼女と正妻の三者で壮絶な修羅場がくるかっ」
以前、修学旅行二日目の朝食時に湊とゆかりが仮初の恋人になると聞いたとき、チドリは底の見えない井戸の様に不気味な闇色になった瞳を見せた。
そして、彼女であるゆかりは、彼が浮気をしていたらとりあえず一発殴ってから、その相手と彼氏に話を聞くと言っていた。
そんな二人の前に正妻属性を身に付け同棲している美少女が現れれば、当然、三者による湊争奪戦が勃発するに違いない。
渡邊は茶化す様に言ったが、内心では実際に始まれば全力で退避しようと心に決めながらゆかりたちを見た。
けれど、ラビリスは話がよく分かっていないようなので除外するにしても、他の二人もどこか呆れた顔はしているが、特にこれといって怒った様子もなく食事を続け、チドリが何も言わないのでゆかりの方が言葉を返す。
「いや、別にそういうのないから。君らは何でそんなに人で遊びたがるのかねー」
「でも、ゆかりちゃん的には心配じゃないの？」
「複雑と言えば複雑だけど、二人が一緒に暮らし始めたのって私たちが正式に付き合うより前でしょ？　それに色々と事情があって暮らし始めたなら、まぁしょうがないかなって」
風花の質問にゆかりは彼女としては納得しきれないが、相手に事情があるのは理解しているので大丈夫だと苦笑して返す。
彼女は昨年の十二月に湊とチドリから二人にまつわる話を聞いた。中々に複雑かつ重い話で、完全に信じられた訳ではなく、大まかな内容と下手に踏み込むことが出来ない類いの話であると理解しただけの状態であるが、ラビリスの話の中に『特殊な施設』という単語が出てきた。

そこから推測するにラビリスも同じ境遇か似た境遇にいた存在で、チドリが何も言わないということは彼女が事前に話を聞いていたと察する事が出来た。
故に、湊が言っていた最重要人物の内の一人であると思われる少女を、ゆかりはどうこうするつもりはなく、ただ家族のように接しているなら気にしないと答えた。
どことなくサバサバとしていて、からかわれると途端に不機嫌になる短気なイメージがあった少女がそんな理解ある反応を見せれば、彼女と同学年の者たちは僅かに驚き、西園寺と高千穂がそれぞれ意見と助言を漏らす。
「わー、岳羽さんってば大人だぁ。まどかだったら相手の子を追い出してって彼氏にいうのに」
「事情も聞かずにそれはどうかと思うけど、岳羽さんのスタンスだと駄目男に引っ掛かったら終わるわよ?」
「あぁ、大丈夫。有里君も普通に駄目男だから」
時すでに遅し。そう言いたげにゆかりは湊の方へ小馬鹿にした顔を向ける。
他の者にすれば、学業だけでなく助っ人で参加したバスケ部でも記録を残しているため、彼は見た目がいいだけでなく文武両道の完璧超人なのかという印象を持っている。
さらにお金も持っていて、料理を始めとした家事も出来る。性格は色々と難しいが老若男女問わず人助けをする紳士っぷり。これでダメ人間ということは流石に出来ないのではと順平たちが言い返すよりも早く、青年の家族である少女と同棲している少女がゆかりの言葉に同調する。
「……そうね。グータラとかって意味ではないけど、駄目男なのは否定しないわ」
「いやいや、休みの日とかは結構グータラやで。起こして準備始めたらシャキッとするけど、ベッドから起きてくるまでに時間かかるんよ」
「まぁ、有里君って基本的に面倒臭がりだからね。他人にあれこれす

るとき以外は基本的にどうでもいいってスタンスだし」
彼を知っているからこそ持てる共通認識。美紀と風花も他の者より関わっている時間が長いため、言葉は濁すがなんとなくは理解している。
能力は高いが根本的な人間性はダメ系。そんな風によく知る者から認識される青年は、話の内容自体に興味がなさそうな顔をしながら串焼きを頬張って、口の中の物を飲み込んでから嘆息気味にこぼす。
「……好き好んでそんな男の傍にいるのもどうかと思うぞ」
自分を救いようのないクズだと認識しているからこその反論。ラビリスに関しては事情が異なるが、湊は他の二人を一度は自分から遠ざけようとしたのだ。
それでも傍にいたいと思ったのは彼女たちの方で、湊もしっかりと考えて選んだのならば好きにさせようと思っている。
知らずに懐いて来る羽入のようなタイプならともかく、知ってて尚傍にいると決めた時点で、相手の事を言えないくらい異端であることは間違いない。
少女たちもそれには言い返せないのか、とても微妙そうな表情で湊にジトっと責めるような視線を送って食事を続ける。
他の者は青年と少女らのやり取りに苦笑いや呆れ顔をしている中、今までずっと他の者の倍速に近いスピードで食事を続けていた羽入が、お箸を置いてコップのお茶を飲み干すなりムスッとした顔で口を開いた。
「あのね、湊君はぜんぜん駄目な男の子じゃないんだよ。困ってたら助けてくれるし、知らない事は教えてくれるし、寂しかったら一緒にいてくれてとっても優しいんだよ。それにね。駄目な男の子だったら一番偉い生徒会長さんにもなれないの」
彼女がムスッとした顔になっていた理由、それは青年の事を悪く言われたからだった。
チドリたちも湊が嫌いで言っていた訳ではなく、半分は雑談での冗談として口にしていただけだ。
けれど、精神的に幼く純粋な羽入にとっては、少女たちの言葉が自

分の大好きな相手を悪く言ってるように聞こえ、我慢出来ずにそんな事はないと反論したのである。
普段はどこかポヤっとした表情で楽しそうにしているだけに、羽入が珍しく怒っていると理解した他の者は、別にチドリたちも本気で言っている訳ではないと宥めつつ、随分と湊は慕われているのだなと感心する。
「いやぁ、有里君ってば後輩ちゃんに愛されてるなぁ。どうやったら可愛い後輩の子に、そんな風に言って貰えるようになるのか教えて貰いたいぜ」
順平には後輩らしい後輩がいない。部活にも入らず、放課後はゲームセンター通いやコンビニで立ち読みばかりしていれば、同じ寮生の下級生に会うくらいで、先輩後輩という間柄にはなりづらい。
しかし、湊が可愛い後輩に慕われているのを見て羨ましくなったのか、どういった経緯で親しくなれたのかと尋ねた。
すると、ほとんど食事を終えてお茶を飲んでゆっくりしていた青年は、顎に手を当てつつしばし考え、自分がどうして羽入に懐かれるようになったのかを答えた。
「……基本は餌付けだな。最初に会ったのは去年の今頃で、羽入が鍵を学校に忘れ家の前で野宿しようとしていたときなんだ。親は仕事で日本におらず、学校も最終下校時刻を過ぎていたから入れない。そうして、朝まで部屋の前で寝ていようと思ったらしい」
湊と羽入の出会いは昨年二月。丁度、木戸との勝負を行った期末の結果発表の日だったことを、湊は今でも覚えている。
エレベーターを降りて家の扉まで行く途中に、猫のように丸くなって寒そうに彼女は寝ていた。
ここはマンションの最上階、オマケにまだまだ春先とは言えない冬真っ只中。いくら都会でも朝までに凍死する可能性が高かった。
「だが、真冬にあんな場所で寝ていれば当然風邪を引く。下手をすれば凍死もあり得たから、まぁ、拾って家で看病してやった訳だ」
相手が同じ学校の制服を着ていたことで余計に目に付き、湊は生きているのかを確認してから抱き上げて部屋に連れていった。

あの時点で既に身体は冷え切っており、もう少し発見が遅れていれば死んでいたかもしれない。
本人はその事に気付いていないだろうが、風呂に入れて身体を温め、鍼治療で風邪の症状を治してやり、一晩寝て起きてからは軽食事を与えて、翌朝の食事と昼の弁当まで用意してやった。
親が仕事でいないことで寂しい思いをしていた少女にとって、学校の先輩で自分によくしてくれる青年は非常に頼りになる存在らしく、以降は頻繁に遊んでとやってくるようになった。
「食事と寝床を提供したからか、それ以降は暇だからと遊びに来たり、出掛けるときについて来て欲しいと頼まれたり。頻繁に相手をさせられている。よって、後輩が欲しければ餌付けをすればいい」
「いや、普通に無理っしょ。真冬に家の鍵忘れて野宿なんて気合入った子なんてまずいねーし。寮暮らしのオレっちじゃ料理提供するのも難しいっす」
前提条件が厳し過ぎる。順平は肩を落として自分には無理だと溜め息を吐いた。
他の者はその様子を見て思わず笑ってしまい。女性陣に受けた事が嬉しいのか、順平は満更でもない表情で食事を続けた。
そうして、談笑しながら食事は続き、しばらくすれば大量にあった料理も綺麗に片付いた。一番食べていたのは湊と羽入だが、湊が馬鹿みたいに大量に食べることは知られていたので、料理を作った本人が食べるのは当然の権利だと誰も何も言わなかった。
片付けるときには協力して皿を重ねて運びやすくし、空いたテーブルを布巾で綺麗にしたところで、煙管を咥えた湊が今後のスケジュールについて話す。
「さて、食事も終わったようだし、三時くらいまで食休みを取って。それから勉強を再開しよう」
「まだ一時半にもなってませんよ？　テスト前だっていうのに、食休みにしても休憩し過ぎじゃないですか？」
湊の言葉に木戸が異を唱える。食休みは必要だが今日はテスト前日なのだから、ここは休憩を短く設定して勉強すべきではないかと。

美味しい物を食べて満足した順平や渡邊は、休みたいのかその言葉を聞いてブーイングしており、木戸が湊の意見に反対したことで宇津木も彼を睨んでいる。
しかし、反対された本人は気にしていないのか、煙管を手で遊ばせながら静かに口を開いた。
「……木戸、食後は消化のために胃に血液が集まることは知ってるな？」
「ええ、だから昼休み明けの五限目は眠そうにしてる人が多いんですよね」
「そうだ。食後は脳に血液が不足しており、血液が不足しているという事は酸素が少ないということになる。これが眠気の原因だが、仮に眠気を感じていなくても酸素不足は起こっているんだ」
眠気の度合いに違いはあれど、胃に血液が集まって脳に酸素が不足気味になる現象は誰にでも起きる。
その事は木戸も知っているらしく、話を聞いて頷いている事を確認しながら湊は言葉を続ける。
「そのため、自覚していなくても集中力を欠いている事になり、そんな状態で勉強してもほとんど知識として定着しない。だが、勉強していたことで脳は疲労を感じ、栄養補給で軽食を取れば、また胃に血液が集中するという悪循環が発生する」
集中力を欠いた状態では著しく効率が落ちる。それでは勉強する意味が薄くなり、さらに悪循環まで引き起こすとなればデメリットが勝ち過ぎる。
「なにより、人は自分で思っているほどそう簡単に意識の切り替えが出来ない。だからこそ、休日に勉強するなら二時間やって三時間休んで二時間やるという程度の周期の方が効率がいいんだ。ま、慣れてくれば勉強の時間を増やせるが、一回の限度は三時間くらいだと覚えておいた方がいい」
学年末考査だけあって勉強を頑張りたい気持ちは分かる。しかし、どうせやるのなら効率よくするべきだろう。
そんな風に、学内最高の頭脳を持つ先輩から諭す様に話されては頷

くしかなく、ばつが悪そうな表情をした木戸は、指示に従うが教えてほしいと一つ尋ねた。
「先輩もそういった勉強法でやってきたんですか？」
「いや、俺は小学校にはほとんど通わず他の人間より暇な時間が多かったから、単純に時間にモノを言わせた泥臭い勉強法で知識を得ていた」
「小学校に通ってなかったってさぼりですか？」
「身体が丈夫じゃなかったんだ。意識不明が数日間続くなんてのもざらだったぞ」
一応、これは嘘ではない。原因は身体の丈夫さではなく仕事で殺されていたからだが、蘇生を受けてもダメージや疲労が酷いと意識が戻るのに数日を要することもあった。
学校に医者の診断書を提出していることを知っている者は、その話だけで幼少期の彼が身体の弱い子だったと信じたようだが、木戸はあまり信じていないらしく、最後まで湊に疑わしげな視線を送っていた。
その後、ちゃんと湊の言った通りに全員が決められた時間で勉強を進めてその日は終了し。翌日からのテストは、かつてないほどの手ごたえを感じたという。
そして、テスト期間明けの翌週の昼休みに張り出された結果は、
第三学年
一位有里湊　１０００点（前回一位）
一位真田美紀　１０００点（前回二位）
一位吉野千鳥　１０００点（前回三位）
一位高千穂楓　１０００点（前回四位）
五位渡邊凛太郎　９８７点（前回六位）
六位西園寺円　９７１点（前回十四位）
六位山岸風花　９７１点（前回十一位）
三十位岳羽ゆかり　８８４点（前回六四位）
六一位伊織順平　７７７点（前回一七八位）
第二学年

一位羽入かすみ　９９８点（前回一位）
二位宇津木香奈　９９０点（前回二位）
九位木戸武蔵　９６８点（前回三十位）
と、このようにいつも通りの湊以外は全員が過去最高点を叩き出し。一学年約二四〇人いる中で順位が二十位以上あがったゆかりと木戸はポカンと口を開けて呆け、百位以上もあがった順平は一周回って冷静になって湊を拝んでいた。
昼休みが終わる頃になると全員が元通りに戻っていたが、テストで好成績を出した事で皆どこか嬉しそうであり、順平が勝手に命名した『真剣ゼミ』を定期考査の度に開催して欲しいと本気で頼みこむ一幕も見られた。
ただし、多忙な湊はそれを当然断ったため、密かにインテリ路線計画を練っていた順平は呆気なく散った夢に涙を流すのだった。

第百六十五話　前篇　青年の力―発動の鍵―

３月１９日（水）
影時間――辰巳ポートアイランド
荒垣が寮を去ってから特別課外活動部の中では変化があった。
最初はイラついていた真田も徐々に落ち着き、荒垣はいつか絶対に呼び戻すと強い決意で組織に残る選択をした。
それを認めた美鶴は、二人だけになったことで戦力的に厳しく、以前よりも強い結束が求められるだろうとお互いを名前で呼ぶことを提案した。
元々、真田は荒垣のことを名前で呼んでいたので、呼び方一つ変えるだけでも距離感が変わる事を理解している。
故に、それを受け入れて名前で呼ぶようになり、さらに影時間ではコンビネーションの訓練を積んだ。
おかげで二人での戦い方には慣れたものの、やはり戦力的には厳しいと言わざるを得ず。覚醒には至っていない適性の高い者を集め、寮での生活の中で目覚めるのを待つ事は出来ないかと考えたりもした。
しかし、その適性の高い者というのが問題で、ほとんどが有里湊の関係者なのだ。
桐条のラボにいる研究者の話では、高い適性を持つ者の傍にいると覚醒が促されるらしい。湊には及ばぬものの、現状美鶴よりも遥かに高い適性を持っているチドリは彼とずっと暮らしていたので、研究者たちは寮で暮らすより彼のクラスに適性の高い者を集めた方が早いと言っていた。
それで目覚めるのなら理事長や父に掛け合ってそうして貰うが、目覚めた彼女たちが湊側についてしまっては意味がない。
去年の九月、ポートアイランドインパクトの事故があった日に美鶴は彼が百鬼八雲だと知った。さらに自分や真田とは比べ物にならないほど強大なペルソナを宿していることも。
不完全な顕現だったとはいえ、街を覆い尽くすほどのペルソナが上空に現れ人の目に触れない訳がない。

何故だか電子機器が使えず写真に撮られることはなかったようだが、インターネット上でも多数の記事が出るほど一時は話題になっていた。
死んだはずの少年の生存、理解を超えた強大なペルソナ、彼に関する情報を伏せ続ける父。それらを踏まえた上で、自分が使った事もない制御剤が存在している理由を考えれば、彼が桐条グループでペルソナの研究に関わっていたことは容易に想像がついた。
元々所持していたのか研究で目覚めたのかは分からないが、ペルソナを持っているのなら情報を得たい。ムーンライトブリッジから飛び降りて行方不明になっていた彼が復帰してから、悪いとは思ったが美鶴は施錠した学内の個室でペルソナを召喚し、離れた場所から彼とチドリにアナライズをかけてみた。
しかし、結果は不発。二人にアナライズをかけようとしても見る事が出来なかった。能力の不調かとも思ったが、試しに真田にかけてみるとポリデュークスの存在を感じ取れた。
そこから推測するに、二人かもしくはどちらかに感知を阻害する能力があり。アナライズをかけても適性を持たない一般人にしか見えないようにしているらしい。
阻害する事が可能という事はアナライズの存在を知っているか、同系統で美鶴以上の力を持っていると思われる。
前者ならばいいが、後者ならばその力を使ってペルソナに目覚めかけている者を見つける事も可能だろう。それが自分たちの知り合いなら尚の事、美鶴たちよりも早く情報を伝えて味方にするか保護するに違いない。
同じクラスなら余計に先回りされ易いので、それならクラスを別にして話をする猶予くらいは作りたい。美鶴はそれを研究員らに伝えて理事長たちにも意図的に同じクラスに集めないでほしいと頼んでおいた。
そうして、来年度の新しいクラスを操作する計画は見送られたが、本日は中等部で卒業式が行われた。
母親に八雲の生存を伝えると父に言ったものの、どう伝えればいい

のか分からず話せていない美鶴は、とりあえず後で渡せるよう写真を撮るため卒業式に保護者側の席で参加した。
隣には妹の卒業式を見に来た真田がいたが、やけに本格的な一眼レフを持っていたことには驚き、どうせなら自分もそういったカメラにしておけば良かったと少し後悔したりもしたが、無事に式は終了し真田も今日は美紀の卒業祝いで実家に帰ると言っていたので美鶴は一人で行動していた。
黄昏の羽根を搭載する事で影時間でも稼働できるバイクに乗り、美鶴は風を切りながらタルタロスを目指す。
タルタロスを目指すと言っても、別に一人で戦いに来た訳ではない。今日はただタルタロスの様子を見るために来ただけだ。
以前、いつの間にかエントランスに剣が現れていることがあった。そこには少し古い英国語で『王の選定の剣』と刻まれており、美鶴たちは三人とも挑戦してみたが一ミリたりとも動かなかった。
とはいえ、謎の多いタルタロスに突如そんなものが現れた事で、上階だけでなくエントランスすらも変化する事があると分かり、美鶴たちは戦わない日でもエントランスの様子を見に来るようにしていた。
そして今日も、剣が現れて以降は特に変化のないエントランスを見るつもりでいたのだが、あともう少しで駅前に到着するとき、地面が揺れて思わず急ブレーキをかけた美鶴は信じられない物をみた。
「なにが、起こっているんだ……」
そう距離のない場所に聳えているタルタロスの外壁を貫通し、空に向かって一条の極光が伸びる。
轟音を立てて崩落した部分からは小さな影が飛び出て来て、着地をするなり美鶴の方へと向かってきた。
最初は相手が誰か分からなかったが、よく見ると長い黒髪の女性に抱えられたチドリと湊と一緒に海に落ちた銀髪の少女だった。
女性一人で少女二人を抱えて走っていることが信じられないが、向こうは美鶴の存在に気付いたようで、近くにやってくるなり焦った様子で話しかけてくる。
《急いで逃げろ。ここにいれば巻き込まれるぞ！》

「に、逃げろというが一体何に巻き込まれるというんだ?」
状況が飲み込めずに聞き返した直後、美鶴は謎の重圧を受けて息苦しくなる。
チドリも表情を苦しそうに歪めている事から、美鶴以外の人間も同じように感じているようで、その原因は何かと顔をあげたとき壊れた外壁の縁に立つ存在を目にした。
薄暗い影時間に淡い光を纏い現れたのは美鶴の知る人物、強大なペルソナをその身に宿す青年・有里湊だった。
＊＊＊
美鶴がタルタロスを訪れる少し前、湊はチドリとラビリスを連れてタルタロスの地下階層である深層モナドへやってきていた。
卒業式を終えた日くらいゆっくりしていればいいというのに、春休みで自由な時間が増えるのだから大丈夫だと言って、湊は習慣となっているシャドウ狩りに出向いた。
翌日が朝からの仕事ならラビリスも休むが、偶然にも休日であった事で湊が行くならと同行し、チドリもたまには戦わないと鈍るからと眞宵堂からやってきた。
そうして、三人で組んでモナドに潜ったのは良いが、強力な敵ばかりで必死に攻撃せねばダメージすら与えられないチドリとラビリスとは対照的に、青年は現れた皇帝〝キングキャッスル〟に駆け寄り。振り上げた九尾切り丸を袈裟切りに振り下ろし一撃で仕留めた。
一撃一撃の音がとんでもなく重く、そもペルソナがなくても戦えるだろうという圧倒的なフィジカルには、彼の戦いを目にしている者として舌を巻くしかない。
けれど、素直に褒めるのは悔しい。彼の出自と経歴を考えれば当然の差と言えるが、対シャドウ兵器として生まれた少女と彼よりも高出力の黄昏の羽根を宿す少女としては、何か一つでも彼に勝っている部分が欲しかった。
残念なことに戦闘に関して二人が勝てる点は無いが、せめて精神的な優位さだけは取っておくため、敵を排除して戻ってきた湊に二人は話しかけた。

「……ペルソナ使いならペルソナで戦いなさいよ」
「タフさに自信があるのに大剣の一撃でやられるとか、流石にシャドウも想定してないやろうしな」
「俺は〝自称・最強のペルソナ使い〟って感じのスタンスだから、別に倒せるならその辺の石ころだって投げるぞ」
　ベルベットルームの住人はペルソナ全書の力でペルソナを呼び出しているので、彼女たち自身はペルソナ使いではない。故に現状では湊が最強のペルソナ使いということで正しいが、本人は冗談として言っているので細かい突っ込みは無粋だろう。
　そして、武器をマフラーに仕舞った湊は何でもないようにいうが、彼なら本当に普通の石ころでシャドウを倒せそうなところが恐い。
　もしも、そんな風にしてモナドの敵を倒せるなら自信を失うところだが、いくらなんでもモナドの敵は石ころでは仕留められないので、彼女たちも一応の心の平穏が保たれるはずだった。
　敵がいなくなったことで三人は再び移動を始め、少女らを前衛に湊が殿（しんがり）を務めていれば、周囲に敵の反応がないことを確認済みのチドリが話しかけてくる。
「……そういえば、湊ってなんで本気で戦わないの？」
「いや、ちゃんと真面目に戦ってるぞ」
「真面目と本気やと意味がちゃうと思うわ。チドリちゃんが言うてんのは、なんで全力出さんのってことやろ？」
　補足するように話すラビリスにチドリは頷いて返す。湊の攻撃は敵を確実に仕留める一撃であったり、連撃し易いように考えられた動きばかりである。
　詰将棋のように緻密に練られた一連の動きは無駄がなく見事なものだが、それは全力とは別の話で、チドリは彼が圧倒的な力を振るって全力で戦う姿を見た事がなかった。
　タルタロスの通路を埋め尽くし、壁や床を高熱によって融解させるタナトスやアザゼルのメギドラオンですら彼の全力ではない。
　全力を出すほどの相手に出会っていないことも原因だろうが、それでも全力がどれほどか把握しているのといないのとでは、彼が全力を

出さざるを得ない相手が現れたときの対応に差が出る。
故に、こういった普段のシャドウ狩りのときに片鱗でもいいから見せろと彼女が催促すれば、湊は少し考える素振りを見せ、前から二体の恋愛〝淫欲の蛇〟がやってきたタイミングでマフラーから黒漆仕立ての短刀を抜くと、左眼を蒼くして強く地面蹴って駆け出した。
敵まで十五メートル、途中から壁を走ってその距離を一秒に満たない時間で詰めれば、湊は敵の前で跳躍し、二体の間を抜ける際に短刀を素早く二度振ってそれぞれを一撃で弾けさせ消し去った。
淫欲の蛇には物理耐性がある。それを一撃で仕留めるには相当の実力差が必要だが、先ほどのシャドウは風船が割れるように弾けて消えた。通常は一撃で仕留めようと黒い靄が散って薄まりつつ消えるというのに、不自然な消え方をしたことでチドリは彼が直死の魔眼の力を使った事を理解した。
敵を倒し終えて戻ってくる青年の瞳は元の金色になっており、先ほどの魔眼を使っての戦闘法が本気だと言いたいのだろう。
しかし、いくらなんでも地味過ぎる。能力について理解していなければ普通に一撃で殺したようにしか見えない。チドリはもっと派手なビックリ技が見たいと彼にクレームを付けた。
「確かにすごいけど一撃で仕留めるっていう結果だけみたらさっきと一緒じゃない。もっとペルソナの力を使った様なのにしなさいよ」
「はぁ……注文が多いな」
敵を倒せているのだから問題はないはず。そう言ってもチドリは納得しないので、湊は渋々ながら相手の言う事を聞いてやり、マフラーに短刀を仕舞って代わりに召喚器を取り出した。
彼は召喚器を使わずに呼び出せるはずだが、側面に〝S・E・E・S〟と刻まれた召喚器を手に持った湊は、遠くに法王〝白のシジル〟の姿を確認して、こめかみに当てた召喚器の引き金を引いた。
「ペルソナ！」
ガラスの割れるような音が響き彼の正面にペルソナが現れる。だが、その姿に二人の少女は驚いた。
炎の灯った金の杯を手に持ち、羊の頭骨から金色の髪を垂らすその

ペルソナは、チドリの所有するメーディアに他ならない。
「メーディア、アギダイン！」
《ルルルゥ！》
そして、彼が命じればメーディアは金の杯から通路を埋め尽くすほどの炎を放ち、遠く離れた場所にいたシャドウを飲み込んだ。
炎が治まったときには敵の姿は無く、先ほどの攻撃で倒しきったらしい。
役目を終えたことを確認したメーディアは消えていったが、今度は背後から女教皇〝狂乱のマリア〟が現れ、チドリとラビリスが武器を構えるよりも速く湊が再び召喚器でペルソナを呼び出す。
「アリアドネ！　ストリングアーツ・椿！」
続いて呼び出されたのはラビリスと同じアリアドネ。彼女の専用スキルであるストリングアーツは、赤い糸で複雑な形状を作り出して攻撃するという応用の利くスキルである。
だが、湊の使ったストリングアーツはラビリスの知らない形状をしており、椿の花の形をした糸が回転しながら敵に向かい。開いた花弁で敵を切り刻み、中央のおしべでドリルのように貫き抉るというなんとも恐ろしい技であった。
単体に対しての技だが攻撃回数が非常に多いので優秀な技と言える。ストリングアーツは技の性質から形状さえ思い浮かべばほぼ無限にスキルを増やせるので、ラビリスが今後の技考案の参考にさせて貰おうと思い眺めているうちに敵が消滅する。
役目を終えたアリアドネも静かに消えて周囲に敵の反応がなくなったところで、少女たちは湊に何故自分たちと同じペルソナを持っているのかを尋ねた。
「ベルベットルームで私たちと同じペルソナを作ってきたの？」
「いや、作る意味もないだろ」
「せやったらなんでソックリやったん？　固有スキルのストリングアーツも使えとったし、もしかして、アベルで抜かんでもウチらのペルソナを借りたり出来るん？」
同じペルソナを作ってきた訳ではないと言われても、固有スキルま

で使えているということは完全に同一な存在という事になる。
スキルの威力など細かな違いはあれど、自分たちの中にペルソナがいる状態で同じペルソナを使ったとなれば、アベルの楔の剣で完全に抜かなくとも他人のペルソナを使えるというくらいしか思い浮かばない。
彼の所持するペルソナについて全て把握している訳ではない少女らは、彼がちゃんと説明するまでジッと見つめた。
左手で召喚器を遊ばせていた湊は答えるのが面倒なのか嘆息するも、二人から訊かれたことで答える気になったのか口を開く。
「あれは両方とも若藻だ。弱体化しているが化ける能力は持っている。だから、俺がアナライズで読み取った対象の情報を若藻に与えてサポートし、姿と能力を完全にコピーしているんだ。まぁ、強さは若藻が基準だからコピー元より強くなることもあるが」
「若藻って確か狐の人やったよね？　あの人、そない色々なペルソナになれるってすごいな」
「ええ、コピーするだけで能力の再現が可能っていうのがとくに恐ろしいわね」
見た目だけ真似るのならばまだ分かるが、その能力までも再現できるというのは非常に恐ろしい力だ。
湊はアナライズで読み取った相手の情報を与えてと言っていたが、情報を得たところで多属性スキルまで扱えるかどうかは別の話になる。
彼女が元々全属性スキルを扱えるというなら納得もいくけれど、湊の様子から推測するに化けているから能力も使えるといった風に思えた。
もし本当にそうならば、若藻はあらゆるペルソナの能力を使用できるトランプのジョーカーの様な存在という事になる。アナライズでのサポートが必要にせよ、ワイルドの能力を一体で体現するペルソナを彼が所持しているというのは反則染みていた。
「でも、それって説明してなかった能力ってだけで別に全力とは関係ないわよね」

湊と若藻のコンビを恐ろしいと思いつつ、けれど、それを見せられたところで全力ではないとチドリはばっさりと切り捨てる。
チドリとラビリスは湊の全力が見たいのだ。何度も死に名切りとしても覚醒した彼の適性値は十万など疾うに越えている。それだけに十万にすら到達していないチドリたちにすれば、差があり過ぎる相手の正確な強さが把握できない。
よってチドリたちがしつこく強請れば、いい加減やり取りに飽きてきた様子の湊が通路を進みながら言った。
「全力ってそんなの見てどうするんだ」
「実力の正確な把握が出来るじゃない。分かっているのといないのじゃ、もしものとき行動に移れるまでの早さが違ってくるわ」
「まぁ、純粋な興味ってのもあるけどな。湊君って敵を倒すときに的確なダメージを与えとるけど、動きとかには余裕が見えるやろ？」
戦闘時の湊は針の穴に糸を通すような正確さで敵の弱所に攻撃を加える。さらに物理無効や反射の耐性を持っている敵にすら、〝通し〟とも呼ばれる技術を用いて身体の内部にダメージを送り込む。
無効はともかく反射相手にどうやってダメージを送るのか疑問に思い、ラビリスが戦闘後の移動中に尋ねた事もあったが、反射膜に触れた瞬間に一瞬引いてから押しこむと、引いた時点で反射をコンマ二桁以下の時間だけ中和する事が出来ると答えた。
少しでも遅れて失敗すればダメージが四倍になって返ってくるリスクもあるらしいが、攻撃の瞬間だけ時間を圧縮する事が可能な湊ならばタイミングは外さない。
別にそれを使わずとも直死の魔眼は防御不可能な技なので、どちらにせよ湊には敵の物理耐性など無視できるものであった。
そんな彼と体術で同じレベルに達する事は出来ないと理解しているが、高いレベルの戦闘は見ているだけで色々と勉強になる。現状、湊以上の強さを誇る者をラビリスは知らないので、自分の知る中で最も強い青年から戦い方等を学びたいと話す。
「ウチ的にはボディのスペックをフルに発揮しても迫れへんと思うとるんよ。せやけど、やっぱ元になるイメージがあると動きも違うてく

るから、そういった意味で体術でもペルソナでも見せて欲しいなぁって」
「戦闘スタイルが違い過ぎるだろ」
湊は確実性を上げるために接近戦を主に取っているが、実際は中距離や超遠距離もいける万能型で、複数の敵がいても同時に相手をするタイプだ。
対して、チドリとラビリスは高度な接近戦も出来る中距離型で、複数の敵がいれば一対一の状況を作り出して確実に仕留めていくタイプである。
本人に合っているかどうかなので、この二つのタイプに優劣はない。けれど、客観的に見れば一度に多数を相手に出来る湊の方が高度で優れていると思うに違いない。
第三者が見てはっきりそう思えるということは、実際に両者の戦い方は大きく異なるという事で、湊が二人の戦い方に合わせない限りはあまり参考になりそうにもなかった。
それらを理解した上で見たいというなら諦めさせるのは難しいだろうと判断し、湊は開けた大部屋になったエリアに入ってから二人に最後の確認を取る。
「……俺が全力を出せば君らは傍にいられないぞ」
「そのときは離れるわよ」
「うん。ヤバそうならウチがチドリちゃんを抱えて走るし大丈夫やで」
機械であるラビリスには体力や息切れが存在しない。さらにマシンスペックから常人の数倍から最大で十倍を超える身体能力を発揮できる。
最大値は一時的なブーストを利用しないと無理だが、それでも走って逃げるくらいは可能だと自信ありげに答えた。
「……俺自身どうなるか予想がつかない。だが、最悪のパターンになる前にベルベットルームのやつらが止めに来るだろう」
言いながら湊はマフラーから掌サイズの長方形の板を取り出した。
一体何のアイテムだと少女らがジッと見つめれば、それが何の変哲

もない鏡である事に気付く。
全力を出すというから何かとっておきのアイテムでも使うのかと思えば、普通の鏡を出して来たことで少し拍子抜けするが、彼が意味もなくアイテムを出すはずがないので、チドリは確認のために用途を聞いた。
「それを使って何をするの？」
「自分に暗示をかける」
「暗示？」
暗示、催眠術と言い換えることも出来るが、意識に働きかけて感情等に別の命令を割り込ませることをいう。
湊は戦闘になれば小狼や名切りに意識を切り替えることで身体能力が増すが、それも自己暗示によってスイッチを切り替えセーブしている能力を解放しているに過ぎない。
一流のスポーツ選手たちもそういった技術は習得しており、普段と試合じゃ雰囲気が違うというのは、切り替えることでまさしく別人になっているのだ。
だが、その話を聞いてチドリは一つ疑問を覚えた。シャドウやペルソナのスキルに精神干渉系のものがあり、相手に恐怖や魅了の効果を及ぼして戦闘を有利に進める様な技なのだが、湊は精神力が強過ぎてそういった精神干渉を完全に無効化していた。
外部からの干渉に意思を強く持って抵抗するのではなく、最初から一切を無視してそんなスキルを放った相手の隙を突いて倒すほどだ。
そんな青年が自分自身に暗示をかけると聞いても、彼にそんな能力があったことも含めて首を傾げるしかない。
チドリがそんな風に状況を飲み込めずにいれば、彼の能力について聞いていたラビリスがチドリになら話して大丈夫だろうと事情を説明する。
「湊君は暗示の魔眼っていうのをもっとるんよ。強力な催眠術が使える眼って感じらしいけど、それで自己暗示で何かするんやと思うわ」
「……一人につき魔眼は一つだと思ってたけど、複数の能力が宿ることもあるのね。ま、いいわ。じゃあやってみて」

今さら彼に話していない能力があろうと驚かない。これから見る事の出来る全力はそれすら超えた光景を見せるかもしれないのだ。
部屋の中央まで進む青年を入り口の辺りに残った二人の少女が見つめる。彼がどんな暗示を自分にかけるのかは不明だけれど、全力を引き出すというからには相当なものに違いない。
まだ気すら放っていないというのに部屋の中の空気が張り詰めていくのを感じ、少女らは静かに青年が力を解放するのを待った。
そして、彼は回転させた鏡を上に放り投げると、その瞬間に右眼の眼帯を外し紫水晶色の瞳を露わにした。
ゆっくりと回転して落ちてくる鏡、彼の目線まではあともう少し。
五、
四、
三、
二、
一、
――――――零。
「あああああああああああああああ――――――――――っ！」
鏡が湊の目線まで来た次の瞬間、全身に鳥肌が立つほど深い絶望に染まった絶叫が響いた。
そして、両手で顔を覆った青年の背中からは羽のようにも見える光の触手が現れ、誰も反応出来ない速度で地面を叩く。
『キャアッ!?』
触手の叩いた地面が砕けて崩壊し、その余波で少女たちは壁まで吹き飛ばされた。
この速度で壁に衝突すれば生身の人間は無事では済まない。そう咄嗟に判断したラビリスは空中でチドリを抱きとめ、相手の頭部を守るように抱え込みながら壁にぶつかった。
「あぐっ」
チドリの分まで負ったにせよ想定以上のダメージ。背中に巨大な戦斧を背負いそれが直撃の衝撃を和らげたというのに、ラビリスは過負荷で一時的に意識をシャットダウンしてしまう。

それは人で言えば気絶したという事だが、部屋の中央で頭を抱えながら地面に膝を突いている青年に声が届くとは思えず。チドリは痛む身体を起こしながら、未だに光の触手が消えていないというのに、どうやってラビリスを連れて逃げるのかと絶望しかけていた。

湊があげた絶叫はイリスが死んだときと同等のように思えた。とすれば、そのときの記憶を呼び起こしたのか、それとも彼女の死に匹敵する何かを自分に見せたのか。

どちらにせよ湊が全力を出すといった以上、アイギスに止めて貰った神降ろしとやらが再現されるのかもしれない。

チドリやラビリスは有里湊にとっての全力を出せと言ってたつもりだったが、彼は文字通りに自分の身で出せる全力をこんな都会で解放しようとしたらしい。

「ああ、もうっ」

悪いのはしつこく強請った自分たちだが、少し考えれば都会のすぐ傍にある人工島で、一度は世界を滅ぼしかけた力を解放しろというはずないと分かるはず。どうして彼はこんなときに限って人とずれた天然スキルを発揮してしまったのかと、チドリは髪型が崩れるのも構わず頭を掻いた。

しかし、そんな事をしていても状況が好転する訳ではない。まずは死なないために引き摺ってでもラビリスと一緒に離れなければならない。

彼女の背負っている超重量の戦斧は桐条製をＥＰ社で改良したもので、研究所に行けばまだあると言っていた。なので、ここで捨てても大丈夫なはず。

戦斧は無理でもラビリスだけなら抱えて移動出来るだろうと考え、アタッチメントから外そうとチドリが彼女を動かしかけたとき、

「消えろオオオオオオっ!!」

顔を上げた青年が部屋に入ってこようとするシャドウに反応し腕を振った。

途端、触手が横薙ぎに振られて壁を破壊しながらシャドウを消し去る。けれど、そのまま勢いは止まらず、彼を中心に三六〇度まるまる

薙ぎ払おうとしていた。
壁に衝突したチドリたちはまだ部屋の中にいて、おまけに触手の先端が届く壁際でモタモタしている。
通路に逃げ込むにも距離は九メートル以上あり、戦斧をアタッチメントから外せていないラビリスを連れて移動するのは不可能。
もう僅かな時間で触手が到達するなら、覚悟を決めてペルソナの攻撃で止めるしかない。アナライズせずとも今の湊から感じる絶望的なまでの力の差に、チドリはきっと死ぬ気で攻撃しても止められないだろうと思いながら、それでも砂粒ほど生存の可能性があるのならと召喚器に手をかけようとした。
《伏せろ!》
だが、チドリが召喚器に触れる直前、横から声が聞こえてチドリは素直に指示に従いラビリスに覆い被さる様に伏せた。
すると、声の聞こえた方から熱気を感じ、僅かに目を向けると鈴鹿御前が掌に集めた極光を投げるようにして触手に放っているのが見えた。
放たれた極光は一条の光となり、迫ってきていた触手とぶつかり消滅させる。そのまま先にあった壁を大きく破壊してしまったが、そんな事に構っていられる状況ではないので、鈴鹿御前は普段と違って余裕のない真剣な表情でチドリの元までやってきた。
《そっちの娘は気を失っておるのか》
「攻撃の余波で壁にぶつかったのよ」
《ふん、貴様らが八雲に余計なことをさせるからじゃ。貴様らが全力を見たいなど抜かすせいで、八雲はアイギスがシャドウに惨たらしく殺される様を己に見せた。限度を知らぬ莫迦の扱いには気を付けぬか!!》
激怒する彼女の言葉を聞いてチドリは絶叫の理由に納得した。復讐に駆られていてもアイギスの事を考えていた青年が、その心の支えとなっている少女の一人を失えば壊れる。
心が壊れると分かっているものを躊躇いなく自身に見せるあたり、実に青年らしいとは思うが想像以上に馬鹿すぎて理解を超えている

としか言えない。
　気を失っているラビリスもきっと彼がそんな暗示をかけているとは思うまい。
　しかし、既に起こってしまったことは変えられない。勝手に顕現できる鈴鹿御前のおかげで助かったが、ここはまだ戦場であると理解しているチドリは女性に退避しようと申し出る。
「とりあえず外に行きましょう。ここじゃ生き埋めにされるわ」
《構わぬ、死ね。三度瓦礫に埋まって死にさらせ。けったいな色の頭をしおって、そっちののびてる阿呆と一緒にここで死ねばよいものを、八雲が気に掛けておらなんだら妾が手ずから葬ってやったというのに》
　とても嫌そうな顔をして死ねと言いながら、鈴鹿御前は白い細腕で乱暴にラビリスを拾い上げて片手で抱える。
　さらに反対の手をチドリの腰に回して、同じように雑に扱いながらも地面につかない程度に抱えた。
　抱えられた方は非常に不安定で落ち着かないが、腕力か握力かどちらにせよ見た目からは想像できない力で、鈴鹿御前はしっかりと二人を落とさないように持っている。
《地上まで打ち抜いて最短を行く。瓦礫がぶつかっても文句は聞かん。主らの自業自得じゃからな》
　そういった彼女は金色の瞳で斜めに天井を見ながら、足元に先ほど同じ極光を集めて蹴る様に振り上げた。
　手以外からもスキルを放てるとは知らなかったチドリは驚くが、地上まで一直線に進んで行く光が完全に治まる前に鈴鹿御前は駆け出す。
　途中、本当に瓦礫の石ころなどが降ってきて当たったが、文句を言っていられる状況ではない。逃げる際に背後でなにやら大きな気配が動いたのを感じたのだ。
　今の湊が追ってきて地上に出るまでに追い付かれればまずい。鈴鹿御前も舌打ちをしながら足を速め、急に浮遊感を感じると思えば既に外に出ていた。

背後から迫る気配が大きくなっているのを感じながら、チドリは着地の音を聞いて鈴鹿御前の再加速に揺られる。
しかし、このまま海の方にでも逃げるのかと思っていれば、鈴鹿御前が急に速度を緩めて大声を上げた。
《急いで逃げろ。ここにいれば巻き込まれるぞ！》
「に、逃げろというが一体何に巻き込まれるというんだ？」
聞き覚えのある声にチドリは顔を上げる。そこには困惑した表情でバイクに跨る美鶴がいて、影時間に他の者と会ったというのにリアクションが薄い。
きっと突然の事態で思考が追い付いていないのだろう。後で騒ぐ可能性もあるが、とりあえず今まだ冷静なら逃がす事が出来る。
湊が外まで追ってくれれば逃がしている余裕があるかも不明なため、いいから行けとチドリらが言いかけたとき、突然全身に途轍もない重力がかかり息が詰まった。
こんな事が出来るのは一人しかいない。鈴鹿御前に降ろして貰いタルタロスの方へと振り返れば、チドリたちの出てきた壁穴の縁に、輝く銀色の双眸を空へと向けた青年が立っていた。

第百六十六話　後篇　青年の力―阿眞根―

影時間――月光館学園

天に向かって聳え立つ異形の塔タルタロス。その壊れた外壁の縁に立って青年は空を見ていた。

暗く沈んだ色を宿しながら、しかし、侵し難い神聖さを感じさせる輝く銀色の双眸には巨大な月だけが映る。

「――――お前か」

月を見ていた青年は憎悪に染まった声を漏らすと飛び降りた。

重力に身を任せ背中から落ちる途中で空に向けて手をかざし、背中から光の触手で出来た羽を生やして空中で停止すれば、彼の掌から空に浮かぶ月に向けて光線が放たれる。

轟、と大気を震わせ射線上にある雲を霧散させながら伸びていく。けれど、流石に月までは届かなかったようで、光が止んでも月は存在し続けていた。

それを見た青年は忌々しそうに表情を歪ませ、体勢を立て直すと宙に浮きながらタルタロスの頂上に向けて先ほどと同じ攻撃を放った。

空に浮かぶ雲に届く光はタルタロスの頂上すらも攻撃圏内に入っており、直撃した頂上部の一部は蒸発して消滅し、蒸発した部分以外は崩れて落下してゆく。

青年は自分にぶつかる瓦礫は触手で払いのけながら、続けて別の階層の辺りに手を向けて攻撃を放とうとする。

アイギスがシャドウらに無残に殺される光景を見た彼は、シャドウの母を殺すことでこの世から全てのシャドウを消し去ろうと思ったのだ。

だが、宇宙までは距離があり過ぎる。飛べば時間がかかっても届くだろうが、怒りに染まっている彼は今すぐに自分の感情を何かにぶつけたかった。

そして見つけたのがタルタロス。憎き神を喚ぶための祭壇。

こんな物がなければシャドウたちもこの地に集まらなかったはず。桐条の研究によってこの場所に現れたのだろうが、湊にとっては現れ

た理由などどうでも良かった。
消す。消し去る。あんなモノを呼び寄せるためのものなど存在していいはずがないのだから。
「――――消えろ」
このまま攻撃を何度も放ち続けてタルタロスを完全に破壊する。影時間の度に復活するのならその度に壊してやろう。
そうして、神の力が増して背中から生える羽が徐々に巨大化していきながら、湊はかざした手より先ほどと同じ光線を出そうとした。
「ベルゼブブ!」
だが、それを阻むように真下から湊に向けて極光が放たれた。
移動用ではない羽では回避は間に合わないと判断した青年は、触手を何重にも重ねて防御姿勢を取る。
一本ならば鈴鹿御前の攻撃でも簡単に焼かれてしまうけれど、防御用に力を籠めて重ねれば衝撃を殺し切る事は出来なくともダメージは受けない。
防ぎきったときには触手が何本もダメになるも、この触手の羽は湊と異界の神の融合が進むときに発生する現象でしかない。空中での姿勢維持に使えると思ったから出していただけだ。
羽を消した湊はマフラーから九尾切り丸を取り出し、そのまま落下の勢いを乗せて自分に攻撃を放った青服の男に斬りかかった。
「はぁっ!!」
空中移動出来ない状態ならば攻撃の軌道は簡単に読める。そう言いたげに青服の男であるテオドアは余裕の笑みで跳躍し回避する。
躱された湊の剣は地面に衝突し、敷かれたタイルを粉々に破壊して爆発を起こす。
飛んだタイルの欠片で頬が切れて血が流れようと、次の瞬間には傷口は完全に治っていた。
その光景を見ていたテオドアは、青年を中心に増した重力下でも普段通りの振る舞いで興味深そうに笑う。
「なるほど、器に入りきらない力が余波として外界に影響し、さらにその余っている力で傷は即座に回復されるのですね。ですが、前回の器

慣らしに比べれば規模が小さい。顕現時に目的が決まっているからでしょうか」
前回の器慣らしは湊の怒りを呼び水にしただけで目的が設定されていなかった。そのせいで力の方向性が定まらず暴走したが、今回はアイギスを殺したシャドウらに復讐するという明確な目的がある。
阿眞根は人としての湊が願ったことを叶えられるようにと姿を変えるものだ。人では出来ない事でも神ならば出来る。そうして、自分を核に異界の存在を融合する形で顕現させるのだ。
目的があるということはそれに適した姿や能力が求められる。故に、器慣らしと違って今の湊は有里湊としての意識が強く残っているように見えた。
対峙するテオドアは相手の意識が強く残っているなら、会話から元に戻す事も出来るのではないかと淡い希望を抱く。
けれど、希望は希望でしかなく、十メートルは離れた場所にいた青年の姿がぶれると、一拍後には武器を振り上げた姿で目の前に迫っており、テオドアはすぐに真剣な表情になって手にした本で下ろされる剣の側面を叩いて弾いた。
「フッ！」
攻撃を逸らされ剣はテオドアの横の地面を抉る。体重を乗せていたことで次の動作に移るまでに時間のかかる相手の隙を逃すはずもなく、テオドアは相手の内臓を破壊する気で靴の爪先を相手の腹部へ突き刺す。
「ぐっ」
骨の折れる鈍い音と内臓の潰れるぐちゅりという異音をさせながら、蹴られた湊は吹き飛び地面を転がってタルタロスの外壁に衝突してようやく止まる。
時流操作を使わずに予想以上の速さで相手が接近してきた事で、テオドアも少しばかり冷やりとしたと短く息を吐く。
けれど、骨折と内臓破裂くらいで相手が止まるはずがない。ゆっくりと起き出そうとしている相手に向かって、テオドアは容赦なくペルソナのスキルを見舞う。

「ラファエル、ガルダイン！」
呼び出された天使が手をかざし暴風を生み出せば、倒れていた湊に襲いかからんと砂塵を巻き上げながら迫る。
生木すらへし折りなぎ倒す大気の力だ。骨と内臓を破壊されて倒れる青年が喰らえば意識が飛ぶに違いない。
だが、彼は素直に負けを受け入れる様な性格ではなかった。
口から血の泡を垂らしながら迫る風を見つめ、黒い感情が奥底に宿る瞳の輝きを強めると、彼は倒れたまま無動作で死の神を呼び出した。
《グルォオオオオオオオオオオオオオオッ!!》
現れたタナトスは既に攻撃態勢に移っていた。獣の骸骨を思わせる頭部の口を開けて、迫り来る暴風に向かって紫電を放つ。
収束し直線状に放たれたジオダインはラファエルのガルダインを貫く。自らのペルソナの攻撃を防ぐだけでなく、そのまま仕留めようと迫ってきた事で、テオドアはベルゼブブを呼び出して背中に乗りながら上空へと逃げた。
回避されたジオダインは地面を焦がしながら進み、学園を囲う外壁を破壊してしまう。その様子を残念そうに見ながら、テオドアは上空にいれば被害は減るだろうかと相手の出方を待つ。
すると、回復を終えた湊がタナトスを背後に控えさせながら共に飛びあがってきた。自分とテオドアのいる空間をガルダインで起こした竜巻で覆うというオマケ付きで。
「風の隔壁とは器用なスキルの使い方をされますね」
馬鹿みたいな力を注ぎこんで発動されたスキルを突破するのは容易ではない。これで自分は逃げられないが、相手が逃げずに自分を追ってくる事を思えば好都合ではある。
しかし、精神力が枯渇せずにスキルを最高出力で放ち続けられる湊を、真正面から相手するのは少々骨が折れた。
ベルゼブブに上昇するように指示を出して、テオドアは湊の様子を伺いながら周囲に被害を出さずに戦う方法を考え続けた。
＊＊＊

湊とテオドアが戦い始めたのと丁度同じ頃、増した重力に苦しむチドリたちの元へベルベットルームの姉妹がやってきていた。
二人はテオドアと同じように増した重力下でも問題なく行動できるようで、涼しい顔のエリザベスが挨拶しつつ話しかけてくる。
「どうもご無沙汰しております。こんなところで奇遇ですね」
「貴女たちが出てきた理由を考えれば奇遇ではないと思うけどね」
「ほんの冗談でございます。お察しの通り私たちは八雲様の神降ろしを止めに来ました。人間にアレの相手は難しいでしょうから」
以前の神降ろしの前段階である器慣らしが起きたときは、どちらにせよ客である湊が強くなるからと干渉できなかった。
しかし、今回は湊が強くなる訳でもなく、悪戯に破壊を振りまいて世界を滅ぼしかねないとして、ちょっと行って止めてこいとイゴールからも許可されている。
先ずは一番槍としてテオドアを向かわせ、その間にエリザベスとマーガレットが万全の状態で戦えるよう色々と準備を進める手筈だが、姉妹らがペルソナ全書を開いて文字を指でなぞっている間、現状をいまいち理解できていない美鶴が唯一の知り合いであるチドリに状況を尋ねた。
「吉野、彼に何があったんだ？　それにこの力は一体……」
「全力が見たいって言ったら意図的に暴走を引き起こしたの。けど、湊の暴走は神の顕現とイコールだから、本当に全力を解放してしまったら東京が地図から消えるわ」
正確に言えば東京どころか関東一帯が余裕で吹き飛ぶが、チドリは話でしか阿眞根の力の規模を知らない。
今は顕現レベルで言えば最低値で、湊の意識の方が強く存在し理性も比較的残っている。テオドアという個人を相手に力を振るっているのがその証拠で、重力が増すなど余波で異常な現象が発生していても、今の湊がそれほど大きな被害を出せるとは想像も出来なかった。
故に、少女は自分の感覚から被害規模を過小評価して美鶴に伝えてしまうも、聞いた美鶴には十分な衝撃があったのか目を見開いていた。

美鶴がそんな風にチドリから話を聞いているうちに準備を終え、マーガレットたちは強い輝きを放つペルソナ全書を持ったまま、仕事時の口調でチドリらにこれからの何を行うのかを説明してくる。
「とりあえず移動させます。申し訳ありませんが規模が膨らみ過ぎていて、今のアレを転移させるには対象指定ではなく範囲指定になってしまいます。貴女方も一緒に移動させることになりますから、置いて行きたい物は身体から離しておいてください。範囲内の人と装備品だけ移動しますので」
説明を聞いてもチドリや意識を失っているラビリスに鈴鹿御前は特にやることがない。けれど、美鶴はバイクは持って行っても邪魔になるだろうと判断し、増した重力下で動き辛いがなんとか離れてヘルメットもバイクと一緒にしておいた。
エリザベスたちが誰かは知らないし最終的に何をする気かは分からない。それでも、美鶴は今の自分に出来る事はないと本能で理解している。
ならば、湊の暴走を止めるために来たという者らを信じて、せめて彼女らの邪魔だけはすまいと指示に従うことにした。
美鶴がバイクから離れたことを確認したマーガレットらは、短く「始めます」と告げて聞きとれない言語を呟く。直後、二人の持っていた全書から紫色の光が広がり、あまりの眩しさにチドリらは目を閉じてしまう。
そして、一瞬の浮遊感を感じて眩しさが消えて目を開ければ、そこには荒廃した街が広がっていた。
現実世界にいたときよりもかなり距離が開いているが、タルタロス周辺の上空で戦っていた湊とテオドアも来ており、被害を抑えるために反撃出来ていなかったテオドアが今までの鬱憤を晴らす様にメギドラオンを撃っている。
上空から降り注ぐ極光に街では大規模な爆発が発生しているが、それを見てもマーガレットはまるで気にした様子もなく、ここがどういった場所であるかを話してくる。
「ここはトーキョー。貴女方から見れば平行世界にあたる別の時空の

東京を模したレプリカです。お客人の鍛練用に作った空間なのでいくら街を破壊しても問題ありません。まぁ、完全に顕現して全力を解放されては、空間が崩壊して生じた歪みが元の世界に影響を及ぼしますが」

街が破壊される程度ならば問題ないが、この空間その物を破壊させると流石にまずい。

時空と言い換える事も出来る世界というものは、平行世界のように交わらずに複数同時に存在している。

それぞれの世界の中でなら人類が滅びようが地球が割れようが、交わっていない世界には何の影響もない。まさに別世界での話なのだから。

しかし、時空その物が崩壊するとなれば話が変わってくる。交わってはいないが傍にあった時空が壊れれば、その際に生じた衝撃が別の時空へと伝わってしまうのだ。

暴走が進み阿眞根の顕現が最大まで行くと、転移してきたこの世界その物が崩壊する可能性もあるため、マーガレットたちは早期に湊の意識を刈り取ってしまおうと考えていた。

だが、彼女たちは既にある一つのミスを犯していた。

「なにあれ、あんなタナトス初めてみた……」

テオドアのベルゼブブの放ったメギドラオンで発生した爆発が治まれば、舞い上がった砂埃の中から湊とタナトスが現れる。

信じられない規模の攻撃だったことで心配してチドリは安堵の息を吐くが、その直後、上空にいたテオドアに向けて飛んで迫るタナトスの姿が変化した。

肩に繋がる鎖が砕けマントのように纏っていた棺たちが宙に浮き、代わりに背中から紫の光沢のある黒い光の翼が噴き出した。

湊と黒い翼のタナトスがそのままテオドアを目指すと、宙に浮いていた八つの棺はそれぞれが別の動きをしながら多方向からテオドアに向けてスキルを放った。

火炎、疾風、電撃、氷結の四属性だけでなく、棺自体が光に包まれて剣先のような物を形成しながら迫っている。

タナトスも含めれば同時に九体の敵を相手にすることになり、それぞれが複数の魔法と物理の両スキルを使用できるとなれば、手数の多さで防御と回避に徹せざるを得ず。それらも長続きはせず詰将棋のように徐々にダメージを負うようになっていくだろう。
「あれは……マズイですね。棺をビット兵器として利用出来るとは私も存じませんでした。マサカド！」
「ヨシツネ！」
彼の鍛錬に協力していたベルベットルームの住人ですら、今のタナトスの別形態を見るのは初めてだった。
このままではテオドアが殺されると判断した二人は、すぐにペルソナを呼び出すと戦っている二人の元へ向かわせる。
ペルソナだけでは細かな指示が利かないので、これから二人も戦場へと赴くつもりであったが、何故タナトスが変化したのかについてチドリに伝える事を忘れない。
「タナトスの変化ですが、正確にはあれは八雲様の変化です。先ほどまではタルタロスの破壊の邪魔をするテオを追い払うつもりで戦っていましたが、転移した事で怒りの矛先を向けていたタルタロスが消えてしまい。タルタロスを隠した私どもを目的の邪魔をする明確な敵と認識されたようです」
「それって大丈夫なの？」
「ええ、大丈夫ではありません。目的の遂行が出来なくなった以上、阿眞根の顕現と私どもの排除に力が使われることになりますので、ぶっちゃければ状況を悪化させてしまいました」
《この無能共め》
阿眞根の顕現規模が抑えられていたのは、湊がアイギスを殺したシャドウとシャドウの母たるニュクスを消しさろうと思っていたからだ。
その目的を達成するには湊としての判断力が必要だったので、状況が変わって目的が達成できなくなれば、湊も力を抑えておく必要がなくなり。顕現を進めながら増した力を使って敵を殺そうとし始めるのも当然と言えた。

湊を止めるためにやってきた者たちが、逆に状況を悪化させてしまうとは無能としか言いようがない。鈴鹿御前が冷え切った目を向けて吐き捨てれば、二人は申し訳ございませんと謝罪し人を超えた速度で駆けていった。

戦場を見守る少女らの後ろで金色の瞳の少女が目覚めたことに気付かぬまま。

＊＊＊

人は空を飛べない。何かを利用すれば空を行く事は出来るが、自らの肉体ではない以上イメージ通りに動く事は叶わない。

真下から来た攻撃を回避するも、逃げた先逃げた先に予測して攻撃を放って来ているため、テオドアは腕や背中に火傷や裂傷など多数の傷を負っていた。

後ろに下がれば掠った氷が左腕を切り、右斜め上空へと逃げれば紫電がベルゼブブの腕の一本を焼失させる。フィードバックに顔を歪めながら正面に直進したところを青い炎の壁が立ち塞ぎ、勢いを止められずせめてダメージを最小限に抑えようと全身に炎を喰らいながら速度をあげて抜けた先には、集束した竜巻が迫っていてギリギリで躱しきれず大きく吹き飛ばされた。

攻撃を喰らい続けてもベルゼブブを消さずに保ち続けているのは意地でしかない。この最後の一本が切れれば容易く殺されることだろう。

湊とベルベットルームの住人の間には大きな実力の差があったが、それは保有するエネルギーの差から一つ一つの威力が違っていた事が大きい。単純な戦闘技術では湊の方が圧倒的に勝っており、今ここで保有するエネルギー量にも差がなくなれば立場は一気に逆転する。

僅かな時間差で八ヶ所から火炎と電撃が迫り、急降下で躱し被害を最小限に抑えようとしたところ、既に攻撃態勢に移った死神と青年が進行方向に現れた。

「べ、ベルゼブブ！」

回避は不可能。ならば相殺するしかないとして、間に合うか不安を覚えながらテオドアはペルソナにスキルの使用指示を出す。

けれど、高同調状態になっている相手のペルソナに反応速度で勝てるわけがない。既に攻撃態勢に入っていたなら尚の事。ベルゼブブが杖に光を集中させようというところで、タナトスの口から赤黒い闇色の光が放たれた。

「――――〝ＤＥＡＴＨ〟」

万能属性が生命から生み出される純粋な力ならば、〝ＤＥＡＴＨ〟はその対極。生命の力を奪うためだけに存在する純粋な力。

どのスキルよりもニュクスに近い根源的なエネルギーを用いているため、生命体では防御する事が出来ず、生命体でなかったとしてもスキルの熱量によって破壊される。

万能属性ならばまだ相殺という道も残されていたが、間に合わず相殺できない以上はその場にいれば死ぬ。そう判断するや否やテオドアはベルゼブブを諦めてその背中から跳躍する。

空中での移動手段を失ったことで回避行動は取れなくなる。だが、彼の視線の先でベルゼブブが攻撃に完全に飲まれているのを見れば、あの場に残っていれば未来はなかったと先の判断は間違っていなかった事は断言できた。

《ハァァァァァッ!!》

そして、落下するテオドア目がけて紫電が迫ったとき、甲冑を身に付けた青年型のペルソナ、塔〝ヨシツネ〟が間に割って入り電撃属性のスキルを無効化しながらテオドアを拾った。

タナトスで宙に浮きながらそれを見ていた湊は、すぐにヨシツネに向けて八基の棺を差し向け自分も向かおうとする。

だが、それを阻むように極太の光が放たれその一帯の空を焼いた。

見れば近くのビルの屋上からマサカドが攻撃をしてきており、ヨシツネを巻きこまぬように撃たれた広範囲攻撃は四基の棺を破壊していた。

単純な出力ではまだ勝てないのを数の優位で覆していたというのに、一気に半分まで減らされたことで、湊は標的の最高位へマサカドとそのマスターを置いた。

「……邪魔だな」

敵を定めたならすぐに殺す。残っていた棺を呼び寄せ、それらを合わせることで花弁の様な形状を作る。
すると、花弁は光を集めながら回転を始め、マサカドのメギドラオンには及ばぬものの極大のメギドラオンを撃ち返した。
放った瞬間に反動で花弁は僅かに下がるが攻撃は真っ直ぐマサカドへと降り注ぐ。回避も間に合わず地表へと着弾すれば、大爆発が起こって吹き飛ぶ瓦礫すら灰塵へと変えて更地を造りだす。
マサカドの傍にマスターがいないことは分かっていたので、湊は攻撃を終えると棺を分離して飛ばし、自分目がけて飛んできた槍をタナトスの剣で打ち払った。
攻撃の飛んできた方へと視線を向ければ、クーフーリンが役目を終えて消えて行くのが目に入り、エリザベスとマーガレットも既にこちらに来ている事を示していた。
テオドアとの戦闘中にも地表に着弾した攻撃によって建物は破壊していたが、それでもまだ隠れられるだけの場所はいくつも残っている。
ペルソナに乗る事でしか飛べない相手は、別々の場所から高威力の攻撃を放ち、湊に手数の優位を発揮させない作戦なのだろう。
隠れる場所をなくすために一帯を焼こうとすれば、その溜めの隙を狙って威力が下がっても攻撃してくるはず。
いくら湊の攻撃の威力が相手に迫ろうと、別に相手の攻撃が弱くなった訳ではない。喰らえば一撃で沈められる可能性を思えば、このまま戦い続けても意味はないと湊は方法を変えることにした。
「うおおおおぉぉぉぉぉっ!!」
銀色の瞳を輝かせながら叫んだ瞬間、彼から噴き出した黒い炎が巨大なペルソナの骨を形作っていく。
上空にいた湊を守る様に展開された蛇骨は、慌てたように三ヶ所から放たれたメギドラオンを喰らっても一部が欠けるだけで、それもすぐに再生して彼を守り続ける。
街を覆うほどの巨体が幾重にも重なって守れば、元の防御力が桁違いな事もあって湊への攻撃を全て防いだ。

その間に湊は内から生じる憎しみで自分を満たし、阿眞根を自らに降ろして完全な神へと至ろうとする。
増大したエネルギーの密度が増して上空にはプラズマが発生し、さらに、周辺に特殊な力場を生み出しながら青年を分解してゆく。
以前の器慣らしの時にも起こった現象。自我が薄れようと人格を保ち続け、降ろす神に意識を飲まれないが故に、儀式が正しく完了せずに先に青年の肉体に限界が来るのだ。
だが今の彼に自分の身に起きていることを正確に理解する事は出来ない。そういった判断力すら削ぎ落して、目的のために純粋な感情を力へと変換して神を喚んでいるのだから。
『あああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!』
大気が渦巻き地表の瓦礫を吸い上げ、青年の上空でプラズマと衝突して弾けては消えていく。さらに上空には黒い雲が広がって白い雷が爆ぜていた。
地球最後の日とはこういう光景をいうのか。見た者全てがそう感じるような状況になっても、ベルベットルームの住人らは必死に蛇骨の防御を突破しようと地上から攻撃を放っている。
合流した三人分の攻撃を集束させて一点突破を狙うが、発生した力場で威力が減衰してしまい。どうやっても最後まで蛇骨の防御を突破しきれない。
全てがもう遅いのだ。神というペルソナに近い性質を持った存在と融合しつつあることで、シンクロ状態の青年の肉体は不安定な状態になり、既に八割が光になって消えていた。
アイギス本人がいれば違った結果もあっただろう。しかし、彼女はここにはいない。似た風貌の少女では意味がなく、同じ声を持った機体も核がないので外部の助けがなければ動く事すら出来ない。
誰も何も出来ないまま青年の身体の最後の一片が光になって空へと昇ったとき、上空に存在していたプラズマごとその場に集まっていた力が解放された。
＊＊＊
その場で何が起こったのか正確に把握出来た者はいなかっただろ

う。気付けば全身がボロボロになって空を見上げていた。
こうなる直前の記憶を呼び起こせば、上空の力が膨れ上がって光が全てを飲み込んだのだと思い出す事が出来た。
爆心地にほど近い場所にいたことでモロに巻き込まれることになったエリザベスたちは、よく生きていたなと痛む身体を押さえて起き上がる。
大切なペルソナ全書がどこかへと行ってしまったが、エリザベスたちよりも丈夫なくらいなので探せば見つかるだろう。
そうして、改めて状況を把握しようとすれば、先ほどまで街を覆っていた蛇骨が消えている事に気付く。
「蛇神の骨が消えていますね」
「ええ、代わりに何かいるわ。分解されて消滅したと思ったのだけれど」
エリザベスたちのいる地上の遥か上空。先ほどまで青年がいた場所に何かがいた。
薄らと光を纏っている様子はペルソナを思わせるが、離れた場所にいてもそんな生易しいモノではないとはっきり理解出来る。
力を司る者たちにすらそう思わせる何かはその場で振り返り、エリザベスたちに気付いたように地上へと降りてきた。
距離にして三十メートルほど離れた場所に降りてきたことで、エリザベスたちは相手の姿を見る事が出来た。
その姿は青年と同一。けれど、瞳が凄絶な憎悪と怒りを宿した銀色であることが、相手が青年ではない事を表している。
近付いて来る度に増す威圧感。常人ならば精神がやられて脳が意識をシャットダウンするか、そのまま狂うに違いない。
なまじ強いばかりにそれを受け止められる彼女たちは、ペルソナ全書もなく全身が痛むせいでまともに戦える状態ではない。
青年の肉体が無事で、この空間が完全に崩壊しなかった事は行幸だが、明らかに存在が変わった青年らしき存在なら今のエリザベスたちを殺す事など容易いだろう。
だが、まだ殺されると決まった訳ではない。諦めるよりも先に相手

が何者であるかを確認しておこうとエリザベスは話しかけた。
「お名前を伺っても宜しいですか？」
『私を元の世界へ戻せ』
「なるほど、言葉は通じても会話が成立しないようですね」
二重に聞こえる音声。青年の物と澄んだ女性の声だ。
異界の神である阿眞根が女性だったとは驚きだが、青年よりも阿眞根の人格が濃く出ているようで会話は難しいと察する。
同時に相手の言葉の意味も理解して、コレを現実世界に解き放てば間違いなく世界が終わるため、エリザベスはその命令を拒否した。
「一度冷静になられては如何でしょう。会話が成立する状態になれば冷静だと判断し元の世界へお送りします」
『そうか。なら、消えろ』
阿眞根の左手に力が収束する。まさか触手の羽すら出していない生身でスキルを放てるとは思わず、咄嗟に動く事の出来ないエリザベスたちは自分の死を覚悟した。
「アステリオスっ!!」
だが、突如横から牛頭の巨人を思わせる異形の存在が現れ、攻撃しようとしていた阿眞根に襲いかかり。攻撃を中断して回避行動に移ったことで距離を取らせる。
跳躍して離れた阿眞根は攻撃してきた人物へと瞳を向けるが、シャドウに近い性質を持つペルソナ、運命〝アステリオス〟を呼び出した金色の瞳をした少女は、獰猛な笑みを浮かべながら大きな戦斧を振り下ろして阿眞根に追撃を放つ。
「アハハハハッ！　なに雑魚いたぶって遊んでんのよ！　こっちはアンタに吹っ飛ばされて頭に来てんだから、そこで大人しくぶっ壊されろ！」
見た目こそラビリスと同一だが、口調がまるで異なり同一人物と判断していいか困るだろう。
もっとも、今の阿眞根は湊としての人格が薄れており、その分、少女に対する執着も薄れているので、相手の攻撃を避け続けながら冷ややかな視線を向ける。

『また邪魔か。そんなに死にたければ望み通りにしてやる』
「うるせー、クソガキ！　訳分かんねえこと言いやがって話通じてねーのかよ。やるのは私、死ぬのはアンタだって言ってんでしょうが！」
横薙ぎに振られた戦斧が阿眞根の腕に当たり相手を吹き飛ばす。本来ならば両断されているはずだが、阿眞根として顕現しているときには耐久力があがるのか相手は無傷であった。
とすれば、避けられるはずの阿眞根が切られたのは、少女の攻撃など喰らってもダメージはないと思っての事だろうか。
自分が舐められていると感じた少女は怒りの表情になり、新型戦斧に搭載された銃機構でライフル弾を発射する。
「自分に暗示かけておいて忘れやがって。人様に当たってんじゃねーぞ！」
籠められた弾丸は全部で六発。それを使いきれば専用カートリッジを交換しなければ銃は使えない。
有線式ロケットアームという中距離兵装はあれど、遠距離攻撃を持たなかったラビリス用に付けた新機能だったが、怒りながら発射した弾は全て手で弾かれてしまう。
それでも少女はすぐに切り替えて近接戦闘に移り、戦斧の推進器を利用した高速の連撃を見舞う。
相手はそれらを完全に見切り、反対に衝撃波を伴った腕を振る事で反撃してくる。ただ腕を振っただけで衝撃波が発生するのは驚きだが、名切りの不視ノ太刀という身体能力だけで斬撃を飛ばせる技が存在することを思えば理解は出来る。
故に、少女は相手が元からデタラメと知っていたのか隙を見せずに攻撃を繰り出し続ける。横に薙ぎ、斜めに切り上げ、側面で叩く。
「アイギスは死んでないっつの。良い子ちゃんの方の私と赤頭が全力見せろって強請って、アンタは鏡使って自分に暗示をかけたんだよ！」
どういう訳か彼女は事の顛末を全て知っていた。何があって青年に変化が訪れたのかもしっかりと理解した上で、ちゃんと思い出せと

怒鳴りつけていたのだ。
会話は成立せずとも言葉は通じるだけあって、相手は少女の言葉が耳に届くと反応を示し。バック転で戦斧を回避すると、銀色だった双眸は金色と紫水晶色のオッドアイ状態になり纏っていた光が消えていった。
相手の様子が一気に変わると少女も攻撃の手を止め、青年がマフラーから眼帯を取り出して右眼に付けながらようやくまともに言葉を返す。
「……そうだったな。暗示を掛けた事がないから記憶の混乱が生じると知らなかった」
「ったく、ほら、さっさと家に帰るわよ。良い子ちゃんはとっくに寝る時間なんだよ」
湊の暗示の魔眼は全力で放てば記憶を丸ごと改変できる。今回はアイギスが無残に殺される映像を見せただけだったことで、少女に言われれば記憶の祖語と直前のことも思い出せた。
仮に記憶の書き換えを行っていれば戻れなかったので、そうなっておらず良かったと元に戻った青年を見てとりあえず安堵しながら、少女は呆れた表情で帰宅するぞと言って戦斧を背中に戻した。
だが、元に戻った湊は目の前にいるラビリスの様な別人に違和感を覚えた。相手は間違いなくラビリスなのだが性格が違い過ぎる。離れていた間に何があったのか分からず、一応の警戒を見せながら素直に思った事を伝える。
「……というかお前誰だ。人格変わってるぞ」
「そうだよ、別人だよ。私はあの良い子ちゃんのダークサイドと姉妹機の負の残留思念から生まれたハイブリッド。名前なんてないけどシャドウラビリスとでも呼べばいいんじゃない」
ラビリスそっくりの少女は、自らをシャドウラビリスと称した。
ラビリスの精神の一部と、彼女に移された姉妹機のメモリデータが結びついて生まれた、ラビリスの破壊衝動を司るもう一人のラビリス。
フフンとどこか勝ち誇った顔をしている相手を見ながら、湊は傍に

落ちていた瓦礫の下からペルソナ全書を引き抜きつつ言葉を返す。
「面倒だからシャビリスで良いな。二重ＯＳかもしれないと言っていたが本当に人格があったとは驚きだ」
「勝手に略してんじゃないっての。でもまぁ、特別に許してあげる。アンタも人いっぱい殺してるんだもんね。他の子もアンタの事は認めてるのよ。桐条のことが大嫌いで、私らのことが大好きで、ちゃーんと大切な人を殺す気持ちってのを知ってるアンタをさぁ」
長いからシャビリスでいい。人の名前を勝手に短くしておきながら、湊は一切悪びれた様子もなく言い切った。
そんな青年にシャビリスは不満げな顔をするも、しょうがないから許してやるかと寛容な態度を見せた。
彼女はラビリスの中の負の感情や破壊衝動を強く引き継いだ人格だ。だが、湊はそんな少女の在り方を認める発言を以前していた。
同じように桐条グループを憎み、同じように大切な人を殺さなければならない状況を味わっている。そして、実験の犠牲となった姉妹らに心からの謝罪と感謝を述べた青年を、怨念となった姉妹らもしっかりと認めて人間と知りながらも彼の事だけは赦していた。
他の者には略させないが湊だけはいいと本人に許可を貰った青年は、探知能力で埋まっていた全てのペルソナ全書を回収すると、シャビリスを連れてベルベットルームの住人の元へ行きそれぞれに全書を渡した。
「初勝利だ」
傷を負っても自動再生していたことで傷一つない湊に対し、ベルベットルームの住人らは服もボロボロで血を流し満身創痍だ。
三人は全力でメギドラオンを撃っていたので、それを防ぎきって今の状況があるのならば、神の力を使おうと自分の勝利だと、湊は親しい者だけが分かる勝ち誇った顔をした。
それを聞いた姉妹は少しイラッとしたようだが、テオドアは傷を負い過ぎて意識を手放しており、自分たちも疲れているので適当に返す。
「ええ、そうね。次の鍛錬の時が楽しみだわ」

「はい。この調子ですと次回からは常に私たち全員を同時に相手で良さそうです」
事実上の死刑宣告。死刑というより私刑かもしれないが、神の力を利用出来ない状態の湊ならば彼女らの誰かが単発で放ったメギドラオンすら正面からは防げない。
魔眼の力を利用しつつ受け流す様な形でならやり過ごせるものの、二人はそんな事をさせないほど怒涛の攻撃を見せるに違いないのだ。
コントロールが利かない以上阿眞根にはなれずとも、トーキョーに来た瞬間に湊がどこまで自分の能力を神に近付けられるかで生存確率が変わってくる。
今からそんな次回の心配をしなければならない事で湊は少し面倒そうだが、とりあえず現実世界に帰る必要があるので、翼が生えたタナトスを召喚すると意識のないテオドアは棺に入れ、他の者らは棺に乗らせて空を飛ぶ。
「ねえ、このタナトスってもう元に戻んないの？」
「いや、力を籠めればこれになるだけだ。通常、シャドウ、冥王の順で姿が変化する。いまは先に籠めた分が残ってるから維持してる」
本来、タナトスはヒュプノスと同じく翼の生えた神として描かれている。故に、炎のように噴き出す黒い翼が生えた姿が正しい姿ではある。
ペルソナは制御するために力の一部をセーブしている以上、死を完全に理解している青年がその枷を外して原初の姿でペルソナを呼び出せても不思議ではないが、シャビリスとしてはペルソナを自在に操ることが不思議なのか興味深そうに棺に触れていた。
しばらく飛ぶと被害圏外で待っていたチドリたちを発見し、一緒に美鶴もいたことで事情を察した湊が眼帯を外しながら三人の前に降りた。
「――――今夜の記憶を失え」
そして、言葉を交わすよりも速く暗示をかける。出会い頭に何かされると思っていなかった美鶴は、それをモロに受けてしまい意識を失った。

ゆっくりと倒れていく美鶴の身体は湊が途中で受け止めたが、片腕で相手を支えながら器用に眼帯を付け直したところでチドリが話しかけてきた。
「そんな扱いでいいの？」
「説明するのも面倒だろ。俺との会話を諦めているから聞かれるのはチドリだぞ？」
「まぁ、話すのは面倒だけど流石に同情するわ」
説明する役目を押しつけられるのは面倒だが、いくらなんでも一言も交わさずに記憶と意識を奪われるのは可哀想だ。湊にお姫様抱っこで抱えられて静かに寝息を立てている少女を見て、チドリは巻き込まれた事も含めて相手を不憫に思った。
けれど、既に暗示はかけてしまったのだから、湊が掛け直さなければ修正はきかない。
美鶴への興味を彼はもう失っているので、相手には悪いがこのまま話を進めるしかなく。チドリが諦めてベルベットルームの住人らが現実に帰る用意をしているのを眺めれば、タナトスを消した湊が話しかけた。
「さて、とりあえず俺の全力はこういった規模になる。出す出さないじゃなくて、出さざるを得ない状況でしか使えないと思ってくれ」
「そうね。ただ、私は貴方の全力を見せて欲しかっただけで、別に神を呼び出すほどのことは言っていなかったのだけど」
チドリがそう言ったとき、湊はその発想はなかったと少し驚いた顔をした。
やはり彼はチドリらの言っていることを勘違いして、神降ろしという自滅の可能性のある全力の解放に臨んだらしい。
彼はこういうところがあるので頭がいいのか悪いのかいまいち判断がつかない。準備が出来たとエリザベスらが帰還の魔法を発動させる中、チドリは深いため息を吐いた。
一瞬の浮遊感の後、無事に現実に戻った彼らはベルベットルームの住人と別れ、美鶴とバイクを寮まで運んでからチドリを送り、湊も今日は疲れたとシャビリスと共に家へと帰っていった。

第六章　―Previous step―

第百六十七話　高等部入学

４月６日（日）
夜――湊自宅

中学卒業の日、神降ろしの発動で一度は肉体を分解された湊だったが、その後、病院で精密検査を受けても問題らしい問題は見られないという検査結果が出た。

何か身体に違和感があるかと尋ねても本人は何もないと言っていたので、肉体分解後の再構築までが神降ろしの正しい手順だったのではと推測されるも真相は謎である。

元々、神降ろしは茨木童子と赫夜比売が、子を母と同じ神の位相へと辿り着かせようと思って始めた事だ。子により善きものをという親の愛で始まった行為は途中から儀式となり、さらに進んで一族の悲願となって名切りの一族全てを巻きこむ呪いと化した。

母から神の力を受け継いだだけで人と同じ生まれ方をした彼女たちは、人が神になるということを甘く見ていたのだ。

人は鳥にはなれない。こんな事は誰だって知っている。人が神になるのも同じ事だ。

神の力を受け継いでいようと人は人である。何をしようと別の存在にはなれない。

湊が神降ろしを成功させるため、肉体を完全に分解されたことでようやくその事に気付き、一度は湊の死を覚悟したものだが、青年は神との完全な融合を果たし肉体を再構築して神降ろしを成功させた。

家に帰って寝ているときに心の世界に呼ばれ、湊は名切りのペルソナや自我持ちらに酷く心配されたが、それも既に先月の事だった。

ダイニングのテーブルのところでノートパソコンを使って仕事をしていると、廊下の方からパタパタと走る音が聞こえてラビリスが部屋に入ってきた。

「湊君、湊君。着方これであっとる？　おかしなとこない？」

現れたラビリスは月光館学園の制服を着ており、その表情はとても嬉しそうである。
あの日、シャビリスとして目覚めた彼女だったが寝て起きたら元に戻っていた。
シャビリスが何をしていたかは中から見ていたらしいが、相手が出ている間は意識を覚醒して肉体の支配権を取り戻せなかったという。
最初から二重ＯＳの可能性を指摘されていた事で、彼女も湊と一緒に精密検査を受けたが身体に変化は見られなかった。
単純にラビリスの意識が落ちたり精神が不安定になれば、もう一つの記憶野に宿るシャビリスの方へ支配権が移り易くなり、事が済めばメインであるラビリスに戻るらしいが、支配権を奪うかどうかはシャビリスの気分次第になる。
対策として意識が落ちたときにシャビリスの宿る第二記憶野への電力供給を抑えるという案も出されたが、ラビリスが精神干渉スキルを受けてしまったとき、第二記憶野にいるシャビリスならばスキルの影響を無視して戦闘続行かもしれないと湊が言った事で保留となった。
また、いっそのこと取り外して同型ボディにシャビリスを入れ、ラビリスとシャビリスで双子にしてはという意見もあったのだが、シャビリスはラビリスと精神の一部を共有している。
二人は別人格だが元はラビリスの正と負の感情という形になるので、シャビリスを切り離してしまうとシャドウが抜けたようになり、ラビリスが精神に異常をきたすかペルソナ能力を失う可能性がある。
故に、分離計画も見送られる形となったが、幸いなことにシャビリスはとりあえず湊の傍にいて危害を加えないという考えでいる。桐条グループの人間に会えばどうなるか分からないが、先日、湊が会ってすぐに意識と記憶を飛ばした美鶴を見ても何もしなかったので、現状維持で様子を見つつラビリスの生活に影響があれば改めて考えるという事になった。
そうして、シャビリスに関する問題もとくに起こらず、明日は待ちに待った高校の入学式。

春休みの間に中等部の離任式があって佐久間と櫛名田が揃って別の学校へ行くことになったが、二人と同じように湊もある意味新天地といえる場所へ移るというのに、早速の仕事を頼まれ新入生代表の挨拶をするように言われている。

しかし、入学式自体は中学校の時と変わらない内容だったので特に何も用意していない。反対にラビリスは憧れの学校に初めて通うということで、数日前からずっとそわそわとしており、前日の夜になったときには楽しみ過ぎて興奮しっぱなしであった。

遠足前の小学生じゃあるまいし、湊としては仕事中で相手をするのが面倒なのだが、基本的に甘い彼は視線を彼女に向けると上から下まで眺めて答える。

「……リボンは輪の部分を少し大きめに、スカートはもう一センチ短くていい。その方がバランスもよく健康的に見える」

「そうなんや。えっと、こう……こんな感じやろか？」

スカート丈を短くしろと言えば変態だと思われる。だが、この青年には下心がない。

なにより、途中から全て自分で作ったことで彼女の身体で触れてない部分などないのだから、基本的に毎日一緒に風呂に入っていることもあって、スカートを一センチだけ短くしろといったところで気にするなど今さらである。

彼の言う通りにリボンとスカートを調整したラビリスは、部屋の隅にあった姿見で調整後の姿を確認する。

言われた通りの状態にすると確かにバランスが良く、丈が短すぎる事もないので健康的な魅力を振りまいていた。

今の状態をしっかりと記憶しておこうとメモリにデータを保存してから、ラビリスは再び湊の元へと戻ってくると浮かれて興奮気味に話し出す。

「ついに明日やなぁ。ウチ、何組になるんやろか。湊君とかチドリちゃんと同じクラスがええんやけどランダムやもんね」

「……そうだな」

正確に言えばランダムではなく成績順である。なるべく学力が均

等になる様に振り分け、素行の悪そうな者がいれば同じクラスにまとめるか逆にばらけさせ、管理し易い方法か集団にさせない方法を取る。

もっとも、今年は湊がいるので学校側もそういった事は余り気にしていない。身長一八〇センチオーバーで鍛えられた肉体を持った男がいれば、相手がアクセサリーを多数身に付けた不良にしか見えない事もあって大概の者は目を付けられないよう大人しくする。

相手をデカイだけと侮れば地獄が待っているため、いきがった愚か者がいればそれはそれで見せしめとして機能するのだ。

もし仮に湊が動かなくても彼のファンクラブである〝プリンス・ミナト〟が密かに動き、相手の素性から素行まで全てを丸裸にして馬鹿な真似をさせないようにするので、学校側としては湊が入ってからの方が生徒の素行がよくなって助かっていた。

それ故、ラビリスはどのクラスになっても心配することなどなく、見た目や人当たりの良さもあって多数の友達を作れるに違いない。

もっとも、新入生代表としてのスピーチがあって入学式の打ち合わせに参加していた彼は、既に本年度の全クラスを把握している。一年生だけでなく他学年も知っており、今ここでばらしてもいいのだが楽しみを奪うのも可哀想かと黙っていた。

「部活も色々と見て回ろう思うとるんよ。セーフティーモードなら他の人らと同じくらいしか力も出ぇへんし。学習能力も人と同じように設定されとるから一緒に練習できるやん」

「……そうだな」

何年も前の桐条製の安全装置はまるで信用できない欠陥品だったが、最新のＥＰ社製ボディでは細かな刺激も感知できるように組んでいるため、機械としての性能をフルに使えば百分の一ミリ単位で肉体を制御出来る。

人として過ごしているときには流石にそこまでは無理だが、同じように発揮される力を細かく制御できるため、しっかりとセーフティーをかけると男子と腕相撲しても勝てなくなるほど力を抑えられた。

そんなことは作った本人の方がよく知っているので、ニコニコと

笑ってどんな部活があるかと想像を膨らませている少女へは適当に返し、湊はパソコンのキーを叩いて仕事用の連絡メールを打ち込む作業に戻る。
「あ、ウチな学食とか購買ってのも利用してみたいねん。カレーうどん？　とか焼きそばパンがあるんやって。すごい人気で争奪戦もあるとか」
「……そうだな」
けれど、ラビリスは湊の反応がとりあえずは返ってきている事で話を続ける。
湊は実家暮らしのときは桜の作った弁当を食べていたが、最近は面倒だからと買った菓子パンを食べていた。
ラビリスが弁当も作ろうかと言ってきた事があったが、そういう手間をかけさせない湊は断って学校に行く途中や購買で買う事にしていた。
彼女もこれから通うようになるのなら、交代制で弁当を作ってもいいかもしれない。しかし、しばらくは学校生活を楽しみにしている彼女に合わせて、湊も一緒に購買のパンや学食で過ごすことになりそうだ。
学校での昼ご飯に大して関心のない湊にすれば、ラビリスの好きにしろといった感じではある。それを口に出すと相手が傷付くので黙っているが。
「そうや、持ち物もちゃんと確認しておかな。家に取りに帰れへんし、購買で買える物は限られとるもんな」
「……そうだな」
話題をころころと変えて話していたラビリスは、部屋に戻って鞄を取ってくると入学案内を見ながら必要な物が揃っているかを確認する。
月光館学園は有名私立にしては珍しく鞄や靴に指定がない。制服もインナーに関しては自由であったり、生徒の自主性に任せている点も多い。
そんな中でラビリスが持っているスクールバッグは自分の人格モ

デルになった少女の両親、ラビリスから見れば祖父母とも言える二人から入学祝いに贈られたものだ。
以前会ったのは祖母だけだったが、高校の合格を報せる際に祖父とも面会して食事をした。
声や話し方など人格モデルの少女との共通点の多いラビリスは、二人にすれば娘が生きているように感じられるらしく、彼女がロボットであると聞いても優しく受け入れてくれた。
そして、明日は二人も見に来てくれると言っていたので、ラビリスもただ自分が楽しみなだけでなく、優しい祖父母に自分の晴れ姿を見て貰おうと気合十分である。
持ち物に不足がないと確認した彼女は、鞄のファスナーを閉めて立ち上がると、パソコンから目を離さずにずっと答えていた湊をジッと見つめて声をかける。
「なぁ、話ちゃんと聞いとる？」
「……聞いてるよ」
「そっか。それでな、通勤電車とかって大変やって聞いてるんやけど」
ちゃんと話を聞いてくれているか確認すれば、湊がこれまでと違う返事をしたことで、ラビリスは深く考えずに納得して話を続けた。
既に入浴や夕食を終えて寝る前の時間なのだが、ここ最近のラビリスはずっとこの調子で、前日の今日は特に酷くて湊としては話自体に飽きている。
青年はそもそも高校に通う気はあまりなかった。数多の戦闘を経験し、それらを己が力として研磨し、研ぎ澄まされた刃の如く一つの個として遥かな高みに至った。
青年の肉体は自立進化を可能としており、人としての形を保ったままより善きものへと成長を続ける事が出来る。故に一生完成する事はないが、現状、学校に通ったところで得られる物など何もない。
人との関わりを得られる場所だとはいうが、湊の築いてきたコミュニティは、相手が湊を理解できないために永遠に極まる事がない。
思い出作りに興味のない湊にとって、コミュニティすら成長させられないのでは学校に通う価値などなく、ＥＰ社で研究を進めていた方

が何倍も有意義な時間が過ごせると思っていた。
最近になってようやく生体パーツ用の人工骨として使える物が出来てきたのだ。巨費を投じて新しく素材を作ることになったが、身体に入れた際に拒否反応が極めて出にくいということで、生体パーツ用でなくとも医療に応用できそうだとシャロンも期待を寄せている。
そうして研究も軌道に乗り始めたというのに、どうして時間を取られるだけの学校に通わなければならないのか。
思っても少女のことを考えて言わないでいる青年は、これでは仕事にならないなと今日は諦めて寝ることにした。
「……ラビリス、そろそろ寝よう。明日は遅刻したら大変だ」
「あ、ホンマや。もうこないな時間やったんやね」
時刻は十一時四十分を回っている。もう少しで影時間だが影時間に慣れて疲労を感じなくなっているペルソナ使いにすれば、他の者よりも一時間多く寝られることになる。
ここから学校までは徒歩と電車で合わせて四十分ほどかかるので、電車に乗り遅れれば遅刻が確定する事もあって、湊はちゃんと寝ておこうと寝室へラビリスを誘う。
同意してついて来たラビリスは自室に鞄を置いて、しわにならぬよう制服を脱いでパジャマに着替えると、部屋にノートパソコンを置きに行っていた湊と一緒に寝室のベッドに寝転んだ。
「あー、楽しみやなぁ。生徒は九時までに教室に集合で、入学式は十時から講堂でやんな？」
「ああ、張り出されているクラス表を見て教室に行き。そっちで一連の流れを聞いたり、入学式用のコサージュを受け取ったりするんだ」
新入生は全員が胸にコサージュを付ける。新入生代表である湊だけは少し豪華なコサージュだが、それでも制服に飾りを一つ付けただけで、他の生徒も随分と立派に見えるのだから効果は絶大だ。
入学式の流れが全て頭に入っている湊がそれを伝えると、ラビリスはそうなのかと感心して毛布を胸元まで引き上げた。
これで彼女も寝るだろう。そう思った湊は相手が寝てから起きて仕事の続きをしようと考えて目を瞑る。けれど、寝るとばかり思って

いた相手はまた話しかけてきた。
「なあなあ、部活の見学って明日からでも出来るんかな？　体験入部は後からやろうけど先に見学しておいたらイメージも持ち易いと思うんよ」
「……出来ない。明日は解散後に入学式の片付けがあるから全部活が休みなんだ」
「そうなんや。なるほどなー」
入学式は看板を置いたりそこらを飾りつけたりしているので、翌日の始業式のために外したりなど片付けをしなければならない。
私学だけあって保護者も来る学校行事には力を入れており、その分飾りの数も多かった。
部活動をしている者にも片付けを手伝って欲しいほどなので、その日は在校生に午後からボランティアを頼んでおり、在校生と教師らで一斉に片付けをする事になっている。
なので、見学したくても活動する部活がない。そう言われてラビリスは納得して頷いた。
同じフレーズをアイギスも言っていたような気がするが、別に同じ口癖を持っていても気にしない湊は再び寝ようとする。
相手は遅刻したら大変だと分かっていて、普段は規則等を守るクラス委員タイプの性格をしている。そういった性格ならちゃんと状況を理解して眠るだろうと思っていれば、
「なあなあ、他の子から連絡先聞かれたら普通に教えていいんかな？　ほら、初めが肝心でアドレス交換するなら初日とかって聞くやん。ウチももしかしたら聞かれるかもしれんし、そういうときは教えていいんやろか？」
ラビリスは湊の腕を掴んで身体を揺らしながら再び尋ねてきた。
そんなのは勝手にすればいい。湊のように仕事の連絡が入る訳でもないので、明らかに信用出来ない相手でもなければラビリスが自由にすればいいのだ。
まして、明日でも話せる事をいま寝る前に聞いておく必要はない。湊は普段よりも声のトーンを一段落としてさっさと寝るように告げ

る。
「……ラビリス、寝ろ」
「うん、ちゃんと寝るで。でな、色々と生徒にも役職みたいなのあるんやろ。委員会とか生徒会っていう。ウチもそういうのやってみたいねん」
殴りたい、その笑顔。相手に悪意がないのは分かっているが、湊は一瞬意識を刈り取ろうとしかけた腕を必死に押さえつけて我慢する。
もう少し、あともう少し話せば寝るはず。湊はそうやって自分に言い聞かせて、何度も相手に寝るように言いながらも話を聞き続けた。
そして、彼女がようやく寝たと思ったときには、時刻は既に朝の四時を回っていたのだった。

4月7日（月）
朝――湊自宅
「もう、なんで起こしてくれへんのよ!!」
翌日、朝からラビリスは半泣きになって学校へ行く準備をしていた。髪を梳かしてポニーテールに結い上げ、制服がしわにならぬよう注意しながら急いで袖を通す。
現在の時刻は八時十五分。九時に教室集合でここから学校までは約四十分かかるというのに、ラビリスは準備にもう少し時間がかかりそうであった。
彼女が慌てている理由は単純に寝坊したから。目覚ましはセットしていたのだが、寝るのが遅かったせいで鳴ったことに気付けなかったという訳だ。
そうして、目を覚まして時計を見ると時刻は既に八時を回っており、隣でスヤスヤと眠っている青年の腹に拳を振り下ろして無理矢理に起こしながら支度をしていた。
起こされた青年は普段以上に顔から表情が消えており、準備はラビリスよりも早く終わっていたので、テレビのニュースを眺めながらコーヒーを飲んでいる。
そのゆったりした姿がムカついたのか、ラビリスは定期券と財布を

ポケットに入れながら湊を怒鳴りつけた。
「このドアホ！　なに呑気にコーヒーすすっとるんよ。次の電車は三十分で遅刻確定やのに急がんでどないすんの！」
「……遅刻確定なら急いでも意味ないだろ。それに寝坊は君が朝の四時まで俺を寝させなかったからだ。影時間前から遅刻しては大変だから寝ろと何度も言ったのにな」
湊は何度も寝ろと言った。途中から数えだしたが二時から四時になるまでに一一八回は言ったのだ。
それでも寝なかったのはラビリスで、湊は彼女が寝てからしか眠れなかったので、さらに睡眠時間は少ない。
これで自分を責めるのかと湊が普段よりも真剣な目付きで言えば、相手が少し怒っていると流石に理解したラビリスは反省し、とても申し訳なさそうに頭を下げた。
「ご、ゴメン。けど、ホンマに時間ないんやって。入学式から遅刻やなんて最悪やぁ……」
せっかく楽しみにしていたのに初日から失敗してしまった。一生に一度の晴れ舞台。来年高校に入り直せば入学式も経験できるが、湊たちと同じ学校に通えるというのに、それを捨ててまで入学式のためだけに学校に入り直したくはない。
自分のせいだとしてもショックを隠しきれず、ラビリスが今にも涙を流しそうになったとき、テーブルにカップを置いた青年が口を開いた。
「まぁ、〝電車なら〟確実に遅刻だろうな」
そういった青年は胸の内ポケットからパスケースに入った一枚のカードを取り出した。
一瞬それが何であるか分からなかったラビリスも、次第に焦点があって物を認識すれば、確かにそれを使えば遅刻せずに済むと顔を輝かす。
「湊君!!」
「準備が終わったなら行こうか。遅刻しないために」
荷物は持った。戸締りやテレビを消すのを忘れず部屋を出ると、二

人は学校に向けて出発した。
＊＊＊
時刻は八時四七分。月光館学園高等部に集まった部活メンバーと元生徒会メンバーは、保護者に先に講堂へ行っておいてくれと告げて湊らを待っていた。
つい十分前に順平もやってきて湊らを待っていると告げれば、なら自分も一緒にと待ち始めたが、八時半に集合をかけていたというのに二人は一向にこない。
何度もメールや電話で連絡を取っても相手から返事はなく。揃って寝坊しているのではと半分が呆れ、半分が心配そうな顔をしていた。
「もういいんじゃないか？　時間を守れないようなやつを待って、お前らが遅刻しては意味がないだろう」
「でも、兄さん。今回は、そのぉ、有里君が新入生代表の挨拶をするんです。彼がこないと入学式が……」
「なっ!?　あいつ、美紀たちの晴れ舞台をっ」
首から一眼レフカメラを提げた真田が顔を怒りに歪める。彼は妹の入学式の写真を撮りに来たのだが、美紀たちが教室に入ってからでも講堂へ行くのは間に合うと一緒に待っていた。
しかし、全員が湊待ちだと聞いていたところへ、さらに入学式にまで影響が出ると聞けば我慢の限界だった。
来たら殴る。顔はマズイので腹に一発入れる。そう心に決めてシャドーを始めた。
妹の入学式を楽しみにしていた彼が怒る気持ちも分かるが、他の者たちとしてもいくらなんでも遅すぎると苛立ち始めていた。
待っているメンバーは揃ってクラス表を見ようと思っていたのでまだ見ていない。彼が来てからクラスを探すと本当にギリギリになってしまうので、いっそクラスだけは先に探しておこうかと思ったとき、車体を大きく傾けて曲がりながら黒いバイクがすごい速度で入ってきた。
音が聞こえて生徒や保護者は一斉に道を開けているが、入ってきた

バイクは校舎の入り口の辺りまでやってくると、タンデムシートに乗っていた女子を降ろして入り口脇にバイクを止め、運転していた者もバイクを降りてヘルメットを脱いだ。
「ほら、間に合っただろ」
「うん！　良かったぁ。寝坊したときはホンマにどないしようかと思ったわ」
　脱いだヘルメットをロックに掛けて、二人は他の者の前にやってくるとラビリスが輝くような笑顔で挨拶する。
「遅れてすみません。皆、おはようございます」
『お、おはようございます』
　余りに綺麗な笑顔を浮かべるものだから、一同は呆気に囚われていたこともあって素直に挨拶を返してしまう。
　だが、色々と突っ込み所がある。バイクで来たのは寝坊で電車に乗り遅れたからだろう。そこは理由として納得できるものの、何故高校生が入学式の日からバイクに乗って来るんだといち早く復活したゆかりが大声を上げた。
「じゃなくて、なんで君はバイクに乗ってんのよ！　てか、免許は!?」
「俺の誕生日は四月五日だ。誕生日の日に飛び込みで受けて取ってきた」
　そういって湊は内ポケットからパスケースに入れた免許証を取り出す。確かに本物のようで発行日は彼の誕生日である四月五日になっている。
　誕生日は午後からお祝いをしていたというのに、その前に朝から試験場に行って免許を取っていたと聞いていなかった部活メンバーは驚きの表情を浮かべた。
　そして、彼がちゃんと免許を持っていると分かると、今度は順平と渡邊が青年の黒いバイクを眺めて瞳を輝かせる。
「マジカッケー、有里君これなんてバイク？」
「ＣＢ４００ＳＢだ」
「うお、それ高いやつじゃないっスか。会長ってばブルジョア」
　湊の通学用バイクの種類は〝ＣＢ４００ＳＢ〟という中型バイク。

初心者でも乗り易いＣＢ４００ＳＦにハーフカウルが付いたモデルで、長距離走向けにシートの乗り心地やハンドルの角度がマイナーチェンジで見直され、しかしながらデザイン性を損ねない美しい外観をしている。
安くはないが乗り続けるのなら決して高いとは思わない。ライダーにそう感じさせ、誰からも一目置かれる優秀なマシンだ。
バイクに興味のある少年らは瞳を輝かせてバイクを眺め、自分が女子とタンデムする姿でも想像したのか途中でいやらしい顔になっている。
だが、湊は既に生徒会長ではないので、渡邊の呼び方はどうにかならないかと思っているところに腕時計を見た風花が話しかけてきた。
「あ、それより時間。教室行く前にクラス探さないといけないから急がないと」
「高千穂はＢ組、俺と山岸とラビリスと西園寺はＥ組、残りは全員Ｄ組だ」
クラスを探すのには時間が掛かる。そう思って全員が生徒玄関に入ろうとしたとき、湊が全員分のクラスを言ってしまう。
集合まで十分を切ったので時間短縮のために親切で教えたのだが、少し楽しみにしていたメンバーたちは全員が何やら微妙な顔をしていた。
「同じクラスはええけど、自分で見たかったわ……」
「いるんだよねー、楽しみにしてるのに先にネタバレする人って」
「ミッチー空気読んでー」
ラビリス、ゆかり、西園寺を筆頭に他の者も口々に不満を漏らす。唯一笑っているのは湊と妹が別のクラスだと知った真田くらいだ。
遅れたのはラビリスのせいで、そのお詫びのつもりで時間短縮として教えただけに、一同の反応が予想外だった湊は何で自分が怒られなきゃいけないんだと子どものように返す。
「なら、先に見ていれば良かっただろ。集合時間を決めたときに誰かが遅れたら先に見ていて良いと言ったぞ」
「……それでも一緒に見ようと思って待ってたんじゃない。なんで遅

れたやつが先に知ってるのよ」
「新入生代表で打ち合わせに参加してたからだ」
言い合いをしながらも一同は校舎に入って靴を履き替える。クラスの貼り出された掲示板を見れば、確かに彼の言っていた通りのクラスに配置されていた。
見るまではまだ嘘の可能性があると祈っていたゆかりは、今年もまた彼氏と別のクラスだったことであからさまに落胆し、チドリも同じように少し悔しそうにする。
対して、部活メンバーと同じクラスだった美紀は嬉しそうに笑い。風花は湊に四年連続だねと言った事で、今年はチドリとゆかりの二人から頬を引っ張られている。
時間がないというのに騒いでいる一同を見ていたラビリスは、これから自分もこのメンバーやもっと大勢の人間と関わって行くのかと嬉しそうな笑顔を見せた。
「今日からウチも皆と同じ学校に通うんやね」
「……そうだな。入学おめでとう」
「うん、ありがとう！」
入学おめでとう。今日という日にその一言を貰えたことで実感が湧いて来た。
友達が出来なかったらどうしよう、授業についていけないかもしれない、ロボットという事がばれたらどうなるか。
そんな不安をいくつも抱いたまま学校へと来たが、今はそれ以上にこれから始まる学校生活への期待と希望で胸が満ち溢れている。
この後の入学式だけでなく明日以降の授業なども非常に楽しみだとして、ラビリスが早速教室へ向かおうと言いかけたとき、職員室のある管理棟の方から人がやってきてエントランスに来るなり声を上げた。
「あー、いたいた！　有里君、おっそいよー。君は新入生代表だから八時半集合って言ったじゃん」
「寝坊した」
「なるほど！　そっか、寝坊ならしょうがないね。ま、最終確認でしか

ないし問題ないから気にしなくていいよ！」
　やってきたのはグレーのフォーマルドレスに身を包んだ一人の女性。湊とラビリスを除いた一同はその人物を見るなり目を見開き、何故お前がここにいるのだと驚きを隠せない。
「は？　なんでクマモンがいるの？」
「あ、みんな入学おめでとう。新しく赴任してきた社会科教師の佐久間文子です。有里君のクラスの副担任だし、授業は奇数クラス担当だからこの面子じゃ有里君と同じクラスの人しか教えないけどよろしくね」
　そう、現れたのは月光館学園中等部を離れて別の学校に行ったはずの佐久間であった。
　相手はチドリにここにいる理由を尋ねられても気にした様子もなく、他の者が既に知っている自己紹介をして最後にビシッと敬礼して見せた。
　確かに相手は中学と高校両方の社会科教師として教員免許を持っていた。しかし、いくらなんでも赴任先が隣は近過ぎないだろうか。
　ツッコミたいがツッコミ所が多過ぎて何を言えばいいか分からず一同が固まっていれば、再び管理棟の方から人が現れ、その人物も佐久間と同じように湊に話しかけてくる。
「有里ー、他の先生方からバイクの移動指示だ。雨の日は屋根付きの駐輪場の方でもいいが、普段は教師用の駐車スペースの方へ置くようにだとさ」
「ああ、分かった」
　今度現れたのは月光館学園高等部の女子制服の上から白衣を纏う女医、櫛名田姫子。
　相手も佐久間と同じく先月の離任式で去って行った。ここは隣と同じ月光館学園だが、学校体系としてはそれぞれが独立しているので横移動など出来ないはず。
　それでも堂々と学校の制服を着ているということはここで働いているに違いない。一般の生徒よりも関わりのあった部活メンバーであるゆかりは、湊がバイクの移動でいなくなったので一同を代表して

相手に尋ねた。
「なんで櫛名田先生までいるんですか？」
「フフン、はじめまして新入生たち。今年から学校の心理カウンセラーになった櫛名田姫子だ。保険の養護教諭は江戸川という男に取られていてな。代わりに心理カウンセラーにしたという訳だ。なに、安心しろ。こっちにも簡易ベッドは二つある。薬品も学校に取り寄せて貰ったから第二保健室として利用できるぞ」
「いや、あの、有里君持ちで盛大にお酒飲んで送別会しましたよね。いい感じに思い出に残る別れだったのにオチがこれって……」
一応世話になった二人が学校を去るという事で、既に卒業していた部活メンバーも集まって紅花の実家の中華料理店で送別会をした。
その際、二人はタダ酒タダ飯だからと高い物を頼みまくり、スポンサーになっていた湊に四六万の支払いがいったほどだ。
女子らはその金額に驚いて、主役だからと言ってもハメを外し過ぎだと二人に注意したが、湊がゴージャスな黒いカードでスマートに払ってしまったので、金額についてはその後触れず互いの今後の活躍を祈って別れた。
相手は少し酔っていたがちゃんと会話が成立していたため、お世話になりましたと感動した風花が泣く一幕もあったというのに、なんで新しい環境に移ってからも同じ顔を見なければならないのか。
チドリやゆかりが冷めた視線を送っていれば、ニコニコと笑っている佐久間が平然と受け止め答えた。
「入学式のおめでたい日に細かい事は気にしたら負けだよ。今日から君らは高校生。中学生とは責任その他もろもろが違うんだから、いつまでもそんな中学生気分じゃダメだぞ！」
「……社会不適合者が言っても説得力無いわよ」
「うっはー、吉野さんったら厳しい！　ま、何を言ってもクラスは貼り出された通りだし。担任や科目の担当教師も決定済みだから、吉野さんや岳羽さんは別のクラスで別の男子と青春をエンジョイするといいよ！」
副担任だろうと佐久間は湊と同じクラス。対して、チドリとゆかり

は隣のクラスで、さらに佐久間の授業担当からもはずれている。
　これでは何か文句があっても会える機会がほとんどなく。相手が勝ち誇ったように自分と少女らの立場の違いをいってきたので、もしや別のクラスになった理由は相手が仕組んだからではと疑いの目を向ける。
「え、まさか先生いじったんですか？」
「まっさかー、新任の教師がそんな事できる訳ないじゃん。担当だって隣のクラスが同じ社会科の小野先生担任だから一つ飛ばしなだけだよ。副担任になったのは担任は全クラス埋まってたけど、副担任なら空きがあったからお給料を多くするためになっただけだし」
　学校の教師は担任を持ったり部活の顧問になると手当てが付く。なので、佐久間も面倒が増えようが積極的に担任や顧問になろうとしたが、今年は〝有里世代〟と学校が裏で呼んでいる優秀な生徒がエスカレーター式で上がってくるので、高等部では早い段階から中等部の生徒を成績や素行でクラス分けして担任も決めていたのだ。
　そうなると副担任でもならないよりはマシなので、佐久間は空いていた湊の学年の副担任に名乗りを上げたのである。
　けれど、それを聞いてもチドリたちの疑いの目は消えない。逆に副担任になることは妥協しつつ、どのクラスの副担任になるかという点では手を回したのではないかと尋ねた。
「……湊のクラスの副担任になるよう細工はしたんでしょ」
「してないよー。普通にジャンケンで勝ったんだもん」
『ジャンケンって……』
　副担任は担任が休みの日には代行で監督する立場だ。そんな重要な物をジャンケンで決めていると聞いて生徒らは疲れた顔をする。
　話が一段落したところでバイクを移動させた湊が帰ってきたので、佐久間は腕時計で時間を確認して一般生徒は教室に行かないとまずいぞと急かした。
「まぁ、細かい事はいいじゃん。ほらほら移動しないと遅れるよ。皆は行った行った」
　言いつつ、管理棟に戻る佐久間は湊の手を掴んで繋いだまま去って

いく。櫛名田はその様子を見てから生徒らの方を眺めニヤッと口元を歪めて一緒に帰って行くが、新入生代表を連れていくのは分かるが連れていく方法をもっとどうにかしろとゆかりは叫ぶ。

「こら―！　手を繋ぐな―！」

本当は手を繋ぐなの前に〝人の彼氏と〟という単語が入る。けれど、それは一応内緒になっていることもあり、高等部から入ってきた事情を知らない者らにばれぬようゆかりは我慢した。

少女のそんな複雑な乙女心を理解している女子らは肩を叩いて慰め、しかし、本当に時間が迫っていることで移動を開始した。

学校について知らないラビリスは風花と西園寺が連れていき、教室でしっかりと話を聞いて移動した講堂では無事に入学式が行われたのだった。

第百六十八話　高等部での生活

４月１４日（月）
朝――校長室
新学年が始まって一週間が経った月曜日、桐条美鶴は校長室に呼ばれて中で待っていた。
手続きに手間取り時期がずれ込んでしまったが、実は今日から月光館学園高等部にカナダから留学生が来ることになっており、同じ二年生で英語が話せる彼女が代表として彼女を迎える役目を受けたという訳だ。
「あー、桐条君、もう少しでタチアナさんが来られるからね。本校は今後留学生の受け入れや生徒の留学に力を入れることになっているので、君に負担をかけることになってしまうけどよろしく頼みますよ」
「ええ、分かっています。相手も同世代の同性の方が話し易いでしょうし、なんとかコミュニケーションを取って本校での生活を楽しんで貰えるよう努力します」
中等部では湊が留学し、高等部では長谷川沙織という生徒が現在も留学中だが、どちらも交換留学や月光館学園が主体となって送り出した訳ではない。
二人以外にも留学した生徒は何人かいるが、受け入れというのはさらに行われたことが少なく、国際化にも力を入れて行こうとしている学校としては、今回の留学受け入れを留学事業拡大の第一歩として非常に重要視していた。
経営母体グループの令嬢で仕事も一部任されている美鶴も当然それを理解しており、そうでなくとも初めての場所で心細いであろう留学生の少女には優しくしようと思っている。
仮に美鶴が家の用事で休んだとしても英語を話せる教師は沢山いて、意思疎通が出来なくなることはないだろう。そう思って構えずに待っていれば、小さなノックの音が聞こえて二年生の学年主任が校長室に入ってきた。
「失礼します。タチアナさんが来られました」

「うむ。入って貰いなさい」
「はい。では、タチアナさん。どうぞ」
学年主任が脇に避けて中へどうぞと案内すれば、肩に掛かるかどうかという短めに切り揃えられた金髪にグレーの瞳の少女が入ってきた。
白人の中でもさらに白い方ではないかと思われる肌に、やはり寒い地方で暮らすと色素が薄くなるのだろうかと美鶴は考える。
少女が入ってきたことで迎えるために美鶴が立ち上がれば、美鶴が挨拶をするよりも早く少女の方から挨拶をしてきた。
「オーチン プリヤートナ！ はじめまして、タチヤーナ・イワノワ・メドヴェージェヴァといいマス！ よろしく、お願いしマス！」
「え、あ、え？ ロシア語？」
相手の自己紹介を聞いた美鶴は思わず校長を見た。カナダからの留学生だと聞いていて、英語を話せる美鶴なら大丈夫だろうと代表に選ばれたというのに、少女の話す言葉がロシア語だとは聞いていない。
いくら美鶴でもそういくつもの言語を話せる訳ではなく、フランス語ならばともかくロシア語は習得していなかった。
そも、校長と学年主任はタチアナさんと呼んでいたが正確にはタチヤーナで、ロシア式の愛称として呼ぶならターニャが正しい。
タチアナとも呼ばなくはないが、この男たちは相手を英語圏の人間だと思って、勝手にタチアナ読みだと思ったに違いない。
カナダからの留学生なので英語圏の人間だと勘違いするのも無理はないが、相手の学校からちゃんと話を聞いていなかったのかと美鶴は頭が痛くなった。
「あー、私は桐条美鶴です。呼びにくいと思うので美鶴と呼んでください。日本語は分かりますか？」
「ダー、ミツルもワタシをターニャと呼んでください。日本語、ちょとダケわかりマス。日本のアニメやクニーガが大好きで、ずっと来たいとおもてマシタ」
クニーガとは本の事で、彼女は娯楽文化を通じて日本に興味を持っ

たらしい。先に用意していたらしいメモ帳を見ながら頑張って話す姿は微笑ましいが、美鶴はこれで本当にやっていけるのだろうかと不安を覚えずにはいられなかった。

＊＊＊

校長室を出た後、臨時の全校集会が開かれてターニャのことが紹介された。

綺麗な髪や瞳の色に加えて、可愛らしい容姿と片言で頑張って話す愛くるしい姿が好印象だったようで、多くの生徒らが少女を受け入れているのを見た教師らも安堵していた。

しかし、相手が実はカナダで暮らすようになって一年しか経っていないロシア人だと後で判明したように、スタートから不安を覚えていた美鶴の嫌な予感は的中し事件は起きた。

美鶴が彼女の世話担当になったことで自動的に同じクラスに配属された訳だが、昼休みになって　パンを持って来ているターニャに対して美鶴は食堂で昼食だった事で、他の生徒らがちゃんと見ているので食べて来ていいと言い、美鶴もその言葉に甘えて教室を出て行った。

そして、生徒たちが一緒にお昼を食べようと彼女の周りに集まり、質問やこの学校のことなど色々なことを話しかけていると急に相手が泣きだしたのだ。

周りの人間は何故相手が急に泣きだしたのか分からず、生徒らが戻ってきた美鶴にすぐ助けを求めても、泣きながらロシア語で話されたところで美鶴には相手が何を言っているのか理解出来ず困ってしまう。

直前にどんな話をしていたのか聞いても泣く要素が見当たらず、留学生が泣いていると聞いて学年主任や英語科の教師らがやってきたが結果は同じだった。

「どうしましょう。急ぎで通訳さんに来て貰った方がいいですかね？」

「しかし、そんな呼んですぐに来てくれる通訳がいますか？」

教室の入り口のところで学年主任と英語科の男性教師が話し合う。

ターニャも落ち着けば少しは日本語が話せるのだが、一向に泣き止まず顔を手で覆ってしまっているので、教師や他の者が困るだけでなく、彼女にとっても留学が辛くなってしまうかもしれない。
それならば無駄に費用はかかるけれど、通訳を呼んで理由を聞いてもらい。早期に事態の収束を計った方が傷も浅く済むはずだった。
ただ、そうなるとどこから通訳を呼べばいいのだという話になってくる。英語やフランス語ならば沢山いるだろうが、すぐに来てくれるロシア語の通訳などいないのではと思ってしまう。
教師らは携帯電話を使って色々と検索しているが、美鶴はいっそグループの方から派遣して貰おうかと思っていれば、集まった野次馬らを避けて真田がやってきた。
「美鶴、どうかしたのか？」
「明彦か。いや、留学生が急に泣きだしてな。喋っていたら突然泣き出したようで、何を話していたか生徒に聞いても何が理由で泣いたか分からないんだ」
「それなら本人に聞けばいいだろう」
「泣きながらロシア語で話されても私も含めてロシア語を理解出来る人間がいないんだ。それで先生たちも急ぎで来られる通訳を探そうかと話しているところだ」
聞いて分かればとっくにやっている。ロシア語の会話入門を図書室から取ってこようかという意見も出たが、ああいった物はパターン化した会話例文しか載っていないので、こういった理由があって泣いたなど一歩踏み込んだ会話になると対応できないのだ。
インターネットの翻訳サイトも同様で、短い文章ならばちゃんと訳せるが、長い上に砕けた表現の入る口語になってしまうと訳した際に支離滅裂な文章になる。
それではまるで役に立たないので、先生たちもいま必死に呼べそうな通訳がいないか探しているところだと伝えれば、真田は不思議そうに首を傾げながら返した。
「何をそんなに悩んでいるのか知らんが、通訳して欲しいなら有里を呼べばいいだろ。美紀が言っていたがあいつ十ヶ国語以上話せるぞ」

瞬間、周りの人間が一斉に振り返った。急に多数の人間が見てきたことで真田もビクリと肩を跳ねさせたが、言われてみれば万能ツールの様な生徒がうちにはいたと教師らも頷いている。

そして、湊が本当にロシア語も話せるかは不明だが、現状頼れるのは一人しかいないと学年主任が職員室にいる教師に電話し、湊に二年生の廊下まで来てくれるよう校内放送をかけてもらう。

たまに学校にいない事もあるが、今日は職員用の駐車場にバイクが置かれていたので確実に来ている。

頼んだ放送が流れ、さらにしばらく待っていると、春だというのにまだマフラーを巻いている長身の青年がやってきた。

非常に面倒くさそうな顔をしているが今は彼に頼るしかない。学年主任は彼に歩み寄るなり用件を伝えた。

「昼休み中に申し訳ない。実は頼みがあってタチヤーナさんから話を聞いて貰いたいんだ。私たちの中でロシア語が分かる人間がいなくてね。君が色々な言葉を話せると聞いたんだがロシア語も大丈夫かな？」

「……筆記はまだ中途半端ですが日常会話くらいなら」

会話が出来るなら十分である。教師らが早速頼めば湊は教室に入ってターニャの元まで進み、顔を覆っていた手をどけた少女と会話を始めた。

少女の方から早口で巻き舌気味な発音の単語がいくつも出るも、近くで聞いている美鶴らは一つとして理解出来ない。けれど、青年はちゃんと頷いて似たような発音でしっかり返しているので、上手く会話は成立しているようだ。

会話を続けて行くうちにターニャは落ち着いた様子になり、湊がハンカチを渡すと席を立って教室を出て行った。

彼女の向かう先にあるのは女子トイレ。中に入って少しすれば前髪が僅かに濡れた状態で出てきたので、顔を洗ってから湊に渡されたハンカチで拭いたようだ。

戻ってきたターニャは廊下に出てきた湊の隣に並んで教師の傍までやってくると、申し訳なさそうな顔をしてペコリと頭を下げた。

「プラスチィーチェ……」
「彼女はなんて？」
「すみません、と泣いて騒がせてしまったことを謝罪したんですよ」
単語ならば聞き取ることは出来たが意味までは分からない。ポケットに手を入れて面倒そうな顔をしながらも、湊がちゃんと通訳してくれて助かったと教師らは安堵の息を吐いた。
そして、一体何が原因で泣いたのかと尋ねれば、先ほど理由を聞いていた湊が要約して説明してくれた。
「急に色々と質問されたり話されたりして混乱したらしいです。ちゃんと返したいけど中々言葉が出なくて、詰まっているうちに次々と来た事でパニックになり泣いてしまったと。一応、訊かれて他の人は悪くないですと伝えたつもりだったようですが、それが伝わってなくて余計に人が集まって、どうしたらいいか分からなかった事でさらに泣いたようですね」
『なるほど』
言われてみれば納得と他の者が頷く。
慣れない土地で皆から歓迎されるのは嬉しいが、それが過剰になってしまうと話は変わってくる。仲良くなる第一歩として互いを知るためとはいえ、一度に色々と聞かれても日本語が達者でないうちは返事に少々時間がいった。
真面目な性格なようで全員にちゃんと返事をしたいのに言葉が出ず、まだ完璧には聞きとれない異国の言葉で次々に喋りかけられたターニャの頭は限界を迎え、どうすればいいのか分からず思わず泣いてしまったのだとか。
それを聞いた教師らは彼女と一緒に昼食を摂っていた生徒らへ、話すときはゆっくり一人ずつ話してあげて欲しいと頼み、自分たちが困らせて泣かせてしまったと理解して彼女に謝った。
これで事態は一応の解決は見せたが、咄嗟に対応出来る者がいない状況よりも、話せる相手がいた方が良いのだろうかと教師らはターニャを湊のクラスへ編入させるかを話し始める。
美鶴もターニャ自身のためにそちらの方がいいのではと考えたが、

教師らが話していたときまだ残っていた湊が、ターニャの顔をジッと見つめて口を開いた。
「ヴィ　ズナーイシ　ナターリア・イリーニチナ・メドヴェージェヴァ？」
「ヤ　ズナーユ！　彼女はワタシのおばさんデス。知り合いでしたか？」
「ああ、一時期彼女のとこにいたんだ。似ているからもしかしてと思ったが本当に親戚だったとはな」
　ターニャの容姿はラナフで民間軍事会社を経営しているナタリアに似ていた。名字も同じだったことでもしやと訊いてみれば、ターニャは驚いた顔をした後にすごい偶然だと笑顔になった。
　相手が似ていたのは彼女の父親がナタリアの弟だから。カナダへ引っ越したのは母親の仕事の関係だが、ナタリアには可愛がって貰っていたので、ナタリアという共通の知り合いが結んだ奇妙な縁にターニャも嬉しそうである。
　途中から日本語で会話していたので二人の話は教師らにも聞こえており、湊が携帯で撮ったナタリアと一緒に写った写真を見せて話しているところへ、盛り上がっているところ申し訳ないと声をかけた。
「あー、有里君は彼女の御親戚を知っているのかな？」
「ええ、留学中にお世話になった女性が彼女のおばさんらしいです。彼女がここを留学先に決めたのはその人から勧められたのもあったようで、連絡は聞いていませんが遠回しに俺のところへ送ってきたみたいですね」
　湊の通っている学校を調べるのは簡単だった。本名は知っていたので、情報屋の五代の経営するカフェのある地域を基準に近くの学校を調べればいいだけである。
　もっといえば、最近は籠球皇子として有名になっていたので、名前で検索すれば画像と一緒にどこの学校に通っているのかも分かる。
　ナタリアはそういった点から学校を見つけ出し、以前から日本に行きたがっていた姪が留学先を探していると聞いて、ロシア語も普通に話せる湊のいる学校を勧めたのだった。

そういうことなら、先に連絡をくれればいいのにとは思うが、問題がなければ湊に頼らず他の者と会話した方がいいので、ナタリアもギリギリまでターニャが自分でなんとかするように考えていたのだろう。

あくまで留学したターニャのことを考えてであって、後々に湊に負担が掛かる事を一切考慮していないのが実に彼女らしいところである。

ナタリアには後でちゃんとメールか電話で連絡を入れることに決め、ターニャと連絡先を交換しておいた湊は自分の教室へと帰ろうとする。

しかし、学校側としてはここで彼に去られても困る。言葉が分かる上に共通の知り合いを持った仲だというのなら、やはり湊にこそ彼女を任せようと思った。

「有里君、ちょっと待ってくれ。実はタチヤーナさんを君のクラスへ編入させるべきかと話していて、言葉も分かるし知り合いを通じた縁があるなら世話係になってくれないだろうか？」

「……留学の意味わかってますか？　確かにそうすれば楽でしょうが、留学生とうちの生徒から異文化交流の機会を奪う事になるんですよ。互いに相手を理解しようと意思疎通の方法から探るのも立派な勉強です。出来る限りは自分たちでやらせるようにしてください」

たまに真面目な事を言うからこの青年は扱いに困る。実際はやる気のないスタンスを取っているだけで、行動や仕事への責任は人一倍なのだが、どうしても見た目と普段の言動でギャップを感じてしまう。

留学の意味を考えれば彼の言う通りであり、学校側としても今回の様なケースは距離感を掴めていないからこそ起きただけだとは分かっている。

なので、結局はターニャに今のままでもいいかを尋ね、言葉の通じる湊と一緒の方がいいと答えればクラスを編入させることにするも、ターニャは今のクラスのままが良いと答えた。

このままクラスが変わっていればしこりが残ったはずなので、彼女

を泣かせてしまった生徒もお別れにならずに喜んだ。
　そうして、湊は自分の仕事はここまでだと教室へ帰ろうとする。後ろ姿を見送っていたターニャは来てくれてありがとうと礼を言って手を振った。
「バリショーエ　スパシーバ　ミナト！」
「ああ、困ったら連絡するといい。俺のクラスは四階の1―Eだから訪ねて来ても良いぞ」
「ダー！　了解しましたデス」
　可愛らしく敬礼で了解したと答えたターニャだが、湊はその敬礼が旧ソ連陸軍式である事に気付いていた。
　きっとナタリアが教えたのだろうが、まさか射撃や格闘術を仕込んではいないよなと不安を覚えずにはいられなかった。
　放課後――生徒玄関
　留学生の相手をして精神的に少し疲れた湊は、まだ部活の仮入部期間にすらなっていないので、元部活メンバーにラビリスを足した面子で集まって帰ろうとしていた。
　もっとも、湊はバイクで来ているので駅までしか一緒になれないが、他に何台も持っているので本人的には置いて帰っても構わないと思っている。
　雨の日のことを考えて湊もラビリスも定期券を持っているため、電車に乗ったところで余分なお金は掛からない。
　それを知っているからこそ、バイトがないならどこかへ遊びに行こうかと話していたとき、生徒玄関についた湊たちを待ち構えている人物がいた。
「有里、放課後だ。そろそろ再戦と行こうじゃないか」
　現れたのは真田だった。今日は相手の部活も休みなので暇なのかもしれないが、以前、負ければ卒業まで試合に誘わないと約束して試合をしたはず。
　これでは立派な契約違反だと湊は溜め息混じりに返す。
「……卒業するまでもう言わないって約束だったはずですが」
「ああ、中等部を卒業したことで、ようやくリベンジマッチに臨めると

いう訳だ」
再戦に燃えて獰猛な笑みで話す真田の話を聞いて、ラビリスを除く女子たちはなるほどと感心する。
確かに湊は月光館学園を卒業するまでとは言っていない。それならば中等部時代に試合をしたので、範囲を中等部卒業と見なす事も出来る。
まぁ、本人がとても嫌そうな顔をしているので、そんな屁理屈を言ったところで受けて貰えるとは思えないが、相手の実力を知らず中学時代の試合の事も知らないラビリスが、相手が体型的にボクサーだろうと当たりを付けつつ尋ねた。
「湊君、この人って強いん？」
「アマチュアにしては、という条件が付くがかなり強い方だな」
「へぇ、ボロ勝ちしてたから貶すと思ってたのに、有里君も真田先輩の実力は認めてたんだね」
「最初から認めてただろ。そうじゃなきゃ、わざわざ公式戦に影響のない日取で試合なんか組まないさ」
湊が他人の実力を評価するのは珍しい。いつもいじって遊んでいたので、てっきり馬鹿にしていると思っていたゆかりは意外だと驚いた顔をした。
もっとも、それはゆかりや他の者が勝手にそういったイメージを持っていただけで、湊は自分の基準だけでなく客観的な評価で冷静に相手を測る。
能力を把握していれば仕事の分配など様々な点で役立つので、アナライズまで駆使した湊の能力分析はちょっとしたものだった。
ただし、そういったものに興味のない真田は、ちゃんと話を聞けと湊に再び話しかけてきた。
「有里の中での評価などどうでもいい。お前の知っている以前の俺はとっくの昔に消えたからな。フォームから筋肉のバランスまで徹底的に研究して肉体改造に励んだ。おかげで試合では物足りなくなってしまったほどだぞ」
言われてみれば確かに真田の体型は以前と少し変わっていた。全

体的には線が細い印象を受けるが、肩幅が以前よりも広くなっているように見える。
湊も名切りとして覚醒してから付け過ぎた筋肉の総量を減らして、より効率的に肉体を動かせるバランスに調整し直した。
おかげで線は細くなったというのに、瞬発力や柔軟性は増したので、真田もそれと似たようなことを敗北後に行って来たらしい。
アマチュアの高校生でそれらを行い成果を出したのは純粋にすごい。だが、だからと言ってすぐに湊にリベンジしようとするのは無謀である。
今まで黙っていたチドリは、若干呆れを含みつつとても不思議そうにしながら口を開いて来た。
「……前から気になっていたのだけど、貴方って目でも悪いの？」
「いや、視力はどちらもAだぞ。何を持って目が悪いと思ったんだ？」
彼は裸眼でもかなり遠くまで見える。遠近だけでなく動体視力も優れているので、チドリがどうして急に目が悪いか聞いて来た理由が分からないらしい。
すると、そんな真田の様子で彼女は逆に納得がいったらしく小さく漏らす。
「なるほどね。問題は目じゃなくて頭というか知識の方みたいね」
一見失礼な言い方だが、本人は別に真田のことを馬鹿と言っている訳ではない。
しかし、まわりの人間は彼女が何の話をしているのか分からないので、相手が再び口を開くまで待った。
少し考える様子を見せていたチドリは、顔をあげて真田を正面から見返すとある言葉について尋ねる。
「攻撃の予測軌道って見える？」
「予測軌道？　それはこう構えていたらこんな攻撃が来るだろうってやつか？」
「ええ、構えてなくても存在はするんだけど、それも見えないんじゃ試合する意味はないわよ」
言葉自体は知らなくとも意味はおおよそ理解できている。それを

確認したチドリは移動しましょうと言って、真田にボクシング部の部室まで案内させた。

＊＊＊

リングやトレーニング器具の置かれた部室に到着すると、チドリは鞄から体操服のハーフパンツを取り出してスカートの下に穿いた。

動いてスカートがめくれても下着が見えないようにという措置だが、今日は部活が休みで他に誰もおらず、男は湊と真田だけなので主に真田対策といったところだろうか。

全員に荷物を置いておくように言って、何もないスペースに立ったチドリは先ほどの言葉について動きも含めて説明しはじめる。

「蹴りはないパターンでいくけど。例えば、左足を一歩前に踏み出した状態だと、強いパンチを右手で打つ可能性があるでしょ。体重移動に入っているから足は動かない。なら、腰と肩の位置で発射点は決まってくる」

体重移動の最後に多少足がずれることはあるが、ちゃんと攻撃に体重を乗せようとすれば足は踏み込んで固定される。

足が固定されれば射程は限定され、さらに攻撃の発射点となる腕と補助の役割を果たす腰の位置でより特定し易くなる。

「少し腰溜めならほぼ真っ直ぐしかこない。つまり、逸れるような軌道は除外できる。この時点で軌道は縦一列の範囲に絞られるわ。分かっているなら迎撃するでもいいし、躱してもいい。一般の選手はこれを経験則と勘でやってしまうけど、訓練すればもっと正確に予測軌道として見えてくるようになるのよ」

中国拳法でよくみる腰溜めの拳は、殴る腕側の入りと反対側の引きの回転運動で拳を放つ。その際、余計な動きを入れると威力が逃げるので、足が前後に開かれている状態ならばほぼ正面にしか打たれない。

腰と肩の位置を線で結び、そこから正面に真っ直ぐの軌道へ来ると分かれば、後は避けるのも反対に打ち込むことも可能になる。

ほとんどの選手は、知識がなくともここに腕があればこんなパンチが来ると経験で知って、試合中はその範囲を警戒しながら戦ってい

る。
だが、それらは訓練する事により正確に目で捉えられるようになる。勘ならば外す事もあるけれど、目で見えていればほぼ外さない。
「そして、見えてくれば今度はこれを攻撃に転用できる。見えていなくて感覚でやってる相手なら、動きの中で予測軌道を出すだけで簡単に引っ掛かるわ。フェイントの動きをしなくてもフェイントになるし牽制にもなるのよ」
勘でやっている者は、経験上の判断で動くので反射的に動いてしまう事が多い。頭で考えるよりも速く動ける利点があるが、反対に引っ掛かり動いてしまった事で相手に絶好のチャンスを与えることにもなり得る。
勘で出来るのは予兆の感知、見える者がしているのは予測軌道の認識。この二つには大きな違いがあり、予測軌道を攻撃に転用できれば、自分の構えにフェイントという余計な動きを入れずに、相手に勘違いさせて隙を生み出すことが可能だった。
「本人の身体能力も関係してくるけど、完璧に予測軌道が見えれば理論上攻撃は受けなくなる。逆にこっちからは見えない拳を出し続けていけるのにね」
フェイントを入れていないのに同じ効果を発揮する。相手にしてみればどれが本物か分からず、かといって反応せず本物だったなら大打撃を受けるので動くしかない。
それらを説明し終えたチドリは、急に構えを取って真田をしっかりと見据え、一定のリズムで足捌きを見せながら接近する。
流石にボクシングのチャンプだけあって真田もすぐに反応し構えるが、チドリが拳を用意しながら左足で大きく踏み込もうとした際、咄嗟に自分から見て右側に避ける動きをしてしまう。
けれど、それは途中の動作でしかなく、チドリは足を踏み込むのと同時に左手の拳を放った。
チドリの拳は回避に動いていた真田の腕に当たり、パンッ、と弾けるような音をさせて相手を後退させる。
そこで実演は終了だとチドリは構えを解いて、これで分かっただろ

うと予測軌道の重要性について真田に伝えた。
「貴方が次の段階へ行くには予測軌道が見えるようになるのが最低条件。そうじゃなきゃ、あり得ない軌道にすら反応して、逆に見えづらいけど存在する位置から攻撃されるわよ」
先ほどのチドリの攻撃は少し大きめに歩幅が取られていた。体重を乗せて拳を放つならば、必要以上に歩幅を開くと踏み込みが甘くなり威力が落ちる。その時点で体重を乗せられない右の可能性は排除され、踏み込みと同じ側の拳を突きだすというボクシングにはないタイプの攻撃という結論に至れるはずだった。
けれど、真田は先ほどの話で左足で踏み込めば右のパンチが来ると言っていたことが頭に残っていたせいで、咄嗟に右が来ると判断してつい動いてしまった。
攻撃を受けた後だからこそ、自分が存在しない攻撃に反応して、別の可能性を完全に排除してしまったと真田は理解出来た。
彼は一部で脳筋のように思われているが、学業の成績は優秀でトレーニングにも科学的な理論を取り入れるなど、ただひたすらに鍛錬すれば良いと思っているような単純馬鹿ではない。
故に、相手が後輩の女子であったとしても、自分の知らない次なるステージを示して来たことに素直に感謝し、まだまだ鍛える余地があることに嬉しそうに笑った。
「吉野、感謝するぞ。まずは関節の可動域について調べれば良さそうだな。以前の試合じゃフェイントの間と言えばいいのか、それが有里からまったく読めなかったんだ。理由がそこにあるとすれば学ぶ価値はある」
やる気を漲らせた真田は拳を掌に打ちつけ、早速今から研究だと鏡に向かってゆっくりとシャドーを始める。
きっと先ずは特定のフォームから繰り出せる攻撃のパターンを頭に叩きこむのだろう。それが終われば他の者に協力して貰いながら、個人ごとに少しずつ違っている攻撃の軌道をみて、徐々に正確さをあげて最終的に予測軌道を視認できるようにするに違いない。
実際は既に予測軌道の視認を習得している格上の相手に鍛えて貰

えば、才能のある者なら一ヶ月ほどで見えるようになってくる。
少しでも見えれば徐々に分かってくるようになるので、真田の方法ははっきり言って遠回りになるのだが、習得が遅れればその分再戦の申し込みも遅くなる。
チドリはそこまで考えた上で真田に伝えたのだが、ハーフパンツを脱いで鞄に仕舞った彼女は、他の者らに帰ろうと告げて部室を出て行きながら湊に話しかけた。
「これで期間が延長されたわよ」
「……まぁ、一応感謝しておこうか」
「ええ、今度デートで何か奢ってくれたらいいわ」
チドリと一緒に出掛けるときは基本的に湊が支払っている。チドリも小物や本を買うときには自分で払っているが、食事代は全て湊が自分から払うと言って彼女に払わせないので、奢ってくれればいいというのは結局気にするなというのと同義だ。
ただし、それは二人にとってはの話であり、デートという単語が聞こえたゆかりが目を細めて湊の背中に拳を一発入れ、他の者はその様子に思わず苦笑して帰っていった。

第百六十九話　放課後の取り引き

４月２５日（金）
昼休み――１―Ｆ教室
昼休み、それは午前中の授業で溜まった疲労を腹を満たすことで癒すリラックスタイム。
湊の昼ご飯はラビリスが作ってきた弁当で、入学当初は購買や食堂を利用していたラビリスも、移動時間が勿体ないから自分で作った方がいいと弁当を作る様になった。
そうして、ラビリスや風花が集まって来て一緒に弁当を食べていれば、教室の扉が開いて男子が入ってくるなり湊の元まで真っ直ぐやってきた。
「有里。頼む、バスケ部に入ってくれ！　皆、お前のプレーを見たがってる」
入ってきたのは隣のクラスの宮本。去年の大会で出会った彼は高校から月光館学園に通い出した。
今週の頭から部活に入れるようになり、バスケ部に行ったら湊がいなくて、初日からは入っていないのだなと思っているうちに週末になり、中等部から上がってきた他の者から多分入らないんじゃないかと聞いて直接勧誘に来たという訳だ。
彼のクラスには渡邊だけでなく、去年の大会で宮本の足を潰そうとした忍足もいるらしい。それぞれのマネージャーは高千穂や友近の幼馴染である理緒と同じ別のクラスということで、色々と気まずい空気もあるもののバスケ男子で趣味は合うので話自体はしているとはゆかりの談だ。
「……俺のプレーが見たければ販売している試合のＤＶＤを買えばいい」
「そういうのじゃねぇって。お前も早瀬との試合で燃えただろ？　去年はまわりの人間がついていくのがやっとで地力の差で負けた。けど、今年から俺や忍足にレベルアップした渡邊たちもいる。それなら夏にリベンジしかないだろ」

彼の言う通り今年の一年生は粒が揃っている。中学時代にレギュラーやエースを張っていた面子もいるので、単純な個人の技量で言えば上級生に勝っている者もいるくらいだ。

チームスポーツなので一人が強くても勝ち続けることは出来ないけれど、戦力に厚みが出ている今、全中で最優秀選手に選ばれた湊がいれば古豪、強豪にも十分通用するチームになることは間違いなかった。

売上は全て寄付するという条件で販売された試合のＤＶＤなど、出てすぐに買って何度も見直している宮本にすれば、出来るだけ早く湊と一緒にプレーして全国レベルというものを体験したいと思っていた。

仲間だがライバル。そういう関係で切磋琢磨してチームが強くなれば早瀬にも勝てる。だから早くお前も合流しろと強く誘えば、湊は箸で唐揚げを口へ運びながら呟いた。

「ん、今日の唐揚げはいい感じだな」

「あ、それ塩麹つかってみたんよ。病院で主婦さんがおしえてくれてん」

「真面目に聞けよ！　全国だぞ、全国。日本中の高校バスケプレイヤーの夢の舞台に立てるんだって。優勝だって狙える可能性があるんだから才能を無駄にするなよ」

湊としては醤油ベースの唐揚げの方が好みだが、塩麹によって柔らかくジューシーに仕上がった塩唐揚げも悪くないとご飯を口に運ぶ。

研究所だけでなく病院の方にも顔を出している事で知り合いになった主婦さんに教わったラビリスは、試しにやってみたが上手に出来ていたなら良かったと可愛らしい笑みを浮かべた。

しかし、完全に話をスルーされていた宮本は語気を強めて、それだけの才能を帰宅部なんかで腐らせておくなと告げた。

確かに湊は全国でもトップレベルのプレイヤーだ。中学時代は早瀬以外に相手をできる者はいなかった。それは高校に上がってからもほぼ変わらず、きっと彼と一人で相対できる者など十人もいないだろう。

トッププレイヤーは大きな大会でしかライバルと戦えないが、それだけに相対すれば化学反応を起こす様に互いに自らの能力の全てを解放して飛躍的に成長を見せる。
昨年の湊と早瀬の試合でそれは既に証明されており、ここで湊が抜けてしまえばトッププレイヤーらの成長の機会が一つ減ることになり、長い目で見れば日本バスケ界にとって大きな損失であるとも言えた。
バスケが好きでも頭はイマイチな宮本はそこまで考えられていないだろうが、野生の勘で何かしらを感じ取っているらしく、お前のいるべき場所はここだと湊を強く勧誘していれば、ポテトサラダを飲み込んだラビリスが一つ教えておこうとある情報を口にした。
「ってか、湊君は放課後に色んな部活回ってるからその内バスケ部にも行くと思うで」
「え、そうなのか？」
それは本当か。宮本が湊を見ればコクリと首肯した。
しっかりと確認した宮本は嬉しそうに顔を輝かせ、熱くなって前のめり気味になっていた姿勢を戻して満足気に頷く。
「じゃあ、お前が来るのを待ってるよ。来たときはミニゲームでもしようぜ。直接やったことないから楽しみにしてたんだ」
「……ああ、行ったときはな」
「うっし。そんじゃ勧誘はこれくらいにしとく。邪魔して悪かったな、午後も頑張れよ」
負けず嫌いで諦めも悪いがしつこい性格という訳ではない。湊が来てくれるならこれ以上は言わないと、宮本は手をあげて別れを告げると帰っていった。
食事中だというのに随分と騒がしかったがこれで安心して食事を再開できる。湊がやれやれと疲れた顔をしていれば、今まで黙ってやり取りを見ていた風花が何か引っ掛かったらしく首を傾げた。
「あれ？　有里君が色んな部活回ってるのってラビリスちゃんの付き添いじゃなかったっけ？　それだと男女で分かれてるバスケ部は女子バスケ部の方しか行かないんじゃ」

そう、確かに湊は放課後に少し部活を回っているが、それは部活に入ろうとしているラビリスの付き添いであった。
湊自身は部活に入るつもりはなく、元部活メンバーと佐久間からは高校では美術工芸部はどうするのか聞かれているが、美術部があるので入りたい人間は自由にすればいいと答えている。
元々、美術工芸部はチドリが入ろうと思っていた美術部がないからと設立したものだ。正確には休部状態で顧問がまだいたから佐久間が自分も顧問になりたいと作り直したのだが、どっちにしろ美術部が存在して部員数も足りているなら湊が入る理由はない。
ただでさえ学校に時間を取られて研究が出来ないのだ。生体パーツの研究もスタートしており、自分の細胞で生体パーツが完成したら、今度はラビリスとアイギスの生体ボディを作らなければならない。
黄昏の羽根を遺伝子として代用した核で作った細胞が、無事に二人の姿で成長するか分からない以上、湊は研究室に籠もって別の姿になる可能性を排除するにはどうすればいいかを研究したかった。
しかし、人の中で暮らすことにまだ不慣れなラビリスを一人にはしておけない。
ゴールデンウィークを過ぎれば、この学校での過ごし方に慣れて、風花をはじめとした友人と共に彼女も学校で自由に動けるようになるはず。湊もそれまではラビリスに合わせて学校にちゃんと通っておこうと思っており、彼にとって必要のない部活動に精を出すつもりはなかった。
「……俺は行ったときはと言ったんだ。行くとは言ってないし、行かなければ何もする必要はない。ほら、嘘はついてないだろ？」
「フフッ、それ詐欺やん」
嘘はついていない。薄く笑って口元を歪ませる青年に、ラビリスは言葉遊びでしかないと苦笑する。
二人のそんなやり取りを見ていた風花は少女の反応を意外に思い。自分が彼女に対して真面目で不正等を許さない性格のイメージを持っていたことを伝えつつ尋ねた。

「えーっと、ラビリスちゃん的にはいいの？　嘘とかそういうの嫌いみたいだったのに」
「いいとは思てないけど、さっきの人も結構失礼やったし多少はええかなって」
「え、強引ではあったけどそんなに失礼だった？」
　食事中にやってきて熱心な勧誘をしてきたので、それを失礼だと断ずることは出来るが、言うほど酷いとは思えなかった。
　風花がそれを伝えればラビリスも笑って「別にそこはかまへんよ」と返し。では、何がそこまでに失礼に感じたのだと答えを待っていれば、ラビリスは口の中の物を飲み込んでから喋り出す。
「才能を無駄にするな、って言ってはったやろ？　確かに活かせるならそれに越したことはないけど、でもそれは本人も望んでたり納得した上での話やん。才能だけで判断して本人の意思を無視するのはよくない思うんよ」
　人は用途が決められて作り出された機械ではない。何にでもなれるし、何にだってなっていい。
　心を持った機械というどちらでもない立場だったラビリスは、湊にその事を教えて貰って今ここで学校生活を楽しめている。
　だからこそ、才能という枠に嵌めこみ本人の意思を蔑ろにする者に、かつての自分や姉妹機を道具として扱っていた者らを重ねてしまい。ラビリスはあまり良い気分がしなかった。
　それを聞いた風花はなるほどと頷いてホウレン草とベーコンのソテーを口に運ぶ。才能を持っているばかりに、周囲が期待を押しつけて本人が思い通りに生きられないというのは、成績ばかりを気にして個人をあまり見ていない親と自分の関係に通じるものがある。
　身内がそういった目で見てくるのと不特定多数が見てくるのはどちらが辛いか。風花にはその答えは分からなかったが、相手が嫌がっているならダメだよねと、再び誰かが勧誘に来ても湊自身の考えを支持しようと思った。
　放課後――長鳴神社
　学校が終わると湊は部活見学をせずに、そのままラビリスを乗せて

バイクで長鳴神社まで来ていた。
石段の下にバイクを止め、ヘルメットを脱いで歩けば、一台の黒いバイクが止まっており、そこで荒垣が座って待っていた。
「……今日は暇なんですか？」
「そう毎日バイトばっかやってられねえだろ」
以前、湊から免許を取る様に言われた荒垣は、しっかりと教習所で技術を磨いて勉強にも励み、二月中には既に免許を取得していた。
夏は暑く、冬は寒い。雨も風も凌げず、バイクとはひたすらに不便な乗り物だがロマンがあった。
オフシーズンとも言える真冬に免許を取得した荒垣だったが、彼は手に入れたばかりの免許を携帯しながら、本屋で雑誌を眺めバイクショップを巡って様々なバイクを見た。
そして、財布と相談しつつ自分が乗りたいバイクを見つけて金を貯めようと思っていた頃、制御剤の追加注文と免許を取得したことを伝えるために会った湊から、そのバイクなら持っているからあげると言って２００５年式ゼファーχを譲り受けたのである。
初めてのバイクは自分で買いたいという気持ちと、こんなチャンスは二度とないという気持ちの間で揺れ動き。湊から最初は立ちゴケしたりするので、中古バイクで練習してから欲しいのを買った方がいいと勧められ甘えることにした。
もっとも、中古バイクと言いながら車体は新品同様で、細かな部分にまで手入れが行き届いており、パーツもグレードの高い物に変更されていたので、住んでいるアパートの近くのバイク屋に手入れの仕方を聞きに行ったところ、本体代込みで百三十万はいくぞと言われ驚いた。
流石にそれは受け取れないと電話するも、湊は通学用や普段使いのバイクを含めて中型だけで五台以上持っており、整備を頼む代わりに乗っていいという変則的ながら結局は荒垣に譲渡する形で話をまとめられてしまう。
以降、その事をしつこく言わなくなったが、今でもバイクの調子を細かく伝えるなど、荒垣は湊に感謝して大切に乗っていた。

綺麗に洗車されワックスでコーティングされたピカピカの車体を見ながら、湊はポケットに手を入れると錠剤の入った瓶を荒垣に投げて渡す。
「……これ、追加の二ヶ月分です」
「ああ、悪いな。今回の支払いはなんだ？」
「いえ、召喚器のコピーで結構助かったので半年分は費用はいりません」
本人には伝えていない偽の制御剤の代金をいらないと断った湊は、彼に借りて特別課外活動部の召喚器をコピー出来た事を実際に感謝していた。
以前、二度目の神降ろしを行った日に使っていた召喚器は、いつか素性を隠しても戦えるようにと準備した物だ。
顔を隠した謎の人物が、特別課外活動部の召喚器を使って法王〝カストール〟を呼び出せば、荒垣を知る人物なら当然荒垣本人だと認識するだろう。
奪ったペルソナは元の能力ではなく、召喚者である湊の力を基にスキルやステータスが決定する。
よって、変装してカストールしか使えずとも、弱くてまるで戦えないという事にはならない。
特別課外活動部タイプの召喚器をコピーして五つ製作し、オリジナルを荒垣に返した湊は、ちゃんと自分が荒垣のフリをする可能性を伝えており、本人からもそれで人を殺さないなら勝手にしろと許可を得ている。
女性を殺した直後は精神的に不安定というのもあり、湊が裏に通じた人間と知って壁を作っていたが、バイクに乗る様になってから少しは落ち着いて以前と同じ距離感を保っていた。
けれど、会話の内容には少々の変化があり。荒垣は受け取った瓶をポケットに仕舞いながら湊に一つ尋ねる。
「なぁ、有里。お前はなんでシャドウと戦ってるんだ？」
「部屋に虫が入ってきたら殺すでしょう。そんな感じですよ」
自分たち特別課外活動部よりもずっと強いストレガやラビリス。

それと比較して尚、底の知れない実力を秘めた青年が戦う理由に荒垣は興味を持った。
ペルソナは心の力だ。何かしらの決意があってこそ強さも増すはず。そう思っていたのに、湊は何でもない事のように答えて当てが外れる。
しかし、彼がただ特殊な可能性もあるので、荒垣は気を取り直すと青年の隣に立つ少女にも同じ質問をぶつけた。
「お前はなんで戦ってる?」
「んー、なんでって訊かれると困るけど、湊君の傍にいようおもたら戦う力も必要やからかな。今のとこは自分の力を把握して効率的に使える方法を探しとるから、こう何か使命感を持って戦ってる訳やないんよ」
何か特別な理由などない。強いて言うなら湊の傍にいるという目的のため、手段として戦っているだけに過ぎない。
対シャドウ兵器として生み出されながら、今の彼女にとってシャドウ討伐は最優先事項ではなくなっていた。
目の前で困っている人がいれば助けるし、シャドウが人を襲っていれば蹴散らす。しかし、そのために生きているのではなく、平和に暮らしている中でそんな場面に出会えば動くだけだ。
命令でも何でもない自分の意志でそうしたいからそうする。封印を解かれて人の中で暮らす様になった彼女は、既に他の者らと変わらないほどに精神の成長が見られた。
もっとも、荒垣はラビリスがロボットだとは知らない。何故か湊と一緒にいる新顔の少女というくらいの認識なので、こんな少女まで戦い自体には何の決意もなく臨んでいると聞いて複雑な表情を浮かべる。
すると、マフラーから取り出した煙管を咥えていた湊は、相手の様子から何を考えて今の質問をしたのかを見抜き、随分とくだらないことで悩んでいるなと嘆息する。
「……先輩も理由なんてなかったでしょう。知らないうちに真田先輩が戦ってて、自分も同じ力があると分かったから手を貸してた。強い

て言うなら幼馴染が無茶しないように見てたってとこですか」
「テメェのそういう人の心を見透かしたような言い方は本当にムカつくぜ」
人は図星を突かれると驚き、それが後ろめたい負の面であったなら苛立ちすら感じる。
けれど、ポケットに手を入れたまま煙管を口のところで遊ばせている青年は、以前から人の心を読んでいるのかという発言が度々あった。
そのおかげで彼に関してはいつもの事だと割り切ることが出来たが、荒垣はポケットから薬の瓶を取り出して視線を落としながら、何故自分だけがペルソナを制御出来なかったのか、自分なりに考えた推測について語った。
「アキはより強い力を求めつつ、妹に被害が及ぶ可能性を減らすためにも戦ってた。桐条は自分の家が発端だからと使命感で戦ってた。そんな中で俺は戦う理由について深く考えた事はなかったんだ。ペルソナの制御に差があったのはそういう点なのかもしれねぇって最近思った」
戦う理由は言い換えれば決意だ。その行動の芯になるものが定まっていない状態で荒垣は力を行使していた。
だからこそ、他の者たちと違い芯がないせいで心がブレてしまい。ペルソナを制御出来ていなかったのではないか。
小さくても良いから目的を持って行動していればあの事件は起きなかった。そう思うと後悔ばかりが浮かんできて、力とその責任について考えずにいた自分が、如何に馬鹿な子どもだったかと過去に戻って殴りたい衝動に駆られる。
薬の瓶を強く握り締めて荒垣がそのように言えば、通学用の鞄からお茶のペットボトルを取り出して飲んでいたラビリスが軽い調子で返した。
「いや、別にペルソナってそういうもんちゃうから関係ないで。単純に力が馴染んでなかったんとちゃうかな」
「なんで言い切れる。ペルソナは心の力なんだろ。なら、そういう心

構えも重要なんじゃねえのか？」
決意というのは心の方向性を定める意味もある。芯を作り、それを基に心の方向性を決めればブレない。
ブレないということは安定するという事であり、何故それが無関係なのか分からず、荒垣は自分よりもペルソナに詳しい二人に尋ねた。
といっても、相手が二人に尋ねようとこういった解説は基本的に湊の仕事だ。ラビリスも研究所時代に用語や当時の考察データをインストールされ、再び目覚めてからはＥＰ社で行っている研究と新たに分かった情報を聞いているが、それでもそれぞれがどういった存在かという用語説明的な知識を持っているだけで、詳しい事は専門家には敵わない。
その点、湊はシャドウやペルソナがどのような存在であるかを完璧に把握しているだけでなく、自身でも影時間に関わる事柄を研究して、新たな技術や装置まで開発しているので誰よりも詳しいと言える。
ベルベットルームの住人も様々なことを知っているようだが、特定の分野に関しては湊の方が知っている物もあり、人間の中で最も影時間について理解しているのは間違いなく湊であった。
「重要と言えば重要ですが別にそれは戦闘に限った話じゃないんですよ。戦いへの心構えはペルソナの強さに影響するだけで、制御というか安定感は別の分野が関わってきます」
自分が解説役になると分かっていた湊は面倒臭そうに話をする。
心構えなどなくてもペルソナは安定するし、そんな戦いに関する考え方一つでペルソナを制御出来れば苦労はしない。
むしろ、心構えや想いの強さというのはペルソナ自体の強さに関わってくる要素だ。守ると強く念じれば盾となり、敵は殺すと念じれば矛となる。
湊のペルソナであるタナトスなどその良い例で、二体に分かれた湊本来のペルソナの攻撃的な部分を司るタナトスは、青年が敵への怒りと憎悪を燃やせば燃やすほど力を増していき、制御するためにセーブされた力を解放して本来の姿を取り戻していく。

二度目の神降ろしの際に顕現した冥王タナトスもまだ完全体ではないが、元の状態と比較すれば冥王の力は軽く七倍まで跳ね上がっていた。

湊の抱いた純度の高い感情をそのままエネルギーとして変換するのが阿眞根であり、その阿眞根の力を注ぎこまれたタナトスは、妹を守るために戦う真田やこれ以上の被害者を出さぬよう使命感で戦う美鶴よりも、強烈な意志を持った者の力を籠められているといえる。

けれど、増したのは安定感ではなく戦闘力だった。戦闘タイプのペルソナだったから顕著に効果が現れたが、非戦闘タイプだったとしても同じように安定感ではなく能力が強化されていたことだろう。

相手がタナトスの変化について知らないと分かっていながら、湊は構わずに話を進めて、実際のところなにが原因でカストールが暴走したのかを親切に教えてやった。

「まぁ、簡単に言ってしまえば先輩は目覚めるのが早かったんです。もう少し適性が上がっていれば他の二人と同じように戦えました。けど、カストールは弱点を持たない中々の力を持ったペルソナで、カストールの成長速度に先輩がついて行けなくなってしまったんですよ」

免許取りたての初心者ではパワーのあるバイクを操り切れないように、力の扱いもろくに知らないペルソナ使いでは、予想以上の速度で成長するペルソナを制御しきれない。

ただし、身体が大きいなどのアドバンテージがあれば、パワーがあるバイクに振り回される事もなく。徐々に運転に慣れて要点を押さえ、完全にとはいかずともバイクの性能をある程度は発揮できる。

そんな風に、荒垣ももう少し適性が高くなってから目覚めていれば、最初のアドバンテージで制御を覚えて暴走させないペルソナの扱いが出来るようになっていたはず。湊がそのように告げれば、荒垣は僅かに視線を落としてから湊の方を見た。

「お前らはペルソナやシャドウについてどの程度まで知ってるんだ？」

「ウチはそない詳しないけど湊君はかなり詳しいやんな」

「……まぁ、そこそこな」
訊けば大概のことには答えてくれる。死を理解し、シャドウの王を内包する青年は人間の中では最もペルソナやシャドウについて理解している人物といっていいだろう。
ただ、そういった情報を教えるのは味方だけだ。そこまで詳しく話すつもりはないと、湊はラビリスにヘルメットを渡し、自分もグローブをはめて帰る用意をしながら言葉を残して行く。
「先輩は深く考え過ぎなんですよ。人を殺した酬いをいつか受ける。ただそれだけです。もっと上手くやれたとか、こうしていれば防げたとか、終わった事を考えても結果は変わりません。まぁ、今後に活かすためなら反省もいいですけど、力を捨てて責任から逃げた先輩には関係ないでしょう？」
胸にナイフを突き立てられたかのように青年の言葉が深く心に突き刺さる。
確かに荒垣がペルソナと自分の心の在り方について考えていたのは、過去をなかったことにしたいという責任からの逃避が理由だった。
それは反省ではない。今後に活かすつもりがないなら考えても意味はない。素直に他の事に没頭して忘れた方が余程有意義だ。
もっとも、人を殺して相手の子どもの人生まで歪めておいて、そこまですっぱりと割り切れる者は少ないだろう。
彼の言葉に何か言いたそうにしていたラビリスにバイクに乗る様に言い。青年は「それでは」と短く挨拶をして去って行った。
後に残された荒垣は胸の奥に苦い物が広がるが、ここで何かに当たってしまえば余計に惨めになる。この後の予定は特にないことから、ラーメンでも食べて帰ってしまおうと彼もバイクに乗ってその場を後にした。

第百七十話　ゴールデンウィークの予定

5月2日（金）
昼休み――1―F教室
昼休み、それは午前中の授業で溜まった疲労を腹を満たすことで癒すリラックスタイム。
今日も湊の机のところにはラビリスと風花に西園寺などが集まって、たまにおかずの交換をしながら弁当タイムと洒落こんでいる。
けれど、いつかの再現のように教室の扉が開くと、これまたいつかの再現のように一人の男子が入って来て真っ直ぐ湊の元へやってくるなり大きな声で話しかけてきた。
「おい、有里！　もうゴールデンウィークだぞ。いつになったらバスケ部に来るんだよ?!」
色黒ジャージ系男子な彼は隣のクラスの宮本。先日、湊がそのうちバスケ部の方にも顔を出すかもと言われて納得して帰ったのだが、いくら待っても湊はバスケ部に現れずゴールデンウィークに入ろうとしていた。
連休中はちょっとした合宿を行い、新チームでの連携を深めることになっている。今年の一年生はかなりの粒揃いだけに上級生も気合が入っており、合宿を楽しみにしていたというのに湊の姿はなかった。
宮本からそのうち顔を出すと聞いていた彼らはどういう事だと尋ね。本人が確かにそういったのを聞いた宮本としては自分が聞きたいくらいであり、とりあえず本人にもう一度確認してきますと言って先輩らにはその日は引いてもらった。
そして、その翌日である今日に改めて問い質しに来た訳だが、魔法瓶に入れて持って来ていた味噌汁をすすっていた青年は面倒臭そうに顔をあげて答えた。
「……ちゃんと女子バスケ部には行ったさ」
「お前は男だろ！　なんで女子の方には行って男子の方には来ないんだよ」

「部活を回ってたのはラビリスの付き添いだからな。色々と回った甲斐もあってテニス部に入ると決めたんだぞ」
男だろと突っ込まれたとき、湊は心の中で女でもあるさと思ったが口には出さない。
性別に関係なく誰もが美人であると評価する顔の造形はともかく、肉体的には性器も含めて男にしか見えず、細胞単位で見て初めて両性であると分かるので、わざわざ自分の身体のことを親しくもない相手に話したりはしないのだ。
自分が部活を回っていた本当の理由を告げて、ラビリスが高千穂や理緒と同じテニス部に所属する事に決めた事を伝えれば、相手はそうなのかと教えて貰った情報を一応覚えておきつつ話題を戻す。
「汐見さんの話はいいんだよ。お前の部活はどうなってんだよ」
「……うちの副担の佐久間が高校も部活をやりたいと言ってきてな。入るつもりはなかったんだが、総合芸術部という新しい部活を立ち上げることになった。部長は真田、副部長は山岸、他メンバーは岳羽、チドリ、ラビリス、留学生のターニャに俺といった具合だ」
湊はＥＰ社での研究を進めたかったので部活に入るつもりはなかった。けれど、湊ともうしばらく一緒にいるために高等部へ赴任してきた佐久間は、高校でも部活をやろうとしつこく勧誘してきた。
中等部に所属していた美術工芸部は、休部状態だった美術部を避けるための抜け道として作られた部活で、美術部の存在する高等部では同じ方法は使えない。
湊と同じ部活になりたいのなら、佐久間が美術部の顧問になれば問題は解決するように思えるが、顧問が二人で在籍する上級生がいる部活ではあまり自由に活動できない。
去年は学校側が湊とチドリの髪と瞳の色について教員に伝えておらず、事情を知らなかった体育科の教師が反抗的だと湊の事を殴ってしまったことで負い目があり、空いている部屋の中でも上等な部屋を部室として割り振られた。
そこをかなり自由に使って冷蔵庫やらコンロやら色々と家電も置いていたので、自由度も低く今さらショボイ設備の部活なんて嫌だ

と、佐久間は自由を求めて変化球で攻めることに決めた。
それが美術・文学・音楽・演劇など様々な方法で芸術に触れ、生徒の独自性を活かしクリエイティブな活動を行うという名目で設立することになった総合芸術部である。
佐久間曰く、美術部は絵や彫刻だけ、管弦楽部は音楽だけ、それぞれの部活はそのように活動が限定的で所謂スペシャリスト向けなので、枠組みを越えた才能を発揮できる場所を提供する総合芸術部とは趣旨が異なるらしい。
他の部活が嫌で言っているだけの詭弁のようだが、昨年、湊は文化祭の演劇で大盛況を収め。部活でコンクールに応募した作品では、籠球皇子ブームもあってだろうが金賞や銀賞とは選考理由が異なる総理大臣特別賞を取り。校内新聞で生徒会長として担当していたコラムは、教師にも好評で様々な芸術分野で才を発揮していた。
助っ人として参加したバスケ部でも成果を収めていたこともあり、様々な芸術の才を持っているなら彼が今後また何かの賞を取ることは十分に考えられる。
よって、一つの型に当て嵌めるよりも、佐久間の言うように様々な分野の活動を行える方がいいのではと学校も判断し、めでたく総合芸術部が設立される運びとなった。
しかし、それを聞いた宮本は微妙な表情を浮かべて突っ込みをいれる。
「いやいや、お前の活躍の場はバスケだろ。それを捨てて女子ばっかの文化部に入ってどうすんだ」
「……お前、マネージャーに男子ばかりの運動部に入ってどうするんだと言ってみろ。どこに入ろうと本人の勝手だろ」
「あ、いや、んー……プレイヤーよりサポーターとして参加したいマネージャーは別じゃないか？」
言われて一瞬納得しかけるも、宮本はすぐにそれとこれとは別の話だろうと返す。
頭は悪いくせに選手とマネージャーの役割の違いについてはしっかりと理解していて、湊は面倒なタイプだったかと心の中で舌打ちを

する。
いっそのこと別の方向に話を誘導し、うやむやにして彼にはお帰り願おうかと考えたとき、二人の会話を聞いていた西園寺が口を挟んできた。
「ていうか、ミッチーって元々文化部だよ？　運動も出来るって感じであって、中学時代はルックスとインテリで売ってたんだから」
「去年応募した作品はコンクールで賞を貰ってたし。どちらかというと文化人としての功績の方が多いよね」
西園寺の話に風花も同調し宮本に説明するが、湊は別に自分を売り出した事はない。
周囲が勝手に不良な見た目に反してインテリなことでギャップ萌えを感じていただけで、本人はチドリやマリアとペアのアクセサリーを付けたり、イリスが褒めてくれた長い髪のままでいるだけだ。
けれど、女子との会話に不慣れっぽい彼には効果覿面だったようで、勢いのほとんどを削がれた状態で返して来た。
「なら、掛け持ちも出来るんだしバスケ部にも入ろうぜ。連休中に一泊で合宿もするんだ。基礎練もやるけど、ミニゲームでどれだけ連携が取れるかも見るから普段より楽しいぞ」
「……連休も俺は仕事があるし、部活で旅行にも行くから無理だな」
卵焼きを口に運びながら湊が言えば、風花とラビリスも揃って頷いた。
西園寺は帰宅部なので関係ないが、湊たちはラビリスとターニャという新メンバーが加わったことで、早速いろいろと体験してみようと計画を練っていた。
留学生であるターニャは一年しか日本にいられない。だからこそ、ちゃんと計画して日本の工芸やら芸術にも触れる機会を作ろうと、今度のゴールデンウィークに旅行で一泊することになっている。
場所は佐久間が見つけてきた田舎町らしいが、昼は染物屋で染物体験をさせて貰い。終われば日本のありふれた田舎の風景を満喫しつつ、老舗旅館で料理と温泉を楽しむ予定になっている。
湊とチドリにすれば自分たちの実家である桔梗組も似たような場

所なので、それほど田舎の風景とやらに感動を覚えたりはしないけれど、ターニャが間違った日本の知識で〝お座敷遊び〟や〝お代官ごっこ〟をとても楽しみにしているため、誤った知識の訂正も含めて他の者は旅行を楽しむつもりだった。
　それを聞いた宮本は予定のブッキングで彼が合宿に参加出来ないことより、引率の教師含めて男女比1：7で本気なのかと正気を疑った。
「え、女子ばっかだぞ？　男子一人なのに旅行って部屋はどうするんだよ？」
「今までは俺だけ別の部屋を取ってた。まぁ、今年は人数が増えたからチドリやラビリスもこっちの部屋にして、他をもう一部屋にしてもいいが」
　高等部から入ってきた事情を知らぬ者にすれば不思議に思うかもしれないが、家族であるチドリや同棲しているラビリスなら同じ部屋でも問題ない。
　彼女であるゆかりも一応セーフではあるし、他にも人がいれば引率である佐久間も監督役という立場で大丈夫。
　風花と美紀とターニャは直接関係があるわけではないので微妙だが、全員で雑魚寝と言われれば少し気にしつつもきっと了承するに違いない。
　湊が同じ部屋だろうと反対する者がいなければ男女比がどうだろうと関係ないため、青年は煮物の里芋を口へと運びながら宮本が気にする必要はないと答えた。
「マジかよ。それでいいのか？　いや、先生もいるし……うーん」
「まぁ、お前は楽しくバスケをプレーしながらゴールデンウィークを過ごせ。俺はのんびりと温泉に浸かってくる」
「くっそー、まだ夏まで時間はあるからな！　ゴールデンウィークが明けたらまた誘いに来るから個人練習くらいしておけよ！」
　それだけいうと宮本は悔しそうにしながら帰って行った。悔しい理由は女子ばかりに囲まれている湊に男として嫉妬したのか、それとも純粋に彼が仲間にならなかった事への悔しさか。

既に興味のない湊は去っていく背中を最後まで見ずにラビリスお手製の弁当を食べ続けるが、宮本が去ってからコクコクと喉を鳴らしてお茶を飲んでいた西園寺が湊に尋ねた。
「まどか的にはどっちでもいいんだけど、ミッチーってもうバスケットボールはしないの？　籠球皇子ブームも治まりつつあるから、高校でもちょっとは活躍しておかないと芸能界で生き残れないよ？」
「……最初から芸能界に入ってないが運動部は別に興味無いな。総合芸術部も佐久間がやりたくて作った部活だし、俺としては時間を自由に使える帰宅部でよかったんだ。まぁ、中学とほぼ同じメンバーだけだから別に嫌という訳ではないが」
帰宅部でよかったと口にしたときラビリスと風花が少し不安そうな顔をしたことで、湊はすぐに嫌々付き合っている訳ではないと付け加える。
こういった気配りは流石だなと気付いた西園寺は笑っているが、彼女が言った籠球皇子ブームは徐々にではあるが確かに治まりつつあった。
本人がテレビや雑誌への出演を断っていたので、テレビで試合の映像と共に全国模試一位や留学経験ありなど経歴を語る度、一般人の興味を引いてブームは余計に加熱して行った。
しかし、それも度が過ぎるとパッと燃えてパッと消えるように急激に収束して行く。
一応、今でも街を歩けば振り返る者が大勢いるが、テレビに出た事があるだけで湊は芸能人という訳ではない。
芸能人ではないからとサインは用意していないし、応援していますとプレゼントを渡そうとしてくれれば、誕生日でもクリスマスでもバレンタインでもないからと普段は基本的に断る。
イベントのときにはちゃんと受け取ってやるあたり律儀だが、今年のバレンタインはプリンス・ミナトの勢力拡大のおかげか条件を指定したというのに約六万個の贈り物が届いた。その指定した条件とは〝贈り物は既製品に限る〟というものだ。
いくらアナライズで包装を解かずに中を確認出来る湊でも、体液や

爪に髪の毛などが入ったお菓子を渡されれば気分が悪い。
なので、そういった負担を減らしつつ、食べきれない量がくれば孤児院などの施設に寄付できるようにと種類に関係なく既製品のみに限定した。
条件を付けても守らない者は大勢いたが、そういった分はプリンス・ミナトがしっかりと選別してくれたので、湊はリストから欲しい物を選び、残りは手伝ってくれたプリンス・ミナトのメンバーに分けて、まだ余っている分は施設に寄付された。
おかげで施設だけでなく話を聞いた東京都からも感謝状が届いたけれど、警察や消防から毎年のように感謝状を貰っている湊にすれば一枚増えても何の感動もない。
そんな青年にすればブームが終わるのは好都合。田舎だと未だに芸能人扱いで騒がれるため、いい加減うんざりしていた彼は、今回の旅行は静かに過ごせるといいなと若干諦めも含みながら小さく希望をもっていた。

5月5日（月）
昼――田舎町
湊とチドリを除くメンバーが待ちに待った旅行当日、私服姿で駅に集まり電車に揺られること数時間。湊たちは辺鄙な田舎にやってきていた。
来る前から小雨が降っていたので旅行先ではどうだろうかと心配していたが、まだ少々小雨が降っているものの空自体は明るくなりつつあるので、もうしばらくで止んでしまうだろう。
故に、電車を降りてホームに立った佐久間は豊満な胸を張る形になりながら、長時間座っていたことで固くなった身体を伸ばした。
「んー、やっとついたね！　予想以上に遠いし、なーんにもない田舎で先生もびっくりしちゃった！」
「ダー、自然がいっぱいデス。デリェーヴニャの景色もロシアやカナダとは違っていて楽しいデスネ」
もともと住んでいたロシアとも現在暮らしているカナダとも違う

田舎の風景。気候の違いから生えている植物の種類も異なるため、ターニャはよくある田舎の景色すら新鮮だと楽しそうに笑う。
　先頭を行く湊がホームから改札の方へ向かい出したので、他の者もあとを追いながらゆかりが途中で口を開いた。
「電車から見た感じだとスーパーとかコンビニもほとんどなかったよね。買い物とかどうしてんだろ？」
「昔ながらの個人商店頼みか車でＧＯって感じじゃないかな。先生も昔は田舎の方に住んでたけどここよりマシだったよ！」
「……うちの地元より田舎で驚いたわ。都会に出るのに電車やバスで一時間以上かかるかどうかって重要なラインね」
「いや、住んではる人もいるのに貶し過ぎやろ。もうちょい言葉選ぼうや」
　チドリの暮らす桔梗組本部は車で一時間も走らずに都会に出る。自転車で十分も走ればコンビニがあり、十五分も走れば大型スーパーもあるので、ここに比べれば都内ということもあって同じ田舎でも発展度合いが違った。
　しかし、チドリだけでなく佐久間やゆかりも田舎過ぎて日常生活が送れるのかと疑問を持っているようで、流石に言い過ぎだとラビリスが困り顔でストップをかける。
　メンバー内では常識人で委員長タイプな美紀がこれまでストッパーとなっていたが、我が強いメンバーに対してあまり前に出るタイプではない美紀だけでは制御出来ないこともあった。
　比較的ツッコミ役でもあったゆかりもストッパー役を兼任していたが、彼女もボケる側にまわると本当に最終ラインでしか干渉してこない湊やチドリに対抗できるストッパーとしてラビリスが加入したことで一番喜んでいるのは美紀に違いない。
　そうして、ラビリスのおかげで今回の旅はあまり気苦労を負わずに済むと美紀が安心していれば、改札を出て振り返った風花が駅の看板を自信なさげに読み上げた。
「えっと、〝はちじゅういなば〟って読むのかな？」

「八十でヤソって読むんだ。八十歳を八十路って言ったり、日本神話に八十神ってのが出てきたりする。まぁ、八十神はモテる弟神に嫉妬して何度も殺そうとするクズの集まりだがな」
「有里君って神話系にも詳しいんですね」
「まぁ、日本神話に関して言えば直系だからな。ルーツを辿れば天照だけでなく、伊邪那岐と伊邪那美にぶつかるぞ」
日本神話のそれと同一かは不明だが、百鬼と九頭龍の両家のルーツが神と呼ばれる存在なのは間違いない。
その実子である姉妹によれば母方の祖父母には会った事がないらしいが、母であった豊玉姫命から聞いた話では、生物というよりは概念に近く、自然や環境とも言い換えられる状態で存在していたのだとか。
古代の人は自然や未知の存在を神と呼び、そこに人格を与える様にして崇めてきたが、実在する神というのは本当にそれに近いものらしく。妖怪であった若藻も玉藻前だったときは、人々の畏れを力としていたので、性質的には心の力であるペルソナと共通する点は多分にあった。
ただし、神の直系だろうと既に人としての肉体を得ている上に、世界の行く末や人の運命に偉そうに干渉する神という輩を嫌っている青年にはそんな事は関係ない。
相手が神だろうと邪魔なら殺す、というとてもシンプルな考えで信仰心など欠片もなかった。
地名について風花たちに教えた湊は、駅からの段差を下りて道路に立って顔を上げる。すると、視界が一瞬歪んだ。
「ん……」
八十稲羽駅で降りたのは自分たちだけ。小雨が降っており駅の周りには人もいなかった。
だというのに、歪んだ視界が元に戻るまでの僅かな時間、湊は視線の先に黒髪の少女がほんの一瞬だけ見えた様な気がした。
霊体や怨念などを視ることが出来るので、都会よりも視え易い田舎ということもあり一瞬映り込んだかと思ったが、少し考える素振りを

見せた青年の様子が気になったのか折り畳み傘を開いたターニャが声をかけてくる。
「ミナト、どうかしましたデスか？」
「目に雨粒が入っただけだ。気にしなくていい」
「なるほど。でも、もうすぐ止みそうデスから安心デスね」
雨は降っているが空は少し明るい。この調子ならば午後からは晴れるだろうとターニャは笑う。
女子も含めてメンバー内で一番髪が長く量も多い湊としては、湿度が高いと髪が重くなるので、傘をさす手間もあり早く止めばいいのにと思った。
そして、一同は予約した染物体験まで時間があったことで、お店の方に向かいながらどこかでお昼を食べるために移動することにした。
――中華料理店〝愛家〟
目的地の染物屋は商店街の中にあった。普段は賑わってそうだが、個人商店ばかりなので連休中は臨時休業を取っている店が多かった。
もっとも、まわりには食べるところもほとんどなかったので、特に反対意見もなく近くの中華料理屋でいいとすんなり決まった。
丁度お昼時だったがゴールデンウィークに加えて雨ということもあり、あまり広くない店内にはまばらに人がいる程度。
これならこの人数でも座れそうだと、四人掛けのテーブルに二組に分かれて座る。その際、普段の慣れか様々な思惑があったのかは知らないが、風花と美紀を除くメンバーが湊と同じテーブルに座ろうとし、面倒に思った湊がターニャを連れて美紀と風花の席へと移動したことで若干名不満げな顔をした。
けれど、湊がターニャを連れて席を移動したのにはちゃんとした理由がある。他の女子メンバーは全員が右利きだが、ターニャだけ左利きなので食事をしようとすると腕がぶつかるのだ。
それなら彼女を左側に座らせればいいと思うかもしれないが、箸の扱いに慣れていない彼女が通路側に腕が出る席だと店員が通ったときにぶつける可能性がある。反対に壁側だと箸に苦戦して無駄な動きをすることがあり壁が邪魔で窮屈になってしまう。

よって、彼女を座らせるのは右側の席になり、腕がぶつからないようにするには両利きの湊が隣に座るしかない。
着席する際に小さく「左利きが並んだ方が楽だよな」と呟くことで、ラビリスを除く不満そうにしていた三名を納得させつつ、湊が壁に貼られたメニューを眺めると店員が水を持ってきた。
「いらっしゃいませー。あ、皇子」
「……それは名前ではないな」
水を持ってきたのは湊たちよりも幼い年頃の少女。個人経営なので店主の娘と思われるが、湊を見るなり驚いた顔をして〝皇子〟と呼んできた。
ブームでその呼び名が定着してしまったので諦めてはいるけれど、旅行先の田舎でも都会と同じく注目されると思うと嫌になる。
湊が皇子と呼ばれる理由を知らないターニャは不思議そうに首を傾げ、他の者らはしょうがないと苦笑しつつ、水とお手拭きを受け取りながら少女からメニューの説明を聞いた。
「日替わりは酢豚かカニ玉、それと今日は雨の日限定のスペシャル肉丼もある」
「スペシャル肉丼ってどんなの？」
「五倍増し肉丼、お値段三千円。ただし、食べきったら無料。女性にはオススメしない」
スペシャルと聞くと興味がわく。ゆかりがどんなメニューかと尋ねれば、何を考えているのか分からない表情で少女が淡々と告げた。
ベースとなる肉丼の量が分からないけれど、普通のどんぶりだと考えればスペシャルの方は五人前ということになる。
それは流石に無理だと風花とターニャは醤油ラーメン、ゆかりはタンメン、ラビリスと美紀は酢豚の日替わり定食、チドリはカニ玉の日替わり定食、佐久間は唐揚げ定食とタンメンを頼んだ。
注文を受けていた少女は残るは湊だけだとジッと見ており、メニューを眺めていた湊もそろそろ決めるかと注文を口にする。
「じゃあ、俺はスペシャル肉丼と坦々麺と青椒肉絲と麻婆茄子」
「え、ほんとに大丈夫？」

「足りなければまた頼むさ」
「……まいど」
少女は食べきれるのかと心配して大丈夫か聞いたのだろう。けれど、湊はその量で足りるのかと尋ねられたと勘違いした。
主なツッコミメンバーはもう一つのテーブルにいるのでツッコミは不在。故に、注文を聞いた少女は少々不安そうな顔をしながら、妙なイントネーションで答えて注文を伝えに去っていった。
その背中を気の毒そうに眺めていた美紀と風花は、料理が来るまで時間があるので珍しそうに店内を眺めているターニャに話しかける。
「ターニャさんは中華料理は初めてですか？」
「ニェット、ロシアでもカナダでもお店はありマス。それに日本のコンビニでは炒飯おにぎりがありマスから、手軽に中華料理も楽しめマスね」
「あ、確かに最近はおにぎりも色々な種類があるよね。オムライスとかソバメシみたいなご飯ものから、天むすみたいに鳥南蛮とかハンバーグが入ってるのまであるし」
「ダー、フリェーブよりもお腹に溜まりますし、小さなお弁当みたいでとても素敵デス」
フリェーブが何か分からない二人は首を傾げたが、湊がパンの事だと教えてやると納得したように頷く。
コンビニの炒飯おにぎりが中華料理かは微妙なところだが、ターニャにとって日本のコンビニおにぎりは画期的らしく、種類が豊富なだけでなくどれも美味しいからと学校での昼食用に買っていき、ノートにメモをしながら様々な種類を試しているんだとか。
実際にそのノートを見せてもらった風花たちは、ロシア語で細かく書かれているので読めなかったが、パッケージをイラストで描いているので何を食べたのかは理解出来る。
ターニャは元々アニメや漫画で日本に興味を持ち、自分でも色々と真似をしてイラストを描いているので、メンバー内だと湊とチドリ並みに絵が上手かったのだ。
そうして、彼女の日本での生活について色々と話しているうちに料

理が完成し、先ほどの少女がせっせとテーブルに運んでくる。
どれもいい香りがして美味しそうだが、中でも目を引くのは特大の丼ぶりに盛られた肉の山だ。
大変重いようでプルプルと腕を震わせながら少女が運んでくる。ここで脇腹を突けば愉快な事になるだろうが、そんなくだらないことをする者はおらず、反対に通路側に座っていたターニャと美紀が支えてやりながら丼ぶりを湊の前に置いた。
「おまちどー。冷めないうちにどうぞ。スペシャル肉丼は残したら三千円だから気を付けて」
全てを受け入れる寛容さ、正しくペース配分する知識、肉の群れに突っ込む勇気、食べ続ける根気、それら全てがなければ完食できないであろうスペシャル肉丼。
青年はさらに坦々麺と青椒肉絲と麻婆茄子まで頼んでいる。一人でテーブルの半分を占領している彼は、他の者に割り箸を取ってやってから食べ始めようとする。
しかし、さぁ食べようというタイミングで肩を叩かれ、鬱陶しそうに振り返れば、後ろにいた佐久間が携帯を見せながら話しかけてきた。
「有里君、それ写真に撮ってもいい？　先生、大盛りメニューとかって頼まないから新鮮なんだよね！」
「……撮るなら早くしろ。冷めると脂肪が固まって不味くなる」
「はーい。うわ、すっごーい。肉丼っていうか山盛り肉だぁ！」
写真を撮る事を許可すると、佐久間だけでなく他のメンバーも写真を撮り始めた。確かに彼女たちがこんな大盛りメニューを頼むことはないので、大食いの湊と一緒にいるときくらいしか出会うことはないだろう。
そういう事ならしょうがないと他の者が撮っている間、湊は坦々麺を啜りながら他の物を食べておく。
他の客や店の少女がチラチラと見て来ているのは気になるが、心配しなくても他の者と分けて食べるという姑息な真似はしない。
皆が写真を撮り終わるまでにピリ辛の麻婆茄子を完食し、坦々麺も

半分ほど食べ終える。食べる速度は速いが噛んでいない訳ではない。パッと見では普通に見えるが、人より顎の力が強く咀嚼のテンポがかなり速いだけだ。

「さて、これだけ盛ってると崩れないか心配になるな」

戻ってきたスペシャル肉丼を前にしても、青年は普段通りの様子で箸を持って一切恐れを見せない。

店内では店員も他の客も緊張した面持ちで見守っているが、それら全てを無視して湊はスペシャル肉丼に箸をつける。甘辛い味付けの最初の肉が彼の口へと運ばれると、そこからは一方的な展開が待っていた。

消える、消える、肉が消える。がっついている訳でも、早食いをしている訳でもなく、とても綺麗で上品な仕草で食べているというのに肉の山が次々と消えていく。

肉を食べていたかと思えばタレのかかったご飯を間に挿み、いつの間にご飯に到達していたのだと唖然としているうちに、彼は残っていた坦々麺と青椒肉絲も食べていく。

料理の減る速度は他の者と同じほどで、途中に会話もしているが、他の者は一品物や定食を食べているのに対して、彼は先に一品完食し大盛りメニューと他に二品を今も食べている。

パーセンテージで見れば減る速度が同じであっても、それはつまり彼だけが異常に速く食べていることに他ならない。

スペシャル肉丼は巷では初見殺しと呼ばれ、育ち盛りの柔道部員や数々の大喰らいたちも初めて食べるときには負かして来た。何度も何度も挑戦し、完食するためのペース配分や気力を鍛えてようやく完食出来る名物料理がついに敗れるのか。

談笑している彼の連れたちとは対照的に、店内の緊張が一気に高まったそのとき、

「すみません、海老チリと炒飯の大盛り追加で」

茶碗一杯分のご飯が一瞬にして消え、青年は米粒一つ残っていないスペシャル肉丼の器を前にしながら、最初に言っていた通り追加の注文を口にした。

その後ろで佐久間が足りないならタダになるスペシャル肉丼を追加すればいいのにと言っているが、二杯目だろうと完食すれば本当にタダになる。
料理を作っている店主の顔が引き攣っているので、一日に何杯も完食されることは想定していないのだろう。
湊が本当に二杯目を頼むとまずいと思ったのか、厨房から少し急いで出てきた少女は、伝票に追加の分をササッと書き足した。
「まいど。器もってく」
最初はずっしりと重かった器も今は嘘のように軽い。手伝って貰わずともヒョイっと持ちあげて去ろうとする少女を見て、湊は少しに気になったことを尋ねた。
「……その三角巾サイズ合ってなくないか？」
「これ大人用。でも、きつく縛れば大丈夫」
「それじゃ外してもしばらく形が残るだろ。髪留めでも使って留めておいた方がいいぞ」
店員の少女は風花よりも小さい。まだ中学生のようなので年齢相応かもしれないが、三角巾の余った布が首筋を隠すほどなので、明らかにサイズが合っていないように思えた。
最近は行っていないが、ここより本格的な中華料理屋でバイトしていた湊は、厨房でおばちゃんたちが三角巾を使っているのを見ていたので、サイズが大きいなら髪留めを使って調整した方がいいとアドバイスし、マフラーから中華風なデザインの髪留めを予備の分も合わせて四つ取り出した。
少女はそれを受け取っていいのか迷ったようだが、湊がエプロンのポケットに勝手に入れると、見ていた佐久間が水を飲みながら茶化してくる。
「中華っぽいデザインの髪留めとかよく持ってるね。有里君も使ったりするの？」
「俺は普通のピンとかゴムしか使わない。これは前に中華街に行ったときについでに買ったやつだ。中華街で売ってるくせにメイドインジャパンだったがな」

「うっはぁ、天邪鬼だね！」
そこは中国製ではないのか。楽しそうにツッコミを入れる佐久間に他の者もつられて笑い、少女はお礼にペコリと頭を下げて厨房に戻って行く。
少し待てば追加の料理が運ばれて来て、さらに頼んでいないはずの杏仁豆腐もついており、運んできた少女を見ると小さくＶサインをしてきたのでどうやらお礼らしい。
勝手にそんなことをしていいのか不明だが、杏仁豆腐は湊にだけ運ばれてきたので、一人分くらいは問題ないということだろう。
そういう事ならありがたく頂戴すると礼を返し、湊はその日スペシャル肉丼と炒飯大盛りを含めた合計七品全てを完食して小さな伝説をうち立てたのだった。

第百七十一話　染物と捕物

午後――巽屋

中華料理屋を出た一同は予約していた時間に、同じ商店街の中にあった染物屋に来ていた。

店の中には反物からスカーフまで色々な染物が置かれているが、出迎えてくれた店主の女性が染めるのは奥の作業場だと言ってメンバーをそちらに連れて行く。

しかし、それでは店が留守になるのではと思っていれば、女性は奥の部屋に向かって大きな声で呼びかけた。

「完二、お客さんの相手をしてるから少しだけお店を見てて頂戴」

「はぁ？　せっかくの休みになんで店番なんかしなきゃいけねぇんだよ」

「連休中グータラしてたんだから少しは手伝いなさい」

奥から聞こえてきたのは男の声。声変りはしているようだが、口調も含めてどことなく生意気そうで、会わずとも相手が年下だろうと湊たちは予想出来た。

少し待っていれば足音が近付き、暖簾をくぐってタンクトップ姿の金髪の少年が現れる。

どちらかと言えば老け顔だが、肌の様子等から判断にするにやはり相手は年下なようで、背は湊よりも低いが中学生で一七〇後半もあれば高校までに一八〇センチを超えるかもしれない。

そんな色々とインパクトの強い少年は面倒臭そうな様子でやってくるなり、店内で待っていた湊たちを見て驚きの声を上げた。

「ったく、休みだってのに……って、うおっ!?　赤髪とか外人とかなんの集まりだ!?」

「こら、お客さんに失礼でしょ！　こちら東京から染物体験にいらした月光館学園の皆さんよ。高校生であんたより年上なんだから口のきき方には気を付けなさい。どうもうちの馬鹿がすみません」

謝罪してくる女性に佐久間が外向けの顔で気にしないでくださいと返す。こういった場面での変わり身は流石で、ルックスの良さと備

えた知性を組み合わせ、彼女は都会の有名進学校の美人教師として旅行先などでは円滑に会話を進めていた。
佐久間が大人の相手をしているのなら、湊は反対に子どもの相手をしておこうと、チドリの髪やターニャにラビリスをチラチラと見ている少年に話しかける。
「休みの日に騒がしくして悪いな」
「いや、別にババァに文句言っただけなんで……」
湊たちが年上だと分かると大人しいもので、少年は気まずそうにしながらも湊からの謝罪に照れた顔をした。
見た目は厳つく身体も大きい方だが、反応からすると不良というよりはヤンチャなだけに違いない。
そういうタイプの方が関わるのも楽だと、湊は鞄から包装紙で包まれた紙箱を取り出し、相手の言葉遣いを諌めつつそれを少年に渡した。
「母親をそう悪くいうもんじゃないぞ。まぁ、東京から買ってきたものだが、これでも摘まんでおいてくれ」
「お、あざっす！」
湊が渡したのは駅の土産屋で売っていた〝江戸っ子バナナ〟というお菓子。個人商店で染物体験をすると分かっていたことで、ちゃんと手土産として買っておいたのだ。
受け取った少年は甘い物もＯＫなようで、早速包装を破って一つ取り出して食べている。少年が「うめー！」と喜んでいるのを見て、気に入ってもらえたのなら良かったと湊は女性に案内されて作業場の方へ移動した。
すると、移動中に前を歩いていたラビリスが振り返って、中華料理屋や先ほどの手土産について感心したように話しかけてくる。
「湊君、さっきから準備ええなぁ」
「……まぁ、仕事で色んな人間に会うからな。基本的にこちらが上になることが多いが、話を円滑に進めるには子どもに好印象を与えた方が楽に済むってのが経験で得た答えだ」
「ハラショー、ミナトはとても親切デスね。チリフォーンでおばさん

もミナトは良い人だと言ってました」
「残念ながら、それは都合が良いって意味がきっと含まれているぞ。ナタリアはそういうヤツだ」
湊は元々不得意をなくすように能力を伸ばしていたので、専門家には及ばないが多方面に高い水準の能力を持っている。
何か困ったことがあれば弱者救済のために手を貸すので、本人のそういった性質と能力を合わせれば、便利屋として非常に重宝するのだ。
仕事屋としてならともかく、彼の経歴等を理解した上で使おうとする人間は少ない。けれど、ナタリアは青年を生意気な子どもとして見る事の出来る数少ない人物であった。
直接的には二万人以上、間接的には十万人以上を殺している人間に、大切な姪っ子を預けてきたのが何よりの証拠で、湊がそれに気付いて悪態を吐くところまで想定済みに違いない。
年の功かは知らないが本当にいい性格をしていると思いながら、湊は奥の作業場まで進み。他の者らと一緒にやり方を聞きながら染物体験に勤しんだ。
――高級別荘地・桐条別邸
湊たちが地方の町へ旅行している頃、美鶴は英恵の暮らす屋敷に赴いていた。
連休と言えど休んでばかりもいられないが、身体が弱いために静養している母親に会う時間を作るくらいは出来る。
何より、以前から伝えねばならないと思っていた湊の事を話すには、この大型連休は丁度いい機会だと思ったのだ。
幼い頃から英恵に仕えている執事の荒川に案内され、美鶴は部屋の前までやってくるとノックし、相手の返事を聞いてから扉を開けて中に入る。
そこには白いワンピースに花柄のストールを羽織って本を読む英恵の姿があった。
「いらっしゃい、美鶴」
「お久しぶりです。お母さま」

起きていて大丈夫なのかと少し心配するも、近くで見た英恵の顔色は健康的で今日は調子がいいのだろうと安心する。
小さな円卓を挟んで英恵の向かいに座り、女中が二人の前に紅茶とお茶菓子を置いて部屋を出て行ってから、美鶴は本題を切り出す前に世間話で会話を始めた。
「顔色がよくて安心しました。身体の調子はよろしいのですか？」
「ええ、まだ春のぽかぽかとした陽気の日が多いから、部屋の中で日向ぼっこしたりしてるのよ。冬眠の時期よりも目覚めの季節の方が眠くなるなんて不思議よね」
うふふと明るい表情で笑う英恵につられて美鶴も笑みを浮かべる。
髪の質やスタイルの良さなど母親から受け継いだ部分も多々あるが、可愛らしい雰囲気の母親に対して美鶴は美人系だ。
対極な雰囲気になったのは父親の切れ長な目が遺伝し、桐条に相応しい厳しい教育を受けて育った事が大きいが、美鶴本人は母の様な全てを包みこむ暖かく柔らかな空気を自分も一パーセントでも纏えればと考えていた。
ほとんど会話した事がないのであまり記憶には残っていないが、八雲の母親もお茶目で可愛らしいタイプだった事は美鶴も覚えている。
幼少期は実子の美鶴より八雲の方が英恵と会っており、そんな母親二人から愛情を受けて育った彼は母性を感じさせる女性に懐き易いだろうと、青年との会話を諦め切れていない美鶴は密かに母性を手に入れる方法などを研究していた。
もっとも、一部の女子からは美鶴も十分過ぎる母性の象徴を装備していると、マジギレに近い半ギレでツッコミが入りそうだが、人柄や雰囲気と胸の豊かさは精神的な母性と肉体的な母性で全く別の話なので、美鶴自身は相手の言葉に困惑しつつ自分の求めるものとは異なると返すだろう。
彼女が求めるのは相手を安心させる空気や包容力だ。実際に親にならなければ持てないものかもしれないが、以前、湊が出場したバスケットボールの試合の応援で会った鵜飼桜は、未婚で出産経験もないのに自分の母に似た雰囲気を持っていた。

相手に対する愛情などがそうさせたのか、生来の気質なのかは分からない。けれど、血の繋がりが関係ないことは母や桜を見ていれば分かるので、美鶴も自分の母から学べるものは積極的に学ぼうと考えながら笑顔で相手を見ていると、紅茶のカップを手にとった英恵が口を開いた。
「それで今日はなんの話かしら？　話したいことがあるのでしょう？」
言われて美鶴は心臓をドキリと跳ねさせる。
どうして分かったのか。今日は連休中に会いに行くと伝えてやってきただけだった。話したい事があるとは伝えていない。
美鶴は驚いて瞬きをしながら何故分かったのかと聞き返す。
「分かるんですか？」
「フフッ、貴女は分かり易いもの。人払いはさせているから大丈夫よ。ゆっくり貴女のペースで話して頂戴」
本人は上手く隠せているつもりだろうが、悩みがあると美鶴は表情に出る。会う機会は少なくとも英恵は母親で、娘のそういった癖をしっかりと理解していた。
というよりも、桐条武治も似たようなタイプなのだ。桐条グループの犯した罪、桐条武治が犯した罪、そのどちらについて悩んでいるのかは知らないが、一人でいるときの彼は死に場所を探す様な瞳をしている。
そして、英恵と共にいるときには、それとは違った酷く申し訳なさそうな顔をする事もあった。
他の者には隠せても二人を知る英恵には隠せない。親子揃ってそんなタイプだけあって、英恵は気付くのは簡単だと笑って美鶴に自分のタイミングで話す様にいった。
ある程度話して場を整えてからと考えていた美鶴は出鼻を挫かれるが、内容が内容だけあって切り出しにくくもあったので、相手が既に聞く態勢になっているのならありがたいと話すことにした。
「その、八年前、いえ九年前というべきでしょうか。当時、死んだと思われていた八雲が見つかったんです」

「……あら」
影時間に関わる話だと思っていたが予想が外れた。そんな意外そうな顔をする英恵に、美鶴は見つかった百鬼八雲の現在についてを伝える。
「現在は名前を変えていますが、有里湊が八雲だったんです。そして、彼とそのご両親を事故に巻き込んだのは、我々桐条グループでした」
ただの交通事故だと思われていた百鬼一家の死亡事故。それは交通事故ではなくシャドウによって引き起こされたものだった。
英恵から親友と息子を奪ったのは、彼女の夫や義祖父の行っていた研究が原因だったのだ。
しかし、それを聞いても英恵は取り乱したりせず、落ち着いた様子のまま美鶴がそのことを知った経緯を尋ねる。
「……貴女はそれをどこで知ったの？」
「昨年の九月二十五日に、彼がムーンライトブリッジで花を手向けていたんです。彼の両親がポートアイランドインパクトで亡くなった事は彼自身が公言しています。そして、ムーンライトブリッジで起きた事故は百鬼家の死亡事故のみです」
彼らを襲った事故以外にムーンライトブリッジで事故は起きていない。ならば、彼の手向けた花は百鬼一家に対してということになる。
それだけならば知り合いだっただけという可能性もあるが、美鶴の記憶に僅かに残る八雲や彼の母親である菖蒲の姿と湊の姿は似ていた。
何より、あの日父親が返した言葉が、彼が八雲である事を証明していたのだ。
「あの日、彼は橋の上でペルソナの暴走を起こしかけました。その事も含めて彼が八雲ではないかとお父様に尋ねると、彼は有里湊でしかないと否定した上で関わるなと告げられました。ただ、八雲が見つかったとお母様に報告すると言った際、お父様が好きにしろと仰ったんです。つまり、お父様は彼が八雲であると知っていて隠していたことになります」

相手が桐条グループと無関係なペルソナ使いで暴走を引き起こす可能性があるのなら、桐条は影時間を生み出した責任として相手に制御剤を与えるなど出来る限りのことをする。
だというのに、あの日の桐条は湊に関わるなと美鶴が彼と接触する事を禁止した。
「私はずっと不思議に思っていました。何故、初のペルソナ獲得者とされる私が使った事のない制御剤が存在するのかと」
桐条も強制するつもりはないようだが、告げてきたときの様子からするに、美鶴の身を案じて相手との接触をやめるように言っていたと考えられる。
美鶴も詳しくは知らないが、百鬼の一族は他の一族から忌避されてきた鬼の一族だとか。龍の一族とされる九頭龍を超える優秀な血を持っているとも聞いており、それは湊の活躍を見ていれば納得がいった。
「実は彼が力を暴走させかけたとき、見えない力が辺りに広がり映像が頭に流れ込んできたんです。彼の記憶らしきものでしたが、横転して燃える車の見える場所でペルソナを使って戦っていました。事故直後に既にペルソナに目覚めていながら、彼が死んだことになった理由を先ほどの話と合わせて考えれば、八雲はペルソナ研究の被験体になっていたんだと思われます」
本当のペルソナ獲得者第一号。両親を失って自身も事故で怪我を負いながら、召喚器も何もない状態で彼は何者かと一緒にペルソナで戦った。
生まれ持っての素質かは分からないが、それだけのことが出来た少年と父を守るために召喚しただけで倒れた美鶴では、どちらが被験体として優秀かなど考えるまでもない。
百鬼一家の事故は全て影時間に起きた事で、八雲がいなくてもそれは事故で一緒に死んだと勝手に処理される。
両親が死んだ以上、八雲には父方である九頭龍家の者以外に親戚はいない。その親戚である九頭龍家も七歌と嫁入りしてきた女性陣以外は、鬼と龍の混血である八雲を忌み子として避けていた。

ならば、彼を愛していた英恵にさえ黙っていれば何の問題も起きない。人々をシャドウの脅威から守るため、世界のために百鬼八雲には被験体という人柱になってもらう。それが組織のトップに立った桐条武治と当時のエルゴ研の生き残りの下した決定だった。
美鶴は自分も能力の拡張のために幼少期にいくつか実験を受けて辛いと思っていたが、彼や同じように身寄りのない子どもの犠牲によって召喚器や制御剤が完成したのなら、自分の辛さなど彼らの受けた痛みの一割にも満たないものだったはずだと胸が苦しくなった。
「桐条グループやお父様への憎しみを思えば、彼が自ら被験体になったとは思えません。つまり、当時のグループが彼を被験体として回収し、お父様は被害者である彼の人生をさらに歪めてっ」
「もういいわ。話すも辛いのでしょう。分かったから、それ以上は言わなくていいの」
悲痛な表情で早口になっていく美鶴を英恵は途中で止める。彼女は父のことを心から尊敬し愛していた。そんな彼女にすれば、自分の父が非道なことを行っていたと認めるのは辛いはずだった。
英恵にそれ以上は口にしなくていいと言われ、美鶴は少々青くなった顔色で紅茶のカップを手に取り口を付けた。
温かい物を飲んで心を落ち着け、美鶴が冷静さを取り戻すのを待ち、英恵はにっこりと優しい笑みを浮かべて八雲に関する情報を教えてくれた娘に礼を言った。
「教えてくれてありがとう、美鶴。でも、実は彼が八雲君だって事には気付いていたの」
「……え？」
驚き美鶴は目を見開く。相手が何を言ったのかは聞きとれたが、どうして彼と会った事もない母が気付いていたのか分からない。
混乱する美鶴をよそに、英恵は娘の反応をくすくすと面白がりながら理由を話した。
「フフッ、不思議そうにしているわね。でも、親ってそういうものよ。瞳の色が変わっていようと、成長していようと分かる物なの。あの子の顔は菖蒲さんに似て綺麗だから分かり易いですしね」

そういうと英恵は席を立って本棚に向かい、そこから何冊かのファイルを持ってくる。
再び戻ってきた英恵はファイルを開き、綺麗にスクラップされた籠球皇子に関する記事を見せた。
月光館学園の男子バスケ部が地区大会を突破したという新聞の地方欄の小さな記事から、雑誌の特集記事まで彼が載っている物は全てあるのではないかと思われる。
英恵が保管している美鶴のアルバムと同じように、とても大切にしているのが伝わってきて、美鶴は母が本当に気付いていたのだと理解した。
だが、それなら何故会おうとしないのかという疑問が浮かぶ。八雲は英恵に懐いていたので、桐条家の人間だとしても例外的に受け入れると思われた。
彼のことをよく知る英恵ならばそれも分かっているはずで、何か会えない理由でもあるのかと聞き返した。
「気付いておられたのなら、どうして八雲に会おうとしないのですか？　彼もお母様のことは慕っていたはずです。桐条家の人間の中でもお母様にだけ例外的に会ってくれると思うのですが」
「八雲君には監視がついているでしょう。それで会ってしまうと武治さんや貴女にも伝わってしまうから我慢していたの。でも、貴女が気付いて武治さんも隠し通せないと思ったなら会いに行ってもいいかもしれないわね」
実際は会っていたし屋敷で匿っていたこともあった。その事を伝えると美鶴が混乱するので伏せておくが、沖縄で会った七歌だけでなく美鶴も湊が八雲であると知り、それを英恵に伝えると桐条に言ってくれたのなら会いに行く事も出来る。
感動の再会という体でいくか、それとも帰省して親戚に会った様な気軽な感じで行くか悩む。
ただどちらにせよ、身体への負担を考えると頻繁に会いに行くことは出来ないので、行くときには何かの行事やイベントに合わせることになるだろう。

英恵がそのように色々と考えていれば、意外にあっさりとした反応を見せた母を不思議に思った美鶴が再び話しかけてきた。
「その、お母様はお父様が隠していたことに対して憤りを感じたりはしないのですか？　お母様にとって八雲は実の息子と変わらない存在だと思っていたのですが」
「んー、そうね。隠していた事には怒っているし、八雲君に酷い事をした事を許すつもりはないけど、それで武治さんをどうこうしようとは思っていないわ。それは八雲君自身が決める事でしょうから、私は話を聞いて八雲君の意志を尊重するつもりよ」
隠していた桐条への憤りは確かにある。だが、英恵にとっては彼との再会の喜びの方が大きかった。
百鬼一家の事故がポートアイランドインパクトによるものだと知ったときは、湊が影時間の戦いに巻き込まれている事も含めて、何故愚かな研究に手を出したのかと先代と桐条や研究者たちを激しく言及したかった。
けれど、湊は既に目的を持って自分の意志で歩いている。どれだけ辛く困難な道だろうと、一度こうと決めれば彼はアイギスやチドリが止めようとしても止まらない。
英恵はそれをしっかりと理解して止めることは諦めているので、心配は常にしているが、復讐も含めていっそ好きにやらせてしまおうと考えていた。
母のその言葉を聞いた美鶴は紅茶のカップに視線を落としてから、意を決したように以前チドリから聞いた湊の生きる目的の一つについて口にする。
「しかし、吉野が言っていましたが八雲は最終的にお父様を殺そうと考えています。彼がペルソナを使役して本気で殺しにかかれば太刀打ちできる者などいませんから、お父様が殺される事になります。お母様はそれでも八雲の意志を尊重するおつもりですか？」
美鶴自身、これが卑怯な質問だとは分かっている。愛する息子が愛する夫を殺そうというのだから、父を失うことになる美鶴よりも英恵の方が辛いに決まっているのだ。

ただ、それでも湊の意志が固いことは事実で、彼は既に桐条を殺せるだけの力を身に付けている。
自分、両親、チドリたち被験者、巻き込まれた人々、誰のための復讐かは分からない。全てかもしれないし別の動機があるのかもしれないが、ムーンライトブリッジで彼の憎悪と殺意の混ざった瞳を見た美鶴は、何も知らない自分では彼を止めらないことは分かっていた。
親しかったとはいえ影時間や桐条の研究と関わりの薄い英恵もそれは一緒だろうが、自分よりはまだ可能性があるかもしれない。そう考えて美鶴は母に「そのときは止める」と言って欲しかった。
けれど、英恵は少し悲しげな表情をして、美鶴の願っていた言葉とは別の言葉で返して来た。
「……武治さんはそれを受け入れるわ。でも、多分、あの子は武治さんを殺さない。殺したいほど憎んでいても、赦さず殺さず呪い続けることの方が武治さんへの罰になるから、死に場所を求めている武治さんにあの子はきっと生き地獄を与えると思う」
「そんな、それでは誰も救われないではないですか……。復讐に生きる八雲も、贖罪のために生きるお父様も、どちらも辛すぎます」
「そうね。でも、武治さんは幸せを求めるには罪を犯し過ぎているし、八雲君は日常を失ってから復讐を誓い歪なまま今日まできてしまった。もう簡単には変われないのよ」
桐条も湊も共に過去に囚われている。復讐も、影時間を消すことも、彼らにとってはその先を生きるためではなく過去の清算でしかない。
もっと別の未来もあったかもしれないが、既に他の生き方を選べないところまで来てしまった。
なら、〝無関係〟である美鶴たちは心の準備をしておくしかない。殺すにしろ生き地獄へ突き落すにしろ、湊はまたいずれ桐条の前へ姿を現すはずだから。
二人の間にしばらく沈黙が降り、美鶴が辛そうな顔をしていると、フゥとゆっくり息を吐いてから英恵が再び口を開いた。
「暗い話になってしまったから、少し別の話をしましょうか。そうい

えば、去年の夏前に七歌さんが沖縄で八雲君に会ったらしいの。昔の記憶が飛んでるみたいですってメールに書いていたけど、まぁ、会いたくなかったから誤魔化したみたいね」
「そうなのですか？　あ、修学旅行で思い出しましたが、このストラップは八雲に貰ったんです。明彦たちへのお土産のついでのようですが、お菓子の箱の上に一つだけ置いて渡してくれたんです」
　言いながら美鶴は携帯につけた赤い琉球ガラスのストラップを英恵に見せる。
　それほど高い物ではないが色が綺麗で美鶴に合っている。会話は未だにないし視線も合わせないが、彼が中学から月光館学園に復帰して初めての交流と言えた。
　機能性を重視するなど遊びを知らない美鶴も、大切な贈り物は常に傍に置いておきたかったのか初めて携帯にストラップを付け、たまに眺めては優しい顔をしている。
　復讐のために生きているのも彼の一面だが、人助けやこうやって気を遣ってくれる優しさも彼の一面である。
　だからこそ、美鶴たちにすれば複雑なのだが、子どもたちの小さな交流に英恵は目を細めて笑った。
「やっぱり優しい子ね。機会があったら会いに行こうかしら」
「それでしたら、五月の終わり頃に彼が試合に出ると聞いていますから、そのときにお忍びで来られてどうでしょう」
「あら、籠球皇子がまた復活するの？」
　バスケットボールは助っ人の時だけと聞いていたので、英恵はまた湊の活躍が見られるのかと興味津々で尋ねる。
　湊はテレビ出演も雑誌のインタビューもほとんど受けていなかった。しかし、一度だけ出た年末特番は、テレビ離れが進んでいる昨今の業界としては異例の高視聴率を叩き出した。
　それが再びブームに火を点け、彼の人気を延長し、ブームが治まりつつある今でも彼の復活を待ち望む声は多かった。
　高校からはさらに試合の内容が高度になるので、そこで活躍すれば本格的にプロや芸能事務所からのスカウトが来るに違いない。

母親としても息子が世間の人気者になるのは誇らしいので、今度の試合についての情報を待っていれば、美鶴は少々複雑な表情を返して来た。
「いえ、それが……今度はテニスみたいで」
「……まぁ」
籠球皇子が別のスポーツに進出する。それは構わないが、またこれは大きな騒ぎになりそうだと、簡単に活躍したスポーツを捨てる湊の天邪鬼さには英恵も苦笑するしかなかった。

――稲羽市中央商店街
染め終えた湊たちの作品を乾かすために干してから、女性は良い出来ですと微笑んで、湊たちを作業場から店の方へ案内しながら作品の受け渡しについて説明してきた。
「では、明日までに乾いているので、またお帰りの際にお立ち寄りください。本日はどうもお疲れさまでした」
「お世話になりました。また明日のお昼頃に伺わせて頂きます」
『ありがとうございました』
佐久間が外向けの仮面で丁寧に応対し、湊たちも女性に礼を言って店を出ようとする。
湊は以前染物をしたことがあったが、留学生のターニャだけでなく他のメンバーも初めてだった事で、色々と楽しかったと満足気な表情だ。
しかし、扉を開けようとしたとき、店番をしていた少年が声をかけてきた。
「外に出るとき気を付けた方がいいっすよ。なんかウチの前に人が集まってるんで。さっき、なに見てやがんだって怒鳴ったんスけど、皇子がどーたらって訳分かんねぇこと言って帰りやしねぇ」
「……すまない、それは俺のことだ。さっき食事したときにでも近所の人間に見られてたのかもな」
外は明るく日が差しており既に晴れている。雨だったら人も集まらなかっただろうが、先ほどの中華料理屋に来ていた人間が話でも広

めたのか、確かに店の前には大勢の人が集まっている気配があった。
　そのまま出れば揉みくちゃにされそうで、そうなると女性陣が危険になる。
　なので、湊は他の者らに自分が出て少し経ってから出た方がいいと告げて、扉を開けて店の外に出た瞬間に悲鳴があがった。
「キャー！　本物、本物の皇子だ!!」
「テレビで見るよりさらに綺麗！　すごい、女性より美人って羨ましい！」
「皇子、握手してくださーい！」
　大勢の人に囲まれ湊は心の中で面倒だと舌打ちをする。テレビの撮影ならばスタッフが壁になってくれるが、生憎と湊はマネージャーすらいない一般人だ。
　登下校時は教師や警備が守ってくれもしたけれど、今回同行しているのは女性の佐久間だけである。
　いくら教師と言っても女性を盾にする事は出来ない。それなら身体を鍛えている自分一人でいた方がマシだと、人を避けながら少し移動する事で集まった人間を店の前からどかせた。
　すると、途中で人を掻き分けながら一人の中年男性がやってきて、スーツ姿の相手は湊に名刺を渡しながら話しかけてきた。
「どうも、私、町の助役をしている者です。本日はテレビの撮影ですか？」
「いえ、総合芸術部という学校の部活で染物体験をしにきたんです」
　助役というのは市長や町長など組織のトップのサポートをする人間で、町の助役ということは彼は町長のサポートをしている人間という事になる。
　助役は要職の一つなので、その辺をプラプラと歩いて暇をしているような人間ではないはずだが、わざわざ来たという事は町の代表として話題の皇子に会いに来たのだろう。
　そういう事なら、他の者の相手をせず彼と話していればいいので楽が出来る。湊は落ち着いた好青年の仮面を被って助役の質問に返した。

「なるほど、確かにテレビでも芸術分野にも精通しているとやっていましたな。そうそう、今日の宿はお決まりですか？」
「はい、老舗の温泉宿を。今から軽く散策しつつ向かうつもりです」
「この町で老舗となると天城屋さんですな。あそこの温泉はじんわりと身体に沁みてくるいい湯ですぞ」
助役のお墨付きとは中々期待できそうだ。湊は温泉がそれなりに好きで、平気で一時間くらい浸かっていられるため、ここで溜まったストレスは温泉に癒して貰う事に決める。
心の中を温泉でいっぱいにしながら、湊が興味のない相手の話を聞いて返事をしていれば、人を掻き分けながらまたまた一人の男性がやってきた。
「ほら、警察だ。ちょっと通せ。連休中だってのに一体何の騒ぎだ？」
警察だと言ってやってきたのは、袖を捲くったグレーのシャツを着た短髪の男で、相手は騒ぎの中心である湊の下に辿り着くと助役を見つけて事情を尋ねた。
「あー、確か町の助役の。こりゃなんの集まりですか？」
「籠球皇子が来ていると聞いてね。今回は部活で染物をしにきたんだそうだ」
助役の話を聞いて警官の男は湊を見てきた。身長差の関係で相手が見上げる形になるが、長髪や眼帯など湊は特徴的ななりをしているため、そういう事かと相手も納得したようだった。
そして、集まっている野次馬と同じ町の住人として、せっかくの観光の邪魔をしてすまないと申し訳なさそうに笑う。
「確かにテレビで見た顔だな。悪いな、田舎で娯楽が少ないもんで、テレビの撮影だとか芸能人が来ただとかって噂はすぐに広まっちまうんだ」
「一応、ただの学生で一般人なんですが。まぁ、自分は慣れているのでいいですが、この人の多さだと連れが危ないので、少しだけ移動して貰えると助かります」
店の前からは少しずらすことが出来たが、まだ人が多いのでチドリたちは完全には出られずにいた。

そちらに男の視線を向けることで、彼女たちの安全確保への協力を求めれば、男は顎の無精髭を触りながら困り顔を浮かべた。
「ん、連れって女子ばっかりか。随分と羨ましい境遇だな。交通整理に応援を呼んでもいいが、面倒ならタクシーを呼んで移動した方がいいかもしれんぞ。近くにいるやつが応援に来るにも五分か十分はかかるしな」
観光にやってきた人間が危ない目に遭えば大問題なので、相手が芸能人ではなく一般の学生ということもあり、男は交通整理は構わないと告げる。
ただ、応援が駆けつけるのにも時間は必要で、どうせ待つ時間が一緒ならタクシーを呼んで移動してしまった方が早いだろうとアドバイスをくれた。
宿泊先はここらでは有名みたいなので、タクシーの運転手にいえば連れて行ってくれるに違いない。
この様子では町の散策をしながら移動するのも大変なので、距離は近いが佐久間に事情を話してタクシーを呼ばせようとしたとき、
「あ？　おい、そこのお前ちょっと待て！」
野次馬の方を見ていた警察の男が怒鳴って野次馬の中に突っ込んだ。
見るとＴシャツにダボダボのスウェットというだらしない格好の若い男が逃げている。相手の方が人混みを抜けるのが早く、人が多くて追えない警察の男は相手が逃げてしまうので道を開けろと叫ぶ。
「お前らどけ、追えねえだろうが！　あ、クソ、仲間までいやがったか！」
先に人混みを抜けた若い男が行く先には、５０ｃｃの原付バイクに跨った若い男がいた。
５０ｃｃの原付バイクは二人乗りが許可されていないが、若い男はヘルメットも付けずに窮屈そうにしながらも後ろに乗り、そのままアクセルを吹かして走り出す。
警察を前にいい度胸だと言いたいところだが、追えない警察など何も恐くない。去っていく若い男らは挑発するようにクラクションを

二回鳴らした。
そんな舐めくさった相手の態度に警察の男が鋭い目付きになれば、
「――――追います」
後ろから声が聞こえたと思った次の瞬間、湊が人の上を飛び越えて近くの電信柱まで移動し、三角飛びのように電信柱も蹴ってさらに跳躍すれば、完全に人混みを抜けて着地した。
湊の見せた軽業に集まっていた人間は歓声と拍手を送るが、相手が原付バイクで逃げている以上歓声に応えている場合ではない。
着地してすぐに駆け出し、湊は逃げていくバイクを追って行った。
ようやく人混みを抜けた警察の男はそれを見て、
「おいおい、二人乗りの５０ｃｃとはいえ原チャ相手に走って追いつくのは無茶だろ」
道は下り坂一直線。重量的に本来の性能を発揮出来ていないにしろ、生身の人間が追い付ける速度ではない。
人混みを抜けた男はバイクと湊を追って走ってゆくが、いくらなんでも無理だろうと半ば諦めムードになる。
しかし、男のそんな考えをよそに、湊は徐々に加速して差を縮めていく。バイクは原付の制限速度以上に出しているというのに、短距離にしても信じられない光景だった。
ただ、このまま進むと道は大通りと合流してしまう。そこは休日で交通量も多いので、必死に逃げているバイクは真っ直ぐ突っ込むに違いない。
車が来ていなければいいが、タイミング悪く来てしまえば大惨事になる。後ろに乗っている男はヘルメットを付けていないので余計に危なかった。
そして、あと少しで大通りに合流するため、男が危険を知らせるようと叫びかけたとき、湊は今までの比ではない加速を見せ、バイクに追い付き並走しながらキーを引っこ抜いた。
「……良い足だな。俺の部下に欲しいくらいだ」
男が呑気に言っている間に、エンジンが停止して急激に速度を落としたバイクは、バランスを取るためにブレーキをかける。

それにより大通りの数メートル手前で止まったが、丁度のタイミングで大型トラックが前を通過して行き、バイクに乗っていた二人は青い顔をしていた。
あのまま自分たちが突っ込んでいたら死んでいたと理解して腰が抜けたのか、若い男たちはバイクから降りて座りこんでいる。
警察の男もそこまで追い付くと、湊がバイクのキーを投げて寄越してきたので受け取り、携帯で応援を呼んでから座っている二人に話しかけた。
「窃盗、ノーヘル、二人乗り、速度オーバー諸々の現行犯だ。お前ら二人とも署に連行する。そういや最近ここらでバイクでのひったくりが頻発してたな。そっちの関連も含めてしっかりと聞くから覚悟しとけよ」
言ってから若い男のズボンのポケットを調べ、先ほどの人混みで盗んだ財布を押収する。
警察の男は湊たちと話していながらも、相手がスリを働いていることには気付いていたのだ。
それは湊も同じですぐに追った訳だが、待っているとパトカーが二台も到着したので、別々に話を聞きつつ財布を持ち主に返し、署まで連行して貰ったところで残っていた男が湊に敬礼してきた。
「窃盗犯の逮捕協力に感謝します。ただまぁ、あんま無茶はするな。一歩間違えたらお前も轢かれてたかもしれん。ああいうときはバイクのナンバーや犯人の特徴を覚えるだけでいいぞ」
「ええ、気を付けます」
協力は助かるがそれで怪我をしては意味がない。現職の警察としてだけでなく、一人の大人として忠告しておけば、湊も素直に気を付けると返事をした。
人混みから脱出し、窃盗犯の逮捕も無事に終えた事で、男は疲れたように肩を回すと「腹減ったー」と呟き商店街の方へと歩き出した。
チドリたちを置いて来てしまったので湊もそちらに戻るが、並んで歩く湊に男は雑談がてら愚痴ってくる。
「さて、ようやく飯にありつけるな。飯を食いに来たってのに、人が集

まってるわ、そこを狙ったスリが出るわで散々だ」
「貴方の遅い昼食が犠牲になるくらいで町の治安がよくなったなら良かったじゃないですか。安い投資ですよ」
「馬鹿野郎、こっちは市民の平和のために休日を犠牲にしてんだ。世間は連休だってのに幼い娘と妻をどこにも連れて行けてねぇんだぞ。飯くらいちゃんと食わせたって罰はあたらんだろうが」
警察に休みはない。それは世間が休みの日でも一部の署員らが出勤し、人が常にいる状態にしているから可能となっている。
つまり、今日も仕事で出ているこの男は、世間が休日のときに出勤する役目を負ってしまった人物という訳だ。
勿論、ここで出勤しているので、時期をずらして彼も連休を取得できるようになっているが、しょうがないとはいえ家族にも犠牲を強いている事が今日の散々な目に遭った原因ではと湊は指摘する。
「それは、家族サービスを蔑ろにした罰が当たったんじゃないですか」
「ぐっ……い、いや、ゴールデンウィークが終われば俺も連休が取れるんだ。そしたら、ちゃんと旅行にだって連れて行くさ」
「ご機嫌取りにケーキくらい買って帰った方が良いですよ。旅行とは別に、連休中に父親と遊びたいって思う子もいますから」
「ん、そうなのか？　まぁ、今日は早番で帰れるからケーキくらい買って行けるし。試しに買って帰ってみるか」
小学校にも通わず、毎日が夏休みといった感じだった幼少期を過ごした湊だったが、彼が裏の仕事ばかりに行っていると、チドリが遊んで欲しそうにすることが度々あった。
毎日が休みなので、世間が休日だろうと平日だろうと関係ないと湊は考えていたのだが、世間が平日のときばかり仕事に休みを入れていると、彼女はたまには日曜日に出掛けたいと言った。
出掛ける場所によっては曜日ごとのイベントがあったりするが、チドリが日曜日に出掛けたいと言ったのはイベントとは関係なく、ただ休みの日に休みをとって遊びたかったのだとか。
どうしてそう思ったのかは分からないが、とりあえずそう思う子もいると湊はそこで知ったので、昔の自分と同じように世間と休みが合

わない男へ、ちょっとしたアドバイスとしてご機嫌取りしておけと伝え、相手も分かったと頷いて返したところで湊が昼に入った中華料理屋の前についた。
「まぁ、なんだ。旅行中だってのにそっちも災難だったな。天城屋まではさっきのとこのバス停から行けるぞ。今日の疲れを癒すためにゆっくり温泉を楽しんでくるといい。じゃあな」
「ええ、さようなら」
男は湊と別れると店に入って行き、湊も先ほどよりも減った人混みを抜けてチドリたちと合流すれば、なんで旅行先でまで人助けしてるんだと呆れられながら、バスに乗って宿泊先である旅館へと向かったのだった。

第百七十二話　旅館でのひととき

夕方――天城屋旅館

バスに乗ってやってきた一同は、歴史を感じさせる大きな和風の建物を見て、これは中々の旅館じゃないかと期待を高めた。

純和風に一種の憧れを持っているターニャは瞳を輝かせて写真を撮っており、また明日の明るい時間にも撮れるからと言って、なんとか止めてからロビーまで入って行く。

「ようこそいらっしゃいました」

「わっ、子どもだ！」

「……失礼だろ」

出迎えてくれたのは着物姿の少女。湊たちよりも年下で中学生だと思われるが、相手を見た佐久間が珍しいと驚いて見せれば、湊が即座に相手の後頭部を叩いてやめさせる。

叩かれた佐久間は何故か嬉しそうにしながら、旅館では珍しい少女の従業員に続けて話しかけた。

「旅館のお家の子なの？」

「はい、繁盛期とかは手伝っているんです」

「えらいね！　皆もちゃんとお家のお手伝いしなきゃダメだよ！」

この周辺では個人商店が多いので、子どもが店の手伝いをするのは一般的だったりする。

農家でなくとも働かざる者食うべからずという風習が根付いており、実際に子どもにも手伝ってもらわなければ店が回らない事もある。

そうなると子どもたちも、自分が生きるためだと嫌々ながらも手伝うため、外から来た人間が考えるほど自分たちがすごいことをしているという意識は希薄だった。

環境の違いによる意識の差はあるものの、しっかりお手伝いしている少女に感動した佐久間が、他のメンバーに君たちもちゃんと手伝いしなよと教師らしい事を言えば、偉そうにするなと湊が冷たい視線を送った。

「……母親と縁を切って家を出たやつが偉そうに」
「おっふ、勝手に私の家庭事情を調べるのはやめてってば。有里君のことも色々ばらしちゃうぞ？」
調べ物が得意な湊は佐久間の過去の経歴から現在に至るまでの家庭環境も把握していた。
それを何も知らない他の生徒に一部とはいえ暴露され、実際はあまり気にしていないものの、教師の威厳に関わるからやめてと苦笑いで返す。
しかし、佐久間もただやられているばかりではない。湊の過去の経歴や裏稼業のことは知らないが、中等部時代の修学旅行で彼の戸籍が作られた物であることを聞いた。
つまり、有里湊とは偽りの経歴で、ここにいる青年は別に本当の名前や経歴を持っているという事になる。
いいのかばらしちまうぜ、と本当にばらす気はないが佐久間が湊を脅せば、青年は場の温度を二度ほど下げる綺麗に作られた笑みを浮かべながら彼女を見た。
「まだ海水浴には早い季節だぞ、佐久間文子」
「皆、私が行方不明になったら犯人は有里君だからね！」
保護者が極道である彼が言うと本気で洒落にならない。季節外れの海水浴につれて行かれれば、そのままお魚さんたちと友達になってしまう未来しか見えないのだ。
湊と海に行くのはいいが、それは燦々と照りつける夏の日差しが眩しい海が良い。
よって、今ここで死ぬわけにはいかないと、ターニャの背中に隠れながら佐久間が他の者に自分の命を狙う男の情報を伝えていると、少女を待たせている状態で連れがショートコントのような事を始めたことをゆかりが謝罪した。
「なんか、連れがゴメンね」
「い、いえ、ブフッ……大丈夫です。で、では、お名前をお伺いします」
「月光館学園という名前で予約している者です」
「月光館学園様ですね。少々お待ちください」

湊と佐久間のやり取りがツボに入ったのか、少女は声と肩を震わせて笑いを我慢しながら、必死に自分の仕事を全うしようとする。
空気を読めない二人のせいでこうなった事を不憫に思った一同は、笑わせた犯人と旅館の内装を興味深そうに眺めているターニャを除き、全員が何も触れないであげようと何事もないように名前を伝え、少女も名前を聞いてフロントに向かうと部屋の鍵を持って戻ってきた。
「お部屋は大部屋と小部屋の二つと伺っておりますがお間違いないですか？」
「はい、大丈夫です」
これまでは湊が自分と他の者で部屋を分けて予約していたが、今回は佐久間に任せたのでどんな部屋を取っているかは佐久間しか知らない。
故に、少女の言葉には佐久間が返事を返したが、部屋の広さも内装を知らない他の者たちはどんな分け方をするつもりなのかと疑問を抱いた。
「では、ご案内させて頂きます。こちらへどうぞ」
案内してくれる少女の後に続いて旅館の中を進んで行く。浴衣を着た人と通り過ぎる際、女性客は湊を見て目を丸くし、男性客は佐久間だけでなくハイレベルなルックスの女子たちをチラリと盗み見てくる。
慣れていると言えば慣れているが、旅行先でもこうだと本当に休めるのは部屋の中ぐらいだと若干諦め、部屋に着く前に一つ確認しておこうとゆかりが口を開いた。
「先生、部屋割りはどうするんですか？」
「ふっふーん、男子と女子を同じ部屋には出来ないからね！　小部屋の方に有里君と〝引率教師〟である私が泊まって、皆は大部屋の方で楽しくわいわい泊まるんだよ！」
まぁ、素敵。とは流石にならない。
湊は見た目的には立派な男で、佐久間と並んでも自然なほど大人びている。

相手の言う事は分かるけれど、そんな二人が同じ部屋で一晩過ごすというスキャンダラスなことを認められるかと、ゆかりは目を細めて佐久間を睨みながら抗議した。
「おいこら、職権乱用すんな」
「わぁ、岳羽さんってば口が悪い。でも、普通に考えて学校行事の一環で男子と女子を同じ部屋に泊まらせる訳にはいかないでしょ？」
今回の旅行は九割方プライベートだが、名目としては部活動ということになっていて、部費の方からお金も落としているため学校行事という扱いだ。
故に、湊が誰かと同じ部屋になるとすれば、それは引率の教師である佐久間しかないのだが、ここで二人の少女が待ったをかけた。
「……私は家族だから問題ないけど。旅行のときは同じ部屋で寝てるし」
「ウチはどっちでも構わへんけど、家やと一緒に寝とるからここでも同じ部屋やっても大丈夫やで」
待ったをかけたのはチドリとラビリス。二人は湊と何度も一緒に寝ている上に、同級生ではなく家族や同居人だ。
ただし、湊が既に家を出ている事や、ラビリスが湊と一緒に暮らしている事を知らなかった佐久間は、書類に書いていた彼女の住所を思い出しながらラビリスも桔梗組で暮らしていたのかと不思議がった。
「あれ？　汐見さんも有里君と吉野さんの家で暮らしてるの？」
「ウチはマンション暮らしですよ。元々は実家を出て湊君が一人暮らししてはって、身寄りのなかったウチに一緒に暮らさへんかって誘ってくれたんです。なんで、ウチと湊はマンションで二人暮らしって訳です」
聞かれたラビリスは笑顔で訂正して、自分は湊と一緒にマンション暮らしだと答える。
二人は一緒に暮らしているとか同居という言葉は使うが、一度として同棲という言葉は使った事がない。
その辺りが両者が相手を特別な異性として意識していない証なのだが、想い人が美少女と一緒に暮らしていると聞いた佐久間は、目を

大きく開いて驚きながら湊に詰め寄った。
「先生そんなの聞いてない！　ずるいよ有里君！」
「……何がずるいのかさっぱりだ」
「何がって、先生のことは誘ってくれてないじゃん。一緒に暮らすなんて楽しいことに誘わないとかずるいよ！」
一緒に暮らすな、ではなく自分も一緒に暮らしたいという辺り、佐久間も人として守るべきラインは弁えているらしい。
中心にいる青年がまず訳ありなので、その青年と一緒にいたり、彼が見つけてきたような相手も同じく事情を抱えている者が多い。
そんな相手を追い出せと言えば青年が怒ることは分かっているので、佐久間が自分もルームシェアしたいと言い続ければ、佐久間を無視していた湊の腕を、弓道で鍛えた少女の手が力の限り掴んだ。
「……ねえ、一緒に寝てるとか私も聞いてないんだけど」
彼女として彼氏が他の女子と同じベッドで寝ているなど見過ごせない。目を細めて責めるように睨めば、湊は気にした様子もなく事の経緯を伝える。
「元々、寝室にキングサイズのベッドを一つ置いてたからな。二人で寝るだけのスペースは十分あるし、私室が狭くならないようベッドはそのまま使う事にしたんだ」
「かすみちゃんが泊まりに来たら三人で寝たりもするんよ。まぁ、湊君は在宅の仕事してて、夜はほとんど寝ぇへんけどね」
湊に続いて、ラビリスも自分たち以外に隣に住む羽入も一緒に寝る事もあると伝え、明るい笑顔を見せてきたことでやましいことはないと嫌でも理解させられる。
さらに彼が社長として多忙な事はゆかりも聞いているので、これでは何も言えないと彼の腕を離して肩を落とした。
そんなゆかりを美紀と風花が苦笑しながら慰めて廊下を進み、かなり奥の方までやってきたところで案内の少女が立ち止まり振り返る。
「こちらが大部屋の椿の間になります。そして、建物の構造の関係で少し距離があきますが、隣の葵の間が小部屋になります」
二つの部屋は共に角部屋になっており、大部屋を出て廊下の突き当

たりを曲がってすぐに小部屋があった。
隣り合ってはいないが間に部屋がないので隣ではある。大部屋と小部屋という異なる広さの部屋で近くにしようと思えばこうするしかない。
佐久間は近い部屋にして欲しいという要望は出していなかったが、相手の厚意で近い部屋にして貰えたので、不満など抱こうはずがなく。案内してくれた少女に礼を言った。
だが、本番はここからだ。小部屋が確定している湊は除外しても、他の誰が彼と同じ部屋に泊まるかという問題がある。
佐久間は自分だけが一緒に泊まるつもりでいるようだが、そうはさせないとゆかりが先手を打った。
「よし、わかった。小部屋の方は三人にしよう。有里君以外にくじで当たった二人が行けば問題も起きないし」
「ダメだよ、岳羽さん。先生は有里君と同じ部屋なんだもん！」
「あー、きこえなーい」
ゆかりとしては彼と二人きりが良かった。しかし、佐久間が言っていた通り、学校行事で男女の生徒が二人きりで泊まるのはまずい。
故に、ここは佐久間に限らず、誰も彼と二人きりにならないという選択肢を取ることにした。
子どものように嫌だと抗議してくる佐久間の意見を聞き流し、ゆかりは他の者に確認も取らず旅館の少女に布団の数の変更を伝える。
「すみません、大部屋の方に敷く予定の布団を一つ小部屋の方に変えてください」
「あ、はい。それは構いませんが大丈夫ですか？」
「ええ、問題ないです」
一番の年長者が一番子どもっぽい態度を取っているため、少女は本当に良いのかと確認を取る。
けれど、よく分かっていないラビリスやターニャは別として、他のメンバーは佐久間を湊と二人きりにするのは倫理的にマズイと考えていたため、ここはゆかりの案に乗っておこうと頷いて返した。
意見がまとまり少女が布団の数の変更をメモしている間に、一同は

鍵を受け取ってとりあえず全員で大部屋の方に入る。
部屋はとても上等な和室で木や畳の香りが心を落ち着かせる。純和風が大好きなターニャはハラショーと叫んで拍手をしており、他の者は彼女の反応に顔を綻ばせながら部屋の真ん中に置かれたテーブルまで進む。
皆に続いて少女も部屋に入ってくると、テーブルの上に置かれた施設案内の紙を指しながら、これからの予定について説明した。
「夕食は六時から個室のお座敷でお取りしてます。先に入浴して頂いても構いませんが、露天風呂は時間で男湯と女湯が切り替わるのでご注意ください。お布団は皆さんがお食事している間に敷かせて頂くので、貴重品の管理はお客様ご自身か部屋の金庫に預けてください」
一同の泊まる部屋と食事のお座敷は丁度反対に位置する。案内の看板があるので迷いはしないが、距離があるので時間にだけは注意しておこうと全員が時計を確認し、それぞれが了解したと少女に返す。
一度ですんなりと説明が終わった少女は安心した笑顔を見せ、丁寧な仕草で礼をすると部屋を出ていく。
「では、ごゆっくりお過ごしくださいませ。失礼いたします」
子どもと言えど所作の一つ一つが丁寧で、和室の戸を閉めるときも、部屋の扉を閉めるのもほとんど音を立てなかった。
幼い頃からしっかりと仕込まれているのだろうと感心しながら、夕食まで時間がある一同はくつろぎモードになってお茶などを淹れつつ過ごそうとする。
だが、いつの間にか手ぶらで歩いていた青年は時計を見ながら、よし、と普段よりやる気があるように見えなくもない顔で立ち上がった。
「……夕食まで一時間ちょっとか。じゃあ、風呂に行ってくる」
「はやっ、一息ついてからじゃないの？」
「丁度男湯の時間なんだ。せっかく来たのに露天風呂に入らないと損だろ」
「人多いから目立つし後にした方がええと思うで」
確かに施設案内の紙には六時までは男湯と書かれている。二時間

交代で次に男湯になるのは八時からなので、これを逃すと夕食後にしばらくだらけていなくてはならない。
そんな無駄な時間を過ごしたくない湊だったが、ラビリスの言う通り今は人が多い時間帯だった。
ただでさえ目立つ容姿をしているというのに、大勢の客のいる露天に行けば籠球皇子効果で話しかけられる可能性が高い。
それでは休めないし温泉も楽しめないので、湊は渋々ながら座布団に座り直した。
すると、これまで話を聞いていたターニャが、話が途切れたタイミングで口を開いて来た。
「イズヴィニーチェ、ロテンブロとはなんデスか？」
「ああ、露天風呂は屋外にあるお風呂のことやね。雨やと大変やけど晴れてたら星空を見ながら入ったり出来るから、日本の温泉旅館を満喫するならオススメやで」
ラビリスにとって露天風呂初体験は桔梗組の外風呂だった。鵜飼の趣味で小さいとはいえ山の上まで温泉を引いており、水もポンプで井戸水を汲み上げているので機械の維持費だけでかなりの費用となっている。
だが、こだわっているだけあって湯加減も景色も最高で、そのイメージが強く残っているラビリスは、ターニャに是非とも体験するべきだと話した。
話を聞いたターニャはとても興味が湧いたようで、早く入りたいとソワソワしていたが、女湯と食事の時間が被っているからとお預けをくらい。次の女湯の時間を確認して肩を落としていた。
夜――露天風呂
旅館の料理は最高だった。山の幸を堪能できるコースを選んだが、川魚や牡丹鍋など普段は食べない料理が並び、どれも素朴ながら美味しいと感じる素晴らしい出来に皆が満足した。
佐久間はさらに滅多に手に入らない〝森蘭丸〟という名の芋焼酎もいただき、商店街の店でほんの僅かだけ取り扱っていると聞いて、帰りに買って帰ることに決めていた。

そんな風に非常に楽しい夕食の時間を過ごした訳だが、くじ引きの結果湊と同じ部屋で寝るのはラビリスと風花に決まり、風花は困った顔をしながら恥ずかしそうにしていたが、決まった以上は変更も交換も無しというルールだったことで大人しく諦めていた。
そして、先に小部屋に荷物を移動させた湊は、露天風呂の時間だからと小部屋の鍵を持って風呂に向かった。
女子たちは荷物を大部屋に残していたので、これで行き違いになっても湊は小部屋に、女子らは大部屋に行く事が出来る。
そのように準備をして時間を潰し、ようやく女湯の時間になったことで移動したメンバーたちは、他に誰もいない更衣室で服を脱いでいた。
「やったね、これは貸し切りっぽいよ！」
「先生、テンション高いですね……」
「うん！　だって、お酒飲んだし、有里君と違う部屋になったんだもん。温泉くらい楽しまないとね！」
湊と別の部屋になったことは引き摺っているようだが、ウジウジしたりせずに佐久間はケラケラと楽しそうに笑う。
酔うほど酒は飲んでいないが気分は高揚していることもあって、この状態で入浴しても大丈夫かと他の者は不安を抱く。
しかし、彼女がシャツとスカートを脱いで下着姿になったところで、相手をジッと見ていたチドリがポソリと溢した。
「……やっぱり、無駄にスタイルいいわね」
「確かに先生ってよく食べる方なのにスタイルくずれないよね」
チドリの言葉に風花も同意する。
佐久間はちょこちょこと他の者より動いていることもあって、食べ盛り成長期であるゆかりたちよりも多く食べる。
流石に湊や羽入ほどは食べられないが、沢山食べて酒も飲んでいながら、スタイル維持のためのトレーニングをせずに全盛期と思われるプロポーションを維持し続けていることもあり、他の者たちは素直にすごいと佐久間を見た。
すると、自分が注目されていると気付いた彼女は、下着姿のまま振

り返って胸の下で腕を組んで持ち上げてみせた。
「にゃははー、発展途上の君たちでは出せない大人の魅力ってやつだね！」
『大人はそんな事しないと思います』
大人にしか出来ない技だが、良識ある大人はそんな事はしないと総ツッコミが入る。
言われても気にせず彼女は鼻歌を歌いながら下着を脱ぎ始め、相手から視線を外し反対側を向いたゆかりは、今回初参加のメンバーであるラビリスをみて、その透き通るような白い肌に思わず声を漏らした。
「うわぁ、ラビリスもスタイルいいよね。色白ですっごく綺麗」
「自分ではよぉ分からんけど、まぁ、ウチは日本人ちゃうから肌の色はしゃーないわ。スタイルも自分で決めた訳やないし」
ラビリスの身体の造形を決めたのはＥＰ社の人間だ。人間にしか見えず、誰も彼女がロボットだと認識できないほど精巧に作られている。
故に、彼女が綺麗だとすれば、それは作った人間のおかげであってラビリス自身の努力によるものではない。
それでも褒めてもらった事は嬉しいので笑顔で返していると、話している二人を眺めていたチドリが話に入ってきた。
「そういう貴女も去年に比べるとやけに成長してるわね。主に胸部が」
「あ、本当だ。ゆかりちゃんなんか身体付きが大人っぽくなってる」
「そ、そんなことないよ。背が伸びて全体のバランスが違って見えるからでしょ」
前に旅行に行ったときも一緒に風呂に入ったが、そのときと比較してゆかりの身体は明らかに大人っぽくなっていた。
確かに身長が伸びたことも一因ではあるが、それだけでなく胸が成長し、腰のあたりが綺麗にくびれて来ている。
中学一年生の頃は風花の方が胸が大きかったが、今ではゆかりの方が大きくなっているくらいだ。

身体が徐々に大人になりつつある証である。と思いたいところだが、チドリはやる気のないような瞳でゆかりを見詰めたまま、成長の理由はやはりあれかと尋ねた。
「……やっぱり揉まれると大きくなるの？」
「ぶふっ!?　ちょ、急になんの話よ！」
予想外の発言にゆかりは前のめりになり棚に顔をぶつけそうになる。ギリギリでその事態は避けたが、慌ててゆかりが返せば、服を脱ぎ終わりタオルを持ったチドリは、温泉の方へ向かいながら改めて先ほどの質問の意図を伝える。
「湊に揉まれて大きくなったんじゃないの？」
「い、いや、それ迷信でしょ。雑誌とかに載ってる豊胸マッサージは、効果はないのに胸を支える筋が伸びる可能性があるからダメだって話もきくし」
その話はよく聞くが医学的には何の根拠もない話で、むしろ、間違った方法で揉んだりすると胸を支える筋が伸び、将来的に垂れて形が崩れてしまうはずだとゆかりは指摘する。
実際は、好きな相手に触れられることでホルモンが分泌し、それが作用して胸などの肥大化が起こったりもするので、完全に全てが嘘という訳ではない。
けれど、医学系の知識を持つ青年はここにはいないので、真相は謎のまま扉を開けて外に出た。
すると、濛々と湯気の立ち昇る立派な温泉が目に入ってくる。これが貸し切り状態とは贅沢だと思いながら、一同は先に身体を洗うためにシャワーへと向かいながら会話を続けた。
「……揉まれた事自体は否定しなかったわね。去年はあれだけうだうだ気持ち誤魔化してたくせに、正式に付き合いだしたらちゃっかりやる事はやってるのね」
「岳羽さんの中古！　ドスケベ！　先生、不純異性交遊は禁止って言ったのに！」
「う、五月蝿い！　誰が中古か！」
ワシャワシャとシャンプーを泡立て、頭が羊のようになりながらゆ

かりを責める佐久間。
彼女は未だ男性経験なしの乙女なので、自分より年下の生徒が肉体関係に及んでいると聞いて、心の中は驚きでいっぱいだ。
けれど、教師と女の二つの立場から、その歳でそんな事をするなんていけないんだぞと怒った。
ゆかり自身、指摘されるまでもなく経験するのが早かった事は理解している。未成年というだけでなく、当時はまだ十五歳の中学生だったのだ。これで早くない訳がない。
それでも仮初の恋人の期間を経て、正式に付き合う事になってゆかりは自分の気持ちに正直に行動した。
未熟な若者として大人から責められるのは覚悟の上。言い訳をするつもりはなく、言い逃れだってしない。ただ、自分の選択に後悔するつもりもなかった。
痴女だの行き遅れだの、身体を洗いながら佐久間とゆかりが騒いでいれば、
「あの、皆さん、他に人がいないと言っても声が響きますからもう少し静かにしましょう」
『はーい』
あまり綺麗とは言えない言葉を大きな声で口にし過ぎだと美紀からストップがかかった。
一度言い争いが中断した事でゆかりたちも身体を洗う作業に戻ったが、少しすれば再びチドリが口を開いてゆかりに話しかけた。
「……話を戻すけど、どっちが誘ったの？」
「せっかく終わったのにそこ聞くかな……」
年頃の少女として興味があるのは分かる。男の方が相手の家族で、想い人でもあるようなので余計に気になるのだろうが、ゆかりが自分の性体験を話すのは恥ずかしいと思っていれば、反対側に座っていた風花も話題に乗ってきた。
「痛いとかって聞くけど、ゆかりちゃんは怖くなかったの？」
「風花まで……。いや、最初はやっぱり恥ずかしいし怖いけどさ。なんていうか、触れたいとか触れて欲しいって気持ちが勝ってくるの

よ。精神的だけじゃなく肉体的にも満たされたいって事なんだろうけど」
心と身体は理性と本能だ。そのどちらもが彼を求めたので、ゆかりは勇気を出して進み、彼と繋がる事が出来た。
改めてそのときの気持ちを言葉にしようとすると難しいが、結局はそういう事でしかないと素直に伝えた。
風花もそんな説明でなんとなくは理解してくれたらしく、ゆっくりと言葉を自分の中に取り入れるように二回ほど頷いて、最後に大恋愛だねと優しい笑みを浮かべた。
友人にそう言われると途端に恥ずかしくなるが、本人も似た境遇で自分をちゃんと理解してくれる人物との恋愛など、もう二度とないと思っているだけに一生物の恋だと思っている。
なので、照れながらも誤魔化さず、「うん」と短く答えれば、再び反対側から雰囲気を台無しに言葉で話しかけられた。
「有里君って色々と器用だけど、そっち方面もやっぱり上手なの？気持ちいい？」
「教師が生徒のそういう話に乗っていいんですか？」
「裸の付き合いで肩書きや上下関係を持ちだすのは無粋だよー」
色々と複雑な気持ちはあるが興味が勝る。佐久間はそう言いたげに頭からお湯を被って泡を流す。
生徒と同じ目線と言えば聞こえがいいが、単純に子どもっぽいだけだろうと呆れながら、ゆかりは他の者の質問に答えた時点で今日はいじられる運命だと受け入れた。
「まぁ、彼しか知らないんで比較は出来ませんけど、たぶん上手なんだと思いますよ」
「ふえー、なるほどぉ。なら初めてでも安心だね！　さって、身体も洗ったし、レッツ温泉！」
その初めてとは自分の事ではないだろうなと訝しんでゆかりは目を細める。
いくら何でも生徒と教師が肉体関係に及ぶのはマズイので、早まった真似はするなよと思いながら、ゆかりたちも身体を洗い終わってタ

オルを手に持ちながら温泉へと向かう。
お湯の色は濁った白で、美肌や関節痛に冷え症などにも効くと脱衣所に書かれていた。入る前から楽しみにしていた佐久間が、貸し切りなので早速飛び込もうと助走をつけようとしたとき、
「ん？　あ、ちょっと待っててな」
何かに気付いたラビリスが制止の声をかけた。
助走をつけようとした佐久間は危なく転けそうになるが、持ち前の身体能力を駆使してバランスを取って耐える。
しかし、一体なんなのだとラビリスの方を見れば、ラビリスは先に温泉に入りジャブジャブと進んで、奥のかけ流しのところへ到着するなり前屈みでお湯に手を入れた。
「ほら、起きって。何時間沈んどるんよ。お風呂で寝たらアカンってば」
言いながら彼女が身体を起こすと、お湯の中から貞子状態の湊が現れる。
相手は本気で寝ていたようで座ったまま目を閉じているが、ラビリスが何度も身体を揺らすとようやく目覚めて、何も付けられていない両目を開いた。
「ん……、ああ、女湯の時間になってたのか」
「とっくやで。女湯になって二十分くらい経ってるわ」
「……そうか」
まわりを見渡して手にタオルを持ったまま固まる全裸の女子たちを発見し、湊も状況を理解して右腕に巻いていた黒い布から眼帯を取り出して右眼に付ける。
これで魔眼の意図しない発動を防ぐ事が出来るので、もう大丈夫だと岩の上に置いていたタオルを頭に乗せれば、広がった髪の毛をざっくり纏めながらゆったりとくつろぎ出す。
しかし、状況を理解しておきながら青年がゆったりし、ラビリスもその傍に腰を降ろして肩までお湯に浸かったところでゆかりが再起動を果たす。
「いやいやいや、男湯と女湯が切り替わるまでずっと温泉に沈んでる

とかあり得ないってば！」
「息を止めておくのは得意なんだ。まぁ、とりあえずお湯に浸かれ。身体が冷えるぞ」
「なんで平然と混浴しようとしてんのよ。他の客が来るかもしれないんだから、さっさと出て行きなさいよ」
ゆかりに続いてチドリもタオルで身体を隠しながらツッコミをいれる。温泉が好きで何時間も入っていられるのは知っているが、ここは時間で男女が切り替わるので彼がいるとマズイ。
まだ他の客は来ていないので、騒ぎになる前に出て行けと強く睨めば、それもそうかと湊は頭に乗せていたタオルを腰に巻いて立ち上がった。
「……そうだな。じゃあ、先にあがる。そっちはゆっくり温泉を楽しんでくれ」
彼が立ち上がると濁り湯で隠れていた傷跡が露わになる。鳩尾の辺りに出来た何でついたか分からない傷跡や、肩から腰に掛けて斜めに走った刀傷など、どれも重傷だった事は素人でも分かる。
以前、チドリが彼のシャツの下を見るときは覚悟しろと言っていた理由を理解し、傷跡の衝撃で裸も見られていたことも忘れていた風花や美紀も、彼が脱衣所の扉を閉めたところでようやく再起動した。
「あ、有里君ばっちり見てたよね？」
「はい、一切リアクションしていませんが……」
再起動を果たすと見れてしまった事実を思い出す。途端に二人は顔を真っ赤にしながらお湯に浸かり、口まで沈んで恥ずかしそうにブクブクと泡を立てる。
他の者は二人と同じように恥ずかしさを感じていたが、それはまた上がってから話せばいいので、とりあえずお湯に浸かると一息ついた。
＊＊＊
全員が温泉からあがって髪を乾かし着替えて出ると、湊は自前の黒い着流しを着て、休憩スペースで旅館の少女とジュースを飲みながら周辺の地図を見ていた。

今回の旅行は染物体験以外はノープラン。移動に時間が掛かる上に、それほど観光できる場所もなさそうだったことで、そんな適当な計画を立てた訳だが、帰る前に巽屋に寄って作品を受け取るのと、その近くにあるという酒屋で芋焼酎を買って帰るくらいしか予定はない。

故に、彼が地元民の少女に話を聞いて観光できそうな場所を調べるのはいいのだが、裸を見られた方としては犯行現場の近くを彷徨いているようにしか見えなかった。

「……犯人は現場に戻ってくるって本当だったのね」

「……ここで涼んでただけだがな」

やってきたチドリがいきなり意味不明な事を言うも、湊は事情を理解して肩を竦める。

対して、話していた少女は、彼らの間を漂う微妙な空気を感じ取って、もしや旅館のサービスに不備でもあったのだろうかと心配して尋ねた。

「あの、何かありましたか？」

「ああ、大したことやないんよ。湊君が長風呂し過ぎて、女湯に切り替わってから入ったウチらと中で会っただけやねん」

「あ、なるほど」

微妙な空気の正体がお風呂場バッタリだと理解し、少女もそれはしょうがないと納得する。

けれど、すぐにある事に気付いて、少女は不思議そうに首を傾げた。

「あれ？　でも、切り替える前に従業員が中を確認するので、切り替えたのなら誰も入られてなかったはずですけど」

「有里君は寝ちゃってて底に沈んでたのよ。あのお湯の色だと底までは見えづらいから、それで見逃しちゃったんじゃないかな」

「それは大変失礼いたしました。溺れて体調を崩されたりはしていませんか？」

「少なくとも三十分は沈んでた馬鹿だから気にするだけ無駄よ」

ゆかりとチドリのコンビが少女に答えると、少女はよくそれだけ沈んでて無事だったなと驚いて見せる。

一歩間違えれば死亡事故で旅館に不穏な噂が立つところだったので、それを回避できてホッと息を吐いていれば、改めて青年の方へと向き直ったチドリが話しかけた。
「で、全員の裸を見た感想は？」
雰囲気もスタイルもバラバラだが、全員が整った容姿をしていることは共通している。
そんな女性陣の裸を一度に見るという幸運に恵まれた彼は、色々と言えば話がややこしくなるので、とても簡潔に素直な感想を口にした。
「……綺麗だったな」
「あっそ。じゃあ、私はオレンジジュース」
「先生はコーヒー牛乳にしようかな」
「ワタシはカルピスでお願いしマスね」
「ほんなら、ウチはフルーツ牛乳っての試してみるわ」
聞いておきながらチドリはどうでも良さそうに話を切り、そのまま自販機の方へと歩いてゆく。
彼女だけでなく佐久間やターニャにラビリスも続いて向かっていくが、袖から財布を出して後を追う青年の背中を見ながら、旅館の少女は裸を見られてそんな簡単に済ませるのかと風花や美紀に尋ねる。
「ジュースで許されるんですか？」
「んー、許すのとはちょっと違うかな」
「私たちも複雑ですけど、覗いた訳ではなく寝てしまっていただけですから、落とし所としてジュース一つって感じですね」
故意ではなく不幸が重なって起きた事故だった。だからこそ、恥ずかしさはまだ残っているが、ジュース一本で話を終わらせるのだ。
彼らのそんな互いを信用しているからこその関係を知って少女は口元を歪ませ。風花たちも後を追うというので、失礼しますと一礼してから去って行った。
「さて、明日の事だが町を一望できる高台があるらしい。そこに寄ってから商店街に向かい。染物を受け取り、土産を買って帰ろうと思う」

風花たちも湊に追い付き飲み物を買ってもらうと、全員がジュースを飲みながら再び地図の前に集まる。
少女から聞いた高台の景色は町だけでなく遠くの山まで見渡せるので、この辺りでは一番の眺めなんだとか。
それを見てから土産を買いに行っても時間は大丈夫なので、軽いピクニックをしてから買い物をして帰ろうと伝えれば、全員が了解したと頷いて返した。
翌日の予定が決まれば後は自由行動。卓球をしてみたいというターニャと一緒に卓球場へ向かったり、レトロなゲームの置かれた遊技場をひやかしたり、一同は遅くまで遊び倒した。
そして、翌日は朝風呂を楽しんでから旅館の朝食を味わい。注文しておいたお弁当を持って高台で景色と共に昼食を楽しむと、商店街で土産を買って自分の染めた作品を受け取って、色々とハプニングもあったが良い旅だったと無事に稲羽市を後にしたのだった。

第百七十三話　テニスの皇子様

５月２５日（日）
昼――都立運動公園

一学期の中間テストを終えたばかりの日曜日。部活メンバーはラビリスや理緒がテニスの試合に出ると聞いて応援に来ていた。

都内の学校かテニススクールに通う高校生を対象とした、アーリーサマーカップというちょっとした規模の大会で、この試合で上位に食い込む者が今後の高校テニスや大会に出てくるという意味では、新人戦気分の一年以外は情報収集も兼ねた偵察の場と言える。

参加人数は一二二人。それまでの戦績によって上位六人が一回戦のシードを得ており、一日目に三回戦まで進め、二日目に続きから決勝までを行うという強行日程だが、残念なことに参加した月光館学園の生徒は全員が一日目に消えていた。

試合に出るからと土曜日の試験を前倒しで受けたというのに、負けてしまって不甲斐ないと落ち込んでいた者もいたけれど、ラビリスは自分がまだ初心者だと理解していたので、悔しいけど楽しかったと晴れやかな表情をしていた。

しかし、月光館学園の生徒らが全員既に敗退したのなら、どうして彼女たちが二日目に試合を見に来たのかというと、それは男子の試合を見るためであった。

「私、有里君がテニス出来るとか初めて聞いたんだけど」

黒と蛍光色の黄色という二色でデザインされたフレームのラケットを握り、湊が右手のフォアハンドのストロークを見せる。

深い位置に飛んだボールを相手の選手が空いたクロスに打ち返すも、打つ前にフォームを見て動き出していた湊が、ラケットを持ち替え余裕で追い付き左手のフォアハンドで厳しいコースに打ち込み決めた。

どんな人間でもボールを打ってから次に動くまでに僅かな時間が必要になる。湊は相手が打つ前に動き出し早くボールに到達して返してくるため、相手にすれば返ってくるまでの時間が短くなり、さら

に抜群のコントロールで厳しいコースを攻めるのでほとんどの選手は追い付く事が出来なかった。
「……私も初めて聞いたけど。学校でもプライベートでもテニスなんてしてるの見た事なかったし」
「ウチも知らんかったよ。まぁ、ウチが試合に出るっていうたら応援だけじゃつまらんからーってスポーツクラブ経由で参加を申し込んではったけど」
ゆかりだけでなく幼少期から一緒にいたチドリも、現在共に暮らしているラビリスも青年がテニスをしている姿を見た事がなかった。
事実、湊はチドリたちと出会ってから一度もテニスをした事がない。けれど、彼は純粋な身体能力だけでなく、経験者から見ても唸るようなテクニックを持っていた。
湊は月光館学園の男子テニス部から出場したのではなく、ＥＰ社のスポーツクラブのテニス部門〝ＥＰＴＣ〟からの応募で参加している。
といっても、実際にそこでプレーしたことは一度もなく、湊と同じようにＥＰＴＣから参加した選手やコーチたちも、初めて見る彼のプレーには純粋に驚いていた。
最初は籠球皇子がテニスにも進出と色物的な扱いで騒がれていたが、二日目になってからは既にそんな声は消えている。
ここには全国に行く者やプロを目指している者も参加しているのだ。そんな中で勝ち上がり続けている以上、その実力は本物だと認めるしかない。
ゲームが終わり湊のサービスに代わる。右手でラケットを持った湊は、高くトスをあげると真っ直ぐフラットのファーストを打ち込んだ。
「は、はやいね。何キロくらい出てるのかな？」
打った音が聞こえたと思えば、すぐにサービスコートに届き、相手に触れさせる事もなくサービスエースを決める。
湊はその長身と長い手足によって他の選手より打点が高いため、ボールの軌道の違いからネットに掛かり辛いという強みがある。

ジャンプしながら打てばさらに打点は高くなるので、全身のしなりを利用して腕を鞭のように振るって放つサーブは、一九〇キロという速球でも安定して入れる事が出来ていた。

一九〇キロならば男子なら出せる者も沢山いる。ただ、それを安定して入れ続ける事が出来るかどうかは別の話で、もっと言えば湊のサーブは余裕を残して打っており、彼の一九〇キロは安定して入れられるラインでしかなかった。

続けて左手にラケットを持ち替えて打ったサーブは、速球ではなく外に逃げるスピン。左サイドからサーブをするなら右手よりも左手で打った方が角度がつくのに加え、直前の速球が頭に残っていたせいで反応が遅れた相手は、駆けこんでギリギリ触れる事は出来たが上手く返せず、苦し紛れのショットは湊に空いたスペースにボレーで決められていた。

「駆け引きも上手いですね。素人でも有里君が試合をコントロールしているのが分かります」

「ダー、相手のイグロークも大変デスね。ミナトとの試合はとても疲れそうデス」

湊といま試合している選手はシードではないがそれに近い実力を持った高校三年生。有名なテニスクラブ出身で優勝候補として数えられていたが、自分のテニスをする事が出来ずほとんどポイントを取れていない。

フォームからの先読みの動き出しの速さを除けば、湊は派手なプレーはほとんどしていない。相手の打ちづらい場所に返し、抜けそうなときは厳しいコースを突いて行くスタイル。

それだけで試合をコントロールしているので、駆け引きの上手さもあるのだろうが、コントロール重視で相手のテニスを封じる試合運びは、誰にでも出来る可能性があるという点に置いて参考になり、他所の選手やコーチらもビデオで撮影しながら見学していた。

「でも、チドリちゃんも知らないならどこでテニスなんて覚えたんだろうね。バスケットよりこっちの方が上手く見えるし。留学中にでもやってたのかな？」

彼のファンだけでなくテニスに関わる者たちもギャラリーとして観戦している試合を見ながら、風花は本当に上手だねと褒めた上で疑問を口にした。
チドリが知らないとすれば一番高いのは留学中に経験していた可能性である。
日本よりも海外の方が土地がある分テニスコートも多かったりするので、その国でのテニス普及率にもよるが、一年も海外にいたなら休日に楽しんでいたことは十分に考えられた。
もっとも、彼が海外にいたころの休日の過ごし方など誰も聞いていないので、本人が試合中のいま答えは分からない。
そうして、彼のテニスの経験について一同が首を傾げていると、突然後ろから女性の声が聞こえてきた。
「あの子がテニスをしていたのは四歳くらいの頃よ」
『……え？』
声が聞こえて全員が振り返る。するとそこには、ニコニコと柔らかい笑みを浮かべた英恵が立っていた。
すぐ傍に護衛らしき黒髪の女性を控えさせながらチドリたちの元までやってくると、英恵は湊のプレーを見て感嘆の声を漏らす。
「はぁ……やっぱり、上手ねぇ」
「……なんでいるの？」
「子どもが試合に出るなら見に来るものでしょう？　丁度こっちに用事があったから、見るために寄ったんです」
尋ねたチドリに英恵は笑顔で答える。少女としてはそういう答えを求めていた訳ではないだろうが、訊かれたことに対しての返答なら間違っていない。
質問に答え終わった女性はコートに視線を戻し、柔らかな雰囲気で微笑み優しい眼差しで湊を見つめる。
突然現れた女性に驚いていたメンバーたちもそこで回復し、直前の会話の中に引っ掛かるものを感じた風花が不思議そうに女性に尋ねた。
「子どもの試合って、有里君のお母さんですか？　あれ、でも有里君の

ご両親は事故で……」
湊の両親は既に他界している。それは本人が認めており、さらに言えば以前チドリに見せてもらった写真に写っていた女性とも別人だ。
複雑な家庭で生みの親と育ての親が違い、女性がそのどちらかである可能性も否定できないが、風花が女性の正体について考え込んでいると、驚き混乱した様子のゆかりが話に割り込んでくる。
「ちょ、ま、待って。この人有里君のじゃなくて、その、桐条先輩のお母さんの桐条英恵さんですよね？」
「ええ、確かに私は美鶴の母親の桐条英恵です。ゆかりさんとは何度かパーティーでお会いしていましたね。どうもこんにちは」
『こ、こんにちは』
正体が判明するもチドリを除いた一同は状況が飲み込めず、相手につられて挨拶を返す。
ゆかりに言われてから相手のことを見れば、髪の毛の質やスタイルの良さは確かに美鶴と似ている。
雰囲気に関しては対極とも言えるくらい違っているが、その点に関しては父親に似たと考えれば違ってもおかしくない。
故に、彼女が本物の美鶴の母親なのだと認識したところで、美紀は先ほどの会話と相手の正体を結び付けて、信じがたい事実に気付いてしまう。
「えっと、桐条先輩のお母さんの子どもが有里君って、お二人は姉弟だったんですか!?」
湊と美鶴が姉弟なら今年一番の驚きのニュースだ。
二人は共に文武両道でルックスも整っている。少しきつめの目付きで冷たく感じる印象も含めて共通点は多かった。
だがしかし、二人が姉弟ならば死んだ湊の両親の存在が謎を残す。名字も違っていれば、普段の学校での態度を見ていると姉弟だとはとても信じられない。
けれど、美鶴の母親である英恵が湊を子どもだと言ったので、一体どういう事だと悩んでいれば、後ろから美紀の疑問に答える声が届いてきた。

「いや、私と彼に血の繋がりはない。養子などで義理の姉弟にもなっていないしな」
「あ、桐条先輩」
　喋りながら現れたのは制服姿の美鶴だった。メンバーたちが挨拶として会釈すると美鶴も挨拶を返し、そのまま母親の隣まで進んでから口を開く。
「お母様、来られるのなら前もって連絡しておいてください。急に体調を崩したらどうするんですか」
「フフッ、美鶴は心配症ね。大丈夫よ、試合の撮影をしてくれている方がいるし、傍には八尋さんが付いていてくれるから」
　テニスの試合の事を伝えたのは美鶴だ。その際、美鶴が湊と八雲が同一人物だと気付き、それを英恵に伝えることを桐条も黙認したことで、もう隠す必要がないなら会いに行くのもいいかもしれないと彼女は言っていた。
　本当に来ていそうだと不安になってやってきた美鶴の予想は的中し、英恵は正体を隠しもせずに青年と親しい者らと一緒に試合を観戦していた。
　彼女が作っていた湊に関する記事を集めたスクラップ帳などから、美鶴も母がどれほど湊のことを気に掛けていたのかは分かっている。
　しかし、身体の弱い英恵がこんな場所で長時間試合の観戦をしていれば、体調を崩して倒れてしまうと心配するも、英恵は傍に控えていた黒髪の女性を紹介し、女性も一礼してから自己紹介をした。
「英恵様のお傍御用を勤めさせて頂いております、和邇（かじ）　八尋（やひろ）と申します。本日は湊お坊ちゃまの試合が行われるコート全てに四台のカメラを配備しておりまして、使用人は会場に二十二名来ておりますのでご安心ください」
「そ、そうか……多過ぎるだろ」
　仕事が出来そうなクールビューティー系の容姿で淡々と伝える和邇に、引き気味でボソッとツッコミを入れる美鶴。
　試合するコートを先に割り出してのカメラ設置など、あらゆる面で用意周到過ぎて逆に怖い。宗家の使用人は動いていないので、今日こ

の会場に来ている二十二名は全て英恵の暮らす別邸からやってきたことになる。
バスでも借りてやってきたのか知らないが、それだけの人数を子どもの思い出を残すためだけに導入する辺り、我慢していた分だけ親馬鹿が加速しているのだと美鶴は理解した。
そうして、美鶴が母の意外な行動力にたじたじになっていると、二人の会話が一区切りしたところでゆかりが再び話しかけてきた。
「あの、桐条先輩と有里君が姉弟じゃないなら、英恵さんの子どもってどういう事ですか？」
「私とあの子の母親は親友だったんです。二人は地方で静養している私が寂しくないようにと頻繁に会いに来てくれて、ご両親が用事があるときには別邸に泊まったりもしていましたから、小さい頃から可愛がっていたあの子は実の息子も同然なんです。何より、あの子の母親から自分にもしもの事があればと頼まれていましたから」
他の者は湊の母が子どもの事を英恵に頼んでいても、それはただ大切な子どもを独りにしてしまう事を心配していたんだろうと認識する。
しかし、実際のところは周囲ではなく、彼の内に存在する名切りの影響を懸念し、英恵に名切りの生まれに関して伝えて頼んでいた。
それが功を奏して彼は神降ろしを経ても生き残り、今も彼女たちの視線の先でボールを追っている。
もっとも、英恵があまりに湊の事を気に掛けているため、ゆかりたちは実子である美鶴にすれば複雑なのではないかと横目で見る。
その視線に気付いたのか美鶴は苦笑し、首を軽く横に振って心配はいらないと返す。
「フフッ、流石にこの歳で嫉妬したりはしないさ。実際、私と有里なら有里の方がお母様と過ごしていた時間は長いしな」
実家で桐条家としての教育を受けていた美鶴よりも、自由に暮らしていた湊の方が英恵のもとを訪れていた。
共にいた時間にすれば湊の方が長かったくらいで、彼とその家族が死んだという報せを受けて廃人のようになっていた姿を思えば、湊が

養子になって英恵の傍にいてくれた方が良いとすら美鶴は考えている。
故に、実子としての独占欲で湊に嫉妬するかと聞かれれば、美鶴は断じてそれはないと答える事が出来た。
彼女の言葉を聞いて安心したのかゆかりはコートに視線を向け、まだまだ自分は彼を知らないと少々悔しそうにしながらも意外だったと話す。
「彼から昔の話とかってあんまり聞いてないんですけど、有里君って桐条家と親しかったんですね。なんか普段の彼の桐条先輩への態度を見てると意外です」
「彼と親しかったのはお母様だけだ。私も父も彼とは数えるほどしか言葉を交わした事はない。愚かなことに大きな家ほど彼らを避けていたからな」
ムーンライトブリッジの事故で鬼が消えてから九年、今尚、鬼の影響は様々なところに残っている。
蘇った鬼が裏界最大組織を陥とした裏の世界の話ではなく、そのことを知らない旧家や名家も鬼の迷信を信じて鬼の遺産を手に入れようとしていない。
百鬼の家には表に出せば騒ぎになるような国宝級の物が数多く眠っている。それらは武器や道具を保管している蔵の地下に安置され、時間が経とうと神秘的な輝きを失わずに使える状態で現存している。
屋敷も含めて管理は九頭龍が行っているが、百鬼の道具を譲ってほしいと頼まれた事はなく、誰もが話題として出す事を避けている節があるため、鬼を忌避する風潮は未だに健在だと美鶴も認識していた。
ただ、パーティーに出席していても会話にほとんど参加していないゆかりは、湊と八雲をイコールで結べないこともあって美鶴の話がいまいち理解できない。
「避けてたって、有里君たちに何かあったんですか？」
「時代錯誤の迷信のようなものです。あの子は少し特殊な生まれで、家が大きくなると人一倍迷信を信じますから避けられていたんです。

それと後は彼らに対する嫉妬もあったんだと思います。家柄でも能力でも勝てないので、そういう部分で蔑むことで小さなプライドを守っていたんでしょう」

紀元前から続く由緒ある家柄に、数多の分野で一流になれるポテンシャル、他者を魅了して止まない容姿など百鬼は天から二物も三物も与えられていた。

プライドの高い者たちはそれに嫉妬し、彼らを呪われた鬼と呼ぶ事で心の平静を保っていたに違いない。

彼らが死んでからも畏れて大人しくしている辺り、鬼の影響力は計り知れないと思わされるが、英恵たちがそんな風に話していると、湊がマッチポイントで決定的なチャンスを作り出していた。

ボールを深い位置に打ち込みつつ、左右に振る事で相手の体勢を崩そうとする。かなり厳しいコースを攻めているので、相手は必死に追い付き本当にただ返すだけとなっているが、大きく外に逃げるボールを打たれた事で、相手は追い付くのが精一杯で反対側をがら空きにしてしまった。

相手も打った後にすぐ気付いたのだろう。時間稼ぎに山なりで返したボールに湊が向かっているのを目にした瞬間、間に合えと空けてしまったサイドへ駆けようとする。

絶好のチャンス。湊がクロスにフラットで打ち込めば相手はきっと返せない。これで試合は終了だとスイングする湊と駆ける相手選手を皆が見ていれば、

「こ、ここでドロップショット」

「相手も愕然としてますね」

なんと湊は空いている絶好のスペースへの直球ではなく、正面へのドロップショットを打って試合を決めた。

今までベースラインを狙って深い球を打っていたので、誰もが最後も同じショットを打ってくると思っていた。

しかし、全員がそう考え、相手選手も間に合うかどうか分からないが追い付く可能性を上げるために走り出していたことで、湊は隙を突く全く予想していないショットを打った。

これには相手も脱力するしかなく、観客も巧いと唸って勝者と最後まで戦い続けた敗者へ称賛の拍手を送った。
コートの中央に集まり礼をして、結果報告をするためボールを持った湊はテニスバッグを担いでコートを出ると、出待ちをしていたファンと握手をしてやってからメンバーたちの元へやってくる。
そして、ここに本来いるはずのない人物の姿を発見し、目で何故いるのか尋ねてくる相手に、英恵が小さく手を振って声をかけた。
「久しぶりね。勝ち上がりおめでとう」
「……観戦するなら疲れないように座ってみてくれ。急に貧血を起こすことだってあるんだぞ」
「ええ、次はそうするわ。フフッ、でも貴方も美鶴も会ってすぐに同じような事を言うのね」
傍に美鶴もいることで湊も事情を察したようで、英恵の心配をしつつ彼女の傍までやってくる。
数年ぶりの再会だと思っている美鶴は、二人があまりにあっさりとした再会で済ましていることに驚いているが、英恵の口にした久しぶりというのは数週間程度の話だ。
数年ぶりも、数週間ぶりも、再会を喜ぶときには同じ〝久しぶり〟という言葉を使うので、肝心な最初の一言にそれを理解して言葉を選んだ英恵の頭脳プレーである。
そんな細かい事までは考えていなかった湊と英恵が話していると、傍で二人のやり取りを見ていたゆかりが驚きで唖然としていた。
「あ、有里君が喋った……」
「俺は別に無口キャラという訳ではないからな。必要があれば喋りもするさ」
「そうじゃなくて、桐条先輩とは話さないのに、そのお母さんとは話すのが不思議で」
言われてみれば確かにと他の者の視線も集まる。美鶴本人が湊と親しかったのは母だけだと言っていたが、親子の親の方だけと話して子どもとは話をしないのは違和感がある。
事情を知る者にすれば両者への対応に差があるのも理解出来るが、

事情を知らぬ者らが湊と美鶴の事を見て、場に気まずい空気が流れかけたとき英恵が手を一つ叩いた。
「そうそう。試合の後は何か用事でもあるのかしら？」
「……別にない」
「そう。なら、今夜一緒に食事でもどう？　貴方と色々話したいの」
「……考えておく」
それだけ答えると湊は試合結果の報告のために大会本部へと去って行った。
英恵は子どもたちが気まずい雰囲気にならぬよう気を遣ったが、青年と一緒に食事に行きたいというのも本心だった。
食事には美鶴も連れていく予定で、それを知れば子どもたち二人は微妙な顔をしそうだが、強く希望されれば二人とも断れないと分かっている。
場の空気を変えるだけでなく、自分の希望もちゃっかり通す強かさは流石の歳の功だった。
そして、その後の試合も湊は順調に勝ち進み、決勝では第一シードの選手とファイナルセットにもつれ込みながらも、先にゲームをブレイクしてそのまま連取で勝利を収め見事優勝を果たした。
――都内レストラン
「じゃあ、八雲君の優勝を祝して乾杯」
都内の個室レストランへとやってきた英恵は、ワインのグラスを片手に笑顔で乾杯の音頭を取る。
それに合わせて湊と美鶴もソフトドリンクの注がれたグラスを胸の高さにあげて応えるが、とても気まずそうに落ち着かない様子の美鶴と、いつも通りの気だるげな顔をしている湊を見て、英恵はこういった場でも湊は口を聞いてあげないのだなと苦笑した。
湊が美鶴と口を聞かないのは、美鶴が何も知らないで父親を肯定するからで、端的に言えば馬鹿と話しても時間の無駄だからという事らしい。
確かに美鶴は桐条の暗部をほとんど教えて貰っておらず、影時間に関しての知識は基本的な部分と発生原因が桐条グループにあるくら

いしか知らない。
しかし、そんな部分はどうでもいいのだ。基礎知識として知っておいた方がいいだろうが、湊の言っているのはそういう事ではなく、自分の戦う理由すら理解せずに桐条の罪や人々のためと大層な事を口にしているのが愚かなのだという。
無関係の者を巻き込んで命懸けで戦うなら、命を賭ける理由くらい把握しておけという事だ。
「フフッ、ブランクがあったのに上手だったわね。両利きを活かしたスイッチフォアハンドはお母さん譲りね」
子どもたちが会話できないなら自分から話すしかない。英恵はヒラメのムニエルをナイフで切りながら、青年のどちらも片手のフォアハンドで打っていたプレースタイルが母親そっくりだったと懐かしそうに言う。
すると、パンを一口大にちぎっていた美鶴が、青年の母親がテニスをしていたとは知らなかったと興味を持つ。
「八雲のお母様もテニスをしていたのですか？」
「ええ、高校から始めて三年生でインターハイを制覇するほど上手かったのよ。インターハイ優勝のワイルド特別枠カードで出場した全日本選手権では、二回戦で当時のランキング一位と当たって大接戦のファイナルセットで負けてしまったけど。色々なところからプロの誘いがあったくらいだったんだから」
親友の嘗ての活躍を娘に話す英恵はとても誇らしげにしている。
彼女の言う通り、湊の母親である菖蒲は高校から部活でテニスをしており。高い身体能力とセンスで一年の頃から頭角を現し、三年目にしてついに全国大会を制覇した。
当時の菖蒲のプレースタイルは湊と同じ両利きのフォアハンドを活かしたオールラウンダー。湊ほど球種は多くなかったが、厳しいコースや空いているスペースを積極的に狙うという、シンプルでいて果敢に攻める攻撃的なテニスは見る者を魅了した。
青年はそんな母親から幼少期に手解きを受けており、幼い頃からやっている者特有の繊細なボールタッチも習得していたのだ。

母親から日本の女子トップを苦しめたテニスを学び、さらに遊びながらテクニックを習得していった湊はまさに母親の上位互換。両者のプレーを見ていた英恵には、子どもが親の技を発展させ完成させたように映っていた。
「それで、八雲君はどうしてテニスをしようと思ったの？　やっぱりお母さんの影響？」
「……本格的にやるつもりはない。ただ、母さんが大会で優勝したことは聞いていたから、俺も一度くらい大会で勝っておこうと思ったんだ」
問われた湊は素直に答える。テニスに特別な思いがあった訳ではなく、あくまで母親との繋がりとして再びテニスをしてみたと。
ブランクがあったので全力が出し切れたとは言い難い。それでも湊は母親に教わったテニスで見事に優勝を果たした。
インターハイと都内の大会では出場する選手のレベルに差があり、湊自身この一回の優勝で母親と同じ場所に立てたとは思っていない。
それでも確かに一つの結果は残した。この結果を受けてこれからまた母と同じように大会に出場し勝ち進んでもいいし、規模は異なっても優勝は優勝だとやめてしまってもいい。
青年がどちらを選ぶにせよ、話を聞いた英恵たちは、青年が再びテニスをしようと思った理由が、記録としてでもいいから母に触れたかったのだという事を理解した。
きっと本人は、そう言えばと母がテニスをしていたこと思い出して、なんとなくの思い付きで自分が試合をしたと思っている事だろう。
テニスと影時間の戦いで種類は異なるが、己が行動の根幹の理由が見えていないのは湊も同じで、しかし、それは青年から早くに親を奪ってしまったことが原因だと分かっている二人は、僅かに目を伏せるとすぐに普段通りの表情になった英恵が湊に話しかけた。
「貴方を見ていると菖蒲さんが重なるときがあって懐かしい気持ちになるわ。仕草だったり、考え方だったり、親子だからというより知らずに真似をして似たんでしょうけど、そういうのを見ると彼女が貴方

の中で生きているんだってつくづく思えて嬉しくなるの」
両親の良いところばかりを貰って生まれた青年は二人によく似ている。ただ、強いて言えば母親の方が似ており、それは仕草などからも見てとれるので菖蒲のことを知っている者にすれば懐かしい気持ちになる。
父親よりも母親と一緒にいる時間の方が長かったためだろうが、母親との記憶や思い出が確かに存在した証となって、受け継ぐ形で菖蒲が湊に中で生きているように感じた。
英恵が昔を懐かしむように目を細めて優しく彼を見れば、食事をしていた青年は眼帯を付けていない左眼の視線を皿に落としてポツリと溢した。
「……似てない方が俺は嬉しい」
「どうして、そう思うの？」
もしや、両親のことが嫌いだったのだろうか。そんなはずはないと思っても理由が分からず英恵は不安になる。
尋ねられても湊は何も答えず、そのまま黙々と食事を続けて全て食べ終わると、最後に水を飲んで立ち上がった。
「ごちそうさま。少し用事があるから先に帰る」
立ち上がった湊はポケットから連絡先の書いたメモ用紙を取り出し、それを英恵のところに置くと部屋を出て行ってしまった。
連絡先は前から聞いていたので今さら教えてもらう必要はないが、二人は久しぶりに再会したことになっているので、美鶴の前ということもあって敢えて連絡先を交換して見せたのだろう。
そこまで気を回したのなら彼は別に怒って帰った訳ではないと思うが、もう少し一緒に話したかったというのに湊が帰ってしまった事で、英恵は自分の言葉が彼を傷付けてしまったのかと暗い表情になる。
すると、湊が帰った理由を同じように考えていた美鶴が、あることを思い出して彼の発言の意味を察して、そのことを母に伝えた。
「お母様、以前お話した流れ込んできた彼の記憶の中に、うちの研究員らしき者を斬り伏せていくものがありました。そこから推測するに

彼は人を殺めたことがあるんだと思います。つまり、先ほどの言葉は〝自分なんかと〟という意味だったのかと」

美鶴は去年ムーンライトブリッジで湊の記憶を見てから、桐条グループのサーバを調べて過去に研究員が大量に死んだ事件や事故がなかったかを洗った。

ペルソナに目覚めた湊が回収されていたことは予想していたが、それらしい施設の情報などはまるで知らなかった。

だとすれば、それは桐条武治が高位ＩＤでしか閲覧できないように制限している可能性が高い。子どもである美鶴は知らなくてもいいと隠されれば、情報戦が得意という訳ではない美鶴では調べようがないため、彼女は研究員の大量死という隠しようのない結果の方から攻めることにしたのだ。

そして、彼女はある事故の記事に行き当たった。ポートアイランドインパクトから約一年経とうとしたときに起きた製薬会社のガス管破裂事故という記事に。

ポートアイランドインパクトを起こした桐条グループが今度は被害者になったこともあり、マスコミも大々的に取り上げ、事故当時の写真も映像も大量に残っていた。

記録が大量に残っていることで調べ物は順調に進み、ヘリを使って上空から撮影したものを見た美鶴は一目でガス管破裂事故などではないと察した。

なにせ、ガス管の破裂による爆発で建物が真っ二つになることなどあり得ないから。

ガス管破裂事故とされるものを湊が起こしたのなら、そのときの犠牲者はほとんど彼が殺したに違いない。百人を超える大人を小学校低学年の子どもが殺したなど驚きだが、それを悪行と理解して罪を背負っている彼はまだ正常な判断力を有している。

力は語られる鬼であったが、心は人であった事を彼女は幸いに思ったが、美鶴よりも青年のことを深く知っている英恵は娘から言葉の意味を教えてもらうと困った顔をして深く溜め息を吐いた。

「……はぁ、あの子は昔から自己評価が低かったのよね。研究員を殺

めたのも被験体の子どもたちを守るためでしょうに、間違った手段ではあっても正しい行動だったと自分を肯定できないものかしら」
湊の自己評価は最低値。存在するだけで害悪なので処分すべきと、２００９年の戦いが無ければチドリたちの前からも消えているくらいだ。
美鶴もかなり不器用にしか生きられないタイプだが、湊はそれ以上に不器用で生きづらそうに見える。
子どもたちは二人とも頭はいいのに何故こうも生きるのが下手なのかと疑問を持ったが、頭がいいからこそ一周回って馬鹿なのだろうと、英恵は思わず苦笑しながら湊の置いて行ったメモを大切に鞄に仕舞ってから、パンのおかわりを頼んで美鶴との食事を楽しむことにした。

影時間――美紀私室
「な、なに……これ……？」
夜中にふと目を覚ました美紀は、どこか普段と異なる空気を感じて窓の外に広がる光景に目を疑った。
緑色の空で眩しいくらいに輝く大きな月、天高く聳える異形の塔、血に見える赤黒い液体が付着した道路など何もかもがおかしかった。
空が緑色なのも関係あるのか少し息苦しく、不安を覚えた美紀は慌てて部屋を飛び出し、そのまま両親の寝室へ向かう。
「お父さん、お母さん！」
二人に会って安心したい。そう思って勢いよくドアを開けると、そこにはベッドの上に転がる二つの棺桶があった。
あんなものは家にはなかった。両親の姿はなく代わりに棺桶が置かれ、美紀は一体何が起こっているのかと泣き出したい気持ちになるが、他の部屋を探してからでも遅くはないと両親の寝室を後にする。
リビング、キッチン、トイレ、お風呂、兄の部屋も見ていくが誰もいない。
時計は零時丁度で止まっていて、何か情報はないかとテレビやパソコンを点けようとしたが反応がなく、ならば携帯はと最後の希望を

持ってみたが結果はテレビと同じだった。
「な、なんなんですか、これ……。だれか、誰かいませんか！」
家にいても何も分からない。一人でこの訳の分からない状況にいるのが怖くて、美紀はパジャマ姿のままサンダルを履き。外に出ると大声を出して近所の家に向かって呼び掛けた。
零時と言えば深夜ではあるが起きている人間もまだまだいる。しかし、どの家も電気が消えていて街灯すら一つも点いていない。
必死に走る美紀がまわりが見えているのは空に浮かぶ月のおかげだ。本来は太陽の光を反射しているだけだが、いま空に浮かんでいる月は自ら発光しているように見えた。
それも含めて異常事態だが、美紀は既に自分の理解の限界を超えているせいで頭が回らず、ただ誰でもいいから人に会いたかった。
こんな異常な世界で一人は嫌だった。このままでは不安で頭がおかしくなる。そうして、泣きだす一歩手前で走っていると、少し先の方から物音が聞こえてきた。
風で何かが転がっただけの可能性もあるが、自分と同じ状況に陥った人かもしれない。そう思って美紀は音のした方を目指し、それほど広くない路地を曲がって音の発生源を見た。
「……え？」
音は聞き間違いではなかった。そこには確かにナニかが存在して、ゆっくりと道を歩いていた。
けれど、そのナニかが美紀には理解出来なかった。ボロボロのフード付きコートを纏った人型のナニかがいるのだが、そのナニかの身体は人のそれではなく火の灯ったランタンになっているのだ。
姿が異形なだけでなく、そのナニかからは明らかに生きている気配がしない。
美紀はあれは危険な存在だと報せる本能に従い逃げようとした。だが、恐怖で身体が上手く動かなくなっていた彼女は、無理矢理に走り出そうとして足をもつれさせてこけてしまう。
「きゃあっ」
倒れて思わず声を出してしまった美紀は、顔を上げてすぐに自分の

失敗を悟った。少し離れた場所にいたナニかが美紀の声に反応し向かって来たのだ。
相手の移動速度は速くないが、遅いという訳でもない。けれど、美紀は敵が迫っている恐怖で腰が抜けてしまっていた。
「い、いやっ」
腰が抜けながらも少しでも逃げようと腕の力で這って行く。意味がない事は分かっているが、逃げようとする本能が美紀にそうさせた。
もっとも、敵は既に傍に来ていたが。
「あ、あぁ……」
美紀から五メートルほど離れた場所で止まった相手は、コートをはためかせながら炎の球を形成し始める。
あれで自分を殺すのか。見ただけで理解してしまった美紀は諦めて目を瞑ろうとする。
兄や荒垣、本当の両親と今の両親、部活の仲間たちの姿が浮かんできて、これが走馬灯かと死を覚悟した。
そして、膨れ上がる炎が発するゴォッという音が耳に届いたとき、目を閉じかけた美紀の前にそれは現れた。
「――――え？」
美紀の目に映ったのは、彼女を守る様に美紀と火球の間に降り立った巨躯の青い天使。
太い腕の一振りで火球を霧散させると、そのまま翼を広げて火球を放った者の元まで拳を振り上げながら飛ぶ。
相手は突然現れた天使に驚いたのか、火球が消された時点で逃げようとしていたが、動き出しの差でそれは間に合わず、剛腕に殴られ身体をくの字に曲げながら吹き飛び黒い靄になって消えた。
何が起こったのか分からないが、天使が自分を助けてくれたことだけは分かる。
命の危機が去ったことに安堵していれば、青い天使が光になって消えていき、天使の身体で隠れて見えなかっただけでそこに人がいることに気付き、美紀はその相手に話しかけられてさらに驚いた。

「真田、こんな時間に外を彷徨くな」
「有里君っ!!」
「……っ」
ようやく会えた人間がよく知った人物だったことで、美紀は緊張の糸が切れて彼に泣きながら抱きついた。
急に抱きつかれて湊は驚いたようだが、美紀が泣いていると分かると小さく溜め息を吐いてから少女の頭を撫で、彼女が泣き止むまでそこを動かなかった。

第百七十四話　少女の適性

５月２６日（月）
朝――月光館学園
湊がテニスの大会で優勝した翌日、久しぶりにバイクではなく電車に乗って登校すると、それなりに人の多い車内で痴漢を働いている者がいたので相手を締め上げ。携帯に登録してある駅直通の番号に電話をかけて、駅に着くなり待って貰っていた駅員に痴漢を任せて湊はそのまま電車に乗り続けた。
湊が通学で電車を利用するようになってから区間内の痴漢発生率が減少しており、湊が何人も痴漢逮捕に協力していることもあって、駅員たちも彼の活躍を喜びながら「ご苦労様です」と顔なじみになっている。
おかげで発生場所や発生時の状況に被害者の連絡先などの必要事項を指定の用紙に書いておけば、痴漢と一緒にそれを渡すことでいちいち電車から降りる必要がなく、聞きたい事があればまた連絡するという形を取ることで学校に遅れずに済んでいた。
テニスの大会で優勝したからか、朝のニュースで再び皇子として取り上げられ、また騒がれるようになってしまい。湊は朝からまわりの声を五月蝿く感じていた。
そんなときに痴漢などという下衆な行為を行っている者をみて、大変不快な思いになった湊は八つ当たり気味に腕を捻ってサブミッションを決めたため、駅について電車を降りた頃には気分はいくらかマシになっていた。
電車を降りて改札に向かう途中、チドリと遭遇し、学校の生徒玄関に向かう途中に朝練を終えたゆかりと出会って、湊たちが共に靴箱に向かうと正面から朝練を終えた男子バスケ部がやってくる。
そして、湊の姿を発見した瞬間に、数名の男子がはっきりと「みつけた！」という顔をした。
「有里ぉぉぉぉ!!」
「……朝から元気だな、宮下」

「宮本だ！」
湊にとって顔見知りだろうと基本的には興味のない他人だ。故に、名前もざっくりとしか覚えておらず、間違えられた方はちゃんと覚えろとツッコミを入れる。
もっとも、宮本はただ挨拶をしにやってきた訳ではない。昨日の今日で既に朝のニュースで取り上げられていた湊の話題を知って、ずっとバスケ部に勧誘していたのにどうしてだと文句を言いに来たのだ。
「なんでバスケじゃなくてテニスやってんだよ！　しかも、ちゃっかり優勝したらしいじゃねぇか」
「そうッスよ、会長。オレ、会長とまたバスケするの楽しみにしてたのに、テニスで優勝したせいで籠球皇子から万能皇子に改名されてたじゃないッスか」
宮本と同じく渡邊も湊の話題を今朝のニュースで知ったようで、優勝は素直に祝うがバスケを一緒に出来ないことには不満げな顔をする。
今まで湊は公認ファンクラブのプリンス・ミナトが決めた〝籠球皇子〟という呼称を利用していたが、そこそこ大きなテニスの大会で優勝する実力となれば、彼の才能はバスケットボールだけには留まらないことになる。
そこで新たに考案されたのが直球な〝万能皇子〟というネーミングだ。テニスの大会にエントリーすると事前に情報を仕入れていたプリミナは、マスコミに嗅ぎ付けられる前に登録商標として申請しており、試合二日目から〝万能皇子〟と書かれた横断幕を広げていたので、マスコミも呼称を〝万能皇子〟に改めていた。
幹部が全て学生だというのに大人顔負けの手際の良さには舌を巻くが、現在、プリミナは勢力を拡大したことで大人も組織に入っており、その中には法の専門家やマスコミもいる。
何より、湊本人にこうしたいのだがどうだろうかと許可を取る際、多方面の知識を有している湊からアドバイスを受けていたので、彼女たちの躍進の裏には強力な助っ人の活躍による部分も大きかった。
それはともかくとして、万能皇子などという微妙な名を付けられた

青年は、今の名前も変だが前の名前もおかしかった事を指摘する。
「なんでと言われてもな。バスケなんて中三の夏しかしてないのに、籠球皇子と呼ばれる方がおかしかったんだぞ」
「じゃあ、テニスは前からやってたのか？」
「小学校に入る前にな。ブランクはあったがバスケよりも慣れてる分強いぞ」
湊のテニス歴は一年強。プロ入りを期待されるも断った母に、実戦的なテニスを幼少期の遊びの中で教わっていた。
少年は母の打った球を夢中で追いかけて返していただけだろうが、その経験が今の彼の中に生きている事は先の大会で証明された。
どちらの手でも優劣なく強いフォアハンドを打てる選手は稀だと、元プロテニスプレイヤーがテレビ局の取材に電話で答えていたため、マスコミやテニス業界はバスケに続いてテニスでも皇子ブームを作ろうと動き出している。
バスケの大会のときにチドリも言っていたように、湊は本来チームプレーには向かない選手だ。
どうやっても運動能力に差が出るので、彼の能力を十全に活かすにはチームをトッププレイヤーで固めるしかない。
そんなことは高校の部活では不可能なので、経験もあり個人技を活かせるテニスの方が向いているのだろうかと、頭では理解しつつも心では納得できない渡邊が溜め息を漏らす。
「はぁ……いや、会長がテニスのが好きってなら文句言えないんスけど。やっぱ一緒にやりたかったんで残念だっていうか」
「別に特定のスポーツに思い入れはないな。テニスをしたのは自分も参加出来る大会だったからだ。今後もするかは決めてない」
「あ、そうなんスか？　じゃあ、まだ可能性はあるってことか。ならまた気が向いたらバスケしましょうよ。テニスより面白いッスから」
また一緒にプレーできる可能性が残っていると聞いて、渡邊や宮本も安心した顔を見せる。
テニス一本に絞るのなら必死に止めていたが、まだ色々と試す気なら彼は元々気分屋で助っ人として参加していたので、近いうちに一緒

に楽しもうと誘うだけに止めた。
　しかし、そのとき渡邊の言葉に聞き捨てならない部分があったと、背後から待ったがかかった。
「その意見には賛成しかねるわね。あれだけ打てるのだから、私としてはテニスを続けるべきだと思うけど」
　言いながら現れたのは朝練が終わってやってきた高千穂やラビリス達女子テニス部。湊の試合は二日とも見ていたので、強豪も参加していた大会で優勝を決めるほどの実力があるなら、高千穂としては彼にテニスを選んで貰いたいらしい。
　そんな部活仲間の言葉を聞きながら、やってきたラビリスは上履きに履き替えながら集まっていた一同と笑顔で挨拶を交わす。
「皆、おはよーさん」
「おはよう。そっちも朝練終わったんだ？」
「試験と大会の時期が重なって忙しかったから、今日の朝練はホンマに基礎練って感じやったけどね。たまにはサーブ＆ラリーでのんびりするのもええわ」
　月光館学園のテニス部員らは初日に敗退してしまったが、まだ試合の疲れが残っている者もいる。
　なので、今日は試合形式に近いサーブで始まるラリーで身体を動かす程度のメニューをこなし、ラビリス達はテニス本来の楽しさをあじわった。
　そのようにラビリスがゆかりらと話す傍らで、湊と渡邊のもとに来た高千穂は昨日の大会の事を思い出しながら、改めて素晴らしいプレーだったと彼の優勝を祝う。
「改めて昨日は優勝おめでとう。ウチの学生としての参加じゃなかったにしろ、同じ学校に通う人間として素直に誇らしいわ」
「応援のためだけに二日目も来てくれたやつがいたからな。少しくらいサービスしないとって思ったんだ」
「来年こそ二日目も選手として参加するわよ。汐見さんも高校から始めたのにすごく上達が速いし、ウチの女子はきっと強くなるわ」
　実際のところ湊は他の者の事など考えてプレーしていなかった。

自分の記憶に残る母のプレーを思い出し、それを自分の動きに取り入れるイメージをしながら相手の動きを観察し、相手の次の動きを予測して実行に移していただけだ。
試合をした相手にすれば不気味だったに違いない。どれだけ自分が厳しいコースに打とうと揺らがず、ただジッと金色の瞳で見つめてボールを返してくるのだから。
もっとも、外から見ていた高千穂はそんな事に気付いていなかったため、湊の皮肉混じりの言葉に次こそ自分も同じ立場だと笑って返した。
そうして、メンバーが多くなったことで全員が徐々に移動し、四階の一年生のフロアに到着すれば、
「有里君……」
先に学校に来ていた美紀が湊の姿を見つけるなり、不安げな表情を浮かべて駆け寄ってきた。
友人に挨拶をしようとした他の者も、どこか泣きそうな顔で湊を見つめる美紀に戸惑い声をかけられない。
昨日の試合が終わってからは別れて帰ったので、二人の間に何があったのか分からず、一同が二人を見ていれば、湊が何も持っていなかった左手を伸ばして美紀の頭に置いた。
「大丈夫だ。何も怖くない」
「……はい」
彼の手から伝わってくる温もりに安心感を覚え、美紀の表情が少しだけ落ち着いた物になる。
最初の泣きそうな顔を見て心配になっていた女子らは、魔法の手だなと置いただけで相手を安心させる青年に思わず感心する。
美紀の様子がマシになったのなら、今度は事情を聞かねばならない。そう思った二人の少女が口を開いたのは同時だった。
『どういうこと？』
何か悩みがあって、それが湊によって解決するなら構わない。ただ、事情だけは話せとチドリとゆかりが湊に説明を求める。
美紀は自分の能力で出来る事を見極め、出来ない事なら出来ない事

と認識するために必要以上に心を乱す事が少ない。
そんな彼女があんな様子になっていたのだから、相応の事情が絡んでいることは容易に想像がつく。
青年の家族と彼女、少女の友人、その二つの立場から放っておく事が出来ない二人が、すぐに説明できるであろう青年に尋ねるも、青年は二人の質問を聞き流して美紀に話しかけた。
「真田、泊まる用意は持ってきたか？」
「……はい、両親にもちゃんと伝えておきました」
「チドリ、今日真田がそっちに泊まる。俺も後で行くから連れて帰ってやってくれ」
巌戸台から桔梗組の最寄り駅までの交通費が入ったＩＣカードを渡され、美紀はそれを自分の定期入れに仕舞うが、傍から聞いていれば話の内容が何やら不穏なものになる。
両親に何かを伝えて青年の現在の実家の方に泊まるなど、これでは二人が一線を越えて子どもが出来てしまった様に思えなくもない。
勿論、そんな事はないと信じてはいるが、少女は幼い頃に青年に命を救われて無自覚ながら初恋だったかもしれないと言っていたのだ。可能性はゼロではない。
青年が声をかけてきた今がチャンスだと、チドリは改めて二人の間に何があったのかを問いかけた。
「何かあったの？」
「昨日の夜に少しな。寝惚けていたらしく、零時頃に外に出てて怖い目に遭ったんだ。まぁ、通りがかった俺が直前で助けたから何もなかったが」
「……そう」
二人の関係を心配していたチドリは、〝零時頃〟という単語を聞いたことで事情を察した。
ただ説明するなら〝夜中に〟と言えばいい。正確に伝えるなら時間を口にするかもしれないが、青年が目で伝えてきたのでチドリだけでなくラビリスも影時間絡みだと気付き、ここでは必要以上に騒ぎにならないようにすべきだと即座に判断した。

他の者も美紀が男に乱暴されそうになったと勘違いしたに違いないので、チドリとラビリスが意図を汲んで傍にいた男子の前に移動してくれたことで、湊はそのまま美紀がショックで男性不信になっているという周りの勘違いを利用する。
「岳羽、チドリと一緒に真田のことを見ててやってくれ。まだ昨日のショックが抜けてなくて精神的に不安定になってるんだ。男はダメだから先輩には伝えなくていい。いま構うと逆効果になる」
「あ、うん。わかった。有里君は大丈夫なの？」
「助けた側だからな。他の男よりはマシだ」
言われてすぐにゆかりは心配しながら美紀に寄り添ってやる。周りにいるメンバーは高千穂とラビリスを除いて全員が美紀やチドリと同じクラスなので、美紀本人のフォローはゆかりとチドリが担当し、男子など周りのフォローは渡邊や宮本がそれとなくしてくれるだろう。
自分たちがペルソナ使いだと隠しているため、妹を大切に想っている真田は邪魔になる。なので、〝男はダメ〟という条件を付けたことで誰も彼には伝えないはずだ。
湊はそう考えながら、話は家ですると言ってラビリスと共に自分の教室へと去って行った。
夜――桔梗組
学校が終わると美紀はチドリに案内されながら桔梗組へ来ていた。駅についた時点で黒塗りの高級車が迎えに来ている事には驚いたが、家に着くと先日泊まった旅館並みに趣のある豪邸にさらに目を丸くした。
もっとも、昨夜のことを思い出すと楽しい気分ではいられない。
湊に救われた美紀は、泣き止んでから彼に自宅まで送ってもらい、彼をそのまま自室へと招いた。
影時間なので電気は点かないはずだったが、湊が腕を振れば家電が復活したので、明るい場所で知り合いといる事でいくらか気分がマシになり、湊に色々と事情を尋ねた。
これはなんなのか、先ほどのお化けはなんなのか、湊と一緒にいた

天使はなんなのか、どうして湊以外の人間が消えてしまったのか。分からない事だらけで泣きそうな美紀に、湊は明日ちゃんと話してやるので今日は寝ろと返して来た。
親には、高校最初のテストなので、今後の勉強で躓かないために友人の家ですぐ反省会をすることになったと伝えるように言い。湊のマンションではなくチドリが暮らしている実家に実際に泊まりに来るように伝え、美紀も今は湊しか頼れる者がいなかったことで、寝付くまで彼に手を握ってもらいながら頷いた事で今朝の出来事に繋がる。
「ちーちゃんがお友達を連れてくるなんて初めてだから、とっても新鮮な気分だわ。真田さんも自分の家だと思ってゆっくりしてね」
「は、はい。あの、有里君から何か連絡は？」
「みーくん？　来るとは聞いてるけど何時になるかはちょっと分からないわ」
美紀が家にやってきた事で一番喜んだのは桜だ。家が極道なので子どもたちが友人を家に招く事はまずない。
湊は水智恵やらラビリスやらソフィアやらを連れてきた事もあるが、彼女たちは友人ではないし、湊も自分の友達はファルロスだけと言っているので友人を連れてくる事は期待できない。
そんなときにチドリが美紀を連れてきた事もあり、桜はちょっとしたお祝いとして豪華な料理を用意しかけたが、チドリが普通で良いとばっさり言い切った事で、普段より少しだけグレードの高い家庭料理が提供されるに留まった。
そうして、チドリと美紀が本日返却されたテストで本当に反省会をしていれば、玄関の戸が開く音がして、女性のものと思われる軽めの足音が一人分だけ聞こえたというのに、湊とラビリスが姿を現した。
「こんばんは」
「すまない、仕事を終わらせてきたんだ」
美紀にすれば足音の数と人数が合わないと疑問符を浮かべるところだが、チドリが湊は足音を消して歩く癖があると教えた事で、ようやく納得した顔になる。

そんな変な癖を一般人が持っている事に突っ込まないのは、彼女が既に湊に毒されている証だが、やってきた二人がテーブルについて桜がお茶を用意したところで、勉強道具を片付けた美紀が頭を下げて改めて礼をした。
「あの、昨日は助けていただいてありがとうございました。有里君が来てくれなければ死んでいたと思います。昔の火事と合わせて二度も助けて貰って。本当に感謝しかありません。ですが、昨日のあれは夢ではないんですよね。そうじゃなければ、私はここでこうやって話していないでしょうけど」
「ああ、現実だ。毎夜零時に世界は塗り潰され一変する」
話をしながら湊はマフラーからチョコレートやクッキーを次々と出し、テーブルの上はちょっとしたティーパーティー状態になる。
美紀以外の少女は話を聞きながらそれを摘まんでいるが、青年も含めて事態を深刻には考えていないので、こういった温度差はしょうがないのかもしれない。
「影時間っていうんだ。発生時間は多少の変動はあるがおよそ一時間。その間は生物は棺桶のモニュメントになり、機械は一切稼働しなくなる」
「あのお化けみたいな存在はなんですか？」
「それはシャドウだ。色々な種類がいるが影時間でも活動できる人間を襲ったりする。まぁ、対抗するための力を持っていれば大丈夫なんだが、真田はその力を得るほど適性を持っていない。数値の上昇率から見ても真田がそれを手に入れる事はないだろう」
他者の適性値を把握出来る湊は、美紀が適性を得る事も、ゆかりや風花が将来的に適性を得るだろうことも分かっている。
ただ、美紀と他の二人の上昇率には大きな差があり、美紀の場合は既に頭打ちのようなので、兄と違ってペルソナ使いになる可能性はゼロだと言い切る事が出来た。
「有里君と一緒にいた青い天使もシャドウなんですか？」
「いや、あれはペルソナというシャドウに対抗できる力だ。両方とも人の心から生まれた存在だが、人の制御を完全に離れたのがシャドウ

で、持ち主が制御下に置いて使役できるようにしたのがペルソナになる」
　美紀のいう青い天使とはアザゼルの事だ。現在はネガティブマインドの期間なので、湊がアザゼルを使って移動している途中に生体反応とシャドウの反応を感知し現場に急行した。
　その際、距離があったので間に合わないと判断し、時流操作で加速して割り込んだおかげで美紀は無事だった。本人はそんな事は分かっていないだろうが、シャドウの説明を聞いて疑問に思った部分を彼女はすぐに聞き返す。
「人の心から生まれるって、私もあんなシャドウを生み出してしまったりするんですか？」
「説明が悪かった。正確にはシャドウもペルソナも人の心の一部だ。心が弱るなどして抜け出るとシャドウになり、シャドウが抜け出てしまった人間は巷で話題になっている無気力症になる。心が一部でも欠けると正常に動かなくなるんだ。まぁ、倒せばシャドウは持ち主に還るから無気力症も治るがな」
　もしも、知らないうちにシャドウを生み出し、それが人を襲ってしまっていたらと思うと怖くなる。
　けれど、湊がその可能性はないとはっきり告げれば、美紀は少しだけ安心した顔になって一口お茶を飲んでから真っ直ぐ湊を見つめ、今度はどうして湊がそんな事を知っているのだと問うてくる。
「……有里君はなんで色々と知っているんですか。危険だと知りながら影時間に活動していたってことは、普段からシャドウと戦っているんですよね？」
「まぁな。知っているのは昔から関わっているからだ」
　彼女の言葉を湊は否定しない。実際に目の前でシャドウを倒しておきながら、否定したところで相手は信じないだろう。
　なら、ここは全てを正直に教えてやり、それから相手に今後はどうするか尋ねた方がいいと判断し、湊はマフラーから取り出した煙管を手で遊ばせながら事を始まりから話し出した。
「影時間は元々この世界の裏側に存在したんだ。俺たちが普段過ごし

ている現実世界とシャドウたち心の化生の跋扈する影時間。それらはカードの裏と表のように接していても基本的に交わる事はなかった。だが、ある実験のせいで状況が変わった」
隣り合わせではなく背中合わせ。二つの世界を説明するなら、そちらの方が正しい。
簡単に行き来出来ず、どちらの世界も見えないだけで同時に存在はしていた。
「交わる事はないと言ったが偶発的に二つの世界の境界に穴が開いて行き来出来る事があり。偶然が重なって向こうの性質を宿した物がこちらに来て、それを先代の桐条が手に入れて研究を始めたんだ」
月の満ち欠けや局地的な磁場の乱れなど、その時々によって理由は異なるが二つの世界が繋がることがあった。
向こう側の住人が現実世界にくれば幽霊や化け物として噂になり、反対に現実世界の住人が影時間側に行ってしまうと神隠しと言われたりもした。
もっとも、そんな事は本当に稀で、もう一つの世界の存在は一部の人間が存在するだろうと話す程度で、真面目に論議される事のないオカルトの分野でしかなかった。
それが一変したのは、シャドウのような不安定な存在ではなく、単体で現実世界でも存在しえた黄昏の羽根が現実世界に紛れこみ、先代桐条がその不思議な羽根を手にしてしまってからだ。
「影時間側の物を使えば小規模の影時間を展開する事が出来る。それにより桐条グループはシャドウを集めて、その力を利用し〝時を操る神器〟を作ろうとした」
「時を操る神器？」
「過去と未来の事象を観測し、そこに干渉することが出来るようになる道具だ。まぁ、分かり易くいえばタイムマシンだな」
今も桐条の研究所跡にその装置は残っているが、桐条グループは施設一つ分という世界から見れば狭い範囲に影時間を展開する装置を開発していた。
それを使って現実世界に影時間を展開し、向こうの住人であるシャ

ドウを集めて、シャドウたちの不可思議な力を利用することで人智を超えた力を手に入れようとした。
　先代や当時の研究員たちは、影時間を展開する装置を開発できてしまったばっかりに、その先である時の支配にまで可能性を見てしまったに違いない。それが異なる分野であるとも分からずに。
「しかし、あいつらは時間を概念として理解出来なかった。理解出来ない物にはアプローチの方法も分からず干渉しようがない。そうして、研究が進まなくなると先代は研究を別の方向へと進めて行った。集めたシャドウの力を使って世界に滅びを齎そうとしたんだ」
　人は時が存在する事は理解出来る。月の満ち欠けや肉体の成長に四季の移ろいなど、自分だけでなく周りの変化からも理解出来る。
　ただ、それでどのような概念か理解できるかは別の話だ。
　流れる時を止める事はおろか、進める事も遅らせる事も人間には出来ない。なにせ具体的にどういった物か分からず、それに干渉する術がないのだから。
　そして、壁にぶち当たった先代は目的を見失い。最後は血迷ったとしか思えない行動に出た。
　その事を伝えれば、今まで黙って聞いていた美紀が、あまりに不可解で先代桐条の行動の意味が分からないと首を傾げる。
「滅びって地球が滅亡するって意味ですか？　それだと先代の方も亡くなってしまうんじゃ……」
「ボケてたのか終末思想に取り憑かれたのかは知らない。だが、晩年の先代は正常な判断力を失っていた。もっとも、シャドウの研究自体が未知の分野であるため、先代が何をしようとしているのかは、ほとんどの研究者たちも分かっていなかったはずだ」
　この際、理由など関係ない。ボケた老人がおかしな行動を取ったにしろ、壁にぶち当たり心が折れた末に自殺しようとしたにしろ、周りまで巻き込んだ傍迷惑な行動を取った事実は変わらないのだ。
　さらに質が悪いのは、シャドウの力を利用して何かをしようとしている事は分かっても、それで実際に何が起こるかまでは起こってみないと分からないため、先代が時を操る神器の作成と言ってしまえば周

囲が気付き辛かった事にある。
影時間の研究において桐条は多様なアプローチを試みるため、考古学や生物学など様々な分野の研究員を集めたのであって、未知の存在であるシャドウや影時間のエキスパートは一人として存在しなかった。
それで先代の凶行に気付けという方が無理な話で、彼の研究は滅びを招く最終段階まで進んでいた。
ある一人の研究員がそれを阻むまでは。
「ただ、それに気付いた者もいた。そいつは最後の実験を途中で無理矢理に中断し、世界が滅びるのを防いだ。代わりに行き場を失ったエネルギーと集めたシャドウが飛び散ったがな」
「途中とは言え世界を滅ぼすエネルギーが飛び散ったって、それに桐条グループが行っていた実験ってことは、もしかして九年前の爆発事故は……」
「ああ、実験の中断で起きた事故だ。そして、中断した者の名前は岳羽詠一朗。岳羽の父親だな」
まさかここで友人の名が出てくるとは思わず、美紀は目を大きく開いて驚いた顔をする。
他の少女二人が一切驚いていないことで、チドリとラビリスがこの事を知っていたと気付き、美紀はさらに驚いているようだが、彼女の珍しい顔に湊は小さく笑いお茶に口を付けてから続きを話す。
「おじさんのおかげで滅びは免れた。ただ、あの事故から毎夜零時に影時間が発生するようになったんだ。俺はあの事故の日に既に適性とペルソナを手に入れていた。まぁ、シャドウが傍にいたから戦うしかなかったんだが、一時期いた施設を抜けてからはシャドウ狩りをしているんだ。無気力症の拡大を防ぐためと、偶然迷い込んだやつがいても昨日みたいな事にならないようにな」
これが影時間の始まりと青年が関わるようになった理由。
理解を超えた内容に彼女は自分の中でまだ情報を整理できていないようだが、最低限の情報を知った事で少しは考える余裕が出来たのか、何故自分がそんな物に関わる事になったのかを尋ねる。

「なんで、私は適性を手に入れてしまったんですか？」
「いや、適性は本来誰でも持ってるんだ。ただ、それが影時間でも活動可能なレベルやペルソナ獲得レベルまで上昇するかは個人差がある。真田の場合は運悪く適性持ち程度の素質を持っていただけだな」
生物ならば適性がゼロになる事はあり得ない。なぜなら、誰しもがその精神にシャドウを宿らせているから。
人が適性を完全に失う事があるとすれば、それは死んで肉体から魂が離れたときだろう。
正確に言えばそれは既に生物でも人でもなくモノになっているが、そういった話は置いといてと言いながら、湊はここでさらに驚きの情報を彼女に伝える。
「お前の兄と荒垣先輩はペルソナ能力者だ。巌戸台分寮はそういった人間を集めてシャドウと戦う桐条グループの特殊な組織でな。相手は俺のことを知らないだろうが、特別課外活動部以外にもペルソナ使いはいる」
「ど、どうして兄さんやシンジさんが戦うんですか?!　シャドウと戦うなんて、死んでしまうかもしれないんですよ！」
「承知の上で真田や他の人がシャドウに襲われないために戦ってるんだろ。他に出来る人間がいないから」
自分の兄や親しい人物が恐ろしいシャドウと戦っていると聞き、美紀は思わず立ち上がって何故そんな事になっているのだと問うた。
そんな事を聞かれても湊にすれば自分の知った事ではないと返したくなるが、一応、本人たちも自分の意志や目的を持って活動していた事だけは説明しておく。
昨夜シャドウの脅威に晒された美紀にすれば、自分や他の者が危険な目に遭わないため、力を持った者が戦っていると言われると黙るしかない。
ただ、男子である兄や湊が戦うのは分かるが、ここで一緒に話を聞いている友人ら自分と同じ女子だ。それでまさか戦っているのかと不安に思いながら、実際は聞く前から理解しつつ尋ねる。
「チドリさんとラビリスさんもペルソナを持っているんですか？」

「ええ、私は桐条グループの被験体だった人工ペルソナ使い。湊と会ったのは桐条の研究施設よ」
「ウチは対シャドウ用に作られたロボットやねん。ペルソナも持っとるけど、手に入れたんは湊君と会ってからやね」
湊が正直に話していた事で、訊かれた二人も素直に自分たちの事を答える。だが、関西弁の少女の方は訊かれた以上の事をばらしてしまい。湊が即座に彼女の目に手刀をいれる。
ツッコミにしてはハード過ぎる目潰しを喰らったラビリスは、本気で痛がり床を転がった後に涙目になって湊を睨むが、一連の流れを見ていたチドリは二人のコントに呆れた顔をしている。
対して、これまでの話とは別のベクトルで衝撃の事実を知った美紀は、信じられないと目をぱちくりさせながらラビリスを見た。
「え、え？　ラビリスさんがロボット？　でも、だって、人にしか見えませんし食事だって……」
「ははっ、やっぱ驚くやんな。でもホンマやで。人にしか見えへんのは湊君がそういうボディを作ってくれたからなんよ。今も研究を進めとって最終的には人間になる予定なんやけどね。てか、目ぇメッチャ痛いし……」
「人間になるって、そんなこと出来るんですか？」
以前のボディなら幻惑機能を解けばすぐにロボットである事を証明する事が出来た。けれど、新ボディに移った今は擬装用スキンを破らなければ白い装甲が見えない。
擬装用スキンは意外と着け直すのが面倒なので、ここでは見せてやる事が出来ないが、涙を滲ませて目が痛いとぐしぐし擦っている少女について、現在では筆頭研究者となっている青年が解説する。
「彼女たちには黄昏の羽根という核がある。ラビリスの心や魂はそこに宿っているんだ。魂が物質に定着しているなら、それを人の肉体に移し替えれば人間としか言えないだろ？」
「でも、そんな現代科学の域を超えた研究をしているって、有里君は何者なんですか？」
「……正式名称は飛騨製人型戦略兵装二式〝有里湊〟。製作者は影時

間の脅威を消して欲しいって願いを持って俺を作った。分かり易く言えば改造人間だけど、血に目覚めたから羽根の搭載以外意味なくなったけどな」
黄昏の羽根の搭載によって得た機械制御を奪う力だけは今も現役で、血に目覚めるまでは改造にもしっかり意味があったので無駄だとは思わない。
ただ、飛騨の施した改造は血に目覚める以前ならば効果があったが、覚醒後の最適化まで終えて現在も細胞レベルの自立進化を続けている青年は、既にそれらの能力を向上させて所持していた。
「ああ、俺の事は人間だと思わなくていい。基本的には人間よりもシャドウ側の存在だから」
ただ、改造が無意味になったと言えど、改造を受けたという事実は残っているし、それがなくても一般的なペルソナ使いとも異なる部分も多い。
その代表がこれだと湊は桜を別の部屋に退避させてから、心臓を包むように内蔵されたエールクロイツに力を送りこみ、部屋の中に影時間を展開してみせた。
部屋の明かりが突然消え、具体的には説明し辛いが空気が変わった事だけは理解している美紀は、時計を見て九時前にどうして影時間になったのかと怯えた表情になる。
「っ、零時じゃないのにどうして……」
「これが出来るからシャドウ側の存在なんだ。試した事はないがリミッターを外して力を使えば大陸まで覆えるぞ」
悪党のような薄い笑みを浮かべて語る青年の適性値は一般的なペルソナ使いの限界値である十万を優に超えている。
そんな彼が力の全てを籠めれば日本全土を覆うだけでなく、ユーラシア大陸のアジア圏まで届かせる事も可能だった。
もっとも、そんな事をしても意味はないので、彼がそこまでの力を発揮する機会は未来永劫無いと思われる。
湊が影時間の展開を終えると桜も戻ってきて、湊の湯飲みにお茶のお代わりを注ぎ。それを横目で見ながらチドリは先ほど美紀が象徴

化していなかったことで、彼女の適性は既に定着しているようだと改めて納得した顔を見せた。
「……まぁ、非常識な馬鹿の話は置いといて、象徴化しないって事は完全に適性持ちみたいね」
「シャドウは月の満ち欠けで活性化するんよ。せやから、満月の前後は危ないから外に出えへん方がええで。なんやったらそのときだけ保護も出来るし」
「保護するなら俺の部屋やＥＰ社よりここの方がいい。シャドウは厳戸台周辺に現れるからな。チドリもいるし、ここなら基本的には安全だ」
湊が少し大きな事をいうときは、一応事実ではあるのだが相手を脅す意味も込めている。
異常なほど自己評価が低く自分を蔑ろにするため、今回は美紀が自分から離れて行くように異常さを伝えてきたのだろうと推測し、それらを理解している少女らは湊の話は半分だけ聞いておくように美紀に伝えて話を進める。
少女たちが自分のために小さくフォローに回っていることに気付いていない青年は、Ｅデヴァイスを起動して厳戸台周辺の立体映像をテーブルの上に表示し、少し操作をしてエリアごとのイレギュラーシャドウの出現危険度を色分けして見せる。
一番危険なレッドゾーンはタルタロスのあるポートアイランドと、そこから駅一つ分しか離れていない辺り。次点で危険なオレンジゾーンは残りの厳戸台全域。それらを除いた港区は稀に遭遇するイエローゾーン。それを越えるとほぼ安全なグリーンゾーンとなる。
建物の細かい部分まで再現された立体映像に美紀は驚いているようだが、ここに来てからは驚きっぱなしだったことで慣れたのか、意外と早くに復帰して保護場所について一つ尋ねてきた。
「あの、兄さんたちのところへ行ってはダメなんですか？　兄さんもペルソナ使いなんですよね？」
「ええ、そうね。でも、大して強くないというか弱いわよ」
最初は相手に気を遣おうとしたが、チドリは隠しても無駄だからと

すぐに率直な事実を告げる。
ボクシングの高校チャンプとして名を馳せているが、そういった白兵戦での強さとペルソナの強さは全く別だ。
親子ほどの歳の差がある大人と子どもで、子どもの方が強いペルソナを持つ事だって十分にあり得る。
なので、将来的な強さはともかく、いますぐに守ってくれる存在の強さを当てにするなら、特別課外活動部よりも湊側の方が安全な事は確かだった。
「どちらへ行くかは真田の判断でいい。ただ、向こうに行くならこちら側の情報を話せない様にするし、お前は多分保護名目で寮に入れられるだろう。さらにお前一人を寮に置いておけないからと、現在二人しかいない駒の一つである真田先輩は戦いに出なくなるだろうな」
「さっき湊も言ったけどシャドウが出るのは巌戸台周辺なのよ。だから、巌戸台分寮じゃ他よりマシなだけで安全とは言い難いわね。向こうのペルソナ使いは貴女の兄と桐条美鶴しかいないし。二人を合わせても私たち一人分の適性にも満たないから、全員の安全を考えるならここで保護された方がいいとおもう」
人を守りながら戦うのは大変だ。敵の数が増えれば飛躍的に負担が増えていく。
当時、圧倒的な力を持っていた青年も、チドリや他の被験体を守りながら戦って研究員の撃った下手な鉄砲で負傷していた。
まだまだ弱い美鶴や真田が同じように美紀を守りきれるとは思えず、彼らの安全も考えるのなら負担になるべきではないとチドリは小さく諭す。
美紀とチドリは中学からずっと同じクラスなのだ。感情をあまり表に出さない少女も、それなりに相手のことを気に入り信頼もしている。
保護されるときはここへ来いと勧めるのは、安全面での客観的事実も含まれているが、ほとんどは純粋に友達のことを想っての彼女の優しさだった。
言葉に含まれたチドリの気持ちを理解した美紀は、相手の優しさを

嬉しく感じつつも、基本的に相手に気を遣う性分なこともあって、そんなにおんぶに抱っこでいいのだろうかと遠慮がちに尋ねる。
「……あの、お言葉に甘えていいんでしょうか？　どれくらいの期間お世話になるのかも分からないのに」
「真田さんがご両親にちゃんと連絡して泊まりに来るなら、部屋もいっぱいあるし家は大丈夫よ」
「とりあえず、保護は満月の日くらいでいいだろ。それ以外は影時間に起きても家から出なければいい」
美紀が聞けば桜と湊がすぐに答える。
昨夜、美紀が襲われたのは外に出ていた事が原因で、例えシャドウが家の前を彷徨こうと発見されなければ中に入ってくる事はなかった。
高レベルなシャドウならば探知能力を有して見つかっていたかもしれないが、そんな敵がイレギュラーシャドウとして現れた事は今までない。彼らがいるのはタルタロスの深層モナドや一六五階以上の高層フロアになる。
ただ、満月は低級シャドウたちも凶暴化しているので、そのときは何が起こるか分からないため巌戸台を離れた方が良いとアドバイスをする。
シャドウに関しては他の者より湊の方が詳しい事もあり、誰からも反論がなく話がまとまれば、昨日から驚いてばかりだった美紀もようやくいつもの表情を見せて湊たちに礼を言った。
「あの本当に色々とありがとうございます。その、よろしくお願いします。お世話になります」
他の者はそれに頷いて返し。今後保護する事が決定すると、桜が後からきた湊とラビリスに食事を提供しながら、湊が美紀に桐条側に自分たちのことや美紀が適性持ちになった事を秘密にしておくように告げる。
ばれたときはばれたときだが、基本的にお互いに不干渉の方がやり易い事もあるのだ。
美紀自身も兄にこの事がばれれば過保護が加速すると分かってい

るようで、言う通りにすると了承で返した。

第百七十五話　それぞれの研究

６月２２日（日）
午後――ＥＰ社研究所
普段学校に通っているせいで仕事や研究が出来ない湊は、日曜日は朝から晩までフルに研究所で過ごす事が多かった。
Ｅデヴァイスのホログラフィのようなキーボードを高速で叩きながら、湊は目の前の容器に入っている人の腕をアナライズを用いて解析していく。
容器は機械にセットされており、中は琥珀色を薄めたような色の液体で満たされている。時折、痙攣のように指がピクリと動く事はあるが、その腕は液体に浮いているだけで何かに繋がっている訳ではない。
長さは一メートル以上、やや筋肉質な男性の物であると推測出来るが、腕しかないというのに血液やらは流れ出ていない。
しかし、細胞が死んでいる訳ではない事は、時折の痙攣から分かるので、これが何であるかを知らない者が見れば気味の悪いお化け屋敷のオブジェにしか見えないだろう。
「こんにちはぁ、入るわよー」
そうやって湊が容器の中身を観察していれば、研究主任のシャロンがトレーを持って部屋に入ってきた。
彼女は湊の傍までやってくると、何も置かれていない机にトレーを置き、空いていたパイプ椅子を持って来て湊の隣に座る。
部屋に人が来ても湊はキーボードを叩き続けているが、シャロンが横から顔の前に手を出してくれば流石に動きを止めた。
「はい、サンドウィッチよぉ。あんた、食べさせないとずっと仕事してるからね。年下の上司が困ったチャンでお姉さんも大変だわぁ」
「……別に食べなくても一ヶ月以上活動できるって言ってるだろ。それに朝は食べたさ」
「それはラビリスちゃんが作ってくれたからでしょ？　部活に行く前にプー太郎にご飯も出して行くなんて健気よねぇ」

食事をする時間すら勿体ない。そんな風に考える青年は、放っておくと飲まず食わずで一日中働いているので、本人が大丈夫だと言っても精神衛生上よくない周りが、彼に軽食を届けて食べさせるようにしていた。

一番彼の元へ行くのが多いのはシャロンで、それは彼女と湊が一番今の研究について詳しく、食事休憩中も意見交換という形で仕事をするためである。

専門的な技術や知識では湊はまだ彼女たちに及んでいない。ただ、徐々に差はなくなりつつあり、さらに解析能力に関して言えば数百億する機械よりも湊の方が上なので、彼でないと分からない問題点を聞くというのは研究を進める上で非常に重要だった。

差し出されたサンドウィッチを受け取り、続いてお茶も渡された湊が食事のために休憩に入ると、一緒にトレーに乗せてきたコーヒーのカップを手に取って、シャロンがそれに口を付けながら尋ねる。

「あんたの腕の成長具合はどう？　今の技術じゃ人工骨格はそれが限界なんだけど、見た感じはちゃんと定着して成長してるわよね」

「ああ、今のところは問題ない。もう少しすれば使えそうだ」

湊が今まで見ていた腕。それは対シャドウ兵器の人間化のため、ＥＰ社が技術を結集し巨費を投じて作りあげた新素材人工骨格ベースの生体義手だった。

腕に限らずＥＰ社では生体パーツを作る際に、まず人工骨格を作りそれに合わせて培養機を組み立てる。

そして、中を成長促進剤や栄養素を加えた羊水に近い成分の培養液で満たし、人工骨格に培養するための細胞を付けた状態で放り込むのだ。

実際は細かな調整も必要になってくるが、その調整が出来るのは湊とシャロンのみで、シャロンの助手である武多やエマは安定状態をキープするために設定を多少変える事は出来ても、明らかに数値に異常が出たときは二人を呼ぶ事しか出来ない。

最初期から関わっている二人が調整を行えないのは、生きた細胞を人工骨格に定着させるため、かなりピーキーな設定で回し続けている

からだ。
　それには医者としての熟練の観察眼だけでなく、医療の最前線で生き残り続けるための勘も必要になってくる。
　湊はアナライズで不足分を補い。シャロンは純粋に自分の技量でそれらを可能にしている。
　日本中だけでなく、最近では海外からも難病治療のために人が来る病院で、未だに寿命を除き死亡者ゼロを維持し続けているトップは伊達ではなかった。
「順調ならとりあえず骨はこれで良さそうね。あとは脳や臓器まで安定して培養できるかどうかかぁ」
「生命が宿れば終わりだしな。課題は多い」
「まぁ、神様に喧嘩売ってる訳だしね。教会のシスターちゃんが聞けば怒るんじゃない？」
「彼女は俺が人殺しだとも試験管ベビーだとも知ってる。その時点で同情しか向けられないさ」
　シャロンの話すシスターちゃんとは、湊がイリスの故郷であるシャテーニュ村の教会から連れてきて、現在は敷地内の教会で働いているシスター・アンナの事である。
　彼女は日本での仕事が楽しいようで、充実した毎日を送りながらときどきシャテーニュ村にお菓子と一緒に手紙を送ったりしている。
　だが、彼女も湊が裏の世界で生きていたことは知っており、数多の人間を手に掛けてきた青年でも悔いて祈りを捧げることは自由だとして、以前、カトリックにならないかと誘いもした。
　もっとも、自分が試験管ベビーという教義に反する存在だと湊が告げたことで、それ以降は勧誘してこなくなったが、今でも会って話をしたり昼食を一緒に取る事もあるのでいい関係を築けている。
　そんな彼女がここでの研究を知れば、人工的に命を生み出すに等しい行為なのでいい顔はしないはず。ただ、湊という既に生を受けている近い存在もいることで、怒りの感情を抱いてやめるべきだと言ってきたりはしないだろうと湊が言えば、湊の主治医になってから彼の生まれや身体について話を聞いていたシャロンが、頭を掻きながらそん

な話もあったなと返した。
「そういえば、あんたってクローンなんだっけ。ラビリスちゃんとか恵ちゃんにも教えてあげた方がいいと思うんだけどねぇ」
百鬼八雲にクローン体が存在し、クローンの母体になった女曰く湊がそうだという話を知っているのは、名切りのペルソナを除けばソフィア、アイギス、シャロンの三人だけだ。
細胞を調べれば成長促進剤やらを使った痕跡を発見出来るはずだったが、残念な事に湊の細胞は最適化で再構築されてしまったので、飛騨が過去に施した施術の跡すらも消えてしまっている。
湊がどのような存在か知っている三名は変わらず接してくれているが、似た立場であるソフィアや医者であるシャロンは理解があるだけで、他の者まで一切気にせず接するかどうかは分からない。
拒絶される事はまずないので心配していないものの、同情される可能性が高いので、それはそれで面倒だと思っている湊は、シャロンが挙げた二人だけでなく他の者にも出生について話す気はなかった。
「話しても混乱させるだけだ。余計な事は言わなくていい」
「そういう男の安っぽい意地で傷付くのは女の子なのよん。そりゃ、患者の意向には沿うし、人道に反しない命令なら部下として従うけどさぁ。話さないってのは信頼してないって事だと思うのよねぇ」
同情されるのが嫌だというのは建前で、実際は拒絶されることを懼れているのではないか。また、彼女たちが相談という形でもそれを他者に話す事を心配しているのではないか。
湊はいらぬ混乱を防ぎ心配をかけないようにしているつもりでも、実際は相手を信頼できていないだけだろうとシャロンは指摘する。
それを聞いた青年は相手をジッと見ながらサンドウィッチを飲み込み、トレーにのったカップに手を伸ばすと、お茶で喉を潤してから言葉を返した。
「……その通りだ。俺はラビリスやアイギスの事だって信頼はしてない。信じて頼ってもろくな事がないからな」
「あーあ、言っちゃった。それ聞いたら泣くわよ、絶対。あんたと並んで歩きたい子にしたら一番残酷だもの」

- シャロンは指摘しておきながらも、少女の事を考えれば湊だけはそれを口にしてはダメだろうと嘆息する。
彼は必要な技術や知識を得るためには他者を師事したりもするが、それは酷く冷めたビジネスライクに近い関係で接している。
誰かを頼らないのは何かあれば結局自分が動かなければならないので、最初から期待するだけ無駄だと割り切っているからだ。
久遠の安寧との戦争中に人の汚い部分をずっと視続け、生かす価値があるのだろうかと疑問を持って、未だにその疑問は消えていない。
だからこそ、湊は他人に期待を寄せたりしないし、相手の能力を最低限のラインでしか信じないのだ。
酷く冷たいと発言について責められた湊は、空になったカップをトレーの上に置き。休憩は終わりだと再びキーボードを叩きながら答える。
「問題ない、信用はしてる。それに裏切られても別に恨んだりはしない。ただ現実として受け止めるだけだ」
「あんた、言葉の意味を辞書で調べ直してきたら？　そういう事を平然と口にしてる時点で信用も出来てないわよ。大切に想ってて親愛の情を向けてるのも分かるけど、あんたって相手を理解する気ないの？」
裏切られて傷付くのは相手を信じていたからだ。だというのに、それをただ現実として受け止めるなど、最初から裏切られる可能性を頭に置いていたからとしか思えない。
口では信用していると言いながら、欠片も信じているとは思えない青年に、シャロンは衝突したり手探りでも相手と本音でぶつかって理解し合おうとは思わないのかと問う。
すると、青年は視線をメガネのレンズに映る画像の方から外さず、読心能力のおかげで既に理解しようとする必要がない事を告げた。
「本人以上に相手の事は分かってるさ。過去も含めて全て解かるんだから」
「記憶の読み込みによる他人の人生の追体験とか興味はあるけど、実

際にやってみるかって聞かれたらお断りだわ。それやっちゃうと自分と相手の線引きが出来なくなって自我崩壊を起こすもの。他人の心を視続けて自我を保つってホントに異常なことよ」
湊の読心能力は深度をあげれば、本人すら忘れている記憶を当時の感情や五感への刺激なども含めて読み取る事が出来る。
それは相手の人生の追体験に等しく、記憶の中では自分も相手と同じ体験をしたこともあって、視続ければ自分を相手だと思いこんだり、自分は本当に自分なのかと自信が持てなくなり自我崩壊を起こす。
彼が自我崩壊を起こさずにいることは喜ぶべきことだが、人としては異常でしかないので素直に喜ぶ事も出来ず、シャロンは残っていたコーヒーを一気に呷ると雑談を切り上げ仕事の話に戻った。
「まぁ、そういう話は別にいいんだけどさ。全身生成（フルオーダー）の最初のテストベッドはあんたでいいの？」
「ああ、他の二人よりも俺の細胞の方が強いからな。データ取りには適してるだろ」
「あんたの細胞で上手くいっても他の二人の方じゃダメってパターンも考えられるけどね。ま、データ取るなら参考になる事もあるし、別に構わないんだけどさぁ」
アイギスとラビリスは、それぞれ人格モデルとなった少女の細胞を使って生体パーツを作る。
細胞の核を黄昏の羽根に交換するにしても、一般人の細胞がベースということもあり強化には限度があった。
その点、神の血を濃く受け継いでいる湊は、細胞一つとっても生命力が桁違いなので培養ペースも速く、データを取るためだけに多少無茶なことをしてもギリギリまで耐えられる。
湊の細胞で無理ならその技術を一般人の細胞で行うことは不可能で、仮に無理だったとしてもギリギリまで耐えて経過のデータを多く採れるというのは、研究者にすればマウスよりも有用なサンプルだと言えた。
細胞の持ち主もその事は理解しているため、データが多ければ多い

ほどアイギスたちの肉体を作る本番に活かせるので、血や肉が欲しいならいくらでも提供しようとすら思っている。
もっとも、いくら湊の傷が高速で治癒すると分かっていても、医者であるシャロンは怪我を負う事や血を流すこと自体をよく思っていない。
なので、本人が協力しようとしても必要な分以外は全て断っており。今日のように様子を見に来ては無茶をしていないかと目を光らせている事もあって、他の研究員たちは湊の異常さを恐れずに研究に集中できていた。
部下たちのメンタルケアは上司として当然だが、上司の世話までしなければならないシャロンは中間管理職の面倒さに絶賛悩み中だ。もっとも、研究は楽しいので文句ばかりではないが、たまには皮肉の一つでも言いたくなるので、椅子から立ち上がってトレーを持った彼女は去り際に言葉を残していく。
「じゃあ、ペットにエサもやったし。私は帰るわね。ちゃんと休憩しなさいよぉ」
「……三ヶ月間、報酬四十パーセントカットだ」
「あーあ、労基に駆けこまなきゃー」
上司への敬意が足りないとして青年が減俸を告げれば、シャロンは冗談を言いながら楽しそうに口元を歪ませる。
他の者たちは彼を遠巻きに見ている感じだが、冷たそうな見た目に反して、いじれば結構面白い反応を返してくるのだ。
その反応からは少しだけ子どもらしさも感じられ、やっぱり子どもはこうでなくてはと、シャロンは楽しそうに部屋を出て行った。
深夜――巌戸台・某所
巌戸台の外れも外れにある建物の地下を改造し、幾月修司は自分用の研究所を密かに作っていた。
彼の専門はシャドウの研究。ポートアイランドインパクトの後はペルソナと人工ペルソナ使いの研究も行っていたが、本職はシャドウの研究で性質の分析から、アルカナ毎に見られる特徴などを細かく分析し、今では桐条の研究グループであるラボよりも数歩先をいってい

る。
そんな男が深夜の研究室で何をしているかというと、現在自分が進めているデス・アバターのプロトタイプの様子を観察していたのだ。
彼の視線の先にある巨大なケースの中には、タナトスたち普通のペルソナと同じ大きさながら、地面に着くほど長い腕をした細身のシャドウが入っている。
細く長い手足、背中には折りたたまれた蝙蝠の様な羽、頭部はベルトの様な物が何重にも巻き付きその上から刑死者の仮面を被っている。その姿はまさに悪魔と言ったところか。
シャドウは灰色の鎖で身体を縛られ、腕には同じ色の枷を付けられている。これは影時間の研究を進めていく中で発見された副産物で、ペルソナやシャドウの波動を阻害し力を抑える働きがある。
仮にこれを使ってペルソナ使いを捕えれば、相手は集中力が乱れた様にペルソナを呼べなくなる。
もっとも、阻害効果は素材の量で変動し、さらに無効化するのではなく抑えるだけなので、一定以上の強さを持つ者には効果はなく、黄昏の羽根並みに貴重なこともあって大量に用意する事は難しかった。
ケースの中にいるシャドウは全身を縛る様に鎖を巻かれ、腕を枷で封じていることもあり、拘束具の量を考えれば一般的なシャドウとは異次元の強さだということになる。
強力なペルソナ使いである娘と理がいない状態で、そんなシャドウを作り出しているなど危険極まりないが、シャドウを見る幾月の表情は真剣そのもので、一切の恐れも怯えも抱いていなかった。
(ふむ、計測された数値を基に考えれば破格の強さを誇る個体が出来た。しかし、実際に外に出した際に肉体を維持出来るか分からないな)
幾月が複数のシャドウを合わせて作った個体の名は刑死者〝ダイモーン〟。
九年前、大量のシャドウを集めて融合させた事で生まれたデスが湊の手に亘っているため、来たるべき滅びの日を迎えるための保険として研究しているデス・アバターの研究個体だ。

ダイモーンはあくまでプロトタイプで本命ではない。これはどのアルカナ同士を組み合わせれば目的のアルカナになるかを調べ、力や速さなど似た性質の者同士を合わせれば能力が引き継がれるかを調査するために作ったものだった。

結果的に言えば、シャドウは似た性質同士を掛け合わせても意味がなかった。

正確には強い個体に他のシャドウを食わせれば、食べたシャドウの能力をいくらか吸収するため、掛け合わすよりも蠱毒の様な方法を取った方が効率的だったのだ。

古代では昆虫だけでなく蛇や蛙など小さな生き物を指して虫と呼んでいたが、百種の虫を用意して一つの容器に閉じ込め、互いに食わせあって最後に残った物が神霊として祀られるのが蠱毒という儀式である。

ペルソナは神や悪魔など神霊の名を冠している物が多いため、本質的には同一であるシャドウも、蠱毒と同じ方法でもって神霊に至ろうとするのかもしれない。

研究の途中で改めてシャドウとペルソナの興味深さを感じた幾月だが、発見した方法では強い個体は作れても、狙った能力を持った個体を作るのは難しいという問題を抱えている事に早期に気付いていた。

問題に気付いていた幾月がいま進めているのは、狙った能力を持った個体を生み出す方法の研究で、その傍らで食わせたシャドウの量と強化レベルの計測もしている。

ただ、計測で分かるのはあくまで適性値から読み取れる強さでしかない。適性値が低くても一点集中型のスキルを持っていれば格上に勝つ事も出来る。逆に適性値が高くてもスキルが弱ければただの体力馬鹿でしかない。

玖美奈と理がいればもう少し早い段階で実戦データが取れたのだが、二人は理のスキルアップ名目で二年間海外で暮らしている。

呼べば帰って来てくれるだろうが、これほど強化してしまったシャドウの実戦データは地下の研究所では取れないので、それなら呼ぶ意

味もないからと幾月はデータを取る方法に悩んでいた。
（あまり気は進まないが、やはりこいつを外に放った方が早いか。真田君と桐条君だけでは勝てないだろうが、そのときにはエヴィデンスも出てくるだろう）
ダイモーンの強さは数値的にはモナド級である。学校の検査で適性値十万に達している湊ならば勝てると踏んでいるが、残念ながら桐条側のペルソナ使いらでは戦いで生き残れるかも怪しい。
彼らにはまだまだ生きていて貰いたいので、湊が参戦してくれることを祈るしかないが、そこで幾月は彼の傍にいる少女たちのことを思い出した。
（そういえば、エヴィデンスの下には被験体の少女だけでなく五式までいたか。何故、封印されていたはずの五式がやつの下にいるのかは分からないが、ご当主に動く気がないのなら仕方がない。あれにも兵器としての仕事を全うして貰おう）
幾月は対シャドウ兵装シリーズの開発にも関わっていたので、五式ラビリスの開発から封印までの流れも知っている。
正式採用された機体の姿も覚えていたので、ラボの方から送られてきた月光館学園に通う生徒たちの適性検査の結果を見て、相手が間違いなく五式ラビリスであることにも気付いていた。
彼女が封印されることになった脱走事件では、ペルソナを覚醒しかけたと聞いており。それにしては適性検査の数値が高かったので、現在ではペルソナを獲得しているものと思われる。
それならば、相手のペルソナを把握しておくためにも、ラビリスには是非参加して欲しかった。
ダイモーンは背中に羽が生えているので、解き放てば影時間の空を自由に飛ぶに違いない。現在、この街で飛行能力を持っているのは高同調状態になれる湊しかいないので、多機構ユニットである戦斧の推進器を使って飛べるラビリスがいるのは好都合だ。
チドリのペルソナは魔法特化タイプなので後方支援に向いており、湊側のペルソナ使いたちはダイモーンと相性がいい者が揃っている。
格闘と魔法のバランスタイプである美鶴たちでは援護すら出来な

くとも、他の三人が戦えば適性値から見ても負けるとは思えなかった。
（ダイモーンの性能テストが出来れば十分だが、向こうの手札が分かれば今後の対策も立てられる。適性値でそれほど差のない玖美奈だけでなく、上回っている結城君でも、何故だかエヴィデンスに勝てる気がしない。それは複数同時召喚による特異性だけが原因ではないはずだ）
難しい表情をしたまま手元の機械を操作し、透明だったケースの表面を鏡状態にして幾月は部屋を出ていく。
彼の計画は未だ桐条にもばれていないが、本来誰にも止める事の出来ない最終段階まで進もうと、湊ならばどうにかして防いでしまうのではという嫌な予感があるのだ。
現在、ワイルドの能力を持っている人間は三人いて、それはエルゴ研で研究員らにその力を見せた湊、自分の居場所を奪われたと湊に憎しみを向ける結城理、黄昏の羽根を身体に埋め込むことで能力を増幅拡張させ力を手にした幾月玖美奈の三人だ。
後者の二人はベルベットルームのバックアップがないため、ペルソナは自分で目覚めさせないといけないなど不便な点もある。
ペルソナの切り替えや高同調状態になれるなど、総合的には同じ力を持っているので対抗し得ると思えるが、複数同時召喚だけは研究し訓練を積んでも未だに出来る兆候すらなかった。
これはベルベットルームの住人も言っていた事だが、複数同時召喚やミックスレイドはワイルドの究極奥義でありながら、扱う者の才能だけで使えるかどうか決まるらしい。
将来ワイルドに目覚める少女や、さらに先の未来でワイルドに目覚める少年も、ミックスレイドの才能は持っていないので実質湊だけの技である。
デスというシャドウの王を身に宿した事によるブーストも、複数同時召喚やミックスレイドの件については関係なく、ワイルドの力を手にした青年がそれをさらに活かす才能を持っていた事は運命としか言いようがなかった。

ただ、幾月が不安を抱いている理由は複数同時召喚の差だけではない。エルゴ研にいた当時、少年だった彼は一夜で百人を超える大人を殺して見せた。
建物を崩落させぬようペルソナも使わず、銃で武装した者らを相手に殺戮の限りを尽くした少年に、幾月はデスと同じ具現化した死のイメージを持ったのだ。
蛇に睨まれた蛙のように動けなくなるのではなく、狂えないならいっそ死んでしまいたいと思わされるような明確な死のイメージは、本人が意図して出しているのなら、死を意識して召喚するペルソナに他者よりも多くの力を注げることになる。
適性値はあくまで保有するエネルギー量、最大瞬間出力が高い方が威力を出せるので、幾月としてはダイモーンとの戦闘で彼の最強の一撃を見られればと淡い希望を抱いていた。
(エヴィデンスの力の解放は街の一角を灰塵に変えるだろう。ダイモーンの力も未知数となれば、街中で解放するのは危険だが。アレはペルソナ使いを狙いにいくはず。桐条君たちかエヴィデンスか、どちらを先に狙うかで状況も違ってくるな)
美鶴たちとダイモーンの邂逅は、美鶴たちの生存の心配だけしていればいい。だが、湊とダイモーンの邂逅は、邂逅ではなく衝突になってくる。
ダイモーンは格闘スキルだけでなく魔法スキルも備えている可能性が高いため、戦闘は遠距離での撃ち合いに発展するかもしれない。
都心でそんな事をすれば甚大な被害を及ぼすこともあり、幾月はダイモーンを解き放つ日と場所を慎重に決めねばならないと考えていた。

第百七十六話　ダイモーン

６月２６日（木）
影時間――巌戸台
「なんなんだ、お前はっ!!」
上空から飛来する悪魔のようなシャドウの腕を転がるように回避しながら真田が叫ぶ。
それまで真田がいた場所はシャドウの爪で抉られ、彼のいる周囲の道路は無事な部分を探す方が難しい状態であった。
「明彦、また来るぞ！　ペンテシレア、マハブフ！」
急降下しては腕を振るって爪で攻撃をしてくる敵は、攻撃を終えれば上空へと逃げてしまう。
真田と美鶴は出力の関係で対空に向かず、攻撃をするなら相手が降りてきたときを狙ってのカウンターしかなかった。
ただ、カウンター攻撃はタイミングが命で、失敗すれば反対に自分が大ダメージを負うリスクを孕んでいる。
突如巨大なシャドウ反応を感知し、以前荒垣の事故が遭った場所とそう離れていない現場に急行した二人は、通常のペルソナと同サイズながらパワーもスピードも異次元の存在を相手にしながら、そんな無謀な戦いを挑まされていた。
美鶴のペンテシレアが広範囲に放った氷弾は、真っ直ぐ真田を狙うシャドウに何発も当たるが、相手は一切速度を落とさず、回避し続けていたことで消耗して完全には避けそこなった真田の背中を爪で抉った。
「があっ」
「明彦っ!?」
爪で切り裂かれた少年のシャツが血に染まる。致命傷はなんとか避けたが重傷には違いない。
二人のペルソナは回復スキルを覚えているものの、それで治せるのは多少の切り傷や擦り傷などで、血がダラダラと流れている様な重傷では、最低限塞ぐだけでも何回スキルを使えばいいかも分からない。

もっとも、治療できるだけの隙があればいいが、敵はまだまだ健在で爪についた血を舐めて喜んでいるのか上空で雄叫びをあげていた。
顔の上半分だけが仮面で覆われ、後はすべて黒いベルトのような物が何重にも巻かれているというのに、ベルトの隙間をこじ開けてまで爪についた血を口に運んだ事に驚いたが、一連の行動で敵が野生の獣よりも高い知能を持っていると分かった。
敵にとって二人との戦いは半分遊びで、一息に殺さないのはいたぶって楽しんでいるのだろう。
シャドウにそんな生き物のような趣味嗜好があるとは知らなかったが、その情報をラボに伝えるにもまずは生き残る事が大切だ。
怪我を負っても意識までは失っていなかった真田が、相手が上空で喜んでいるうちに自分の治療を試みている間、美鶴は自分が今度は敵の攻撃を引き付けねばと武器を構えた。
「どうした、シャドウ！　私はまだここにいるぞ！」
相手の狙いが真田になってから気を引いても遅い。だからこそ、美鶴は相手が動き出す前に自分から挑発して気を引きに行く。
声が聞こえた敵は血を舐め終えた手を口から放し、両腕を大きく広げると降下体勢に入った。
「ま、待て！　そっちじゃない！」
しかし、敵が降下していった先にいたのは真田だった。慌てて美鶴は駆け寄ろうとするが余りに相手が速過ぎた。
腕だけで這うように建物の影に移動しようとしていた真田も、自分が狙われている事に気付いたようだが、回復のための召喚すら出来ていない以上、まともに反応する事は出来ない。
アスファルトを抉るような攻撃をまともに喰らえば、いくらペルソナの付与効果で一般人より耐久力が増しているペルソナ使いだろうと無事では済まないだろう。
同時に動けなくなることを危惧し、距離を開けていたことが仇になった。やめろと手を伸ばし必死に走る美鶴の目の前で、動けない真田が敵の手にかかろうとしたとき、一つの影が横から飛び出し真田を巻き込んで横に転がった。

「あ、荒垣っ!?」
飛び出して来た影のおかげで敵の攻撃は地面を抉るだけで済んだ。
そして、真田を助けてくれた人物をみれば、相手は特別課外活動部を去って行った荒垣だった。
敵の動きを警戒しつつ、起き上がった荒垣は真田に肩を貸して立ち上がるなり二人を怒鳴りつける。
「馬鹿かお前ら！　勝てないなら逃げるくらいできるだろうが！　俺が来なきゃ確実に死んでたぞ！」
「す、すまない。だが、敵の移動速度があまりに速くて」
「とりあえず、建物の方へ逃げるぞ。お前も走れ」
相手は上空からの急降下でしか攻撃をしてこない。ならば、屋根のあるところや狭い場所なら入ってこれないだろう。
バイクを置いて来る事になってしまうが、そんな物は後で回収すればいいと荒垣は肩を貸したまま駆け出した。
揺れる度に傷が塞がっていない真田は痛そうに顔を顰めるが、まだ話す体力はあるようで足を動かしながら荒垣に話しかけた。
「……シンジ……近くにいたのか？」
「まぁな、あんだけデカイ音たててりゃ流石に戦闘だって気付くさ」
寮を去ってから荒垣は事故現場近くの溜まり場にいるようになった。二人が戦っていたのはその近くだった事で、戦闘音に気付いた荒垣は心配してやってきたという訳だ。
そして、ここらへ頻繁に来ている荒垣にとって、どこを通って逃げればいいかというのも当然頭に入っている。
服が汚れることなど気にするなと、薄暗く汚い狭い路地を通りながら、どこか入れそうな建物はないかと周囲を探す。
後ろから美鶴もちゃんと付いて来ているが、出血している真田の体力はそろそろ限界に近い。荒垣がしっかりと腰に手を回して支えなければ、足もふらついて立っていられないくらいだ。
影時間が終わるまで逃げ続けるとすれば、どこかで一度休みスキルを使って傷を塞ぐ必要がある。
上空では三人を狙った敵が飛びながら追ってきているのが見える

ため、下手な場所では建物の天井を打ち抜いて侵入してくるかもしれない。
　真田の治療、信じられない強さを持った敵、ペルソナを失っている自分、様々な要因について考えながら荒垣は状況的に詰んでいるかもしれないと思ってしまった。
「想像以上にヤベー状況だな」
「ここらで治療のために休める場所はないのか？」
「古い建物が多い。あいつの攻撃の威力を考えたら天井壊して入ってくるかもしれねえぞ」
　前を向く事すら出来なくなっている真田を見て、美鶴は心配した様子で尋ねるが、荒垣だってずっと休める場所を探している。
　けれど、ここは駅前の開発が始まる前から存在した建物が多く、建築年数を考えれば敵の攻撃を防げるほど信用出来なかった。
　そして、荒垣の顔にも焦りの色が浮かんできたとき、突然真田の身体から力が抜け。一緒に倒れてしまわないよう荒垣は必死に踏ん張ってから、意識を失った幼馴染の少年に声をかけた。
「おい、アキ！　アキ!!」
「失血で気を失ったのか。このままではまずいぞ」
　流石に意識を失った男を一人担いで逃げる事は出来ない。なにより、意識を失うほど血を失ったのなら、このままでは失血のせいで死んでしまう事が懸念される。
　これ以上逃げられなくなった荒垣は、上空の敵に警戒しながら真田を地面に寝かせると、美鶴に少しでも治療してやれと頼んでから何か生き残る方法がないか必死に考えた。
　戦力は美鶴のみ。その美鶴も効くかどうか分からない回復スキルで真田の治療中。狭い路地だが無理をすれば敵も入って来られるだけの幅のある通路。
　状況は絶望的でも荒垣は自分に出来る事を考え、そして生き残る一つの可能性をみつけた。
「テメェならこの状況が視えてんだろ！　少しは気ぃ回して助けに来い！」

動かなくなった荒垣たちに痺れを切らしたのか、上空にいた敵が荒垣たち目がけて降下体勢に入る。
近くのビルはおよそ四階建てで、敵が建物の高さに到達すればそこから一秒も掛からずに荒垣たちに届く。
それを理解しながらも、遥か上空から敵が来ているのを見ていた荒垣は叫んだ。自分の知る中で唯一上空の敵を倒せそうな者を呼ぶために。
そして、敵が建物の高さに到達しようというとき、敵の進路を遮る様に極光が走った。
「やっぱ視えてやがったのか……」
横から攻撃が来た事で敵は攻撃を中断し、急上昇して回避行動を取った。
美鶴は何が起こったのか分かっていないらしいが、一先ずの危機が去ったと空を見たまま安堵の息を吐く荒垣の目に過ぎ去る青い天使が映る。
あれが今の攻撃を放ったペルソナかと思っていれば、荒垣たちのいる路地に入ってきた者が呆れた様子で、先ほどの呟きに言葉を返してくる。
「文字通り飛んできてあげたのに何言ってるのよ」
「視えてても距離があれば物理的に無理やって言うたやん。それにタルタロスでシャドウ狩っとるんやから、そない暇しとる訳やないんよ？」
現れたのは髪の長い二人の少女。一人は大きな戦斧を背中に背負い、もう一人は鎖で繋がったハンドアックスを二つ持っている。
やってきた少女の姿を見た美鶴は、彼女の主観では影時間に会うのは初めてだったので、ペンテシレアの回復スキルを使ったまま驚きの声を上げた。
「吉野、それに汐見も。やはり君たちもペルソナ使いだったのか」
「……どうでもいいでしょ。それより、そのままじゃ死ぬわよソレ」
美鶴の回復スキルでは重傷の真田を治療できない。回復スキルで血が流れ出る速度は遅くなっている気がするが、結局は流れ出ている

事に代わりはない。このままでは失血性ショック死を引き起こすだろう。
　やってきたチドリの言葉が事実だと分かっている美鶴は、悔しそうな表情をしながらも、すぐに頭を切り替えると二人に助力を求めた。
「君たちのペルソナで回復スキルを持っている者はいないか。私のスキルでは出血を遅らせる事しか出来ないんだ」
「多少の怪我なら治せるけど、私の力は回復が本質じゃないから無理ね。ラビリスはそもそも回復スキルを持ってないし」
「じゃあ、湊君に頼むしかないやん。湊君っ！　この人死んでまうよ！」
　建物の間から覗く空では、湊とシャドウが制空権を握るドッグファイトをしていた。どちらも速いが自分が有利な位置に着くために絶えず移動している事で、実際に攻撃の撃ち合いが始まればどうなるか分からない。
　故に、戦闘の邪魔をして悪いという気持ちはあるが、人命救助を優先したラビリスが大声で呼びかければ、湊はシャドウを追って上昇する途中でカードを砕きバアル・ペオルを呼び出した。
　呼び出した本人はそのまま敵を追って、空中に呼び出されたバアル・ペオルは面倒くさそうな表情で腕を振り、真田だけではなく美鶴たちの細かな怪我と疲労を癒して消える。
　淡い光の波動が届き、真田の出血が止まって顔色がマシになるのを見た美鶴たちは、自分たちの疲労が回復している事も含めて回復スキルの威力に驚かされる。
「傷跡も残さず治っているとは、とんでもない力だな」
「つーか、今アイツ、ペルソナ出したまんま他のペルソナ呼ばなかったか？」
「……ちょっと待って。お願いメーディア」
　ワイルドの能力も複数同時召喚も初めてみたことで、荒垣は信じられないという顔をする。
　だが、相手の質問に答えるよりも今は状況の把握が先だ。チドリは白い装飾銃を改造して湊が作った召喚器を頭に当ててメーディアを

呼び出す。
　呼び出されたメーディアはチドリの命令で空を飛んでいる敵にアナライズをかけ、読み取った情報を腕に付けた端末に送信して敵の強さを表示した。
「何、アイツ……。数値が〝９８９００ｓｐ（レベル９９弱）〟って刈り取る者並みじゃない」
「その小さな機械で敵の強さが測れるのか？」
「さっきから五月蝿い。分からないなら黙ってなさいよ」
　初めて見る機械に興味を持ったらしい美鶴を黙らせ、チドリはドッグファイトを続ける両者をジッと見つめる。
　適性値から割り出した敵の強さは刈り取る者に近いレベル。しかし、その飛行速度は圧倒的で、自分に掛かる負荷を無視した曲芸飛行をしてまで追う湊が距離を詰められないほどだ。
「刈り取る者と同じ強さにしては速過ぎひん？　湊君も距離を詰めれてへんし、高機動タイプならええけど火力も持っとったらまずいで」
　アザゼルは速さに特化したペルソナではないが、ペルソナ全体の中でも遅い訳ではない。
　高同調状態でステータスも全力に近付いている事を考えれば、真面目に敵を殺しに行く湊が追い付けていない時点で敵の速さは異常だった。
　チドリのアナライズによって相手の強さが刈り取る者級だと分かり、もしも、相手が速いだけでなく威力の高いスキルを持っていれば湊が危険だとラビリスがいえば、同じように考えたチドリが戦闘が見えない狭い場所から移動すると告げた。
「見える場所に移動するわよ。来るならその無能も背負って連れて来なさい」
「……明彦も必死に戦っていたんだがな」
　血が少なくなって意識を失っている真田を無能と呼ぶチドリに、彼と一緒に戦っていた美鶴や幼馴染の荒垣は同情した顔をする。
　しかし、意識を失っている真田が足手まといなのは真実で、必死に戦おうと相手に手傷を負わせる事も出来なかった事を考えれば、美鶴

も含めて何も反論できない。
近くにシャドウの反応はなく、上空の敵は湊との戦いで精一杯でチドリたちの方へ向かってくる事はないため、荒垣が真田を背負って拓けた場所まで移動すれば、高速で飛びまわる両者の戦闘がようやくはっきり見えた。
＊＊＊
蝙蝠のような羽をはばたかせ上昇するシャドウを追い。湊もアザゼルの翼をはばたかせて急上昇していく。
耳元を過ぎる風が五月蝿いが、急な方向転換で身体に掛かるGも無視して、湊は先を行く敵にどう追い付こうか考えていた。
アザゼルは他のペルソナよりも少し大きく、高火力でありながら肉弾戦も出来るパワーとタフネスを持ち合わせた重戦車のようなペルソナだ。
筋力によって生み出される推進力はそれなりであるものの、高機動特化型のようなスピードタイプにはどうしても一歩譲ってしまう。
他にもっと速いペルソナを持っていないのかと言えば、別に持っていない訳ではないが、湊は自分の先を飛んでいるシャドウをこれまで見た事がなかった。
仮面から確認出来るアルカナは刑死者。モナドにいるシャドウらよりも強く、刈り取る者に近い力を持った存在がイレギュラーとしてタルタロスの外に現れるなど初めてで、来るまでに見ていた限りでは敵は真田たちをいたぶって遊んでいた。
さらに人間の血を舐めて喜んでいた事も合わせて考えれば、シャドウらしからぬ高い知能と生物のような嗜好を持っている様子ですらある。
「……ファルロス、様子がおかしい。普通のシャドウじゃない」
《うん、僕も感じてるよ。多分だけど、あれは僕と同じ複合シャドウだ。複数のシャドウが合わさって一つの個体になってる》
不自然な能力の高さに違和感を覚え、湊は自分に宿るシャドウの王に意見を求める。
湊の方が詳しい分野もあるが、シャドウに関する知識ならシャドウ

の王でありニュクスの息子であるファルロス以上に知っている者はいない。
　そして、湊の目を通じてみていたファルロスも、先を行くシャドウが普通のシャドウではないことを感じ取っており、能力は比べるまでもなく劣っているが自分に近い存在だと察した。
「……複合シャドウは自然発生するものなのか？」
《本来はね。ただ、それには人の死を求める心が必要になる。というより、死を求めた人たちのシャドウがニュクスを呼ぶために合わさって僕という宣告者を生み出すんだ》
　宣告者、つまりはデスであるファルロスの事だが、実験で生まれなくとも彼が近い将来誕生していた事は湊も聞いている。
　人々の滅びや死を求める心がシャドウとなって抜け出し、そのシャドウが集まって〝死〟そのものであるニュクスを呼ぶデスとなるのだ。
　しかし、彼以外に複合シャドウを知らなかった湊は、役割を持ったデス以外に複合シャドウが誕生する事はないはずだと聞いて納得した表情になる。
「つまり、お前が既に存在している以上、複合シャドウは生まれないんだな？」
《絶対ではないよ。僕は不完全体だし、人々の死を求める心が強くなれば、僕の復活を待たずに新たな宣告者を生み出すかもしれない》
　現在のファルロスはデスとしての役割を果たせない。となれば、人々の心が死を求めれば、新たなデスが生まれてくる可能性は十分にあり得た。
　湊たちの先を飛んでいるシャドウの力は一般的なシャドウを遥かに凌いでいる。
　刈り取る者というイレギュラーな存在に匹敵する複合シャドウが、こんな時期に現れるなど絶対に何か理由がある。そう睨んだ湊は、敵をジッと見つめ、
「そうか。でも、あれはそういった類いのモノじゃないな」
　最後には、相手が宣告者でもそれに近い存在でもないと結論付け

た。
《アナライズも使ってないのに、見ただけで分かるのかい？》
「……俺の中にいて知らなかったのか。死を理解してるってことは、俺の魂は常にニュクスに触れてるってことだぞ」
ファルロスは青年の結論を微塵も疑っていない。だが、アナライズも使わずに性質を読み取るなど人間には無理だと思っていた。
そして、どうやって彼が相手の性質を読み取ったのかという疑問に返って来た答えに、ファルロスは思わず言葉を失ってしまう。
ファルロスやペルソナたちは彼の中に存在するが、それは精神の領域に存在しているのであって、魂がどういった状態で存在するかは知らない。
神降ろしでは理解を超えた異界の神と拮抗し消滅を免れ、果ては取り込み共存という誰もが不可能だと思っていた別の道を行った彼の魂は、人のそれを超えた力を持っていることは明白だった。
それがまさか、死を理解していることで、生きて人としての形を保ったままニュクスと共にあると聞いては、自分がニュクスの欠片である羽根に触れて滅びを呼ぶ可能性を恐れていただけに、ファルロスとしては何故滅びが起きないのかと驚くしかない。
湊に取り込まれていてデスが直接ニュクスに触れていないから大丈夫なのか、それとも湊が神の力を中和出来ているのか、今のファルロスに答えは分からない。しかし、もし本当に彼の魂がここにありながらニュクスに触れることが出来るなら、シャドウの事が分かるのも納得がいった。
《そう、だね。うん、そういう事か。確かに、それなら君には僕たちの違いが分かって当然か》
「ああ。何より、俺の友達はあんなのとは違う」
《ははっ、それはどうも。まぁ、生まれた理由がなんにせよ、あれはそのままにしておくと拙い。他のシャドウを食べて僕の代用品になりかねない。こっちの準備も出来ていないし。叩いておくべきだ》
「分かっ――――っ!?」
今はまだ宣告者ではないが、今後さらにシャドウを食べて成長すれ

ばどうなるか分からない。
故に、ここで倒しておくべきだと言われた湊が分かったと頷きかけたとき、敵が飛びながら羽を羽ばたかせオレンジ色の鱗粉を振りまいた。
後を追っていた湊が急制動がかけられず鱗紛の舞う空間へと入ってしまうと、鱗紛は強烈な光を放ち大きな爆発を引き起こした。
＊＊＊
敵が鱗紛を撒く様子は地上からも見えていた。火の粉のようにきらめく鱗紛の舞う空間に湊が入った途端に爆発し、爆発が治まっても黒い煙で状況が分からない。
「あ、あり、さとが……」
「湊君、爆散してもうた……」
アギダイン級の炎が拡がる爆発に飲まれた湊をみて、美鶴や荒垣は唖然とし、ラビリスもタイミング的に防御が間に合わなかったのではと心配する。
火炎が弱点の美鶴は勿論、弱点のない荒垣のカストールでも先ほどの一撃に耐えられるとは思えない。
実戦を経験している者にすれば、自分たちを基準に受けるダメージを考えてしまうのも無理はないが、青年のことをよく知っている少女は冷静なまま口を開いた。
「……あの程度で死ぬならとっくに生きてないわ」
「しかし、ガードも間に合うタイミングではなかったぞ？」
「必要ないわよ」
いくら湊が強力なペルソナを有していようと、流石に直撃ではかなりのダメージを負っているはず。
ずっと追ってきていた湊を倒した事で、空中で止まりながら意味の分からない奇声をあげて喜んでいるシャドウを見た美鶴がそういうと、酷くつまらなそうな顔をしたチドリは首を横に振る。
そして、ジッと黒煙の方を見ている彼女につられ、他の者が同じようにそちらを見たとき、空から轟音が響いてきた。
何事か、と驚く暇もない。音が響いたと思えば黒煙の中から太い極

光が現れ、そのまま止まっていたシャドウを飲み込み遠くの空に浮かぶ雲を散らす。
攻撃を放った衝撃で霧散していた黒煙のあった場所には、一切の傷を負っていない湊がアザゼルと共に存在し、攻撃が敵を完全に飲み込んだ事を確認した後、放っていた極光を止めていた。
「ほらね、アザゼルに炎は効かないんだもの。心配するまでもないわ」
「あ、そうなんや。ペルソナの耐性とか聞いてへんから知らんかったわ」
いくら相手の攻撃が強くてもペルソナやシャドウには耐性という相性がある。
湊のペルソナは基本的に弱点よりも耐性が多い優秀なものが多いが、『神の如き強者』を名の由来とするアザゼルは、ネガティブマインドのペルソナの中でも抜きん出て耐性に優れていた。
物理の全てに耐性を持ち、魔法も電撃と火炎は効かない。他の魔法は通常通りだが、五つに分かれたステータスの耐性の値が非常に高い事もあって、素の防御力でほとんどの攻撃に耐える事が出来るのだ。
敵はそれらを知らずに勝ったと思いこんだのだろうが、彼の実力を知る者にすれば、頭を潰すか首を刎ねない限り、彼を殺せたと安心してはならないのは常識だった。
強さだけなら刈り取る者に匹敵し、速さならば上回ってすらいた敵も、子どもなのかと思ってしまうほどの油断や慢心を晒し、そこを突かれて一撃で呆気なく消え去れば街にも静寂が戻ってくる。
ようやく敵を倒し終えた湊もやってきてチドリたちの傍に着地し、戦闘でボロボロになり袖などが破れた服を着た美鶴の姿を見て、マフラーから取り出した制服のジャケットを勝手に羽織らせると、そのまま何事もなかったようにラビリス達に話しかけた。
「さっきのは複合シャドウだった。シャドウは他のシャドウを食べれば力を吸収し強化されていく。自然発生は珍しいが、他に何か理由があるなら今後また似たようなのが現れるかもしれない」
「他の理由ってどんなのがあるん？」
「同じ想いを持った複数の人間からシャドウが抜け出たとか、誰かが

意図的に作ったとかだな。前者なら偶然ともいえるが、後者なら出来るのは桐条グループの研究員くらいだろう」
湊たちが話す傍ら、視線すら向けずにジャケットを羽織らされた美鶴は、驚きつつも自分の格好が酷い事に初めて気付き、湊が上着を貸してくれた嬉しさもあって少し照れた顔で袖を通す。
女子の平均身長を考えれば長身に分類され、さらにヒールのあるブーツを履いてスタイルのいい美鶴でも、流石に一八〇センチを超える湊の上着はサイズが合わずぶかぶかだ。
けれど、そんなものは些末事だとばかりに袖を通し終え、ファスナーをしっかりとあげて湊の制服に包まれた美鶴は会話に参加する。
「確かにシャドウを使った研究などうちのグループしか出来ないが、研究を進めているラボでのシャドウ研究は解析がメインで、それを利用した実験などは行っていないんだ。旧エルゴ研の生き残りがいたとしても、設備や資金の関係で個人では難しいだろうし、何者かが悪意を持って複合シャドウとやらを作った可能性は低いのでは？」
今も昔も桐条側にそれほどのシャドウ研究の技術はない。そう思っている美鶴は素直に話すが、湊は彼女の言葉に反応を返さず何かを考え込んでいた。
いつも通りの無視とは少し様子が異なるため、美鶴が尋ねても意味がないと分かっているチドリが気を利かせて口を開く。
「……何か気になる事でもあるの？」
「いや、大した事じゃない」
「訊かないと話さないでしょうから訊いておくわ。何が気になってるの？」
彼の基準は一般人とかなり異なる。後で実は知っていたけど大したことじゃないと思ったし、訊かれなかったから話さなかったという事も多々あり、美紀が火事から助けた相手だと認識していた事などがいい例である。
先に気付いている本人はいいかもしれないが、知らずに土壇場で慌てるのは他の者なので、チドリがここで聞いておくのは大変意味があった。

そして、聞かれたら話せる事は正直に話してくれる青年は、考えをまとめているのかしばし黙りこみ、一分ほど経ってから質問に答えた。
「……さっきのシャドウが何か話していた気がするんだ。正確には言葉を発していたというか」
「シャドウって喋れるん？」
「声は出せるからな。知能が高ければ意思疎通はともかく言葉は話せるさ」
言葉を話すシャドウの代表格はファルロスだが、彼は湊の影響を受けて自我を形成しており、さらに言えばシャドウの王という特別な存在でもある。
故に、彼を基準として考える事は出来ないが、それでも咆哮するシャドウも中にはいるので、声を出せる以上、知能が高ければ話せてもおかしくはなかった。
「それで、なんて言ってたの？」
「俺は爆炎の中にいたし、相手は顔をベルトで覆ってて上手く聞こえなかったが、〝祝祭〟って言ってた気がする」
「祝祭？　って、何を祝うの？」
「俺に聞かれてもな。まぁ、シャドウ側でも何か変化が始まってるのかもしれない」
湊が敵の攻撃に飲まれたとき、美鶴たちはシャドウがただ奇声をあげているとしか思わなかった。
けれど、それが実際は人の話す言葉になっており、何やら意味深な単語だったことで湊も気になったのだ。
他の者にすれば祝祭と言われても意味が分からないだろう。ただ、湊はもしかすると散らばった十二のシャドウの復活が迫っている予兆かもしれないと睨んでいた。
もっとも、聞かれていないのでそのことは話さないが、それが後々面倒を引き起こすと分かっていない青年は、話はここまでにして今日は帰るかと帰宅の準備を始める。
「さて、俺たちは帰ります。寝てる人には、上手く逃げていたら敵が諦

めてタルタロスに帰って行ったとでも伝えておいてください。俺たちの事は話す必要ありません。助けた代金はそれでいいです」
「怪我の事はどう説明すんだ。俺らにそんな便利な回復スキルはねぇぞ」
「タルタロスで拾った秘蔵の回復アイテムを使ったと言えばいいでしょう。臓器の破損や四肢の切断は治せませんが、切り傷や刺し傷なら重傷でもこれで治りますから」
言いながら湊はマフラーに手を突っ込み、中から宝玉を取り出してみせる。
宝玉は強力な回復スキルの籠められたマジックアイテムで、持った状態で強く念じれば単体を対象とした回復スキルを発動させる事が出来るのだ。
これならば真田が負っていた程度の傷は癒せるため、実際にタルタロスで拾える事も含め説得力があった。
複数持っている湊はそれを相手に渡そうとするも、真田を背負っている荒垣は受け取れないので、ノールックで美鶴に投げ渡すとアザゼルを召喚し、チドリとラビリスをアザゼルの腕に抱かせる。
驚きつつもキャッチした美鶴は、受け取ったアイテムを上着のポケットに仕舞いこんで、飛び立とうとしていた湊に慌てて礼をいう。
「あ、有里！　助けてくれてありがとう。この上着はクリーニングしてから返す。だから、また学校で」
彼女がそう言い終わるとアザゼルは羽ばたいて上昇し、そのまま凄まじい速度で去って行った。
去っていくペルソナを見つめていた美鶴は、今までずっと勧誘し続けていた者たちが、自分たちよりも遥かに影時間に関わる事柄に対して知識を持っており、さらにはシャドウを倒して街の平和を守ってくれていた事に驚かされた。
しかし、彼らの実力を実際に目にしたからこそ、自分たちが仲間になれば足を引っ張る事になると理解してしまい。湊が言っていたように真田や桐条グループにも秘密にして、一切干渉しない方がいいのではと思ってしまう。

助けられた手前、真田には先ほどの設定で伝えておくが、荒垣に手伝ってもらい彼を病院に連れていく間、美鶴は自分はどう報告すべきなのだろうかと悩み続けていた。

＊＊＊

（なるほど、刈り取る者クラスのシャドウも一撃か。一度に放てる威力に関してはずば抜けているな）

湊たちが戦いを終えて帰って行ったとき、離れた場所から戦闘の様子を観察していた幾月は、自分の作ったシャドウが倒されたというのに楽しそうに口元を歪めていた。

ダイモーンが湊に勝てない事は最初から予想していたが、まさかカウンターの一撃で屠られるとは思っていなかった。

シャドウの中では最速ではないかというスピードで翻弄し、逃げながら後方に攻撃を放つというテクニカルな戦法を取った事など、ダイモーンのおかげで得られたデータは非常に役立ちそうな物が多い。

美鶴たちがやられそうになったときは冷や汗をかいたが、それも最後は全て丸く収まった事で、再び強力な複合シャドウが現れても湊が助けに来るだろうという希望が持てた。

デス・アバターが完成すれば器である湊と封印されたデスは用済みだ。コントロールの効かない湊より、デス・アバターを使った方が計画も上手くいく。

完成にはまだ時間がかかりそうだが、それまでは研究に付き合ってくれよと笑いながら、幾月はその場を後にした。

第百七十七話　大会に向けて

６月３０日（月）
昼――月光館学園・姫子の部屋
月光館学園高等部には二つの保健室がある。一つは怪しい男・江戸川が主となっている保健室。
もう一つはスクールカウンセラーとなった櫛名田姫子が、学校に頼んで薬品やら資材も置いているスクールカウンセリングルームだ。
表札には『相談室』とシンプルに書かれているが、扉のとこに勝手に付けた表札には『姫子の部屋』と書かれている。
都内の有名進学私立校でよくそんな自由な事が認められるなと思う者もいるが、この学校は有里世代と呼ばれる学年が入学してから、中心人物である有里湊によって色々とルールの緩和がなされてきた。
それは生徒だけでなく、彼の周りにいる能力は確かだが自由な人格破綻者たちにも適応され、本来の保健室は江戸川の方だからと昼から部屋で鍋を食べても誰も文句を言わない。
ノンアルコールビールをゴキュゴキュと飲みながら、上機嫌で鍋を突いているそんな女教師二人と共に、湊たち総合芸術部のメンバーも部屋で弁当やパンを食べて過ごしていると、扉をノックする音が聞こえて部屋の主が扉に向かって答えた。
「保健室は管理棟一階だぞ。泡を吹いて倒れたり、転倒して頭を打って気を失ったなど、救急車が必要なレベルでなければそっちに回るといい」
自分で保健室として使えるように学校へ要望を出したというのに、彼女は緊急時以外はだらだらとゲームや漫画を嗜み過ごしているため、食事中に来るなど特に論外だとばかりに面倒を江戸川に丸投げした。
もっとも、緊急時ならば完全にスイッチが切り替わった様子で対応するので、生徒からの尊敬は皆無だが信頼だけはされている。
そうして、用件を伝える前に拒否されたノックした人物は、それ以外の理由だったようで扉を開けると部屋に入ってきた。

「すみません、保健室として用がある訳ではないんです。有里はいますか？」
やってきたのは紙袋を持った美鶴だった。ノンアルコールビール片手に鍋を食べている教師や、絨毯の上でクッションや座布団に座って弁当を食べる湊たちなど、ここが学校だと忘れそうになる部屋の内装には驚いたようだが、湊の姿を発見した美鶴が部屋に入ろうとしたところで櫛名田が口を開いた。
「うちは上履きだろうと土足厳禁だ。靴を脱いで棚に入れてから入って来い」
「あ、はい」
姫子の部屋は簡易ベッドや事務机もあり保健室に近い感じになっている。
しかし、靴を履いているとくつろげないので、絨毯を敷いて入り口脇に靴箱を設置する事で土足厳禁にしているのであった。
そんなルールを初めて聞いた美鶴も最初は戸惑うが、確かに誰も靴を履いていなかったことで大人しく従い入ってくる。
靴を棚に仕舞い、扉をちゃんと閉め、改めて部屋の中を見た美鶴は湊の元まで進むと彼に話しかけた。
「有里、その、話していた制服を持ってきた。貸してくれてありがとう」
言いながら美鶴は持っていた紙袋から、綺麗にクリーニングされた制服のジャケットを取り出す。
話を知っているチドリとラビリスは驚かないが、他の者にすれば湊が美鶴と視線すら合わせない事は有名なので、どこでなにがあって制服を貸したのか興味津々だ。
けれど、その事を聞こうにも湊が制服を受け取らないと話が進まない。
しかし、やはり彼は美鶴が入ってくる前と全く同じ体勢のまま、視線すら向けずに弁当を食べ続けて受け取ろうとしなかった。
別に美鶴が着たからもう着ないだとか、美鶴が触れた物など触りたくないから捨てろなどという子ども染みた真似はしない。今の湊は

ワイシャツの上にオリーブドラフ色の上着を着ているので、返されればシャツの上にジャケットを着るだろう。
私服での登校が許されていようと、制服という選ぶ手間が省ける服というのは実に効率的なのだ。
冬場ならもっと私服寄りになるが、夏は制服を普通に着る湊にすれば、複数持っていようと制服を返されて困る事はなかった。
そう、問題は美鶴を相手にしないというただ一点に尽きる。
現在、部屋は机で鍋を食べる教師二人、長机で談笑しながら食べているチドリ・ラビリス・ゆかり・風花、クッションに座って食べている湊・美紀・ターニャというグループに分かれており、湊と美鶴の緩衝材になっているメンバーは全員が部屋の奥にいる。
そこからわざわざ席を立って、既に渡すために差し出している美鶴から制服を受け取るのも変で、代理なら一緒にいる美紀かターニャが受け取る方が自然だが、美紀は代理になるほど湊と親しい立場ではなく、ターニャはそもそも二人の関係をよく分かっていないので首を傾げている。
これでは誰がどう動いても違和感があり、湊が自分で受け取る以外に無事に話を進めることは難しかった。
「桐条さん、有里君も食事中に渡されても困るだろうし、そこのハンガーにかけておきなよ。しわが出来ないように畳んでたにせよ、伸ばしておいた方が着易いしね！」
「あ、はい。そうさせてもらいます」
誰も動く事が出来ず、ただ気まずいまま時間だけ過ぎていこうとしたとき、鍋を食べていた佐久間が壁のところにあるハンガーを指して美鶴に助言をした。
佐久間も桐条グループと湊の関係は理解しており、二人が色々と訳ありなのも知っている。
だからこそ、ここでは教師として誰も傷付かずに済みそうな指示を出したのだが、彼女の目論見は成功したようで、美鶴もどこかほっとした顔でジャケットをハンガーにかけた。
一人が動き出せば他の者も動けるようになって、部屋の中の空気も

元通りになっていき。ジャケットをかけ終えた美鶴は、入ってきたときと同じ様子で再び紙袋に手を入れると、顔だけ湊の方を向きながら中から取り出した缶の容器を佐久間たちのテーブルにおいた。
「それとこれは貸してくれたお礼だ。他の者と一緒にたべてくれ」
「ふむ、礼のクッキーが桁一つ違う高級品とは流石ブルジョア」
「まぁ、有里君に届いたバレンタインプレゼントには高級品も沢山ありましたけどね。桐条さん、ありがとう!」
置かれたクッキーの缶を見て、教師二人は持ってきた本人がいるにも関わらず自分の思ったことをばっさり言う。
ここにいる教師二人は美鶴が桐条グループのご令嬢だろうと特別扱いしない。いくら優秀でもそれを超える才能を持つ生徒が他にも存在し、自分たちも美鶴と同等か分野によってはそれ以上の能力を持っているため、周りが騒ぐほど彼女に特別さを感じないのだ。
もっとも、学校に出資している母体グループということは、彼女たちの雇い主ということでもあるのだが、自分たちが適当なことをしても美鶴がそれを告げ口したりしないと思っているからこそ、多少の節度はあるが舐めた態度も取ったりしているのだが、美鶴の方にも庇える限界が存在する事を二人は知らない。
この程度ならばチドリや真田と大して変わらないので気にしないが、知らずに地雷を踏み抜くなどして、佐久間と櫛名田もきっといつか痛い目に遭う事だろう。
馬鹿な大人が子どもに怒られる未来がいつ来るかは不明だが、それはそれとして、まだ用件があった美鶴は湊の傍に移動すると紙袋から一枚のプリントを取り出し、美紀とターニャに断ってから前を失礼しプリントを湊の正面に置いた。
「まだ用件があるんだ。その、部活の事でな。来月にインターハイの結団式があり、八月の頭から本格的に大会が始まるんだ。試合のエントリーは部活に所属していないと出来ないし。エントリーには締めきりがある。これまでは所属しているという体で誤魔化して来たが、有里がテニスでインターハイに出るならちゃんと書類を提出する必要があるんだ」

湊は以前の大会の後から男子テニス部所属という扱いで大会にエントリーし、既に都大会と関東大会を勝ち抜き関東代表としてインターハイの出場資格を得ている。
だが、実際にテニス部に所属している訳ではなく、試合に出て勝っているのでやる気はあるのだろうが、学校側としてもいまいち状況が把握できていない状態だった。
母親のことがあって再びテニスを始めた湊だが、彼は大会に出るつもりがあるのかないのか不明で、仮に出るにしても無頓着そうだと思い。目標としていた大会の前に、気を利かせた美鶴が本当にエントリーするならという事で入部しておく必要があると教えに来たのだ。
「もし、インターハイにも出るつもりがあるなら入部届けを出してくれ。名義というか所属は既に月光館学園高等部男子テニス部としてエントリーされているがな。こういった部分でケチを付けてくる者もいるから、不安材料は先に消しておくべきだ」
前回出た大会と違い、全国大会に向けた高校生テニス大会出場には、高校の部活に在籍している必要がある。
月光館学園のテニス部はそれほど強い訳ではなく、団体戦出場メンバーは揃っているが、そちらに出られれば十分で個人戦は勝ち進める湊に枠を譲ってもいいと部員たちも言っていた。
もっとも、そう言った彼らも六月中に行われた関東大会で敗退して既に夏を終えた訳だが、美鶴がインターハイ出場のために必要なことを伝えると、わざわざ湊に伝えるためだけに美鶴自らテニス部や顧問に聞きにいったのかとゆかりは驚いた顔をして、どうして関係のない美鶴が湊のために動いたのかを尋ねる。
「え、桐条先輩がわざわざ聞きに行ったんですか？」
「話を聞いておかないと説明も出来ないからな。私個人としてだけでなく、学校側も有里には部活で活躍して欲しいと思っている。それに必要な事をしているだけだ」
言ってしまえば、湊のテニス部所属と大会での活躍はグループや学校からの希望でもある。
先日の大会で既に全国レベルの相手に勝利している事を思えば、湊

がインターハイ序盤で負ける事は考えづらい。
彼が試合に出るだけで学校の宣伝になり、勝てば学校に取材や受験を考えて見学の問い合わせも殺到するのだ。
湊がＣＭに出れば一本で最低二千万、番組出演料は一時間で二百万とされており。これは本人が決めた訳ではなく、業界が勝手に高く設定してそうなっているだけだが、学校はこれらを支払わずに湊の知名度を使えるので桐条グループ含め笑いが止まらない状態である。
ＣＭには出ていないのでＣＭ出演料は交渉で提示された額に過ぎないが、どちらにせよ学校に来た取材や出演依頼の話を聞いている美鶴も、湊の人気にあやかってばかりいるのは如何な物かと苦言の一つも漏らしたい気分ではあった。
なので、いくら学校や桐条グループが湊に出て欲しいと言ってきていても、わざわざ気を遣う必要はないぞと付け加えておく。
「これは別に君に強制するものではない。集団が苦手な君としては、再びマスコミやファンに囲まれるのは面倒だろうからな。その辺りは理解している。ただ、お母様がな。勝手に書類を提出して退路を断っておけばいいと仰られていたんだ」
強制はしない。むしろ面倒なら出なくていい。湊の意見を尊重したい美鶴だったが、ただ一点問題があった。そう、美鶴の母親である桐条英恵からの熱烈コールだ。
気まずそうな、困ったような顔をして告げた美鶴は、英恵から湊が試合に出るよう手を回しておけと電話やメールで何度も言われていた。
彼女が湊の活躍を見たいという気持ちは分かる。自分の子どもの活躍を見たくない親など少数なのだから。
美鶴も英恵と同じで湊の活躍を見たいと思っているが、いくら何でも勝手に書類を出しておくのはまずい。
これで当日までにへそを曲げて出ないと言われれば、出場すると聞いて集まるファンやマスコミがかっかりし、不満が湊や他の者に波及する可能性もある。
そんな事は英恵も望まないはずなので、美鶴がわざわざ正面から参

加しないかと誘いに来ることになった本当の理由を話せば、奥のテーブルで弁当を食べていたチドリが不敵に笑って口を開いた。
「……流石に湊の性格がよく分かってるわね」
「巻き込まれる有里のことを考えてみろ。お母様の気持ちも分かるが、自分の親の言う事だけに止めるなら全力でだ」
「桜も私にこっそり出しておけばって言ってたわ。親の考えることなんて似たようなものよ」
　実を言えば英恵だけでなく桜も同じ事をチドリに言っていた。湊の性格を考えれば、勝手にエントリーされていても英恵や桜が裏で糸を引いていれば断れない。
　それを分かっていて利用しようとする辺りの強かさは、危ない事をしてばかりの子を持つ親としての経験によるものだろう。実際に裏で動けと言われた二人の少女は、自分たちの親の発想に思わず呆れるしかなかった。
「ほんで、湊君は部活どないするん？　来年も暇どうか分からんし、出るんやったら余裕ある今年に出といた方がええと思うけど」
　英恵や桜の話は一先ずおいておき、実際のところ湊本人に出るつもりがあるのか。チドリと同じテーブルでお弁当のトンカツを食べていたラビリスが尋ねる。
　ラビリスは団体と個人どちらの選手にも選ばれていなかったので、大会では出場する先輩の応援に行っただけだが、唯一勝ち上がった湊がインターハイにも出場するなら楽しみも増えると彼女的には出場して欲しいようだ。
　他のメンバーもそれは同じで、夏の日差しの中での応援は大変だが、部活の仲間として湊が頑張っている姿をみたいと期待するのは当然だった。
　そんな一同の期待の籠った視線を向けられた青年は、食べていたグラタンを飲み込むと面倒くさそうな表情で答える。
「……優勝するだけでいいんだけどな。一回戦から出るのは面倒でしかない」
「あの、その優勝が即ち日本一ってことになるんですが、全国大会優

勝ってタイトルにこだわりがあるんですか？」
簡単にいうが、それ即ち高校の日本一だと美紀が突っ込む。
湊に限らず面倒だから地区大会をパスし、全国大会にだけで出たいという学生は大勢いるだろう。全国大会の試合をほとんどパスし、決勝のみ戦いたいと思う者はさらに多い可能性だってある。
それで優勝したときに心から喜べるのかは不明だが、将来の事を考えれば〝全国大会出場〟という肩書きが重要なので、自分の実力を試すつもりがなければ問題ないのかもしれない。
過程よりも結果を重視する湊も、別にテニスで活躍する事を目的とはしていないので、パスしていいと言われれば即決でパスを選ぶが、どうして全国大会優勝にこだわるのか美紀に聞かれれば、聞かれた本人ではなく残っていた美鶴がそれに答えた。
「彼の母は高校生のときに全国大会で優勝しているんだ」
「え、そんな人の子どもってテニスエリートじゃん。なんで中学でもしなかったの？」
本人ではなく美鶴が答えたことも驚きだが、それよりも湊の母親の経歴の方にゆかりたちは驚く。
ゆかりも弓道とテニスで種目は異なるが、全国を目指して修練に励んでいる。中学の頃はそれなりの成績を収めつつも全国大会には出られなかったが、テニスで全国優勝した母を持ち、その母の才能を受け継いでいたなら、なんで試合に出なかったのか不思議でたまらず。せっかくのスキルが勿体ないと思うのも無理はない。
ただ、湊の場合はバスケットボールという異なる種目で才能を見せてもいたので、現在までテレビで話題として取り上げられている事も考えれば、本人がそれほど熱心でないことも含め勿体ないと騒ぐほどでもないのかもしれない。
そんな風に短時間に思考を巡らせながら答えを待っていると、何故だか再び答えたのは本人ではなく美鶴だった。
「おば様がテニスを始めたのは高校からだ。テニス歴三年で全国制覇し世間から注目された猛者だが、それを考えれば有里が中学でテニスをする理由の方が存在しないな」

「へぇ。けど、桐条先輩って有里家の家庭事情も知ってるんですね」
「まぁ……ほどほどにな」
正確には有里家ではなく百鬼家であり、戸籍を探っても有里家はほとんど遡れないようになっている。
そこまで詳しく戸籍を調べるには、相当な権力を持っているか、そういった事に詳しい者と親しくなければならないが、ゆかりたち一般人が知る事はないので、美鶴は様々な事情が絡んでいる事もあり心中は複雑ながらも控えめに頷いた。
「まぁ、答えはいますぐじゃなくてもいい。出る気があるなら今週の水曜日には出してくれ。それではな」
借りていた物も返し、部活の話も伝えたので、湊にも考える時間が必要だろうと美鶴は提出期限だけ報せて去っていく。
扉を開けたときに廊下から夏の熱気がむわっと部屋に入ってくるが、しっかりと閉められるとすぐに冷房で部屋の温度は快適なものになった。
来客が去った事で今まで話を聞いていた者たちも食事を再開し、湊も美鶴の置いていった入部届けに名前を書いて職員室に後で戻る佐久間に投げて渡した。
「およ？　有里君、試合出るの？　またテレビ局来ちゃうけどいいの？」
「別にいい。取材は受けないって言ってあるからな」
受け取った入部届けをポケットに仕舞いつつ、佐久間は青年を取り巻く環境が再び騒がしい物になることを懸念し、本当にいいのかと彼の意志を確認する。
母親の事や懐いている英恵に桜といった者たちに望まれているとはいえ、彼は注目される事が嫌いで、基本的に静かに普段を過ごしたがっている。
外向けに愛想のいい好青年の仮面を被る事が出来、さらによく人助けをしている湊は、ルックスの良さとどこか高貴でミステリアスな雰囲気もあってテレビ映えするとマスコミにも人気があった。
ブームが起こったときなど半年近く取材申し込みの電話が鳴りや

まず、桐条グループが学校の負担を軽減するために用意した専用ダイヤルもすぐ係りを三倍に増員したほどだ。

あれから一度はブームも落ち着いたのだが、昨年の年末特番で湊が活躍し、先日テニスの大会優勝から地区・都・関東大会と続けて優勝したこともあってブームは再燃してきている。

これで全国大会に出場でもすれば、高校生となり以前よりもプロ入りが現実味を帯びて来ている事もあって、マスコミは前回以上の熱心さで皇子ブームを盛り上げていくに違いない。

さらに、今の湊はラビリスと同居しているので、もしもマスコミが彼に付き纏えば女子と同棲しているなどとスキャンダルとして取り上げられる可能性もある。

ゆかりと付き合っている事も、プリンス・ミナトをはじめとした周囲の協力もあって隠せているが、ラビリスとの同居がばれればゆかりとの交際や女子しかいない部活に所属している事も広まり、部活メンバー全員と湊が不健全な関係にあるのではないかと下衆な記事を書かれる事も考えられた。

一応、現在はパパラッチが彷徨いていれば、相手の視界から消えて背後に回り込み、「ご苦労様です」と挨拶をして名刺まで貰ってから取材を断っているので、既に顔を覚えられている事もあり一般的な取材陣は活動を控えている。

だが、内容がスキャンダル関係となると話は違ってくる。クリーンなイメージで売れていることで、あまりに踏み込んだ強行取材をすれば視聴者たちからクレームが飛んでくるため、マスコミもそれほど無理な取材は行えていないが、そのクリーンなイメージが間違っていたという趣旨で行う取材なら他の芸能人らと同じような扱いで行ける。

噂に過ぎない内容だろうと、ブームにもなった皇子のスキャンダルとなれば記事を載せたものは売れるに違いない。

そんな風に周囲の状況も変わった今だからこそ、しっかり考えた方がいいのではと、簡単に大丈夫だという湊を心配して佐久間はしつこく確認を取った。

「本当にいいの？　義務教育期間と高校だとまわりの反応も違うよ

？」
「ああ、分かってる。それは職員室に戻ったときに顧問に渡しておいてくれ」
「むぅ……いいけど、あの先生って人の胸見て話してくるから、あんまり好きくないんだよね。他の男の人も有里君みたいだったいいのにー」
若さ、美貌、スタイル、多才といくつも天から与えられた佐久間は、まわりの男性陣がチヤホヤしてくれるのはいいが、お前はどこに向かって喋りかけているんだと思いたくなることもしばしばで、いやらしい男性教師の相手はうんざりだとテーブルに突っ伏し嫌な顔をする。
とはいえ、ここをやめて別の場所で働こうと男など似たようなものなので、男性がいる職場で働く限り佐久間の悩みはなくならないだろう。
湊に色々と問題を持ってくる人物ではあるが、彼の特殊な事情を理解して色々と便宜を図ってくれてもいるため、たまには労ってやるかと立ち上がり頭を撫でてやれば、途端に彼女はだらけきった喜びの笑みを見せた。
勿論、そんな彼を一部の女性陣は冷ややかな視線で見ていたが、視線に気付いていた青年はあえて気付いていないフリをして食事に戻って行った。

7月6日（日）
午後――都内テニス公園
インターハイに出るため入部届けを出した週末にいきなり他の大会にも出るという強行日程。にも関わらず、コートの周りには大勢の人が集まり、湊と対戦相手のどちらかを熱心に応援している。
この大会は湊が最初に優勝した大会と似たタイプで、関東に住んでいる高校生に出場資格が与えられており、高校だけでなくテニススクール所属でもエントリーできる。
インターハイでの関東代表は湊だが、インターハイに繋がる大会に

は出ていないテニススクール出身の選手も多く出ているので、真の関東最強が誰かここではっきりすると騒いでいる者もいた。
そして、男子の試合は当初の予想通り、湊が順当に勝ち進み現在決勝戦で争っている。
対戦相手は昨年関東ジュニア大会ベスト8まで進んだ他校の三年生。早瀬ほどではないが色黒のスポーツ刈り男子で、パワーに自信があるのか全てのストロークを馬鹿正直な直球勝負のフルスイングで打っていた。
湊にすればそんな物は打ち頃の球でしかないが、練習不足があるので実戦の中で感覚を取り戻していくと事前に話していた通り、ラケットを持ち替えて常にフォアハンドで厳しいコースに返している。
厳しいコースを攻められても足で取りに行き返す相手と、パワーだけでなく重さもある敵の打球を片手打ちで返しコースも狙っていく湊。素人から見ても中々の勝負であることは間違いなく、インターハイとは関係のない大会と言えど、流石は関東中から集まった頂点を決める試合だと観客を楽しませていた。
「よくあんだけコース乱さず返せるよねー。見てると有里君のコントロールがずば抜けてるってのは素人の私でも分かるわ」
「あれだけ精密機械のようなショットを打っていると、審判も彼のコントロールはかなり正確だという印象を持つの。そのため、かなり際どい打球を打ってそれが僅かに外れていても、ライン上で入っているとジャッジされたりもするのよ」
女子の試合も既に終わっており、ラビリスと共に合流した高千穂がテニスを知らないゆかりに解説してやる。
湊の真骨頂ともいえるコントロールの良さは、自分の望んでいる試合展開を作れるという事の他に、審判の判定を味方に付ける効果もあった。
プロや大きい大会のようなチャレンジ制度が存在しない以上、審判の判定が覆る事はなく、それ故、判定を味方に付けられる湊のプレイスタイルは安定性も含め非常に強力だった。
「でも、相手の選手も頑張って返してるよね。決勝戦で一番疲れてる

はずなのにすごいなぁ」
「相手は三年生でこの大会は最後ですから、そういった後のなさもあって有里君より必死なんでしょうね」
相手の選手はテニススクールに通いプロを目指す三年生、対して湊は一年生でまだこれからがある。
試合に出る以上、湊も手を抜くつもりはないが、ジュニア最後の年ということで必死さという点に置いては相手に軍配が上がるだろう。
勿論、それくらいで勝負を譲り負けてやる湊ではないため、風花と美紀が話していると、上がったロブをチャンスボールだとばかりに相手がスマッシュで打てば、直後、湊は前に出てそれを球が地面につく前に真正面から相手コートに打ち返した。
ドゴンッ、と明らかにテニスボールが出していい音ではない轟音が響き、体重を乗せた渾身のスマッシュを打った直後で体勢が整ってなかった相手も唖然としている。
「うっわぁ……湊君もえげつない球打ちはるわ。渾身のスマッシュをドライブボレーされたら攻めようがないやん」
あまりに容赦のない打球にラビリスも苦笑し、唖然としている相手選手に同情的な視線を送る。
彼女が口にしたドライブボレーとは、来たボールを作ったラケットの面で押し返す通常のボレーと異なり、ストロークのようにスイングして相手の打球をバウンド前に叩き返すボレーの事だ。
相手の打球の威力をほぼそのまま返すボレーに対し、ドライブボレーは打ち返すのと同じなので自分のパワーを威力として上乗せできる分だけ強くなる。
ただし、ボールが地面につくまでの僅かな間にボールに対応してスイングまでする必要があるため、空振りや打球が飛び過ぎてアウトになり易いというリスクのあるショットでもある。
そんな通常より難度の高いショットを相手の決め球に対して繰り出すあたり、湊もこれ以上試合を長引かせるつもりはないのだろう。
相手の動揺が抜け切る前にサービスラインに立ち、すぐに次のゲームに行くぞとばかりにサーブの構えを見せていた。

「……二〇三キロ、サーブの速度上げたわね」
「ダー、とても速いデス。相手のイグロークも返せませんでした」
インターハイと関係ないとはいえこれも公式戦。大会の記録がしっかりと実績として残り、今後の他の大会のシード枠等にも影響する。だが、流石に全国規模でもなければ高校生の大会で速度計が配備されているところは少ない。
それを補うため、プリンス・ミナトがしっかりとスピードガンで計測してくれており、計測係と表示係で抜群のコンビネーションを見せる彼女たちの発表を見れば他の者でもサーブの速度は分かる。
そして、それを見て速度を確認したチドリが今日の試合最速だと言えば、目をぱちくりとさせていたターニャが素直に驚いて見せた。
これまでの湊のサーブは一九〇キロほどで、スピンなど変化球で来るときはそれよりも遅かった。それをみた相手は青年のマックスが一九〇キロだと思っていたはずなので、ここでさらにギアを上げてくるのは予想外に違いない。
案の定、相手は完全に振り遅れてボールをネットに引っかけてしまい、直前にスマッシュを無効化されて負った動揺にさらにダメージが加算されているようだ。
スポーツでの精神の乱れはプレーにも大きく影響してくるため、湊がリードしている状況でこれほどのダメージを負った相手は立ち直れまい。
そう判断した湊は続けて二〇八キロのサーブを打ち込み、相手のラケットを吹き飛ばして完全に心を折りに行った。
純粋なプレーだけでも勝てるというのに、相手のメンタルも同時に攻める辺りが非常に狡猾でいやらしい。彼をよく知らない者は湊の圧倒的な実力に湧いているが、反対に彼をよく知る者たちはえげつないなと複雑な表情で彼のインターハイ前哨戦ともいえる大会優勝を見守っていたのだった。

第百七十八話　テスト前日の過ごし方

７月１３日（日）
午前――中央区・マンション〝テラ・エメリタ〟
夏の日差しが眩しい休日の朝、湊の住んでいるマンションの前にある集団が集まっていた。
現部活メンバー＋湊が会長を務めていたときの中等部生徒会役員＋順平。ターニャが増えたことを除けばいつぞやの試験勉強のときと同じ面子である。
彼らが集まった理由はただ一つ。明日から始まる一学期期末テストに向けて、湊の部屋で試験勉強をするためだ。
「宇津木ちゃんとチビスケも集まるってめっちゃ久しぶりな感じするよな。ま、中等部と高等部で離れてるからしゃーないけど」
「確かに久しぶりですが、去年から五センチも背が伸びたのでいい加減チビって呼ぶのはやめてくれませんかね。高校生ならそれくらい分かるでしょうに」
身長は伸びて来ているというのに、渡邊が以前と同じ低身長という本人にとっては不名誉なあだ名で呼んできたため、木戸はとても嫌そうな顔をして呆れたように溜め息を吐く。
中学三年生になった木戸たちも明日から期末テストだ。そのため最初から今日は勉強するつもりだったが、去年の三学期期末テストのときのように、今回も湊の部屋で勉強しないかと渡邊が声をかけたことで彼らも集まった。
順平が勝手に命名した『有里湊の真剣ゼミ』は、たった一日の勉強で受講生全員の成績を飛躍的にアップさせる。
前回はテストで満点しか取らない湊の勉強法が気になって一緒に勉強した木戸も、湊の教え方の方が学校の教師よりも分かり易かった事で、今回は三年生の大切な時期だからと湊に勉強を見て貰うつもりで来ていた。
「たった五センチ……会長の肩にも届かない背丈で笑わせる」
「なっ、五月蝿いんだよお前は！　背が高けりゃ偉いのか！」

そして、いじめから自分を救ってくれた湊を神として心酔している宇津木は、校舎が別々になって接点が減った事を寂しく思っていた事で、今回の誘いは渡りに船だとばかりに喜んで参加していた。
しかし、以前から仲があまりよくなかった二人は、湊たちが卒業し中等部の最高学年になってからも不仲なままで、他所様の暮らすマンションの前だというのに言い合いをする二人を見て、生徒会役員時代の二人を知っている元役員メンバーは懐かしい気持ちになった。
「木戸君、宇津木さん、まだ九時前なんだからあまり大きな声を出すと近所迷惑よ」
「うんうん、困るのはミッチーだから静かにしないとねー」
彼らが騒いで近所の住人が迷惑に思えば、そのクレームは彼らを招いた湊に向かう事になる。
湊は勉強しに来た者たちに場所を提供し、勉強を教えるだけでなく食事も与えてくれるので、そんな恩人に迷惑をかける事は出来ないと注意された二人はすぐに口をつぐんだ。
相性の関係で口喧嘩の多い二人だが、素の性格は真面目で素直なので、自分たちが悪いと分かればすぐに言う事を聞いてくれる。
その点に関して言えば扱いも楽だと高千穂と西園寺が考えていれば、今回が初参加でさらに学年も一人だけ高校二年生のターニャが、同じ部活メンバーであるゆかりたちに不思議そうに何やら尋ねていた。
「ンー、いつもお休みの日でも朝から勉強するのデスか？」
「いやいや、流石にそんな真面目じゃないですよ。明日からテストなんで、しっかり勉強してテストに臨もうって今日は集まっただけで」
「有里君の教え方が上手いので、私たちはそれに甘えさせて貰っているんです」
真面目で勤勉と評価される日本人だが、いくらなんでも全員が全員休日の朝から勉強会を開くほど真面目ではない。
今回の集まりもテスト前の特別なことだと説明すれば、ターニャも納得したようで笑顔で頷く。
そんな風に全員が集合して雑談を交えながら、それぞれの顔合わせ

とざっくりとした自己紹介を済ませば、いつまでもここで話しているもあれだからとマンションに入って行く。
現在の時刻は午前九時ごろ。前回よりも早くに集まったのは、高校になって授業の内容が難しくなったので、その分勉強時間が多く欲しいと渡邊や順平が望んだからである。
もっとも、渡邊は今も上位十人に入る成績を維持しているため、どちらかと言えば中間テストで酷い成績だった順平の強い希望であるが、他の者も九時に集まって勉強するくらいは問題なかった。
そのような経緯があって開催されることになった勉強会だが、全員が大きなエレベーターに乗って最上階まで昇り、最奥にある湊とラビリスの暮らしている部屋の前まで行くと、先頭を歩いていたチドリが代表してインターフォンを鳴らした。
「……出てこないわね」
ボタンを押してインターフォンを鳴らすも返事がない。音は鳴っているので壊れているという事はないが、ならば何故返事がないのかという疑問が浮かぶ。
今はテスト前なので部活もなく、仮にＥＰ社の仕事があったとしても定時出勤する必要のない二人が九時前に家を出ているとは思えない。
もしかすると、何か他のことをしていて気付かなかっただけかもしれないので、もう一回鳴らしてみると他の者に伝えてからチドリは再びボタンを押してみた。
すると、
《ふぁーい。ん？　ああ、チドリちゃんたちやん。朝早くからどないしたん？》
「どうしたって、湊の家でテスト勉強しに来たのよ」
《あー、そうなん？　そんな話は聞いてへんけど、まぁ、とりあえずあがって待っといてや》
再び鳴らしてみると今度は反応があり、ラビリスが出てくれた。しかし、なにやら眠そうな声をしており、もしかしたら起きたばかりなのかもしれない。

さらにいえば、湊の家で勉強会をするというのに、同居している少女がそんな話を聞いていないと言った事で、今回の勉強会を企画した男に一斉に視線が集まる。
前回の勉強会も半ば無理矢理に湊に認めさせていたため、今回もそんな風に勝手に決めて押し掛けたのではないだろうなと見ていれば、企画者である渡邊が気まずそうに視線を泳がせながら真相を吐いた。
「い、いやぁ、言ったら絶対許可くれないだろうと思ってさ。でも、実際に来ちゃったら会長の事だから入れてくれるかなぁって」
『なにやってるのよ……』
呆れて物も言えない。同時に数名の女子からツッコミが入る。
湊は嫌そうにしながらも頼めば結構言う事を聞いてくれるのだ。今回のような彼の休日を潰すイベントでも、最終的には許可を出して世話も焼いてくれていたに違いない。
だというのに、こんな彼の優しさに付け込む形で押しかければ、湊の不快指数は飛躍的に高まり、ふざけた計画を立てた者への信用はかぎりなくゼロに近付く。
へそを曲げられれば一発でアウトだというのに、どうして余計なことをしてしまったのか理解出来ない。
女性陣が馬鹿な事をした男に冷たい視線を向けていれば、扉の方からガチャンと鍵を開ける音が鳴り、そのままゆっくりと扉が開いた。
「起きたばっかで着替えてへんくてゴメンな。とりあえず、皆あがってリビングで待っといてや」
「おっと、髪降ろしてるパジャマ姿のラビリスちゃんとは何ともレアな」
「順平、あんたやらしい目で見てると有里君に眼球潰されるわよ」
男として女性の普段と違う姿に視線がいくのは分かる。だが、それがとある青年の庇護下にある少女に向けられた場合は話が別だ。
言い訳も弁明も必要ない。邪まな思いを持って見た時点で罪だと、青年は無慈悲に罪人を罰するに違いない。
ただ、今ならまだ間に合うかもしれないぞとゆかりが警告すれば、順平も同じように思ったのか急いでラビリスから視線を外していた。

そして、それから全員が家の中に入るとラビリスは他の者にリビングに行くように案内し、自分は寝室に入ってベッドで寝ている者を起こしにいく。
「湊君、かすみちゃん、なんか皆がテスト勉強しに来はったで」
部屋の前を通る際に中の様子が見えた一同は少し驚く。
湊の家のベッドがキングサイズで、湊とラビリスはそこで一緒に寝ていることは聞いていたが、いま見れば三つ置かれた枕の真ん中の位置で湊が眠り、その左側には着ぐるみパジャマを着て湊に抱きついて寝ている羽入の姿があった。
順平や渡邊など思春期男子たちは二人暮らしで三つの枕の意味を理解し、美少女二人に挟まれて寝るとか羨まし過ぎると拳を震わせる。
対して女性陣は、羽入のあまりの無防備さに呆れつつ、湊本人も子どもに懐かれているとしか思っていないのだろうなと嘆息する。
「……なんで、またあれがいるのよ」
「試験前だから泊まり込みで勉強してたんじゃないかしら。有里君はともかくとして、羽入さんの方はもう少し警戒心を持つべきだと思うけれど」
湊の染色体のことを知っている部活メンバーだけでなく、高千穂など他の女子からも湊はセーフゾーンとして認識されている。
紳士的、いやらしさがない、ガツガツしていない、余裕がある等々。評価は人それぞれだが、彼が下心を持って女子と接する事はないという一種の共通認識があるのだ。
そのため湊が後輩女子に抱きつかれて寝ていようと、羽入の方が安心感を求めて抱きついているだけで、抱きつかれている本人は暑くて寝苦しい程度にしか考えていないことは分かっている。
ただ、それでも家に来たらいるはずのない他所の家の娘が一緒に寝ていれば、なんで羽入がいて一緒に寝ているのだと突っ込まずにはいられない。
釈然としないものもありつつ、廊下を進みメンバーがリビングで待っていると、支度を終えたラビリスがやってきてお茶の用意をし、

少しすると髪を軽く束ねた着物姿の湊がフード付きパーカーに着替えた羽入をお姫様抱っこして現れた。
やってきた湊はそのままソファーに座り、羽入を膝枕したまま寝かせて彼女の歯を磨いてやりながら待っていた者たちに話しかける。
「……休日の朝から迷惑なやつらめ」
『ツッコミどころしかないんだけど』
迷惑そうな表情をしながらも丁寧に羽入の歯を磨いている湊に総ツッコミが入る。
歯を磨かれている方は起きているのかどうか微妙な様子で、湊が口を開けろと言ったり歯を閉じろと言えば言う事を聞いているため、とりあえずは話だけは聞こえているようだ。
両者のそんな様子を観察しつつ、何故湊が寝惚けたような羽入の歯を磨いてやっているのだとチドリは尋ねた。
「なんで中三の歯を磨いてやってるのよ」
「……スイッチが入るまで時間がかかるときがあってな。そういうときは食事の準備があるから、ラビリスが用意してる間に俺が羽入の支度をさせてたりする」
「着替えもしてるの？」
「着替えの用意はしてるな。脱いだり着たりは非常に遅いが自分でしてる。一応、これでも起きてはいるからな」
湊の説明した通り、羽入の目覚めには、普通にパチッと目覚めるパターンと今回のように半分寝ているパターンの二種類がある。
自分の家で寝ているときは時間差でアラームをセットした目覚ましを用意し、二度目のアラームで覚醒状態に持っていくらしいが、湊の家に泊まるときは目覚ましすら用意しておらず。起きるときはラビリスや湊に起こして貰っていた。
そして、彼女の目覚め方が二種類あると分かっている湊たちは、食事の用意と羽入の準備を進める係りで役割分担し、準備をさせながら食事の用意が終わるのを待つ手法を取っている。
幼稚園児以下の小さな子どもを持つ親のような連係プレーだが、残念ながら羽入は天然が入ってるだけの中学三年生だ。

基本的な考え方は幼いが頭の回転が悪いということはなく、身体にいたっては美鶴並みのスタイルをしている。
年齢と身体に関してはとっくに子どもと言い切れない相手に、ここまで手をかけて世話をするのは甘やかし過ぎとしか言えない。
話を聞いたゆかりがそれは羽入本人のためにならないと、優しいを超えて甘過ぎる湊を叱る。
「着替えや食事の用意をして、歯磨きとか身支度までしてあげるとか甘やかし過ぎでしょ。そういうのは自分でやらないと本人が苦労するんだよ？」
「子どもに甘いとは思ってたけどこれほどとはね。ラビリスも一緒にいて何してるのよ。揃ってダメ人間製造器になってるじゃない」
「んー、そう言われたら反論できひんけど、かすみちゃんが起きられへんのって基本休日やから大丈夫やと思うで」
お茶の準備を終えてキッチンから出てきたラビリスは苦笑し、全員の前にお茶を置きながら答える。
湊は平日でも起きない時があるが、羽入の場合は休日モードなのか起きれないのはほぼ休日限定となっていた。
そのため、ラビリスも休みの日は少しくらいゆっくりしてもいいだろうと思って許容しており、歯を磨き終えて羽入を洗面所まで再び運ぶ湊を見送りながら、他の者が心配するほどではない事を伝えた。
普段から甘やかしているならともかく、休日限定ならば少しはマシに思える。出されたお茶を飲んで待っていた者たちがそう思って待っていれば、目が覚めて自分で歩いている羽入が湊と共にリビングに戻ってくるなり宇津木を見つけて駆け寄った。
「あー、香奈ちゃんだー！　お休みだから遊びに来てくれたの？」
「いえ、あの、会長にテスト勉強を見て貰いに伺ったの」
「そうなんだぁ。ご飯食べたらお勉強の時間だから一緒にやろうね」
嬉しそうに自分と遊ぶために来てくれたのかと尋ねる羽入に、宇津木は申し訳なさそうにテスト勉強のために来た事を告げるも、羽入は気にした様子もなく食事の件を伝えてテーブルの方へ移動する。
勉強の前にはまず糖分補給をしなければならない。さらに空腹だ

と集中力が続かないため、湊たちは先に朝食をとってから勉強する事にしていた。
自分たちが朝早くから押し掛けたこともあり、やってきたメンバーは湊らが朝食を取る事に何の反対もない。
彼らが食事をしている間、チドリたちは出されたお茶を飲みつつどの教科を勉強するか話し合い。徐々に勉強へと移って行った。
――ラボ
湊たちがテスト勉強をしている頃、美鶴は湊から貰った宝玉の解析結果を聞きにラボを訪れていた。
宝玉はペルソナのスキルを使うように能力者が念じれば、かなり重度の切り傷や刺し傷も完治させるほど強力な回復スキルが発動できる。
流石に四肢や臓器の喪失を再生させる事までは出来ないが、湊クラスの回復スキルを持っていない美鶴としては、いざというときの備えとしてタルタロスで拾えるこれを人工的に作る事は出来ないかとラボに解析を依頼していたのだ。
ラボではペルソナやシャドウの研究がメインになっているものの、こういった影時間に関係する物体の解析も行っている。
それは様々な方面から影時間の謎を解き明かすためだが、やってきた小太りの男は宝玉を載せたトレーをテーブルに置くと、待っていた美鶴にファイルにとじた書類を見せながら話し始める。
「こちらが今回の解析結果です。触れた感じでは石英などありふれた鉱石に近い感触でしたが、電子顕微鏡を使って表面を見てみると正六角形の集まったセル構造になっていました。他の鉱石でも非常に細かく見れば見られますが、拡大の倍率を考えるとあり得ない事です」
掌に乗るくらいのサイズをした宝玉は、触ると表面はツルツルしており、角度を変えると表面だけが虹色に光って見えるが全体としてはスポーツ飲料のような半透明な白色をしていた。
いくら触ってツルツルしていたとしても、普通の鉱石ならば拡大して見れば木の表面のようにざらついていそうな見た目だったり、デコボコと荒れた大地の様な状態になっていて、どうしてこれがツルツル

の手触りを生み出しているのかと不思議に思えたりする。
しかし、宝玉はそういった一般的な鉱石とは異なり、大した拡大倍率でもない状態で既に正六角形の結晶の集まりだと分かっていた。
「内部がどうなっているか様々な方法でスキャンを試みたのですが、そちらは光を屈折させてしまうのか読み取れませんでした。ダイヤなど宝石はカットの仕方で光の反射が変わってきます。それに似てこの宝玉は全ての光を表面で屈折させてしまうのかもしれません」
一見すると子どもの玩具である合成樹脂製の宝石のようにも見える。そんな物が光を全て屈折させてしまう特殊なカットを施されているはずがないので、スキャン出来なかったのは物質自体の性質によるものだと推測された。
詳しく調べたいが研究員たちではどのようなアプローチを取ればいいか分からず、現状では調べること自体が難しいと聞いて、美鶴はほとんど何も分かっていないのだなと少し困った表情で返した。
「つまり、現実世界の物ではないという事だけが分かったという事ですね」
「ええ、そうなります。考古学や地質学に詳しい者がいれば他のアプローチも思い付くのかもしれませんが、現在のラボには適した人材がおりませんので、これ以上の解析は難しいかと」
単に解析と言ってもその方法によって分野は異なってくる。どういった素材で出来ているか、どのような構造をしているかなど、X線で単純に調べる程度ならば慣れた者なら出来るが、その手段が使えないとなると今後は専門家に任せるしかない。
ただ、影時間やシャドウについて研究している今のラボでは、他の分野に精通している者がおらず、実質これ以上は打つ手なしの状態である。
効果と入手場所は分かっているので使用自体は問題ないが、人工的に似た物を作って緊急用に配備できないかと考えていた美鶴としては、こうなるだろうと心のどこかで分かってはいたが残念な気持ちが強かった。
しかし、話を聞き終えて残念そうな顔をした美鶴が調べてくれた研

究員に礼を言いかけたとき、分からないなりに調べた結果のファイルを片付けていた相手が口を開いて来た。
「ああ、実はエルゴ研時代に在籍していた者にそういった方面の専門家がいるんです。以前回収された武器らしき遺物なども含め、その人物に解析を依頼すればもう少し詳しい事が分かるかもしれません」
「その方は現在も存命なのですか？」
「はい。いまはポロニアンモールで骨董品屋を営んでいると聞いています。事故前に研究から離れていますが、影時間やシャドウについても理解している彼女以上の適任者はいないかと」
ポロニアンモールの骨董品屋と聞いて美鶴の心臓が跳ねる。そこは湊とチドリがバイトをしている店だったはずだ。
元エルゴ研の職員がペルソナ使いの青年たちと共にいる。そう考えると相手は二人を通じて現在も影時間に関わっているのではないかと思われた。
専門家の力を借りられるのならありがたいが、その人物に協力を求める事で湊たちの日常を壊してしまう可能性がある。
影時間を終わらせる使命と被害者の平穏、どちらかを選ばなければならない美鶴としては、しばらく心中穏やかとはいられなかった。
昼前――マンション
前回同様、それぞれがいくつものテーブルに分かれて勉強に励む。窓際のテーブルに元生徒会メンバーと順平、部屋の真ん中に置かれたテーブルに湊とラビリスを除く部活メンバー、ダイニングのテーブルに湊とラビリスと羽入といった具合だ。
留学生であるターニャに勉強を教える際、湊とターニャがロシア語で会話している事に中学生組が驚いたりという一幕も見られたが、元々勤勉な性格もあってターニャも他の者と同じように基本的には自分で進めていた。
普段は飽きっぽい順平も湊に教わると理解出来るようで、考え方のコツを聞いてからは教科書や資料集を見ながら自分で考えるようにしている。
優れた教育者というのは、勉強嫌いな生徒に理解出来る事の楽しさ

を教えるのが上手い。分からないからつまらなくなり勉強もしなくなる訳で、そこを一人一人に合わせて指導できる湊は、メンバー全員が認める優秀な先生だった。
ただ、彼がそのように指導したのには理由がある。それは自分で考えさせて青年が教える時間を減らすためだ。
それでも、全員が湊の希望通りに動いてくれる訳ではない。湊と同じテーブルで一生懸命考えていた羽入は、教科書を見て不思議に思ったようで勉強とは関係ない部分について尋ねてきた。
「ねえねえ、湊君。分からない事があるんだけど聞いてもいーい？」
「……それが今回のテストに関係ないと分かっていても聞きたいなら好きにしろ」
読心能力が使える湊だが普段は力のスイッチを切っている。けれど、相手の感情のようなものは雰囲気で理解してしまうので、羽入のように幼い精神をしている者の思考は雰囲気で読めた。
まわりはそれを察しが良いとか勘が鋭いというが、湊に言わせれば声の調子や目の動きに口元の様子など相手が内容を話さなくても得られる情報は多い。
いまの羽入がテストの内容と関係ない部分で疑問を持って聞いて来ている事も、感情の雰囲気とそういった情報から読んだだけだが、相手は湊の発言を質問の許可と受け取ったらしく嬉しそうに質問をしてくる。
「あのね、ここにマスターベーションは赤ちゃんを作る準備って書いてるの。でもね、気持ち良く感じるとかとは書いてるんだけど、全然どうやってやるのか書いてなくてぇ」
羽入が見ていたのは保健体育の教科書。保健と体育の両方について載っているが、今回のテストで出てくるのは保健分野で性教育と同じような内容だった。
医師免許を持っていない闇医者として働いている湊は、保健で習う内容についても真面目に捉えるため、羽入が純粋な疑問として尋ねて来ていると理解して真面目に考える。
「私もいつか赤ちゃんが欲しいんだけど。やり方が分かんないから準

備できないの。湊君が知ってたら教えて欲しいなって」
だが、可愛らしく首を傾けて少女が性教育に被る内容を青年に尋ねれば、真面目に勉強していた者たちも手を止めずにはいられない。
話をあまり理解出来ないターニャやちゃんと真面目な質問だと思っているラビリスは別だが、風花や美紀に宇津木といったメンバーは気まずそうな表情になり、他の女子は無知ゆえに男子にそんな質問をしてしまう羽入に呆れ、男子たちは精一杯興味がないので勉強を続けていますというフリをする。
内容が内容だけに本来なら答える方も気まずそうにしたりするものだが、一般的な人間とは考え方が異なり、さらに精神的に幼い羽入に正しい知識を色々と教えている湊が教師役だったことで、彼はどう教えれば分かり易いかと煙管を手で遊ばせながら口を開いた。
「……まぁ、俺もした事はないんだがまず男女で方法は異なるな。子どもを作る上で男女の役割が違う事は分かるか？」
「男の子はお父さんで、女の子はお母さんだよ？」
「随分とまたざっくりとした認識だな。まぁいい。俺と隣にいるラビリスは身体の構造が違うだろ？　ラビリスには胸があって俺にはない。そういった男女の身体の違いを性差、もっと正しく言えば生物学的性差というんだ」
羽入の言う父親と母親というのは子に対する立場であり、子どもを作る上での役割を説明するにはもっと踏み込む必要がある。
そのため、湊はまず男女の大きな違いとして、隣に座るラビリスと自分を見比べた際の分かり易い部分を例に挙げてから説明してゆく。
「この性差というのが子作りや子育てで重要になってくるが、女性でも胸に関して言えば個人差があるので置いておく。それよりも大きな違いがあってそれが生殖器だ。命の素となる精子は男性しか作れないし、精子を受精させる卵子は女性しか作れず、それらはそれぞれの生殖器の中で作られる」
女性の母性の象徴における貧富の差は戦争に発展しかねないので深くは言及せず、湊はあくまで男女の違いについて語る。
男女の生殖器は形状から役割までが全く異なり、見た目の違いは一

緒に入浴したときや教科書などで知っているだろうと暗に告げて確認を取る。
湊が羽入と一緒に入浴する事は少ないが、相手がしつこくねだって入った事や、同じくしつこくねだってきたのでラビリスも入れて三人で入る事もたまにあった。
一応、彼女が泊まりに来たときにはラビリスが一緒に入浴しているものの、湊とも一緒に入ったときに生殖器を見ていたなら違いもより分かり易くなるはず。
そう思って確認を取れば頷いているので、湊は羽入にも分かる様に言葉を簡単にしながら説明を続けた。
「さっき言った役割というのは、つまり父親は赤ん坊の素を作る側で、母親はその赤ん坊の素を受け取ってお腹の中で育てるってことだな。ここまでは大丈夫か？」
「うん」
たまにずれた思考を見せるが、羽入は別に理解力がない訳ではない。
ちゃんと丁寧に教えてやれば一度で理解するほど覚えが良く、今回の説明もしっかりと理解して付いて来ている事で、湊もここまで分かれば後は簡単だと話を最初まで戻す。
「男女の役割がそれぞれ分かったら、それに関係してくる話をしよう。話を一番初めに戻すが赤ん坊の作る準備は本来必要ないんだ。羽入もおよそ一ヶ月毎に月経が来ているだろ？」
「月経って、えーっと生理のことだよね？　血がドバーって」
「お前のいう勢いで出血したら一日目で死ぬぞ。まぁ、それであってるが、女性側の準備は月経がくれば終わりなんだ。月経が来たという事は卵子を作れるようになったって事だからな」
月経で何が起こるかというのは教科書にも書いてあるが、読んでもあまり理解出来ないのなら、それが理解出来るように何のために必要な事なのかを教えてやればいい。
男が月経について女性に説明するのも変だが、彼の場合は正しく少女に教えてやる事が出来るため、耳だけ傾けている他の女子らもス

トップをかけたりはしない。
　そうして、知識がなく赤ん坊を作る準備が出来ないと不安そうにしていた少女は、自分が知らぬうちに準備が出来ていると知って安堵の表情をしながら、よりはっきり聞いておこうと念のため確認してきた。
「じゃあ、私も赤ちゃん産めるの？」
「身体の状態でいえば、な。ただ、母親になるってのは身体が出来てるだけでは不十分だ。お前はまだ結婚出来る年齢ではないし、子育てに関する知識もない。母親として生きていく覚悟は胎児が成長し出産が近付けば出来てくるらしいが、子どもが子どもを産むというのを周りの人間はよく思わない。皆に祝福されたいならちゃんと大人になってからにすべきだ」
　母親としての自覚は胎児の成長や、出産の大変さを通じて芽生えていくと言われている。
　英恵のように実子でない子どもを愛してくれる者は少数、桜のように出産経験もなく母として子に愛情を注いでくれる者などさらに希少だ。
　その点で言えば、妊娠すれば自然と自覚や愛情を覚えるようになっていくかもしれないが、未熟な少女が妊娠しただけで周囲は好き勝手に言ってくる。
　新しい命が宿るというめでたい出来事を、そんな嫌な思い出と共に記憶に残したくはないだろう。
　誰からもケチを付けられず、皆から祝福される方が良いに決まっているのだから、ちゃんと大人になって結婚するまでそういう事はするなと湊は少女を諭した。
　既に数名と肉体関係を持っている青年の言葉には欠片の説得力もないが、そういった裏事情を知らなければ大変素晴らしい話なので、少女も分かったとしっかり頷いた。
「湊君は何でも知ってるんだね。あ、でも、マスターベーションってどうやるの？　気持ち良いって本当？」
　ただし、それはそれ、最初にした質問の中で一部まだ説明されてい

なかった事で、気になっていた羽入は再び湊に質問をぶつけた。
途端に場には気まずい空気が戻ってくるが、そういったものを一切気にしていない湊は聞かれた事に答えてしまう。
「人によってやり方も快感の度合いも異なるらしいぞ。それを前提としてよく聞く方法をいくつか挙げるとすれば」
『おっほん!!』
だが、湊が具体的な内容を口にする前にゆかりたち女性陣が同時に咳払いをした。
最初から気まずい思いをしていなかったターニャとラビリスは別だが、その他の女性陣が一斉に咳払いをしたことで湊が話を止めると、勉強の手を止めたゆかりが作った笑みを浮かべて湊に話しかける。
「あー、有里君？　そういうのは子どもには早いんじゃないかな？」
「いや、男子に比べ女子の方が精神の成長が早く。自慰行為の初体験年齢も平均すると」
『おっほん!!』
女子の方が男子よりも早く二次性徴が来る。それに伴って自慰行為の初体験年齢も色々とあるのだが、彼の持っている医学的な知識は置いといて、精神的に幼い子どもである羽入の前ですべき内容ではないと女性陣が再び待ったをかけた。
実際の性行為の様子をビデオなどで見せるのならともかく、自慰行為のやり方を聞いたところで別にどうにかなるとは思わない。
故に、湊は聞かれた事を羽入に教えようと思ったのだが、今度はゆかりだけでなく風花や美紀も一緒になって言いようのないプレッシャーを放ちながら湊に釘を刺して来た。
『有里君？』
「……まぁ、デリケートな話は同性の方が的確な判断を下せるか。羽入、それについてはもう少し大人になってからの方がいいらしい。グロテスクなシューティングゲームを子どもにさせてはいけないのと似たような感じでな」
「そうなの？　じゃあ、大丈夫になったら教えてね」

「機会があれば、な」
聞きたがりの子どもと違って、まだ話す時期ではないと言えば羽入は引いてくれる。
その後の部分に一抹の不安を感じるも、とりあえずの問題は回避されたことで女性陣も安堵の息を吐いた。
同じ空間にいた順平と渡邊はどこか惜しそうな顔をしていたが、同じテーブルで勉強していた宇津木と高千穂から冷たい視線を向けられすぐに真面目な顔でプリントに向き直る。
男子らのそんな様子に女性陣は呆れているようだが、全員の集中が切れているのなら休憩を入れるべきかと、時計で時刻を確認した湊は昼食の準備をするべく立ちあがった。
「さて、いい時間だし昼にでもするか」
「わぁーい。今日はお寿司がいいなぁ」
「また面倒なものを……」
お昼ご飯と聞いて真っ先に喜ぶ羽入のリクエストに湊は表情を歪ませる。
寿司は立派な和食なので得意ではあるが、自分が作るときには料理で手を抜かない青年にとって、寿司はおまかせ含めて注文が入ってから握るものだ。
となれば、前回のパーティーメニューと異なり、今回は作り置きが出来ず全員が食べ終わるまで提供に回らなければならない。
他の者は適当にいっぱい握って好きに取る形式でいいというだろうが、妥協を許さぬ青年がそんな事をする訳がないので、本日の勉強会に参加した者は本格的な江戸前寿司を味わえるだろう。
ラビリスが手伝えれば少しは負担も減るのだが、残念ながら寿司のときにラビリスが出来る事などお茶を淹れることくらいだ。
よって、十人以上の食べ盛りの学生を一人で相手することになるものの、大繁盛の中華料理屋で鍛えられた青年ならば何とかするはず。
仕込みを終えてからマフラーに仕舞っておいたネタを用意し、それらを寿司用ネタケースに入れて青年が準備を整えれば、なんでそんなに本格的なんだとほとんどの者が心の中でツッコミを入れていた。

第百七十九話　面倒な来客

８月５日（火）
午後――埼玉県・テニス場
インターハイ、それは部活動に励む全国の高校生たちが憧れる夢の舞台。
今年のテニスは埼玉県で開催され、そう遠くないからと英恵も団体戦が終わり個人戦の始まる五日目からやってきていた。
「こういう場所の空気を感じるのは久しぶりだわ。菖蒲さんの応援で来ていただけだけど、皆楽しそうでやっぱりいいわね」
日傘を差しながら歩く英恵は、斜め後方を歩くお傍御用の和邇（わに）に話しかけながら楽しそうに会場を眺める。
楽しいだけではなく、中には泣いて仲間に背中を摩られている者もいるが、全員が一生懸命でその姿が輝いて見えた。
やはり、こういった人々の頑張る姿は美しい。そう感じた英恵は来てよかったと思いながら目的の青年の姿を探す。
彼の試合が行われるコートは調べ済みで、既に屋敷の使用人たちがビデオカメラをセッティングしていつでも撮影できるようにしているはずだが、試合の前に彷徨いている青年に会えれば是非話したい。
もしいるとすれば、きっとマスコミやファンなど人に囲まれていると思われるが、大会の運営や青年のファンクラブの者たちが周囲を警戒して、不用意に参加選手に近付かせないようにしているかもしれない。
そのときは手を振って彼を呼べば来てくれると思われるため、英恵はどこにいるのかなと半分宝探しの様な気分で会場を進んでいた。
「あ、おばさまー！」
すると、突然遠くから自分を呼ぶ声が聞こえて来て英恵は声の方を向く。
一体誰だろうと声のした方を見てみれば、髪を結った茶髪の少女がスプリンター並みの速度で走ってきていた。
走ってきた少女は息一つ乱さずに英恵の前に立つなり、挨拶をしな

がら喋り出す。
「おばさま、こんにちは。ここインターハイの会場ですけど八雲君を見に来たんですか？」
「こんにちは、七歌さん。八雲君というか有里君の試合を観に来たのよ。七歌さんは部活の応援かしら？」
英恵の元にやってきた少女の名は九頭龍七歌。湊の父が彼女の父親の弟で彼女自身湊とは従姉弟であり、特級五爪の力に目覚めた湊が不在の間は九頭龍家の当主でもある。
そんな彼女も部活でテニスをしているのだが、インターハイに出るとは聞いていなかったので、自分と同じように湊を見に来たのでもなければ試合の応援だろうと英恵は踏んだ。
彼女の予想は見事に当たっていたようで、快活に笑ってサムズアップして見せながら問われた七歌は自分がここにいる理由を告げてくる。
「はい。三年生の先輩が一人出場してるんで応援に来たんですよ。八雲君も出場するってニュースでやってたんで丁度良かったです」
七歌は湊が八雲だと再会した時点で気付いていたため、ニュースや雑誌などで有里湊の記事があれば八雲の近況が分かるとして目を通していた。
最初はバスケットボールで活躍してすごいなと思っていたのに、今年になると彼の母と同じテニスで全国の舞台に立っているので、彼の身体能力とセンスには驚かされてばかりだ。
しかし、彼の血筋を考えるとある意味当然だとも思ってしまう。彼はオリンピックのどの競技でもメダルを獲得出来るだけの恵まれた肉体を持っているのだから。
ただし、理論上はそれだけのスペックを備えていようと、湊だって練習せずに何でも出来る訳ではない。
他の者よりも習得が速い等違いはあれど、最終的には出来るように練習と努力が必要だった。
遺伝子が違う、持って生まれた才能、そういって湊の活躍の理由を一言で片付けるのは簡単だ。けれど、それは湊の努力を一方的に否定

する行為であり、己の努力が足りていないことを誤魔化しているに過ぎない。
七歌自身はそのような愚かな考え方はしておらず、そもそも今年の大会には最初から出場していないので、先輩の応援がてら湊の試合が見られるので今回の応援のための遠征にはノリノリで参加していた。
九頭龍の直系の中で唯一鬼を恐れず、反対に彼らの事を敬っている少女の眩しい笑顔に、英恵も自分と同じように湊の活躍を心から祈っていることを感じて嬉しく思う。
並んで歩き会場を進みながら、英恵は先に会場にいた彼女なら湊を見ているのではないかと試しに尋ねてみた。
「ねえ、七歌さん。有里君がどこにいたか見ていないかしら？」
「八雲君ならさっき女の子らと一緒にいましたよ。赤い髪の子とか外人さんとか綺麗な子ばっかりでした。皆と付き合ってるんですかね？」
いくらなんでもそんな馬鹿な話はない。世間的にはアウトだったり、恋人に自分が同居人とどんな風に暮らしているかは話していないが、湊だって一度に交際する相手は一人だけという常識くらいはある。
周りからすれば綺麗どころに囲まれているので、もしかしてと邪推してしまう気持ちは分かるが、英恵は自分の息子が複数の女性とそのような爛れた関係を築いている事は絶対にないとどこか迫力のある微笑で断言した。
「七歌さん、八雲君はそんな事しない。いいわね？」
「い、イエス、マム」
普段静かな人の方が怒ると怖い。英恵のように深窓の令嬢といった雰囲気の女性なら尚更で、七歌もこれ以上この話題を続けるのは危険だと察知しすぐに頷いて返した。
少女の素直な反応に満足した英恵もすぐいつも通りの雰囲気に戻り、湊がチドリたちと一緒なら目立つので見つけるのも簡単だろうと使用人のネットワークを頼る事に決める。
彼女自身も使用人たちの携帯番号を知っているが、会場内であれば

桐条グループの警備部が使っている物と同じ特別製の無線機が使える。
英恵がそんな物を勝手に持ち出して使用人に持たせている事など、娘の美鶴どころか夫でグループ総帥の桐条すら知らず、もし二人がその事を知れば英恵の八雲に掛ける情熱に頭を抱える事だろう。
だが、桐条も桐条で娘の生まれた年に作られた超高級ワインを専用の鍵付きワインセラーに集めているので、子どもの事になると馬鹿になるのは夫婦揃ってであった。
「八尋さん、皆さんに連絡を取ってもらえるかしら」
「坊ちゃまがどこに居られるか、ですね。かしこまりました」
使用人たちに連絡を取れと言われただけで、傍に控えていた和邇は意図を汲んで無線で他の者たちと情報のやり取りを始める。
今回は以前の大会のとき以上に使用人が来ているため、湊たちのような目立つ容姿の者が固まっている集団はすぐに見つかるだろう。
一を伝えるだけで十の事を理解し、迅速な対応を取ってくれる優れた従者には英恵もご満悦で、彼女からの報告を期待に胸を膨らませながら待っていれば、無線で話す和邇を見た七歌が興味を持ったようで、英恵に彼女についてたずねた。
「おばさまの専属ＳＰさんですか？　綺麗な人ですね」
「彼女はＳＰではなくお傍御用を任せている使用人よ。勿論、そういった心得もあるけど」
お傍御用というのは文字通り主の傍で様々な用件を解決する使用人の事で、屋敷の中全体で働く普通の使用人よりも、主の身の回りの世話をメインに担当する者の事をそう呼ぶ。
契約上は普通の使用人でも専属従者のような立場であるため、お傍御用に任命される事を最高の名誉だと誇る者もいる。
ただし、主の様々な命令を聞くために傍に控えている事もあり、もしものときは自分の身を盾にしてでも守らなければならない。そういった関係で和邇が格闘技等を修得していると聞けば、七歌も流石桐条家の使用人だと感心した様子で小さく拍手をして見せた。
無線で連絡を取っている本人は何故自分が拍手されているか分か

らないだろうが、無線機を腰のケースに仕舞って戻ってきた事で、ついに居場所が分かったのかと英恵は報告を聞く。
「あの子は見つかった？」
「はい。第三コートの傍にある壁打ちの辺りにおられるそうです」
「そう。なら、向かいましょうか」
居場所が分かったのなら移動してしまう前に合流しようと歩き出す。和邇は英恵の斜め後方に控え、七歌はついでだからと湊に会うために英恵と並んでゆく。
このとき、湊の下を目指す英恵は七歌も一緒で大丈夫だろうかと僅かに不安を覚えていた。
美鶴に自分が八雲である事がばれたり、美鶴が気付いたのならもういいだろうと英恵が会いに来たりと色々あるが、湊はまだ七歌を自分の従姉だと認めて他の者に話してはいない。
そも、七歌は湊が自分は八雲ではなく有里湊だと紹介しても、最後まで八雲と呼んで去って行った女である。
彼の現在の名前が全国規模で有名になっていても、会えば昔の調子で〝八雲君〟とまた呼んでしまうのではないか。
その事を考えると不安しか湧かず、湊の素性がマスコミや周囲の者にばれる危険性を思えば、このまま少女を連れていくのはマズイかもしれない。
青年のいる場所に到着するまでに、少女だけ別の場所に行ってもらう良い方法はないか。頭をフル回転させ考えながら英恵が歩いていると、英恵たちの耳に近くにいた男子のとある会話が届いた。
「なぁ、マジであの皇子が来てたぜ。バスケだけやってりゃいいのに、運動神経を自慢したいのか知らないけど、真面目にテニス一本でやってる方にしたらたまったもんじゃないよな」
「それな。ファンの応援で相手ビビらせて勝ってるって話も聞くし。試合で当たったらガチでいくわ」
迷惑そうな表情の少年と悪戯っぽい笑みを浮かべた少年が、ベンチのところで靴紐を結び直しながら楽しそうに話している。
聞こえてきた会話の内容から察するに二人も出場選手で、まだ試合

ではないのか試合があっても勝利して今後の試合を残しているのだろう。
テニス一本でやってきてここにいる者にすれば、バスケットボールで有名になった青年が高校からテニスに転向して出場し、確かに色々と複雑なものはあるはずだ。
しかし、部活動に励む少年少女が目指す夢の舞台は、ただ運動神経がいいだけで出れるほど甘くはない。
元々テニスをしていた青年が再びテニスをして悪いということもなし、彼自身の努力を最初から否定して卑怯な手段で勝ってきたと口にした者に怒りの双眸を向けた七歌は、英恵が引き止めるより先に少年らの方へと向かっていた。
「ねえ、有里君がファンを使って勝ってきたって誰に聞いたの？」
「え？　いや、誰って別に。ただ同じ学校のやつが話してただけだけど……」
「つか、急になに？　ファンか何かで皇子のこと悪く言ったから怒ってんの？　そういう事ならゴメンね。こっちとしてはバスケやってたのが急に大会でてきて意味不明だからさ。ちょっと愚痴りたくなっただけなんだよ」
急に七歌に話しかけられた少年たちは、驚きつつも愚痴が聞こえて気を悪くしたなら済まなかったと謝罪してくる。
心から湊の事を悪く思っていた訳ではなく、中高生によくあるちょっとした不満について話していたようで、そういう事なら強く怒る必要もないかと七歌も肩の力を抜く。
だが、同じスポーツをしている者として、これだけは言っておかねばならないと真剣な表情で彼女は口を開いた。
「別に彼のファンじゃないけどさ。貴方たちだって選手として出場してるなら、全国って舞台にくるだけでも大変なのは知ってるでしょ。関東ブロックなんて全国一の激戦区だし、ただ運動神経がいいだけじゃ勝てないのも分かるよね？　愚痴りたくなる気持ちは分かるけど、応援に来てる人もいるし。思った事そのまま口に出さない方がいいよ」

少年たちのユニフォームに書かれた学校名をみれば、二人とも九州ブロックからの出場者だった。
全国を目指す道のりに楽なものなどないが、湊が勝ち上がってきた関東大会は全国でもトップクラスの激戦区なのだ。
余程他校の選手に興味がないでもなければ、その事を知らないはずがないので、皇子と持て囃される青年が運動神経の良さだけで勝ち上がってきた訳ではない事は理解出来るだろう。
気まずそうな顔をした二人は七歌の忠告に素直に頷き、二人が分かってくれたならこれ以上は言うまいと、七歌も急に話しかけた事を謝罪してから英恵たちの元へと戻る。
七歌が上級生らしき他校の男子に突っかかりに行ったのを恐々見ていた英恵は、七歌が無事に戻ってきた事に胸を撫で下ろし、それから直情的に行動する彼女のことを諌めた。
「七歌さん、あまり驚かせないで頂戴。出場する選手と問題を起こしたら貴女も困るでしょう？」
「八雲君のことを悪く言われてムカっときちゃって。ゴメンなさい」
安堵の息を吐いてから七歌を注意した英恵に、七歌は青年のことを何も知らない相手が侮辱していたのが許せなかったと話し謝罪する。
英恵としても彼らの言葉に思うものがなかった訳ではないが、だからと言って感情ですぐ行動に移るほど浅慮ではいられない。
相手だってこの後に試合が控えているのだろうし、そういった者と問題を起こすと負けた理由に使われたりなど面倒が増えるのだ。
今回は何もなかったから良かったものの、英恵はしっかりと反省しなさいと再度注意してから、傍に控えていた和邇に向き直って次に七歌が行動を起こそうとしたときのために一つお願いしておく事にした。
「八尋さん、私はあまり速く動けないから、次からは貴女が止めて頂戴。今も貴女なら止められたでしょう？」
「ええ、確かに。分かりました。今後は七歌様の行動に注意しておきます」
その場の空気に溶け込みながらも、一度口を開けば明らかに一般人

とは異なる雰囲気を発する彼女ならば、身体能力が高く武術と護身術を習っている少女を無力化する事も可能なはず。
仕える主の命に頷いて返した彼女は、切れ長の目で七歌を見つめて視線だけで「勝手な事は控えてください」と早速釘を刺した。
武術である程度の実力を持っていれば、相手の実力も分かる様になるというが、釘を刺された七歌は和邇の実力が測れなかった事で完全に格上だと認識する。
こういった手合いは命令に忠実であるが故に容赦がないため、自分の身の安全を守るため七歌は迂闊な行動には出ないようにしようと心に決めた。
そうして、その場を離れて英恵たちが再び歩いてしばらくすると、屋根の付いたベンチのところに赤毛の少女や外国人の少女など目立つ者の中に一人の青年を発見し、ようやく見つけたと英恵の歩も僅かに速くなる。
ベンチまであと二十メートル、大勢の野次馬が湊を見に集まっている事に気付くが、試合を控える選手に接触する事はご遠慮くださいと大会運営や配備された警備がガードしているので、そのベンチのある一角だけは他に誰もいない安全圏となっていた。
青年たちのいる場所へ近付きながら、これでは自分も会えないのではないかと英恵が心配していたとき、隣に立っていた少女が急に手を大きく振りながら駆け出し
「おーい、やっくもきゅ――――」
たところで、音もなく近付いた女性が首筋に手刀を落として少女の意識を刈り取った。
先ほどはちゃんと〝有里君〟と呼び変えていたのに、大勢の前で急に本名を口走ろうとした少女が悪い。
そう思いながらも、自分が命じたことで従者が躊躇いなく意識を刈り取りに行った事に罪悪感を覚えた英恵は、自分とほとんど変わらぬ背丈の少女を軽々脇に抱えている女性に話しかけた。
「えっとぉ……もう少し穏便にお願いね」
「一刻を争うかと思いこのような手段となりました。申し訳ありませ

ん」
首筋に強い衝撃を与えて意識を刈り取るのは、後々の事を考えるといいとは言えない。ただ、和邇ならば湊と同じように後遺症も残さずに実行に移す事が可能なはずなので、英恵もそれ以上は何も言わずに再び青年の下を目指す。
残り十五メートルほどの距離にきた時点で気付いていた湊が視線を合わせてきたため、これならガードマンに止められる事もないだろうと英恵は安心した。
他の者は後からついてくる和邇が意識を失った少女を抱えている事に驚いているようだが、事情を察したらしい湊とチドリは何も言わず、遠路はるばる応援にやってきた英恵をただ迎えた。
――古美術〝眞宵堂〟
年中人の多いポロニアンモールの中でも、クラブやカラオケなど人気の施設が固まった一角に店を構える眞宵堂。
夏休み期間中でモール自体の利用者数は普段よりも多いが、若者がわざわざ骨董品屋に足を運んだりする訳もなく、極稀に訪れる客の相手をしながら栗原は仕入れのために骨董市の開催情報などを見ていた。
骨董市ははずれを引く事もあるが、顔なじみになった者が安く良い物を売ってくれることもあるので、そういった意味では通常の商談よりも信頼や友好度がものをいう世界だ。
以前なら、審美眼とアナライズで世界最高の鑑定士となった湊の協力で選定も楽だったが、一躍有名になってしまった彼を連れていくと騒ぎになるので、最近では店をチドリや湊に任せて自分で仕入れに向かったりしている。
こういった商売をしている事もあり、色々なものが見られる骨董市は眺めるだけで楽しいのだが、元々研究職についていた彼女はどちらかといえば出不精な性分であった。
そんな彼女にはやはり自分の城でのんびりと過ごしている方が気楽なのだが、ほとんど人の訪れない店に突然の来客があった。
「いらっしゃ――――あんたか」

突然の来客は薄茶色のスーツに黒のタートルネックを着た男、栗原からしてみればエルゴ研時代の元同僚である幾月修司であった。
相手がこの店を尋ねてくるのは初めてではないが、それこそ開店したばかりの頃に開店祝いでやってきたくらいで、骨董品に特別興味がある訳でもない男の来訪は不自然だった。
小さな笑みを浮かべながら入ってきた幾月は、店内に置かれた品を興味深そうに眺めながら栗原の元にやってくると、手土産と思われるお菓子の箱を渡しながら挨拶をしてくる。
「やあ、随分と久しぶりだね」
「ああ、確かに久しぶりだが今日は何の用だい？」
「ちょっとね。とりあえず、つまらない物だが手土産を持ってきたから後で食べてくれ」
幾月の渡してくるものなど怪しくて受け取りたくないが、ここで突っぱねるのも不自然なため、受け取った箱を机の端に置いて栗原は言葉を返す。
「ご丁寧にどうも。で、話があるならそこの椅子に勝手に座りな。用がないなら壺の一つでも買って帰りな」
「じゃあ、椅子に座らせて貰おうかな。少し話があって来たからね」
栗原が指でさした場所に置かれていたのは、どことなくエスニックな雰囲気の椅子。
チドリのバイト中に美紀が店を訪れた際によく使っており、元々はレジ側に置かれていたが今では机を挟んで店側に置く様になっていた。
客が買った商品の配送手続きのときに座って待ってもらう事もあるので、元は自分が店にいるときに子どもたちを座らせるのに置いていたが、湊がほとんどバイトに入らなくなった今では現在の位置の方が何かと都合がよかった。
そんな椅子に座った幾月は、飲み物でも買ってくれれば良かったかなと冗談を言うと、すぐに少し真面目な表情になって話し始める。
「エルゴ研が解体され新しくラボが発足されたと前に話したのは覚えているかい？」

「ガス管の破裂事故のときだったか。随分と昔の事だが、まぁ、覚えてるよ」
それについて話したのは約八年前、湊とチドリがエルゴ研を脱走してすぐの事だ。
湊が壊滅させ解体が決まったエルゴ研跡地で、死んだ元同僚たちに花を手向けに行ったところで幾月と再会し、今後の影時間の研究がどうなるかを話した程度だったが、湊を匿っていると勘付いた様子だった幾月のことも含めてよく覚えている。
今にして思えばずっと匿っておく事など無理だったので、ばれて湊たちが桔梗組で暮らす様になってむしろ良かったとすら思える。
母親であり姉の様な存在でもある桜が身寄りのない二人を可愛がり、鵜飼も会ったばかりの訳ありの子どもを守ってくれていたからこそ、二人は完全とはいかないまでも日常に戻ってくる事が出来た。
湊が主体となってシャドウを狩る事で人々を守っているため、桔梗組の者たちは間接的に人々の平和を守ったことになる。
勿論、そんな事を言っても本人たちは実際に守っているのは湊だというだろうが、彼が何も心配せずに戦っていられるのは、桔梗組がチドリの事をしっかりと守ってくれているからだ。
飛騨から子どもたちを頼むと言われておきながら、ほとんど何も出来ずに彼らを見送るしかなかった栗原としては、被害者である子どもたちの今の姿を見ると時折当時のことが頭を過り、苦い記憶と共に結びついたラボの話はしっかりと覚えていた。
随分と昔に話した事を栗原が覚えていると、幾月もどことなく嬉しそうな顔を見せ、ラボの現状についてを語る。
「ラボでは現在もシャドウや影時間についての研究を進めている。終わらせる方法はきっとあるはずだからね」
「その割には成果が出てるようには見えないね。無気力症も増えてるってテレビでやっていたし」
「ああ、年々増えている事は確認している。シャドウの活動が活発になっているのか、それとも影時間に迷い込む者が増えているのかは分からないが、数年前よりシャドウに襲われる人は増え事態が悪い方に

進んでいるのは確かだ」
湊たちは無気力症が起こる原因を知っている。心の暗部を見つめる力が弱まり、安易に死を求めたとき心からシャドウが抜け出て人は無気力症になる。
しかし、桐条グループではまだそれを知らない。無気力症がシャドウと関係している事は分かっているが、シャドウに心を食われてそうなると思っているのだ。
もっとも、どちらの考えに至ったとしても、シャドウが人々の敵である認識は変わらない。影時間に迷い込んでしまった者を襲わないという保証がない以上、迷い込んだ者の安全のためにシャドウは狩らねばならず、湊たちはさらに無気力症となった者を助けるためにもシャドウを狩るに過ぎない。
栗原は湊たちから無気力症の事を聞いているが、無気力症に陥る者の数が急激に増加している事を把握しているため、桐条側に何か秘策でもあるのだろうかと話に耳を傾ける。
すると、明確に現状を打破する方法は見つかっていない様子だった幾月は、顔を上げて真っ直ぐ栗原を見ると、熱意の籠った言葉でここに今日来た理由を告げた。
「単刀直入に言おう。君にグループに戻って来て欲しいんだ。現在ラボにいる面子での研究アプローチに限界が来ていて、僕たちは別の視点を持った人材を欲している。専門的な知識を持ちながらグループの研究についても既に理解している君のような人は貴重でね。グループだけでなく僕個人としても君の力を貸して欲しいんだ」
彼が今日ここを訪れたのは、影時間の研究に置いてラボの人材不足が課題として上がったためであった。
新たなアプローチの模索だけでなく、無の武器や宝玉など影時間に見つかったアイテムの解析もしなければならない。
だが、人にはそれぞれ専門分野があり、現在のラボにいるメンバーではそういったアイテムの解析も十分には進んでいなかった。
その点、栗原は元々考古学的見地からシャドウや影時間について研究していたため、一見ただの錆びた金属の塊にしか見えない物も、彼

女ならばそれがどういった物として作られたか形状やサイズからでも予測が出来る。
　現在のグループに必要なのはそういった別方面のアプローチが可能な研究者であり、美鶴が研究員から栗原のことを聞いた後、元同僚だからと幾月がスカウト役を買って出たのだった。
　だが、いくら桐条グループが彼女の知識と能力を認めていようと、本人に協力する意思がなければ意味がない。
　相手がスカウトしに来た理由は理解したが、だからと言って一度は思想についていけず離れた身として、そう簡単に協力する気にはなれないと彼女は首を振った。
「私は既にグループを離れた身だ。今さら研究所に戻ろうとは思わないね」
「ああ、君がそういうとは思っていたよ。だが、君が知っている頃とは研究所も変わったんだ。試しに一度でいいから見学に来てもらえないだろうか。研究がどの程度進んでいるか興味はあるだろう？」
　研究所の場所も、そこで働く者たちも、栗原がいた当時とは全く違う。
　ポートアイランドインパクトから九年、その間ただ無駄に時間を過ごして来た訳ではなく、歩みは遅くとも少しずつ前に進んできたのだろう。
　相手の性格と影時間を消すために必死になっているグループの現状を考えれば、ここで断っても再び勧誘しに店まで押し掛けてくるに違いない。
　ならば、相手をある程度満足させつつ、自分の知らない彼らの九年間とラボとやらを見てこようと思った。
「はぁ、見学だけだよ。時間と場所を後で連絡してきな」
「ありがとう！　時間が決まり次第すぐに連絡するよ。ああ、迎えはちゃんと寄越すからね。車がくるまえに集合しておいてくれたまえ」
「……冷房は十分だよ」
　真面目なのかふざけているのか、どちらにせよ湊とは違った意味で面倒な男なのは確かだ。

くだらないダジャレに嘆息した栗原は、用事を終えて出て行こうとする幾月を呼び止め。帰る前に何か買って行けとよく分からない八千円の花瓶を一つ買っていかせたのだった。

――テニス場

一回戦を勝ち進み二回戦に出た湊を大勢の人が応援する。チドリたちと合流した英恵も、日傘を差しながら湊の試合を見守っていた。

対戦相手は湊と試合で当たればガチで行くと言っていた少年で、既に湊が第一セットを取り、現在は第二セットの四ゲーム目、三ゲーム目をブレイクし2―1でリードする湊のサービスゲームだった。

外に逃げるスピンを打った湊が前に出ると、相手はネットプレーを避けるためにロブ気味のボールで深い位置を狙う。

しかし、前に出ると見せかけて途中で止まっていた湊はそのままコートを横切る様に走り、中途半端な高さのボールを跳躍してからのバックボレーで簡単に決めた。

高校生の中でも長身に入る湊は、その驚異的な跳躍力で生半可なロブは全て届いてしまう。それを躱そうと高くすれば、コートに落ちるまでの時間が出来てしまい。追い付いた湊に十分にボールを引き付けて打たれるので、相手選手はどうしても厳しいところに直球を打ち込むしかなかった。

元々そういったシンプルなプレーが得意な選手ならばいいが、様々な球種で相手を振るような選手は相性最悪とばかりに追い詰められ、半分は狙い過ぎてアウトになる自滅で点を失っていた。

見ている方としては湊の活躍は大いに結構だが、全国大会に出ても頭一つ抜けた実力を発揮する青年のプレーには舌を巻くしかない。

「今日の有里君の動きすごいキレッキレだね。調子いいのかな？」

「ああ、きっと右腕のせいやね。素の方が思い通りに動いて調子もええらしいわ」

直前の遅いサーブが頭に残っている相手に今度はフラットの高速サーブを放ち、サービスエースでブレイク状態をキープする。

そんな湊のいつにも増してキレのいい動きに、ゆかりが調子が良いのだろうかと疑問を持てば、先日完成した生体義手のおかげだろうと

ラビリスがつい口を滑らす。
直接的な単語は口にしなかったが、ラビリスの言葉を聞けばほとんどの者は彼が怪我をしていたと認識するだろう。
「え、有里君って何か怪我してたの？　大丈夫かなぁ」
案の定、風花が心配そうな顔をしてしまい。口を滑らせたラビリスは自分の失態にばつが悪そうにする。
こういった状況で機転が聞かないのはやはり人生経験の差か。彼女と同じく湊が右腕を試作品ながら実用可能なレベルの生体義手に替えたと聞いていたチドリが呆れ気味にフォローを入れた。
「……留学中に大怪我したって言ったでしょ。その後遺症みたいなもんよ。最近になって治療できるようになったから治療して、今はもう前とほぼ同じように動くから心配しなくていいわ」
先日完成した試作品の生体義手は、覚醒後も実戦で使い続けてきた左腕には劣るが、これまでの戦闘用義手より遥かに優れた耐久性を誇っている。
実際に湊の細胞を培養して作ったのだから当然ではあるが、怪我をすれば血が出るし脈だって測れる。骨が人工物である事を除けば本物の腕と変わらないのだから、開発に成功し実用試験に移っている湊たちは義肢開発において間違いなく世界トップの技術を持っていた。
もっとも、ラビリスやアイギスのように全身を作るのと違い。上腕までは元の腕がある湊は神経接続部がそのままとなっており、元の腕と生体義手に継ぎ目がある状態ではある。
その部分に目を瞑れば擬装用スキンを付ける必要もなく、壊れることを恐れてパワーをセーブする必要もないので、右腕に気を遣う必要がなくなった湊の動きが良くなるのも当然だと頷けた。
チドリから湊の怪我が既に治療済みだと聞いた他の者も安心し、相手を圧倒するプレーに再び目を向ければ、今まで少女らの会話を聞いていた英恵が青年の今の状態を知っているチドリやラビリスに一つ尋ねた。
「あの子、自分がこっちで何をしているか教えてくれないのだけど、ちゃんと自分の腕として使えるようになったって事でいいのかしら

？」
「ええ、正真正銘、生身の湊の腕よ。筋肉の量とかは流石に鍛えて合わせないといけないけど、ちゃんと血も通ってるわ」
「そう。それは良かったわ」
　青年自身は右腕の喪失を自分の馬鹿で支払った授業料として納得していた。そして、ＥＰ社とシャロンが合同で作った三連装アルビオレ改はアイギスとお揃いだと喜んでいた。
　けれど、黒い腕輪のように見える神経接続部はともかく、そこから先の白い装甲が剥き出しになった機械義手は、彼を大切に思っている者からすれば痛々しく映った。
　普段は擬装用スキンや若藻の能力でカモフラージュしていたが、やはり血の通わない腕を持つ事で精神にも何かの影響があるのではと不安になり、いつも彼の事を心配していた。
　それがどういう訳か生身の腕を再び手に入れ、おかげで湊自身も今まで以上に快適そうに動き回っている。
　やはり気にしていないと言っていても、本当の腕ではない事で色々と不便や不都合を感じていたのは間違いなく、それらが解消されて良かったと英恵は胸を撫で下ろした。
　湊の右腕が義手であると知っていたゆかりも、チドリたちの会話で去年のクリスマスに話していた研究途中だった生体パーツの腕が完成したんだと勘付き、それはとてもおめでたいと明るい顔になる。
　青年の活躍を見るために応援に駆け付けていたが、それ以上の朗報を聞いた英恵たちは勝負を決めに行く湊を一生懸命応援し、彼が勝ち進むのを見守った。

第百八十話　ラボ見学

８月７日（木）
昼――ラボ
幾月にラボへの見学を伝えていた栗原は、その日のうちに日時を伝えられ二日後にはラボに来ていた。
場所は以前偵察しにきた湊に聞いていたが、湾岸部に近い場所で表向きは医療器具の開発と製造のための施設となっている。
こんなものは公安が踏み込んでくればすぐにばれてしまいそうだが、様々な方面から圧力をかけて動きを封じ、今日まで公安に一歩も踏み込ませず研究し続けていた。
湊が代表を務めているＥＰ社の方も公安が密かに探っているらしいが、日本で様々な黒い噂のある桐条グループの方が優先順位は上で、さらにいえばＥＰ社も着々と日本での地盤を強化して圧力をかけているため、公安の職員にしてみれば近い距離に二つの捜査対象がいながら手を出せない歯がゆい状態であることは間違いなかった。
元研究員だが現在はただの骨董品屋の主人である栗原には関係のない話だが、湊の話によれば一時期湊とチドリではなく栗原をマークしている者もいたという。
理由は元研究員である栗原経由で本丸の桐条グループに攻め込むため、栗原を引っ張って行く材料となるものがないかを探していたみたいだが、相手が適当な理由をでっちあげてくる前に湊が処理したので問題は解決したらしい。
殺したりしていないだろうなと尋ねると、湊は五体満足で生きていると答えた。ただ、公安として仕事を続けるのは難しくなったとのことで、恐ろしくなった栗原はそれ以上訊いたりしなかったが、ここでまた桐条グループと接触すれば再びマークがつくかもしれない。
そうなると色々と面倒なので、裏の仕事を辞めた湊が動くような事態にならないためにも、ここでの研究を少し見学すれば栗原はすぐに帰ろうと思っていた。
「やあ、いらっしゃい。今日は来てくれてありがとう」

「少し見学したらすぐに帰るさ。盆前は意外とモノが売れるんでね。午後からは店を開けるつもりだよ」
施設の入り口まで進むと以前と同じスーツに身を包んだ幾月が待っていた。
来てくれた元同僚を笑顔で出迎え、ゲスト用のＩＤを手渡すと早速中に入って長い廊下を進み、研究区画と思われる方へと連れていく。
協力するつもりはないと言い。現在は部外者である栗原に一部の職員しか知る事を許されない研究を見せていいのかという疑問はある。
グループのトップシークレットを見たのだから、対価として協力しろと言われたりしないだろうと考えていれば、大きな窓で研究室の中が見えるエリアについた。
中では白衣を着た職員たちが影時間に手に入れたであろうアイテムを調べていたり、召喚器や対シャドウ戦で使用する武器の設計などを行っていた。
「ここは調査部と開発部だ。タルタロスで手に入れた物を解析したり、グループの抱えるペルソナ使いたちのサポートアイテムの開発や改良を行っている」
「対シャドウ兵装シリーズはもう作ってないのかい？　九年前はペルソナの搭載に成功した七式まで作ってただろ？」
「対シャドウ兵装は核となる黄昏の羽根が必要になる。大規模な事故を二度経験し、グループに残っている羽根の数も少なくなっていてね。技術は今も残っているが、開発に費用と時間が掛かる上に羽根も必要となれば、そう贅沢に使っていられないグループとしては研究を凍結状態にするしかなかったんだ」
黄昏の羽根はニュクスの肉体である月の表面が剥がれ地球に落着したものだ。月まで行ければ取り放題だろうが、そんな事が出来る者は限られているため、偶然地球に落ちて来るのを待つしかない。
地球に来たとしても手に入れられるとは限らないので、桐条鴻悦が巨費を投じて集めた羽根も残り少なくなっている以上、羽根の節約はグループ全体に厳命されていた。

そんな理由もあり、大きな羽根を最低でも一枚は使用する対シャドウ兵装シリーズは、開発を進めるのが困難だと現在は凍結されていた。
もっとも、凍結されたと言っても完全に研究をやめた訳ではないと幾月は補足で説明をいれる。
「ああ、でも完全に凍結した訳ではないよ。屋久島にも研究所が置かれていたのは覚えているかな？」
「五式の試験場や七式の訓練に使用してたやつならね」
「ハハッ、試験場は五式封印後に封鎖され今は廃墟だよ。そっちではなく後者の方だね」
五式の試験場とはラビリスたち五式のテストベッドが戦っていた施設の事である。
そこは正式採用機となったテストベッド最後の一機であるラビリスが、姉妹たちがいた証である記憶を消去すると言われた怒りで一部破壊され、ラビリス自身も施設を破壊して脱走したのが危険と判断された事により使われなくなり破棄された。
実験が行われていた当時から既に十年ほど経っているので、雨風による劣化と老朽化が合わさって、今では近付く事も危険な廃墟になっていると思われる。
天下の桐条グループの管理下にある施設がそれでいいのかとも思うが、幾月は湊に会う以前にアイギスが訓練を行っていた施設について語った。
「七式の訓練に使用していた施設は今も残っている。ちょっとしたトラブルで起動しなくなった七式もそこに保管されていて、現在は七式用の強化武装なんかを開発しているね」
「起動しないのに開発しても意味ないだろ。それとも後継機を作る目処が立っているのかい？」
「いやぁ、他にやる事もないし。備えあればってやつだよ。今のメインはあくまでシャドウやタルタロスの研究だからね」
対シャドウ特別制圧兵装シリーズのラストナンバーはアイギスだけれど、それはポートアイランドインパクトによって、それ以降のシ

リーズを作っていられる状況ではなかっただけのこと。
事故以前に桐条を離れた栗原に真相を知る術はないが、まず間違いなくアイギスよりも後に開発する予定だった機体の設計図は存在するはずだ。
むしろ、人格データを入力した黄昏の羽根を搭載していないだけで、型式名称は異なっていたとしても、八式にあたる機体のボディは既に製作を終えているのではないかとすら思える。
アイギスのための武装とは言いながらも、どうせ他の機体にも流用できるようになっているのだから、幾月たちが再び人の心を持った機械を生み出し、青年の逆鱗に触れるのではないかと栗原は気が気ではなかった。
とはいえ、桐条から離れていた栗原にとっては興味を引かれる実験や、逆に湊やチドリの協力のおかげで自分の方が進んでいる分野の研究もあったりと、ただ軽い気持ちで見学に来て心惹かれるものがいくつもあった。
それだけで研究所への復帰を了承するほど馬鹿ではないが、研究の核心については上手く誤魔化し話さない幾月の説明を聞きながら先を進めば、ある扉の前に到着し幾月が先ほどよりも真面目な表情で声をかけてきた。
「実は君が来るのなら是非会いたいといった人物がいるんだ。僕は席を外しておくから、君だけで会って話をしてもらえるかな」
「……部屋に入ったら中からは開けられないってのは無しだよ。そのときは研究に協力せずに舌を噛み切って死ぬからね」
「信用されてないなぁ。大丈夫さ。本当にただ君と会いたいって人がいるだけだから」
見るからに胡散臭い男を信用しろという方が無理な話だ。早期に研究から離れた栗原よりも、直接手を汚して来たこの男は絶対に信用してはならないと本能が告げている。
シャドウの脅威から人々を守る手段として、同じ心の力であるペルソナの確保が挙げられるのは理解できるが、それで投薬と実験により犠牲を出してでも子どもたちにペルソナを獲得させるなど正気の沙

汰ではない。
子どもたちの事を気に掛けている栗原にすれば、人々のためだろうとそんな悪魔のような研究をしていた者を信用する事など出来ず、最大限の警戒を見せながら彼女と話したいという人物のいる部屋へと入った。
「っ、まさか貴方がいるとは思いませんでした」
「久しぶりだな、栗原君。忙しい中、わざわざ時間を作ってもらいすまない」
部屋の中に入って栗原は驚いた。彼女と話したいと会議室の様な部屋で待っていたのは、グループ総帥である桐条武治だったのだ。
栗原が入ってきた事で席から立ち上がって出迎えた桐条は、彼女に適当な椅子に座る様に言ってから、内線でお茶の用意を持ってこさせると静かに話し出す。
「父の時代とは研究所の様子も随分変わっただろう」
「ええ、まぁ」
彼女がまだ研究所にいたとき二人は話した事があったが、ほとんどは主任だった岳羽詠一朗の傍にいて彼女にも声をかけて来ていただけだった。
知らない訳ではないが特別親しい訳でもなく、どうして桐条が自分と話したかったのか分からない栗原は、場に重い沈黙が降りてしまう前に尋ねた。
「どうして、私と話をしようと?」
「君の力が借りたいと思っているのは私も同じだ。ならば、組織の長として直接頼むのが筋というものだろう。純粋に古い知り合いと話をしたかったというのも勿論あるがね」
自分たちがお願いする立場なのだから、トップ自ら動く事で筋を通すのは当たり前。
そう話す桐条は本気でそう考えているようだが、いくら本気だとしても桐条の様な多忙な人間が彼女のために時間を割くなど普通はあり得ない。
せいぜい主任クラスが動く程度で、ラボに置いては幾月がその役職

についているので責任や誠意については既に果たしていると言える。
だというのに、桐条は時間も気にせず彼女としっかり話そうと思っているらしく、持って来させた紅茶に口を付けていた。
彼のこういった妙な真面目さはとある青年に似ているようにも思える。彼もシスターに日本に来てもらうときなど自分でスカウトしに行っており。自分で行った方が確実だというのもあるのだろうが、彼もお願いする側なのだから直接赴き頼むのが礼儀だと考えていた。
世界のため、大切な少女のためと理由はそれぞれ異なるが、自分が泥を被って手を血で汚す覚悟を持った彼らは、根っこの部分では似ているのだろうなと思え、おかげで鋭い眼光の相手に感じていた緊張がいくらか和らいだような気がした。
そして、緊張が和らいで頭も回るようになってきた栗原は、これまで聞けずにいた率直な疑問をこの際無礼と知りつつ聞いてしまおうと考える。
「いくつか聞かせてください。何故、子どもたちを巻き込んだのですか？」
「それは誰の事を言っているのかね？」
「全員です。始まりの少年と人工ペルソナ使いたち。ご令嬢のように巻き込まれた者と違い、彼らは貴方たちが巻き込んだ者たちだ」
滅びを求めるという愚かな思想に取り憑かれた先代鴻悦と違い、桐条には良識と良心がしっかりと備わっている。
組織の長として冷酷にならなければいけないときもあるだろうが、ポートアイランドインパクトで彼の父をはじめとした研究者だけでなく、一般人である無関係な者も含めて大勢を犠牲にしながら、何故、事故の後また無関係な子どもたちを巻き込み多くを犠牲にしたのかが分からない。
いや、正確には分かっている。ただ、頭でそれを理解しながらも人であろうとする彼女の良心が納得出来ず、改めて研究を承認した本人に決定した理由を尋ねたかった。
各界の重鎮や様々なタイプの人間と関わってきた桐条は、彼女のそんな考えをしっかりと読み取った上で、紅茶を一口飲んで考えをまと

めてから言葉を発する。
「事故から毎夜発生するようになった影時間を消すため我々は研究を進めている。しかし、方法は未だ見つかっていない。それでもシャドウという脅威は常に存在し、影時間に迷い込んだ者たちの中にはシャドウの犠牲となった者もいる」
犠牲となった者とは即ち無気力症となった者のこと。実際は違うが影時間が発生するようになってからシャドウが抜け出易くなっているので、無気力症患者たちもある意味でシャドウや影時間の被害者である事は間違いない。
「犠牲者が出ている以上、影時間が消す方法が見つかるまでシャドウを野放しにする事も出来ず。我々はシャドウに対抗するためペルソナの研究及びペルソナ覚醒者の捜索を始めた。事故から意識の戻らない少年を参考にしてな」
当時はまだ覚醒者がいなかったので統計が取れず、既に覚醒している湊と類似点を多く持っている者が覚醒し易いのかもしれないという仮説で捜索が始まった。
意識が戻って会話出来ればもっと別の方法もあっただろうが、目覚めるまでは他に方法もなかったため、旧エルゴ研には湊の身長と体重だけでなく脈拍など様々なデータが保管されていた。
もっとも、湊たちの脱走時にそういったデータは一部を除き建物ごと物理的に消滅したものの、最初はそんなつもりで彼を回収し研究所に連れて行った訳ではない。
「君のいう始まりの少年、つまりは百鬼八雲君の事だが。彼に関しては被害者の保護という目的もあった。後に解析されたアイギスのメモリから彼が一緒に戦っていた映像が見つかるまではの話だが」
「早急にペルソナ使いが必要だと考えるのは当然で、貴方がそれを急務として何よりも優先した事は理解出来ます。ですが、シャドウを用いた実験であれだけの被害を出した後です。根本が同じであるペルソナでも同様の被害が出ると慎重になるべきでした」
「アイギスのメモリに残っていた映像を見れば考え方は変わる。戦いを知らぬはずの少年が、対シャドウ兵器よりも高度にペルソナを使役

していたのだから」
いくらシャドウの被害を食い止めるためにペルソナ使いを求めようと、自分たちだけでは制御しきれない異能を扱う以上は慎重になるべきであった。
議論に議論を重ねて、これ以上は実際に見てみないと分からないという段階になってからなら、犠牲となった子どもの人数も少なく済んでいただろう。
しかし、そう話す栗原に桐条は、湊の戦いぶりは研究者に夢を見させるには十分だったと答える。
数多の戦術をインストールされた戦闘のプロともいえるロボットよりも、素人である少年の方がシャドウを抑えていたのだから、子どもの能力を甘く見ていた研究者が〝天然ペルソナ使い〟の能力と見なしてしまうのも無理はない。
それについては一応理解出来るが、揃いも揃って思慮の足りない当時の研究員らに栗原は思わず頭を抱えて嘆息した。
「はぁ……それは天然のペルソナ使いだから出来たのではなく、あの子個人の資質によるものです。実際、昨年ご令嬢たちはペルソナの制御を誤って事故を起こしていたでしょう。天然の覚醒者だろうと暴走の危険は常に存在します」
「ああ、だが我々はそれに気付けなかった。目覚めぬ彼は私が素性を伏せた事でエヴィデンスと呼称され、美鶴が後にペルソナに目覚めた事も合わさり、研究者たちは同世代の子どもが力に目覚め易いと考えた。私もそうだと信じて、子どもたちを犠牲にするという愚かな選択をしてしまったのだ」
影時間に起きた事は現実世界に戻れば他の記憶として置き変わる。戦闘で建物の壁が壊れれば、飲酒運転の車が突っ込んだなど、適性を持たぬ者にはそれらしい記憶として認識されるのだ。
その代わり、適性を持っている者にはニュースの映像と事故の理由に大きな差がある事が違和感として残り、そこから影時間に何かあったのだろうと簡単に推測されてしまう。
そういった事もあって桐条は栗原が昨年の荒垣のペルソナ暴走事

故を知っていても気にしなかったが、自分で気付いたのではなくチドリや湊から情報を仕入れている彼女は、僅かに申し訳なく思いながら紅茶に口を付けて顔を上げた。
「まぁ、貴方が当時何を思っていたのかは分かりました。それとは関係なく、純粋に私個人の意志としてグループに復帰するつもりはありません。骨董は趣味で集めた物ばかりですが、チームで研究してってやるより骨董品屋の店主の方が性にあってるんです」
元々、昔の想い人だった岳羽詠一朗に誘われて研究チームに入った身だ。彼がおらず既に様々な者を不幸にしている研究になど今さら参加したくない。
どちらかと言えばインドア派で人と話すのも億劫な栗原にとって、古傷を抉る事になるかも知れないそんな事をするくらいなら、客の来ない店でチドリやその友人にお茶を出すという子守りをしている方がマシだった。
「そうか。君の持つ知識や専門家の視点からの助言に期待していたのだが、そういう事なら無理に誘ったりはすまい。今日は忙しい中来てもらって悪かった。帰りの車はすぐに用意させよう」
栗原のそんな答えを聞いた桐条は残念そうな顔をしながらも、しつこく勧誘を続けたりはせずあっさり引き下がる。
深く研究に関わってはいたが、彼女は既に日常に居場所を作って平和に暮らしており、そんな相手の日常を壊したくないという想いからの決断だろう。
しかし、あまりにあっさり引き下がられた事で拍子抜けしてしまった栗原は、苦笑しながら話は最後まで聞いて欲しいと言葉を付け加える。
「ああ、いや、グループに復帰するつもりはないと言いましたが、店に持って来てもらいさえすれば鑑定の正式な仕事としてお受けしますよ。個人で行うので時間はかかるでしょうが、私も研究に関わっていましたから、後始末に最低限の責任は果たすつもりです」
「そうか。いや、十分過ぎるくらいだ。ありがとう。君の協力に感謝する。依頼の報酬等についてはまた後日連絡しよう。出来る限り君

の要望に答えるので遠慮せず言ってくれ」
そう、栗原は研究所に戻るつもりはなかったが、鑑定の依頼くらいは最初から受けてやろうと思っていた。
現在前線で戦っているのは関係のない子どもたち。彼らの安全にも関わってくるのだから、責任の一部を担っている者として、子どもたちのためにも出来る範囲で協力するのは義務だと考えていたのだ。
ただし、協力するのはあくまで個人への依頼として持って来られた場合に限る。組織に組み込まれてしまえば、上層部の意向など大きな波に飲み込まれて身動きが取れなくなる。それではまた誤った方向に進んだとき何も出来ないので、彼女は協力者という輪の外からグループの情勢を見守る立場を取る事にした。
桐条は彼女のそんな考えを肯定し、協力して貰えるだけで十分だと大いに喜ぶと、部下たちに依頼の品に優先順位を付けておくよう指示を飛ばし。それを終えると栗原にゆっくり見学して言ってくれと別れを告げて去って行った。
――埼玉県・テニス場
女子の試合や男子の三位決定戦が終わり、残るは今年の覇者を決める男子シングルス決勝のみとなっている。
事前の下馬評通りに湊は決勝まで進み、対戦相手は今年の団体戦で優勝した学校の三年生エースが上がってきた。
足の速さと絶妙なボールタッチが武器の相手にすれば、厳しいコースで攻めて試合展開をコントロールする湊のスタイルとは相性が良い。
何より、最初はデータが少なく、スイッチフォアハンドという希少な才能を持っている湊に多くの選手が苦戦してきたが、インターハイ決勝までくればデータも集まり分析され、こうすればいいという対策も取られた。
サービスラインほぼギリギリでクロスに湊が打ち込めば、前に詰めていた相手が湊のバック側にドライブボレーを打って来る。
「……チッ」
スイッチフォアハンドはラケットを持ち替える事で、どちらでも力

の強いフォアハンドで打てるという特徴がある。
しかし、それにはラケットを持ち替える時間が必要で、返って来るまでの時間が短く、ラケットを持ち替えていたら間に合わないと判断した湊は、面倒そうな顔をしてこれまでよりも力のないボールをバックで打ち返した。
湊にバックを打たせた相手は作戦が嵌まっている事で口元を歪め、打ち返されたボールに追い付くと回り込んで強烈なフォアを湊のいないクロスに打ち込んでくる。
「ゲーム4―2、工藤リード！」
打たれたボールに湊は追い付く事が出来ず、ゲームを取られ相手にさらに差を付けられてしまう。
まだ第一セットなのでこのまま落としても挽回の機会はあるが、二セット取った方が勝ちというルール上、後のない状態にはしたくはないし、出来ることなら作戦が嵌まって調子づいている相手から試合のコントロールを奪っておきたい。
ベンチに戻って汗を拭きながら、湊はこれまでのゲームを思い出して現状の打開策を考える。
自分の攻撃が通じないのは、相手が厳しい球にも対応出来るだけの足とテクニックを持っているから。相手の攻撃に対応出来ないのは、自分のプレースタイルが完璧に近い形で研究され弱所を突かれているから。相手の調子はどんどん上がっているが、自身の調子は悪くなっているという事はなく平坦なまま。
（……調子が悪くないなら何の問題もないな）
ゲームとゲームの間の僅かな休憩時間に現状の把握を終えた湊は、ひとつ前のゲームの時よりも落ち着いた様子でコートに戻る。
色々と考え過ぎたり、反対に相手を観察するのに夢中になって咄嗟の判断が疎かになるのは青年の悪い癖だ。
ただ、そういった情報を頭の中で整理してしまえば、彼はスイッチが切り替わったかのように動き出す。
今度は湊のサービスゲーム。これを落とせば後がなくなるので、ボールをコートにつきながら湊は相手をジッと見つめた。

（俺は母さんに教わったテニスでこれまで試合をしてきたが、自分に合ったテニスは別にある。勝つために試合をしてきたが、目的を邪魔する敵として立ち塞がるのなら容赦はしない。叩き潰させて貰おう）

バウンドさせたボールをキャッチすると、湊はそのままトスをあげてサーブ体勢に移る。

コートの右端から極端なクロスを狙ったフラットを打つためのポジション。相手もそれに合わせて対角寄りの場所でラケットを構えるが、今回の湊はこれまでのサーブよりも身体を捻り、大きく溜めを作った状態でラケットを振り抜いた。

「はぁっ!!」

全身のばねを使って生み出された力は、鞭のようにしなる長い腕の振りと連動し、これまでよりも格段に速くラケットを振り抜く。

傍から見てもこれまでよりも速いと一目で分かるラケットが叩いたボールは、相手のサービスコートに突き刺さると、そのまま一歩も身動きをさせず相手の横を通り過ぎていった。

「ふぃ、１５―０！」

これまでの比ではない速さに動揺しつつ、再起動を果たした審判がコールする。

観客たちもコートの周りではガヤガヤと騒がしくしているが、プリミナの会員たちの持つボードには〝時速二三七キロ〟と書かれていた。

過去の試合では最高二〇八キロまでしか出していない者が、突然三〇キロも上げてくれれば誰だって驚く。

一切反応出来なったのなら余計に動揺し、これまで得ていた精神的な優位性もほぼ消えたと言っていいだろう。

決勝までくるだけあって、そういった動揺を顔に出さないのは見事だが、次のサーブで湊が遅いスピンを打てば反応が一瞬遅れた事で動揺しているのは丸分かりだ。

返されたボールの元まで走りラケットを構えた湊は、これまではショートクロスや深い位置にロブで打っていたところを、相手の足元に向かって上から叩くような強打で返した。

「うおっ!?」
突然の足元への強襲に驚くも、相手は咄嗟にボレーで打ち上げる形になりながらも返す。
しかし、そのボールの落下地点には既に湊が待機しており、完全に狙いを定めた湊は、助走を付けて跳躍しながら渾身のスマッシュを叩きつけた。
効率的に力が伝わり先ほどのサーブと変わらぬ速度で飛んだボールは、真っ直ぐ相手のラケットに向かうとガットを直撃し、相手の手からラケットを吹き飛ばす。
今まで押されていたとは思えぬ怒涛の攻めに会場も湧き、観客の方からは黄色い声援が飛ぶ。
試合中の湊はそれには応えないが、次のサーブに移ろうと移動したところで、相手選手が手を上げて声をかけてきた。
「す、すみませんガットが切れたのでラケットを替えさせてください」
「ええ、どうぞ」
何かと思えば、先ほどラケットを直撃したボールのせいでガットが切れたので、予備のラケットと交換させて欲しいという話だった。
ガットなどそう簡単に切れるものではないが、テンションによっては相手の強打の負荷に耐えきれずに切れることもある。そのため選手は予備も含めて三本はラケットを持ってくるものだが、劣化していた訳ではなかったのなら、急にプレースタイルを変えてきた湊相手に残りの本数では心許ないに違いない。
それでも湊は叩き潰すと決めた相手への攻めを緩める気はないので、高校日本一を決める試合でありながら、選手のプレーとは別の部分で色々と気の抜けない試合になりそうであった。
＊＊＊
少女たちの視線の先で跳躍した青年が再び相手のラケットを狙ったスマッシュを放つ。今度はフレームに当たったようだが、偶然返ったヒョロ球の向かう先には青年が両手でラケットを持って構えており、両手打ちのドライブボレーで易々と点を奪う。
これまでが精密なショットで厳しいコースを狙い点を取って勝ち

に行く静の型だとすれば、現在の湊は力で捻じ伏せ相手を負かす攻撃的な動の型だ。
厳しいコースを狙っても追い付かれてしまうのなら、取れない球など最初から狙わず、相手が余裕で届く範囲であろうとまともに打てないようにしてやればいい。
相手の足元や深い場所を執拗に攻め、僅かでも隙を見せたとき相手コートで跳ればコート外へと飛んでいくボールを強打で叩きこむ。
「なんか、今の有里君怒ってるみたいに見えるね」
相手のサーブをそのまま相手の足に近い位置にライジングショットで返す湊を見て、風花は少し怖いと困った表情を浮かべる。
バスケのときは試合を楽しみ相手に勝とうとしていたが、今の湊は相手を潰して負かそうとしている。自分が上に行くのではなく、相手を地に伏せさせるという、その微妙な違いを風花も感じ取っているようだ。
「……別に怒ってはいないわよ。単純にスポーツから戦いに内容が変わっただけだもの」
「普通の人はそんな説明じゃ分からんやろ。まぁ、簡単に言えば今の湊君は試合に勝とうとしてるんやなくて、優勝するために相手を負かしてやろうとしてんねん。喧嘩でボコボコに殴っとるんをイメージしたら分かり易いやろか」
言葉で説明しようとすると中々難しいが、試合の勝利ではなく優勝という目的を果たすために戦っていると聞けば、微妙なニュアンスの違いを理解しきれていなかった面々も少しは理解出来たようで頷く。
彼女たちは美紀と一緒に真田の試合を観に行った事がある。そのときの真田と今の湊は確かに重なる部分があるため、湊が格闘技の試合をしていると考えれば怖さも和らいだ。
だが、湊のプレースタイルが変わろうと、相手も頂点まで後一歩というところまで来た猛者。湊優位に試合が進もうとリスクを冒して流れを引き戻そうとする。
レシーブで湊が再び足元へボールを打ってくると睨み、サーブと同時に前へと走る。見ていた湊はそれに気付くも、これまで通りサー

バーの足元だったポイントを狙って直球で返す。
読みが当たった相手はチャンスだと内心で喜び、コートの中ほどで止まるとしっかりボレーで湊のバックサイドを狙った。
プレーの変わった湊は厳しいコースを狙わなくなった分、確実に入る範囲に強打を打ち込めばいいため一球一球の重さが増している。しかし、スイッチフォアハンドは継続して使用しており、それなら最初に使っていた作戦はまだ有効だと相手は判断したのだ。
だが、相手は一つ大きな勘違いしていた。
「ハァッ!!」
バックサイドに飛んだボールを湊は素直にバックハンドで打ち返す。ラケットを持ち替えようとする素振りも見せず、まるでそれが得意なショットかのように重心の移動から腰や肩の回転まで、全てが見事に調和したスイングは、フォアハンドと遜色ない打球を相手コートに返していた。
湊がバックハンドが苦手だと思っていた相手は、フォアハンドと同じ速球で返ってきたボールに反応しきれない。
一瞬反応が遅れた後にラケットを伸ばすが、ボールはフレームに当たってあらぬ方向へと飛んでいく。
「15―40!」
相手がしていた大きな勘違い。それは青年がバックハンドが苦手だと思い込んでいたこと。
どんな選手にも得意なショットと苦手なショットはあるが、バックハンドではまともなボールは返せませんという欠陥を抱えた選手がいたなら、常識で考えて大会の決勝まで上がって来れる訳がない。
湊のバックハンドがこれまで弱かったのは、ギリギリまで母のテニスの象徴であるスイッチフォアハンドでいけないか考えていたからだ。
最初からバックでいくと決めていたなら、余計な時間を割かずにしっかりとしたフォームで打球を返せる。
マッチポイント直前にその事実に気付いた相手選手は、最後の逆転の目が潰された事で気の抜けた様子のままサーブを打つ。

気は抜けていても身体は練習を覚えており、無駄な力が抜けた分とてもいいサーブだった。さらに、これまでと同じようにボールが来ると思ってその場でラケットも構える。
けれど、完全にコースを読んで助走を付けていた湊が打った打球は、サーブの威力を殺しネット前に落とすドロップショットだった。
「ゲームセットアンドマッチウォンバイ有里、カウント6―4、6―1！」
これまで強打に慣れていた相手は可能性を排除していたショットに反応出来ず、審判のコールを聞くと疲れが一気に出て座りこむ。
観客は今年の日本一が決まり両者の健闘を称える拍手を送るが、まさか本当に湊が優勝してしまうと思っていなかったゆかりや風花たちは、驚き過ぎてどう反応していいものやら分からず、手を繋いでピョンピョンと飛び跳ねた。
「本当に優勝しちゃった！　日本一だよ、ヤバくない?!」
「うん！　とにかくすごかったね。皆でお祝いしてあげないと！」
一緒になって喜びながらお祝いを考える少女たち。ケーキでも作ってみようかなと笑う風花に、美紀やゆかりはそれなら料理は自分たちが担当しようかと返す。年下の少女たちの喜びようを美鶴とターニャが微笑ましそうに眺めるが、風花の料理の腕前を知る者がここにはいなかった。
調理実習では材料が全て必要な分用意されているのでミスしようがなく、これまで部活で何かを作るときは料理が得意な教師陣と湊と美紀が主導し、風花は基本的に運搬や配膳を担当していた事で彼女が作る場面がなかったのである。
いくら致死量の毒を喰らっても死なないとは言え、湊も好き好んで毒物を摂取しようとは思わない。善意のお祝いが悪意に満ちた呪いを生み出すとはこのとき誰も知る由もなかった。
「八尋さん、撮影は表彰式まで入れるように伝えて貰えるかしら。編集作業は後日やるから今日は撮影まででいいわ」
「かしこまりました」
後に息子が毒殺されかけるとも知らず、英恵は撮影スタッフとして

来ている使用人たちに指示を出す。
親友の息子が母親と同じように全国制覇を成し遂げる瞬間を見れると思っていなかっただけに、その瞳には僅かに涙が滲んでいた。
けれど、大勢からの声援と拍手に応えている息子の姿を見ないと勿体ないので、ハンカチで目を拭うと自分も拍手で彼の健闘を称えた。
同じように隣で観戦していた桜も、とても興味深い言葉が聞こえてきた事で、惜しみない拍手を送りながら英恵に話しかけた。
「桐条さん、編集したものをダビングして貰う事は可能ですか？」
「データのコピーと一緒にＤＶＤに焼いてお渡しします。パッケージも作れますがどうしますか？」
「サーブと普通のショットで悩みますね。格好良いのはサーブですが、こう躍動感や力強さは普通のショットの方が感じられそうで」
「では、入れ替え出来るように何種類かお作りしますね」
二人はママ友。歳は一回り以上違うが青年を大切に想う気持ちは同じで、皇子としてテレビに取り上げられる様になってから、そのことで電話やメールで情報交換もしている。
自分たちの親のそんなやり取りをチドリと美鶴は冷めた目で見ているが、試合後の礼を終えて湊がコートから出てこようというタイミングで、美鶴の傍で一緒に観戦していた七歌が湊を指差して騒ぎだす。
「お、出てきますよ美鶴さん！　出てきたと同時に喜びのダイビングハグをしなければ！」
「お気持ちは分かりますが、坊ちゃまは試合で疲労を感じておりますが故、今回はご遠慮ください」
衝動に任せて走り出そうとする七歌を、誰よりも速く近付いた和邇が前に回り込んで止める。
武術の心得のある七歌は隙を突くためじりじりと動こうとするが、和邇は隙などどこにも存在しないとばかりに、構えも取らずプレッシャーのみで七歌の動きを封じる。
「一年生のインターハイ優勝は今回しかないんですよ？」
「重々承知しております」

そんな風に、気を駆使して見えない陣地を制圧するという、上級者同士の高度な戦いが無駄に繰り広げられる中、コートから出てきた湊は早速取材陣とファンに囲まれていた。
運営が用意したガードマンが選手に触れないよう身体を張って止めてくれているが、全員をガードする事など出来ずファンらしき女の子が湊に白いタオルを渡している。
一応、試合が終わってからもタオルで拭いたが、完全には拭けてなかったようで受け取った湊が汗を拭くと、それが隙だったとばかりにＩＣレコーダーを持った男がファンの子を押し退けるように現れる。
「あ、取材記者に押し退けられたファンの子を助けてはるわ。今回から来た人か知らんけど注意されとるね」
「個別の取材とかは受けないけどマスコミ対応は丁寧だもの。それを知っているからこそ、顔見知りになった人はちゃんと待ってるのに、ああいうがっついた新参は他の取材陣からも叩かれて当然ね」
ラビリスとチドリが見つめる先で、男に押し退けられた女子がバランスを崩しかければ、湊はすぐに相手の手を掴んで助けた。お礼を言ってタオルを返すと、今度は無礼な記者を丁寧な口調で注意し、記者が湊と女子の両方に頭を下げて謝って大きな問題にはならなかったらしい。
青年の活躍は自分の事のように誇らしく嬉しい気持ちになるが、注目されるという事は今みたいな事が起き易くなるという事でもある。
生体義手の完成で研究は一気に進んだと聞いているが、自ら多忙さを引き上げている彼の難儀な性格に、彼をよく知る少女たちは本当に大丈夫だろうかと心配せずにはいられなかった。
そして、彼女たちの予想通り、スポーツ誌の一面を飾りニュースでも取り上げられた皇子のインターハイ優勝によって、翌日から彼は再びミーハーな一般人らの相手に頭を悩ませることになっていた。

第百八十一話　祝勝会

８月９日（土）
午前――古美術〝眞宵堂〟
インターハイ優勝から数日後、湊はＥＰ社を使って皇子ブームが過熱し過ぎないよう裏から圧力をかけ、前回のブームの時よりもいくらかマシなレベルに抑えることに成功した。
厳戸台周辺では人助けをしている湊は元から有名人なので、知らないおじさんやおばさんが笑顔で挨拶をしてくることもあるが、前回のようにブームに乗っかっただけのにわかファンに囲まれず、そこそこ普段通りの日常が過ごせることに湊は満足していた。
そして、そんな湊は一応まだバイト先ではある眞宵堂にやってきて、栗原がラボに行って桐条武治と話したことを色々と聞いていた。
「まぁ、そういう訳でグループには復帰しないが協力者って立場にはなった。あんたらの情報は勿論流さないが、あっちの子どもたちに死なれるのも困るからね」
「……そうか。自ら参加している以上は死んでも自己責任のはずだが、元研究員としては複雑なんだな」
「割り切れるほど図太くないんでね。生きていようとあんたたちを巻き込んだことにも責任を感じ後悔はしてるんだ。死なれたら余計にくるものがあるさ」
復帰する訳ではないのでグループに籍を置く訳ではない。あくまで協力者という立場になるだけだ。
近くにある交番にいる黒沢という警察官も同じく協力者だということで、今後桐条グループが影時間関係で怪しい物を持って来ても見ないフリをしてくれると話は通っている。
こんな近くに協力者が揃っているのは驚きだが、ここは最初から桐条グループが作ったショッピングモールなので、考えてみればそういう時のために協力者候補を集めていた可能性もあった。
ただの考え過ぎということも勿論あるが、警察という取り締まる側である人間の協力も得られるのなら動き易い。

協力者である黒沢は、あくまで見えないところで起きている異常の解決のためだ、とは言っているが、警察という自由の利かない組織にいながら個人の判断で協力してくれる者は貴重だ。
今後取り扱う物の中にはリークされたら不味い物もあるので、彼を信用しての綱渡りになるかもしれないが、そのときはそのときだと再びグループに協力すると決めた栗原も自分で責任を取る覚悟はしていた。
「ああ、そうだ。協力することになったら、今の状態じゃ店が狭くなるかもって話になってね。解析や調査をする間置いておくスペースも必要になるだろうって、そう遠くないうちに店を改装することになったよ」
「無料で改装して貰えるとはラッキーだったな。盗聴器等の検査は任せろ」
「ははっ、そんときは頼むよ。流石にコンセントの中とかに設置されたら自分じゃ調べきれないからね」
隣接する店の関係もあってテナントの入っているスペースを広げる事は出来ないが、壁を高性能な最新薄型素材に替える事で中は広く使えるようになる。
さらに、壁に棚を取りつけて貰ったり、商品を傷めないために店の照明を全て特殊な物に替えたりと、数百万は掛かるリフォーム代全てを桐条グループが払ってくれるのだから、影時間が終わってからも店を構え続ける予定の栗原にすれば儲けものだ。
工事は全て桐条グループ傘下の業者がやるので仕上がりに関しては心配していない。ただ、指揮下に入らない協力者という立場上、首輪を付けておく事の出来ないグループは、カメラや盗聴器を仕掛けて栗原の動向を探ろうとしてくるかもしれない。
そうなればノウハウのない栗原では外す事も出来ないので、仕事でそういった事にも慣れている湊がいてくれて良かったと彼女は笑った。
「壁も床もやっぱり木に近い色合いにしようと思ってるんだ。カントリー調の方が落ち着くだろ？」

「……栗原さんの店なんだから好きにすればいい。派手なピンクや紫だったら悪趣味だと貶すが、それ以外なら大理石の床でも剥き出しのコンクリートでも許容範囲だ」
「大理石も確かに心惹かれるけど、剥き出しのコンクリートって、私はそんなのイヤだよ……」
桐条武治は古い知り合いである栗原にそんな失礼な真似はしないだろう。けれど、桐条グループも一枚岩ではない。グループのためにと動こうとする者もいるはずだ。
栗原もそれを分かっているからこそ、そういった類いの物が仕掛けられようと桐条を責めるつもりはないし。湊に任せておけば問題がないので、リフォームのパンフレットを湊にも見せながら新しい店の壁や床の色について話していた。
興味のない青年は心底どうでも良さそうに出されたコーヒーを啜っているが、思いがけぬ改装という協力の見返りに内心でかなり喜んでいる栗原にすれば、興を削がれる青年の言葉につまらないやつだと思ってしまうのも無理はない。
しかし、二人がそうやって話をしていれば、店の扉が開く音がして客が入ってきたため、栗原はパンフレットから顔を上げて客に挨拶をした。
「いらっしゃい……って、桐条さんとこの娘さんじゃないか。こんな店に何か用かい？」
「はい。幾月さんからここの事を聞いたので、挨拶と共に早速鑑定を依頼しようかと」
協力者となってすぐに挨拶に来るとは、随分と躾の行き届いた出来た娘だと栗原も感心する。
まぁ、名家の娘ともなれば出来て当然なのかもしれないが、弓でも入っているのかという細長い布製のケースを肩にかけてやってきた美鶴は、店の奥までやってきたところで湊の存在に気付いたらしく、少しぎこちない笑顔で彼にも挨拶がてら話しかけた。
「あ……その、インターハイ優勝おめでとう。お母様もとても喜んでおられた。今月の二十一日に開かれるお母様の誕生パーティーに〝

話題の皇子〝として君をゲストに招待したいとも言っておられたが、既に気付いている七歌や九頭龍家の方と会うことになってしまう。なので、私としてはやめた方がいいと思うのだが、参加するかどうか君からお母様に連絡してやって欲しい」

話しかけられても湊は当然何も答えない。事情を知っている栗原にすれば、尻拭いをさせられている子どもたち同士のこういった姿はあまり見たくないが、目の前で両親を失った彼が加害者の家族と口を聞きたくないというのも分かる。

自分も研究に参加していた加害者である栗原に口を出す資格はないので、せめて美鶴が気まずいままでいる状況を何とかしようと少女に用件を聞く事にした。

「それで、鑑定して欲しい物ってのは？」

「あ、はい。この長い金属製の物です。金色の変わったシャドウを倒したら出てきたのですが、全体が酷く錆びて風化してるようで、何の金属か不明なこともあって溶かして使うのも難しいと。一応、武器だったのではと推測されているのですが」

話しかけられた美鶴は肩の荷物を下ろし、レジカウンターのところに置いてケースを脱がせていく。

中から出てきたのは、美鶴も言っていた通り酷く錆びた長物の武器らしき金属だった。槍か薙刀か似た別の何かという可能性もあるが、出された物を数か所確認してから栗原は鑑定が終了したと金属の正体を明かした。

「ああ、こりゃ〝無の薙刀〟だね。切れ味はないが見た目よりも丈夫で固いから、そのままでも使えない事はない。ただ、これの正しい使い道は武器合体の素材なんだ」

「武器合体ですか？」

栗原は湊たちと関わる様になってから贖罪のため独自に研究を再開した。その中で黄昏の羽根を用いない対シャドウ武器の研究も行っており、湊の協力もあって無の武器とペルソナを組み合わせることで武器合体が可能だと発見した。

イゴールたちベルベットルームの住人には珍しくないものだが、桐

条グループも未だに発見していない技術であり、スポンサーもいない個人で行っている研究であることを思えば、彼女の発見は十分過ぎる成果と言える。
「あー、あんたは湊の事情を知ってるみたいだから、色々と伏せずに話すよ。その代わり、仲間に湊の事を知らないやつがいるなら黙っておきな。幾月やあんたの父親にもだ」
ただ、グループが発見していない研究を美鶴が知っている訳もないので、そこから説明しなければならないかと、栗原は頭を掻いて余計な事は他の者に伝えるなと釘を刺してから武器合体という技術を説明する。
「武器合体ってのはペルソナと武器を融合させる技術さ。黄昏の羽根と同じように無の武器もペルソナへの親和性が高くてね。合体させればペルソナの力を宿した武器が出来るんだ。武器自体に力が宿ってるから、それを使えば一般人でもシャドウにダメージを与えられる。勿論、自身は耐性がないままだから攻撃を喰らえば大怪我するけどね」
「ペルソナを合体させてしまうと自分のペルソナが消えてしまうのでは？」
「そりゃね。合体させると解除出来ないし。武器はあくまで持って使う物だから、合体したペルソナのスキルを使うだなんてことも出来ない。持ち主が死ぬってときなら後の者に対シャドウ兵器として託せばいいが、それ以外ならペルソナに制限のないワイルド能力者専用ってとこだね」
シャドウの攻撃を喰らえば一般人ではひとたまりもない。全身を最新の防具で覆っても耐えきれる物ではないので、ペルソナを合体させた武器を持っても一般人を前線に配置する事は出来ないが、襲われたときに咄嗟に攻撃を喰らわせて逃げる時間を稼ぐくらいは出来るかもしれない。
一般人にとってはもしものときの自衛手段。ペルソナ使いにとっては様々な可能性を秘めている武器。
そんな驚きの新技術である武器合体も、現状ではペルソナを無限に

生み出せるワイルド能力者の協力が必要不可欠だが、それを聞いた美鶴は再び不思議そうな顔をして聞き返してきた。
「すみません、ワイルド能力者とは？」
「なんだ。そういう話は聞いてないのかい？　ワイルドに関しちゃ、湊が研究所にいるときから知られてるはずだが」
「残念ながら全く。そもそも、有里や吉野がグループの研究所にいたというのも、偶然切っ掛けを得て気付いた事ですので、幾月さんやラボの方からは何も……」
　二人が話している間、黙ってコーヒーを飲んでいる湊の方を気まずそうに美鶴が見る。
　美鶴が湊が研究所にいたと知ったのは、ムーンライトブリッジで湊が神の力を発現させかけた際、感応波によって彼の過去を覗き見たのが切っ掛けだ。
　そこから彼の正体に到り、死んだとされる彼を誰が回収していたかを当時の状況から考えれば、答えに辿り着くのは簡単だった。
　しかし、上から話を聞いて事情を知った訳ではないので、過去の研究や桐条の暗部に関してはまだまだ理解が浅い。
　そんな相手にどれだけ情報を与えていいか分からず栗原も困った顔をすると、とりあえず湊が止めてくるまでは話す事にした。
「そうなると何を話していいのか困るね。まぁ、ワイルド能力者ってのはワイルドっていう複数のペルソナを所持出来る能力のことさ。誰にでも目覚め得るらしいが私も湊しか見た事はないよ」
　誰にでも目覚め得るというのは、湊だけでなくベルベットルームの住人からも聞いている。なので、その情報は確かなのだろうが、残念ながら栗原も湊以外のワイルド能力者を見た訳ではない。
　ベルベットルームの住人はペルソナ全書の力で呼び出しているため、厳密にはワイルドとは異なる。よって、現時点で一人しかいないのに誰にでも目覚め得ると言って信じて貰えるかは分からないが、そういった能力があることだけ覚えておいてもらい、栗原は今回の鑑定結果について美鶴に詳しい部分は誤魔化しておいてもらう事にした。
「無の武器に関しちゃ、ラボの方にはペルソナの波長と同調する反応

が見られたって伝えておくれ。ペルソナと合体させる事が可能かもしれないが、同時にペルソナを失う可能性もあるので現時点では試す事は出来ないってね」
「分かりました。ああ、そういえば、似たような物が他にもあるのですが名前はどうなっていますか？」
「総称は無の武器で剣、薙刀、突剣、拳、槍、弓、鈍器、小刀、銃の九種類さ。金色のレアシャドウからしか見つかってないから、欲しいときはそいつを倒しな」
「分かりました。覚えておきます」
　彼女の研究に湊も関わっていると理解したのだろう。美鶴は素直に頷いてぼかして報告しておくと約束してくれた。
　あの厳格そうな男の娘にすれば随分甘いと言わざるを得ないが、その分、まだまだ子どもなのだと考える事も出来る。
　鑑定結果を聞き終えて帰る準備をしている美鶴を横目で見ながら、栗原はコーヒーを飲み終えて煙管に切り替えていた湊に声をかけた。
「そういや、湊。あんた部活の子らが祝勝会をしてくれるんじゃなかったのかい？」
「ああ、だから料理を作ったり準備をしている間は家を追い出された」
「追い出されて行く場所がバイト先って、もう少し何かあるだろうに……」
　家主のくせに女子らに追い出されてバイト先に来るとは情けない。自分の会社でも何でも行く場所などあったはず。
　青年にすればこだわるポイントではないのかも知れないが、彼がやってきてから時間も経っており、もうすぐ十二時を回るので帰るにはいい時間だろう。
　栗原は午後も店にいなければならないが、湊と同じくらい人付き合いに不器用そうな美鶴を、帰るならその祝勝会に連れて行ってやってはどうかと提案した。
「これからやるならついでに連れて行ってやりな。どうせバイクだろ？」
「……連れていく理由がないな」

「英恵さんに祝勝会の様子を伝えて貰えるだろ。桜さんも英恵さんもあんたの普段の暮らしを気にしてんだ。散々心配かけた親を安心させるために必要な事だと思いな」

言われた湊は途端に嫌そうな表情をした。思った通りの反応に思わず噴き出しそうになるが、母親たちのことを出せば彼は大人しく引き下がると知っている。

案の定、嫌そうな顔をしながら湊は深く溜め息を吐くも、バイクのキーをポケットから取り出すと黙って立ち上がって店を出て行った。

後に残った美鶴は状況についていけず困惑していたので、鑑定の品はこのまま眞宵堂に置いていって構わないから、湊を追いかけて行っておいでと送り出す。

言われた美鶴はとりあえず礼を言ってから駆け足で湊の後を追っていったが、二人揃って不器用なのでこの後どうなるかは予測がつかない。

ただ、決して悪いようにはならないはずだと栗原には不思議な予感があった。

昼――マンション・湊の部屋

午前中に家に来て湊を追い出した部活メンバーたちは、最低限の料理が出来るようになったゆかりも戦力として加わり、美紀を中心に様々な料理を作りあげて行った。

その傍らで風花は一人本を見ながらケーキ作りに奮闘していたが、まだ大量にあったはずの胡椒がかなり減っていたり、使うはずの粉末バニラビーンズが袋の中に残っていたりと不思議な事が起こっていた。

ただ、多くの女子は対湊用の山盛り料理の方を担当していた事で、風花が一人で頑張ってみるとやる気を見せていたケーキ作りのチェックが甘くなり、気付けば少し不格好ながらもクリームでデコレーションされたケーキが完成していた。

ビックリ箱も開けるまでは綺麗に包装されたプレゼントにしか見えないので、いくら見た目が普通であっても風花のケーキを信用するのは危険である。

冷蔵庫の中に封印されたソレを最初に口にするのは主賓である湊になりそうだが、祝いの席でテロの標的にされるとは欠片も思っていない青年が帰ってくると、作れるくせに味見専門でキッチンにいたチドリがひょっこり顔を出し、湊の後ろを見て僅かに驚いた顔をした。
「……どこで拾ってきたの？」
「……別に」
「そう。エサでも貰えると思ったのかしら。元の場所に捨てて来ないとね」
何一つ具体的な事を伝えていないたった一言で、複雑な事情を察したチドリは流石の付き合いの長さと言ったところか。
それでさらに美鶴を煽る辺り、湊に同情しつつ家にやってきた美鶴を牽制しているのだろう。
後輩にそのような扱いを受けた美鶴はとても複雑な表情で呆れ気味にチドリを見返し、廊下を進む湊の後をついて行けば、料理を運ぶためにキッチンを出てきたゆかりと遭遇し、ゆかりはチドリよりもさらに驚きの声を上げた。
「うぇっ、桐条先輩っ!?　ちょっと有里君ってばどこで拾って来たのよ！」
「君たちは私をなんだと思っているんだ……。確かに突然の来訪はすまないと思っている。だが、ここへ来たのは眞宵堂の店主について行けと言われたからだ。祝勝会の様子などをお母様に伝える係りとしてな」
チドリに続いてゆかりまでもが捨て犬のような言い方をしてきたことで、美鶴は頭が痛くなり手を当てて首を横に振る。
母からは確かに湊の普段の様子を教えて欲しいと言われている。そのため、他の者が彼のために開いてくれた祝勝会という催し物など、母もきっと様子を知りたいに違いないだろうと、栗原の言葉に従って美鶴はついてきた。
本来は呼ばれておらず、湊との間に複雑な事情の絡んでいる桐条の人間が祝いの席に参加するべきではないのかもしれない。
けれど、先にバイクの元に着いていた湊は、タンデムシートに予備

のヘルメットを置いてグローブとヘルメットを付けていたので、言葉は交わさないが拒絶している訳でもなかった。
さらにいえば、初めてのタンデムで手の置き場所に悩み、悩んだ末に肩に手を置けば、湊は小さく嘆息してから美鶴の手を掴んで自分の腰に回させた。
それは傍から見れば背中に抱きつく様に密着しており、スタイルの良い美鶴がやれば豊かな双丘が押し付けられる形だ。順平たち一部男子にすれば羨ましいと野次を飛ばしたに違いない。
残念ながら湊と美鶴は互いにそのような事は考えていなかったが、美鶴にすれば湊が拒絶せずに触れてくれたという事実が重要だった。なぜなら、それは遠回しに来ていいと許可している事に他ならないのだから。
そんな風に美鶴がここへ来た経緯を全員に伝えリビングに入れば、ソファーに座って羽入の遊び相手になっていたターニャが手を振って彼女を迎えてくれた。
ターニャの隣に美鶴が座ると湊は着替えるために部屋に戻り、その間に他の者たちが料理をテーブルに並べていく。
その量は明らかに二十人前はあるのではという壮観なものだが、運んでいるゆかりと美紀が「これで足りるかな？」と話していたのが聞こえ、まだ人数が増えるのだろうかと考える。
しかし、そのまま人数は増えることなく、着替え終わった湊も戻ってきて、料理の配膳が終わった事で全員が席についた。
美鶴はこういった友達同士で行う手作り感溢れるパーティーに参加する経験はほぼ初めてだが、料理は派手さはないもののどれも見た目と香りで食欲がそそられ、アットホームな雰囲気もあり決して豪華な社交界のパーティーに劣っていないと、後輩らの仲睦まじい姿に目を細める。
全員にジュースの注がれたコップが行きわたれば、楽しそうに笑みを浮かべるゆかりが乾杯の音頭を取った。
「それじゃあ、有里君のインターハイ優勝と全日本選手権出場を祝ってカンパーイ！」

『カンパーイ!』
手に持ったコップを当て鳴らし口を付ければ、一同はコップを置いてそれぞれ好きな物を皿に盛っていく。
美紀が作ったサラダとハンバーグと和風きのこパスタ、ゆかりが作ったピラフと唐揚げ、ラビリスが作ったグラタンと麻婆茄子。それ以外にも沢山の料理がテーブルには並んでいるが、唐揚げが割と好きな湊が早速皿に取って食べていれば、彼氏が自分の手料理を食べているのを見て緊張した様子のゆかりが評価を尋ねる。
「有里君、その唐揚げどう？　美味しい？」
「……普通」
「おいこら、作った私に失礼でしょーが」
湊のいう普通とはよくある味という意味だ。特別美味しいという訳でもないが、そこそこ食べれる味ということで評価的にプラスだったりする。
けれど、普段からつまらなそうな顔をしてる彼が普通と言えば、ほとんどの者がどちらかと言えばマイナスのイメージと判断するに違いない。
勿論、普段の彼の様子に慣れている一同はそれで険悪な雰囲気になったりはしないが、不思議な信頼関係で結ばれているのだなと客観的に見ていた美鶴は、ターニャが盛りつけてくれたサラダを食べつつ、ここに来てからずっと抱いていた疑問を口にした。
「そういえば、ここは誰の家なんだ？　私は店主から有里の家に行くと聞いていたから、てっきり吉野もいるご実家に行くのだと思っていたのだが」
「ここはウチと湊君の家やで。湊君の住所届けが実家のままやって佐久間先生も言ってはったけど」
聞いた途端に美鶴は驚きでむせそうになる。しかし、料理や他人の家を汚す事は出来ないと何とか耐え、咳払いをして喉の調子を整えてから改めて聞き返す。
「こ、高校生で同棲しているのか？　だが、有里は岳羽と交際していると聞いていたんだが……」

「あー、私と有里君が付き合う前から二人は暮らしてるんですよ。男女の関係じゃなくて家族的な感じらしいです」
「そ、そうなのか。吉野と有里も元は他人だからな。家族になることは可能か」
彼女がいながら他の同級生の女子と同棲している。美鶴でなくとも聞けば首を傾げるような話だ。
ただ、ラビリスもペルソナ使いだと知っているため、彼女もまた色々と訳ありで湊が保護したのだろうと納得する事にした。
空気が読めないことは多々あるが、訳ありと察すれば必要以上に踏み込んでいかないのは美鶴なりの優しさだ。今回もそれがプラスに働き話題が収束すると思ったとき、ラビリスが笑顔で爆弾を落とす。
「まぁ、今は二人で暮らしとるけど、将来的にはもう一人増えるかもしれへんけどね」
「そ、それは……家族が増えるという意味か？」
「うん。今から会うのを楽しみにしてるんよ」
スプーンでグラタンを頬張るラビリスは無邪気な笑みを浮かべている。純粋に心から家族が増えるのを楽しみにしている。誰が見てもそれが一目で分かる姿だ。
しかし、そんな少女の姿を見ていた一同の視線は同時にスライドしていき、ハンバーグをおかずにピラフを食べていた青年で止まる。
ある少女たちからゴミを見るような冷めきった視線、ある少女たちからは信頼を裏切られた悲しそうな視線、ある少女たちは皆が見ているから見ているだけだったりするが、本人とラビリス以外の視線はこの瞬間彼を射抜いていた。
それも当然で、若い男女が二人で暮らしていて家族が増えるとは、二人の間に新しい命が芽生えるという事だろう。男女の関係ではないと言いながら、彼女持ちの男は他の女子と肉体関係を持ってさらに相手を妊娠させようとしているのだから、彼らが高校に入学して半年も経っていないこともあり心象は最悪だった。
「……お前ら勘違いするなよ。ラビリスが言っているのは彼女の妹の事だ」

だが、他の者たちの勘違いに気付いた青年はすぐに誤解を解くため真実を話す。
いくらクズな青年でも機械を孕ます事など不可能。将来的には妊娠も出産も可能な人間とほぼ変わらぬ身体になる予定だが、今まで何度でも肉体関係に及ぶ機会のあったチドリに手を出していない時点で、湊が誰よりも大切にしている少女らに手を出さないのは明白だった。
そして、湊から家族が増える本当の理由を聞いて、風花が本当に驚いた顔でラビリス本人に初耳だと尋ねた。
「え、ラビリスちゃん妹さんがいたの？」
「あれ、言うてなかったっけ？　まぁ、異母姉妹いうやつで一度も会った事ないんやけどね。湊君はウチと会うより前に妹に会ってはって、その関係でウチのことも色々とよくしてくれたんよ。妹のしたことは妹のしたことで、ウチにまで恩を感じんでええって言うたんやけどね」
ラビリス本人も認めた事で誤解は完全に解け、場の不穏な空気が正常に戻ってゆく。
ただし、ゆかりはラビリスの話に少々引っ掛かる部分があったらしく、ジュースで喉を潤してから湊に話しかけた。
「え、有里君もしかしてラビリスと妹さんを重ねてるの？　それで傍にいさせてるって男としては最低だし、彼女としては複雑過ぎるんですけど」
「二人は別に似てないぞ。ああ、まぁ、頑固なところとか平気で殴りかかってくるところは似てるか」
これまた酷い誤解に湊も思わず嘆息する。機械の身体には共通点や類似点がいくつも見られるが、顔の造形は整っているという事以外はあまり似ていない。
性格も話し方もまるで違い。身長やスタイルだって妹のアイギスの方が良かったりする。
それで二人を重ねて見るなど無理な話で、強いて言えば二人とも変に頑固なところなどは似ていると教えた。

アイギスのことを少し知っているチドリは話を適当に聞きながら食事を続けているが、他の者にすれば友人の妹への興味は強くなるばかり。中でも女子が平気で殴りかかってくるとはどういう事だと美紀が怪訝そうな顔で聞いて来る。
「殴りかかってくるって妹さんに何かしたんですか？」
「留学中に数年ぶりに再会したんだが、お互いに意見を譲らなくて勝った方が命令するって話になったんだ。その流れで殴り合いになって拳を掴まれたまま何発も喰らったな。かかと落としをガードで受けたときは道路が砕けたし、最終的に負けたよ」
普通なら悔しそうにするところを、湊は珍しく嬉しそうに負けたと小さく口元を歪める。
衝撃的な内容の後にそんな珍しいものを見たことで、他の者たちは余計に何があったか気になった。
「え、なにそのバイオレンスな人。ていうか、女の子と殴り合いの喧嘩になって負けるって……」
「有里君に勝つってかなりすごいと思うんですが、ラビリスさんの妹さんって何者ですか？　というか、そんな本気の喧嘩になるって一体何で揉めたんですか？」
ゆかりの感想や美紀の疑問も尤もだ。これに対して青年が何と答えるのか待っていれば、食べていた物を飲み込んだ青年は、少し話しづらそうにポソリと答えた。
「……いや、一緒に日本に帰ろうって言われて、俺がそれを拒否したんだ。そしたら、帰るまで一緒にいるっていうから一人で帰れと」
「その相手は行方不明になってた湊を探しに一人で日本を飛び出して行ったのよ。中国から徒歩とヒッチハイクでドイツ辺りまでね。それでそんな事を言われたら怒るに決まってるわ」
湊の話だけでは経緯がまるで分からない。なので、事情を知っていたチドリが当時自分も怒りを感じていた事を思い出して、青年が完全に悪いとアイギスの行動を擁護する。
「うっわ、なにそれマジ最低じゃん。よくそれで相手のこと殴れたわね」

「心配して来てくれた人にそれは酷いね……」
「ダー、ミナトは女の子にもっと優しくするべきデス」
すると、興味津々に聞いていた者たちは、青年のあまりの自分勝手さに呆れ果て。チドリの言うように悪いのは湊で、心配して必死に駆けつけてくれた者によくそんな真似が出来たなと女性陣から非難の声が飛んだ。
大部分を省いているがチドリの話したことは事実で、その点に関しては湊も反論する気はない。ただし、殴り合いに発展した事に関していえば湊の方にだって色々と言い分はあった。
「怪我人相手に手榴弾を投げてくる相手だぞ。誰だって応戦するさ」
「いや、迎えに来てもろたんやから帰ったら良かったやん。てか、そんなんしてたとか聞いてへんし。人の妹になにしとるんよ」
湊が少し反論すればラビリスが呆れたように怒ってくる。正確には〝帰らなかった〟のではなく〝帰れなかった〟のだが、理由を説明すれば自分の命が狙われていた事などを話す必要があるため、話したくない湊は不服そうにしながらも黙った。
海外で行方不明になっていた間の青年の行動は今まで不明だったが、まさか途中でそんな事をしていたとは思わず、女子たちの青年を見る目はプロテインを語る真田や順平を見るときと近い物になっていた。
湊にすれば大変な侮辱であり決して納得できるものではないが、先ほどの話を聞いて今ここで湊の味方になってくれる者がいるはずもない。それが分かっているからこそ何も言い返さなくなった湊がお茶を飲んでいれば、料理が綺麗に完食され全員が食事を終えているのを確認した風花が気を遣って話題を変えてくれた。
「ま、まぁ、有里君とラビリスちゃんの妹さんの話は置いといて、食後のデザートも兼ねてお祝いにケーキを作ったの。初めてだから不格好になっちゃったけど、今から用意するね」
「じゃあ、私はお茶を淹れますね。ラビリスさん、ポットはありますか？」
「うん。茶葉が何種類かあるからウチも一緒にいくわ」

三人がデザートの用意のために動き出せば、他の者たちもお皿を重ねたりして片付けを手伝う。この中で最年少である羽入もキッチンから台拭きを持ってきて、食器の片付いたテーブルを拭くなどしてしっかりと協力する。

本日の主役である湊はただ座っていろと何もさせて貰えないが、いくら広いキッチンでも女子数名がいれば多少動き辛く、図体のでかい湊がいると完全に邪魔でしかない。

この家での勝手が分かっていない美鶴もそれは同じで、食器を片づけるところまで協力していたが、ケーキとお茶の準備に入ったときからは湊と同じようにテーブルで座って待っていた。

そうして、お湯を沸かすために少々の時間が要ったが、十五分もしないうちに準備は整いテーブルにケーキが置かれた。

白いクリームで覆われ、上にはイチゴが等間隔で並んでいる。ただ、クリームの表面が滑らかとは言い難く、見た目的には小学生が頑張って作りましたと言った感じだ。

「一応、本を見てレシピ通りに作ったんだけど、上手に出来なくてゴメンね」

「いや、作ってもらえて感謝してる。大変だったろうにありがとう」

しかし、料理は見た目が全てという訳ではない。見た目の悪いケーキを作ってしまって恥ずかしそうにしている風花に優しく礼を言って、湊はケーキを人数分切り分けると一片を自分の皿に載せた。

外からは分からなかったが中のスポンジはココアパウダーを混ぜたような色をしている。最近では手作りケーキセットとしてスポンジだけで売られているが、これは手作りなようで初めてなのに頑張ったなと素直に感心する。

スポンジとスポンジの間にはクリームとイチゴジャムのような物が挿まった層があり、クリームだけにしない辺りに彼女の努力の色が見えた。

そんな風にジッとケーキを観察している湊を風花が緊張した様子で見ているため、他の者も何故か緊張した様子になりケーキも取らずに彼を見つめる。

「それじゃあ、いただきます」
そして、ようやく彼が一口大に切ったケーキを口に運んだかと思えば、次の瞬間、湊の瞳が金色から魔眼の蒼色に変化していた。
「お、おい、急に瞳の色が変わったがどうした？」
ただでさえ珍しい輝くような金色の瞳が、一瞬で揺らめく蒼色に変化すれば誰だって驚く。心配して美鶴が様子を尋ね、彼女は他の者にも事情を聞きたそうにしているが、残念ながら魔眼について知っているのはチドリとラビリスだけだ。
そして、二人は湊の魔眼の発動条件を知っている。自ら死を視ようとしたとき、自己暗示で戦闘状態に切り替わったとき、怒りや憎しみなど感情が昂ったとき、そして極度のストレスを感じたときだ。
いまこの状態で魔眼が発動するなど最後の条件しかあり得ない。よく見ればフォークを持っている手に血管が浮き上がっており、死に至るような毒を飲んでも平気な彼に一口でそれほどの肉体変化を起こさせる物体に戦慄を覚える。
普段なら気付けばすぐにオフにしているというのに、未だに魔眼も切り替わっておらず。下手をすればキレてテーブルをひっくり返すかもしれないので、チドリとラビリスが咄嗟に反応できるよう備えていれば、フォークを置いて紅茶を一口飲んだ湊が静かに口を開いた。
「……山岸、ちゃんとレシピ通りに作ったんだな？」
「え、うん。大さじとか小さじとかよく分からなかったけど、スプーンの事だと思ったから小さじはティースプーンを使って、大さじはサラダを混ぜるときのやつを使ったよ」
「……そうか。食べた事のない風味だが、俺も全部のレシピを知ってる訳じゃないからな。こういうのもあるんだと覚えておこう」
風花の言葉を聞いた瞬間、他の全員がこれダメなやつだと即座に認識した。サラダを混ぜる大きなスプーンは正確にはフォークとセットでサラダサーバーと呼ぶが、あれは赤ん坊の掌くらいは平気である。
正しい大さじの三倍以上はあるはずなので、小さじをティースプーンで量ってしまっている事も含め、作られたケーキはレシピ通りとは

到底言えないものだった。
加えて言うのなら、湊はケーキを口に運ぶ途中で黒胡椒の香りを感知していた。粉末バニラビーンズと間違えたのだろうが実際に口に入れれば胡椒辛いというレベルではなく、さらにイチゴジャムだと思っていた物は唐辛子の泡盛漬けで、何故そんな物があるのかも不明だが、とにかく口に入れて飲み込むまでに二つの辛さで喉が焼かれるようであった。
スポンジの方もココアパウダーなど微塵も混ざっておらず、焦げている訳でもないのに何故黒いのかが分からない。
そして、焦げていないのに何故だか炭化した肉を食べたときのような、ジャリジャリとした不快な食感が口の中に広がり、それらは焼かれた喉の表面を削る様に胃へと落ちて行く。傷に荒い鑢をかけるが如き痛みによって、ケーキよりも血の味の方が強く感じられたほどだ。
卵の殻は御愛嬌として流すが、アルミホイルの欠片がいくつか混じっているのは嫌がらせだろうか。
ほのかに柑橘系の香りがするのはプラスポイントだと思いたかったが、残念ながら香りの素は食器洗い洗剤で、これを普通の人間が口にするのは危険だと判断する。
「ラビリス、冷蔵庫に箱が入ってるからそれを持って来てくれ」
「え、あれってケーキやないの？」
「ああ、山岸が俺のために作ってくれたからこれは一人で食べたいんだ。だから、皆はそっちで我慢してくれないか」
冷蔵庫の中に置かれたケーキは、もしも作れなかったときのために湊が買っておいた物だ。
まさか、作れたのに使う事になるとは思わなかったが、一生懸命作ってくれた風花を傷付けず、同時に他の者たちの安全を確保して一人で毒を喰らおうという青年の漢気に、風花を除くメンバーたちは心の中でほろりと涙した。
「そういう事ならしゃーないな。湊君がこう言ってるんやけど、風花ちゃんもええかな？」

「あ、うん。私は別に構わないけど、有里君は一ホール一人で食べて大丈夫？」
「ああ。あんまり日持ちする物でもないし。作ってくれた本人の前でちゃんと完食しておくさ」
とても優しい口調と表情で話す湊に風花は照れた顔をする。食べきれなければ処分しても構わないと思っていただけに、全部ちゃんと食べるさと微笑を向けられれば、喜びも相まって頬を染めずにはいられない。
だが、本人たちが話している周りでは、皆が顔を背け心の中で「ありがとう、そしてゴメン」と青年に感謝と謝罪を唱え続けていた。
彼は見た目が良いだけのイケメンではない。相手を傷付けないため自分が損する事を厭わないという内面までもがイケメンの真のイケメンであった。
湊は風花を傷付けないと誓い全て一人で食べきる事を決意した。彼のそんな覚悟を無駄には出来ない。いつかは笑い話に出来るかもしれないが、そう出来るまでは真実は自分たちだけが知っていればいい。
故に、少女たちは素早く冷蔵庫のケーキを取って来て皿に置き、並行して濃い目のブラックコーヒーと冷えたコーラという青年を援護する物を用意した。
自分の考えを察して貰えたことに青年も安堵し、力技で魔眼を抑え込んで戦いに臨んだ彼は、談笑する少女たちの隣で地獄のような三十分を耐えきり、一人の少女の笑顔と大勢の少女の命を守り抜いたのであった。

第百八十二話　依頼と案内と

８月２２日（金）
――ベルベットルーム
現実世界とは異なる時の流れに存在するベルベットルーム。
そこを訪れた青年はテーブルの方まで進むなり、マフラーから大きな棺桶を取り出すと、それを床において依頼人である女性に話しかけた。
「依頼にあった〝不気味な巨大人形〟を持ってきた」
「まぁ……これはまた随分と立派な棺でございますね。中身が見えない分期待に胸も高鳴ります。では、早速拝見させていただきます」
湊がここへやってきたのはエリザベスの依頼をこなす為だった。姉弟三人から依頼を受けているが、湊の本来の担当はエリザベスであるため、彼女からの依頼が最も多い。
さらに言えば、彼女の依頼は姉弟の中で最も抽象的な説明である事が多く、今回の〝不気味な巨大人形〟という以来もノーヒントで出されたときには、湊もそれはそれは嫌そうな顔をしたものだ。
他の客人ならばちゃんとしたヒントを与えたりするらしいが、湊ならノーヒントでも大丈夫な気がする事に加え、もし間違った物を持って来ても面白い物だったりするので、彼女的には楽しめるので問題ないらしい。
依頼を受ける方にすれば堪ったモノではないが、仕事に真面目な湊は今回も自分なりに考えて依頼の品を持って来ていた。
彼女の姉弟が二人のやり取りを興味深そうに眺めつつ、棺に近付いたエリザベスが腰を落として蓋を開ければ、そこには薄緑色の入院着を身に付けた湊そっくりの人間が横たわっていた。
「っ……これは魂のない器ですか？」
「正式名称はＥＰ０４〝プロトフルオーダー〟、ＥＰシリーズはＥＰ０４以降人工骨格をベースにした生体パーツになってる。そして、ＥＰ０４は俺用の型式番号で右腕が完成してから俺の細胞を培養してすぐに作ったのがそれだ。クローンに似て否なる魂だけを持たない

人の器。つまり、人形(ひとがた)だな」
ただ眠っているように見えるが呼吸も脈拍もなく、試しに手袋を外して顔に触れてみれば冷たい。
エリザベスが湊に贈ったマフラー、正式名称〝夜天の棺〟は生き物を入れる事が出来ないので、棺桶に入っていようと収納されていたソレは生き物ではなくモノなのは確実だ。
これでどうやってアイギスたちの肉体として機能するようになるのかは不明だが、湊ならこれに命を吹き込む事が可能なのだろう。
青年が彼そっくりの死体モドキをニンギョウならぬヒトガタと称して持ってきたのには驚いたが、その分楽しい依頼になったとエリザベスは満足気な笑みを浮かべ、蓋を閉じた棺桶に指で光の文字を書き込むとペルソナ全書の空きページへ封印した。
封印しておけば湊のマフラー同様時間凍結され腐る事も朽ちる事もなくなる。すぐにはこれといった用途が思い付かないが、ただ土へと還すのは勿体ない気がして、エリザベスは後々何か使う方法を考えようと思いながら口を開く。
「ひとまず研究の成功に心からの祝辞を述べさせて頂きます。おめでとうございます。これで貴方の大切な方たちは人としての肉体を得て、性交だけでなく妊娠と出産も可能という訳ですね」
「それは相手がいる事が前提だけどな。まぁ、完成したのは俺の細胞ベースだけだ。これから二人の人格ベースになった者の細胞を使っての生成が始まるが、そっちも同じように出来るかどうかは分からないさ」
湊の細胞をベースとしたフルオーダーが完成した事で、研究は既に次へと移っており、今はラビリスの人格モデルである間宮聖の細胞と血液を使って、ラビリスの型式であるＥＰ０５シリーズの製作に取り掛かっている。
生物としては破格の強度と適応性を持った湊の細胞なら上手くいったが、ラビリスたちの場合は元の細胞の強度に心配が残るので開発は難航するだろう。
そのため、それと並行して湊の細胞を使って兵器としての機能を残

した生体パーツの研究も進められ、そちらはＥＰ０６シリーズとして扱われている。
　湊の細胞がベースなのでＥＰ０４の延長として扱ってもいいのではという意見もあったが、コンセプトが異なる上に、もし生体兵器をＥＰ０４としてしまえば、ラビリスのボディ完成後に作るアイギスの型式がＥＰ０６になってしまう。
　用意した戸籍上は汐見アイギスという名前だが、本来の名前が七式アイギスなのにそれでは紛らわしいと、割り振る型式の調節もあってラビリスがＥＰ０５、アイギスがＥＰ０７になるのは既に決定事項だった。
　黄昏の羽根というオーパーツの力を借りながらも、大切な人の幸せのために頑張る今の青年の姿は、力を求めて血生臭い世界で生きていた頃よりも眩しく映る。
　クスリと小さく笑ったエリザベスは、ペルソナ全書から栞を引き抜くと指でなぞり、彼に言葉を返しながら栞の中に入れておいた小さな長方形の箱を取り出した。
「研究の成功をお祈りしております。さて、求めていた物とは異なりますが、大変興味深い物でしたので依頼は達成とさせていただきます。ご協力ありがとうございました。今回は達成報酬として少し変わった物を用意させて頂きました。どうぞお受け取りください」
　差し出された箱を受け取った湊は、まずトラップの類いが仕込まれていないかを確認する。
　三姉弟のうち姉二人はよく弟を可愛がって遊んでいるので、同じノリでたまにトラップが仕込まれている事があるのだ。
　そういった物は直死の魔眼で見れば一発で見抜け、さらに存在を殺して解除も出来る。よって、左眼で見て何もないと確かめた湊は、箱の蓋を開けて中身を取り出した。
「……度の入ってない眼鏡にしか見えないが」
　入っていたのはハーフリムのシルバーフレーム眼鏡。少々インテリ臭いデザインだが、顔の整っている湊ならば知的さがアップしよく似合うだろう。

けれど、いくら度が入っていなくてかけても問題ないとは言え、眼鏡など激しく動けばずれてしまい人助けやシャドウ狩りでよく動く湊には不要な物だ。
せっかく貰った物だが、このままではマフラーの肥やしにするしかないなと思っていれば、近付いて来たエリザベスが眼鏡を取り出し、少し下げ気味にかけると上目使いで報酬の説明をしてくる。
「この眼鏡はレンズに特殊な細工が施されており、八雲様の右眼の力を遮断する事が可能になっています。もっとも、光を介して対象に命令を送っていると仮定して作った物ですから、前提条件が間違っていれば効果はありませんのでご注意ください」
言いながら眼鏡を外すとエリザベスはどうぞと返して来た。
現実離れした不思議な美しさを持つだけに眼鏡姿も似合っていたが、別に湊に眼鏡属性など特定のフェチズムは存在しない。
故に、説明を聞いてそうなのかと半信半疑のまま受け取り、付けていた眼帯を外して眼鏡をかける前に一先ず力が発動するかを確認する事にした。
普段湊が座っている位置から見て右側に姉妹二人がおり、湊は現在彼女たちの前にいる。報酬をくれた者に暗示をかけるのは気が引けるので、ならば対象は一人しかいないと紫水晶色の妖しい輝きを見せる右眼を顔ごと左に向けた。
「その場でスクワットしろ」
「わ、わわっ!?」
湊の右眼は暗示の魔眼といって命令を送り相手の脳に干渉する事が出来る。暗示などと呼ばれてはいるが、本来は声を発する事なく暗示や命令に幻覚など様々な効果を対象に掛ける事が可能なのだ。
その効果は強大な力を持つ力の管理者にも有効で、突然命令されたテオドアは自分の意志に反して身体が勝手にスクワットを始めてしまう。
これで効果が未だ健在な事は分かったが、強力すぎる魔眼の力をコントロール出来ないからこそ湊は封じており、今の命令も狙った場所より広い範囲で飛んでいたようで、湊と姉妹たちの視界の端でイゴー

ルもスクワットをしていた。
「あら、主も健康を気にしていらしたのですか？」
「如何に精巧に出来ていても人形の身体では鍛えても無意味だと思いますが」
「はぁ……お客人、術を解いてくださいますかな？」
主と呼びながらも一切敬う気のない姉妹にイゴールは渋い顔を浮かべ、深いため息を吐いてから湊に命令の解除を頼んできた。
不気味な老人が部屋の真ん中でスクワットをしているなどシュール過ぎるため、相手の願いを聞いた湊はテオドアの方も含めてすぐに解いてやる。
弱い命令だったので別に湊が解かなくても少しすれば自由になっただろうが、視界の中で二人もスクワットをしていれば鬱陶しいため、とりあえず邪魔なものが消えてから湊は眼鏡をかけて魔眼封じの効果を試してみた。
「三回手を叩け」
「……フゥ、今回は大丈夫なようです」
「テオ、そういうときはノリを合わせて、暗示にかからずとも手を叩くモノですよ」
魔眼封じのおかげか暗示にかからずに済んだテオドアが安堵の息を吐けば、エリザベスが失望した表情でやれやれと頭を押さえる。
そんな事をされると検証にならないのでしなくていいが、真面目なテオドアはそういう物なのかと驚き、湊に「すみません」と謝罪してきた。
世間知らず故の反応にしても、散々からかわれているのだから少しは学習するべきだが、仮に分かっていても姉二人は理不尽な事を多々言ってくる。
とすれば、結果だけ見れば結局何も変わらないので、不遇な扱いを受けるテオドアに湊は心の中で同情しつつ、魔眼封じの効果が実証されて満足そうな女性の言葉に耳を傾けた。
「どうやら現段階では成功とみてよろしいようですね。貴重な素材を惜しげもなく使用して作らせた甲斐がありました。さて、魔眼封じの

効果が証明されたところで、次なる依頼をお出ししても宜しいでしょうか？」
「ああ、とりあえず聞こう」
何かをたくらむ様な含みのある笑みを浮かべている時点で嫌な予感しかしない。
けれど、彼女やその姉弟の依頼は魔眼封じの眼鏡の様な特殊なアイテムを貰える事もあるので、湊は受けるかどうかは聞いてから決めると予防線を張っておくことにした。
いくら予防線を張ろうとエリザベスが強引に受けさせれば無駄な訳だが、その後口を開いた彼女が語った内容に湊は随分と驚かされるのだった。
昼――スイーツバイキング〝ぽっぷ・しゅが～〟
高校最初の夏休みも残り一週間ほど。部活の大会も終わって少しのんびり休みを過ごせるようになった頃、ターニャを除く部活の女子メンバーたちが集まって女子会を開いていた。
なぜターニャだけいないのかというと、学校が留学生向けに行事をいくつか企画しており、今日はそちらに美鶴と一緒に参加して旧日本家屋を見に行っているのだ。
別に一般の生徒も申し込みをしていればバスや入場料など込み込み三千円で参加できたが、旧日本家屋にそれほど興味がないメンバーは、湊の応援などに参加して夏休み前半が忙しかった分、後半は少しゆっくりして過ごそうと思っていた。
そのため、今日は女子に優しい弱めに冷房の効いたスイーツバイキングに集まり、軽食も食べつつ八十分間で心ゆくまでスイーツを堪能しようとここにいた。
現在の時刻は一時過ぎ、入店してから既に五十分は経過しているが、甘い口を変えようとパスタを取ってきたゆかりは、スプーンとフォークでパスタを巻いて手を動かしながらも顔は他の者たちの方へ向けて口を開く。
「なんかさぁ、高校入学組の知り合った子に、有里君って汐見さんと付き合ってるの？　ってよく訊かれるんだよね」

『ああ……』
汐見さんとはラビリスのことだ。一緒にバイクに乗って登下校していたりする姿をみて、ゆかりに質問した生徒もきっと勘違いしたのだろう。
他の者たちは即座にそれを理解して、訊かれたときにはとても複雑な気持ちになったのだろうなと少女に同情する。
名前の挙がったラビリス本人は意味をよく理解していないらしいが、ラビリスがチョコフォンデュのマシュマロを口に運びながら首をかしげていれば、隣の席から軽薄そうな少年の声が飛んできた。
「オレっちもそういうの聞かれた事あるわ。高校入学で寮生になったやつなんだけどさ。有里君って一緒にいる子の誰と付き合ってんのって。空気の読めるオレは勿論機転を利かせて、前髪がペアルックな桐条先輩だって言っておいたけどな」
軽薄そうな声の主の名は伊織順平。友近、宮本、渡邊の三人と一緒にショッピングモール〝ミルキーウェイ〟に来ていて、偶然出会ったゆかりたちが食事に行くと言ったら付いて来たのだ。
ゆかりとチドリが嫌そうな顔をしても、席は別にするからと当たり前の言って食い下がり現在は通路を挟んで隣の席で食事をしている。
そんな男が女子の会話を盗み聞きして会話に入ってくるだけでなく、機転を利かせた結果湊が心の底から嫌がるような事を勝手に広めていたと聞き、チドリはケーキ用のフォークをダーツのように投げて順平の手の甲に刺した。
「いっでぇっ!? ちょ、チドリンってば急になにしてんのよマジで?!
血ぃ出ちゃったっしょ!」
「……勝手に話に入って来ないで。あと、今後湊と桐条美鶴が付き合ってるってデマを流したら、今みたいにフォークで首を狙うから」
複数置いてあったのか投げた物と同じフォークを手に持ちチドリが脅しをかける。
手の甲からじんわりと滲んできた血を手拭きで押さえていた順平は、チドリの放つプレッシャーに怯え、何度も首を縦に振ると彼女から顔を逸らして深いため息を吐いた。

友人のそんな姿に男子らは思わず苦笑し、元気付けるためのフォローの意味も込めて友近が話しかける。
「今のは伊織が悪いって。機転の方も訳分かんねぇし」
「いや、あの二人見てれば絶対ないって分かるじゃん？　そしたら、全員フリーってことかって勝手に納得して、フリーならアプローチしよって思うやつも出てくるかもしれないだろ。んで、女子たちのモテ期到来って訳よ」
「到来していらないっつの。指輪付けてるのに告白してくる男子がいると思ったらあんたが犯人か！」
校則では派手な化粧や装飾品は禁止されているが、湊がゆかりに送った指輪はシンプルなデザインであるため違反にはならない。
校則上認められている範囲内のペアリングによって、自分には彼氏がいますというアピールになり、告白やラブレターなど中学時代に散々経験した面倒を回避できるはずだった。
しかし、右手薬指に指輪をはめているというのに、ゆかりは高校に入学してから複数の男子から告白されていた。
その度に付き合ってる人がいるからと断ってきたが、まさか順平のせいで指輪が虫除け用のフェイクと認識されていたとは思わず、ゆかりは腰を浮かせかけふざけんなと激しく怒る。
それに対し順平がヘラヘラとした様子でゴメンと謝れば、同じテーブルについていた宮本が一人だけ事情を知らなかった事で何やらショックを受けていた。
「岳羽さん、指輪なんかしてたのか。……え？　ってことは、誰かと付き合ってたのか」
『え……』
改めてゆかりの手を見れば確かに綺麗なリングが光っていた。それは即ち、誰かと付き合っているという事で、知って残念そうな顔をする彼に、逆に他の者たちが驚かされる。
これはもしかしなくてもそういう事だったのかと気付けば、ゆかりがどんな反応をすればいいのか分からず困った表情を浮かべ、場に微妙な空気が漂いかけたところを友近や風花が焦りながらもフォロー

をいれた。
「あ、あー、宮本はほら高校入学組だからさ。友達とかクラスメイトで誰が恋人持ちかって知らなかったんだよ」
「そ、それならしょうがないよね。うん、人の手とかちゃんと見ることってあんまりないし」
留学生のターニャを除けば正規部員の女子は五人。その中で唯一彼氏持ちのゆかりを好きになるとは運がない。
別に他の者だったら付き合えたという訳ではないし、チドリとラビリスには湊が、美紀には真田というガーディアンが存在するので、下手をすれば彼氏持ちのゆかり以上に難易度が高かった可能性もあるものの、高校最初の夏休みに告白せずに失恋することはなかったはずだ。
出会ってからの期間が短いからか、見ていると深刻なダメージは負っていないようだが、男子たちがご愁傷様と宮本に心の中で同情していれば、パンケーキを頬張りながら宮本はゆかりに話しかけた。
「でも、彼氏いるならそっちと遊びに行ったりしなくていいのか？」
「ま、まぁ、たまには一緒に買い物行ったりもしてるから」
「ふーん。あ、じゃあ、そっちの部活って有里と岳羽さんだけ恋人持ちなんだな」
知らなかったと純粋に感心している少年は、傷心しながらも自分から話題に乗って来る。
ある意味で大物だと男子だけでなく風花や美紀も思わずすごいと驚き。中学からいる者以外には秘密にしているはずだというのに、湊に彼女がいると気付いていた事にはさらに驚愕した。
ただ、微妙に言い方がおかしかったので、恋人持ちの二人がまさに恋人同士だとは気付いていないらしい。
知らない方が幸せなこともあるが、そのまま勘違いさせておくと知ったときにダメージが大きくなる。なので、順平は直接言う事は出来ないが何とか気付けと、曖昧な言葉で彼が気付く様に仕向けようとした。
「確かにそうだけど、二人だけっつーか二人がっつーか」

「あいつ留学経験あるからかグローバルだな。俺、外国人とか挨拶だけでもテンパるし」
「いや、外国人ってどっから出てきたんだよ。話の流れが訳分かんねぇよ」
「どっからって、ほら窓から見えるだろ。珍しく眼鏡かけてるけどあの恋人っぽい人と一緒に歩いてるの有里だろ？」
言いながら宮本はゆかりたちの隣の窓を見て、外を歩いていた通行人を指差した。
まさかの言葉に他の者たちが一斉に窓の外を見れば、そこには確かに仕事中とは異なる眼鏡をかけた湊が歩いており、隣には彼に引けを取らない美しさを持った女性が並んで歩いている。
光に煌めく銀髪、レンズの大きい黒縁のボストン型眼鏡、グレーのノースリーブニットワンピに黒タイツ。眼鏡以外に小物のないシンプルなファッションだが、それだけに女性本人のルックスの良さが目立っている。
隣を歩く青年も右眼は前髪で隠れているが、普段はかけない眼鏡をかけて余計にファッショナブルに見え、美男美女過ぎて周囲から浮いている事もあり、まるで芸能人がお忍びでデートをしているようであった。
カフェの持ち帰り用カップから伸びるストローに口を付けながら、時折笑って湊に話しかけている女性をみて、渡邊はラビリスと会ったときよりも衝撃的だと立ち上がる。
「おおっ、激マブじゃん！　あれ誰？　会長ってば交友関係マジで広いな！」
「あー、普通の服装して眼鏡かけてはるけどエリザベスさんやね。あの人って私服も着たりするんや」
「一応、私やラビリスも知ってる相手よ。貴方たちに説明するならマフラーの贈り主って言えばいいかしら」
中学二年で同じクラスだった者は覚えているはず。暗にそう言ってチドリがエリザベスを紹介すれば、
「皆、もうお腹いっぱいだよね？　じゃあ、そろそろ出て少し歩こう

か」
ジッと窓の外の二人を見ていたゆかりが笑顔で皆に告げた。
＊＊＊
不気味な巨大人形を持ってこいという依頼を達成した湊。そんな彼にエリザベスが出した次の依頼は、外の世界を案内して欲しいというこれまでとは趣の異なるものであった。
それ自体は大して難しくないので湊も受領したが、ベルベットルームの制服で外を歩けば目立つので、湊のマフラーに入っていた中から適当にコーディネートし、二人はこれといった目的もなく現実世界へとやってきた。
何かが見たい訳でも、何かがやりたい訳でもなく。本当にただ外に行ってみたいだけ。そんな彼女をどう案内すべきか考えて、湊はとりあえず何でもあるショッピングモールへ連れてきたのだ。
「食べ物であるきなこを飲み物にするとは……食に貪欲な日本らしい一品でございますね。味も大変素晴らしく大満足でございます」
施設に入ってすぐのカフェで〝黒蜜きなこ抹茶ラテ〟というのぼりを発見した彼女は、きなこ好きとして試さずにいられないと買いに行った。
湊も何か飲むか聞かれたが、特に飲みたい気分ではなかったのでエリザベスの分を注文し、テイクアウトで施設内を回りながら飲んでいる。
そんな二人の周りはやけに騒がしく、また大勢から見られているような気もするが、周囲の事などどうでもいいと思える二人は、気にせず進みながら次はどこへ行こうか話し合う。
「私服を買っておいた方がいいんじゃないか。外に連れていくのはいいが、流石にあの目立つ制服と並んで歩くのは嫌だぞ」
「私はとくに気になりませんし、八雲様にいただいたこの服を気に入っております。さぞファッションについて勉強なさったのでしょう。美に五月蝿い姉上も認めた素晴らしいコーディネートでございます。よっ、最高のコーディネーター！」
「ノリについていけないし、変な呼び方をするな。というか、そっちま

で魔眼封じをかけるとは思っていなかったから、服を選んだ後に言われて選び直すはめになったがな」
歌舞伎の大向うのように掛け声を言ったかと思えば、青年とそう歳の変わらぬ少女のように微笑みくるりと回って見せるエリザベス。湊に貰った服が本当に気に入っているようだが、彼女が着ている服は実は選び直したものだった。
最初に選んだのは深窓の令嬢のような、普段英恵が着ている物に近い雰囲気のものだったが、エリザベスは後出しで魔眼封じの眼鏡をかけると告げて来て、その眼鏡に合う服を選び直す事になったのである。
何故、魔眼を持たぬ彼女が魔眼封じをかけようと思ったのか。それは湊に贈った魔眼封じが完全ではないため、自分もかけていればそれぞれのレンズで力を遮断し、暴発の暗示をかけられるリスクをより減らせると考えたからだ。
今の湊は眼帯を外していて両目が露出しており、前髪で右眼は隠れているものの魔眼封じの奥には紫水晶色の瞳が光っている。
つまり、魔眼封じで抑え切れなければ暗示が暴発してもおかしくない状態で、湊本人は快適さよりも安全性を取りたかったが、魔眼封じのテストも兼ねた依頼と言われ大人しく従っていた。
そんな理由で揃って伊達眼鏡をかけている二人は、ときどき商品を見に店に入りながら会話をする。
「八雲様と会ってもうすぐ九年になりますね。さらに来年には十年という節目を迎えます。ベルベットルームと現実では時の流れが異なりますが、あの部屋の住人以外でこれだけ長く関わった方は初めてです」
雑貨屋に置かれていた太鼓を叩く猿の人形を手に取り、どこか感慨深そうにエリザベスは話す。彼女にとって湊は初めての客という訳ではない。これまで担当してきた客人は大人ばかりだったが、男も女もいて、国籍もバラバラだった。
けれど、ほとんどの者は一年もすれば旅路を終え、手助けを必要とせず去って行ったのだ。

中には旅路の途中で命を落とした者もいるし、手助けをしたにもかかわらず失敗して破滅に向かった者もいる。
一人として同じ結末を迎えた者はいなかったが、これほど長い旅路のお供になることなど初めてで、部屋に初めてきた頃の青年の姿を思い出してエリザベスは小さく微笑む。
「戦いが始まれば今よりも忙しくなる事でしょう。私共も出来得る限りお客様を手助けするつもりです。ですが、戦いが終わればお客様が部屋を訪れる理由はなくなります。影時間を消し平和を取り戻すための旅路ですから、全てを終えたあとは訪れるべきではないと言った方が正しいでしょうか」
湊の戦いはこれからが本番だ。これまで戦って力を付けてきたのは、十年の時を経て復活するデスの欠片たちを全て倒し、封印から解き放たれたデスが呼びよせるニュクスを消すためだ。
ファルロスの話によればニュクスは倒せないし、消し去る事も本来は不可能。しかし、湊には神をも殺す眼がある。
実際の問題点はニュクスを殺せば生物も滅ぶという事なのだが、まだ猶予は残っているので心配はしていない。
ただ、その戦いが終われば湊がベルベットルームを訪れる必要はなくなり、基本的に外に出る事のないエリザベスは湊と別れを告げる事になる。
本当の戦いに向けて万全のサポートをするという意気込みと同時に、これが終わればやってくる別れにエリザベスも複雑な想いを抱いていた。
「正直に申しますと八雲様と契約を結んだ事を今になって後悔しております。契約を果たすまで死ぬ事の出来ぬ呪い。それは……全ての契約を果たし終えた貴方に死が訪れるとも取れますから」
店をひやかすのもそこそこに、エリザベスは人の少ない静かな方を目指し歩いてゆく。
後悔しているとは言ったが、別に湊との間に契約という結びつきが出来る事を嫌がっている訳ではない。
契約がなくともコミュニティが発生しているのだから、二人の間に

強さの違いはあれど繋がりが出来る事は必然だったと言える。
けれど、当時は強い結びつきの方がいいだろうと考えた契約が、今になって彼の旅路の終わりを暗示しているようで、彼との別れが永遠の物になってしまうのではないかと不安に駆られる。
湊が生きていられるのは封印されたデスが彼を蘇生させるから。が、デスの蘇生も完全という訳ではなく、首を刎ねられたり頭に銃弾を撃ち込まれれば湊も死ぬ。
死なないのではなく、死にづらいというのが厄介なもので、本人も自分は死なないからと色々な無茶に走る事が多い。
だからこそ、余計に心配になってしまうと、エリザベスはベルベットルームの住人としてではなく、彼女個人としての言葉を湊に送る。
「ご自愛なさいませ。貴方は貴方が思っておられる以上に多くの者から想われています。時がくれば八雲様は振り返る事をお止めになり前だけ見て進み続けるでしょう。ですから、猶予のある今に伝えておこうと思いました」
周りが止めても彼は聞かない。そんな事はエリザベスも知っている。
だからこそ、やめろというのではなく、あくまで気に留めておいてくれと彼女は言った。
言う事は聞かないが話は聞く彼にはこちらの方が効果がある。長い付き合いによって彼の性格を理解しているエリザベスが、目線の違う彼を真っ直ぐ見上げれば、彼女がそんな事を言ってくるとは思わず。湊は意外そうな顔をしてから小さく笑った。
「……ありがとう」
「いえ。では、もうしばらくこの場所の案内をお願い出来ますか？」
「ああ。ただ、先に少し遅めの昼でも食べてから回ろう。そこそこ美味しいステーキハウスがあってな。昼からがっつりでも大丈夫だろ？」
「はい、ご案内よろしくお願いいたします」
湊に負けず劣らずエリザベスもかなりの健啖家だ。彼女なら湊が好きなだけ食べてもついてこれる。

別に常人と同じ量を食べるだけでも問題はないが、たまには満腹まで食べていいだろう。並んで歩く二人は湊がエスコートする形で食事へと向かった。

＊＊＊

人混みに紛れつつ物陰からこっそり覗いていた一同。二人が見つめ合ったときにはキスでもするんじゃないかとハラハラドキドキしたが、彼らの期待通りとはならず二人は再び歩き出した。

このままでは見失ってしまうので、彼らは相手の歩くペースに合わせてばれない距離を維持しながら後を追おうとする。

これで本当に浮気現場を目撃する事になれば洒落にならないが、尾行を続けていると先ほどの二人を見ていたゆかりが小さな声で喋り出した。

「なに話してたのか聞こえなかったけどさ。なんかあの人、有里君のことすっごく分かってるって感じだった」

「……私と会う前からの知り合いだもの。両親の事故のすぐ後に会ったらしいわ」

昔からの知り合いだろうと、家族以外で自分以上に恋人の事を知っている者がいると悔しい。

遠目から見ているだけで相手が湊の事を憎からず思っているのは女の勘で分かり、湊の方も部活メンバーといるときよりも自然体で接しているようで、彼女も湊が言っていた何を犠牲にしてでも守りたい者の一人かそれに近い人物なのかと考えてしまう。

チドリとラビリスがそうだと聞いていたので、最初に聞いた三人のあと一人は先日聞いたラビリスの妹だとばかり思っていたが、そうでなくても現実離れした美貌を持った女性がそれに近い位置ならば恋人の立場が危ういとゆかりは思ってしまった。

ただ、それは出会ってからの期間の差というより、いかに湊の事を理解できているかの差だと冷静に分析し、少女は肩を落として深いため息を吐いた。

「はぁ……やっぱり、私って全然有里君のこと知らないなぁ。話題として出さなかったのもあるけど、いくらなんでも知らな過ぎるのはま

ずいよね」
「事故の話が出る事を考えると聞き辛いですしね。そういった葛藤は当然だと思います」
知りたいけど聞き辛い。そんなジレンマに悩むゆかりを美紀が当然だと慰める。
これまでゆかりが彼の過去について深く訊かなかったのは、事故や彼の経歴にどうしても触れてしまうからだ。
彼の身体に刻まれた傷跡から一般人では想像も出来ない世界で生きてきた事は分かる。そこに大切な人を失った事も加わるとなれば、いくら本人が気にしないと言っても尋ねる方はどうしても躊躇してしまう。
それなら以前チドリに連れて行ってもらった喫茶店のマスターたちにもう一度話を聞く方が楽だが、聞けば答えるというのに他の者から情報を集めれば、まるで嗅ぎまわられているようで本人もいい気分はしないだろう。
知りたいのは自分の気持ちの問題でしかないだけに、どうするべきかとゆかりが深く悩んでいれば、尾行していた二人が通路を曲がって行ってしまった事で、順平が遅れている女子たちに声をかけて報せた。
「おっと、曲がって行っちゃったぞ！　お喋りもいいけどターゲットを見失わないようにダーッシュ！」
夏休みで人が多いため見失うと再び見つけるのは難しい。そのため急げと言って全員が小走りで後を追えば、曲がった先に追っていたターゲットの姿はなかった。
あれだけ目立つ容姿の二人を見逃すのはあり得ない。湊の方は長身なので余計に分かり易く、その青年もいないとなれば二人はどこかの店に入ってしまったのかもしれない。
「っていねーし！　岳羽さん達が喋って遅れたせいで見失っちったじゃん」
せっかく楽しくなってきたところだったのに、尾行を提案してきた当人たちのせいで見失ったと渡邊は口を尖がらせて不満を露わにす

る。
だが、
「いえ、ちゃんと待っておりましたからご心配なく」
「あ、わざわざありがとうございます……って、フォアーッ!?」
そのとき近くにあった自販機の影から声が飛んできて、見ればターゲットの二人が並んで立っていたため、渡邊は見つかってしまったと驚きで飛び退いた。
エリザベスの方は興味深そうに薄い笑みを浮かべているが、湊の方は暇人めと言いたそうな呆れ顔。恋人以外の女性と二人で歩いていた湊にも問題はあるが、尾行していたという負い目があるだけにほとんどの者は気まずそうに視線を泳がせる。
すると、前髪で右眼が完全に隠れながらも珍しく眼鏡をかけている湊が口を開いた。
「店から急いで出てきたから合流してくるものだと思っていたのに、一定の距離を開けて近付いて来ないからな」
「あまりに稚拙な尾行術を微笑ましくも思いましたが、皆様方の貴重な休日を無駄に過ごさせるのも忍びなかったため、こうして曲がり角からは死角となる自動販売機の影で待っていた次第でございます」
『……ごめんなさい』
まさか尾行が店を出た時点からばれていたとは思わず、おまけに気を遣って待っていてくれたと聞かされた一同は素直に謝った。
しかし、唯一人謝らなかった赤髪の少女だけは、相手を知っている事もあり率直な疑問を尋ねる。
「なんで揃って眼鏡かけてるの?」
「性能テストのためだ。案内する間はかけて調子を確かめる約束でな」
「レンズが特殊な素材で作られているため、特定の光を遮断する構造となっております。しかし、まだ研究段階ですので実地訓練も兼ねてこちらを案内して頂いておりました」
ペアルックと言えばペアルックだが、それなりに真面目な理由で掛けていたりする。

なので、恥ずかしくないのかという視線を向けてくるチドリに、湊が邪推するのはやめろと暗に返していれば、二人の関係が掴めずもやもやしていたゆかりが思いきってエリザベスに尋ねた。
「あ、あの、デートしてたんじゃないんですか？」
「デート？　ああ、フフッ、なるほど。そのような見方もございますね。ですが、本日はこちらに不慣れな私の案内をして頂いております。それをデートと呼ぶには些か色気に欠けるかと」
彼とのデートは中々惹かれるものがあるが、今日のところは純粋に外の世界の案内だけだ。
ゆかりが湊に特別な感情を向けていることに気付いたエリザベスは、少女の幼い嫉妬心からくる不安を取り除くべく、優しい微笑を浮かべて安心していいと否定した。
それを聞いたゆかりは少しほっとしたようだが、浮世離れした雰囲気の美人と彼氏が一緒にいるのはやはり複雑なものがある。
以前言っていた最重要の三人の一人ならばしょうがないが、とりあえずその疑問も解消しておこうと、ゆかりは続けて湊の方へ向き直ると尋ねた。
「ねえ、この人も大切な人の一人？」
「まぁ、大切は大切だが前に言った三人の最後はラビリスの妹だぞ」
「あ、やっぱりそっちなんだ」
質問が少々大雑把かもしれないと思ったが、湊はちゃんと意図を読んで答えてくれた。そして、自分の予想通りだったことで、家族であるチドリとラビリス姉妹が大切ならちょっと安心だと湊のせいで大きくなった胸を撫で下ろす。
ゆかりのそんな様子に他の女子たちは良かったねと笑顔を見せ、ゆかりと湊の関係を知らない宮本以外の男子も同じように温かい視線を送る。
しかし、二人が浮気の関係でないとしたら出会いも含めて気になり出し、どうしたらこんな美人と出会えるのかという今後の参考のためも含め、渡邊が代表してエリザベスと湊の関係について踏み込んで訊く。

「あのお会長とどういったご関係なんですか？」
「どういった関係か……。いざ考えてみると一言で答えるの難しいですね。私たちの関係はどう言い表すのが適正でしょうか？」
「……なんだろうな。ビジネスパートナーってほどドライではないし、かといって知人というのも変だ。一応、師弟ではあるけどそれもな」
ベルベットルームの客と担当者。客観的に見ればそれだけでしかないが、二人はお互いにそんな仕事の付き合いというドライな間柄ではないと認識している。
今日のこれとて依頼という名目ではあるが、湊に案内して貰いながら一緒に休日を過ごしているだけだ。先ほどはデートという認識はないと答えたが、そう見えると言われれば完全に否定する事は出来ない。
一応、今も夢を通じて戦闘訓練を受けているので、湊から見ればエリザベスたちはペルソナ戦闘の師匠でもある。
ただ、師弟という意識は男女の関係以上にないため、二人が揃って答えに悩んでいると順平が他の者が一番聞きたかった事をズバリ聞いた。
「あー、男女のそういうんじゃねぇの？」
「出会ったのはこの方がまだ幼い頃でしたから」
「会った頃は普通に抱き上げられていたしな。最初は歳の離れた姉ってのが一番近かったかもしれない」
遠回しに否定する二人だが、湊の言葉を聞いたチドリを除く一同は本気で驚いた。
相手は雰囲気も含めて年上のようだが、どことなく幼さも残っているようにも見えるので、年齢は分かり辛いがそこまで歳が離れているようには見えない。
だというのに、幼い頃に湊が彼女に抱き上げられていたとなれば、少なくとも十歳は離れている様な印象を持った。
実際のところ二次性徴を迎えた小学六年生の女子なら、小学一年生の男子を抱き上げるくらいは出来る。

そのため五つも離れていない可能性も存在するのだが、二人の言葉を聞いていると一回り違うくらいはありそうで、驚いた美紀は失礼だとは承知しながらもエリザベスに年齢を尋ねた。
「え、あのすみませんがお幾つですか？」
「フフッ、女性にそういった事を尋ねるのはマナー違反かと。ただ、幼き日のこの方は少女のようにとても軽かったので、抱き上げられたのはそういった理由もございます」
エリザベスの言葉を聞いた女子たちは、以前チドリに見せてもらった少女の格好をした湊を思い出して納得する。
チドリと並んでも違和感がない美少女っぷりだったので、確かにあんな子どもならエリザベスの華奢な腕でも抱き上げる事は出来そうだった。
そして、
「まぁ、エリザベスの事はいいだろ。それで、お前らが気にするような展開はないんだが、もう行ってもいいか？　こっちは遅い昼食を食べに行くところなんだ」
女子たちが納得してくれたなら話はそろそろいいかと、右手で眼鏡の位置を直しながら湊がこれからの予定を皆に伝えた。
湊は夜勤明けにベルベットルームに向かってそのまま来ている。時刻は既に三時になろうというところなので、昼ご飯を食べておきたいという彼の気持ちも分かり全員が頷いて返した。
「では、失礼いたします。皆様もよい休日を」
別れを告げて去って行く二人を一同は見送る。いくら目立つ二人でも距離が開けば人混みに紛れて見えなくなった。
「……なんか雰囲気も含めて不思議な人だったね」
その場に残ったままのゆかりがぽつりとこぼせば他の者も同意し頷く。
尾行をやめたら途端にやる事がなくなったと気が抜けてしまい。再び追いかけてもばれそうなのでもう一度尾行する気にはなれず、かといって解散するには時間が早い。
さてどうするかと悩んだ末、気晴らしにカラオケでも行くかという

ことになった。そして、全員揃ってカラオケ屋に向かうと、部屋は別々でという女子たちの無慈悲な言葉に男子たちは涙を流した。

第百八十三話　霊園での出会い

９月２５日（木）
午前――霊園

残暑も和らぎ涼しくなった風で秋の訪れを感じる九月下旬。岳羽ゆかりは母と一緒に今年も父親の墓参りにやってきていた。

母からは学校を休む必要はないと言われているが、まだまだ父親の死の真相を確かめる方法が見つかっていないだけに、墓参りくらいはちゃんとやりたいと思って来ている。

桐条グループと接点を持って真相に近付けば命日前後の休日に来るかもしれないが、十年という節目を迎える前の年の時点で何も分かっていない以上、このまま分からずに終わるかもしれないという不安も湧いてくる。

ただ、父親への近況報告にやってきた今日だけは、そういった父を心配させるようなことは考えずに学校での暮らしや友人に彼氏といった者たちの事を話そうと思っていた。

掃除の道具を持って二人が墓の前に到着すると、今年はまだ誰も来ていないようで枯れた花を広げた新聞に置き、水をかけ歯ブラシなどを使って彫られた文字の部分もしっかりと綺麗にしていく。

「はぁ……やっぱり墓石の掃除って大変だね。去年は先に誰かがやってくれてたけど上手な人っているんだね」

「コツもあるんでしょうけど一番は根気よ。綺麗になってねって思って掃除するの」

そこで眠る者の事を悼みしっかりと想いながら汚れを落として行く。綺麗にするコツを知らないのなら、そうすれば綺麗になるとゆかりの母である梨沙子は話すが、寮生活で自分の部屋を軽く掃除する程度のゆかりとしては精神論よりコツの方が聞きたかった。

とはいえ、いくら愚痴ろうと手を動かさない事には綺麗にならない。父の眠る場所は綺麗でいて欲しいため、悪戦苦闘しながらも頑張り続けていれば、手向ける花の茎を切って長さを合わせていた梨沙子が唐突に話題を振ってくる。

「ねえ、ゆかり。掃除しながら聞くのもなんだけど、いつになったら有里君を連れて来てくれるの？」
「ぶふぉっ!?　ちょ、お父さんの前でやめてよ！」
　別の場所なら聞いてもいいという訳ではなく、むしろ聞くなというのがゆかりの正直な気持ちだ。
　けれど、聞くのならせめて場所を選んで欲しい。父親の墓前だと恥ずかしさがどうしても出てしまうから。
「お父さんもきっと心配してると思うの。浮いた話のなかったあなたの近況も聞きたいだろうし。相手が皇子となれば苦労もあるんでしょ？」
「いや、そりゃ自由にならない部分もあるけど、別に学校に行けば普通に会えるよ」
　梨沙子の言う通りゆかりにはずっと浮いた話がなかった。ルックスは非常に整っており、性格も特別悪いという訳でもない。なのに恋愛話がないとなると、周囲の人間とちゃんとやれているのかと心配になって当然だ。
　ただ、別に浮いた話がなかった訳ではなく、告白は何度もされていたが断っていたから母に話していなかったのである。
　今も有名になってしまった湊との関係をマスコミに撮られないよう注意しているが、話さないだけで交際はそれなりに順調だと少女は返した。
　しかし、ゆかりが面倒臭そうに受け答えしていたため、梨沙子は心配した困り顔をして娘の交際に少しだけ口を出す。
「親として言っておくけど、若さにまかせて暴走しちゃダメよ。男の子はまだ結婚出来ないんだからね」
「なっ、こんな場所でする話じゃないでしょーが！」
「お参りが終わったらお昼ご飯までしか一緒にいないじゃない。人がいっぱいいる場所じゃ彼の事は話せないし」
　母の言葉にゆかりは顔を真っ赤にしてＴＰＯを弁えろと返す。
　そこには図星を突かれた動揺と照れも混じっているが、梨沙子が遠回しに避妊だけはしっかりしろと言ってきたのだから、何で既に一線

を越えているとばれているのか分からない少女の反応も当然だ。
けれど、梨沙子も別に本当にそういったところまで進んでいると確信があった訳ではない。虫の知らせか女の勘か、湊が大人っぽい雰囲気だからというのもあってカマをかけただけであった。
それもゆかりの動揺しまくりの反応で確信に変わるが、親としては高校生になったばかりの娘が既に純潔を捧げていると聞けば複雑だ。テレビで見た感じでは誠実そうな青年だったが、娘との将来をどのように考えているのか親として聞いてみたい。
磨き終えて乾いたタオルで墓石を拭いていた梨沙子が彼氏を紹介しに来いと言おうとしたとき、ゆかりたちより早くからお参りに来ていたと思われる家族が奥の区画から歩いて来た。
鶏がらの様な痩せた中年女性、豚のように太った中年男性、父親に似て肥えた大学生くらいの茶髪の男。着ている服から裕福そうではあるが、品のなさから今の代になって栄えた成り金だと思われる。
近付いて来る一家は霊園だというのに大きな声で喋っていて、近付いて来る彼らの会話はゆかりたちの耳にも届いた。
「はぁー、やっと終わった」
「こらこら、出来は悪かったがあいつは一応私の弟でお前の叔父なんだぞ。ここを出るまではちゃんとしてなさい」
「っても、別に会ったことなんてほとんどないし。叔父さんの補償金が貰えたのはラッキーだけど、毎年の墓参りはいい加減面倒っていうか」
「来年で丁度十年だ。それまでは我慢しないとな」
自分の弟や親戚が亡くなったらしいが、それにしては彼らの会話は耳を疑うような内容だった。
いくら面識がほとんどなかろうと死者を侮辱するような言葉をわざわざ口に出す必要はない。それが本人の眠る霊園内となれば尚更だ。
けれど、彼らはそんな事など関係ないとばかりに大声で話を続ける。
「桐条グループと岳羽とか言うオッサンも余計な事してくれたよな。

自分らの利益のために非合法な実験をしてたってニュースでみたし。そういうクソのせいでオレらが苦労するんだ」
「はっはっは、確かにな。だが、神様ってのはちゃんと悪事を見てるもんだ。実験に関わっていた人間は天罰がくだって全員死んでるからな」
大勢の人が亡くなったというのに、男と父親は笑ってざまぁみろと話している。
天罰がくだったというのなら、その事故に巻き込まれた者も何かの罰で死んだとでもいうのだろうか。ポートアイランドインパクトで亡くなったらしい父親の弟であり男の叔父にあたる人物のこともぞんざいどころか、むしろ見下している節すらあるため、相手は自分たちの都合の良いように解釈して話のネタにしているのだろう。
周りに人のいない状況であれば勝手にすればいいが、そういった話を死者の眠る霊園でするなど常識がないにもほどがある。そこに事故で亡くなった者やその家族がいるなら尚更だ。
年月が経って久しく聞いていなかった父を侮辱する言葉に、ゆかりはカッと頭に血が昇るのを感じる。掃除道具をその場に置くと先ほどの発言を撤回させるため男らの元へ向かおうとする。
「あいつらっ」
「ダメ、ゆかり。やめておきなさい」
「なんでよ！　何も知らないあんなやつらに、お父さんのこと好き勝手言われてるんだよ！」
感情に任せて出て行こうとするゆかりの腕を梨沙子が掴んで止める。
娘を止める彼女の表情もまた辛そうだが、それならば何故相手に何も言わないのかゆかりには理解出来ない。
部活で鍛えているため腕力はゆかりの方が強い。故に、掴まれている腕を振り解いてしまおうと考えたとき、突如男の足が止まった。
「あ、あぎゃぎゃぎゃっ」
「お、おい、急にどうした？」
「変な事はやめなさい優一！」

今まで普通に馬鹿笑いしていた男は、急に地面に寝そべると腕と足をバタバタとさせながら暴れ始めた。上等そうなスーツも土で汚れ、困惑顔の両親が相手を立たせようとするも、男は激しく暴れてその手を拒む。
突然理解不能な奇行を目にしたゆかりも呆気にとられ、先ほどまで感じていた憤りも急速にしぼんで行き。息子の急変に戸惑う一家をゆかりたち親子が遠目から見ていれば、
「――――ああ、それ駄目ですね。憑かれてますよ」
霊園の入り口側からよく通る青年の声が響いた。
何故彼がここにいるのかは分からないが、黒いマフラーを首に巻いた湊はポケットに手を入れたまま一家の下に進み、好青年の爽やかな仮面を被って男の両親に声をかける。
「もしかして、死者の眠るこんな場所で死者を冒涜するような事を仰いませんでした？」
「い、いや、そんな事は」
「ぐぎゃっ!?　ぐぎゃっ!?」
指摘を受けて焦ったように父親が答えれば、男の様子はさらに酷い物になる。
それを澄ました顔でジッと眺める湊は顎に手を当て、軽く観察しながらポソリと呟く。
「干渉が強くなりましたね。これはもう無理かなぁ」
「む、息子に何が起きてるんだ!?　頼む、教えてくれ！」
状況を分かっているのは一人だけ。つまり、男の両親にとって頼れるのは湊しかいない。それを分かっている湊は、相手が縋りついてきたところで内緒話をするような抑えた声で男の置かれた状況を説明した。
「怒った死者の魂が息子さんの魂に直接干渉してるんです。器は無事でも中身が駄目になったら一生パーのままになりますよ。いますぐ寺でお祓いして貰った方がいいです。ご家族揃って死者に詫びて、二度と侮辱せず馬鹿な真似もしないと反省してね」
幽霊や祟りなど迷信だと思っていたのだろう。湊の言葉を聞いた

二人は青い顔をしているが、男が暴れるのをやめたタイミングで父親が肩を貸して急いで霊園を出ていく。母親の方は携帯でお祓いをしてくれる寺を探していたようで、そんな去って行く一家と入れ違いで今度は二人の女性がやってきた。
一人は美鶴の母親である桐条英恵、もう一人は彼女のお傍御用を勤める和邇八尋である。
お参りの荷物は全て和邇が持ち、ハンドバッグだけ持って英恵がやってくると、近付きながら先ほどの事も見ていたようで英恵は困った顔で湊を叱った。
「はぁ……こら、酷い事をしてはダメでしょ？」
「……俺じゃなくて霊がやったことだろ」
「坊ちゃま、お戯れはほどほどになさいませ」
周りからは男が突然奇行を始めたようにしか見えなかったが、後から来た二人は湊が相手に何をしたのか分かっているようで若干呆れ気味だ。
しかし、ゆかりにすれば彼がこの場にいる事の方が驚きで、三人が近付いて来ると真っ先にその事を尋ねた。
「な、なんで有里君がここにいるの？　っていうか、英恵さんとお付きの人も一緒だし。さっきの人に何したの？」
「坊ちゃまは英恵様と共に岳羽詠一朗氏の墓参りに来たのです。そして、先ほどのあれはあの男性に向けて殺気を放っただけです。言い換えれば恐慌状態になっていた訳でございます」
「いや、殺気を放つってそんな……」
答えてくれたのは青年ではなくお付きの女性だったが、漫画やアニメじゃあるまいし、いくらなんでも殺気とやらで人を狂わす事など不可能だと思ってしまう。
そうしてゆかりが疑いの目を向けていれば、湊は突然霊園の傍にある林の方を指差した。
どこにでもある木の生い茂った林でしかないが、そこがどうかしたのかと思って見ていれば、湊が「三、二、一……」とカウントを取り終えた直後、ゼロと口にしたのと同時に大量の鳥たちが鳴きながら飛

びあがって行った。
　人よりも動物の方が気配に敏感だというが、百メートル以上離れた場所に殺気を飛ばしてしまう青年への驚きの方が強く、ゆかりも母の梨沙子もポカンと呆けていれば、事情を知っていたらしい和邇がさらに補足で説明してくれる。
「ゆかり様も急に目の前にナイフを出されれば恐怖を感じるでしょう？　殺気とはそれを己の放つ重圧でのみ引き起こす技術です。目に見えないからこそ余計に混乱するのですが、まぁ、先ほどの男性もしばらく休めば問題ないかと」
「そ、そうですか」
　聞いたゆかりはどこの殺し屋だとツッコミをいれたくなったが、よく考えれば本当に殺し屋なので洒落にならないと思って直前に口を閉じる。
　英恵と和邇はもしかすると知っている可能性もあるけれど、ここにはゆかりの母親もいるので彼の事を話すのはマズイ。
　故に、殺気を飛ばせる部分はこれ以上触れない事に決め、ゆかりは最初に気になった事を改めて尋ねた。
「あ、てか、お父さんのお墓参りってなんで？　別に、つ、付き合ってるからってそこまでしなくても」
　墓前とはいえ付き合っている彼氏がくれば親への挨拶と言える。命日にしっかり来る辺りが真面目っぽい彼らしいが、そういうのは流石にまだ早いよと照れてゆかりが頬を染めれば、対する青年は小馬鹿にしたように鼻で笑った。
　いくらなんでも失礼だろうと、瞬間拳が出そうになるがここには互いの母親が揃っていて、そんな人たちの前で彼氏を殴るのはマズイかもしれない。
　ここでは自分が大人になるべきだと肩を震わせつつも我慢し、ゆかりが湊からの精神攻撃に耐えていれば、今度は母親同士が顔を合わせて梨沙子の方から挨拶を交わす。
「ご無沙汰しております」
「いえ、こちらこそ。お線香をあげさせて頂いてもよろしいですか？」

「はい、是非お願いします」
親族に許可を貰って湊たちは線香と花で故人を悼む。お供えも持ってこようと思ったが、こういうのはカラスや猫など動物に持っていかれ易いので、供えた後は持って帰る様に言うところも多い。
岳羽詠一朗の眠る霊園では別に持って帰れと言われていないものの、近くに林があるため動物が来やすい。そんな場所でエサとなる物を置いて墓を汚されると困る事もあり、三人は手を合わせて冥福を祈ってから立ち上がった。
三人が三人とも丁寧な所作でしっかりと冥福を祈ってくれていた事が分かり、梨沙子が英恵に感謝の言葉を伝えていると、親同士が話している間、子どもたちも子どもだけで会話をする。
「……おじさんの命日に災難だったな」
「ん、まぁね。慣れてるっちゃ慣れてるんだけどさ」
ここを訪れるタイミングが被ったのは偶然だろうが、三人で一緒に来たはずなのに湊だけ先に到着したのは、きっと彼だけ先ほどの一家の会話を遠くから聞きとったからに違いない。
以前のゆかりならば一人で解決できたと助けてくれた湊にも突っかかっていただろうが、自分が求めていた強さは一人で何でも出来ると強がっていては手に入らないと分かった今は、素直に助けて貰ったことを受け入れ、あんな馬鹿の言葉一つで頭に血が昇ってしまった事を反省していると返す。
しかし、そう話すゆかりが少し寂しそうな顔をしていた事で、正面に立っていた湊は彼女の頭に優しく手を置いて、馬鹿相手に手を出さずに終わったお前は偉いと褒める。
「大切な人を侮辱されたら怒って当然だ。岳羽は何も間違っちゃいない。ただ、女性しかいないときに危ない事はするな。ああいう馬鹿を殴りに行くなら俺が傍にいるときにしてくれ。馬鹿が逆切れして来ても絶対に守るから」
「うん、ゴメンね。心配してくれてありがと」
突然頭に手を置かれたゆかりは驚くがすぐに嬉しそうな笑顔を見せる。

父が死んでからは頭を撫でてくれた男性など湊しかいない。知らないおじさんが撫でようとしてきたときには不快感を覚えて避けてきたが、好きな人の手は温かくて気持ちがいいのでゆかりも頬を染めて嬉しそうにする。
ただ、そんな二人の桃色空間を展開するときには、ギャラリーの存在に注意しておかねばならない。
「はぁー……いいですね、この少女漫画みたいな雰囲気。皇子って呼ばれる理由がようやく分かった気がします」
「女の子に優しいのは昔からなんです。お母さんにそう躾けられていたので、成長した今では助けてくれる皇子様って皆さんに思われているみたいで」
「なるほど、本当に娘には勿体なく思ってしまいます。親の私がいうのも変ですが、娘のどこが気に入ったのか分からなくて」
気付いたときにはもう遅い。母親たちは子どもたち二人の甘い空気に表情を緩ませ、自分も少女だった時代にこんな恋愛がしてみたかったと話に花を咲かす。
二人とも良家の娘だったので一般的な恋愛結婚とは言い難く、そういった事もあって少女漫画のような皇子様との甘い恋愛に強い憧れを抱いている部分があった。
故に、二人が共通の話題で盛り上がるのはいいのだが、その中に聞き捨てならない部分があった事で、見られていた恥ずかしさに顔を真っ赤にしたゆかりは、勝手に見るなと怒りながら娘の魅力を分かっていない母親に教えてやれと湊に強くいった。
「ほ、ホントにこの人たちはー！　ほら、言ってやってよ私の良いとことかさ！」
「……まだ昼間だぞ」
「ちょ、何を想像したっ!?」
昼間から言えないような良いとことはどこか。あまり想像したくないが身体など所謂女としての部位についてだと思われるため、ゆかりは思わず胸の前で両腕をクロスさせて距離を取る。
それを見た湊が薄く笑った事でからかわれたと気付き、怒ったゆか

りの拳が彼の腹部に届くまで一秒と掛からなかった。
昼――そば処〝たかまつ〟
午後から湊たちは別の場所に行く予定があるが、お昼ご飯を一緒に食べるくらいは大丈夫だと、五人は揃って霊園近くの蕎麦屋に来ていた。
長方形の席の下座に和邇が座り、彼女から見て右側の近い方から英恵と湊、反対側は近い方から梨沙子とゆかりが座り、親がいる事もあってなんとなくお見合いのようでもある。
それぞれ山菜蕎麦や鴨南蛮蕎麦など好きな物を頼み、温かいお茶を飲んで待っているとずっと話を聞きたいと思っていた梨沙子が興味津々な様子で湊に喋りかけた。
「最近の子どもがどんな風に遊んだりするのか知らないんだけど、有里君はゆかりとどんな風にデートしてるの？」
「大きく分けると目的ありと目的無しの二パターンですね。目的ありだと数日前から遊園地や新しく始まる映画に行くって決めて予定を立てます。ただ、いつもそういう訳ではなく、待ち合わせの場と時間を決めてショッピングモールに行って服や雑貨を眺めたりってときもあります」
恋人の母親に話を聞かれてもノータイムで答えられる辺りは流石の一言。
自分の母親が話好きのおばさん状態になっていてゆかりは恥ずかしそうだが、子どもたちの話に興味があるのは英恵も同じだ。和邇だけは気配を消して控えているが、娘と違って湊が質問に答えてくれると分かった梨沙子はさらに質問を続ける。
「この子って昔からいちご大福は白餡しか認めないとか、そういう細かいとこで五月蝿いんだけど迷惑かけたりしてない？」
「ええ、面倒なときは無視しているので大丈夫ですよ」
驚きの白さ。そう言いたくなる綺麗な微笑で黒い発言をする湊に他の者たちは固まる。
若い二人のことなのでどんな関係を築こうが自由ではあるが、面倒なら無視するというドライ過ぎる対応を聞いた梨沙子の表情は娘へ

の心配で陰り、これでは悪い印象を与えてしまうと思った英恵が逆にゆかりにも聞いてみることでフォローを入れる。
「あ、えっと、ゆかりさんはこの子と一緒にいて大丈夫？　少し我儘なとこがあるから大変だと思うのだけど」
「あー……今のところは大丈夫です。まぁ、なんだかんだ中学からの付き合いで慣れてますし」
　聞かれたゆかりは「少し？」と首を傾げそうになるも我慢する。本当はかなりの我儘プーだが、それを理解して付き合えば総合的にはいい彼氏なのは間違いないからだ。
　答えるまでの僅かな間で少女の苦労を感じ取った英恵は、息子が苦労をかけてすみませんと申し訳ない気持ちになるも、梨沙子にはなんとかばれなかったようで、運ばれてきた蕎麦を食べながら尚も会話は続く。
「そうだ。付き合ってるって聞いてからずっと訊こうと思っていた事があるの。ねぇ、有里君。どっちから告白したの？」
「……それは試用期間も含みますか？」
『試用期間？』
　二人はまだ付き合っているだけの恋人関係だ。同棲やら恋人の状態を結婚までの試用期間と呼ぶ者もいるが、その恋人の状態にも試用期間があると言われ母親たちは頭に疑問符を浮かべる。
　彼女たちの視界の端では何で話してしまうんだとゆかりが頭を抱えているが、青年は物理的に黙らせないと話をやめないので、食事中で無駄に席を立てない以上、彼を黙らせる事は不可能だった。
「まず、俺と岳羽は正式に付き合う前に、恋人関係とはどんなものかと知るために仮の恋人になっていたんです。そのときは一応、俺の方から持ちかけて岳羽も了承して契約を結びました。それからしばらく仮の恋人でいたのですが、岳羽の方が本気になってしまったことで、自分を好きにならない相手を選んだ俺の読みが外れてしまい。よく考えろと一度距離を置いたんです」
　無駄に優雅に蕎麦をすする青年の言葉に、母親らは余計に混乱した様子を見せる。

そも、恋人に興味があって付き合ってみるという考え方は理解できるが、どうしてそこで仮の恋人という微妙な関係になるのかが分からない。
話をしていると子どもたちはゆかりの方が一般的な感性を持っているので、湊から言い出したと聞いたときにはそうだろうなと納得も出来た。なのに、ゆかりの方も了承したと聞いてしまうと、最近の子は感覚派なのかと自分たちの世代とずれを感じた。
そんな母親たちをよそに椎茸の天ぷらに塩をかけて食べていた湊はそれを飲み込み、母親たちに箸を動かす様にいってから続きを話す。
「そして、その結果報告として岳羽が選らんだのがクリスマス・イヴで、ディナーの最後に正式に付き合ってくださいと告白されました。まぁ、それはこっちも予想していたので、ちゃんと考えたなら認めるしかないと話を受けた感じです」
色々と面倒な手順を間に挿んだが最後はゆかりから告白して恋人になった。それを聞いた母親たちは本人たちがいいなら気にしないでおこうと納得する。
ただ、どうも話を聞いていると湊の方は別にゆかりを好きになった訳ではないように聞こえた。
形だけの恋人からゆかりが本気になってしまったように、付き合ってから好きになることもあるので、付き合いだした時点では別に好きでなくとも構わない。
しかし、今もそうだとすれば純潔を捧げてしまっているであろう娘が不憫なので、梨沙子は母親として娘の恋人にどう思っているのかと尋ねた。
「じゃあ、有里君はゆかりの事は別に好きじゃないの？」
「大切に想っていますよ。ただ、一般的な好きとか愛してるって気持ちは理解出来ないので、そんな自分でもいいのかはちゃんと聞きました」
娘を大切に想っていると聞いて梨沙子は一先ず安心する。だが、自分の気持ちなのに好きかどうか分からないというのは理解出来ない。

湊の返事を聞いた梨沙子が難しい表情をすれば、母親が多分勘違いしていると察したゆかりが補足で説明を入れた。
「その、有里君ってお父さんと同じ事故でご両親亡くしててさ。それからちょっと色々あって、人との関わり方とかの感覚が一般とは違うの。大切な人たち以外は全部他人とかって感じでね。まぁ、そういうのを理解して付き合ってて大切にもして貰えてるから別に心配しなくて大丈夫だよ」
湊は梨沙子が勘違いしたように自分が相手を好きかどうか分からないのではない。一般的な好きや愛しているという感情を概念として理解出来ないのだ。
その分、青年の言う〝大切に想う〟というのは、一般人からすれば重い愛が籠められている。文字通り命懸けで守ろうとする姿は狂愛と呼んでもいい。
実際に目にしていなくとも、ゆかりは彼の身体に残った傷痕からそれを感じて、そんな彼の在り方も含めて受け入れて愛している。
だから、母親が心配するような事はないと彼への信頼が籠もった瞳を真っ直ぐ向けてくれれば、娘がいつの間にか自分の知らない強さを持っていた事に驚きつつ、梨沙子はそういった愛の形もあるんだなと感心して同じ母親の立場である英恵に話しかけた。
「なんか、思っていたよりも最近の子って大人な考え方でちゃんと付き合っているんですね。私は縁談で詠一朗さんと出会った形ですから、恋愛も知らなかった自分と比べて、子どもだと思っていた娘の方が大人な考え方で正直驚いています」
「私も武治さんとは家同士の縁談で出会いましたから同じようなものです。子どもたちの年の頃なんて、テレビに映るアイドルや俳優を格好良いと言っていたくらいで、他は友人と楽しく過ごしていたものですから」
英恵も湊たちが付き合う経緯を今まで知らなかったが、先ほどの会話から湊の経歴についても知った上で付き合っていると察し、そんな心の強さを持った子が恋人で安心したと笑顔を見せる。
本人たちがしっかり考えているなら口出しするのも野暮なので、そ

の後はただ普段のデートの様子や思い出について聞いていれば、根掘り葉掘り聞かれて耳まで赤くなったゆかりが、現状を打開しようとさも今思い出したように話題を変えた。
「あ、そういえば、去年お墓の掃除してくれたのって英恵さんだったんですね。すごく綺麗にしていただいてたんで助かりました。ありがとうございます」
「いいえ、昨年は訪れていませんから私ではないですよ」
「あれ？　じゃあ、誰がやってくれたんだろ」
　桐条家の人間ならお参りに来てもおかしくない。そう思って今日来てくれた英恵が去年も掃除してくれたと思っていたので、予想が外れたゆかりは他に誰かいたかなと不思議そうにする。
　すると、追加で頼んだ山菜ご飯を食べていた湊が顔をあげて口を開いてきた。
「多分、俺だ。他に寄るところがあったから九時前に来て掃除しておいた」
「え、なんでお墓の場所知ってたの？　ていうか、あのときまだ仮の恋人だったのに」
　てっきり湊は英恵の付き添いで来たと思っていた。それだけに、あの日は今日と同じで十時過ぎくらいに行っていたので、九時前に来て掃除をしていたなら辻褄が合うと思っても、彼が個人でお参りに来る理由が分からずゆかりは半信半疑だ。
　そうして、ゆかりが何でと不思議そうにしていれば、またこの子は話していなかったのかと困った顔をして英恵がある情報を少女に伝える。
「ゆかりさん、この子と貴女のお父さんは知り合いなの。元々月光館学園の初等部に通っていたから、辰巳ポートアイランドでお仕事されていた詠一朗さんと出会う機会もあってね」
「うそっ!?　え、待ってよ。そんな話聞いてない！」
　出会ってから四年目にして知る衝撃の真実。彼氏と父親は知り合いだった。そんな馬鹿なと驚くゆかりの隣では梨沙子も目を丸くして驚いており、言われた青年の方は蕎麦湯を飲んでからシレッと呟い

た。
「……別に聞かれてないからな」
「いや、そこは聞かなくても話すでしょ。普通に」
「自分の常識が世間の常識だと思うなよ？」
「こっちの台詞だっつーの！」
その台詞はそのままそっくり返す。怒り気味にゆかりが言えば、公共の場所だからと母親たちが少女を宥める。
普段はいい彼氏だったりするというのに、たまに本気で驚く事や下衆な発言をかますから油断ならない。母親たちに宥められたゆかりは冷たいお茶を一気に煽って冷静さを取り戻した。
だが、そんな少女に対して青年は自分もヒントは出していたと告げる。
「というか、中学二年の夏祭りにちゃんと言っただろ。ある人からお前をよろしくと頼まれたって」
「ああっ、確かに言ってた！　いや、でも、普通にお父さんと君が知り合いって気付ける訳ないじゃん！」
「想像力の欠如だな。第一、修学旅行の真田もそうだったが、別に俺がお前らやその知り合いと過去に出会ってたところで別に大した問題じゃないだろ。知らなくても普通に接してこれたんだから」
湊が部活メンバーに話していなかった繋がりと言えば、チドリたちにも黙っていた英恵に始まり、修学旅行で語った美紀を助けていた幼少期のエピソード、さらに部活メンバーにとってはテニスの大会で明らかになった桐条家との話に加え、恋人にも黙っていた彼女の父親と面識があったことなどかなり多い。
確かに知らなくても家族や恋人としてやってこれたのだから、話しても話さなくても信頼関係の構築に影響はなかったと言える。
けれど、知っていたなら教えて欲しいというのが正直なところで、食べ終わりお会計を済ませて外に出たゆかりは、ここで別れる前に少しだけ聞いておこうと車に向かおうとする湊に父の事を尋ねた。
「ねえ、お父さんとどんな事話したの？」
「……基本的に家族の自慢を聞いてたな。誕生日ケーキの前で笑顔で

写るお前の写真を見せてきて、美人の妻に似て可愛い娘だろって言ってきたり。まぁ、普通って返したらどうみても天使だろって怒ってきたりもしたが、ジュースを買ってくれたりと俺にも優しかったよ」

ついでに言えば、娘が彼氏を連れて来ても絶対に認めないというエピソードもあったりするのだが、恋人になっているだけでなく既に何度も肌を重ねていることもあって、話すとゆかりが罪悪感を覚えるかもしれないのでそれは秘密にしておく。

岳羽詠一朗との思い出について語る湊は優しい目をしていて、聞いていたゆかりたちも彼にとって父は本当に優しい人だったのだなと素直に感じられた。

父の命日に意外なところで父の思い出話を聞けて、ゆかりだけでなく妻であった梨沙子も懐かしい気持ちを覚える。

「お父さんってば外でもそんな感じだったんだ……」

「有里君、そんな昔にしたあの人のお願いを覚えていてくれてどうもありがとう。貴方みたいな子がゆかりの初めての恋人でちょっと安心しました」

霊園では心ない言葉で傷付いたが、自分たちの知る岳羽詠一朗の姿を知ってくれている者がいた。

それが嬉しくて二人は笑顔になり、娘をよろしくと幼少期に聞いた頼みを未だに覚えていてくれた青年へ梨沙子は礼を言った。

既に和邇が運転席に乗っている車に向かおうとしていた湊は、故人の家族からそんな事を言われて意外そうな顔をし、すぐに表情を普段通りのやる気のない物にすると小さく呟いた。

「……岳羽が一番辛いときに守ってあげられなかったんです。だから、今度こそおじさんとの約束を果たします。それじゃあ、今日は失礼します」

それだけ告げると湊は英恵たちの待つ車に乗り込み、ガラス越しにゆかりたちに礼をして駐車場を出ていった。

後に残った二人も見送りを終えた事で車に乗り込むが、シートベルトを締めながら梨沙子は今日会った青年について思って事を口にする。

「有里君って不思議な子ね。なんか、どことなく追い詰められてるような顔をしてたわ」
「……うん。たまにああいう顔するんだよね。お父さんの事で周りに色々言われたのなんて有里君のせいじゃないのにさ」
「優しくて不器用なのかもしれないわね」
「うん、私もそう思う。なんか私よりもお父さんのこととかで悩んでる感じするし」
梨沙子と同じ事をゆかりも感じていた。本人たちが既に乗り越えていても、傷付いた過去があるということ自体に湊は後悔を見せることがある。
別に彼に救ってくれと頼んだ訳ではない。けれど、助けられなかったのは事実だというように、湊は自分の無力さに憤り被害者にすまなそうな顔をするのだ。
なんでそんな風に考えるのかは分からないが、優しくて不器用というのは中々あっていると思う。
シートベルトを締め終え、母の運転する車が出発すると、窓の外を眺めていたゆかりは湊にとって岳羽詠一朗とはどんな存在だったのだろうかと考えていた。

第百八十四話　全日本選手権

１１月１１日（火）
午前――大会会場
全日本テニス選手権。それは国内だけでなく海外でも活躍する日本のテニスプレイヤーたちが、己の全てを出し合い日本一を目指す栄誉ある大会である。
インターハイ優勝のワイルドカードで参加が決まっていた湊は、大会二日目から始まった男子シングルスに出場し、国内ランキング四十位のプロを下して無事に二回戦へと駒を進めていた。
話題の皇子が出場すると聞いてマスコミも大勢集まっているが、今日集まった観客とマスコミの数は昨日の比ではない。
その理由は湊の二回戦の相手が、大会四連覇をかけた国内ランキング一位であり世界ランキング十三位という、まさに本大会優勝の大本命である第一シードの春日井譲治というプロだったからだ。
あるテレビ局が会場に来ていた客にアンケートを取ると、七割の人間が春日井の勝ちと予想した。
その中には湊のファンも当然混じっているが、流星のように現れ破竹の勢いでここまで来た湊に対し、相手はずっと日本のトップとして世界で戦ってきた猛者。経験値と安定性に置いて他の追随を許さぬ男に、いくらインターハイの決勝とはいえ弱点を突かれ一時劣勢になっていた子どもが勝てるほどテニスは甘くない。
本日は平日だが事前に応援に行くと学校に許可を取っていた事で、会場には部活メンバーだけでなく美鶴や真田も来ている。
そして、その傍には桜と英恵も来ており、これまでとは格の違う相手との試合の前に応援に来ている英恵たちの方が緊張していた。
「も、もうすぐ始まりますね。本当にすごい人でこんなところで試合だなんて、わたしなら緊張で倒れちゃいます」
「私もこんなに大勢の人が来ているのを見るのは二度目です。あの子の母親も二回戦で国内ランキング一位の方とあたってしまったんですが、最終セットまでもつれ込んで負けてしまったんです」

国際戦の経験もない高校生プレイヤーが、日本のトップを相手に最終セットまでもつれ込むとは大したものである。
ただ、その息子が同じように二回戦で日本のトップと当たってしまったので、英恵たちはどうしても嫌な予感がして落ち着かなかった。
英恵たちがそんな風に話す傍ら、知り合いが試合に出るからと妹に連れられて来た真田は、種目は違えど大会の空気はやはり独特の物があるなと少しワクワクしながら試合の開始を待っていた。
「美鶴はテニスに詳しいのか？」
「別荘でやった事もあるからルールくらいは分かる。ただ、解説は期待してくれるな。インターハイの試合ですら有里が攻撃的なプレーで押し勝ったくらいしか説明できなかったんだ」
インターハイも決してレベルが低い訳ではない。過去には高校生で全日本選手権を制した者もいるのだから、豊作の年ならばプロと遜色ない内容のときもある。
だが、やはり平均で見ればプロや社会人の出る全日本選手権には到底及ばないのは、昨日の一回戦を見ただけで美鶴にも理解出来た。
今日はさらに日本のトップが出てくるのだから、身体能力ではけっして劣っていない湊との対決という事もあって、美鶴は最初から解説役にはなれないと断言した。
「あ、有里君と相手の選手が来ました！」
「相手の選手も結構大きいね」
「一七九センチだってさ。有里君の方が少し大きいけど有利ってほどの差じゃないよね」
ヘアバンドを巻いたスポーツ刈りの選手と一緒に湊がやってきた。相手は既に臨戦態勢という雰囲気で目がギラギラしており、そんな男の後ろをアンニュイな表情で歩いている湊とのギャップが激しい。
周囲の観客はコート入りする二人の名前呼んで応援しているが、試合前の二人は答えずにベンチに荷物を置いている。
緊張とは無縁の相手だけに不調の心配はしていないが、一応朝の時点ではどんな様子だったか気になったチドリはラビリスに尋ねた。

「朝、湊は試合について何か言ってた？」
「んー、長引いたら面倒とはいうてはったけど、他は二回戦で国内ランクトップと対戦とかお母さんと同じやって苦笑してたくらいかなぁ」
勝ち進めば国内ランク一位とあたることもあるだろうが、母親と同じように二回戦であたるのはちょっとした運命の悪戯を感じてしまう。
青年はそういった出来過ぎた冗談のような展開も嫌いではないので、彼をよく知るチドリも話を聞けばどんな顔をして言ったのかは想像がついた。
準備を終えたコートの二人は春日井がサーブを選択し湊がコートを選んでいる。練習の打ち合いを見る限りではどちらもいい音をさせているが、素人では余程の悪球を打たない限りラリーの様子から相手のコンディションまで察する事は出来ない。
故に、試合が始まってみなければ判断はつかないが、一同が見守る中、練習を終えて試合開始の第一球が放たれた。
春日井の初球は鋭角気味の直球。どちらかといえば守備を意識した粘りのテニスをする男だが、ここぞというチャンスを決めに行くパワーにも自信のある選手だけに、自分が試合をコントロールし易いサービスゲームでは強気で行くようだ。
本大会はコートの端に速度計が置かれており、そこに表示されていたのは〝２０９ｋｍ／ｈ〟という数字。湊が安定して打つサーブとほとんど大差ない中々の速度だが、反応できるよう下がり気味で構えていた湊は、余裕のある動きで前に出ると右手のフォアハンドでしっかりと打ち返した。
だが、
『……え？』
試合を見ていた者たちは湊の打球を見て呆気にとられる。それはコートにいる審判や春日井も同様で、完璧に捉えたと思われた湊のレシーブはコートを大きくオーバーし観客席に飛んでいた。
力んでしまったのか、それとも手が滑ったのか。理由は本人しか分からないが湊にしては珍しいミスなのは確かだ。

「いきなりのミスは立ち上がりが心配になるね」
「うん。でも、今度はちゃんと返せたね」
湊でもやはり大きな大会だといつもの調子を発揮出来ないのだろうか。見ていたゆかりがそう心配すれば、今度のレシーブはちゃんと良いコースに返ったと風花が安心した顔をする。
お互いに相手を左右に振る深めのラリーが続き、連続で同じサイドに来ると相手の打球を読んだ湊が先に動いてショートクロスのドライブボレーで点を奪い取る。
読み合いになったときの動き出しは完全に湊が勝っていたため、これで相手も迂闊に単調なラリーに持ち込む事は出来なくなった。打ちあうのなら相手の打点や体勢を崩す様にスピンやスライスも混ぜていかなければならない。
ただ、それは同時に自分もやり返されて崩れるリスクがあるので、ここからは深い位置のラリーよりもショート狙いやネットプレーが混じって行くはずだった。
「……あ、またミスした」
もっと高度な駆け引きの試合展開が始まると観客が期待した目の前で、またしても湊があらぬ方向にレシーブを飛ばしてしまった。
一回なら偶然だが二回ならば必然だ。何があったのかチドリは目を凝らして湊をよく見る。
「……本人もなんか分かってないみたいね」
調子を確かめるように素振りし直している湊を見ていれば、本人も少し不思議そうに首を傾げており、どうやらミスした理由を理解していないらしい。
ラケットは前から使っている物で、シューズとユニフォームも一般の大会でも身に付けていた馴染みの物だ。いつも使っている道具なので問題はないと思われるが、ならば相手のサーブが特殊な変化球なのかというとそうでもない。
どちらも違うとなると湊自身の問題になってくるが、彼を知る者にすればそれが一番あり得ないだろうと思えた。
そして、本人と観客、どちらも不調の理由がよく分からないまま試

合は続いていった。
＊＊＊
今回の試合は過去の試合と同じく二セット先取の三セットゲーム。
湊の謎の不調という心配要素を抱えたまま進んだ試合は、当初誰も予想していなかった湊の自滅による大差がついていた。
第一セットは6―4で春日井が取り、現在は第二セットで4―1と春日井がまたもリードしている。選手二人は九〇秒の休憩時間でベンチに座っているが、湊は誰が見ても憔悴していると分かるほど大量の汗を掻いて肩で息をしながらタオルを頭から被っていた。
日本トップを守り続けているだけあって春日井は強い。安定したストロークとここぞというときにリスクを恐れないショットで決めてくる。
そんな相手に湊も苦戦を強いられるとは思っていたが、いくらなんでも今日の湊はミスショットが多過ぎた。それでもサービスゲームをキープしたり、必死に食らいついて点を取ったりもしているが、不調の状態でそんな事をすれば余計に体力を消耗する。
誰が見ても分かる湊の消耗はその結果であり、ここまで湊が弱っている姿を見た事のないゆかりたちは激しく困惑していた。
「ねえ、今日の有里君どうしたの？　なんか全然集中できていないっていうか、いつ倒れてもおかしくなさそうなんだけど」
休憩時間が終わって湊がボールを持ってコートに戻っている。遠くからでも目が虚ろなのが分かるくらい疲労の色が濃く出ており、ドクターストップをかけるべきではとゆかりが思うのも無理はない。
上げたトスが流れてサーブの体勢が崩れたが、苦しそうな顔で湊はなんとかそれを打って相手コートに入れる。崩れた体勢で打った事で予想外の回転が掛かったボールを相手は打ち損じラッキーに救われ最初のポイントを取る事が出来た。
だが、次に同じようなサーブが来ても相手はラケットを振り抜いて強打で返してくるだろう。先ほどのサーブは一七〇キロしか出ていない。湊の本日の最速サーブが二一五キロであり、インターハイ決勝で二三七キロを出した事を思えば遅すぎるのだ。

続けて打ったサーブはコート端から打って角度を何とか付けた一八六キロの直球。これまでに比べればマシだが、相手は落ち着いて正面のダウンザラインに打ち込み、辛そうな表情で追い付いた湊がそれを必死に返している。
目はまだ完全には死んでおらず、点も一応取れているので周囲も判断が難しいだろうが、チドリや桜も裏の仕事や戦闘以外で湊のこんな様子は初めて見るので、他の者同様その顔には困惑の色が浮かぶ。
「……疲労とか関係なく身体が思うように動かないみたいだけど、どうしてそうなってるのか分からないわね」
「あんなに出たがってた大会なのに、このままじゃみーくんも納得できない結果に終わっちゃう」
残っている体力を絞り出す様に瞬間的に優れた動きを見せ、湊は自分のサービスゲームはなんとかキープする事が出来た。
しかし、相手のサーブに移るとまたしても上手く返せないでいる。ミスした次のポイントでは動きがマシになり取り返したりもしているが、基本的には相手がリードして連続でポイントを取る事もあった。
そして、相手がゲームを取った事でカウントは5―2に変わる。泣いても笑ってもこのゲームを取られれば湊の敗北だ。
試合が始まって一時間以上経過しており、既に九〇秒休んだ程度で回復できない状態にある。これまでは何とか打球に喰らいついて点を取っていたが、青年に限界が来ている事は誰の目から見ても明らかだった。
「もしかして、あの子……」
そして、同じように試合を見ていた英恵も湊の限界を感じ取るが、ずっと考えていた彼女は湊の不調の理由についてある一つの予想を立てた。
もしこの予想が当たっていれば、どこまで不器用な子なのかと思ってしまう。ただ、それと同時に本人には何よりも大切な事なのだろうと納得できる気もした。
＊＊＊

試合が始まってからずっと不調を感じていた湊は、自分の思い通りにまるで動いてくれない手足を必死に動かしながら戦っていた。
全身を針金で縛りつけられているような違和感。視界もほとんどぼやけ、はっきりと見えているのはボールくらいだ。
「……はぁ、はぁ」
こんな無様な試合を見せられて相手も観客も呆れているに違いない。
応援に来てくれた者たちのために勝たなければと思う反面、負けて自分と同じだと母が喜んでくれるのではと考えてしまう。
もう会えない故人を喜ばせるべきか、今傍にいる者たちの期待に応えるべきか。どっちが正しいか分からない湊の勢いのないサーブを返され連続でポイントを奪われる。
残り二ポイントで試合は終了。負けるのは悔しい気もするが、自分が本当に何をしに来たか分からなくなった湊は、次のサーブのために移動した場所で意識が遠のき静かに目を閉じかけた。
「――――勝ちなさい!!」
瞬間、観客席から聞こえてきた声で湊はハッとして目を開く。
一体何だと声の方へと視線を向ければ、身体が弱くいつも優しい英恵が厳しい顔をして立っていた。
珍しい事もある物だ。そんな事を呑気に考えていられる余裕などないが、疲労困憊で虚ろになった湊の瞳が自分を捉えていると気付いた英恵は、厳しい表情から一転してフッと優しく微笑み言葉を伝えてきた。
「――――大丈夫、勝った方が絶対に喜ぶから」
誰が、とは彼女は言わない。ただ湊の欲しかった答えがそこには詰まっていた。
審判がプレーが始まる直前は静かにお願いしますとアナウンスをすれば、英恵は謝罪の一礼をして席に座る。普段は大人しい彼女の意外な一面に周りの者も驚いている。
それが見えた湊は先ほどよりも視界が拡がり手足が動く様になっている事に気付く。考えれば簡単な事だった。色々と悩み過ぎて心

と体がばらばらに動いてしまっていたのだろう。
完全に復調したとは言えないが手足が動いてコートが見える。英恵の言葉を信じるなら、自分はなんとしてでも勝たなければならないと、湊は苦しそうな表情のままボールを高くトスした。
「っ!!」
自分を縛りつけていた物を力任せに引き千切る様に、湊はラケットを思いきって振り抜く。
「ふぉ、フォルト!」
これまでとは比べ物にならない速度と勢いに審判も驚く。惜しくもフォルトだったが速度計には二三六キロと表示されていた。
死に体だった青年の瞳に力が戻り、思いの籠った打球が飛んできた。それだけで相手は警戒レベルを一つ上げたようだが、今の湊にそんな事を気にしていられる余裕はない。
ファーストが外れたならセカンドを、これで落とせば本当に後がなくなるというのに、湊はラケットとボール、そして相手のサービスコートだけを見てさらに強くラケットを振るう。
「……はぁっ!」
気合一閃、打たれたサーブは一筋の線となりコートに突き刺さる。反応しようと思っていた春日井は一歩も動けず、すぐに速度計を確認した。
「ふぃ、１５—３０!」
審判のカウントが響く中、打った本人以外の視線が速度計に注がれる。崖っぷち一歩手前のセカンドサーブは過去最速の二四二キロ。日本のプロでもこれほどのサーブを入れられる者はなかなかいない。
サーブというのは筋力があるだけでは駄目なのだ。本当に必要なのは腕をしならすような柔軟性と力を伝える強靭なバネ。これに関しては後天的に鍛えるのにも限界があり、この域の高速サーブを打てるというのは持って生まれた才能と言える。
だが、これはまだ限界ではないのではという考えが見ている者の頭を過った。
まだ目の慣れていない速球で来られては返しようがない春日井は

後ろに下がり構える。深い位置ならば守る範囲も広くなってしまうが、跳ねて勢いの弱まったボールの方がまだ返せる可能性があるためこれは一般的な対処法だ。
「ぐ……ハッ！」
が、そんな相手の事などまるで頭から消えている青年は、未だ苦しそうにしながらも、先ほどより腰を落としてから全身のバネを使ってラケットを振りに行く。
ただ棒立ちで打つよりも腰を一旦落として力を溜めた方が強い打球が打てる。そんな事は見ている全員が知っていたが、相手コートで跳ねたボールは必死に取りにいった春日井のラケットのフレームを掠って壁際まで飛んだ。その速度、二四九キロ。
「３０―３０！」
まだ速くなるサーブに観客たちも沸き出す。野球の硬球に比べれば全然マシだが、テニスボールだってあの速度で当たれば骨折もあり得る。だというのに、対峙している春日井もどこか楽しそうで、絶対に返してやるぞと挑戦する少年のような笑みを口元に浮かべている。
湊が打ったサーブは全て直球。そも、その速度でスピンやスライス等の変化球が打てる訳もないのだが、直球しかないと分かっていれば純粋に反応できるかどうかの問題だ。ボレーのようにラケットの面を置いておくだけでいい。あれだけの勢いならばそれで十分に返る。
国内トップの男がそんな風に湊を待っていれば、自分を縛りつけていた枷が外れ解き放たれた青年は、今までよりも高くトスをあげてサーブを放った。
「レット！」
最速更新、二五五キロ。しかし、惜しくもネットに触れてコートに入ったためファーストサーブからやり直しである。
入ったように見えた観客からは『あー……』と残念そうな声が聞こえるも、ファーストもセカンドも関係なく速度をあげ続ける青年の事だ。きっと次はもっと速い球で来るだろうと一球多く打つことにも不思議な期待が寄せられていた。
「ハッ！」

「４０―３０！」
二五八キロで正面から飛んでくる打球に春日井も思わず飛び退く。返すとか返さないの問題ではない。死に体だった青年の姿が頭に残る目も慣れていない状態で、こんなものが正面から飛んでくれば返せる訳がない。
かつてテニスではビッグサーバーが覇権を握っていた時代があった。あるビッグサーバー同士の試合では、お互いにサーブを打ち合うだけで点数が入り、ダブルフォルトで勝敗が決するようなものもあった。
そこには技術も何もない。道具やサーブの進化に他のプレーの進化が追い付けていなかったことで、そのような大味な試合ばかりが展開し、サーブしか得点力のない者でもプロとしてやっていけたのだ。
だが、そんな時代も長くは続かなかった。速いだけのサーブなどいずれ慣れる。それをしっかりと返してやれば、サーブしかしてこなかった者は己の武器を失い簡単に負けた。
いまはパワーと技術のどちらが欠けても世界に通用しない。いくらパワーがあっても単調では技術で封じられ、技術しかなければ披露する前にパワーに翻弄される。
どちらが得意だろうともう片方を疎かに出来ないのが近代テニスだ。しかし、そんな時代にもしサーブだけで勝てる者がいるとすれば、それはかつての時代とは異なり新しい武器を手にしたと言える。
「……ラァッ!!」
放たれたサーブは惜しくも外れフォルトとなる。だが、速度は二五九キロとまだ上がる。
あとたったの一キロ、一般の選手が一キロ上げるのにどれだけの苦労が必要かなど観客には関係ない。
『いっけー!!』
青年を応援するためにきた者たちも彼の復活を感じ取り、越えて見せろと声援を飛ばす。
しっかりと聞こえていた青年は、完全に自由となった手をしっかりと動かし高いトスを上げ、全身のバネを駆使しながら溜めた力を一気

に解放するようにラケットを振り抜いた。
「ハァァッ!!」
高く高く上げられたトス、安定した姿勢とラケットの軌道、それらを見た者はラケットとボールが触れる前に直感で理解する。このサーブは完璧だと。
観客も審判も春日井も、この場にいる全員が一つの意識を共有したとき、彼らの思っていた通りにボールはコートに突き刺さり、後ろへ抜けていく際に反射的に振っていた春日井のラケットを弾き飛ばしていく。
二六二キロ、それがたったいま打たれたサーブの速度。
呆然とする男の手から離れたラケットがカランカランと軽い音をさせれば、それが止むのが合図だったように客席が爆発した。
「す、すげー！　二六二キロだってよ！　高校生が世界記録だしたぞ！」
「皇子ー！　そのままいっちゃえー！」
ゲームで言えば未だに首の皮一枚で繋がっている状態でしかない。だが、二〇〇八年時点で世界最速の二六二キロのサーブを決めた事で、全員が湊の完全復活を確信した。
不調の原因は何かなど知るまい。それでも、復活したからにはただでは終わらないのが彼だ。ラケットを飛ばされた春日井も今のは笑うしかないと拍手をしており、落としたラケットを拾うとゲームは取られたが試合には負けないぞと闘志の宿った視線を送った。
＊＊＊
青年の完全復活から試合の内容は激変した。以前の動きが戻ってきた湊が、母のテニスと自分のテニスを融合させ、瞬間火力の非常に高い技術のテニスで挑み始めたのだ。
元々どちらの手でもフォアハンドの打てる湊は守備が得意であった。そこに攻撃向きの自分のテニスを融合させれば、どちらも譲らないストローク戦に激しい技と力の応酬が混じる事になる。
外に逃げる深いストロークで湊を振った春日井は、返ってきたボールを絶妙なドロップショットでネット際に落とす。

当然誰も届かない思うところだが、走ってきた湊は届かないと分かるや否や、ヘッドダイブの要領で跳んでラケットの先で拾い上げた。
コートに倒れながらでも返したボールは力のないロブとして相手のコート中頃まで飛ぶ。けれど、そこには春日井が待っており、しっかりと余裕のある構えで渾身のスマッシュを打った。
「っ……らあ!!」
抜ける、そう思ったスマッシュも起き上がった湊は諦めずに取りに行った。バウンドする前に触れれば返せる。逆にバウンドを待てばきっと届かない。
だから、湊はボールの軌道に割り込むように再度跳んで、ボレーで相手の着地地点を狙って強引にポイントを奪い取った。
いつもの彼にはない必死さ。コートの上を転がり服や顔を汚している彼など皆初めて見るだろうが、そうしなければ勝てないほどの差が二人にはあった。
しかし、負けそうな場面でも復活を果たし、まだまだ諦めていない青年を必死だと馬鹿にする者などこの場にはいなかった。
「お母様、先ほどの言葉はどういう意味ですか？　どうしてあれで有里の調子が戻ったのか分からないのですが」
そして、ようやく彼が調子を戻したことで安心していた美鶴たちは、切っ掛けは間違いなく英恵の言葉だろうと考え、彼女にその言葉の意味を尋ねた。
勝った方が喜ぶのは当然だ。別に誰かを人質に取られて負ける様に言われている訳でも無し、言葉としては意味を理解出来るが、何故それが湊を復活させるほどの効果があったのか。美鶴たちが気になっているのはその点についてだった。
「……自分では薄々気付いてたようだけど、あの子は自分が勝っていいか分からなかったのよ」
「それは高校生が国内ランクトップを負かすという意味ですか？」
「いいえ。あの子が気にしていたのは母親である菖蒲さんの評価。勝てば喜ぶのが普通だけど、負けたら負けたで全日本選手権二回戦でランクトップに負けたっていうお母さんと同じ結果になるのよ」

親ならばどちらにせよ喜んで褒めてくれる。しかし、負けて自分と同じ結果になるよりも、勝って越えてくれる方が喜ばれるのが当然だ。
常識で考えて悩むまでもないと思った真田は、率直にそんな物は悩む必要もないでしょうと聞いてみた。
「いや、いくら同じ結果だろうと勝った方が喜ぶでしょう」
「あの子はその判断が出来なかったの。まぁ、それは自分の真似をさせる形で褒めてテニスを教えていた事も関係しているのだけど」
遊びながらテニスを教えていた菖蒲は、湊が自分と同じ事が出来るたびに上手だねと褒めていた。それもあって、湊は母が自分と同じことを喜ぶという情報が頭に入っており、今回の不調の一因はそこにあると英恵は言った。
しかし、話を聞いていた者たちは意味が分からないと納得のいかない様子で、英恵も自分もそうだと苦笑しながら皆が分からないのは当然だと説明を付け加えた。
「ふふっ、よく分からないでしょ。大丈夫、それが普通よ。ただ、あの子はそういうのを知らないの。こうした方がご両親が喜んでくれるっていう想像より、こうしたときに喜んでくれたっていう記憶に基づく情報の方が上位にくるのよ」
負けていた湊が復活した勢いのままゲームを連取し、そのまま第二セットを勝ち取った。
勝敗は最終セットにもつれ込むと周囲が騒ぐ中、誰もが当然のように考えられる事も知らない息子に僅かな憐れみを覚え、事故により人生だけでなく彼個人すらも歪めてしまった事を英恵は申し訳なく思う。
「あの子にとって重要なのは過去と未来だけ。現在なんてあの子にとっては求める結果の過程でしかないのよ」
この大会に出たのも故人である母を喜ばせるためだろう。同じ物に触れることで彼自身、少しでも母に触れたいという思いもあったのかもしれないが、本格的な戦いが始まる準備期間に無駄だとしか思えないテニスを始めたのは、今彼のまわりにいる人たちを喜ばせるため

ではなかった。
　そんな湊という過去を引き摺り未来しか見ていない青年の話を聞き、ゆかりは以前そば屋で話した事を思い出して英恵に尋ねる。
「有里君がお父さんのお願いを覚えているのもそれが理由ですか？」
「ええ、多分ね。ゆかりさんのことを大切に想っているのもあるでしょうけど、故人となった詠一朗さんにお願いされていた事も理由の一つだと思うわ」
　故人は湊にとって過去の存在だ。しかし、過去を引き摺っているということは、それは彼にとって今も続いているという事になる。
　ゆかりは父の真相を確かめるために月光館学園へとやってきた。未だに何も掴めていないし、どうやって調べればいいのかも分からない。
　ただ、ずっと父の事を心の中に残していても、頭の中では〝過去の事〟として認識していた。
　それがゆかりと湊の違い。何年経っても思いを風化させず、今尚その事で悩み考え続けているからこその強い意志と目的を彼は持っている。
　何故湊が時折思いつめた表情をするのかようやく理解したゆかりは、年頃の青年らしく必死にボールを追いかけている彼の姿を見ても、根柢の想いの違いをはっきりと理解してどこか遠くに感じた。
＊＊＊
　そんな少女の気持ちなど知らず、ただの目の前の敵に勝つことだけを考え続けた青年は、二ゲーム差をつけなければ勝利とならない最終セットで、先にゲームをブレイクしていた。
　ゲームカウント１３―１２、ここで決めなければ序盤にかなり消耗していた湊が先にダウンする。
　世界で戦ってきた男だけあって、湊復活後の三回目のサービスゲームで二五〇キロ越えの高速サーブにも対応してきた。
　直球でしかない高速サーブは下がっている者にコースを読まれれば返されてしまう。いくら速くてもそれだけで決まるほど必殺という訳ではないし、プロとして日々励んでいる者も甘くはないのだ。

だが、それはここまで必死に喰らいついて一歩リードした湊も同じ。極限まで集中して相手の動きを観察し、試合の中で相手のショットを真似して点を取るという芸当も見せた。
試合の中で成長する者もいるというが、青年ほどはっきりと強くなっていく事を周囲にまで実感させる者は多くないだろう。
サーブを返されストローク戦になり、相手のドロップに時間を稼ぐロブで対応し、ベースライン間際から打ってきたストロークをハーフボレーのドロップ返しで決める。
ドロップをお見舞いしたすぐ後にドロップを決められた相手は悔しそうだが、すぐに頭を切り替えてデュースに持ちこむため集中力を高めているようだ。
対する青年も限界が近いためここで終わらせると静かに闘気を放ち、ハイになって瞳孔の開いている金色の瞳で相手を睨みつけた。
「アッ！」
マッチポイントで湊が選んだのは強烈なスピンの掛かったサーブ。僅かに相手のボディ寄りに変化したサーブを相手は詰まらせる事なくショートクロスに返し、湊もそれは読んでいたとドライブボレーでダウンザラインを狙った。
あわや決まるかという打球。しかし、相手も日本のトップとして戦ってきた意地と強い相手に勝ちたいという思いから、走っても僅かに届かない一歩を飛び込んで逆クロスに返した。
正面のハーフコート辺りに相手がいる場面での執念が生んだショット、普通の者なら届かないタイミングだった。全力で走っても届くか微妙な距離、それもバックサイドというフォアよりもリーチが短くなる側なら尚更だ。
だが、湊には母から教わったスイッチフォアハンドがあった。咄嗟にラケットを左手に持ち替え走る。相手だって届いたのだから自分だって届く、ここで抜かれて延長戦などゴメンだと着地も考えず飛び込んだ。
「らぁぁぁっ!!」
後ろへと抜けて行こうとするボールを飛び込んだ湊のラケットの

先端辺りが捉える。空中の不安定な姿勢で少しでもグリップが甘くなればラケットごと後ろに逸らされて終わりだ。
そんなことになって堪るかと湊はグリップが潰れるほど握り込み、ギリギリで返す事に成功する。
青年が地面に倒れ込みながら打球の行方を目で追えば、ボールはネットテープに当たり上に飛んだ。どちらに落ちても不思議ではない。けれど、青年を応援する者たちは心の中で「入れ！」と強く念じた。
その思いが届いたのかどうかは分からない。ただ、上に飛んだボールが最後に落ちたのはネットの向こう側だった。
「げ、ゲームセットアンドマッチウォンバイ有里、カウント４―６、７―５、１４―１２」
両者コートに倒れたままの決着。春日井は悔しそうに「ちくしょー！」と言いながらも笑顔で立ちあがり、続けて少し呆けていた湊も立ちあがってネットインを謝罪した。
「すみません、最後だったのに」
「いいって、いいって。あー、でも本当に悔しいな。あんなサーブの相手と対戦できる機会なんて滅多にないし、出来れば決勝でやりたかった」
コート中央で握手を交わすと相手は快活に笑って湊の肩を叩いて気にするなという。負けた悔しさ以上に試合の楽しさが勝ったようで、相手は応援してくれていた観客に一緒に手を振って答えながら話しかけてくる。
「実はテニスプレイヤーとしての君の事は結構前に雑誌で知ってたんだよ。俺の憧れの人と同じ技使ってるからさ。あ、君は知らないかもしれないけど、俺が小学生のときに女子高生で両手利きの選手がいたんだ。その人は序盤に負けちゃったけど、俺にとっては両手でバンバン拾うのが格好良く見えてさ。憧れてテニス始めて、気付いたらプロになってたよ。まぁ、俺は持ち替えなんて出来なかったし、その人にも結局会えなかったんだけどな」
春日井の言葉を聞いた湊は思わず相手の方を見た。湊と一回りほ

ど違う相手の年齢を考え、それよりも六歳以上年上の女子高生で両手利きの選手などそういない。
さらに持ち替えという単語から、彼の憧れの人と湊の持つ同じ技とはスイッチフォアハンドの事だと推測できた。
自分の母の影響でテニスを始めた相手を、その息子が同じ技で倒した。なんとも数奇な運命だが、自分の母の事を覚えてくれている相手がいたことが嬉しく、湊はこの人にはちゃんとお礼を言っておこうと思った。
「……そうですか。貴方のようなすごい選手にそう言って貰えて、母もきっと喜んでいると思います」
「え、うそっ!? 君、あの人の息子さん? でも、あれ、子どもにしては大きくない? お母さんっていつ結婚したの?」
「大学卒業してすぐです。まぁ、事故で他界しているので会わせる事は出来ませんが、母が全日本選手権に出ていたって事は秘密にしておいて貰えると助かります。俺、両親が死んでから施設とか回って名字も変わってますから」
本当は名前すら変わっているが、旧家とは言え一般人である両親のことを相手が深く知る訳もないので、もっともらしい理由で秘密にしておいてくれるように頼む。
相手は義に厚く口も堅いことで有名なため、湊の頼みを聞いて誰にも話さずにいてくれるだろう。
そんな湊の思った通りにしっかりと頷いて「分かった」と答えた相手は、憧れの人が亡くなっていた事実にショックを受けつつ、けれど、その息子と試合が出来た事を感慨深そうにする。
「そっかぁ。でも、バスケしてた君がテニスに出てきたのはそういう事か。お母さんのリベンジが出来たな。絶対に喜んでいるから、そのまま優勝して一番強かったのは春日井さんでしたって言っておいてくれよ!」
「ええ、優勝したら必ず」
「よっし! そんじゃ、応援してくれた人たちのとこに行ってやれ! 君の事を待ってるぞ!」

荷物を纏めて並んでコートを出ると、取材陣に囲まれる前に春日井は湊の背中を押して逃がした。そして、すかさず自分がマスコミの前に出て壁になってくれる。

相手は負けたばかりといえ、四連覇がかかっていた日本のトッププレイヤーだ。いくら湊に取材をしたくても、目の前にいればそちらの取材を先にするしかない。

湊が疲れていると分かって気を利かせてくれた相手に頭を下げ、湊は握手やサインを求める観客にゴメンと謝罪しながら待つ人のいる観客席へと進んで行く。

眼鏡のおじさんも、ラケット柄のシャツを来た子どもも、今はゴメンと避けて湊は先を急ぐ。そんな青年の視線の先で待っていたのは、湊が激闘を制したことで感動の涙を流していた英恵だった。

見つけた湊はバッグを放り出して相手に抱きつき、普段よりもどこか子どもらしい声で結果を報告する。

「勝てた」

「ええ、頑張ったわね」

「おばさんが、母さんが喜ぶって言ってくれたから、勝とうと思えた」

こんなにも彼が感情を表に出してくる事など珍しい。普段の学校での彼を知る者は目を丸くしているが、抱きつかれた英恵は嬉しそうに湊の頭を撫でてエライエライと褒めてやる。

褒めてもらえた湊は英恵から身体を離すと、今度は桜にも抱きついてしっかりと応援の礼をした。

「桜さんの応援もちゃんと聞こえてた。ありがとう」

「うん。みーくん、いっぱい頑張ってたもんね。疲れてるでしょ？本部に報告に行ったら今日はゆっくり休みましょうね」

大きくなってスキンシップの減った湊がこんな風に自分から来るなど稀だ。それだけ勝てた事が嬉しいのだろうが、桜が優しく今日はしっかりと休みなさいと言えば湊は素直に頷いて返した。

そして、桜からも離れた湊が今度は誰に抱きつくのか、周りにいた者が若干の期待を持ちつつ構えれば、青年は放り投げたバッグを拾い上げて「報告に行ってくる」とそのままスタスタと去っていく。

よく考えれば分かる事だが、こんな場所で湊が同年代の女子に抱きつけば、それはたちまちゴシップ的な噂として広まってしまう。
英恵や桜は大人だから知り合いのおばさんやお姉さんとして扱われるが、お傍御用の和邇は大人組みでセーフだとしても、先輩である美鶴ですらアウトなのだからチドリやゆかりなど以ての外だ。
けれど、少女たちとしては自分も青年とスキンシップを持って喜びを分かち合いたかった。全員とは無理でも自分とくらいは……と思うのも無理はない。そんな少女たちの恨めしそうな視線を背中に受けながらも、勝てた事で少し嬉しそうな青年は気付かず本部まで去って行った。
そうして、高校生が第一シードに大逆転勝利が夜のニュースとして伝えられた五日後、決勝ではその高校生が第二シードとぶつかり、またしても最終セットにもつれ込みながらも勝利を収め、十六歳七ヶ月という最年少優勝記録を樹立して号外が出されるほどの話題となったのだった。

第百八十五話　研究の問題点

１２月１３日（土）
午後――ゆかり私室

二学期の期末テストを目前に控えた土曜日。学校から直帰したゆかりは寮の部屋で一人湊が作ったテスト対策プリントを解きながら考え事をしていた。

このプリントは何度も部屋にやって来られるのは迷惑だからと、プリントはやるから家には来るなと言って湊が用意した物だ。

彼の取ってない選択授業の科目まで用意されていて、それが教師の板書よりも分かり易くまとめられていることもあり、湊に教わったときだけ点数が上がる順平などは拝みながらプリントを貰って行ったほどである。

ただ、ゆかりは現在テストよりも気になっている事があるせいで勉強に身が入っていなかった。

（有里君はずっと事故のことを考え続けてるんだよね。お父さんのことも忘れないで、多分、自分だけで色々と背負ってきたんだろうな）

どうして湊が父のお願いを覚えて守り続けてきたのか最初は分からなかった。湊が会うまでに岳羽詠一朗の知る性格から変わって、成長したゆかりが平気で他者を傷付けるクズになり下がっていた可能性もあるというのに、湊は好きな子をいじめる感じで遊びながらもゆかりに優しくしてくれていた。

時には厳しい事をいうこともあったが、それは考えが子ども過ぎたゆかりを思って否定しただけで、今になって思えばゆかりと母の拗れた関係を必要以上に悪くさせないよう配慮していたのだと理解出来る。

それらが父との約束によるものだと知り、先日のテニスの試合で聞いた英恵の言葉でようやく謎が解けた。湊は事故とそれに関わることを一切風化させずに思い続けていたのだ。

以前、夏祭りで両親との思い出が遠い過去のように薄れていくとも言っていたが、最近の湊の様子を見ていると過去のことをしっかりと

思い出せたようである。
一部の記憶が薄れようと桐条への憎しみの炎を燃やし続け、薄れていた記憶を取り戻した今では憎しみ以外の思いも強くなっているのだろう。フルマラソンしようと疲れなさそうな青年が、心と体がばらばらになったくらいでテニスの試合で倒れる寸前まで弱っていたのが良い証拠である。
(私はあんなに真剣に事故のことを思った事があったかな。お父さん絡みだと怒ったり反論したりもしたけど、知らない人のことまで感情的になれるかって言われたら無理だし)
そして、英恵の一言で復活し試合に勝った湊は、チドリすら初めて見たという素の表情で喜び英恵や桜に報告していた。
クールや大人な雰囲気とファンたちに呼ばれ、ゆかりたちからすれば何にも興味がなさそう普段の様子からは想像も出来ない姿だった。
ただ、見たときには驚いたが不思議と違和感はなかった。その事を風花たちと話せば彼女たちも同じように感じたという。
つまり、事故さえなければ彼はゆかりたちと変わらない喜びを自然に表現する、今時の若者らしい性格をしていたという事なのだろう。
(お父さんの無実を証明するって月光館学園に来たのにさ。実際はただお母さんから離れたかっただけなのかも)
彼の本来の姿とも言える〝あり得た未来〟を垣間見た事で、ゆかりは余計に事故の齎した彼への影響を強く意識した。
性質が真逆になるような、どこにでもいるはずの子どもが人を殺せるようになってしまうような、大きな傷を彼の心に残して事故も来年で十年を迎えようとしている。
その間にゆかりは自分が何をしていただろうかと考える。小学生の間はただ何も出来ず母と一緒に逃げていた。
けれど、いつまでもそんな生き方は嫌で、母の様な逃げてばかりの弱さも嫌で、ゆかりは自ら父の無実を晴らすために月光館学園へとやってきた。
来たばかりの頃はやる気で燃えていた。ここなら情報も外より集まると思って、学校が始まれば図書室で色々と調べようと計画を立て

たりもした。
だというのに、実際に学校が始まってからは難しくなった勉強に必死でついていき、中学の授業ペースに慣れてくると部活や友人との時間を楽しむようになり、いつの間にか恋をして告白までして付き合うようになっていた。
聞けば誰もがスクールライフをエンジョイしていると思うだろう。本人だってそう思うのだから。
(ううん、そんな事ない。ちゃんと、お父さんは私の信じた優しいお父さんだったって今でも証明したいと思ってる。足りなかったのは本気で知ろうとする覚悟)
ただ、それでも父を忘れた事はなかった。どう調べればいいのか分からず、楽な方へ逃げてしまった事は認めるが、母から逃げる口実に父を使った事は勿論、どうでもいいと思った事だって一度もないと少女は父に貰った思い出の携帯ストラップを握りながら考える。
(桐条先輩と知り合って近くにいる今はすごいチャンスなんだ。後はそこから少しでも情報を得るだけ)
夏祭りで湊は言っていた。真相を調べるには桐条と接触するしかないと。そして、その切っ掛けとして美鶴とパイプを持つ事は非常に有効だとも。
無関係の者ならば美鶴も企業スパイかと疑うかもしれないが、同じ学校に通う先輩後輩ならば心のガードも緩んで近付き易い。しかし、それも美鶴が卒業するまでしかチャンスはないので実質来年が最後だ。
(一人で生きていくって言ってたのに、有里君を好きになってからどこかで甘えてた。お父さんみたいに自分の味方でいてくれる人が傍にいて安心しきってた)
居心地の良いぬるま湯に浸かっていた少女も、過去に対して異常な執着を持ち続ける青年を見た事で目が覚めた。自分もあの様でなければならないと。
だが、今の自分では彼の様にはなれない。頼る事の出来る、甘える事の出来る大切な者が傍にいるのでは、心の弱い甘ったれな自分では

近付く事すら出来ないと厳しい現実に少女は項垂れる。
(私は弱いからきっと彼の傍にいたら少し駄目なだけで簡単に諦めちゃう。お父さんのことを本気で知りたいなら、彼に甘えられる状況にいたら駄目なんだ)
膝の上に落とした携帯を握ったままの手を見つめ、変わるなら方法など一つしかないではないかと自分に言い聞かせる。
このまま彼といれば少女は幸せでいられる。ただ、父の無実を晴らすという目的からは遠ざかり、下手をすれば永遠にチャンスを失うかもしれない。
(私って本当に、勝手だなぁ……っ)
残り約一年がきっと人生で最大のチャンスだと頭では分かっている。けれど、ゆかりは今の幸せを手放すのが怖くなり大粒の涙を流した。
――ＥＰ社研究所
テニスの全日本選手権で優勝してから湊の生活は変わった。などという事はそれほどなく、以前よりも声をかけられ易くなったくらいで今まで通りの生活を送れていた。
その理由としては皇子ブームが二回目だからというのが挙げられる。最初のブームならば金になるからと様々な企業やマスコミが広告塔のように使おうとしてくるが、流石に二回目になると一般人にも浸透しているので目新しさが薄れる。
勿論、今までテレビ出演を基本的に断っていた湊が出るとなればスポンサーも集まってくるだろうが、優勝後に湊が個別取材を受けたのはテニス雑誌一件のみ。それも国内ランクトップの春日井と一緒に受けるという条件を付けた一回限りだ。
湊ともう一度話したいと思っていた春日井も快諾した事で実現した対談は、当初予定された四ページを大きく変更した大増量十五ページで載せられ、予約時点で売り切れ続出の重版に重版を重ねる月刊スポーツ雑誌としては異例の売り上げを記録した。
出版社からは電話で改めて感謝が伝えられ、学校に件の雑誌五十冊＋湊への菓子折りが送られてきたりもしたが、その本人は母との思い

出だった全日本選手権に出場を果たしたことで既に頭を研究に切り替えており、現在はＥＰ社の工場地下区画の研究室でラビリスの生体ボディの研究を行っていた。
　記録媒体として使える黄昏の羽根の性質を利用し、それぞれの身体データを保存した黄昏の羽根を超微細に分解した後、人格ベースとなった少女らの細胞の核と入れ替えて培養する。
　それが湊の考案した対シャドウ兵装らの人間化であり、試しに自分の細胞とデータを保存した黄昏の羽根で培養したところ、実にシビアな設定と調整が必要だったが順調に培養が進んで生体義手とプロトフルオーダーの完成まで漕ぎ着けた。
　現在はその発展として人工骨格の部分を改造し、三連装アルビオレなどのような兵器としての機能を搭載した戦闘用生体義手の研究もラビリスらの研究と同時に進めているが、湊が見ていた培養液で満たされたケースの中で培養していたラビリスの細胞が彼の前で崩れていった。
　それを見ていた湊は苦虫を噛み潰した表情をすると、近くに置いてあったパイプ椅子を蹴りあげて研究室の高い天井にぶち当てる。落下してきた椅子はかなりの音を立てながら床にぶつかるが、完全にひしゃげてしまった椅子はもう直しようのないレベルだ。
　青年の突然の行動に同じ部屋で改善点などについて話していた研究員らは動揺し、明らかにまだ苛立ちが治まっていない様子から声もかけられずにいると、コーヒーを飲んで研究員らの話を聞いていたシャロンが頭を掻きながら立ちあがって湊に声をかけた。
「あのさぁ……そうやって物に当たるのやめてくれない？　あんたがやると絶対に壊れちゃうのよぉ。それに同じ部屋にいる人がびびっちゃうしねぇ」
　昔よりも無駄な筋肉が落ちて細くなったが、湊は所謂細マッチョと呼ばれるガタイに長身も合わさって立っているだけで威圧感がある。
　さらに切れ長の瞳の美人でもあるため、そんな彼が苛立って物に当たっていると、殴り合いの喧嘩もした事のない研究員らは恐怖を感じて研究が手につかなくなるのだ。

彼の経歴を知っている武多とエマなど、一歩間違えれば殺されると思っているのか他の者以上に怯えており、助手や部下の様子を見て彼を落ち着かせる必要があると思ったシャロンがこうしてわざわざ話を聞きにきた次第である。
「ほーら、今回はどうしたかお姉さんに言ってみな。話は聞いてあげるからさぁ」
不貞腐れた様子で残っていた別のパイプ椅子に湊が座れば、後ろから抱きつく様にシャロンが話してみと彼に構う。
二人の年齢差は約一回り。お姉さんと言われると首を傾げるものの、桜や佐久間も同じくらいの年齢なので、さらにもう一回り上の英恵がおばさんならそこまでおかしくはないはずだ。
「……また同じタイミングで細胞が崩れた。培養液の濃度を変えても、温度を調節しても、三日目には崩れるんだ」
「あんたの時は最初っから一週間以上いったものねぇ。細かい条件を変えてのアプローチが全部不発だとストレスが溜まるのも分かるし、年が明ける前に完成させたいって焦る気持ちも理解出来るわ」
最初に行った湊の細胞を使った生体パーツの研究では、何度も条件を試行錯誤して安定して培養できる数値を割り出したが、そこに至る前段階でも一週間ほどは培養を進められた。
だというのに、最初から安定数値で培養しているラビリスの細胞は、どうしてだか三日目には崩れて培養が進まなくなってしまう。
基となる人格ベースの少女の細胞は培養し増やしているので、崩れた細胞から微細な黄昏の羽根の細胞核を回収すれば何度でも再実験は可能だが、湊の細胞で作ったプロトフルオーダーが完成してから今日までラビリスの方は全く進歩がない。
ファルロスの力の欠片であるシャドウらが目覚めるのは来年で、目覚めて戦いが始まれば研究を進めていられるか分からない。故に、２００９年までに彼女を人にしてあげたい湊が焦る気持ちはシャロンも理解出来た。
「けどさぁ、最初から無理って言うか無謀な研究だって分かってたでしょ？　あんたの方は人よりも細胞の分裂速度が速くて強引に乗り

きった感じなのよ。一般人の細胞では不可能でほぼ再現性のないサンプルって説明したじゃない」
湊が焦る理由は分かるけれど、そもそもが簡単な研究ではなかった。人工関節などは一般的な医療でも使われているので、生身に人工物を入れること自体は不可能ではない。
だが、人工の骨に培養した細胞、直接的に言えば筋肉だけじゃなく臓器や脳に至るまで全てを後付けで人を作ろうというのだから、全ての臓器が正常に機能するかの検証も含め、本来ならもっと段階を踏んで試行実験を繰り返すべきなのだ。
青年の細胞を基にしたプロトフルオーダーが完成したのだって、生命力に溢れた彼の細胞の分裂速度が常人よりも速く、第一の壁になると思われた一週間を簡単に越えられたから出来ただけであり。どういった順番に臓器が出来ていくのかなど参考になるデータは多数取れたが、分裂速度と耐久性に関していえばまるで参考にならない一サンプルでしかなかった。
これまではベースとなる技術が一緒だった事で、比較的速く新しいボディを作れていたが、いま湊たちが扱っているのは機械ではなく生きた細胞だ。分野は既に医学や遺伝子工学になっており、分野を跨いで研究していたシャロンたちは慣れているが、湊だけまだ機械のボディ製作時のイメージを強く残していた事で、シャロンはしっかりと頭を切り替えろと指摘する。
ただ、後ろから抱き締められる形になっていた青年は、大人から真っ当な指摘を受けるも納得が出来ないのかポソリと呟いた。
「……でも、出来る」
「いや、それはあんたの希望ね。というか願望。特殊過ぎる成功例が出来たからって希望を持ち過ぎたのよ」
どこからその自信が来るのか分からないが、根拠のない言葉にシャロンは思わず溜め息を吐いて現実を教える。
出来る可能性はあるが現状では不可能。細胞の耐久性なのか、それとも培養液が合っていないのか。失敗する原因を突きとめる事から始める必要があるので、今年中に完成させることが無理なのは分かり

きっていた。
シャロンがそんな風に子どもを諌めれば、湊は培養液で満たされたケースを見ながら色が変わるほど強く拳を握り締める。
彼だってそんな事は言われなくても分かっているのだ。だが、諦めるような言葉を吐けば成功が遠退くようで嫌だった。
大人びてはいてもそういう意地のはり方はまだまだ子供で、普段の様子で忘れがちになるがまだ高校生だったと思い出し、シャロンも子ども相手に厳しく言い過ぎたことを反省して頭を撫でる。
「あー、ゴメンゴメン。私らだって別に出来ないとは言ってないわ。現に今だって安定培養出来る方法について話してたんだし。ただ、元々研究者だった私らはそんな短期間で出来ると思ってないの。こんなの数年数十年かける研究だしさぁ」
大切なのは客観的に現状を把握し、何から手を付けていくか優先順位を決めていくこと。
そうしなければ、全てが中途半端になってしまい時間を無駄にするだけでなく、下手をすれば研究自体が続行不可能になるかもしれない。
だから、湊も一回頭を冷やして他の研究員らと一緒に話し合おうと彼女は誘った。
既に湊の細胞によって成功体が作られているのだから不可能ではない。本来なら長い時間をかけて行うべき研究でも、急がば回れで短縮法が見つかるかもしれないから皆で考えようと。
しかし、そういったシャロンが身体を離すなり立ちあがった湊は、先ほどとは別の培養中のケースを見つめながら静かに言葉を発した。
「……もういい。元から人の力だけじゃ無理だったんだ」
「いや、人間とほぼ変わらないあんたでいけたんだから大丈夫だって。もう少し時間がかかるかもしれないけど、濃度や温度やその他諸々で安定する値が見つかるから。大切な子たちのための研究で諦めちゃダーメ」
言い過ぎたことでへそを曲げたのか急に諦めるような事を言ってくる湊に、シャロンはこれだから子どもの相手は難しいと内心で顔を

顰める。
知識を得る事に貪欲な湊は教えれば吸収していくので、その器用さもあり研究の助手として非常に優秀なのだ。エマや武多では出来ない調整も対象の状態をアナライズで見続けられる湊ならば問題ない。
そんな青年がここで研究を下りてしまえばシャロンの負担は急増し、さらに言えば作業が回らなくなって研究を凍結せざるを得ない状況になる事も考えられた。
相手が頑固なのは過去の経歴とこれまでの付き合いで分かっている。故に、どうにかしてやる気を取り戻して貰えないだろうかと考えていれば、ケースを見ていた湊が振り返って言葉を返してきた。
「……何を勘違いしている。元々一人でやろうとしてたんだ。いくら失敗を繰り返しても死ぬまで諦める気はない」
「あー……そうなんだ。じゃあ、さっきのはどういう意味？」
諦めないのなら良かったが、紛らわしいのでもっと分かり易く言って欲しいとシャロンは頭を掻く。普通に聞けば諦める言葉だが、彼は別の意味で言ったらしいので、その意味を尋ねれば湊はケースに視線を戻して言葉を続ける。
「前提が間違っていたんだ。培養液はこれでいい。というか、必要な栄養を混ぜた羊水とほぼ同じで駄目なはずがない」
「ふむ。それで？」
「足りないのは情報の方だった。黄昏の羽根は命じゃない。生物とは異なる概念を持つ存在の欠片だ。だから、その欠片に命を教えてやればいい」
瞬間、湊の身体から淡い緑の光が溢れだしケースを包みこむ。何が起きているのか分からないが、近くにいたシャロンは激しさを増す光で近くに居続けることが出来ずに後ろに下がった。
他の研究員らはシャロン以上に怯えて壁際まで逃げているが、シャロンはこれもペルソナの力なのだろうかと観察を続ける。そして、よく見れば溢れ出た光は小さな粒の様になっており、彼女は流れてきた光の粒に試しに触れてみる。
元が光なので硬さや手触りのような感触はなかったが熱は感じて、

たった一粒なのに随分と温かいのだなと感心を覚えた。
見ていてどこか落ち着く綺麗で優しい緑光が、まるで暴れる炎のように激しく放出される様はどこか歪に感じるが、少しすれば光は治まり、疲れた様子の湊がケースから離れ椅子に座ったことでシャロンも近付いてケースの中を改めて見る。
すると、そこにはこれまで崩壊していたときよりも明らかに育った細胞が残っており、湊が時流操作と先ほどの光の放出を同時に行っていたと理解した。
「……安定した。ねぇ、これ何日目？」
「二週間だ」
「へぇ、それでどうやったの？　さっきの光ってなに？」
「あれは俺の生命力だ。なくなれば死ぬから全てはやれないがかなりの量を注ぎこんだ」
湊の時流操作は範囲を選べる。心臓を包む結合した黄昏の羽根であるエールクロイツを中心に、アナライズで自由に範囲を選べることで、湊は心臓から培養している細胞までのごく狭い範囲だけ時を加速させた。
また、それと並行して細胞に生命力という命の源であるエネルギーを直接与え続け、湊は他の者の細胞でも自分と同じように細胞が崩壊する前に安定期まで持っていこうとした。
細胞核として入れた黄昏の羽根は命ではない。けれど、命の源を外部から与え続ければ、それが潤滑油のように元の細胞と黄昏の羽根を馴染ませ機能させる。
情報を記録できはするものの、人格を与えない限り学習能力を持たない黄昏の羽根にどうやって命を教えるのか不思議に思っていたシャロンは、湊の説明を聞いて随分と荒っぽい教え方だと苦笑しつつも納得したという表情を作る。
「なるほどねぇ……。というか、もしかしたら、駄目だったのはラビリスちゃんやアイギスちゃんのデータの方だったのかも。データって心を除いた純粋な身体のデータでしょ？　二人の身体の設定数値は出せても、元が人工物だからカテゴリが生命体としてのデータになっ

てなかったのかもしれないわね」
　彼女の口にした説に湊は僅かに驚きを見せる。確かに言われてみればそうだが、湊たちが入力したラビリス達のデータは身長や体重に筋肉のバランスなど、人であればこんなスタイルだという感じで入力したものだ。
　顔の造形に髪や瞳の色など細かな部分までデータとして入れてはあるが、元が人間だった湊の時と違い彼女たちには生き物という情報が欠けていた。
　そもそも、心は持っていても生き物ではないし、生き物だという情報をどのように入力すれば機能するかも分からない。湊の取った行動はかなり無理矢理な理論ではあったが、ある意味で最適解だったのではと話すシャロンに、青年はそれならアイギスの方はもっと簡単に作れるのではと尋ねる。
「じゃあ、先に軌道に乗ったラビリスの細胞核の羽根に、アイギスのデータを上書きすればいいのか」
「そうね。それなら、カテゴリ内の数値をいじるだけだから大丈夫じゃない？　まぁ、まだ推測の域だけどさ」
　細胞核の交換は専用の器具を使って細心の注意を払う必要があるが、細胞核として利用した黄昏の羽根の回収だけならば、湊は能力の応用で簡単に出来る。
　培養された細胞の核は黄昏の羽根ではなく、普通の生物と同じ細胞核が残っているため、既に遺伝子情報が残っている細胞があればベースとなった黄昏の羽根は抜いても問題なく、今後の培養が楽になるなら良かったと湊も小さく笑った。
　ただ、シャロンの方はまだ話が残っていた事で、生命力のほとんどを放出して疲れて座っている湊に近付くと、
「あ、そうそう。あの子らの事になると周りが見えなくなるのは慣れたんだけどさ。ああいうの出すんなら先に言えっつーの！」
　振り上げた拳骨を青年の脳天目がけて振り下ろした。
　シャロンが湊を殴ったとき、ゴンッ、と痛そうな音が研究室に響くが、実際には殴られた方より殴った方が痛がっており、遠巻きに見て

いた研究員らは拳もまともに握れない頭脳労働派が殴れば当然だなと同情する。
急に生命力という訳の分からない光を説明もなく放出されれば、ペルソナを知る者ならそういった超常的な力か何かだろうかと推測し、その場に残っても大丈夫か心配もするだろう。
離れていた研究員たちはまだいいが、すぐ傍にいて光にも触れているシャロン的には、いくら自分の手が痛もうと殴らなければ気が済まなかったのは容易に想像できる。
ただ、年齢的には彼女の方が上でも、会社の中での立場は湊の方が上だ。別に痛くはなかったが疲れているときに殴られて不機嫌になった青年は、酷く冷めた表情でシャロンを見ると淡々と呟いた。
「……お前、冬のボーナスカットな」
「ちょ、それ割とマジで言ってるでしょ。新しい機材買うのに必要なんだからやめなさいよ。やったらラビリスちゃんに言いつけるからね」
「言ったところでラビリスに会社のことを決める権限はない。経営に関しては素人だから口出しもしないと言っているしな」
シャロンが言いつければラビリスは可哀想だからやめてやれと言うに違いない。だが、言ったところでラビリスは会社の経営に関してはノータッチなので、湊より上の権限を持つ者などいないこともあり撤回させようがない。
ボーナスカットの理由はジャパンＥＰ社の代表取締役を殴ったからという正当なもので、先に説明もなく周りを驚かせた自分も悪いが、主任という立場ある人間が部下の前で上司に暴力はいけないなと湊は薄い笑みを浮かべて席を立った。
「ボーナス払いが出来なくなって残念だな。まぁ、自分の行動が原因だし反省しろよ」
「待って、ゴメンってばぁ。ほら、お姉さんちゃんと話聞いて慰めてあげたじゃない。個人の研究室用にいくつか欲しいのあるからカットされるとキツイんだってばぁ」
八つ当たりで椅子を蹴り飛ばしていたときとは打って変わって、青

年は疲れているのに少し楽しそうに口元を歪めて研究室を出ていく。その後を追ってボーナスカットの撤回を求めるシャロンは、他の研究員たちに交代で細胞の観察をしておくように告げて一緒に部屋を出る。

細胞の培養さえ軌道に乗れば、人工骨格に合わせて筋肉や臓器を作って行く事も出来る。それが分かっているからこそ、湊は減った生命力を食事で回復させるため食堂を目指した。

第百八十六話　聖夜の決断

１２月２４日（水）
午後――ポートアイランド駅
今日はクリスマス・イヴ、日本では恋人や家族と少し特別な日を過ごすといったイメージが強い。
日も落ちて辺りが薄暗くなり始めた頃、雪の積もった駅前で肌を刺すような寒気に白い息を吐きながら、普段よりも落ち着いた印象の服でお洒落をしてきたゆかりは、待ち人が来るのを静かに待っていた。
「……意外と早いな。メリー・クリスマス、と言っておくべきか？」
「それよりも久しぶりって挨拶すべきじゃない……って返して欲しいの？」
「よく覚えてたな」
「そりゃ、記念日に最初にした会話ですから」
湊が去年の再現を期待した挨拶をしてきたことで、ゆかりも相手の希望に答えて同じセリフで返してやる。
今日は世間ではクリスマス・イヴだが、二人にとっては正式に交際を始めて丁度一年の記念日でもあった。
それだけにゆかりは湊が一周年をしっかりと覚えて意識してくれていた事が嬉しく、滑らないよう気を付けて近付けば、彼の左腕を取って抱きつくように腕を絡めた。
「……えへへ」
今日の湊は眼鏡をかけた状態で長い髪をコートの中に仕舞い、さらに上からマフラーを巻いているので一目では長髪だと気付かれない。
そんなちょっとした変装も兼ねた分厚いコートを着ている者に抱きついても、お互いの体温などこれっぽっちも分からない。けれど、触れあっているだけでどこか温かく感じて、ゆかりは抱きついたまま自分の右手と彼の左手を恋人繋ぎで繋ぐ。
そんな少女の様子を眺めていた湊は、今日は随分と機嫌がいいなと思いながら、彼女との触れ合いで感じた事を率直に伝えた。
「こうやって腕に抱きつかれると、一年で随分育ったなと改めて実感

するな」
「ちょ、可愛い彼女の愛情表現をすぐそっちの話に持っていくな！」
ゆかりが湊の腕に抱きつくという事は、彼の協力もあって随分と成長した母性の象徴が押し付けられるという事である。
別に触られても嫌な気持ちになったりはしないが、ＴＰＯは弁えて欲しいし、暗くなっているが時間的にはまだ夕方なので自重しろとゆかりは繋いだ手を強く握って彼を注意した。
しかし、リアルに釘を刺されようと表情一つ変えないで耐えられる湊にとって、いくら弓道で鍛えていようと非力な少女の締め付けなど一切ダメージはない。
ムスッとした顔をするゆかりをそのまま見返した湊は、酷い誤解だと溜め息を吐きながら先ほどの言葉の意味を話した。
「はぁ……俺は身長差のつもりで言ったんだがな」
言われてみれば確かに身長差は減っていた。湊の身長は一八三センチで止まっているけれど、ゆかりはまだ伸びているので、去年から一年間でおよそ頭一つ分ほどの差まで縮まったと言える。
だが、今日のゆかりは少しヒールのあるロングブーツを履いているし、向かい合っていたときに目線の違いで言っていたならともかく、抱きついたタイミングで言うのはどこか不自然であった。
そこをゆかりが指摘すれば、
「ダウト！　それ絶対――――っ」
話している途中で口を塞がれた。
目を閉じたせいで他の感覚が鋭くなり、待っている間に少し冷たくなっていた唇が触れた湊の体温で熱く感じる。
突然の行動に驚くが彼からの愛情表現は珍しいので、彼が唇を離すまで優しい感触に身をゆだねていれば、離れた彼は小さく口元を歪めてゆかりだけに聞こえる声で呟いた。
「去年より近かっただろ？」
「……ばーか。まだ人いっぱいいるんだから、気を付けないと写真撮られちゃうよ？」
一センチや二センチの差が縮まったところで、頭一つ分も差があれ

ばゆかりでは背伸びしても届かず、結局は今の様に湊が身体を屈めて顔を近づけてくれなければキス出来ない。
そして、唇同士が触れあえば、ゆかりの頭の中は湊のことでいっぱいになり、ちょっとした距離の違いなど気にしていられない。
それを分かって聞いてくる湊の意地悪に、嬉しいが周りも気にしろ有名人とゆかりは返す。
少女の照れ混じりの返事に満足したのか、青年は姿勢を正して周囲を見渡しながら、そろそろ移動しようと提案する。
「さて、とりあえずイルミネーションを観に行こうか。今年はいいと言われたからホテルは取ってないが、レストランの予約はしてるからな。色々と観に行くならそんなに時間はない」
「あ、うん。じゃあ、いこっ」
クリスマスディナーの予約をするとき、一緒にホテルもどこかに取るかを湊は尋ねた。その際、ゆかりは今年はいいやと言っており、本人がいうならとホテルの予約は取っていなかった。
彼女なりのサプライズがあるのか、それとも高校生になって寮則が変わったのかは分からないが、それでもレストランの予約は取っているので見て回る時間は限られる。
ゆかりが見たいと言っていたイルミネーションは巌戸台から少し距離があるため、湊が駅の方へ歩き始めると、ゆかりは彼の手を取って繋ぎながら目的地を目指した。
夜――都心・レストラン
秋には黄葉が彩るイチョウ並木のイルミネーションや、海外から巨大なモミの木を輸入して飾り付けた本物のクリスマスツリーなど、クリスマス特集の雑誌に載っているデートスポットをいくつも回った二人は、時間になった事で湊が予約していたレストランへとやってきた。
外観はどこか教会のような感じだったが、中は落ち着いた雰囲気の洋風レストランで、離れた場所に配置されたテーブルには本物の富裕層だと分かる品のある夫婦や家族が食事を楽しんでいた。
ゆかりもこれで名家の娘なので、桐条家主催のパーティーなどでマ

ナーも身に付けている。服装もドレスコードがあっても問題ない物を選んできたので、名前を告げれば問題なく席まで案内された。
席に付けば湊が椅子を引いてゆかりを待ってくれ、彼女は随分と紳士だなと小さく笑ってお礼を言いながら座る。
彼女が座れば湊も正面に移動し席についた事で、給仕を務める女性が丁寧な仕草で礼をして本日のコースの説明を始めた。
「本日はクリスマスディナーの星のコースでお承りしております。食前のお飲み物はいかがなさいますか？」
「んー、酸っぱいのより甘いのがいいなぁ。ピンク色の甘いフルーツ系って何かありますか？」
「ピンク色ですとバージンブリーズは如何ですか？　グレープフルーツとクランベリーのジュースを混ぜたノンアルコールカクテルで、グレープフルーツの爽やかな飲み口が特徴なのですが」
「へぇ。じゃあ、私はそれで」
バージンブリーズはシー・ブリーズからウォッカを抜いたノンアルコールカクテルで、店によってピンクであったり赤に近かったりするのだが、この店ではピンク色をしているようだ。
ゆかりはフルーツジュースを飲む方ではないので味は想像できないが、二つのフルーツの組み合わせを美味しそうだと思って頼めば、湊が目だけで「バージンじゃないのにな」と言ってきていたので、ゆかりは給仕の女性から見えないようにテーブルの下で彼の足を踏んづける。
対して踏まれている青年は気にした様子もなく、メニューも見ないままドリンクを頼んだ。
「俺はサンドリヨンでお願いします」
「あ、それ前も頼んでたね。それが好きなの？」
「……レモン、オレンジ、パインのジュースで作るカクテルなんだ。これだとどこでも置いてるから選ぶ手間がなくていい」
「えー……特別なディナーでそういう選び方してたとか知りたくなかったんですけど」
カクテルは言ってしまえばジュースや酒の組み合わせだ。店に

よってはジュースの種類が限られて作れない物もあるが、湊が挙げた三種類はよく使うのでどの店でも置いている。
すると、自動的にサンドリヨンならどこでも頼めることになり、こだわりのない青年は好みより楽さで種類を選んでいた。
店を調べて予約まで取るマメな性格をしているくせに、根っこの部分は面倒臭がりなようで、知りたくなかった衝撃の事実にゆかりが微妙な表情をすれば、給仕の女性も苦笑して注文を通しに去って行った。
周りに人はいるがテーブル同士の距離は開けてあり、周囲を気にせず話せる状況になったことで、星のコースと書かれた御品書きを見ていたゆかりが湊に話しかけた。
「ねえねえ、星のコース以外ってどんな名前だったの？」
「花と雪だ。花は野菜中心のヘルシー系、雪は魚料理、星は肉料理のコースになってる」
「そうなんだ。雰囲気は分かるようで、ちょっと首を傾げるね」
花は植物繋がり、雪は水繋がりだろうか、星に関しては綺麗な言葉で残っていたのがそれだったという理由っぽいが、とりあえずゆかりは独特ながら面白いセンスだと笑顔を見せる。
そうして、二人が雑談を交わしていれば、食前のドリンクが運ばれてきて二人はグラスを手に取った。
「何に乾杯しようか」
「岳羽が大人になって一周年だからそれにでも乾杯するか」
「よーし、表でろ。鬼畜眼鏡に乙女の鉄拳を喰らわしてやるから」
さっき言葉を交わさずに話したというのに、まだそのネタを引っ張るのなら実力行使も辞さない。
彼のかけている眼鏡が変装用の伊達なのは分かっているため、その眼鏡叩き割るぞと良い笑顔を見せれば、青年は色気すら感じる綺麗な微笑を浮かべて言葉を返す。
「じゃあ、今年も今日の思い出にでいいんじゃないか」
「ん、じゃあそれで。今日の思い出に乾杯」
「乾杯」

ちょっと締まらないが、青年との会話などこんな物だとゆかりも諦め、二人はグラスを小さく鳴らしてドリンクに口を付ける。
酸っぱいフルーツ同士の組み合わせだったが、ゆかりが希望していた通り味は甘めで、けれどすっきりとした後味で非常に飲み易かった。
湊の方は飲み慣れているので店ごとの違い程度しか感じていないが、少女は彼の選ぶ店は当たりばかりだなと感心する。
「こういうお店ってどうやって見つけるの？　やっぱり仕事関係？」
「そういう場合もある。後は桜さん達と食事に出かけたり、昔、家族で行った事のある店だったりだな」
「今日のここは？」
「ここは仕事だな。アレルギー食材を使わない料理の研究会にシェフが参加してて、そのときに名刺を貰ったんだ」
ＥＰ社では電子カルテで患者ごとにアレルギーの情報を管理しており、食堂では診察券のカードを読み込ます事で、アレルギー食材を除いた料理のメニューを個別に渡している。
呼ぶときには食堂と呼んでいるが、建物はいくつかに分かれて一般のレストランのような建物もある。そちらはディナーなどのコースメニューも扱っているので、アレルギーがあって外食が難しい家族もそこなら安心して食事が出来ると評判になっていた。
湊たちが今日来たレストランのシェフは、ＥＰ社が主催する料理の研究会に参加し、自分の店でも似たような事が出来ないかと熱心に話を聞いて代表を務める湊にも名刺を渡していった。
その後、何度か話がしたいと食事に招待されて料理の味も知っており、ディナーを楽しむ場所として相応しいと選んだ訳だが、少女の方は話を聞いて彼は一体どれほどパイプを持っているのかと呆れ気味な顔をした。
「学校にも来てるのに、よくそんな色々な人と会ったりできるね。疲れないの？」
「部下が会って後で報告を聞く事もあるからな。岳羽が思っているほど会ってないぞ」

「そうなんだ。まぁ、どっちにしろ学生のする話じゃないと思うけどね」
言ったところで料理が運ばれてきた。二人の前にはカブの冷製スープが置かれ、ゆかりは楽しみだとスプーンですくって口へ運ぶ。
彼女のカブのイメージは柔らかい大根といった感じなのだが、スープはカブの風味でまろやかになったポタージュの様で、ときどきすりおろしたカブらしき舌触りが口の中に残る。
ただ、ざらついているかと言えばそうではなく、丁寧に処理をしつつ別の食感も味わえるよう敢えて残しているのは確実で、こういったスープもあるのかとゆかりは初めての味と食感に心の中で賛辞を送る。
「冷製スープって苦手だったけど、これは飲み易くて美味しい。本当に丁寧な料理って感じ」
「最近では海外の野菜を国内で作っていたりするんだ。ここでは契約農家に頼んで西洋野菜を作ってもらって、それを直接仕入れている。だから、シェフの出したい味が出せるらしい」
「ああ、同じニンジンでも種類によって冬は甘かったり甘くなかったりするもんね。なるほど、そういう条件を食材の時点で揃えてるから、余計な処理とかを省いて丁寧に作れるんだ」
ゆかり自身も料理をするので、食材の味の違いで思い通りの味を出せない難しさを知っている。
それをここのシェフは自分で食材から選ぶことでクリアし、味のばらつきを考えなくていい分、それぞれの処理に力を注いで調理できるのだという。
美味しさと丁寧な処理にはやはり秘密があるのだなと、ちょっとした裏話を聞きながらゆかりは運ばれてくる料理に舌鼓を打った。
――巌戸台
食事中にプレゼントの交換も終えて、レストランを出て巌戸台まで戻ってくると、二人は駅から歩いて女子寮を目指していた。
薄らと雪が降ってホワイトクリスマスだなと思いながら歩いていれば、寮までまだ十五分ほどかかる場所でゆかりが立ち止まり、湊の

方へ振り向くなり口を開いてきた。
「今日はここまでいいや」
「まだ寮までは距離があるぞ」
「分かってるよ。でも、今日はここまでいいの」
現在の時刻は九時前で年頃の少女が一人で歩くには安全とは言い難い。けれど、送って行こうとすれば強く拒否してきた事で、湊はどうしたんだと不思議に思ってゆかりを見つめる。
すると、相手はどういう訳だが今にも泣き出しそうな顔をしており、理由があってここで立ち止まった事を湊も察した。
湊が何も言わずに相手を見つめていれば、何度も口を開きかけては閉じていたゆかりが、意を決したように震える声で話し始めた。
「あの、ね。突然こんな事言われても困ると思うんだけど、私と別れて欲しいの」
突然の言葉に湊は目を細めて相手の真意を探ろうとする。どうみても相手は別れる事を嫌がっている。けれど、誰かに命令されてという無理矢理な感じはしないので、事件性がなければ記憶を読むのはやめておこうと話の続きを黙ってきく。
「自分から告白しておいて勝手なのは分かってる。でも、私、このままじゃ有里君に頼って、依存しちゃいそうで」
頼る、依存する、この単語から思い出すのは誰にも頼らないと言っていた昔のゆかりの姿。
当時の彼女は余裕がなかった。父の事を調べるといいながらも、美鶴に積極的に会いに行って情報を仕入れるでもなく、かといって図書館で桐条グループにまつわる書籍や新聞で当時の状況を再度洗い直しもせず、調べたいというだけで行動は一切起こしていない。
そんな状況で少しは焦りを覚えていたようだが、運悪く母親が交際相手を紹介したいと言ってきた事で、彼女は母親に反発して誰にも頼らず自分だけで幸せを掴むんだと意地になっていた。
見かねた湊が話を聞きガス抜きに恋人の真似事をして、一年前から本物の恋人になって彼女の方も色々と考えられる余裕が出来ていたはずだが、どうしてまた昔のような事をいうのか不思議に思っていれ

ば、ゆかりは自分が改めて考えるようになった切っ掛けを話す。
「有里君のこと見てて分かったんだ。私に足りないのは覚悟だって。お父さんの無実を証明するためにきたって言ってたけど、今までは全然本気じゃなかった。そんなんじゃ何も分からなくて当然だよね」
分からなくて当然という少女は自嘲気味に笑う。
口でなんと言おうと行動を起こさなければ意味がない。母親との思い出を大切に思っていた湊は、母を喜ばせるためにテニスで日本一に輝いて見せた。
ゆかりにそこまでの事は出来ないが、それでも自分に出来る範囲で全力を尽くす必要があると、思うだけで何もしてこなかった自分に活を入れられた気がしたのだ。
「有里君の事は今も好きだよ。本当に大好きで、付き合ってる間ずっと幸せだった。でも、お父さんの事も諦められないの。私は弱いから、付き合ったままだと、君に甘えてきっと途中で諦めちゃう」
ゆかりは湊と共に過ごす中で自分の弱さを知った。だからこそ分かる。湊と一緒にいれば弱い自分はこれだけ頑張ったんだからいいよねと途中で諦めてしまうことを。
これは自分でやらなければならないこと。自分一人で立って、必死に走り回って、そうやって真実を知ろうとしない限り途中で折れてしまう。
故に、
「だから、ゴメンなさい。私と、別れて、ください……」
ゆかりは大粒の涙を流しながら震える声で別れて欲しいと頼んだ。
本気で別れるつもりなら、父の事を調べるので交際を続けられないと関係の解消を一方的に告げればいい。
しかし、ゆかりは頼みはしたが選択を湊に委ねた。湊が嫌だと、自分も手伝うから一緒にいたいと言えば、きっと断り切れずに今の関係を続けることになるだろう。
本人は無自覚だろうが、ちょっとした甘さが残っていることで、彼女が言っていた自分は弱いという言葉に説得力があった。
ただ、それは色々な葛藤と別れるという決断を下す中で、そこまで

考える余裕がなかっただけとも思える。
そう思った湊はコートのポケットに手を入れたまま、真っ直ぐゆかりを見つめて静かに答えた。
「……わかった」
少女が別れて欲しいと頼み、青年がそれを受け入れた。言葉にすればたったそれだけで、二人の一年という長くも短くもない交際期間は終わりを告げた。
湊の返事を聞いたゆかりは両手で顔を覆って嗚咽を漏らす。自分で決めたことだが、それでも辛い選択に変わりはなく肩を震わせている。
そんな少女の姿を見ていた湊は今の彼女には酷かもしれないが、何も言わずに立ち去る事など出来ず、彼女の頭に優しく左手を置いた。
「お互い不器用だな。まぁ、なんだ。辛くなったら愚痴は聞いてやる。だから、頑張ってこい」
「うぅっ……ゴメンねっ、私、ずっと有里君のこと好きだからっ……ずっとずっと、愛してるからっ」
これが最後だから許して欲しい。そう誰にでもなく言い訳をして、ゆかりは湊に抱きつき、湊もゆかりをしっかりと抱きとめキスをした。
大切な思い出とする事が出来れば、それを支えに頑張って行ける。別れのキスは十秒にも満たない短いものだったが、身体を離したゆかりは涙を流しながらも無理矢理に笑顔を作って「ありがとう」と告げると、そのまま振り返りもせず走って寮に帰って行った。
きっと、少しでもここに残れば決意が鈍ると分かっていたのだろう。小さくなっていく彼女の背中を見ていた湊は、突然暇になったことでどうするかなと雪の降る空を見上げた。
――チドリ私室
桔梗組は日本家屋といった造りだが、ケーキを買ってきて桜がオーブンで焼いたターキーを食べるなど、チドリたちがやってきてからはしっかりとクリスマスも祝っていた。
そうして、桜の手料理を楽しみつつクリスマスの音楽特番を見終

わってお風呂に入ってきたチドリは、寝巻用の浴衣の上に羽織を着て自室へと戻ったのだが、
「っ、どうしているの？　デートじゃなかったの？」
扉を開けて明かりを点けると何故だか湊がいた。
明かりも点けず暗い部屋でベッドに背を預けて座っていた青年は、本来なら今日も彼女と泊まりでクリスマスデートに行っていたはず。別にそれを本人らに聞いた訳ではないが、既に一線を越えている若い男女なら、きっと恋人同士で過ごすクリスマスはそうなるだろうと察して、ラビリスも今日は羽入の家でクリスマス会をして泊まってくると気を利かせていた。
それがどうして十一時前という恋人たちの時間に都心から離れた桔梗組にいるのか。訳が分からず尋ねながら近付けば、湊はやる気の感じられない様子で答えてくる。
「デートはした。けど、さっき振られて別れてきた」
「どういうこと？」
別れたという言葉は二つの解釈が出来る。一つは恋人関係の解消、もう一つは別々の帰路につくこと。振られたというからには前者のように思えるが、ゆかりが湊にべた惚れなのは部活メンバー全員が知っている。
さばさばしているようで人一倍嫉妬深く、湊が他の女子と二人で話しているのを見かけるだけでムスッと不機嫌そうにするくらいだ。
そんな彼女が湊を振るなど余程の事がない限りあり得ない。彼女の大好きな父親を侮辱したとか、誰かを妊娠させただとか、そういうレベルでなければないはずだが、チドリが彼の傍に腰を降ろせば青年はポツポツと話し始めた。
「岳羽はおじさんのことを、あの日の事故の真実を知るために月光館学園に来たんだ。だけど、俺と付き合ったままだときっと甘えて途中で諦めてしまうからって」
聞いてなるほどと納得したと同時に、随分とまた難儀な性格をしているとゆかりの決断に憐れみを覚える。
今も湊の事が好きなくせに、こうしなければ父親の事を調べられな

いくらい不器用なのだろう。チドリは自分も不器用だとは思っているが、そんな自分から見ても生きるのに不器用だと思う者がまわりには沢山いた。
目の前にいる青年もその一人だ。
「別れて欲しいって言われて、俺もそれを受け入れたけど。なんか、気が抜けた」
確かに今の湊は気が抜けているというか、どことなく無気力な感じになっている。
別に、付き合っている間は気を張っていて、別れた事で肩の荷が降りたという様子ではない。
とすれば、彼もゆかりとの関係解消で少しはショックを受けているのだろうかと、チドリは心配して尋ねた。
「辛いの？」
「どうだろう。よく分からない。ただ、なんとなく誰かと一緒にいたくなった」
これで湊も甘えたがりだ。というより愛情に飢えている。親を早くに亡くし、その後、周りから頼られてばかりの人生を送ってきた事で甘え方も知らず、甘えたとしても随分と不器用な甘え方だったりするのだが、そんな彼は急に突き離されて喪失感を覚えたのだろう。
ゆかりはあれで尽くす女だ。付き合いだしてから湊のために料理を勉強し直したり、ファッションに無頓着だった彼をコーディネートして、服の選び方を教えてやったりもしていた。
そんなありふれた日常とも呼べる時間が、暗い世界で生きてきた彼には尊いものだったに違いない。そして、気付かぬうちに彼もまた相手に惹かれていたという訳だ。
「そう。じゃあ、多分、貴方は相手の事が好きだったのね。自覚はなかったんでしょうけど」
「人を好きになるってのはよく分からない。だけど、これがそうなら、そうか、俺は岳羽が好きだったのか」
他者を想う事は知っていても他人を愛することを知らない青年は、別れて初めて相手を好きだったと気付いた。終わってから後悔する

ことなどざらだが、本当にいま自分が胸に抱いている空虚感が失恋の痛みならば、人を好きになるというのは随分と身近にある感情なのだなと思った。
そしてそのとき、湊の心の変化に呼応するように彼の前に一枚のカードが現れる。光を放ちながら現れたカードのアルカナは〝恋愛〟。
「……これは、恋愛〝ブリュンヒルデ〟か」
新たな力の目覚め、失ったことで愛を知った青年に悲恋の戦乙女たるブリュンヒルデが目覚めたのは随分と洒落が利いている。
人を好きになるという他の者が当然の様に知っている感情。それをようやく理解し始めた青年がカードを見つめたまましばらく何も話さず黙っていれば、それを静かに見守っていたチドリに湊が急に声をかけてきた。
「……チドリ、馬鹿なこと言っていいか？」
「クリスマス・イヴだもの。大抵の事は許してあげる」
失恋の痛みで参っている二人には申し訳ないが、彼の心が成長を見せたのは喜ぶべきことだ。それが人を好きになるということなら尚更で、今なら多少無茶な我儘もチドリは許せた。
すると、青年はチドリの言葉に僅かな安堵を見せ、彼女の手を掴むと真っ直ぐ瞳を見つめながら言った。
「今日は一緒にいたい」
「それはどういう意味で？」
「チドリと一緒にいたいんだ」
青年の発言にこれは予想外だとチドリも若干戸惑う。彼なら添い寝して欲しいという意味で言っている可能性もあるが、話の流れを考えると男としてチドリを求めているように取れる。
失恋で自棄になっているのかと相手を見るが、その瞳にはしっかりと彼の意志が見て取れ、寂しさや人恋しい気持ちもあるのだろうが、ただ失恋の痛みを埋めたいというだけで言っている訳ではないのは分かった。
しかし、事が事だけにチドリも相手の考えや意志はしっかりと確認

しておかねばならない。
「寂しいの？」
「かもしれない。でも、ああ、うん。なんだろ。別れて、どうしようか考えたとき、最初にチドリの顔が浮かんだんだ」
言われてチドリは自分の顔が熱くなるのを感じる。それはそういう事と思っていいのだろうかと。
チドリは失恋のショックを受けた湊に、ショックを受けているならゆかりの事が好きだったのだろうと伝えたが、人は必ずしも一人しか愛せない訳ではない。
大切な者以外は他人という極端な思考を持つ青年にとって、ゆかり以上に好きな相手や同じくらい好きな相手が知らぬうちに出来ていてもおかしくない。
なにせ、彼は自分が相手に抱いている感情の種類すら知らなかったのだ。普通の者よりも想う気持ちが大きいだけに、愛に飢えたまま無自覚に複数の女性を同時に愛している可能性は十分に考えられた。
そして、そんな彼が真っ先に会いたいと思って来たのが自分だと知った少女は、大抵の事は許すと言ったしと心の中で誰にでもなく説明し、自分の左腕を掴んでいた彼の手に右手を重ねた。
「いいわ。今日は特別な日だから、私が貴方の欠けた心を満たしてあげる。その代わり、貴方は私を愛して――――」
最後まで言い切るかどうかというところで唇を塞がれる。そのまま抱き上げるようにベッドに寝かされ、明るいのは嫌だと言えばリモコンで部屋の明かりを消し、聖なる夜に二人は長い時間を過ごした。

１２月２５日（木）
早朝――桔梗組
クリスマス当日の午前五時半頃、冬場で外はまだ真っ暗だが、桔梗組では既に起き出して洗濯機の前で話す者たちがいた。
一人は赤い髪の少女、もう一人は青みがかった黒髪の青年。二人は汗などで汚れた身体を綺麗にするため温泉に入ると、今度は洗濯が必要だとベッドのシーツや入浴前に着ていた衣類を洗濯機に放り込ん

で洗いに来たのだ。
ゴウンゴウン、と音を立ててまわる洗濯機の傍に並んで座る二人は、他の者がまだ寝静まっている屋敷の中で、ここだけが音がしている事に不思議な感覚を覚えながら言葉を交わす。
「……なんか変な感じ。まだ入ってるみたい」
「それ、岳羽も同じこと言ってたな」
チドリの言葉に湊が返すと、流石にデリカシーがないと少女は隣の青年の脇腹を肘で小突く。
つい小一時間ほど前まで自分を抱いていて今も一緒にいるというに、どうしてここで他の女の名前を出すのか、それも元カノとなれば余計にアウトだと言うように睨みつけた。
そこまですれば青年も自分の失言を察して素直に謝罪してくる。少女の方も別に本気で怒っている訳ではないが、今は普段よりも独占欲が強くなって嫉妬し易いため注意するよう暗に伝えれば、また静かになってしばらくしてから湊が喋り出した。
「……少し考えてたんだ。人を好きになるってこと」
「そう。何か分かった？」
「チドリは俺が相手を好きだったんじゃないかって言ったけど、俺は今まで相手を大切だと想っていたんだ」
他人から指摘されたところで素直に自分の気持ちがそうだったのかと断定は出来ない。こういった物は自分で考えて納得するか、悩み続けて折り合いを付けていくものだ。だからこそ、青年も情事を終えて熱い湯に浸かりながら自分なりに考えた。
「でも、俺は山岸や真田のことも大切に想ってる。チドリの友人だからってだけじゃなく、俺個人から見ても好ましい相手だと」
「それはまた、随分と気が多いのね」
二人はこれまで家族だからと越えて来なかった一線を越えてしまったが、別にこれから恋人として過ごしていく訳ではない。あくまで今日は特別だっただけだ。
なので、湊が新しく恋人を作ろうが、他の誰かを好きになろうがチドリに口を出す権利はない。

ただ、いくらなんでも自分も所属するコミュニティの中で、最後に血を見そうなドロドロの愛憎劇はやめて欲しい。
現時点で既に二人は彼に純潔を捧げ、一人は同棲し、残る者も幼少期の初恋や憧れ混じりの親愛の情を抱いているのだ。ちょっとの変化で保たれているバランスは崩壊するのは容易に想像がつく。
彼の真意は違うところにあるのだろうが、先に釘を刺しておくという意味も込めてチドリが言えば、湊は茶化さないでくれと苦笑しながら続ける。
「今まで岳羽に対しての気持ちと山岸らに対する気持ちに差はなかったんだ。まぁ、距離感や接し方は相手によって変えていたけど、それはコミュニケーションの取り方の違いでしかない」
湊が明確に特別扱いしているのはアイギス、チドリ、ラビリスの三人。英恵や桜という母親に、エリザベスなど他の者よりも優先度が上だと思われる者もいるが、基本的には大切な者というカテゴリー内にいる者たちの扱いに差はなかった。
しかし、チドリの指摘が正しいとすればその認識は間違っていた事になる。本人は同列に扱っているつもりでも、無自覚に差を付けて特別な感情を抱いていたとすれば、ではどうして同列だと思っていたのかという新たな疑問も湧いた。
「だから、余計に分からなくなった。振られてショックだったのは確かだろうが、それが好きな人と離れたからなのか、恋人という関係が終わってしまったからなのか」
「私にはよく分からないけど、別れたからって別に話さなくなる訳じゃないでしょ。というか、相手はまだ八雲の事が好きでしょうし、無視されたら傷付くと思うわよ」
「そうなのかな」
ゆかりと別れる事がショックなのか、それとも恋人という特別な関係が終わってしまうことが惜しかったのか。考えてみても未だに答えは出そうにない。
ただ、これで話す事もほとんどなくなると勝手に思っていた湊にとって、無視されたら相手は傷付くというチドリの指摘は少々意外

だった。
別れても終わりではない。ただ以前と関係が少し変わっただけ。チドリがいうには湊とゆかりはそういう状態になったらしい。
「まぁ、とりあえず、もう少し人を好きになるってことを考えてみようと思ったんだ。岳羽の事が好きだったのかも、色々と調べて考えていれば答えがはっきりすると思うし」
「そう。はっきりと答えが出るかは分からないけど、考えて自分の気持ちを明確にしようとするのは良いと思うわ。貴方はもう少し自分の気持ちについて理解を深めるべきだと思うから」
この青年は目的のためなら自分の心を殺して結果を求めてしまう。だからこそ、少女としては素直な自分の気持ちと向き合う時間を作った方がいいと思った。
幸いな事に彼の周りには、彼の境遇を理解し相談に乗ってくれる大人たちがいる。
最近では湊がテニスの大会に出るなど普通の子どもらしい事をしているので喜んでいるが、彼が〝人を好きになる〟という当たり前の感情について相談してくれれば、その日を相談された者にとってたちまち記念日になるに違いない。
戦いが始まればそんな事を考えている余裕などないかもしれないが、せめてそれまでは、彼が今まで蔑ろにしてきた自分の心と向き合っていくべきだろう。
言われて青年が自信なさげに頑張ってみると返せば、少女も切っ掛けになればいいからと笑って頷いた。
たった一夜で青年とその周りで色々な変化があったが、そんな風に子どもたちが談笑していたとき、洗濯機の音が届かぬよう個人の私室からは離れているこの場所に、毎朝六時前に起きている一人の女性がやってきた。
「ちーちゃん、いるの？　まだ早い、け、ど……」
洗濯機の回る音と少女の声が聞こえてやってきた桜は、扉を開けて中をみた瞬間に固まる。
早朝から回る洗濯機、その傍に並んで座る子どもたち、加えて今日

はクリスマス。これだけの条件が揃っていれば誰でも簡単に答えに辿りつけた。
現れた桜を見てチドリは驚いた顔をしてから一気に赤面して焦っているが、反対に青年の方は風呂上がりで上半身裸のままゆったり煙管を吸っている。
これが経験の差かと無駄な思考に逸れかけるも、桜はこの状況で自分が言うべき事はなんだと必死に頭を働かし、詰まりながらも親として子どもたちに一言告げた。
「あ、その、高校生の内は避妊だけはしっかりね」
言った。言い切った。これで自分は役目を果たせたと足早に去ろうとする。何せ桜自身は恋人がいたこともなければ、キスだって幼少期の湊やチドリとしたことしかないのだ。
二十代後半で未だに純潔を保っている彼女にとって、情事の後を想像させる生々しい現場にいるのは非常に恥ずかしかった。
しかし、言うだけ言って去ろうとする女性に少女が制止の声をかけた。
「あ、ま、待って！」
女性も気まずいが少女の方が気まずい。青年はたまにしか帰って来ないが、二人はこれからも一緒にここで暮らすのだ。ここで去って行かれると、今後、顔を合わせる度に妙に気を遣われることは容易に想像がつく。
声をかけたチドリはすぐに立ちあがり駆け寄ると、声をかけられビクリと立ち止まった桜の手を掴んで行かせない様にした。
すると、桜は未だに動揺が抜けきっていないが、以前、家を出たはずの湊とチドリが下着一枚で同じベッドで寝ていたときから事情は知っていたからと、まだ解けていなかった誤解を元にチドリに安心してと言葉を返す。
「だ、大丈夫よ。うん、お父さんとかは知らないから」
「ちがっ、ていうか知らないからって何よ！」
少女は恥ずかしさから反射的に違うと否定するも、これだけ条件が揃っていてその言い訳は苦しい。ただ、鵜飼や渡瀬が知らないのは当

たり前だが、直前の桜の言い方では彼女は前から知っていたように聞こえた。
チドリと湊が繋がったのは今日が初めてなので、何を知っているんだとチドリは必死に詰め寄り、チドリに負けず劣らず恥ずかしそうに赤面する桜が口ごもるというやり取りがその後数分間続けられる。
そんな様子を黙って眺めていた湊は、マフラーから上着を取り出して着ながら、三年連続でほぼ同じ時期に自分は誰かの純潔を奪っているなと関係のないことを考えていた。

第百八十七話　運だめし

２００９年1月2日（金）
午前――長鳴神社

年が明けて二日目の朝、岳羽ゆかりはコートを着込みマフラーを巻いて女子寮から長鳴神社を目指していた。

あの日、湊と別れて泣きながら寮に帰った少女は、帰省していなかった寮生たちに心配されながらも、彼氏と別れただけだからと言って部屋に籠もった。

部活メンバーたちには何も伝えられず、悲しさと寂しさで何度も湊に電話しそうになるも、我儘を言ったのは自分だからと我慢し、食事と風呂のとき以外は部屋に籠もってしばらく過ごしていた。

けれど、今日は冬休み前から約束していた初詣がある。元日は忙しいだろうからと二日目にずらし、新年最初に部活メンバー＋αで集まる予定なのだ。

正直に言えば行きたくなかった。何せ、行けば湊がいるのだ。相手は気にしていないかもしれないが、別れたばかりでゆかりの方は気まず過ぎる。

寮を出るときも他の者が心配して隈を隠すように化粧をしてくれたり、ぼさぼさになっていた髪を梳かしてくれてようやく見せられる状態になったくらいだ。

これなら部活メンバーに心配をかけるだけなので、仮病でも使って休んだ方が良かったかなと思っている間に到着してしまった。

「あ、ゆかりちゃん！　明けましておめでとうございます！」

ゆかりが来た事に気付いた風花が笑顔で手を振りながら挨拶をしてくる。彼女の他には真田兄妹、美鶴、メンバーに入っていなかった荒垣がいるのは謎だが、ラビリス、チドリ、そして湊も既に揃っていた。

部活メンバーの中でターニャだけいないが、彼女は年末年始だけ帰省してカナダにいるので問題ない。

そういう訳で、最後にやってきたゆかりは風花や美紀と挨拶を交わ

すと、どうして予定になかった荒垣までやって来ているのかを尋ねた。
「荒垣先輩が来るって聞いてなかったんですけど、真田先輩と約束してたんですか？」
「いや、少しは人が減ってるだろうと思って二日に来てみれば、朝から馬鹿に絡まれて拘束されただけだ」
「誰が馬鹿だ。偶然だろうと出会っておきながら年始めの挨拶もせずに去るやつがあるか」
ゆかりは噂で荒垣が休学中だと聞いていたが、真田の様子からすると幼馴染である彼も荒垣に会うのは久しぶりのようだ。
となれば休学中という噂は真実で、どうして休学しているのか気になるが、体調や経済的な理由など何かしら込み入った理由はある事は容易に想像がつくため、相手が話して来なければ自分から聞きに行ったりはしないでおこうと思った。
荒垣がここにいる理由が分かれば、ゆかりは残りのメンバーにも挨拶をしていく。気まずくとも避けては通れないので、ゆかりは出来る限り平静を装って湊の前に立つと、自分から彼に挨拶をした。
「あ、あの、あけまして、おめでとう」
「ああ。明けましておめでとう、岳羽さん」
彼の言葉を聞いた直後、ゆかりの目からは大粒の涙がこぼれていた。これには湊も珍しく驚きを見せ、二人の様子を見守っていたチドリから先に事情を聞いていた部活メンバーの女子たちが、慌てて二人の間に割って入る。
「あ、有里君！　なんて事言うんですか！」
「大丈夫？　ゆかりちゃん？」
「あ、あれ？　やだ、これは、違うの。別に有里君が、悪い訳じゃなくて」
涙を流している本人も自分が泣いている事に驚いているようで、美紀や風花に気遣われれば目を拭って涙を止めようとする。
けれど、そんな事で感情に起因する涙が止まる訳もなく、風花がハンカチを渡し、美紀が落ち着かせるように背中を擦りながら道の端へ

と移動する。
　そして、驚いてから女子たちの様子をただ黙って見ていた青年を、チドリとラビリスもゆかりの元へ行く前に呆れた顔をして馬鹿じゃないのかと罵倒した。
「何で余計なこと言うのよ」
「湊君、ホンマにデリカシーないな。もう端っこの方行っとき」
　端の方へ行っておけと言われても、ゆかりたちが端の方へ行ってしまっているので行ける訳がない。もしかすると逆サイドに行ってろという事かもしれないが、それは少し遠いので湊はその場に残っておく事にした。
　すると、ゆかりの元へ行っていなかった先輩三人も、湊がゆかりを〝岳羽さん〟と呼んで泣かせたことだけは見ていて理解していたので、腕組みをして立っていた真田が代表するように青年の馬鹿な行動を諌めた。
「お前は新年早々なにをしてるんだ」
「いや、別に、ただ別れたから呼び方を変えた方がいいかと思っただけで」
　湊はチドリが部活メンバーに根回しをしてくれていた事を知らない。ただ、先輩組はその中に含まれていないので、身近なカップルの破局に驚いた顔を見せてくる。
「お前ら別れたのか？　いつ？」
「いつってイブですけど」
　真田がこういった話題に食いついて来るのは意外だ。だが、さらに続けて今度は荒垣まで傍に来て詳しく尋ねてきた。
「どっちから切り出したんだ？」
「切り出したのは岳羽の方です」
　イブという事は約一週間前、ゆかりから切り出したという事は振られたのは湊の方だ。
　普段はやる気のない世間を舐めくさった表情や態度を取っている青年が、恋人たちのイベントとも言える日に振られていたと聞いて、これまで何度も辛酸を舐めさせられてきた男たちはざまぁ見ろと勝

ち誇った顔をする。
「フン、どうせ下心を見せたんだろう」
「色んな女に良い顔してっから振られんだよ」
イブに振られる理由などそれくらいしか考えられない。がっついて身体の関係を求めて拒否されたのだろうと二人は思った。
ただ、それが真実であろうとなかろうと、後輩が彼女と別れたと聞いて喜ぶなど人間として小さ過ぎる。これが同級生の順平あたりならば見た目通りと思うところだが、ファンクラブまで存在する高校ボクシングチャンプや、休学中とはいえ四月には最高学年になる男までもが揃って言ってくるなど、傍から見れば恋人がいることを羨んで嫉妬していたようにしか見えない。
そして、先輩二人に言われた青年の方はというと、何で無関係のこいつらが勝ち誇っているんだと僅かに苛立ちを覚え、目線が勝っていることもあり心の底から見下す様に言葉を返す。
「……彼女いない歴＝年齢×女性経験無しのガキが偉そうに」
「なっ、貴様っ!!」
「なっ、テメェっ!!」
童貞は黙っていろ。湊が小馬鹿にしながら遠回しにそういえば、痛いところを突かれた二人は肩を震わしながら湊を睨む。
どうして条件が増える際に加算ではなく乗算にしたのかは不明だが、年頃の男子にとって女性経験の有無は男の格付けでとても重要な意味を持つ。以前から湊は女子に手を出しているのではと思われていたが、先ほどの発言で彼が経験者であることは確定したと言っていい。
相手はゆかりなのか他の者なのかまでは分からない。それでも、一年長く生きていながら、未だに彼女がいたことすらない少年たちは、事実であるため湊の言葉に反論する事が出来ず、けれど、言われっぱなしではいられないとアイコンタクトで伝え合い揃ってファイティングポーズを取った。
童貞を指摘されて必死になっているようにしか見えないその光景は、湊にしてみれば恥の上塗りだなと余計に笑えるものなのだが、先

輩である真田たちが臨戦態勢に移行したことで、男子三人のやり取りを黙って見ていた美鶴がこれ以上は見過ごせないと話に入ってきた。
「少し落ち着け。明彦も荒垣も人のそういった話にあまり口を出すな。事情も知らずに見当違いな事を言って恥をかくのは自分だぞ。それと、有里も女性経験やらの話は外でしない方がいい。大っぴらにする話題ではないからな」
真田たちを諌める際には呆れを含んだ厳しい視線。しかし、湊への注意の際は恥ずかしいのか僅かに頬を染めて話す。親の決めた婚約者はいても美鶴もまだ経験のない乙女なのだ。そういった類いの話に慣れていない事もあってどうしても恥ずかしさが出たらしい。
臨戦態勢だった男二人は注意されるとばつが悪そうにし、湊は平常運転で美鶴の言葉を無視していれば、離れていたゆかりたちが戻ってきて湊の元までやってきた。
泣いていたゆかりの目は赤くなり、寮生の友人がしてくれた化粧も僅かに落ちて隈が見えている。それでも彼女は湊の前にやってくると、急に泣いてしまったのは自分のミスだと、被害者であるはずなのに謝罪してきた。
「急に泣いてゴメンね。その、呼び方は有里君の好きにしてくれていいから」
「傷付けるつもりはなかったんだ。ただ、変えた方が岳羽も気持ちを切り替えやすいかと思っただけで」
方向性は完全に間違っていたが、他人行儀な呼び方は湊なりに気を遣った結果だった。
ゆかりが引き摺らないよう距離のある言い方をすれば、自動的に距離が開いて気持ちも離れていくはず。そんな甘い読みでよく女子と付き合えたなと思うところだが、理由を聞いたゆかりは不器用な人だなと苦笑し、自分も悪いから気にしないでと気を遣ってくれたこと自体には感謝した。
ゆかりは本気で湊を好きだったし、現在もまだ好きなままだ。気持ちはそう簡単に切り替えれず、下手をすれば今後もずっと引き摺りっぱなしかもしれないが、折り合いを付けて普通に接することが出来る

くらいには回復させる予定である。
なので、切り替えるまでもう少しかかるだろうが待っていて欲しいと、周囲に気を遣わせてしまう現状を彼女は反省し、予想以上に引き摺るタイプであった自分に苦い顔をする。
「あー、うん。まだもう少し無理かな。ゴメンね、自分から言い出したのに、こんなに引き摺って。重いよね、私」
「気にしなくていいわよ。泣きはしなかったけど、湊も振られた日の夜はかなり引き摺ってたから」
ゆかりが自分を重い女だと溜め息を吐けば、珍しいことにチドリがフォローを入れた。曰く、湊も同じくらい引き摺っていたと。
「それ、本当？」
その情報に驚いたゆかりは大きく目を開いた後、悪戯っぽく笑うチドリと嫌そうな顔をしている湊を見つめる。
彼の反応を見る限り本当の様だが確証が欲しい。ゆかりが返事を待っていれば、チドリはしっかりと頷いて返してきた。
「ええ、誰かと一緒にいたくなって急に実家に帰って来たくらいだもの」
意外過ぎる青年の一面に周囲の視線が彼に集まる。
普段は素っ気ない態度や一匹狼のような孤高の態度を取っているが、それはあくまで雰囲気の話であって、実際は人と一緒にいたいタイプだったのか。
本当の彼をよく知る者なら意外でも何でもない話なのだが、傷心中の少女には〝彼も自分と同じだった〟という事実が嬉しいようで、今度は喜びの涙を僅かに目尻に滲ませた。
「そうなんだ……。フフッ、なんか、有里君には申し訳ないけどちょっぴり嬉しいな」
青年も自分との関係を惜しんでくれていた。その事実が何よりも支えになる。ここへ来るまでは暗雲がかった重い気分だったが、明かりが灯ったように心が温かくなりゆかりはようやく笑顔を見せた。
これならば後は時間が解決するだろう。彼女の事を心配していた他の者たちも安堵し、それでは参拝しようと石段を上って行く。

二日目ともなると元日よりも人は減っており、途中にある屋台に心惹かれつつも賽銭箱に辿り着くのは容易だった。
それぞれが何を祈ったのかは本人しか分からないが、参拝を終えた者たちはおみくじのところまで移動し、風花やラビリスが早速引こうと楽しそうにする。
「初詣のおみくじって特別な感じがしますよね。結果は普通だったりするんだけど、いつも引く前は楽しみで」
「ウチは今回でまだ二回目やから毎年の醍醐味みたいなんは分からんけど、一年の運勢を占うんは面白いと思うわ」
ラビリスは去年初めておみくじを引き、今回のこれで人生二度目のおみくじだった。見た目が外国人であるため、風花たちも勝手に外国暮らしで文化が違ったのだろうと思っており、彼女に最初に引かせてあげている。
そんな少女らの姦しい様子を後ろで眺めていた真田は、腕組みをしたまま不敵に笑って自分の主義を口にする。
「俺はこういった願掛けはしないタイプなんだ」
「たかが遊びでつまんねぇ野郎だな。妹が楽しんでるもんにケチ付けて楽しいのか？」
瞬間、真田の目は妹の姿を捉える。幸いな事に彼の先ほどの台詞は先輩組三人と湊にしか聞こえていなかったようで、他の少女たちは小銭を入れておみくじを引くのに夢中になっていた。
もしも、彼の台詞が聞こえていれば、彼女たちが楽しんでいるものに水を差すことになり、彼の妹である美紀は友人たちに申し訳ない気持ちになっていただろう。
偶然にもそれが防がれた事は実に幸運であったと言える。そこからの真田の転身はまさに一瞬だった。
「フッ、お前が凶を引かずに済むよう遠回しに止めてやったんだがな」
「言ってろ。テメェは末吉がお似合いだ」
良い笑顔で財布を取り出した真田は荒垣よりも先におみくじを引きに向かった。余りの変わり様に荒垣は呆れ、妹のことになると分かり易いなと美鶴も苦笑しながら後に続いた。

そうして、全員がくじを引き終えれば、いざ御開帳と風花が自分の結果を口にした。
「あ、中吉だ。全体運はいいみたいです。恋愛運は大きな波あり？」
「私、吉だ。恋愛運は……恋人失せる」
続いて開いたゆかりはくじの結果に肩を落とし暗い顔をする。失せるも何も既にフリーになっているのだが、父の事が解決すれば再び告白しようと思っているだけに、新年早々それを挫かれる結果にダメージを負ったようだ。
そんなゆかりが先に結果を見ていた風花に慰められている横で、ワクワク顔でくじを開いたラビリスは、自身の引いたくじに書かれていた内容に跳ねて喜ぶ。
「やった、ウチ大吉や！　皆は恋愛運みとるん？　ウチのは……運命の者は傍に居るやて」
他の者が恋愛運を見ていた事で彼女も見てみたが、未だに恋愛というものがよく分かっていない少女は首を傾げる。
彼女にとって〝運命〟は自身の持つペルソナのアルカナのイメージが強い。それを思えば傍にいるであっているものの、そういう意味ではないことは理解しているので、全体的に良い事が書いてある中で恋愛運だけよく分からない結果になったと不思議そうにしていた。
「私は小吉ですね。健康運がちょっと悪いかもって書いてます。恋愛運はいい出会いありと」
「……私、中吉。金運が望む物が手に入る。恋愛運は……別れあり、悪し」
続けて美紀とチドリも自分の結果を確認する。無難な事が書かれた美紀はホッとしているが、その隣では先日想い人と一夜限りとは言え繋がる事の出来た少女が不満そうにしている。
彼女のくじの結果を現在の状況と合わせて考えると、即ち湊とお別れすることになってしまうという事だ。
まだ付き合ってもいないのに別れとは冗談にしても過ぎている。揃って二十五歳まで恋人がいなければ、「結婚したい」「別に良いぞ」のやり取りで済むくらいに絆も育んでいるため、このくじを作った者は

ヘボだと思う事にしてチドリは恋愛運について書かれている部分が見えないように折り畳んでくじを財布にしまった。
「私は吉だな。既に親が決めた婚約者がいるんだが、恋愛運は好転ありと書いてある」
「フッ、俺は中吉だ。健康運が怪我多しなのは気になるが全体的に悪くない。シンジはどうだ？　どうせ凶だったんだろう？」
望むほど良い結果ではなかったが悪くはない。これなら十分及第点だと笑う真田が荒垣に声をかければ、
「へっ、アキ、お前の負けだ」
荒垣は自信満々に不敵な笑みを浮かべて自分の引いたくじを真田に見せた。そこには輝くは〝大吉〟の文字。長鳴神社のおみくじで最高位の結果である。
自分が吉という中途半端な結果だったこともあり、真田は驚愕し信じられないと荒垣の手からくじを奪って改めて確認する。
「馬鹿なッ!?　お、俺が中吉なのに、お前は大吉だとっ!?」
「金運が悪いらしいが他はまぁまぁだ。ま、新年一発の勝負で勝てたんだから悪くはねぇわな」
新年最初の運だめし勝負は荒垣の圧勝。悔しそうにする真田と余裕のある表情をしている荒垣が勝者と敗者を明確にし、自分の運命を占うくじでも勝負にしてしまう二人を他の女子たちは少し子どもっぽいと思って見ていた。
そうして、ほぼ全員のくじの結果が判明した訳だが、湊の結果をまだ聞いていなかった事で、自分のくじを財布にしまったラビリスが皆を見ていた青年に話しかけた。
「湊君はどないやったん？」
「……普通に大凶だったが？」
何て事はない様にシレッと答える湊。
他のおみくじは朱い縁取りと文字で書かれているというのに、青年の手にあるくじは黒い縁取りと文字で書かれていた。
大凶など大吉以上に珍しく、また置いていない神社もあるというのに、ここでは実在してしかも色も他と違っているという特別仕様。彼

がくじの結果を気にするような性格とは思えないが、初めて見る大凶に女子たちは非常にレアだと沸く。
「え、ウソ!? 私、大凶って初めて見た。すごい本当にあるんだ」
「ていうか、大凶って珍しいから普通じゃないと思うんだけどなぁ」
「本当に全体的に悪い事が書いてますね。健康運なんて命危うし注意されたしって書いてますし。あ、でも、恋愛運は出会い近しで悪くないです」
大凶だけあって内容は悪い事が多かった。ただ、恋愛運だけマシなのは不運でも彼の持つ魅力を消す事は出来ないという事なのかもしれない。
全体的にばらけた結果になり、大吉や大凶という珍しいくじも引けた一同は、参拝とくじも終わったので屋台を冷やかして帰るかと移動の準備を始めようとする。
そのとき、奥の社務所の方向から一匹の白い犬がやってきて湊たちの前で止まった。
「あ、犬や」
「……なんだこの犬」
初めて見る犬にラビリスと湊は首を傾げる。色は白いが犬種は柴犬のようで、成犬だが人懐っこくラビリスが腰をおろして相手の頭を撫でれば、犬は気持ち良さそうにして一鳴きした。
「わんっ!」
「ははっ、首輪付けてへんけど人懐っこいな」
「見た感じ人間に換算したら四十歳くらいのオッサンだぞ。きっと野良でも人にエサを貰えるように学習したんだろ」
可愛らしい犬を前になんとも夢のない事をいう湊。現役女子高生に頭を撫でられて四十歳のオッサンが喜んでいると聞くと犯罪の臭いしかしない。
二人の後ろでは話を聞いていた女子らが微妙な顔をしているが、以前、この犬を見た事があったことでチドリが初対面の二人に相手を紹介した。
「それ、ここの宮司のペットよ。前に見た事ある」

「確か、コロマルだったよね。ねえ、コロマル、今日は宮司さんは一緒じゃないの？」
　同じく前に見て覚えていたゆかりが犬の名前を呼んで飼い主はどこかを尋ねる。前に会った頃よりも随分と成長しているが、特徴的な毛色と人に慣れた様子は健在だ。飼い主もきっと愛情を籠めて育てたのだろうと思っていれば、コロマルは何故か立てていた耳を伏せて悲しい声で鳴いた。
「くぅーん」
「あ、そうなんや。それは残念やったね。よしよし」
「いや、今ので何を理解したんだよ」
　悲しそうにするコロマルを撫でて慰めるラビリスに、ツッコミ所しかないと荒垣が思わず尋ねた。
　相手の様子から他の者も彼の飼い主に何かあった事は察したが、それがどういう内容なのかは分からない。
　怪我をした、死んだ、引っ越した等々、考えられる理由は色々とある。ラビリスが本当にコロマルの言った事を理解したなら説明してくれるはずだが、荒垣の問いに答えたのはラビリスではなく湊だった。
「……事故で亡くなったらしいです。だいたい、鳥居の辺りだとか」
　ペットを飼っていると鳴き声から、遊びたいや散歩に行きたいという相手の気持ちを理解出来るようになる話はよく聞く。
　しかし、湊の説明はそのレベルを超えており、さらに言えば青年の説明を否定しないラビリスも同じ事を読み取っていたようなので、犬の言葉を理解しているとしか思えない二人に美鶴は半信半疑ながら本当に分かるのかを訊いた。
「君たちは犬の言葉が分かるのか？」
「あー、前に知り合いが犬と仲良うしてて、ウチもそんときに相手の言いたい事とかをだいたい分かる様になったんです。まぁ、相手もこっちに伝えようとしてくれへんと難しいけど、コロマルさんは結構はっきりと言ってくれはるから分かり易いかな」
　笑いながら理由を話すラビリスは、相手が年上だからか敬称を付け

て呼ぶ事にしたらしい。別にその点についてはどうでもいいだろうが、犬と仲良くしていれば言葉も分かる様になるとは驚きで、大変な興味を持った風花もラビリスの隣に腰をおろしてコロマルを撫で始めた。

犬の言葉が理解できればその能力を活用できる場面は多い。ブリーダーやトリマーだけでなく、犬に諜報を頼んで相手に姿がばれないようにする方法なども取れるのだ。

そうでなくとも、動物と意思疎通が取れるなど絵本の中の話の様であり、美紀やゆかりも一緒にコロマルと遊んでいれば、コロマルをジッと見つめていたラビリスが顔を上げて湊に話しかけてきた。

「なぁなぁ、湊君」

「駄目だ」

「ウチらのマンションはペットＯＫやん。飼い主さんいなくなってもうてコロマルさん可哀想やろ？」

ファミリー向け高級マンションであるテラ・エメリタは、蛇やクモに大型のトカゲなど周辺住民が恐怖を感じる動物類は流石に駄目だが、犬や猫にウサギや鳥など一般的なペットであれば飼育の許可も必要なく飼っていい事になっている。

飼い主を亡くしたコロマルを不憫に思ったらしく、ラビリスは自分たちの家で飼おうと提案するが、食用にも出来ない畜生の飼育などゴメンだと湊は却下した。

「別に似た境遇のなんてそこらじゅうにいるさ。犬もそう言ってる」

「えー、でもコロマルさんも屋根付きの家のがええやんな？」

「わふっ」

その光景は周囲から見てかなり異様だった。若い男女が犬を交えて二人と一匹で会話しているのだから。

ペットをウチの子と呼ぶ頭の弱そうな者が、ペットに話しかけている様子はたまに見られるものの、彼らの場合は本当に犬の言葉を理解して喋っている。

先輩組三人は部活メンバーほど湊やそれに関わる異常に慣れていないため一歩引いて見ており。彼らが見守っている最中も二人と一

匹の会話は続く。
「なぁ、散歩もエサの用意もウチがするからさぁ」
「だから、犬が自分で今の生活に満足してるんだから余計なお世話だろ」
「むー、てか犬やなくてコロマルさんって呼びぃや。湊君も人間って呼ばれたら嫌やろ？」
「呼ばれる事もあるから気にならないな。それこそ、お前とかあんたっていうのと変わらない。犬も犬と呼ばれて嫌がってないしな」
「わんっ！」
　因みに今のコロマルの鳴き声は湊たちには「気にしてないぜ」と聞こえている。ラビリスは機体番号０２４をはじめとした、彼女と同じ五式のテストベッドシリーズらの記憶とも言えるメモリを引き継いでこの力を得た。
　湊は人間が古代に失ってしまった能力を宿したままの肉体を持っていた事で、名切りとして覚醒後に読心能力と共にそれを使えるようになった。
　過程と強度は異なるものの、どちらも端的に言えばイメージを読み取る力であり、コロマルの様にしっかりと自分の考えを伝えようとしてくれる動物との会話は比較的楽であった。
「シロと似てて懐かしい思ったのになぁ。コロマルさん、湊君がケチでゴメンな」
「わふっ」
「嘘を吐け、犬種が違うじゃないか。それと保健所は年中無休なんだ。そこに行けば犬もぐっすり寝れるぞ。他の仲間と一緒にな」
　湊はラビリスが話すシロという犬を見た事はないが、コロマルの言葉を読むついでにラビリスの記憶からシロの見た目だけ読みとって、共通点は性別と毛色くらいしかなく思わず呆れる。
　そして、嘘を吐いた相手に適当な事を言うなと返すついでに、そんなに屋根付きの寝床が欲しいなら保健所に連絡して引き取ってもらえばいいことを告げれば、湊の言葉を聞いたラビリスは目を見開いて驚き、コロマルを守る様に抱きしめるとすごい剣幕で怒りを表してき

た。
「き、鬼畜や。鬼畜がおる！　保健所の人呼んだら絶対に許さんへんよ。そんなんしたらウチは家出て行くからな！」
「……酷い言われようだ。保健所では里親募集事業もしている。それで一時的に保護して貰い、新しい飼い主を見つけてもらえばどうかと言ったつもりだったというのに」
　飼い主がいない犬を前に保健所を呼ぶといえば、ほとんどの者が殺処分を想像する。けれど、保健所は別にそれがメインの仕事ではなく、一時的に保護して里親を募集したりもしているのだ。
「人に慣れていて言葉を理解出来るくらいに利口だ。柴犬のアルビノという珍しさもある。成犬であることがネックになるかもしれないが、逆にアルビノでここまで育っていれば病気のリスクも他の犬と変わらない。飼い主が亡くなったので新しい飼い主を探していると言えば、引き取り手は見つかり易いと思うがな」
　ラビリスはＥＰ社の仕事にほとんど関わっていないので知らないだろうが、会社ではアニマルセラピーとして通院患者にペットの飼育を勧める事があった。
　運動不足になりがちな年配の患者も、一人では外にあまりでないがペットの散歩という理由があればほぼ毎日歩くので運動になり。ペットを通じて他者とコミュニケーションを取る様にもなるので、運動不足の解消だけでなくボケ防止など他の効果も期待できた。
　そういったペットはどこから来るのかと言えば、主に保健所や里親募集のボランティア団体からの紹介であり、里親になる前に会社が金を出して予防接種などを受けさせているので、ＥＰ社の負担を除けばそれぞれにメリットのある素晴らしい事業である。
　湊もそれには当然関わっていて、会社の敷地内に新しくペット用の運動公園や動物病院を作り、飼育アドバイザーやブリーダーも雇って初心者でも飼育と躾けが出来るよう手配したのだ。そんな青年がわざわざコロマルを殺処分しろというはずもなく、酷く心外だと溜め息を吐けば、ラビリスは湊が自分以上に真面目に考えていた事に意外そうにした。

「ほえー、湊君もちゃんと考えて喋ってはったんや。てっきり殺処分しろって意味やと思ったわ」
「もし本心ではそう思っていても、愛着を持ってるやつの前でわざわざ言う訳ないだろ。興味がないのに、死なせようとするのもおかしな話だしな」
「あははっ、疑ってゴメンて。そやな、湊君って興味無い物はどうでもええってスタンスやもんな」
自分が勝手に勘違いして青年を疑った事を少女は謝罪する。湊は一見冷たいがそれは対象に興味や関心がないためだ。
敵なら殺す、害があれば消す、極めて冷静にその判断を下して、相手が幼い子供でも手に掛ける事が出来るようになったが、その敵や害というのは湊の大切な者にとっての話なのだ。
ただ自分を狙ってくるなら見逃したり無視する事もあるので、血に目覚めて殺人衝動が消えた湊が進んで命を奪う事はない。
改めてその事を理解出来たラビリスは、コロマルを飼ってやれない事実は消えないが、相手は今も神社を寝床として生活している話を聞けたので、たまにエサでも持って来て一緒に遊ぶことにきめた。
「じゃあ、コロマルさん。また来るからな。次はゴハン持って来たるから、野良やと勘違いされて捕まったアカンよ」
「……それなら首輪付けとけばいいだろ。住所はここにして」
言うなり湊はマフラーの内側をゴソゴソと漁って、赤い首輪とそれに付けるタグを取り出した。タグは中に紙が入って住所が書けるようになっており、湊はさらさらとボールペンで神社の住所を書くと、タグを取りつけた首輪をコロマルの首に巻いた。
今まで首輪を付けていなかったコロマルはどこか慣れない様子だが、ラビリスや風花が似合っていると褒めれば誇らしげにしている。
これで外で見つかっても神社に連れて来られるはずなので、野良と勘違いして捕まる可能性はほぼ無くなるはずだった。
けれど、男前が上がったコロマルに注目している者たち以外は、どうして湊が首輪を持っていたのかが不思議なようで、もしやアブノーマルな話題かとチドリが疑いの目を向けてくる。

「……普段から首輪なんて持ち歩いてるの？」
「会社の備品で余った分を一部だけ仕舞っておいたんだ。逃げたペットの中には首輪を外してるやつもいるから、捕まえたときにリードを付けられるよう首輪も合わせて持ってる」
「そう。マリアやゆかりにも首輪を贈ってたから、てっきりそういう趣味があるのかと思った」
　正確に言えば彼女たちが身に付けている物はチョーカーであって、ネックレスやペンダントと同じ首周りの装飾品だ。
　身に付けている者の中には支配されたい願望を持っている者もいるかもしれないけれど、贈った湊はそんな事を考えておらず、むしろ、相手に似合うことしか考えていなかったからこそ、彼自身もマリアとお揃いの黒いチョーカーを首に付けている。
　チドリも湊がマフラーの下にチョーカーを付けている事は知っており、それでも首輪と呼んで言って来たという事は、ちょっとした悪戯心でからかっているだけなのだろう。
　イヴの夜を一緒に過ごしてから、チドリは前より少しだけ甘えてくるようになった。他の者では気付かない微妙な甘え方だったりするが、幼い頃から仕事がないときは遊んでくれとせがまれていた青年はちゃんと気付き、からかってくる少女の頭に左手を置いて小さく苦笑する。
「これでも健全な趣味嗜好をしていると自負しているんだがな」
「行いが不健全なら一緒でしょ」
「フッ、それは耳に痛いな」
　やってる事が不健全だと言われてしまうと反論できない。真っ当とは程遠い行いもいくつもしてきたので、確かにこの青年は健全とは言い難かった。
　とはいえ、それでもここではコロマルのために首輪を出したくらいで、他に何も言われる筋合いはなく。話が終わったのならそろそろ帰ろうと青年は歩き出す。
　他の者たちもそれに続いて歩き出し、ラビリス達もコロマルに別れを告げると後を追って、出店のいくつかを冷やかしながら帰路につい

た。

第百八十八話　前篇　好きという気持ち―勘違い―

２月１４日（土）
夜――風花自室
世間がバレンタインで賑わった日の夜。風花は家の自室でとあるパンフレットを見ながらにこにこと楽しそうに明日の準備をしていた。
パンフレットには美術館の特別展の案内がかかれ、その中には風花が好きな画家の絵も紹介されており。以前から行きたいと思っていた彼女は明日行ける事になって喜んでいるという訳だ。
（明日は日曜日で人が多いから外で少し並んで待つことになるかも。貼るカイロとか温かい飲み物とか持っていった方がいいよね）
明日の予報では天気は良いもののとても寒くなるという。マフラーと帽子、手袋もしっかりと用意して寒くない服を選ばなくてはならない。
だが、あまり可愛い系の服を選ぶと一緒に行く湊が恥ずかしい思いをするかもしれないので、風花が持つ服の中でも少し大人っぽいものを選ぶつもりだ。
（有里君ってお洒落な服ばっかりだから、あんまり子どもっぽいのは駄目だよね。ゆかりちゃん達が言うには本人は別に気にしてないらしいけど）
何故、風花と湊が二人で美術館に行く事になったのか。それは中学の夏休みと同じで、他の者の予定がそれぞれ埋まっていたからだ。
バレンタインまでは全員が湊や真田など、世話になっている者や友人に贈り物をするため予定を空けていた。だが、その分、イベント後に予定が詰まっており、ゆかりは図書館で調べ物、ラビリスは運動部の休日練、チドリは着物を新調しに桜と出掛け、美紀はバレンタインでお金を使ったから喫茶店で少しバイトをするらしく、留学生のターニャはもうすぐ留学期間が終わるので、最終レポートの作成に忙しく休日は掛かりっきりになるらしい。
そういう訳で、唯一暇そうな湊が選ばれた訳だが、実を言えば彼が

一番忙しい身だった。
ラビリスの生体ボディはほとんど完成しており、後は電気刺激で筋肉の反応を調べて、最後に湊のアナライズで細かく問題がないかをチェックしていく事になる。
そのチェックが実は最も神経を使う部分で、脳や臓器に異常がないかを確かめるのに湊は細胞単位で調べるのだ。
もしその段階で異常が見つかれば、黄昏の羽根を移植して生体ボディに移ったラビリスが病気や機能障害を患うことになるため、そのボディは破棄して一から作り直さなければならない。
健康な身体を与えたいと思えば当然の行動だが、異常の有無に関わらずかなりの集中を必要とする作業で、湊も休憩を挿みながら慎重に少しずつ行うこともあって、本来なら休日に人の多い美術館に行くという疲れる事は避けるべきであった。
けれど、興味のない風花の両親は一緒に行く気になれず、他のメンバーも忙しいとなれば風花は一人で行かなければならない。
本人は一緒に行く人がいなくても大丈夫と言っていたが、他の女子メンバーは背の小さな風花が一人で人混みの中を行けばどうなるかを想像し、心配だから湊が一緒に行ってやれとＳＰ役を命じた結果、当日は二人で回る事になったのであった。
（あ、黒いスーツで来たらどうしよう。ＳＰってそんな感じだよね？）
ラビリスが守ってやれといい、ゆかりがＳＰ役とか適任じゃんと告げた事で、もしかすると湊は黒いスーツにサングラスの本物らしい服装で来るかもしれない。
もしそれで、風花が落ち着いた印象のお洒落な服を着て行けば、周りからは良家のお嬢様がＳＰに守られているように映って、風花が作品を見ている間は他の人たちが近寄りがたくなってしまうのではないかと不安に思い始める。
色々と考えながら準備をしていたせいで時刻は十一時を過ぎている。待ち合わせは九時半なので、もしかすると寝てしまっているかもしれない。
（あー、どうしよう。寝ちゃってるかな？　普通の服装でいいよって

伝えたいだけなんだけど。もしスーツを用意してたら申し訳ないし。うぅー……）

心配になって電話しようと思ったが時間的に厳しい。そうして、風花が選んだのはメールでの連絡だった。

これならば仮に寝ていても起きてから見てもらえる。まぁ、既にスーツを準備済みなら申し訳なく思うが、それは別の機会に着てくださいとお願いするつもりだ。

そんな事を考えながら風花が〝服装は普通の私服でお願いします〟と送れば、一分ほど経ってすぐに返事が返って来た。

（〝お前は俺をなんだと思っているんだ〟……ああ、良かった。そこら辺の感覚は普通だったみたい）

メールの文面から携帯を持って呆れ顔を浮かべる湊が容易に想像できる。

家では着物だったり、夏祭りに神父の格好で来たりなど、彼はコスプレっぽい服装をしている事もあったので、今回も形から来るのではと心配したが大丈夫だった。

心配が杞憂に終わった風花は安心しながら急に変なメールをしたことを謝罪し、すぐに自分の準備に戻る。心配事がなくなると途端に明日を待ちきれない気持ちが湧きあがってきて、本やパソコンで明日見る画家の事を調べ直しているうちに時間は過ぎていき、気付けば時計は午前二時を回っていて風花は慌ててベッドに入るのだった。

２月１５日（日）

朝――駅前

ベッドに入ってからも携帯をカチカチと触って中々寝付けなかった風花は、寝不足な状態で目覚め、温かいお茶の用意や着替えに目を回しそうになりながら家を出た。

忘れ物はないはずだが、寒い中で湊を待たせるのが申し訳ない。彼はいつも時間より早く来るので、集合時間五分前なら既に来ているはずだった。

運動の得意でない風花は遅れてゴメンなさいと心の中で思いながら必死に走り、集合場所である駅前の案内板までやってくると、メガ

ネをかけて軽く変装した湊が本を読みながら立って待っていた。
「ご、ゴメンなさい。遅れましたっ」
「……いや、まだ三分前だぞ」
「ん、はぁはぁ、ごほっ……うん、でも、待たせちゃったから」
遅れた事を謝罪する風花に湊はコートの内ポケットから取り出した懐中時計を見せてくる。
時計の針は確かに集合時間の三分前を指しており、風花は別に遅刻などしていない事を表していた。
けれど、この寒い中で待っていて貰った事実は変わらない。故に、そのことを謝罪したのだと風花が息も絶え絶えに伝えれば、湊はそれ以上は深く聞かずに「そうか」と短く返した。
待ってくれていたお礼に風花が温かいお茶の入った水筒を取り出そうとすると、青年は風花の呼吸が整うまで待ってくれ、もう大丈夫ですと伝えたところで歩きながら話す事になった。
並んで歩くには歩幅の関係で風花の方がかなり頑張って早歩きをしなければならないが、そこはデート慣れしている青年が相手だ。ちゃんと風花の方にペースを合わせ、ゆったりとした歩調で二人は街中を進む。
「……回る前に喫茶店にでも入ってちょっと休むか？」
「え？　ううん、大丈夫だよ。気を遣ってくれてありがとう」
普段規則正しい生活をしている風花は、昨晩の夜更かしが原因で目の下に薄らと隈を作っていた。
そこに待ち合わせ場所までのダッシュも加わり余計に疲れて見え、このままだと寝不足が原因で貧血にでもなりはしないかと湊も心配したのだが、本人は若干眠気があるくらいで大丈夫だと笑顔を見せる。
湊の医者としての経験から言えば、疲れている人間は自分の健康状態も正確に把握出来ない状態になっていて危険なのだが、今日に関しては自分も注意して見ているから何かあっても大丈夫だなと相手の意見を尊重する事にする。
集合場所は駅前にしたが美術館までの基本移動は徒歩で、まだ店が

開ききっていない冬の街中を二人で歩いていれば、湊の方から再び話しかけてきた。
「両親から何か言われたりしなかったか？　一人娘が男と出掛けてくると聞けば心配しそうだが」
「だ、大丈夫だよ。お友達と美術館に行くとしか言ってないから」
本当は母親に彼氏かと聞かれたが、風花はそんなのじゃないからと否定してきた。高校生になったからか、最近になって以前よりも成績の事を厳しく言われるようになりつつあるものの、両親は部活メンバーが学年トップの成績だと知っているため、遊んでも良いが一緒に勉強しなさいとだけ言われている。
友達の事を悪く言われる心配がないのは心情的にも楽だが、親戚が医者ばかりの中で風花の両親だけ医者でないからか、両親はコンプレックスから風花を医者にしようと成績について厳しく言ってきていた。
ただ厳しいなら教育方針として分かるけれど、自分たちの見栄のために人の将来を勝手に決められては堪ったものではない。それが原因で最近家に居場所がないように思えて来ている風花は、今日こうやって出掛けるのはいい気分転換になるだろうと非常に楽しみにしていた。
故に、親からそういった心配はされていないから大丈夫だと風花は答え。パン屋の前を通ったときに漂ってきた焼き立てパンの香りで表情を緩ませていると、隣を歩いていた湊が唐突な話題を振ってきた。
「なぁ、山岸。人を好きになったことってあるか？」
「えっ!?　ず、随分と急な質問だね」
湊がこういった俗っぽいネタの話を振って来るのは珍しい。そも、本人に男女のそういった関係に対する興味がないようなので、興味のない事を話題として取り上げるはずもないのだが、今日の湊は理由があるのか普段通りの表情のまま尋ねてきた。
青年が急にこんなことを聞いた理由は、以前、チドリに言っていたように〝人を好きになる〟とはどんな感情なのかを考える参考にし

たいから。
湊が自分の命よりも大切だと思っている少女たちと、ゆかりや風花など大切に思っている少女に対する〝大切〟という言葉は重さが違う。
普通ならより重く見ている方を好きだと考えるべきだが、チドリを抱いてから改めて考えてみると、相手をより女性として意識するようにはなったが、大切に想う気持ち自体には変化がなかった。
ゆかりとチドリのどちらに対してもそうだったので、大切に想う事と好きになることは直接関係ない。現時点での湊の考えはそうであり、ここで風花に尋ねたのは他人の意見を聞いてみようと思ったからであった。
問われた風花は最初こそ驚いていたが、湊なりに真面目な質問だと受け取ったようで、しっかりと考えてからゆっくり口を開く。
「その、恋とか、そういうのはまだないかな」
「そうなのか。顔も整ってるしモテそうなものだが、告白されたりもないのか？」
「私はゆかりちゃんや美紀ちゃんみたいに可愛くないし。自分で言うのもなんだけど地味だもん。男の子からそういう事を言われたことはないよ」
部活メンバーは全員容姿が整っている。中でも飛び抜けているのは湊とラビリスで、後は各個人の好みによるが赤髪の派手さでチドリが目立っている事を除けば、大人しい風花よりもゆかりや美紀の方が目立っている。
そのため、一応風花も密かに人気はあるのだが、周囲から湊の庇護下にあると思われていることもあって、彼女は未だ男子から告白された経験はなかった。
彼女の容姿や性格を非常に好ましいと思っている湊からすれば不思議でしょうがなく、まわりの男は見る目がないのかと思いつつも、告白に関して目立つかどうかは実際のところ関係がないのではと返す。
「目立つのは確かに大衆から支持を得る者だが、恋愛は個人の問題だ

ろ。大勢から好かれようと一対十ではなく一対一の集合体だ。誰か一人の好みに合致すれば山岸だって告白されてもおかしくない」
「フフッ、確かにそうだけど、やっぱり相手を知る切っ掛けが必要じゃないかな。それには先に言ってたように目立った方が知られる機会も多くなるし。知られてすらいなければ好かれもしないと思うの」
確かに湊の言う事は間違いではない。風花を好きな者が百人いようと、百人として告白してくるのではなく、あくまで百人の中にいた者が個人で告白してくるのだ。
それを考えれば目立っていなくても、風花を好きになった者が一人いれば告白の可能性はある。
けれど、好きになる前に興味を持つ切っ掛けも大事だと思うと少女は持論を述べて笑い、目立つという要素はそこで重要になってくるとも説明した。
「あ、勿論、ただ目立てばいいって訳じゃないよ。危ない人とか悪い人だって広まると誰も近付かなくなっちゃうし。目立つなら興味を持ってもらえるような、相手が知りたくなるような事でないとね」
「……なるほど」
恋愛とは思った以上に繊細な問題らしい。風花の話を聞いて湊はそう思った。
同年代の者の中にはドラマでも見ておけと呆れてしまうほど陳腐で夢見がちな者もいるが、風花は初恋も未だ経験していない身ながら、彼女なりの恋愛観を持って人を好きになるという事を考えていた。
やはり、内面も含めて自分が評価していた人物は違う。湊が心の中で密かに風花のことを尊敬すれば、開店前の女性向けファッションブランドのショーウィンドウを眺めながら風花が意外そうに聞き返してきた。
「でも、珍しいね。有里君がそういう話するのって。何かあったの？」
「まぁ、ちょっとな……さっきの話とは関係ないんだが、少し聞いてもいいか？」
「うん。私に答えられる事なら何でも聞いて」

事情があるのは察している。多分、それがゆかりと別れた事とも関係しているであろうことも。
だから、どれだけ変な質問でも笑わないから相談して欲しい。そう思って相手からの質問を待っていれば、三十秒ほど沈黙してから湊は真剣な表情で静かに尋ねた。
「山岸、俺のこと好きか？」
「私が、有里君を好きか？　……ええっ!?　なっ、きゅっ、なんでそんなっ!?」
頭をハンマーで殴られたような衝撃を受け、風花は一気にテンパり顔を真っ赤にしたまま言葉に詰まる。
湊の方は何でも聞いてと言われたから聞いたのだが、相手が質問の意味を理解出来なかったのかと思ってもう一度分かり易く伝える。
「山岸がどう思ってるかを知りたいんだ」
「えと、その、あの、あうぅ――――」
「あ、おい、山岸！　山岸！」
そして、風花は寝不足で体調を崩していた事も合わさり、顔を真っ赤にしたまま緊張で意識を失った。
――???
「……あれ？　えっと、私どうしたんだっけ？」
目を覚ました風花は起き抜けで頭がはっきりせず、自分がどうして見知らぬベッドで寝ていたのか不思議に思いつつ身体を起こす。
彼女の寝ていた巨大なベッドは部屋の壁際中央に位置し、少し離れた場所にソファーとテーブル、大きな薄型テレビに家庭用カラオケマシーン、さらに旅館の部屋に置かれているような小さな自販機らしきものが発見出来る。
誰かの家というよりはホテルのような雰囲気だが、少女が状況を把握出来ずにぽけーっとしていると、ベッドの正面にある扉が開いて上半身が裸の湊が出てきた。
「起きたのか？　悪いが寝てたから先にシャワーを使わせて貰ったぞ」
「な、なんで？　ここどこですか?!」

起き抜けに同級生の引き締まった裸の上半身を見た事で一気に覚醒が進む。見れば自分も気を失う前に着ていた私服からバスローブになっており、ベッド近くの椅子に彼女が着ていた私服と私服で見えないように置かれたブラがあった。
「どこって……所謂、ラブホテルだが」
「ら、ラブホテ……っ!?」
ここには湊と風花しかおらず、目覚めるまで意識のなかった少女が自分で服を着替えた訳がない。
とすれば、服と下着を脱がしてバスローブとショーツだけ身に着けさせたのは、慌てる風花を不思議そうに眺めている青年に他ならなかった。
「あ、有里君はこんな事しない人だと思ってたのにっ。あんまりですっ」
信じていた青年に裏切られ、風花は大粒の涙を流して手で顔を覆う。
彼のことは好ましく思っていた。告白され、デートを重ね、恋人として過ごしていればこうなる未来もあったかもしれない。
「悪いとは思ったが、俺のことを好きか聞いたら顔を真っ赤にして気を失ったから、比較的近かったここに運んだんだ」
「私は何も答えてませんっ」
しかし、青年は少女が気を失ったのをいいことにホテルに連れ込み、倒れる直前の相手の反応を都合よく解釈して非道な行為に走った。
自分自身にも勘違いさせてしまう隙がなかったとは言わない。ただ、一生に一度しかない大事なはじめてを、こんな形で寝ている間に奪われた事が酷く悲しかった。
「ひ、酷いです。私は、有里君の事を大切な友達だと思ってたのに」
知らない者にこんな事をされれば恐怖と絶望しかないが、直前まで笑って話していた信頼する友人にされると、どうしてという疑問と共に心が悲しみで満たされる。
明日から学校でどんな顔で会えばいいのか分からず。また、彼を

想っている友人たちになんと説明していいかも分からない。
そうして、風花が膝を抱えるようにして泣いていれば、泣いている少女を見て困ったように頭を掻いていた青年がぽそりと呟いた。
「……俺は山岸のことを友達として見た事なんて一度もないぞ」
「……え？」
聞こえてきた言葉に風花は思わず顔を上げる。そこには真剣な眼差しを向ける青年の顔があった。
「しょ、正直に答えてください。有里君は私のことをどう思っていたんですか？」
「どうって……大切に思ってるよ。過去形じゃなく現在進行形でな」
「そう、だったんだ……」
言われるまで気付けなかったが、彼から直接聞くとそうだったのかと少し納得がいった。
中学から合計すれば四年間同じクラスだったが、彼はその間ずっと自分を友達ではなく異性と見ていたらしい。
大切に思っているなら、こんな形ではなく正面から気持ちを伝えて欲しかったが、四年間で積み重なった気持ちがちょっとした切っ掛けで溢れたと思えば理解も出来た。
裏切られて悲しく感じていた風花は、自分も知らぬうちに彼をやきもきさせる事もあったのかなと自分のこれまでを振り返る。すると、静かになったことで落ち着いたと判断したのか湊が改めて声をかけてきた。
「落ち着いたか？」
「急にこんな事になって、そんな簡単に落ち着けないよ」
「……そうか。同意も得ずに悪かった」
風花が泣いている間に上を着た湊はベッドに腰掛けると、勝手なことをして申し訳なく思っているのか、怒られて落ち込んでいる子どもの様に暗い表情で謝罪した。
それを聞くとやはり根っこは真面目で誠実な彼のままだと思ってしまい。胸中は未だ複雑なまま風花は優しくも芯の通った様子で彼の行いを諌めた。

「うん。そこは、本当に反省して、もう二度とこんな事はしないって約束してください。いくら有里君の事が好きな子が相手でもきっと傷付くから」
「ああ、約束する。本当に悪かった」
彼は自分を守るためには嘘を吐かない。ここでの約束は一生の物として守って行くだろう。
それが返事からしっかりと理解出来た風花は、寝ている間に少し乱れていた襟元を正しながら、こうなるまで自分が彼をどう思っていたかを話し出す。
「……あのね。私も有里君の事は嫌いじゃなかったの。男の子として好きかって聞かれると、やっぱり深くそう意識した事はなかったから答えようがないんだけど。好きか嫌いかなら間違いなく好きだったよ」
これが気を失う前にされた質問への答え。話す風花をジッと見つめる青年は、少女が過去形で話していることで今は違うのだと理解して、次に来るであろう拒絶の言葉を待った。
「でも、相手の同意も得ずに、寝ている女の子にこういう事をする人は嫌いです。嫌いというより、本当は犯罪だからね？」
「……ああ」
優しい少女が明確に誰かを嫌う事など稀だ。苦手、と濁すことはあっても、嫌い、という拒絶する言葉はまず使わない。だが、青年はそれを彼女から直接告げられた。
色々と考えた末に今回の行動に移った訳だが、少女を泣かせるほど傷付けてしまった時点で誤りで、少女の言葉がそれをより実感させ青年の心に重くのしかかってくる。
「繰り返すけど、ちゃんと自分が最低な事をしてしまったって自覚して、こんな事は二度としないって反省してね？」
「ああ、ごめん。本当に悪かった」
数時間前の自分を殴ってやりたい。風花への申し訳なさに湊は色が変わるほど拳を握り締める。
自分がどれだけ反省しようとそれで風花の悲しみが消える訳では

ないのだ。せっかくの休日をこんな形でぶち壊してしまった己の浅慮を悔やんでいれば、その様子を見ていた風花がフッと優しい表情で湊に笑いかけた。
「うん。今日の事は私の胸にしまっておくね。誰にも言わないから安心して」
「でも、山岸は傷付いたんだろ？」
「本音を言えば今も複雑だよ。意識を失ってる間だったし、信じてた人に裏切られた形だから余計にね」
「ならっ」
そう思っているのなら警察に突き出せばいい。それだけの事をしたのだから当然の権利だ。
しかし、言おうとする湊の言葉を遮るように風花は自分の気持ちを語った。
「でもね、私は今の皆の関係を壊したくないの。意識を失ったのは前日に夜更かしした自分の落ち度だし。それがなければ有里君もこんな事しなかったでしょ？　それを思ったら有里君だけを責める事は私には出来ない」
風花はこんな事があっても湊を憎んではいなかった。自分勝手さに憤りを感じなかったと言えば嘘だが、そういった激情よりも信頼を裏切られた事への悲しみの方が大きい。
老若男女誰にでも優しく、大勢の女子を痴漢やガラの悪いナンパ師から助けてきた青年が、どうして自分というパッとしない容姿の人間に劣情を抱いてしまったのかは分からない。
だが、どのような理由があろうと既に事は起きてしまった。そして、それが周囲にばれれば友人たちとこれまでのような付き合いは出来なくなる。
中学から続く友人たちとの関係を壊したくなかった風花は、それが分かっているからこそ、裏切られた悲しみと友人たちとの絆を天秤にかけて絆を取る事を選んだ。
「……何か出来る事はないか？　出来る限りのことはさせてもらう」
少女の選択を理解した湊は、自分の軽率な行動で相手に一生物の心

の傷を負わせたと理解し、償える物ではないが何か少しでも出来る事はないか尋ねる。
　すると、胸中は未だ複雑な風花も最初は何もないと言っていたが、湊がしつこく聞けば思い付いたのか、人差し指を立てた右手を顔の前に出して言った。
「じゃあ、一つだけいいかな？」
「なんだ？」
「うん。その、思い出にさせてほしいの。こうなっちゃったけど、せめて、はじめてくらい、ちゃんとした記憶として」
「それは……」
　相手の願いなら大概の事は聞いてやるつもりだったが、予想外の内容だったことで湊も微妙な表情をする。
　本気でそれを願っているのなら湊に拒否する気はないものの、年頃の少女の中でも大人しい部類に入る風花がこんな事を頼むなど意外で、もし場所の雰囲気に流されているのなら考え直した方がいいと改めて確認を取る。
「本当にいいのか？」
「本当はね、やっぱり怖いよ。自分でも冷静じゃない事は分かってる。でも、私はまだ有里君の事を嫌いになれないの。だから、今日ならこれを思い出として上書き出来る気がするから」
「……わかった」
　冷静とは言い難い。けれど、自棄になっている訳でもない。
　声と肩を小さく震わしながらも、真っ直ぐ見つめてくる少女の瞳と言葉からそれを感じ取った湊は、ならばもうこれ以上は言うまいと相手の望みを聞く事にした。
　相手の望みを聞くと決めた湊は、そっと風花の頬に手を当てて顔を寄せると優しく口づけを交わす。はじめての経験に風花は固まり体を硬くするが、少女の緊張を感じ取っている湊は相手を抱き寄せて何度も首筋にキスを落とし、時間をかけて相手が慣れるのを待ってから共にベッドに倒れ込んだ。
　そして、二人は後に理解する。自分たちの会話は噛み合っていたよ

うで微妙にずれていて、その決定的な間違いに気づかぬままお互いに盛大な勘違いを犯していたと。
そう、湊は意識を失っている風花を襲ってなどいなかった。ただ相手を休ませるため近場にあったここを選び、寝やすい服装に着替えさせただけで、自分が襲われたと思った風花が怒っている理由も青年はいかがわしい場所に連れて来られていたからだと取ったのだ。
破瓜の痛みと出血でそれを理解する少女は、それまでずっと勘違いに気付かぬまま青年にリードされ長い時間を過ごすのだった。

第百八十九話　後篇　好きという気持ち―切っ掛け―

午後――ホテル廊下

風花のお願いを湊が了承してから三時間後、顔の見えないフロントで部屋の代金を支払い。湊たちが怪しい雰囲気の廊下を進みながら出口を目指していると、青年の隣を歩く少女が耳まで真っ赤にして悶えていた。

「うー……」

「だから、本当にいいか聞いたじゃないか」

「だって、その、何もしてないって思わなかったんだもん！」

言われた少女は潤んだ瞳で湊を見ながらしょうがないじゃんと返す。

風花が悶えていた理由は、自分から湊に抱いてくれるよう頼んだ結果、純潔を散らすことになったからだ。

「随分と信用されてないな」

「そもそも、なんで服だけ着替えさせてたの？　下着も上だけ外してあったし」

「皺になるし、上は外さないと寝苦しいだろ」

そう、湊は寝ている風花を襲ってなどいなかった。気を失った風花をどこかで休ませなければならないと考え、あまり良い場所ではないがしょうがないと近場にあった以前ゆかりと利用した事のあるラブホテルに運び、服が皺になってはいけないと思って寝やすい服装に着替えさせたのである。

シャワーを浴びていたのは、ただ待っているのは暇だったので、少し頭をすっきりさせる意味も込めて浴びていただけだ。

それを風花は自分を襲ってからシャワーを浴びていたのだと勘違いし、湊は湊でラブホテルといういかがわしい場所に連れて来られて風花が怒り悲しんでいると盛大に勘違いした。

「もぉ、私が誤解してるって教えてくれれば良かったのにっ」

「いや、ホテルに連れて行った事を怒ってると思ったから」
「そこも驚いたけど、気を失った人の介助が目的なら目を瞑りますっ」
さらに言えば、湊の誤解を受け易い言葉が風花の勘違いを加速させた部分もある。
風花が友達だと思っていたのにと言ったとき、湊は友達として見た事は一度もないと言ったが、それはファルロス以外の誰も友達と認めていないからだ。
大切に思っているというのも、ゆかりに言っていたものと同じで恋愛感情は含まれていない。
それを真剣な表情で言うものだから、ゆかりと交際していた時期を間に挿んでいようと、風花は湊が昔から自分の事を異性として見ていたのだと勘違いしてしまった。
以前から周りの人間に言葉が足りず誤解され易いと言われてきたが、今回はそれが悪い方に働いたことで少女を傷付け不安にさせ、最終的に本当に純潔を奪う事態に発展したのだから、誰がなんと言おうと湊に非があったのは確実だった。
「あー、うー、もーっ」
「まぁ、なんだ。処女膜の再生手術っていうのもあるから。費用は出すし」
「悩んでるのはそこじゃありません！」
気遣いはありがたいが根本的な解決になっていない。手術で膜を再生させても肉体関係を持った事実は消えないのだ。
長い廊下を進んでようやく外に出た風花は、両手で小さなハンドバッグを持ちながら、これからの事を考えて憂鬱になる。
「あぁ、明日から皆とどういう顔で会えば……」
湊の事を好いているゆかりやチドリにすれば風花の行動は裏切りであり、そんな素振りは見せてなかったくせにと恨まれてもおかしくない。
美紀とラビリスは怒りはしないだろうが、やはり恋人でもないのに一線を越えたと聞けば良い顔はしないだろう。
何より、今も一緒にいて話している青年と明日からどのように接し

たらいいのか。今はまだ直後なのでテンパっている風花が押し気味で話せているけれど、別れて家に帰ってから冷静になれば、自分のしでかしたことの大きさと経験した行為を思い出して恥ずかしくて顔も見れなくなる確信があった。
そして、少女が今後の事を考えていっぱいいっぱいになっているとき、
「……あ」
少女に追い打ちをかけるように、ホテルを出たところで丁度前の道を歩いていた荒垣と遭遇してしまう。
「ん……おうっ!?」
相手は珍しい組み合わせだなという顔をした直後、二人が出てきた建物を二度見して目を見開いてから、何も見なかった事にして足早に去ろうとした。
それを見た風花は完全に誤解されたと思って相手のコートを掴んで引き止める。
「ま、待ってください！　違うんです！」
「い、いや、俺は何も見てねぇよ」
「じゃあ、なんで目を逸らすんですかぁ！」
コートのポケットに手を入れたまま俯き気味に歩いて行こうとする荒垣は、風花に引き止められても視線を合わせようとしない。
まぁ、知り合いが所謂そういう行為に及ぶための施設から出てくれば、荒垣でなくとも気まずく思ってしまうのは当然だ。
さらに言えば、荒垣から見て湊と風花は幼馴染の妹の同級生。つまりは後輩に当たる訳で、年下の二人が休日の昼間からそういう行為をしていたなど考えたくもなかった。
けれど、風花が顔を真っ赤にして目に涙を溜めながら、ギュッと掴んでコートを離そうとしないとなれば話をしない訳にはいかない。
はぁ、と一度溜め息を吐けば、諦めた様子で二人の方へ向き直り口を開いて来る。
「あー、なんだ。その、別に言いふらしたりしねえよ。意外な組み合わせではあるが尽くすタイプっぽいしな。一生に一度はこういうクズ

に引っ掛かる事もあるだろうぜ」
「ち、違います。有里君はそんな人じゃありません」
荒垣と真田の中では『有里湊＝クズ』という公式が存在している。後輩に対して大人げないと思う者もいるかもしれないが、湊も先輩二人を欠片も敬っていないので、彼らの関係はそういったガキっぽいものでいいのだ。
しかし、風花は大切な友達を悪く言われて、湊はそんな人物ではないと相手の言葉を否定した。
それを聞いた荒垣は二人を恋人だと思っているので、彼女の前で恋人を貶すような発言は不味かったかと頭を掻いて反省を見せる。
「あ、ああ、恋人のこと貶されんのは気分悪いか。それは謝る。悪かった」
「恋人でもないですからっ」
恋人と誤解され風花の顔の赤みがさらに増す。
ただ、テンパっている風花は気付いていないのだろうが、若い男女が一緒にホテルから出てきておきながら、恋人関係ではないと否定しても信じてもらえる事は稀だ。
順序が逆になる者も中にはいるけれど、一線を越えれば恋人になるのが普通である。
荒垣も普段から恥ずかしがって否定しているだけだと考えるところだが、必死に否定している少女は誠実で真面目な優等生タイプの風花だ。いくら恥ずかしくても彼女が不要な嘘を吐くとは思えないため、彼女の言葉が真実だとすればこれは見過ごせない事態だと荒垣は湊に詰め寄った。
「恋人じゃねえって……は？　おまっ、有里！　どんな弱みで脅しやがった!!」
「脅されてもないですからっ」
美紀と同じく純粋な少女が自分から湊と身体だけの関係になったとは考えづらい。となれば、二人の会話を黙ってみているクズが相手の弱みを握って関係を強要した可能性が高く。風花が止めようと事と次第によっては殴ってやると本気の目を見せた。

それに対して言われた青年は何を馬鹿なと呆れた顔をして、冷静さを欠いている風花を一度引かせるべく後ろから少女の口を手で塞ぎ、物理的に黙らせたまま自分で荒垣との会話を進める。
「……色々と複雑な事情があるんです。事件性はないので他の者には内緒にしておいてください。その分は後でサービスしておきますから」
「まぁ、俺は第三者だからな。そっち方面は詳しくねえし、首を突っ込むつもりはねぇよ。ただ、泥沼だけは避けろよ。お前が刺されるだけならいいが、こいつらの友情にヒビが入るような事にはなるな」
「ええ、善処します」
考え方は冷淡で発想は下衆なクズだが、部活仲間相手には基本的に優しく親切だ。大切に思っている少女の友人を気遣う素振りも見せており、青年が自分の欲望を満たすために少女らを利用するとは確かに考えづらい。
完全には納得していない様子だが、荒垣も一応は信用してくれているようで今回は引いてくれた。
話が終わると彼はタイヤ交換を頼んだバイクを取りに行くところだと言って、そのまま二人の前から去って行った。
相手の向かうバイク屋に心当たりのある湊は、そういえば確かにホテルとそう離れていない場所にあったなと思い出し、今後もここを利用したときには会う事もあるかもしれないなと考えて歩き出す。
「うぅ、知り合いにばれちゃった……」
「先輩は口が堅いし空気が読めるから大丈夫だ」
「大丈夫でも恥ずかしいんだってばぁ」
ホテルを出てすぐに知り合いに見られた風花は、もう知っている人はいないよねと疑いながら周囲を見回している。
そんな事をせずとも湊に言えば気配を探って人のいない道を行く事も出来るのだが、彼の能力を知らない少女は誰もいないことが確認出来ると肩を落とし、今日は散々な日だと悲しい溜め息を溢す。
「はぁ……美術館楽しみにしてたのになぁ」
「これから行けばいいだろ。まだ二時にもなってないし」

「え、本当？　あ、本当だ」
目覚めてから時計をろくに見ていなかった風花は、ホテルで長い時間を過ごした気になっていたことで、自分が気を失っていた時間と合わせると既に夕方くらいだと思っていた。
けれど、湊が出してきた懐中時計は二時前をさしており、ここからなら歩いて向かっても十分見て回る時間がある。これにはからくりがあって、実はホテルの部屋に着いた時点で湊が部屋の中に時流操作を展開して時を圧縮していたのだ。
よって、風花が長い時間を過ごした気になっていたのは正しく、外で一時間経つ間に部屋の中では風花が気を失っている時間も含めれば五時間経っていた。
それを知らない風花は美術館に行けると分かって純粋に喜びを表し、安心したようにホッと息を吐くと顔を綻ばせた。
「良かったぁ。特別展だから見逃したら次はいつになるか分からなくて」
「ホテルに行ってて行き忘れたとは言えないもんな」
「も、もう！　他の人に言ったら本当に怒りますよ。もう許してあげませんから」
荒垣が他言無用でいてくれても、当事者の湊が他の者に話してしまえば意味がない。湊はたまに天然で爆弾を落とす事があるので、風花は念入りに秘密にしておくよう釘を刺した。
すると、言われた湊は遠い目をして顔に影を落としてぽつりと呟く。
「悲しかったな。気を失った女子を襲う様なやつだと思われていたなんて」
「あ……それは、本当にゴメンなさい。動揺していたとはいえ、失礼過ぎるよね」
状況が状況だけに風花が勘違いしてしまうのも無理はないが、それでも何もしていなかった湊としては、少女の方からそんな事をしでかす人物だと思われていたのは寂しい。
青年が遠い目をして呟いた事で風花もそれを自覚し、本当に申し訳

なかったと頭を下げれば、湊は悲しい笑みを浮かべながら気にしなくていいと首を横に振る。
「いや、いいんだ。あんなのしか近くになかったとは言え、誤解される様な場所に連れて行った俺が悪かったんだ」
「そ、そんな事ないよ。気を失ったのは自分のせいだし。有里君は早く休ませるためにしてくれたんだもん。全然恨んでないよ？」
誤解していたときは裏切られたことが悲しかったが、青年は何もしていないどころか、風花の事を思って休める場所を探してくれた。自分のミスで気を失うことになった風花にすれば、迷惑をかけたことに対する謝罪と、看病してくれた事に対する礼を言いたいくらいだ。
相手が悲しそうな顔をしている事で、疑ってしまい本当に申し訳なかったと風花が謝罪も込めて返せば、湊は少女の瞳をジッと見つめて改めて彼女の気持ちを確かめる。
「許してくれるのか？」
「勿論だよ。その、さっきのは恥ずかしくて色々言ってただけだから」
色々あって冷静さを失っていただけで、風花は自分の誤解だったと気付いた時点で湊の事は恨んでいなかった。
そも、知らぬ間に失った初めてをせめて思い出に昇華させたいとやり直すにしても、本気で憎み嫌っている相手に抱いて欲しいと頼む訳がない。
とっくに恨んでいないと言いながらにっこり風花が微笑みを向けてくるのを見た湊は、
「……それは良かった。まぁ、自分でもあれだけ積極的にしていて嫌でしたじゃ俺も困るからな」
「ええっ!?」
しゅんとした表情から一転、あくどく口元を歪めてそれなら良かったと眼鏡の位置を直す。
あまりの変わりように演技で騙されていたと気付いた風花は驚くが、ホテルでの情事について言われて耳まで赤くしながらも、自分は別に積極的な訳ではないと青年の誤解を解く。
「あ、あのときは、その、私ばっかりして貰うのはって思ってたからっ。

ゆ、ゆかりちゃんからも少しだけ聞いてましたし」
「ほう、女子の会話はまた随分と内容が生々しいんだな」
「あー……思い出すだけで顔から火が出そう。本当になんで私ってば自分から言ったんだろぉ」
最中は自分も高揚していて、未熟な知識を総動員して湊にも気持ちよくなってもらおうと頑張った。けれど、冷静になると自分のはしたない行為の数々に自己嫌悪に陥り、湊の顔を直視出来ないと頬に手を当て顔をそらす。
今朝まで正真正銘の乙女だったのだから、終わって冷静になった少女の反応は当然だ。
ソフィアは別として、ゆかりとチドリは完全な同意の上で行ったので相手に心の準備が出来ていた事もあり、事後は照れはしていたがどちらかというと湊への甘えの方が強かった。
それを覚えていた湊は、自分の行動が誤解を招いて少女を傷つけたのは事実であるため、できる限りのケアをさせてもらうと言ったことは嘘ではないと改めて伝える。
「……真面目な話で、嫌なら忘れさせる事も出来る。先ほど言った再生手術後に忘れれば結果的には何もなかったようなものだ」
「んー、よく分からないけど、そういうのはいいかな。こういう勘違いから経験する事になったのは残念だけど、有里君が私を大事にしてくれてたのは伝わってきたから。ゆかりちゃんが言ってた心が満たされる感じっていうのを私もちょっと理解出来たよ」
後悔はあくまで思い出して恥ずかしいだけの自己嫌悪。湊と繋がったこと自体は嫌ではなかったと少女ははにかむように笑う。
青年のことを異性として強く意識した事はなかったけれど、今回のことが切っ掛けになって知らぬ間に少し惹かれていた自覚は持てた。それはまだ恋と呼ぶには至らないかもしれないが、好きな人から大切に想われ優しく抱かれた事は一生の思い出となる。
そんな照れながらも満足そうな笑顔を見せられた青年は、
「……山岸」
「なに――――――」

自分の内に新たなペルソナの目覚めを感じつつ、相手を可愛らしいと思い不意打ちで唇を奪った。
突然のことに風花は固まって動けなくなり、湊は周りに誰もいないからと相手を抱きしめて舌を絡ませる。
唇と歯を割って異物が口内に入ってくるも、情事の記憶で受け入れてしまった少女は、時折熱い呼気を漏らしながら身を任せ、一分以上経ってようやく青年が離れてから潤んだ瞳で彼の行動を諌めた。
「も、もうっ。そういうのは、あのときだけって……」
「たまにならいいだろ。お互いにフリーなんだから」
「そういうのは……良くないです。でも、付き合ってないのに自分からお願いしちゃった私が言っても説得力無いなぁ」
確かにお互い誰とも付き合っていないので、そういった意味では同意の上なら問題ないかもしれない。
しかし、両者の認識と周囲の認識は別の話で、倫理的な話をすれば付き合ってもいない高校生の男女がホテルに行って一線を越えたり、周囲から隠れてキスをしたりというのはよろしくない。
諭すようにそれを青年に伝えた少女は、ただ自分が言っても説得力はないよねと肩を落としてため息を吐いた。
すると、少女の隣を歩いていた青年はネガティブマインドの期間でも目覚めたカードを呼び出せるよう、マフラーから取り出したホルダーに入れてから少女に一つアドバイスする。
「限定的に割り切って楽しむのも手だぞ。肉体的な接触が精神安定剤と似たような効果を齎すって研究結果もあるんだ。最近の山岸はどこか疲れて見えるから、最初は抵抗があるだろうけどカウンセリングの一つとして受け入れてもいいんじゃないか？」
「そ、そういうのはやっぱり恋人同士じゃないと。それとも、有里君がそういう事をしたいの？」
尋ねる風花の言葉の裏には〝自分と〟という意味が込められている。湊も嫌いな相手を抱くことはないので、風花とそういった事をしたいかと訊かれればイエスと答えた。
だが、

「……前にも言ったが俺は遺伝子的に両性のキメラだ。普段はどちらでもあってどちらでもない状態にある。簡単に言えば両方の視点から物事を見ている訳だ。そうすると性欲も湧かない。男として見れば当たり前でも、女として見れば同性に欲情するのはおかしいからな。俺が自分から女性を抱きたいと思う事は通常ないと思ってくれていい」

そう、平時の湊には性欲がなかった。思考の切り替えで主観的な性別を切り替えるなど一般人には理解しがたいだろうが、普段の湊は男女両方の視点で同時に見ているため、男としての自分と女としての自分が互いに監視し合っている。

仮に女子を前にして男としての自分が暴走しそうになっても、女としての自分が理性的に対処して男の暴走は起きない。逆に女としての自分が同性相手にキレそうになっても、男としての自分がやめとけと止めて不快感を表わす程度で治まったりもする。

「ただ、生物の本能ではなく、個人の感覚として誰かと一緒にいると安心する事もある。岳羽と別れた後にチドリに会いに行ったときとか、世間じゃ人恋しいっていうのかも知れないけど、一緒にいてくれるとそのときは空虚感が消えたんだ」

どちらでもあるからこそ人と考え方は違うが、男女の関係を抜きにして誰かと居たいときはある。

昨年のイヴにそれをより実感したと湊が言えば、風花は心配そうに湊を見上げながら、部活メンバーの女子と以前話した事を彼に伝える。

「ゆかりちゃん達も心配してたよ。有里君はときどきすごく思い詰めた悲しい顔をしてるって。寂しいなら寂しいって言っていいんだよ？　皆に頼られるのが辛いなら、そんなのは自分でやってくださいって断ってもいいの。有里君ばっかりが色々と背負わなくていいんだから」

頼まれると中々断れない少女が言っても説得力はないかもしれないが、彼の周りにいる者たちは、青年のことをよく見て心配もしていた。

何でも出来ると思わせる才能、周囲の期待を背負って結果を出す実力とそれに対する信頼、そういったものが積み重なって、大人までもが彼に頼ってばかりいる。

それを傍で見ていた少女たちは、面倒と口で言いながらも請負こなしている青年の姿に時折不安を覚えていた。いつかその重みで彼が潰れてしまうのではないかと。

だからこそ、我慢しないで嫌なことは断って、もっと自分の気持ちをストレートに伝えてくれていい。隣から向けられる真摯な瞳からそんな少女らの思いを受け取り、湊は自分の周りは随分とお節介が多いらしいと小さく苦笑した。

「そうか……美術館に行こう」

「フフッ、うん！」

青年が笑ったことで気持ちが伝わったことを理解した風花も笑顔を浮かべる。色々と予想外のこともあったが今日は美術館に絵を見に来たのだと再び歩き出す。

恋人でも友達でもなく、しかし、一線は越えてしまった二人の関係は微妙な状態にあるが、互いに相手を思い合える良好な間柄なのは間違いない。

二人は風花の好きな画家について話しながら、冬の青空の下をゆっくりと並んで歩いて行った。

影時間――巌戸台

美術館に行った後、夕食を食べてから風花を送っていった湊は、本日のシャドウ狩りをはぐれシャドウ狙いにして街中を歩いていた。

タルタロスの近くなるほどはぐれシャドウは増えるけれど、そんなものはタルタロスに寄った日の帰りにでも倒せばいい。

そうして、今日の散策はタルタロスから少し離れた場所をと考えていたのだが、長鳴神社の近くを通ったとき、犬の鳴き声とシャドウの気配を感じ、湊が神社の前へやってくると白い犬が剛毅〝鋼鉄のギガス〟に襲われていた。

いや、襲いかかってくるシャドウを相手に、勇敢にも爪と牙で応戦していたと言った方が正しいか。

とはいえ、両者の体格差は五倍以上。俊敏な動きで攻撃をどうにか躱していたが、敵の拳がかすっただけで吹き飛ばされ、硬いアスファルトの上を転がった犬は倒れたまま口から泡の混じった涎を垂らしている。

その様子からこれ以上は戦えそうにないと判断した湊は、止めを刺そうとシャドウが拳を振り上げた瞬間に両者の間に割り込み、振るわれた拳を黒い腕で受け止めた。

「こんな時間に随分と変わった縄張り争いだな」

「くぅーん」

一人と一匹が言葉を交わす間、攻撃を受け止められた敵は乱入者を排除しようと逆の手を振り上げる。

そんなものをまともに受けてやるつもりはないので、湊は掴んでいた相手の拳を弾くように離し、そのまま万歳状態の敵の腹部に向けて蹴りを放って後退させた。

相手には打撃耐性があるのでダメージは軽微。けれど、振り上げた拳を人の身でありながら片手で受け止め、さらに一歩踏み込んだだけの蹴りで己の巨体を吹き飛ばす乱入者を警戒しているのかすぐには来ない。

勝手に警戒して攻めあぐねてくれるのなら、こちらはその時間を有効に活用させて貰おうと、湊は犬の傍に腰を下ろして怪我の状態を確認しながら、相手が偶然影時間に迷い込んだのではない事を理解した。

「なるほど、お前は適性者じゃなく覚醒者か。少し手を貸してやろうか？」

「……わんっ」

出血はあるが骨に異常はない。これならすぐに治療の必要はないと判断し、湊は力を貸すのでお前が戦えと犬に告げる。

やられても目が死んでいなかった犬は闘志の籠もった声で鳴き返し、いい返事だと湊はマフラーからＳ．Ｅ．Ｅ．Ｓ．のコピー品である召喚器を取り出した。

「動物であるお前なら当たり前のように死を受け入れられるだろう。

受け入れて尚生き続ける強さを見せろ。さぁ、行くぞ」
前を向け、敵を見ろ。召喚器を犬の頭部に当てながら湊は言う。
元は飼われていようと獣には野生の本能が眠っている。そして、弱肉強食の世界を知る獣ならば死を当たり前のものとして受け入れ、人よりも遙かに高い適性を持ち得る。
そして、敵がいつまでも動きを見せない湊にしびれを切らし寄ってきたところで、湊は犬とタイミングを合わせるように引き金を引いた。
「ペルソナ」
「アオーンッ!!」
パリンッ、とガラスの割れるような音が頭の中に響く。直後、犬の頭上で水色の欠片が渦巻き、三頭を持つ黒い獣が現れた。その名は剛毅〝ケルベロス〟。
冥府の門番であり〝地獄の番犬〟として有名なケルベロスは、冥府にやってきた者はそのまま通すが、逃げようとする者は喰らってしまう恐ろしい存在として語られている。
けれど、ケルベロスはオルフェウスが竪琴で奏でた美しい音楽を聴いて眠ったというエピソードも持っていて、初めて呼び出したペルソナがオルフェウスだった青年は、ケルベロスを宿すこの犬も自分に懐くのだろうかと関係のないことを考えていた。
そんな彼の視線の先では呼び出されたケルベロスが炎を吐いて敵の足を止め、動きの止まったところで怪しく光る魔法陣を展開し闇魔法のムドで呪殺している。
ペルソナでの初戦闘を見事勝利で飾った犬はどこか誇らしげな表情を浮かべ、湊はそんな相手の頭を撫でると、戦闘に引き寄せられ集まってしまった者たちの気配を感じて立ち上がった。
「初めてにしては上出来だな。残りは任せろ」
言いながらマフラーに手を伸ばした彼が取り出したのは一つのカードホルダー。そこには昼間目覚めた女教皇のカードが収まっており、わらわらと集まってきた複数のはぐれシャドウの位置を捕捉しながらカードを握り砕いた。

「こい、スカサハ！」
青年の召喚に応じて現れたのは黒衣を纏った美しい女性型ペルソナ、影の国の女王こと女教皇〝スカサハ〟。
濡烏の長髪を揺らし、その手に魔槍を呼び出したスカサハは、地を蹴りシャドウの一団に飛び込むと次々と敵を屠ってゆく。
横一閃の薙ぎ払いで三体の虚栄のマーヤが消滅し、刺突で貫通耐性のあるリングフォートを貫き殺す。消え去る敵の黒い靄を払うと身体を反転させ、上空にいたヴィーナスイーグルに狙いを定めると持っていた槍を投擲した。
スカサハの手を離れた魔槍は一瞬にして赤い軌跡となり、上空の敵を貫くと彼女の手へと戻ってくる。
全ての敵を倒し終えた女性はどこかつまらなさそうだが、ここでの仕事が終わった以上顕現している理由はない。右手に槍を携えたまま左手を腰に当て、次はもう少し骨のあるやつを頼むぞと表情だけで伝えて消えていった。
ペルソナが消えてホルダーにカードを戻ってきたことを確認した湊は、マフラーにそれを戻してから伏せたままの犬に話しかける。
「犬、怪我の治療をしてやろうか」
「わふっ」
「よし。じゃあ行こう」
ペルソナのスキルを使えば一瞬で治すことは出来る。けれど、この犬は世にも珍しいペルソナに覚醒したペルソナ犬だ。彼には敵のことや自分の能力についてある程度説明しなければならない。
故に、犬用の召喚器を作ることも視野に入れ、湊は相手を抱き上げるとそのままＥＰ社の研究区画へと連れて行った。

第百九十話　十年目を前にして

２月２６日（木）

夜――月光館学園・女子寮

父の死の真実を知る。そのために厳戸台へやって来た少女は、自身の見通しの甘さと現実の厳しさに打ちひしがれ、部活を終えて寮に帰ってきてから一人廊下の休憩スペースでぼうっとしていた。

当時の新聞記事や特集記事を載せた雑誌を見ても、書いてあるのは桐条グループと研究主任だった岳羽詠一朗への非難、そして実験を行った理由とされる勝手な憶測ばかり。

研究主任ではあったがまだ若かった岳羽が、どうして成功を焦って危険な研究をしようというのか。人によっては若くても焦るかもしれないが、ゆかりの覚えている父はもっとおっとりとした人の良い性格であった。

そんな父が自分から危険な研究を進めていくとは思えず、結局、有益な情報を得られていないことで、ゆかりは自分の能力では十年前の出来事など調べられないのではないかと諦めムードに入っていた。

（有里君にあれだけ言っといてこれだもんなぁ。お父さんのことは何も分からない。調べる糸口も分からない。結局、やったことは自分で告白しておきながら、自分勝手に振って有里君を振り回しただけ。本当に自分が嫌になるわ）

自分がここで呆けている間に食堂の利用時間が迫っていた。館内放送でそれを聞いたゆかりは、しまったと表情を歪めるがすぐに今日はいいかと諦める。

世間で騒がれるようになった無気力症ではないが、気持ちばかりが先行して実際には何一つ出来ていない自分に嫌気がさし、ゆかりは何もする気が起きなくなっていた。

こんな事なら父のことを諦め、素直に湊と交際を続けて幸せな生活を謳歌していれば良かったと考えてしまう程度にだらけている。

途中、心配して友人が様子を見に来てくれたけれど、相手はゆかりが思春期特有の将来の不安を覚えていると考えて気楽に行こうとア

ドバイスをして去って行った。
本当はそんな話ではないのだが、訂正するのも面倒で、このまま部屋に帰って今日は寝てしまおうかと考えたとき、廊下の向こうから寮母の女性がやってきた。
「あ、岳羽さん。あなた、岳羽さんでしょ？」
「え、あ、はい。そうですけど」
やってきた寮母と話をするため立ち上がれば、相手は会えて良かったとホッと息を吐いた。
名簿を見ればどの部屋で暮らしているかは分かるけれど、部屋にいなければ寮内を探すか、最悪登録してある番号に電話をかけなければならない。
そこまでせずに見つかって良かったと笑った女性は、手に持っていた封筒を差し出しながら口を開いた。
「良かった。探していたのよ。はい、あなた宛のお手紙。差出人は岳羽詠一朗さんって方よ」
「は？　ちょっと待って、そんなはずっ」
十年前に死んだ者から手紙が来るなどあり得ない。けれど、寮母が嘘を吐く必要性もないことで、ゆかりは一体どういうことだと混乱しながら手紙を受け取り確認した。
そこに書かれていたのは間違いなく手書きの父の字。しかし、封筒と書かれた文字の様子からどうにも年季が入りすぎていると思って裏を向ければ、そこには封筒に印刷された「ムーンライトブリッジ開通記念」という文字があった。
つまり、これは一時期流行った未来への手紙と呼ばれる、いわゆるタイムカプセル的なものらしく。およそ十年経ったことでこうして送られてきたと言うわけだ。
父のことを諦めかけていたときに自分の許に来るなど、運命の悪戯を感じずにはいられない。
その可能性は低いと理解しつつも、この手紙には何かしら父の行っていた研究のヒントが書かれているのではと、ゆかりは淡い希望を抱いた。

「あの、どうもありがとうございますっ」
「あ、ちょっと、受け取るならサイン！　それに荷物も忘れてるわよ！」
　手紙を受け取ったゆかりは自分の部屋へと走った。この際、ヒントなどなくてもいい。ただ十年前の父が自分にどんなメッセージを送っていたのか知りたかった。
　父の手紙を持って駆ける少女の瞳には、諦めかけていたとは思えぬほどの力が戻っていた。

２月２７日（金）
放課後――月光館学園
　金曜日の放課後、部活はないがラビリスが掃除当番になっていたことで、揃ってＥＰ社に行く用事のある湊は時間潰しも兼ねて教師からの頼まれごとで資料室に資料返却に来ていた。
　そして、時計を見てそろそろ掃除の終わる時間かと思って部屋を出ると、彼の後ろから少し顔の赤い風花が出てくる。
　ただの資料返却でどうして顔が赤くなっているのか他の者が見れば疑問に思うだろう。ただ、今この場には二人しかおらず、誰も尋ねないので中で何があったかは本人たちしか分からないが、湊が施錠したタイミングで遠くから呼びかける声が聞こえてきた。
「あ、有里君と風花じゃん。二人も掃除当番だったの？」
　やってきたのは鞄と一緒に部活の用意を持っているゆかりだった。湊たちが所属している総合芸術部は休みだが、弓道部にも所属している彼女はそちらの活動があるらしい。
　近づいてくるゆかりを見て風花が気まずそうにしていても、湊はいつもと変わらぬ態度で返事をした。
「今週は当番じゃないが、五限目に使った資料を片付けに来ただけだ。山岸、手伝ってくれて助かった。また今度ジュースでも奢る」
「う、うん。別に気にしなくていいよ。それじゃあ、今日はちょっと用事があるから先に帰るね。ゆかりちゃん、部活頑張ってね」
「あ、うん。お疲れー」

鞄を持ってきていた風花は二人に頭を下げて別れを告げると、パタパタと急ぎ足で去って行った。
湊が用事を終えた彼女を送り出したようにも見えるが、会ってすぐに帰られたことでどこか避けられたような気がしたゆかりは、青年の様子をジッと観察してから、先ほどの風花の様子がいつもと違ったような気がして湊に探りを入れる。
「……ねぇ、風花と何かあった？」
「何かとは？」
「いや、その、仲が縮まるようなこととかさ」
チドリや佐久間のように明確な執着を持っているわけではないが、風花も以前からやんわりと湊を意識する場面が度々見られていた。
女の勘と言おうか、好きな人を目で追っていると自然とまわりにいる女子の姿も入ってきて、最近で言えば風花の割合が増えている。
そこに先ほど見たばかりの光景を足せば、ゆかりと別れてフリーになった湊が、今度は同じ部活仲間である風花といい仲になってきているという推測が立つ。
既に別れたゆかりに二人の仲をどうのこうの言う権利はないが、まだ湊を好きでい続ける少女としては気になってしまい。多少、歯切れの悪い訊き方になったが湊は普段通りのやる気のなさでそれに返してきた。
「まぁ、四年も同じクラスだしな。それなりに親しくはなれたんじゃないか？」
「そういうんじゃないって。何だろう。えーっと、距離感みたいなのがさ。近くなったような気がして」
そんなものは訊かなくても分かっている。
と言うより、ゆかりが尋ねている意味を理解していながら、青年は敢えてズレた回答をすることで遊んでいるらしく、気付いたゆかりが真面目に答えろと責める視線を送れば湊は苦笑して別の話題を振ってきた。
「なんだ。疲れてるのか？」
「……うん。少し疲れてるかも。ごめん、ちょっと充電させて」

話を逸らされた気もするが、言ってゆかりは湊に抱き付く。こんな姿を他の者に見られれば大変だが、幸いな事に二人のいる廊下には誰もいなかった。
湊と別れてから父の事を調べ始め、まるで成果のないまま十年が経とうとしている事実にへこみ、こんな事なら父の件は諦めて湊と別れず普通の幸せを選べば良かったと考えてしまう程度にゆかりは疲れていた。
何も言わなくてもそれらを察してくれる湊の優しさが嬉しくて、頑張るためにちょっとだけ休ませて欲しいと抱き締めて貰ったゆかりは、彼に優しく包まれ胸に広がっていた不安が解けていくのを感じ、本当に魔法みたいだと久しぶりに穏やかな笑顔を見せた。
「ありがと、結構元気出た」
「愚痴はまだいいのか？」
「そっちはまだいいかな。なんか昨日の夜に変な夢みちゃってさ。それで寝不足で疲れてたの」
今後への不安と父のことを強く意識させる切っ掛けの手紙が来たからか、ゆかりは昨夜変な夢を見てしまったと湊に話す。
空気が生温い感じがリアルでねと苦笑したとき、話を聞いていた湊はゆかりの頭を撫でながら彼女の体調を心配してきた。
「夢は精神状態が深く関係してくる。仮に似たような夢を続けてみるなら、病院でカウンセリングを受けるなり、睡眠導入剤を処方して貰うなりした方がいいぞ。幸いなことに近くに大きな病院もあるしな」
「うん。続くようだったらそうする。じゃ、私は部活だから。またね」
「ああ、またな」
会う前と会った後でゆかりは明らかに表情が違っていた。彼女のいう充電とやらは効果抜群だったようで、離れて小さくなっていくゆかりの足取りは軽い。
しかし、それとは対照的に見送る青年は、先ほどのゆかりの話について真剣な顔で考え込んでいた。
（……タイムリミットか。岳羽の目的を考えれば、あいつは桐条側に行った方がいいんだろうな）

ゆかりの見た夢というのは特徴から言って影時間の事だろうと途中で察していた。
湊の周りにいる者たちは影時間に適応し過ぎている湊の高い適性に感化されてか、素質がある者は既に覚醒や適性獲得への兆候を見せている。
真田の妹である美紀がその代表で、彼女はペルソナに目覚めるほどの適性はないが、既に影時間の適性を完全に獲得し、シャドウが凶暴化する満月には桔梗組の方で保護されていた。
そして、今回の事でゆかりも既に適性を獲得したと判断でき、彼女がペルソナを覚醒させるのはそう遠くないだろうと湊は読んでいる。
同じく風花も徐々に適性が高まっているため、覚醒すれば二人も他のペルソナ使いと共にいるようになると思われるが、桐条に近づこうとしているゆかりはＳ．Ｅ．Ｅ．Ｓ．へ所属した方が彼女にとって有益で、風花に関してはどちらでも構わないはず。
現在既に美紀を保護しているので、それが二人に増えようが三人に増えようが構わないと考える湊が生徒玄関へ向かうと、丁度そのタイミングで上から降りてきた少女が湊に声を掛けてきた。
「あ、弟君だ。やっほ、元気してる？」
「時任先輩……卒業前だってのにまだ学校に来てたんですね」
「まぁ、ボクシング部のマネージャーは卒業式まで引退しないからね。進学の準備もそれほどないし、家でゴロゴロしてるより部活してた方が楽しいんだ」
柔らかな笑顔で話しかけてきたのは三年生でボクシング部マネージャーの時任亜夜。
湊に言わせれば真田に惚れているという男の趣味が悪い先輩だが、彼女は十年前の事故で亡くした弟に生意気なところが似ている湊によく構っていた。
構われている方も過干渉は面倒だが、相手くらいの距離感ならば別に問題ないと許容しており、もうすぐ卒業する少女と他愛のない雑談を交わす。
けれど、先ほどまで影時間について考えていた湊は、感覚が敏感に

なっているのか話の途中で気になることがあり、自分だけ別の時の流れに乗るとアベルの剣を呼び出し亜夜の胸を貫いた。
アベルの剣は〝楔の剣〟と呼ばれる特殊な武装で、普段は切れ味のいい実体剣だが、赤い光を纏うと相手の適性やペルソナを奪う魔法剣になる。
そして、魔法剣状態の剣を引き抜くと彼女の中から小さな黒い欠片が現れ、それを手のひらの上で浮かせながら湊は自分の中にいるシャドウの王に話しかけた。
「ファルロス、これは何だと思う？」
《何だと思うって訊かれると、僕の力の欠片かなって答えるしかないんだけど》
湊の手のひらの上でゆっくりと回転する黒い欠片は、通常のシャドウよりも濃い気配を漂わせている。明らかに普通の物ではないと思って取り出したが、まさかファルロス本人の力の欠片だと言われ、湊は飛び散ったのは十二体のアルカナシャドウだけだったはずだと聞き返す。
「お前の力は俺に封印された本体と十二のアルカナシャドウに分かれたんじゃなかったのか？」
《お皿を床に落とすと大きい塊と小さな欠片が出来るでしょ？　大きな塊のアルカナシャドウは自律行動を取ったけど、自然消滅するはずだった小さな欠片もいくつか人の中に入り込んでたみたいだね》
「抜き出した以上影響はもうないよな？」
《適性持ちでもないし、大丈夫のはずだよ。ああ、けど、僕の力は少し回復するみたいだ》
本来なら消えるだけの力の欠片が、どういう運命の悪戯か少女の中に入り込んでいた。
そのままにしていれば欠片の影響で人格に変調をきたすことや、傷が癒えてアルカナシャドウが復活してくれれば、通常のシャドウよりも強い力を宿すデスの欠片を求めてシャドウが彼女を襲うかもしれない。
それを未然に防げただけでなく、欠片を取り込むことで中にいる

ファルロスに僅かにだが力が戻った。まだ完全に外に出ることは出来ないが、ペルソナ召喚の応用で湊がエネルギーを肩代わりすれば一時的に実体として顕現出来るようになったのだ。
　試しに出てきたファルロスが廊下の窓を開けて見せると、友人を見ていた湊は小さく笑って口を開いた。
「……名前、考えておかないとな。力が戻れば人として過ごすんだろ？」
《うん。君と同じ学校に通ってみたいからね。洒落た名前を期待してるよ》
「ああ、今と同じように男性器の意味になるものを選んでおこう」
《う、うん。そこは別に普通の名前でいいかな。マーラとかダビデとか付けられても困るし》
　ファルロスとは確かに男性器という意味を持つ単語だが、別にわざとそういう意味を意識して名乗った訳ではない。というか、自分は男性器ですと自己紹介する者などいるはずがない。
　なので、湊は気を利かせて同じ意味になるよう考えるつもりだったのだろうが、ファルロス本人はその名が男性器の隠語になった神や世界一有名な包茎男の名前にされても困るので、あくまで日本人の名前でいいよと彼に説明しておいた。
　――ＥＰ社・研究区画
　掃除を終えたラビリスと合流した湊は、バイクを走らせてＥＰ社の地下にある研究区画までやってきた。
　ＩＤを提示して中に入るとき、今日もまた公安の人間が一般人を装い病院や食堂の方を彷徨いていたと警備から報告を聞き、また後で対処しておくと答えて湊は廊下を進む。
　隣を歩くラビリスは落ち込んだ様子でため息を吐いているが、なぜ彼女がそんな様子なのか分からない湊は、いい加減鬱陶しいのであきれ気味に声をかけた。
「さっきから何でため息を吐いてるんだ？」
「なんでって、分かるやろ。もう一週間以上もおらんねんよ？　はぁ……せっかく遊ぼうと思てボールも買ったのに、コロマルさんってば

誰かに貰われたんやろか」
ラビリスが暗い理由、それは長鳴神社の犬であるコロマルがいなくなったからだ。
つい先日までは見かけたというのに、ここ一週間ほどは朝も夕方も見かけなくなり、後で食べてくれと置いていったドッグフードも鳥が食べていて、コロマルが帰ってきた形跡は一切なかった。
誰かに飼われているのならいいが、もしも、事故にあったり保健所に保護されているなら心配である。彼の安否が気になってため息が出るのもしょうがないと少女が言えば、それを聞いた青年は聞いて損したと鼻で笑った。
「犬の一匹や二匹いなくなったところで別に生活に影響はないだろ」
「影響あるし。ていうか、湊君が飼わせてくれとったら心配せんで済んだんやで？」
「俺は責任を持てないから飼わないと言ったんだ。君よりずっと現実的だよ」
冷たい物言いにラビリスはムスッとした表情を浮かべ、あまりに薄情すぎると責めるように睨んだ。
けれど、なんと言われても湊はペットを飼うことは反対で、どうして自分から苦労と責任を負おうとするのか理解できないと首を振る。
コロマルは飼い主がちゃんと躾けていたのかとても利口で、悪意を持って近づこうとする者以外には吠えたりもせず大人しいものだが、それでも日中は誰も居ない家に留守番させることになったり、ほぼ毎日散歩に連れて行く必要があったりと手間がかかる。
ペットとの触れ合いで得るものは当然あるに違いないけれど、それならＥＰ社で行っているペットの躾け教室のアシスタントのバイトでもすればいいと湊は考えていた。
そうして、湊のことを冷たいと言ってラビリスがへそ曲げつつ部屋の前に着けば、カードキーを通して扉を開けながら湊が一言告げた。
「それとな、あの犬ならここにいるぞ」
青年の声が消えるか否か、ゆっくりと自動で開いていく扉の中を見たラビリスは目を見開いた。

「コロマルさん！」
「わん！」
　驚きつつも、久しぶりの再会を喜びラビリスが駆け出せば、コロマルも嬉しそうに尻尾を振ってやってきた。
　少女は相手がどうしてここにいるか分からないだろう。ここに連れてきた張本人は、足にすり寄ってきた相手の頭を一度撫でると準備のため部屋の奥に行ってしまうが、ラビリスは相手の頭や首をわしゃわしゃと撫でながら、彼の首に見覚えのない首輪がついている事に気付いた。
「あれ、コロマルさんその首輪どうしたん？　前に湊君にもろたやつ外してもたん？」
　丸っこいパーツの付いた変わった形の首輪。どことなくヘッドフォンのようにも見えるが、ヘッドフォンは頭に沿う部分にのみカーブを描いたパーツが付いていてリングにはなっていない。
　そうして、観察しているとラビリスは自身のコアである黄昏の羽根が目の前の首輪に反応している事に気付き、もしや黄昏の羽根を積んでいるのかと思ったところで部屋の奥からやってきたシャロンが彼女の疑問にあっさりと答えた。
「それはワンちゃん用の召喚器よぉ。坊やがその子を連れてきてから作ったの」
「召喚器って嘘やろ⁉　え、コロマルさんもペルソナ使えるん？」
　彼女が驚くのも無理はない。ペルソナとは高次の精神を宿した者しか獲得する事の出来ない異能であり、それは死と向き合うことでのみ発現させる事が出来るのだ。
　ラビリスの主観ではどんな頭のいい動物でも死という概念を理解できず、故にペルソナとは人間のみが獲得できる力だと思っていた。
　けれど、コロマルがここにいて主任であるシャロンが嘘を言うとは思えないので、一体どういうことかラビリスは視線で湊に尋ねた。
「この前、影時間にシャドウと戦ってるのを見つけてな。やられそうになってたから力を貸して、戦闘終了後に治療と事情説明のために保護したんだ」

簡単な説明だが実に分かりやすい。世の中珍しいこともあるもんだとラビリスはコロマルを撫でながら素直に驚いている。
「ほわぁ、犬でもペルソナ使いになれるんやね」
「わん！」
まるで、どうだと言っているかのように誇らしげな顔で鳴くコロマルを、ラビリスはすごいすごいと褒めてやる。
そんな二人の姿を視界に捉えながら、色々な器具を持ってきて用意している湊は追加でコロマルの情報を話す。
「軽く戦闘訓練もしたんだぞ。練度はまだ甘いが獣だけあって危機察知能力と敏捷性に優れてる。本能で死を当たり前のものとして受け入れているし、こいつのペルソナの伸び代は他の者より遙かに高い」
「へぇ、やっぱコロマルさんはすごいんやね。あ、ウチもペルソナ持ってるから、これからは一緒にタルタロスとか行こな」
「わふ」
いくら説明を受けてもペルソナを駆使した戦闘は実際にやってみなければ分からない。犬用の召喚器が完成してから、湊は最初にラビリスを目覚めさせた第二演習場で戦闘訓練を行った。
犬だけあって牙と爪は人のそれより鋭く強いが、流石に戦闘で酷使すればダメージが蓄積して日常生活で使えなくなってしまう。
そこで湊は相手にナイフを咥えるようにアドバイスし、すれ違いざまに切りつけるという方法を最初に覚えさせた。口に咥えているため顔という急所を敵に近づける必要があるものの、慣れてくれば三角飛びの要領で器用に切って離脱することも可能になっていた。
コロマルの成長には湊も素直に驚き、ならばペルソナはどうだと実際に召喚させれば、犬でありながら炎を一切恐れず、湊が蛇神の影から呼び出した亡者共を苦もなく倒した。
獣としての危機察知能力に加えてバトルセンスの良さも見受けられ、極めつけとしてコロマルのペルソナである剛毅〝ケルベロス〟は潜在値が他の誰よりも高く、それは大きな変化が必要ないほど彼の心にしっかりとした芯があってぶれないことを表わしていた。
アナライズでも確かめコロマルのペルソナ使いとしての期待値を

把握した湊は、これは予想外の拾い物だと密かに喜んでいる。
そうして、中々に信用できる戦力を手に入れた湊は、全ての準備を終えたようで戻ってくるとラビリスに話しかけた。
「さて、そろそろいいか？」
「あ、うん。一緒に来てって話やったけど、今日はなにするん？」
彼女は湊に研究所に一緒に来てくれと言われやってきただけで、ここで今日何をするのかまでは聞いていない。
新しいパーツのテストであったり、使っている戦斧の改良版を試すなど、彼女はこれまで様々な研究に協力してお給料を貰ってきた。
湊と暮らすようになって服や日用品に食料品と言った物を買うようになり、まともな金銭感覚を身につけた彼女にすれば少し貰い過ぎではないかという額だが、ラビリスのテストしたパーツや技術が将来的には軽量且つ高性能な義肢として活用されるようになるので、医療の発展に対する貢献度を思えば決して高すぎるという事はない。
そして、ラビリスもこれからは自分のお小遣いからコロマルの世話用品を買おうと思っているため、コロマルのエサ代のためにも頑張るぞとやる気を見せれば、
「ラビリス、今日から君には人間として生きて貰いたい」
湊がそう話し、武田とエマがタイヤ付きの酸素カプセルらしき大きな機材を運んできた。
機材の半分は透明になっており、そこから見えた中にはラビリスそっくりの少女がまるで寝ているかのように横たわっている。
先ほどの青年の言葉と併せて考えれば、もしや、本当に彼は神の領域に踏み込んだ禁忌の研究を完成させたのかとラビリスは動揺しながら尋ねた。
「え……これ、え、ホンマに？　ホンマのホンマに完成させたん？　だって、ウチと会って一年くらいしか経ってへんよ？」
「坊やが本物の馬鹿だったからねぇ。基礎理論は一緒に組んだし、培養中の調整も手伝ってたけど、ほとんどこれ一人で作り上げたようなものよ。貴女たちを早く人間にしてやるんだってね」
ロボットを人間にするために掛けた時間がたったの一年。実際に

はラビリスと会う前からシャロンたちと一緒に研究はしていたが、それでも半年しか違わず、湊は一年半で対シャドウ兵器用の生体ボディを作り上げた。
　カプセルの中で酸素マスクを付けている入院着の少女は、本当に今にも目を覚ましそうで、これで魂だけが宿っていないなどまるで信じられない。
　けれど、実際にシャロンたちも脳波や電気刺激で反応を見て、一切覚醒の兆候が見られなかったことで、これが植物状態とは別の症状だと判断し、未だ完全には信じ切れていないが湊の悲願が達成されたことを認めた。
「な、なぁ、大丈夫なんかな？　ウチが人の身体になったら、これまでの記憶を失ったりとか、ペルソナ使えんくなったりとか、機械やから出来てた無茶も出来なくなるんやろ？」
「まぁ、生身だからねぇ。耐久性っていうの？　人らしく言えば怪我のしやすさは格段に高くなるけど、それって人としてはしょうがない話よ。普通の生き物は死んだら終わりなんだもの」
　これで君は人になれる。そう告げられた少女は不安な表情を浮かべ、湊とシャロンを交互に見ながら自分の正直な気持ちを伝える。
「ウチ、人になりたいって思ってたけど、ははっ、なんかいざなれるって言われると怖いわ。今なら大破しても新しくボディ作ればいいんやもん。怪我やってダメージフィードバックをカットすれば腕がもげても戦えるし。シャドウとの戦闘を考えたら今のままの方がええと思うんよ」
　シャドウとの戦闘は決して楽なものではない。明らかな格下であっても、一つの油断で大怪我を負わされることもある。
　今のラビリスの身体ならばパーツ交換ですぐに復帰できるが、もし人の身体になれば腕がもげれば治らなくなり、その後は足手まといだからと戦線に出られなくなる。湊の傍にいようと考えている少女にとって、それはあまりにデメリットが大き過ぎる。
　故に、シャドウとの戦闘が終わるまで様子を見ないかと提案すれば、彼女の瞳をまっすぐ受け止めた青年が口を開いた。

「……ラビリス、君が怖いと感じるのは分かる。死への恐怖は生き物が持つ本能だからな。それを理解している君の心は既に機械の域を超えている。ただ、生きるというのは死への恐怖だけじゃない。人になれば君は新しい命を宿すことも出来るようになる」
ロボットと人の最大の違い。それは子を成す事が出来るかどうか。
彼女もどうすれば子どもが出来るかは知識として知っている。今の身体は生殖器内部までは作り込まれておらず、そういった事をする相手もいないので勿論経験はないが、病院の方で仕事を手伝う中で赤ん坊を抱かせて貰ったことはあった。
見るからにとても脆くて、触れることすら不安になってしまうくらい弱い存在。それなのに命の輝きに溢れていて、赤ん坊を抱いたときラビリスは心の奥に不思議な温かさを感じた。
人になれば少女もあの尊い存在を宿し、産むことが出来るようになるという。それを聞いたラビリスの心が動きかければ、
「一応補足しておくとさ。完全な人間って訳でもないのよ。臓器とかは生体パーツだから人のそれと同じ機能だけど、どうしても求める細胞の強度に達してない部分があって、そういった点を解決するために超微小サイズにした黄昏の羽根を全身に取り込んでるから、平時でも付与効果で一般人より身体能力とかは高くなってるわ」
シャロンがさらに説明を加え、セーフティーをかけている現在よりも自然な形で高い身体能力を発揮できると太鼓判を押した。
ただ、いくら身体能力が保証されても心配事は残っている。
「じゃあ、ウチの中におるもう一人のウチはどうなるん？」
「彼女は君の別の側面だ。根っこで繋がっているから分離は出来ない。まぁ、生身で別人格に近い物を保持しているのは不安かもしれないが、全ての記憶をコアと一緒に移すから、そこは安心して欲しい」
ラビリスの中にいるもう一人の彼女とは、負の感情を司り攻撃的な別人格であるシャビリスの事だ。
本人は湊以外にそう呼ぶことを許可していないけれど、面倒なので研究時の仮名称としてそれは採用されていたりする。
そんなシャビリスの人格は、ラビリスが受け継いだテストベッドの

姉妹機たちの感情データとラビリス自身の負の側面が結びついたものであり、厳密には別人格という訳ではない。
彼女を分離するという事はラビリスの人格を一部切り離すということなので、そんな事は技術的に不可能だと湊は告げた。
どうせなら彼女も別のボディに移って、一つの個として生きればいいのではと考えていたラビリスは肩を落とすも、そんな彼女にシャロンは一番気にしていた戦闘面についての情報を付け加えた。
「ああ、あと生体ボディでもオルギアとE．X．O．は使えるわよ。オルギアは肉体の活性化による身体能力のアップだけだけど、E．X．O．はコアと全身に取り込んだ羽根を共鳴させて、その間はペルソナの鎧で全身を覆ってるような状態になるわぁ。オルギアはともかく後者は使用後に疲労感がドッと押し寄せるでしょうけど、三分くらいは問題なく使えるから、羽根の付与効果も含めて影時間の活動は前とほぼ変わらない力を発揮できるんじゃないかしら」
十年前に作られたアイギスのオルギアモードには、使用後にオーバーヒートで動けなく欠陥があった。それを現代の技術で解決し、クールダウンが完了するまで再び使用出来なくなるものの、効果が切れても戦闘を続けられるようにしたのが改良版オルギアモード。
理論は異なるが人の身体でも黄昏の羽根を搭載したままになるラビリスは、そこから全身にエネルギーを送ることで細胞を活性化させ、通常の運動と同じ負担で一時的に身体能力にブーストをかける事が出来る。
正式名称〝エクストリーム・オルギアモード〟ことE．X．O．は、それをさらに発展させたもので、ペルソナ召喚時のエネルギーを黄昏の羽根に送って増幅し、増幅させたエネルギーで今度は自分の肉体を包み、限界ギリギリの力を使うことで使用後の負担は大きいが、ペルソナの鎧を纏いながらオルギアモード以上に身体性能を引き上げる新技術だ。
改良版オルギアモードはEP社製対シャドウ兵器ボディのイヴにも搭載してあるが、E．X．O．はペルソナの力を利用する関係で、黄昏の羽根を宿し肉体の強度もある湊とラビリスの二人しか使用出

来ない。
　それが生身になってからも使えるというのは朗報だが、彼女は最後にもう一点だけ教えて欲しいと質問を口にした。
「ロケットパンチは？」
「……それいるのか？」
「あると便利やねん」
「分かった。アームドギアとして開発できないか検討してみる。ただ、現状、戦斧にチェーンが付いてて中距離もいけるから、緊急性は低いと判断しての開発になるから期待するなよ」
　一応、ラビリスたちの人工骨格は肘・肩・膝の関節で分離する事が出来るようにはなっている。外した部位にはこれまで開発した武装を装着できるものの、生身で分離した場合は肉ごと切り離すことになってしまう。
　湊はそういった痛みを平気で我慢して血を流しながらパーツを換装できるが、生身で感じる痛みを知ったラビリスやアイギスが同じように我慢して戦闘を続けられるとは思えない。
　よって、湊はロケットパンチを鎧も兼ねた新武装として開発してみると彼女に約束した。
　日常生活には必要ない物も、戦闘という非日常の中では慣れ親しんだ武器として信頼しているため、咄嗟に頼りたくなるときがあるかもしれない。
　そう考えて気にしていた少女も最後の不安が取り除かれれば笑顔を浮かべ、湊たちによろしくお願いしますと生体ボディへの移行を頼んだ。
　行う作業は大きく分けて四つ。まず彼女の記憶を吸い出し記憶媒体としての黄昏の羽根に移す。そして今度は光の粒状にした羽根ごと記憶を脳に定着させ。それが終わってからようやくラビリスのコアである黄昏の羽根を移植する。
　身体にメスを入れて傷つけたくない湊は、黄昏の羽根の分解と再構築が可能な者が自分しかいないため一人でこなし。それらが終わってから、ようやく締めである生命力の供給で全ての羽根を共鳴させ、

彼女の肉体の全機能を目覚めさせると、記憶と人格はそのままに肉体の移行を無事に成功させた。

第百九十一話　少女の勧誘

3月8日（日）
午後――月光館学園

先日、高等部の卒業式を終えたばかりの月光館学園。休日にもかかわらずそこへやって来た岳羽ゆかりは、約束の時間には遅れていないなと腕時計を見ながら、生徒会室の前まで来ると軽く扉をノックした。

すると、中から「どうぞ」という女性の声が聞こえてきたので、ゆかりは失礼しますと言いながら扉を開き中に入った。

「来てくれてありがとう。休日に呼び出してすまないな」

「いえ、大切な話ってことなんで気にしてません」

部屋の中にいてゆかりに話しかけてきたのは桐条美鶴。来年度には生徒会長になると見られている本校母体グループのご令嬢だ。

そんな彼女の向かいの席にやってくると、相手に座ってくれと言われてゆかりは素直に席に着く。

美鶴の方を見れば何やら分厚いファイルが置かれているものの、彼女はすぐに話し始めるつもりはないらしく、沸かしておいた電気ポットで紅茶を淹れ、それをゆかりと自分の前に置いた。

「話をするのにお茶の一つもないというのは寂しいからな。飲みながら話をしよう」

「はい、いただきます」

来るまでに冷えていた身体を温めるためにカップを手に取り口を付ける。電気ポットで淹れた紅茶だが普通に淹れるよりも美味しく感じ、ゆかりはそれで相手が紅茶を淹れるのに慣れているのだろうと察した。

静かに紅茶を飲むゆかりの正面では、美鶴も上品な仕草でカップに口を付けているが、正直に言えばゆかりは相手が苦手だった。

文武両道、容姿端麗、家柄もよく、公私をきっちりと分ける公平さを持っている事で周囲からの信頼も厚い。

似たような男をゆかりは一人知っているが、あれは力を見せること

で周囲を黙らせているタイプなので、力の見せ方や使い方に関しては正反対と言える。
　そう考えたところで、そういえば二人は親戚ではないが似たような関係だったなと思い出し、呼ばれた理由を聞いていないゆかりは、もしかすると湊に関係する話だろうかと推測した。
「あの、今日呼ばれたのって有里君関係ですか？」
「ん？　いや、別に彼は関係ないが。どうしてそう思ったんだ？」
「先輩と私って有里君を挟まないと接点がほとんどないじゃないですか。だから、何か彼のことで訊きたいことでもあるのかなって」
　同じ学校に通う先輩と後輩だが、別に部活が一緒という訳でもなく、相手が湊のまわりをチョロチョロしているうちに少し話すようになっただけ。
　桐条家主催のパーティーに出席して面識があったとしても、湊がいなければ会えば挨拶を交わすくらいの関係にはなっていなかっただろう。
　ゆかりがそれを理由として湊関連の話だと思っていたと言えば、美鶴は確かにそうだなと苦笑しつつ改めて今回の話に湊は関係ないと否定した。
「君が彼と交際していた事は知っている。まぁ、中等部にいた者にとっては有名な話だからな。ただ、それと今回の件は関係ない。もし仮に有里のことを訊くなら、吉野や汐見を呼んだ方が早いだろうしな」
「じゃあ、今日はなんで？」
　湊の話を聞きたいなら家族であるチドリやラビリスに尋ねる。恋人だったゆかりしか知らない事もあるだろうが、美鶴は他者の恋愛事情に首を突っ込むタイプではないので、恋人同士の思い出かもしれない部分に触れることはないのだ。
　しかし、そうなると美鶴はゆかり個人に用事があって呼び出した事になる。知らない仲ではないけれど、やはり繋がりは薄いので呼ばれた理由に心当たりもなく、紅茶のカップをテーブルに置いてゆかりは相手の答えを待った。

「先日、君は辰巳記念病院に行ったな？」
「え？　ああ、はい。なんか最近変な夢を見ちゃって寝不足が続いてたんで」
　ゆかりが呼ばれた理由を相手に尋ねると、美鶴は唐突に関係ない話題を振ってきた。どうして知っているのか分からないが、相手の言う通りゆかりは変な夢を見て寝不足が続いていたので、先日湊にアドバイスされた事を思い出して辰巳記念病院に向かった。
　病院では変な夢を見るという話をして、何か大きな不安を抱いているのが原因ではないかと医者に言われ、それはまさしく当たっているのだが、美鶴も同じ日に病院に来ていたのだろうかと思っていれば予想外の言葉が返ってくる。
「知っているかもしれないが、あそこはうちのグループの経営する病院でな。そこである検査をして特別な兆候が見られた場合は連絡が来るようになっているんだ。結論から言おう。君が夢だと思っているものは夢じゃない。毎夜午前零時に発生する影時間と呼ばれるものだ」
　この人物は急に何を言い出すのか。呆気に取られるゆかりに対し、美鶴は手元にあったファイルを開いて書類を見せながら話を続ける。
「どこか湿った生暖かい空気、緑色の空、異形の塔、巨大な月など現実とは思えないものを君も見たのだろう？　先ほど言ったとおり影時間は毎日発生している。だが、それを知覚できるのは適性を持った一部の者だけだ。私はそういった者を集めてシャドウと呼ばれる化け物と戦っている」
　見せられた書類は以前チドリが勧誘を受けたときに見せられたのと同じ物だ。それぞれの単語について説明が書かれており、一般人がこれだけを見ればゲームか何かの設定資料かなと思ってしまうだろう。
　案の定ゆかりもそう感じたようで、困惑した表情を浮かべながら美鶴に言葉を返した。
「いや、あの、急にそんなこと言われても。っていうか、これ先輩が考えたんですか？」

「簡単に信じられないのは分かる。だが、こちらも真面目に話しているんだ」
紅茶のカップに手を伸ばし口を付ける美鶴は、休日に人を呼び出して冗談を言うほど手の込んだことはしないとはっきり答える。
けれど、それを聞いたゆかりはむしろ冗談であって欲しかったと微妙な顔をしながら、とりあえず情報をもう少し集めようと質問していくことにする。
「それであの、先輩はなんでシャドウってやつと戦ってるんですか？」
人を襲う化け物がいたとしても、だからといって自分が戦うという発想には通常ならない。
いくら一般人とは別世界で生きる名家のご令嬢であっても、戦えば危険なのは分かっているはずで、自分が怪我をすれば周囲の者が心配することも分かっているだろう。
だからこそ、どうして高校生でしかない彼女が戦っているのかを知りたかったのだが、美鶴はシャドウの危険性についてから話してきた。
「岳羽も無気力症という言葉は聞いたことがあるだろう。世間では精神疾患と認知されているものだ。あれは正確には病気ではない。シャドウに心を食われた者が陥る症状だ」
「心を食われるって？」
「言葉の通りだ。シャドウは影時間に迷い込んだ人間を襲って心を食べる。そして、食われた人間は無気力症を患った影人間になってしまうんだ。現在、グループの方でも治療法を研究しているが現状効果的なものは見つかっていない」
無気力についてはゆかりもニュースで見て知っている。弓道部の友人の近所にも無気力症にかかっている人がいる話は聞いていたし、それほど遠い世界の話ではないとは思っていたが、それとシャドウという非日常の存在が繋がると聞いて思わず首をかしげた。
化け物に襲われても死なないのは朗報だと思える。普通、ゲームや漫画の話なら化け物に襲われた人間は死ぬか同じ化け物になるのがセオリーだ。その点、優しいと言っていいのかは不明だがシャドウな

ら襲われても命は助かるのだから、心配は続いても突然の別れに悲しむことはない。
　ただ、無気力症という病気と認定されておきながら、桐条グループほどの力を持ってしても治療法を発見できないとなれば、その〝心が食われる〟ということに恐れを感じてしまう。
　ゆかりの表情にそんな思いが出ていたのか、美鶴も遊びのない真面目な表情でさらに詳しく続ける。
「まぁ、突然回復するケースはいくつか報告されているが、既に一ヶ月以上無気力症状態で入院している者もいる。無気力症状態が長く続けば、他の者と同じように突然回復しても後遺症が残り完全に元通りにはならないらしい」
「その、後遺症っていうのは？」
「まだ後遺症の残った被害者がいないのであくまで推測だが、無気力症が完全に抜けきらなくなるらしい。ぼーっとしやすくなったり、感情の起伏が乏しくなる可能性があるそうだ」
　後遺症の症状で言えばそれほど深刻ではないと思える。だが、無気力症は夢遊病患者のように徘徊することや、廃人のように街中で動かなくなっている者もいる。
　ふらふらと道路に飛び出すことや、相手の意識がはっきりしていないのをいいことに犯罪のターゲットにされることも考えられるのだ。
　桐条グループはまだ無気力症の原因をシャドウに心を食われた結果だと思っているが、湊は己の心の弱さが原因でシャドウが抜け出てしまっていると知っている。けれど、本人たちの弱さが原因だとしても影時間がなければそうはならなかったので、シャドウを狩ることで無気力症の拡大を防ぎ治療に勤しんでいた。
　以前助けられた事で青年がシャドウを戦っていることは知っていても、その地道な活動の真の理由を知らない美鶴は、無気力症と絡めてシャドウの危険性と放置できない理由について話をする。
「治療法が見つかっていない以上、我々に出来るのは被害者を減らすことだけだ。だから我々は対シャドウ部隊を編成し影時間に戦っている。そして、君にもその適性が見つかった。単刀直入に言おう。岳

羽、我々と共にシャドウと戦って欲しい」
　強い意志の宿った瞳で真っ直ぐゆかりを捉え、美鶴は人々を守るために仲間となり戦って欲しいと頼む。本当なら即戦力どころか主力部隊になれる湊たちに仲間になって欲しいのだが、湊が桐条グループの下に付く訳がないことは美鶴も理解していた。
　ならば、せめて戦力の確保をしなければと、相手が湊に声をかけられている可能性も考えつつ、新たに見つかった適性持ちであるゆかりを勧誘したのだが、仲間になって欲しいと言われたゆかりは演技ではなく本当に影時間に関わることを知らない様子で戸惑いを見せてきた。
「ま、待ってください。ちょっと混乱してるっていうか。これが真面目な話だっていうのも半信半疑でむしろ疑ってるし。ていうか、なんで私なんですか？」
「最初に言っただろう。影時間は適性のある者しか知覚できない。さらに、ペルソナというシャドウに対抗できる力に覚醒する可能性がある者は適性持ちの中でも限られる。現時点でグループが確認しているのは君で四人目だ」
　四人目というのはあくまでグループが確認している人数の話。変な夢を見るという形で病院に相談に来たゆかりと違って、湊、チドリ、ラビリスの三人は適性値は十二分に足りているが確証が掴めていないためここでは除外されている。
　話を聞いたゆかりは自分が確認されるまでたった三人でいたのかと疑うような視線を向けるも、美鶴は相手の視線を気にした様子もなく今回強く勧誘する理由を述べる。
「シャドウには通常兵器は効かないんだ。ペルソナに覚醒したペルソナ使いが剣や銃を使えばダメージを与えられるが、同じ武器を使ってもただの適性持ちではダメージを与えられない。いま組織にいるペルソナ使いは私ともう一人。後の一人は今は部隊を離れているので、戦力は常に求めている状態なんだ」
「そ、それは大変ですね……」
　話の流れからゆかりはもしかして巌戸台分寮に住んでいる者がそ

うなのかと考える。突然自宅通いから寮生活に変わった真田や、現在休学中の荒垣が分寮生なので可能性はかなり高い。
美鶴が冗談でこんな事を言うとは思えず、さらに特徴の一致する分寮生がいる状態でくだらない作り話の設定モデルにするとも思えないので、簡単に信じることは出来ないが話だけはちゃんと聞こうと休憩も兼ねて一旦別の話題を挿むことにした。
「先輩、少し関係のない質問をしてもいいですか？」
「ああ、私に答えられる事なら何でも訊いてくれ」
今回、美鶴はゆかりに頼み事をする立場だ。故に色々と質問をしても答えてくれるはずという打算があったが、案の定、美鶴は嫌な顔一つせずに誠実に答える姿勢を見せてきた。
父のことを彼女に尋ねたい気持ちはあるが、十年前はまだ小学生だった美鶴が深い部分まで知っているはずがないことは湊も言っていたので、ゆかりはここでは別のことを尋ねるため口を開いた。
「あの、桐条グループが病気の研究をしていたって話を聞いたことはありませんか？」
「病気の研究？　それはどんな病気なんだ。医療部門もあるから常に病気については研究しているが、君が訊きたいのは何か特定の病気についてなのだろう？」
ゆかりが知りたいと思ったのは湊やチドリの過去について。湊が桐条グループの研究施設にいたのはポートアイランドインパクトで両親を失った後だ。
数年の違いでしかないが、世間に公表されていない研究の中でも、人々のためになる病気に関するものなら子どもにも聞かせている可能性はある。ゆかりはそこに賭けた。
「えっと、詳しくは分からないんです。ただ、何年も前に公にされてない病気の研究をしてて、最悪人が死ぬこともあるのに被害を防ぐ方法も見つかってなくて、抗体の存在は仮説として分かっていたけどずっと見つかっていなかったらしいんですけど」
説明しながら要領を得ない質問だと相手に申し訳なくなる。ただ、ゆかりとしてもチドリにそうとしか聞いていないので、これ以上は相

手が知っていて察してくれる事を祈るしかない。
訊かれた美鶴はというと質問の内容を理解できていない様子だったが、紅茶を一口飲んで考え込む素振りを見せれば、少々の時間をおいてから考えが纏まったらしく言葉を返した。
「ふむ……曖昧すぎて分からないが、それは無気力症の事ではないのか？　公にされていないものでうちが研究しているといえば無気力症が代表的なものだが」
「あ、あれ？　あ、でも、シャドウって病原体じゃないですよね？　それに化け物の抗体っていうのもよく分からないことになりますし」
言われてみると確かに合致している部分はあった。けれど、チドリは病気と言っていて、説明もそれになぞらえていたことで、やっぱり違うのではとゆかりは尋ね返す。
質問者自身が自分の質問に色々と混乱しているようだが、問われた美鶴はシャドウを病原体として見る発想はなかったと感心した表情を見せ、考え方によっては実に的を射っていると肯定した。
「無気力症の原因はシャドウだ。そして、シャドウに対抗できるペルソナはその抗体と言えなくもない。シャドウの研究を進めるうちにペルソナの存在が示唆され、私が覚醒するまでずっと立証されていなかったしな」
影時間に関する知識を持たない人間には、シャドウを病原体に例えた説明の方が分かりやすいかもしれない。これは一つメモしておこうと話しながら手帳にペンで書き込む美鶴。
研究者たちはシャドウはもっと危険で謎の多い存在だと言うだろう。しかし、相手は何の知識もない素人。それなら相手でも理解できるものに例えた方が話も円滑に進む。
こういった柔軟な発想を持っている者は貴重なので、ゆかりにその話をした人物が誰か尋ねようとすれば、顔をあげた美鶴の視線の先では直前の美鶴の言葉に疑問を感じている少女がいた。
「え、でも、天然の抗体を持ってて研究されてたって……」
「ふむ、君の話はいくつか重要なピースが欠けているように感じる。そもそも、その話は誰から聞いたんだ？」

最初は柔軟な発想をしている相手として興味を持ったが、少女に桐条が非公開にしている研究について話をした人物としても気になってくる。
それが本当に病気に関する研究の話であったとしても、相手は桐条の深い部分まで知っていて情報をリークした事になるのだ。
現在も内部にいるなら一度グループの中を洗わなければならないし、既にグループを離れていたり、外から調べてそこまで調べ上げたのなら、内部情報をこれ以上リークされないよう対策を取らなければならない。
そう思って、美鶴が相手の名前を教えて欲しいと頼めば、ゆかりは何度か口を開きかけては閉じて、最後に申し訳なさそうな様子で俯き気味にぽそりと言った。
「あの、すみません……言えません……」
言えないと回答を拒否するとき、拒否に至った理由として様々なことが考えられる。
相手の様子を観察していた美鶴がゆかりから感じたのは、知らないから答えられないというものでも、約束だから言えないというものでもなく、話せばその人物に危険が及んでしまうかもという不安だった。
感情を隠せないのは未熟な高校生としては自然だが、それだけに中学生から月光館学園にいる彼女にそこまで思われる人物は絞られてしまう。
当事者であった彼や彼と共にいる少女たちなら、グループが世間に隠し続けている研究について知っていてもおかしくはない。そう思って美鶴は、とある青年のためならしょうがないなと少し話をすることにした。
「……これは独り言だが、グループには私も知らされていない暗部が存在する。その中にはシャドウに対抗するため、ペルソナを人工的に覚醒させようと、集めた孤児を被験体とした人体実験もあったらしい」
「その被験体になった子たちはどうなったんですか？」

「ほとんど死んでいる。ただ、一部は施設を脱走して生き延びているようだ」
　その脱走して生き延びた一部の被験体が彼であるとは説明するまでもない。ゆかりも美鶴が察した上で言葉を濁して真摯に話してくれていると理解し、黙って相手の話の続きを聞く。
「私がこの件を知ったのは偶然だった。父がそのような非人道的な行為をしていたと信じたくはなかったが、色々と状況証拠が揃って認めざるを得なかった。父に訊いても、当時を知る研究員に訊いても、きっと何も答えてくれはしないだろう。子どもが知る必要はないとな」
　子どもは感情で動く生き物だ。どれだけ賢くても経験不足で間違いを犯す。
　故に、桐条をはじめとした大人たちは、美鶴が余計な不安を抱くことを防ぐためだけではなく、情報が漏れるリスクを避ける意味も込めて全ては伝えるつもりがなかった。
　知る者が増えれば増えるほど情報漏洩のリスクが跳ね上がる事を理解している美鶴は、既に関わっていることもあって大人たちの対応を勝手だと不満に思う部分はある。
　けれど、どれだけ教えてくれと頼んでも口を割らない事も分かっているので、大人たちが話してくれるまで自分から尋ねに行く気はなかった。
　ある意味で大人とも言える美鶴の対応に、ゆかりは一定の理解を示しつつも納得までは出来ないようで、僅かに呆れの色を混じらせながらもう調べないのかと聞いた。
「先輩はそれで調べるのをやめたんですか？」
「まさか。私はこの件に関して非常に強い憤りと失望を覚えている。お父様のことは今も尊敬しているが、知った以上無条件に全てを肯定するほど盲目的ではいられない。何も話してくれないというのなら勝手に調べるまでだ」
　青年が関わってくると話は自分の母にまで及ぶことになる。彼以外にも犠牲になった子どもがいることは分かっているので、美鶴はい

けるところまで調べていくと彼女にしては珍しい悪戯っぽい笑みを浮かべた。
　それを聞いたゆかりは相手も色々と複雑な事情に首を突っ込んでいるのだなと意外そうにし、成果は違うが自分も同じように調べて回っていたことで、相手の行動の根源的な理由は一体なんなのだろうと尋ねた。
「それは……贖罪ですか？　犠牲になった子どもへの」
「桐条の罪として背負う覚悟はある。だが、私がこの件に執着するのは犠牲となった者たちへの贖罪というより、何も知らず過ごしてきて、彼に押しつけてしまっていた後ろめたさによるところが大きい」
　彼同様に犠牲になった子どもたちには申し訳ないが、執着の理由は酷く個人的なものだと美鶴は続ける。
「こんなことを言えば呆れられるだろうが、申し訳なさと同じくらい惜しい気持ちと悔しさがあるんだ。一つ違っていれば姉弟として生きる道もあったはずだからな。私はずっと弟妹が欲しかったから余計にそう思ってしまう」
　それは既に終わってしまった可能性の未来。回収された少年が研究所ではなく英恵の屋敷に運ばれていれば、事故の原因を知っても少年は桐条たちを恨まなかったかもしれない。
　両親を失ったことで出来た心の傷は、英恵が母となり美鶴が姉となることで少しでも癒やせてやれたはずだ。
　血の繋がりなど些細なことで、利口で愛らしかった少年が弟になれば、周囲から弟に甘すぎる姉と言われようと美鶴は彼に愛情を持って接していた自信がある。
　けれど、現実はそうではなく、手を血で汚してまで力を求めた彼は、桐条武治を殺すと断言するまでに憎悪を抱いていた。青年の憎しみの炎を消すことなど彼が懐いていた英恵ですら不可能であり、英恵も誰にも止めることは出来ないと言っていた。
　誰も救われない未来へ進むことが決定している事を思えば、美鶴として何か出来ることはないかと足掻かずにはいられないが、現時点では何も出来ることはなかった。

そうして、美鶴の口から青年の過去についての情報を得たゆかりは、今日呼ばれた理由のことを思い出して、自分が戦えば湊たちを戦いから遠ざけられるのかなと少し考えた。
「……先輩、私はイメージが湧かないんで平和のためとかそんな大きい理由では戦えません。ただ、自分が知らなきゃいけないこと、知りたいことに繋がっている気がするから、自分と大切な人のためになら協力します」
「ああ、それでもいい。君の力を貸してくれ」
協力していれば父のことも調べられるかもしれない。そんな打算を含みつつも、ゆかりは自分の大切な人と友達を守ることに繋がるのであればと美鶴の申し出を受けることにした。
シャドウやペルソナなど、ゲームや漫画としか思えない設定については未だ半信半疑ではある。
ゆかりの表情からそれを理解しながらも、美鶴は協力してもらえれば詳しい話は追々でも大丈夫だろうと、勧誘成功に安堵の息を吐いて新たな仲間の加入を歓迎した。

第百九十二話　帰国と帰国

３月２２日（日）
深夜――湊自宅
既に影時間を終えて日付も変わった午前三時頃、明かりの消えたとある一室で押し殺したようにくぐもった声が時折聞こえていた。
「ん……ぁんっ……」
声の出所を探ればそれは部屋に置かれた大きなベッドの方からしており、激しく揺れるベッドの上には重なり一つになった影があった。
ベッドの揺れが激しさを増すにつれ、くぐもっていた声もはっきり聞こえるようになり、影が大きく揺れたと思えば部屋には一気に静寂が広がる。
静けさが戻ってどれだけの時間が経ったかは分からないが、静かだったベッドに動きがあり、今まで一つに重なっていた影が二つに分かれて、大きな影が小さな影に寄り添いながらベッド脇に置かれた携帯を手に取った。
「……まだ三時か」
「ん……まだやなくて、もう三時やろ。ホンマに、明日はターニャさんの見送りやいうのに」
湊に腕枕されたまま気怠げな様子で話すラビリスは、毛布を肩の辺りまで引っ張り上げると、湊の手から携帯を取って自分でも時間を確認し溜息を吐く。
汗などで汚れた身体を綺麗にするためシャワーを浴びようかなと考えるが、流石に今はまだ疲労感があって動けず、明日起きてからでもいいかなとも思ってしまう。
携帯を返した相手は一切の疲れを見せておらず、本当にどんな体力をしているのだと呆れてしまうが、少女は乱れた髪の毛を整えつつ青年に話しかけた。
「シャロンさんが言うてはったよ。多分、湊君は性依存症やろうって」
「……話したのか」

「流石に頻度が高過ぎるわ。人になってこういう事も出来るんは分かってたけどさ。元々一緒に過ごしてて抵抗感なかったウチも迂闊やったけど、週三とか週四が普通なんかなって疑問くらい持つし」
以前から性知識については一般教養として身につけていたが、人間の身体になってから湊に求められるようになり、ラビリスは戸惑いつつも受け入れて湊に求められるまま肌を重ねていた。
真面目な委員長タイプな彼女にすれば、高校生でこんな事をしてもいいのだろうかという葛藤はあった。加えて二人は付き合っている恋人同士という訳でもない。
それで人間の身体になって一週間ほどで求められれば、本当の目的は身体だったのかと疑って当然である。
しかし、世間の男性を敵に回しそうな話だが、有名であるが故に青年は別に相手に困っていなかった。本人にその気がないので実行に移したことはないが、ファンクラブの女子数人に声をかければ簡単にフィッシュできる程度に供給体制は整っている。
ラビリスもそういった裏事情は理解しているので、ただ身体を目的として求めてきた訳ではないと思えた訳だが、コロマルの散歩やお弁当の準備など、青年と違って朝から忙しいラビリスにとって一日おきや連日求められるのは体力的にも厳しいものがあった。
若さというか思春期の男子はこんなものなのだろうかと、ラビリスが医者であるシャロンにそれとなく聞いてみれば、一回戦だけで終わるのなら連日もあり得るが、三回戦、四回戦と毎回猿のように盛ってくるのなら、それは完全に依存症になっていると指摘した。
「あ、別に湊君を嫌ってるんちゃうよ？　まぁ、人になって八日目にお風呂で触って来られたんはビックリしたけど。素直にウチとこういう事もしたいって言ってくれたから、本当に女の子として見てくれてたんやなって分かって、お風呂も寝るのも一緒やって今更かなぁ……ってＯＫしたんやけど」
流石の湊も羽入が泊まりに来ているときは何もしない。羽入の方が二人よりも早く寝付くので、相手が寝てからなら出来なくもないが、もしそんなことをすればラビリスは本気の拳を湊にお見舞いする

だろう。子どものいるところで何を考えているのかと。
対して、家に自分たちとコロマルしかいないときは、コロマルはバルコニーかリビングで寝ているため、二人きりの寝室や浴室で湊の方から頻繁に誘って情事に耽っていた。
ＥＰ社で開発した対シャドウ兵装シリーズのボディに搭載されたセンサー系はどれも高性能だったが、人間の身体ほどダイレクトに刺激が伝わるわけではない。
まして、生殖機能を持たなかった元ロボットの少女にとって、それらに関係する刺激は全て未知のもの。経験豊富な青年が相手だったこともあり、彼女自身快楽の伴う刺激が癖になってもおかしくなかった。
ただ、いくらなんでもこうも連日求めてくる今の湊は異常だった。
ラビリスは聞いていないので知らないだろうが、湊はラビリス以外にも数名の女子と関係を持っている。恋人ではないので浮気にはならないが、一夜限りと言いつつ湊が帰省したときには求められ致しているチドリ、自分から抱いて欲しいと言ったせいで強く断れず放課後や休日に致している風花、仕事で日本に来たときには暗黙の了解として関係を続けているソフィア。
以上の三名にラビリスを加えた計四名が現在進行形で関係を続けている者であり、ソフィア以外の三人より先に湊と一線を越えたゆかりは、別れて以降はデートやキスもしていなかった。
留学生と教師を除く部活の女子メンバー五人中、四人が同じ男子に純潔を捧げているという事実は驚きだが、それぞれに今の関係がばれれば泥沼の未来しか見えない。
「でもまぁ、自分でも気付いてたんやろ？　意図的に切り替えへんと性欲無いんやしさ」
「……まぁな。診断された事はなかったが、多分元々食事がそうだったんだろうとは思っていた」
一悶着あることは予想しているが、自分が刺されるという最悪の未来までは想像できていない甘い男は、ラビリスから自分の症状に関して自覚はあったのだろうと訊かれ、身体を起こしベッドランプの方へ

と手を伸ばしながら頷いて返す。
何をしているのかとラビリスが見ていれば、相手はベッドランプの傍に置いてあった小さな紙箱を取って、避妊具の残りを確認していた。
まさか、四回もしてまだやるつもりではないだろうなと、呆れ混じりの責める視線を少女は送るが、どうやら既に空だったようで彼は箱をゴミ箱に放り投げて再びベッドに寝転ぶ。
「俺は死を理解しているから生の実感が薄い。もっと言うと己の命への執着がない。けど、頭ではそれを当然と受け入れていても、無意識下では生の実感を得ようとする。死を理解している分、生を理解しようと心がバランスを取ろうとするわけだ」
「あー、じゃあ、ご飯いっぱい食べてたんはエネルギーの源を大量摂取することで、こう、間接的に生の実感を得ようとしてたんや？」
「多分な。純粋にエネルギーを蓄えておくために食べてたのもあるんだが、そういった摂食障害の部分がなかったとは言い切れない」
純粋に健啖家なだけだと思われていた青年だが、強靭な肉体の維持にエネルギーが必要という部分を抜きに考えると、好きだから大量に食べていた訳ではないという事実が浮かび上がってくる。
そも、研究所にいたときの湊は今ほど食べていなかった。英恵に聞けば昔は他の人と同じくらいしか食べていなかったことも確認が取れるだろう。
では、どうして湊が現在のような状態になったのかを考えれば、多大なストレスと死を視るようになった影響で生の実感が薄れたことが挙げられる。
「ほんで次は性依存症も発症したんや？　けど、別に今までは何もなかったんやろ。なんで急になったん？」
「あくまで推測になるんだが岳羽と別れたのが原因だと思う。別れたとき強い喪失感や空虚感を覚えたんだ。それでチドリに会いに行ったときに一晩限りという約束でして、空虚感とかが薄れて大丈夫になって、そういった方法で心の隙間を埋める方法を覚えたんだろうな」

生を実感するために無意識に糧となるものを摂取していた青年は、心に空いた穴を埋めるためにチドリを抱いたことで、性行為によっても同じ効果が得られると学び、これまた無自覚に人の温もりを求めるようになった。

性依存症は幼少期に両親やまわりから十分な愛情を得られずに育った者がなり易い。目の前で両親を失った彼の過去を思えば十二分に予想し得た事態だったが、周囲は彼があまりに普通にしていることでどこか大丈夫だと思っており、実際に発症してラビリスが相談を持ちかけるまで気付くことが出来なかった。

摂食障害と性依存症、どちらも心因性のものであるため治療は難しく、さらに言えば青年の場合どちらも我慢して症状を抑えられてしまう。

根本的な解決が望み薄な以上、余計な負担が増えることになるが本人に我慢してもらうしかないか、と話を聞いていたラビリスは困った表情を浮かべた。

「んー、生の実感を得るためやと治療は難しいな。湊君の場合は肉体の方で生を実感しづらい要素が多過ぎるから、色々なゴタゴタが終わってからゆっくり治していくしかないかなぁ」

「実害は出ていないし、それしかないな。ま、とりあえず現状出来る治療をしてもらおうか」

言うなり青年はどこから取り出したのか未開封の紙箱を出してきて、口元を小さく歪めながら中から新しい避妊具を取ってラビリスの胸の上に置いた。

今日はもう終わりだと思っていた少女は流石に驚き、さっき捨てた空箱はなんだったのだと青年に尋ねる。

「ちょっ、空やったんやないの?!」

「さっきのは空でもマフラーに大量に入れてるからな。自社製品だけあってコンテナ一つ分は余裕である」

「む、無理やって！　今日はもうホンマに無理！　シャワーの時間考えたらコロマルさんの散歩まで二時間しか寝られへんのよ！」

避妊具は一応医療用品でもあるので、ＥＰ社でも作っておりユー

ザーからの評判がいい。湊はそれをコンテナごとマフラーに入れていて、一箱十二個入りの商品を毎日消費しようと数年持つくらいのストックはあった。
　ちゃんと準備しておくのもマナーではあるが、いくらなんでも用意しすぎだとラビリスの顔は自分の身の危険を感じて引き攣り。さらには、現時点でたった二時間しか寝られないのに、まだ睡眠時間を削るというのかと怒りを見せる。
　すると、湊は抵抗しようとする相手の両手を頭の上で拘束し、これまでの情事で汗ばんだ少女の谷間に舌を這わせてから顔を上げると外道の笑みを浮かべた。
「……便利だよな。時流操作って」
　いくらでも時を圧縮できる。故に、これから何回戦しようが十分な睡眠時間も確保してやれる。
　担当医であるシャロンから時流操作と肉体蘇生を使用するなと言われているはずの青年は、過去最低な能力の使用を宣言し、一人の少女がその犠牲となっていった。

午前――国際空港ロビー
　今日でカナダに帰るターニャを見送るため、空港には佐久間も含めた部活メンバーと美鶴がやってきていた。
　ターニャ本人は手続きのために席を外しているが、残ったメンバーは空いている椅子に座って雑談をしながら時間を潰している。
　すると、他の女子たちと喋っていたラビリスがふと大きな欠伸をした。
「ん、ふぁー……」
「フフッ、なんかラビリスちゃんが欠伸って珍しいね」
　ラビリスが欠伸をしている姿を初めて見た風花は、相手に悪いと思いながらもくすくすと笑ってしまう。つい先月までロボットだった少女が欠伸をしなかったのは当然だが、話している途中で欠伸をしてしまった本人は申し訳なさそうに謝って返した。
「ん、喋ってるのにゴメンな」

「ぜんぜん、いいよ。集合時間早かったもんね」
「いや、別にそれは大丈夫やったんやけど、最近夜はあんま寝れてへんくてさ」
どこか疲れた様子で話すラビリス。そんな彼女を傍で見ていたゆかりは、先日までの自分とどこか重なって見えて、もしや彼女まで自分と同じ状況に陥っているのではと心配して声をかけた。
「寝られてないって変な夢を見るとかじゃないよね？」
「ううん、別に変な夢とかやないよ。ただ、どっかの誰かさんが毎日のように人が寝るの邪魔してくるんよ」
ゆかりの質問に答えた少女は言いながら、近くで缶コーヒーを飲んでいた男を責めるような視線で睨んだ。
寝不足は全てこの男が寝る邪魔をしてくるからである。疲れた様子の少女がそう告げたことで、まわりにいたメンバーは何故そんな事をしているんだと微妙な表情になり、メンバーを代表してチドリが彼を諌める。
「……なに子どもみたいなことしてるのよ」
「冤罪だぞ。うちには犬もいるからな」
「コロマルさんはウチらの寝室に入ってこーへんし。てか、子どもみたいな悪戯の方が何倍マシか。あんなん子どもは絶対してけぇへんしな」
寝不足、寝室、子どもは絶対しない。そのワードと被害者と加害者が若い男女であったことで、その場にいたメンバーは一瞬にして正解にたどり着いてしまう。初心な者らは気まずそうに視線を逸らし、以前自分も青年から同じ被害を受けたおかげで耐性がついていた数名は視線だけで詳しく説明しろと告げる。
周囲が喧噪に包まれている中、その空間だけが妙な緊張感に包まれ。渦中にいる青年は状況を把握できていないのか、どうして女性陣が自分を見てくるのか不思議そうにしているが、とりあえず自分に不利な状況にあることは空気で察したらしい。
とはいえ、以前自分たちはただの家族で男女の関係ではないと言っていた者が、半年も経たずにかなり爛れた男女の関係になっていた以

上、そうなった経緯を話すまで逃がすわけもなく、彼が席を立つ前に捕まえておこうと腰を上げかけたとき、ある意味最高のタイミングでターニャが戻ってきた。
「イズヴィニーチェ、カウンターが混んでいて遅れました」
「……大変だったな。ここに座って休むといい」
戻ってきたターニャを労い席を譲り、ゴミを捨ててからトイレに行ってくると湊がその場を離れるまで僅か五秒。あまりの速さに女性陣は目を丸くしながら、けれど、彼の行動は最低に格好悪いとすぐに呆れ顔になった。
「逃げた」
「逃げたわね」
「逃げちゃったね」
ゆかり、チドリ、佐久間が同じタイミングで言ったことで、風花や美紀までも困り顔で乾いた笑いを漏らすしかなかった。
まぁ、普通に考えて同じ部活内のメンバーと別れてすぐに、以前から同棲していたとはいえ他の子とまで肉体関係を持ったと聞けばよくは見られない。
また、以前付き合っていたゆかりだけでなく、今回の件でラビリスも湊と一線を越えていたことがメンバー全員に知れ渡ったが、ここには当人たちしか知らない関係を持っている者がまだいた。
チドリに関しては湊がラビリスに話してしまったので正確には当人以外にも知る者はいたが、湊を巡りかなり危ういバランスで成り立っているメンバーの間に、今回の件で僅かな亀裂が生じたのは全員が感じ取っていた。
「どうかしましたデスか？」
「いや、何でもない」
そして、来たばかりで状況を把握していないターニャも不穏な空気を感じて尋ねたのだが、これから帰国する彼女に心配はかけられないと第三者の立場にいる美鶴が気にしないように言う。
不思議そうにしている彼女には申し訳ないが、美鶴としても色々と複雑で他の者に話したくないのだ。

もし、この件を母である英恵に伝えれば、英恵はそんな不誠実なことはいけないと説教するためだけに学校までやってくるだろう。そこからさらに他にも関係を持っている者がいると明らかになれば、少しミステリアスな好青年のイメージで売れていた皇子の大スキャンダルとして取り上げられる。

これまでの人気を考えれば流行語に絶倫皇子やら浮気皇子、または多股皇子など不名誉な呼び名が選ばれる可能性もあった。

彼に色々と負い目のある美鶴としては彼には平穏に暮らして欲しい。学園の風紀を取り締まる側としては見過ごせない事態だが、幸いなことに湊は現在フリーであり現在進行形で関係を持っていると断言できるのは同棲中のラビリスだけだ。関係を持っている相手は他にもいると思われるが、それを証明する証拠はどこにもない。疑わしきは罰せずというやつで美鶴は複雑ながらも今回の件は目を瞑ることにした。

すると、誰も何があったのか話してくれないことで諦めたらしいターニャが、出発までまだ時間があるからと他の者たちと最後の時間を過ごすため口を開いた。

「ンー、こうしていざ帰るとなると寂しいデスね。皆さんと過ごす時間はとても楽しかったデス」

「またいつでも遊びに来るといい。将来、日本で就職する事も出来るしな」

「ダー、そういった選択肢も考えておきますね。日本の建築様式に非常に興味をもったので、大学ではそういった道に進むのも楽しそうデス」

笑顔で話すターニャは、皆と一緒にいった旅行や、留学生向けのイベントで様々な日本の伝統建築を見ることが出来た。それは今までアニメや漫画などサブカルチャーで日本に憧れを抱いていた少女にとって、とても大きな刺激となったらしく、カナダに帰ってから建築系の大学を探すのもいいかもしれないと思うほどであった。

そんな相手と話す美鶴は同じ新三年生として、自分の興味のあることで進学先を選ぼうとする姿が眩しく見える。

美鶴は将来家を継ぐために進学先もある程度決まっており、第一志望は帝都大学、第二志望は古都大学と日本の二大トップになっている。彼女の学力ならば十分にA判定を貰えるレベルであり、あとは学部をどれにするかいう選択肢が残っているくらいだ。

少女の母からその話を聞いている某青年は、美鶴の場合、国内に残らず留学した方が得る物も多いだろうにと視野の狭さを呆れられているのだが、自分で自分の可能性を狭めている美鶴に別れの迫ったターニャが笑顔で声をかけた。

「ミツル、ミナトと仲良くデスよ。ターニャは何もしりませんが、ミツルは自分の本当の気持ちを話しません。それではミナトも心を開いてくれませんデス」

言われた美鶴はハッとした表情をする。彼女は部活メンバーよりもそれぞれの関係性が薄い。それ故、外から見ていて湊と美鶴の不仲の原因になんとなく気付いていたようだ。

美鶴本人は自分が桐条家の人間だから無視されていると思っているのだろうが、それを言えば英恵も同じ立場なので、英恵の使用人たちとも会話をしていた以上、桐条家や桐条側の人間だから話さないというのは間違っている。

一度一つの考えに嵌まると他の選択肢を想定しない美鶴にとって、今回のターニャの言葉は大きなヒントになったはず。ここから気付いていけるかは本人次第だが、帰る前にアドバイスをしておかなければならない者は他にもいるので、ターニャは他の者たちの方へ向き直ると再び笑顔で口を開いた。

「他の皆さんは、ウダーチ、色々と頑張ってください。何のことかは皆さんが一番分かると思うデスから言いませんね」

他の者たちは同じ事に悩んでいる。だからこそ、誰にも肩入れせずにただ頑張れと伝える。

想いの強さや自覚度は違っているが、大なり小なり全員が無自覚にでも彼に惹かれているのは近くにいれば気づけた。

無自覚な憧れに、本当に子どものように純粋な淡い恋心、全てを捧げたいと思えるほどの愛まで、一人一人違ってはいても結局は〝好き

〝という想いの表れであり端から見ていると微笑ましくなってしまう。
きっと最初はこうではなかったのだろうが、長い付き合いの中で間近で見続けて惹かれていったに違いない。
言われた者たちの中には大人も一人混じっているが、全員が気恥ずかしそうにしているので、これは本当に大変だと心の中で苦笑しながら、ターニャは戻ってきた青年にも言葉を残す。
「ミナト、バリショーエ　スパシーバ。今まで本当にありがとうございました。いっぱい、いっぱいお世話になったデス。ただ、一つだけ。魅力的な人が沢山いても、女の子はキチンと一人を選んだ方がいいデス。レベッカも心配してるデスからね」
たった一年の付き合いだが、最も深く交流を持った者たちをターニャはしっかりと見ていた。そして、その中の数名が年を明けてから顔つきが大人びてきたことで、彼女たちの視線の先にいた青年と何かあったことは容易に推測できた。
かなり鋭い観察眼を持っていたターニャの言葉に、青年ははじめ何のことだと白を切るも、流石に海外で世話になった蠍の心臓の構成員の名前を出されると微妙な表情になる。
伯母であるナタリアを知っているのだから、彼女の仕事についても知っていて、さらに歳の近い構成員と交流があっても不思議ではない。だが、そもそも湊が留学から帰って一年で、ナタリアの姪っ子が丁度日本に留学したがっていたという話の方が出来すぎていたのだ。
ターニャの個人情報に嘘はない。名前や年齢、どこの高校に通っていたなど、そういった物は全て本物だ。しかし、彼女や彼女の家族が蠍の心臓と無関係かというとそうではない。どの国にも諜報部があり工作員がいるように、民間軍事会社でも情報収集や現地で手引きをする役としての構成員が存在する。
つまり、ターニャは自分の趣味も半分入っていたが、湊のことを心配して帰国後の経過観察役としてナタリアに派遣されたエージェントだったという訳だ。
ナタリアという知り合いの親族であったことに加え、戦闘訓練をほ

とんど受けていない素人の動きだったことで湊は相手の素性を探っていなかったが、帰国直前にネタばらしされたことで本当に嫌そうな顔をみせた。
「フフッ、演技は得意デスからね。でも、一緒に楽しんでいたのは本当デスよ」
「……さっさと帰れ」
「ダー。では、皆さん。ダ　スヴィダーニァ、また会いましょう！」
シーズンが違うので夏までなら留学の延長は出来たが、一年間彼らを見てきたことで青年が人に恵まれている事がはっきりと分かった。ならば、これ以上の観察は必要ない。
出会った者たちとの別れは惜しいが、晴れ晴れとした気分でこの地を後に出来るターニャは、最高の笑顔で別れを告げると時間だからと立ち上がり、鞄を手にして手を振りながらゲートの向こうへ去って行った。
ゲートの向こうに消えていった少女の姿を目で追っていた者たちは、彼女の素性に気付いた青年を除き、親しくなった者との別れで少ししんみりとした空気になる。
だが、いつまでもここに残っている訳にはいかないので、年長者として先に切り替えた佐久間が全員に声をかけた。
「行っちゃったね。じゃ、私たちも帰ろうか。先生、帰りにお昼ご飯食べたいなぁ。有里君も一緒にいこうよ！」
「……別に構わないが」
「やったぁ！　じゃあ、ご飯食べるときに汐見さんとの事とかレベッカさん？　とかの話も聞かせてね」
見惚れるような笑みの裏に渦巻く黒い炎。安易に昼食の誘いを受けたばかりに青年の逃げ道は消えた。

夜――巌戸台・某所
「お帰り、二人とも。海外での生活はどうだった？」
巌戸台の外れに密かに作られた研究施設。そこで新たに取れたシャドウのデータをまとめていた幾月は顔を上げて振り返ると、扉を

開けて入ってきた一組の男女を笑顔で迎えた。
「とても楽しかったです。目的通り基礎から鍛え直して色々と覚えることも出来ましたし」
「私も理と一緒に色々と覚えてきちゃったから、多分、桐条さんたちと戦っても私一人で相手出来ると思うわ」
やってきた男女は覚醒前の湊と瓜二つな姿をした少年・結城理と幾月の娘である玖美奈の二人。月光館学園に通っている玖美奈は留学として二年間海外に行っていた訳だが、本来の目的は研究所にいて体術を鍛えられない理の修行だった。
湊が主にユーラシア大陸に居たため、二人は北米と南米を色々と渡っていたが、その中で玖美奈自身も鍛えていたらしく、ペルソナ能力の差だけでなく対人戦闘においても自分の方が強いだろうと自信ありげに話す。
けれど、美鶴たち特別課外活動部の顧問になっている男は、まだ何も始まっていない状態でメンバーを潰されては困ると苦笑した。
「それはしばらく待ってくれるかな。デス・アバターがまだ出来ていなくてね。色々と複合シャドウは作ってみて改造したりもしていたんだが、しばらくは彼女たちやエヴィデンスに復活するアルカナシャドウの相手をしてもらう必要があるから」
アルカナシャドウの目覚めが近いことは幾月も気付いている。無気力症の急な増加、ゆかりのようにペルソナ使い候補の適性上昇など、人とシャドウの双方にこれまで見られなかった変化が起き始めている。
いずれ復活することは分かっていたのだから、複合シャドウの一部が意味深な言葉を発していたこともあり、最近の変化はその予兆であると見るのが自然だった。
ただ、デス・アバターが生まれるまでアルカナシャドウの相手を任せるのはいいが、根本的な問題である桐条側の戦力が揃っているのかが気になり、持っていた荷物を下ろして近くのソファーに腰掛けた理が幾月に尋ねた。
「戦力的に揃ってるんですか？　メールでは一人抜けたって話でした

けど」
「ああ、暴走事故を起こして荒垣君が離脱していてね。その代わり、岳羽詠一朗の娘である岳羽ゆかり君が先日加入したよ。また、四月になるが転入生で高い適性を持った子が来ることになっている。転入前の健康診断で発覚したから詳細は伝えてないけどね」
一人抜けたが既に候補者は二人居る。それを聞いてなるほどと納得した理は、玖美奈が持ってきてくれたインスタントコーヒーを受け取りながら、最も気になっていたことを口にした。
「それで有里湊の方はどうなってます？」
「適性も変動なしで動きはあまり見られないね。たまにタルタロスでシャドウを狩っているくらいだよ。だがまぁ、やはり強いよ。適性じゃ結城君の方が上だが、最高瞬間出力じゃ群を抜いてる。死神クラスのシャドウも高火力スキルで一撃さ」
湊の適性値は留学から帰ってきて以降変化はない。より正確に計れるよう開発した測定器を使ってその結果なのだから、桐条側だけでなく幾月も湊の限界が現在の数値だと認識していた。
ただし、いくら保有するエネルギー量で理の方が勝っていようと、スキルの威力で言えば湊の方が優れていた。
継戦能力と高火力はそれぞれ利点が異なり、状況によってどちらが優れているかも変わってくるが、湊は理より適性値が低いだけで保有するエネルギーが少ない訳ではない。そうなると戦況をひっくり返す一撃を放てる湊の方が有利に思われたが、少年の隣でコーヒーを飲んでいた少女が父に言葉を返した。
「お父さん、私たちも海外に行ってただ身体を鍛えていた訳ではないのよ。感知される恐れもない海外なら、影時間には好きにペルソナの訓練が出来たんだもの。理が出力で負けていたのはここでは力を出せなかったから。お父さんに聞いたレベルの威力なら私も出せるわ」
理が負けていたのは場所の関係で全力を出せなかったから。出せなかったのはあくまで全力であって、高火力を出せなかった訳ではない。
加えて、玖美奈も桐条側に感知されぬよう普段は能力を封じる腕輪

を付けて生活していたので、封じる必要のなかった海外では日本にいたときよりも強い力を発揮できた。
飛び抜けた戦力が本人しかいない湊側の陣営に対し、幾月側には並ぶ戦力が二人も揃っていて、相手には守らなければいけない対象がいる以上、圧倒的に不利なのは湊の方であった。
「ほう、かわいい子には旅をさせよっていうのは本当だね。しばらくは様子を見るが、必要がないと分かれば諸々の処分は君たちに任せよう」
娘からもたらされた朗報に幾月も喜びを見せる。
現在、幾月が確認している影時間における勢力は大きく分けて四つ。一つ目は美鶴の所属する特別課外活動部、二つ目が湊の勢力、三つ目が被験体の生き残りと見られる者たち、そして最後が自分たちとなっている。
幾月が最も警戒しているのは当然湊の勢力だ。彼の元にいるペルソナ使いは被験体だったチドリと対シャドウ兵器のラビリスの二人を確認しており。特別課外活動部のメンバーとも接触していたが、仲間という訳ではないので、湊の経歴を知る桐条と幾月が反対している限りその勢力二つが手を組むことはない。
三つ目の勢力である被験体の生き残りは、タカヤたちストレガのことであるが、幾月にすれば彼らは放っておいても死ぬ存在でしかない。能力は全員が高水準に達しているものの、制御剤を服用している限り短命は避けられない。
チームとしては最多人数で全員が戦闘慣れしているため、もし特別課外活動部と遭遇すれば、練度と人数の両方で劣る美鶴たちが負けるだろう。
しかし、ストレガが進んで桐条側と接触してくることはないと思われるので、やはり警戒すべきは湊しかおらず、幾月は玖美奈たちの成長は嬉しい誤算だと口元を歪めた。
「あと少しだ。正しい世界のためにもうひと頑張りと行こうじゃないか」
戦いのときは迫っている。あと少し、もう少しだけ頑張れば望む世

界が訪れる。
　そのために十数年を費やしてきた男は、娘と少年と共に勝利を誓い合った。

第七章　―Ｓｔａｒｔｓ―
第百九十三話　来訪者

４月６日（月）
夜――巌戸台
ガタンゴトンと揺れる電車の中、明るい茶髪を後ろで纏めた少女が一人窓の外を眺めていた。
星形レンズの趣味の悪いサングラスをかけ、大きなボストンバッグを昔の不良のように肩越しに持っている姿は異様の一言。
イヤホンを付けて音楽を聴いているので周囲の音は耳に入っていないだろうが、見るからに変わっている少女を軽く指さしてヒソヒソと話す者たちもいる。
しかし、本人はそんなことを気にせず、流れていく景色を眺め一人考え事をしていた。
（巌戸台よ、私は帰ってきた！　……まぁ、住んでたことないけど）
一人でくだらない事を考えている少女の名前は九頭龍七歌。本年度から従弟の青年が通っている月光館学園高等部に転入してきた者だ。
今も彼女は学生寮を目的地として移動をしているのだが、色々とトラブルが重なりこんな時間になってしまった訳である。
当初は愛車のドラッグスター４００で華麗に登場しようと思っていた。けれど、バイクは後で送るから今日は電車で行けと両親に言われ、渋々電車に乗った結果が大幅な遅れであった。
（八雲君いないかなぁ。巌戸台駅周辺は出没スポットらしいけど）
けれど、少女はそのことをあまり深く考えず、高速で流れる景色に従弟の姿はないかなとのんびり寛いでいる。
深夜に近く外は暗い上に、サングラスをかけていてまともに見えるはずもないが、それでもサングラスを外さないのは彼女なりのこだわりなのだろう。全く無駄でしかないが。
《巌戸台、巌戸台です。この電車、辰巳ポートアイランド行き、本日

の最終電車となっております。お乗り忘れの無いようご注意ください》

電車が駅に着いた事で少女も人の流れに乗って降りてゆく。もうすぐ日を跨ごうという時間にもかかわらず人は多く、それだけ電車の遅れの影響があったことが窺えた。

ホームを歩いて改札に向かい、切符を通して外に出ると、少女にとって見慣れぬ景色が広がっていた。しかし、すぐに見慣れたものになるのだろうと思っていたとき、時計の針が頂点を指し、世界が緑色で塗り潰された。

「……へぇ、他所は変な塔まであるんだ」

世界が一変し街から人の気配が消えようと、七歌は気にした様子もなく知らない街を観察していた。

人工島である辰巳ポートアイランドの方を見れば巨大な塔らしき建造物が建っていて、遠過ぎてしっかりとは見えないが、頂上は雲に達しているのではないかとサングラスを額に掛けて肉眼で見る。

彼女は毎夜零時に訪れるこの時間を以前から知っていたが、先日まで暮らしていた街でも旅行先でも、あんな異界産と思えるような塔は出現していなかった。

十年前の事故、桐条グループがこだわり続ける土地、公的には鬼籍に入った従弟が残り続けていることからきな臭い場所だとは思っていたが、異形の塔の出現によりやはり霊地とも呼べる特殊な場所なのだろうと少女は確信を持つ。

もっとも、何かあったとき用に実家からお守りは持ってきているが、鬼と違って龍は超人的な力は持っていない。せいぜいが守護龍憑きとして始祖の力の一部が宿っているくらいだった。

(この土地にくれば八雲君たちの事故についても分かるかなって思ったけど正解っぽいね。本人に訊ければ一番確実だけど、今は八雲君じゃなくて有里君らしいし、そもそも盟約から解かれた鬼だからなぁ。下手をすると九頭龍は皆殺しなんだよね)

鬼の始祖が龍の一族を守り傷つけられないよう子孫に呪を施したことで、自分たちが鬼の主であると勘違いした龍は鬼たちを奴隷のよ

うに使役してきた。
心優しい鬼たちは盟約に従って弱い龍を守り続けたが、その中で全く黒い感情を抱かなかった訳ではない。呪が施されていなければ皆殺しにしてやろうと思った者もいたほどだ。
しかし、それぞれの始祖が二つに分かれた神の力が再び一つになるよう願いを籠め、鬼が神の力に耐えうる肉体を手に入れたことで、二千年の時を越えようやく二つの一族の正統血統の間に子が生まれた。
二つに分かれていた古き神の力を統合し、願いの成就のために施されていた呪を破った鬼の子は、鬼たちが鍛え究め続けた力と技を自由に振るうことが出来る。そう、一族を虐げ続けていた龍に恨みを晴らすことが出来るのだ。
固有の力を持つ一級四爪である七歌はまだいいが、二級三爪である七歌の父と祖父は霊視と操気しか始祖の力を扱えない。より強い力を継いでいる七歌の方が二人より強いので、その七歌以上の龍の力に覚醒した八雲が相手では、仮に彼が鬼の力を一切使わなかったとしても勝ち目はなかった。
父親らと違って龍としての驕りを見せず、昔から鬼と仲良くしたいと思っていた七歌としては、先祖が撒いた種だろうが鬼が復讐を誓うのはしょうがないと思っている。けれど、人の気配が消えポツポツと棺桶のオブジェが立ち並ぶ街の中、やはり好きな人たちに恨まれ憎しみのままに殺されるのは悲しいなと思って歩いていれば、七歌は妙な胸騒ぎを感じて立ち止まった。
（……なんだろう。たまにいる迷い込んだ人の気配じゃない）
七歌がいるのは駅から商店街の方へ真っ直ぐ伸びる大通り。妙な胸騒ぎの正体は、少し行った先の細い路地へ曲がったところの方から感じる気配のようだが、今は周囲に人もおらず何かあったときに助けを求めることが出来ない。
ここは危険を冒すべきではないとシャツの中にしまっているペンダントを握りしめ、七歌は息を殺し出来る限り自分の気配を消して慎重に進んで行く。
通常、危険を冒すべきではないというのなら、その場に残るか隠れ

ることを選ぶだろうが、いまは日常ではなく非日常の時間だ。先手必勝という訳ではないが、相手が移動して先に見つかるよりも、隠密行動で自分が先に相手の姿を確認した方が有利にことを運び易い。
七歌が目指している巌戸台分寮という建物も道を進んだ先にあるのだから、ここで彼女が先に動くことにもそれなりの意味があった。
そして、曲がり角にある雑居ビルまで進んだ七歌は、建物の影からそぉっと顔を出して気配の正体を目にした。
（何あれ？　手首に頭が乗っかったお化け？）
そこにいたのは身体が人間の手の形をした不思議な生物だった。いや、正確に言えば生物と呼んでいいのか分からないが、手首に当たる部分から頭が生えているソレは何をするでもなくゆっくり道路を歩いていた。
大きさは七歌の腰に届くかどうかで大きいとは言えない。けれど、その昔、祓魔師や陰陽師と呼ばれる職についていた一族でもあった龍の子孫として、七歌は悪霊の力は大きさでは判断できない事を知っていた。
故に、少女は相手が変な動きをした瞬間に逃げようと決め、一時的にその場に待機することを選んだ。
幸いなことに相手はただ歩いているだけで、何かを探している様子もなければ、出会った瞬間に危害を加えてきそうな気配もない。この時間が終われば一緒に消えてしまうだろうと思って観察を続けていれば、次の瞬間、相手に動きがあった。
（っ!?　お、踊ってる。ラインダンスみたいに足を上げて一人で踊ってるっ）
何を思ったのか分からないが、七歌の視線の先にいたお化けは急にラインダンスのような動きで踊り始めた。音楽などなくたった一体しかいないというのに、急に動いたと思えばどうしてラインダンスなのかが分からない。
七歌は相手をお化けと呼んだが見た目がふざけているので、その動きも相まって相手の周囲だけ非常にコミカルな空間となっている。
見つかれば危険なのは分かっているため、最初はどうにか必死に耐

えていた七歌も、相手がその場でジャンプして踵を当てるように両足と思われる指をぶつけて着地したところで、その動きは卑怯だろとついに耐えきれなくなった。
「くくっ、んふふ、あはははっ！」
これではバレてしまうと思いながらも笑いが止まらない。なぜ妙に慣れた動きなのか、振り付けを自分で考えているのか、そんな疑問も浮かんできて七歌は鞄を持っていない方の手で腹を押さえて笑う。
すると、案の定相手は七歌の存在に気付いたようで、振り返ると胴体である手で指ぱっちんの動きをして見せた。最初、その動きになんの意味があるのか分からなかった。
意味を分かったのはそう考えた直後、相手の頭上に火球が現われ、嫌な予感がした瞬間に七歌は鞄をビルの影に投げ込み、自分は荷物が巻き込まれぬよう反対側に跳びながら迫る火球を回避した。
受け身を取ってすぐに立ち上がった七歌の頬を、火球が通ったことで熱せられた空気が風となり撫でてくる。外れた火球は道路に当たって弾けて消えたが、一歩間違えれば自分が大火傷を負っていたかと思うと怒りが湧いた。
一気に頭に血が昇った少女は相手を敵だと認識し、近くに落ちていた石を拾うと、しっかりと両の足で地面を踏み締めスローイングモーションに移った。
「テメェ、ぶっ飛ばすぞ！　なに他人様に火ぃ飛ばしてんだ！」
無意味に足を高く上げ、踏み出した足に体重移動しながら全身の力を指先に込める。ギリギリまで石を放さず、力を完璧に乗せきって放たれた石は剛速球となって敵の額を捉えた。
仮面になっている額に石が当たった敵は、その予想外の威力に踏ん張りきれず後ろに倒れ。かなり痛かったのか倒れたまま手足をバタバタしながらもがいている。その様子を見ていた少女は心の中でざまぁみろと笑いながらファイティングポーズを取った。
「やんのかコラ！」
お化けか何か知らないが敵だというならぶちのめす。一発で死ねそうな火球を飛ばしてきたのは相手だ。お返しに石を投げても誰も

反対しないだろう。
　そう思って相手が立ち上がる前に次の石を拾って準備していれば、駅の方から地面を蹴る足音が聞こえ、足音の主が慌てた様子で声を掛けてきた。
「馬鹿かテメェは！　シャドウ相手に喧嘩売るやつがあるか！」
「お？　誰だテメェ？　私が可愛いからって舐めてんじゃねぇぞ！」
「うるせぇ！　襲ってきてる敵がいるのにふざけてる場合か！」
　現われたのはニット帽にコート姿という季節感に欠けた一人の男。敵の次はナンパ野郎かと思って七歌の対応も敵意を含んだものになるが、相手の男にそんなつもりはないようで、七歌に逃げるように勧めてくる。
「危ねえからここから離れろ」
「よし、戦うぞー！　ニット帽、あんたは武器になるもの取ってこい！」
　この少女は人の話を聞かなかった。いや、言葉は理解しているのだ。ただ言うことを聞く気が無いだけで。
　そんな少女の反応から、一瞬相手がなにを言っているのか分からなかった男は、数秒ポカンとした後、状況が分かっていないのかと思って、出来るだけ平時の調子に合わせて改めて話しかけた。
「は？　いや、なんで逃げねえんだよ」
「喧嘩売られておきながら、背中を見せて逃げるなんて出来ないでしょ」
　少女は状況を理解できていない訳ではない。単に異常な自尊心の高さから売られた喧嘩を買おうとしていただけだった。
　男としてはそんな馬鹿は知り合いだけで十分だったが、ここで偶然見つけてしまった以上は放っておけない。そう思って動きそうにない相手の腕を取って走りだそうとすると、
「アホか！　いいからこっちこい！」
「触んな変態！」
「あぐぅっ!?」
　少女は男の手を振りほどき、いい加減にしろよと男が振り返ったタ

イミングで思い切り股間を蹴り上げてきた。
蹴られた男は思わず絶叫しかけるも、腹の底から迫り上がってくる痛みのせいで声が出せず、その場に倒れ込むように膝をついて前屈みに蹲る。
「あ、がっ、テメェ……そこ蹴るのは、無しだろうがっ……」
すぐ近くに敵がいる状態で男の魂を蹴るとは非常識にもほどがある。これでは少女を連れて逃げるどころか、まともに立って走ることも出来ない。
目に涙を滲ませ、しかし、ここはまだ戦場だからと男が敵の様子を見ていれば、蹲る男を冷めた瞳で見ていた少女がポツリと呟いた。
「ふぅ……しょうがない。ここは奥の手だ！」
言うなり七歌は男を追いて走り去っていった。
まさか自分を囮にして逃げたのか。もしここを無事に生き延びれば、次に会ったときは女でも殴ってやると男が必死に立ち上がろうとしていれば、逃げたはずの少女が何やら棒状の物を持って帰ってくるなり男にそれを渡してきた。
「ニット帽、これで時間稼いどいて」
「ふざ、けんな……股間蹴られてすぐ動けるかっ」
「無理なら死ぬだけだよ」
彼女が持ってきたのはなんとバス停の標識だった。根元の方が歪になっていて、その様子から察するにコンクリートの台座から引っこ抜いたのではなく、どこか道路に立てられていた物をへし折ってきたことになる。
この周辺で老朽化の進んだバス停など無かったため、彼女は強引にへし折って持ってきたようだが、平均的な女子と変わらぬ体型の相手がどうやって金属の棒を折れたのか気になるが、男は苦々しい表情でなんとか立ち上がるとバス停を受け取って言葉を吐いた。
「テメェ、おぼえてろよ」
男の視線の先では敵も起き上がって体勢を整えていた。先ほど七歌が攻撃を当てたことで、敵もすぐに接近して本格的に危害を加えてくるだろう。

それなら少女の近くにいるのは不味いはずなので、男はどこか頼りない足取りで駆けだし敵の注意を引きつけ始める。
敵が火球を飛ばせば避けながらバス停で叩き落とし、負傷しているというのに周囲への被害も減らそうとする立ち回りはどこか慣れた様子だ。
観察しながらそんな事を考えていた七歌は、相手が時間稼ぎをしてくれている間に自分も役目を果たさなければと集中を高め出す。
「来やれ――――来やれ――――来やれ」
足を肩幅に開き、目を閉じて合掌しながら詠唱する。
祓魔師としての血のおかげか、七歌にはああいった化け物を祓うための力が宿っていた。
この力に気付いたのは八雲たち一家の事故が起きて少し経ってから。そう、今まさに体験している非日常の存在をはっきりと認識した後だ。
「我が身を守り給え、我が望み叶え給え、我に仇なす者を滅し給え！」
額から汗を流し、全身の力が吸われていくような虚脱感を覚える。けれど、この力を発動させるにはまだ気を抜くわけにはいかない。
これまでの成功率は一割以下、詠唱はそれを少しでも高めようとイメージを固定化するために用意したものだ。
七歌がこうしている間も男が化け物を相手に頑張っている。どこの変態か分からないが、相手が役目を果たしている以上、自分もそれに応えるのが筋というものだった。
「お願い！　エウリュディケ！」
彼女の呼びかけに呼応するようにガラスの割れるような音が響き、渦巻く水色の欠片と共に何かが現われる。
ウェーブがかった背中に届く長い髪、色とりどりの花で作られた冠、丈の長い白いキトンを身に着けた美しい女性の姿をした超常の存在。少女の頭上に現われたそれは敵に向けるよう手をかざすと、掌に力を集め烈風を巻き起こした。
男に気を取られていた化け物は超常の存在の攻撃をまともに喰らい。地面を転がりながら黒い靄になって消滅する。

脅威が去ったことを確認したことで、七歌は呼び出したエウリュディケに礼を言って彼女を消した。
バス停を持って戦っていた男は目の前で起きたことに驚いている様子だが、祓魔師の業など一般人が知るはずもないよねと七歌が考えていたとき、戻ってきた男が口を開き話しかけてきた。
「お前、ペルソナ使いだったのか……」
「ペルソナってなに？　今のは私の守護霊だけど？」
ペルソナとは仮面の事。心理学用語で言えば外界と向き合うための自分、といった物だったはずだと七歌は認識している。
男はエウリュディケをそう呼んだが、勝手に人の守護霊に名前を付けるなと切って捨て、七歌はビルの影に待避させておいた鞄を回収して大きく背伸びをした。
「はぁ……やっぱ守護霊を呼び出すと疲れるなぁ。あ、ねぇねぇ。巌戸台分寮って知ってる？　ここらへんにあるらしいんだけど」
「あ？　まぁ、知ってるが」
七歌も一応は地図で寮の場所は知っている。けれど、道案内がいればより確実だ。
ここで出会ったのも何かの縁。知っているのなら道案内しておくれと少女は男に笑顔で頼む。
「やぁ、それは良かった。じゃあ、案内よろしく！」
「なんで俺が案内しなきゃなんねえんだ」
「なんでって、今まさに助けてあげたじゃん」
道案内する理由も義理もない。そう言いたげな男に、七歌は誰が化け物を倒したか思い出してみろと真顔で返す。
男としては自分も時間稼ぎを手伝ったという気持ちだろうが、この人物の相手をする方が疲れると諦めたのか、深く溜息を吐きながらも早く解放されるためにしょうがなく道案内を引き受けることにした。
――巌戸台分寮
男と寮の前で別れた七歌が建物の中に入ると、中は明かりも点いておらず暗かった。
しかし、それは電子機器が使えないこの時間が原因であり、既に消

灯時間になってしまっている訳ではない。
とはいえ、せっかく来たのに誰もいないのは寂しいなと思っていたところ、入り口のすぐ傍にホテルの受付のようなカウンターがあり、そこで暇そうに頬杖を突いていた少年が話しかけてきた。
《やぁ、こんばんは》
「おっすおっす、こんばんは」
この非日常の時間に人がいるとは珍しい。本日二人目の遭遇者を見ながら七歌はそんな事を考える。
もしかすると、この地には同じように非日常の時間に適応している者が大勢居るのかもしれない。不思議な塔があったことも含めて色々と裏がありそうだと思っていれば、少年は七歌に楽しげな笑顔を向けてきた。
《随分と遅かったね。少し待ちくたびれてしまったよ》
「うむ、文句は鉄道会社に言ってくれたまへ」
《ははっ、それは確かに。さて、早速だけどこれにサインしてくれるかな》
少年が指を鳴らすと一つの冊子が現われる。すごい手品だと思っている間に少年は表紙を開き、中に書かれている言葉を見せてきた。
――――〝我、進みし道の先にある、いかなる結末も受け止めん〟
書かれていたのはその一文だけ。他に何も書かれておらず、言葉の意味もはっきりとは分かりづらいため、読んだ七歌は思わず首を傾げる。
「んー？　悲しい現実を受け入れろ的な？」
《別に悲しい現実に限った話ではないけど、この先、もし嫌なことがあっても自分が選んで進んできた道の先にあるものから目を背けないでって約束だよ》
狭い範囲で考えれば、自分で入寮を決断したのだから隣人トラブルがあってもしばらくは我慢しろということになる。学生寮というのは部屋の調整がなかなか難しく、仮に何かあっても移動まで時間がかかるのだ。
とはいえ、本来はもっと深い意味が籠められているのだが、七歌は

それほど深くは考えなかったようで、自分の選択ならちゃんと受け止めるのは当然だと返した。
「嫌な事があれば反省も後悔もすると思うけど、まぁ、自分の選択した結果ならしょうがないよね」
漢字表記でいいのかという疑問もあったが、何も言われないと言うことは書き手の自由に違いない。
受け取ったペンを使い、七歌はサラサラと自分の名前をフルネームで書き込み。しっかりと書き終えると冊子を開いた状態のまま相手に返した。
《うん。それじゃあ改めて、〝九頭龍七歌〟さん。ようこそ、この街へ》
見届けた少年は返された冊子を満足気に手に取ると、そのまま歓迎の言葉を残して闇に溶けるようにその場から消えていった。
「おぉ……消えた」
恐怖はないが不思議ではある。彼もこの時間のみに存在する化生の類いなのか、それとも幼いながらも希有な才能によって人体消失マジックを習得しているのか、七歌は色々と興味が絶えなかった。
けれど、これで入寮の手続きは完了したはず。そう思って奥に向かおうとしたとき、七歌が向かおうとしていた奥から人の気配を感じ、相手も七歌に気付いたようで声を上げてきた。
「……誰っ」
「こんばんは、本年度から引っ越してきた者です！」
「ひ、引っ越し？」
声から震えを感じて七歌は先手を打ってすぐに自分の素性を話す。
この時間に人がいることは珍しい。それはこの特異な地でも例外ではなく、基本的には人は棺桶のオブジェになっているのだ。
階段を降りてきた少女もそれを知っているからこそ、何者かの気配を感じて来るまでに会った化け物の同類と疑ったのかもしれない。
それならすぐに自分が人間であると伝えればいらぬ警戒を避けられる。そう思っている間に非日常の時間が終わり、寮のロビーに明かりが灯った。

そして、ピンクのカーディガンを着た少女の後ろにある階段からまた人が降りてきて、相手が知っている顔だったことで七歌が手を挙げれば相手も笑顔で彼女を迎えてくれる。
「七歌か。随分と遅かったから心配していたんだぞ」
「やぁやぁ、美鶴さんお久しぶりです。実は電車がトラブって遅れたんですよ。あ、これつまらないものですがお土産です」
言いながら彼女が渡したのは先ほどの男が返してきたバス停。全力の跳び蹴りを数発ぶち込み、根元から曲げて折ったので溶接でもしなければ直せず、折った人間が責任を持って処理しろと返されてしまったのだ。
予想外の大きさのお土産に受け取った美鶴は戸惑い、それが何であるかを認識して余計に驚いている。
「臨海バス、巌戸台二丁目？　七歌、これは一体……」
「道案内役のニット帽がへし折ったんですよ。前屈みで股間を押さえてましたし、あのニット帽は危険ですね」
「ニット帽……もしかして、荒垣に会ったのか？」
「いえ、名前は知らないです。寮の場所を知ってるか聞いたら案内してくれました」
股間を押さえていたのは七歌に蹴られたから。バス停を折ったのも七歌。全てが彼女の責任であるというのに、ニコニコと笑って話すせいで美鶴は本当だと信じてしまい。状況はよく分からないが何をしているんだと、荒垣は本人の知らぬところで知り合いから評価を下げられていた。
「まぁいい。後で明彦に頼んで荒垣の部屋に運ばせておこう。それより、君の部屋は三階の一番奥だ。荷物は届いているが荷解きは明日にした方がいいな。岳羽、彼女を部屋まで案内してやってくれるか？」
「はい。あ、私は岳羽ゆかり。四月から高校二年です」
「お、いっしょいっしょ。私は九頭龍七歌。よろしくね！」
この地にやってきて初めての同級生。同じ寮なら同性だし仲良くなるかもしれない。そう思って七歌が満面の笑みで握手を求めれば、ゆかりも慣れぬ相手のテンションに面食らいつつ手を出し握手に応

じた。
――巌戸台
影時間が明けた頃、人通りのないオフィス街に一人佇んで空を見上げている青年がいた。
長い髪を結い上げ、首に黒いマフラーを巻いた隻眼の青年・有里湊だ。
街中に現われたイレギュラーシャドウを退治しにここまでやってきた湊は、そろそろ待ち人が戻ってくる頃だろうかと振り返った。
すると、そこには囚人服にも見える白と黒のボーダー柄の服を着た少年が立っており、少年は戻ってきたタイミングで彼が振り返ったことに驚きつつも、待たせてしまって申し訳ないと謝罪を口にした。
《遅くなってゴメンね》
「いや、別にいい。それより会えたのか？」
《うん。ばっちりさ》
湊に尋ねられ頷いたファルロスは、嬉しそうにその場で手を返して何もなかった場所から冊子を取り出す。
それは先ほど七歌にサインしてもらった契約書であり、ファルロスに渡された湊は契約の内容を読んで興味なさげに口を開いた。
「よく分からない契約だな。最後まで戦いを見届けろってことか？」
《本当は〝我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん〟って内容にしようと思ったんだけどね。ただ、彼女の場合は君のこともあって巻き込まれた側の人間だから、どんな結末も受け入れろって契約じゃなくて、結末は結末として一度受け止めてって契約にしたんだ》
ニュアンス的には変わらないように思える。けれど、その契約を少女に持ちかけたファルロスにとっては全く別なようで、彼の意図をなんとなく察した湊は歩き出しながら返した。
「その二つは大して変わらないだろ。受け止めた後は否定しようが逃げようが自由ってだけでな」
《諦めろって意味を含めた話と一度状況を把握すれば自由にしていいって話じゃ違うよ。まぁ、彼女ならどっちでも受け止めて前に進むだろうけどね》

受け止めると受け入れる、二つの契約の違いはこの部分だ。前者は結果の把握までが契約だが、後者は結果は結果として素直に受け入れろと押しつけが入っている。
相手が少女であることもあり優しい契約に変えたらしいが、契約を持ちかけた少年は、どちらの契約でも七歌の行動は変わらないだろうと言った。
卒業していった時任亜夜の中にあった力の欠片を回収したことで、ファルロスも力を僅かに取り戻し、湊に力を分けてもらえばペルソナのように具現化出来るようになったわけだが、今日は七歌が引っ越してくるという情報を得たことで会いに行った。
話は湊から少し聞いていたが、実際に会ってみるとどことなく湊に似た雰囲気もあって、二人が従姉弟であることにも納得でき。フランクな調子と思い切りの良さから高評価だったらしく、ファルロスが彼女の内面を褒めれば、それを聞いていた青年は自分が持つ七歌の印象からすれば意外だと口を開いた。
「随分と評価しているんだな」
《そりゃあ、友達の従姉だからね。彼女も君と同じワイルドの力を持ってる。ってことは、君と同じように諦めの悪さは一級品の可能性が高いってことだ》
「あれには期待するだけ無駄だと思うがな」
《君は昔の知り合いに対する評価が低すぎるよ。彼女は優秀だよ。何よりとても魅力的だしね》
ファルロスが七歌に会いに行ったのには複数の理由が存在した。
一つは友人の従姉への挨拶、せっかく湊を追って転校してきてくれたのだから、友人として仲良くしておこうと考えるのは当然だ。
そして、二つ目は彼女もまた湊と同じワイルドの能力を所持している可能性が高いため、その見極めと必要ならばベルベットルームにたどり着く手助けが目的だった。
結果から言えば七歌もワイルドの素養を持っていて、ベルベットルームの協力があれば力もすぐに使いこなせそうなレベルで、後から力に目覚めたとはいえ現S・E・E・S・メンバーの中でもトップ

クラスの活躍が期待できた。
それら二つが主な理由だったが、最後にもう一つだけ残っていて、それが相手が魅力的な少女であるため是非お近づきになりたいという不純なもの。
性依存症と判明してから女子たちと会う頻度を減らしている青年は、自分が魅力的な女子に囲まれているせいで感覚が麻痺しているのか、あれはないだろうと呆れ気味にファルロスの女性の趣味を否定する。
「……女の趣味が悪いな」
《随分と酷いことを言うね。他の人に聞けばチドリさんやゆかりさんと同じくらいの美少女だと評価されるはずだよ？》
「そうか。世の中には物好きが多いんだな。俺は御免だ」
青年と少女は父親同士が兄弟であるため血が繋がっている。だからという訳ではないだろうが、七歌を女として見ることは自分には無理だとファルロスの言葉を切って捨てた。
そも、相手の経歴や魅力になど興味は無い。七歌もまた力を持っていてこの街にやってきた。彼女自身に影時間をどうこうする目的はないだろうが、それでも桐条側にいて影時間に関われば会うこともあるかもしれない。
会ったときにどうするかは互いの目的や立場で変わってくるが、それまではファルロスが契約させたことでベルベットルームの手助けを受けられるのだから、自分は特に何もしないでおこうと湊は放置を選んだ。
実際のところ、湊が力を分けなければファルロスは顕現できていないのだから、力を分けている時点で間接的に干渉したとも言えるが、この街に新たにやってきた者への彼らなりの歓迎を終えたことで青年らはその場を後にし帰路へとついた。

第百九十四話　新学年のはじまり

４月７日（火）

朝――月光館学園

寮に新たなメンバーが加わった翌日、岳羽ゆかりは美鶴に言われて転入生を学校まで案内していた。

相手の名前は九頭龍七歌。旧家の出身であり美鶴の知り合いと言うことで、ゆかりもパーティーでなんとなく見たような気もするが、実際に言葉を交わしたことはなかった。それ故、同級生だがなんとなく距離感を掴めずに学校に到着してしまった。

「ここが月光館学園高等部。まぁ、転入試験とかで来たかもしれないけど、登下校はこれが基本ルートだから覚えてね」

「了解であります！　で、私のクラスどこー？」

「え？　いや、それは生徒玄関のクラス表を見ないと分からないけど、貴女は先に職員室じゃないかな？」

ニコニコと笑顔で話しかけてくれるのはありがたい。寮には先輩しかおらず、集まっている理由から和気藹々という雰囲気でもないため、どうしても息が詰まるのだ。

その点、相手は影時間についてまだ何も知らないので、現時点ではただの同級生として接する事が出来る。

施設の基本的なことを説明しながら靴箱に向かい。中で上履きに履き替えると、相手はそのまま「アデュー！」と言って職員室に行ってしまったので、唐突に案内の役目を終えたゆかりはポカンとしてしまった。

会ったばかりで変な子という印象が固まりつつあるが、ベクトルは違っても同じくらい変な人間を知っているため、ゆかりは彼女も運動や勉強が得意なのだろうかと考える。

あれで能力が伴っていなければただの馬鹿だが、何かしら秀でた才能を持っていれば天才の変人になる。

ただでさえ自分の学年には濃い面子が集まっている現状で、これ以上増えるとなると自分のような常識人ではツッコミが追いつかず、精

神的疲労を感じる毎日になりかねない。
故に、先生方ももう少し能力より人柄で選んでくれないかなと思ったところで、ゆかりはクラス表の貼り出されたボードの前にたどり着いた。
ずらっと並ぶ中から自分の名前を見つけなければならないが、彼女にはいくつかの希望があり。どうか自分の願うクラスになっていますようにとここ数日は祈り続けていた。
その希望とは、湊と同じクラスになること。次点で部活メンバーと同じクラスになることで、顧問の佐久間はどうせ副担任にしかならないので正直別のクラスで構わないと思っている。
自分の心に素直になって祈りを捧げ続けた少女は、今日でその結果が決まるとあって中々クラス表を見ることが出来ないが、覚悟を決めてちゃんと見ようとしたとき、丁度いいタイミングで他の部活メンバーがやってきた。
「あ、ゆかりちゃん。おはよう」
「おはよう、風花。それと皆もおはよう。全員同じ電車だったの？」
「ウチと湊君はバイクやで。まぁ、チドリちゃんの到着時間を聞いてたから合わせてきたけどな」
湊とラビリスは相変わらずバイクで通学している。雨の日や湊に用事があるときには電車で来ることもあるが、ラビリスが朝練で先に出るとき以外二人は揃ってバイクで来ており、それを初めて見る一年生の中には目を丸くして驚く者もいた。
せっかく、あの皇子と同じ学校に入れたのにと嘆く者や、やはり人気があるだけに一緒にいる先輩も綺麗な人が多いと羨む者などもいて、湊を中心としたメンバーは新学期早々なかなかに話題を集めている。
ただ、本人たちは湊と一緒に過ごす中で周囲の人間に騒がれることにも慣れてきており、生皇子だとはしゃいでいる一年生らを無視して会話を続ける。
「……それで貴女はもうクラスを見たの？」
「ううん。今からだよ。今年も皆と一緒がいいなぁって祈りを捧げて

たからね」
　チドリに言われてゆかりは冗談っぽく告げて笑う。他のメンバーと同じクラスがいいというのは本当で、今日までずっと寝る前に祈りを捧げていたのだが、やはりそこまで本気でやっていると聞けば大概の者は引く。
　風花や美紀にラビリスは苦笑して気持ちは分かると言ってくれるだろうが、湊とチドリは小馬鹿にした呆れ顔を向けてくるとはっきり分かっている。そのため、そこまで本気でやっていた訳ではないと装った訳だが、ゆかりの言葉を聞いた湊は右目を隠している前髪を指でいじりながらボソッと呟いた。
「まぁ、去年も一昨年も俺は別のクラスだったがな」
「知ってるから同じクラスがいいって祈ってたの」
　言われなくても知っている。中学三年生、高校一年生、この二年間はゆかりと湊は別のクラスだった。
　というより、彼と同じクラスでいたのは風花くらいなものだ。チドリと美紀も中学三年生では湊と別のクラスになり、高校一年生ではゆかりと一緒のクラスになったが、湊は風花とラビリスとだけ一緒で別のクラスになっている。
　中学三年生のときはともかく、付き合って以降はずっと彼と同じクラスになりたいと思っている純情乙女なゆかりは、わざわざ悲しいことを言わないでいいからと責める視線を湊に向け、そのままいざ審判の時とクラス表に視線を移した。
「……おめでとう、岳羽」
「う、嘘、これ本当に？　夢じゃないよね？」
　信じられない、これは夢ではないだろうか。そうやって口元に手をやって驚く少女を、青年が優しい瞳で見つめながら祝福する。
　ずっと祈り続けた。そうなって欲しい、そうあって欲しいと。好きな人と少しでも一緒にいたいという少女として当たり前の感情を源泉とし、彼女は強い想いで神に祈り続けたのだ。
　そして、結果がついに出た。少女の願いと正反対という最悪の形で。

「なんでよー！　私だけ隣のクラスじゃん！」
部活メンバー総勢六名、顧問を入れて七名。そのうち、ゆかりだけがＦ組所属になっており、他の者は顧問の佐久間も含めて全員がＥ組所属になっていた。
いくら何でもあんまりすぎる。湊と別のクラスになることは可能性として考えていたので、残念ではあるが納得もしよう。
けれど、これだけのクラスがあってほぼ全員が同じクラスになるという奇跡を起こしていながら、自分だけがハブられると仲間じゃなかったのかと自信を失う。
ワナワナと震えてショックを受けている少女の隣では、中学一年生のときから同じクラスでいつづけている青年と少女が話をする。
「山岸とは五年連続だな」
「ふふっ、そうだね。これだけ続くと来年も一緒かもって考えちゃうね」
三百人以上いる同級生の中で湊と同じクラスで居続けているのは風花だけだ。実際のところ中学三年間は本当に偶然だったが、去年は夜中に侵入して湊がクラス名簿を改竄したから同じクラスになっていたのだが、そんな事を知らない女子たちは暢気に会話を続ける。
「そういえば、私とチドリさんも五年連続ですね」
「ええ。一人だけ別のクラスってある意味伝統になりつつあるわね」
美紀とチドリ。こちらは本当に純粋に五年間同じクラスのコンビで、湊らと再び同じクラスになったのも偶然であるため、どちらか一方が異常な豪運の持ち主なのかもしれない。
対して、高校から参加したためまだ二年目でしかないラビリスは、そこまで同じクラスに拘る気持ちが理解できず、ただ落ち込んでいる友人を慰めようとゆかりの肩に手を置く。
「まぁ、ゆかりちゃんもそない落ち込まんと。別に知り合いがおらん訳やないしさ」
「そういう問題じゃないってー。嘘でしょー……。ねぇ、そっちのクラスに順平あげるから有里君ちょうだい？」
お互いに男子を一名ずつ出せば人数比に影響はない。故に、出席番

号もほぼ同じ知り合いをゆかりが交換に出そうとすれば、今まさに話題にあがった少年が丁度到着して、来て早々にどうしてそんな話にと微妙そうな表情を浮かべた。
「えー、オレっち到着したばっかで何で他のクラスに売られようとしてんの……」
「何よ、嫌なの？　ほら、E組は男子が勝手にやってた非公式の人気ランキング上位の女子が沢山いるわよ？」
「それはそうだけどさぁ。有里君と同じクラスで超ハッピー！　って思ってるE組の子がだよ？　実際にクラスに行ってみれば同じくらいナイスガイなオレっちがいたらどう思うよ？　多分、明日には机と椅子が消えてるぜ？」
　正確には一般人だが、一部から芸能人として扱われている湊と同じクラスになれるなど、同学年の女子のほとんどが目標にしていることだ。
　今もクラス表の貼り出された掲示板の近くでは、難関校の合格発表のように一喜一憂する者で溢れ、中には感極まって泣いてしまっている者もいる。
　もし、ゆかりがいうトレードが成立した場合、周りでこれから一年同じクラスだと喜んでいる生徒らはどう思うだろうか。
　間違いなくショックを受け、それらは次第に憎悪に変わり。元凶であるゆかりだけでなく、生け贄にされた順平にまで危害が及びかねない。
　既に決まったクラスが変更になることはないだろうが、その辺りまでシミュレーションして順平が話せば、
「岳羽さん、他のクラスに有里君はあげないよ！」
　丁度話が途切れたタイミングで後ろから声がした。
　声がして一同が振り返れば、そこには腰に手を当てて堂々と立つ佐久間がいた。フフンと得意気な表情をしている理由はクラス表の副担任の欄をみれば理解できるが、ショックを受けているときに彼女の相手は面倒くさいとゆかりは露骨に嫌そうな顔をする。
「うわ、テンション下がってるときに来るとか……」

「おっとぉ、一応は先生なんだし。先生相手にそういう態度はよくないよぉ？」
ゆかりの冷たい態度には慣れている。というか、部活メンバーのうち半数は佐久間をぞんざいに扱うため、小さいことを気にしない質もあって彼女はそれを笑って流しつつ諌める。
すると、一応は教師の言うことであり、確かに他の生徒のいる前でこういった態度は不味かったなと反省してゆかりも謝罪を口にした。
「はいはい。すみませんでした、佐久間先生。それで、何で来たんですか？」
「いやぁ、うちの有里君が他所のクラスに攫われようとしてるって聞いてね。これは副担任として守らなきゃって」
クラス表に書かれている通り、佐久間は去年に続けて今年も湊のクラスの副担任になっていた。
しかし、湊の担任は英語の寺内から古文の江古田に変わっており、担当学年と共に担任と副担任がセットで進級するのでなければ、今年も湊の担任や副担任になりたい者がジャンケンでその座を勝ち取ったことになる。
二年連続でそのような適当な決め方をされていれば不安しかなく、いい加減経営母体である桐条グループにたれ込むぞという脅しも籠めてチドリが担任の決め方について尋ねた。
「……今年もジャンケンで勝ったの？」
「違うよぉ。今年はまず先に先生たちのクラスを決めてね。それから有里君を欲しいってクラスの先生でクジを引いたの」
去年の決め方には色々と不都合があった。先に生徒を決めていたせいで、所謂問題児を集めたクラスに気の弱い教師が配属されたり、進学クラスに根性論を唱える時代遅れの熱血教師が配属されたりと、明らかに適性を欠いた組み合わせがいくつか出たのだ。
最初はいいかもしれないが、僅かな亀裂が大きな溝となり、教師のリコールを求める声が生徒からあがりかけ。これでは湊の宣伝効果もあって、進学私立としてブランド力の高まっている学校の評判に傷が付いてしまうと、学校も早期に対応し去年はなんとか乗り切ること

が出来た。
　それを反省したのが今年からの決め方で、先に担任と副担任を含めたクラス構成を決めてしまい。次に宙に浮いていた状態の湊を欲しいクラスがクジ引きで手に入れるという方法だった。
　湊は事前にこの決め方を知ったことで、今年はクラス決めを操作できないと諦めたのだが、生まれ持った強運によってかチドリやラビリスのクラスの副担任になった佐久間が湊を引き当てた。これには湊も少しだけでかしたと思っており、後でご褒美に飴玉でもあげようと思っている。
　そんな事は欠片も知らない佐久間は、自分が見事引き当てるまでに色々と苦難があったのだとメンバーたちに話した。
「今年は副担任まで結構埋まっててさ。二年目の私じゃ江古田先生のクラスしか空いてなかったんだぁ。でも、江古田先生はあんまり有里君を欲しがってなかったんだよね」
「じゃあ、くださいよ。副担任が出しゃばるのって良くないですよ。年長者の江古田先生を立てましょうよ」
「うぇ、今日の岳羽さんキツメだね……。いや、でも、私が欲しかったんだもん。それでクジ引きしてちゃんと勝ったもんね。まぁ、Ｆ組の鳥海先生とどっちがそのクジを選ぶかジャンケンになったんだけどさ。あの人の直感も恐ろしいね」
　副担よりも権力の強い担任は湊を欲しがっていなかった。それを聞いたゆかりが割とマジな口調で攻めれば、朝からやけに攻撃的だと佐久間もタジタジになる。だが、そうは言っても自分が湊を欲しかったのだから、誰がなんと言おうと佐久間に譲る気はない。
　もっとも、女の勘か勝負師の勘か、佐久間が引こうと思ったクジをゆかりの担任になった鳥海も狙っていた。
　一人だけなら偶然や勘違いかもしれないが、二人が同じクジに惹かれる物を感じたなら何かある。そう思った佐久間と鳥海は真剣な表情で向き合い、勝利を掴むべくジャンケン一発勝負に挑んだ。
　結果、ジャンケンで勝って望み通りのクジを引いた佐久間が湊をゲットしたと聞き、ゆかりは担任になった鳥海にもっと頑張って欲し

かったと八つ当たり気味の愚痴を漏らしながら、一人だけ別のクラスになったことに改めて肩を落とす。
「はぁ……ギリギリで有里君と別のクラスとか泣ける。せめて他に誰か一人でも同じクラスが良かった。一人だけ別って何の罰ゲームよ」
昔は自分の気持ちを誤魔化していた少女が、こうもはっきり自分の希望を口にして落ち込むのを見ると微笑ましいものがある。
落ち込む少女のことは頭をポンポンと撫でてやっている湊に任せ、他の者はそろそろ自分のクラスに行かなければと移動を開始した。
放課後――2―F教室
新学期の始まる全校集会を講堂で行った後、クラスに戻って担任が今後の予定を話すと今日の授業は終了した。
まだ部活にも委員会にも入れないため、七歌は昨日できなかった荷解きをしてしまおうと帰る準備をしていたとき、すぐ傍にいた帽子を被った男子が彼女に話しかけてきた。
「よう、転校生！」
「よう、在校生！　顎ヒゲが最高にクレイジーでキマってるな！　ヒューヒュー！」
「お、おう。君、そういうキャラなのね……」
名前ではなく転校生と呼ばれたので、七歌もそれに倣って在校生と返してやる。予想外の反応に相手も引いているが、別に引かれたところで気にしない少女は荷物をまとめながら帰る準備を進める。
すると、まだ残っていた男子は気を取り直して再び笑顔を浮かべると、自分の胸を右手の親指で指しながら自己紹介をしてきた。
「まぁいいや。オレは伊織順平、呼ぶときは順平でいいぜ」
「私は九頭龍七歌。呼ぶときは九頭龍さんでいいぜ」
「いやぁ、それ距離あるなぁ。名前で呼んでいいって言ったんだから、そこは同じく名前で呼ぶの許可する展開じゃね？」
言葉は通じているのに話が通じない。言葉のキャッチボールをしようとすれば、相手はボールをバットで打ち返してくるイメージだ。
どうして会ったばかりでそのような対応なのかと順平が不思議に思っていれば、七歌は名前呼びの許可を求めてくる順平に嫌そうな顔

をして理由を話す。
「えー、だってナンパでしょ？　私、そういうの受け付けてないんだよね」
「ちがうっつの。オレっちも中二のときに転校してきてさ。転校したてのアウェー感っての？　そういうの知ってるから、七歌っちが馴染みやすいよう最初に声かけて切っ掛け作ろうと思っただけだって」
「ほーん、見た目よりいい人だね。顎ヒゲはセンスないけど」
「きっついな―。ナチュラルにディスって来るとか会ったことないタイプだわぁ」
〝言葉のナイフ〟というものがあれば彼女の言葉がまさにそれだ。会ったばかりで警戒されているのかもしれないが、せっかくの美少女転校生と仲良くなろうと思っていたのに、初っ端からその思惑を砕かれ順平は本気で肩を落としへコんだ。
そして、二人のやり取りを見ていたのか、何を馬鹿な事を言っているんだとピンクのカーディガンを着た少女も新たにやってくる。
「あんたは割とそういうポジションでしょ」
「おっと、元祖プリプリ王女……」
「変なあだ名付けんな。それより、同じクラスだったね。寮も同じで何かと接点あると思うから改めてよろしくね」
ゆかりは部活メンバーと離れてしまったが知り合いはいた。けれど、順平も言っていたが相手は転校生で知り合いも居ない。
なら、同じ寮でもある自分が色々と助けになってあげようと思って挨拶をすれば、七歌も同性相手だと警戒が薄れ自然な笑みで挨拶を返した。
「うん、よろしく。私のことは七歌様でいいよ」
「な、七歌様って……ゴメン、私まだ貴女のキャラに慣れないわ」
一部訂正しよう。警戒は薄れてもキャラはぶれていなかった。
相手のノリに慣れれば流すことも出来そうだが、それには時間が必要になる。どれくらいで慣れるか分からないため、その前に距離を開けてしまう可能性もあるが、まだもうしばらく様子を見ておこうと順平とゆかりがその場に残る。

相手が去ってしまわないなら七歌の方もクラスメイトと会話を続ける意思はあったので、変人キャラは一時封印して自分が聞きたかったことを二人に尋ねた。
「まぁ、冗談はそれくらいにしておいて。八雲君ってどこにいるか知ってる？」
「八雲？　それって名字？　それとも下の名前？」
「下の名前だよ」
正しくは百鬼八雲。どちらも珍しいと言えば珍しい名前だが、ちゃんと名字辞典にも載っている名前だ。
七歌の探し人である青年は全国に知られるようになった有名人なので、勿論二人も知っていると思ったのだが、少女の予想に反して聞かれた二人は首を捻った。
「うちの学校にそんな名前の生徒いたっけか？」
「新入生は確認してないけど、二、三年にはいないと思うよ。ちょっと珍しい名前だし、聞いてたら覚えてるだろうから」
二人も全校生徒の名前を把握している訳ではない。けれど、八雲という珍しい名前なら少しは話題になるはずだ。
月光館学園では定期考査の結果が順位と共に貼り出されるため、話題になった相手のことをもっと知ろうと点数や順位を見る者も出てくる。
それがないということは月光館学園高等部に該当する生徒はいないということであり、ゆかりたちがまだ名前を把握していない一年生にいないのであれば、探し人は中等部か初等部にいると思われた。
二人からその事を聞いた七歌は、そんなはずはないと一瞬怪訝そうな顔をするも、すぐに何かに気付いた顔をして改めて口を開く。
「あ、そっか。えっとね、有里湊君だよ。うん、他の人だとそっちの名前だ」
「いや、有里君って名前ぜんぜん違うぞ。まぁ、有里君は隣のＥ組だな。今朝、それでゆかりっちもヘコんでたし」
自分は昔の癖で八雲と呼んでしまうが、他の者にすれば彼は有里湊だった。その事に気付いて七歌が訂正すれば、やはり有名人だけあっ

て順平たちも彼のクラスを教えてくれる。
聞いた七歌は早速生徒手帳のメモ欄に聞いたクラスを書き込みつつ、どうして湊が隣のクラスだとゆかりがヘコむのか気になり、ちょっとした雑談として尋ねた。
「ヘコむってなんで？　ファンなの？」
「ゆかりっちは元カノなんだよ。よく分かんないけど、お互いのために距離を置いて別れたって話だけど」
七歌は本人に尋ねたのだが、理由を正確に把握していた順平がニカッと笑って答えてくる。
別に理由を知れればどっちが答えても構わないけれど、今度はどうしてそんな大人な理由で別れたのかという疑問が浮かんできた。
ただ、会ってすぐに深くまで事情を聞くのはデリカシーに欠けるので、七歌も自重して二人の漫才のような会話を聞き続ける。
「本人の前で普通そういう話するかな」
「どうせすぐばれるっしょ。未練ＭＡＸなのも見てりゃ分かるし」
「はいはい、引き摺る重い女で悪かったわね。てか、部活あるから私は行くから。順平、その子に変なことしないでよ」
聞いていると湊とゆかりが付き合っていたと言う話は中々に有名なようだ。それを七歌が理解しているうちにゆかりは部活に行くため去ってしまったので、七歌もそろそろ帰るかと席を立つ。
「過保護だねぇ。ま、用事も特にないしオレたちも帰るか？」
「うん。じゃあ、また明日！」
別れを告げてすぐにダッシュ。驚いている順平をその場に残して、七歌は一人ですぐに教室を出て行ってしまった。
後に残るは一緒に帰ろうと誘ったつもりの少年一人だが、名前の呼び方について話していたときと同じノリだったことで彼も色々と悟ったらしく、空いてしまった放課後の予定に思いを馳せつつ小さく呟いた。
「ああ、そこ一緒に帰らないんだ。キャラ濃いなぁ、あの子……」
悪いやつではない。だが、とりあえず変なやつではある。順平は七歌と会話してみて抱いた印象をそう結論づけ。席に戻って鞄を取っ

てくると自分も今日は帰るかと教室を出て行った。
夜――巌戸台分寮
(八雲君は隣のクラスかぁ。見たら確かにいたけど女の子に囲まれてたなぁ)
教室を出てからダッシュで寮に帰ってきた七歌は、途中で夕食を食べに出かけた以外ずっと荷解きを頑張っていた。
何に使うのか分からない黒いマントをクリアケースに畳んで仕舞ったり、ベッドの下のスペースに黒い寝袋を設置したり、ワンルームの部屋を自分好みの快適な空間にするべく彼女は奮闘する。
(まぁ、昔から綺麗な顔しているしね。ただのファンじゃなくて友達っぽい雰囲気だったし安心かな)
とはいえ、頭の中ではずっと湊のことを考えており。見た目や名前など色々と変わってしまった彼が、学校でもしっかりと人気者であったことは少女としても嬉しいことだ。
彼の学校での様子をたまに教えて欲しいと英恵からも言われているため、今日のことや自分とは別のクラスであることも伝え、少し経ってから情報提供への感謝と新しい環境に移った七歌を案じる言葉を貰い。少女としてもそれなりにリラックスした状態で作業できていた。
(さてと、荷解きも終わったし。お風呂に入ってから寝るかな。あっちの方は……証拠掴んでからでいいや)
ただ、今現在少女はある一点気になることがあった。何の意図があってそうしているのかは分からないが、もう少し情報を集めてから行動する事に決め、入浴セットと着替えを持つと七歌は部屋を出て行った。
――???
荷解きを終え、お風呂に入ってから翌日の準備も済まし、七歌はぐっすりと夢の世界へ旅立ったはずだった。
「ようこそ、ベルベットルームへ」
「……ん?　夢じゃない感じ?」
けれど、気付けば彼女は上昇する群青色の部屋にいて、正面に座っ

ている長鼻の老人に挨拶されるも、これが夢なのか現実なのか気になり頬を抓ってみたりと色々試していく。
それらは全くの無意味なのだが、やってきた少女の反応を楽しそうに眺めていた老人は、来たばかりの相手にここがどういった場所なのかを説明した。
「夢であるとも言えるし、そうでもないとも言えます。ここはベルベットルーム、夢と現実、精神と物質の狭間に存在する場所にございます。そして私の名はイゴール、ここの主です」
「私は九頭龍七歌。あの、立派な鼻ですね！」
見た瞬間に鼻に目が行き、七歌はそれをずっと言いたかった。彼女的には褒め言葉のつもりなのだが、イゴールの後ろで話を聞いていた者たちはクスクスと笑い。笑われたイゴールが責めるような視線で笑っていた者たちを睨んだことでようやく止まった。
群青色の服を着た者たちは見た限りイゴールの部下のようだが、七歌が彼らの方を見れば、視線を戻したイゴールが親切に紹介してくれる。
「彼らについても紹介しましょう。この三人は私の従者で長女のマーガレット、次女のエリザベス、末弟のテオドアです」
紹介された三人は呼ばれるたびに礼をして挨拶をする。末弟のテオドアだけはテオとお呼びくださいと言っていたが、全員の紹介が終わったところで本題に入るらしく。イゴールは指を組み直しギョロリとした瞳を七歌に向けると話し始めた。
「本日貴女をここへお呼びしたのは、貴女の持つ力と待ち受ける運命についてご説明するためです。既に貴女はご自身に宿る力を自覚しているはずだ。心の具現にして、様々な困難に立ち向かうための仮面の鎧。それを我々はペルソナと呼んでいます」
聞いて七歌はニット帽が言っていたことを思い出す。彼は七歌の守護霊を見てペルソナと呼んでいた。てっきり何かのゲームや漫画で似たような存在がいるのだろうと気にもしていなかったが、イゴールはペルソナを心の具現と呼んだ。
確かに守護霊を呼び出す際、七歌は精神力を大量に消費して呼び出

しているので、心を具現化させていると言えなくもない。
だとすれば、ニット帽とイゴールが言っていることは同じで、七歌が守護霊と呼んでいる存在は一部でペルソナと呼ばれているようだ。
「ペルソナって私の守護霊のこと？」
「はい。愚者〝エウリュディケ〟、それが現在の貴女の持つ力です。しかし、貴女には複数のペルソナを扱う〝ワイルド〟の素質がある。我々はそのワイルドの力が十分に発揮できるよう、何らかの形で契約を結ばれたお客人のサポートするのが仕事でございます」
少女の問いに肯定で返すイゴールは、テーブルクロスの表面を撫でて先日七歌が署名した冊子を呼び出した。
どうしてそれがここにあるのかは分からない。しかし、寮の受付でした署名が契約となって、七歌は今現在ここに呼び出されていることは理解できた。
なら、もう少しここでの事を聞いても良いだろうかと新たな質問を口にする。
「え、じゃあ担当者とかも付くんですか？」
「ええ、勿論。基本的には全員でサポートを行いますが、何かあったときのため担当は設けておきます」
「やった！　じゃあ、私はそっちのショートの人がいいです！」
七歌が向いた視線の先にいたのは次女のエリザベス。肩に掛からない程度の銀髪を揺らす美女だ。
ミステリアスな雰囲気を纏った大人の女性に見えるが、どこか幼くも見えて自分と同じ年なのではとも考えてしまう。
女性相手に年齢を尋ねるようなマナー違反は犯さないものの、マーガレットよりは歳も近いはずと、彼女に担当を依頼すれば、エリザベスはとても丁寧な仕草で頭を下げてきた。
「誠に申し訳ありません。私は既に他の方の担当となっておりますので、七歌様の担当者になることは出来ないのです」
「えー、そっかぁ、残念。じゃあ、マーガレットさんでお願いします！」
長女のマーガレットは背中に届く銀髪を高い位置で纏めた、一目で大人の女性と分かる美女だ。

ミステリアスな雰囲気で言えばエリザベスと同レベルだが、歳や姉弟での立場の違いか彼女には落ち着きがあった。服装や口調も相まって秘書や厳しい教育係に見えなくもないが、七歌が彼女に担当になってくださいと頼めば、先ほどのエリザベスと同じ内容の言葉が返ってきた。
「申し訳ありません、私も既に担当が決まっております。よって、七歌様の担当は愚弟であるテオドアとなりますが、何卒ご理解くださいませ」
それぞれが担当に付けるのは一人だけ。よって、七歌の担当にはフリーのテオドアが付くことになる。
そういう事なら先に言っておいて欲しかった七歌だが、ここでのルールがそうなら自分は従うまでだと残念そうにしつつも話を受け入れ、それならばとマーガレットとエリザベスそれぞれの担当者について教えて貰うことにする。
「なんだぁ……。ねぇねぇ、二人の担当ってどんな人？　その人もここに来るの？」
「私どものお客人もたまにお見えになりますよ。ですが、お客人同士が顔を合わせぬよう、こちらからお呼びするときはタイミングをずらしております」
ベルベットルームの住人はそれぞれの客人のことを知っている。両者が希望するならば同じタイミングで呼んでもいいが、そうでなければ顔を合わせても混乱するだけなのでタイミングは常にずらすようにしている。
話を聞いて七歌はそういうものなのかと感心しつつ、しかし、聞き逃せない部分があったぞと聞き返した。
「え？　二人とも同じ人を担当してるの？」
「はい。元々は私だけでしたが、一人では十分なサポートをすることが出来ないと判断し、途中から姉上にもお手伝いしていただいております」
「ずるいよー。私も綺麗な女の人を侍らせたかったー！」
七歌は別に同性愛者という訳ではないが、イケメンな男よりも綺麗

な女性といる方が楽しいと考えるタイプであった。
　エリザベスから姉と二人で一人の客をサポートしていると聞けば、自分もそんな羨ましい状況になりたかったと落ち込み、腕を伸ばした状態でテーブルに頬をつけてだらけた態度を取る。
　端から見ていれば中々にユニークだが、一方で彼女の担当になることが決まったテオドアは、自分が未熟だから七歌が落ち込んでいると思い込み、普段以上に真面目な表情で全力のサポートを約束する。
「未熟な身ではありますが、出来る限りのお手伝いをさせていただきますので、どうかよろしくお願いします」
「うーん、まぁいいけどね。じゃあさ。前に私が戦ったお化けみたいなのって何か分かる？」
　そんなに熱の宿った瞳で決意表明されても、七歌としては別にテオドアに不満があったわけではない。ただ個人の好みで美女二人の方が良かっただけなのだ。
　故に、相手のやる気は買うが、今はそれほど何かして欲しい訳でもないので、とりあえずペルソナやらに詳しい様子の相手に先日の化け物について尋ねた。
　七歌の予想通りならあの化け物はペルソナの同類。人の心や想いが元となって生まれた存在ではないかと睨んでいる。
　その予想はほぼ当たっており、尋ねられたテオドアも質問が自分の知っている事柄だったことで、ホッとした様子で出来る限り分かりやすく簡潔に話す。
「あれはシャドウと呼ばれる存在です。現実世界の一日と一日の狭間に存在する影時間に姿を現し、シャドウを倒すことが出来るのはペルソナ使いだけです。ただ影時間に適応しただけでは力が足りず、ペルソナ使いとしての適性を得て初めて物理ダメージも与えられるようになります」
「シャドウに影時間ね。じゃあ、あの高い塔は？」
「あれはタルタロスと呼ばれる物です。もし影時間にタルタロスを訪れたら、そのときは青い扉をお探しください。その扉を潜ればご自分の意思でこの部屋を訪れる事が出来ますので」

ペルソナ、シャドウ、影時間、タルタロス。自分の知らなかった情報が次々と手に入り、七歌はここに呼ばれて良かったと思い始める。
彼女がここに来られたのは、寮の入り口にいた少年が難解な内容の書かれた冊子にサインを求めてきたからだ。
あのときの少年もまた日常の存在ではなかったように思うが、このベルベットルームには現実からも来られるらしいので、もしここで帰ってしまっても色々と知る機会はあるに違いない。それなら、今のうちに知っておきたいことをいくつか聞いてから今日は帰ろうと心に決める。
「あ、さっき言ってたワイルドだっけ？　ペルソナを複数扱うってどうやるの？」
七歌は自分が特殊な才能を有していると言われても、自分の中にエウリュディケしか感じない。これでは複数のペルソナを扱う以前の問題だった。
ペルソナという超常の存在を複数扱えれば、昨日現われたようなシャドウと戦うときに便利である。そう思って方法を聞くと、今度の質問には部屋の主であるイゴールが答えてくれた。
「今後、シャドウを倒したときや精神の変化で新しい力に目覚める事があるでしょう。そのとき目覚めた力、すなわちペルソナを意識して精神の表層へと引き上げれば、ペルソナを切り替えて呼び出す事が出来ます」
「一度に複数は呼べないの？」
「複数同時召喚も理論上は可能です。しかし、ペルソナは貴女の人格の一部を固定化したものであり、一度に複数の人格を表出させられる者などいません。そのため、呼び出そうとしても失敗し、仮に成功しても十分な力が発揮されぬまま人格の統合が上手くいかず廃人となるやもしれません。十分にお気を付けください」
ペルソナは七歌自身の心の一部に姿を与えたものである。一体呼ぶだけで精神力を消耗し疲労を感じるため、二体同時に呼びだそうものなら相応の負担を覚悟しなければならない。
イゴールの説明ではまず出来ないといった感じだが、それでも理論

上可能なら成功する可能性も同時に存在する訳で、七歌はどういった人間なら出来るのだろうかと顎に手を当てて考え込み、こういった存在なら可能ではないかと思い付いたことを試しに聞いてみた。
「ふーむ、なるほどねぇ。多重人格の才能があるとかなら出来るのかなぁ。そういうペルソナ使いっていたことある？」
「ええ、しかしその方は人格毎にペルソナを有していました。また、他者の心までも受け入れ己の内に取り込む方もおられましたが、それは己と相手の境界が曖昧になり、自我崩壊の危険性を孕んでいます。ある意味、その方の心が壊れているからこそ出来たと言えるため、参考にはなりません」
「そうなんだ。色々と分かってるんだね」
　七歌の思い付いたことはいい線を行っていた。しかし、イゴールの知る一つの身体に二つの精神を宿す少女は、それぞれの人格毎に別のペルソナを所持しており、肉体の支配権をどちらか一方しか手に入れられないこともあって同時召喚など出来そうにもなかった。
　そして、似たようなところで、別の人間の心を自分に取り込み、己を主人格としたまま擬似的な多重人格状態を己の内に展開している青年もいたが、そちらは通常の多重人格より余計に精神崩壊の危険がある。
　なので、負担とリスクが大きいだけの同時召喚を無理に試みようとせず、上手く持っている戦力を使う方法を考えた方がいいとアドバイスし、イゴールは本日の別れの時が来たことを告げた。
「さて、そろそろ時間のようですな。最後にこちらをお持ちください。先ほど言った扉を潜る際に必要な鍵です。ペルソナを呼び出すように鍵をイメージしていただければ現われますので、現実世界から来られる際にはその様にお願いします」
「うん。わかった。また何かあったら聞きにくるね」
「ええ、お待ちしております。それではまた、ごきげんよう」
　老人の声が徐々に遠く聞こえていき、七歌は瞼を開けていられなくなっていく。
　ベッドで寝たらここに来ていたので、帰るときは逆にこっちで寝る

のかもしれないと、暢気に考えて意識を手放せば、ベルベットルームに来ていた七歌は金色の光に包まれ消えていった。

第百九十五話　候補者の監視

４月８日（水）
朝――月光館学園
不思議な夢を見た次の日、九頭龍七歌は夢が本当にあった事なのかを確かめるため、ベルベットルームの鍵を呼び出してみた。
すると、イゴールが言っていた通りに鍵が現われたことで、ペルソナや影時間の話が実際にあったことだと信じることが出来た。
もっとも、だからといって日常が大きく変わるわけではなく、今日も今日とて真面目に勉学に励むべく元気に登校してきた。
来る途中にパンを買ってモシャモシャと食べ、同じ学校の制服を着た男子らの視線を浴びつつ生徒玄関に入る。七歌の靴箱は胸の高さにあるので丁度良く、パパッと履き替えて教室に向かおうとしたとき、後ろが何やら騒がしくなっていた。
「……そういうのはやめた方がいいな」
「あ、ちょっ、携帯返せよ！」
何だと思って振り返れば、七歌のよく知る青年が三年生の男子生徒から携帯を奪っていた。
スポーツをやっていそうながたいの良い三年生は、必死に腕を伸ばして青年の手から携帯を奪おうとするも、青年は身体を軽く捻るだけで全て躱し、自棄になって飛びかかってきた相手の足を引っかけ最後は転かしている。
朝っぱらから生徒玄関で盛大に転んだ相手には同情を禁じ得ないが、どうしてそんな事になったのか不思議に思っていれば、立ち止まって様子を見ていた七歌と青年の目が合い。彼は三年生から奪った携帯を七歌に投げ渡してきた。
「おっとっと。急に渡されても困るんだけど、これどうしたらいいの？」
「……画像フォルダから自分の写真を消しておけ。終わったら返したらいい」
言われてデータフォルダの画像一覧を見ると、青年の言っていた通

りに七歌の写った写真があった。靴箱に靴を仕舞っている姿なので、別に見られて困る物でもないが、名前も知らない相手に無断で隠し撮りされていたと分かると気分が悪い。

撮られたばかりの写真を完全に消し、他には何もないだろうなとSDカードの中身までチェックしていく。確認した限り自分の写真は他になかったが、可愛い女子が友達と喋っている写真や音楽を聴きながら暇そうに電車を待っている写真など、携帯の持ち主は日常的に気に入った女子を無断で撮影していたらしい。

不幸中の幸いと言うべきか、写真は全て日常風景で、下着が見えていたり水着姿であったりするような写真はない。流石にそちらだと罪が段違いであったため、撮った本人も自重していたんだろうなと七歌は推測する。

そうして、女子の写真を全て削除し終えると、携帯を青年に投げ返し、彼を経由して持ち主の元に戻っていく。

転けてぶつけた肩を痛そうに擦っていた男子は、携帯が戻ってきたことにとりあえず安堵し、そして写真コレクションが全てなくなった事に落胆していた。

それを見ていた青年は心から呆れたように深い溜息を吐き、冷たい視線を男子に向けると、

「……猥褻な写真がなかったから今回はデータの消去だけで見逃す。だが、また繰り返せば次はデータの消去だけじゃ済まさないぞ」

右手の指を曲げて骨をバキバキと鳴らし、次はないと警告した。

彼が色々な人間を助けている話は有名で、中には不良グループを壊滅させたという噂まである。そんな相手を本気で敵に回したくはないため、男子生徒は顔を青くしながら、

「あ、ああ、分かったよ。勝手に撮って悪かった」

とだけ返して自分の教室の方へ走り去っていった。

一連の出来事を見ていた野次馬からすれば、新しい学校に来て早々このようなトラブルに巻き込まれ、残された少女は色々と不安になるのではないかと思われた。しかし、本人はいたって気にした様子もなく、ニコニコと輝くような笑みを浮かべて盗撮を看破した青年にお礼

を言っていた。
「ありがとね、八雲君」
「……誰だよそれ」
「えへへ、久しぶりにお姉ちゃんに会ったからって照れるなよぉ！」
ポケットに入れていなかった彼の右腕を掴み、ブンブンと振り回してから自分の腕と絡めるようにして抱きつく。
転校早々で密かに男子たちの話題になるほどのルックスをした少女が、隙間ゼロという端から見れば羨ましいを超えて妬ましく思うスキンシップを取れば、少女の青年に向ける信頼の表情も含め何かしらの関わりがあることは一目瞭然だ。
けれど、腕に抱きつかれた青年は嫌そうな顔で腕を振って引き剥がそうとしており、それでも七歌が楽しそうに離れずにいれば、ついに青年も平和的な解決を諦めて左手で少女の頭を掴んだ。
「イダダダダッ!?　割れるっ、割れて脳漿ぶちまけちゃうっ」
「穴も空いてないのに頭骨骨折くらいでぶちまけるか」
時間が経てば鼻や耳に口といった部位から流れ出る可能性もあるが、頭骨を割られただけでは脳みそが出るための穴がないので、普通にぶちまけることは不可能。
人体について詳しい青年はそれを冷静に突っ込むが、痛がっている本人は意地でも離したくないのか、大声で痛みを叫びながらも耐えていた。
青年にすればそもそも相手の目的が分からない。助けてお礼を言われるまでは分かる。だが、抱きついた後はどうすれば相手の目的が達成されたことになるのかが不明だ。
教室まで行けば離れるのか、それとも予鈴がなるまで一緒にいるつもりなのか、相手の目的によって青年の取るべき行動は変わってくる。
それらを問答無用に解決してくれるのが、万国共通である肉体言語によるこの超平和的解決法だったのだが、これが効かないとなると青年としても本意では無い肉体言語フェイズ２への移行も検討しなければならない。

フェイズ2の内容を簡単に説明すれば、抱きつかれている右腕で相手を一本釣りして投げるというもの。仮に相手の体重が標準を下回る四十キロだったとしても、力の入りづらい体勢から持ち上げるにはかなりの筋力を必要とする。

この大技を披露すれば流石に相手も離れると思うので、怪我をさせる可能性は高いがしつこい相手が悪いのだと、青年がまともな方法による解決を放棄しかけたとき。

「な、七歌！　君は何をしているんだ！」

知っている人物の声が聞こえてきて、その声の主が後ろから七歌の脇の間に腕を入れて青年から引き剥がした。

突然羽交い締めの形で引き剥がされた少女は不満そうにするも、引き剥がした本人は、七歌が絡みに行っていた相手を見て気まずそうな表情をしている。

そして、今まで抱きつかれていた腕を軽く回して青年がストレッチを始めたところで、七歌を引き剥がした本人こと桐条美鶴は、七歌を拘束したまま何があったのかを尋ねた。

「七歌、君は公衆の面前で朝から何をしているんだ」

「いや、八雲君が盗撮魔から助けてくれたんでお礼を言ってたんですよ」

「盗撮？　痴漢にでも遭ったのか？」

「ああ、そういうやらしいのじゃないです。男子が隠し撮りしてて、それに気付いた八雲君が許可も無しに黙って撮影するのはダメだぞって相手を叱ったんです」

辰巳ポートアイランドと巌戸台を結ぶモノレールは、湊が痴漢を検挙し続けたことで都会で最も女性が安心して乗ることの出来る区間としてマスコミに取り上げられるほどになった。

彼がバイク通学でモノレールをほとんど利用しなくなってからも、たまに乗ることがあるからこそ迂闊に痴漢できないとアンダーグラウンドな情報掲示板で話されている。

だというのに、転校してきたばかりで痴漢に遭ったのかと美鶴が心配すれば、悪いことではあるがただの隠し撮りで少女に直接的な被害

はなかったとの話で、美鶴も安堵の息を吐きつつ問題を解決してくれた湊に感謝しながら改めて少女を窘める。
「そうだったのか。いつもすまない、有里。だが七歌、それでも君が抱きついていい理由にはならない。彼も有名になったことで色々と忙しいんだ。あまり迷惑をかけるな」
「えー、生き別れになった姉弟の感動の再会ですよ？　ハグもキスも許されるはずですって」
「君も彼も一人っ子だろうが……」
　両者の裏の事情を知っている美鶴としては生き別れも含め否定しきれないが、少なくとも実の姉弟ではないことは確かなので、嘘は吐かずに純粋なツッコミを入れた。
　すると、七歌が不満そうに「ブーブー」と文句をたれ始めたので、美鶴は不快感を一切隠さぬ冷たい瞳で七歌を見ていた青年に、君はもう自分の教室に向かっていいと告げてこの場を預かることにする。
「ああ、有里、君はもう行ってくれて大丈夫だ。七歌が迷惑をかけてすまなかった」
　彼は美鶴に視線を向けていなかったけれど、実際は言葉も存在も認識した上で存在しない物として扱っている。故に、美鶴がここで七歌を止めているならもう襲ってこないと判断したらしく、言われた通り階段を上って去って行った。
　羽交い締めにされていたことでその背中を黙って見送るしかなかった少女は、青年の安全が確保されたところでようやく解放され、あっさりと去った青年に対しての愚痴を漏らす。
「ちぇー。久しぶりにあったのにつれないなぁ」
「君はもう少し慎みを覚えてくれ」
「だって、久しぶりに会ったら早速助けてくれたんですよ？　やっぱり優しいなぁって嬉しくなるじゃないですか」
　昔から優しかったが、久しぶりに会ってもその優しさが健在だったことで少女は嬉しく思った。懐かしくて、自分の記憶の中にあった彼のままで、本当に彼が生きていたとようやく実感が湧いたのだ。
　けれど、幼少期の彼とあまり関わりのなかった美鶴にすれば、彼の

人助けの評判は中等部の頃から聞いていたため、別に七歌相手に限らず彼はずっと今の調子だったと返す。
「彼は誰にだって優しいさ。困っている人間を助けるのが当然とばかりに行動するからな」
「それで得をするのは他人だけですけどね。やっぱり歪みはそのままって訳かぁ……」
人助けの評判は七歌もマスコミを通じて知っていた。しかし、それで得をするのは助けられた者だけで、有里湊自身はずっと貧乏くじを引いていくことになる。
彼のそういった在り方を知っている七歌としては、自分がして貰えれば嬉しいが、痛々しくも感じるので実際のところは複雑だ。
少女のそんな心情など知らぬ美鶴が不思議そうに見ている中、七歌は何でも無いですと愛想笑いを浮かべて、自分たちもそろそろ教室に向かおうと歩き出した。

夜――巌戸台分寮
湊と七歌が朝から遭遇するというちょっとしたハプニングがあった日の夜。美鶴はもうすぐ日を跨ごうという時間でありながら、寮の四階にある作戦室でゆかりや理事長の幾月と共に機械を操作しモニターを眺めていた。
彼女たちの見ているモニターに映っているのは入寮したばかりの七歌の部屋だ。
部屋の中には既に部屋の主が帰ってきており、机の前に座って難関大学受験者向けの参考書を解いていた。学校の課題だけでなく、自ら進んで勉学に励むのは良いことだ。
寮や学校で会ったときには、色々とおかしなノリや言動が目立ち、周囲からは変人の馬鹿という印象を持たれつつある。けれど、彼女にこんな一面があると知れば、学校の連中も天才故の異端ぶりと認識を改めることだろう。
「なんか意外ですね。普段が普段だけに、ああやって真面目に勉強してるのがすごく不思議で」

「そういえば、君は七歌の経歴についてよく知らなかったな。確かに色々と変わった行動を取ることも多いが、文武共に優秀な人物で、彼女は中学校と前の高校では一年生から生徒会長を務めていたほどだ」
一見ただの馬鹿に見えるだろうがその認識は誤りで、七歌の基礎スペックは一年生で生徒会長を務めるほど高い。
学校や生徒らに惜しまれながらも、湊のいる高校に行きたいからと簡単に転校を決めてしまった辺り、やはり型に嵌まらない人物という感じではあるが、高い能力を持っているのであれば余計に彼女のおかしな行動の理由が分からないとゆかりは首を傾げる。
「え、じゃあ、なんであんな変人っぽいことしてるんですか？」
「さぁな。きっと本人の性格だろう。だがまぁ、七歌の能力を甘く見ない方が良い。彼女は最も有里に近い人間だからな」
湊に最も近い人間と聞いてゆかりはどう思ったのだろうか。精神的な距離感なのか、それとも能力の高さで似ていると評したのか。
前者ならば転校してきたばかりの少女が、どうして自分の好きな人と親しいのかと嫉妬を覚えるはず。けれど、湊は学校でそのような様子は見せていないので、七歌と同じクラスにいるゆかりならばありえないと分かるに違いない。
だとすれば、美鶴の言葉は後者を表わしていたと思われるので、ゆかりとしてはそんな天才型なのだなとぼんやり考える程度であった。
そうして、そうこうしている内に画面の中では勉強道具を片付け、立ち上がるなり背伸びをしている七歌が映っていた。時刻は十一時五二分、影時間の目前だ。彼女が動いたことに気付いた幾月は、勉強を切り上げたのはやはり影時間のせいかなと考察する。
「おや、もう寝るようだね。電気の使えない影時間になる前に寝るってとこかな？」
「あ、なんかベッドの下から出してますね。あれは……寝袋？」
見ていると七歌はベッドの下からゴソゴソと何かを取り出して床に広げていた。それはどこからどう見ても黒い棺桶型の寝袋で、正直に言えばどこに売っているんだと突っ込みたいところだが、楽しそうにそれを手に取ってベッドの上にセッティングしている事から、彼女

は棺桶型の寝袋を使用しながらベッドで寝るつもりのようだ。
「うーん、余裕あるねぇ彼女。象徴化を知ってるからこその偽装か。まぁ、シャドウが相手なら意味もないと思うが」
「何にせよもうすぐ影時間です。様子を見ていましょう」
いくら棺桶型の寝袋で象徴化の偽装をしても、シャドウによっては鋭い感覚で隠れている相手を見つけ出す。よって、彼女の行動や準備は全て気休めか人間に対する偽装にしかならないのだ。
無論、本人はそれを知らず、ただ他の者たちと同じようにすることで安心感を得ようとしている可能性もあるが、美鶴の言うとおり既に影時間が迫っている。
本当に彼女が影時間に適応して見せるのなら、このまま様子を見ていた方がいいと判断し、全員が静かに影時間の到来を待った。
そして、時計の針が頂点を指したとき、世界は緑色に塗り潰された。
「……象徴化せずか。混乱も見られないし、本当に高い適性を持っているみたいだね」
選ばれた者しか立ち入ることの許されない影時間。その中でも七歌は一度顔を上げて時計を見てから溜息を吐いたくらいで、後は月明かりで明日の持ち物を用意したりと平然としている。
ここまで平時と同じ行動を取れるのなら間違いなく彼女は適性を持っている。混乱も何もないとなれば、それこそ美鶴や真田など既にペルソナに覚醒している者と遜色ないレベルと言えた。
彼女が美鶴たちと同じペルソナ使いとして覚醒し、一緒にシャドウの脅威から人々を守ってはくれないかと密かに期待している幾月は、顎に手を当てながら画面に映る少女の様子を眺め満足げにする。
しかし、彼女が準備を終えて教科書類を鞄に片付け終えたところで、注意深く七歌のことを見ていた美鶴が異変に気付く。
「いや、待ってください。様子が変です」
これまで特に変わった様子を見せていなかったというのに、片付けを終えた少女は何やら周囲を見渡して落ち着かない行動を取っていた。
部屋の中をグルグルと歩き回ってみたり、壁のところで立ち止まっ

たかと思えば耳を当ててみたり、再び部屋の中央に戻ってくれば今度は床に耳を当ててみたりと、彼女が一体何をしているのか見ているだけでは分からない。
「何かの音でも聞いてるのかな？」
「音？　――――まさかっ!?」
ゆかりの言葉に美鶴は嫌な予感を感じた。すると、その予想は見事に的中し、画面に映っていた少女は立ち上がって数度頷いてからゆっくりカメラの方を見て口を動かした。その動きは、

〝みいつけた〟

大きく目を開き口元を吊り上げながらカメラ越しに視線が合ったように感じる。あまりの異常さに思わず背筋がゾクリとするが、さらに恐ろしいことに七歌は部屋の隅に立てかけていた薙刀を持って部屋を飛び出していた。
主の消えた部屋の映像を見ながら二度目のまさかという悪寒が美鶴たちを襲い。慌てて部屋の扉をロックするボタンを押すが、その予感はやはり的中し、七歌が部屋を出て数秒後に彼女たちのいる部屋の扉が激しく叩かれた。
《おい、開けろ！　ここにいるのは分かってんだぞ！　人の部屋盗撮しやがって、ぶっ殺してやるから出てこい！》
『ひぃっ!?』
ドンドンドンッ、と明らかに手で叩いていては出せない音が響く。今出てきて謝れば許してやると言うのなら出るかもしれないが、殺すから出てこいと言われて素直に開ける者などいまい。
だが、叩く音の激しさは段々と増しており、もしかすると扉をぶち破られる可能性もあるのではないかと冷たい汗が背中を流れる。
大人である幾月も表情を強張らせており、少女二人は幾月以上に恐怖を感じて動けずにいた。すると、美鶴たちが開けないと分かって諦めたのか扉を叩く音が唐突に止む。
しかし、安堵の息を吐く間もなく、今度は扉の把手がガチャガチャ

と五月蠅く音を立てだした。
《あけて》
まだ扉の前にいた七歌は扉越しにぼそぼそとつぶやき続ける。バイオレンスから一転して状況がホラーに変わり、これならば先ほどの直接的な五月蠅さの方がマシに思えた。
不気味な物や怖い物が苦手なゆかりなど顔を真っ青にしており、美鶴も相手が七歌だと分かっていなければ震えていたに違いない。ただ、相手は知り合いの少女だと自分に言い聞かせることで、美鶴がどうにか恐怖に囚われるのを耐えていれば、一足先に呑まれてしまったゆかりがガタガタと震えながら七歌への対処法を問うてくる。
「せ、先輩、どうするんですかヤバいですよ！」
「理事長、何か彼女を落ち着かせる方法はありませんか？」
「い、いやぁ、流石に僕もこういったタイプの生徒とは関わった事が無いから……」
こんなときばかり大人だからと頼られても困る。相手は理性をどこかに置いてきた変人にして狂人だ。むしろ、知り合いだった美鶴の方が止められる可能性はある。幾月がそう苦笑いを浮かべれば、把手の音が止んで代わりに何かがきこえてきた。
《来やれ――――来やれ――――来やれ》
その呟きの意味は分からない。だが、何か危険な気がする。一体何をしようというのか美鶴たちが扉の方を見て警戒していれば、次の瞬間扉が音を立てて吹き飛んだ。
ここはシャドウやその他の脅威からペルソナ使いを守ることを目的として作れているため、並の威力では窓ガラスすら割ることは出来ない。
だというのに、濛々と巻き上がった埃の向こう側に立っていた少女は、どうやってか扉を修復不可能なレベルまで完全に破壊し。立ったまま上半身をだらりと垂らして、右手に薙刀を持ちながらゆっくりと部屋に入ってくる。
「悲しいなぁ……美鶴さんも岳羽さんもグルだったなんて……」

「ま、待て七歌。これには理由がっ」
ちゃんと説明するから武器を置いて落ち着いて欲しいと美鶴は説得する。ただ、本能で相手を恐れているのか、美鶴だけでなくゆかりも一緒になって席から立ち上がり窓際の方へ逃げつつ言っているから格好が付かない。
しかし、それを聞いた七歌はキッと顔を上げると、薙刀をしっかりと持ったまま駆け出し、先ほどまで美鶴が座っていた椅子を足場に飛び上がってから置かれていた装置のモニターを叩き割った。
「はぁっ!!」
彼女の持っている薙刀は武道で使う刃のない物で、練習用なのか試合で使える物より重く丈夫に出来ていた。身体能力の高い少女がそんな物を遠心力も加えて振り抜けば、液晶モニターなど割れてもおかしくはない。
ただ、すぐ傍で見ている者にとっては恐怖を増長させるものでしかなく、普段のふざけた態度の消えた七歌が真剣な表情をしているのを見て、美鶴たちも彼女がどれほど怒っているのかを理解した。
「理由があれば許されるっていうなら、被害者がこうやって盗撮されないためにモニターを破壊しても許されるよね？」
「秘密にしたままこのような事をして本当にすまない。だが、これは君の身の安全を守るためでもあったんだ」
「ふーん。でも、いま私一人に怯えている人がどうやって守ってくれるの？」
武器を持っていると言っても刃はない。殴られれば痛いだろうが、先陣を切る者が片腕を犠牲にする覚悟で突っ込めば、一人が武器を無効化している間に他の二人が七歌を拘束することも可能だ。
それをしない、もしくは出来ないのは美鶴たちが怯えているから。大人の男性が味方にいるというアドバンテージを持っていながら、年上の美鶴もゆかりと一緒になって怯えている時点で何かあっても守ってくれるとは思えない。
七歌がはっきりとそう返せば、美鶴は何も言い返せないと表情を歪ませ拳を強く握り締める。身体能力で言えば美鶴よりも七歌の方が

上なのだ。彼女ならば敵が来ても一人で走って逃げる事も出来るだろう。
　相手に何も言い返せず美鶴が黙っていれば、さらに七歌は言葉を続けた。
「桐条美鶴、私は八雲君がいるからここへ来たし、これからも彼の傍に居ようと考えてる。そして、ここにいるために両家の間に何かしらの取り決めが必要なら従うつもりもある。だけど、そんな取り決めはなかったし、無断で盗撮しておいてそれを他の生徒や男性教師が見ているとなれば、私は家を通して抗議せざるを得ない」
　家の知名度ならば桐条家の方が上だが、格で言えば旧家の九頭龍家も負けてはいない。古い家同士の繋がりは馬鹿に出来ないので、もし七歌が正式に家を通じて抗議してくれれば、桐条家は示談に持ち込むためにかなりの労力を割く必要があった。
　二人のやり取りを見ていたゆかりは、美鶴が彼女を湊に最も近い人間と評した意味を理解し、強い相手から自分の身を守るため無意識に足のホルスターに手を伸ばしかけた。
　すると、真っ直ぐ美鶴を見つめていたはずの七歌が、深紅の瞳をゆかりに向け視線だけで彼女を牽制し、余計なことはしない方がいいと警告する。
「無駄だよ岳羽さん。その足に着けた拳銃を抜こうとしても、貴女が抜いて構えるより私の方が速い。この眼は未来を視るからね。貴女が動き出そうとしたときには、私は既に貴女に切りかかってるよ」
　未来を視るという彼女の言葉の意味は理解できないが、六メートルの距離など七歌なら三歩で制して、薙刀が十分に届く範囲だろう。
　ゆかりが持っている拳銃は武器ではないので、七歌の言う通りゆかりが構えるよりも相手の攻撃がゆかりを打つ方が速い。
　次にまた無意識に拳銃に触れようとすれば、七歌が問答無用に攻撃してくる可能性もあって、ゆかりが胸の前で手をぎゅっと握ると、状況を改善しようと美鶴が改めて七歌の説得を行った。
「七歌、話をするから武器を置いてくれ。多分、信じられないと思うがちゃんと話すから」

「信じて貰えないと思うなら、私に有利なこの状況を維持しておいた方が良いんじゃないですか？　武器を置いたら有利な状況が崩れて私にとってはマイナスです。逆を言えばそれは美鶴さんたちにとってプラスに働きます。少しでも信じて欲しいなら、こっちにデメリットを発生させちゃダメでしょ？」
　現在、両者の関係は対等ではない。美鶴たちの非常識な真似に七歌が怒っており、訴えられれば負けるのも美鶴たちなので、話を聞いて貰えるだけでもありがたいと思うべきなのだ。
　武器を置いて欲しいのなら、最低でも三人は手足を拘束して何も出来ない状態になるくらいでないと、七歌は話を聞こうとも思わないだろう。
　美鶴としては落ち着いて話をしたかっただけなのだが、相手側の言い分も当然であると理解を示し、このまま話を始めることにした。
「……わかった。まず、君がどれだけ状況を把握しているか確認するため、いくつか教えて欲しい。君は毎夜零時に訪れるこの時間を知っていたか？」
「ええ、八雲君たちの事故が遭って少し経った頃からですし、だいたい十年くらいの付き合いになりますかね」
　無駄な説明を省くため七歌側の理解度を測ろうと思ったのだが、その答えには美鶴だけでなく幾月やゆかりまでも驚愕する。
　十年といえば美鶴とほぼ同じ時期には目覚めていたことになり、適性に目覚めて数ヶ月のゆかりなどより大先輩にあたる。
　いくら何でも、幼い少女がたった一人で周囲に報せることも知られることもなく、十年間密かに影時間を過ごしてきたとは信じられなかった。
「十年だと？　君はそんなにも一人でこの時間を過ごしてきたのか？」
「電子機器が使えないのは不便ですし、他の人は棺桶になっててつまらないですけど、別にこれといって何も起こりませんからね」
　確かにシャドウが出るのは巌戸台周辺だけなので、東京にすらいなかった七歌にとって、影時間は不便だが人より一時間多く一日を過ご

せるくらいのものだったのかもしれない。
　ただ、そういう事なら名称やシャドウについての説明だけで済むと考え美鶴は話を続けた。
「そうか。この時間は影時間と呼ばれていて、実はある化け物が出現する危険な時間帯なんだ」
「化け物ってシャドウの事ですか？　それならペルソナ持ってるから大丈夫ですよ。成功率は低いですが、さっき扉を壊したみたいにして倒せますから」
『っ!?』
　いざ話を進めようと思えば、七歌が既にシャドウやペルソナについて知っていると分かり、美鶴たち全員が先ほど以上に驚いた。
　最初に寮へやってきたとき、七歌は影時間の中を歩いて寮までやってきた。その途中で荒垣と出会っていたので、もしかするとシャドウと遭遇して彼から話を聞いたのかもしれないが、これは改めて確認する必要があるとして幾月も質問をぶつける。
「私は月光館学園理事長の幾月だ。それで九頭龍君、君はシャドウやペルソナのことを知っていたのかね？」
「呼び方は知らなかったけど、ペルソナについては守護霊って勝手に呼んでて、影時間の存在を知覚してから少しして認識してましたよ。さっきも言いましたが成功率は低いけど集中すれば呼び出せますし」
　確かに召喚器を使わずに呼び出すことも可能だが、召喚器の有無で成功率と疲労度はかなり変わってくる。話を聞くとその特徴とも一致しているので、七歌の話は本当であり、彼女が既にペルソナ使いなのは間違いないようだ。
　候補者として監視していたつもりが、前提条件が間違っていたことに美鶴たちも困り顔を浮かべる。ただ、そういえば七歌の話に気になる部分があったので、美鶴は確認のためその部分について尋ねた。
「まさか既にペルソナを覚醒させていたとは……。七歌、君はシャドウやペルソナについて誰から聞いたんだ？」
「誰でも良いでしょ、そんなの。今は盗撮について弁明する機会を与えただけなんですから、脇に逸れずに話を続けてください」

会話が成立したと思えば冷たい反応。それも当然で七歌の言い分が正しいのだが、そういった反応に慣れていない美鶴としては少しショックを受ける。
けれど、彼女の気が変わるといけないので、美鶴は気を取り直して自分たちの説明を始めた。
「あ、ああ、シャドウについて知っているなら話が早い。私たちはシャドウの脅威から人々を守るため集められたペルソナ使いや候補者の集団なんだ」
顧問である幾月は違うものの、美鶴もゆかりもペルソナ使いと候補者だ。ロードワークがてら見回りをしに出ている者もいるが、組織としてシャドウ対策に当たっている。
組織名は特別課外活動部、通称S・E・E・S・だと伝えたところで幾月が説明を引き継いだ。
「影時間には希に一般人が迷い込むことがある。そういった者を守ったり、徘徊するシャドウを排除することを我々は任務としていて。監視してたのは候補者だった君の様子を見ていただけなんだ。影時間の適性やペルソナに目覚めると最初は精神的に不安定になってパニック症状を起こす者もいるからね。そういったときすぐに向かえるよう影時間中は見ていたという訳さ」
人は理解できない状況に置かれると、現状を把握しようと必死になるあまり冷静さを失う。七歌も本来ならそうなる可能性があったので、もし混乱していれば、すぐに向かって落ち着かせてあげようと思っていたのも監視していた理由の一つだ。
その点において嘘はないので、話を聞いて考え込んでいる七歌からの反応を待っていれば、相手は考えがまとまったのか顔を上げて口を開いてきた。
「たとえば、寮の中は防犯のために安全カメラが設置されてるって事前に説明していれば、流石に個人の部屋の中まで撮られてるとは思わなくても、知ったときには少し不信感を軽減出来ますよね？　どうしてそういう問題が起こったときのための行動をしておかないんですか？」

それを言われてしまうと何も反論できない。カメラは本体が見えるようなタイプではなく、巧妙に隠された超小型の隠しカメラなので、そもそも見つかると思っていなかったのだ。
知らずにカメラの前にポスターを貼ってもしょうがないと言えばしょうがないし、そういったときには監視を諦めるつもりだったのだが、七歌は部屋の中を特に探りまくった訳でもなく発見していた。
彼女ほどの察知力を持っている者がそういるとも思えないが、今後は彼女の指摘通りに不信感を持たれぬよう先に説明しようと決めて、幾月たちは自分たちの不手際を詫びた。
「すまない、考えが足りなかったよ」
「いや、考えって言うか足りてないのは常識ですけどね。候補者って事は私を仲間にしたかったって事ですよね。けど、信頼を裏切る行動ばかり取っていて、普通に考えて仲間になって貰えると思います？」
変人のような振る舞いをする七歌だが、彼女は周囲からどう見られるかを自覚した上で行動している。自覚していると言うことは一般常識を理解している訳で、そんな彼女にすれば美鶴たちの行動は配慮不足ではなく常識の欠如であった。
学校ぐるみの盗撮など犯罪でしかないので、七歌の言い分も当然だが、いまの様子で既に仲間に誘える空気ではないと状況の悪さを悟った美鶴が見つめる前で、七歌は失望したとばかりに溜息を吐いて背中を向けた。
「明日、私が学校から帰るまでに部屋のカメラを外しておいてください。それじゃあ」
言うなり彼女は部屋を出て行った。多分、自室に戻ったと思われるが、生憎とモニターが破壊されているのでカメラの映像は確認できない。
再びカメラで監視しようものなら、彼女は今度こそ家を通じて学校と桐条グループを訴えてくるはず。なので、ここは彼女の言うとおり学校が終わって帰ってくるまでに、私室のカメラ撤去と新しいモニターをグループの方に頼んでおくことにした。
そうして、七歌が去った部屋の中では、折角の新メンバー候補との

関係が一気に悪くなってしまったことで、苦笑いせずにはいらない幾月たちが残った。
「困ったことになったねぇ」
「ええ、やはり最大限の慎重さで臨むべきでした。彼女とはまた改めて話をしてみます」
「うん。僕たちより桐条君の方が親しいからね。彼女も話を聞いてくれるだろう。よろしく頼むよ」
今回のことは七歌が見逃してくれただけだ。本当ならば影時間が明けてすぐに警察を呼ばれてもおかしくなかった。
その点において美鶴たちは大きな借りが出来た訳だが、美鶴としては友人として七歌とは個人的に親しいままでいたい。
故に、容易ではないと思うが、明日からどうにか話をすることで彼女の信頼回復に努めていくと美鶴は約束した。
だが、美鶴とゆかりは影時間が明けて部屋に戻った際、七歌の怒りが自分たちの予想を遙かに超えていたことを理解する。
なんと彼女たちの私室の扉が蝶番ごとドライバーで丁寧に外され、美鶴の部屋にいたっては私室の中にあるバスルームの脱衣所の扉まで外されていたのだ。
そして、部屋の前には三脚にセッティングされたビデオカメラが部屋の中を写すように配置され、〝触ったら訴訟〟の張り紙までされており、自分たちがしたことをその身で思い知れとばかりにばっちり報復がなされていた。
外された扉はというと、女子フロアの談話スペースに三枚重ねた状態で鎖で縛られ、さらに大きな南京錠で解けないようにするという徹底ぶり。
この間違った力の使い方は湊を彷彿とさせるが、二人の関係を知っている美鶴は、ここまで似なくてもいいのにと頭を抱え思わず溜息を吐いた。

第百九十六話　戦いの訪れ

４月９日（木）

朝――月光館学園

七歌の作戦室強襲というハプニングから一夜明けた翌日。ゆかりは寝不足で怠そうな足取りのまま学校に登校してきた。

影時間が明けた後、自分たちの部屋に戻ろうとしたゆかりと美鶴は、私室の扉が撤去された上に部屋の中を写すようにビデオカメラがセッティングされている事に気付いた。

犯人は七歌確定ではあるものの、自分たちがしていたことを考えれば、相手はただやり返してきただけなので強く言うことは出来ず。さらにカメラに触ったら先の件で訴訟だと書かれた紙も張られていたので、いい気分ではないがしばらくはしょうがないと受け入れることにした。

しかし、七歌の本当の復讐はそこからで、午前二時頃からおよそ一時間おきに大音量の目覚まし時計が様々な場所で鳴り響いたのだ。

一つ目は美鶴のベッドの下、二つ目はゆかりの机の下、三つ目は女子フロア談話スペースの椅子の下など、隠された場所はバラバラだが部屋の扉がないのでどこで鳴っても二人の耳に届いてしまい、少し寝ては起こされるせいで寝不足になっていた。

また、三つ目の目覚ましを止めてようやく少し眠れると思われたときも、日課のランニングのために六時前に起きてきた七歌が、背中に木刀を担いで廊下で準備運動を兼ねたラジオ体操を始めるという暴挙に出たことで、結局まともに寝られずに登校時間が来てしまい。ゆかりは昼休みに櫛名田の部屋のベッドで仮眠させて貰おうと思いながら学校へやってきた。

すると、生徒玄関のところで駐車場の方から歩いてきた湊と遭遇し、疲れてはいるが朝から会えて少し嬉しかったことで笑顔を浮かべた。

「おはよ、今日は一人なんだ？」

「ラビリスが朝練だったからな」

「そっか」
違うクラスになってしまうことに慣れたのか、今ではこうやって朝偶然会うだけで喜べる自分の単純さにゆかりは苦笑する。
靴を履き替えていた湊はそれを見て不思議そうにしているが、彼が気にすることではないので、何でも無いとだけ告げて彼女は購買に向かう。
今朝は寝不足とストレスのせいで頭が働かず、七歌のカメラから死角の位置で着替える必要があったなど、ボケボケ状態では学校の準備にも少々手こずった。そのため朝食など摂る余裕もなかったことで、学校に来てからパンくらいは食べておこうと思った次第である。
もっとも、食欲はないので菓子パン一つとペットボトルの紅茶で済ますが、買い終わって後ろで待ってくれていた湊と一緒に教室へ向かおうとしたとき、横から凄まじい速度で両者の間に割り込む者がいた。
「うわっ!?」
急に何かが目の前に来たことで驚いたゆかりは数歩下がるが、距離が空いて相手を見る余裕が出来たことで視線を向ければ、割り込んできた人物が件の七歌であると認識する。
どうして相手が割り込んできたのかは不明だが、その瞳は明らかに怒りを表わしており、背中に湊を庇うようにして壁になった彼女は、キッと鋭い視線でゆかりを睨みながら口を開いた。
「すみませんがうちの八雲君に近付かないで貰えます？　岳羽さんみたいな人が傍にいると、八雲君の教育上良くないので」
「は、はぁ？　だから、彼は有里湊でそんな名前じゃないんだけど？　それに近付かないでって意味分からないし」
昨日の今日なので七歌が敵意剥き出しなのは分かるが、怒っている理由が湊に近付いていたからとなると意味が分からなくなる。
そも、彼女は転校初日から何故か湊を八雲君と呼んでいるが、ゆかりたちは彼の名前が有里湊だと知っている。免許証にもそのように書かれているし、学生証にもはっきりと記載されているので間違いない。

だというのに、彼女は自分が間違っているとは微塵も思っていないようで、ゆかりの言葉を無視して湊の方へ振り返るなり、ゆかりの危険性について熱く語り出した。
「八雲君、この人に近付いたらダメ。美鶴さんとグルになって寮の私室を盗撮するような人間だから危ないよ。幾月とかいうオッサンと揃って女子の盗撮映像売ってるんだから」
「なっ、ち、違うからね？　誤解だからっ」
盗撮は確かにしていたが、その映像を売ったりなどしていない。
理事長である幾月の名前まで出てきたことで信憑性が増し、近くで自分たちを見ている生徒から余計な噂が広まってしまうと困るため、ゆかりは必死に彼女の言葉を否定した。
もっとも、ゆかり自身は長い付き合いの中で湊がこういった話を簡単に信じるとは思っていない。彼はどういう訳か他人の嘘を高確率で見抜くので、裏家業で培った何かしらの勘なのか、今回の話もそれによって真贋を見抜いてくれるはず。
そう考えて少しばかり安心していたのだが、湊にゆかりの危険性を熱弁していた七歌が急に振り返り、ゆかりと視線を合わせるなり敵意の籠もった言葉をぶつけてきた。
「岳羽さんは元カノでしょ。現在は他人なんだから八雲君に付きまとわないで」
「別れた後も交友を続けるかどうかは私たちの勝手じゃない。ていうか、貴女の方こそなんなのよ。有里君のこと変な名前で呼んだり訳わかんないこと色々言って」
確かに元カノで現在は他人かも知れないが、部活仲間で友人だとゆかりは思っている。
それは他人ではあっても赤の他人ではないので、誰と勘違いしているのか不明だが、転校してきたばかりのくせにお前こそ湊に付きまとうなと言い返した。
すると、相手は変な名前呼ばわりはやめろと言いつつ放っていた怒りのオーラを僅かに弱め。そのまま自分の腰に右手を当てると、
「自分はふりかけみたいな名前のくせに、菖蒲おばさまが付けた由緒

正しい名前を変とか言わないでくれる？　それに私は八雲君の血縁者。父親同士が兄弟の従姉弟であり姉だよ」
　己と湊の関係について高らかに宣言した。
　瞬間、周囲の空気が固まる。言われて二人を見比べると、生まれ持った品の良さなど共通点が感じられ、さらに言えば顔つきが似て無くもない。
　美人度で言えば湊に軍配が上がるし、髪や瞳の色も違うので簡単には信じられないが、七歌があまりにはっきりと告げたことで一部の者が本当にそうなのかなと信じかけたとき、今まで黙っていた湊が薄く笑って口を開いてきた。
「……俺の周りは自称姉が多くて困るな。たまには妹が来ればいいのにと思えるくらいの余裕が出てきた」
「まだ完全に記憶戻ってないの？　ほらほら、実家が隣で一緒によく遊んだ七歌だよ？　英恵おばさまのことを思い出してるなら分かるはずなんだけど」
「俺は一人っ子だしお前なんて知らない。岳羽の言った通り対人関係に口出しされる覚えはないしな。分かったら妄言はそこまでにしておけ」
　湊に義妹好きという属性はないが、姉ポジションを狙ってくる者は過去にもいたので、たまには逆パターンで来てもいいんだぞと軽い冗句を飛ばす。
　それに対して七歌は未だに記憶喪失で自分のことは思い出せていないのかとガッカリしながら、それでもゆかりのような人間と関わると碌な事にならないと湊のためを思って忠告した。
「私の事を思い出せてないのは分かったけど、それでも岳羽さんと関わるのはダメ！　八雲君は有名人になったんだから、こういう非常識な盗撮魔と一緒にいたら変な写真撮られるよ」
「……話はよく分からないが、岳羽の盗撮癖は前からだぞ。人の寝顔を勝手に撮って、携帯のプライベートモードの待ち受けにしているくらいだし」
　言われたゆかりは寝顔隠し撮りが本人にバレていたことに驚き視

線を泳がす。
彼女の携帯には携帯側面にあるボタンを押すことで起動出来るプライベートモードが存在し、そちらは通常とは違う待ち受け画面が設定できた。通常モードとの違いはアイコンの並び換えが出来たり、お気に入りページへのショートカットがボタン一つで出来るくらいなので、通常モードの方に慣れていれば大して恩恵はないが、こっそりと撮った彼氏の綺麗な寝顔写真を待ち受けにして癒やされていたので気付かれていたとなると恥ずかしさしかない。
ゆかりが視線を泳がせながら頬を染めて言い訳を考えている間、そちらを放置しておくことにした湊は、さらに続けて自分の盗撮被害への考えを七歌に語る。
「だが、俺の隠し撮りに関しては今更だ。街中を歩いていても撮られることがあるからな。撮ったやつ全員にいちいち消させていたらいくらあっても時間が足りない」
「むぅ……。八雲君が言うならいいけどさ。岳羽さん、あんまり八雲君の周りを彷徨かないでね。はっきり言って迷惑だから。それじゃあ、八雲君も授業頑張ってね。バイバイ」
湊があまりに寛容だったことで、これ以上言っても今は無駄と判断したのか七歌は湊にだけ笑顔を向けて去って行く。
その際、キッと鋭い視線でゆかりを牽制することも忘れないのは流石の一言だが、後に残されたゆかりは会ったばかりの相手が自分の元カレの血縁者を自称して来たりで色々と混乱していた。
「なんなのよ、もう……」
「ま、あれはあれで誰かと勘違いして俺を心配してるんだろ。俺のことについてはどうでもいいが、相手の態度は元を辿れば岳羽たちが悪いんだから、自分たちの行いの報いとしてしばらくは我慢しろ」
「えっとぉ……どういう事か分かってたりする？」
「……さぁな」
事情を詳しく知らないはずの青年が的を射た発言をしてきたことで、ゆかりは思わずドキリと心臓を跳ねさせる。
彼は桐条を憎んでいるので巌戸台分寮についても知っていそうだ

が、被験体にされていた彼が今も影時間に関わっているかどうかは不明だ。蓋をしていたい辛い記憶だと思っている可能性もあるため、これ以上聞くのは躊躇われた少女は話を切り上げると、彼の言葉を真摯に受け止め教室へ移動することにした。

影時間――巌戸台分寮

学校も終わり帰ってきたゆかりは、影時間になると昨日までと同じく寮の作戦室に来て、今日の七歌の様子を語り、美鶴や幾月に自分は話も聞いて貰えない状態だと改めて言った。

彼女たちのいる作戦室の扉やモニターは既に新しい物に交換されて直っており、七歌の言いつけを守って彼女の部屋からはカメラも撤去されている。

故に、いま彼女が何をしているのかは分からないが、きっと武器を持ったまま起きているのだろうと予想しながら、幾月は持ってきたアタッシュケースを開いて二人にみせた。

「ふーむ、岳羽君の会話に応じてくれないとなると、やっぱり桐条君に任せるしかないみたいだね。せっかくこうして彼女用の召喚器も用意したんだが」

「彼女は召喚器を使わずに呼び出せるようですが、消耗と成功率を考えれば召喚器の有無は大きいです。こちらについて貰えなくても、影時間に勝手に動くのなら自衛手段として持っておかせた方がいいかと」

ペルソナは己の心の力を具現化させた物なので、集中さえ出来れば呼び出すのに召喚器は必要ない。

ただ、召喚器の補助効果はかなりのもので、召喚に慣れていない者でも召喚成功率を飛躍的に高め、さらに召喚をスムーズにさせることで精神力の消費を抑える事も出来る。召喚器を使わずに呼び出した際に消費する分のエネルギーがあれば、召喚器を使うだけで三回はペルソナを呼び出せるのだ。

七歌が特別課外活動部に入るかどうかはともかく、勝手に動き回ってシャドウに襲われては大変なので、最低でも召喚器を渡して自分の

身を守れるようにさせなくてはならない。
その事を美鶴が伝えれば幾月も同意するように頷き、彼の手にある召喚器をどうやって渡すか話し合おうとしたとき、コンソールから呼び出し音が鳴り響き外に出ていた真田から通信が入ってきた。
《美鶴、応答してくれっ》
「どうした明彦？」
声の調子がいつもと違う。様子がおかしい相手に美鶴は怪訝な表情をして応答すれば、真田の持っている通信機から何かが暴れるような音が届いて、すぐに彼の声も返ってくる。
《シャドウが現われた。だが、いつものやつとは違う。見たらお前も驚くぞ！》
「言っている場合か！　今はどういう状況だ？　助けは必要なのか？」
《フッ、今まさに追われている状況だ。もう少しでそっちに着く。雑魚も一緒に湧いているから、そちらでも戦闘準備をしておいてくれ》
それだけ言うと通信は切れてしまった。普段見ない強敵に追われながらも笑っていられる余裕があるのは良いことだが、非構成員の七歌がいるここへ敵を連れて戻ってきてしまうのは非常に拙い。
組織の活動をどこか遊びのように捉えている真田に思わず呆れつつ、美鶴は右手を額に当てて数度頭を振ると思考を切り替えた。
「理事長、今の通信の通りです。私はこれから明彦と共にシャドウ討伐に当たります」
「あ、ああ、分かった。くれぐれも気をつけて」
「岳羽、君は七歌の護衛だ。彼女の召喚器も一緒に持って行き、事情を話して避難してくれ。もしも戦闘になったときは君が彼女を守るんだ」
「え、あの……はい、分かりました」
実戦経験のないゆかりはお前が守れと言われて不安な顔をする。相手は今まさに険悪な状態にある七歌だ。そんな彼女に事情を説明して避難して貰い、さらに緊急時には一度も成功していないペルソナの召喚を行って戦わなくてはならない。

そのことを思うと不安で仕方が無いが、美鶴はこれからもっと危険な前線に出るのだ。適性を見いだされペルソナ使いの組織に所属していながら、自分以上に危険な任務にあたる者に対して、自分には出来ませんと我が儘を言うことは出来ず、ゆかりも幾月から七歌の召喚器を受け取ると部屋を後にした。

＊＊＊

本日の影時間が始まってから七歌は何やら胸騒ぎのような物を感じていた。

悪意や敵意ではないが、何か強い意思を持った存在が近付いてきている。先日のシャドウと似たような存在であるならば、自分の身を守るために戦わなくてはならない。

美鶴たちが対処にあたる可能性もあるが、相手の実力も構成員の数も把握していないので、七歌は彼女たちを信じずに自分の身は自分で守ろうと考えていた。

寝間着から私服に着替え、練習用で鉄芯の入った重い薙刀を手に取る。実家から持ってきたお守りのペンダントが服の中にあることを確認し、準備は出来たと部屋を出ようとしたとき、部屋の扉をノックする音が響いた。

《ゴメン、起きてる？　ていうか、緊急事態だから起きて欲しいんだけど！》

聞こえてきたのはゆかりの声。緊急事態ということだが、七歌は自分が感じている存在についての事だろうかと予想しながら、嫌々ではあるものの扉を開いて相手と口をきく。

「なに？」

「あ、良かった。起きてた。っていうか、なんで武器持ってるの？」

「なんでって何か来るからだけど？」

七歌が既に武装していた事にゆかりは驚いている。昨日の事があったので警戒して武器を持っていると思ったのか、一歩引いて表情を強張らせていたゆかりであったが、少女から武器を持っていた理由を聞くとすぐに冷静さを取り戻している。

「あなた、シャドウの気配が分かるの？」

「気配は分からないけど、何か強い意志みたいなのを持った存在が近付いてきてるのは分かるよ。明確にこっちに意識を向けてる感じだし」
シャドウの気配というものは分からない。ある程度まで近付けば何かがいるというのは雰囲気で分かるが、もしここから駅前まで探知してみろと言われても七歌には出来ない。
ただ、いま近付いてきている者はここを目指して進んでいる。さらに理由は分からないが七歌は自分も標的になっている気がしていた。
人は自分に視線や感情が向けられると気付きやすくなる。相手がシャドウであってもそれは変わらず、狙われているのならせめて戦いやすい状況を作っておこうと七歌は考えていた訳だが、ゆかりは相手に心の準備が出来ているのなら説明する手間も省けると、幾月から預かり持ってきた召喚器を渡してきた。
「分かってるなら話が早いや。これ、あなた用の召喚器。弾は出ないよ。頭に当てて引き金を引けばペルソナが呼べるの。使った方が呼び出しやすくなるから持ってて」
言いながらゆかりは銃口を天井に向けて数度引き金を引いて見せる。弾が入っていないことは確認して貰えたはずなので、そのまま七歌に召喚器とホルスターを渡せば、若干疑いつつも七歌はそれを受け取ってホルスターのベルトを腰に巻いた。
ペルソナの召喚が不安定だった彼女にすれば。補助のための道具があれば余計に戦える。既に覚悟は決めているので、装備も整ったのなら後は戦う場所を選ぶだけだ。
薙刀を持ったまま部屋を出た彼女は、戦いやすそうな場所はあそこしかないと目星を付けて移動を始める。すると、相手の目的地を分かっていないゆかりが慌てて静止の声をかける。
「あ、ちょっと、どこ行くの？」
「どこって屋上だよ。道路より広いし敵が来ても見やすい分戦えるから」
てっきり逃げるとばかり思っていたゆかりにすれば驚きの発言だ。戦いなど現代社会で生きる学生とは無縁のもの。だというのに、七歌

は既に意思を固めた強い眼差しで屋上を目指そうとしている。
相手を止めたいが誰に何を言われようと七歌は言うことを聞かないだろう。それこそ、八雲君とやらと同一視している湊が彼女に命令しないかぎり。
ゆかりが何も言わないことで話はそれだけかと会話を終了した七歌が再び進み始めれば、彼女を一人で行かせる訳にはいかないゆかりも心の中で冗談でしょと運命を呪いつつその後を追った。
＊＊＊
真田から通信を受けた美鶴は寮から少し離れた場所で真田と落ち合い、そのまま湧いていたシャドウの討伐に当たっていた。
どれも大した強さではないが数が多い。レイピアを敵の仮面に突き刺し霧散させ、横から来ようとした者にはブーツで蹴りを入れて距離を取らせる。
「ポリデュークス！」
そんな彼女の傍にいた真田は怪我をした脇腹を片手で押さえつつ、召喚器を使って己のペルソナを呼び出し、広範囲に雷を放つことで雑魚を一掃した。
まだ敵は残っているが囲まれることを防いだ二人は一度集まり、周囲に気を配りながら敵について言葉を交わす。
「明彦、お前の言っていたすごいやつとやらがいないようだが？」
「ああ、来るまでは追われていたんだが、いつの間にか雑魚だけになっているな」
周囲にいる敵はマーヤばかり。多いと言っても五十体もいないので、広範囲スキルと近接格闘を合わせて戦えば持久戦になっても勝てるはずだった。
しかし、真田の話ではこれまで見たこともない敵がいたはず。そいつがどの個体を言っているのか分からないが、少なくとも今現在は姿を見せていなかった。
美鶴がその事を尋ねれば真田も自分を追っていた相手がいないことを認め、ではどこへ行ったのかと近付いてきた敵を切り伏せながら美鶴は真田に問いかけた。

「逃げた可能性は？」
「その可能性は低い。ここへ来る途中にウチの学校の二年を見つけてな。適性者候補のようで状況を話すと次第に落ち着いていった」
　美鶴が敵を切り伏せている間に、真田も反対から来た二体の敵をコンビネーションパンチで牽制してから、止めにペルソナの拳をお見舞いして霧散させる。
　そうして改めて会話が出来る状態になれば、再び集まり美鶴が召喚したペンテシレアに真田の回復をさせながら話を続けた。
「それは喜ばしい事だが、それと逃げた可能性がないことがどう繋がるんだ？」
「そいつを男子寮に送る途中で敵と遭遇したんだ。やつは適性を持つ俺たちを明確に狙っていた。それが分かったからより適性の高い俺が囮になって二年を逃がせた訳だが、おかげで肋骨をやられた」
　ずっと脇腹を庇っていたので美鶴も相手が怪我をしているとは思っていたが、骨折となると自分のペルソナでは治しきれないと応急処置以外は諦める。
　ただ、新たな適性者候補が見つかったというのは朗報だと喜びかけたところで、敵がより強い適性の者を狙うという部分が引っかかり、美鶴は最悪の可能性に到った。
「なるほど……いや、待て。だとすると、そいつは寮へ向かったかもしれない！」
「なに？　寮には岳羽と転校生しかいないだろう」
「七歌が力に目覚めたのは私と同時期だ。本人の話では不安定ながら召喚器の補助無しに召喚も成功させている。適性の高さで言えば私たちよりも上かもしれない」
「なんだとっ!?」
　目覚めた時期が適性の高さに直結する訳ではないが、数年前に召喚を成功させている七歌ならば美鶴や真田と同じだけの適性を持っていてもおかしくない。
　いや、桐条グループの確認している中で最も高い適性を持った有里湊の血縁者となれば、特殊な血筋もあって美鶴たち以上の適性を持っ

ている可能性の方が高いくらいだ。
七歌について詳しく知らない真田はそこまで分かっていないだろうが、それでも妹の同級生である女子たちが危ないと聞き。思考を切り替えると鋭い視線で周囲の敵を睨んで、ここをすぐに突破することを選ぶ。
「急ぐぞ、美鶴！」
「わかっている！」
こんな事ならば七歌とゆかりも一緒に寮の近くで迎撃に当たっていればと、美鶴は自分の判断を悔やまずにはいられない。
自分たちが向かうまでに最悪の結末を迎えることも考え、すぐにそれを振り払うと目の前の敵を倒すことに集中した。
＊＊＊
屋上にやってきた七歌は、屋上に向かって吹いてくる生温い風に髪を揺らしながら敵を待っていた。すぐ後ろには怯えた様子のゆかりがキョロキョロと周囲を見渡しているが、向かってくる大きな気配は正面から感じるので、敵が来るのが前方からなのは確定していた。
待ち始めてどれくらいの時間が経っただろう。三分か、それとも五分か。時計が止まっているせいで時間は分からないが、少し待ったと思える程度の時間が経過したころにそれは現われた。
「ひぃっ!?」
ピチャピチャと水音のような物が聞こえていたと思えば、屋上の縁に巨大な黒い手がかかり下から青い仮面が現われた。
それがずっと感じていた気配でありやってきた敵の正体だが、実戦経験がないのか七歌の後ろでゆかりが肩をびくりと揺らして表情を引き攣らせている。
七歌自身も敵に対して一切の恐怖を感じていない訳ではないものの、既に敵が目の前にいて怖がってばかりもいられない。震えて立ち止まっていれば自分が死ぬのだから。
「……怖いなら邪魔だから下に戻ってなよ。守って戦うほどの余裕なんてないだろうし」
「な、なんでそんなに冷静なのよ。目の前に敵がいるんだよ!?」

敵は複数の腕で身体が形成された化け物。全ての腕が一ヶ所で繋がっており、そこか仮面を持っている腕を切れば倒せるのだろうかと七歌は予想する。
少女が戦う前に相手を分析している間に屋上に上がってきた敵は、今まで何も持っていなかった手に西洋剣を出現させ、それを見た七歌は近付けば八つ裂きだなと他人事のように考えていた。
相手も既に戦う準備は出来ている。ならば、こちらも動くしかないと召喚器を手にした七歌は、そのまま召喚器をこめかみに当てながらゆかりの問いに答えた。
「分かってるじゃん。目の前に敵がいるから、だから覚悟を決めるしかないんだよ！　ペルソナァ！」
これではまるで自殺のようだ。そう思いながらも七歌は今までよりも遙かにクリアな思考で召喚を成功させる。
受け取った召喚器は中に何かが入っているようで、グリップから青い光が漏れているが、その何かによって七歌はより強い死のイメージを感じることが出来た。
それで召喚が簡単になったということは、ペルソナの召喚は死を具体的にイメージすればするほど容易になり力も増すに違いない。
ならば、戦わなければ死ぬ今の状況はこれ以上ないほどに力を発揮できるはず。現われたエウリュディケと確かな繋がりを感じて、七歌は彼女に攻撃を命じた。
「お願いエウリュディケ！　マハガル！」
丈の長い白いキトンを身に纏ったエウリュディケは、手をかざすと髪を揺らしながら広範囲に暴風を巻き起こす。
風はそのまま敵へと向かい、動き出そうとした敵を押し返すことには成功したが、以前、街中で遭った敵のように一撃で消し去るには至らなかった。
見たところダメージも軽微、これでは持久戦になってしまいそうだと考えながら、七歌はエウリュディケが消える前に武器を持って横に駆け出す。
あのままその場に残っていれば、馬鹿みたいにぼけっと立って戦い

を見ているゆかりを巻き込むと考えての判断だ。
敵も何もしていないゆかりより、ペルソナという戦闘力を持った七歌を敵と定めたようで追ってきた。その間にゆかりは反対側に逃げているが戦力にならないので気にしない。
ただ、七歌の武器は鉄芯が入っているとはいえ、木で出来ている刃のない薙刀なので格闘でのダメージは見込めない。だとすれば、やはりペルソナ頼みの戦法しかないかと思ったところで、敵が腕だけを伸ばして切りかかってきた。
「なっ、延長コードみたいにぃ！」
軽口を叩いているようだが、これは素の性格によるものだ。真っ直ぐ狙いを定めて伸ばされた腕は剣を持っているので、七歌は大きく回避する事よりも最小限の回避といなす事に目的を絞ってタイミングを計る。
第一の腕が来るまで三秒、そう読んだ三秒後に本当に腕はやってきて、動き出していた七歌は横に振るった薙刀で剣の側面を叩いて受け流す。
さらに第二の腕が来るまで二秒、そちらの読みも見事に当たり、やや上から来たものは身体を捻ったままサイドステップで躱して、相手が地面を切りつけたところを七歌も上から叩き付けるように切りつけ攻撃した。
手首を狙ったことが上手く働いたのか、それで相手は第二の腕で持っていた武器を取り落としたが、薙刀でそれを遠くに弾いてから距離を取った七歌は、やはり刃のない武器では瞬間的なダメージしか与えられないと苦い表情を浮かべた。
（特別硬い訳じゃない。ただ、こっちの攻撃力が弱いんだ）
深紅の瞳で敵を睨んでいた七歌は、三本に数を増やして再び迫ってきた腕を切り払い、跳んで、躱してゆく。
相手の速度が増してかなりギリギリではあるが、攻撃の軌道を読んでいるためもう少しまでなら対処も可能だ。けれど、それは相手の攻撃を七歌が捌き続けるだけで決定打のない泥仕合になる事を意味する。

ペルソナのスキルを使ったところで、最初の一撃と同じ結果に終わるのならほとんど意味が無い。
それでも、ただ防戦一方になるのは御免だと七歌は薙刀を片手持ちに切り替え、空いた手で召喚器を使った。
「エウリュディケ、ガル！」
呼び出したペルソナが風弾を放てば、敵は数本の腕を使ってそれをガードした。
相手の攻撃が止まれば移動する余裕が出来る。七歌はその場を離脱し、相手と一定の距離を保ったまま屋上を移動する。
すると、ガードを解いた相手は、七歌との戦いが長引くと考えたのか、突然方向転換し屋上の隅に移動していたゆかりの方を見た。
「まずいっ」
七歌が見ている前で、方向転換した敵はそのままゆかりを目指して移動し始めた。敵の接近に驚いている相手は、顔を恐怖で引き攣らせながら逃げようとしている。
けれど、相手が屋上の真ん中辺りにいたことで、敵の攻撃を避けるでもしなければ逃げ道などない。
あっという間に角に追い込まれたゆかりは、青い顔をして召喚器を持っているが、どうしてだかそれを使ってペルソナを召喚していない。
硬い床を蹴って急いで敵に近付く七歌は、もしや、死の恐怖が勝って召喚が出来ないのかと考えるが、剣を持った相手が目の前で腕を振り上げても、まだそんな事を言っている相手が信じられなかった。
「エウリュディケ、お願い！」
再びペルソナを呼び出し、敵の背中側に風弾を当てて僅かな時間を稼ぐ。
そして、今ここでやらなければ死ぬというのに、いつまで甘えているんだと怒りのまま叫んだ。
「〝死〟にたくなければ〝死ぬ気〟で戦え！　岳羽ゆかり！」
恐怖で固まっていたゆかりは、その声でハッとした表情を浮かべる。

何もしなければ死ぬ、だが、死の恐怖に打ち勝って死ぬ気で戦えばまだ可能性はあった。
自分はまだ死ねない。そんな思いを表わすように彼女の瞳に力が宿る。震える両手で持った召喚器を額に当てると、恐怖に打ち勝つように叫びながら引き金を引いた。
「あああぁぁぁっ!!」
そして、静かな影時間の屋上に、パリン、と硝子の割れるような音が響いた。
「……やればできるじゃん」
土壇場にならないと覚悟を決めれない甘ったれだが及第点ではある。そんな風にほっと安堵の息を吐いた七歌の視線の先には、風を纏って現われたゆかりのペルソナ、恋愛〝イオ〟が敵を吹き飛ばす姿が映った。
牛の頭骨型の椅子に座った女性型のペルソナであるイオは、七歌のエウリュディケと同じ疾風属性スキルを持っているらしい。
力に目覚めたばかりでゆかりのペルソナも決定打を持たないが、戦力が増えたことで出来ることもあると、七歌はゆかりに指示を送った。
「私が隙を作るからその間にこっちに来て！　エウリュディケ、上から潰して！」
敵越しに見えるゆかりが頷いたことを確認して、七歌はペルソナを上空へ飛ばす。それを敵が視線で追っていたので好都合とばかりにアイコンタクトでゆかりに移動を開始させ、同時にエウリュディケには上空から真下の敵に向かって暴風を放つよう命令した。
相手は複数の腕を足のように使うタコのような移動法だ。ならば、正面や後方から来た攻撃は支える腕と進む腕で負担を分散して耐えられても、上からの攻撃では等負荷になるので踏ん張るしかない。
そう考えた七歌の読みは当たり、相手がその場に押さえつけられている間にゆかりが七歌の元へとやってきた。
強敵を前にお互い決定打を持たない以上、これまでの確執を忘れて共同戦線を張らなければ死ぬのは確実。故に、七歌はゆかりの瞳を

ジッと見つめて拳を突き出した。
それを見たゆかりは七歌の意外な行動に一瞬キョトンとするが、すぐに口元を歪ませ普段の勝ち気な雰囲気で自分の拳を当てて返す。
「作戦はあるの？」
「属性が同じだから、挟み打ちで潰すか切り刻むくらいかな。ああ、切り刻むときは風を薄く薄くするように心掛けて放ってね」
これまで七歌はガルを風弾として放っていたが、かまいたちのような使い方も可能ではあった。
ただ、普通に放つよりも当たり判定が狭くなるため、剣で防がれることも考えると使いどころが難しかったのだ。
けれど、共同戦線を張った今ならば多方面から同時に攻撃を放ち、片方が外してももう一人が攻撃を当てにいける。
召喚に成功したばかりのゆかりの技術に僅かな不安が残るが、それでも自分たちに出来るのはそれくらいだと、七歌は合図を送ってゆかりと同時にペルソナを召喚した。
『ペルソナ！』
呼び出された二体のペルソナが左右に分かれる。敵は一瞬どちらを狙おうか迷った様だが、呼び出した本人を狙えばいいと気付いて七歌たちに剣を持った腕を伸ばしてきた。
それを確認した七歌は薙刀を構えてゆかりの前に出ると、作戦は続行だと背中で語ってペルソナを目標地点まで移動させる。
敵の攻撃が来るまであと数メートル、上手く捌かねば自分もゆかりも終わりだと分かっている少女は、呼吸を整えるとカッと目を見開いて武器を振るった。
右足狙いの剣を横薙ぎで弾く、そのまま勢いを利用して裏拳の要領で腹狙いの剣を切り上げ、続けてきた左脇腹狙いの剣を石突きで叩いて逸らす。最初に弾いた剣が再び戻ってこようとする瞬間に手首を狙ってローキックをかまし、相手が落とした剣を空中で弾いて二つ目の腕に突き刺した。
これら全てが僅か数秒の間に行われた事で、後ろで見ていたゆかりは目を丸くしているが、相手が美鶴に湊に最も近い人物と評されてい

た事を思い出したらしく、味方で本当に頼もしいと小さく笑った。
「いけるよ！」
「わかった！」
七歌が敵の攻撃を防いでいる間に準備は終わった。敵を挟み打ちに出来るポジションに移動していたペルソナたちは、ギリギリまで力を研ぎ澄ましてスキルを放てるよう待機していた。
召喚に成功したばかりのゆかりはそう何度もペルソナを呼べない。そのため、最初の一発が最大のチャンスだからと七歌たちは全力を初撃に掛けようと考えていたのだ。
溜めたスキルの余波か、二体の女性型ペルソナが髪を激しく揺らし、それがいつでもいけるといっているようで頼もしく感じる。
再びアイコンタクトでタイミングを計った二人は、同時に口を開き攻撃の解放を命令した。
『いっけぇぇぇっ!!』
瞬間、限界まで鋭さを増した風の刃が次々とシャドウを襲った。
伸ばした腕は無数の風で刻まれ、一際大きな刃が脆くなった部分を切断していく。これは不味いと逃げようとするも、召喚者を襲っていた腕を排除するとペルソナは今度はシャドウ自身に狙いを変えて、逃がさないとばかりに左右から風の刃を放ち続けて本体の仮面や腕にも傷を作っていく。
溜めていただけあって効果時間も長く、強敵を前に絶対にここで仕留めると心が決まっているからか二人のペルソナは本来以上の力を発揮していた。同じ力を持っていた事で相乗効果が生まれた事も強さの一因だろう。
そうして、二人が精神力が空になるまでスキルを放ち続ければ、胴体でもあった腕をバラバラに切断されもはや動けない状態となった敵が残っていた。
傷口から血が流れるように黒い靄が漏れ出しているので、相手は放っておいても直に消えるだろう。それを確認した二人は全力を出し切った事で疲労の色を見せながらも、顔には清々しさすら感じる笑顔を浮かべて再び拳をぶつけ合った。

そして、二人がそうやって勝利の余韻に浸っていると、
「無事か二人とも！」
屋上の扉が開いて肩で息をしている美鶴と真田が現われた。二人が危険だと思って全力で駆けつけてくれたようだが、屋上の真ん中辺りでくたくたになって座り込んでいる二人と、数メートル離れた場所で消えていっているシャドウを見て、美鶴たちも二人がやりきった事を察したようだった。
真田の方は後輩の女子二人が自分に怪我を負わせた強敵を倒したと知ってつまらなそうだが、美鶴の方はまだ召喚にも成功していなかったゆかりが七歌と力を合わせて戦いきったと知って、心配しつつもそれ以上に嬉しそうな微笑を浮かべて二人の元へ近付いていく。
だが、それが彼女たちの犯した過ちだった。敵が完全に消滅していないにもかかわらず、もう消えるからと気を抜いた瞬間を敵も見逃さなかった。
「っ、岳羽、転校生、避けろ！」
最初にそれに気付いたのは美鶴の後ろに続いていた真田だった。
釣り上げられた魚のようにビチビチと跳ねていた腕が、近くに落ちていた剣の一つを取って、せめて最期に一太刀とばかりに座っていた七歌たちに向けて投げたのだ。
疲労感で動けなくなっていた七歌たちも、完全に油断していた美鶴も、反応が遅れて対処できない。真っ先に気付いた真田がペルソナを呼び出そうと召喚器を抜くも、額に当てて引き金を引いている間に剣は二人に到達する。
止めも刺さずに最後の最後で油断した彼女たちのミスだが、こんな結末はあんまりだと悔しさを感じながら二人の少女が瞳を閉じかけたとき、
「カストール！」
くぐもった男の声が屋上に響き、少女たちを守るように黒いペルソナが現われた。
少女らを狙って投げられた剣は、ペルソナの跨がる馬の額から伸びる穂先に弾かれ地面に落ちる。そして、直近の脅威がなくなると黒い

ペルソナは跳び上がって、屋上の床を割るほどの威力でシャドウの仮面を踏み抜いた。
本体である仮面が破壊された事でシャドウは今度こそ完全に消えてゆく。それと同時に少女らを守ったペルソナも消えていくが、美鶴と真田は非常階段のところに立つフルフェイスのヘルメットで顔を隠した黒いロングコートの男に釘付けになっていた。
男はシャドウが消えるのを確認するなり脅威は排除したとばかりに、美鶴たちが声を掛ける間もなく非常階段を降りていってしまう。
「待て！　シンジっ……ぐっ」
真田はそれを追おうとしたが、脇腹が痛むようで追うことは叶わなかった。
男の去っていった方角を複雑そうに見つめる美鶴や、動けない自分に悔しそうにする真田など、戦いの終わりとしてはスッキリしない部分もある。
シャドウを相手に必死に戦った少女らにとっても、最後の最後で美味しいところを持っていかれたような気もするが、今度こそ本当に戦いが終わったと確信できた事で、二人はそのままその場に寝転がると疲労がピークに達したことで意識を手放していった。

第百九十七話　特別課外活動部の勧誘

４月１２日（日）
午後――巌戸台分寮

屋上での戦いの後、精神力を限界まで使った七歌とゆかりは一日眠り続けて、目覚めたのは土曜日の朝だった。

本来なら土曜日も学校があるのだが、一日眠り続けるほどの疲労はすぐには回復しないだろうと、美鶴が気を利かせてもう一日休むと事前に連絡してくれていた。

おかげでリフレッシュに一日を費やすことが出来、その間に共に戦った絆でお互いを名前で呼び合うことにもなったのだが、詳しい説明や自己紹介は全員がゆっくり出来る日曜日に持ち越された。

そして、今日がその約束の日で、全員集まったから四階の作戦室に来て欲しいと美鶴から連絡を受け、七歌も先日強行的手段によって突入した部屋の前にやってくると、新しく立て付けられた扉に向かって拳を振り下ろした。

「おい、開けろ！　ここにいるのは分かってんだぞ！　人の部屋盗撮しやがって、ぶっ殺してやるから出てこい！」

とりあえず、あの日の再現をしておく。部屋の中から驚いた声が聞こえてきたので、やはり会話には緊張感がないとねという七歌の狙いは成功した。

それが終わると今度は普通に扉を開けて中に入り、引き攣った表情をする幾月や、怪訝そうな顔をする真田に、疲れた表情の美鶴とゆかりを見てから自己紹介を改めて行う。

「やあやあ、我こそは彼の地に神遣い在りと謳われた龍の末裔也。姓は九頭龍、名は七歌。一三三代九頭龍家当主にして第一級四爪守護龍憑きなるぞ！」

「長いし、何言ってるのか全然分かんないわよ……」

「それはゆかりの学がないだけだね。ま、簡単に言うと旧家の九頭龍家当主って話だよ。本当は代行だけどね」

共闘でぐっと距離が縮まったからか、ゆかりは部活メンバーに対し

て行うように自然とツッコミを入れた。
けれど、七歌は七歌で気にしていないらしく、自分が旧家出身の人間だと伝えてから空いていたゆかりの隣に腰を下ろした。
それでようやく話し合いのメンバーが揃ったため、上座に座っていた幾月が場を仕切り直して、改めて自己紹介から始めておこうと口を開く。
「改めて自己紹介しておこう。前にも言ったが私は幾月修司、月光館学園の理事長をしている。そして、前回いなかった彼は三年の真田君」
「真田明彦だ。お前の学年に美紀という妹がいるが、適性を持っているのは俺のみで妹は実家暮らしをしている。よろしくな」
あの戦いの日の夜に姿は見ていたが、その後会話も交わさずに七歌は気を失ってしまった。目覚めた後もタイミングが合わなくて挨拶が遅れていた訳だが、よろしくと挨拶を返してから七歌はもう一人ペルソナ使いがいたはずだと首を傾げる。
「この前のフルフェイスは仲間じゃないんですか？」
「彼は荒垣真次郎、君がニット帽と呼んでいた相手だ。今は少し訳があってチームを離れている。ただ、どうやら一人でも活動は続けていたようだ」
「シンジは俺の幼馴染みでな。丁寧に変装して顔も隠していたが、ペルソナを見ればすぐにばれるというのに、出て行った手前恥ずかしいのか知らんが素直じゃないやつだ」
フルフェイスのヘルメットを被っていたせいで顔は分からず声も聞き取りづらかったが、美鶴と真田は相手の正体に気付いたらしく、どこか懐かしそうな笑顔でここにはいないメンバーの事を説明した。
七歌も荒垣とは厳戸台に来た初日に会っているため、確かにあの日もロングコートを着ていたなと共通点を思い出す。
そこからさらに出て行った理由などについても尋ねたくなるが、そういったプライベートな部分にずかずかと踏み込むほど非常識ではないため、自分を助けた黒いペルソナの持ち主がニット帽こと荒垣真次郎という事だけ覚えて七歌は幾月の話を聞いた。

「まぁ、荒垣君を除けば桐条の戦力はここにいるメンバーで全員だ。先日のような強大なシャドウが出ることは希だが、適性持ちの中でもペルソナに目覚める者はさらに希少でね。戦力が常に不足している事もあって、九頭龍君にも仲間になってもらいたいのが素直な気持ちさ」

桐条グループと言えば日本の就労人口の二パーセントを担っている大企業。その力を持ってしてもシャドウという化け物に有効な戦力を、片手の指で足りるほどしか集められていない事実に驚愕する。

七歌自身、巌戸台に来るまで影時間に適応した人間を見たことはなく、極希に迷い込んだ者はいたが偶然迷い込んだだけで翌日には影時間の記憶を失っているようだった。

知り合いばかりではなかったので、翌日普通に通学や通勤している姿を見て勝手にそう思っていた部分はあるものの、迷い込む者はいても適性を持つに至る者は少なく、ペルソナに目覚めるとなると宝くじの一等が当たるよりも発生確率が低いように思えた。

そうして、戦力の確保も大変なんだなと考えたところで、話は分かったが組織体系や福利厚生などはちゃんとしているのかと七歌は尋ねる。

「待遇とかはどうなってるんですか？　こう、危険手当とか武器の支給とか」

「学生寮を拠点としているため、表向きは特別課外活動部という部活になっている。よって、個人に対して正式に賃金を支払うことは出来ないが、歩合制の報酬で良ければグループの方から支払う事も可能だ」

これで完全なボランティアですと言われていれば断っていた。目の前に困っている者がいれば助けもするが、そうでなければいつか出てしまう被害者のために命を懸けて化け物退治などしていられない。

そも、先日のシャドウだって武器がちゃんと刃のある物ならもう少し楽に戦えたのだ。シャドウが手から取り落としていた剣を再利用出来ないかとも考えたが、後で美鶴に聞いたところ武器もシャドウの一部だったようで一緒に消えてしまったという。

そうなると、七歌は再び威力に心配の残る練習用の薙刀を使い続けるしかなかったので、歩合制だろうと報酬が出るのはありがたかった。
「ほーん、協力者みたいなのっていないんですか？」
「ポロニアンモールの交番で勤務している黒沢さんが伝手を辿って武器を融通してくれている。あとは、同じくポロニアンモールの骨董品屋も変わった道具を取り扱っている協力者だ。まぁ、対価は必要だし、骨董品屋の方は店主がいるときに行かなければ意味が無いがな」
今度の質問には交番の黒沢巡査と古くからの知り合いである真田が答える。
桐条グループでも武器など装備品について研究を進めているが、特殊な戦闘訓練を受けていない者らが武器を扱う場合、強度と軽さを両立させる必要があった。
どこかの誰かは槍や大剣を軽々振るっているが、いくら影時間の付与効果で力が増していても、何十分も武器を振り回し続けるなど普通は不可能。体力が切れれば思考も鈍り、思考が鈍ればペルソナにも影響が出る。
故に、そういった状況にならないよう限界まで軽さと強度を両立した武器を開発しようとしたのだが、残念ながら既存の素材では強度を上げれば重量も増してしまい、新素材の開発をしようにも簡単にはいかず。現状、黒沢の横流し品で使える物を本人らに選んでもらうしかなかった。
もっとも、七歌としては桐条グループが費用を負担し、練習用の薙刀よりも良い性能の武器が手に入るなら文句はない。
ただし、骨董品屋の方はどうして店主じゃなければ意味が無いのか分からず、不思議そうに首を傾げるとそのまま理由を尋ねた。
「店主以外の人は協力者じゃないんですか？」
「こちらの事情を知っているのは店主だけで、後はバイトが二人いるがどちらもうちの生徒なんだ。現在は店舗の改装中で利用できないが、この活動は極秘任務だからな。相手が家族や恋人であろうと無関係の一般人ならばくれぐれも口を滑らせないよう覚えておいてくれ」

真田から引き継いだ美鶴が微笑を浮かべて説明を終えれば、七歌は紅茶のカップに口を付けながらフムフムと頷く。
一般人に影時間のことを教えないのは、情報の秘匿だけでなく、影時間のことを知ったせいで相手が適性を得てしまうリスクを下げるためだ。
高い適性を持っている者と一緒にいれば適性が目覚めやすくなるという報告もあるが、さらに影時間が存在すると言う認識を持つだけで影時間に迷い込み易くなる可能性も挙げられている。ペルソナ使いにまで成長するか現状不明であるものの、適性持ちは切っ掛けがあれば案外簡単になれてしまうので十分注意してくれと美鶴が念を押すのも当然と言えた。
そうして、一連の話を終えると全員が一旦休憩としてクッキーや紅茶に手を伸ばす。七歌にも頭の整理が必要だと思っての気遣いだが、少しすると幾月が顔を上げて真っ直ぐ七歌を見つめながら口を開いてきた。
「それで、色々と説明したが改めてお願いしよう。九頭龍君、君の力を貸して貰えないか？」
「うーん……条件があります。私はまだ盗撮の件を完全には許していません。なので、男性教師でありながら女子の部屋を覗いていた理事長を一発殴らせてください」
ゆかりと共闘したことが切っ掛けで仲良くなった七歌は、盗撮していたメンバーへの怒りもほぼ落ち着き許せる状態まで来ていた。
ただ、それでもケジメとして男性の幾月には罰を受けてもらいたい。それが今回の落としどころであり、特別課外活動部に力を貸す条件だと伝えれば、
「君の気持ちは当然だね。先日のことに関しては非常に申し訳なかったと思っている。それで助力が得られるのなら罰は甘んじて受けるよ」
七歌が幾月を殴ると聞いて不安そうな表情を浮かべる美鶴と対照的に、幾月本人は穏やかな微笑すら浮かべて少女の出した条件を受け入れた。

彼も大切な子どもたちを預かる立場の人間だ。いくら理由があったとしても悪いことをしていた自覚はあり、それ故の真摯な態度も見せた訳だが、殴る許可を得た七歌は許可を得たことでしっかりと頷くなり部屋を出て行ってしまった。

どうして殴ると言っておいて部屋を出て行ったのかは分からないが、一同が不思議に思って待っていれば扉が開いて七歌が戻ってきた。その手に金属バットを携えて。

「よーし、思いっきりいくぞー！」

「ま、待て七歌！　君は一体何を持っているんだ？」

「え？　知らないんですか？　どこにでもある普通の金属バットですよ？」

本人は金色に輝く金属バットをかざして誇らしげな顔をしているが、それを見ている周りの者は困惑して表情が引き攣っている。

てっきり拳で頬でも殴りつけて円満解決になるとばかり思っていた一同にすれば、相手がわざわざ暴力事件でよく凶器になっている金属バットを持ってくるなど予想外で、そんなにも怒っていたのかと少女の怒り具合に逆にビックリするほどだ。

ただ、どれだけ彼女が本気で金属バットの使用を考えていたとしても、普段運動もしない研究畑の中年男性が殴られれば入院待ったなしである。

対シャドウにおいてはまるで戦力にならないとしても、幾月は裏方としては働き、特別課外活動部が動きやすいよう手配してくれているため、ここで彼に抜けられては困ると美鶴やゆかりたちは七歌を必死に説得した。

その甲斐もあって七歌は凶器を使わない尻キックで許してくれたが、思いの外高威力で声にならない叫び声を上げてしばらく悶えていた幾月は、ようやく尻が落ち着いたことで何とか椅子に戻ってくると額に脂汗を滲ませたまま会話を再開する。

「さ、さて、九頭龍君が仲間になってくれた事でうちの戦力も増した。岳羽君も無事に召喚出来たようだし、もう少ししたら見つかったばかりの候補者が入寮してくるから、全員揃ったらタルタロスの調査もし

てみようか」
　タルタロスはシャドウの巣とも言われる怪しい塔だ。ある日突然エントランスに台座に刺さった剣が現われたりもしたが、それも含めて詳しいことは何も分かっていない。
　美鶴と真田は何度か調査に出向いたこともあるけれど、荒垣を入れても三人しかいなかったため無茶は出来なかった。
　けれど、ようやく戦力も増えてきた。あとはもう一人の新人が加入したところで本格的に調査を計画してみようと幾月が言えば、今から待ち遠しいと瞳を輝かせていた真田に美鶴が冷たい一言を放った。
「明彦、お前は怪我が治るまで留守番だぞ」
「なっ!?　ふざけるなっ、こいつらだけ行かせられるか!」
　いくらシャドウとの実戦を経験していようと、七歌もゆかりもまだまだペルソナ使いとしては未熟で戦いの素人。そんな下級生の女子らだけで化け物のいるダンジョンを攻略させられないと、真田は椅子から立ち上がり美鶴に食ってかかった。
　すると、先輩らのそんなやり取りを見ていたゆかりは、普通そうにしているが重傷だったのだろうかと真田を心配して具合を尋ねる。
「あの、真田先輩ってそんな酷い怪我したんですか?」
「候補者を逃がす際に負った名誉の負傷らしいがな。肋骨にヒビが入っているんだ。医者には二ヶ月くらいは安静にしていろと言われている。当然トレーニングも禁止だ」
「馬鹿を言うな。二ヶ月も休んでいたら身体が腐ってしまう。仮に復帰できても二ヶ月の間に落ちた体力や筋力のせいでまともに戦えるかも怪しいぞ」
　命に別状はない。さらに後遺症が残る心配もないので安心していい。
　ただ、ウォーキングなどならともかく、部活の練習やシャドウとの戦闘など怪我を悪化させるだけなので認められない。
　美鶴がそのようにばっさりと言い切れば、トレーニングを怠った方が身体に悪いと真田も譲らなかった。
　この場合、普通に考えれば美鶴の言い分が正しいだろう。医者も安

静にしておくように言っているのだから、怪我を治すためなら黙って従っておいた方が良いに決まっている。
けれど、自分も運動する身として、怪我をしたときのことを色々と調べて七歌が、クッキーをポリポリと食べながら別に方法はあるよと口を挟んだ。
「それなら酸素カプセルと加圧トレーニングをしたらどうですか？体力の方は無理でも筋力は少ない負担で安全に体幹から鍛えられますし、加圧トレーニングは骨折の回復を早める効果があると言われています。それと併用すればヒビくらいなら酸素カプセルで一ヶ月もかからず治せますよ」
酸素カプセルも加圧トレーニングも、どちらも骨折を早く治すのに効果的と言われるものだ。さらに筋力を維持することも出来るので、体力の衰えはウォーキングなどで補って貰うとして、真田の要望を取り入れた治療としてこれ以上のものはないと思われる。
真田も一見脳筋のように思われているが、頭は決して悪くないので、そういった最新のトレーニング方法も調べており、詳しくはないが聞いたことはあると答えた。
「ふむ、どちらも聞いたことはあるな。有名なスポーツ選手が怪我をした際に使用して、驚きの速さで復帰したとか……。美鶴、お前たちのところでそれはやっていないのか？」
「カプセルの開発からやっているさ。ただ、骨折の治療の場合は酸素カプセルと回復を早める特殊な機械を併用する必要がある。連絡すれば用意できるはずだが、専門家のいる病院に毎日通院して貰うことになるぞ」
「同じ病院で加圧トレーニングも出来るようにしてくれ。それなら医者やトレーナーと一緒にトレーニングが出来るからお前も安心だろ？」
カプセルに入る時間は一時間弱と言ったところだが、それでも学校がある日も毎日通うのは大変だ。ならば、最初からそこでリハビリを兼ねたトレーニングも出来るようにしてくれれば手間も省ける。
美鶴としては怪我の件で少しは大人しくして貰いたかったが、やは

り戦力として信頼している彼には早く復帰して貰いたかったのか、真田の要望を聞き届けて辰巳記念病院で治療が出来るよう手配することを約束した。

――栃木県・那須野

寮で特別課外活動部についての説明を終え、七歌たちが普通にお茶の時間を楽しんでいた頃、湊は秘境と呼べるような鬱蒼とした木々の生い茂る森へと来ていた。

山を幾つも越え、橋も架かっていない大きな川を渡り、そうしてようやくたどり着けるような森は、一切人の手の入っていない旧い時代の匂いがする。

そんな場所を歩く青年の隣には短い丈の改造着物を着た黒髪の女性が歩いており、彼女は昼間だというのに薄暗い不気味な森を見て溜息を吐く。

《はぁ、現代日本にもまだこんな自然が残っていると思えば素晴らしいのかもしれませんが、実際に歩くとなると面倒以外の何ものでもありませんねぇ》

「……まぁ、別に飛んでいくことも出来たけどな。ただ、呪で結界を張られていたら実際に近付かないと分からないし。歩いて行くのにも意味がある」

今回、那須野の奥にあるこんな秘境へやって来たのには訳があった。

それは湊の隣を歩いている女性、力を失っている白面九尾の狐こと若藻に所縁の品を求めてであり、湊もこんなにも秘境にやって来る必要があると思っていなかった。

死んでも相手は大妖の九尾。いつか復活するべく呪を用いて結界を張り、高僧だろうと近づけない場所にそれを隠しているに違いない。

不穏な気配と呼べばいいのか、空気の変化を敏感に感じ取って目的地に近付いている湊に、元々の持ち主である若藻はいらぬ苦労ではないかとこぼす。

《別に殺生石なんて色んな場所で祀られているんですけどね。七五三縄をかけた大きな岩とか見たことありません？》
「ああいうのは漏れ出た瘴気を浴びた贋物だったりで、俺たちが向かっている先にあるのはお前の心臓が封じられた本物だ」
落ち葉を踏み締め、他よりも清浄過ぎる空気を吸い込みながら湊は先を目指す。
この先にあるのは死んだ九尾の肉体が変化したと言われる殺生石。あまりに毒素が強く瘴気を放つとして誰も触れることが出来なかったというが、一人の僧が割ったことで全国に散らばったと言われている。
ただ、その僧が割ったのはあくまで身体だった抜け殻の部分の物であり、湊たちが向かう先にあるのは核である心臓が変化したものだ。
大妖だけあって九尾は心臓から復活することが出来る。それには大量のエネルギーを必要とするが、心臓を破壊されては意味が無いため、身体を囮にして心臓だけはゆっくりでも傷を癒やせる秘境に飛んだらしい。
《まぁ、手に入ったら元の力もほぼ取り戻せると思いますが、そこまで急いで力を取り戻す必要あります？》
「アルカナシャドウの力は想定ほどじゃなかった。だが、今後もそうとは限らない。岳羽たちの実力も低いし、色々と裏工作が必要になる場面も増えるだろう」
殺生石を取りに来た理由は、若藻の力を取り戻すためだった。今でも自身と湊の姿を変化させる事は出来るが、力を取り戻せば現在はバアル・ペオルとのミックスレイドで行っている地形の変化等も単独で可能になる。
それだけでなく、湊自身に宿っている他のペルソナと違い、殺生石があれば若藻はそれを核として顕現する事が出来るようになるのだ。
「……何より、俺が最後まで戦えるか分からない以上、保険は用意しておいた方が良いだろ」
今後どれだけの戦力が必要になるか不明な以上、自分に頼らず動ける者がいてくれた方がありがたい。そういった理由もあって、湊は森

のかなり深い場所までやってくると、開けた場所にある大きな泉を見つけた。
《綺麗な場所ですねぇ……まぁ、逆に異常ですけど》
泉の水は非常に透き通っていた。木々も新緑の葉を揺らし、一部では満開の桜が咲いている。
現実のようで、同時に幻想的でもある風景に思わず感嘆の声を漏らすが、若藻自身もこれは綺麗過ぎて逆に異常だと表情を歪めた。
すると、湊は黙ってレヴィアタンのカードを取り出し、靴と融合させて水神の具足に変化させて泉の上を一人歩いてゆく。
殺生石があるのは間違いなくこの場所だ。空気と気配でそれは分かっている。だが、泉の底に沈んでいるのなら取るのが面倒だなと考えていたとき、泉の丁度真ん中辺りに来た湊は突如水中から現われた触手に捕まり水中に引きずり込まれた。
外からでは分からなかったが、泉は思っていた以上に深く広かった。そして、その底に触手だと思われた金色の尻尾を伸ばしている犯人がいた。
《臭う、臭うぞ！　貴様、鬼の一族の女だな！　その血と生き肝を寄越せ！》
確かに血や細胞は女性でもあるが、どこをどう見れば女に見えるのか。心の中で湊はそう溢すが、体長三十メートルを超す巨大な九尾の鼻先に連れて来られた湊は、相手の力量を測りながらこれで不完全体なのかと素直に感心した。
相手はただ大きいだけでなく、シャドウと同じようにスキルに似た業を放つことが出来る。現代にも神代の時代から生きている者たちはひっそりと残っているため、刈り取る者よりも遙かに強い力を持った者がいても不思議ではない。
けれど、相手はまだ身体を癒やしている最中。魂は若藻として抜け出ているので、殺生石に宿っているこの意識は自分を殺した鬼たちへの怨念に違いない。それでここまで力を持つとは流石大妖の一角だと、湊は自分も力を見せるべく右腕に纏わせた黒い炎を全身に広げた。

《ぐっ、それは呪いの類いかっ》
水の中でも燃え続ける炎は右腕だけでなく、背中や左腕も覆って黒のロングコートになった。
思わぬ反撃に九尾は表情を歪めるも、湊は蒼い瞳で相手を見ながら泉の底に降り立ち、バアル・ペオルの力を使った念話で相手に話しかける。
「……でかいだけの化け物が勝てると思うなよ。ペルソナっていうのは自分の一部だ。いくら強大な力を持っていようと制御できなきゃ意味が無い。だから俺は、仮にペルソナが暴走しても、己だけでねじ伏せられるだけの力は持っているんだよ」
蛇神ならともかく、名切りも含めたペルソナたちが暴走し湊のコントロールを離れたとしても、湊は己の肉体と武器を使って相手をねじ伏せることが出来た。
元々、生身でシャドウと戦っていたのだから、その延長くらいにしか青年は思っていないが、実際のところシャドウとペルソナでは知能に差がある。人が制御していただけあって、暴走してもペルソナの方が賢い訳だが、自我持ちですら同じように下せると豪語する青年はコートを変化させ背中の部分から複数の腕を出現させると口元を邪悪に歪め笑った。
「だがまぁ、変化する力で勝負したいなら受けてやろう。俺の蛇も中々応用が利くからな」
言い終わった瞬間、黒い腕が九尾へと伸びる。相手は尻尾を伸ばすことで対抗するも、呪いの籠められた炎と身体の一部では分が悪かった。
実体を持っていると想定し、触れた瞬間に弾こうとする九尾の思考を読んだ湊は、触れる瞬間に炎へと戻し、逆に相手の尻尾を炎で覆って焼いていく。
これは堪らないと敵が後退すれば、湊は自分の後ろの何もない場所を蹴って急加速し、相手の腹の下に潜り込むなり右腕をかざして巨大な炎の腕を顕現させた。
「とりあえず、上に出ろ」

噴き上がる炎は相手を掴んで地上まで一気に伸びてゆく。暴れようにも水の抵抗に身動きが取れず、急に明るくなったと思えば地上に出ていた。
しかし、水中から出ても腕の勢いは止まらず、地上から数十メートルほどの地点まで九尾を運ぶとそこでようやく消えて、代わりに泉から脱出した湊が紫の剛槍を持って現われ九尾の胸を貫いた。
《ギャアアアアアアアアアアアアっ!?》
湊が貫いた胸から赤い血と共に黒い泥のような物が溢れる。自分を殺した者を道連れにする呪いのようだが、蛇神とまでなった数千年に及ぶ名切りの業を受け止めている湊には効果が無い。
浴びた本人は汚いと不快に思っているだろうが、槍を抜いて傷口から黒い腕を進入させると、目的の殺生石たる心臓を掴んで引き抜いた。
すると、それが合図だったのか、九尾の肉体が塵となって消えていき、湊とともに地上まで落ちてきたときには完全に消滅していた。
《どーも、お疲れ様でしたー》
そして、不完全体とはいえ九尾を狩って一息吐こうとしていた湊を労い、地上に残っていた若藻が笑顔でパタパタとやってくる。
彼女は泉に入らず観戦していたのだが、今見れば先ほどまで透き通っていた泉は獣の死骸で溢れた沼になっていた。
咲き誇っていた桜や新緑も朽ちた枯れ木となり、どうやら全て餌をおびき寄せるため九尾が用意した幻術のようだった。実際に取り込まれても影響がないほど現実世界を侵食する幻術には舌を巻くが、今後は力を取り戻した若藻が同じように出来るはず。
そう思って黒い炎を消して、マフラーから取り出したタオルで頭を拭いていた湊は、濃紫色の球体を若藻に差し出した。
「とりあえず、元の姿に戻れ」
《了解でーす》
自然界にはあり得ないであろう、完全な球体をした物体が探していた殺生石だ。石には見えないという者もいるだろうが、九尾の心臓が変化した拳大の物なので正確には石ではない。

これには他の殺生石同様呪いが籠められており、本体であるこれは普通の者が一瞬でも触ると瘴気にやられて触れた部分が爛れてしまう。素手で掴もうものなら肉が腐り落ちるほどの猛毒を持った危険物なのだが、気にせず持っている湊から若藻が受け取り。彼女がそれを胸に抱いたとき変化が起きた。

肩にかかる黒髪は腰よりも長い輝く金色になり、着物も派手ながら品のある絢爛豪華な赤い物へと変わった。ペルソナの進化を初めて見た湊は姿が変わっただけで能力も随分と上がるのだなと感心するが、無事に玉藻前になった相手の手から殺生石を取るとそれをマフラーに仕舞う。

てっきり返して貰えるとばかり思っていた玉藻前は、それに驚きどうしてだと尋ねた。

《えー、それ私の心臓なんですけど。八雲さん、返してプリーズ》

「普段は俺が持っておく。これに力を籠めてバッテリーにしないといけないからな」

《あー、なーるほど。じゃあ、たーっぷりお願いしますね。まぁ、一番はそれを使わずに済むことなんですけど》

殺生石をバッテリーとして使うことになるとすれば、それは湊がどうやっても力を供給できなくなったとき、即ち、彼の死を意味する。

己を殺した名切りを恨んではいても、八雲個人のことは好いている彼女にとって、そのような悲しい別れと共に訪れる自由など欲しくはなかった。

ただ、今後の戦いでは何が起こるか分からない。ならば青年の備えも当然だとして、玉藻前は彼に己の身を案じるよう言いながら街を目指し帰って行った。

第百九十八話　新加入

影時間――七歌私室

特別課外活動部に入ると決めてから、七歌はゆかりと一緒に召喚の練習をするようになった。

本当ならタルタロスという異形の塔に行って、シャドウ退治も兼ねた実戦で鍛えた方が良いのだが、戦力となる新人が今週末に入寮してくるということで、タルタロスの探索はその〝彼〟とやらが来てから行うという事だった。

けれど、召喚の練習も毎日行っている訳ではない。たまには休みも必要だろうと、影時間の前に眠ってしまう日もある。

今日もそのつもりだったのだが、七歌が部屋で寝ていると何かの気配を察知してパッと目を開いた。するとそこには、

《やあ、こんばんは》

囚人服のようなものを着た少年が立っていた。

相手の名前は知らないが入寮の際に出会ったことは覚えている。彼と交わした契約のおかげでベルベットルームにも辿り着けたので、何故勝手に部屋に入ってきているのかは気になったが、そこは寛大な心で流してお礼を言った。

「こんばんは。契約、ありがとね」

《ああ、もう彼らに会ったんだね。お役に立てたなら良かったよ》

やはり少年もベルベットルームについて知っていたらしく、契約が七歌をあの部屋へ案内するためのものだったことが分かる。

と言うことは、彼は七歌がペルソナ使いであることも知っているはずなので、神出鬼没なことやその不思議な雰囲気もあって人間ではないのではと思った。

「あなたもペルソナなの？」

《どうしてそう思ったんだい？》

「だって急に消えるし、影時間にしか会ってないし」

《フフッ、それならシャドウと思うべきじゃないかな。ペルソナは日常の時間でも呼べるけど、普通のシャドウは影時間にしかいないから

ね》
　言われてみると成程と思わされる。七歌は日常の時間の中でペルソナを召喚したことはないが、常にその存在は自分の内に感じているため呼び出す事も可能と思われた。
　それに対してシャドウはこの街でしか遭遇したことはなく、影時間外に見たこともない。シャドウが普通の幽霊や怨霊であるならば日常にも存在や気配を感じるはず。それがない以上ペルソナは日常にも存在可能で、シャドウは影時間でのみ存在可能なものだと判断する事が出来た。
　けれど、話を聞いた七歌は少年の言葉に一部引っかかりを覚えた。〝普通のシャドウは〟と言うからには例外も存在するのではと思ったのだ。
「普通のってことはシャドウも日常に存在できるの？」
《出来るよ。その場合は体表面に影時間と似た性質のフィールドを展開したりするけどね。ただまぁ、普通のシャドウが自然にそれを行うのはほぼないから大丈夫だよ》
　影時間にしか存在できないのなら、それと同じ効果を持つ物で自分を覆ってしまえばいい。実に簡単な発想ではあるが、実現させようと思えば大変な労力が必要と思われる。
　街中で遭ったような普通の個体ではきっと無理だろう。先日ゆかりと共に戦った大型ならばどうだろうか。七歌がそんな事を考えていると少年はやってきた理由を思い出したようで唐突に話を切り出してきた。
《そうそう、今日は君に終わりが近付いている事を伝えに来たんだ》
「終わり？」
　終わりと一言にいうが、それだけでは何の終わりか分からない。一日の終わりであったり、この世界の終焉だったり、言葉の指す内容によって規模が大きく異なってくる。
　今七歌が終わりと言われて思い浮かぶのはこれまでの日常の終わりだ。ペルソナや影時間、シャドウといった存在について知ったことで彼女の生活に大きな変化が起こった。

それはつまり平和な日常の終わり、新しい非日常と交わった生活の始まりという訳だ。
「終わりって何の終わり？　平和な日常？」
《君のいう平和な日常は十年前に既に終わっていたんじゃないかな？　大切な人を亡くし、影時間を知って、ペルソナを得たときにはさ》
言われた七歌は心臓がドクンと強く鼓動したように感じる。
父や祖父は彼らを恐れていたが、七歌は百鬼家の三人が大好きだった。特に自分では絶対に勝てないと思わされた少年には淡い憧れも抱いていた。
しかし、大変な事故が都会で起こったというニュースを見ていたとき、警察から家に電話が掛かってきて一家の死を伝えられた。
鬼と恐れられた一族の者も、自分と同じ龍の血が流れる者も、その二人の子として生を受けた現人神の少年も、交通事故というごくありふれたものによって命を落としたのだ。
もう会えないと聞いて涙を流したが、七歌は彼らの葬儀の際に少年の遺体がないことに気付いていた。最初は遺体が見つからなかったのかと思ったが、誰もがそこに少年の遺体があると認識していて、最後は七歌の目の前で何も入っていない骨壺を墓に納めていた事を覚えている。
あのとき影時間の記憶補正に気付いていれば、彼らの事故が影時間に起きた物だとも気付けただろう。しかし、七歌がそれを知ったのはつい先日のことで、今更それを人に言う訳にもいかない。
なら、七歌にとって平和な日常が終わったのは事故の異常に気付いたあのときで、事故の真相を知ろうとしている今は既に非日常であると言えた。
「何でも知ってるんだね」
《何でもは知らないよ。僕が知っているのは自分が見聞きしてきた事だけさ》
「じゃあ、八雲君が事故に遭って、おじさまとおばさまが死んだのも見てたんだ？」
《直接ではないけどね。ただ、そういう事があったっていうのは知っ

てたよ》
にっこりと人懐っこい笑みを浮かべる相手が何者かは分からない。しかし、悪い存在でないことは分かる。
故に、七歌は契約によって自分の手助けをしてくれた相手ともう少し親交を持つことにした。
「何の終わりかは教えてくれないんだね」
《いずれ分かることだからね》
「じゃあ、名前は教えてよ」
《うん。僕の名前はファルロス。これからよろしくね、七歌さん》
笑顔で握手を求めてきたファルロスの手を七歌も握り返す。これで相手がシャドウならシャドウにも色々な種類がいるのだなと思うところだが、七歌は不思議なことに少年から八雲に似た気配を感じていた。
もしこれが八雲の送ってきた使者ならば彼も何か知っていることになる。記憶喪失の範囲が分からないので下手に聞くことは出来ないが、とりあえず明日は彼に会いに行こうと思いつつ、七歌は消えていくファルロスを見送ると再び眠りについた。

４月１８日（土）
昼休み――月光館学園
昼休み、午前中の授業で疲れた脳と身体を食事などでリフレッシュするための時間だが、ゆかりが七歌と一緒に教室でお昼を食べようとしたとき、七歌は飲み物を買ってくると言って教室を出て行ってしまった。
一階の購買部まではそれほど離れていない。行ってすぐ帰ってくるはずなので、それくらいなら待っておこうと思った訳だが、七歌は五分経っても帰ってこなかった。
混んでいるのかなとも思ったが、七歌より後に教室出て行った男子が買って戻ってきていたので、ゆかりは何かあったのかなと心配しつつ迎えに行ってみると、生徒玄関についた時点で相手の姿を発見した。有里湊というおまけ付きで。

「でね、シャドウと戦うためのペルソナっていう守護霊みたいなのがいて、あそこの寮はその力を持った人たちの秘密基地なの」
「……そうか」
聞こえてきた会話にゆかりはギョッとする。そも、どうして二人が一緒にいるんだという疑問もあるのだが、紅茶のペットボトルを持っている七歌と同じように、湊も湊でやる気のない表情で紙パックのジュースを手に持って飲んでいるため、飲み物を買いに来たところで遭遇し七歌が相手を捕まえたことは容易に推測できた。
少女から知り合いと勘違いされたまま接せられるのは面倒だろうが、あれで湊は面倒見が良い貧乏くじを引くタイプ。七歌が嬉しそうにしている限り、湊は嫌々ながらでも会話に付き合ってやるのだろう。
ただ、その会話の内容が他言無用と言われた影時間関連のものとなれば、彼が関係者である可能性を知っている身として口を挟まずにはいられない。
ダッシュで近付いたゆかりはすぐに七歌の口に手を当てると、いい加減帰りたそうにしている青年に慌てて直前の会話が冗談であると誤魔化した。
「むぐっ!?」
「あははー、ゴメンねー。知り合いが迷惑かけて。この子、変なこと言ったりする癖があるから真面目に聞かなくていいからー!」
自分でしておきながら非常に雑な言い訳だとゆかりは泣きたくなる。もう少し演技力があれば自然な流れに持って行けたのだろうが、残念ながら今は七歌が湊に影時間のことを話してしまったことで内心焦っているため、文句を言う者がいれば自分に出来る精一杯がこれなのだと言い返したかった。
けれど、そんな者が現われるよりも早く七歌が拘束から脱出し、息を吸い込むなり中断した話の続きをしゃべり出す。
「ぷはぁっ。あ、ゆかりもさっき言ってた特別課外活動部のメンバーなんだよ。イオっていう変な牛のペルソナ持ってるの」
「牛じゃねぇっつの。人型の方が本体だから!」

そして、ゆかりはそれについツッコミを入れてしまった。条件反射とは恐ろしいもので、牛に可愛いイメージを持っていなかったゆかりは、少女特有の感覚でそこを訂正せずにはいられなかったのである。

口に出した後になってしまったと彼の顔を見れば、青年は真っ直ぐゆかりのことを見ていて言い訳は出来そうにない。

「あ、えーと……ゲームの話です」

それでも自分は誤魔化すしかないのだと己に言い聞かせ、かなり無理があると分かっていてフィクションの話だと言ってみれば、

「いや、大丈夫だ。信じるぞ」

意外なことに湊は少女らの話を頭ごなしに否定せず、むしろ真剣な表情で誤魔化す必要は無いと告げてきた。

もし、湊が影時間に対する記憶を持っていたならこの反応はおかしい。彼は必要の無い嘘は吐かず、相手に知られたくないときは話さないという選択肢を取る傾向がある。

故に、この反応からすると美鶴の言っていた過去の非道な実験の話が間違っていたか、もし彼が被験体だったとしても影時間の記憶を失っている可能性が考えられた。

そしてそうなると、もしかすれば七歌のいう八雲君と湊が同一人物という話も嘘ではないかもしれないと思ったところで、これまで真剣だった青年の表情がどこか哀れみの籠もった優しいものに変化した。

「まぁ、思春期の子どもによく見られるものだからな。気にしなくていい。ちゃんと分かってる」

「ちょっ、違うって！　本当にそういうやつじゃないから！」

痛いやつ。そう認識されたと気付くのは一瞬だった。

確かに一般人が聞けばゲームや漫画の話としか思えず、逆に真剣に言っていれば可哀想な痛いやつと思われるだろう。ゆかり自身勧誘されたときは美鶴に対して同じことを思ったので、話を聞いていた湊がそう思うのも無理はないと思う。

ただ、他の者ならともかく、好きな人にそう思われるのは本気で避けたかった。

既にお互いの間に見えない壁が出来て、精神的な距離が開いたよう

な錯覚すらしているのだ。別れたあとのギクシャクがようやく無くなったタイミングで、また彼と会えなくなるなど死んでも御免である。

影時間についてばらすのはいけないと分かっていても、ゆかりは一身上の都合により彼に話しますと心の中で謝罪し理解して貰おうとすれば、

「大丈夫、分かっているから。月にニュクスっていうシャドウの親玉がいて、そいつを倒さないと影時間とやらが終わらないんだろ？　誰にも知られずに、ただ人々の平和のために戦うなんて素晴らしいじゃないか。俺も影ながら応援しているから、その活動が終わるまで近付かないでくれ」

「ちがう、誤解なの！　てか、変な設定つけるな！」

「私、ポジションはレッドね！　ゆかりはカレー大好きイエロー、八雲君は皆のピンチに覚醒して助けに来るブラックとかシルバーのポジションあげるから助けにきてね！」

「あんたも五月蝿い！　てか、誰がカレー大好きか！　そんなの真田先輩に譲るから、私は可愛いヒロインのピンクにしとけい！」

聞き覚えのない単語が出てきたり宇宙規模の話になったりと、訳の分からない設定まで追加された時点で相手が本気で信じていない事は理解できた。

青年は話しながら徐々に下がって距離を開け始めたので、ゆかりが相手の上着を掴んで必死に行かないでくれと頼み込んでいれば七歌が余計な事を言ってくる。

別に七歌がレッドだろうと美鶴がホワイトだろうと構わないが、特別課外活動部はイメージカラーを設定した戦隊モノの組織ではないし、イエローはまだしもカレー大好きという設定が気に入らずゆかりが言い返せば二人は口論に発展した。

去り時を逃したことで無益な争いを続ける二人を眺める青年は死んだ目をしているが、そろそろ止めようかなと思ったところで後ろから声がかけられた。

「あ、ゆかりちゃん」

「ん？　あ、風花じゃん。有里君を迎えに来たの？」
「え、あ、ううん。ちょっとパンを買いに来たの」
やってきたのは湊と同じクラスの山岸風花。てっきり帰ってこない湊を迎えにきたと思ったが、今日は一緒に食べていなかったことで首を横に振ると、ゆかりたちは場所を空けて風花が購買で買い物出来るようにする。
空いたスペースを通った少女はおばちゃんに注文してパンを買い、支払いを終えると両手いっぱいにパンを持って行こうとするので、湊がマフラーからレジ袋を出して入れてやると頭を下げて礼を言ってきた。
別にその程度大したことはないのだが、小食なイメージのある少女がパンを大量買いするなど珍しい。体力を使うような事をした後でも、ここまで大量に食べている姿を見たことがなかったので、不思議に思った青年は風花に声を掛けていた。
「……随分と沢山食べるんだな」
「その、今日一緒に食べてる友達の分も買いに来たの。混雑してると思ったから、大勢で行くより一人がまとめて買った方がいいかなって」
友人の分も一緒だと言われれば、そういう事かとすんなり納得がいく。別に混雑はしていなかったが、普段あまり昼に買いに来なければお昼時のイメージで混んでいると思っても不思議ではない。
そこで風花が気を利かせて自分が買いに行ってくると言う様子も想像がつくので、友達を待たせているからと去って行く風花に手を振りゆかりたちは少女を見送った。
「今日は一緒に食べてなかったんだね」
「……まぁ、山岸には山岸のコミュニティがあるからな。クラスも変わって新しい知り合いが出来てもおかしくないだろ」
「変な男に引っかかったりしてないよね？」
「……山岸の周りにいるのは女子くらいだぞ」
湊と一緒にいるため部活メンバーに近付いてくる男子は少ないように思えるが、風花は小動物系なこともあって狙われやすいイメージ

をゆかりは持っていた。
それ故、おかしな人と交友関係を持っていないだろうなと探りを入れれば、湊があっさりと否定したことでゆかりとしては僅かに安心する。
別に部活メンバーに彼氏が出来たところで口出しする権利はないが、友人として皆に幸せになって欲しい彼女としては、世話焼きな性分もあって色々と気になるようだ。
他の者にすれば自分のことをまず先にしろと突っ込みたいだろうが、残念ながらここにそのメンバーはいないので、去って行った風花と面識のなかった七歌の言葉で話題は変わった。
「さっきの子って八雲君の友達？」
「……友達じゃない。俺の友人は一人だけだ」
「じゃあ、彼女？」
「……クラスメイトだ」
言葉が出てくるまでの間がなんとも怪しいが、二人の関係は二人にしか分からないものなので、知りようのない七歌とゆかりは深く突っ込んだりはしない。
ただ、七歌に八雲と呼ばれた湊がすんなり返事をしていたことで、ゆかりは押しに負けたんだろうなと苦笑しながら指摘した。
「有里君、もう訂正するの諦めたんだね」
「何度言っても直さないなら、いっそ諦めた方が楽だからな」
「クラスメイトが苦労かけます」
ただでさえ彼は人助けで普段から忙しそうにしているのに、昼休みという貴重な休憩時間まで困らせる訳にはいかない。
ペコリと頭を下げればゆかりは七歌の手首を掴んで引っ張り教室へ帰ろうとする。七歌の方は当然それに抵抗するが、〝しつこいと嫌われるよ〟という自分が言われたら効果覿面な言葉ランキング上位の台詞によって見事誘導し、そのまま大人しくなった七歌を連れて教室へと戻っていく。
本当ならば湊も同じ方向なのだが、ここですぐに動けば七歌に話しかけられることは容易に想像がつくため、湊は湊で購買に再び寄って

時間をずらしてから教室へと帰っていくのだった。
夜――巌戸台分寮
学校から帰ってきて夕食を済ました七歌は、暇な時間をゆったり過ごそうとラウンジで美鶴とゆかりを誘いお茶の時間を楽しんでいた。
美鶴が最近はまっているという紅茶だけあって香りと味がよく、リラックスした状態で新しい学校や街での生活について談笑していたのだが、途中で真田が降りてきてテーブルの傍に立ちつつ会話に参加してきた。
「さっき連絡があった。もう少しで寮に着くそうだ」
「あ、それって言ってた新メンバーですか？」
全員に向かって笑顔で告げた真田にゆかりが尋ねる。
これまで美鶴と真田しかいなかったが、三月にゆかりが入部し、四月初旬に七歌が加入した。そしてさらに、先日の大型シャドウと戦った日に真田が候補者を見つけたらしく、ずっとその人物が来るのを待っていたのだが、真田の様子からすると今夜にも着くらしい。
学校から帰ってきてから荷物が運び込まれていた様子はなかったので、学校に行っている間にでも桐条グループの者が運び込んだと思われるが、前に住んでいた寮の部屋を引き払った相手は、放課後からこの時間まで遊んでいたという事になる。
これはもしかして、中々に遊び人な人物なのではと考えたところで、少し勿体ぶった悪戯っぽい表情をした真田がゆかりの問いに首を縦に振り答えてきた。
「ああ。お前たちと同じ学年の男子だ。というか、お前らの知り合いでもある。特に岳羽とは親しい人物だぞ」
二人と同じ二年生で転校して来たばかりの七歌の知り合い、さらにゆかりと親しい男子など限られている。
話を聞いた少女らは同時に同じ人物の姿を頭に浮かべ、昼に冗談で影時間の話をしたが、本当に彼が新メンバーなのかと半信半疑ながら期待に胸を膨らませ浮き足立つ。
そうして、答え合わせは来てのお楽しみだと到着を待てば、それから十分経ってようやく寮の扉が開き、少女らのよく知る人物がしっか

りとした足取りで皆の前に現われた。
「じゃじゃーん、オレっち登場！」
『チェンジで』
「ちょっ、ひどくねっ!?」
相手を見た瞬間瞳のハイライトが消えた少女らの声が重なる。
現われた人物の名は伊織順平。真田の言っていた通り二人の知り合いで、ゆかりと親しいと言えなくもない男子だ。
けれど、お前じゃない。自分たちの期待を返せと溜息を吐き、ゆかりも七歌もテンションだだ下がりとばかりに紅茶とクッキーをやけ食いする。
「はぁ、期待して損した」
「ヒゲ、走って八雲君呼んできてよ」
「えー……新メンバーにも優しいアットホームな職場じゃねぇの？つか、なして有里君？　マジで関係ないし、あっちとしても呼ばれても困るだろ」
一方の順平はここまで冷たい態度を取られると、自分が何かしただろうかと動揺を隠せない。
七歌が湊のことを八雲と呼んでいることは知っているので、そちらの名で呼んできてと言われても意味は通じるが、多忙な彼をこんな時間から呼んでも迷惑になるだけだろうと常識的なツッコミを入れた。
そんな後輩たちの様子を立って眺めていた真田は、せっかくの新メンバー加入というおめでたいイベントが思っていたのと大きく異なる反応に終わったのを見て、落ち込んでいる少女らは何を期待していたんだと疑問に思った。
「お前ら誰だと思ってたんだ？　九頭龍も岳羽もこいつとは同じクラスだろ？　それに岳羽は以前から面識もあるらしいじゃないか」
「そりゃ面識はありますけど、親しい男子って言ったら普通に有里君だと思うじゃないですか」
「あいつに適性があるなんて話は聞いたことがないからな。俺としてはお前のイメージの方が驚きだぞ」
確かに最も親しい男子と言えば湊になる。しかし、真田は彼に高い

適性があるという話は聞いたことがなかったので、ゆかりのイメージの方が違和感があると呆れた顔をした。
　その影で美鶴が複雑な表情を浮かべている事には誰も気付かず、出鼻を挫かれ所在なさげにしていた順平が遠慮気味に手を挙げ、まだまともな反応をしてくれそうな先輩二人に声をかけた。
「あ、あのぉ、オレっちって来ちゃダメでした？　あんま歓迎されてない雰囲気？」
「いや、我々は君の加入を心から歓迎する。実際のところ常に戦力が不足していてな。君のように顔見知りなら連携も取りやすいので、こちらとしては嬉しい限りだ」
「そ、そっすか？　いやぁ、この前、真田さんに助けられたときはシャドウにビビって情けないとこ見せちゃいましたけど、オレっちにもペルソナっつー特別な力があるって聞いて、今じゃやる気満々ッスよ！　皆で力を合わせて街の平和を守ろうぜ！」
　根が単純なのか、順平は美鶴から歓迎の言葉を受けると照れたように笑い、すぐに拳を突き上げて己のやる気を全身で表現した。
　少女ら二人はそれを冷めた目で見ているが、新メンバーになんの不満もない真田たちはムードメーカーだなと彼の情熱を買った。
「な、頼もしいだろ？」
「ああ、使命に燃えることは良いことだ。この性格からするとペルソナは火炎属性かもな」
　ペルソナとは精神の具現、ワイルドと異なり己の心の根幹部分をペルソナとして成す普通のペルソナ使いたちは、その性格がペルソナの持つ属性に大きく反映される。
　順平のように単純な熱血タイプなら火炎、熱血タイプではあるがテクニックと速さを持っている真田のようなタイプなら電撃など、やろうと思えば性格診断の形で分類し予想する事も出来た。
　正確な属性は実際に召喚してみないと分からないが、上級生二人が新メンバーの順平が火炎属性であるならと作戦について語る傍ら、順平はクラスメイト二人の元まで近付き、自分がまだ知らない組織の内情等について尋ねた。

「そういやお二人さんもペルソナ使いなんだよな。役職とか階級とかあったりすんの？」
「私、レッド。ゆかりはピンク。真田先輩はカレー大好きイエローで、美鶴さんがホワイトだよ」
「お、じゃあオレっちはクールな二枚目のブルーってとこか」
順平もヒーローに憧れる男子だけあって、七歌が口にした戦隊モノの話題は普通に通じた。
昼間のゆかりの希望が通ったことで更新されたらしく、カレー大好きイエローの称号は無事真田に引き継がれたが、リーダーのレッドを七歌が務めるのなら自分はサブリーダーポジションのブルーかなと順平は言った。
けれど、哀しいかな現実は非情である。別にブルーが誰とは決まっていないが、現時点でのお前の役職はそれではないと七歌がはっきりと告げた。
「残念、見習い期間中はお茶汲みブラウンだよ」
「えー……マジかぁ、最近はヒーローにも下積みってあんだなぁ……」
戦隊ヒーローにブラウンなんていたかなと首を傾げる順平。いてもいなくても特別課外活動部ではそうなのだと言われればお終いだが、あまりにくだらない後輩同士の会話を見かねたのか、美鶴との会話を終えていた真田がツッコミをいれてきた。
「何を馬鹿なことを言ってる。うちは部長の美鶴以外は学年の序列があるくらいで横並びだぞ」
「え？　そうなんスか？　んだよ、七歌っちってば人が悪いぜ」
「いやいや、顔と頭が悪い順平よりマシだよ」
言葉のナイフが順平の胸に突き刺さる。ショックのあまり思わずその場で四つん這いになってしまうが、今度は誰も順平に構ってくれず、真田ですらスルーして美鶴との会話を再開している。
「さて、美鶴、メンバーも揃ったし今夜こそ挑戦しようじゃないか」
「ああ。だが、怪我の治ってないお前はエントランスで私と待機だぞ」
「ちっ……治ったらすぐに前線に出るからな」
傍らで聞いていると物騒に聞こえるが、この寮はシャドウと戦うメ

ンバーの集まった秘密の組織である。
　それを踏まえると活動関連の話だろうかと興味を持った順平が、四つん這い状態から復活し、床に着いた膝を払って立ち上がってから真田に質問をした。
「えっとぉ、何の話ッスか？」
「フッ、初陣だぞ順平。準備しろ。今日の影時間にシャドウの巣へ出向く」
「おおー、早速ッスか！　よっしゃ、オレもペルソナ召喚してバンバン活躍してみせるぜ！」
　時間はあるが初陣の順平には心の準備も必要だ。そう思って真田が出陣の用意を促せば、順平は期待の新星としてデビューするぜと準備のため部屋へと走って行き。残された者らも武器や治療薬の用意があるからとそれぞれの部屋に戻っていった。

第百九十九話　ダンジョン探索

――辰巳ポートアイランド

シャドウの巣であるタルタロスを探索するため、七歌たちは装備を整えると電車とモノレールを乗り継ぎ辰巳ポートアイランドを目指した。

彼女たちの装備はグローブタイプの真田を除き、全員がそれなりの大きさになるので隠して移動するのが難しい。

けれど、電車など公共の交通機関を使わないと移動に時間が掛かりすぎるため、一同は持ち運び用ケースに入れることで部活用具としてカモフラージュしながらなんとか辰巳ポートアイランドまでやってきたのだが、学校の最寄り駅で降りたところで意外な人物と遭遇する。

「お！　おっすおっす、八雲君。こんな時間に奇遇ですな！」

その人物とは彼女らのよく知る有里湊その人。

階段の下に彼の姿を発見した七歌は、数段飛ばしで階段を降りきると嬉しそうに駆け寄って声を掛ける。

だが、声を掛けられた青年は大荷物の集団を見て目を細め、寮暮らしとはいえこんな時間に制服姿で彷徨くのは如何なものかと苦言を呈した。

「……おかしな格好で彷徨いてると補導されるぞ」

「トカゲの尻尾はいるから大丈夫だよ」

「あー、それ絶対にオレっちのこと言ってるよね。七歌っちに何かした覚えないのに言葉のナイフ刺さりまくりでオレっち泣きそう……」

どうして彼女がこんなにも自分にきついのか分からない順平は、徐々に慣れつつあるが心にダメージを負っているんだぞと泣く振りをする。

けれど、そのリアクションは全員に流され、本気で涙が出そうになっている順平を放置して、湊の前にやってきたゆかりがここで何をしていたのかを相手に尋ねた。

「てか、有里君はこんな時間になにやってたの？」

「岳羽に会える気がして星を眺めて待っていたんだ」
「ちょっ、な、なに変なこと急にっ」
　優しい微笑で好きな人からそんなことを言われれば、本当に会えたこともあって運命的だとゆかりは頬が緩むのを止められなくなる。
　シャドウ退治も兼ねたタルタロスの探索のためにやって来ておきながら、一人だけ耳まで赤くしてラブコメ展開に突入している少女を他の者は白けた様子で眺めているが、中でも冷めた瞳で相手を見ていた青年は、乙女心を弄んでおきながら冗談に決まっているだろと鼻で笑う。
「まぁ、それは冗談だがラビリスが課題のノートを忘れたから取りに来ていたんだ」
　そういう青年の手には一冊の大学ノートが現われ、どんなマジックだと驚きつつ、この時間に中に入れて貰えたことも驚きだぞと真田がツッコミを入れる。
「お前、よくこんな時間に入れて貰えたな」
「生徒なんだから学校に入るために許可なんていらないでしょう」
「完全下校時刻を過ぎたら施錠されているだろ？」
「施錠されてるなら鍵で開ければいいじゃないですか」
　言って今度はマフラーの下に手を入れ、湊は複数の鍵がついたキーホルダーを取り出して見せた。
　彼の手からそれを受け取ったゆかりは自分たちの部室や弓道場の鍵と同系統のタイプを発見し、もしや学校内全ての種類のマスターキーを持っているのではと疑いの目を向けながら、最も詳しいであろう美鶴にも見て貰う。
　受け取る前から嫌そうな微妙な表情をしていた美鶴は、一般の教室だけでなく理科準備室の劇薬用の保管棚の鍵まであることに驚いてゲンナリしているが、見終わると没収せずゆかり経由で湊に返却し素直な疑問を口にした。
「生徒が学園のマスターキーと思われる鍵を持ち歩いているはずはないんだがな」
「そういえば、有里君って中等部のときも屋上の鍵を持ってたよね。

そういうのって本当はどこから手に入れてくるの？」
「どこからって職員室でご自由にどうぞと貸し出してるだろ」
湊が学校の鍵を持っているのは中等部の頃からだった。それを覚えていたゆかりが入手経路を尋ねれば、返ってきた青年の答えに全員が首を傾げてしまう。
確かに職員室には部室や体育館の鍵が置いてあり、クラスと名前を貸出票に書いて貸し出しもしている。
けれど、それはあくまで各教室の鍵であって、湊の持っているマスターキーは専用の金庫に保管されて貸し出していないのだ。
マスターキーの金庫が開けられるのは理事長、校長、教頭、学年主任、教務課長のみ。その中で湊に鍵を貸す可能性があるとすれば、桐条グループから彼を他校に行かせないようある程度優遇するように言われている校長と教頭だが、いくら優遇しろと言われていても学内の施設を自由に使われる危険性が出るようなことをするとは思えない。
故に、彼の鍵の入手経路は実際のところ別口だろうと思ったところで、美鶴は駅前の時計を見て少々慌て始めた。
「あ、有里、もうすぐ日付を跨ぐ時間だ。汐見が家で待っているなら早く帰った方がいいんじゃないか？」
「え、せっかく八雲君に会ったんだから、もう少しお話してもいいじゃないですか」
「いや、しかし……」
深夜とも言える時間に偶然にも湊に会えたことで、七歌が少しくらい大目に見てもいいじゃないかと不満げな顔をする。
ただ、美鶴が最初に見た時点で時計の針は既に十一時五八分を指していた。そして、七歌とやり取りをしている間も時間は進み、あることを危惧している美鶴が本気で拙いと冷や汗をかき始めたとき、時計の針が頂点を指してその時間が到来してしまう。世界が緑色に塗り潰され、適性を持たない者は棺桶のオブジェになる影時間だ。
「あっ……そっか。適性がない人は象徴化しちゃうんですね。確かに知り合いが棺桶になるのはあんまりいい気分じゃないかも」

世界が緑色に塗り潰されると、一同と会話していた青年が黒い棺桶のオブジェに変化してしまった。それを見たゆかりは自分たちが知り合いの象徴化を見ないで済むよう美鶴は気を遣ったのだろうと察し。同時に彼が被験体だったという話は、やはり一部が間違って伝わっていたと理解して、辛くもあるが彼にとってはこの方が良かったのだろうと不思議な質感の棺桶に手を触れる。

そんな彼女の後ろでは、気を遣ってくれた人認定を受けた少女が象徴化した湊を見て大いに混乱しているのだが、誰もそれには気付かず、不思議そうに首を傾げて棺桶を見ていた七歌が急にペシペシと棺桶を叩き出した。

「おーい、八雲くーん？」

「やめろ、九頭龍。それで有里の象徴化が解けたらどうするんだ」

「え？　いや、だって八雲君が棺桶になるっておかしいじゃないですか」

叩いたくらいで象徴化が解けるかどうかは不明だが、ペルソナ使いという高い適性を持った者が干渉したとき何が起こるかは分かっていない。

ならば、不用意に無関係の人間を巻き込んではならないと真田は止めた訳だが、あまりにも七歌が湊の象徴化を納得していないようなので、一同を代表して順平がその理由を彼女に尋ねた。

「なして、有里君が象徴化したらおかしいと思ったんだ？」

「なんでって八雲君は適性持ってるじゃん」

こんなのは常識だ。そう言いたげに七歌は湊が適性持ちであることを断言する。

他の者にすれば目の前に答えがあるのに、彼女がそれで納得しない方が謎だが、組織に所属して日が浅いためにまだよく理解していないのだろうと真田は改めて象徴化について説明してやる。

「いいか？　適性を持っていたら象徴化はしない。象徴化したということは有里は適性を持っていないと言うことだ」

「いや、持ってますって。ねえ、美鶴さん。記憶を失ったら適性も失うんですか？」

訊かれた美鶴としては七歌の言っている事が正しいという認識だ。以前、湊が非常に強力なペルソナを呼び出して戦っているのを目にしており。何故今目の前で象徴化したのか彼女が訊きたいくらいである。

しかし、ムーンライトブリッジの一件で湊はペルソナの発現が不安定で暴走の危険もあり、制御剤を服用している怖れもあったはずだと思い出したことで、同じように象徴化してしまうこともあるのかもしれないと冷静になり、美鶴は七歌の質問について可能性の話だがと前置きした上で自分の推測を話した。

「……ふむ、そういった前例がないので分からないが、記憶は人格構成と深く結びついているからな。記憶を失うことで適性やペルソナを失う可能性もなくはない。だが、彼が適性を持っていると思った根拠を聞いてもいいか？」

「八雲君の家族が事故に遭ったのって影時間なんですよ。他の人は誰も不思議に思ってませんでしたが、八雲君の骨壺が空っぽのまま納められたのを覚えてますし。影時間の記憶補正が働いた以上は彼も影時間にいたって事ですよね？」

影時間の記憶補正は適性を持たぬ一般人に対し、集団催眠を遙かに超えたレベルで作用する。

荒垣の件やストレガの殺人依頼が全て事故で処理され、人を殺していながら両者が社会的な罪で裁かれていないのが何よりの証拠だ。

それを考えればあたかも遺体があるように葬儀が進められ、誰も不思議に思わぬまま納骨までされても不思議ではない。

約十年前から適性を持つ七歌の言葉だからこそ信憑性は高いが、話を聞いていた真田は八雲と湊が同一人物であるという前提が間違っている可能性はないのかと問うた。

「その話が本当なら可能性はあるな。だが、お前の言っている人物と有里が同一人物である確証はあるのか？」

「英恵おばさまが息子って呼んでる時点で確定じゃないですか。というか、八雲君も英恵おばさまの事を思い出してますし、ほとんど記憶も戻ってるはずなんだけどなぁ」

言われてみればと英恵の存在を知っている全員が思わず納得してしまう。そうなると今度は英恵が八雲を湊と呼んでいる疑問が生じるのだが、英恵が八雲と湊の関係性について何かしら知っていることは確かだ。

一方で、順平だけは英恵と面識がなかったので、ゆかりから美鶴の母親のことだと聞いて湊と美鶴は姉弟だったのかと驚いているが、以前同じようなことがあったため美鶴も今回はスルーし、ここで話していても湊が象徴化した事実は変わらないとタルタロスへ向かうことを一同に促した。

「事故が影時間におきたにしろ、当時偶然迷い込んだ線も捨てきれない。そして、象徴化している以上、今現在は適性がないのが現実だ。一日の影時間も限られているし、探索のため今はタルタロスへ急ごう」

『はーい』

影時間が明けたとき目の前から七歌たちが消えていても、記憶補正がかかり話を終えて去って行ったと認識されるはず。故に、彼に関しては放置しても問題ないと美鶴が先導すれば、七歌たちもそれに続いて学校のあった場所に急に現われたタルタロスへと向かった。

そして、全員が学校の敷地内に入ってタルタロスの入り口へ消えていこうとしたとき、棺桶のオブジェになっていたはずの青年が元の姿に戻り、面倒そうな視線を七歌たちの方へ向ける。

「……はぁ」

その溜息にはどんな意味が込められているのか。それは本人にしか分からないが、青年の背後に黒い死神が現われると彼らは空へと飛び上がり、彼ら以外に訪れた者のいないタルタロス上層部へと消えていった。

――タルタロス

「うっひゃー、うちの学校って変形機能があったんスね」

「物理的に無理だろ」

エントランスに入るなり馬鹿げたことを言う順平に真田が呆れて返す。落ちれば終わりと思われる通路周りの穴をのぞき込み、七歌が

それを後ろから押そうとしてゆかりに止められる一幕もあったが、全員がエントランス中央の開けた場所につくと順平が台座に刺さった剣を発見した。
「おっ、変な剣が生えてんじゃん」
「ほっほぉ……これは噂に聞く王様の剣ってやつですな。王様の資格があれば抜けるっていう」
台座に刺さっているのは装飾の施された黄金の柄を持つ見事な西洋剣。素人でも一目で普通の物ではないと分かる逸品であり、彼女たちより先にその存在を知っていた真田がそれを初めて見た日のことを語った。
「それはある日突然あったんだ。俺たちも試しに引っ張ってみたが一切抜けなかった」
「へへっ、じゃあいっちょオレっちが格の違いを見せてやりますよ。見たとこすっげー業物っぽいし」
選ばれし者だけが抜けるというフレーズが格好良い。オマケに自分が渡された太刀よりも豪華で切れ味も良さそうだと順平はノリノリで剣を掴んだ。
真田や美鶴という学内カーストトップ陣が抜けなかった物を自分が抜いたらどうなるか。ペルソナという特別な力にも目覚め、美男美女の集まる寮の一員にもなったイケイケの自分ならいけるはずと、順平は渾身の力を両手に籠めて気合いと共に剣を引っ張り上げる。
「ふんぬあぁぁぁぁっ!! ちくしょぉぉぉぉ、抜けねぇぇぇぇっ!!」
けれど、現実はどこまでも残酷だった。顔が真っ赤になるほど本気で引いてもビクともせず、最後は息切れを起こすほど疲弊して諦める結果となった。
戻ってきた順平は大見得を切った手前全力でヘコんでいるが、それを迎えた真田は呆れを通り越して哀れみすら覚えるとばかりに追撃を入れる。
「あそこまで無様に失敗したのはお前が初めてだぞ。違いは違いでも明らかな格下だったな」
「い、いやぁ、抜けてない時点で一緒ッスよ」

自分でもダサかった事は分かっているのでやめて欲しい。そんな風に順平が帽子を深く被り直して顔を隠していると、いつの間に移動したのか今度は七歌が剣の元へ行っており、両腕を組んで男らしく仁王立ちすると高らかに声をあげた。
「フッ……見ているがいい有象無象ども！　いでよ、エクスカリバーァァァァァッ！」
偶然というか台座に刺さった逸話を持つ剣で最も有名な事から、彼女の叫んだ剣の銘は確かに合っていた。
すると、それだけが理由ではないだろうが、彼女が引っ張ると石と硬い金属が擦れる、ズズッ、という音が小さく鳴って剣がほんの少しだけ抜けた。
これまで誰にも反応しなかっただけに、僅かとは言え動いたのはすごいぞと美鶴たちも注目し、直前にチャレンジした順平と一緒に彼女を讃える。
「おお、マジで少し動いたぞ七歌っち」
「ふむ、およそ二センチと言ったところか」
「ふぐぐ……ダメだぁ、これ以上は動かない……」
刀身の殆どが埋まっていたため、二センチだけでも出てきたのは大きな進歩だ。それ以上は抜けなかった事で本人は不服そうだが、皆の元に戻ると彼女は美鶴の言葉から剣について自分なりの考察を語り出した。
「もしかしたら一日に二センチは動くのかもですね」
「本当に選ばれた存在なら一気に抜けるんじゃないのか？　毎日二センチという微妙な長さなら少なくとも一ヶ月は続ける必要がある。これは本命が別にいて準候補のお前は試されているのかもしれんな」
二軍スタートでも努力して結果を積み重ねれば一軍になれる。そんな風に七歌も剣から試されているのではと真田が言えば、七歌は剣のくせに偉そうだなと口をへの字に曲げてしまう。
転校当初の奇行が減ったとはいえ、彼女が変人であることは全員の共通認識だ。しかし、能力は確かで編入テストを満点クリアしつつ、たまに美鶴よりもずっと大人な視点で物事を見ている節もある。

ただ、それが彼女の平時かと思えばそうではなく、今のようにやたらと子どもっぽい部分もあって、それを見るとゆかりなどは性質が陽に偏っているが湊と似た面倒くさい性格の子だと認識できて、むしろ親近感が湧くほどであった。
転校して最初に出来た友人からそのように思われていると知らない少女は、無礼な剣の相手に飽きて今度はエントランスをぐるっと一周見渡していた。
そして、ある一点で視線が止まり。もしかして、あれがイゴールたちの言っていた扉だろうかと思ったところで、別に用事がないから今すぐじゃなくていいやと後回しにすることを決定し、エントランスのほぼ中央に位置する階段を改めて見つめた。
「これがタルタロスを上るための階段ですか？」
「ああ、ここはあくまでエントランス。あの階段のゲートを潜ったところからタルタロスのダンジョンが始まるんだ。今日は新人の君たち三人に」
美鶴が話している間階段の方を見ていた七歌は、階段の影に何やら動く物を見つけて首を傾げた。
タルタロスにいるのならシャドウの可能性が高いけれど、だとすれば不意を突けそうなタイミングで襲って来ない理由が分からない。
相手は隠れているつもりかもしれないが、何やら頭巾とも帽子ともつかない青い被り物がチラチラと見えていたので、七歌は薙刀を片手に持ち替えると隠れている相手の元へ向かった。
「お、なんかみっけ」
「待て、不用意に近付くな。小さくても恐らくシャドウだぞ」
七歌の向かう先に美鶴たちも視線を向けた事で隠れている何かを発見する。
階段の影からこっそり見てきている相手は体長四十センチもなさそうだが、シャドウの力と体格には何の因果関係もない。小さくても強力なシャドウもいるため美鶴が静止の声をかけるも七歌は隠れていた者の傍まで進み、見上げてきている小さな存在と視線を合わせた。

《ヒホ?》
「それが名前なの?」
　そこにいたのは天辺が尻尾のような形になった青い頭巾を被る小さな雪だるまらしき存在。頭巾と同じ色の襟巻きと靴も履いていてオシャレさんだなと思うが、やはり敵意や害意と言ったものは一切感じられなかった。
《ヒーホー》
「ははっ、なに言ってるのか全然分かんない」
　七歌に訊かれて相手は首を横に振っているため、〝ヒホ〟というのは名前ではないのだろう。それは分かるが正しい名前は分からないので笑っていれば、相手はどうやれば伝わるかなと顎に手を当て考えるポーズを取ってきた。
　美鶴の話ではシャドウは影時間に迷い込んだ者を襲うらしいので、言語によるコミュニケーションが取れる雪だるまは別の何かなのだろう。
　そう思った七歌は相手を抱き上げると、そのまま美鶴たちの元に戻って捕まえた雪だるまを見せた。
「美鶴さん、雪だるま捕まえましたよ!」
「今すぐ捨てろ!　攻撃されたらどうする!」
　正体不明の存在を安易に捕獲したことで、美鶴は何かあれば自分が対処せねばと召喚器とレイピアを構えて七歌と雪だるまから距離を取る。
　もしも相手が油断させておいて攻撃してきたとしても、氷結属性のペンテシレアを持つ自分ならば対応できるはずだという判断だ。
　けれど、後輩らはそんな美鶴の考えなどどこ吹く風とばかりに、ゆかりまで七歌の捕まえた雪だるまを見ようと近付いて行ってしまう。
「なんかこの前のシャドウとかと違うね。ていうか、これどっちかっていうとペルソナっぽくない?」
「あ、それ私も思った。野良ペルソナっていえば良いのか。なんか仲間になってくれそうだよね」
　急に捕まえられても相手は大人しくしている。試しにゆかりが指

を近づけると、相手は赤ん坊のような小さな手で優しく握り返して楽しそうに笑っていた。
　これが全て罠にはめる演技なら大した役者だが、女子と一緒に楽しそうにしている雪だるまを見ていると、あれが敵だと思うことは流石の美鶴も出来なかった。
「先輩、ペルソナにもシャドウみたいな野良がいるんスか？」
「いや、そんな話は聞いたことがないが……確かに意思疎通が可能で敵意も感じないな」
　順平に訊かれ試しに美鶴が相手をアナライズしてみれば、驚くことに相手はシャドウではなく本当にペルソナだった。隣でそれを聞いた真田も野良ペルソナとは珍しいと同じく驚いている。
　だが、既に仲良くなった様子の七歌は相手がシャドウでもペルソナでも気にしないらしく、相手を床に下ろすとポケットからニコちゃんバッヂを取り出して頭巾に付けてあげた。
「よーし、君の名前はヒーホー君だ。ヒーホー君は七歌隊の名誉隊員に任命しよう！」
《ヒッホホー！》
「うむ、君の活躍に期待するぞ！」
　新メンバーのヒーホー君は名前と缶バッヂに大いに喜び飛び跳ねる。そこまで本気で跳んでいる訳でもないのに、相手は七歌たちの腰辺りの高さまで届いているので、身体は小さいが身体能力は非常に高いのかもしれない。
　そうして、新たなメンバーの加入を女子二人が歓迎していれば、急に真面目な顔になった七歌が中断していた話に話題を戻した。
「で、私らだけで探索してきたらいいんですよね？」
「あ、ああ、そうだ。だが、本気でその雪だるまも連れて行くのか？」
　話をちゃんと聞いていて理解していたのは素晴らしいが、いくらペルソナでも素性の知れない相手を仲間として同行させるのかと美鶴は怪訝そうに尋ねる。
　これで近くに召喚者がいればそちらを仲間に引き入れたいところだが、残念なことに美鶴の探れる範囲内に人はいない。そうなると、

本当にヒーホー君を仲間として同行させることになりそうだが、問われた七歌はどこからその自信が来るのか分からないが、絶対に大丈夫だと力強い瞳で答えた。
「大丈夫ですよ。私、ゆかり、ヒーホー君の黄金チームで無事に帰ってきますって」
「いや、会ったばっかのヒーホー君を入れておいて、ナチュラルにオレをハブるのやめてくれよ。つか、チームって七歌っちが隊長で決定系？」
新人チームならばヒーホー君を除いてメンバーは七歌、ゆかり、順平の三人。既に七歌が隊長として話が進んでしまっているが、決まっていないなら自分がやりたいなぁとチラチラ様子を窺いつつ順平が聞けば、どうして七歌が隊長なのかゆかりがその理由を語った。
「私と七歌は真田先輩に怪我を負わせた大型シャドウを二人で倒しているの。彼女の適性は桐条先輩と同時期に目覚めてたらしいし、先輩が来ないならキャリア的に七歌が隊長として相応しいってわけ」
「なーるほど。んじゃ、慣れてくればオレっちが隊長やってみてもいい？」
順平は七歌に対し転校してきたばかりの新人のイメージがあったが、転校前から美鶴と面識があってペルソナ使いとしてのキャリアもあるとなれば、影時間における先輩と認めるしかない。
さらに、自分とほぼ同じ立場だと思っていたゆかりも七歌と二人とは言え強敵との実戦経験ありとなれば、しばらくは経験値稼ぎを続け戦いに慣れるしかない。
そのように今後の方針をまとめ、一人前となった暁には隊長もやらせて貰えないかと順平が改めて聞けば、
「んー、ペルソナのスキル構成によるけど順平は前衛アタッカータイプで、自分が戦ってると後衛への指示が難しいから多分無理。後衛タイプのゆかりも同じ理由で前衛に指示を飛ばしづらいだろうから、中距離型の私が消去法で指揮を執ることになるとおもう」
ヒーホー君と話していた七歌が顔をあげて難しい表情を浮かべながらそう告げた。

一見ただの変人だが七歌は自覚ある変人だ。別に普通にしておくことも出来るが、正攻法では勝てないと思わされた八雲に追いつくために他の者のしないことを試しているのである。

そんな彼女は先日のシャドウとの一戦も問題なく行えていたように、他の者と違って戦闘に慣れていた。それは旧家の跡取りとして護身術を習っていたからだが、元々今ある手札から取り得る戦術を把握し、効果的に切っていくという指揮官としての才能に恵まれている事も大きかった。

「事前に聞いた先輩らの戦闘スタイルを踏まえても結果は同じかな。補助も出来る美鶴さんは中距離型と言えなくもないけど、順平と真田先輩は性格的にも攻撃向き。二人の長所を活かすなら指揮は他の人間に任せて敵を倒しまくってくれた方がありがたいよ」

「ほう、随分と慣れている様子だな。美鶴が教えたのか？」

「いや、七歌は旧家の跡取りとして護身術に武道を習っていたこともあり、一緒に兵法も囓っていたらしい。中学時代と前の高校では一年の頃から生徒会長をしていたので、元から組織のトップに立ち指揮する事に長けていたようだな」

既に美鶴や真田を加えたパターンも考えられており、それぞれに合った役割分担まで頭の中で出来ていることに真田は素直に感心する。

これまでは美鶴が部長として作戦等も考えていたが、美鶴は指揮よりも後方支援も兼ねた指揮官補助の方が合っている。

政治的な駆け引きであれば前に出ても良いが、それが戦闘となれば七歌の方が指揮官に向いていることも自覚しており、ナビとして補助する役目がなくても任せられるようなら彼女に任せようとすら思っていた。

「ま、そういう訳で順平には敵をバッサバッサ切り伏せるエースとして頑張って貰うよ。真田先輩が離脱している間、男子は順平しかいないからね。頼りにしてるよ」

「お、おう！　まっかせとけって！」

自分が隊長になれなくて不貞腐れるかと思われた順平を、七歌は

エースという役割を与えることでモチベーションを上げさせた。一人だけの男子だから頼りにしていると付け加えたこともあって、順平のやる気はほぼ満タンと言って良いだろう。
新たにヒーホー君という仲間も加わったこともあって、新人チームとしての初陣にも関わらず出発直前の空気は非常にいい状態だ。
今日はまだ二階しか探索させるつもりはないが、美鶴たちも不思議と何の不安も感じず、とりあえずタルタロスがどんなところか見てこいと七歌を送り出した。
＊＊＊
タルタロスの二階、ダンジョン部分に足を踏み入れた七歌たちは、エントランスに残った美鶴から地形についての情報を通信で貰いながら敵を倒し進んでいた。
「順平、行って！」
「おう！　見てろよ、オレの大活躍！」
現われた二体のシャドウ、臆病のマーヤと残酷のマーヤを確認した七歌は、チームの中で唯一火炎スキルを持った順平に相手を任せる。
ここに来るまでにも何体か倒していた順平も相性は覚えていたようで、すぐに召喚器を抜くとこめかみに当てて引き金を引いた。
「ヘルメス！」
気合いと共に呼び出された金属の翼を持った鎧のペルソナの名は魔術師〝ヘルメス〟。
ギリシャ神話において伝令の神とされており。彼の作った竪琴がアポロンから息子のオルフェウスに渡り、エウリュディケを連れ戻しに行ったときには同行したという話もあれば。ゼウスに雌牛に変えられた後、ヘラによって怪物に監視されていたイオを助け出したという逸話もある。
そのように仲間のペルソナと中々に関係の深い存在だが、ヘルメスは火の起こし方を発見したという逸話も持っており。当然、順平のヘルメスにも炎を司る力は備わっていた。
迫る臆病のマーヤに狙いを定め、ヘルメスは飛び上がると上空から炎弾を降らす。一発で敵は怯み、二発で体勢を崩し、三発目で直撃す

ると黒い靄になって霧散してゆく。
だが、敵はまだもう一体いて、ヘルメスの攻撃が流れ弾となって残酷のマーヤの侵攻は僅かに遅れたが、耐性があるせいでダメージを与えたとは言い難い。
しかし、敵がさらに進んでも順平は慌てたりせず、その場から横に避けることで後ろから来ていた味方に道を譲った。
《ヒッホー!》
空いた道を白い雪だるまが高速で滑っていく。スキルによって床を凍らし、ヘッドスライディングの体勢で進み続けたヒーホー君は、速度はそのままに敵に突っ込むと相手を体当たりで吹き飛ばした。
「氷で決めて、ヒーホー君!」
《ヒーホーオオオッ!》
小さくてもパワーは一級。体格で勝る敵を吹き飛ばしダウンさせれば、着地と同時に七歌の指示通り口から吹雪を吐いて敵を弱点の氷結で凍りづけにし、最後は限界が来たのか砕いて消滅させる。
見事入れ替わることで二体の敵を倒した一人と一匹は、順平がしゃがむことで楽しそうにハイタッチをしているが、前衛の二人に合流した七歌とゆかりも落ち着いており、これまでの連戦の疲れを感じさせていなかった。
一人で全ての敵を倒そうとするのではなく、相手によって入れ替わり対処していくチームプレーは、今日初めて組んだとは思えないほどスムーズに出来ている。それには美鶴のアナライズ結果を聞いた七歌の指示が的確なこともあるのだろうが、一番の理由は自分がしっかり女子を守らねばと責任感を持って順平が戦ってくれているのが大きいだろう。
「へへっ、オレら中々のコンビだな」
《ヒホー!》
最初は正体不明の野良ペルソナとして警戒していた順平も、ヒーホー君がちゃんと七歌の指示を聞いて戦っていたことで、共に敵を倒した今では連帯感を抱いていた。
お互いを認め合う一人と一匹の様子は見ていて微笑ましいが、普段

の彼の様子からすると不気味なくらいしっかりしている。
　頼りになるのは良いことだが、一体どうしたんだとゆかりは冗談っぽい口調で本人に尋ねた。
「ま、私らからすれば、初陣なのに頼りになりすぎてちょっと気持ち悪いけどね。悪い物でも食べた？」
「そりゃ、オレっちもエースですから？　女性陣を守るナイトにならナイト、なーんつって」
「ヒーホー君、そいつ氷像にしちゃってー」
《ヒホ！》
「うわぁぁぁ、やめろぉぉぉ!?」
　調子に乗って溢した馬鹿な発言は聞かなかったことにしてやる。だから、安らかに眠れとゆかりはヒーホー君に頼んで順平を愉快な氷像にしてやろうと考えた。
　頼まれたヒーホー君が頑張って吹雪で凍らせようとするも、順平は必死にそれらを躱してなんとか生還を果たす。
　敵よりも味方の攻撃の方が恐ろしいわと肩で息をしている順平に、これに懲りたら次は言葉に気をつけろとゆかりが頑張ってくれたヒーホー君を労っていれば、ペルソナの力で七歌たちの様子を見ていた美鶴が通信を入れてきた。
《しかし、岳羽じゃないが私としても少々意外だ。学校生活での様子を聞けば、伊織はムードメーカーである分、感情に左右されやすいタイプだと思っていた。だが、今日の戦闘を見ている限り、戦闘で気分が高揚してきても頭は冷静さを保っているようだった。初陣となれば調子に乗ってもおかしくないというのにな》
　感情で力が増幅するタイプはよくいる。調子がいいと神がかった力を発揮するが、一度ドツボに嵌まると中々力が発揮できなくなるため扱いは難しいが、そういったタイプだと思われた順平は意外なことに冷静な戦いぶりを見せていた。
　その落ち着いた対処の仕方は素人とは思えぬレベルであり、普段のふざけた態度が演技なのではと思ったほどである。
　しかし、美鶴の言葉を聞いた順平は暢気な表情のまま、どうして自

分がこんなにも落ち着いて戦えていたのか心当たりがあると答えた。
「あー、それは多分あれッス。有里君の真剣ゼミの効果ッスね」
《真剣ゼミ？》
ゼミと言うからには研究会のようなものだと思われる。だが、あの面倒臭がりの湊が一般の生徒を招いて研究会を開くとは思えない。
故に、それはどういった物なのか聞き返せば、事情を知っているゆかりが今度は答えた。
「順平が勝手に呼んでる試験前の勉強会のことです。有里君の勉強法が気になって何人かで彼の家に行ったんですけど、彼が用意した対策プリントをやっただけで順平ってば底辺から平均以上の順位になったりしたんですよ」
《それは……随分と優秀な教師だな》
湊の学力が非常に高いことは知っていたが、他人に教えて成果を上げるほどだとは思っていなかった美鶴は、順平のクラスを担当する教師らを思って言葉に詰まる。
試験前の駆け込み勉強ならば長期的な記憶として定着するとは思えないが、それでも必要なときに必要な学力を発揮できれば成績の上では問題ない。
実際に順平は中等部の終わり頃からテストでは平均並みの点数を取っており、赤点常連の名は既に返上しなければならない状態だ。
これが全て湊個人のおかげで、さらに戦闘にまで活かせるとなれば、美鶴としてはアドバイザーとして雇いたいくらいであった。
「実際、有里君って教え方が上手いんスよ。オレとしては何も分かってないって感じだったんスけど、有里君はこれが分かってないからこっちも分からないってのを見抜いて、これをしてから次にこれをすれば出来るってゲームの攻略法みたいに教えてくれたんです」
《ふむ、だとすると戦闘も同じように自分の役割と次の行動を頭の中で組み立てていたのか？》
「いやいや、そこまでは無理ですよ。ただ、七歌っちが全体を見て指示してくれるんで、オレっちは自分の役目を果たして次の人に繋げばいいって考えてたんす。次もオレなら追加で指示が来るし、他のやつに

指示がいけば邪魔しないようにしつつフォローにいけるようにって。ま、ターンバトル的な発想っすね」
順平がよくやるゲームでは味方は行動し終わると元の場所に戻ってくる。それと同じで順平も七歌の指示を基に自分のターン行動を取って、終わると他のメンバーや自分の次の行動のために動く準備をしていた。
ゲーム感覚ならば美鶴としては注意しておきたいところだが、順平はゲームの行動パターンを参考に戦闘中の行動を決めていただけだ。
《ゲームから着想を得たのはユニークだが、君のその思考は普通一朝一夕で身につく物ではない。明彦は未だに遊び気分が抜けていないが、我々の活動は映画のヒーローと違って一瞬の油断で簡単に命を落とすこともある。だが、そうやってチームで戦うことを意識して動いてくれる者がいれば、格段に危険は減り全員を助ける事に繋がるんだ》
それなら柔軟な発想を褒めこそすれ、窘めるのはお門違いだろうと通信の向こう側で美鶴も小さく笑う。
《切っ掛けをくれたのは有里かもしれないが、それを自分の力として活かしているのは君の才能だ。七歌も言っていたが私も君の力を頼りにさせてもらうぞ》
「へ、へへっ、うっす！」
土壇場で召喚に成功し二人がかりとは言え大型シャドウを倒したゆかり、面白い発想でチームの中で力を発揮する順平、そんな彼らを統率し自身も前線と後方支援を柔軟にこなす七歌。さらに野良ペルソナという不思議な存在も混じっているが、通信越しに彼らを見ている美鶴は素直にいいチームだと思った。
彼女の傍では戦力が整ったというのに己が戦えない事ですねている者もいるが、美鶴としては自分たちの後輩は新人ながらなんとも頼もしいじゃないかと期待感に溢れていた。
「よっし、敵も見なくなったし戻ろうか」
「ういっす。ヒーホー君、帰りもオレらがナイトだかんな。油断すんなよ」

《ヒッホホー》
今日はまだタルタロスがどういった場所か知って貰うだけなので、他のフロアには移動しないが、美鶴だけでなく戦っていた本人たちもこれならやっていけそうだという自信を持てていた。
帰るための脱出装置に向かう途中にもシャドウが出てくる恐れがあるため、リーダーの七歌は勿論、エースとして味方を守ろうとする順平とヒーホー君もしっかり周囲を警戒する。
そんな二人を後ろから眺めていたゆかりは、一番の新人が先輩ぶっちゃってと溜息を吐く。
「はぁ……あんたはまた偉そうに。言っとくけど私らの中で一番強いのヒーホー君だからね？」
「あー……それなぁ、桐条先輩の力で調べたらしいけど意外だよなぁ。適性値だっけ？　それで言うと先輩らより高いんだもんな」
言われた順平は本当に不思議そうな顔で隣を歩くヒーホー君を見る。
なりは小さいがヒーホー君の適性値は美鶴たちよりも高い。これはアナライズした美鶴自身が一番驚いたことで、現在美鶴は約八千、真田は約六千の適性値を持っているのだが、ヒーホー君は二人を上回る一万ほどの適性値を持っていた。
対して順平とゆかりは三千にも満たず、目覚めて長い七歌もペルソナを鍛えていなかったため適性値は約四千と高くない。
つまり、新人三人の合計とヒーホー君単体でようやく同じくらいの適性値となる訳だが、適性値はあくまで保有するエネルギー量の様な物。ペルソナでスキルを放つときには最大出力の方が重要になってきたりもするので、適性が高ければ強いという訳でもなかった。
「戦闘は適材適所、向き不向きがあるから一概には語れないよ」
「まぁ、それもそうなんだけどさ」
パワーはないがスピードがある、スピードはないがタフネスがある、そんな風に何かで劣っていようと持ち味を活かせば戦闘は分からないものだ。
適性値を基に色々と考察するのはいいが、それで安易に強さを格付

けするのは間違っていると七歌が指摘すれば、ゆかりも素直に認めて強さの話題はそこまでとなった。
そして、フロアのシャドウを全て倒してしまったのか敵に会わぬまま進み、最奥と思われる場所で七歌たちは変わった機械を見つけた。
「お、脱出装置発見。んじゃ、帰るから皆装置に近付いて」
後はこれを起動して帰るだけ。三人と一匹はすぐに装置の傍に寄ると七歌が操作したことで発生した光に包まれエントランスへと戻ってゆく。
今日は、タルタロスに来て早々変わった協力者との出会いはあったが、大きな怪我もなく探索を終えられた。そして、七歌たちが帰る支度をしていると、ヒーホー君が残るというのでエントランスで別れると、それでようやく七歌たち三人の初めてのタルタロス探索は無事に終えることが出来たのだった。

第二百話　青年の選択

――深層モナド

斬りかかる天神の武者の刀を鎖で編まれた黒い手甲で受け止め、そのまま握り潰すようにしてへし折る。

得物を破壊されたシャドウは武器から手を離して後退しようとするも、青年は折った刀身を敵の首に向けて投げつけ、一瞬の隙を作ると〝悪魔〟のカードを呼び出した。

「こい、マスティマ！」

赤い欠片と黒い奔流の内より現われたのは、鋭い牙と角を持つ野獣の様な姿をしたペルソナ、神の眷属で在りながら憎悪の名を冠する悪魔〝マスティマ〟だ。

《――――――アァァァッ!!》

咆哮し地に降り立ったマスティマは床を踏み砕き、拳を振り上げながらシャドウへ突進すれば、筋肉の隆起した腕ごとそれを相手にぶつけるよう振り下ろし強堅な甲冑もろとも破壊し消し去る。

目の前の敵をペルソナに任せている間、湊は背後から飛んできていた砲弾を九尾切り丸で両断し、すぐに武器をコートに仕舞うと敵に向けて走り出す。

砲弾を撃ってきた洗礼の砲座は戦車型のシャドウ。全ての物理に対して反射の耐性を持っており、タフな相手を殺すのなら弱点の電撃スキルを見舞うのが効果的。

けれど、逃げようと後退する敵に追いついた湊は、相手の耐性を知っていながら腰溜めに構えた左拳を砲身に当てて跳ね上げ、バランスを崩した敵に足を頭上まで振り上げた渾身の踵落としを決めた。

（……足りない）

物理攻撃など効かないと油断していた敵は、踵落としを喰らった場所を陥没させ、跳ね上げられた砲身が歪んで使えなくなる大ダメージを負う。

本来、耐性はガードキルというスキルを使わなければ無力化出来ないが、湊はそういった耐性を殺す魔眼を持っているだけでなく、武術

の〝通し〟と呼ばれる技術も習得していた。
威力を内部に伝えて破壊する技だけあって、シャドウに対しても耐性を無視してダメージだけを通すことが出来ると湊も重宝していたが、同じく武術で通しが使えるチドリは物理耐性持ちのシャドウには使えないと言っており、彼が実際に通しでダメージを与えられているのかは疑問が残る。
けれど、魔眼も使わず物理耐性を無視している以上、目の前のシャドウは湊にとってカモでしかない。着地してしっかりと地面に足を付けると、肘打ち、回し蹴り、拳打、膝蹴りと連続で放つことで相手の耐久限界を超えて霧散させた。
直近の敵を倒し終えた湊は後方で敵を倒していたペルソナを消し、呼吸を整えながらコートに手を入れると再び大剣を引き抜く。
（……まだだ）
引き抜いた大剣は振り向きながら振るわれ、横の通路から迫っていた無の巨人の剣を受け止める。
その際、互いの持つ武器の性能差から相手の剣は砕けるも、無の巨人は構わず逆の手を湊に向けて振り下ろしてくる。
湊はそれを受け止めることも出来たが片手で剣を持ったまま後方に跳ぶことで回避し、敵の一撃で砕けた床の破片が飛んでくるのも構わず投擲のモーションに移り剣を投げる。
青年の手より放たれた高速で飛ぶ超重量の鉄の塊は、見事に相手の顔面を捉えるかと思われたが、相手には物理吸収の耐性があった。
いくら湊でも魔眼で耐性を殺すか、直接近接格闘で衝撃を内部へ通さない限り物理耐性は無効化出来ない。案の定、剣が当たった敵は回復したことで破壊された剣が復活し、投げられた剣はそのまま敵の正面に落ちて地面に刺さってしまう。
（……もっと）
これまでモナドで多くの敵を倒していた湊が、今更耐性を間違えるというミスを犯す訳がない。
ならば、どうしてわざわざ敵を回復させるような事をしたのか？
視線だけで敵を殺せそうなほど鋭い眼光で敵を睨んでいた青年は

床を蹴り、敵の呪殺攻撃を避けて壁を走りながら接近すると、右腕に黒い炎を走らせながら飛び込み、敵の正面に落ちていた剣を掴んで地中へ炎を送り込んだ。
剣を伝って地中に送られた炎は間欠泉のように地面から噴き出し、石材の身体を持つシャドウを身体の内部から燃やしてゆく。
ブロック状の石材で組まれた身体は、その隙間から黒い炎が漏れ出して消えるのは時間の問題だと思われた。だが、シャドウは消えゆく間際にせめて一太刀と剣を振るい、その剣が湊の身体を捉えようとする。
その瞬間、湊の腕を覆っていた炎の一部が腕の形に変化し、剣を受け止めながら握り砕いてしまえば、死ぬ間際の一撃をあっさりと防がれた敵は武器と共に靄になって消滅した。
敵を倒し終えた湊は腕の炎を消して剣を仕舞うと、さらに下の階層を目指して進んでゆく。
(この程度じゃ駄目だ。もっと、小狼として仕事をしていたときの感覚に戻らないと)
それぞれが強大な力を持つモナドのシャドウを狩っていた湊は、今の自分の状態に満足できず、かつて裏の世界で死神と呼ばれた頃の自分を取り戻そうとしていた。
単純な身体能力や技術で言えば現在の方が強い。名切りとして覚醒したことで身体は作り替えられ、今尚より優れた存在になろうと自律進化している。
しかし、湊が言っているのはそういった肉体的な強さの話ではない。久遠の安寧との決着をつけて日本に戻って以降、研究と日常ばかりの毎日を送っていたせいで、彼は感情のない敵をただ殺すだけの機械のような自分を失っていた。
親しい者からは痛々しいとまで言われた、まるで抜き身の刀のような常に張り詰めた状態こそ、湊の理想とする目的を果たすためだけに存在する自分の姿だ。
(最悪を想定するなら今の状態じゃ対処できない)
先日見たアルカナシャドウはモナドの敵にも劣る存在だったが、こ

れから来るアルカナシャドウも同程度かは分からない。
いや、ペルソナが死に近付くほど強くなることを考えれば、シャドウもデス死に近付くほど強くなると考える方が自然である。
強大な敵と対峙し、自分や影時間に関わる桐条の者が死ぬなら構わないが、大切な少女とその世界の一部になっている少女の友人らが命を落とすのはなんとしてでも避けなければならない。
そうしてかつての自分に戻る方法を考えていた青年は、それが大切な少女や彼を想う者たちにとって最悪の選択だと気付かぬまま、右眼の眼帯を解きコートから鏡を取り出した。
《駄目だ、湊君っ》
青年のやろうとしている事に気付き、僅かに力を取り戻したことで具現化出来るようになったファルロスが止めようと現われる。
しかし、力を失っている少年ではどう足掻いても彼を止めることは出来ない。
「必要なのは俺の力だ。記録として保持しておけば、それと結び付く感情はいらない」
《違うよ。それは、君と大切な人との絆だ》
青年がやろうとしているのは、戦闘中に行っている思考と感情の分離のさらに先、思い出から感情を分離する記憶の記録化である。
元々、小狼だった状態から湊が鈍ったのは日常で多くの者と関わって執着が増えたからだ。以前の状態に戻すのならば、一番簡単なのはその執着を必要最低限まで初期化すれば良い。
しかし、記憶を消せば日常に支障をきたすので、その点をクリアした状態で執着を消すには、思い出に結び付いている感情の部分を切り離してやればいい。
この方法ならば湊は記憶を保持したままでいられ、さらに感情自体が消える訳ではないので、大切な少女たちを守るために激情を燃やして心の力を振るうことも出来る。
ただ、それを実行に移せば湊の他者に対する対応は明らかに変化するだろう。今でこそ善人として人々に頼られているが、その前は湊が他者に興味を抱いていなかったこともあり、話しかけても一言二言で

会話が終わって気まずい空気が流れていた。
戻ってしまえばそのときの再来となり、むしろ、親しくなったと思っていた者にすれば、相手が急に冷たくなって自分が何かしたのだろうかと悩むに違いない。
そして、彼のことを想っている者たちにとっては、ようやく日常にも居場所を作り始めていた彼が、自らその日常を切り捨ててしまったことに深い悲しみを覚えるだろう。
力を求める気持ちは分かるが、それでは結局大切な者を傷つけるだけだとファルロスが止めれば、湊は構わずカードタイプの鏡を手に持ち言葉を返した。
「……俺にとってはチドリやアイギスが生きている事が全てだ。憎まれようと恨まれようと関係ない」
《君はこれまでの自分を否定するのかっ》
「違うな、これも次へ進むための選択の一つだ」
言い終わると同時に紫水晶色の青年の右眼が妖しく光り、鏡を見ていた湊は僅かに身体を揺らして手から鏡を取り落とした。
それは即ち彼の暗示の魔眼が力を発動し、彼が直前に籠めた記憶の改変が行われたということ。
数年掛けてようやく僅かな人間性を取り戻したというのに、目的のために躊躇いもなく再びそれらを手放した青年にファルロスは深い悲しみと憤りを感じる。
感情を消した訳ではないのでまた人間性を取り戻すことは可能だが、そのためにどれだけの時間が必要かなど考えたくもない。
他の者にもっと力があれば、青年もここまで自分の力のみを信じて突き進もうとはしなかっただろう。つまり、これは人々が彼に縋り頼ってきた結果でもある。
暗示をかけた直後の記憶の混乱から回復し、右眼に眼帯を付け直して顔を上げた青年は、目の前に敵などいないというのに氷のように冷たい感情の消えた瞳になっていた。

４月２２日（水）

放課後――月光館学園

本日の授業を終えて帰ろうとしていた七歌は、携帯に真田からのメールが届いていることに気付き、内容を確認しながら鞄の中に教科書類を詰めていく。

どうやら部活メンバーに一斉送信されていたようで、七歌の席の近くでは順平やゆかりも同時に携帯を見ているが、どうやら活動の協力者を紹介したいから放課後にポロニアンモールに来て欲しいというお誘いだった。

美鶴たちから聞いている協力者は警官と骨董品屋だったが、骨董品屋は未だ改装中なので消去法で警官の方だろう。

そう考えた七歌は刃のある武器が欲しかったので、順平とゆかりが暇なら一緒に行こうと声を掛ける。

「伊織ー、野球いこうぜ！」

「お、野球できんの？　つか、寮にあった金属バットってそういや七歌っちのらしいけど、二人じゃ野球できねーしバッティングセンターでも行くか？」

「いや、二人とも真田先輩のメールの方済ませてからにしなよ」

元野球少年だけあって順平は七歌の誘いにぐっと来ていた。今でも野球は見るのもするのも好きで、巌戸台にあるバッティングセンターの会員証も持っている。

それなりに行っていたのかシルバー会員のカードを順平が財布から取り出せば、遊びにいくならちゃんと用事を済ませてからにしろとゆかりが二人を窘めた。

二人も別に本気で行こうと思っていた訳ではなく、時間が余れば少し遊ぶかという感じだったので、ゆかりに言われると素直に聞いてポロニアンモールを目指すべく教室を出る。

普段なら弓道部があるゆかりも先日のミーティングで今後の予定は話し終えていたので、今週は休日練習まで部活は休みだと同行し、一緒に階段を降りて靴箱に行けば知っている青年の姿を発見した。

「お、有里君じゃん。そっちも当番とかなかったんだね」

この後は用事があるので遊べないが、帰る前に顔を見れてラッキー

だとゆかりが近付いてゆく。
そして、声を掛けられた青年が靴を履き替えて振り返ったとき、
「――――ねえ、どうしたの？」
彼の瞳を見たゆかりは真剣な表情になって尋ねていた。
「……何が？」
「何がって、明らかに普通じゃないじゃん」
絶対におかしい、そういってゆかりは彼を問い詰める。
昨日までは分かりづらくも感情のある瞳をしていたのだ。それが次の日には何も写していない冷たい瞳になっていれば、いくら何でも何かあったとしか思えない。
ゆかりが怒ったように尋ねても湊は首を捻るだけで質問の意図を理解しておらず、これでは埒が明かないと昨日の放課後に何をしていたか順に聞こうとしたとき、二人を眺めていた七歌が後ろから口を挟んだ。
「八雲君、また記憶が消えたの？」
「……また記憶の話か。飽きないな、お前も」
自分は記憶喪失ではない。何度もそう言ってきたというのに、七歌がまたしても記憶喪失について聞いてきたことで、湊はいい加減付き合うのも面倒だと呆れた顔をして帰ってしまった。
ゆかりも七歌も去って行く湊を引き止めようと思ったが、今の湊はどこか近寄りがたい雰囲気をしており、これまでのように気安く声を掛けるのは躊躇われた。
そして、少女らと青年のやり取りを後ろで眺めていた順平は、今日の湊は違和感ばりばりだと怪訝な表情で腕を組み首を傾げる。
「あれー、なんか有里君の雰囲気いつもと違くなかった？　こう、オレっちの知ってる感じだともう少し面倒見良さそうなタイプだったんだけど」
「そんなの見たら分かるでしょ。あれじゃまるで、昔に戻ったみたいじゃない」
絶対におかしいし先ほどの対応にも違和感しかない。順平にそう返すゆかりはどうして湊が昔のような状態に戻っているのかが気に

なるようで考え込む。
すると、あの状態の湊を知らなかった七歌が、彼があんな状態だった時期があったのかと尋ねた。
「ゆかりはあんな状態の八雲君を知ってるの？」
「私以外にも中等部からいる人は結構知ってるよ。入学してきたばっかりの頃はあんな風に人を寄せ付けない感じだったんだから」
入学当初の湊は今よりも近寄りがたい雰囲気だった。同じように他者との関わりに興味がなさそうなチドリがフォローを入れることもあったくらいで、一方的に助けて去って行くことを除けば昔の湊は人付き合いが少ない方ですらあった。
けれど、最近の湊は地道な人助けと部活を通じて注目されるようになったこともあり、街を歩けば自然と挨拶されるくらいに人と関わる事が増えていたのだ。
それがどうして昔のような雰囲気に戻り、日常を過ごしていればなり得ない冷め切った瞳の色になっていたのか疑問が残る。青年のことが心配で堪らないゆかりが分かるはずもない原因について考えていれば、靴を履き替えていた順平が知っていそうな人から情報を集めてはと助言した。
「クラスの子かチドリンとかラビリスちゃんに聞いてみれば何か分かるんじゃね？」
「……うん、何か知らないか聞いてみる」
現状、彼の変化について知っていそうなのはチドリとラビリスくらい。他のクラスメイトはきっとゆかりと同じ状態だと思われるので、七歌たちとポロニアンモールに移動する間、ゆかりは彼の家族である少女たちに連絡を取った。
――ポロニアンモール
「妄想モノマネシリーズ、お題〝真田先輩に試合で余裕勝ちしたときの有里君〟」
ポロニアンモールについた七歌たちは、集合場所の交番を目指す途中に暇だからと順平のモノマネを見ていた。
帽子を脱いだ順平はどこも見ているのか分からない黄昏れた表情

になって溜息を吐き、相手を見下したような薄い笑みで髪をかき上げる動作をしながら、余裕たっぷりに低めの声で呟く。
「……男前が上がりましたね、先輩」
あくまでこれは妄想だ。順平が勝手に相手のイメージから発言を考えており、実際にこのようなことを言った事実は存在しない。
しかし、湊のことを知る少女たちは、彼のイメージと順平の台詞が見事に合っていたため笑いながら感想を述べる。
「あー、すごく言いそう」
「ルックスに天と地ほどの差があるけど、口調とか台詞の特徴はよく捉えてるじゃん」
「あははっ、だろ？　まぁ、オレっちは転入前で実際に試合見てないんだけど。真田さんが白目剥いてぶっ倒れてたって話は聞いてたからさ」
先頭を行く順平は女子らの方を見ながら後ろ向きに歩き、中々良いネタだったろと手応えを感じる。
ここに来るまでチドリたちから事情を聞いていたゆかりは暗い表情をしていて、一体なんと返ってきたのか尋ねれば、チドリとラビリスから揃って「あんな馬鹿しらない」と彼に対して怒っていて何も聞けなかったとのことだった。
それを聞いた七歌が美鶴の母親である英恵に電話で事情を話して、湊や周辺人物から何か聞いていないか訊いてみていたが、そちらも有力な手掛かりはなく、むしろ英恵が湊を心配してこちらに来ようとするのを止めなければならないほどだった。
仲間、それも可愛い女子らの暗い表情など見たくないと思った順平は、なんとか彼女たちを笑わせようと頑張った結果モノマネへと踏み切った訳だが、真田と会う前に成功して良かったと安心したとき後ろから衝撃を受けて思わず頭を押さえる。
「いだっ!?」
急に何が起こったのか分からず、その場にしゃがみ込みながら振り返れば、そこには額に青筋を浮かべた真田が立っていた。
「男前が上がったな、順平」

「ちょ……ただの冗談じゃないッスか。殴るとかマジ酷いっすよ」
「人をコケにするようなネタを披露しておいてよく言えるな」
どうやら彼は一連のモノマネを見ていたようで、思い出したくもない中等部の苦い記憶を思い出させられて怒ったようだ。
それくらいで随分と器の小さいやつだと思わなくもないが、仮にそれを口にすれば拳になって返ってくるため、順平は殴られた箇所を押さえながら立ち上がると許して貰えるよう相手にすり寄る態度をみせる。
「じゃあ、次のネタで笑ったらチャラにしてくださいよ」
「俺に関係するネタ以外にしろ」
「分かってますって。妄想モノマネシリーズ、お題〝頑張って有里君に声を掛けようとするけど躊躇っちゃう桐条先輩〟」
真田が湊に対してあまり良い感情を持っていないことは分かる。故に、ここは真田と親しい人物のモノマネでウケを狙おうと、帽子で片目を隠して美鶴の前髪をイメージすれば、
「――――随分と楽しそうだな？」
そのタイミングで後ろからよく通る女性の声が聞こえてきて、順平と真田は驚愕の表情のままバッと振り返る。
振り返った二人の視線の先では姿勢良く歩いてくる美鶴の姿があり、もしかしなくても聞こえていたよなと嫌な汗が背中を濡らす。
真田のときは本人のモノマネではなかったので助かったが、湊関連に敏感な美鶴はそれをネタにした自分のモノマネをされそうになった直接の被害者。これは拙いのではと順平が固まっていれば、凛とした表情の美鶴が薄く笑いながら口を開いてきた。
「どうした、伊織。続けてくれて構わないぞ？」
「い、いやぁ、まだネタの練りが甘いんで今回はやめておきます」
「そうか。なら、いつか完成したときには見せてくれ」
セーフ、ギリギリセーフ。相手の恩情によって助けられ、順平と真田は互いに肩を叩き合って無事を喜んだ。
男子のそんな馬鹿な行動を呆れた目で見ていたゆかりは、気を取り直して美鶴までやって来たことで自分たちを呼んでいた真田に声を

掛ける。
「全員集合ってくらい重要な用件だったんですか？」
「いや、俺は顔合わせとしてお前らを黒沢さんに紹介しておこうと思っただけだ。美鶴が来るとは聞いていなかったぞ」
「なに、君たちが黒沢巡査に会いに行くときいたからな。装備を整えるにも色々といるだろうと先日の探索の報酬を先に持ってきたんだ」
シャドウとの戦いは命懸けだ。その働きに応じて報酬が支払われるのは当然だとして、美鶴は封筒を取り出すとそれを探索リーダーの七歌に手渡す。
貰った直後に金額を確かめるのは少々下品ではあるものの、中身が分からないと買う物も決められないため、一言断ってから中身を取り出せば日本一のモテ男こと諭吉が十人ほどいた。
「お、おぉ、急にリッチマンになった気分だ」
これはあくまで支度金と報酬の一部を合わせた物ではあるが、まとまった金を見たことがなかった順平は思わずゴクリと喉を鳴らした。
ただ、お金を封筒に仕舞い直した七歌は、貰えるのなら貰っておくが、支度金を用意するくらいなら必要な物資を別口でくれれば良いのにと不満を漏らす。
「けど、これって別に桐条グループが装備を支給してくれれば必要ない出費ですよね」
「まぁ、そう言ってくれるな。グループでも色々と開発を進めているが、刀を打ったりは出来ないんだ。形を真似て現代の技術で模造しても、鉄の特性を知って柔軟性を持たせることで切れ味と強度を両立させるなんて事は出来ない。そうなると現存する武器を使うのが効率的でコネを持っている黒沢巡査に仕入れを頼んでいるんだ」
七歌の言い分も分かるが、現状ではこれがベストな選択なのだと美鶴は答える。
様々な物を生産している桐条グループでは兵器類も作ってはいるが、人が使う刀剣類などは作っておらず、ノウハウもないのでシャドウとの戦いにおいてどの程度信頼できるか分からない。

故に、現代よりも優れた冶金技術によって作られ、魂を込めて鍛えられた物を探して使った方が優れていると思われる。
それを桐条の伝手を使って探すことも出来なくはないが、実際に本人が確かめてみないと武器との相性は分からないため、無駄に集めるよりある程度の目星を付けて集めてくれる黒沢なる人物の協力を仰いだ方がいいのだと美鶴は言った。
「ふーん。ま、いざとなったら実家から持ってきますよ。百鬼家ほどじゃないですけど、九頭龍家にも出せば世間が騒ぐような神代の宝剣とかが安置されてるんで」
ニコッと笑いながら話す七歌は、そのまま身体を反転させると真田の後に続いて交番に入って行く。そこで黒沢という男を紹介され、適性を持たない協力者は珍しいなと思いながら、七歌だけでなく順平やゆかりの武器も新調した。
終わって余った時間は、せっかく全員が集まっているということで、順平の案内でバッティングセンターの併設されたゲームセンターに行き、初めて来たという美鶴に遊び方を教えながら一緒の時間を楽しんだ。

影時間――ポートアイランド駅裏路地
今日もまた影時間がやってきた。生温い空気に不快さを感じながら、荒垣は座っていた階段から腰を上げると、薄暗い路地を進んで行く。
彼が座っていた場所からは事故現場が見えた。不安定になっていたペルソナの暴走によって、天田乾という少年の目の前で母親の命を奪ってしまったのだ。
人が瓦礫で潰れる音、広がってゆく血溜まり、幼い少年の絶叫、それらは今でも深く記憶に刻まれており、荒垣は罪悪感なのか影時間にはなるべく事故現場を見に来ることにしていた。
もっとも、今の彼に暴走の危険は無い。ペルソナは湊によって抜かれており、さらに副作用のある制御剤を飲むことでより安全策をとっている。

湊の話では持ち主との繋がりによって戻ってくる事もあり得るらしいが、制御剤を飲んでいればそれも弱まり、仮に戻ってきても薬の力で押さえ込めるという二段構えだ。
先日、真田がわざわざやってきて、この前は助かったと礼を言われ、さらに戦うならちゃんと戻ってこいとも言われたが荒垣に心当たりはなかった。
それはつまり、以前許可を貰いに来た通りに青年が荒垣の振りをして彼らを助けたのだろう。美鶴にバレている時点で変装までして正体を隠す意味は分からないが、ああやって真田が助けるたびに来るとすれば、礼を言われる面倒さを荒垣に押しつけることが目的のような気もした。
「……ん？」
そんな事を考えていた荒垣が裏路地を進んでいると、道の先に人の気配を感じ、話し声が耳に届いてきた。
こんな時間に何かをしている人間など限られている。それが人気の無い裏路地となれば、高確率で彼らだろうと当りを付ければ、他の道と合流する十字路に彼らはいた。
「結婚詐欺か知らんが、依頼人はお前をエライ目に遭わせて欲しいっちゅう話や。最低でもリハビリが必要なレベルの大怪我、別に殺してもかまへんとも聞いとる」
「な、なんでだよ！　あ、あれはあいつが勝手に貢いできただけでっ」
ビシッとしたスーツを身につけたホスト風の男の前に、三人の男たちが立っていた。一人は眼鏡をかけ書類を相手に見せる男、一人はダボッとしたラッパー風の服を着た男、そして最後の一人は相手の言葉に一切の関心を示していない上半身裸の男だ。
「詳しい事情は聞いていません。まぁ、特に興味もありませんしね」
「なら、なんでこんなっ」
今まさに殺されようとしている者にとって、殺される理由はとても大切なものだろう。彼らに依頼した理由はおおよそ理解したが、彼らがそれを受けた理由によっては仕事を受けるほどではないだろうと言うことも出来る。

もっとも、聞いたところで報酬が良かったのでと言われてしまえばそれまでだが、男が自分の命を守るために必死になって尋ねれば、ダボッとした服を着た男であるカズキが呆れ顔で口を開いた。
「馬鹿かテメェ、オレらは金貰って依頼人の望み通りにしてるだけなンだよ。例えオマエが聖人君子だろうが極悪人だろうが、依頼人は復讐を望ンでオレらに頼ってきた。だからオレらはオマエを始末すンだ」
仕事と報酬が見合っていれば細かい事情は興味ない。そう断言されては何も言い返せず、半裸の男のことタカヤの腰の銃や、カズキが腰につけている刃物を見た男は、自分はそんなもので殺されるのかと顔を恐怖に歪ませ、ストレガの三人に背中を向けると一目散に走り出す。
「い、嫌だっ。オレは何もしてない、あんな口約束を破っただけで殺されてたまるかっ」
こんな仕事を続けていればターゲットが逃げようとするなど日常茶飯事。ただ、追い詰められた者の表情を楽しみにしているタカヤや、狩りのように逃げるターゲットを追うことを楽しみにしているカズキは、人としては三流以下のターゲットのいい反応に口元を歪ませた。
「ヒャハハッ！　いいぜ、オニゴッコの始まりだァ！　せいぜい遠くまで」
追い詰められて火事場の馬鹿力が発揮されているのか男は中々の走力を見せる。
けれど、影時間で身体能力の上がっているペルソナ使いと比べれば並以下だ。追いつくのは簡単だろうと腰の獲物を抜いてカズキが駆け出そうとしたとき、彼らの進む先に黒いマフラーを巻いた人影が見えた。
男は相手を知っていたようで、人助けをすることで有名な青年ならば助けてくれるだろうと縋る気持ちで相手に近付く。
「た、助けてくれ。こいつらに殺され――――」
だが、男と青年の距離が縮まった次の瞬間、極めて自然にまるで邪

魔な羽虫を追い払うが如く、青年の手が伸ばされると男の首を掴んでへし折りそのまま捨てていた。
人を殺すとき、ここまで自然に違和感も不自然さなく手に掛ける事の出来る者はいないだろう。あまりにあっさりとし過ぎていて、見ていたストレガのメンバーもしばし呆けてしまったくらいだ。
赤い泡を吐き痙攣している男を見ていたカズキは、自分たちが殺す前にターゲットが取られたぞと頭を掻きながらタカヤに聞いた。
「あーあ、獲物横取りされちまった場合はどうなンだ？」
「手間が省けたという事で宜しいのでは？　しかし、ふふっ……随分と久しい感じがしますね。世間で有名になってから甘くなったと残念に思っていたのですが、以前のあなたに戻られたようで何よりです」
仕事のことなどどうでもいい。そう言いたげなタカヤはやってきた湊に話しかけながら、見事な手際でしたと彼の殺しを褒めて拍手を送る。
タカヤは銃を、カズキは刃物を、ジンは手榴弾をそれぞれ持っていて殺すときにも使っていたが、湊は何も持たずに手で首を掴むだけで済ませていた。
殺しにもエコが求められている訳ではないが、何も使わず自分の身一つで出来るのなら楽なことこの上なく、仕事もしやすいだろうと素直に感心できた。
そんな事を彼らが話している間にジンは男の様子を確かめており、確認し終えて立ち上がると首を横に振って戻ってくる。
「頸椎を完全に折られとって即死や。あない自然に殺されて苦しみを感じる間もないやろうけど、まぁ、結果的に死んどるから依頼人も満足やろ」
見事に即死させられていて、どうやれば一発で首の骨を折れるのかとジンも苦笑する。
同じく話を聞いていたカズキも、自分には出来そうにもないと青年の特異な怪力に呆れつつ、事情を知らないはずの彼がどうして男を躊躇いなく殺せたのか尋ねた。

「ゴリラみてェな握力してやがンな。しかし、オマエ、あいつが殺しのターゲットだと知ってて殺ったのか？」
「……殺されるって叫んでたろ。なら、纏わり付かれても面倒だし、その前に殺しておこうと思っただけだ」
「なるほど、海外から戻ってきたばかりの頃の印象を受けていましたが、むしろ裏の仕事を始めた頃に近いようですね」
　湊の殺した理由を聞いたタカヤは、冷たい瞳をした青年の様子を絶賛し、どこまでも楽しませてくれると嬉しそうに笑う。
　エルゴ研にいた頃から本気の命の奪い合いを望んでいたタカヤにとって、甘くなってしまった彼と戦いには不安を抱いていた。ギリギリの戦いの中でこそ生を実感できるというのに、余計な殺しはしないと手を抜かれる可能性もあったからこその不安だ。
　けれど、彼は何があったのか知らないが、湊は邪魔をする者は全て敵だと一切の情け容赦なく殺せる状態になっていた。これならそのときが来れば楽しい命の奪い合いが出来るという確信が持て、ターゲットがいい反応をしたとき以上に嬉しそうにしていれば、湊はストレガのメンバーに別れを告げて去って行ってしまった。
　ここを訪れた理由は不明だが、仕事を終えたストレガもいなくなったことで、ようやく動けるようになった荒垣は先ほどの光景を思い出して心の中がかき乱される。
「……なんなんだ、あいつは」
　ずっとヤバいのはタカヤという男だと思っていた。あいつが一番自分の行動の意味を理解した上で冷静に人の命を奪っている。だからこそ、殺人を忌避するまともな精神構造は持っていないと思っていたのだ。
　しかし、それも先ほどの光景を見た後では変わってくる。本当に危険なのは執着や感情すら持たず、それでも人を簡単に殺せてしまう青年の方だった。
　あんなことが出来る人間がどうして平然と学校に通っていられるかも分からず、中等部の頃から知っていたはずの相手の姿も心の中でぼやけてきて、荒垣は複雑な心境のままその場を後にした。

第二百一話　復調

影時間――深層モナド

床に着きそうなほどの巨腕と化した黒い異形の右腕を携え青年が走る。

この先にいる、この先に強い敵がいるからと、硬い床を蹴って狭い通路を抜けて大広間へと飛び込んだ。

瞬間、迫るのは複数の銃弾。血濡れのコートにロングバレルマグナムという、巨腕の青年ともタメを張れるほど異形の姿をした死神が放ったものだ。

「らぁっ!!」

青年は空中にいたまま、巨腕を振るうことで全てを叩き落とす。全てが必殺の威力を有していながら、しかし、青年の黒い腕はそれを勝る硬度でただ荒々しく防ぎきった。

けれど、死神はそんなもので敵を殺せると思っていなかったのか、青年が着地するまでに広範囲に青白い雷を落とした。

雷の落ちた床が黒く焼け焦げながら砕け、その破片を至るところに喰らっていた青年にも雷が降り注ぐ。痛みを感じるよりも早く、脳の奥の回線が切れたように意識がプツリと途切れそうになるも、青年はよろめきはしたがその場に立っていた。

何にも守られていない生身の顔は表面が炭化し、眼帯に覆われていない左眼ははっきりと血管が分かるほど血走っている。

だが、

「ペルソナァァァッ!!」

意識をしっかりと繋ぎ止めていた青年は咆吼するように黒き死神を呼び出した。

《グルオオオオオッ!!》

青年に呼応するように雄叫びを上げながら現われたタナトスは、獣の頭骨を思わせる頭部の口を大きく開き、正面にいる敵へレーザーのように直進する紫電を放つ。

攻撃の兆候を感知した刈り取る者は咄嗟に回避するも、完全に避け

きることは出来ず左腕を焼かれた。
けれど、その程度で死ぬほど相手も弱くない。残った右腕でリボルバーを振るって斬撃を飛ばすと、タナトスは棺から複数の氷槍を飛ばし打ち消した上で敵の退路を塞ぎ、自身も剣で相手に斬りかかり銃でそれを受け止めた刈り取る者ごと壁に衝突した。
目の前の敵をタナトスが相手している間、傷が自動で治癒した湊は背後からの攻撃を感知し、巨腕の掌を広げて迫る炎弾を防ぐ。
掌とぶつかり散っていく炎の隙間から見えたのは、タナトスが戦っているのとは別個体の刈り取る者。
長時間一つのフロアに留まっていれば現われるため、刈り取る者が複数現われても湊は一切表情を変えず、敵に向かって駆け出しながら〝隠者〟のカードを砕く。
「刻め、ジャック！」
両手にナイフを持ち、飛び出すように現われたジャック・ザ・リッパーは、その俊敏さを活かして敵の懐に入り込むと、敵を連続で切りつけその場に足止めする。
切る、切る、切る、切る、切る、切る切る切る切る切る、コートごと切り刻まれ胸から黒い靄が漏れ出した刈り取る者は、その場でエネルギーを収束させ極光を解放しジャック・ザ・リッパーを引き剥がす。
巻き上がった砂埃の中を突き進む湊は、吹き飛ばされたジャックが消えてゆくのを感じながら、敵がスキルを放とうと動き始めていた事で距離を詰めて巨腕で殴りかかった。
「はぁぁぁぁっ!!」
振りかぶった拳で刈り取る者を捉えようとするも、斬撃を放てる敵の銃身と巨腕が衝突し互いに弾かれ後退する。けれど、すぐに両者は相手へと向かっていき巨腕と銃身をぶつけ合う。
両手の銃を剣のように振るう死神に対し、湊の変化した腕は右腕だけ。それでも、青年はもっと速く、もっと強くと時に避けては逸らし、片腕でも敵の二刀に対処しきって何度も何度も拳を振るい続けた。
そして、遂に限界がきた武器が銃身を歪ませ、互いに攻撃し合う事で保たれていた均衡が崩れた一瞬を湊は見逃さなかった。

銃身の歪んだ武器を持った相手の右手に蹴りを入れ、そこを基点に反対の足で跳び上がり、打ち合っていた敵が突然飛んだことで思考にラグが発生して動きを止めた死神の頭部を異形の右手が掴む。
彼の右腕は憎悪や怨嗟という負の感情の塊である蛇神の力の欠片を用いて形成したもの。物質化して物を掴めるようにすることも出来れば、エネルギーのまま利用し純粋な破壊力として解放する事も出来た。
「弾けろっ!!」
叫んだ直後、巨腕の掌に集まった高密度エネルギーが一気に解放され、轟音と共に爆発が起きると死神の頭部が黒煙を上げながら消し飛んでいた。
頭部を失い、持っていた銃を取り落としながら胴体が倒れるように消滅して行くとき、湊はそれを足場に大きく後ろに飛んで次なる敵の攻撃を回避する。
部屋の入り口から地面を突き進み次々と生えてくる氷の槍。消えかかっていた死神の胴体も貫かれ消滅し、あのまま湊が残っていれば餌食になっていただろう。
しかし、後ろに大きく距離を取ったにも関わらず氷の槍は青年を狙って迫っていたので、撃墜すべきと判断した彼は〝恋愛〟のカードを砕くと白銀の鎧に身を包んだ戦乙女を呼び出した。
「ブリュンヒルデ!」
オーディンの命に背いた事で炎に囲まれた城で眠りに就いていたという伝承により、ペルソナとして呼び出された彼女は炎の力を宿している。そして、彼女は超重量の槍を軽々扱い、槍投げによって敵を貫いたという逸話を持っている事から、その手に持った鎧と同じ白銀の槍に炎を纏わせると迫り来る氷ごと敵を屠らんとその手より投げ放った。
轟、と空気を押しのけ一条の光となった槍は炎の尾を宙に残したまま直進し、地面から突き出してきた氷を溶かし砕いてもまだ止まらず、さらにそのまま飛び続け部屋の入り口にいた混沌のキュクロプスの腹部に突き刺さった。

湊を狙ってスキルを放ってきたシャドウはこいつだ。自我持ちではないにも関わらず、ブリュンヒルデは絶対に許さないと手から離れた槍に纏わせた炎を激しく燃え上がらせ、腹部を貫いた槍伝いに敵を内側からも燃やしてゆく。

全身を炎に包まれた敵は藻掻くように暴れるが、湊までは距離があって何もすることが出来ない。何もしないまま、出来ないまま無様に燃え散った敵を見届けたブリュンヒルデは薄く笑うと光となって消えていった。

しかし、敵とペルソナが消えても青年は戦闘状態を解除しない。なぜなら、何十体という数のシャドウが次々この大広間に雪崩れ込んできたから。

「タナトスっ」

フロア中のシャドウが青年を狙っている。そう思ってもおかしくない数のシャドウが押し寄せ、飛んでくる砲弾やスキルを巨腕で叩き落としながら後退。そして、刈り取る者の首を刎ね飛ばしていたタナトスに声をかければ、青年の声に応えるように飛び上がったタナトスの姿が変化した。

棺を繋いでいた鎖が砕け、解放された棺が一つ一つ独立した動きをしながら宙に浮けば、タナトスの背中からは紫の光沢を持った黒い光の翼が噴き出した。

阿眞根を解放した日に湊の変化によって生まれた、平時ともシャドウとも異なるリミッター完全解放時の姿〝冥王〟。

冥府の神にして王の力を知れと天井まで舞い上がったタナトスは、極光が反転したかのような赤と黒の禍々しいエネルギーを集め、宙に浮いた八つの棺もその蓋を開いて攻撃の発射態勢に移る。

何十体、何百体いようと関係ない。全ての敵を蹂躙し殺し尽くさんと、青年自身も取り出した九尾切り丸に右腕の炎を纏わせ横薙ぎに振るい、シャドウの大群に向けて黒い炎の大波を放つと同時に命令した。

「やれっ!!」

タナトスも含め合計九門、上空にあるそれらから撃たれるスキルは

絨毯爆撃など生温いとばかりに空間を埋め尽くす。黒い炎の波に押し留められ直撃したシャドウが飛び散り、飛び散った破片も新たに撃たれた攻撃で蒸発してゆく。

一撃や二撃ならば耐えられたシャドウもいただろう。けれど、怒濤のように押し寄せる力の波には抗えず、全てが終わったときには融解し赤くなった床や壁だけが残されていた。

右に巨腕、左に大剣という出で立ちで部屋の奥から見ていた青年は、もうこのフロアにシャドウはいないと分かってゆっくり歩き出す。融解した床はマグマのように蒸気を立てる赤い泥と化しているが、青年は構わず進み。中頃に来たところで剣をある一点に突き刺すと、次の瞬間床の熱が消えて溶けて固まった硝子状に戻っていた。

熱だろうと何だろうと存在するのなら殺せる青年ならではの消火方法だが、彼以外にこんな深い階層まで潜ってくるものはいないので、その行為はほぼ無意味。

とはいえ、地下というほぼ密閉された空間にあんなものがあれば、空気が熱せられてフロア全体が熱くなる。それを嫌ったとすれば意味は十分にあったとも言えるだろう。

床に突き立てた剣を再びコートに仕舞った青年は、自分が全盛期の精神状態に近付きつつあることを確認しながら、次の獲物のいるさらに下の階層を目指して去って行った。

5月1日（金）

放課後――辰巳記念病院

有里湊が行方不明になった。

七歌たちが靴箱であったあの日以降、家にも帰っておらず、誰も連絡がつかないという状態が続き。彼の家族である少女らは心当たりがないか学校から聞かれていたが、彼女たちでもどこにいるのか分からないという話だった。

事情を知る者にすればチドリの探知能力でも見つけられないのかと疑問を持ったが、チドリのメーディアは生命の流れを感じ取る力があって、その力でメンバーの生体情報を共有し、付近の地形や敵を知

る事が出来る。
その際、メンバーの潜在能力一杯まで知覚情報を受け取れるので、直接見えていない場所の敵も分かるのだが、湊の場合は赫夜比売やバアル・ペオルの力でその回線を完璧に誤魔化すことや、自分の意志で一方的に遮断することも出来た。
どちらも圧倒的な実力差があるからこそ可能なのだが、チドリの力で居場所が分からないとなると索敵範囲外にいるのか接触を断っているのか判断が付かず、居場所を探った本人も生きてはいるだろうが状況把握は不可能と断言した。
もっとも、その辺りの話を知らない者にすれば、様子がおかしくなってすぐに消えたことになるので心配でしかなく、捜索願こそ出されていないもののプリンス・ミナトを中心に騒ぎは拡大傾向にある。
放課後になって順平について病院にやってきた少女らもそれは同じで、湊がどこにいるのか気になりながらも、今は出来ることをしながら情報を待つしか無いと考え動いていた。
「えーと、二〇三号室、二〇三号室っと……お、あった」
今日は真田が半日の検査入院と言うことで、お見舞いがてら荷物を持ってきた順平は、聞いていた病室を見つけて扉に手をかける。横スライドの扉をゆっくり開けて中に入りながら彼が挨拶すれば、
「ちぃーっす。伊織順平、きましたー」
「あん？」
「あ、れ？　えと、ここって真田さんの病室ッスよね？」
中に真田の姿はなく、代わりに夏前だというのにコートとニット帽を身につけた荒垣が一人でいた。
彼のことを知らない順平は相手が柄の悪い不良に見えて萎縮するが、以前、彼と会ったことのあった七歌が手を挙げて声を掛けた。
「おう、また会ったな変態ニット帽！」
「誰が変態だ。つか、何しにきた？」
初めて会った日に身体に触れようとしてきた相手だけに、七歌の中では相手が変態セクハラ野郎と認識されているようで、態度自体は軽いが言葉は中々に辛辣だ。

順平や真田が相手でもそうなので、もしかすると男子が相手ならば基本的に毒舌なのかも知れないが、ここを訪れた理由を問われた彼女は笑顔のまま答える。
「真田先輩が痔の手術したって聞いたんでお見舞いですよ」
そのような事実はない。聞いた荒垣自身も相手の言葉に首を傾げており、七歌の後ろにいたゆかりが彼女の発言に頭を押さえていれば、病室での会話が外まで聞こえていたようで、扉が開いて入ってきた真田が現われていきなり会話に参加してきた。
「勝手に人の病状を捏造するな。骨折がちゃんと完治したか検査のため一日入院しただけだ」
「あ、先輩お疲れっす。検査どうでした？」
「フッ、九頭龍が教えてくれた治療法により、予定よりもかなり早く完治したぞ。これで俺も前線に出られる。タイトル自体に興味は無いが、後輩にエースの座を奪われたままではいられないからな」
ようやく本人に出会えたことで順平は笑顔になり、彼に頼まれていたトレーニング器具を手渡しながら診察結果を尋ねると、真田はフフンと得意気に口元を歪ませ、もうバッチリだと右手に左手の拳をバシンと打ち付けて見せた。
彼は先月の大型シャドウ出現時に順平を逃がすため無理をして怪我を負ったが、それも七歌が言った酸素カプセルと加圧トレーニングの併用により治った。
最初の診断で二ヶ月は掛かると言われていたところを半分まで短縮できた上に、トレーナー付きで体幹を鍛え直していたこともあって、落ちた体力は再び鍛えなければならないが本人はそれすらも待ち遠しいと嬉しそうだ。
しかし、幼馴染みのそんな様子に呆れた顔をして荒垣が立ち上がれば、彼にも聞いておこうと思ったゆかりが口を開く。
「あ、そうだ。荒垣さん、有里君見てませんか？」
「有里？　いや、しばらく見てねぇな。またどっか行ったのか？」
「はい。一週間くらい前から連絡が取れなくて」
湊が行方不明になったのは初めてではない。前回は留学中に海外

で行方不明になっていた訳だが、今回は国内にいて音信不通になっている。彼に限って攫われたりはしていないと思うが、一週間も連絡が取れないと色々心配になってくる。
　それを聞いた荒垣は自分が最後に彼を見たときの事を思い出し、いなくなったのが一週間前ならあのとき既に変化が現われていたのだろうと、彼に関わろうとする少女らに一言忠告しておくことにした。
「……アキ、それにお前らも、あいつにはあんま近付くな」
「お前がそんな事を言うなんて珍しいな。何かあったのか？」
「何もねぇよ。ただ、どういう訳か今のあいつはまともじゃねぇ。近付けば互いに不幸になるぞ」
　そう言い残すと彼は部屋を出て行った。荒垣が湊の何を知っているのか色々と気になるが、様子がおかしかったことは靴箱で会ったときに七歌らも見ていた。
　となれば、それ以降に荒垣も湊を見て雰囲気が変わっていることを知っているのだろう。あの状態を見れば心配になるのは分かるが、必要以上に脅すような事を言った意味について考えていれば、荒垣の忠告に首を傾げていた真田はベッドに座って順平の持ってきた握力グリップでトレーニングを始めた。
　幼馴染みの言葉が気になるだろうに、随分とマイペースだなとゆかりは微妙な表情になり、順平もやっぱりこの人は大物だなと苦笑いを浮かべる。
「は、ははっ、真田さんってよくトレーニングについてとか調べてたりしてるッスよね」
「ま、鍛える事が好きだからな。鍛えれば鍛えるほど身体は応えてくれるが、間違った方法では痛いしっぺ返しをくらう。そうならないためには鍛え方の勉強も必要なんだ」
　トレーニングはどれだけ頭の悪い方法でも何かしら効果はある。ただ、誤った方法では十分な効果を得られず、効果以上に負担をため込んで怪我のリスクを跳ね上げる。
　それでは鍛えた意味がなくなってしまうので、真田は最新のスポーツ医学も取り入れたトレーニング方法も調べており、自分なりに勉強

した上で日々トレーニングに励んでいた。
　彼が筋トレをしている理由は自分が強くなるためらしいが、それはシャドウと戦う前から行われている。ならば、どういう経緯で現在の活動にも参加する事になったのか興味が湧いたゆかりは率直に尋ねた。
「あの、先輩ってなんで戦ってるんですか？」
「戦う理由か？　ま、美鶴に誘われたからと言ってしまえばそれまでだが、元々ボクシングの試合だけでは強くなるにも限界を感じていてな。そんなときに美鶴からもっと自分を試せる場所があると言われたんだ」
　誘われたときは頭がどうかしてしまったのかと相手を疑ったが、いざ飛び込んでみると確かにボクシング以上の戦いがそこにはあった。
　怪我や命を失うリスクは常に頭にあるが、それ以上に強くなる実感と戦いの興奮が得られる。自分が本当に求めていたものはこれだったと、真田は特別課外活動部に入って良かったと自信を持って言えた。
　そんな真田の話を聞いていて、ボクシングだけでは限界を感じていたという言葉が出てきた事を意外に思った順平は、皇帝とまで呼ばれるほど鍛え上げた格闘技への思い入れはないのかとベッドの傍に立ったまま口を挟む。
「へぇ、んじゃボクシングも強さを得る手段ってことッスか？」
「まぁな。今でこそ愛着も湧いているが元々ボクシング自体に思い入れはない。素手でやる格闘技なら何でも良かった。昔、自分の無力さを思い知ったことがあったんだ。妹は俺が守る。そう思っていたのに、俺は妹が死にそうになっているときに助けに行くことすら出来なかった」
　そう話し握力グリップを強く握り締める真田の瞳には強い後悔と共に決意の色が映る。
　九年前に起きた孤児院の火事、そこで少年はただ一人の肉親を失いかけた。実の両親と死別し、唯一残った最愛の妹を守るのは自分の役目だと思っていたにもかかわらず、燃える建物の中に妹を残してきて

しまい、助けに行こうにも制止する大人の腕を振り払う事も出来なかった。
「だが、そのとき俺の代わりに妹を助けてくれたやつがいたんだ。大人が止める暇もなくそいつはあっさりと助け出して、俺は余計に自分の小ささと弱さを思い知らされた。見た目は俺より小さくて、まぁ、実際に年下だったんだろう」
今でもあのときの光景は脳裏に強く焼き付いている。空から降ってきたその人物は、長い黒髪を揺らしながら扉を破壊して中に侵入し、一分ほどで二階の窓をぶち破って美紀を背負いながら外に出てきた。
大人たちは誰もが救出は絶望的だと思っていただろう。真田自身も火の勢いが強すぎて助けられないと思ってしまっていたのだから。
しかし、その相手は誰にも出来ない事をあっさりとやってのけた。身体の大きさに関係なく、誰にも出来ないことを平然とやってのける姿に当時の真田は強さを見た。
「妹が無事だった安堵と助けにいけなかった申し訳なさで泣いていた俺にその女子は言ったんだ。……泣くほど大切なら自分の手で守れ。周りの制止を振り切ってでも、ボロボロになりながらで良いから助けろ。守る者にとって弱さは罪だ。そんなことじゃ、簡単に零れ落ちていくぞ、とな」
あの日から真田はその言葉を胸に己を鍛えるようになった。一方的な約束ではあったが美紀を助けてくれた少女に誓ったのだ。絶対に強くなって今度こそ自分で妹を守ると。
「その言葉を胸に俺は自分を鍛えるようになった。もう二度と自分の弱さのせいで大切な者を失わないようにってな。まぁ、戦いに関しては、しばらくリハビリがてらという事になるが、俺も今日から前線に復帰する。改めてよろしく頼むぞ」
そういってベッドから腰を上げると真田は荷物をまとめて帰る準備を始めた。既に診断を終えて帰って良いと言われているのだ。さっさと寮に戻って身体を鍛えたいに違いない。
最初から大した検査はないと言われていた事で荷物も少なく、まと

め終えた荷物の入った鞄を持つと、反対の手で握力グリップを握りながら真田は部屋を出た。
　彼に続いて部屋を出た順平は先ほどの話に出てきた女子の件が引っかかり、修学旅行で事故の話を同じく聞いていたゆかりにこっそりと耳打ちする。
「なぁ、ゆかりっち。真田さん、女子って言ってたけどあれってさぁ……」
「言わない方が良いんじゃない。言われても信じないだろうし」
「だよなぁ。ていうか、言ったら真田さん的にミキティの彼氏として有里君を認めざるを得なくなるだろうし。むしろ、今後ミキティの彼氏としての最低条件が有里君レベルになりそうだもんなぁ」
　そう、真田は相手の容姿と髪の長さから女子と認識していたが、順平たちは美紀本人から相手が男子だと聞いており、さらに助けた人物が湊だと知っていた。
　これを真田に伝えれば本人は呆れた顔で何を馬鹿なと斬って捨てるに違いない。事実確認を取ってもまだ言えるかどうか見物だが、湊を嫌っている真田にわざわざ伝える必要性はないと判断し黙っておく事に決める。
　順平とゆかりがそんな事を話している間、先を行く真田と並んで歩いていた七歌がニコニコ顔で口を開いた。
「先輩、完治祝いに晩ご飯奢ってください。ラーメンとか牛丼でもいいですよ」
「なんで自分の祝いに後輩に奢らんといかんのだ」
「先輩がサボってる間にどれだけのシャドウを狩ったか覚えてないんですか？　少しくらい労っても良いと思うなぁ」
「ぐっ……」
　真田が休んでいた間、確かに七歌たちは素晴らしい活躍を見せていた。既に十階のフロアボスまでの攻略を終え、十四階にいるフロアボスの姿を確認するところまでは行っている。
　これまで見た事のないタイプのシャドウがボスだったので撤退したが、そう遠くないうちに倒してさらに先に進む事だろう。

特別課外活動部がまだ三人だったときには行った事もないフロアに後輩が行っている。着実に力を付けているのも見て取れ、そのせいで余計に戦えない己に歯痒さを感じていたのだ。
そういった活躍を労えと言われてしまうと、予想以上の働きをしている事実があるため、戦いを任せていた申し訳なさと先輩としての矜持によって断る事は出来ない。
相手はそれらを理解して比較的安価な食べ物でＯＫだと言って来たのだろう。そう思った真田は強かなやつだと呆れながら渋々承諾する事にした。
「……トッピングは一つだけだぞ」
「よっしゃ、全盛り一択じゃー！」
「それは一つとは言わん！」
トッピングメニューには確かに全盛りなるものが存在した。単品で頼んでいくよりも少しだけ安いのだが、一種類という意味で一つだけだと言った以上それを選ばせる訳がない。
ケチ臭いと文句をいう七歌のことは無視して、話を聞いていたか不明な順平とゆかりに牛丼とラーメンどっちにするんだと問いながら、四人は一緒に病院を出るとそのまま食事へむかった。

影時間――深層モナド
地面を走り迫る青白い電撃の進路上に青い虎が現われそれを吸収して消す。
そして、身体の周囲にバチバチと帯電させながら獲物を睨んだ虎は、地を蹴って駆け出すと続けて迫る巨大な拳に自身の爪をぶつけて相殺した。
「大口真神、烈風撃！」
マルタタイガーでありながら白虎のペルソナである〝バイフー〟が敵の攻撃を全て受けると、今度は攻撃に転じるため青年は巨大な白狼のペルソナを呼び出した。
現われた白狼は身体の周囲に風を纏い疾走する。彼の通り過ぎた地面にはいくつもの刀傷が残され、纏っている風がただの己に属性を

付加させるための物ではない事が窺えた。
見据える先には小さな砦のようなシャドウ、皇帝〝キングキャッスル〟が再び電撃を放つ用意をして待っている。
相手は攻撃を解放するだけで放てる状態にあり、ただ突っ込んでも返り討ちにあうだけ。ならば、既に接近している状態でどうするのか青年の判断を待っていれば、
「風を解放しながら進めっ」
青年から実にシンプルな命令は飛ばされた。
威力を上げるために密度を高くしていた風を、僅かに解放することで全身を覆う防壁にする。
その分、疾風属性の斬撃という技本来の威力は落ちるが、近付いて攻撃を当てれば後にも繋がるので、喰らうダメージを最小に抑えながら相手にもダメージを与える策を取った。
命令を受けた大口真神はすぐにそれを実行に移し、さらに進めば敵が広範囲に電撃を放った。防壁を展開してもいくらかの電撃が当たって白い毛を焦がすが、大きなダメージを負う前に敵に辿り着き、攻撃中で動けない敵に纏った風ごと体当たりをかけた。
走って勢いのついた巨体にぶつかられ吹き飛ぶ敵の身体には、しっかりと刀傷が残りそこから黒い靄が血のように漏れ出し倒れる。
「アタランテ、刹那五月雨撃っ」
弱点の疾風属性を喰らって倒れた今がチャンスとばかりに、湊は続けて月色髪の女狩人を呼び出し、その空間を埋め尽くすほどの矢の雨を降らせる。
ドドドッ、と矢から聞こえるはずのない音が響き、青年の視線の先、先ほどまで敵がいた場所には光の滝が出来ていた。相手はダウンして防御も取れない状態だったのだ。これでは流石に生きていまい。
攻撃が止み、舞った土埃が治まると、その場にはクレーターだけが残って敵の姿は完全に消えていた。
邪魔な敵の消滅を確認した青年はペルソナたちを消すと再び歩き出す。
直死の魔眼に頼りすぎない事も目的に含みながら力を試し戦って

いたが、状態は既に小狼のときに戻っていると言って良い。自分の身を守る事よりも敵を殺す事を優先し、痛みがあってもそれは敵への殺意にすぐに変換され、ただ目的を果たすための機械であり続ける。それが湊の戻ろうとしていた過去の自分。

ただ、本人にその自覚はないが今の彼は当時よりも質が悪い。昔の湊はどれだけ自分が不利であっても弱者を殺す事はなかった。相手が銃を持っていても子どもなら無力化はしても命を奪うまではしなかったのだ。

けれど、海外での経験を経て、湊はそういった命も奪えるようになっていた。

邪魔をするなら殺す。邪魔になるから殺す。そんなあまりにも命を軽く見るような他者には理解されない思考は、〝特別な命は存在しない〟という命の平等さを悪い方向から見た彼の特異な価値観に由来する。

もっとも、そういった価値観を持っていながらチドリやアイギスを特別扱いするのだから、彼の在り方がその時点で矛盾を孕んでいることはいうまでもない。

かつて茨木童子がファルロスに伝えた湊の性質は〝矛盾すら内包した陰陽の調和〟。それに照らして考えれば、彼にとって特別な命以外は全て価値がないという事なのだろう。

自分勝手と言ってしまえばそれまでだが、現実での数日に匹敵する時間を戦いに費やした事で、彼はようやく元の状態に戻れたと一定の満足を示していた。

蛇神から多くの力を引き出して異形と化した右腕の力を消すと、覆っていた力が消えた事で自由になった右手を何度か握って調子を確かめる。

この腕も一度は失って新たに得た物の一つだ。何かを失う度に湊は強くなってきたが、大切な少女とその世界だけは失う訳にはいかない。他の物は全て不要と切り捨ててでも守ると己に誓い、青年はようやく地上を目指して去って行った。

第二百二話　委員会への参加

5月8日（金）
昼休み――月光館学園

湊が行方不明になってからさらに一週間が経った。生きていることは確実らしいが、結局まだ何の連絡も手掛かりもなく、学校は捜索願を出してはどうだとチドリやラビリスに伝えたが、二人だけでなく保護者である桜までもその必要は無いと答えた。

というのも、湊は誰にも何も告げずにフラッと海外に行く事がある。携帯電話も普及していない発展途上国や、日本からはいくつもの国を経由しなければ行く事の出ない国など、何の目的があって行ったのか不思議な場所を訪れている事もある。

別に旅行で行っている訳ではないが、本人は行った理由を尋ねても個人的な理由とだけ答えて詳細を話さない事も多々あるため、そんな困った放浪癖を持つ相手を探すのに捜索願を出しても無意味という事だった。

そんな彼と親しい者だけが手に入れられる情報をゆかり経由で聞いていた七歌は、留学経験のある湊にしてみれば日本は狭いのかなと暢気に捉えながら、昼休みになった事で自分の教室で総菜パンをかじっていた。

「九頭龍さんいるー？」

今日のお昼ご飯はパン屋さんのハンバーガー。照り焼きハンバーグとシャキシャキのレタスを自家製パンで挟んだ人気商品だ。

個数限定のため手に入れるのには運が必要だが、割と運の良い彼女はラスト一個を偶然手に入れられる事が度々あって既に店のリピーターになっている。

そうして、大きな口を開けてバクリと齧り付き、もっきゅもっきゅと笑顔で租借していれば、名前を呼んで教室に入ってきた担任の鳥海が返事くらいしてよと少しムッとした様子で彼女の席の前で立っていた。

「あー……もう話しかけていい？」

「あげませんよ？」
「生徒からお昼ご飯をカツアゲした事なんてないわよ」
　失敬な。そう言いたげに嘆息しつつも、鳥海もなんとなくで七歌の性格を理解していたらしく、そのまま彼女の席の傍で立ったまま話しかけてくる。
「あなたまだ委員会とか入ってなかったわよね？　急に欠員が出ちゃってさぁ。頼める人がいないのよ。だから、お願いできないかなぁって」
「一度は引き受けたくせに仕事を放棄したその無責任な人が直接やって来て、私に土下座しながら代わって欲しいって頼んできたら考えてあげなくもないですよ」
　急に欠員が出たというからにはこのクラスにおける担当者が決まっていた事は確実。仕事も割り振られていて、しかし、何らかの理由によって委員を辞退しなければならなくなり、相手は鳥海にその旨を伝えたのだろう。
　そうなると鳥海は相手の素性から事情まで全てを把握しているはずなので、迷惑をかける人間が責任を持って頼みにこいという七歌の言い分も理解は出来る。
　ただ、言い回しから何から彼女の対応はある青年を想起させ、彼とあまり話した事は無いがどういった育ち方をすればこうも歪めるのかと思っていた鳥海は、最近の子にすれば珍しくないのかなとジェネレーションギャップを感じた。
「……あなた、隣のクラスの有里君に似てるわね」
「まぁ、従姉弟ですから」
「え、そうなの？」
「有名ですよ。主に私の中で」
　似ていると言われた七歌は瞬間嬉しそうに口の端を吊り上げる。邪道を持って正道に勝ろうとしてきた彼女にとって、今でも湊は目標であり超えるべき壁だ。
　そんな相手に似ているということは、成長の過程に違いはあっても酷似した結果を得られているという証拠。

相手が文武共に有名になっていた事で差を感じていたが、七歌も集団の中ではトップクラスであり、むしろ湊に近い位置にいるため、今までやってきた事は無駄ではなかったと思う事が出来た。
意外なところで気分をよくした七歌は、そのまま鳥海の話を受けるかと思いきや、袋から取り出したミックスサンドの包装を解いてかぶり付き、健康な歯でしっかりと租借しながら言葉を返す。
「てか、私にも部活に入る予定があるんですよ。これでも去年の大会で結果出してるんで、女子テニス部で活躍する私に委員会は無理なのです。順平っていう帰宅部のプー太郎がいるんでそっちに頼むと良いですよ」
昨年、インターハイに先輩の応援で参加していた七歌だが、彼女自身も県大会を突破し、中国大会で惜しくも敗退するという結果を残していた。
彼女が入る予定の女子テニス部の顧問がテニスに興味が無い事で話題にはなっていないが、しっかりとした指導者であったならば七歌という即戦力の入部を心から喜んだに違いない。
しかし、彼女がもう少しすれば部活に入ると告げると、それを聞いた鳥海は腕を組んで片手で顎に触れながら少々考え込み、一人で勝手に納得したように頷くと口を開いた。
「とても言いづらいんだけど、前の学校で選手登録してたなら六ヶ月以内は公式戦に出場できない規定だけど？」
「ッ!?」
そんな馬鹿な、あり得ない、あり得て良いはずがない。ミックスサンドを持つ手を震わせながら、七歌はキッと鳥海を睨むと嘘を吐くなと糾弾する。
「ちょ、テメェ、ふかしこいてんならタダじゃおかねーぞ！」
「教師になんて口聞いてんの。てか、嘘じゃないから。調べたらちゃんと規定に書いてあるし」
ここまで教師相手に強く出られる生徒も珍しい。面と向かって完全にタメ口を利く生徒などチドリを除けば初めてではないだろうか。
佐久間や櫛名田相手のときだけ湊もタメ口を利いているが、彼の場

合は鳥海など一般の教師には敬語を使っている。そのため、俺様系の湊も見てみたいなとちょっと思っている女性教師は残念にも思っているのだが、携帯を使って大会規定を調べている七歌を眺めていると、最初は難しい顔をしていた少女の表情が和らいだ。
「お？　親の転勤は特例っぽいですよ？」
「あなたは寮暮らしでしょうが」
「いえ、祖父の体調が思わしくないからって親が実家で暮らす事になったので、引っ越しついでに私だけ好きな学校に移ったんですよ。前の学校は寮もなかったし、実家周辺は田舎で最寄りの高校までも遠かったので」
　二年になって急に転校してきた七歌だったが、別に湊を追ってやってきた事だけが理由では無い。
　実は彼女の祖父である九頭龍大蔵が歳のせいか体調を崩しており、歳の近い祖母だけでは対応しきれるか分からないからと、両親も仕事を在宅の物に切り替えて介護目的で引っ越す事が決まっていたのだ。
　七歌の見立てでは実際は八雲が生きていて血に覚醒した事がストレスとなり、それが原因で体調が悪くなっているのだと思われるが、どちらにせよ親の仕事が変わって引っ越す事になっていた事実が存在する。
　九頭龍家の実家は様々な神話の残る島根県の中でも特にド田舎といった場所なので、七歌だけが通学のために利便性の高い土地の学校に移ることはなんらおかしくない。これで大会には出られませんと言われれば、じゃあお前が直接実家に行って通学できるか見てこいよと七歌は運営に言うつもりであった。
　転校の理由が特例に当てはまりそうな事が分かった事で七歌の問題は解決したが、しかし、それはそれとして鳥海も他の人にやってくれないかと頼みに行くのが面倒だったことで、転校してきたばかりの七歌に仕事を任せようとする。
「あー、そういう事なら大丈夫かもね。けど、別に部活も毎日ある訳じゃないから大丈夫よ。委員会も当番は持ち回り制だし」
「ふー……ミス・鳥海、順平イズ暇人、オーケー？」

「まぁ、伊織君は暇人でしょうけど仕事サボりそうじゃない。そういうの困るからちゃんとしてくれる人に頼んでるの」
本当は英語も喋れるのだが、七歌は何故だかこういうときだけ適当な英語で返す。
けれど、そんな彼女の調子に慣れてきた鳥海は華麗に流し、近くで友近と一緒に昼飯を食べていた順平が流れ弾で精神的ダメージを負っていると、しつこく頼んでくる鳥海の相手が嫌になった七歌が相手を挑発するように全身の力を抜いてだらけきった態度で言葉を返した。
「いやじゃー、やりとうないんじゃー」
「あなた、ハッキリ物事言うし見てると面白いわぁ。けど、保健委員と図書委員の好きな方選ばせてあげるから頑張ってよ」
この学校にいる生徒は、優等生タイプと裏で陰口を叩く現代っ子タイプでほとんどが占められているため、こんなにダイレクトに反応を返してくれる生徒は非常に希だ。
まぁ、だからといってその態度は褒められた物ではないのだが、今なら選ぶチャンスがあると聞いたところで七歌がピクリと反応し、姿勢を元の状態に正すと欧米風の大仰な仕草で手を口に当て、「信じられない！」と驚いてみせた。
「え、二人もやめたんですか？　名前は？　そのクズたちの名前はなんて言うんですか？　他人様に迷惑かけるクズが一体どういった名前を付けられたか知りたいんですけど。あ、これ卒業研究の一環です」
無論、そんな卒業研究など存在しないし、七歌自身もつまらない研究にしかならないと分かっているのでやるつもりはない。
ただ、そう言っておけば少しくらい教えて貰えるのではと睨んだのだが、鳥海はよくも悪くも大雑把な性格だった事で、とくに隠す様子もなく辞退した生徒らの名前を口にした。
「クズって……高橋君と根岸さんにも家庭の事情とかがあるんだからね？」
「テメェらぜってー許さねぇからな！　お前らの内申が最低値になる

くらい責任放棄を糾弾し続けるからまともな進路は諦めろよ！　私はトップクラスの成績だから帝都大に現役合格するけどな！」
下手人は判明した。席を立って片足を椅子の上に乗せるなり、教室の隅で友人と集まって食べていた男子と丁度教室に戻ってきた女子を指さし七歌は吠えた。
突然言われた二人は七歌の気迫に圧されて怯えているが、既に慣れていた鳥海が結局どっちを選ぶのかと聞き直した事で事態は治まり、七歌が図書委員になる事が決定したのだった。

放課後――図書室
放課後、図書室に集まった図書委員たちは、顧問の大西の隣に立つ少女を見てなんとも言えない表情を浮かべていた。
少女の名は九頭龍七歌、四月に転校してきたばかりだが、良い意味で目立つ容姿によって男子の間では話題になっており既に隠れファンもいる。
けれど、いまの彼女は趣味の悪い星形サングラスをかけて腕組みをしながらクチャクチャとガムを噛んでおり、誰かが口を開こうとすると膨らませたフーセンをパンッと破裂させる事で音を鳴らし、タイミングを外された事で誰も喋れなくなるという状況が続いていた。
相手が何故そんな態度を取っているのかは分かっている。本来、彼女のクラスの図書委員は高橋という男子だったのだ。それが今日限りの代理ではなく新メンバーで彼女が来たと言う事は、何かの事情があって高橋から彼女に正式に委員が交代したことになる。自ら立候補した訳でもなければ面倒ごとを押しつけられたことになるので、彼女もきっとそういった立場でここにいるに違いなかった。
とはいえ、いつまでも七歌に合わせて話を進めない訳にもいかない。頭に手を当てて深く溜息を吐いた大西は、七歌のことを見てから他の者の方へ向き直ると新メンバーを全員に紹介した。
「今日から図書委員になった二年F組の九頭龍だ。転校してきたばっかりでよく分からないだろうから、えっとー……そうだ。長谷川、丁度当番だし教えてやって」

大西が呼ぶと大人びた容姿の女生徒が前に進み出て、七歌と大西の傍までやってきた。
近付いて来た相手を七歌はサングラス越しに値踏みするよう睨み付け、最終的にどういう結果を出したのかは不明であるが、サングラスを僅かに下にずらして目を見せると右手を差し出して握手を求めた。
「アタイは九頭龍七歌、ファッキン高橋のせいで図書委員にされちまった哀れな美少女さ。ま、こっちも島根じゃブイブイいわしてたんでね。クソ野郎には地獄を見せてやるつもりだが、アンタには別に恨みはないからさ。いっちょ仲良くやろうや」
今日日、ここまでコテコテの昭和のヤンキー風な人間などいないだろう。知り合いではなかったものの、普段の彼女がこういったキャラでないことは分かるため、長谷川は面白い子だなと笑顔を見せて握手に応じる。
「フフッ、あなた面白いわね。私は長谷川沙織、留学……ていうか休学してたからあなたより二つ年上だけど、学年は同じ二年生だからよろしくね」
「お、マジモンの先輩ッスか。サーセン、ただ老けてるだけの同級生だと思ってました」
「ふ、老けてる？　あ、でも、そうね。年齢的には大学生だからしょうがないのかな。けど、あなたがよければ丁寧語じゃなくていいから。同じ二年生だしね」
相手は大人びた容姿をしているが、それは実際に他の者よりも年上だからという理由が存在した。
もし休学していなければ大学一年生、ということは現在最高学年の三年生の一つ上の先輩であり、七歌からすれば二つも上という事になるが、彼女の知り合いの男子の方が相手より年上に見えるので、年上っぽい人間へのタメ口には慣れているからと相手の要望を聞く事にした。
「了解。で、なんで休学してたの？　好きな年下の男の子と同じ学年になりたかったとか？」

「うーん。そういう甘酸っぱい素敵な理由だったら良かったんだけど、今日は仕事があるからその話はまた今度にしましょうか」
普通なら気になっても複雑な理由があるのだろうと踏み込んで聞いたりはしない。けれど、七歌はそういった〝空気を読む〟という行為を意識的に避ける事があった。
相手が聞いて欲しくないというオーラを出しているときや、明らかに他人を傷つけると分かっているときは流石にちゃんと空気を読むけれど、長谷川は七歌に尋ねられるまで聞いて欲しくないオーラを出していなかった。
もっと正確に言えば、尋ねられたときに出したオーラは「説明が難しい」というタイプのものであり、嫌な思い出だから言いたくないのとは違っている。
作業を始めて貸し出し用のバーコードの読み取り方や、返却された本を棚に戻す際の探し方を教えて貰っていると、七歌は相手が頼られることを喜んでいる節があることに気付く。
生粋の世話焼きお姉さん気質ならば別に良いが、年上という理由でそれが当たり前になって自己の存在理由と認識しているとすれば問題だ。
そんな事を心の中で考えつつ、一通りの作業の仕方を習って受付カウンターに戻ってきたところで、ここまでで何か質問はあるかと長谷川は微笑を浮かべて聞いてきた。
「だいたいの仕事のやり方は分かったかしら？」
「オーケー、オーケー。てかさ、他の人は？　私たちだけって少なくない？」
「んー、集まるときはほぼ全員だけど、当番はだいたい少人数よ。受付係と本の陳列係って感じだから。まぁ、今日は皆さん忙しいみたいで特に少ないのは確かだけど」
元々少ない当番の一部が用事を理由に欠席している。それを聞いたとき、七歌は相手が何を言われても断れないタイプだと確信し、知り合いの人助けばかりしている男子と重なって見えた事でそれは幸せになれないよと苦言を呈した。

「もうちょい頼まれても断るとかした方がいいよ。テメェの責任はテメェで果たせって」
「そうね。でも、相手も困っているみたいだったし、私は暇だったから別に大丈夫よ」
「違うんだよなぁ。当番はもう前から決まってた事で、相手の用事は余程の事じゃない限りは当番があるって分かってるのに入れた物なんだよ。つまり、自己都合で当番の優先順位を下に置き、〝あの人なら助けてくれるだろう〟って図々しくも考えていたわけ」
　確かに困っている人を助けるのは良い事だ。世の中には自分の力ではどうにもならない事もあれば、自分でも出来るが非常に労力を必要とする事もある。
　そんなとき、誰かがちょっと力を貸すだけでとても楽になるのであれば、自分に出来る範囲で手助けしてやってもいいだろう。助けられた者は感謝するし、助けた自分も感謝されれば気分がいい。
　だが、長谷川は大きな勘違いしていた。彼女がやっているのはそうではないのだ。
「今の貴女がしているのは困っている人の手助けじゃなく、図々しいガキを甘やかしてるだけだよ。相手は貴女に心からの感謝なんてしないし、あの人がいると楽で助かるわって見下してるまであるかも」
　現在の歪な関係を続けていれば、やがて大きなしっぺ返し受ける事になる。相手が悪いと言うのにそれで助けていた自分が不利益を被るなど馬鹿馬鹿しいだろう。
　故に、もう一度自分が何をしたいのかを考え、長谷川の善意に付け込んだ今の一方的な関係は見直すべき。そう七歌が忠告すると長谷川は少し驚いた顔をしてから、これまでよりも柔らかいとても自然な笑顔でフッと笑った。
「すごい……九頭龍さんって格好良いね。そうやって本音を相手にぶつけるのって簡単には出来ないもの」
「よせやい、まぁよく言われるけどな！」
　直接褒められることは度々あるものの、大概は〝男前〟という女子に対して失礼ではないかと思うような讃辞であったりする。もっと

も、細かいことは気にしない七歌はそれでも喜ぶが、素直に格好良いと言われれば余計に嬉しいので快活に笑った。
　そんな年下の同級生の可愛らしい笑顔を見た長谷川もつられて笑顔になり、会ったばかりだがあなたと仲良くなりたいと素直な気持ちを口にする。
「フフッ。ねぇ、名前で呼んでもいいかしら？　あなたとお友達になりたいの」
「ば、バーロー、そういうのはさりげなくシレッと呼べば良いんだよ。改まって呼ぶとなんか恥ずかしい空気になるだろうが」
「そうなんだ。じゃあ、改めてよろしくね七歌ちゃん」
「おう、よろしくな沙希」
　二度目の握手、しかし、先ほどの挨拶と違って今度は友達になるための握手だ。
　改まって名前で呼びたいと言われて照れた七歌が相手から差し出された手を握ると、その瞬間、頭の中で不思議な声が響いて長谷川との間に〝隠者〟の絆が生まれた事を告げた。
　ゆかりや順平とも既にタロットになぞらえた絆を持っているが、新しい絆が生まれると友達が増えている実感が湧くので七歌としても嬉しい。
　もっとも、何度かタルタロスやポロニアンモールに行っているが、ベルベットルームには夢で行った最初の一回のみ行っただけで、後は扉もスルーし続けているため絆が何の役に立つのかは分からない。
　そうこうしているうちに現実に意識が戻ってくれば、先ほどまでにこやかな笑顔を見せていた相手が、どういう訳だか困ったような、何か言いづらそうな表情で口を開いてきた。
「あの、ゴメンね、沙希じゃなくて沙織なの」
「し、知ってたわい。ちゃんと自分の意見を言えるか試しただけだし。素で間違えたとかゼッテーねーし」
「そうなんだ。やっぱり七歌ちゃんって面白いね」
　くすくすとおかしそうに笑う沙織の表情は会ったばかりの頃より自然だった。

これが相手の素の表情、まだまだ知らないことばかりだけど、友達になったのだから知っていけば良い。
そう考えながら再び仕事に戻った七歌は、沙織とオススメの本について話ながら委員会の時間を過ごした。

影時間――タルタロス
両腕がランスに似た形状をした大きなシャドウが独楽のように回転しながらフロア内を移動する。
ただでさえ戦車のアルカナでタフだというのに、回転する事でスキルを喰らっても僅かに弾いているようでダメージが思うように通らない。
ポリデュークスに電撃を放たせた真田は、直撃したにもかかわらず相手が勢いを殺す事無く迫ってきた事で苦虫を噛み潰した表情をして横に避けると、相手の進路を塞ぐように氷柱が地面から生えて衝突する。
ヒーホーの作り出した氷柱は回転するランスによって削られてゆくが、壊れる前にヒーホーが補強し続けるためどちらが先に音を上げるかの勝負になった。
削る削る削る、作る作る作る、矛と盾による両者一歩も引かぬ正面からの戦いとなるも、これは別にどちらの能力が勝るかという戦いではない。互いの命を奪い合う殺し合いなのだ。
故に、
「ヒーホー君、床を凍らせて！」
敵の削り出した氷が溶けて床を濡らしたタイミングで七歌が指示を飛ばし、ヒーホーはその命令を遂行するべく氷柱を作りながら床の水溜まりも一緒に凍らせてみせた。
「よっしゃ、ダウンしたぞ七歌っち！」
独楽のように回転していたとき、急に床が氷になれば滑ってしまうのもある意味当然。目の前の氷柱を壊そうと前のめりになっていた事もあって、相手は簡単に滑って転倒してくれた。
近くでそれを見ていた順平は召喚器を構えながら七歌の指示を待

ち、自分はいつでも準備万端だとやる気に満ちた笑みを見せる。
「ナイス！　ヒーホー君は敵の足を凍らせて、他の皆は魔法スキルで一斉攻撃！」
相手には全ての物理攻撃が効かない。それは最初に順平と真田が攻撃し続けてくれた事で分かっている。
ならば、ここですべきなのは厄介な機動力を奪い、唯一有効な魔法スキルを全力で叩き込むこと。お互いのスキルがぶつかりあって威力が削がれても構わない。ただ全力で、自分のありったけを籠めて、その一撃で敵を倒すためにスキルを放つ。
指示を聞いた順平、真田、ゆかりの三人は七歌と同様に召喚器を頭に当てて敵を見る。
起き上がろうとする敵の足をヒーホーが凍らせて時間を稼いでくれている間に、全員が集中力を高めると同時に引き金を引いた。
『ペルソナッ!!』
現われた四体のペルソナから同時に火炎、疾風、電撃スキルが放たれ、足を氷漬けにされて動けない敵を蹂躙する。
風によって敵を切り刻み、電気が凍った部位を砕く、そして炎が全身を包んで焦がせば、ダメ押しとばかりに氷の槍が地面から生えて敵を貫き、相手は耐えきれなくなって消滅していった。
黒い靄になって消えていく敵を見ながら、七歌は敵の戦力分析のために危険な前衛で戦ってくれた男子たちの元へ移動すると、ありがとうねと労いの言葉をかける。
「お疲れ様。ゴメンね、強い敵相手に大変な役を押しつけて」
「気にすんなって。オレっちはともかく真田さんは意地になって物理で倒そうとしてただけだし」
「馬鹿を言うな。どこかにしら隙があるはずと思って色々と試していただけだ」
開幕で敵に打撃を喰らわすもノーダメージだった事で、真田は途中意地でも殴り倒してやるとばかりに己の拳と物理スキルで敵に攻撃し続けた。
それをフォローしつつ順平も斬撃が効かないか試して見たが、最終

的にゆかりの矢も効かなかった事で全ての物理耐性を持っていると分かり、途中からは魔法主体での戦いに切り替えた。
けれど、敵もフロアボスだけあって通常のシャドウと違い一筋縄ではいかず、先ほどの独楽回転で魔法スキルすら弾かれ攻略に時間がかかったという訳だった。
そのことで七歌が謝るも順平は気にした様子もなく笑って返し、真田も真田で殴り倒せなかったのは惜しいが勝てたので結果オーライだと言ってきた。
新人と病み上がりのコンビだというのに、強敵相手に立ち回っても余裕が見えるのは戦力が充実しているからだろうか。後方から援護射撃と回復スキルでの補助を担っていたゆかりも戻ってくると、全員頑張ったが今日のＭＶＰは彼だろうと七歌は屈んで相手の帽子に勲章バッヂを付けてやる。
「ハーイ、それじゃあ今日のＭＶＰは敵をダウンさせてくれたヒーホー君に決定！」
《ヒッホッホー！》
ニコちゃんバッヂと並んで付けられた勲章バッヂを誇らしそうにするヒーホーに、ＭＶＰを逃した男子二人は悔しそうな顔を向ける。
もっとも、七歌は指揮官として公平に判断してその日のＭＶＰを決めているため、順平も真田もどういった点が評価されていたのかは客観的には理解出来ている。今日でいえば敵の足止めがそうだろう。
相手は独楽のように回転していたせいでダメージが通らなかった。動きを止めるには攻撃するしかなく、けれど、それが効かないとなると相手が止まるまで逃げ続けるしかない。
それを氷柱を作り続ける事で、味方の安全を確保しながらダウンまで持って行ったのだから、決定的なチャンスを作り出した事も含めて評価されて当然と言えた。
だが、そういった理由を理解していても、順平は頭の後ろを掻きながら使えるスキルの応用性の高さが違いすぎると苦笑を漏らした。
「いやー、確かに分かるんだけどなぁ。氷結スキルって他と違って便利過ぎね？　攻撃だけじゃなく敵の拘束とか防御用の壁にも出来る

んだぜ？」
《私のペンテシレアは氷結属性を持っている。だが、ヒーホーのように瞬時に壁などを作れるかと聞かれれば、あれほどの強度の物は現時点では無理だと答えるしかない》
　ヒーホーは氷結スキルによって防壁から敵の拘束まで器用にこなす。床を凍らせて滑りながらタックルすることもあるので、氷結スキルのエキスパートと呼ばれるほどに高い実力と技の幅を持っていると言って良い。
　けれど、同じ氷結スキルを持っている美鶴が、自分も氷結スキルは使えるがヒーホーのようには出来ないと言えば、ずっと一緒に戦ってきた真田が意外そうに返した。
「なら、こいつのスキルの多様性はこいつ自身の強さによるものって事か」
《ああ、そうなるな。もし私が今日の作戦にヒーホーの役目で参加していれば、相手の攻撃で氷を砕かれ突破を許していただろう。同じ力を使えるだけに大きな力の差を感じるよ》
　体長三十センチほどの小さな身体で、よくもこうまで強くなれたとヒーホーは見事な活躍を見せていた。順平と復帰した真田も弱い訳ではない。ただ、ヒーホーは前衛で自ら戦いながら不足しがちな他の前衛のフォローにも回っているため、指揮官からすれば攻守の要として重宝し、同じ前衛の者からしても彼がいれば安心して戦えると頼りにされていた。
　七歌も状況に応じた判断はずば抜けているが、もう一つブレーンがあると戦術の幅も広がる。順平も『有里湊の真剣ゼミ』とやらのおかげで上手く立ち回ってくれているけれど、ヒーホーのように全体の先の先まで考えた動きが出来る訳ではない。
　そう考えれば既にヒーホーはチームになくてはならない存在だが、彼のフォローを過信して自分の危機感が薄れてはいけないと七歌は前衛二人に注意しておいた。
「けど、氷結スキルは言って物理寄りだからね。触れてどうとでも出来るって考えると過信は出来ないよ。ヒーホー君もフォローして壁

とか作って守ってくれるけど、突破されることも考えて常に回避や防御を頭に入れて立ち回ってね」
「うっす」
「ああ」
　勿論分かっていると素直に頷く二人は、自分こそがエースだという強い自己主張で戦ってなどいない。チームワークを第一に考え、その中で自らが活躍してポイントを稼ごうとしているのだ。
　そのため七歌もあまり心配はしていないが、改めて注意しておけば彼らもより危険を意識して戦ってくれるはずだと思って伝えた。
「フフッ、まだ一月も経ってないけど、七歌もリーダーとしての貫禄が出てきたね。順平がヒーホー君と一緒に前衛で敵を倒しまくって、私らも援護しつつ敵を倒すってのがお決まりになってて。真田先輩も復帰したから前衛はさらに層が厚くなったし。こうチームでまとまりみたいなのが出てきたよね」
　指揮官とは言え先輩も含む男子に一人の少女が指示や注意を飛ばす光景は日常では見られない珍しいものだ。傍らでそれを見ていたゆかりが笑みを溢しながら言えば、現在のタルタロス攻略が順調なのは他にも理由があるぞと真田が口を挟む。
「お前らが俺たちと異なる属性を持っている事も大きいぞ。シンジは物理しか持っていなかったが、俺と美鶴は電撃と氷結だ。美鶴がバックアップに回ってしまえば実質属性は俺の電撃のみだからな。それだけではシャドウの弱点を突くのも難しかった」
　今はまだ下層フロアなのでシャドウもそれほど強くないが、それでも物理や電撃の片方が効かなければ、もう片方でゴリ押しするしかなかった以前と比べ、全ての属性が揃っている現在では戦力差は歴然だ。
　美鶴のアナライズが慣れてきた事も大きいが、効率面で大きく違えばチームとしての戦力アップが実感出来るのも当然と言えた。
「んじゃ、オレっちとヒーホー君の存在はデカいってことッスね。戦闘に参加してる中で唯一の火炎と氷結ですし」
「それを言うなら私の回復スキルも重要だと思うけど？　余裕かまし

て怪我した誰かさんを治療してすぐ復帰出来るようにしてる訳だし」
「俺もこの中では唯一の電撃スキル持ちだ。確かにお前らの活躍も認めるが、こっちが速さというアドバンテージを持つ以上、いつまでもエースやＭＶＰを名乗れると思うなよ？」
真田がいた頃にいなかった属性は火炎と疾風。だが、美鶴が参加しないのであれば氷結も含まれる。
そして、疾風はゆかりと七歌で二人いるので、敵に火炎か氷結が弱点のシャドウが現われれば活躍出来るのは順平とヒーホーの二人ということになる。
やっぱりオレたちがエースで黄金コンビだなと屈んだ順平がヒーホーと笑い合えば、聞き捨てならないなとゆかりと真田が反論し、誰が最も重要な戦力かという話題で議論が過熱した。
仲間らのそんな様子を通信越しに見ていた美鶴など、後輩相手の真田の態度に大人げないと感じながらも笑って、こんな事が言い合えるのも余裕があるからだなと七歌に話しかけた。
《フフッ、強敵を倒したばかりだというのに頼もしい限りだな》
「ですね。さて、休憩も十分取ったことだし、そろそろ次のフロアへ行きますか！」
残るフロアはあと少し。もう少し上まで行くと階段が何かで通れないようになっているらしく、索敵した美鶴もそれが何かは分かっていないが現時点の終着点はとりあえずそこになっている。
強力なフロアボスを倒した後で疲労もあるだろうが、まだ行けるよねと声を掛ければ全員が気合いの籠もった返事を返してきた事で、七歌はさぁ出発だとさらに上を目指していった。

第二百三話　モノレールにも乗れーる

――ＥＰ社・個人研究室

ＥＰ社地下区画の最奥に存在する青年のみ入る事を許された研究室。

明かりも点いていないその部屋の中央には人が一人入れるカプセルが横たわり、カプセルの中ではある少女にそっくりな魂のない器が静かに眠っていた。

栄養を点滴で摂取し、電気刺激によって筋肉が衰えぬよう調整し、そして青年が定期的に生命力を分け与える事で器を保つ。

カプセルの傍らに独り立つ青年は手から蛍火色の光の粒を放出しながら、何の感情も宿らないはずの蒼い瞳に僅かな慈しみの色を浮かべて少女を見る。

「……アイギス、今夜あいつらが来るんだ」

眠る少女には魂がない。故に何も答えない。

それでも湊は今夜やってくる敵の訪れを器でしかない物に伝える。

「影人間の増加速度を考えると食べているのは一体。なら、今夜やってくるのは〝女教皇〟だろう」

やってくるのは他のシャドウよりも力を持ったデスの欠片たち。しかし、それらは一度にやってくる訳ではない。

死に近付くほど力を増すのかは不明だが、デスに近いアルカナを持つシャドウほど復活までに時間を要するようで、前回は魔術師〝マジシャン〟一体のみが復活していた。

やつらの復活に必要なエネルギーは人々から抜け出たシャドウを吸収する事で得ている。最近になって無気力症の影人間が増加傾向にあるというのもそれが原因であり、久遠総合病院でも多数の無気力症患者を受け入れることでデータはしっかりと取れている。

それを元に前回のマジシャンが現われた時よりも少し増加しただけと判明しているため、今回やってくるのは女教皇〝プリーステス〟のみと思われた。

「影人間が見つかっているのは駅周辺。なら、敵も駅周辺か列車に現

われると思う」
復活する満月の日になってからしか姿を現さないとはいえ、敵の出現ポイントを事前に予測する事は可能だ。
相手が最初に姿を見せるのは十年前の事故で飛び散った欠片が落ちた場所。そのデータは残っていないけれど、落ちた場所から動かずにエネルギーを集めているとすれば、当然ながらその周辺での被害が最も多くなる。
港区の巌戸台で被害が多いなら敵が来るのは巌戸台。巌戸台の中でも影人間がよく発見されるのが商店街なら、敵が現われるのは商店街と見て間違いない。
そんな犯罪のプロファイリングのように敵の出現箇所を既に予想していた湊は、駅周辺と線路沿いで特に影人間の発見が見られる事から、駅周辺よりも列車の可能性の方が高いと思っていた。
ここで線路ではなく列車と睨んだのは、落ちた場所から動けないはずなのに被害者の発見される範囲がかなり広範囲に亘っていたことが理由である。
落ちた場所が線路なら動けない、しかし、相手が列車自体に乗り込んでいるのなら一緒に線路沿いを移動出来る。これならば被害者の発見場所の件も説明が付くため、湊の読みはほぼ当たっているはずだった。
「……きっと、あいつらも出張ってくるんだろう。岳羽がおじさんの事を知るためとはいえ、本当に……」
鬱陶しそうな表情を浮かべる彼の脳裏を過ぎるのは、四月の下旬頃からタルタロスを訪れるようになった特別課外活動部の姿。
彼らは人々のため、影時間を終わらせるために戦ってタルタロスの謎を解き明かそうとしている。
掲げる理念は立派だと思うけれど、実力が伴っていなければただの大口を叩く馬鹿でしかない。サポートも補助機械に頼らなければならないレベルであり、今後もタルタロスを登っていくのならすぐに限界がやってくるのは目に見えている。
では、そちらは諦めて満月のアルカナシャドウのみを狩るかと言え

ば、タルタロスを登れない以上ペルソナを安定して鍛える事も出来ないので、良くて敗北悪くて味方が死亡する未来しか見えなかった。
戦力は増えて個人も徐々に強くはなっているため、サポートさえしっかりしていれば今後もタルタロスを攻略していけるかもしれない。ゆかりを守るために湊が置いてきたプチフロストも力を貸しているので、刈り取る者が出ない限りはきっと大丈夫だろう。
もっとも、七歌たちからはヒーホー君と呼ばれ男子として扱われているものの、プチフロストの中身は座敷童子なので正しい性別は女なのだが、彼女は召喚時に湊が籠めた力が枯渇するか、敵の攻撃を受けて耐久限界を迎えない限りはタルタロスのエントランスに待機している。
湊の呼びかけや本人の意志で湊の中に戻る事も可能だが、次の戦場が列車の中だとどちらにせよ特別課外活動部の方からは彼女に何の指示も送れないはずなので助力は期待出来ない。
狭い場所でチームワークなど発揮しきれないため、必要なのはチームとしての強さよりも個人の力だが、スキルによっては自分で自分を危険に晒す事にもなりかねない以上、今回も彼らがやってくるのであれば様々な場所での戦闘経験のある青年自ら彼らの補助に出向く必要があった。
「……それじゃあ、何も知らないやつらのお守りをしてくる」
少女の器に別れを告げた青年は部屋を出る前に、黒いロングコートを身に纏って黒いフルフェイスのヘルメットで顔を覆う。
別に正体がばれても構わないが、出来れば誤解してくれていた方が動きやすいので、今日もまたペルソナと手にした武器で勘違いして貰うのだ。
全身に漆黒を纏った青年は自分の研究室に複雑な暗号キーのロックをかけ、誰も入れないようにしてから離れると、地上部に用意してあった大型バイクに跨がり敵の待つ場所へと去って行った。

5月9日（土）
影時間――作戦室

昨日もタルタロスに行った事で今日は休みにしようと決めた日の夜。真田が作戦室を訪れると美鶴がコンソールを操作して一人で何かをしていた。
彼女は現在の特別課外活動部において、唯一索敵タイプの力を持つ特別なポジションにいる。その彼女が一人で何かをしているという事は、タルタロス探索の翌日だというのに今日も街中のシャドウの様子を窺っているのだろう。
戦闘とは勝手が異なるとは思うが、ペルソナの力を利用する以上、あまり根を詰めすぎると精神力が枯渇して倒れる恐れがある。
そうなればメンバー全員が心配するに違いないので、座っている彼女の元まで近付けば少しは休めよと声を掛けた。
「探索もないというのに随分と精が出るな」
「なんだ、明彦か」
やって来たのが真田だと分かった美鶴は短く息を吐いて肩の力を抜く。
別に声を掛けられて驚いた訳ではないが、作業に集中していた事もあって知らず疲労を感じており、声を掛けられて集中が途切れたなら少しばかり休憩しようと思ったのだ。
とはいえ、一日の影時間は限られている。なので、今行っている作業は継続しつつ、チームの休みと決めた日にまで自分がどうして作業を行っていたのか訳を話す。
「前線に出ている者たちが休んでいるからこそ、バックアップの私は力の精度を上げる意味も込めて、街中にイレギュラーシャドウがいないかを探っていたんだ」
「それはご苦労な事だが、実際、タルタロスと比べ広範囲の索敵は可能なのか？」
それは素朴な疑問だった。真田のペルソナには探知能力がないので勝手は分からないが、本人曰くそう強くもない能力で街一つをカバーするなど出来るとは思えない。
けれど、今まさに目の前でコンソールをいじりながら作業をしていたため、強くないなりに全く出来ないということは無いのだろう。

そんな風に真田から率直に尋ねられた美鶴は、指を組んだまま掌を前方に向けるようにストレッチしながら眉根を寄せて答えた。
「正直に言わせて貰えば難しい。元々、私のペンテシレアは索敵に応用出来る能力があるだけで戦闘タイプだからな。昨日辿り着いたタルタロスの行き止まりよりも上のフロアに行けば、私の力ではサポートも難しくなるだろう」
「なら、今後タルタロスの探索を続けていくなら、専門かどうかはともかく強力な索敵能力を持つメンバーを早急に探す必要がある訳か」
「そうなるな」
出来る事なら見つかったその日の内にでもメンバーに加わって欲しい。それが、メンバーの命を預かりながらも己のサポートの力の限界を感じている美鶴の素直な気持ちだった。
タルタロスがただのダンジョンであればこうも力は求められなかった。敵のアナライズさえ出来れば後はフロアマップでも作成すればいいのだから。
けれど、タルタロスには日によって構造が変化する特性があった。待機時の拠点としているエントランスとフロアボスのいるフロアだけは例外だが、他のフロアは階数に関係なく翌日には構造が変わってしまうため、行った日ごとに索敵してマップ情報と敵やアイテムの有無を教える必要がある。
上に行くほど敵の強さも増すので、味方の生存ためにも余計に補助の力が求められるのだが、かと言って前線メンバーはどうだと聞かれれば、そちらも十分とは言い難いと美鶴ははっきり告げる。
「現状、戦力は揃ってきているが安心とは言い難い。火炎と電撃は伊織とお前しか持っていないからな。どちらかがやられてしまえば大幅な戦力減だ」
「そう簡単にやられたりはしないさ。まぁ、戦力が増えるのは大歓迎だがな」
「ああ。最重要は探知型、時点で不足している属性スキルを持つペルソナ使いが望ましい。もっとも、後者に関してはワイルドとやらがいれば解決するんだが」

ない物を言ってもしょうがないのかもしれないが、美鶴は前に眞宵堂で聞いた特殊なペルソナ能力者が味方にいてくれればと思ってしまう。

通常一人につき一体というペルソナの制限を無視して、複数のペルソナを己の力として呼び出す事が出来。同時に複数体呼び出す事は出来ないけれど、現われた敵に応じて呼び出すペルソナを変えることで即座に対応することが出来るという。

どういった種類の才能を持っていれば身につけられるのかは不明だけれど、もしも、そんな類い希な能力を持つ者が味方にいれば戦術の幅が広がることは確実。

ひょっとすれば探知型のペルソナに目覚めることもあり得るので、仮にまだ力に目覚めたばかりでペルソナが充実していなくても、美鶴としては希少な力を持つ者がただ仲間になってくれるだけでも大歓迎である。

もっとも、現実はそうではなく、サポートも前線メンバーもギリギリで保たれている状態。考えるだけで頭を押さえたくなるところだが、美鶴が頭に手を当てる前に話を聞いていた真田が口を開いた。

「ワイルド？　なんだそれは、桐条の秘密兵器か？」

言われて美鶴はそういえば真田に伝えていなかったなと反省する。

彼は美鶴に次いで二番目にチームに入った古参メンバーだ。影時間の発生が桐条グループの研究が原因であることも伝えており、ゆかり以降に入ったメンバーよりも事情を理解しているとも言える。

二人だけでイレギュラーシャドウと戦っていた時期もあっただけに、彼のことは非常に信頼してはいるのだが、ワイルドのことを知る切っ掛けとなった青年と彼の関係があまり良好でないこともあって、無意識のうちに話すのを避けていたようだ。

別に湊のことなど欠片も話題として出さずに伝えられるのに、変に気を遣い過ぎて情報伝達に不備があったのは己の落ち度だとして、美鶴は伝えていなかったことを謝罪しながら彼にワイルドの説明をする。

「いや、ペルソナ能力の上位種と考えてくれればいい。複数のペルソ

ナに目覚め、状況に応じて切り替えられる能力だ」
「随分とまた便利な能力だな。ペルソナは自分の心だろ。それを複数なんて多重人格でもなければ無理じゃないのか？」
「詳しい事は私も知らない。ただ、そういった能力が存在する可能性が示唆されているんだ」
確かに真田の言う通り、己の分身であるペルソナを複数持つということは、精神が複数無ければ説明が付かなくなる。
本来の心理学用語としてなら、ペルソナは状況や個人ごとに対して向き合う際の顔という意味なので、ワイルドのように敵に応じて切り替えて対峙する方が正しい本来の意味に近いと言えるが、美鶴自身もワイルドに関しては知らないことの方が多い。
故に、深く掘り下げて変に喋り過ぎてしまう前に、話はここまでだと打ち切りかけたとき。二人の傍にあった装置からけたたましい警告音が鳴り響き、モニターに映るグラフには敵の到来を告げる大きな波長が見られた。
「敵か？」
「どうやらそうらしい。だが、この反応は通常より大きいな。まさか……」
グラフの波長は頂点と底辺よりもさらに大きな数値を表わしている。これほどの力の規模を持つ敵など先月現われ真田を負傷させたシャドウや、いつかの悪魔のような姿をしたシャドウしか見たことがない。
現われる前に影人間が増加するという傾向も合わせて考えれば、前者が出現したときの状況に酷似しているが、まだ決めつけるには情報が不足していると美鶴が言いかけたとき、グラフの波長を見て瞳をギラギラとさせながら嬉しそうに口元を歪めた真田が己の拳を逆の掌に打ち付けた。
「フッ、復帰早々リベンジマッチとは心が躍る」
「明彦、遊びじゃないんだぞ」
「分かっているさ。あいつらを起こしてくる。お前も準備を進めておけ」

前回は順平を逃がすために怪我を負ったが、そう何度も負傷して戦線を離脱していられない。部活に出られないのも困るし、危険な戦いを後輩たちだけに任せるのも嫌だった。
だからこそ、真田もやる気は十分に、今夜は前回のような無様を晒すつもりはないと言い切って部屋を出て行った。
＊＊＊
真田が他の者たちを起こしに行ってくれれば、少し経ってから制服に着替えて召喚器も身につけた二年生トリオが順番にやってきた。
普段から被っている野球帽の位置を調整しながら現われた順平は、自分が最後だったことに気付いて他の者に謝りつつ、今日突然呼ばれた理由は敵が出たからかと尋ねた。
「すんません、遅くなりました。つか、休みに呼び出しって事は敵っすか？」
「ああ、先月出たのと似た大型の反応を感知した。といっても別個体だから能力も違うだろうがな」
答えながら美鶴はコンソールを操作し、前回の大型シャドウの波長を今回のと並べるように画面に表示する。
同じ種類の敵ならばタルタロスに出ようが、イレギュラーシャドウとして街中に出ようが、ぴったりと重なる波長が記録されるはずだが、並べられた今回と前回では反応の大きさは似ているが、その波長自体ははっきり別物と分かるほどに異なっていた。
同じシャドウならば当然あり得ないため、実力が前回とほぼ同規模の別個体であることが分かる。
それを見て前回の敵をギリギリで倒したゆかりの表情が強張れば、一緒に戦っていた少女は真面目な表情のままモニターを眺め尋ねる。
「場所はどこなんですか？」
「モノレールだ。駅から線路上を歩いて向かって貰う事になる」
続けてコンソールを操作すると港区の地図が表示され、何度か拡大してからようやく自分たちの知っている場所だと認識出来る状態になった。
美鶴がモノレールと言っていた通り、敵がいるのは駅などではなく

駅と駅の間にあるまさに線路上といえる地点。これなら厳戸台駅から歩いて行くしかないなと考えたところで、ここから直接現場に向かうことで発生する弊害に七歌は眉を寄せて難しい顔をした。
「ヒーホー君を連れてくる暇はなさそうですね。狭い場所なら氷結が一番使い勝手のいいスキルなんですけど」
「ああ、申し訳ないが一日の影時間は有限だ。今回を逃せば次の影時間に敵がどこに現われるか分からない以上、チャンスを無駄にしないためにも呼びに行っている暇はないな」
美鶴も七歌から指摘される前にその事には気付いていた。前線に出ているメンバーの中で最も強い適性値を持ち、攻守の要にもなっていたヒーホーが抜けるということは、下手をすればチームのバランスを失って連携が取れなくなる危険を孕んでいる。
さらに、順平の火炎や真田の電撃のようなダメージと直結する攻撃と違って、氷結ならば狭い場所でも周囲への被害を最小限に抑えて使える。
そのため、こういった時にこそ頼りにしたいのだが、時間が限られているのなら呼びに行っている時間も無い。
美鶴がバイクを飛ばせば、七歌たちがモノレールに行っている間に連れて来られるかもしれないが、その間のバックアップが期待出来ないとなるとアクシデントが起こったときが恐い。
よって、戦力に不安があろうと今日は二年生トリオと真田で敵を攻略するしかない訳だが、ヒーホーの抜けた穴を補う戦術について七歌が考えていれば、腕を組んで自信ありげに立っていた真田が恐れる必要などないだろうと後輩たちに発破をかけた。
「なに、先月は岳羽と九頭龍だけで倒せたんだ。似たようなものなら戦力も増した分こっちが有利だろ。油断は出来んが戦う前から恐れる必要も無い」
「真田さんもやる気満々ッスね」
「当然だ。今日はリベンジマッチのようなものだからな。この拳で敵をリングに沈めてやるさ」
男子二人は前回の大型シャドウに良い思い出がない。むしろ、苦い

思い出の方があるくらいで、順平はビビってしまったときに真田が囮を務めて寮まで全力疾走で逃げ帰り、真田は真田で順平の囮になったときに攻撃を避けきれずに肋骨にヒビを入れられた。
だからこそ、今回の戦いは前回の雪辱を果たすための大事な一戦といえ、強敵が出たことを内心で喜んでいるほどであった。
そんな〝男のプライド〟のために戦おうとする彼らの心情の考察など出来ないだろうが、七歌やゆかりも最近の影人間の急増についてはよく思っておらず、原因が今回のシャドウであるならば早急に倒すべきとの結論に至った。
少し強くなったくらいで大丈夫だろうと油断してはいけない。しかし、相手の強さを前に自分の実力を過小評価して動けなくなってもいけない。自分がやられれば味方もやられてしまうという緊張感を持ちつつ、真田の言った通り背負いすぎずに行こうと七歌はメンバーらに声を掛けて目的地へと向かった。
――巌戸台駅
装備を整えた前線組の四人が寮を出て駅に向かうと、少し経ってから後ろに機材を積んだバイクに乗った美鶴が到着した。
彼女のバイクを知らなかった順平は格好良いと目を輝かせていたが、すぐにどうして影時間でも動かせるんだという疑問を抱いたようで首を傾げている。
「あれ？　影時間って電子機器はダメって話じゃなかったんスか？」
「これは特別製だ。寮の作戦室に置いてある機械と一緒で黄昏の羽根を積んでいる。だから影時間にも動かせるんだ」
組織の作戦室だから……といった理由で、これまで順平は意識していなかったのだろうが、彼は寮の作戦室で影時間でも稼働する機械を既に見ている。
美鶴のバイクもそれらと同じで動力部に黄昏の羽根を積み込むことで起動出来るようになっており、もしも街中にシャドウが現われても簡単に移動できるようにと小型化された通信補助機材と共に街の中を駆けていた。
そんな彼女の話を聞いた順平は、積んでいた機材のアンテナを立て

ている相手を見て、こんなに沢山の機械が動かせるのなら影時間でも不便に思うことはなくなりそうだと軽い口調で呟いた。
「へぇ。んじゃ、そのナントカって鳥の羽根があれば影時間でも結構快適に過ごせそうっすね」
「黄昏の羽根は生物の羽根ではない。構成している物質すら不明なオーパーツ。それが鳥の羽根の形をしているから黄昏の羽根と呼ばれているんだ。私たちの召喚器にも積まれているんだぞ？」
　言いながら美鶴は取り出した召喚器のグリップ部分を指して、この青く光っているのがそうだと教える。
　鳥どころか生物由来ですらなく、全く未知の物質だと聞いて順平も驚いているが、美鶴がそんな風に後輩らに教えていると、シャドーボクシングでウォーミングアップを済ませていた真田が口を挟んできた
「雑談はそれくらいで良いだろう。時間もないし敵の元へ向かうぞ」
「お前は自分が戦いたいだけだろうに……。まあいい。今日はここからバックアップを担当する。君たちは早速モノレールに向かってくれ」
『了解！』
　駅前に残る美鶴と別れた一同は改札を素通りしてホームに行くと、ホームの隅にある点検用の入り口から線路に下りて歩いて進む。
　このままずっと進んで行けば海の上に出てしまうのだが、流石にそこまで行く前に着くよねと思いながら歩いていたゆかりは、眩しいくらいに輝く満月を眺めて傍らをゆく七歌に話しかけた。
「田舎の線路を歩いたことはあるけどさぁ、都会でモノレールの線路を歩くって不思議な感じだよね。てか、今日は満月か。現実時間よりも大きいからか結構明るいよね」
「うん。てか、影時間の月って明らかに太陽光の反射じゃなくて自分で光放ってるよね」
　自ら光っているように見える月は、実際は太陽の光を反射しているだけというのは小学生で習う常識だ。
　しかし、今も影時間の街を照らしている巨大な月は、明らかに自ら

発光しているようにしか見えず、現実時間の月とは別物なのかなという疑問を七歌に持たせた。
ただ、いくら気になったとしても今は作戦行動中。駅を出てから五分も歩けば目的の銀色の車両が見えてきた。
「お、あったあった。てか、思いっきり扉が開いてるね。駅でもないのに開く訳ないっつの」
「まぁ、仮に罠だとしても敵が中にいるなら入るしかない。先に俺と順平が入って敵が襲ってこないか確かめる。九頭龍と岳羽はそれから入ってこい」
そういうと真田は軽々と上って列車に乗り込んでいく。後に続いた順平も剣を列車の中に置いてから上り、真田と一緒に中を警戒して様子を確かめてくれている。
デリカシーのない男子二人が思わぬところで気を利かせてきたのが意外なのか、そんな二人の偵察が終わるのを待っている間七歌は素直な感想をゆかりに告げた。
「先輩も女子に気を遣ったり出来たんだね」
「まぁ、美紀っていう妹がいるしね。ちょっとだけ重ねて見てるんじゃないの？」
実際のところそれが正解である。自分の妹の同級生、ゆかりに至っては中学時代からの友人だ。いくら彼女たちが戦えると言っても、真田より年下の女子であるという事実は変わらない。
故に、真田は男の自分こそが危険な役目を負うべきだと考えており、作戦行動中も基本的には彼女たちが直接敵と戦わずに済むよう囮になることもあった。
「敵はいないようだ。お前らも上がってこい」
「ほら、手ぇ貸してやるぜ」
『そういうの間に合ってるんでいいです』
大きな武器を持っている女子らにこの高さは辛いだろうと親切心で言ったのだが、見事なシンクロで断れて順平は涙が零れそうになる。
しかし、男は簡単に涙を見せてはならないと決めているため、上を

向きながら女子らに背中を向けた順平は、隣で腕を組んで立っていた真田に話しかけた。
「真田さん、最近の女子って人の善意を平気で踏みにじってきますよね」
「一部の人間だけだろ。俺の妹はそんな事はしない」
「いやぁ、ミキティもゆかりっちとかの影響受けてる可能性ありますよ。有里君とかチドリンも居ますから」
笑いながら言った瞬間、横から拳が飛んできて順平は真横に吹き飛ぶ。何が起こったのは一瞬分からず尻餅をついたまま顔を上げれば、そこには拳を突き出した状態の真田が立っていた。
「人の妹を馴れ馴れしく呼ぶな。そして、美紀はあれで頑固だ。しっかりと自分というものを持っているから岳羽たちの悪影響は受けていない」
フンス、と鼻から息を吐いてお前は何も分かっちゃいない告げる真田に、順平は一回目は殴らず口だけで言って欲しかったなと思いながら痛む右肩を押さえ立ち上がる。
敵がいないからこそこんな事をしていられるのだが、男子二人の会話は女子の耳にも届いており、何もしてないのに美紀に悪影響を与える存在と言われたことにゲンナリしながらゆかりが愚痴をこぼす。
「ねぇ、なんか私すっごいディスられてるんだけど」
「不良っぽいイメージ通りじゃん」
「どこがよ。花も恥じらう乙女ですから」
「先に自分のスカート丈を恥じらおうぜミス・ピンク」
お前のパンツ、ピンク色。列車に乗り込む際に短いスカート丈のせいで見えていたぜと七歌は指摘する。言われたゆかりは頬を染めて五月蝿いと返すが、男子と女子がそれぞれ緊張感のない様子を見せていれば、急にプシューと音をさせ開いていた扉が一斉に閉まった。
「あ、閉まった……」
「どうやら敵もお出ましのようだな」
そして、前方の車両から生首のようなシャドウ、女教皇〝囁くティアラ〟が数体やって来たことで、敵も自分たちの侵入に気付いたよう

だと真田は拳を構えながら言った。
閉じ込められ、敵がやって来たことで戦闘モードに移る七歌たちをさらなる変化が襲う。
「お、おおっ!? な、なんか動いてね? これ動いてね?」
そう、武器を構えて七歌の指示で動こうとしたとき、突如列車が動き出したのだ。
窓の外を流れる景色はドンドンと加速していき、この調子ならすぐに普段乗っている時よりも速くなると思われた。
《何があった。列車が急に動き出したぞ!?》
「私たちが侵入したことで敵も動き出したみたいです。多分、列車のコントロールを奪ってるんじゃないかな?」
そして、駅前からペルソナを通じて状況を見ていた美鶴も、どうして動くはずのない列車が動いているんだと慌てて状況を尋ねてきた。
答える七歌の様子はいたって冷静だが、周囲の様子も見ている美鶴はこのまま進んでしまえば大惨事になる事を仲間に告げる。
《動いているのはその列車だけだ。そのまま進み続ければ十分後には前の列車にぶつかるぞ!》
シャドウがコントロールを奪っているのは乗っているこの列車だけ。ならば、一本早い列車は先の方で止まったままなので、進み続ければ当然海の上で衝突することになる。
もし仮に列車がなかったとしても、この列車の向かう先は終点である辰巳ポートアイランドだ。列車にはぶつからずとも駅の壁に衝突し無事では済まない。
状況はまさに最悪、制限時間内に強力なシャドウを倒して列車を止めなければならないのだ。こんな状況で落ち着いてなどいられないはずだが、拳を構えた少年はそれでこそ燃えるとばかりに瞳をギラつかせ獰猛な笑みを浮かべた。
「それはマズいな。なら、一ラウンドでけりをつけよう」
「え、えっと、一ラウンドって五分くらいだっけ?」
「三分だよ。喋っている時間が惜しいし。雑魚は押しのけて先頭車両まで行くよ!」

衝突まで残り十分。少女たちの命懸けの作戦が始まった。

第二百四話　ギリギリの戦い

影時間――モノレール

前方からやってくる天秤型のシャドウ、魔術師〝炎と氷のバランサー〟が炎を飛ばして来たことで順平のヘルメスが盾となり皆を守る。

ヘルメスが敵の攻撃を防いでくれている間に後ろから勢いをつけて跳んだ真田が座席に着地し、相手の真横から拳を振り上げて殴りかかる。

正面に向かって攻撃している最中に横からの奇襲を受けた敵は倒れ、その瞬間を狙ってゆかりのイオがガルを放つと敵は吹き飛びながら黒い靄となって消えた。

しかし、そいつを倒しても奥にはまだ敵が残っている。最初は一ラウンドでけりをつけると言っていた真田も、こうも敵が多くてはろくに進むことも出来ないと苦虫を噛みつぶした表情を浮かべた。

「美鶴、残り時間は?!」

《残り七分ほどだ！　しかし、敵を倒しても止まるには距離がいる。それを考えればあと五分ほどと見た方が良い》

現在動いている列車は敵を倒しても止まるまでに距離が必要になる。もしも、その場でピタリと止まれば慣性の法則で七歌たちだけが列車の移動していた速度で壁に叩き付けられるので、残り時間が想定よりも少ないことを告げられても当然だと納得しか出来ない。

けれど、納得したところで焦らない訳ではない。七歌たちだって死にたくはないのだから、急いで敵を倒そうとしている。

こうも敵が多いのは予想外だったが、普段のタルタロスの探索時と比較すれば、ヒーホーが抜けているにもかかわらず一体倒すのに掛かっている時間は少ないくらいだ。

「次、来ます！」

身体がピンク色の手袋になった魔術師〝ダンシングハンド〟が来たことで、既に構えていた七歌が薙刀を持って飛び出し、敵を切り上げ、浮いた敵をさらに横薙ぎで叩いて一瞬にして倒しきる。

しかし、今まさに敵を倒したばかりというその瞬間を狙って放たれたのか、正面から彼女に向かって氷刃が飛んできていた。
「七歌っ!?」
敵を倒した直後というのは誰でもわずかに気が抜けやすい。次の車両への入り口にいた炎と氷のバランサーもそれを分かっていて狙ったのか、攻撃を終えたばかりの七歌に氷刃が迫っていた事でゆかりが悲痛な叫びを上げた。
ここでもし七歌が倒れれば時間までに大型シャドウを倒すのは絶望的だ。それは戦力の減少というだけでなく、メンバーの精神状態が不安定になりまともに戦えないという理由が大きい。
氷刃が迫っている七歌もそれは分かっているのだろう。自分の死が仲間の死に直結すると。
そして、もう避けられないと誰もが思ったとき、七歌は薙刀を握る手に力を籠め、普段は赤褐色の瞳を深紅に変えると、足を高速で振り上げいなすように氷刃の側面を蹴りつけることでやり過ごし、足を再び地に着ければ攻撃を放ったことで隙を晒していた敵に向けて薙刀を投擲した。
「ハァァァァッ!!」
槍には斬ったり刺したりする以外にも、投擲することで敵を貫くという使用法もある。
七歌はそれを薙刀で再現しただけだが、全身のバネをフルに使って投げられた武器は敵の仮面のど真ん中に突き刺さり、敵が消え去るとカランと音を立てて床に転がった。
攻撃への対処からカウンターまではほんの数秒の出来事であり、七歌がやられると思って飛び出しかけていた順平と真田は前傾姿勢になりかけたところで止まっていたが、全てを一人で対処しきってしまった友人が無事なことでゆかりは安堵の息を吐いた。
「はぁ、良かったぁ……。ホント、心配させないでよぉ」
「いやいや、あれくらい大丈夫だって。前の大型シャドウのときも同じような事はしてたでしょ」
笑ってこれくらいは余裕だと話す七歌にゆかりはそうだっけと首

を傾げる。
　前回はあまりにも必死だったことで周囲を見ている余裕がなかっただけだが、言われてみれば剣を持った腕が伸びてきたときに信じられない反射神経で対処していたような気がする。
　ならば、今回の単発攻撃くらいは簡単に対処出来て当然かとゆかりが思ったとき、七歌が無事良かったと安心しつつもカバーに入るのが遅れた男子たちは申し訳なさそうに謝罪した。
「わりぃ、あそこはオレっちがすぐにカバーに入るとこだったよな」
「いや、距離で言えば俺の方が近かった。すまん。しかし、よく一人で捌けたな」
「今は未来が視えてるんですよ。だから、多少速いくらいの攻撃なら〝後の先〟で対処出来ます」
　そう話す七歌を見たとき、他の者は初めて瞳の色が変わっていることに気付いた。
　彼らの身近にもこれまで湊という金色の珍しい瞳を持つ青年がいたが、今の七歌も宝石のような綺麗な深紅の瞳になっており思わず言葉を失う。
　他の者が驚いている間も七歌は気にせず落ちた武器を拾いに行っているが、先ほどの言葉も含めて一体彼女の身体に何が起こっているのか心配そうにゆかりが尋ねた。
「ね、ねぇ、目の色が変わってるけど大丈夫なの？　目の血管切れてたりしない？」
「ああ、大丈夫、大丈夫。これ家の一族に希に発現する特異体質だから」
　別に血管が切れたことで目が赤くなっている訳ではない。それならば戦闘可能という意味でも安心だが、彼女の出生について何も聞かされていない者にすれば謎が増えただけだ。
　もしも本当に未来が視えているのなら戦闘に置いて凄まじいアドバンテージを持っている事になるが、それならば今までその能力を使っていなかった疑問が残る。
　こういった事は早めに解消しておいた方が良いと考えた真田は、

拾った武器の刃が欠けていないか確認していた七歌に近付き説明を求めた。
「未来が視えると言ったがどういう意味だ？」
「それは進みながら話しましょうか。時間もないですし」
　残り時間は刻一刻と減っている。重要な事ではあるものの話すのは構わないが、それでダメでしたでは悔やみきれないだろうと七歌は先を急ぐことを提案して他の者も後に続く。
　次の車両にいけば再びダンシングハンドが現われたが、真田のポリデュークスが正面にジオを放って動きを止め、すかさず順平が大剣で切りつけて敵を倒しきる。
　指示を飛ばさずとも素晴らしい連携を見せた事で七歌も笑顔で頷き、瞳を普段の赤褐色に戻すと自分も奥にいた女教皇〝偽りの聖典〟に向かってエウリュディケのガルを放ちながら先ほどの問いに答えた。
「うちの一族は龍の末裔で不思議な力を現代まで残しているんです。ただ、どれくらいの力を受け継いでいるかは個人差があって、十二歳前後に血に目覚めるまで分かりません」
　九頭龍の目覚めは百鬼よりも早く元服前にはほとんどの者が己の力を自覚する。それは言葉を話せるようになった頃には親から自分の一族と名切りについて聞かされ、両家の秘密と在り方を知っているからだが、七歌も他の龍よりは遅かったが中学生になったくらいには目覚めていた。
「そして、それらは等級が設定されていて四級一爪から特級五爪までの五段階あります。あ、ちなみに私は上から二つ目の一級四爪です」
　話ながら次の車両への扉を開け、目の前にカブトムシ型のシャドウである皇帝〝死甲蟲〟がいたのを見た瞬間、ゆかりが召喚器を抜いてイオを召喚し相手の弱点であるガルをお見舞いした。
　戦闘に入る前に不意打ちを喰らった敵は吹き飛び倒れるが、その際に奥にいた臆病のマーヤ二体を巻き込んだのでチャンスが生まれる。
　召喚しっぱなしだったゆかりと新たに呼び出し直した七歌のペルソナが揃ってガルを放ち、合体した二つのスキルは列車の窓が割れる

のではないかというほどの振動を車両に与えながら、倒れていた三体の敵を全て飲み込み霧散させた。
「で、等級が上になるほど使える力が増えていくんですが、一級四爪以上だと魔眼といって瞳に異能が宿ります」
「それが先ほど言っていた未来が視える力なのか？」
「ええ、能力も人によって異なりますが、私のは〝未来視（さきみ）の魔眼〟といってとても近い未来を視ることが出来ます。まぁ、常時発動し続けられる訳ではないですし、その情報を活かせるか別の話ですが」
　能力を使っている間、七歌には通常の視界と重なるように数秒先の未来の映像が見える。それは敵が攻撃を放って自分に飛んでくる映像であったり、真横に飛んでこちらの攻撃を回避する映像であったりと状況によって異なるが、現実の時間にして一秒にも満たない一瞬の間に終わるため、七歌はこれまで窮地に立たされれば見た映像を元に反射神経をフルに使って攻撃を捌いていた。
　彼女の視る未来とは確定的な物ではなく、そのまま誰も何もしなければそうなるという未来である。人によってはそれを未来予測と呼ぶかも知れないが、視た未来を変えられるかどうかは本人次第だ。視てから行動に移すまでの僅かな時間にしっかりと対応を考える必要もあれば、間に合うかどうかも分からないため反射神経を求められる。
　七歌の的確な対処の理由を聞いた他の者は、便利だが活かせるかどうかは本人次第だと理解したためピーキーな能力だと思ったようだが、自分の能力を見事に使いこなしている少女は思い出したように仲間たちに口止めをしておく。
「あ、これ結構大事な話なんで秘密にしてくださいね。必要だと思ったから仲間には明かしただけなんで、美鶴さんもグループの人間に話したりしないこと。これ破ったら島根に帰るんで」
　口調はいつも通りのものだが、通信越しに聞いていた美鶴も七歌の言葉が本気であると理解し肝に銘じる。
　彼女は必要だと感じた事で仲間には明かした上で他の者には他言無用と言い、美鶴にはさらにグループの人間にもと念押しした。わざ

わざそのよう言うからには、そこには桐条武治や幾月修司も含まれているのだろう。
　別に彼女も彼らを信じていない訳ではないと思いたいが、本来なら一族の者以外には話してはならない情報を教えてくれたのだ。力を貸してくれているだけでもありがたいため、美鶴が口外しないことを約束すれば他の者たちも同じように頷いて返した。
　話が一段落したタイミングで炎と氷のバランサーが現われたため、七歌が斬りつけたところを真田のポリデュークスが殴りつけて倒せば、先ほどの魔眼の話と合わせて気になることがあったのか順平が口を開いた。
「そういや、有里君のことを親戚つってたけど、マジなら七歌っちのご家族とか有里君もそんな不思議な力もってんのか？」
「お父さんとお爺ちゃんは二級三爪だから魔眼は持ってないよ。八雲君のお父さんは私と同じ一級四爪で、八雲君は他の龍より目覚めるのが遅かったけど三年くらい前に特級五爪に目覚めてる。だから、二人とも魔眼は持ってるだろうし、八雲君はさらに特級五爪にのみ許された異能を持ってるはずだね」
　個人差があると言ったように能力の詳細は不明ではあるが、一級四爪以上であれば魔眼持ちは確定である。
　故に、それ以下の七歌の父と祖父は二級三爪の霊視までしか使えないが、湊の父親である百鬼雅は魔眼持ちだったと聞いているし、さらに上の特級五爪に目覚めた湊は別の能力も持っているはずだと彼女は簡潔に答える。
　さらに加えるとすれば、過去の名切りに認められる者が現われない限り当主を空座としておく百鬼と違い、九頭龍では最上位の等級に目覚めた者が当主となる仕来りがある。
　同じ等級がいれば先着順になるが、兄と父よりも上位だった百鬼雅は鬼の婿養子になる際に継承権を放棄するよう言われており、それからは先代だった七歌と八雲の祖父が当主を務めていた。だが、目覚めた七歌が新たな当主となり、さらにその後に目覚めた八雲が最上位だったことで現在の当主は八雲なのだが、それを他の者に伝えても八

雲が当主なら結婚して家を継ぐのかと聞かれるだけなので、七歌は八雲本人が記憶を失っていると思っていた事もあってその部分は伏せておいた。
　そうして、さらに敵を倒して進みつつも時間は過ぎて残り五分を切った頃、先ほどの順平と同じように七歌の一族の特異体質について気になったらしい美鶴が話しかけてきた。
《……七歌、その魔眼とやらは絶対に瞳の色が変わるのか？》
「え？　ああ、多分そうじゃないですか？　力を使う間は神の血を呼び覚ましてる訳ですし」
　七歌も他の魔眼持ちを実際に見た訳ではないので断言は出来ないが、自分の体感からすると魔眼の使用で瞳の色が変化するのは別に血行が良くなってなどという理由ではない事は少女にも分かる。
　魔眼の発動はまさに血に宿る古の神の力の行使であり、神と違って脆弱な肉体である人間が力を使えば影響が出るのは当たり前だ。家に残る古文書によれば中には使用するにつれて視力を失っていった者もおり、特にデメリットのなかった七歌は幸運な部類といえるだろう。
　始祖の時代から数千年経って人の肉体となった以上、魔眼の発動時に瞳の色が変化するのはほぼ確定事項だが、どうして美鶴がそんな事を聞いてきたか気になった七歌は、もしかしてと理由に当りをつけた上で予想した事に対して否定の言葉で返した。
「でも、八雲君の金色の瞳はあれ魔眼じゃないですよ。よく分からないけど違うと思います。綺麗ですけど」
《いや、それではないんだ。前に彼の家に行ったとき》
　以前、祝勝会として湊の家に行ったとき美鶴は彼の瞳が蒼色になるのを見た。風花の手作りケーキを食べて魔眼が発動する意味はよく分からないが、あのときのケーキは一般人が食べれば命の危険があったに違いない。
　七歌の話を聞いた感じでは発動は任意のようだが、仮に命の危険に晒されたときも発動すると思えば、当時の状況は実によく当てはまっている。

そうして、彼が八雲だと知っている美鶴が湊の魔眼について口にしかけたとき、
「桐条先輩っ」
言葉を遮るようにゆかりが大きな声を出しながら、今日初めて見るテーブル型のシャドウに矢を射った。
言われて気付いた美鶴は慌ててアナライズをかけ、相手の弱点を知ると他の者に七歌が指示を出して倒しきる。
これで話を再開させることは出来るようになったが、戦闘が終わると美鶴は作戦行動中にもかかわらず雑談をし過ぎたと自分を戒め、以降は作戦の方に集中することをメンバーたちに告げた。
《すまない、敵への反応が遅れてしまった。残り時間もないし私はバックアップに集中しよう》
敵を倒して列車を止める必要があることを考えれば賢明な判断だ。少しでも早く倒すためにはバックアップで最短ルートともいえる攻略の道筋を示して貰った方がありがたい。
けれど、いくら新たな敵が来たからと言っても、先ほどのゆかりは少々強引で意図的に美鶴の話を切った気がしたことで、順平は後ろにいるゆかりの様子を気にして声を掛けた。
「どったのゆかりっち？」
「別に、敵が来てたからサポートをお願いしただけだよ」
確かにそれはそうかもしれない。だが、似たような敵とはタルタロスでも戦ったことがあるため、そこまで直ちにサポートを要するとは順平には思えなかった。
前衛組の後に続いて走るゆかりが何か気まずそうな表情をしているため、空気を読んだ順平はそれ以上何も訊かなかったが、彼女と美鶴の間に何かあるのなら近い未来に問題になるかもしれない。その事を思うと後でリーダーである七歌に相談した方が良いかもしれないが、今は目の前の事態を解決することが先だ。
そうして、四人がシャドウらを蹴散らしながら進めば、一同はやっと先頭車両に到着して今回の本命である敵の姿を目にする事が出来た。

「ようやく出会えたな」
「うっわぁ……なんかすげー格好してるぞ」
先頭車両に踏み込んだ七歌たちが運転席の方に目をやれば、客室と運転席を隔てる壁を背にした状態で足を開いて座った大型シャドウがそこにいた。
左が黒、右が白というように身体の色が左右で違ったおり、その髪の毛は自由に動くリボンのような形状をしている。
その特異な見た目もさることながら先頭車両に入った瞬間に室温が数度下がったように感じ、見れば窓ガラスや椅子の表面が薄らと凍っていたことで七歌は自分の勘違いではないと理解した。
「寒いね……これは氷結確定かな」
相手の属性が氷結であるならば弱点を持つ真田は分が悪い。となるとある意味で対になる火炎を使える順平が鍵になってくるが、それも敵に近づければの話だった。
皆が武器を構えながら敵を見ていれば、敵は髪の毛であるリボンを伸ばして攻撃を仕掛けてくる。突然のことだったが警戒していたことで全員が反応し、上手く横に飛んで避けたところで無残に切られて落ちた吊革を手に順平が敵の攻撃の切れ味に驚く。
「おいおい、吊革が綺麗にスパッと切れてるんだけど」
「喰らえば終わりだが避ければ問題ないってことだ」
「そんなシンプルにいかないッスよ！」
当たらなければどうと言うことはない。楽しそうに口元を歪めながらそう話す真田に、順平は当たれば終わりじゃないかと怒り気味に返す。
真田の言うことはもっともだが、ここは狭い列車の中だ。おまけに相手が氷結属性スキルによって常に冷気を放出しているため窓や壁だけでなく床や座席まで凍っているところがある。
もしも意気込んで攻撃をしかければ、知らずに凍った箇所を踏み、そのまま滑って転倒してしまう恐れもあるため、自在に動く相手の髪の毛だけでなく戦いのフィールドそのものにも気を巡らせる必要があった。

《マズいぞ、残り三分を切った！》
「順平！」
「任せろ！　こい、ヘルメス！」
　残り時間がないと言われ、七歌の指示を聞いて順平は前に出ながらペルソナを召喚する。
　現われたヘルメスは敵に向かって炎弾を放つが、相手は顔の高さに氷刃を形成しそれで迎え撃つと、威力の違いからか炎弾を霧散させて尚突き進んできた。
　避ければ仲間に当たると判断した七歌は持っていた薙刀を横薙ぎに振るい、氷刃の横っ面を叩いて砕きながら、攻撃を放った直後の敵にダメージを与えるべくさらに指示を送った。
「ゆかり！」
「了解、ペルソナ！」
　ゆかりのイオは先ほどのヘスメスのように正面の敵に向かって風の刃を飛ばす。相手はまだスキルを放ったばかりで連続では形成出来ないはずだ。
　これで倒せるとは思わないが、相手がダメージを受ければ僅かでも隙が生じるに違いない。互いの実力に明確な差が存在し、さらに時間がない以上はたたみかけられるときに全力を籠めるしかない。
　迫る風の刃がその切っ掛けとなるはずだったが、あと少しというところで敵の髪が顔の前で複数交差し、ゆかりの放ったスキルを完全に破壊して消し去った。
「先輩、同時に行きます！」
「わかった！」
『ペルソナ！』
　こうなっては仕方がない。一連の攻撃に合わせて自分たちもスキルを放ち、それによって無理矢理に相手の隙を作り出す作戦にシフトすれば、七歌のエウリュディケは真田のポリデュークスと一緒になってスキルを放った。
　時間をおいた事で再度形成されようとしていた氷刃を風の刃が破壊し、出来た隙を雷の槍が逃さんとしてついに敵の顔面を捉えようと

する。
　しかし、それをまたしても髪の毛が幾重にもなって防いだことで、七歌は小さく舌打ちをすると敵が複数撃ってきた氷刃を連続で破壊してから現状を仲間に説明する。
「ダメ、あいつの髪の毛が厄介過ぎる。魔法は相殺されるし、物理で攻撃しようにもあれで止められてカウンターを喰らっちゃう」
　敵を見て思い出すのは先月現われた魔術師の大型シャドウ。あちらは何本もある腕を伸ばして七歌を攻撃してきたが、今回の敵も自分が動かない代わりにリボン状の髪の毛だけを器用に動かして全てに対応してくる。
　魔法スキルを防いだり破壊出来るだけの強度を持つのなら、ヘルメスやポリデュークスが物理スキルで攻撃を仕掛けようと相手はそれを受け止めるに違いない。
　そして、受け止められ動きの止まったペルソナに向けて相手は氷結スキルを撃ってくるので、カウンターの餌食になりたくなければ、完璧な隙を引き出すまで他の手段で攻めるしかない。
「順平、ゆかり！」
『ペルソナ！』
　今度は順平とゆかりが同時にペルソナを召喚し炎と風を合わせて敵に攻撃する。
　けれど、風の助力を得て渦巻き進む炎は、敵の放つ吹雪によって相殺されてしまい。これでは自分たちの精神力が減るだけだと順平はデタラメな敵の強さに悪態を吐いた。
「チクショウ、こっちは合体技だぞ！」
「ちがう、足りないのは純粋な火力だ。燃やさなきゃ、あれを突破しなきゃ勝機は無い」
　二体分の攻撃を止められて信じられない気持ちは分かる。だが、敵と拮抗する攻撃を見ていた七歌は、今のスキルはただ合わさっただけで相乗効果は生まれていなかったと分析した。
　相手の攻撃を突破するために必要なのは火力、もっと単純に言えば全てを燃やすほどの熱量。敵の吹雪を溶かして相手まで届けば良い

だけの話なのだ。
《残り一分だ！》
「九頭龍、もう時間がないぞ！」
一分を過ぎれば自然な減速では止まりきれずぶつかる。通信越しにも美鶴の焦りは伝わり、真田だけでなく順平とゆかりの表情にも不安が宿り始めた。
しかし、そうは言われても七歌だって最善だと思う手を考え続けてはいた。ただ受け身ばかりではいてくれない敵の攻撃を防ぐために仲間に指示し、その間も自分は出来ることは無いかと頭を働かせる。
必要なのは炎。風と合わせても範囲が広がるだけで炎自体の威力の上昇はそれほどでもない。なら、どうやれば炎の力を上げることが出来るのか。
「考えろ、考えろ、使える手はあるはず、まだ、まだ私はこんなところで死ねないっ」
死ねない。まだ自分は百鬼一家の事故の真相を掴んでいない。その想いが頭を過ぎったとき、七歌は不思議な力の目覚めを感じ取った。
そう、全ての可能性は自分の中にあったのだ。
「順平、この一撃で仕留めるからありったけで撃って！」
「わかった！」
迎撃をゆかりと真田に任せて順平は退がってくると七歌の隣に並び集中力を高める。残り少ない力を全て絞り出すためには相応の時間が必要なのだ。
彼が力を溜めている間に七歌も自分の準備をする。目覚めた力を解放するよう、頭の中で愚者の仮面を外し、新たに魔術師の仮面を被る。
あと少しでタイムリミットなのは分かっているが、これで失敗すれば全て終わり。だから、せめて後悔だけはしないよう二人は目を見開いて敵を見た。
『ペルソナっ!!』
溜めた力に呼応するように二人の頭上で激しく水色の欠片が回転

する。先に形作られ具現化したのは召喚にも慣れた順平のヘルメスだ。
そして、ヘルメスと共に渦巻く欠片の中から現われた七歌のペルソナは、白いキトンを身につけた女性のペルソナではなく、肌にピッタリとした黒い衣装に身を包んだは獣人型のペルソナ、魔術師〝ネコマタ〟だった。
現われた二体は同時に炎を放つと二体分スキルが合体し、敵の吹雪を押しのけるだけでなく床や窓ガラスの氷を溶かし始めた。
車両内の全てを照らすほどの熱量には真田もゆかりも驚き退がるが、彼らの視線は変化した七歌のペルソナと初めて炎に飲まれた敵に注がれている。
「違うペルソナだと……」
「よく分かんないけど、行けるよ二人とも！」
全身を炎に焼かれている敵は苦しそうに藻掻いているが、相手は手で顔を覆って頭を振り乱しているだけで立ち上がって移動する素振りは見せない。
これで立ち上がって近接格闘を挑まれていれば大変だったが、動かないのであれば押し切らせて貰う。最後の一滴まで出し尽くすように二人は心を燃やしてスキルを放ち、
『ハァァァァァァッ!!』
もうこれ以上は無理だという段階まできて、敵もようやく限界を迎えたようで黒い靄になって消えていった。
敵の取り逃しはなく、大型シャドウの気配も完全に消滅した。そうして、今回の騒動の元凶である敵を倒した二人は、やりきった清々しい笑顔のまま座り込むと小さなガッツポーズを浮かべた。
「もう無理……今日はこれで限界だよ」
「よ、よっしゃ……なんとか、倒したぜ……」
「お前たち、よくやってくれた。後は列車が止まるのを待つだけだ。美鶴、時間は？」
敵を倒したなら後は自然に止まるのを待つだけ。座り込んだ二人に真田とゆかりが手を貸し、列車同士の距離を測っていた美鶴の返答

を待てば、少しして通信機から震えた声が返ってきた。
《ダメだ、間に合わない。お前たち、急いで後部車両に避難しろ！　その列車は一分後には前の列車に衝突する！》
敵は無事に倒せたが時間が掛かりすぎた。七歌がもっと早くにネコマタを出せていれば、いや、そもそも列車に乗ってなどいなければ、そんな風に色々と思うことはあるかもしれないが、何をどう考えたところで四人が列車に乗っていて衝突まで残り僅かなことは変わらない。
「ちょっ、どうにかして止められないんですか!?」
「ブレーキをかければまだ間に合うはずだ！」
ゆかりの言葉に真田が急いで止めるぞと動き出す。運転席は目の前、客室とを隔てる扉さえ開けば運転席には簡単に入れるのだ。
「クソッ、鍵が掛かっていて開かないっ」
だが、防犯のためもあって当然のように鍵は閉まっている。ここにいるメンバーにピッキングスキルを持つ者はおらず、正攻法では開けられない以上、何か別の方法で開けるしかなかった。
扉は順平と真田が揃ってタックルしてもビクともせず。本当にもう時間がないと焦る順平はいっそのことペルソナのスキルで扉をぶち壊してしまおうと提案する。
「真田さん、ペルソナでぶち破りましょう！」
「ダメ、威力を間違えたら機械を壊しかねない」
「じゃあどうすんだよ！」
それを七歌が冷静にダメだと却下し、ではどうするかと本当に最後尾の車両まで逃げることも視野に入れ始めたとき、運転席の窓から正面を見ていたゆかりがレール上に何かがあるのを見つけた。
「……なに？　人？」

＊＊＊

七歌たちが列車の中で騒いでいたとき、影時間の生温い風にコートを揺らし、黒いスモークのヘルメットを被った男はレール上にいた。
ここは真下が海になっていてモノレールの高架橋を渡ってくる以

外に来る方法はない。つまり、偶然通りがかったという訳ではなく、男は今日ここで起こる事件のために来たことは明白であった。
「……カストール」
彼の視線の先には迫ってくる列車が見えた。あと数十秒で到着するだろう。僅かに下り坂になっているため速度に乗っている状態では自然に止まることも殆ど期待出来ない。
乗っている者たちも列車の運転など出来るはずがないので、止めるにしろ減速させるにしろ外部から協力する必要があった。
男はコートから抜いた召喚器をヘルメット越しに頭に当て、そのまま引き金を引くと黒い騎馬に乗ったペルソナを呼び出して横に並ばせる。もっと別の方法もなくはないが、色々と考えた結果これが最善だと選んだ男はペルソナと共に列車の到着を待った。
＊＊＊
その光景は列車の中からも見えていた。列車が迫っているにもかかわらず、相手はレール上に立ってペルソナを呼び出し並んでいる。
ギリギリではあるが避けるだけの空間は空いているというのに、そこを利用して回避しようとせず、むしろ堂々と立っていることから相手の狙いは簡単に察する事が出来た。
「馬鹿なっ。無茶だ、やめろシンジ！」
「荒垣さんっ!?」
客席と運転席を隔てるガラスを強く殴りつけて真田が叫ぶ。もう距離はない。逃げるなら今しかないとゆかりも心配して叫んだが、その声が届くことはなく列車は男とペルソナに正面からぶつかった。
だが、彼らの心配を余所に男とペルソナは撥ね飛ばされも巻き込まれもせず、列車に押されて後退はしているがしっかりと耐えつつ立っていた。
「す、すげー……列車と相撲とって耐えてる……」
あまりの光景に順平も思わず乾いた笑いを漏らす。異能であるペルソナだけならば分かるが、一緒になって召喚者も列車のブレーキになろうとするなど正気の沙汰ではないのだから。
男とペルソナがブレーキとなったことで列車は徐々にではあるが

減速している。ただ、このままでは止まる前に男に限界が来てしまう可能性があった。
　自分たちを助けるために大切な幼馴染みが命懸けで止めようとしている以上、仮に機械が壊れる恐れがあろうと、もはや真田に手段を選んでいる余裕はない。
「九頭龍、悪いがドアをぶち破らせて貰うぞ！」
　腰の召喚器に手を伸ばすとそれを額にあて、先ほどこの案に反対していた少女に謝罪しつつ引き金を引こうとする。
　どれがブレーキかなど知るはずもない。だが、こういった乗り物には緊急停止用のスイッチやレバーがあるはずだった。扉が開けばそれを全員で探せば良い。だから、それまで保ってくれと願いつつ真田の指が動きかけたとき、
「ちょっ、ま、待ってください！　前、前に壁がっ」
　レールのさらに先を見ていたゆかりが今度は白い大きな壁を見つけて大きな声を上げた。
　壁は完全にレールを塞いでおりそれは奥まで続いているようですらある。どうやっても壁までに止まることは不可能で、列車を正面から押さえていた男もフロントガラスを伝って屋根の上まで上って行ってしまった事で、順平は手を顔の前に突きだして顔を背けながら恐怖のあまり叫んだ。
「ちょっ、やめて、まだ死にたくねぇよぉぉぉぉぉ!?」
「ダメ、ぶつかるっ!?」
　そして、列車は壁とぶつかり車体が小さく揺れた。ぶつかったにしてはあまり衝撃はなかったが、それでも急ブレーキが掛かったことで七歌たちが座り込んでいれば、いつの間にか列車は完全に停止していた。
「……と、止まった？」
「一体何がどうなってるんだ？」
　窓の外を見ても風景は後ろに流れていない。走行時の揺れも一切ないことから止まっている事は確実。
　壁とぶつかるときには死を覚悟していたが、列車がぶつかった衝撃

で潰れるということもなく自分たちの無事を確かめると、状況を把握しようと窓の外を見ていた七歌が先ほどまで壁だった白い物体が高架橋の上を覆い尽くしているのを見つけ、よく観察することでようやくそれの正体を理解した。
「あ、皆見て。さっきの壁の正体って雪だよ」
「なるほど、雪がクッションも兼ねたブレーキになって止まったと言う訳か」
「でも、こんな季節に雪なんてどこから……」
全員が壁だと思っていた物は高く積もった雪だった。フワフワのパウダースノーでも豪雪地帯のようにガッチリ固まった雪でもなく、絶妙な硬さと柔らかさを併せ持った良質の雪は、その重量でブレーキの役目を果たし、柔らかさによってクッションの役目を果たした。
おかげで列車は前の列車までそれなりの距離を開けて止まることが出来た訳だが、梅雨前のこの時期の東京に雪などあるはずもなく、一体誰がこんな物をとゆかりが思ったとき、離れた場所にある前方の列車の屋根の上から手を振る者の姿を発見した。
《ヒッホホー!》
『ヒーホー君っ!?』
一同が驚くのも無理はない。ヒーホーの普段の待機場所はタルタロスのエントランスで、彼に探知能力がないことは全員が確認している。
故に、ヒーホーが七歌たちの危機を察知することなど出来るはずもないのだが、列車の屋根から飛び降りて雪の上に着地した相手は、どういう訳だか仲間のピンチに気付いてしっかりと準備していてくれたようだ。
フロントガラスの外ではヒーホーに続いて七歌たちの列車の屋根に待避していた男も降りてきた。すると、ヒーホーが指を鳴らして雪を消していたので、両者が知り合いだと気付いた順平たちは連係プレーだったのかと思わず納得の息を漏らす。
「マジかよ、オレらのピンチを察知して助けに来てくれたのか」
「だとするとシンジは雪の準備が終わるまでの時間稼ぎだったという

訳か。どちらにせよ無茶をするやつだ」
焼け石に水としか思えなかった男の働きにも意味はあった。ヒーホーが雪の用意をする時間を稼ぎつつ、雪のクッションでも止まれるレベルまで減速させるのが目的だったに違いない。
助けてくれた事は感謝してもしきれないが、もっと自分の身の安全も考えてくれと真田が嘆息したとき、外にいたヒーホーが男の後に続いて前の列車の傍に停めてあったバイクのタンデムシートに座っていた。
《ヒーホー！》
バイバイ、そう言っているかのように手を振り、ヒーホーは七歌たちに別れを告げる。
てっきりこの後も一緒にタルタロスまで見送ることになると思っていたゆかりは、バイクに乗る男をジッと見つめてからヒーホーに視線を移して意外そうに口を開いた。
「あれ、帰っちゃうんだ」
「ありがとう、ヒーホー君！」
「マジでサンキューな！」
聞こえるかどうかは分からないが七歌たちが列車内から手を振れば、後ろ向きに座ったヒーホーも大きく手を振り返してきた。感謝の気持ちもちゃんと伝わったようで一先ず安心し、発進して遠ざかってゆく黒いＶＭＡＸを見送れば、ようやく列車の扉も開いたことで七歌たちは外に出た。
「はぁ……疲れた。二人がいなきゃ死んでたよ……」
《危険な目に遭わせてすまなかった。私にもっと力があればもっと速く正確に敵の情報を伝えられ、今回のように君たちを危険に晒すこともなかったはずなのに》
「それは俺たちにも当てはまる事だ。もっと力があれば敵をすぐに倒せていたんだからな」
落ち込んだ様子の美鶴に己の不甲斐なさに憤りを感じた様子の真田が返す。
敵はなんとか倒したものの、今日の出来事は自分たちの力不足を実

感する結果だった。
　タルタロスで戦えていたのもヒーホーの存在が大きく、彼が抜ければ様々な部分に改善の余地があることを一同は知った。
　自分たちが死ぬ直前だったことも大きくのしかかり、駅に向かいながら話すメンバーたちを暗い雰囲気が包みかけたとき、先頭を歩いていた順平が全員に振り返って笑顔を見せる。
「まぁ、何にしても無事だった訳ですし。強敵を倒した祝いに帰りにラーメンで食っていきましょうよ。オレっち今日はすっげー疲れてお腹ぺこぺこで」
「こんな時間に開いてるとこなんてあるのか？」
「巌戸台の駅近くにあるんすよ。すっげー古くて小さいッスけど、そこの塩ラーメンは飲み会の日のシメに最適だとか」
　今日の順平は剣にペルソナに大活躍だった。疲労から空腹を感じるのも無理はなく、普段ならばこんな時間に夜食を食べることに反対な女子たちからも反対意見は出ず、それなら自分も特に異存はないと真田も笑って快諾した。
「よく分からんが良いだろう。今日のＭＶＰはお前と九頭龍だからな」
　いつもなら七歌がＭＶＰを決めているが、今日のＭＶＰは間違いなく二人だろうと真田は断言する。道中の雑魚を散らす際には真田も活躍していたが、大本命を倒すには二人の力が不可欠だった。
　故に、真田の言葉には誰も異論を挟まなかったが、その事で聞くことがあったと思い出したゆかりが隣を歩く七歌に向き直って質問をぶつけた。
「あ、そういえば七歌のさっきのペルソナってなんなの？　他にもペルソナ持ってるとか聞いてないんだけど？」
「フフン、これが数多のペルソナを自在に使役するという私の眠れる才能〝ワイルド〟さ。まぁ、ずーっと忘れてたんだけどね」
　追い込まれた事で思い出して使うことが出来た訳だが、七歌はずっと用事がないからとベルベットルームに行っていなかった。行ったのは夢を通じて呼ばれたときのみで未だに鍵を使って自分で行った

ことはない。
そのせいでとある末弟は深く落ち込んでいるのだが、今日の事を切っ掛けに七歌は彼らの元を訪れるつもりでいる。
ようやく説明や仕事が出来るようになるため、今後は彼もしっかりと職務に励んでいく事だろう。
ただ、それはあくまで七歌の事情であり、話を聞いたゆかりにすればそんなすごい力を忘れていた事に驚きを隠せない。
「んー、使ってなかっただけで前から出来たってこと？」
「そうらしいよ。使えなかったのは自覚がなかったからだけど」
「なんじゃそりゃ……」
通信機の向こうで話を聞いていた美鶴も同じ感想を抱いたに違いない。ずっと半信半疑だったワイルドの覚醒者が仲間に現われた事は良いことだ。血の繋がりを考えれば運命を感じるが、知っていたなら話していて欲しかった。
自分の力不足を痛感した一日だったが、七歌がもっと早くにワイルドを使えていれば戦術の幅も広がって美鶴からも指示を送る事も出来た。それによって大型シャドウに辿り着くまでの時間も短縮出来たはずなので、今後はチーム全体のためにも七歌に力に関して何か忘れていないか美鶴はたまに尋ねることに決めた。
会話に参加せずにそうやって美鶴が色々考えていれば、ゆかりと同じように今日の出来事を振り返っていた順平が突然不思議そうに首を傾げ、さらに腕組みまでして全身で疑問を表現してくる。
「あれ？　そういや、桐条先輩のバイクって影時間でも動く特別製なんスよね？」
《ああ、そうだ。まぁ、今回のようにシャドウが制御を乗っ取れば他の機械も動くと判明したがな》
「いや、それもなんですけど。オレっちが言いたいのは、さっきヒーホー君を連れて帰った人もバイクに乗って行ったよなぁって」
『あ……』
そのとき、順平を除く全員の声が重なった。
確かに思い出してみれば男は大型バイクで器用に列車の横を抜け

て帰って行った。美鶴のバイクはラボで手を加えた特別製だが、同じような物が世間に出回っているはずがないので、では、相手がどこで特別製のバイクを手に入れたのかという疑問が湧く。
　その点については幼馴染みの真田も勿論答えを持っていなかったが、前に正月に会ったとき荒垣がバイクで来ていたため、彼が免許を取ったことを知っているぞと真面目に答えた。
「まぁ、前に免許を取ったとは聞いているから法的には問題ないな」
《そうじゃないだろう。ここで考えるべきは誰が荒垣のバイクに黄昏の羽根を積んだかだ。自分でやったとすれば羽根の入手経路も知る必要がある》
　彼も召喚器を持っていることから羽根を一枚所持していると言えるが、召喚器を使っていたことを考えれば、それとは別にバイクに搭載した羽根を持っていなければ説明がつかない。
　搭載すること自体はエンジンに組み込めばいいのでそう難しくもないが、大変貴重な羽根をどうやって手に入れたか美鶴が悩んでいれば、一枚を同時に使う方法もあるのではと七歌が口を開いた。
「んー、バイクに召喚器を挿し込んでるとかじゃないんですか？　そしたら一つの羽根でも行けますよ」
《ふむ、それは新しい発想だな。まぁなんにせよ本人に聞くまでは答えは分からないか。では、君たちはそのまま駅に向かってくれ。影時間が明けるまでにはちゃんと着けるはずだ。その後はグループの者に向かわせるので待っていてくれ》
「了解っす。あ、帰る前にラーメン食いに行くんで送るのはそこまでいいですからね」
《わかった。食べてくるのは構わないがあまり遅くならないようにな》
　武器を持って店に行くことは出来ない。加えて、今日の彼らは本当にボロボロで歩いて帰ることなど出来ないだろう。
　そう思った美鶴が送迎を向かわせると言えば、七歌たちは安堵の息を吐いて駅まで歩いて行き。装備を送迎の者たちに預けると真田の奢りでラーメンを食べてから寮へ帰った。

第二百五話　戦いを明けて

５月１１日（月）
朝――月光館学園
大型シャドウを倒した二日後、七歌たちは未だに疲れの残る身体を無理矢理に立たせ学校へとやって来ていた。
来週に中間テストがあると既に教師に言われており、今週の授業も範囲に含まれる教科もあるため気は抜けない。
ただ、あの日、七歌たちが乗っていた列車はあわや衝突という場所に放置されたまま影時間を明け、翌日の朝刊には重大なオーバーランとして取り上げられていた。
ニュース番組でも勤務状況におかしな点はなかったか、車両の整備不良ということは考えられないかなど、様々な角度から事故について語られていたが、心身共に疲れ切っていた七歌たちは日曜日の夕方まで眠っていたのであまりニュースを見られていない。
もっとも、美鶴だけは前衛ではなくバックアップだったため、ただ一人普段通りに起きて活動していたので朝からニュースを見て、大型シャドウとの戦闘について報告するためラボに行った際に詳しい話も聞いたようだが、どうやら運転手は給与カットなどペナルティを受けるのだとか。
その話を聞いたとき、彼は影時間になるまで普通に運転していたので、悪いのはコントロールを奪って動かしたシャドウだと七歌たちも抗議をいれたが、大きくなりすぎた事態を収束させるためにもその決定が覆ることはない。
けれど、母体グループである桐条グループにはちゃんと事情を知っている者がいるので、一時的に辛い境遇に置かれることにはなるが、その後のケアも含めてしっかりとフォローは入れるという。
それを聞いたことで七歌たちは一応納得することにしたが、筋肉痛の残る身体で一緒に登校してきた七歌とゆかりは露呈した自分たちの弱点も含めて今後の戦力について話していた。
「やっぱり個々のレベルアップが必要だよね。不利な相手には何も出

来ませんじゃ話にならないし」
「だね。ついでに言えば、美鶴さんのバックアップも限界を感じるから探知型の仲間が欲しいかな」
「あー、先輩って専門はむしろ戦闘なんだっけ」
七歌たちは階層が上がるごとに強くなるタルタロスのシャドウに対抗するため、作戦室で自分たちの戦力を確認する意味も込めてミーティングを何度か行っていた。
その際、美鶴本人の口からペンテシレアは本来戦闘型のペルソナであると聞かされ、バックアップに通信機などの補助機材が必要なのも、彼女のペルソナにとって探知能力はあくまで副次的にあるだけのオマケだからだという事だった。
話を聞いたことで七歌たちも慣れているはずの美鶴が、どうしてアナライズに時間が掛かることがあるのかという謎が解けたため、現在では彼女のバックアップはあくまで補助であり現場で感じ取ったものを優先することに決めている。
一ヶ月近く戦ってきたことで七歌たちも未熟ながら戦士としての勘が育ってきている。美鶴や真田もそれはちゃんと認めているので、指揮官である七歌の命令や作戦時の方針に背かないという範囲ではメンバーの独断行動も許されているのだ。
ただ、そうは言っても敵が強くなっているというのにバックアップがこのままでは厳しい。美鶴の能力は相手を読み取るのに時間が掛かるだけでなく、知覚出来る距離に限界があった。
本人が言うには既にいっぱいいっぱい。先日タルタロスを登った際に見つけた柵に覆われた階段より先に進めば、彼女の限界距離を超えて通信すらまともに出来なくなる可能性もあるという話だ。
その事を思い出したゆかりは、便利な力に目覚めた友人なら探知型のペルソナも出せるのではと考え、試しにそんなペルソナはいないのかと尋ねた。
「七歌のワイルドで探知型のペルソナは出せないの？」
「んー、今のところは無理かな。そもそも私にそういう系統の才能がなきゃ探知型のペルソナも目覚めないだろうし」

「どういう人が探知型に目覚めるんだろうね。先輩の他にもいれば特定の才能を伸ばせば適性ありって分かるけど」
ペルソナとは本人の心が具現化した分身である。故に、本人のパーソナリティが能力にも反映され、分かりやすいところでは熱血漢なところのある順平が火炎属性のペルソナに目覚めたなどが例として挙げられる。
ただし、ペルソナの持つ属性スキルが性格診断のようにある程度予測出来るのに対し、探知型の能力は特殊タイプに分類されるので、桐条グループでも美鶴以外に発見出来ていないため詳細が分からないのだとか。
もしも他にもいれば共通点から目覚めるために必要な才能や性格を割り出し、それを元に様々なペルソナを扱うことの出来る七歌も探知型のペルソナを手に入れる方法を模索する事も出来たが、現状分からないのならしょうがないと残念そうに溜息を吐いた後、ゆかりは気を取り直して隣を歩く友人に笑顔を向ける。
「でもまぁ、それぞれ一芸に秀でた状態だったから、七歌が万能型になってくれたのは心強いかな。その分負担をかけることになりそうだけど全員でフォローし合うのは変わらないし」
「いやぁ、便利ではあるけど万能じゃないんだけどね。一度に出せるのは一体だけって点は変わらないからさ」
「あ、そうなんだ。特訓で沢山出せるようにはならないのかな？」
「それはそういう才能がいるらしいよ。実際のところ、廃人になる可能性もあるからやらない方がいいみたい」
複数同時召喚は理論上は可能である。けれど、自分の精神の一側面をペルソナとして固定化し具現させるワイルドにおいて、複数の側面を同時に具現化するというのは側面同士が混ざり固定化出来ないことや、具現化させる段階になって並列思考のような状態になって心身に過負荷が掛かる恐れがある。
ただの不発という形で済めばいいが、過負荷によって回路がショートするような状態にでもなれば、ペルソナ能力を失うことや廃人になってしまう可能性があった。

七歌はそれをベルベットルームの住人から聞いていたため試すつもりはないが、複数同時召喚が出来れば一人軍隊になるとして大幅な戦力アップと考えていたゆかりは、予想外に危険な技であると理解し目を丸くして驚いている。
「廃人って危ないじゃんそれ。てか、誰にそんな話きいたの？」
「ん？　ああ、ベルベットルームってとこにいる人だよ。契約して訪れた人の手伝いしてるんだって」
聞かれた七歌は答えながら校門を通って学園の敷地に入る。
彼女は今日学校が終わればポロニアンモールに向かい、そこから前に見つけた青い扉を潜ってようやくベルベットルームを訪れる予定でいた。
ワイルドの力を自覚し、さらに手に入れたペルソナを切り替える方法も既に理解しているが、どうやれば能力を活かしていけるのかアドバイスを貰いに行くのが目的であるが、加えてペルソナの目覚め方も聞いておく必要がある。
先日は火炎の力が必要だと考えていたことで火炎スキルを持つネコマタに目覚めた。しかし、必要だと思ったらその力を持ったペルソナが目覚めるのであれば、バックアップが出来る探知型のペルソナがあればと考えている今それが目覚めないのはおかしい。
もしかすると、七歌の持っている才能と力を求める心が合わさったときに目覚めるのかも知れないが、そういった部分についても訊いておくためにも、七歌は絶対に放課後は別の予定を入れないぞと固く心に誓う。
一方、七歌が心の中でそんな事を考えている間、ゆかりは謎の組織であるベルベットルームについて思考し、結局情報が少な過ぎるとすぐにギブアップして相手をペルソナ研究機関と認識していいかを少女に尋ねる。
「それって桐条以外のペルソナ研究機関になるのかな？」
「別に研究はしてないと思うけど詳しい感じではあったね。というか、私以外にも契約してる客人がいるって言ってたし、ペルソナ使いや研究してる人って別に桐条以外にもいると思うよ」

言われてゆかりの頭を過ぎるのは、自分が特別課外活動部に誘われた日の美鶴との会話だ。
あの日、美鶴は桐条には自分も知らされていない暗部が存在すると言っていた。その中には孤児を集めて被験体とした〝人工ペルソナ使い〟とやらの研究も存在したらしい。
当時被験体だった子供らはほとんどが命を落としたが、一部は施設を脱走して消息も生死も不明となっているとも聞いている。
だとすれば、七歌が言っているように他にもペルソナ使いがいる可能性もあれば、桐条とは別ルートで影時間の存在を知って研究している機関があってもおかしくなかった。
先日のような大変な戦いが続くのであれば、ゆかりとしては他のペルソナ使いたちがいれば協力したいし、出来れば有益な情報交換なども出来ればと思っている。
ただ、相手が脱走した被験体だったとすれば、自分たちに酷いことをした相手だとして桐条グループとその関係者を憎んでいるかもしれない。
それでは協力以前の問題であるため、交渉が決裂したり敵対されるくらいなら、現状維持のために遭遇すらしない方が良いのではと思ったとき、生徒玄関に向かっていたゆかりたちの耳に近付いてくる甲高いバイクの音が届いた。
「おっ、バイク通学とはシャレオツですな。私もそろそろ実家から送って貰おうかなぁ」
「なに言ってんの。あれずっと来てなかった有里君だよ？」
暢気に自分も愛車を取り寄せてバイク通学しようかなと話す七歌に、ゆかりは我が校でバイク通学を認められているのは一人だけだとライダーの正体を教える。
それを聞いた七歌は驚いた顔をしているが、彼女も湊がバイクで来ていることは知っていたはずなので、戦闘の疲れからまだ本調子ではない事が窺えた。
とはいえ、いくら体調が万全でなくともテスト前だけあって今日を乗り切るしかない。テスト勉強は週末に集中して行うことにし、今日

と明日は授業だけは聞き逃さぬようにして寮に帰ったらすぐ寝るに限る。
テストが終わるまでは大型シャドウが現れでもしない限り美鶴も活動は休みだと言っていたため、とりあえず今日を頑張ろうと生徒玄関に入りかけたとき、ゆかりが何かを思い出したように顔を上げて口を開いた。
「あ、ゴメン。私ちょっと用事を思い出したから先に教室行っといて」
「んあ？　別にいいけどトイレくらい普通に行けば良いのに。小学生じゃあるまいし、別にゆかりの入った個室から爆音が轟こうがからかったりしないって」
「本気で違うっつの！」
乙女の尊厳に懸けてそのような事象は過去にも未来にも起こり得ない。本気で違うからと怒り気味にゆかりは言って、七歌が生徒玄関に入っていくと自分は来た道を戻っていった。
彼女がどういった用事を思い出したのかは気になるが、残念なことに今の七歌はベッドに全力ダイブしたいくらいに疲れている。
故に、放課後にはベルベットルームを訪れる予定も控えているため、七歌は靴を履き替えると購買によって栄養ドリンクを買い。それをグイッと飲み干してから自分の教室へと上がっていった。
＊＊＊
以前の自分に戻るためモナドに籠もって武者修行をしていた湊は、昔の感覚を取り戻し、満月に現われるアルカナシャドウも倒したことで一区切りついたとして、数週間ぶりに学校へやって来た。
彼のバイクは職員らと同じ駐車場に止めることになっているので、指定席となっている駐車スペースにバイクを停めて降りると、バイク側面のホルダーにヘルメットのベルトの金属部を通して鍵を閉める。
別にハンドルにかけておいたりシートの上に置いていたとしても盗まれないとは思うが、風が吹いて落下した際に中の衝撃吸収材が割れてしまうかもしれないので、そうならないようホルダーにちゃんと通しておくのである。
そうして、ハンドルロックもちゃんとかけてバイクから離れようと

したとき、校舎に近い駐車場の隅に一人の少女が立っているのが見えた。
車が入ってくるので注意は必要ではあるものの、別に生徒は立ち入り禁止ということはないが、用事もないのに訪れて楽しい場所でもない。
何より、相手は真っ直ぐ湊のことを見ているので、自分に用があるのだろうと推測した湊は、バイクの鍵を上着のポケットに仕舞い込みながら待っていた少女の前に立った。
「……何か用か？」
「はぁ……久しぶりに会ったのに随分な言い方だね君は」
ずっと心配していたというのに、久しぶりに会った第一声があまりに素っ気なかったことでゆかりは微妙な表情を浮かべる。
彼の瞳は今も感情のこもらない冷たい色のままだ。何かあったのだろうが、それについての説明も何もない状態で湊はただ突き放すように言葉を返してくる。
「用がないなら自分の教室に行け」
「それを話す前に君が色々言ってきたんでしょ。はぁ、その……あのさ、放課後に少しだけ時間貰えない？」
「理由によるな。俺も暇じゃない」
「えっと、ここでは言えないっていうか。周りに聞かれたらマズいと思うから」
そう時間は取らせない。少しだけ誰にも聞かれない場所で話をしたいだけだ。
とある理由からゆかりはそう言ったのだが、湊にすれば相手が気まずそうに口ごもっているだけで要領を得ず。単純に顔を貸してくれと言われているようなものなので、プライベートの忙しさから一切悩まず拒否の言葉を吐く。
「それで素直について行く人間がいたら余程のお人好しだな」
「わ、分かってるよ。でも、言えないじゃん。影時間の話だし……」
ゆかりが彼と話そうと思っていたのは影時間に関わる内容であった。一般人がそれを知るはずもないが、湊は以前に七歌とゆかりから

その話を聞いている。
ただし、そのときの彼はゆかりらの話を思春期特有の妄想だと思っていたはずだが、ゆかりは湊側の事情など欠片も気にした様子もなく顔を上げると口を開いた。
「一昨日はありがとう。助けてくれて」
「……何の話をしてるんだ？」
「モノレールの話。ペルソナと一緒に列車を遅らせてくれたでしょ」
何について礼を言っているのか分からないという湊に対し、ゆかりはちゃんと分かっているといった風にハキハキ答える。
一昨日の戦いでは敵を倒してもまだ危険が残っていた。むしろ、敵だった大型シャドウより止まらない列車の方が命の危険を感じたくらいである。
列車の止め方など知る者は一人もおらず、運転席に入ろうにも扉に鍵が掛かっていて、下手にぶち破ろうとすれば機械まで壊しかねないと二の足を踏んでいた。
おかげでただでさえ過ぎてしまっていたタイムリミットを余計にオーバーし、必死に助かる方法を探りながらも心の中では諦めだしていたとき、ゆかりたちの見ている前でペルソナと共に列車を止めようと正面から受け止めた者がいた。
あのとき、ゆかりも真田たちが言っていた事で相手を荒垣だと思っていたのだが、彼女はとある理由で相手が荒垣ではなく湊だと思ったらしく、何を言っているのか分からないといった態度を取っている青年に呆れ顔で気付いた理由を告げる。
「あのね、元カノ舐めないでくれる？　君のことずっと見てたんだから、バイクに乗るときとかちょっとした仕草の積み重ねで気付くっての」
そう、ゆかりが相手を湊だと思ったのは、ヘルメットで顔を隠した相手が帰る直前にバイクに乗る際、バイクを跨いでハンドルを握るまでの仕草が湊とソックリだったからだ。
乗り方など誰でも同じだと思う者もいるだろう。しかし、スタンドを上げてから倒さぬよう気をつけて跨ぐ者、跨いでからスタンドを上

げて発進する者など、それぞれに慣れたやり方というものがあって、ずっと彼のことを見てきた少女は少ない情報から男の正体に辿り着いたという訳であった。
少女自身の愛の重さの成せる技か、彼の傍にいた少女たちならば当たり前に気付くことが可能なのか、それは本人たちにすら分からないけれど、仮に湊に対して限定であろうと相手が優れた洞察力を持っている事を知った青年は、表情を一切変えないまま気付かれたことに対して一言だけ返す。
「……なるほど、次からはちゃんと先輩の動きをトレースすることにしよう」
「意外とあっさり認めるんだ？」
「否定してもお前の中では確定事項のようだからな」
仮にここで湊が違うと言い張ってもゆかりは信じないだろう。別に気付いたことを他の者に話したりもしないだろうが、認めるまで付き纏われる事を思えばここで肯定しておいた方が楽に済むのは確実だ。
そういった判断から湊はすぐに認めた訳だが、相手があまりにあっさりと認めた事で少し拍子抜けしたゆかりは、肩にかけていた鞄の中を漁って栄養補助食品のココアクッキーを取り出し、箱ごと彼に差し出して最初に言っていた事をもう一度伝えた。
「まぁ、そういう事だから放課後ちょっとでいいから時間ちょうだい」
助けてくれたお礼だけでなく、彼がどれくらい影時間に関わることを知っているのかが聞きたい。
以前、チドリが言っていたことが影時間やペルソナの研究であったなら、もしかすると湊も寿命を縮める劇薬を飲んでいたかもしれないのだ。
彼の身を心配する少女としてはなんとしてでも聞き出し、裏の仕事で右眼や右腕を失ったことも含めて、彼がどのような過去を生きてきたのかを理解したかった。
またそれだけでなく、ゆかりは影時間の活動を通じて、美鶴が自分たちの身を本気で心配しつつもまだ話していない事があると気付い

ていた。
話せないのか、それとも話したくないのか。機密というものがあるので本当に全てを明かすことは難しいのかも知れないが、もし、それが自分や桐条グループを守るためであったならゆかりにも考えがあった。
シャドウとの戦いは命懸けだ。七歌も言っていたがお互いの信頼関係が第一である。それを利己的な理由で反故するのであれば、ゆかりだって裏で勝手に動き回らせてもらう。
彼女は十年前の事故の真相究明のために桐条に近付き、恐ろしい敵がいるのなら愛する人や友人を守ろうと思って戦いに参加することにした。
世界や人々のためとよく口にする美鶴ほど使命に燃えていたりはしないし、顔も知らない人のために命を懸けて頑張るほどの情熱も持っていない。
彼女にとっての世界とは親しい者のいる極狭い範囲であり、彼女が情熱をかけられるのは同じくその世界の枠の中にいる者のためであった。
ゆかりが差し出したココアクッキーをジッと見つめる彼との会話は、今後の活動を続けるために非常に有益になるはず。そう思って返事を待っていれば、少し経ってから青年はココアクッキーを受け取り、箱から出した袋を開けて中身を食べつつ静かに答えた。
「……周囲に聞かれる心配がない場所だったな。以前、チドリが話をするため連れて行った喫茶店は覚えているか？」
「うん。駅裏の奥まったとこにあるお店だよね？」
「ああ、そこで合ってる。別々に行った方が見つからないだろうから放課後そこへ来てくれ」
言われた場所への行き方をゆかりはちゃんと覚えていた。行ったのはチドリと一緒だった一度きりだが、紅茶もお菓子も美味しかったので雰囲気の良さもあって強く印象に残っている。
どうせなら彼のバイクに乗せて貰いたかったけれど、高校から月光館学園に通い始めた者の中には湊と総合芸術部の者たちが親しいこ

とに嫉妬している者もいるため、余計な火種を作らないために別々に目的地に向かうのは理解出来た。
そして、彼から話をするための時間を作って貰う約束を交わすと、ゆかりは彼と一緒に校舎へと向かい。放課後のことを楽しみにしながら靴を履き替えて自分の教室に行った。

放課後――ベルベットルーム
朝にゆかりと会う約束を交わした湊は、喫茶店フェルメールに向かう前に鍵を使ってベルベットルームを訪れていた。
椅子に座る彼の正面には長鼻の老人とその後ろに三人の従者の姿が見える。
別に雑談をしにここを訪れた訳ではない青年は、早速本題に入ろうと足を組み替えると姉弟の末弟であるテオドアに話しかけた。
「……そちらの業務が滞らないよう契約者を助けておいたぞ」
「はい、確認しております。この度はお手を煩わせてしまい申し訳ありませんでした」
四月の頭に七歌の担当となったテオドアだったが、相手がワイルドの力の扱い方を知らなかったことでベルベットルームにも訪れず、依頼を通じて彼女の成長を促そうとも計画段階からまったく進んでいなかった。
そんな状態で今回の満月戦に突入したため、せっかく担当になったにも関わらず相手が死ぬかと思ったが、テオドアの方からもベルベットルームに来ていない相手を少しフォローしてあげて欲しいと湊に依頼したことで、無事生還を果たしたのを確認したテオドアもホッと胸をなで下ろしていた。
そして、テオドアからお礼の言葉を受け取った青年は、今日は約束があるから急いでくれと達成報酬の受け渡しを急かす。
「そういったのはいい。報酬分の働きをしただけだ。それより、今日はこの後に予定があるから報酬をくれ」
「それはどうもすみません。では、早速今回の報酬をお渡しします」
丁寧な仕草で頭を下げた彼は、すぐに姿勢を正すと持っていた本の

あるページを開き、そこに描かれていた魔法陣に指を這わせて中身を取り出した。
輝く魔法陣の中から白い光に包まれてテーブルの上に現われたのは、随分と古臭く錆び付いた見た目の西洋甲冑の兜であった。
フルプレートタイプではなく前面部が開いた簡単は造りではあるが、防具を必要としない湊にこんな物を渡しても意味がない事は相手も知っているはず。
ならば、これは以前彼がくれたある品と似たものかと湊が考えていれば、正しく予想していた物であるとテオドアから説明が入る。
「これは昔八雲様にお渡しした無の鎧のアナザータイプになります。正しくはこれも無の鎧なのですが、便宜上区別するため無の兜と呼んでおります。こちらも八雲様の力に反応して形状が変化するので普段は別の形でお持ちください」
言われて湊が兜に触れればすぐに光に包まれて変化が始まった。靴になっている無の鎧と違って頭部を守る物では日常的に身につけられる物も限られているが、光が治まると兜は銀色のイヤーカフになっていたため変化にはそれなりの幅があるようだ。
試しに手にとってメガネにしてみたり、オペラ座の怪人のマスクにしてみたり、色々と変化させてみたところ、どうやら頭や顔だけでなく耳につける物も対象内である事が分かった。
無の鎧は無の武器と違ってペルソナと合体させた際に特殊な効果を持つアイテムになり易いため、今回のこれもきっと役に立つことだろう。
普段は最初に変化したイヤーカフとして身に着けておくことにした青年は、手に取って左耳に着けると報酬をくれた人物に礼を言う。
「感謝する」
「いえ、また無の鎧が手に入った際には報酬に回しますので、そのときは是非お受けください。本日はどうもありがとうございました」
報酬を受け取った湊は相手の言葉に頷くと席を立って扉に向かう。今日は七歌もここを訪れるはずなので、鉢合わせしないよう急いで出て行くと、現実世界に戻った彼はゆかりが来る前に到着しておくべく

フェルメールへ向かった。

第二百六話　質問事項

放課後――ベルベットルーム

「ようこそベルベットルームへ、随分と久方ぶりですな」

「まぁ、用がなかったので！」

学校帰りにポロニアンモールを訪れて狭い路地の奥にある扉を潜った七歌は、以前夢で来たことのあるベルベットルームにやってくるなり笑顔で挨拶して席に着く。

ここまではっきりと用事がなかったと言われてしまうといっそ気持ちが良い。担当者であるテオドアだけはようやく客が来てくれたため安堵の息を吐いているが、他の者が素直すぎる七歌の様子に小さく笑っていると、イゴールも正面に座った少女の反応に笑みを漏らしてやって来た理由を尋ねた。

「フフッ、では本日は用があってここを訪れたという事ですかな？」

「新しいペルソナに目覚めたんですけど、これってもっと増やしたり出来るんですか？」

七歌に目覚めた新たなペルソナは魔術師〝ネコマタ〟。愚者〝エウリュディケ〟の存在も自分の中に感じるので、ペルソナが変化したのではなく単純に増えただけのようだ。

力を使うには自分の中でスイッチを切り替えればいいだけ。七歌は心の中で呼び出す存在を意識し、白い仮面を付け替えるというイメージでペルソナを変えているが、それはあくまで彼女のやり方だ。

もし他にワイルドの力を持った者がいれば、そちらはそちらで自分なりのイメージを持ってペルソナを切り替えるに違いない。

けれども、ペルソナは召喚しなければ自分の心の中にのみ存在するため、誰であろうと呼び出すときには宿る存在に意識を向ける必要がある事は確かだ。

方法は違えど手順は同じ。そう考えながら七歌が今後ペルソナを増やしていく方法について聞けば、イゴールは少女の前に力を求めてこの部屋にやってきた客人のことを思い出しながら、当時彼にしたものよりも詳しい説明を口にする。

「ワイルドに目覚めたのであれば、お客人にも可能性の芽が見えるようになったはず。シャドウとの戦いの後、カードが見えたときには空想の中でカードを引いてみてください。ソードならば武器、コインなら金銭、カップならば生命力、ワンドならば経験といった風に対応したものを得られます。そして、その際にペルソナを引けばペルソナを得られると言う訳です」

ワイルドであれば新たなペルソナを手に入れるのは存外簡単だ。契約者となっていることが前提条件ではあるが、シャドウと戦ってから頭の中に浮かぶカードの中からペルソナに対応している一枚を引けばいいだけ。

その際、他のカードに手を伸ばせば別の効果を発揮してくれるが、七歌は当面の間は戦力増強を目標に掲げているので、可能性の芽と遭遇すればペルソナ優先でカードを引くことだろう。

ただ、可能性の芽という方法以外にもペルソナを手に入れる事は出来るはず。何故なら七歌は自力でネコマタを目覚めさせたのだから。

「なるほどなるほど。で、他にも自分で目覚めたりもあるって訳ですね？」

「ええ、ペルソナはお客人の心が形を成したもの。貴女の心に変化や成長があれば、それは当然ペルソナにも現われます」

可能性の芽はあくまで外的要因である。外の変化に対して対応するだけであり、それ以外に内的要因として己の精神の変化によって目覚める事もあるのだ

前回の七歌は追い詰められたことでネコマタに目覚めたが、今後ペルソナを手に入れるようになれば手に入れたペルソナ同士を融合させるペルソナ合体も必要になる。

今はエウリュディケも含めて二体しかいないのでやらないが、近いうちにそういった事も行なうようになるため、指を組み直したイゴールの後ろに立っていたテオドアが会話に参加し口を開いた。

「そして、そこからが私の仕事となります。私は七歌様のペルソナ同士を合体させ新たなペルソナを生み出す事や、七歌様が手に入れたペルソナを記録し、それを再度呼び出す事が出来るのです」

「ほう、合体とな」
合体に関しては主にイゴールが担当し、またイゴールにしか出来ない高度な合体もあるけれど、簡単なものならばテオドアにも可能だった。
さらに記録したペルソナを記録した状態のまま呼び出す事が出来るので、金銭的な余裕がありさえすれば素材に使って呼び出し直すということも出来る。
合体して生み出されたペルソナは基本的に素材となったペルソナよりも高レベルになるため、スキルや耐性にもよるが利用して損はない。話を聞いて理解した七歌も興味深そうに何度も頷き、今後は積極的に利用しようと考えたところで、今朝ゆかりと話していた事を思い出したのでそれもこのタイミングで聞いておくことにした。
「あ、そうそう。探知型のペルソナって私も目覚めるかな？」
「七歌様は随分と強さをお求めの様子。そういった方は戦うペルソナに目覚めやすいので可能性がゼロとは言いませんが難しいかと」
「むぅ、己のストイックさが裏目に出たかぁ。ま、そういう事ならしょうがないね。じゃあ、また新しいペルソナをゲットしたら来るからよろしくね！　バイバーイ！」
話が終われば即退散。疲れているからしょうがないのかもしれないが、出て行く背中を見送りながら随分と忙しい人だと姉妹は笑い、とりあえずでも説明を済ますことが出来た末弟は安心した表情をしていた。

――喫茶店〝フェルメール〟
放課後、運悪く掃除当番に当たっていたゆかりは掃除を終えると急ぎ足で学校を出て、途中少し迷いそうになりながらもどうにか目的の店を見つけることが出来た。
人通りの少ない少々寂れた雰囲気の隠れ場的な店だが、裏の仕事に関わっていることもあって簡単には辿り着けないようになっているのかもしれない。
そんな事を考えながらゆかりが店の扉を開ければ、カウンターでグ

ラスを磨いていた店主の五代が笑顔で少女を迎えてくれた。
「やあ、いらっしゃい」
「どうも、有里君って来てますか？」
「ああ、彼なら奥にいるよ」
前に座ったカウンター席ではなく、目的の青年は奥のテーブル席で書類を眺めながらコーヒーを飲んで待っていた。
今日のお客は彼だけのようで、前のドレス姿の女性もいつもいる訳ではないのだなと思いつつ席に向かい、そのまま彼の正面の椅子に荷物を置くと座ったばかりのゆかりに湊がメニューを渡してきた。
「……先に飲み物とかを注文しろ。食べながら話した方が気も楽だろ」
「うん。えっと、ホットのアップルティーとミルクレープで」
メニューを受け取る際、彼の方を見ると左耳に見覚えのないイヤーカフが増えている事に気付く。
以前から持っていたのか、それとも待ち合わせ場所に来るまでに手に入れたのか、それは本人に訊かない限り分からないだろうが、注文を終えてアクセサリーの増えた彼をジッと見ていれば、湊は英語で書かれた書類に視線を落としたまま口を開いて来る。
「それで？　答えられる事ばかりじゃないが何が聞きたいんだ？」
どう切り出そうかと考えていた事もあって、ゆかりは相手の方から単刀直入に話題に入ったことに僅かに感謝する。
相手が色々と事情を抱えている事は知っている。最近では彼が七歌の生き別れの従弟である可能性まで浮上していて、古くからの知り合いらしい美鶴もそれを否定しなかったために信憑性は高いが、だとすると七歌の言っていた〝八雲君〟と名前が異なっている疑問も新たに浮かんでくるので、ゆかりは何から聞くべきか迷ってしまう。
彼の素性、これまでの人生、どうして関わるようになったのか、今も関わっているのか、訊きたいことが多過ぎて悩んでいる間に五代が飲み物とケーキを持ってきて、その際、「一つ一つ訊いた方がいいよ」と笑顔でちょっとしたアドバイスをくれた。
考えすぎて訳が分からなくなっていたゆかりにとって、五代からの

アドバイスは思考を一度リセットするに大変効果があった。
確かに考えるも何もゆかりは湊のことを何も知らないのだ。裏の仕事に関わるようになった経緯も、本当にペルソナ使いであるかも詳しいことは何も知らない。
ここを話し合う場所として選んだ湊や、アドバイスをくれた五代の様子から察するに、ここではペルソナについて話も問題ないと思われる。どうみても影時間に関係なさそうな人物ではあるが、五代も湊やチドリとは古くからの知り合いらしいので話だけは聞いているのかもしれない。
そう考えたゆかりはテーブルの上に置かれたカップを手に取ると、アップルティーの香りで心を落ち着かせながら味も楽しみ、ふぅっと一息吐いてから最初の質問を口にした。
「えと、有里君もペルソナ使い……でいいんだよね？」
そう、まず初めにするべき質問はこれだ。相手が黒い騎兵のようなペルソナを召喚していたのは見たが、世の中にはヒーホーのように野良ペルソナという存在もいる。
あの黒いペルソナがそうだとは思えないが、話の切り口としては悪くないと思っていたところ、湊は書類に視線を落としまま頭上に一瞬だけカストールを呼び出した。
店はそれほど広くないので完全に呼び出していたら大変だったが、上半身が現われかけたところで消していたので、五代も驚きはしたものの苦笑で済ましている。
具現化しかけたペルソナを見てもその程度の反応と言うことは、やはり五代もペルソナの存在を知っていたという事になるが、連れが迷惑をかけてすみませんとゆかりが頭を下げたところで先ほどの質問に対し青年が言葉を返してくる。
「これで納得したか？」
「いまどうやって出したの？　召喚器は？」
青年がペルソナ使いだと言うことは理解出来た。けれど、その召喚方法にゆかりは戸惑いを隠せない。
先ほど彼は書類に目を通していただけで他には何もしていなかっ

た。そう、召喚器で頭を打ち抜くという一連の動作を行っていないのだ。
一応、なくても召喚は出来るがかなりの集中力が必要で安定召喚は出来ないと聞いてはいたが、召喚には召喚器が必要という固定概念を持っていたゆかりにすれば驚きでしかなく、本当に召喚器が必要ないのか確認を取れば湊は顔を上げてコーヒーに口をつけてから答えた。
「あんな玩具なくたって召喚は可能だ。そも、あれは他の被験体のために開発しただけだからな。元々俺には必要ない」
「開発したって君が？　桐条グループの研究所にいたのってやっぱりペルソナ関係だったの？」
召喚器は必要ないという彼の手の上に一枚のカードが現われる。初めてみたゆかりはこれがペルソナの力の宿る核なのだろうかと不思議に思うが、召喚器を開発したのが彼ならば桐条グループでペルソナの研究に関わっていたのは確実だ。
だとすれば、彼もチドリと同じように制御剤を飲んでいた可能性があるため、以前象徴化していたことについても合わせて尋ねることにする。
「ねぇ、四月の下旬くらいに駅前で会ったの覚えてる？」
「お前らがタルタロスを見に来たときのことか？」
「そう。けど、君あのとき象徴化してたよね？　もしかして適性が安定してないの？」
適性が安定しないこととペルソナの制御が上手くいかないことは同義ではない。そも、ペルソナは一定以上の適性を持っていなければ目覚めないのだ。
ペルソナとはシャドウたちのいる心の世界での自分である。自己の存在を確立することでペルソナまで存在の濃度は増すが、一時的に現実世界と繋がるだけの影時間ではなく、本当の心の世界ならば他の者たちもシャドウという形で存在はしていた。
ペルソナを得た者たちはそういった心の世界の自分すら自分自身に宿る場所を変えるが、代わりに現実での肉体に心の世界でも存在出来る力が付与される。

そのため、ペルソナを得た者は力を完全に失うでもしない限りは適性を持ち続け、仮にその力が不安定だったとしても日によっては象徴化してしまうなどという事は起こり得なかった。
ただ、何も知らない少女にそれを説明するのは面倒なため、湊は玉藻前の力を引き出して象徴化してみせると、すぐにそれを解除して人の姿に戻って改めて先日の真相を語った。
「こうやって象徴化したように偽装しただけだ。別にバレようと気にしないが知られない方が楽ではあるからな」
「それもペルソナの力なの？　なんかペルソナって思ってたより便利って言うか戦う以外にも色々と出来るんだね」
ゆかりの中でペルソナは戦うことと通信及び探知することしか出来ないイメージがあった。
勿論、彼女のそのイメージは間違っていないし、ほとんどのペルソナは戦う力を持っていて一部の探知型と呼ばれるペルソナには存在の探知等の力を有している。
けれど、似たような超常の存在であるシャドウは先日モノレールを操って見せた。同じ事がペルソナにも出来るかは不明であるが、湊の持っているペルソナは姿の偽装という初めて見るタイプの能力を持っていたことで、ゆかりとしてはペルソナやシャドウの力は自分の想像よりも幅広いと思い知った。
普通ならばこれで途方もない存在に関わったと脱力するところだが、幸か不幸か少女の前にはそれらに詳しい人物が丁度いる。
よって、今日は彼が色々と教えてくれるようなので、ゆかりもお言葉に甘えてミルクレープを一口食べながら彼に尋ねた。
「有里君ってペルソナとか影時間についてどこまで知ってるの？」
「……質問内容が曖昧すぎる。もう少し具体的に言ってくれ」
湊も無条件に何でも教えてくれる訳ではない。訊かれれば答えられる範囲で答えてくれるものの、それはゆかりがちゃんと具体的に質問をすればの話だ。
勉強で考えれば分かりやすいが、全部分からないから教えてと言う甘えた馬鹿には教えたくなくなり、こことここが分からないと自分で

出来るところはやろうとする者になら教えてやる気になるという話である。
　それに気付いたゆかりは自分の中で優先順位を決め、七歌や美鶴でも詳しく分かっていなさそうな事柄に対しての質問を中心に尋ねてゆく。
「んー、じゃあワイルドって知ってる？」
「一人につき一体というペルソナの原則に縛られない能力だな。ペルソナには愚者から世界及び宇宙まで二十四種のアルカナが存在するが、ワイルドなら死神以降のアルカナも扱えるようになる」
「く、詳しい……。てか、そんなに沢山のアルカナなんて知らないけど、どうして死神以降はワイルドじゃなきゃ扱えないの？」
　ペルソナやシャドウがアルカナというものでグループ分けされていることは知っていたけれど、その分類が本当にタロットと同じ数だけ存在するとはゆかりも思っていなかった。
　青年の言葉を聞いて思わず怯みかけるも、しかし、すぐに気を取り直して紅茶に口をつけつつ、通常のペルソナ使いとの大きな違いである死神以降のアルカナが扱える理由について訊いた。
　すると、青年は五代にコーヒーのおかわりを注文して、先ほどから見ていた書類の一部にボールペンでチェックを入れながら再度答える。
「アルカナは人の成長過程や人生を表わしていると言われている。そして、死神は文字通りに〝死〟だ。人は死を超えられない。だから普通の人間は生者のアルカナである刑死者までしか目覚めないんだ」
　聞いてなるほどと思うと同時に新たな疑問も湧いてくる。アルカナに意味があるのは知っていたが、それほど占いに凝っている訳でもないゆかりは個別の意味までは把握していなかった。
　その点に関しては寮に帰ってからでも調べるとして、今は完全にアルカナの制約を無視出来るワイルドの特異性というか異常とも言える部分が気になる。
　人は死を超えられない。これは当然のことであり人以外の生物としても当たり前の事だ。

臨死体験をしたという者も希に聞くが、ほとんどは意識不明の状態や心臓が一度止まっただけで、完全に心臓や脳の活動が止まってから数日後に復活した者の話など神話の中にしか存在しない。
だというのに、ワイルドはその概念の象徴たる死神以降のアルカナですら扱えるというのだから、生物的な死を超えてしまえる存在なのだろうかとゆかりが考えてもおかしくなかった。
しかし、今はそんな哲学的な要素も混じった話をして話題を広げている時間は無い。ただでさえ多忙で中々捕まってくれない彼を個人的な理由で拘束しているのだから、ゆかりは甘えてしまってはダメだと自制して改めて聞きたいことに話題を戻す。
「じゃあ、ワイルドの話に戻るけど複数体呼び出すと廃人化する危険があるっていうのは？」
「事実ではある。自己認識や自身の定義付けが甘いと、中途半端に繋がって自我が戻ってこれなくなる場合もあるんだ。それに加えて消費エネルギーも増加し、さらにどちらも自分であるため二体のペルソナを動かすときには右手と左足で別々の字を書くくらいの器用さがいる」
「えと、右手と左手じゃなくて？」
「ああ、別に左手と右足でもいいが、左右の手で別々の字を書く以上の難しさがある。手で言うなら五本の指で別々の文字を書くイメージでもいい」
左右の手で別々の文字を書くことなど意外と簡単だ。文字の綺麗さを別にすれば一週間も練習すれば余程のポンコツでもない限り単語くらい書けるようになる。
ここにいる青年は幼少期から両利きであったため当然にようにそれが可能であったが、一度もやった事のないゆかりにすれば難度の非常に高い技であり、想像するだけでそれ以上だと分かる足と手で文字を書くなど不可能に思えた。
ただ、五本の指で別々の文字を書くイメージでもいいと彼が口にしたとき、その口調からもしかいして彼なら出来るのではという考えが一瞬過ぎったが、ゆかりはそれを言葉に出さぬまま様々な事象に詳し

い彼に情報の出所を聞いた。
「どうしてそんなに色々知ってるの？　チドリとかも知ってる感じ？」
「自分の力、敵の正体、それらをろくに調べもせずに戦う方が不思議だと思うが？」
聞かれ彼はゆかりを一瞥し、さも当然とばかりに言葉を返すとすぐ書類に視線を戻す。
この質問をすれば彼の背景を少しは理解出来ると思っていたゆかりは、返ってきた言葉に思わず撃沈して肩を落とした。
そう、彼にすれば知っていて当然、むしろどうして分かるまで調べないのかそちらの方が不思議なのだ。
裏の世界で生きてきたからか知らないが、彼は情報が命よりも大切になる場面もあるという考えで。情報を制すれば圧倒的不利を覆すことも可能なので、現状、実力が不足しているゆかりたちにすれば彼の在り方は見習うべきであった。
もっとも、ゆかりは今まさに勉強している最中なので、ならここで聞いて知っていけば良いよねと気を取り直し、一口大に切ったケーキを口に運んで新たな質問を投げた。
「あ、ねぇねぇ、どうして真田先輩たちは有里君のペルソナを見て荒垣さんだと思ってるの？　もしかして同じペルソナとか？」
「ああ、その認識で合ってる。ペルソナは本来自分の分身であり固有の能力だ。だからこそ、普通同じペルソナを持っているとは思わない」
ゆかりは真田たちが相手を荒垣と言っていた事で最初は荒垣だと認識していただけで、細かな仕草を観察していれば湊であると気付けた。
ならば、普通、一緒に戦ってきた者なら顔が見えなくても別人であると気付くはずだが、同一のペルソナを所持しているのであればその限りではない。
ペルソナは固有の能力、持ち主によって姿や能力が異なり、例え兄弟や親子でも同じペルソナなどいないというのが桐条側での常識だ。

それ故、長くペルソナ関連の事柄に関わり、完全にそう思ってしまっている者ほど引っかかりやすい心理トラップだったという訳だ。
今後はさらに荒垣の動きもトレースするらしいので、実際に近付いたりしない限りバレることはそうそうないだろう。彼の平穏を願っていた少女としては関わっている時点で色々と複雑だが、しかし、既にどっぷりなら突っ込んで聞くことも出来るとして彼の強さについて聞いてみた。
「有里君って強いんだよね？　適性値だっけ、あれで言ったら私たちとどれくらい差があるの？」
「……適性値は保有するエネルギー量としての見方なら正しい。だが、純粋な強さの話なら適性値が低くても一撃に籠められるエネルギーが多ければ格上に勝つことも出来る。だからこそ、そういった話は不毛でしかない」
強さは数値で簡単に表せるものではない。適性値はあくまで目安であり、その値が示す本当の意味は保有するエネルギー量である。
なので、適性値を比較した際に分かるのは継戦能力くらいなもので、実際の実力を測りたいなら一撃の強さであったり、ペルソナの持つ耐性を比べた方がマシだと思えた。
そんな風に比べることが間違っていると話す湊に対し、ゆかりはそれはそうかも知れないが、一概に間違いとも言い切れないのではと返す。
「でも、強くないと適性は高くないんでしょ？」
「……まぁ基本な」
「じゃあ、今の有里君の数値を教えてよ。私っていうか私たちは五千くらいで、真田先輩は七千弱、桐条先輩は八千強だよ」
今の冷たい瞳の彼が入学当初の状態だとすれば、自分が教えれば相手が断れない事は知っている。
どうして今の状態になったのかも勿論尋ねたいが、今日は影時間に関わることを教えて貰いに来たのだ。
よって、今は気になっていた彼の実力を聞いて、自分たちと彼の差を性格に把握したかった。

そんな彼の性格などを利用した少々ずるい作戦だったが、案の定、彼は呆れた様子を見せながらもちゃんと答えてくれた。
「……はぁ、桐条側のデータを見れば分かる。四月の身体測定時の俺の数値は十万だ」
「じゅ、十万ってとんでもなく強いじゃん」
「中学一年の時点で三万は優に超えていた。俺が強いんじゃない。お前らが弱すぎるんだ」
現在の特別課外活動部の戦力を合わせても中学時代の湊に遠く及ばない。合計数値が即ち強さという訳ではないが、彼女たちが必死に戦っても湊の方が余力を残してエネルギー切れになると聞けばショックを受けずにはいられないだろう。
そして、本人の口から自分が強いのではなく、ゆかりたちの方が弱いのだと断言されれば、自分たちの力不足を痛感したばかりの少女としては痛いところを突かれた気持ちになり、相手が彼ということも弱さを僅かに見せてしまう。
「ねぇ、もし良かったらで良いんだけどさ。タルタロスの探索とかたまに出る大型シャドウとか、出来れば一緒に協力して戦わない？」
「……一方的な依存を協力とは言わないな。一人で倒せるのにわざわざ足手まといを連れて行く意味がない。正体がバレようとお前らと手を組むことはないと言っておく。それじゃあな」
今日の話はこれで終わり。書類をまとめてマフラーに収納し、そう告げて席を立った湊は五代の前に一万円札を置いて店を出て行ってしまった。
唐突に話を切られたゆかりにすれば消化不良であり、もっと話を聞きたかったしあんな言い方しなくてもと不満が残る。
「……もう、何よあの態度」
「ハハッ、まぁ彼にも色々とあるんだよ。昔から誰かのために戦ってばかりだからね。君らのお守りをしながらだと逆に難しいのさ」
自分勝手な態度で帰ってしまった湊に不満を漏らすゆかりに、五代は紅茶のおかわりを持ってきて笑いかける。
彼のことをよく知る大人から見ても湊の態度は褒められたもので

はないが、先ほどのゆかりの発言はそれもしょうがない申し出だったのだ。
湊とゆかりたちでは実力に差があり過ぎる。これで共闘などしようものなら、ゆかりたちは快適に戦えるかもしれないが、湊はフォローに力を割くことになって実力を活かしきれない。
仮に単独の湊が一晩で百体の敵を倒すとすれば、共闘状態なら半分以下になる可能性もあるレベルであり。これではゆかりたちの倒す数が増えたとしても湊単独で戦った方がいいくらいだ。
数値によって実力差を理解したゆかりもそう言われると何も言い返せず。しかし、気分が治まらなかったことで追加のケーキを頼むと、紅茶のおかわりを飲みながら湊の置いていったお金でやけ食いをしてから寮へ帰っていった。

深夜――マンション〝テラ・エメリタ〟
影時間も明けて時計の針が一時を指した頃、湊は現実世界の時間にして数週間ぶりに家に帰った。
ラビリスとコロマルが既に寝ていると思って静かに扉を開けたが、リビングにはまだ明かりがついていて、玄関の扉が開いた音に気付いたラビリスがムスッとした表情で彼を出迎える。
「おかえり」
「……ただいま」
彼は誰も起きていると思っていなかったが、少女の反応からするとわざわざ待っていたらしい。別に帰るとも何も伝えていなかったのだが、コロマルがバルコニーで寝ているので静かにと一言注意しつつ廊下を歩く彼女は湊に色々と聞いてきた。
「ご飯はどうしとったん？」
「今朝、岳羽がカロリーチャージのココア味をくれた」
「はぁ……やっぱ食べんとおったんや」
行方をくらませて数週間経っていたというのに、食事を聞かれて今朝のことを答える時点でおかしい。彼のマフラーには食料が大量にはいっているはずだが、何日も戦い続けておいて食事もしないなど身

体に悪いとしか思えず、私室に入って着ていたコートを脱ぐなど着替えるのを手伝いながらラビリスは心配したんだぞと彼に伝えた。
「勝手に感情消しとるし。かと思ったら行方くらますし。ホンマに心配ばっかさせんといてよ」
「……必要な事だったんだ」
「それでもや」
彼が目的のために動いていることは分かっている。影時間を終わらせ、チドリやラビリスたちが平和で暖かな世界で生きていけるよう全力を尽くすのが彼なのだから。
しかし、だからといって心配しない訳ではない。彼の性格を知っているからこそ、またどこかで無茶をしているのが簡単に想像出来てしまい、こうやって帰ってきて顔を見るまで安心出来ないのだ。
「先にお風呂にするん？」
「……別にどっちでもいい」
「それが一番困るんやけどね。まぁいいわ。ウチもまだ入ってなかったから」
彼が身体の汚れを殺して清潔な状態を保てることは知っている。ただ、それでも普段はちゃんとお風呂に入っているので、とりあえずご飯の前にお風呂に入ってしまおうとラビリスも着替えを持って一緒にお風呂に向かう。
話したいこと、聞かなければならないことは沢山あるが、今は無事に帰ってきたので別に良い。どんな事をしていたかは食事中に聞いていくとして、二人分の着替えを持っていたラビリスは脱衣所に到着するなりそれをカゴに放り投げ、急に彼の方へ向き直ると抱きつきながら背伸びをして唇を奪った。
「フフッ、おかえり湊君」
急にキスされた青年は感情の消えた瞳でありながら少女を見て不思議そうにしている。
少女にすれば触れ合うことで安心はより深いものになり。心配をかけたのだからこれくらいは許されるだろうといった考えだ。
そして、相手の不意を突いたことで、悪戯が成功したように嬉しそ

うな笑顔を見せた少女は、そのまま自分と相手の服を脱がせると一糸纏わぬ姿のまま彼の手を引いて浴室に入っていき。久しぶりに一緒の入浴だったことで長い時間を一緒に過ごした。

第二百七話　テスト明けの過ごし方

影時間――タルタロス

湊がまた登校するようになってからすぐに中間テストが行なわれた。決まった時期に行なわれるため慣れたものだが、一般的にはテストが終われば開放感に包まれて自由を謳歌しようとする。

しかし、湊は授業とテストでやっている事に違いはあれど、拘束時間が長い事に変わりはないとテストが終わった日の影時間にタルタロスへやって来ていた。

黒いロングコートを纏った彼の後ろには、またすぐどこかにいなくなるのではと疑っている少女らと一匹の犬が追従しており、階段や地下階層への扉のある開けた場所に着いた時点でラビリスが口を開いた。

「湊君がおらんかったから来るんも久しぶりやな」

「特別課外活動部の方も今日は来ないみたいだし。調子を戻すには丁度ね」

「わふっ」

彼女たちは特別課外活動部のメンバーよりも高い実力を持っているが、自分たちだけでタルタロスを訪れる事はほぼない。

というのも、青年と一緒にいるために自分たちも力を付けようとは思っているものの、現在開放されているフロアではボスが相手でも簡単に倒せてしまい。被害の拡大を防ぐためシャドウを狩ること自体も目的にしている青年と違って彼女らには旨みがないのだ。

それならばＥＰ社の地下演習場で実戦形式の訓練を積んだ方がマシであり、実際に少女らと犬は一緒に格闘術やペルソナの特訓をしていた。

火炎スキルが得意なチドリとコロマルは共に炎の使い方を工夫していたし、ラビリスも固有スキルのストリングアーツで複雑な形状を瞬時に編めるように練習した。

おかげでタルタロスにも通わず実力は伸びているが、やはり訓練と実戦では緊張感が違う。

今日はそういった実戦の勘も取り戻せればと思っているが、少女らがエントランスで話していると、階段の影からヒーホーがひょっこりと顔を出し、湊の姿を発見すると白い光に包まれ姿を座敷童子に変化させながら駆けよってくる。
《……八雲……今日は一緒……》
「……ああ、どうせあいつらは来ないからな」
ゆかりが死なないよう保険として彼女には待機して貰っている。座敷童子にとっては一日は影時間の分しか進んでいないが、それでも愛しい我が子と離れていると寂しいのか、今日は一緒に回れると聞くと嬉しそうに小さな笑みを見せた。
青年はそんな相手の頭に左手をかざし、自分と離れていても戦えるようエネルギーを送っているが、それが終わるまで暇だったチドリたちは周りを見渡してエクスカリバーが長くなっている事に気付く。
「……なんか前に見たときより伸びてるわね」
「ホンマや。地震とかで押し上げられたんやろか？」
前にチドリたちが見たときには、危ないからと湊が押し込んだ事で鍔の辺りまで埋まっていた。
しかし、いま見れば二十センチほど抜けてきており、勝手にこうなったのであれば影時間の度に塔が生える際の振動などによって押し上げされた可能性が考えられる。
そんな簡単に動いて大丈夫かなと心配し、ラビリスとチドリが押したり引いたりするも、剣は微動だにせずやっぱり壊れているとチドリが柄に蹴りを入れたところでエネルギーの補充を終えた座敷童子が話しかけてきた。
《……それ……あの子たちが、ちょっとずつ抜いてる、の……》
彼女のいう〝あの子たち〟とは、ヒーホーの姿でお守りをしている特別課外活動部のメンバーの事である。
見た目的には明らかに年下に思えるが、どれだけ譲っても中学生が限界の姿だろうと彼女は幕末から明治を生きた人間で、結婚と出産経験もある立派なレディーであるため、そんな彼女からすれば周囲から大人っぽいと言われる美鶴ですら幼い子どもに過ぎない。

もっとも、そんな彼女もヒーホーの姿のときには子ども扱いされ、さらには性別を男だと思われて七歌たちに接されているが、その事は特に気にしていない座敷童子は七歌たちの慎ましい努力を見ており現在も継続中であることを全員に教える。

すると、動くなら一気に引き抜いたら良いのではと純粋に疑問に思ったラビリスが、どうしてそんな面倒な事をしているのかと尋ねた。

「なんで一気に引き抜かんの？」

《……選ばれてないから……一日に二センチしか、ダメって……》

「剣のくせに人を選ぶなんて生意気ね」

「くぅーん」

道具は使う人を選べないとはいうが、この剣に関しては例外であった。チドリはそれを生意気と切って捨て、耳を垂らしたコロマルは一つの武器を手に入れるため苦労する者たちを想い同情の鳴き声を上げた。

もし、特別課外活動部のメンバーが少女らの言葉を聞けば、気持ちを分かってくれてありがとうと涙を流すに違いない。

少しだろうと剣を抜けるのは七歌しかおらず、今も来れば抜いているのは意地になっているからだが、輝く刀身がここまで見える状態にするのも苦労したのだ。柄の長さと剣の幅から計算して今でようやく三分の一ほどと思われるが、残り三分の二を抜くにはおよそ一ヶ月は掛かると予想される。

部活動や成績の維持など本業たる学園生活をしっかりとこなしながら、影時間には人々のためにシャドウと戦ってタルタロス攻略を行なうのは並大抵の苦労ではないはずだ。

剣を抜くのはそのオマケかも知れないが、それでもここまで抜けた剣は少女らがタルタロスを訪れた証であり努力の結晶であることは間違いない。

しかし、そんな事に一切の興味を抱いていない青年は、ただ危ないからと柄に手を置くとそのまま剣を奥まで押し込んだ。

「あ、せっかく三分の一くらい抜けてきとったのに」

「……俺には関係ない」
せっかく頑張っていたのに可哀想だと眉根を寄せるラビリスに、青年は欠片の興味もないとたった一言返してモナドへ続く扉に向かってしまう。
この剣の正統な所有者は彼であり、それを放置しようが何しようが自由だ。七歌たちの事情や努力だって知ったことではないと言われれば確かにそうだろう。
ただ、それならそうで引っこ抜いてマフラーに収納しておいてもいいはず。彼のマフラーの中には使っていない武器も多数納められており、今更一振り増えたところで何の問題もない。
それでも回収しないのは自分に聖剣が似合わないというただ一点のみが理由だが、昔のような状態に戻ってしまった彼に言っても無駄なので、ラビリスたちは黙って彼の後を追った。
＊＊＊
Ｔ字路の交差点に陣取った知恵の輪のような金属に絡みついた蛇型シャドウ、恋愛〝淫欲の蛇〟が全身から炎を放ち狭い通路を埋め尽くそうとする。
しかし、黒いコートを揺らし左手に持った長大な白銀の剣を青年が振るえば、剣圧によって炎は中央から真っ二つに割れる。そうして剣の一振りで出来た道を駆け抜けた青年は、スキルを放っていたことで無防備な姿を晒していた敵に勢いのまま力任せに刃をぶつけて金属ごと叩き切った。
硬い金属ごと身体を切られた敵は地面に落ち、そのまま闇に帰るように黒い靄となって消えてゆくが、敵を倒した青年はシャドウが消えるよりも早く動き出し、右の通路から迫っていた氷槍に大剣をぶつけて砕きながら防ぐ。
モナドに出てくる敵は実に優秀だ。敵が最も嫌がるタイミングを知っているのか、交戦中ならば攻勢に出ようとしたタイミングを、戦闘が終わったなら終わった直後を狙って攻撃を仕掛けてきた。
氷槍の向かってきた方向に視線を向ければ、混沌のキュクロプスが二体やって来ており、先ほどの攻撃を仕掛けてきたのはどちらかであ

る事は確実。
ならばと青年は駆け出し、大剣を左手に持ったまま右腕を黒い炎で覆って異形の巨腕に変えると、二体のシャドウが同時に放ってきたマハブフダインに向かって腕を突き出し炎の盾を展開した。
敵に向かって青年が進めば、氷が巨腕の掌に触れる度に、ジュッ、と溶けた氷がそのまま蒸発する音が聞こえる。
一瞬にして辺り一面を氷の世界に出来るほどの攻撃ですら容易に防がれ、それ以上の攻撃を持たぬシャドウは勝てないと判断し逃げようとした。
だが、敵が迫ってから逃げるのでは意味がない。相手がスピードに乗っているのに対し、シャドウらは動き出しからスピードに乗るまで時間がかかる。
まして、相手が人を超えた化け物ならば見えた時点で逃げていても遅いくらいであった。
「ハァァァァッ!!」
逃げようとする敵に追いついた青年は、右手の巨腕を裏拳のように振るうことで手前の敵を壁に埋め込み動きを封じ、奥の敵には持っていた大剣をランスのように突き出して胴体を貫いてやる。
それぞれを一撃で仕留められれば楽だが、流石に二体同時にやるのでは完璧とまではいかない。
ではどうするかと思えば、これまで青年が着ていた黒いコートだった物が炎の様に揺らめき、背中側から黒い炎で出来た腕が二本伸びるとシャドウを掴んで燃やし始めた。
彼が今着ているコートは満月の夜に着ているマフラーを変化させた物ではない。黒い腕を形成する要領で蛇神の力の欠片をコート状にしたものであり、元がただの影であることからすぐに形状や形態を変化させることで防御や攻撃など様々な状況に対応することが出来た。
そうして、黒い炎に捕まれたまま敵が燃え散ると、青年は異形の巨腕を消してコートを元に戻し。そのタイミングで後から追ってきていたチドリらが息を切らして追いついてきた。

「ちょっと、少しはペース考えてよっ」
「ん、はぁはぁ、コロマルさんでも追いつけへんとか先行き過ぎやで」
「……わふっ」
敵が現われる度に先行して倒しに向かい、それからさらに見つけて倒しに行くというのを繰り返していた事で、青年は少女らとかなり距離を開けてしまっていた。
もっとも、犬で他の者よりもスピードに自信のあるコロマルだけは、かなりギリギリではあるものの付いて行けそうだった。
けれどそれは、距離を離されないというだけの話であって、湊に近付いていける訳ではなかった。
相手の攻撃に対処しながら敵を屠り、複数出てくればその分だけ余計な手間をかけて殺していながら、最後にはコロマルすら完全に振り切ってしまえば、肩で息をして呼吸を整える少女らも呆れるしかない。
一緒に来たのだからもう少し考えろとチドリらが訴えれば、言われた湊はコートから複数の腕を出して幾重にも少女らを覆い。迫っていた砲弾を防いでから審判のカードを砕いて青い天使呼び出す。
現われたアザゼルは少女らの背後に降り立つと、通路の奥の奥から攻撃してきた戦車〝洗礼の砲座〟を見据えて極光を放ち、過ぎ去った通路の表面を融解させながら敵も蒸発させた。
「……別に付いてこいと言った覚えはないからな。敵を殺してる俺に追い付けないなら、素直に諦めて上のフロアでも登っていたら良い」
敵からの奇襲攻撃を防ぎ、カウンターでスキルを放つまで僅か四秒。カウンターが着弾して敵を殺すまではプラス二秒ほどと思われる。
走り続けた疲労もあるのだろうが、完全に不意を突かれたチドリらは自分たちが対応出来るタイミングではなかったこともあって、余計に青年と自分たちの実力差を思い知らされ悔しい表情を浮かべるしかない。
今の青年の強さは異常だ。以前から強いことは知っていたが、今日は魔眼を一切使っておらず、ペルソナだってカウンターの一撃に呼び

出した以外は、チドリらと一緒に追いかけてきていた座敷童子しか出していない。
記憶に紐付けされた感情を消して昔の状態に戻り、さらに数日間モナドに籠もったことで昔の感覚を完璧に取り戻して仕事屋時代の強さになったとチドリは思っていたが、仕事屋時代が精神状態や戦闘の勘の全盛期ならば肉体の全盛期は現在と言える。
それら二つが噛み合ってまさに最高の状態に仕上がったとなれば、一言で言って化け物と呼ぶしかない強さも納得がいく。しかし、それらが様々なものを代償として支払って得られるものだと分かっている少女は、青年がそこまで自分を犠牲にしなければならないのかと辛そうな表情で尋ねた。
「……ねえ、湊。刈り取る者だって倒せるほどの力を得たのに、貴方はまだ力を求めるの？」
「敵がそれ以下なら杞憂で済む。だが、人の手に負えない脅威が来る可能性を否定出来ない以上、これで十分と甘い見通しでいる事は出来ない」
満月の度に他のシャドウよりも力を持った大型シャドウがやってくる。チドリたちもその事は聞いているし、だからこそ満月の日には美紀を桔梗組で保護していた。
ただ、彼女たちが聞いているのはそれだけで、そのシャドウたちはどういった存在なのか、十二体全てのシャドウを倒せば何が起きるのか、そういった事は何も聞かされておらず、尋ねても湊が答えないせいで純粋にアルカナシャドウの強さしか脅威として認識出来ていない。
「それはそうかも知れないけど、だからって貴方が一人で何とかしようとする必要はないでしょう」
「うん、ウチらだってちょっとずつ強くはなっとるし。桐条の方でも新しいペルソナ使いは見つけてるみたいやん。一人では無理でもウチらの力を合わせたら出来るかもしれへんやろ？」
だからこそ、彼がどうしてそこまで力を求めようとするのか分からず、何かあれば自分たちも一緒に頑張るとラビリスも微笑を浮かべれ

ば、湊は一切の感情が籠もっていない冷たい瞳を少女らに向けて言葉を返した。
「……他人は信用しない事にしてる。任せて何かあったとき俺が傷つくなら信じた自分の馬鹿さ加減を嗤うだけで済むが、それが他の者を傷つければ目も当てられない」
これは以前、ラナフで蠍の心臓にいたとき、武器の整備を他の者に任せないのかと聞いたレベッカに彼が答えた事と同じものだ。
どれだけ備えて完璧だと思っていても、誰かの思い付きの行動などでイレギュラーが起こってしまうことは珍しくない。
それがカバー出来る範囲のことなら何も問題ないが、備えていたものでは対応しきれないとなれば犠牲や不利益が生じることもある。
彼はその生じたものが自分に向くなら構わないと思っている。任せるというのは一種の賭けであり、この場合は彼が賭けに負けただけの話だ。
だが、その被害が他の者に及ぶとなれば償いきれない。なので、彼は他者の力は一切信じず、己の力すら疑いながら自分で何事にも対処しようと考えているのだった。
「私は他人じゃない」
しかし、それを青年から言われた少女は、悲しみを内に秘めたまま怒った様子で言葉を返す。
自分と彼は確かに血の繋がりもなく、戸籍上は他人であることは認める。それでも一緒に過ごしてきた十年という年月は存在し、その中で育んだ絆や想いがある。
他人を信用しないというスタンスは分かったが、自分は〝家族〟だと少女が遠回しに言えば、青年はマフラーから青い縁取りのされた白銀の銃を抜いて腕だけを後ろ向きに引き金を引いた。
『っ!?』
彼の突然の行動に驚いた少女らは彼の後ろに伸びる通路の奥に視線を向ける。
響いた銃声は二発、火を噴いたファルファッラから放たれた銃弾は十数メートルの距離でもしっかりと敵を捉え、剛毅〝天神の武者〟の

甲冑の胸部分を砕き、もう一発で頭部を兜ごと吹き飛ばして消滅させる。
会話をしながらでもちゃんと周囲を警戒し、敵が出れば即座に殺す反応速度は恐ろしさすら感じるが、彼にとってはこの程度何でもないようで銃はすぐに仕舞って口を開いた。
「……家族だというのなら君は家にいてくれ。俺は君たちが戦うことに反対なんだ」
「それやと、ウチらが戦わんようになったら湊君も家におるんやんな？」
「俺の活動は無気力症の治療も兼ねている。君たちとは事情が違う」
敵を殺した事で再び歩き出した彼は、治療目的も含んでいる時点でチドリたちが戦うのとは事情が異なると切って捨てる。
大型シャドウを倒した直後は回復傾向にあるものの、無気力症の患者数は段々と増しており、ＥＰ社が余っていた広大な土地に病院を建てていなければ、近所の病院だけでは患者の受け入れすら厳しい状況になっていたほどだ。
湊は事前にこうなることを見越して病院を建てておいた訳だが、いくら無気力症患者用の入院施設を作っていたとしても、現在のペースで増えるようではすぐに限界が来てしまう。
となれば根本的な解決策が必要となり、大量のシャドウらを吸収している大型シャドウが現われるまでは、今回のようにシャドウらを狩って持ち主に戻るよう仕向ける必要があった。
シャドウがどういった存在であるかの説明を受けている少女らも、彼がこうやって敵を倒し続けることの意味は分かるので、自分たちが今回何も出来ていない事を考えれば黙るしかなかった。
そうして、チドリらも彼が戦うことに異論を挟まなくなると、湊は一人で先行しながら数十体のシャドウを倒し、チドリたちも座敷童子の力を借りつつ協力してシャドウを倒して力を付けていった。
５月２４日（日）
午後――長鳴神社
試験を終えた七歌は休日ということで久しぶりに買い物に出かけ

ると、午後には長鳴神社の中を駆け回っていた。
「見よ、これが飛び込み大車輪だ！」
境内を全力で走った七歌はその勢いのまま大きな鉄棒に飛びつき、腕を伸ばしたまま一回転して見せる。
普通の人間ならば勢いに負けて手を離しそうなものだが、身体能力の高さにセンスも合わさって無事に技を終えた彼女はシュタッと着地し、それを傍で見ていた少女が瞳を輝かせて拍手を送った。
「わぁー！　お姉ちゃんすごい！」
「フフン、もっと褒めるが良い。あ、でも舞子ちゃんはまだ危ないからダメだよ。高校生くらいになるまで封印しておいてね」
「うん！」
七歌を尊敬の眼差しで見つめる少女の名は大橋舞子。以前、気まぐれに神社へ立ち寄った際に知り合いになり、どうやら訳ありの家庭のようで少女が一人で寂しい思いをせぬよう七歌も気に掛けて度々会っているのだ。
舞子にしてみれば姉が出来たようで嬉しいらしく、一緒に神社の境内で遊んだりタコ焼きを買って分け合いっこしたりしたときには笑顔を浮かべている。
もっとも、流石に家庭内の事情にはあまり踏み込めないので根本的な解決までは出来ないが、それでも一緒にいるときは楽しく過ごせるように気を配っていることもあり、両者の仲は非常に良好と言えた。
「ねぇねぇ、お姉ちゃん。ここって白いワンちゃんがいるんだよ。しってた？」
「ん？　いや、一回も見てないから知らないなぁ。どこにいるの？」
「わかんない。前は一人でおさんぽしてたりもしたけどいなくなっちゃったの」
舞子は七歌と出会う前から一人でよくここを訪れていた。そのとき、神社に住む白い犬と出会って何度か遊んでいたのだが、未だ一度として出会ってなかった七歌が居場所を尋ね返せば、舞子は残念そうに眉を寄せて最近は見ていないと答える。
少女の言葉が真実で犬が一匹で散歩していたのなら野良の可能性

が高い。となれば、いなくなったのは保健所に捕まったか、何かの事故に巻き込まれ死んでしまったのではと七歌は推測した。
ただ、それを思い付いたまま口にすれば少女の笑顔が曇ることは確実であるため、もっとポジティブに考えようと七歌は別の意見を口にした。
「自分だけで散歩して帰ってこれるなら随分と利口な犬なんだね。もしかしたら飼い主が出来て貰われていったのかもね」
「そうなのかな？　一人はさびしいから家族ができたならうれしいね！」
犬だろうとたった一匹でいるのは寂しいはず。新しい飼い主のもとで新たな家族と一緒に幸せに暮らしてくれていれば嬉しい。
優しい少女が心からそう願って笑顔を見せれば、七歌も釣られて笑顔になって二人で笑い合った。
愛らしい少女とその少女に慈愛の瞳を向ける美少女。二人の間にはコミュニティという絆が存在し、それがなくても七歌は寂しそうにする少女を放ってはおけなかっただろうが、オカルト的な物だろうと繋がりを示すものがあると嬉しいと七歌も思っていた。
家に帰っても少女が辛い思いをするのなら、せめて一緒にいる間は笑っていて欲しい。そんな風に考えている七歌が舞子と一緒に楽しい時間を過ごしていれば、時計を目にした舞子が残念そうに呟いた。
「あ、もうこんな時間だ。舞子、おうちに帰らなきゃ」
「そっか、気をつけて帰ってね」
「うん。お姉ちゃんバイバイ！　またあそんでねー！」
いくら休みの日でも小学生が遅くまで外にいる訳にはいかない。設定されている門限までにちゃんと家に着いておくため舞子が別れを告げれば、七歌は再び会うことを約束して少女を送り出す。
また遊んで貰えると分かって舞子も嬉しそうに去って行き、その背中が見えなくなれば七歌もやることがないので帰ろうかなと考えた。
「んん？」
だが、七歌が帰ろうかと考えたタイミングで石段を登ってやってきた者がおり、その人物らに視線を向けた七歌は見知った顔がいたこと

で首を傾げた。
　やってきたのは合計三人。オレンジのフード付きパーカーを着た小学生くらいの少年、黒いキャップとタンクトップを身に付けたヒゲ面の男、そして休みの日のラフめな格好をした茶髪の少女だ。
　ヒゲ面の男と茶髪の少女は七歌と同じ寮で暮らす者たちなので知っているが、残る一人の少年については一切情報がない。
　またテスト明けの休日に順平とゆかりが一緒に行動していることも不思議で、何やら怪しい関係を想像した七歌はお参りしている少年を後ろで眺める二人にこっそりと接近し、少女の肩に手を置くと水くさいぞと声を掛けた。
「水臭いぜご両人。そういう事なら教えてくれれば良かったのに」
「あ、七歌。こんなとこで偶然だね。てか、急に何の話してんの？」
　突然現われてよく分からないこと言ってきた友人に対し、ゆかりは休日に外でばったりとは珍しいと思いながら、もう一回説明して欲しいと頼んだ。
　すると言われた七歌は、こういうのは言うだけ野暮だろとしらばっくれる相手に粋に笑って見せて返す。
「おいおい、そんな野暮なこと口にさせないでくれよ。大丈夫、美鶴さんたちには上手く言っておくから多少遅くなってもいいし」
「……はぁ？」
　一方、七歌に言われたゆかりは本気で意味が分からないと不快そうに眉を寄せ、目だけ本気になると普段よりいくらか低い声色で言葉を発した。
「七歌、笑えない冗談はやめてくれる？　もしあんたがふざけて言ったことがある人の耳に入って誤解されたら、私は誤解を解くためにあんたと順平っていう犠牲を払うことに些かの躊躇いもないよ」
「いやぁ、オレっちも巻き込まれた側なのに一緒に戦犯扱いされるってどうよ」
「あんたが消えれば誤解も消えるでしょ」
「へいへい。ったく、ゆかりっちってば有里君が絡むこととなると冗談すら通じなくなるんだから」

ゆかりが言ったある人とは彼女の想い人である湊のことだ。他の人に誤解されるのも迷惑極まりないので嫌だが、湊の耳に入って誤解されようものなら速やかに原因を排除して誤解を解かなければならない。

あまりにマジな目でそれを口にしたゆかりに順平も思わず呆れ、持っていたジュースに口を付ければ、ならば本当は何をしていたのか改めて七歌が尋ねる。

「んで、本当は何してたの？　子連れデート？」

「七歌、私は友達には本気でぶつかっていくタイプよ。次はグーで行くから」

「先に説明すれば七歌っちもいわねぇってば。あー、子連れってのはあれよね。天田少年のことだろ？」

新学年が始まった当初、七歌とゆかりはお互いに険悪な雰囲気を見せていた。

事情を知らぬ者たちにすれば女子同士の争いは恐ろしくてしょうがなかったが、今日に関して言えば三人一緒だった説明も簡単に出来る。

今までお参りしていた少年が順平たちの元へやってくれば、順平は丁度良いからと少年を七歌の正面に立たさせて自己紹介するように言った。

「はじめまして、天田乾っていいます。お二人とは神社に通ってるうちに知り合いました。今日は来る途中にゆかりさんと会って、暇だから一緒に行ってくれるって歩いてたとき、オクトパシーのタコ焼きを食べながら歩いていた順平さんにも会ったんです」

「そうそう。ゆかりっちが天田と知り合いとは知らなかったんだけどさ。まぁオレっちも買い物は終わってたからついでだしご一緒したって訳よ」

そう。三人一緒だったことを説明すればたったそれだけだ。ゆかりと順平はそれぞれ別口で天田と知り合っていて、今日は偶然出会って一緒に話をしながらやってきたに過ぎない。

面白みに欠ける真相を聞いた七歌は残念そうな表情を浮かべ、すぐ

に普段通りの顔に戻ると自己紹介してくれた少年に挨拶を返した。
「私は九頭龍七歌、この二人とは偶然同じクラスになって、寮も偶然同じってだけの赤の他人だよ。あ、皆から皇子って呼ばれてる有里湊君のことは知ってる？　彼とは従姉弟同士だから他人の二人と違って特別な関係だよ」
「天田君、こんな事言ってるけど自称だから騙されないでね。有里君は七歌のこと知らないって言ってるし」
「オイ、ピンク。私と八雲君の仲を嫉妬するのは分かるけど、そうやって子どもに嘘を教えるなよ」
「はぁ？　嘘も何も有里君は知らないって言ってたじゃん。おまけに半分無視されてるし、私とあんたのどっちが正しいかなんて一目瞭然でしょ」
そして、少年の前で再び女同士のバトルが勃発する。
七歌の場合は別に湊を男として見て自分が特別な存在になろうとしている訳ではないが、血の繋がりがあることをとても特別だと思っているようで、それを否定してきたゆかりを鋭い視線でキッと睨む。
対して、ゆかりはゆかりで元カノという他者より一歩進んだ存在であると認識しており、影時間関連のことが片付けば再び告白して彼女の座に返り咲こうと思っているため、血縁者だろうが彼にとっての特別であろうとする者や自分の夢を阻もうとする存在に容赦する気はなかった。
「やめいって。初恋もまだな小学生に女子同士のドロドロした部分は刺激強いからな？」
ただ、本人たちにとっては譲れない戦いかもしれないが、第三者からすればムキになって大人げないとしか思えなかったりするため、小学生の前という事もあって順平は柄ではないと自覚しつつ少女らを諌める。
「順平さん、お二人は有里先輩のことで何かあったんですか？」
「あー……説明は難しいけど、とりあえず有里君に関することなら相手より上に立ちたいっぽいぜ」
「へぇ、高校生にもなると人間関係も複雑なんですね」

「うん、この二人を一般的な高校生と見るのは間違ってるけどな」
素直なのかませているのか判断に迷うが、天田は順平の説明で高校生なら七歌たちのような事も普通と認識したらしく、小学生の男子が女同士の醜い争いにトラウマを覚える事態だけは回避された。
もっとも、七歌とゆかりは言い争っていないだけで互いに睨み合っているため、門限があるからと天田が先に帰ってしまえば、順平は本当にどうしようと頭を抱えたい衝動に駆られながら、偶然ロードワークに出ていた真田がやってくるまで途方に暮れていた。

第二百八話　風花の失踪

５月２８日（木）
夜――月光館学園

その日、山岸風花は体育倉庫のマットの上で膝を抱えて一人考え込んでいた。

どうしてこんな事になってしまったのだろうか？

時計の針が二つとも頂点を指そうという時間だ。そんな時間に生徒が体育倉庫に残っていて良いはずがない。

だが、外から鍵が掛かっていることで中からはどうもできず、非力な少女では壊して脱出することできないため、明日どこかの部活かクラスが開けてくれる事を祈り、風花はここで夜を明かそうと考えていたと言う訳だ。

（お腹すいちゃったな……）

本来ならば閉じ込められて焦りを覚えるのが普通なのだろうが、風花は既に自分の力ではどうにもならないと諦めている。

何も出来ないということは無駄に希望を持つこともない。他力本願と言われようと降ってくる救いを待つしかない身であるため、彼女はそういえばお昼もちゃんと食べれていなかったと思い出してただジッと空腹に耐えるのみだ。

（あ……お父さんとお母さんへの連絡どうしよう）

ふと思い出したように顔を上げた風花の傍には荷物の入った鞄があった。その中には携帯電話もあるので外部に連絡を取って助けを呼ぶことも出来るが、彼女は電池残量が心許ないという理由から節約のため電源を切っており、両親や友人から連絡が来ていても分からない。

もっとも、仮に連絡が来ていたとしても、今の自分の置かれている状況を知って心配をかけたくないので、風花は両親だけでなく大切や友人らにも相談や助けを求めるつもりはなかった。

そも、彼女がここに閉じ込められてしまったのは、同じクラスの森山という生徒とその友人らに呼び出された事が原因だ。

不安に思いつつも何の用事だろうかとやってきてみれば、面白いものがあるからと中に入れられ、そのまま扉を閉められ施錠までされてしまった。
去って行く前に彼女たちは明日には出してやるからと笑っていたが、これは立派な監禁罪であり相手が優しい風花でなければ退学処分になっているところだ。
風花と森山たちの付き合いが始まったのは今年の四月まで遡る。
ある日の学校帰り、風花は部活関連や趣味の本を見ようと一人で本屋に立ち寄った。
そこは商店街にある店で、それほど大きな店ではなかったが月光館学園の生徒で利用している者も多くいる場所である。
風花もその店には何度も来ており、その日も店内をお決まりのルートで見て回って工学系の棚のところで本を見ていた。
だが、その日はある本を立ち読みしていると気になる部分があったので、もう少し詳しい内容の載っている本で調べてみようと思い、その内容の書かれている本を探すことにする。
立ち読みしていた本に載っていた内容だけあって、関連項目について詳しく書かれた本はすぐに見つかったが、売れ筋商品ではないからか残念なことにその本は棚の高い位置に置かれていた。
そして、本人も自覚している事だが山岸風花は小柄で、思い切りジャンプしてみても手を上げた湊の掌にタッチ出来ないくらいの小ささである。
そんな彼女がしっかりと本棚に収まった本を取るには鞄を床に置き、精一杯背伸びをしてようやく指の先が触れるかというもので、必死に頑張った彼女は届いてとジャンプして本を抜こうとして目的の本だけじゃなく周りの数冊も一緒に落としてしまった。
本を大切にする彼女は売り物を落としてしまってごめんなさいと申し訳なさでいっぱいになり、すぐに落とした本を拾おうとしたのだが、落下した本のうち一冊が床に置いていた鞄の開いていた口から入りかけていた。
これは危ないとすぐに拾い上げようと本を掴んだとき、携帯電話に

ついたカメラのシャッター音が響き、本を取って風花が顔を上げれば数メートル離れた場所で携帯を構えた森山と友人らがニヤニヤとあくどい笑みを浮かべて立っており、風花は誤解を招く写真を撮られてしまったとすぐに悟った。

案の定、森山たちはすぐに近付いて来て、〝優等生なのにこういう事をしちゃうんだ？〟と本を鞄に入れようとしているように見えなくもない風花の写真を見せてきた。

それは誤解だと拾った本を棚に片付けながら訴えたが、万引き犯として捕まったらどうしようとパニックになっていた風花の言葉はしどろもどろになっていて、森山たちは〝何言ってるか分からない〟とゲラゲラ笑ってから〝また明日ね〟と去っていってしまう。

森山たちが帰った後、風花は大変なことになってしまったと泣きたい気持ちだったが、これで周りにばれると大騒ぎになってしまうと思って、彼女はほとんど眠れずに次の日は学校へ行った。

（やっぱり、私ってどんくさいんだなぁ）

前日の去り際にまた明日ねと言っていた通り、学校へ行くと森山たちが絡んできて以降はたびたびいじられるようになった。

直接金銭を要求されることや暴力を振るわれることはないが、お昼を買いに行かされたり提出物の答えを写させるよう要求してきたり、写真のことをばらすぞと脅されつつ使いっ走りにされていた。

本当は辛かったし何度も相談しようかと考えた。だが、もし風花が相談すればそれは湊の耳にも当然入る。

風花は湊に自分がいじめられていると知られたくなかったし、もし知れば彼がどういう行動に出るか分からないというのもあって、両親だけでなく誰にも相談しないで森山たちが飽きるまで我慢する事を選んだ。

その結果が今の状況という訳だが、風花はエスカレートしつつある森山たちのことで精神的にきており、加えて両親が以前にも増して成績のことを言ってくるようになったことで、こんな自分に生きている価値なんてあるのかなとネガティブな思考に陥っていた。

（本当は、多分、有里君は気付いてるんだよね。私が何も言わないから

気付いてないフリをしてくれてるだけで）

まるで中学時代に戻ったようだと言われる彼の瞳は、呑み込まれそうな暗さを秘めており、その瞳で見つめられる度に風花は全てを見透かされている気分になった。

高等部になってから名前を変えた総合芸術部は現在も活動しており、湊も部活がある日には参加しているが、それ以前に学校に来る日数が激減していて週に二日が普通、四日来るなど奇跡といった状態になっていて風花も最近はちゃんと話せていない。

それでも昼食を一緒に取らなくなったことや、自分とは付き合いがなさそうなタイプの森山たちと行動する場面を見ておおよその事情は察しているに違いない。

彼は本質的に優しく甘い性格であるため、まだ気付いていない様子のチドリやラビリスたちには何も話していないのだろう。友人に〝可哀想〟と思われる情けなさを風花が味わう必要がないように。

（……なんか、何もすることがないから逆に落ち着いてきちゃったな）

自分の中で淡く芽生えた湊への感情が恋心なのかは分からない。

彼のことは格好良いというより綺麗だと思っていて、相手には失礼かもしれないが自分も将来はこんな風になりたいと同性としての憧れのようなものは抱いていた。

背は小さく、運動も出来ない。昔から自信がなく、親に言われるからと勉強だけは出来るようになったが友人たちには及ばない。

そんな風花からすれば、綺麗で格好良く、文武共に優れていて、当たり前のように人助けをしていた彼はまさに自分の理想そのものだったのだ。

だが、そんな彼との関係が変わったのは二年生に昇がる前、今年のバレンタイン翌日の話だ。

好きな画家の特別展が開催されることになり、小柄な少女を一人で行かせることに不安を覚えた友人らが唯一人予定のなかった彼――実際はとても多忙だったらしいが――に同行するよう言い、風花と湊は二人で所謂美術館デートに行ってきた。

しかし、風花が途中で倒れてしまい。倒れた彼女を介助するため湊

がホテルに運んだことで勘違いの連鎖が生まれ、お互いに勘違いしたまま一線を越えてしまう。
　そのときは自分から言い出したこともあって一度限りの関係で済まし、以降はこれまで通りの友人として過ごしていこうと考え、当日の内に彼にもその旨を伝えておいた。
　だというのに、湊はその後も何度か関係を求めてきて、休日や放課後にホテルに行ったこともあれば、全くと言っていいほど誰も使っていない空き部屋とはいえ生徒もまだ残っている放課後に学校で情事に耽ったこともある。
　強く拒めれば青年もちゃんと聞き分けたのだろうが、風花は自分が言ったことで一線を越えることになったという負い目もあり、さらに彼が言っていた通り触れられている間は安心感や満たされる感覚があったことで拒否出来ずに回数を重ねていった。
　風花から見れば最も親しい友人の一人だった彼とそんな関係になり、いけないことだと理解しながらも恋人にもならずズルズルと続けていたが、二年生になってからは彼の雰囲気が変わって学校にあまり来なくなったことや、高校入学組で湊のことを恐れていない森山たちが風花をいじるようになったため一度もなかった。
　ただ、両親からのプレッシャーや自分に自信のない風花にとって、彼と過ごす一時は様々な不安から解放される時間でもあったらしく、一種の精神安定剤を失った風花は限界に近付いていた。
（本当に、なんでこんな事になっちゃったのかな……）
　抱えた膝に顔を埋めながら風花独りで考え込む。
　もう何もかもを捨ててどこか遠くへ行ってしまいたい。とそんな風に思える強さがあれば良かったのだろうが、風花は追い詰められると余計に内に溜め込んでしまうタイプで、他の者に心配をかけてでも逃げ出すという発想がなかった。
　しかし、彼女がそう思っていても周りの状況の変化に巻き込まれ、結果的に同じ状況に置かれてしまう事がある。
　そう、時計の針が頂点を指したとき、世界の変化と共に風花もその存在を現実世界から消した。

影時間――タルタロス
急に地面が揺れ出したことで地震だと思った風花は、次の瞬間、体育倉庫から知らない場所に移動してしまった事で目を丸くしていた。
見えないくらい高い天井、不気味な仮面の装飾が彫られた壁、床や壁には血に見える赤い水溜まりがいくつもあり、光源もないのに周囲は明るい。
ここがどこかは分からないが、風花は近くに落ちていた自分の鞄を拾い上げると、まるでファンタジー映画や小説に出てくる魔法のダンジョンのようだと考えていた。
あまりに非現実的過ぎて思考が追いついてこないけれど、夢にしては質感がリアルで手を抓ってみれば痛みがあるので現実だと思われる。
ただ、現実だとすれば異世界にでも迷い込んでしまったとしか思えず、体育倉庫ならともかくここからどうやって帰ればいいのかと不安を覚えずにはいられない。
(どうしよう、変なところに来ちゃった。移動しないと危ないかな?)
セオリーで考えればこの後は危険なモンスターが現われるはずだ。
となれば風花がいる広間のような場所には二つの入り口があるので、どちらかがハズレでモンスターがやってくるに違いない。
そう考えて立ち上がった風花は恐怖に押し潰されそうになりながらも、どっちがハズレだろうかと考え始める。
現在地から見て右か左か。考えるため右の通路へ向いてみると何やら嫌な予感がする。第六感のようなものかと思って少し集中すれば、不思議と遠くに何か嫌な気配があるような感じで、説明はしづらいがとにかく右側には何か恐い存在がいるらしい事は分かった。
次に反対側の方も見てみると、そちらにも嫌な気配を感じたが右側よりも距離があった。頭の中にボンヤリと浮かぶ周辺の情報も合わせて考えれば左が正解と思われる。
右側の嫌な気配が近付いていることもあって、この場に残るのは危険だと判断した風花は怖々歩き始めると左の通路を進んでゆく。
(なんでだろう……曲がり角の向こうがどうなってるのかなんとなく

分かる……）

風花は武術の経験もなければ勘が良い方でもない。しかし、不思議とこのダンジョンに移動してからはボンヤリとだが周囲の様子が感知出来た。

十メートル先の角を曲がればしばらく直進、直進が終われば十字路に到着し、左は嫌な気配のある部屋に何かが落ちていて、右は直進の先に行き止まり。正面はさらに道が続いて途中に右へ曲がれる道があるなど、よくは分からないが頭の中に立体的な地図が浮かんでくる。

最初は風花も偶然だと思って信じていなかったが、途中からは道がその通りになっていたので、この不思議な場所では魔法のようなものが使えるのだろうかと思うようになっていた。

（これ、すごく便利かもしれない。この嫌な気配が何か分からないけど会わずに済むし）

嫌な気配の正体は分からないが、風花は不思議な力のおかげで遭遇を回避出来ている。

ただ漠然と気配のする方向が分かるのではなく、周辺の地形と一緒に感知出来るので路地に追い詰められたり、挟撃されるような状況になることも避けられるので、戦う力を一切持たない少女にその力は合っていた。

（あ、でも、出口とかが分かる訳じゃないんだよね）

彼女の能力はあくまでソナーのように周辺を感知するだけであり、ここがどこなのか、嫌な気配が何なのかという情報まで自然に頭に入ってくるような類いではない。

見ただけで理解出来る能力だったならあまりの便利さに頼っていただろうが、風花は今の能力でも出来ることはあるはずだと、これまで行なっていなかった天井や床の向こう側へ意識を向けるというのを試してみる。

壁の向こう側が見えているような不思議な感覚には慣れないものの、力はちゃんと効果を発揮して床のすぐ下に別のフロアがあることが分かった。さらに天井の向こうには別のフロアがあり、それによっ

て風花はここが複数のフロアに分かれた立体的なダンジョンであると把握出来た。
（意識をもっと外に広げるように……遠くまで見るように伸ばしていけば……）
いま風花が試したのは自分を中心にほぼ球体に知覚を伸ばしてみる方法だった。ならば次はさらに遠く、もっと広範囲を見るようにゆっくりと把握してどこまで分かるかを試してゆく。
瞳を閉じて地形を把握しようとする少女は、途中で嫌な気配が近付いていたことで中断してまた安全な場所まで逃げてから再度探知を試みるというのを繰り返した。
そして、試す内にコツが掴めてきて敵と仮称することにした嫌な気配の位置を把握しながら探れるようになり、ここが途轍もなく高い塔のような場所で、風花のいるフロアには上に登る階段しかないことが分かった。
登ったからと言って外に出られる訳ではないので、敵から逃げられているうちはここに留まるべきか、それとも行けるところまで移動してみるべきか風花は考え込む。
（外が見える場所もあるみたいだから、降りる階段がないならそこから外壁を……って思ったけど私じゃ無理だよね）
壁伝いに降りていけば敵にも遭遇せず下まで降りられるかもしれない。そう考えた風花だったが自分の非力さと運動神経の鈍さは理解しているため、どうせ途中で手を離して地面まで一直線という哀しい結末に終わるだろうと諦める。
では、結局残るか登るかしかないのだろうかと悩みつつ、風花はさらに塔の周辺の地形も見てみようと思ったとき、あることに気付いて驚愕した。
（嘘っ!?　駅があって、ムーンライトブリッジやポロニアンモールもある……。それじゃ、ここは位置的に月光館学園のままってこと？）
風花は自分が知らない世界に移動したと思っていたが、周辺には自分のよく知る土地が広がっていて、自分のいる塔は学校と同じ場所に存在していた。

ここが学校ということはあり得ない。だとすると、学校の場所に変な塔が建った平行世界に迷い込んだのだろうか。
周り全てが異常ならば感覚が麻痺して異常を異常と認識出来なくなるが、自分の日常の中にある物が異常を囲うように存在していると異常だけが浮かび上がってしまう。
それによって酷く混乱した風花が、もっと何か現状を把握出来るものがないかと意識を伸ばしたとき、街中のある一画に意識の端が触れた途端体中を震えが襲った。
（あっ……なに、これ……こんなの……）
街中を見ていたとき敵と呼ぶ事にした嫌な気配もまばらにだが感知していた。よく観察すると気配にも大きさの違いがあり、その違いは体格ではないとすれば強さのような物だろうかと推測していたのだが、今風花が意識を向けた一画には他の敵を遙かに凌駕する黒く強大な何かがあった。
何も見えない、ある一点を中心に周りの空間までも黒く塗り潰され、街中に大きな空間の歪みや存在の欠落があるような違和感すら覚える。
それはこの世界に自然に発生した異界ではなく、何か力を持った存在が自然と引き起こしている現象だ。あくまで感知能力での視点であって、実際に見ればただ街の一画に何かがいるだけだろうが、もし現場に他の者がいれば重圧にやられ意識を手放すにちがいない。
日常とは異なる世界だとしても、自分の知っている街と同一の場所にそんな得体の知れないモノがいるというのが恐ろしい。そんな事を考えながら風花がその一画を見るのをやめようとしたとき、風花の背筋にゾクリとした悪寒が走った。
（ど、どうしようっ。逃げなきゃっ）
この塔からその存在のいる場所までは数キロ離れている。風花が力を使ったとき塔や街中にいる敵たちは観察しても何の反応も示さなかった。それらの情報から彼女は自分の力が誰にも気付かれずただ遠くを見る能力のように思っていた。
なのに見るのをやめようとした瞬間、どういう訳か風花は強大な力

を持つ何かと目が合う感覚を覚えた。彼女が相手の位置を把握したように、相手にも彼女の位置がばれてしまったのだ。
勘違いと思いたいが街中にいた存在が驚異的な速度で移動を開始した。はっきり調べようとしなくても分かる。相手は真っ直ぐこの塔を目指している。
戦う力を持たない少女はすぐに力を塔内の敵の位置の把握に切り替え、鞄を抱えると迫っている存在から逃げる形で反対方向へ移動を開始する。
そこそこ広いと言っても一つのフロアは学校のグラウンドよりも狭いくらいで、数キロの距離を一気に移動する存在からは逃げられない。それを分かっていても少女は恐怖には勝てず、少しでも可能性があるならと反対側の壁まで辿り着き、どうか来ないでと震えながら祈ることしか出来ない。
もっとも、そんな神頼みが通じるはずもなく、
「きゃあっ」
風花は近付いて来た存在が塔を迂回するように回り込んで自分のいる壁側にやって来たところで死を覚悟し、近くの壁が轟音を立てて吹き飛んだ衝撃で倒れその場に蹲った。
瓦礫の転がる音、濛々と立ち上る土埃、それらに包まれた風花は壁の外にいる存在への恐怖によって動けない。
だが、殺されると思って蹲ったままでいたというのに、いつまで経っても壁の外にいる者は攻撃を仕掛けてこず、顔を上げかけた風花の耳に聞き覚えのある声が届く。
「――――何をしているんだ。こんなところで」
聞き間違いだとも思ったが、壁が壊れてからは何も衝撃が襲ってこず、自分も生きている事から顔をちゃんと上げれば、そこには壁に開いた穴の外で異形の存在と一緒に浮いている湊の姿があった。
一瞬、獣の頭骨を模した頭部を持つ異形の存在に湊が襲われそうになっているのかと疑うも、すぐにその異形の存在自体が彼の力であると理解する。
背後にいた存在を消して塔に降り立った青年は、ポケットに手を入

れたまま歩いて近付くと、状況が分からず顔を上げてから座ったままになっていた風花の脇に手を入れて抱き上げるように立たせた。
いくら身長差があると言っても同級生に〝たかいたかい〟と同じ事をされると恥ずかしい。先ほどまでの恐怖も消えて、色々と考える余裕も出てきた風花は立たせてくれた礼を言いつつ青年にここがどこなのかを尋ねる。
「あ、ありがとうございます。あの、ここってどこなんですか？　それにさっき有里君の後ろにいたモノは？」
「……塔の名前はタルタロス、月光館学園のもう一つの顔だ。そして、さっきのはペルソナという一部の者に目覚める異能。まだ覚醒はしていないがお前も感知能力を一部使っていたろ。タイプが異なるだけで同じものだ」
確かに風花は自分が不思議な力を使えていると思っていたが、系統が異なるにしろ自分にも謎の存在が宿っているのだとすれば妙に納得出来た。
無論、納得出来たと言っても簡単に信じ切ることは出来ないし、あれだけの距離があっても恐怖を感じさせる力を有する湊と自分の力が同じだとは思えない。
それでも答えてくれる青年が無駄な嘘を吐く人物ではないと知っているため、風花はどうして学校がこんな姿になっているのかという疑問も感じつつ、湊の言葉をゆっくりと自分の中に落とし込む。
すると、風花のことを見ていた青年が静かに口を開き、誰もが疑問に思うであろうことを少女に尋ねた。
「今度はお前が質問に答える番だ。どうしてこんな場所にいるんだ？」
「あの、その……森山さんたちに体育倉庫に閉じ込められちゃって……気付いたらこのフロアにいたの」
「……なるほど」
聞いただけで全てを察した様子の青年に、風花はやはりバレていたのかと恥ずかしい気持ちになる。
友達にバレていたことが恥ずかしいのか、閉じ込められた上に訳の

分からないものに巻き込まれる鈍くささが恥ずかしいのか、自分でも恥ずかしさの理由は分からない。
それでも湊は一つも馬鹿にするような素振りを見せず、少しばかり考え込むと再び視線を合わせて話しかけてきた。
「……山岸、これからお前の家に行く。各教科のノートだけ持ってこい。教科書類や着替えは必要ないから、今持っているものとそれだけ持って出てくるんだ」
「え、あの、なんで？」
降りる階段はなかったが彼はここまで飛んできていた。ならば、開いた壁の穴から出て自由に移動することも可能だろう。
帰り方すら分からなかった風花にとって湊の申し出はありがたい。しかし、家まで送って貰えるのは嬉しいが、その後にノートと今持っているものを併せて持って出てこいという理由が分からなかった。
疑問に思って風花が聞き返すも今度の問いに青年は答えず、立っていた風花の背中と膝裏に手を回してお姫様抱っこすれば、彼は風花が思っていたように壁の穴から飛び降り、途中で黒い異形の存在を顕現させると風花の家を目指して飛び立っていった。

深夜――桔梗組
言われた通り家に帰ってノート類を取ってきた風花は、また移動するという青年の言葉に従って抱き上げられ田舎へとやって来ていた。
飛んでいる途中で街の様子は日常へと戻り。その事について湊に尋ねれば、影時間は一日約一時間という返答があってあれは異世界ではなく現実世界の異界化なのだと理解した。
タルタロスに影時間、さらにペルソナなどどうして湊がそんな事を知っているのか聞きたいことは沢山ある。
だが、彼に抱っこされたまま空を飛んで移動し、田舎の小高い山の頂上に建てられた広いお屋敷にやってくれば、彼は風花を地面に降ろしてインターホンを鳴らした。
《はーい》
「俺だ。ちょっと訳ありを連れてきた」

待っている間目の前の門などを観察していれば、随分と立派な家だなと風花は以前部活で行った旅館を思い出したが、インターホンから女性の声が聞こえて二、三回やり取りをすれば小さな戸が開く。
そこから顔を出したのは風花もよく知る赤髪の少女で、相手がいることからここが彼らの現在の実家なのだと察した。
「あの、こんばんは」
「……拾ってきたの？」
「タルタロスに落ちてたからな」
「そう。珍しいとこにいたわね」
こういうときにどう言葉を交わせばいいのか分からず、風花はとりあえず夜の挨拶をしてみたが、髪を下ろして着物を着た少女はジッと風花を見つめてから湊と会話して完全にスルーされる。
二人の会話の内容からするとチドリも彼と同じく影時間に関わることを知っているようだが、とりあえず門の前で立ち話もなんだからと中に通され、これまた大層な平屋の日本家屋が建っていたことで風花は二人が良家の子なのだとはっきり認識した。
「立派なお屋敷だね……」
「そう？　ただ古いだけだと思うけど」
風花からすれば立派なお屋敷だが、昔から住んでいるチドリにすれば古くさいという印象しかないらしい。別に嫌っている訳でないようだが、この家を建てると決めた人が聞けば泣かれそうな意見だ。
中に入って石畳を歩き、母屋まで案内されながら風花がキョロキョロと物珍しそうに眺めていれば、玄関に入ったところで二人の保護者である桜が出迎えてくれた。
「いらっしゃい。えっと、山岸さんでしたよね？」
「はい、山岸風花と言います。あの、実は何で連れて来られたのか分かってないんですけど」
「そうなの？　みーくん、どうして山岸さんを連れてきたの？」
湊と風花が出会ったのは偶然で、だからこそ突発的に連れてきた理由を家人の桜たちも把握出来ていない。
理由を知っているのは彼だけなので、どういった考えからそうした

のか答えを待っていると、
「……しばらくここに泊める。携帯の充電はしてもいいが電源は点けるな。学校にも両親にも連絡しなくていい」
目的は分かっても意図を理解出来ない返答をしてきたことで、口にした本人を除く全員の頭に疑問符が浮かんだ。
泊まるなど一言も聞いていなかった風花など目を丸くして驚いており、別に急だろうと泊めることは構わないと思っている桜ですら、せめて詳しい説明をして欲しいと改めて聞き直す。
「あのね、そうしようと思った理由を教えて欲しいの。山岸さんも驚いちゃってるから」
「同級生からの苛め、自分のコンプレックスを子どもに押しつける親、そういった周りの環境に山岸自身が対処出来ていない。一度距離を置いて考える時間を作るべきだと思った」
直前まで驚いていた風花は、一切包み隠さぬ彼の言葉を聞いて複雑な表情となり俯く。
友達に苛められている事を知られるのは辛いだろう。さらに家庭にまで問題があるとなると萎縮してしまい。見ていたチドリや桜はそれだけで彼の言葉が真実だと分かった。
「それに影時間のこともある。山岸はもうペルソナを出せるレベルまで適性が出ている。どうするかは本人次第だが、能力の使い方も含めて教えておいた方がいい」
「……分かった。とりあえず、時間も遅いしお風呂に案内するわ。荷物は居間にでも置いてついてきて」
距離を置いて考える時間を作るべき、青年がそう言ったからには風花はまだ考えるだけの余裕は残っているのだろう。
滅多なことを考えるほど追い詰められていなくて良かったと思うと同時に、その段階で少女の前に彼が現われたことは運命の導きに違いないとも思える。
神という存在をあまり信じていないチドリですらそう考え、桜も複雑な事情を抱える風花のことをちゃんとフォローしてあげようと視線で訴えてきたため、とりあえず今日は疲れているだろうからとチド

リは少女を風呂まで案内した。

第二百九話　風花の田舎暮らし

深夜――桔梗組

泊まるには少なすぎる荷物を置いた風花はそのままチドリに風呂に案内され、旅館並みの広さを持つ脱衣所にまず驚いた。

小さな内風呂もあるとの事だが普段から使っているのはこちらで、広い分掃除も大変なのが悩みだという庶民には理解出来ない愚痴を聞きつつ、後で着替えやタオルは持ってくるからと風呂で使うタオルだけ受け取り扉を開ければ、そこには高級旅館だと見紛うばかりの温泉が濛々と湯気を立て存在していた。

本当にこんな豪華な場所に住んでいるのかと疑いを持ったが、温泉に浸かれば様々な悩みは全て吹き飛んでリラックス出来、チドリの肌の綺麗さはこれが理由だったのかと思わず納得したほどだ。

そうして、思わぬところで温泉を満喫した風花は、脱衣所に置かれていた新品の下着と浴衣を借りて、湊たちの待っていた居間に戻った。

「あの、お風呂ありがとうございました。お家に温泉があるってすごいですね」

「フフッ、お風呂はうちの自慢の一つなの。内風呂も外と同じ天然の温泉を引いてて、その他の生活用水は井戸水を汲み上げてるから、喉が渇けば蛇口からごくごく美味しい水が飲めるのよ」

お風呂上がりで頬を上気させた風花に扇風機の近くに来るよう言って、桜は相手にお茶を入れつつ我が家の自慢出来る部分を話す。

温泉も井戸水も鵜飼の趣味と身体の弱い桜のことを考えた設備であり、おかげで桜もチドリもそれほど気を遣わずとも美容にいい暮らしが出来ているのだから、美容にも興味を持っている少女としては素直に羨ましいですと笑みを漏らした。

どこか似た雰囲気のある風花と桜がそんな風に和やかに会話していれば、待っていた湊が入れ替わりで風呂に向かう。

それを目で追って相手がいなくなったことを確認したチドリは、小さく嘆息してから携帯を取り出すとラビリスに電話を掛け、家で心配

している少女に湊がこちらに泊まる旨を伝える。
　どうして湊ではなくチドリが電話するのか風花は不思議に思ったが、よく考えれば湊は変なところで適当な人物だ。そのため、別に一日くらい連絡しなくてもいいだろうと考え、相手が家で心配して待っているとも知らず連絡を入れないなんて事もしょっちゅうだからこそ、急にこちらに泊まることが決まればチドリが連絡することにしているらしい。
　友人らのちょっと不思議な家でのやり取りを見ていた風花は。湊がいない間に持ってきた荷物が本日の授業の用意そのままと追加した全教科のノートだけであることを先に話しておくため、鞄を持ってくると中身をチドリと桜に見せた。
「あの、実は泊まる用意とか何も持ってきてなくて。行き先も聞いていなかったし、荷物は今日の授業の用意とノート類だけなんです」
「……それで良いんじゃない？　湊は多分あなたが行方知れずになったと偽装するつもりみたいだし」
　そも、風花は今日だけ泊まるものだと勘違いしているようだが、湊が連れてきた時点でチドリたちは数日ここで風花を匿うものだと思っている。
　着替えや学校の用意全てを持ってきていれば家出と怪しまれるため、湊も風花に失踪した日の学校の用意以外はほとんど何も持たせなかったのだろう。
　けれど、湊の考えをあまり理解出来ていない風花は、行方知れずになったと偽装するには学校に行ったらばれてしまうのではと疑問を持ち、もしかして行ってはいけないのだろうかと心配そうな表情を浮かべる。
「え、でも、学校はどうしたら……」
「分からないけど、誰にもバレずに授業だけは受けられるんじゃない？　そうじゃなきゃノートを持ってこいとは言わないでしょうから。ああ、教科書と資料集は湊が貸してくれるわよ」
　学校を休めると聞けば普通の子なら喜ぶ。別に学校が嫌いだからではなく、好きに自分の時間を過ごせるとして喜ぶのだ。

その点、真面目過ぎる風花はズル休みは気が引けてしまうようだが、湊がノートを持ってこさせたのなら、リアルタイムか録画で彼女も授業を受けられるよう取り計らうつもりに違いない。
湊のマフラーの中には不思議な道具が入っているし、ペルソナに便利な固有スキルを持っているものもいるので、出席を諦めることにはなっても授業を受けることは安心してくれていい。
チドリがそう話して風花の心配を取り除こうとすれば、二人が話している間に布団の用意をしていた桜も戻ってきて、どうして湊が風花をここへ連れてきたのかを改めて語った。
「みーくんは山岸さんが考える時間を作ろうとしているんだと思うの。誰も貴女がここにいるとは思わないし、ここでならゆっくり過ごせるでしょうから、ちょっとだけお休みして心の整理を付けていきましょうね」
娘を通じて己の劣等感を晴らすためか両親たちに家では厳しく言われ、学校では森山たちからいじられ日に日にエスカレートしていく毎日。これでは本当に心が安まる時など無いだろう。
人を見るのが得意な桜からすれば風花の限界は近い。大人しい彼女が爆発しても周囲への被害はないだろうが、一時期の湊のように心が壊れてしまう恐れがあった。
心が壊れるというのは人が持つ一種の防衛機能。生命活動を行なう最低限の機能だけを維持し、自身を破滅させる可能性を持ったシステムを司る意思の部分だけストップさせるのだ。
それによって自分で動くことは出来なくなり他者の助けを必要とすることにはなるが、自分の命を守ることだけは出来る。
もっとも、ここへ連れて来られた時点で風花の運命は変わった。チドリや桜にも伝えた事で、今後彼女が森山たちから何かされそうになれば湊は表立って動くことだろう。全てを裏で済ませてしまう事も出来るが、風花が人のいる場で何かされそうなら湊は相手を社会的に殺す。
そうならないようチドリもラビリスに事情を話して湊の動きに警戒するが、今日はもう時間も遅いのでとりあえず寝室に移動しようと

チドリは立ち上がり、荷物をまとめていた風花に声をかけた。
「じゃあ、寝室に案内するわ。とりあえず、今日は私の部屋にするけど明日からは客間を用意するから」
居間を出て長い廊下を進み奥まで行くと、桔梗組で数少ない洋室であるチドリの部屋に到着する。
そこには既に風花用の布団が敷かれており、机の傍に荷物を置くように伝えると、チドリはベッドへ座り、風花は自分にあてがわれた布団に腰を下ろした。
初めてくる友人の部屋に風花は感心したように見渡しているが、整理整頓された室内を見ても楽しくないだろうとチドリが思っていると、風花が突然小さく笑って話しかけてくる。
「ふふっ、お友達の家にお泊まりって少しワクワクするね」
「……私は実家だからなんとも言えないけど」
風花にとっては友人の家にお泊まりだが、チドリにすれば自分の空間に他人が一人いるだけである。
昔のチドリならば湊と桜以外の他人が部屋にいれば嫌がっただろうが、風花とは既に親しい友人という関係であるため、気にした様子もなく目覚ましをセットしてから携帯をいじる。
それを見ていた風花は湊と約束したので電源は点けられないが、充電だけはしておこうとコンセントを借り、充電コードと携帯を繋いだところで気になっていた事を尋ねた。
「ねえ、チドリちゃん。チドリちゃんもペルソナとか影時間を知ってるの？」
「ええ、湊と出会ったのもそれが理由だから」
二人の出会いに関係していると言うことはおよそ十年前からということになる。それほど昔から関わっていると思わなかった風花は思わず驚くも、チドリもまた湊に助けられたのだろうと心の中で納得し、知っているのなら教えて欲しいと青年について抱いた疑問を口にした。
「あの、助けて貰ってこういうのもなんだけどね。私、影時間に会った有里君が怖かったの。タルタロスってところにいた敵よりも、もっと

暗い何も見えない気配を街中で感じて、それに意識を向けたら逆に気付かれてやってきたのが有里君だった」
「……感知型には種類がある。貴女の場合は知覚を広げていくタイプなのかもしれないわね。それだと感知型なら〝触れられた〟と気付く場合があるから、逆にハッキングされることも警戒しないといけない」
かもしれないとチドリは言ったが、実際のところ自分の予想は当たっているとほぼ確信していた。
同じ感知型でも種類があり、その中で最も多いと思われるのが自分の知覚をソナーのように広げて、それに触れたものを感じ取るというタイプなのだ。
チドリも美鶴もアプローチの方法は異なるが系統は同じ。そして、風花も意識を向けて気付かれてしまったのなら同じはず。故に、そのタイプが注意しておかなければならない点を説明しつつ、ただ一人別系統の感知型能力を持つ青年についてはあえて隠して話を続ける。
「……貴女が湊を怖いと思ったのは実力差が大きいから。あれは世界のバグ、自称なんてふざけたことを言ってるけど間違いなく最強のペルソナ使いよ。そこらの雑魚シャドウじゃ千体集まろうと敵じゃないもの」
「そ、そんなにすごいんだ」
風花は実際にシャドウを見ていないので強さの基準が分からないが、それでも千体の敵に囲まれても勝てる場面を想像すればすごいというのは理解出来る。
ここへ運ばれる間も彼は自由に空を飛んでいたため、塔の外壁を簡単に破壊したことも含めて戦闘力が高いことは確実。自在に空を飛びながら地上の敵へと目掛けて攻撃を放つ彼を想像し、自分の知り合いが悪い人でなくて良かったと風花は思った。
「ねえ、これからもっとペルソナとかについて聞いてもいい？　タルタロスとか影時間とかよく分からないけど、私も関わって行かなきゃいけないんだよね？」
「関わり方は貴女次第。だけど、当面はそうね。影時間を終わらせる

方法も分からないし、自分の身を守るためにペルソナくらい呼べるようにした方がいいわ」
「私も何か出せるようになるの？」
「実際に能力を見てないから分からないけど、呼ばずに能力を一部使えているなら簡単だと思う。まぁ、慣れるまでは怖いかもしれないけどね」
　風花はまだ一般のペルソナ使いが召喚する場面を見ていない。湊は何もせずペルソナを呼べるので参考にならず、彼女もどういった風に召喚するのか想像もしていないだろう。
　チドリの召喚器は湊がくれた特別な品なので貸せないが、まだ古い召喚器は残っているし湊も特別課外活動部のコピー品を持っている。
　もし、彼女が召喚方法を聞いて実物の召喚器を見ても練習に乗り気ならば、それらを彼女に貸してやればいい。相手の大人しい性格から考えれば、引き金を引くまでに時間が掛かりそうではあるものの、落ち込んでいた彼女が新しい事に挑戦することにやる気を見せるなら、自分は湊のフォローも兼ねて相手の背中を押すだけだとチドリは応援する立場を取ることに決めた。
「じゃあ、明日からお願いします」
「……分かる範囲だけね」
　明日からと言っても実際はチドリは学校にも行くので放課後になる。しかし、風花がどうやって授業を受けるのかまだ方法を聞いていないので、そろそろ風呂からあがったはずの湊を呼びに行こうか考えたとき、控えめなノックの音がして湊が部屋に入ってきた。
「……明日の着替えを持ってきた」
「あ、わざわざありがとうございます」
　風呂上がりで下ろした髪を緩く布紐でまとめた湊は、その手に風花の着替えを持っていた。
　受け取った風花は広げてサイズを確認しつつ、湊が持ってきたという事はチドリの服では無いのだろうかと少女の方を向く。
　すると、チドリは自分のではないと答えるように首を横に振り、風花の持っている服が彼女に似合いそうな大人しめながらも可愛らし

い花柄のワンピースで、湊の服装のセンスが増している事に気付いた。
「随分と可愛いのも持ってるのね」
「まぁ、デパートがそのまま入ってると思ってくれて良いからな」
服に限らず湊のマフラーには大量の物が入っている。それこそデパート並みの品揃えで、仮に天変地異が起きて世界中が飢餓に見舞われようと、家族を養うのに余裕で数年は保つだけの蓄えがある。
現在、風花が身に付けている新品の下着も湊のマフラーに入っていたものであり、中に食材から兵器まで何でも揃っていると知っている少女は準備が良すぎる青年に呆れ顔を浮かべるが、服を届け終わってもまだ湊が残っていたことで、明日のことを説明しないのなら何故帰らないのだろうかと不思議に思う。
「そろそろ寝るけど、まだ何かあるの？　もしかして夜這い？」
後半はちょっとした冗談である。まぁ、去年のクリスマス以降、彼だけがこちらに帰ってきたときは、桜たちに気付かれぬように細心の注意を払いつつ一夜を過ごしては、実は桜にだけはバレているという事を繰り返しているのはここだけの話だ。
とはいえ、いくら何でも家庭環境といじめ問題で精神的に弱っている少女を放り出し、家族だけでなく友人も同じ屋根の下にいる状況で隠れていたす勇気はチドリには無い。
何より、今日はそういう雰囲気ではなく、湊は不明だがチドリは学校に行くので夜更かしも出来ない。
そう思って相手からの返事を待っていれば、湊は形状を変えて帯にしていたマフラーに手を伸ばし、掌サイズの紙箱を二つ取り出して、ベッドと布団に座る少女らそれぞれの前に落ちるよう放り投げた。
彼が投げてから紙箱が落ちるまで目で追っていた少女たちは、最初はそれが何か分かっていなかった。しかし、自分のすぐ傍に落ちてパッケージが見えた瞬間、もう一人の少女に見られてはいけないと急いで手を伸ばす。
「ちょ、ちょっと湊！」
「あ、有里君っ！」

二人が手に取りパッケージを隠しながら青年に文句を言ったのはほぼ同時だった。
彼が投げた紙箱の正体、それは彼の会社で作っている避妊具。青年と肉体的な関係を持っている二人は当然それを見たことがあったので、こういった物を何も知らないはずの友人の目に入ってはマズいと思ったのだが、互いに全くの同時と言って良いタイミングで隠したことで、〝何故、貴女がそれを慌てて隠すの？〟という疑問が湧き、次いで彼が口を開いた事で全ての事情を察する。
「……こっちに泊まるときはそういう約束だったろ。それに治療行為って言っていたのに山岸には最近してやれてなかったからな」
「い、色々と聞きたいことだらけだけど、貴方それ正気で言ってるの？二人じゃないのよ？」
「え？　ええっ!?　も、もしかして、今からその、そういう事をするつもりなんですか!?」
チドリに対してはここ最近のお決まりであるため、風花に対しては記憶から感情を抜いて以降は会う時間がなくそういった行為をしていなかったため、湊は二人が揃っているので丁度良いと考えていた。
けれど、少女らにとっては回数を重ねた今でも恥ずかしさが残っているというのに、友人も一緒となれば恥ずかしさはこれまでの比ではなく、今後の付き合いを考えると気まずくてしょうがない。
何より、青年が自分の目の前で他の女を抱くのを目にすれば、絶対に嫉妬してしまうので、友情にヒビが入るという意味でも全力で遠慮したかった。
だが、少女らが不安を抱く理由が、人数が増えることで満足出来なくなるためだと思った青年は、感情の読めない金色の瞳を二人に向けながら指をバキバキと鳴らして拳を握ってみせる。
「大丈夫だ。一線は越えてなかったが多人数相手は訓練で経験がある。まかせろ」
「心配はそこじゃない！」
「心配はそこじゃありません！」
何をトンチンカンな事を言っているのか。風花ですらちょっと怒

り気味に声を荒げ、彼から距離を取るためベッドに待避してチドリの背後に隠れる。
そして、チドリも余程の事が無い限りは見せない真剣な表情で彼を睨み、ハッキリと拒絶の言葉を吐いた。
「出て行って。じゃないと大声出して桜を呼ぶわよ」
「……今、この部屋は別の時の流れにある。どれだけ大声を出しても外には届かない」
「もっとマシなことに能力を使いなさいよ！」
桐条鴻悦が求めた時を操る神器の一つの答え。それがこんなくだらない理由で使われるとは神でも思うまい。そして、青年の主治医であるシャロンがこの能力の使い方を聞けば〝このお馬鹿〟と青年の頭を叩くことだろう。
彼の細胞は全て不死化して分裂回数のリミッターが解除されている。しかしそれは、いつ癌細胞化しておかしくない状態であり、薬が効かない彼が癌に冒されればすぐ全身に転移して死に至るのだ。
よって、肉体への影響が未知数な時流操作とファルロスによる蘇生や治癒は行なうなと厳命されているというのに、青年は誰かを抱くときにはほぼ確実に時間を引き延ばすため使用していた。
理由は彼の体力ならば朝まで交わろうと問題ないのだが、相手の体力を考えると休む必要があるからだ。なるべく時間を圧縮して長い時間を過ごし、解除してから相手をしっかりと休ませる時間を確保する。
そんな風に彼なりに気を利かせた能力の使い方だったが、それは同時に外界からの隔離を意味し、助けを求めたかった少女らにすれば逃げ場がないという死刑宣告に近かった。
『――――――っ』
これから自分たちがどうなってしまうのか恐怖に怯えた少女たちは、逃げようと決意を固めるも彼の背中から現われた黒い影の腕に身体を拘束されてしまう。
彼の使う蛇神の影は尻尾や触手のような形状にも出来るのだが、ここで腕型にしたのは少女たちへの配慮だろうか。

しかし、形状がなんであれ捕まった事実は変わらない。ゆっくりと近付いた青年は立たせた少女らの帯を解くと、はだけた襟元からするりと腕を入れて少女らの肌に触れる。
優しく触れられるだけで身体が熱を帯びていき、敏感な部分に触れられたときには声が出そうになるが、すぐ傍に友人がいることで唇を噛んで我慢する。
そうして、快感と羞恥に身を悶えさせ、顔を真っ赤にして声を我慢しなければならない生き地獄を少女らが味わいながら、三人の夜は更けていった。

５月２９日（金）
早朝――温泉
時刻は朝の五時半、まだ僅かに星が見える薄暗さだが、そんな時間に温泉に浸かっていた青年の両隣には彼に身体を預けるように座る少女たちがいた。
午前一時頃から始まった行為は、圧縮された時の中では五時間以上、現実世界の時間にして二時間ほどで終わった。
まだまだ余裕という態度で煙管をふかしていた青年に対し、二人で一人を相手にしたにもかかわらず少女らは足腰が立たなくなり、学校にも行くチドリにとって三時から寝た程度では回復しないということで、さらに圧縮した時間の中で六時間ほど休ませて貰い、ようやく現実世界の時の流れに戻ってきて汚れた身体を綺麗にしたという訳だ。
行為が進んで行く中、途中からトランス状態にでもなっていたのか、少女たちは恥ずかしく思いながらも友人の前で青年の唇を貪ったり、相手の上に跨がって乱れたりしてしまったが、休んで少し頭が働くようになれば気まずさしかない。
全ては温泉に浸かりながらリラックスしたように夜明け前の空を眺めているこの男が悪いのだが、彼の両手が少女らの腰に回され足を撫でていても反応しないあたり、少女たちもまだまだ本調子ではないようだ。

何より、異常な状態だったことでいつも以上に興奮していたのは事実で、それは自分の性癖や性格によるところだろうという自覚があるため、少女たちは青年だけを責めることが出来なかった。
ただ、それでもこれだけは聞いておかなければとチドリは身体を離すと青年を見つめ、しっかりとした口調で彼に問いかけた。
「ねぇ、泊めてる間は毎日こんなことするの？」
「……いや、俺は帰るぞ」
「……そう、それならいい」
流石にこれから毎日では身体が持たない。そう思っていただけに、青年の答えを聞いたときにはチドリだけでなく風花も安堵の息を吐いた。
そも、青年以外は先ほどまでの行為が異常だと認識している。恋人同士だろうと高校生で経験するだけでも早いというのに、付き合ってもいない男女が三人で行なうなど……。
彼がこういった事を異常と思わないのは、裏の世界で生きていく中で必要になるかもと様々なスキルを習得していたせいだが、裏の仕事をやめたのなら正しい情操教育を桜や英恵から受けた方が良いように思う。
無論、今回の件を理由として説明することは出来ないけれど、彼がこの先誰かと恋人になって結婚するときの事を考えれば、青年を正しい道に戻すのは早い方がいいに決まっている。
出来るだけ早い内に湊にとっての母親である二人のどちらかには伝えておこうと思いつつ、そろそろ上がろうとチドリが立ち上がれば、風花と湊も一緒にあがることにしたようで、タオルで一応身体を隠しつつ彼女に続いて脱衣所へと戻ってゆく。
まだ早い時間なので出来る限り静かに引き戸を開けるとそこには、
「――――三人とも、着替えたらリビングに来てね」
ニッコリと微笑む桜が背後に荒ぶる炎のオーラを揺らめかせ立っていた。
＊＊＊
あの後、身体を拭いて髪を乾かし、着替えた三人がリビングに行く

とテーブルのところに三枚の座布団が敷かれ、向かいの席に厳しい表情の桜が正座して待っていた。
彼女が怒っている理由など考えなくても分かる。愛し合う二人が若さ故の過ちで同意の上からそういった行為に及ぶのならある程度は目を瞑るが、いくら何でも三人でそういった事をするのは倫理的に認められないという事だろう。
諌めることや軽く注意することはあっても、桜がこのようにハッキリと怒っている様子で説教しようとする事は殆ど無い。
それだけに普段とのギャップから余計に恐ろしく感じて少女らがビクビクしながら青年を挟むように座れば、桜は凜とした態度のまま口を開いた。
「三人とも私が何を言いたいか分かる？」
『……はい』
「……いや」
反省して落ち込んだ様子の二人に対し、青年だけは本気で分かっていない様子で首を傾げる。
その瞬間、少女たちは嘘でもいいからここは「はい」だろと彼の頭を叩いてやりたかったが、特殊な育ち方をしているせいで感性がずれている青年が相手だけに、桜の方も相手が開き直っている訳ではないと分かって困った顔をしている。
怒っているのがイリスであれば、ずれている青年だけ後回しにして少女たちに若い頃から歪んだ性愛を経験すると苦労するぞと諌めるのだが、残念ながら桜は身体が弱いことと極道の一人娘であったことで彼氏がいたことすらなく、大学院を出てすぐに二人の母親になったのでそちらの経験はない。
よって、人生経験の豊富な先輩としてのアドバイスや説教は出来ないのだが、ここは改めて一般的な倫理観や道徳の方面から攻める事にしたらしく、キリッと表情を引き締めると言葉を続けてきた。
「あのね、まだ高校生とはいえ身体は出来ているから、若さが暴走してそういった行為に及んでしまう事もあるとは思うの。褒められた事ではないけど、ちゃんと二人が互いを想ってするなら、しょうがない

とも思うから私も止めないわ」
言って、勿論避妊等の最低限のことをちゃんとした上でならと付け加える。
子どもは大人が考えている以上に成長しているもので、親も常に相手に目を届かせることは出来ないため、暴走するくらいなら条件を守った上である程度は認めた方がいいという判断だ。
門限から男女交際のルールまで、ありとあらゆることを決めて子どもをコントロールしたがる親と比べれば、桜は子どもの意見も聞いてくれるので子どもにしてもありがたいだろう。
しかし、いくら子どもたちの自主性を認めると言っても、流石に限度があると彼女は言葉を厳しくする。
「でも、今回のあなた達の行為はそうじゃないわよね？　みーくんが二人と同時に付き合っているなら、それはそれで問題だけど特例として認めなくもないわ。だから聞いておきたいのだけど、あなた達の関係はどうなっているのかしら？」
湊の器量があれば複数人と付き合うくらいはありそうである。女子の方もそれでもいいからと付き合いたがる可能性があるため、親としては複雑だが恋人関係を認めなくもない。
よって、正確に状況を把握するためにも、現在の彼らをとりまく関係がどうなっているのか桜が尋ねれば、場の空気に取り込まれていない湊がさらりと答えた。
「山岸とはカウンセリングとして行なってる。チドリとは帰ってきたときの約束だからしてる」
「か、カウンセリング？　えっとぉ……山岸さんはもしかして依存症とかなのかしら？」
「ち、違います！　その、えっと、前に間違って有里君としてしまって、それから精神安定剤と同じ効果があるからってたまに誘われて……」
カウンセリングと聞いて思い浮かぶのはスーツに白衣と眼鏡を装備した湊が、診断と称して診察室のベッドに風花を押し倒す光景。
一部の層にはウケること間違い無しのシチュエーションだが、もしかして性依存症なのかなと尋ねて返ってきた言葉を聞いたとき、桜は

湊がとんでもないことをしてしまったのではと険しい顔になる。
「みーくん、山岸さんに何をしたの？　事と次第によっては英恵さんも呼んで怒ってもらうよ？」
「ち、違うんです！　間違ってっていうのは私の勘違いが原因で、その、寝ている間にされてしまったと思って、ならせめて思い出に昇華させて欲しいって頼んだんです」
　勘違いで純潔を散らすことになった自分の初体験を話すのは恥ずかしいだろう。風花は顔を真っ赤にして涙目になりながらも、しかし、彼の名誉を守るために勇気を振り絞ってあの日のことを話した。
　けれど、哀しいことに風花の言葉は重要な部分が抜けていて要領を得ず、桜だけでなくチドリも首を傾げていると、湊が淡々と補足で説明を加える。
「前に貧血で倒れた山岸をホテルに運んだんだ。近くに寝かせて休ませる場所がなかったからラブホテルになってしまったが、寝ている間に俺がシャワーを浴びてきたことで勘違いが加速し、後は山岸の言った通り。精神安定剤というのも人との接触が安心感をもたらすという話で、色々と悩んでいた様子の山岸に一線を越えたなら深く悩まずカウンセリング感覚ですればいいと言っただけだ」
「……みーくん、もう少し一般常識のお勉強しようね。お医者さんとしての判断じゃなく、高校生の視点でも物事を考えられるように」
　彼が闇医者として働いていることを知っている桜としては、その知識と技術の高さは認めるものの、もう少し普通の子どもらしさを持って貰いたいと思わずにはいられない。
　人と異なる感性を持つ彼だからこそ救える者もいるのだろうが、デリケートな恋愛関係の話になれば彼の考え方は基本的にマイナスにしか働かない。よって、彼にちゃんとお勉強していこうと伝えれば、桜は気を取り直して話の通じる少女たちを大人として諌めた。
「事情は分かったけど、これからはこんな淫らな事はしちゃダメよ。その、みーくんが色んな女性とそういった関係を結ぶのは敢えて目を瞑るけど、ちーちゃんと山岸さんは自分がとっても価値のある女の子だって自覚を持って、相手が素敵な男の子でもどんどん条件を出して

超えてくるまで許しちゃダメ」
　条件という高いハードルを超えてでも恋人になりたいという意思のある者でなければ、とても可愛い自慢の娘とその友人である少女たちには釣り合わない。
　だからこそ、かぐや姫気分で無理難題をふっかけろと桜は口にしたのだが、話を聞いた少女たちは同時に青年の方を見て、桜も彼なら簡単に条件をクリアしてしまいそうだと納得しかける。
「ああ、うん、みーくんが相手の場合は頑張って突っぱねて。簡単に許すような安い女じゃないって」
「でも、能力で身体の自由を奪われたら無理だし」
「うん、黒い腕で手足を捕まれて動けなかったもんね」
　同意の上だと思われた行為は実際のところ青年の独断であった。少女らの証言でそれを知った桜は完璧に作られた笑顔を見せると、少女たちに部屋に戻るように伝え青年だけをリビングに残し、丁寧に丁寧に何度も繰り返してしてはいけないことを教え込んだ。
　また、この件を英恵にも伝えられ、青年はそちらでも長い説教を受けることになるのだが、それはまた後の話である。
＊＊＊
　早朝の説教も終わりチドリの部屋の換気や片付けが全て終わると、桜と子どもたちは一緒に朝食を食べていた。風花はこのまま家に残るので湊から受け取った私服のままだが、チドリと湊は制服姿になっており、食事を続けながらチドリは風花の授業について尋ねる。
「それで、この人の授業はどうするの？」
「……流行りの通信授業だ」
　言いながら彼はマフラーに手を入れて大きなテレビを取り出すと、それを近くのコンセントに繋いで電源を入れる。
　それを眺めていた三人は、いよいよもって彼のマフラーが猫型ロボットのポケットに思えてならなかったが、湊がその国民的アニメを知らない可能性が高いため、あえて何も言わずに画面を見てみるも何も映らない。
　無論、出入力のコードを差していないので映像は何も映らないのは

当然だが、湊が見ておけと言って素直に少女らがさらに見ていると映像が流れ始めた。
それは今彼らのいる部屋を上から見た映像で、どうしてそんな物がと上を見てもカメラなど存在せず不思議でしょうがない。
試しにチドリがカメラのあるであろうポイントにハンカチを投げてみるも、映像は乱れることなく映ったままで、どういった技術なのか疑問に思った風花がそれを聞いた。
「あの、これってどうなってるんですか？　見えないカメラでもあるのかな？」
「……このモニターはある技術を応用して俺の能力の受信機として開発したものだ。映っているのは俺の能力で見ている光景で、カメラワークに制限がないから結構自由な角度で見れる」
モニターは未来的な技術を多数内蔵したEデヴァイスの一部機能のみを使えるようにと、現代の技術と素材で再現した劣化コピー品だったが、湊の能力の受信機としては正常に稼働しており。
青年は何もしていないというのに、まるで撮影用のラジコンヘリが移動しているようにカメラの視点を動いていく。
テーブルの周りを見ていたと思えば地面すれすれになったり、そこから少し上を向いたときに立っていたチドリのスカートの中が映りかけて青年が蹴られたりもしていたが、音声も聞こえてズームも自在だと分かって、これなら遠隔授業も完璧だと風花はちょっとした感動を覚えた。
家に置いてきてしまった教科書や資料集も全教科分を湊が出してくれたので、これで問題なく授業も受けられると安心する。
もっとも、親にも黙って学校を休むのは気が引けるのだが、風花自身、自分がとても追い詰められていたことは分かっているので、ペルソナなど影時間に関わることを教えて貰ってから帰ってもいいだろうと思うようになっていた。
そういった少女の心境の変化はとても大切で、両親や森山たちのとの関係はともかく、自ら命を絶つような危うさからは離れている証でもあった。

かなりのショック療法ではあったが、湊が二人同時だろうと風花を抱いたことにも意味はあったようで、食事を取り終えた湊は見づらかったらモニターに話しかけるように言ってからバイクのタンデムシートにチドリを乗せて登校していき。

それを見送った風花は世話になる代わりにと片付けを手伝い、桔梗組での生活をスタートしていった。

第二百十話　騒ぎと訓練

５月３０日（土）
朝――月光館学園
生徒たちが丁度登校してくる朝の時間、月光館学園高等部の正門前では人だかりの出来る騒ぎが起きていた。
後から来た者たちは何があったんだと先にいた者たちに尋ね、どうやら生徒が一人倒れていたらしいと話が広がってゆく。
件の人物と思われる女生徒の傍には教師たちが集まっており、少しすれば救急車が到着して学年主任の教師が付き添い運ばれていった。
朝からそのような光景を目にした生徒たちは「すごかったね」「怖いね」と口々に語っているが、そんな中で顔を青くしながら救急車の去って行った方角を見ていた少女が一人いた。
明るい茶髪に意図的に焼いた小麦色の肌、派手なメイクにつけ爪やアクセサリーを多数付けた、所謂ギャルと呼ばれるタイプの少女の名は森山夏紀。
彼女は湊やチドリと同じＥ組に所属する生徒だが、その風貌もあって周囲から不良と呼ばれるタイプの生徒とばかりつるんでいて、他のクラスメイトとはほとんど交流していなかった。
そういった理由もあって顔色の悪い彼女に誰も声をかけていなかったが、救急車が完全に見えなくなった事で移動しようとした森山の傍に目立つ青年が一人立っており、相手が眼帯を付けていない左眼で森山を見ていた事で、不意を突かれる形になった森山はビクリと肩を揺らしてから相手に何か用かと突っかかっていく。
「なんか用？　デカい図体で傍にいられるとジャマなんだけど？」
「……お前は最後だ」
「はぁ？」
一体何の話なのか。相手とまるで話した事のない森山は言葉の意味が理解出来ず首をかしげ、天才と周囲から持て囃されるだけあって変人なのかと冷たい目を向ける。
すると、話はそれだけだというかのように青年は去って行ってしま

い、後に残された森山は言葉の意味への疑問だけが残って不完全燃焼に終わる。
訳が分からない変人の相手など今後することはないと思われるが、これまで自分とは相容れないタイプの人間だと思っていた湊に対し、今日の出来事で余計に不信感が大きくなったことで、森山は湊に近付かないでおこうと心に決めて校舎へ向かってゆくのだった。
＊＊＊
女子テニス部に入部した七歌が朝練を終えて教室にやってくると、クラスは校門前で倒れていた生徒の話題で持ちきりだった。
七歌が来たことに気付いた順平が手を上げて挨拶し、朝練のときに倒れていた少女を見たかと聞かれたため首を横に振って返すと、相手は期待が外れて惜しそうな顔をしていたので、ここまで話題になったことに疑問を感じていたこともあり、七歌はこれまでどの程度の情報を集められたのか聞いてみた。
「順平はどれくらい知ってるの？」
「ん、気になる？　気になっちゃう？　まぁ、倒れてた理由とかは又聞きだったりで信憑性はビミョーなんだけど、とりあえずウチの学年の女子みたいよ」
同じ学年であってもクラスが違えば一度も会話したことのない相手もいる。七歌の場合、四月に転入してきたばかりなので余計に知り合いがおらず、順平が倒れていた生徒のクラスと名前を教えてくれてもピンとこなかった。
少女のそんな様子を見た順平は自分もそうだと笑ってフォローを入れ、時間潰しも兼ねてここまで聞いた倒れていた理由をいくつか話し、その中では持病や急性アルコール中毒が一番あり得るかなと個人的見解を返す。
そんな風に二人が話していればゆかりも登校してきて、何やら疲れた様子だったことで何かあったのかと声をかけた。
「疲れてるっぽいけどどうしたの？　二日目？」
「違うから。てか、仮にそうだったとしても男子の前でする話題じゃないっての」

机のところまでやってきたゆかりは、もう少し慎みを覚えなさいと七歌のおでこをピシャリと叩く。
男子が女子の生理について知りたいかどうかは不明だが、ゆかりはそういうのを知られると気持ちが悪いので、男子も暮らしている今の寮では気をつけて生活していた。
七歌や美鶴もその辺りはしっかりと分別を付けているため、誰かの時期がくれば風呂の順番等それとなくフォローし合っているが、七歌は元の性格もあって平気で軽口を飛ばすときがある。
それは絶対に違うと分かっているからこその冗談なのだが、少女が〝二日目？〟とゆかりに尋ねたとき、一部の男子がこっそりと聞き耳を立てていることに気付いたゆかりは、思春期だろうともう少し自重しろと呆れ気味に溜息を吐き、自分の席に落ち着いてから疲れている理由を話した。
「校門のところで倒れていた子いたでしょ。昨日、その子が話してるのをちょっと見たから、先生にこんな様子でしたよって伝えに行ってたの」
「ほーん、それで？」
「まぁ、先生たちもそうかって感じだったかな。普段から素行がいい方じゃなかったみたいだし、夜通し行方不明からの発見ってことで事件性があるかどうか調べるみたい」
生徒には事情をあまり話さないのが普通だが、前日の様子を伝えに行った生徒だと話が違ってくるのか、ゆかりは少しだけ聞くことが出来たらしい。
もっとも、伝えに行ったのが倒れていた生徒のクラスで副担任をしている佐久間だったので、それなりに親しい者だからと教えてくれた部分もあるだろう。
ゆかりから新たな話を聞けた順平は顎に手を当てて考え込んでいるが、七歌としては相手がE組の生徒ならば湊が何か知っているのではと考え、聞きにいってみようかと提案する。
「ねぇねぇ、八雲君に話を聞きにいかない？　同じクラスの子のことなら知ってそうだし」

「んー、多分無駄かなぁ。有里君って他人に興味ないからクラスメイトの名前も覚えてなかったりするのよ。何年か同じクラスになってる相手でもそれだから、不良っぽい子なら余計に関わりなくて覚えてないと思う」

あれだけ人助けしている人間がそんな性格だとは誰も思うまい。しかし、しょうがないと苦笑する彼女にすれば湊が人間嫌いなのは常識であった。

彼が人助けするのは弱者を助けるのは当然のことだから。他人を不幸にする存在が許せないので、己の出来る範囲で障害を排除しているのだが、幸か不幸か彼は他の者よりも出来る範囲が広かった。

そうして助けているうちに正義の味方やヒーローのように讃えられるようになり、本人の知らぬところで彼ならば誰でも助けてくれるという噂が一人歩きしているのが現状だ。

だが、彼は他の者に興味を持っていない。慕っている後輩の世話を焼くなど甘い部分はあるが、自分で出来ることを楽したいがために彼に頼めば冷たい言葉で断られるのだから、本人も言っている通り本来彼は他者と関わるのが好きではないのだろう。

青年のことを従弟と呼んで慕っている七歌も、流石にそういった部分までは知らなかったようで、意外そうにしながらも残念だと口を尖らせている。

情報を得たいのか、湊との話の種にしたかったのか、それは本人にしか分からないが、彼から有益な情報が得られそうにないと分かった七歌は一気にやる気をなくして机に突っ伏してしまった。

そんな少女の反応を見て順平とゆかりは思わず笑ってしまい、倒れていた女子の件はここまでだとホームルームが始まるまで雑談で時間を潰した。

放課後――桔梗組

本日の授業が終わり、湊の能力を利用した通信授業でしっかりと授業を聞いてノートを取っていた風花も、お茶にしようと桜に誘われたことで縁側に座り、熱いお茶と水饅頭を食べて湊たちが帰ってくるのを待っていた。

やってきて一夜明けた日こそ両親に連絡しないで良いのかなと心苦しく思っていたが、携帯電話を湊に没収されたことで少し吹っ切れたこともあり、彼女はここでの隠居生活を受け入れつつある。
両親になにも言われず、森山たちから苛められることもない。両親だけでなく友人や学校の先生には心配をかける事になるが、一番親しい部活メンバーの半数には事情を理解して貰っているので、授業もちゃんと受けられることもあり風花としては気持ちが楽だった。
ここでの生活はチドリが起きるのと同じ時間に起きて一緒に朝食を取り、彼女が登校している間に片付けを手伝って、授業の時間はお茶などを飲みながらではあるが勉強に集中し、昼は桜と一緒にご飯を食べてから午後の授業を受けて、放課後はお風呂や屋敷の掃除を手伝いつつ食料品を買いについて行ったりしている。
田舎だけあって知り合いもおらず、周辺を散歩することも問題なく出来るため、色々と制約が多くなるとばかり思っていた風花は拍子抜けしたくらいであった。
「もうすぐ来ると思うからもう少し待っててね」
「はい」
隣で朗らかな笑みを浮かべお茶を飲んでいる桜に言われ、風花もつられて同じように微笑み頷いて返す。
明日は日曜日で学校も休み。そのため、学校が終わってから湊がラビリスも連れてやってくることになっており、風花たちは彼らの到着を待っているのだ。
影時間、ペルソナ、シャドウ、それらについて最低限の説明はチドリから受けており、知識としては理解することが出来ている。
風花のペルソナは召喚せずとも相手の気配を感知出来ていると言うことで、ほぼ間違いなく探知型か探知能力を持っているとみられているが、未だに召喚自体は一度も行なっておらず、ペルソナ使いだとは聞いているチドリの召喚も見せて貰っていない。
相手が敵でなければ見せたところでデメリットは存在しないが、どうせ湊が来てから召喚の練習をすることになるので、チドリが言うにはそのときにでも見せてくれるという話だ。

宿るペルソナは基本的にそれぞれ姿が異なるらしく、湊の黒いペルソナが禍々しくも対極である神々しさや力強さも感じたことで、風花はチドリのペルソナも強さと美しさを兼ね備えた存在なのかなと密かに楽しみにしていた。

そうして、お茶の時間を楽しみながら風花が桜と共に待っていれば、急に突風が吹いて庭に敷かれた砂利の一部にクレーターのような穴が開いた。

「きゃあっ」

「え？　え？」

突然のことに一体何が起きたのかと桜と風花は目を丸くするが、次の瞬間、何もなかった場所からチドリとラビリスとコロマルが現われ、最後に何やら帽子のような物を手に持った湊がクレーターの中心に現われたことで、先ほどの突風は彼らがやってきたことで発生したのだと分かった。

しっかりと地面に降り立ったラビリスは風花と桜を見つけて手を振って挨拶し、コロマルも尻尾を振りながら嬉しそうに二人に駆け寄る。

待っていた風花と桜はラビリスとコロマルを迎えるが、その後ろをゆっくりと歩いてくるチドリと帽子をマフラーに仕舞う湊に先ほどの突風は一体何だったのか尋ねた。

「みーくん、さっきの風は何だったの？　見えないくらい速く飛んできただけ？」

「……いや、ハデスの隠れ兜を使ってたんだ」

言いながら湊は仕舞ったばかりの帽子を取り出して見せてきた。

ハデスの隠れ兜とは、ギリシャ神話に出てくる冥府の神たるハデスの持っている被れば姿が消える兜のことだが、彼の言っていることが本当なら彼の持っている帽子を被れば姿が消えることになる。

いくらペルソナなど不思議な存在がいると言っても、帽子一つでそんな事が可能なのかと二人が信じ切れずにいれば、湊が実際に目の前で帽子を被ってみせた。

すると、彼が言っていた通りに一瞬で姿が見えなくなり、コロマル

が姿の消えた湊を探そうと匂いを嗅いでいるが発見出来ないようだった。
姿が消えるだけでもすごいというのに、匂いまで消えて犬が追跡出来なくなるとは高性能にもほどがある。それについて桜がどんな原理なのか尋ねようと思ったのだが、相手が消えたままなのでどこに向かって聞けばいいのか分からない。
風花も一緒になってキョロキョロと辺りを見渡して湊の姿を探せば、立っていたチドリが庭の砂利を手に取って何もない空間に向かって放り投げた。
その結果、ラビリスから三メートルほど離れた場所で不自然に砂利が落下し、姿は見えなくともそこに存在することが分かり、桜も居場所が分かって安心したように声をかける。
「みーくん、ありがとう。もう兜を脱いでいいわよ」
「……そうか」
言われて兜を脱いだ湊が現われたのは、なんと砂利の落下した地点ではなく桜と風花の背後だった。
これには二人だけでなくチドリたちも驚く。一瞬で移動した訳ではなく、彼は最初からそこにいた。ただ、兜を被ったまま背中から黒い腕を庭まで伸ばしていただけで。
「……小細工なんて卑怯」
ちょっとした工夫で湊の居場所を看破したつもりになっていたチドリは、そんな伸縮自在の腕を出して居場所を偽装するなど狡いと湊を睨む。
けれど、青年は黒い腕を消してから兜を仕舞いつつ、どこか卑怯なんだと感情の読み取れない瞳を少女に向けて返した。
「その程度で居場所がばれるなら意味ないだろ。触れている物も消えるからこそ色んな用途で使えるんだ」
「覗きにしか使わないくせに」
「全て見てるのに覗く理由がないな」
「……変態」
ハデスの隠れ兜の効果対象は被っている者だけでなく、被っている

者が触れている物も含まれる。
先ほどチドリたちが突然現われたように見えたときは、湊が黒い腕でチドリたちを掴んだままタナトスで空を飛び、周囲から見えないよう兜で姿を消していたという訳だ。
以前は超高高度を飛んで地上から見えないようにしたり、時流操作で視認出来ない速度で飛ぶことで姿を隠していたが、前者は同乗者の負担が、後者はいつ肉体に限界が訪れるか分からない湊の肉体への負担が問題となっていたので、先日テオドアから貰った無の兜にタナトスを融合してハデスの隠れ兜を作ってからは愛用するようにしていた。
そして、無の武器や鎧とペルソナを融合してもペルソナ全書があれば再召喚は可能なので、隠れ兜を作ってすぐにエリザベスに呼び直して貰っており、タナトスは現在も湊の手持ちに存在している。
隠れ兜とタナトスが同時に存在する矛盾について説明を受けている少女は、青年が他の者がいる前で堂々と覗かずとも裸体は拝めると言い切ったことで頬を染め、そのまま着替えてくると言い残し玄関の方へ逃げるように去って行ってしまった。
一応、この場にいる女性陣は全員が青年を取り巻く女性事情やらを理解しているので大丈夫だが、流石に外でそういった発言をすれば少女たちの名誉に関わる。よって、桜の方からそれとなく諌めておくことにして、足を洗う必要のあるコロマルをラビリスが抱き上げて玄関の方へ向かうと他の者たちもようやく動き出した。
＊＊＊
制服から部屋着に着替え、コロマルも足をちゃんと洗って貰ったことで家の中を歩き回れるようになると、約束していた通り風花へのペルソナ講座が始まった。
講師は一番詳しい湊が務めるが、彼の場合色々と他のペルソナ使いと異なる部分があるので、何かあれば補足出来るようチドリとラビリスも傍に控えている。
そうして、マフラーからホワイトボードを取り出し、湊が魔眼殺しのメガネをかけて準備が完了したところで、以前から聞こうと思って

いたことを風花が尋ねた。
「あの、前から聞きたかったんですけど、有里君のマフラーってどうなってるんですか？」
「……その質問は今しなければならない事なのか？」
「あ、いえ、あの、ごめんなさい……」
聞けば親切に教えてくれる青年が相手だったことで、風花はこれまでと同じように尋ねただけだったのだが、返ってきたのは冷たい視線と突き放すような言葉。
それを受けた少女は自分が悪いことをしてしまったと思い、半分涙目になりながらすぐに謝ったが、青年の方を見れば二人の少女が同時に彼を殴っていた。
「初っ端から何で泣かせてるのよ」
「気になっただけやのに、素直に教えてあげてもええやん」
二人の少女が放った拳は青年の手で軽々と受け流される。実力差を考えれば当然の結果だが、別に彼をボコボコにすることが目的ではないため、攻撃が無効化されたチドリたちは、座布団に座り直すと湊に代わって風花の質問に答えた。
「湊のマフラーは特別なマジックアイテムで中に物を入れられるようになってるの。内部は時間凍結されるから、食べ物の保存とかなら冷蔵庫とかより高性能よ」
「オマケに収納の上限がないから何でも放り込んでおけるんよ。まぁ、四次元ポケット的なもんやと思ってもらったら分かりやすいかな」
「そうなんだ。さっきの兜もだけど有里君って不思議なものを色々持ってるんだね」
風花も聞く前からそんな気はしていたが、ラビリスが四次元ポケット的なものだと口にしたことで、やっぱりそういったアイテムだったかと予想が当たったことに内心で喜ぶ。
少女たちに勝手にばらされた青年は気にしていないのか、今はホワイトボードにこれから説明することを書き込んでいるが、風花も少し気になっていただけだったので、マフラーの謎が解ければ今度こそペ

ルソナ講座の始まりだと聞く姿勢になった。
「……もういいのか？」
「うん。いきなり話の腰を折ってごめんなさい」
　別に湊も怒って先ほどのように返した訳ではない。元々ペルソナの話をする予定だったので、先にそちらを聞いてからでいいのではと思って聞き返しただけだ。
　しかし、今の湊は感情が読み取りづらいので、彼をよく知るチドリたちも彼が怒っていると勘違いしてしまった。
　彼がイレギュラーを嫌がるタイプであり、説明しようと思った矢先だったことも勘違いされた要因の一つだが、とっくに気にしていない彼は準備が出来たならと説明を始めた。
「まず、ペルソナとは己の精神の一部、無意識の領域に存在する己の精神の根幹と捉えてもらっていい。本来、人は人のままで精神を具現化することなど出来ない。しかし、現実世界が影時間という異界と繋がることで、影時間に適応するべく具現化出来るようになるんだ」
　説明しながらホワイトボードを指す湊。そこには無意識の領域について絵で描かれており、風花の心の中でも極狭い範囲が今回の話の核である無意識の領域だと示されている。
　本来異能など持たない人間が、影時間という異なる理の世界に触れることで異能を発現させる可能性を持つようになるが、風花はその説明を聞いて「アレ？」と首を傾げた。
「あの、有里君は影時間じゃないのにペルソナを呼んでましたけど、影時間じゃなくてもペルソナって出せるんですか？」
「既に力に目覚めていれば出せる。影時間中だろうと俺たちがいるのは現実世界だからな」
　いわれて風花も成程と納得する。影時間は自分たちのいる現実世界を上書きするように出現している。ベースはあくまで現実世界なので、影時間に力に目覚めたとしても力は残るという訳だ。
　簡単な説明ながら理解して貰えたようなので、続きを話すぞと湊は話を進める。
「次に、ペルソナを呼び出す方法だがコツが分かれば道具を使わなく

ても呼べる。だが、速度や確実性を重視するなら召喚器という補助器具を使った方が楽だ」
そういって彼がマフラーから取り出した物をみて風花は目を見開く。
光に当たって鈍く輝く金属の塊は、どこからどう見ても拳銃である。勿論、本物など見たことはないが、玩具にしては出来が良すぎて怖さすら感じるため、風花は少々怯えた様子を見せながら湊に尋ねた。
「え、これ、拳銃ですよね？」
「弾は出ない。弾倉の部分に黄昏の羽根という能力を補助するものが入っている。これで自殺アクションを行なうことで、死を意識して無意識の領域からペルソナを引っ張り上げるんだ」
頭に銃口を向けて引き金を引く。とても簡単だろうと言ってくる湊に風花は引き気味だ。
そも、自殺アクションという単語があるのかも不明だが、弾は出ないと言っても銃は本物。それを使って自殺の真似事をするなど正気の沙汰ではない。
今回も青年が独自の感性で間違ったことを言っているのではと思い、風花は彼の傍らにいる友人たちに視線を向けるが、二人の少女はとくに何の反応も見せていなかったことで、彼の言っていることが本当だと思い知る結果に終わる。
「あ、あの、本当にこれじゃないとダメなんですか？」
「……別に死を意識出来るならナイフでもいいぞ」
「ナ、ナイフはちょっと……」
召喚のトリガーが死を意識することである限り物騒な形になるのは避けようがない。他の方法を青年から教えて貰うも、ナイフの方が生々しいので余計に怖いと感じた風花は尻込みしてしまう。
少女のそんな反応を見た他の者たちは、やはり普通はこうなるなとある意味予想通りだったことで安心する。
これで風花が躊躇いもせず召喚を試みていたら、死を恐れないほど自分の命への執着が薄れているとして心の状態を疑わなければなら

なかった。
死を怖がるのは当然のこと。むしろ、そういった葛藤があるからこそ、召喚出来たときには大きな力が生まれるのだ。
せっかく説明して貰ったというのに恐怖で召喚に挑戦出来ないでいる事で、青年たちに申し訳なく思っている少女へラビリスは大丈夫だと安心させるよう声をかける。
「風花ちゃん、別に今すぐやなくてええんよ。時間はあるんやし、とりあえず召喚器を持ち歩いて慣れていったらどうやろか」
今の風花は死への恐怖と未知への恐怖が混在している。ならば、先に未知への恐怖を薄れさせる準備期間を設けてはどうだというのがラビリスの提案だ。
流石に外で持ち歩けば呼び止められるだろうが、この家の中で持ち歩く分には弾もはいので問題ない。
ラビリスが湊の方をみればホルスターを出してくれたので、それを受け取って召喚器を納めてラビリスは相手に渡した。
「湊君も言っとったけど弾は入ってへんからね。とりあえず、銃に慣れていこうな」
「う、うん。ごめんね。すぐに出来なくて」
「……それが正しい反応だから気にしなくていいわよ」
「うん、ありがとうみんな」
丁寧に説明するだけでなく、召喚に踏み切れるよう気を遣ってくれる皆の優しさが嬉しかった。
風花はそんな皆の気持ちに応えるためにも、頑張って慣れていこうと決意を新たにホルスターと召喚器を受け取り、召喚器に慣れる訓練を始めるのだった。

第二百十一話　怖い話

6月1日（月）
夜――巌戸台分寮

学校から帰り、夕食なども食べ終わってから七歌たちがラウンジでのんびり過ごしていれば、順平がなにやらニヤついて話しかけてきた。

理由は先日校門の前でE組の生徒が倒れていたのが、実は怨霊の仕業だという噂を入手してきたからというものだったが、何故だか真田と美鶴がその話に興味を示し、知りたいのなら教えましょうと順平も得意気になる。

幽霊や怪談が苦手なゆかりはとても嫌そうな顔をしているが、ここで一人だけ部屋に戻れば逃げたようで負けた気持ちになるのか、彼女も席に着いて他の者と一緒にテーブルを囲んだ。

ラウンジの明かりを消し、懐中電灯を持ってくれれば準備は完了。雰囲気が出てきて楽しくなってきたのか真田は小さく口元を歪めて聞く体勢になっているが、全員集まったことで順平がいざ話そうとしたとき、彼よりも早く懐中電灯で自分の顔を下から照らし口を開く者がいた。

「じゃあ、洒落にならないほど怖い話を始めます」

「え？　七歌っちからスタート？」

せっかく話す気満々になっていたというのに、いきなり七歌に主導権を握られたことで順平は面食らってしまう。

しかし、他の者にすればあくまで余興であるため、リラックスした様子で腕組みなどしながら、どちらから話してもいいぞと七歌の話も聞く気になっている。

こうなってしまうと誰が最初に話すか揉めている間にだれていくので、場の空気を優先した順平はションボリしながら七歌に順番を譲ることにして聞き手に回った。

そして、懐中電灯で下から自分の顔を照らしていた少女は、他の者の準備が整ったところで静かに口を開いた。

「……四十二歳、童貞、高卒、フリーター」
瞬間、場の空気が固まり全員がなんとも言えない表情になる。ワクワク顔を浮かべていた真田も一瞬で現実に引き戻された気分なのか、いたたまれない様子で言葉を漏らした。
「……確かにそれは恐ろしいな」
「ちょっ、それ恐さの種類ちげーから！　つか、妙にリアルなのやめろって！」
「あんたは明日は我が身っぽいもんね」
このメンバーの中では順平だけがそうなりそうだとゆかりは指摘する。もっとも、童貞というステータスを所持し得る男子は二人しかいないので、単純に成績から最終学歴の予想を立てただけなのだが。
言われた順平は「そ、そんなことねーし」と動揺しながら必死に否定しているが、彼らの様子に構わず懐中電灯で自分を照らしていた七歌はぽそりと話を続けた。
「……行きずりの男と一晩の過ち、二ヶ月生理無し」
これはまた胸にズンと来る重い内容である。男子たちは何も言えず顔を俯かせているが、女子たちは彼らよりも話の怖ろしさを理解していることで、女性として同じ立場になった場合を想像したらと素直な気持ちを話す。
「うわぁ、本当にそれマジで洒落にならないよね。認知させることも出来ないだろうし……」
「自分の軽率な行動も原因の一つだからな。相手だけを責めることも出来ない」
一度の過ち一生の後悔。子どもに罪はないとしても、父親の欄が空白のまま生まれることになり、父親のことで苦い思いをした母親がしっかりと育てられるか分からない。
自分はそんな事にはなるまいと女子たちは固く決意するが、自分たちの所属するコミュニティー内である一人の青年を中心に爛れた人間関係が形成されていると知ればどんな反応をするのだろうか。
とはいえ、それはそれ、これはこれで七歌は自分の話はこれで終わりだと、まるでマイクのように持っていた懐中電灯を順平に渡す。

「私からは以上です。さ、順平どうぞ。空気はあたためておいたよ！」
「えー、この空気でオレの番かよ……はぁ」
空気は温まるどころか極寒、共に現実味のある暗い未来についての話だったことで想像しやすかったため、話が始まるまで楽しそうにしていた真田すら今は真顔だ。
これでどうやって夏の怪談のように盛り上げればいいのか分からず、順平は途方に暮れながらも精一杯の語りで行ってやると声を作り静かに話し始める。
「どうも、こんばんは。伊織順平アワーのお時間です。……世の中には、どーも不思議なことって、あるようなんですよ……ご存知ですか？　遅くまで学校にいると……死んだはずの生徒が現れて、食われるよ、って怪談……」
誰の真似なのか分からないが、無駄に上手い順平の語りに一度冷え切った空気が再び熱を持つ。
寒い方が怪談には向いていると思われるが、実際はそうでもない。そも、そうであれば蒸し暑い夏よりも冬の方が盛り上がる。
一応、盆の時期というのも関係あるが、怪談をするには生暖かい空気の方が臨場感が出るため、少し頭がぼうっとしてくる温度が望ましい。
明かりを消す前に空調の温度も設定変更しておいた順平は、真田たちが聞き入っていることを確認しながら、つい先日の事だがと言葉を続けようとした。
「……私の知り合いに」
「あ、なんか倒れてた子、前日の晩に学校に来てたらしいですね。んで、学校来てたから死んだ生徒の怨霊に喰われて倒れてたってオチらしいです」
「へいへーい、七歌っちよー。携帯で掲示板調べて先にまるっと喋るのは反則っしょー。どうすんのよこの空気、伊織順平アワーが開幕と同時に閉幕しちったじゃん」
話す前にオチまで言われた順平はテーブルに額をぶつけそうになるほどガックリと落ち込む。

懐中電灯で自分を照らしていたことで順平からはしっかり見えていなかったようだが、七歌は順平が話し始めた時点でテーブルの下で携帯をいじり、学校の掲示板サイトを開いて件の怪談とやらの内容を読んでいたのだ。
原文は別に順平のようにアレンジはされておらず、純粋に倒れていた子を夜の学校付近で見かけたとだけ書かれ、他の者たちはその書き込みに対して、学校に行ったから幽霊に魂を持って行かれたんじゃないかと冗談を飛ばしている。
七歌から携帯を受け取った美鶴も原文を読ませて貰い、その間に順平が空調の温度を戻して明かりを点けて帰ってくれば、美鶴は腕を組んで難しい表情で考え込んでいた。
「どうした美鶴？　今の話で気になる部分でもあったのか？」
「そうだな。私自身まだはっきりとは言えないが、この死んだ生徒の怨霊というのがどこから出てきたのかが引っかかってな」
何がこうも引っかかるのか違和感の正体が分からないとしながらも、死んだ生徒の怨霊という怪談が出来るくらいには噂になっていると知って美鶴も驚いたらしい。
噂は事実無根であってもトラブルの種になり易い。しかし、生徒会長という役職に就いていながら、生徒の間で噂になるほどの話題に今まで気づけていなかった。その事を反省しながら噂の元となった事柄について顎に手を当てて考え込んでいる美鶴に、真田が率直な疑問なんだがと一つ問いかけた。
「うちの学校で死んだ生徒なんているのか？」
「高等部という話ならいないな。だが、十年前の事故で多数の生徒が怪我を負い、さらに初等部の生徒が一人亡くなっていると聞いている」
聞かれた美鶴は表情を暗くしながらも答える。自分のグループが引き起こした事故が原因で小学生だった生徒が一人犠牲になったのだ。当時の事故に美鶴は関係ないとしても罪悪感を覚えてもしようがない。
他の者たちもどう反応すべきか悩んだようだが、順平は事故には触

れずに亡くなった生徒が存在した事実にのみ食いつき聞き返す。
「え？　んじゃ、女子を襲った怨霊ってその生徒なんスか？」
「んな訳ないじゃん。倒れてた子って高等部から入ってきた子だよ？　十年前の初等部に通ってた子と接点なんてあるはずないし。てか、幽霊とかあり得ないし」
順平の言葉を鼻で笑ったゆかりはあり得ないと切って捨てる。
倒れていた生徒は高等部から入学してきた生徒だ。相手のことを知らないと言っても、中等部からいたゆかりもそれくらいは分かっていた。
高等部から来た生徒がどうやって初等部に通っていた生徒と接点を持つというのか。噂では怨霊は恨みで女子を襲ったらしく、いくら何でも接点もない相手を恨むとは思えない。
よって、怨霊など嘘っぱちだと強がりつつゆかりが言い放てば、順平の向かいの席に座っていた真田が不敵に口元を歪めて反論してきた。
「そうとも言い切れんぞ。うちは私立だからな。倒れていた生徒が公立の小学校に進学しただけで、幼稚園や保育園では同じところに通っていた可能性はある。怨霊が夜中に学校を彷徨く生徒と遭遇して十年ぶりの再会を喜んだ……なんて話も考えられるだろ？」
そう。相手が幼少期にどこに住んでいたかは分からないが、小学校以前に出会っていた可能性がまだ残っている。
二人は大の仲良しだったが一人が小学校を受験したことで離れ離れになり、十年の時を経て最悪な再会を果たしてしまった。なんて事も考えられるのだ。
せっかく精一杯の強がりで否定したというのに、真田のせいで再び可能性が浮上したことでゆかりは涙目になる。
すると、ゆかりの援護という訳ではないが、今度は七歌が真田の意見をあり得ないと真っ向から否定した。
「いやいや、それはないですよ」
「何故そう言い切れる？　別に倒れていた生徒の経歴を知ってる訳じゃないだろ？」

「はい、倒れていた子に関しては知りません。ただ、死んだ生徒のことは知ってるのであり得ないって話です」
少女の言葉を聞いた一同は驚いた顔をする。それも当然で、今年になってから東京にやってきた相手が、十年前の東京にいた人物のことを知っていると言われても普通は信じられない。
けれど、相手が無駄な嘘を吐くような人物ではない事を知っている一同は、とりあえずどういう事なのかを確かめるべく、昔から島根にいたのではと尋ねた。
「あれ？　七歌っちって島根県民じゃなかったん？」
「へい、ボーズ。私は父親の実家と住んでた場所が島根だっただけで、生まれ自体は母方の実家がある東京なんだぜ。里帰り出産ってやつさ」
「へぇ、多分一生使うことはない無駄知識だわ」
生まれは東京、育ちは島根。覚えていても使う場面はないと思われるが、七歌のプロフィールにまた一つ詳しくなったところで謎は解けずに終わる。
彼女がどうして死んだ生徒を知っているのか。これは直接訊いてみるしかないだろうと判断し、ゆかりは身体を隣に座っている七歌の方に向けて単刀直入に訊いた。
「それは良いけどなんで七歌は死んだ子を知ってるの？」
「なんでってニュースになってたし、新聞にも犠牲者名簿が載ってたもん」
「当人だとちゃんと確認したのか？　広い日本で同姓同名なんていくらでもいるだろ」
「いや、百鬼八雲なんて珍しい名前は一人しかいませんよ。まぁ、死んだことになってるけど、本人はちゃんと生きてるんで怨霊はありえません」
その名前を聞いて全員がそういう事かと理解する。七歌の話が本当であれば確かに死んだはずの生徒は名前を変えて生きているため、倒れていた生徒とどれだけ因縁があろうと怨霊としては干渉出来ない。

ただ、それは美鶴の言っていた犠牲者と七歌の知っている犠牲者が、本当に同一人物であったならの話だ。
「美鶴が言っていた亡くなった生徒は九頭龍の従弟なのか？」
「ああ、そうだ。身内を亡くした生徒はいたが当人が死んだのは八雲しかいない」
そう答えた美鶴に対して七歌は「死んでませんって」とツッコミを入れているが、他の者にすれば怨霊の正体について振り出しに戻っただけでなく、死んだはずの生徒が名を変えて生きているという新たな疑問が生じたことになる。
七歌が普段から自信満々に確信に満ちた瞳で話すことで同一人物説を信じそうになるが、いざこうやって考えてみると湊は両親が死んでいる事以外は謎が多く、チドリも彼についてほとんど語らないので七歌の話の方が真実だと思えるくらいだ。
一応、ゆかりは彼が桐条の研究所を脱走してから、どのような人生を歩んできたか聞いている。それをここで話すつもりはなく、むしろ墓まで持って行こうとすら思っているが、その話もあくまで十年前の事故に遭ってからの人生でしかない。
世間では妖艶な雰囲気と中等部入学以前の素性が不明であるため、神秘的だとかミステリアスで良いとも言われているけれど、やはり自分の知り合いのことは気になるのか、順平は七歌の従弟である〝八雲〟を知っている美鶴に実際はどうなのか尋ねる。
「あの、有里君ってマジで七歌っちの従弟なんスか？　名前とか聞いてると色々違うんですけど」
「本人が否定している事が答えだろう。それ以上は私に聞かれても困る」
「でも、先輩は有里君の実家のこととか知ってたじゃないですか。七歌が転校してくる前から」
ゆかりが特別課外活動部に誘われた際、美鶴は両親を失った彼が自分の弟になる未来もあったと言っていた。桐条家と付き合いがあって、別邸に住む英恵から可愛がられている子どもなど限られている。
七歌も英恵が息子と呼んでいる時点で確定だと言っていたので、彼

が素性を隠す理由は不明だが八雲本人である可能性は極めて高い。
どうしてそれを理解している美鶴までもが真実を話さないのかゆかりも気になったが、指摘された美鶴は顔を僅かに俯かせて複雑な面持ちで黙ってしまった。
これでは話が進まないと他の者が悩みかけたとき、湊にも七歌の従弟にもさして興味を持っていなかった真田が第三者の立場から思い付いた事を口にしてきた。
「単純にあいつが九頭龍の相手を面倒くさがっている可能性もある。美鶴や順平より岳羽の方が親しいんだからお前から聞いてみればいいんじゃないか」
「ん、そうですね。今度聞いてみます」
言われてみるとそれも考えられる。あれで湊は人の好き嫌いが激しいので、七歌のように人の話を聞かないで纏わり付いてくるタイプなど湊は最も嫌がるタイプに違いない。
会話を聞いていた七歌は真田に「ぶっ飛ばすぞ童貞野郎！」と自分が湊に面倒に思われているはずがないと怒っているが、ゆかりは友人の名誉のために敢えてスルーして今度本人に聞いてみることにした。
雰囲気が以前のものに戻ってしまった彼が教えてくれるか不安はあるものの、チドリは彼の素性について話せる範囲をハッキリと線引きしているため、本人に聞かないことには真実には辿り着けない。
そう思ってゆかりが決意を新たにしたところで、脱線してしまった話を戻そうと美鶴が仕切り直す。
「さて、話が逸れたが怨霊についてもう一度話し合おう」
「つっても、そんなのよくある話じゃないんスか？　昔死んだ生徒が……なんて鉄板ですし」
順平の言う通り学校にまつわる怪談では死んだ生徒の霊ネタは鉄板だ。大会前に亡くなったエースであったり、イジメを苦に自殺した生徒であったり、バリエーションは豊富だが死んだ生徒ネタというジャンルは共通していると言える。
お嬢様である美鶴もそういった知識はあったのか、順平の言葉に頷いて返しながら、それでもそこから地道に調べるのが最善だと告げ

る。
「確かに怪談としてはありふれた内容だ。しかし、その怨霊とやらの元となった生徒が誰なのか、どうして倒れていた生徒は夜の学校に来ていたのか。欠けているピースを埋める事が出来れば事件の詳細も明らかになるだろう」
「となれば調査が必要だな。丁度良い、倒れていた生徒と同じ学年の方が調べやすいはずだ。お前たちの方で情報を集めてこい」
『えー……』
調査は任せたぞと言ってくる真田に二年生トリオは嫌そうな顔をする。噂の元を調べてくるだけで危険のない任務だというのに、三人が同時に嫌な顔をしたため真田の方も驚くが、嫌がる理由を聞き返す前に七歌が声を作ってわざとらしい演技を始めた。
「聞きました伊織さん、童貞さんったら自分が恐いからって後輩に頼まれましたのよ？」
「嫌ですわね九頭龍さん、その呼び名だとわたくしにもダメージが入るんでございますのよ」
調べるのが面倒な七歌は真田を煽って自分で調べさせようと画策する。けれど、その呼び名は傍にいる少年にもクリティカルヒットでダメージを与えるものであり、言葉を返した後も「高二なら大丈夫、まだ普通だし」と自分に言い聞かせていた。
後輩らのそんな態度を見ていた真田は直前に煽られていたこともあり、額に青筋を浮かべて不真面目な後輩ら怒鳴りつけた。
「ゴチャゴチャ言うな！　同学年故の調べやすさ以外にお前たちに頼んだ理由はない。適材適所であたるのもチームワークだ。ちゃんと自分の役割を果たしてこい」
『……はーい』
怨霊の話がどんな真実に繋がっているのかは分からない。しかし、それにもまずは情報が必要なので、しっかりと調べてくるよう言われた三人は渋々了解し、雑用でストレスが溜まるのなら今日はストレス発散にタルタロスへ行こうかなと七歌が提案したことで、一同は本日タルタロスに挑むことが急遽決まった。

影時間――タルタロス
上空から襲いかかってくるヴィーナルイーグルの攻撃を横に飛んで回避し、受け身を取りながら転がった七歌はすぐ振り向いてペルソナを呼び出す。
「フォルネウス、ブフ！」
現われたエイのようなペルソナ、皇帝〝フォルネウス〟はヴィーナスイーグルの背後を取り、その翼に向かってブフを放ち凍らせてみせる。
弱点である氷結属性を喰らっただけでなく、飛ぶための翼まで封じされた敵は固い地面に不時着し、その隙を逃さないとヒーホーが地面から氷柱をはやして敵を串刺しにする。
その攻撃が決め手となってシャドウは黒い靄になって消えていき、周囲に敵の気配もない事から七歌はメンバーに警戒態勢を維持しつつ小休憩と指示した。
「ぶはー、マジで飛んでる敵はやりづれぇなぁ。オレの武器だと速さについていけねーし」
「まぁ、対空戦力としては岳羽の弓には勝てないからな。届かない敵にはどうしようもない」
当てることが出来ればどでかい一発とコンビネーションを持つ男子二人は大活躍出来る。けれど、先ほどの敵のように空を飛ぶタイプが相手では射程圏外なため、二人はペルソナで戦うほかなく、中距離型の七歌や遠距離型のゆかりに頼ることになってしまう。
敵にいいように翻弄されていることを悔しく思いながらも、自分の力をしっかりと理解している二人は事実を事実として受け止め、先ほど敵を倒したばかりの小さな仲間を労う。
「お前はいつもよくやってくれているな。一つを極めればどんな敵にも通じるんだと改めて思い知らされる」
《ヒホ？》
戦いに慣れてきたと言ってもタルタロスを登って行くにつれ敵も強くなる。一瞬の油断が命取りになり、油断していなくても敵が強く

て窮地に立たされることもあった。
　そんなとき、他の者のフォローが間に合わない状態でも、ヒーホーだけは氷結魔法を駆使して仲間を守り、攻守の要となって全員を助けてくれる。
　氷結魔法が効かない敵が相手でも、氷の壁を作って時間を稼いだり、吹雪で敵の視界を封じて仲間を助ける姿は、自分の力が通じないときどうすればいいと焦る真田たちの良い見本にもなっていた。
　通じないからと言って何も出来ない訳ではない。それを教えてくれる小さな仲間はチームにとって既になくてはならない存在になっていた。
《私のバックアップがもっと上手く出来れば、ヒーホーにばかりフォローさせずに済むんだがな。前線で戦っている君たちには本当に申し訳ない》
「お前は元々戦闘タイプだからな。補助して貰えるだけ十分だ。それに新戦力が後方支援タイプの可能性だってある」
「え、なんすか？　新しいペルソナ使いが見つかったんすか？」
　真田が口にした新戦力という言葉にいち早く反応した順平が詰め寄るように尋ねる。
　今もチームとしてまとまっていて、強くなる敵とも戦えてはいるが、ヒーホーを除けば一番の新人である順平は自分が先輩になるためペルソナ使いとしての後輩を待ち望んでいた。
　そんな人が見つかったなら早く連れてきて欲しいと目を血走らせて順平が言えば、真田は近いから離れろと相手にジャブを食らわせつつ候補者のことを伝える。
「離れろ順平。まだ適性が見つかっただけで、ペルソナは今後覚醒するかもしれないという段階だ」
「いてて……それでも仲間が増えるなら良いことじゃないですか」
　候補者でもいないよりはいい。適性がある時点で覚醒の可能性は高いのだ。
　新メンバーの登場に今からワクワクしてきた順平は、ここが一番大事なんですけどと前置きをして、その相手がどんな人物なのか真剣な

様子で尋ねた。
「で、相手は女子っすか？　それとも野郎？　オレっち可愛い女子がいいなぁ」
「性別が何か関係あるのか？　まぁ、相手はお前たちと同学年だ。そして知り合いでもある」
知り合いでもある、そう言った真田は真っ直ぐゆかりを見てきた。
ここで三人のうちの一人を見たからには、新メンバーはゆかりとても縁のある人物という事だろう。
同じ学年、ゆかりと縁のある人物、そして候補者になるだけの高い適性を持っている者。それらの条件からある一人の人物を頭に思い浮かべ、もしかしてとゆかりが動揺していれば、
「え、まさか、それって……」
「ああ、E組の山岸だ」
「うわぁ、私の知らない子だぁ」
予想外の人物の名が上がったことでゆかりと順平はずっこけ、唯一立ったままでいた七歌は知らない子ですねと笑顔を見せる。
後輩らのそんな派手なリアクションを見た真田は首を傾げるが、立ち上がったゆかりは期待させておいて酷いですと真田を非難した。
「今度こそ有里君かなって思ったのに紛らわしいですよ」
「何が今度こそなのか分からん。俺は一度もあいつが候補者だなんて言った覚えはないぞ」
「はいはい、そうですね。てか、風花がペルソナ使いかもってどうしよ。あの子、物騒なのとか苦手だろうし戦うなんて無理じゃないかな……」
湊でなかったことは残念だが、知り合いが仲間になってくれるのは嬉しい。しかし、相手があの優しくて大人しい風花となれば、戦いに向かないのでは心配の方が勝った。
《あくまで適性が見つかっただけだ。それに戦いが苦手なら非戦闘タイプのペルソナに目覚める可能性の方が高い。彼女とはまた話をしようと思っているが、岳羽が望むなら君もその場に同席してくれて構わない》

「あ、はい。そのときはまた教えてください」
友達が心配なら話し合いに付いてきていい。美鶴がそう提案すれば、ゆかりもそれは助かりますと小さく安堵の息を吐く。
一応知り合いではある順平と、相手を全く知らない七歌からすれば不思議な感じだが、大切な友人が相手となれば戦いに巻き込みたくないものなのだろう。
自分にはそうまで思える友人がいるだろうかと考え込む二人に、美鶴がそろそろ先へ進もうと言ったことで一同は陣形を整え、どこから敵が来ても良いよう備えながら迷宮を進んでいった。
――桔梗組
七歌たちがタルタロスを進んでいるのと同時刻、桔梗組の湊の私室には大型液晶で探索中の特別課外活動部の姿を眺める者たちが集まっていた。
巨大なベッドの中央に座っていた湊は手の中で煙管を遊ばせつつ、ベッドの下でクッションに座っている風花に声をかける。
「……随分と心配されていたな」
「うん。でも、ゆかりちゃんたちはこんな風に戦ってたんだね」
風花は湊の不思議な力は見ていたが、シャドウとの戦いは実際には見ていなかった。
そのため、これもペルソナやシャドウを理解するために必要だからと、昼間は授業を受けるために使っている液晶で実際の戦闘を見せたのである。
友達が武器を持って恐ろしい敵と戦い、足などに小さな怪我を負っている姿を見た風花は心配そうだったが、彼らの話題が自分のことになるとゆかりが心配してくれるのが嬉しかったのか小さな笑顔を見せた。
「まぁ、これくらいやったら別に心配せんでええけどね。一緒におる雪だるまのペルソナがいれば余裕で勝てる敵やねん」
そんな少女に声をかけたのは、湊の左側でベッドに俯せになりながら観戦していたラビリス。
彼女に敵の強さを計測する力はないが、フロア毎のシャドウの強さ

は記憶しているので、ヒーホーがいれば大丈夫だと断言することが出来たのだ。
「……けど、刈り取る者っていう強い敵もいるのよ。それが出たら流石にあれじゃ勝てないから、そのときは逃げるしかないわね」
現状、あのフロアで警戒すべきは一体のみ。現われれば空気が変わり、鎖を引き摺る音が聞こえるので絶対に分かる。
もしタルタロスに行くことがあるようならそれだけは頭に入れておいてと、湊の右肩に頭を乗せて寄りかかっていたチドリは静かに伝えた。
「皆はあんな恐いのと頑張って戦ってるんだね。私、全然知らなかった……」
「……知らないのが当然だ。むしろ、この時間に適応出来る方が異端だと思ってくれて良い」
「うん。でも、せっかく力を持ったから、明日からちょっとずつ召喚の練習も頑張っていこうと思うの」
自分の知らない世界やそこで戦う友人を見た風花は、これまでの自分の常識がどんどん崩れていくのをハッキリと自覚した。
こんな危険な世界にこれから自分が飛び込まなければならないのかと思うと恐くて震えてくるが、今はまだ湊たちが守ってくれている。
ならば、自分が今すべきなのは一刻も早く自分くらいは守れるようになることだろう。
まだまだ召喚器に対する恐怖は残っているし、自分に本当にそんな力があるのかという不安もある。
けれど、自分の事は信じられなくても友人の事は信じられるため、ベッドの方へ振り返った風花は少し吹っ切れた笑顔を見せて特訓を頑張ると三人に宣言した。
だが、そんな少女の決意の宣言を聞いた青年は、感情の籠もらない瞳を少女に向けたまま小さく呟いた。
「……どんな高尚な決意も全裸だと格好がつかないな」
『剥いだ本人に言われたくない』

青年が呟いた直後、途端に三方向から同じ指摘が入る。
仲良く四人で観戦していた訳だが、クッションに座る風花も、湊の傍にいる二人も、そして能力を使っていた本人も今現在一糸纏わぬ姿だった。
別に彼らに家では裸で過ごすなどという習慣はない。しかし、ならばなぜ服を着ていないのかと言うと、特別課外活動部のことを教えると言って部屋に呼んだ青年が、やってきた少女たちの服を脱がして行為に及んだからだ。
確かに影時間まではまだ時間があったが、先日桜に怒られていながら再びしてくるなど誰が予想出来るだろうか。
今回初参加のラビリスも流石に多人数はインモラルにもほどがあると怒って抵抗したが、蛇神の力の欠片など生身で吹き飛ばせるものではなく、最後には彼の毒牙にかかってまともな思考力を奪われた。
体力と技術、どれだけ抵抗しようと相手の自由を奪う異能、それら全てが凶悪に噛み合った相手に勝てるはずもない。行為を終えて疲れていた少女たちは、休憩とも言える観戦タイムに突入しても服を着る気になれず、時間が経つにつれ他の者がいる場でも全裸でいることに慣れて体力が復活してきた今も裸だったのが事の真相だ。
そんな異常な状態にした張本人は間違いなく青年であるため、お前だけには言われたくないと少女たちが指摘すれば、青年はそうかと短く答えてそのままベッドに寝転がり、液晶の電源を風花に切らせると「今日はもう寝るぞ」と部屋の明かりを消した。
翌朝、彼らを起こしに来た桜は裸のままベッドで眠る四人を目にするのだが、その後彼らが圧縮した時の中で数時間の説教を受けたのは言うまでもない事である。

第二百十二話　盲目の聖人

6月4日（木）
昼休み――月光館学園

真田から噂の実体調査を命じられたゆかりは、なんで自分が怨霊の話を調べないといけないのかと文句を言いたい気持ちを抑えつつ、これもS．E．E．S．の正式な任務だと思うことでモチベーションを維持した。

もっとも、調査と言っても結局は友人たちから話を聞くくらいで、警察のように誰かのアリバイを調べるだとか怪しい人物を尾行する必要もなく、噂話に詳しい人物にさえ巡り会えればすぐに終わる程度のものだ。

中等部からいるゆかりはそれなりに友人もいて、その中には勿論噂好きも数名いる。彼女たちを当たっていけば同じく調査を命じられた他二人よりも早く終わるだろう。

そう思って翌日から調査を開始したのだが、話を聞いて行くにつれて内容が少々怪しい方向に進んでいる事にゆかりも気付いた。

先日倒れていた女子の後にも同様の事件が二件発生しており、被害者のクラスはバラバラだったが、全員が女子で二年生という部分は共通していた。

さらに調査を進めていくと友人も知り合いから聞いた話だがと前置きした上で、被害者の三人が不良のたまり場に出入りしているメンバーだと情報も入手し、危ない薬でもやっていたのではという個人の感想まで貰えた。

情報を聞いて回ったゆかりとしては流石に薬が原因ではないと思っている。これは別に薬などそう身近にあるものではないと考えているからではなく、単にあの辺りは警察官がたまに見回るので後ろめたい事をしている者は寄りつかないと思っての考えだ。

何より、もし本当に薬をやっていたのなら、既に倒れていた生徒から薬物反応が見つかって騒ぎになっているだろう。

現在も辰巳記念病院に入院中だという女子らにそのような話はな

く、仮にそんな反応があれば美鶴が教えてくれるはずなので、ゆかりとしてはこれ以上の調査は現地取材しか無理という結論に達していた。
そうして、自分で出来る範囲の調査を終えたゆかりは、続けて特別課外活動部の新メンバー候補である風花とちょっと話をしようと昼休みに彼女の教室へ向かった。
先日の部活の日には休んでいたので、今日こそはと思ってやってきたのだが、しかし、目的の人物の姿は発見出来ず、どこにいるんだろうと思ったところで飲み物を買いに行っていたらしい湊が戻ってきたので、教室に入る前に彼を捕まえて風花の所在を尋ねた。
「お、有里君。風花がどこにいるか知らない？」
「……今日は休みだ」
「え、そうなんだ。この前も休んでたし体調崩してるのかな？」
梅雨も明け夏になろうかという時期だ。元々運動をするようなタイプでもない風花なら、その儚げな雰囲気の通りに繊細で季節の変わり目に体調を崩してもおかしくない。
季節の変わり目の病は体力の低下などもあって長引きやすく、治ったと思っても再びぶり返したりと非常に厄介だ。
クラスが違ったことで連絡が入っていなかったゆかりは、また後で様子を聞きがてら励ましのメールでも送ろうと決めつつ、病名などが分かるなら聞いておくかなと目の前の青年に尋ねた。
「休んでる理由とかって聞いてる？」
「……聞いてないな。担任が体調不良とは言っていたが」
詳しい話は何も知らないと首を横に振る湊。当てが外れたゆかりはそっかと残念に思うが、生徒の欠席理由をクラスメイトに伝えるかどうかは担任によるのでしょうがない。
湊たちE組のクラス担任は古典担当の江古田という中年男性教師で、ゆかりのクラスの古典も担当しているため面倒を嫌がる性格は把握済みである。
よって、担任から詳しい欠席理由を聞いていないのならある程度は理解するが、体調不良だとは分かっている以上、お見舞い代わりの

メールの一通でも送ってあげるべきだとゆかりは告げた。
「病気とかで休んでるときはメールとかで励ましてあげなきゃダメだよ」
「……励ます理由がないだろ」
「寂しいこと言うなぁ。友達が元気なかったら励ますもんでしょ？」
「ただのクラスメイトだ」
　風邪をひいたときや熱を出したとき、ただベッドで寝ているだけなのに何故だか不安になった経験のあるゆかりは、身体の不調に引っ張られて心も弱ることをよく知っている。
　そんなとき友人から励ましや体調を気遣うメールがくれば、弱った心にクリティカルにヒットして泣きそうになるくらい嬉しいのだ。
　だからこそ、湊にも風花の体調を気遣うメールの一つでも送ってあげて欲しかったのだが、彼は送る理由がないだけでなく、そも相手はただのクラスメイトでしかないと言い切った。
　この発言には流石にゆかりもムッとし、眉を寄せて不快感を露わにしながら言葉を返す。
「五年も一緒にいて、ただのクラスメイトって言うのは冷たいと思うんだけど」
「それはお前の感じ方だな。俺はそうは思わない」
　自分たちが出会ってから既に五年が経っている。中等部で同じクラスになり、湊と風花はそれからずっと同じクラスだ。
　二回や三回連続程度なら偶然でも、四回、五回となればもはや運命と言って良い。ゆかりが望んでもなれなかったそんな希少な立場にいる少女を、あくまでただのクラスメイトと言い切る青年にイラッとしたゆかりは、本人はいないとはいえ自分の友人に失礼な発言ばかりする男をキッと睨み声を荒げた。
「もういいよっ。有里君がそんな冷たい人だなんて思わなかった。バーカ、ハーゲ！」
　こんなやつもう知らない。そう思ったゆかりは子どもっぽい悪口を言って彼に背を向け自分のクラスに帰ろうとする。
　しかし、背を向けて一歩踏み出そうとしたとき、ゆかりの耳に信じ

られない言葉が飛び込んできた。
「用が済んだなら帰れ、どブス」
「ど、どブスっ!?　今どブスって言ったぁ!?」
それはゆかりにとって初めての経験であった。
幼い頃から容姿について褒められてきた彼女は、湊との交際を経てスタイルも抜群になり、トータルでかなり整ったルックスをしていると言える。
誰とも付き合う気がないと断っても未だにラブレターや告白を受けており、これまでの実績と合わせて考えても彼女の容姿が優れているのは確実だ。
そんな周囲から容姿を褒められて育った少女は、たった今人生で初めて〝ブス〟と容姿について貶された。それも愛している相手から。
こんな事を言われては真っ直ぐ帰る訳にはいかず、再び青年の方を向いたゆかりは、精一杯余裕があるように見せつつ口を開く。
「あああ、謝るなら今のうちだよ?　いいい、今ならギリギリで許してあげる」
「お前が二回罵倒してきたから一回だけ返したんだ。謝罪すべきはお前の方だろ」
怒りなのか空しさなのか、頑張って余裕があるように見せようとしたゆかりの声は震えていた。
そんな少女の様子に青年は早く帰りたいオーラ全開で返すが、二人が教室の前で騒がしくしていたことで、教室の中にいたラビリスたちがやって来て状況に対する説明を求めてくる。
「ああ、ゆかりちゃんやん。揃って教室の前で騒いでどないしたん?」
「このどブスが他人様を」
「また言った!!」
とても自然に〝どブス〟呼びしてきた青年の行動に驚きつつ、ゆかりはこの人ヒドいと相手を指さして抗議する。
「ちょ、聞いてよ、ホントに信じられない!　有里君ってば何度も私のことどブスって罵ってくるんだよ!」
「どういう流れでそうなったの?」

「こいつが話が終わって帰る前にバカ、ハゲと罵倒してきたんだ」
「こいつって言うな。それは有里君が風花に冷たかったからでしょ！
休んでるのにメールも電話もしてあげないで、あげくにただのクラスメイトだなんて言っちゃってさ」
少女が怒るのも当然だ。この冷血漢は体調を崩して家で寝ている少女に、調子を心配するメールも何も送ろうとしないのだから。
湊が休んだり行方不明になったときには、部活メンバーは佐久間も含めて全員が彼のことを心配するメールを送った。
安否不明でいた頃など、無事を祈願して神社に神頼みに行ったりした者もいたくらいである。
だというのに、この男は自分は心配して気に掛けて貰っていたというのに、心配する側に立ったときにはただのクラスメイトだから送る理由もないと告げた。
これで怒らない方がおかしいだろうとゆかりが熱を籠めて言えば、話を聞いたラビリスはとても申し訳なさそうな顔をして、湊にも悪気はないのだと説明してくる。
「あー、残念やけど湊君って人のカテゴリー分けが特殊やからしゃーないわ。同じクラスでも大して知らん人やったら他人って扱いやし」
「そうね。一般人でいう〝友人〟は湊の中じゃ〝知り合い〟だったりするし。呼び方の違いとして受け入れるしかないわ」
ラビリスに続けチドリも補足するが、湊はカテゴリー分けする際のカテゴリー名が人とずれているだけで、中身は共通している事もあるのだ。
彼が友達と呼ぶのは一人しかいないが、他の者の言葉で表わせばそれは〝親友〟であったり〝相棒〟という唯一無二の存在になっている。
よって、他の言葉も〝一般的な呼び名〟に当てはめていけば、ゆかりもきっと納得するに違いない。
紛らわしく誤解を招く湊が悪いのだが、とても特殊な育ち方をした弊害故に、本人だけが悪い訳ではないので我慢してやってくれ。そう友達二人から言われてはゆかりも怒りの矛を収めるしかなく、そっち

に関しては納得しようと頷いてから言葉を続けた。
「そ、そっちに関してはそうかもしれないけど、人のことどブスって言ったんだよ？」
「……湊の好みじゃなかっただけでしょ。不満なら鏡見て自分で可愛いって言ってればいいじゃない」
「ちがっ、そういう事じゃなくてっ」
カテゴリー分けに関しては納得することにしたが、自分をどブスと呼んだことは乙女として許せないし許したくない。
なにより、好きな相手から言われた事がショックで、チドリの言う通り彼の好みじゃなかったとすれば泣きたいくらいである。
見知らぬ千人からの可愛いよりも、愛する一人からの可愛いが嬉しい年頃だ。鏡に映った自分を褒めるなど空しいことこの上なく、本気でブスだと思っているのかとゆかりが不安そうな顔をすれば、女の子を傷つける言葉を発した湊をラビリスが優しく諌めていた。
「まぁ、ゆかりちゃんも悪口言うてたなら強くは言わんけど、湊君も女の子にブスとか言ったらアカンよ」
「どブスだ。ブスじゃない」
「どう違うんですか？」
「ブスは悪いブスだ。どブスは救えないブスだ」
湊の中ではブスとどブスは別物らしく、その違いが分からなかった美紀は具体的にどう異なるのかを尋ねた。
しかし、返ってきたのは非常に分かりづらい説明で、そもブスに良いも悪いもあるのだろうかとツッコミそうになりつつ、これではまだ分からないので、頭の上にクエスチョンマークを浮かべた一同を代表し、チドリが改めて言葉の意味を彼に訊いてみる。
「救えないブスってなに？」
「心の醜さが滲み出てるブスのことだ」
『それって性格ブスのことじゃ……』
瞬間、特殊な感性を持つ彼の言葉の意味を全員が理解し、ゆかりの方を見て何かを察した顔をする。
友人らにそんな顔で見られた少女は「納得するな！」と大声で反論

するも、見た目の問題じゃないなら個人の感じ方なので何も言えないと諦めてしまった。
無論、それはチドリたちだけであって、ゆかりの方は最後までブスという言葉を撤回させようとしたのだが、残念なことに昼休み終了を告げるチャイムが鳴ったことで撤回させることはかなわなかった。
放課後――桔梗組
学校が終わって湊たち三人が帰ってくると、嬉しそうに尻尾を振ったコロマルが風花や桜と一緒に彼らを迎えてくれた。
愛犬の可愛らしい姿に女性陣は和やかな雰囲気に包まれるが、先頭を歩いて屋敷に入ってきた青年は「……邪魔だ」と冷たい言葉を吐いてコロマルを横に避けさせて部屋に向かってしまい、残されたコロマルが哀しそうに耳を垂らしたことで、ラビリスが走って彼を追いかけ跳び蹴りをかます一幕もあった。
その跳び蹴りは残念ながら背中に足が触れた瞬間、発勁によって弾き返され、逆にラビリスが尻餅をつく結果に終わったのだが、湊も別に不機嫌だったとかそんな子どもっぽい理由でコロマルに冷たい言葉を吐いた訳ではない。
というのも、湊は太古に人から失われたイメージを読み取る力を備えていることで、アイギスやラビリスと同じように動物の言葉が分かる。能力の強度を言えば湊の方が強いくらいで、そのため彼女たちよりもハッキリと動物の思考を理解する事が可能なのだ。
先ほどの女性陣からは可愛く見えていたコロマルのことも、能力を持った湊からすれば「若、お帰りなさいやし！」と四十代のオッサンが言っているようなもので、組員たちのそういうノリが面倒な湊だからこそコロマルのことも適当にあしらったというのが事の真相だった。
そんな説明を受けた他の者たちは、一見便利そうだが難儀な能力だと青年に同情を覚え。コロマルも自分が元気に行きすぎたことが原因と理解したようで、今後は大人しく〝待て〟の状態で出迎えるようにすると言葉の分かるラビリスと湊に伝えてきた。
そうして、全員が着替えて居間に集まり桜が用意したお茶とお茶菓

子を味わっていれば、熱いほうじ茶を啜ってから雅な仕草で羊羹を口に運んだ湊がテーブルを挟み正面に座る風花に話しかけた。
「……それで、召喚の準備はちゃんと出来てるのか？」
「え？　えっとぉ、召喚器はちゃんと持ってるけど準備ってなにかな？」
　言われても聞いた覚えのなかった風花はこてんと首を傾げて聞き返す。
　召喚など拳銃型の召喚器を頭や首に当て、周りから見れば自殺にしか見えない形で引き金を引くだけだ。ある種の儀式ではあるのだろうが、己を擬似的に殺すことで内より心の化生を呼び出すとは実に物騒に思える。
　自分にもそんな力があると聞いても未だに実感が湧いていない風花は、渡された召喚器には本当は弾丸が入っていて死んだらどうしようと不安に思っているのだが、彼女のそんな胸中を一切気にした様子もなく、湊は再び熱いお茶に口をつけてから召喚前に必要なのは自分に合った心の在り方であると説明した。
「召喚時の精神の在り方は大きく分けて二種類ある。一つは死にたくないと守る力としてペルソナを呼び出すタイプ、もう一つは死んでたまるかと敵を倒す力としてペルソナを呼び出すタイプだ」
「んー、私はじゃあ守る力として呼び出すタイプかな。自分の力で誰かを攻撃するのって怖いし」
　このタイプの違いに優劣はない。自分がなんのためにペルソナを召喚するのか自覚すれば召喚しやすくなるだけの話で、湊のようにどちらでもないタイプもいるため、風花が自分なりに呼び出す際の心理トリガーを決められるなら考える必要はなかった。
　しかし、風花は未だに本当に自分にも能力があるのだろうかと半信半疑のようなので、湊は先に自分のタイプを風花に認識させてから召喚を試させようとする。
「じゃあ、とりあえずやってみろ」
「は、はい」
　緊張した様子で返事をしながら立ち上がった風花は、そのまま縁側

に向かってからサンダルを履き、砂利の敷かれた庭に降り立って召喚器を構える。
彼女は自分に銃口を向けておきながら両手で拳銃を持ち、右手の親指で押すことにより引き金を引くという変わった持ち方をしていた。
本物の銃なら持ち方の一つでもレクチャーするところだが、別に狙いを定める必要もないので、本人がやりやすいようにやればいいと湊は口出しを控える。
他の者たちも風花を黙って見守り、召喚器を構えた少女が今まさに引き金を引こうとしたとき、
「ん、ごめんなさい。やっぱり少し怖くて……」
少女は皆に申し訳なさそうな顔を見せながら、怖くて出来ないと持っていた召喚器ごと腕を下ろしてしまった。
召喚器に内蔵されている黄昏の羽根には、人が死への恐怖を抱きやすくする効果があるので、元々荒事が苦手な風花なら余計に怖くなってもしょうがない。
しかし、彼女が自分くらいは守れるようペルソナを獲得させるのが今回の試みであるため、一人では踏ん切りが付かないのなら少し手伝ってやると青年も庭に降りて風花の正面に立った。
向かい合って立つ二人にはかなりの身長差があるけれど、目の前にやってきた青年のことを風花が見上げていれば、湊はそっと左手を伸ばして風花の胸に優しく触れた。
「山岸、自分の心臓の鼓動を感じろ。お前はここにいる」
湊に触れられている箇所を強く意識すると、風花は自分の心臓の鼓動を確かに感じる事が出来た。
心臓の鼓動は生きている証であり、それは自分がここに存在するという事でもある。
それによって己の存在を肯定された気持ちになった風花は、先ほどまで感じていた恐怖が薄れていることに気付き、今なら出来るかもしれないと心を落ち着かせ再度召喚器を構えた。
そして、
「ペルソナ」

風花が静かに呟き召喚器の引き金を引けば、彼女の頭の中でガラスが割れたような音が響き、直後に彼女と湊を包むように水色の欠片が回り出す。
自分だけでなく他の者の召喚も見てきたチドリやラビリスは、渦巻く水色の欠片の様子だけで風花のペルソナの現れ方が他者と異なっている事に気付くが、その原因はなんだと思っているうちにペルソナの輪郭がはっきりと現われ始める。
風に揺れる金色の長髪、目を包帯で覆われた女性の顔、盾のようにも見える装飾が施された薄水色のドーム状の特徴的な下半身。
そのドームは召喚者である風花を内部に納めており、それが水色の欠片が彼女の周りを回っていた理由のようだ。だが、霊体のような状態からペルソナが具現化する際、一緒にいた湊は身長差の関係で不意打ちの一撃を顔に喰らうことになり、現在もドームの中で攻撃を喰らった顔を押さえて風花の足下で膝を突いている。
「ご、ゴメンナサイ!」
「……初召喚で湊にダメージを与えるとはやるわね」
「湊君がペルソナとかシャドウからダメージ受けるんホンマに久しぶりやない?」
見事召喚に成功した風花も、自分の召喚が原因で湊に不意打ちを喰らわすことになってしまったことは把握しており、ドームの中で彼を心配してしゃがみ込み頭を撫でてやっている。
以前の彼女ならそんな大胆なことを男子相手に出来なかっただろうが、桔梗組に来てからは湊と身体的な接触が多数あったので、彼を甘やかすときのノリでつい出てしまったらしい。
予想外のハプニングに見舞われ、中に入れるペルソナの内部でそんな事をしている二人を暢気に眺めながら、チドリやラビリスは湊にダメージを与えるとは随分と硬いペルソナなのだなと考えていると、膝を突いていた湊に動きがあって、青年は膝を突いたまま右腕を頭上に向けて黒い炎を放った。
「あぐっ」
黒い炎が放たれるとペルソナは内側から破壊されるように消えて

しまい、風花は下腹部の辺りを押さえて苦悶の表情を浮かべた。
炎が最初に当たった場所も人で言えば下腹部の辺りなので、ダメージが還る場所もリンクしているのだなと他人事のように考えて立ち上がった湊は、自分の足下で辛そうにしていた少女に声をかけた。
「これがダメージのフィードバックだ。ペルソナが受けたダメージは一部召喚者に還る。召喚時のシンクロ率が高ければ高いほど能力は強くなるが、その分、自分に還ってくるダメージも大きくなる。その辺りは一長一短だから自分の判断で調整した方が良い」
「……完全に仕返しでしかなかったわね」
外野であるチドリが何か言っているようだが、湊は一切耳に入っていないかのように聞き流して無視する。
召喚の際に顔面に攻撃を喰らったのはあくまで偶然だ。他のペルソナと呼び出された際の状態が違っているのが原因だが、そんな偶然の事故にわざわざ腹を立てるはずがない。
余裕たっぷりの立ち姿でそれをアピールする湊だが、並みのスキルよりも威力の高い黒い炎を攻撃に使っている時点で言い訳出来ないレベルである。
頑張って召喚を成功させた少女に対する青年の反応に、見ていた少女たちは子どもかとツッコミたくなったが、ここで指摘すれば根に持つ彼から夜に苛められるので、一人の犠牲で大勢が救われるのなら安いものだとそれ以上は何も言わなかった。
そうして、牛で引こうと動かすことの出来なかったという伝承を持つ盲目の守護聖人である女教皇〝ルキア〟の召喚に成功したことで、風花が見事ペルソナ使いの仲間入りを果たすと、ダメージから立ち直った少女にチドリと湊でアナライズの方法を指導し、自分の能力の使い方を少しずつ理解させていった。

第二百十三話　怪談の聞き取り調査

夜――巌戸台分寮

風花がペルソナを手に入れ、理論的な説明などを受けて能力の勉強を進めている頃、寮に帰ったゆかりは昼間の件で未だにご機嫌斜めであった。

ムスッとした顔でロビーのテーブルに座り、コンビニスイーツのプリンを頬張る彼女の姿は異様としか言えず、ソファーの方で携帯ゲーム機で遊んでいた順平も顔を上げるとどうかしたのかと心配して声をかけた。

「あー、そんなにプリプリしてどったのゆかりっち？」

「別に何でもない」

「いやぁ、プリンをガツガツ食べるって花の女子高生のする行動じゃないっしょ」

怒っているのは一目で分かる。不機嫌オーラ全開でやけ食いのようにプリンを食べている以上、これで普通ですと言われても誰も信じない。

非公式に男子の間で行なわれた校内女子人気ランキングでも、見事にトップテン入りするほどの美少女がスイーツとはいえやけ食いはいただけない。

これでは男子たちも幻滅ですぞと順平が暗に伝えれば、プリンを食べていたゆかりは顔を上げると鋭い視線でキッと睨んで知るかそんなものとばかりに暴言を吐いた。

「うっさいハゲ！　話しかけんな」

「えー……心配しただけでハゲって言われちゃったよ。したら真田さんならなんて言われるんだ？」

「おい、こっちに飛び火させるな」

順平の向かいのソファーでグローブを磨いていた真田は、女子の癇癪になど付き合っていられないとばかりにノータッチを貫こうとしていた。

そこに順平が話題を振ってきたことで驚いた顔をすると、おい止め

ろ、と本気で関わりたくない様子で巻き込まれる事を拒否した。
しかし、このまま皆の集まる場所で不機嫌オーラを放ち、声をかけるだけで八つ当たりされてはかなわない。よって、無関係でいることを諦め、事態の早期収束を図るべく真田は妹から聞いていた彼女が不機嫌な理由を他の者にも伝える事にした。
「まぁ、岳羽のことは美紀から聞いている。なんでも昼休みに有里から謂われのない暴言を吐かれたと」
「そうか。まぁ、彼はたまにキツい言葉も吐くからな。岳羽もあまり気にしすぎるな」
あの青年は綺麗な顔で平然と他人の心を抉るような言葉を放つ。別にそれで有名という訳ではないが、美鶴の耳にも届く程度には学内でも知られているため、今はショックだろうが彼にとってはそれが普通なので気にしすぎるなと美鶴は後輩を慰めた。
美鶴たちよりも付き合いの長い少女も、その事はちゃんと分かっているのだろうが、けれど言われた言葉が問題なのだとゆかりはぽそり呟いた。
「……どブスって言われたんです」
『……え？』
「だから、有里君にどブスって言われたの。それも二回」
一同がなんと言ったのか一瞬理解出来ず聞き返せば、ゆかりは眉を寄せてムスッとしながらもどこか落ち込んだ様子で話す。
彼女が別れた現在も湊のことが好きなのは一部では有名な話だ。それを知らないのは高校入学組くらいなもので、中等部からいた生徒に二人が以前付き合っていたと聞いて驚く者もおり、フリーになった現在も交友が続いていることで両者が納得した上での円満な別れだったのだろうと周囲から思われているくらいだ。
しかし、そんな現在でも仲の良かった二人が、相手の容姿を貶す言葉を吐いて険悪になるなど何があったのか非常に気になる。
ただし、そこに触れる前に純粋な感想として、ゆかりをどブスと評価する湊の採点はどれだけ厳しいんだと順平は呆れ気味に言った。
「ゆかりっちでどブスって有里君ってどんだけ面食いなのよ」

「そう？　性格キツいし、ブスではないけどどブスには当てはまると思うけど」
「ブスに性格なんて関係ないだろう。というか、その違いはなんだ」
順平や真田はゆかりの容姿は整っていると思っている。内面や妹の友人という部分も合わせると付き合いたいとは思えないが、それでも目の保養にはなるというのが年頃の少年としての正直な気持ちだった。
けれど、同じ年頃でも男子と女子では考え方が異なるのか、七歌は自分も湊の意見に賛成だと言って周囲を驚かせ。その言葉の真意を聞き出すべく真田が聞き返せば、七歌は単純に評価する部分の問題だと口にする。
「え？　だから、ブスは顔面崩壊じゃないですか。で、どブスは内面崩壊ですよ」
「……なんで分かるの？　有里君も同じ意味で使ってたんだけど。彼にとってブスは見た目で、どブスは性格ブスなんだって」
〝ブス〟と〝どブス〟、二つの言葉は本来そのような違いで区別されたりはしていない。
だが、七歌にとってはそれが当然であるかのように、どブスは性格ブスのことなのだと他の者に説明した。
それを聞いたゆかりはちょっと驚いた顔をして、彼以外にも同じ感性で二つの言葉を使い分ける者がいるとは思わなかったと言いながら、今度は溜息を吐いて明確に落ち込み沈んだ様子で言葉を続ける。
「はぁ……私ってそんなに性格悪いかな。そりゃ、お世辞にも上品なお嬢様とは言えないけど、だからって性格ブスってほど他の人に迷惑かけて傷つけてはいないと思うんだけど」
他の者からでも性格が悪いと言われれば年頃の少女としては落ち込んでしまう。それが好きな相手となれば尚更で、しかも言い方が〝どブス〟と一見容姿のことを言っているようにしか聞こえないとなれば余計に傷は深いものとなるのも当然だ。
普段の姿からは想像も付かない落ち込みように、少女を心配した美鶴はフムと言葉を選びつつ、そんな事はないから大丈夫だと励まし

た。
「岳羽の性格だが私から見てもこれと言って粗はないように思える。部活動にも精力的に励み、女子ばかりだが交友関係も広いと聞いている。もし性格に問題があればこの現状はあり得ない」
「まぁ、確かにそうっスね。ちょっとサバサバしてっけど、あんま親しくない男子にも割と親切にしてるし、それで勘違いしちゃうやつもいるくらいだし」
　美鶴に続いて順平もゆかりのことを褒めて大丈夫だと安心させる言葉をかける。一部の女子からは快く思われていないようだが、それは湊と親しいことに嫉妬しているだけなので、別にゆかりの性格に問題があるわけではない。
　本人が嬉しいかはともかく、男子からはその応対の態度も含めて人気があることを伝えれば、ゆかりもそうかなと少し元気になりかけた。
　だが、そうやって他の者が少女を慰めていると、
「ああ、悪女ってこと？　八雲君って貞操観念ちゃんとしてそうだし、そういうビッチ系は嫌いなのかもね」
　ここでまた空気を読めない女が余計な一言を放った。
　立ち直りかけていたゆかりは自分はビッチ系ではないと思いつつも、湊が自分のようなタイプが嫌いだと言われたことが大ダメージだったようで、顔面からテーブルに突っ伏して機能停止してしまう。
　突然のことに驚いた順平が慌てて駆け寄り声をかけているが、そんな彼らを見てから七歌がソファーの方に視線を向けると、何故だか美鶴が気まずそうに視線を逸らしていたので、直前の自分の言葉に何か意見があるのかと問うた。
「おい、みちゅる。何故そこで視線を逸らすんだい？　何かあるならお姉さんに言ってみ？」
「みちゅるはよせと言っているだろう。それにいつ君が私より年上になった」
「こまけぇこたぁいいんだよ」
　こんなのはキャラに過ぎない。今はそんなツッコミなどどうでも

いいので、何かあるならハッキリ口にしろと催促する。
　年長者を年長者と思わぬ彼女の態度は褒められたものでないが、長い付き合いで相手の性格を把握していた美鶴は諦めたように頭に手を当て、首を横に振ると、しょうがないといった様子で口を開いた、
「やれやれ、まぁ視線を逸らしたのは有里のことだ。彼はお世辞にも貞操観念がちゃんとしているとは言い難くてな。むしろ、風紀を乱す側ですらある」
「え、マジっすか？　あ、そういや、前に家に行ったら後輩ちゃんとラビちゃんと川の字で寝てたっけか」
「ヘイ、ボーズ。その話をもっと詳しく聞かせてみな」
　別に誰彼構わず手当たり次第に女子を喰っている訳ではない。そういう点においては十分信用に足る人物ではあるものの、自分の庇護下においた者、もっと簡単に言えば彼が親しくしている女子数名とは既に関係を持っていることが確認されており、それらの一部は恋人関係にない状態だとの情報も得ている。
　これらは全て美鶴が彼らと接している内に自然と得た情報なので、知っているのは総合芸術部の人間くらいだろうが、美鶴や教師である佐久間が黙認しているから問題になっていないだけで、学校に伝われば最低でも一週間以上の謹慎処分となり、事態が重く見られれば退学や転校も考えられた。
　とはいえ、彼と関係を持っていることが確認されているのはゆかりとラビリスのみであり、美鶴から見てチドリも怪しいとは思っているが証拠はない。であれば、前者は恋人、後者は同棲していることで、高校生として褒められない行為ではあるにしろ一定の理解も得られ、風紀が乱れているとは一概に言えないだろう。
　そのため、やけに食いついてきた順平と七歌が話していても、それ以上その話題に口を出すことはしなかったが、他の者がいつまでも生産性のない話をしていたことでグローブ磨きを終えた真田が口を挟んだ。
「くだらない話はそれくらいでいい。それよりお前たち、言っていた調査は進んでいるのか？」

『……？』
聞かれた順平と七歌は頭の上でクエスチョンマークを浮かべ首を傾げる。そんな話ありましたっけとでも言いたげな態度に真田は血圧が上がるのを感じるが、真田が怒鳴る前に今まで機能停止していたゆかりが顔だけソファーの方に向けて答えた。
「一応、調べましたよ。ただ、これ以上の情報収集は現地調査が必要って段階になっちゃって」
「どういう事だ。詳しく話してみろ」
調査をしていてどのような経緯でその考えに至ったのか。気になった真田と美鶴が真剣な表情で尋ねればゆかりはこれまで自分が調べた事を他の者に話した。
同様の事件があって計三人の女子生徒が病院に運ばれたことは美鶴も把握していたが、彼女たちが知り合いでポートアイランド駅の裏路地の辺りにたむろしていたとは初耳だった。
一晩中家に帰らなかった日もあったとの事で、その日も家に帰らぬまま朝になって発見されたとなれば、確かにその日の様子などを知っている者がいないか現地調査しかない。
話を聞いて納得した様子の二人は、よく調べてくれたとゆかりを労いつつ、今後の方針について話し続ける。
「フム、それは確かに普段からたむろしていて彼女たちを知る者に聞くしかないな」
「だな。前日の様子などを覚えているやつがいればいいが」
「ちょ、先輩らマジっすか!? 知らないのかもしれないッスけど、あそこチーマーとかもいてチョーヤバいって噂なんすよ？」
事件解決の糸口を見つけるため現地調査に乗り気な二人に対し、順平はそれは危険だと待ったをかける。
というのも、二人は噂などに疎くて知らないようだが、二人が行こうとしている場所はこの辺りでも有名な不良の溜まり場なのだ。
暴力事件などざらで、タバコ代わりに違法な薬物を吸引している者もいると言われており、さらに有名なカラーギャングやチーマーも出入りしていると言われている。

そんな場所に女子連れで高校生が乗り込むなどライオンの前に餌をぶら下げるようなものであり、絶対に反対ですと想像するだけでビビった様子の順平は熱弁した。
「そんなの噂だろ。いざとなれば女子を逃がす時間くらい俺たちだけで稼げばいい。シャドウを相手にするより簡単だ」
「危険のベクトルが違いますって！　つか、武器もペルソナも使えないんスよ？」
「なら余計に気をつけないとな。決行は週末の夜にしよう。お前らもそのつもりで予定を空けておいてくれ」
危険なら用心すればいい。そういってグローブと整備用品を持って立ち上がった真田は、他の者らに予定日を告げて階段を上がっていってしまった。
それに対し、驚くことに女子からは反対の声が上がらず、順平は完全にアウェーな状況に置かれながらも、おかしいのは絶対に他の者たちだとまともな自分がしっかりせねばと謎の責任感に目覚めていた。

6月6日（土）
夜――辰巳ポートアイランド・裏路地
それから数日が経ち、一同は一度寮に帰って不良たちが集まり時間まで待ってから裏路地を訪れていた。
お世辞にも清潔とは言い難い空間に美鶴は眉を顰めるが、狭い路地を通って拓けた場所に出れば、噂通りにガラの悪い若者たちが酒やタバコを嗜みながら直接地面に座り込んで談笑していた。
中には七歌たちと同じくらいの年頃の女子も混じっており、倒れていた女子たちがここに来ていたという話もあながち嘘ではないように思えた。
しかし、目的があって訪れたとはいえ、ここの常連たちからすれば七歌たちは見慣れない余所者であり、学校の制服を着ているとなれば余計に悪目立ちする。
笑って話していた男の一人は面倒くさそうに立ち上がると、裏路地に入ってきた美鶴らを威嚇するように肩をいからせて近付き、余所者

はさっさと消えろと立ち去ることを要求してきた。
「オマエらちっと遊ぶとこ間違ってね？　制服なんか着てこんなとこ何しに来たんだよ」
「君たちに少々聞きたい事があってな。二、三、質問に答えてくれるとありがたい」
威嚇するようにメンチを切ってきた相手にも怯まず、美鶴はしっかりと相手の目を見ながら淡々と自分たちがここへやってきた理由を告げる。
彼女の後ろでは順平が不良相手にビビっているが、真田や七歌も美鶴と同じように静かに相手を見ており、脅せば簡単に帰って行くと思っていた男の思惑は外れたことになる。
けれど、その程度で逆に怯む訳もなく、相手の男は僅かに意外そうな顔をしてからすぐに小馬鹿にしたような軽い嘲笑を浮かべた。
「ぷっ、君たちだってよ。オマエら目上のもんに対する言葉遣いもしらねぇのかよ」
「その制服って月高だろ。あーあ、私立のお坊ちゃん学校の生徒がこれじゃ日本の将来は暗いねー」
男の年齢は分からないが近くにいてヤジを飛ばしてきた仲間がチューハイの缶を持っていることから、一応は成人を迎えていると判断出来る。
無論、それは相手がちゃんと年齢確認を受けて店で買っていたらの話だが、少なくとも美鶴たちよりも年上であることは確かだと思われるため、美鶴は自分たちに非がないと理解しつつも事を荒げたくなかったことで謝罪を口にする。
「言い方が気に障ったのなら謝罪しよう。すまなかった」
「オマエらの学校じゃちゃんとした謝罪の仕方も習わねぇの？　しょうがねぇからちょっと俺たちが謝り方ってやつを教えてやるよ」
だが、その言葉を聞いた男は全然ダメだなと首を横に振り、教えてやるからちょっと来いよと美鶴の腕を掴もうと手を伸ばしてきた。
咄嗟に危険だと思って七歌は相手を蹴り飛ばそうと動きかけたが、七歌が動くよりも早く真田が美鶴の前に立ち男の手を阻んだことで、

男は面食らって動きを止めて美鶴の危機も未遂に終わる。
そして、仲間に余計なことをしようとした男を真っ直ぐ見つめた真田は、背後に美鶴を庇ったまま欠片も怯みもせず男に向かって言葉を放つ。
「謝り方を教えるのなら言葉で説明すればいいだろう。わざわざ触れる必要はないはずだ」
「バカかオマエ。しらねぇってんで親切に手取り足取り教えてやろうとしてんだろうが。つか、テメェらみたいな余計なやつはいらねーよ。レクチャーし終えたらちゃんと帰してやるからテメェらは先に帰っとけ」
男たちにとって必要なのは女子だけだ。タイプは異なるけれど三人ともが別々の魅力を持っており、整った容姿と服の上からでも魅力的だと分かるスタイルに雄としての本能が刺激される。
己の持つテクニックと雄としてのシンボルによって美しい顔を苦悶の表情で歪ませ、足の先から頭の天辺まで相手の身体の全てを支配したい。
そう思った男は女子たちの身体に向けていた視線を正面に戻すも、そこには静かに敵意を向けてくる少年が立っていたことで、目的を果たすには先に邪魔者を排除する必要があるなと男は面倒くさそうに頭を掻いた。
「あーあ、なんだよその反抗的な目は。こっちは親切で優しく言ってやってるってのにさぁ」
「もういいだろ。面倒だからそっちの野郎二人にだけお帰り願おうぜ。そいつらが帰ったら女の子は丁重におもてなしすっから安心しな」
周りにいた男の仲間が数人立ち上がると真田たちを囲むように近付いて来る。
同じ年頃の女子も近くにはいるというのに、その女子たちも男らが勝手に馬鹿やってると笑いながら見ている事で男らと変わらない下種さだと改めて理解出来た。
情報収集のためにやって来たとは言え、こんな馬鹿なやつがいるの

なら女子らは寮に残してきた方が良かったなと、真田は目の前の男たちを冷めた目で見ながら口を開いた。
「こんなのが同じ男だと思うと情けなくなるな」
「言うねぇ。んじゃ、そういう訳だから。怪我したくなきゃ今のうちに帰った方がいいぜ。女の子には残って貰うけどなぁっ!!」
既に準備が出来ていた男たちは真田の一言が開戦の合図とばかりに拳を握って迫ってくる。
男たちの狙いはあくまで邪魔者の排除、すなわち真田と順平だけがターゲットという訳だ。
真田たちを痛めつけている間、美鶴たちを拘束しようと何人かの男は女子の方へ向かってくると思われる。
しかし、くればそいつから地面にキスすることになるぞとばかり七歌たちも応戦の構えを見せ、こうなったらヤケクソだと順平も真田と共に女子を守ろうと敵の方を向けば、互いの拳が届く距離まで迫ったところで静かな声が響いた。

「――――随分と楽しそうだな」

瞬間、その場にいる全員が全身総毛立ち動きを止める。
空気が重い、ここだけ重力が増していると錯覚を起こしてしまうほどの重圧に膝を折りそうになるも、動けば殺されると本能が告げてくるために誰一人として動かない。
まるで頭から冷水を浴びせるかのように、ヒートアップしていた者たちを一瞬で素面へと戻したそれは、これまで一度して味わったことのないほど濃密な殺意
攻撃的な意識や怒りや憎しみから派生して放たれる殺気ならば、真田も公式戦で当たった対戦相手から感じたことはあるが、殺気と殺意は欠片もかすりもしないほど別物である。
前者は悟らせないよう隠すことも可能ながら、攻撃しようとすれば自然と出てしまう気配。
対して殺意は自分が胸の内に秘めた意識であり、そんなものは言葉

にでもしなければ他の者は感知しようがない。
だというのに、いまこの場にいる者たちは自分の身に大蛇が巻き付く光景を幻視し、それがとある青年の殺意であることをはっきりと理解していた。
「盛り上がってるようだがパーティーでもあったか？」
そうして、誰一人として動けず固まっていれば、濃密な殺意を全員に向けている青年、有里湊がブーツの底を地面にぶつけて鳴らしながらやってきた。
青年の傍らには彼とお揃いのチョーカーを首に巻いた金髪の少女が一人いるが、その少女は場に満ちる殺意を欠片も気にしておらず、普段通りだからこそ異常に映った。
だが、真田たちに襲いかかろうとしていた男たちは、金髪の少女など構っていられる状況ではないと、全身に嫌な汗をびっしょり掻きながら震えて青年に声をかけていた。
「あ、有里君、ち、違うんだよ。これは、迷い込んできたこいつらを脅して追い返そうとしただけでっ」
「そうか。だが、せっかく盛り上がっているんだ。少しくらい遊んでもいいだろう？　人間ボウリングなんかどうだ」
言い終わるかどうか、そんなタイミングで青年は男の襟首を掴んで力任せに引っ張り、仲間たちの固まっていた場所に放り投げる。
勢いよく放り投げられた男は仲間の男らにぶつかり、ぶつかられた方も巻き込んで一緒になって地面の上に倒れた。
見事全員が倒れたことで湊は「ストライクだな」と呟くけれど、遊びはまだ終わらないとばかりに、傍に束ねて置かれていた建設用の足場をまとめていた紐を切ると、そのうちの数本を取ってこれまた力任せに投げる。
「……ダーツなんかも楽しそうだな」
投げられた鉄パイプは男の仲間の身体すれすれの場所に突き刺さり、彼らの動きを物理的に封じる。
そして、金属の棒が硬いコンクリートに突き刺さっていることで、僅かにでもずれていれば人の身体など簡単に貫通していたことを嫌

でも想像させられ、精神的にそう強くなかったのか一人の少女が座ったまま過呼吸を起こす。
「過呼吸か？　心理的なものが原因でなり易いが、まぁ、アルコールの摂取等でなるときもある。治療自体は簡単だが面倒なので今は手っ取り早い方法を取らせて貰おう」
　不良少女の一人が過呼吸を起こしていることに気付いた青年は、相手の元までゆっくり歩いて近付くなり、左手を相手の首に伸ばして締め上げた。
　過呼吸を起こしている状態の相手になにをするのかと思えば、締め上げられた少女は白目を剥いて意識を失い、青年の手が離されたところで規則正しい呼吸を始めた。
　随分と荒っぽい方法ではあるが、精神的な負荷によって過呼吸を起こしているのなら、そもそもそんな事すら考えられない状態にすればいいという解決策だったらしい。
　つるんでる少女の一人を助けて貰ったことはありがたいが、だからといって男たちがしようとしていたことがなくなった訳ではなく、過去に青年に病院送りにされた経験を持つ不良の男らは全身を震わせながら赦しを請うた。
「わ、悪かった。謝る、謝るから許してくれ！」
「……謝ると言われても別に俺は怒っていないからな。お前たちも何も悪いことはしていないんだろう？」
「お、オレたちはそいつらを脅そうとしてたんだ。女子は中々の上玉だったし、楽しめればラッキーだと思って！」
　濃密な殺意という重圧を未だに受け続け、さらに突然知り合いが自分たちの知らない一面を見せながら現われた事で動けずにいる真田たちと違い、男たちは湊の怖ろしさを知っていたことで土下座をしながら自分たちの罪を告白する。
　やってきたばかりの自分にそんなことを言われてもと青年は男らの必死の懇願を軽く流すが、楽しめればラッキーという言葉を聞いたときには思わず呆れた表情になり、顔は男たちの方へ向けたまま被害者になりかけていた美鶴の元まで向かうと、青年は煙管を手で遊ばせ

るときのような自然な気軽さで背後から美鶴の胸を掴んで弄ぶ。
「楽しむ、ねえ。確かに身体は出来ているが……高校生だぞ。それに一人じゃ何も出来ない非力な雄が、数の暴力で女性を屈服させようとするのも気にくわないな」
男たちが楽しもうと思っていた身体が如何ほどのものなのか。あくまで美鶴の存在は気に掛けずただ身体の感触のみを確かめるよう青年が弄れば、服の上からでも一目で分かるほど豊かな双丘は、青年の指が動く度柔らかな質感を残したまま形を変えてゆく。
普段の彼女ならば触れられた時点で手を弾いていただろうが、現在の裏路地は全域が青年の支配圏内に入っており、無遠慮に胸を触れている手は美鶴にすれば首筋に当てられたナイフと変わらないのだ。
余計な動きをすれば殺されると頭ではなく本能が認識してしまう状況で、どうして不良たちは謝罪のためだろうと動けているのか不思議でならない。
だが、美鶴から離れた湊が土下座をしている不良たちの顔面を蹴り上げ意識を刈り取っていれば、その対象が傍観者に徹して男らを止めようとしていなかった少女まで及ぼうとした段階で、奥の方で動く気配があり制止の声が掛かった。
「その辺にしとけ。確かにこいつらは手を出そうとしてたが実際にはまだ出してねぇ。未遂の罰ならそれくらいでいいだろ」
言いながらやってきたのは夏前だというのに、コートにニット帽という季節感のない格好をしていた荒垣だった。
特別課外活動部のメンバーよりは今の湊の状態に耐性がついているけれど、いつまでもこんな重圧を受け続ければ精神が先に参ってしまうのは彼も同じだ。
額に脂汗を掻きつつ、それでも止めねばならないと思ってやってきた彼が声をかけた事で止った青年は、数秒だけ蒼い瞳で荒垣を見たかと思えば、再び粛正という名の一方的な虐殺を再開しようした。
しかし、彼の拳が少女に向かって伸びるよりも早く、今までずっと待っていた金髪の少女がもう飽きたと呟き彼の行動を止めた。
「ミナト、ここつまんない。いこ?」

「……そうだな」
自分も粛正対象になると覚悟して止めに入った荒垣の言葉は無視されたというのに、金髪の少女が言えば湊はあっさりとその手を止めて殺意も納めた。
それによって今までまともに動くことも出来なかった者たちは、思い出したように肺に空気を取り込むが、動ける状態になったときには湊も金髪の少女も姿を消していたので、タイミング良く彼らがここに現われた理由を尋ねることは出来なかった。
しかし、真田たちからすればもう一人知り合いが残っていたので、そちらの少年に近付いて声をかける。
「シンジ、いたのか」
「お前らが来る前からな。それはいいが馬鹿かテメェ、こんなとこに女子なんか連れて来るんじゃねぇよ。お前が喧嘩に巻き込まれるのか勝手だが、そいつらに何かあったらどう責任取んだ」
「……すまん、考えが足りてなかった」
会っていきなり説教を喰らった真田は、自分に非があったことで幼馴染みの言う通りだと反省する。危険な目に遭わせかけたことで女子たちにも謝罪し、直接的な被害はなかったので大丈夫だと許し合ったところで再び荒垣が口を開いた。
「んで、なんでわざわざこんなとこに来たんだ？」
「普段からここにいる者に少々聞きたい事があってな。月光館学園の女子生徒が校門前で倒れていた事件は知っているか？」
「一応な。ここに出入りしてたやつが何人も巻き込まれてたってんで話題にもなってた」
美鶴に聞かれた荒垣はそれならここでも話題になっていたと話す。いくらまっとうな道からはずれた者たちが集まっているといっても、他に行き場がないからこそ集まっている者同士の繋がりは強かったりする。
相手が月光館学園に通う生徒だったこともあり、直接話したことはほとんどないが荒垣にも覚えくらいはあった。
「そうか。私たちはその少女らの前日の様子などを知っていた者がい

たら教えて欲しかったんだ。倒れた原因が分かれば、そこから情報を整理して死んだ生徒の怨霊とやらの話も分かると思って」
「なんだ、んなこと調べてたのか。死んだ生徒のこともここじゃ話題になってたぞ。事故にあった女子らが一人の生徒を苛めたらしくてな。人知れず自殺とかなんとかって話だ」
被害者のアリバイを調べているかと思えば、怨霊の正体を調べるため動いていたと聞いて荒垣は拍子抜けする。
しかし、すぐに表情を引き締めると美鶴たちが考えているよりも、真相はもっと生々しいものだぞと告げる。
自分が会長を務める学園内でイジメがあり、被害者が自殺したという話を聞いたことのなかった美鶴にすればそれだけで衝撃的な話だ。
真偽はともかくとして、今は出来るだけ情報が欲しい。そうして、顔を上げると美鶴は彼に被害者の名を尋ねた。
「……その苛められていた生徒の名は？」
「……山岸だ。加害者に対して有里が動いてない以上流石に死んではねぇと思うが、ここ数週間は学校にも顔を出してないって聞いた」
そして、被害者の名を聞いた途端、美鶴よりもゆかりの方が顔を驚愕に染め、すぐ真っ青になるとなんの冗談だと取り乱す。
「な、何よそれ。私、そんなの全然聞いてないっ。風花が自殺って、いじめられてた素振りだって全くなかったしっ」
「落ち着け岳羽。いま君が動揺しても何も解決しない。私もグループを通じて山岸の件は調べるから、君は自分の知り合いから情報を集めるんだ。大丈夫、絶対に生きている。だから今は冷静になれ」
大切な友人がイジメを苦に自殺と聞いて冷静ではいられないのは当然だ。しかし、荒垣も言っていた通り今回の件で湊が動いた気配がない。
彼は独自のネットワークを持っているため、風花の死を知れば確実に加害者を家族ごと地獄に叩き落とすはずなので、それが成されていない以上生存は確定だと思って良いはず。
根拠が一人の青年の行動とは随分と軽く思えるが、彼が強大な力を持つペルソナ使いだと知っている美鶴や荒垣にすれば、これ以上ない

ほどの信憑性があった。
　そして、彼らと同じように湊に対して絶大な信頼を寄せているゆかりも、彼が動いていないのが何よりの証拠と言われれば何よりも納得出来たことで落ち着きを取り戻した。
　混乱していた後輩が落ち着いたのを見た荒垣は、この様子なら大丈夫だなと話を切り上げることにし、自分も彼らに背を向けると用が済んだなら帰るようメンバーに促す。
「話はそんだけか？　だったらもう帰れ。ここには近付くな」
「ああ、助かった。情報の礼に今度はがくれでも奢ろう」
「けっ、随分と安い礼だな」
　色々と予想外のことはあったが荒垣のおかげで情報が手に入ったのだ。お礼がラーメンと言われて荒垣は不服そうだが、それがただの軽口であることを真田は知っている。
　話は終わったとして全員が寮へと帰ろうとしたとき、今まで黙っていた七歌が顔をあげたかと思えば、何を思ったのか突然美鶴の胸を揉み始めた。
　触れられた美鶴は驚きつつも、当然、他人に触れられていい気分はしないので弾いて距離を取るが、どうしてこんな事をしたのか少女を問い詰めた。
「お、おいっ。急になにをするんだ！」
「え、いや八雲君に自由に触らせてたんで、パブリックドメインなのかなって思ったんですけど」
　七歌が美鶴の胸を揉んだ理由は湊が好き放題揉んで去って行ったからだった。彼が良いなら自分もいいはず。そんな謎理論を展開する彼女には呆れるしかない。
　けれど、七歌の口にした単語の意味を知らなかったことで、美鶴の胸を揉んだ七歌を羨ましそうにみながら順平がその意味を尋ねる。
「パブリー？　七歌っち、それどういう意味なん？」
「んー、簡単に言えばご自由にどうぞ的な？」
『なにっ!?』
「マジすか!?」

言葉の意味を聞いて反応した声は三人分。七歌に尋ねた本人と、それに加えて帰ろうとしていた荒垣と順平の傍にいた真田だ。
三人の男たちは驚きつつも視線は美鶴の胸に集中しており、いくら仲間といえど無礼にもほどがあると美鶴は腕で胸を隠しながら三馬鹿を怒鳴りつけた。
「そんな訳があるか！　煩悩に塗れた俗物共め、全員まとめて処刑するぞ！」
「でも、八雲君はオッケーでずるくないですか？」
「あのときは気にしている余裕がなかっただけだ。当然、有里にも認めた覚えはない。まぁ、今更追いかけて謝罪を求めるつもりもないが」
そも、どうして湊が触ったのか分からない。不良たちが楽しめそうと言っていた身体がどんなものか確かめたのだと思われるが、初めてといっていい本格的な湊からの接触がボディタッチとは少し泣きたくなる。
彼の母親も美鶴の母親もさらに言えば桜も全員が豊かな母性の象徴を持っているため、彼にすれば女性の胸は母親を感じることの出来る重要なものなのかもしれない。
とはいえ、男子との交際経験もない美鶴にすれば、いくら彼が来てくれると言われようが身体を好きにさせるというのはハードルが高すぎた。
なんとか膝枕辺りで妥協して貰えないだろうかと真剣に悩みつつ、ゆかりとも約束し彼女自身とても心配しているので風花の件もしっかりと調べようと考えながら、他の者たちと共に美鶴は寮へ帰っていった。

第二百十四話　救出に向けて

深夜――巌戸台郊外

七歌たちが不良と一触即発の状態になっている現場に偶然にも遭遇した湊は、以前した〝一般人に迷惑をかけない〟という約束を破ろうとした不良たちにちょっとしたお仕置きを終えると、共にいたマリアと一緒に巌戸台郊外までやって来ていた。

彼の左腕をぎゅっと掴んでいるお姫様はどこかご機嫌斜めで、彼女が機嫌を損ねる理由に心当たりのない湊は、きっと月に一度やってくる女性特有の理由に違いないと最低な当りを付けるも、自分で勝手に決めつけておきながらそれが間違いであることには気付いていた。

彼の肉体性能は人よりも優れている。それらは動物に近く、肉眼で数キロ先が見えたり一部の動物のように赤外線などを肉眼で捉えることも可能で、嗅覚も例外ではなく様々な匂いを嗅ぎ分けられるのだ。

よって、知られれば変態と罵倒されるに違いないが、青年は月経時の女性が近付いてくれれば匂いで気付く。仮に嗅覚を封じられても触れた体温の違いから判断することも出来、今のように生来の腕である左手に触れていれば嫌でも気付けた。

匂いと触診の結果マリアは白。別に下着の色を指している訳ではなく、現在の彼女は平時の状態で月のものまで期間があるという意味だ。

そも、調べなくても周囲の人間の生理周期くらい彼は把握している。頼る大人のいないストレガの女性陣が初潮を迎えた際に世話をしたのは湊であったし、付き合っていたゆかりや風花に関しては肉体関係を結んでいることで彼女たちの方からなったときにしばらく出来ないと伝えてきていた。

そういった理由で時期を把握し、それとなく彼女たちをフォローしてきた彼だが、女性特有の理由でなければ何が理由なのだろうとボンヤリと考える。

心を読んでしまえば一発だと頭で理解しつつも、仕事でもなければ

極力使わないと決めているのは、彼なりに人付き合いに誠実であろうとする気持ちの表れである。
まぁ、生きること自体に不器用な彼が自分の力だけでなんとかしようとしても無駄でしかないのだが、そんな彼のことを理解している少女は可愛らしく頬を少し膨らませながら拗ねた表情で青年に話しかけた。
「ミナト、大きいおっぱい好きなの？」
「……突然だな。何を思ってその考えに至った？」
質問に質問で返すのは頂けない。それを分かっていても青年は彼女が急に変な質問をしてきたことで理由を尋ねるしかなかった。
すると少女は湊と繋いでいる手に僅かに力を籠め、視線を道路に落としながらポツリと答えた。
「ミナト、さっきおっぱい触ってた。あの大きいのがいいの？」
「……別に大きさで選んだ訳じゃないが」
「じゃあ、あのおっぱいの人が好きなの？」
「それはない。というか、胸しかないように言うな」
マリアがジッと見つめながら美鶴のことが好きなのかと問うてくれば、湊はとても静かに落ち着いた声であり得ないと否定した。美鶴の名誉のために胸以外にも見るべき点はあると擁護するオマケ付きで。
彼にすれば非常に珍しいと思える行動だが、他の者たちは美鶴に対する湊のことを一部誤解していた。
湊は別に美鶴個人は嫌っていない。もっと言えば〝英恵に似ている〟という点に置いて容姿は好きな部類ですらある。ただ、父のことで視野が狭くなっており、罪を背負うと言いながら自分自身の戦う理由すら誤魔化して仲間たちに嘘を吐いているのが許せないのだ。
つまり、器として捉えれば気に入っているが、その中身が心の底から嫌悪する部類の無能であるため現在の対応となっている。
そこまで詳しく話したりはしないが、とりあえず美鶴を好きだなどという事実はないと断言したことでいくらか機嫌の戻ったマリアは、嬉しそうに彼の腕を自分に引き寄せ、ここ最近でさらに育ってきた豊

かな双丘の谷間に挟み込んだ。
「マリアも大きくなった」
「……そうだな」
「触らないの？」
「別に発情してる訳じゃないからな。第一、もう目的地に着いた」
彼が自分にはしてくれないと思ったときには落ち込みそうになっていたが、いつの間にか目的地に着いていたと知るとマリアはキョトンとしながら目の前の雑居ビルを見上げた。
昭和という時代を感じさせる古びた外観、時間帯もあって緑の非常灯しか点いておらず、周囲には点々と民家や小さな店があるだけで外には人の気配を感じず、昼間は普通の田舎の風景が夜にはなんとも不気味に映る。
こんなところはアナログな防犯設備しかなく、警備システムもいれていないところが多い。入り口のガラス製の扉の前に立った青年は右腕に黒い炎を纏わせると、その炎を伸ばして扉の鍵穴の中に入れて解錠した。
元は力の塊であるため形状は変幻自在、それを鍵穴に入れてしまえば労せずスペアキーに早変わりするという訳だ。別に炎を使わずともピッキングスキルを持っているが、どちらが早いかなど比べるまでもない。
静かに中に入った湊たちはビルに一つしかない階段を上り、人の気配のある三階まで真っ直ぐ進む。古いビル特有のやや埃っぽい臭いにマリアが顔を顰めつつも、階段から二番目に近い部屋から小さな明かりが漏れていたことで湊はそこまで進むと扉を開けた。
「だ、誰だっ!?」
薄暗い部屋に入るとメガネをかけた小太りの中年男性と、三十代と思われる切れ長の目をした女性が中にいた。どちらもスーツを着ており、いやらしい理由で密会していた訳ではないようだが、人が突然入ってきたことに驚いた男が叫んだことで両者は距離をあけて対峙する形となった。
二人は小さなライトで自分たちの足下を照らし、それによって外に

明かりが漏れるのを防いでいたようだが、その明かりを男が向けてきたことで、今なら顔も見れるだろうと湊は薄い笑みを顔に浮かべる。
「……自分の上司の顔くらい覚えておけ」
「しゃ、社長っ。違うんです、これは研究に必要な情報を貰おうとしていただけでっ」
「……そういうのはいい」
男はやって来たのが湊だと分かった瞬間慌てて言い訳をするが、それを聞いた青年は途中で五月蝿いから黙れと男に口を閉じさせる。
湊が今日ここへやってきたのは研究員の一人が情報を持ち出し、それを外部の人間に売り渡そうとしているとの話を耳にしたからだ。
医療や人間工学に偏っているものの、ＥＰ社で行なっている研究はオーパーツである黄昏の羽根を使用していることもあり、その技術は他の企業の数年先をゆく。
中でも生体パーツと呼ばれる人の細胞を培養して作る義肢など、実用可能レベルで既に完成していると分かれば世界中からオファーが殺到し、先天的後天的に関係なく身体障害者たちの希望の光になるとしてノーベル賞も狙えるものだろう。
だが、いくらそれが人の助けになると言っても、湊がその研究を始めたのは自分の右腕とアイギスたちの身体を作ることが目的だったので、契約時点でそれを認めているシャロンが一部技術を一般用義肢に流用する以外は誰にも使わせるつもりはなかった。
「お前たちのことなんか最初から信用していない。女や金、家族の問題等で簡単に裏切る可能性があるんだ。個人の生活状況によってはあり得るだろうし、自分の大切なモノのために動くことを咎めるつもりない。だが、こちらの不利益になるのならそれは容赦しないと最初に言ったはずだ」
確かに研究結果を公表ないし他企業に売れば、それによって技術は目に見えて進歩するに違いない。
だが、急激な技術の変化に現場が対応出来るかというとそうではなく、逆に扱いきれない技術によって大きな事故が起きることも考えられる。

湊はそれらを考慮し、またその技術を使って肉体を手に入れた少女らを守るためにも、余計な問題が起きないよう守秘義務を徹底させていたのだ。
男はそれを破り、よりにもよって湊が憎んでいる組織の人間に売ろうとした。裏切り者の男は当然始末するが、情報を見たこの女も同様に対処すると青年は氷のように冷たい瞳を向ける。
「そして、桐条の研究員。お前も同じだ」
「ま、待って！　私はただ取引を持ちかけられただけで、正統なビジネスとして情報を受け取ろうとしただけなの！」
「知らない。興味もない。こちらの機密情報を見た時点で生かしておく理由がない」
部屋の温度は急激に下がってゆく。夏前だというのに窓の表面に薄らと氷が張り、自分たちの呼気が白くなっていることでそれが現実だと理解する。
ペルソナ等については一部の研究員しか知らされていないため、そこに含まれていない男は一体何が起きているのか分かっていないようだが、女の方は桐条のラボに務めていて適性者候補のリストにも目を通していたようで、どのような力が放たれようとしているかを理解し全身を震わせている。
「ま、待って有里君っ。貴方のその力は世界のために役立たせる事が出来るのよ。私と一緒に来てくれれば、同じ力を持った人たちを紹介できるわ」
「……興味がないと言っただろ。世界のため、人々のため、そんな耳障りの良い言葉を謳うやつを俺は信用しない」
同じ氷結の力を司るペルソナを持つ美鶴と七歌を知っている女は、召喚せずとも現実まで影響を及ぼす能力はまさかに規格外だと評価する。
室温はさらに下がり続け、顔や耳が痛くなってきても女は湊から視線を逸らさず交渉するも、青年は欠片も心に響かないと冷たい瞳で二人を射貫く。
「もういい。そのデータは手向けにくれてやる。向こうで自由に使う

といい」
記憶を探れば男はここに持ってきたコピーの他は私物のパソコンにしかデータを残していない。ならば、目の前のものを処分した後に男の自宅を訪れパソコンを回収ないし処分すればいい。
よって、青年は冥土の土産だと口にすると、黒い炎をコートのような形状にしてマリアに纏わせる。彼のマフラーも外気をある程度遮断する効果はあるが、いちいち着せる手間を考えれば蛇神の影の方が手早く済むのだ。
共にいる少女の安全を確保出来たことで準備は完了。これでもう何も気にする必要ない。震える大人たちが怯えた顔をする目の前で、彼は冥王の姿をした黒い死神を呼び出した。
「――――ニヴルヘイム」
現われた黒い死神から波紋のように白い波動が放たれる。部屋の中にあった机や椅子が白く固まったかと思えばすぐに崩れていき、同じように波動が研究員らに届くと二人は凍りつき一瞬で絶命した。
死んだ二人はそのままゆっくり倒れ床にぶつかる。すると身体は崩れて肉体だった破片と共に赤い細かな粒が広がった。
二人の持ち物も一緒に崩れて元が何だったのか分からなくなったため、これで情報が余所に渡る心配はないだろうとビルを後にする。
彼の後に続く少女は不思議な感触のコートに関心を持っているようだが、彼が指を鳴らすと炎のようになって霧散してしまったことで少々残念そうな顔をした。
それを見た湊はマリアを慰めるように頭を撫でてやり、相手が気持ちよさそうな顔をするのを眺めながら研究員の男の家を目指してビルを後にした。

6月8日（月）
朝――月光館学園
週末に裏路地で情報を集めたことで、休みが明けて学校に来るなり、ゆかりたちは風花の件を確かめるべく職員室を訪れていた。
失礼しますと職員室に入れば、風花のクラス担任である江古田のも

とに美鶴とギャルっぽい見た目の生徒が既におり、ギャルっぽい見た目の生徒は思い詰めた表情で何やら話していた。
「自殺でもされたらヤバいと思って、夜中にマキが閉じ込めた体育倉庫に行ったんだけど。そしたら、あんなことになっちゃうし。他の子も探しに行ったけど、そのたびに皆帰ってこなくなってっ」
やってきた七歌たちも途中から話を聞いたが、どうやら彼女たちは風花を体育倉庫に閉じ込め、後で様子を見に行く度に仲間が校門前で見つかる事態になっていたらしい。
学校に行ったのが夜中というのが気になり、倒れていた少女たちの様子が無気力症に似ていたことで、七歌はもしかして影時間に迷い込んでシャドウに襲われたのかと推測した。
七歌が気付いたということは美鶴もきっと同じ答えに辿り着いているはずだが、江古田から森山と呼ばれた生徒が話を終えると、美鶴は森山に先に職員室を出ているように言い。彼女が出て行ってから改めて江古田に向き直り口を開いた。
「ここ数日の山岸の欠席は〝病欠〟と届けていらっしゃいますが、先生は山岸が行方不明だとご存じだったのでは？　知っていて何故警察に届け出ないのですか？」
「これが事件に巻き込まれているとなればすぐにでも届け出るが、家出や駆け落ちなら動くだけ山岸を追い詰めることになるだろう？思春期の子ども相手には慎重さも必要なんだよ。ご両親も様子を見ることで納得されていらっしゃる」
江古田の言っていることは正しくもある。森山の話が真実であれば風花は苛められてことになり、そんな彼女は現在の自分の置かれた環境から逃げたくて家出をした可能性がある。自分の意思で動いているのなら下手に騒ぎになれば余計に彼女を追い込むことになってしまい。追い込まれている相手をさらに追い込めばそれこそ取り返しのつかない事態になりかねない。
それなら、ある程度相手に考える期間を与え、頭が冷えるのを待った方が良い結果に落ち着きやすい。
既に両親とも話をしていたことで、江古田の言い分も一理あると

思ってしまった美鶴は複雑な表情を浮かべたが、これ以上話しても有益な情報は得られないとして職員室を出て行く美鶴に追従する形で七歌たちも廊下に出た。
職員室の独特な空気から解放された順平はホッと息を吐いているが、そんな彼を呆れた顔で見ていた七歌とゆかりは、何やらエントランスホールの方が騒がしい事に気付き、待っているはずの森山がいないことで嫌な予感がして急いでエントランスホールに向かう。
美鶴と順平もそれに続いて生徒玄関であるエントランスホールに来たが、そこには予想通り森山がいて、今来たばかりの様子の有里湊に何故だか食ってかかっていた。
相性が悪そうな二人は一応同じクラスらしいが、何を揉めているのか話を聞こうと近付けば、少々不穏な言葉が七歌たちの耳に届いた。
「アンタが、アンタがマキたちを襲ったんでしょ！」
襲ったとは随分と物騒な言葉だ。そんな事を口にしながら森山が今にも湊に掴みかかろうとしていたことで、順平は止めとけと肩を掴んで相手を止める。
「ちょ、タイムタイム！　有里君ってば何にも関係ないでしょーよ」
「マキが倒れてた日の朝、コイツがアタシに言ったんだよ！　お前は最後だって！　それから順番に皆倒れて、最後に私だけが残ったなら犯人はコイツしかいないじゃん！」
確かに一人目の被害者が発見された日にそんな言葉を聞けば、状況から見ても彼が事件と無関係とは思えなくなる。
激情で身体を震わす森山の迫力に順平は思わず手を離して彼女を自由にしてしまうが、相手が再び湊に向かっていくよりも先に、今度は湊が感情の読めない瞳で森山を見ながら静かに口を開いてきた。
「……お前の友人とやらは発見される前日の深夜から学校に向かい、そのまま朝になってから校門前で発見されたんだ。その時間帯のアリバイを持つ俺がどうやってそいつらを襲うんだ？」
「アリバイなんて口裏合わせてるだけでしょ！」
「はぁ……考える頭もないなら人間の言葉を話すなクズ。アリバイは街中の防犯カメラでも確認出来る。そして、お前の友人たちは病院で

〝無気力症〟と診断されているんだが、俺がどうやって離れた場所にいる人間を精神疾患にしたか言ってみろ」
口調は静かなものだが、自分を犯人扱いした人間に対して湊の方も辛辣な言葉で返してゆく。
完璧なアリバイ、どうやっても不可能な状況、それらが揃っていても犯人だと思うなら証拠を出せ。
彼の主張は当たり前のものだが、それでも森山はまだ納得出来ていないようなので、湊はあの日の言葉の意味を語った。
「前のあれはお前が少しでも苦しむよう脅しただけだが、言った通りの結果になったなら良かった。他者の尊厳を踏みにじっておきながら、自分たちが罪悪感に駆られれば掌を返すその図々しさは尊敬に値するな」
本当に風花を心配しているのなら警察にでも届け出ているはず。しかし、彼女は学校にこそ相談したが、結局それは様子を見ようということになって成果を得られていない。
そんな無駄なことばかりしている状況を見て、湊は彼女が本当に救いたいのは風花ではなく罪悪感を感じている自分なのだと断言した。
取り返しのつかない事をしてしまった訳ではない、という確証とそれによる免罪符が欲しいだけ。風花に対して全く心配していない訳ではないだろうが、結局は嫌な事から逃げたいだけなのだ。
それを見透かした湊は金色の瞳に時折蒼色が混ざりつつも、口の端を歪めて馬鹿な奴らだと校門前で倒れていた生徒らを心の底から侮辱する言葉を吐いた。
「いっそ本当に死んでくれれば感謝の心から花の一つでも手向けてやったものを、無気力症程度とは随分とつまらない結果になったな。ああ、お前らみたいな価値のないやつに期待するだけ無駄だったか」
「コイツ、殺してやるッ!!」
自分の友人たちを価値がない存在と言われた事で、森山は我慢の限界に達して掴みかかろうとした。
しかし、森山が距離を詰めようとした瞬間、湊の左手が彼女の首に向かって伸ばされていた。

一般人からすればその手は相手の首をただ掴もうとしているようにしか見えなかっただろう。だが、一切の感情が消えた瞳と彼の気配から、七歌はそれが殺すための毒手だと気付いて横から森山を突き飛ばしていた。
そして、彼の方にも変化があり、見れば腕を伸ばしきる前に背後から二人の少女が接近し、その身体と腕を掴んで止めていた。
「やめなさい、湊」
「気持ちは分かるけどアカンよ」
彼を止めていたのはチドリとラビリス、彼女たちは中々やってこない湊を迎えにきたようだ。
森山を突き飛ばしたことで入れ替わる形になった七歌は、数十センチほどの距離まで詰められた彼の手を見て、彼女たちが止めていなければ自分がやられていたと思わず安堵の息を吐く。
突然突き飛ばされた森山は状況を理解していないようだが、やってきた少女らが湊をそのまま連れて行ってしまったので、安全が確保された七歌は煽ったのは彼だが貴女も悪いと森山を諌める。
「森山さん、貴女が友達を馬鹿にされて怒ってたように、八雲君も山岸さんのことで相当怒ってたんだよ。貴女たちのせいで山岸さんは行方不明なんだし、少しは八雲君の気持ちも理解してあげて」
「……わかったよ」
それを言われると森山もばつが悪そうにする。高校入学組の彼女は湊らの関わりを知らないが、中等部からいる者にすれば湊の怒りは当然なのだ。
自分と友人の関係に置き換えて考えてみろと言われ、冷静になった彼女はそのまま落ち込んだ様子で去って行ったが、残った者たちは先ほどの光景で先日のことがフラッシュバックしたと疲れた顔でお互いを見合った。
「ぶっはー……マジで朝から嫌な汗かいたわ。山岸さんのことで激おこなのは分かるけど、この前の件もあるし有里君てば怖すぎだってのの」
「そんな暢気な話じゃないよ。いま本気で人が殺されかけたんだか

ら」
未だに湊に対して若干の距離を感じている順平は、彼の纏う独特の張り詰めた空気は苦手だと身体を解すように腕を回す仕草をしてみせる。
その気持ちは分からなくもないと七歌は思ったが、けれど、事態はかなり危険なところまで進んでいたと告げる。
そして、あまりに現実味のない七歌の言葉に順平とゆかりは不思議そうな顔をすれば、美鶴も彼女の言葉を肯定するように頷き、あのままチドリたちが来なければ起こっていたであろう惨劇を二人に説明した。
「七歌が森山の助けに入り、吉野と汐見が有里を止めてくれたから無事に済んだが、誰も止めていなければ有里は森山の首をへし折っていた」
「は？　え、首へし折ったら死んじゃうじゃないッスか!?」
「だから本気で殺したいくらい怒ってたんでしょ。百鬼は愛が深い一族なの。大切な人を傷つける存在は何があっても許せないんだよ」
大切な人を傷つける存在を許せないというのは分かる。順平たちだって友達を傷つける者がいたら怒りを覚えるし、仕返しをしてやろうと考えることだってある。
しかし、それで躊躇いもなく相手を殺せるかと聞かれれば答えはノーだ。いくらなんでも殺すなんてことは理性がストップをかけて出来ない。
百鬼の愛はそれすらも容易に超えてしまえると七歌は話すが、それを純粋な愛と呼んで良いのか順平たちには分からなかった。

放課後――生徒会室
そして、その日の放課後。森山から事件の被害者たちの様子などを詳しく聞き込んできた美鶴が招集をかけたことで、特別課外活動部のメンバーは生徒会室に集まっていた。
全員が集まったことを確認した美鶴は、他の者が入ってこないよう内側から鍵をかけると、座ってくれと着席を促し全員が落ち着いたと

ころで話を切り出す。
「来る前に森山からもう少し話を聞いてきたが、彼女の友人たちが校門で発見される前日に何かの呼び声を聞いていたそうだ。無気力症になったことを考えれば、その呼び声はシャドウの物だろう」
当初は意識不明で原因は調査中となっていたが、意識を取り戻したあとの様子が無気力症と一致したことで、校門前で発見された全員が無気力症と診断されていた。
ただ、その件については病院側から伏せられ身内しか知らないはずなのだが、湊はどこで彼女たちの病状を知ったのだろうかと美鶴の中に疑問を残しつつ、いま聞かされた話によっていくつかの謎が解けたなと真田は不敵に笑う。
「なるほど、あいつらは自分の狙ったターゲットに呼び声で干渉し、それによって影時間に落とすという訳か」
「え、それじゃあシャドウって人をちゃんと区別してるってことッスか？」
「そういう事になるな。選定基準は分からないがやつらは明確に人類を狙っている。それがようやくはっきりした」
これまでも無気力症という形で犠牲となった者を出していたが、てっきり偶然影時間に迷い込んだ者が襲われるとばかり思っていた美鶴たちにすれば、シャドウの方から人に干渉して来るというのは晴天の霹靂だった。
それはつまりシャドウは明確に意思を持って人を襲っているということになり、人間にすればシャドウは天敵ということになる。
偶然ならともかく向こうから襲ってくるとなれば認識を改める必要がある。シャドウは人類の敵だと。
「それで私たちは何をすれば良いんですか？」
「森山の護衛……と言いたいところだが、今回は山岸の救出任務が優先だ」
一同がシャドウについて新たな共通認識を持ったところで、ゆかりが集められた理由について尋ねれば、美鶴は少々言い淀みながら風花救出について詳しく他の者に話す。

「山岸は体育倉庫に閉じ込められて姿を消した。鍵は掛かったままでそれは不自然だ。となれば、彼女は学校がタルタロス化した際に迷い込んだ可能性が高い」
「影時間を足した分しか時間が経過していないとすれば、山岸は恐らく無事だろう。だが、シャドウにいつ襲われるか分からない。よって、今夜にも作戦を決行しようという訳だ」
ペルソナ使いである七歌たちも慣れるまでは影時間の活動で普段以上の疲労を感じていた。となれば、まだ目覚めてもいない風花の疲労はその比ではなく、シャドウに襲われる危険もあるためスピード勝負という訳だ。
さらに真田は遭遇確率を上げるため、行くときは風花と同じように体育倉庫からだと他の者にも告げ。補助の美鶴とその護衛に誰が残るかという話になったときには、友達は自分の手で助けたいとゆかりが救出隊を強く希望したことで順平が残ることに決まった。
次にシャドウに狙われそうな森山を寮で一時的に保護し、その間に七歌たちは風花を助けにタルタロスへ向かう。作戦内容が決まったことで意識の切り替わったメンバーたちは、絶対に助けようと誓い合い、放課後の時間を準備に費やした。

第二百十五話　救出の果てに

夜――桔梗組

満月になると危険な厳戸台を離れて桔梗組で保護されている美紀は、チドリとラビリスの二人と一緒に桔梗組に来ると、桜と共に出迎えてくれた人物を見て目を丸くした。

何故なら、ここ数週間休んでいて連絡も取れなかった友人が元気な姿でいたから。

風花が出迎えてくれたことに驚いていた美紀に対し、風花の方もどうして美紀がここにやってきたのか驚きつつも疑問に思ったようで、家に上がったチドリの方から事情を説明し、まさか相手が影時間に関わっていると思ってなかった二人は再び同じような驚きの表情になっていた。

そうして、全員が着替えを済ましてリビングに集まれば、湊が来るまで宿題でもしておこうと軽い勉強会をして過ごし。時間が遅くなってきたことでお開きになってから夕食の用意をしている途中で湊がやってきたため、一同は食事をしながら話そうとダイニングに集まっていた。

「でも、驚きました。風花さんがこちらで保護されていたなんて」

「あ、うん。偶然タルタロスに迷い込んだ日に有里君が来てくれて、少し自分のことを考えるべきだって連れてきてくれたの」

本日のメニューは豚カツをメインに、おひたしと漬け物とひじき、お味噌汁とサラダ、さらに湊が好んで食べるからと桜お手製の揚げ出し豆腐や煮物も並べられ、栄養バランスも気にする女子にも嬉しいラインナップとなっている。

ただ、青年の前だけキャベツ丸々一つ分の千切りが盛られており、それが壁になって他の席からは顔が見えづらいのだが、彼はテーブルの上座に一人で座っているので影響は少なかった。

そんな一人でモリモリとキャベツや煮物を食べている彼を横目で眺めつつ、風花は自分と近い立場にある美紀のことを改めて教えて貰おうと口の中のものを飲み込み話しかける。

「美紀ちゃんはペルソナ使いじゃないんだよね？」
「はい。戦う力を持ってないので、危険な満月の日にこちらで保護していただいているんです」
「凶暴になるんだっけ？　それと大型シャドウも出るとか」
　今日は満月だ。それはつまり一ヶ月の中で最もシャドウが凶暴な日ということであり、さらに大型シャドウが現われる日ということでもある。
　美紀の暮らす真田家は巌戸台にあるため、戦う力のない適性持ちが留まると見つかったときにとても危ない。それを未然に防ぐための保護であった。
「……話は終わったか？　これから山岸がどういう立場を取るか話し合っておきたいんだが」
　いつの間にかキャベツの山を食べ終えていた青年が口を開く。
　少女たちを保護した張本人であり、もっと言えばチドリとラビリスを連れてきたのも彼なのだが、彼が助けた少女たちの視線が集まると、彼はマフラーから出来たての麻婆豆腐を取り出し、追加でそれを食べながら話を切り出した。
「今日の影時間に特別課外活動部がお前の救出のためタルタロスへ向かう。お前が向こうにつくなら俺はお前をタルタロスまで運ぶし、こちら側に残るのであれば自然な形で家に戻れるよう手配しよう」
　特別課外活動部が救出に動く以上、タルタロスに迷い込んだはずの風花は生死を問わずタルタロスにいなければならない。
　それはタイムリミットが来たということであり、今晩で彼女のここでの生活は終わりということだ。
　まぁ、一日では見つけられなかったと引き上げてくれるのなら、もう少しだけ延長しておくことも可能だが、自分のために救出班が動くと聞いた風花は申し訳なさそうにしており、これなら延長など言い出さないだろうと見越して湊は話を続ける。
「お前の能力を活かすのであれば特別課外活動部の方がいい。向こうにとってお前の能力は喉から手が出るほど欲しいものだからな。能力含めお前は誰からも必要とされるだろう。対して、俺はお前に能力

的な価値を一切求めていない。ああ、誤解しないように言っておくが、山岸のことを無価値と言ってるんじゃない。俺が認めているのは山岸個人だ。例え何も出来なくともお前という人間がいてくれればそれでいい」

能力的な価値を一切求めていないと言ってからすぐ、湊は風花を気遣うように言葉を付け足す。

相手が傷つけるために言っている訳ではないと分かっている少女は、補足して貰わずとも意味を理解していたが、彼の気遣いが嬉しかったことで小さな笑みを浮かべる。

しかし、それはそれとして、現状風花が選べる二択はどちらを選ぶにしてもメリットデメリットがあった。

前者ならば自分も戦場に近い場所に行く必要がある代わりに、彼女もチームの力となって一緒に活躍することが可能だ。

対して、湊側についた場合は彼女は何もする必要がなく、それは危険にも巻き込まれないと言うことだが、代わりに自分だけの価値を求めている彼女にすれば力を得たにも関わらず現状維持でしかない。

テレビ越しに特別課外活動部の戦いを見学し、湊たちの指導によってタルタロスで実際にシャドウたちをアナライズしたこともあるからこそ、風花は自分があんな危険な場所に行って仲間の足を引っ張ってしまわないかと不安げな顔をする。

すると、そんな彼女を見ていたチドリとラビリスが食後のお茶を飲みながら、考えてしまうのは分かるが深く悩むより感覚で決めた方がいいとアドバイスする。

「実感の違いと考えればいいわ。自分も一緒に何かしている実感が欲しいなら向こう。ありのままの自分を受け入れてもらいたいなら湊って感じよ。まぁ、何も出来なくても気にしないとは言ってるけど、湊は女としては求めてくると思うけど」

「ははっ、まぁやりがいのある職場と待遇のいい職場の違いみたいなもんやね。向こうにはゆかりちゃんもいはるし、別にどっち選んでも悪いことにならんと思うよ」

そう、こちらには部活メンバーのほとんどが揃っているが、向こう

にもゆかりがいる。顔見知りの美鶴や真田だっているのだから、別に向こうに行っても悪いようにはならない。
　そもそも、彼らはチームとして活動に当たってはいるが素人だ。鉄の掟がある訳でもなければ、別に命令違反で反省房にぶち込まれることもない。
　自分に自信のない彼女が悩むのは分かるが、間違っても助けてくれるのが仲間なのだから、彼女一人がそう背負い込む必要がないと言って貰えれば、少し悩んでから風花は決意したように顔を上げた。
「えっと、その、いっぱいお世話になって、能力の使い方も教えてもらって。本当に、本当に感謝しきれないくらい恩を感じてるの。でも、ゆかりちゃんたちが困ってるって知ったら、それを手助けしてあげたいって思ったの」
　とても辛い状態にあった自分に優しくしてくれた青年の許を離れるのはつらい。しかし、親のこと、友達のこと、そういった色々な事を考える時間を貰ったことで、風花は自分に何が足りないのかを掴みかけていた。
　それを本当に理解しようと思えば今のままではいられない。自分から挑戦していくつもりで動かなければ、きっと掴みかけているものすら忘れて今まで通りの自分になってしまう。
　そう思ったからこそ、風花は困っている友達を助けるためにも、自分は特別課外活動部に行こうと思った。
「だから、有里君の敵になるつもりはないけど、ペルソナ使いとしての私は特別課外活動部に行こうかなって思います。本当にゴメンなさい」
「別に謝る必要ないやん。最初から好きに選びっていうてたんやし」
「そうね。仮に貴女が敵になるとしても仮面舞踏会には情報の使い手が複数いるから、そうなれば貴女のことは完封出来るし問題ないわ」
　現在の仮面舞踏会の通常戦力はここにいる三人と一匹。そこにソフィアも加われば、ラビリスとコロマルを除く全員が探知能力を持っているため、ジャミングだけでなく能力を通じて風花の知覚に攻撃する事も可能だ。

強力な後方支援を封じてしまえば、単純な戦闘力でも勝っている仮面舞踏会が圧倒的に有利。湊がいなくても一方的に倒せるだろう。
自分たちが戦う姿など風花は想像していないだろうが、チドリたちはいずれぶつかることもあるだろうと思いながらも口には出さず。風花の選択をただ尊重した。
そうして、風花が向こうにつくと決めたことで、食事を終えたメンバーらはただ談笑していたが、最後まで一人で食事を続けていた湊が食べ終わったとき、食器を下げて戻ってくると準備を始めようと風花を立ち上がらせた。
「さて、方針が決まったら山岸をタルタロスに送る準備をしないといけないな」
「えと、行方不明になった日の格好をしておけばいいんだよね？」
「ああ、加えて疲労状態になっておく必要もある。お前は半日ほど影時間を体験していることになってるからな」
今現在、風花は湊から貰った服を着ている。学校でそのまま行方不明になったのに私服で発見される訳にはいかないので、風花は桜がクリーニングに出してくれていた制服に着替える訳だが、さらに連日の影時間で疲労困憊という状態にしておく必要もあると青年は言った。
「でも、疲労状態ってマラソンでもしたらいいのかな？」
ペルソナに目覚めて召喚の練習もした風花は既に影時間に適応している。そのため、影時間を体験しても召喚などをしなければ疲れたりもしないが、あくまで救出される際の状態を行方不明のままだったように見せかけるためのものだ。
その必要性は風花もちゃんと理解しているものの、しかし、簡単に疲労状態になどなれる訳もないので、どうやって疲れればいいかなと首を傾げつつ青年を見上げれば、風花とジッと見ていた彼は風花の手を掴んで部屋を出て行こうとする。
「しばらく出来なくなるからな。〝そういった〟方法でいいだろ」
「え？　ええっ、ちょっと待って！　だって、今からそんな事してたらっ」
自分がこれから何をされるのか一瞬で理解した風花が抵抗するも、

青年に手を掴まれている時点で逃げようがない。
部屋から出る際に風花はチドリたちに助けてという視線を送ってきたが、連日のことで疲れていた二人の少女は、一人の少女の尊い犠牲に感謝しつつ静かにお茶に口を付けて見送った。
「あの、風花さんたちは一体なにを……？」
「ははっ、知らん方がええこともあるんよ」
「……気になるなら湊の私室に行けば分かるわよ。ただ、そのときは参加させられるでしょうから、子どもでいたいなら近付かないことね」
あの部屋にいま近付けば捕食される。それは例えでも何でもない純然たる事実だ。
近付いても無事に済む唯一の例外は桜だと思われるが、そも桜は恥ずかしさもあって終わって身を清めたお風呂上がり頃にしか近付かないため、行為中に近付いて大丈夫かどうか本当のところは分からない。
けれど、美紀が近付けば確実に純潔を散らすことになる。少女も彼を憎からず思っている一人だと思われるが、初めてが友人らに見られながらというのは嫌だろう。
故に、終わって出てくるまで絶対に近付くなと暗に伝えれば、意味を理解したらしい美紀は風花が湊とそういった関係を持っているという事実に対しても顔を赤らめ俯いた。

――月光館学園
影時間が訪れるまでに体育倉庫に侵入しなければならない特別課外活動部のメンバーたちは、それぞれがしっかりと準備を整えた上で校門前にやってきていた。
次にシャドウに狙われる危険のある森山は寮の空き部屋で保護することに決め、彼女だけを寮に残して集まった一同は、友達を助けるためやる気を見せているゆかりを筆頭に、妹の友人を無事保護してやりたいという真田や、前線で指揮官を務める七歌が救出部隊として侵入することになっており、情報支援の美鶴とその護衛として残る順平

は危険な侵入を試みる彼らを心配した。
「三人ともマジで気をつけてな。山岸さん助けるにも自分らが無事じゃなきゃムリだからさ」
「うん、心配してくれてありがと。けど、可能性を考えると先輩の言ってた方法が一番高いと思うからさ」
心配してくれる順平に七歌は笑顔で返し、危険でも可能性の高い方法を選んでいくしかないと答える。
自分たちがこうやって話している間も相手は一人で怖い思いをしているかもしれないのだ。絶対に助けてあげなきゃと七歌もやる気をメラメラと燃やし。いつでもＯＫだぜと早速作戦行動に移ろうと提案する。
それを聞いた真田は、その前にやることがあると今にも敷地に入ろうとしていた二年生たちを呼び止めた。
「まぁ待て。まずは鍵を手に入れるところからだ」
「え、先に用意してないですか？」
「当たり前だろ。教師も帰る際に鍵が揃っているかチェックする決まりなんだ。盗んでいれば当然ばれる」
影時間前に侵入すると分かっていながら鍵を準備していないと聞かされ、ゆかりは何という無能だと真田を冷たい瞳で見る。
すると、悪いのは俺じゃないと真田が理由を話すも、理由はどうあれ準備不足である事実は変わらないとゆかりの評価は低下したままに終わる。
理不尽なクレームをくらった真田が怒りに震え、それを順平が抑えて抑えてと宥めながら、ゆかりが美鶴と一緒にどうやって鍵を取りに行くか話し合おうとしたとき、一人の少女が不敵に笑ったかと思えば声色を特徴的なだみ声に変えてポケットから何かを取り出した。
「テレテテッテテー、〝万能スペアキー〟！」
言いながら彼女が高く掲げたのは一つの鍵束。それは以前、とある青年が持っていた物に酷似しているが、それを取り出す際の変な小芝居はなんだとゆかりがツッコミを入れる。
「いや、なんのモノマネよ」

「なんのって青狸だけど？」
「というか、それは本物か？」
「本物ですよ。八雲君に夜中の学校に侵入したいから一日貸してって言ったら、何個か持ってるからあげるってくれました」
美鶴に問われ七歌はあっさりと入手経路をばらす。とある青年の持っていた物と酷似しているのではなく、いま七歌が持っている物がまさにそれだったのだ。
確かに学校から鍵を盗むよりも、何故か学校全ての鍵を所有している彼から借りた方が、様々なリスクを考えると簡単に済むだろう。
事前にちゃんと考えて鍵を手に入れていた七歌を褒めてやりたいとも思うのだが、美鶴としては重要な鍵があまりにも杜撰に管理されていると知って頭が痛いと手で押さえた。
「取り扱い注意の薬品棚の鍵もあるというのに、そんな簡単に鍵束を配られると困るのだが……」
「まぁ、今回はいいだろう。終われればお前が預かって保管していればいい」
「え、私が貰ったんですからあげませんよ」
八雲から貰った物をあげる訳がない。馬鹿言ってんじゃねえよと七歌が真田を冷たくあしらえば、先輩を敬わない女子二人に真田は肩をふるわせ、再び順平がここは我慢ですと彼を宥める一幕があった。
だが、これで容易に侵入出来ることになった。あとは影時間になる前に三人が体育倉庫に潜み、他二人が後からエントランスで待機しておけばいい。
危険だとは思うが、これも風花を救うためだと全員は気合いを入れ直し、絶対に助けるぞと心を一つにしてから任務にあたった。

――影時間

結果から言えば山岸風花は簡単に見つかった。
バラバラになってしまった七歌たちが合流した頃、歩くのもやっとという酷く疲弊した様子だったが風花が現われ、そんな彼女にゆかりが肩を貸す形で転送装置を探して現在はフロアを歩いている。

お守りだと言って風花に召喚器を渡した真田は美鶴たちに合流したことを伝えようと思ったが、どうやらここは索敵圏外らしく音声はぶつ切りになって上手く伝わらなかった。
「うわっ、大きな月」
「そういや、今日は満月ってテレビで言ってたよん」
通信は上手くいかなかったが、それでも既に合流した真田たちがエントランスに戻れば問題ない。
そうして先を目指して歩いていると、外が見える廊下にさしかかったところで、巨大すぎる月を見たゆかりが声を上げ。それに答えるように七歌もテレビで聞いたばかりのことを伝える。
二人の会話を聞いていた真田は先行しつつ暢気なものだと思っていたが、友達を助けられて気が抜けたのだろうと注意はせず、自分が気をつけていればいいかと周囲を警戒する。
だが、そんなとき突然通信機から乱れた音声が入ってきた。
《きこえ……敵……いそい……っ》
最後にブツッ、と音を立ててから反応が消える。真田たちが呼びかけても応答はなく、何かあったとしか思えない状況に真田たちの顔には焦りが浮かぶ。
すると、これまでゆかりに支えられていた風花が、何やら怯えた様子で頭に手を当て口と開いた。
「な、なにか、来てます。大きな二つの反応が下にっ」
「大きな反応？　まさか、やつらが来たのかっ!?」
風花が合流した際、どうやってシャドウから逃げていたのか聞けば、彼女はなんとなく気配が分かると答え、もしかすると探知型の能力を持っているのかもしれない事が分かった。
そんな彼女の言葉だからこそ、大きな二つの反応があると聞いた真田は、例の大型シャドウが現われたのかと考え、美鶴たちが危ないと言って駆け出した。
彼を追ってゆかりたちも走って行くが、ゆかりたちは救助者を連れているため遅い。よって、真田一人が先を行く形になり、後を追って走る七歌は到着までゆかりと会話をしながら進む。

「ねえ、さっき思ったんだけどさ。前のモノレールの日も満月だったよね。それで今日も満月に敵が来た。これ偶然だと思う？」
「大型シャドウは満月に現われるってこと？　最初の腕いっぱいマンが現われたのも満月なら可能性は高そうだけど」
「一ヶ月周期くらいと思えばほぼ合致してるよ」
　最初に現われた大型シャドウ〝マジシャン〟も、前回現われた〝プリーステス〟もほぼ一ヶ月周期であり、極めつけの今回。これはほぼ確定と言っていいだろう。
　イレギュラーと思っていた大型シャドウの出現周期を突き止めた二人は、この情報は次回以降の活動に役立つはずだと他の者にも伝えることにし、ならば、絶対に生き残らなければならないと先に戦っている美鶴たちを助けるため転送装置の元へ急いだ。
＊＊＊
　先に到着した真田の目に飛び込んできたのは、煙をあげながら横転しているバイクと傷つき倒れる美鶴と順平。そして、剣を持った大型シャドウと杖を持った大型シャドウを相手に、ボロボロになりながら一人で戦っているヒーホーの姿だった。
　いくら攻撃してもヒーホーのスキルは効いていないようで、ヒーホーはただ敵が順平と美鶴の許へ行かないよう氷壁や氷刃で妨害している。
　しかし、いくらヒーホーが頑張ろうと敵は二体。剣で氷壁が砕かれると、もう一体のシャドウの杖から放たれた風弾を横殴りに喰らい小さな身体が吹き飛ぶ。
　それらを見た瞬間、真田は全身の血が沸き立つかのような熱を感じ、それが怒りであると理解しながら召喚器の引き金を引いていた。
「貴様らぁっ!!」
　呼び出されたポリデュークスが杖を持ったシャドウに接近し、ヒーホーの分だとばかりに拳で殴りつける。
　身体の表面は金属のような質感だったが、そんなものは関係ないと力の限りに拳を振り抜けば、敵はくの字に身体を曲げて吹き飛んだ。
　石柱に背中をぶつけた敵はそのまま倒れているが、こんなものでは

怒りは治まらない。
真田は自分を仲間意識をそれほど強く持つタイプではないと思っていたが、こうやって目の前でやられているのを見れば、理性など吹き飛んで敵を沈めてやると駆け出すほどには仲間思いだったことを理解する。
美鶴も順平も全身ボロボロだ。強大な敵を前にしても、真田たちの安全のため通信機だけは守らねばと奮闘したのだろう。
そして、二人が倒れてからも、ヒーホーは小さな身体で必死に戦い彼らを守ってくれた。
まだ意識を手放していないヒーホーは、動かない身体を頑張って起こそうとしているが、真田が後は任せろと強い意志の籠もった瞳を向け、自分の拳を握り締めると剣を持ったシャドウへ駆け出す。
弱点を突いたのか杖のシャドウはまだ起き上がってこない。状況は一対一であり、それは真田にとって好都合だった。
接近に気付いた敵が剣を振り上げるも、真田はチドリに言われてから鍛えていた攻撃の予測軌道を読み切り、横薙ぎに振るわれた剣を身体を沈み込ませることでやり過ごすと、そのまま身体を起こす勢いを乗せて腹部に拳をめり込ませた。
金属製のナックルが敵の腹部にぶつかったとき赤い火花が散る。質感が金属のそれと似ているとは思っていたが、実際に身体が曲がる金属で出来ていたようで、もはや鎧と変わらないなと真田は心の中で吐き捨て距離を取る。
そのタイミングで七歌たちも遅れてエントランスに到着し、倒れている美鶴たちを見たゆかりが慌てて回復魔法をかけた。
「お願い、イオ！」
回復魔法によって傷のいくつかが治っても二人は動かない。意識を失っているだけで命は無事だが、それでも仲間をこんな目に遭わせた者を赦しはしないと七歌も召喚器を抜いた。
「ベリス、二連牙！」
現われた騎兵のペルソナは馬を器用に操り剣を持ったシャドウに接敵すると、手に持った槍で二連突きを叩き込む。

しかし、攻撃を喰らっても敵は怯んだ様子もなく、貫通攻撃が効かないのかと七歌は舌打ちをした。
「貫通無効！　ゆかりは物理攻撃以外に専念！」
「了解！」
すぐに情報を共有して仲間に指示を出す。味方がやられて頭に血が上ろうと、リーダーである七歌は判断力を残しておかなければならないのだ。
だが、味方に指示さえ出せば彼女もある程度は自由に動く。先ほど真田の攻撃を喰らっていたということは、相手には打撃は効くということ。
「ゾウチョウテン、突撃！」
ならば有効な技が判明するまでは効く技で敵を攻撃するしかない。
鎧を纏った武人のようなペルソナは相手が振るった剣を手に持った錫杖で弾き、空いたボディを渾身の力で殴りつける。
「ウソッ、なんで効かないの!?」
だが、その攻撃を喰らった敵は平然と立っていた。予想外の事態に後退していた真田も驚いており、一体どういうことだと考えていれば、復帰した杖のシャドウのスキルがゾウチョウテンを襲った。
先ほどヒーホーを攻撃したものと同じ風弾は、疾風が弱点のゾウチョウテンに効果抜群。一撃で消えるゾウチョウテンからのフィードバックダメージに七歌は喘ぎ、味方が攻撃を受けたことで真田が再びペルソナで攻撃を試みるが、今度は杖のシャドウにも攻撃が通らなくなっていた。
先ほどまでは効いていた攻撃が通らない。これまで出会ったことのないシャドウの能力に一同は動揺する。
これが仮に一度でも受けた攻撃が効かなくなるというタイプならば、状況は既に積んでいるといえる。攻撃の種類と同じ数だけしか相手にダメージを与えられないということは、つまり一撃必殺並みの威力が要求されるということだ。
今の七歌たちに大型シャドウを一撃で倒せるほどのスキルはなく、さらに言えばあと何属性攻撃可能なのかも分からない。

ゆかりはとりあえずダメージを受けた七歌や、未だに気を失っている美鶴たちを移動させて回復させているが、いくら自分たちの傷を癒やそうと敵が無事ならジリ貧でしかない。
アナライズが出来る美鶴が意識を取り戻せば状況も変わってくるが、頭から血を流していた彼女が意識を取り戻してすぐにペルソナを呼べるとは思えないため、七歌は味方を連れて撤退することも考え始めていた。
そして、タルタロスの入り口に視線を向けたとき、彼女の視界に戦場へヨタヨタとおぼつかない足取りでやって来る者の姿が映る。
「森山さんっ!?」
やってきた者の姿に驚き、最初に声をあげたのは風花だった。
どうして彼女がこんな場所にいるのか。意識がハッキリしていないようで、自分が戦場に向かって進んでいることに気付いている様子はない。
そして、そんな闖入者の存在にシャドウも気付いたようで、剣を持ったシャドウが森山の方へと向かっていく。
「クソッ、なんで来たんだ!」
このままでは不味い。敵の足止めをしようと真田が向かおうとするも、杖のシャドウが今度は炎弾を放ち行く手を遮ってくる。
避けた真田は咄嗟に召喚したポリデュークスの雷で二体のシャドウを攻撃し止めようとするも、結果は先ほどと同じで敵にダメージはない。つまり、剣のシャドウが森山へ近付いていくのを止められなかったという事だ。
「風花、あたし、風花に謝らなきゃってっ」
今の彼女に敵の姿は見えていない。ただ風花に会って謝らなければならないという意思のみで動いているようだ。
けれど、そんな彼女の事情などシャドウには関係ない。あと数メートルというところに迫った彼女を切り裂かんとシャドウは立ち止まり剣を振り上げる。
「ダメ、森山さん！　逃げて！」
このままじゃ死んでしまう、だから逃げろ。そういって駆け出そう

とする風花は、近くにいたゆかりに止められてしまう。
「風花、危ないから下がって！」
「でも、森山さんがっ」
真田は杖のシャドウに足止めされ、真田とゆかりらの中間地点にいる七歌では間に合わない。
森山本人は未だ意識がハッキリとせず、自分から相手の攻撃圏内に進み続けている。これでは見殺しにするようなものだと風花は必死にゆかりの拘束を解こうと暴れるが、哀しいかな体格差に加え運動部と実戦で鍛えているゆかりに力で勝てるはずもなく、風花は黙って森山に剣が振り下ろされるのを見ているしかなかった。
「やめて――――！」
杖のシャドウの攻撃を多少喰らってでも突破し、森山の許へ駆けつけようと真田も向かうが既に遅い。
風花の心からの叫びも空しく、人の身の丈より長大な剣が森山に向かって振り下ろされる。
剣は森山の胴体を捉え、彼女の腰から上が下半身と別れを告げて飛び、硬い床にぶつかると音を立てて砕けた。
『――――え』
一体何が起こったのか。確かに剣は森山の胴体を分断したはずだと、事態が飲み込めない者たちの声が重なる。
切り飛ばされた森山の上半身は床にぶつかると砕け、大小様々な透明の欠片になって床に散らばる。
そして、さらに視線を奥に向ければ剣の届く範囲よりも入り口側に、未だ無事な姿の森山が立っていた。
「贋物？　いや、しかしあれは……」
状況が分からず真田は杖のシャドウの攻撃に注意しながら、分断された森山だったものを遠目から観察する。人の下半身ほどの大きさをした透明な塊になったそれは、周囲で何かがキラキラと細かく光っており、さらに白い煙を出しているようだった。
見ていた真田はドライアイスに似ているなと思ったところで、もしやと小さな仲間に視線を向ければ、倒れていた彼が指先から魔法を

使っているのが見えた。
彼の操る属性は氷。それは周辺と温度変化を起こすことも可能な術であり、危険を感知した彼は他の者が気づくよりも先に森山と同サイズの氷柱を作り出し、温度変化で像を歪ませてあたかも森山がそこまで既に進んでいるように見せたのだ。
「お前ってやつは！」
自分も瀕死だというのに、そんな状態でも他の者を助けようとする彼には頭が下がる。
敵に攻撃が効かないことで絶望を感じ始めていた真田は、彼の活躍によって心の中に熱いものが蘇ってくるのを感じた。
そして、それは真田だけではない。七歌やゆかりもヒーホーが森山を助けてくれたと気づき、先ほどまでの焦りが消えてここをなんとか突破しようと前向きな気持ちを取り戻す。
敵の能力の正体は分からないが絶対に勝って生き残る。頑張って勝とうと七歌が仲間に号令をかけようとしたとき、七歌は視界の端に映っていた小さな仲間の変化に気付いた。
「ヒーホー君っ!?」
見ればヒーホーの身体が半透明になって消えかかっていた。それはペルソナを消すときや耐久限界を迎えた際に消える状態に似ている。
そう思ったところで、七歌たちは自分たちが彼に対して一つの勘違いをしていたことに気付く。
いくら自我を持ったように自律行動していようと彼は一つの生命ではなくペルソナだ。となれば、耐久限界を超えれば当然のように消滅してしまう。
人ならば瀕死状態でもスキルや自然治癒等で回復を見込めるが、ペルソナにおいては回復スキルを使おうと肉体ダメージが回復するだけで、身体を構成しているエネルギーが還ってくる訳ではない。
ヒーホーはただでさえ瀕死状態だというのに、さらに遠隔で高度にスキルを使ってしまった。これでは耐久限界を超えエネルギー切れになって当然だった。

「待ってて、いま私が力をあげるから！」
エネルギーが切れようとしているのなら、自分の力を分け与えればいい。方法など知らないが七歌はヒーホーに駆け寄ろうとする。
しかし、ここで再び杖を持ったシャドウが今度は広範囲にスキルを放って妨害してきた。
仲間が消えようとしている今、お前の相手などしている暇は無い。真田と七歌は同時に引き金を引いた。
『邪魔をするなぁぁっ!!』
一瞬で現われたポリデュークスの雷とエウリュディケーの風が融合し敵を壁まで吹き飛ばす。その間に七歌がヒーホーまで駆け寄ろうとしたとき、消えかかっていたヒーホーが突然光に包まれた。
まさか、もう消えるのか。心がざわつく七歌たちが見ている前で、光に包まれたヒーホーの姿がゴスロリ調のドレスを着た少女に変わった。
ペルソナの姿が変わる場面など初めてみた一同は呆気にとられるも、少女の姿になっても相手は消えかかった半透明なままで、それは限界が近いことを表わしていた。
ならば、やはり自分が力を分け与えねばと七歌が近付こうとすれば、ヒーホーだった少女は首を横に振ると小さく笑った。
《……一緒に遊んでくれて……ありがとう……》
鈴のような可愛らしい声が耳に届いた次の瞬間、少女を中心に風が渦巻いた。エントランスの気温が急激に失われていき、あまりの寒さに美鶴と順平も意識を取り戻したようで何が起きているのだと周囲を見渡している。
だが、そんな二人を除いた他の者は、少女が最期の魔法を放とうとしていることを理解し、何も言うことが出来なかった。
床や壁が凍りつき、敵シャドウの体表面も白くなって動きが鈍くなる。ギシギシと音を立てながらやってくる敵がスキルを放つも、それらはすぐに凍りついて消滅する。
氷の風が渦巻くこの空間は彼女の領域。氷結結界ともいえる攻防一体の術を発動した彼女は、これまで様々な攻撃を無効化してきた敵

がその場から一歩も動けなくなったことを確認すると二体のシャドウに向けて手をかざし呟いた。
《――――摩訶鉢特摩》
摩訶鉢特摩、別名を大紅蓮地獄。八寒地獄の最下層にして、そこへ堕ちた者は寒さによって肉体が折れ砕け、最後には噴き出した血の花を咲かせるという。
彼女の放った術はまるでそれを再現するかのようにシャドウの身体を凍らせ、渦巻く風の衝撃で倒し粉々に砕いた。
砕けたシャドウたちは靄になって消えていき、血の赤い花とはいかなかったが黒い花を見事に咲かせた。
「ヒーホー……君？」
その時々によって攻撃がランダムに効かなくなるという規格外の力を持った敵は消えた。だが、その代償として仲間が一人消えようとしている。
実感の湧かない七歌が呆然としながらヒーホーだった少女に近付き声をかければ、もうほとんど消えかかっている少女が振り返り見惚れるような笑顔を浮かべた。
《……さようなら……ばいばい》
少女はそう言い残して完全に消えた。彼女のいた場所には七歌があげたニコちゃんバッヂだけが落ちて残っている。
死ねば消えてしまうペルソナやシャドウだからこそ、身に付けていた物が一つ残っていることで彼女が消えたことを実感させられた。
一歩一歩ゆっくり近付き落ちているバッヂを拾った七歌は、その場に座り込んで震えた声で言葉を漏らす。
「お、女の子なら、最初から言ってよ……私、ずっとヒーホー君って、男の子の名前で呼んじゃったじゃん……」
これまで仲間と一緒に何とかやってこれた。だが、分断されただけで今回のような結果になってしまった。
相手が大型シャドウだった、特殊な力を持っていた、そうやって敗因などいくらでも挙げられるが結局は自分たちが弱かったという事実に行き着く。

敵を倒すことは出来たがそれはヒーホーのおかげだ。七歌たち特別課外活動部は今日初めてチームとして敗北し、その結果一人の仲間を失った。

やりきれない結果に真田は床を殴りつけ、これまでどんな時でも弱さを見せなかったリーダーもこの日だけは涙を流した。

第八章　―Ａｄｖａｎｃｅ―

第二百十六話　前を向く

６月１０日（水）
朝――巌戸台分寮

あの日、山岸風花を救出した七歌たちは、彼女を病院へ連れて行くという美鶴と別れ寮に戻った。

気を失っていた順平と美鶴も、目覚めたときにいた少女がヒーホーだったと七歌らの反応から気付いていたようで、自分たちがちゃんと戦えていればと七歌たちに謝ってきた。

しかし、今回の敗北は自分たち全員の責任であり、命懸けで敵を倒してくれた彼女に報いるためにも強くなろうと全員の心が一つになった。

「いってきます、ヒーホー君」

そして、大切な仲間を失った先日の戦いは、普段はふざけていた七歌にも一つの変化をもたらした。

制服に着替えて学校へ向かう直前、七歌は部屋のコルクボードに留めたニコちゃんバッヂに挨拶をしてから部屋を出る。

そのバッヂは名誉隊員に与えたのに、自分の許へ帰ってきてしまった思い出の品だ。

先日の戦いは全員が弱かったから負けたという話になったが、リーダーを務めていた七歌は他の者にはそう言いながらも、自分に対しては納得出来ていなかった。

あれは作戦を組んだ自分の責任である。大型シャドウが現われようと順平たちを退かせることが出来ていればヒーホーの消耗は軽微で済んだ。エントランスに戻った自分たちが敵を牽制しながら風花を外に出しさえすれば、後はヒーホーが氷の壁でも作って敵の足止めをして時間を稼ぐことも出来ただろう。

こうやっていれば敵にも勝てたなどと、そんな風に終わってしまったことを言ってもしょうがない。頭ではそう分かっていても心は素

直に納得してくれない。
だからこそ、七歌はもう絶対に負けないと心に決め、タルタロスに行くとき以外にもより高度な自主練を行なうようになった。
まだ始めたばかりだが七歌以外のメンバーも既に動き出している事を彼女は知っている。ヒーホーの消滅にショックを受けているのは全員が同じで、彼らもまた己の無力を痛感したのだ。
もうヒーホーは助けてくれない。なら自分たちが強くなるしかない。もう二度と仲間を失わないために。
そうして、七歌も他の者たちも次の戦いに向け、既に前を向いて歩き始めていた。
昼――ポロニアンモール
七歌たちが学校で勉学に励み、風花が病院の個室で一人寂しく入院している頃、ようやくリニューアルオープンを迎えることが出来た古美術眞宵堂には店主ではなく一人の青年の姿があった。
以前よりも店が広くなり、さらに壁の陳列棚を増やして貰ったことで置いてある品数は随分と増えた。
しかし、骨董品屋というのは一部の層にしか需要がない。新装開店などと謳っても足を運ぶ者もほとんどおらず、リニューアルオープンに際して客が来ることを楽しみにしていた栗原は少々ショックを受けたようで目玉商品を仕入れてくると出かけてしまった。
正式な店員は店主である栗原しかいないので、彼女が出かけている間は必然店を閉めておくとしかないのだが、使い勝手のいいバイトの青年がいたことで彼女は湊を召喚するなり出かけていった。
一応、湊は元バイトであって、現在もバイトとして働いているのはチドリだけなのだが、勉強する意味のない湊と違って彼女は授業を受ける必要がある。
それ故の人事だと言われてしまえば湊も納得するしかなく、風花がある意味社会復帰したこともあって、少しぐらいは栗原の頼みを聞いてやっても良いだろうと彼は大人しく店番を引き受けていた。
誰もいない店の奥、一人パソコンで仕事をしながらコーヒーを飲む姿は実に画になっている。だが、そうやってＥＰ社の仕事をしていた

湊は、突然心がざわつくような感覚を覚え、一体何だと顔を上げて周囲数キロ圏内を索敵する。
「――――っ」
例え日中であろうと異常があれば動く必要がある。そう考えながら索敵した湊は、ここに存在するはずのない気配を感知し、そしてそれと共に自分の知るものとよく似ているが若干異なる複数の気配も見つけたことで、先ほどのざわつくような感覚を覚えたのはこれのせいかと当たりをつける。
見つけた気配の数は合計十三。それらはベルベットルームの扉がある奥の路地からゆっくりと広場の方へ出てきて立ち止まっている。
すると、交番にいる桐条側の協力者である警官が接触し、離れるとそれぞれが分かれてモール内を散策しはじめた。
（なるほど、〝そういう存在〟なのか）
最初は紛い物かと排除を検討していた湊だが、自分が彼女の気配を読み間違えるはずがないという絶対の自信を持っている青年は、突然現われた気配が本物であると理解したことで、この世界または時間軸の存在ではないと看破した。
そして、待っていれば気配の一つが近付いてきて、引き戸を開けるカラカラという音が聞こえれば、蝶々を模したデザインのバイザーを頭に付けた少女が店に入ってきた。
「ごめんくださーい。って、ここ何屋さんなんでしょう？　雑貨屋？」
その声と姿は久遠総合病院で働いている水智恵に似ているが、身体の一部が明らかに人のそれではなく、さらに言えば腕などは球体関節になっている。
どう見ても相手は人間ではないものの別に差別する気のない湊が黙っていれば、物珍しそうに店内を眺めながら入ってきた少女は奥のカウンターにいる湊に気付いて会釈してきた。
挨拶がちゃんと出来ることは良いことだが、見ていると随分とぎこちない様子でまだ慣れていないようですらある。
そんな珍しい客を湊が眺めていれば、先ほど突然現われた反応のうちの一つがやってきて、扉を開けるなり怒った様子で先に来ていた少

女の名を呼んだ。
「メティス、勝手に色々な場所に行ってはダメでしょう！　それにここは雑貨屋じゃ、なくて……」
入ってきた少女は怒っていたはずなのに湊の姿を見るなり言葉を失っていく。
月光館学園の制服に身を包み、煌めくような金色の髪をふわりと肩に垂らす少女は、青い瞳を揺らしながら青年をジッと見つめると口に手を当てる。
「……ようこそ、古美術眞宵堂へ」
そんな少女に向かって青年が静かに口を開けば、
「八雲さんっ」
瞳に大粒の涙を溜めた少女はもう一人の少女を放置したまま、カウンターに陣取る青年の許までやってくると彼に抱きつき声をあげて泣き出した。
先にやって来た少女は後から来た少女の突然の反応に目を丸くし、それは青年も同じでとりあえず彼女が泣き止むまで優しく頭を撫でていた。

＊＊＊

少女が泣いていると、少ししてから彼女の仲間たちも店に集まってきた。
やってきた者たちは全員が湊の姿を見ると驚き、数名の女子が金髪の少女と同じように大粒の涙を流していたが、とりあえずこれでは話が出来ないからと、青年が赤髪の少女に準備中の札を出すように指示してから少女が泣き止むのを待った。
彼女や他の少女らが泣き止むまでは少しの時間を要したが、全員が店に入った時点で店の中の時間が外よりも速くなるように時流操作を施している。故に、ここで一時間喋っていようと外では数分しか経たないので、泣き止んだ少女らが顔を洗って目を冷やしてからでも何の問題もなかった。
店が広くなったことで椅子を置くだけの空間が出来たため、カウン

ターを囲むように湊がマフラーから出した椅子を配置すれば、他の者たちはそれに大人しく座り、湊のマフラーから取り出されたコーヒーと紅茶をそれぞれが受け取ったところで最初に泣いた少女・アイギスが申し訳なさそうに謝罪を口にする。
「すみません、突然……」
「いや、大丈夫だ」
　別に泣いたのはアイギスだけではない。最初に現われたメティスという少女を除けば、女子は美鶴以外の全員が涙を流していたし。男子も真田と荒垣は驚いた顔をしていただけだったが順平や天田は少し涙ぐみ、コロマルはコロマルで嬉しそうに尻尾を振っていたため、全員が大きく反応したことに違いはない。
　ただ、それでもアイギスは急に出会って泣いたことで困らせたと感じているようで、別にそちらの事情はおおよそ把握しているからと、湊はマフラーからクッキーなどのお茶菓子を出しながら自分から話しかけた。
「それにしても、未来人の客を相手にするのは初めてだな」
「未来人って、八雲君どこで気付いてたの？」
「お前たちが来た時点で気配には気付いていた。そして、お前たちが本物であることも分かったから、力の大きさでもっと未来から来た本人なのだろうと推測したんだ」
　ただ会っただけで未来から来た本人だと分かる者などそういないだろう。湊自身も最初は紛い物と疑っていたが、彼がアイギスやチドリの気配を読み間違える訳がなく、さらに他の者たちの力が現在の彼らより大きくなっていることで〝成長した姿〟と認識出来たわけだ。
　他の者にすれば平然と時間旅行者の存在を受け止める彼の柔軟な頭にも驚きなのだが、アイギスの隣に座っていた蝶々型バイザーを付けた少女は湊のことを知らなかったので、短い会話の中で見せた彼の優秀さを讃えながらアイギスに彼が誰なのかを尋ねる。
「感知型の能力を持っているにしてもすごい読みですね。姉さん、この人は一体誰ですか？　あの寮にはいなかったみたいですけど」
　あの寮、とは未来の巌戸台分寮のことだろう。湊はそもそも寮に住

んでいないのでいなくて当然だが、ここには寮で暮らしていないはずのチドリとラビリスとコロマルもいる。そこから推測するに彼らがここは別の世界の人間でなければ何かに対処するため集まったに違いない。

今後への影響を考え、不必要に未来の情報を得てはダメだからと読心能力をオフにしている湊は、会話という短いやり取りの中から重要な単語を抜き出しつつ、現在向こう側で起きている事態をしっかりと把握しようと彼女たちの会話に耳を傾ける。

「この方は百鬼八雲さん。最強のペルソナ使いでわたしたちの大事な仲間。そして、わたしの一番大切な人」

「最強のペルソナ使い？　なら、なんで私たちのいた世界のこの人は姉さんのピンチに駆けつけてくれないんですか？　正直に言って鈍っている他の人よりずっと頼りになると思うんですけど」

「それは……」

聞かれたアイギスはとても言いづらそうに言葉に詰まる。他の者も反応は同じで、メティスだけが訳が分からないと首を傾げているので、事情を察した湊が他の者に代わって彼女に理由を語ることにした。

「メティス、だったか？　未来の俺が協力しない理由は簡単だ。そっちの俺は既に死んでいる。だから手助けしようにも出来ないんだ」

「……え？　な、なんで？　だって、え、でも、最強のペルソナ使いって姉さんが言ったのに、そんな人がどうして？」

未来の自分が死んでいるなどと平然と宣う青年に、言われたメティスはどう反応して良いのか困っている。

自分の信頼する姉が最強のペルソナ使いだと呼んだことも関係しており、そんな強い人間がどうすれば数ヶ月後に故人になるのか不思議でしょうがない様子だ。

相手を困らせるつもりのなかった湊は気にしなくていいと返すけれど、そんな青年とは対照的に他の者たちは自分の死期を既に悟っているという彼の態度に納得がいかず、メンバーを代表してチドリが少し怒ったように彼に問いかけた。

「貴方、この時から既に自分が死ぬことを知ってたの？」
「まぁ確証はないが予感としてな。ああ、先に言っておくがニュクスとの戦い以降の話はしてもいいが、それより前のことは話すな。こことそちらが完全な地続きかどうか分からない以上、下手に未来の情報を俺に与えて分岐させる必要はない」
黒々としたコーヒーの入ったカップに口を付け、自嘲するように口元を歪める青年に思わず他の者たちは言葉を失う。
彼は眼に宿った力により万物の寿命を視ることが出来る。それは即ち死という概念を理解しているという事だが、そんな彼にすれば自分の命の終わりすらも感じ取れるようで、こうまで自分の命に対して執着を持っていないとどう声をかけていいか分からなくなる。
しかし、それでも何か言わなければならないと、紅茶に視線を落としていた美鶴が顔を上げて口を開いた。
「自分が近い未来に死ぬことを予見しておきながら、君は随分と冷静にこちら側の状況も考えてくれるんだな」
「完全な地続きか分からないと言ったでしょう。もし、俺がここで首を刎ねて死ねば、ここはそちらから見て別の過去ということになる。時間というのはそれくらいあやふやなものなんですよ」
美鶴たちからすればここは自分たちの過去という認識だ。けれど、死と同じように時間を概念的に理解している湊にすれば確実にそうだと言えるものではないらしい。
分岐世界やパラレルワールド、自分たちのいる世界を基準にそれらをどう捉えるかが重要なのだが、彼がいうには世界とはリアルタイムで分岐して異なる世界が生まれるものだということだ。
昼食に蕎麦とうどんのどちらを食べるか。そんな些細なことなら分岐は起きないけれど、未来からきた観測者がいたとしても、例えば彼らの世界で生きていた人間が死ぬような事態が起きればそれは観測者の目の前で別世界に分岐したといえる。
だからこそ、湊は自分たちのいる世界が存続するルートに分岐したアイギスたちの世界と同じものになるよう、本来知り得ないニュクスとの戦いに関する情報を一切得ようとしなかったのだ。

ただ、そんな二人のやり取りを聞いていたゆかりは、ちょっと待ってと口を挟んで、先ほどの会話で自分が気になった点について青年に尋ねた。
「てか、有里君いま普通に美鶴さんと会話したよね？　え、いいの？」
「それはお前たちが勝手に勘違いしてるだけだ。俺は何も分かっていない状態の馬鹿と話す気がないだけで、自分が戦う理由を理解している状態になっていれば美鶴さんとも普通に会話する」
「フフッ、確かに以前の私は自分から見ても酷い状態だった。あんな状態の私に付き纏われていた君にはさぞ不快な思いをさせたことだろう。過去の私に代わって謝罪させてくれ」
ゆかりが気になったのは湊が普通に美鶴と言葉を交わしていた事に関して。
彼女の記憶ではこの時期の彼は美鶴と言葉を交わしていなかったようで、だとすれば普通に会話している今の光景は異様に映ったことだろう。
ただ、それは湊も言ったように周囲の勝手な思い込みであり、本人は戦う理由を理解している状態の美鶴ならば会話もした。
美鶴も昔の自分がどれだけ酷いものだったのか自覚はあったようで、彼女が昔の自分のことで彼に謝罪すれば、脱線していた話を戻すぞと真田も会話に参加してくる。
「話を戻そう。有里、俺たちの世界のお前は時限式で開く箱に手紙を入れていたんだ。その内容はただ二つ。一つは〝俺を頼れ〟、そしてもう一つが〝妹を、メティスをよろしく〟だ。これらに心当たりは？」
「ないですね。ただ、そっちの俺も今の俺と同じように未来から来た先輩たちに会ったんでしょう。だからこそ、過去の俺を頼るように伝え、さらにここで出会ったメティスを信用して良いと判断したってところですか」
彼らがいうには寮の作戦室の奥、幾月が使っていた部屋の中に三月三十一日から四月一日になる直前に時間設定された電子制御の箱があり、その中に二枚の便箋と大量の宝玉輪が入っていたという。

今の湊にそんな事をする理由も心当たりもない。だが、時の空回りが起こったことと中に入っていた手紙の内容から察するに、アイギスらの世界の湊は彼女たちが事件に巻き込まれると知っていたのだろう。

湊がどこでメティスの存在を知るかなど今をおいて他にない。故に、そちらの世界の自分も同じように未来から来たアイギスたちに会ったのだろうと言えば、便箋に書かれていた内容を知らなかったらしいメティスが不思議そうに首を傾げた。

「私が妹？　あ、でも、姉さんの大切な人ってことは、私にとっては兄さんなのかな。兄さん、兄さん、兄さん……うん、素敵な響き。あの、貴方のことを兄さんって呼ばせてもらってもいいですか？」

「……どうぞ」

呼び方など好きにすれば良い。湊がそう返せばメティスは嬉しそうに顔を綻ばせる。

相手はアイギスの妹を自称するように湊たちより幼いらしい。そう思って見ていれば納得の反応ではあるのだが、一部の者には湊に既に心を開いている様子が納得出来ないようで順平から不満の声があがる。

「えー、妹ちゃんってばここ来るまで一緒に戦ったオレたちより、会ったばっかの有里に懐くとか薄情じゃね？」

「まぁ、僕たちもまだ仲間として信用してませんからお互い様でしょう。有里さんの手紙がなきゃ同行も遠慮して貰いたかったですし」

実際のところ順平もメティスをまだ信用し切れていないようだが、天田の方はもっとドライに手紙があったから同行を許していると取れる言葉を放つ。

メティスとメンバーらの出会いは最悪で、どうやら彼女がメンバーらを排除しようと攻撃したらしいが、その辺りのことに興味のない湊は単純に気になった部分について指摘した。

「……なるほど、そちらの伊織は俺を呼び捨てなのか。となれば余計に別の過去という見方が強くなるな」

「ああ、六月ならまだオレっちも有里君呼びだったぜ。ちょっとした

理由があって途中から呼び方変えただけでさ」
「また話が脱線してるぞ。コイツが言ってた過去と繋がった理由とか色々と話すことがあんだろ」
　別世界である証拠の一つだと思ったが、実際はまだ時期が来ていないだけの違いだったようで、それならばと湊は別世界かどうかの判断を保留にする。
　そして、再び脱線しかけた話を荒垣が戻しつつ、メティスを指してから、どうして二つの異なる時間軸の世界が繋がったのかなどの疑問を解消していこうという。
　メティスを除く他の者たちも同じように疑問は持っていたようだが、これは別世界か純粋な過去かで話も変わってくるものの、繋がった時点では純粋な過去だという前提で考えれば、それほど難しい話ではないと青年が答えた。
「……それ自体は簡単に予想出来ますよ。時の狭間は集合無意識の空間でしょう。つまり、シャドウやペルソナの持つ時空間に干渉する力を空間自体が持っている。なら、閉じ込められ孤立無援状態になり補給が見込めなくなったことで、全員が食料や治療薬などライフラインの確保を求めたため、その想いが場の力に方向性を持たせて色々と調達出来るここに繋がったんでしょう」
「え、なんで願っただけで繋がるの？　てか、どういう理論で組み立てた予想よそれ」
　湊にとっての常識は他の者にとってすんなりと理解出来るものではない。
　その考えに至った彼の頭の中身を見てみたいとゆかりは呆れた顔になり、彼女以外も時の狭間がどういった空間なのか詳しい説明も受けずに理解出来ている時点で、彼が自分たちとは異なる視点で物事を捉えていると理解し諦めた顔をしている。
　ただ、メティスは事前に彼と同じ考えに至っていたらしく、湊も考えた末に同じ結論に至ったことが嬉しかったようで得意気な顔を見せる。
「ほら、私がした説明と一緒じゃないですか。兄さんの言ってること

は多分合ってますよ。あそこは心の世界みたいなものだから、全員が願ったことで想いが大きくなり願いにも反応したんだと思います」
「へー、てか湊君よぉそんなん分かるな。当事者のウチらもよく分かっとらんのに」
「俺は元々時を概念的に理解しているからな。お前たちとは感じ方が違うんだ」
僅かな時間の差しか存在しないけれど、〝過去〟の人間である湊が自分たちより状況を理解している。彼ならばと納得する気持ちがあると同時に、やはりそれでも不思議でしょうがないとラビリスは苦笑する。
もっとも、時流操作を使える湊にすれば、時を概念で理解していれば状況から推測するのはとても簡単だった。
二つの異なる時間に置かれた世界が繋がった理由もおおよそ理解出来、他の者たちがお茶菓子に手を伸ばしながらライフラインが確保されたが今後どうするかと話し出せば、湊の隣に座っていたアイギスが事の発端について彼の意見を聞きたいと口にした。
「あの、八雲さんはどうして時の空回りが起きたんだと思いますか？」
「……そうだな。タルタロス消滅の揺り返しで時の狭間が出現した事が切っ掛けではあるだろうが、寮だけが切り離されたってことは原因が寮内に存在すると思った方が良い」
彼女たちの話によれば時の狭間はとても広いらしい。寮の床下の階段から降りることの出来るどこまでも広がる砂漠のような空間。そこにいくつかの扉があって、扉を潜った先のダンジョンの最奥にあった扉がこちらの世界に繋がった。
どこまでも広がる砂漠のような空間というのは異界化していると判断して良い。影時間は現実世界に重なるように現われていたが、時の狭間は完全に心の世界側の空間という訳だ。
それが寮の地下まで伸びてきたのは偶然かもしれない。だが、寮だけが空間的に切り離され時の空回りに巻き込まれたのなら、その原因は寮かそこにいる者たちにあると判断すべきだろうと青年は話す。
「まぁ、簡単に言えばお前たちが原因ってことだ。時の狭間は近くに

いる者の精神の影響を受けるようだし、お前たちが先へ進むことを恐れているか、もしくは過去に囚われているんだろう」
「そんな、だって私はちゃんと前を見てるよ。君がいなくなって哀しかったけど、でも、守ってくれた世界だからそこで強く生きていくんだってっ」
　彼の言葉にそんなことは無いとゆかりが反論した。ここにいる青年に言ったところで意味はないのかもしれないが、それでも〝同じ存在〟である彼には自分がちゃんと歩き出していると理解して貰いたかったから。
　しかし、彼女の想いなど知らないとばかりに湊は全てを見透かすような金色の瞳を彼女に向け、それはお前がそう思い込んでいるだけだと告げる。
「……それは前しか見てないんだ。起こった事実を受け入れたんじゃない。見るのが嫌で、だから前しか見ないことで目を逸らしている。ほら、お前も過去に囚われているじゃないか」
　過去ばかり見ている幾月。今を生きるストレガ。それらと違い、過去を引き摺り未来しか見ていない青年だからこそ、少女が誰よりも過去に囚われているとすぐに分かった。
　他の者たちも彼の言葉に思うところはあったのだろう。気まずそうに視線を落としているが、直接指摘された少女は図星を突かれたからか、怒った様子で勢いよく立ち上がると感情のままに叫んだ。
「い、一体誰のせいだと思ってるのよ！　あなたが、あなたが何も告げないで一人でニュクスと戦いに行って、それでそのまま……帰ってこなかったんじゃない……」
　途中から声を震わせ、瞳から大粒の涙を溢し、最後には顔に手を当てたままゆかりは椅子に腰を落とした。
　隣に座る美鶴らがゆかりの肩を抱くようにして落ち着かせているが、湊としてはいくら責められようが自分とは無関係なので知ったことではない。
　他の者たちもゆかりの言葉を聞いて複雑そうな表情で湊を見るが、同じ存在ではあるがここにいる湊を責めても何の解決にもならない

とは理解しているようで、ゆかりの背中を撫でていた七歌が話を進めるため彼に今後どう動くべきかを尋ねた。
「八雲君、原因が私たちにあるならどうすればいいの？　そう簡単に過去への未練をなかったことには出来ないと思うんだけど」
「別に未練自体は大した問題じゃない。というか、俺が語ったのは今回の件が起きた原因であって解決策じゃないからな」
そう、湊が語ったのは〝どうして時の空回りが起きたか〟というアイギスの問いに対する答えだ。
原因を究明したところで現在の状況に陥った理由しか分からない。そこから解決策を考えることも出来るかもしれないが、青年には既に事態を収束させる方法が見えているのか、アイギスを挟んでさらに隣に座っているメティスの方を見ると彼女に話しかける。
「メティス、時の狭間にはあとどれだけ扉がある？」
「えっと、沢山です。兄さん」
「そうか。まぁ、それを全部攻略してくるといい。そうすれば、お前たちの未練が形になって現われる。寮を三月三十一日に繋ぎ止めている楔がな」
正確な数は数えていなかったようだが、それでも湊の役に立たねばとメティスは笑顔で答えた。
状況を一番冷静に見ていると考えて彼女に尋ねた方にすれば当てが外れた訳だが、別に具体的な数を理解していまいがやることは同じである。
全ての扉のダンジョンをクリアし、最後の扉の最奥で待っている存在を倒せ。とても簡潔にそう告げた青年は、未来から来た者たちに必要な物資を渡すと自分たちのすべきことをしてこいと彼女らを送り出した。

第二百十七話　未来人への助言

6月11日（木）
早朝――厳戸台分寮・屋上

もうすぐ夏の訪れを感じるであろう六月の朝、冷たい空気の中で一人神経を研ぎ澄ます者がいた。

その手には装飾もない武器としての実直さだけが感じられる地味な薙刀が握られており、武器を手にした者は数メートル離れた位置に置かれた巻き藁をジッと見つめると、踏み込むと同時に武器を振るって巻き藁を三分割する。

見事切られ巻き藁は崩れ落ちようとするも、しかし、武器を振るった者は振るった勢いを利用して遠心力で威力を高め、落下を始めていた藁の一つにそれを当ててさらに細かく散らしてみせた。

武器を振り終え、残心の構えを見せてから己の切った藁を確認しに向かった者は、その切り口から自分の今の実力と状態を判断し、これではまだダメだと悔しそうに屋上の床に叩き付ける。

（違う。こんなんじゃダメだ。まだ力で切ってる。武器を己の一部として速く鋭く斬撃を放つ）

切り口を見れば一部の藁が引き千切られたような状態になっていた。武器の刃はとても鋭利に研がれており、もしまな板に置かれた野菜に真っ直ぐ振り下ろせば、下にあるまな板ごと切ってしまう可能性もあり得る切れ味だ。

そんな鋭い刃をちゃんと当てていれば、引き千切られるような切り口になどなる訳がない。斬撃の入る角度か振るう速度か、何かしらの要因が不足していて切る際に引っかけてしまったらしい。

（龍じゃダメなのかな。武器を使っても鬼の刃に遠く及ばないなんて……）

七歌の記憶の中に百鬼が無手で斬撃を放った映像があった。彼は何も持っていなかった。だというのに、八雲の祖父はぶれたように見える速さで腕を振り抜き、目の前に置かれていた古い畳に鋭い刀傷を残してみせた。

八雲と遊ぼうと思って百鬼の屋敷の道場へ赴いた際に偶然みたのだが、当時の七歌ではどのようにして行なったのかも理解出来なくとも、あれが純粋な体術だという事だけは理解出来ている。
優れた身体能力に究めた業を合わせることで、己の肉体を名工の打った業物の域まで昇華していた。
あちらは武器を持っていなかったにも関わらず、今の七歌よりももっと鋭い一撃を放てていた。身体能力はともかく俊敏さなら老人だった湊の祖父より若い七歌が勝っているというのにだ。
自分と彼らでは何が違うのか。首から下げて服の中に入れているペンダントを握り、彼女は一人己の無力に悩み続けた。

午前――古美術眞宵堂
「……一人で来たのか」
「は、はい。ダメでしたか？　その、あの人たち、自分たちだけで話してるから……」
湊がパソコンから視線をあげると、恐る恐るといった様子でメティスが一人でやってきていた。
音もなく入ろうとしてもモール内に現われた時点で湊は気付いているため、別に来たところで気にしないから普通に入ってこいと返せば、メティスは嬉しそうな顔をして駆け寄ってくる。
あれからアイギスたちの方では時の狭間の扉の攻略が進められているようで、補給がてらやって来た際には報告を聞いていた。
やはり二つの世界の時の流れはずれており、湊にすれば数時間前に来たばかりというタイミングで再び現われるも、向こうでは数日経っていたりという事もある。
それ故、彼でなければ用意出来ない補給物資が存在することから、湊は帰ってきた栗原に「数日は自分が店を預かるので仕入れに行ってこい」という暗示をかけ、未来のアイギスたちが時の空回りに巻き込まれていることがバレないよう根回しもしている。
もっとも、アイギスたちは補給目的で過去と繋がっているので、補給の出来ない深夜にこちらに来ることはなく。そういった部分は扉

が自動で設定していると思われるため、湊が少し席を外して別の場所にいる間に彼女たちが来ることもないようだ。
　そんな訳で、モールの営業時間中かつ湊さえいればアイギスたちは一人でも来れるようだが、やってきたメティスは湊の傍まで近付いてくると、そのまま椅子をいくつか並べてその上に寝転がり、最後に湊の足を枕にして寝てしまった。
　あちらの世界では夜なのだろうかという疑問はあるが、構って貰えない寂しさでこっちに来たようなので、彼女を受け入れてくれる存在の近くにいると安心して眠れるのだろう。
　少女に膝を貸していたところで仕事に影響はないため、別にいいかとスルーしながら湊がキーボードを叩いていれば、少ししてから閉店の札が掛かっている扉の開く音が聞こえた。
「あの、すみません八雲さん。こっちにメティスが来てませんか？あの子、勝手にどこかに行ってしまって」
　やってきたのは少女の姉であるアイギス。心配した様子で来た彼女は、湊の許までやってくるとカウンターの中で湊の膝を枕に寝ている妹を発見して思わず嘆息する。
「やっぱり……」
「そう怒ってやるな。君たちが自分の知らない話で盛り上がってて居場所がなかったらしい」
　寮の中にいなければこちらに来ているとしか思えない。そして、メティスが一人でやってくる場所など兄として慕っている湊のいる眞宵堂くらいだ。
　推理とも言えない単純な連想ゲームで正解を引いたアイギスは、湊が妹を甘やかしていると思ったのか複雑な表情を浮かべるも、確かに彼女の分からない内容で仲間と談笑してしまっていたと反省し、妹の面倒を見てくれていた青年に礼を言うと湊の隣に腰を下ろした。
「あの、この子はなんなんでしょう？　わたしの後に作られた機体にしては精神が発達しすぎていると思うんです」
「……本当に分からないのか？」
「え？　あ、はい。美鶴さんも知らないみたいで、今は桐条グループと

も連絡が出来る状態ではありませんし」
　アナライズが可能な湊はメティスの秘密に気付いている。だが、同じようにアナライズが出来る風花やチドリでもメティスが何者なのか分からないという。
　そうなってくると湊だけがどうして分かるのかという謎が残るが、青年は自分だけが理解出来た理由に心当たりがあるのかアイギスの質問には答えず、今の関係のままでいろとアドバイスを一つする。
「メティスは君の妹だ。今はそれだけ分かっていればいい」
「……教えていただけないんですか？」
「君がちゃんと思い出せば分かる。だから、今の俺は何も言わないでおこう」

　言われたアイギスは彼が答えてくれないことに不満げな顔をするが、言わないと言った以上は絶対に話してくれないと理解していたことで、すぐに諦めると彼の肩に頭を乗せて体重を預けてくる。
　見目麗しい姉妹二人に慕われていると分かる光景は男たちから嫉妬と羨望の眼差しを向けられるような状況だ。
　だが、青年は構わず画面に視線を向けてキーボードを叩いているため、店の中は穏やかな時間が流れる。
　アイギスも彼女の主観で久方ぶりに会えた大切な人との時間が心地良いのか、リラックスした状態で一緒の時間を楽しんでいれば、そういえば伝え忘れていたと途中で口を開いてくる。
「あ、そういえば、言い忘れていました。実はメティスと戦ったときにわたしの能力が変化したんです」
「……別にワイルドは特殊な素養という訳じゃない。切っ掛けがあれば誰でも目覚め得る力だ」
「そうなんですか。気付いていらしたんですね」
「俺のアナライズはそういった部分も分かるからな」
　彼女が伝え忘れていたのは自分もワイルド能力に目覚めたという話だった。
　元々は普通のペルソナ使いだった彼女がワイルドに目覚めて周囲

は驚いただろうが、湊にすれば固有のペルソナしか使えない他の者の精神構造の方がおかしいという考えであり、ミックスレイドまで使えるならまだしもワイルド程度ならば十分あり得ると返す。
　それはあくまで最初からワイルド能力を持っていた者としての意見ではあるものの、アイギスは七歌もそれほど驚いていなかったと告げて、一度黙り込むと何やら言葉にしづらそうな躊躇いがちな表情で湊に一つ問うてくる。
「……八雲さん、どうしてあなたは死んでしまったんですか？　確かに、わたしたちではニュクスに勝てなかった。でも、だからってあなたが一人犠牲にならなくても。そんな事をするなら、わたしは一緒に死ぬ方がずっと良かったです」
「……俺はまだここにいる。だから死者の気持ちは分からない」
「あ、そうですよね。すみません。あまりにも平然とこちらの世界の事件について意見をくださるので、八雲さんには未来のことが分かっている気になってしまって」
　湊はあくまでこの世界の湊だ。アイギスたちの世界の湊が非常に酷似していたとしても、それは湊の未来の可能性の一つであって同一人物かは分からない。
　しかし、アイギスは彼があまりにも平然と未来で起きていることに対してアドバイスをくれるので、どうしてもこの世界の存在であるということを忘れてしまうと苦笑した。
「おーい、アイギス。迎えにきたぞー」
　そんな風にメティスを膝に乗せたまま湊がアイギスと会話を続けていれば、またしても店の扉が開いて今度は順平たちが入ってきた。
　やってきた者たちはアイギスとメティスの状態を見て複雑な表情を浮かべ、皆がやって来たことでアイギスがメティスを起こしていれば、補給のためにやってくるのはいいがと前置きした上で美鶴が彼女のためを思い忠告してくる。
「君の気持ちは分かるが彼に会うのは程々にしておいた方が良い。でないと別れが辛くなるぞ」
「んー、いっそのこと八雲君を私らの時代に連れて行っちゃえば良い

んじゃないですか？」
時の狭間が消えれば二つの世界の繋がりは断たれる。それは湊の死んだ未来のアイギスたちでは二度と会えないということであり、直前になってせめて過去の湊でも良いから会える現状を維持したいと心変わりしかねない危険を孕んでいる。
だが、それならばこの過去の湊を未来に一緒に連れて行けば良いのではと七歌が意見を出した。
男子や美鶴は何を言っているんだという顔をしたが、一方で女子たちは出来るのなら良いのではと思ったのか、その発想はなかったという顔をしている。
無論、本人の同意を得る必要があるけれど、出来るなら一緒に来て欲しい。そんな想いをアイギスたちの表情から悟った湊は、起きたメティスをちゃんと座らせながら一緒に行くことは出来ないと先に断りを入れた。
「それは多分不可能だ」
「なんで？」
「俺という存在は同一次元に複数存在できない。イゴールたちから聞いてないのか？」
不可能ということは拒否や拒絶ではなく、そうする事が出来ないという意味だ。
湊はここにいて、二つの世界は自由に行き来が出来ている。だというのに何故無理なのか七歌が聞き返せば、湊は自分という存在が世界において特殊な立ち位置にいることを他の者たちに語る。
「俺は内に神を宿しているため〝固有存在〟といって次元世界における特異点なんだ。一つの世界に特異点は一つしか存在出来ない。仮に二つ目の特異点が現われようとすれば片方かまたは両方が消え去る。だから、俺は俺が存在しない世界にしか移動できない」
湊の中には現在別次元の神が宿っている。それは魂レベルで融合しており、彼女を宿していることが原因で湊は他の者たちのように同一次元に二人存在するが出来ないようになっているのだ。
「でも、こっちの湊君はもう死んではるよ？」

「……説明するより見せた方が早いか」
だが、ラビリスたちにすれば彼女たちの世界の湊は既に死んでいて、この世に存在しないことになっている。
湊にとってはそういう意味ではないのだが、言葉で説明をするより見せた方が早いため、一同を伴って外に出ると二つの世界を繋ぐ扉を目指した。
＊＊＊
「ここか。では見ておけ」
店の外に出ると他の者たちの案内で世界を繋いでいる扉の許までやってきた。
もっとも、アイギスたちには扉が見えているようだが、湊の視点ではそこには何も存在せず、もう少し先にいけばベルベットルームに続く扉があるくらいである。
とはいえ、順平が実際に扉を潜って行ったりきたりして見せてくれたので、正確な位置と時空の綻びともいえる歪みの位置は既に特定出来た。
あとはそこに干渉するだけだと、湊は魔眼を発動し蒼い瞳になってから非常に小さな空間の歪みに向かって右腕を入れた。
「八雲さんっ!?」
アイギスたちの視点では湊は扉に右腕を突き入れただけだった。だというのに、次の瞬間白い電撃のようなものが爆ぜて彼の右腕に走り、突き入れた腕が数秒で鮮血に染まって所々が焼け焦げていた。
慌ててアイギスが彼の腕を扉から引き抜けば、彼の右手の指はそれぞれがあらぬ方向にねじ曲がり、拳や上腕の方には裂傷が出来ている。そこに肉の焦げた臭いまで漂っているため、痛みを堪えた青年が深く息を吐いたところで全員が彼を連れて行けないことを理解した。
「っ……これが、特異点が同時に存在出来ないということだ。お前たちの世界の俺の存在は残ってる。だから俺はお前たちの世界にはいけない」
そう、例え死んでこの世を離れていても存在した痕跡までが消えた

訳ではない。痕跡があるのならその世界には特異点が残っていると言うことであり、アイギスたちの主観がどうあれその世界の湊は〝存在〟しているのだ。
なにより、いくらそちらに湊がいなくても、こちらの世界の湊が行こうとすれば全身が右腕と同じ末路を辿ることになる。これでは平穏な日常を過ごすことも不可能であるため、アイギスたちも彼を連れて行くことを諦めるしかなかった。
＊＊＊
腕を自力で治療した後、湊はアイギスたちを向こうの世界へ送り出した。彼女たちがいうには扉はあと一つなのですぐに終わるという。
だが、湊の予想が正しければ、最後の扉の奥にいる彼女たちの未練が具現化した存在は彼女たちにとって非常に戦いづらい相手である可能性があった。
（……俺が原因か）
未来から来たゆかりは言っていた。一体誰のせいだと思っているのかと。
あちらの自分が何をしたのか湊は知らない。そもそも別の世界である可能性もあるので同じ選択をするかも分からないが、もし誰にもニュクスが倒せないとしても、自分が命を賭すことで実現可能な手段があるのなら湊は迷わずそれを選ぶと断言出来た。
自分の命を一つ使うだけでチドリやアイギスの生きるこの世界が存続するのなら、比べるまでもなく最上のコストパフォーマンスだろう。己の命を勘定にいれない青年だからこその結論は無論他の者には理解されない。
しかし、だからこそ彼は目的のために自分の全てを使う覚悟を疾うの昔に決めていた。
それは未来であっても変わらない。時の空回りが自分が原因で起きたというのなら湊は自分でそれに対し責任を取る。
「……座標、固定」
血で赤く濡れた右腕を再び扉のある場所に向けて挙げる。傷は既にふさがっているけれど、服は破れて一部焦げてもいるので、今から

することに右腕を使うのは丁度良かった。
アイギスたちがこちらの世界にいないからか歪みは小さくなっているものの、まだ確かに繋がりは残っている。
なら後はそこに腕を入れるだけだと、先ほど右腕を酷く損傷したばかりだというに湊は再びあちらの世界に向かって右腕を突き入れた。
「……っ」
入れた瞬間、先ほどの再現だとばかりに白い電撃が爆ぜて湊の腕を焼いてゆく。
指先、手首、肘と奥に入れていくだけで痛みが数倍に跳ね上げられ、それでもまだだと湊は片腕を丸ごと突っ込んだ。
（少しだけでいい、ただこの一回だけ成功してくれっ）
腕を伝った痛みに表情を歪ませながらも、湊はあちらの世界に伸ばした右腕に力を集める。
自分の方からは見えないというのに、それでも確かに目の前の穴が向こう側へ繋がっている確信がある。
だからこそ、自分が原因だというのならその尻拭いは自分でやってみせると、彼はあちらの世界と繋がっている右手でカードを握り砕いた。
ペルソナがあちらの世界で顕現し時の狭間へと向かってゆく。ペルソナの見ている視界を湊も見ることが出来るため、寮のラウンジから地下へ進み、さらに一つ残った扉を潜ってダンジョンの奥へと向かわせる。
（あと、少しっ……）
ペルソナを呼び出した瞬間、こちらの世界にいる身体の方にも白い電撃が伝ってきた。
直接向こうと繋がっている右腕ほどのダメージはないが、それでも体表が焦げたり血管が千切れて全身が血に染まってゆく。
けれど、湊はこの程度の出血では死にはしない。意識もしっかりと繋ぎ止め、目的を果たすまで保てばいいとペルソナの方へ意識を集中させる。
扉を潜ってダンジョンに入ったペルソナは途中に現われるシャド

ウらを蹴散らし、ただ奥を目指し飛んでゆく。
対して、ペルソナが奥に進むにつれ反動なのかこちらに残っている湊のダメージが酷くなり、彼の足下には既に血溜まりが出来ていた。
体表を走る程度だった電撃は明確に彼の身体に傷を残し始め、さらに浸透していくように臓器にまでダメージが届く。喉の奥から鉄の味が迫り上がってくるが今はどうでもいいと押さえ込み、さらに湊が意識を割けば向こうではペルソナが目的地に到着した。
（……これでっ）
ダンジョンを抜けて時の狭間に似た空間に出れば、その奥に剣を持って戦う湊そっくりの何かがいた。
他の者たちは突然の乱入者に驚いているようだが、時間のない湊は構わずペルソナを操作し、ペルソナを呼び出そうとしていた自分そっくりな相手に向かってメギドラオンを放つ。
ただ一撃、だが今の彼に出来るのはそれくらいだ。これで倒せなければアイギスたちに頑張って貰うしかない。
メギドラオンを放ったペルソナは攻撃を止め、余波で発生した煙が晴れるのを待つ。そのただ待つ間も残っている湊にダメージが返ってきているのだが、結果を確認せずにペルソナを消すことは出来ないのであと少しだからと彼は耐えた。
そうして、あちらのアイギスたちも見守る中、煙が晴れたそこに敵の姿はなかった。
「……はぁ」
目的は達成した。あちらに送っていたアザゼルを消すと湊はその場に腰を落として少し休む。
数分間も奥で何かしていようものなら、噴水のある広場から見られそうなものだが、湊は小さく殺気を放つことで他者の本能に働き掛け、そこに近付きたくないと思わせるよう仕向けていた。
おかげで全身が血濡れになって血溜まりの上に座っている今も誰からも声をかけられずに済んでいるが、流石にこのままでは騒ぎになるため、湊はバアル・ペオルに怪我の治療を頼んでから血溜まりにナイフを通してそれ自体を消した。

＊＊＊
治療を終えてその場の後処理も終えた湊は、ベルベットルームに入ってシャワーを借り、汚れた服も着替えてから店に戻っていた。
すると、しばらくしてからアイギスたちがやってきたのだが、彼女たちはやって来るなり怒ってきた。
湊としては完璧に後処理をすることで怪我をしたこともばれていないはずなのに、どうして怪我をした事がバレたのか分からない。
ペルソナだけ送ったんだと白を切ろうとしたが、女子全員からダウトと言われてしまったことでその作戦も通じず、何よりアイギスが珍しく本気で怒っていたので誤魔化すのは無理だと悟って湊も諦めた。
「……なんで怪我したと分かったんだ？　奥の通路はちゃんと掃除しておいたのに」
「はい、確かに通路には血の跡もなく綺麗でした。ですが、わたしたちの寮のラウンジと繋がる扉のところに大量の血液が残っていたんです。こっちの世界の方は上手く誤魔化せても、流石にわたしたちの世界の方までは出来なかったようですね」
話を聞いてなるほどと納得する。召喚する間に右腕から落ちた血液が床に着き、それが完璧な証拠となって今回の無茶がバレてしまったらしい。
証拠があるなら誤魔化すことは出来ないなと諦め、そのまま話をスルーする流れに持って行こうとするも、相手も湊の性格は理解しているようで逃がさないとばかりに正面からしっかりと目を合わせてきた。
「八雲さん、あなたはもっと自分を大切にするべきです。敵の姿と強さに驚き劣勢だったことは認めますが、それでも自分たちだけでも勝つことは可能でした」
「……さっさと終わらせたかったんだろ。それに時の空回りの原因が俺なら自分の事は自分でやるさ」
その言葉を聞いたときゆかりがハッとした顔をして俯く。他の者も分かっているようだが、それは彼女が来たばかりの頃に口にした言葉だからだ。

彼は自分に非がないことでも背負いすぎる性格だ。それが未来の自分がした事であろうと、自分のしたことが影響して事件の原因に繋がっているなら、〝全て自分が悪い〟と極端な結論に至ってしまう。
事故に巻き込まれた被害者でありながら、自分の両親の死すらも己が原因だと思ってしまうのは、生き残ってしまったが故の罪悪感からくる一種の精神疾患だ。
そのことを理解していたはずなのに、関係のない彼を責めて追い込んでしまったことを深く後悔したゆかりは、今にも泣き出しそうな顔で彼に謝罪した。
「ごめん、私が言ったせいだね。本当にゴメンなさい」
「……別に岳羽の言葉は関係ない。俺は〝俺を頼れ〟という言葉に従っただけだ。どっちにしろこれで終わりだしな」
未来の自分の言葉を利用してゆかりに責任はないという。それが彼女に気を遣っていることになるのだが、言っても彼の中では既にそういうことになっているようなので、ゆかりは小さくありがとうとだけ返しておいた。
だが、ゆかりが湊にお礼を言い終わると、既に解決モードに入っていた青年にメティスが近付き「実は」と言って話しかけた。
「あの、兄さん。実は兄さんの贋物を倒したら鍵が現われたんです。数は姉さんたち一人につき一本で合計十三本。どうやらそれを一つにまとめて寮の入り口を開けば時の空回りを終えられるはずなんです」
言いながらメティスはアイギスに借りて現われた鍵を見せてきた。見た目こそレトロな一品だが、彼の知る寮の鍵とは形が異なっていることで本当に使えるのだろうかと首を傾げる。
すると、今度は美鶴も話に入ってきて、さらに別に使い方もあるらしいと説明してきた。
「だが、その鍵には別の使い方もある。寮の屋上へ続く扉に使えば今のように限定的にではなく本当に過去に戻れるらしい」
「……なら入り口に使えばいい。過去に戻る意味はない」
「なんで？　過去に戻れば色々とやり直せるんだよ？」

ばっさりと告げる湊にゆかりが簡単に決めないでと待ったをかける。鍵の使い方はメティスが教えてくれたものだが、それが本当ならば桐条鴻悦が求めた時を操る神器の簡易版とでも言える機能を有していることになる。

望まぬ結果に終わったことをやり直せるなら、そのチャンスを無駄にするべきではないとゆかりが言えば、彼女の話を聞いていた真田が口を挟んだ。

「岳羽、お前は前を向くんじゃなかったのか？　過去をやり直すなど対極なことだぞ」

「分かってます。でも、それでもやっぱり自分に嘘は付けないから。私は過去に戻って有里君が死なないようやり直したいんです」

ゆかりはゆかりなりに湊が救った世界で生きていこうとしていた。だが、彼が死なずに済むよう過去を変えられるかもしれないチャンスが転がり込んできた。

なら、ゆかりは自分の気持ちに従って、どんな小さな可能性でもいいからそちらに賭けたいと、自分は過去をやり直す方を選ぶと宣言した。

「俺だって自分を犠牲にした有里の選択には納得し切れてねぇ。だがな、それでもあいつは命使ってでもお前らを守ったんだ。その覚悟も、想いもお前はなかったことにするのか？」

しかし、いくら彼女が言ったところで可能性は可能性でしかない。なにより、やり直すなど自分たちの世界の湊がしてきたことを否定する行為ではないのかと、真田に続いて荒垣も口を挟んだ。

それを聞いたゆかりは僅かに辛そうな表情をすれば、傍に立っていたチドリがしっかりと荒垣を見つめて言葉を返した。

「……分かるから辛いのよ。苦しいことから逃げてるだけかもしれないけど、それでも私も湊には生きていて欲しい」

家族としてずっと過ごしてきたからこそ彼女の切実な願いが重く響く。

チドリが言葉を切ると辺りには沈黙が降りるが、メンバーたちもどちらの言っている事も理解出来るのだ。

真田たちとて湊が生き返るなら生き返って欲しいと思っている。だが、現実はそう簡単にはいかず、湊は命懸けで世界を救って自分たちは生かされた。
なら、今の自分たちの役目は彼が守った世界で精一杯生きることだろうと思っているだけだ。
鍵は本人が譲渡しようとしない限り奪ったところで融合しないため、このまま話が平行線を辿るなら鍵を賭けて戦うしかない。
それを誰が言い出すか場の緊張が高まりだしたとき、話を聞いていた青年が静かに口を開いた。
「……岳羽、チドリ、悪いがお前たちは前提からして間違えてる。過去に戻っても歴史をやり直す事は出来ない」
『……え？』
言われた少女たちは一瞬何を言っているのか理解出来ないという表情を浮かべる。
それはそうだろう。過去をやり直せるチャンスが転がり込んできたと思ったら、それは不可能だと助けたい相手と同一人物に否定されたのだから。
しかし、伝えることはちゃんと伝えなければならないため、湊は冷めたコーヒーに口を付けてから顔を上げるとメンバー全員を見るようにして話し始めた。
「お前たちは扉を潜ってこちらに来たな？　なら、何故そちらでも同じ事が起きると思わない？」
「つまり、過去をやり直せるのではなく、その世界の自分が存在する過去に私たちが行くということか？」
「ええ、確証はありませんが可能性は高いかと」
確認してきた美鶴に湊が頷いて返す。そう、ゆかりたちは自分が過去の世界に戻って、そちらでもう一度ニュクスと戦うつもりのようだったが、別の扉にしても扉を潜って過去に行くのなら現状と同じ事が起きる可能性が高いのだ。
つまり、彼女たちが過去に戻ったところで、その世界にはその世界で生きている本人たちがいるため、二人目であるゆかりたちの望んだ

ような結果にはなり得ない。
「仮にお前たちの意識だけが過去に跳んだとしよう。だが、そうなればお前たちはその世界の自分の人格を上書きして殺すことになる」
「でも、同一人物なんだから結果的に未来の記憶を得るだけでしょ？」
「いや、違うな。言い訳しようが一人の人間を殺すことにかわりはない。そして、その世界の俺はすぐに変化に気付き、お前たちを自分の知る者たちを殺した〝お客さん〟として扱うだろう」
　さらに湊はゆかりたちが考えていたであろう状況の方でも、お前たちが望んだ結果にはならないと残酷に告げる。
　ここにいる湊は未来から来たゆかりたちの存在に気付いた。ならば、当然彼女たちの世界にいる湊も変化に気付いてしまう。
　時間を概念的に理解していて、状況を誰よりも把握している彼からそんな事を言われてしまえばゆかりたちも納得するしかなく、希望を断たれた彼女たちはどうあっても彼を救えないことに悲しみの涙を流す。
「な、なんでよ。何で死んだのかも分からないままで、せっかく、やり直せるチャンスが手に入ったと思ったのに。……こんな、こんなぬか喜びさせるだけの結果になるなら……」
「……はぁ、じゃあ過去をちゃんと見てくればいいだろ」
『……え？』
　急に言われて彼が言っている事を理解出来ず二人の涙が止まる。
　その反応に彼は再び溜息を吐くが、どうしてお前たちは現状と示し合わせて他の可能性に頭がいかないのかと呆れつつ詳しく説明する。
「お前たちは未来の俺が何をしたか分からないから不完全燃焼なんだろ。なら、ここへ来たときのように、ニュクスとの戦いの日の俺の許へ行ってくればいい」
「せやけど、過去に繋がる扉なんてもう残ってへんよ？」
「あるじゃないか。今も過去と繋がってる扉が」
　言われて全員がハッとした顔になる。そう、全ての扉が消えたと思ったようだが、正確に言えば今も過去に繋がっている扉が一つ残っている。

ここに繋がっていたのが全員の意思の反映であるならば、再び願えば別の場所に繋がる事もあるだろう。
「真実を知って、それから先に進めばいい。どうせ俺の事だ。多分、何かしらのメッセージは残してるはずだしな」
記憶に紐付く感情を消した今の青年に感情の起伏はほとんどない。しかし、今ここで必要なのは彼女たちが前に進めるような背中を押す言葉だ。
未来から来た彼女たちと出会った自分ならば、終わらない三月を越え、四月一日を迎えるアイギスたちにメッセージを残している。微笑を浮かべてそう告げ、湊は真実を知ってから自分たちの時間を生きろと言った。
それを聞いたメンバーたちは自分たちがすべきことを理解したのだろう。もうここに戻ってくることは無いと直感で理解しながら、店を出ると見送りに来てくれた青年に心からの礼を言って自分たちの世界へ帰って行った。

夜――ポロニアンモール
アイギスたちを無事に未来へ送り出した湊は、時間が経ってから完全に二つの世界の繋がりが断たれた事を確認すると少し疲れたように息を吐いた。
実際のところ常人なら失血死しているレベルに血を失ってもいるので、彼が疲労を感じていても無理はないのだが、どちらかと言えば少女たちに気を遣っての気疲れの方が大きい。
最初に未来の自分が頼れと言ったことで相談が始まり、湊が色々とアドバイスした事で分からない事があればこちらで話すことになっていたから助かったが、もしも彼女たちが自分たちだけで鍵の使い方を話していれば仲間同士で戦っていたに違いない。
それが始まってしまえばきっとアドバイスの意味はなかったはずなので、未来の自分が彼女たちにとって精神的支柱になっていたのは僥倖と言える。
（……アイギスか）

そして、何よりも気を遣ったのがアイギスとメティスである。湊は会った瞬間に理解していたが、メティスはどういう訳か抜け出てしまったアイギスのシャドウだった。
となれば、アイギスはペルソナを失っているはずなのだが、能力が変化してワイルドになったので大丈夫だったらしい。
メティスの登場とワイルドの覚醒の順序を考えるとおかしいと思うものの、アイギスは湊に長期間ペルソナを預けていたのでペルソナ及びシャドウが抜け出ていても活動出来るようになっているのかもしれない。
まぁ、どちらにせよ二人ともアイギスだったので、甘えん坊な側面らしいメティスのことは受け入れてやり、成長した部分らしいアイギス本人のことは上手く導いておいた。
対応を誤れば精神の均衡が崩れて影人間になっていた可能性もあったので、どうにか事件の解決まで持って行けたことで湊も一安心というわけである。
（……早く目覚めないだろうか）
だが、安心して一息つくと久しぶりにアイギスと過ごせた反動か、湊は彼女に会いたくなった。
彼女の新型ボディは既に完成している。他の誰も入れない彼個人の研究室で今も眠っており、アイギス本人が目覚めたときにパピヨンハートごと記憶を移植すればいつでも活動出来る。
しかし、その本人が目覚めるというのが問題であり、湊は彼女がいつ目覚めるのかを知らなかった。
会いたい、会いたい、会いたい。
特定の対象にのみ執着する彼だからこそ、その分他の者よりも想いが大きく膨れあがる。
彼女に会えない不満と共に早く目覚めないかなと若干の苛立ちを感じつつ、噴水広場まで戻ればまだいた客たちの声が聞こえてきて暢気な話し声が癇に障る。
「井上さん、うーたーいーたーいー！」
「ご、ゴメンって。機材トラブルなんだからしょうがないだろ？」

茶髪の子どもとスーツの大人がクラブの前で騒いでいる。なんの話か分からないが、今の苛ついている湊にとって女子の甲高い声で喚かれると非常に不快だった。
心の中でさっさと帰れと思いつつ、湊は再びどうやればアイギスが目覚めるだろうかという問題について思考を割くと、またしても女子の大きな声が彼の邪魔をしてきた。
「ライブしたい、歌いたい、イベントやりたいー！」
「まだ駆け出しなんだから一つ一つだよ」
「そのイベントが一つ飛んだんじゃんっ」
よく分からないが二人はタレントとマネージャーのような関係らしい。楽しみにしていた仕事が飛んで女子の方がご立腹で、男の方は幼い子どもの対応に困って宥めきれていないようだった。
時間が遅いこともあって人は減っているが、それでもここは公共の場だ。騒いでいれば迷惑であるし、何より湊は自分の思考の邪魔をされたことで頭にきていた。
苛々の募る間も女子はまだ騒いでおり、男の方が情けない対応で相手を落ち着かせられていないことでついに湊が切れた。
素早くマフラーに手を入れると二十枚綴りのカラオケ割引クーポンを取り出す。それを全力で振りかぶると騒いでいる女子の後頭部にぶつかるよう投擲した。
「イタイっ!?」
軽い紙がそんな速度で飛ぶのかという勢いで女子に迫ると、クーポンはそのまま女子の後頭部を捉える。
急に後ろから何かがぶつかった事で驚いた少女が後ろに振り返れば、
「――――五月蝿い、どブス」
完全に目の据わった状態の湊はただ一言相手にそう告げた。

第二百十八話　新しい玩具、新しい仲間

夜――ポロニアンモール

切れた湊に後頭部にカラオケ割引クーポンを投げつけられ、さらに〝どブス〟呼ばわりされた少女は驚きにかたまり口をパクパクとさせている。

一緒にいた男も同じように驚いているが、自分が身を挺して守るべき商品（タレント）に危害を加えられた事実によって再起動を果たし、相手の方が体格的に勝っていようと大人の男として物申さずにはいられないと湊に詰め寄った。

「君、急に女の子に何してるんだ！」

「……黙れ無能。公共の場でみっともなく喚き散らしているガキも諌められないくせに、よくそれで偉そうに口が聞けたな」

近付いてきた眼鏡をかけた男は、傍に来ると余計に湊が大きく見えたのか不機嫌そうなオーラにも圧倒され思わず二歩後退ってしまう。

しかし、ここで引いては少女を守る者としての役割を果たせないため、男は自分たちの非を謝罪しつつ一般常識として先ほどの行為は許されないと反論した。

「そ、それは申し訳なかったと思う。しかし、それでも見ず知らずの人間に物を投げるなんて許される事じゃない」

「歌いたいと騒いでるからカラオケのクーポンをやっただけだ。好きなだけ歌ってさっさと帰れ」

言われて男が少女の近くに落ちている物を見れば、確かにすぐそばのカラオケ店の割引クーポンに違いなかった。

少女が歌いたいと言っていたことも事実で、湊もその願いを叶える助けになるものを渡しただけとなると、男は立場的に微妙と判断したのか強く責める事が出来ない。

もっとも、いくら正当に聞こえる理由があろうと、突然物を投げてぶつけた時点で傷害は成立している。ただ、それで話題になってしまうと売り出そうとしている少女の将来的にマイナスに働きかねないため、少女に怪我らしい怪我がないことから男は湊が反省を見せれば

この場で収めようと思っているようだ。
湊の性格を知っていればまずあり得ないと諦める選択肢なのだが、初めて会った男が知らないのも無理はない。
そんな相手からの謝罪を待っている男に対し、湊はむしろお前がちゃんと頭を下げて謝れと完全に見下す形で冷たい視線を向ける。
すると、
「ねえ、どブスってどういうこと？」
今まで固まっていた少女が湊の傍までやってくるなり、先ほどの言葉はどういう意味なのかと問いかけてきた。
実際のところ彼女も言葉としての意味は理解しているだろう。無論、〝どブス〟を性格ブスという意味で使っているとは思っていないだろうが、そうでないなら単純に自分の容姿が酷く醜いと言われたと思っているはずだ。
相手がどういった経緯で芸能界に足を踏み入れたのか青年は知らない。親か知り合いがオーディションに応募したのか、それとも自分からタレントになろうとして養成所にでも通ったのか。
湊にすれば相手はただの我が儘で五月蝿いだけのガキなので欠片も興味はないが、そんなに知りたいのなら教えてやると相手の質問に答えた。
「……お前がどブスだってことだ」
「だから、なんで私がどブスなのよ？　別に自分が特別可愛いとかいうつもりはないけど、そこまで言われるほど容姿が悪いとも思ってないんだけど」
「誰も容姿の話なんてしてない。救いようのない内面を指してどブスと言ったんだ」
「そういうのは性格ブスっていうの！　あたしは違うけど！」
やはり世間一般では性格ブスをどブスとは言わないようで、相手の少女は紛らわしいと地団駄を踏みながら抗議の声をあげてくる。
その際、自分は違うと言ってくるあたりいい性格をしていそうだが、お前のことなど知らないとばかりに湊が聞き流していれば、言い合いをしている二人を観察していた男が何かに気付いたように言葉

を発した。
「君、もしかして皇子かい？」
「井上さん、この失礼な人しってるの？」
「つい最近も話題になってただろ。バスケとテニスの両方で注目を集めた選手で、大手事務所からもスカウトされてるっていう。うちのスカウトも挨拶で名刺は渡せたって言ってたけど、その後もどこにも入ってないらしいね。けど、年末特番とかにも出てるし業界じゃ先輩だよ」
少女から〝井上〟と呼ばれた男は湊の正体に気付き、すぐに不味いなという顔をする。
男はあくまで少女のマネージャー、少女の方は活動ジャンルが不明だが駆け出しや下積みと呼ばれる段階を抜けていないことは湊でも理解出来た。
となれば、芸歴や経歴から湊の方が業界内で先輩の立場であり、さらに湊は話題になったことでマスコミだけでなく共演した大御所とのパイプも持っているため、湊が少女の頭にクーポン券を投げつけたことが諍いの発端とはいえ井上は強く言い返せないという訳だ。
テレビ出演の経験があると言っても一般人のカテゴリーに自分をおいている湊に業界の常識は通用しないが、相手がそれを知っているはずがないので、勝手に勘違いしてくれているなら利用してやろうと湊も急に強気になって相手に少し尋ねる。
「……どこの事務所だ？」
「タクラプロだけど？」
「なんだ中堅のくせに所属タレントの躾けも出来てないのか。ここ数年の新人発掘率の悪さの原因はそこだな」
井上の方に聞いたつもりが少女の方が答えてきたが、タクラプロは湊も名前は知っているし、先ほど井上が言っていた通りスカウトの名刺も残っている。
音楽方面に強いのか所属タレントはアイドルや歌手など音楽に関わる者が多く、モデルや俳優を専門としている者より肩書きはアイドルのまま女優業もしているようなタイプが多い。

名刺を貰ってから調べた程度の知識ながらその程度は知っていたため、デビューした新人が悉く消えている最近の現状を指摘しつつ、湊は少女の態度から見て当然の結果だと井上に告げた。
すると、言われた井上は確かに将来有望な新人は発掘出来ていないと複雑な顔をするも、しかしこの子は違うんですと熱意の籠もった目で見ながら返してきた。
「確かにここ最近までは不振でしたが、この子はこれまでの子と違って光るものがあるんです。公共の場で騒いでいたこと、監督する立場でそれを諌めることが出来なかったことは確かにこちらの落ち度です。ですが、この子の未来が既に決まっているような言い方は取り消していただけませんか？」
マネージャーだから彼女を高く買っている訳ではなく、これまで大勢の担当を見てきたからこそ別格として買っているらしい井上は真剣に言葉を伝えてくる。
反省もするし、謝罪も勿論する。しかし、この子の未来についてだけは聞き捨てならないと。
だが、湊は少女の態度や振る舞いに問題があると指摘しただけで将来について言った覚えはない。そこは間違えてくれるなと真剣な表情をしたままの井上に淡々と返した。
「別にどブスの未来に対してどうこう言った覚えはない。こんなやつでも売り出し方で簡単に上まで行けるしな」
「簡単にって、自分じゃ出来もしないくせに」
湊が少女よりも先輩であると理解した時点で井上は対応を改めていたが、少女の方は未だにどブス呼ばわりされていることもあって湊にタメ口を聞いていた。
さらに、どうせ持て囃されていただけだろうと話題になったのは実力でないと言いたげな様子も見せてきたことで、こいつはどこまでも救いようがないなと湊も思わず嘆息する。
「お前と一緒にするな。俺は出来なきゃ言わない。なんならお前のステージだって用意してみせるぞ？」
「学校の文化祭で呼んでくれる程度でしょ？」

「月光館学園は有名進学私立でギャラを考えると小遣い稼ぎに良いはずだが、そんなものなら俺が用意したとは言えないな」
桐条グループ出資の有名進学私立に加え、皇子効果もあって、月光館学園はいまや国内でもトップクラスの知名度を持っている。そこの文化祭となれば駆け出しのタレントとしては是非とも出させて欲しいと逆に頼んでもいいくらいだ。
けれど、「アチャー……」と顔に手を当てている井上と違って少女は状況を正確に把握しておらず、公立の小学校や中学校のような手作り感溢れる文化祭を想像しているのかショボいと思っている節があった。
感じ方は人それぞれであるため湊はわざわざ訂正しようとは思わなかったが、ギャラは良いんだぞとだけ返すと、自分のマフラーに手を伸ばしてそこから都内の地図を取り出し、それを相手にも見えるように広げてある部分を指さした。
「……この一帯は全てうちの土地だ。この公園は遊具のない草原だから、ここにステージを設営して周辺に出店を作れば野外フェスが開催出来る」
「え、これ広さは？」
「出店との距離を作ることを考えても二万人は呼べるな。まぁ、どブスにそれほどの集客力はないだろうが」
普段は市民や入院患者の憩いの場となっている公園も、湊が言えば簡単に野外フェスの会場にすることが出来る。
そも、無料開放しているだけで湊の管理する土地なのだ。ずっと使えないならともかく、数日間だけ祭りの会場になると言うことなら文句も出ないだろう。
二万人というのは低めに見ての話であり、実際は安全性を確保した上で三万人だろうと呼び込めると思われるが、お前じゃ無理だなと湊が冷たく笑えばムッとした顔をしてから少女がマネージャーの方を向いて大声で言った。
「井上さん、この仕事取って！　二万人だろうと呼び込んでこの人のこと絶対ギャフンて言わせてやるんだから！」

「ええっ、いや、そんな簡単に言われても。というか詳細も詰めてないし、何よりりせ単独で二万人規模の野外フェスは僕も無理だと思うし……」
いくら少女に可能性を感じていると言っても少女はまだ駆け出しだ。クラブでサプライズライブを開催するなど、そういった地道な営業を続けて知名度を上げていく必要があるというのに、いきなりこんなトップアイドル規模の仕事を単独で行なうなど大爆死しにいくようなものだ。
それでも少女は自分を馬鹿にしてくる湊を見返してやりたいのか絶対にやると言い張っている。
「……あ、こんな時間にすみません、お久しぶりです」
そうして井上がまたしても我が儘な少女をコントロール出来ずにいれば、いつの間にか地図を仕舞っていた湊が仕事用の携帯を取り出してある者に電話をかけていた。
人と話している途中で電話をかけに行くなど余程の事だ。湊の口調は明らかに目上の者に対してのものであり、こっちがテレビで見ていたときの姿かと井上は彼の不思議な二面性をそっと眺める。
対して、少女の方は途中に電話で抜けるなど業界人として常識がないとムスッとしているが、電話でしっかりと話が出来たらしく湊も別れの挨拶をしている。
「ええ、はい、じゃあそちらの都合に合わせますのでまた時間が決まり次第お電話ください。失礼します」
話し終えた湊はすぐに携帯を仕舞うと戻ってくる。待たされた少女は不機嫌になって湊を睨むが、戻ってきた湊はそれを気にした様子もなく仕事の話だとして口を開いた。
「いま柴田さやかさんに連絡を取った。夏頃で良ければスケジュール的にフェスに参加出来るらしい。事務所やマネージャーとも相談する必要があるから、参加するかどうかを決める前にイベント概要を聞くミーティングをしたいとのことだ」
「ええ!? サーヤがそんな簡単にOK出したんですか!?」
湊の話を聞いて驚いたのは井上だ。彼の言ったサーヤとは以前の

年末特番で湊と共演したアイドルであり、現在の彼女は女優業にシフトしつつも業界でも五本の指に入るトップアイドルまで登り詰めている。
そんな相手とパイプを持っており、さらに簡単な電話で前向きにイベント参加を検討すると返事を貰えるのはすごいことだ。
少女単独ならば二万人など不可能だろうが、トップアイドルも参加するとなれば集客力においての問題は完全にクリアされる。中堅プロダクションの駆け出しのアイドルが到底参加出来るはずもないフェスに今ならば参加出来ることもあり、これはすごいぞと興奮気味に井上は突然舞い込んできたチャンスがどれほどの物かを熱く語った。
「りせ、これはチャンスだぞ！　サーヤが参加するならイベント自体の注目度も上がる。そこで君も観客の記憶に残れば一気に知名度がはね上がるだろう！」
無論、トップアイドルと同じ舞台に立つとなれば相応の苦労がある。主役にばかり注目が集まって一切記憶に残らない可能性もあるのだ。そこで未だ実績のない自分と相手の違いを自覚して折れることも十分に考えられるが、だとしてもチャンスがあるなら挑戦すべきだと井上は言う。
しかし、駆け出しアイドルのシンデレラストーリーよろしく熱血な展開を繰り広げようとしている男には悪いが、青年は考えの読めない冷たい瞳のまま男の勘違いを指摘した。
「勘違いするな柴田さんはオマケだ。〝どブスｆｅａｔ．柴田さやかフェス〟と呼んでもいいが、やるならとりあえず大見得切ったお前を主軸にしたイベントにする」
「なっ!?」
湊の言葉に井上は思わず言葉を失う。雑誌のインタビューすら半年以上前から申し込まなければアポの取れないトップアイドルを、駆け出しアイドルのオマケとして起用するなど前代未聞だ。
誰が見てもどちらが真の主役かなどハッキリ分かるだろう。けれど、名前が先に来ているなら少女の方がイベントの主役という扱いに

なる。
ということは、イベントの主役でありながらフェス当日に大勢の客の前でモブとして扱われると言う訳だ。
公開処刑どころの話ではない。完璧に、完膚なきまでに、ここに立っている青年はトップアイドルを夢見る少女の心を折ろうとしている。それを理解した井上が一転して冷静になり少女に参加を思い留まらせようとすれば、
「だからどブスじゃない！　あたしには久慈川りせって名前があるんだから。呼ぶなら〝久慈川りせｆｅａｔ．柴田さやかフェス〟って呼んで！」
駆け出しアイドル・久慈川りせはそう言って湊に啖呵を切り、フェスへの参加に闘志を燃やしていた。
それを眺める青年が心の中で〝アイギスが来るまでのいい暇潰しを見つけた〟と考えているとも知らずに。
――巌戸台分寮
湊がそんな風にアイドルとも言えないタレントの卵と遭遇している頃、七歌たちは寮の作戦室に集まって全員が来るのを待っていた。
部屋の中には既にゆかりと美鶴を除くメンバーが集まっており、理事長もコーヒーを飲みながら全員が揃うまでもうすぐだとゆっくりしている。
そうしてさらに雑談しながら待っていれば、控えめなノックの音が聞こえ、すぐに扉が開くと美鶴とゆかりに連れられやってきた山岸風花が部屋に入ってきた。
案内されつつ風花がテーブルのところまでやってくると、七歌はポケットからクラッカーを取り出し風花の方へ向けてから紐を引っ張る。
「きゃあっ」
「フー！　退院おめでとう！」
驚いた風花は手で頭を押さえてしゃがみ込み、クラッカーから飛び出たカラーテープと紙吹雪が彼女の上に降り注ぐ。
突然の七歌の奇行に仲間たちは何をしているんだと白い目を向け

るが、風花が驚きつつも退院を祝って貰ったことに礼を言っていることでまぁいいかという空気になる。
散らばったゴミを回収し、全てゴミ箱に捨てると新しくやってきたメンバーの分の飲み物を用意し、全員の前に飲み物が行き渡ったところで幾月が口を開いた。
「皆、集まってくれてありがとう。そして、山岸風花君は初めまして。僕は月光館学園の理事長をしている幾月修司だ」
「あ、はい。どうもはじめまして」
一応、案内のパンフレットにも書かれていたので理事長の名前等は知っていたが、こうやって目の前で会って話した事はなかったため風花は恐る恐るといった感じで挨拶を返す。
小柄な少女の硬い様子を見て幾月は緊張しなくていいよ笑顔を向けてやり、さらに隣に座っていたゆかりがクッキーでも食べるかと声をかけたことで風花の方の緊張も和らいでゆく。
ここにいる者は理事長と七歌を除けば風花にとって顔見知りばかり。七歌も前に会ったことはあるので風花にとってアウェーという訳ではない。
そのため、今は飲み物とお菓子でも楽しみながら話そうと言いながら、理事長は今回の風花の件と併せて先日の満月のことを切り出した。
「山岸君のことも含めて皆ご苦労だったね。まさか大型シャドウが複数現われるとは予想外だったが君たちが無事で良かった。彼……いや、正確には彼女なのかな？　君たちがヒーホーと呼んでいたペルソナのことは聞いているよ。自我を持ったはぐれペルソナが存在したとは驚きだが、彼女のおかげで君たちが無事だったことは幸運というほかない」
これまで桐条の研究で自我持ちのペルソナやシャドウの存在は発見されていない。それが偶然にもタルタロスで見つかったのは運命の悪戯のようにも思えるが、そんな希少種のおかげで七歌たちが無事に生き残れた。
そう、皆が助かるため、いや、皆を助けるためにその希少種が犠牲

になったのだとしても。
　つい先日まで一緒に戦っていた仲間が死んだ。その事実は今も七歌たちの心に傷として残っており、それが人間ではなかったとしても関係ないとして、リーダーを務めていた七歌は自分の力不足を悔しがるように強く拳を握って呟くように声を出した。
「……気付く要素はあったんです。ちゃんと満月に敵が来ると気付いていれば、それにも対応した作戦を練ってヒーホー君が死ぬこともありませんでした」
「そう簡単にはいかないさ。何せ前例はたったの二度。一度目は強襲に近い形だったし、二度目も桐条君が偶然見つけたに過ぎない」
　七歌の言った〝気付く要素〟とは三回目である先日の満月を経ての考察だ。たった二度、それも全く別の場所、別のタイプの敵が出現したというのに、それらの共通点に気付いて三度目の敵の出現を予測するなど不可能に近い。
「君たちにとっては大切な仲間だったんだろう。だが、子どもを戦わせている大人としては、犠牲になったのがペルソナでよかったというのが正直な気持ちさ。シャドウの突然変異か、それとも誰かの残留思念がペルソナとなったのか。その存在自体に疑問は残るが、もしかすると召喚者の許に戻っている可能性もあるんだからね」
　冷たいと思われた幾月の言葉も最後まで聞くと風花を除く全員がハッとさせられる。
　言われてみれば確かにそうなのだ。ヒーホーのことは完全に独立した存在だと考えていたが、もしかするとどこかのペルソナ使いの許に戻っているかもしれないのだ。
　もしも、彼女を呼び出していた召喚者がいたならかなりの実力を持っている事は確実。ヒーホー自身の強さもそうだが、何よりも影時間を足した分だけとはいえ召喚し続けていたことになるのだから。
　ヒーホーの完全消滅よりは、破格の力を持ったペルソナ使いが存在したという話の方が希望が持てる。あくまで想像の域を出ない話ではあるが、もう二度と仲間を失わないよう強くなろうとしている者たちにも、少しくらい都合の良い希望を持つことは許されるはずだっ

た。
　とはいえ、それはそれとして、いくら七歌たちが犠牲にならずに済んだと言っても、チームにおいて重要な戦力が抜けた事実は変わらない。その事は現実として受け止め考える必要があると美鶴は口にした。
「ですが、どちらにせよ我々が強力な戦力を失ったことも事実です。同じ氷結属性を扱うからこそ、私はヒーホーほど応用力もなく自在に魔法が使えないと自覚しています」
「あいつは守りの要だったからな。ミスをフォローして貰ったことも一度や二度ではない。もうやつの助力を得られないということは、今後は今まで以上に慎重に進まなければならないと言うことだ」
　そう、満月に大型シャドウを倒したなら、もしかすると再びタルタロスの上層階への道が開かれているかもしれない。
　上に行けば行くほど敵が強くなっているというのに、ここに来て自分たちを守ってくれていた存在が抜けた事はかなりの痛手だ。
　ワイルドの力を持つ七歌も驚異的な速度で力を付けてはいるが、チーム全員を守るほど余裕がある訳ではない。それは他の者も同じで、自在に氷で壁や足場を作ってフォローしてくれたヒーホーの抜けた穴を埋めることは到底出来そうになかった。
　せっかくヒーホーが生きている可能性があるかもという事で明るくなりかけたメンバーらも、信頼していたからこそ欠けた存在の大きさを嫌でも理解させられ再び沈んでゆく。
　普段はムードメーカーな順平や空気を読まない真田や七歌までも似た状態で、コーヒーを飲みながらそんな子どもらの様子に思わず苦笑して見せた幾月は、そう悪い話ばかりじゃないと場の空気を変えるべく別の話題を振った。
「確かにそうだ。だが、悪い話ばかりではない。桐条君、山岸君に説明はしておいてもらえたかな？」
「はい。入院中に少しですが、シャドウや影時間など用語について既に把握して貰っています」
　既に説明済みだという報告を美鶴から受けた幾月は満足そうに頷

く。
　それを見たゆかりらが何の話だろうかと首を傾げれば、コーヒーのカップをテーブルに置いた幾月が風花の方へと身体を向けるなり口を開いた。
「では改めて説明しよう。我々は特別課外活動部、影時間に現われるシャドウたちから人々を守るため作られた組織だ。シャドウを倒すことが出来るのはペルソナという異能に目覚めた者のみ。そして山岸君、検査の結果君にも力があることが分かった」
　救出後に改めて検査をすればいつペルソナに目覚めてもおかしくない数値が計測された。その報告を受けていたからこそ、幾月は退院前に美鶴経由で風花に説明していたのだ。
　退院したばかりの少女を危険な活動に巻き込むなど間違っているだろう。しかし、ヒーホーが抜けた今だからこそ、幾月は貴重な戦力を欲していた。
「君自身もプライベートで色々と大変なのは分かってる。だが、こちらもなりふり構っている余裕がないんだ。単刀直入に言わせてもらうが仲間になってくれないか？　人々をシャドウという脅威から守るために、君の持つ、君だけの力を、我々に貸して欲しい」
　理事長という立場ある大人が真っ直ぐ見つめ真剣な眼差しで頼んでくる。そういった状況に加え、幾月は風花が悩んでいる〝己の価値〟を肯定する言葉を口にしてきた。
　今の彼女にとってそれは非常に嬉しい言葉だ。相手が知っていて口にしたのかは分からない。だが、ここに来る前から既に考えを決めていた少女は、こちらでも受け入れて貰えるならと自信なさげながら微笑で答えた。
「その、私なんかの力で良ければ」
「え、ちょっと、そんな簡単に決めていいの？　特別課外活動部に入るってなったらこの寮に住むことにもなるんだよ？」
「あ、うん。その説明も受けてるよ。ただ、ちょっといま両親と成績とかのことで上手くいってなくて、少し距離をとって考えたい気持ちもあるから丁度良かったっていうか」

友人の事を心配したゆかりがちゃんと時間をおいて考えた方が良いと言えば、風花は心配してくれてありがとうと礼を言いつつ大丈夫だと返す。
親と上手くいっていないことで距離を取りたい気持ちはゆかりにも理解でき、むしろ、その事に関しては先輩であるため強く反対は出来ない。
もっとも、最初は母親から距離を取る意味もこめてやってきたゆかりも、青年に相談して色々と母親の立場を考えつつ、自分も人を好きになったことで母親の弱さを責められないと思うようになれたが、一人の女としての勘で相談のためだとしても風花を湊に近づける気になれなかった。
何か理由があるのかと聞かれれば勘としか言えないのだが、それでもこういったときの予感は当たるものだ。一年生の終わり頃から幼さが抜け、風花も高校生らしく可愛さの中に女性らしさも感じるようになったことで、今の風花なら誰かと恋仲になることも十分に考えられる。
すると、彼女と恋仲になる可能性のある第一位に湊がやってくるため、友人と泥沼バトルに突入したくないゆかりは、優秀な相談相手になってくれる青年を今回は紹介しないでおこうと心の中でこっそり少女に謝罪した。
そんな風にゆかりが一人で良心の呵責などに耐えていると、仲間になることを決断してくれた風花を歓迎すると美鶴が優しい表情で話しかけていた。
「ご両親への説明はこちらで上手く計らおう。学業に関して悩みがあるのなら、私や明彦で空いた時間に勉強を見てやることも出来るしな」
「おい、勝手に決めるな」
「なんだ、お前は後輩であり妹の友人でもある者に勉強を教えてやることも嫌だというのか？」
「ぐっ……」
自分のトレーニングの時間が削られることを嫌がった真田は不満

を漏らすが、大事な妹の友人が相手となると無碍には出来ない。
　これが湊ならばせいぜい一人で苦しめと全力で見下しながら拒否するのだが、残念ながら相手は妹の友人の中でもとびきり善良な少女だ。これは観念するしかないと肩を落とし、分からないところがあれば聞きに来いと告げた彼を見て、幾月は仲が良くて素晴らしいと楽しそうに笑う。
「ははっ、まぁ山岸君が仲間になってくれて嬉しいよ。それで活動の話に戻るんだが、これが隊員の証である腕章と召喚器だ。見た目は拳銃だけど中が埋められているからね。仮にマガジンを入れても弾は撃てないんだ」
「あ、どうも、ありがとうございます。えっと、これを頭に当てて撃てば召喚出来るんですよね？」
「ああ、そうだ。だが言ってしまえば自殺するようなものだからね。活動までにという期限はあるが君の心の準備が出来たときでいいよ」
　救出の日に一度は渡された召喚器が再度戻ってきた。仲間になると決めた以上は腕章も召喚器も風花のものである。
　だからこそ、自分のペースで良いと言ったのだが、召喚器を手にした風花は立ち上がって何も置かれていない場所に行くと、心を静めて召喚器を額に当てると呟きながら引き金を引いた。
「――――ペルソナ」
　皆が見ている前で風花がペルソナの召喚を試みた。適性は足りている。なら必要なのは異能を顕現させる強い心だけだ。
　ガラスの割れるような音が響き、水色の欠片が風花を包むように回り始める。これは召喚が進んでいる証、故にほぼ成功したと言っていい状態になったのを確認した真田は、手にしてすぐ召喚に踏みきった彼女の思いきりの良さを思わず褒めた。
「受け取ってすぐにとは意外と肝が据わっているな」
「女は出産も出来ますからね。土壇場での肝の据わりっぷりは男とは比べものになりませんよ」
　七歌の説明は一見まったく別の話のようだが、言われて見ると関係しているように思えなくもない。

これが彼女が〝馬鹿と天才は紙一重〟と言われる所以かと思わず納得しかけたところで、風花を包んでいた召喚光が治まり、召喚した少女はペルソナの内部にいた。
随分と珍しい形での召喚に一瞬気を取られるが、すぐに再起動を果たした美鶴は風花のペルソナの力を把握するべく質問した。
「山岸、ペルソナの中に入っているがそれは動けるのか？」
「えっと、ダメみたいです。というか戦闘向きじゃないみたいで攻撃手段もありません」
ペルソナの体内にいる少女は目を閉じて何やら念じるような仕草をみせ、すぐに何もすることが出来ないと申し訳なさそうに告げた。
折角召喚したにもかかわらず動けず、さらに固定砲台のように止まってスキルを放つことも出来ない。これではただの的になるぞと美鶴が考えていたとき、先日の救出時のときの事を思い出した真田が美鶴に重要な話を伝え忘れていたと説明する。
「そういえば、山岸は召喚前からシャドウの位置を把握して逃げ回っていたらしいぞ」
「と言うことは動けない事も含め索敵に特化したペルソナという訳か。ふむ、今後は護衛に残す戦力も考えておく必要があるな。もう二、三人仲間が欲しいところだが……」
先日満月の戦いでサポート係に護衛が必要だと実感したばかりだ。風花の力も範囲や発動時間の把握はしきれていないため、それらは今後タルタロスの攻略をする中で知っていけばいいだろう。
だが、タルタロスを攻略していきながら、風花の護衛もしていこうとなると明らかに人数が不足している。これぱかりはどうしようもないのだが、美鶴は顎に手を当て難しい表情で考えた後ふっと力を抜いた。
「まぁ、この話は今はいい。山岸、仲間になってくれてありがとう。また入寮等については後日話そう。下に車を待たせているので今日は送っていく」
「はい。あの、皆さん、これからよろしくお願いします」
時間も遅いので今日はここまでにしよう。そう言って美鶴は風花

から腕章と召喚器を受け取ると、それが元々入っていたアタッシュケースに仕舞い込む。いくら入部が決まったと言っても流石に本物の拳銃を改造した召喚器は家に持って帰れないからこその一時回収だ。

風花がいつ入寮するかもまだ決まっていないが、既に仲間になることは確定しているため、美鶴に連れられ部屋を出て行こうとしたとき、風花は綺麗な笑みを浮かべてこれから仲間になる者によろしくと挨拶をした。

その笑顔を見たメンバーたちは、ヒーホーという仲間を失ったことで落ち込んでばかりいたが、自分たちはこの笑顔を助けることはできたのだと思うことが出来た。

新たな仲間が増えただけでなく、思い掛けないお返しを貰えたことで笑顔になった一同は、家に帰る風花を寮の玄関まで見送ることにして全員で一緒に作戦室を出て行くのだった。理事長ただ一人を部屋に残して。

第二百十九話　風花の復学

6月12日（金）
朝――月光館学園
自宅のベッドで久しぶりに休んだ風花は、いつもより早く目を覚ますと学校へ行く準備をした。
これまで授業は全てテレビ越しに受けていたので支障はなく、ただ自分の足で通学路を歩く感覚に妙な懐かしさを覚えながら学校に向かった。
それほど友達がいる訳でもないので、通学途中に声をかけられたりすることは殆どないが、靴箱で上履きに履き替え、自分のクラスに行くと現実世界で約二週間ぶりにやってきた風花をみた一部の生徒が「あ、ユーレイの子だ。生きてたんだ」と無自覚ながらキツい言葉を吐いたことで風花は少しショックを受けた。
相手に悪気はないのかもしれない。元々、イジメを苦に自殺したという噂も出ていたのだから、それを知っていた相手が勘違いするのも無理はない。
だが、仮に死んでいたとしても、あのように軽い調子で言われると自分の価値がどれほど大した事がないかを突きつけられるようで胸が締め付けられた。
それでも帰る訳にはいかないので自分の席まで進み、他の者からチラチラと見られていることに気付きながら教科書などを机に仕舞っていれば、一つの足音が近付いてきて彼女の机の傍で止まった。
「風花、あんた寮に入るんだって？」
「森山さん……」
やってきた相手は風花を苛めていた森山だった。
あの日、タルタロスであった事を相手は覚えていない。けれど、あのときの相手が謝らなければと言っていたのは本心のはずだと美鶴から説明があった。
ずっと心配していて、ずっと罪悪感を抱えていて、風花が学校にいると言われていたから彼女は半分意識のない状態でありながらタル

タロスまでやってきたのだ。
「カッタイなーその言い方。夏紀でいいから」
「う、うん」
「ま、なんかあったら相談しなよ。いつでも話聞くから」
「……夏紀ちゃん」
そして今日、久しぶりに学校へ来た風花を心配して彼女は声をかけて来たようだった。
これまでの事がなくなった訳ではない。だが、森山はもう二度と同じ過ちは繰り返さないだろう。
不器用な相手の優しさに触れた風花は思わず嬉しくなって瞳を潤ませる。そんな少女の姿に森山が苦笑していれば、
「お前に相談しても何も解決するとは思えないがな」
教室の入り口の方からよく通る低い声が聞こえてきた。
和やかな雰囲気を一瞬にして霧散させた無礼な声は誰のものか。森山が振り返れば教室に入ってくる湊の姿があった。
相手の席は風花の席の近くなので、相手が席についたタイミングを狙い、急に絡んできてどういうつもりかと森山は問うた。
「朝からなに？」
「……別に」
「なんかあるならハッキリ言いなよ」
何もなければ突っかかったりしてこないだろう。以前から彼は森山に対して攻撃的であったが、裏でグチグチと言われるのは気分が悪いので、言いたいことがあるなら直接言ってこいと森山は告げる。
すると、金色の瞳で真っ直ぐ相手を見返していた湊は、そんなに言うなら良いだろうと静かに口を開いた。
「じゃあ、一言。……お前、よく恥ずかしげもなく山岸の前に姿を現せたな。加害者のくせに」
瞬間、言葉のナイフが加害者と被害者を襲う。
彼に言わせれば森山は何も罪を償っていない。謝ったのは意識のない状態で、当時のことを相手は覚えてもいないのだ。
それでどの面下げて相談に乗ってやるだなどと言えるのか。被害

者である風花はとても気まずそうに視線を逸らし、加害者である森山も図星を突かれて言葉に詰まる。
せっかく好転しかけていた関係を修復不可能なレベルに壊しかねない青年の言葉は、当事者同士の間にだけ流れる空気を教室全体まで広げ、登校してきたばかりの者たちは何があったのかと困惑していた。
だが、
「湊、その辺にしときなさい。最終的な落とし所は当事者同士が決めるんだから」
「風花ちゃんも困ってまうし、忠告以上はしたアカンよ」
新たにやってきた二人の少女が青年を諌める事で場の空気が動き出す。
彼が何をしたかなど分かっていたようで、彼女たちの対応は実に的確だった。ラビリスの方から罪の意識で押し潰されそうになっていた森山にもフォローを入れ、風花が森山に寮に置く家具を見に行きたいとお願いしたことで二人の間の気まずさは抜けた。
森山を嫌っている湊は心の中では図々しいやつだと毒を吐いているのだろうが、チドリたちからこれ以上は言うなと釘を刺された事で黙っている。
そのおかげで朝礼が始まることには教室内の空気は元に戻り、風花も森山と笑顔で会話が出来るようになっていた。
＊＊＊
教室内の空気が正常になった頃、チャイムが鳴ると出席簿を持った佐久間が教室に入ってきた。
「みんなー、おっはよー！」
元気よく挨拶しながら入ってきた佐久間は、そのまま教卓まで進んで教室中を見渡すと目当ての青年のところで視線を固定し、輝くようなとびっきりの笑顔を浮かべると青年にだけ特別に挨拶をする。
「有里君、おはよう！」
「……ああ」
「うん、今日も元気いっぱいだね！」

他の者たちは心の中で思っただろう。今の返事のどこが元気いっぱいなのかと。
もっとも、突っ込んだら負けだと思って誰もあえてツッコミを入れなかったが、江古田はどうしたのだろうかと皆が心の中で疑問に思っている間に佐久間は出席を取り。誰も休んでいないことが確認出来ると保護者向けのプリントを各列の先頭に配りつつ皆に話しかけた。
「フフン、実は今日は皆にビッグニュースがあるんだよ！　さーて、それは一体どんな内容でしょうか？」
言われた生徒たちは一斉に考え始めるが、ビッグニュースと聞くとまず思い浮かぶのは転入生だ。
しかし、そんな話は一切聞いていないので可能性はゼロ。というよりも、もしも転入生がいるとすれば一緒に入ってきているだろう。
その存在も確認出来ていないため、誰かが転入してくることや、逆に転校することも候補から外して良いと思われる。
なら一体何の話だろうかと生徒らが考え始めれば、シンキングタイムに入ってすぐにバスケ部の渡辺が手を挙げた。
「はーい！」
「はい、渡辺君」
「先生が産休に入る」
「ハズレー、さらにセクハラで内申点も減点ね！」
佐久間には恋人などいない。二十代も半ばを過ぎた年齢ながらキスの経験も一度だけで、未だに純潔を守っている希少種である。
そんな彼女が湊に特別な想いを抱いているのは中等部からいる者に取っては常識であり、渡辺が知らないはずがない。それで妊娠しているというのはセクハラだと指摘し、内申点を下げられた渡辺は本気で頭を抱えて自分の発言を後悔している。
両者のやり取りを見ていた他の者たちは、楽しいクイズの時間から一転して解答を誤れば成績に影響すると分かり躊躇し出す。
しかし、このままでは佐久間の方から当てていくのではと不安が過ぎったとき、中等部時代に湊と一緒に生徒会に入っていた西園寺が綺麗な作り笑顔で手を挙げた。

「はい！」
「西園寺さん、どうぞ」
「センセーが解雇で実家に帰るとか？」
「よーし、喧嘩なら買うぞー」
お互いにニコニコと笑って言っているが両者の間には見えない火花が散っている。
元々二人の正確は似たようなものなのだが、年上の地味系彼氏持ちでありながらイケメンは別腹だからと湊をデートに誘うような押せ押せ系の西園寺は、自分のお気に入りのイケメンにちょっかいをかけてくる佐久間の事が嫌いなのだ。
対して、佐久間の方も表面上は良好な関係を築いているように見せているが、心の中ではお前だけにはゼッテー渡さねぇと西園寺に対抗心を持っており、彼の傍にいる訳ありメンバーならともかく彼女だけは絶対に彼の傍にいさせないと思っていた。
それ故、両者の対立はある意味で当然の結果なのだが、このままでは話が進まないので、佐久間は途中で話を切り上げるともう答える人はいないのかと教室を見渡した。
「ほらほら、もっとハッピーな感じのアイデアはないの？」
「風花さんが復学したこととかですか？」
「あ、それもあったね。山岸さん体調よくなって良かったね！　でも無理は禁物だからね！」
「は、はい。ありがとうございます」
美紀の言葉で思い出した佐久間は風花に優しい表情を向けるが、実際のところ彼女は休んでいたのが体調不良ではないと知っていた。
だが、ここで問題を大きく取り上げてしまうと風花の立場が悪くなるので、あえて全員の前で体調不良だったことを強調してそれこそが真実だったと認識させたのである。
彼女のそんな細かな気配りを理解していた風花はホッとした顔になり、それを満足そうに見ていた佐久間はここらでタイムアップだと宣言した。
「もうみんな頭が硬いなぁ。ここは有里君に一つお手本を見せて貰お

うか。じゃあ、有里君正解をどうぞ！」
「……江古田が処分を受けて副担任に降格、繰り上げで篠田文子が担任に着任」
「おっと、両親が離婚前の名前を出すのは減点だよぉ？　ちゃんと愛を籠めて佐久間先生って呼ぶようにね。けど、だいせいかーい！　なんと今日から私がこのクラスの担任だもんね。お給料もアップアップだよー」
　湊以外に佐久間の両親が離婚している事は知らない。よって、彼女の旧姓と両親が離婚していることを知った他の生徒たちは驚いているが、バラしたことは減点だと言いつつも大して気にしていないのか佐久間は給料増額に喜んでいる。
　ここは普通どうして江古田が処分を受けることになったのかという質問が飛び交う場面だというのに、皆の意識が佐久間の素性の方に割かれているからか質問は一切出なかった。
　青年がここまで計算して発言したなら大したものだが、残念ながら窓の外を眺めている彼にそんな計算などなかった。
　そんな風に、話の内容に興味のない青年が窓の外を眺めていれば、再起動した他の生徒らは担任の途中変更による影響を懸念し、何か変わるのですかと佐久間に質問する。
「先生、先生が担任になったら僕らは何か変わるんですか？」
「良い質問だね。まぁ、大きな変化としてまず他のクラスの子から羨まれるよ。〝あんな綺麗な先生が担任なんてずるいや！〟ってね。さらにホームルームの度に会えるようになります」
「……人によっては地獄じゃない」
　確かに彼女の容姿はかなり整っている。スタイルも美鶴以上で、身体能力と頭脳は学園内どころか日本国内でも上位に位置するだろう。
　ただ、それはあくまで肉体（ハード）の評価であり、性格（ソフト）の評価で言えば自信満々に自分の価値を語ることも含め残念であった。
　佐久間が担任になった場合のメリットを話し終えたところでチドリがツッコミを入れれば、声には出さないが心の中で何人かが同意して頷く。

「そんな事言っていいのかなぁ。担任の先生にはご機嫌取りしといた方が良いと思うけどなぁ」
それを見た佐久間は出席簿をヒラヒラと振って不敵に口元を歪める。
彼女には以前からそういった傾向があるのだが、上手い具合に権力を駆使して自分に刃向かってくる生徒を叩き潰すのだ。
湊のようにテストで点さえ取っていれば出席日数すら優遇して貰える特待生ならまだしも、美紀やチドリのような成績優秀者は学費の免除しかされていない。
そうなるとここで点数を減らされる訳にはいかないため、下手に彼女の機嫌を損ねる訳にはいかなくなった生徒たちは、「江古田め、余計なことをしやがって」と処分を受けて落ち込んでいる相手の知らないところでさらなる追い打ちをかけるのだった。

放課後――図書室
授業が終わり生徒たちが部活動や自由を求め娑婆へと出ていく放課後。担任と無責任な前任のクラスメイトのせいで図書委員になった七歌は、受け付けカウンターで新しいバーコードのラベルを作りながら、それを入荷されたばかりの本に貼るという作業をしていた。
「んでね、環境を変えるために新しく風花って子が寮に入ってくることになったの。まぁ、ゆかりとは友達らしいし、他のメンバーも知り合いみたいだから学校の延長みたいな感じだろうけど」
七歌は一緒に作業している沙織に自分たちの暮らす寮に新メンバーが来ることを話していた。
これまで実家暮らしだった生徒が突然入寮するなど非常に希なケースだ。そのことに興味を持った沙織がどういった経緯があったのかを尋ねれば、七歌はペルソナの件を伏せつつ、風花が一部の生徒から苛めを受けていた事などを伝えた。
本人のいないところで言い触らすのは良くないけれど、E組でそういった事があった話を聞いたことがあったのか、沙織はあの話はその子だったのねと逆に納得した様子だ。

「へぇ。でも、その子も全く知らない新しい環境よりは、仲の良いお友達のいる場所の方が安心でしょうね」
「別に目的があれば新しい環境も苦じゃないよ？」
「あ、そっか。七歌ちゃんは転入生だったね」
「へへ、この学校で一番のルーキーだぜ」
知らない環境、新しい環境に飛び込むのは勇気がいる。苛めを受けていたようなメンタルの弱そうな少女ならば、環境が変わること自体に不安や躊躇いを覚えるに違いない。
話を聞いていて沙織はそう思ったようだが、どんな物でもいいので自分なりの目的を持っていれば案外大丈夫だと経験者である七歌は語り、彼女の言い方が面白かったことで沙織も思わず笑ってしまった。
それに釣られて七歌も楽しそうに笑うが、そういえばと隣にいる少女も二年間の留学で自分と同級生になっていた事を思い出した。
「あ、でも、沙織も似たような感じでしょ？　同級生がいないっていうか後輩の中に放り込まれた形だし」
入学当時からいた教師も残っているとはいえ、彼女の元々の同級生は今年の三月に卒業してしまっているのだ。知らない者の中に飛び込むという意味では七歌とそう変わらないだろう。
自分は大丈夫だったが沙織も同じように気にしていなかったのと尋ねれば、沙織は右手を頬に添えるように首を傾げて考える素振りを見せ、別に気にしたことはなかったと返す。
「んー、そうなんだけど、留学前もあんまり大勢とは親しくしてなかったの。委員会を通じてだけど七歌ちゃんと話してる方が長いくらいよ」
「おっ、二人だけの濃い時間という訳ですな！」
偶然の出会いだったが沙織が留学前も併せて一番仲が良いのは七歌だと言った。
まだ放課後や休日に一緒に遊んだこともなければ、学園内で会っても軽く挨拶する程度だが、こうやって一緒に委員として働くときには雑談に興じている。

七歌自身もそれを楽しんでいたが、沙織も同じように楽しく思っていたなら非常に嬉しい。そう思ってニカッと笑ってみせれば、沙織は何故だか躊躇いがちに口を開いてきた。
「あの、前から少し気になっていたんだけど、一つ聞いてもいいかしら？」
「おう。答えられるか分からないけど、質問するくらいは構わないぜ！」
「ありがとう。じゃあ、その、えっと……七歌ちゃんって同性の方が恋愛対象なの？」
「は？」
流石の七歌も一瞬何を聞かれたのか理解出来ずフリーズする。
しかし、すぐに言葉の意味を理解すると変な誤解はやめてくれと慌てて否定した。
「ババババ、バーロー！　こちとら生粋のノーマルだい！　そりゃ、可愛い子と遊んだりスキンシップ取るのは好きだけど……はっ!?」
可愛い子や綺麗な人は嫌いではなくむしろ好きだ。そういった相手にスキンシップを取るのも楽しいとは思っている。
だが、それはそれ、これはこれというやつで、七歌の恋愛対象はバッチリ異性であった。
何故彼女がそのような発想に至ったのか甚だ疑問だ。どこにそんな要素があったのだろうかと考えた七歌はある一つの可能性に思い至りハッとする。
そう、その可能性とは沙織が七歌を恋愛対象として見ているということだ。
これならば「女性が好きなの？」という意味に思われた彼女の質問の意味は一八〇度変わり、「同性愛って興味ある？」という事になる。
相手のことは好ましく思っているが、出会って間もない上にそういった対象としては見れない七歌としては、とても心苦しいがと相手への配慮をしつつ素直な自分の気持ちを伝える事にした。
「すみません、貴女の気持ちには応えられません。これからも良いお友達でいましょう」

「ち、違うよ！　七歌ちゃんが女子相手に変なこと言ったり、スキンシップが激しいって聞いたりしてたから、もしかしてそうなのかなって思っただけなの。別に私がどうこうとかじゃ本当にないから」
付き合うことは出来ないと断りの返事を返され、今度は沙織の方が慌てる番となった。
言われてから本人もそういった意味に取られる可能性に気付いたようだが、彼女の質問は最初に七歌が思った方で合っていたのだ。
普段の行動と言動が誤解を生んだようだが、お互いに慌てて嫌な汗を掻いたと思いながら少し落ち着くべく深呼吸して作業に戻ることにした。
もっとも、新しく入荷された本などそう数がある訳ではない。真面目にやれば残り僅かにとなり、終わったら時間まで何をしようかと考え始めたところで入り口の扉が開いて一組の男女が入ってきた。
「でね、三丁目にあったお好み焼き屋が閉店して、その後にウサギの小物を集めた雑貨屋が出来たの。可愛いマグカップがあったから買ったんだけど、学校で使おうと思ったら耳が邪魔でさぁ」
「……そうか」
入ってきたのはこの学校で一番有名な男子と彼のクラス担任になった女性教師。男子の方は興味なさげに返事をしているが、彼の左腕に女性教師が自分の腕を絡めているので、傍から見れば美男美女のカップルに映る。
しかし、二人はお互いに教師と生徒だ。禁断というよりも都の条例が赦してくれない関係である。
相手はそれ分かっていてやっているかは不明だが、カウンターに座っている図書委員の二人が彼らを見ていれば、視線に気付いた女性教師が自分の左手で抱えていた分厚い本を掲げて見せてきた。
「あ、授業で使った資料の返却だから気にしないで！」
そう言って彼女は貸し出し禁止の棚の方へ歩いて行く。図書室の本には一部貸し出し禁止の物があり、生徒も図書室内でならば閲覧出来るのだが、施設の外へは持ち出し禁止となっている。
だが、教師はその対象には含まれず、授業で使うときなどには事前

に連絡しておけば受け付けカウンターをスルーして借りていくことが出来た。
彼女たちはそれを返しに来ただけのようだが、二人が奥の棚へと消えていったところで七歌が二人のいる方向を睨み口汚く罵る言葉を吐いた。
「ファック、見せつけるように八雲君と馴れ馴れしくしやがって」
「あ、あの、相手は先生だからね？」
「教師である前に女だよ。股にTが付いてない代わりにマタニティーがあるって覚えよう」
「う、うーん……それはあんまり覚えたくないかなぁ」
言われてみれば確かに相手は教師という立場より自分を優先している節がある。というより、学内で湊にあそこまでベッタリ出来る教師など彼女含めて二人しかいない。
他の女性教師は彼の容姿や成績等を褒めてはいるが、流石に立場や年の差もあって大っぴらには異性として見るような発言もなかった。
よく学校はそれを問題にしないなと思うところだが、二人は中等部の頃からの付き合いであり、さらに同じ部活メンバーと今も部活動を続けている。
そのメンバー全員という訳ではないが、ほとんどが成績優秀でコンクールなどにも積極的に作品を出しているようなので、やることさえやっていれば部活メンバーの女子や湊本人が抑えるということで見逃されているようだ。
無論、そんな事は七歌には何の関係もないので呪詛を吐いて二人のいる方向を見続けているが、七歌がくだらないことに時間を使っていると再び扉が開いてお団子頭の女子が一人入ってきた。
「あ、あの、長谷川さん！」
「あ、東田さん。どうしたの？」
「えっと、その、借りてた物理のノート……」
「ああ、もういいの？」
やってきた女子は真っ直ぐ沙織の元にやってくると彼女に話しかけた。

相手のことは七歌も覚えていたので、借りた物をちゃんと返しに図書室までわざわざ来るとは偉いぞと心の中で褒めてやる。
別に相手にしてみればそんな言葉はいらないだろうが、沙織が相手からノートを受け取る準備をしかけたところで少女から予想外の言葉が返ってきた。
「ミチがなくしたんだ。ゴメンナサイ、怒っとくから！」
「えっ？」
言いながら少女は顔の前で両手を合わせながら頭を下げてくる。本当にゴメンナサイと言葉では言っているが、貸した物を勝手に又貸ししてなくされた沙織としては困惑するしかない。
そうして沙織がどう返すべきか悩んでいると、
「ねぇ、ちょっと！」
相手の態度にムカついた七歌が立ち上がりふざけんなと相手を怒鳴りかける。
だが、七歌が色々という前に奥の棚の方から出てきた青年が、一連の話が聞こえていたのか冷たい瞳で女子を見ながら話に割り込んできた。
「……お前、なんで他人事みたいな言い方してるんだ？　人から借りた物を勝手に又貸ししたのはお前だろ」
「え、そ、そうだけどっ」
「さっさとそいつ呼び出せよ」
女子と青年の身長差は二十センチ以上、男子でも目の前に来られたら威圧感でビビるというのに、さらにそれだけの身長差で見下されながら命令を受ければ、普通の生徒は恐怖のあまり素直に言うことを聞くしかない。
彼と一緒にいる教師はニコニコと笑っていて話に参加しないようだが、下手に教師が介入するより彼に任せた方が上手く纏まりそうではある。
ならばここは彼の手腕に期待しようと七歌は涙目で電話をかける女子を眺めていた。

＊＊＊
女子が電話をかけてから五分ほど経ってから一人の女子がやってきた。彼女がなくした本人のようだが、相手は自分がどうして呼ばれたのか分かっていないようで、湊がいることに少し驚きつつ近付いて来ると湊がすぐに用件を切り出した。
「ノートを持ち主に返せ」
「え、有里君？　ノートって何の話？」
「お前がこいつから借りたノートだ。持ち主がなくて困ってる。さっさと返せ」
言いながら湊は沙織を指すが相手は話したこともない年上の女子である。本人は今は同級生だから気にしないでというだろうが、見た目で年上だと理解しながらもこいつ呼ばわりする辺り、湊は欠片も沙織に興味を持っていないらしい。
けれど、それでも困っている人間を助けるのが彼だ。明らかに不機嫌だと分かる様子でノートの返却を迫れば、言われた女子は萎縮しながらも申し訳なさそうに借りたノートの現状を伝えてくる。
「ご、ゴメンナサイ。でも、どこにいったか分からなくて……」
「そんな話は聞いてない。返せって言ってるんだ。分からないなら見つかるまで探せばいいだろ。借りた物を返すなんて当たり前のことだぞ」
お前の言い分など知らない。バッサリと切り捨てて湊は良いから返せと言う。
女子にすればない物はないという感じなのだろうが、それこそ貸した方にすれば知ったことではない。借りた以上は返せ、出来ないとは言わせない、相手の反論を封じて湊が言えば、又貸しした女子と同じようになくした女子も泣き出してしまう。
それを傍で見ていた七歌は面倒臭い相手だなと心の中で思っていた。本当に泣きたいのはノートをなくされた沙織の方だろう。悪いのは自分のはずなのに、強く言われた程度で泣くなど自分勝手が過ぎる。
優しい湊では相手が泣いてしまうと強く言えないだろうが、その時

は選手交代しようと椅子から腰を上げかけたところで再び湊が女子に言葉を返した。酷く冷たい声色で。
「泣く暇があるなら心当たりのある場所を探してこい。お前もだ。部活やバイトなんて知らない。さっさと見つけて持ってこい」
最後に鬱陶しい虫を払うように腕を横に振れば、女子たちは泣きながら駆け出して図書室を出て行った。
女子たちの様子からすると二人は湊にちょっとした憧れのようなものを抱いていたに違いない。
だが、今回の件で完全に見限られたと思っているだろう。全て自業自得であり、勝手に人の物をなくすような無責任な者に同情の余地はないが、それでも一応は言っておくかと今まで黙ってみていた佐久間が彼の許にやってくると苦笑しつつ話しかける。
「有里君ってばきっびしぃ。女の子を怖がらせて泣かせるのは良くないよ？」
「……泣きたいのはなくされた方だろ。借金じゃあるまいし、ちゃんと管理していれば返せないなんて事はないんだからな」
借金は自分たちではどうにもならなくなって、泥沼と分かっていながらも生きるために借りる場合もあるため返せないという状況も理解は出来る。
しかし、ノートはそんな物と違ってただ用事を終えてから返却すればいいだけだ。使って減るようなものではなく、使えない状態になったとすれば自分の管理不行き届きでしかない。
よって、あんなのは泣いた方が悪いとバッサリ切り捨て、青年が受け付けカウンターの方を向いたタイミングで七歌もサムズアップして彼を褒める。
「八雲君、ナイス！」
「……見ていて不快だっただけだ。それよりそっちのお前、理系科目が望ましいがどの教科でも良いからノートを出せ」
ノートを出せと言われた沙織は理由が分からず首を傾げる。隣にいる七歌も同じように不思議に思っているようなので、これは別に彼女の理解力が乏しい訳ではないだろう。

ただ、別にノートを見せたところで不都合はないため、数学や化学を中心にいくつかのノートを彼に渡せば、それらをパラパラと眺め終わった湊がどこからか取り出したノートにシャーペンと四色ペンで書き込み始めた。
内容は物理のようだがその筆記速度が半端ではない。何より授業の板書を全て暗記していることに驚きである。
「うわぁ、書くのすごく速い。てか、何してるの？」
「ノートの複製だ。あいつらになんか期待するだけ無駄だろ」
七歌に聞かれた湊は答えながら書き続け、五分もかからずに最新の授業内容まで書き込むとノートを沙織に渡した。
受け取った沙織は最初のページから順に見てゆくが、字の太さや色ペンの使い分けなど、全てが完璧過ぎて思わず感嘆の声を漏らす。
「すごい、これ筆跡まで私のノートにそっくり」
「他のノートを見れば板書の写し方の癖くらい分かる。何より竹ノ塚は基本的に同じ授業しかしないからな。話が逸れるときも同じ内容だけあって、余談等で一部のクラスだけ補足で板書が増えたりもしない」
『そうなんだ』
七歌や沙織は他のクラスの授業の様子までは知らなかったようで、全クラス共通の内容と聞いてそうなのかと感心する。
もっとも、そんな事を知っていようがいまいが湊の見せたノートの完全コピーは他の者には出来ない芸当だ。
授業内容を全て記憶しておく頭脳、対象の筆跡や書き込みの癖を見抜く洞察力、他のクラスも同じだと把握しておく諜報力、それら全てを持ち合わせて尚不可能と思わせる技能はまさに神業と言えた。
「それはやる。自分で写し直すでも、そのまま継続して使うでも好きにすれば良い。元のノートが戻ってくれば一番だがな」
「どうもありがとう。宿題に必要だったから本当に助かるわ」
沙織にノート渡し終えた湊は佐久間を連れて図書室を出て行った。なくされたノートそっくりのノートが手に入った沙織もご満悦で、これでもし女子たちがノートを見つけられなくても困ることはない。

必死に探している者にもいい薬にだろうし、概ね円満な解決になったなと思った七歌は解決に導いた青年を褒めちぎる。
「八雲君って改めてスペック高いよね！　うん、自慢の弟だわ！」
「フフッ、ノート貰えて本当に助かっちゃった。お礼に何か返した方が良いのかな？」
「多分いらないと思うよ。まぁ、それでも何かお返しするなら購買のお菓子とかで良いと思う」
そう、彼は別に恩返しを求めて人を助けている訳ではない。単純に自分が見ていて不快だからとか、弱者を助けるのは当たり前のことだからなど、基本的には自己満足でしかないのだ。
故に、彼はお礼を受け取ることはほとんどないし、それでも受け取って貰うならお菓子程度にするしかない。
「あ、八雲君に惚れちゃダメだよ。彼は女泣かせの相が出てるので惚れても自分が哀しくなるだけなのですよ」
「そうなんだ。でも大丈夫よ。私、有里君ってちょっと苦手だから」
「あー、よく知らないと雰囲気とか怖いもんね」
「ううん、見た目は綺麗な人だなって思ってるよ。そうじゃなくて、彼って何も見てない感じがするから苦手なの」
七歌は沙織が彼のことを苦手だと言ったとき意外に思う。誰にでも優しい、頼まれれば嫌と言わない、そんな流されやすいとも言える性格の彼女でも苦手なタイプがいることが驚きだったのだ。
見た目ならば黒い眼帯を着けていることや、一八〇を超える長身に威圧感を感じてという事で理解も出来る。
だが、沙織が彼を苦手に思っていたのは、そういった外見からくるものではなく〝有里湊〟という人物の人間性そのものについてだった。
「何も見てないって？　周りのこととかよく見てると思うんだけど？」
「うーん、他人に興味がないって言えばいいかしら。彼って誰のことも必要としてないでしょ？　私は誰かに必要とされたい人間だから根本的に合わないのよ」

言い終わりどこか遠い目をした沙織は貰ったノートを鞄に仕舞い込む。
彼のような他者を必要としない人間は、誰かに必要とされたい人間にとって己の存在を否定されているように感じるらしい。
七歌にすれば人助けばかりしている湊も同じ〝誰かに必要とされたい人間〟だと思っているのだが、彼のような強い人間をそういうタイプだと思うことが出来ないのかも知れない。
また一つ沙織の内面に触れることが出来た七歌は、頭の中で絆が深まったことを報せる声を聞きながら仕事を片付けると、余った時間に授業で出された課題をして過ごした。

第二百二十話　遠い背中

影時間――タルタロス・４２Ｆ

新戦力となる風花の加入、そして美鶴が前線に出られるようになったことで、一同は入寮したばかりの風花と共にタルタロスへ訪れていた。

これまで使っていた通信機器を積んだバイクは現在修理中。風花に補助機材は必要ないため、通信機器を積まなくて良くなったこともあり、壊れた箇所の修理と一緒に一部を改修しているらしい。

それを聞いた七歌は実家から届いた愛車のドラッグスター４００を美鶴に見せ、今度の休みにでも一緒に近場を転がそうとツーリングの約束をした。

《前方からシャドウ反応！　敵の数三、嫉妬のクビドです！》

タルタロスに赴く途中、そんな会話をしていたメンバーたちだが、テレパシーのように直接頭に響いてくる声を聞きながら敵を視認したことで、七歌たちは前衛を入れ替えて七歌と美鶴が前に出た。

背中に羽の生えた赤ん坊のようなシャドウは恋愛〝嫉妬のクビド〟。新たに開いた四一階以降から現われるようになった新種だ。

小さい上に飛んでおり、さらに手に持った弓矢で遠くから攻撃してくるので相手は非常に面倒くさい。

だが、ここは一本道の狭い通路だ。他に逃げ場がない以上は正面からの撃ち合いになる。

それを読んでいたからこそ順平と真田も入れ替わった訳だが、前に出た二人は既に準備は出来ているとばかりに敵を睨んで召喚器に手をかける。

《敵の弱点は氷結属性です。疾風属性は効かないので注意してください》

『了解！』

改めて風花から弱点を教えて貰った事で前に出た二人の迷いは消える。

イメージするのは亡き仲間の雄姿、どこまでも自在に氷を操ってみ

せていた彼女の技量と発想は非常にためになった。
彼女が七歌たちに知らしめた氷結属性の有用性は、他の属性と違って実体を持っている点だ。
魔法としての威力を発揮出来ずとも、物理防御や物理攻撃に転用することも可能。そして、放つときにも工夫すれば限られた力でも威力や効果を増す事が出来る。
そんなヒーホーが自分たちに見せた戦い方を頭の中で反芻しながら二人は同時に引き金を引く。七歌が召喚するは女教皇〝ハイピクシー〟。美鶴のペンテシレアと同時に現われたペルソナは、胸の前で右手を構えるとそのまま素早く横薙ぎに振るう。
すると、その手からたった一発の氷槍が高速で射出され、直近の敵の眉間に突き刺さり消滅させた。
「ペンテシレア、マハブフ！」
自分たちの仲間が一撃でやられたことに動揺を見せたシャドウに向け、続けざまに美鶴が攻撃を放つべく力を練り上げる。
先ほどの七歌は一発に絞ることで技の質を磨き、速さと威力を通常よりも上げてみせた。
そして、それとは対照的な技の使い方として、本来は吹雪や氷槍の連射という形で放つマハブフで、美鶴は氷槍をより細かく鉛筆ほどのサイズで形成し氷針とも呼べる氷を多数作り出した。
一度に扱える氷の量が決まっていて、氷槍ならば二十本程度しか作れないとしても、それを細かくすれば四十本の氷針を作ることが出来る。
そんな風にして質より量を選んだ美鶴は逃げ場をなくすほどの氷針を撃ち放ち、一発では敵を倒せなくとも、当たって動きが止まったところに次々と追撃をかけることでシャドウを倒しきった。
女子二人のそんな凶悪なスキルの使い方を見ていた順平と真田は、もしも自分たちが何かをしでかし〝処刑〟の対象になったらと想像し背中を汗が伝うのを感じる。
「うっわぁ、七歌っちのあれ完璧に殺し屋ってかスナイパーって感じっすね」

「美鶴の方を見てみろ。シャドウがハリネズミになってるぞ。俺はあっちの方が恐ろしい」
いくら速くとも一発に絞ることで威力等の底上げをしている性質上、七歌の攻撃は連射が不可能となっている。
今よりも成長すれば威力と速さを最高値に設定しながら二発、三発と撃てる数の上限も上がるかもしれないが、現状は一発のみで第二射にはインターバルを要する以上は避ければ終わりだ。
しかし、美鶴の方は威力は弱くても完全に面で攻めているため、いくら真田の反射神経が優れていようが回避出来るものではなかった。
よって、対処のしようがないという点において、美鶴の方が凶悪さは上だと真田は判断した訳だが、敵を倒し終えて戻ってきた二人はどこか不満げな顔をしていた。
「どうしたお前たち。敵を倒したのに何かあったのか？」
「何かあったという訳ではない。ただ、自分の未熟さにうんざりしていただけだ」
真田に聞かれた美鶴は肩をすくめて答える。新たに編み出したスキルの運用法だったが、決して満足のいく出来ではなかったと。
真田や順平にすればどちらも優れていたと思うのだが、本人たちは許容範囲のイメージにすら届いていないらしい。
「私も美鶴さんも今の目標はヒーホー君なんです。それで自分なりに工夫してスキルを使ってみたんですが、あまりに完成度が低くて背中が遠いと思ったんですよ」
「オレっちからしたら一撃必殺でいいと思ったぜ？　一発しか撃ってないから省エネにもなるし」
「そこはそうだね。でも、一発しかないから避けたり防いだりされたら終わりだし、今みたいに複数で来たら対処が間に合わないの」
確かに一撃必殺になるよう一発に絞っている分、無駄にエネルギーをロスせずに済むという利点はある。
エネルギー切れでヒーホーが死んだからこそ、七歌は継戦能力を向上させようと思ったのだが、その点については合格だと言えるだろう。

だが、言ってしまえばそれだけなのだ。質の向上を目指して威力と弾速は上がったが代わりに連射性が失われた。
今後の修練でその点を克服出来る可能性は勿論あるけれど、現状では先ほどの技がほぼベストと言う点では自分も一緒だと美鶴も己の技の反省点を述べる。
「私の方も似たようなものだ。通常のエネルギー消費量で広範囲をカバーして複数を同時に相手出来る利点はあるが、一つ一つの威力が元のスキルよりも大幅に下がる。よって、敵が強力なスキルを放って迎撃行動を取ってくれれば、スキルで抑えることも出来ずに突破されるだろう」
美鶴のスキルは逃げ場をなくす攻撃の死角を減らすためのもの。複数のシャドウを相手取っての戦闘を想定したものだ。
彼女は先日の戦いで大型シャドウが二体だったことにより、通信機器を守ろうとして守り切れず結局やられてしまった。
もし機材が無事であっても七歌たちまでの距離を考えると通信出来たかは不明だが、それでも美鶴は色々とやろうとして全て中途半端に終わってしまった形になる。
機材は壊れてもまた作ればいいが、自分たちがやられたことでヒーホーに無理を強いる結果となり、最終的に彼女は限界を迎えて消えた。
もう二度とあんなことにはならないよう、一人でも多数の敵を対処出来るようになりたい。そんな思いから編み出した技だったが結果は手数でどうにか敵を倒せる程度だった。
これでは鎧を着たような敵や相手も強力なスキルを放ってくれれば防がれ、一発逆転を狙える強力なスキルを獲得した訳ではない美鶴は持久戦で負ける。
七歌も美鶴もまだまだ新技の構想を練っていこうとは思っているが、やはりヒーホーのようにやるには地力が足りないと己の無力を実感することになった。
しかし、強さに対して貪欲になりつつある二人を見ていた真田は、今も強さを求め続けている者として、同じ問題にぶつかったことがあ

るからこそ理解出来ると最初の壁の越え方について一つアドバイスした。
「俺たちとあいつでは保有しているエネルギーの量が異なる。一瞬で練られる量も当然違うだろう。なら、俺たちは俺たちに出来るやり方でやっていくしかない。お前らのスキルの研究は無駄じゃないさ」
「フッ、そうだな。山岸という即戦力も加わったんだ。実戦の中で使える武器を増やしていこう」
信頼する戦友から励まされた美鶴はフッと笑って諦めないぞとやる気を見せる。
新たに仲間になった風花は素人とは思えないほど的確な指示を出し、前線で戦っている七歌たちを支えてくれているのだ。
これまでよりも情報面で強化された事を考えれば、後は七歌たちが戦いの中で自分の長所や短所を基に戦い方を工夫すれば良い。
次の大型シャドウが現われるのは約一ヶ月後の満月。それまでにチームワークも含めて成長していこうと一同は頷き合い先を目指した。

６月１４日（日）
夜――ＥＰ社応接室
七歌たちがタルタロス探索に出かけた次の日の夜。
ジャパンＥＰ社のビルの応接室には、久慈川りせとマネージャーの井上、そしてトップアイドルである柴田さやかとマネージャーの女性が座って待っていた。
通常、待っている間の飲み物は紅茶とコーヒーのどちらにするかくらいしか訊かないものだが、部屋に案内した秘書のような女性は四人に喫茶店のメニューのようなものを渡し、それぞれにドリンクとスイーツを尋ねた。
海外に本社のある世界有数の大企業だけあり、やはりお客様対応すらレベルが違うと思わされる歓迎の仕方だ。
そんな場所に呼ばれて本当に騙されてないかと疑うのも無理はないが、マネージャーたちも含めて全員が注文すれば、糖質カットだから安心してくださいねと微笑んで女性は部屋を出て行った。

相手が体型維持やカロリー計算に気を遣う職業だからこその心遣いだろう。それはまさしくおもてなしのプロだと思わされる対応だったが、頼んで数分で飲み物やスイーツが運ばれてくると、配膳係と一緒にスーツ姿の湊もやって来たことで、ミーティングをこの時間に指定した柴田が湊に最初に謝罪した。
「あ、有里君。ゴメンね、日曜日のこんな時間になっちゃって」
「いえ、こんなに早く会っていただけると思ってなかったので、お時間を作っていただいてありがたいくらいです。まぁ、飲み物やお茶菓子を食べながら話しましょう」
やってきた湊はホワイトボードを部屋に運び込ませて上座に座り、飲み物やスイーツを他の者たちの前に並べていた女性にコーヒーを頼むとネクタイを軽く弛める。
普通、客に会う際にわざわざだらしない格好になる必要は無いが、湊の場合は少しネクタイを弛めてもファッションだと思えるため誰も気にはしない。
そうして、彼の飲み物が来るまで会議は始まらないので、他の者が言われた通り先にケーキやシュークリームを食べていると、出て行った女性がコーヒーと一緒にワッフルを持ってきたので、湊もそれを軽く食べながら話し始めた。
「では、まず最初に自己紹介から。ジャパンＥＰ社の代表を務めている有里湊です。本日は野外フェス開催に向けて参加していただけるようプレゼンしようと思っています」
「あ、それ本当だったんだ。でも、学生なのに社長さんなの？」
話を切り出した湊はマネージャーたちに自分の名刺を渡し、相手も慌てて受け取ると自分の名刺を渡してくる。
こんなおやつを食べながらの名刺交換など聞いたことも無いが、マネージャーたちは事務所の方から嘘でも本当でもパイプを作っておけと言われていた。
そのため、会社のビルを見て中に入ってからも緊張しっぱなしだったのだが、イチゴの乗ったミルクレープを頬張って満面の笑みになっていた柴田が一番知りたかった事を聞いてくれたので、適応力と度胸

は流石トップアイドルだと思いつつ彼の言葉を待った。
　すると、切ったワッフルを優雅な仕草で口に運んでいた湊は、コーヒーで口の中をさっぱりさせてから綺麗な微笑を浮かべて返す。
「珍しいですか？　昔から女子高生社長や主婦社長なんてものが話題になっていたと思いますが」
「それは起業組でしょ。有里君の方は大企業の日本本部のトップな訳だし、相当なコネクションがないとなれないよね？」
「そういう事ですか。まぁ、これでも留学経験があるので海外にも伝手はあるんです。で、そこで出会ったＥＰ社の方に能力を買われて広告塔も兼ねたお飾りの社長をやってます」
　自分でアイデア商品を開発して売るような起業組ならともかく、外国企業の社長など一般人が急になれるものではない。
　そこに一体どんな絡繰りがあるのか柴田が気にすれば、湊は名前ばかりの社長ですと答えた。
　湊の国内での知名度は確かに高いので、そんな青年が社長をしていれば嫌でも目立つに違いない。宣伝に金をかけずに済むことを考えれば中々の手だった。
　説明を受けて納得した様子の柴田はなるほどと頷き、なら早速仕事の話をしようと興味津々に尋ねた。
「それでそれで？　野外イベントは経験あるけど、野外フェスって初めてだから楽しみなんだけど。具体的にどういうことやるか決まってるの？」
「……ええ、メインはここに呼んだ二人です。ただ、柴田さんは特別出演という形にしたいと思っています」
　言いながら湊は用意していた企画書を両陣営に渡す。そこには会場やイベントの形式等全てが書かれている。
　よって、それを読めば理解して貰えるはずだが、今はここで直接口で説明した方が早いので、湊は柴田の方を向きながら紹介するように手でりせを指しながら話を続ける。
「イベントの名前は後で決めますが、メインはこちらのどブ……どブ川さんです」

「すみません、久慈川です」
「ああ、失礼。久慈川さんですね」
名前を間違えられたりせは真顔で訂正する。明らかにどブスと言いかけていたので間違えた理由はハッキリしているが、どうせ紹介するならちゃんと名前を覚えておけと言いたげな様子だ。
マネージャーの井上も何か言いたそうな様子ではあるが、先日のことがあって強くは出られず黙っている。
すると突然、柴田が肩を振るわせ始め、目元に涙の粒を作りながらクフフッと我慢しきれず笑い始めた。
「ご、ゴメン久慈川さん。有里君が真面目に思いっきり名前間違えるからつい」
「いえ。この人、どブスって言いかけるから間違えたんですよ」
「どブス？　えっと、久慈川さんってファンからそんな愛称で呼ばれてるの？　事務所が最初に考えてくれなかったの？」
〝どブス〟など普通にしていて呼ばれる名前ではない。そも、蔑称なので名前と言って良いのかも不明だが、ほぼ接点のなさそうな湊からそう呼ばれるからには、もしかすると自分が知らないだけでファンからの愛称がそんな可哀想なものになってるのかもしれないと柴田は考えた。
無論、そんなはずはないのだが残念ながら柴田は新人アイドルであるりせの事を全く知らなかったのだ。
せっかく憧れの大先輩と会えたりせにすれば出会いを最低な形で演出されたため、ぶち切れてフルーツタルトを湊の顔面にぶつけても許されるレベルだろう。
しかし、ここで切れても自分に一切良いことはないと分かっているため、湊への怒りで声を震わせながらも柴田に事情を説明した。
「愛称はりせちーってなってます。どブスなんて呼ぶのはこの人だけです。会ってから一回もまともに呼ばれてませんから」
「えー、有里君、裏では女の子にそういう事する人だったんだぁ。イメージ壊れちゃうなぁ」
仮に事務所の先輩後輩や大御所と新人という関係だろうと、裏では

下の者を蔑称で呼んでいると聞けばよくは思われない。
それが全く別の事務所で、さらに男子高校生と女子中学生という年齢差も考えれば、湊が年下の子を苛めているようにしか思えないなと柴田はガッカリした顔で指摘した。
もっとも、それは彼女の演技で内心ではどうしてそうなったのか気になっているだけなので、湊は軽く流しつつイメージが間違っているんですよと返す。
「最初からそういうタイプですよ。それに俺のどブスは世間一般じゃ性格ブスを指す言葉らしいです」
「性格ブス？　あっ……」
「ち、ちがいますよ！」
湊の言葉で何かを察したように柴田が視線を逸らせば、今度はりせが慌てて誤解ですと事の経緯を説明する羽目になった。
それはりせ自身の失態だけでなく、マネージャーの管理不行き届きを他所の事務所にも知られることになるのだが、一緒に話を聞いている柴田のマネージャーは特に口を挟まずにいるのでここではどうもする気もないらしい。
事情を聞いた柴田もようやく理解したようで、アハハと苦笑しながらある事について納得がいったと話す。
「けど、そっか。うん、前に共演したとき有里君と喋ってて不思議だったからさ。世間一般で認知されてる皇子キャラと雰囲気違うなって。素はもっと悪い子だったんだね」
「世間に求められているイメージを壊さないよう努力する部分もありますが、場面によってそう言ったものは使い分けます。公共の場で騒いでいる子どもを叱るときは普通に仮面を外しますよ」
欠点無しの完璧超人、誰にでも分け隔て無く接する好青年。そんな一般人の作り上げたイメージを守るつもりなど湊にはサラサラない。
普段はそれこそ無駄に波をたてる必要がないので愛想良くしているが、ここぞという時は自分の考えを優先して動くのだ。
それを柴田が悪い子だと感じても別に構わないと言えば、今の方がいいよと彼女は笑ったので湊も脱線した話を戻すことにした。

「では、改めて説明しますが仮名称〝久慈川りせｆｅａｔ．柴田さやかフェス〟が開催しようと考えている企画です。会場はこの敷地内にある広場を丸ごと使います。この前半分をステージに、後ろ半分で屋台とかを出していこうと思っていて、物販とかも屋台側に設営します」

物販を屋台側にする理由は会場への行き帰りの途中で他の店でも金を落としても貰うためである。

屋台はＥＰ社の人間と桔梗組だけで十分な数を用意出来るため、それ以外はショッピングモールのテナントやりせと柴田の事務所関係者を呼ぶだけで十分だろう。

よって、メインはあくまで人が来る流れを作ることなので、物販は大きめにスペースを確保し、十分な安全を確保して会場に行けなかった人でもグッズは買えるように手配する予定だと湊は言った。

「はい、質問！　これはＥＰ社が正式にスポンサーとして開催するって考えていいのかな？」

「ええ、ステージや衣装の一部に独自技術を使った製品を使うので、お披露目というかイベントでの使用が可能かのテストをしたいんです。なので、マスコミは一部入れますが基本ＥＰ社のみで開催します」

共同開催など面倒でしかない。湊がそう言えば、両陣営はＥＰ社にだけ話を通せばいいのなら楽だから問題はないとのこと。

むしろ、その独自技術を使ったステージや衣装に興味があるようで、別途配布する資料でその点も後で伝えることを約束すればその件も了承して貰えた。

その後も資金面、会場設営、警備等々、不明な点を順番に話し合い。湊が計画段階で既に実現可能なレベルの詳しいデータまで用意してくれていた事で会議は順調に進んだ。

そうして、話も一段落し両陣営が前向きに参加を検討するという段階になったところで、これまで楽しそうに話を聞いていた柴田が真剣なプロの顔になって一つ良いかと話を切り出した。

「じゃあ、真面目な話として意見を言わせて貰うね。私としては楽しそうなイベントだなって思う。交通の便も良いし、夏って事もあって

かなりの集客が見込めると思う。ただ、久慈川さんをメインにする理由が分からない。これは久慈川さんが嫌いだとか自分がメインになりたいって訳じゃなくて、単純にメインを張れるだけの知名度がないって意味」

そう、イベント自体には何の不満もないのだ。これから進めて行く中で問題は出てくるだろうが、現時点ではステージや衣装の準備も予備プランまで用意されているので安心出来る。

けれど、いくらイベント開催に問題がないとしても、無名のアイドルをメインにこんな大きなイベントをやっても成功するとは思えないと彼女は冷静に指摘する。

「私としては参加もいいと思ってる。ただ、今の状態で開催すれば間違いなくメインを喰っちゃって、久慈川さんの印象は一切残らないんじゃないかな」

このままではりせは名前だけのメインとして終わる未来しか見えない。どんなに彼女が頑張っても、会場で初めて会うのでは集まる客は柴田のファンばかりになるだろう。

柴田としては自分が精一杯輝いてファンを満足させられればいいので不満はない。

だが、りせや湊は本当にこれで良いのかと彼女が尋ねれば、湊は真っ直ぐ彼女の視線を受け止めあっさりと答えた。

「でしょうね。でも、別にそれで良いのでは？　こっちで舞台は用意します。でも、客の心に残るかどうかは本人の努力次第。どちらにも魅せる演出は用意しますから後は自分で頑張って貰うしかありません」

これには柴田だけでなくりせや両陣営のマネージャーも驚いた顔を見せる。仮にも会社としてイベントを開催しようというのに、失敗したなら失敗したで構わないと言ってのけたのだ。

湊側で出来ることは全てする。レッスンの場所やトレーナーも用意し、万全の態勢でサポートもプロデュースも行なう。

しかし、最終的には本人のやる気次第。このチャンスに挑戦するかどうかもすべて本人の意思に任せる。

簡単にそう言ってみせた湊を驚いた顔で見ていたりせは、持ち前の負けず嫌いが言い方向に働きすぐにやる気に満ちた瞳になると、マネージャーが口を挟むより先に湊と柴田の両者を見つめて口を開いた。

「やります。やらせてください」

「本当にいいの？　私、かなりスパルタっていうか付いてこれない子は置いていくタイプだよ？」

「レッスン中は絶対に足を引っ張ると思います。でも、本番にはしっかり並んで横に立ちます。立ってみせます。だから、どうかよろしくお願いします」

トップアイドルと駆け出しの新人。両者の間には絶対的な差があり、それは実力だけでなくプロとしての意識の問題もある。

だが、いくら実力が足りないとしても、やる以上は他の人間を納得させるだけの結果を出さなければならない。

例え知り合いが勝手に送ったオーディションが切っ掛けでアイドルになったのだとしても、やるからにはトップアイドルを目指すと決めたのだ。

これだけ用意されていて、さらに本物のトップアイドルと同じステージに立てる。なら、偶然落ちてきたこんなチャンスを前に逃げたくないとりせは参加を表明した。

そんな一瞬の決断で表情の変わった少女を見た二人は、今の彼女なら挑戦する価値はあると心の中で彼女を評価するのだった。

＊＊＊

りせと柴田が共に参加すると決めた事で、詳しい契約内容等を事務所に伝えなければならないとマネージャーたちとりせは帰って行った。

だが、この後はもう仕事もないからと柴田だけは残り、自分ももう帰るだけだからと言った湊と共にＥＰ社近くのレストランに来て仕事の話をしがてら夕食を一緒にすることになった。

もっとも、仕事のことよりも話題は専ら僅かな間でプロの顔も見せたりせの事だ。

「久慈川さん、素直で良い子だね。あんな子にどブスなんて言ったら可哀想だよ」
「ショッピングモールの中で大声で喚いてたんですよ。マネージャーもろくに諌められてなかったので、今も俺の中じゃ我が儘な子どもってイメージです」
スプーンとフォークを使って少量のパスタを巻きながら柴田が苦笑すれば、真っ赤になるほどピザにタバスコを振った青年はそれを食べながらイメージは今も変わらないと返す。
確かに話してみれば中学生らしい生意気さもあったが、あの勝ち気な性格は業界で上を目指そうとするなら必要なものだと柴田は思ったものだが、残念ながら湊は素人でありイベントにもプロデューサーとして参加するだけだ。
なら、これ以上は言っても無駄かなと彼女もタバスコたっぷりのピザを平然と食べながらイベントについて思いを馳せる。
「でも、フェスかぁ……フフッ、楽しみだなぁ。お客さんとの距離も近いし皆の顔が見れそう」
「普通、こういったイベントのときは半年前からスケジュールを押さえるものだと思っていました。よく急でも入れれましたね」
「ああ、私はセルフプロデュース組だからね。ある程度は本人の感覚で仕事取ってきたりもあるんだ。マネージャーさんもメインは事務所への報告が仕事だし。結構自由だよ」
聞いた湊はそれで彼女のマネージャーはほとんど話に入ってこなかったのかと納得する。
りせの方は井上が主に仕事を取ってきて、売り出す方針も事務所と一緒に決めているようだが、トップアイドルクラスになると仕事も勝手にくるらしいので、後は今後の活動方針に沿う形で選んでいけば良いのだとか。
よって、今回の打診も楽しそうだしＯＫと簡単に決めた訳だが、彼女としては副産物して貰える仕事も参加決定の決め手だと答えた。
「てか、おかげでＣＭとかの仕事も貰えるしね。女優転向前にコスメのＣＭ貰えたのは本当にラッキーだよ」

「代わりに久慈川にはペットボトルの紅茶のＣＭを渡しました。イベントまでに久慈川には知名度を上げて貰う必要がありますからね。下地作りの一環です」
「私はコスメのＣＭと新曲二つ、久慈川さんは紅茶のＣＭと新曲三つだよね。持ち歌が足りないとはいえ強行軍過ぎてちょっと可哀想」
ストローで冷たい紅茶を飲みながら柴田はスケジュール大丈夫かなとりせを心配する。
柴田の方はこれまで出した曲があるので大丈夫だが、りせは駆け出しなせいでまだ一曲しか持っていなかった。
これではカバー曲を歌うにしても限界がすぐに来るので、ソロで新曲を三つ、さらに柴田とのデュエットで一曲歌うことが決まっている。
デュエット曲はフェスで初披露なので時間もあるが、ソロ曲は七月に入って隔週でリリース予定だ。間にはＣＭや雑誌のグラビア撮影まで入ってくるので、彼女のスケジュール帳は一気に書き込みが増えたことになる。
ほぼ同じ条件で新曲やフェスに向けてのレッスンが控える柴田も忙しいはずだが、仕事の流れを既に理解している彼女にすれば自分の分は問題なくこなせるらしい。
そして、既に用意してあったデモテープと歌詞カードを見ながら、楽しそうにしていた柴田は悪戯っぽい表情で湊の事を呼んだ。
「ねえ、プロデューサー」
「……別に最初から奢るつもりでしたよ」
「あ、そういうのじゃないよ。ていうか、年下なのに生意気だよ？」
急に役職名で呼ばれた湊は奢ってくれと言う催促だと受け取った。
けれど、柴田もトップアイドルなのでお金には余裕がある。何より自分がそういうのを武器にして奢って貰おうとする女だと思われるのは嫌だったのか伝票を取った。
「ふふーん、ここではお姉さんな私が払っちゃうもんね」
「……俺の年収は百億を超えてますよ」
「……有里君、足下が暗くてもお札は燃やしちゃダメだよ？」

いくらトップアイドルでも年収百億には届かない。何よりお飾りの社長と言っておきながら、ただの学生がそんなに稼いでいると思っていなかったため、柴田は相手も普通の世界の住人じゃなかったと軽いショックを受けたようだ。

だが、考えてみれば分かることなのだ。りせとの騒動から今日までに二人にソロ曲をとりあえず一曲は用意していたが、こんな短期間でプロに作詞作曲などして貰えるはずがない。

ならばどうやって用意したのかというと、イメージに合う未発表曲を持っている者に売ってくれと頼みに行ったのである。

まぁ、相手もプロなので簡単にはいかなかったが、最終的には金とおはなし（暗示）で解決出来た。それを全て金の力だと話す青年に柴田は遠い目をするが、その間に柴田の手から伝票を取った彼は最後にコーラを飲んでから席を立つ。

「まぁ、久慈川の方はスパルタでいいです。あれは限界にぶち当たるレベルにも達してないので」

「流石に駆け出しでぶつかられても困るけどね。でも、あのマネージャーさんもいい新人を発掘したね。彼女、伸びると思うよ」

「それはどういった根拠に基づいての意見ですか？」

「フフッ、トップアイドルの勘かな」

会計を終えて外に出た二人は並んで駐車場まで向かいながら話す。

トップアイドルまで登り詰めた者として見ればりせは中々に見込みがあるらしく、その彼女を見つけたというマネージャーの目も確かなのだとか。

湊としてはその辺りはよく分からないが、身長差が三十センチ以上ある男に対して正面から物申す事が出来る度胸は大したものである。

そういった肝の据わり具合が見込みに繋がるのだろうかと考えてる間に、二人はここまでやってきたバイクの許に到着した事で、青年が横に掛けていたヘルメットを外して柴田に渡した。

「途中までででも送るんで乗ってください」

「きゃー、送り狼に食べられちゃうー」

「……なるほど、群馬の山奥にでも置いてきましょうかね」

「あ、杉並区でお願いします」
湊が相手だと冗談が通じない可能性がある。なので、本当に山奥に連れて行かれることを危惧した柴田は、受け取ったヘルメットを被りながら真面目に答えた。
そんな相手の態度にフッと息を吐いた湊もヘルメットを被るとバイクに跨がる。
彼の準備が出来たことで柴田も後ろに乗り、どこに手を置こうか悩んだ末に行きと同じように抱きつく形で腰に腕を回した。
「いいよー」
「じゃあ、行きます」
同乗者の準備も出来たのなら早速駐車場を出る。交通量の多い時間帯なので進みは遅いかもしれないが、まだ夏前ということもあり夜でも気温は大丈夫だ。
混んでいない川沿いの地道を行くなど軽い夜のツーリングを楽しみながら、湊は柴田をマンションまで送ってから帰っていった。
そして数日後、レストランから出てきて一緒にバイクに乗るところが撮られた写真と共に、とあるスポーツ新聞の一面に二人の熱愛報道記事が載った。

第二百二十一話　戦いと日常の影響

影時間――深層モナド

上層フロアよりも強力なシャドウらが跋扈している深層モナド。

その地下五階までやってきていたラビリスたちは、フロアの中央にある大部屋で一体の敵との戦闘に移っていた。

クナイを咥えたまま赤い瞳を敵に向けて部屋の中を駆け回るコロマル。

それを叩き潰すように大樹のような太さの黒い触手が頭上から振り下ろされ、元いた場所の床を叩き割っていくがコロマルは最高速を維持して捉えられるのを防いでいた。

「アリアドネ、ストリングアーツ〝剣〟!!」

コロマルが必死に敵の攻撃から逃げていると、これ以上はさせないとばかりに巨大な戦斧をウィングモードにして背負ったラビリスが推進器で加速して追いつき、再び振り下ろされようとしていた触手を剣型にした赤い糸で半ばから切り落とした

切断された先端側は床に落ちると霧散して消滅する。しかし、それで安心は出来なかった。

何故なら、切断したはずの部位が切断面から再び生えてきて復活したから。

それを見たラビリスは空中で姿勢制御しながら舌打ちをするが、悠長にその場に留まることなど出来るはずもなく、完全に復活した触手は狙いをラビリスに変えて再び動き出した。

ラビリスは正面から叩き潰そうと迫ってくる触手を視認した瞬間、最大速で真後ろに飛んで壁に到達する。

「っ、でりゃー!!」

そして、そのまま壁に辿り着くと最後は慣性に任せながら外した戦斧を手に持ち、三角跳びの要領で壁を蹴って飛び出すと触手に向け全力で戦斧を振り下ろした。

刃が触れる瞬間にはガキンッと硬い物に当たった感触が手に伝わってくる。

けれど、現在の彼女は生身でありながら戦闘時には機械のときとほぼ同じ出力を出せる。
その理由は湊が拘り抜いた彼女の人工骨格が力を生み、そして反動を吸収して肉体へのダメージを最小限に抑えるからだ。
おかげで彼女は日常生活でのリミッター制御ではなく、戦闘時の出力の上昇という形で活動を行えている。
そんな彼女が戦斧で唐竹割りを繰り出せば、触手は容易く真っ二つに裂けていった。
「チドリちゃん！」
触手を半ばまで切り裂き着地したラビリスは、今度は切り上げで触手を再び短くしながら仲間に呼びかけた。
敵を挟んで反対側にいたその相手は意識を集中しながら召喚器を額にあて、カッと目を開くと静かに呟く。
「お願いメーディア……マハラギオン！」
引き金を引いた少女の頭上に羊の頭部を持った女性型ペルソナが現われる。
手に持った金色の杯に灯った炎が激しく燃え上がり、そのまま複数の炎弾になって部屋の中央にいる異形の敵に次々と着弾する。
全身を覆う黒い影、狐のような造形をした頭部、二メートルを越す巨大な両腕、そして先ほどからコロマルやラビリスを襲っていた触手の正体は、敵の腰辺りから生えている尻尾だ。
現在は一本しか生えていないが、敵の頭部は狐のような造形をしている。身の丈以上に大きな腕のせいで狐だとは断定出来ないのだが、もしも敵が狐だとすると最悪のパターンを想定しなければならない。そう、敵が大妖九尾を模した姿に変化するという事を。
「ダメ、攻撃が通らない！」
百を超える炎弾を敵に叩き込んだチドリが叫ぶ。
全ての攻撃はしっかりと当たっているのだ。だが、敵はそれらを避けも防ぎもしない。
理由はすぐに判明したがどうやら炎に対して耐性を持っているようで、メーディアの攻撃では敵を覆っている影を剥がすことも出来な

かった。
　これでは敵にチドリを認識させただけで奇襲を掛けるのも難しくなっただけである。
　炎での攻撃が通らないと判断したチドリはメーディアを消し、すぐにその場を離れるように駆け出す。
　すると、ラビリスに切られた尻尾が再生するのと同時に、敵の腰辺りから新たな尻尾が生えてきてチドリが元いた場所に真っ直ぐ伸びると壁に穴を開けた。
　一本目の尾は鈍器として使っていたというのに、二本目は先端が鋭くなっていて貫通力に特化しているらしい。
「あんなの当たっただけで死ぬじゃない……」
　判断が遅れていればお腹の風通しがよくなっていたところだ。思わず冷や汗が流れるも敵と一定の距離を開けているチドリに焦りはない。
　それは他のメンバーにも同じことが言え、ラビリスが一本目の尾の相手をしてくれたおかげで逃げられたコロマルも既に息を整えている。
　もっとも、現状で有効な攻撃がラビリスとアリアドネの斬撃しかない以上、そこを突かれてしまえば攻撃手段を失ったチドリらに勝ち目はない。
　どうやって現状を打破するか考えながら二人と一匹が敵との距離を保っていると、突如敵が天井の方へ向いて吠えた。
《ガァァァァァァァァァッ!!》
　敵の雄叫びによって大気が振動する。あまりの音量に不意打ちを喰らったチドリたちは一瞬くらっとするが、全身がビリビリと震えていたおかげでその場に縫い付けられる形になり転倒は免れる。
　しかし、全員がそれで足を止めてしまった事に変わりは無く、今までに地面についていた両腕を上げると敵は床を砕くほどの踏み込みで駆け出した。
　姿がぶれたように見えるほどの加速。自分へと迫っている敵を見ていたラビリスにすれば、一歩ごとに空間移動しているようにすら感

じられた。
《ガァァァァッ！》
数メートル先の床を踏み砕いた敵が目の前に現われる。右腕を高々と上げ、ラビリスも人を超えた反応速度でそちら側に戦斧を構えるが、横薙ぎに振るわれた敵の巨腕は戦斧の防御ごとラビリスを殴り飛ばした。
ガードの上から殴られたラビリスは、そのまま武器を手放して地面を転がり動かなくなる。
たったの一撃。
ラビリスは生身でも機械のときと同じだけの働きが出来るように作られている。それは当然耐久力にも反映されているのだが、そのラビリスをして一撃で仕留められてしまう攻撃に、チドリは嫌な汗が背中を濡らすのを感じた。
次は自分かコロマルか。そう考えながら斧を腰のベルトに付けたストラップに下げ、同じベルトに差していた刀に切り替える。
刀を使った戦闘という意味では湊に軍配が上がるけれど、チドリはその飲み込みの速さで鵜飼から教わった剣術を完璧に習得している。
咄嗟の攻撃ならそれぞれの手に持った手斧よりも両手で掴んだ刀の方がいなしやすい。
そのような判断で武器を持ち替えたチドリだったが、ラビリスを倒し終えた敵は右肩を引いて向きを変えると、床に両腕をついて口元にエネルギーを集め始めた。
（何よそれっ）
収束するエネルギーを見た瞬間にチドリはそれが危険だと理解していた。
開放されたときエネルギー弾のまま飛ぶのか、それともレーザーのように光線として撃たれるのか分からない。
しかし、集まっているエネルギーの量がチドリの想定を遙かに超えているのだ。
（これなら刈り取る者の方がマシじゃない！）
刈り取る者もメギドラオンを撃ってくるが、あちらの収束させるエ

ネルギーは辺り一面を焼き払う程度。
対して、狐顔の攻撃はフロア全てを焼き払うのではないかという桁違いの熱量を感じた。
自分に向かってそんな物が撃たれると分かってチドリは射線から逃れようと走るが、もしも、その攻撃が放射型で津波のように押し寄せるのならチドリに逃げ場はない。
少しの間ならペルソナに掴まって上空に逃げられるけれど、敵が少しでも上を向けば終わりだ。
収束しているエネルギーの色は全てを塗り潰すような黒。たまに赤い揺らめきのようなものが見えているため、以前、湊のタナトスと無の銃を融合させた特殊武器〝ウィオラケウス〟と同じ虚無属性の攻撃だと思われる。
であるならば相殺だけでなく防御すら不可能だろう。虚無属性はあくまで湊が便宜上名付けただけで正式な分類がある訳ではない。
しかし、その性質は万能属性に近く、相殺以外の方法では防御出来ないだけでなく、生命力の対となる死の力であるため生物やシャドウには余計にダメージが入るようになっているのだ。
敵がシャドウであっても確実に弱点を突くことの出来る攻撃が、今まさに馬鹿みたいな出力で放たれようとしている。
流石のチドリもこれは終わったかもしれないと死を覚悟した。
「アオーンッ!!」
だがそんなとき、敵を挟んで反対側にいたコロマルが遠吠えしながらペルソナを呼び出した。
彼はチドリと同じ炎や呪殺の使い手だが、攻撃の効かない敵に対して何をしようというのか疑問が湧く。
もっとも、必死に攻撃の射線から逃げようとしているチドリに冷静に考える余裕はない。よって、助けてくれるなら急いでくれと心の中で祈っていれば、コロマルのペルソナ・ケルベロスが尻尾から炎を噴射し弧を描くように駆けて狐顔の真横からタックルを仕掛けた。
スキルを加速に用いるなど器用な使い方だと褒めたいところだけれど、残念ながらチドリとしては敵が転けたときに収束したエネル

ギーが解き放たれるのではと怖くて仕方がない。
心配する少女が走りながら横目で見る中、タックルを喰らった敵はほんの僅かに体勢を崩しかけるも床についていた両腕で踏ん張り耐えきった。
耐えきった敵はそのままコロマルに一切構うことなくエネルギーの収束を続け、これで終わりかと思えば、敵が体勢を崩しきっていないと分かったコロマルが追加で指示を送り、三つあるケルベロスの右頭部が下から抉り込むように敵の喉笛に噛み付く。
《グオオオオオオオオオオオオオオ――――――ッ!!》
攻撃の発射台たる頭部に直接攻撃を喰らった敵は思わず天井へ向く。
その際、溜めていたエネルギーも天井に向かって放たれるが、大部屋の天井を貫きそのまま複数のフロアをぶち抜いてしまっていた。
どこまで貫通したのか、また外への影響はないのかなど心配な点はいくつもある。ただ、コロマルの機転により直近の危機は去り、部屋全体を攻撃の余波である熱気が包むも迫る死を回避した事でチドリもコロマルも思わず緊張の糸を弛めてしまった。
《ガァァァァァッ!!》
攻撃を邪魔された敵がその隙を見逃すはずもなく、吠えながら首を振って喉笛に噛み付いていたケルベロスを投げ飛ばすと、そのまま三本目の尾を生やし鋭く尖らせたそれで貫いた。
胴体を完全に貫通されたことで具現化を維持出来なくなったケルベロスは消え、ペルソナの受けたダメージの一部が召喚者にフィードバックされる。
「きゃうんっ」
通常のシャドウとの戦闘で還ってくるダメージよりも遙かに重いダメージがフィードバックされ、驚いたコロマルは声を上げながら苦しそうに俯く。
どんなに痛みに慣れている者だろうと痛覚があれば不意打ちの痛みに反応するのはしょうがない。
ただ、運が悪いことにコロマルが現在身を置いているのは戦場だっ

た。
「ダメ、避けなさい！」
遠くにいたことで見えていたチドリが呼びかけるように叫ぶ。
その声で気付いたコロマルがハッとして顔を上げれば、敵がその場で回転して横薙ぎに振るった尻尾が目の前に迫っていた。
ペルソナを召喚しても既に間に合う距離にはなく、気付いたのが遅かったことで逃げることも出来ない。
ならば、攻撃を受ける瞬間に自分から飛んで攻撃を逃がそうとコロマルは考えた。
その犬らしからぬ発想は湊から戦闘訓練をみっちり受けていたからこその考えだが、振るわれる途中で巨大化した尻尾を相手にそれを成功させるのは非常に困難だった。
「――――っ」
大型トラックに激突された並みの衝撃を受けたコロマルの身体は、蹴られたサッカーボールのように簡単に飛んでいき背中から壁に衝突する。
ぶつかった瞬間に壁には血液が付着し、内臓や骨にダメージがいったのかコロマルは血の泡を吹いて地面に落下した。
そんな一連の光景を眺めている事しか出来なかったチドリは、理不尽な強さの敵と己の弱さに対する苛立ちで食いしばった奥歯をギリリと鳴らす。
遠目から見ても一目で無事ではない事が分かる。ラビリスも一撃でやられ地面を転がり、頑張ったコロマルも壁に衝突して重傷を負った。
チドリは追い込まれている状況の中でも、今は離れた場所にいる敵を一人でどうにか出来る訳がないと分かっている。ただ、せめて二人を回収して撤退出来ないかと思考を巡らせているのだ。
（それぞれの尾の性質が変化しないのかどうかが知りたい。鈍器がそのままなら良いけど、三本共が貫く形状になったら厄介過ぎる）
運が悪いことに敵の尾は三本まで増えてしまった。二本目と三本目は同じ性質のようだが、それだけに別々の方向から来れば動きを制

限され、残った一本目の尾まで同じ性質に変化すれば追い込まれ貫かれる未来しか見えない。
だが、もしも一本目がそのまま鈍器でいてくれるのなら足場に利用出来る可能性があった。
尻尾同士はお互いを傷つけないはずなので、鈍器を足場に一気に敵へと近付いてコロマルがやったように喉笛に刀を突き立てられるだろう。
現状判明しているチドリやコロマルでもダメージを与えられる箇所。そこに最大の一撃を決めて時間を作るというのが撤退までの流れだ。
もっとも、作戦を考えたチドリ自身かなり自分の理想が入ってしまっている事を自覚している。
攻撃が当たるからと言って尻尾に触れて無事かは不明だし、喉笛に刀を突き立てても効かない事も考えられる。
何より自分とほぼ同じ体型のラビリスはペルソナで運ぶにしても、重傷のコロマルを抱えて全力疾走して敵から逃げ切れるとは到底思えなかった。
それでもチドリが作戦を実行に移そうと思ったのは、単純に怪我を負った仲間の命が心配だったからだ。
このまま放置すれば死んでしまう。一刻も早く治療出来る場所に連れていって治療して貰わなければと急かす内なる声に一人頷いて返したチドリは、刀を持つ手に力を籠めると敵に向かって一気に駆け出した。
チドリに動きがあったことで敵も反応し、左右から二本目と三本目の尻尾を伸ばす。
そこまでは想定内だったチドリは前進することを止めずに、自分に迫ってきた貫く尻尾を刀で逸らして対処した。
敵までの距離はおよそ二十メートル、もし相手が鈍器の一本目を使うのならこの辺りしかない。
そう考えながら最後の一本が来ることを願っていたチドリは、敵がパンチを繰り出すような右腕を引くモーションに移っていたことに

驚愕し、腕も尻尾のように変幻自在だったという最悪の可能性に気付いた。
二本目と三本目の尻尾はチドリを己の正面に迎え入れる罠。まんまと誘い込めば最後は変化させた腕で料理してやればいい。
そんな敵の考えが理解出来る状況に置かれたチドリは、敵の右腕が馬上槍のような形状に変化するのを見ると、それに対処すれば生き残れるはずと最後まで諦める気は一切なかった。
「――――え？」
もっとも、それはチドリが勝手にそう思っているだけで戦況は刻一刻と変化するものだ。
そのまま馬上槍に対処して攻撃をしかけようと思っていたチドリに向かって、今まで足を止めていた相手が一気に駆け出し目の前に現われた。
化け物の脚力を持ってすれば可能な動きだが、あと少し間合いがあると思っていたチドリにすれば不意を突かれた形だ。
既に腕を引いていた敵はただ右手を突き出すだけでいい。対してチドリは間合いを再度計測し直して、迫り来る馬上槍を絶妙な角度で逸らさなければならなかった。
そんな達人技を不意打ちによって冷静さを欠いた状態で出来るはずもなく、チドリが反応しきる前に敵の馬上槍が少女の胸を貫こうとした
《そこまでじゃ！》
とき、チドリのさらに後方から女性の声が響き、チドリと敵との間に一振りの刀が割り込んだ。
勢いのついた攻撃を飛んできた刀が受けきった事に驚いている間もなく、チドリは浮遊感を感じると次の瞬間には後方に投げ飛ばされ地面を転がる。
突然の荒っぽい扱いで感じた痛みに思わず怒りを覚えるが、チドリを掴んで後ろに投げ飛ばした本人は、飛ばした刀とは別の刀を二振り出すと両手に持って馬上槍を切り刻み、敵が後退しようとすれば最初に飛ばした刀を足で投げて喉笛に突き刺した。

弱い部分に攻撃を喰らった敵は怯んで動きを鈍らせ、その隙を見逃さなかった女性は敵の懐まで入り込むと右手切り上げでアッパー気味に頭部を切り裂き、左手の刀を横に振るって右足を切りつける。
頭部と足に同時にダメージを喰らった敵はバランスを崩し倒れそうになるも、女性はまだ倒れる事は許さないとばかりに喉に刺さっていた刀の柄尻に膝蹴りを入れて転倒を防いだ。
《ほれ、さっさと畜生との繋がりを切らんとお主が死ぬぞ》
女性は敵の正体が最初から分かっているような口調で語りかけ、倒れる事が許されなかった敵の左脇腹を切りつける。
他の者が頑張っても中々傷つけられなかった全身を覆う影は容易く切り裂かれ、敵が呻き声と共に切られた部位から血を流せば、全身を覆っていた影が霧散して中から青年が現われた。
その瞳は本来白い部分が漆黒に染まり明らかに普通ではない。だが、霧散していった影が一つの塊になると徐々に形状が変化したので、影の正体が青年に憑依していたのだと分かった。
変化した影は最終的に金色の髪に豪華絢爛な赤い着物を纏った女性になる。
戦いに乱入した女性は赤い着物の女性を睨んでいるが、湊の瞳が通常の状態に戻ると青年が赫夜を呼び出してコロマルとラビリスに治療を施したことで会話が始まる。
《ほれ見ろ八雲。このような下劣な畜生に肉体を貸すから小娘共が死にかけるのじゃ》
《人のせいにしないでくださいますぅ？　これでも大分手加減してましたし、悪いのは弱すぎる相手の方ですよ》
チドリたちを殺しかけたと指摘された玉藻の前は、悪びれた様子もなく全てチドリたち側の弱さが原因であると反論する。
これまで行なわれていた戦闘の真相だが、それは玉藻の前に肉体の支配権を与えた湊を相手にどこまで戦えるかという実戦トレーニングだった。
シンクロ率を上げて完全にペルソナ化してしまえる湊だからこそ、憑依という自我持ちのペルソナに逆に肉体を貸し与える事が可能な

のだが、自我持ちは個体によって湊以外の人間に対するスタンスが異なっている。
だからこそ、死んでもそれは弱いのが悪いという考えの玉藻の前では、本気で死にかける事態に発展する超スパルタになってしまったのだ。
《莫迦か。あの犬であっても殺していれば貴様は八雲の怒りに触れ、その小汚い魂ごと破壊されておったわ》
《あんな無謀な攻め方する方が悪いでしょ。私は言われた通りにほぼ死ぬくらいまでなら自由ってのを実践しただけですし》
口では色々言いつつも基本的には面倒見のいい鈴鹿御前が怒っても、湊自身が最初に許可を出していたからと玉藻の前はハンと鼻で笑って聞く耳を持たない。
まぁ、彼女の主は湊なのでそれ以外の者の言うことは聞く必要も無いのだが、訓練とは受ける側にも教官を選ぶ権利があった。
蛇神の影である黒い腕を伸ばして気を失っているコロマルとラビリスを回収していた湊に近付き、チドリは普段からやる気のない目を向けると率直な感想を告げる。
「湊、こいつ嫌。こんな訓練じゃ強くなる前に死ぬ」
「……そうか。そういうギリギリの感覚が実戦だと重要になってくるんだが、まだそういう段階にないなら他のやつにしよう」
四体の大型シャドウが倒れたことで敵も強くなってきている。
だからこそ、湊はより安全が確保された状態で強敵と戦えるように実戦訓練を考案したのだが、残念ながら裏社会流の鍛え方は一般人に合わないようだった。
自分も似たような実際の殺し合いの中で強くなってきた青年は、ならば次の教官役は誰にすべきか真剣に考え込みながら、再び少女たちの想像の斜め上をいく鍛錬を思い付くのだった。

６月１８日（木）
昼――職員室
昼休み、それは午前中の授業で疲れた脳に休憩と食事で栄養を与え

回復させる時間である。
　もっとも、昼休みに食事をするのは生徒だけではない。中には生徒と同じように食堂に向かう者もいるが、職員室では教師たちが弁当やパンなどそれぞれが自由に食事を取っていた。
《えー、お二人は以前年末特番のバラエティ番組に共演した事が切っ掛けで知り合っており、その際に連絡先を交換して親密になっていったのだと思われています》
《私もそれ見ましたよ。皇子がサーヤちゃんをお姫様抱っこして助けていたんですけど、本当に格好良くってドキドキしました》
　ただ、点けられているテレビで流れている昼のワイドショーを見ると、それを見ていた教師たちは揃って溜息を吐く。
　普段は別にテレビなど点けてないのだが、今は学校の方にもテレビ局や雑誌記者などマスコミ関係者がやってくるため、生徒たちが外でインタビューを受けていないかという確認のためにも見ておかなければならないのだ。
　男性アナウンサーとコメンターとして出演している演歌歌手の女性が話すのを聞いていた鳥海は、近くの机でモシャモシャとバケットで作ったサンドウィッチを食べている教師の方を向くと、お弁当のトマトを口に運びつつ厭みをたれる。
「そっちのクラスは楽しそうで良いですね。話題にも事欠かないし」
「あれは嘘って有里君は言ってました。だから何も悪くないです」
　言われた佐久間も実際は熱愛報道でダメージを受けているようだが、湊は本当に付き合っているなら隠さずに認めるタイプだ。
　故に、彼がそんな事実はないと言った以上は信用していい。
　彼のことをよく知っている佐久間や櫛名田、さらに去年の担任だった英語の寺内なども理解しているようだが、残念なことに他の教師たちは半信半疑という者が多いようだ。
　七歌やゆかりのクラス担任である鳥海は、どちらかというと他人の恋愛などどうでもいいという立場ではある。
　ただ、一時期の皇子ブームのように学校周辺にマスコミやファンが集まり、さらに湊関連用の専用ダイヤルだけでなく学校の方にも取材

の申し込みやファンからの嫌がらせの電話が掛かってきていたため、もう少し彼に大人しく過ごすよう言えないのかという意味で新担任の佐久間に言ったのだ。
「まぁ、恋愛なんて個人の問題だから、アイドルだろうとお姫様だろうと自由に付き合えばいいと思いますけど、有里君にはもう少し自分の立場を自覚するよう言ってください」
「有里君は一般人ですよ。他の子と同じように過ごして良いと思います」
「本人の認識と周囲の反応は別です。これが他の男子生徒なら一般の男子学生としか報道されなかったでしょうけど、彼は既に業界人として扱われているから大事になってるんですよ」
　本人がなんと言おうと既に一般人とは認識されなくなっている。今回の熱愛報道がその証拠だと鳥海が言えば、コーヒーを飲んでいた佐久間はニッコリと百パーセント作られた笑みを浮かべて返した。
「いやぁ、有里君は残念ながら〝有名な一般人〟なんですよ。運動部の活動も既にしていない以上は、写真を撮られたりするのは普通に肖像権やらパブリシティ権の侵害ですし。今みたいに学校の周りを囲んで他の生徒の学校生活にも影響が出てる点については軽犯罪扱いです」
「大会のインタビュー以外でテレビに出てる以上は一般人じゃ通用しないでしょ。まぁ、他の生徒の学校生活に影響が出てる方はそうかもだけど」
　佐久間の認識としてはマスコミが騒ぎすぎているのが問題であって、湊自身の対応に落ち度はないと思っている。
　アイドルと付き合っているなどという事実はなく、本人が否定し続けても嘘と決めつけて騒いでいるのもマスコミだ。
　なら、ここは自分たちがすべきなのは、教師としてしっかり生徒を守ってやる事だと佐久間は語る。
「鳥海先生も有里君のクラス担任になりたがってたんですし、今はマスコミに対応に追われて大変でも生徒を守ってあげましょうよ」
「うーん。まぁ、そうなんだけどね。生徒たちも同じ話題で騒いでる

し、実際のところ彼が大きく動かないと火消しは無理だと思うわよ」
珍しく真面目な佐久間の言葉に同意しつつも、鳥海は事態はそう簡単には終わらないと捉えていた。
騒いでいるのは何もマスコミだけではない。一般消費者、もっと身近で言えば生徒や保護者も彼のことを知りたがっている。
統率が取れていた『プリンス・ミナト』ですら内部分裂を起こしかけている以上、本当に大変なことが起きる前に湊自身の手で何かしらの対応を取る必要が出るのも当然だった。
彼に余計なことをさせたくない佐久間はその案に当然渋い顔をするけれど、頭が良いだけあって効率や効果の面で見て鳥海の意見の正当性は理解している。
学校側もいつまでもマスコミやファンからの攻撃が続くようなら対応を考える必要が出てくるため、それなら仲の良い佐久間の方から青年に何か行動を起こす予定はあるかと尋ねた方がいいかもしれない。
鳥海との会話でそこまで考えた佐久間は、残っていたパンとコーヒーを一気に食して片付けると、自分から湊に少し話をしてみますと言って職員室を出て行った。

第二百二十二話　計画通り

昼休み――2年廊下

職員室を出た佐久間は購買部で飲み物だけを買うと2―Eの教室の方までやってきた。

今回の騒動に関して青年がどのように動くのかを聞いておくためではあるが、佐久間としては放っておけば勝手に青年が解決するのではとも思っている。

最初に熱愛記事を掲載したのはスポーツ新聞大手の〝帝都スポーツ〟。ここの新聞の話は半分くらい冗談として聞いておけというのが読者の常識だ。

けれど、今回はこれまでスキャンダルのなかったトップアイドルと多方面から注目を集めている青年というビッグカップルの話題であったことで、世間も大きく食いついてここまでの騒ぎになっている。

今回の騒動に関して教師は半数が信じて、半数がまた誤解されたんだろうなと思っている。

信じているのは男性に多く、誤解されたと思っているのは女性が多いのは彼の日頃の行い故だろうか。

何にせよ彼から改めて詳しい話を聞いてから今後の対応についても尋ねる。それが今すべきことだと思って佐久間が教室の前までやって来ると、目的の青年が廊下に出てきて後輩らしい女生徒三名と話をしていた。

「先輩、その……私……先輩とサーヤちゃんの事は応援します。でも、踏ん切りが着くまで先輩のことは好きなままでいても良いですか？」

そう言って先頭にいるボブカットの女生徒はポロポロと涙を溢しながら彼を見上げている。

後ろにいる二人はただの付き添いのようだが、好きな人の幸せを願って身を引こうとしている〝良い女〟な友人の雄姿を見届け、全てが終わってから支えてやろうと思っているに違いない。

これが昼休みでなければ素晴らしい友情だと思えるのだが、残念な

がら場所が教室の前という事もあって大勢から見られており、これでは答え方によって青年に悪い評判がついて回りそうですらある。
自分も彼に構って貰おうと普段から色々画策しているだけに、傍目から見ると彼も随分と苦労しているんだなと思ったりもしたが、黙って話を聞いていた青年はポケットに手を入れるとブランド物のハンカチを取り出し、それで正面に立つ少女の涙を優しく拭きながら答えた。
「……君の心遣いは嬉しい。だが、熱愛報道はデマだ。俺は誰とも付き合っていないし、しばらくは忙しいので恋人を作る予定もない。なので応える事は出来ないが君の心は君の自由にするといい」
言い終わると青年はハンカチを女生徒に渡してあやすようにポンポンと頭に手を置いた。
ハンカチは返さなくていいとも言っており、思わぬプレゼントを貰った女生徒は噂がデマだったことに対する嬉しさもあって再び涙を流している。
彼のそんな優しく紳士的な対応と少女の反応を見ていた野次馬の中には、自分もそんな風にされたいと羨ましそうな顔をしている者もいた。
だが、自ら行動を起こすほどの勇気はないのだろう。嬉し涙を流しながら友人らに支えられて自分たちのクラスに帰って行く少女をみて、大勢の女子がよく頑張ったねと温かい眼差しを向けていたことを佐久間は見逃さなかった。
「モテモテだね、有里君」
去って行った子と比べ二年生は随分とチキンな少女が多いのだなと思いつつ、佐久間は手を挙げて挨拶しながら青年に近付く。
相手は告白まがいの事をされている時点で佐久間の来訪に気づいていたようだが、勇気を振り絞った少女の告白中にわざわざ話を遮ってまで来訪者への応対をするはずもない。
そうして、いつからか再び濁るようになってしまった感情の読めない金色の瞳を向け、青年は一切の遊びがない言葉で佐久間を迎えた。
「……用件は？」

「おっと、人との交流には無駄に思えがちな雑談も必要なんだよ？」
これでは中等部一年生の頃に戻ったようだ。随分と人間らしさを取り戻したと思っていたのに、彼は二年生になったばかりの頃に現在の状態になっていた。
他者を寄せ付けない空気、目の前の人間に一切の関心を示していない冷たい瞳、それでいて人助けだけは現在も続けている。
在り方そのものが酷く歪で、佐久間としてもどういった人生を歩んでくればこうなるのか知りたいくらいであった。
とはいえ、それはそれとして彼女も今日は用件があってここへ来ている。昼休みの時間も有限であるため、重要なことだけは聞いておかねばと仕切り直して用件を切り出した。
「ま、いいけどさ。用件は例の熱愛報道に関してでね。学校側として改めて真偽を尋ねつつ、今後動く予定があるならそれも聞いておこうと思って」
「……俺と柴田さんは付き合ってない。あれは仕事の後に時間があったから夕食を一緒に食べただけだ」
「だよね、だよね。あ、一応私はそれを聞いてたから、噂が少しでも逸れればと思って別の情報を流したりもしてたんだよ」
湊の話が広まらないよう頑張ったんだよと胸を張る佐久間。けれど、青年としては彼女が代わりに流した別の情報に対して不安しかないらしく、僅かに呆れた空気を纏いながら聞き返す。
「別の情報とは？」
「ふふーん。それはねぇ……二人が年末特番の撮影後に付き合うことになったから、当時付き合っていた彼女と別れたって話だよ！」
聞かれた佐久間は腰に手を当て豊満な胸を張るように背を僅かに反らすと、ババンッ、と効果音を付けたくなるほど自信満々に告げた。
時系列で言えば年末特番の撮影、当時付き合っていた彼女と破局、年末特番の放送、となるので撮影後に付き合うことになったなら話としては通る。
むしろ、それがあって別れてから年末特番で二人がお姫様抱っこしているシーンを見て、別れることになった彼女はどう思ったのかと同

情してしまいたくなるだろう。
よって、学内で言えば別れた彼女のことを知っている者も多数いるため、話を反らすならある意味で効果的だと思える佐久間の作戦ではあったが、そのようなデマを流された方は堪ったものではなく、自信満々に胸を張っていた佐久間を後ろから強襲する影が現われた。
影は高速で背後から近付き、その手に持った丸めて筒状にしたノートで佐久間の後頭部をひっ叩く。
「いったーい！」
「やっぱアンタが犯人か！　おかげでこっちは捨てられた女扱いで励ましのメールが何通も届いてんだからね！」
後ろから殴られた佐久間が後頭部を押さえながら振り返れば、そこにいたのはすぐ隣のクラスにいたゆかりだった。
彼女は佐久間が流したデマのせいで迷惑を被っているらしく大変ご立腹である。
そんな怒りながらゆかりが見せてきた携帯の画面には、確かに「今度ケーキ奢るよ」や「あの時は根掘り葉掘り聞いてゴメン！」というタイトルのメールが何通も届いていた。
確かにありもしないデマでこんな風に友人たちから可哀想な子として扱われれば哀しいだろう。
本当に違うと言っても強がらなくて良いとすら言われてしまいそうで、本人はやるべき事があるから恋愛はそれからだと別れたつもりでも、周囲の目はずっと〝男をトップアイドルに奪われた女〟というフィルターを通すことになる。
健全かどうかは置いておくが、それでもこれまで過ごしてきた普通の学園生活がくだらないデマによって崩壊した。その責任はどう取るんだと目の据わったゆかりがジッと佐久間を睨めば、本人は叩かれたところが痛いのと言って湊に抱きついていた。
「痛いよ有里くーん。こんな凶暴な子とは別れて正解だよぉ」
「やかましいわ！　オーバーエイジ枠のくせに生徒に色目使うなっての」
「わぁ、岳羽さんってば口が悪い。岳羽さんが鳥海先生のこと年増っ

て呼んでたって言っておくからね」
一回りの年の差をオーバーエイジ枠と称したゆかりだが、それは佐久間より年上の鳥海たちのこともオバサンと呼んでいるようなものだ。
ニヤリと笑ってそのことを指摘した佐久間は、抱き付きから彼の左手を取っての腕組みにポジションシフトしながら、お前の担任に言いつけるぞと彼女を脅した。
そんな風に一人の青年のことで教師と生徒がやり合っていれば、状況をただ眺めていた青年の許に新たな少女が近付き声を掛けた。
「けーど、八雲君さぁ。いまサーヤのファンから殺害予告まで出てるらしいじゃん。学校の場所もバレてるし対策しないと危ないと思うよ？」
やってきたのはゆかりと同じくF組の教室から出てきた七歌。彼女は噂を信じていないタイプのようだが、それでも湊にアイドルのファンから殺害予告が出ている事は知っていた事で彼の身を案じた。
その心配の内何パーセントかは、彼を殺しにきた者を青年自身が返討ちにして半殺しにしまう事を考えてのものだ。
人を片手で数メートル放り投げられる者が簡単に殺されたりはしない。隙を突いて襲いかかったつもりでも、彼なら見てから反応出来るだけでなく、相手が駅に到着した時点で気づいていそうだった。
とはいえ、彼も普段は目立つ学生として生活しているので、明らかに常人離れした身体能力を使って暴漢に対処したりはすまい。
そう思って七歌が対策をするつもりがあるかを尋ねれば、
「……もう少ししたらマスコミにも対応する予定だ。それまでは学校側も警察と連携して最低限の対処だけでいい」
短く彼はそれだけ答えて購買に行ってくると去って行った。
本人がそう言うのであれば学校は他の生徒に被害がいかないよう目を光らせ、後はマスコミや交際をよく思わない過激派のファンが校内に入らないよう気をつけるだけだ。
穏便に済ませることが出来るかは不明であるが、時期を選んでいる様子もあったため対応する準備を進めているに違いない。

そうして一応の納得を見せた者たちは自分たちの教室に戻り、彼がどのような対応をするのか待つ事にした。

６月２１日（日）

夜――都内ホテル・控え室

熱愛報道がされた週末、都内有名ホテルの一室に湊はいた。その近くには柴田さやかと久慈川りせもおり、そわそわしているりせとは対照的に渦中の二人は落ち着いた様子で紅茶を飲んでいる。

どうして無関係な自分が不安になっていて、本人たちはここまで落ち着いてお茶を楽しめるのか不思議でならない。

そう思ったりせは湊がテーブルの上のクッキーに手を伸ばしたタイミングで尋ねた。

「あ、あの、プロデューサーもサーヤさんも本当に大丈夫なんですか？」

りせがプロデューサーと呼んだのは湊の事だ。彼が二人の野外フェスをプロデュースするからこその呼び名だが、周りからすると同年代の青年に対して役職名で呼ぶ姿はおかしく映る。

とはいえ、本人たちはそれで良いらしくクッキーを口に運んだ湊は不思議そうに首を傾げ、その隣に座っていた柴田も焦るりせに対して何がそんなに心配なのと苦笑を浮かべる。

「もう報道されちゃったし、今から焦っても変わらないからね」

「で、でも、やっぱりトップアイドルが恋愛でスクープ撮られるのは……」

「あー、そこはね。けど、何かあっても仕事は有里君が回してくれるから大丈夫だよ。事務所にもそれは言ってあるし」

トップアイドルのスキャンダルは今も日本中で騒がれている。相手が一大ブームを起こした皇子ということもあって、悔しいけどお似合いだと祝福する者から、裏切った相手を絶対に許さないとＣＤや限定グッズを燃やした画像をネット上に上げる過激なファンの存在も確認されている。

そんな中でも余裕を持っていられるのは土壇場になると肝が据わる度胸を持っている事に加え、現在のスポンサーが離れても十分な収

入を得られるよう仕事を振ってくれる新たなスポンサーを手に入れたからだ。
会ってから過ごした期間は短いが、芸能界という黒く汚い部分もある世界で生きてきただけあって柴田の人を見る目は鍛えられている。それによると青年は十分に信用出来ると判断されたらしく、トップアイドルがそういうならとりせも渋々ながら納得を見せた。
その後、しばらくは会話らしい会話もないまま時間も進み、書類を眺めている湊と新譜を聞いて口ずさんでいる柴田を見て、りせが二人ともすごい胆力だと呆れを通り越して尊敬の念を抱き始めた頃、扉がノックされてスーツ姿の男性が入ってきた。
「有里さん、お時間です！」
「……はい」
男が呼びに来たことで返事をした湊は書類を片付けてから立ち上がり、ネクタイが少し曲がっている事に気付いた柴田が直してやると彼だけが部屋を出て行く。
目の前でネクタイを直す光景を見ていたりせとしては、報道は本当だったんじゃないかと少し疑ったが、彼が呼ばれたなら自分たちの出番もすぐに来るだろうと、いつでも出られる準備をして呼ばれるのを待った。
＊＊＊
呼ばれた湊は案内の男の後ろ進んでホールを目指してゆく。今日はそこでマスコミ相手に記者会見をする予定であり、湊が指定したように全国放送のキー局では生中継してくれるはずだった。
そういった理由もあって湊も今日はカジュアルながらネクタイを締めるファッションを選んだが、記者たちの前に出る前にネクタイを直して貰えたのはラッキーと言えるだろう。
ピシッとしたフォーマルな格好で要人の相手をすることもあるが、彼は基本的には面倒臭がりで自分のことに無頓着である。
その点、人に見られることを職業にしている柴田は彼と対照的な人物であるといえ、二人が揃うと仕事に関して真面目という点で結び付き、その他に関しては年上の柴田が湊を気に掛けることもあって相性

は良かった。
「では、ここを出たら会場になります。既に記者たちは集まっていますので奥の席までお進みください」
「わかりました。ありがとうございます」
廊下を進んで扉の前までやってくると男が笑顔で説明をしてくる。扉は直接部屋に繋がっていて、舞台袖のようなものはないからいきなりカメラのフラッシュがたかれることになる。
慣れていてもフラッシュの光はキツいものがあるので、十分に注意して中に入りましょうと男が言えば、湊も改めて自分の服装を見直してから頷いて準備が出来た事を伝えた。
それを確認した男も頷くと、扉に手をかけてゆっくりと開いていく。開き始めた時点でシャッター音が響いていたが、男が扉を開けきって湊を誘導してくれたので、部屋に一歩入った湊は入り口で記者に向かって一礼すると自分の席まで進み、再び一礼してから椅子に座った。
椅子からは会場中を見渡すことが出来、会場には自分たちの所属を表わす腕章とパスケースを身に付けたマスコミたちが百人以上いた。
中には以前会ったことのある記者もいたが、ここで個人的な話をすることは出来ないので、湊は会場を一通り見渡すと机に置かれていたマイクを手に取って電源を入れた。
「どうもこんばんは。本日はお集まりいただきありがとうございます。今日は色々と話す予定ですが、まず最初に世間をお騒がせしたことを謝罪します。自分の通う学校にも、柴田さんの事務所にも迷惑をかけましたし、自分や彼女のファンでいてくださる方にも不安な思いや不快な思いをさせたと思います。誠に申し訳ありませんでした」
言って湊は立ち上がってしっかりと頭を下げる。まだまだ若い男子高校生の精一杯の誠実さが見て取れるが、マスコミとしてはこれから彼が何を語るのかという点に注目している。
大きな発表があるということなので、もしかすると正式に交際を認めたり、湊がまだ結婚出来る年齢ではないためとりあえずという形で婚約を発表するのではとも言われており、どのマスコミも言葉を聞き

逃さぬよう神経を集中させてゆく。
すると、頭をあげた青年はその場に立ったまま会場中に視線を送ると、マスコミが密かに期待していたサプライズを伝えてきた。
「そして、本日は私の方からある発表をするため記者会見をすると伝えていましたが、ある方をこちらにお招きしています。皆さんが私だけでいいと思うのであればこのまま進めます。ですが、彼女もこの会見に参加していいと思われる方がいれば拍手をお願いします」
ある女性をここに呼びたい。青年がそういうからには今日の会見の内容から察するに登場するのは彼女なのだろう。
登場した時点で不自然に左寄りに座っているとは思っていたが、後から参加者が増えるのなら納得のポジションである。
彼の言葉を聞いて会場中が色めき立ち、これは面白くなってきたと参加を認めるように拍手をすれば、記者たちの思いは分かったと青年が頷いた。
「拍手多数ということで、ありがとうございます。では、すみませんがスタッフさん、控え室から呼んでいただけますか？」
湊が言えば彼をここに案内した男が扉から出て行って控え室で待つ少女を迎えに行った。
帝都スポーツが熱愛をスクープしたときと違い、今回はどこのテレビ局も来ているので他所を出し抜く事は出来ないが、それでも日本中が注目する会見であるため視聴率は狙える。
そこへさらに渦中の人物が揃って現われるとなれば、テレビ的にも非常に面白いので記者たちは早く来ないかなと瞳を輝かせて待った。
すると、男が出て行ってから少し経ってから扉が開き、呼びに行った男がゆっくりと扉を開ける。
遂に登場するのかとカメラが向けられ、巨大なレンズをつけたデジカメからシャッター音が響けば、扉の影から現われたのは記者たちの想像する人物とは別の少女だった。
茶色い髪を左右の高い位置で結んだ少女がやってきてテーブルの真ん中に座ると、会場中がどよめき一体誰だという声が広がる。
しかし、少しすると続いて柴田も登場したので、再びカメラが向け

られシャッター音が会場を埋め尽くすが、湊と柴田の間に謎の少女が一人座っている事で会場は不思議な空気に包まれた。
　それを一切気にしていないのか、席についた青年はマイクを取ると再開しますねと着席した二人と会場を交互に見てから、口を開いて話し始めた。
「じゃあ、人数が増えたので順に自己紹介をしたいと思います。どうしましょう、年齢順にしときますか？」
「そういう事なら一番お姉さんの私からいくね。皆さん、どうもこんばんは。今回、有里君の彼女役を務めさせて頂きました柴田さやかです」
「あ、そういう感じですか？　では、柴田さんの彼氏役を務めさせて頂きました有里湊です」
　柴田が自己紹介したとき記者たちは知っているという顔をしていたが、途中で聞き捨てならない単語が混じっていたため首を傾げた。
　すると、青年の方も小さく笑いながら同じような挨拶をしたことで、会場の中は状況が分からず混乱した様子の記者たちの声で埋め尽くされる。
　だが、挨拶はまだ一人分残っているため、謎の少女の正体を知りたがっていた記者たちが静かになれば、こういった沢山のカメラに囲まれる事に慣れていなかった少女は緊張した様子で挨拶をした。
「あ、あの、皆さんはじめまして。まだデビューしたばかりですが、アイドルをしています久慈川りせです」
「りせちゃん固いよ―。ほら、これ全国に生中継なんだからカメラさんに手を振ってアピールしなきゃ」
「は、はい！　あ、でも、こんな沢山くるって聞いてませんよ！」
　ガッチガチに緊張した少女に助け船を出すように柴田が茶化してみせる。言われたりせは素直に手を振るけれど、よく考えれば打ち合わせと違うと気づいたようで文句を言った。
　だが、それを言われても柴田は笑顔を崩さず、ちゃんとお知らせはあったよとりせに返す。
「控え室に取材申し込みをしてきたマスコミ一覧って紙が置いてあっ

たよ？」
「うそ⁉　え、どこにですか？」
「えっとね。有里君が肘で下敷きにしてたやつかな」
「ちょっと、プロデューサー！」
　犯人はお前か。柴田の言葉で絶対にわざとだと思ったりせが反対側に座っている青年を見れば、本人はそんな事は知らないなと肩をすくめて見せてくる。
　そのわざとらしいリアクションが余計に神経を逆なでするのだが、全国に生中継されているカメラの前でいつまでもコントを続ける訳にはいかない。
　マイクを再び持った湊が腕時計で時間を確認しつつ少女らを見て、そろそろ話を始めようかと切り出した。
「話を進めてもいいですか？」
『はい』
「じゃあ、進めますね。ああ、その前に少しだけ模様替えをしましょうか」
　話をするには少しばかり物足りない。そういって青年が指を一度鳴らせば、彼らの背後の白い壁が突然黒くなりカラフルな模様が浮かび上がった。
　そこにはロックなデザインで〝久慈川りせｆｅａｔ．柴田さやかフェス〟と描かれており、それを見た瞬間に集まったマスコミたちは嫌な予感がした。
「今日、自分が発表するのは夏に開催する野外フェスのお知らせです。これはまだ仮称ですが〝久慈川りせｆｅａｔ．柴田さやかフェス〟がイベントになります。主役は真ん中に座っている久慈川さん、特別出演が柴田さんです。どうして音楽イベントの発表を自分がするかというと、スポンサーに知り合いがいて宣伝を頼まれたからです」
　言い終わると同時に会場に音楽が流れ出す。歌っているのは声的にりせのようだが、全国生中継を突然イベントの宣伝に利用されたテレビ局としては非常に拙い展開だ。
　既に諦めムードには入っているが、せめて湊と柴田の交際の真相く

らいは話して欲しいと記者たちが心の中で祈れば、今度は柴田が口を開いて記者たちにとって無慈悲な言葉を吐いてくる。
「皆さん既にお気づきだと思いますが先日の私と有里君の記事は仕込みです。有里君の知り合いの新聞社さんにお願いして記事を作って貰ったんです。炎上商法ってやつですね」
「宣伝を頼まれたんですが自分は業界のやり方に詳しくなかったので、こんな感じでまず注目を集める方法を取ってみました」
そう、先日写真を撮られたのも、スキャンダルが世に出る前に対処しなかったのも、全ては今日のための仕込みだった。
イベントを成功させる上で宣伝は非常に大事だ。けれど、いくら宣伝を頑張ろうとりせの知名度が低いままではやりようがない。無名のアイドルを主役にしたところで、そのまま特別出演の柴田に注目が集まって名ばかりの主役になっていた事だろう。
では、どうすれば短期間でりせの知名度を上げられるかと考えたとき、湊は正攻法では圧倒的に時間が足りないという結論に達し、注目を集めてからマスコミの前に彼女を出そうと考えた。
この会見を見ている者はりせをおまけと捉えるだろう。だが、今はそれでいいのだ。次第に一緒に出た子はどんな子なのだと注目が集まっていき、テレビが勝手にりせの方の情報を流すようになる。
フェスをやると決まった日から今日までに新曲の一つを視聴用に聞けるレベルまで仕上げさせたので、これからしばらくはその新曲で音楽番組に出ながら知名度を上げていけば良い。
その間に二人のＣＭもどんどん流してゆくので、知名度のなさを覆す作戦は生中継されている時点で八割方成功したと言えた。
ただ、そういった事情を既に理解していながらも、一応は仕事として聞いておかなければならないのか、質問を許可すると記者の一人が手を挙げた。
「では、お二人は実際にはお付き合いされていないんですか？」
「そうですね。前に仕事で一緒になったときに仕事用の連絡先は交換しましたが、それ以降は今回の仕事の件で連絡するまで電話もメールもなかったです」

「私の事務所的には有里君との共演はＯＫだったんですよ。ただ、有里君サイドがＯＫしてくれなかったので本当に久しぶりの共演になります」
「こっちは事務所に所属してませんからね。空いた時間にバラエティに出演したのが奇跡みたいなものですよ」
　穏やかに会話する二人からは本当に男女の関係を読み取れない。勿論、それが演技である可能性もあるのだが、青年の方からアプローチをかける可能性は皆無のようなので、最初の一人の質問だけで十分だと判断したのか二人の関係についての質問はそれっきりだった。
「まぁ、とはいえ今回の主役は久慈川さんです。自分と一緒に写ってるより、少女二人の方が華やかな画になりますから、カメラさんもそっちを撮ってくださいね」
　ジョークを飛ばしながら浮かべられた美しい微笑はテレビの前の視聴者に笑いをもたらしただろう。だが逆に、これを見ているマスコミ関係者たちには、スキャンダル発覚からここまで完全に青年の掌の上だったと苦笑いを浮かべさせた。

第二百二十三話　復讐代行のお仕事

影時間――路地裏

深夜零時になり世界が緑色に塗り潰される。文明の利器は全て止まり、人も虫も全ての生き物たちが自分の殻に閉じこもって世界が再び動き出すのを待つ。

だが、そんな時間にふと目覚める者がいた。Tシャツにジーンズというラフな格好をしていた男は、最初は意識がハッキリしていなかった様子だが、すぐに覚醒すると周りを見渡して異変に気づく。

「……は？　なんだ、コレ……」

見れば男の周りにいくつもの黒い棺桶が並んでいた。自分の傍に円陣を組むように並ぶ四つの他、階段の辺りに寝そべっているものや、逆さになったドラム缶の上に立っているものもある。

少しウトウトして変な夢でも見ているのかと思ったが、ベタに頬を引っ張ってみても痛みを感じるだけで周囲に変化はなかった。

彼はいつものように世間からはみ出し者として扱われる友人らと一緒に遊んでいただけだ。

特に目的もなく集まり、夜中まで適当に喋ってから家に帰るという生産性のない毎日を送っていた。

昼前まで眠って、起きたら昼食を摂ってからバイト先のパチンコ店に行き、夜の十一時頃にあがってコンビニで夕食を買ってから他の者とここで合流する。

そんなありふれた毎日を送っていただけの男は、どうして自分がこんな質の悪いB級ホラーのような状況に置かれなければならないのかと頭を抱える。

いくつもの黒い棺桶に地面に点在する血溜まり、周囲に人の気配はなく遠くには怪しい緑色の光を放つ異形の塔まであった。

これが夢でなければ本格的に自分の頭がおかしくなったと認めるしかない。男が半分泣きそうになりながらそう考えていれば、駅前に通じる路地の方から音がして一体何だと思わず振り返った。

「だ、誰だよっ!?」

振り返った男の視線の先に立っていたのは男女数名からなる怪しい集団。
先頭を歩く上半身裸の男、その後ろに続くアタッシュケースを持つ眼鏡の男とダボッとしたパーカーを着た男、さらに後ろには男たちと違ってまともな服装をしたオカッパの少女と金髪の少女とハの字眉毛の少女が並んでいた。
こんな異様な空気の場所で平然としている者など普通ではない。先頭の男の見た目の時点でそれは思っていたが、尚更強く思ったことで男がこの場を離れようとすれば、男が逃げる前に上半身裸の男が口を開いた。
「どうもこんばんは。随分と驚いた様子ですが、ここは誰もが毎晩訪れている世界なのですよ。まぁ、実際に認識出来ているかは別の話ですが」
おかしな見た目の半裸男に急に話しかけられた男は思わず一歩下がる。
人は自分よりも感情的になっている者を見ると冷静になると言うが、逆に自分よりも冷静な者を見ると何故そんなにも平然としているんだと余計に感情的になってしまうものだ。
しかし、おかしな世界に半裸男は馴染んでいる。日常の世界ならば浮いている格好でも、こんな変な世界なら違和感もほとんどない。
そのせいか状況を理解出来ていない男もおかしなモノが増えたと思っただけで、余計に心が乱れるという事態は避ける事が出来た。
もっとも、このおかしな世界がどんな場所なのかは気になるため、男は声を裏返しながらも正面に立つ者たちへ言葉を返した。
「な、なんだよオマエら。ここはどこだよ!?」
「言ったところで分からんわ。それよりこれ見てみぃ」
男の質問に答えたのは半裸の男ではなくアタッシュケースを持った男だった。
自分の交友関係の中には関西弁がいなかったので不思議な感じはしたが、相手の見せてきた書類を受け取った男は一体何だと訝しみながら書類に目を通してゆく。

そこには男の住所、氏名、年齢、職業等々個人情報がしっかりと書かれている。
どこでこんな物を手に入れたのだと聞きたかったが、男が尋ねる前に関西弁の男が書類を回収してしまったのでタイミングを逃してしまう。
けれど、書類に目を通した男の動揺した表情を見て、関西弁の男は鼻で笑ってつまらなそうに言葉を続けた。
「どうやら合っとるみたいやな。お前を恨んどるやつから復讐を頼まれとんねや。ああ、誰からの依頼かは言わん約束やから聞くだけ無駄や。知ったところでなんも変わらんしな」
「ふ、ふざけんなよ！　なんで俺がどこの誰とも分からねえやつにそんな事されなきゃなんないんだ！」
依頼人に情報は漏らさない。裏に限らず仕事をする者なら当然のことではあるが、命を狙われている方にすれば、一切自分の手を汚さず金で他人の命を奪おうとする卑怯者に文句を言いたかった。
しかし、復讐代行の男たちにそれを言っても意味は無い。これ以上の話は無駄だとばかりに半裸の男は淡々と返してくる。
「さぁ？　依頼人がどういった理由で貴方を恨んでいるのかは知りません。ですが、人は知らぬうちに他者を傷つけ恨みを買っているものです。そんな些細な事で……ということもざらですからね。運が悪かったと諦めてください」
そう言って半裸の男はベルトに差していた拳銃を抜いて構えた。
月の光を受けて怪しい輝きを見せる大型のリボルバーはどう見ても本物だ。普通の銃よりも明らかに大きく、その分威力が高いと考えれば当たっただけで死んでしまうだろう。
容易く命を奪える代物を見た男は自分が狙われている事もあって身体を震わせるが、こんな訳の分からない状態のまま大人しく死ねるかと吠える。
「ざっけんじゃねーぞ！　こんなところで死んでたまるかぁ！」
自分はまだ死ねない。男は怪しい集団に背中を見せて駆け出す。
すると後ろで半裸の男が「素晴らしい」と笑ったようだが、命を狙

われている男は殺し屋の事など気にしている余裕はなかった。
今も自分は狙われている。そして殺し屋に背中を見せている以上、手に持っていた得物でその背中を撃ってくるはずだ。
実際に銃社会で生きてきた経験はなくとも、映画や漫画の世界でそんなセオリーを知っていた男は半裸男たちの来た方向とは反対の狭い路地に逃げ込もうとする直前、急停止すると真横に向かって思い切り飛んで転がった。
――――ドゴオンッ
男が真横に飛んだ直後にそんな音が大気を震わせた。転がりながら自分のいた場所をチラリとみれば、暗闇に炎が走っていたことで弾丸が過ぎていった事を理解する。
やはりあのままいれば危険だった。頭でそう認識した瞬間に嫌な汗が全身を濡らすも、まだ安心は出来ないため男は立ち上がるとビルとビルの間の路地とも言えぬ隙間に入り込んで逃げた。
後ろから関西弁の男が大声で何か言っているのが聞こえていたが、必死に逃げようとしている男に細かく言葉を聞いている余裕はない。
今ここで再び銃で狙われれば逃げ場はないのだ。一秒でも早く隙間を抜けて逃げなければならない。男は擦れて服が破れるのも構わず駆け抜けた。
＊＊＊
二発目の銃弾が撃たれるより先にビルの隙間を抜けた男は今も走っていた。
抜けると同時に真横に飛んだ事で第二射も避けられた訳だが、そんな事で安心していられる状況ではない。
入り組んだ路地でときどき方向を変えながらも大通りの方へ抜ける道を選んでゆく。
ここで一般人が犯しがちなミスが、相手から隠れようとしてどんどん狭い場所を目指すことだ。
それでは自分の逃げ場も減らすことになり、一対一ならまだしも路地と大通りの両方を探すだけの人数がいる集団相手には効果が無い。
相手が大勢いる場合はいっそ相手に姿が見つかってもいいから大

通りに出るのだ。そして、そこから数本だけ細い路地にたまに逃げ込み、また大通りに戻ってというのを繰り返す。
大通りにいるのは常に逃げ込む場所を確保するためで、細い路地と大通りを行ったり来たりするのは攪乱と運が良ければ相手の人数が分散することを狙ってのこと。
こんな月明かりしかない時間ならば相手の視界も悪いので成功確率は高そうだが、男が大通りに出て走っていると、少ししてからパーカーを着た男が追いかけてきた。
相手に手には海賊が持ってそうな剣が握られており、逃げている男はここは日本だぞと文句を言いたくなったが半裸男が銃を持っていたので今更な話である。
「ヒャハハッ！　随分と逃げてンじゃねェか！　どこまでいけるか楽しい鬼ごっこと行こうぜ！」
片手に剣を持って大声で喋っているパーカーの男は、何も持たずに腕を振って走っている男よりも速かった。
最初の不意打ちで稼いだ距離もほとんど残っておらず、このままでは追いつかれて剣で斬り殺される未来しか見えない。
銃で撃たれるのとどっちがマシだろうかと考えるが、文字通りどちらも死ぬほど痛いことに変わりはない。
まだまだ生きていたい男は諦めるなと自分を鼓舞し、どうやってか生き延びる方法はないかと周囲を見渡す。
すると、
「よ、よっしゃあ！」
進行方向に鍵のかかっていない自転車を見つけた。幸運なことにマウンテンバイクで、辿り着いた男は跨がるなり立ち漕ぎになって発進する。
「ンだそりゃ!?　テメェ、卑怯な手ェ使ってンじゃねェぞ！」
いくらパーカーの男の足が速くても、下手をすれば素人でも原付以上の速度が出せる立ち漕ぎしたマウンテンバイクには追い付けないだろう。そう思って全力で漕いでみれば案の定パーカーの男は段々と小さな点になって視界から消えていった。

「……はぁ、マジでなんなんだよ」
全身にびっしょりと汗を掻いていた男は一先ず直近の危機を回避した事で深く息を吐く。
立ち漕ぎをやめてサドルに腰を落とし、座ったまま普通にペダルを漕いで疲れた頭でなんとか現状を把握しようと考える。
自分を狙っている敵の数は合計で六人。男女三人ずつで男たちは見た目からして変人としか思えないが、女の方は高校生くらいの見た目で中々上玉が揃っていたように思う。
一般的な男はどうせ殺されるなら変人の男たちより女の方が良いと思うのだろう。しかし、実際に狙われてみれば美人にだろうと殺されたくないというのが本音だった。
とはいえ、このまま遠くへ逃げたところで無事に済む可能性は低い。ならばと肉体と精神にかなりの疲労を感じている男はどこへどうやって逃げるかに考えをシフトさせる。
普通ならば警察に助けを求めるところだが、男は逃げている間に誰ともすれ違っていない事に気付いていた。
不気味な棺桶はいくつも見たが、生きた人間は追ってきている殺し屋たちしか見ていない。
となると警察に行ったところで誰もおらず、追いついてきた殺し屋たちに警察署で殺されるなんて哀しい事態にもなりかねない。
それならむしろ海側に逃げてしまおうかと考えたとき、ビュウ、と風を切る音が聞こえて辺りが急に暗くなった。
「随分と遠くまで逃げましたね。過去最高記録ではないでしょうか？」
何が起きたのか分からず混乱する男の耳に頭上からそんな声が届く。
一体何が起きたんだと自転車で走りながら上を見れば、男は唖然として自分の目を疑った。
そこにいたのは巨大な化け物。大蛇の尾のような異形の両足、蛇を編んだような不気味な翼、そんな身体のパーツを持ったくすんだ赤髪の黒い肌の巨人が空を飛んでいた。

近くの雑居ビルよりも巨大な化け物の腕には先ほどの怪しい集団が抱かれており、翼を羽ばたかせて進行方向に先回りすると、接近を嫌がり男がブレーキしたことを確認して集団がその腕から降りてきた。
「ったく、最期やいうのにしょうもない事しくさって」
「まぁ、命狙われれば普通は逃げると思うけどね。居場所が分かるから今回は無駄だったけど」
巨人の腕から降りてくるなり不機嫌な関西弁の男とオカッパの女が言葉を交わす。
怪しい集団は最初からずっと逃げた男の居場所を把握していたようで、ＧＰＳのような物を使ってここまで追ってきたのだろう。
今まさに光になって消えていった巨人がなにかという疑問はまだ残っているが、それよりも常に相手に自分の居場所がバレているという事実の方が衝撃で、ここまで逃げてきた男から逃げ出そうとする意欲を削いできた。
「よーく逃げたなクソ野郎！　テメェの悪運には拍手を贈ってやりたいが、こっちも暇じゃねェからちゃっちゃと死ンでくれ！」
そして、背後からは先ほど撒いたパーカーの男まで追いついてきて、逃げていた男は前後から挟まれてしまう。
横にはまだ逃げるだけの空間が残っている。よって、相手が攻撃してくれれば回避行動を取ること自体は可能だ。
けれど、咄嗟に避けたところでどうなる。先ほどの巨人が再び現われれば一般人でしかない男に身を守る手段はなく、巨大な腕で殴られるだけで容易く死ぬに違いない。
半裸男の拳銃か、それともパーカーの男の剣か、巨人に殴られずとも死ぬ方法はあるけれど、どれが一番マシか考えながら男は怪しい集団の次の動きに注意した。
巨人から降りてきた者たちは動いていない。となれば、次に襲ってくるのは追いついてきた背後の男だろう。
近付いてくる足音に意識を集中させ、自分までの距離をおおよそで測る。タイミングを逃せば斬りつけられて殺されることは確実なの

で、男はかつてない程の集中力を見せ、敵が攻撃してくるタイミングで自転車を捨てて横に飛ぶように回避した。
「うぉぉぉっ!!」
飛び込み地面の上を転がりながら避ければ、予想通りにパーカーの男が剣を振り抜いて元いた空間を斬りつけていた。
素人が咄嗟の回避行動を取れるとは思わなかったのか、空振ったパーカーの男は驚愕に目を開き、勢い余って運転者を失って倒れゆく自転車に突っ込んでいる。
また驚いたのは相手の仲間も同じで、またしても素人が攻撃を避けた事にはどうしても驚きを隠せないらしい。
だが、逃げていた男もこのままでは自分が殺される事は分かっている。攻撃を避け、相手が驚いている今がチャンスだと、地面を転がっていた男は受け身を取って立ち上がると、身体を反転させ自転車に足を取られていたパーカーの男に攻撃を繰り出した。
「はぁぁぁぁっ!!」
「舐めンな素人がっ!!」
男の大振りな拳はバック転でアクロバティックに後退した相手に容易く回避される。
体重移動も腕や腰の動きもバラバラ。喰らっても大したダメージはないと分かっているが、素人の攻撃を喰らうというのはプライドが許さないのだろう。パーカーの男は掠ってもやらないと距離を取ったのだ。
けれど、攻撃が届く前に回避されていた男は相手の行動をむしろありがたいと思っていた。何せ自分は素人なのだ。そんな人間の攻撃が簡単に当たる訳がない。
だからこそ、男は大振りな攻撃を仕掛けて敵が逃げてくれることを祈った。そう、地面に転がった自転車で追撃を仕掛けられるように。
「どりゃあっ!!」
「なっ!?」
攻撃を繰り出しながら自転車の許に戻った男は、相手が逃げたのを確認しながら、足下にあった自転車を全力で蹴り飛ばす。

わりかし最近の自転車であるためフレームは非常に軽い。全力で蹴れば浮き上がって飛ぶくらいには軽量で、咄嗟の回避行動を取っていたパーカーの男は次の動作までの僅かな隙を突かれて飛んできた自転車と衝突する。

いくら軽いと言っても固い金属製のフレームがぶつかってくれば当然痛い。それが不意打ちで腕くらいでしかガード出来ていなかったとなれば尚更だ。

ぶつかってきた自転車が落下したことで、ガードの腕を下げたパーカーの男の顔が痛みと怒りに歪んでいる事は確認出来た。

ならば、ここでさらに追撃だと男は拳を握り締めて、先ほどのようなお粗末な体運びではなく、あくまで喧嘩殺法ではあるが腰の入った拳を繰り出した。

「甘ェっってンだろうが三下ァ!!」

攻撃が繰り出されるのを黙って見ているほどパーカーの男も優しくはない。相手の左拳を自分の左手で側面から叩いて受け流し、空いた脇腹に向かって持っていたカットラスを振るい斬りつける。

「くっ……!?」

斬られると思った男は攻撃を流された際に勢いに身を任せ、わざと力の逃げた方向に自分も身体を入れることで直撃を回避する。

僅かに斬られた部位から赤い血が滲むものの、バッサリと切られて行動不能になるよりはマシだ。

切り付けが浅かったことでパーカーの男も忌々しそうに睨んでいるが、そう簡単に死んでたまるかと男も諦めずよろけた状態から踏みとどまり、振り返り様に回し蹴りを放つことで反撃も忘れない。

片手持ちの剣に注意しながらパーカーの男と近距離でやり合う際、仲間の半裸男から銃で撃たれないよう常に位置取りには注意する。

遠く離れた半裸男と己とパーカーの男が一直線になる状態。それさえ維持していれば貫通した弾丸が味方を傷つける可能性を理解している半裸男は撃てない。

敵の仲間から援護がないなら後は自分がこの死地を切り抜ければ良いだけ。そう自分に言い聞かせて男は相手の剣を側面から叩いて

弾きつつ、足払いをしかけたり顎に向かって拳を突き出して防戦一方になることを防いだ。
「テメェ、三下がァ！　チョロチョロとクソたるい攻撃ばっかしやがって！　面倒臭ェ、終わらせてやるよ！」
だが、いくら死に物狂いだろうと素人にいいように防がれて頭にきたのか、パーカーの男はキレて瞳孔の開いた瞳で男を見ながら吠えると、横一閃に剣を高速で振り抜いて男を後退させる。
その僅かな隙を作ることに成功すればパーカーの男も後退して距離を開け、再び男が挑んでくる前に腰から引き抜いた拳銃を自分の頭部に当てて引き金を引いた。
「こい、モーモス！」
男からすれば拳銃自殺にしか見えない行為だったが、パーカーの男が引き金を引いた直後に異形の存在が頭上に現われる。
赤いボロ布を身に纏い、その手に大鎌を持った骸骨のような化け物。パーカーの男がモーモスと呼んだそれは、現われるなり鎌を引きながら男に突進してきた。
このままでは目の前に来た瞬間に化け物は鎌を振って身体は両断される。頭よりも先に本能でそれを理解していた男は残された時間で必死に生き延びる方法を考えた。
敵の仲間がやり過ぎだと止めたりはしないだろうかと淡い希望を抱くが、ターゲットが自分たち相手にどこまで出来るか興味深そうに眺めていた半裸男以外は全員が関心すら持っていない様子だ。
これでは相手になんの希望も望めないとして、男はここまでかと深く溜息を吐くとモーモスに向けて右手をかざした。
「――――こい、レヴィアタン」
男がかざした手を握ると男を中心に赤い光と黒い欠片が回転を始める。そして、他の者たちが驚いている間に、光の中心からオーロラのような光沢を持った水色の鱗に覆われた海竜が現われ、モーモスに鼻先からぶつかってゆくと敵を近くのビルまで吹き飛ばした。
モーモスを吹き飛ばしたレヴィアタンは戻ってくるなり男を守るように自身の身体で召喚者を隠し、そんな様子を眺めていたパーカー

の男は、自分の持つ力と同種の力を一般人が持っている事に驚いたのか警戒しながら様子を見ている。
それは半裸男たちも同様で相手が一般人ではないと理解し、眼鏡の男やオカッパの女がその手に拳銃を取っていつでも使えるよう構えた。
だが、半裸男たちの中でただ一人構えも見せていなかった金髪の少女が、そんな他の者たちの様子など知らないとばかりに走り出すとレヴィアタンに守られた男の許へ向かってゆく。
「あ、ダメだよマリア！」
咄嗟の行動に面食らったオカッパの女は金髪の少女を呼び戻そうとするが間に合わない。
相手は普段はぽやっとしているくせに身体能力は仲間内でトップクラスなのだ。男にも負けない身体能力の相手が急に走り出して止められるはずもなく、金髪の少女は十数メートルの距離を一気に駆け抜けてレヴィアタンの下を潜り抜けると男の許へ到着した。
「ミナト！」
男の許へ到着した少女は嬉しそうな笑顔を浮かべながら相手に抱きついた。
少女の言葉を聞いた他の者たちは何を言っているのか一瞬理解出来なかったが、レヴィアタンが消えてゆくとそこにはマリアに抱きつかれた湊だけがいて男の姿が消えていた。
「……は？　ミナト、テメェどンなトリック使ったか知らねェがずっと化けてたのか？」
男が消えて湊が現われた。ということは男は最初から湊の変装だったのだろう。
骨格レベルの変装など聞いたこともないが、相手ならやりかねないと妙な信頼のある青年にカズキが尋ねれば、聞かれた本人は抱きついてきたマリアの頭を優しく撫でながら答えた。
「……ああ、最近他のやつに教えるために演技に凝っててな。迫真の演技だったろ？」
彼がアイドルと交友を持っていることはストレガのメンバーも

知っている。別に羨ましいとは思わないものの、表舞台でも派手に動いて結果を残せる才能には純粋に驚嘆するほかない。
ただ、それで自分も演技が出来るよう練習する際の相手にされるのは困りものだった。
ストレガのメンバーは依頼を十全にこなせるよう下調べもしていたのだ。相手の予定を把握して今日ならやれると踏んで動いた。
しかし、蓋を開けてみるとターゲットは自分たちの知り合いが化けたもので本人ではなかった。いや、もしかすると本人の可能性もあるのだが、そうすると依頼自体が虚偽の内容で最初から青年が演技の練習のために釣っていたことになる。
今後の事を考えると無駄足を踏みたくないため前者であって欲しい。心の中でそう思いつつ近付いたタカヤは湊に尋ねた。
「今回の依頼は貴方が仕組んだものですか？　それとも依頼内容を掴んでターゲットのフリをして割り込んだのでしょうか？」
「後者だ。マリアが今日は仕事だと教えてくれてな。お前らのターゲットはこいつだろ」
いいながら湊はマフラーに手を入れるとあるものを取り出してみせた。彼の手にあるのは呆然とした表情で固まるターゲットの頭部、湊が先ほどまで化けていた人物だった。
どうして青年がそんな相手の頭部を持っているかは不明だが、きっと演技練習のために化けると決めた時点で殺しておいたのだろう。湊に騙されたストレガが日を改めて殺しにいく手間を省くために。
「なるほど、先にターゲットを奪われていたのですね。まぁ、過程には拘りませんから依頼完了ということでいいでしょう」
「ったく、お前は他人様巻き込ンで遊ンでンじゃねェよ」
「お前らも逃げたターゲットの対処という意味で良い練習になったろ。一般人でも運が重なればあれくらいは可能だからな」
路地裏からここまで追うという余計な手間を掛けさせられ、中でも素人の喧嘩殺法だろうと戦闘を行なったカズキとしては無駄に疲れさすなと文句を言いたかった。
しかし、相手を騙していた本人は化けていた男の身体能力まで模倣

していたので、最後のペルソナ召喚以外は素人でも出来ることだぞと忠告した。
いくら影時間でペルソナ使いの身体能力が上がろうと人外の動きは出来ない。となれば、関節の可動域などから逆算して対処は可能なのだ。
今回のカズキはまさにそれで攻めきれなかったため、自分にも反省すべき点があると理解しているカズキはばつが悪そうにしながらも反論はしなかった。
「さて、私たちはこれで帰りますが貴方はどうするのですか？」
「……俺は他に寄るところがある」
「そうですか。では、また機会があれば会いましょう。次は最初からちゃんと自分の姿でね」
タカヤとしては今回の遊びは中々に興味深くお気に召したらしい。けれど、仕事をこなすという点では、影時間の残りを気にしながらターゲットの処理を考える必要があって面倒でもあったようだ。
別に湊が相手の仕事のことを気遣う必要もないのだが、深く知らない相手に化ける練習としては今日のことで十分ではあった。それに付き合って貰った礼として相手の希望にある程度は沿ってもいい。
そう考えながらマリアを身体から離した湊は、ストレガのターゲットだった者の首をジンに投げ渡すと背を向ける。それが合図だったようにタカヤたちもスミレが呼び出したテュポーンの腕に抱かれると空を飛んで去って行った。

第二百二十四話　新たな情報

６月２３日（火）
午前――ＥＰ社レッスンルーム
壁側の一面が鏡張りになったレッスンルームにステップの靴音が響く。
音の出所は鏡の前にいる少女。ポップな字体でカラフルなアルファベットと星の描かれた白いＴシャツに、ピンク色のダンス用ハーフパンツスウェットを着た久慈川りせだ。
軽快な音楽に合わせて一つ一つの動作を丁寧に確かめながら踊っていたりせは、通しでの振り付け確認も兼ねた練習を終えると音楽を止め、壁際に置いていたタオルとスポーツドリンクを取って椅子に座る。
ダンスで熱くなった身体には常温のスポーツドリンクすら爽快に感じ、汗で失った水分と塩分を補給しつつ疲労回復に効果的な成分も摂取しながらホッと一息吐いた少女は、同じく壁際に置かれた椅子のところで書類を眺めていた青年に声を掛けた。
「……ねぇ、なんでわざわざここで仕事してんの？」
「一人だとサボるだろ。だから、スポンサーとして目を光らせているんだ」
言われてりせはこいつは本当に失礼だなとジトっと責める目で睨む。
今やっているのはあくまで自主練。柴田と違って歌やダンスの基本的なレベルが低い彼女は、湊がＥＰ社側で用意している各レッスンに加えて個人でも練習していた。
無論、所属している彼女の事務所でもレッスンは受けられるのだが、中堅プロダクションと世界有数の複合企業では設備が段違いで、さらに言えば事務所では予約しなければレッスンルームを使うことも出来ないという理由もあり、フェスまで自由に利用を許されているＥＰ社を訪れていたりする。
レッスンルーム以外にもトレーニングルームやプールに大浴場に

マッサージ等々、デビューしたてのアイドルでは普通は受けられない好待遇。さらに渡されたＩＤカードを利用すれば、しっかりと栄養管理された美味しい食事を敷地内のレストランで無料で食べられる。
いっそ、ＥＰ社で芸能プロダクションを立ち上げ、そこに移籍させてくれないかなと思いたくなる現在の環境は、少しでも早く新曲をものにしたいと考えているりせにとってこれ以上ない場所なのだ。
しかし、仕事上の信頼関係を築くためにプロデューサーと呼ぶことにした相手は、ちょくちょく彼女の進捗状況を確かめにレッスンルーム等へ訪れている。
トレーナーに聞くこともあれば自分の目で見て確認することもあり、お金を出すだけにそんなに気になるのかなと思わなくもないが、りせとしてはいまいち自分を信用されていないようで彼の態度は気分が悪い。
もっと言えば、人のことを言っておきながら本人も本業である学校をサボってここにいる訳で、世間的にはむしろ有名進学私立の模範的な学生としてのイメージが強いだけに、今のような状況は人のことを言える立場ではないだろうというのが本音だ。
尊敬するトップアイドルである柴田に対しては敬語を使うというのに、ファーストコンタクトが最低だったことで欠片も敬う気のないりせは、青年がどんな仕事をしているのかなと隣から書類を覗き込みながら一つ尋ねた。
「プロデューサーって学生でしょ。学校行かなくていいの？」
「定期考査でも全国模試でも満点だからな。特待生である俺は好成績さえ取ってればある程度は自由登校が認められている」
「それってお前は成績がいいから勝手に頑張れって学校が言ってるってこと？」
「逆だ。結果は残すから干渉するなと俺が拒絶してる」
中間・期末の試験だけでなく、日本中の学生が受ける全国模試でも満点を取っているなら、彼は大学の志望校判定で間違いなくＡを取ることだろう。
一般のテストを受けずとも大概のところは推薦で受かりそうなも

のだが、どちらにせよ現状を見ると学校は彼にこれ以上は教えることがないように見える。
それによって話を聞いたりせは学校側から放置されているのかなと心配したが、実際は真逆で彼の方が上から邪魔するなと学校に命令している立場だった。
都会の有名進学私立でそれが許されるなど普通とは思えない。けれど、りせは実力で他の者に認めさせる姿を素直に強いと思った。
自分ももっと人気になれば事務所の方針に引っ張られず、好きな仕事や挑戦したい仕事をさせて貰えるようになるはず。今は年齢もあってか〝りせちー〟というロリ系のキャラで売る方針になっているけれど、自分も柴田のように歌と女優業という二足の草鞋でいく正統派になりたい。
そう思ってりせが今回の仕事は絶対に成功させなければと決意を新たにしていれば、少女が外部の人間が見てはいけない仕事の書類を見ようとしている事に気付いた湊が、りせの顔を片手で掴んでタコ口にしながら先ほどのダンスで気になった点を指摘してきた。
「……それより、間奏のときにふらついてたぞ。あそこはジッとしてサビ、大サビと動きを大きくしていく際に重要な部分だろ」
「うぐっ……わ、分かってます！　まだ覚えきれてないから、どうしても考えながらで反応が遅れるの」
タコ口という変顔にされ、さらに真っ当な指摘を受けたことでりせは顔を赤くしてそっぽを向く。
指摘されるまでもなく本人も気づいてはいたのだ。しかし、まだまだ新曲の振り付けも覚えきれていないことで、ピタッと止まるべきパートでもこうだったかなと考えていてふらついてしまった。
原因が自分の予習不足に他ならないと分かっているため、りせは午後にあるトレーナーとのダンスレッスンには同じミスは繰り返さないんだからと湊に宣言しておいた。
指摘した本人は少女の宣言を軽く流しているが、彼の態度は普段からこんなものなので、そろそろ慣れつつあるりせもわざわざ突っかかったりせず、休憩がてらの雑談を続けようとスポーツドリンクを飲

みながら純粋な疑問を口にした。
「てか、ずっと仕事してたくせにどうやって見てたの？」
「……別に書類を見てても視界には収まってるからな。余分な動きがあれば分かる」
今りせが練習しているのはソロの新曲だ。彼女が湊経由で貰うと決まっているのはソロ三曲と柴田とのデュエット一曲の計四曲。その内既に貰った最初の一曲は披露出来る及第点まで突貫で仕上げたが、二曲目は歌番組等での披露がまだ先なので時間をかけての練習となっている。
そのためりせも一曲目ほど急いで覚えようとしていなかったのだが、残念なことにここにいる青年は歌う本人も覚えきれていない曲を完璧に振り付けまで覚えていたようで、無駄な動きがあれば一発で分かるし見ていて気づいた事もあると嘆息した。
「……というかお前、身体硬くないか？」
「か、かたくないもん！　ほら見て、バレエとか体操とかしてなかったのにこんなに足も開く！」
指摘されたりせは驚いた顔をすると耳を赤くしながら必死に反論する。
身体の硬さはダンスする上で非常にマイナスな要素。それだけに自分はそうじゃないと椅子から立ちあがって限界まで横に開脚してみせて見たのだが、湊は黙ってそれを眺めているとおもむろに立ち上がってりせの前に立つなり、彼女の右足に水平蹴りを放って強制的に限界を超えさせた。
「――――っ!?」
彼女は既に限界まで開脚していた。むしろ、相手の言葉を否定するため見栄を張って少し痛いくらいまで頑張って足を広げていたのだ。
そんな状態で第三者の蹴りにより強制的に限界以上まで開脚させられれば、当然悶絶するほどの痛みに少女は襲われる。
声なき声をあげ、後ろに倒れながら口をパクパクと開閉し、最後には目に涙を溜めながら背中から床にぶつかる。
突然のことに何が起こったのか理解出来ていなかったが、倒れたタ

イミングで痛みを認識出来るようになり、倒れて打った背中の痛みよりも激しく襲い来る股関節の痛みに、少女は人の目など知らぬと見た目も気にせず倒れたまま股間に手を当て押さえながら叫んだ。
「さ、裂けたっ。股が裂けたぁ！」
「裂けてない。裂けてたら血が出る」
「鬼、悪魔、血も涙もない外道！」
蹴られた際に股関節の辺りでブチッという音がしたような気がして、りせは股間を押さえていた手を見てみるが血は出ていなかった。
とはいえ、出血がなくとも未だに激しい痛みは治まっていないので、起き上がって床の上にアヒル座りになると少女は自分を見下している青年を非難する。
「……ダンスより先に身体を柔らかくする方が先みたいだな」
子どもの言うことだ。湊は別に何を言われても気にはしない。
けれど、今のりせの身体の硬さでは続けてる内に疲労を溜めて怪我をする恐れがあった。
故に、柔軟な身体を手に入れるための肉体改造も並行して行なう事に決め、湊は座ったままのりせに近付くと相手を床の上に倒そうとする。
「ちょっ、変態！　触んないでよ！」
「関節外されたくなきゃ黙ってろ」
それが真っ当かどうかは不明だが、直前に酷い仕打ちを受けたりせは必死に抵抗した。痛みで足に力は入らないけれど、それでもこのままでは自分の身体が持たなくなると思ったから。
しかし、年齢と性別、さらに言えば相手の動きをコントロールする技術で負けていたりせは、容易く青年に組み敷かれ、全身を余すとこなく揉まれて痛みを伴う肉体改造を受けさせられることになった。
放課後――はがくれ
入り口の扉を開けた瞬間、やってきた者の鼻に食欲をそそる香りが届く。
魚介系の出汁で作ったこの店自慢のとんこつスープに、サイドメニューの餃子、さらに奥ではカッカッとリズミカルに中華鍋を振るっ

て炒飯を炒める店員の姿が確認出来、ラーメンだけのつもりが炒飯も美味しそうだと席に座る前から客を悩ませた。
「お客さん、二名ですか？　空いてる席にどうぞ！」
　客の来店に気づいた店員が笑顔で着席を促してくる。それに頷いて返した制服姿の男子は、初夏にロングコートを着ている季節感のない男子と共にカウンター席に座るとメニューを指しながら口を開いた。
「さて、前の礼だ。好きなのを頼め」
「特製定食でいい」
「そうか。なら俺も同じのを貰おう。すみません、特製定食二つ」
　特製ラーメンと餃子とライスのセット、それがこの店の特製定食だ。
　注文を受けた店員は「あいよ、特製定食二丁！」と他の店員に伝えてどんぶりを用意し始めた。
　カウンターに座っているとどんな手順で作っているのかが分かって中々面白いが、二人で来ておきながら黙ってラーメンの製作工程を見ているのもつまらない。
　セルフサービスの水をコップに注いで自分と荒垣の前に置けば、真田はそれを手に取って口をつけてから話しかけた。
「今日、幾月さんが寮に来ることになってる。なんでも大型シャドウの件で進展があったらしい」
「……そうか。んで、それを俺に伝えてどうする？」
「分かってるだろ。食い終わったら寮に来い。一緒に戦えって訳じゃないんだ。情報ならお前も聞いておいて損はない」
　予想はしていたがやはりかと荒垣は嘆息する。
　これまで隣に座る幼馴染みはことある毎に戻ってこいとしつこかったが、少し知恵を付けたのか今回はとりあえず寮に来いと言ってきた。
　荒垣自身も影時間やシャドウについて興味がない訳ではないため、イレギュラーシャドウの中でも力を持っている大型シャドウの情報は聞いておいて損はない。

今日は先日の路地裏での情報料としてはがくれを奢ってくれるという話だけに、奢って貰って〝はい、さよなら〟と帰るのも人としてどうかと思うため、まぁ、それくらいならいいかと荒垣も妥協することにした。

「……泊まりはしねえぞ。話を聞いたら帰る」

「ああ、情報共有が目的だからな。お前の部屋はそのままだが別に構わん」

泊まるというのなら部屋の掃除もあるので、遅くに来る幾月がやってくるまでに全てを終らせておかなければならない。

今日はそこまでする気分でもなかったのか、荒垣がミーティングに参加するだけで十分だと真田は笑った。

二人がそんな風に話している内に料理も完成したようで、カウンター越しに店員が料理の盛られた器を渡してくる。

受け取ったそれらを自分たちの前に置いた二人は、割り箸を取ると同じタイミングで手を合わせて「いただきます」と呟いてから食事をするのだった。

夜――巌戸台分寮・作戦室

真田が荒垣を連れて寮に戻ると美鶴は少し安心した顔で彼を迎え、以前からの知り合いであるゆかりと風花は意外そうな顔で挨拶し、七歌と順平は先日の事で礼を言った。

別に荒垣は戻った訳ではなく、大型シャドウについての情報を共有するために話を聞きにきただけなのだが、ゆかりを除く後輩たちにすれば彼は大型シャドウのときに現われるお助けキャラなので、一緒に作戦会議をするという認識程度で特に他には何も言わなかった。

荒垣本人としても自分が彼らを助けたのは七歌が街に来たときだけなので、仲間のピンチに颯爽と現われる戦隊モノのブラックポジションとして扱われても困るため、彼らの変なところでドライな踏み込まない感性には助けられた。

もっとも、ここにいるのはペルソナの素養を持つ者たちということだが、彼らの家族関連のプロフィールには暗い部分があるため、踏み込まないというのは自分たちが他者に踏み込まれたくないという気

持ちの裏返しなのかもしれない。
とはいえ、離脱している荒垣を含めた全メンバーが集まったため、美鶴の携帯にあと少しで寮に到着するという幾月からの連絡が来たタイミングで、後は幾月が来ればいつでも始められるようお茶の用意などをすると全員が作戦室に移動した。
「やあ、遅れてゴメンよ。荒垣君も久しぶりだね。来てくれて嬉しいよ」
「……うっす」
ここを離れて以来会っていなかったため、元気な姿を見れて嬉しいとやってきた幾月は笑顔を向ける。
そんな顔で見られた荒垣は出て行った身だけあって若干気まずそうに会釈し、両者の再会を美鶴と真田はしんみりとした表情で眺めていたが、今日は話すことがあって集まったんだと幾月が何やら楽しそうにしていたことでミーティングが始まった。
「さて、今日集まって貰ったのは連絡していたように大型シャドウについて分かった事があったからなんだ。前回の戦いで真田君たちが気づいたように大型シャドウは満月に来る。これはほぼ確定と思っていいだろう。月の満ち欠けはシャドウたちにも影響があるからね。やつらが満月に現われるのもそういった理由が関係していると見られている」
満月にはシャドウは凶暴化し、逆に新月にはシャドウは大人しくなる。桐条の方でもそれらは研究データとしてはっきりと出ている。
大型シャドウも特殊な存在ではあるがシャドウなので月の満ち欠けによる性質は変わらない。
だからこそ、一ヶ月の間でもっとも凶暴化する満月に現われて暴れているのだろうと見られているが、今回はその話ではないんだと幾月は話を続けた。
「そして、次が新たに分かった情報だ。君たちも知っての通りシャドウはペルソナのように魔術師から刑死者のアルカナに分類される。刈り取る者という例外もあるがその一種を除いて他は全てその条件に当てはまるんだ」

ペルソナと違って魔術師からのスタートだがシャドウにもアルカナが存在する。それぞれのアルカナにはどういった性能に優れているかなどの特徴があるので、相手のアルカナが分かるだけでも作戦をたてるときには有効だ。
「そこでラボの研究者たちは、これまで現われた大型シャドウをどのアルカナに属するか調べたんだ。すると、面白いことに真田君を追って現われたのが魔術師、モノレールのやつが女教皇、先日の二体が女帝と皇帝だったのさ」
順平は二体目から、風花は三体目と四体目からなので詳しい事は知らないが、それでも未だに一体もアルカナが被っていない事は理解出来た。
ただ、それを言われたところで〝シャドウは敵〟という程度でしか認識していない順平は、相手について新しい情報を聞かされても何がすごいのか分からない。
「あー、相手のアルカナが判明したのは分かったッスけど、それが何かあるんスか？　別にアルカナ同士に弱点みたいな優劣ってないですよね？」
「シャドウのアルカナは魔術師から刑死者の十二個。それで現われる大型シャドウがアルカナ順ってことは次の敵は法王で、残る敵はアルカナ的に八体だけってことじゃないかな？」
ソファーの背もたれに背中を預けてだらりと座っていた順平に、風花はこういった事だと思うと優しく説明する。
すると順平もアルカナと現われるシャドウの種類の関係を理解出来たらしく、遅れて「すごいじゃないですか」と驚いた顔を見せた。
そんな素直なリアクションに満足したのか幾月もウンウンと頷き、他の者にも分かりやすく説明してくれた風花を褒めながら話を続ける。
「その通り！　いやぁ、山岸君は飲み込みが早いね。彼女の言った通りでアルカナが判明した事で今後現われる大型シャドウは八体だけとの予測が立てられたんだ。満月の度に大変な思いをする事に変わりはないが、それでも限りがあると分かったのは朗報だろう？」

「前回のように一度に現われるのは二体が限度だとすれば、最短で十月、最長でも来年二月という事ですか。卒業前に終わるのならありがたいですね」
「フッ、それなら二月までもつれ込んだときには、最後の大型シャドウとの戦いを卒業記念マッチと名付けることにしよう」
敵の残数から計算して残る戦いの期間を美鶴が口にすれば、真田も合わせて軽口を叩く。
人は終わりも分からずに作業をさせられれば途中でモチベーションが低下してしまうが、終わりが分かっているとそこまで頑張ろうと思うことが出来る。
真田たちの軽口もそういった部分から余裕が出ての発言だが、これまでの話を黙って聞いていた荒垣が気になることがあると口を開いた。
「一つ聞いていいか。その大型シャドウを全部倒したとして何かあるのか？　俺としては力を持ったシャドウを倒した程度で影時間が終わるとは思えねえ。お前らの言う〝大型シャドウ〟の条件から外れた大型シャドウだって存在するしな」
そう話す荒垣の脳裏に浮かぶのはタルタロスで見た刈り取る者、そして去年美鶴と真田を追い詰めた悪魔のような見た目の変異種だ。
どちらも普通のシャドウより数倍大きく、単純に力と身体の大きさを指して〝大型シャドウ〟と呼称しているなら条件に当てはまっている。
しかし、そんなやつを見たことがない七歌は、どんな敵なんですかと美鶴に尋ねた。
「大型シャドウの条件から外れた大型シャドウってなんですか？」
「君たちが参加する前の話だ。シャドウ反応を見つけた私と明彦が現場に急行すると、刈り取る者に匹敵する力を持ったシャドウがいたんだ。こちらを追い詰めるように動き、本当にシャドウなのか疑わしい知能の高さだった」
「え、そんなやつと二人で戦って勝ったんですか？」
「いや、近くにいて戦闘音を聞きつけた荒垣が来てくれてな。負傷し

た明彦を連れて必死に逃げ延びたという訳だ」
倒した訳ではなくなんとか逃げ延びただけ。ペルソナ使いとしての先輩である美鶴たちで勝てなかったシャドウが存在する事実が二年生たちに大きな衝撃を与える。
敵に襲われ失血で気絶していた真田など、あのときの事を思い出すと悔しさに震えるが、確かにあのときの敵は大型シャドウと呼ぶに相応しい相手であった。
そんな風に当時を覚えている二人から何も反論がなかったことで、荒垣は彼らが自分と同じように敵を大型シャドウと判断していると捉えて話し続ける。
「あのときはタルタロスで見つけたアイテムがなければアキは死んでた。お前らの呼ぶ大型シャドウの他に、刈り取る者もそうだが一定数のイレギュラー大型シャドウとでも呼べるやつが存在する。俺としてはイレギュラー大型シャドウの方が満月に来るやつより強いと思ってるが、そいつらが残ってても大丈夫なのか？」
出現時期も何もかもが不明の存在。刈り取る者はタルタロスに長時間いれば会える。
だが、悪魔のような見た目をした方は完全なイレギュラーであり、機動力も含めて他のシャドウを圧倒している。
そんなやつらが残っていて平和になるなど到底思えないので、大型シャドウを倒して終わりという件に懐疑的な荒垣が幾月からの返答を待っていると、顎に手を当てて考え込んでいた七歌が思い付いた事を呟いた。
「んー、ほぼ出会ってないだけで大型シャドウは元から存在していて、満月に現われる大型シャドウは特殊なんじゃないですか？　こう、何か役割がある的な」
「確かに興味深い話だ。刈り取る者のように大型シャドウというものは最初から存在していて、我々が大型シャドウと呼んでいる存在は真にイレギュラーなシャドウなのかもしれないね」
通常のシャドウと大型シャドウの違いはまだ完全にわかっていない。それ故、幾月は荒垣の問いに完全には答えることが出来なかっ

た。
　しかし、七歌の言ったことはあながち間違いではないのかもしれない。むしろ、その通りなのではと思える部分もあったことで幾月は彼女の言葉のメモを取っていた。
　他の者たちの話を聞きつつそんな姿を眺めていた順平は、自分の正面に置かれた紅茶のカップに手を伸ばして口元に運ぶと、分からないなりに考えていて浮かんだ謎についてポロッと溢した。
「つか、シャドウってなんで存在するんスかね。どっから来たのかも分かんねーし。もしかして宇宙からの侵略者とか？」
「確かにそういった可能性もあるね。だが、残念なことにシャドウがどこから現われたのかも、どういった目的で存在するのかも未だ不明なんだ」
　シャドウは影時間にのみ存在する化け物で、どういう訳だか人の心を食べてしまう。桐条グループでもそんな風にしか分かっていないので、先ほどの荒垣の問い同様に幾月ははっきり答えられない事を詫びつつ分かっている事を話す。
「シャドウは人を襲って心を食べてしまう。だが、それが生物のようにエネルギー摂取のためなのか、ただ敵として人を襲うことが目的なのかも分からなくてね。力を付けて繁殖するのなら随分と偏食だし面倒な生態といえるが、やつらが種としてどんな存在理由を持っているのかは今後の研究に期待するしかない」
　彼らの目的が分かれば研究は一気に進むだろうが、如何せん危険が伴うため直接捕まえて調べる事も難しく、影時間に対応させた研究機材を用意するのも大変だ。
　ラボを今の規模にするにもかなりの費用が掛かっており、それでも調べられていないのが現状である。
「とはいえ、大型シャドウの到来は待ってくれないからね。他の者では対抗することも出来ない以上、申し訳ないが君たちに頑張って貰うしかない。タルタロスの謎の究明もあるし。そちらも併せてよろしく頼むよ」
　ただ、それでも研究ばかりに意識を割いてはいられない。強くなる

大型シャドウとの戦いで子どもたちのリスクを少しでも減らせるよう装備やアイテムの開発も進めなくてはならないし、病院と協力して無気力症患者の保護と治療もやる必要がある。
やることが沢山あるからこそ進行は遅いが、それでも一歩ずつ着実に進まなければならないため、幾月は子どもたちにタルタロスの謎解明を任せつつ、共に頑張っていこうと改めて協力をお願いした。
それに対し、言われなくてもやる気だった者たちは黙って頷いて返し、大人からここまで言って貰えることに感動した者は嬉しそうな笑顔を見せた事で、チームを離れている荒垣には彼らがどこか遠く感じられたのだった。

第二百二十五話　満月の戦いに向けて

６月３０日（火）
影時間――巌戸台分寮・屋上
生温い風が吹き抜ける屋上、そこで一人薙刀を振るう少女がいた。
薙刀は長物であるため振れば遠心力で力を出しやすい。リーチもあるので近接武器では最強の威力を出せる物の一つではあるのだが、その分、間合いの内側に入られてしまったときの対処が重要だった。
拳ならまだしも相手が剣などであれば、自分は満足に武器を振れないのに凶刃を防がなくてはならないのだ。出来ないでは済まないので、七歌はタルタロスに行かない日も一人で武器を振るって距離に関係なく完璧に扱えるよう鍛錬している。
《やあ、精が出るね》
「……ファルロス」
そうして、彼女が一通りの型を終えて一息吐いたとき、背後から声が聞こえて振り返れば少年が立っていた。
囚人服のような白黒のボーダー服に水色の瞳、影時間に馴染みすぎていることもあって不思議な雰囲気だが、少年は七歌が振り返ると笑顔で手を振った。
《今日はどうして来たか分かっているかい？》
「現役ＪＫが運動して汗を掻いてるからね。そういうのに寄ってくる男が一定数いるのは知ってるよ」
《あははっ、確かに運動する女の子はキラキラと輝いて素敵だよね。けど、影時間じゃそれも台無しじゃないかな？》
女子高生の汗の匂いに誘われてやって来た訳ではないが、ファルロスは面白いことを言うねと無垢な笑みを浮かべた。
ファルロスから見れば七歌は十分に魅力的な女性だ。友人にその事を伝えると趣味が悪いと返されたが、順平や真田など彼女の身近な者たちだって〝外見は〟優れていると認めている。
他にも学内の男子や駅前でナンパ目的に彷徨いている者たちも彼女の姿に目を奪われる事があるので、おかしいのは湊の感性であって

ファルロスは至って正常だった。
とはいえ、いくらファルロスでも女の子をデートに誘うシチュエーションは選ぶ。こんな道路や壁に血の染みが浮かび上がっている不気味や世界ではムードも何もない。
よって、デートのお誘いはまた別の機会にでもと言って消えると、ファルロスは屋上の縁に現われて平均台の上を歩くように進みながら続き話した。
《あと一週間で満月だ。今も鍛錬していたけど、他のお友達も含めて準備は出来てるかな？》
「ヒーホー君の抜けた穴は埋められてはいないよ。けど、それぞれが強くなってカバー出来る程度には仕上がってきてる」
準備は進んでいると答えながらも七歌は苦笑する。
最高戦力の抜けた穴は大きい。風花の加入で人数的には変動しておらず、むしろバックアップの能力は向上したが、前線部隊全員が成長してもヒーホーが担っていた戦力分にはまだ及んでいなかった。
メンバー全員の成長を足しても埋められないほど彼女は強かった。最期の一撃など余力を残していた二体の大型シャドウを同時に屠ったほどだ。
あれほどの力を付けるにはどうやって鍛えればいいのか。彼女が誰かのペルソナなら持ち主の心の強さは化け物級だと思ってしまう。
七歌も強くなるためイゴールに言われた通り絆を育んでいるが、古書店の老夫婦との会話は普通に世間話を楽しんでいるだけだし、テニス部で出会った友人たちとも大会を目指して切磋琢磨しているだけだ。
それが本当にペルソナの強さに関係あるのだろうかというのが純粋な疑問であり、この前のミーティングで話題になった大型シャドウの謎も残っている。
その事を思い出した七歌は顔を上げると、影時間の街を眺めていた少年に話しかけた。
「ねえ、ファルロス。貴方は大型シャドウがどういう存在か知ってる？」

《漠然とした質問だね。簡単な答えでよければ強力なシャドウって答えるけど》
「そういうのじゃなくて、大型シャドウには何か役割があるんじゃないかって話。桐条の研究機関で大型シャドウがアルカナ順に現われる事が分かったの。なら、最後の刑死者を倒したら何が起こるのかなって」
　まだラボの方でも研究中で確証は得られていないため、幾月も予想でしかないがと前置きしつつ全ての大型シャドウを倒せば影時間が終わるのではと言っていた。
　満月の度に現われる存在が特殊な役割を持ったシャドウならば、そういった可能性は十分に考えられるだろう。
　ただ、七歌としては荒垣の言っていた事も気になり、全ての大型シャドウが刈り取る者並みならまだしも、最初の魔術師や次の女教皇などはフロアボス程度の強さでしかなかったことで、強さに関係なく一部の大型シャドウだけが特別な役割を持つことなどあるのだろうかとも思っていた。
　それを色々と知っていそうな少年に尋ねれば、少年は腕組みをしながら考え込み、難しい顔をして口を開いた。
《うーん、そうだね。どう伝えれば分かりやすいかな。まず、君たちは影時間を終わらせるために戦ってる。そういう認識でＯＫかい？》
「うん。消せないから当面の脅威から人を守ってるだけだし、根幹の目的はそこだね」
　聞かれて七歌はそうだと頷く。現在シャドウと戦っているのは、あくまで被害拡大を防ぐための一時的な処置であり、実際は影時間を終わらせることこそが目的であった。
　そして、その目的に大型シャドウを倒すことが関係しているのかと聞きたかった訳だが、七歌たちの目的を確認した少年は、なら大丈夫だと再び人懐っこい笑みで答えた。
《そういう事なら大型シャドウと戦うことは間違ってないと思う。最近の無気力症被害の増大も大型シャドウの出現する兆候だから、被害範囲を調べれば出現する場所も絞れるだろうし》

「それは大型シャドウが現われる前に顕現に必要なエネルギーを周囲から集めてるって認識でいいの？」
《うん。ペルソナと一緒でシャドウも肉体を維持するエネルギーはいるからね》
少年から齎された情報に七歌はなるほどと納得しながらも驚いていた。
幾月の話ではシャドウが人の心を喰らう理由が分かっていなかったが、ファルロスのおかげで食事としての意味があることが分かったのだ。
大型シャドウを倒した後に無気力症から回復した者たちが大勢いるので、エネルギーにされた心は吸収して消える訳ではないようだが、何故やつらが人間を狙うのかという謎が解けたのは一歩前進といえた。
「じゃあ、今回みたいに被害者が多いときは敵がそれだけ強いか、もしくは複数の大型シャドウが同時にエネルギー補給をしてるって感じかな？」
《そう考えていいと思うよ》
「そっか。色々と教えてくれてありがとう」
《気にしないで。今はまだ全ては話せないけど、僕も君たちには無事でいて欲しいから》
今日はこれで帰るねと言ってファルロスが消えてゆく。七歌はそんな彼に手を振って見送った。
シャドウが人を狙う理由、次の敵が出現する可能性のあるポイントの見分け方、ファルロスが教えてくれた情報は特別課外活動部にとってとても有益だ。
時間が遅いのでまた後でになるが、学校から帰ってからでも皆に話すことにして、七歌は今日の鍛錬を終えるべく荷物をまとめると屋上を後にした。
7月1日（水）
夜――巌戸台分寮・ロビー
学校に行ってから帰るまでに七歌は最近のニュースや新聞で無気

力症患者について調べた。
美鶴にも連絡して桐条グループの持っている情報も教えて貰ったが、おかげでここ一ヶ月程の無気力症患者の発見されるスポットもいくつか見つかった。
やはり発見場所はタルタロス周辺の港区に限られていて、それが美鶴の言っていたシャドウがこの辺りにしか出没しないという情報の裏付けにも繋がったが、重要なのは発見場所がどこに集中しているかだ。
港区全域に幅広く見つかってはいるものの、ここ一、二週間で何人も立て続けに見つかっている場所があり、先月の患者数の増加と今回の増加数を比較すれば、ほぼ同等かむしろややペースが速いくらいであった。
寮に帰ってからそれらをデータとしてまとめた七歌は全て印刷し、食事を終えたメンバーらをロビーに集めるとお茶の用意をしてから全員に見せることにした。
「これちょっと見て。これが先月の無気力症患者の増加グラフ。で、今回のグラフがこれね。ついでに先々月のもあるけど、これらを比較してみるとあることが分かるよね？」
「んー、なんか毎月増えてるな。つか、先々月から先月にかけて倍近く増えてるし」
「そして、先月と今月はほぼ同じか。いや、むしろ三週間で先月と並んだ今月の方が増える見込みだな」
順平と真田は単純に数値の増加としてグラフを見ている。だが、七歌はその増加の仕方からあることに気づいて欲しいのだ。
誰が最初に気付いてくれるか。そんな事を考えながら仲間たちを眺めていれば、データの管理に慣れている美鶴は七歌がグラフを見せた意図を察したようで、成程と力強く頷くと顔をあげて七歌を称賛した。
「よく気づいたな七歌。これはお手柄だぞ」
「え、桐条先輩これで何か分かったんですか？」
美鶴が気付いたことにゆかりは驚きの声をあげて尋ねる。どうや

ら彼女も順平たちと同じようにデータをただデータとして認識していたらしい。
　もっとも、こればかりは無気力症やそれに関連する情報をどれだけ知識として自分の中に落とせているかが重要になるので、戦闘に関する情報にばかり知識が偏り気味なメンバーならしょうがないのかもしれない。
　元から研究に関わっている美鶴や、リーダーとして様々な情報を頭に叩き込んでいる七歌、そしてバックアップ担当の風花はグラフから理解していたが、分からない人間にも教えておかねば話が進まないので、尋ねられた美鶴が分かっていない者たちに丁寧に教えてやる。
「君たちにも教えたが無気力症はシャドウに心を喰われた者がなる症状だ。つまり、それがそのままシャドウの被害者数と言える。グラフを見れば先々月から一ヶ月で倍に増えたが、街中に現われるイレギュラーシャドウの数はほぼ変わっていない」
　七歌がグラフに加えて付録として付けた書類を手に、美鶴はイレギュラーシャドウの出現数が書かれた部分を指しながら話す。
「では、イレギュラーシャドウの出現以外に二つの月で何か大きな違いがあったか考えてみると、満月に現われるシャドウが一体から二体に増えたことが挙げられる」
「あ、そうか。じゃあこの増えた被害者は大型シャドウに心を食べられてしまったんですね。そして、今月も先月と同じくらいって事は敵が二体の可能性があると」
　ようやく理解出来たとすっきりした顔で話すゆかりに美鶴も頷いて返す。
　今日まで次も二体いるのだろうかと不安な気持ちを抱いていたのだが、最初から二体来る可能性が高いと分かっていれば心の準備も出来るのだ。
　敵のアルカナも既に分かっているため、ペルソナのようにアルカナ毎に見える能力の特徴を念頭に置き、これから一週間で対大型シャドウの作戦を練っていこうと一同は話す。
「確かにこれはお手柄だな。最初から敵が二体いる可能性が高いと分

かっていれば、余計な心配を考えずに済む」
「ああ、先月より被害者が多いのは敵が強くなっているからだろう。強いシャドウほど大食いと考えれば敵は三体ではなく二体と思ってよさそうだ」
先月と今月では被害者は微増という程度でしかない。もしも一体でこの被害を出しているなら驚異的だが、それは考えづらいので敵が強くなった分だけ被害が上乗せされていると読むのが妥当だろう。
次の敵は二体。そう頭に置いてもらったなら次はこれを見て欲しいと七歌は別の書類を出した。それは計三枚の地図で東京、二十三区、港区と段々と拡大されている形だ。
「次の敵が二体の可能性が高い事は分かってもらえたなら、さらにもう一つ見てもらいたいの。これは発見された被害者の分布。一応、広い範囲と拡大版で三種類あるけど一番拡大してる巌戸台のが重要かな」
「こうして見ると東京でも港区しか被害者出てないんだね」
「うん。でも、まだ港区だけって可能性もあるから安心は出来ないと思うけど」
「その辺りは私たちの頑張り次第だな。敵がタルタロス周辺に留まっているうちに倒していくしかない」
地図上に赤いマーカーでこれまでの被害者を、黄色いマーカーで今月の被害者の発見場所を記しているが、そのポイントは二十三区の港区に集中していて、もっと言えば巌戸台などタルタロスに近い場所にばかりといった感じだった。
これはこれで重要なデータではあるが、その中でも今注目すべきはこの部分だろうと真田が最も拡大された地図の一部を指さした。
「それより今はこっちだろう。九頭龍の言う通り港区でも巌戸台周辺に集中しているが、今回は特に白河通りで多く発見されているな」
「あー、なんか二人組も見つかったとかってニュースでやってましたね。カップルで無気力症なんて可哀想だなって思ってたけど、そういう場所だから一緒に襲われたって訳ね」
真田の指さした場所には黄色いマーカーが集中している。それは

白河通りという場所のようだが、残念ながら七歌はまだこちらの地理を完全には把握しきれていない。
　よって、順平がカップルの無気力症被害者が発見されていた事に納得しているのか分からず、その辺りがどういう場所なのかを尋ねた。
「ゴメン、私は単純に次の大型シャドウの出現ポイントを絞るためにデータを出しただけだから、この辺りの土地には詳しくないんだけど、白河通りってカップルのデートコース的な感じ？」
「まぁ、大人のカップルのデートコースには入るかもな。ぶっちゃけるとラブホ街なんだよ。その辺りに集中してるっつーか」
「あぁ、そういう事ね」
　そういう裏事情があるのなら思わず納得だと七歌は苦笑する。
　全員が真っ当な関係とは言い切れないだろうが、少なくとも一緒にホテルに入るくらいには深い関係になっているのだろう。
　そんな相手を狙うシャドウの趣味を疑うところではあるが、何にせよ今回の七歌が持ってきたデータは今後の作戦で非常に役に立つと美鶴は改めて讃え、他の仲間たちにもこれを活かしていこうと話す。
「おっほん……まぁ、何はともあれ七歌の見つけてくれた情報は非常に有益なものだ。敵の数、そして出現する範囲をある程度まで絞れたのだからな」
「ああ、それを基に今から作戦を練るなら、タルタロスで予行練習することも出来る。前回のような事にはならないだろう」
　今までは大型シャドウに振り回される形だったが、相手の出現周期に気付き、さらに現われる個体数とエリアも今回のことで絞れるようになった。
　入念に準備して今度は圧倒的な勝利を収めてやると真田が獰猛に笑えば、他の者にもその熱が移ったように瞳に力が宿る。
「てか、よく桐条グループの研究員が気付いてない事に気付けたよね。七歌ってそういう分析とか得意なの？」
「ま、わりと得意かな。ただ、今回のやつはシャドウの研究と無気力症の研究がバラバラにされてたのが原因だと思う。警察と医者じゃなくて犯罪心理学者が必要だったみたいな？」

「シャドウの研究は警察というより生物学者だが例えとしては分かりやすいな。被害者のいる場所に襲ったシャドウがいるという逆転の発想は、それぞれを別に研究していては確かに気付きづらい。一歩離れて二つを見れば簡単に気付けるというのに」
新しく入った風花は別だが、メンバーたちはまだヒーホーの死を引き摺っているのだ。
もう二度と仲間を失ったりしない。消えたヒーホーの分まで自分が戦う。全員がそのように心に決めているからこそ以前にも増して結束が高まっている。
後は自分たちの実力と状況に応じた作戦が重要になってくるが、次の満月に大型シャドウが現われるであろうエリアの地図を見ていた順平は、顔を上げると実際に戦うことになる場所が屋内なのではと皆に伝えた。
「つか、そうすっと次は屋内での戦闘も十分考えられるよな。モノレールに出たりタルタロスのエントランスに入ってきたりもしたから」
「ああ、十分あり得る話だな。やつらが建物の中に入れるサイズとは思えないが安心は出来ない」
順平の言葉に真田も頷いて返す。大型シャドウのサイズで建物に入れるとは思えないが、壊しながら来ればそんな問題は簡単に消える。
よって、屋内戦闘を想定しておかなければならないため、順平は最初にどれだけの広さがあるのかを把握しておこうと他の者に尋ねた。
「なぁゆかりっち、ホテルとかって戦えるだけの広さとかあんの？廊下とか部屋の広さもホテル毎には違うんだろうけど、こう平均としてさ？」
「んー、戦えるだけの広さっていうとどうだろう。寮と似た感じのワンルームに大きなベッドがあってトイレとお風呂付きって感じだから、正直ペルソナを出してバンバン戦うのは難しいかなぁ」
「ホテルによってはマッサージチェアとかカラオケの機械もあるし、動きづらさとか同士討ちを考えると飛び道具のゆかりちゃんも難し

いよね」
「あー、だね。てか、どう考えても部屋の中の物を壊さずに大型シャドウと戦えるとは思えないけど」
聞かれたゆかりは記憶を頼りに広さを説明した。それに補足するよう風花も付け加えたので、話を聞いていた他の者たちも頭の中で大体思い浮かべられただろう。
狭い場所での単純な戦闘の難しさだけでなく、仲間にも攻撃が当たる危険性を考慮すると次の作戦当日ゆかりは風花の護衛に回るべきかもしれない。
中学からの友人である少女二人がそうやって話していれば、いつの間にか他の者たちは黙っており、その事に気付いたゆかりと風花がどうしたのかと首を傾げたタイミングで、若干気まずそうな順平が直前の質問は半分冗談だったとカミングアウトしてきた。
「えっとぉ……正直、ラブホの中なんて知る訳ないってツッコミが返ってくると思ってたんだけどな。そっか、ゆかりっちだけじゃなく風花も行ったことあんのかぁ……」
どこか遠い場所を見つめる順平に言われ、己の失言を理解したゆかりは顔を一瞬青くさせるとすぐ真っ赤になって直前の言葉は嘘でしたと苦しい言い訳を始める。
「ちょっ、ちがっ、今のなし！」
聞いた全員が「それは無理だろ……」と心の中で思う。言った本人と恥ずかしさで顔を真っ赤にして俯いている風花も思っているのだ。これで誤魔化せれば奇跡である。
次の戦いに向けて話していたので、真面目に受け取って答えてしまった訳だが、ゆかりも風花も男子に自分たちが経験済みだとバレたことで頭を抱えてしまい。そのせいでその後しばらく作戦会議が中断したことを順平が三年生から責められたのは言うまでもない事である。

深夜――巌戸台・某所
影時間も終わり世間が寝静まっている頃、とある施設の地下でひっ

そりと作業する男の姿があった。
パソコンのキーを叩く音だけが部屋に響き、男はキーを叩きながら時折視線をある物へと向ける。
それはまるで首無しの騎士のような存在だった。頭のない西洋の騎士鎧が鎖に縛られていて、傍から見ても何が行なわれているのか分からない状況になっている。
だが、分かる者が見れば一目で分かっただろう。動きを封じられているのは複数のシャドウを混ぜた複合シャドウで、それを縛る鎖はシャドウやペルソナの力を封印するためのものであると。
「……大型シャドウは最初から存在する、か。荒垣君も九頭龍君も良いことを言ってくれるじゃないか」
作業していた男はふと視線を壁際のカレンダーに移すと、七月七日を見て楽しげに口元を歪めながら騎士鎧のシャドウの調整を進める。
男の見た七月七日は丁度次の満月の日だ。七歌たちはその日に大型シャドウと戦う予定であり、湊も湊で何かしらの動きを見せる。
それが分かっていて敢えて何かするつもりなのか、男は目的の日に間に合わせるためシャドウの最終調整を進めるのだった。

第二百二十六話　前篇　七夕マッチ―二つの反応―

7月7日（火）
影時間――港区オフィス街
それはただ歩いていた。
世界から生き物たちの気配が消え、ただ化け物だけが跋扈する隠れた時間の中で、カチャリカチャリと金属同士がぶつかる音をたてながら。
二車線のセンターラインを踏みながら歩くそれの向かう先には、はぐれシャドウだろう皇帝〝黄金蟲〟が佇んでいた。
このままいけば二体はぶつかる。黄金蟲もやってきた相手が人間でないため気にせず背中を向けるが、歩いてきたそれは黄金蟲の許までゆくと右手に黒い影を纏わせハルバートを呼び出した。
呼び出した武器の全長は七メートルを軽く超える。持っている者が頭を抜いて四メートルを越す背丈なのだ。それならば武器の長大さも頷けるというもの。
くすんだ鉄色のハルバートを手に持ったそれは、黄金蟲の背後で武器を振り上げると真っ直ぐ鋭い剣筋で武器を振り下ろした。
いくら硬い甲殻を持っていようと翅同士が丁度ぶつかる繋ぎ目を狙われると脆い。構造上翅は広げられるようになっているので、僅かなずれもなく翅同士の触れ合う線を通った刃はほとんど抵抗もなく黄金蟲を切り裂いた。
身体の後ろ半分が斬られて潰れた黄金蟲は、傷口からまるで血を流すように黒い靄を漏れ出している。
このまま放置すれば五分もせずに影になって消えてゆくだろう。だが、黄金蟲を倒したそれは手のハルバートを消すと半分潰れた黄金蟲を持ち上げた。
持ち上げられた黄金蟲は死にかけとはいえまだ生きている。よって弱々しくも無事な前脚を動かして抵抗しているが、持ち上げた者は黄金蟲の傷口を頭部の載っていない首に近づけ、黄金蟲から流れ出る黒い靄を己の内に取り込み始める。

徐々に存在を失いつつある黄金蟲だったその靄を取り込む光景は、まるでシャドウの捕食行動のようだ。
いや、事実それは捕食行動なのかもしれない。人の心を食べると言われるシャドウだが、それらもある程度の知能があれば他の個体の吸収ではなく食事という形でエネルギーを補給出来る。
今回は補給する対象がシャドウなので吸収と同じ結果だが、だとしてもシャドウが食べるために他の存在を襲ったという事実は消えない。
力を全て吸収されたことで黄金蟲も消滅し、食事を終えたそれも再び歩き出す。
徘徊するそれに特定の目的などないが、己の進行を妨げるモノがあれば再び武器を手にするだろう。それがどんな相手であっても。

――巌戸台分寮・作戦室
大型シャドウの出現パターン等、色々と判明した事で事前に準備をして過ごしていると満月の日がやってきた。
作戦室には既に装備を整えたメンバーたちと幾月が集まっている。
ある程度の場所は分かっているのですぐに向かってもいいのだが、一応はこちらで場所を探っておこうと現在風花が索敵をしていた。
「……見つけました。やっぱり白河通りに現われたみたいです」
「フッ、これで九頭龍の予想が正しかったと証明されたな」
「ああ、今後はグループの方でも被害者の発見場所のデータを詳細に取っておくよう伝えよう」
風花の言葉で思わず笑みを浮かべた真田と美鶴が会話する。
他の者たちもそれを聞いて頷いているが、やはり事前に敵の現われる場所が判明していた方が作戦日当日も索敵してから現場に向かうまでの時間的ロスが少なく済む。
影時間はおよそ一時間しかないのだから、現場急行までの時間を減らせば減らす程戦いに余裕を持てるのだ。
七歌の発見によって余裕が出来たこともあり、皆の安全性が上がるのなら良かったと幾月もホッと安堵する。

「いやぁ、今回はこれまでより準備に時間もかけていたようだし、今までよりしっかりと対策を練って戦えそうだね。九頭龍君のおかげかな」
「ふふーん、特別賞与をくれてもいいんですよ！」
「ははっ、確かにそれくらいの成果だからね。今日の作戦が終わってからになるが期待してくれて構わないよ」
七歌たちは無償で危険な活動を行なっている訳ではない。危険手当と実績に応じた報酬を桐条グループから支払われている。
ただ、それも多いに越したことはないので、七歌はファルロスから聞いたのが切っ掛けであっても今回の発見の功績に応じたボーナスを強請ったという訳だ。
ボーナスの件を幾月が認めたことで七歌がガッツポーズし、それを他のメンバーが笑っていると一段落したところで順平がシャドウの話に戻るけどと言って風花に一つ尋ねた。
「風花、シャドウの反応が何体あるかも分かんのか？」
「うーん、今はちょっと一体しか見つからないです。反応が大きいから同じ場所に潜伏してる可能性もあるんだけど……あれ？」
ペルソナの中に入って目を閉じて探っていた風花だが、彼女は別に現場の光景がしっかりと見えている訳ではない。
探知型のペルソナ持ちにはそういったタイプもいて、風花自身もソナーのように状況を把握する自分の能力より精度はそちらが上だと思っている。
それでも変化する状況をリアルタイムで把握する事は出来るため、大きな反応なのか複数の反応が重なって大きく見えているのかは不明だが、白河通りの反応は動いていないと断言した。
他の者たちはそれを聞いて目的地が決まったと出発の準備を始める。だが、少し待って欲しいと敵の居場所を探っていた風花はそのままペルソナの中で何やら難しい表情をした。
「山岸、どうかしたのか？」
敵の居場所が判明しても出てこない風花に美鶴が声をかける。
時間は限られているので現場には出来るだけ早く向かいたいのだ

が、これまで美鶴もチームのバックアップを担当していたので、何か気になる反応でもあったのだろうかと尋ねたのだ。
　声を掛けられた風花はそれに反応して顔を上げるとペルソナを解除し、立ち上がって他の者たちと目線の高さをほぼ同じにすると美鶴に返事をした。
「あ、はい。もう一体の反応が見つかったんですが、白河通りから場所が離れてるんです」
「なんだと？」
　風花の言葉に全員が驚いた顔をする。
　これまでの傾向から白河通りの反応を見つけるまでは七歌のデータ通りだったのだ。
　それがまさか別の反応まであるとはどういう事だと思いつつ、離れた場所では対処が間に合わないのではと現実的な問題も発生し、すぐに出撃する訳にはいかないなと手に持った武器を置いて再び全員が話し合う。
「敵が二体という予測は正しかったが場所が離れているとは……」
「白河通りの大きい反応の方は動いていません。もう一体の街中にいる方は移動しているみたいですがどうしますか？」
　問題は別々の場所で反応が確認された事だけではない。街中の方で反応が確認された事で敵が二体と判明したのはいいが、だとすると白河通りの反応が大過ぎるのだ。
　反応が大きい理由として考えられるのは二つ。一つは相手がこれまでの大型シャドウよりも強大であること。もう一つは当初の予想通りに二体の大型シャドウが存在するパターンだ。
　前者は前者で難しいが、これで後者だとすると大型シャドウが三体も現われてしまったという事になる。
　先月よりも被害者の人数が少し増えた程度なので、三体でそれなら一体一体の強さはそれほどではないのかもしれない。
　現場の状況が分からないためそんな風に美鶴が考えていると、同じように考え込んでいた七歌が考えてばかりもいられないので、「とりあえず」とリーダーとしての意見を先に口にした。

「先に言っておくと二手に分かれるのは反対です。大型シャドウ相手のそういった訓練はしていませんし、風花のバックアップも十全に出来ない可能性が高い。となると、個人的には動いていない方を先に倒して、残りの時間で移動している方を叩くべきかと」
「ふむ、確かにその方が確実か。ただ、時間内に倒せなかった場合どうなるのかが不明という点がな……」
　美鶴としても確実性を考えると七歌の意見に近いことを考えていた。そのため七歌の決定には一切反対する気はないのだが、敵を討ち漏らした場合に被害者がどうなるかが気になると幾月に意見を求めた。
「大型シャドウを倒した後に被害者が無気力症から回復するケースが多数見られている。食べた心を吸収するまでに時間がかかるのかもしれないが、研究者としてはそちらのタイムリミットがどれだけあるかが問題だね」
「ちなみに、そのリミットを超えたら？」
「あくまでそう見られているだけだが、感情の起伏がなくなったりなどの後遺症が残るかもしれない。大型シャドウを倒したとしてもだ」
　それを聞くとメンバーたちは途端に難しい表情になる。これまで少なからず自分たちの活動によって街の人々を守れてきたという自負があった。
　しかし、ここでの決断とこれから向かう戦いの結果によっては自分たちの力不足で人々を助けられないかもしれないのだ。
　別にそれで誰かが責める訳ではないだろうが、助けられる可能性があったという事実に自分で自分を責めることになるだろう。
　幾月は悩む子どもたちに言葉を掛けようとするも何も出来ない自分が言っても気休めにもならないだろうと止め、彼女たちがどんな決断を下すのかを見守った。
　そして、感覚的には数十分が経過したのではと思えるような沈黙が場に降りると、実際には一分経過したところでバッと顔をあげた七歌がそれを破った。
「……先に言った通り今から全力で白河通りの敵を撃破、残った時間

で可能なら街中の方へ向かいます。ただ、最悪街中の方は捨てます。満月を過ぎた場合に大型シャドウがどうなるか分からないけど、明日も出るかもしれないし。そうじゃなくても次の満月にはまた出るだろうから、逃した場合はそっちで優先的に倒しましょう」

次回に持ち越すことになるが焦って一体も倒せない方がマズイ。故に、ここからは白河通りの方に集中して作戦に望む方針で行く。

街中の方を捨てると言ったときには真田が悔しそうな顔を見せたが、彼もこれから向かう敵の反応の大きさから簡単にはいかないと理解しているため反対はしなかった。

もっとも、被害者のためにも出来るなら街中の方も倒したいという気持ちが強いのだろう。方針を決めるとすぐに準備をして彼は下へと降りていった。それに続くように他の者たちも準備を整えると幾月に見送られて現場へと急行した。

――白河通り

「ここか、山岸」

「はい。反応はこのホテルの中、最上階から感じます」

寮を出た特別課外活動部のメンバーは現場に急行すると、反応があるというホテルの前にやってきていた。

看板にはフランス語で『シャン・ド・フルール』と書かれており、それは『お花畑』を意味している。

ここでどんな花が咲き乱れるのかは分からないが、そんな事は今はどうでもいいと薙刀を片手にホテル最上階の方を見ていた七歌が口を開いた。

「風花、ゆかり、変な意味じゃなく純粋に作戦の関係で聞くけど、ここを利用した事は？」

彼女が知りたいのは内部を正確に把握しているかどうかだ。全ての部屋を利用した事があるとは思わないが、いくつかでも知っているのなら部屋の配置や広さについて詳しく指示が貰える。

よって、以前の順平とは違って本当に作戦のために知りたいのだと訊けば、二人は恥ずかしそうに俯きながらも頷いて返した。

「じゃあ、バックアップは安心だね。ゆかりは風花の護衛、他の三人は

私と一緒に突っ込むよ」
「……シンジがあっちに向かってくれていると良いんだがな」
「確かに荒垣も大型シャドウの襲来周期を知ったが難しいだろう。先月も大型シャドウに辿り着けていなかったし、山岸が伝えでもしないと敵の居場所も分からないはずだ」
準備運動をしながらリーダーの指示に頷いて返した真田が呟けば、美鶴も確かにそれならありがたいのだがと苦笑する。
彼一人で倒せるとは思わないが足止めだけでもしてくれているとありがたい。そう思って彼がもう一体の大型シャドウの方へ向かっていることを祈ったのだが、ここであることを思い付いた順平が閃いたという顔をして声をあげた。
「あ、なら風花から荒垣先輩に連絡すればいいんじゃねーの？　あの人なら多分また路地裏とかにいるだろうし」
「え、あ、そうですね。見つかるか分からないけど連絡が出来るようならしてみます」
以前から知っているので荒垣の場所くらいなら時間をかければ探せる。そして、影時間の適性を持っている相手なので、この時間でも問題なく通信することが可能だろう。
けれど、風花は前線部隊のバックアップをしながら出来るかは分からないと歯切れの悪い返事をしつつ、それでも良いならと荒垣を探すことを了承した。
これから戦いに向かう者たちはたったそれだけの事でも悩みが晴れたのか、街中のシャドウへの迷いを吹っ切ってホテルに向かってゆく。
「よっし、じゃあ行くよ！」
『了解！』
武器を持った四人は風花とゆかりを入り口に残し、駆け足で中に入ると最上階の部屋を目指していった。
四人が中に入った時点で風花もペルソナを召喚して指示を送り出す。それが既に小さな戦いが始まっている証だが、戦闘中でないタイミングを見計らって隣に立っていたゆかりが風花に話しかけた。

「……風花、こっからでも連絡取れるって言ったよね？　なら、探して欲しい人いるの。多分、街中で一番大きな反応だから広く探せば見つかると思う」
「えっと、荒垣先輩じゃなくて？」
「うん。荒垣先輩よりそっちの方が確実だと思うし」
　こちらでの会話は中のメンバーには伝わっていない。最初にゆかりが内緒だというジェスチャーをしたことで、風花がバックアップのとき以外は意図的に音声を切っているからだが、荒垣以外に誰か味方がいるのだろうかと風花は首を傾げた。
　他のメンバーに秘密という事は相手を知っているのはゆかりだけなのだろう。そして、知り合いだというのに味方ではない存在。
　そんな事を考えて風花はある一人の存在に行き当たり、街中で一番大きな反応というのも確かにそうだと思えたことで、ゆかりも彼のことを知っていたのかと尋ねた。
「あの、もしかして、ゆかりちゃんが言ってるのって……」
「……風花も知ってたの？」
「その……うん。内緒にしてたけど閉じ込められた日に助けてくれて、しばらく考える時間が必要だろうって匿ってくれてたの。先月の満月にタルタロスにいたのは、ゆかりちゃんたちの動きを把握してそれに合わせて送ってくれたからで」
　風花はてっきり桐条側はこの時間における彼の事を知らないのだと思っていた。
　けれど、ゆかりはしっかりと知っていて他の者にも黙っていたらしい。
　ならば、強くは口止めされていないので、あの日のことも教えても構わないだろうと判断して自分が知っている理由を伝えた。
　それを聞いたゆかりは以前彼が見せた反応の理由に合点がいったらしく、ならちゃんと教えておけよと呆れ混じりの深い溜息を吐いた。
「はぁ……だからお見舞いの連絡もしないで良いって言ってたのか」
「その、ゴメンね。秘密にしてて」

「ああ、大丈夫。有里君が秘密にしておけって言ってただけだろうし」
心配してくれていた友人に対し、風花が自分から秘密にしていたとは思えない。
なら、その裏にはあの青年がいたのだろうと簡単に想像がついたため、ゆかりは笑顔で気にしないでと返し、同じ青年を知る風花に彼への連絡を頼んだ。
「じゃあ、出来たらでいいから有里君に連絡してくれる？」
「うん、やってみるね」
――街中
それは街の中を進んでいた。どこで見つけたのかアメリカンバイクに跨がり、大して広くもない二車線の道路を一三〇キロで走行する。
完璧な速度超過だが違反を切る警察は現在黒い棺桶のオブジェになってお休み中だ。
故に、誰に止められることもなく影時間の生温い風を肩で切り、コーナーでは倒した車体と道路の間で火花を散らせていれば、最速の名を欲しいままにしている者を追ってくる影がやってきた。
グングンと後ろから距離を詰めてきたのは一台のバイク。先を走っているハーレーとは車種もタイプも異なるがサイズだけならためを張るＶＭＡＸだ。
その黒いＶＭＡＸに跨がるのは黒いコートに黒いフルフェイスを被った全身黒ずくめの男。
頭部がないというのにミラーで追跡者の存在を感知したシャドウは、追いつかれる事を嫌ったのはアクセルをさらに回すと加速してゆく。
「……生意気だな。贋物が」
バイクに乗ったシャドウを追ってやってきたＶＭＡＸの持ち主は、ハーレーの出す速度じゃないだろうと呆れつつ、速度が上がれば暴れてくるバイクを制御しているシャドウの腕を認めながらも存在は認めないと吐き捨てる。
直線ならまだしも停止している車という障害物やカーブのある街

中では、普通の人間はハーレーで一三〇キロなど出そうとは思わない。
そんな事をすればすぐに制御しきれなくなって何かにぶつかるからだ。
しかし、人間には不可能でもシャドウならパワーもあるので人の限界の先を行くことが出来る。その結果が先をゆくバイクの走りという訳だが、徐々に差を詰めてゆく後続のバイクは前をいくシャドウの正体に気付いていた。
《前に見た複合シャドウと別タイプみたいだね》
「ああ、アルカナは皇帝だな」
バイクで走る青年の傍に霊体で現われた少年は、前にいるシャドウは大型シャドウではないと口にする。
それに頷いて返した青年もアルカナ自体が違うからなと言って、さらにアクセルを回して距離を詰めた。
今回、湊も最初は白河通りの方へ向かおうと思っていた。前回七歌たちにミスがあったので倒すことに失敗した際に尻拭いをしようと思っての判断だが、そこへ向かう途中でもう一つ大型シャドウクラスの反応を感知したことで、湊は特別課外活動部と別の反応の許へ向かったのだ。
結果的にそれは正解で、仮に七歌たちが来ていればバイクに乗ったシャドウに追いつくことも難しかっただろう。
速度が速度だけに先回りも厳しく、やはり同じ移動手段を持った湊が適任であることは間違いなかった。
《それでどうやって追いつくんだい？　バイクをやめて空からもありだと思うけど》
一緒にいるファルロスはまずは追いつく必要があるねと言って、バイクで追いつく算段を青年に尋ねる。
彼の乗るバイクは怪物級のエンジンを積んだカスタム車なので、まだまだ限界の半分も速度を出してはいない。
よって、ここから全力でぶん回せば追いつくことは簡単に出来るはずだ。

しかし、相手はシャドウでシャドウが支配した場合、バイク本来の性能を無視したレベルの性能変化が生じる可能性も十分に考えられる。
ペルソナを使って空から追えば無駄に張り合うこともなく済むが、バイクを追うときは同じようにバイクで追う方が楽だったりするのだ。
そのため青年がどっちを選ぶのか答えを待っていれば、青年はギアを上げて加速することで答えた。
《おっと、これは予想外だ……》
さらに加速したことで敵の背中が近付いてきた。これなら追いつくまでにそう時間はかからないだろうとファルロスが安心した時だ。
なんと前を走るバイクに乗っていたシャドウがバイクごと黒い靄に覆われ、それが治まるとバイクの見た目に変化が生じていた。
基本的な部分は変わっていないが、前輪のあたりから前方に向けてドリル回転する二本の槍が突き出し、後輪も真横に向かって二十センチほどのトゲが突き出している。
突然の悪趣味極まりない改造には思わず呆れるが、前方にいる敵はただバイクが変化しただけでなく、なんと変化後はバイク自体の方からもシャドウ反応が出ているのだ。
これではまるで普通のバイクがシャドウになってしまったようだが、敵をアナライズしていた湊は何が起きたのか理解したようで、ファルロスに敵が何をしたのか説明した。
「……分かったぞファルロス。敵は自分の一部をシャドウに戻してバイクに融合させたんだ」
《シャドウに戻す？　取り込んでいた力をそんな風に切り離せるなんて知らなかったよ》
シャドウとは思えないほど器用な力の使い方にファルロスも舌を巻く。
相手はデスの劣化模造品とも言える、複数のシャドウを混ぜて作られた大型シャドウもどきだ。
それが自分の力を削ってでもマシンの強化を行なうなど、余程湊に

走りで負けたくないのかもしれない。
強化されたシャドウバイクは一気に加速して詰められた距離を離しにくる。それに気付いた湊が合わせて加速することで両者譲らず街中での二〇〇キロオーバーのレースが始まった。
影時間で停止している車を避けながら二台のバイクが疾走する。ヒュウヒュウ、と流れる風が五月蝿いくらいに主張してくるが、そんな事を気にしていれば一瞬で過ぎ去ってゆく景色に自分も取り残されることになる。
そんな事は御免だと、現在追う形になっている湊は敵との距離をどのタイミングで詰めるかを考えつつ、冷静にマシンを制御して車体を地面すれすれまで倒してコーナーリングしながら敵の戦力を分析していた。
相手のメインは乗っている方のシャドウ。アルカナは皇帝で名前はリッター。
対してバイクに融合させるため切り離された方は、アルカナが戦車で名前はライダー。
普通は乗っている方がライダーではないのかとも思ったが、細かな部分などどうでもいいと湊はカーブでスピードのロスを極限まで減らして僅かに差を詰める。
すると、差を詰められたからかライダーの方がスキルを使ったのか光に包まれ加速した。一瞬なんのスキルを使ったんだと疑問に思ったが、よく考えれば単純に速度を上げられるスクカジャに違いない。
これはこれで面倒だなとは思ったが、スクカジャの加速で離れてしまった分だけアクセルを強めに回して湊は距離が開くことを防いだ。
「……あの突き出てる槍が地味に風を流す効果を生んでいるな」
五月蝿い風の音に、強くなる車体の振動、さらに避けることに失敗すればぺしゃんこになる危険なレースの最中だというのに、湊は敵を観察して相手が性能以上の走りを見せる理由を探っていた。
見ていると敵のバイクは最初よりも車体の振動が大人しくなっており、さらに詳しく見ればその理由が突き出た二本の槍が空気を上手く流して抵抗を減らしているからだと分かった。

空気の抵抗というのは馬鹿に出来ないもので、抵抗が強ければその分だけ前に進もうとするパワーを削られてることになり、自分が思っているレベルの加速が生まれなくなる。
その点で言えば上手く抵抗を減らしている敵の方が加速出来るのだが、純粋なエンジンのパワーなら負けないと湊は敵の真っ直ぐ後方につけて、スリップストリームも利用した加速でグングンと差を縮める。
シャドウバイクとなったマシンと搭乗者のシャドウの身体が大きいため、かなりの距離があっても湊はスリップストリームを生み出す空間に入り込むことが出来た。
おかげで段々と背中は近付いていき、残り八メートルという一般的な車間距離を無視した距離につけることが出来ている。
ここからどうやって敵を追い詰めて倒すかが重要なのだが、それを考えようとしていた湊の視線の先でリッターが手に黒い靄を纏わせるなりハルバートを出現させていた。
「何が狙いだ？」
高速のレースをしている最中にそんなバランスを崩しかねない物を持つなど、自殺志願するようなものだ。
それでも出したからには何かをするのだろうが、湊は敵がいつそのハルバートを使うのか警戒していたせいで、バイクのシャドウが不意打ちで仕掛けてきた攻撃への対処が遅れた。
「っ!?」
敵のバイクが光ったと思った次の瞬間に後方に向けて発射される火球。それらは全て湊がこれから通過する道路に着弾し爆発を起こした。
次の瞬間には湊はそこにバイクで突っ込み、ブレーキも間に合わずバイクごと吹き飛ばされる。
普通に生活していれば、時速二〇〇キロで走っていた状態で吹き飛ぶなど想像もつかないだろう。
それは湊も同じで、吹き飛び空中で回転している間はどの方向に空があるかなどと考えていた。

だが、そんな考えている時間もすぐに終わりが来て、湊は近くのビルの前に広がる植え込みに向かって落下し、そのまま勢いを殺せず転がりビルの壁に衝突する。
一般人ならばその時点で全身の至るところに骨折や裂傷を負って死んでいるところだが、湊の着ているコートは普段マフラーになっているマジックアイテムで、ロケットランチャーが直撃しても身を守れるほど衝撃を吸収する素材であった。
そのおかげで植え込みを転がってもほぼ無傷で済み、湊は落下の衝撃で割れたヘルメットのシールド越しに自分が吹き飛ばされてきた方向を見た。
「――――――」
途端、視界を占める大型のバイク。
湊が吹き飛ばされたのと同じように、乗っていたバイクも爆発で同じ方向へと吹き飛んでいたのだ。
バイクが迫ってきていても、植え込みの中を転がってビルの壁に叩き付けられた直後の湊は動けず、そのまま衝撃が来るまでジッとバイクを見つめていた。
そして、一秒後にはバイクはまず湊の首の辺りに衝突し、衝撃を吸収するコートに守られていない首の骨を簡単にへし折った。ゴキリッ、となんとも嫌な音が響いたかと思えば、続けてバイクは頭部を下敷きにするようビルにぶつかって停止する。
壊れたまま倒れたバイクの下からは、土がすぐには吸収しきれないおびただしい量の血が広がってゆくが、青年の方に動きはなくピクリとも動かない。
何せ背骨が折れた時点で即死だったのだ。さらに頭部が超重量のバイクの下敷きになっていることもあり、これで何事もなかったかのように動けるはずがなかった。
バイクに融合したままスキルを放つという青年の予想外の攻撃をしかけたシャドウたちは、スキルを放った後も一切スピードを弛めず既に現場を去っている。
そうして、後には冷たくなった青年とその愛車だけが残されること

となった。

第二百二十七話　後篇　七夕マッチ―異変の予兆―

影時間――ＥＰ社研究所

満月の日、前線には出ないからとＥＰ社の方で実験の手伝いをしていたラビリスは、突然巨大な気配を感じて急いで建物の外に出た。

後からコロマルや簡易補整機の指輪を付けた研究員たちもやってくるが、外に出て空を見上げた全員が驚きのあまり声を失った。

「な、なんで……」

彼女たちの目に映ったのは港区上空を覆う程巨大な何か。

龍か蛇か、その顔を見ることは出来ないので判断に迷うが、実体を持った骨を半透明な爬虫類の身体で覆った何かが港区上空で蠢いていた。

他の者たちはそれが何か分からない。ただ、港区と中央区の境界あたりにあるＥＰ社にいても、その巨大な何かが放つ重力波を受けて身体が重かった。

離れた場所にいてもこれほどの影響力があるのなら、直下の街にいる者たちの被害はどれほどになるか分からない。

暴れれば被害規模がどうなるか不明だが、幸いなことに巨大な何かはずっと港区上空に対空したまま移動しておらず、現状はただ身体への負担が増す程度で済んでいた。

ただ、かつて同じ物を見たことがあるただ一人の少女だけは、他の者とは違う感情でそれを見ていた。

「い、行かな。急いであれの真下に行かんとっ」

「は？　ちょっと、ラビリスちゃんそれ本気？」

急に何を言い出しているのかとシャロンが心配そうに少女を見つめる。

それはそうだろう。シャドウやペルソナという超常の存在を研究するようになった者でも、上空にいる存在がそれらとは一線を画す化け物であることは一目で分かるのだ。

ただ現れただけで重力波という影響が外界に出ている。近付くにつれ重力波の効果は強くなるに違いない。

それだけでも危険なのだが、さらに化け物が何もしないとは限らないのだ。
何重にも重なるようにうねりながらでも街を覆える程の巨体が落ちてくるだけで、二十三区の何割かは壊滅するだろう。
ただの物理的な力だけでそれなら、他のペルソナやシャドウのようにスキルを放てば被害規模は想像もつかない。
いくら戦う力を持っているといえど、子どもをそんな危険な存在のいる場所に行かせることは出来ないとシャロンが腕を掴めば、ラビリスはそれを振り払って泣きそうな顔で叫んだ。
「あれは湊君と繋がっとる神様の力なんよ！　前に封印が解けかかったときはもっとあやふやな状態やったのに、今は完全に骨格が具現化して身体まで具現化しかけとる。何があったんか分からんけど、あれが完全に出る前に止めんと湊君も街も無くなってまう！」
ラビリスが上空のそれを見たのは去年の九月。ムーンライトブリッジで桐条への怒りが呼び水となり、湊が押さえ込もうとしても神の力が顕現しかけた。
今回の出現は当時よりもさらに具現化が進んでおり、完全に肉体が構築されていないとしても湊の意識はほとんど残っていないと思われる。
青年から聞いた説明では直前の感情を基に神への命令が下されるので、仮に彼が敵を滅ぼすと願っていれば神の力によって敵ごと街を消し飛ばしかねない。
敵を倒すために街ごと破壊するならば分かるが、敵を倒す余波で街が破壊されるだなどと誰が思うだろうか。
だが、遠く離れた場所にまで力の影響が出ている以上、見ている者はそれが現実に起こりうると嫌でも理解させられた。
「あーもう、なら斧を持って行きなさい！　普通に走るより背中に装備して飛んでった方が速いから！　それに桐条の子たちにバレないよう幻惑機能も起動しておくこと。ワンちゃんはお留守番よ！」
最悪のケースを考えれば全員で待避するのが正解だ。それを頭で理解していても、シャロンは全員が無事に済む可能性に賭けようと

思ってしまった。
生きることに不器用すぎる青年のことも気に入っているし、ここでの研究も軌道に乗って手放すには惜しいレベルになっている。
なら、それらを失わないためには、危険だと分かっていても止められる可能性を持った少女を送り出すしかない。
シャロンが急いで研究員らにラビリスの装備の準備を指示すると、こんなときになんの役にも立てない己の無力さを悔しく思っている彼女にラビリスは頭を下げて感謝した。
――ホテル〝シャン・ド・フルール〟
ラビリスたちが異変に気付く数分前。大型シャドウの反応を見つけて白河通りまでやってきた七歌たちは、現場に突入した前線部隊の四人が最上階の部屋で敵と交戦していた。
敵は背もたれが女性の姿をした椅子という変わったものに座った肥満男性型の大型シャドウ、法王〝ハイエロファント〟。
それ一体ならば大した問題はないのだが、相手は子どもほどの大きさをした紙の人型のようなシャドウを二体従えており、肉弾戦を挑んでくる人型の方が地味に厄介だった。
「順平は赤い方、真田先輩は黒い方をお願い！」
『了解！』
人型の身体にはそれぞれと赤い紋様と黒い紋様が描かれている。それで区別しながら男たちに相手をしてもらい、その間に美鶴と二人で本体を倒そうと七歌は考える。
見た目は人型に切った紙にしか見えないというのに、そんななりでも中々に重い蹴りを放ってくるのだ。そういった相手には肉弾戦が得意な男子をぶつけた方が勝率も高い。
相手の蹴りを大剣で受け止め押し返し、着地したところを順平が斬りつけてダメージを与える。
真田の方は近距離で躱しながらジャブを着実に当てていっているので、やはり采配に間違いはなかったと確信しつつ、七歌はハイエロファントの攻撃の予兆を感知し召喚器を頭に当てるとペルソナを呼び出した。

「来て、タケミカヅチ！」
七歌が皇帝〝タケミカヅチ〟を呼び出した直後、ハイエロファントが二人を狙って電撃を放ってきた。
爆ぜた電気が天井や絨毯を焦がすが、七歌を庇うように前に出たタケミカヅチは持っていた銅剣で電撃を容易く切り伏せる。
相手が電撃属性を使ってくるのに対し、タケミカヅチは同じく電撃属性を持っていて無効耐性も持っているのだ。
これなら七歌のタケミカヅチが防いでさえいれば敵の魔法スキルは怖くない。
「ペンテシレア！」
そして、敵の攻撃を防いだタイミングで七歌の後ろにいた美鶴が横に飛び出し、すかさずペンテシレアの氷で相手の座っている椅子を絨毯に縫い付けた。
絨毯と一緒に凍ったせいで相手は動くことが出来ず、このチャンスを無駄にはしないと七歌はタケミカヅチにさらなる命令を送る。
「タケミカヅチ、月影！」
《ウオオオオオオオッ!!》
月影は満月に近付くほど威力が上がるユニークな斬撃スキル。今日はその満月なので威力は最大になっており、動けない敵に向かって飛びかかると勢いを乗せて袈裟切りに斬りつけた。
攻撃を喰らったことで吹き飛び床に倒れた敵は、肩から腰まで斜めに斬りつけられたことで出来た傷から黒い靄が漏れ出し、今の一撃でかなりのダメージを与えたことが窺える。
これならあと少しで倒せるだろうと、七歌は順平と真田が余計な人型を抑えているうちに決めることにした。
「美鶴さん！」
「わかった！」
二人で視線を交わすと同時に召喚器を頭に当てて引き金を引く。
現われたのは以前も呼び出していたハイピクシーとペンテシレア。
二体のペルソナは現われるとお互いに手をかざして冷気を放つ。
それらは中間地点でぶつかり、一体で作るよりも早く大きく一つの氷

槍を作り上げた。
『はぁぁぁぁぁっ!!』
氷槍が完成すれば再び二人はシンクロした状態でペルソナにスキルを放たせる。
すると、先ほどの月影を喰らったダメージで動きが鈍っていた敵は、完全に起き上がる前に氷槍を胸に受け、それが致命傷となったのか喰らった勢いで壁にぶつかるとその場で靄になって消えていった。
完全な敵の消滅を確認し、順平たちと戦っていた人型も消えたことで一息吐いた七歌たちは、今回は準備していただけあって上手く戦えたと笑いあう。
「皆、よくやってくれた。山岸もチームとしては初の大型シャドウ戦だったが見事なバックアップだったぞ」
《ありがとうございます。皆さんもお疲れ様でした》
それぞれが自分の役割を果たしたことで得た勝利だ。強くなっている実感と、自分も戦いの役に立てたという充足感がそれぞれの胸を満たす。
けれど、今日の戦いはまだこれで終わりではないぞと、他の者よりも早く気持ちを切り替えた真田が部屋の入り口へと向かって歩き出した。
「よし。なら、すぐに街中の方へ向かうぞ」
「あー、確かにそうでしたね。オレっち的には少し休憩はさみたいけど、これもヒーローの辛いところってやつか」
戦っている最中は忘れていたようだが、順平も真田の言葉で街中にいるもう一体の存在を思い出したらしく、疲れた顔をしながらもすぐに気持ちを切り替えて真田の後に続く。
そんな彼の様子に七歌と美鶴は苦笑しつつも頼もしく感じていれば、ドアノブを掴んだ真田が怪訝な顔をして「開かないぞ」と呟いた。
そして、その言葉に続くように風花の方からも通信が入ってくる。
《あれ？　待ってください。何故かまだ部屋の中にシャドウの反応が》
「なんだと？」

扉が開かずシャドウの反応が部屋の中にある。それはつまり当初の予測通りにホテルの敵が二体いたということだ。
しかし、その敵の居場所が分からない。全員が警戒しながら部屋の中を見渡していると、美鶴が僅かな違和感を覚えて鏡の方を見た。
「ん？　この鏡は……」
言われて全員が部屋の壁に掛かっていた大きな鏡を見た。正面にいる自分たちの姿を映していない鏡を。
明らかにおかしいと気付いたときには遅く、次の瞬間、既にスキルを放てる状態になったハート型の大型シャドウが鏡から出てきた。
ペルソナを召喚しようにも間に合わず、召喚器に手を伸ばしたところでシャドウはスキルを放とうとした。
だが、
――――――ドクンッ
そのとき全員が一瞬何が起きたのか分からなかった。
敵はスキルを放とうとしていた。今まさにスキルを使って七歌たちに何かしらの攻撃をしようとしていたのだ。
けれど、全身が総毛立つような悪寒を感じた事で、七歌たちだけでなくシャドウも動きを止めて攻撃は未遂に終わった。
相手も動きを止めたということは今の悪寒の正体は目の前のシャドウではない。では、今のは一体何だと全員が混乱していれば、シャドウから一番遠い位置にいた順平が大剣を振り上げながら駆け出した。
「でりゃー!!」
走って勢いをつけた順平は敵の数メートル手前で飛び上がる。そしてそのまま、七歌たちと同様に動きを止めていた大型シャドウを唐竹割りで斬りつけた。
完全に無防備な状態で攻撃を喰らったからか、シャドウはハートの割れ目の部分から真っ二つになって床に落ちる。
そんな状態で復活できるわけもなく、登場してから過去最速で退場してゆくこととなった。
「ナイス、順平！」

「ああ、咄嗟によくやってくれた」
「へへーん、って言いたいとこっスけど、なんか明らかおかしいぞ」
全員が状況に混乱しているときすぐに行動を起こして対処した順平の功績は大きい。リーダーだった七歌だけでなく、美鶴と真田も己の失態を反省しつつ順平に礼を言うが、普段なら調子に乗る順平も何かおかしな事が起きていると警戒を解いていなかった。
それは他の三人も同じように感じていて、先ほどの悪寒を感じてから妙に息苦しく思っていた。
これがもしも街中の大型シャドウの影響なら、ここまで力の余波が及ぶ強敵ということになる。
「扉が開くようになった。一先ず山岸たちと合流しよう」
状況を把握するために先に外の二人と合流しようと真田が駆け出せば、七歌たちも真剣な表情のまま後に続いた。

＊＊＊

七歌たちがホテルの入り口まで戻ってくると、外にいた風花とゆかりが地面に座り込んで上空を見ていた。
そんな二人に何があったのかと聞こうとして近付けば、七歌たちはホテルから一歩外に出た途端身体が重く感じて膝をついてしまう。
二人が座り込んでいたのはこれのせいかと気付き、続いて二人と同じ方向に視線を向ければ、そこには空を覆い尽くす何かがいた。
「は？　え、ちょ、なんだよ……あれ……」
順平の言葉は全員の気持ちを代弁していた。
街の空を覆い尽くすほどの巨体を持つ生物などこの世に存在しない。大過ぎて顔も全長が分からず、下から見上げている七歌たちでは龍のように見えるという程度しか対象を認識出来ていなかった。
もし仮にあれが街中の大型シャドウだったなら絶対に勝てない。挑む以前の問題で見ただけで戦いにならないとはっきり分かる。
理性と本能の両方でそれを理解した七歌だったが、上空の存在が大型シャドウではなかったとしたらという可能性を考え、自分たちより先にそれを見ていた風花たちに声をかけた。

「風花、ゆかり、何があったのか教えて」
「私たちにも分かんないよ。なんか急に重力が強くなった感じがして、それで空を見たらあれがいたの」
七歌は外にいたゆかりたちの方が状況を把握出来ていると思っていたが、外にいた二人でも急にあれが現われて重力が増したくらいしか把握出来ていないらしい。
となると、何かが起きたのはこの辺りからでは見えない場所、かなりピンポイントな狭い範囲だと予想され、そこの近くにいなければあれが出現するに至った経緯も分からないだろうと結論づける。
遙か上空にいる存在に干渉する手段は思い浮かばないが、これでは倒さなければならないとなっても戦うことも難しい。
そう思っていれば、召喚器を手にした風花がアナライズをかけてみるとペルソナを呼び出した。
あのサイズの存在にアナライズなど掛かるのだろうかという不安はある。ただ、何も読み取れなくても大きさだけでも把握出来ればと結果を待っていれば、ペルソナの中で目を閉じていた風花に異変が起こった。
「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
アナライズを仕掛けていた風花はペルソナを解除するなり頭を押さえて叫びだした。
彼女はそのまま地面の上をのたうち回り、このままでは不味いと思った七歌が相手に飛びかかって首を絞める。
風花の豹変に驚いていたゆかりは、七歌の行動でハッとして苦しそうにしている風花が目に入り七歌を止めようとする。
「七歌、あんた何やってんの！」
「五月蝿い邪魔すんな！　今すぐ意識を落とさないと風花は狂うぞ！」
止めようとしたゆかりを怒鳴り声だけで制した七歌は、鬼気迫る表情で風花の首を絞め続けてそのまま相手の意識を落とした。
気を失った直後に気道を確保して安定した呼吸を確認していたので、命に別状はないのだろうが先ほどの豹変も含めて風花に何があっ

たのかが知りたい。
そう思ったゆかりが七歌に尋ねようと口を開きかけたとき、今まで黙っていた美鶴が両足に力を入れて立ち上がった。
「明彦、伊織、どちらでもいい。山岸を辰巳記念病院まで運んでくれ。もう一人と岳羽で護衛しながらだ」
「お前はどうするんだ？」
「私はあれの下に行く。行かなくちゃいけないんだ」
上空の存在を見つめる美鶴の瞳にはどこか哀しげな色が混じる。
どうしてそんな瞳をして危険な場所に行こうとするのか分からず、美鶴からなんの指示も受けなかった七歌は、自分も一緒に来るよう言われていると理解し、先に彼女にあれがなんなのかを尋ねた。
「美鶴さん、あれが何か知ってるんですか？」
「詳しくは分からない。だが、あれはシャドウじゃない。ペルソナだ」
それだけ答えた美鶴は重力が増しているにもかかわらず普段並みの速度で駆け出した。
後を追う七歌は空を覆うほど巨大なペルソナを呼び出した者がいる事実が信じられず、美鶴の向かう先に行けばその人物にも出会う事になるのだろうかと僅かな不安を抱いていた。
――街中
七歌たちがハイエロファントを倒した直後、バイクに頭部を下敷きにされていた湊に動きがあった。
身体が僅かに光ったと思えば手が動いて片手でバイクをどけて立ち上がる。フレームの一部が歪んでしまったバイクは修理するまでまともに走れないだろうが、壊れたバイクをコートに仕舞って脱いだヘルメットと眼帯も同じように収納した湊の瞳は両方とも銀色になっていた。
そして、ゆっくり一歩ずつ歩き始めると湊の身体は光に包まれ、服についた血の汚れが消えるだけでなく、胸部が膨らみ段々と背丈が低くなってゆく。
鍛え上げられた筋肉の鎧を纏っていた肉体は、柔らかな印象の丸みを帯びたものとなり。顔の造りも浮き世離れした美麗さではあるが

湊とは別のものになった。
僅かな時間で骨格から顔の造りまで全てが変化すると、最後に青みを帯びた長髪の色が透き通るような金髪になったところで、湊だった者は女の声で言葉を発した。
「放逐されし者より漏れ出た汚泥如きが……よくも〝私〟を殺したな……」
そう呟いた女の顔に浮かぶは憤怒の相。
シャドウが去って行った方角とは別の方角を睨みながら足に力を籠めると、女は次の瞬間光の粒になって弾け、元いた場所から数キロ離れた別の場所に現われる。
道路の真ん中に現われた女が振り返れば、湊とバイクで競っていたシャドウがまさにやってくるところだった。
時速一六〇キロで大型バイクが接近してくるというのに、女は逃げもせずキッと鋭い視線でその敵を睨み、そのままシャドウに向けるよう正面に右手をかざした。
「……ただでは済まさんぞ」
呟き掌が白く光る。たったそれだけで女の眼前には氷の世界が広がっていた。
道路だけでなく周辺のビルも凍りつき、道路の上にはバイクごとシャドウを閉じ込めた氷山が出現している。
中に閉じ込められたシャドウに動きはなく、そもそも、全身をがっちり氷に覆われた状態で厚さ数十メートルの氷に閉じ込められているのだから動けるはずもない。
走って熱くなったエンジンでも解けない氷とはどれほどのものだろうか。
ただ、本来ならばシャドウは氷漬けにされた時点でダメージ限界を超えて消滅してゆくのだが、女の氷に捕らえられたシャドウにはその気配が一切ない。それだけでこれが普通の氷ではないことを証明していた。
「貴様がどこより生じたかは知らぬ。だが、そこへ戻れるとは思わぬことだ。私は貴様らを殺すことが出来るのだからな」

人から抜け出たのか、それとも心の世界から迷い出てきたのか。
それは知らないがと言いながら女はゆっくりと両手を肩の高さまで上げ、氷の中のシャドウを睨みながら両掌を向かい合わせにして近づけてゆく。
グググ……と間に風船でもあって割ろうとするような仕草だが、何もない空間でそんなことをしていれば、シャドウを閉じ込めていた氷が中央へと圧力をかけていた。
閉じ込められているシャドウは当然それで潰されてゆくが、乗っている首無し鎧のシャドウより先にフレームが破損したらしいバイク型シャドウからは、黒い靄ではなく血のようにも見える黒い液体が漏れ出している。
本来ならば黒い靄になって消えてゆくというのに、シャドウがダメージを受けて血を流すとはどういうことだろうか。
専門家たちが見ればそんなことを思うのだろう。しかし、敵を殺そうとしている女にすれば、自分と近い存在を殺すことは容易かった。
これが人から抜け出たシャドウなら持ち主は一生無気力症になるが、そんな事は関係ないと女がシャドウを文字通りこの世から消そうとしたとき、細い路地から女の立っている大通りに出てきた者がいた。
「っ……これはどういう状況かな？」
「氷に閉じ込められているのは街中に現われた大型シャドウか？」
大通りに現われたのは顔に疲労の色が濃く出た七歌と美鶴だった。
街の中心に向かうにつれ蛇神の重力波は強くなる。それは全身に重りを付けているのと同じだ。
彼女たちはそんな状態で蛇神の真下を目指して走っていたのだから、大型シャドウ戦の疲れもあって今は疲労のピークといった感じだろう。
しかし、それでも途中で見つけた異常な存在のことは無視出来ない。そう思って二人がゆっくり女と氷山の方へ近付いてくれれば、シャドウを殺そうとしていた女は冷たい瞳のまま振り返った。
「何かと思えば惑星を食い潰す虫か」

「君がこれを」
「ちょっと待って美鶴さん」
女まではまだ距離がある。けれど、相手が振り返ったことで美鶴が声をかけようとすれば、女に不穏なものを感じた七歌が前に出て美鶴の言葉を制した。
人の形をしているから気付くのが遅れたが、七歌は相手が普通の人間ではないと気付いたのだ。
十メートルも離れていないが相手は不思議と生物の持つ気配が感じられない。シャドウとも異なる独特な気配は本能で迂闊な行動を取ってはならないと理解させるに十分であった。
とはいえ、目の前には人に見えるモノがいる以上、言葉を交わせるのなら何かしらの情報を得る必要がある。
そう考えた七歌は瞳を魔眼に切り替えると、何かされてもすぐに回避出来るよう警戒しつつ声をかけた。
「ねえ、貴女は一体なに？」
「ほう、よく見れば小さき者か」
七歌に訊かれた女は深紅の瞳を見て興味深そうに口元を歪める。その口ぶりからすると相手は魔眼を知っているようだが、九頭龍の異能は百鬼以上に秘密にされてきたため、女がそれをどこで知ったのかという疑問が残る。
ただ、おかげで相手の剣呑な雰囲気が少し和らいだので、七歌は今は相手の素性を知ることが大切だと改めて質問を口にした。
「もう一回訊くね。貴女は一体なに？　人なの？」
「ククククッ、随分と愉快な事を訊くな。ああ、〝私〟は確かに人間だ。私は〝私〟以上に人間らしい者を知らぬ」
女の言葉を聞いた七歌たちは心の中で首を捻った。
自分は自分以上に人間らしい者を知らないと、相手はそう言ったようなのだが言葉に違和感を覚えるのだ。
彼女たちのその予感は当たっており、女は『私』という単語を二つの意味で利用している。ただ、耳には同じ音として届くので違いが分からないという訳だ。

「小さき者よ、お前は私を知らぬのだろう。であるならば理解しようとするな。知らぬのなら理解も出来まいて」
そんな風に女の言葉の真相すら理解出来ていない七歌に、女は必死に理解しようとしても無理だと諦めるよう笑いかけた。
言われた本人は馬鹿にされたような気分だろうが、これはこれで女なりの優しさだ。そもそも規格が違うのだから真に理解出来るはずもないのだから。
だが、女が自分の知る者の末裔と楽しく話していると、その傍に立っていた余計なものが話しかけてきた。
「知っていれば答えてくれ。あの上空のペルソナを呼び出した者はどこにいる？」
「……本能のみで生きる虫らしい行動だな。まぁいい、不便なこの身に慣れる役には立つだろう。して、あれを呼び出した者は〝私〟だ。己が意思に関係なく私を呼べば出てしまうのだ」
話しかけてきた美鶴に女は呆れた表情を向けつつも答える。自分なりに折り合いを付けて質問に答えてくれたらしいが、その言葉は中々に独特で理解できるようになるまで時間がかかりそうだ。
もっとも、美鶴が一番知りたかった上空のペルソナを呼び出した者についての情報は得られた。それが彼女の求めていた答えとは違っていたとしても。
「待て、何を言っている。あれは、あのペルソナは君の物なのか？」
「やはり所詮は虫か。だからあれは〝私〟の物だと言っている。理解出来ないのなら訊くな」
既に答えたことを何度も聞かれて女は不機嫌な顔をする。
誰だって同じようなことを繰り返し聞かれれば、最終的にもう訊くなと怒ることだろう。
まだ二度目でも今回の美鶴の態度は女にとってそれに該当したようだが、ここで美鶴が食い下がって余計にこじれる前に七歌は状況を把握しようと別の質問を口にした。
「あの大型シャドウはどういう状況？」
「あれは今から殺すところだ。汚泥如きが〝私〟を殺したからな。存

在ごと殺してやろうとしていたところよ」
女がそれを言い終わるかどうか。そのタイミングで何かが飛来すると、七歌たちの前から女を連れ去った。
その場に残こされた七歌たちは一体何が起きたのかと目を白黒させているに違いない。
一方で連れ去れた方は自分の首を掴んでいる華奢な腕を見つつ、続けてその視線を相手の顔のところで固定して思わず口元を歪めた。
「ハハッ、今日は随分と客が多いな」
「五月蝿い、その身体を返せっ!!」
女の首を掴んだまま空を移動している者は、認識阻害の力を行使しているため黒い靄で全身が覆われて見えなくなっている。
しかし、女はそんなものは無意味だとその奥にある相手の姿をしっかりと見ながら、自分の事を棚に上げておかしなことを言うものだと口の端を吊り上げた。
「儚き者よ。お前がそれを言うのか?」
「私とアイツは根っこの部分で繋がってる。正がアイツで負が私、お前とは違うっ」
そう、今現在女を掴んでいるのは湊を心配してやってきたラビリスなのだが、その瞳は赤ではなく金色になっている。
これはここに来るまでにラビリスからシャビリスへ人格が入れ替わっているという事だが、彼女を儚き者と独特な呼び方で呼ぶ女からすれば、シャビリスの話を訊いたことで余計に違いはないと思っていた。
それを説明しようにも今の状態では話がしづらいので、女はシャビリスの腕を弾いて解放されると、十メートルほどの高さから一気に地上に降りて着地する。
捕まえていた相手に逃げられたことでシャビリスも数メートル離れて止まったが、その目には怒りと憎悪が宿っていて今にも攻撃を仕掛けてきそうであった。
そんな相手と向かい合う形で立った女は、知らぬのなら覚えていろと自分と湊の関係について語った。

「何が違うのか。私は〝私〟であり、〝私〟は私でもある。別の言葉で言い表すなら、男としての側面が〝私〟であり、女としての側面が私になっている。お前と何も違わないだろう？」
「五月蝿い！　返せ、返せ、返せぇぇぇぇぇっ!!」
女の言うことなどまともに聞く気はない。そう言うかのようにシャビリスは戦斧を手に持つと、ブースターを噴かせたまま急加速で斬りかかってきた。
他の者たちは女の服装がロングコート姿の湊のままでも気付いていなかったというのに、彼女は一目でそれに気付いて肉体を奪われたことも察したのだろう。
なら、今の彼女の怒りは当然であり、大切な人の身体を返せと必死になるのも無理はない。
そんなストレートな感情を向けられた女は斬りつけられる瞬間に光の粒になって弾け、相手の攻撃を回避するとシャビリスの八メートル後方辺りで肉体を湊の状態で再構築した。
「フフ、〝私〟も目を覚ましたし時間だな。汚泥を殺し忘れたが単に破壊するだけでもいいだろう。ではな儚き者。また会おう」
言いながら女が湊の身体で拳を握ると、離れた場所で氷山が砕けた。中に捕らえられていたシャドウも黒い靄となって消え失せ、それらが終わったタイミングで湊の瞳の色が両目とも金色に戻った。
湊の瞳の色が元通りになると上空にいた蛇神も消え、重力波がなくなり楽になったことで静かに歩いて近付いたシャビリスがどこか心配そうに青年に声をかける。
「アンタ、戻ったの？」
「ん、まぁな。俺が死んで意識が途切れたから、その間だけ彼女が身体を使ってたんだ。別に身体を乗っ取られたとかそういう話じゃないし、心配しなくていい」
コートから取り出した眼帯を着け直す相手の言葉遣いから雰囲気まで、全てが自分の知る青年に戻った事でシャビリスは安堵の息を吐く。
しかし、それはそれとして、先ほどまで湊の身体を使っていた存在

のことが気になったため、相手のことを理解している青年に一体どういう存在なのかと尋ねた。
「……てかアイツだれよ？」
「誰って俺と魂レベルで融合して共存してる神だ。定形や性別の概念は持っていなかったが、融合したときに俺の女の部分の方がしっくり来たらしくその領域を使ってる。」
湊は名切りの最高傑作として作られているため、肉体を構成する細胞だけでなく精神も両性であり中性となっている。
それは男女どちらの優れた点も取り入れられるようにするためだが、湊は精神を男か中性の状態にして過ごしているので、女だけとしてはほとんど使わないからとその領域を異界の神に使わせていた。
その結果が男の側面が湊で、女の側面が異界の神という現在の状態に落ち着いた訳なのだが、ラビリスの時ですら一切そういった話を聞いていなかったシャビリスは、本当になんともなくて良かったと安心して青年の前でポロポロと涙を溢してしまう。
「何故泣く？」
「うっさいバーカ！　死ね、ていうか死ぬな！」
「……どっちだよ」
青年が死んだから一時的にでもあの女が出てきた訳で、そんな状態になられるのは嫌だからとシャビリスはすぐに発言を撤回した。
しかし、そんな乙女心が分からない男は単なる気まぐれかと考え、すぐに別のことに意識を持っていってしまう。
今日の満月に現われたアルカナシャドウがどうなったのか。特別課外活動部のメンバーたちはどこにいるのか。何やら怪しい動きを見せていたストレガは近くにいるのか。
そういった様々なことに思考を使い始めた青年は、一つ一つ確認して問題がないことを把握すると、シャビリスの戦斧をコートに仕舞ってから彼女を抱き上げ、タナトスを呼び出すとコロマルの待っているＥＰ社へと向かった。
そして、人騒がせな神の一時的な顕現により様々な方面に影響を残しつつ、七夕の日の満月は静かに終わりを告げた。

第二百二十八話　七夕から一夜明けて

7月8日（水）
放課後――ラボ
「以上の結果から街中に出現した大型シャドウは、満月に現われるものとは別個体だと思われます」
「なるほど、では白河通りに現われた二体が正規の大型シャドウという訳か。他にも大型シャドウが確認された以上、今後は満月の方をアルカナシャドウと呼称すべきかな」
研究所の会議室で話していた幾月はインスタントコーヒーに口を付けながら話を聞き、手元にある報告書にも目を通していた。
そこに書かれているのは美鶴が確認した街中の大型シャドウの特徴。
これまで出会ってきたシャドウは各アルカナごとに仮面に違いがあり、それに照らして考えれば街中の大型シャドウは皇帝と戦車だったのだ。
白河通りの二体は法王と恋愛、ならば次に現われるのは戦車、正義、隠者という順になる。
戦車の方は満月の大型シャドウの可能性も残っているが、既に皇帝の大型シャドウは倒している以上、街中の大型シャドウが二体とも満月の大型シャドウという可能性は低かった。
一夜に四体の大型シャドウが現われ、それらを全て倒せたことは間違いなく幸運といえるものの、内二体は影時間を終わらせる鍵である満月に現われる存在ではなく、さらに仲間が一人錯乱状態になったなどのトラブルもあった。
それらを含めて考えると完全に手放しに喜べる結果とは言い難いねと幾月は苦笑する。
「しかし、色々と謎の残る一夜になってしまったね。街を覆うほど巨大なペルソナ、それを解析しようとして錯乱した山岸君、二体の大型シャドウを単独で撃退する少女、その少女を連れ去った黒い人影ときたか」

「七歌がいうには少女は人ではない別の何からしいです。私には人に見えましたが、それは姿だけで中身はこの世界にいてはいけないモノだとか」
言いながら美鶴は半信半疑であることを表わすように目を僅かに伏せる。
美鶴はアナライズを使えるが能力はあまり強くない。対して、七歌はアナライズは使えないが龍の血によってこの世に在らざるモノを視る事が出来る。それが何かは分からないがこの世の存在ではない事だけは理解出来るのだ。
その能力によって七歌は対峙した少女を人の姿を借りて現われた化生と看破した訳だが、シャドウやペルソナならともかく、他の幽霊や妖怪など昔から語られているような神話的、オカルト的な存在に肯定的ではない美鶴は信じ切れていないようだ。
とはいえ、現状は不思議な少女の事だけでなく、上空に現われた超級のペルソナについても詳しく分かっていない。
唯一上空に現われたペルソナについて何か分かっている可能性があるのは風花だが、彼女は影時間に意識を失ってから病院に運ばれ入院しているため、相手の意識が戻って話を聞かないと分からないだろうと美鶴が考えれば、その事について伝え忘れていたと幾月が口を開いた。
「ああ、そういえば先ほど病院から連絡があってね。山岸君は無事に意識を取り戻し、退院して桐条グループの車で寮まで送ったそうだ」
「そうですか。何事もなくて良かったです」
「本当にね。君たちにはいつも大変な事を任せてしまっているが、我々もどうにか安全性を上げられないかと研究してはいるんだが結果は思わしくない」
申し訳なさそうにする幾月に美鶴は気にしないでくれと首を横に振る。
彼女はラボにも時々足を運んでいるため、ここでどれだけ研究員が頑張って開発と解明を進めているかも分かっている。
不眠不休という訳ではないが、それでも徹夜をしてでも新しい敵の

データを短時間でまとめ、いち早く活用出来るようにと特別課外活動部に届けてくれているのだ。
作戦中は風花の能力で解析して弱点や敵の技などを把握し、前線の者たちが情報を頼りに戦って倒していても、そういったまとまったデータは作戦中以外の敵の分析などに役立つ。
全てを完璧には覚えていなくても、苦戦した強敵の弱点や行動パターンを頭に入れているだけでおおいに変わってくる
それを実感しているからこそ美鶴はラボの人間たちを労い。おかげで助かっていると伝えた。
「敵のデータベース化は非常に助かっています。そういった意味ではサポートは十分と言えるかと。問題はむしろ前線の戦力ですね。荒垣が戻ってくれれば戦力的にも助かるのですが、まだ彼は戻る気はないようです」
「それは残念だ。まぁ、こちらでも新戦力を探してはみるが、あまり期待出来ない以上君たちの負担を少しでも減らす方向で考えていくしかないね」
満月の日など荒垣が密かにシャドウと戦ってくれている事は幾月も聞いている。
どうして同じ目的なのに単独行動を取っているかは不明だが、そこは彼なりのケジメなのだろうと美鶴たちは考えていた。
そのため真田ですら強くは戻ってこいと言えていないものの、幾月は子どもたちの負担を減らすための良いアイデアが浮かんだようで、彼にもそれを伝えてみようと悪戯っぽく笑った。
――喫茶店〝フェルメール〟
美鶴と幾月が話しているのと同じ頃、学校が終わってから少し話したいとラビリスが誘った事でチドリはフェルメールを訪れていた。
湊は仕事があるからと今日は学校も休んでいたので、現在ここにいるのは少女二人と店主の五代だけである。
そも、ここは狭い路地のかなり奥まった場所にあるため、お客は偶然奥まで迷い込みでもしないと殆ど来ないのだ。
店を開いている本人はそれをどう思っているか分からない。それ

でも、とても大切な話をしようと思っている少女たちは、他の者に聞かれる心配のないこの場所をとても気に入っていた。
「途中でシャビが自分を出せって無理矢理に変わってもうて、ウチもシャビの中からみてた形やけど、それでも昨日のはこれまでと桁が違ってたのは分かったわ」
「蛇神の顕現は桔梗組にいた私でも感知出来たわ。嫌な感じがしたからアナライズまではかけてないけど、港区の方角を見たら上空にオーロラみたいなのが出てて何があったんだろうって思ってた」
蛇神の顕現はそれこそ天災レベルの現象だ。湊が自分の意思で蛇骨を一部具現化する程度なら影響はないが、蛇骨の状態でも蛇神が出てしまえば特殊な力場が発生して他に影響を及ぼす。
以前、湊の修練場としてコピーされたトーキョーで力の管理者たちが戦ったが、そのときには力場だけで三姉弟たちのペルソナの攻撃は威力を削がれていた。蛇骨の強度は上級スキルでも突破が難しいレベルのため、遙か上空にいられれば他の者は打つ手無しというのが実際のところだ。
そんな蛇神がかなり具現化した状態で昨夜は港区上空に現われた訳だが、隣の六徳市にある桔梗組からは蛇神自体は見えずともさらに上空にオーロラが出ているのが見えたという。
何かあったのかとペルソナで探ろうとしかけ、しかし、何やら嫌な気配がしたことでチドリは風花のようにはならずに済んだが、そんな遠くからでも見えたのかとラビリスは紅茶に口を付けながら驚いた様子だ。
「桔梗組からでも見えるて、どんだけ広い範囲に影響でとるんやろ。まぁ、重力波くらいやって被害はほぼなかってんけどさ」
「それでも一人病院行きになったわよ。まぁ、本人は後遺症もなかったようだし、蛇神にアナライズをかけちゃダメって戒めにもなったのは不幸中の幸いね」
今日学校を休んでいた風花にお見舞いメールを送れば、午後になって検査を終えて携帯を手にすることができる状態なった風花から、影時間のことを知っているチドリたちに昨夜上空に現われた謎のペル

ソナにアナライズをかけた事が原因だと真実を伝えてきた。
その話は同じく休んでいた湊にもメールの転送で伝えておいたのだが、原因となった蛇神を呼び出してしまった本人は、精神汚染の可能性が頭から抜けている方が不用心だと素っ気なく返してきた。
その点について、同じ力を持っているチドリも同意見ではあった。同系統の力を持っている人間なら回線を通じてハッキングも可能だと伝えており、実際にチドリが風花の力をハッキングしても見せたのだから。
しかし、それでも少しくらいは心配する素振りを見せたらどうだと言えば、今の自分にそういったものを求められても困るとだけ返して連絡は途切れた。
確かに湊は影時間の戦いが本格化することを見越し、記憶と感情の結びつきを解除することで仕事屋だったときの状態まで精神が戻っている。
瞳も中等部に入学した頃の冷たさになっているため、部活メンバーの負傷を聞いても心は揺れないのかもしれない。
ただ、それでチドリやラビリスが納得出来るかと言えばそうではなく、中学生と遊んでる時間があるなら抱いた女のフォローくらいしろと甲斐性のない青年を糾弾していた。
「はぁ……ってか、昨日の湊君はこうなんか完全に女の子になっとったんよ。中身が違うのは分かったけど、身体もホンマに女の子になっとってん」
「それは狐の幻術じゃなくて？　あれでも普通は気付かないレベルなんだけど」
少女たちも玉藻御前には会ったことがあり、その能力の高さも知っている。一般人ではまず見破ることが出来ず、アナライズを持っている者でもかなりの集中をしてようやく分かるのだ。
しかも、それは以前の若藻の姿の状態の話であり、力を取り戻して進化した玉藻御前の幻術は現実を上書きする物理的な干渉力を有している。
鈴鹿御前とのミックスレイドである夢幻回廊には劣るが、それでも

街一つは平気で造り出せるのだから、生体ボディになってからも幻惑機能を持っているラビリスだろうと見抜けるものではないとチドリは判断した。
だが、それを言われたラビリスは難しい顔をしながらワッフルを頬張り、口の中の物をしっかりと飲み込むと言葉を返す。
「んー、というか湊君やないとペルソナ出せんくない？　蛇神は封印が解けて出てまうんやろうけど、他は湊君の精神から分かれたものやし。中身が違っとったら力も使えんと思うわ」
そう、一番の問題点はそこだ。ペルソナは当人の心が具現化したものなのだが、蛇神が顕現している間は湊ではなく神に人格が切り替わっていた。
これでは神の精神に宿る存在は呼び出せても、湊の精神と結び付いているペルソナは呼び出せない。
そう指摘すればチドリもそれもそうかと悩みだし、紅茶をゆっくり飲みつつどういう状況だったのだろうかと考え始めた。
すると、少女たちに紅茶のおかわりを用意しつつ、グラス磨きに精を出していた店主の男性が苦笑しながら優しく声をかけた。
「そういうのは小狼君に尋ねるしかないんじゃないかな？　その神様ってのが前に言ってた阿眞根と同一かどうかも分からないし、同一なら既にコミュニケーションを取れるレベルなのかってのも確認しておかなくちゃいけないだろ？」
「それはそうだけど……」
「最近の湊君はあんま教えてくれんからなぁ」
聞かないと分からないというのは分かっている。けれど、聞いたところで答えてくれるかは別の問題だ。
湊は昔から本当に大切なことは自分の内に仕舞って話さない。それは他の者を気遣っていたり、悪戯に混乱させないためではあるが、おかげで実際にその事態が起きれば青年だけが冷静に対処するという状況に陥る。
今回の神との入れ替わりに関しても同様の事が言えるのではないかと考え、少女たちが訊くのを躊躇うのも無理はない。

とはいえ、五代の言うことは正論なので、また直接会ったときにでも尋ねることにし、二人はかつて湊のおかげでかなり儲けた男に無料でお茶とお菓子を提供させてオヤツを楽しんでから帰って行った。
夜――巌戸台分寮・作戦室
風花が戻ってきている事を確認すると、他のメンバーたちは大丈夫かと心配して声をかけた。
本人はもう大丈夫と普段通りの柔らかい笑顔を見せたが、彼女がまだ本調子かは分からないので数日の間はタルタロス探索はお休みという事で決定した。
しかし、昨日のことを改めて話し合う必要があったので、そのミーティングには全員が参加するため現在四階の作戦室に幾月を含めたメンバーが揃って話をしていた。
「という訳でやはり街中の大型シャドウは満月に現われるものとは別個体だった。今回の事を踏まえて、今後は満月に現われる大型シャドウをアルカナシャドウと呼称し、その他の大型シャドウはそのまま大型シャドウと呼ぶことにする」
「んじゃ、後は六体ってことッスね。まぁ、折り返しにはちげーねぇし。今回は大きな怪我もなかったんだから結果オーライっしょ」
「ああ、本当に皆よくやってくれたよ。色々と謎の残る夜となったが本命はしっかり倒せたんだからね」
美鶴から連絡事項を聞いた順平は残念がる様子もなく快活に笑ってみせる。
もしも街中の大型シャドウがアルカナシャドウだったなら、残り四体というかなり余裕のある状態になっていたが、別にそうでなくてもアルカナシャドウをしっかりと倒せた結果は変わらない。
その事を幾月も褒めて彼らの成果を讃えれば、全員で一頻り笑いあってから改めて美鶴が話を切り出した。
「それで話は変わるんだが、山岸、君はあのとき何があったか覚えているか？」
「えっと、あの大きなペルソナをアナライズしたときの事ですよね？」
「ああ。急に錯乱状態なったことで慌てて七歌が君の意識を落とした

んだが、具体的にどうしたのかが分からなくてな」
　アナライズをかけた直後、風花は頭を押さえて叫びながら地面を転げ回った。あまりに突然のことで七歌以外は動けなかったが、彼女の咄嗟にとった行動のおかげか一晩入院してきた風花は特に体調が悪そうにも見えず普段通りの様子だ。
　なら、あのときに何があってそんな状態になったかを教えて貰おうと美鶴が尋ねれば、風花は自分に何があったのかを静かに語り出した。
「あのとき、私はあのペルソナがどういった存在なのかを探ろうとしたんです。半透明な胴体に触れるような感じで知覚を近づけていって、身体に触れたと思ったら意識が別の場所に飛ばされていました」
　感知系の能力を持っていない者にすれば探り方のイメージの時点で不思議なものだろう。だが、強度に違いはあれど同じ力を持っている美鶴だけは、能力の知覚で触れただけ意識が別の場所に飛ばされたという現象が気になるようでさらに話に聞き入る。
「そこは黒い濁流が激しく流れていて、私はただ呑み込まれるだけでどうすることも出来ませんでした。そして、そのときにそこがあのペルソナの精神と呼べば良いのか、内部であり黒い濁流が全て人の負の感情だと気付いたんです」
「負の感情というと嫉妬や怒りとかか？」
「いえ、もっと暗い殺意や憎悪といった感情でした。何千、何万という人の負の意思の集合体。それがあのペルソナの正体です」
　ギュッと膝の上で手を握っていた風花は僅かに怯えた様子を見せながらも全てを話し終えた。
　あれだけの巨大なペルソナであれば、それが大勢の人間の精神が集まって出来たものだと聞いてもある意味納得出来る。
　むしろ、街を覆うほどのペルソナを個人が宿している方が恐ろしいくらいだ。
　よって、風花の話もかなり信憑性があったのだが、ペルソナについて専門的な知識をそれほど持っていない真田は、集合体のペルソナなどあり得るのかと半信半疑な様子で聞き返す。

「ちょっと待て。ペルソナは個人の心の結晶みたいなものだろ。それがどうやって集まり一つになるんだ？」
「分かりません。ですが、あれだけの負の感情がペルソナという身体を得ても破壊行動に移らなかったということは、それを制御しているブレーンが存在するのかもしれません」
「桐条君たちが出会った少女がそうなのかな？　まぁ、詳しい事は分からないが今後また現われたときに警戒することにしよう。力を振るわれれば街なんてひとたまりもないからね」
　尋ねられても風花とてペルソナの全てを知っている訳ではない。ただ、自分が中に取り込まれかけたからこそ、負の力を根源としていながら暴れていないのは誰かが制御しているからではという考えに至った。
　その考えはその考えで、何万人もの人間の強い負の感情を抑え込んでいる化け物がいる事になるのだが、分からないことが多過ぎるからこそ強くは注目されなかった。
　そうして昨夜の顛末について情報共有もなされ、一同は用意していたお茶とお菓子を食べていると、何かを思い出したらしいゆかりが尋ねづらそうにしながら美鶴に話しかけた。
「あの、桐条先輩、いい機会だから少し訊きたいんですけどいいですか？」
「ああ、私で答えられる事なら答えよう。一体何が聞きたいんだ？」
　影時間関連の情報は知っておいた方が活動時に役立つことも多い。だからこそ、美鶴も優しい顔で何でも聞いてくれと答えたのだが、ゆかりが口にした問いはそんな彼女の想像とは少々違う内容だった。
　質問の許可を貰えたことで安堵の息を吐いたゆかりは、そのまま顔をしっかりと上げて視線を合わせると、自分の中でゆっくり確かめつつ以前から聞きたかったことを口にした。
「その、勧誘されたときにも少し聞いたんですけど、影時間とかタルタロスがいつ見つかったのかってことなんです。十年前の事故もなんか関係してるみたいですし、丁度半分まで倒せたこの機会に教えてもらおうと思って」

「フム、どこから話したものか。まず、シャドウには不思議な力があるという話は前にもしたな？　グループでの研究によればそれは時間や空間にも干渉し得るらしい」
「実際、ラボにいる研究個体のシャドウは、自分の体表面に影時間と同じ性質のフィールドを展開していてね。そのおかげで影時間外でも身体を保っていられるんだ」
　想定とは少々違っていたがゆかりの問いは自分が答えられる内容だった。それを表わすように美鶴が相手に理解しやすいよう言葉を選んで話せば、彼女の言葉を補足するように幾月も説明したことで、これまで詳しい事までは知らなかったメンバーたちも真剣に耳を傾ける。
「そして、十四年前、偶然にもシャドウの存在を知った私の祖父が研究に着手した。大量のシャドウを集め、その力を利用して何かを作ろうとしていたと聞いている」
「じゃあ、私のお父さんが桐条グループでしていた仕事っていうのも……」
「ああ、君のお父様も研究に携わっていたようだ」
　今度の言葉にはゆかりは大きなショックを受けたようで黙り込んでしまう。
　まさか自分の父親まで怪しげな研究に手を貸していたとは思わなかったようだが、ここで大きく取り乱したりしないのは、彼女もどこかで薄々感じとっていたからかもしれない。
　桐条グループが所有する人工島、家族にほとんど明かされなかった研究内容、そして事故から十年越しに力に目覚めて認識した影時間。これらは全てが繋がっていると考えた方が自然で辻褄も合うと。
　そんな風にゆかりがショックを受けていれば、手にしていた紅茶のカップを皿の上に置いてから、幾月がより詳しく説明を続けた。
「けど、当時はまだ影時間もシャドウも出現周期は存在しなかった。それが出来てしまったのはまさに十年前の爆発事故が原因なんだ。実験が途中で中断した結果あの事故が起きて、その際、集められたシャドウは街の方へと飛び散ってしまってね。アルカナシャドウは

そのときのシャドウという訳さ」
そう、あの事故のあった日、建物が崩れるほど大きな爆発に紛れて数体のシャドウが街の方へと飛んでいってしまった。それが満月のたびに現われるアルカナシャドウの正体だ。
全員が一斉に来ない理由は不明のままだが、もしかすると爆発に巻き込まれた際に怪我をして癒えるのを待っていたのかもしれない。
そんな事も付け加えて幾月が話せば、これまでの話を聞いていた順平が信じられないと驚きの表情を浮かべて口を開いた。
「じゃあ、影時間もタルタロスも桐条グループのせいで生まれたってことッスか？」
「タルタロスはそうだが影時間は元から存在していたものではある。事故以前から偶発的に発生してはいたんだ。ただ、それが毎夜零時に現われる事になったのは、事故を起こした桐条グループの責任と言えるだろうね」
美鶴がこれまで〝桐条の罪〟という言葉を口にしていた本当の理由を知ったゆかりは、複雑な気持ちが顔にも表れるように暗い表情を浮かべていた。
それは自分の父親が死んだ事故の原因となる研究に荷担していた事も理由なのだが、美鶴は彼女が騙されていたことにショックを受けているのだと思い込み、命懸けで力を貸してくれていた仲間を裏切ることになって申し訳ないと心からの謝罪を口にして頭を下げた。
「すまない。目先のことに囚われてばかりで説明を怠ってしまっていた。こういった事はまず最初に話すべきだというのに」
「いえ、そんな、結局やることは一緒ですし。私もお父さんのことがある以上は無関係じゃないんで」
「それでもだ。本当にすまなかった」
説明を怠っていた理由の一つには、真実を話せば協力して貰えないという気持ちがあったのは事実だ。
だが、協力して貰う以上は全てを話すのが礼儀だという気持ちも同時に存在した。
彼女が非情に徹しきれる人物だったなら真実を覆い隠し、戦う者た

ちがやる気になるような理由を提示していただろう。
　それが出来ない辺りまだまだ未熟で彼女の真面目な性格をよく表わしており。天下の桐条グループの社長令嬢でありながら深く頭を下げる姿を見たメンバーたちは、桐条グループはともかく〝桐条美鶴〟という個人は今回のことで信用出来ると思うことが出来た。
　そんな風に子どもたちが改めて絆を深めている姿を見ていた幾月は、雨降って地固まるかなと心の中で考えつつ、もっと知りたいのなら知る方法が丁度あると寮に来る前に考えていた事をメンバーに伝える。
「まぁ、もっと詳しい話を知りたいなら当時の事を知っている人物に直接尋ねるのが一番さ。君たち期末テスト明けは連休だろ？　そのとき、多忙な御当主が丁度屋久島で休暇を取られる予定でね。これまでの慰労も兼ねてそこにお邪魔させてもらえることになったんだ」
「え、マジっすか!?　うっはー、タダで南の島に旅行とかサイッコーだぜ！」
　暗く真面目な雰囲気から一転、二週間後に控えた学期末テストという試練を超えればご褒美があると提示されたことで順平だけでなく全員の顔が明るくなる。
　テンションの上がった順平は青い海と白い砂浜が自分を呼んでいると大はしゃぎだが、ちゃんとテスト勉強もするんだぞと教師として窘めつつ幾月は真田にちょっとした用事を頼むのを忘れない。
「ああ、そうそう。真田君の方から荒垣君にも伝えて貰えるかな？　彼にも聞いて貰った方がいいと思うからね。どうしても予定が合わないなら残念だが、彼の分のチケットも実は予約済みなんだ」
「ええ、分かりました。日にちもあるし伝えておきます」
「どうもありがとう。さて諸君、敵も残るはあと半分だ。学校の勉強もしながらというのは大変だろうが、旅行で英気を養いつつ頑張ってくれたまへ」
　残るアルカナシャドウは六体。ようやく折り返し地点に立った訳だが敵は今後も強くなってゆく。
　そんな戦士たちが戦いの疲れを癒やすために企画された旅行は、彼

らのやる気を引き出す上で効果覿面だったようで、今から楽しみだと先ほどまでの暗さが嘘のように部屋には笑い声が響いていた。

第二百二十九話　昼時ハプニング

――巌戸台・某所

誰もが寝静まる深夜、巌戸台の外れに密かに作られた地下研究所で男は一人作業をしていた。

机に座る男の前に置かれたディスプレイには港区の地図と、その面積とほぼ同じ大きさをした龍のモデルが表示されている。

これは先日の満月に現われた巨大なペルソナの全長を計算してみた仮のデータだが、あまりに馬鹿げた答えが出たため男は自嘲気味に笑った。

「ははっ、蜷局を巻いてこれか」

眼鏡にディスプレイの光を反射させた幾月は、こんなものとどう戦えばいいのかと考える事を放棄したくなった。

相手は身体を何重にも重ねた状態で街を覆っていた。だとすれば完全に身体を伸ばせば二十三区をいくつも跨げるほどの体長をしているということだ。

影時間中でも撮影可能なカメラが何故か起動しなかったので実際の映像はないが、巌戸台分寮の屋上から直接それを見た幾月は、自分の研究している複合シャドウの失敗作でもあれほどの大きさは作れないぞと頭を悩ませる。

大きな複合シャドウを作る事は可能なのだ。パワーとタフさに特化したものを一時期は作ろうと研究していたことで、ただシャドウ同士を喰わせて行けばそういった無駄にデカいものが出来ると分かっている。

しかし、それだと高い能力を持った究極のシャドウであるデス・アバターを作る事は出来ない。

よって、幾月はどう組み合わせればそれぞれの特性を引き継げるかという研究を進め、先日は吸収と乗っ取りに特化した個体を試し、それなりに使えることは分かったのだが、巨大なペルソナという全く別の問題が生まれた事で彼は現在悩んでいる。

何度も計算し直し、その度に計算が間違っていないという結果が

返ってきたことで幾月が溜息を吐けば、彼のいた部屋の扉が開いてコーヒーと軽食を手に持った少年と少女が部屋に入ってきた。
「幾月さん、そのペルソナを呼び出した少女の似顔絵とかはないんですか？」
「ああ、桐条君と九頭龍君が出会っただけでね。透き通るような金髪に雪のように白い肌をしていたらしいが、生憎と彼女たちの証言から似顔絵を描くスキルはなくてね」
やってきたのは留学前の湊にそっくりな少年・結城理、そして幾月の実の娘である幾月玖美奈だ。
理からコーヒーとサンドウィッチを受け取り、休憩のためにそれを食べながら答えた幾月は、相手の顔が分かればその人物を探せるんだがと苦笑する。
湊の存在もあって外を出歩けない理は別だが、幾月と玖美奈は外で活動して仕事や学校にも普通に通っているため、顔さえ分かっていれば探す時間を作るくらいは出来るのだ。
けれど、顔が分からなければそれも不可能なので、相手を見つけることを諦めつつ規格外の少女がいたものだと玖美奈も話す。
「でも、贋物の他にもこれだけ強力なペルソナ使いがいたなんてね」
「もしかするとエヴィデンスのバックにいる他のペルソナ使い集団のメンバーかもしれないがね。幼少期のアレにペルソナの知識を与えていた者が存在することは確認されているんだ」
幾月が話しているのはベルベットルームの住人たちのことだ。
桐条グループの施設に軟禁状態だった湊に、どういう手段を使ってかペルソナの知識と戦い方を教えていた存在。
そんな風に認識している幾月にとって、桐条グループと同時期には既に存在し、エルゴ研よりもペルソナやシャドウに精通していた者たちならあり得ない話ではないと思えた。
もっとも、それはあくまで可能性の話なので、組織に所属していようが単独だろうが、相手の桁外れな戦力への対処法がないなら危険であることに変わりはないと理が忠言する。
「何にせよ放置するには危険です。街を覆い尽くすようなものと戦う

なんて不可能だ」
「出来れば仲間に、無理ならその子を殺すしかないわね」
「そうだね。今後に向けてあちらのメンバーを増やしつつ、私の方でも少し情報を集めてみよう」
湊たちがどのような反応を見せるか調べるつもりが、予想外の戦力の台頭を見ることになり、流石の幾月も特別課外活動部の戦力強化は急務だと考えた。
現在離れている荒垣、屋久島の研究所で眠っているアイギス、そしてもう一人覚醒する可能性が高いとみられる初等部の少年。
その三名は最低でも引き入れなければ、今後、複合シャドウの実験データを取るときに死人が出る恐れがあった。
故に、アイギスの回収を目的とした屋久島行きに荒垣を同行させ、さらに夏休みが始まる頃には初等部の少年を引き入れて、嫌でも荒垣が復帰せざるを得ない状況を作り出す。
次の満月まではまだ時間があるが、超大型ペルソナを使役する謎の少女の捜索をする間、特別課外活動部の安全を心配しなくて済むよう幾月も裏で手を回してゆくのだった。

7月12日（日）
午前――巌戸台分寮・作戦室
満月の戦いを乗り越えた週末の日曜日。実際のところ日曜日は週始めだという者もいるが、作戦室に集まってお茶を飲みながら屋久島の旅行ガイドを広げて談笑する女子たちには、週末だろうが週始めだろうがどうでもいいことだった。
現在作戦室には寮で暮らす女子四人が揃っており、旅行の話をするなら混ぜて欲しいなと順平も一度やってきたが、七歌とゆかりによって女子会に男が入ってくるなと追い返され現在は一階で落ち込みながら真田と話している。
そんな感じで女子四人だけで姦しく旅行でどこを見たいかなどを話しているのだが、話題はときどき脱線して旅行中のファッションや水着の話になったりもする。

「見て見て、これすっごい攻めてるデザインじゃない？」
「うわっ、キワド過ぎでしょ。これ激しく動いたら見えちゃうよ？」
今年の流行水着と書かれたファッション誌の特集ページを開いてみせた七歌に、ゆかりはいくら何でもそんなものを着る勇気はないと苦笑で返す。
同じく開かれたページの写真をみた風花と美鶴など、少しでもずればトップが露出してしまうほどの布面積の少なさに動揺を見せたほどだ。
けれど、そうかなぁと他の者の反応に七歌は首を傾げ、実際に着ているモデルの写真をジッと見てから風花に視線を移して再び口を開いた。
「風花とか似合いそうじゃない？　身長があると伸びて危ないけど、小柄でスタイル良い人なら攻め攻めでビーチの視線独り占め出来そうだもん」
「わ、私はもっと普通のでいいです！　ていうかむしろ注目もされたくないし……」
寮には男女別に分かれた大浴場があるため、七歌たちはたまに同じ時間にお風呂に入ってお互いの裸を見る機会があった。
そのとき七歌たちは風花がかなり着痩せするタイプだと知ったのだが、普段は隠されているスタイルの良さをアピールするチャンスだといえば、本人は恥ずかしいのでもっと普通の水着がいいと答えた。
それを聞いたゆかりは、七歌の選んだ際どい水着はともかくとして、折角の機会なのに勿体ないよと残念がる。
「でも、勿体なくない？　風花ってとくに運動もしてないのに胸は出ててお腹周りはシュッとしてるよね」
「あ、それ思った。私らは運動部と実戦で動いてるから分かるけど、風花って密かに筋トレで体型維持でもしてるの？」
「え？　ううん。別になにもしてないよ？　背は伸びてないけど身体が大人になってきてるだけじゃないかな？」
実戦と運動で絞れている前線組と違って風花は後方支援なので作戦中も動いたりはしない。

そして、部活も文化部で通学は徒歩と電車であることから、どうして彼女の身体が中々に絞れているのか他の者たちは不思議がった。
昔、中等部時代に一緒に旅行に行ったときは今ほど女性的な体つきではなかったことをゆかりは覚えており、確かに成長もしているのだろうが体型維持に努めている者からすると不公平に思えてならない。
そんな風に年頃の乙女として相手を羨んでいれば、ムムムと考え込んでいた七歌が分かったと瞳を輝かせて顔をあげた。
「むむむ……あ、わかった！　彼氏とラブラブしてるからだ！　ほら、聞くところによると激しい運動だからカロリー消費するらしいじゃん？　だから風花も多分それだよね」
「え、ちが……うかどうかは分からないけど、別にそういう事をばっかりしてる訳じゃないよ！」
考えてみると本人もその可能性が高いのではと思ったのか否定しきれない。
ただ、自分が普段からそういう事をばかりとしていると思われると困るため、風花は顔を真っ赤にしながらそれだけが理由ではないと反論する。
もっとも七歌はそんな少女の反論を笑って聞き流しているので、紅茶を飲んでいた美鶴が無遠慮過ぎるぞと年上として後輩を窘めた。
「七歌、あまり人のそういった事情にくちばしを突っ込むものじゃないぞ」
「下世話な話は淑女の嗜みでしてよ美鶴さん」
「君はまったく……」
年頃の少女として美鶴も全く関心がない訳ではない。ただ、親しき仲にもというやつで突っ込んで聞くのもどうかと思っているのだ。
けれど、七歌たちは風花と同級生ということもあり美鶴よりは多少無遠慮にも聞けるのか、ゆかりも興味津々で風花に話を聞きたがる。
「ってか、気になりません？　前から聞きたかったんだけど風花っていつの間に彼氏作ったの？」
「いや、あの、別に彼氏はいないっていうか……」
「ああ、別れちゃったのか。ゴメン、そういう事なら話しづらいよね」

「違うよ。別に別れてもないというか」
聞かれた風花はとても言いづらそうにしながら視線を泳がせる。彼女が男性とそういった行為をしたことがあるのは確実で、現在もそういった相手がいるのは反応から分かる。
ただ、付き合っても別れてもいないと聞けば、思わずどういうことだと首を傾げて危ないことじゃないのかと心配しても無理はなかった。
「……山岸、まさか事件性はないだろうな？」
「ええっ!?　ち、違います！　ちゃんと知り合いですから！」
慌てた様子で答える風花に一同はとりあえず安堵の息を吐く。
押しに弱い非力な少女だ。男に強く言い寄られてそのままという可能性も否定出来ない。
よって、見知らぬ柄の悪い男にそんな関係を強要されているのではないと分かったのは良かったが、だとすると可能性は一つしかないよなと七歌が少し言いづらそうに切り出した。
「風花、もしかして……セフレ？」
「えっとぉ、そのぉ……やっぱり、一般的にはそういう言い方になっちゃうよね……」
付き合っていないのに身体を重ねる関係といえばそうなる。不倫や浮気よりはマシかもしれないが、どちらにせよ褒められた関係とは言い難く、どうして真面目な風花がそんな事をと美鶴も真剣に尋ねた。
「山岸、君はまだ高校生だぞ？　個人の恋愛観を否定するつもりはないが、親の扶養で学校にも通わせて貰っているんだ。いくら何でもその歳からそういった爛れた関係は」
「はい、分かってます。でも、その、色々と付き合えない事情とかもあって」
風花のような子がそんな関係を続けると言うことは、考えた末にそういった状態でもしょうがないと納得したのだろう。
少し哀しそうに目を伏せる姿からもそれが窺え、他の者は事情を知らない自分がこれ以上言うことは出来ないと口を閉じる。

しかし、それでも相手くらいは教えて欲しい。何か協力や相談に乗るくらいは出来るからとゆかりは相手の名を尋ねた。
「それで、その相手ってどこの誰？　私たちの知ってる人？」
「……言わなきゃダメですか？」
『うん』
揃って他の者たちが頷き風花は思わず肩を落とす。相手との関係も隠していたかっただろうに、さらに名前まで知られるのはとても辛いのだろう。
だが、逆にそこまで彼女が隠そうとするとなると、相手がどこの誰なのか興味が湧いてくる。
今度はゆかりだけでなく美鶴もジッと風花を見つめて答えを待てば、「あー……うー……」と頭を抱えて悩んでいた風花が口を開くよりも先に、消去法で答えに辿り着いた七歌が相手の名前をいってしまった。
「……てか、思ったんだけど風花の傍で付き合えない事情ありそうなのって、実際のところ八雲君しかいなくない？」
『……あ』
聞いた途端に全員の胸にその言葉がストンと降りてくる。彼しかいない、彼以外にあり得ないと。
バレた風花も耳まで真っ赤にして俯き。確かに彼が相手なら簡単には付き合えないなと美鶴も同情的な視線を向ける。
「……なるほど、有里か」
「待って、有里君っていまラビリスと付き合ってるんじゃないの？私なにも聞いてないよ？」
以前、ターニャの見送りで湊とラビリスがそういった行為をしていると知って以降、ゆかりは二人が付き合っているという認識を持っていた。
別に本人たちに聞いた訳ではなく、恋人同士だとも思っていなかったが、同棲している二人がそういう事をしていると聞いてセットで考えていたのだ。
どうしてそんな歪な認識を持っていたのかは、相手がフリーである

と思いたかった乙女心による都合の良い解釈だとしか言えないが、風花と彼がそういった爛れた関係であると聞けば、浮気ではないのかと二人をようやく恋人だと認識した上で物事を考えられた。
だが、そんなゆかりの言葉に対して、クラスメイトの少女からは身も蓋もない残酷な言葉が飛んでくる。
「そりゃ元カノは他人だもん。別に話す義務も義理もないでしょ。んで、いつからそういう関係？　てか、どういう流れでそうなったの？」
「えっと、ゆかりちゃんは聞いてたと思うけど、今年のバレンタインの次の日に美術館に行った話は覚えてる？」
湊と風花が一緒に美術館に行った件はゆかりしか知らない。そして、覚えているかと聞かれたゆかりが頷いたのを確認しながら、その時のことを思い出して風花は言葉を続ける。
「私、好きな画家の作品が見られるのがすごく楽しみで前日にあんまり眠れなかったの。それで遅刻しかけて急いで向かったんだけど、美術館に向かう途中に貧血で倒れて。目が覚めたらラブホテルに運ばれちゃってて服もバスローブになってたの」
いまでも当時の驚きと恥ずかしさははっきりと覚えている。彼の傷跡の残る身体にも驚きはしたが、少女として受けたショックは人生の中で一番だったと断言出来た。
かなり特殊なシチュエーションだと思われるが、思い出してしみじみしながら風花が続きを話そうとすれば、何故だか他の者たちの表情が険しくなり場の空気が張り詰めていくのを感じた。
「岳羽、今すぐに有里を呼び出せ。来なければマンションに向かうと伝えろ」
「了解です。……サイッテー、本当に許せない」
風花が最後まで話す前に他の者たちは行動に移っていた。本気で怒った様子のゆかりが電話越しにぶち切れながら湊を呼び出してしまい。誤解だと風花が宥めようとしても誰も言葉を聞かず、むしろ辛かったなと優しく慰められてしまう始末。
だが、この後に起こるであろう惨劇を想像し、どうにかしなきゃと慌てる少女の言葉が届くことはなかった。

＊＊＊
寮で一体何が起きているのか分かっていない青年は、寮生以外の部活メンバーと一緒にコロマルの散歩をしている最中に呼び出され、相手が本気で怒っていたこともあり理由を聞くため厳戸台分寮に向かっていた。
「コロマルさんの散歩コースの近くで良かったなぁ」
「というか、そんなゆかりさんが怒るようなことって何かしたんですか？」
「……記憶にないな。別に普段からよく怒ってるし気まぐれだろ」
「貴方、知らないうちに他人を怒らせる天才じゃない」
確かにゆかりはよく怒っているが、それを抜きにしても湊は簡単に他の者を怒らせる天才である。
美紀に聞かれて自分は何もしていないとシレッと答える青年に他の者は苦笑しつつ、街中を進んで行けばホテルを改装した趣のある外観の建物が見えてきた。
「あ、ここやな」
「ペット同伴ＯＫなんでしょうか？」
「別に入り口くらいなら大丈夫でしょ」
今日はコロマルが一緒にいるのでペット禁止となれば外で待って貰うしかない。しかし、別にそんな話は聞いていないので、全員で中に入ると美紀が代表して挨拶をした。
「ごめんくださーい」
「なんだお前たち、こんなところに揃ってやってきて」
「あ、兄さん。実は散歩に付き合っていたら有里君がゆかりさんに呼ばれたから来たんです」
「あぁ、ゆかりっちたちなら上で女子会中だぜ。呼んでこようか？」
ゾロゾロと中に入っていけば、ソファーのところでグローブを磨いていた真田とカップ麺を食べていた順平が迎えてくれた。
しかし、二人は嫌な顔もせず、むしろ湊を呼んだというゆかりを呼んできてやろうかとまで言ってくれた。
本人にすれば別に電話で到着を報せてもいいし、直接相手のいる部

屋まで行ってもいい。だが、呼んでくれるのならお言葉に甘えようと考えたとき、それは疾風の如き速さで階段を飛び降りてやってきた。
アップで纏めた茶色い髪を揺らし、怒りで瞳孔の開いた真紅の魔眼を持つ少女は、人の限界を超えた速度でやって来ると急接近してきた者の方へ身体を向けた青年の許に向かう。
「――――死ね」
そして、彼の三メートル前で跳躍すると握り締めた拳で顔を殴りつけ、着地すると即座に股間を蹴り上げた。
まさに一瞬の出来事でチドリたちは唖然としていたが、真田と順平は青年の蹴られたシーンを見て痛みを想像し内股になって顔面を青くする。
男ならば例え筋骨隆々なプロレスラーだろうとそこを蹴られれば悶絶し地に伏す。それを七歌は勢いをつけた本気の蹴りで行なったのだ。同じ男として潰れていないか本気で心配になり、潰れていなくても痛みのショックで気を失っていないかと攻撃された青年を見た。
すると、顔面と股間に連続でかなりのダメージを受けたはずの青年は、上着のポケットに手を入れたまま一切動じた様子もなく冷たい視線を目の前に少女に向けていた。
彼は明らかに半端な威力ではない攻撃を受けていた。吹き飛ばなくても数歩下がったりはしてもおかしくない。
だというのに、まるで何事もなかったかのように立っている青年に、戦闘態勢を崩していない少女が警戒を強めれば、ジッと少女を見ていた青年が静かに口を開いた。
「……お前が死んどけ」
その言葉を聞いた瞬間、七歌は全身に鳥肌が立った。ここは危険だ下がらなければと脳が警告を発する。
数瞬先の未来を視る魔眼によって、相手が右拳で殴りかかってくる映像が見え。それに従って七歌は斜め左後方へと飛ぶように退いてゆく。
相手が完全に動き出すより先に逃げている以上、いくらリーチがあろうとどうやっても湊の攻撃は届かない。

むしろ、攻撃をした直後の相手にカウンターを仕掛けようかと考えていたとき、七歌は下から衝撃を受けて頭が真っ白になった。
一体何が起きた。飛びそうになる意識を意思の力で繋ぎ止めて七歌は状況を把握しようとする。
すると、直前に自分がいた空間にポケットに手を入れたまま足を振り上げた湊が立っていた。
そこから推測するにどうやら青年は後ろへ逃げる七歌まで一瞬で間合いを詰め、そこから顎を蹴り上げてきたらしい。
先ほど魔眼で視た未来にそんな映像はなかった。攻撃手段も相手の移動速度も全てが想定外。何故だという疑問が頭を占めていると、続けてこめかみに衝撃を受けて横に吹き飛ぶ。
蹴り上げられ空中にいた七歌へ、さらに追撃として回し蹴りをしてきたようだ。
吹き飛んだ七歌はそのままテーブルを越えて真田のいた壁際のソファーにぶつかり、衝撃を吸収しきれず床に転がり落ちる。
「お、お前!? 相手は女子だぞ!?」
「七歌っちから攻撃したにしても手加減しなさ過ぎっしょ!?」
顎と頭に攻撃を喰らった七歌は、ギリギリで意識はあるようだが焦点が合わず動ける状態ではない。それを見た真田と順平は流石にやり過ぎだろうと声をあげる。
しかし、言われた青年はただただ面倒そうにしているだけで気にしていない様子だ。
これには一緒に来ていた女性陣も引いているが、そんな混沌とした場所に新たな人物がやってくる。
「七歌!?」
七歌から遅れて到着したゆかりは倒れている友人を見て心配そうに駆け寄った。
心配するゆかりに七歌は呂律の回らない口で「大丈夫」と返すが、明らかに無理をしている姿は余計に痛々しく映り、友人をこんな目に遭わせた者への怒りが膨れあがる。
「こんな風に女子に暴力振るって自分の思い通りにして、ホントにサ

イッテー！」
立ち上がったゆかりはソファーを足場にジャンプすると、立っていた青年の顔面に拳を叩き込んだ。
素人がそんな事をすれば拳を痛めかねないが、今回は成功したようで着地したゆかりは湊を睨んでいる。
一方、七歌に続いてゆかりにも殴られた湊は、一瞬だけ左眼が蒼くなると深く溜息を吐いた。
「……はぁ」
まわりにいる者はそれが攻撃の予兆だと本能で感じ取った。七歌のときは反応出来なかったが、今回は前の事があったからと動くことの出来たチドリとラビリスが湊の腕を掴んで止める。
さらにコロマルがゆかりに体当たりをかけて逃げるように促せば、邪魔をされた湊から蛇のように全身に絡みつく殺意が放たれ
「ち、違うのゆかりちゃん！　全部誤解だから！」
ようとして突然現われた第三者の声が響いたことで霧散した。
自分も七歌の二の舞になりかけたと気付いていないゆかりは、焦った顔で階段を駆け下りてくる風花と気まずそうな表情をした美鶴の方を見て、自分が何をされたか分かっているのかと友人を想って怒りの声をあげる。
「風花、こんなやつ庇う必要ないって」
「だから、私は有里君に襲われてなんかいません!!」
普段は穏やかで優しい少女の珍しい大声がフロアに響く。
ゆかりはそれに驚いて先ほどまで感じていた怒りが吹き飛び、少しは相手の言葉を聞く冷静さが戻ってきたのかキョトンとしながら言葉を返した。
「……へ？　どういうこと？」
「岳羽、その……山岸の話には続きがあったんだ……」
やってきた湊をとっちめる係の七歌とゆかりに対し、美鶴は湊を庇おうとする風花を慰め直接会わなくて済むようにする足止め係になっていた。
だが、そのおかげで先に事の真相を聞けたようで、理解した今では

先走った少女たちに訳も分からぬまま襲われた青年への申し訳なさを感じているらしい。
倒れていた七歌もようやく身体を起こすことは出来るようになったが万全とは言えず、殴られた分をやり返そうとして二人がかりで止められている青年など、場は既に遅かったという状況だが、それでも全員が話を聞いてくれる今言わなければならないと風花は泣きそうな顔のまま話した。
「本当に襲われたりしてないの。もう、話の途中で誤解したまま説明も聞いてくれないし。心配してくれたのは嬉しいけど暴力はダメだよ」
「えっとぉ……やらかした系？」
風花の言葉を聞いたゆかりは表情を引き攣らせてダラダラと冷や汗をかきながら尋ねる。
聞かずとも答えは分かっているのだろうがもしもの可能性に賭けたのだろう。だが、現実は残酷だ。彼女の問いに美鶴が頷いて返せば、ゆかりは高速で身体を反転させると腰を九十度に曲げ、未だに両脇からチドリとラビリスに腕を掴まれ拘束されている青年に謝罪した。
「……申し訳ありませんでした」
感情的になりやすい分、ゆかりはこういった部分は潔い。
今回は、相手のことを好きで、風花とそういった行為に及ぶ関係だと聞いて嫉妬した部分もあった。
だが、それはそれ、これはこれというやつで怒った一番の理由は友達を傷つけられたからである。
風花とゆかりのやり取りで青年は既に大体の事情を察しているだろうが、かなりの勢いで殴った上に罵倒もしてしまったので、しっかりと頭を下げて謝罪すれば、次の瞬間ゆかりは頭に衝撃を受けて床に倒れ込んだ。
薄れゆく意識の中で彼女が最後に見たのは、自由な足で踵落としをしたであろう青年のつまらなそうな顔だった。

第二百三十話　お昼時

昼――巌戸台分寮

痛む後頭部を手で押さえながらゆかりが目を覚ますと、自分がエントランスのソファーで寝ていることに気付いた。

時間はあれから四十分ほどしか経っておらず、反対側のソファーの足下にコロマルが寝ていることで、まだ彼らが帰っていないことを理解する。

では、その本人たちはどこにいるのかと周囲を見渡せば、キッチン側のテーブルに座って少女たちから説教を受けている青年の姿が映った。

既に回復したらしい七歌と美鶴と風花はキッチンに面したカウンターテーブルの方にいるが、テーブル席では青年の正面にチドリ、隣にラビリス、チドリの隣でラビリスの正面にあたる席には美紀が座っている。

男たちはどうやら上の自販機前の休憩スペースに行っているようだが、誰かがかけてくれたらしいタオルケットを畳んでから立ち上がると、ゆかりは叱られている青年の許へ近付いた。

「だから、いくら相手が本気で殴ってきても女の子やったら少しは手加減せなアカンの！」

「手加減はしてやっただろ。そこの莫迦はソファーに向けて蹴り飛ばしたし、どブスは謝りやすいようにもっと頭を下げさせただけだ」

一人目は浮かせたところをソファーまで蹴り飛ばし、二人目は拘束されながらも自由な足で踵落としを繰り出し意識を刈り取った。

女子相手にそんな容赦のない攻撃をした青年に対して、ラビリスは大層ご立腹のようだが、本人は自分が悪いとは全く思っていないようで手加減はしてやったぞと返す。

確かに彼が全力で攻撃していれば七歌は一撃目で頭部が潰れたトマトになっていたし、ゆかりは首があらぬ方向に曲がって地に伏していたところだ。

それを考えれば彼がかなりの手加減をしたことは間違いないのだ

が、他の者にすれば手加減した攻撃であってもやり過ぎたように見えたらしく、珍しく美紀も一緒になって湊を窘める。
「男性とは身体の丈夫さが違うんですよ？　それで消えない傷が残ったらどうするんですか？」
「それはそっちの莫迦に言え。本気の金的で障害が残る可能性を考えなかったのかとな」
　七歌の蹴りは一般人なら睾丸破裂の危険もあった。湊が無事に済んだのは顔を殴られた時点でペルソナを打撃無効のベルゼブブに切り替えたためであり、いくら湊だろうとノーガードだったなら潰れたりもした。
　それほどの危険があっても湊は相手をソファーに向かって蹴り飛ばすという配慮を見せていたため、これでまだ文句があるなら先に七歌を傷害罪で警察に突き出してから話を聞こうと言えば、七歌の攻撃もやり過ぎだと思っていた美紀は黙らざるを得ない。
　だが、他の者がそうやって言いくるめられようと、彼と十年近く一緒にいて喧嘩もしてきた少女だけは一切怯まずネチネチと言葉で責め続ける。
「誤解に気付いて謝ってきた相手に仕返しして恥ずかしくないの？」
「誤解から殴っておきながら、一方的に謝って終わりなら警察はいらないな」
「男として器小さ過ぎ」
「別に自分から器がデカいなんて言った覚えもないしな。そうやって評価するのはチドリの自由だ」
　暖簾に腕押しとばかりに湊はチドリの言葉を意に介さず聞き流す。自分は悪くないという確信から何を言われても揺らがないが故の反応だが、そんな男に文句を言っている方にすれば開き直りやがってとストレスが溜まる一方だ。
　加害者である七歌や同じく誤解してしまった美鶴、そして止められなかった風花は気まずそうに黙って彼らのやり取りを眺めているけれど、流石にそろそろ止めないとチドリやラビリスが先に爆発しそうだった。

近付いたゆかりは攻撃してしまった側である分気まずいのだが、チドリたちからすれば湊の被害者という微妙な立場であるため、自分が話しかけることで喧嘩を止めさせようと声をかけた。
「あー、私らのことで怒ってくれてるみたいだけど別にいいから。てか、先に洒落にならないレベルの攻撃したのはこっちだし」
「ほら、どブスもこう言ってる。お前らの気遣いは余計なお世話だとな」
「いや、どブス呼ばわりは聞き捨てならないけどね」
悪いのはこっちだからとゆかりが湊側に立った瞬間、それ見ろと湊は自分を責めていた三人を馬鹿めと見下した。
もっとも、蹴られたことは許すがどブス呼ばわりは別の問題なので認める気はない。それを指摘したとき湊は理解出来ないと不思議そうな表情を浮かべたが、本調子ではないゆかりがその反応を流せば、美鶴が起きてきたゆかりの体調を気遣って声をかけてくる。
「岳羽、気分はどうだ？」
「まぁ、少しまだ痛みますけど意識ははっきりしてるし大丈夫です」
「鍛え方が足りないぜ、ゆかり選手」
「うん。多分、あんたの方が重い怪我だったと思うんだけどね」
顎と側頭部に蹴りを受け、自分が駆けつけたときには呂律も回っていなかった。
そんな相手が普段通りの様子で笑顔を向けてくれれば、気を失っていたゆかりとしてはどんな身体の構造をしているのだと突っ込みたい衝動にかられても無理はない。
とはいえ、相手もどうやら無事な様なので、それはそれで良かったかなと思っているところへ椅子から立ち上がったラビリスが申し訳なさそうに謝罪してきた。
「ゆかりちゃん本当にゴメンな。また湊君にはキツく言っておくから」
「全然気にしてないからいいよ。さっきも言ったけど悪いのはこっちだし。てか、皆ずっと起きるの待ってくれてたの？」
見たところ気を失う前と何も変わっておらず、本当にただここで

待っていた様子だ。
　昼前にそれは申し訳なかったなと思うところだが、尋ねたゆかりに風花が待っていたのには理由があったのだと答える。
「うん。別に用事もなかったし、上での話の続きも伝えておかなきゃいけなかったから」
「あー。けど、そんなの後にしてお昼くらい食べてて良かったのに」
「まぁそうなんだけど、八雲君が三十七分後に目覚めるってエラく具体的に言うからさ。それなら待っておこうかなって」
　実際にゆかりが目覚めたのは三十七分後であり、その点については全員が驚かされた。
　まさか普段から他人の意識を刈り取っていることで、相手が目覚めるまでどれくらいかかるか分かるようになっているのかと疑うところだが、誰も怖くて尋ねられないので真相は謎のままだ。
　とはいえ、それはそれとして現在の時刻は昼過ぎで昼食には丁度いい頃合いである。他の者はともかく目覚めたばかりのゆかりは食べられるのかと美紀が体調と一緒に食欲についても尋ねた。
「ゆかりさんは食欲はどうですか？」
「うーん、普通かな。あ、お腹が空いてるから食べれるって意味ね」
「じゃあ、湊は責任取って何か作りなさいよ」
「……法治国家とか思えない理不尽さだな」
「司法はとっくの昔に権力の味方よ」
　他人の家とも言える場所で料理を作っていいものかと悩むところだが、別に寮生の誰からも反対意見が出なかったことで湊も諦めたのか嘆息すると席を立った。
　キッチンへと向かう際にラビリスが「コロマルさんの分もな」と言えば、背を向けたまま手を振って返したので話は聞こえたのだろう。
　これだけ女子が集まっていて男一人に昼を作らせるのもどうかという疑問が起きないのも不思議だが、それは全員が彼の料理の腕を信頼している証なのかもしれない。
　そして、湊がキッチンに向かって水の音や食器のぶつかる音が聞こえてくれれば、空いた席にゆかりが座り、上で聞けなかった風花の話の

続きを聞いた。
　聞いたときには思わずそれが初体験で良かったのかと同情したが、本人は残念な気持ちもなくはないが彼が相手で良かったとは思っていると答え、納得しているなら他人がとやかく言うべき事ではないとそれ以上は何も言わなかった。
　ただ、ゆかりたちが勘違いして湊に殴りかかっていくまでの経緯を聞いたチドリからは、いくら何でもそれは勘違いする方が悪いと先ほどとは一転して彼を擁護する声が飛んだ。
「……なんで本人に確認もせずに殴ることになるのよ。それ全く湊の事を信用してないって事じゃない」
「いやぁ、言い訳のしようもございませぬ」
「自分がどれだけ無礼な事をしたか分かってる？　貴女たちは湊を意識のない相手を強姦するような男って決めつけたのよ？」
　なんだかんだ少女も青年には甘い。本人を甘やかすような事はないけれど、他者が彼を馬鹿にしたりすれば、無言の圧力をかけたり反論したりする。
　それを指摘されれば彼女は家族だから当然だと答えるのだろうが、やはり湊本人には内緒なのでキッチンから彼が現れればシレッといつも通りのつまらなそうな顔に戻り、どうしてそうなったのかという一連の流れは伝えず結果だけを簡潔に告げた。
「湊、悪いのこっちの三人に決まったから」
「……最初からそうだったろ」
　三人とは七歌、ゆかり、美鶴のことである。実行犯の二人は勿論のこと、事情を話そうとしていた風花を引き止めて説明の妨害をしていた者も当然同罪だ。
　チドリから聞いた湊は言うまでもないと持ってきた皿をコロマルの前に置き、そのままキッチンに戻っていこうとする。
　そして、昼ご飯だと嬉しそうに皿の前まで来たコロマルが哀しそうな顔で耳と尻尾を垂らしたことにより、そこに乗っているのが皮を剥いただけのタマネギだと気付いたラビリスが怒って湊に殴りかかれば、青年はその手を掴んで背中側で捻り上げ、片手で相手を拘束する

と他の者から見えない角度で空いている手で何やらしていた。
二人のそんな小さなバトルを華麗にスルーしながらチドリたちの会話も続き、ムスッとした顔でチドリが言葉を発したときだった。
「いくら湊でもあり得ないから。非常識なりに強姦とかそういう卑怯な事はしないって分別はあるわよ」
「……いや、強姦したことはあるぞ」
『……は？』
背中側から抱きしめるような形でラビリスの服の中に手を入れていた男は、少女の拘束を解いて解放しながらとんでもない爆弾を落とした。
その場にいる全員は彼がなんと言ったのか一瞬理解出来ず、理解出来てもどう反応していいのか分からず固まるしかない。
頬を染めながら乱れた服を直したラビリスがコロマルの前からタマネギの乗った皿を回収し、それを無理矢理に渡された湊がキッチンに戻ろうとしたとき、待て待てと再起動を果たしたゆかりが青年にストップをかける。
「ちょっとタイム！　いますっごい爆弾発言だったと思うんだけど、本気で言ってるの？」
「わざわざ嘘吐く理由がないだろ。というか、俺と相手の初体験はそのときだぞ」
まさかの事実に少女たちは二度目の石化にかかる。経験豊富そうな彼の事だから、初体験は年上の美女とでも済ましたのだろうと勝手に思っていたが、強姦で済ませたとは誰も予想出来るはずがない。
というより強姦など直球の犯罪行為なので、一般人の少女たちもいる前で暴露することなどなかっただろうとチドリは思わず責めたくなったが、それよりもまず先に彼を少しでも真っ当な道に戻さなければと罪を償わせることを第一に行動する。
「湊、謝罪しに行きましょう。今すぐに」
「謝罪は必要ないって既に和解済みだ。気にしなくていい」
その謝罪が必要ないというのが会いたくもないという意味なのか、それとも本当に示談等が成立して形だけでも和解出来ているのかチ

ドリたちでは判断が出来ない。
湊本人はいつも通りだが、他の者からすれば大事だろうと彼は自分基準で考えるので参考にならず、どういった反応すればいいのか戸惑いつつ美紀が経緯を確認しておくべきだろうと、どうして基本的に女性に優しいはずの彼がそんな事をしてしまったのかを尋ねた。
「どうしてそんな事をしてしまったんですか？」
「……最初は殺すつもりだったんだけどな。直前になって相手に知り合いの姿が重なって出来なかったんだ。まぁ、それで殺せないなりに痛みを与えてやろうと、何度も殴りつけながら犯してやったんだ」
「殺すつもりだったって、どうしてそんな……」
「俺と一緒にいると邪魔だからという理由でイリスを殺された。だから今度はこっちが殺してやろうと思っただけだ」
淡々と話していた彼の言葉に黒い炎が混じる。事情を知っているチドリとラビリスだけでなく、ゆかりや美紀たちも彼と一緒に海外へ行った女性が死んだことは聞いていた。
裏にそんな陰謀めいたものがあったとは初耳だが、イリスを殺されたことに対して彼がまだ深い憎悪と激しい怒りを持っていることは分かった。
相手を殺めるという最後の一線を越えなかったことは不幸中の幸いで、それを思えば相手のしたことに対する報復として彼の行為は正当性があることも理解が出来た。
そう、一般人である少女たちでも彼が復讐に走ったことを〝間違いだとは言えない〟と認めてしまったのだ。
湊が他人を鏡とすることで行動の善悪や評価を下す性格であることを利用し、理由があろうとダメなものはダメと否定することで、彼をどうにか真っ当な光の当たる世界に戻そうと思っている者たちにすれば、この場で彼が認められてしまったことは全てが無駄になったという点で非情に残念でならない。
ただ、そうやって彼に一般的な価値観を教えようとしていた者たちも、心の中では彼の行動に理解を示してはいたので、遅かれ早かれ青年も自分は間違っていなかったと気付いていたはずである。

ならば、今ここで話すべきはどうやって彼に改めて正しい善悪の価値観を教えるかではなく、彼が本当に万全なアフターフォローを出来ているか確認することだろう。
色々と抜けたところのある青年のボケボケっぷりを知っていたラビリスは、ここをまず確認しておくかと他の者が尋ねづらい部分を彼に聞いた。
「湊君、赤ちゃんは？　赤ちゃんはどうなん？」
「赤ん坊？　誰のだ？」
「湊君と相手のに決まっとるやん。そんときは避妊してへんやろ」
話の流れで青年と相手との間に子供が出来てしまったかを尋ねていると分かるはず。
しかし、ここでも青年の天然スキルが発動してしまったことで、他の者たちは深く溜息を吐きつつ、ちゃんと確認しなさいと窘めれば、青年はマフラーから携帯を取り出して電話をかけようとした。
その際、彼が誤魔化す可能性を疑ったチドリから、最初からスピーカーモードにして話せという指示が飛び、面倒臭そうにしつつ素直に聞いた湊がスピーカーモードに切り替えた携帯をテーブルに置いて相手との電話が繋がった。
《すみません、お待たせしました。何かご用でしょうか？》
「いや、今日は少し質問したくて電話したんだ。ソフィア、お前子供はいるか？」
聞こえてきたのは鈴のように綺麗な女性の声。けれど、青年が呼んだ名前から外国人であることは明白で、連絡が取れるのは良かったが海外にいるなら事情は複雑になるなと全員が心配していると、彼の質問から少し間を置いて予想外の答えが返ってきた。
《あの、産んでもよろしいのですか？》
「……まぁ、ダメだと許可しない理由もないしな。腹を痛めるのはお前だし、お前が産みたいならこっちはサポートするくらいだ」
《そうですか。その、なんと言葉にしていいのやら。てっきりダメだと言われるばかり思っていたので、正直に申しますととても嬉しいです》

産んでもいいか。それは既に妊娠して出産すべきかどうか考えているからこその思考だ。
少女たちにすれば青年が本当に父親になっていたことが衝撃であり、さらに続けて犯されたはずの女性が出産に非常に乗り気であることが第二の驚きだった。
自分が知らない男に襲われて妊娠したならば、腹の子に罪はなくとも忌み子として見てしまうことになりそうで、電話の向こうにいる女性がどうしてここまで嬉しそうに出来るのかまるで分からない。
《それでいつになさいますか？　名前も考えなくてはいけませんし、籍をどうするかというのも重要ですね。わたくしは姓が変わることは気にしませんので好きにお決めになってください。ああ、勿論、湊様が名を戻すというのであれば百鬼という姓になることも》
その時、青年の手が一瞬ぶれてテーブルの上に置かれていた携帯の画面が自然に割れた。
何が起きたのか分からない少女たちは、驚き目を見開いて携帯と青年の間を視線で何度も往復する。
すると、どこから取り出したのか湊は二つ目の携帯を出すと、再び同じように設定変更してソフィアの番号にかけた。
直前に電話していただけあって今度は出るのが速かったが、相手が話し始める前にこちらも伝えておかねばと、湊は事情を説明しつつ暗に察してくれと願った。
「……すまない、画面に虫が止まってな。それと、質問が悪かったようなので改めて聞き直すが、お前に妊娠や出産の経験はあるか？　いま携帯は理由があってスピーカーモードなんだ。周囲には同じ学校のやつらがいるから、そういった者たちが聞いても大丈夫なよう全年齢対象向けの回答を期待する」
《そういう事ですか……。では簡潔に答えますがどちらも経験はありません。まぁ、両親が試験管ベビーですとやはり自然妊娠は難しいのだと思います》
湊が察してくれと願えば聡いソフィアはその期待に応えた。まさか質問の意図まで理解しようとは思っていなかったが、相手はより優

れた人間をと遺伝子操作を受けて作られた存在だ。
その能力を持ってすれば湊の置かれた状況を推測することも容易いのか、どこか残念そうな色を声に混じらせつつ青年の求めた答えを無事に返した。
しかし、歳の近い少女にするとソフィアの答えは素直に納得がいくものではなく。一生に一度の思い出を滅茶苦茶にされながら、どうして冷静でいられるのかと尋ねずにはいられなかった。
「ねえ、貴女って湊に無理矢理純潔を奪われたんでしょ。どうして普通に対応出来ているの？」
《その声はチドリさんでしたわね。貴女がどこまでわたくしたちの関係を聞いたかは知りませんが、最初からわたくしは湊様を好いていたのですよ。自分の物にして、最後は子を為そうと思うくらいに》
普通に考えると恨んで当然だ。相手を殺してやりたいと思っても無理はない。
けれど、その前提が間違っているとすればどうだと言いながらソフィアは続ける。
《ですので、抱かれること自体に抵抗感はそれほどありませんでした。最初は衣服を強引に破られて恐ろしくも感じましたし、暴力を振るわれながらという部分は確かに心に傷として残りましたが、その後に改めて優しく抱いて頂いたことで上書きも出来ましたし。他の方が心配されるような事は一切ありませんのよ》
一般的にはチドリたちの想像する反応を取って当たり前。それでも自分たちはそうはならなかった。
二度目に抱かれたときの事を思い出していたのか、どこか嬉しそうに話すソフィアの答えに嘘は感じられない。
おかげで性犯罪者の称号を手に入れていた青年を警察に突き出さずに済み。他の者たちもようやく安堵の息を吐くことができた。
聞きたい事も無事に聞けて電話も切られ、良かった良かったと一同を和やか空気が包みかけたとき、何かを忘れているようなと全員が小さな違和感を覚える。
どうして自分がそんなものを感じるのかも分からず、そもそも何に

対して違和感を覚えているのかも分からない。
周りを見渡してもお昼ご飯を待つコロマルや、眼帯の位置を直しつつキッチンに戻っていく青年しかおらず。やはり何もおかしな点など見つからないまま、気のせいかなと思ったところで青年のいるキッチンの方から肉を焼く香ばしい香りが漂ってきた。
お昼時だったことでお腹の空いていた少女たちは、その香りを嗅いだだけで意識が昼食に持って行かれて深く考えることが出来なくなってくる。
あまりの空腹から先走って七歌がキッチンに入ろうとしたときには、調理していた湊の方からナイフが飛んできて壁に刺さり、素人が覚悟もなく入ってくるんじゃないと料理人たちの聖域への侵入を拒む一幕も見られた。
だが、さらにしばらく待っているとようやく青年がキッチンから出てきて、それぞれの前に敷いたランチョンマットの上にオニオンスープとサラダ、そしてメインであるバター醤油で食べるローストビーフ丼を並べ、先ほどの匂いの正体がローストビーフの焼き目を作っていたのだと判明した。
美容に気を遣う少女たちにとって、焼き色と薄ピンクのグラデーションが見事な肉の上に乗ったバターは気になるところではある。
しかし、口にする前から絶対に美味しいと確信出来る料理を前にすれば、少女たちも今だけは純粋に美食の徒になれと葛藤を捨て本能に身を任せようと思うことが出来た。
犬用に別に作られた料理もコロマルの前に置かれ、最後に自分の分を持ってやってきた青年が席に着けば、じっと待っていた少女たちは流れるような所作で手を合わせて食材と作ってくれた者への感謝の祈りを口にする。
『いただきます』
祈りを捧げた少女たちは湊が用意した特製の醤油をバターにかけ、それを箸でゆっくりと溶かすように混ぜて肉にタレを馴染ませる。
タレのかかったご飯だけで十分美味しいのだろうが、焼き目の部分にスパイスも利かせた柔らかな肉があれば相乗効果で料理の完成度

は高まる。
タレを馴染ませていた箸の先を舐めただけで、醤油とバターの濃厚な味と芳醇な香りが広がり唾液の分泌が増え。もう待てないと少女たちは丼を手に持って箸で摘まんだ肉を口へと運んだ。
そして、口に入った途端に少女たちを襲ったのは、バター醤油のタレがかかった肉からジュンワリと溢れてきた凝縮された旨みだった。
噛む度にスープのように溢れてくる肉汁は、肉本来の美味しさを少女たちに伝える。
そこにタレの味が混ざって深みが増し、いつまでもこれを味わっていたいと少女たちの租借は止まらない。
だが、柔らかい肉は噛んでいると解けていってしまい。最後には味の余韻を残しながら喉の奥へと呑み込まれてしまう。
すると少女たちはまた味わいたいと肉を口に運んで味の染みたご飯も食し、間にサラダとスープを挟みながらもほとんど休みなく丼を平らげてしまった。
食べ終わった少女たちは皆が一様に、ほぉ、と充足しきった顔をしているが、青年がさっぱりとしたチーズケーキをデザートに出してくれば、再び彼女たちの目には火が灯り、今度は姦しい女子会の体で食事は進むのだった。

第二百三十一話　テスト明けの過ごし方

７月１８日（土）
午前――ＥＰ社
私立である月光館学園と違い。普通の公立では土曜日は休日になっている学校は多い。
ＥＰ社前のバス停で降りて敷地内へと入ってきた久慈川りせも、今日は学校が休みだからと朝から自主練のため社内のレッスンルームを目指してやって来た訳だ。
トップアイドル柴田さやかとの合同フェスは来月に迫っている。多忙な相手とのレッスンは機会が限られているため、それ以外の時間に自分の曲とパートのレッスンを仕上げておく必要があった。
おかげで仕事と学校のないときは基本的に通い詰めで、今では社内の人とも親しくなって頑張ってねと応援までされている。
「おはようございまーす！」
「おはよう、りせちゃん。レッスン頑張ってね！」
「はい、頑張ってきまーす！」
入り口で通行証を通して建物に入り、社員とすれ違う度に元気に「おはようございます」挨拶しながら目的地を目指す。
現在、〝アイドル・久慈川りせ〟はなんの実績もないペーペーである。知名度こそ湊の戦略のおかげで高まったが、それも〝トップアイドルと共演する謎の新人〟という一時の話題性によるものでしかない。
そんな駆け出しにとって今のレッスン環境は破格の待遇で、最新設備の整ったレッスンルームで有名なトレーナーからマンツーマンで教えて貰えることなど今後数年はないだろう。
レッスンが終わってからシャワールームに向かえば、天然温泉の引かれた広々とした浴場があり、事前に希望を出しておけばマッサージも受けられる。
この会社の社員になれば習い事としてりせが現在受けているものと同じ環境でレッスンが受講出来、浴場の利用やマッサージは習い事

のサービスとして無料で受けられるというのだから、芸能界を引退したらここで雇って貰えないかなとりせが考えてしまうのも無理はない。
　というのも少女にすれば青年には貸しがあるのだ。身体が硬いと馬鹿にされ、そこから身体を柔らかくするという名目で全身を揉まれたのだ。
　腕や足だけではない。服の上からではあるが尻も胸も触られ、股関節の辺りを揉むときには大事な部分にも触れられた。
　多感な時期の少女にとっては泣きたいほどの辱めであり、翌日はショックでレッスンに行けなくなったほどだ。
　けれど、彼の行なった肉体改造とやらの成果は本物で、たった一度のマッサージで確かに身体の柔軟性が増していた。
　おかげでダンスのキレも良くなり、無理矢理に押収されたようなものだが、対価を払っただけの価値はあったと言える。
　しかし、それはそれ、これはこれというやつで、アイドルとして身体を柔らかくして貰えた事は感謝するが、一人のうら若き乙女として先日のセクハラ行為に対する謝罪と賠償はなんとしてでもぶん取ってやらねば気が済まなかった。
（今日はプロデューサーいるかな？　テスト期間だって言ってたけど）
　エントランスを抜けて建物の奥までやってくるとレッスンルームのある区画に到着する。
　それぞれの部屋は防音と防振がバッチリなのだが、一応、さらに各部署の営業室と離しておけばより安心ということで離れた場所にあった。
　通い慣れたりせはその中を歩き、現在はほぼ自分専用になっている部屋へと向かう前に更衣室でレッスン着に着替えようと思ったのだが、ロッカー室に向かう途中にある自販機の置かれた休憩スペースに知った顔を見つけたことで彼女は相手の許まで近付いた。
「あ、プロデューサー。おはよう、何してるの？」
「……お前を待ってたんだ。今日はレッスンは休み、その代わり一つ

撮影の仕事だ」
休憩スペースで一人コーヒーを飲みながらノートパソコンで作業していた青年は、りせがやってくるとパソコンを閉じて顔を上げながらそう話す。
レッスンする気満々だったりせとしては出鼻を挫かれた形だが、〝撮影の仕事〟という言葉が頭に入ってくるとすぐに顔を輝かせて本当かと嬉しそうに尋ねる。
「仕事ってホント！　あ、でも、井上さんは？　事務所にちゃんと話は通ってる？」
「ああ、許可も取ってある。マネージャーは今日は別の担当の挨拶回りで来られないから、俺が同行してやることになった」
「そうなんだ。でも、他所のアイドルのマネージャー業務しても大丈夫なの？　ほら、こうギャラとかの話で」
「そも、仕事を取ってきて回してやってるのも俺だからな。言っておくがお前のマネージャーは俺と事務所の中継をしているだけで、最近は別の担当たちの仕事にかかりっきりだぞ。掛け持ちしていることもあって今の方が楽ではあるらしいが」
フェスに出演するということで有名になり、りせは最近になって仕事が増えている。
話題のアイドルとして朝のワイドショーで生歌を歌ったこともあれば、週刊少年誌のグラビアを撮影したりもした。
おかげで湊と出会う前と後で給料が十倍以上違っているのだが、それらは湊がコネや権力を利用して多方面に声をかけたことで舞い込んで来ている部分があり、マネージャーの井上は事務所への連絡や売り出しの方向性的にＯＫかを判断するくらいしか関わっていない。
そんな裏方の話を今まで知らなかったりせとしては、自分のアイドル活動が事務所の外の人間にほぼ任されていると知って驚きを隠せないが、考えてみればペーペーでしかない少女に専属マネージャーなど付くはずもない。
そして、井上が他の駆け出しアイドルたちのマネージャーも兼任していることは知っていたため、現状、湊の売り方で仕事が出来ている

ならいいかと楽観的に考える事にした。
「そうなんだ。じゃあ、お仕事いこ？」
「先に着替えだ。その後に車で移動するから、日焼け止めを全身に塗っておけ。今日は屋外ロケになる」
言いながら湊はりせが来た道を戻ってゆく。着替えというから更衣室に行くのかと思ったが、そちらはただのロッカールームで、これから向かうのはテレビ局でもよく見るようなメイクルームらしい。
そんなものが会社に用意されているのは驚きだが、ここでは様々な習い事が出来るようになっているので、メイクルームもその道の資格取得用に現場そっくりにしているのだとか。
案内されて中に入れば確かにテレビ局そっくりの造りだと納得する。もっとも、キー局の大きなメイクルームよりさらに広いが、それは実際に使う部屋か習い事用の教室かの違いだろう。
一つの鏡の前にメイク道具が置かれ、壁際には何着もの服が掛けられている。メイクする場所は分かったが、衣装と実際の化粧はどうするのか疑問に思ったりせは可愛らしい服を眺めながら湊に尋ねた。
「ねぇ、撮影用の衣装ってどれ着ればいいの？」
「……別に好きなやつでいいぞ。夏ってことで爽やかなイメージの半袖なら何でもいい。お前のセンスに任せる」
「そうなんだ。あ、わたしこのブランド結構好きなんだぁ」
掛けられている服は全て撮影に使えるものだと聞き、りせは今日使った衣装を後で貰ったり出来ないかなと考えながら服を選ぶ。
彼女は知らないがここにあるのは全て湊の私物だ。他の者の着替え用にマフラーの中に適当に入れているものなので、本人に言えば二着だろうと貰っても構わない。
ただ、それは後で知ることなので、りせはオレンジのワンピースに白のショートパンツを選ぶとこれに決めたと湊に渡した。
「プロデューサー、私これにする。外なら動くかもだしスカートよりパンツの方がいいよね？」
「……そうだな。じゃあ、着替えるついでに日焼け止めを塗るぞ」
歌番組等には出演の経験があるりせもバラエティなどはまだ経験

がない。しかし、テレビを見ている中で自分ならこういった部分を気をつけようとは考えていたので、今回は衣装選びの時点からそれを実践してみた。
彼女より撮影等に慣れている青年も認めたことで、考えがあっていて良かったと安心したのも束の間。何故だか湊が自分の手に日焼け止めクリームを出したため、りせは嫌な予感がして後ずさりながら相手に行動の意味を問うた。
「ちょ……なんでプロデューサーが手に出してるの？」
「なんでって自分でやるより早いだろ」
「私は女の子で、プロデューサーは男でしょ！」
「図々しいぞ。いいからさっさと脱げ。服に隠れる部分にも塗るんだからな」
夏の紫外線を甘く見てはいけない。服が薄くなった分、それを通過した紫外線が肌を焼くのだ。
他所の商売道具を預かっている以上は最善を尽くさねばならないだろうと青年が言えば、少女は身の危険を感じて全力で逃げ出し、二メートルもせずに捕まってしまった。
その時点でかつての肉体改造とやらを受けた際の記憶が蘇り、必死の抵抗も空しく顔にクリームを塗られると、今度は空いた両手で次々と服を脱がされ一気に下着姿まで剥かれた。
中学生という年頃もあって未成熟だがその身体は女性になりつつある。それを恋人でもない男に見られるだけでなく、下着の中以外の全てを丹念に触られたとなれば少女のプライドはボロボロだった。
文字通り全身くまなく日焼け止めを塗られた少女は、終わってから解放されても下着姿のまま床に座り込み、一仕事終えて煙管をふかしていた馬鹿を目に涙を溜めて睨みながら恨みを吐いた。
「うぐぅ……絶対に訴えてやる。事務所経由で厳重抗議してやるんだからぁ……」
「言っておくがさっき出たギャラの話で行くと俺の時給は一千万を超える。つまり、本来ならお前はこうやって無駄な時間を使わせている事に対して一千万を支払う義務がある訳だ。だが、それは俺の厚意に

よって免除されてきた」
「……それで？」
「別に遡って事務所に請求してもいいんだぞ。中堅のタクラプロじゃ自己破産しか道はないがな。所属タレントの一人や二人喰っても足りないくらいなんだ。仕事のために日焼け止めを塗った程度でゴチャゴチャいうな」
文句が多いりせに対して湊は仕事だから割り切れと開き直って告げる。
彼のギャラは実際はＥＰ社の年収を時給に計算しなおした際の話で、別に仕事の出演料が時給一千万という訳ではない。
だが、その部分を説明しなければ駆け出し自分と一世を風靡した相手にそれほど差があるのかと伝わり、所属タレント食べるという部分は下衆い例えだとは思ったが、確かに相手は仕事のために触ってきただけだと渋々納得して立ち上がった。
「……将来もし自伝を出すことがあったら、プロデューサーにはよくセクハラされたって書くから」
「枕営業をしていたと言われても良いなら好きにしろ。正直、お前の身体には欠片も欲情しないが」
「うっさいバーカ！　絶対にいつか後悔させてやるんだから。ウエストのくびれとスラッとした脚線美にメロメロって言わせてやるもん！」
「……胸も成長しろよ」
相手が啖呵を切ったことで、それは将来が楽しみだと青年は薄い笑みを浮かべながら化粧台へ移動する。
その動きで化粧も彼がするのだろうと理解したりせは衣装を着てから椅子に座り、慣れた手つきの青年からナチュラルメイクを施された。
どうして男なのに他人の化粧に慣れているのかと尋ねれば、美術部だから色塗りは得意なんだと返されてゲンナリする場面もあった。
とはいえ、彼の化粧は実に見事なものでりせも納得の出来であり、これなら別に美術部の色塗り感覚でも構わないと思える。

着替えもメイクも終了し、湊が新たに出してきたジュエリーボックスから好きな物を選べ言われ、小物のアクセサリーも身に付けてりせの準備は万端。
それじゃあ出発しようと車の待っている駐車場に向かう途中、少女はそういえばどんな仕事か聞いていなかったと隣を歩く青年に仕事内容を聞いた。
「ねぇ、プロデューサー。そういえば今日の仕事ってなんの撮影？　バラエティ？　それともグラビアとか？」
「……いや、ＡＶだぞ」
瞬間、少女は一陣の風になった。手足が千切れても構わないという覚悟で全力で振り、暴君から逃げなければと命懸けで元来た道を戻って人のいるエントランスを目指した。
だが哀しいかな、魔王からは逃げられない。
「――――逃げるな」
りせは己の持ちうる全力で走った。だというのに、エントランスまで十数メートルというところで後ろから抱えられ、まるで荷物のように肩に担いだまま運ばれてしまう。
けれど、少女としてここはどうやっても逃げなければならない。全力で叫び暴れながらりせはそんな仕事は受けられないと抗議する。
「いや！　絶対に無理っていうか中学生にさせる仕事じゃないから！　事務所だって絶対許可しないし！」
「お前のマネージャーは経験がなくて初めてだからよろしく頼むと言っていたぞ」
「はぁっ!?　ちょ、こら、井上ぇぇぇ!!　絶対許さないから覚えてなさいよぉぉぉ！」
本人になんの確認もなくなんて仕事に許可を出しているのか。アハハと笑う眼鏡の姿を空の向こうに幻視しながらりせは次に会ったら殺すと心の中で誓う。
だが、今はそんな事を言っている場合ではない。少女が全力で暴れようと気にせず進み続け、見た目以上に筋肉ゴリラなパワーを発揮している男を止めなければ己の貞操が危険なのだ。

人助けで有名な相手ならば必死に頼めば聞き届けてくれるかもしれない。そんな淡い期待を抱きながらりせは叫んだ。
「ねぇ、ホントにイヤだから離して！　私、絶対にしない！　てか、生理だから、いま生理になったから！」
「……もし事実なら驚きのタイミングだな。それよりお前、馬とかは大丈夫か？」
「う、ウマっ!?　バッカじゃないの、てか変態過ぎでしょ!?　誰か助けてー！　犯されるぅぅぅ！」
少女の必死な言葉を軽く聞き流し馬は大丈夫かと聞かれ、りせは驚きのあまり目を見開いてふざけるなと返した。
なにせ馬のアレは人間のものと比べて倍じゃ済まないほどご立派なのだ。未経験の中学生がそんなもので純潔を散らせるはずがない。
そう思って全力で周囲に助けを求めれば、相手が何を言っているのか一瞬分からず湊が立ち止まり、そこから数秒考えて相手の勘違いに気付いて誤解を解いた。
「……久慈川、言っておくとアニマルビデオの略だぞ。動物園のパンフレットと園内で流すＰＶの撮影だ」
「……へ？」
そう、りせはＡＶと聞いてアダルトビデオに出演させられると思ったようだが、湊が言っていたのはアニマルビデオの事だった。
馬が大丈夫かと聞いたのも乗馬の画を撮る可能性があったので、そういった大型の動物も怖くはないかと先に聞いたのだ。
説明を受けたことで大人しくなったりせを湊が下ろせば、相手は耳だけでなく首まで真っ赤に染めて視線を逸らしつつ精一杯の強がりをいう。
「し、知ってたもん」
「……お前の心は汚れているな。そして、出会ってから短いがこれまで随分と手を掛けてやっていたのに、処女に獣姦させるようなやつだと思われていたとは哀しくて泣きそうだ」
「そ、それはゴメンってば。でも、ＡＶって言ったら普通はアダルトの方だと思うでしょ」

「それは人による。俺は思わない」
中学生のアイドルが随分と歪んだ性知識も持っている事に湊は呆れる。耳年増なだけともいうが、どちらにせよアイドルのイメージとしてはあまり良くないだろう。
そして、自分が盛大な勘違いから青年を罵倒してしまった事に加え、アブノーマルな世界のことも知っていると青年に知られたことで少女は羞恥から顔を上げることが出来ず。次に口を開いたのは目的地の動物園についてからだった。

午後――月光館学園
今日は月光館学園の期末テスト最終日。最後の科目も終えて地獄のテスト週間から解放された生徒たちは、それぞれの自由を謳歌しようと学校を出て行く。
そんな中、七歌が順平やゆかりと一緒に靴箱まで降りてくると、丁度いいタイミングで風花やラビリスたちE組メンバーと出会い。真田や美鶴もやってきたことで一緒に帰ることになった。
「フゥ、夏の日差しが眩しいぜ……」
「お前はどういうキャラを目指してるんだ?」
靴を履き替えて外に出ると太陽に手をかざしながら順平が呟いた。
急に謎のキャラを見せてきた相手に真田は呆れ気味に尋ねるが、どうやらテスト明けでハイになっていることと屋久島旅行が楽しみな事が関係しているらしい。
「いやぁ、だって屋久島っすよ? 南の島、青い海と白い砂浜がオレを待ってるぜってなもんでしょう!」
「やれやれ、はしゃぐのはいいが事故だけは簡便だぞ」
「分かってますって」
海での事故は陸でのそれよりも助けるのが難しい。ライフセーバーですら救助の際に死ぬこともあるのだから、普段から泳いでいる訳でもない一般人では助けるのはほぼ絶望的だ。
そのため真田は先に釘を刺しておいたのだが、順平は分かっているのかいないのか判断に困る笑いをみせてきた。

これで本当に事故にあえば洒落にならないが、今からしつこく言ってもしょうがない。そう思うことにして七歌も彼らの話には突っ込んでいかず、隣を歩いていたゆかりに旅行のことで話しかけた。
「そういえば、ゆかりは水着買った？」
「ううん。テスト期間中はそっちに集中したくて帰りに買おうと思ってたとこ。別にセールもやってなかったしさ」
旅行に行くことが決まってから雑誌を見たりはしていたが、実際に店舗まで足を運ぶのは控えていた。
やはり水着を買ってしまうと頭が旅行の方へ行ってしまい。少しずつ進めていた勉強の内容が抜けて行ってしまう気になるのだ。
本当にそうなるかは本人のやる気次第ではあるが、ゆかりはその方法で勉強に集中出来たことで、終わった今はどんな水着にしようか考えていた。
すると、七歌たちの後ろを歩いていて話が聞こえていたのか、ラビリスやチドリと話していた美紀が会話に参加してくる。
「なら、ゆかりさんも一緒に行きますか？　私たちも水着を買いにいく予定だったんです」
「あ、そうなんだ。そっちもどっか行くの？」
「うん。ゆかりちゃんらが旅行に行くって聞いとったから、ウチらも皆で泳ぎに行こかって話してて」
ラビリスたちがゆかりたちの旅行について聞いたのは先日寮に行ったときの事だった。
別に旅行へ行く金がない訳ではないが、どちらかというと夏のイベントを楽しみたいということで彼女たちも同じ時期に泳ぎに行くことが決まったのだ。
ただ、ラビリスたち総合芸術部のメンバーのうち屋久島の行くのはゆかりと風花のみ。残りは美紀とチドリとラビリスと湊という事になるので、ラビリスの言った〝皆で〟の中にもしや湊も入っていないよなと心の狭い男が一人目だけは笑っていない笑顔で妹に聞き返した。
「一体どこに行くんだ？　泊まりか？」

「日帰りのプールです。有里君が屋内プールの施設を持っているらしいのでそこに」
「ふえー……そんなの持ってるって八雲君って皇子ブームで稼ぎまくったの？　てか、今日は本人はいずこに？」
家にプールがある、ではなく、屋内プールの施設を持っているとは随分と規模が大きな話だ。
それが湊の家ではなく彼の持ち物だというからさらに驚きは強くなり、本人がいないこともあって七歌がお金の出所と共に彼の所在を尋ねると、本人から連絡を受けていたチドリが携帯の画面を見つつ答えた。
「……湊は今日は仕事。アイドルとＡＶ撮影に動物園に向かってるって」
「ちょっ、オレたちが勉強に精を出してるのに、有里君ってばどこで精を出そうとしてんのよ⁉　つか、十八歳未満が男優していいんか⁉」
「……プロモーションのアニマルビデオだけど？」
「ですよねー。はい、知ってましたー」
年頃の少年としてＡＶという単語につい反応してしまった順平は、チドリからゴミを見るような軽蔑しきった視線を送られ目を逸らしてしまう。
ほぼ同時期に同じ勘違いをしたアイドルがいると知れば喜ぶかもしれないが、彼がその事実を知ることは一生ないので同級生の女子から変態のレッテルを貼られ終わることとなった。
そんな風に、旅行に向けて高いテンションになっていた少年が落ち込みがっかりしていると、彼らの正面から歩いて近付いてくる者がいた。
「やあ、皆お疲れさま」
『理事長？』
彼らの前にやってきたのは月光館学園の理事長を務める幾月修司だった。
普段、相手は桐条グループのラボにいるので、こうやって昼から出会うのは本当に珍しい。

その事を指摘しつつ美鶴はどういう用件かを相手に質問した。
「珍しいですね。今日はどうしたんですか？」
「ちょっとね。寮で暮らす子が増えるから、今日はその子を迎えに来たついでに寄ったんだ」
そう言ってから幾月が横にずれると、彼の後ろにいた少年がひょっこりと現われる。
少年の姿を見て相手が誰かを確認した一部のメンバーは驚いた。
着ている物は同じ月光館学園のものだがそれは初等部の制服で、そして相手と既に知り合いの者もいる天田乾だった。
「どうも、こんにちは」
「あれ、天田少年て、え、寮で暮らすのって天田のことっすか？」
「ああ、彼は夏休み中も帰省しなくてね。でも、初等科寮に一人じゃ寂しいだろうから、その間だけ転居させようって訳さ」
「しかし、理事長。うちの寮は……」
「分かっているとも。だが、巌戸台分寮で暮らすということは彼もそうって事さ」
いくら一人になってしまうからと言って無関係の者を寮に泊まらせる事は出来ない。
そう思って美鶴たち特別課外活動部のメンバーが視線で語り合えば、言いたいことは分かっているよと優しく笑って幾月は彼にもペルソナ使いとしての素養があると言った。
勿論、メンバーではない者たちは言葉の意味を理解出来なかったはずだが、きっと高校生の中で一人だけ小学生がいては気まずいのではという意味に取ったらしい天田は、夏休みの間だけとは言っても世話になるということで年上の者たちへ丁寧に挨拶した。
「もう少し先になりますが、皆さんよろしくお願いします。でも、随分と男女比が偏っているんですね。男子は僕を入れて三人ですか？」
「いや、今はいないがもう一人いるぞ。俺の幼馴染みだ。それと女子も四人だけでそこにいる三人は実家暮らしだ」
今現在ここにいるのは男子生徒が天田を含め三人、それに対して女子生徒は七人と男女比がかなり偏っている。

巌戸台分寮は同じ寮で男女が暮らすという珍しい状態ではあるものの、流石にこれでは男子の肩身が狭いのではと心配して尋ねた天田に、真田はチドリたちを指して友人関係だが寮生ではないと教えてやった。

その説明で成程と納得した様子の天田は、紹介を受けたメンバーに視線を送っていき、丁度知っている顔があったことでラビリスのことを見ながら話題として出した。

「あ、そちらの方は有里先輩とバイクに乗ってる方ですよね。登校時間にたまに見ました」

「天田君も有里君のこと知ってるんだ？」

「有名ですから。それに最近初等部の方でも話題なんですよ。今度の劇場版フェザーマンRのキャストに入ってて、テレビ放送の方でも劇場版に先駆けて出演するのが決まっている事が告知されているんです」

少年の口から湊の名前が出たことで、初等部でも知られているんだなとゆかりは軽い気持ちで考えていた。

だが、天田からやけに熱の籠もった言葉が返ってきたことで押され気味になり、さらに言えば突っ込み所があったため改めて確認を取る。

「え、フェザーマンって日曜の朝にやってる特撮だよね？　それに有里君が出るの？」

「はい。レギュラーではありませんがフェザーマンの先祖である〝翼の民〟の戦士シムルグとして登場するんです。映画と先行登場では翼の民の巫女ガルダとしてアイドルの柴田さやかさんも一緒に出ますし。特撮好きの間だけでなく一般の方からも注目を集めていますよ」

正式名称・不死鳥戦隊フェザーマンRとは、日曜日の朝のスーパーヒーロータイム放送している特撮番組で、不死鳥戦隊フェザーマンからキャストや一部設定をリニューアルして作られた新番組だ。

幼い男児だけでなくフェザーマンを見ていた大人からも根強い人気があり、最近では若手のイケメン俳優をキャストに起用しているこ

ともあってお母さんたちだけでなく一般の女性たちからも注目を集めている。
しかし、そんな特撮番組にどうして湊とトップアイドルが出演するのかと疑問に思えば、そういえば野外フェスを企画していたので、その宣伝も兼ねて特別出演することにしたのだろうとすぐに疑問は解決した。
本人は色々と面倒臭がりなのだが、変なところで凝り性なので今回の件もある意味では納得がいく。
ただ、目の前にいる純粋にヒーローに憧れている少年には、大人の事情が絡んだ青年の思惑を話すことは出来ないなとメンバーの心は一致し、湊はいないのかなとソワソワしている彼に対してその部分は話さずに済むよう言葉を選んで七歌が会話を続ける。
「彼は今日お仕事でお休みだけど、天田君って結構特撮とか詳しいの？」
「え？　いや、その、普通ですよ。起きたときにテレビが点いてて見るくらいで、劇場版は学校の先輩が出るなら見てみようかなって感じですし」
「そうなんだ。けど、最近は大人にも人気だからチェックしてるのかなって思ったんだけど、あんまり興味ないんだね」
「べ、別に興味がない訳じゃありませんよ。というかそういう七歌さんは詳しいんですか？」
「うんにゃ、ぜんぜん。名前は知ってるけどメンバーの色も知らない」
七歌も本当は知っている部分はある。流石に登場人物の名前までは知らないが、メインキャラの色くらいは覚えていた。
ただ、ここは天田と交友を深めるチャンスなので、敢えて知らないフリをしてどういう訳か子供らしく振る舞えない少年に自分で話させようと思ったのだ。
すると案の定、興味がない訳ではないが詳しくない七歌に対し、自分が知っていることで良ければという態度を装いながら少年は饒舌に説明し始めた。
「赤、青、黄色、ピンク、黒が基本メンバーです。それから追加メンバー

で緑と白も増えてますね。映画の有里先輩たちは先輩が蒼銀、柴田さんが黄金をイメージカラーにしていますが、先輩たちは古の存在ですから魔具という装備を付けるだけで変身はしないんです」
「へぇ、よくチェックしてるんだね」
「あ、その、興味があるなら解説本も持ってますから、寮で暮らし始めてから貸しますよ？」
「そうなんだ。じゃあ、そのときはよろしくね」
「はい！」
　自分の好きな物に興味を持って貰えて嬉しいのか天田は小学生らしい笑顔を見せた。
　以前から少年を知っているゆかりたちも、大人ぶって素直な態度を取れない彼のことを気にしていたので、七歌が相手のプライドを傷つけないよう気をつけながらちゃんと大人な対応してくれたことを内心で喜ぶ。
　そんな若者たちの交流を見守っていた幾月も同じ事を思ったようで、これなら一緒に寮で暮らしても大丈夫そうだねと微笑んだ。
「ははっ、仲良く出来そうでよかったよ。それじゃあ我々は少し手続きがあるから先に行くよ」
「皆さん、さようなら」
「うん。またね、天田君」
　校門の前にとまっていた車に乗り込み去って行く二人を見送り、七歌たちもさて行こうかと歩き出す。
　旅行の準備のため向かう場所を決めながら、メンバーたちは揃ってテスト明けの放課後を過ごした。

第二百三十二話　屋久島旅行

７月２０日（月）
午後――屋久島

期末テストも終わって連休に入ると、七歌たち特別課外活動部のメンバーは普段の活動の労いも兼ねた屋久島旅行に来ていた。

新幹線と電車で鹿児島まで行き、そこからはフェリーに乗ってゆったりと屋久島を目指す。

今回の旅行には事前に誘われていた荒垣も同行しており、船の中を探検するという順平や船の上で筋トレを始める幼馴染みを止めたりと一人忙しそうにしている。

そんな男子三人のやり取りを見ながら談笑していた女子たちは、そろそろ島が見えてくるという船内アナウンスを聞くと外に出て、遠くに見えてきた自然豊かな島と青い海にゆかりが感動の声を漏らした。

「うわー、ようやく見えてきたね！」

「海の色がすごく綺麗ですね。それに東京よりとっても暑いし」

「風花、まだ脱いじゃダメだよ。他のお客さんもいるんだからね」

「ぬ、脱がないよぅ！」

暑くてもここでは脱いじゃダメだよと七歌が言えば、風花は顔を真っ赤にして脱ぎませんと言った。

女性陣四人の中で一番初心で純粋そうな見た目に反して、最も経験豊富なのが風花なのだ。

両者同意の上なので案件ではないが、それもこれも全て一人のクズのせいであり、七歌たちも彼女が彼としてきた具体的な内容までは聞いていない。

しかし、いくらなんでも自分たちの通う学び舎で致していたり、友人同士の女子三人を集めて相手にしているとは思わないだろう。

青年の保護者であり母親代わりである二人の女性には既に伝わっていて、その件について再三の説教と注意を受けていても改めていないことから、精神疾患であることを大目に見てもギルティなのは確実。

近いうちに青年は母親たちからかなりキツメのお仕置きを受けることになるだろうが、それはそれとして男子たちも島が見えてきたことに気付いて甲板に出ると、柵から身を乗り出すようにして興奮した様子の順平が叫んだ。
「おほー！　みえてきたー！　すっげぇ、ついにきたぜ！　ＹＡ・ＫＵ・ＳＨＩ・ＭＡー!!」
やけに屋久島の発音が変だが本人は気にしていない。携帯を取り出して写真を撮りまくっているが、携帯のカメラの望遠機能は大したことがないので、もっと近付かねばハッキリとした写真は撮れないだろう。
そんな順平に遅れて出てきた三年生男子二人は、先ほどの順平の言葉が聞こえていた荒垣が呆れ顔を浮かべていた。
「なんで屋久島の発音が妙に片言なんだよ……」
「浮かれているからだろ。俺も南の島の熱気にあてられ身体を動かしたくなってきた」
「おう、いいぜ。お前ら二人だけこっから泳いでいけよ」
「ふむ、それは中々楽しそうだな」
皮肉を言ってもトレーニング馬鹿には通じない。海と島を眺めながら真田がストレッチを始めたことで、まさか本当に泳いでいく気かと驚いた荒垣が止める一幕もあり、女子たちは楽しく、男子たちは荒垣が様々な苦労を負いながら屋久島へと上陸した。
＊＊＊
フェリーが港に到着すると、既に迎えの車が来ていて乗り込んだ一同は桐条別邸に向かった。
見えてきた屋敷は本家ほどではないが、周囲から浮いているくらいには豪華なもので、車を降りてから屋敷の中を歩いている間中ずっと庶民なメンバーはぽかんとしている。
「世界の豪邸訪問って感じでマジすげー……」
「あそこに飾られてる壺も何千万もするのかなぁ？」
「んにゃ、あれは一五〇万そこそこでしょ。てか、そんな何千万もするのをこんな玄関通路に飾ってたら嫌味でしかないし」

割ってしまったらどうしようとビクビクしている風花に対し、そこまで高級品じゃないと七歌が教えてやる。
彼女も美鶴ほど世間ずれはしていないが、育ちは十分に上級階級なので審美眼も確かで壺の価値を見事に言い当てた。
もっとも、一五〇万円であっても高級品には違いないので、順平と風花に真田と荒垣を加えたメンバーが廊下は慎重に歩こうと固く心に決めていた。
そんなメンバーたちの珍しく緊張した様子が面白いのか美鶴もクスクスと笑っていると、正面の扉が開いて眼帯をつけた男性が一人歩いてきた。
相手の姿を視界に捉えると美鶴も少々緊張した様子を見せたが、他の者たちが動くよりも早く七歌が勝手に口を開いてきた。
「はじめましての人に紹介しましょう。この強面の御仁が美鶴さんのパパさんです！　やぁやぁ、お久しぶりですな。旅行中はお世話になります！」
「う、うむ。美鶴も、他の者たちも、束の間の休暇だがゆっくりしていくといい」
急に七歌が笑顔でフレンドリーに挨拶したことで、桐条は肩をびくりとさせて挨拶を返した。
桐条グループのトップにここまで親しげに接することが出来る者など、彼の妻である英恵を除けば七歌くらいのものだろう。
本来ならば一瞥するくらいでほぼ素通りする予定が、完全にペースを乱されたことで他の者たちにも挨拶することになり、七歌に倣ってメンバーらも「お世話になります」と頭を下げれば桐条は頷いて去って行った。
そんな父の珍しい姿を見た美鶴は自由な後輩に苦笑していたが、七歌がどうしたのかと尋ねれば何でもないと返し、屋敷のエントランスに到着したところで他の者たちに部屋の説明をした。
「部屋は沢山あるから個人で用意してある。ただ、部活行事という体を取っているので、男子は西側、女子は東側でフロアが異なっている。ホテルのように部屋番号で内線が繋がるようになっているが、何かあ

れば使用人に連絡して聞いてくれた方が早いだろう」
どんな時間であっても主人とその客人に最高のおもてなしが出来るよう、桐条家の使用人たちは当直を決めて二四時間体制で対応出来るようにしていた。
故に、何かあれば自分より屋敷について詳しい使用人に尋ねてくれと告げ、風呂や食堂にトイレの場所など最低限の施設案内を終えると部屋に移動しようという話になった。
だが、解散する前に既に泳ぐ気満々だった順平が、荷物も置いていないというのに「行こうぜ！」とすぐに遊びに誘った。
「じゃあ、さっそく海に行くとしますか！」
「え、ちょっといきなり？　流石に着替えとか少し時間掛かるよ？」
「んじゃ、男だけ先に行っとくぜ！　一秒も無駄にできないからな！
真田さん、荒垣先輩、着替えてソッコーでビーチ集合っす！」
言うだけいうと順平は部屋の場所を聞いて鍵を受け取るなり走って行った。
捨て台詞で「一番乗りだ！」とも言っていたことで真田も勝負と思ったらしく後に続いたが、そんな二人を見送った他の者たちはガキっぽい男子に苦笑し、荒垣に三〇分くらいはかかるから待っていてくれと言付けて別れた。
分かったと返事をしてから自分も部屋に向かう荒垣は、旅行の間はずっと自分が馬鹿二人のお守りをするのかと肩を落とすのだった。
――ビーチ
真夏の眩しい太陽、日の光が反射し輝く白い砂浜、どこまでも広がり透き通るような青い海、着替えて浮き輪やビーチボールを持ってやってきた順平は素晴らしい光景に感動していた。
「くぅぅぅ、サイッコーのバカンスだぜ！」
「あまりはしゃぎ過ぎて水分補給を怠るなよ。脱水症状にでもなったら休暇も台無しだからな」
「……そう言うならお前も荷物持てよ。クーラーボックスにくだらねぇプロテイン飲料まで入れやがって」
遅れてやってきた真田は泳ぐのにいい環境だとストレッチを始め

るが、飲み物の入ったクーラーボックスを肩に掛けて持ってきた荒垣は重いんだよと幼馴染みに文句をいう。
空いているパラソルの下に荷物を置き、真田に倣って準備運動を始める荒垣は黒地に白で南国の草花が描かれた落ち着いたデザインの水着を着用している。
対して、真田は肌が白いからか上はTシャツを着て、下はピチピチのブーメランという目のやり場に困る水着だ。
順平はというとトレードマークのキャップを後ろ向きに被り、朱色を基調とした夏らしい派手な水着で何やらソワソワしている。
他の男子二人はどうしたんだと訝しんでいるが、その理由も数分後に理解出来た。
「うわぁ、すっごいキレー！」
ピンクのビキニに下はデニム、普段付けているチョーカーは外しているが代わりにサングラスを頭の上にかけてきたゆかりは、ビーチに来るなり男子同様美しい景色に感動の声を漏らす。
「おっと、ゆかり選手！　想像より結構強気なデザインですな！　やはり部活で絞れているという自信が大胆さに繋がっているんでしょうか！」
しかし、そんなやってきたばかりの彼女を見た順平は、手をマイクを持っているような形にすると急に実況の真似事をし始めた。
言われたゆかりはすごく嫌そうな顔してからゴミを見るような目で順平を見ているが、そんな視線を送られている当人は続いて現われた風花の方を見ていて気付かない。
「やっぱり暑いけど風が気持ちいいね。あ、荷物はそこですか？」
「続いて現われたのは風花選手！　つか、え……それなんも入れてないよな？　ほえー、風花ってめっちゃ着痩せするタイプ？」
彼が驚くのも無理はない。風花は小柄でスタイルもパッとしないようにみえていたのだが、脱いでみるとゆかりに負けないくらいスタイルが良かったのだ。
実際のサイズはゆかりの方が上だが、小柄であることを考えると風花の方が大きく見えるくらいである。

それ故、順平の実況を聞いた他二人の男子も風花の方を思わず見るが、突然男子たちから無遠慮な視線で見られたことで風花は胸元を両手で隠すとゆかりの後ろに隠れてしまった。
上級生二人はそこでハッとして自己嫌悪しているのか気まずそうな顔をする。
「おっと、ここで大本命の登……場……だ……」
だが、次にやってきた者を見たときには思わず目を奪われ、順平ですらも途中で言葉を紡げなくなっていた。
透き通るような白い肌、すらりと伸びる長い手足にくびれた腰、清純さを感じさせる白いホルターネックに赤いハイビスカス型のアクセサリーを付け、腰にはパレオを巻くことで落ち着いた大人の色気も醸し出している。
これが本当に自分たちと同じ高校生なのか。完璧なプロポーションと圧倒的な質量で主張してくる双丘に目を奪われ、順平だけでなく真田と荒垣もやってきた美鶴から視線を逸らせず。遅れてきたことを謝罪して彼女が微笑んだときにはドキリと心臓が跳ねた。
「すまない、遅くなった」
「い、いやぁ、ぜんぜん待ってないッスよ！　女性を待つのも男の甲斐性のうちってね！」
「フフッ、そうか。七歌ももう降りてくるのであと少し待ってやってくれ」
緊張して声が上擦りながらもちゃんと言葉を返せたのは、彼が普段からお調子者で喋り慣れているからだろう。
これが真田や荒垣ならば女性慣れしていない事もあって、言葉に詰まって何も返せていなかったはずだ。
なははーとだらしのない顔で笑う順平と、仲間の女性的な部分を意識して気まずくなった男二人が視線を逸らし、男たちの様子に気付かぬまま美鶴は美しい海を眺めている。
それを客観的に見ていたゆかりと風花は、湊のおかげで少しは男に慣れていた事もあり、男が三人とも童貞だと理解するとともにその無防備さから世間知らずなお嬢様を自分たちが守ってやらねばならな

いと考えていた。
　どうやって野獣たちからお嬢様を守るかについては、作戦の立案等が得意な人材がいるので到着を待てば良い。ゆかりと風花がアイコンタクトでそう思っていると、オレンジの水着に麦わら帽子と大きな浮き輪を装備した少女が坂を駆け下りてきた。
「よう、待たせたな！」
「おおっと、トリを務める七歌選手の登場だ！　弾けるパッション溢れる水着と普段は隠されたラインのコラボレーション！　ゆかりっちに続いて七歌っちも大胆なデザインでオレ的にチョーグッジョブって感じだぜ！」
「へへっ、そういう男三人は芋臭いな！　一緒にバカンスを楽しむなら八雲君みたいなイケメンが良かったぜ！」
　登場するなり太陽のような輝く笑顔で毒を吐く七歌。瞬間、男たちは心に大ダメージを負ったのか砂浜に膝をついていた。
　上級生二人は湊と比較され下に見られたことが屈辱で、順平は小物で精一杯のオシャレをしようと素体のイケメンにすら勝てないのだなと残酷な現実に打ちひしがれ、心の中でチクショーと叫びながら砂浜を殴りつける。
　そんな奇行を見せている男たちを無視して脱いだ帽子をパラソルのところに置いた七歌は、グッグッと準備運動をしつつ他の女性陣に声を掛ける。
「んじゃ、とりあえず泳ぎますか。シュノーケル持ってきたから軽く潜ったりも出来るよ。シュノーケリングしたいなら私ダイビングのライセンス持ってるから案内するし言ってね」
「え、そうなんだ。初耳だけどそれなら後で機材借りて本格的なスキューバダイビングもしてみたいかも」
　桐条家ほど派手に名前を知られてはいないが、七歌も生まれは由緒正しい家柄なので上流階級の暮らしはしていた。
　おかげで両親と南の島にダイビングをしに行く事もあり、せっかくなら色々なところで潜れるようにと資格も取っておいたのだ。
　実際のところダイビングには運転免許のような国家認定資格はな

く、潜りたければ禁止区域でもない限りは個人の責任において自由に潜ることは出来る。
ただ、レジャーとして楽しむ際にはダイビングショップやスクールから資格の提示を求められ、持っていないのなら参加を認められないと断られてしまうのである。
今回の場合は既に資格を持っている七歌が教える他、幸いなことに桐条家の使用人の中にはインストラクターを務められる者もいるので、その者達に指導を受けつつ楽しむことになるだろう。
「ボンベなどの機材は屋敷にある。あまり沖に出ても危険だから今回はボートはやめておくが、桟橋の辺りから潜ってもいいかもしれないな」
「本当ですか！　沖縄ではシュノーケリングだけだったから、本格的なダイビングなんて初めてです。七歌ちゃん、そのときはよろしくお願いします」
「おう、任された！　んじゃ、とりかえず最初は何も考えずに海ではしゃごう！」
持ってきていた携帯で屋敷に機材の準備とインストラクターを頼み、七歌たちはそれまで遊んでいようと海に向かって駆け出してゆく。
立ち直った順平達も一緒に海へと飛び込んでいけば、メンバーたちは日頃の戦いの疲れを癒やすべく夏の海を満喫するのであった。

夜――桐条別邸
屋久島の海を満喫した一同は食事を終えて休んでいると、話すことがあるからと集まるように言われリビングにやってきた。
他の者たちが来たときには既に部屋には桐条と美鶴と幾月がおり、女中に飲み物の用意を頼むとメンバーらもソファーにかけてゆく。
そのまま少し待てば飲み物が到着し、それを各人の前に置いてから女中らが部屋を出て行けば、これまで沈黙を守っていた桐条が顔を上げて口を開いた。
「まず初めに君たちには礼を言わせて欲しい。これまでの戦いと多大

なる協力に感謝を」
　日本の就労人口の二パーセントを担っている桐条グループのトップ。そんな人物からの言葉に、慣れない者たちは緊張もあって恐縮してしまう。
　ただ、自分たちのこれまでの頑張りが大人から認められたことも実感出来たので、順平などは戸惑いつつもどこか嬉しそうにしていた。
　子供たちに礼を言った桐条はそれぞれの顔を見渡し、それから本題である十年前の出来事について語り始めた。
「美鶴からも大体は聞いていると思うが、全ての始まりは父・鴻悦がシャドウの力を利用し、あるものを造ろうとした事にある。私の父が造ろうとしていたものは〝時を操る神器〟と呼ばれるものだ。シャドウの時空間に干渉する力を利用し、自らが数多の時の流れを掌握する時の支配者になろうとしていたのだ」
　シャドウたちの持っている不思議な力は七歌たちも聞いている。幾月から説明も受けていたことで、やつらが自分のまわりにだけ影時間の性質を持ったフィールドを展開出来ることなども知っていた。
　しかし、そういった力を利用したとして、どのような事までが実現可能になるのかいまいちイメージが湧かず、当時の資料などが残っていて分かっているなら教えて欲しいと風花が質問した。
「時の支配者って例えばどんな事が出来るんですか？」
「あくまで仮説に過ぎないが事象の観測と干渉が出来るらしい。それが事実であるならば、己の不利益になることを事前に知ることも出来れば、障害となる者の両親が出会うのを邪魔することも出来る」
「すげー、ってことはマジでタイムマシンってことか」
　想像以上のスケールに驚く順平に、他の者たちも確かにそうだなと同調する。
　もし権力を持った者がそんな力を利用することが出来れば、力を手に入れた者は文字通りに敵無しだろう。
　お前が生まれてこないようにしてやると言えば従うしかなくなり、秘密裏に動こうにも過去と未来を見て自分の行動は筒抜けになってしまうのだ。

実現していれば誰も逆らえなかったので、本当に研究が失敗して良かったなと安堵の息を吐いていると、桐条がリモコンを操作してプロジェクターとスクリーンを用意し始めた。
これから一体何が始まるのかと思っていれば、桐条は映像を流す準備をしながら言葉を続けた。
「当初はそのための研究だったが、晩年の父は深い虚無感のようなものを抱いていたようで、主導する父の影響から研究自体がおかしな方向へと進んでいった。相手はグループのトップだ。何より未知の存在に対して皆が手探りで探っていたことで気付くのが遅れた」
桐条が話を止めるとスクリーンに荒い映像が映し出される。
ボロボロの建物の中でところどころに瓦礫が転がり、さらに黒煙と炎も一緒に映り込んでいる画面の中には一人の男性がいて、音声が飛び飛びになりながらも男性が話し始めた。
事故は当時の桐条家当主のせいでおかしな方向へ変わっていった。自分は成功に目が眩んで研究に荷担した。影時間を終わらせるには飛び散ったシャドウを倒す必要がある等々、映像は乱れつつも内容は全て聞き取ることが出来た。
最後に男性が爆発に呑まれていったことで、見ていた者たちは気まずげに視線を落としたが、子供たちのそんな様子に構わず桐条は今見た映像が何であるかを語りだす。
「これは当時の事故の様子を残した唯一の映像だ。彼の名は岳羽詠一朗、父に見出され研究の主任を務めていた男だ」
「え、岳羽って、まさかゆかりの……」
男性の名を聞いて七歌が言葉を漏らせば他の者たちも一斉にゆかりを見た。
すると、ゆかりは動揺しているのか直前の桐条の言葉も聞こえていなかった様子で、今見たばかりの映像で理解したことをそのまま口にする。
「ま、待ってよ。それじゃあ、全部本当にお父さんのせいだって言うの？」
「それは違う岳羽。君のお父様一人の責任ではない」

「何が違うって言うんですか！　お父さんのせいで事故が起きて、沢山の人が被害に遭って！　それで……有里君のご両親だって結局はお父さんが殺したようなもんじゃない！」
事故を起こしたのが自分の父親だと知ってショックを受ける彼女に、美鶴はゆかりの父親だけのせいではないと説明する。
だが、映像の中で本人も言っていたではないかと声を荒げ、ゆかりは席を立つとそのまま部屋を飛び出して行ってしまった。
出て行くゆかりに向かって美鶴が「待て、岳羽っ!!」と声を掛けるも効果はなく、そのまま姿が見えなくなったことで部屋の中に気まずい沈黙が降りる。
それはそうだろう。事故を起こした者たちの尻拭いという形で行なってきた戦いが、実は自分の父親のせいで、さらに同級生のご両親の死に繋がっていたのだから、今の彼女の心の中を思えば誰も口を開くことは出来ない。
けれど、このままではいけないと思い、友達のために真実が知りたいと風花が桐条に向かって尋ねた。
「あの、本当にゆかりちゃんのお父さんが十年前の事故を起こしたんですか？」
「詠一朗が関与していた事は確かだ。だが、美鶴の言った通り彼も荷担していただけであり、あの事故の責任は彼個人ではなく我々桐条グループにある」
聞いて責任の所在はその辺りが妥当だろうなと納得する。
そも、桐条グループのトップが主導して研究を行なっていたのだ。いくら研究主任だろうと雇われている身に過ぎず、上の許可や指示がなければ勝手な研究は行えない。
ただ、いくら頭ではそうやって理解出来ても、彼女にとっては事故の当事者が問題なのだと美鶴が桐条に説明した。
「岳羽は、有里湊と一時期交際していました。そして、今もまだ彼の事を想っています。それだけに、彼から両親を奪った事故の原因が自分の父親だと知って、どうしていいか分からなくなってしまったのでしょう」

「……そうか」
そういった事情であれば何も言えないと桐条も思わず黙ってしまう。
他の者もゆかりを慰めるだけの言葉は持っていないので、七歌がしょうがないと迎えを言い出すまで誰一人何も話せずただその場に残っていた。
＊＊＊
部屋を飛び出したゆかりはそのまま屋敷の外に出て海まで来ていた。
信じていた父に裏切られたことで頭の中はグチャグチャになり、父のせいで自分の愛する人が孤独になったと知って胸が強く痛んだ。
どうすれば良いのかも、何をすれば良いのかも分からず、ポケットに入れていた携帯を取り出すと、今はただ謝らねばとゆかりは電話をかけた。
夜の闇のせいもあるのだろうが昼間はあんなに綺麗だった景色が今は酷く寂しく映る。視界は涙で歪み、嗚咽でまともに話せる状態ではないのだが、数回コール音が鳴ったところでプツッと繋がりその瞬間ゆかりは泣きながら謝罪の言葉を口にしていた。
「ゴメン、ゴメンね、有里君っ」
《……急にどうした？》
「十年前の事故、お父さんのせいだった。ずっと信じてたけど、だけど、本当にお父さんのせいでっ」
急にゆかりが泣きながら謝ってきたことで電話の向こうにいる湊も困惑する。
言っていることが無茶苦茶で、とりあえず父親のしたことで謝罪したがっていることは分かるが、どういった経緯でそういう事になったのか分からないと混乱するばかりだ。
「謝っても許されてる事じゃないのは分かってる。でも、ゴメン有里君。私のお父さんが君のご両親を殺したのっ」
しかし、ゆかりは相手のことを考えているほど心に余裕がないため、ただ心のまま彼に対して謝罪を口にし続ける。

ズボンが汚れることも気にせず浜辺に座り込み、肩を落として携帯を持っていない方の手で泣きながら砂を強く握り締めて。
すると、携帯を通話状態にしたまま湊はしばらく黙り込み、ゆかりが言葉を吐き出しきるのを待って、それからようやく静かな声で言葉を返してきた。
《……話の流れはよく分からないが、十年前の事故の原因がおじさんだった事は知ってたぞ》
「……え？　あの、それ、どういう意味？　私は十年前の映像で、お父さんが自分の責任だって言ってるの見たんだけど……」
《ああ、あれか。それなら俺も知ってる。というかマスターデータは俺が持ってるからな》
一瞬相手の言っている事が理解出来ずゆかりはキョトンとする。
自分が先ほど見たのは事故当時もテレビで流されていない極秘映像のはずだ。彼がそれを見る機会などないだろうと思ったのだが、マスターデータを持っていると聞いてゆかりは急激に自分が冷静になるのを感じながら純粋な疑問を口にした。
「なんでそんなの持ってるの？」
《研究所を離れるときに研究員がくれたんだ。だから、桐条に残ってるのはコピーデータの方になる。ああ、お前にデータのことを伝えなかったのは影時間との関わりがなかったからだぞ》
知っていたなら教えろよという理不尽な怒りが湧き上がってくるも、そういう理由ならしょうがないかとすぐに納得もする。
自分よりも彼の方が桐条グループとの関わりも深いのだ。こういうこともあるのだろうと考えながら、ゆかりは服に付いた砂を払い落としながら立ち上がった。
「じゃあ、有里君は自分の両親を殺した人間の娘だって知ってて私と一緒にいたの？」
《まぁそうなるな。ただ、事故についてはおじさんの責任でもあるってだけだ。おじさんが俺の両親を殺した訳じゃない》
「でも、お父さんが研究なんかしてなければご両親は生きてたかもしれないんだよ？」

《そういった可能性の話をすれば、ポートアイランドインパクトとは関係ない事故で死んでいたかもしれないだろ。考えるだけ無駄だ》
ゆかり個人は父親のしたことで彼の両親が死んだと思っていて責任も感じている。
だが、その被害者本人が別に気にしなくて良いと、責任を感じている加害者家族より軽く考えているから話がややこしかった。
幼い子供から両親を奪ったのだ。一生掛けても償いきれる物ではないと考えるのが普通だろう。そう思ってゆかりがさらに申し訳なさそうにしていれば、
「でも、やっぱり……」
《面倒臭い。お前は俺から離れたいのか一緒にいたいのかどっちなんだ？》
青年がバッサリと言葉を切り捨て、そんな事はどうでもいいから自分はどうしたいのか言えと言ってきた。
急にそんな事を言われてもゆかりとしては父のした事による罪悪感があるので、やはり彼とは距離を置くべきだと考えてしまう。
しかし、それとは別に岳羽ゆかりという少女個人としての気持ちを考えると、迷うことなく一緒にいたいというのが本心だった。
お互いの立場と己のエゴ、どちらで考えても正解であり間違いでもあるように思える。
もしもゆかりが被害者側であったなら、後ろめたさもないので素直に自分の気持ちで考えることも出来たのだが、残念なことに二人の関係はゆかりが加害者側で湊が被害者側と変わることはない。
正解がないようにすら思える難しい質問に悩み続けること数分、ようやく自分の心に折り合いを付けて答えを決めることが出来たゆかりは正直な気持ちを口にした。
「そんなの……一緒に居たいに決まってるじゃん……」
《ならそれでいいだろ。せっかくの旅行中にくだらないことで悩むな。もう影時間になるから切るからな》
少女が必死に考えて答えを出したというのに、湊はそれだけいうと本当に電話を切ってしまった。

これでは父のことで悩んでいた自分が馬鹿みたいではないかと思えてくるが、湊のあっさりとした反応が本当は自分を気遣ってだと気付いていた少女は、通話を終えて閉じた携帯をギュッと握り締めると後ろ手を組んで夜空を見上げる。

「あーあ、本当に、まったく……」

父のことも、彼の両親のことも完全には納得出来ていない。だが、呆れたように呟くゆかりの顔にはスッキリとした笑顔が浮かんでいた。

第二百三十三話　屋久島二日目

7月21日（火）
午前――屋久島・研究所
十年前の事故以降、桐条グループでは対シャドウ兵器はほとんど造られなくなった。
研究自体は他の物に転用出来るからと進められているが、実際に造られていた兵器のパーツなどで、七式より後に対シャドウ用人型戦術兵器という形で造られたのはRシリーズが数体だけだ。
ただ、それを知っているのは桐条グループの中でも一部の人間だけで、後継機は実戦にも配備されていない事から彼らの姉にあたる者たちのデータの中には欠片の情報も存在していない。
仮に、彼女たちが寝ている間にデータが追加でインストールされ、それによって存在を知っていればどうなっていただろう。
Rシリーズはアイギスたちと違って純粋な人型ではない。ラビリスの持っている戦斧のようにボディ自体に可変機構が設けられており、中にはバイクに変形するような機体もある。
心を持ったロボットを人間にしてしまおうと考え、実際に生命の創造という神の領域に踏み込んだ青年でも、流石に生身の身体でバイクに変形する機能は付けられない。
そうなると人間になれるラビリスやアイギスというRシリーズ以前の機体とRシリーズたちの間に〝同じ存在に造られながら自分たちは全くの別物〟という認識が生まれ、人格面はともかく自己認識の面に何かしらの齟齬が発生する可能性もあった。
とはいえ、Rシリーズは自分の姉たちの存在は知っているけれど、アイギスたちは自分より後に造られた後継機のことは知らないので、実際にどうなるかはもっと後の話になるだろう。
そう、たった今数年ぶりの眠りから覚めた少女の行動次第という訳だ。
「――――ん、起動確認。サーバーとデータリンク、現在は二〇〇九年七月二一日と確認しました」

前面部の開いた筒状の装置内部に設置された椅子に座っていたアイギスは、目を覚ますと桐条グループのサーバーにアクセスして今日がいつなのかを確認した。
それによって自分が最初に設定していた〝二〇〇九年〟での起動を無事に果たした事に心の中で安堵の息を吐く。
続いて彼女は自分のボディの状態を確認してゆく。各部センサー、ウェイトバランサー、損傷箇所の有無等、自分が万全な状態だと理解するとゆっくりと椅子から降りて自分が何をするために起動したのかを思い出そうとした。
「……八雲さんは？」
彼女が最初に思い出すのは前回起動した際の記憶。
大切な彼を追って島を飛び出し、無事とは言い難いが再会も果たすことが出来た。
だが、自分が無事だというのに彼の姿が見えない。ここは屋久島の研究所だ。そこまで運ばれてボディの修繕等が行なわれておきながら、彼が傍にいないのはおかしい。
一体どこにいるのだろうかと部屋の中を歩いて見て回る。すると、
「これは……クマの爪で作ったアクセサリー？」
自分のいた部屋の壁際に置かれた棚に、水色のワンピースとクマの爪で作られたネックレスが置かれていた。
どちらも保管用の袋に入っていたので破って取り出し、ワンピースを着てからじっくりとアクセサリーの方を観察する。
その大きさから推定すると素材となったクマはかなりの大物。自分が雪原で八雲と共に戦った相手が該当するとして、きっと八雲が殺した相手の爪を誰かが加工したのだろうと考えた。
自分にピッタリの服と一緒に置かれていたため、アイギスはアクセサリーを首に掛けて服の中に入れるとどうして彼がいないのかと部屋の中をさらに歩き回る。
何か少しでも手掛かりが欲しい。何かないかと思ったところで自分の中にペルソナがいないことに気付いた。
（パラディオンの存在が感知出来ません。不具合……ではなく、そも

そもわたしの中に存在しないようですね）
自分の中にペルソナがいないと分かっても彼女は動揺しない。いない理由については彼にペルソナを抜かれて奪われたからと分かっているから。
よって、その点については一切の動揺を見せなかったが、彼女は自分が無事だというのにペルソナが未返却のままであることのおかしさが気になった。
（わたしが無事ならば八雲さんはペルソナを返しているはずです。あれは意識のない状態でも第三者が身体を操って持ち主の手で砕けば戻ると聞きました。なら、今の状態は明らかにおかしい）
八雲のアベルによって奪われたペルソナは、本人の身体でカードを砕けば持ち主の中に戻る。
誰かが持ち主の手にカードを握らせ、そうして握り砕いても別に問題はないのだ。
だからこそ、意識がなかったとしても、アイギスは自分の中にパラディオンがいない理由が分からなかった。
何故、八雲は自分にペルソナを返していないのかと。
（あり得ない、そんな事は絶対にない。でも、八雲さんがわたしにペルソナを返していない以上考えられるのは……）
そんな事は無いと考えたくはないが、数多の推論の中から機械としての自分が最も高い可能性を弾きだしてくる。
意識を失ったとき自分と一緒にいたのは八雲である。
それは意識を失う直前の記憶に過ぎない。
自分をここへ連れてきたのは研究所の場所を知っていた八雲である。
捜索命令を受けていた桐条グループの人間は世界中にいた。
エネルギーの譲渡で彼の呼吸は安定していた。
一時的に回復しようと衰弱しながらあれだけの怪我で生きていられる人間はいない。
心の中で何度も反論しその考えを否定するが、自分の中にある情報から導き出される答えは一つの残酷な結論しか示さない。

自分のことを大切だと言ってくれた彼が、自分のペルソナを持ったまま傍を離れるなど普通ならあり得ない事はアイギスにも分かっている。
ただ、どうしてもその答えを認めることを心が拒否し、あの状態から彼が生存する可能性を何千回も何万回も計算し直した。
そして、それらは全て彼の生存の可能性が限りなくゼロであることを証明し、アイギスはその場に座り込んで服越しに胸元のネックレスを握り締めた。
「そん、な……なんで、だって八雲さんが死ねば世界は……」
彼が死ねば世界は終わる。不思議な予感でそう思っていたのに世界は続いている。
既にこの世界に彼はいない。その事実だけで多数のエラーが観測され、胸の奥が苦しくて堪らなくなる。
一人の青年の命など世界にとって数十億の中の一つだったのかもしれない。だがそれでも、アイギスにとっての世界は彼が全てだったのだ。
「こんな、こんな事って……」
機械の少女の瞳から涙が溢れる。エモーショナル・ティアーと研究者たちが呼ぶ現象だ。
しかし、そんな呼び方などどうでもいい。今ここにいるのは大切な人の死を知って悲しむ一人の少女しかいないのだから。

午後――ビーチ
伊織順平はビーチで絶望していた。
昨夜はゆかりがショックを受けて屋敷を飛び出す一幕もあったが、七歌が呼びに行けばどこかスッキリした表情で帰ってきたことで無事に話が終わったのだ。
リビングから各自の部屋に戻るときには普段通りの様子で会話していたので、翌日になればまた一緒にビーチで楽しく過ごしながら、女子たちの眩しい水着姿を拝めると考えていた。
「れっつ、えんじょい……さまー、ばけーしょん……」

けれど、現実はそう甘くはなかった。なんと女子たちは、せっかくだから縄文杉を見てくるとお弁当を持って明け方に屋敷を出発していたのだ。
いつになったら帰ってくるのだと使用人に尋ねると、休憩も含め往復で十時間くらいは掛かるのではと言っていた。
若くて体力もあり、さらに登ってゆくことに慣れているため、ゆかりたちなら平均より早く帰ってこられるだろう。だが、それでも三時は過ぎるだろうということで、登山で疲れて戻ってきた彼女たちが海に入る可能性はゼロという事実に順平は膝をついて絶望していたと言う訳だった。
「なんで南の島に来て木なんか見に行ってんだよぉ……」
「屋久島の縄文杉をそこらの木と一緒にすんな。専用のツアーだってあんだぞ」
「いや、海があるのに勿体ないじゃないっスか」
「水泳の方が効率は良いが、登山も中々に鍛えられる。むしろ、陸地での作戦行動を考えると登山の方が優れている部分もあるくらいだぞ」
順平から海に行こうとしつこく誘われた事で荒垣と真田もやってきたが、連れてきた本人がぐだぐだとしていることに先輩二人は呆れていた。
そんなに女子の水着が見たければ、東京に帰ってからプールにでも行けば良いじゃないかと思ったが、口に出せば一緒に行きましょうと誘われることは容易に想像がつくため、二人はパラソルの下でビーチチェアに座って飲み物を飲みながら適当に順平の話を聞いている。
しかし、そんな先輩らの適当な反応で爆発したのか、順平は「うがー！」と叫びながら立ち上がると、やけにギラついた瞳で二人の方へ向き直り口を開いてきた。
「先輩、こうなりゃアレしかないっスよ！」
「なんだアレとは。分かりやすく言え」
順平の様子から考えるにどうせ碌な事ではない。
ビーチフラッグや遠泳勝負ならまだしも、一緒に女の子を眺めましょうと覗きまがいのことを言ってくればすぐに殴ろうと考えなが

ら、二人は順平からの言葉を待った。
「夏、南の島、ビーチ。それで女子がいないときたらナンパしかないっしょ！」
『却下だ』
「ちょ、即答すか!?」
やはりろくでもなかったかと真田と荒垣は同時に溜息を吐く。
こんな南の島に来てまで考えるのは女性のことばかり。他にもっと考える事があるだろうと思うと共に、骨休めなのだから少しはゆっくりとしたらとどうだと言えば、相手は何故か小馬鹿にしたようにハンと鼻で笑って小さく呟いた。
「はーあ、これだから女子慣れしてない先輩はなぁ。有里君なんて色んな女の子と遊んでるってのに、年上の先輩らが未だにチェリーとは笑えてくるぜ」
「なんだと貴様、もう一度言ってみろ！」
「あれ、図星突かれてキレるんスか？　でも、勝負する前から逃げてる男が何を言っても言い訳にもならないッスよ」
真田にとって湊は忌むべき存在だ。自分の妹のまわりを彷徨く害虫と呼んでもいい。分不相応に話しかけてデートに誘おうとしていた他の者たちは駆除してきたが、未だに湊だけは駆除することが出来ず、むしろ可愛い妹の信頼まで得ているから質が悪い。
そんな男と比べて劣っているとは最大の侮辱であり、真田だけでなく荒垣も苛ついたのか額に青筋を浮かべて順平を睨み付けた。
「テメェ、人にそんだけ言っといて自分もチェリーじゃねえだろうな？」
「あーれ、荒垣先輩はまさか年下と比べるんスか？　今はチェリーでもオレっちが先輩らと同条件になるには一年あるんですよ？」
一年後もどうせ同じだろうとは思ったが真田たちは何も言わない。
現状は相手の言う通り年下の湊に遅れを取っているのだ。それだけで挑む価値はあり、順平の女性経験など欠片も興味ないこともあって二人は作戦について話し始めた。
「順平、それだけ啖呵を切ったんだ。何かしらの勝算があって言った

んだろうな？」
「その辺りは先輩らのコミュニケーション能力によるッス。まぁ、会話の糸口くらいは何個か頭に入ってますけどね」
　これまでも順平は友人らと一緒にナンパや合コンに参加してきた経験がある。成功率は言わずもがなではあるが、仲間を除けば妹とその友人くらいとしか話した経験のない真田よりはマシだろう。
「ま、気楽に行きましょうよ。ただ女の子と会話して一緒に遊ぼうってだけッスから」
「いや、やるからには全力で勝ちに行く。交渉時の貢献度で採点していき勝負だ」
「んじゃ、負けたらラーメン奢りだからな」
「フッ、見ておけ。俺が有里になど負けていないところを見せてやる！」
　バシンッ、と右掌に左拳を打ち付けて真田は不敵に笑うが、その勝負しようとする相手は既に真田たちの手の届かない遙か先にいたりする。
　どこの誰が高校生で女子複数人を一度にで相手にしていると考えるだろうか。他にも色々とアブノーマルな行為もしているため、内容を聞けばドン引きしながら勝てなくてもいいと思うに違いない。
　ただ、いまこの場にいる馬鹿な男子たちは、自分たちも有里には負けていないという一心からナンパ大作戦を開始した。
――森
　縄文杉を見に行ってきた帰り道。本当に現代なのかと思うような幻想的な風景を見たことで興奮状態の風花は、疲れたけど見て良かったねと他の者たちと笑いながら話す。
「本当に素敵でしたね。パワースポットって呼ばれるのも納得で、不思議な雰囲気のある森でした」
「近隣に大きな都市のない島だからな。独自の生態系が作られ、手つかずの自然が残っているんだ。そして、世界遺産にも登録されたことで島民も環境保護に取り組んでいる。あの風景は人と自然が共存している証という訳だ」

元々は長い年月をかけて形作られた自然ではあるが、観光客が増えてからも形を保っているのは島民たちの努力の賜物である。
自分たちの暮らす島の自然を守る。その思いは人々と街を守るために戦っているゆかりたちも共感する事が出来た。
「ゆかりちゃんはどうだった？」
「言葉にしづらいけど、なんかこう純粋にすごいなーって思ったよ。アニメ映画のモデルになったって聞いてたけど、本当にソックリで驚いちゃった」
太古の自然を残す森は映画の映像そのままで、現実に存在していたことにも驚いたし、逆にタイムスリップしたような景色をソックリそのまま描いた映画の方にも感心してしまった。
昨日の夜に沈んでいたとは思えないほどの笑顔に身振り手振りを混ぜてゆかりが話せば、その作品を知っていた風花も本当にソックリだったねと同調する。
後輩たちがそんな風に話に花を咲かせているのを美鶴は微笑ましく思いながら眺め、時計で時刻を確認しながら屋敷までの距離をおおよそ測っていると、森の奥でも通じる衛星を利用した通信機に急に連絡が入ってきた。
「すまない、理事長からだ」
こんなときに何かあったのだろうかと美鶴は首を傾げ、ゆかりたちに一言断ってから立ち止まって通話ボタンを押す。
「はい。私です」
《ああ、繋がって良かった。桐条君、実はこちらで少し困った事が起きてね》
「ちょっと待ってください。いまスピーカーに切り替えます」
どうやら悪い予想が当たってしまったらしく、屋敷の方で何やらトラブルが発生したらしい。
大概のことは多芸な屋敷の使用人たちで解決出来るため、幾月がわざわざ連絡を入れてきたということは戦闘力も持った美鶴たちにしか解決出来ない事なのかもしれない。
それならば何度も伝えるのは時間も掛かるので、いっその事と全員

で同時に聞ける状態にしてから幾月に話の続きを促した。
《実は島の研究所に保管されていた対シャドウ兵器の戦闘車両が起動し、勝手に出て行ってしまったんだ》
「は、え、対シャドウ兵器の戦闘車両って戦車って事ですか!?」
あまりに予想外の言葉にゆかりは目を大きく開いて驚愕する。
そも、どうしてそんな物騒な物を屋久島になど運び込んだのだろうという疑問も残るが、出て行ったのが戦車となると捜索自体は難しくないと思われた。
何故ならどう考えても平和なこの島に戦車があれば目立つからだ。さらに追跡もそう難しくはないのではと風花が話す。
「戦車なら目立つと思いますし、そもそもキャタピラ痕で辿っていけるんじゃ?」
《それがキャタピラじゃないんだ。市街地でも活動出来るよう小型化もしてるしね。歩行式小型戦車と思ってくれればいい》
それを聞いたゆかりたちはなんて面倒な物をと思わず呆れ顔になる。
別に幾月が作った訳でもないのだが、そんな無駄に高性能な戦車ならしっかりと管理しておけと思ってしまうのも当然だ。
けれど、それをここで言ってもしょうがないので、美鶴は今自分たちがどういった状況にいるかを伝える事にした。
「現在帰っている途中ですがまだ時間はかかりそうです。男子の元に直接向かって合流し、それからの捜索になりますが何か注意すべき点はありますか?」
《特にはないがなるべく一般人には見られない方が良いね》
「分かりました。ただ、目標の捕獲が困難と判断すれば最悪破壊しても構いませんか?」
《う、うーん。破壊は多分無理かな。それに君のお父上が研究員たちに何があろうと破壊や破棄することは禁ずると言っておられたようだし、桐条グループにとっても重要なものだから最悪足止めに徹して時間を稼いで欲しい》
ペルソナを使えば戦車だろうと破壊出来そうなものだが、美鶴の父

である桐条が他の者に破壊するなと言っていたなら美鶴たちも従うしかない。
通信を切って急いで帰る用意をし始めた美鶴は、共通の認識を持っておくため他の者たちにこれからすることを告げた。
「と言う訳だ。せっかくの観光だったがこれから作戦行動に移る。まずは浜辺にいると思われる男子たちと合流しよう」
『はい！』
せっかくの観光も一時中断。向こうにも情報が伝わっているかは分からないが、一先ず合流してから考えようと美鶴たちは駆け足で浜辺を目指した。
＊＊＊
男たちは浜辺で膝を抱えて並んでいた。こんなはずではと思いながらも、自分たちの無力を思い知らされた事で燃え尽きていた。
「……先輩、生意気言ってすんませんした」
「いや、順平の言う通りだった。美鶴や岳羽たちと普通に会話出来ていることでどこか驕っていたんだ。自分がこんなにも見知らぬ相手との会話で躓くとは思ってもいなかった」
「……これまでずっと見下してたが、有里のやつは何気にすげー事してたんだな。考えを改めさせられたぜ」
泳いで遊んでいた三人組にはキモイと逃げられ、旅行に来ていたＯＬ二人組には邪魔だと追い払われ、ノリの良い女性二人組は途中までは会話に付き合ってくれたが最後に連れがいるとネタばらしして帰られた。
しかし、これじゃあ死んでも死にきれんと男たちは諦めずに頑張った。
もっとも、一人ならどうだと話しかければなんかキャラの濃ゆいオバサンであったり、自分たちの悪いところを丁寧に指摘して練習に遊んであげようかと言ってくれたお姉さんは本当はお兄さんだったりと本当に散々だった。
こんな事なら大人しく自分たちだけで遊んだり、ゆかりたちのように森へ行ったりした方が良かったとすら思える。

順平はともかくとして、真田と荒垣にとって何よりもダメージとなったのは、湊が相手の年齢問わず女性と普通に談笑していた場面を見ていたことにあった。
あんな適当なやつに出来るのなら自分たちの方が常識もあるので余裕だろう。そんな風に考えていた過去の自分を殴ってやりたい。
ナンパをして思い知らされたのが、知らない人間との会話のキャッチボールにはかなりの技術と知識が必要ということだ。
自分の得意な分野のことならば話せる。だが、それ以外のことでは何について話せばいいのかも分からず、また自分が興味のない内容であろうと相手に気持ちよく話させて聞いておかなければならない事もある。
それを酷く痛感させられる一時であったと、真田たちは湊が女性にモテる理由を理解し、せっかくの旅行で途轍もない敗北感を味わうはめになった。
「はぁ……って、ん？」
もう何もやる気が出ない。そんな風に順平が深く溜息を吐いて絶望していたときのことだ。ぼんやりと景色を眺めていた順平は急にボケッとした顔をしてフリーズした。
それを見て、同じように敗北感を味わっていた真田と荒垣は、気持ちは分かるが流石にフリーズするほどのダメージを負っているなら屋敷で休んだ方が良いのではと声を掛ける。
「おい、順平。具合が悪いなら屋敷に帰ったらどうだ」
「違いますよ！　ほら、アレ！　アレ！」
声を掛けられたことで復活した順平は何やら急に元気になっていた。
ダメージの抜けきっていない真田たちにすれば、急に元気になった順平の相手は面倒臭いのだが、必死に見ろと言ってくるので言われた方を向いた。
その方向にあったのは浜辺から伸びる桟橋だ。この辺りはボートで遊ぶ者も居るので、別に桟橋があっても不思議ではない。
けれど、順平が言っているのはその桟橋の端に立っている一人の少

女の事だった。
太陽に照らされ輝く金髪、雪のように白い肌、水色のワンピースに身を包んだその少女はどう見ても日本人ではない。
世界遺産なので外国から見に来る者もおり、もしかすると観光客だろうかと考える。
だが、そんな風に考えていた真田たちと違って、順平は純粋に相手の容姿について言及した。
「見てくださいよ先輩！　今までのは前座だったんだってくらいブッチギリで可愛くないッスか？」
「ん、まぁ確かに」
「でしょでしょ！　あの子と遊べたらこれまでの事は帳消しっしょ！」
「いや、待てよ。流石に外国人観光客だったらまずいぞ」
ここからでは横顔くらいしか見えないがそれでも可愛いという確信が持てる。大興奮の順平に続き、真田も確かに相手の容姿が優れている事は認めざるを得ないと同意した。
しかし、それはそれ、これはこれというやつで、これまでは同じ日本人で言葉も通じたから振られる程度で済んでいたが、いくら可愛くても日本人相手とは勝手が違うぞと荒垣は忠告する。
それを聞いた順平は浜辺から腰を上げてニカッと歯を見せるなり、先輩たちも行きますよと少女の方へ向かいだした。
「これも旅の思い出っスよ。ほら、行ってお喋りしますよ！」
「おい、待て順平！」
「お前、どうなっても知らねぇぞ」
どうせこれでダメでも結果は今と変わらない。なら、最後の希望に賭けてみるのも悪くはないだろう。
そんな風に少し自棄になりながら少女の元へ向かった三人は、最初になんと声を掛けるか相談し合って、とりあえず順平が代表して声を掛けてみることに決まった。
先頭を歩く順平の後ろに二人が続き、数メートル離れたところで立ち止まり声を掛けた。

「あの……君、一人？」
順平が声を掛けると相手の肩がビクリと揺れた。言葉が分かるかどうかはまだ判断出来ないが、反応があったからには自分が話しかけられた自覚はあるのだろう。
少し待っていれば相手がゆっくりと振り返る。ついにその尊顔が拝めると男たちは無意識に構えて喉を鳴らし、次の瞬間予想外の事態に男たちは驚いた。
『……え』
振り返った少女は予想通りに可愛かった。むしろ想像以上の美しさと言える。
これは直接見ることが出来ただけでもラッキーだと思えるレベルなのだが、宝石のように美しい水色の瞳からポロポロと涙が溢れていたのだ。
もしや急に声を掛けられ驚いて泣いてしまったのだろうか。思わず順平たちはそんな事を考えるが、少女は袖でグシグシと目元を拭うと再び目から涙を溢れさせながら口を開いた。
「なにか、ご用でしょうか？」
「あ、えっと、その、なにかあったのかなぁ……なんて心配してみたり」
「放っておいてください」
泣いている少女はそれだけ言うと再び海の方を向いてしまった。
完全な拒絶の言葉に男たちはお互いに見合って困り顔を浮かべる。
少女本人から放っておいてくれと言われても、明らかに何かありましたという空気を出して泣いている少女を放っておくことなど出来ない。
ただ、泣いている理由が分からないことにはどうしようもなく。何か情報を得ることは出来ないだろうかとその場で話していれば、突然ザパンと海から何かが出てきた。
「二人の少女を大勢で囲み、自分たちの思い通りにしようだなんてふてぇ野郎だぜ！　そこに並べ、私の銛が貫いてやる！」
顔にシュノーケル、身体をダイビング用ウエットスーツで覆い、手には銛を持った女が海から現われ桟橋の上に登ってくる。

女子たちは全員が縄文杉を見に行っていたと思っていたので、ここで単独行動をしていた少女が物騒な物を持って現われたことは驚きだが、男たちは少女の手にある銛の方が気になって上手く反応を返せない。
「ま、待て九頭龍。俺たちは今来て声をかけただけだ」
「黙れナンパ野郎！　お前たちの悪行はここまでだ！」
ずっと海にいたということは、真田たちが必死にナンパしている姿を見ていてもおかしくないという事である。
〝ナンパ野郎〟と呼ばれてそれに気付いた男たちは、見られていた事実に恥ずかしさのあまり死にたくなってくる。
けれど、銛を構えた七歌を見ていると恐ろしさに顔が引き攣るため、本心ではまだ死にたくないと思っているようだ。
そして、怒った様子のまま銛を構えた状態で目の前にいる七歌をどうしようかと悩んでいれば、真田たちの後方から知っている声が届いた。
「お前たち、こんなところにいたのか」

声に反応して振り向けば、森の方から駆けてくる美鶴たちの姿が映る。
縄文杉を見に行っていたはずが、何をそんなに慌てているのだろうと思えば、やってくるなり美鶴は真田たちに事情を説明しようとした。
「実は大変なことが起きたらしく、お前たちにも手伝って」
「――――いや、大丈夫だ桐条君」
美鶴が事情を話そうとしていた途中、新たに聞こえてきた声によって美鶴の話は中断する。
そして、先ほどの男子たちのように美鶴たちが振り返れば。スーツ姿でやってきた幾月が泣いていた少女に声を掛けた。
「ダメだろう、アイギス。勝手に研究所を抜け出しては」
「……すみません」
幾月にアイギスと呼ばれた少女は今度は涙が止まっていて、しか

し、どこか沈んだ様子で謝罪の言葉を口にした。
　その姿は見ているだけで哀しくなってくるが、続けて語られた幾月の言葉のせいで皆の頭の中は驚きに染まってしまう。
「何にせよ見つかって良かった。ああ、詳しい事は屋敷に戻ってから話すが、私が言っていたのは彼女の事だ。対シャドウ特別制圧兵装七式アイギス。それが彼女の名だ」
『はぁっ!?』

第二百三十四話　それぞれの場所で

夜――桐条別邸

アイギスが対シャドウ兵器と聞いても半信半疑だったメンバーが別荘に戻ると、とりあえず全員が着替えて落ち着いてから話をしようという事になった。

海に潜っていた七歌は勿論、他の女子たちもトレッキングで汗を掻いていたので全員が賛成し、男子たちも水着から私服に着替える前に潮風でベタついた肌をさっぱりさせようと男女別の大浴場に向かった。

その間、アイギスの方は研究所で簡単なチェックを受けたのだが、全員が着替えて戻ったときには屋敷にいたため、女中に飲み物を用意させて全員が椅子に座ってから幾月が口を開く。

「さて、桟橋のところでも少し話したが改めて紹介しよう。彼女は対シャドウ特別制圧兵装七式アイギス。桐条グループが対シャドウ用に開発したロボットのラストナンバーさ」

幾月から紹介されて一同の視線がアイギスに集まる。

ヘッドフォンのように見えるクラッチユニット、手袋をしているように見える指先や首までを覆う白い布は全て日焼け対策のようにすら思える。

しかし、それらは全てロボットである証で、服を脱げば手足や関節はもっとハッキリと機械のパーツが見えるらしい。

もっとも、他の者たちに注目されても彼女は暗く沈んだ表情で俯き、他の者たちに見られようとほとんど反応しない。

それが余計に人間臭く見えて、順平などは声を掛けた美少女がロボットだったという事実に項垂れている。

「人間にしか見えねぇのにロボットって……とほほ」

「ナンパまでしてたもんね。ドンマイ外道共」

落ち込んでいるのは順平だけでなく真田や荒垣も同様だった。順平ほどハッキリと態度には出ていなくとも、自分たちがロボットをナンパしてしまったという事実が効いているらしい。

それを見た七歌は満面の笑みで追い打ちを掛けるが、桟橋で銛を構えていた事情も分かっていなかった美鶴は、一体何があったのかと桟橋でのことを尋ねた。
「七歌、ナンパとはどういう事だ？」
「ああ、ここにいる外道たちは女子がいないからってビーチでナンパして歩いてたんですよ。ま、結果は全戦全敗。ていうか、あんな会話でよく女子の興味を引けると思ったなってレベルでした。で、最後に泣いているアイギスのところに三人で行ってナンパしたんです。泣いている女の子をナンパするだなんて男の風上にもおけないってんで、私は銛で貫いてやろうと思った次第ですが本当にやっとけば良かった」
毒たっぷりの説明が終わると女性陣の冷たい視線が男子らを射貫く。別にナンパをしてはいけないとは言わない。だが、男三人で泣いている女の子を囲むのは外道の所行だ。
七歌が真面目に銛で貫いておけば良かったというのも納得で、ゆかりや美鶴などは何故そこで躊躇ったのかとアイコンタクトだけで七歌に伝え、七歌もアイコンタクトだけで面目ないと謝った。
女性陣のそんな器用なやり取りを見ていた男性陣は、その場に居づらそうに身体を小さくするも、よく考えれば七歌が別行動していた理由が気になったようで、テーブルの上に置かれたカップに口を付けてから順平が疑問をぶつけた。
「つか、七歌っちはなして一人だけ海にいたんだ？　しかも銛まで持ってさ？」
「なんでって私は縄文杉みたことあるもん。潜る方が好きだからって別行動を伝えて、地元の漁業組合に許可貰ってから一人で魚をゲットしてたりしたんだよ」
別に本格的に魚を獲っていた訳でない。ただ、ダイビングを楽しみながら海の幸もゲット出来れば一石二鳥である。
そういった理由で七歌は屋敷に戻る際に大きなクーラーボックスを持ってきて、最後に女中に渡して晩ご飯に使ってくれと伝えていたのだ。

素人には中々難しいというのに、休憩を挟みつつ何時間も漁をしていた体力と根気には恐れ入る。
ただ、今はそれよりも対シャドウ兵器のアイギスについて語るべきだろうと、美鶴が脱線してしまった話を戻した。
「下衆たちの処遇は後で決めるとして、話をアイギスの方へ戻そう。理事長、対シャドウ兵器というのなら何故彼女は実戦に配備されていなかったのですか？」
「彼女は十年前の事故の際にシャドウと戦って損傷してね。修理が終わってから何度も起動しようとしていたんだが、何故か全く反応がなかったんだ。それがどういう訳か再び再起動して今に至ると」
言われてなるほどと全員が頷く。どうして屋久島に研究所があるのかという疑問は別にして、起動しなかったのなら配備以前の問題である。
十年前というと飛び散ったアルカナシャドウたちとの戦いの可能性もあり、当時はまだ美鶴すら力に目覚めていなかったので、単独でよくシャドウと戦えたものだと感心すらした。
「ロボットだなんて信じられないです。本当に生きてるみたい……」
「最初見たときは泣いてもいたもんね。あ、ていうか、アイギスはどうして泣いてたの？」
ハードとソフトの両面に詳しい風花は、オーバーテクノロジーの塊であるアイギスに強い興味を示す。
動きの一つ一つが本当に人間のようで、まだ少ししか聞いていないが言葉の受け答えも実にスムーズだった。
こんなものを作ってしまう桐条グループの技術力には改めて驚かされるが、目を輝かせている風花の意見に同意しつつ苦笑した七歌は、そういえばナンパされる前から泣いていたが何故泣いていたのかと彼女に聞いた。
すると、今まで俯いていたアイギスはゆっくりと顔を上げ、表情に影を落としつつも静かに質問に答える。
「……大切な人が、亡くなったんです。あの方のためにわたしは存在していたのに、助けられなかったんです」

予想外に重い答えに一同は黙り込む。
大切な人を亡くしたら泣くのは当然だ。しかし、彼女は作られた存在、人工的に生み出されたロボットである。
そんな彼女がいくら大切な人を亡くしたからと言って、人間のように泣いたり出来るのかと思った七歌が幾月に一つ尋ねた。
「えっと、理事長、アイギスってマスター登録とかあるんですか？」
「いや、そんな機能はないよ。彼女は人類をシャドウから守るために作られているからね。ペルソナ獲得のために心を与えられているから、それで優先順位を付けることは考えられるが」
『ペルソナっ!?』
幾月から齎された新たな情報を聞いて全員が立ち上がるほど驚いた。
それを見て逆に幾月の方が驚いたりもしていたが、ロボットが心を与えられてペルソナが使えるという事実に一同は驚愕と動揺を隠せない。
何せいくら精巧に作られようと相手は機械だと思っていたところに、実は相手も自分たちのように心があると言われたのだ。
身体の構成物が異なる以外に違いが存在しないとなれば、本当に人間を相手にするように対応すべきだろうか。そんな事を考えながら風花たちは改めて幾月に確認する。
「ロボットなのにペルソナが使えるんですか？」
「まぁね。獲得出来たのは姉妹機の中でもラストナンバーの彼女だけだが、アイギスにもしっかりとペルソナが宿っているよ」
「マジかよ。んじゃ、アイギスもオレたちと一緒に戦えるじゃんか」
そういう事なら彼女も立派な戦力になる。むしろ、対シャドウ兵器として生み出された彼女の方が本職ですらある。
相手が機械であることは残念だが、服を着ていれば普通に可愛い美少女にしか見えないため、順平はこれでさらに寮が華やかになると笑って言えば、
「……ペルソナは使えません。喪失しました」
アイギスの口から衝撃の一言が返ってきて再び場の空気が固まっ

た。
だが、すぐに彼女の言葉の意味を考えて立ち直った美鶴は、自分の心の結晶たるペルソナが消えることなどあり得るのかと首を傾げる。
「なに？　理事長、ペルソナ能力が消えるなどあり得るのですか？」
「あ、いや、それは僕も初耳だ。アイギス、ペルソナが消えたというのは本当かな？」
「はい。あの方が持ったまま逝ってしまわれましたから」
自分のペルソナは大切な人が持って行ってしまった。彼女からペルソナを抜き取り、未だに返却されていないという事はそういう事だ。
彼がいない世界で戦う理由もないのでなくても構わないが、七歌たちにすれば他人のペルソナを持っていくことが可能という事実の方が驚きだった。
「は？　え、他人のペルソナを持ったまま死んだって、ペルソナって貸し出せるの？」
「それは聞いた事がないな。アイギス、詳しく経緯を話してくれないか？」
「……言いたくありません」
聞かれたアイギスは目を伏せて静かに拒否し、これには他の者たちはおおいに驚く。
通常、映画やアニメで見るようなロボットは人間の言う通りに行動し、それこそ絶対服従や従順といった感じなのだ。
しかし、いまアイギスは七歌たちの目の前で回答を拒否した。明確に自分の意思で拒んだと分かるので、本当に心があるのだなと相手を一個人として認識しつつ、美鶴は重要なことなので少しでも教えてくれないかと食い下がる。
「アイギス、ペルソナの譲渡が可能かどうかというのは、戦力が常に不足している我々の活動において重要なことなんだ。貸したのは君の意思か、それともその大切な人とやらが他人のペルソナを使えるのかぐらいは教えてくれないか？」
「……あの方の能力です。あの方は他者の力を自分の物として使えま

したから」
「そうか……。教えてくれてありがとう」
渋々ながら答えてくれたアイギスに礼を言って、美鶴や幾月は途端に難しい表情になる。
他人のペルソナを貸し出すことが可能であれば、現在候補者として挙がっている天田のような子どもを戦力として投入せず、彼のペルソナを大人が使っていくことも考えられた。
けれど、実際は個人の持つ才能によるもので、そんな特殊な力を持っていた者がいたにも関わらず、接触する前に故人になってしまっていた事は桐条グループにとって大きな痛手だった。
ただ、美鶴たちはそんな風に考えていても、ゆかりたちにすればアイギスとその人物の関係の方に興味があり、瞳には恋バナのときのような輝きを宿してアイギスに尋ねてみた。
「ねぇ、その大切な人って名前とか性別は？　ていうか、どんな人？」
「名前は言えません。ただ、女性です。どんな人と聞かれればとても優しい人でした。機械であるわたしを対等な人間として扱ってくださり、わたしに幸せになって欲しいと言ってくれたんです」
相手が死んだと言ってもアイギスは彼の事を誰にも話そうとは思っていなかった。ただ、性別くらいは知ったところでどうもならないので、彼が民間軍事会社〝蠍の心臓〟のメンバーから姫と呼ばれ、本人も自分の性別が女性でもあると言っていたのでそれを教えた。
一緒に過ごした時間は一日にも満たない。だが、彼との会話の一つ一つが本当に大切な思い出として残っているのだ。
そんな風に彼について話すアイギスはとても綺麗な顔をしており、聞いている全員が本当に大切な人だったのだなと理解する。しかし、同時にこの様子ではペルソナを失っていることもあってメンバーにはならないだろうと順平が残念そうに溜息を吐く。
「はぁ、せっかく新メンバーが増えると思ったのに、これじゃ巌戸台にはオレたちだけで帰ることになりそうだな……」
「……巌戸台？　お願いします。わたしも連れて行ってください！」
順平の呟きが聞こえたとき、アイギスは急に立ち上がって必死な様

子で懇願した。
彼女がこんなにも感情を表に出せると思っていなかった者たちは呆気にとられるが、それでも再起動を果たすと部長扱いの美鶴が代表して責任者の幾月に意見を求める。
「あ、いや、それは……理事長、良いんですか？」
「まぁ、ペルソナは使えなくても戦力にはなるからね。特別課外活動部に入る事自体は構わないよ。ただ、どうして急に同行しようと思ったのかは聞いておきたい」
先ほどまではどうみても活動に乗り気ではなかった。〝あの方〟に対する執着だけは見せていたが、そのせいで他の者たちのことなど興味がないといった様子だったのだ。
それが一転して急に一緒に行きたいと口にしたからには理由があるはず。参加自体は問題ないがそこはしっかり聞いておく必要があると幾月が尋ねれば、アイギスは服越しにネックレスをギュッと握りながらぽそりと答えた。
「巌戸台はかつてあの方が過ごしていた街なんです。だから、わたしもこの目で……」
もう会えない。だから、せめて彼が過ごしていた街を、彼が生きていた世界を見たいと彼女は願った。
本当に機械なのかと思ってしまうほど純粋な想いが伝わってくる。そんなアイギスの哀しくも尊い願いを聞いたゆかりたちは、もし自分が同じ立場だったらと考えて胸が苦しくなり、彼女の事を応援してやろうと援護に回った。
「先輩、アイギスも連れて行ってあげましょうよ。大切な人の過ごした街を見てみたいなんて健気じゃないですか」
「私からもお願いします。もう会えないなら、せめてそれくらいの願いは叶えてあげたいです」
「多数決取りまーす。アイギスを連れて行っても良いと思う人！」
『はーい！』
七歌が多数決を取れば二年生組の四人が笑顔で手を挙げ、さらに七歌がアイギスの片手を掴んで無理矢理に挙げさせた。

難しい立場の美鶴、大して興味のない真田、そもそも離脱していて話に加わって良いのか分かっていない荒垣は手を挙げなかったが、幾月を含めても手を挙げなかったのは四人なので、アイギスの手を挙げさせて五人分の票をゲットした賛成組の勝ちだった。
後輩たちの強引な部分を諌めるべきかとも思うが、けれど、美鶴も個人的にはアイギスの願いを叶えてやりたいと思っていたため、苦笑しつつここは素直に認める事にする。
「フゥ、わかった。別に私も反対していた訳じゃない、理事長の許可も出ているし彼女も連れて帰ろう」
「皆さんっ、どうもありがとうございます！」
一緒に巌戸台へ連れて行って貰える。それを聞いたアイギスは泣きそうな笑顔を見せて、深々と頭を下げて皆に感謝した。
帰るのは明後日の午前中。よって、まだ丸一日残っているが、連れて行って貰えるだけありがたいので問題ないとアイギスは言い。他の者たちも傷心中の彼女に気を遣いながら交流を深めるべく、どんな内容なら話が出来るか手探りながら言葉を交わすのだった。

7月22日（水）
朝――ＥＰシネマズ
七歌たちが屋久島へ行っているとき、東京ではある一つの施設がプレオープンの日を迎えていた。
実際のオープンは夏休み開始日である週末の二十六日だが、その前にオーナーの知り合いたちを招いて従業員がしっかりと動けるか、施設の利用に問題はないかを確認するという訳だ。
そして、その施設の一つが地域最大の映画館であるＥＰシネマズ。
既に上映が開始している映画に加え、今日はここで『劇場版フェザーマンＲ―時空を超えた戦い―』の関係者を除けば日本最速の試写会が行なわれるとして、招かれたちびっ子と保護者が大勢来ていた。
「有里、今日は招待してくれてありがとう。うちの家計状況じゃこいつらを遊びに連れて行ったりも出来ないから、今回の招待は本当に助かったし嬉しいよ」

「ま、再戦の約束を守れそうにないからな。ちょっとした罪滅ぼしだ」
映画館の入り口のところで湊に話しかけてきたのは色黒の少年、かつて全中バスケの準決勝で大接戦を繰り広げた早瀬だ。
彼の後ろには小さな弟妹たちがやって来ており、その手にはフェザーマンのソフビ人形などが握られている。
「すげー！　兄ちゃん、ほんとにシムルグとしりあいだったんだ！」
「シムルグ、魔具みせて！」
「こら、お前たち！　有里に迷惑がかかるだろ！　映画までもう少しなんだから大人しくしてるんだ！」
ちびっ子たちは先週の放送で登場した戦士シムルグを見ていた。それ故、目の前に本物のヒーローが現われたと大興奮しているのだ。
しかし、早瀬にすれば招待してくれた知り合いに迷惑をかけているだけなので、やめないかと弟妹を叱ってから湊に申し訳なさそうに謝罪する。
「悪い、こいつら話した日からずっと楽しみにしてたから」
「いや、気にしてない。子どもが寄ってくるのは慣れてるしな。まぁ、今日はジュースとポップコーンもタダだ。混む前に売店で買っていくといい」
正式にオープンすれば当然映画館の売店ではお金を払う必要がある。
ただ、今日は招待したお客様が相手なので、一般的な映画関連グッズは有料だが、ジュースとポップコーンはサイズに関係なく無料サービスしていた。
父親が事故死したことで経済的に厳しい早瀬たちにすれば、映画などほとんど観に来る事も出来ないが、さらに一人一人にジュースやポップコーンが買い与えられることなどまずあり得ない。
普段は大きなサイズで一つか二つ買って分け合っており、それはそれで家族の仲の良さが確認出来るかもしれないが、ちびっ子たちは〝自分だけの〟というワードにも心惹かれるらしく早瀬の手を引っ張って早く買いに行こうと急かした。
元気いっぱいの弟妹たちに振り回される早瀬は大変そうに見える。

ただ、それでも弟妹たちが楽しそうにしているのが嬉しいのか、湊に騒々しくしてすまないと謝ってから売店の方へ去って行った。
　そんな相手を見送った湊が招待客に挨拶しつつ、館内の見回りの仕事をして歩いていれば、今度は遠くから小さな少女が駆け寄ってきた。
「あ、せんせー！　おはよー！」
「おはよう。だが、施設内では他の人間の迷惑になるから走るな」
「はーい！」
　黄色のワンピースを着て駆け寄ってきたのは、以前、喘息で夜間診療に訪れた少女だった。
　彼女の名前は宇津木千佳と言って、中等部の生徒会にいた宇津木香奈の妹である。
　少女は自分を治療してくれた湊のことを先生と呼んで慕っているが、他にも彼によって命を救われた同年代の少女が存在し、そちらの少女も一緒にやってきていた様で、宇津木妹から少し遅れてお嬢様といった姿の少女が走ってきた。
「もう、千佳さん！　みーちゃまを見かけたからといって急にはしり出さないでください！」
「えへへ、ゴメンね雛ちゃん」
「あ、あの、会長。妹が本当にすみません！」
「湊君、にゃっちー」
　先に行ってしまった友人に怒っているのは以前小児癌で病院を訪れた桃井雛。彼女の家は裕福で、命を救ってくれた名医のいる街に住みたいという娘の希望を聞くかたちで、現在は巌戸台の方に引っ越して月光館学園に通っている。
　そんな子ども二人の保護者を務めているのは、湊の直属の部下だった宇津木香奈と湊の家の隣人で彼女の友人である羽入かすみ。
　二人とも今日は私服で夏らしい涼しげな服装だが、急に駆け寄って行った妹の非礼を詫びる宇津木はともかく、暢気にアイスを食べている羽入の事が気になった湊は一つ尋ねた。
「宇津木、気にしてないからそっちも気にするな。羽入、お前まさか水

着を着てきて下着を忘れてないだろうな？」
どうして映画館に水着を着てくるのか。それにはとある理由が関係していた。
今日はここＥＰシネマズでプレオープンが行なわれているが、実は同時に隣の敷地の屋内プール施設などもプレオープンを迎えている。
映画館は九時から映画の上映が始まるよう八時半から開いていて、プールの方は十時からの開園となっているものの、招待客は着替えている事が条件ではあるが施設の行き来を認められている。
よって、映画を見終わってからプールに行こうと考えている者もおり、羽入たちもそういう計画だったようだが、言われた羽入は自分の荷物の中を探してから残念そうな顔をする。
「あ、忘れちゃったー」
「……はぁ、これをやるから荷物に入れておけ」
「わぁ、ありがとう！」
そうだろうと思ったと溜息を吐いた湊は、自分のマフラーから紙袋を取り出すとそれを羽入に渡した。
中には彼女のサイズにピッタリな下着が入っている。他人からすれば、どうしてそんな物を持っているのか疑問に思うだろう。
しかし、嬉しそうに紙袋を受け取った少女は気にしていないようで、紙袋をそのまま鞄に仕舞うと満面の笑みで礼を言った。
そして、物販を見てくると言った彼女たちと別れ施設を進み、湊が入り口の方までやってくると何やら係員の女性が小学生の男の子と揉めているようで、全く面倒なことばかり起きるなと思いつつ話を聞きに向かう。
「……どうかしたんですか？」
「あ、有里さん。実は招待客ではないお客様みたいで」
言われて相手の方を見てみれば、何やらチケットを手に持った少年が不安そうな表情で立っていた。
まぁ、湊も相手が荒垣に母親を殺された少年だとは気付いているのだが、少年の方はそんな事は知らないので純粋に同じ学校に通う生徒として先輩の湊に話しかけてくる。

「あの、僕、初等部の天田って言います。前売り券を持ってるんです。だから、ちゃんとお金は払えますから試写会を見せて貰えませんか？」
「……今日は金を取ってないんだ。前売り券を持っていても使う事は出来ない。というか、小学生だろ。保護者はどうした？」
「それは……」
小学生以下の子どもも招待客には含まれているが、流石に保護者同伴で来てくれるようには伝えていた。
しかし、ただ早く映画が見たくて来た天田はそんな話は聞いていないので、返事に困って俯いてしまう。
だが、そんな風に湊たちがやり取りをしていると、天田の背後から一人の少年がやってきた。
「すみません、先輩。その子、僕の連れなんです。待ち合わせをしてたんですが先に行ってしまったようで、合流出来て良かったです」
「……木戸か。確かに招待客の連れなら入れるが、幼少期から他人の善意に甘えていると碌な大人にならないぞ。なにより、お前の嘘は分かり易すぎる」
やって来たのは生徒会時代の部下だった木戸だった。相手は元々は規則等に厳しい潔癖症な性格だったはずだが、同じ特撮好きで困っている子どもを放ってはおけなかったのか咄嗟に嘘を吐いて助けようとしたらしい。
もっとも、そんな嘘はすぐに見破られて湊に呆れた顔をされるのだが、湊が相手に対して呆れていたのは別の理由もあった。
「……というか、別に入れないとは言ってない。招待してなくても直接言いに来れば月光館学園の生徒は認めているしな。お前が前売り券なんて出すからややこしくなったんだ」
「え、そ、そうなんですか？」
「ああ。ただ、他の人間と違って一手間かかる。入り口を入ってすぐ右のところに特設カウンターがあるから、そこで自分の名前と生徒番号を書いて入館証を貰ってこい。木戸は嘘を吐いた罰としてついて行ってやれ」

「はぁ……了解です。というか先輩の対応が紛らわしいんですよ」
そう。別に湊は入れてやらないとは言っていない。単純に金を取っていないので前売り券を出されても困ると伝えただけだ。
相手が月光館学園の生徒であれば身元は保証される。故に、別に保護者がいなくてもちゃんと手続きをすれば認めると答え、体よく木戸にお守りをさせながら湊は館内の様子をチェックして回った。
＊＊＊
千を超える矢の雨が降り注ぐ。逃げ場などない。戦場に一人残った男を殺すため、獣王軍の者たちは次々と矢を放った。
《うおぉぉぉぉぉっ!!》
男は両手に持った二振りの刀で矢を切り伏せてゆく。全てを防ぐ事は出来ず、腕や足を掠って切り傷が増えてゆくが、ただの一本たりとも男には刺さらない。
そして、切り伏せながら前進し、倒れぬ男に動揺して敵軍に僅かな隙が出来ると男は一気に駆け出した。
広い草原に蠢く敵、敵、敵。どこまでも広がる敵の総数は二万体。加えて、敵軍には獣王軍五星将の一人が含まれている。
だが、それがどうしたと戦士シムルグは怯む事なく前進し、嵐のような激しさでもって敵軍と衝突した。
《相手はたった一人だ。倒して名をあげろ！》
《こいつを倒せばフェザーマンはすぐそこだ！》
剣を、槍を、斧を、それぞれ得意な武器を持った兵士たちがシムルグを囲むように挑んでくる。
戦場に残ったのはシムルグただ一人。他の者たちはこの先の洞窟に向かい。奥にある時の狭間から自分たちの時代に戻ろうとしているのだ。
しかし、時の狭間から特定の時空に飛ぶには術者の協力がいる。よって、巫女ガルダがついていき、それが済むまでの時間稼ぎとしてシムルグが残ったのだ。
ただ、それはあまりに無謀としか言えなかった。
敵の数が二万だという事は分かっていた。そこに獣王直属の五星

将が混じっている事も分かっていた。
　さらに言えば、フェザーリングで変身するフェザーマンのスーツと違い。シムルグの身に付けている魔具は巫女の力で能力を向上させている。つまり、巫女から離れてしまうと恩恵が受けられず、普通より丈夫な装備でしかないのだ。
《なんで倒れないんだこいつっ!?》
《クソッ、怯むな数で押せ!》
　だからこそ、特別な力も持たない古の戦士が残ったところで何が出来ると敵も侮っていた。
　本人も確かに無謀だろうなとは理解していたが、敵のように自分が何も出来ないとは考えていなかった。
　敵の槍を片手の剣で受け流し、身体が泳いだところを蹴り飛ばして数人を巻き込んで吹き飛ばす。続けて開いたスペースに走り込み、自分を無視して洞窟へと向かおうとする敵を背後から強襲して倒す。
　この先には守りたい者たちがいる。故に、ここより先は行かせないと、体中傷だらけになりながらもシムルグは戦い続けた。
　すると、一瞬辺りが暗くなり、嫌な予感がして真横に飛んで避けるとそれが空から降ってきた。
《我は獣王軍五星将が一人、緑山将の乱獅子なり！　そなたを翼の民、戦士シムルグとお見受けするがどうか!》
《ああ、確かに私はシムルグだ!》
　三メートルを優に超える巨体。手にはさらに巨大な槍を持った獅子頭をした獣人。それはフェザーマンたちがシムルグに話した敵将の姿と一致していた。
　突然降ってきた乱獅子は相手がシムルグと分かると豪快に笑い、すぐに一分の隙もない構えを取ってくる。
《おお、やはりか！　参謀の指示で鳥共を追って遙々こんな時代に来たが、彼の戦士と刃を交えることが出来るとは僥倖なり!》
　乱獅子が槍を横薙ぎに振るうだけで竜巻が起こった。シムルグは両手の刀を交差させてガードしたが、竜巻にぶつかった瞬間に大きくはじき飛ばされる。

それを追って乱獅子が一直線に突進してきたため、地に足がついた瞬間シムルグは横に飛んで回避する。
乱獅子の攻撃は味方が巻き込まれる事を一切気にしていない。現われたときも、竜巻を起こしたときも、突進してきたときだって敵軍の兵たちが何人も倒れていた。
これを利用すれば少しは楽を出来るかとシムルグは考えたが、そも、そんな余裕を持って挑めるような相手ではない。
敵将の相手をしながら、さらに雑兵たちが洞窟に向かわぬよう気を配らなくてはいけないのだから、悠長に敵の数を減らす事など考えてはいられなかった。
《さぁ、いざ尋常に勝負、勝負ゥ!!》
《貴様の相手などしている暇はないっ》
両手の刀を逆手に持ち替えると、シムルグは身体を低く屈めながら駆け出してゆく。
相手は敵が自分に向かってきてニヤリと笑っているが、すぐに表情を引き締めると牽制のために横に薙ぎ、すかさず鋭い突きを放って貫こうとした。
だが、シムルグもそんな相手の行動は予想していた。大切な巫女を守る役目を負っていたのだ。様々な武器に対する戦い方は勿論、体格で劣っている場合の戦い方だって頭に叩き込んでいた。
敵が突いてきた槍に刀の腹を走らせ、一気に加速して接近してゆく。あまりの速さに乱獅子も驚愕するが、すぐに槍を片手持ちに切り替えて頑丈な鎧で覆った拳を接近するシムルグに向かって放つ。
《甘いわ!!》
《ハァッ!!》
迫る拳をシムルグは紙一重で回避し、鎧の隙間を斬りつけて距離を取る。
残念ながら鎧の下には鎖帷子を着ているので効果はなかったが、鎧の下を切られたという事実が乱獅子に危機感を覚えさせた。
＊＊＊
フェザーマンたちを元の世界に帰したガルダは、シムルグが洞窟の

入り口を崩して塞いでしまったことで、中にある抜け道を通って急いで丘の上に出てきた。
《はぁ、はぁ……シムルグは？》
自分が傍にいなければ魔具は使えない。それを分かっていても、ガルダは未来からきた子孫たちを元の世界に帰すため、彼が一人残って時間を稼ぐ事を了承した。
だが、それは彼を心配していないという事ではない。本当はすぐにでも戻って彼の助けとなりたかったが、彼から自分の役目を果たすように言われて必死に耐えたのだ。
そして、ようやく役目を終えて、戦場を見渡す事の出来る丘の上までやってきたのだが、そこから戦場を見たガルダはあまりの光景に言葉を失った。
《そ、そんな……》
見渡す限り倒れている敵、敵、敵。洞窟までまだまだ距離がある一定のラインから洞窟側へは一体たりとも敵が来ていなかった。
絶対に先へは行かせない。そう心に決めて戦ったシムルグは、それを守り通したのだ。
けれど、戦場を見てガルダが言葉を失ったのはそれだけが理由ではない。今も尚、戦場には動く二つの影があったのだ。
《貴様ァ、いい加減に倒れぬか！　その怪我ではどうせ生きられぬ！なのに、何故足掻くというのだ！》
戦場の声がガルダの耳にも届く。彼女は巫女の力によって遠くの音も聞く事が出来るのだ。
吠えながら槍を振るう乱獅子は、全身を覆っていた鎧は両腕の部分が砕かれ、胴体や背中を覆っている物も深い傷が残っている。
言っている本人も既に満身創痍でありながら、ただの人間には負けられぬというプライドと、一部は自分が巻き込んだとはいえ自軍の兵たちを残らず倒されたこともあってコイツだけは倒すと決めているらしい。
対して、無事なところを探す方が難しいほど全身に傷を負っているシムルグは、中程から折れた両手の刀を強く握り締めながら叫んだ。

《……決まって、いるだろう。死んでも守りたい者が、この先にいるからだ！》
叫んだシムルグは最後の力を振り絞って駆け出す。自分の守りたい者を狙う敵を倒すことが出来るのならここで終わってもいい。
《うおおおおおっ!!》
《貴様ぁぁぁぁぁっ!!》
シムルグの覚悟を感じ取った乱獅子も、改めてこいつは危険だと同じく残る力を振り絞って迎え撃った。
衝撃波を生み出すほどの威力を持った渾身の槍の一突き。敵を捉えたと思った乱獅子は自らの勝利を確信した。
だが、槍が貫く直前、シムルグの姿が突如視界から消えた。
一体どこに消えたのか。そう思って僅かに空を見上げると、折れた刀を逆手に持って降りてくる敵の姿が映った。
攻撃が当たる直前に飛び上がって回避したシムルグが、鬼気迫る表情のまま乱獅子へと迫る。
しかし、そのとき自分が負けると直感で理解しながらも、乱獅子はどこかそれを他人事のように考え、両手に武器を持って降りてくる戦士の姿が翼を広げている鳥のようだと思っていた。
そして、
《ぐ……が……見事、なり……》
逆手に持った刀を深々と胸に振り下ろし、貫かれた乱獅子はグラリと揺れるとそのまま仰向けになって倒れた。
獣王軍五星将の一人を含む二万の軍勢を相手に一人戦いきり、勝利を収めた男は敵に刺さった刀を引き抜くと足を引き摺るようにしながら戦場を離れてゆく。
それで彼が洞窟の入り口へ向かっていると理解したガルダは、両目に涙を溜めながら丘を駆け下りて彼の許へ向かった。
昼――ＥＰシネマズ
映画を見終わった天田はどこか呆けていた。それは隣に座っている木戸も同じで、館内を見渡せば同じような状態になっている者や、涙を流している者もいた。

「はぁ……今回の映画はすごいアクションでしたね」
「ああ、それに内容も大人向けだった」
ざっくり説明すれば、敵の罠にはまって過去に飛ばされたフェザーマンたちが、自分のご先祖に助けられて元の世界に戻りタイムスリップさせた敵を倒すという内容だった。
しかし、過去に飛ばされて追加装備やロボットを呼び出せないフェザーマンを倒すべく、五星将の一人が大軍と共に追ってくるという緊迫した内容で、ちびっ子たちや長年のファンたちも手に汗を握って見ていたのだが、元の世界に戻ってからしかロボットの戦闘シーンが出てこないだけあって今回の映画はアクションシーンにとても力が入っていた。
男女問わず思わず格好良いと感じるシーンも沢山あり、これでワイヤーアクションを使っていないというからさらに驚きだ。
一人残って戦うシムルグのシーンや、元の世界に戻って木の根元に折れた刀が刺さっている事で事情を察したフェザーマンたちが悲しむシーンなど、本当に大人も見られる内容だったことで歴代の映画も見てきた天田たちも大満足だった様子だ。
まだ前売り券が残っているので、上映が始まってからもう一度見に来ようと思っていると、スクリーンの前にある舞台に繋がる扉が開いて誰かが入ってきた。
一体誰だと思って天田がジッと見れば、それはフェザーマンを演じるキャストたちと今回の映画に登場したガルダ、シムルグ役のアイドル柴田と湊に映画監督だった。
「え、キャストが登場するなんて聞いてませんよ!?」
「……有里先輩は平気でこういうサプライズする人なんだよ」
試写会という名目で上映されていたため、まさか監督も含めた映画のメインキャスト全員が登場するとは思わず館内は一斉にざわつき出す。
湊のことを傍で見ていた者ならば、十分にあり得る話だったと予想し得た事態に頭を押さえているが、内心では嬉しいらしく前のめり気味に椅子に座り直している。

それを聞いた天田は余計に湊がどんな人物なのか不思議に思っているようだが、しかし、今はキャストと監督の話を聞いておかねばと舞台の方へ視線を送る。

監督から順に挨拶を始め、次にフェザーマンのキャストたちの番になり、それが終わると劇場版の特別出演枠の二人の順番が回ってきてマイクを持った柴田が隣に立つ湊と腕組みをしながら笑顔で挨拶をした。

《皆さん、こんにちは。最後の最後でシムルグと結婚した巫女ガルダ役の柴田さやかです》

そう、実をいうとシムルグは死んではいなかった。瀕死の重傷ではあったが、どうにかしぶとく生き残り、もうあんな無茶はさせないからと泣きながら怒ったガルダが結婚を迫りゴールインしたのだ。

では、どうして木の根元に刀が刺さっていたかというと、二人はフェザーマンから元の世界にある基地では古のアイテムから情報を読み取ることが出来ると聞いていたので、結婚報告をするため使えなくなった刀を利用していたのである。

おかげで映画はハッピーエンドで終わった訳だが、映画から飛び出てきたキャストは現実世界での職業がある。

それで考えると一度は交際報道があった二人が腕を組んでいるため、湊の初出演映画を観るためにやってきた一部の者たちからは声にならない悲鳴があがりかけた。

しかし、訓練されたファンクラブ会員たちは他の者の迷惑になるからと声を我慢し、なんとか心の中ですぐに離れろと嫉妬の念を送るに留めている。

そんな風にキャストたちの挨拶を終えると設定秘話や撮影時の裏話などが監督とキャストたちから明かされ、ダメで元々だと直談判に来て本当に良かったと思いながら天田はこの日の試写会を満喫してゆくのだった。

第二百三十五話　十年ぶりの街

７月２４日（金）
朝――巌戸台分寮
「では、アイギス。私たちは学校へ行ってくるが、くれぐれも一人で外に出ないようにな。街を見て回るのなら放課後に付き合ってやる。だから、それまでは大人しくしていてくれ」
「……はい、了解しました」
旅行から帰ってきた翌日の朝、アイギスが四階作戦室のソファーに座って待機していると、登校前に美鶴が声を掛けにやってきた。
彼女には専用のメンテナンスブースがあるのだが、流石に彼女一人を連れてくるような気軽さで搬入出来るようなものではなく、今週末にどうにか突貫で作業しようということで話が決まっていた。
その間、彼女はここを待機場所とし、何かあればラボの方で対処する事になっている。
もっとも、巌戸台に到着してからもアイギスは暗い表情のままなので、学校が終わって案内に連れ出すまではとくに問題はないだろうと美鶴も楽観的に考えていた。
扉が閉まって足音が遠ざかっていくとアイギスはソファーから腰を上げて窓際まで歩いて行く。
今日の天気は快晴。屋久島と違って薄い水色の空が広がり、鳥たちが忙しそうに飛び回っているのが見える。
寮を出て行った美鶴が前の通りを歩いて行く姿も見え、そのままボンヤリと眺めていれば数十分後に慌てた様子の順平も走って出て行った。
（……どうして慌てた様子だったんでしょう。学校という施設に遅刻しそうだったのでしょうか？）
アイギスは知識としては学校がどういう場所か知っている。一応、月光館学園の案内パンフレットのデータも入っており、施設の中がどのような感じなのかも分かっている。
だが、そこで人々が勉学に励む様子や、どのような日常が存在する

のかは識らない。
大切な彼も以前はそこにいたのだろう。そして、彼と共にいたチドリもきっと美鶴たちのように学校に通っていたに違いない。
けれど、彼はもういない。チドリと連絡を取る事が出来れば墓の場所や、自分の機能が停止してからどうなったのか詳細を聞く事が可能かもしれないが、聞いたところで彼が戻ってくる訳でもないので会う気にはなれなかった。
(……でも、八雲さんがどんな街で暮らしていたのか。それぐらいは知っておきたいです)
そう考えて顔を上げたアイギスはワンピースの中にあるネックレスを服越しにギュッと握ると、窓際を離れて部屋の入り口へと向かう。
学校が終わったら案内してくれると言っていたが、現在の時刻は十時前なので六時間も後になってしまうため、そこまで待つ気のないアイギスは勝手に出て行く。
既に寮には誰もいないので止める者もおらず、作戦室を出て階段を降りていった彼女はエントランスを素通りして玄関の扉を潜った。
「……音がとても大きいであります」
建物の中にいたので気付かなかったが、外に出れば目の前の車道を走る車や街を歩く人々の話し声が聞こえてくる。
昨日、アイギスたちが戻ってきたのは祝日の夜だったので人通りも少なかったが、今のこの喧噪がこの街の日常の姿なのだろうと少女は理解した。
小さな子どもを自転車の後ろに乗せて走る女性、携帯電話で話しながら笑っているスーツ姿の若い男性、杖を突きながら難しい表情で立ち話している老いた女性たち。
目的地も決めずに歩き続けるとアイギスは多種多様な人々とすれ違った。
五月蝿い、でも、この街には沢山の命が溢れている。そんな事を思いながら、アイギスは彼が過ごした街の〝日常〟を見て回った。
住宅街に近い場所にある神社や、街中とは比べものにならないくら

い人でごった返したショッピングモール、海沿いの静かな公園に昔ながらの商店街と海外とは雰囲気も造りも異なる日本の日常風景。
困った顔をした人もいれば、とても怒った様子の人も中にはいた。しかし、彼女が見た人々の多くは楽しそうに笑っていた。
(……八雲さんがいないのに、誰もそれを気にしていません。海で遊んでいた七歌さんたちもそうでした。あの方が亡くなっても、他の人たちは自分の日常を過ごして笑ったり怒ったり)
ポートアイランド駅前の広場までやってきた彼女は、花壇横のベンチに座って考える。
十年前に彼が守った日常。当時のメモリーは破損してほとんど思い出せないが、自分一人ではシャドウを倒す事が出来なかった事は覚えている。
そう、ここで楽しそうに笑っている者たちは、全員が彼によって命を救われているのだ。
だが、誰一人としてその事を知らない。小学生の子どもが、両親を失った直後だというのに世界を守るために戦ったというのに。
(世界は何事もなかったかのように回っています……。まるで、あなたなど最初から存在しなかったかのよう……)
どうして、どうして、どうして。
アイギスの頭の中で同じ言葉が繰り返され占めてゆく。
彼はこんなにも沢山の人を守ったではないか。親を失った子どもに協力を求めてしまったのは自身であるが、だとしても人々を救った彼が死んでもそれがなかったかのように流れてゆく世界が信じられない。
「なんで、どうして、八雲さんがいないんですかっ」
彼が救った世界、人々の笑顔が溢れる世界、そこに救った本人の姿がない。
こんな事はあんまりだとアイギスの瞳から涙が溢れた。
＊＊＊
急に大声を出したかと思えば、次の瞬間には手で顔を覆って泣き始めた少女は駅前広場で酷く目立っていた。

それが超のつく美少女となれば余計で、一体どうしたんだと周りにいた者たちは不審げに少女の方を見る。
だが、一時的に気にはしても声を掛けるほどの関心はなく、少しすれば彼女の方を見ていた者たちも興味を失って自分の用事に戻っていた。
とはいえ、夏休み直前の昼間となると暑さで浮かれたのか邪なことを考える者もいる。
映画館から出てきて暑さと日差しに顔を顰めていた二人組の若者は、ベンチに座って泣いている少女を見るとニヤリと笑って少女を指さして二人で話す。
「なぁ、あの子結構よくね？」
「おほ、メッチャ泣いてるじゃん。なに？　話聞いて慰めちゃう？」
「いいべ？　ちょうど昼だしワックでも誘ってさ」
話題だからと観てきたハリウッド映画が期待外れだったこともあり、若者たちはこれから何をしようかなと考えていた。
適当に昼を食べたら服でも見て、そのままゲームセンターなりカラオケにでも行こうと思ったが、丁度良い暇つぶしになりそうな物を見つけて気分が高揚する。
昼代は奢る事になるだろうが、上手くいけばかなりのリターンが期待出来そうだと下心満載の笑みを浮かべ、さぁ話しかけにいくぞと踏み出そうとしたとき、
「――――殺すぞ」
若者たちは首筋にナイフを当てられているかのような寒気を覚えて動けなくなった。
いま真後ろに何がいるのかは分からない。その声もギリギリで耳に届くような小さな呟きでしかなかった。
けれど、数秒後には自分たちが殺されているだろうという確信だけがあり、泣いている少女に邪な考えで近付こうとしたのがダメだったのかと数秒前のことを後悔する。
「なんだ。よく分かっているじゃないか。二度とそんな事を考えるな。そして、今すぐ消えろ。そうすれば見逃してやる」

男の声が聞こえてすぐに背中をトン、と軽く押されたことで若者たちは動けるようになる。
何が何だかよく分かっていないが、このまま振り向かずにこの場を離れれば見逃して貰えるという事で、二人は涙と鼻水で顔面をグチャグチャにしながら必死に走り去って行った。
脱兎の如く逃げ出した若者を見送った先ほどの声の主は、あまりに男たちが滑稽すぎて呆れて溜息を吐く。
ただ、これで余計な邪魔は消えたとして静かに歩き出すと、先ほどの二人組が話しかけようとしていた少女まで近付き、両手で顔を覆っている彼女に声を掛けた。
「……どうして泣いているんだ？」
男が声を掛けると少女の肩がビクリと揺れる。そのまましばらく身動きもせず、声を掛けた方も黙って立ったまま見つめていれば、少女は顔を手で覆ったまま静かに口を開いた。
「とても……とても、悲しい事があったんです」
「そうか。俺に手伝える事はあるか？」
「大丈夫です。もう、解決しましたから」
その悲しい出来事の解決に協力出来るかを尋ねれば、少女はもう大丈夫だと答える。
だが、解決したというのに少女は俯いて顔を手で覆ったままで、何故だか再び指の間から涙をポロポロと溢している。
どうして大丈夫と言ったのに泣いているのか。それが分からない男は少女に泣き止んでくれないかと尋ねた。
「じゃあ、泣き止んで欲しいと言ったら、君は泣き止んでくれるか？」
「それは……難しいですね。とても嬉しいのに、何故か涙が止まらないんです」
そう言って顔をあげた少女は嬉しそうに笑いながら泣いていた。
立っている男と座っている少女の視線が交わり、ずっと探していた互いの姿を認識する。
青年の方は随分と姿が変わってしまった。右眼には眼帯が付けられているし、背丈だって二年前と比べて十センチ以上は伸びている。

ただそれでも、少女は彼が自分の一番大切な人だと一目で分かった。
「おかえりなさい。八雲さん」
「ああ、お帰りアイギス」
自分たちが出会った街で再び会えた。だからこそ、二人はここに帰ってきた相手に「おかえり」と言った。
挨拶を交わすと少女はすぐに立ち上がって青年の胸に飛び込んでゆく。青年もそれを優しく受け止め、ずっと待ち望んでいた再会を喜び合った。

昼休み――月光館学園・生徒会室
テスト期間後の連休も明け、結果が発表される昼休み。七歌たちは美鶴に言われて生徒会室で昼食を食べながら話をしていた。
「つか、実際のところアイギスの大切な人って誰なんだろうな？」
「あ、それ私も気になってた。十年前ってことは桐条グループの関係者なんですよね、多分」
集められたのは特別課外活動部の全メンバー。集められた理由はアイギスをどのように案内して歩くかという相談だったが、案内後の彼女の様子によって戦力が増えるかどうかが変わってくるため美鶴も真剣に考えていた。
その中で、焼きそばパンをかじりながらパイプ椅子に逆向きに座っていた順平が、相手がどんな人物だったかによって思い出の場所も変わってくるだろうと意見し、ゆかりも乗っかる形で相手の素性が知りたいと美鶴に尋ねる。
アイギスには厳戸台行きが決まってからも何度か尋ねたのだが、かなりガードが固くて髪の長い女性だったという事しか聞けていない。
内緒にされればされるほど気になるのが人の性というものであり、話自体には興味のない真田も何故そんなに勿体ぶって隠しているのかと気にはなっていた。
なので、桐条グループの方で該当する人物が分かるなら教えてくれと皆が聞けば、サンドウィッチを食べていた美鶴も頷いて口を開い

た。
「ああ、私もそれについては調べていた。理事長やラボの方でも該当する人物が誰か調べて貰っていたんだが、最も可能性が高いのは彼女の生みの親とも言える当時の開発責任者、君嶋夕ではないかとの回答があった」
「その人は今どこに？　もしかして、十年前の事故で？」
「いや、彼女はそれより前に行なわれたアイギスの稼働実験で亡くなっている。実験は戦闘訓練も兼ねていたようだが、その中で訓練用のシャドウが暴走して襲われたらしい」
十年前の事故ではないが既に故人であると聞いて他者たちは複雑そうな表情を浮かべる。
もっとも、彼女の死亡した本当の理由は、グループの指示を無視した計画を実行に移し、その中で暴走したシャドウからアイギスを庇ったことが原因である。
娘と思っているアイギスがただ戦う兵器として命令を聞き続ける未来を憂い、ちゃんと自分で考えて命令を拒否したりも出来るようにと君嶋は願った。
結果的にその望み通りにアイギスは疑問を持てるようになったのだが、十年前の事故の日に再起動するまでに彼女の人格形成に影響があるかもしれないからと当時の記憶はメモリーから削除されている。
よって、アイギスは君嶋のことは一切覚えていないが、それを知らないメンバーたちは生みの親を失って悲しんでいると思われる新たな仲間とどう付き合っていくか七歌を中心に話し合う。
「向き合うって事ならお墓参りとかはさせてあげたいよね。ただ、逆効果の可能性もあるから、当面はこの街での暮らし方を教えつつ心の隙間を埋めていくしかないかな」
「やっぱりロボットとは言っても女の子ですし。最初は服を買いに行ったりすると良いんじゃないかな？」
「おっ。そんなら、そんときはオレっちが荷物持ちに付いていくぜ？」
「おう、泣いてる子ナンパした腐れ外道はいらねぇから一人で遊んでな」

心の隙間を埋める作戦として、必要な物を買い揃えていく事を口実に出かけようと風花が提案すれば、順平が便乗して一緒に遊びに行きたいと言ってきた。
それを七歌が笑顔でぶった切ると順平は頭を垂れて落ち込み、流れ弾を喰らった真田もナンパ勝負で出来た心の傷に塩を塗り込まれて堪えている。
女子がいないときに馬鹿なことをして勝手に自爆したのだから、美鶴としても男子らを擁護する気は欠片もないが、ここでさらに追い込むと面倒なことになるとはっきり分かるため、七歌が追撃する前に話題を戻す。
「まぁ、何にせよ今日はどこに何があるかという事くらいしか説明出来ないだろう。買い物等は週末に持ち越しだな」
彼女の生活用品を買うお金は桐条グループから出る。当日ついて行けるかは分からないが、付いて行けなくとも問題ないよう後で準備を進めつつ、美鶴はアイギスが仲間たちと打ち解けられれば良いのだがなと小さく溜息を吐いた。

午後――ＥＰ社・個人研究室
無事に再会を果たした湊とアイギスはまず初めに寮に戻り、寮の電話から桐条グループ傘下の清掃業者に電話して女子フロアの一室を早急にクリーニングするよう依頼した。
このとき湊はハデスの隠れ兜を被っていたので防犯カメラにはアイギスの姿しか映っていない。
よって、後で解析されても急に帰ってきたアイギスが電話をして出て行くようにしか見えないが、それを済ませてから二人は空を飛んでＥＰ社の施設最奥にある湊の個人用研究室を訪れていた。
「……入ってくれ」
「はい。お邪魔するであります」
ここに来るまで二人は誰にも会わなかったが、理由はこの区画は湊の専用研究室しかないため、他の研究員たちの立ち入りが禁止されているからだった。

おかげで二人はスムーズに青年の研究室に到着でき、中に入ったアイギスが物珍しそうに部屋の中を見渡していると、部屋の奥の壁際に置かれた大きな装置が気になった。
「あれはなんですか？」
「……あれが君に見せたいものだ」
誘われてアイギスは装置の元まで移動する。それは酸素カプセルのように蓋の部分が半透明で中が見える縦長の機械だった。
一体中には何があるのか。そう思ってアイギスが覗き込めば、そこに酸素マスクとコードに繋がった電極を身体に付けた彼女とソックリの少女が寝ていた。
「これは……わたしですか？」
「正確に言えば君の新しい身体。人間としての身体だ。君に言われて俺は世界に君を人間だと認めさせる事は諦めた。けど、別のアプローチで君が人として生きられる方法を探したんだ」
言われてアイギスは話している青年の方を見る。装置の中で眠るアイギスとソックリな少女に慈しみの視線を向けており、眠っている少女が彼にとって大切だということは理解出来る。
だが、アイギスは神降ろし直後の戦いで勝利し、彼にそんな力で支配するような方法はダメだと諭して、自分が人間として認められる必要はないと伝えたのだ。
それを、彼はアプローチの問題だけだと取ったらしく、こうやって彼女が人として生きられるように〝人間〟の身体を作ってしまった。
並大抵の苦労ではなかったはずなのに、日本に帰ってこの身体を作るに至った経緯を話す彼の横顔はどこか楽しそうですらある。
「ただ、機械の身体である以上はどうやっても無理だと思った。俺は気にしなくても、他の人間は君を機械として扱う。なら、人間の身体を用意してしまえばいいと思ったんだ」
「それは、わたしソックリのこの方をわたしの人格で上書きするという事ですか？」
「いや、そうじゃない。これは人工骨格を君の身体の設計図をいれた細胞で覆ったものだ。本当に君だけのために作ったもので、この身体

は生きてはいるが魂はない。だから、メモリー内の記憶とパピヨンハートを移植すれば君は人間になれるんだ」
魂はパピヨンハートに、記憶はメモリーと一部はパピヨンハートにも入っている。
理論上はパソコンの中身の引き継ぎするように、アイギスもメモリーとコアを移植すれば新ボディにそのまま移れるはず。
けれど、そんな新ボディへの移行作業よりも、アイギスはどうやって肉体の設計図という〝遺伝子を持たぬ〟機械の自分の情報を細胞に入れる事が出来るのだと問うた。
「そんな、不可能であります。そも、遺伝子を持たないわたしの設計図を細胞に入れる事など」
「ああ。だから、黄昏の羽根を遺伝子として代用した。君の設計図データを黄昏の羽根に記録し、細胞核と極小の黄昏の羽根を入れ替えて培養したんだ」
黄昏の羽根は情報と物質の中間の特性を持っている。故に、アイギスも人格データを入力されて自我を持つに至った訳であるが、その特性をこんな形で利用しようと思った者など桐条グループにすらいなかった。
研究員たちはアイギスたちをどこまでも機械と割り切っていた。自我を持っていようと個人ではなく道具として見ていたのだ。
だからこそ、黄昏の羽根を使って生き物を作ろうという考えには至らず。おかげで本当の意味での人造人間が作られる事も無かったのだが、彼女の前にいる青年は少女のために神の領域にまで手を出していた。
少女は彼が自分のために頑張ってくれて嬉しいという気持ちよりも、どうして青年がそんな事にまで手を染めてしまったんだという悲しみの方が大きくなる。
「あなたは……どうしてそう無茶ばっかりするんですか！　そんな、生命の根幹を揺るがすような神の領域に踏み込むなんてっ」
「機械の身体に人の心と魂が入っている方がおかしい」
「だからって、こんな事は許されるはずがありません！」

「俺は、そのことで将来君が苦しむのが嫌だったんだ」
結局、青年が研究を進めた理由はそれに尽きる。
世界に人間として認めさせようとしたのも同じであり、彼はずっと同じ気持ちで今回は別のアプローチを試したに過ぎない。
言っても聞かない性格だとは思っていたが、本当にこの青年は自分のために無茶ばかりする。そんな風に思いながら、ストレートな彼の言葉に嬉しさが勝って怒るに怒れなくなったアイギスは困った人だと思わず苦笑を浮かべた。
「もう、本当に八雲さんは大馬鹿者であります……。しかし、本当にわたしは人間になれるのですか？」
「ああ、生体パーツの研究はずっと進めていたんだ。実際、君の姉である五式ラビリスは既に生体ボディになって学校にも通っている」
「わたしの、姉さんですか？」
「桐条宗家近くの研究所に封印されていたんだ。だから、こっそり連れ出して再起動させた。彼女も君に会いたがっていたから、近いうちに会えるよう手配する」
自分の前に何体かの対シャドウ兵装が作られた事は知っている。残念ながら詳しいデータは入っていないが、妹のアイギスが会う前に大切な人が姉と面識を持っている事はとにかく驚きだった。
「もう、八雲さんのせいでずっと驚きっぱなしであります。姉さんが人間になっているなら、わたしが人間にならない訳にはいかないじゃないですか」
「戦力の面は気にしなくていい。意識する事で肉体を戦闘モードに切り替え、それによって機械の身体に近いパフォーマンスを発揮出来る。新型のオルギアモードであるエクストリーム・オルギアモードも使えるから、いざというときもバッチリだ」
言われてからアイギスはハッとする。人間は機械よりも脆い。目の前の青年は生身で対シャドウ兵器と正面からやり合っていたがそれは彼が特別なだけで、普通はナイフで切られれば血が出るし、高いところから飛び降りれば骨折して行動出来なくなる。
シャドウとの戦闘などを考えれば機械の方が疲れない事も含めて

理論上は強そうだが、そういった彼女の懸念を予想しクリアしておいた彼の準備の良さには流石のアイギスも呆れてしまう。
「まったく、用意周到でありますね」
「まぁな。少し頑張った」
「少し頑張るだけでロボットを人間に出来るのであれば、世の中からＳＦという娯楽ジャンルは消え、一部の科学者たちは廃業する事になるかと」
　この研究を進めるに当たって専門家たちの力も借りていたが、根幹の部分は知識を身に付けた彼が主導で進めていた。
　一年と少しという短い期間の間に、彼は世界トップクラスの知識と技術を持った研究者になったとシャロンたちも太鼓判を押すだろう。
　ただ、その全てが大切な少女のためのものであり、他の研究には一部技術を応用させる以外は使おうともしないのが実に彼らしかった。
　パピヨンハートや記憶の移行作業に移るため、アイギスは彼の用意した椅子に座って準備をする。
　ラビリスのときは主電源を完全に落としてからの作業を他の者にも手伝って貰ったが、一回やった事は既に覚えているので今回は一人でも問題ない。
「アイギス、眠る前にこれを返す」
　そうして、彼がスパコンの準備やら何やらを進めていると、急に一枚のタロットカードを投げ渡してきた。
　不思議な光り方をするカードだと思って見ていると、湊が握りつぶすジェスチャーをしてきたので、これが待機状態のペルソナだったのかと感心しつつカードを砕いた。
　すると、すぐに自分の頭上にパラディオンが現われて消える。今度こそ自分の中にペルソナの存在を感じた事で、少女もようやく戻ってきたのだなと思えた。
　それからさらに待っていれば湊の方も準備を終えたようで彼女の傍に戻ってくる。電源を落とし、次に目が覚めたら人間の身体になっている。
　本当に嘘みたいな話だがアイギスは彼を疑う気はさらさらなく、た

だ、少しだけ目が覚めたときに彼がいなかったらという不安から一つのお願いをした。
「あの、手を握っていて貰えますか？　目が覚めたらすぐ会えるように」
「ああ、分かった」
言えば彼はすぐにぎゅっと手を握ってくれた。温度センターが彼の体温を感知する。
今のアイギスではこういったデータは数字でしか認識出来ないが、人の身体になれば触れ合いだけで感じ取られるようになるらしい。
その事を考えて、なんて素敵なんだろうと思った彼女の瞼がゆっくりと閉じてゆく。
「おやすみ、アイギス」
最後に彼の優しい声を聞いた少女は、完全に瞼を閉じるとそのまま意識を手放した。
夜――巌戸台分寮
七歌たちが学校から帰ってくると、アイギスは寮のエントランスで一人絵本を読んで待っていた。
そんな物がこの寮にあったかなと思わなくもなかったが、とりあえず着替えたらすぐに出掛けられるけどと誘うも、彼女はきっぱりと「今日はいいであります」と出掛ける事を拒否した。
それは美鶴や風花が誘っても同様で、今は絵本に夢中とばかりに読み続けて時刻は既に晩飯時を過ぎていた。
「なあ、アイちゃんの様子なんか変じゃね？」
「やっぱり？　帰ってきたら一人で絵本読んでてさ。出掛けないのって聞いたら今日は行かないでありますって」
キッチン前のカウンターテーブルでカップ麺を食べながら眺めていた順平は、昨日会ったときと雰囲気が違うなと思って彼女を見ていた。
何がどう違うかと聞かれると難しいのだが、一言で言えば雰囲気が明るくなって可愛さも増しているように思えた。
もっとも、そんな事を言えば女性陣から冷たい視線が飛んでくるの

で心の中で思うに留めるが、順平の横で牛丼を食べている真田も、テーブルの方でお茶を飲んでいる女性陣四人もジッと観察していれば、突然絵本をパタンと閉じたアイギスが耳のクラッチユニットに手を掛けてそれを外した。
「フゥ……音楽というのは奥深いものでありますね」
「って、それ取れんのかよっ?!」
外したイヤフォンを肩に垂らしたのを見て順平が思わずツッコミを入れる。
まぁ、全員が同じように思ったのだから彼がツッコミを入れるのもしょうがないが、そういうパーツだと思っていた物が外れて下に普通の耳があったのを見て、風花が少々残念そうにアイギスに尋ねた。
「あの、アイギス？　それってイヤフォンだったの？」
「はい。カチューシャと連結出来るタイプの物でして、音楽を聴くために付けていたのであります」
「ロボットが音楽聴くってなんだよ。つか、その下って普通に人の耳だったんかよ」
今のアイギスの頭は普通にカチューシャを付けている状態だ。そのカチューシャと連結させる事が出来るのが先ほど外したイヤフォンで、繋げる事でヘッドフォンとして利用する事が可能になる。
そんな説明を受けて、そもそも音楽なんて聴いていたのかと一同は新たな驚きを感じたが、言われてもアイギス本人は話をよく分かっていないらしく、首を傾げてから立ち上がるとテーブルの上に置かれた本の上に付けていた手袋を外して置いた。
「よく分かりませんが、そろそろお風呂に行ってくるであります」
『って、そっちは手袋だったんかいっ?!』
今度のツッコミは順平に加えてゆかりと七歌からも同時に入る。
手袋を外した彼女の手はとても肌が白くて美しかった。細くて長い指、艶のある長い爪、ネイルをやればさぞ映える事であろう。
ただ、服を着た状態でも分かり易い機械の部位だと思われていた手が、まさか柄付きの手袋だとは思わず、本当にロボットなのかと疑わしく思えてきた七歌が恐る恐る聞いた。

「えと、アイギス？　あなたってロボットで良いんだよね？」
「いいえ、人間であります」
『はぁっ!?』
　見ていると確かに今の彼女は人間にしか見えない。
　と言うよりも、これでロボットと言われた方が疑わしいのだが、他の者からすると彼女は桐条グループの作った対シャドウ兵器ということになっている。
　それがどうすれば人間という事になるのかと、現状への理解が追いついていない美鶴が思わず尋ねていた。
「待て、君は桐条グループに作られた対シャドウ兵器という話だったろう。それがどうして人間に？」
「どうしてと言われても。では、美鶴さんは何故人間なのですか？」
「いや、それは人間として生まれたからで」
「では、わたしもそういう事であります」
　あっさりと言い返すアイギスの言葉に美鶴も納得しかける。
　何故彼女が人間なのかと考えれば、そう生まれたからとしか言えないからだ。
　しかし、美鶴が完全に納得しきる前に、よく考えろと真田がアイギスがロボットであった証拠が存在すると告げてきた。
「おい、納得するな美鶴。アイギスには開発者がいたんだろ。幾月さんも十年前の戦いで損傷して動かなくなっていたと言っていた」
「そ、そうだな。いや、しかし、実際に彼女はどう見ても人間で……」
　屋久島で会ったときと違って今の彼女は本当に人間そのものだ。
　雰囲気も明るくなって美しさも増しており、不思議そうに美鶴たちの方を見ながら瞬きをしている姿はロボットには見えない。
　けれど、真田の言う通り彼女が桐条グループに作られたロボットという情報もあり、一体何が何やらと美鶴が悩んでいれば、アイギスのことをジッと見ていた七歌がテーブルの上に置かれた絵本を指さして話しかけた。
「……アイギス、その絵本はどうしたの？」
「これはですね。あの方に買って頂いたのであります！」

聞かれたアイギスは嬉しそうに笑って絵本の表紙を皆に見せてきた。
ネズミが赤いチョッキを着ている表紙は七歌たちも見覚えがあり、風花などは「あ、懐かしい」と呟いてもいる。
しかし、気にするべきは本の内容ではなく、聞き捨てならない単語が混じっていたぞと美鶴が再度口を開いて尋ねた。
「待ってくれ。アイギス、私は君に大人しく寮で待機しているよう命じたはずだ。というか君の大切な人は既に亡くなっていたんじゃ？」
「あの方が亡くなったなど笑えない冗談であります。そのような無礼な事を仰るのであれば実力行使で黙らせる事も厭いません」
「いや、それを言ったのは君だ。私たちはそれが誰なのかも知らないんだぞ」
ムスッと怒った顔をされても、アイギスの大切な人が死んだと言っていたのは本人だ。それで責められては言われた方は堪ったものではない。
まぁ、大切な人が生きていたからアイギスも元気になったという事なら納得も出来、彼女が勝手に日中に彷徨いていた事も今なら不問にしたいとは思う。
ただ、少しくらいは相手の情報が欲しいと思った美鶴が話しかけようとすれば、その前にゆかりが美鶴に代わって話を聞いてくれた
「それで結局生きてたなら良かったけどさ。どうやってロボットを人間の身体にするのよ？　アイギスのボディの時点でオーバーテクノロジーって感じだったのに、それ以上ってもはや魔法の域でしょ」
「あの方が言うには少し頑張ったそうです。ですが、おかげでわたしも妊娠や出産が可能な人間になることが出来ました」
「頑張ったって、本当に何世紀先の技術よ……」
ロボットを人間にするという魔法のようにしか思えない所行。かつて人形に命を吹き込もうとした芸術家たちが何人もいたと言われているが、今回の件はそれの成功例と言っても良いだろう。
しかし、アイギス本人は歴とした科学技術であると言い、魔法という理論も何もないものではないと断言した。

それは彼女の大切な人とやらが、世界トップレベルである桐条グループを超える超技術を有している事の証明であり、ペルソナなど異能に触れているメンバーたちでさえ俄には信じがたい事でもあった。
そして、他の者たちがどうなっているんだと悩んでいれば、自分の荷物をまとめたアイギスは階段の方へ向かっていきながら去る前に言葉を残してゆく。
「では、わたしは明日もお出かけする予定ですので、就寝前にお風呂に行ってくるであります」
「あ、待ってアイギス。お風呂の使い方とか教えるから」
七歌たちが帰ってくると女子フロアの一室がアイギスの部屋になっていた。
彼女はそこに荷物を置きに行くついでに着替えを取ってくるのだろう。
ただ、人間の身体になったばかりのアイギスに常識があるとは思えず、さらに言えばお風呂の使い方も分からないだろうと風花が後を追っていった。
それを見送った美鶴は頭に手をあて、本当に何が何やらと深い溜息を吐く。
「はぁ……驚きの連続で頭がパンクしそうだ。だが、彼女の身体についてや大切な人とやらの事はグループにも調べさせつつ、私たちの方でも個々で今後探ってゆくとしよう」
彼女の身体は随分と変化してしまったが落ち込んでいたときよりは話しやすい。
また、寮で生活する仲間が増えた事に変わりはないため、明日には天田が来る事もあってアイギスの人間化は好都合ですらあった。
他の者たちも完全には納得しきれない様子ではあったが、美鶴に言われると頷いて返し、しばらくは世間知らずな留学生を相手にするような感じで行くことに決まったのであった。

第二百三十六話　一学期終業式

7月25日（土）
朝――巌戸台分寮
朝、他の者たちが一学期の終業式に参加するため学校に向かうと、薄いブラウンのプリーツスカートと青のタータンチェックのシャツを着たアイギスが階段を下りてきた。
この服は湊に選んで欲しいとお願いして買って貰ったもので、今はまだ湊の選んだ組み合わせ通りに着ているが、徐々にファッションの勉強を進め、持っている服を自由に組み合わせていけるようになる予定である。
それはそれとして、どうして彼女がおめかしして下りてきたかと言うと、昨夜言っていた通りに本日も出掛けてくるからだ。
昨日は開けっ放しで出てきてしまったが、戸締まりはして欲しいと寮の玄関の合い鍵を貰ったことで、今日は外に出るとちゃんと施錠してから鍵をハンドバッグに仕舞って目的地を目指す。
「……対象A、建物を出ました」
《了解。十分に距離を開けたまま尾行し、彼女と接触する人物の情報を送れ》
「了解」
そんな風にアイギスが外に出て道路を歩いていると、五十メートル以上の距離をあけて彼女を尾行する者たちがいた。
今まさに通信していたのはスーツを着たサラリーマン風の男で、仕事の特別な通信機ではなく仕事の話をしている様に見せかけて携帯で話していた。
これは日常に紛れる事で尾行対象と周囲から怪訝に思われないための策である。
相手がロボットから人間になったという報告を美鶴から聞き、最初は桐条グループもいくらなんでも冗談だろうと考えていた。
けれど、あのお嬢様がそんなおかしな冗談を言うだろうかと、改めて他の寮生たちにも確認をとって、彼女に風呂の使い方を教えるため

一緒に入浴した風花から、身体は感触も含めて本物の人間と同じだった、という証言を受けて一応は信じる方向に決まったのである。
無論、その後はグループの方で大騒ぎになった。
桐条グループの中でもトップクラスの秘密である対シャドウ兵装という心を持ったロボット。その時点で数世紀先の技術なのだが、それを逆に人間にしてしまうというさらに未来の超技術を持った個人が存在するなど俄には信じられない。
だが、実際にアイギスは人間になっていて、その相手は彼女が一番の大切だと公言している人物だったのだ。
ある者はそれを聞いて、君嶋夕が彼女の一番大切な人と言っていたのは誰だ、と八つ当たりに近い言葉を吐いた。
まぁ、もっとも可能性が高いという話だったので、それが外れたところでおかしくはないのだが、すると今度はその人物は誰だという話になってくる。
アイギス本人が教えてくれれば手間も省けるが、彼女に話す気はないようで、美鶴から今日も接触するという連絡を受けて現在五十人体制で彼女の監視に動いていた。
「あ、対象が曲がります。継続、お願いします」
《了解。お前は別ルートから進み、対象から離され過ぎるな》
「了解です」
アイギスの尾行を続けていると彼女は十字路に入ったところで左に曲がった。
このまま男も同じ方向に曲がってもいいのだが、念には念を入れて曲がり角付近に待機していた者に引き継ぎを頼み、自分は三つ手前の角を曲がって尾行を中断する。
相手の姿が見えなくなったことで、ふぅっと一息吐いて男も張っていた気を弛める。
遠目から見ていれば相手は超のつく美少女にしか見えない。今は人間になっているのだから、実際に普通の美少女と呼んでも良いのかもしれないが、元のロボットだったときの姿を画像ファイルで見ていたこともあり、男の中には相手は人間の姿をした元兵器という印象が

強くあった。
　五十メートル離れていたのもそれが理由で、もし万が一ロボットのときと同じセンサーの強度があれば、最低でもそれだけは離れていないと見つかってしまうと思ったのだ。
（はぁ……ロボットならともかく、化け物が人の中に紛れられるようになったなんてな）
　男からすればいくら見た目がよくても彼女は人造人間という感覚だ。
　人のようで人ではない。ロボットや人形の方がまだ〝そういう物〟として割り切って接する事が出来る。
　だが、先ほどまで見ていた対象は、ロボットが自分を人間と思い込んで人間社会に溶け込もうとしているように見えて、男としては酷く不気味で不快だった。
　これは所謂『不気味の谷現象』というやつで、ロボットの動作や外観が人間に似てくると人は好感を覚えやすくなっていくが、ある一定のところで逆に嫌悪感を抱く事になり、さらに似てくると再び好感を覚えやすくなるというものである。
　実際にアイギスと接するようになれば、相手にもちゃんと感情があって、身体も人間になったのなら普通の人間と理解出来るようになるだろう。
　しかし、男は彼女がロボットだったときから感情がある事を識らない。情報としては聞いているが、それはＡＩが人間のした簡単な質問に答えるようなレベルだと思っているのだ。
　よって、この神経を使う任務に既に嫌気が差しながら、せめて相手が前からやってくる少女のように普通の人間ならなと思い再び溜息を吐いた。
「――――ご苦労様」
　だが、男は前からやってきた少女の瞳を見たとき、急に何も考えることが出来なくなって元来た道を戻っていった。
　その男の背中を見送った少女は、紫水晶色の瞳を妖しく輝かせながら薄い笑みを浮かべると、少し先の路地に入るところで姿を消し、ま

た別の場所に現われては情報部の人間たちに挨拶をしてまわった。

＊＊＊

寮を出たアイギスが待ち合わせ場所にやってくると、そこには既に湊が待っていて数名の女子に囲まれていた。

今日は夕方頃に新しく入寮してくる者がおり、挨拶等をするためそれまでに帰ってきて欲しいと言われている。

よって、限られた時間を大切に過ごそうと思って少し急いだというのに、待ち合わせしていた自分より先に他の女子と会っているとは何事だとアイギスはムスッとした表情を作る。

そして、そのままズンズンと彼の方へ近付いていけば、女子たちの声が耳に届いた。

「あの、良ければ少しだけでもお話し出来ませんか？」

「バスケットボールをされていたときからファンなんです。こんな偶然二度とないと思うんで、どうかお茶だけでも」

「すみません。ここへは待ち合わせで寄っただけなんです。連れももう来たのでお話はまたの機会に」

それだけ言うと湊は女子たちの前を通ってアイギスの元までやってきた。

彼の連れが美少女だったことに女子たちは驚いたようだが、アイギスに対する嫉妬よりも純粋な羨ましさが勝ったのか、女子たちは心から残念そうな顔をして去って行った。

「楽しそうにお話していましたが良かったのですか？　あちらは二人、こちらは一人。数的有利を考えれば戦力は先ほどの女性たちの方が上であります」

「……それはどうだろうな。他の人間はどうか分からないが、俺は君がいてくれればいい」

去って行った女子たちもルックスは悪くなかった。それが二人となれば戦力的にもなかなかと言える。

もしも、ここにいるのが順平や他の男子であったなら、一人の超美少女より二人の可愛い女子を取ったかもしれない。

だが、自分には関係ないと湊がアイギスの手を取れば、悩むまでもなく自分を選んで貰えたことで機嫌をよくしたアイギスは、彼の手を握り返してから自然に恋人繋ぎに持って行く。
彼女はそれが恋人繋ぎだという事を知らない。ただ、よくしっかりと繋ぐにはと考えて、こうするのが一番だと答えに辿り着いただけだ。
西洋人の見た目をした美少女と、宣伝目的とはいえテレビにも出ていることでイケメン俳優として扱われるようになった青年が仲睦まじく手を繋いでいれば目立つ。
「忘れていました。おはようございます、八雲さん」
「ああ、おはようアイギス。昨日買った服、やはりよく似合ってる」
しかし、本人たちは周囲の声など一切気にせず、とても穏やかな表情で挨拶を交わして歩き出す。
芸能人の恋は基本的にお忍びのイメージが強いので、ここまで堂々とされていると他の者たちも美男美女のカップルで眼福だと思うだけでＳＮＳ等に情報を挙げようとも思わない。
それは彼が普段から色々な人を助けていることで、大勢から慕われ幸せを願われていることも関係しているのだが、自分に善意が向けられる事などないと思っている青年は、周りから向けられる温かい気持ちと優しい視線に気付かずその場を去って行く。
「それで、今日はどこへ行かれるのですか？」
「朝食は食べたか？」
「食べていません。空腹、という初めての感覚を楽しんでいました」
「……そうか」
人間になったばかりの彼女にとって、人の身で体験する全ての事柄は新鮮な驚きである。
起きて最初にみた彼の顔、起きて最初に感じた手に触れる温もり、彼の胸の中で嗅いだ心やすらぐ香りなど、外界から受ける刺激を彼女は何でも楽しんでいた。
それは自分の身体の中で起こる変化についても同様で、昨日の夜から何も食べていないことで感じている空腹も、これがお腹が減るとい

うことかと彼女は感心していた。
ただ、青年の方は彼女に一切の飢えやひもじさを感じて欲しくないようで、少し考えてから顔を上げると飲食店のある方向へと進んでゆく。
「じゃあ、最初に少し食べに行こう」
「了解であります。八雲さんはどういった料理が好きですか？」
「……別に食べられたら何でも」
「それは料理人泣かせの一番良くない答えだと知っています」
変なところで詳しい知識を持つアイギスは、そんな答えはよくないですよと湊を注意する。
言われた本人はばつが悪そうに視線を僅かに逸らしたが、実際、彼は猛毒のある食べ物だろうと処理せず食べられるので、数億人に一人という繊細な味も分かる舌をしていようと、自分が食べる物に関しては味に無頓着であった。
「じゃあ、ハンバーガーでも食べに行こう。個人でやっている店なんだが、野菜も多くて密かに女性に人気なんだ」
「穴場や隠れ家的なお店と呼ばれるものですね。非常に楽しみであります」
そんな彼もアイギスが食べるとなると真剣に考え、自分の持つ膨大な知識の中から味、量、店の雰囲気や立地に内装などを比較して最適な答えをはじき出す。
まさに才能の無駄遣いといったところだが、本人はアイギスにより良き物をと考えているだけなので、本人にとっては自分の能力の本来の使い方はこういった方面が正しい。
それが周囲には理解されないのが悲しいところだが、他人の意見などまるで気にしない彼は、第三者から見て無駄な能力の使い方できっちりとアイギスをエスコートするのだった。
放課後――巌戸台分寮
学校から帰ってきた七歌たちは、天田を迎える準備をしつつ彼の到着を待っていた。

その途中でアイギスもブランド物の紙バッグを持って帰ってきたが、荷物を置きに三階へ上がっていった彼女を見て、美鶴は小さく溜息を吐いた。
「はぁ……平然と帰ってきたな」
「ん？　美鶴さん、アイギスに帰って来ちゃダメって言ってたんですか？」
「いや、夕方には帰ってくるように伝えていた。ただ、実は彼女の知らない部分でちょっと問題が起こってな」
キッチンで料理の下拵えをしていた七歌は、昨日の今日でアイギスを追い出してしまうのかと美鶴に尋ねた。
それを聞いた美鶴はまさかと首を横に振り、ちゃんと帰ってくるように伝えていたが、桐条グループの方でとある問題が起きていたのだと説明する。
「君たちには伝えていたが、彼女の大切な人とやらの正体をグループの方で調べようとしたんだ。今日も会うという話だったので、情報部の人間が数十人規模で用心に用心を重ねて挑んだ結果……任務についた全員が海浜公園で釣りをしていたらしい」
スーツ姿の者や買い物帰りの主婦にしか見えない数十人が、土曜日の昼間から竿を持って釣りに勤しんでいる光景は不思議に映っただろう。
天気が良かったので釣りに出掛けたくなる気持ちも分からなくはないが、尾行を命じられておきながら任務を放って遊びに行くのはいただけない。
自分も頑張って学校に通っているのにいい大人が狡くないかと、順平は桐条グループでの勤務形態について尋ねた。
「え、任務ほっぽって釣りとか桐条グループ的にありなんスか？」
「サボっていたなら当然罰則を受けるさ。だが、社の方で報告待ちをしていた人間が定時報告がない事を不審に思い。連絡がついた者に居場所を聞いて現場に行くと、インドア派も含め全員が真剣に釣りを楽しんでいたんだ」
釣りをしていた者たちは声を掛けられてようやく正気を取り戻し

たが、どうして釣りをしていたのか覚えておらず、中には知らぬ間に高級な釣り道具を買っていてショックを受けている者もいたという。
給料日になったばかりで数万円が吹き飛んだとなれば絶望も大きいだろう。
報告を聞いて哀れに思った桐条武治は、個人の判断で希望者からは道具を定価で買い取ることに決めたようだが、今回の件はいくつも謎が残っているとして桐条グループも調査に動いている。
その事を美鶴がメンバーたちに伝えると、グローブを磨いていた真田が少々小馬鹿にしたように笑って口を開いてきた。
「なんだ、そいつらは何者かに催眠術でも掛けられたと言いたいのか？」
「ああ。現時点では非科学的だろうと暗示を掛けられたとしか説明が付かない。そして、アイギスをマークしていた情報部の人間を的確に狙ったことを考えると、やったのはほぼ間違いなく〝あの方〟とやらだろう」
聞かれて美鶴が頷いて返せば、信じられんなと真田は笑ってグローブ磨きに戻る。
彼がそんな態度を取りたくなる気持ちも分からなくはないが、美鶴や桐条グループだって別に情報部の者たちのミスを隠蔽するためにこんな事を言っている訳ではない。
ただ、自分もどちらかというと真田と同じ意見だとゆかりも会話に参加してきた。
「けど、催眠術なんて簡単にかけられるんですか？　情報部って映画に出てくるような秘密捜査官的なのですよね。なら、そういう尋問とか受けても何も話さない訓練とかしてそうですけど」
「そんな事が出来る知り合いがいないのでな。どこまで出来るかは正直分からない。というより、何でも出来るのなら今回の件は逆に不自然なんだ」
ゆかりの持つ情報部のイメージは大体合っている。流石に映画に出てくるような精神的、肉体的にキツい拷問を受けても大丈夫というほどの訓練は受けていないが、情報を漏らさぬよう特殊な鍛錬を積ん

でいるため常人よりは口も固い。
しかし、そんな者たちが簡単に催眠術に掛けられていた事に加え、催眠術に掛かっていた者たちの状態を考えるとおかしな点がいくつか浮かび上がってくる。
美鶴がその事を指摘すれば、彼女が言わんとする事を理解した七歌がエプロンで手を拭きながらキッチンから出てきた。
「ああ、相手の行動を操れるなら〝何を見てもスルーしろ〟って、問題なしの報告だけさせておけばいいんですもんね」
「そういう事だ。そこから考えてグループの方では初犯だから見逃され、さらに次は無事では済まさないぞと警告してきたのではと捉えている。もっとも、帰ってきた際に何も言わなかったところを見ると、アイギス本人は自分の大切な人が裏で動いていたことを知らなそうだが」
尾行されていた本人は裏で何があったのかを知らない。これは共同生活を続ける上では幸運だが、事態への対処としては非常に厄介と言える。
何せアイギスは何も知らないのだ。大切な人とやらが本気で桐条グループに牙を剥いても、事情を知らないのではアイギス経由で謝罪を申し込む事も出来ない。
むしろ、自分を餌にして相手をおびき出そうとしていたと知れば、彼女は桐条グループを卑怯者と罵って相手の許に行ってしまうかもしれない。
どうして相手がアイギスを継続して寮に住まわせているのかは分からないが、今回の件が警告だとすれば、余計な事さえしなければアイギスを戦力として貸してくれるという事なのかもと美鶴らが考えていれば、寮の入り口の扉が開いて一人の少年が入ってきた。
「ごめんくださーい！」
元気よく挨拶をしてきたのは初等科の制服を着た天田乾だった。
荷物は既に届いているが、身の回りの物などすぐに使う物を入れた鞄を持ってやってきた少年を寮生たちはあたたかく迎える。
「よく来たな。初等科の寮とは違う部分もあるだろうが、しばらくは

ここが君の暮らす家だ。自由に寛いでくれ」
「ありがとうございます。今日からお世話になります、天田乾です。よろしくお願いします」
迎えられた天田は少し照れた様子を見せながらも、順平よりもよっぽどしっかりした挨拶をしてみせた。
ゆかりなどは天田とも面識があったので、茶化して順平にその事を指摘すれば、真田や風花が確かに天田の方が大人だなと真面目に頷き笑い声が響いた。
自分より年上の者たちばかりの環境に最初は緊張していた天田も、他の者たちに釣られて笑って緊張が和らいだようで、寮の玄関の鍵を受け取りながらトイレの場所などを聞いていると、階段の方から音がして荷物を置いてきたアイギスが下りてきた。
「おや、そちらの方が仰っていた入寮者ですか？」
「うん。初等科五年生の天田君だよ。天田君、彼女はアイギス。ついこの前からここで暮らしてるの」
どう見ても日本人には見えない容姿に天田は最初驚いた様子だった。
高校生に囲まれる生活になることは分かっていても、流石に外国人までいるとは思わなかったらしい。
だが、やってきたアイギスが挨拶をしながら握手を求めてきた事で、天田もそれに応じて無事二人は挨拶と握手を交わす。
「お互い新参者ですがどうぞよろしくであります」
「あ、はい。よろしくお願いします。えと、アイギスさんは外国のご出身ですか？」
「いえ、ニッポン生まれです。ですが、海外にいた時期もありますのでグローバルな視野で考える事が可能です」
バッチリ外国人の見た目をしていても、日本生まれの日本育ちで日本語しか話せない者もいる。
その点、アイギスは日本で作られたが言語インターフェースに英語も入っていたため、どちらの言葉も話す事が可能となっていた。
加えて、数ヶ月の間は外国を一人で渡り歩いていたため、人間社会

で生きるための一般常識は不足しているが、国や文化の違いに直に触れてきたことで物事に対して広い視野で考える事が出来るようになっている。
よって、何かあれば遠慮なく聞いてくるといいとアイギスが言えば、天田も戸惑いつつその時はよろしくお願いしますと頷いた。
「さてと、じゃあ料理作り始めちゃうね。ささやかな物だけど二人の入寮歓迎会だから楽しんでね」
新メンバー同士の顔合わせも無事に済んだので、今から準備を進めてしまおうと七歌がキッチンに戻ってゆく。
既に下拵えは終えているので順番に調理を開始すればすぐに完成するだろう。
歓迎会を開いて貰えると思っていなかった天田は照れながら感謝し、アイギスは料理をしている七歌を興味深そうに眺めるなど、二人の歓迎会は始まる前から賑やかだった。
夜――作戦室
「さて、アイギスが参加してくれる事になったので、お互いの戦力を確認する意味も込めて今日はタルタロスへ向かおうと思う」
歓迎会を終えた後、明日から夏休みということで夜更かししても構わないだろうと、影時間まであと少しという時間になってから天田以外のメンバーが作戦室に集まっていた。
天田は十時には風呂を済ませて就寝しており、この部屋自体は他よりも防音性能が高いためメンバーたちは気を遣わずに作戦について話す事が出来ている。
そして、アイギス本人からペルソナを取り戻した報告も届き、ならばお互いがどの程度戦えるのかを知っておくべきだろうというのが本日の活動目的だ。
「へへっ、やっぱ新メンバーが増えるのっていいよな。つか、シャドウと戦いだしたのはアイちゃんのが先だろうけど、オレたちの戦いとかみたら結構驚くと思うぜ。特にうちの自慢のリーダー様の実力は頭一つ抜けてっからな」
これまでの戦いで順平たちは自分たちの成長を感じていた。

それは六月のアルカナシャドウとの戦いで大切な仲間を失った事も関係しているが、それを抜きにしても七歌の持つ力は特別で非常に珍しい。
だからこそ、相手が気になるようにと順平が勿体ぶって言えば、狙い通りに話題に食いついたアイギスが七歌の方を向いて尋ねた。
「七歌さんはそんなにお強いのですか？」
「フフッ、君が活動していたのは十年前だったな。その間にシャドウやペルソナの研究も進み、当時の桐条グループではまだ知られていなかった事もいくつかあるんだ」
不思議そうな顔をしているアイギスの問いに、美鶴が微笑を浮かべながら答える。
実際のところアイギスが活動していた十年前は、桐条グループの方でも湊というワイルド能力者の存在を把握していたようだが、眞宵堂店主の栗原から聞かされるまで美鶴もワイルドのことを知らなかった。
もしかすると、桐条グループにおいて十年前の人工ペルソナ使いの研究はなかったものとして扱われ、その中で得られたデータも同じように極秘とされ伝えられていないのかもしれない。
その事は美鶴の推測も含まれるため教える必要もないだろうと話は控えるが、七歌の特別な力については現場で改めて確認して貰ってから話す事に決まり一同は移動することになった。
話をしながら並んで歩く真田と順平を先頭に、七歌と美鶴、風花とゆかりと続いていき最後尾をアイギスがトテトテと追ってゆく。
階段を下りてエントランスを素通りして出て行くメンバーたちの動きは慣れたものだ。
愛用の武器をギターケースやらバットのケースに入れて偽装し、さらに学校の制服を身につける事で部活用具を持っているだけのように見せている。
それを最後尾から観察していたアイギスは一人だけ制服がないため私服だが、先を行くメンバーたちは気にしていないのか構わず駅を目指した。

移動するメンバーたちを追ってくる小さな影があることにアイギス以外気付きもしないまま。

――月光館学園

影時間になる前に電車に乗る事が出来た一同は、そのまま月光館学園の前にやって来ていた。

閉まっている校門の前に待機し、もう少しだなと携帯で時間を確認した七歌がジッと校舎を見つめる。

すると、数秒後、時計の針が全て頂上を指したとき、世界が緑色で塗り潰され学校の校舎が姿を変え始めた。

柵のような物が刺々しく飛び出してきたかと思えば、何もないところに階段が急に出てきたり、さらには一体何階まであるのだろうという具合にニョキニョキと建物自体が天を目指して伸びてゆく。

これまで探索してきたメンバーにとっては慣れた光景で、アイギスにとっては知識だけはあったので初めて見ても驚くほどのものではなかった。

しかし、夜中に揃って出て行く先輩らが気になって追ってきた者にすれば、自分たちの通う学校が急に不気味な塔に変貌したことは非常に衝撃的だったらしく、隠れていたことも忘れて声を出してしまった。

「な、なんなんですかコレ。学校はどうなっちゃったんですか!?」

幼さの残る少年の声が急に聞こえたことでアイギス以外のメンバーが驚いて振り向く。

するとそこには、寝る際に着ている半袖ハーフパンツのジャージ姿で呆然と立っている天田がいた。

「あ、天田!? 何故、君がここに!?」

学校の変化に驚いている天田に対し、いるはずのない少年がいたことで同じくらい驚いた美鶴が思わず口を開く。

他の者は美鶴が声に出したことと同意見だったことで何も言わなかったが、お互いに状況が飲み込めず話が進まずにいると、驚いている一同を不思議そうに見ていたアイギスが美鶴の問いに答えた。

「天田さんなら寮を出たときからずっと我々を尾行していました」

「ちょ、アイギス、気付いてたんなら何で止めないのよ！」
「寮で暮らすのなら彼もペルソナ使いではないのですか？　天田さんを作戦に連れて行かないという報告は聞いていなかったので、特殊任務気分でも味わっているのだろうと思っていたのですが」
　言われてみれば誰もアイギスに天田の事情を説明していなかった事に今更ながら気付く。
　あくまで作戦には参加しない候補生だと教えておけば、アイギスも尾行が始まった時点で他の者たちに天田の存在を報せていたに違いない。
　これは完全に連絡を怠っていた美鶴たちのミスだが、まさか入寮初日からこんな形でバレるとは思っていなかったので、どう説明すべきかと美鶴らは頭を抱えた。

第二百三十七話　繋がる記憶

影時間――タルタロス

天田は七歌たちを追って来てしまった事で、予定にない影時間とタルタロスの出現を体験してしまった。

いくら適性者候補と言えど彼は小学生であるし、三年生組だけが知っている事情により活動への参加には否定的な考えを持っている。

けれど、混乱している子どもを連れて影時間に彷徨く事は危険なため、悩んだ末にメンバーたちはタルタロスのエントランスまで付いてくるように言って、階段近くの拓けた場所にやってきた。

中に入ったとき、初めて訪れたアイギスも含め天田たちは不思議そうに眺めていたが、アルカナシャドウのようなイレギュラーな存在以外がやって来る事はほぼないため、少年の安全が確保出来たことで美鶴が彼の方を向いて口を開いた。

「天田、いくら我々が夜中に外へ行こうとしていても、小学生の君がそれを追って外に出ていい理由にはならない事は分かるな？」

「どうしても気になって……すみません」

いくら歳不相応に落ち着いていても、相手はまだまだ子どもだ。自分よりも年上な先輩たちが夜中に揃って出掛けていけば、一体どこへ行くのだろうかと気になっても無理はない。

まぁ、追ってくる際に部屋から携帯や財布と定期券を持ってくる冷静さは可愛げがないし、そのせいで電車移動した彼らを追えてしまったのだから、美鶴たちにすればもっと普通の子どもでいてくれればと言ったところだろう。

けれど、怒られて反省した様子を見せていた天田は、当然学校が変形してしまったことがとても気になるようで、やや怯え気味に俯いていた顔を上げて疑問を率直にぶつけた。

「あの、学校はどうなっちゃったんですか？」

「それにはまずこの時間の説明が必要になる。少し長くなるがとりあえず聞いてくれ」

こうなった以上は夢だから忘れろでは済まない。相手が信じるか

どうかは分からないが、危険だからこそちゃんと事情を説明すると言って美鶴は影時間やシャドウの事を話した。
最初は疑い気味な顔をしていた天田も、七歌が実際にペルソナを召喚してみせれば信じる気になったようで、まだ完全には飲み込めていない様子ながら大まかには理解したと頷く。
「皆さんはそんな化け物と戦うために集められた人たちだったんですね。なんかヒーローみたいですごいです」
「ま、人に言えないって事とかも併せて考えるとマジでヒーロー活動だよな。誰にも話せず、誰にも褒められない。だけど、この街の平和はオレたちが守ってみせる……ってな」
特別な力に目覚めた者たちが集まって日夜化け物と戦い続ける。そうして影ながら街の平和を守っているという設定に惹かれたのか天田の瞳に尊敬の色が混じる。
その調子に合わせて順平がそれっぽく自分たちの活動のキャッチコピーを考えると、天田の瞳は完全にヒーローを見つめる少年の物になっていた。
危ないことから子どもの天田を離そうと思っていた三年生組にすれば、順平の言葉と行動は余計なことでしかない。
子どもに尊敬の眼差しを向けられ「へへへ」と得意気に笑っている順平の脇腹を真田が殴れば、痛みで蹲っている馬鹿を置いて真剣な様子で七歌が釘を刺した。
「天田君も私たちと同じ力に目覚める可能性はある。ま、影時間も体験してるし、ほぼ確定と言っても良いとは思うけど、異能が使えることと戦える事は別だよ。私たちも何度も死にかけてるしね」
「七歌の言う通りだ。実際、シャドウとの戦いで一人仲間が命を落としている。彼、いや、彼女は野良ペルソナという特殊な存在だったが、自分が消える最期の瞬間に強力な敵を道連れにして私たちを救ってくれたんだ」
特撮ヒーローのように自分たちのピンチに都合良く新兵器が完成し、それを使って一発逆転という訳にはいかない。
一緒に戦っていようと仲間のピンチを助けられる保証はなく、既に

自分たちは仲間を一人失ってもいるのだ。
天田にその事をしっかりと伝え、危険と隣り合わせでヒーローへの憧れだけでは務まらないことを教えれば、続けて真田も真剣な表情のまま彼の方を向いて話しかけた。
「天田、お前何か運動はしてるのか？」
「あ、はい。一応、小学校のクラブでは週に一回サッカーをしてます」
「そうか。なら、普通のやつよりは体力もあるのかもしれない。だが、その特技では戦えないな。小学生の蹴りなど余程良いところに決まらない限り人間でも耐えられる」
初等科では中等部や高等部と違って部活はなく、クラブ活動が週に一回あるだけだ。
個人で習い事をする分なら話も違ってくるが、週に一回のサッカークラブでは運動していない者よりは体力があるくらいだろう。
加えて、やっているのがサッカーではいくらキックが強くなっていようと戦闘に転用出来ない。
湊のように全身のバネと身体のしなりを利用して威力を高めでもしなければ、小学生の蹴りがシャドウという化け物に通じる事はないのだ。
よって、真田が今の天田には武器と呼べるものがないとハッキリ告げれば、指摘されて天田は落ち込み視線を俯かせてしまう。
「まぁ、何にせよ今日は装備もないし君を活動に参加させる事はない。譲歩しても護衛付きでの見学くらいだ」
そんな天田を見かねた美鶴はしょうがないなと妥協案を出し、彼に自分たちの活動を実際に見ることを許可した。
――タルタロス６５Ｆ
アルカナシャドウを倒す度にタルタロスは登れる階層が解放されてゆく。
タルタロスとアルカナシャドウがどう関係しているのかは不明だが、全くの無関係ではないことだけは確かで、七歌たちも満月から数日経って調子が回復してくると積極的に登ることにしていた。
そして、実際にはもっと上の階層まで探索を進められているのだ

が、今回は天田の見学ということもあって先日開いたばかりのエリアの最下層で戦っている。
正面の通路から黒い蛇が空中を泳ぐように接近してくる。敵の名は恋愛〝情欲の蛇〟。
敵を睨み付けた七歌は薙刀を片手で持って、反対の手で召喚器を頭に当てるとすぐに引き金を引く。
「お願いゲンブ、ブフーラ！」
バリンッ、と七歌の頭の中でガラスの割れる音が響く。そしてすぐに頭上で水色の欠片が回転すれば、その中央から黒い亀と亀に絡みつく蛇が現われた。
七歌が呼び出したペルソナの名は節制〝ゲンブ〟。日本でも有名な四方を守る四神の一柱であるが、ゲンブは顔前で氷の槍を生成すると情欲の蛇に向かって撃ち出した。
スキルの形状変化に着目して練習していたことにより、鋭さを高めた氷槍は通常のブフーラよりも高速で射出され、そのまま敵の胴体に突き刺さると敵は黒い靄となり消えてゆく。
ゆかりと美鶴に守られながら遠くでそれを見ていた天田は、己の知る普段の様子と全く別の顔で戦う先輩たちを見て驚き思わず呟いていた。
「これが七歌さんたちの戦い……」
拳銃自殺というペルソナの召喚方法にも驚愕したが、ペルソナを使わずに拳や武器で化け物と渡り合えている事も衝撃だ。
ライオン型のバイクのような見た目をした戦車〝マッハフォート〟が突進してくれば、順平が横っ飛びで回避しつつすれ違い様に小さく斬りつける。
ダメージでバランスを崩して減速した敵に、今度は真田が駆け寄って頭部を側面から殴り飛ばし転倒させた。
倒れている敵が起き上がるまでは絶好の攻撃チャンス。
七歌が号令をかけて仕留めに向かおうとすれば、パンッ、と勢いよく合掌してから掌を離したアイギスの手に狙撃銃ブレイザーＲ９３ＬＲＳ２が現われ、他の者がどこから出したんだと驚いている間に

構えて敵の眉間を撃ち抜いていた。
そして、敵の消滅を確認したアイギスは、使った銃を両掌で挟むと消してしまい。合掌した掌を離すと狙撃銃を持つ前に持っていたキャリコＭ９５０が再び現われる。
一緒に戦っていた者だけでなく、離れた場所からジッと見ていたゆかりや美鶴でも彼女の高速武装変更の謎は分からず、敵が一時的にいなくなったことで戻ってきたタイミングで七歌が尋ねた。
「アイギス、武器が銃なのは良いんだけど。さっきからどうやって武器チェンジしてるの？　もしかして、そういうペルソナ能力？」
「いえ、これはあの方の武器を借りているだけであります」
言いながらアイギスは自分の両手首に付けた黒いリストバンドを他の者に見せた。
不思議な光沢のある素材で出来ており、ゆかりや美鶴などは湊の持っているマフラーに似た素材だなと思ったりもしていたが、そんな事を考えている間にアイギスの説明は続く。
「この中に多数の装備やアイテムが入っており、わたしはこう言った物が欲しいと考えながら取り出しているだけです。収納されている物が分からないので、実際に何が出るかは分かりませんが、今のところは求めている効果を発揮出来る装備が取り出せています」
説明しながらアイギスはキャリコを仕舞うと、今度は手の中にナイフを出現させて見せた。
持っている武器の収納から次の装備を出すまでにかかる時間は三秒未満。
流石に一瞬での換装とはいかないけれど、どちらにせよ驚異的な速度ではあるため、銃火器を主武装としている彼女ならば弾倉を交換するより武器を変えた方が速いのは確かだ。
それを聞いた者たちは再びキャリコを手にする彼女を見ながら呆れ顔になり、〝あの方〟とやらの持つ謎技術に美鶴などは頭を押さえる。
「正確な装備の把握が出来ないとはいえ、何でも入っているとすれば補給の心配が消えるな」

「確かにな。アイギス、それは食糧とかも入っているのか？」
「勝手に人の物を取るのはいけない事であります。わたしは武装の貸し出しの許可は頂いていますが、その他の物品については聞いておりません。よって、中に食糧があろうと取り出さないであります」
リストバンドを渡した本人はそんな事は気にしないだろう。
国宝すら収納されている伸縮自在な自分のマフラーを、わざわざ一部切り取って彼女に与えたのだ。
取り出し口は増えたが繋がっている空間は共通であるため、アイギスが物の価値を知らずに使い潰してしまうことも考えられる。
そんなリスクを負ってでも彼女に渡して取り出し方を教えたと言うことは、アイギスなら中身を自由に使って構わないという事だった。
けれど、彼女はそんな風に拡大解釈はせず、中に武器が入っているから好きに使うといいという言葉を律儀に守っている。
話を聞いた仲間たちは自分たちのピンチよりも、彼女はあの方との約束を優先させそうだなと思ってゲンナリしたが、気を取り直した順平がそういえばと作戦室で話していた七歌の特殊能力についてアイギスに感想を求めた。
「ってか、どうよアイギス。七歌っちの戦いっぷりに驚いただろ？」
「確かに他の方よりも体運び等が洗練されている印象を受けました。風花さんの指示に合わせて戦い方を変えている点も高評価であります」
「いやいや、そこじゃなくてさ。ほら、色んなペルソナ使ってたんだぜ？」
「そうですね。沢山使いこなせることは非常に便利だと思います」
うんうん、と頷いているアイギスは確かに七歌の実力を評価していた。他の者よりも戦いに慣れており、自分や仲間の戦力を把握しながら戦闘中も指示を出せていた。
新参のアイギスに関しては武器が銃であること以外は分かっていなかったので、遠距離型のゆかりにするような指示の出し方になっていたが、武装が換装出来ると分かったなら今後はもっと的確に指示を

出せるようになるだろう。
　そうして、風花のサポートに合わせたペルソナの運用も含め、メンバー内ではトップクラスの実力だと思うと感想を述べれば、他の者がワイルドを初めて見たときの反応と違っていたことで、どうして驚かないのとゆかりが尋ねた。
「あー、アイギスさ。七歌が色んなペルソナ使えるの見ても驚かないの？」
「全く驚かなかった訳ではありません。ですが、ワイルドは稀少ではあっても七歌さんしか持っていない訳ではないので、わたしも初めて見たときほどの衝撃はありませんでした」
　驚かなかった理由を聞かされ、今度はメンバーたちが逆に驚かされる。
　これまで桐条グループではワイルドは七歌しか確認されていない事になっている。
　実際、順平やゆかりも七歌にペルソナチェンジのイメージを聞き、頑張って発現させようとしてみたが出来なかった。
　よって、ワイルドは七歌だけが持つ特殊な才能と認識していたことで、アイギスが他にもワイルド能力者を知っていると聞けば驚かずにはいられない。
　だが、メンバー内で唯一人、他にもワイルド能力者を知っている美鶴としては、もしかして〝あの方〟は彼なのかと心の中で不安に思いつついくつか確認を取る。
「待て、アイギス。君はグループの方でワイルドの情報を得ていたのか？」
「いいえ。エルゴ研時代のデータを保持していますが、ワイルドに関する記述は一つとしてありません」
「なら、何故知ってるんだ？」
「あの方もワイルドの能力者だからです。もっとも、十年前に既に力に目覚めていたことも併せれば、能力の質には大きな差があると思われます」
　十年前に目覚めていたワイルド能力者。そして、メンバー最強の七

歌を超えるペルソナの力。
尾行者を的確に狙って暗示をかけたことや、ロボットを人間にする技術に、時空間を超えた武器の転送を可能にする装備も含め、本当に相手は何者なんだという感情が全員の胸の奥で膨らみ続ける。
別に全て相手が自力で手に入れた能力ではないのだが、日本の就労人口の三パーセントを担っている大企業の桐条グループですら分かっていない情報や謎の技術を所持している時点で、とんでもない化け物であることは確実だった。
「アイギス、あの方とやらは本当に女性なんだな？」
「はい、とてもお綺麗で会えば驚くかと。ですが、男性のことは生理的に受け付けないようなので、接触禁止であります」
超がつく美少女であるアイギスが認める美貌。その時点で能力とは関係なく会ってみたいと思うが、順平が興味を持った直後に野郎はダメだと言われて肩を落とす。
そんな順平を見て他の者たちは思わず笑い出すが、改めて相手の性別を確認した美鶴だけは、湊クラスの実力を持ったワイルドが他に存在するのかと考え、もしや前回の満月に出会った透き通るような金髪の少女かと予想した。
それは間違いのようで正しくもあったが、一同が小休止を取っていると突然風花から通信が入ってくる。
《新たなシャドウ出現、順平君の後ろにある通路から来ます！》
通信を聞いた瞬間、全員の表情が引き締められ戦闘モードに入る。
それを眺めていた天田は本当にプロみたいだと思いながら、通路からやってくる敵の姿を見た。
「――――え？」
敵の姿を見たとき天田は言いしれぬ悪寒を感じた。
あの日、あの場所で、自分は似た存在を見ていると。
「あああああぁぁぁぁぁっ!!」
やってくる敵の名は、皇帝〝征服の騎士〟。黒い馬に跨がる黒鎧の騎士であった。
そんな敵の姿を見た直後、天田は突然叫び声を上げた。

あの日の事は夢だと思っていた。否、誰も信じないから夢だと思い込もうと自分を誤魔化してきた。
だが、夢だと、見間違いだと思っていた者は現実に存在したのだ。
他の者たちが天田の異変に驚いている間に、本人は叫ぶのを止めるとキッと敵を憎しみの瞳で睨み、駆け出してゆく。
その際、ゆかりが足に着けた召喚器を抜き取り、他の者たちが止める暇もなく敵の正面に立った天田は額に当てた召喚器の引き金を引いていた。
「うおぉぉぉぉっ!!」
腹の底から響いてくるような、変声期前の少年には似つかわしくない雄叫びをあげる。
そして、バリンッ、と頭の中で音がすると水色の欠片が舞い始め、彼の頭上で心の化身が具現化した。
丸鋸のような刃が縦に身体を覆った異形のペルソナ、正義〝ネメシス〟。
その名は〝義憤〟を意味し、神の怒りと罰を司るニュクスの娘である。
「はぁぁぁぁぁっ!!」
現われたペルソナにさらに力を送り込み、天田は敵に向けてハマを放った。
殺到する御札と地面に現われた光の魔法陣によって動きを封じられた敵は、最後には全身が弾けるように黒い靄になって消滅していった。
敵の弱点が偶然にも光であったから上手く決まったが、呼び出したペルソナが消えると同時にその場に座り込んだ少年を追って来た者たちが叱責する。
「天田、お前は一体何を考えているんだ！　あれほど危険だと言っていたというのに！」
「はぁ、はぁ……あの、すみません。でも、どうしてあいつを見たら抑えられなくて……」
彼のことを心配して声を荒げた美鶴に、天田は初召喚の疲れから肩

で息をしながら申し訳なさそうに謝罪した。
しかし、先ほどの行動には何やら理由があったようで、訳があるなら話してみろと真田に促されぽそりと先ほどの行動について語り始める。
「二年前、僕の母さんが事故で死んだんです。でも、僕はあのときの事を覚えてる。母さんは事故で死んだんじゃない。この影時間に、黒い馬の化け物が暴れてそいつに殺されたんですっ」
「じゃあ、さっきのシャドウがお母さんの敵(かたき)なの？」
「……分かりません。でも、僕は母さんを殺したあのシャドウが赦せない。だから、お願いします。僕も戦わせてください！　もう誰も、母さんみたいな目に遭って欲しくないんです！」
七歌に聞かれても天田は分からないと首を振る。それはそうだろう。同じ見た目のシャドウは多数存在するのだ。
これまで七歌たちも騎士系のシャドウは倒してきたし、その中に実際に天田の母親を殺した個体がいた可能性もある。
だが、どれが本当に母親を殺した個体かは関係ない。もう誰もシャドウに殺されないよう、そのために自分は戦いたいと天田は仲間に入れてくれと頼んだ。
それをきいた他の者たちはアイギスを除いて一様に複雑な表情を浮かべる。彼の事情は分かったし、戦うための力を持ったことで資格があることは認める。
ただ、やはり子どもを戦わせるのはどうだろうかとしばし悩んだ末、組織の決定権をある程度任された美鶴がしょうがないと嘆息してから言葉を返した。
「……目覚めてしまった以上、本人に戦う意思があるなら止められない。だが、組織に所属するなら先ほどのような独断専行は無しだ。指示にはしっかりと従って貰う」
「はい。よろしくお願いします！」
とんだ驚きの連続だったがこれで天田の参加は正式に認められた。
それに安心して笑みを浮かべていた天田に、七歌が勝手な事をした罰だと言って拳骨を落としてから一同は脱出装置を目指し、本気で痛

くて涙目になっている少年を含めたメンバーたちは帰還していった。
７月２６日（日）
昼――巌戸台商店街
影時間が明けた日の昼、真田は荒垣に大事な話があると言って呼び出していた。
相手は急になんだと訝しんでいたが、はがくれで昼を食べてから店の外を歩きながら真田は昨夜のことを全て話した。
天田が寮で暮らすようになったこと、影時間に関わることを知ったこと、そして母親の事故の記憶があったことでシャドウを憎みペルソナに目覚めたことを。
途中までは黙って話を聞いていた荒垣は、尾行くらい気をつけろと不注意で子どもを巻き込んだことを責めたが、ペルソナを呼び出してシャドウを倒した経緯を聞くと再び黙り込んだ。
そして、全てを話し終えたことで、真田は今日その話を伝えた本当の理由を切り出した。
「シンジ、戻ってこい。お前が後悔し続けている事は知っている。だが、だからこそお前は戻ってくるべきだ」
これまで何度も聞いてきた戻ってこいという言葉。しかし、今回のそれは重みが違う。
本当に悔いているのならば、贖罪のためにも共に戦って天田を守らなければならない。
今まで真田は荒垣のせいではないと庇う言葉を言い続けていたが、事情が変わったことで罪を犯したと思っているなら自分で償えと言っているのだ。
言われた本人は幼馴染みに言われるまでもなく分かっている。今が償うチャンスということも。
けれど、それは自分が救われたいと思っているだけではないかという葛藤があり、本当に天田のことを考えているのかと悩むこと数分。深く溜息を吐いてから荒垣は顔をあげた。
「……わかった。だが、その前に俺は寄るところがある。夜には行くから部屋の換気でもしといてくれ」

「そうか。他の者にも伝えておく。逃げるなよ、シンジ」
「うるせえ。さっさと帰れ」
彼が戻ってくると分かった真田は悪戯っぽく笑って逃げるなよ言い残していった。
それは幼馴染みなりの心遣いだったが、当然、真田よりも気を遣える荒垣も気付いていた。
そうして、嬉しそうに帰って行く真田の背中を見送った荒垣は、携帯を取り出すとある人物に電話をかけた。
自分の罪と向き合う時が来たのだ。少年に断罪されるまでは自分が彼を守らなければならない。
そのために必要な力を取り戻すため、荒垣が相手の応答を待っていると三コール目で電話が繋がった。
「……有里、事情が変わった。ペルソナを返してくれ」
《……天田が特別課外活動部に入ったんですね。まぁ良いですよ。三百万持ってきてください。それでお返しします》
相手がこちら側の事情を察していることに今更驚きはしない。彼には能力の眼があるのだ。範囲は分からないが街中の事は大体見られると思っていい。
しかし、後半の言葉を聞いたところで荒垣は噴き出し、なんの冗談だと抗議する。
「おま、あり得ねえだろ！　元々俺の物だぞ！」
《貸し金庫って知ってます？　預かって貰うにもお金が掛かるんですよ。なので、これは正当な対価です》
「……そんなに持ってねぇよ」
《なら、貧乏人と話すことはありません。桐条グループに頭でも下げてキャッシュで借りてから来てください》
電話を切ろうとしてくる相手の背後から、「有里君、衣装チェックしてー」という女性の声が聞こえてくる。
そういえばアイドルと一緒に何かしていたんだったなと思い出すが、そんな仕事場で平然と法外な貸し金庫代を要求してくる神経が分からない。

このままでは自分はペルソナの守りもなく生身で戦う事になるため、どうにかしてでも返して貰おうと頭を捻った。
「待て、まだ切るな。金以外に何か方法ないのか？」
《無いですね。大概の物は手に入るので》
聞いてこのブルジョワめと近くの電柱を殴りつける。殴った拳はジンジンと痛むが、それでも殴らずにはいられなかったのだ。
このままでは本当に美鶴に頭を下げて金を借りることになってしまう。事情を話せば相手が湊ということもあって、美鶴は簡単にお金を用意してしまうだろう。
どうして彼女がそんなにも湊のことを気にしているのかは分からないが、箱入りのお嬢様がアウトローな青年に無自覚な恋心を抱いていると推測している荒垣は、金銭のやり取りが発生すればその関係は恋愛には繋がらないだろうとして別の策を考える。
「頭金を払っての分割は可能か？」
《ローンや奨学金じゃあるまいし、キャッシュ一括に決まっているでしょう。払い終わる前に戦いで死ぬ可能性もある以上、一括以外は認めません》
言われ、確かにそうだが知り合いが死んだときの事を考慮し、淡々と冷静に話すなと文句を言いたくなる。
彼と交渉するための情報は何かないか。脳をフル稼働させ、そういえば気になっていた事があった事を思い出す。
もし、彼女が嘘を吐いていたならという前提の話になるが、桐条側に情報が渡ることを拒んで嘘を吐いたなら意味も分かる。
ふぅ、と落ち着くために一呼吸置いてから、荒垣は自分の推測から立てたとある考えを彼にぶつけた。
「有里、ついこの前、あの寮に一人メンバーが加わった事は知ってるか？」
《……ええ、女子が一人ですよね》
「ああ。けどな、そいつと会ったばっかりの頃に興味深いことを言ってたんだ。自分のペルソナはある人が持ってるってな」
これが卑怯だという事は分かっている。しかし、最低でも交渉出来

るだけの状態に持って行くには脅すしかない。
荒垣は自分が力を取り戻すにはこれしかないのだと割り切ってさらに続けた。
「なぁ、俺のペルソナを抜き取ったお前の力と似てるとは思わねえか？」
《似てるもなにも彼女のペルソナを持ってたのは俺ですよ。アイギスとは十年前から知り合いですから》
「って、ストレートに認めんのかよ」
《別に絶対に隠し通さないといけない事ではありませんし。というか、こっちを脅すのなら俺は天田に全部伝えるだけですよ。お前の母親を殺したのはこの男で、こいつらはそれを黙って傍で見ていたって》
あまりにもあっさりと認めた事で荒垣は拍子抜けしてしまう。
本人に隠し通す気が無いのであれば、なんの脅しにもならない。
むしろ、カウンターで喰らったダメージの方が大きく、被害が自分だけでなく美鶴や真田にまで及ぶと認識したことで荒垣は何も言えなくなった。
そうして、荒垣が万策尽きて黙り込んでいると、電話の向こうが騒がしくなり何やら忙しくなってきたようで、仕事の方に集中したい湊から面倒そうな声が届く。
《脇が甘いんですよ。まぁ、付き纏われても面倒なのでペルソナは返してあげますよ。タロットカードを送るので、それを先輩が握り砕いてください。他の方が砕くと俺に戻ってくるので気をつけてください》
「あ？　お、おお。悪いな」
《では、忙しいので失礼します》
急に無償で返してくれると言われて荒垣は驚いた。しかし、返して貰えるのならこの際何でもいい。
気分屋な青年が相手だったことで、あまり気にせず礼を言った彼は、電話を切ると今生活しているアパートに荷造りをしに戻った。
そして、その日のうちに巌戸台分寮に移った彼は、いつカードが送

られて来るのだろうかと気にして過ごし、十時過ぎに『一階男子トイレの個室』とだけ書かれたメールを受け取りトイレに向かうと、洋式便器の中に沈んでいたカードを発見し悲しみに包まれた。
確かに他の者にバレないかもしれないが、誰にも気付かれずにそんな場所に置いていく事が可能なら部屋に置いて行けたはず。
これが金を払い渋った代償かと思いながら、荒垣はピンクのゴム手袋をはめて便器に沈んだ〝ただのカード〟を握りつぶし、何も起こらず失意に沈んで部屋に戻ると本物のカードを発見したことで、自分の苦悩はなんだったんだと多大な心労を負ったのだった。

第二百三十八話　訓練と出会いと

７月２７日（月）
午前――ＥＰ社・第三演習場
体育館ほどの広さの空間の中、高さの異なる金属製の柱が六、七メートルほど離されランダムに並ぶここは、ＥＰ社の工場区画地下に存在する第三演習場だ。
対シャドウ兵器の暴走にも耐えうる特殊素材で出来ているため、ここならば彼女たちがフルパワーで戦闘訓練を行なっても問題ない。
もっとも、ペルソナのスキルを何発も打ち込めば流石に壊れてしまうが、今日ここへやって来ているアイギスは、不慣れな近接武器と〝Ｅ．Ｘ．Ｏ．〟こと〝エクストリーム・オルギアモード〟に慣れる訓練に来ているのでペルソナを使う事はない。
慣れず腰の浮いた状態で日本刀を持っていた彼女は、柱から柱へ飛び移っている者を目で追いながら動き出すタイミングを計る。
機械だった頃と違い、人の足になったことで足首を手に入れた彼女は、フットワークの自由度が上がった。
その分、オーバーヒートのように体力という活動限界も出来てしまったが、自由に動き回れるようになったということは、今現在彼女の視界に映っている者のように三次元的な動きをより高度に出来るようになったといえる。
ならば、敵を攪乱しながら接近して短期決戦に持ち込んでしまえばいい。
「起動、エクストリーム・オルギアモード!!」
相手が新たな柱に着地しようという瞬間、アイギスはペルソナ召喚のエネルギーを胸部にあるパピヨンハートに送り込み、黄昏の羽根の特性を利用して増幅させた心的エネルギーで全身を覆い強化した。
直後、ガンッ、と十分な強度のある床がヘコむのではないかという脚力で踏み出し、ほぼ一瞬で自身の最高速度に達して柱の側面に着地する相手の許へ突っ込んだ。
「はぁっ!!」

「――――っ」
突進の威力を刀に乗せてぶつかっていたアイギスの刃を、湊は柱に着地したまま持っていた刀でいなして別の柱の方へと逸らす。
力の向きを逸らされたアイギスは別の柱に突っ込む事になるが、空中で身体を捻ると湊のように柱の側面に着地して別の柱に飛び移って再び湊の元を目指してゆく。
片や何度も攻撃のために突っ込んでは逸らされ柱に着地し再び飛ぶ少女、片やどうやって柱に着地して止まるのかという妙技を見せながら攻撃を容易くいなす青年。
二階の展望室から訓練の様子を眺めている研究員たちにすれば、どうやれば人間がこんな三次元的な動きを出来るのだろうかと呆然としているだろう。
しかし、いくら凄まじい動きを見せてもアイギスの攻撃は通らない。柱の側面という本来不安定になるべき場所で、相手が僅かな間でも停止出来てしまうことが原因だ。
アイギスは柱に着地すると重力に従って落ちる前に蹴って飛んでいた。これはすぐにでも移動しなければ柱を足場に出来ないことを意味している。
よって、アイギスは空中で身体を捻って軌道を僅かに変えることは出来ても、基本的には動きは柱同士を直線的に移動するだけということだ。
再び攻撃をいなされたアイギスは完全に動きが読まれていることに歯噛みする。こんな状態では地上に降りて縦横無尽に走った方がマシだと。
そして、そう思ったアイギスの行動は早かった。
使いこなせない刀をリストバンドの中に戻すとキャリコを取り出し。複数の柱を蹴って上を目指す。
そのまま最も高い柱の上に到着するなり、彼女は身体を屈めてから全身のバネをフルに使って天井に向かって跳躍した。
勿論、跳んだところで高い天井には届かないが彼女の狙いはそこではない。完全に制空権を取ったところで眼下を見つめ銃口を対象に

向ける。
近接武器に慣れるために始めた訓練で銃を使うことは反則に近い。それでも青年に勝つには武器に拘ってはいられないのだ。
「これで決めます！」
指を掛けた引き金を引き続ければ、銃口が火を噴き連続で銃弾が地上に向けて放たれる。
柱の陰に隠れようにも制空権を取っていることで上から撃たれるだけだ。
これならば簡単には防げまいと銃弾が彼に迫れば、湊は地上に降りて腰からナイフを抜き、刀とナイフを構えて真っ直ぐ銃弾を見つめる。
その行動をアイギスは不思議に思いながらもさらに狙いを付け、弾倉が空になるまで銃弾を放てばもう当たると思われた最初の一発が湊から逸れて床にぶつかった。
銃弾が床に当たると、キュインッ、と甲高い音が響いてそのまま跳弾となり彼方へと飛んでゆく。
耳にそんな音が届いたアイギスは一瞬何が起きているのか理解出来なかった。
しかし、続けて二発、三発と連続で銃弾が彼を避けるように軌道を変えて床にぶつかっている。
普通ではあり得ない現象を目撃したアイギスは、その中心にいる青年の動向に注目して銃弾が彼に迫った瞬間の動きを見て驚愕した。
「そんなっ!?」
距離のある物は右手で持った刀で銃弾の側面を撫でて軌道を逸らし、かなり近距離まで近付いてきた物はナイフで側面を弾いて強制的に軌道を変える。
右手が仕事をすればそのまま無駄のない動きで左手でも仕事をこなし。左手を使い終わればそのまま流れるように再び右手を使う。
そんな風にして青年は常人では目で追えない速度の銃弾を全て対処しきってしまった。
これで相手の動きをいくらか制限して流れを変えようと思ってい

たアイギスにすれば完全に予想外で、落下しながら弾のなくなったキャリコを消してすぐにガバメントを持ち直して次の作戦を考える。
だが、空中で身動きの取れない相手を大人しく地上に降ろすほど青年は優しくはなかった。
銃弾の雨が止むなり刀の剣先をアイギスに向けたまま右腕を引き、まるで狙いを定めているようだと思ったところで何もない空間に向かって鋭い突きを放った。
そして、数瞬後にアイギスは左脇腹に激痛が走ったことで彼の行動の意味を理解する。
「あぐぅっ」
痛みに表情を歪め空中でバランスを崩しながら落下する。彼女が痛みを感じた部位から真っ赤な鮮血が流れ出し、着ている衣服には刺し傷が出来ていた。
先ほどの湊の攻撃、それは名切りの血に覚醒した事で完全に使えるようになった〝不視ノ太刀・真打ち〟の応用だ。
彼は徒手空拳でも熊を斬り殺す事が出来るが、刃のある武器を持っていれば攻撃範囲がさらに伸び、斬撃を飛ばすという離れ業も可能になる。
先ほどの突きはアイギスに向かって切っ先分だけ斬撃を飛ばしたが、切るよりも刺した方が傷の深さが増すように、刀を振るって斬撃を飛ばしたときよりも速さと威力が増すという効果があった。
他にも線ではなく点で攻撃出来るので、周囲への被害も含めてダメージを調整しやすいなどの利点もあるが、持っていた武器も手放し落下してくる少女を見て駆け出した青年は、そのまま速度を上げて飛ぶと落ちてくる彼女に向かって跳躍し、わざわざ傷口につま先が当たるようにして空中で蹴り飛ばした。
「――――っ」
ナイフで刺されたような傷がある部位を蹴られた事で、アイギスは一瞬視界がホワイトアウトする。
だが、焼けるような痛みの後に蹴られた鈍い痛みで感覚を強制的に戻され、蹴られた衝撃によって横に吹き飛ばされると、今度は金属製

の柱に背中をぶつけて肺の中に残っていた空気を全て吐き出して今度こそ床に落ちた。
　これまで体験したことのないような痛みを連続で知ったことで、アイギスは目に涙を滲ませながら脂汗を掻いて荒い呼吸を繰り返す。
　血を失って身体に力は入らないし、そもそも全身が痛むので動くことも出来ない。
　以前、ドイツで戦ったときにはほぼ互角で、アイギスの方がやや優勢だったくらいだが、それは彼の方が今にも倒れそうな満身創痍だからこその結果だ。
　肉体が成長し、さらに筋力やリーチが伸びて万全な彼を相手にすれば実力差は歴然。
　やはり自分が彼に勝つことなど出来る訳がなかったと、俯せで倒れ顔だけ横に向けてそんな事を考えていた彼女の視界には、自分を蹴り飛ばしてから綺麗に着地した青年が映った。
「ゴホッ、ゴホッ……やくも、さん……」
　ゆっくりと近付いてくる相手を見ながらアイギスは弱々しく声を出す。
　今の彼は、右眼は眼帯に覆われたままだが、左眼は戦闘状態を表わす蒼い魔眼になっている。大切な少女が相手だからと手を抜かなかった証拠だ。
　ボロボロにされておきながら彼女はそれを見て、真剣に相手をしてくれてありがとうと感謝していたが、近付いて来た彼の次の行動で彼女のそんな考えは吹き飛ぶ。
「――――っ」
　声にならぬ叫びを上げる少女、右肩に焼けるような痛み、そして突き刺さるナイフ。
　感情の籠もらない冷たい瞳をした青年が左手に持っていたナイフを彼女に向かって投げたのだ。
　完全に決着はついており、見学している研究者の中にシャロンがいたようでスピーカー越しに訓練の終了を告げているが、そんな事は関係ないとばかりに青年は空いた左手で寝ている少女の首を掴んで持

ち上げた。
「うぐっ、ああっ」
強い力で首を掴まれ呼吸が出来ない。反射的に唯一動く左手で首を絞めている彼の手を弱々しく掴むが、彼の手はビクともせずアイギスは痛みと苦しさで意識が朦朧としてきていた。
「やく、も、さんっ」
意識が途切れそうになるとき、このまま自分は彼に殺されるのだろうかという考えが彼女の頭を過ぎる。
思えば彼が自分に好意的に接する理由などない。命を救って貰ったと言っていたが、そもそも彼の両親を殺して、さらに彼を危険な戦いに巻き込んだ張本人なのだ。
桐条グループの人間を殺したいほど憎んでいるというのなら、自分こそ最も残忍な手段を用いて殺したい相手だろう。
そう思うと彼に嫌われるのはとても悲しいが、これはしょうがないことなのだと受け入れる事が出来た。
大好きな人の手に掛かって死ぬことが出来る。人となって数日だが悪くない終わり方だと思ったとき、彼女は死ぬ寸前だというのに彼に向かって笑いかけていた。
「――――赫夜っ」
直後、首を掴んでいた手が離され、落下する彼女の身体を抱き留めながら彼はペルソナを呼び出していた。
現われたのは、くノ一のようにも見える丈の短い紫の着物に身を包んだ白髪の女性。普段はウサ耳型のレーダーユニットのある〝カグヤ〟の姿で呼び出されているが、スキルの威力で勝る本来の姿である〝赫夜比売〟として呼び出したのだ。
刺さっていたナイフは影の腕で引き抜いており、現われた赫夜がやや心配そうな顔でアイギスに回復スキルをかければ傷は瞬く間に塞がる。
失血による倦怠感と酸欠気味で少しぼーっとしているが、痛みから解放されて青年に優しく抱き留められていることで、アイギスは安心しきった顔で笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。八雲さん」
「ごめん。君に少しでも生身の身体の弱さを知って欲しかったんだ。簡単に傷つくし、首を絞められたくらいで死にそうになるって」
最後まで冷徹な仮面を被っていたのは、全てアイギスに人間の身体の脆弱性を教えるためだった。
怪我をすれば動きと思考は鈍り、酸素がなければ意識を保つことが出来ず、機械の頃には出来たことでも生身では十全に出来ないことが多々ある。
それを理解して貰うために敢えて彼女を傷つけた訳だが、アルカナシャドウたちとの戦いを前に小狼時代の自分に戻るため感情のリセットをかけたにも関わらず、今の湊は明らかにアイギスを心配して申し訳なさそうにしていた。
傍からそれを見ていた赫夜比売は我が子ながら難儀な性格をしていると心の中で苦笑しつつ、少女が傷つくことで本人以上に傷つく青年のためを思い、今回のような訓練はなるべく避けるよう忠告する。
《八雲、わたしの術も完璧ではありません。傷によっては痕が残ることもありましょう。その娘を思うのであれば、そういった事も頭の隅に置いて鍛錬なさい》
「……わかった」
実際のところ、赫夜比売のスキルを使えば部位の欠損でもなければ骨折だろうと治る。
ただ、それを過信して怪我に無頓着になっては困るため、そもそも怪我をしないように見ておくべきだと彼女は伝えたのだ。
基本的に八雲至上主義な名切りのペルソナと異なり、赫夜比売は八雲が他の者たちとも良好な関係を築くことにも重点を置いて接している。
どちらも過保護な事には変わりないが、湊はこういったタイプの大人のいう事の方がよく聞くため、彼があっさり頷いて返すと二人のやり取りを見ていたアイギスが驚いた顔をしていた。
「ペルソナが喋っているであります」
《わたしは八雲に宿りペルソナの力を得た亡霊です。当時、姓という

ものはありませんが、名乗るのであれば九頭龍ユーリと名乗った方が分かり易いでしょう》
「九頭龍は七歌さんと同じ名字であります」
《ええ、あの子も八雲同様わたしの子孫です》
　アイギスはドイツで鈴鹿御前と会って話もしていたが、あのときは緊急事態だったので深く考える余裕がなかった。
　けれど、今は話している相手の容姿などもじっくりと観察出来る余裕があるので、確かに八雲とも七歌とも似ているところがあるなと両者が血縁関係にあることに彼女も納得する。
《龍神であった母様より力を受け継ぎ、姉様は鬼の一族に、わたしは龍の一族になりました。そして、鬼は研鑽を重ね、龍はわたしが力の大部分を持ったまま過ごし、数千年経ってようやく八雲という両家の力を継いだ愛子が生まれたのです》
「なるほど、ではあなたは八雲さんのお婆様でしたか。ご家族の方とは知らずペルソナとお呼びして申し訳ありません」
　七歌と八雲が親戚であるという情報も地味に更新しつつ、アイギスは改めて彼の遠い祖母にあたる赫夜比売に挨拶をした。
　愛子と親しくしている少女が、亡霊となっている己にそんな風に接してきた事がおかしいのか赫夜比売は手を口元に当ててクスクスと笑い。そこまでの気遣いは不要であると告げる。
《ふふっ、所詮この身は八雲に憑いた亡霊。何を無礼なことがありましょうか》
「いえ、その辺りはキチンとする必要があります。先日拝見したワイドショーでは姑との関係が夫婦関係に大きく響くと仰っていましたので」
　旦那の祖母は姑とは呼ばない。しかし、アイギスは彼の親族に初めて会ったので、細かいことは気にせず良好な関係を築こうと考えた。
　だが、それを聞いて驚いた青年は、どこから夫婦関係などという話が出てきたのだと彼女に問いかけた。
「アイギス、それは関係ない。というか夫婦関係ってどっから出た話だ？」

「八雲さんはわたしを好きと言いました。そして、わたしも八雲さんが大好きです。ならこれはもう結婚するしかないかと」
「いや、それはおかしい。第一俺は結婚出来る年齢じゃない」
それはドイツで戦った後のことだ。アイギスから自分の事が好きか嫌いか二択で選べと言われ、湊は選択肢が卑怯だと思いつつも素直に好きだと言った。
彼女にすればそれで言質は取れており、自分も彼のことが大好きなのでもはや二人の愛を阻む物は存在しないという訳である。
ただ、湊はそういう意味で言った訳ではないし、そもそも少女を自分という呪われた存在に固執させたくもない。
故に、なんとか正しい知識を与えて、相応しい友人や男性と関わるようにならないかと考えていれば、子供たちの微笑ましいやり取りに和んでいた赫夜比売が老婆心からアイギスに一つ助言した。
《ふふっ。アイギス、八雲にはわたしの他にも元は人間だった者たちが憑いています。中々に気難しくあなたのことを快く思わない者もいるでしょう。ですが、大切なのはあなたと八雲の心です。お互いに信頼し合えるなら心を強く持って共に歩みなさい》
「はい。お婆様のお言葉、しっかりとこの胸に刻むであります」
迷いのない真っ直ぐな瞳。そして、自分の心に従っての正直な言葉。
それらを確認した赫夜比売は少女ならば大丈夫だろうと満足げに頷き、それではまた、と言って湊の中に戻っていった。
青年の家族に挨拶する事が出来たアイギスの方も嬉しそうに彼女を見送り、話が厄介な方へ進んでいることを自覚した青年だけが疲れた顔をしている。
展望室から見ていた者は先ほどまでの彼の行動で彼以上に疲れているだろうが、既にアイギスも自分で立てる程度には回復しているので、二人はここを出るため扉へと向かってゆく。
「この後は姉さんとの対面ですね。初めて会うので楽しみであります」
「そうか。まぁ、似ているかどうかで言うと別に似てはいないが」

「腹違いの姉妹というやつだと聞いているであります」
今日、ラビリスはテニス部で午前中は抜けていた。それが終わるなりこちらに向かうということで、アイギスは近接武器の訓練を受けていたのだ。
そして、ようやく姉妹が対面することになり、説明を受けていた本人も会うのを楽しみにしていた訳だが、扉が開くなりアイギスのはしゃぐ様子を見て小さく笑っていた青年が後方へ吹き飛んだ。
「八雲さんっ!?」
扉が開いた瞬間、彼の顔面に赤い拳が叩き込まれるのを見てアイギスは驚いた。
すぐに倒れた彼の許に駆け寄り、心配して抱き起こしてから彼を殴り飛ばした下手人を睨み付ける。
「一体どういった了見でありますか。ことと次第によっては実力行使も辞さない覚悟であります」
「うん。まぁ、アイギスの気持ちも分かるけど、今は少し待っといて貰えるかな？　ウチはちょっとばかし人の妹をボコボコにした外道にお仕置きせなアカンのよ」
現われたのは銀髪赤眼の少女。その彼女の手には特殊合金製の真紅のガントレットが装備されている。
その拳同士をぶつけて臨戦態勢に入っている彼女は、先ほどの訓練の様子を上で見ていたようで、アイギスを殺しかけたクズに天誅を下そうと考えていた。
しかし、近付いてくる相手を視線で牽制しながら、アイギスは起こしている湊の頭を胸に抱き、庇うように相手から遠ざけて言葉を返す。
「妹さんを傷つけられた事はお悔やみ申し上げます。ですが、それにはきっと理由があったはずです。それでも八雲さんに暴力を振るおうとするのであれば、わたしが相手をします」
「ちょ、待ちって。ウチが言った妹はアイギスのことやから。ウチはラビリス、桐条の方やと五式ラビリス呼ばれとったアンタの姉やよ」
妹がやるなら相手するぞと言ってきた事でラビリスはおおいに

焦った。
　彼女の方はアイギスの写真を見て姿を知っていたが、アイギスは姉の姿を一切知らなかったことで食い違いが起きたらしい。
　ただ、改めて説明を受けても、アイギスにすれば大切な青年を傷つけた闖入者でしかないので、実の姉だと聞いても敵意剥き出しのままキッと鋭い視線で相手を射貫く。
「そうですか。ですが、八雲さんに危害を加えたあなたはわたしの敵です。受けて立ちます」
「いや、だから今のはアイギスを傷つけた相手にお仕置きしただけで」
「わたしはそんな事はされていません。あなたは嘘つきです」
「ちが、あーもう、どう説明すればええんよぉ……」
　楽しみにしていた出会いがこんな形になり、おまけに妹にも嫌われたことでラビリスは泣きそうになりながらどうすればいいんだと頭を抱える。
　傍から見れば湊が加害者でアイギスが被害者としか思えないが、アイギス本人が彼は自分の事を考えて厳しい訓練をしてくれたと考えているため話が合わない。
　こうなってくるともう後は青年が仲を取り持つしかないというのに、アイギスに支えられながら立ち上がった青年は口元を小さく歪めながらラビリスを見た。
「妹に嫌われたな」
「なっ!?　この下衆、誰のせいやと思てんのよ!」
「やめてください!　あなたは八雲さんに近付いてはダメな人です」
　元を正せばやり過ぎた青年のせいだというのに、急に殴られた腹いせに湊は仲を取り持つことを拒否した。
　加えて小馬鹿にしたように煽ってまで来たので、ラビリスがふざけるなといつものように掴みかかろうとすれば、アイギスが間に入って邪魔をして彼に近付くことを阻んだ。
　姉にすればずっと会うのを楽しみにしていた可愛い妹だというのに、妹にすれば大切な人を傷つける危険な姉と認識され、感動的なものになるはずの出会いは一人の下衆のせいで最悪な形でスタートを

切るのだった。
夜――巌戸台分寮
アイギスがラビリスと出会った日の夜、寮生たちはとくに予定もないので一階に集まりながらも、女子たちはキッチン側のテーブルでお茶をして過ごし、男子らはテレビに近いソファー側でそれぞれの時間を過ごしていた。
しかし、カップ麺を食べていた順平は暇だったのか、夏休みの自由研究を何にしようか考えていた天田に話しかける。
「そういや、天田少年は武器は決めたのかい？」
「武器ですか？　えっと、一応候補は考えてますけど、どれが良いのかよく分からなくて決まってはいません」
少年もこれからはシャドウと戦うために武器を手にする必要がある。
サッカーくらいしかしてこなかった彼はどれも素人という事になるが、だからこそ簡単に決めると危ないぞとコーヒーを飲みながらバイク雑誌を読んでいた荒垣が忠告した。
「成長途中の身体じゃ重い得物持って長時間移動するのもキツいだろ。そこらを考えて選ばねぇといざってときに危ねえぞ」
「はい。気をつけます」
出戻りではあるがシャドウとの戦いを経験している先輩の言葉に天田は素直に頷いて答える。
彼は荒垣が自分の親の敵だとは知らない。それ故の素直な態度という訳だが、逆に忠告した方が少年の反応に戸惑い気味なようで「ならいい」と短く返すと再び雑誌に視線を戻した。
そんな荒垣の隣でグローブを磨いていた真田は、幼馴染みの細かな様子には気付かず、新しい後輩に先輩として助言出来る部分もあるぞと少年に声をかける。
「候補ってのはどんなやつだ？　俺たちの中で似ている物を使っている者がいればアドバイスも出来るが？」
「あ、その……双剣とか使ってみたいなぁって少し思ってて」
『双剣？』

双剣とは所謂二刀流のことだ。片手で持っているため攻撃力は下がるが、それぞれの手で攻撃を捌く事も出来るので防御には向いている。
ただ、どうしても高い技量が要求され、さらに言えば非力な子どもではろくにダメージが通らない可能性もある。
だというのに、どうして彼がそんな武器を選んだのだろうと三人が尋ねようとすれば、点けっぱなしのテレビであるＣＭが流れた。
《守るために戦う――――『劇場版フェザーマンＲ―時空を超えた戦い―』大ヒット上映中！》
そこには両手に持った刀で必死に戦うシムルグの姿が映っていた。夜のニュースなどでも歴代最高の客入りとして大きく取り上げられ、既に今年の邦画ランキングでトップになるのではと見られている。
かつてヒーローに憧れていた時代のあった彼らも、そんな人気で一般客も入っているというのなら久しぶりに観てみようかなと興味を持っていたため、フェザーマン好きの少年なら既に押さえていてもおかしくはないなと彼を見てみれば、案の定、気まずそうに視線を逸らしていた。
その反応から双剣を選んだ理由も丸わかりであり、普段はふざけている順平ですら珍しくお兄さんぶって彼を諌めた。
「あー……やめとけ、天田。ちゃんと選ぼうぜ」
「な、何がですか？　僕はちゃんと考えて選んでますよ。というか、まだあくまで候補の一つですし」
「いや、丸わかりだから。オレたちもそんな時代はあったけど、これ本当の戦いだからな。そういう選び方はマジでやめとけ」
順平が真剣な様子で話すということは珍しい。それだけに、これは真面目な話だという事が天田にも伝わった。
これでまだ未練があるなら真田と荒垣も諭そうと思っていたが、普段とのギャップのおかげで順平の言葉だけで天田はもう少し考えてみることにしたらしい。
大人びてはいるがやはり子どもだ。シャドウとの戦いに臨むと決意したのは母親の敵討ちが理由だろうが、戦い自体はヒーローへの憧

れが見て取れる。
やはりそういった危なっかしい部分は自分たちが注意しておく必要があるなと考え、それぞれがまた自分の時間に戻ろうとしたとき、入り口の扉が開いてアイギスが帰ってきた。
「ただいま帰ったであります」
「お、アイちゃんおかえりー」
「順平さん、ただいまです。皆さんお揃いでちょうど良かったであります。こちら、お寿司のお土産です」
帰ってきたアイギスは手に包みを持っていてそれを順平らの前に置いた。
お土産と聞いてお茶をしていた女子たちも見に来たが、包みを広げると十人前はありそうな寿司が並んでいた。
容器は持ち帰りと処分がしやすい軽くて柔らかい合成樹脂製。しかし、並んでいる寿司は先ほど握ったばかりという新鮮さで、高級寿司を食べ慣れている美鶴ですら見事なものだと感心する。
「かなり上等な寿司だな。アイギス、夕食で食べてきたのか？」
「はい。あの方に連れて行っていただきました。とても美味しかったので皆さんにもお裾分けです」
順平などにすれば初めて見る高級寿司に大興奮する。ゆかりや風花も少しつまもうかなと温かいお茶と取り皿の準備にキッチンへ向かえば、どこの寿司屋か見ていた七歌が驚きの声をあげた。
「え、これ虎膳じゃん」
「お、なになに？　七歌っちの知ってるお店？」
「行ったことはないけどね。信用出来る客しか入れないことで有名な超ＶＩＰ向けの老舗だよ」
江戸前寿司〝虎膳〟。一見さんお断りで有名で、気難しい店主に気に入られなければ入ることが出来ないが、味は抜群で各界の著名人が一度は行ってみたいと挙げる店だ。
一時期などは総理大臣も並ぶ店などのように取り上げられ、別に並んだからといって入れる訳ではないが、いくら様々なパイプや権力を持っていようと信用されなければ入店お断りとして知られている。

だが、そんな店が持ち帰りサービスをしているはずもない。にもかかわらず、目の前にはしっかりとした江戸前寿司が存在している。
美鶴も虎膳の寿司は初めて食べるので、どうやって持ち帰れるようになったかを尋ねた。
「アイギス、持ち帰りはどうやって頼んだんだ？」
「わたしが皆さんにもお裾分けしたいと言ったら、あの方が持ち帰りたいからおまかせで握って欲しいと頼まれたんです。最初は店主さんも渋っていましたが、容器は自分で用意しますと見せれば笑ってしょうがないなと握ってくださいました」
通常はやっていないサービスを認められるほどの繋がり。ただの常連では二度と来るなと言われて終わるだろうに、〝あの方〟とやらはユーモアのセンスも含め随分と気に入られているようだ。
そんな事を話している間にゆかりと風花がお茶と取り皿を持ってきたため、他の者たちも食べるという事で全員がソファーに詰めて座る。
ネタは旬のネタから定番まで十数種あり、それぞれに皿と箸が行き渡るとアイギスに頂きますと言ってから食べ始めた。
すると、
「う、うんめー!!　んだこれ、シャリからして回転寿司とは別もんだろ！」
「本当に美味しい。ネタが解けるようってこういうのを言うんですね」
順平と風花が満面の笑みを見せれば、他の者たちも同意して頷きながら箸を動かす。
簡単に噛みきれる柔らかいネタ、ほのかに甘いピカピカのシャリ、お茶との相性も抜群で、既に夕食を済ませているとは思えない勢いで寿司は減っていった。
自分が美味しいと思ってお土産にして貰ったアイギスはそれを眺め満足しているが、こんな上等な寿司屋に簡単に連れて行く人物に興味を持った七歌が再び相手のことを知りたがり尋ねた。
「アイギス、ご飯はその人と二人で行ったの？」

「いえ、今日は姉さんもいました。ですが、個人的に良好な関係を築くのは難しいとも感じたので、今後のお付き合いは不明です」
「え、アイギスってお姉さんいたの？」
「そのようです。初めて会いましたが、あの方に暴力を振るうので悪い人でした」
食事をしていた者たちはムスッとした顔のアイギスに姉の事を聞かされ驚いて手を止めた。
天田は知らされていないが他の者たちは彼女がロボットだったと知っている。その姉ということは相手もロボットのはずだが、真田が美鶴を見れば彼女は首を横に振ったので詳細は不明らしい。
その事については美鶴が桐条グループに問い合わせる事にして、他の者たちはアイギスの姉がどんな人物なのだろうかと想像を巡らせる。
もっとも、アイギス自身も相手のことをよく思っていないようなので、彼女からどんな人なのか詳しく聞くことは出来ないだろう。
約一名は彼と一緒にいる少女のことを思い出し、そういえば名前も似ているなと考えたりしていたが、とりあえず考えても分からない事は置いておき、今は新鮮な寿司を食べてしまおうと一同は再び箸を動かして寿司を堪能するのだった。

第二百三十九話　少女たちの夏休み

７月３０日（木）
昼――巌戸台分寮
夏休みに入って約一週間。まさに夏真っ盛りという晴れ日の昼頃に、寮の扉が開いて七歌が帰ってきた。
何やらニコニコとしている彼女の手には熟していない緑色の柿の実が握られており、彼女の帰宅を待ちながらソファーで雑誌を読んでいたゆかりはどうしたんだと尋ねた。
「おかえりー。ってか、それどうしたの？」
「これ？　商店街にある古本屋のおじいちゃんとおばあちゃんに貰ったの」
出掛けていた彼女が行っていたのは古本屋〝本の虫〟といって、老夫婦が営んでいる小さなお店だ。
こちらに来てから近場の本屋として利用しているうちに夫婦と仲良くなり、イゴールたちの言っていた絆が芽生えたのか〝法王コミュ〟を結んでいた。
そして、今日は老夫婦から渡したいものがあると言われて行ってきたのだが、そのときに貰ったのが熟れていない若い柿の実だった。
これは教師をしていた老夫婦の一人息子の教え子が植えた木についた実で、校舎の増築計画の中で邪魔な木として切られそうになっていたという裏話がある。
その計画は木を植えた卒業生たちの反対署名運動に加え、美鶴に誘われて生徒会に所属している七歌の活躍によって阻止されたが、結果は木を別の場所に植え替えるという折衷案に終わった。
けれど、老夫婦はその結果に満足しており、色々と駆け回ってくれたお礼として数冊の本と思い出の柿の実をくれたのだ。
「夏にも柿の実ってあるんですね。秋になって実がついて熟れていくんだと思ってました」
「うんにゃ、夏にはほぼ大きさが完成してるよ。熟れていくのは夏の終わり頃からだけどね」

ゆかりと一緒に待っていた風花は夏休みの宿題をしていたノートから顔を上げ、秋を代表する作物とも言える柿を夏に見るのは不思議な感じだと微笑む。
七歌もそれに笑い返して夏には既に実は出来ているんだぞと伝え、どうやって保存しようかなと考えながらラップに包んで冷凍室に入れた。
熟れていれば食べられたかもしれないが、残念ながら貰った実はまだ早いという段階にもなっておらず、かといって生モノをインテリアとして扱うには勇気がいる。
そうして悩んだ末に、しばらくはコールドスリープさせておこうと決めて、柿を入れた冷蔵庫の前で二礼二拍手一礼してから七歌はゆかりと風花の前に戻ってきた。
「おっすー。んじゃ、準備出来てるなら出掛けよっか」
「あ、じゃあ、ちょっとノート類を部屋に置いてくるので少し待っててください」
満月まで残り一週間。そのため、次の戦いに向けて少し準備をしようと今日は三人で少し出掛ける話になっており、老夫婦に呼ばれていた七歌が用事を済ませたら出発することになっていた。
他の者たちもほとんど準備は出来ているが、ノート類を部屋に置いていきたいと言って風花が部屋に向かったので、彼女が戻ってくるのを待ってから七歌たちは寮を出た。
「あー、今日もあっついねー」
「たるんでますぞゆかり選手。私はこの暑い中を往復済みなのだから」
「それ商店街まででしょ。ポロニアンモールまでどれだけかかると思ってんのよ」
外に出てあまりの日差しの強さにゆかりは手をかざして目元に影を作る。
そんなことをしても暑さは変わらないが、眩しさは軽減するので全くの無意味という訳ではない。
けれど、外に出るなり暑さでゲンナリしている様を見て、七歌がそ

んな事じゃやっていけないよと言ってくるものだから、ここから目的地までどれだけあると思っているんだとゆかりも反論した。
二人の少女のやり取りを傍らで見ていた風花は日傘を差して笑い。三人の少女は暑さに文句を言いながらも姦しく目的地へと向かった。
――ラボ
七歌たちがポロニアンモールに向かっているとき、朝から用事があると言って出掛けていた美鶴は桐条グループのラボに来ていた。
ここを訪れたのは先日のアイギスの言葉に気になる点があったからだ。
「お嬢様、こちらが対シャドウ兵器の資料になります」
「ありがとうございます」
美鶴がラボ内にある会議室で待っていると、白衣を着た眼鏡の中年男性が古いファイルを持ってやってきた。
相手からそれを受け取った美鶴は礼を言ってから中身に目を通してゆくが、資料を読んでいる美鶴に男が声をかけてくる。
「現在ラボに残っている資料の中で最も詳しく書かれているのはそれです。ただ、七式アイギスを除く過去の機体に関しての資料は、どうやら十年前の事故で失われてしまったようで見つかりませんでした」
「……そうですか」
申し訳なさそうに伝えてくる男に美鶴はないものはしょうがないと微笑んで返す。
心の中では資料が失われていることを残念に思っているが、それを相手に言ったところでどうにもならない。
ポートアイランドインパクトと呼ばれる十年前の事故、それに加えて九年前に起きた桐条傘下の製薬会社に偽装したエルゴ研のガス管破裂事故、この二つの事故によって研究のデータはほとんど失われてしまった。
おかげでポートアイランドインパクト後の十年の内数年は、失われた貴重なデータの復旧に追われていることになっていた。
今でこそ新たな研究も出来るようになっているが、対シャドウ兵器に関しては天然のペルソナ獲得者が見つかったことで研究自体が凍

結され、アイギスが目覚めるまでは資料の整理すら行なわれていない。
　それを美鶴が見たいと言ってからたった数日でまとめてくれたのだから、美鶴としてはここに目的の資料がなくても研究員らを責める気など毛頭無かった。
　そうして、そのまま資料に目を通していくとラストナンバーであるアイギスの資料が最も多く、人間になった彼女が対シャドウ兵器のロボットだったという事実を再確認する。
　今日も彼女は朝から出掛けているが、他の者たちも既に彼女を人間として扱っておりロボットだったということを忘れている節すらある。
　それが良いことかどうかは分からないが、彼女のことを情報としては知っている研究員は寮での様子などを美鶴に尋ねた。
「七式アイギスの様子はいかがでしょう？　日常生活も問題なく送れていますか？」
「ええ、今日もあの方とやらのところへ出掛けて行きました」
「そうですか。ロボットを生き物にしてしまうほどの技術。研究者として一度は会ってみたいものです」
　研究員たちもアイギスの人間化を聞き、どうすれば機械を人間に出来るのかと議論がなされた。
　結果だけを言えば何をどうすれば良いのか欠片も分からなかったが、ラボに配属されてから長い者たちと違い、ラボに入ってから三年にも満たない研究員から器を作ってコアを移植したのではという意見が出された。
　これは長年勤めている者たちはアイギスを高度なＡＩを積んだロボットとして認識していたが、入ってから日の浅い者はアイギスはコアに自我や魂が宿っていると認識していたため、コアさえ移植すれば彼女のまま別の肉体になれるのではと考えたのだ。
　真相はアイギスに尋ねても教えてくれないので謎のままだが、長年研究していた者ほど先入観で気付けないというのは少し面白い。
　研究員がアイギスを人間にした人物に会ってみたいものだと言っ

たところで、美鶴は目的の情報であるアイギス以前の対シャドウ兵器について書かれた項目を発見した。
「一式から三式までは車輌型……四式以降が人型で、黄昏の羽根を積んだのは五式からか……」
彼女が見つけた資料に書かれていたのは、対シャドウ兵器開発がどのように発展していったかというもので、そこには七式アイギスに至るまでの対シャドウ兵器開発の系譜が載っていた。
目を通していた美鶴にすれば、どうして車輌型をやめて人型にしようと思ったのか不思議でならないが、続きを読めばその頃にペルソナが実在する可能性が現実味を帯び、ならば対シャドウ兵器にも搭載する事が出来ないかとなったらしい。
つまり、最初に人型で作られた四式は、あくまで人型ロボットが製作可能かそして実用可能かを調べるためのプロトタイプ。
次に開発された五式が黄昏の羽根と人格を与えた場合の反応を見るテストベッドで、五式で採ったデータに加え銃火器など新たな仕様の実験機として作られたのが六式、そして六式までに得られた全てのデータを使って作られた正式採用機がラストナンバー・七式アイギスというわけだ。
これを読むとラストナンバーである彼女はかなりの性能を有していた事が窺える。それを言い方は悪いが人間にしてしまって大丈夫なのかという不安も感じるが、先日共にタルタロスへ訪れたときには七歌以上の身体能力を見せて戦っていた。
それを考えると〝あの方〟とやらは、アイギスが人間になっても戦闘力が変わらないようにしたのだろう。恐るべき科学力だ。
「これは……」
そして、さらに美鶴が読み進めたとき、テストベッドである五式の実験について書かれた項目を発見する。
それは読んでいて思わず眉を顰めるほど非道な内容だった。
黄昏の羽根に人格をインストールしたことで彼女たちは人間のように経験を積んで成長出来る。勿論、身体は機械なので成長はしないが、経験から肉体の運用や戦術面での成長が期待され、〝五式〟にな

る可能性を持った機体を何十体と作り、最も性能で優れた機体を〝五式〟として運用していこうと考えられた。
だが、彼女たちは対シャドウ兵器、つまりは戦うための機械だ。そんな存在が己の性能を示すことが出来るのは戦場しかない。
けれど、当時は影時間も限定的な発現しかせず、敵となるシャドウも簡単には遭遇すら出来なかったので戦う相手はいない。
ならどうやって戦いの中で性能を見せるのかと思えば、当時の研究者たちは近い性能を持った〝姉妹たち〟を戦わせれば良いと判断した。
「なんと非道な。彼女たちにも意思はあっただろうにっ」
あまりの内容に美鶴はファイルを持つ手に力を籠めて声を荒げる。
急に大きな声を出されて研究員は肩をビクリとさせているが、書かれている内容を思えば美鶴が激昂するのも無理はなかった。
性能を知るために姉妹を殺し合わせ、負けた方のデータを勝った方にインストールすることで全ての経験を勝者に獲得させる。
そんなことを繰り返して残った最後の一体が正式に〝五式〟として採用されようと、そのまま少女が精神的に成長していけば、いつか姉妹殺しを罪として背負うことになるかもしれない。
研究者がその可能性に気付かなかったはずがない。そう思って美鶴は怒りを露わにしたが、研究者の男は何故そんな実験が行なわれたのか理解出来るとして理由を説明した。
「お嬢様、残念ながら研究者は彼女たちを一つの個として認識していません。自我を持っている、心があると言われても、高性能なＡＩを積んだロボットだと認識しているのです」
「馬鹿な。それではペルソナの獲得をどのように考えているんだ？」
「実験の産物。人工的な方法でもペルソナを獲得し得ると分かった程度でしょう」
男の言葉に美鶴は絶句した。心があって、大切な人が死んだと思って涙を流せた彼女を、研究員らはあくまで〝ロボット〟としか見ていない。
ペルソナは高度な精神、つまり心を持っていなければ獲得出来ない

というのに、作られた存在だからという一点によって彼らは相手をモノとして認識しているのだ。
そんな馬鹿な話があるかと怒鳴りたい気持ちになる。だが、目の前の相手を罵倒しようと既に行なわれた非道な実験がなかったことになる訳ではない。
研究員らの考え方を知った今となっては、アイギスが人間になったのはむしろ良かったと感じながら資料の続きを読み、実験の最終的な勝者に与えられた名前を見たとき美鶴は頭を殴られたかのような衝撃を受けた。
「そ、そんな、これが彼女の姉の名前なのですか？」
「はい。容姿については詳しく書かれていませんが、複数の資料から同じ名前が出ました。よって、五式の名称は〝ラビリス〟で間違いないかと」
美鶴はその名前を知っている。ムーンライトブリッジで湊の様子がおかしくなったときに突如現われたのが最初の出会いだったが、それから時間が経って再会し、今では普通に話すことも出来る学校の先輩後輩という関係だ。
湊と一緒にいることから何かしら訳ありなのだろうとは思っていたが、資料に書かれている彼女の末路は暴走したことで封印凍結されたとある。
その後、彼女が再稼働されたという話は何も書かれていないので、考えられるのは彼女の存在を知った青年が連れ出したのだろうという事だった。
まさか湊とチドリだけでなくラビリスまでもが桐条グループの被害者だとは思わず、被害者であるはずの湊が他の被害者を救い続けている事実に美鶴は申し訳なく思えてくる。
「どうもありがとうございました」
「もう良いのですか？」
「はい。知りたかった事は分かったので」
アイギスの姉の情報を得たいと思ってやってきたが、それを知ったことで新たな悩みが生まれてしまった。

ファイルを返した美鶴はすぐに会議室を出ると、アイギスは今日彼の家にいるのだろうと当たりを付けて表に車を呼ぶ。
外に出れば正面玄関に車は到着していたので、駅に向かってくれと告げると彼女は移動中ずっと外を眺めていた。
昼――マンション〝テラ・エメリタ〟
時刻は十二時半をやや過ぎた頃、湊たちの部屋では料理の良い匂いがしており、キッチンではラビリスが鼻歌交じりで料理を作っていた。
一方その頃、リビングの方ではアイギスがコロマルと羽入かすみと一緒にＤＶＤを見ており、全員の視線がテレビに釘付けになっている。
《ぼくだけの力で君に勝たないと、ドラえもんが安心して、未来へ帰れないんだぁ！》
ひ弱そうな眼鏡をかけた少年がガキ大将の少年に掴みかかり挑んでいる。それを見て羽入は目に涙を浮かべているが、アイギスはやや不思議そうな顔で見ているだけだ。
遅れてきた青ダヌキが公園に到着したときには眼鏡の少年が相手のギブアップで勝利していたが、同じタイミングで料理の皿を持ってラビリスがやって来たことで他の者たちは食事の準備を手伝う。
「ラビちゃん、コップ持ってくるね」
「うん、ありがとう。アイギスはキッチンにある皿を持ってきてくれへんかな？」
「了解しました」
一時停止をかけて羽入とアイギスがキッチンに向かう。ラビリスはコロマルの食事のため、フローリングに食事用のマットを敷いてから彼の器を置いた。
そして、コップとお茶を持った羽入と料理の盛られた皿を持ったアイギスが戻ってきたので、入れ替わりでラビリスは箸やフォークを取りに行く。
別に三人が一斉にワチャワチャとなっても動けるだけの広さはあるが、あまり人が多いと危ないと言うことでラビリスはキッチンから

二人がいなくなるのを待ったのだ。
そうして、ラビリスが再び食器を持って戻ってくると、全員の前に皿と料理が並べられ、ウキウキ顔の羽入が手を合わせたことで他の者も続いた。
「いただきます！」
『いただきます』
「わふ！」
今日のお昼は塩焼きそばに中華丼。見た目の派手さはないが中々に手間の掛かる料理だ。
食べ慣れている羽入はラビリスに美味しいよと笑顔で告げ、姉の料理を初めて食べるアイギスはジッと料理を見てから箸で口に運んだ。
「……美味しいです。姉さんは料理が出来たのですね」
「いや、だから普段作ってるのはウチや言うたやん。アイギスもそれで普段食べてる味を知りたいって残ったんやし」
実は今日、アイギスは湊から家に呼ばれてやってきたのだが、実際にやってくると家にはラビリス、コロマル、宿題をしにきた羽入の三人しかいなかった。
青年をどこに隠したのかと怒ったアイギスにラビリスが仕事でいないと説明し宥めるも、ならここに用はないと帰ろうとしたので、彼が普段食べている料理を食べたくはないかと引き止めることに成功したのだ。
第一印象が最悪でスタートしたアイギスにとって、彼のいない場所で彼に危害を加える人物と共にいるのは不満でしかない。
それでも彼のことを知りたいからと素直に残る辺り、なんだかんだ子どもで扱いやすいのだなとラビリスは思っていたりする。
今日彼が仕事なのは前から分かっていたことで、それでもアイギスを家に呼んだのは姉妹の仲を改善させるためだろう。
湊がいない間の緩衝材として羽入を呼んでくれている点もありがたく、ラビリスとしては何とか話をするくらいは出来そうだと安堵の息を心の中で吐きながら彼女に話しかける。
「アイギス、興味あるんなら料理教えたるよ？　湊君が好んで食べる

料理とかも知っとるから、そういうのなら覚えて損はないと思うし」
「良いのですか？」
「そりゃ、ウチから言い出したんやしええよ。まぁ、最初はカレーとかで具材の切り方に慣れていく必要はあるけど、慣れてきたら次は湊君の好きな料理にチャレンジやで」
湊をだしにするのは狡いかとも思ったが、おかげでアイギスは目を輝かせてよろしくお願いしますと言ってきた。
妹に慕われるのはなんと気分が良いのだろう。ある意味不幸な事故によって相手には嫌われてしまったが、こういう関係を自分は夢見ていたんだと感動しながらラビリスは食事を続ける。
「あのね、ラビちゃんは料理がとっても上手なんだよ。でも、湊君はもっと上手なの。食べたらビックリするよ」
「お褒めにあずかり光栄であります。そのように言って頂けるとわたしも鼻が高いです」
「いや、かすみちゃんが褒めたんは湊君であってアイギスは関係ないやん」
どうして湊のことを褒められてアイギスが自慢げにするのかは分からない。
ただ、アイギスがそういうと羽入も「やったー」と口の周りにご飯粒をつけながら喜んでいるので、本人同士の間では何かしら通じるものがあったのだろうとラビリスが口の周りを拭いて世話をしつつ流すことにした。
因みに、アイギスは湊のことを百鬼八雲と認識しているが、他の者たちは基本的に有里湊という呼び方で統一されている。そのためアイギスに湊の話をしても通じない可能性があったので、彼女には湊が本名ではなく偽名で普段は生活していることは説明済みだ。
おかげで七歌と他の者が話すときのように、アイギスだけが八雲と呼んで他は湊や湊君と呼ぶ変な会話が行なわれたりもしているが、ラビリスが料理の先生になることでアイギスからの尊敬も取り戻せたようなので、ラビリスも細かい点は気にせずアイギスからの質問に答えながら食事を続けた。

そして、全員が食事を終えて、お茶の用意をしつつラビリスがキッチンで洗い物をしていると、インターフォンが鳴ったことでＤＶＤの続きを見ていたアイギスがキッチンに呼びかけた。
「姉さん誰かが来ました」
「ん、分かったー。はいはい、どちら様ですか？」
《急にすまない。桐条美鶴だ。一人で来たんだが、今こちらに有里とアイギスはいるか？》
美鶴は以前ここに来たことがあるらしいのでやってきても驚かない。
だが、湊とアイギスがいるかと聞かれたことで、既に二人がどういった関わりを持っているのかバレているのだろうと察する。
「……湊君は仕事でおらんよ。アイギスはかすみちゃんとテレビ見とるけど」
《そうか。少し、君と話がしたいんだが時間を貰えないか？》
「わかった。開けるから中に入って」
外で話すより家の中の方が安心出来る。ここに湊とラビリスが住んでいるという情報は桐条グループも掴んでいるのだろうが、湊は隠れているパパラッチすら完全に看破して名刺を受け取るほど警戒心が強い。
そんな相手を監視していれば会社に抗議が行くため、登下校中に軽く監視する以外、桐条グループもこのマンションや周辺地域では何もしていないのだ。
よって、家の中なら自由に気にせず話せるからと美鶴を中に入れれば、リビングのソファーに座っていたアイギスはやってきた美鶴に挨拶をした。
「あ、美鶴さん、こんにちはであります」
「こんにちは。というより、君は随分と寛いでいるな」
「はい。あの方のお家なので」
髪の長い綺麗な女性という情報からラビリスがそうかと一瞬考えるも、彼女は姉にも会ったとあの方と姉を別人として説明していた。
羽入の髪の毛は肩に掛かるくらいの長さなので除外され、残るは今

は仕事に行っている家の主しかいないだろうと美鶴は溜息を吐いた。
「やれやれ、アイギスからはあの方は女性だと聞いていたんだがな」
「ああ、湊君は遺伝子キメラで両性なんよ。だから女性でも間違ってないで」
その話は初耳だと美鶴は思わずラビリスを見る。彼女がそんな冗談をいう意味が無いので、改めて訂正しない辺り事実なのだろう。
この事を他の者たちは知っているのだろうと考えたりもしたが、両性であっても彼は女性を抱いているので、遺伝子的には両性であろうと結局メインは男になると思われる。
リビングの入り口に立ったまま美鶴がそんな事を考えていれば、キッチンに向かっていたラビリスがお盆にケーキと紅茶を乗せてやってきて、テーブルにそれらを置くと二人に声をかけてゆく。
「アイギス、かすみちゃん、お茶とケーキ出しとくから食べて待っといてくれるかな？」
「いいよー。いってらっしゃーい」
「ゴメンな。コロマルさん、二人のこと見とってな」
「わん！」
任せとけと一鳴きするコロマルの頭を撫で、ラビリスはついて来てと言って美鶴をキッチンに案内する。
そこにはアイギスたちに出したものと同じ紅茶とケーキがあり、それをお盆に乗せるとラビリスはキッチンから扉一枚で繋がるバルコニーの方へ出て、そこにあるパラソル付きのテーブルへ美鶴を案内した。
「ほんで、アイギスのことも分かったならウチの事も分かって来たんやろ？」
「ああ。五式ラビリス、桐条グループに作られた対シャドウ兵装で黄昏の羽根を初めて搭載されたモデル。それが君の経歴で間違いないんだな？」
「うん。って言っても、もう人間の身体になってしもてるから、今更桐条グループになに言われても戻る気はないわ」
信じられないような話であったが、本人が認めた以上は美鶴も事実

として受け取るしかない。
ケーキを食べながら笑う彼女に暗い部分は見られないが、彼女は桐条グループから姉妹殺しを命令されていたに違いない。
それをここで聞いても良いものだろうかと悩みつつ、美鶴はまず先に桐条グループが今更君を連れ戻す事はないと断言する。
「安心してくれ。ここへは個人として来ているし、グループが何かしようとすれば全力で止める。何より、お父様も彼の平穏を二度と壊したくはないだろう。そのためにアイギスもそのまま残していたようだしな」
十年前に壊れた機体など破棄されてもおかしくない。それを大改修とも言える修理をしてまで残していたのは、桐条武治が湊とアイギスの関係を知って敢えて残していたとしか思えない。
それを考えればグループの人間はともかく〝桐条宗家〟は全員が湊の味方と言えた。
仮に桐条武治が彼に不利益となる何かをしようとすれば、気付いた時点で妻と娘が敵となって青年側に立つことになる。流石の桐条もそれだけは避けたいはずだ。
「あ、寮の皆には湊君のこと話してしまうん？」
「いや、当分は話す気は無い。岳羽や荒垣は気付いている節もあるが、何も言わないところを見ると私と同じように時期が来るまでは何も話さないのだろう」
荒垣は湊が能力者だと知っているし、ゆかりもその辺りの話をぼかして聞かされているので何となくは察している様子だ。
後はアイギスと彼を繋ぐ何かを見つければ、アイギスが女性だと言っている相手が湊だと気付くはずだが、実をいうと湊は中学二年生のチドリの誕生日会で美紀に絵の女性がエリザベスかと聞かれ、彼女の名はアイギスだと言っていたりする。
そんな昔の何気ない一言を覚えているはずもないが、当面、美鶴から他の者にアイギスと湊の関係がバラされることがないと分かると、二人の間に漂っていた緊張した雰囲気は霧散し、ただのお茶会となる。

「あ、それと、これは少々お節介かもしれないが、その、君は大丈夫なのか？」
「ん？　大丈夫って何の話？」
「いや、アイギスは有里に強く執着しているだろ。そして君は彼と深い関係のはずだ。そうなると将来的に姉妹で一人の男性を取り合うことになるはずだが……」
アイギスは姉が大切な人と身体の関係を持っている事は知らない。
だが、ラビリスはアイギスが彼の事を大好きだと知っているはずだ。
そうなると将来的に泥沼な未来しか見えないのだが、言われたラビリスはカラカラと笑って大丈夫だと断言した。
「あぁ、そういう事な。まぁ、ウチは別にアイギスがしたいようにしたらええと思うとるよ。別にシェアでも独占でも何でもな」
「シェ、シェア？　それは秘密裏に一夫多妻制を取るということか？」
「今も似たようなもんやろ。聞いてると思うけど、ウチとチドリちゃんと風花ちゃんと湊君でした事もあるし」
「は、初耳だぞ!?」
衝撃の事実に美鶴は紅茶を噴きそうになる。名前の挙がった三人とゆかりが彼と深い仲なのは知っていた。チドリに関しては予想していただけだが確信に近い物があったので構わない。
けれど、いくら何でもその三人が同時に青年と寝ていたと聞いては、何が起こってそんなアブノーマルなプレイをすることになったのだと驚くのが当然だ。
「待て、三人と一人でどうやってするんだ。まさか、内二人は女性同士でか？」
「あー、湊君に言われてキスとかはしたけど、基本は湊君が一人に挿れて他の二人に手とか使って来る感じやね。後は能力で影みたいなの出して、それでまぁ色々としてきたりやわ」
「や、やめろ！　生々しいことは言うな！」
自分で聞いておきながら耳まで真っ赤にして美鶴は相手の言葉を遮る。

男女二人で行なうそういった行為すら想像が付かないというのに、女性が三人に男が一人でどうやれば出来るんだと美鶴はキャパシティオーバーで目を回しそうになる。
しかし、話した本人はこれくらいでと美鶴の様子を苦笑して涼しい顔をしており、純粋だった少女も彼に抱かれて随分と精神的に大人になっている事が窺えた。
「別に何も具体的なことは言ってへんて。そんなん言うたら二人きりのときも大概アブノーマルやで？」
「そ、それは、いわゆるＳＭというやつか？」
「んー、首締められたりとかはあったけど、別に叩いたりはされんかな。けど、ウチらを気持ちよくさせたいらしくて、お尻とかもいじってくるから最初はビックリしたわ」
「それは撫でたりという話か？」
「んな訳ないやん。お尻に挿れてくるんよ。多分、みんなやられとるよ？」
何故そんなところに挿れるのか。箱入りで育った美鶴は未知の領域に恐怖すら感じる。
しかも、目の前で話している少女だけでなく、彼と関係を持っている者はほぼ全員が同様の経験をしているらしい。
そこまでして何か得られる物があるのだろうか。自分の知らない世界の話に衝撃を受けた美鶴は、呆然としながら紅茶とケーキを完食すると、今日は帰ると言ってトボトボと帰って行った。

――古美術〝眞宵堂〟
ポロニアンモールにやってきた七歌たちは、新たなアイテムを手に入れるべく眞宵堂へとやって来ていた。
今日は店には店主の栗原しかいないが、影時間に関わる話をするなら丁度良いとして、預けていた端緒の薙刀を受け取りつつ栗原に話しかけた。
「栗原さん、なんか良い物おーくれ！」
「……ちっ、ほら飴玉だよ」

タダで物をあげるのが嫌なのか、栗原は舌打ちをしてから葡萄味の飴を七歌に一つ手渡す。
貰った本人はそれで喜んでいるので、後ろで見ていたゆかりたちも気にしないことにするが、あと一週間で満月と言うことで交わされる雑談は自然と自分たちの強さについての話題になってくる。
「あと一週間だけど天田君とか大丈夫かな？」
「そうですね。まだペルソナに目覚めたばかりだし、先輩たちも気にはしてるけど戦闘中じゃそうずっとは見ていられないもんね」
天田の武器は結局槍に決まった。最初は敵の乱獅子と一緒は嫌だと渋っていたが、薙刀を使っている七歌が長物は女性や子どもでも戦える優れた武器だと説明し、様々なメリットを伝えた事で納得して貰うことが出来た。
「正直、私たちってどれくらい強くなってるのか分かりづらいしね」
だが、いくら武器が決まって戦い始めても、満月までの残り日数を考えると天田に経験を積ませるには時間が短すぎる。
加えて、確かに強くはなっているはずだが、自分たちの強さは数値など具体的には分からない事で、ゆかりはどれくらい強くなっているんだか分からないと肩をすくめる。
しかし、その話を聞いていて少々気になったようで、栗原はアレは持っていないのかと三人に尋ねた。
「なんだ。あんたら適性測定器も貰ってないのかい？」
「適性測定器って何ですか？」
「そのままだよ。アナライズが使える人間が相手を調べると、その適性を数値にして出してくれるんだ。適性の高さはほぼ強さに直結してる。つまり、それで強さが分かるって話さ」
言いながら栗原はカウンターの内側にある棚の奥をゴソゴソと探すと、ようやく見つけたようで携帯より二回り大きな機械を出してきた。
「ほら、こいつはサービスしておいてやる。バックアップの人間が持っておきな」
「あ、どうもありがとうございます」

元を辿ればこれは湊がくれた物だが、別に人にあげたところで彼は文句を言ったりはしないだろう。
傷薬と武器の調達だけでなく、風花が使える新たなアイテムが手に入ったのはありがたい。
早速使ってみようとして栗原に店の中で召喚するなと怒られ、結局寮に帰ってから使ってみることになった。
結果だけを言えば先輩組を抜いて七歌がトップ、反対に目覚めたばかりの天田が最下位だった。
自分たちの強さを数値で確認出来るようになった事で、順平辺りは「余計にＲＰＧっぽいよな」と笑ったりもしていたが、この数値まで強くなろうと目標を立てることも出来ようになった。
真田にしてみればそちらの使い方の方が良いらしく、栗原に貰った適性測定器は非常に重宝するものとなった。

第二百四十話　青年たちの夏休み

８月１日（土）
昼――ポートアイランド駅前
ギラつく太陽の日差しが厳しい昼過ぎ、順平は映画館から出てくると眩しそうに目を細めた。
今日は一人で映画を観に来たのだが、天田が言っていた通り自分の知っている戦隊モノよりも内容もアクションも随分と進化していた。
これは本当に年内邦画ランキングでトップに立つかもしれないなと思いながら、この後はどうしようかと花壇の横にあるベンチに腰をかける。
「……はぁ」
映画の内容は良かった。一人残ったシムルグの戦闘シーンなど、思わず前のめりになってしまったほどだ。
終わり方もハッピーエンドだったので気持ちよく観ることが出来たのだが、溜息を吐いた順平が今考えているのは特別課外活動部での事が原因だった。
つい先日、風花たちが栗原から貰ってきた適性測定器。それを使ってメンバーの適性を測ってみたところ、最も弱いのは目覚めたばかりの天田で適性値は〝１８３００ｓｐ〟（約レベル３６）。
目覚めたばかりでこれは非常に高いようだが、シャドウの活動が活発になってきていることと関係しているのか、最近は後から目覚めた人間も昔と比べて高い適性になっているらしい。
そして、続いて後方支援の風花の〝２１０００ｓｐ〟（レベル４２）、順平の〝２１９００ｓｐ〟（約レベル４４）、復帰したばかりの荒垣の〝２３２００ｓｐ〟（約レベル４６）、ゆかりの〝２４１００ｓｐ〟（約レベル４８）、美鶴の〝２４４００ｓｐ〟（約レベル４９）、真田の〝２５６００ｓｐ〟（約レベル５１）、アイギスの〝２７０００ｓｐ〟（レベル５４）、七歌の〝３１４００ｓｐ〟（約レベル６１）となっていた。
レベルの部分に関してはあくまでペルソナが未進化状態であればの話で、進化するのであれば適性は爆発的に増加し、そのときには〝５００００ｓｐ〟なら〝レベル５０〟といった感じで〝１０００ｓ

p〟につきレベルが一つという計算になる。
以前と比べれば随分と強くなった物だと美鶴や真田は楽しそうに話していたが、そのとき順平は酷い劣等感を覚えていた。
ずっと一緒に戦っていた。前線で必死に戦って活躍もしているつもりだった。
なのに、成長を数値として見れば、順平は復帰したばかりの荒垣にも劣る最下位であった。
まだ下には天田と風花がいると言われようと、新人と後方支援を前線組と比較する方がおかしい。
一時期支援に回っていた美鶴にゆかりは追いついているし、怪我で抜けていたらしい真田もワイルド持ちの七歌と対シャドウ兵器のアイギスに次ぐ強さだ。
これでは前線で活躍していると思っていた自分はお荷物ではないかと、仲間たちから離れ一人になってから落ち込むのも無理はなかった。
「……はぁ」
「……さっきから鬱陶しいんだけど？」
「へ？」
再び深い溜息を吐くと斜め後方から声が聞こえてきて、不意を突かれた順平が振り返れば赤い髪の少女がベンチに座り絵を描いていた。
今日は薄い水色を基調とした落ち着いた色のワンピース姿だが、どうしても真っ赤な髪は目立ってしまう。
しかし、目付きが悪いことに目を瞑れば美少女に分類され、高校に入ってからは女性らしく成長しスタイルも良いので、そういった意味でも周囲の目を惹く存在だ。
そんな良くも悪くも目立つ相手を見落とし気付かないほど悩んでいたのか。うじうじとしている自分に順平は思わず嗤ってしまい、横目でそれを見ていたらしい少女が冷めた表情で口を開いた。
「うざい……臭い……どっか行って」
「いや、臭くはねえだろ。オレっち、シトラスミントの香りよ？」
「頭になんか湧いてるんじゃないの？」

シトラスミントが良い香りかどうかは好みによるが、悪い香りという訳ではない。
けれど、とりあえず順平からはそんな爽やかな香りはせず、見た目からして汗臭いから近付くなと視線でチドリが返せば、普段ならおとぼけなツッコミを返すはずの順平が力なく笑って視線を正面に戻した。
「はぁーあ。ま、こんな暗いとそりゃ鬱陶しいわな」
「……なに、悩み相談でもしたいの？」
「お、聞いてくれんの？」
如何にも悩みがありますという雰囲気を出されれば、話を聞いて欲しいアピールとしか思えない。
本当は聞きたくないが、知り合いというだけでこうやって絡んでこられるのは鬱陶しいので、話したければ話せばいいとチドリが無言で絵の続きを描き始めれば、順平は聞いてやるという意味に取ったらしく言いづらそうにしながら話し始める。
「あー、まぁ、勝手に話すわ。えっと、あくまでゲームの話なんだけどさ。一緒にやってるやつの中じゃ遅く始めたんだけど、敵を倒したりで結構活躍してたわけよ。何年も先に始めてた先輩にも負けないくらい強敵も倒してたんだ」
アルカナシャドウやフロアボスの活躍を思えば、順平は決して他の者たちに劣ってはいない。
むしろ、順平は攻撃の要であり、エースとしていなければならない存在だ。
「けど、実際にレベルで比べてみっとオレっち弱々でさ。しばらく離れてた人にも負けてるし、一番の新参と後方支援を除くと最弱だったんだよな。今までレベル表示なんかしてこなかったから知らなくて、最近になって知って結構ショックだったつーか」
倒してきた敵の数や強さで言えば負けていない。だが、己の強さを表わす適正値では絶対的に他の者に劣っている。
ワイルド持ちの七歌や先輩たちには負けていたとしても、前衛で直接敵と戦ってきた分、ゆかりよりも上だと心のどこかで思っていた。

それが蓋を開けてみればゆかりは美鶴に迫るほどで、順平はむしろ差を開けられている立場であった。
男だから、女だから、そんな理由で相手を下に見ていた訳ではない。ただ、男としてのちっぽけなプライドで女子を守るなら自分の方が強くなければと無意識に考えていたのだ。
レベルという形で自分たちの強さを表わしたことで、自分が仲間の中では弱く、さらにこんなにも劣等感を抱きやすいと知ったのもショックだった。
仲間が強いなんて良いことじゃないか。そう思いたいが自分が弱いという事の方が気になるため、こんな気持ちを抱いてしまう自分も含めて絶賛悩み中だと順平が言い終われば、黙って話を聞いていたチドリは呆れたように溜息を溢しながらも言葉を返した。
「たかがゲームでそこまで落ち込める感覚が分からないけど、活躍出来てるなら別に気にする必要ないでしょ。レベルなんて分かり易い指標の一つであって、重要なのは実績とステータスでしょうし」
「い、いや、そりゃそうだけどさ」
「レベルが低ければやることが変わるの？　他の人はあなたの実力を信用して一緒にやってたんでしょ。なら、ここでうじうじするよりレベリングでもして差を縮める努力でもしてなさいよ」
あまりにもバッサリとした言い方に順平もしばしポカンとする。
けれど、確かに相手の言う通りだった。ここまで順平が仲間と一緒に戦って実績を残してきた事実は変わらない。
数字に惑わされていたが、それを言うなら討伐数で順平は他の者に勝っている。
何より、仲間たちは「お前は足手纏いだ」などと言ったことはなかった。
「そっか。そうだな。話聞いてくれてサンキュー！」
ここでうじうじしてても何も解決しない。男ならしゃんとしろと言われて順平は目が覚めた。
偶然会っただけだというのに相談に乗ってくれた少女に順平は礼を言うと、ベンチから立ち上がって晴れやかな表情で背伸びをしてか

ら、そういえばと少女に再び声をかけた。
「つか、そういや、チドリンは一人で何してんの？　わざわざ暑い中で絵なんか描いてさ」
「気持ち悪いから名前で呼ばないで。何してたってあなたに関係ないでしょ」
「いいじゃん、教えてくれよー」
「警察呼ぶわよ。十秒以内に視界から消えて」
　クラスが違うのであまり話す機会はないが、中学校時代からの知り合いではあるため、順平が仲良くしようぜと話しかけるもチドリは真顔で携帯を取りだした。
　この少女はやると言ったら本気でやる。それを雰囲気で感じ取った順平はスプリンターばりの走りでその場を後にした。
「……はぁ、見えないけどいるんでしょ？」
　人混みの中に消えてゆく順平の背中を見送った少女は、再び絵の続きを描き始めるとぽそりと呟いた。
　それは周りの人間には聞こえない程度の声だったが、誰も座っていなかった少女の隣に、突然帽子のような物を持った青年が姿を現す。
「よく分かったな」
「とっくに時間を過ぎてるもの」
　時計は既に一時十二分を指している。少女はここに一時で待ち合わせをしていたので、その時間になっても現われず、さらに連絡もないとくれば隠れているとしか思えなかったという訳だ。
　まぁ、偶然出会った順平が急に悩み相談など始めたので、青年は空気を読んで姿を晒さなかっただけだが、見事に見抜いた少女に青年は小さく笑い。帽子をマフラーに仕舞ってから立ち上がると、画材道具をまとめ終えた少女に手を差し出して立ち上がらせた。
「じゃあ、行こうか」
「行くってどこに？」
「チドリが行きたい場所でいい。なければこっちで決めるが」
「……じゃあ、靴が見たい」
　最近、湊は久慈川りせと柴田さやかのフェスの準備を進めたり、こ

ちらに戻ってきたアイギスの相手をしてばかりでチドリとはほとんど会っていなかった。
今日はその埋め合わせのようなもので、純粋に久しぶりに二人だけで出掛けることになっていたため、何の用事かと聞かれた際も答えずに順平を追い払ったという訳だ。
別に湊が桔梗組まで迎えに行くことも出来たし、移動時間を考えるとその方が良かったのだが、駅前に待ち合わせで良いと少女が強く推してきたという裏話もあったりする。
そんな経緯を経て無事に合流出来た二人は、少女のリクエストである靴を見に街中へと向かってゆくのだった。

深夜――アジト
影時間も終わり日付も変わった頃、複数あるアジトの中でも最も建物の状態の良い廃屋の中で、ストレガのメンバーたちはそれぞれの時間を過ごしていた。
電気は配線をいじって使えるようにしてあり、ジンは仕事の依頼を確認しつつパソコンと睨めっこ。カズキは自分の得物であるカットラスの刃を研ぎ、メノウは先月の収支の計算をしている。
そして、メンバーの中では年少組であるマリアとスミレは並んで寝転びながらテレビを眺め、リーダーであるタカヤは銃の手入れをしながらおもむろに口を開いた。
「……そろそろ満月になりますね」
愛銃を布で磨いていた彼は別に天体観測が趣味という訳ではない。
月や星空が綺麗だと感じるくらいの感性はあるけれど、彼が満月を気にするのは単純にここ最近になって月に一度やってくる来客を待っての事だった。
研究所時代からの付き合いであるメノウやカズキは相手が何を言いたいのか理解し、カレンダーを眺めながらおよそ一週間後だなと相槌を打つ。
「そうだね。また大型シャドウが出てくるはずだけど、そうなると桐条側のペルソナ使いも出てくるだろうね」

「影時間を消すために戦ってるンだったか？　はっ、テメェの持ってる力の一つを平気で捨てようなンて、恵まれたやつらは考える事が違うなァ」
　ストレガのメンバーは湊から黄昏の羽根を貰ったマリアを除き、全員が今も制御剤を服用して寿命を縮めている。
　別に好きで飲んでいる訳ではなく、そうしなければ己のペルソナに取り殺されてしまうというだけの話だ。
　長年飲み続けて身体が蝕まれていることは理解している。というよりも、既に自覚出来るほどに身体にダメージが蓄積しているため、精神的に幼いマリアには伝えていないが、メンバーたちは二、三年の内に自分が死ぬだろうと気付いていた。
　残り時間が少ないからこそ、ストレガは今という瞬間を生きることに命を燃やす。
　桐条グループによって無理矢理に目覚めさせられた能力だろうと自分の力だ。それを使ってある者は他の者の生の感情を観察し、ある者は生き残りを賭けて遊び、そうやって自分なりに命と向き合って生きている事を実感している。
　だというのに、桐条側のペルソナ使いは影時間を消そうとしている。自分たちの生きる目的の一つを奪おうとしている訳だ。
　そんな事は認められないとカズキが獰猛に口の端を吊り上げれば、タカヤは自分たちの敵となる者たちを思って嘲笑を浮かべた。
「言われたことをただ信じてやってきた者に、そこまでの考えなどありませんよ。何より、あの者たちがいなくても湊がいる時点で大型シャドウは討伐されます」
　湊がシャドウ狩りをしているのはストレガも知っている。というより、彼が留学している間は依頼を受けて代行していたくらいだ。
　どうして湊がシャドウを狩り続けているのか理由も聞いているが、一般人の被害を減らすという理由はあくまで他の者に話すとき用の理由だろう。
　実際はチドリたちが平和な世界で安心して暮らせるようにであり、それ故、湊が独自に調べて影時間を終わらせようとしている事もタカ

ヤは分かっていた。
「ですが、私たちもただ見ている訳にはいきません。十二体のシャドウを倒したところで影時間が消えないとしてもね」
言ってさらにタカヤは浮かべていた薄い笑みを深めて銃を仕舞う。
特別課外活動部は十二体のシャドウを倒して終わりだと考えているようだが、タカヤはその先の存在をある筋からの情報で知っていた。
全てのアルカナシャドウが倒された程度では影時間は終わらない。むしろ、全てのアルカナシャドウが倒されてようやく終焉が始まる。
他のメンバーにその事は詳しく話していないが、情報の裏が取れていないため話さなかったとでも言えば問題ないはず。
そんな事を考えて予備の弾丸の整理もしていれば、パソコンから顔を上げたジンがタカヤはどう動くつもりなのか尋ねてきた。
「ほんなら、タカヤはどないするつもりなんや？」
「そうですね……。人数から言ってあちらの戦力も整ったようですし、そろそろ第二幕へと進めましょう。不要な者は舞台から降りていただき、相応しい人物に舞台に上がって頂きます」
現在のストレガは六人。数の上では荒垣も復帰して九人になった特別課外活動部に負けている。
しかし、こちらにはスミレという巨大なペルソナを宿した特異な存在もおり、彼女のテュポーン一体で普通のペルソナ使い数人を相手出来るので戦力はほぼイーブンだろう。
「そういう訳で次の満月ではあちらと接触します。ミナトにも我々が会うことは伝えておくので心配は無用です」
「ふーん。けど、相応しい人物ってもしかしなくてもミナト君のことだよね？　ボク、絶対にミナト君と敵対したくないんだけど」
現状、湊は表立っては動いていない。桐条側に気を遣っているという感じはせず、ただ単純に桐条側に干渉されたくないから裏で動いている感じだ。
ただ、その湊を舞台に上げてストレガ、特別課外活動部、仮面舞踏会がそれぞれ動くようになれば、状況によってはストレガと仮面舞踏

会が衝突することもあるだろう。
戦う事を見越して事前に敵について調べておこうとは考えるものの、問題なのは仮面舞踏会の主戦力と言えるメンバーが不明な事だ。
主戦力を除けば裏界で最大規模を誇っていた〝久遠の安寧〟を傘下に収めているので、その時点で相手側には一国とやり合えるだけの潤沢な軍備と資金があると言える。
ただ、影時間に動ける者に限定すると話は変わってくるため、影時間での衝突を念頭に置いた作戦立案に向けては、一体どれだけのペルソナ使いが所属しているのだろうかというのが最大の焦点となった。
もっとも、〝あの〟湊と自分たちが戦う場面を想像しただけで顔を青くしたメノウは、実際に戦いになれば自分は遠くから情報支援するだけだからと消極的な姿勢を見せた。
「フフッ、別に構いませんよ。まぁ、どうしてあちらとの関わりを避けているのか不明ですが、どうせ知り合いなんです。いっそバラして自由に動いた方が彼も楽でしょう？」
本人が現状でも気にせず動いているというのに、タカヤは言葉の上では湊のことを考えているようで、実際は状況を引っかき回すことを楽しんでいる節がある。
もし、湊が本気でストレガを敵と認識すれば、ここにいる六人全員が無事に生き延びることは不可能だろう。
そもそも、彼に懐いているマリアが湊と敵対することはあり得ず、そのときは彼女だけ湊の方へ行ってしまいそうだが、そうなれば他のメンバーと違って普通に生きられる彼女を保護して貰えるのでストレガにとって損はない。
むしろ自分たちが死んだ後の少女の行く末を案じていたメノウにとっては、是非お願いしますと礼を言いたいくらいだ。
そして、マリアを除いた他のメンバーはタカヤとカズキは湊との殺し合いを昔から望んでおり、第一研出身でカズキと同じように戦闘狂に弄られているスミレも湊との戦いを楽しむだろう。
問題はアナライズが使えるジンと、アナライズに加えて索敵も行えるメノウだ。

二人は湊に助けられた恩があるだけでなく、彼の強さをハッキリと感じ取っているので、本気の彼と対峙した瞬間に殺される未来を理解している。
よりにもよって、重要な後方支援の二人が戦う前から心を折られているという訳だ。
青年が留学から帰ってきたときにタカヤとカズキは二人だけで湊に負けており、あれから二人も強くはなっているものの、青年の成長速度も読めないので、再びバックアップもなく戦えば同じ結末を迎える可能性は非常に高かった。
彼を舞台に上げると言った本人もそれを理解しているはずだが、理解した上で楽しんでいるようで笑いながら立ち上がった。
「さて、では少し連絡してきます」
「タカヤ、必要以上にミナト君のこと煽んないでよ？」
「勿論です。当日は我々が向かうので、ミナトは実家でゆっくりしておいてくださいと伝えますよ」
それだけ言うと彼は部屋を出て行った。
後に残ったメノウやジンなどストレガ内での常識人組は、どうしてわざわざ彼に実家にいろと伝えるのだろうかと思い。嫌な予感しかしなかった。
――ＥＰ社
夜も更けて世間が寝静まっている頃、ＳＳランク以上のＩＤという実質湊とソフィアのカードを使わなければ入ることの出来ない区画の一室で、湊は煙管を咥えながらパソコンの前に座り仕事をしていた。
風呂上がりなのか髪は下ろしており、痛々しい傷跡の残る上半身には衣服を身に着けていないが、その首にはチョーカーにネックレスなど多数の装飾品がつけられている。
ペルソナの宿るタロットカードを入れておくホルダーは別だが、後は全て青年の知り合いの少女たちとお揃いの物ばかり。
複数の女子とお揃いを着けているなら、逆に特別感が薄れてしまう気もするけれど、女子たちは自分だってお揃いの品を持っていると互

いに張り合っているため、青年の前でそういった話題が出ることはない。
　おかげで彼は自由に仕事や研究に勤しむことが出来るのだが、湊がキーボードを叩いていると机の上に置いていた携帯が光り、ディスプレイには青年の知り合いの名が表示されていた。
　時刻は既に深夜の三時を回っており、こんな迷惑な時間にかけてくる非常識なやつの相手などする必要は無いかと考える。
　だが、相手から連絡があることは珍しく、前に連絡が来たときには荒垣が制御剤を欲しがっているという話だったので、今回もそれなりに重要な話があるのかもしれない。
　面倒だなと思いつつも、そういった可能性があるのなら出ない訳にはいかないので、短く嘆息するとキーボードを片手で叩きながら渋々電話に出た。
「……時間を考えろ。お前と違ってこっちは学生であり社会人だ」
《どうもすみません。社会経験がないため一般常識には疎いのです》
　湊が嫌味を言いながら電話に出れば、それを利用してタカヤも笑いながら返してくる。
　言葉では謝っているものの、そこには一切の反省も遠慮も見られず、裏の仕事をしているせいで本当に一般常識が欠如しているのだなと諦め、話が長引くと面倒だからと湊の方から切り出した。
「それで何の用だ？」
《はい。実は次の満月に桐条側のペルソナ使いと接触しようと思っていまして、今回はそのご報告のために連絡しました》
　これまでストレガは特別課外活動部に対し偵察に留めて接触は控えてきた。
　別に会う理由がなかったというのもあるのかもしれないが、今回は相手と直接会ってみるようなので相手の事情も変わったのだろうと湊は推測する。
「あいつらと接触するからどうした。そんなのは勝手にすればいいだろ」
《まぁそうですが、それにあたってミナトには次の満月の戦いへの参

加を遠慮して頂きたいのです。色々と話し合うこともありますので、貴方はどうかご実家の方でチドリらとお過ごしください》
湊にすれば両者が接触しても構わないので勝手に会えばいいと返す。
けれど、タカヤは会っている間に邪魔をして欲しくないので、その間はチドリの暮らす桔梗組本部にでもいてくれと頼んできた。
チドリらの安全のため実家の場所など教えておらず、どうしてそこでチドリのいる実家が話に出てくるのだろうかと湊は気になる。
ただ、そういった違和感しか覚えない普段とは異なる対応のおかげで、相手が自分に実家にいて欲しいんだと気付いた湊は、チドリらに何かあるといけないので当日はタカヤの望み通りにしてやろうと考えた。
「……わかった。そのときは実家にいてやる。だが、チドリに何かあれば命はないと思え」
《ええ、分かっておりますとも。では、用件はそれだけなので失礼します》
流石のタカヤも真っ正面から湊に喧嘩を売るような事はしない。
そんな事をすれば裏界最大組織を単独で撃破した力が全て自分に向くのだ。
もはや、戦いを楽しむどころの問題ではなく、何秒間生き延びれるかという己の死が確定したチキンレースでしかない。
今を生きるを信条にしているタカヤも別に死にたい訳ではないので、青年の忠告をしっかりと受け止めると話はそれだけだと電話を切った。
通話を終えた湊は携帯を再び机に置くと仕事を再開するが、その丁度のタイミングで部屋の扉が開き、バスローブ姿のソフィアが現われて不思議そうに湊を見ながら近付いてくる。
「いま、どなたかとお話されていましたか？」
「……知り合いから電話があった。だが、仕事には関係ないから気にするな」
一人しかいないはずなのに話し声が聞こえたことで不思議に思っ

ていたようだが、電話をしていたと分かるとソフィアは納得した顔で頷いた。
話し声の理由が分かった彼女は、そのまま進路を壁際に置かれた小さな冷蔵庫に変更する。到着すると中からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、コクコクと小さく喉を鳴らして飲みながら湊の許にやってきた。
「湊様も飲まれますか？」
「いや、煙管で水分補給は出来てる」
言いながら湊は咥えていた煙管を片手で持ち、器用にペン回しのような事をしてみせる。
それを眺めていたソフィアは上手い物だと感心したようだが、入浴前の激しい運動とお風呂でも汗を掻いたことで失った水分を補給するべくペットボトルの水を飲みきった。
空になったペットボトルは湊が受け取って潰してからゴミ箱に放り込み、綺麗な放物線を描いてゴミ箱に入る様を見届けたソフィアは、両手が空いたことで座っている湊に後ろから抱きつくような形で首に腕回して甘えた声で話しかけた。
「急ぎの仕事はないのですから、湊様も今はゆっくりと休まれてはどうですか？」
「確かに急ぎの仕事ではないが、いつも余裕がある訳じゃない。早めに済ませるに越したことはないだろ」
後ろから回されたソフィアの腕に触れつつ、湊は普段から余裕を持っておくために空き時間に仕事をしているんだと説明する。
次の満月は一週間後に控えており、何やらストレガの方も動きを見せるらしい。
そうなるとそれぞれの組織がどのように動くのか予測が難しくなるため、そちらでトラブルの対応に追われることになろうが、仕事に穴を開けずに済むよう今から備えているという訳だ。
だが、その事を理解していながらソフィアは敢えて湊に休むべきだと進言する。
「湊様、今日はもうお休みになった方がよろしいかと。今やるよりも

一休みしてからの方が仕事もはかどります」
「……自分が寝たいだけだろうに」
湊の身体を気遣って言っているように見えて、実際は自分が疲れているのでもう寝たいだけ。
ソフィアの言葉をそのように取った湊は、小さく溜息を吐いてからパソコンを待機モードにして席を立ち、椅子の後ろにいたソフィアをお姫様抱っこで抱き上げてから寝室へと向かう。
抱き上げられた少女は嬉しそうに湊の首に腕を回し、彼の首に自分の唇を触れさせているが、青年は相手の行動など全く気にせず部屋を出て、すぐ近くの寝室の中へと入る。
ここはＳＳランク以上のＩＤを持つ者しか入れない区画だが、実際はソフィアが日本に来たときに生活するスペースで、ここに滞在しているときは二人は頻繁に肌を重ねている。
以前は運動音痴だったソフィアも、湊の相手をするには体力が必要だからと地道な筋トレや体力トレーニングをするようになり、遺伝子操作をしていることもあって今では並みの人間より動けるほどに成長した。
だが、そうやって体力がついてくると、好きな事に傾倒しやすい彼女は湊との行為に余計に嵌まってしまい。せっかく風呂で身体を綺麗にしたというのに、もう一度やろうとゆっくり下ろされたままベッドに彼を誘った
「湊様、まだご満足出来ていないのでしょう？　わたくしも休憩したことで回復いたしましたし、どうかお好きなようになさってください」
「……いや、今日はもうやめとけ」
誘われた湊はそれに乗るかと思いきや、蒼い瞳で相手を見ながら少女の頭の辺りで指を一閃してから隣に寝転んだ。
「もう、そういった鎮め方は情緒がありませんわ」
「盛った女が情緒を語るな」
彼が指を一閃するまでは身体の火照りと疼きを感じていたというのに、その欲求を魔眼で殺されたことでソフィアは素面に戻ってしま

う。
　別にもう一度身体や気分をそういった状態に持っていけば同じように出来るが、急に素面に戻ったことで不満そうにしている彼女は、寝転んだ湊の太い腕を枕にしながら同じように寝転がると、彼の傷跡に指先で触れながら話しかける。
「もうすぐ満月ですわね。準備は進んでおりますか？」
「最初から準備はそう必要ない。ただ、ストレガの方で動きがあった。俺まで巻き込んで何かするつもりらしい」
　あのタカヤが裏で糸を引こうとしているのだ。どうせろくでもない事に違いない。
　しかし、完全に無視していると後で厄介なことになりそうなので、湊としては警戒しながら変化してゆく状況に対処してゆくしかない。
　ただでさえ忙しい時期だというのに余計な手間をかけさせられ、とても面倒臭そうにその事を話す湊の顔を見たソフィアは、思わず可愛いと感じてしまい青年の頬に優しく口づけを落とすと、彼の頭を豊かな胸に抱き寄せて優しく撫でながら言葉をかける。
「湊様、どうかお気を付けくださいませ。貴方も死なない訳ではないのですから」
　内臓が吹き飛ぶほどの大怪我からでも蘇生可能だとは言え、湊だって頭を吹き飛ばされたり生命力が枯渇すれば死ぬ。
　本人も頭ではそれを理解しているのだろうが、有事の際は自分のことを後回しにしてしまう傾向があるため、無駄だとは分かっていても少女は青年に改めて自分を大切にするよう伝えたのだ。
　そのまま少女が青年の頭を撫で続ければ少しして彼の寝息を聞こえ、やはり何だかんだ言っても疲れているのだなと少女は困った顔を浮かべながら自分も眠りについた。

第二百四十一話　顔合わせ

8月6日（木）
午後――桔梗組

夏休みに入って初めての満月の日、湊は美紀だけでなくラビリスやコロマルも連れて桔梗組にやって来ていた。

今のところ巌戸台周辺にしかシャドウは確認されていないので、影時間の適性しか持っていない美紀を保護するのであれば、隣の市にある桔梗組でペルソナ使いに守られている方が安全だろう。

とはいえ、今は夏休み真っ最中。美紀と一緒にラビリスとコロマルを連れて湊が現われれば、家人の桜にしてみれば子どもが友達を連れて帰省してきたような感覚であった。

お昼を食べてから女子三人は夏休みの宿題を一緒に進め、湊だけはパソコンと向き合って仕事をしていたが、三時頃になると桜が休憩がてらオヤツしましょうと冷えたスイカを持ってきた。

「切り方はどうする？　大きく食べたい人もいれば小さく何個も食べる人もいると思って、こうやって切らずに玉のまま持ってきたんだけど」

「ほわぁ、めっちゃ大きなスイカやね。これ桜さんが作りはったん？」

「いいえ。近所の農家さんが毎年くださるの」

桔梗組の敷地内には桜が趣味でやっている家庭菜園がある。本格的に農業をしている訳ではなく、トマトやキュウリを作っているくらいだが、チドリも手伝っているので家族が食べるには十分な量が作られていたりする。

ラビリスも株を分けてもらってバルコニーのプランターでトマト栽培しているため、スイカまで作っているならすごいなと思った訳だが、流石にこんな立派なものは作れないと桜は苦笑し、バスケットボールより一回り大きなスイカの切り方についてラビリスが意見を出した。

「あ、ウチあれやってみたい。スイカ割りってやつ」

「確かに夏らしいイベントではありますが、叩き割る訳ですから食べ

づらいと思いますよ？」
「……別に余れば湊が食べるだけだし、ブルーシートもあるからやりたければやれば？」
ラビリスにとって夏は今年で二回目。封印凍結から復活したのは三年前の秋だったので、高校に入ってからしか夏は体験していないのだ。
よって、彼女はまだ夏のイベントをあまり体験しておらず、こういった機会でもなければ出来ないからとスイカ割りをしたがった。
それを聞いた彼女の友人たちは、経験のある美紀が楽しくはあるが食べづらさという問題点があることを指摘し、この家で暮らしているチドリが面倒は湊に押しつけブルーシートを敷いてやってみればいいと答えた。
チドリの発言に湊は白けた表情になるも、子供たちに切り分けてあげるつもりだった桜が苦笑しながらブルーシートを取りに向かったことで、急遽スイカ割り大会の開催が決定した。
桜が戻ってくるまでの間、ラビリスはスイカを撫でて楽しそうに待っており、縁側で伏せ状態で休んでいたコロマルも興味を示している。
すると、三分ほど経ってから桜がブルーシートと木刀、それと目隠し用の手拭いを持ってきたことで、受け取ったラビリスはすぐにブルーシートを広げて準備を完了させた。
ブルーシートの上にスイカを置く際、湊がこれを使えと八百屋にもある転がり防止用の輪っかを出してきたけれど、他の者にすればどうしてそんな用途が限定的な物を持っているんだと疑問が湧く。
しかし、輪っかを置いたことでスイカが逃げなくなるので、スイカ割り初体験のラビリスも楽しめるだろうと他の者は何も言わなかった。
「では、ラビリスさんは目隠しを付けてください」
「うん、いいで！」
「……その場でグルグルと十回くらいまわったらスタートしていいわよ」

タンクトップに七分丈のパンツという夏らしい格好をしたラビリスは、庭にサンダルで降りるとスイカから五メートルほど離れチドリたちに言われた通りに目隠しをして十回まわった。
十回まわった程度で彼女は目を回したりはしないが、それでも最初はスイカに対して正面から向き合っていたというのに、やや斜めにずれた状態で歩き始めてしまう。
ここからは周りの人間が協力して彼女を誘導するのだが、他の者が口を開くよりも先に外道が言葉を発した。
「……逆だ。百八十度まわれ」
「ほえ？　そんなずれとる？」
湊に言われて少女は素直に百八十度回転する。それではスイカに背を向けることになり、もっと言えば彼女の向かう先には鵜飼の育てている盆栽しかない。
青年の狙いに気付いたチドリはあくどい表情で口の端を吊り上げ、逆にそれは拙いのではと思った美紀が焦ったようにラビリスの向きを修正する。
「あ、ラビリスさんダメです。そっちは反対で盆栽があります」
「え、どういう事？　湊君が言ってたんてこっち向きやろ？」
「は、はい。まぁ、それが盆栽の方向だったといいますか……」
「……湊君、あとで話があるわ」
楽しくスイカ割りをしようとしている人間に何を割らせようとしているのか。今は目隠しを外せないので、終わったら待っていろよと普段より低いトーンで告げてラビリスは向きを修正する。
美紀がもっと右だと言えば、チドリがそのまま後三メートルと声をかける。
一歩一歩の歩みは遅くとも、仲間の協力によって彼女が着実にスイカまで近付けば、あともう少しというタイミングで湊が声をあげた。
「そのまま正面に振り下ろせ」
「うりゃー!!」
頭上まで振り上げられた木刀は、気合いと共に一気に振り下ろされる。

上手く割ろうとは思わない。ただ、当たってくれればそれでいい。
そんな思いで振り下ろされた木刀は、スイカの五十センチ手前の地面を強く叩き、木刀を伝って返ってきた衝撃が少女の手を強く痺れさせた。
返ってきた衝撃にラビリスは「うぐー」と唸りしばらく止まっていたが、少しすると復活したのか目隠しを取って状況を把握するなり湊を睨んだ。
「あーもう！　全然、まだ届いてないやないの！　誰や振り下ろせ言うたんは！」
「……犬、ダメだろ」
「アンタや！　てか、コロマルさんは人の言葉話せへんから！」
急に責任転嫁されたコロマルは驚いた顔で湊を見た。けれど、そんな訳あるかとラビリスは木刀を槍投げのように投擲し、湊が片手で軽くキャッチしたことで選手交代する。
怒りながら戻ってきたラビリスはサンダルを履いている湊に目隠しをし、立ち上がった瞬間に背中を蹴っ飛ばして送り出す。
一般人がそんな事をされればすぐに転倒してしまうが、青年は蹴られたときは蹌踉けかけたけれどすぐに普通に歩き出し、スタスタとラビリスのスタートポジションに到着した。
「ちゃんと十回まわりーや」
人の思い出作りを潰したのだから同じルールで自分も仕返しをしようとラビリスは考える。
言われた青年は大人しく従って十回まわったが、ラビリスと違ってしっかりスイカの正面をキープしており、どんな指示をすれば嘘だとバレづらいだろうかと思案する。
彼に対してはチドリも悪戯の仕掛けるはずなので、問題は優しくて真面目な美紀だけとなり、ラビリスは先手を打って美紀の肩を叩いて呼ぶと口に人差し指を当て「静かに」とジェスチャーで報せた。
直前のこともあって理解してくれた美紀は頷いて返し、さぁ、これで復讐の準備は整ったとラビリスはチドリとアイコンタクトをしてから指示を飛ばす。

「湊君、もうちょい右や。十二度くらい右にずれてー」
彼女の指示を聞けば湊はスイカの横を素通りして地面を叩くことになる。
距離が足りないよりも、すぐ傍を素通りしている方が格好悪く見えるので、そういった方向で彼を誘導してやろうと思えば、湊は突きの構えを取って駆け出し、他の者が驚いている目の前で目隠ししたままスイカを貫いた。
割るでも砕くでもなく、木刀がスイカを貫通している絵面はかなりシュールだ。
技術的なことを言えば、刃物と違って太くて丸い木刀の最も尖っている部分を高速で突き出して、切れ味として不足している部分を補ったのだろうが、たかがスイカ割りでそんな高度な技を見せてどうするというのが正直な感想だろう。
あまりの驚きにしばし呆けていたラビリスは、誰の指示も聞かずに的確にスイカに到達したのはどういう理由だと、一仕事終えて目隠しを外していた青年に問いかけた。
「湊君、なんでスイカの場所分かったん？」
「……最初に距離と方向を頭に叩き込んでいたからな。仮にそうしてなくてもペルソナの力で周囲の状況は視える。まぁ、どっかの馬鹿は人を無関係の方向に誘導しようとしていたみたいだが」
フッと鼻で笑った湊はそのまま木刀を引き抜くと果汁を払って美紀に手渡した。どうやらまだ出来るから次にやればいいという事らしい。
そも、湊は一時期完全に両目を覆った状態で生活していたのだ。物までの距離は片目での生活だからこそ逆に敏感に感じ取るようになっているし、最初にスイカの位置を頭に叩き込んでからの作業など文字通り目を瞑っていても出来る。
この場でその事を知っているのは、両目を覆っていた時期があると知っているチドリくらいだが、分かっていたとしても狡いとは思うようで、戻ってきて仕事を再開した湊は放置し、他の者たちは貫通痕の残ったスイカを割ろうと張り切って臨んだ。

影時間――巌戸台分寮

ついに満月の日がやってきた。新たに増えたメンバーではアイギス、天田、荒垣がアルカナシャドウとの初戦闘ということでこれまでの戦いを事前に伝えていたが、やはり天田に関しては準備不足が否めず、今回は後方でのサポートメインでの起用となる。

本人はその事を不服そうにしていたけれど、少しの油断で簡単に死んでしまうのだ。一人が死ねば他の者にも影響を及ぼし、それだけでラインが崩れて全滅もあり得る。

それをしっかりと話せば渋々ながら理解してくれたため、一同は巌戸台周辺の地図が表示されたモニターを見つめ美鶴から目的地の説明を受ける。

「今回、山岸が敵の反応を感じたのは巌戸台の北、湾岸部と呼ばれる場所だ。この辺りは国の手があまり入らず放置されているが、資料によると旧陸軍の基地や実験施設と思われる遺跡がある」

「放置された軍の施設って、もし兵器が残ってたらシャドウに乗っ取られてるかもってことッスか？」

「ああ。保存状態も不明なのでなんとも言えないが、仮に使える状態にされていればこれまでより危険と言えるだろう」

不安そうな顔で順平が尋ねれば、美鶴も普段より深刻そうな顔をして頷く。

無気力症の被害者数から考えれば、今回のアルカナシャドウの数は二体。風花によれば反応は一つしか感じないらしいが、一カ所に固まっている可能性もあるため、詳細は現地で改めて見ないと分からないらしい。

旧陸軍の兵器の威力は分からないが、それらを一体ないし二体のシャドウが使ってくるなら、七歌たちもかなり防御をメインに考えた布陣で挑むことになる。

施設内の地図があれば良かったのだが、敵の出現ポイントは被害者の多い地域という数キロ範囲でしか絞れないので、今回も敵が現われて初めて施設にいると分かっただけで地図を手に入れる時間はなかった。

施設内部の詳細も分からず、敵が旧式とはいえ近代兵器を所持している可能性が挙がり、メンバーたちは普段よりも緊張した様子を見せるが、そんな子供たちの不安を感じ取った幾月が微笑みを浮かべて口を開いた。
「地理的な話をすればあの辺りは大戦中に戦闘が行なわれた場所じゃない。まぁ、空爆くらいはあったかもしれないけど、敵が攻めてきたときの最後の砦って訳じゃないからね。施設の中じゃ実用性を重視してそう複雑な構造にはなっていないと思うよ」
これが疎開した者たちが隠れるための大型防空壕であったら大変だが、そういった用途で作られた場所ではないため、今は使えずとも電気や水道もある比較的近代的な造りになっていると思われた。
それだけで迷う心配等は軽減し、幾月の心遣いを感じたメンバーたちも少しは余裕を持てるようになったようで、リーダーの七歌が強い瞳で他の者を見渡して号令をかける。
「よっし！　それじゃあ皆行こうか。向こうについたら風花が中を調べて、それを基に作戦の詳細を決めるってことで！」
「了解しました。レッツラゴーであります」
「アイちゃん、それどこで覚えたのよ……」
ビシッと敬礼して答えたアイギスに、その言葉はもはや死語だぞと順平が教える。
彼女の言語インターフェースを開発した者の中にオヤジが混じっていたからこその言動なのかもしれないが、アイギスと順平のやり取りに他の者は笑ってしまい。最初の頃のガチガチ感が嘘のようにリラックスして現場へと向かっていった。
＊＊＊
寮を離れて随分と歩くと目的地に近付いて来た。傍には雑草の生い茂った斜面と切り立った崖があり、さらに少し視線をずらすと空に輝く大きな満月に照らされて赤い海が広がっているのが見える。
その様はこの世のものとは思えないけれど、全てとは言わないがこの世界では透明な水はほぼ血のような色になるらしく、最初は薄気味悪く思っていたゆかりと風花もいい顔はしないが以前ほどは気にし

ていないらしい。
他よりも雑草の少ない砂利道を進み。そうしてようやく拓けた場所に出たと思って正面に視線を向けると、大きな鉄の扉の前に立っている者たちがいた。
今は影時間だ。この時間に普通の人間がいるはずがない。いや、仮に迷い込んだならいてもおかしくはないが、混乱した様子もなく平然と立っているなどあり得なかった。
先頭を歩いていた順平は思わず足を止め、他の者たちも順平と並ぶようにその場で足を止めて扉の前にいる者たちと対峙する。
相手の人数は三人。一人は上半身裸の男、一人はアタッシュケースを持った眼鏡の男、そして一人はいつか湊と一緒にいた金髪の少女だった。
彼らは一体ここで何をしているのか。そんな疑問を持った美鶴が口を開こうとすれば、それよりも先に半裸の男が話しかけてきた。
「どうもこんばんは。はじめまして、と言うべきですかね」
顔色の悪さもあって男が薄い笑みを浮かべてくると不気味に感じる。
しかし、相手がちゃんとコミュニケーションを取ろうとしてきたのならば、こちらもそれに応じない訳にはいかないだろう。
明らかに警戒している真田や順平を手で制して、一歩前に出ると美鶴が言葉を返した。
「君たちは一体誰だ。ここで何をしている？」
「私の名はタカヤ。こちらはジンとマリアです。一応、ストレガという名でも呼ばれていますが、一体誰かと聞かれれば、桐条の実験で無理矢理にペルソナを覚醒させられた者と答えた方が分かり易いですか？」
その言葉に一同は動揺する。中でも美鶴は目を見開き言葉を失っており、彼女の様子が尋常ではないことから何かしらの事情を知っていると察する事が出来る。
だが、今はペルソナ使いとばらしてきた者の相手をしなければならないため、いつでも対処出来るようナックルを装着した拳を握り締め

ながら真田が美鶴の前に立つ。
　すると、そんな真田たちの警戒した様子を楽しそうに見ていたタカヤが、もう一つの質問にも答えてやると口を開いた。
「ここで何をしているという質問にも答えましょう。実はあなた方の活動はずっと見ていました。そして、今日はこれまで楽しませていただいた礼に挨拶をしに来たのです」
「ただ挨拶をしに来たのか？　それとも、その扉の奥にいる存在を倒す手伝いでもしに来たのか？」
　タカヤたちの背後にある大きな鉄の扉。今日の敵はその奥にいることが分かっている。
　もしも邪魔をしてくるのなら、その前にお前たちを倒すぞと鋭い視線で睨んでくる真田に、タカヤはなんとも予想通りの反応だと少し小馬鹿にした様子で返した。
「残念ながらその逆です。我々は影時間が消えることを望んでいない。影時間の消滅はペルソナの消失を招く恐れがあるのです。無理矢理に目覚めさせられたとしても、自分の力には変わりありませんからね。失うことを拒むのは当然でしょう？」
「なら、お前らは俺たちと戦うという事だな」
「なに焦っとんねん。話は最後まで聞けや」
　ボクシングの構えを取った真田に対し、ジンがはやるなと言いつつ自分も何やらボール状の物を取り出した。
　ここにいるメンバーはボクシングをしている真田、フェンシングをしている美鶴、喧嘩慣れしている荒垣、そして武術を習っていた七歌を除き、他は全員が対人戦に慣れていない。
　ロボット三原則に縛られていたはずのアイギスは不明だが、既に人間になっている以上は問題なく戦えると思われるが、対人戦闘になったときの事を考えて七歌は様子をみる。
　ジンに言われて真田も動かなかったことで、まだ話をする余裕があると判断したのか、ジッとメンバーらを観察していたタカヤは再び美鶴に話しかけた。
「桐条グループのご令嬢であるあなたはどう思いますか？　こうやっ

て〝被害者〟が力を奪わないでくれと言っているのに、そんな事は知らないと再び〝自分たち〟のエゴを押しつけるのですか？」
「っ、それは……」
当時のことに美鶴は関係なかった。実験を止められる立場にはいなかったし、自分の知らないところで実験が行なわれていたと知ったのも全てが終わってからだ。
だが、彼女は自分も同じ桐条で罪があると考えている。そんな彼女にすれば加害者である自分たちの意見を被害者に押しつける事は出来ない。
そんな彼女の弱みを突いたタカヤの厭らしい考えを看破していた荒垣は、美鶴を下がらせると相手を睨みながら質問に質問で返す。
「テメェらこそどうなんだ。今もシャドウの被害者は増えてる。大型シャドウを放っておけば被害は増える一方だ。それでも構わねぇってのか？」
「それを我々に言うのは筋違いでしょう。シャドウが現われるようになったのも、今なお被害者が増え続けているのも、全てそこにいるご令嬢らの父親たちのせいなのですから」
自分たちは力を失いたくないだけ。被害が増えようと桐条グループの実験が原因なのだから責められる謂われはない。
そう告げたタカヤは〝父親たち〟と口にしたとき、美鶴とゆかりを見ていた。
二人の父親は実験に参加していた。タカヤたち人工ペルソナ使いの研究は死んだ岳羽詠一朗は無関係だが、今のこの状況を作り出した元凶には間違いない。
相手がどれだけメンバーらの素性を知っているのかは不明だが、影時間に関わることに対してかなりの情報を持っている事は確かだ。
そうして、再びメンバーらが警戒して武器を手にしようとしたとき、話は変わるが、と急にタカヤは真田に話しかけた。
「ああ、それよりあなたはここにいて良いのですか？」
「……何の話だ」
ここにいて良いのかと聞かれても、アルカナシャドウは彼らの背後

にある扉の先にいるのだから目的地はここでしかない。
まぁ、早く奥に行って倒さなければならないという意味ならば分かるが、それなら扉の前を開けろとしか言えないため、そういった話ではないのだろう。
そして、真田が分かり易く簡潔に話せと言えば、タカヤは顎に手を当てて目を細めながら薄く笑った。
「なるほど、どうやら知らないのですね。妹さんが今どこにいるのかも」
「お前、美紀に何かしたのかっ!!」
妹の存在を知られている事も驚きだが、それよりも妹に何かしたのかと頭に血が昇った真田は掴みかかりに行こうとする。
だが、その瞬間、今までぽけーっと立っていただけのマリアがナイフを持ち、真田や七歌を上回る俊敏さでタカヤたちの前に出たことで、真田も思わず足を止めて一定の距離を維持しながら敵を睨み付ける。
今の彼女の瞳には野生の獣のような鋭さがあり、近付けば切るという無言の圧力がある。
仮にジンとタカヤだけだったならすぐに戦闘に突入していただろうが、身体能力に関しては元シャドウ兵器の姉妹を除きトップランクのマリアがいたことで、真田や特別課外活動部のメンバーも簡単には手が出せなくなった。
おかげでもう少し話をする猶予が出来たので、考え無しに突っ込もうとしてきた真田に呆れた顔をしたジンが言葉を返した。
「アホか、わしらは何もしとらんわ。ただ、ある男によって連れてかれとるって話や」
「そのご様子だと妹さんが影時間の適性を持っていることも知らなかったようですね」
真田がペルソナに目覚めた以上、妹の美紀も高い適性があっておかしくない。
全生徒の適性値を見ることが出来た美鶴は知っていたはずだが、美鶴も桐条グループも〝ペルソナに目覚める〟だけの数値があるかを

見ていたので、ペルソナに目覚めずとも影時間の適性を得る可能性がある生徒の把握を怠っていた。
だが、そんなグループの人間でも気付いていなかった情報を、どうしてストレガたちが知っているのかと疑問を持ったとき、タカヤは酷く愉しそうな顔で美紀の居場所を口にした。
「まぁ良いでしょう。今、あなたの妹さんは桔梗組という極道の屋敷にいます。妹さんをそこへ連れて行ったのは裏の世界で死神と怖れられた存在。たった一人で二万人以上殺し、間接的な被害を含めれば十万人以上殺した裏界最凶の殺人者。こちらでは仮面舞踏会の小狼と呼ばれていますが、またの名を有里湊とっ」
最後まで言い切る直前、その場に一発の銃声が響いた。
放たれた銃弾はタカヤとジンの間を通り、鉄の扉に当たって、カンッ、と寂しげな音を鳴らす。
突然のことにその場の全員が一人の少女を見るが、拳銃を手にした金髪碧眼の少女は普段からは考えられないほど冷たい瞳でタカヤを見つめている。
「あの方を殺人者と呼ぶことは赦しません」
「……なるほど、事情を知っている者もいたのですね。ですが、それなら話は早い」
相手側にも事情を知っている者がいるのなら真偽を問うまでもない。
そんな風に笑ったタカヤが片手を上げれば、その時、その場に影が落ち、すぐに空から巨大なペルソナが降ってきて突風を巻き起こした。
「くっ」
「きゃあっ」
くすんだ赤髪に黒い肌、全長三十メートルを超す巨大な体躯、蛇の尾のような足を持ち、その背中からは蛇を編んで出来たような異形の翼が生えている。
そんな訳の分からぬ急に現われた敵の発生させた風のせいで七歌

たちは動けない。
その間にタカヤたちはペルソナに乗って空に向かうが、去る前にジンが持っていたボール型の手榴弾を落として鉄の扉をひしゃげさせていった。
「ははっ、せいぜい頑張って取り戻すといい。あの純粋なる殺人鬼と対峙出来るのなら！」
影時間の空にタカヤの声が響く。飛び上がった大型のペルソナは街の方へと消えていき、そのまま見えない角度に入ったようで肉眼では行方が分からなくなった。
まさかの伏兵登場によってタカヤたちの去って行った方角を見つめていた七歌は、風花に相手の行方を調べるよう指示すると、動けるようになってすぐに扉の状態を確認した。
手榴弾は野球ボールほどのサイズながら中々の威力をしており、扉を歪ませてしまっている。
もっと威力が高ければ扉は倒れていたかもしれないし、威力が低ければ表面を焦がして終わりだっただろう。
歪んだせいで開かなくなったことを思えば、相手は威力を計算していたのかもしれない。同じように扉を調べていた美鶴も悔しそうな顔をしていた。
「クッ、扉が歪んで開かないっ」
「ペルソナで無理矢理壊せないんですか？」
「その場合、入り口付近の崩落の危険性があります。重機を使って慎重に撤去することを推奨します」
美鶴に尋ねたのは槍を持った天田だ。彼はペルソナのスキルなら扉を破壊出来ると思っていた。
超常の存在であるペルソナのスキルを使えば、確かに彼の言う通り巨大な鉄の扉を破壊する事も可能かもしれない。
だが、その場合、扉の周りまで衝撃が伝わってしまい。入り口自体が壊れるかもしれないとアイギスが止めた。
この向こうに倒すべき敵がいるというのに、影時間が明けて業者を手配しなければ手が出せない。完全にストレガの掌で踊らされたと

他の者も悔しがっていれば、ここで何も出来ることがないと分かった瞬間真田が叫んだ。
「シャドウなんて後回しでいい。美鶴、今すぐに車を用意してくれ！
美紀が！」
そう。何も出来ないならここにいる意味は無い。
それよりも、三十メートル超す巨大ペルソナを擁したストレガをして最凶と言わしめた男、自分たちの知らない顔を持った有里湊という青年の許へ行かねばならない。
桐条グループには黄昏の羽根を積んだ車が何台かあるため、すぐにそれを手配するよう頼み、真田は車が来られる場所まで急いで戻るぞと駆け出した。
――巌戸台分寮
《そういう訳で理事長、全員が乗れるサイズの車を回させてください》
「ああ、分かった。色々と驚きの連続だが、そういう事ならシャドウは後回しでいい。どうか気をつけてくれ」
《はい。では、失礼します》
美鶴たちの持っている通信機からでは桐条グループまで連絡する事が出来ない。
それ故、寮に残っている幾月に中継して貰い。美鶴たちのいる場所まで大型車をすぐに手配した。
彼女たちのいる場所を考えると七分ほどで到着するはず。そこから桔梗組まではかなり飛ばしても二十分はかかると思うが、ついに彼と特別課外活動部のメンバーたちが邂逅するかと思うと幾月の口元には笑みが浮かんだ。
あれが裏の世界で人殺しをしていると聞いたときには驚いたものだが、ポートアイランドインパクトからどうにか立て直したエルゴ研の生き残りを殺したのだ。それくらいはやっていても不思議ではない。
だが、表の顔である有里湊を知る者たちと会ったとき、お互いにどういった反応をするのか興味を抱いていると、
「話は終わったかァ？」

開いていた作戦室の扉に寄りかかり、わざわざ手の甲を使ってノックしながら一人の青年が声をかけてきた。
ダボダボのパーカーにカーゴパンツ、服装だけで言えば少し前のヒップホッパーのようだが、相手の腰には召喚器とカットラスが下げられ、ニヤリと笑って部屋の中に入ってくるとモニターなどの装置を興味深そうに眺めている。
「君は……」
「ははっ、ンだしけたその面は。九年ぶりの再会なンだ。もっと喜ンだって良いンだぜ？」
突然現われた招かれざる客に幾月は動揺し後退る。
逃げたところでその後ろには壁と窓くらいしかないが、研究所以来だなと愉しそうに笑ったカズキはカットラスを抜いて幾月に向けた。
「うちのリーダーから直々に命令されてなァ。積もる話もあンだろうが、とりあえず死ンでくれや」
一瞬で距離を詰め、振るわれるカットラス。
切られた幾月の身体から鮮血が舞い。作戦室の壁と床を汚した。

第二百四十二話　月下の戦い

影時間――巌戸台分寮

巌戸台分寮の裏にある駐車場、普段はほとんど使われる事はないが、寮がまだホテルだった時代から存在するものだ。

その入り口にはストレガの構成員であるカズキが面倒臭そうに立っており、彼は駐車場の中央で燃えている炎を見ながら通信機に話しかける。

「おう、終わったぞ。今、裏の駐車場で死体焼いてるとこだ」

《ご苦労様です。こちらも上手くミナトの方へ誘導出来ました》

特別課外活動部のメンバーを湊の方へ誘導する際、どうすれば効果的に相手を敵として見てもらえるかをタカヤは考えていた。

メンバーたちのプロフィールについては事前に入手しており、男子メンバーと湊は付き合いはあっても仲が良いとは言い難かった。

今回はそれを利用することで彼らを湊の許へ送り出せたが、実際、彼らが戦闘になるかどうかは微妙なところだ。

現在、湊と一緒にチドリやラビリスもいるので、彼女たちが彼を止めれば戦闘は起きない。仮に彼女たちが止めなくても、特別課外活動部のメンバーが真田を止めれば湊も何もしないだろう。

「ンなことやって意味あンのか？」

《さぁ？　ですが、これでミナトも自由に活動出来ます。彼が出てきた方が愉しめることは間違いないので、両者が戦うかどうかはついでに過ぎません》

「ハッ、もう何もねェならオレは戻るぞ」

《ええ、では指定していた場所で》

意味があるか分からないことのために相手を煽ったのかと聞かれ、タカヤは湊を表に引き出すことが目的だったと語る。

そんなことなど気にせず、時期が来れば彼に戦いを挑めば良かっただろうとカズキは思ったが、もしこれで湊に特別課外活動部という枷が出来れば相手をしやすくなる。

既にチドリという弱みを抱えているので、さらに増えれば彼に勝つ

手段も増えるだろう。
そう考えれば悪い策とは言えず、自分が済ませたばかりの仕事の結果を聞いた敵の反応も含め、これから少しは面白くなりそうだと口元を歪めてその場を後にした。
――六徳市
幾月からの連絡を受けて七歌たちを迎えに行ったマイクロバスは、現在田舎道を走って港区から内陸側に向かった場所に位置する六徳市にいた。
桔梗組があるのがこの市なのだが、バスの中の雰囲気は暗い。
妹が極道の家に連れて行かれていると聞いた真田は荒垣と共に先頭に座り苛ついた様子で拳を握り締めているし、湊が人殺しだと聞いた順平や天田はその後ろで状況が飲み込めず困惑している。
彼の事情を少しは知っているゆかりや美鶴は通路を挟んだ反対側に座りただ黙っており、二人の後ろの列に風花と並んで座る七歌は何を思っているのか首から下げて服の中に入れているネックレスを握り締めていた。
だが、もう少しすれば目的地に到着するということで、相手側の情報を少しでも得ようと考えた真田が湊への敵意を剥き出しにしたまま七歌たちの後ろに座っていたアイギスに話しかけた。
「おい、アイギス。お前、何故有里のことを俺たちに黙っていた？」
「わたしは皆さんがあの方と知り合いだとは知りませんでした。知らないことは話しようがありません」
アイギスが湊たちの家に来たとき、来訪した美鶴とは会っているが、他の者までが彼と知り合いとは聞いていなかった。
訓練したときに出会った赫夜から湊と七歌が親戚であることも聞いてはいたが、だからといって寮生全員と面識があるとは考えないので、聞かれていないことをベラベラ話す必要は無いはずだとアイギスは返す。
それを聞いた真田は事実だというのに余計に苛ついた様子を見せ、今度は話を聞いたときに他の者と僅かに違った反応を見せていた美鶴に質問をぶつけた。

「美鶴、お前は学生の適性値を知っていたはずだ。なら、美紀に適性があることも、有里がペルソナ使いだという可能性にも気付いていたんじゃないのか？」
「……美紀に関しては確認不足だった。だが、有里については気付いていたし、ペルソナ使いだとも知っていた」
「なら、どうして言わなかった!?」
　彼の周辺にいる者たちは適性が上がりやすい傾向にあった。そのせいで美紀もただ適性が高くなっているだけだと認識され、しかし、ゆかりや風花のようにペルソナを獲得するほどではないと見逃された。
　彼女が適性に目覚めていたと分かっていれば、その時は当然保護していただろうが、知らなかった以上はどうすることも出来ない。
　ただ、湊のことに気付いていたなら、風花のときのように仲間に伝えなかったのはどうしてだと聞かれ、美鶴は腕を組んだまま顔を上げて答えた。
「彼は私たちの仲間になり得ない。交渉の余地すらない相手を当てには出来ない以上、余計な混乱を招く情報は伏せておくさ」
　桐条グループの被害者である湊が、どうやれば桐条グループに協力するというのか。
　そも、美鶴は彼と言葉を交わすことも出来ないので、他のグループの人間も同じように相手にされることはないと思われる。
　交渉することすら出来ないのなら、最初から候補から外れてしまうため、そんなものを仲間に伝えて聞いたメンバーが彼をしつこく勧誘するという事態が起きないよう配慮するのは当然と言えた。
　しかし、真田は適性の件を知っていたなら、彼の裏の顔についても知っていたはずだと美鶴を糾弾する。
「人殺しだぞ！　あいつがそんな人間だと知っていれば、美紀に近づけることなどなかった！」
「先輩、苛ついてるからって人に当たらないでくださいよ。自分だって知らないでずっと過ごしてたんでしょ？」
「なんだとっ」

真田のあまりの言い方にゆかりが冷めた視線を向け、知らなかったくせに知った途端に騒ぐなと切り捨てる。
彼女の言っていることは正しいが、怒っているときに図星を突かれると余計に激昂する。
そして、今度はゆかりに怒りの矛先が向こうとしたとき、美鶴が静かに口を開いて湊はただの人殺しではないと説明し始めた。
「……彼が最初に人を殺したのは被験体の子供たちを助けるためだ。研究所にいても未来はない。だから、制御剤を奪い。逃げるときに妨害してきた研究員たちを殺したんだ」
「それがどうした。最初は助けるためだったかもしれない。だが、二万人だぞ。それだけの人間を殺して平然としているやつのどこを信用出来るっ?!」
人助けのために手を汚しただけならまだ分かる。けれど、二万という数の命を奪っておいて、平気な顔で学校に通いテレビにも出ているようなやつがまともな神経をしているはずがない。
そんな人間を簡単に信用するなど正気かと真田が返せば、興奮して立ち上がっていた彼の肩を掴み、無理矢理に座らせてから隣に座っていた荒垣が声を発した。
「アキ、しばらく黙ってろ。有里のことなら俺も知ってた。こいつらほど事情は知らねぇが隠してたって意味じゃ同罪だ。だが、あいつがただ悪戯に人を殺すような人間じゃねぇことは俺でも分かる。苛ついてるのは分かるがあと少しで着くんだ。ちっとは頭冷やせ」
幼馴染みまでが彼がペルソナ使いだと知っていた事に真田は驚いた様子だが、荒垣の言った通りバスは桔梗組の傍まで来ていた。
そこからさらに走ること三分、バスは桔梗組のある山から三百メートルほど離れた空き地に停車する。
適性を持っているだけの運転手はバスで待機して貰う事になるが、他の者たちは一応の警戒として全員が武器と召喚器を持ったままバスを降りた。
「……こっちだ。明彦、絶対に手を出すなよ」
「それはあいつの出方次第だ。俺は美紀を取り返すだけだからな」

事前に場所を把握していた美鶴が先導して案内すれば、忠告を受けた真田は既に臨戦態勢といった感じでナックルを付けた拳を握り締めている。
そんな敵意剥き出しの人間が近付けば、当然、チドリやラビリスを守ろうとする彼は排除行動に移るはずなので、戦闘に入る前に止めなければと美鶴や荒垣が警戒していると、メンバーたちは山の麓に着いた。
見上げれば何段あるんだと思ってしまう石段が山頂まで続き、その先には大きくて立派な山門が聳えている。
しかし、そんな長い石段や山門よりも、やってきた一同は頂上の石段に腰掛けている青年に視線を奪われた。
今はまだ影時間だ。だというのに彼は以前のように象徴化もせず、ただ静かに石段に座っている。
それを見た瞬間真田は駆け出し、他の者たちも遅れて後を追うと、先に昇っていた真田が中腹の踊り場で立ち止まって頂上にいる青年を睨んだ。
「有里、美紀を返せ」
「……急に大勢で来たかと思えば第一声がそれか」
呆れた様子で立ち上がった青年は、酷く冷たい瞳で他の者たちも見回し、再び真田に視線を向けると静かに返す。
「こんな時間に迷惑だろ。お前らを家に入れるつもりはない。さっさと帰れ」
「黙れ、美紀は無事なんだろうな？」
「真田なら奥で寝てるんじゃないか？　まぁ、これから帰る人間にはだからどうしたって話だが」
妹が無事と聞いて真田は少し安心したようだが、まだ美紀が相手側に囚われている状況は変わっていない。
そして、青年は真田らを家に入れる気はないようなので、押し退けてでも通ろうと戦闘状態に切り替えつつあるとき、
「八雲さん、ゴメンなさい……」
真田たちがここに来ることを止められなかったことをアイギスが

謝罪した。
彼女の口にした名前が〝有里湊〟ではないことに他の者は驚いたようだが、十年前に二人が出会っていたことを考えれば何もおかしくはない。
なにせ当時の彼は〝百鬼八雲〟だったのだから。
少女が申し訳なさそうに謝れば、それを聞いた青年は小さく微笑んで一瞬で消える。
そして、他の者が驚いている暇もなく、少女の目の前に現われて彼女の肩に手を置いた。
「別に君のせいじゃない。気にするな」
口にした直後再び彼は消える。今度は彼が肩に手を置いていたアイギスも一緒に姿を消し、次の瞬間には最初に彼がいた頂上に一緒に現われた。
誰一人として視認出来ない速度、一緒に移動したアイギスですら驚いた顔で振り返り、自分が移動したことに気付いた様子だ。
ペルソナを使ったのだとしてもいつ召喚したのか分からず、そもそもどんなスキルを使えば瞬間移動出来るのかも美鶴たちには分からない。
「なっ、は、え？　今、瞬間移動したのか？」
「……全く目で追えなかった。速過ぎるっ」
順平はそんなスキルありかよと狼狽え、美鶴はこれほどまで差があるのかと移動速度のみで実力差を実感し苦い顔をする。
彼がアイギスだけを連れて行ったのは彼女のみ入ることを許すという事だろう。
ならば、美紀の無事はアイギスに確認して貰えばいい。彼女は湊から携帯を渡されており、美鶴たちもその携帯と連絡先は交換している。
だからここは大人しく言う通りにしようと美鶴が声をかけようとしたとき、偉そうに選別するなど何様なんだと拳を握り締めた真田が駆け出した。
「貴様の言うことなどどうでもいい。俺は力尽くでも妹を返してもら

うっ」
真田が飛び出して向かってくると、湊はアイギスを山門の方へと突き飛ばした。
体勢を崩した彼女が倒れかけると、何もなかった空間から片腕が陶器の義手になった女性が突然現われアイギスを受け止める。
続けて女性の隣に純白の髪を背中に垂らした女性も現われ、それが先日会った赫夜だと認識している間に、赫夜は山門に手をかざして凍らせてしまう。
仮に山門に辿り着いても簡単には門を開けられないようにしたようだが、それを見た真田はそうまでして中に入れたくない理由があると考え、すぐにでも妹を助け出さなければと頂上にいた湊に殴りかかった。
「はあっ!!」
階段というただでさえ戦いづらい場所で、自分より高い位置にいる人間を攻撃するのは非常に難しい。
しかし、真田の武器は拳だ。自分のリーチを完璧に把握していた彼は、ギリギリの距離まで接近して確実に当てられる距離で拳を放った。
金属製のナックルを装備した拳で殴られれば普通骨折するが、攻撃が当たる前に青年はマフラーから錆びた剣を出してそれで受け止めた。
後ろから見ていた七歌たちは青年の持つ剣の名を知っている。だからこそ、素材でしかない〝無の小剣〟で真田の拳を完璧に受け止められたことに驚きが隠せない。
「……さっさと帰れ。これ以上やると言うならお前たちを敵と判断し殺す」
「美紀を取り戻すまで帰る気はないっ」
「……そうか」
受け止められた拳を引き、真田が右で牽制のジャブを数発放つ。脇腹、胸、丹田、肩と時折左のフックも混ぜながら連続で拳が繰り出される。

青年はそれらを全て剣で受け止め、真田が再び拳を放とうとしたタイミングで足払いをかけ、避けようとした真田がバランスを崩し階段から落ちる。
しかし、美紀を守るためにボクシング以外の格闘技も少しは囓っていたため、すぐに受け身を取って止まると立ち上がった。
「美紀を、返せぇぇぇぇっ!!」
いくら登りで勢いをつけづらいとはいえ、足に自信のある真田ならば階段でも助走の勢いを拳に乗せる事が出来た。
これまでで一番速い。これならば届くかもしれないと見ていた者たちが思えば、真田の向かう先にいた青年の瞳が〝蒼く〟なっていた。
「ダメ、真田先輩っ!!」
青年の瞳を見た瞬間、七歌はゾワリと全身を走る悪寒を感じた。
思わず彼女も魔眼を発動してしまい。数瞬後の真田と湊の未来を視てしまう。
だからこそ、彼女はそうならないよう真田を止めたのだが、妹のことで頭に血が上っている者に声が届く訳もない。
真田は湊の顔に向かって拳を突き出し、相手の青年はそれを受け止め、伸びきった腕の肘に膝蹴りを繰り出して腕をへし折った。
「ぐあぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
利き腕の肘を逆折りされた真田は右手で肘を押さえ絶叫する。
しかし、その程度で敵が済ます訳もなく、その場に座り込もうとした真田の顎を蹴り上げ、浮いた身体を袈裟切りに斬りつけ階段から落とした。
「――――何やってんだっ、テメェッ!!」
あまりの事に一瞬呆然としかけたが、幼馴染みがやられたことで斧を持った荒垣が駆け出す。
「行くな、荒垣!」
青年へと向かっていく荒垣に美鶴がやめろと叫ぶが止まらない。
さらに続くように相手を明確に敵と認識した様子の順平と天田も彼を追い。階段を転がり落ちてきた真田を受け止めた七歌と美鶴は、

チームの回復役であるゆかりと一緒にペルソナを召喚して彼に回復スキルをかける。
残った風花は湊の戦闘力を測ろうと考えたのかペルソナを呼び出すが、栗原に貫った適性測定器の数値を目にして思わず飛び出した男子に制止の声をかけた。
「ダメです、有里君と戦っては！」
必死な様子の少女の声がその場に響くが、仲間がやられた以上は彼らも黙っていられない。
ストレガの言うことなど半信半疑だったが、ボクサーの腕を容赦なくへし折り、さらに追い打ちで斬りつけるほどの非情さを見れば信じるしかない。
自分たちの敵は人を殺すことに躊躇いを覚えない殺人鬼。普段見せていた姿はどうあれ、今の彼はそういう存在だ。
「痛えじゃすまねえぞ！」
真っ先に突っ込んだ荒垣は正面から斧を振るい、それを青年が剣で受け止めたタイミングで天田と順平が左右から攻撃を仕掛ける。
「おらぁぁぁっ!!」
「はあっ!!」
順平は湊の左肩を、天田は右脇腹を狙って切りつける。
殺す気など勿論ないが、回復スキルの使い手がいるので重傷くらいは負ってもらう。
「やめてください、皆さん！」
邪魔をせぬよう茨木童子に拘束され動けないアイギスは、必死に拘束を解こうと藻掻きながらメンバーたちと湊が戦うのをやめるよう説得する。
けれど、順平と天田は既に武器を振り始めてしまった。今更勢いをつけた武器を止められるはずもなく、そのまま青年が斬りつけられようとしたとき、湊が片手で剣を持つと空いた手で荒垣の斧に触れた。
「なっ!?」
すると、荒垣の斧は一瞬で砕け散り、湊は自由になった剣を横薙ぎに振るって荒垣と攻撃途中の天田を斬りつける。

切られて階段を落ちてゆく二人からすぐに視線を外した青年は、横薙ぎの勢いのまま身体を回転させ振った剣を順平の大剣に当てた。
一瞬で仲間二人が切られ、さらに当たるはずの自分の攻撃が防がれ順平は驚愕する。
その驚愕した数瞬が絶対的な隙となり、相手の攻撃を弾いてバランスを崩させると、湊は腰に差していたナイフを順平の脇腹に向かって投げた。
「がぁぁぁっ!?」
胸を切られた荒垣、脇腹を切られた天田、そして脇腹を刺された順平は血を流しながら倒れてゆく。
自分たちの知っている普段の彼とは全く異なり、今の湊からは一切の感情が読み取れない。
ただ淡々と敵を処理しているだけといった様子で、相手が知り合いだろうと構わず武器を振るい続けている。
これがストレガの言っていた殺人鬼としての顔なのか。相手は湊で間違いないというのに、知らない人間を見ているような気がして、アイギスだけでなく美鶴やゆかりもどう対処すればいいのか迷ってしまう。
いや、正直に言えば何の感情も抱かず、一切の躊躇いもなく刃を振るってしまえる相手が怖かった。
そんな風に、少女たちが戦いを止めたいと思いながらも動けずにいれば、回復スキルによって切られた傷をある程度塞げた真田が、よろよろと身体を起こして無事な右手で召喚器を握っていた。
まさか人間に向かってペルソナを使うのか。それはダメだと美鶴が手を伸ばすも間に合わず、口から血を垂らしながら真田は引き金を引いた。
「ぐっ……ペルソナァ!!」
青い光の中から呼び出されたポリデュークスは、真田の想いに呼応して全力の電撃を放つ。
そんなものを喰らえば人間など一発で感電死するという威力にゆかりたちの血の気が引く。

空を走った電撃は真っ直ぐに青年へと向かい。あと僅かというところで青年の振り上げた剣がぶつかるとその瞬間に弾けて消えた。
「なっ……スキルを切り払ったのかっ」
彼が無事だった事は嬉しい。しかし、電撃という実体を持たない攻撃を、まさか錆びた剣一つで破壊するとは思わず美鶴は驚いてしまった。
ただ、真田がペルソナを使ったことで状況は完全に変わった。これまで向かってきた敵を追い払っていただけの湊は、相手が自分を殺しに来たことでスイッチが入ったのだ。
先ほど斬りつけた際に天田が落としていった槍を拾い上げると、湊はそのまま真田に向けて投擲する。
「八雲君、ダメ！」
真っ直ぐ真田の胸に向かって放たれた槍は、咄嗟にカバーに入った七歌が薙刀で払い落とす。
弾いた槍は石段の脇の林に飛んでいったが、これ以上槍のような大きな武器が投げられる事はないと思えば気にならない。
しかし、真田が本気で狙われた事を受け、先ほど切られた男子たちも今湊を仕留めないと拙いと思ったのか、真田と同じように召喚器に手をかけていた。
「ぐ……ヘルメス！」
「カストール！」
呼び出された二体のペルソナは、一体が火炎弾を放ち、もう一体が騎馬の角で突進を仕掛けた。
どちらか一方が防がれても、もう一方が間を置かずに相手に襲いかかる。一緒に戦い始めてあまり経っていないが、それでも彼らのコンビネーションはフロアボスにも通用した。
防御するでも回避するでも、湊は迫る攻撃への対処で一手遅れることになる。
本命はその瞬間だと荒垣たちが動向を見守れば、湊の姿が一瞬ぶれ、次の瞬間その手には荒垣の傍に倒れていたはずの天田が首を掴まれた状態でいた。

「やめて有里君！」
彼が何をしようとしているのか分かったゆかりが叫ぶ。
しかし、気付いた荒垣と順平が攻撃を中止しようとする暇もなく、天田の身体は火炎弾に向かって放り投げられ、湊はカストールの角を正面から片手で受け止めた。
轟々と燃える球体の炎は少年を照らし、そのままぶつかると空中で爆発を起こす。
防御することも出来ずに直撃を喰らった少年は林へと吹き飛ばされ、斜面を転がると木の根元で止まった。
僅かに呻き声が聞こえたことで生きてはいるようだが、その場から動くこともなく重傷なのは間違いない。
怪我を負った仲間を助けに行こうとゆかりが立ち上がれば、突然、彼女の前に湊が現われた。
「――――お前たちは邪魔だ」
そう呟いた彼の手には赤い光を宿した西洋剣が握られていた。
これまで使っていた無の小剣と違いその西洋剣には鋭い刃が存在する。それを使って何をしようというのか。
そんな事を思っている間にゆかりは剣で切られ、続けてルキアの中に入っていた風花もペルソナごと切られた。
まさか自分たちが攻撃されると思っていなかった二人は驚きとともに悲しみを感じるが、一切の痛みを感じていないことを不思議に思っていると、急に景色が変わって二人はアイギスのいる頂上に移動していた。
『……え？』
「そこで黙って見てろ。あいつらが諦めて帰れば解放してやる」
そう言った湊は女教皇のカードを砕き、ルキアを呼び出すと風花とゆかりを中に閉じ込める。
突然移動したことに加え、自分たちがルキアの中に閉じ込められたことで二人は混乱した様子だが、天田を助けに行こうと思っていたゆかりは風花にペルソナを消すように言った。
「風花、すぐにルキアを消して！　今助けないと天田君がっ」

「ち、違うの。私はルキアを出してない。このルキアは有里君のペルソナみたいなのっ」
自分のペルソナのはずが風花はルキアとの繋がりを感じられないでいた。
必死に消えるように呼びかけてもみるが、一切反応はなく今のルキアは二人を閉じ込める檻と化している。
それを聞いたゆかりは何を馬鹿なと考えるが、ならば自分のペルソナで無理矢理に突破しようと思ったとき、自分の中からイオの存在が感じられなくなっている事に気付く。
切られても無事である事、切られた二人共がペルソナを失っている事、そこから考えられる一つの予想をゆかりは背を向けている青年にぶつけた。
「まさか、私たちのペルソナを奪ったの？」
「……ああ、回復手段を奪うのは当然だろ？」
特別課外活動部で最も強い回復スキルの使い手はゆかりだ。ワイルドで回復スキルを覚えたペルソナを使える七歌でも、その威力はゆかりのイオに及ばない。
だからこそ、湊はその回復手段を断つことで相手の継戦能力を奪うことにしたのだ。
「八雲さん、お願いします！　やめてください！」
「それはあいつらに言ってくれ。素直に帰れば追ったりしない。ここへ来ようと向かってくるから追い払っているだけなんだから」
彼らと戦って欲しくないアイギスが懇願しても湊は背を向けて石段に向かう。
天田はもう戦えないし、他の男子も全員手負いだ。真田は切られた傷をゆかりたちに治療してもらったようだが、それも完全とは言い難く利き腕の骨折もあってほぼ戦えないだろう。
ならば、片付けるのにそう時間は取らない。自分を殺そうとしてきた者には同じように死を与えようと、青年はゆっくり石段を降りて倒れている荒垣や順平の許へ向かい始めた。
「くっ、ペンテシレア！」

このままでは仲間が殺される。そう考えた美鶴も覚悟を決めてペルソナを呼び出し、足止め目的で彼を氷に閉じ込めようと考えた。
けれど、湊はそのスキルの着弾地点を読み切ると跳躍で回避し、そのまま美鶴の正面に着地する。
「なっ!?」
正面に来られたことで驚いた美鶴は咄嗟にレイピアを抜き、それを振り抜いて彼が距離を取ってくれることを期待する。
だが、そんな彼女の期待も空しく、美鶴がレイピアを振り抜く途中で湊は腰から新たなナイフを抜いたかと思えば、それを振り上げてレイピアを持っていた美鶴の腕を手首と肘の中程から切り飛ばした。
「あああああああっ!?」
鋭い切れ味のおかげで痛みは腕を切り飛ばされてからやってきた。
無事な方の腕で切られた部位を思わず掴んだが、骨ごと切られた痛みが和らぐことはない。
あまりの痛みに気を失いそうになり、脂汗を流してその場に蹲ろうとしていた美鶴に向け、黙って見ていた湊は彼女が取り落としたレイピアを拾ってその腹を刺した。
「――――あ」
腹を刺された美鶴は仰向けのまま階段を落ちてゆく。
咄嗟に駆け出した七歌が頭をぶつける前に抱きとめることが出来たが、利き腕を折られた真田以上の重傷に七歌は思わず顔を顰めた。
「美鶴さん……っ」
絶対に彼女は助ける。だが、その前にこの場を切り抜けなければならない。
顔を上げた七歌は傍にいた真田に彼女を預けると薙刀を持って立ち上がり、服の中に入れていたネックレスを取り出す。そして、開閉式になっていたネックレスを開けると、中に数粒入っていた赤黒い丸薬を一つ飲んだ。
直後、七歌は全身が熱くなるのを感じる。身体の内側で何かが暴れているような、細胞そのものが変化しているような感覚を感じながら、身内だからと戦う事を拒んでしまっていた自分の情けなさと、大

切な仲間を傷つけた敵への怒りで叫んだ。
「百鬼八雲っ!!」
叫んで七歌は石段を強く蹴って駆け出す。今日まで見せてきた戦いの比ではない加速、オルギアモードを使用しているアイギスすら超えていると思わせる速度で接近した七歌は、両手で持った薙刀を振り抜き、再び無の小剣を手にしていた湊をガードごと吹き飛ばす。
ペルソナの一撃を受け止めた相手を一人の少女が吹き飛ばした事が信じられず、仲間たちは林の木に叩き付けられた青年と吹き飛ばした少女を交互に見て言葉を失った。
だが、少女の攻撃はそれだけでは止まらない。
「はあっ!!」
吹き飛ばした青年の許へ向かうと追撃を繰り出す。刃を回転させながら繰り出された突きは、青年が飛び上がりさらに木を蹴って回避していなければ、確実に胸を貫き心臓を破壊していた。
木の幹を大きく抉った一撃を見舞った七歌は、反転して逃げた湊を追ってゆく。
相手の動きが明らかに普段と違うと認識した湊も、相応の対処をする必要があると感じたようで、他の者を相手していたときよりも動きが変わった。
再び石段の上で両者が交差し、七歌の突きを弾いた湊は首を狙って横薙ぎに剣を振るう。
その攻撃を薄皮一枚で回避した少女は、手首を返して持ち替えると石突きで青年の顎をかち上げようとする。
しかし、その攻撃は仰け反ることで回避され、面倒に思った少女は自分の身体を地面に対して平行になるように跳ぶと、そのまま横薙ぎに武器を振るって相手から見て縦に斬り上げた。
ただ斬り上げなかったのは次の一手までの速さの問題で、七歌の方法だと七歌も一緒に回るので着地すればすぐに動ける利点がある。
一見無駄に思える動きも、出来る限り速く連続で相手に攻撃を浴びせるための策だ。
「はあっ!!」

斬り上げを武器でガードして後ろに飛んだ湊に対し、着地した七歌は短く武器を持って連続で斬りつけてゆく。
今の少女の瞳は真紅に染まっており、肉体が相手の動きについて行けるようになった事もあって、未来が視える七歌の攻撃は徐々に当たるようになり、僅かにではあるが相手を追い詰めている状況にあった。
躱そうと身体を捻った瞬間に刃を跳ね上げ頬を掠め、追撃を避けるために柄を弾きに来た右腕を引いた刃で僅かに斬る。そこからさらに脇腹、左足と少しずつ湊の身体に傷を作るが相手の動きは一向に落ちない。
そも、肉体のスペックがほぼ同じならば、相手の次の動きが視える七歌の方が圧倒的に有利になるはず。
それを徐々に追い詰めることしか出来ないのだから、相手の次の動きが視えていようと七歌も一切油断が出来る状況ではない。
袈裟切りを放った七歌の薙刀を湊がいなし、空いた胴へと蹴りを放ってくるので少女は跳んで回避する。
数瞬先の未来が視えていても、何度かに一回彼は別の攻撃を仕掛けてくるから危険だ。
そんな事を思いながら片手のハンドスプリングで跳んで着地し、攻撃を受けていないのに口の中に血の味が滲み出したことで、七歌は自分の活動限界が近付いていることを悟って勝負に出る。
「白虎っ！」
今の集中力なら行けるだろうと召喚器を使わずペルソナを呼び出す。
近接格闘で戦っていた相手は、突然ペルソナが出てきて攻撃を仕掛けてきたことに眉を顰めたが、突進を受けて剣のガードごと吹き飛ばされており、距離が開いたタイミングを狙って次のペルソナを呼ぶ。
「朱雀！」
完全に足を止めた七歌は手の痺れを感じていた。本来の限界を超えた動きを引き出した代償だ。
しかし、身体が動かなくともペルソナの召喚に影響はない。赤い羽

根に七色の尾羽を持った鳥は、舞い上がると湊に向けて炎を吐いて辺りを照らす。
ヘルメスの放ったような炎弾ではなく火炎放射器のような連続で襲い来る炎は、白虎の一撃で復帰しきれていない青年を捕らえるだろう。
そう思って七歌が朱雀のスキルを放てば、吹き飛ばされながらも炎をジッと見ていた湊が節制のカードを砕いた。
「スーツェー！」
青年に迫った炎が突然現われた煌びやかな羽根の朱い鳥に阻まれる。
相手もワイルドならば火炎無効のペルソナを所持しているかもしれないと思っていたが、まさか自分と同じ四神のペルソナを出してくるとは思わず七歌は僅かに驚く。
けれど、同じペルソナならばその弱点も知っている。朱雀の弱点である氷結スキルを持つ四神はこいつだと七歌はペルソナを変えた。
「玄武！」
「シェンウー！」
七歌がペルソナを変えるのとほぼ同時、相手の行動を読んでいたように湊も玄武を呼び出した。
黒い甲羅の亀と赤い鱗の蛇という七歌の玄武に対し、湊のシェンウーは亀も蛇もどちらも全身が黒い。
現われた二体は同時に冷気を放ち、それは両者の中間地点で衝突する。
だが、同じペルソナでも見た目に違いがあるのなら、呼び出す者の実力によって能力に差が生じるのも当然だ。
最初は拮抗していた攻撃は、徐々に七歌が押し負けてゆく。玄武に氷結スキルは効かないので彼女にダメージはないが、七歌の後ろにいる荒垣や真田たちは余波を受けて苦しい表情をしているため、これではダメだと次のペルソナを呼び出す。
『青龍（チンロン）！』
飲んだ丸薬の副作用で立っているのも辛くなり、薙刀を杖代わりに

身体を支えて呼び出せば、今度は全くの同時に湊も青龍を呼び出してきた。
七歌の青い龍と湊の緑の龍は同時に疾風属性のスキルを放つが結果は同じ。湊のチンロンのブレスで青龍の攻撃が飲まれ、石段に倒れている順平や重傷の美鶴が飛ばされそうになっていた。
適性測定器を見ていた風花が静止の声を掛けていたのは、きっと相手がとんでもない適性値を持っていたからに違いない。
力負けしている状況からそんな事を考えていた七歌は、吹き荒れる風で暴れる髪を手で押さえ、自分より高い位置から無表情で見ている青年を見つめながら打開策を考えた。
「同じペルソナじゃ勝てないっ。おじいちゃん、おばあちゃん、お願い力を貸して！」
今の手札では相手に勝てない。トランプのスートに優劣があるようなもので、同じカードでも性能が違うのだ。
ならば、それらを融合させて相手のペルソナを超えるペルソナを生み出せば良い。
そう考えた七歌は、イゴールが普段行なってくれているペルソナ合体を思い出し、古本屋の老夫婦との絆で召喚可能となったペルソナを呼び出すべく、自分の中に存在する四神の力を一つに纏めてゆく。
「……なら俺も力を束ねよう」
すると、ただ見ているだけで青年は彼女が何をしようとしているのか理解したのか、四枚のカードを具現化すると十字に配置して力を束ねる。
力を持ったペルソナを融合させ、さらに力を持った存在を生み出そうとする影響か、二人の周りには青い光の粒と金色の風が渦巻く。
これほどの力が衝突して大丈夫なのか。普通ならばそう思うのだろうが、他の者たちにすれば自分たちのリーダーが最凶の敵と対峙している今そんな事を考えている余裕はない。
それぞれを包む風の輝きは増し続け、十字に配置されていた湊のカードが光になって一つのカードに生まれ変わったとき、七歌も力を一つにすることが出来たのか顔を上げて新たな力を呼んだ。

「来て、黄龍！」
「来い、麒麟（チーリン）！」
現われたのは七歌たちの頭上を覆い尽くすほどの大きさをした金色の龍、法王〝黄龍〟。
対して、青年の方は大型の馬よりさらに一回り大きな白銀の毛並みを持つ古代中国の聖獣、審判〝麒麟〟。
同じペルソナを融合させたというのに、姿も大きさも全く異なる二体のペルソナは、対峙するだけで周囲の空気を震わせる。
黄龍が身体の周りでバチバチと青白い雷を爆ぜさせれば、麒麟は静かに白光を纏って輝いてゆく。
「黄龍、ジオダイン!!」
真紅の魔眼で青年を真っ直ぐ見つめた少女が手を横薙ぎに払えば、上空にいる黄龍が青年目掛けて雷を落とす。
ポリデュークスの電撃など比ではない。まさしく自然の猛威という強大な力が敵を討ち滅ぼすために落とされた。
「麒麟、九天応元雷声普化天尊！」
《――――――ッ》
だが、青年が迫りくる雷に向かって手をかざせば、麒麟が声高く嘶き、主に降り注ごうとする厄災を討ち払わんと雷帝の名を冠す白雷で迎え撃った。
大地へと落とされる龍の雷に、天を昇る雷帝の雷。その衝突の余波は凄まじく、七歌もその場に立っていられなくなる。
「くっ……」
ぶつかり合った雷が閃光で辺りを灼き一時拮抗する。
しかし、その直後に黄龍の雷が弾け消え、天に昇る雷が暴風を巻き起こしながら金色の龍を飲み込んだ。
＊＊＊
「あ、ぐ……」
黄龍の一撃を撥ね除けて葬れば、その場に立っているのは湊と彼が呼び出した麒麟だけになっていた。
直前まで戦っていた七歌は肉体の限界が来たのか暴風が巻き起

こった際に吹き飛ばされており、黄龍が受けたダメージのフィードバックで石段に倒れたまま動けなくなっている。
「……鬼の血で作った丸薬か。一時的に始祖の力を得ようと、人間の肉体ではその程度が限界だったな」
七歌が先ほど飲んだ丸薬は百鬼の血で作ったものだ。龍の一族がそれを飲めば一時的に龍と鬼の混血になり、人を超え始祖であるキサラとユーリに近付く事が出来る。
しかし、いくら龍の正統血統だろうとその身は人のそれ、最初から神の器として作られた湊と違って力を使えば十分も保たない。
それが分かっていたからこそ湊は本気を出さずに時間切れを狙ったのだが、時間切れが来る前にペルソナで片を付けようとした点は評価する。
故に、麒麟を消して再び頂上まで戻ると、倒れている者たちに冷たい瞳を向けて口を開いた。
「時間切れだ。赫夜」
《……はい》
今まで黙って戦いを見守っていた女性が湊の傍までやってくると、湊は彼女をカードにしてマフラーから取り出した無の大剣と融合させる。
錆び付いた大剣はカードに触れると光に包まれ、それが治まると龍が巻き付いた燃える金色の剣が現われていた。
智恵の利剣〝倶利伽羅剣（クリカラケン）〟。それが彼の持つ剣の名だ。
「座敷童子」
続けて湊が座敷童子を呼び出せば、その少女の姿を見て特別課外活動部のメンバーたちが目を見開く。
その姿は紛れもなく自分たちを守って消えたかつての仲間だったから。
「ヒー、ホー君……お願い、皆を助けて……」
再会出来た喜びよりも、今は仲間を助けることの方が優先だ。
倒れていた七歌は少女に向かって弱々しく手を伸ばし、自分は置いていって構わないから、どうか仲間たちを連れて逃げて欲しいと頼

む。
しかし、そんな彼女の言葉を受けた小さな少女は、石段を挟むように左右の林に氷壁を造りながら言葉を返した。
《私の……名前、百鬼雪菜……八雲を苛める人は、嫌い》
かつて一緒に戦った仲間であろうと、自分の可愛い子どもを苛めるような者を助ける義理はない。
左右に広がる林の方へ逃げられないよう氷の壁を作り、完全に相手の逃げ道を封じてから座敷童子は茨木童子の隣に立ち湊に道をあける。
仕事を終えた少女に短く礼を言った青年は前へと進み、頂上から石段を見つめるがその手に持つ剣は出した時よりも輝きを増しており、金色だった刀身は灼いた鉄のように真っ赤になっている。
アイギスは初めて見るものであるため剣の能力は知らないが、逃げ道を封じて頂上に立ったからにはそこから眼下にいる者たちを焼き払えるのだろうと推測する。
そして、その予想が正しければ彼は今から七歌たちを殺そうとしているという事だ。彼にそんなことをして欲しくないアイギスは暴れて茨木童子の拘束を解こうとするもビクともせず、せめて言葉だけでもと必死に湊を引き止める。
「待ってください八雲さん、お願いします！」
「……もう十分に待った。何度も帰れと言った。これ以上来るなら殺すとも忠告したが、それを聞かずにこいつらは俺を殺そうと必死になった。倒れている仲間を連れ帰ろうともせずにな」
怒りの宿った蒼い瞳で倒れる者たちを睨む青年にアイギスの声は届かない。
なにせ、湊は何度も帰るように言っていたし、少しの猶予を与えてからこれ以上くれば殺すと警告していたのだ。
それを聞かず反対に殺そうとしてきたのだから、ここで湊が殺してもそれは自業自得でしかない。
けれど、そんな理屈など関係なく、仲間に死んで欲しくないし、青年にも人殺しをして欲しくないゆかりがルキアの中から叫ぶように

声をあげた。
「やめて有里君！　言う通りにするから、全員連れて帰るからっ！」
「もう遅い。大丈夫だ。こいつらは灰一つ残さず消してやる」
その身の一片たりとも残しはしない。目の前で灰一つ残さずに消えれば、相手が死んだという実感は湧きづらいだろう。
自分を止めようと叫んでいる少女たちにそんな無駄な気遣いをしながら、青年はあまりの高温に刀身が眩い金色になった剣を上段に構えた。
石段の方では順平や荒垣が諦めずに地を這って逃げようとしているが、さらに下の方では既に焦った表情の真田が氷壁に阻まれている。
無事な右腕で殴りつけているが効果はなく、そんな無駄な足掻きを感情の籠もらない瞳で見ながら青年は別れの言葉を吐く。
「――――じゃあな」
そう口にした直後、彼の持っていた剣が巨大な炎の柱と化した。
周辺の空気に含まれる水分が一瞬で蒸発し、赫夜や座敷童子の作った氷も徐々に溶け出している。
そんなものを振り下ろせば逃げ場のない七歌たちは炎に灼かれ、青年の言った通り灰すら残らず消えるだろう。
青年は狙いを外さぬようゆっくり剣を振り下ろし始め、やめてという少女たちの叫びが響いたとき、
『ペルソナっ!!』
「アオーーン！」
山門の上から声が響き、三体のペルソナが降ってきた。
二体のペルソナが攻撃の射線上に入り、残りの一体が糸を使って青年を拘束する。
拘束されたことで湊は剣を途中までしか振る事が出来ず、剣に溜められた炎は影時間の空を灼いて終わる。
そして、七歌たちの方へ僅かに飛びかけた炎は、射線上に入った火炎無効の耐性を持つ二体のペルソナが防いだため、剣に残った炎が全て消えたときには全員が剣を振るう前と同じ状態で生き残っていた。

第二百四十三話　戦いの後で

影時間――山門

「姉さん、チドリさん、コロマルさんっ」

湊の攻撃を妨害したペルソナたちは、糸で拘束している一体を除いて消えてゆき、代わりに山門の上からラビリス、チドリ、コロマルが降りてきてアイギスたちの傍に着地した。

二人と一匹が最悪の事態を防いでくれた事でアイギスは安堵の息を吐き、ルキアに捕らえられている二人も同じように泣きながら安心している。

そんな彼女たちの様子と共に、石段に倒れている者たちを見たラビリスとチドリは、剣を振り下ろす途中の体勢で拘束されている青年に声を掛けた。

「湊君、いま何しようとしたんよ？」

「どういう状況か説明して」

二人の声は普段よりも低く、そこには明らかに怒りの感情が混ざっており、本当ならば今すぐにでも彼を殴りたいという意思が読み取れる。

けれど、問われた青年は蛇神の影を使って拘束していた糸を切ると、赫夜を剣から分離して無の大剣をマフラーに仕舞っている。

質問に答える気がないのか、それとも分かっているのにわざわざ聞くなと思っているのか、今の青年の表情からは考えが読み取れない。

ただ、茨木童子にアイギスを離してやれと言ってからルキアを消し、自分の持っている自我持ちのペルソナを全員呼び出したので、彼の行動に注意していれば、氷が溶けて開くようになった山門が開いて不安そうな表情の美紀が外に出てきた。

「っ、兄さん、シンジさん!!」

外に出てきた美紀は石段に倒れている兄たちを発見し駆け下りてゆく。

それに続くようにルキアから出られたゆかりと風花も駆け下りてゆき、瀕死の重傷の天田や、腕を斬り飛ばされた美鶴の許へ向かった。

専門家でなくとも全員がこのままでは危険な状態だと分かる。中でも天田と美鶴はすぐに病院に連れて行っても助かるか分からない。
だからこそ、今この場で全員を救う手段を持っている青年に美紀は助けを求めた。
「有里君、お願いします。皆さんを助けてくださいっ」
「……助ける理由がないな」
皆の怪我を見て青い顔しながら必死に頼んだというのに、湊はなんで助ける必要があるんだと不思議そうに肩をすくめる。
それを見た名切りのペルソナたちは相変わらずだと苦笑しているが、今はそんな亡霊たちの反応に文句を言っている暇はないため、チドリとラビリスもゆかりたちを手伝って怪我人を助け起こし、改めて彼に治療するように言った。
「湊、この人たちを治療して」
「助けたければ自分でやれ」
「あなたにしか出来ないから言ってるのよ！」
利き腕の肘を破壊されさらに斬りつけられた真田、
鋭利なナイフが脇腹に突き刺さって大量に出血している順平、
胸を斬られ同じように大量に出血している荒垣、
脇腹を斬られた上に火炎弾をまともに喰らって大火傷を負った天田、
右腕を切り飛ばされレイピアで腹を貫かれた美鶴、
丸薬の副作用とフィードバックダメージで口から血を吐きまともに身体を起こせない七歌。
よくもまぁ知り合いをここまで痛めつけられたものだと逆に感心してしまうほどの惨状に、チドリとラビリスは飛び出すのが少しでも遅れていれば彼女たちが死んでいた事を改めて理解する。
湊からはストレガが何か仕掛けてくるかもしれないから中にいろと言われていたのだが、外で戦闘が始まったことで心配したチドリが索敵したことで敵の正体が判明し、ペルソナを使った戦闘が始まったときには七歌たちが危ないと思って何とか外に出ようと考えた。
しかし、外に続く山門は外から凍らされていて開かず、かといって

裏門から出ていては間に合わなくなる。
そうして思い付いたのがラビリスに山門の上まで運んで貰い、そこから飛び降りて外に出るという方法だった。
おかげで何とか間に合う事が出来たが、湊は倒れている者たちを敵として認識しているため治療してくれそうにない。
順平を助け起こしていたチドリが怒って言っても黙って見ており、本当にコイツはとチドリが立ち上がろうとしたとき、七歌の様子を見ていたラビリスが湊に駆け寄るなり胸ぐらを掴んで怒鳴った。
「なにゴチャゴチャ言うてんの！　七歌ちゃんも美鶴さんも死にそうなってんのに、それを見てなんで普通に助けようと思えへんのよ！　ええから早よ治療しぃ！」
ここまで彼女が怒る事は初めてだ。言われた湊はジッと相手の赤い瞳を見ていたが、彼女に開放されるとアベルの楔の剣を具現化し、時流操作を利用してアイギスを除く特別課外活動部のメンバーらを切ってから山門へと向かい赫夜に後を任せた。
「赫夜、適当にやっとけ」
《……はい》
全員からペルソナを奪っただけでなく、密かに召喚器も奪い取った湊が屋敷に帰って行く。その際、赫夜は湊の瞳の色が僅かに暗く濁ったような気がしたが、今はすぐにでも治療しなければならない者がいるので石段を降りてゆく。
赫夜が淡く温かな光を放出して一人一人治療して回り、天田の大火傷や真田の骨折を完全に治すと、美鶴の腕も切断面を付けながらスキルを掛ければ無事にくっついて動くようになっていた。
「まさか、切れた腕まで繋がるとは……」
「ホンマにゴメンな。湊君、普段はちゃんと手加減するんやけど」
血を失ったことによる気怠さはあるが、治療して貰った美鶴は繋がった腕の指が無事に動くのを不思議そうに眺める。
他の者たちも自分たちのスキルではあり得ない回復力に素直に驚き、これならばチドリたちが治療するように言っていたのも納得が出来た。

そして、丸薬を飲んだ副作用すら治療して貰った七歌が痺れの消えた手を動かしていると、傍に屈んで目線を合わせた赫夜が窘めるように話しかけた。
《七歌、八雲相手に鬼血丸を使用してはなりません。ただの鬼が相手ならばまだしも、神祖の血を持つ八雲が相手では勝ち目がありません》
「ふえ？　お姉さん、なんで薬の名前知ってるの？」
七歌が飲んだ丸薬の名前は〝鬼血丸〟といって、文字通り名切りの血を原料とした薬である。
ただ、どうしてそれを見知らぬ女性が知っているのかと七歌が問えば、ラビリスらと一緒にこちらに残ってメンバーの容態を見ていたアイギスが答えた。
「七歌さん、その方は八雲さんのペルソナとなっている九頭龍家の始祖、ユーリお婆様です」
「え、なんで八雲君の方にいるの？　八雲君は鬼で、うちが龍じゃん」
《完全なるモノは両家の能力を統合する事で生まれます。それ故、最も強き龍の力を宿すあの子にわたしも憑いたのです》
七歌も普段は意識していないが、現在の九頭龍家当主は特級五爪守護龍憑きとして覚醒した湊である。
本人に言えばそんな家は潰してしまえと返してくるだろうが、最も強い龍の力を持った者に始祖の霊が憑くのはある意味当然で、それなら納得するしかないかと七歌も渋々認める。
「とりあえず、全員家に案内するわ。男は内風呂、女は露天の方で身体の汚れを落としてから話をしましょう」
そうして、無事全員の治療が終わり、どうにか動ける状態になると他の者たちを立たせたチドリが先頭になって彼らを家に案内した。

深夜――桔梗組
ここを初めて訪れる者たちは、中に案内されると驚いた様子を見せた。
老舗旅館かと思うほど立派な造りの日本家屋に、露天風呂と内風呂

の檜風呂があると聞いては、本当にここが普通の家なのかと疑うのも無理はない。
しかし、血や土で汚れた格好のままいさせる訳にもいかないため、全員を風呂に入れている間に部屋に独りでいた湊に着替えを出させ、綺麗になった七歌たちを組の話し合いにも使っている長テーブルのある和室に案内した。
「ごめんなさいね、すぐ淹れられるものがお茶しかなくて」
言いながらお盆にお茶を載せてやって来たのは桜だ。
影時間が明けるなり急に大勢が来た事には驚いたようだが、相手が湊と同じ学校に通う生徒と聞いて、ならば寝る部屋の用意もしなければと取り計らってくれた。
相手と面識のあった者たちは「突然押しかけてすみません」と申し訳なさそうにするが、桜にすれば組員が大勢泊まることにも慣れているので、最初から美紀やラビリスが泊まる事もあって気にしていないらしい。
テーブルに着いた全員の前に湯気の立った緑茶を置き、個別包装されたお茶菓子も器に入れてセッティングしたことで準備は完了。
桜もここに残って話を聞くようで、子どもたちのいるテーブルと並べて置かれた湊のペルソナたちがいるテーブルに着いた。
すると、相手がいれば不快に思うくせに、いないとそれはそれで気になるらしく、お茶に口を付けて湯呑みを皿に置いた真田が尋ねた。
「……あいつはどうした？」
ここにいないという事はまだ部屋にいるという事だろう。チドリが呼んでくると席を立とうとすればアイギスが立ち上がり自分が行くと伝え、部屋の場所を教えるためアリスも一緒に部屋を出て行った。
それを見ていた特別課外活動部のメンバーは、未だにペルソナが自我を持っている事が信じられない様子。
けれど、隣のテーブルではヒーホー君の正体であった少女が最中を食べてお茶を飲んでいるので、言われなければ人間と区別が付かないなと思いつつも状況を受け入れ始めていた。

「お連れしたであります」
アイギスたちが部屋を出てからしばらくすると二人の少女と共に湊がやってくる。
その瞳の色は戦闘時と同じ〝蒼〟であり、未だに戻っていないことにチドリやラビリスは眉を顰めたが、彼がアイギスの隣に座ると敵意を隠し切れていない順平が青年に尋ねた。
「なぁ、オレらの召喚器とペルソナはどうしたんだよ？」
「……俺が持ってる。お前たちが暴れないようにな」
暴れたところで全員を無力化するのに一分もいらないだろう。
しかし、家で暴れられると迷惑であるため、外に残っていた武器も含めて湊が全て回収しておいた。
それを聞いた特別課外活動部の者たちは、どうやってペルソナを奪っているのか気になりつつ、自分の大切な物が敵の手にある事を不快に思って言葉をぶつけた。
「わざわざ暴れたりしねーよ」
「ああ、今すぐに返せ」
順平に続いて真田も湊を睨みながらペルソナを返すように要求する。
メンバーの女性陣はそれを怖々見ているが、湊が反応を返す前に隣のテーブルから笑い声が聞こえ、茨木童子が笑って目に滲んだ涙を指で拭って口を開いた。
《アハハハハッ、青さも過ぎれば見るに堪えんな。勘違いしているようだが、貴様らは八雲の慈悲で生かされただけだ。立場を弁えろ》
「フン、勘違いしているのはお前たちの方だろう。何万という人間の命を奪ってきたらしいが、平然と他者を害する傲慢さとそれだけの罪を犯しながら生きていられる図々しさには頭が下がる」
他人の命を自由にしてきた事で自分を偉いと思っているのではないか。
相手の言葉に怯まず真田がそう返せば、途端に部屋の空気が張り詰めてゆく。
原因は隣のテーブルにいる湊のペルソナたちが真田に対して怒り

を覚えているからだが、自分たちの愛子や主が侮辱されれば怒るのも当然だ。
　これまで散々裏で助けて貰っていた、という事情も加わればすぐに手を出さないだけ我慢している方だろう。
　ピリピリとした空気から自分たちが危険な状態にあると美鶴は気付き、これ以上真田が相手を刺激しないよう諌める。
「……やめろ、明彦。今の私たちは向こうの厚意で話し合いの場を設けて貰っているだけなんだぞ」
「そうね。別に貴方たちをどうこうするつもりはないけど、八雲のペルソナたちは自我を持っているから、八雲の意思を無視した行動だって取れてしまう。余計な挑発をしたときの身の安全は保証出来ないから、もう少し考えて発言してちょうだい」
　ペルソナたちが暴れればエネルギーを供給している湊を除き誰も止められない。
　その唯一のストッパーがやってきた客を歓迎していないため、これ以上迂闊な発言が続けば文字通り命の保証はしかねた。
　改めてチドリがその事を伝えると特別課外活動部の男子メンバーは渋々大人しくなり、無謀を超えて命知らずとしか思えない男子らに溜息を吐いてから美鶴が口を開いた。
「まず、我々がここを訪れたのは、ストレガという者たちに美紀がここにいると聞いたからだ。その際、八雲が大勢を殺してきた人間という情報とここが極道の家という情報も伝えられた」
「あの、私がここにいるのは自分の意思です。満月の日はシャドウが凶暴化するからと保護して貰っていたんです」
「それはいつからだ？」
「去年の五月の終わり頃からです。影時間に驚いて外に出てしまって、シャドウに襲われたところを有里君が助けてくれたのが切っ掛けです」
　去年の五月末からという事は、美紀は湊に助けられてから一年以上ここに通っていた事になる。
　ならば、突然現われた敵に妹の所在を聞くまで知らなかった美鶴た

ちは、本来口を出せる立場ではないだろう。何せ美紀の命が危険に晒されていたことすら知らなかったのだから。
だが、兄として妹のことには口を出さずにはいられない真田は、美紀が湊に助けられたと口にしたところで顔を顰めながら、どうして助けられた後も自分を頼らなかったんだと問い質す。
「何故、そこで俺の方へ相談に来なかったんだっ」
「兄さんもシンジさんも何も言ってなかったじゃないですか。それにシャドウの出る巌戸台から離れた方が安全ですし、有里君やチドリさんの方が兄さんたちより強いと言われましたから」
七歌たちの総適性値はアイギスを含めて『２１６９００ｓｐ』、平均で言えば『２４１００ｓｐ』となり丁度ゆかりの適性値と同じだ。
それに対してチドリたちは湊に付き添って貰いながらモナドにいたので、二人と一匹で平均五万ほどとなっており、ペルソナのステータスも非常に高い。
ステータスの高さについては特別課外活動部のメンバーが精神的にまだ未熟で、精神の変化でペルソナが進化する余地があるからこそ伸び悩んでいるだけだが、そこさえ乗り越えれば七歌たちも制限解除され適正値も飛躍的に跳ね上がるに違いない。
ただ、現時点ではチドリたちの方が強いことに間違いはないので、女子二人と犬に負けていると言われた男子らが微妙な顔をしたところで美鶴が話題を戻した。
「話を戻そう。先ほど言った事情もあってこちらに来たんだが、山門のところで有里に帰れと言われてな。美紀のことで頭に血が昇った明彦が殴りかかり、腕を折られたのを見て他の男子も交戦してしまったんだ」
少々申し訳なさそうに伝えて美鶴はお茶に手を伸ばす。
湊も相手の腕を折るなどやり過ぎな面はあったが、客観的に見れば自分たちから先に手を出しておきながら、やられて仕返しに行って再び返り討ちにされただけだ。
男子らの喧嘩っ早さが今回の原因であるため、終わってみれば罪悪感が湧いてきた美鶴が気まずげにするのも無理はない。

とはいえ、知り合いの真田たちなら家に入れてやれば良かったのではと思ったのか、ラビリスはジトッと責めるような目で湊に尋ねた。
「なんで湊君は入れてあげんかったんよ？」
「……武装した集団が来て入れる訳ないだろ。俺は真田は奥で寝ているはずだと伝えた。影時間が明けてからでも電話して確認すれば済んだ話で、どうしてそんなやつらを入れなきゃいけないんだ」
影時間には黄昏の羽根を積んだ機械以外は動かない。逆に影時間さえ明ければ携帯に連絡する事は可能なのだ。
既に相手側に捕まっているのなら影時間内に解決しようとはせず、そういった方法で安否確認をしても良かったはずだ。
そして、それ以前に極道の家であり相手が殺人鬼だからと警戒したのだろうが、他人の家に行くのに完全に武装して良いはずがない。
自分たちに戦闘の意思はないと目の前で武装解除するパフォーマンスを見せるなら分かるが、武装も解かずに一方的に要求を告げ、さらに断られれば武力行使に出るなど悪手のオンパレード過ぎて話にならなかった。
湊がその事を指摘すれば、隣のテーブルでお菓子を食べていた座敷童子とバアル・ペオルの姿になった鈴鹿御前が補足を入れてくる。
《八雲は……ちゃんと、忠告した……何度も、何度も……》
《ああ、随分と優しいものだったぞ。此奴らもただ切られただけだからな》
「吉野たちが来なければこいつは俺たちを殺していただろうがっ」
後一歩遅れていれば殺されていた。寸止めなどという脅しではなく、完全に自分たちを焼き殺そうとした事実は消えない。
興奮のあまり思わず立ち上がって真田が言えば、特別課外活動部の女性陣たちも複雑な表情で視線を落とす。
それを聞いたチドリやラビリスは、鈴鹿御前が言っていたのは魔眼を発動しながら死の線を切らなかったという事だろうと理解しながらも、相手を殺そうとしていた事はやはり問い質さねばと真剣な顔で湊に話しかけた。
「それや。湊君、なんで皆を殺そうとしてたんよ？　いくら何でも限

度があるやろ」
「……敵なら殺すだろ」
「皆、知り合いや！　いくらでも無効化の手段があるんやから、そこまでする必要ないやろ！」
テーブルを叩き怒鳴るラビリス。言われた青年は感情の読めない蒼い瞳でジッと見返しているが、途中の経緯を知らないラビリスにすればそう思うのは当然である。
相手を重傷に追い込んだ上で殺そうとした。端的な情報しかなく事実のみを並べればそうなるため、明らかにやり過ぎな湊をチドリも睨めば、言われた本人は静かに口を開き反論した。
「それはこいつらに言え。アナライズをしていた山岸と負傷者の回復をしていた岳羽を捕らえた以外、全てこいつらから攻撃を仕掛けて来たんだ」
そう、先ほどの戦闘において湊からは誰一人攻撃を仕掛けていない。
真田だけでなく、荒垣も天田も順平も、全員が先に仕掛けて返り討ちにあった。
途中で参戦した美鶴だって彼女からスキルを放っているし、七歌など最初から殺すつもりで林の木まで吹き飛ばしてきた。
だというのに、青年が全て悪いかのように言われれば、最初に言っていた通り帰っていればそんな事にはならなかったと言い返したくなるのも無理はない。
そして、湊がそう言い返せば天田や順平が睨んできていたので、負傷していた天田を盾にした件についても説明する。
「はっ、随分と俺に憎しみを抱いているが筋違いだぞ」
「なんでだよ。お前が僕を炎に放り込んだんじゃないか！」
「お前が負傷したのはお前のお仲間の攻撃によってだ。直撃していれば相手も同じ怪我を負っていたというのに、仲間を助けるためだと理由をつけて自分たちの暴力だけは肯定するのか？」
あのタイミングならば湊は簡単に避けられた。よって、天田のように直撃という事はなかっただろうが、ペルソナ二体の波状攻撃をして

おきながら相手を傷つける意思がなかったという事はないだろう。
当たっていれば天田のような大怪我を負う攻撃を仲間が放っておいて、自分がそれの盾にされて憤るなど話にならない。
「先に手を出してきたのはお前たちだし、ペルソナのスキルを放って来たのもお前たちからだ。こちらは一人だったのに対し、お前らは最大三人で同時に仕掛けてきてもいたな？　ただお前らが弱すぎただけの話で人を悪者にするなよ」
そう言い切り湊が口の端を僅かに上げれば、我慢の限界が来たのか男子たちが立ち上がる。
「んだとテメェ！」
「調子に乗るなよ！」
そして、女子たちが止める間もなくテーブルを踏み台にして殴りかかろうとすれば、
「――――敵に見逃され、情けで治療して貰った分際で粋がるなよ」
彼らは背後から首を掴まれ一歩も動けなくなる。
一瞬で移動することは影時間にも見せていたが、一人でどうやって四人の首を掴んでいるのかと思えば、湊は背中から黒い腕骨を出して四人の首を掴んでいた。
ギリギリと首に指が食い込んでいき、四人の身体を持ち上げてゆく。
掴まれている者たちは自由な腕で骨の拘束を解こうとするが、影時間外のペルソナ使いの身体能力は一般人とさほど変わらない。
下手をすればペルソナより強い力を解ける訳もなく、全員の顔色が悪くなりだした頃に一人の少女が口を開いた。
「八雲、今すぐ部屋に戻って。貴方がいると話が出来ない」
「……そっちが呼んだくせにな。まぁいい、少しは自分たちの行動がどれだけ偏ってるか考えろ」
冷たい視線で睨むチドリに言われると湊は拘束を解いて部屋を出て行く。
その際、またしても瞳の色が僅かに濁ったように見えたが、荒い呼吸をしている男子たちを心配そうに眺めていた者たちは誰もその事

に気付かない。
「はぁ……不必要に八雲を刺激しないで。私たちの前では人を殺さないけど、裏を返せば一瞬で別の場所に連れて行って殺す事は出来るの。八雲も言っていた通り貴方たちは見逃して貰っただけ。自分たちの実力で生き残った訳じゃないのに勘違いしないで」
相手の実力を見ておきながら、まだこうやって感情に任せて行動出来る無謀さには感心する。
もっとも、それは大いに呆れを含んだ皮肉なのだが、お互いのメンバー等の情報交換をする前に湊を退出させなければならないのは予想外だった。
未だに彼しか知らない情報はあるし、誰よりも影時間について理解している彼から聞いた方が早い話もある。
しかし、彼をここに残せば怒りが収まっていない彼らと話など出来はしないだろう。
「なんであんな異常者を野放しにしているんだ」
「兄さん、失礼ですよ！」
首に残った掴まれた痕に触れながら吐き捨てた真田の一言に美紀が激怒する。
もし、ここで九年前の火事について説明すればどんな顔をするのだろうか。そんな事を思いながらチドリが暗くなった場の雰囲気をどうするか考えていれば、隣のテーブルにいた湊のペルソナたちが次々に立ち上がった。
《クフフ、お前たちはつくづく八雲を怒らせるのが上手いな。魔眼を解除出来ないほどの怒りなど久方ぶりだぞ》
《七歌、八雲はあなた達を赦してなどおりません。チドリやアイギスがいるから何もしていないだけのこと。今の八雲が何を想っているかは分かりませんが、自分たちの行動の責任が未だ残っていることを忘れてはなりません》
茨木童子と赫夜比売がそう言い残すと次々に部屋を出て行く。
自分たちが使った湯呑みはアリスがお盆に載せて持っていったが、座敷童子などは真田の後ろを通るときに背中を蹴ってから出て行っ

た。
蹴られた本人は何をすると僅かに憤った表情を見せたが、小学校高学年か中学一年生ほどの小さな少女が蹴った理由も分かるので、女子たちは特に何も言わずペルソナたちの言葉について頭を悩ませる。
「……迂闊だった。解除してないんじゃなくて、解除出来ない状態にあるなんて」
「やはり、八雲もあの眼で何らかの異能が使えるのか？」
「ええ、それを使われていたら貴方たち死んでたわよ。防御も回復も不可能な最凶の力だから」
美鶴が尋ねればチドリは詳しい能力は伏せながら端的に語った。
思えば魔眼状態でありながら彼らの傷を全て治せた時点でおかしいのだ。
それはつまり湊は相手を本当に追い返す目的で戦っていたという事で、相手を殺そうと考えるまでにかなり我慢していたのだろう。
戦闘が終わってからも魔眼が切り替えられないなどいつ以来か。
このままでは本当に拙いと思い、チドリは今日の話し合いはここまでにしようと伝えると、アイギスを含め誰も湊の部屋に近付くなと告げ、そのまま桜と一緒に部屋を出て行った。
他の者たちは既に泊まる部屋を聞いているのでそこへ移動し、部屋を去るチドリの表情から自分たちは一体どうなるのかと不安を抱えながらも、戦闘の疲れが出たのかその日はすぐ眠りについた。
――桐条宗家
チドリたちが部屋で話し合いをしていたのと同時刻、警察からの電話を受け、幾月と思われる焼死体が発見されたという報告を受けた桐条は頭を抱えていた。
寮の駐車場で発見されたので寮生に事情を聞こうと思ったが、誰もいないのでどうしていないのかとも尋ねられた際には、夏休みなので知り合いの家に揃って泊まりに行っているというありきたりな理由しか返せなかった。
どうして焼死体が幾月だと分かったかと言えば、持ち物からそう判断されたようだが、損傷が酷く見た目では人物の特定が不可能なの

で、これから司法解剖を行ない歯形などから特定して行く事になるらしい。
犯行は影時間に行なわれたと推測され、きっと真相は分からず強盗目的で襲いかかった犯人が誤って殺し、その証拠隠滅を図ったなどといった感じになるに違いない。
大事な右腕とも言える人物を殺された桐条は、犯人は誰だろうかと推測する。
最も可能性が高いのは有里湊だが、彼は桐条のことも生かしているので急に殺す事はないと思われる。
ならば、最近聞かれる影時間を悪用している者たちだろうかと考えるが、犯人がわかったところで幾月が生き返る訳ではない。
桐条武治という個人の感情は今は置いておき、今後の子どもたちのサポートも含め、彼の後を継いでくれる者を早急に探さなければならないとグループ総帥の顔になったとき、パソコンのプライベートアドレスに一通のメールが届いた。
「ん、これは……」
こんな時間、それも立場的に自然とセキュリティの厳しくなるプライベートアドレスにメールなど珍しい。
幾月の事があったばかりという事もあって、重要な件かと内容に目を通した桐条は余計に頭を抱える事になる。
そこに書かれていたのは、巌戸台分寮の生徒たちが武器を持って襲撃してきたため、無力化した上で保護しているので朝一で引き取りに来いという湊からの命令であった。
相手は極道、ただでさえ話がややこしいというのに、どうして娘たちは関わるどころか胃痛すら感じるようになりながら、深く溜息を吐いた桐条は部下の高寺へと電話を繋ぐのだった。

第二百四十四話　対面、話し合い

８月７日（金）
朝――桔梗組
早朝とも言える時間。まだ夏の暑さを感じない涼しい時間帯に、黒塗りの車が一台石段の前に停まった。
運転手の男が車から降りると後部座席の扉を開け、そこから眼帯を付けた男性と三十代半ばと思われる男性が降りてくる。
眼帯の男の名は桐条武治、それに付き従っているのは彼の部下である高寺一郎だ。
高寺はあくまで表の桐条グループに所属する人間であるが、今日これから行なわれるであろう話し合いは影時間とは無関係なものになる。
故に、桐条は部下と共に詫びの品を持って子どもらを引き取りに来たのだった。
「高寺、難しい話になると思うが表情に出すな。聡い子だ。僅かな表情の変化で読まれるぞ」
「心得ております。相手方の提示した条件をすぐに飲めるよう準備も進めさせております」
「うむ。では、行くぞ」
これから向かうのは関東でも名の知れた極道の総本部だ。
まさか組員が揃っているという事はないだろうが、そうでなくても厄介な青年が待っていることに変わりはない。
相手がただの子どもであれば良かったが、残念な事に彼は俳優業などもしているため、そういった仕事への影響から賠償を支払わされる可能性が高い。
また、桐条グループの娘が武器を持って極道の家に殴り込んだなど、多くのマスコミが取り上げたがるスキャンダルでしかない。
青年がそういった脅しをしてくる事も考えられるので、二人は子どもたちの安全の確保と、桐条グループ全体に影響が及ばぬよう出来る限りの要求を飲む準備をしてきた。

本来ならば殺害された幾月の葬式などの準備を進めたいのだが、今現在は司法解剖で結果待ちの状態である。
それが終わるまでに無事に話が済めば良いがと考え、長い石段を登り切った桐条はインターフォンを押した。
＊＊＊
起きて朝食を食べていた七歌たちは、その席に湊がいないことを不思議に思いつつ、桜から迎えが来るので待っているようにと伝えられ、昨夜話をした和室で待っていた。
迎えが来ると言われても、昨日は色々あってここまで送ってくれたバスへの連絡を忘れていたので、きっと今も空き地かその周辺で待ってくれているはずだ。
ならば、それに乗れば簡単に帰れるのだが、極道の家に来たという事もあって大人が呼ばれているのかもしれない。
その場合は顧問の幾月がくると思われるので、来たら迷惑を掛けて申し訳ないと謝罪しようと美鶴が考えていれば、部屋の戸が開き桜に案内されて男性が二人やってきた。
「お、お父様っ!?」
まさかここに多忙な父が来るとは思っていなかった美鶴は驚く。
それは他のメンバーたちも同じようで、わざわざグループ総帥が部下らしき人物を連れてやってきた事に驚きを隠せない。
案内を終えた桜が出て行き戸が閉められると、全員の無事を確認した桐条は安堵の息を吐き、子どもたちが無事で良かったと声を掛けた。
「無事であったようで何よりだ。昨夜、お前たちがここへ来たと聞いたときには肝が冷えたぞ」
「申し訳ありませんお父様。お忙しいのにわざわざ……」
「構わん。普段、お前たちにばかり苦労をかけているのだ。このくらいは当然だ」
こんな事で多忙な父の手を煩わせてしまったことを美鶴が申し訳なさそうにすれば、大人たちの尻拭いをさせているのだから、何かあれば駆けつけるのは当然だと桐条は優しく言って美鶴の頭に手を置

く。
父に頭を撫でられるなど小学生以来なので、美鶴はとても照れた表情をするがおかげで周りは和やかな雰囲気になる。
他の者に笑われて美鶴は恥ずかしそうに「からかうな」と告げ、話題を逸らすようにもう一人の男性に視線を向けたので、部下の高寺一郎だと紹介を済ませた。
父だけでなく部下まで来るなど余程心配したのだろう。メンバーたちは高寺にも来てくれてありがとうございますと感謝し、お互いにちゃんと挨拶を交わしたところで桐条が昨夜の事を教えて欲しいと切り出した。
「さて、君たちには昨日何があったのかを話して貰いたい。主観だろうと客観だろうと構わない。出来るだけ詳細に頼む」
ここへ訪れることになったストレガとの出会い、適性を持っていた美紀と湊たち、まとめて掛かっても欠片も敵わなかった湊との実力差、秘薬による強化を施しても負けてしまったワイルド同士の戦い、あと一歩で殺されていたところ少女に助けられたこと。
美鶴たちは順に語る事で主観と客観の両方で昨夜の事を伝え、それを聞いていた桐条らは美鶴たちが無事だった事は本当に奇跡としか言えないという顔をしていた。
だが、最後まで話すと途端に二人は難しい表情になり、一体どうしたのだろうと子どもたちが不安に思ったところで高寺が口を開いた。
「御当主、やはりこれはかなり厳しいかと……」
「うむ、分かっている」
「おじ様、高寺さん、一体何が厳しいんですか？　迎えに来ただけじゃないんですか？」
二人は一体何の話をしているのか。事情が分からず七歌が尋ねれば、他の者たちも教えて欲しそうに大人たちを見る。
すると、七歌に尋ねられずとも結局は教える事になっていたので、高寺が非常に簡潔に自分たちがここへ来た本当の理由を話した。
「君たちは我々が迎えにきたと思っているようだが、実際は君たちのした事に対する謝罪に訪れたんです。月光館学園の寮に住む生徒た

ちが、深夜に武器を持って家に押しかけてきたため、有里湊が無力化した上で保護した。これが今回の件の端的な説明です」
武器を持って襲撃を掛けた時点で犯罪ではあるが、事態を重くしている問題点は主に二つ。
一つは、学校側が動向を見ておかなければならない寮生が深夜に勝手に行動していたこと。
そしてもう一つは、加害者側にグループの令嬢がいて被害者が広告塔であり特待生の湊である事だ。
前者は学校の管理責任を厳しく問われるだろう。後者は自分たちが宣伝に使わせて貰っている相手だけあって、その身内が危害を加えるなど絶対にあってはならなかった。
ただの生徒ならばそれなりの金額で和解を申し出ることも出来ただろうが、相手は金銭的に余裕のあることに加え、マスコミ経由でいくらでも世論を味方に付けられる地位を持っている。
そんな者を相手に譲歩などしてもらえるはずもないので、自分が考えられる以上に厳しい処分を覚悟してくれと高寺は語った。
すると、そんな一方的な話があるかと昨夜の事を持ち出して真田や順平が反論した。
「馬鹿な、それでは俺たちが加害者みたいじゃないか！」
「みたいじゃなく完全に加害者なんだよ。これから行なわれる有里湊との話し合いに影時間の事はきっと出てこない。だからこそ、それらを抜いて考えれば、君たちはただ武器を持って極道の家に襲撃をかけただけでしかないんだ」
「そんなムチャクチャっすよ！　オレたちはその本人に殺されかけたんスよ？　真田さんは腕折られたし、桐条先輩なんて腕切り飛ばされて腹まで刺されたってのに」
「じゃあ、その傷はどこにあるんだい？」
指摘され全員がハッとする。腕を折られた真田も、腕を切り飛ばされた美鶴も、赫夜のおかげで痕すら残らずに完璧に治っているのだ。
これではどれだけ説明しようと重傷を負わされたなど信じては貰えない。

子どもたちがそれを理解したところで、高寺はようやく自分たちの置かれた状況が分かったかと嘆息して続けた。
「状況が分かったかな？　こちらは完全に無傷なのに対して、向こうは九頭龍さんに腕や足を切られている。さらに君たちの指紋が付いた武器を押収されているし、召喚器だって傍から見れば拳銃でしかない。相手は芸能活動もしているからね。一体どれだけの賠償金をふっかけられる事か……」
怪我を負わせた場合、一般人への賠償金の支払いでも数百万は飛ぶのだ。芸能活動をしている青年が相手ではそれだけで済むはずがない。桁が一つ二つ増えることは覚悟しておかなければならない。
お金が絡んでくると順平や真田にも事態の重さを理解出来たのか、二人に加えて彼に思い切り切りかかっていた男子らは暗い表情になっていた。
「あの、話し合いの準備が出来たそうです」
「分かりました。すぐ向かいます」
男子たちの雰囲気に釣られて女性陣も深刻な雰囲気になってきたとき、戸が開いて桜が奥の座敷で湊が待っていると伝えに来た。
ついに対面かと大人二人は表情を引き締め桐条が先頭になって出て行く。その際、メンバーらも二人の後に続いてゆくが、座敷に着く前に高寺がこれから行なうのはただの話し合いではないと念押ししてきた。
「話は全て私と御当主でする。形式として君たちも同席して貰うが、絶対に口を開かないでくれ。今日の話し合いは君たちの進退についてだけじゃなく、桐条グループの今後にまで影響するんだ。言い方は悪いがこれ以上余計な事はしないで欲しい」
出会ったときの優しさは欠片もなく、高寺は非常に厳しい態度で伝えてきた。
それほどまでに自分たちの置かれた状況が悪いという事だが、戸で区切られただけの部屋をいくつも抜けてゆくと、最奥の座敷の手前の部屋に美紀、チドリ、アイギス、ラビリスが座っていた。
どうやら同席は出来ないが話は聞かせて貰えるらしい。四人とも

が少々緊張した様子なので、彼がどういった対応をするのか彼女たちも把握していないのだろう。
座敷に入る前からピリピリと空気が張り詰めているのを感じ、部屋の前で一度深呼吸してから桐条は一礼して入室した。
「突然のご連絡にもかかわらずお越し頂けた事を感謝致します」
「いえ、この度は娘とその友人が大変な無礼とご迷惑をおかけし、謝罪のしようもありません。誠に申し訳ございませんでした」
座敷に入ると湊が奥に座っていた。服装は実家での普段着の着物ではなく洋服だが、彼の後ろには七歌たちの持っていた武器と召喚器が並べられている。
召喚器のグリップから青い光が見えないことから、既に黄昏の羽根は抜かれているようで、貴重な黄昏の羽根を失った事を痛く思いながら桐条たちが用意された座布団に座ると、後ろにいた子どもたちも座った事を確認して高寺が初めに挨拶した。
「私は桐条の部下の高寺と申します。この度は誠に申し訳ありませんでした。それで、お怪我の方はどのような御加減でしょうか？」
「腕と脇腹、それに足に数針縫う傷が残っていますね。おかげで衣装は丈の長い物しか当分着られませんし。仕事にも様々な制限が出来ると思います」
そういって湊が袖を捲ると未だに血が滲み出ている切り傷があった。
七歌自身は掠っている程度だと思っていたが、見れば二十センチ以上の長さで傷が出来ており、深さによっては障害が残っていてもおかしくないレベル。
既に縫合されてはいるが、見ているだけで痛々しい怪我の状態に、高寺は余計に申し訳なさそうな表情になって頭を下げる。
「いきなり金銭の話というのは無礼かと思いますが、怪我の治療費、怪我によって負う仕事の損失等全てこちらで負担させて頂きます」
「ドラマ、映画、ＣＭ、今月の下旬に予定しているフェス等、かなりの企画が進められている最中です。もし今になって衣装が着れなくなったり怪我で撮影出来ないシーンが出れば、違約金は三億を軽く超

しますがすぐに用意出来るんですか？」
「はい。それにご迷惑をおかけした賠償金も併せまして、既に三倍の額を用意させて頂いておりますが、その後の活動においてまた何かありましたら追加でお支払いするつもりです」
違約金をキッチリ払う事になれば三億円にはなる。そう言った湊に高寺は三倍の額を払う用意が既に出来ていると返した。
つまり、九億円もの大金を桐条グループから湊に支払うのだ。違約金を払えば湊の手元に残るのは六億円になるが、それでも順平たちでは一生使い切れない大金である。
いくら世界に知られた桐条グループだろうと、そんな大金をポンと出す事は出来ないはずだ。
けれど、特別課外活動部のメンバーがした事に対する謝罪として払うしかない。お金だけで済めばまだ良い方なのだから。
「分かりました。仕事の損失等についてはそれで納得します」
「ありがとうございます。また書面に起こし次第送らせて頂きます」
賠償金について受け渡しの方法等を書類にしてしまうと、何かあったときに今回の事が外部に漏れる恐れがある。
その事は桐条や高寺も分かっているが、わざわざそうするのは、自分たちに不利なことになろうと迷惑をかけた責任を果たす、という誠意を相手に見せるためであった。
湊も相手がそういった意味で書類を送ると伝えてきた事を理解しているので、金額も妥当であった事から素直に受け入れてお金についての問題は解決した。
桐条グループにとっても安い額ではないが、想定した範囲内で納得して貰えたことに高寺たちも内心で安堵の息を吐く。
これで和解成立として帰らせて貰えれば言う事無しだが、そうはならないだろうと思っているとき、湊が輝くような金色の瞳を向けながら口を開いた。
「では、続けてそちらのご令嬢と友人たちの今後についてお話しましょうか。こちらの要求は全員の転校と学校のある港区、そして、この家のある六徳市への接近禁止です」

簡潔に告げられた湊の要求に、覚悟していたつもりの桐条と高寺も動揺して表情に出しそうになる。
相手の要求は真っ当だ。怖い思いをしたので、もう同じ学校に通いたくない。もう顔を合わせたくない。そうして学校と実家への接近禁止を要求してきたのだろう。
だが、それはあくまで表向きの理由でしかなく、港区という範囲で接近禁止を要求してきた裏を読み取れば、桐条グループで唯一の対シャドウ部隊に活動させないという事だった。
ペルソナ使いを失えば桐条グループにシャドウへの対抗手段はない。
黄昏の羽根を積んだ対シャドウ銃などの兵器を持ってくれれば、影時間への適性しかない者でもダメージを与えられるが、攻撃は出来ても相手の攻撃を防ぐ術がないのであまりに危険すぎた。
青年には当然それが分かっているのだろうが、影時間のことなど一切触れずに後ろに置いていた武器を桐条たちに見せてくる。
「これが押収した凶器です。相手が凶器を持っていたので、こちらもこのような道具を使って応戦してしまいましたが、まさか拳銃まで所持していた事は驚きでした。警察への連絡も考えましたが、知り合いという事もあって気が引けてしまい。当事者間で解決出来るようにとそちらにご連絡した訳です」
「ご配慮、痛み入ります」
このような道具と言って見せてきたのは無の小剣だった。
話には聞いていたが、七歌たちの武器と比べれば明らかにお粗末で、これで平然と相手を切りつけられる技量には感服するほかない。
元々文句を言えるような立場ではないが、応戦した際に使った武器が錆びた剣らしきものでは問題になるはずもなく、桐条たちは湊が警察に連絡しなかったことにただ感謝するしかなかった。
けれど、桐条と高寺が反論の一つもせずに湊の要求を受けようとしているのを見て、このままでは転校させられシャドウと戦う事も出来なくなると焦った順平が立ち上がった。
「ちょ、待ってくれよ！　そんなのおかしいって！」

「――――黙って座っていろ」
そんな一方的な要求は聞けない。順平がそう言おうとしたとき、湊が鋭い視線で射貫いてきたことで、順平は腰を抜かしたようにその場に座り込んでいた。
今の技は七歌も以前美鶴の婚約者に使っていた気をぶつけるというものだ。
しかし、一切触れる事もなく視線のみでそれが可能な時点で普通ではない。自分も気のコントロールが出来るからこそ、七歌はやはり龍と鬼の混血は格が違うと思い知らされる。
一方、少女がそんな事を考えている間、綱渡りのようなギリギリの話し合いをしていた大人たちは、あれほど言ったのにと順平の行動に心の中で苦い表情をしていた。
今の順平の態度からは一切の反省が見られない。そも、真田や順平は湊に対して未だに敵意を持っており、桐条たちに言われても自分たちが加害者だとは納得しきっていなかったからしょうがないが、それでも相手にそれがばれる態度だけは取ってはいけなかった。
このままではさらに要求を突きつけられるのではと考えつつ、桐条は順平の行動に対する謝罪を述べた。
「申し訳ありません。突然の事に動揺したようで」
「いえ、気にしてません。それで、こちらの要求は飲んで頂けるのですか？　流石に襲われたということもあって同じ学校に通うのは不安なんです。出来ないというのであればこちらが学校を去りますが」
気にしてないと微笑を向けてきた青年は、要求は先に言った物のみと繰り返す。
新たな要求をふっかけられなかった事は幸運だが、だからこそ桐条と高寺は今のを見逃して貰えたのは自分たちに貸しを作るためだと理解していた。
もしも直前の借りがなければ、三年生だけでも卒業までいさせて貰えないかと食い下がれたかもしれないが、被害者である青年が話し合いの席での加害者の無礼な態度を許した以上、桐条たちはその要求を呑んですぐに応じなければならない。

今後、シャドウの脅威にどのように対応していくか。それらも考えていかなければならないが、今回は全員が無事だっただけでも良しとしようと桐条が要求を呑む事を告げようとしたとき、
「苛めるのはそれくらいにしてあげられないかしら？」
突然七歌たちが入ってきた戸が開きその場に女性の声が響いた。
女性の声に覚えのあった者たちは驚愕して振り返り、思っていた通りの人物が立っていて再び驚く。
「英恵……どうしてここに？」
「ふふっ、実は夜中のうちに連絡を頂いていたの」
桐条が問えば英恵は悪戯っぽい笑みを浮かべ、隣の部屋にいた赤髪の少女の方へ一度視線を送る。
そう、本来地方にある桐条別邸にいるはずの彼女がここを訪れたのは、湊の行動を読んだチドリから夜中のうちに連絡を受けていたからであった。
ワンピースの上に薄いカーディガンを羽織った姿で現われた彼女は、入り口から進んで桐条らの傍に立つと、穏やかな表情で湊を見つめながら再度口を開く。
「それで八雲君、どうか赦してあげられないかしら？」
英恵は子どもたちに争って欲しくないと思い。しこりが残る今回のような対応はやめるべきだと湊を諭しにきた。
湊にとってもう一人の母親である英恵は弱点であるため、彼女が現われた時点で湊は話し合い中の作った笑みを消して普段の顔に戻っている。
その時点で勝ったも同然で、チドリは湊が英恵の登場に内心で苛ついていることを理解しながら、相手の思い通りさせずに済んだ事に小さく口元を歪めた。
そして、英恵が部屋に入ったことで話し合いがご破算になったと判断したチドリらが部屋に入ってくれれば、湊は淡々とした口調で少女らに問いかけた。
「……お前らも同じ意見か？」
「ええ、そうよ」

「ウチも友達が転校するんはイヤやわ」
「……わかった」
チドリもラビリスも湊が桐条側に出した要求はおかしいと考えていた。
だからこそ、英恵と同じように思っていると告げれば、湊は右手で目元を隠しながら深い深い溜息を吐いて静かに分かったと言った。
英恵たちの意見を聞いて青年が折れてくれると思っていなかった桐条らにすれば、彼がこんなにも簡単に要求を引っ込めたことは驚きでしかない。
だが、英恵たちの意見を聞くというのが真実だと伝えるように、立ち上がった湊は具現化したカードを持ち主の方へと投げて渡してゆく。
受け取った七歌たちはカードをどうすれば良いのか分からなかったが、チドリが持ち主が砕けばペルソナが戻ると告げれば言う通りにし、全員に奪われたペルソナが返却された。
さらに続けて湊はマフラーから本物の召喚器を取り出し、それをその場に置いて代わりにダミーであるコピー品をマフラーに収納する。
まさか用意されたのが形だけをコピーしたものだと思わなかったので、桐条たちからすればどれだけ自分たち側の情報を持っているのだと恐ろしくなったが、ペルソナと共に召喚器も戻ったならば言う事はない。
要求も取り下げられ、無事にペルソナも戻ってくるとメンバーたちにも笑顔が戻ってくる。
それを見て英恵やチドリらも小さく笑っていれば、ピアスと熊の爪のネックレスを外した湊がそれぞれを片割れを持つ少女に投げ渡し、完全に濁りきった金色の瞳を向けて呟く。
「――――さようなら」
直後、彼はその場から消えていなくなった。
戦闘時にも彼が一瞬で移動するのは見ていたので、七歌たちにすればまた不思議な移動法を使ったのかといった感じだ。
もっとも、今は戦闘中ではないので、彼が消えたところで順平たち

もどこに行ったのかとしか考えない。
「は？　あいつ、今度はどこ行ったんだよ？」
「風花、探知で居場所分からないの？」
「ゴメンなさい、有里君は隠れられたら分からないの」
せっかく話がまとまったというのに彼はどこに行ったのか。
不思議に思った順平やゆかりが探知能力を持つ風花に居場所を尋ねるも、同じ力を持っている湊はジャミングが出来るので隠れられると見つけられないと申し訳なさそうに答える。
だが、また変なことをしやがってと呆れている順平たちと違い。チドリや英恵といった彼の近しい場所にいた者たちは、変わり果てた瞳の色と言い残した言葉に呆然としていた。
特別課外活動部のメンバーや桐条らが彼女たちのそんな様子に気付かずにいると、ひたひたと足音をさせて長い黒髪の女性が部屋にやってくる。
《どうした莫迦みたいに呆けて？》
やって来たのはネガティブマインド時のバアル・ペオルの姿になった鈴鹿御前だった。
七歌たちにすれば、主が姿を消したというのに、ペルソナがまだ家に残って自由に歩いているのは不思議でならない。
しかし、彼女たちがどういった存在なのかを尋ねようとする前に、明らかに焦った様子のチドリがピアスを握り締めて鈴鹿御前に駆け寄った。
「八雲は、八雲はどこに行ったの?!」
「ちょ、チドリ、どうしたの急に？」
急に大声を出して湊の居場所を尋ねるチドリの様子に、ゆかりは一体どうしたんだと首を傾げる。
けれど、ゆかりの言葉に答えている余裕などないのか、チドリだけでなくラビリスも焦った様子でどこかに電話をかけている。
すると、少女たちと同じように不安な表情になりながらも、自分が焦れば子どもにも伝わるからと耐えていた桜の許に渡瀬がやってきた。

「桜さん、学校からお電話です」
「あ、すぐ行きます」
鵜飼や渡瀬は組の仕事もあるので湊の行動には不干渉でいる。
ただ、今日は桐条グループの人間が来るからと、一応渡瀬だけ護衛のために残っていたのだが、そんな彼が学校から電話が来たと言ってきたとき桜は嫌な予感がしていた。
電話を受けに桜が部屋を出て行くと、一度は和やかなムードになりかけていたメンバーは、チドリたちの反応から何か起きていると察して何も言えなくなる。
そして、数分経って電話を終えて戻ってきた桜が、青い顔をしながら一同に衝撃の情報を齎した。
「……みー君が、学校に退学届を出して行ったって」
『っ!?』
湊が姿を消してから五分ほどしか経っていない。僅かな時間で二十キロ以上離れた場所に行ったことも驚きではあるが、それよりも何故急に学校を辞めたのだと他の者は驚きを隠せない。
退学理由は学業と仕事の両立が難しいからと言ったらしい。仕事を始めてからも成績は落ちておらず、学内考査も全国模試も満点トップを維持している。
にもかかわらず、本人がそういって退学届を出すだけ出して去ってしまったので、本当に良いのかと引き止めも兼ねて電話が来たという訳だ。
桜は全く話を聞いていないので保留にしておいて欲しいと伝え、そのまま電話を切ったため湊の退学は確定していない。
しかし、本人に連絡が取れないため、何が何やらと桜が困惑していれば、話を聞いていた鈴鹿御前は愉しそうに笑った。
《ハハッ、やはり仕事が速いな》
「なんでそんな事になってるんよ!?」
《阿呆かお前は、自分たちが言ったんだろうが。此奴らに残って欲しいとな》
電話をかけても通じなかったのか、湊の突然すぎる行動に混乱した

様子を見せるラビリス。
　それを冷めた瞳で見ていた鈴鹿御前は、七歌たちに残って欲しいと選んだのは自分だろうと返す。
「だからって何で八雲が出て行くのよ！」
《言っていただろうが。要求が飲めぬのなら自分が去ると。お前らは八雲ではなく此奴らを選んだのだ。選んでおいて今更何を騒ぐのだ》
「違うっ、私はそんなつもりで言ってない！」
《お前の考えなど知らぬさ。八雲は最初からそういった意味で問うていたのだからな》
　チドリは湊が他の者たちと上手くやっていけるようにと考え、一方的とも言える話をなかった事にしたつもりだった。
　けれど、湊はチドリらも英恵と同じ意見かと尋ねたとき、その答えが湊の要求を呑むかどうかとして捉えた。
　まさかそんな受け取り方をするとは思っていなかったチドリは鈴鹿御前に反論するが、自分の言葉を相手がそのままの意味で受け取ってくれるかは状況による。
　何より、既に湊は去ってしまったのだから、ここで何を言っても無駄でしかなく。今更騒いでいる者たちを冷ややかに見つめながら鈴鹿御前は続けた。
《お前らは八雲と此奴らが仲違いすることを憂いて言ったのだろうが、それはお前らの独りよがりだぞ。何せ、お前らは一つも八雲の心について考えなかったのだから》
　湊のことを考えて言っていたというのに、それでどうして心について考えなかった事になるのか分からない。
　彼女が一体何を言っているのか分からず、その場にいる者たちの視線が集まれば、そのままでしかない言葉の意味を理解出来ぬ者らに呆れながら彼女は説明する。
《此奴らに襲われても八雲なら無事と考えていたな。そして、それだけの強さを持つ八雲だからこそ知り合いには手心を加えてやれと言ってもいたな。しかし、妾に言わせればおかしな話だ。襲われても無事だからと言って襲われた事実は消えぬし、知り合いたちに殺され

そうになった者がどのような気持ちか少しは想像したか？》
真田や順平、天田に荒垣や七歌など、特別課外活動部のメンバーたちは湊を明確な敵として倒そうとした。
無自覚であったとしてもそこに殺意がなかったとは言えず、実際、彼らの攻撃は湊が防いだり躱したりしていなければ致命傷になっているものもあった。
メンバーたちにすれば仲間と一緒に化け物を倒す感覚だったに違いない。
だが、彼らが戦っていたのは心を持った一人の人間だ。どれだけ強かろうが、どれだけ攻撃を防ごうが、湊からすれば知り合いに殺されそうになった事実は残る。
《だというのに、お前らが赦してやれなどと戯れ言をほざき始めたときには笑いそうになった。お前らはどこまで八雲に我慢を強いて心を蔑ろにするのだろうかと》
言われてハッとした表情になった英恵は気まずそうに目を伏せる。
それはチドリやラビリスも同じで、湊が傷つけた被害者である特別課外活動部のメンバーにばかり目が行ってしまっていた事に気付いたようだ。
しかし、その被害者という発想も間違えていると鈴鹿御前は話す。
《重傷だった此奴らを気に掛けるのは分かる。だが、お前らは八雲に自分を殺そうとした者らの治療を強要しておきながら、数針縫う傷を負った八雲のことは誰も気に掛けなかった。無意識にどうせ治る、治せると思っていたんだろう》
元々、湊は一方的に相手を蹂躙した訳ではない。襲われたから反撃していただけだ。
相手はペルソナまで使ってきたというのに、それでも八雲を倒す事が出来なかっただけの話であり、チドリたちの考える被害者と加害者の立場はまるきり反対である。
加えて、鬼血丸を飲んだ七歌は湊の身体に数針縫う必要のある怪我を負わせていた。
確かにファルロスの蘇生を応用した治癒の力や、ペルソナの回復ス

キルを使えば簡単に傷を治すことは出来ただろう。
だが、どうして家族であるはずの少女たちは襲ってきた敵の心配はして、襲われた家族には心配する言葉の一つもかけなかったのか。
昨夜から聞いていた鈴鹿御前は、湊の怪我の事を尋ねたのは話し合い中に高寺が尋ねた一度きりだったと話し、そこで少女や英恵に向かって怒りのままに叫んだ。
《巫山戯るなっ!! 八雲の強さは脆さの裏返しだ。敵に怯え、失う事を誰よりも恐れるが故に力を求め手に入れたのだ》
彼の過去を知っている者ならば知っているはずだった。どうして青年があそこまで必死に力を求めていたのかを。
《チドリ、ラビリス、お前らは八雲に普通や常識を説いていたな? だが、彼奴が生きてきた世界では敵は殺すものだ。どれだけお前らの常識で語ろうと別の世界で生きた彼奴はそれしか知らぬ。しかし、彼奴は知り合いだからと追い返そうとした。自分の命が狙われようと、魔眼を人間には使わず重傷に留めていたのだ》
湊が本気で殺すつもりなら直死の魔眼で治療不可能な怪我を負わせていたはずだ。
けれど、ここにいる者たちは全員が怪我を完治しており健康そのもの。
それが彼が本当に殺すつもりはなかった事の証明になり、最後に殺そうとしていたのも、そこに至るまでに十分な時間があった事を表わしている。
少し考えていれば分かったはずなのに、そこに目を向けず一緒になって青年を責めた少女に鈴鹿御前はどんな気持ちで彼を責めたのかと尋ねた。
《ええ? 無知な赤ん坊を甚振るのは愉しかったか?》
「違う、そんなつもりで言ったんじゃない!」
《何が違うというのだ。そういった言葉を口にする度、八雲の耳には〝お前は異常だ、間違っている〟と聞こえていたのだぞ。必死に力を求め続けた十年を、これまでの人生を否定されている訳だからな》
チドリやラビリスが世間での常識や普通を説く度、裏の世界で生き

てきた湊は自分を異物として認識していた。
社会という人間同士で形成するコミュニティの中で生きる上で、常識というのは考え方の指標として重要視される。
だが、そこに別の場所の常識を持ち込もうとする者がいれば、自分たちとは異なる物として数の暴力で排除される。
それが相手の生まれやこれまでの歩んできた人生を否定する事になるなど考えもせずに。
《妾たちはお前たちなら八雲を分かってやれるのではと期待していた。だが、やはり無駄だったようだな。いつの世も人間は鬼の力を利用する事しか考えていない。強さばかりに目を向け、その心を知ろうともしないっ》
湊の脆さを知っていたはずの者たちが、どうして今回は彼の味方であろうとしなかったのか。
別に敵になった訳ではなく、今後彼が特別課外活動部の者たちと少しでも上手くやっていけるよう考えてもいた。
しかし、湊は襲われた時点で相手を敵として認識していたのだ。
チドリたちはそういった湊の視点で物を考えることを怠ったが故に、肉体的に無事だった湊を加害者として捉え、肉体的に重傷だった特別課外活動部のメンバーたちを被害者としてみてしまった。
そんな、身体が無事だからといって心まで無事かは別だという事を忘れ、つい実力の面で弱い者の方に立ってしまったチドリたちに冷たい瞳を向け、鈴鹿御前は庭に面した開け放たれた戸の方へ向かう。
《おめでとう。力を合せたことにより、お前たちは無事人の姿をした化け物を追い払う事が出来た。せいぜい、化け物の犠牲の上に成り立つ平和を謳歌するといい。もうこちらから干渉する事はないだろう。だから、お前たちも干渉してくるな》
「待って、八雲の居場所をっ」
《さようなら、人間。私にはお前たちこそ鬼に見えるよ》
伸ばしたチドリの手が届く前に鈴鹿御前は哀しそうな顔をして消えていった。
後には重苦しい空気だけが残り、互いの言い分があったにせよ自分

たちの行動が原因で青年が去った事で、酷く気まずく感じて誰一人として動けなくなる。
だがそんなとき、自分は話に参加する資格がないからと隣の部屋にいて話だけを聞いていた少女が、部屋に入ってくるなり座っていた兄の正面に立って頬を強く張った。
バシンッ、と乾いた音が部屋に響き、叩かれた者だけでなく他の者まで少女の突然の行動に目を丸くする。
優しい性格から、これまで一度として暴力を振るった事のなかった少女が突然手を出したのだ。誰だって驚いて当然である。
しかし、突然の行動の意味を問おうと彼女を見たとき、その瞳にいっぱいの涙を溜めていたことで誰も言葉をかけられなかった。
「なんで、なんで兄さんは有里君にあんな事を言ったんですか!! 皆さんもです! 自分だって有里君を殺そうとしたくせにっ、都合の良い事ばかり言ってどうしてそこまで有里君を傷つけたんですか!!」
「違う、俺はお前を助けようとしてっ」
「助けてくれたのは有里君です! 兄さんもシンジさんも、誰も私が本当に大変なときには来てくれなかった。九年前の火事のときも、去年シャドウに襲われたときも、兄さんたちじゃない。有里君が助けてくれたんですよ!」
妹に叩かれ狼狽えている真田に対し、大粒の涙を流しながら少女は昨夜からの言動と態度を責めた。何故、自分たちの行動を反省せず被害者面しているのかと。
思えば一番客観的に両者の言葉を聞けていたのは美紀かもしれない。
美紀は湊に助けられここで匿われていた恩があり、尚且つ、身内だからこそチドリやラビリスが湊の言葉に否定的な立場を取ったように、家族だからこそ兄の言葉を全ては肯定的に受け止めずにいた。
勿論、そこには自分が兄たちに黙っていたことが今回の騒動の一因という負い目もある。
ちゃんと伝えていれば湊に迷惑を掛けずに済んだ。チドリやラビリスと湊が言い合いするような事もなく、湊と特別課外活動部のメン

バーたちが戦って険悪になる事もなかっただろう。
だからこそ、美紀は昨夜の話し合いでは自分が桔梗組にいる理由を語り、兄が言い過ぎれば止め、今日は口を出せる立場ではないからと最後まで隣の部屋で聞き役に徹していたのだ。
ただ、今になって美紀は兄たちを止めきれなかった事を深く後悔していた。
もっとちゃんと言っていれば、自分が湊にどれだけ助けられたかを語っていれば、兄たちの印象も変わってあれほど一方的に湊を糾弾したりしなかったのではないかと。
そんな自分の迂闊さと兄たちのこれまでの行動の結果、一人の青年が去るという結果を招いてしまったことで、美紀は怒りと悲しみの混じった感情のままに兄たちを責めた。
「守れないくせに、助けられもしないくせに、私の大切な人を傷つけないでくださいっ」
そこまで言い切ると少女は顔を手で覆ったままその場に崩れ落ちた。
彼女の口にした言葉は全てが本心という訳ではないだろう。だが、感情が昂ぶって出た言葉だけに、心の奥底ではそんな風に考えている部分もあるのかもしれない。
自分が助けようとした者に、仲間の大切な人だからと助けようとした者に、憎しみすら混じった否定の言葉をぶつけられた事で真田たちは全員がショックを受ける。
泣き崩れた美紀は桜が肩を貸して部屋を出て行ったが、家族や息子を追い込んでしまったという後悔でチドリらもまともに話が出来る状態になく、英恵は高寺と彼女の連れて来た侍女に連れられて部屋を出て行き、チドリにアイギスやラビリスは黙って部屋を出て行った。
そうして、全員が去って部屋には桐条と特別課外活動部のメンバーたちだけになれば、湊がいなくなったとき以上に重苦しい空気の中、座ったままの桐条が真剣な表情のまま子どもたちに話を切り出した。
「こんなときに話すべきではないのだろうが、君たちにもう一つ悪い報せがある。昨夜の影時間に幾月が殺害された」

「な、そんな、まさかっ」
「彼ではない。ここへ来る前に寮に寄ってきたが、カメラにはパーカーを着た一人の青年が映っていた。タイミングを考えればお前の会ったストレガとやらの別働隊だろう」
幾月が殺されたと聞いて美鶴たちの顔が青ざめる。まさか犯人は彼かと想像しかけたところで、それを読んでいた桐条が別人だから安心しろと声を掛けた。
その情報によって湊と親しかったゆかりや風花は安堵の息を吐いたが、彼が犯人でなかったところで幾月が殺された事実は変わらない。
特別課外活動部の活動は、理事長である幾月が色々と取り計らってくれていたおかげで出来ていた部分もあるので、学校とのパイプ役と桐条グループへのパイプ役を同時に失った以上、今まで通りにはいかないのではと七歌が冷静に尋ねる。
「私たち、これからどうなるんですか？」
「……八雲君は君たちに力を返した。ならば、これからも今まで通りシャドウと戦って貰うことになる」
「理事長の後任は決まったんですか？」
「ラボの人間で適任がいればその者が引き継ぐだろう。しかし、もうしばらくかかる。それまではストレガの動きに警戒しながら慎重にシャドウ掃討に当たって欲しい」
敵対するペルソナ使い集団ストレガ、去って行った湊、幾月の死。一日の間にあまりに多くの事があり過ぎて、七歌たちには考える時間が必要だった。
身体は無事、力も取り戻せた。しかし、美紀に言われた言葉が強く頭に残り、シャドウと戦う気になどなれない。
自分たちはどうなるのか。自分はどうすべきなのか。それぞれの胸に不安を残しながら、七歌たちは桔梗組を後にした。

第九章　―Ｄｉｓｃｒｅｐａｎｃｙ―

第二百四十五話　情報を求めて

８月１０日（月）
午前――ラボ

湊がチドリたちの前から去って行ったという情報は、その日のうちに桜経由で栗原にも伝えられた。

彼がどこかへ行くのは普段からよくある事だが、チドリとの絆を表わすピアスを置いて別れの言葉を口にしたとなれば、状況は三年前イリスが殺されたときを嫌でも思い出してしまう。

ただ、今回はそういった復讐のためではなく、チドリたちが七歌たちといる事を選んだために身を引いたというややこしい状況になってしまっている。

チドリは部屋に閉じこもって何かをしており、アイギスは自分が彼を傷つけてしまったと己を責め続け、ラビリスはどうにか彼と連絡が取れないかと色々と頑張っているようだが、今まで使えていたＥＰ社のＩＤが使えなくなっていて、もはやＥＰ社にすら入れない状態になっていた。

どうしてＩＤが使えないのかと知り合いになっていた警備のおじさんに尋ねれば、ラビリスのＩＤはゲストＩＤであるため、使用期限が終われればただのカードになってしまうという事だった。

つい数日前まで使えていたというのに、そんな馬鹿な話があるかと文句を言いたくもなったが、丁度やってきたシャロンからバイト名目で行なわれてきた性能チェックは社長命令で終了になったと教えて貰えた。

今後は研究やデータ収集に参加する必要はなく、怪我や病気になれば他の者と同じように久遠総合病院に来てくれれば、事情を知っている者が診察するという話だ。

（はぁ、問題なんて湊のことだけで十分だってのに）

青年とそれを取り巻く環境の事で頭を悩ませていた栗原は、今日は

店を閉めて桐条グループのラボへやってきていた。
呼び出してきたのはグループ総帥である桐条直々だが、幾月が影時間に殺されたという話も入ってきており、このタイミングで呼ばれた事に嫌な予感しかしてない。
そうして、職員に先導されて以前来た事のある会議室にやってくれば、中に通され待っていた桐条と対面した。
「わざわざ呼び出してすまない。来てくれて感謝する」
「まぁ、昨日の葬儀で会った時点で予測はしてましたからね。幾月が死んだから、私に後釜につけって話でしょう？」
警察の司法解剖によって死体は幾月だと断定された。桐条グループ傘下の歯医者に残っていたレントゲンと歯形が一致したのだ。
そして、死因は焼かれた事ではなく切られた事による失血性ショック死。わざわざ焼いたのは犯人に繋がる証拠を隠滅するためだろうとの事だった。
作戦室にも彼の血の跡が残されており、既にハウスクリーニングで綺麗にしたものの寮生たちも相当のショックを受け、日曜日に行なわれた彼の葬儀に参列した。
そこには元同僚だった栗原もいたのだが、身内がいなかったという事で喪主を務めた桐条から、明日ラボに来て欲しいと頼まれ今日面会する事になったのだ。
寮生らは美鶴が以前から申し込んでいた夏期補習に今日から参加しており、湊がいなくなった責任を感じているのか荒垣も復学のため補習を受けている。
本人たちはアルカナシャドウやストレガの問題があるのに、悠長にこんな事をしている場合ではないと考えているのかもしれない。
だが、桐条グループが無気力症の被害者数を改めて調べると、満月から三日経った現在、ピークの満月の日よりも被害者の数は減っていた。
アルカナシャドウを倒す事で被害者が回復すると考えられていただけに、その結果はシャドウと無気力症の関係性を今一度見直す事にはなったが朗報と言える。

しかし、だからと言って前線に出る子どもたちとグループを繋ぐ役目である顧問を空席にはしておけない。
そうして、桐条が目を付けたのは、古くから研究に関わっており、尚且つ寮生たちとも良好な関係を築いている眞宵堂店主の栗原だった。
「君に更なる負担を掛けるのは申し訳ないと思っている。だが、一から信頼を築いている時間はないのだ。だからこそ、私は客員という形で顧問に着いて貰いたいと思っている」
「あー、事情は分かりますがね。ってか、理事長をやれとは言わないんですね」
「理事長は単に学園でも円滑に動けるようにと配慮した結果だ。そこに関しては事情さえ知っていれば代わりはいくらでもいる」
理事長はあくまでアリバイ作りなど彼らの学校生活への影響を減らす役目でしかなかった。
だが、顧問はシャドウの特性などを理解して子どもたちのバックアップも行なう必要があるため、影時間に詳しくなければ務まらない。
そうなると選べる人材はかなり限られるため、桐条も理事長と顧問を分ける事で早期に対応しようと考えたのだった。
栗原もその辺りの事情は察していたのか困った表情で頭の後ろを掻くと、さてどうしたものかと考える。
率直に言えば断りたかった。別に幾月が死んだから自分も狙われるかもと怖がっている訳ではない。
彼女が断りたい理由は主に二つ。一つは本業である眞宵堂の仕事が疎かになりかねないから。もう一つは子どもたちの命を背負えるほど覚悟を持っていないから。
研究に荷担していたのである程度の責任は感じているし、そのために眞宵堂では主に特殊なアイテムの加工や交換という形で協力はしている。
だが、顧問となれば本格的に子どもたちの命を預かる事になるのだ。
バックアップとは言うがシャドウとの戦闘において彼女に出来る

事はない。ただ七歌たちから戦闘終了の連絡を待つのみである。
　自分にはそんな精神をすり減らす役目は負えないと考え、栗原は率直にそれを伝えた。
「悪いとは思いますが無理ですね。自分で戦場に送り出しておきながら、子どもたちが無事に帰ってくるのを待つなんて、自分じゃ心が保ちません」
「……分かっている。幾月もその事については常々悩んでいた。だが、有里湊が行方を眩ませたことで彼側のペルソナ使いからも連絡があったのだ」
　湊側のペルソナ使いとはチドリ、ラビリス、コロマルの事を指している。
　勿論、コロマルが連絡を取る事など不可能なので、連絡をしたのはどちらかの少女か仲介人と思われるが、一体どういった話をされたのかと栗原は尋ねた。
「誰から何の話があったんです？」
「吉野千鳥君から英恵経由で一時的に特別課外活動部へ合流するとの事だ。メンバーは吉野千鳥、汐見ラビリス、そしてコロマルという犬らしい」
　当初、桐条だけでなくラボの方でも犬がペルソナ使いになれるのかという疑問を持った。
　けれど、美鶴たちはコロマルがペルソナを呼び出している瞬間を目撃し、さらに言えば命を救われていたので、メンバーたちの証言によってコロマルもペルソナ使いである事の確認は取れた。
　話によればチドリたちはメンバー最強の七歌よりも高い適性を持っているので、そんな人材が一度に三人も合流してくるのは朗報としか言いようがない。
　だが、これまで湊共々力を隠していたというのに、このタイミングで何故協力しようと考えたのかが読めない。
　そこの点について何か聞いているのだろうかと考え、栗原は分かっているのなら聞かせて欲しいと頼んだ。
「合流する理由は？」

「寮に住むつもりはないが、あちらとしても戦力は多い方がいいと」
「……湊の捜索でもするつもりなんですかね。仮にタルタロスにいるなら二人と一匹ではキツいでしょうし」
湊は探知型の能力を応用したジャミングが使えるので、同じような探知型の能力者でも反応を探して見つけるという事は出来ない。
虱潰しに遠視の能力で探せば、遠くの風景の中に偶然発見という事もあり得るが、栗原が例として挙げたタルタロスは二百層以上に分かれたダンジョンだ。
他の者たちは地下のモナドの扉を開ける事は出来ないし、アルカナシャドウを倒す度に消える柵をどける事も出来ない。
けれど、実力もありながら空を飛ぶ事も出来る湊にはそういった制約がない。もっと言えば魔眼で床や天井を切り、穴を開けてショートカットする事も可能だ。
ならば彼を見つけたとしても、そこまで向かうのにシャドウとの遭遇は避けられないはず。そこで道中の敵を蹴散らす味方をチドリたちは求めたらしい。
「吉野君の話によれば十中八九タルタロスにいるとの事だ。無気力症患者が減っている事も伝えると、彼女は予想が確信に変わったとも」
「……それはつまり湊が一人でシャドウと戦っていると？」
「ああ」
湊が失踪してから今日まで誰一人としてタルタロスを訪れていない。
街中のイレギュラーシャドウとも戦っていないので、いまシャドウと戦っている者がいるとすれば湊かストレガかまだ見ぬペルソナ使いという訳だ。
「逃したアルカナシャドウの気配は消えているが、周辺の無気力症患者は増えている。そこから考えるにアルカナシャドウは何らかの理由で満月にしか姿を現さないらしい。だが、そことは別にポロニアンモール周辺でもやや増加傾向が確認された」
「ってもまだ満月から三日でしょう？　その増加傾向が偶然の可能性もあるんじゃ？」

「偶然ならばそれでいい。しかし、先日姿を現したアルカナシャドウと次のアルカナシャドウの出現の兆候が見られた。にも関わらず、無気力症患者が減っているとなれば、やつらが捕食するよりも速くシャドウを狩っている者がいるという事らしい」
アルカナシャドウを逃した七歌たちが最も恐れたのは、無気力症患者の症状の悪化と人数の急激な増大だった。
今回逃したアルカナシャドウは恐らく二体。そこに新たなアルカナシャドウが増えればこれまでの比ではない被害の増加が予想される。
その不安を排除するためにラボで無気力症患者のデータをまとめたところ、ここ一ヶ月増加傾向にあった湾岸部周辺の被害に加え、ポロニアンモール周辺でもやや増加傾向にあるという事が分かった。
まだ満月から三日なのでそれが新たなアルカナシャドウの影響かは不明。しかし、そういった増加傾向にある地域が確認されているにもかかわらず、病院で保護していた無気力症患者の一部が回復したことでグループの方でも何が理由か分からなくなった。
英恵経由で連絡したチドリにそれを伝えれば、彼女は増加するよりも速く湊がシャドウを狩っているのだろうと答えたが、もしそれが真実であれば彼はどんな速度で戦っているのだと栗原も疑問を持つ。
「待ってください。その回復した無気力症患者ってどれだけいるんですか？」
「正確な人数は出ていないが、ここ一月で増加した四分の一ほどには昇ると見られている。七歌君たちの推測では、アルカナシャドウに心を喰われた者はアルカナシャドウを倒さぬ限り回復しない。となれば、その他のシャドウの被害者だけが回復しているのだろう」
「そんな、たった三日ですよ？　影時間で言えば三時間しかない。それでその数を倒すなんて……」
「ああ、言いたい事は分かる。けれど、かつてエヴィデンスと呼ばれた青年ならばと考えてしまうのも無理はないだろう」
どれだけ言葉を選ぼうが彼の残した結果を見れば誰だって内心では化け物だと感じる。

そんな彼ならばそれだけの数のシャドウも狩れるのではないか。そう思うのもある意味では当然だと桐条が言えば、栗原はまた彼に負担を強いるのかと心苦しくなった。

彼がチドリたちの前から姿を消したのは自分を不要だと思ったためだ。けれど、それは彼女たちの傍からいなくなっただけで、青年が幼い頃から持っていた〝チドリたちが平和で温かな世界で暮らせるように〟という行動指針は変わっていない。

満月の夜が明けてからすぐに行動を開始したのも、被害者を少しでも減らそうという考えからだろう。

それが分かってしまう栗原は、青年のぶれなさに頭を悩ませつつ、巻き込んだ自分だけが楽をする訳にはいかないかと溜息を吐いた。

「……常にいるのは無理です。ただ、しばらくでよければ面倒を見ます」

「すまない。感謝する」

臨時顧問にはなるが自分の店を出来るだけ優先したい。ただ、そろそろ自分も過去の罪と向き合わなければと、栗原はこれまでの一歩引いた状態から一歩踏み出すことに決めた。

その言葉を聞いた桐条は頭を下げて感謝し、具体的な勤務内容等をその後話し合った。

午後――月光館学園

夏期補習を終えたメンバーたちが校舎から出てくる。夏の日差しと暑さに順平などは顔を顰めたが、補習が終わって開放感に包まれている他の生徒と違い、メンバーたちは全員どこか覇気がなかった。

中でも一番暗い表情をしているのは真田だ。普段の彼ならば久しぶりに学校の制服を着ている幼馴染みをからかっただろうが、今の彼は瞳にも力がなく押されれば倒れそうな雰囲気すらある。

その原因は先日の妹の言葉だ。彼は後からゆかりや順平に聞いたのだが、九年前の孤児院の火事で美紀を助けたのが幼い湊だったらしい。

相手にはずっと恩を感じていて、いつかもし再会出来れば礼に加え、あのときより強くなった自分を見て貰おうと思っていた。

しかし、そうとは知らずに真田は相手に危害を加えてしまった。知らなかったという事情、妹が相手に捕らえられているという状況、それらを考えれば不幸が重なったとも言える。
だが、湊が去って行った後の美紀の言葉。
守れないくせに、助けられもしないくせに、自分の大切な人を傷つけるな。
それを聞いたメンバーたちは、自分たちのこれまでの戦いが否定されたような気持ちになった。
本来の敵であるシャドウではなく、知り合いの青年に刃を向けて去る原因を作ったことは事実。これでは、人々を守るために戦っているなどとは口が裂けても言えない。
本来ならば美紀も夏期補習には参加するつもりで申し込んでいたのだが、彼女は体調不良を理由に参加をキャンセルしており、湊が去った日からは兄や荒垣だけでなくゆかりや風花といった総合芸術部の友人とすら連絡を拒否している。
温厚で優しい彼女がそこまで明確に他者を拒絶するなど初めてで、普段の彼女を知っているからこそ、相手がどれだけ自分たちに強い怒りを持っているのかが理解出来た。
「皆さん、お疲れ様です」
「あ、天田君。アイギスと一緒に迎えに来てくれたんだ」
「はい。まぁ、寮にいてもやる事がないんで……」
メンバーたちがやや暗い表情で校門に近付いてゆくと、そこで待っていた天田とアイギスが声を掛けてきた。
アイギスがこの時間に出掛けていないのは珍しいが、湊が失踪した事もあって出掛ける理由がなかったのだろう。
そんな事を思いながら七歌が返事をすれば、天田もどこか暗い表情で答えて黙ってしまう。
つい先日までは少年もやる気に燃えていた。自分もフェザーマンのように人々を守るヒーローになろうと張り切っていたのだ。
しかし、そんな少年にとってショックな事が起きた。一つは憧れのヒーローを演じていた青年が冷徹な敵となったこと。もう一つは助

けようとした相手から余計な事をするなと明確に否定されたことだ。
後者に関しては順平たちも同じように感じていたので、いくら大人な考えを持っていても小学生でしかない天田が相当なショックを受けるのも無理はない。
一つの心の支えを失ったようなものであり、だからこそ部屋に閉じこもっていたアイギスを連れてまで他の者と一緒にいようと考えたようだ。
そんな天田を見てから七歌は他の者たちを見てどうしたものかと考える。
アルカナシャドウの事はまだ解決しておらず、しかし、満月が来たからかテオドアからはタルタロスの新しい階層が開かれたと連絡があった。
志半ばで亡くなった幾月の仇討ちではないが、彼の意志も継いで影時間を消すために今後も頑張っていかなくてはならない。
ただ、今の状態では下層フロアの敵にも隙を突かれてしまいそうだと思っていれば、フゥ、と一呼吸して顔を上げたゆかりが口を開いた。
「……ねぇ、私たちの知らない有里君の事を知ってる人がいるんだけど、よければ話でも聞きに行く？」
自分たちの知らない湊の事と言えば、裏家業をしているときの彼の情報だろう。
それを知っている者がいるとすれば、彼の家族だったチドリたちを除けば同じ裏家業の人間しかいないはず。
何故、ゆかりがそんな相手を知っているのかと疑問に思ったが、謎の多い青年について自分たちは何も知らないという自覚があった一同は、ゆかりに案内を頼んで場所を移動した。
――喫茶店〝フェルメール〟
港区の外れ、入り組んだ狭い路地の中にある隠れ家的な喫茶店。
ゆかりの案内でそこを訪れた者たちは、こんな場所はじめてきたという顔で店内に入る。
「いらっしゃい。おや、随分と大勢で来たんだね」
「どうも、お邪魔します」

「ははっ、お客さんなら大歓迎だよ。好きな席に座って」
一度にこれだけの人数がやって来るなど初めてだ。しかし、店内はシックな雰囲気の普通の喫茶店なので、席は十分あるからとメンバーたちに自由に座って良いと五代は笑う。
言われたメンバーたちは奥の複数人がけのテーブル席に向かうが、最後尾を歩いていたアイギスは五代の姿を見ると、その顔に覚えがあって頭を下げて挨拶した。
「あなたは……どうも、お久しぶりであります」
「ええ、久しぶりですね。目覚めたと聞いてなかったから驚いたけど、どうやらラビリスさんと同じように人間になれたみたいだね」
相手が普通の子どもたちならばこんな話はしない。急に人間になれたんだねと言われても、事情を知らなければ何を失礼な事を言ってるんだとしか思われないからだ。
だが、五代は彼らが桐条側のペルソナ使いだと知っている。湊たちのこともあって相手を警戒しての事だが、入ってきた時点で訳ありのような雰囲気を出していたので、五代はわざと自分が桐条側の事を知っていると分かるように振る舞った。
すると、五代が何者なんだと驚いている美鶴たちと違い、アイギスが相手に声を掛けて挨拶をしたことに驚いていたゆかりが少女にどんな繋がりがあるのかを尋ねた。
「アイギス、五代さんと知り合いなの？」
「はい。以前、海外でわたしを八雲さんの許へ連れて行ってくださったんです」
「まぁ、それが桜さんたちからの依頼だったからね。僕たちには何も出来なかったから、本当にあのときは運が良かったよ」
一部の者はアイギスがラビリスの妹という時点で、湊の留学中に会っていた事は知っていた。
しかし、それが裏の世界に関する事だとは思っていなかったので、何でもないように微笑んで話す五代の反応もあって戸惑ってしまう。
もっとも、詳しい事を知らない者たちはそんな事もあったのかという程度で、テーブルに着くと飲み物とデザートを一品ずつ注文してか

らゆかりが話を切り出した。
「あの五代さん、実は今日は有里君について聞きに来たんです。私たち、彼がどんな事をしていたのか知らなくて……」
「フム……それはまた急にどうしてだい？　彼がどんな事をしていたのかは知ってるみたいだけど、その具体的な内容なんて子どもが知るべき事じゃない。知らなくていい事だ」
　こんなに大勢に青年のしてきた事や五代の本業が知られている。秘密裏に動く者にすればその時点でかなり痛いのだが、何も知らない子どもたちはただ知っている者に聞きに来たとしか考えていないのだろう。
　その点については子どもたちを責めるつもりはないし、まぁ、普通の子どもならばそうだろうなとしか五代も思わない。
　ただ、その〝普通〟であるはずの子どもが湊の裏の顔を知りたがっている。
　どうして自分からわざわざ裏の世界に関わろうとするのか、五代はジッと相手を見つめその真意を尋ねた。
「知ったからにはちゃんと理解しておいた方がいいと思ったんです。彼がしてきた事は悪い事、その事実は変わらないけど、どうしてそうなったのか経緯や理由を知れば見方も変わると思うから」
　飲み物の用意をしながら聞いて五代はなるほどと納得する。
　彼女たちが暗い表情でやって来たのは、きっと青年に対して何かをしてしまったから。
　その何かというのは、裏の世界で生きてきた彼との価値観の違いから生まれてしまったに違いない。
　用意した飲み物をトレーに乗せて運び、それぞれの前に置きながら五代は改めて口を開く。
「……今回は彼から何も聞いていない。となると君たちは情報屋に情報を求めに来た形になる。これでも仕事だからね。彼についての情報はけっして安くはないよ？　支払いはキャッシュのみ、円でもドルでも構わないけど、本当に聞きたいならこちらの条件を受け入れてもらうしかない」

これで引いてくれれば御の字。そう思いながら五代が伝えれば、唯一この中で払えそうな美鶴が全員に頷いて返したため、彼女が払う事で決定したらしい。
スポンサーとなる者がいるとやはり上手くはいかない。その事について苦笑した五代は、冷蔵庫から注文のケーキ類を取り出し、再びトレーに乗せてそれぞれの前に置くと、入り口の札を『準備中』に変え、カウンターに戻ってコーヒーを入れてから一同の方へ向き直った。
「さて、まずはどこから話したものかな。彼が初めてここを訪れたのは九年前、桐条グループ傘下の製薬会社でガス管の破裂事故があった頃だ」
そのガス管の破裂というのは被験体の脱走事件の隠蔽であり、実際は被験体たちを逃がすために青年が建物を融解させるほどの一撃を放ったのが真相だ。
ムーンライトブリッジでの戦いの後、桐条グループに回収された青年はそのままエルゴ研の被験体となり、被験体番号０００、通称〝エヴィデンス〟として素性を隠されたまま過ごす事になった。
だが、そこで彼はこのままでは他の被験体たちに未来はないと考え、全員を連れて脱走する事を計画し実行に移した。
もっとも、まだ幼い子どもでしかなかった彼は大人たちの狡猾さを読み切れず、相手の用意していた奥の手によって多くの被験体を犠牲にしてしまい、結果的に数名の被験体たちしか逃がす事が出来なかった。
その後、彼は桐条の追っ手から隠れるためチドリと共にしばらくは栗原の許に匿われていた。だが、かつての同僚に花を手向けに行った際、栗原が幾月と遭遇して居場所がばれた。
栗原も含めた本人たちにそう聞いていた五代が話せば、自分たちの知っている幾月の印象からすれば、ばれてもこっそり協力してくれそうなものだがと順平が不思議がる。
「え、なんで幾月さんに居場所がばれたらまずいんだ？　あの人なら子どもを保護してくれそうなもんだけど」

「……そうだな。幾月修司が君たちにどう接していたのかは分からないけど、あの男は間違いなくこっち側の人間だよ。そも、まともな人間なら子どもを被験体になんかしない。百人ほどいた被験体で生き残ったのは一割に満たないんだ。親しかった君たちにこういうのも何だけど、あの男は殺されて当然のことをしていたのさ」

幾月が殺されたという話は五代の許にも届いている。

そんな相手と子どもたちが親しかった事も今の反応で分かるが、五代は会ったばかりの子どもたちよりも、詳しく事情を知っている湊側に立って話をしている。

だからこそ、冷たく突き放すように殺されて当然だったと告げ、子どもたちから複雑な視線を向けられながら話を続ける。

居場所がばれた二人は知り合いに聞いていたここを訪れ、そこで住む場所が手に入るような仕事がないかと聞いてきた。

入ってきた時点で湊からはかすかに血の臭いがしており、髪も返り血によって変な傷み方をしていたことで、そのとき店にいた五代たちは話を聞く前から訳ありだとは気付いたと言って笑う。

話を聞いていた七歌たちにすれば、身体から血の臭いがするなどどれほどの血を浴びればいいのかと考えてしまう。

だが、そんな事は日常茶飯事だったよと告げて五代は彼らが桔梗組に行った経緯を話す。

「そのときロゼッタ、ああ、仲介人の女性だけど、彼女の持っている依頼にマンションからヤクザを追い出して欲しいってのがあったのさ。依頼料は退去させた部屋に住む権利か現金だった。で、彼は本体を叩いた方が速いと考えてね。極道の本部に乗り込んだのさ」

彼は一度殺されてしまったが、結果的には上手くいった。

裏の世界でも名の知れた元壊し屋の渡瀬がいなければ、湊は一人で組を潰せたかもしれない。

しかし、彼が殺されたこともあって桜は子どもたちの側に立ち、そんな桜を非戦闘員だからと人質に取らなかった湊を鵜飼も気に入った。

おかげで二人は住む場所を手に入れ、湊はチドリを守ってくれる者

に預けて力を求める事に集中出来るようになった。
「桔梗組で暮らす事が決まったことで、彼はチドリちゃんを常時守る必要がなくなった。だからこそ、今度は自分が力を付ける事に集中しようと裏の仕事を始めたんだ。ま、基本的にはイリスとコンビを組んで仕事を学び、たまに僕が銃火器の扱いを教えることもあったけどね」
受ける依頼はイリスがかなり選んでいた。子どもにそんな事はさせたくないという思いもあったのだろう。
基本的には情報収集や依頼の品を取ってくるものばかりで、殺しの依頼があっても相手は自己中心的な理由で汚い事をしている悪人ばかりだった。
その中で彼は大勢の人を助けていたし、娘を助けたことでベレスフォード財閥との繋がりも出来たなど、彼のしている悪事を知りながらも協力してくれる者も生まれた。
だが、順調に行っていたはずの仕事は、一人の壊し屋との出会いで別の方向へ向かってしまう。
「君たちと出会ってからも彼は仕事を続けていた。けど、中学一年の夏、彼は一人の壊し屋と出会って負けてしまった。相手は彼が名切りだと気付いていてね。自分が狙われている事にも気付いていたし、力を求めて〝留学〟として海外に渡ったんだ」
日本で隠れて仕事をこなすよりも、海外に行って戦場に出た方が力も技術も存分に使える。
そういった理由で彼は武者修行で本物の戦場に身を投じた訳だが、話を聞いていた者たちはそこまでして力を求める必要があったのだろうかと暗い表情になる。
明らかに湊の力は異常だ。容易く人を殺せてしまう力は過剰とも言える。
そんな力を持たなければ、彼も〝普通〟に生きられたのではと思うのも無理はない。
けれど、そんな子どもたちの考えを見抜いた五代は、考え方が逆だよと指摘する。

「彼が力を求めたのは力がなければ生きられなかったからだよ。エルゴ研から脱走するとき、桐条側に何人の被験体が殺されたか知ってるかい？　まぁ、詳細は僕にも分からないけど、そのときに死んだ被験体を彼は忘れていない。自分が守りきれずに殺したと思っているのさ」
「そんな、八雲さんは何も悪くありません！」
「だろうね。僕らだってそう思っているよ。けど、彼は〝そういう人間〟なんだ」
叫ぶように声をあげたアイギスに五代も同意して頷く。
湊は自分が守り切れなかったとき、相手を見殺しにしたと考えてしまう。
随分と難儀な考え方だとは思うけれど、ずっと傍にいたイリスがそんな風に思う必要はないと言っても変わらなかった。
彼の本当の母である菖蒲や、その菖蒲から彼の本質について聞いていた英恵ならば、彼がそういう存在として生まれてきたことも知っている。
生きてきてそういう考えを持つようになったのではなく、生まれながらに他人にこそ価値を置き、自分のことを考えることが出来ないのだ。
一言で言えば歪。どうして善悪も分からぬ幼子がそんな考え方をしているのか。同じ血を持つ菖蒲や百鬼の祖父も、湊が完全なるモノだからそうなのかと深く悩んだ。
そして、そんな在り方の彼だからこそ、あの事件は起きてしまったと五代は続ける。
「彼を負かした壊し屋だが、そのバックについていたのが裏界最大の組織、久遠の安寧という先進国並みの軍事力を持つ組織だったんだ。そこの実質的な支配者に目を付けられ、一緒にいたイリスを邪魔だと依頼の中で殺された」
「え、それって前に有里君が言ってたソフィアさんの事ですか？」
「ああ。ソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタイン。表向きはＥＰ社のトップになってる彼女だよ。彼は見た目が良いからね。美しい物

好きの彼女は欲しがったのさ」
イリスを殺された件は聞いている。相手を犯してやった経緯について寮で聞いたので、当時いなかったアイギスを除く女性陣は皆知っていた。
だが、そんな痴情の縺れのような理由で人が殺されていたとは思わず、どんな世界なんだと複雑な表情をしていれば、五代は別に裏の権力者にとっては珍しくないと言って話を戻す。
イリスを殺された後、彼はなんとかイリスを故郷に連れ帰って埋葬し、しばらくは廃人になって教会の世話を受けた。
そのとき世話をしてくれたシスターは、彼に誘われ現在ＥＰ社の敷地内の教会で働いているが、イリスの死を切っ掛けに彼は母親に掛けられた記憶の解禁術が発動して名切りとして覚醒した。
名切りたちの血に宿る記憶を継承し、肉体と精神も変革した事で彼は真に化け物となった。
因縁の相手だった仙道弥勒を殺し、敵を久遠の安寧とソフィアに定めると自ら名切りの鬼を名乗って宣戦布告したのだ。
そのせいで彼は一千万ドルの懸賞金を掛けられ世界中の仕事屋から狙われるようになり、しかし、それらを躱して一万人以上の構成員を殺し続けた。
「彼は久遠の安寧の人間しか殺さなかった。だけど、彼を狙った仕事屋は場所も考えないで銃火器を使いまくってね。一般人への影響もあるって事で、今度は国聯に目を付けられて狙われるようになった」
「それがあのドイツの街で急にやってきた軍隊なんですね？」
「そう。まぁ、懸賞金は地下協会、通称ギルドっていう仲介屋と情報屋の合体した巨大組織経由で懸けられていたから、ベレスフォード氏が国聯に働き掛けて国聯軍と一緒に引かせたけどね」
そのおかげで湊は敵を倒せば無事に日本に帰ることが出来るようになった。
今までどこにも知られていなかった久遠の安寧の本拠地も物流から割り出され、青年はついに一人で乗り込んでソフィアを手中に収め、彼女ごと久遠の安寧を配下に加える事で裏界最大組織と名切りの

鬼との戦争は終結したのだ。
「ま、ソフィアさんも流石に自分より強いペルソナ使いがいるとは思わなかったんだろうね。僕なら同じ力を持っていても彼の経歴を知れば戦いを避けるけど、その辺りはやはり世間知らずのお嬢様だったって訳さ」
「待ってください。ＥＰ社のトップもペルソナ使いなんですか？」
「そうだよ。小狼君がいうには彼の次に強いのが彼女だ。チドリちゃんもラビリスさんもソフィアさんには及ばない。まぁ、死生観とかが関係しているらしいね」
彼側にまだ自分たちの知らないペルソナ使いがいたと聞いて美鶴は頭を抱える。
相手と直接会った事はないが、企業の持つ影響力を考えれば桐条グループとほぼ同等、国内ならばホームということで桐条グループが勝るが、それでも油断ならない商売敵でもあるのだ。
そんな企業のトップにいながら湊に次ぐ力を持っているなど信じられない。
美鶴たちはチドリたちの適性値を聞いて驚いていたのに、さらにそれを超える力を持つ者がいるなど、超大型ペルソナを有するストレガも含めれば、陣営の持つ戦力で最も劣っているのは自分たちだという事を思い知らされた。
「まさか、そんなにも他の組織が力を持っているなんて……」
「君たちは平和な世界で生きてきたからね。シャドウとの戦い以外じゃ命の危機なんて感じた事もないだろ？　ペルソナの力はそういった部分も影響しているらしいし、ただの学生なら劣っていて当然だよ」
五代は仕事屋が相手ではしょうがないよとフォローしたつもりであったが、その言葉は〝所詮は素人だ〟という風に聞こえて美鶴たちの胸に刺さる。
彼のことを聞いて色々と知る事が出来た。相手を一方的に殺人鬼となじっていた者たちも、正義では裁けない悪を討つため彼は自分が手を汚していたのだと認めるしかなかった。

殺していい人間なんていない。そう思いたいが実際は殺されてもしょうがないと思える悪人も存在する。
彼が狙っていたのはそういった人間ばかりで、彼のおかげで救われた者たちもいたのだ。
事情を知った今となっては一方的に責めた事も含めて謝罪したい気持ちが出てくる。殺されそうになった事は完全に許す事は出来ないが、敵ばかりの世界で生きてきたならば、自分の大切な人を守るためあのときの彼が敵を排除しようとした事も理解出来る。
だからこそ、彼ともう一度話をして自分たちのしたことの謝罪をし、それから彼の話を聞いて改めて有里湊という人間を理解したいと思う。
そう考えたゆかりは、湊の裏の顔も知っている五代に自分たちがしてしまった事を話し、知った今だからこそ彼とどんな関わり方をしていけば良いだろうかと尋ねた。
「まず謝りたいんですけど、その後はどうしたら良いと思いますか？」
「んー、そうだね。非常に言いにくいんだけど、まず謝る事が出来ないんじゃないかな？」
「それは会えないって事ですか？」
「まぁ、それもあるよ。けど、もっと根本的な問題さ。以前、彼が絆を捨てたのは誰も巻き込まないためでもあった。だけど、今回は君たちの選択によって別の道へ行く事になっただけなんだよ」
前回というのは久遠の安寧との戦争のときの事だが、あのとき湊は他の者に狙いが向かないよう自ら孤独になった。
しかし、今回はチドリたちが七歌たちが学園に残る事を求めたため、湊は言っていた通りに自分が彼女たちの前から消えたのだ。
話によればそうなる前から真田や順平は彼の事を疎ましく思っていた。ならば、今の状況は自分たちや自分の仲間の望んだ通りの状況であり、今更慌てる意味が分からないと五代は冷たい表情になる。
「きつい言い方になってしまうけど言わせて貰うよ。君たち何か勘違いしてないかな？　君たちの選択の結果が今だ。いくら反省しようが、謝罪したいと思おうが、君たちのした事はなかった事にはならな

い」
　五代は別に湊の行動を全て肯定するつもりはない。彼が素直に屋敷に招いていれば戦闘には突入していなかったと言われれば、確かにそうだねとも思う。
　けれど、七歌たちにも彼と同じだけの落ち度があった。知り合いが相手ならなんで武装していたんだいと聞かれれば七歌たちも言葉に詰まるだろう。
「シャドウが相手だろうと君らも武器を持って戦ってるんだ。少しは自分たちの行動に責任を持っているのかと思っていたけど、聞いている限りじゃそんな事はないみたいだね。子どもの我が儘にいつまで他人を巻き込むんだい？」
　つまり、どちらが悪かったなどという点についてはどうだっていいのだ。
　お互いに間違えたにしろ、自分たちの行動の結果が現状ならば認めなければならないのだと五代は諭す。
「ま、今のは親馬鹿だった母親（イリス）の代わりに怒ってみただけさ。実際のところ君たちの好きにしたら良いと思うよ。無茶をする子だからね。力尽くで話を聞いて貰うくらいしか方法なんてないんだよ」
　厳しい言葉を投げられた子どもたちが視線を落とせば、五代はフッと優しく笑ってお説教はここまでだとアドバイスを始める。
　湊の過去を知った程度で理解したつもりになられると困るのだ。だからこそ、彼に会って何を話すにしろ、ちゃんともう一度考えて慎重に行動した方がいいと伝える。
「僕としても彼には誰かと一緒にいて欲しいと思ってる。だから、大変だと思うけど頑張ってね。餞別として飲食代はサービスしておくよ」
「どうもありがとうございます。では、情報料の方は？」
「ああ、そっちも少しサービスしておこう。三割引と端数切り捨てで八四〇〇だ」
　既に飲み物とデザートを食べ終えていたので、話を聞き終わった一同は荷物を持って入り口へと向かう。

そして、飲食代をタダにして貰えたことに感謝しつつ、美鶴は財布から八千円を取り出し、他の女子たちが小銭を出して素早く会計を済まそうとすれば、キャッシュトレイに置かれたお金を見て五代が不思議そうに首を傾げた。
「ん？　小銭なんて出してどうしたんだい？」
「え、八四〇〇円ですよね？」
「ははっ、まさか。単位は万円だよ。こっちじゃそれが常識だよ？」
面白い冗談だねと笑う五代に対し、金額を聞いた一同は驚きのあまり固まってしまう。
どこの世界に普段から一億円近い現金を持ち歩いている学生がいるというのか。
まぁ、湊ならばマフラーに入れているので、アイギスがそれに気付けばすぐに用意する事も可能ではあるが、そんな物が入っているとは知らないため困っていると、誰よりも速く再起動した順平が声をあげた。
「いや、話聞いただけで一億近くってぼったくり過ぎでしょっ!?」
「彼の情報は裏じゃ高額で取引されてる。懸賞金がなくなったとはいえ裏世界で最凶と呼ばれる生きた伝説だ。そんな彼のこれまでを話した以上は僕も彼に狙われかねない。知り合いでも敵と見なせば彼は躊躇いなく殺すからね」
五代は湊に命を狙われるリスクを負ってまで話した。つまり、何かあれば逃げる必要もあるからこその値段設定である。
嘘だと思うなら調べてみるといいと言って、五代はカウンターの中にあったノートパソコンを取り出し、ギルドの運営する裏の情報掲示板で湊の情報の相場を子どもたちに見せた。
そこに書かれていたのは五代の言っていた通りの相場でやり取りされる湊の情報。真偽も分からないというのに、信じられない高値で仮面舞踏会の小狼の情報は取引されていた。
それらと比べれば五代の話は信憑性も情報量も桁違いで、相場よりもかなり安くなっているのでお得ですらある。
けれど、いくらなんでも急に言われても払えないと美鶴たちが思っ

ていれば、先ほどまでの優しい雰囲気から一転、五代はタバコを咥えて火を点けながら話し出す。
「ま、払えないっていうならそれでもいいさ。けど、その時はこっちの流儀でケジメを付けて貰う。君たちの個人情報は持っているし、桐条グループの研究所の場所もいくつか知っているからね。今は圧力をかけてやり過ごせている公安へ確実な証拠をリークすれば、芋づる式で過去の人体実験も当然バレるだろうね」
先ほどと同じようにニコリと笑うが、美鶴たちにはそれが金か死か選べと言っているように見えた。
湊も桐条グループのかなり深い部分の情報を持っていた。ならば、繋がりのある五代も湊と同等の情報を持っていると考えた方がいい。
いま公安に踏み込まれれば影時間を終わらせるなどと言っていられなくなるため、深い溜息を吐いた美鶴は宗家にいる斎川菊乃に連絡し、すぐに現金を持ってきてくれるよう頼むのだった。

第二百四十六話　彼の許へ

８月１２日（水）
午後――巌戸台
五代から湊の過去を聞いてから数日、アイギスは自由な時間を使って湊に出会えはしないかと街中を歩いていた。
研究所に回収され、それから彼が歩んできた人生はアイギスの想像を超えていた。
よく今日まで心が壊れずに生きてこられたものだと思ったが、話を聞き終わったときには既に彼は壊れていて立ち止まる事すら出来ないのだと理解する。
どれだけの傷を負おうと彼は目的のためならば痛みを無視するのだ。
痛いなら痛いと、苦しいなら苦しいと言えれば楽だろうに、ずっと頼られてきた青年は弱音の吐き方を知らない。
無知な赤子とはよく言ったものだ。あれだけの知識を持っていながら、彼は人間が成長する過程で自然と身に着ける心を守る手段を持っていなかった。
そんな青年にすれば自分が大切に思っている者たちから責められるのはどれほど辛かっただろう。
彼女たちも湊の事を考えて怒ってくれたのだろうが、敵を殺す事で守ってきた湊にすれば、それを否定されることは己の価値を失うのと同義だった。
チドリもラビリスも英恵も、全員が七歌たち特別課外活動部のメンバーが残る事を望んだ。
それは即ち彼女たちの日常に自分は不要で、これからは影ながら守り続ければいいのだと彼は受け取ったようだが、アイギスには彼が必要なので駅前にやって来たとき遠くに見えたその姿にもすぐに気付いた。
「じゃあね、プロデューサー。明後日もよろしく！」
「……イベント前だ。気をつけて帰れよ」

「分かってるって。ばいばーい！」
中学生くらいの少女が手を振ってから改札の方へ去って行く。
それを見届けた青年はポケットに手を入れたまま歩いてどこかへ行ってしまうが、ここで声を掛けなければ次にいつ会えるか分からないとアイギスは走った。
駅前の人混みの中を走るのは中々に難しい。人にぶつかりそうになって謝っている間に彼は遠くなっていき、しかしそれでも諦めずにその背中を追いかける。
「待ってください、八雲さん！」
足の長さもあって歩くのが速い彼は、すぐに駅から離れて人通りの少ない路地に入っていく。
けれど、人通りが少ないのならアイギスもしっかりと走る事が出来るため、息を切らせながら全力で追いかけると歩いていた青年の左腕を掴んだ。
「ハァ、ハァ……お願いします、待ってくださいっ」
「……人違いだ」
やっとの思いで追いついて声を掛けるも、相手は冷めた目でアイギスを見つめながら自分は八雲ではないと否定してくる。
それを聞いたとき、そこまで自分たちと一緒にいたくないのかとアイギスの表情が悲痛に歪む。
だが、アイギスが相手の腕を掴んだままでいれば、青年が深い溜息を吐いてから「こっちへ」と細い路地へと少女を連れて行く。
相手に案内されるままアイギスも一緒に路地へと向かえば、そこで青年の身体が光に包まれ、腰に届く長い金髪の女性の姿に変化した。
《ま、こういう訳で本当に人違いなんですよ。ぬか喜びさせたようですみません》
「あなたは一体……」
《ペルソナとしては死神〝玉藻御前〟って名前です。那須野で討伐された九尾って知りません？》
フフッと大人っぽい色気のある笑みで尋ねられ、那須野で討伐された九尾の事は知っていたアイギスは素直に頷いて返す。

白面金毛九尾の狐、傾国の美女として有名な中国の妲己、そんな風に色々な呼び名があるけれど、日本の三大妖としても知られる存在だ。
相手の話によれば同じ名を持つ同一存在などではなく討伐された本人。という事は紛れもなくペルソナの枠になど収まらぬ化生の一柱のはずだが、どうしてそんな相手が湊の姿をしていたのかとアイギスは尋ねた。
「どうして玉藻御前さんが八雲さんの姿を？」
《玉藻で結構です。それで変化していた理由は仕事に穴を開けないためですよ。私は他の方と違って心臓っていう予備バッテリーもあるので自由が利くんです。ま、適材適所でもあるんですけど》
なんと相手はペルソナという不安定な存在でありながら、生身の自分の心臓を保持しているという。
そんな状態でペルソナにしておける事も謎だが、どうして玉藻に代役を任せて湊本人が仕事に出ないのか分からない。
本人は無事なのか、今どこで何をしているのか、湊の安否を知りたい少女は少しでも情報が欲しいと質問を重ねる。
「八雲さんはいまどこにおられるのですか？　そんなお仕事に行けないような状態なんですか？」
《んー、まぁそうですね。どうせすぐに分かるのでお教えしますが、八雲さんは貴女方の前から消えて以降はずっとタルタロスの地下フロアでシャドウを狩ってます》
「ずっとって、もう五日分も影時間の中にいるのですか？」
影時間は一日に約一時間。五日分となればそのまま五時間ほどという事になる。
しかし、日常の中の五時間と影時間の五時間を一緒にする事は出来ない。影時間はただいるだけで気力や体力を消耗するのだ。
いくら相手が湊であろうと、そんな環境でシャドウと戦い続ければ激しく消耗しているはず。
居場所が分かったなら今夜にでも会いに行こうと、アイギスが他の者たちにも教える事を考えていれば、アイギスの事をジッと見返して

いた玉藻が薄く笑った。
《あらあら、そのご様子ですと今夜にでも八雲さんに会い行かれるおつもりですか？》
「はい。やはり善は急げと言いますし、疲れているのならば休息を取っていただく必要もありますので」
《なるほど……ですが、貴女方は会って貰えると本気で思っているのですか？　確かにアイギスさんは八雲さんを心配しているのでしょう。しかし、他の方は果たして同じ気持ちですかね？　心配するフリをして、本当はただ自分が罪悪感から解放されたいがために謝罪するのでは？》
　その謝罪は何のためか。相手のため、自分のため、それすら分からないのなら会っても意味はない。
　他の者と一緒に会いにゆくのなら余計に重要になってくるその部分を、アイギスたちはまだはっきりとさせられていないのではないか。
　そう指摘した玉藻はさらに笑みを深めて妖艶な雰囲気で一つ付け加える。
《何より、会ったところで話が通じるとも思えません。今後会いに行くおつもりのようなので親切心から教えておきますが、アレ、もう完全に壊れてますよ？》
「アレとは、八雲さんのことを言っているのですか？」
《ええ。まぁ、私の性質というのもあるのですが、私が尽くすのって基本的に破滅する未来を持つ相手なんですよ。なんとなーく嗅覚で分かると言いますか、そういう相手に惹かれるんです。どんな最期を迎えるのか識りたくて》
　玉藻は湊の心から生じたペルソナではなく、呪いや人々の負の心が集まり妖怪として生まれた存在だ。
　だからこそ、彼女は人の終わりを感じ取る嗅覚に優れており、今現在の主人である湊にもそう遠くないうちに終わりが来るだろうと話す。
　出会ったときから歪で、よくこんな状態で真っ当に動けているもの

だとも思ったが、止まる事も出来ない欠陥品なのだと理解したときにはさらに最期が気になるようになった。
故に、自分は今も一緒にいて彼の最期を見届けるつもりだと笑う玉藻に、アイギスは怒気の籠もった瞳を向けて叫ぶ。
「あなたは、あなたは八雲さんのペルソナではないのですかっ」
《だから、こうやってお仕事を代わりにしたりしているんですよ。先に言っておきますが別に私が壊した訳じゃありません。最初から壊れていたようですが、ギリギリのバランスで保たれていた均衡を貴女たちが崩したんです》
湊が死ぬときを愉しそうに眺めようとしている玉藻に対し、ペルソナならば主人を救うのが当然ではないのかとアイギスは怒る。
けれど、玉藻は変化を利用して仕事を代わるなどの世話はするが、壊れた心を治療する事など出来ないので、そんな事を言われてもと肩を竦めた。
《まぁ、会いに行くなら相応の覚悟をしてください。愛の力でハッピーエンド、なんて円満解決はあり得ませんから》
これ以上話しても意味はない。湊の場所は既に伝えたので、後は好きにしろといって玉藻は再び湊の姿になって帰って行く。
その後ろ姿を見つめたアイギスは、他の者たちに湊の居場所が判明したと連絡をし、今日の夜にタルタロスへ行こうと誘いを掛けるのだった。
夜――巌戸台分寮・作戦室
影時間の二時間前、美鶴に言われメンバーたちが作戦室に集まっていると、扉がノックされて数名の人間が部屋に入ってくる。
眞宵堂の店主である栗原、チドリ、ラビリス、コロマル、そして桐条英恵だ。
何故、ここに英恵がいるのか。その事に疑問を感じなくはないが、彼女たちがやってきた理由は栗原から話すとして、全員が席に着くと栗原が口を開いた。
「細かい自己紹介は別にいいね。幾月の後任としてしばらく顧問になる事になった栗原だ。今後、影時間の作戦行動のバックアップを担当

するけど、毎回来れる訳じゃない。あくまで本業は店の方だからね。まぁ、よろしく頼むよ」
幾月の死からまだ一週間も経っていない。にもかかわらず、すぐに後任が決められたのは活動に出来るだけ穴を空けないためだろう。
相手が知り合いである事はありがたいが、まだ心の整理がついていない者たちが複雑な表情を浮かべていれば、あまり店でしっかりと会話をした事のなかった順平が手を挙げて質問した。
「あー、ちょい質問していいスか？　栗原さんって桐条グループで具体的には何してたんですか？」
「十年前に先代当主の下で研究員をしてたのさ。考古学の方面から調べて欲しいってね。ペルソナの基礎理論を見つけたところで離れたから、あの事故現場にはいなかったが、それでも岳羽主任の部下として小学生だった八雲とも面識はあったよ」
岳羽主任とはゆかりの父の事である。十年前の研究にも関わっていたならば、面識があってもおかしくはないが、改めて第三者から湊と岳羽詠一朗が知り合いであったと聞くと不思議な気持ちになる。
ゆかりはもう少し父の事を聞いてみたそうな顔をしていたが、サバサバとした性格の栗原は、そんな事は後でも聞けるからと一緒に入ってきた者たちの紹介に移った。
「私のことはそれくらいでいいだろ。じゃあ、こっちの面子の話に移る。名前は知ってるだろうから単刀直入に言うと、今日からチドリたち三人も作戦に参加する。ただ、特別課外活動部には入らないし入寮もしない。ま、助っ人と思って貰えばいい」
紹介を受けた三人は特別課外活動部で最強の七歌よりも高い適性値を持っている。
一人だけでもかなりの戦力アップだというのに、一度に三人も加入となれば戦力は倍に跳ね上がったと言っても良いだろう。
幸いな事に湊に敵意を抱いていた男子らも、湊を諌めていたチドリたちには悪感情を向けていないため、何度か一緒に戦えばすぐに合せられるはずだ。
しかし、今のところ七歌たちは相手の戦い方やペルソナの力を知ら

ない。中でも一番の謎は犬でありながらペルソナを出せるというコロマルだが、どこまで戦力として期待して良いのかという疑問を解消するため真田が一つ尋ねた。
「その助っ人とやらはどこまで協力してくれるんだ？」
「第一目標は八雲に会う事。ただ、八雲がいるのは深層モナドだから、そこを攻略するために力を付ける必要があるなら、少しはそっちに時間を割いてもいい」
助っ人として参加するのはあくまで湊の許に辿り着くため。
彼のいるところに行くまでに強力なシャドウがいるので、自分たち以外にも戦力が必要と思ったからこそ、相手が強くなるために協力してでも一緒に来て欲しいと考えた。
突然の申し出の理由を理解したメンバーたちは、それを聞いて納得したような顔になったが、美鶴はチドリの話に出てきたモナドとは一体何だと質問を返した。
「我々は深層モナドが何か分かっていない。その説明も頼む」
「モナドっていうんはタルタロスの地下フロアのことやねん。エントランスの右側の扉から地下に行くんやけど、階層が深くなるにつれて敵の強さも増すんよ。正直、アルカナシャドウより強いのもおるから、ウチらも湊君と一緒にしか入ったことないんやけどね」
自嘲するように話すラビリスに対し、聞いていたメンバーたちの表情は暗くなる。
モナドもタルタロスの中に存在するため、敵は同時に複数出現することもあり得る。
ただ、もしそれら全てがアルカナシャドウ並みの力を持っていたとすれば、流石にこの戦力であっても厳しい。
そう思ったからこそメンバーたちは暗い表情になったのだが、何かの策がある可能性も否定出来ないため一同を代表してゆかりがその事を指摘した。
「そんな敵がいるところに行って大丈夫なの？　いくらなんでも厳しくない？」
「八雲がいるなら行くしかないでしょ。別に貴女たちが来ないなら私

たちだけで行くけど」
戦力的に心許なくとも目的地に変更はない。相手がいるのなら行くだけだとチドリは断言する。
確かにそれはそうなのだが、メンバーの安全がある程度確保されないのであれば、そのままゴーサインを出す訳にはいかないだろう。
数ヶ月前の満月には味方がやられ、ヒーホーが敵を道連れにしなければ死んでいたかもしれないのだ。
その経験があるからこそ七歌もすぐに答えられずにいると、話が進まないのであればラボの方で分かった事を教えておくと口を開いた。
「あー、先にグループの方で掴んでる情報を伝えておく。あんたたちがアルカナシャドウを逃した事で心配された無気力症患者数だが、満月から僅かに減少傾向にある。敵の出現予想地点周辺の被害は増えているが、無気力症患者自体は回復している人が出てきてるみたいだ。で、その理由がタルタロスにいる八雲だと思われてる。ずっとシャドウを狩り続けているんじゃないかってね」
「八雲さんのペルソナである玉藻さんが仰っていました。八雲さんはあの日からずっとモナドで戦っていると。栗原さんの話からすると真実のようですね」
一先ず無気力症の被害が減っていると聞いて安堵の息を吐くが、その理由を聞いてメンバーはすぐに表情を引き締める。
皆の前から去って既に五日が経っている。アイギスが聞いた話が事実であれば、それだけの時間を戦い続けているという事で限界も近いだろう。
相手の意思を無視する事になっても連れ帰らないと危険だ。
特別課外活動部にすれば一度敵となった相手だが、今現在も人々のためにシャドウを狩っているというのならば個人の問題は置いて助けるべき。
そんな風に一同の考えがまとまったところで、栗原はこのタイミングで英恵がやってきた理由を話した。
「英恵さんがここに来た理由だけど、単純に八雲を心配したからさ。影時間中は作戦室にいるし、ストレガの件があったからと桐条グルー

プが黄昏の羽根を積んだ車を一台寮に配備した。何かあればそれで逃げるから心配しなくていい」
「ゴメンなさい。何も出来ないのに無理に押しかけて。でも、どうか八雲君をよろしくお願いします」
栗原と違って適性を持たない英恵の指には簡易補整器の指輪が光っている。
身体の弱い彼女にとってそれはかなりの負担になるはずだが、それほどまでに自分が追い詰めてしまった子どもの事が心配なのだろう。
桐条グループも緊急時に備えて車を一台配備するなど、英恵の意思を尊重しつつ何かあれば栗原と共に逃げられるよう準備をしている。
ならば、英恵たちにはここで待っていて貰い、無事に湊を連れ帰ってくると約束して一同はタルタロスへと向かった。

影時間――タルタロス
電車とモノレールを乗り継ぎ、無事ポートアイランドに到着すると世界は緑色に包まれた。
少し欠けた大きな月が空に浮かび、自分たちの知る学校が異形の塔に姿を変える様子を黙って見つめる。
つい先日まで影時間の関係者だと知らなかった同級生と一緒に見るのは、なんとも不思議な感じだと順平が溢すと他の者たちも確かにと同意する。
一緒にお昼を食べたり、一緒に旅行に行ったり、一緒にテスト勉強した事だってあった。
ちょっと前の事だというのに随分と昔の事のように感じ、それだけ自分たちが日常とは離れた場所に来てしまったのだと自覚する。
ただ、もし無事に湊に会って謝罪する事が出来、そして赦して貰えるのであれば、また以前のように一緒に思い出を作りたい。
だから、まずは彼に会って自分たちのした事を謝り、チドリたちもどういった意味で湊に他の者を赦してやって欲しいと思ったのかを伝えようと考える。
そんな事を思いながらタルタロスへ近付いたとき、感知型の力を持

つチドリと風花がタルタロスの異変に気付いた。
「……おかしい。あまりに静かすぎる」
「うん、なんだろう。何かの力がタルタロスを覆ってるみたい」
言われて他の者たちもタルタロスを見上げる。外から見た限りではどこにも変化はなく、今日も雲に届くほどの高さで聳え立っている。
だが、感知型の二人が言うのなら何かいつもと違うのだろう。その原因は何かと立ち止まったチドリたちがジッと塔を見ていれば、何かに気付いたようにチドリがアイギスの方を見た。
「まさか……アイギス、玉藻は本当に五日って言ってたの？」
「はい。わたしたちの前からいなくなった日からずっといると。そういえば、話すときに少し笑っていましたが」
「そう。なら、全員横一列に並んで。合図をしたら同時に中に入るわよ」
チドリが何に気付いたのか分からない他の者たちは、言う通りに一列に並びながらも首を傾げる。
同じ力を持つ風花にもタルタロスの異変の正体が分かっていないというのに、彼女は一体何を感じ取ったのかと七歌が尋ねた。
「ねえ、一列に並ぶ理由は？」
「……説明するより見た方が速いわ。見てて」
言いながら近くに落ちていた大きめの石を拾ったチドリは、タルタロスの入り口から二メートル手前で立ち止まった。
拾った石を一体何に使うのだろうかと他の者が注目すれば、チドリは持っていた石を入り口に向かって放り投げた。
彼女の手を離れて山なりに飛んだ石は、そのまま入り口を通過して中に入ろうとする。
しかし、入り口を通過すると思った瞬間に石は消えて、どこに消えたんだと他の者が探す前に、チドリがエントランスに続く通路の途中に落ちていた石を指さした。
見れば確かにチドリが投げた石のようだが、消えてから一瞬で通路に移動したようにしか見えず、どういった原理が働いて瞬間移動した

のか分からない。
　他の者がそんな風に考え込んでいると、今の実験で確信が持てたらしいチドリが解説した。
「目には見えないけど、境界線の向こう側は時の流れが違うの。中の時の流れはこっちよりかなり速い。だから中に入った石は一瞬で移動したように見えたわけ。入るタイミングが遅れれば、合流がどれだけ後になるか分からないわよ」
　瞬間移動したように見えた石は、実際にはちゃんと放物線を描きながら飛び、地面にぶつかってから転がって止まったに違いない。
　しかし、内部の時の流れが外よりも速くなっているので、外から見れば入った瞬間には既に終わってしまったという訳だ。
　話を聞いた者たちはそんな不思議な事が起こり得るのかと半信半疑だが、湊の許に向かうために協力して貰う以上はある程度の情報を渡す必要がある。
　これも最低限の信頼関係を築くためだと自分を納得させ、少し悩んでからチドリは静かに口を開いた。
「……〝時を操る神器〟、桐条側の人間なら貴女たちも聞いた事はあるでしょ？」
「ああ、私のお祖父様が手に入れるため研究していたと聞いている。過去と未来を自由に観測し干渉出来るようにするための物だと」
「ええ、私もそう聞いてる。でも、実際に人の手に渡った物はもう少し限定的な能力しか持っていなかったの。出来るのは時の加減速だけ。完全な停止もタイムリープも出来ない」
「まさか、それが今タルタロスの内部にあると言うのか？　いや、有里がそれを使っているのか？」
　驚いて聞き返してきた美鶴にチドリは頷いて返す。
　屋久島で話を聞いたときには桐条鴻悦の妄想の産物だと思っていたのだが、能力が限定的だとしても時の流れに干渉出来る時点でペルソナ以上に破格の異能と言える。
　それを使えば自分たちが動き出すよりも速く接近し、そのまま首を刎ねる事だって出来るのだ。

あまりの凶悪な力に僅かに怖じ気づくも、戦闘中にはほとんど使っていなかったがあの移動速度の謎が解けたと真田たちも納得の顔になる。
「あの速さの秘密はそれか。だが、もしまた戦闘になるとすれば、そんなものを使われたらこちらは何も出来ないぞ」
「最低限それを取り上げて使えなくするしかないッスよね」
「ああ。だが、取られる前に有里も使うだろうな。吉野、時を操る神器とはどんな形をしているんだ？」
まずその圧倒的なアドバンテージを相手から奪う必要がある。
勝てない事は分かっているが、せめて何も出来ないという最悪の状況だけは避けるために。
だからこそ、時を操る神器の形を先に聞いておこうと真田が尋ねれば、チドリは首を横に振って時を操る神器はそういったものではないと説明する。
「……正確に言えば〝時を操る神器〟は単独で存在するものじゃないわ」
「いくつもあるの？」
単独で存在するものではないという事は、複数あるのかもしくは複数の物で構成されているかだ。
後者ならばパーツの一つを奪えば機能を失うだろうが、前者ならば一つを奪っても次を出されたら終わりだなと七歌は難しい顔をする。
すると、チドリは湊の持つ〝時を操る神器〟は前者であり後者でもあると語った。
「重要なのは物じゃなくて〝時の流れ〟という目に見えないモノを認識出来る八雲の方なの。シャドウと同じように時空間に干渉する力を持っている黄昏の羽根を媒介に、八雲は力を上乗せする事で時の流れに干渉しているのよ」
「じゃあ、八雲君ってこうなんていうか……時間経過が目で視えてるの？」
「正確には時を概念として理解しているらしいわ」
「ほーん。でもま、それなら黄昏の羽根さえ出させなければいけるん

じゃない？」
説明を聞いて成程と七歌たちも理解する。先ほどの七歌の予想における前者でもあり後者でもあるというのは、湊が黄昏の羽根を持った場合にのみ、その黄昏の羽根が時を操る神器として使えるようになるという意味だった。
時を概念として理解出来るという意味は分からないが、そういう事ならば湊が黄昏の羽根を持たないよう気をつければ良い。
相手が何も取り出せないくらい連続で攻めれば、その間に彼の弱点である少女たちが彼に語りかけて話し合いに持ち込めるのではないか。
そんな風に七歌が大まかに作戦を立てれば、チドリは「残念ながら不可能よ」と前提からして無理なのだと話す。
「……八雲は研究所時代に黄昏の羽根を身体に埋め込んでるの。既に八雲とパスが通ってるから半エネルギー状態で触れないらしいし、やるなら心臓を包んでる羽根ごと胸部をふき飛ばす必要があるかも」
実際のところ、その方法を使っても湊から羽根を取り出せるかは怪しい。
チドリとマリアは湊が羽根を分解して心臓の内部に入れてから再構築した事で、心臓を切って開ければ中から羽根を取り出せるが、湊の方はパスが繋がった事で視認出来はするが触れる事は出来なくなっている。
胸部を丸ごと吹き飛ばしても肉体の再生と共に復活する可能性の方が高く。そも、そんな事が出来るのなら奪う必要もなく勝てているので苦労はしない。
何より、タルタロス内部の時を圧縮しているのなら、そちらを切らない限り別の能力は使えないので心配する必要はないと告げ、チドリは改めて他の者たちを横一列に並ばせると同時に中へと入った。
入り口を潜る際に何かの力に触れたような気がしながらも無事に入る事に成功する。
よく考えれば、頭から入った場合、時の加速した頭とまだ外に残っている身体で血液の流れる速度に差が出来るはず。

となれば当然頭の方から急激に心臓に血液が送られ、不整脈など何かしらの不具合を起こすはずだが、そうならないという事は生物の場合は身体の一端が触れた時点で全体に効果が広がるのかもしれない。
もしも教えて貰えるのなら聞いてみようと考えつつ、チドリが顔をあげるとエントランスの階段辺りに知った顔があった。
一人は紫の塗料で顔に紋様を描いた茜髪の女、もう一人は長い白髪を腰まで垂らした女、今はその二人しかいないようだが、鬼と龍の始祖である彼女たちがいるという事は他の自我持ちや湊もいるに違いない。
大勢でやって来たチドリたちに視線を向けた茨木童子は、フフッと愉しそうに笑うと口を開いた。
《おや、随分と久しいな。懐かしい顔ぶれだ》
「貴女たち、一体何日ここにいるの？」
《会って直ぐにした質問がそれか。まぁいい、既に一月など超えているぞ》
その返事にやって来た者たちは驚愕する。時を加速させているとは聞いていたが、本当に外とは違う時の流れに身を置いて戦っているという実感が湧いてきたのだ。
だが、ある程度は予想していたチドリは他の者より衝撃は少なかったらしく、サボっている様子の二人と同じように青年も休んでいるのかと聞き返す。
「休息はちゃんと取ってるの？」
《フフッ、あれが言って聞くはずもないだろう》
正面からジッと見つめてくるチドリに対し、分かっているだろうにと茨木童子は笑みを深める。
言って聞くほど素直ならばこんな風に話はこじれていない。三年前の久遠の安寧との戦いと同じように、今回も目的を達成するまで休まず働きっぱなしだ。
前と違いがあるとすれば、前回はターゲットを殺すと少し休息を取ってから移動して次のターゲットを狙っていたが、今回は無気力症患者の救済が目的であるためシャドウが消えるまで休めないところ

だろう。
　それはつまり、止めない限りは倒れるまで戦い続けるという事であり、話を聞いた順平やゆかりも流石に無茶だろうと声をあげる。
「え、ちょ、待てよ。んじゃ、有里は三十時間も休まずシャドウ狩ってるってことか？」
「嘘っ、敵はアルカナシャドウより強いんでしょ？　そんなの相手に休まずなんて自殺行為じゃない?!」
　モナドの敵は七歌たちが戦ってきたアルカナシャドウ以上の力を持つ者もいる。
　そんな敵を相手に一ヶ月分の影時間を足し合せた三十時間も戦うなど正気の沙汰ではない。
　だが、驚いているゆかりたちを見て、茨木童子は何を馬鹿な事を言っているのだと鼻で笑う。
《クフフ、お前らにとって一日は一時間なのか？　随分とせわしない毎日を生きているのだな》
「馬鹿な。本当に一ヶ月以上もここにいるのか？」
《そう言ったはずだが？》
　自分で聞いておきながら改めて肯定されると美鶴は絶句している。
　彼女も順平やゆかりと同じように一月を『一ヶ月分の影時間』と認識されていたのだろう。それがまさか『影時間の中に一ヶ月』という意味だと誰が思おうか。
　そも、普通の人間では七二〇時間以上も連続で活動出来ない。覚醒した名切りはラクダのように身体の中にエネルギーを溜め込んでおくことで長時間の活動を可能にするが、それでも不眠不休で一月も戦うなど出来ないはず。
　それを可能にしているのは彼の意志の力なのか、それとも玉藻が言っていたように既に壊れてしまっているからなのか。
　どちらにせ彼に会わない事には話も出来ないため、モナドに続く扉に向かったチドリが扉を開けようとすれば、扉は固く閉ざされたままビクともしなかった。
「くっ、やっぱり開かない！」

「どいてください。すぐに破壊します」
「ちょ、待ちってアイギス！　扉壊したら繋がりも消えてモナドに入れんくなるから！」
　開かないならぶち破る。一切の遊びのない表情で対物ライフルを取り出して構えるアイギスに、ラビリスが扉は魔法的な力で空間を繋いでいるので壊しても意味がないと教えた。
　話を聞いてアイギスも渋々武器をしまったが、実際のところラビリスの方もあまり余裕はないようで明らかに焦っている。
　まぁ、知り合いが一ヶ月も戦っているなど聞かされれば当然だが、少女たちを眺めていた赫夜は今更やって来て何を話すつもりなのかと尋ねた。
《行ってどうするのですか？　今のあの子に言葉は届きません。人を人と認識することも難しいでしょう。シャドウ諸共殺されたいのですか？》
「八雲はそんな事しないっ」
　一ヶ月も戦っている人間に正常な判断力が残っていると思うのか。
　そう話す赫夜をチドリは強い瞳で見返し、湊ならばちゃんと気付いてくれると言い返した。
　無論、その言葉には何の根拠もない。ただ彼ならば自分に気付いてくれるという願望で話しているだけだ。
　彼の状態が分からないからこそ、最悪の状況よりマシでいて欲しいという想いが言葉として出たが、そう思いたい気持ちは分かるぞと笑ってから茨木童子は自分の妹に声を掛ける。
《無駄だユーリ。こいつらには現物を見せた方が早い》
《ですが、今の八雲は……》
《まぁな。しかし、これも必要な事だ》
　二人は今の青年の状態が分かっているらしい。それは彼と繋がっているからなのか、それとも能力で彼の姿が見えているからか分からない。
　ただ、チドリたちが引かないとも分かっているので、これから案内してやるぞと茨木童子はモナドに続く扉を開けた。

《先にいくつか忠告しておこう。お前らが戦う必要があるのは最下層のみだ。他は警戒する必要すらない。だが、最下層に降りるときには警戒を最大に引き上げろ。八雲がいるのは通路を抜けた先の大部屋だが、その攻撃は通路にも届くぞ》

《今、タルタロスに散らばる他の者たちも呼びました。八雲の許に着く頃には合流しますが、危険を感じたときには装置を使って戻りなさい》

強大な力を持つシャドウたちが跋扈するモナドで、何故敵を警戒する必要がないのか意味が分からない。

しかし、湊のペルソナの中でも最強格の姉妹が揃って言うからには、七歌たちは最下層の湊にだけ警戒すればいいのだろう。

先導する二人についていく前に覚悟決めたメンバーたちは、どこか嫌な気配を感じる扉を眺め、自分たちの装備を確認すると全員で扉を潜り地下を目指した。

第二百四十七話　青年との再会

――深層〝モナド〟

エントランスに佇む、白銀の扉〝ヘヴンズ・ドア〟。

茨木童子の案内でそれを潜った一同は長い階段を下ると、一部の者にとっては初めて訪れるタルタロスの地下階層・深層〝モナド〟に足を踏み入れた。

明らかに上の階層とは異なる重苦しい空気、探知能力しか持たない風花はエントランスで待っておくかと言われたが、案内して欲しければ風花の同行も条件だと言われれば従うしかない。

そこまで今の湊の姿を全員に見せたいのかと余計に不安を煽られるが、階段を下りきったそこは、何度か訪れた事のあるチドリたちにとっても初めて見る光景が広がっており、自分たちの膝辺りの高さまで通路の床一面が黒い霧に覆われていた。

「つか、なんか寒くね？」

「うん。やっぱり地下だからかな？」

黒い霧の方も気になるが順平が寒くないかと言えば、七歌たちも同意して頷く。

だが、何度かモナドに来た事のあるチドリたちは、モナドも上のフロアと同じように温度は変わらないと告げた。

ならば、原因は黒い霧なのだろうが触れても大丈夫かと警戒する他の者に対し、茨木童子と赫夜比売は気にした様子もなくフロアに降りてゆく。

二人が何もなっていない事から、とりあえずは触れても問題ないようだが、この霧の正体が分からない順平が思わず質問を口にした。

「なぁ、これシャドウが消えるときに出るやつか？」

《まぁ、似たようなものだ。実体を持たぬ限り触れても身体に害はない》

似たようなものと説明しつつ、実体を持たない限りは大丈夫だと説明されると、何かあれば実体化してシャドウになるのかと一同は身構える。

だが、見渡す限りどこまでも床は霧に覆われているので、先へ行くには触れるしかないかと諦めて自分たちも霧に触れながらフロアに立った。
すると、突然頭の中に声が響き、自分の胸が苦しくなる。
まさか騙したのか。そう思って佇む二人のペルソナを見るが、他の者たちは自分たちの中に流れ込んでくる何かによって動けない。
「なに……これ……。何かの心が、流れ込んでくる……」
頭を押さえ風花が呟く。
それは何者かの心。悲哀、憤怒、怨嗟、そういった人間の抱いた負の感情が次々と流れ込んで来る。
今の状況から抜け出すために霧を吹き飛ばそうと考えるも、ペルソナの召喚には集中力が必要だ。
他者の心が自分に流れ込んでいる状態でなど出来るはずもなく、どうすればと苦しさに耐えていれば突然上からシャドウが降ってきた。
「ぐっ、こんなときに敵だと!?」
美鶴が全員武器を取れと号令を掛けるが、他の者たちが動き出そうとすると茨木童子が手で制した。
《黙って見ていろ》
もしや茨木童子が代わりに戦うのか。そう思っていれば、降ってきた砂時計のようなシャドウの周りで霧に変化が起こった。
今まで漂っていただけの霧が集まり何かを形作ってゆく。
一体何が起きているのかと黙って見ていれば、それは武器を持った人型の何かであったり、巨大な頭部を持つ獣のようなものになった。
人型の何かと獣のようなものは実体を持っているがどこか不安定で、傷を負ったシャドウのように時折黒い靄が出ている。
一言で説明するならばシャドウのなり損ないというのが一番近いが、そんな何かが何体も現われると次々とシャドウに襲いかかってゆく。
七歌たちにすれば霧で出来た何かもシャドウのように見えているので、シャドウ同士の仲間割れかと思ったが、それらが戦いだしたとき自分たちに流れ込んでくる心からより具体的な意思を感じ取れた。

「なんやの……あのシャドウたちの心なん？　戦いたない言うてんのに、なんで戦っとるんよ……」
自分たちに流れ込んでくる心は「戦いたくない」と強く叫んでいた。
自分の身体と同じように霧から作られた武器を持ち戦っていながら、何故、そんな事を思っているのかラビリスには分からない。
だが、かつて自分も同じように戦いを拒んだ事がある彼女は、それが他人事のように思えず困惑していると、手で頭を押さえながら赤い瞳でシャドウたちを見ていた七歌が口を開いた。
「違う、ラビリス。あれはシャドウじゃない。今、分かった。あれは全部過去の名切り、八雲君に宿った名切りの業……」
《流石に分かるか。そうだ。この霧は名切りの業が外に流れ出たもの。ミックスレイド〝百鬼夜行・大紅蓮地獄〟と八雲は呼んでいるが、実体は蛇神から漏れ出る名切りの業を具現化させているだけだ》
完全とはいかずとも七歌も九頭龍として名切りの事は聞いている。
だからこそ、いまシャドウと戦っている影たちが、鬼が代々継承している名切りの業より生じたものだと気配で気付く事が出来た。
もっとも、少し触れた程度でこれほど苦しくなるような負の感情を、たった一人で抱え込んでいる湊の精神状態が心配になってくるが、互いの家の事を知っている者同士だけで会話を終えられても困るとしてゆかりが尋ねた。
「名切りの業ってなんなの？」
《言ってしまえば一族の集合意識だが、業を構成する意識は大きく分けて二つある。一つは我らが大命であった完全なるモノの創造を為そうという意志》
《そしてもう一つ。わたしたち龍の一族が自分たちを守るため、自分たちの利益のため、千年以上も鬼たちを戦わせた事で溜め込まれた怨嗟の呪い。それが名切りの業の正体です》
《お前たちに流れ込んだ心など業の一厘にも満たんぞ。気を強く持てば何ら影響はない。さっさと慣れろ》
既に名切りの亡霊たちはシャドウを倒して霧へと還っていた。
戦いが終わったのならここに留まる必要もないため、茨木童子たち

は先を急ぐぞと他の者たちを急かした。
気を強く持てばと簡単に言われても困るが、確かにここにいても湊の許へは辿り着けない。
一同は流れ込んでくる心を弾き出すように集中し、深く息を吐いてから顔を上げると、茨木童子の言っていた通りに心が流れ込んでくるのが止んでいた。
天田を含めた全員が無事に適応出来た事を確認し、茨木童子たちはでは行くぞと再び歩き始める。
その後ろ姿を見ながら着いていく途中、先ほどの言葉の中で七歌は気になった部分があるんだと口を開いた。
「さっき言った蛇神って街の上空に現われるやつ？」
《ああ。先月も出たがあれで三割程度だ》
「でも、あのとき会った女の子は自分のペルソナだって言ってたよ？なんで八雲君の中にある業を他人が出せるの？」
名切りの業はその性質から当主としての器を持つ者だけが引き継ぐ事になっている。
もし兄弟がいても長男には継がれず、その下に生まれた弟や妹に引き継がれる事だってある。
逆に、引き継いだ者が子孫を残さずに死ぬときには、ペルソナに近い心の化生であるため、他の名切りに宿を変えて引き継がれることもあった。
もっとも、器を持った者が引き継いだときとは異なり、一時的な避難措置として宿主に選ばれた者は、自分の魂よりも強い力が後から精神に入ってくるため人格に影響を及ぼしやすかったと言われている。
そういった話を聞いていた七歌は、自分が出会った少女はもしや他の宿主にも宿れるという名切りの業の性質を逆手に取り、無理矢理に湊から抜き出して使ってしまったのかと考え込む。
だが、七歌が聞いていたそれらの話は全て表向きの話であり、実際に血が果たす役割は意識集合体へのアクセス権だ。
実際に血そのものに宿っていた茨木童子たちとは異なり、普段、名切りの業の象徴である蛇神は心の海に存在している。歴代名切りた

ちは血に目覚める事で蛇神にアクセスして記憶や能力の一部を引き出し、反対に自分の記憶や魂を蛇神へと与えて引き継げるようにしてきたのだ。
ただ、湊は鬼と龍の血を持っていた事で、完全なるモノに至る存在として認証され、心の海にいた蛇神を自分の精神の中へと取り込んだのである。
よって、湊以降に名切りの血を持つ者が生まれたとしても、既にアクセスすべき蛇神がいないので名切りが積み重ねてきた成果も呪いも受け継ぐ事はできない。
もっとも、そんな詳しい話を今ここでする意味はないため、七歌に質問されたことで赫夜比売がその出会ったというのは彼女の事だろうと口を開いた。
《七歌が出会ったおなごはベアトリーチェの事でしょう》
「ベアトリーチェ？」
《我らは阿眞根と呼んでいました。あれは八雲の陰性を司っていますから、他人という訳ではありません》
七歌たちが満月の日に出会った少女の名はベアトリーチェ。
それは湊と融合を果たした神の名で、茨木童子たちは呼び名がなかった事で、そのまま湊の神としての名である阿眞根とこれまで呼んでいた。
けれど、湊が完全に覚醒したときには紛らわしいため、湊自身が彼女の事はベアトリーチェと呼ぶと決め、阿眞根は完全に湊の神としての名で使う事となった。
七歌と共に彼女と直接会った美鶴はそんな名前だったのかと覚えておく事にしたようだが、湊と他人ではないという部分も含めてどういう事かを歩きながら尋ねた。
「有里の陰性を司るとはどういう意味だ？」
《そのままの意味だ。中には知る者もいるだろうが八雲の性別は両性だ。男であり女、女であり男。お前たちと接している八雲は陽性である男の人格と思えばいい。そして、お前たちが会ったベアトリーチェは陰性である女の人格だ》

「多重人格？　いや、しかし、相手は声も身体も完全に女だったぞ？」
《神降ろしを為した八雲にとって肉体は人の性質を持つ器に過ぎない。ベアトリーチェが作り替えれば姿形は自在に変わる》
つまり、七歌と美鶴が出会った相手は、人格が異なるだけでその身体は湊の物であったという事だ。
そんな事が可能なのかと男子たちは半信半疑だが、仮にそれが事実だとすれば、肉体の持つ機能は正常に働くのか。
その事が気になった順平は、自分たちが入った大部屋でシャドウと名切りの業が戦っているのを横目で見ながら、そこを素通りしつつ質問する。
「んじゃ、有里がその女の人格になって身体を作り替えたら妊娠とかもすんのか？」
《下衆め。女と見れば孕ます事しか頭にないのか》
「ち、ちげーよ！　単純にどこまで女なのか気になっただけで！」
可愛い愛子を性の対象としてしか見ない下衆を茨木童子が鋭い視線で睨む。
彼女が相手を罵ったときには、他の女性陣からも冷たい視線が飛んできたが、流石に男としてしか見ていなかったので、順平が慌てて誤解を解くと赫夜比売が親切に質問には答えてくれる。
《機能の点から申すならば可能でしょう。ですが、ベアトリーチェの意識が出ているときも、八雲は完全に寝ている訳ではありません。大本は八雲であり、その空いた意識領域に彼女の人格を宿らしただけですので、ベアトリーチェが肉体の主導権を持っていても八雲の考えを読み取り行動出来ます》
《つまり、普段の八雲の行動を読み取れば、ベアトリーチェだろうと女は抱いても男に抱かれる事はないという事だ》
最後に話をまとめた茨木童子は、そういって順平に残念だったなと告げるも、順平はだから違うんだってと頭を抱えている。
仲間のそんな様子を見た他の者たちは、湊の状態を聞いて知らず張っていた気を僅かに弛め、どうにか普段に近い状態になる事が出来た。

すると、他の者たちも今のうちに知りたい事を聞いておいた方が良いと思ったのか、今度は今まで黙っていたチドリがこの霧が発生している理由を尋ねる。
「それで、なんで名切りの業がここまで漏れ出てるの？」
《八雲がシャドウを殺すため展開しただけだ。十層からなるモナド全域に展開しているため、新たなシャドウが現われる度に先ほどのように自動で迎撃する》
「……それってずっと？」
《ああ、ここを訪れた日よりずっとだ》
茨木童子の話によれば、湊は自分の力だけでは広いタルタロス全てのシャドウを狩る事は出来ないと考えたらしい。
ならば、十層しかないモナドならばどうだと思案し、自身はフロアがほぼ大部屋だけで埋まっている最下層でシャドウたちと戦い、残りの九層には自動迎撃システムとして名切りの業を展開したのだという。
確かにその方法で一ヶ月も戦っていれば、モナドに現われるシャドウたちを狩り尽くすことも可能かもしれない。
さらに他の自我持ちたちは上層フロアや外のイレギュラーシャドウを狩るために動いているとのことで、いくら強いと言っても単騎でしかない手勢の少なさを見事にカバーしていると言える。
ただ、青年がどうやって短期間に大量のシャドウを倒しているのかという疑問は解消したが、その方法には大きな欠点があるはずだとチドリは指摘する。
「待って。時流操作はかなり負担が掛かるんでしょ？　エネルギーの消費も激しいって言ってたのに、こんなスキルをずっと展開し続けてたら、すぐにガス欠になるんじゃないの？」
《今の八雲は半分阿眞根になっている。阿眞根は八雲の感情をエネルギーとして変換し、それによって人の器に入りきらぬ量のエネルギーを扱えるのだ》
「だからって体力が持つはずないでしょ！」
いくらエネルギーの問題が解決しても、人間の身体が先に悲鳴をあ

げるはず。
チドリが珍しく大声を出して言っても茨木童子たちは表情を変えず、心配ならさっさと歩けとだけ言ってモナドの最奥を目指していった。

――モナド・最下層

そうして歩くこと二十分。本当ならばもっと時間がかかるところだが、途中の戦闘は全て名切りの業が担当してくれた事で七歌たちは戦わずに着くことが出来た。
しかし、最下層にやってきたメンバーたちは、部屋に入るなりその室温に驚き、これまでずっと寒い中を進んできたこともあって余計に暑く感じた。
「暑っ、なんだよここ？」
《先へ行くなら構えろ。敵と見れば反射的に攻撃してくるぞ》
モナドに入ったばかりの頃と同様に、順平が今度は暑いぞと反応を見せれば、茨木童子は遊んでいる時間は終わりだと全員に戦う準備をさせる。
いまメンバーたちがいるのは降りてきた階段と転送装置がある小部屋で、奥へと続く通路が一本だけ延びているだけだ。
つまり、通路の先にある大部屋では今も湊が戦っているという事。
暑さに気を取られて気付くのに遅れたが、通路の方からは激しい戦闘音が聞こえてくる。
実際に戦う姿を見ていないというのに、間に壁を挟んでいても向こう側にいる者たちの強さを重圧として感じ取ることが出来る。
探知能力を持っている風花とチドリなど表情が強張っており、今向こうではどんな戦いが行なわれているのかと緊張が走った。
そして、全員がしっかりと作戦行動中の状態になったことを確認すると、いくぞと言って茨木童子と赫夜比売が先頭に立って通路へと入って行く。
最初は壁を挟んでいたことでこもって聞こえていた戦闘音が段々とハッキリし、そうして通路の終わりが見えてきたことで、意を決し

たメンバーらは大部屋に入って目に飛びこんで来た光景に息を呑んだ。
奥の壁まで百メートル以上の奥行きを持つ部屋に溢れる敵、敵、敵。
鎧武者の姿をしたシャドウ、巨大な三眼の生首のシャドウ、城にしか見えないシャドウなど、自分たちが見たことのあるシャドウもいれば、中には出会えばすぐに逃げろと言われ交戦を避けてきた死神までもが混じっている。
「なんで？　なんで、ここだけ大量にシャドウがいるの？」
この部屋にいるシャドウだけでも百体は優に超える。上にはほとんどシャドウがいなかったというのに、何故ここにはこんなにも大量のシャドウが溢れているのか。
素直に疑問に思ったゆかりが尋ねれば、いつでも動けるよう警戒している赫夜比売が正面に視線を向けたまま答える。
《あれは八雲に集まっているのです。シャドウは心の化生、故に、惹かれる心の種類という物があります。八雲は戦いながらそれを放ち続けているため、ここには新たなシャドウが現われるのです》
話している途中、シャドウの群れの中で黒い爆発が起こった。
そして、そこから弾けるように何かが飛び出し、一体何だと皆が視線を向ければ、それは長い髪を揺らし輝く金色の双眸で敵に憎悪を放つ青年だった。
首に巻かれたマフラーは健在だが、上半身は赤黒く染まったぼろ切れが申し訳程度に覆っているだけ、ズボンも元は普通の物だっただろうに同じく赤黒く染まってダメージジーンズのようになってしまっている。
そんな姿になっていた湊は空中に躍り出た瞬間、右腕に黒い炎を纏う。それを横薙ぎに払うだけで炎の津波が発生し、大量にいたシャドウの一画が全て黒い靄へと還ってゆく。
だが、その攻撃範囲にいなかったシャドウたちが、空中にいる湊に向かってスキルを放ち、氷塊や電撃が彼に直撃して壁まで吹き飛ばされている。
いま湊が喰らった攻撃は先日の七歌たちが放ったスキルとは比べ

ものにならない威力だ。
そんなものを喰らって無事に済むはずがない。案の定、壁まで吹き飛んだ青年がそのまま壁にぶつかれば、壁には放射状に赤い染みが広がる。
それを見た女子たちが思わず声をあげそうになるも、茨木童子が手で制して我慢させると、壁にぶつかった青年に向けて再びスキルが殺到する。
遠目から見ていればそれは光の集合体にしか見えないが、それが湊に当たると思ったとき、再起動した青年はマフラーから巨大な剣を抜き放った。
「あれは、九尾切り丸……」
以前、英恵の誕生日パーティーで桐条に運び込んだ七歌は、既に彼の手に渡っていたのかと正統な持ち主の手にある大剣を見て思う。
しかし、いくら破格の硬度を持つ大剣でもスキルを防ぐことは出来ないはず。
そう思って見ていれば、湊は左手で壁に捕まったまま右手一本で百キロを超える大剣を振り抜きスキルの集合体を切り裂いた。
一瞬で消え去る強力なスキルたち。それを為した青年の瞳は両眼とも蒼く輝いており、これが彼の魔眼の力かと思い知らされる。
目の前の脅威を排除した青年はそのまま壁を蹴って跳躍すると、自分からシャドウの群れのど真ん中へと入って行く。
着地の時点で剣を真下に構えて数体のシャドウを殺し、地面に足が着くと同時に周囲のシャドウを薙ぎ払う。
斬撃に耐性があろうと関係ない。今の青年に斬れないものなどないのだ。
吹き飛びながら消えて行くシャドウを残し、青年は走りながら敵を切り続け、その途中に相手の攻撃が掠って血が流れようと無視して突き進む。
部屋の入り口の七歌たちからはシャドウの群れに埋もれてあまり見えないが、それでもまるで嵐の様にシャドウたちが吹き飛んでは消えて行くことで、青年が止まらずに戦っている事だけは分かった。

《……これが今の八雲だ。傷を負っても無視し続け、自分で敵を呼んでいながら敵が消えるまで戦う事を止めない》
《シャドウは生き物の心から生じるもの。故に、世界から生き物が消えぬ限り際限なく湧いてくるでしょう》
先ほど湊が敵を屠った一画を見てみれば、そこは既にシャドウで埋まっており、かといって部屋のシャドウの総量が減ったようにも見えない。
どうやら上のフロアと同じようにシャドウがその場に現われているらしい。
そんな際限のない戦いに生身の青年が耐えられるはずもないが、見ていれば再びシャドウのいる一画で爆発が起きた。それを起こしたのは両手にロングバレルのリボルバーを持った死神だが、敵は周囲のシャドウごと湊を始末することを選んだ様だ。
最初の爆発で湊が吹き飛ばされると、さらに追撃として湊に向かって巨大な火球が二個三個と降り注ぐ。
湊に衝突した火球は爆発を引き起こし、爆発の炎が治まりきる前に追撃の爆発が起こる。
完全に炎に飲み込まれれば流石の湊も危険で、アイギスたちが救出のため飛び出して行こうとした瞬間、爆発の炎を突き抜けて異形の黒い腕を携えた湊が出てきた。
「あれは……鬼の腕？」
自分の身長を超えた長さの黒い右腕を突き出した状態で出てきた湊は、腕の全面に何かのフィールドを発生させながら死神の火球をぶち抜いて行く。
後もう少し、そう思っている間に敵に到達すると、死神の銃身と湊の鬼の腕がぶつかり衝撃波を発生させる。
両者を中心に吹き飛んで行くシャドウたち、一体どれほどの威力でぶつかっているのか気になるが、鍔迫り合いをしながら死神が頭上に光を集め出していた。
それを見たアイギスは敵の攻撃の正体をすぐに看破し、他の者に注意喚起する前に青年に向け叫んでいた。

「ダメです八雲さん！　すぐに逃げて！」
死神が放とうとしているスキルは、大部屋の中に存在する全てを飲み込む可能性すらある凶悪なもの。万能スキル〝メギドラオン〟だ。
そんなものを至近距離で喰らえば、満身創痍な湊は確実に死んでしまう。
そう思ってアイギスが叫べば、敵のスキルが完成するまでの僅かな合間に青年が吠えた。
「がぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
瞬間、湊の全身から黒い炎が噴き出し渦巻いた。
正面にいた死神だけじゃなく、衝撃波を喰らって倒れていたシャドウ、湊に向けて遠くからスキルを放っていたシャドウ、その部屋にいる全てのシャドウを飲み込み黒い竜巻が部屋の中を蹂躙してゆく。
部屋の隅にいた七歌たちも思わず吸い込まれそうになるが、何とか必死に地面に伏せて耐えることで何とかやり過ごす。
そして、竜巻が全て治まり静かになると、そこには高い天井の方を向いてじっとしている青年一人だけが佇んでいた。
先ほどまでは無尽蔵に湧いていたシャドウも現われず、湊も静かになったことでもしや正気を取り戻したのかと茨木童子は様子を窺う。
すると、天井の方を向いていた湊がぐるりと向きを変え、金色の瞳を少女に向けてゆっくりと歩いてきた。
「……アイギス、来てたんだな」
「はい。八雲さんが心配で、そしてあなたにずっと謝りたくてやって来ました」
先ほどまで荒ぶっていた青年が正気を取り戻した事に他の者は驚きを隠せない。
だが、現に湊はアイギスのことをしっかりと見ながら言葉を交わしている。
イリスを殺され復讐に走っていたとき、彼をギリギリのところで繋ぎ止めていたのはアイギスに対する気持ちだった。
茨木童子が強行した器慣しで荒神へと変じたときも、彼はアイギスの姿を見たことで自我を取り戻して人の側へと戻ってくることが出

来ていた。
　そんなこれまでの事を振り返ってみると、百鬼八雲という青年にとってアイギスという少女は特別な楔なのかもしれない。
「なぁ、アイギス。俺の大切な人は死ぬんだ。大切だと、生きていて欲しいと思うと、その人は死んでしまう」
　やって来る青年を迎えにアイギスが歩み寄っていけば、突然青年が目を伏せながら語り出した。
　五代から聞いた話を思い出せば、確かに彼と親しくなった者は大勢死んでいた。
　背負いすぎる青年がそれをずっと悔やんでいてもおかしくはない。今回の暴走もそういった自責の念から罪滅ぼしにやっていたのかもしれないと思っていれば、青年は僅かに視線をあげて哀しい瞳でアイギスを見ながら続ける。
「でも、俺は君のことを大切に思ってる。信じて貰えないかもしれないけど、ずっと昔から大切に思い続けているんだ」
　両親、飛騨、助けたいと思った被験体たち、そしてイリス。
　彼女たちとの別れは青年の心に傷として残り、自分が大切に思った者は死んでしまうと刻まれたらしい。
　だがそれだけでなく、相手が死ななければ自分が大切だと思っていると他者に分かって貰えないとも感じているようだ。
　これは確かに歪で、玉藻の言っていた通りに人としては壊れてしまっているのかもしれない。
　けれど、アイギスは湊から向けられる想いをちゃんと分かっている。だから大丈夫だと包み込む様に優しく微笑んで彼を安心させてあげようと思った。
「大丈夫です。わたしは死んだりなんかしません」
「うん。でも、やっぱりちゃんと信じて欲しいんだ」
　自分が信じていた者たちに否定されたからか、湊は酷く弱々しい笑顔で信じて貰いたいと口にした。
　これまで青年は誰に否定されようと、それによってどれだけ自分が傷ついたとしても、痛みを無視して目的のために動き続けていた。

そんな青年が珍しく吐いた弱音にアイギスは胸を締め付けられる。ここまで追い込んでしまったのかと。

だからこそ、アイギスは何も心配しなくて良いと彼を抱きしめようと思った。

足を止めていた彼に近付き、あと三メートルというところで彼が顔を上げる。

きっと今にも泣きそうな顔をしているのだろう。そう思ってアイギスが表情を見れば、そこにはあまりに美しい微笑が浮かんでおり、そんな綺麗な表情を見せながら湊はただ一言告げた。

「だから――――僕がこの手で君を殺します」

第二百四八話　時を越えて

影時間――巌戸台分寮

七歌たちがタルタロスにむかってどれくらいの時間が経っただろう。

通信機の傍に座ってお茶を飲みながら待っていた栗原と英恵は、共に不安を胸の中に仕舞い込んで表情には出さないようにしていた。

というのも、やる気を出していた子どもたちには悪いが、大人である二人は彼女たちが行ったところで湊を連れ戻せはしないだろうと考えている。

そも今回のことは遅かれ速かれ起きていたはずの事態だ。

彼は自分がチドリやアイギスの傍にいるべきではないと考えている。一緒にいるのはラビリスやアイギスの生活基盤を作るためであり、人間になって日常生活も問題なく行えるのなら既に目的は達したと考えていい。

そんなときにチドリたちは七歌たちが自分たちの傍に残ることを望んだ。

深い意味があったかどうかなど関係ない。七歌たちが去らないのであれば自分が去ると言っていた後で、チドリたちは七歌たちが転校するのは嫌だと言った以上、彼がもう自分が傍にいなくても大丈夫だと判断しても何もおかしくはなかったのだ。

一度決めれば自分がどれだけ傷つくことになろうが青年は進み続ける。

彼女たちのためになるのならチドリやアイギスの心を傷つける事になったとしても考えを変えないため、力尽くという手段を取れないとなると連れ戻すのはやはり難しいだろう。

子どもたちよりもそれを客観的に理解している英恵は、ただ黙って紅茶のカップに視線を落としていると、僅かに地面が揺れ急に窓の外が明るくなった。

「い、一体どうしたのっ!?」

「なっ、あれを見てください！」

突然の揺れに英恵は持っていたカップを落としそうになる。
なんとか耐えて無事に割らずに済んだが、ぬるくなっていた中身が少々手に掛かってしまい、濡れた手をハンカチで拭きながら窓際に向かう。
先に窓の外を見ていた栗原が驚いているので、窓の外には何が見えているのだろうかと見てみれば、寮から離れた場所に聳えていたはずの異形の塔が消えていた。
そして、その塔があったはずの場所には現在、雲を散らし天まで届く赤と黒の禍々しい光の柱が立っている。
タルタロスが形態を変えたのか。一瞬、そんな考えが頭を過ぎるが、二人が見ていると光の柱は徐々に消えていってしまう。
かつてタルタロスについても研究していた栗原ならば何か分かるかと思い。英恵は窓の外を見つめたまま隣にいる女性に話しかけた。
「栗原さん、タルタロスが姿を変えると聞いたことは？」
「中の構造ならともかく外観についてはありません。というより、アレは何かのスキルで塔を消し去ったんだと思います」
言われてみれば、確かに先ほどの光の柱は塔を飲み込んで消し去ったようにも見える。
だが、それが事実だとすれば、子どもたちの向かった場所にそんな事が可能な存在がいると言うことだ。
もっとも、もしそのようなシャドウがいれば先に湊が出会って対処しているはず。
だからこそ英恵がその可能性に気付いたとき、自分で言った栗原も塔を消し去った存在に関わっているであろう人物に思い至り、既に子どもたちが接触しているとすれば拙いと考える。
今からでも子どもたちを呼び戻せないか。そう思って通信機の元に向かおうとしたとき、タルタロスのあった場所から天へと昇っていくものが見えた。
「あれは……あれが、八雲君が身に宿す蛇神ですか？」
「私も初めて見るので断言は出来ませんが、あんなものがそう何体もいるとは思えません。きっとそうかと」

遠目からでも分かる巨大さ。銀色の角と瞳を持つ蛇神が遙か上空を目指して昇ってゆく。
他の者たちの話によればこれまでは骨だけが顕現するくらいで、先月の満月のときにラビリスが見たという姿も半透明な肉体が骨を覆っていた程度のはずだ。
それがどういう訳か英恵たちの見た蛇神は肉体まで完全に顕現してしまっている。
湊は力の強すぎる蛇神を呼び出せないからこそ、その力をいくつかに分けてネガティブマインドのペルソナとしていた。
もし、その制限が解かれて自ら呼び出したのなら厄介ではあるが問題はない。
けれど、これまでのように湊の感情を呼び水に顕現してしまったなら、蛇神の持つ力の規模を考えるとかなり拙い状況だった。
「英恵さん、もしあれが暴走だとすればすぐにでも子どもたちを避難させる必要があります」
「分かっています。でも、蛇神の様子が……」
本当ならば全員を車に乗せる事など出来ないが、今は定員オーバーなど気にせず寿司詰めにしてでも迎えに行くべきかもしれない。
そう思って栗原が車のキーを手に取れば、窓際でジッと蛇神を見ていた英恵は様子がおかしいと蛇神を指した。
栗原にすればあんな巨大なモノの普通など分かるかとツッコミたかったが、様子がおかしいというのであれば見ておかなくてはならない。
怪獣映画のように第二形態として翼でも生えたならば可愛いものだと栗原が見れば、雲より高い位置で蛇神が旋回して街を覆えるほど長大な身体で環を作っていた。
聞いていた情報とあまりに違う状況を栗原は訝しみ、これはどういう事だと首を傾げる。
「何でしょう？　今までの話だとただ街の上空を覆っているはずなんですが」
「質量が存在するとして、あれだけの巨体が旋回すると竜巻が起きた

りするんじゃないですか？」
「あれの動く余波で確かに局地的に嵐のようになる可能性はあります。しかし、あれだけ上空となるとあまり地上に影響はないかと」
もし地上から百メートルほどの位置でやっていれば、街は跡形もなく消し飛んでいるかもしれない。
だが、雲よりも高い場所となると高層ビルも近くにはないので影響はほとんどない。
つまり、蛇神の行動に意味があるとすれば、破壊とは別の目的であると考えられる。
このまま蛇神が今の状態を保つのならばチャンスだと考え、栗原は子どもたちのところへ行こうと思った。
「英恵さん、私は車で子どもたちを迎えに行ってきます」
「……私も連れて行ってください。なにか、なにか八雲君に拙いことが起こっている気がするんです」
真剣な表情でそう言ってくる英恵に栗原は目を見開く。
自分も影時間の作戦行動には慣れていないので勝手などはよく分かっていないが、それでも何の力もない英恵を連れて行っても足手纏いである事は分かる。
何より、彼女を連れて行くことが困難な理由も存在した。
「……正気ですか？　桐条が用意した車には子どもを全員乗せられません。定員オーバーしてもギリギリ、今は一人分の席も余裕はないんですよ？」
そう。迎えに行くには桐条グループの用意した車を使うしかないのだ。
いくら大型車と言えど、器具を使って座席を外すでもしなければ、成人と変わらぬ背丈の子どもたち十人以上を乗せる容量はない。
だというのに、英恵を乗せれば助手席分のスペースが埋まってしまい、余計にスペースが足りなくなってしまう。
それが分かっているのかと栗原が尋ねれば、その視線をしっかりと受け止めて英恵は答えた。
「向こうに着けば置いていってくださって構いません。お願いしま

す。私をあそこまで連れて行ってください」
そんな事出来る訳がない。しかし、もし連れて行かなければ英恵は歩いてでも向かう可能性があった。
蛇神が次にどうなるか分からない以上、少しでも早く現場に向かいたい栗原は、深い溜息を吐くとどうなってもしりませんからねと告げて車へと向かった。
――モナド・最下層
英恵と栗原が話をする数分前、湊の唐突な言葉を聞いた他の者たちは言葉の意味を理解出来ずにいた。
しかし、その僅かな思考の停止する時間があれば、湊は極めて自然な動作でアイギスに近付き首に向かって手を伸ばすことが出来た。
けれど、思考停止していた他の者たちと違い、湊が言葉を発した瞬間、湊とアイギスをジッと見つめていた茨木童子と赫夜比売の行動は速かった。
二人はほぼ一瞬で湊たちに近付き、赫夜比売がアイギスをやや乱暴になりながらもラビリスに向かって放り投げると、茨木童子はアイギスの首に向かって腕を伸ばしていた青年の顔面に拳を叩き込んで壁まで殴り飛ばす。
アイギスは無事ラビリスによって受け止められ、反対に殴り飛ばされた湊は衝突した壁が壊れて瓦礫に埋もれている。
しかし、加減している余裕がないほど切羽詰まった状況だっただけに、少女が殺される事を防げた茨木童子は瓦礫に埋まる青年を見ながら吐き捨てる様に言葉を発する。
《ハハッ、相変わらず発想が斜めすぎて笑うしかないな！》
《言っている場合ですか！　アイギス、チドリ、ラビリス、あなた達はすぐに上へ。今の八雲の狙いはあなた達です》
動揺する他の者たちと異なり、茨木童子たちは湊の状態を正確に把握している様子だ。
先ほどの言葉の意味も含めて説明が欲しい。受け止めたアイギスを支えながら立たせていたラビリスが二人に尋ねた。
「ちょ、湊君はどないしたん？」

《逆転の発想というやつだ。己の大切な者が死んで来たからこそ、八雲が大切に思い、さらに相手が死ねば真実の証明になるという話だ》
「じゃあ、八雲君は本気でアイギスを殺すつもりだったの？　でも、そんな事したら……」
茨木童子の説明を聞いて発言と行動の意味だけは七歌たちも理解出来た。
けれど、もしもそんな事をすれば今以上に湊は壊れるだろう。
《ああ、殺した後に己のした事を自覚して壊れるだろうな。前に自分で自分に幻覚を見せた際には魔法で作り出した写し世を壊しかけたが、実際に手にかければ想像もつかん》
七歌の言葉に茨木童子も頷いて返し、冷静さを取り戻してはいるが思考自体は壊れたままであるだけに質が悪いと険しい表情をする。
茨木童子の話に出たときの事を覚えているチドリとラビリスも緊張した様子になり、ここは赫夜の言う通りに撤退すべきかと考える。
すると、瓦礫に埋まっていた青年が身体を起こし、手を当てた頭を振りながら出てきた。
「ああ、やっぱり大変だ。信じて貰わないといけないけど、そう簡単には信じて貰えない。だからこそ、ちゃんと殺せたら信じてくれるよね？」
綺麗な顔で笑う青年は真っ直ぐにアイギスを見つめる。
少女の前には茨木童子と赫夜比売がいるというのに、今の彼の瞳にはその姿が映っていないようだ。
だが、そんな彼の今の様子よりも気になることがその身体には起こっていた。
鉄骨が貫通した事で出来た胸部の傷跡や、ラビリスに切られたことで出来た刀傷など、そういったモノが全て消えていっているのだ。
先ほどシャドウに付けられた傷の回復と同時にそれらが行なわれたことで、今のはファルロスの蘇生ではなくベアトリーチェの力だと茨木童子は当たりを付けた。
《即時再生という事はベアトリーチェの力か。まったく、八雲が正気に戻ったなどと言ったのはどこのどいつだ》

《姉様が勝手に思っただけでしょうに。僅かに落ち着いたせいで状況はむしろ悪化しています》
《分かっている。人格にも影響が出ている以上、やはり一度殺さねばならんか》
言い終わるかどうかのタイミングで茨木童子は駆け出した。
人の目では追えない速度、十数メートルをほぼ一瞬のうちに走破し湊の前に拳を振り上げ現われる。
そして、再び彼の顔面に向かって拳を繰り出せば、湊は一瞥することもなく手を払いあげて弾き、浮いた相手の身体に向かって肘打ちを放つ。
攻撃を喰らった茨木童子は驚愕の表情のまま吹き飛び、今度は反対に壁に叩き付けられていた。
けれど、それを見ていた赫夜比売は予想していたかのように冷静に対処する。
前方に手をかざして氷の槍を生成、それらを扇形に配置し、湊に向かって一斉に射出。
千を超える氷の槍が彼に迫れば、彼はその場で足を止めて直撃するモノだけを叩き落とし始めた。
頬を掠め、手足が切れ、そうして血が流れても彼は気にせずに落とし続ける。
何故武器を出して迎撃しないのかは分からないが、今の攻撃が効いているのならばと同時に雷を発生させる。
赫夜比売の雷は氷の槍と槍の間を走り、もはや氷のスパイクがついた雷の網のようだ。
こんなものに人間が対処出来るはずがない。そう思って彼に視線を向ければ、ここで湊は足下に落ちていた氷の槍の一つを蹴った。
彼が蹴った氷の槍は赫夜比売のスキルの下を通って飛び、術者本人に向かって迫ってくる。
しかし、それが見えていた赫夜比売がいくつかの氷で迎撃すれば、湊はその僅かな隙を突いて今度は複数の氷の槍を蹴りながら前進を始めた。

彼の蹴ったモノは全てが正確に術者を狙っているため、赫夜もそれに対処する必要が出てくる。
増えた反撃のために迎撃を増やせば、その隙を突いて彼からの反撃も徐々に増えてゆく。
今現在は氷の槍と雷を受けている湊の方がダメージも大きいが、痛みに耐性があり傷も即時再生するのでは効果は薄い。
反撃に対処するにつれて前進しながら湊の手数も増えてゆくとなれば、このままではいずれ辿り着かれてしまうと赫夜比売も焦りを浮かべる。
だがその時、
《大莫迦者が！》
部屋に飛び込んできたバアル・ペオルが球体にしたメギドラオンを湊に投げつけた。
光線よりも圧縮しているため見た目よりも威力が高いそれは、彼の前で解放されると爆発を引き起こして湊を飲み込む。
明らかに人間に向けて放って良い威力ではないが、続けて壁まで吹き飛ばれていた茨木童子も手をかざして爆発に向けて熱線を放った。
極光の爆発を突き抜けた熱線がぶつかった壁は赤く染まり、蒸気をあげながら融解させている。
そんなものの直撃を喰らった人間は骨も残らず溶けるに違いない。これまで黙って見ている事しか出来なかったアイギスは思わず赫夜の肩を掴んで彼女を止める。
「やめてください、こんな事をすれば八雲さんが死んでしまいます！」
《大局を見なさい！　既に殺さねばならぬ状況にあるのです！》
アイギスの言いたいことは分かる。しかし、今そんな話をしている余裕はない。
彼女や七歌が湊の身体の事をどこまで理解しているか分からないが、殺しても止まるかどうかも怪しいのだ。
一時的に冷静になっているからこそ、赫夜比売たちはここで一気に畳み掛けるしかないと考えている。
肩を掴んでいたアイギスを振り払い、赫夜も万能属性スキルに切り

替えようと手を再びかざす。
すると、バアル・ペオルの起こした爆発が突然弾け、湊を覆う様に展開された半透明な蛇の頭骨がそこに現われた。
「何で邪魔するんだ。僕は信じて貰いたいだけなのに、俺はただ大切に想っているだけなのにっ」
蛇の頭骨は茨木童子の熱線すらも防いでおり、湊の身に迫る攻撃全てから彼を守っている。
頭骨を展開する前はどうやってやり過ごしたのか分からないが、自分たちの攻撃が一切効かなくなったとすればまずい。
中にいる湊も頭を押さえて焦った表情をしているため、一度は取り戻した冷静さが再び失われるのも時間の問題だ。
彼が再び獣のようになれば余計に厄介になる。残り時間がどれだけあるか分からないが、どうにか頭骨を突破して内部の湊にダメージを与えようと、薙刀を取り出したバアル・ペオルと直刀を取り出した茨木童子が駆けて頭骨を切りつける。
新たに部屋にやってきた出雲阿国も雷を纏わせた刀で続き、アタランテも上空から矢の雨を一点集中して撃ち続けるが、超高硬度でありながら湊の肉体と同じように再生機能を備えた頭骨は簡単には突破出来ない。
《どいて……そこから、出て……八雲……》
前衛たちが突破出来ないと分かると、到着したばかりの座敷童子がアリスと共に巨大な氷の槍を生成し始める。
熱線やメギドラオンを防いだものを相手に、そんなもので行けるのかと信用しきれないが、二体分の力を集中させたならばもしやと場所を空ける。
それを確認した座敷童子たちが氷の槍を放てば、空気を切り裂きながら飛んだ槍が頭骨の眉間に突き刺さった。
これまでで最も効果のあった一撃に他の者は驚き、止めとばかりに待機していたジャック・ザ・リッパーが槍の底を切りつけて頭骨に打ち込む。
打ち込まれた氷の槍は頭骨を貫通し、内部にいた湊に襲いかかる。

中にいれば逃げ場がないため頭骨はすぐに解除され本人は避けたが、その瞬間を狙ってバアル・ペオル、茨木童子、出雲阿国が連続で切りかかる。
反応速度で上回る湊はそれらを刃の側面を叩くことで受け流すも、赫夜比売の氷の槍と違って対処するには細く数の多い矢が上空か迫ったことで湊は大きく後方へと跳躍させられた。
せっかく僅かずつでも前進出来ていたというのに、一気に振り出しに戻された湊は先ほどよりも焦燥感を顔に出しながら叫ぶ。
「なんで、なんで、なんでっ!! 皆死んだんだっ、俺が殺したんだっ、大切な人は殺さなきゃいけないんだっ!!」
今の湊は理性が失われているため、普段閉じ込めている心が出やすくなっている。だからこそ、その叫びを聞いた者は、彼がどれだけ大切な人の死を自分のせいだと思っているのか理解出来た。
心からの叫びだからこそ痛々しい。湊のせいではない、湊が責任を感じる必要はない。そう言ってあげたいが、言ったところで自分を責めている本人には届かないだろう。
未だアイギスを殺すことも諦めていない様で、叫んだ湊が再びアイギスを目指して動き出せば、自我持ちのペルソナたちは前衛と後衛に分かれて対処する。
後衛がスキルで湊の隙を作り、前衛が多段攻撃で体勢を崩して攻撃を当てる。
切りつけた端から傷が再生するので効果はほとんどないが、今の状態を維持しながら殺すしか止める手段は思いつかない。
一ヶ月不眠不休で戦っていながら、武器も使わず自分たちと戦えている事に茨木童子は呆れたタフさだと苦笑いを浮かべる。
《殺さねば止まらんとは鬼の伝承の体現者と言えよう。しかし、これほどとは本気で八雲の人格が残っているのか疑わしいなっ》
殺すという目的に執着しているのか、それともアイギスに執着しているのかで相手の状態も変わってくる。
アイギスに執着している方が湊の人格が残っているという事だが、出来れば後者でいてくれと思いながら茨木童子が切りつければ、

「――――――あれ？」
僅かに切られながらも避けた湊は、地面を転がる勢いを利用して立ち上がり突然動きを停止した。
湊の状態に変化が現われるのは大概がよくない状況の前触れだが、停止した湊は頭に手を当てたまま何かを呟いている。
「違う、ちがう、チガウ。有里湊は本当の名前じゃない、あの母親から生まれて、すぐに培養器に入れられて、違う、ちがう、チガウ、お母さんは母親じゃなくて、百鬼八雲は僕じゃなくてっ」
今のうちに攻撃するべきか。
戦っていた自我持ちたちはそう考えるも、今までとは明らかに様子が違っていて下手に手を出すとどうなるか分からない。
ここでまた蛇神の骨を呼ばれると厄介だが、警戒は最大に引き上げつつも、今の湊がどういった状態なのかを判断することにして自我持ちたちが止まっていれば、今まで小さな声で呟いていた湊が突然頭を抱え大声で叫びだす。
「ああ、ああっ、間違えた間違えた間違えたっ。全部嘘だ、嘘だ、嘘だっ!! 僕は違う、俺じゃない、違う、全部はじめから間違えてたっ!!」
これまでも意味の分からない言葉を吐いていたが、今までの比ではない変化に他の者は警戒を強める。
すると、叫んでいる湊の身体が光に包まれだし、他の者たちの目の前でどういう訳か背丈が縮んでゆく。
「一体何がっ」
「有里の姿が変わってゆく……」
アイギスや美鶴が驚いている間に湊の背丈はどんどん小さくなる。
一八〇センチを越えていた長身は男子たちよりも小さくなり、さらには女子たちよりも小さくなる。一体どこまで縮むんだと思っていれば、天田よりもさらに小さい小学校低学年ほどの背丈で止まった。
《これはベアトリーチェによる変貌なのか？》
身体を包んでいた光が消えると、そこには地面に着くほど長い髪を垂らした少年がいた。
アイギスは見覚えのある姿に懐かしさを覚えるが、背丈だけでなく

服装までムーンライトブリッジで事故に遭ったときと同じになっていたことで、普通の変貌とは異なるなと思っていたバアル・ペオルに茨木童子がこれはそんなモノではないと伝える。
《違う。これは、ベアトリーチェが八雲の時に干渉しているんだ》
《では、姉様。今の八雲は十年前の？》
《髪の長さ、記憶等の差異はある。だからこそ、完全にそうとは言えんが一つの個体という限定範囲で時空間に干渉して時を跳躍させたと見るべきだ》
　湊の姿が十年前のものに変化したとき、自我持ちのペルソナたちは未だこの場に残っていたアイギスたちを守れる位置まで下がっていた。
　出てきたのが十年前の湊であったことは意外だったが、その身が放つ存在感は現在の湊を上回っている。
　二つの異なる時間軸を繋げるなど、未来のアイギスたちの存在を知らなければ信じていなかっただろうが、ニュクスらと同じ高次元の存在ならば可能でもおかしくはない。
　姿が変わった湊が一体何をするつもりなのか見ていれば、少年は哀しそうな黒い瞳を天井に向けて言葉を紡ぐ。
「やりなおさなきゃ。ぼくが助けちゃダメだった。ぼくは誰も助けちゃダメだった」
　その言葉が耳に届いたとき、アイギスたちは彼が自分たちの言葉で今の姿になってしまったことに気付く。
　どれだけの人間を助けようと、二万人以上の人間を殺めてきた事実は消えない。
　あの日の言葉を受け、そんな者が普通に暮らしている事などやはり間違いだったと考えたに違いない。
「違う、八雲！　私は貴方にここにいて欲しいの！」
　彼を傷つけたと後悔していた少女が叫ぶも少年の耳には届かない。
　既にその瞳にはアイギスも映っておらず、彼はただ遠い場所を見つめている。
「全部やりなおすんだ。ぼくが関わってしまう前に、ぼくが誰かを救

う前まで、全部、全部やりなおさなきゃ」
天井を見つめていた少年が天井に手をかざす。すると、その手の中に光が集まり一枚のカードを形作り始めた。
遠目から見ていた者たちはそれがペルソナの宿るカードである事は分かったが、どのペルソナが宿るカードかまでは分からない。
徐々に輪郭がハッキリし、そこに描かれた絵柄が見えてきたとき、目を見開いた茨木童子は叫んだ。
《っ、やめろ八雲！　そいつを呼ぶな！》
それは左上に天使、右上に鷲、左下に牛、右下にライオン、中央には踊り子が描かれている最後のアルカナ。
――――ＸＸＩ〝世界〟
少年が持つペルソナで世界を司るペルソナなど二体しかいない。
今の彼では自分の本来のペルソナを呼び出せない以上、彼がこれから呼び出そうとしているものなど蛇神以外にあり得ない。
距離の関係で召喚を阻むことは不可能、故に、ペルソナたちはスキルを応用した結界を最大出力で展開し。それが終わるか否かのタイミングで少年がカードを握り砕いた。
「――――おねがい。きて、无窮（ムキュウ）」
＊＊＊
完全体として呼び出された蛇神・无窮は、頭部が現われた瞬間に天井に向けて〝ＤＥＡＴＨ〟を放ってタルタロスを消滅させた。
もし仮に風花がエントランスに残っていれば蒸発して死んでいただろう。
思わぬところで命拾いした少女たちを放置し、呼び出した少年は頭部に乗って天を目指す。
アイギスと出会った当時の姿になった彼は、今はただ全てのことをなかった事にして歴史をやり直さなければと考えている。
子どもになった姿を見て、アイギスたちは自分たちが彼をそこまで追い詰めたと考えたに違いない。
しかし、実際のトリガーは茨木童子の〝八雲の人格が残っているか疑わしい〟という発言だ。

あの時の八雲は判断能力などは正常とは言い難かったが、アイギスのことや死んだ者たちのことを覚えていた様に記憶はあった。
そのため、茨木童子の言葉を聞いたときに自分がクローンである事、自分が生まれてから一度も母親に抱き上げられることもなく成長促進剤でオリジナルと同じ年齢まで育てられ出荷されたという、生みの親であったエルナ・ボーデヴィッヒの記憶から読み取った事まで思い出してしまった。
自分が戦う原因となった両親を殺された事への怒りも、滅びを回避するためアイギスと共に戦ったのも、全てはオリジナルの記憶であって自分のした事ではない。
ならば、それを理由に今まで生きて戦い、時には憎しみをぶつけていたのは、無関係な人間が勝手に勘違いして迷惑を掛けていた事になる。
「はやく、はやくっ」
空を目指す少年は高度を上げ続ける蛇神にもっと速く飛んでくれと命じる。
自分の間違いを正すため、あの日から全てをやり直す。
オリジナルがどうなっているのかは知らない。それでも、全てをやり直すにはあの日の続きから始めるしかない。
少年はそれが正しいかどうかも分からぬまま、雲を超えたところで蛇神から飛び降りて何もない空中に着地する。
少年が離れても蛇神は上昇を続け、成層圏に届いているのではないかという高さで上昇を止めた。
そして、街を覆えるほどの長大な身体で環を作る様に旋回する。
「无窮、門をひらいて！」
何もない空中に立っていた少年が蛇神に向けて手をかざすと、蛇神は咆吼をあげて身体が光に包まれてゆく。
徐々にその輪郭がぼやけ、反対に環の内側に膜の様なものが張られると、全ての光が治まったときには街の遙か上空に巨大な鏡が出現していた。
蛇神が巨大な鏡に変化したことに呼応するように、今度は少年の足

下にも光の魔法陣が浮かび上がってゆく。奇しくもそこはタルタロスの頂上だった場所で、タルタロスの頂上は儀式場としての役割を果たしていた。
ならば、少年がそこでやることなど一つしかない。
未だ完全には力を取り戻せていないデスの代わりに蛇神を使い、母なる者の封印されている領域と現世を繋ぐ門を開き、十年前に行なわれるはずだった儀式をここで再現するのだ。
＊＊＊
蛇神の顕現の余波だけで吹き飛ばされかけたアイギスたちは、茨木童子たちの結界のおかげでどうにか生きていた。
ＤＥＡＴＨによって破壊されたタルタロスは破片もすべて融解したため、七歌たちは上を見上げると空に浮かぶ魔法陣にいる少年と蛇神が変化した鏡を見ることが出来る。
だからこそ、自分たちの頭上に浮かぶあれは何だとアイギスは誰にでもなく尋ねていた。
「あれは、一体なんですか？」
《……あれは門だ。蛇神は本来向こう側の存在、だからこそ現世との境界を揺らがせ繋ぐ門の役目を果たす事も出来る》
そう話しながら茨木童子たちはアイギスたちを掴んで飛び上がる。
急に掴まれたことに一同は驚くが、ペルソナであるため空を飛べる彼女たちは、アイギスらを穴の底から地上部である正門から校舎までの道に運んでから解放した。
地上部に運んで貰らえたおかげでモナドの最下層にいたときよりも近くで見ることが出来るが、ただの鏡の様な状態だった蛇神に再び変化が起きていることに気付く。
鏡状だった部分が渦を巻いて向こう側に何かが視える。影時間の空ではない。それが何かは理解出来ないが、暗い闇が広がり奥に何かが存在することだけは分かる。
本能であの門の向こう側が危険だと理解していた真田は、一体何が始まろうとしているのだと叫ぶ。
「おい、あれは何だ!?　有里は門とやらを作って何をしようとしてい

る!?」
《門は先ほど言った通り現世とあちら側を繋ぐためのものだ。そうして出来ることなど一つしかない。八雲は、十年前の続きをするつもりだ》
湊の目的を理解したことで、一斉に自我持ちのペルソナたちは飛んで空を目指す。
そんな事はさせられない。まだ門は完全に繋がっておらず今ならば止めることが出来るかもしれない。
だからこそ、出し惜しみもなくスキルを放ち、湊の妨害と変化した蛇神の破壊を目指す。
だが、彼女たちは忘れていた。自分たちの頭上にいるのは姿を変えた神であることを。
《ぐっ!?》
現世と常世を繋ごうとしていた門から波動が放たれ、上昇していた茨木童子たちを重力波が襲う。
思わず力負けして一気に地上に叩き付けられるところだったが、空中で体勢を立て直すとどうにか着地する事が出来た。
湊の許へ向かっていた彼女たちが戻ってきたため、重力波が発生していることも含めて、今自分たちは何をすべきかと七歌が問う。
「教えて、私たちは何をすればいいの?」
《蛇神の重力波を突破しない限り、現状出来ることなどない。門の完成度は既に六割、完全に常世と繋がり八雲が境界に触れれば全て終わる》
忌々しげに門となった蛇神を睨み、茨木童子はほぼ詰んでいる状況だと告げた。
地上に届く重力波は身体が重いと感じる程度だが、空を飛んで近付くとその分受ける重力は増してゆく。
普通ならば地上ほど重く感じるのだろうが、蛇神の放つ重力波はスキルのようなもので近い距離ほど効果が強くなるのだ。
だからこそ、それをどうにか出来なければ終わると話していたとき、湊の足下の魔法陣が消えていくのが見えた。

今度は一体何が起きるのか。そう思って見ていれば、湊の足下から門まで続く光の螺旋階段が現われている。
門の接続も続けているため、湊が階段を上りきったと同時に十年前の続きが始まるのかもしれない。
着々と準備が進められているのを見て、既に滅びへのカウントダウンが始まっている事に、珍しく焦った表情になるバアル・ペオルが七歌たちに指示を飛ばす。
《全員ペルソナを出して八雲を止めろ！　辿り着ける可能性が他よりも高い七歌の黄龍とアイギスのパラディオンは妾たちで援護する。すぐに呼び出せ！》
龍の血を引く七歌と親和性の高い黄龍、盾を持つパラディオンは他よりも重力波の影響を軽減出来る可能性がある。
そのため、バアル・ペオルたちが重力波にスキルをぶつける形で突破する作戦だ。
指示を出した本人もあまりにお粗末な作戦に表情は硬いが、今できることはそれくらいしかないので、指示を聞いたメンバーたちが一斉にペルソナを呼び出すと後に続く。
上昇する途中で再び重力波が放たれて特別課外活動部のペルソナたちが落下して消えてゆく。しかし、二度目であった自我持ちのペルソナたちは、必死に上昇を続ける黄龍とパラディオンを襲う重力波にスキルを当てて相殺した。
微弱な重力波は無視できるため、これならばもしや行けるかもしれない。
影時間の独特の空気を肩で切りながら上昇し、黄龍とパラディオンと共にバアル・ペオルや茨木童子たちが湊に迫れば、後もう少しというところで先ほどまで湊が足場にしていた魔法陣が現われ結界の様に行く手を阻む。
《くっ、既に儀式は始まっているとでもいうのか！》
魔法陣を破壊しようと茨木童子が熱線を放ちぶつける。
けれど、魔法陣はビクともせず、これ以上先へいけない事で苦虫を噛んだ顔をすると、せめて声よ届けと叫んだ。

《ファルロス、八雲を止めろ！　このままでは本当に世界が滅びるぞ！》
茨木童子たちが上昇している間に門はほぼ完成している。
子どもの足で登っているので湊が到達するまでは少し猶予があるが、足を止めてはいないので時間の問題だろう。
それ故、まだ最後の頼みの綱が残っていると茨木童子は叫んだのだ。
彼女の声が聞こえたのかは分からない。ただ、湊が半分まで階段を登ったところで彼の身体から光の粒が放出され、影時間の空にタナトスが現われた。
《オォォォォォォォォォッ!!》
咆吼したタナトスは棺桶を翼のように広げると、真っ直ぐ湊に向かって突進を仕掛ける。
これ以上は進ませない。そんな意志を感じさせる様子でタナトスが腕を湊に向かって伸ばせば、その手が触れる直前、湊の身体から翡翠の騎士が現われ不意を突く形でタナトスを切りつけた。
流石のファルロスもネガティブマインドの時期にポジティブマインドのペルソナを呼び出せるとは思っていなかったのか、楔の剣で切りつけられて湊の中へ強制的に戻される。
これで湊を阻む全ての障害は排除された。

＊＊＊

ゆっくりと階段を登っている少年の耳には他の者たちの声が届いていた。
だが、自分はすぐにでも世界をやり直さなければいけない。
間違っていたのだから、自分という誤った存在を排除し、正しい世界に作り替えるのだ。
〝待て、八雲〟
〝行ってはいけない〟
〝戻ってきて〟
下にいる者たちの声が再び届く。

だが、今の湊は記憶を持っていながら姿と共に精神も退行を果たしているため、自分が為すべき事のために足は止めなかった。
頭上に浮かぶ鏡の鏡面は完全に黒い孔となって心の世界と繋がっている。
姿は見えないが湊は向こう側にニュクスの存在を感じ取っている。
これならば十二体のアルカナシャドウを倒し切っていなくても、個でありながら他を圧倒する心の力を持つ湊が足りない分を補うことでニュクスを呼べるはずだった。
残り十段。
残り九段。
残り八段。
少年が門に近付くにつれて街中にいたはぐれシャドウたちが騒がしくなっている。
自我など残ってはいないはずなのに、獣ほどの判断力でも母なる存在の訪れが近付いていることは分かるのかもしれない。
タルタロスにいたシャドウたちは建物ごと消し飛ばされたので、また明日の影時間にタルタロスが再構築されるまで出ては来ないだろう。
まぁ、その前に世界は滅びるのだが、少年が歩みを進め残り二段となり境界に向かって手を伸ばしたとき、それは突然に現われた。
「ダメよ、八雲」
「――――え？」
自分の知る声が聞こえたことで少年は振り返る。
すると、そこには死んだはずの母が優しい表情で立っていた。
「な、んで？　お母さんは、しんじゃったのに、どうしているの？」
「記憶の解禁術を仕掛けたとき、あなたにもしもの事があれば一度だけ心の中で会えるよう別の術も掛けておいたの。ただ、こうやって実体を持てたのは八雲の力でしょうね」
いるはずがない人物、ずっと会いたかった人物、それが優しい笑顔を浮かべて立っていることで少年の心の中はグチャグチャになる。
そんなはずはないこれは幻覚だと思い込もうとするが、目が、耳が、

鼻が、そこに母が存在することを教えてくる。
突然の事に頭を抱えながら動揺した顔をしている我が子を見た菖蒲は、湊に近づき両手を広げて彼を呼んだ。
「おいで、八雲」
「ちがう、ちがう、ちがうっ。ぼくは八雲じゃない、本物の子どもじゃない、お母さんの子どもじゃないっ」
すぐにでも母の胸に飛び込みたい気持ちはある。
しかし、自分がクローンである事実がそれを邪魔する。
目の前の女性はオリジナルの母親であって自分の母親ではない。
記憶の上では母親であっても、その記憶はオリジナルのものなのだから自分は息子ではない。
怯えた顔で湊がそう叫べば、菖蒲はもう一歩近付いて少年の手を握り優しく語りかけた。
「いいえ。あなたは私の子どもよ。私はあなたの中でずっと見てきた。だから、大丈夫。怖がらないで？」
「いい、の？　ぼくはたくさんのひとを……」
「いいの。私はあなたが無事ならそれでいい。よく頑張ったね。偉いよ、八雲」
「おかあさんっ」
記憶の上では十年。その間、ずっと求めていた存在に受け入れて貰えたことで少年は涙を流しながら抱きついた。
罪を犯した自分を認めてはもらえない、クローンである自分は否定される、甘えることも赦されなかった状況にあった彼はずっとその事で悩み続けていた。
目的のために傷ついても進み続け、そのせいで余計に傷つくことになっても歩みを止めずにいた彼にとって、この一時は初めてただの子どもでいることが出来た瞬間だった。
子どもの力で精一杯に抱きついてくる我が子を菖蒲は愛おしそうに抱き返し、疲れ切っているはずの彼の頭を優しく撫でながら優しくあやす。
「疲れたでしょう？　寝るまで傍にいてあげるから。だから、今は

ゆっくり休んで？」
「……うん」
「おやすみ。愛してるわ。八雲」
母の声を聞いた少年は、安らぎに包まれたまま意識を手放す。
そして、その瞬間、二つの世界を繋いでいた蛇神も静かに光になって消えていった。
＊＊＊
湊が門に到達するのが見えていた者たちは、間に合わなかったと絶望しかけた。
だが、十年前の続きが始まろうとしたとき、一人の女性が現われて彼を止めてくれたことが分かった。
遠く離れていたせいで相手の姿ははっきりとは見えない。ただ、女性が現われて少しすると門が消滅したことで、どうやら危機を回避することが出来たらしいとだけ理解出来た。
そして、子どもたちを心配してやってきた栗原と英恵と共に待っていれば、少年の姿のまま意識を失っている湊を抱いた女性が空から降りてきた。
相手を知らぬ者たちは茨木童子たちと同じ自我持ちのペルソナだろうかと考えたが、相手の正体を尋ねる前に英恵が声をあげた。
「あ、菖蒲さんっ」
菖蒲の名を呼んだ英恵は湊を抱いている菖蒲に駆け寄った。
久しぶりに会う親友のそんな様子に菖蒲は笑い、少し落ち着いてと挨拶をする。
「フフッ、久しぶりっていう言い方も変かな？　でも、久しぶり」
「どうしてあなたが？　英恵さんも八雲君の中にいたの？」
「うん。でも、私は百鬼としての力は弱かったの。だから、一度限りの術式として八雲が大変なときに心で会えるよう組み込んでいたってわけ」
菖蒲が仕込んだ術式は、名切りの事を知った湊の心が耐えきれなくなったときに起動するものだった。
イリスが死んで廃人になったときは、未だ完全に名切りとしては目

覚めていなかったので起動しなかったが、今回は結果的に己の生に後悔を抱きながら死のうとしていた事で起動したのだ。
本来は心の中で出会うだけのはずが、ベアトリーチェと同調した湊の力が強くなりすぎて実体化までした訳だが、それでも一度限りの術式という点は変わらない。
そんな術式を起動させてまで湊を救ってくれた菖蒲に、茨木童子たちは血に宿り共にいながら何も出来なかった事を素直に謝罪した。
《済まない。今回ばかりは助かった》
「謝らないでください。子どものピンチに駆けつけるなんて親として当然ですから」
名切りとしての力は遠く及ばない。しかし、自分はこの子の母親として当然のことをしたまでだとしっかり抱きしめて彼女は笑った。
そんな女性に自分たちのした事を話すのはとても辛い。しかし、だからこそ正直に伝える必要があると七歌も彼女の許にやってきた。
「おばさま、その、私たち八雲君に……」
「うん。分かってるから言わなくて良いよ。そういう道を選んだのは八雲だもん。悲しいけどしょうがないことだから」
なんと、七歌が伝える前に菖蒲は全て分かっていると少し悲しそうに笑った。
湊の選んだ道は他者に理解されるものではない。むしろ敵を多く作ってしまうものだ。
だからこそ、七歌たちの反応もごく自然なものだと菖蒲は気にしなかった。
ただし、これだけは言っておきますと突然真剣な表情になると、菖蒲はアイギスやチドリたちを見つめて口を開く。
「あなた達は全然ダメ。何も分かってない。八雲の事を世界で一番愛してるのは私なんだからね！」
『……え？』
髪が長いこともあって寝ている姿は少女にしか見えない我が子を抱きしめ、菖蒲はあなた達の愛は自分の物に遠く及ばないと宣言した。

そのノリはどこか佐久間を彷彿とさせたが、そういえば湊は桜や佐久間といった一部の人間を苦手としていたので、母親の性格に似ている部分があったからかと自然に納得する。
こんなお茶目な母親の許で育っていれば湊はどんな子どもに成長していたのだろうか。そんな事を思わず考えさせられる相手は、ふにゃっと真剣な表情を崩して言葉を続ける。
「ま、そういう訳で、私が負けたって思えるくらい好きってアピールしなきゃダメだよ？」
飴と鞭という訳ではないが、菖蒲はしっかりと息子の事を考えてくれる少女ならば認めると遠回しに伝えてきた。
一部の少女にとってはこれ以上ない激励であり、言葉はしっかり受け取ったと笑顔を見せれば満足したように笑った菖蒲の身体が光に包まれ始めた。
「……時間みたい」
術式に宿る菖蒲は他の自我持ちと異なり二度と呼ぶことは出来ない。
だからこそ、我が子と別れることをとても惜しむように彼女は力一杯抱きしめている。
そんな親子の姿を見ていた英恵は、親友との再びの別れに涙を流しながら、自分もあなたに伝えなければならないことがと告白する。
「菖蒲さんっ、私、あなたたちに謝らなくちゃいけないことがっ」
「さっきも言ったけど大丈夫よ。分かってるから辛いことをわざわざ言わなくて良いの。申し訳ないって思ってるなら、その分、この子を愛してあげて」
罪悪感で子どもに付き合って欲しくない。ここで消える自分には出来ないが、親友になら任せられるからと菖蒲は英恵の手に湊を渡した。
母親から別の女性の手に移っても安心した表情で寝ている湊を見つめる菖蒲は、身体が消えるその瞬間まで子どもの頭を撫でる。
「ゴメンね、八雲。愛してる――――」
そういって最後に光が弾けると、菖蒲の気配は完全に消えていた。

菖蒲から託された子どもを英恵はしっかりと抱きしめており、離れてみていた栗原はとりあえずは一件落着かと思ったところで一つの問題に気付いた。
「あー、湊はいつ戻るんだい？」
《記憶があるのなら意識がもどれば戻るだろう。ま、今日のところは病院で預かる。車で来たなら久遠総合病院に運んでくれ》
「辰巳記念病院じゃなくてかい？」
《たわけ、敵のど真ん中に愛子をおくか》
久遠総合病院ならば湊の主治医であるシャロンもいる。
何より、桐条グループも入り込めないセキュリティなので湊を守ることも出来た。
それを言われてしまうと栗原も辛い立場にあるため、召喚者の意識が途絶えても出っぱなしの茨木童子たちを不思議に思いながら、言う通りに湊を病院へと運ぶのだった。

第二百四十九話　幼子

影時間――都内・某所

蛇神の降臨、タルタロスの消滅、宣告者の完成を待たずに行なわれたニュクス召喚の儀。

それらは全てが途轍もない規模のエネルギーを発していたため、探知型のペルソナを有していない者でも感じ取れ、遠く離れた場所からでもある程度は肉眼で見ることが出来た。

異変を感じた事でビルの屋上へやってきた男は、ムーンライトブリッジの向こう側に見慣れたタルタロスがないことに不思議な感覚を覚えながら、代わりに蛇神が変じた神鏡によって開いた門を見て感動の声を漏らす。

「まさか……あれは大いなる存在、シャドウの母たるニュクスを呼ぼうとしているのか？」

男は過去の研究からシャドウたちには大本となる存在がいることに気付いていた。

その存在の名はニュクス、夜を統べる女神にして力を持った神々の母である。

しかし、ニュクスの存在はあくまで仮説に過ぎず、話としては存在する可能性が高いというレベルに留まっていた。

だが、遙か上空に現われた門の向こう側には明らかに現世とは異なる世界が広がっており、あちら側に何かがいるということを本能で理解出来た。

男に遅れてやってきた者も初めて見る光景に興味深そうにしながら、成程と一つ頷いて口を開いた。

「人々の暮らす時間を現世、影時間をあちら側の世界と考えていましたが、どうやらあの世というのはさらに別の次元に存在していたようですね」

「ああ。だが、やはりニュクスは存在した。誰がやったかは分からないが世界を繋げただけでこれだ。こんなものが降臨すれば現代文明は間違いなく滅びるだろう」

男はあれをしっかり目に焼き付けたいと掛けていた眼鏡を外し、布でレンズを磨いてから再びかけ直す。
蛇神から神鏡へ、神鏡から神門へ、一人の人間がこれだけの儀式を行なったとすれば脅威でしかない。
何せ、ニュクスの降臨には相応の手順があったはずだからだ。
「せやけど、ニュクスが現われるんはアルカナシャドウを倒した後やなかったんかい？」
その事を思い出していた者は眼鏡の男へと尋ねる。
すると、男の後ろに立っていた少女が薄い笑みを浮かべながら頷き、妙に耳に残る不思議な声で答えた。
「ええ、十二体に分かれた力の欠片が一つになり、シャドウの王、宣告者であるデスが復活してニュクスは降臨するのよ」
「けど、あの巨大な蛇を呼び出したやつは力業で空間に孔を空けた。ここまで力の余波が届くんだ。蛇が旋回していた時点でその中心には空間の歪みが生じていたはずだ」
少女に続いて隣に立っていた少年も会話に参加し、蛇神の召喚者は途轍もなく規格外だと呆れた様な顔で吐き捨てる。
宣告者であるデスは人類の総意によって生まれる。十年前の研究で人工的に誕生を速めることが可能だとは分かっていたが、蛇神の持ち主はそれらをすっ飛ばして個人の意志のみでニュクスを呼んでしまった。
これでは自分たちの研究どころか、十年前に命を落とした者たちも無駄死にでしかない。
何せ、滅びを求めるのなら蛇神の持ち主にさえ頼めば良かったのだから。
ある意味ではニュクスが実在すると分かったので良かったが、もしこのまま世界に滅びがもたらされるのであれば、世界が滅びた後の準備が出来ていない男はどうしたものかと顎に手を当てる。
けれど、その事に僅かな不安を覚えながらも神門に熱い視線を送っていた男は、神門が突然弾ける様にして消えてしまったことで名残惜しそうに溜息を溢した。

「……消えたか。儀式が失敗したのかどうかは分からないが、先ほどのあれは十年前に御当主が行なおうとしていたものと同一だろう。我々以外にも滅びの日を求め、単独でそれを為そうとした者がいたことは朗報だ」
「それは同志という意味でですか？　それとも、先のことにより滅びの訪れが現実味を増したからですか？」
　終わったのならすぐにこの場を去ろうと男は屋上の入り口に向かって歩き出す。
　その僅か後方に続いて半裸の男が尋ねれば、眼鏡の男は振り返ることなく愉しそうに答えた。
「勿論、後者さ。あの巨大なペルソナは先日桐条君たちが出会った少女のものだろう。しかし、我々は相手について何も知らない。一人で世界に滅びを齎そうとする精神の在り方も含め、正直に言ってコントロール出来るとは思えない」
「では、その少女とやらは諦めると？」
「ああ。儀式を行なえば確実にニュクスは呼び出せる。なら、そんな危険なものを抱え込んでリスクをあげる必要はない。仲間は同じ目的のため手を組んだ君たちだけで十分さ」
　その少女を味方に出来れば間違いなくジョーカーとなる。
　だが、現状は同盟を結んだ相手がいれば戦力は足りているのだ。
　だからこそ、ここでそんな危険な存在を招き入れるリスクは冒せない。手順を踏めば自分たちでも安全にニュクスを呼べるのだから、お互いに協力して行こうと言って幾月は笑った。

８月１３日（木）
朝――久遠総合病院
　車で湊を久遠総合病院に送った後、どういう訳か実体を維持できている自我持ちのペルソナたちがシャロンに事情を説明し、湊はそのまま病院内のＶＩＰ区画で入院することとなった。
　他の者たちは一度帰って朝の面会可能時間になってから来いという事で、桜や美紀にも湊が保護された事を伝えつつ、夜が明けて九時

頃には既に病院の前にやって来ていた。
特別課外活動部のメンバーたちの行動に怒っていた美紀とは久しぶりに会った訳だが、今の彼女は湊が十年前の姿になっているとも聞いた事で心配そうな顔をしている。
《お前ら朝から随分と熱心だな》
男連中が心配そうにしている美紀に話しかけることが出来ないでいると、病院から現代風の私服姿になった茨木童子が出てきて呆れた顔で一同を見渡す。
彼女は珍しく現代の服を着ているが、一応、自我持ち全員がそういったＴＰＯを弁えて人前で活動する事が出来るので、メンバーらが不思議そうにしていようと本人たちにすれば今更というやつだ。
そうして、茨木童子が他の者に背を向けてガラスの自動ドアから入ってゆくと、他の者たちは病院特有の匂いを感じながら清潔な館内を歩く。
入院着で彷徨く患者や忙しそうに物を運んでいる看護師とすれ違い。夏休みだけあってお見舞いの人間も多くいるなと思いながら、さらに上のフロアに上がって奥へと向かえば、明らかに他とは異なるガラスの扉で区切られたエリアがあった。
ガラスの向こう側が特別な入院患者が泊まるＶＩＰ区画という訳だが、ガラス扉の向こう側は奥が見えないよう壁が立っており、玄関のように三和土（たたき）もあることから靴を脱ぐ必要があった。
まぁ、施設内を清潔に保つには土足で移動しない事が一番なので、中に入れば三和土で靴を脱ぎ、スリッパに履き替えてから壁を迂回して奥へ向かう。
壁を避けた先には廊下が続いており、途中にいくつかの扉があったが最奥まで進んで廊下を抜けると、リビングダイニングのようになった奥の部屋で自我持ちのペルソナたちが寛いでいた。
その広い空間の他にもキッチンやトイレにバスルームも存在し、本当にここで暮らすことが出来そうな間取りに一同は少し驚く。
だが、そんなところを見て回る必要はないので、もう一度廊下の方へ戻ると茨木童子に案内されるまま部屋の一つに通された。

そこは他の個人用の病室と変わらない簡素な内装だった。違いがあるとすれば置かれているテレビやベッドのグレードが高いくらいで、ナースコールのボタンもある事からＶＩＰ区画の中でもここだけは病院であることを意識できる。
しかし、他の者が何よりも驚いたのは、簡素な内装ではなくベッドで寝ている子どもの姿だった。
「な、なぜ八雲さんはさらに小さくなっているんですか？」
《知らん。朝になったらそうなっていた》
寝ている子どもを見たアイギスは目を見開きながらベッドに近付いてゆく。
そこには髪の長い少女にしか見えない子どもがすやすやと寝息を立てているのだが、昨夜の時点では相手は十年前の小学一年生くらいの姿をしていたはずなのだ。
だが、いまアイギスたちの目の前にはもっと小さな子どもがいる。
身体の大きさを考えると二歳にもなっておらず、赤ん坊ではないが大して変わらない幼さだ。
本当にこの子が湊なのだろうかとアイギスが手を伸ばせば、横から英恵がその手を掴んで止めた。
「アイギスさん、起きてしまうから抱き上げてはダメよ？」
「ですが、本当にこの子どもが八雲さんかどうか……」
「それは私が断言します。流石にこんなに髪は長くなかったけど、八雲君は元々菖蒲さん似で女の子にしか見えない子だったから」
せっかく穏やかな表情で寝ているのに抱き上げれば起きてしまう。
それは流石に可哀想だからと英恵がアイギスを止めると、一度部屋から出て話そうとその場所から移動する。
まぁ、移動すると言っても自我持ちたちのいるリビングの方へだが、ソファーやテーブルにバラバラに座ると茨木童子が他の者たちが帰ってからの事を説明した。
《昨日、お前たちが帰ってから我らも交代で八雲を見ていた。一夜明ければ元に戻ると思っていたんだが、明け方の五時頃か、出雲阿国が見ているときに突然縮みだしたのだ》

《何の前触れもなかったんだよ。本当にしゅしゅしゅしゅしゅーって》
身体が僅かに白い光に包まれた後、驚いている出雲阿国の目の前で八雲の身体は縮んで今の姿になっていた。
本人たちは今の姿は本当に小さくて可愛いと思っているが、だからといって大きくなるどころか逆に小さくなって良いはずがない。
自我持ちたちが顕現状態を維持されていることで湊の心が残っている事は分かるが、その記憶がどのようになっているかも分からないとなると下手に動けない。
そうして全員が黙っていると俯いていた美紀が顔を上げて口を開いた。
「……もし記憶がなかったらどうなるんですか？」
《どうもならん。そも、今の八雲ではここにいる全員を知らぬのだ。英恵のことは欠片くらいは覚えているかもしれんが、あくまで当時まで退行していたらの話でしかない》
もし湊がただの幼児になっていたとすれば、彼は誰も知らない状態で大勢の大人に囲まれることになる。
自分の心から生じたペルソナたちの事は気配で理解して貰いたいが、背丈からするとまだ二歳児にもならないと思われるので、その幼さにそこまでを期待することは難しいだろう。
それを聞いた美紀は視線を落としたが、まずは湊が目を覚まして彼の状態を把握しない事には今後の対応を話し合うことも出来ない。
よって、もうしばらくは彼の目覚め待ちだという話で纏まれば、そういえばと茨木童子が口を開いた。
《ああ、シャロンが保護者がやってきたら来るように言っていたぞ。今の幼い八雲のとりあえずの健康状態などを伝えたいらしい。目が覚めてから育てる可能性もあるからな》
確かに今の湊の健康状態はかなり心配だ。アイギスたちが来るまで一ヶ月も不眠不休で戦っていた事を考えれば、なぜ点滴もしていないのだと疑問も湧く。
きっとその点に関しては医者の判断もあったのだろうが、ならば話

を聞いてくると英恵と桜が席を立てば、アイギスが自分も聞きたいと一緒について行った。
三人がＶＩＰ区画から出て行くと残った者たちはどうするかという顔になる。
とりあえず、キッチンにはお茶などもあるので、赫夜比売が自由に使っていいと伝えると美鶴とラビリスがお茶の準備をしにキッチンへ向かい、男子らはリビングに残ったが、他の女子たちは寝ている湊の様子を見に部屋へ向かった。
「……八雲君、ちっちゃいね」
「うん。可愛いよね」
ベッドで寝ている子どもは本当に少女にしか見えない。
ベタベタと触ると起きてしまうので出来ないが、可愛らしい相手の姿に思わず頬を緩ませながら風花が指を伸ばせば、相手の小さな手に触れた途端にきゅっと掴まれた。
それは子ども特有の反射行動なのだが、簡単に折れてしまいそうなほど細く小さな指に掴まれたことで、風花は何やら感動して思わず叫びそうになっている。
ここで叫べば起きてしまうので、絶対に声を出すなよとゆかりが後ろから口を押さえれば、今度は美紀が指をそっと伸ばして小さな唇に触れた。
途端、湊は何かを探すように顔を少し動かすと寝たまま相手の指を咥えた。
「あ、歯があります」
「まぁ、二歳くらいらしいしね。それくらいなら歯も揃う頃でしょ」
寝ている湊は風花の指を掴んだまま美紀の指を吸っている。
おかげで硬い歯に触れることが出来た美紀は、七歌の説明を聞きつつこんな小さな子どもでも歯があるのだなと感動を覚え、うっとりした目を寝ている子どもに向けていた。
「……連れ帰ろうとしたら通報するわよ」
そんな寝ている子どもにちょっかいをかけている二人に、チドリは冷めた視線を向けると本気で通報するからと脅しをかけておく。

もし育てることになれば家族である自分が連れ帰るのが当然だと思っているのだろう。
彼女も十分に幼い湊にやられていると言えるが、幼い子どもを可愛いと思ってしまうのは母性からくる本能なので、相手のことを大切に思っている事も合わさればこの反応も当然といえた。
その後、女子たちはお茶を飲みに少し離れたりもしたが、基本的に寝ている湊を見て過ごした。
話が長引いているのか、それともシャロンの用事が立て込んでいてすぐに話せていないのかは分からないが、アイギスたちはまだ帰ってきていない。
まぁ、帰ってくれば大勢で部屋にいてはダメだと注意されているだろうが、寝顔を眺めているだけで女子たちが癒やされていたとき、寝ていた湊の睫毛が少し動いた。
「あ……これ、起きるのかな？」
「しっ、寝ぼけてるだけかもしれないから静かに」
目を閉じたままさらに目を瞑るような動作をしていることで、このまま目覚めるのかなと風花がワクワク顔で彼の目覚めを待つ。
しかし、ただ寝ぼけているだけの可能性もあるので、ゆかりが静かにするように言って部屋にいる全員が彼を見ていれば、閉じていた瞳がゆっくりと開いた。
瞳の色は輝く様な金色、つまりは一度黒眼に戻っていた十年前の姿とはまた異なる状態という事だろう。
まだ眠そうに小さな手で目をこすり、可愛らしい口を大きく開けて欠伸をしている。
その仕草だけで風花や美紀はプルプルと身体を震わせているが、まだ相手からのアクションがないことで他の者たちは待ちに徹する。
すると、ようやく意識が覚醒してきたのか、相手は両足を前に投げ出した状態で身体を起こし、目をぱちくりとさせながら周囲を見渡し始めた。
ここはどこだろうか、とそんな事を考えているに違いない。
十数年前の記憶の状態でも、現在の湊の記憶を持っている状態で

も、彼は意識を失ってから運ばれているので自分がどこにいるのか分かっていない。
だからこそ、本当に重要なのは次の行動だと思って見ていれば、相手は驚いた顔をして周りを見渡し始めた。
そして次に、自分が大勢に囲まれていることに気付くと、相手は身体を横に倒して転がる様にベッドから飛び降りてゆく。
「あ。危ないって！」
相手の突然の行動にゆかりが手を伸ばして受け止めようとするも、湊はベッドから落ちる瞬間に残していた足でベッドを強く蹴って跳躍した。
おかげで受け入れ体勢になっていたゆかりは体当たりを喰らい、後ろ向きに床の上に倒れながら頭を打ってしまう。
対して、ゆかりをクッション代わりにした相手はそのまま相手の上から降りて逃走。
歩ける様になったばかりの転けそうな走り方だが、小さいことも相まって異様に速く感じる。
部屋を飛び出すとすぐ左には知らない人が大勢いたので方向転換。
部屋を出て右方向、つまりはＶＩＰ区画の入り口へと向かって駆けてゆく。
「有里が脱走した！　多分、記憶はない！」
逃げた相手を追うために女子たちは部屋を出て行く、美鶴は打った頭を痛そうに押さえているゆかりを助け起こして他の者に事情を説明するが、それを聞いた自我持ちたちは真剣な表情で立ち上がって子どもの後を追った。
＊＊＊
病院内の冷たい廊下を入院着姿の幼女が走る。ペタペタと裸足で走る音をさせながら廊下を疾走するが、その速度は小学校低学年の子どもよりも速いくらいだ。
自分たちの腰にも届かない背丈の子どもがそんな速度で走っていれば大人は当然驚く。
一体どうしたんだと走ってくる子どもを看護師が腰を落として止

めようとすれば、子どもは相手の腕を真横に飛んでかい潜り、受け身で床を転がる勢いを利用しながら立ち上がり再び走った。
今にも転けそうな走り方でどうしてそんな速度が出るのか。
見ている者は不思議に思うが、走っている子どもの顔がやけに真剣なので、ただ事ではないことは理解する。
彼女の後ろからは数名の女子たちが走って追いかけてきているが、病院内で全力疾走できないことや人がいることもあって、全力で走れている子どもの方が速度は上だ。
徐々に距離が開いてくると、もう少しでエスカレーターの方へ出てしまうということもあって追いかけている女子たちは焦りを覚えている。
そんな大人側のことなど知らずに子どもが走っていると、前方から白衣を着た女性と金髪の少女が歩いてくる。
「アイギス、八雲君を捕まえて！」
そのタイミングで追って来ていた女子が叫び、走ってくる子どもに気付いた少女が驚いた後に真剣な顔で立ちふさがった。
だが、子どもはまだ抜けられると思っていた。難しいことは考えられなくても、空いている相手の脇を通って逃げればいい。
そう考えて相手の目の前で横に飛べば、予想外の跳躍に目を見開いた相手は短く呟いた。
「――――オペレーションＥ．Ｘ．Ｏ」
瞬間、相手の身体から青白い光が放たれ人間の限界を超える。
それはたった一瞬だけの事だったが、少女はその一瞬で相手の動きに完全に追いついた。
抜けたと思った子どもは後ろから抱きしめられ、その事に驚きながらも暴れて脱出を図る。
だが、絶対に離さないと少女が両腕を使って身体と首辺りで抱え込めば、首辺りを押さえていた方の腕に激痛が走った。
「痛っ」
一体何だと見てみれば、子どもが必死な顔で噛み付いていた。
小さくとも健康的な白い歯が少女の柔らかい肉に食い込んでおり、

そこからは赤い血が出ている。
けれど、それでも離すことは出来ないと、少女は拘束する腕にさらに力を籠めながら逃げようとする子どもに話しかける。
「お願いです八雲さん、怖がらないでください！　わたしたちはあなたに危害を加えません。絶対に誰にもさせませんから！」
アイギスは完全とは言わないが対象のイメージを読み取る力を持っている。
それによってコロマルなど動物の言葉を理解している訳だが、いまアイギスはその力で自分の腕の中にいる子どもが怖がっている事に気付いた。
話を聞かなくても分かる。この子どもに有里湊の記憶はない。
そんな状態で、目が覚めたときには知らない大人に囲まれていて驚いたはずだ。
今も必死に逃げようとしているのは恐いから。知らない場所で、知らない人間に囲まれたことで怯えている。
だからこそ、アイギスは噛まれている腕が痛もうと、相手をしっかりと抱きしめて落ち着いて欲しいと声をかけ続けた。
すると、アイギスの言葉から湊の状態を察したらしいシャロンが、子どもと目線を合わせ相手の顔に手を当てた。
一体何をするのか。拘束しながらアイギスが見ていれば、シャロンはちょっとゴメンねと言って湊の顔の向きを少し変えて自分の方を向かせる。
「ここは病院。分かる？　ここは病院。私はお医者さん。病院の先生よ」
しっかりと目を見て話しかけられた事で僅かにだが湊の噛む力が緩んだ。
それを確認したシャロンは相手の頭を撫でながら続ける。
「ゴメンね、ビックリしたね。でも、このお姉ちゃんたちはあなたを助けてくれたの。大丈夫だからゆっくりお口離してね」
知らない場所で目覚め、両親も傍にいない状況で大人たちに囲まれるなど、幼い子どもにとってどれだけ不安だったことだろう。

怖がらせてゴメンねと謝りながら頭を撫で続けてやれば、少しは落ち着いたのか湊はアイギスの腕から口を離した。
健康的な歯には赤い血が付いており、彼の口の周りもアイギスの腕も血だらけだ。
流れた血は湊の着ている入院着と床も汚しており、相手に怪我をさせてしまったことを後悔しているのか、アイギスの腕の中で振り返った湊はとても心配そうに彼女を見上げる。
その瞳に宿る不安をすぐに感じ取ったアイギスは、腕の痛みを我慢しながら出来るだけ彼を安心させてやろうと微笑んだ。
「心配しないでください。これくらいのケガ、へっちゃらですから」
相手は十年前の八雲よりさらに幼い。だからこそ、アイギスは子どもにも分かり易い砕けた言葉遣いを選んだ。
しかし、それでも相手は自分を助けてくれたらしい人物に怪我を負わせた事に責任を感じているのか、僅かに目を伏せるとアイギスの怪我した部分に触れた。
かなり深い傷に子どもの高い体温は染みて痛い。それを分かっているシャロンがそれとなく相手の手を離させようとしたとき、湊の身体が淡く光り触れている部分から緑色の光が溢れた。
一体これはなんだ？　どうして力について何も知らない今の状態で異能が使える？
そんな疑問が頭に次々と浮かんでくるも、光が治まって湊が手を離せば傷は綺麗になくなっていた。
「あなた、自分の生命力を放出できるの？」
湊の治療行為を見ていたシャロンが突然そんな事を言った。
言われた本人は不思議そうに首を傾げているので意味を理解していないようだが、知らずにやっているとするとまずいのか、シャロンはあんまり力を使ってはいけないと優しく伝えてから立ち上がる。
見ていたアイギスもシャロンに続き湊を抱っこしたまま立ち上がるが、腕の中にいる相手は既に逃走の意思はない様で、アイギスの服をきゅっと掴んだまま大人しくしていた。
追いついた者たちはそれを見て安堵の息を吐いているが、今度は口

の周りと服が血だらけになっていることに気付き、心配した様子で一気に近付いて来た。
「口から血が出ているじゃないですか!?　すぐにお医者様に看て貰わないと！」
「大丈夫？　痛くないかな？」
「あー、それアイギスちゃんの血だから大丈夫よぉ。というか、この子まだ落ち着いたばっかりだから驚かせないであげてね」
急に美紀と風花が距離を詰めてきたことで、湊は僅かに表情を強張らせながらアイギスに抱きつく手の力を強めている。
これはアイギスに対しては警戒を解いているが、他の者にはまだ警戒心を残しているという事なので、心配なのは分かるが相手のことを考えてやってとシャロンが二人に距離を取らせた。
子どもが怯えては可哀想だからとすぐに理解してくれた美紀たちに感謝しつつ、シャロンは携帯で掃除のスタッフを呼ぶと、スタッフが来るまでの間に少し湊の状態を把握しておこうと簡単な質問をした。
「あなた、自分のお名前いえる？」
まずは自己紹介から。自分の名前はシャロンだから、先生でもシャロンさんでも好きに呼んでと言って笑いかける。
そして、次はあなたの名前を教えて欲しいと頼めば、湊は先ほどのようにアイギスに強く抱きつきながら首を横に振った。
言葉は理解しているというのに、どうして名前を教えてくれないのか。その事に疑問を感じていると、彼を抱き上げているアイギスが名前を教えてあげてと声をかける。
「八雲さん、ちゃんとお話ししないとシャロンさんも困ってしまいますよ？」
自分を抱いてくれている者に言われると、湊は今度は不安そうな顔でアイギスを見つめて首を横に振った。
名前を呼ばれて反応しているという事は、確かに彼は自分の名前を八雲だと理解している。
しかし、今現在この場で最も信頼している様子のアイギスに言われ

ても、首を横に振るだけで湊は一言も話さない。
そうやって相手の様子から分かることを考えていたシャロンは、そういえば先ほどもアイギスに噛み付くだけで全く声を出していなかったことに気付いた。
「……この子、話さないんじゃないわね。多分、話せないんだわ」
「それは失語症という事ですか？」
「よく勘違いされるけど、失語症と失声症は別の病気よ。失語症は言ってしまえば脳の麻痺などが原因の機能障害で、その範囲は筆記や言語理解にも及ぶの。対して、失声症は心因性のものだから発声以外ならコミュニケーションも可能なのよ」
声を出せない子どもに話せというのは難しい注文だった。
相手の状態を分かっていなかったからこその言葉だったが、無理なことを言ってゴメンねと謝り頭を撫でてやれば、湊はアイギスに抱きつく力を弱めてホッとした顔をしていた。
そんな成長した彼からは想像も出来ない素直な反応に笑いそうになる。
けれど、相手が記憶のない〝百鬼八雲〟であるならば、服を買いに出掛けた保護者二人も交えてもう少し細かく今後の事を話し合わなければならない。
幸いなことにこの女の子にしか見えない少年は、アイギスに抱っこされている間は大人しくしている。
彼を抱っこしたい風花たちがおいでと言っても離れようとしないので、しばらくはアイギスにベッタリしていると思われるが、その状態ならば話し合いの場に彼を連れてくる事も出来る。
掃除用具を持ったスタッフが到着したこともあり、シャロンはとりあえずＶＩＰ区画に戻ることを提案すると、携帯で別のスタッフに幼児用の入院着を持ってくるよう伝えてその場を後にした。

第二百五十話　幼い八雲

午前――久遠総合病院

肉体が幼児退行した湊に有里湊の記憶がないと判明した事で、ＶＩＰ区画に戻るまでに彼を追いかけた者たちの中では、幼い彼を本名である八雲と呼ぶことが決まった。

そして、彼を抱っこしていたアイギスは、血で汚れた自分の腕を洗うついでに、口の周りが血で汚れてしまった八雲をお風呂で洗って着替えさせる事になった。

風花と美紀は可愛らしい彼をお風呂に入れたがってもいたが、八雲本人が他者を警戒しアイギスから離れようとしなかったことで、しばらくは彼女に任せておくべきだとシャロンが医者の観点から伝える一幕もあった。

まぁ、他の者も悪戯に子どもを怯えさせようとは思っていないので、残念そうにしつつも二人は引き下がり、アイギスが八雲の身体を洗ってあげている間、他の者たちはお茶を飲みつつ現状確認をしておくことにした。

「正直、オカルトの分野だと医者としてはどうとも言えないんだけどさぁ。あの八雲ちゃんはボウヤと別人と考えて接するべきね。忘れているんじゃなくて、有里湊としての記憶がないみたいだし」

身体が縮んだことは専門外で分からないと言いながら、しかし、自分が実際に彼と少し話して分かった事をシャロンは簡潔に告げてコーヒーに口を付ける。

ＶＩＰ区画から脱走してフロアの端の方まで逃げることが出来たのだ。

アイギスに噛み付いて深い傷を負わせることも出来ていたので、その点からすると八雲の健康状態に問題はないと思われる。

しかし、まだ精密検査をした訳でもないし、普通の二歳にもならない子どもの免疫力などあまり期待できない。

なので、彼の体調については細心の注意を払うべきだが、その前に彼と接するときには湊の事は忘れて接してやれと彼女は言った。

彼は有里湊として過ごした記憶を忘れた訳ではなく、記憶を得る前の状態まで戻ってしまったと考えられるのだ。
昨夜、湊が十年前の姿になった理由を茨木童子から聞いていた者たちは、さらに彼が時を遡ったのだとすれば、どれほど彼の心に負担を強いたのかと罪悪感を覚える。
まだ影時間の戦いは終わっておらず、次の満月には新たなアルカナシャドウに加え、先日討ち漏らしたアルカナシャドウも倒さなければならない。
現状最強のペルソナ使いであった湊の助力が得られず、彼のペルソナたちも力を貸してくれるか分からないとなると、仮にチドリたちが手伝ってくれたとしても厳しい戦いを覚悟しなければならない。
そうして、一同が今後の自分たちの活動についてどうしたものかと黙っていれば、脱衣所の扉が開いて何やら小さな影が元気に飛び出してきた。
「もう八雲さん！　ちゃんと髪を乾かさないとダメであります！」
飛び出してきた影はペタペタと可愛らしい足音をさせながら廊下を走り、そのままリビングへとやってきてソファーやテーブルの周りを駆け回る。
見れば、それはオムツ一丁で濡れた髪を揺らし走る八雲だった。
次に彼を追って出てきたアイギスは腕を洗うだけだったので服は脱いでいないが、身体を拭いてオムツを穿かせた時点で逃げた八雲の髪を拭こうとタオルを持っている。
そんなアイギスが追いかけてくると八雲はさらに嬉しそうに笑顔で走って逃げ、話せないので声は出していないが、もし話せたならキャッキャとはしゃいだ声を出しているに違いない。
お母さんを困らせてはしゃいでいる姿は本当に愛らしいが、小さな八雲と違って人や物の多い場所では素早く動けずアイギスが困っていると、髪を乾かさないと風邪をひくよとゆかりが走ってきた八雲を捕まえようとする。
「こーら、ちゃんと髪の毛拭かないと風邪ひくよ？」
「っ!?」

急に横から手が伸びてくると八雲は驚いた顔のまま全力で跳び退いて逃げた。
相手の間合いから脱出すると再び笑顔になってアイギスとの追いかけっこを再開し、今度は七歌が捕まえようとすると、先ほどのゆかりのときと同じように一切の遊びのない真顔のまま驚いて逃げている。
そして、また間合いから逃げてアイギスだけが追いかけていると笑顔になったことで、真剣に避けられた二人の少女は心にダメージを負う。
「え、私、そんな子どもに嫌われるような事した？」
「まぁ、知らない人扱いだとこうなのかもね。けど、正直めっちゃキツい……」
風花や美紀ほどではないが二人も可愛い子どもと遊びたい気持ちはあった。
相手が自分の大切な人が幼くなった姿というのもあって、尚のこと母性が刺激されていたという条件も重なり、本気で逃げられたショックを隠しきれない。
落ち込む二人に同性からは同情的な視線が向けられ、男性陣はオムツ一丁で無邪気に走り回る子どもが湊の過去と言われても信じられないという顔をする。
その間も八雲とアイギスは追いかけっこをしている訳だが、入り口の方で音がして誰かが入ってくると、突然八雲が何かに気付いたようで廊下を歩いてくる人物に突撃した。
急にオムツ一丁の子どもが走ってきた事に相手は驚いた様だが、それが八雲だと分かると持っていた荷物を置いて彼を抱き上げている。
「こら、髪の毛が濡れたまま走り回っちゃ駄目でしょう？　アイギスさん、そのタオル貸して貰えますか？」
「あ、はい。お願いします」
やってきた人物、桐条英恵はアイギスからタオルを受け取ると八雲を床に下ろして丁寧に髪を拭いてゆく。
彼女が髪を拭いてやっている間、その後ろからやってきた桜がチド

リを呼んで荷物を持って貰うと、アイギスも英恵が床に置いた荷物を移動させる。
　しかし、移動させている間も他の者たちの視線は英恵に注がれており、どうして八雲が大人しく彼女に髪を拭かれているのかという疑問を抱いていた。
　彼は先ほどゆかりと七歌から全力で逃げていた。そこから、今の彼は噛み付いても怒らず優しくしてくれたアイギスと医者のシャロンにしか懐いていないと思われていたが、急にやってきた英恵には自分から寄っていったため別の条件があるのかもしれない。
　そうして、英恵が八雲の髪を拭き終えるのを待っていると、髪を拭き終わって英恵が八雲を抱き上げたときラビリスが尋ねた。
「あの、さっきゆかりちゃんと七歌ちゃんが八雲君に逃げられてたんやけど、なんで英恵さんは簡単に抱っこ出来てはるんですか？」
「なんでと言われても八雲君が自分から来たからですよ？　この子は昔から人の顔を覚えるのは速かったから、知り合いだった私が来て挨拶してくれたんだと思います」
　別に英恵自身は特別な事はしていない。ただ八雲が英恵に気付いて寄っていっただけである。
　だからこそ、英恵がご挨拶出来て偉いねと八雲を撫でてやれば、八雲の記憶がどのような状態なのか気にしていたバアル・ペオルの姿の鈴鹿御前が、そういう事かと納得しながら頷いた。
《なるほど、己の名を覚えていた通り、今の八雲は八雲として生きてきた分の記憶は持っているのじゃな》
「そういう事ねぇ。じゃあ、私かアイギスちゃんがいなくても英恵さんがいれば大丈夫ってことか」
　八雲に生まれてから今の年齢に至るまでの記憶があると分かると、自分たち以外にも面倒を見られる人が見つかって良かったとシャロンは笑う。
　シャロンは湊に頼まれている仕事に加え、難しい手術の時は助っ人として駆り出され、さらには専門としている一般向けの義肢開発を進めている。

今は湊の担当医師としてここにいるが、いつまでも彼に構っていられる立場ではないので、アイギス以外にも子守が出来る人物がいたのは朗報だ。
英恵に抱き上げられて嬉しそうにしているため、これで他の者に懐くまでの間も交代で面倒を見られる。
そう思って八雲の様子を見ていれば、英恵にたかいたかいをして貰ってはしゃいでいた八雲が急にピタッと止まった。
「八雲君？　どうしたの？」
直前まで笑っていたというのに、急に笑顔をやめてジィッと英恵のことを見ている。
年の割に理解力などがあるため、今の彼の行動にも何かしらの意味があるのだと思われるが、残念なことに子どもは大人が考えもしない事をしでかすこともある。
さらに彼は現在言葉を話せないので、次のアクションから何を考えているのか推測するしかないのだが、英恵を見ていた八雲は何故か急に嫌そうな顔をして暴れ始めた。
驚いた英恵はこのままでは落としてしまうと考え、八雲を床の上に下ろしてやる。
すると、八雲は走って英恵の前から離れ、今度はソファーに座っていた美鶴の前で停止してジッと相手を見つめた。
「これは一体何をしているんだ？」
幼い子どもにジッと見つめられている美鶴は、慣れないからか居心地が悪そうに他の者に尋ねた。
しかし、他の者は急に英恵を嫌がった事も含めて状況を理解出来ていない。まだもう少し八雲の行動を観察しなければ分からないので見ていれば、八雲は美鶴に向かって万歳のような形で手を伸ばす。
「……抱き上げればいいのか？」
どうやら抱っこを強請っているようなので、美鶴は怖々と手を伸ばして八雲を抱き上げた。
小さくて柔らかく、体温も自分たちより高いので、抱き枕としては最高品質なのではと思わず考える。

こんな抱き方で良いのだろうかと思いつつ、軽く上下に揺すってあやしてみれば、抱っこされていた八雲は何やら微妙そうな顔で美鶴の胸をペシペシと叩き下ろせと催促した。
下ろせと言われたからには言う通りにするが、相手を床に下ろした美鶴は抱き心地が良かっただけに残念そうだ。
一方、下ろして貰った八雲は一切の関心を失ったようにすぐに美鶴から離れ、立ったままでいたアイギスの許に戻った。
下からジッと見上げて万歳したので、アイギスが抱き上げると少し安心した顔になり、八雲は英恵の方を指さして首を横に振る。
どうやら英恵が違うと言いたいらしいが、一体何が違うのかが他の者には分からない。
相手の言いたいことを理解してやりたい気持ちはあるので、他の者も一緒になって考えていると、ゆかりが「あ！」と声をあげた。
「分かった！　八雲君の記憶と姿が違うんだ！」
「それは八雲さんと会われていたときの服装とという意味ですか？」
「そうじゃなくて、八雲君の知っている英恵さんは十数年前の姿でしょ？　子どもにしてみれば多分よく似た人って感じちゃうんだよ」
ゆかりの説明を受けたことで、他の者は言われてみれば確かにと納得する。
八雲の正確な年齢は分からないが、仮に二歳だとしても十五年前の記憶ということになる。
つまり、八雲の知る英恵は二十代の姿なのだ。現在の四十歳手前の姿とはやはり差異もあって、それが気になった八雲は英恵を贋物だと思ったに違いない。
その後に美鶴の方へ行ったのは、親子だけあって昔の英恵と似ていないこともないと思い一応確かめたのだろう。
彼が英恵から逃げた理由を理解したアイギスは、ちゃんと話せば理解してくれるはずだと抱っこしたまま八雲を英恵の前まで連れて行く。
「八雲さん、この方は八雲さんのお母様のご友人である桐条英恵さんであります。八雲さんの知っている姿と違うのは、八雲さんが沢山寝

ている間に歳を取っただけなのです」
「ゴメンね、八雲君。おばさんがおばさんになってビックリさせちゃったね」
この人は貴方の知り合いですと改めて説明し、英恵も謝りながら八雲の小さい手を握って握手する。
半信半疑の八雲はアイギスと英恵を交互に見ていたが、先ほど優しく頭を拭いて貰ったこともあり、相手を本人と認めたのか再び笑顔を見せた。
その顔を見た英恵も内心で安堵の息を吐き、ほっと胸をなで下ろしながらアイギスから八雲を受け取ってあやす。
まだ髪は完全には乾いておらず、もっと言えばオムツしか穿いていないので着替えさせる必要もある。
だが、今は親がいないことを不安に思っているであろう八雲を安心させることが大事だ。
背中を優しくトントンと叩きながら、身体を上下に揺すって相手を落ち着かせていれば、ニコニコと笑っていた八雲は何やら考える顔になって英恵の胸に手をパシパシと置いた。
先ほど美鶴に対しても似た様な仕草を見せたが、あの時と違って今の八雲は嫌そうな顔をしていない。
一体彼が何を伝えたいのだろうかとアイギスが考えていれば、八雲の行動の意味を理解していたらしい英恵が口を開いた。
「はいはい。じゃあ、その前に髪の毛を乾かしてお着替えしましょうね」
「あの、八雲さんが何を伝えたいのか分かったんですか？」
「ええ。まぁ、子どもは会話での意思疎通が難しいから、こういったサインは割と多いの」
こういった幼い子どもとのコミュニケーションは、やはり育児経験のある者の方が優れている。
湊とチドリを育てた桜も赤ん坊は育てた事がないので、これから八雲の面倒をみる可能性も考えてアイギスと共に英恵から説明を受ける。

「いま八雲君は私の胸を叩いたでしょう？　それはお腹が空いたってサインなの。赤ちゃんはお母さんのおっぱいを飲んでたから、ゴハンを食べるようになってからも名残として残ってるのよ」
全ての赤ん坊がそうという訳ではないが、お腹が空いて泣くでもなければ、お母さんの胸を叩いてお腹が空いたと伝える子は多い。
八雲は声を出すことが出来ないので、余計にそういったサインに気付いてあげる必要がある。
それを理解しているアイギスたちは、八雲の髪を乾かしに洗面所へ移動しながら、英恵と一緒にいる間に出来る限り学ぼうと真剣に話を聞いていた。
＊＊＊
八雲がお腹が空いたということで、昼には少し早いが一同は敷地内の食堂に向かうことになった。
しかし、それには八雲を着替えさせる必要があるからと待っていれば、英恵と桜が買ってきた荷物と一緒に部屋に入った八雲が数分後に皆の前に現われた。
「うわー、可愛い!!」
リビングにやってきた八雲を見た途端に風花が瞳を輝かせる。
ポニーテールに纏めた頭にはピンク色のキャップ、白地にキャンディ柄のTシャツを着て、その上にややカボチャ型の膝丈オーバーオールを穿いた姿はやはり幼女にしか見えない。
これらをコーディネートした二人の母親も満足げに八雲を見ており、本人たちはズボンだから大丈夫と考えているに違いないが、可愛いと褒められている八雲も得意気な顔をしているので良いのかもしれない。
まぁ、男性陣はあまり玩具にしてやるなよと呆れているが、そんな事を口にすれば女性陣から怒濤の反論が待っているので順平すら口に出さなかった。
「じゃあ、八雲ちゃん連れて食堂にいきましょうか。先に連絡して個室の方を取っておいてもらったから別にゆっくりでいいわよ」
呼ぶ際の名前は食堂だが中身はそこらの店よりしっかりした洋風

レストランだ。
病院のカルテから患者のアレルギー情報だけを取得し、ＩＤカードになっている診察券を通せばアレルギー食材を除いた専用メニューを頼めるとして大勢の固定客を確保している。
そんな人気の食堂の個室など中々取ることは出来ないはずだが、そこはオーナー権限というやつで、普段は利用されていない専用の部屋がしっかりと存在していた。
ここから向かうまでの間に部屋の用意をしてくれているはずなので、のんびり行きましょうとシャロンが先導すれば、部屋に残るという自我持ちのペルソナ以外が彼女の後に続いてＶＩＰ区画を出て行く。
お出かけ用の服に着替えてご機嫌の八雲もアイギスと手を繋いで歩いており、病院の中で他の人とすれ違う際、オシャレさんねと大勢から褒められて余計に機嫌を良くしていた。
そして、入り口の自動ドアを潜って熱気を感じながら外に出れば、日陰のところで寝て待っていたコロマルがアイギスたちに気付いて駆け寄ってきた。
「ワン！」
「すみません、お待たせしましたコロマルさん。ほら、八雲さんもコロマルさんにご挨拶ですよ」
退行した八雲はコロマルの事を知らないので、待ての状態で待機してくれているコロマルに挨拶をしてと八雲とコロマルを対峙させる。
初めて見る相手に八雲は不思議そうにしているが、コロマルは匂いで相手が湊だと分かっているのか大人しく待っている。
その様子に本当に賢い犬だなと他の者が感心していれば、ジッと相手を見ていた八雲が手を挙げるとコロマルの頭を叩いた。
「きゃん!?」
「あ、こら！　そんなんしたらアカンやろ！　ちゃんとコロマルさんにあやまり！」
「そうですよ、八雲さん。コロマルさんに謝ってください」
急に叩かれ思わず驚きの声をあげてコロマルが下がれば、傍で見て

いたラビリスと共にアイギスが何故そんなことをするんだと八雲を怒る。
直前までコロマルは待ての状態で待機してくれていたのだ。八雲を怖がらせてはいけないと気を利かせ、相手からの反応を待っていれば予想外の一撃。
別に叩かれたところで幼い子どもの一撃など痛くはないが、それでも何もしてない相手に急に暴力を振るうのは悪いことだ。
彼のことを可愛い可愛いとだだ甘で見ていた美紀や風花も、どうしてそんな事をしたんだろうと不思議に思って見つめれば、ラビリスたちから怒られた八雲は繋いでいたアイギスの手を振り払い、そのまま逃げる様にシャロンの後ろに隠れた。
「あらあら。気持ちは分かるけど子ども相手に怒っちゃダメよぉ」
「けど、悪いことしたらアカンよって教えんと」
「そうねぇ。でもさ、怒ることと叱ることは別だからねぇ」
怯えた様子で自分の後ろに隠れた八雲に苦笑しつつ、シャロンは八雲を抱き上げるとそのままコロマルの前まで移動する。
相手を叩いた直後に怒られたことで彼はコロマルのことをムッとした顔で睨んでいるが、そんな事をしちゃダメよと優しく言いながら、シャロンは左腕で相手を抱いたまま八雲の右手と自分の右手を重ね、そのままコロマルの頭に手を置いて撫でた。
「ねぇ、八雲ちゃん。さっき八雲ちゃんがしたみたいに頭ぺしんってしたらワンちゃんは痛い痛いってなっちゃうの。だから、触るときはこうやって優しくなでなでしてあげて？」
シャロンが八雲の手を握りながらコロマルを撫でるので、八雲は抱き上げられていることもあって逃げようがない。
ただ、手を重ねている状態で力と速度をコントロールしてもらえば、八雲自身もコロマルのフワフワとした毛を堪能することが出来た。
「そうそう。叩いてゴメンねーって優しくよぉ」
「くぅーん」
「ほら、ワンちゃんも許してくれるって。良かったわねぇ」

途中でシャロンが手を離しても八雲は感覚を掴んだのか優しく撫で続ける。
すると、コロマルも小さな手に撫でられるのが気持ちいいのか、もっと撫でて欲しいと自分から頭を差し出した。
相手から好意を向けられると子どもというのは素直なもので、シャロンが地面に下ろしても笑顔になって両手でわしゃわしゃとコロマルを撫で、そこには犬と子どもが戯れる優しい空間が存在した。
そんな温かな光景を後ろで見守っていたシャロンは、先ほど彼を怒っていた少女たちに、相手が子どもだからこそ大人はちゃんと考えて対応しなければならないと窘める。
「子どもはどうしても好奇心で動きやすいからさ。危ないことをしたら強く叱っていいけど、悪いことしたときは何がダメなのかをしっかり諭す様に教えてあげなきゃね」
子どもは子どもなりに言われた事から学んでゆく。だからこそ、〝叩いてはダメ〟ではなく、〝こういった理由があるから叩いてはダメ〟と伝える必要があった。
情緒面で成長したからこそ元対シャドウ兵器の姉妹は善悪の判断も出来るが、そういった部分はまだまだ経験不足な感じが否めない。
本人たちも先ほどの自分たちの対応がいけなかったことは理解した様で、申し訳なさそうに八雲に近付いて謝ろうとすれば、近付いて来た事に気付いた八雲は嫌そうな顔で英恵の許に走って行った。
その後ろ姿を見つめるアイギスは、大切な少年に嫌われてしまったと深く落ち込む。
だが、怒られた子どもなんてしばらくはそんなものだとシャロンがフォローし、一同はそのまま食堂へ向かった。
＊＊＊
シャロンが話を通して用意して貰った個室は、呼び名こそ個室であったがささやかなパーティーを開けそうな広さがあった。
部屋は二階にあり、窓からは夏の日差しをキラキラと反射する海が遠くに見える。
広い部屋の中には三つの円卓が置かれ、やってきた者たちは三組に

分かれて席についてゆく。
一つ目のテーブルには男子が固まって座り、二つ目のテーブルには特別課外活動部の女子メンバーとラビリスが座る。
そして、三つ目のテーブルには八雲と保護者二人に加えてチドリとシャロンと美紀が座れば、八雲には子ども用のメニューが渡され、彼の隣に座った英恵と桜が一緒にメニューをみながら彼の料理を選んでやる。
「わぁ、八雲君のはどれも美味しそうで良いわねぇ。八雲君はどれが食べたい？」
写真付きのメニューには豪華なお子様ランチやカレーにラーメンと庶民的なものもある。
今の八雲は濃すぎる味付けでなければ、基本的には何でも食べて良いので、どれが食べたいかと尋ねられると、彼は瞳を輝かせて大きなパフェを指さした。
「んんー、それはご飯を食べてからにしようね？　ほら、八雲君。美味しそうなハンバーグもあるよ？　それともカレーライスがいいかな？」
子どもからすると甘いものは格別のご馳走なのだろう。だが、ご飯を食べる前にデザートを食べさせる訳にはいかないので、桜が苦笑しつつ食後にしようねと言えば、八雲はわかったと頷いてメニューを眺める作業に戻った。
他の者たちはそんな様子を眺めながら自分の注文を決め、桜と英恵も交代で八雲の様子を見ながら注文を決める。
そして、最後まで悩んでいた八雲が子どもメニューで一番量の多い〝よくばりお子様プレート〟に決めたところで、店員を部屋に呼んで全員の注文をまとめて伝えた。
まだまだ小さい八雲がお子様メニューで一番量の多い料理を頼んだときには、小学生向けの量だが大丈夫かとも聞かれたが、もし食べきれなければ他の者が貰ってもいい。
男子たちが子どもとはいえ赤の他人の食べ残しを食べるかは分からないが、風花も身体の割に健啖家であるし、七歌も下手な男子たち

より大食いである。
アイギスとラビリスも女子の平均よりは食べるため、彼女たちならば八雲の残しも食べるだろうとしてそのまま注文を通した。
すると、注文を受けて部屋を出て行った店員が少ししてから部屋に再び戻ってきて、八雲の許までやってくると玩具がたくさん入った箱を見せた。
「こちら、お子様メニューご注文のお子様へのプレゼントでございます。お好きなものをお一つお選びください」
「あら、良かったわねぇ。ほら、八雲君はどれがいい？」
お子様メニューのオマケだとは言っても、ここはトップ企業であるＥＰ社の直営だ。
全国チェーンのファミレスで配っているようなチャチなものではなく、ＥＰ社のトイ部門で作られた正規品が箱の中には入っている。
ボトルを握るとリングが出てくるシャボン玉セットや、振動に反応して七色に光るリングなど、子どもが好きそうなものが揃っており、夢中になって見ている八雲には宝の山に違いない。
しかし、貰えるのは一つだけ。いくら可愛くてもちゃんとルールは守らせなければと英恵と桜が見ていれば、八雲はじっくりと悩んだ末に自分の背丈ほどもある合成樹脂製の刀を選んだ。
せっかく女の子のような服装をさせたというのに、どうしてそんな男の子っぽいものをと思わなくもないが、それは母親たちが思っているだけで成長した湊を見れば彼が武器好きなのは分かりきっていた。
八雲が玩具を選べば店員は去って行き、自分の愛刀をゲットした八雲は得意気な顔で刀を鞘から抜いている。
「八雲君、危ないからあんまり振り回しちゃダメよ？」
「けど、軽いとはいえ、自分の背丈ほどもある武器を振れるものなんですね」
「ま、子どもは握力が強いからねぇ」
左手で鞘を持ったまま八雲は右手一本で刀を左右に振っていた。
そんな動きでは何も斬ることは出来ないけれど、大人たちからすれば危なっかしいという印象が強い。

まだまだ料理が来るまで時間がかかると思うが、もし来たら一度預からなければと考えていると、八雲が椅子に座ったままお尻でジャンプをし始めた。
「どうしたの八雲君？」
「あ、もしかして降りたいのかな？」
なんだなんだと保護者たちは驚くが、どうやら椅子から降りたいようで、英恵が椅子を引いて床に下ろしてやると八雲は笑顔になった。
まぁ、料理が来るまでの待ち時間は子どもにとって退屈なのだろう。
今の八雲ではドアノブを捻って外に出ることは出来ないので、部屋の中でくらいは自由にさせておくかと刀を持って走り回る彼を微笑ましく思いながら眺める。
だが、少し走り回ると八雲はその場で動きを止め、キョロキョロと周りを見渡してから、再び走り出すと椅子に座っていたアイギスの傍に向かった。
さっきまで嫌いだと無視していたのに、またアイギスに構ってもらいに行ったのか。
他の者がそう考えていると、八雲は手に持った刀の先でアイギスの腕を撫でた。
スリスリと上下に擦るように何度も撫でているが、今の八雲は何やらショボンと落ち込んだ顔をしており、そんな状態でアイギスを刀で撫でているせいで嫌いだと言っているようにも見える。
嫌いな相手をやっつけるために玩具で武器を選んだのなら、それはとても可哀想なことをしてしまったとアイギスが困っていれば、彼の行動を眺めていた大人の女性陣から笑い声が漏れた。
「フフッ、八雲君は可愛いですね」
「ボウヤになってからもこれくらい素直なら楽なんだけどねぇ」
「まぁ、やはり子どもだからこその素直さなんでしょう」
桜もシャロンも英恵も、誰一人として八雲の行動を咎めようとしていない。
もし八雲が嫌いな相手をやっつけようとしていれば、彼女たちは優

しく諭して止めさせているはずなので、止めないからには別の理由があるのだろう。
だが、どうしても行動の意味を理解出来ず困っていれば、見かねた英恵が苦笑しながらアイギスに行動の意味を説明してくれた。
「アイギスさん。困らなくても大丈夫よ。八雲君は今あなたに謝ってるの。さっきはゴメンなさいって。そして、もう怒ってないか聞いているのよ」
その説明を聞いた者たちは一斉に八雲の事を見つめた。
つまり、落ち込んだ様子は、まだ怒っているのではという不安の表れで、攻撃らしき行動は構って欲しいというアピール。
さっきまでは急に怒られて拗ねていたが、時間が経ってからでもちゃんと謝りに来たのは褒めてやるべきだろう。
アイギスは相手の頭に手を乗せると、優しく撫でながら微笑んだ。
「大丈夫ですよ、八雲さん。さっきはわたしも怒ってしまってすみません。これで仲直りです」
子どもが謝ってきたのだから、アイギスも自分の非を認めて謝罪せねばと謝った。
その言葉を聞いた八雲は先ほどまでの不安な顔が嘘のように顔を輝かせ、刀と鞘を持っている手をブンブンと振りながら全身で喜びを表現する。
「うー！」
『喋った!?』
話せないだけでなく、声も出せないはずの子どもが声を出している。
「うー」だけでは言葉の意味を予想することも出来ないが、今は声を出せるようになったことが重要なので、アイギスははしゃいでいた八雲の脇の下に手を入れると抱き上げつつ立ち上がった。
「八雲さんが話せるようになりました！」
「そうねぇ。心因性だから時間がかかると思ったけど、今の環境に慣れれば声を出したり話したり出来るのかもね」
今はまだ単語すら話すことができなくても、声を出せるならコミュ

ニケーションの幅も広がる。
本当に良かったとアイギスが何度もたかいたかいしてやれば、喜んだ八雲が楽しそうに再び「うー！」と声をあげ。彼が話せないことを心配していた者たちが目に涙を浮かべるという一幕もありながら、一同は明るい雰囲気の中、食事の時間を大いに楽しんだ。

第二百五十一話　夏祭りの楽しみ方

――都内・某所

都内の外れに作られた地下研究室。

そこで幾月はパソコンに向き合い、新たに作ろうとしているシャドウの組み合わせについて考えていた。

湊にデスを奪われたことで新たな宣告者を生み出そうと始めた研究だが、研究を進めるうちにアルカナごとの特性なども理解出来、これはこれで面白い研究内容だと密かに気に入っていたりもする。

しかし、今取り組んでいるのは敵陣営の動きを測るための実験体。

あまり弱く作るとすぐに倒されてしまって参考にならず、かといって今現在出来る最高のシャドウを作ると、今後も作ろうと考えている複合シャドウのデータを取りづらくなる。

さてどうしたものかと一息入れるためコーヒーに口を付けると、幾月は研究室のソファーに座って依頼書に目を通していた男に声をかけた。

「突然だが、君にとって最も厄介な敵とはなんだい？」

「本当に突然ですね。最も厄介となると悩みますが、シャドウに限って言えば複数の耐性を持つタフな個体でしょうか」

声をかけられたことで書類から顔をあげ、タカヤは少し悩んでから正直に答えた。

影時間を終わらせないようにと特別課外活動部と敵対する事を選んだストレガだが、彼らもシャドウを倒すことはあったし、出会って襲いかかってくれば今後も倒そうと考えている。

通常のシャドウなら倒したところで問題はなく、アルカナシャドウに関しても幾月からどういった存在なのか聞いたので暇なら自分たちで倒してもいいとすら思っているのだ。

そんな彼らの実力は平均値で言えば特別課外活動部を超えており、リーダーを務めているタカヤが厄介だと思うのなら、それは特別課外活動部にとっても脅威になり得る。

まぁ、もしも湊たちと手を組んでいれば湊一人に討伐される可能性

もあるが、幾月は湊が特別課外活動部に手を貸す可能性は低いと見ている。
　既に二つの陣営は邂逅した後なので、今後は特別課外活動部にばれることを気にせず湊も動くと思われるが、同じ敵を相手に戦う事があったとしても連携もせず湊は単独で攻めるはずだ。
　突出した強さを持つからこそ、彼は共闘することに向いていない。
　そんな考えを持つ幾月は、タカヤの言葉を聞いてなるほどねとパソコン上でいくつかのファイルを開いた。
「実はシャドウの耐性というのはアルカナごとにある程度決まっているんだ。だが、以前私が作った失敗作は完全に融合しないからこそ複数のアルカナの特徴を併せ持っていた」
「ほう……複合シャドウではなくキメラシャドウと言ったところですか。通常より多くの耐性を獲得出来るのなら興味深い存在ですね」
　幾月たちが複合シャドウと呼ぶ個体は、ペルソナ合体のように複数の個体を融合して姿やアルカナが変化して生まれる個体だ。
　スキルなどは融合させたシャドウの力を一部引き継ぐけれど、基本的には新たな姿のアルカナに準じるため、個体スペックの向上や能力の変化を思えばまさにペルソナ合体のシャドウ版と言えた。
　対して、幾月が以前作ったある実験体は、アルカナの組み合わせが悪かったのか姿はグチャグチャに混ぜたようなものになり、スキルと耐性が素材になったシャドウを足したものになっていた。
　強いかと聞かれると、複合シャドウと違って能力値が大幅に上がった訳ではないので微妙だが、耐性の豊富さで言えば成功体の複合シャドウより勝っているため、防御に関してならばキメラシャドウに分があった。
　今まで失敗作と呼んでいた幾月はタカヤの呼び方が気に入り、今後はそういった失敗作をキメラシャドウと呼ぶことにしながら話を続ける。
「そのキメラシャドウの面白いところは、一度キメラシャドウになってしまうと複合シャドウに出来ないところなんだ。キメラシャドウより強いシャドウに喰わせても、どういう訳か喰ったシャドウが新た

なキメラシャドウになってしまう」
「なるほど、なら逆を言えばキメラシャドウにシャドウを喰わせれば、さらに豊富な耐性を持った個体に強化されるという事ですね」
自分が食べたシャドウの力を吸収して洗練されてゆくのが複合シャドウなら、キメラシャドウは食べた分だけブクブクと肥え太ってゆく。
これまで強さにばかり注目していたので気付かなかったが、特別課外活動部や湊たちの動きを見るのなら倒されづらいキメラシャドウはうってつけである。
色々な能力を付加させられるからこそ、どのような力を持った個体にしようか悩み。少年のような純粋な瞳でパソコンの画面を見つめながら、幾月は愉しそうにキメラシャドウの配合を考え続けた。

８月１６日（日）
午前――久遠総合病院
湊が肉体ごと退行してから三日が経った。
三日経った現在も彼の身体は縮んだままで、一体どうすれば元の状態に戻るのかも分かっていない。
自我持ちのペルソナたちも時期に関係なく出入りが自由な鈴鹿御前が中心となり、精神内部と外側から同時に色々と調べて彼の状態を把握しようと試みてはいるが、有里湊と名乗って過ごしていた青年の精神がどこにも見当たらないらしくお手上げ状態とのことだ。
もっとも、彼の状態が分からなくとも幼くなった八雲は未だに存在する訳で、彼を一人にはしておけないからと、英恵や桜が部屋の余っているＶＩＰ区画に泊まって今日まで面倒を見ていた。
「うー！」
そして日曜日の朝、八雲はリビングに置かれた低いテーブルに手を突き、テレビを見ながら興奮した様子でピョンピョンと小さく跳ねていた。
彼の見つめる先では四人の女の子が悪者と闘っており、女子向けのアニメながら戦い方は肉弾戦がメインで中々に迫力がある。

「はい、八雲君。お口あーん」
そんなテレビに夢中になっている彼の隣に座り、タイミングを計って桜がヨーグルトを混ぜたシリアルを乗せたスプーンを出せば、八雲はテレビを見たまま素直に口を開けてスプーンを咥えた。
彼が口から溢してしまわぬようゆっくりとスプーンを引き抜き、もぐもぐとよく噛んでいるかを確認しつつ、桜はストロー付きのお茶のボトルを彼の傍に置きながら次の一口の用意をする。
朝の子ども向け番組を見ながらの食事なので、タイミングを計っていることもあってペースは非常にゆっくりだ。
しかし、桜たちは一人が食事の世話をしていても、もう一人や自我持ちのペルソナが他の家事やら自分の食事を済ませられるので、ちゃんとよく噛んで食べている分には食事が遅くても気にしていなかった。
「うー！　うー！」
「や、八雲君。ゴハン中は踊っちゃダメよ」
ただ、本編が終了してエンディングに入ると、四人の少女が踊っているのを真似て八雲も踊り出した事で、流石にそれはダメだとシリアルの入った器を置いてから桜は止めた。
彼はこのアニメを今日初めて見たはずなのだが、湊だったときの反射神経が生きているのか、見てから反応してすぐに大雑把には真似ることが出来ていた。
恐竜の着ぐるみパジャマを着て踊る姿は愛らしいので、本当ならば最後まで見ていたかったが躾の方が大切だ。
そう思って桜が彼を捕まえて膝の上に乗せれば、彼は踊るのを邪魔されたというのに気にした様子もなく、桜の膝の上に収まったまま置かれていたお茶のボトルに手を伸ばし、ストローを咥えてテレビを見続ける。
てっきり邪魔されたことを怒ると思っていたのだが、本人が大人しくしているのなら今がチャンス、彼がボトルから口を離すとそれをテーブルに置いてやり、桜は先ほどよりも短い間隔で彼の口にスプーンを運ぶことが出来た。

「はい、ごちそうさま。お腹いっぱいになったねー」
「うー」
朝の子ども向け番組も終了し、朝ご飯を食べさせ終わったことで桜は八雲を解放してやり、自分は空になった器を持ってキッチンに向かう。
桜は移動中、暇になった八雲が次に何をするかと視線で追っていれば、彼は寝室の方へと走っていきオモチャ箱から刀を持って戻ってきた。
その武器を使って何をするというのか。先に食事をしていた英恵や茨木童子たちが眺めていれば、八雲はソファーの近くで寝転がっていたコロマルの許に行き、彼を揺すって起こしている。
動物ＮＧのはずの病院内にどうして彼がいるかというと、仲良くなった八雲が一緒にいると聞かなかったからだ。
ＶＩＰ区画はそもそも各国の要人など極限られた人間にしか使わせないエリアであり、この病院が始まってから使われたのも今回が初めてである。
故に、どうせ使い終われば完璧にハウスクリーニングするので、直接外と行き来できる扉もあるＶＩＰ区画内であればＯＫだと特別に許可されていた。
「うー」
「わん！」
八雲に起こされたコロマルが立ち上がれば、刀を持った八雲とコロマルが少しの距離を開けて対峙する。
どうやら二人で戦いごっこをするようで、ちゃんと付き合ってやるコロマルの利口さに感心しながら、保護者たちはどんな風に戦うのかと興味深く眺める。
すると、刀を両手で掴んだ八雲が動き出すよりも早くコロマルが横に逃げた。
直後、正面に向かって八雲が刀を振り下ろし、その勢いで鞘だけが飛んでコロマルがいた場所を通過してゆく。
歴戦の勘から相手の動きを先読みして避けたコロマルもすごいが、

刀を使った戦いごっこで不意打ちの飛び道具を放つ八雲も恐ろしいセンスである。
攻撃を避けられた八雲は嬉しそうに跳んではしゃぎ、今度は普通に刀を持ってコロマルを追いかけ始めた。
刀を貰った日に突きは危ないからダメだと教えておいたので、戦いごっこをする八雲は刀を振ってしか使わない。
だからこそ、食事をしながら保護者たちも安心してごっこ遊びをする子どもを見ていたのだが、英恵たちが食事を続けていると、病院の面会許可時間になっていたことで、病院側の入り口からやってきた者たちが部屋に入ってきた。
『おはようございます』
廊下を抜けてダイニングにやってきた者たちは、朝食を食べている英恵や桜を見つけしっかりと挨拶した。
メンバーは先日ここにやってきた女子メンバー全員で、その手には夏休みの課題と浴衣が入った鞄がある。
彼女たちは、今日も一日八雲の様子を眺めつつ夏休みの課題をこなして過ごす予定だが、日が暮れてからは持ってきた浴衣に着替えて出掛けるつもりであった。
というのも、今日はコロマルの実家である長鳴神社で夏祭りが開催されており、日が暮れてから全員で行くことになっていた。
男子らは八雲にそれほど関心がないためここには来ず、祭りも現地集合ということで女子だけが集まった訳だが、英恵たちに挨拶してからリビングの方へ視線を向けると、恐竜の着ぐるみパジャマを着た八雲が刀を持って立っていた。
その傍にはコロマルも控えており、どうやら二人で遊んでいたらしいとすぐに察する。
ちゃんと面倒を見てくれていたコロマルに感謝しようと、飼い主であるラビリスが妹のアイギスと共に近付こうとすれば、笑顔になった八雲がコロマルに何かを伝えて彼の背中に乗った。
「うー！」
「アオーン！」

ライドオン、人馬一体とばかりに誇らしげにする二人。
そして、他の者たちが驚いている間にコロマルが発進し、他の者たちの近くを通る際に八雲が全員を切りつけてゆく。
ラビリス、アイギス、チドリ、風花、美紀、ゆかり、美鶴、順番に次々と斬られていき八雲もあと一人だと最後の標的に狙いを定める。
それがコロマルにも伝わったのか彼も八雲の八人斬りを達成させるべく七歌へ接近するが、他の者たちが斬られている間に七歌は鞄から三十センチ定規を取り出していた。
「うー！」
「あまし！」
八雲が切り捨て御免と刀を振れば、それでは死んでやれぬと七歌が定規で刀を受け流す。
阻まれた八雲は悔しそうな顔をするが、すぐに馬から飛び降りて振り返ると再び七歌に斬りかかった。
「ううー！」
「来い！」
刀を床に擦りながら迫る八雲に、七歌は受けて立つと返す。
馬の機動力を失って勝ち目があるのか。他の者が見守る中、八雲が刀を振り始め、七歌もそれに合せて定規の刀を振り始めたことで両者が衝突する。
だが、互いの刀がまさに衝突すると思われた瞬間、八雲は刀を捨てて大きく後ろに跳躍していた。
相手の攻撃に合せて武器を振っていたため七歌の刀は当然のように空を切る。しかし、何故八雲は直前になって武器を捨てたのだと思っていれば、後ろに跳躍した八雲はパジャマのポケットから赤いゴムボールを取りだし、口の高さに持ってきてから投げていた。
彼の手を離れたゴムボールは綺麗な放物線を描いて飛び、空振りしていた七歌の腕に当たった。
見ていた者たちは、刀同士の戦いでそんな奥の手はありなのかと思ったが、何故彼は赤いゴムボールなんて用意していたのだろうかと考えたとき、彼の服装を見て思わず納得してしまった。

「ああ、今のは怪獣の炎攻撃なんやね」
「そのようだな。わざわざ口の高さに持ってきて投げていたあたり、よく考えられている」
そう。他の者たちは恐竜のパジャマだと思っていたが、八雲は自分を怪獣だと考えてちゃんと攻撃手段を用意していたのだ。
まぁ、そのボールはコロマルと遊べるように元々用意していたものだが、怪獣の格好をして炎攻撃として放ったなら認めなければならない。
攻撃を受けた七歌は小さく笑いながら膝をつき、定規を手放すと壁に寄りかかるように倒れた。
「くっ、見事なり……」
七歌が倒れるのを見た八雲はフンスと胸を張って勝ち誇る。
手放した刀とボールを回収し、ボールを再びお腹のポケットに仕舞いつつ通り過ぎる際にはついでに刀で切ってゆく。
倒した相手を再び切る辺り容赦ないが、今の八雲はアニメの戦闘シーンを見て気分が高揚していた。
故に、刀を持ったままソファーに登ると、ソファーの上で立ち上がって刀を掲げて勝ち鬨をあげた。
「うー！」
「わん！」
将である八雲に続いてコロマルも自分たちの勝利を声高に叫ぶ。
八雲がソファーの上にいて自分はフローリングにいるのは、きっと八雲を立てているからに違いない。
ごっこ遊びの相手になったり、八雲の乗る馬になったり、主君を立てる部下にもなったりとコロマルの役割は目まぐるしく変わってゆく。
けれど、コロマルは嫌な顔一つせずにしっかりと八雲の面倒を見ており、シャドウから救われたことで彼に忠義を尽くしているのがよく分かる。
本当に犬なのが勿体ないナイスガイだなと思いつつ、やってきた女子たちはテーブルの方へ移動し、それぞれ持ってきた夏休みの課題に

取り組んで夜までの時間を過ごした。
夜――長鳴神社
カランと下駄の音をさせながら浴衣姿の女子たちが歩いて行く。
それぞれが自身に合った色と模様の浴衣を着ており、そんな女子たちが一団になって歩けば自然と異性の目を惹いた。
けれど、保護者たちを含めると十人という大所帯。そんな集団に声をかける勇気は誰一人としてないようで、とくにトラブルもなく彼女たちは神社の傍で待っていた男子たちと合流することが出来た。
「おっすおっす！　全員ショボい服装だな！」
「いや、七歌っちたちが気合い入りすぎなだけっしょ。有里じゃないんだから、普通の男子は浴衣も着物も着ないって」
合流するなり服装を貶されても順平は気にした様子もなく言葉を返す。
待っていた男子たちは全員が普段と変わらぬ私服で、確かに夏祭りという状況を考えると粋とは言い難いかもしれない。
しかし、周りを見れば浴衣を着ている男子などほとんどおらず、着ているのはファミリーで訪れた者や彼女に合せたと思われるカップルの男くらいである。
それなら自分たちが着ていなくても問題ないだろうと言えば、七歌は道を開けて私服姿の英恵に抱っこされていた八雲を見せた。
その格好は、藍色の生地に様々な風鈴の模様が描かれた甚平を着ており、髪の毛は誰かがやってあげたのだろう、長い髪を結って星の飾りがついた簪をしていた。
普段着るような服やパジャマは必要だからと分かるが、お祭り用の服まで買っている辺りに保護者たちの本気が感じられる。
当の本人は賑やかな周りの様子にキョロキョロとしているが、女子たちはそんな様子も可愛いと思っているのか見て和んでいる。
彼が今の姿になった経緯を思うと男子たちは何も言えないが、子どもだろうと成長してからだろうと女子に囲まれている事は変わらないんだなと、そういう星の下に生まれたことに僅かな嫉妬を覚えた。
「まーた随分と可愛くしちゃって。元に戻ってから本人に怒られるか

もしれねーぞ？」
「八雲君は呆れるだけで別に何も言わないと思うよ」
「そんでも、服を買い過ぎだって言うかもしれないだろ？」
「八雲さんのマフラーに入れておけば服も劣化しませんし、誰かのお子さんが生まれたときに再利用可能です。抜かりはありません」
買い物などで無駄を嫌う湊ならば確かに言いそうな事ではあるが、残しておけば使い道があるので無駄にはならないとアイギスは自信たっぷりに話す。
八雲の服を買ってきたのは桜と英恵だ。病院から少し離れた場所にＥＰ社のものであるショッピングモールがあり、そこに入っている海外の有名子どもブランドの服をいくつも買ったのだ。
もしかすると一日で元の姿に戻ってしまうかもという恐れもあったが、三日経っても未だに戻る気配はなく、言葉を覚えさせようとしても「うー」としか話せていない。
小児科の医者によると二歳どころか一歳半になったくらいだろうとのことで、そのくらいならば言葉を覚えなくともおかしくはないらしい。
ただ、それがこのまま続くと、今度は元に戻る兆候が全く見られないということにも繋がってくるので、英恵たちとしては少しずつ成長が見られた方が良いと思っている。
けれど、それはそれこれはこれというやつで、可愛い子どもに愛情を注ぐのは当然のことであり、せっかく小さな八雲がいるのに可愛い格好をさせないなんて勿体ないと今回も親馬鹿が発揮された。
外見が幼女であるため髪を結っている時点で言い訳がきくはずもないが、一応、服装は男女どちらでもいける柄の甚平にしてある。
これまで着せた服も女子っぽいだけでズボンを選んでいたので、着せられている八雲も褒められて得意気になっている事もあり、英恵たちには一切後ろめたいところなどなかった。
そんな事情をある程度察していた順平は、これ以上言えば擁護派の風花や美紀も一緒になって怒ってくると分かっているため、集まったなら行こうかと話を切り上げる。

「んじゃ、ここで止まっててもしょうがねぇし。そろそろ行きますか。誰か何かみたいもんある？」
「あ、私たこやき食べたい。お祭りだと定番だし」
「ウチはかき氷やけど溶けてまうから後でええかな」
順平に聞かれてゆかりやラビリスが答えつつ一同は境内に向かってゆく。
人の流れに乗りながら石段を登り、鳥居を潜ればそこから先は様々な屋台とそこを訪れる人たちで溢れかえっていた。
抱っこされている八雲は最初は人の多さに驚いていたが、会場に取り付けられたスピーカーから聞こえてくる音楽や人々の笑い声につられてはしゃぎだし、道行く人の持っているお面や景品を欲しがって手を伸ばす。
けれど、身体を乗り出したところで英恵が抱っこし直し、後で一緒に買いましょうねと近場の屋台から見てゆく。
この辺りは桔梗組の縄張りであるため、チドリや桜が顔を見せれば屋台を出している組員らも挨拶をしてくる。
中学から付き合いがある者たちはそれにも慣れているが、高校から参加した者や天田は初めて見るため、遊ぶなら一回分の値段で複数人やっていいと言われ驚いている。
「お、シンジ。久しぶりにこれで勝負と行こう」
「……テメェ、前は卑怯な手で勝ってただろ。撃って倒したやつだけカウントがルールだ」
今年もチドリたちのおかげで存分に遊べることになり、ならば早速一つやろうと真田が以前来たことのある射的屋で止まった。
女子たちは傍の別の屋台に向かったので、挑戦する真田と荒垣だけではつまらないだろうと、順平と天田も一緒になって足を止めて彼らの勝負を見届ける事にした。
コルクの数は十発。まぁ、とても軽いので一つでも倒すのは難しいのだが、真田は以前の経験を活かして最初から狙いをフェザーマンのソフビ人形に決めていた。
頭、肩、腕、当てるとすればこの辺りだろう。身体を乗り出してギ

リギリまで銃口を近づけ、しっかりと狙いを付ける。
撃つときには呼吸を止めてブレを無くし、集中力が高まったところで引き金を引いた。
一発目、二発目は外れ、三発目は足に当たるも不発、四発目から八発目までは連続で外し、残り二発になったところで真田の集中力は頂点に達した。
パンッ、と甲高い軽い音が響き放たれるコルク、銃身が曲がっていたのか狙いがやや左に逸れてゆくが、ギリギリのところで腕に当たって人形は肩を引くようにして後ろに倒れる。
たった一つの景品を取るために九発も使ったのは痛いが、それでも真田は見事に景品を手に入れることが出来た。
最後の一発は適当に倒れやすそうなキャラメルを狙ってみるも外し、結局、真田は一つしか取ることが出来なかったけれど、屋台のオヤジから受け取った人形を手に勝ち誇る。
「見ろ、シンジ！　前とは別の色だ！」
「ハッ、お前が一体倒す間にこっちは二体だ」
「なんだとっ!?」
言われ真田が荒垣の手を見れば、確かに彼も二体のフェザーマンを持っていた。
昔取ったのは赤と黒、今回は真田が黄色で荒垣は青とピンクを倒している。
過去の分も含めて色が被らなかったのは良かったが、しかし、今回は敗北を認めるしかない真田は悔しそうな表情を浮かべる。
「くっ……まだ祭りは始まったばかりだ。次は別の種目で勝負するぞ」
「雑なお前じゃ勝てねえよ。順平とでもやっとけ」
この中で最も器用なのは荒垣だ。それだけに彼はコツを掴めば大概のことは出来る。
真田は自分のやり方で突っ走るタイプなので、そんな方法しか出来ないなら似たタイプの順平と争っていろと返し、荒垣は取ったばかりの景品をジッと見ていた少年の方へ振り返った。

「ほら、やるよ」
「え、でも」
「なんだ。欲しいなら俺のもやろう」
荒垣から二体の人形を貰った天田は目を丸くする。そこへ俺のもやるぞと真田も渡してきたことで、天田の元には三体の人形が集まった。
高校生ならば無用な物であっても、小学生ならば喜ぶかもしれない。相手はフェザーマン好きであったし、貰ってどんな反応をするだろうかと見ていれば、天田はどこか懐かしそうに貰った人形を見ながら笑い出した。
「あはは、前にもこんな事あったな。お母さんと一緒にお祭りに来たんですけど、そのときに知らないお兄さんにフェザーマンの人形を貰ったんです。先輩たちにも貰ったおかげで、最初の五人が揃っちゃいました」
フェザーマンの初期の五人は赤、青、黄色、ピンク、黒。
そして、天田の話を聞いたときに、真田も荒垣も昔自分たちが人形をあげた少年が彼であったと気付いた。
天田親子も巌戸台に住んでいたので、地元の祭りに来ていてもおかしくはない。だが、世間のあまりの狭さにとても不思議な縁を感じ、人形をあげた二人は彼がここにいる原因を思いながら、せめて今日は楽しく過ごせるようにと順平を交えながら彼を色々な屋台へ誘っていった。
＊＊＊
集合して一緒に回る予定が男子だけ別行動になっていた頃、女子たちは八雲が泳いでいる金魚に興味津々になっていたことで、金魚すくいの屋台で足を止めていた。
エアーポンプの付いた水色のプラスチックプールの中を、赤や黒に斑といった鮮やかな色の金魚たちが泳ぎ回っている。
ここの店では色だけでなく形も何種か用意しており、大きなデメキンもいて見ているだけで楽しむことが出来た。
「うー」

「八雲君もやりたいの？　じゃあ、お姉ちゃんが先にやるからやり方みててね」
プールの縁に掴まってジッと見ている八雲が落ちないよう、英恵が後ろから身体を支えていると、やるならやり方を見せるねと風花が店員からポイと器を貰って実践してみせる。
道具を貰ったことで何かが始まると分かったらしく、八雲の視線が風花に向けば、言った手前頑張らないとと風花も気合いを入れて金魚すくいに挑んでゆく。
ここの金魚はどれも色が綺麗なので、後はサイズか形で選んでゆく事になるが、風花は失敗しない事を優先して少し小さな赤い金魚に狙いを定めた。
泳ぐ金魚の向かう先にポイを入れ、そのまま金魚を追いつつ、水を切るように斜めに水から抜くと水の抵抗で破れないらしい。
事前のリサーチでそれを聞いていた風花が集中し、いざ勝負と小さな金魚をすくって見事器に入れれば、目を輝かせた八雲は拍手していた。
「うー！」
「ねー、お姉ちゃん上手ねー」
「ふふっ、こんな感じでお魚さんをすくうの。分かったかな？」
どうやらしっかりとお手本を見せることが出来たようだと風花は安堵する。
ならば、次はいよいよ八雲の番だと店員から道具を受け取り、英恵が器に少し水を入れて水面に浮かべてやれば、八雲は気合いと共にポイを水につけた。
「あー、いきなり全部濡らしちゃったかぁ」
「ふふっ、確かに子どもには分かりづらい遊びかもしれませんね」
いきなり全部を水に入れると、八雲はそのまま腕を左右に振って水の中で紙を破いてしまう。
本人は金魚を追いかけて楽しんでいるのかもしれないが、見ていたゆかりと美紀はこれではすくうことは出来ないなと苦笑した。
しかし、少しすると八雲は腕を振るのをやめ、ジッと魚を目で追っ

てから紙のなくなったポイで水を切るような動きをし始めた。
その動きに何の意味があるのだろうかと見ていれば、彼がポイを水中から浮上させ離水したタイミングで金魚が飛び出し、そのまま浮かべていた器に入ってゆく。
一匹だけならば偶然だと思うところだが、最初に赤い金魚が入ると、続いて斑が入り、赤いデメキンが入り、黒いデメキンが入りと種類の異なる金魚が次々と器に増えてゆく。
これは明らかに狙ってやっているとしか思えず、真剣に素早く手を動かし水を切り続ける幼児にゆかりたちは戦慄した。
「え、すごっ。ポイの縁で弾いてるって事だよね？」
「ああ、凄まじい動体視力と反射神経だな……」
「私は幼少期からこれを傍で見ていたんだぜ。歪まずに育って良かったと思うだろ？」
退行した八雲に出来るのならば、きっと元々の彼も幼い頃から同じ事が出来たと思われる。
自分が相手と同い年でこんな大人でも出来ない超絶技巧を傍で見せられれば、確かに劣等感から性格が歪んでもおかしくない。
それを思うと七歌は変わってはいるがまともではあるため、本当にまともに育って良かったねとゆかりたちも同情せずにはいられなかった。
彼女たちが八雲を見てそんな事を考えている間に、八雲の方は全種類をコンプリートしたのか、いらなくなったポイを風花に預けて自分の戦果の入った器を嬉しそうに持っていた。
ここは組員の屋台なので言えば金魚は全て貰えるので、帰るときまで八雲が取った分だけ別にしておいてもらおうと思ったとき、八雲は口を開けて金魚の入った器を顔に近づけていた。
「ダメダメダメ！　それは食べられないお魚だから！」
「ほら、八雲君。あっちでゴハン食べようねー」
瞬間、ゆかりが彼の手から器を奪い、すかさず英恵が抱き上げて食べ物の屋台の方へ連れて行く。
ペット欲しさに捕まえていたのではなく、どうやら食糧確保に捕ま

えていたようだと悟った一同は複雑な気分になった。
だが、すくった金魚はちゃんと分けて残しておいてくれることになったので、彼もお腹がいっぱいになればちゃんと子どもらしく金魚を愛でるに違いない。
祭りに来て早々、子どもの予想外な行動に僅かな疲労を覚えつつ、しかし、アメリカンドッグを買って貰って頬張っている姿に癒やされながら女性陣も様々な屋台をひやかして回る。
「あ、コロマルさんのお面が売ってます」
「ホンマや。流石、人気者やね」
元々はここに住んでいたことでコロマルも名が知られている。おかげで毎年屋台を出しているようなお面屋では、コロマルをモチーフにしたお面も販売されていた。
これは記念になると思ったのかアイギスら姉妹は揃って購入し、八雲も欲しがったことで三人とも同じコロマルのお面を頭に被った。
しっかりと顔に着けるのではなく、少し斜めに頭に被るのがポイントだと七歌が調節してやれば、被せて貰った八雲もご満悦になって地面に降りて綿菓子屋へと向かってゆく。
人が多いのではぐれると大変だが、八雲が進むとコロマルが後を追いかけてくれることもあって、数件隣への移動ならば英恵たちも焦ったりはしない。
キャラクターが印刷された大きな袋に入った綿菓子を前に瞳を輝かせている八雲に追いつき、どれが欲しいのかと聞けば、八雲は今朝見ていた女子向けアニメのキャラクターが描かれた袋を指さした。
女の子っぽい格好をさせていた英恵と桜は、彼が女の子っぽい物を初めて選んだことで僅かに感動を覚える。
ただ、それに浸って待たせると可哀想なので、普通に売っている物よりも沢山詰めてもらった特別製の袋を貰い、英恵は早く早くと期待の視線を向ける八雲にそれを渡す。
「はい、八雲君。大きくて良いのもらえたわねぇ」
「うー！　うー！」
貰った八雲は全身で喜びを表わすようにピョンピョンと跳んでは

しゃぎ回る。
子どもにすれば大きい物はそれだけですごいのだ。だというのに、八雲はさらに特別な一番大きい物を貰えたのだから喜ぶのも無理はない。
彼がはしゃいでいる今のうちに他の者たちは集まって次の予定を話し合う。今日は花火もあるのである程度の時間になれば移動することになるのだが、流石に参拝もせずに行くのは罰当たりだろう。
だからこそ、花火を見ながら食べる物を買い集めることも含め、少し決めておこうと話していれば、ふと八雲の方へ視線を向けたアイギスが彼がいないことに気付く。
「っ、八雲さんがいません！」
「えっ、いまそこでピョンピョンしてたじゃん?!」
「動いているうちに人の流れに流されてしまったのかも……」
本当につい先ほどまで八雲は飛び跳ねていた。目を離した時間など一分にも満たないだろう。
だというのに、周りを見ても八雲の姿が見えず、彼を心配した者たちは名前を呼んで周囲を見渡す。
けれど、当然のように反応はなく。もしや可愛いから攫われたのではと不安が過ぎったことで、風花がカッと真剣な表情になってとんでもない事を言い出した。
「ペルソナを使います！」
「ちょ、待って風花！　流石にここじゃ無理だから！」
これだけ人が多い場所でペルソナを呼び出せば大騒ぎだ。
今は召喚器も持ってきていないので、ゆかりや七歌が彼女に落ち着くよう言っている間に、顎に手を当てて考えていたチドリが口を開いた。
「……桜、会場にいる組員全員に八雲を探させて。この通りから外れてなければ屋台から見てても見つかるはずだから」
「うん、分かった」
「あ、多分、コロマルさんが追ってはるわ。探して貰うんならコロマルさんも目印になるかも」

見ればコロマルも一緒に消えていた。八雲一人ならば心配だが、コロマルがちゃんと追って行ってくれているのなら少しは安心だ。

人の多い場所で小さい子どもから目を離してしまった己の迂闊さを猛省しつつ、桜はすぐに会場に来ている組員全員に八雲の写真を送って捜索を依頼し、それが終わると自分たちも八雲を探すべく移動を始めた。

第二百五十二話　迷い子と犬

夜――長鳴神社

スピーカーから流れてくる音楽と、人々の声で騒々しくも賑わう境内。

石畳の脇に開かれた屋台の一つに、湊の公認ファンクラブである『プリンス・ミナト』の出店があった。

すぐ隣には会長同士が友人という関係で、真田のファンクラブである『真田王国』も一緒に店を出している。

そこで足を止めて商品を眺めているのは、湊の隣の部屋に住む羽入かすみたちであった。

羽入の友人である宇津木、その宇津木の妹である千佳、千佳の友人である桃井雛というメンバーで祭りにやってきた四人は良い物がないかと色々を眺め、しかし、置かれているラインナップに不満があったのか雛が眉を寄せて店員に質問した。

「少々お尋ねしますわ。みーちゃまが演じたシムルグの商品は既に売り切れてしまいましたの？」

「申し訳ありません。わたくし達もそういった商品を揃えたかったのですが、残念なことにシムルグはフェザーマンの製作会社に権利があるのです。そのため、いくら皇子の公認組織と言えど自由に販売出来ないのです」

シムルグとは劇場版フェザーマンで湊が演じたキャラだ。

特撮の歴代興行収入を大きく塗り替え、今のペースならば百億円を超えるのではとも見られている。

今回の映画一本で今後何本かの分の制作費が既に確保出来るレベルで、製作会社の方も喜んでおり、グッズ販売もかなり力を注いでいた。

しかし、それだけに劇場版のゲストキャラではあるが、メインキャストとして扱われたシムルグの関連商品は製作会社が厳しく管理しており、湊の公認組織であるため見本は送られて来ているが、それを販売するならば相応の額を払って許可を得なければならない。

こんな屋台でそんな事をすることは出来ないので、プリンス・ミナトの会長である雪広繭子は、本当に残念だけど申し訳ないと雛に謝罪した。
そういった理由があって売られていないのなら、彼女の方も納得したのか今度は別の物を見てゆく。
別に本人と知り合いで一緒に写真を撮ることも出来るというのに、小学生がわざわざ貯めたお小遣いをお祭りで売っているアイドルグッズに使う必要はないと思うが、本人は一切気にしていないのか友人の千佳と一緒に見続ける。
すると、後ろでリンゴ飴を食べながら見ていた羽入が、視界の端に映った白い物に気付いてそちらを向いた。
「あー、コロマルさんだー！」
見れば、人の流れに合わせてコロマルがトコトコと歩いていた。
けれど、今の彼は一人ではなく、その背中には大きな綿菓子の袋を大事そうに持った幼児が乗っている。
頭にコロマルのお面を被った幼児は元気に拳を突き出し、コロマルに前進するよう命じている。
周りの人間もその様子を微笑ましそうに見ているが、知り合いである羽入に気付いたコロマルは、羽入の許までやって来ると嬉しそうに一声鳴いた。
「ワン！」
「わぁ、すごいねー。湊君それどうやってるの？　小さくてかわいー！」
やってきた二人を見るなり、羽入は縮んだ湊を可愛いと言って抱き上げた。
急に知らない人に抱き上げられて八雲は驚いたようだが、相手が悪意のない存在だとすぐに分かったようで、不思議そうに相手を見ながら抱き上げられたままでいる。
その足下ではコロマルも安心した顔で待ての状態で待機しており、幼児を乗せてやってきた犬に子どもたちも興味津々だ。
「わぁ、白いわんちゃんだ！　ねぇねぇ、かすみちゃん。このわんちゃ

んってコロマルさんっていうの？」
「そうだよぉ。あのね、コロマルさんは湊君が拾った犬なの。元々はこの神社に住んでたんだって」
「では、ここはコロマルさんのご実家ですのね。お祭りの日にちゃんと見回るなんてえらいですわ」
小学生の少女達がコロマルに近付き頭を撫でれば、コロマルの方は気持ちよさそうに目を細めている。
そんな光景を眺めていたプリミナ会長の雪広は、商品の置かれた棚越しではあるが、話を聞いていたため湊の飼い犬であるコロマルに触れたそうにしていた。
けれど、彼女には店主としての仕事があり、さらに言えばペットの犬よりも羽入が湊と呼んだ子どもの方に興味を惹かれる。
雪広は中等部時代にチドリとの交渉の末に湊の幼少期の写真をデータで貰っている。それは彼の小学一年生頃の姿でイリスとの仕事のために女装もしていた。
いま羽入に抱かれている子どもと比較すると、瞳の色こそ黒と金で違いはあれど、さらに幼くしたような感じという点で酷似しており、流石に本人だとは思わないがかなり近しい血縁と思われた。
そして、ここにいる子どもが血縁であるならば、こんな大人でもはぐれそうな混雑した場所に、とても小さな子どもを犬と一緒に出掛けさせるとは考えづらい。
となると、湊本人が探しにやってくるのではと考えていれば、八雲をたかいたかいしてあやしていた羽入が笑顔で八雲に尋ねた。
「ねぇ、湊君。どうして小さくなっちゃったの？」
「うー」
「そっか。分かんないんだ。じゃあ、しょうがないねぇ」
質問された八雲はジッと羽入の目を見て言葉を返しただけだ。
それで何が伝わったのかと他の者たちは突っ込みたい。突っ込みたいけれど、不思議と彼女なら言葉を理解しているように思えてしまう。
ただ、それでもとりあえず、何点かは言っておかねばならないと宇

津木が口を開いた。
「あの、羽入さん。人は縮んだりしないから、その、その子は会長とは別人よ。それに性別からして違うし」
「えー？　でも、ほら湊君だよ？」
普通の人間は肉体ごと幼児退行したりはしない。誰だってそう思うし、そんな事は常識である。
まぁ、宇津木は八雲の服装や髪型で性別を勘違いしたものの、そこを除けば彼女の言葉は非常に正しい。
けれど、友人から言われた羽入は首を傾げ、どう見てもこの子は湊であると顔を見せた。
見れば確かに日本人どころか世界でも珍しい輝くような金色の瞳をしており、湊の不思議な輝きを持つ瞳の色が好きだった宇津木は、確かにこれは同じ瞳であると認識する。
もっとも、瞳の色がいくら同じであったとしても、百歩譲って兄弟か親戚だろうと考えていれば、その間に羽入は八雲を抱っこしたまま屈んでコロマルに話しかけていた。
「コロマルさん、湊君と一緒にお祭り回ってたの？」
「わふ！」
「へぇー、じゃあラビちゃんに連絡しないとだね。ちょっと待っててね」
コロマルの返事を聞くと羽入は片手で八雲を抱きながら携帯を取り出し、そのままどこかに電話をかけている。
そんな幼児に続いて犬とも会話し始めた彼女を、宇津木や雪広は本当にこの天然ちゃんは大丈夫だろうかと心配そうに見つめていれば、相手と通話が繋がったのか羽入は笑顔のまま話し出した。
「あ、ラビちゃん？　うん。あのね、今お祭りに来ててね。湊君を乗せたコロマルさんと会ったの。でね、今はえっと、湊君のファンクラブのお店の前にいるから、コロマルさんが来て欲しいんだって」
どうやらここに飼い主を呼んだようで、電話が終わると羽入はコロマルに「呼んだからね」と笑いかけている。
それにお礼を言うようにコロマルも「ワン！」と鳴き返しており、本

当に会話が成立しているのではと思ってしまう。
だが、やはり常識という物が邪魔をして信じ切れずにいれば、高校生よりも純粋な心を持っている小学生が瞳を輝かせて直球で尋ねていた。
「ねぇ、かすみちゃん！　かすみちゃん、コロマルさんとお話できるの？」
「うん。コロマルさんはね、とっても頭が良いからできるんだよぉ。今もね、湊君と二人で来たのって聞いたら、〝ちょいとはぐれちまってな〟って」
「わぁ、コロマルさんあったまいい！　すごいね！」
見た目の愛らしさに反して、やけに江戸っ子な口調の犬だなと高校生達は心の中で突っ込む。
実際に口に出して突っ込めば多分負けなので、犬の言葉を理解する人間よりも、人間の言葉を理解できる犬に感心している小学生を眺めつつ宇津木たちが待っていると、人混みをかき分けるように金髪碧眼の女性が走ってきた。
「八雲さん！」
走ってきた女性であるアイギスは、羽入に抱っこされている八雲を見て安堵の息を吐く。
さらに、彼女に続いて普段湊と一緒にいる女性陣も集まってきて、羽入と違ってアイギスと初対面な者たちは本当に知り合いだったのだなと改めて理解した。
「もうっ、本当にご無事で良かったです。羽入さん、ありがとうございます」
「全然いいよぉ。ほら、湊君。アイちゃんが来てくれたよぉ」
八雲を保護してくれていた羽入に深々と頭を下げると、羽入は気にしなくて良いと笑顔のまま八雲をアイギスに手渡した。
無事に戻ってきた八雲を抱っこするなり、アイギスはその存在を確かめるように強く抱きしめ、大きな綿菓子の袋を持ったまま八雲は不思議そうにキョトンとしている。
そんな感動の再会を果たしている傍では、ちゃんと子どもを見てく

れていた忠犬をチドリたちが労っており、どうやらはぐれた子どもをコロマルが追って見つけてくれていたのだと他の者たちは察した。
そして、アイギスの腕から一緒にいた英恵の手に八雲が渡れば、話しかけるならば今しかないと、雪広がチドリにその幼子は一体誰ですかと尋ねた。
「あのぉ、吉野さん？　その愛らしいお子様は、羽入さんの言う通り、本当に皇子なのですか？」
「この子は八雲。湊と血の繋がりはあるけど、湊の兄弟でも子どもでもないわ」
「なるほど、ご親戚という訳ですね。ですが、幼くとも纏う気品たるや天界の御使いの如し。さすがは皇子の御血族です。夏の夜空の下でも輝いておりますわ」
この時、相手も八雲の保護に一役買ってくれていたという事で、雪広の質問にチドリは一切の嘘なく答えていた。
本人なのだから当然血の繋がりは存在するし、兄弟や子どもという事もあり得ない。もっと言えば、一言も本人ではないとも言っていない。
ただ、その辺りのことは脳内補完したらしく、勝手に親戚だと勘違いしてくれた雪広は、やはり湊の親戚は幼くともオーラが違うと眩しそうに見つめていた。
＊＊＊
羽入達の協力もあり、女性陣は無事に八雲との合流を果たした。
彼女たちはそのまま参拝所に向かい、遅れてやってきた男子達と合流してから参拝し、色々と屋台を回りつつ食糧を確保すると神社の近くにある山にやって来ていた。
現在の時刻は八時少し前、あともう少しで花火が上がるので、穴場の展望スポットまで移動してきたのだ。
今回も組員達の屋台で色々とサービスして貰え、おかげでそれぞれがお腹いっぱいになるほどの食べ物が用意されている。
コロマルもシロップ抜きのかき氷を貰っており、食べやすいようフランクフルト用の平たい容器に貰って、今はそれを嬉しそうに尻尾を

振りながら食べていた。
それを見ていた順平は、やけにがっついているなと感じて、犬にとっては今の気温は暑く感じるのだろうかと首を捻った。
「やっぱり、毛皮着てるとオレらよりも暑く感じるんかね」
「まぁ、犬って全身に汗腺がある訳じゃないらしいしね。体温調節のために水とか氷を摂取できるようにしてあげないといけないらしいよ」
順平の言葉に返しつつゆかりは可愛らしいサイズのリンゴ飴を囓る。
まだ中に到達していないようでチビチビと食べているが、彼女は既にお好み焼きを食べているので、今は食後のデザートタイムなのだろう。
そんなすぐ傍で話していた二人の会話を聞いていたアイギスは、犬と人間の身体機能の違いに僅かな興味を抱き、ラムネを飲みつつ実際に犬を飼っている姉にコロマルの飼育で気をつけている点を尋ねた。
「姉さんは普段どのようにしているのですか？」
「うちはバルコニーに水道の蛇口があるんよ。コロマルさんが好きなときに使えるようにって、スイッチ式やから大丈夫やで」
ペット可であるマンションに住んでいるラビリスだが、コロマルの寝床はバルコニーに設置されている。
雨の日や冬の間は家の中に入れていたりもするが、冷暖房で人間にとって快適な温度で一定に保たれている室内よりも、風もある屋外の方がコロマルも過ごしやすいだろうという判断だ。
彼の小屋はレールに乗せた可動式なので、日向か日陰かはコロマルの判断で変えられる。
さらに水も自由に飲めるようスイッチ式にしており、それらの使い方はちゃんと教えているので、夏場の屋外であろうとコロマルは快適に過ごせていた。
ちゃんと相手の事を考えて快適な環境を用意している姉を尊敬しつつ、アイギスは道具の使い方を覚えて実行できるコロマルもすごいと思いながら、桜にタコ焼きを食べさせて貰っている八雲の様子を見

に移動する。
「八雲さん、タコ焼きは美味しいですか？」
「うー」
買ってから少し時間が経っているので、まだ温かくはあるが火傷するほどではない。
それをさらに桜は半分サイズにしてから食べさせており、すぐにパクパク食べられて八雲の方も夢中になって頬張っている。
食べさせている桜も、与えれば与えるだけ食べる八雲に苦笑しているが、食べるペースが早いという事は気に入ったという事なのだろう。
八雲が沢山食べている姿が好きなアイギスは、相手が小さくなっている事もあり自然とお姉さんっぽさを出しながら良い食べっぷりだと笑う。
「沢山食べてすくすく育つと良いですね」
「……赤ん坊にしては食べ過ぎだし、元に戻った方が早いわよ」
アイギスは今の八雲の状態でも良いと考えているようだが、チドリとしては可愛い事と今のままでも良いというのは別問題らしく、好きなだけ食べさせている桜たちを窘めつつ、彼には元の姿に戻って欲しいと話す。
子どもになってからの彼の食事を見ていると、下手をすれば男子達と同じくらい食べているのではないかという時がある。
先日食べた〝よくばりお子様プレート〟は、大人でも満足できるだけの量があった。
八雲はそれを桜と英恵に食べさせて貰いながら完食し、さらには注文時に瞳を輝かせていた特大パフェまで注文してしっかりと食べきった。
このときに他の者たちは昔から大食いだったのかと理解した訳だが、そんな彼のオムツ事情はというと実は一日に一枚しか消費していなかったりする。
というのも、何度保護者たちがオムツを外して確認してみても、彼は一切の排泄行動をしていないのだ。

子どもにはお通じが悪い子もいるので、もしやと医者に診せてもみたが、別に彼の下腹はぽっこりともなっていなかった。
では、食べた物はどこに消えているのだろうかという謎が発生し、彼の身体の状態について何か分かることがないかを自我持ちのペルソナに尋ねれば、単純に消化しきっているだけだろうとの答えが返ってきた。
これは一緒に生活していたチドリやラビリスも意識したことのなかった事だが、湊は基本的にトイレに行かない。
都合の悪い話になったときにエスケープするために行くことはあるが、基本的に用を足しに行ったりはしないのだ。
その理由が、名切りは食べた物をほとんどロスなく消化して吸収できるからというもので、食べれば食べた分だけエネルギーとして身体に蓄えられるのだ。
だからこそ、一度は血に目覚めた現在の八雲も、同じように食べた物をしっかりと消化してエネルギーに変換しているのだろうという話だった。
「ほら、八雲君。もうすぐで花火があがるからねー」
「うー？」
「お空に大きなお花が咲くのよ。ヒューー……バーンって」
八雲がタコ焼きを一パック食べ終わると、桜は彼の口の周りをウェットシートで拭いて綺麗にしてやる。
沢山食べてお腹も満たされ、顔を拭いて貰いスッキリした八雲は笑顔になる。
桜の説明を聞くとはしゃいだ様子で空を見上げ、他の者たちも同じように眺めていれば、遠くで甲高い音が鳴り、夏の夜空に鮮やかな大輪の花が咲いた。
「……すごい」
赤、白、青、オレンジ、緑と様々な色を組み合わせた花火が次々とあがってゆく。
初めて花火を見たアイギスは、知識としてはそれらが金属を燃やすことで起きる化学反応だと理解している。

しかし、実際にそれを見て体験してみると、感動のあまり上手く言葉が出なくなり、こんな時間を大切な人たちと一緒に過ごせている事を思うと胸がいっぱいになった。
「花火、綺麗やね」
「はい、とても」
アイギスが感動して何も言えなくなっていると、隣にいたラビリスがアイギスの手を握って笑いかけてきた。
きっと彼女も初めて見たときは同じ気持ちになったのだろう。
繋がれた手からそれが伝わってきたアイギスも笑顔で返し、静かに夜空を彩る花火を眺める。
ロボットのままだったなら同じように感じたのだろうか。人になったからこそ味わえている感動ではないのか。
そんな事を小さく思わなくもなかったが、知らないことに触れる感動に違いなどないはず。
姉がいて、仲間がいて、そして大切な人が一緒にいて思い出を作っている。
ならば、きっとロボットのままでも同じように心が温かくなったに違いない。
自分がロボットだったときからよくしてくれた優しい者たちと一緒にいられる幸福、それにアイギスは強く感謝した。
「来年もまた皆さんと一緒に見られるといいですね」
「そやね。影時間とかもなくなって、何にも気にせず遊べるとええね」
先日はストレガの妨害にあったせいで、目的に辿り着けずアルカナシャドウと戦う事が出来なかったが、それでも残りの数が変わる訳ではない。
遅くとも今年中には全てのアルカナシャドウを倒し、そのまま影時間が終わることになるだろう。
影時間がなくなれば、ここにいる者たちも年相応にはしゃぎ回って、馬鹿騒ぎだって出来るようになるに違いない。
なら、そのためにも頑張らなければと真田は瞳の奥で闘志を燃やしながら、残りのアルカナシャドウを倒すぞとやる気を見せる。

「なら、俺たちはもうひと頑張りしないといけないな」
「ああ、無事に影時間が終わっても、我々三年生には受験も控えているしな」
『……そうだな』
せっかく真田がこれからのアルカナシャドウとの戦いにやる気を見せたというのに、美鶴の一言で一気に現実に戻されてしまう。
ずっと休学していたせいで大量の課題を出されている荒垣もそれは同様で、祭りに来てまで進路について悩むとは思ってもみなかった。
予想外のフレンドリーファイヤを受けた三年生男子二人が沈んでいれば、三年生の会話を聞いていた順平が、自分たちにとってもそう他人事ではないとショックを受ける。
「うわー、そう考えるとオレたちも半年後には三年かぁ。シャドウと戦ったりもしてるからか、今年はなんかあっという間に過ぎていくなぁ」
「無駄に日々を過ごすよりは良いでしょ。そんだけ濃い一年って事だし」
ゆかりに言われて順平はそうだけどさと納得しきれない顔をする。
ただ、順平にはそう言ったがゆかり自身も今年は本当に濃い年だと思っていた。
影時間に関わり、父の死の真相も見えてきて、今は父のしてしまったことの後始末は自分が着けると頑張っている。
父の死の真相を知るため、どうやってか桐条グループに潜入する方法はないかと考えていた去年とはえらい違いだ。
「確かにそうですね。僕なんかは去年ならこうやって大勢でお祭りに行くこともなかったですし」
「へへっ、なら今年は去年よりもいい年という事ですな！」
夏休み前からの参加ではあるが、ゆかりが濃い一年だと感じているように、天田も去年の自分と比べると今年はすごい差だと苦笑した。
母親以外の人間とお祭りに来るなど初めてで、こうやって誰かと花火を見るなんて去年は考えもしなかった。

それが、仲間が出来て一緒にいるようになり、こうやってお祭りを満喫してから花火まで一緒に見ている。
去年よりもいい年という事だろうという七歌の発言はまさにその通りで、普段は変に大人ぶっている天田もそれには素直に頷いて答えた。
「シャドウとの戦いは怖いけど、皆と深く関わることが出来たって意味では良かったのかも」
「そうですね。それがなければきっと私はこうやってここにいないと思います」
「くーん」
自分の居場所を見つける事が出来た風花。
もし影時間がなければ湊が助けに来ることもなかったであろう美紀。
影時間がなければ元の飼い主を失うこともなかったが、同時に湊という恩人やよくしてくれるラビリスとの出会いもなかったコロマル。
彼女たちは影時間のせいで生まれた不幸を知っているが、反対に影時間のおかげで縁が結ばれたことも理解している。
故に、既に事が起きている以上、あまり悪い点にばかり目を向けていてはダメだと気持ちを切り替え、自分たちもそろそろ再スタートを切ろうと七歌が宣言した。
「今日で一区切りつけよう。明日から、またタルタロスにも行って上を目指す。次の満月は二ヶ所に分かれなきゃいけないだろうし、このまま八雲君が戻らない事も視野に入れて、全員もっと強くなろう」
湊はまだ戻ることが出来ない。けれど、彼が八雲に戻ってしまうまでにシャドウを倒してくれていたおかげで、病院で入院していた無気力症患者の約半数は回復する事が出来た。
一人でそれだけの戦果を挙げてくれた以上、後は自分たちが引き継いで彼が守ろうとした人々を守るだけだ。
本人は一刻も早く元の身体に戻りたいと思っているかもしれない。
だが、影時間のことなど何も知らず、桜に抱っこされ花火を見てただ楽しそうにしている彼をみると、どうか少しでも彼の平和な時間が

続きますようにと願わずにはいられなかった。
故に、七歌の言葉に仲間たちは頷いて返す。臨時メンバーであるチドリたちも一緒に頷き、明日の影時間には一緒にタルタロスへ向かうことが決まった。

第二百五十三話　怪物

影時間――海浜公園

祭りがあった日の影時間、七歌たちは武器を手に持って走っていた。

「もうっ、明日からって言ったのに！」

せっかく今日は楽しい気分のまま終われるはずだったのに、影時間に入るとアルカナシャドウを超える大きなシャドウ反応が観測された。

あまりに大きな反応であったため、念のために風花にも探って貰えば、機器の故障ではなく港区とポートアイランドの中間ほどの位置、つまりは海上に何かがいるとの事だった。

それほど大きな反応があったなら現場に行かない訳にはいかず、風花に頼んで湊のマンションに泊まっているチドリとラビリスを呼び、彼女たちにＶＩＰ区画にいるコロマルを連れてきて貰った。

無事に全員が合流し、海上にいるのならポートアイランドに渡る必要はないだろうと、海沿いの道を走りながら左を見れば、遠く離れた場所からでも肉眼で確認出来る何かが確かに海に浮かんでいる。

「おい、流石にデカすぎるだろう！」

もしも、遠目に見える巨大な物体がシャドウであるならば、今まで倒してきたアルカナシャドウなど小さいくらいだと真田が声をあげる。

本土と人工島の中間地点である海上にいるため対象までは距離があるものの、小さく見積もっても学校の体育館より大きい。

水中にある部分は見えないので不明だが、海上に見えている部分は饅頭のような楕円のドーム型をしており、その直径は下手をすれば五十メートルにも達しているのではと思われた。

「つか、今日はやたら棺桶見ますね」

「祭りがあったからだろう。この時間でも帰っていない者が大勢いるんだ」

今日は祭りがあったからか零時頃でも象徴化した人間が多数いた。

それらの横を通り過ぎながら順平が言えば、美鶴が褒められた事ではないが祭りで浮かれる気分は分かると答えた。
けれど、規格外の大型シャドウがいるせいで、こんなに沢山の人がいると戦闘に巻き込まれる者が出るかもしれないと不安になる。
一応、象徴化した状態で地面に倒されても、象徴化が解けたときに地面とぶつかった痛みが残る事はないと分かっている。
攻撃を受けて吹き飛んでも象徴化が解けないことも分かってはいるが、もしも、象徴化の耐久限界を超えた攻撃を受けるとどうなるかは分かっていない。
象徴化が解けるだけで済むのか、それとも象徴化が解けた上で本人の肉体にもダメージが伝わってしまうのか。
流石にその辺りは恐ろしくてラボの方でも調べられていないが、一般人の攻撃がシャドウに通じないように、シャドウの攻撃が象徴化した人間には効かないと願うしかない。
そんな事を考えながら七歌たちが走っていれば、海浜公園の端、陸地からでは最も敵に近い地点に複数の人影が見えて七歌が声をかけた。
「こっちに来てたんだね。八雲君は放置してて良いの？」
《目を覚ましたところで戦えぬさ。それに英恵と桜が指輪を付けて見てくれている。心配は無用だ》
七歌たちよりも先に来て待っていたのは、湊の持つ自我持ちのペルソナたちであった。
彼女たちは海に浮かぶ敵を見ながらただ立っていたが、人数を数えてみれば、なんと自我持ちたちは全員が来ているようで、湊の警護を考えると逆に心配になってくる。
そんな七歌の考えを読んだのか、茨木童子はちゃんと保護者二人が簡易補整器の指輪を付けてみてくれていると言った。
今の八雲はペルソナ能力を使えるのかは分からないが、適性はあるようで一度も象徴化していない。
となれば、自我持ちたちがいつ消えてしまうか不明であるため、英恵たちは影時間でもちゃんと八雲を見ておけるよう用意していた訳

だ。
そんな風に、主を残して七歌たちよりも先にやって来ていた自我持ちたちに、美鶴は相手の正体が分かるのなら教えて欲しいと頼む。
「あの巨大な物体はシャドウでいいのか？」
《はい。ですが、普通のシャドウではありませぬ》
近付いたことで海上に出ている部分に限られるが敵の姿がよく見える。
それはまるで人の脳みそのような姿形をしており、血色の悪い黒ずんだ紫色をしていることも相まって余計にグロテスクに見える。
シャドウの証である仮面がどこにあるのかも分からず、本当にシャドウであるならばこれではアルカナも分からない。
そんな異形の敵の正体が分からぬ美鶴の質問に赫夜が答えれば、どう普通ではないかを見せるためにバアル・ペオル姿の鈴鹿御前が万能属性の光線を放った。
影時間を照らすほどの光に七歌たちは思わず目を細め、しかし、真っ直ぐ敵まで伸びた攻撃の結果をじっと見続ける。
すると、攻撃が敵の体表に触れた瞬間に余波で水柱があがり、水飛沫が光線の熱で蒸発して水蒸気が発生する。
おかげで視界は少し悪くなってしまったけれど、攻撃の勢いが治まってくればどうにか見ることが出来た。
血色が悪くなった人の肌のような黒ずんだ紫色の体表が黒く焦げ、一部が完全に燃え尽きて消滅しているように見える。
身体は確かに大きいけれど、攻撃を放ったときもとくに動きを見せていなかったため、もしかすると相手は大きいだけで鈍いのかもしれない。これならば遠くからチマチマと削っていけば時間がかかっても倒せるかもしれない。
そう思って僅かに気を弛めたメンバーたちの視線の先で、シャドウに信じられない変化が起こった。
「なっ、再生してるってのか!?」
驚きの声をあげた荒垣は信じられないという表情で固まる。
先ほど鈴鹿御前の一撃を受けたことで黒く炭化していたはずの身

体が、急にボコボコと膨れあがって元通りになってゆく。
欠損した部位の範囲を考えれば、敵の再生能力は明らかに湊をも超えていると言えるだろう。
ただでさえ馬鹿げた巨体であるというのに、さらに驚異的な再生能力を有しているなど質が悪い。これは厄介な相手だなとメンバーらが苦い表情をしていると天田が口を開いた。
「全員でペルソナを呼び出して、そのまま接近させて近距離で一斉攻撃したら良いんじゃないですか？」
《まぁ、普通はそう考えるだろうな。しかし、あのデカブツは厄介な事に魔法スキルに耐性を持っている。普通に通るのは万能属性くらいだ》
「そ、そんなのどうやって倒せっていうんですか！」
天田の叫びが影時間の空に響く。
まぁ、思わず叫んだ彼の気持ちも分かる。万能属性は一部のペルソナしか使えぬ上位魔法とも言えるものであり、威力が高い分敵の耐性をほぼ無視できるが、代わりに他の魔法よりもエネルギーを多く消費する。
この場でそのスキルが使えるのは七歌と自我持ちたちくらいだが、七歌に万能属性スキルを連発しまくるほどのエネルギーはなく、自我持ちたちは自分たちがいつ湊の中に戻るのか分からないので下手に力を消費できない。
となると、残るは耐性とは関係ない物理攻撃でも仕掛けるしかなくなってくるが、試しにアイギスが対物ライフルを取り出して撃ってみると、着弾地点の肉が吹き飛んだものの、やはりすぐに再生して効果は薄かった。
敵の再生能力が湊と同じようにエネルギー依存であるならば、エネルギーが切れるまで攻撃して肉を削ぎ続ける事も一つの手段だが、体長五十メートルを超える巨大脳みそ型シャドウのエネルギー量など底が知れない。
かといって、集合に時間がかかったせいで影時間も残り少ないので、試せることから試してみようと風花が一つ提案した。

「あの、敵の傷口を氷結属性で凍らせてみてはどうですか？」
「ふむ、炭化していた部位が再生した以上、凍らせても効果があるとは考えづらいが、可能性のあることから試していくしかないか」
風花の提案した作戦を試すことに決め、メンバーで氷結属性が使える美鶴と七歌がペンテシレアとロキを召喚する。
自我持ちたちは赫夜比売、鈴鹿御前、座敷童子、アリスが氷結を担当し、茨木童子が万能属性を使うことに決め、それぞれが空へと飛び上がってシャドウを目指す。
対象までの距離は七百から八百メートルほどだろう。全速力で飛べばすぐに到達でき、残り百メートルほどで先頭を行く茨木童子が攻撃を放とうとしたとき、敵シャドウに変化が現われた。
「美鶴さん、ペルソナを下げて！」
変化にいち早く気付いた七歌が指示を飛ばせば、美鶴はすぐにペンテシレアを後退させる。
すると、敵シャドウは傷を負ってもいないのに体表面をボコボコと膨れあがらせ、そこから大型トラックのタイヤの直径ほどもある太い触手をいくつも生やした。
生やした触手は乱暴に振るわれ、ペンテシレアやロキが向かおうとしていた進路上を通過して海面を強く叩いている。
茨木童子たちも変化に気付いて待避しており、少し離れた場所から触手に向かってスキルを放つ。
攻撃を喰らった触手は簡単に千切れ飛ぶものの、本体同様の再生能力を有しているようで、千切れた傷口からすぐに生えてきて元通りになってしまう。
ならばと赫夜たちが千切れた部位をすぐに凍らせてみるが、僅かに再生に時間がかかるようにはなったが、最後には氷が砕けて再び生えてしまっていた。
これでは再生までの時間稼ぎすら難しい。そう判断して七歌と美鶴はペルソナを消し、敵に接近していた茨木童子たちも作戦の練り直しだと戻ってくる。
《ふむ、これは随分と難儀だぞ》

「……八雲さんの魔眼はどうでしょう？　あれなら再生できなくなると思いますが」
想像以上に厄介な敵に茨木童子が考え込めば、アイギスが八雲の〝直死の魔眼〟ならば敵の再生を封じた上で攻撃できるではと進言する。
確かに、直死の魔眼で死の線を切られれば、その傷口は一生治らないし術などを使おうと回復もしない。
傷口を塞ぐには傷口を焼いてくっつけるなどの荒技が必要であり、すぐに再生してしまう今回の敵にはまさに打って付けだ。
けれど、彼の反則級の能力を何度も傍で見てきたチドリは、魔眼は確かに凶悪な能力をしているが相性が存在しそこまで万能ではないと返す。
「無理よ。アナライズして分かったけど、あのシャドウは普通のシャドウじゃない。複数のシャドウが集まって出来た群体のシャドウなの。八雲の魔眼は個に対しては有効だけど、群体だと数の分だけ攻撃する必要があるから難しいわ」
一度に殺せるのは一つまで。続けて切ったり刺したりすれば連続でも殺せるし、自動蘇生が使えるなど複数の命を持っていたとしても一発で殺すことは出来るが、相手が群体ならば個別の命を持っているので死の点を突こうが一撃では殺せない。
そも、直死は直接切ったり突いたりする必要があるので、百本以上の触手で接近を拒んでいる第二形態ともいえる状態に移行した敵が相手だと非常に面倒であった。
その説明を受けたアイギスは残念そうにしながら再びライフルを構え、何もしないよりはマシだと敵の触手を撃ってゆく。
「しょうがない。徒労に終わる覚悟で消耗戦で行くよ」
『ペルソナッ!!』
他の者たちも有効な作戦が思い浮かばないのなら、地道に削って相手のエネルギー切れを狙うしかないとペルソナを呼び出した。
自我持ちたちと違って特別課外活動部のメンバーらは単独で触手を破壊出来ないため、二人から三人一組単位で触手を破壊する。

ゆかりのイオが風の斬撃で切れ目をいれると、すかさず順平のヘルメスが同一ヶ所に斬撃を放って切り落とした。
また、真田のポリデュークスが電撃で触手を焼くと、荒垣のカストールが切りつけ、さらに天田のネメシスが丸鋸のような刃で切断してからすぐに離脱する。
そうやって七歌たちが一部の触手を相手にしている間、自我持ちたちも相手が耐性を持っていようと気にせず己の得意な術を放ちぶつけていく。
風の刃で数本の触手を切り落とし、続けてサポートが切断面ごと相手の体表を凍らせて動きを鈍らせる。
相手の動きが鈍れば氷ごと敵の身体を砕かんと一撃を見舞うが、何分大きさがあるので全体の数パーセント程度しか砕くことが出来ない。
切った先から再生し、砕いても再び元通りになってゆく。
サポートで普段から長時間ペルソナを出している風花と異なり、他の者たちはペルソナを長時間維持して戦わせる経験などほぼない。
自分たちの攻撃の効果がまるで感じられず、ただただ自分たちだけが消耗していく事に全員の表情が曇ってゆく。
「皆、頑張って！　ここが踏ん張りどころだよ！」
しかし、そんな疲れてきた仲間たちに七歌が気合いを入れろと声をかけた。
身体は動かしていないというのに汗を滲ませ、まだ敵の限界はこないのかと焦りを覚え始める。
敵の本体を自我持ちたちが叩いてくれているが、まだか、まだなのかと、残っている力をかき集めてペルソナを十五分以上維持し続けた。
そして、敵よりも先に仲間たちが限界を迎えようとしていたとき、戦況を見ていた風花が残念そうに口を開いた。
「……もうすぐ影時間が明けます。今回は残念ですが、また対策を練って対処しましょう」
「了解。皆、お疲れ様。今回は撤退しよう」

大人と子どもで体力が違うように、身体が大きいほどスタミナを蓄えることが出来るとは言うが、桁外れの巨体を持つ今回の敵は七歌たちの想像を超えてタフ過ぎた。
全力を出すことが出来ない状態とはいえ、湊のペルソナたちが力を貸してくれたというのに、七歌たちが攻撃をやめれば敵は元通りに戻っている。
シャドウに体力回復する術があるのかは分からないが、今回与えたダメージが次の影時間にも持ち越されることを祈り、七歌たちが荷物をまとめて帰投しようとしたとき、港区の空が緑色から日常の色に戻った。
だが、
「……は？」
敵がいた場所を見つめていた順平が思わず間抜けな声をあげる。
既に影時間は終わっており、夏休みを過ごす者たちの象徴化も解けてしまっている。
だからこそ、武器を持っている七歌たちはすぐにでも帰らなければならないのだが、自分たちの武器を擬装用のギターケースなどに仕舞い込もうと思っていたのに、海上にいてはならぬ存在の姿があって順平は叫んでいた。
「おい、影時間が明けたってのにあいつ消えてねーぞ!?」
順平に言われて他の者たちも敵がいた場所をみれば、確かに巨大シャドウは影時間と同じ姿のままそこに存在していた。
複数の触手で海面を叩く度に水柱があがっているせいで、周囲の注目を集めることになり海浜公園にいた者たちも海側の柵のところに集まってくる。
「なあ、あれ何だろ？」
「でけー、クジラじゃね？」
時間は既に零時を過ぎているが、月明かりとムーンライトブリッジや海浜公園の明かりによって海に巨大な何かがいることは分かる。
シャドウは今も触手で海面を叩いているため、一体何だろうかと野次馬が続々と集まっており、このままでは収集がつかなくなるぞと真

田が叫んだ。
「おい、美鶴！　流石にこれはまずいぞ！」
「分かっている！　だが、シャドウが何故現実世界でも実体を維持できているんだ!?」
そも、どうして影時間が終わってもシャドウが残っているのかが分からない。
普通のシャドウは影時間が終われば、例え目の前にいたとしても消えてしまう。
だからこそ、巨大シャドウが今も海上にいる理由が分からず、美鶴は相手が朝までいるとすれば情報規制も不可能だと頭を抱えた。
予想外の事態に弱い美鶴が悩んでいる間も野次馬は増え、海浜公園だけでこれではポートアイランド側でも大勢が見ていると思われる。
敵を倒すだけの戦力はなく、情報規制も不可能に近い。これではシャドウの存在が世間にばれるのも時間の問題だ。
その場にいる者たちが何か手はないかと考えていると、ジッと敵の方を見ていた荒垣が口を開いた。
「吉野、お前あいつは群体のシャドウって言ってたよな？　てことは、何体かのシャドウが合体してるってことか？」
「詳しい事は分からない。ただ、そういう存在の可能性は十分考えられる」
「んじゃ、もしかすっと桐条グループの訓練用のやつが混ざった可能性もあるってことか」
荒垣の言葉を聞いた美鶴はハッとした顔をする。
確かに桐条グループには訓練用に調整したシャドウがおり、そのシャドウたちは自分の体表面に影時間の性質を持ったフィールドを展開することで影時間外でも存在を維持できていた。
海上にいる巨大シャドウが複数のシャドウが寄り集まった存在ならば、逃げた訓練用シャドウが混じってフィールド展開能力を持った可能性は考えられる。
まぁ、実際にそうだったならば、美鶴は何故訓練用シャドウが逃げたことを隠していたんだとラボの人間を問い詰めるところだが、今は

そんな話をしている場合ではないだろうと焦った様子の順平が声をあげた。
「皆して冷静に言ってる場合かよ！　マジやべーって、このままじゃニュースに取り上げられちまうぞ。神様、仏様、誰でも良いからどうにかしてくれよ！　影時間カムバーック!!」
人間は焦っているときに自分以上に焦っている人間を見ると落ち着きやすい。
この場にいる者たちも、顔の前で合せた両手を擦って祈っている順平を見て、ここまで来るといっそ哀れだなと急激に冷静さを取り戻した。
だが、神に祈りたくなる気持ちも分からないでもないので、せめてシャドウを隠すことだけでも出来ないだろうかと全員が策を考えていたとき、ペルソナを召喚していなくても限定的に能力を使える風花が異変に気付いた。
「っ……何これ？　何かの力が急激に拡大しています！」
ルキアを使っていないので詳細は分からない。
ただ、遠くから何か得体の知れない力が広がってきている事は分かる。
他の者たちは風花につられて彼女の見ている方角を見るが、一体何が来るんだと身構える暇もなく風花が来ますと告げた。
「ダメです、ここも飲み込まれます！」
直後、メンバーたちは確かに何かの力が自分たちを覆ったことを理解する。
けれど、それが何であるかを調べようとしたとき、先ほどまで騒いでいた野次馬の声が止んでいることに気付いた。
一体どうしたのかとそちらを見れば、柵に寄りかかっている棺桶のオブジェがいくつも並んでいる。
その周囲には血のような赤い水溜まりがあり、さらに空は不気味な緑色になっている。
極めつけはポートアイランドに自分たちのよく知る異形の塔が出現していたことで、美鶴や他の者は自分たちを覆った力の効果を理解

した。
「これは、影時間だと？　馬鹿な、既に零時は過ぎている」
「だが、おかげで時間稼ぎにはなるぞ」
そう、理由は分からないが美鶴たちは零時を過ぎた状態で再び影時間に入っていた。
順平の祈りが通じたのかとも考えたが、彼の祈りにそんな力がないことは分かっているため、おかげで助かったと思いつつ特別課外活動部の者たちは首を傾げる。
すると、自分たちを覆った力が来た方角を見つめながら、茨木童子が悲しそうな表情を浮かべて小さく溢した。
《……戦いに呼ばれ、目覚めたのか》
その声が聞こえた者たちは、何か知っているのかと彼女に尋ねようとする。
だが、見ればチドリやラビリスも憂いを帯びた表情をしていたことで、七歌たちもこの現象を引き起こした存在が誰であるかを察した。
直後、影時間に轟音が響く。そちらを見ればムーンライトブリッジの下を複数の極光が通り、そのまま巨大シャドウへと叩き込まれる。
着弾した余波で海上に爆発が巻き起こり、腹の底に響く音を聞きながら七歌たちが視線を向ければ、青い天使を背後に控えさせあの日と同じボロボロの姿で飛んでいる湊がいた。
鈴鹿御前たちの攻撃を遙かに超える威力、それらを連発して叩き込み続けることが可能な適性値も驚異的だが、彼がペルソナを使って本気で戦う姿を初めて見た者は、どうして飛んでいるのかと驚き疑問を感じる。
「ねぇ、なんで八雲君は飛べるの？」
《同調率の問題じゃ。八雲は貴様らよりペルソナと深く結び付いておる。つまり、ペルソナの力をより引き出せるのじゃ》
「んじゃ、私たちも強く結び付けるようになれば飛べるの？」
《ああ。じゃが、深く結び付けば己とペルソナの境界が曖昧になり、ペルソナの受けたダメージをより強く受けることになる。まぁ、一長一短じゃな》

鈴鹿御前の言う通り、ペルソナとの同調率を上げることが出来れば、飛行能力を得たりスキルの威力が上がったりと良いことが沢山ある。しかし、代わりにフィードバックダメージが増えて、敵の攻撃に一層気を配らなければならなくなる。

海上では前後左右に上下からと自分に襲いかかってくる触手を躱し続け、それと並行してスキルを叩き込んでいる湊がおり、あんな芸当は不可能だと思った者たちが素直に諦めれば、今まで触手で攻撃するしかなかったシャドウに変化が起こっていた。

「シャドウが光ってる……」

七歌たちが戦闘を見ていれば、触手で湊に攻撃している間に脳みそに似た形状の本体が赤く発光し始める。

一体何をする気だと思っていれば、輝きは目が眩むほどに高まり、最高潮に達したときシャドウの身体から無数の光線が放たれた。

遠くから見ていた順平たちは、シャドウの体表から無数の光線が出ていることでまるでウニのようだと暢気に思っていたが、傍で戦っていた者にとっては逃げ場のない広範囲攻撃である。

すぐに気を取り直して、あんな攻撃手段を持っていたのかと素直に驚いてみせる。

「おいおいおい、オレたちのときはあんな攻撃してこなかったぞ!?」

《それだけ八雲を脅威と判断したのか、もしくは蓄積したダメージで成長したのやもしれんな》

順平の言葉に茨木童子が返していれば、他の者たちの視線の先では天使の翼で身体を覆ってガードしている青年がいた。

敵の攻撃は徐々に範囲を絞って湊に集中しており、青年側も空中にいるせいで踏ん張りが効かずガードごと押されている。

だが、なんとか攻撃には耐えられていると、シャドウは今まで振り回していた触手の先端からも同じ光線を放ち、背後や横からアザゼルに攻撃を仕掛けた。

いくらタフなペルソナと言えど、その防御には限界が存在する。正面からの高火力を防いでいる隙を突かれ、背中や脇腹に被弾したアザゼルは正面に対するガードにも綻びが発生してしまう。

怒濤のように押し寄せていた敵の攻撃はその綻びから徐々に浸食し、ついにはアザゼルのガードをこじ開けて青年に直撃する。
触れた途端に光線は爆発し、その威力でアザゼルが消えた湊は空中で吹き飛ばされた。
このままではまずいと新たなペルソナを呼ぼうとするも、吹き飛ばされ落下を始めていた青年に敵は触手を振り下ろし、触手は彼を表面に押さえつけたまま海面を強く叩いた。
「八雲さんっ」
見ていたアイギスは柵から身体を乗り出すようにして青年の名を叫ぶ。
身動きが取れない状態で触手と海面の間に挟まれたのだ。大型トラック同士の衝突より強い力が掛かった事は確実なので、生きていようと全身の骨が砕け散り、内臓も全て破裂している事だろう。
シャドウは湊を海面に叩き付けた後も触手を海に向かって振り下ろしており、シャドウ周辺の海は波がかなり荒れている。
瀕死の状態であんな波に揉まれては助かりようがない。今すぐに彼の許へ行かねばとアイギスが飛び込もうとすれば、今行くのは自殺行為だとゆかりや七歌が後ろから掴んで止める。
「アイギス、ちょっと待って！」
「行けば有里君を見つける前に貴女が死んじゃうって！」
「いいから離してください！　八雲さんが、八雲さんがっ！」
自分の命などどうでもいい。今は彼を見つけて助ける方が重要だとアイギスは止める二人の拘束を解こうとする。
けれど、そうはいかない二人は全力でアイギスにしがみつき、飛び出そうとしている少女を必死に抑えていると、ルキアを呼び出して反応を探っていた風花が見つけたと声をあげた。
「海中から強力な反応を確認！　すごい、どんどん反応が大きくなってる」
今、海中にいる者など彼以外にはあり得ない。反応が大きくなっているとすれば、それは即ち反撃のためだろう。
この場に置いて巨大シャドウを屠れる可能性を持つのは湊だけ、故

に、どうか頑張って欲しいと他の者たちが祈っていれば、突然、赤と黒の力の奔流が海から噴き上がった。
轟々と燃える炎の様に奔流は天まで昇る。巨大シャドウの高さを超え、本土と人工島を結ぶムーンライトブリッジよりも高く昇っている。
そして、どこまで昇ってゆくのかと思われた力の奔流が弾けるように消えると、巨大シャドウより尚巨大な存在が現われた。
《グオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――――ッ!!》
その咆吼に大気が震え、大地が揺れる。
黒い肌に、関節や胴体を群青の色の鎧のような外殻で覆い、鮫を思わせるような鋭い牙と黄色の目をした頭部が空に向かって咆吼していた。
柵に掴まって見ていた七歌たちも思わず吹き飛ばされそうになり、必死に柵に掴まりながら現われた巨人を見た順平と天田は、どちらもデカすぎるだろうと突っ込まずにはいられなかった。
「嘘だろっ、これが有里の適性値なのかよ!?」
「これじゃあ怪獣大戦ですよ!」
巨人、正確に言えば巨大な龍人なのだが、湊の呼び出した永劫〝セルピヌス〟は、咆吼をやめると触手で襲いかかってきたシャドウに向けて拳を突き出した。
セルピヌスは海底に足を着けて立っただけで、ムーンライトブリッジの最も高い橋柱よりも背が高くなる。
そんな全長百メートルを超える巨体が人間のように鋭く拳を放てば、それだけでミサイルなど目ではない破壊力を生み出す。
轟、と拳でその場の空気が押し退けられ、セルピヌスに向かって伸ばされていたシャドウの触手は拳圧だけで木っ端微塵にはじけ飛ぶ。
しかし、それだけで拳の勢いが止まることはなく、殴られたシャドウは身体を陥没させながら水切りのように海上を滑って吹き飛んでゆく。
吹き飛んだシャドウを追うためセルピヌスが踏み込んで走り出せ

ば、一歩進む度に七歌たちの身体は振動で跳ね上がり、海沿いのブロックが敷かれた通りにはいくつもの亀裂が走った。
「吉野、あれは何というペルソナなんだ。蛇神ほどではないが規格外にもほどがあるぞ！」
「知らない。私はこんなペルソナ聞いてないっ」
天田も言っていたがこれでは怪獣大戦だ。自分たちのような普通のペルソナ使いでは割り込むことも出来ない。何せ、相手が動いただけで立っていられなくなるのだから。
しかし、美鶴たちが必死に柵に掴まりながら湊の戦いを見ていると、セルピヌスの移動で発生した波が迫ってきていることに真田が気付く。
「おい！　でかい波が来るぞ！」
このままでは自分たちは波に呑まれてしまう。だが、セルピヌスが走っているせいで地面が揺れており、普通の人間より優れた身体能力を持っているアイギスたちですら立つことすらままならない。
自我持ちのペルソナたちはちゃっかりと宙に浮いて待避しており、それを見た七歌は自分たちも連れて行けと怒鳴りそうになる。
もっとも、そんな事を言いかけている間に波が到達しようとしており、せめて流されないようにと柵に強くしがみつけば、大きな壁のように迫っていた波が半透明な蛇の身体で防がれていた。
「これって、有里君のペルソナだよね？」
《ふむ、どうやら蛇神を使って街を守っているようじゃな》
見れば自分たちだけでなく、陸地に到達しようとしていた波はすべて不完全に顕現している蛇神の身体で防がれていた。
離れた場所でシャドウを殴りつけた際、シャドウの身体の破片が陸地に落下しようとしたときも蛇神の身体が防いでいたので、セルピヌスを召喚すると決めたときには既に対策をしていたようだ。
自分は瀕死の怪我を負っていたはずなのに、しっかりと街を守ることを考えてくれていた事には頭が下がる。
そんな事を思っている間に、セルピヌスは巨大シャドウをまるでボールのように蹴り上げ、相手を空中に追いやって身動きを封じたま

ま、最後に口から吐いた赤い光線で敵を消滅させていた。
恐るべき再生能力も丸ごと消滅させられては意味がない。まぁ、巨大な敵を完全に飲み込む規模の攻撃が出来る者など限られているのだが、人類にとっては幸運なことに今回は彼がいてくれた。
「敵の反応ありません。完全に消滅したようです」
敵のことをずっと探っていた風花も反応の消滅を確認したと告げたため、他の者たちはどうにかなったと安堵の息を吐く。
そして、後は湊の帰還を待つだけだと海に立つ巨人を見ていれば、敵を倒したセルピヌスはそのまま光になって消えてゆき、セルピヌスの頭部があった場所から一つの影が落下するのが見えた。
それを確認した途端、自我持ちのペルソナたちは全速力で影の許まで飛んでいた。
見ていると、足に自信のあったアタランテがどうにか影をキャッチすることに成功したようだが、戻ってきたその姿を見れば、彼女に抱えられた影の正体である青年はぐったりとしていて意識がない。
心配して駆け寄ったアイギスは、湊は無事なのかと自我持ちたちに尋ねる。
「八雲さんはご無事なのですか？」
《かなり消耗している。すぐにでも病院に連れて行き休ませる必要があるだろう》
血で汚れたボロボロの服を見れば、彼があの日のままである事が分かる。
てっきり八雲に退行して回復を図っているんだと思っていた者にすれば、一ヶ月以上戦い続けてまだセルピヌスを出せたのかと驚くところだが、ここでいくら話していても湊の状態は悪化するだけだ。
話している間に湊が維持していた影時間も解除され、再び野次馬たちが騒いでいる声が耳に届くと、自我持ちのペルソナたちが先に戻っていると言って湊を連れて去って行った。
それを見送った他の者たちは、お見舞いは明日の朝になってから行こうと話し合い、今日はそのまま別れてそれぞれの家に帰るのだった。

第二百五十四話　目覚めた彼

８月１７日（月）
朝――久遠総合病院
病院に乗り付けた黒い高級車から一人の女が降りてくる。
女は降りるなり駆け出すと、自動ドアが開く時間すら惜しいとばかりに身体を無理矢理に割り込ませて中に入る。
目的地は入り口よりも上のフロアだ。手に持っていた小さなポーチからカードキーを取り出しながら、エスカレーターを駆け上り廊下を走る。
ここが病院など知ったことかと言わんばかりに急ぐ彼女を、ナースステーションにいた看護師たちが驚いた顔で見ていたが、朝の静かな病院内を走る女にとって他人から向けられる感情などどうでも良かった。
都内でもトップクラスの大型病院であるため、部屋数も自然と多くなり、その分だけ施設も広くなっている。
開発計画には女もしっかりと参加していたのだが、目的地までの距離が遠いこともあって、女は誰だこんな馬鹿みたいに広い病院を建てたのはと憤りを感じていた。
今の時間帯はまだ面会が許可されていないため人は少ないが、出歩いている入院患者やスタッフはいるので廊下を走る彼女とすれ違う。
すれ違った者たちは美人が必死な表情で走るものだから、恋人や家族が事故にでも遭ったのだろうかと気の毒そうな表情で彼女の背中を見つめた。
そして、周りがそんな風に気を遣ってくれていることなど一切知らぬ彼女は、通路の最奥にあった目的地が見えていたことで、手に持っていたカードキーを使って強化ガラスで出来た扉を開けた。
中に入った彼女は三和土で靴を脱いでスリッパに履き替えると奥を目指す。
シャロンから受けた連絡が嘘であって欲しい。そう思いながら廊下を進んでリビングに到着すれば、

「ああっ……あああっ……」
彼女は愛しい者の変わり果てた姿を目にして、涙を流しながら崩れ落ちた。
何故だ。どうしてこんな事になってしまったのだ。ソフィアは溢れてくる涙を拭いながら残酷な神を恨む。
もう少し、せめてあと一日でも早く到着していればこんな事にはならなかった。
グループのトップになった事で仕事が立て込み、彼が倒れたと聞いてもすぐに日本にこれなかったソフィアは、その後さらに多忙になったとしても無理をして日本に来るべきだったと激しく後悔していた。
「何故、何故ですか……どうしてわたくしの到着を待たずにこんな……」
赤い瞳から涙をポロポロと溢しながらソフィアは手で顔を覆う。
こんな結末などあんまりだと、彼女は心のままに彼に向かって叫んだ。
「わたくしだって小さい湊様にお会いしたかったのにっ」
「……俺の身体を先に心配しろよ」
自分の欲望に素直な彼女に呆れながら、湊は箸を動かして食事を口に運ぶ。
巨大シャドウを倒した翌日、湊は既に起きて食事を取っていた。
身体のサイズは縮んでおらず、意識もハッキリしており、ならば後は食事で体力や生命力を回復させるだけだと、自我持ちのペルソナたちがせかせかと料理をしては湊の許に運んでいた。
本当にどれだけ食べるのかという量を既に食べているため、ダイニングのテーブルに座って彼を見ている英恵と桜も唖然としている。
まぁ、食べれば食べた分だけ回復するというのならば止めはしないが、せっかく小さくなった湊を楽しみにしていたソフィアはハンカチで涙を拭い、どうしてこのタイミングで戻ってしまったのかと尋ねた。
「ぐす……何故、もうしばらく小さいままでおられなかったのですか？」

「別に自分の意思で小さくなっていた訳じゃないし。切っ掛けがなくて戻れていなかっただけだ」
湊は自分が小さくなったときの事をあまり覚えていない。
あの時は疲労やら心労やらで精神的におかしくなっていて、肉体ごと退行したのもその影響だろうとは分かっている。
けれど、正確に何があったのかを把握しようとは思わず、別にこうして元に戻れているので、本人としては玉藻に任せてしまっていた仕事に復帰することしか考えていなかった。
ただ、一ついう事があるとすれば、自分が目覚める事になった理由についてだ。
あのとき、敵が現われたことでラビリスたちがコロマルを迎えに来たことで、簡易補整器の指輪をつけた英恵と桜は影時間だが目を覚まして寝たままの八雲を見ていた。
どうか無事に敵を倒して来て欲しい。そう思って二人は見送ったのだが、影時間が明けて現実の時間になったとき、パチリと目を覚ました八雲が黒い炎に包まれたのだ。
一体何が起きているのか二人は分からなかったが、炎が段々と大きくなると中からボロボロの姿の湊が出てくる。
何故このタイミングで戻ったのか。それを尋ねる暇もなく直死の魔眼を輝かせた湊は影時間を展開し、外に出るとそのまま飛んでいってしまった。
後に、気を失った彼を連れて戻った茨木童子たちに事情を聞いたが、現実世界への適性を持った巨大シャドウなど普通のペルソナ使いに対処出来る訳がない。
それに気付いて彼は目覚めたのだろうが、その敵を討った本人は赫夜の置いた熱いお茶に口を付けてから口元を歪ませ吐き捨てるように言った。
「ああ、本当に……あれだけの数が集まってもシャドウ一匹まともに倒せないとは恐れ入る」
「湊様が出るまでは桐条側のペルソナ使いが?」
「対処しようとはしたらしいな。茨木童子たちも手伝ったらしいが、

俺の目覚めがいつになるか分からないせいで全力を出せなかったみたいだ」
時期に関係なく出入りが可能な鈴鹿御前を除けば、他の者たちは新月が終わるまでは出てこられなくなる。
もしも、小さくなった八雲に何かあればと思うと、流石にいくら脅威が現われようと八雲に直接の被害が及ばなければ、消える危険を冒してまで全力を出すことは出来ない。
湊もそういった事情は理解しているので、自分のペルソナたちが敵を屠れなかったと聞いても何も思わなかったが、シャドウ掃討を目的に活動している者たちも同じでは困ると話す。
「別に遊び半分というか、あくまで清掃ボランティアとしてやっているなら構わないが、デカいことを言っておきながらの現状は滑稽を通り越して不快ですらある」
「なるほど、素人に自分の領分を荒らされるのは確かに我慢なりませんものね」
湊と話ながらソフィアが正面の席に座れば、アリスが紅茶を淹れて彼女の前に置いてゆく。
ありがとうございますと感謝の言葉を返し、置かれた紅茶に口を付ける。
アリスは自我持ちの中では新米なのだが、自我持ちたちが湊の経験等を逆にフィードバックできることもあって、彼女の淹れてくれた紅茶は舌の肥えたソフィアを十分に満足させていた。
急いでやってきた事もあって少し疲れていたソフィアは、紅茶の香りと味を楽しみながら、目の前で食事を続けている男を見つめ再び話しかける。
「それで湊様は相手に対して何か働き掛けるおつもりですか？」
「……特にはなにも。まぁ、邪魔をしてくれれば対処もするが」
二人は平然と物騒な会話をしているが、この場には自我持ちのペルソナの他に英恵と桜とコロマルもいる、
英恵たちにすれば、邪魔してくればその娘や友人たちを殺す、という話を保護者たちの目の前でしないで欲しいと思っているに違いな

い。
そも、湊にそんな事をして欲しくないというのもあるのだが、目覚めた湊の瞳は桔梗組を去った日と同じように家族であった者たちへも一切の関心を失っていた。
酷く冷たいどころではない、本当にまるで何の興味も持っていないのだ。
そんな瞳を見るくらいならば、憎しみや怒りという負の感情を向けられた方が存在を認識されているだけマシにすら感じる。
以前から、娘より湊について相談を受けていた英恵は、娘はこんなにも辛い境遇を味わっていたのかと、彼に見てもらえなくなって初めて本当の辛さを理解した。
自我持ちたちと話しているときも、目の前に座っているソフィアを見る目も以前と同じ僅かな情が感じられる。
つまり、八雲の世話をしていた英恵たちが、勝手に彼が帰ってきてくれたと思っていただけで、退行時の記憶がない彼にすれば、桔梗組や家族であった者たちに見切りをつけたままなのだ。
そんな現状を正確に把握した英恵たちがショックを受けていれば、最初から彼女たちを相手にしていなかったソフィアがそういえばと鞄から一冊のファイルを取り出した。
「そうですわ。以前、言われていた黄昏の羽根について分かった事があったのです。ベレスフォードの力も借りましたが、世界中を探していくつかの羽根が見つかりました」
「やっぱりあったか。それで量は？」
「枚数にすれば二百枚もありません。いくつかは霊鳥や神獣の羽根として信仰の対象にもなっていたので譲っていただくのに苦労もしましたが、これで地球に存在する羽根の八割は占有できたかと」
黄昏の羽根はあればあるだけ使える便利なオーパーツだ。新たに地球に落ちてくる事は非常に珍しく、そんな事を期待するのなら巨額を投じて現存する羽根を世界中から探した方が速い。
桐条グループも同じように世界中で羽根を探していたのだろう。けれど、物流の最大手と様々な業界に強いコネクションのある者同士

が手を組めば、密林の奥地で暮らす少数民族の許にある物だって見つける事が出来た。
ソフィアが見せてきたファイルには、ＥＰ社で手に入れた羽根の写真と共にどこで見つけたのかを簡潔にまとめられている。
地域ごとの偏りはあまり見られず、自転と公転の影響をほとんど受けていないのだなと湊も興味深そうに眺めながら食事を続ける。
だが、目が覚めるなり人に作らせておいて、他の事をしながらついでのように食べているのを見た赫夜たちは少し不満そうにしている。
ソフィアはそういった使用人の気持ちなど一切考えない人間のため気付いていないが、今の湊には血肉になるためのエネルギーが必要であり、それらは最終的に赫夜たち自身の顕現のためにも必要になってくるので結局は強くは言えなかった。
ページをパラパラとめくりながら全体に目を通し、書かれていた情報を頭に入れ終わったのか湊はファイルを返却する。
それを受け取ったソフィアは今回は中々に苦労したと小さく笑って、今後集めた羽根はどうするのかを尋ねた。
「現在、病院と工場には必要な数の羽根を配備しております。予備の発電機も数機用意出来ていますので、新たに施設を作らなければ十分に足りていますが、集めた羽根はどのようにしましょう？」
病院は無気力症患者の受け入れをメインに想定して作られたものであるため、当然、影時間にも十分な処置が行えるよう発電機などは用意されている。
医者も簡易補整器の指輪を付ければ問題ないので、湊から見ても病院は今の状態で十分に対応可能だと思えた。
ならば、大量に集められた羽根はどう使えばいいのかと言えば、いくつかはソフィアも利用するような海外の施設に発電機を作れば良いだろう。
彼女も影時間の不便さにはうんざりしており、その事を湊は聞いていたのでちょっとしたお返しのつもりだった。
「お前が普段利用する施設にいくつか使って良い。電気がないと何をするにも不便だろうからな」

「あら、お気持ちは嬉しいのですが、せっかく集めた物を使ってもよいのですか？」
「使うために集めて貰ったからな」
湊に言われたソフィアは確かにそうだと笑い。鞄から手帳を取り出すと発電機を取り付ける施設をいくつか見繕ってゆく。
主な活動拠点はヨーロッパの方だが、今はベレスフォード家と協力して北米やアジアにも様々なパイプを形成している。
アジア方面に向けた拠点はこのジャパンＥＰ社で十分だが、北米滞在時の拠点とヨーロッパのいくつかの拠点にも発電機は置いておきたい。
だが、あまりに遣い過ぎると迷惑をかけることになるので、施設全体をカバーする規模ではなく、施設内でもソフィアが使う部屋など限定規模での運用を考えて必要な数を計算した。
「んー……およそこれくらいですかね」
「随分と少ないな。それで足りるのか？」
「拠点とは言っても使う部屋は限られておりますので、己が利用する部屋さえ使えれば十分なのです」
施設全体をカバーするにはあまりに少ない量を提示され、これでは全く足りないのではと湊は首を傾げた。
だが、必要なのは自室の分だけだと少女が補足すれば、確かにこれで十分足りそうだなと湊も頷いて納得する。
「そうか。なら、残りは俺の方で預かろう。いくつか試したいものがあるからな」
「あぁ、前に仰っていた対シャドウ武装ですか？　素手で屠れる湊様には不要に思いますが」
ソフィアは湊の協力者であるため、チドリやラビリスにも話していない事を色々と伝えている。
その中に、退魔刀のようにシャドウを屠れる武器を作るという計画があり、適性のブーストやシャドウやペルソナへの高い干渉力を持った黄昏の羽根を原料に使えば、湊も満足できるレベルの対シャドウ武装が製作可能だと思われた。

ただ、物理無効の耐性を持っているシャドウすらも素手で殴り殺せる男が、今更新たな武器を手にしたところで戦果に影響はないだろう。
素直に思ったことをソフィアが尋ねれば、様々な種類の武器を蒐集している青年は食べ終えた食器を重ねながら答えた。
「……確かに俺は退魔刀も持っているし、九尾切り丸なんて魔剣や妖刀と呼ばれる類いのものだ。どちらもシャドウを殺すのに向いている」
重ねた食器はジャック・ザ・リッパーたちが持って行ってくれたので、改めて湊は熱いお茶で一服しながら言葉を続けた。
「けど、対シャドウ武装は俺が使うとは限らない。武器自体の効果でシャドウたちに干渉出来るんだ。もしものときの備えに準備できるなら用意しておいて損はない」
対シャドウ武装を使うとすれば、それは自分ではなく適性しか持たぬ一般職員かもしれない。
協力してくれている者たちの安全確保は最優先、湊も何かあればすぐに駆けつけるつもりではいるが、どうしても遅れるときには自力で対応して貰わなければならない。
銃タイプの武装で牽制しながら逃げるにしても、追いつかれた時のことを考えて近接用の武器も必要になるだろう。
そうやって色々と考えていけば、これでいいという正解が存在しないだけに、出来る限り使う者に負担の掛からないものを目指してゆくしかない。
彼から武装の開発コンセプトを聞いたソフィアは、あまりに慎重過ぎてお優しい事だとも思ったが、以前、湊と久遠の安寧とで戦争をしているときも、彼は無関係の者を庇ってひたすら自分が不利な状況になっていた。
となると、もはや彼のこれはそういった困った性分であると受け入れるしかない。
相手の妙な人間くささは慕われる理由の一つであり、同時に開発する部下泣かせな部分でもあるが、ソフィアとしては美点の一つとして

捉えて小さく微笑んだ。
「……さて、じゃあそろそろ行くか」
「ええ、分かりました」
すると、食事を終えた湊が立ち上がってここ出る準備を始めたので、移動するというのならついていこうとソフィアも席を立つ。
出て行こうとする子どもらに英恵たちは何か言いたそうだが、既に見切りを付けた者と湊がまともに会話するはずもなく、彼は片付けをしている自我持ちを残したまま、黙ってＶＩＰ区画を出て行ってしまうのだった。
＊＊＊
昨夜、湊が元の姿に戻ってから気を失ったことで、もしかすると目が覚める頃には再び小さくなっているのではとアイギスたちは不安を感じていた。
別に小さい八雲が悪い訳ではない。むしろ、愛らしい姿に癒やされるとして受け入れられている部分もあるくらいだ。
けれど、今重要なのはそういった事ではなく、もし彼がちゃんと湊のままであったなら、どうやって先日の事を謝罪しようか一同は悩んでいた。
「つっても、謝ってそれで許してって事にはならねえと思うけどな」
謝って許し合って円満解決。そんな風になればどれだけ良いかと順平が思わず溜息を溢す。
彼とは明確に命を狙って殺し合ったのだ。激昂した順平たちにそういった冷静な判断力は残っていなかったが、客観的に見ればいつでも殺せたのに見逃し続けた青年に対し、仲間の敵を取るため最後まで殺そうとしていた順平たちに分かれる。
別にどちらの責任であったかなど今更話す気はないが、相手にとっては先日終わった話を再び出されるのだ。
余計に気分を害してしまうのでないかと恐れるのも無理はなく、そうなったときにはどうするかと美鶴が他の者に意見を求める。
「先日の相手の要求は、我々の転校とポートアイランドを含む港区への接近禁止だ。事実上、桐条グループに影時間から手を引けと言って

いるようなものだろう」
「有里の言いたいことは分かるが、流石にそれは呑めないだろ。俺の初期対応が拙かったことは認めるし反省もするが、向こうも正当防衛とは言い難い対応だった」
もはや双方にあの日の傷は残っていない。七歌たちは戦闘後には治療されていたし、湊は一ヶ月以上モナドに籠もっていたとき、怪我をする度に自動治癒で治していたらしい。
となれば、あの日の交渉で使っていた七歌に切られた傷があるというカードは使えず、前回よりはいくらかマシな着地点で話を終わらせることが出来るのではないかという期待が膨らむ。
ただ、美鶴や真田がそんな話をしていれば、
「どうして兄さんたちは素直に反省して謝ろうとしないんですか？相手に対して悪いことをした。だから、誠意を持って謝罪する。これが大前提なのに、相手にどれだけ譲歩させるかから話し合うなんておかしいですよ」
前回は第三者に徹していたことで何もすることが出来なかった美紀が、その考えはおかしいと少々怒った様子で口を挟んだ。
美鶴や真田の考えも理解出来なくはないのだ。どうにかして丁度良い落とし所に持っていきたいと思って、そのための会話を事前に考えておくのも分かる。
ただ、あまりにも本題の謝罪が蔑ろにされているようで、美紀としては二人の態度は非常に気分が悪かった。
そんな風に、自分たちよりも年下の美紀に言われた者たちは、確かに先ほどの会話は謝罪する者の会話ではなかったと反省して視線を落としながら廊下を進む。
すると、前方から歩いてくる男女に気付いたアイギスが、自分のよく知る青年がしっかりとした足取りで歩いていた事で嬉しそうに声をかけた。
「八雲さん、体調はよろしいのですか？」
「……まぁな」
「今から八雲さんの許に御見舞いに窺うところだったんです」

「……そうか。なら、用事は済んだな」
目的がお見舞いだったなら、こうやって外に出ている本人と出会えた時点で目的が達成されたと言って良いだろう。
話が終わったのなら自分は行くぞと進み始めれば。その背中に向かってラビリスが声をかけた。
「湊君、病み上がりにどこ行くん？」
「仕事だ」
足を止めることもなくただ一言告げて湊が行ってしまう。その斜め後方にはソフィアも追従しており、この二人は話しかけられても止まる気がないのかと慌てて美鶴は呼び止めた。
「待ってくれ有里！　我々は改めて先日の事で謝罪をしたくて来たんだ」
先日は気も立っていて喧嘩腰の会話になったが、今日は最初から謝るために来た。
だから、どうか少しだけで良いから時間をくれないか。
そう言って美鶴が湊を呼び止めれば、呼ばれた本人はただただ面倒臭そうにして、追従している少女に短く指示を伝えていた。
「ソフィア、適当に話を聞いておけ。言うだけ言えば満足して帰るだろう」
彼のそんな言葉が耳に届くと他の者はムッとする。
今日、最初に会ったときから彼は一度として他の者をまともに見ていない。
そして、さらに仕事だからと早々に会話を切り上げて立ち去ろうとしている。
お見舞いに来て先日の謝罪をしようとする者に対し、どうしてそんなにも冷たい態度を取るのか。少々怒った様子で追ったゆかりは彼の腕を掴んで呼び止めた。
「ちょっと待ってよ！　そんな言い方って！」
直後、彼の腕を掴んでいた手は鬱陶しそうにする彼によって振り払われる。
これまで湊からそんな扱いを受けたことないゆかりは呆然とし、そ

して他の者と同じように腕を振り払うためこちらを向いた彼の顔を見た。
そこにあったのは綺麗な色をしている彼の瞳。ただ、色は綺麗だがその瞳は何も映していない。
目の前に人がいるというのに、それを視界には納めても視認することはなく。まるで何もなかったかのように自然と振り返って去ってしまった。
「人はあんなにも冷たい目をすることが出来るのか……」
「もう、本当にどうしようもない感じでしたね」
ゆかりと同じように彼の瞳を見た美鶴と七歌が溜息混じりに溢す。
あんな目をしている者とどうやって会話すれば良いというのか。
彼が怒っているなら時間が解決してくれる事もあるかもしれないが、見切りを付けて関心を失ったのならどうしようもない。
何かしらの解決策がないだろうかと悩みながら、七歌たちはとりあえず英恵らとの合流を測ってＶＩＰ区画へと向かうのだった。

第二百五十五話　取るべき立場

午前――久遠総合病院

湊が立ち去った後、ＶＩＰ区画を訪れた七歌たちは英恵たちと共にリビングに集まっていた。

彼が置いていった自我持ちのペルソナたちは、彼の使った食器を洗い終えると去って行ったため、この場所に今の湊側に属する人間はいない。

勿論、彼側に着きたいと思っている者はいる。けれど、湊は契約を結んでいるアイギスたちをも見限っているのだ。

幼い八雲が自分たちに懐いてくれていたことで、彼も同じように機嫌が直っていると無意識に考えてしまい。今までと同じ態度で話しかけてしまった者は、どれだけ呆れられてしまったのだろうかと深く落ち込む。

「きっと、図々しいやつだと思われたであります……」

「あー……ドンマイ、アイちゃん。つか、この対策会議も何回目だって話だけどな」

あの日、桔梗組へ襲撃をかけた七歌たちの処分を話し合ったとき、湊は今後二度と襲撃されないためにと転校と港区と六徳市への接近禁止を要求したのだ。

襲われた本人がそれを望み、要求が通らないのであれば自分が去るとも言っていた。

にもかかわらず、チドリたちは七歌たちの残留を望み、彼の要求を不当であると言ったからこそ宣言通りの状況になっている。

チドリたちは七歌たちの残留は望んでも、彼が去ることを望んだ訳ではないのだが、湊と特別課外活動部の対立においてチドリたちは第三者でしかなかった。

そんな者たちがあれこれと話に入ってきた上、さらに自分たちの要求を通そうなど、当事者からすれば鬱陶しいことこの上なかったに違いない。

彼をよく知る者にとって、彼は一度でも自分の輪の内側に入れた者

には甘いくらいに優しい反面、興味のない他人にはどこまでも冷たくなれる性格だと分かっている。
まさか、あの甘い彼が一度内側に入れた者を見限る事が出来るとは思わなかったが、彼も心を持った人間なので我慢に限度があったという事なのだろう。
他の者ならば十分に考えられる事だというのに、彼に対しては可能性を頭から排除していたのは、やはり一方的に甘えてしまっていたからだろうと自嘲気味にチドリが呟いた。
「前に本人も言ってたけど、八雲にすれば私たちといることに一切のメリットはないのよね。むしろ、行動に制限が出来る点でデメリットしかないし」
「そんな……家族と一緒にいるのをメリットやデメリットで考えたりしないでしょ？」
チドリの言葉を聞いたゆかりが驚き、家族との繋がりにそんなものを持ち込む事はないだろうと否定する。
だが、その家族というフィルターを除いて考えてみれば、確かに湊側には一切のメリットがない。
戦闘面に置いては誰も彼を助けることは出来ないし、彼にそんな事はして欲しくないと言って行動を制限することすらある。
何もしてくれないくせに、口だけは出されたらどんな風に思うだろう。
湊は基本的には我慢強く、他の者の意見を聞いて呆れながらも自分を曲げることも多々ある。
しかし、そんな彼でも絶対に曲げられない部分はあるし、干渉が過ぎればいい加減にしろとうんざりもするのだ。
今回の事はそういった事が複数重なって起きたと分析し、ショックを受けている者たちに代って美鶴が一度整理しようと口を開いた。
「状況を整理しよう。お母様たちから聞いた情報もまとめると、有里自体にこちらと敵対する意思はない。だが、我々が彼の行動を邪魔すれば排除してくると思われる」
「邪魔をすればと言うが、あいつの判定なんて俺たちには分からんぞ」

美鶴に言われ、湊の気まぐれで変わりそうな判断基準など分からないと真田が返す。
それを聞いた他の者たちも同意して頷くが、確かに湊の判断基準は状況によって変動しそうなのだ。
機嫌が良ければ多少の邪魔をしても見逃し、さらには不利な状況に陥っていれば助けてくれる可能性すらある。
しかし、彼の機嫌がすこぶる悪ければ、真田たちがいようと一切気にせず敵のいるエリアを焼き払うかもしれない。
気をつけろと言われればそれぐらいはとメンバーたちも考えるけれど、判断基準が状況によって変動するのならばやはり難しい。
相手のでたらめな実力を知っているからこそ、出来ることなら彼と事を構えたくないメンバーたちが悩んでいれば、紅茶のカップに視線を落としていた美紀が顔をあげて呟いた。
「……やっぱり、ちゃんと謝罪した上で有里君の要求を呑んだ方が良いんじゃないですか？」
「美紀、それは俺たちにこの街から去れという事だぞ？」
「分かっています。でも、別に死ぬ訳じゃありません」
湊が桐条側に出した要求は大きく分けて二つ。
一つは特別課外活動部のメンバーたちの転校。
そして、もう一つはメンバーたちの港区と六徳市への接近禁止である。
これらを要求したのは、知り合いであるはずのメンバーたちに襲われたため、今後も同じ学校に通い続けるのは怖いといった理由だ。
当然、それらは建前でしかなく、湊にすればメンバーが突然攻撃を仕掛けてこようと相手の攻撃が届く前に敵の命を奪える。
そんな青年が相手だからこそ、自分の言っている事が分かっているのかと真田が尋ねれば、美紀はしっかりと見返して頷いた。
「改めて言っておきますと、私はペルソナも持っていませんし。影時間の戦いで出来る事もないので、言ってしまえば無関係な第三者です。ですが、自分の立ち位置を別にすれば、助けられた恩もあって有里君の要求を肯定的に捉えています」

一方的な湊の要求を肯定的に捉える。それは自分の兄も含めた友人たちが転校してもいいという意味にも取れる。
ゆかりと風花は美紀の言葉を聞いて僅かに悲しげな表情を見せたが、美紀は彼女たちの反応に構うことなく言葉を続ける。
「皆さんが彼の要求に不満を抱くことは分かりますし、危害を加えられた事で一方的に加害者扱いを受けることを不服に思うことも理解出来ます。でも、皆さんは有里君にそんな事を言えない立場だと思います」
真田たちの主張は理解出来る。けれど、そんな事を言える立場なのかと美紀は一同を非難する。
これまでの美紀を知っている者たちは、彼女はこんなにもはっきりと自分の意見を口にする者だっただろうかという違和感を覚えた。
真田や荒垣は特に強く衝撃を受けているようだが、やはり湊が去って行ったことが原因なのだろうと、美鶴は美紀の変化に戸惑いつつ自分たちが抜ける事で発生する問題点をあげる。
「影時間の戦いは無関係な人々をシャドウの脅威から守る戦いだ。ストレガという影時間の存続を願う者たちの存在や、イレギュラーシャドウのことを思えば常に戦力が十分とは言えない。それでも君は私たちに戦いから手を引けと言うのか？」
「有里君の助力を願うのならば、〝はい〟と答えます」
シャドウには通常兵器が効かない。彼らにダメージを与えるには、ペルソナ使いとして覚醒するか、もしくは貴重な黄昏の羽根を搭載した武器や弾丸を使う必要がある。
前者はもちろんのこと、後者においても保有する貴重な羽根を無駄には出来ないとして開発はほとんど行なわれていない。
おかげでシャドウが街中に現われても特別課外活動部のメンバーらに任せるしかないのだが、ただでさえ少ない戦力が減ることになろうとも、美紀は湊に助力を願えるならば安い対価だろうと話す。
「実力差やこれまでの事を聞いて思ったんです。多分、皆さんの存在は有里君にとって邪魔でしかないと。自分の身も守れない人たちが戦闘エリアを彷徨いていたら、有里君も全力を出せませんよね？　皆

さんが集まっても有里君一人に及ばないなら、邪魔をしないことが一番なんじゃないですか？」
「一日に複数箇所で敵が出現したらどうすんだ？」
「自我を持っているペルソナたちに対処させたら問題ないと思います。本人が意識を失っても込めたエネルギーが切れるまでは動けますから」
湊が一人で戦うようになれば街全域をカバー出来なくなる。そういった意味で荒垣が複数箇所に敵が現われた場合の話をすれば、美紀はこれにも冷静に淡々と答えた。
現に昨夜の湊は意識を失った状態でアタランテたちに運ばれている。
湊本人の意識がどこにあるかも分からなかった幼い八雲の状態でも、茨木童子たち全員が顕現状態を維持できたことを思えば、どれだけ湊本人と離れようがペルソナたちは自由に行動できるだろう。
召喚者は確かに一人だけだが、ペルソナ自身に自我が存在するならば集団で動いているのと変わりはなく、他の者と違って召喚者の意識の有無が問われない自我持ちの方が優れている部分すらある。
美紀がその事を静かに伝えれば、他の者たちは理屈では言い返せなくなり黙ってしまう。
何せ、メンバーたちも昨夜の巨大シャドウと湊の戦いを見て、自分たちなどいなくても彼に全てを任せていれば良いのではと感じていたから。
「……皆さんは納得していませんが、大人の人たちは私と同じ考えだと思います。先日来られた桐条グループの方たちも、皆さんが残るよりも有里君の要求を呑んだ方が人々のためになるから、あの場で相手の要求を呑もうとしたようですし」
止めとばかりに美紀が言えば兄である真田すらも俯くように黙ってしまった。
お前たちは必要ない。中途半端な力など持っていても意味がない。邪魔をするくらいならば身を引け。
守るべき者からそう言われた彼らの胸中は複雑だ。自分たちが相

手のためと思っていた事が真逆の意味を持つことになったのだから。
普段は静かで人の和を大切にする美紀がここまで厳しい事を口にするなど初めてで、それだけに彼女が先日のやり取りで湊が去ってしまったことをどれだけ悩んでいたかが窺える。
しかし、このままでは美紀までも他の者と袂を分かつことになりそうなので、今まで黙っていた英恵が子どもたちを思って口を挟んだ。
「皆、少し落ち着きましょう。八雲君は話が決裂した時点で以降の事は何も言っていないわ。美鶴たちに解散しろとも、港区から出て行けとも。だから、不干渉を前提にすれば現状維持で良いはずよ」
「失礼ですが、現状維持では何も解決しないかと。このまま有里君と決別したままで良いのならなにも言いませんが」
「ちょっと美紀、熱くなりすぎだって。あなたまで他の人と険悪になる必要ないでしょ」
英恵が口にしたのは自分の希望が混じった都合の良い解釈であり、それでは問題が先送りされるだけで何も解決しない。美紀にそう指摘されてしまうと英恵は何も言えなくなる。
彼女は実の娘である美鶴と親友の息子である八雲の間で揺れていた。
出来ることならば一緒にいて仲良くして貰いたいが、被害者と加害者という立場が邪魔をして望む関係にはなり得ない。
だからこそ、美紀があなたは結局どちらの味方なんですかと言外に問えば、ゆかりが思わずもう少し冷静にならないと話し合いも出来ないと彼女を諌めた。
すると、これまでは冷静な口調で話していた美紀が、そこに不快さと熱を込めるように言葉を返す。
「逆に何故皆さんが冷静なのか不思議です。自分たちの行動の責任について何も考えていないんですか？」
「僕たちの行動の責任って有里先輩がいなくなった事でしょう？　だから、どうすればいいかを話し合ってる訳で」
責任について考えるも何も、今そのために集まって話しているんだろうと天田が答える。

天田も彼のおかげで瀕死の重傷を負ったが、その傷は完璧に治療されて後遺症どころか傷跡すら残っていない。
だからこそ、時間が開いて今は冷静に話す余裕があるのだが、そんな天田の言葉に美紀はやはり何も分かっていないと首を振った。
「あの夜に皆さんの取った行動、それを庇ったチドリさんたちの許から有里君が去ったんです。自分たちが原因で一つの家族を壊してよく平気でいられますね。それにチドリさんたちもチドリさんたちです。どうして家族の側に立とうとしないんですか。もう庇わない、有里君の要求を呑ませるから帰って来て欲しい。そう言えば良いじゃないですか」
本当は帰ってきて欲しいくせに、どうしてチドリたちはそのために行動しないのだと美紀は強く責める。
チドリたちは湊が他の者たちと険悪にならぬよう、今後の事を考えて許してやれと言っていた。
しかし、チドリたちに危害が及ばぬように敵を倒してきた湊にすれば、そんな者たちと仲良くする事など出来る訳がない。
なら、チドリたちは当初の甘い考えを捨てて、彼の意を汲んでやらなければならないはず。
本当に彼とのことを解決したいのであれば、ここで今自分がどういった立場を取るのかハッキリさせるべきだと美紀は主張する。
「皆さん、立場をはっきりしてください。兄さんたちは要求を呑むか、呑まずに彼の敵となるか。チドリさんたちは要求を呑んで関係修復を図るか、呑まずに絶縁するかです。要求を呑まずに彼が帰ってくるなんて有里君が言い出してこない限りあり得ません」
夏休みも残り半分を切っている。退学届を出した事だって保留のままになっているのだ。
その事も含め、彼に戻ってきて欲しいのならすぐにでも自分たちの意思を伝える必要がある。
家族たちは今度こそ彼の味方でいるのか。特別課外活動部のメンバーたちは我を通して敵となるのか。
鋭く言い放つ彼女の雰囲気に呑まれ、他の者たちはしばらく口を開

くことが出来なかった。

――ＥＰ社

他の者たちが集まって話し合いをしている頃、病院を出た湊はソフィアと共にＥＰ社のオフィスにやってきていた。

桔梗組を去ってから自分はタルタロスに籠もり、仕事は全て自分の姿になった玉藻の前に任せていたので、久しぶりのデスクワークをちゃんとこなせるか心配していたが、報告書に目を通していくうちにやり方を思い出すことが出来た。

久慈川りせと柴田さやかの野外フェスのステージ設営についての連絡も来ており、良いタイミングで目覚める事が出来たと心の中で思いつつ湊は承認の判を押す。

そんな風に湊がデスクで仕事をしていると、ソファーに座って夏休みの課題をしていた〝美紀〟が遠慮気味に話しかけてきた。

「あの、本当に良かったんですか？　こんな皆さんを騙すような形で……」

「別に誰も傷つけてないだろ」

同じ人間が二つの場所に同時に存在することなど出来る訳がない。つまり、本物の美紀がここにいるということは、今現在、チドリたちと一緒に話をしている美紀は贋物という訳だ。

今日、病院へ向かう途中に話を聞いてこちらにきた美紀にすれば、去って行ったはずの湊と再び普通に会話出来る事は嬉しいが、今頃友人たちが自分の姿をした玉藻の前から厳しい言葉をぶつけられていると思うと心苦しくなる。

入れ替わりを提案したのは湊側なので別に美紀が気にする必要はないのだが、彼女がそうやって複雑な表情を浮かべていると、簡易キッチンの方からお茶を持って出てきたソフィアが美紀の前にカップを置いた。

「湊様が言われた通り、あなたが気に病む必要はありません。全て、自分たちの立場を明確にしていない者たちが悪いのですから」

他にも湊の事を心配するメンバーが揃っていた中で、何故美紀だけ

がここに呼ばれたのか。
それは本物の彼女も湊の要求の正当性を理解し、皆で集まる前に彼にその事を伝えていたからである。
あの日、美紀は隣の部屋で話を聞いていたが、湊が桐条に要求した真田たちの転校は、自分も同じ立場であったなら同じようにするだろうと素直に納得することが出来た。
敵であれば殺すというのが当然の世界で生きながら、湊はチドリたちに言われれば不服そうにしながらでも治療を施し、翌日には自分の前から消えれば追ったりもしないと断言したのだ。
転校しなければならない事は美紀にとっても残念ではあったが、平日なら放課後にでも待ち合わせておけば会うことも出来、転校した者とは港区では一緒にいられないという事は大したデメリットではない。
まぁ、桐条グループからするとせっかく集まったペルソナ使いが、一度に全員作戦から外れるという事で、湊の要求を呑むことはかなり厳しかったに違いない。
それでも桐条武治が湊の要求を呑もうと思ったのは、単に影時間の謎解明よりも美鶴たちの命の方が大切だと思ったからだろう。
特別課外活動部のメンバーたちはその事に気付いていないだろうが、反省も不十分であった者たちに対し、このままなぁなぁで済ませる訳にはいかないからと湊は今回の行動を取った。
「皆さんが有里君との敵対を選んだときはどうするんですか？」
「……別にどうもしない。今回の話し合いは中途半端な態度を取る人間に責任を自覚させるためのものだ。選ぶ内容に興味はない」
他の者たちを見限って桔梗組を出た湊ではあるが、彼は自分の事に関する怒りは長続きせず冷めやすい。
大切な者や弱者が理不尽な理由で傷つけられれば、その怒りは十年経とうと消えたりはしないが、やはり自分の事となると二、三日もすればどうでも良くなるのだ。
今回のことも、そのどうでもよくなった案件であり、美紀と共謀していなければ見限った演技などせず普通に会話していたに違いない。

それを理解した美紀は、やはり彼らには少しの反省が必要だと思ったので、あの日の事について自分の素直な気持ちをメールで伝えておいて良かったと思った。

ネタばらしをいつ行なうかも決めていないが、話し合いが終われば玉藻の前から連絡が入る。

それまでは自分は自分のすべきことをしようと美紀は課題に取り組み、湊とソフィアは溜まっている仕事をテキパキと消化してゆくのだった。

第二百五十六話　鬼と龍の邂逅

８月２１日（金）
夜――桐条宗家・迎賓館
美紀に化けた玉藻の前から、いい加減自分たちの立場をはっきりさせろと言われた四日後。
特別課外活動部のメンバーとチドリたちは、英恵からの招待を受けて桐条宗家へとやって来ていた。
本日、八月二十一日は英恵の誕生日。毎年、桐条宗家の迎賓館にて誕生日のパーティーを開いており、各界の著名人や重鎮もやってくるパーティーに一般庶民の順平などは萎縮していた。
男子たちは桐条グループから借りたフォーマルなスーツ姿、女性陣はチドリと桜は自前の着物を着ているが、他は全員が自前であったり借りたドレスを着ている。
もっとも、食品を扱う場にペットはＮＧという事で、コロマルは隣の家の羽入に預かって貰っており、飼い主であるラビリスは上が黒で腰から下が暗いオレンジ色のドレスを着て、初めて参加するパーティーにただただ目を丸くしていた。
「ほあー……皆すっごい豪華な感じやなぁ」
「だよな。オレたちみたいな庶民には眩しい世界だぜ」
普段被っている帽子もなく、さらに少し生えていたヒゲも不衛生だからと剃らされた順平が、会場の中央から視線を逸らしつつぼそりと答える。
白いフリフリのついたピンクのドレスのゆかり、暗いグリーンに黒い模様の入ったドレスの風花、バラのように真っ赤なドレスで肩を出している七歌、黒い模様と縁取りのされたシルバーのドレスを着たアイギス。
野郎は全員が衣装に着られているようで似たような感じだが、普段は見ることの出来ない女性陣の姿が眩しく感じる。
だが、いくら女性陣のドレス姿を素晴らしく感じても、このように慣れない場では何をして良いかも分からず、順平はいつもの調子はど

うしたと心配になるくらい大人しかった。
グラスを片手に談笑する恰幅のいい男や、高級食材の使われた料理を皿に盛って美味しそうに食べている女性、この場で様々なパイプを作ろうと会場中を挨拶して回る男性など、何も知らなくてもこの場が一般人の考えるお誕生日会の会場でないことは空気で分かる。
何度も参加している七歌やゆかり、そして似たような物に参加したことのあるチドリと桜は特に気にしていないが、他のメンバーが動けずにいることで一緒にかたまっていると、ブライダルかと思ってしまうほど見事なクリーム色のドレスを身に纏った美鶴がやってきて笑顔で声をかけてきた。
「君たち、こんな隅の方でどうしたんだ？　慣れない空気で疲れてしまったのなら部屋を用意させるが？」
「いやぁ、一般ピーポーな順平らが動かないんで一緒にいただけですよ。てか、みちゅるー、今日のドレスは随分と大胆ですなぁ」
言いながら七歌は美鶴の後ろに回り込むと、がばっと開いている背中に指で触れる。
七歌も七歌で肩が出ているが、美鶴はさらに背中もオープンになっている事で、彼女のドレス姿を見た男性陣たちは全員が見とれてしまっていた。
ただ、そんな男性陣の反応に気付いていない美鶴は、急に背中に触れられたことで頬を赤くしながら後輩を叱った。
「こら、やめろ！　これは別に自分で選んだ訳じゃない。菊乃が今年はこういったものが流行っていると選んだんだ」
「別にそういう流行はなかった気もしますけど、まぁ似合ってるならいいと思いますぜ！」
似合っていて綺麗なら何でもいい。そう言って七歌は笑って美鶴と腕を組む。
周りに彼女のように積極的にスキンシップを図ってくる者がいないため、どうしていいか分からず困っている美鶴も、別に腕を組むこと自体は嫌ではないようで、そのまま男子たちにも声をかけた。
「お前たち、お腹は空いてないのか？　今日は立食パーティーだから、

どのテーブルからでも好きに取ってきていいんだぞ。食べたい物があれば出来る範囲なら注文を付けることも可能だが」
「い、いや、今はまだいい」
「ああ、俺も後で適当に摘まむくらいでいい」
普段ならば肉があるだけで嬉しそうにする真田も、こんな場所では肉肉言ってられないようで、ドレス姿の美鶴から僅かに視線を逸らしながら答えた。
そして、幼馴染みである荒垣はというと、普段通りを装ってはいるが、視線が彼女の顔や肩にと定まっておらず、明らかに緊張しながら話しているのが丸わかりだ。
けれど、美鶴は彼らが自分に対して緊張しているとは気付かず、慣れぬ雰囲気に戸惑っているのだろうと微笑ましく思いながら小さく笑みを浮かべた。
「そうか。まぁ、ソフトドリンクも用意しているから、何か欲しいものがあれば伝えるといい。お父様とお母様はもうしばらく挨拶があるので一緒にいられないが、皆、どうか自由に楽しんでくれ」
例年通りに身体が丈夫でない英恵のために席が用意され、美鶴の両親はそちらの方で来場者と挨拶をしている。
美鶴も最初はそこにいたのだが、いつまでも仕事の付き合いをさせるのも悪いからと、桐条が飲み物を取ってきなさいと理由を付けて退席させたのだ。
話を聞いてそちらに視線を向けた七歌は、ドリンクを持っていたボーイからジンジャーエールを受け取り、美鶴と腕を組んだまま口を付けると大変そうだなと苦笑する。
「いやぁ、今日も大量にいますなぁ」
「まぁ、お母様は普段は別邸にいるからな。会う機会のない者にすれば、こういったときにでも顔を覚えて貰おうと必死なんだろう」
「うーん、黒い陰謀の臭いが……おっと、急に騒がしくなってきた」
美鶴も大人たちの見え透いた魂胆には気付いているが、そういった付き合いも含めての繋がりだ。
七歌は旧家なのでそれほど繋がりを重要視しておらず、家の立場の

違いからその辺りの感じ方が異なるのはしょうがないと美鶴も小さく笑う。
しかし、そんな風に二人が話していると入り口の方が何やら騒がしくなっていた。
一体どうしたのだろうかと他の者も視線を向ければ、突然、入り口から英恵たちのいる最奥まで会場の中央に真っ直ぐの道が出来ていた。
人でごった返していたはずの会場で、そんな風に人が分かれて道が出来るなど通常あり得ない。
周辺にいる他の出席者たちも何が起きているのか分かっていないようで、その場に立ち止まって入り口の方へ視線を向けると、新たに会場に入ってくる者たちの姿が見えた。
「……完全にマフィアの若頭ね」
会場に入ってきた者の姿を見たチドリが思わず呟く。
黒いスーツに紺色のシャツ、赤いネクタイにスカーフのように垂らした黒いマフラー、そんなファッションでやって来たのは両眼が金色に輝いた有里湊だ。
長い髪を結い上げ、ピンクのバラの花束を持って悠々と歩く姿は実に様になっており、〝本物〟という物を知っている上流階級のご令嬢たちも思わず熱い視線で見つめている。
だがそれだけでなく、会場の中央を真っ直ぐ歩いている彼の両脇にはドレスアップしたソフィアと美紀が左右それぞれで腕を組んでおり、彼らの後ろを同じくドレスアップした自我持ちのペルソナたちが歩いていた。
ドレスアップした女性陣に対しては会場中から男性の視線が集まっており、会場の人間の反応を見れば、彼らが入ってくる時点で道を開けた意味も納得がいった。
自分の前に真っ直ぐ伸びる道を進んだ青年は、そのまま英恵の正面までやってくると立ち上がって彼を迎えた英恵に花束を渡す。
「……誕生日おめでとう。慣れてないから、花を贈ることにしてみた」
「ありがとう、八雲君。とても綺麗ね。嬉しいわ」

ソフィアと美紀に腕を放すように言ってから、湊は英恵に花束を渡すと頬に軽いキスを落とした。
それらは明らかに海外の風習なのだが、花束を貰った英恵も嬉しそうに頬へお返しのキスをしていたので、本人たちにすれば西洋の文化だろうと気にしないらしい。
ただ、会場に来ていた者たちにすれば、総帥夫人とそれほど親しい間柄の彼は一体何者なんだという疑問が生じる。
日本にいてテレビで彼の事を見ていた者たちは、今日は眼帯がないけれど〝皇子〟として知られている有里湊だろうと思っていたのだが、英恵の口から出たのは〝八雲君〟という聞き慣れない名前だ。
よく似ている別人なのかと一瞬考えるも、彼のような目を惹く容姿の人間が何人もいる訳がないとその考えを切り捨てる。
では、どうして名前が異なるのかという話になり、招待客について知っているであろう従事の者を呼んで、今挨拶している青年と一緒に来た者たちは誰だという質問が会場中でなされた。
「あいつ、勝手に美紀をっ」
周りでは謎の美人集団という話題で盛り上がっている中、唯一人、真田だけは湊が自分の妹と腕を組んで会場に入ってきたことで怒りを感じていた。
濃紫の暗い色のドレスを着たソフィアに対し、美紀は明るいゴールドのドレスを着ている。
首の辺りまでしっかりと生地はあるが、袖はなく代わりにレースのグローブをしていて兄としても誇らしくなるような見事な着こなしだ。
しかし、そんな美しい姿をした妹が何故湊と腕を組んでやって来たのか。
堂々としているソフィアに対し、美紀は少し恥ずかしそうに照れていたものの、女二人が男を引き立てている形になっており、自分の妹が湊のおまけのように扱われているのが我慢ならない。
そうして、最初の萎縮していた姿から一転し、普段通りの状態になった真田が妹を連れ戻そうと一歩踏み出したとき、彼は背中に氷の

柱を入れられたかのような悪寒を感じ、何が起きたと振り返った。
するとそこには、
「申し訳ありませんが、坊ちゃまへの接近はご遠慮願います」
女中の正装たるヴィクトリアンメイド服に身を包み恭しく礼をする、英恵のお側御用である和邇八尋(かじやひろ)がいた。
会場には桐条宗家の女中の他に、和邇と同じ桐条宗家の女中とは僅かに異なるデザインのメイド服を着た者たちがいる。
彼女たちは全員が英恵付きの女中たちであり、彼女たちは自分たちの主である英恵を何よりも優先し、さらには彼女が大切に想っている美鶴と八雲を次点で優先する。
従者にとっては主が第一であるため、何か起きればグループ総帥の桐条よりも英恵と二人の子どもを優先する訳だが、中でもお側御用を務める和邇は英恵の精神の安定を考えて子ども二人の間にも序列を付けている。
本来は従者が主の子どもに序列を付ける事など許されることではないが、英恵自身のことを考えての行動であり、彼女の中の序列を誰かに話すこともないので問題にはなっていない。
だが、今ここにいる真田は明確な敵意を持って湊を見ていた。ならば、従者として見過ごせる訳もなく、忠告に従わなければ実力での排除もあり得るぞと暗に告げた。
「お嬢様方〝S．E．E．S．〟の皆様は坊ちゃまとの敵対を選んだと聞いております。本日は英恵様がお招きしたお客人としておもてなしさせて頂きますが、坊ちゃまに対し会場内であろうと接近や接触はご遠慮ください」
「俺が用があるのは妹の美紀の方だ。美紀があいつから離れれば用などない」
後ろに立たれたときには悪寒に襲われたが、面と向かって話せば先ほどの気配を感じなかったことで真田ははっきりと答える。自分の目的はあくまで妹が湊から離れることであると。
先日、美紀に化けた玉藻の前が他の者たちに今後の立場について尋ねると、特別課外活動部のメンバーは全員が港区への残留を望み結果

的に敵対を選ぶ事になり、桜・英恵・チドリ・アイギス・ラビリス・コロマルといったメンバーは再び湊が去ることを恐れて彼の意見に賛同する立場となったのだ。
よって、和邇からすれば特別課外活動部のメンバーは大切な主の子どもへ刃を向ける不逞の輩であり、招待客でなければ即座に排除しているのだが、その事を一切表に出さず淡々と言葉を返す。
「美紀様が坊ちゃまのお側にいるのはご本人の意思です。兄である真田様よりも坊ちゃまと共にいる事を選ばれた。その事実をお受け止めください」
冷静な大人からはっきりと妹はお前より他の男を選んだと言われ、真田はショックのあまり固まってしまった。
そんな相手の様子を気にせず和邇は言うだけ言って去ってしまい。見ていた他の者たちは、美人だけあって厳しい言葉を吐くと切れ味が半端ではないなと改めて相手の恐ろしさを認識した。
まぁ、グループ総帥夫人のお側御用を務めるのだ。並みの神経や胆力では、権力を持って勘違いした者に舐められてしまう事もあるので、しっかりと自分の役割をこなすには彼女のような強さが必要なのだろう。
言葉の刃を突き立てられた真田には悪いが、美鶴や七歌が英恵の側近が彼女のような強い女性で良かったと思っていると、湊が挨拶を終えて食事の置かれたテーブルの方へ移動していた。
自我持ちたちはそれなりに自由に食事を楽しんでおり、湊の方も今日のパーティーに招待されていたベレスフォード家の者たちと一緒に話をしている。
ベレスフォード財閥のトップである貿易王アドルフ・ベレスフォード、医療と軍事で世界トップシェアを誇る複合企業ＥＰ社トップのソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタイン、そしてそんな二人と対等に話している日本で今最も勢いのある俳優である有里湊。
彼らとのコネクションを得たい者たちは、どうにかして会話に参加してお近づきになれないだろうかと画策するも、何故だか一定の距離から近付く気になれず周りから見ている事しか出来ない。

「あ、お父さんとお爺ちゃんだ」
だが、中には青年が気を放つことで作っていた簡易結界を突破出来る者もおり、それが自分の父と祖父である事に気付いた七歌は、一体何を話すつもりなのだろうかと美鶴と組んでいた腕をそのままにぐんぐんと彼らの方へ近付いてゆく。
七歌に引っ張られる形になった美鶴は困り顔を浮かべつつ制止の声をかけるも、残念なことに美鶴よりも七歌の筋力の方が上だったことで、そのまま湊たちの会話が聞こえる辺りまで接近した。
「君は……本当に八雲君なんだね」
「この目で見るまでは信じることなど出来なかった……。だが、何故だ。どうして、あの事故で死んだお前が生きている!?」
湊を見て明らかに動揺している二人は七歌と同じで龍の血を引いている。
だからこそ、湊を傍で眺めていただけで気付くことが出来たのだろう。彼が鬼の血を引いている百鬼八雲本人であると。
「また、生まれた日のように鬼の力で蘇ったのか。今度は雅と菖蒲さんという両親の命を喰らって!」
今日、彼らがここへやって来たのは七歌から八雲がやって来ると聞いたからだ。
直接自分の目で見て、相手が本当に百鬼八雲であるかを確かめる。そのために、わざわざ隠居していた七歌の祖父まで七歌の父である九頭龍恭介と共にやって来た。
結果、事故で死んだはずの彼が生きていた事は真実だと分かった訳だが、一体どのような手段で生き返りこの場に現われる事が出来たのかという疑問が残る。
それを彼らが真剣に問いただし湊を睨めば、尋ねられた方は急に何の話だと不思議そうに相手を見ながらスペアリブにかぶりついた。
まぁ、湊にすれば二人は一応は血の繋がりがあるだけの他人だ。祖父であり伯父ではあるが、抱き上げられたことも、頭を撫でられたことも一度もない。
そんな者たちが急に偉そうに質問してきても答える気にはならず、

ベレスフォードの話が気になっていたので食べながら続きを聞こうとすれば、湊の許に戻ってきた茨木童子が恭介らに向かって言葉を発した。
《貴様ら場を弁えろ。今日は英恵の生誕を祝う催しだぞ？》
「貴様はあの日の化生かっ」
やってきた茨木童子を見るなり、祖父も恭介も僅かに怯えた色を宿しながらも必死に彼女を睨み付ける。
どうやら両者には何かしらの因縁があるようだが、彼女にそんな話など聞いていない湊は相変わらず興味なさそうに両者の話を聞いていた。
すると、今度は美鶴と腕を組んだままの七歌が怒った様子でやってくるなり、自分の父と祖父に向かって冷たく言い放った。
「二人とも、おばさまの誕生日パーティーをメチャクチャにするんなら出て行って」
「七歌、お前はまだその鬼に魅入られているのか？」
「二級程度の力で偉そうに八雲君を鬼呼ばわりしないでくれる？」
確かに湊は鬼の血を引く者だが、七歌の父が言い放った言葉は明らかに蔑称としての意味を含んでいた。
七歌は龍の中では珍しく鬼たちのことを尊敬していたので、龍の血にも目覚めている湊の事を格下が莫迦にするなと彼女は憤慨した。
娘のそんな言葉を受けた恭介は、何も鬼の一族が悪い訳ではないと弁解する。
「違う。違うんだ、七歌。鬼の一族が悪いんじゃない。私だって菖蒲さんの事は認めていたからこそ雅との結婚も祝福した。だが、その鬼だけは、百鬼八雲だけは生きていちゃいけないんだ」
叫ぶように恭介が言えば、その場の空気が数度冷たくなるような錯覚を覚えた。
見れば、いつの間にか恭介らを囲うように自我持ちたちが立っており、全員が恭介らに明確な敵意を抱いて睨んでいる。
だが、人間の方でも同じように今の言葉に怒りを覚えた者たちがおり、最も近くにいた七歌は瞳孔の開いた真紅の魔眼で親を見ながら言

い放った。
「……いくら親でも、それ以上言うならただじゃ済まさないよ？」
「七歌、お前はこの鬼の出生を知らぬからその様なことを言えるのだ」
口を開いた祖父に対して、七歌はまだ言うかと気をぶつけて黙らせようとする。
けれど、相手もそれなりの覚悟を持ってやって来たらしく、二人は七歌の気を受け止めた上でさらに言葉を続けた。
「あの日、私たちは菖蒲さんの出産が始まったからと病院に行ったんだ。雅も落ち着きがなくて、廊下で声をかけて落ち着かせながらずっと待っていた」
「だが、分娩室に入ってから二時間後。赤子の泣き声は聞こえることなく、暗い表情で医師たちが出てきたのだ」
「確かに彼は菖蒲さんから産まれた。だが、この世に生まれ出ることは出来なかった。雅と菖蒲さんの子どもは死産だったんだ」
彼が口にした言葉がはっきりとその場に響く。会場に溢れた人々の声である程度はかき消えたが、それでもその場にいた七歌や美鶴の耳にはしっかりと届いた。
祖父も恭介も嘘を言っている雰囲気ではないが、だからこそ、七歌はそんなはずはないと震えた事で言い返す。
「待ってよ。そんなはずないでしょ。だって、現に八雲君は今も生きてて」
「ああ、私たちだって信じられなかった。だが、病院の個室に戻り、亡骸と共にいた菖蒲さんの前にそこの女が現われると、自分の右腕を亡骸に与えて命を吹き込んだんだ」
言いながら恭介は湊の傍に立っていた茨木童子を指さした。その女があの日起きたことの元凶であると。
見れば確かに茨木童子の右腕は、上腕の中頃から真っ白な陶器製の義手になっている。
父親たちの言葉が真実であれば、ペルソナになっている彼女の右腕が失われていることも説明が付く。
「分かったか、七歌。そやつは鬼の外法で命を吹き込まれた存在。

あってはならぬ命だ」
しかし、まだ七歌が信じ切れずにいると、彼女の祖父は憎しみの籠もった瞳で湊を射貫きながら告げてきた。
そこに立っているのは呪術により蘇生された忌み子、親の命を喰らって再び生き返った呪われた子であると。
《愚かな龍よ、控えなさい》
けれど、祖父の言葉が七歌の心に染み込む前に、彼らの言葉を聞いていた赫夜比売が言葉を発し、呆れを含んだ冷ややかな視線で二人を捉えながら告げる。
《お前が外法と呼んだ御業は我が母より賜った龍の権能です。矛盾すら内包する八雲に生と死の概念を教えるため、生まれ出る前に姉様に八雲の魂を預け、生まれ出てから再び返しただけのこと》
《まぁ、鬼の肉体と龍の御業があって初めて出来る事だからな。力を継いでいないお前らには出来ぬだろうさ》
確かに結果だけを見れば八雲が死産であったことは事実。
けれど、それは別に八雲が生まれることなく一生を終えていた訳ではなく、完全なるモノになるために必要な手順として一時的に魂と肉体を分けていただけだった。
おかげで湊は生きたまま〝デス(死)〟を内包出来ており、死を概念としても理解出来るようになっている。
それを為したのは彼らが忌避している鬼の力ではなく、彼らも本来ならば受け継ぐ可能性のあった龍の力であった。
ただ、二人は彼女たちが誰なのかを知らない。よって、七歌がこのまま無知から無礼な言葉を重ねないようにと茨木童子と赫夜比売を紹介した。
「この二人は八雲君に憑いてる両家の始祖だよ。八雲君の誕生は始祖二人にも祝福されたものだったの。だから、二人が何を言おうと百鬼八雲は龍にも望まれた存在だってこと」
「そんな馬鹿な。龍の始祖が鬼に憑くなどっ」
《莫迦はお前だ。鬼が龍を守っていたのは、姉が妹の一族を案じた故だ。龍が鬼の主などというのは冗長した龍の子孫が勘違いを起こし

抜かした戯れ言に過ぎん》
鬼を従える龍の話を聞いて育っていた恭介にとって、自分たちの祖が忌み子と呼んでいた鬼に憑いていることは認められる事ではなかった。
龍の正統な当主は娘の七歌であると信じてきたというのに、二つの一族の関係からして龍の思い込みだと言われては自分の信じてきた物が崩れ去っていく感覚を覚えてしまう。
しかし、七歌の言葉が真実で、鬼の方はともかく湊の傍にいる女性が龍の祖である事は血で理解出来てしまった。
もしものことがあれば、雅と菖蒲の命を喰らった忌み子を自分たちの手で冥府に送り還そうと思っていた二人は、愕然としながらその場に立ちすくんでいると、勝手に盛り上がっていた七歌たちを冷めた目で見ていた湊が口を開いた。
「……話は終わったか？　お前ら、他所の誕生日パーティーで問題を起こすなよ」
それだけ言うと湊は料理を取りに別のテーブルへと行ってしまう。
龍に伝わる退魔の宝具を持って決死の覚悟をしてやってきたというのに、歯牙にもかけられていなかったという事実は、二人の男の心を折るのには十分だった。

第二百五十七話　野外フェス

８月２６日（水）
夕方――港区・自然公園
学生たちの夏休みも残り僅か。残りの数日で宿題を片付ける者もいれば、最後の思い出作りに勤しむ者もいる。
今日、このＥＰ社所有の土地にある自然公園にやって来た者たちは後者だろうが、沢山の屋台が出ている公園内には学生だけでなく大人の姿もあった。
スポーティーなキャップとサングラスをかけた少女は、そんな大勢の人で賑わう公園内を見ながら奥へと進んでゆく。
屋台で焼きそばを買っている親子や、ペットボトルのジュースを飲みながら〝柴田さやか〟と書かれた団扇で扇いでいる男性に、サイリウムの色を変えて遊んでいる女子たち。
少し進むだけでも色々な人たちの姿が見え、少女は思わず口元を楽しげに歪めながら関係者以外立ち入り禁止と区切られたエリアに向かい、警備の者や忙しそうに準備を進めるスタッフに挨拶をしながら一つのテントに入った。
「あー、涼しい。けど、外はもうすっごい人だったよ！　蒸し暑さよりも人の熱気の方がすごいくらい！」
シートで囲われた仮設テントの中には空調設備が置かれており、冷房が効いたテントに入った少女・久慈川りせは興奮した様子で話し、サングラスとキャップを外してからウォーターサーバーで水を入れる。
外を歩いて火照った身体には常温の水であろうとクールダウンの効果がある。
小さな紙コップの中身を全て飲み干した彼女は、しかし、見てきた会場の様子に興奮が冷めないようで、パイプ椅子に座っていた青年たちに続けて話しかけた。
「物販の方もすごい売れ行きだって。直筆サイン入りをランダムに入れた効果もあるみたいだけど、プロデューサーって本当にお金儲けの

才能はあるんだね」
屋台の並ぶエリアの方には大きな物販スペースが設けられており、柴田さやかと久慈川りせがこれまで販売したＣＤや写真集の他、今回の野外フェス限定商品も多数揃えられている。
フェスを盛り上げるようなサイリウムに応援団扇なども売られており、りせが様子を見に行ったところフェスが始まる前から既に物販の方は大賑わいであった。
だが、物販の方が大盛況なのはフェスへの期待だけが理由ではない。
実は事前に公式ホームページ等で当日のフェス限定商品の中にアイドルの直筆サイン入りの物がランダムに紛れていると告知されていたのだ。
これは湊が考えたことであり、業界やファンの間では完全に禁じ手とされていた限定商法なのだが、業界の常識など知らぬ湊にすれば売れれば正義だ。
サインが書かれているのはフェス限定商品であり、これまでに発売されていたＣＤや写真集は一緒に売っているだけの通常版でしかないので、在庫処理のためではなくあくまでサプライズに過ぎない。
その辺りの采配は不満をある程度封じることにも一役買っているので、業界の常識を無視して金儲けに走る青年の手腕を認めつつ、今日のイベントを楽しみにしていたトップアイドルの少女は悪戯っぽい顔で湊に笑いかけた。
「フェス中に撒く水用の紙コップにも私たちのサイン入りだもんね。サインのし過ぎで本当に腱鞘炎になるかと思ったよ」
「すぐそこに評判の病院がありますよ」
「お、そこまで考えての行動なら黒いなぁ。有里君ってば真っ黒だよ」
シレッと答える湊の方を見ながら、この子は悪い子ですと話す柴田の顔には笑顔が浮かんでいる。
日が沈んでからイベントが始まるとは言え、まだまだ夏の暑さは残っており会場は全体的に蒸し暑い。
歌って踊るアイドルたちは倒れないようにと水分補給にクールダ

ウン用品も準備しているが、会場に集まっているファンたちは人口密度もあって気温以上に暑くなる。
すると、体力のない者や体調の優れない者の中から倒れる者も出てくるので、少しでも予防になればとフェス中には水を入れた紙コップを客席に向かって投げることになっていた。
専用の投石器のような物まで準備済みで、それでどこまで飛ばせるか挑戦する企画も進行には含まれている。
他にもさりげなく客席に向かってミストを送る用意もしてあるので、ライブの熱を妨げずに客の体調への配慮も欠かしていない湊には本当に頭が下がると柴田は考えていた。
何せ、柴田は野外イベントには参加したことはあるが野外フェスは初参加。りせの方などこの規模のライブ自体が初めてという状況。
そんな中で体調を崩して病院に運ばれる者が出れば、経験の浅いりせはパフォーマンスに影響が出るだけでなく、今後の活動にまで響くトラウマが出来るかもしれない。
そうでなくても野外イベントで熱中症や日射病で倒れた者が出ると、翌日にはニュースで取り上げられてしまうのだ。
会場スタッフの準備や計画に落ち度がなかったかという話で済めば良いが、イベントの主役を飾るアイドルと所属事務所まで責任について言及され、その後の仕事にまで影響が出れば目も当てられない。
だからこそ、湊はそういった体調へ配慮する仕掛けに力を注いでいた訳だが、五十個以上の紙コップにサインした柴田は、本当に大変だったなと改めて今日までの準備について語った。
「新曲の準備もあったし、色々なところに宣伝でお邪魔したこともあって本当に忙しかったよ。極めつけはレッスンの休憩時間に書かされたサインだけど、ファンの皆が喜んでくれるといいよね」
「私、本格的なサイン会とかしたことなかったんで、プロデューサーに書かされたのが一度に書いたサインの過去最高記録でした」
「お、じゃあ、このイベントが終わってからは記録更新するかもだね。有里君が何局かカメラ入れてるし、注目度を上げてきたおかげもあってすごい事になるかも」

新人どころかりせはまだ駆け出しのアイドルでしかない。
普通に考えればそんなりせがトップアイドルと同じ舞台に立つには、バックダンサーやコーラスとして参加するしかないのだ。
けれど、今日の野外フェスの主役はりせであり、柴田はあくまで共演者という立場。
柴田のネームバリューを最大限に利用して集客と注目を狙う。それが湊の考えた今回のイベントを成功させる策であり、お飾りの主役になりたくなければ死ぬ気で頑張れというスパルタなエールであった。
当然、柴田もやるからには全力だと言っていた。これまで誰よりも汗と涙を流してトップに立っている彼女は、同じ舞台に立てば新人だろうとプロとして扱う。
りせがついて来れなければ容赦なく主役を喰うつもりでいて、イベントへの参加を聞いた時点でそのことは本人とマネージャーに伝えている。
憧れのトップアイドルにそんな事を言われれば、普通の新人ならば萎縮してイベントへの参加を見送るかもしれず、仮に参加したとしても宣言通り喰われてしまう。
だが、りせは新人にはあり得ない過密スケジュールの合間をぬってトレーニングに励み、どうにか動けるレベルには至った。
ダンスも歌もまだまだ柴田には及ばない。表現力だって未熟で、体力も同年代と比べてそう多い訳ではない。
それでも、気持ちでは負けるかとレッスンを続け、今日の本番に共演できることを柴田も喜んでいた。
憧れの先輩に認めて貰えたことは当然りせの自信に繋がっている。後は本番でどこまで力を出し切れるか、お客さんと一緒に盛り上がることが出来るかだ。
「すみません、そろそろ着替えお願いしまーす！」
『はーい』
時計を見れば本番が始まるまで一時間を切っていた。スタッフが着替えるように言ってきたことで、衣装に着替えてメイクをしてと本

番まであっという間だろうとりせたちの頭も切り替わる。
「それじゃあ、りせちゃん行こうか」
「はい。じゃ、プロデューサーは後でね」
メインの二人はこれから着替え用の車に向かって、そこで着替えと一緒にメイクもすることになる。
男の湊がそこにいる訳にもいかないので、次に会うのはスタンバイ前になるだろうとテントを出る二人は手を振った。
そちらに視線を送った湊の方も準備があるので立ち上がると、二人と少し時間をおいてからテントを後にした。
＊＊＊
蒸し暑い夏の夜。アイギスは自分の姉とチドリも含めた二年生メンバーと共にバスに乗り、野外フェスの行なわれる会場に来ていた。
今日はここでトップアイドルも参加する野外イベントがあるらしいとの情報を聞きつけ、参加料も無料だからと思い出作りにやって来たのだ。
まぁ、情報を聞きつけたと言っても湊がプロデュースしていることで話題になり、参加するアイドル二人も色々な番組に出演して宣伝してきた。
そのおかげで公園の入口側のスペースは沢山の屋台と来場客で賑わっており、さらに奥に進むにつれて人も多くなっていた。
「八雲さんに呼ばれてこれだけの人が集まっているのですね。流石であります」
「いやぁ、有里はイベントをプロデュースしてるだけで参加者じゃねえから、集まったのはあくまでアイドルを観に来た人らだな」
ライブ仕様なのか野球帽を後ろ向きに被り、ネックレスと腕に巻くアクセサリーを増量して歩く度にジャラジャラと音をさせている順平は、感動しているところ悪いがとアイギスに事実を告げる。
屋台でチョロッと買い食いしつつ奥に向かえば、彼の言っていた通り物販のブースはアイドルたちのファンでごった返していた。
これらの人々は全て湊ではなくアイドルのために集まっており、彼らが集まりたくなるようにイベントを作った手腕は認めるが、主役で

はないと再度教えてやればアイギスは少しつまらなさそうにしている。
「八雲さんが出ないのであれば帰るであります……」
「まぁまぁ、有里君が作ったステージだしさ。彼の事を知るにはどんなイベントに仕上げたのか見ても損はないんじゃない？」
別にアイドルにはそれほど興味がないゆかりも、近くでイベントがやっているのなら折角だし見てみようかなと思ってやってきた。
だというのに、連れがイベント前に帰ろうとするので、イベント自体が彼の作品なんだよと教えてやれば少しは興味を持ったらしく、扱いやすいようで面倒だなと小さく嘆息する。
そんなゆかりの頑張りを見て苦笑していた風花は、改めて初めて参加するイベント会場を見て、すごい熱気だと集まったファンたちについて話す。
「こんなに沢山の人が集まるなんてすごいですね。私でも何曲も知ってるようなアイドルだし、トップアイドルって聞くと成程って感じかも」
「ま、サーヤつったら知らないやつはいないってレベルだからな。もう一人の子もテレビで見た感じ可愛かったし。夏の最後の思い出にはサイッコーだぜ」
こういったノリの良いイベントが好きな順平はあと少しだし楽しみだと興奮気味に話す。
ただ、今年こそは彼女を作って思い出作りを頑張ると言っていただけに、結局は例年通りのままだった事で無理にテンションを上げているようにも見えた。
もっとも、今年も彼女は出来なかったなとは誰も突っ込まない。
それを言えば自分たちも独り身である事を指摘されるだけでなく、むしろ有里湊という一人の青年を中心に泥沼な状態である事が話題にあがり、女同士の友情にヒビどころか亀裂が生じかねない。
七歌はそんな者たちの中でも姉を自称しているだけなので外れるが、わざわざ面倒な方向に話が行くと分かって話題にする事もないと判断し、人が大勢並んでいる物販ブースを指して口を開いた。

「皆、物販はどうすんの？　折角だしなんか買ってく？」
「あー、私はいいかな。ＣＤとかはレンタルで十分だし」
今日出演するアイドルたちの歌はゆかりも何曲か聞いていたが、ＣＤやグッズを買い集めるほど熱心なファンという訳ではない。
ライブで気に入った曲があれば、後で曲目を見てＣＤを借りに行くくらいでいい。
そんな熱心なファンが聞けば激怒するであろうゆかりの発言だが、それを聞いた順平はオーバーに肩を竦めるとやれやれと呆れたように呟く。
「ゆかりっちってば夢がないなぁ。今日のイベントグッズはなんと直筆サイン入りが混じってるんだぜ？　一人五個までらしいけど、見た感じ馬鹿みたいに売れてるみてぇだし。ビッグウェーブに乗ろうとは思わないのかね」
「……公式からどのグッズに何個サイン入りがあるかってアナウンスしてないし。絶対に欲しいファンにすれば、少しでも可能性を上げるため数を買うしかないんでしょ」
「湊君もエグい商売の仕方しはるわ」
何万個と用意されているグッズの中で、当たりであるサイン付きは個人の物が三十点、二人のサインが書かれたプレミアム版は三点という恐ろしい倍率だ。
限定シャツなどはＥＰ社参加の企業がデザインしたしっかりとした品なので、普段着としても利用できるレベルではあるが、サイズによっては一つもサイン付きがなかったりと悲しい事になっている。
けれど、運営からは用意されたサイン付きグッズの数が明言されただけで、どのグッズに何個サイン付きがあるかという詳細は出されていない。
当然、ファンたちは運営に詳細も教えて欲しいという要望を送ったが、サイン付きが混じっているのはあくまでサプライズ要素なので当日をお楽しみにという返答しかなかった。
それを聞いたファンたちは、当然の如く金の亡者めと運営とプロデューサーである湊をネット上で叩いていたが、分かっていても何も

することは出来ないので、会場に来たファンたちは財布が許す限り一つでも多くのグッズを買うしかないという訳だ。
ただし、この場で全てのサイン付きが出なければ、後日、専用サイトにて残ったサイン付きグッズが当たる抽選が行なわれる。買ったグッズ五個一口で、レシートに記載された番号を入力すれば自動で個数が計算される仕様である。
そんなダブルチャンスも残っているからこそ、熱心なファンたちはグッズの値段を計算し、一つでも沢山のグッズを買おうと躍起になっていた。
傍から見ていると異様な光景にも思えるが、まぁ、折角来たのだからと開始までもう少し時間もあることでアイギスたちも列に並ぶ。
全員今日のパンフレットは買うが、順平は男性用のTシャツも一枚買うらしい。ならばとラビリスも部活の練習着にでもしようとTシャツを買うことに決めた。
Tシャツは前面部が見えないように畳まれた状態で個別包装され、パンフレットは簡素な色つきの袋に入っているので取り出さなければサイン付きかは分からない。
自分たちの順番になってそれぞれお金を払って商品を受け取ると流れに乗って出て行く。
すぐ傍で開けると後ろがつっかえてしまうので少し離れたところで立ち止まると、早速確認だと七歌や順平は袋を開けた。
「あー、普通のやつでした。惜しい！」
「いや、別に惜しくないっしょ。ま、オレっちも普通のだったけどさ」
ちょっとだけ期待しつつ開けてみれば、表紙は綺麗でTシャツもサンプルと同じ柄であった。
ゆかりや風花も同じように開けてみて、結局は七歌や順平と同じように綺麗な商品だったことでこんなもんだよねと笑いあう。
だが、一番最後に買ったことで遅れてやって来たアイギスは、自分の買った物と他の者が買った商品を見比べて急に不満そうな顔をした。
「む、わたしの買った物だけ印刷に不備があるであります。どういう

了見が問い質し、即刻交換して貰ってきます」
印刷の不備と聞いて他の者たちの頭にクエスチョンマークが浮かぶ。元ロボットだけあって、そういった物も気付きやすいのだろうかと思って見てみれば、彼女のパンフレットの表紙にはサインペンで書かれたマークが二つあった。
そのマークが何であるかを一瞬で理解した順平は、交換して貰ってくると元来た道を戻ろうとする彼女を慌てて引き止めた。
「ちょ、それ！　それが当たりのやつだから！　限定三点しかないプレミアムサイン！　嫌ならオレのと換えてやるからストッププリーズ！」
アイギスも一緒にサイン付き限定品の話を聞いていたので理解していると思っていたが、彼女はそもそも人間の文化についてまだまだ知識が不足していた。
おかげでプレミアムサインを見てもラクガキにしか思えず、風花たちが如何に貴重な物かと説明しても通常の商品の方を欲しがっている。
だが、物販ブースから少ししか離れていない場所でそんな話をしていると、後ろの方から聞いたことのある声が聞こえてきた。
「あー、せっかくお揃いで買ったのに汚れてる……。お店の人に交換してもらわなきゃ」
「ま、待って羽入さん！　それ、限定品のやつだから！」
声がした方へ振り返ってみれば、湊のマンションの隣人である羽入と友人の宇津木が一緒にいた。
今日は時間も遅いという事で妹たちは来ていないようだが、羽入の方が買ったTシャツの前面部にはサインペンで書かれた二つのマークがあり、本人は汚れていると認識して嫌そうな顔をしていた。
「そっちもかよ！　つか、何で有里の知り合いは物の価値を知らずに買ってんだよ！」
自分たちが来るまでに何千、何万という人間がグッズを買っていったはずだが、ゆっくり来たアイギスに続いて羽入までもが三点しかないプレミアムサインの品を手にしている。

別にその点についてはただの運だとして納得も出来るが、本人たちから汚れや印刷ミスと認識されているのは、ファンが喜ぶのならとサインしたアイドルとサイン欲しさに必死になっているファンたちが不憫でしょうがない。

別に転売する気など欠片もないものの、順平は羽入とアイギスに普通の方が欲しいのなら買ってあげるからと交渉を持ちかけた。

無論、価値を知らぬ者を騙そうとしているように見えた事で、他の女子たちには少々睨まれたが、順平は交換する前に価値があるのはサイン付きである事を再度説明した。

それでも通常版を選んだのは本人たちであるため、順平はTシャツとパンフレットを一つずつ追加購入するだけで、三点中二つのプレミアムサインをゲット出来たのだった。

「いやぁ、今日はマジでサイッコーの日だな！　アイちゃんも後輩ちゃんも欲しいのあったら言ってくれよ。アメリカンドッグでもラムネでも好きなの買ってやっから！」

「了解しました。ですが、もう少しで始まるので帰りにお願いするでありますー」

女子二人で遅い時間にいるのは危ないという事で、羽入と宇津木も合流すると一団になってメンバーらは公園奥の会場へと向かってゆく。

プレミアムサイン付きのグッズを大事そうに袋に入れ、はしゃいだ順平が先頭になって進むとライトアップされたステージが見えてきた。

ステージにはまだ楽器などしか置かれておらず、時折スタッフと書かれたシャツを着た者がステージ上の物を移動させているだけで主役は来ていない。

けれど、時計を見れば開始時刻まで残り僅かなので、順平たちも出来る限り近付いたところで立ち止まって開始時刻を待つ。

「音楽のイベントとはこんなにも大勢の方が集まるのですね」

「んー、湊君が言うには三万人くらいは大丈夫らしいけど、見た感じやともっと来てるみたいやね」

以前、湊から三万人くらいは集まれる会場だと聞いていたことで、人の多さに驚いているアイギスにラビリスは四万人くらい集まるのではと話す。
それを傍で聞いていた七歌や風花は、そんな人数がグッズを買いまくっていたならば、確かにチケット代を取らなくても十分な収益は見込めるのだろうなと思えたが、ステージにバンドのメンバーが集まりだしてきた事でそちらに注目する。
ドラムが小さな音でリズムを刻み始めれば、ベースもそれに合せて弾き始めた。
まだ何の曲という訳でもなくリズムを刻み始めただけだが、会場に集まった者たちもそのリズムに乗り始めた事でボルテージが上昇する。
新たに現われたキーボードも参加し、バックコーラスの女性たち、サックス、トランペットと人数も増えてゆく。さらにギターもやってきたところでメンバーたちは驚愕に目を見開いた。
なんとそこには、サングラスをかけながら衣装に身を包んだ青年がいた。
＊＊＊
「じゃあ、いくよ。りせちゃん」
「……はい」
ステージ衣装に身を包んだ二人は、お互いに強く手を握りあうと観客から見えない舞台袖で深呼吸する。
ついにこの数ヶ月の努力の成果を見せるときが来た。泣いても笑っても一夜限りのお祭りが始まる。
湊と出会ったのは人前で歌えると楽しみにしていたイベントが潰れた直後だった。
店の配線トラブルが原因だったようだが、そのおかげでミニライブはお流れになり、楽しみにしていたりせは人前だというのにマネージャーの井上に八つ当たりしてしまった。
それを近くで見ていたらしい湊は、公共の場で喚くなと彼女の頭にカラオケ屋のクーポンを投げつけてきた。

今思えば最悪に近い出会いだ。お互いに喧嘩腰で言い合いになり、出来るものなら歌ってみろ、分かった歌ってやるで仕事が決まったのだ。

事務所に帰ってからその事を伝えると、社長だけでなく先輩たちからもお叱りを受けたが、一度口に出したことは引っ込められない。

後日、湊は本当にトップアイドルの柴田を呼んで仕事を依頼し、そこでりせも本当に自分が大きなステージで歌えるんだと期待に胸が躍った。

ただ、本当にステージをやると決まってからは楽しい事ばかりではなかった。

同年代の駆け出しの中では光る部分があったりせも、客前でプロとしてパフォーマンスを見せるには実力がまるで足りていなかったのだ。

共演する柴田もダメなら置いていくと言っていた。それに啖呵を切ってやらせてくださいと返したのは自分なので、絶対に中途半端は許されないとトレーナーの厳しい扱きにも耐えた。

(大丈夫、大丈夫、やるだけの事はやった……)

知名度を少しでも上げるために音楽番組だけでなく、バラエティ番組や朝の情報番組にも出演したりしながら、移動中や仕事以外の時間でフェスに向けて新たに貰った曲の歌詞と振り付けを頭に叩き込み、歌詞と振り付けが頭に入っているという前提の個別のレッスンで表現力を磨き続けた。

最初は投げ出したくなるくらい辛かった。こんなの駆け出しがする仕事じゃない。自分がやりたいと言っている先輩もいる。そんな事を考えては自分がやるんだと弱った心を奮い立たせた。

多忙な柴田との合同練習の機会は限られていたし、吸収できるものは何でも吸収してやろうと特に集中して臨んだおかげで、柴田にも褒められるほどの速度でりせは成長した。

残念なことに元のギター担当が胃腸風邪で急遽来られなくなる一幕もあったが、ギターなら演奏できるという万能なプロデューサーのおかげで穴も埋まった。

入念に打ち合わせを行ない、リハーサルも重ねた事で、ギターが変わっても驚くほど動揺は少なかった。
何より、会場には人が集まり、バンドたちも会場の空気を温めるため軽快なリズムを刻み続けている。
もう本番だ。次に照明が落ちたら二人はステージに飛び出していかなければならない。
心臓が痛いくらいに高鳴り、失敗したらどうしようと弱音まで頭をもたげてきても、繋がれた頼もしい先輩の手の温もりで冷静さを失わずに済んだ。
「いま！」
「はい！」
音が止み、照明が消えた瞬間、りせと柴田は駆け出してステージへ上がった。
指定された場所に到着した瞬間、照明が復活してステージ脇で爆発が起こり観客に向かってカラーテープが飛ぶ。伴奏をカットしたオープニング曲の演奏がスタートするのとりせたちが歌い出すのは同時だった。
待ち望んだアイドルの登場に会場中から歓声があがる。
駆け出しのりせがメインで、トップアイドルの柴田が共演者。
そんな構成の時点で、企画を発表した当初は来るのはほとんどが柴田のファンだろうと思われていた。
しかし、ステージに立って観客を見たりせは、自分の名前が書かれた団扇を必死に振ってくれているファンを見つけた。
一人二人ではない。会場を埋め尽くすほどの人の中で、数え切れないくらいの人たちがりせにも声援を送ってくれていたのだ。
ライブは始まったばかりだというのに目頭が熱くなる。嬉しさのあまり泣きそうになるが、数瞬瞳を閉じるとパッと開いてアイドルとしての笑顔を見せた。
《みんなー！　来てくれてありがとー！》
《夏の最後を飾る三時間限りの夢のお祭り、みんなも楽しんでいってねー！》

来てくれた者たちのために最高の自分を届けよう。
観客と共にライブを作り、忘れられない思い出として残す。
終わった後のことは考えない。このステージで自分の全てを出し切ってみせる。
その想いを胸に、二人のアイドルは限界を超えたパフォーマンスで観客を沸かせた。

夜――控え室用車内
フェス終了後、野外ライブの着替えやメイク室として用意されたキャンピングカーの中で、りせと柴田は完全に燃え尽きていた。
イベントは想像超えるほどの大成功。スタッフが来場者を数えてみるとおよそ五万人集まっていたという。
そんな観客を前に三時間二人でステージを披露し続けたのだ。途中にトークやゲームを挿んではいたが、女子中学生や女子高校生の体力の限界を超えており、二人はステージから降りるとそのまま倒れ込んでここに運ばれた。
ステージの方は、雨が降ると困るような機器類だけは既に取り外して撤収しており、残りは明日になってから片付けることになっている。
イベントが大成功したことで大人たちは打ち上げに向かったが、メインを張った二人にそんな体力は残っておらず、何とかゆっくりでも着替えようとした事で中途半端に下着姿で止まっていた。
「……はぁ、客には見せられない姿だな」
化粧台に突っ伏しているりせと、椅子に座って呆けている柴田を見て湊は思わず溜息をつく。
主役とも言えるアイドル二人が打ち上げに参加出来ない事で、代わりに二人のマネージャーが連行されており、アイドルを送っていけない彼らに頼まれて湊は二人の様子を見に来たのだ。
この車はＥＰ社が用意したものなので鍵は湊が管理している。おかげでスタッフたちは誰も来なかった訳だが、もし男性スタッフが来ていれば大変な事になっていたに違いない。

着替えられないのなら衣装のままでいてくれた方が良かったのだが、汗を吸った衣装を着たままでは身体が冷えた可能性もあったので、これはこれで良かったのかもなと思いつつ、湊は大きなタオルケットを手に取って二人の身体を拭いてやる。
「プロデューサー……これ、セクハラ……」
「人の車で下着姿になってたのはそっちだぞ」
動く元気もないくせに、身体を拭かれたりせが条件反射でセクハラだと呟いた。
その程度でも判断能力が残っているのはありがたいが、普段は元気な二人が相手だと逆に面倒臭いのかもしれないと思いつつ、湊は相手の身体にタオルを被せ、自分からは見えない状態にして下着を脱がせる。
急に下着を脱がされタオル一枚にされても動く元気はないのか、相手はほとんど無反応でぐったりとしており、これなら大丈夫だなと湊は新しい下着を身に着けさせた。
身体を拭いてから下着を替えれば後は簡単だ。二人が着てきた私服を着せていき、脱がせた下着はとりあえずビニール袋に入れてからそれぞれの鞄に入れておく。
「有里君……訴訟だからね……」
無反応だったが、大丈夫ではなかった。
下着姿を見たこと、身体を拭いたこと、下着を脱がせたこと、下着を着せたこと、服を着せたこと。さぁ、一体どれがアウトだったか考えてみようと頭の中で悩んでみる。
ここに一般常識を持った他の者たちがいれば、きっと答えは全部だと教えてくれるに違いない。
ただ、この場にそんな者はおらず、駆け出しアイドルだろうがトップアイドルだろうが、湊からすればスイッチを切り替えない限りは欲情の対象にはなりえない。
よって、
「撮影でキスもしたでしょう。これぐらい今更ですよ」
全く別の話を持ち出して彼は開き直った。

体力の限界で疲れ切っている相手は反論する元気もなく、荷物をまとめ終わると運転席に向かった湊を視線だけで追いかける。
彼女たちは頭の中でぼんやりと彼が何をするつもりなのか考えているに違いない。
まぁ、運転席に向かった時点でやることなど一つしかないのだが、ここが自分の土地だということで湊は車のエンジンをかけると公園内を走り出した。
そのまま走らせた車は病院の方へ向かい。従業員用の出入り口前で停車すると、りせと柴田を順番に中へ運び入れてゆく。
彼女たちを運び入れたのは、以前、宇津木の妹と母親を泊まらせた『ルーム』と呼ばれる部屋だ。病棟と違ってキッチンやお風呂付きのワンルームの宿泊室になっており、動けないほど疲れている二人を泊めるには丁度良かった。
汗を掻いたままでは気持ち悪いのではと、お風呂に入れてやることも考えたが、お風呂はお風呂で体力を消耗するのだ。
ならば、少し寝て体力が戻ってから入れば良いだろうと考え、二人が明日から三日間は休みを取っていることを知っていた湊は、それぞれのベッドの傍に薄めたスポーツドリンクを置いておくと、部屋の電気を消して鍵を閉めてから去って行った。
翌日、昼間に起きてきて食事を取ったことで回復した二人から、車内でのことを他言したら社会的に抹殺すると言われたことはいうまでもない事である。

第二百五十八話　少女の転入

9月1日（火）
朝――月光館学園
夏休みも終わり、九月初日の朝。
アイギスは買ったばかりの真新しい制服に袖を通し、不思議な気持ちで学校の前に立っていた。
〝汐見アイギス〟、それが彼女に与えられた戸籍上の名前。
姉であるラビリスが夜の海に行った際、湊が考えた名字だと聞いている。
自分の名字を考えるのなら、別に湊と同じ有里か百鬼でも良いのにと思ったが、それを口に出したらラビリスも同じ事を言ったのだとか。
別に汐見という響きが嫌という訳ではなく、高等部からこの学校に通っている姉もその名前で認識されている。
ならば、腹違いの妹という設定になっているアイギスも、これからはその名前で呼ばれることにも慣れていかなければならない。
自分は既に人間の身体を得ていて、今後は他の者と同じように一人の人間として社会の中で暮らしてゆくのだから。
だが、それはそれとして、校門の前に立って校舎を眺めていたアイギスは、何やら周囲の人間の視線が自分に集まっていることに気付いた。
「なぜ、皆さんはわたしを見ているのでしょう？　制服の着こなしに問題があるのでしょうか？」
初めて着る服なので不備があったのかもしれない。寮の部屋で風花たちに手伝って貰いながら身に着けた制服を再度見直し、やはりどこがおかしいか分からなかった事で彼女は困り顔を浮かべる。
すると、一緒に登校してきていた風花や七歌がくすくすと笑い、別に制服の着方に問題がある訳ではないと教えてやる。
「違うよアイギス。制服の着方はそれであってるの」
「うん。まぁ、まだ夏服で良いとは思うけど、そうじゃなくて、他の人

はアイギスの容姿が気になってるの」
「容姿？　わたしの容姿に特別目立つ点はないと思いますが……」
完璧な制服の着こなしがしたいという事で、アイギスはブレザーまで完全に着込んでいる。
八月と変わらない気温の中で、流石にそれは暑かろうと思わなくもないが、いま彼女が目立っているのはそれが理由ではない。
学校の敷地内へと入っていく学生らが彼女を見ている理由は、単純に彼女の容姿が人の目を惹くくらい整っているからだ。
「一般人の感性からするとアイギスはすっごい美少女なの。お人形さんみたいに綺麗って感じで」
「ラビリスちゃんが入学したときもそうだったから、西洋人風の見た目がそもそも目立つっていうのもあるしね」
学内でもトップランクの容姿を持つ七歌から見ても、アイギスのルックスは頭一つか二つ抜けて優れている。
あの真田や荒垣ですらナンパのときは美少女認定していたらしいので、そんな彼女が道の真ん中にいれば注目が集まるのは当然と言えた。
もっとも、アイギス本人は自分の容姿を普通だと思っており、それならば注目される理由が分からないのも当然だなと七歌たちは笑いながら校門を潜る。
「やっぱり最初は職員室だよね。私のときもそうだったし」
四月にこの学校へやってきた七歌は、アイギスも同じように職員室に向かってから教室に行くはずだと流れを整理する。
教科書など必要なものは既に受け取っていて、自分のクラスが何組であるかも書類で渡されているので把握はしているが、やはりクラス担任に連れて行って貰う必要はあった。
そのため、校舎に入って上履きに履き替えると、そこで風花とは別れて七歌が一人でアイギスを職員室へ案内する。
「ここが職員室だよ。アイギスのクラスは私と同じみたいだから、鳥海先生っていう女の先生のとこに行けばいいから」
「了解しました。では、また後ほど」

「うん。じゃあ、また後でね」
職員室の場所が分からないアイギスを連れてきたが、後は鳥海の許へ行って挨拶すれば良いだけだ。
教室までは鳥海と一緒に来るはずなので、案内を終えた自分は先に教室に行っておくと七歌もその場を離れた。
急に知らない場所で一人になったアイギスは、ここで過ごしてゆくのなら一人でもやっていけるようにしなければとやる気を出し、扉に手をかけ開くと同時に挨拶する。
「失礼致します。鳥海先生はおられますか？」
急に入ってきた外国人の女生徒に視線が集まる。生徒だけでなく教師も同じ反応だったことで、七歌たちが言っていたように自分の容姿が目立つ事はハッキリと理解出来た。
だが、この学校には交換留学生も何人か在籍しているため、少しすると教師らは興味を失ったように視線を外し、そのタイミングで一人の女性が手を振ってきたことでアイギスは相手の許に向かった。
――2―F教室
チャイムが鳴りホームルームの時間になれば、鳥海の後に続いてアイギスが教室へと入ってくる。
その姿を見た瞬間、教室中で息を呑む音がして、数名の男子が彼女に見惚れていた。
マヌケのように口をポカンと開き、瞳はアイギスだけを映して動かず、一体彼女は誰なんだという問いが頭の中を占める。
事前に転入してくると知っていなければ、きっと自分も同じようになっていただろう。そう思えた順平は頬杖をつき、彼女に一目惚れした男子たちにある理由から心の中でご愁傷様と唱えた。
「はーい。皆、久しぶり。新しい学期が始まったところだけど、今日は転入生を紹介するわ」
「汐見アイギスです。皆さん、どうかひとつよろしくお願いします」
ぺこり、と丁寧な仕草で少女が一礼すると教室中から拍手が起こる。
この学校は以前から女子のレベルが高いと言われていたが、夏休み

明け早々に歴代記録を更新するほどの美少女が転入してきたのだ。
男子たちは皆お近づきになりたいと考え、女子たちは海外の女優みたいだとアイギスのルックスにただただ感心していた。
「彼女は隣のクラスの汐見ラビリスさんの妹さんになります。お母さんが違うって聞いてるんだけど、あんまり家庭の事情とかは訊かない方がいいのかしら？」
「わたしもあまり詳しい事は知りません。姉さんとも今年初めて会ったので」
「へぇ、色々と複雑なのね。そういう事なら皆も家庭の事情についてはあんまり訊かないように。分かったわね」
アイギスとラビリスが姉妹なのは間違いないが、誕生日の関係で年子という設定には出来なかった。
よって、湊は開発を担当していた研究室が異なっていた事で産んだ親が違うと定義し、二人を腹違いの姉妹という設定にして同学年にすることを画策したのだ。
本来ならばアイギスしか入学する予定になかったので、これらの設定と根回しは後になって追加する羽目になったものではある。
ただ、湊は偶然見つかったラビリスのこともしっかりと考え、彼女のことで負う苦労を一切負担に感じていない。
必要になるだろうと姉妹の戸籍をしっかりと用意し、ラビリスの入学には間に合わなかったが生身の肉体を無事に完成させてみせたのだって、全て彼女たち姉妹に喜んで貰いたかったからだ。
「さてと、それじゃあアイギスさんの席はっと」
「八雲さんのお隣でお願いします」
「八雲さん？　それって確か九頭龍さんが有里君を呼んでるときの名前よね？　貴女もその名前で呼んでるの？　ハンドルネームか何か？」
鳥海はアイギスが口にした名前に聞き覚えがあった。それは自分の教え子である七歌だけが使っている、この学校で最も有名だと思われる青年の名だ。
別に呼び方は自由なので鳥海も特に注意したりはしていなかった

が、ここで新たに転入してきた生徒までもが同じ名前で呼んでいると、その名前の由来などが気になってくる。
一番あり得そうなのはオンラインゲームであったり、もしくはネット上の掲示板で使っているハンドルネーム。
湊がそんな俗っぽいものを嗜んでいるかは不明だけれど、別の名前を使う場面を考えると鳥海は自分の経験上それがまず思い浮かんだ。
無論、自分の学内でのイメージが壊れるので、恋人も作らずにオンラインゲームで休日を潰している事など誰にも話す気はない。
ただ、もしも湊とゲームの中で知らぬうちに出会っていれば面白いなと考えつつ、鳥海はアイギスの席の話だったなと話題を戻した。
「まぁいいわ。あー、残念だけど有里君のお隣にはなれません。そもそも彼のクラスは貴女のお姉さんと同じE組なので」
「皆さん、短い間でしたがお世話になりました。では、失礼します」
話を聞いてアイギスが教室の扉に向かうまで僅か二秒。
彼女はとても丁寧にお辞儀をすると廊下へ出て行こうとする。
しかし、すぐに再起動を果たした鳥海は後を追い。彼女を後ろから抱きとめると、行かせてなるものかと拘束する。
「ストップ、ストップ！　クラスはそんな自由に変えられるものじゃないから！」
「わたしの一番はあの方の傍にいることであります！　別のクラスならこの場所に用はありません！」
「姉妹や兄弟は同じクラスになれません！」
出て行こうとするアイギスと、それを止めるために必死になる鳥海。
傍から見ていると中々に面白い光景かもしれないが、クラスの男子たちは転入してきた美少女がまた湊の関係者であったことに肩を落とす。
先ほどの彼女の発言には、僅かな可能性を夢見ることも出来ないほどの力が籠もっていた。
絶対に自分は彼の傍にいる。他の者などどうでもいい。そんな強い意志を見せられれば、遠目からみて目の保養にするくらいしか出来

ないと諦めて当然だった。
ただ、アイギスと鳥海の間ではまだいざこざが続いているようで、自分の姉が既にいることで湊と同じクラスになれないと知ったアイギスが悔しそうな顔をしている。
最初の出会いは最悪だったが、その後の付き合いで姉妹の仲が良くなったことで姉を恨むことはない。けれど、それでも諦めきれなかったアイギスは、教室から出て行くのをやめて鳥海に一つ提案した。
「では、両クラス間で順平さんと八雲さんのトレードを望みます」
一般常識に疎いアイギスの突然の発言に、話題に出された順平はそんな無茶な話があるかと嘆息する。
両者の合意があろうとクラス替えは通常不可能。特例であれば、イジメの加害者と被害者で、問題が大きくなって加害者が別のクラスに移されることはあるかもしれないが、そうでもなければ一年間は同じクラスにいなければならない。
まぁ、初めて学校に通うアイギスはそれを知らないのだろうが、また後でそういった常識についても教えてやらねばと思っていると、アイギスの言葉を聞いたクラスメイトたちが彼女の提案を肯定するように拍手を始めた。
「ちょ、こら、拍手すんな！　オレっちを売り飛ばす気か！」
「順平、エビでタイを釣るんだよ」
「半年間一緒に勉学に励んだ仲間だろうが！」
最小のコストで大きなリターンを得るのだとワクワク顔で話す七歌に思わずツッコミを入れる。
彼女も姉を自称していただけに、湊と同じクラスになりたいと強く望んでいる側の人間だ。
そうでなくともこの学校には〝プリンス・ミナト〟の会員が多数いるので、興味のない男子と皇子を交換できるとなれば賛同者で溢れるだろう。
それは分かっているのだが、売られる方は堪ったものではないため強く言い返せば、力の強いアイギスを止めていたことで既に疲弊している鳥海が静かにと声をあげた。

「はい、みんな静かに！　クラス替えもトレードも無理だから！
まったく。学校は社会生活を学ぶ場所でもあるの。だから、好きな人と別のクラスでも我慢してください。というか、そんな我が儘が通ったら教室中がカップルだらけになってるわよ」
「なるほど、確かにこのクラスは違うようですね」
アイギスの言葉のナイフがクラスメイトの胸に突き刺さる。
教室を見渡したアイギスはクラスメイトたちに恋人がいないと雰囲気で理解したらしい。
夏休み明けに恋人がいないということは、寂しい二年生の夏を過ごしたか休み中に破局を迎えたという事だ。
どちらにしても悲しい現在に繋がる訳で、クラス中がお通夜ムードになると流石に鳥海も同情的な視線を教え子たちに送り、先ほどからキツい発言の目立つ転入生を諌めた。
「アイギスさん、日本の学校はまだ不慣れなのかもしれないけど、もう少し自己主張を抑えるところから始めましょうか。日本では強く主張し続けていると敵を作ってしまうから」
彼女のプロフィールには海外で生活していた時期があると書かれている。
もっとも、それは湊を追って中国からドイツまで陸路で向かっていたときの事なのだが、鳥海はアイギスの外見もあって海外で元々暮らしていたと思ったらしい。
勘違いが良い方向に働いた事に七歌たちは内心で安堵し、結局、アイギスの席は七歌の隣の休んでいる者の席ということになった。
そうして、ようやく話が一区切りついたところで、鳥海が疲れた声を出しながらそういえばとアイギスに話しかけてきた。
「はぁ……と、そうだった。ねぇ、アイギスさん、有里君の知り合いなら彼から話とか聞いてないの？」
「何がでしょう？」
「何がって彼のことよ。夏休み中に急に学校辞めるって言ってきて、一応保留にはなってるけど一切連絡もないから、学校としてはこのままもう来ないんじゃないかって思ってるわよ？」

鳥海の言葉を聞いてアイギスたちは自分たちが大事な事を忘れていた事を思い出した。
だが、それについてゆっくり話し合っている時間はない。昼休みか放課後、それが無理なら寮に戻ってからでも話し合う必要がある。
教師から突然しらされた情報に阿鼻叫喚となった教室の中、七歌たちは静かにそう考えるのだった。
夜――巌戸台分寮
他の者たちともメールで連絡を取り合ったが、結局、湊が学校を辞めたという話が学校中に広まった事で、学校では集まることは出来なかった。
彼と同じクラスの生徒や部活仲間の風花たちに、家族のチドリなどは質問攻めにあっていたようだが、彼女たちも詳しい話を知らないので話せることはない。
むしろ、彼のことを大切に想っている彼女たちの方が知りたいくらいで、彼と連絡先を交換している生徒たちも頑張って連絡を取り合おうとしていたが、七時を回った現在まで彼からの返信は一通たりともなかった。
「完全に忘れてたよね……。八雲君が学校辞めたってこと」
一階のラウンジのソファーにダランと座りながら七歌が呟く。
あの日、チドリたちの前からも消えようとした湊は、そのまま学校にも退学届を出してすぐに去っていた。
突然のことに驚いた学校が保護者に詳しい話を聞こうと連絡したことで、桜が本人から話を聞くので保留にして欲しいと頼み、一応、まだ彼の籍が学校にも残っている。
ただ、彼は今日の学校を休んでおり、もっと言えば元の姿に戻ってから未だにラビリスとコロマルのいる家にも帰っていない。
ラビリスとアイギスのＥＰ社研究区画へのパスは失効したままなので、結局、連絡手段は残っていても彼が自分たちの前から姿を消した状態から何も変わっていないのだ。
対策会議のためにと呼ばれてやってきていたチドリとラビリスとコロマルも含め、その事がすっかりと頭から抜け落ちていた面々は、

さてどうしたものかと頭を悩ませる。
「てか、やっぱり私らが転校しないと戻る気ないんじゃないの？」
もしかすると、湊は退学が保留になっていると知らないのではと思って、チドリやアイギスからその旨を伝えておいた。
ただ、他の者と同じように連絡はまだ返ってきておらず、そもそも彼がちゃんとメールに目を通しているかも分からない。
仮にちゃんとメールを読んだ上で今の対応を取っているとすれば、湊が最初にした要求が通っていないからと考えるのが自然で、自分たちが転校したくないがために一人が学校を辞めた事に罪悪感を覚える。
紅茶のカップに口を付けながらゆかりがそう溢せば、キッチン側のテーブルにかたまって座っていた男子の中から順平が口を開いた。
「だからって転校する訳にもいかねーだろ。学校が変わるだけじゃなく、港区に近付くことも禁止なんだ。シャドウとの戦いを途中でほっぽっていくって事だぞ」
ヒーローに憧れている部分がない訳ではない。他の者にはない、特別な才能が欲しいと思っていた少年にとって、シャドウとの戦いは人々を守るという自分に与えられた使命なのだ。
だからこそ、いくら自分たちの行動が原因で学校を辞めたのだとしても、湊一人の復学のためにこんな中途半端な状態で戦いから離れるのは嫌だった。
「ですが、皆さんが戦いをやめても八雲さんが一人いれば戦力は十分です」
すると、こんなところで戦いを止められるかと話す順平に、アイギスが酷く淡々と冷静に言い返した。
使命感から戦う気になっているのだろうが、人々のためを思うのであれば、順平たちはむしろ去るべきだと。
何故なら、特別課外活動部のメンバーさえいなくなれば、影時間における最強戦力である湊の助力が得られる。
彼は独りタルタロスに籠もって何千、何万というシャドウを狩り続けたのだ。

これまでの活動を実績として評価するのであれば、この場にいる全員の倒した分を足しても遠く及ばないほどの実績を持つ彼に任せた方が確実である。
アイギスがそれを静かに告げれば、姉であるラビリスが諌めるように言葉を返した。
「いくら強いって言っても一人で何でも出来る訳やないんよ。湊君に出来て他の人に出来ない事があるように、他の人にしか出来ん事もあんねん」
「わたしにとって八雲さんがいないのでは意味がありません」
今からでも七歌たちを転校させてしまおうと考えているアイギスは、姉がなんと言おうが自分の大切な人がいないのでは意味がないと返す。
ラビリス自身は個々を尊重する大切さを伝えたかったようだが、裏を返せばシャドウに対する戦力を求めている今だからこそ、他の者には出来ない事が出来る戦力の湊を優先すべきだろうとアイギスは考えていた。
傍から彼女の事を見ていてその内心を予想出来た順平は、件の青年についていくつか聞きたかったんだと口を開く。
「つーかさ。その有里についても色々と聞きたかったんだよ。何で右眼があんのかとか、七歌っちの親父さんらが言ってたらしい死んでも生き返るとかって話だとかさ」
「八雲さんは昔からパッチリ二重の右眼がちゃんとあります。あの方の目が小さいなどと事実無根で無礼なことを言わないでください！」
「いや、落ち着けアイギス。伊織が言っているのは、彼は右眼に怪我を負っていたのではという話だ」
順平の言葉を聞いたアイギスが突然怒り出したことで、一体どこに怒る要素があったのだと一同は驚く。
しかし、彼女の怒り方がずれていたことで、アイギスには順平の言葉が〝小さくて目があるように見えなかったぜ〟と言っているように聞こえていた事は理解出来た。
誰もそんな事など言っていないというのに勘違いした彼女を美鶴

が落ち着かせると、少しムスッとした表情でアイギスは湊の右眼の怪我について他の者に話し出した。
「八雲さんの右眼は深い雪に覆われた森で出会った熊との戦闘で負傷したものです。攻撃を受けそうになっていたわたしを突き飛ばしたことで、八雲さんは攻撃を躱しきれず爪で右眼を抉られました」
雪の積もった森で野生の熊と戦うなど正気の沙汰ではない。重傷を負った状態で相手を屠って生き残れる可能性はほぼゼロだ。
それを成し遂げた青年の戦闘力には恐れ入るが、話を聞いていた天田は自分が目に怪我を負ったことがなかったので、そこまでしっかりと治るものなのかと尋ねた。
「眼球って腕とか足みたいにちゃんと治ったりするんですか？」
「表面に小さく傷が出来たとか、そういったレベルならば治る。だが、獣の爪で深く抉られたとなると、肉としての厚みだけならば可能性はあるが、光は一生失ったままになるだろう」
美鶴は自分の父がそうであるからこそ、怪我で失明した目が再び見えることはないと知っていた。
多少の傷ならばまだ可能性はあるけれど、表面だけでなく目の奥まで傷が達していれば、まず間違いなく回復は見込めない。
しかし、自分たちが最後に見た青年は、両眼とも無事に存在しているようであった。
視力も問題なくでているとすれば、一体どうやって回復したのだろうかという疑問が涌いてくる。
この場において彼について詳しいそうなのは家族の少女だ。他の者が聞きづらいのならと七歌が代表し、知っているなら教えて欲しいと頼み込む。
「チドリたちは八雲君の右眼が元通りになってる事とか何か知ってるの？　よければ教えて欲しいんだけど」
「右眼が治っていたのは知ってたわ。本来なら回復しないような怪我でも、鬼の身体のおかげか回復したり蘇生がなされる事があるの。だから、生き返ったりだとかはその事でしょうね」
青年の右眼が治ったこと、完全に心臓が停止してからでも蘇生され

ること、チドリは当然それらを詳しく知っていた。
しかし、いくら問われようと湊の身体の秘密をそう簡単に話すことは出来ない。
よって、チドリは最低限のレベルで他の者に説明すれば、他の者たちがさらにチドリに質問をぶつけようとする前に話を進めるため美鶴が言葉を発した。
「まぁ、彼についての話は今は置いておこう。それよりも、話しておかねばならないのは、今度の満月の戦いについてだ」
次の敵は前回倒せなかったことでさらに人々の心を食べて成長したアルカナシャドウに加え、今月の満月に現われた新たなアルカナシャドウまでいる。
それぞれが別の場所に現われるようなので、これまで以上に厳しい戦いになることが予想される。
だからこそ、美鶴は今のうちに少しでもチーム分けや、どちらが強力になった先月のアルカナシャドウへ向かうかなどを話し合った。
まだ臨時顧問の栗原にも伝えていないので確定ではないが、厳しい戦いになると分かっているならこそ進められる準備に、話し合いに参加したメンバーたちも満月に向け気持ちを切り替えていった。

第二百五十九話　不穏

――都内・某所

前回の満月からおよそ一ヶ月、幾月が秘密裏に作った研究所の一室にストレガたちの姿があった。

普段はここへ来ていないマリアも今日は来ているが、幾月と一緒にいる結城理の事をジッと睨んでおり、彼女は彼らとは一切言葉を交わしていない。

他のメンバーたちも理と会ったときにはよく知った人物にそっくりで驚いたが、彼の正体が有里湊の元になったオリジナルだと聞かされた際、湊のことを同じ遺伝子を持つだけの劣化品と称したことでマリアは理を敵と認識したのだ。

そんな少女の反応を見た理や玖美奈は、戦闘のスイッチが入らぬ限り相手が幼稚な事から、子どもの反抗などどうでもいいと切り捨てていた。

もっとも、理と玖美奈は相応の時期になるまで動く事が出来ない。それは理が湊とそっくりな事が原因だが、それまではどうしてもストレガに実働部隊として動いて貰う必要がある。

故に、マリアの事はどうでもいいと見なしつつも、理や玖美奈だけでなく世間では死んだことになっている幾月も、ストレガたちがこれから特別課外活動部を相手にどう動くつもりなのかを現在尋ねていた。

「人数が増えた事で戦力が増したようだが、君たちはどうやって対処するつもりなんだい？」

巌戸台分寮が拠点だと分かっていれば、特別課外活動部の戦力を調べるのはそれほど難しいことではない。

幾月が調べたところ、最近になってチドリ、ラビリス、コロマルといった三名が巌戸台分寮に出入りしているらしい。

ペルソナの索敵能力を使ってしまうと相手に気付かれる恐れがあるため、一緒に影時間の戦いに出ているかまでは分からないが、お互いに影時間に関わっていると知ったなら活動している可能性は高い。

無論、それは一人の青年を除いての話になるが。
「今度の戦いでは彼らの戦力が分散されます。片方は先月のアルカナシャドウへ、残りは今回のアルカナシャドウの許へ向かうでしょう。数で勝っている者たちが自ら己の利点を潰してくれるのです。ならば、我々は分散した敵のどちらかに戦力を集中させればいい」
「ふむ、それは確かにそうだが、エヴィデンス側のペルソナ使いが合流したなら、例え分散しても簡単にはいかないんじゃないか？」
顎に手を当てて思案するように話す幾月は、ストレガと変わらぬ実力を持つチドリたちの存在は無視できないのではと尋ねる。
元からペルソナを扱うように作られていたラビリスは勿論、ペットとはいえ弱肉強食を本能で知っているコロマルや、研究所時代に使っていた制御剤で寿命が縮んでいるチドリなど、湊の傍にいる者たちは通常よりも高い適性値を持っている。
それは制御剤で今も寿命を縮めて死に近付いているストレガも同様で、彼らは七歌やアイギスを除けば、一人で特別課外活動部のメンバー二人を相手する事が出来た。
今現在、特別課外活動部の戦力は八人。これは戦闘力を持たぬ風花を除いた人数だが、そこにチドリたちが加わっても十一人にしかならない。
人数をほぼ均等にしようすれば六人と五人。もしも、少数精鋭を目指して少人数の方を七歌、アイギス、チドリ、ラビリス、コロマルというメンバーで固めてくれば面倒だが、戦力のバランスを考えるとその五人はばらけるはずだ。
ならば、大した力を持たない本来の特別課外活動部のメンバーなど恐れる必要はない。主力たる先に挙げた五人の誰かを狙うか、チームの弱所たる残りのメンバーを狙っていくか、どちらにせよ敵が分散したところを突けばストレガには十分な勝算があった。
その事を考えながらタカヤは、確かにチドリたちの合流は自分たちにとってマイナスではあると肯定した上で、もう一つ忘れてはならない存在も実は計算に入れていないのだと自嘲気味に話す。
「ええ。それに私の読みにはミナトの存在が考慮されていません。理

由は、彼が桐条に力を貸すとは思い難いからですが」
最も警戒すべき相手が敵戦力に数えられていない。そんな前提の作戦など机上の空論にもならぬ都合の良い妄想でしかない。
けれど、タカヤたちは湊の内に燃える憎しみと怒りの炎の片鱗を見ている。
研究所で出会ったばかりの頃はそれほどではなかったが、脱走する日に豹変した彼を見て、人としてあるための境界を完全に踏み越えた事を理解した。
周りの人間がどれだけ尽くそうと彼の中から黒い感情が消えることはない。
だからこそ、今の時点で利用価値を持たぬ特別課外活動部と湊が手を結ぶことはない確信があったが、湊のことを知らぬ理は呆れ気味に雑な作戦だと問題を指摘した。
「そうなると、あいつが一人出てくるだけで戦況は随分変わるんじゃないか？　僕と姉さんならともかく、お前たちじゃアレを止めきれないだろ？」
「ええ、確かに。ですが、彼が力を貸すとすれば混成メンバーにはなりづらく、片方はミナトをリーダーとした第二部隊になるでしょう」
力を貸すと言うよりは作業の分担。敵が二体いるのだから、互いに不干渉という前提の元で別々の敵に当たることは考えられる。
そのときのチーム分けはチドリたちだけが湊側につくと思われ、元の特別課外活動部で一つのチームになるに違いない。
「ミナトがリーダーでいてくれるなら、そちらには誰か一人をメッセンジャーとして送れば合流させる事は防げるかと」
「彼が助けに向かうとは思わないのかい？」
「ミナトが桐条側に仲間意識を持つとは思えませんので」
「なるほどね。じゃあ、君たちは本来の特別課外活動部のメンバーを相手に戦うのか」
合流すれば厄介な追加戦力を湊が連れて行ってくれるのならば、人数で囮ながらも個人の強さで勝るストレガたちにも勝機はある。
何せ相手にはアルカナシャドウを狩るという目的があるのだ。

普通にぶつかっても厄介な相手と戦おうというのに、背後から邪魔されれば目的達成のために一部の者をストレガの足止めに割かねばならない。
「もし我々と相手が遭遇すれば、主戦力はアルカナシャドウを倒すため先に進み、何人かが足止めとして残ると思われます。その段階になればこちらの作戦は成功と言って良いでしょう。日常に浸りきった相手は弱点も多く、正々堂々と戦わずとも戦力を削ぐことは出来るのですから」
アルカナシャドウは誰かが倒す必要があるので、役目を負って貰うためにもストレガはここで全力を出して相手を狩ろうとは思っていない。
だが、天然のペルソナ使いだけあって相手の成長速度は目を見張るものがある。
このまま成長されると次の段階に移る際に障害となり得る可能性があるため、出来れば一人か二人は数を減らしておきたかった。
いくら湊と接触したと言っても相手は学生でしかない。裏の仕事をしている者たちの怖さを知る訳もないので、タカヤはさして難しい仕事ではないだろうと薄く笑った。

9月5日（土）
影時間――巌戸台分寮・作戦室
一ヶ月ぶりの満月がやって来た。前回はストレガの妨害があってアルカナシャドウを倒せず、この一ヶ月でかなりの無気力症患者が生まれてしまっていた。
今回も敵を漏らせば病院に収容できない数の無気力症患者が生まれる恐れがあり、さらに言えば先月倒す予定だったアルカナシャドウの被害者が完全には回復しなくなるかもしれない。
無気力症になっても一、二ヶ月ならば完治すると見られているが、それも確かではないので、七歌たちは先月倒す予定だった方を優先的に倒すと決め、美鶴と七歌が中心となって改めて今日の作戦の確認を行なっていた。

「湾岸部側は反応の大きさから二体、ポロニアンモール側は一体だと思われる。先月討ち逃した方はさらに人の心を食べて成長しているだろう」
「敵の数と強さから湾岸部側に戦力を多く割きます。チドリたちも今回は参加してくれるから、私と先輩たち以外は全員そっちに向かってもらう」
事前に軽くは打ち合わせをしていたものの、やはり四人でアルカナシャドウを倒しに向かうと聞いて一部の者たちは心配そうな顔をする。
確かに四月や五月の敵は実質四人以下で戦い勝ってはいるが、アルカナシャドウは段々と強くなっているのだ。
いくら戦い慣れているメンバーで固めているといっても、心配になってしまうのは無理もなかった。
「あー、七歌っちさぁ。もし、そっちにストレガが出たらどうするんだ？」
「そのときはストレガの相手をするよ。こっちは一体だし一月目だから猶予はあるからね。まぁ、だからこそ逆にそっちに現われたときが大変なんだけどさ」
確かにアルカナシャドウを倒すことは重要だが、それで自分たちがやられてしまっては意味がない。
ストレガが妨害に現われればシャドウを諦めて応戦し、来月にでも倒すことにするよと七歌は素直に答えた。
彼女のこういった臨機応変さは、目的に拘りがちなメンバーの多いこのチームにとって稀少であり、だからこそ彼女が全体の指揮を任されている理由と言えた。
事前に対応を考えている彼女が一緒に行くのであれば、人数が少なくても問題はなさそうだと順平も納得した顔になり、続けてもし湾岸部の方にストレガが現われたらどうするかという話に移る。
「問題はこっちに来たときだよな。一応、指揮は風花が執ってくれる予定だけど、流石に足止めとシャドウ討伐の二ヶ所をリアルタイムは難しいだろうし」

リーダーである七歌が美鶴たちと一緒に行ってしまうので、もう一つの現場指揮官にはバックアップを普段から担当している風花が選ばれた。
彼女は戦闘には参加しないので、慣れない部分があっても余裕を持って指示を飛ばす事が出来るだろうと七歌と美鶴が判断しての人選である。
まぁ、瞬間的な指示は戦闘慣れしているチドリやラビリスも出来るため、そういった者が複数いるのなら戦闘自体は行えるものと思われる。
だが、実際の戦闘員が七人しかいない状態で、もしもストレガが現われれば状況はかなり厳しくなる。
ストレガは全員が戦闘力を有するチームだ。普段は活動に参加しないマリアのような者もいるが、彼女を除いても人数は五人とそれほど差がない。
対人戦闘どころか殺人にも慣れている者たちを相手に、たらふく人の心を食べて強化されたアルカナシャドウ二体を倒しに向かう余裕などないだろう。
シャドウの居場所は変わっておらず、それはつまりストレガにも所在がバレているということ。
本当に邪魔をするつもりならば、彼らは迷いなく湾岸部の方に戦力を集中させて来るに違いない。
ストレガたちは風花やチドリと同じように索敵能力を持った者が反応を消していて見つからず、本当に現場に行ってみない事にはいるかどうかも分からないため、改めて考えてみると不安になってきた。
「うーむ、ストレガがいなけりゃ簡単なんだけどなぁ。ポロニアンモールの方は捨てて私たちも湾岸部に向かうべきか」
「ああ、流石に今回を逃せば甚大な被害が出る可能性がある。もしもを考えるとそちらの方が良いかもしれないな……」
今日の作戦において、湾岸部のシャドウを倒すことは絶対条件であり、敵が来たとしても成し遂げなければならないことだ。
それを思えば七歌は当初の予定を変更し、湾岸部の方へ戦力を集中

させた方が良いかもしれないと考え直した。
敵がいながらそれを見過ごす事になると聞いた真田は複雑そうな顔をしたが、彼も優先順位は把握しているので文句は言わない。
ただ、それでもやはり完全には納得がいかないのか、真田以外の者もどうするか悩んでいると、話し合っている子どもたちを後ろから眺めていた栗原が何かに気付いたように入口の方を向いた。
「良いタイミングで来てくれたね」
栗原の言葉に反応して他の者たちも入口の方へと振り返る。
すると、そこには両眼を金色に輝かせた湊が立っていた。
今まで散々連絡しようとしても一切繋がらなかった相手の突然の登場にメンバーたちは驚く。
ここは桐条側のペルソナ使いたちの拠点だ。正体がばれる前ならばともかく、この地への残留を望んだことで七歌たちが明確に敵対を選んでから、彼がわざわざここへ足を運ぶ理由が分からない。
もしや、湊の主張を肯定し味方になると言っておきながら、今も七歌たちに協力しようとしているチドリたちを連れ戻しに来たのか。
そうなれば、ただでさえ人数が足りていない戦力がさらに減ることになる。
彼がここへやってきた目的が分からず、静かに場を緊張が包んでゆくと、部屋の中央のテーブルまでやってきた湊がチドリたちを見て口を開いた。
「……チドリ、真田はどうした？」
「今日は自分の家にいるわ。私たちが戦闘に参加するから桔梗組に預けることも出来なかったし」
「それならそれでここへ連れてきたら良かっただろ」
「本人が自宅でいいって言ったのよ。敵に襲われたならここのセキュリティも信用出来ないからって」
本来、チドリやラビリスには満月で凶暴化するシャドウから美紀を守るという仕事がある。
湊はここ最近連絡もつかず行方不明になっていたが、彼女たちが友人と結んだ約束を守っていると思っていただけに、ここに美紀の姿が

なかったことが意外だったようだ。
ただ、湊と特別課外活動部の対立以降、彼女は自分の兄を含めた特別課外活動部のメンバーらと少し気まずくなっていたので、巌戸台分寮のセキュリティが信用出来ないというのは、会うのを避けるための嘘の可能性もあった。
チドリからそういった話を聞いた湊は呆れた様子で短く嘆息すると、チドリやラビリスのことを見つめて言葉を続ける。
「危険だから護衛していたんだろうに。一人もつかずにいさせるなんて無責任なやつらだ」
「っ、そもそも八雲と連絡がつかないから、こうやって不足してる戦力を補うために戦おうとしてるんじゃない！」
今度の満月は計三体のアルカナシャドウを相手に二ヶ所で作戦行動を取る必要があった。
さらにタカヤたちストレガが出てきて妨害してくる可能性もあるので、どうやっても特別課外活動部だけでは手が足りない。
そこでチドリたちは、影時間を消すという目的は一緒だからと助っ人契約を延長して、今日も一緒に作戦に参加するつもりでいたのだ。
おかげで美紀の護衛につけなくなってしまったが、相手も護衛につけない理由には納得していたので、急に現われた者に好き勝手言われる筋合いはないとチドリは言い返す。
けれど、声を荒げて主張してきたチドリを冷めた目で見ていた湊は、そんなに連絡が取りたければあらゆる手段を試せば良かっただろうにと漏らす。
「仕事用のメールアドレスに連絡してくれれば読んださ。栗原さんにもそれで呼ばれたから話を聞きにきたしな」
「まぁ、縁を切っててもビジネスの付き合いは可能かと思ってね。半分賭けだったが上手くいってよかったよ」
チドリたちはプライベートの連絡先やＥＰ社の人間を通じて湊と連絡を取ろうとしていた。
だが、本人がプライベートで呼ばれても反応しないのであれば、部下たちが勝手に伝言するなど出来るはずがなかった。

その辺りを理解して栗原は仕事用のアドレスにメールを送り、今日の影時間にチドリたちを含めたメンバーがどう動くか話し合うだろうから来るといいと伝えた訳だが、どうして家族にそんな方法で連絡しないといけないのかとチドリは不満げだ。

だが、そんな個人の感情など知ったことではないとばかりに、湊はアイギスに視線を向けると話し合いの結果を尋ねた。

「アイギス、お前たちがどう動く予定なのか教えてくれ」

「はい。当初の予定ではポロニアンモールに七歌さんを含めた四名が赴き、残りのメンバーで湾岸部の二体を叩くつもりでした。ですが、湾岸部はストレガが妨害に現われる可能性が高く、足止めをしながらシャドウを倒すのは困難ではと話していたところです」

味方とも言えない相手に自分たちの作戦をバラして良いはずがない。

そう思って美鶴などがアイギスを止めようとするも、アイギスは一切躊躇うことなく全て湊に話してしまった。

まぁ、彼が敵対するつもりで掛かってくれば止められないので、どちらにせよ隠す意味も薄かったことで諦めるが、七歌たちの動きを把握した彼がどう反応するか見ていれば、湊はポケットに手を入れたまま背を向け入口の方へ進んでゆく。

「あ、湊君ってばどこ行くんよ?」

話を聞いておいて無反応とはどういう事なのか。そういった意味も込めつつラビリスがどこへ行くのか尋ねれば、湊は普段通りの何にも興味のない無表情で言葉を返してきた。

「……お前らの動きは把握したから、こっちはこっちで勝手に動くだけだ。湾岸部には来なくていい。あの程度ならすぐ終わる」

既に影時間になっている以上、ここでいつまでも時間を浪費してはいられない。

そう言いたげに歩き出した湊は、このまま一人で湾岸部の敵を仕留めてくるとだけ言い残して出て行こうとする。

確かに彼の実力を持ってすれば余裕かもしれないが、自分たちが悩んでいたことをあっさりと解決されると複雑な気分になる。

彼は別に助けてくれる訳でも、共闘してくれる訳でもない。ただそこに邪魔な敵がいるから相手を殺しに向かうだけだ。
突然やってきて蹂躙して去って行く。そんな天災のような存在に狙われた者には同情を禁じ得ないが、今回は七歌たちにとってプラスに働くので無問題。
出て行く彼を追いながら、七歌は彼に着いていきたい者は自由にしろと告げた結果、チドリたちにアイギスを加えたメンバーだけが湊の方へ向かい。残りメンバーでポロニアンモールへ向かうことが決まった。
厄介な方に湊が向かう以上そちらに関しての心配は消える。
あとは自分たちは自分たちの仕事をするだけだと、七歌たちは急いでポロニアンモールへと向かった。

――港区巌戸台
七歌たちがそれぞれの目的を目指して寮を出た頃、巌戸台のとある住宅街に一人の男の姿があった。
まだ夏の暑さの残る時期だというのに、ダボダボのパーカーとカーゴパンツを身に着けた男は、暇そうに手元でナイフを遊ばせながら連絡を待っていた。
《カズキ、動いたよ》
「ちっ、やっとか……」
突然聞こえてきた仲間からの通信に、どれだけ待たせるんだと舌打ちしながら彼は文句を言う。
自分もペルソナ使いの敵と戦いたかったというのに、適材適所というやつで裏方へと回されたのが大層不満だったようだ。
だが、確かにタカヤやジンに同じ事が出来るとは思えず、敵戦力を減らすという目的がある以上はカズキも仕事をしなければならない。
生き物の気配がしない静かな住宅街で移動を始めた彼に、メノウが通信で湊が湾岸部の方へ向かい、特別課外活動部がポロニアンモールにそれぞれ向かったことを伝えた
「そうか。ンじゃ、こっちの仕事も無駄にならねェなら待った甲斐も

あったな」
《うん。ミナト君が来たのは予想外だったけど、タカヤの読み通りに別行動みたい。ボクらはこのまま桐条の方へ行くからそっちもよろしく》
「おう、分かった」
通信が切れるとカズキは再び手に持ったナイフを投げて遊びながら進んでゆく。
先月はタカヤたちが特別課外活動部へ挨拶をしている間に、裏で幾月殺しの偽装工作をしていたし。今回もそれと同じ要領でやるだけだ。
彼が進む先には一軒の民家が見えてきて、表札に書かれた〝真田〟の文字を確認した彼は口元を歪める。
本当なら彼らが去った後に厳戸台分寮へ向かい。今度は栗原を刺し殺してくる予定だったのだが、今日はどういう訳か適性だけ持っているメンバーの妹が自宅にいた。
住所も相手が適性だけは持っているという事も、全て幾月から教えて貰ったことだが、気付くのが遅れるであろうそちらを狙う方が容易く、またメンバーたちにも精神的なダメージを与えられるのではと標的が変更された。
「ちっ、やっぱ鍵掛かってンな」
玄関の扉に手をかけても扉は開かず、ピッキングスキルなど持っていないカズキは面倒臭いなと頭を掻く。
相手がいるのは分かっている。そこは索敵能力を持っているメノウにも確認して貰ったので確実だ。
ならば、この扉さえ突破すれば適性しか持たない相手などどうにでもなるので、すぐに突破してしまおうと召喚器を抜いた。
「ぶっ壊せ、モーモス」
カズキが引き金を引けば、その場にボロ布を纏った痩せぎすな男性型ペルソナが現われる。
召喚されたモーモスは手に持った鎌を大きく振りかぶると、玄関の扉に向かってそれを振り下ろした。

「よーし、土足で邪魔すンぞ」
音を立てて崩れた扉の残骸を踏みながら侵入してゆくカズキ。
上で物音がした事から相手も扉が壊れる音で目覚めているのだろう。
別に抵抗しても構わないが、走って逃げようと考えているのなら無謀にもほどがある。
そんな事を考えながら、カズキは美紀のいる二階への階段をのぼっていった。

第二百六十話　正義と戦車

影時間――辰巳ポートアイランド

栗原の依頼によって現われた湊のおかげで、アイギスを除くメンバーで行動出来るようになった七歌たちは、すぐにポロニアンモールのある辰巳ポートアイランドへ向かっていた。

目的地までの距離を考えれば七歌たちの方が先に着く。人数も十分に揃っているので、余程の事がない限りは自分たちの方が先に倒せるのではないかと見ている。

七歌たちは湊が素面の状態で全力を出しているところをまだ見たことがない。

前回の満月の日に戦ったときは、相手はほとんど足を止めていたし、ペルソナだって七歌たちがペルソナを出した際に迎撃目的でしか使っていなかった。

また、アルカナシャドウ討伐に失敗した尻拭いのためか、一般シャドウたちを狩り続けていたときは鬼気迫る様子で戦ってはいたものの、精神が変調していて冷静とは言い難く本来の実力が分からない。

先日の超巨大シャドウとの戦いは、天田や順平が言っていたように怪獣大戦としか思えない規模で参考にならず、やはり湊の本来の戦い方や実力を知ることは出来なかった。

鬼として戦うのか、それとも裏の仕事で培った技術で戦うのか。勝てないと理解しながらも、長年、鬼の強さに憧れていた七歌は自分の役目は分かっているけれどと本音を溢す。

「正直、向こうの戦い方を見たい気持ちもあったんですけどね」

「ああ。君が着いてゆくなら好きにしろと言っていたのを聞いて、吉野たちと共にアイギスが彼を追っていくとき、私も彼がどのように戦うのか見たいと思ったさ」

不気味なほど巨大な月に照らされた夜道を駆けながら、美鶴は気持ちは分かるぞと七歌に笑いかける。

今でこそヒーホーが無事に持ち主の許に戻っていたと分かったが、それまで七歌と美鶴はヒーホーの戦い方を参考に鍛練を積んでいた。

七歌にはワイルドの能力があったので、ペルソナを変えれば全ての属性を扱うことが出来たが、それぞれのスキルの使い方の練度を上げることや、一つの属性を極めようとする事は無駄ではない。
氷結属性に関しては共に戦うことで、ヒーホーがその可能性を示してくれていたのだ。
強くなると決めれば模倣から始まり、その中で自分たちのスキルコントロールの得手不得手を把握して、自分たちの長所を活かすか弱点を補うかを考える事が出来た。
おかげで彼女たちはヒーホーが消える前よりも柔軟な発想でスキルを扱えるようになったが、ヒーホーの召喚者である湊ならば、さらに高度なペルソナ戦闘を行えると思われる。
彼は七歌と同じワイルドの能力者だ。オマケにワイルド能力者でも彼以外には扱えない複数同士召喚という離れ業まで可能ときている。
そんな彼の戦い方をみれば、すごすぎて真似できないという事もあるだろうが、自分の戦いに取り入れられる部分もきっとあるに違いない。
遙かな実力者の戦闘は見ているだけで学べるものが多い。それ故、今後のためにも誰かが彼の戦いを見ておいた方が良いとは思ったが、こちらも人数を確保出来ただけで安心できるほどではなかったと同行しなかった理由を美鶴は話す。
「確かに彼の戦い方は気になったが、アルカナシャドウは新たに現われるものの方が強くなる。流石に二ヶ月間も力を蓄えたあちらには及ばぬだろうが、一体と言えど決して油断は出来ない」
反応の規模からポロニアンモールの敵が一体なのは確実だ。風花だけでなくチドリも同じように一体と認識しており、さらに湊も自分は二体の方へ行くと言っていた。
ならば、これから七歌たちが向かう先にいるのは一体のアルカナシャドウに違いない。
二ヶ月間も人の心を食べた湾岸部の敵には及ばずとも、これまで現われたアルカナシャドウより強力なのは確実。

そんな敵と戦うなら戦力は多いほどいい。なにせ、湊の裏社会での顔を知っている者たちの妨害も待っているだろうから。
「彼と面識があるのならやつらも実力を知っているはず。となれば、人数が多くても実力で劣る我々を狙って」
「どうやら早速のようだ。俺とシンジが足止めする。九頭龍たちは先を急げ」
美鶴が話している途中で真田が呆れたように呟く。
ポロニアンモールまであと少し。遠くにその建物が見えているというのに、海沿いの道を進んで視線を正面に向ければストレガが既に待ち構えていた。
相手の人数は三人。タカヤ、ジン、そして大型ペルソナの使い手であるスミレ。
ストレガと面識のあった荒垣はスミレの事も多少は知っているが、真田たちにすれば以前一緒にいたマリアとは別の少女がメンバーにいたのかという驚きの方が強い。
だが、相手の実力は分からなくても、敵の足止めをして残りのメンバーがシャドウを倒さなければならない事に変わりはない。
少しの距離を開けて対峙し、どのタイミングで七歌たちを先に行かせようかと真田が考えていれば、立ち止まったメンバーたちを見て薄い笑みを浮かべたタカヤが口を開いた。
「先へ行きたいのならどうぞ。何名かは残っていただきますが、我々の相手をしていただければ残りの方はシャドウの許へ向かって貰って構いません」
「お前たちはシャドウを倒されると困るんじゃないのか？」
「ええ、確かに。ですが、大型シャドウはまだ何体か残っています。来月か、さらに次か。そのどこかで止めれば良いのですから、今日はそちらの戦力を削らせていただこうかと」
この人数を相手にすれば流石にタカヤたちも捌ききる事は出来ない。
ならば、アルカナシャドウは刑死者までいるのだから、今回は目的を絞って足止めに残った者たちを処理した方が確実である。

余裕すら感じさせる様子でそう話すタカヤの言葉を聞いた者たちは、やはり人の殺すことに慣れている者たちだけあって、確実性を重視した慎重さを持つ面倒な相手だと警戒を強めた。
だが、通してくれるというのならば七歌たちにとっても好都合ではある。相手の人数が三人なので、真田と荒垣の他に一人か二人残れば大丈夫なはず。
そう考えて七歌が誰に残って貰うべきかと考えようとしたとき、自身の身長よりも長い武器を手にした少年が一歩前に出た。
「僕も真田先輩たちと一緒に残ります。三人いればお互いをかばい合えますから」
「相手は裏社会の住人だよ。大丈夫？」
「はい。余裕とは言えませんけど、あいつらより強い人を知ってるんで」
心配して七歌が声をかければ、天田はプレッシャーは感じていないと笑う。
一月前に天田は裏社会の住人と交戦し敗北した。自分より遙かに強いと思っていた仲間たちでも相手にならず、特別課外活動部の敗北と言っていいほどの惨敗を喫したのだ。
確かに敵の戦い方は正々堂々とは言えないものであったが、ルールなど存在しない武器を持った戦いで卑怯もなにもない。
時間が経ったから今だからこそ、天田は自分たちが弱くて負けたという事実を認めるだけの冷静さを持てていた。
無論、このままリベンジもせずにいられるほど大人ではないが、だからこそ湊に劣る実力しか持たない敵ならば、どうにか普段通りの精神状態で戦うだけの余裕はあった。
「三人とも、どっちが先に応援に駆けつけるか競争だからね！」
試合や喧嘩で対人戦に慣れた二人に加え、そんな天田も残るのなら相手を倒せずとも足止めは出来るはず。七歌たちも急いでシャドウを倒してから戻ってくるので、ここに残ると決めた男たちに激励を送って先へ進んだ。
――湾岸部

七歌たちが走って現場へ向かっている頃、湊たちも目的地に近い場所まで辿り着いていた。
ポケットに手を入れたまま歩く湊は、エルゴ研脱走後にストレガたちと再会したのはこの辺りだったなと少し懐かしい気持ちになる。
他の者たちはここがそんな思い出の地であることなど知らないため、何故自分が転入したのに学校へ来ないのだとアイギスが不満を伝えていた。
「八雲さん、聞いていますか？　あなたの籍はまだ学校に残っており、学生の本分として登校の義務があるのであります」
「……それで？」
「今ならわたしと〝放課後デート〟というものも可能でお得です」
「……なるほど」
何がお得なのかは分からないが、アイギスは自信満々に学校へ通うことでのメリットを語ってくる。
授業を聞いて勉強すれば将来役に立つ、学校で得た友達は一生の財産になる、そういった具体性のない青臭い言葉ではなく、アイギスは自分と放課後に遊べることだけを告げてきた。
別に放課後でなくとも湊が誘えば彼女は来るだろうが、彼女が口にした〝放課後デート〟なる単語は中々に魅力的な響きを持っている。
学校で彼女が放課後デートの相手を募集すれば、男子生徒は勿論、女子やもしかすれば教師まで立候補してくる可能性もあるのだ。
そんな相手が自分はあなたとしかデートするつもりはありませんと言ってくれれば、如何に堅物の男でも少しはぐらりときて心惹かれるものだ。
だが、彼女の話に関心を持っていない青年は言葉を聞き流しており、他の男子たちが血涙を流して羨むデートの誘いを受けなかった。
「別に学校なんてどこのだっていい。それより今は仕事が忙しいんだ。進めてる研究も複数あるし、勝手に籍を残してようと通う気はない」
湊の言葉を聞いたアイギスは不満そうにムスッとした顔になる。
しかし、いくら彼女が不満そうにしても、湊本人は既に退学したつ

もりでいたのだ。
学校から事情を聞かれた桜が勝手に保留にしていただけで、青年は学校を止めることに対して欠片も未練がない。
以前、ずっと学校に通いたいと思っていたラビリスにすれば、あんなにも楽しくて得る物の多い場所を簡単に離れられる神経が分からないが、彼の興味や執着する対象がとても極端だと分かっているチドリは呆れつつも話題をシャドウの方へ修正してゆく。
「それより、大丈夫なの？　この先にいるアルカナシャドウは二ヶ月分の力を持ってるんでしょ？」
風花と一緒に索敵した事でチドリのこの先にいる敵の強さは理解している。
一体の強さは死神に劣るものの、重なる二つの反応の合計値ならば良い勝負をしているように思う。
そんな敵と洞窟のような狭い場所で戦うなど無謀でしかない。
敵の攻撃から逃げるにも、反対に敵に攻撃するにも気を遣う必要があるのだ。
アルカナシャドウが二ヶ月も人の心を食べ続けるとどうなるのかという貴重なサンプルではあるが、それを倒す必要があるとなればチドリも心配せずにはいられなかった。
話しているうちに洞窟の入口にも到着し、先ほどのチドリの言葉を受けて湊がどう反応するかを他の者が待てば、ジッと入口を見ていた湊が視線を上にずらして山を指さした。。
「……極論を言えば爆薬を使って山を崩し、天井の岩で圧殺すれば一般人でも倒せる」
「けど、ここって旧陸軍の基地やった場所やろ？　貴重な遺跡やん」
「興味ないな。ただのカビ臭い洞窟だろ」
いくら強かろうが相手は別に不死性を持った化け物ではない。
重力や空気の抵抗など敵も地球の物理法則に従っているのだから、シャドウでもどうにもならない自然災害規模の力をぶつければ一般人でも勝てる可能性はある。
幸いなことに敵がいるのは下りの傾斜がある洞窟の最深部。なら

ば、上の山を崩してしまえば逃げることも出来ず、シャドウたちは揃って岩の下敷きになるに違いない。
　他の者からすれば大変貴重な遺跡と呼べる場所であろうと、彼にとってはカビ臭いだけの洞窟に過ぎないようで、他の者が彼の言葉に呆れている間に湊が先頭になって入ってゆく。
「まぁ、少し調べはしたんだ。ここは基地と言っても防衛のための施設じゃない。薬や兵器の生産に修理や開発を行なっていた場所だ」
「技術部門だったという事ですか？」
「まぁそうだな。そういった工場を兼ねた基地は都市周辺にいくつもあった。だが、ここは立地からも分かるように回りから見えづらい場所にある。つまり、敵に知られたくないものを作っていたんだ」
　海に近い場所ではあるが入口は山に囲まれたように奥まっており、内部を掘って基地は作られているので上空からも気付かれない。
　戦艦などならば作るために必要な設備の時点で作られる戦艦のサイズが分かるため、自分たちの作る兵器を知られないよう硬い山肌を掘って基地を作ったに違いない。
　話を聞いていたアイギスも、自分たちの新兵器の情報が漏れないことのメリットは理解出来たが、ここで何を作っていたかは想像がつかない。
　カビ臭い洞窟を進み、白骨化した遺体などを横目に見ながら奥へと進む途中、この施設について調べたなら知っているに違いないとアイギスは青年に尋ねた。
「戦時中に敵に知られないようにしていた意味は分かりますが、その知られたくないものとは？」
「戦闘車輌の新型。いや、改良型と言った方が正しいか。資料が正しければ、ここでは三式中戦車チヌの改良型が作られていたらしい」
　三式中戦車チヌとは第二次世界大戦後期に開発された旧日本軍の戦車の名だ。
　敵の戦力に対抗するため、早期に開発と量産を目指して作られた経緯があるが、話している湊は既に旧世代となった兵器に興味がないのか簡単に説明して言葉を切った。

けれど、アイギスは自分が元は人型戦車だったからか関心を持ち、何やら興味深そうにうんうんと頷いて見せている。
「三式ですか。七式のわたしや五式の姉さんの先輩でありますね」
「……俺の名前は人型戦略兵装二式だが？」
「八雲さんは八なのでわたしの次です。チドリさんは千なのでもっと後です」
確かにアイギスたち対シャドウ兵装シリーズも、最初は戦闘車輌という事で戦車の形をしていた。
しかし、シャドウを倒すにはペルソナが必要と分かり、四式から人型へと方向転換し、ラビリスたち五式から黄昏の羽根を積むようになった経緯がある。
その事を思えば開発元が異なっていても、戦闘車輌である三式中戦車もアイギスたちの先輩にあたるのかもしれない。
だが、彼女たちのように兵器としての名前を持っている湊にすれば、開発元が区別しやすいようにナンバリングしているだけで、ここに置かれている三式中戦車改とアイギスたちとは何の関係もないと考えていた。
それは名前に数字が入っているだけで話題に出されたチドリも同じようで、ただでさえ蒸し暑いというのに空気が澱んでいることで余計に不快そうにしながら、こんな場所に保管されていた戦車の話をしてきたのには理由があるんだろうと青年に聞いた。
「数字なんて別にいいけど、それじゃあ今回のシャドウがここにいるのって」
「ああ、完成品かどうか分からないが、多分乗っ取られてるだろうな」
薄暗い洞窟を進み続けると正面に鉄製の大きな扉が見えてきた。
そこを抜ければ実際に様々な作業をしていた場所に出られるに違いない。
だが、ここに置かれていた戦車が乗っ取られている可能性が高いと聞いたことにより、先頭を行く湊以外のメンバーは少し距離を開けて様子を見る。
湊ならばどんな相手にも対応出来るが、他の者は流石に戦車相手に

余裕の立ち回りが可能という訳ではない。
よって、先に湊が入っても戦闘音が聞こえなかった事で中を覗いてみれば、まるで舞台のせりのようにリフトで下から上がってきたシャドウが現われていた。
「なっ、こんな大きな戦車やなんて……」
「はい。通常の戦車の二倍から三倍はありそうです」
対シャドウ兵器としてインストールされていた兵器の知識を参考に、ラビリスとアイギスは現われたシャドウの大きさが戦車としては規格外だと指摘する。
元となった三式中戦車はかなり大きめに言って、全長六メートル、幅三メートル、高さ三メートルにしかならないのだ。
正確な数値で言えばそれよりも小さいというのに、現われたシャドウはそれらの数値が倍以上になった巨体をしている。
元の戦車が大きかったのか、それとも二ヶ月分溜めた力でここまで膨れあがったのか。ただ見ただけでは理由は分からないにしろ、湊たちはこのシャドウをここで倒さなければならない。
想像以上に大きな相手を見てアイギスたちが怯んでいれば、先に部屋に入って敵を見つめていた湊がマフラーから大剣を取り出した。
「……ああ、一つ言い忘れていたが、俺はこういった戦車が嫌いなんだ。ＥＰ社と戦争していたときに、生身の俺に何度も砲弾を喰らわせてきたせいでな」
言い終わると同時、湊は大剣を片手で持ったまま走り出す。
その場にいれば延長線上にチドリたちがいたため、湊は反時計回りに移動しつつシャドウとの距離を詰める。
武器を持った人間を認識したシャドウも接近しつつある湊に狙いを定め、砲身を回転させると爆音を立てながら砲弾を放った。
一発、二発、三発。そんな機能など本来ないというのに、戦車型のシャドウは敵を屠らんと連続で砲弾を撃ってゆく。
シャドウの撃った砲弾は湊へと近付いてゆくが、走り続けている湊の方が砲弾よりも速く、既に彼が通り過ぎ去った場所に着弾して爆発と炎を生んだ。

「それじゃあ死んでやれないなぁっ！」
どこを狙っているんだと獰猛に口元を歪め、敵の周りを走って徐々に近付いていた湊が切り返し一気に距離を詰める。
シャドウにすれば横移動していた相手が突然正面から突っ込んできたようなものであり、入口のところで見ていたチドリたちも何故そんな行動に出たのかが分からない。
案の定、湊に狙いをつけた敵が再び砲弾を放ち、それは真っ直ぐ湊に向かって飛んでゆく。
三十メートルも離れていない場所ならば、撃ってから砲弾が当たるまで二秒も掛からない。
炎の尾を引きながら砲弾が青年へと向かってゆく光景がスローモーションのように映り、少女たちが声をあげようとしたとき、敵に向かって進んでいた青年は砲弾が向かってくると同時に僅かに身を屈め、走りながら大剣を後ろに振って爆発を起こし加速した。
元々人間としては驚異的な速度で走っていながら、屈んで避けた砲弾を切って背後に起こした爆風を利用して加速した湊は、そのまま敵の下に潜り込み、敵の腹を切りつけながら走り抜けてゆく。
通常の戦車ならばこんなことは出来ないが、シャドウと融合したせいか相手は四つのキャタピラで四足歩行の動物のような形になっており、それぞれの足を立てているせいで身体の下ががら空きになっていた。
湊が切りつけた場所からは金属同士がぶつかったことで火花が出ていたが、いくら頑丈な身体でも自分以上の硬度を持つ剣で切られればダメージを負う。
砲弾を避けられたこと、さらに切られてダメージを受けたこと、それらが重なって激昂したのかシャドウは激しく身体を震わせると砲台部分が分離して二体になった。
「……なるほど、三式中戦車は九〇式７５ｍｍ砲を乗せたような構造だったな」
元となった戦車は別の兵器だった野砲を砲台として採用し、それを走るための車輌部分に乗せたような構造をしていた。

実際は戦車として運用するために改造もしてそのままではないが、走れなくなっても撃つことは出来るし、撃てなくなっても走ることは出来る等、砲台と車輌は別々に運用することは可能であった。
目の前の敵は一体でありながら二体分の反応を出していたため、その理由をようやく理解した湊は、シャドウ同士で合体することも出来るのかと感心しつつ、怒りからキャタピラとは思えぬ速度で走ってくる戦車〝チャリオッツ〟と空を飛びながら狙ってくる正義〝ジャスティス〟の位置を把握しながら走り続ける。
追ってくるチャリオッツが湊の行動の選択肢を奪い、空から狙ってきている砲撃で逃げるルートを絞る。
合体していただけあって上手いチームワークを発揮しているが、湊も湊で戦車とは戦い慣れている。
後ろからチャリオッツが猛スピードを追い上げてくれれば、湊はその場で振り返って敵の左前のキャタピラに向かって剣を投げた。
「……間抜けが」
猛スピードで走っていた状態で硬い大剣を踏んでしまうと、チャリオッツは左前のキャタピラだけ空回りを起こし、そのままスリップしてあらぬ方向へと行ってしまう。
その先には基地の壁が存在したことで、猛スピードのまま相手は壁に突っ込んでいったが、追って来ていた者をやり過ごした湊は、投げた剣を拾うと敵が動揺している間に今度はジャスティスを狙って投げつけた。
ヒュン、と甲高い風斬り音をさせながら飛んだ大剣は、動揺しながら撃とうとしていた敵の持っている砲身に真っ直ぐ入り込む。
直後、撃とうとした砲弾と剣がぶつかったのか爆発を起こし、砲身を持っていたジャスティスを黒煙で完全に飲み込んでいった。
「基本的なステータスは上がっても知能は変わらずか」
使っていた大剣を投げてしまった事で、壁にぶつかっていたチャリオッツの方へ向かいだした湊は新たな大剣をマフラーから取り出す。
入口から動かず観戦していたラビリスはその剣を見て驚愕し、対シャドウ兵装用の武器を人間が扱えるのかと不安を覚えた。

そう。彼が新たに取り出した武器は、加速器が搭載された五式シリーズ用の多変機構付きの大剣だったのだ。
大剣を取り出した湊は身体の横で刃を寝かせた状態で構えるなり、武器の加速器を利用して一気に速度に乗ってチャリオッツの身体に向けて刃を振るった。
「チッ……九尾切り丸ほどの強度はないか」
ガキンッ、と音をさせて敵にぶつかった刃が弾かれ、湊は面倒臭そうに己の持つ武器を見つめる。
稀少なレアメタルを惜しげもなく使って製作されたオーパーツたる九尾切り丸と異なり、五式シリーズ用の武器は姉妹機と戦うことを前提にした強度はあるが、実験場所だった戦闘用チャンバーの壁や床を破壊出来ないレベルには治まっている。
おかげで敵にダメージを通すのも手間だと苛立った様子の湊は、振り始めの瞬間にだけ加速器を起動し、何度も何度も何度も何度も武器を振り続けた。
自分よりも遙かに巨大な敵を戦うというのに、弾かれる剣を振るって意味があるのかと見ている者たちは考える。
しかし、剣を振って弾かれるという一連の流れを湊が繰り返してゆくと、徐々に弾かれた勢いを利用して再び剣を振るうようになっていき、動作の無駄が排除されて加速を続ける。
敵の身体を切りつける度に火花が散ることもあって、加速を続けて目で追いきれなくなった湊の剣は小さな嵐のようになっていた。
「何だ、この程度か。自慢の鎧も大したことないなぁ！」
そして、ついに青年の剣がチャリオッツの鋼鉄の鎧を突破し始める。
壁にぶつかってダウンしていたチャリオッツの脇腹を斬り続けていれば、あまりに斬られすぎて一部が真っ赤になるほど熱を持ち、そこを斬ればシャドウの本体にもダメージが通ってゆく。
これまで受けていなかったダメージを喰らったことでチャリオッツも目覚めたようだが、身体を起こして逃げようにも怒濤のように攻撃を浴びせられているせいで動くことが出来ない。

敵も弱い訳ではないのだ。むしろ、攻略の糸口を掴めなければ、持ち前のタフネスもあって苦戦は必至になる相手と言える。
けれど、数多の敵と戦い続けてきた経験を持つ彼が相手では、少々珍しい程度の能力はすぐに攻略されてしまい。今のように一方的な展開が待っているのだ。
斬られ続けた箇所からチャリオッツが黒い靄を漏らしはじめ、彼の戦いを見ていた者たちは終わりが近いことを悟る。
だが、チドリたちはこの場にまだもう一体シャドウが残っていることを忘れていた。
「っ、八雲！　危ない！」
九尾切り丸を砲身に投げ入れられた事で暴発し、そのまま部屋の隅に不時着していたジャスティスがいつの間にか起き上がっていた。
内部で爆発したせいで砲身は裂けてしまっているが、砲弾自体は自分の力で作れるのか、敵はフラフラと飛び上がると蹌踉けながらも湊に向けて砲弾を放った。
チャリオッツをその場から逃がさぬため、高速の連撃を繰り出していた湊はすぐに対応する事が出来ない。
チドリの叫びも空しく、そのまま彼の背に砲弾が吸い込まれてゆく
「……いや、見えてるぞ」
と思いきや湊は剣の加速器を利用して一気にその場を離脱した。
攻撃を喰らうはずの湊がその場からいなくなれば、当然、砲弾は直進した先にあるものに着弾する。
そう、狙いを外したジャスティスの一撃は、これまで湊の攻撃を受けて脆くなっていたチャリオッツの脇腹に直撃し、再びチャリオッツをダウンさせてしまう。
もし仮にシャドウにも心というものが存在するとすれば、相棒に攻撃されたチャリオッツも、相棒を攻撃することになったジャスティスも、どちらも心中は大荒れで動揺している事だろう。
連携を取れなくなった二体に未来などない。攻撃を避けるために離脱した湊は触手状にした影を伸ばして落ちていた九尾切り丸を回収すると、そのまま九尾切り丸を掴んでいる触手を蠍の尻尾のように

使ってジャスティスを何度も突き刺した。
同じ鉄を使ってはいても、土台の車輌部分ほど強固には作られていない砲台は簡単に破損してゆく。
一方をそんな風に攻撃している間に、湊は再びチャリオッツの方へ戻ると全身から蒼い光を放出して今日最速の一撃を敵に振り下ろす。
Ｅ．Ｘ．Ｏ．を起動して放たれた一撃は敵に致命的なダメージを与え、九尾切り丸で貫かれたジャスティスと同じタイミングで消えてゆくのだった。

第二百六十一話　美紀

――ポートアイランド

くすんだ赤髪に黒い肌をした巨大なペルソナが豪腕を振るう。

大木のような腕がその場の空気を押し退け、振るうだけでゴウッという音が鼓膜を震わせてくる。

迫る敵の攻撃に対し、荒垣は呼び出していたカストールを盾にして時間を稼ごうとするが、タフネスに自信のあるカストールですら豪腕に捉えられると石畳に叩き付けられ弾けるように消えた。

「ぐあっ」

敵の攻撃を受けたのはペルソナだけだったが、傍にいたことで攻撃の余波を受けて荒垣も吹き飛ばされる。

あまりの衝撃に声をあげた荒垣は転がり全身に痛みが走るも、何とか歯を食いしばって耐えると斧を持っている手に力を籠めて敵を睨み立ち上がる。

正面にいるのは一体の巨大なペルソナだけだ。ジンとタカヤはペルソナも呼び出さずに戦闘を眺めており、つまりは荒垣たち三人は眼鏡をかけた少女のペルソナ一体に押さえ込まれている。

しかし、荒垣たちのペルソナが五メートルもないのに対して、敵のペルソナは優に三十メートルはあると思われる。

そんな相手と戦っている荒垣は、海上に現われた超巨大シャドウのときにも思っていた事だが、やはり大きさというのはそれだけで強さに繋がりやすいと感じていた。

「クソがっ、有里といいこいつといい。デカいペルソナでも流行ってやがんのか！」

悪態を吐きながら荒垣は巨大なペルソナについて考える。

状況に合わせてペルソナを変えられるワイルドの湊は、そういったペルソナが必要になるかもしれないからと巨大ペルソナを用意した可能性があるが、目の前の少女は荒垣たちのように一体のペルソナしか持っていない。

という事は、荒垣たちのような通常のペルソナ使いでも、常識外れ

にしか思えない巨大ペルソナを持つことは出来るのだ。
ペルソナは己の心の有り様が姿として強く表れるため、地味な見た目の少女の中にもペルソナが巨大になる要因を持っているに違いない。
巨大ペルソナに対抗するには同じ巨大ペルソナか圧倒的な実力差が必要だ。何か切っ掛けを得られれば、カストールを巨大化させることが出来るのではと戦いながら荒垣は考えた。
すると、荒垣たちがテュポーン相手に必死に戦っている姿を見ていたタカヤが、酷く落胆した様子で口を開いてきた。
「やれやれ、この様子ではスミレ一人で十分に終わらせられそうですね。他のペルソナ使いとの戦いという事で楽しみにしていたのですが」
「こいつらの適性なんてたかが知れとったやろ。ぬるい環境におって群れな戦えへんやつらやで？」
「その様ですね。中には面白い方もいたようですが、ここに残った者たちはハズレのようだ」
特別課外活動部はストレガと比べると僅かに人数が多い。
それだけに個人の能力と実力に差があって、能力のバリエーションはともかくとしてタカヤに言わせれば当たり外れがあった。
適性値だけでもストレガに並ぶ者や変わったスキルの使い方をする者など、そういった者が相手であればタカヤも直接戦ってみようという気持ちになれた。
しかし、ここに残った三人はチームでの戦いは出来ているが、個人の能力は平凡で特別目立つ点もない。
チームワークでテュポーンと対等にやり合えたならば見込みはあったけれど、現状、何とか耐えているだけでこのまま続けば確実にスミレが勝つ。
そんな戦いを見続けても無駄でしかないため、もう終わらせるべきかとタカヤが溜息混じりに溢せば、話が聞こえていた真田たちは悔しさと怒りで立ち上がった。
「ポリデュークス、ジオンガ！」

敵を睨んで立ち上がった真田がペルソナを召喚するなりスキルを放つ。
眩い閃光が周囲を照らして太い電撃がテュポーンへと進んでゆくが、攻撃が迫っていると分かったスミレはペルソナに蛇の尻尾のような足を巻かせるとそれでガードした。
これまでペルソナで殴りかかろうとほとんどガードせず、召喚者や傍にいるタカヤたちに攻撃の余波が届きそうなときにのみ防いでいたため、真田はその行動に僅かな違和感を覚えた。
ガードに意味があるとするならば可能性として挙げられるのは二つ。一つは電撃スキルが弱点であること、二つ目は電撃に限らず魔法スキルに対する防御力が弱いことだ。
もし、挙げた可能性のうち理由が前者であるならば、ここには真田と天田という電撃スキルを持つ者が二人いるので、僅かにだが勝てる可能性が見えてくる。
逆に後者であっても荒垣以外は魔法スキルを持っているため、どちらにせよ有効な攻撃方法が判明したことはプラスに働く。
今の攻撃で気付いた事を検証し、ここからどうにか逆転していこうと真田が口を開こうとすれば、
「――ところで、あなたはここで戦っていてもよいのですか？」
突然、タカヤが真田のことを見ながら薄い笑みを浮かべてきた。
その間もテュポーンが拳を振り上げてくるので、真田は距離を取ってペルソナで反撃しつつ言葉を返す。
「俺たちはお前らを足止めし、倒すのが目的だ！」
ここで戦い足止めする事がチームのためになる。倒すこともまだ諦めていないぞと瞳に強い光を宿し、ポリデュークスはテュポーンの巨大な腕を躱して脇腹を殴りつけた。
もっとも、耐久力の高いテュポーンは殴られても平気な顔をしており、召喚者も一切動じた様子もなく冷静に場の状況を見てペルソナを操っている。
攻撃が通らないとなるとジリ貧になってくるものの、真田たちも徐々に敵の攻撃には慣れて躱せるようにはなっている。

いつタカヤたちが参戦して来ても対処出来るよう気を配りながら、さらにテュポーンへ攻撃を当てていれば、後ろで見ていたタカヤが口元を歪め言葉を続けてきた。
「フフッ、聞き方を変えましょう。あなたは妹さんの許へ行かなくてもいいのですか？」
「っ、お前ら美紀に何かしたのか!?」
「さて。ですが、我々があなたの妹さんの存在を知っている事は先月の会話で分かっていたはず。だというのに、匿いもせず湊だけでなくチドリたちも護衛から外すとは、狙ってくれと言っているようなものです」
相手の言う通り、タカヤたちは兄である真田も知らなかった美紀の適性について知っていた。
彼女が湊たちに匿われていたことも把握しており、つまりはリアルタイムで特別課外活動部及びその関係者の居場所を把握する術を持っているのだろう。
少し考えれば気付けたはずだ。幾月修司を殺されたばかりだというのに、湊の事で頭がいっぱいになっていたが故の失態。
ここへ来る前にも湊から護衛がいないことを指摘されていたというのに、ストレガがやって来るとしてもアルカナシャドウのいるどちらかだと思い込んでいたのだ。
タカヤの言葉が事実であれば別働隊が美紀を狙っている。一刻も早く彼女の許に向かう必要があるというのに、自分が抜ければ天田と荒垣が危険なため動くことが出来ない。
苦虫を噛み潰した表情で真田が焦っていれば、カストールを呼び出した荒垣が叫んだ。
「アキ、すぐに美紀のところへ行け！」
「しかしっ」
「大丈夫です。七歌さんたちが来るまで粘ってみせます。それより先輩は美紀さんを！」
カストールが敵の目の前まで行くと、ネメシスが横に回り込んで電撃を放つ。

確かに相手は強いが指示を出しているのは一人の人間だ。多方向から同時に複数の敵へ対処するときには、どうしても反応が遅れてしまうのだろう。
相手の動きに慣れてきたことで、そういった攻め方も出来るようになってきたため、荒垣だけでなく天田も真田に美紀の許へ向かうように言った。
「……すまん！」
仲間に背中を押された真田は申し訳なさそうに表情を一瞬浮かべるも、すぐに真剣な表情になって走って行った。
真田が背を向けた瞬間に撃ってくる可能性もあったので、荒垣たちは敵の動きに警戒していたが、タカヤたちは動くことなく、何故だか今まで戦っていたスミレがペルソナを消していた。
長時間の召喚で疲れたのだろうかと考える。けれど、タカヤたちの許に下がってゆくスミレに疲労の色は見えない。
では、今度はタカヤたちが代わりに戦うのだろうかと思って見ていれば、タカヤは楽しげに笑いながら拍手してきた。
「フフッ、仲間同士の美しい友情ですね。しかし、そちらの少年もここで戦っていてよいのですか？」
「動揺を誘おうたって無駄だぞ。僕に家族はいない」
美紀に続けて誰かを人質に取ったような口ぶりで話す相手に、天田は自分には人質になる家族がいないと告げて槍を握り直す。
もし、母親が生きていれ自分はここにいない。母が死んだ日に影時間を体験していたので、適性かペルソナも得ていたかもしれないが、それでも母をおいて危険な戦いに身を投じていたとは思えない。
真田やその家族のことは知っていたようだが、自分のことは知らないようだと相手の持つ情報に穴があると判断した天田は、隙を突いて相手を無力化しようと考えながら機を待つ。
すると、タカヤの隣に立っていたジンが、何やら拳ほどの大きさのボールらしきものを持って天田たちを睨んできた。
どうやら動けばこちらも攻撃するという意思表示のようだが、仲間の反応を気にした様子もなくタカヤは一人言葉を続けた。

「ええ。ですが、あなたには我々より先に倒すべき者がいるはずです。そう、二年前に母親を殺した敵が」
相手の言葉を聞いたとき、天田はカッと頭に血が昇ってくるのを感じた。
確かに母が死んだのは二年前だ。そして、あれは飲酒運転のトラックが突っ込んできたのではなく、影時間に現われたシャドウによって建物が破壊されて起きた事故である。
話した警察はその事を信じてくれなかったが、天田は影時間の存在を知った事であれが現実にあったことだと理解している。
だが、どうしてそれを敵であるストレガが知っているのかと天田は乱れた心のままに叫んだ。
「何だよ。なんで、お前がそんな話を知ってるんだ?!」
「フフッ、我々の世界では様々な情報が集まるのですよ。まぁ、あなたの母親の件はまた別ですがね」
裏社会の情報網は表の世界よりも様々な情報が手に入ると言われている。
天田もテレビやアニメでそういった情報屋の存在を知っているし、実際にゆかりの案内で五代という情報屋とも会っていた。
それを思えば完全に裏社会の住人であるストレガが、特別課外活動部のメンバーたちの情報を知っていても不思議ではない。
ただ、彼の口ぶりからするとタカヤは天田の母親の仇について知っている節がある。
同じ種類のシャドウについて知っているとか、相手の生死について知っているという訳ではなく、敵がどこにいるのかまでハッキリしていそうだ。
母親の仇についての情報が手に入ると思った天田は、胸の奥で黒い感情が湧き上がるのを自覚しながらタカヤを問い質した。
「知ってるなら言え！　母さんを殺したシャドウはどこにいる！」
「そんなものはいません」
「嘘だ！　僕は見たんだ。黒い馬の化け物が暴れて、そのせいで母さんは死んだんだ！」

自分が倒すべき相手がいると言ってきたくせに、尋ねられると存在しないなどと言われ、そんなはずがあるかとあの日見たことを話す。
暴れる黒い馬、壊れる建物、降り注ぐ瓦礫に押し潰される母親、どれもハッキリと彼は覚えているのだ。
あれが夢であるとすれば、自分の母親が死んだことも夢でなければならない。
だが、母親は現実に死んでいる。当時、親戚が葬儀のためにやってきてくれたが、母親の遺体が入っている木棺の中は幼い天田は見せて貰えなかった。
それはつまり、見せられるような状態ではなかったのだろう。何百キロか何トンかは分からないが、そんなものに押し潰された人間が原型を留めているはずがないのだから。
「ええ、そうです。あなたの母親は化け物のせいで死んだ。ただ、そんなシャドウはいません」
「馬鹿にしてるのか！　騎士型のシャドウなら何体も見てる。あいつらのどれかが母さんを殺したんだろ！」
「いいえ。何度も言いますが、あなたの母親を殺したのはシャドウではありません」
「じゃあ、一体何だって言うんだ！」
自分たちは敵同士で先ほどまで戦っていた。
天田も荒垣も服はボロボロで身体にも細かな傷が出来ている。
にもかかわらず、天田は相手が母親の死について何か知っていると思い、真実かどうかも分からぬというのに言葉を聞こうとしていた。
仲間であるのなら荒垣はここで天田を制しているべきであった。敵の言葉など真に受けるなと。
仮に真田が残っていれば言っていたに違いない。だが、荒垣にはそれが出来ない理由があったことで、タカヤが真実の一歩手前まで話すことを許してしまう。
「少し考えれば分かるはずです。黒い馬の化け物は存在した。しかし、それはシャドウではない。あなたも知っているでしょう？　シャドウ以外にも似たような超常の存在がいることを」

「なに、を……え？」
シャドウに似た超常の存在などペルソナ以外にあり得ない。
なら、自分の母親はペルソナに殺されたのかと考えたとき、天田は自分が見た特徴に当てはまるペルソナがいることに気付いてしまう。
少し離れた場所で斧を持ったまま黙っている味方。敵の言葉を肯定も否定もせず、天田がそちらを見ても視線を僅かに俯かせたまま沈黙している。
「どうやらあなたが本当に倒すべき相手が理解出来たようですね。しかし、今日のところは時間のようだ。今回はこれで引きますが、次に会うまでにもう少し力を付けておいてください。次にまみえたときも同じ様であれば、我々も容赦なく処理させていただきます」
それだけ告げるとタカヤたちはスミレが呼び出したテュポーンに掴まって飛び去っていった。
その場に残された天田と荒垣の間には痛いほどの沈黙が流れるが、少しするとポロニアンモールの方から仲間たちが走ってきた。
「お前たち、無事か?!」
「……ああ、なんとかな。だが、どうやら美紀が狙われたらしい。アキは先に行ってるが、俺たちも急いだ方がいい」
「分かりました。風花、すぐ八雲君たちに連絡して。終わったらすぐに向かうから」
きっと急いで敵を倒してきたのだろう。いつもよりボロボロになった格好で息を切らせて走ってきた美鶴は、真剣な様子で荒垣たちの身を案じてきた。
タカヤに告げられた言葉によって動揺している天田はそれに答えられないが、荒垣が代わりに自分たちの方で何があったのかを話し、すぐに七歌が風花に連絡を取るよう指示をして美紀の許へ向かう準備をする。
美紀と仲の良かったゆかりと風花は不安そうにしており、彼女たちの反応があったからか美鶴や七歌も天田の様子を特別気にする事はなかった。
きっと、再び知り合いが狙われた事に動揺していると思ったに違い

ない。
　その勘違いは天田と荒垣双方に取ってありがたいものであったが、ここで天田に様子がおかしいことを尋ねていれば、後に起こる事件を未然に防げていた事を今の七歌たちは知る由もなかった。

　――住宅街
　チドリ経由で湊の方へ連絡を終えた七歌たちは、すぐにポロニアンモールから離れると美紀の暮らす真田の実家を目指した。
　七歌や美鶴は詳しい住所を知らなかったが、家に行ったことのある荒垣やゆかりの案内により、一同は真っ直ぐ美紀の暮らす実家に辿り着くことが出来た。
　しかし、辿り着いて家の前までやってきた者たちは、道路に広がる血溜まりを見て言葉を失った。
「美紀っ、美紀っ、しっかりしろよ！　絶対に、絶対にまだ助かるからな！」
　血溜まりの中央には下腹部にナイフが刺さった美紀と、それを抱き起こして血だらけになって傷口に布を押し当てている真田がいた。
　彼のペルソナはかなり弱いが回復スキルを持っていたはず。彼の傍に召喚器が落ちているという事は、きっと精神力が枯渇するまで必死にスキルをかけたに違いない。
　だが、彼のペルソナでは傷を塞ぐことはおろか、十分に止血することも出来なかったようだ。
　見るからに取り乱しながらもナイフを抜かなかったのは、せき止めるものがなくなれば出血が激しくなると分かっていたからだろう。
　妹の事となれば冷静さを失い易いだけに、応急処置に関しては頭が働いてくれていた事はありがたい。
　真田が声をかけ続けていたことも関係あるのか、美紀はまだ意識を失っていないようだが、危険な状態にはかわりなく、ゆかりをはじめとした回復スキル持ちがすぐに駆け寄った。
「美紀っ、大丈夫!?　まだ意識は保てる!?」
「ゆか、りさん……」

弱々しい声で答える美紀を見ながら、ゆかりたちはペルソナを召喚して美紀に回復スキルをかける。
かなりの力を籠めたというのに傷が塞がってゆく様子はなく、一回で足りないのなら二回、三回と続けて唱えつつ、美鶴や七歌は近付いて美紀の状態を確認した。
彼女は顔に一発殴られたような痕があり、他の怪我は下腹部に刺さったナイフの傷だけのようだ。
玄関の扉が鋭利な刃物で切られた形跡があるというのに、美紀の身体の傷はあまりに少なすぎた。
真田がやって来るまでに殺す十分な時間はあっただろうし、刺したのが心臓のある胸ではなく下腹部というのも不自然。
そこから考えられるのは、敵はわざと即死しないようにナイフで刺していったという事だ。きっと自分たちに美紀が死ぬ瞬間を見せるために。
「頼む、美紀を助けてくれ!!」
「分かっている。だが、この深い傷は私たちの力ではっ」
何度も回復スキルを掛けたが効果が見られない。臓器にまで傷が達しているのか知らないが、傷が塞がらないのであれば、ナイフを残したまま布で傷口を押さえて出血を抑えるしか手段はない。
道路に広がる血溜まりから考えると、失血性ショック死を起こすのも時間の問題だ。
病院へ連れて行こうにも影時間が明けるまでは時間があり、仮に病院が開いていたとしても動かすのも危険。
回復スキルは使い続けるが、効果がない以上は自分たちに出来る事はない。
残る可能性は彼が辿り着いてくれることだけだと美鶴たちが焦りを覚えていると、上空から降りてくる者たちの声が聞こえてきた。
「美紀ちゃん!」
「七歌さん、状況はどうなっていますか?」
タナトス本体から分離した棺桶に乗ってラビリスたちが降りてくる。

地面に足が着くなりラビリスは心配して泣きそうな顔で美紀の許へ向かうが、アイギスとチドリはこちらの状況を把握しようと七歌の言葉を聞く。
「出血している傷は下腹部に刺された一箇所。でも、傷が深いのか私たちのスキルじゃ治せなくて」
「一つの傷でこんなに出血しているの？」
「うん。多分、私たちに見せるためにわざわざ外に連れ出して刺したんだと思う」
家の中で刺し殺せばいいのに、わざわざ気付きやすい家の前で刺したまま放置する理由などそれしかない。
実際、七歌たちでは助けられないのだ。このままならば何も出来ずに美紀は死に、それによって七歌たちは心に深い傷を負って無力感に苛まれる。
幾月を殺されたときは既に遅かったが、今回は間に合っても何も出来ない苦しみを味わせるのが目的なら、確かに向こうの目的はほとんど達成されたと言っていい。
メンバーで最も強い回復スキル持ちのゆかりですら、疲労困憊になるほど力を使っても美紀を助けられないのだから。
「有里君、お願い！　私たちの力じゃ美紀の傷を治せないの！　あなたのペルソナの回復スキルで美紀を助けて！」
大切な友達を助けられないのが悔しい。どれだけ頑張っても、どれだけ必死に力を使っても無駄だった。
悔しさと美紀への申し訳なさに色が変わるほど拳を握り締め、ゆかりが必死に青年に助けを請えば、他の者たちより僅かに離れた場所にいた湊は普段通りの淡々とした口調で答えた。
「……やるだけ無駄だ」
『なっ!?』
流石にこのタイミングで断りはしないだろうと思っていただけに、湊が予想外の返事をしてくると他の者たちは言葉を失った。
何せ、美紀は兄と喧嘩してでも湊の味方でいる事を選んでいたのだ。

敵か味方で判断する彼だからこそ、味方を選んだ美紀を助けるとばかり思っていたのに、また先月のように治療を拒んだ湊の胸ぐらをチドリが掴む。
「また、あなたはっ！」
「……可能、不可能の話だ。お前たち、ペルソナを持っていて知らなかったのか？　攻撃スキルと違い、回復スキルはペルソナ能力者にしか十分な効果を発揮しない。つまり、適性しか持たない真田を助けることは出来ないんだ」
「そんなっ……」
そうでなければ湊は医者として働いてなどいない。どんな傷も病も治せるなら、湊は世界中の人間をペルソナの力で癒やしてまわっていたに違いない。
しかし、ペルソナ使いならば切り落とされた腕を再び繋げることが出来ても、相手が適性しか持たないのであれば力は発揮されず、せいぜいが擦り傷や腫れを引かせる程度の力しかないのだ。
これまで人前や一般人相手に使ったことがなかったからこそ、七歌たちはその事実を知らなかったようだが、こんな事で嘘を吐くはずがない青年が断言した事で、今度こそ美紀を助ける手段が失われてしまった。
大切な家族が、友人が、今まさに死のうとしているというのに、傍にいるだけで見ている事しか出来ない。
「……お前、死ぬのか？」
「そう……ですね。このままだと、そう、なると思います……」
他の者たちが絶望を感じていたとき、青年は美紀に近付くと傍に立ったまま一つ問いかけた。
段々と死が近付いている者に、わざわざそんな質問をする意味が分からない。
けれど、質問された少女は気を悪くした様子もなく、細々とした声ながら青年の質問に答えてゆく。
「でも、これは、きっと私への罰ですから……。兄さんたちは、私を心配してくれたのに、随分と失礼な態度を取ってしまいました。今日

だって、言われたとおりに寮で保護されていれば、こんな事にはならなかったんです」
こうなったのは自業自得だと美紀は微かに笑ってみせる。
これまで何で守って貰っていたのかも考えず、気まずいからと寮で保護される事を拒んだ。
もしかすると、寮に行っていれば栗原まで一緒に襲われていたかもしれないが、そんなもしもを考えていると切りがないので、美紀は自分を抱き起こしている兄と他の者に向かって謝罪を口にした。
「兄さん、皆さん、本当にゴメンなさい」
「馬鹿、お前が謝る必要なんてないだろうが！」
「でも、最近ずっと」
「気にしてない！　少しばかり反抗期が遅れてきただけだ！」
徐々に美紀の身体から力が抜けていっている事で、真田は妹に残された時間が僅かであることを悟る。
しかし、そんな事は認められない。あの火事のとき同様、自分には何も出来ないけれど、最後の一瞬まで妹が助かることを諦めることは出来なかった。
「頼む、誰でもいいっ。美紀を、俺の妹を助けてくれ!!」
他の者の前だろうと構わず涙を流しながら、真田は妹を死なせたくない一心で助けを請う。
傍にいる者たちだって分かっている。そんな都合の良い奇跡が起きるはずがないことは。
自分たちは助けられなかった。大切な友人の命が敵によって奪われるのを防げなかった。その事実に様々な感情が渦巻き、別れが近付いている美紀を見て視界が歪んでゆく。
すると、ここでまた美紀をジッと見ていた青年が口を開いた。
「真田、生きたいか？」
「……できれば、そうですね」
「助かる可能性はある。だが、代償が必要だ」
その言葉を聞いて他の者たちは一斉に彼を見た。
魔法で助けることは出来ないと言っておきながら、まだ助けられる

可能性を持っていたとは頭が下がる。
だが、この段階までそれを言わなかったという事は、彼が言った代償とやらが関係しているのだろう。
一体それは何だと他の者たちが言葉を待っていれば、湊はあくまで美紀に向かって話し始めた。
「アベルの〝楔の剣〟を使ってお前から適性を奪って強制的に象徴化させる。その間は時間凍結と呼んでもいいが、真田の生命活動は一切が時を止める。それを利用して外で手術の準備を進め、象徴化を解くと同時に緊急手術で処置してゆく」
重要なのは美紀の身体を今の状態で止めてしまう事だ。いくら湊は時間の加減速が出来ると言っても、他人の身体で部分的な加減速をして出血を止めたりは出来ない。
そんな事をすれば時の流れを遅くした部位で血液が滞り、時の流れを戻したときに多量出血で大惨事を引き起こす。
だからこそ、影時間中に適性を奪えば強制で象徴化させられる〝楔の剣〟を使い。美紀の身体の時を完全に停止させてから、必要なものを全て準備して、最後はスピード勝負で助けるしか方法はないと彼は言った。
「代償は、適性を失うだけですか？」
「いや、適性を失えば影時間に関わる記憶を全て失う。それが代償だ」
適性を失えば影時間に関することは全て忘れる。風花をいじめていた森山夏紀のように、強く心に残った思いが残ることもあるかもしれないけれど、やはり記憶に関しては覚えておく事は出来ない。
「影時間の記憶を失ったら、皆さんのことも忘れてしまうんですか？」
「影時間に過ごした事とかはな。日常の中でも影時間について話した事とかは忘れるだろうが、チドリや岳羽と部活で過ごした事や、ラビリスや山岸と一緒に旅行した思い出は消えない」
美紀が最も心配していることは友人たちとの思い出だった。
代償として失う記憶がどこまでかが分からないと、大切な友人たちとの思い出まで消えてしまうのではと怖くなる。
中学生の頃から一緒に過ごしてきたのだ。部活もしたし、学校行事

に参加して、旅行にも行った。
そんな宝物のような思い出がなくなるのは、美紀にとって身を引き裂かれるほどの辛さがあった。
けれど、失う範囲は影時間に関わる部分だけ。大筋の記憶はちゃんと失われることなく美紀の中に残り続けると湊は保証した。
さらに、代償のために踏ん切りがつかずにいる妹の背を兄も押す。
「美紀、どんな思い出だろうと失いたくないのは分かる。だがそれでも、俺はお前に生きていて欲しいっ」
友達との思い出を失ってしまう辛さは真田には想像もつかない。
自分が死にかけているというのに悩むほどだ。美紀にとっては何物にも代え難いものなのだろう。
妹の様子でそれを分かっていても真田は美紀に生きて欲しいと泣きながら伝えた。
それを聞いた美紀は影時間に関わる部分だけだろうと記憶を失う事を惜しいと思いつつも、最後は兄たちの願いを聞いて助かる可能性に賭けることにした。
「お願い、します……」
「……分かった」
やると決めたなら出来るだけ早い方が良い。湊は他の者たちに離れるように告げると、審判のカードを砕いてアベルを呼び出した。
「皆さん、心配と迷惑をかけてごめんなさい。次に会ったときは忘れていると思うので、今のうちに謝罪を」
現われたアベルは手に持っていた剣に赤い光を纏わせる。ただの鉄の剣にしか見えない武器が、これで適性やペルソナを奪うための魔法剣になったのだ。
その様子を霞んできた視界で眺めていた美紀は、記憶があるうちに最近の自分の態度の悪さを謝罪しておいた。
皆は気にしていないと言ってくれるが、これは美紀なりのケジメだ。記憶を失ってからでは意味がない。だからこそ、今のうちに伝えるべきことを青年にも伝えておく。
「有里君、あなたにも一つ伝えて、おきたい事があります……私は、

きっと有里君の事が好きでした。何度も助けてくれ……て、本当にありがとう、ございます。そして、そんなあなたにこんな事をさせてしまってごめんなさい。でも、私の持つ僅かな適性が、どうかあなたを守って……くれるよう願いを込めておきます」

美紀の言葉が終わると同時にアベルはその剣を美紀に突き立てた。

瞬間、美紀の身体から淡い光が漏れ出し、彼女はすぐに棺桶のオブジェに姿を変えた。

しかし、その場に起きた変化は美紀だけではなかった。彼女から漏れ出した光が湊を包むと、その光が急に強く輝きだし蒼い炎になって頭上に飛び上がったのだ。

「綺麗……」

「これが、美紀の込めた想いか」

彼の頭上に姿を現わしたのは蒼い炎の身体を持った鳥だった。

星〝フェニックス〟、実体を持たず酷く不安定にも見えるが、生と死を繰り返す再生を司る霊鳥である。

湊の頭上を優雅に飛ぶペルソナの姿に、ゆかりや美鶴だけなく他の者たちも思わず見とれるが、湊に触れて力が増幅されるだけでペルソナに昇華するほどの純粋な想いだったのだ。

それを美紀から奪い、また奪わせてしまった湊に、他の者たちは申し訳なさを感じずにはいられなかった。

「有里、すまない……美紀を頼む」

「……報酬は貰った。だから助けてみせる」

〝星〟のカードを自分の中に入れると、湊は象徴化した美紀をタナトスに持たせて飛び上がる。

他の者たちには行き先が久遠総合病院であるとだけ告げ、湊は彼女を助けるべく一人先にその場を去って行った。

後に残った者たちは病院に向かう者と、道路の血溜まりや斬られた玄関の扉などの事後処理を桐条グループに伝える者に分かれ、事後処理を伝えるグループも自分たちの仕事を終えるとすぐに病院へと向かった。

第二百六十二話　自覚

９月６日（日）
深夜――久遠総合病院
深夜で明かりもほとんど落とされた暗い病院の廊下。
そこで真田たちは美紀の手術が終わるのをただジッと待っていた。
影時間が明けてからも湊は準備が終わるまでは影時間を展開している必要があるので動けず、手術室にはシャロンをはじめとした複数の人間が忙しそうに出入りして準備を進めていた。
桐条グループの方にも影時間の存在を知っている医者はいるが、湊の持つ異能も含めて事情を知っている者がこちらには多数いるらしく、影時間対応型の大型発電機を備えている事もあり、こちらの方が緊急時にも最善の処置が行えることはすぐに分かった。
自分たちが原因で発生した影時間への対応として、医療という非常に重要な分野で劣っていることを知った美鶴は胸中複雑だった。
けれど、湊は元々そういった事に対応するためにこの病院を作ったらしく、桐条グループとＥＰ社に差が開いたのは、単純に持っている影時間の知識量の違い、そしてそこから何が必要になるかを理解した者がトップにいたかどうかの違いでしかない。
桐条グループも湊と同等の知識を持っていれば、新たに病院を増やすか既存の施設を増築していた事だろう。
もっとも、事が起こってからそんな事を考えても意味はないし、手術が始まる直前にシャロンが、
「この中にＡＢ型ＲＨ－の人間はいる？」
と尋ねてきた事で、この規模の病院であっても輸血パックの不足などの問題は起こり得るのだと理解した。
彼女に聞かれたときには、天田と七歌が自分たちはＡＢ型であると申し出たが、その場でシャロンが少量の血を採取して調べるとＲＨ＋と出てしまう。
血が足りないのなら兄である自分の血を使ってくれと真田も申し出たが、そも、真田の血液型は妹と異なるＡ型だった。

稀血を除き、よく人数が少ない血液型の話題として出るＢ型ＲＨ－というものがあるが、実をいえばＢ型ＲＨ－が最も少ない訳ではない。単純に他よりもＡＢ型の方が少ない事もあり、日本で言えばＢ型ＲＨ－が千人に一人という割合に対しＡＢ型ＲＨ－は二千人に一人と言われている。

シャロンとしては兄である真田も妹と同じ稀少血を持っていないかと期待していたのだが、兄弟で血液型が違うというのはそれほど珍しい事ではない。

仲間たちからの血液の提供が見込めないと分かれば、シャロンは今病院にある分で足りない分は湊から貰うかと言って早々に手術室に戻って行ってしまった。

彼も手術には参加するようなので、そんな人物から血を抜いても良いのだろうかという不安はあった。

しかし、それ以前に七歌が彼の血液型は母親と同じＡ型のはずだと発言した事で、異なる血液を輸血したら美紀が死んでしまうと大騒ぎになり。シャロンの助手である武多が機材を持ってきたところを捕まえ、湊の血液型が美紀と異なることを説明するという一幕もあった。

ただ、その事を説明すると武多は不思議そうに首を傾げ、ちょっと待っていて欲しいとシャロンを呼びに行った。

ただでさえ準備に忙しいというのに、難しい手術前に医者を呼ぶなど本来許される事ではないだろう。

けれど、このままでは美紀が死んでしまうので、武多に呼ばれて再び廊下に出てきたシャロンに事情を話せば、彼女はそんな事かと嘆息して「名切りの血は成分が変化して万能血化している」という説明をしてくれた。

何でも、元はどうか知らないけれど、湊の血は鬼の力に目覚めたことで血中成分にすら変化が起こり、ただの水で二十倍希釈しても問題なく輸血に使えるらしい。

むしろ、湊の血の方が傷の治りや滋養強壮にもいいので、大量に出血して体力を失っている美紀には何にも勝る薬と言えた。

そして、全ての準備を終わったのか扉が閉ざされ手術中というランプが点灯し、一時間は経ったかというとき、俯いて黙っていた真田がポツリと話し始めた。
「俺は……あの火事の日、もう少しで美紀を失うところだった」
急に何の話だろうかと傍にいたメンバーたちは不思議に思う。
ただ、何か話していないと不安のなのかも知れないと考え、他の者たちは口を挿まずに彼の言葉を聞く。
「危険だからと制止してくる大人たちの腕を振りほどくことも出来ず。ただ泣きながらあいつの名前を叫ぶことしか出来なかった。だが、そんなとき突然あいつが空から降ってきたんだ。急に何かが降ってきたかと思えば、扉を切り裂いて燃える建物の中に入っていった」
彼が語り始めたのは九年前の出来事だ。本当ならば自分は命を失っていたと美紀も言っていた児童養護施設で起きた火災。
実際にそれを目にしたのは真田と荒垣のみだが、話を聞いているだけでも当時の凄が相当な無茶をしたらしい事は分かる。
「そして、その場にいたやつらが訳も分からず混乱していれば、あいつは美紀を背負って二階の窓を突き破って出てきたんだ。……ずっと助けてくれた相手は女だと思っていた。髪も長かったし、見た目もあってな。けど、美紀に言われて初めて有里だったと知ったんだ」
最初から知っていれば心からの感謝の言葉を送りたかった。
唯一の肉親である妹を助け、真田が生きていく上での目標となる言葉をくれたのだ。
彼がいたから今日まで自分は妹を守るために頑張ってこられたと、そう言って感謝の言葉をずっと伝えるつもりだった。
しかし、知らなかったことで真田が取った対応は真逆にものとなった。
「また、また俺はあいつに助けられた……」
ずっと俯いて床を見ていた真田は立ち上がると、待合の椅子から立ち上がって何でもない壁の方へ向かう。
「美紀を失わないよう力だけを求め続けた。守る者にとって弱さは罪だと言われ、二度と妹をこんな目に遭わせないと強くなる事を誓っ

た。……だが、結局はこの様だっ」
静まり返った廊下に絞り出すような真田の声が響く。拳を痛めることも気にせず、彼は左手で壁を強く殴りつけてさらに続けた。
「力さえあれば、どんなものが来ようと守れる。そう思ってずっと戦い続けてきた。だが、そんなのは俺がただ前に進んでいる実感を求めていたに過ぎない」
〝守る者にとって弱さは罪〟という言葉を受けて、真田は火災から少し経てばすぐ身体を鍛え始めた。
柔道でも、空手でも、素手で出来る競技なら何でも良いと思いながら、ただ我武者羅に自分に合っているものを探してボクシングに行き着いたのだ。
施設にいた頃は荒垣と一緒にやんちゃしていたので、体力もだが同年代の中では喧嘩慣れもしている方だった。
ただ、やはり素人の喧嘩と格闘技は拳の出し方一つとっても違い、真田は出来る事が増えて試合に勝つようになり、少しずつではあるが自分が目標とする相手の強さに近付いている実感を得ていた。
「シンジも覚えているだろう。昔、試合をして負けた俺にあいつは言ったらしい。俺は美紀を守っているのではなく、自分が傷つくのが嫌で自分のために美紀を守っているんだと。まさにその通りだった」
しかし、中学に入ってから湊と出会ったことで、真田は自分が思っているほど成長していないのではと考えるようになる。
つい先日までランドセルを背負っていた小学生だった者を相手に、防戦一方のまま一ラウンドでＫＯ負けするという無様を晒したのだ。
彼に負けてからはしばらく荒れ、もっと強くならねばと試合に物足りなさを感じていた頃に特別課外活動部にスカウトされた。
後になって荒垣も加わったこともあり、ペルソナを得てシャドウと戦うようになってからは、自分が本当に求めていた戦いはこれだったと充足感を覚えるようになった。
そこには、自分よりも強い湊が持っていない力を手にしたという優越感もあったに違いない。
おかげで真田はさらに視野が狭くなり、自分がシャドウを倒して強

くなる事が美紀を守ることに繋がると考えるようになってしまった。
「危険だと知っていながら、分かっていながら俺は力を求めて戦う事を優先していた。守るというのなら、適性があると知った時点であいつのように美紀を遠ざければ良かった。だが、俺は負けた悔しさに意地を張って、馬鹿みたいに張り合うばかりで、美紀のことなどろくに見ていなかったっ」
彼も同じ力を持っていた。いや、自分よりも遙かに強い力を持っていて、自分が知らないところで美紀をシャドウの脅威から守ってくれていた。
本来ならば礼を言うべきだと気付いていながら、役目を奪われた気持ちになった真田にとっては屈辱的で、負けた悔しさもあり相手に反抗する態度ばかりを取ってしまった。
美紀はそんな兄の行動は間違っていると分かっていて、本気で怒ってくれてもいたのだ。
だが、やはりどこか意地になっている部分があったこと。折角得た力を捨てるような真似をしたくなかったこと。ただそれだけでこの地への残留を望んで湊と敵対する事を選んでしまった。
湊の言うとおりにしていれば美紀はストレガに襲われる事はなかったに違いない。
もう起きてしまった以上、どれだけ後悔しても意味はないが、真田は自分がどれだけ無意味にガキっぽい行動ばかりしていたか気付くことが出来た。
仲間たちの前でこんな風に弱音を吐いたのも、自分がどれだけ馬鹿だったかを聞いて欲しかったに違いない。
けれど、ここでただ弱音を吐いて終わりならば、心が折れて逃げ出しただけだ。
自分が馬鹿だったと気付いた。なら、次はどうするんだと幼馴染みである荒垣が尋ねた。
「……そんでテメェはどうするんだ。弱音吐いて終わりか？」
「いや、ここからだ。どうせ、俺のこの性分は変えられない。中途半端で投げ出せば、それこそ美紀に合せる顔がない。だから、今度こそ俺

は戦って守れるようになる。なってみせる」
先ほどまでの後悔に沈んだ顔が嘘のように真田の瞳には強い光が宿っていた。
挫折して終わるのではなく、再び立ち上がって彼は先を見ている。
妹の手術も終わっておらず、心の中は不安でいっぱいだろうに、それでも真田は妹の無事を信じて新たな決意を固めている。
それを見た他の者たちは彼を強い人間だと思った。実力ではまだまだ七歌やアイギスにも及ばぬだろうが、その心の強さだけは彼女たちにも負けていない。
そんな彼はこれからきっと強くなってゆくだろうと、沈んでいたメンバーたちも思わず笑みを浮かべると、探知型のペルソナを持つ二人の少女がある変化に気付いた。
「あ、真田先輩のペルソナが……」
「……心の変化に合せて、ペルソナの方も変化したみたいね」
他の者たちには真田がやる気になったようにしか見えないが、どうやら二人は彼のペルソナが別の姿になったのが分かったらしい。
無論、本人もペルソナの変化には気付いており、新しく手にした力と共にこれから精進してゆくつもりだ。
美紀が襲われ危険な状態であることは勿論不幸な話だが、それを切っ掛けに真田の心に変化が生じて新たな力に目覚めたのは良い報せと言える。
あとは美紀が無事に一命を取り留めれば純粋に喜ぶことが出来るのだが、他の者たちがさらに待つこと一時間。手術中のランプが消え、扉が開いたかと思うと疲れ切った表情のシャロンが出てきた。
二時間も難しい手術を行なっていたのだ。相手が疲れ切っていても無理はないと思うが、それでも妹のことが心配な真田が相手に駆け寄った。
「美紀は、妹はどうなったんですか?!」
「……ごめん、私らも全力を尽くしたんだけどさ。私らの力だけじゃ助けられなかった」
その言葉を聞いたとき、その場にいた全員が言葉の意味を一瞬理解

出来なかった。
湊は助けられる可能性があると言っていたのだ。可能性があったなら、国内トップレベルのスタッフと設備が整ったこの病院なら助けられるのではないのか。
無意識に、そう、全員が無意識のうちに湊もいるのなら助けられると思っていた。
けれど、執刀医であるはずの女性が謝罪し、自分たちの力では助けられなかったと告げたということは、美紀は助からず死んでしまったということ。
これから守るために戦う決意をしたばかりだというのに、妹が死んだという事実に真田は目の前が真っ暗になってその場に倒れ込みそうになる。
だが、実際に見るまでは信じられず、考えるよりも先に手術室に向かって走り出そうとしたとき、新たに部屋から出てきた湊が真田の顔を掴んで部屋への侵入を阻んだ。
「……紛らわしい言い方をするな。それじゃ真田が死んだみたいだろ」
「え？　ああ、そっか。ゴメンゴメン。妹さんは助かったわよ。たださぁ、現代の医療レベルじゃ助けられなかったって話でね。かなり坊や頼みになっちゃったのよ」
不潔な状態で部屋に入れる訳にはいかない。ただそれだけの理由で真田を止めた湊は、荒垣に向かって真田を突き飛ばし、紛らわしい言い方をしたシャロンを諌める。
注意された彼女も確かに言い方が拙かったかと頭を掻くと、美紀の容態は安定したと伝えてから、先ほどの言葉の意味を改めて説明した。
「本当にギリギリの状態だったからさ。普通ならもう助けようがなかったのよ。けど、坊やは患者の体内も視えるから真っ直ぐ出血箇所を押さえて、傷口の縫合を行ないつつ輸血もして持ち直したってわけ。ま、助けられたから良かったけど、その分現代医療の限界を感じる結果になったわぁ」

「下腹部の傷跡は目立たないように塞いでおいた。三ヶ月もすれば痕も消えるはずだ」
「場所が場所だけに女の子は気にするからねぇ。一応、本人には虫垂炎って説明するから、あなた達もそんな感じでよろしく。んじゃ、私らは患者の移動とかがあるから行くわねぇ。バイバーイ」
湊たちが去って行くと少ししして入院着を着た状態で眠っている美紀がストレッチャーで出てきた。
最後に見たときよりも顔色が良くなっており、自然に安定した呼吸をしていることで、もう容態が急変する心配もないらしい。
自然に起きるまでは入院する病室への立ち入りも禁止のようだが、部屋まではついてきても良いという看護師の厚意に甘え、妹が無事でボロボロと涙を流す真田と一緒に友人が助かったことを喜び安堵の涙を流すゆかりたちも病室の前までついていった。

昼――病室
手術が無事に終わり数時間が経った頃、美紀は病室のベッドで目を覚ました。
目を覚まして身体を動かすと下腹部が痛み、思わず呻いてしまったが、それに反応して病室にいた看護師の女性が彼女の覚醒に気付いた。
「真田さん？　目が覚めましたか？　ここがどこだか分かりますか？」
「い、いえ、病院ですか？」
相手の服装と部屋の雰囲気でここが病院であることは理解出来る。
ただ、眠る直前の記憶が曖昧で、どうして自分がここにいるのかが分からない。
起きるまで待っていてくれていた彼女ならば、自分がここで寝ていた理由も知っているに違いないと思い、美紀はゆっくりと身体を起こそうとしながら口を開いた。
「あ、あの」
「ああ、起き上がっちゃダメですよ。真田さんは虫垂炎で緊急手術を

したばかりなんです。無理に動くとお腹の傷が開いてしまうから、今は安静にしていてください」
虫垂炎と聞いて一瞬何のことかと考えるも、すぐに所謂盲腸のことだと思い出す。
自分がそんなものになった覚えがないので本人は不思議そうにするが、盲腸が悪化すると激しい痛みで意識を失うこともあるというのは知っていた。
ならば、昨夜のうちに盲腸の痛みで意識を失い、そのまま病院に運ばれてから緊急手術が行なわれたのだろう。
欠片も記憶のない美紀は、意識を失った自分のために動いてくれた者に申し訳なさを感じながら、看護師に言われた通り素直にベッドに横になっておいた。
そんな風に、彼女がそのままベッドに横になっているのを確認した看護師は、意識が戻ったことを伝えてくると告げて部屋を出て行った。
何かあればナースコールしてくれとコード付きのリモコンを置いていかれ、これなら起き上がる必要もないなとぼんやりと考える。
起きたばかりというのも関係あるのか、美紀は本当に欠片も昨夜の記憶がないことが不思議で、義両親に聞けば昨夜のことを教えて貰えるのかなと寝たまま周囲を見渡す。
部屋には美紀の私物は一切なく、どうやら携帯電話等は全て家にあるらしい。
これでは家族とも連絡が取れないなと思わず嘆息すれば、丁度のタイミングで扉がノックされ、美紀がどうぞと許可を出せば兄たちが部屋に入ってきた。
「よう、美紀。調子はどうだ？」
「あ、兄さん。それに皆さんも」
真田に続いてゾロゾロと部屋に入ってきたのは、兄と同じ寮で暮らす者たちと総合芸術部の部活メンバーたちだった。
随分と大勢でやって来たのだなとも思ったが、暇を潰すものもなかったので、今は騒がしさが逆にありがたく感じる。

そんな美紀の顔を見た者たちは何故だか安心した表情になり、中でも普段より明るく感じる兄が積極的に話しかけてきた。
「まさか急に盲腸で気を失って倒れるなんてな。夜中に電話で聞いて驚いたぞ」
「そうだったんですか？　あの、実はあんまり覚えてなくて……」
「まぁ、激しい痛みで気を失ったくらいだからな。でも、そういう人も多いらしいぞ」
盲腸の痛みで動けなくなる者や、そのまま意識を失う者は別に珍しくはない。
兄も美紀と同じようにそれを知っていたようで、夜中に義両親から電話で手術だと聞いて本当に心配したんだぞと苦笑を浮かべてくる。
他の者たちは兄経由で話を聞いたのだろう。昨日の真田の焦った様子は傑作だったと茶化しつつ、ゆかりたち部活メンバーが花を持ってきた。
「これ、お見舞いの花。何日か入院したら、あとは数日おきに検査に来ればいいらしいけどね」
「わぁ、ありがとうございます。突然の事なのに本当にすみません」
美紀が寝ている間に医者から話を聞いていたのか、ゆかりたちは美紀が知らない入院の日程を話してきた。
しばらくは入院することになるのだろうかと思っていただけに、数日の入院だけで済むのは非常にありがたい。
まだまだ新学期が始まったばかりだし、もう少しすれば学園の文化祭の準備も始めなければならない。
友人たちと一緒に参加したいと思っていた美紀は、数日おきの通院だけで済むのは非常に幸運だと笑い、ゆかりたちが持ってきてくれた綺麗な花を素直に喜んだ。
そして、ゆかりたちが部屋の花瓶に花を飾り、少しばかり雑談を続けていると再び扉がノックされた。
今度は義両親かなと思って美紀が返事をすれば、今度はどこかオリエンタルな雰囲気をした外国人の女性と一人の青年が入ってきた。
「ハーイ。私は主治医のシャロン・J・オブライエンよ。まだ傷は痛む

でしょうけど気分はどう？」
「えっと、少し熱っぽい気がしますけど、しんどさとかはないです」
「そう。それは良かった。でも、入院中はなるべく寝ておきましょうね。それが傷を治す一番の方法だから」
白衣を着ていたので医者だろうかと考えていれば、その予感は見事に当たり女医のシャロンが挨拶をしてきた。
綺麗な人だなと思いながら美紀も挨拶を返し、随分と日本語が上手なのだなと相手の経歴等に僅かな興味を抱く。
しかし、急にそんな事を尋ねれば失礼になると思ったことで、シャロンと一緒に部屋に入ってきた青年へと視線を向け、どうして彼がここにと美紀は驚きの声をあげた。
「あ、有里君まで来てくださったんですか？」
「まぁ、知り合いが入院したと聞いたからな」
「そんな。数えるくらいしか話したこともないのに、仕事で忙しい中どうもすみません」
部屋にやってきたのは芸能活動もしている元クラスメイトの有里湊だった。
彼はチドリの家族であるため、きっと付き添いで来てくれたのだろうと考える。
仕事も忙しいだろうに、わざわざお見舞いに来てくれてありがとうと礼を言えば、ゆかりたちが何やら驚いた顔をして美紀に尋ねてきた。
「……え？　美紀、どういう事？　有里君と話したことないって」
「あ、いえ、まったく話した事がない訳ではないですよ。ただ、中等部の頃に何度か話した程度なのに、こうやってチドリさんの付き添いでお見舞いに来てくださるなんて申し訳なくて」
自分と彼はほとんど接点がなかったので会話する機会も少なかったが、チドリたちとは部活が同じだったことで、チドリに用があったときに傍にいた彼と話すことは何度かあった。
本当にただそれだけの接点しかなかったというのに、忙しい仕事の合間にこうやって見舞いに来て貰えたのはとても嬉しい。

改めて美紀が湊に向かって礼を言えば、腕時計を見たシャロンが面会時間はそろそろ終わりだと告げてきた。
「じゃあ、そろそろ出ましょうか。まだ手術の後で疲れてるしょうし、今日はここまでって事でね」
「あの、皆さん本当にありがとうございました。私も出来るだけ早く治せるよう頑張ります」
倒れたときのことは思い出せないが、倒れたと聞いてすぐに大勢お見舞いに来てくれたのは非常に嬉しい。
医者のシャロンも看護師たちも優しそうな人ばかりだったので、これだけ恵まれた環境にいればすぐに治るだろう。美紀はすぐに学校に復帰することを約束し、部屋を出て行く者たちを笑顔で見送った。
――病院・廊下
「……八雲、どういう事？　失うのは影時間に関わる記憶だけじゃなかったの？」
廊下に出て部屋から十分離れるなり、シャロンと並んで先頭を歩いていた湊をチドリが呼び止めた。
目覚めた美紀は顔色もよく、意識もはっきりとしていて元気そうだった。
その様子から無事に手術が成功した事は感じられたが、昨夜のことに加えて影時間に関する記憶も失ったのは理解出来ても、何故彼女から湊と過ごした〝日常〟の記憶まで消えているのかチドリたちには理解出来ない。
何かの勘違いだろうかとゆかりが確認してみても、美紀の中では本当に湊との接点がなかったようで、部活メンバーである〝チドリ、ゆかり、風花、ラビリス〟と彼が一緒にいたときに何度か言葉を交わしただけだと言っていた。
これでは日常の記憶は消えないという彼の説明が嘘だった事になる。助けることを優先し、日常の記憶も一部消えるリスクを隠したのだろうか。
アベルの能力を正確に把握しているのは湊だけなので、先ほどの美紀の様子と昨夜の説明について改めて尋ねれば、湊は後ろにいたチド

リたちの方へ振り向いて静かに答えた。
「……ああ。だから、俺のことも影時間に関わる記憶として消えたんだろ」
「それはおかしいであります。話によれば美紀さんと八雲さんが出会ったのは中学校に入ってからとのこと。ならば、チドリさんやゆかりさんや風花さんと同じく、八雲さんとの記憶も残っているはずです」
湊が自分との記憶も影時間に関わる記憶に含まれたのだろうと答えた。
けれど、それはおかしい。なにせ湊も他の部活メンバーも美紀と出会ったのは中等部に入学したときなのだ。
一応、彼だけ九年前の火事のときに会っていたという違いはあるが、その火事も影時間ではなく日常の時間に起きている。
他の者たちとの思い出が消えていないというのに、湊との事だけが影時間に関わる記憶に含まれるのはやはりおかしい。
アイギスがそう反論し、他の者たちが再び彼の言葉を待てば、湊はそもそも条件が違うんだと言って話し始めた。
「……俺は高い適性を持っているせいで他の人間の適性に影響を与えやすい。岳羽や山岸みたいに、傍にいれば適性を獲得しやすくなる。真田に関しても同様で、あいつが適性を得た原因は日常で俺の傍にいたことにあるんだ」
「たった、たったそれだけで、美紀ちゃんにとって湊君との思い出も影時間に関わることに含まれたん？」
ラビリスの言葉に湊は頷いて返す。別に美紀に限った話ではないが、研究所にいた者たちのように最初から適性を持っていたならともかく、湊の傍で適性が強化された者たちが適性を失えば美紀と同じようになるはずだ。
その事を淡々と説明する彼の様子を見ていれば、彼も適性を奪って初めてそうなると理解したのではなく、予めそうなると分かっていたように思えてくる。
既に美紀からは適性を奪ったので元に戻すことは出来ない。ただ、

彼がこうなると知っていたのかだけは確認しなければならないと真剣な眼差しで湊を見つめ真田が口を開いた。
「有里、お前はこうなると分かっていて美紀の適性を奪ったのか？」
「……確信はなかった。だが、その可能性は高いと思っていた」
知り合いの記憶から自分が消える。それを予想していながら実行したと聞いて、真田はやるせない気持ちになり思わず拳を握り締めた。
もし、自分が友人から他人として扱われればどう思うだろうかと想像してみる。
昨日までは一緒に笑いあっていたというのに、次の日には顔と名前しか知られていないのだ。
共通の知人がいて間接的に友好な態度を取ってもらえればいいが、それがなければ他人なのだから関心を持ってもらえず。相手の関心を引こうとして自分の知っている相手の興味がある話題を出せば、何故そんなに自分のことを知っているのかと不審がられるに違いない。
考えれば考えるほど辛くなる未来しか想像できず、実際にそんな状況になった彼が平然としていられる事が理解出来なかったゆかりが思わず彼の本心を聞いた。
「なんで？　なんで、そんな何でもないことみたいに言えるの？　一緒に過ごした思い出が、美紀の中からあなたのことが消えちゃったんだよ？」
「……相手の中から俺に関する記憶が消える。それだけで命を救えるなら迷う余地なんてない」
ゆかりに聞かれた湊は、相手に忘れられる事を〝その程度のこと〟と言ってのけた。
あのとき、他に取れる手段はなかったのだ。美紀の命を救うには適性を奪い、象徴化させて治療の準備を進める必要があった。
ならば、本人がどう考えようと結局はやらなければならなかったのだ。
これが自分の命や四肢の一つを使ってという話ならば別だろうが、湊との思い出を忘れた美紀は何も悲しんでいないし、湊にとっても美

紀を無事に助けられて良かったと考えている。
他の者は何もすることが出来なかったのだから、自分が納得している以上は口を出す必要はない。
最後にそう言い残した湊は他の者たちをその場に残し、仕事があると言ってシャロンと共にＥＰ社の工場区画へと去って行った。

夜――ＥＰ社・工場区画
あの後、七歌たちは納得し切れていないようだったが、結局はそのまま寮と自宅に戻っていった。
湊がいない間、チドリはマンションに泊まってラビリスとコロマルと一緒にいるらしいが、影時間に何か起きたときすぐに対応出来るようにと部屋にいるのは明白だ。
彼女が影時間に積極的に動くことを好ましく思っていない湊にすれば複雑だが、幼い姿から元に戻ってから一度もマンションに帰っていない者に言われても相手は納得しないだろう。
それが分かっているからこそ、湊は彼女たちに好きにさせている訳だが、ソフィアと共に薄暗い廊下を歩いていた湊は、昼間に七歌たちに伝えていなかったことを話していた。
「……真田の件ではっきりしたが、やはり影時間の記憶を失えば俺の事も忘れるようだ」
「そうですか。それは寂しくなりますわね」
僅かに顔を俯かせてソフィアは残念そうに漏らす。
もし話を聞いていた者がいれば、何故、美紀の記憶から湊との思い出が消えたという話で、関係のない彼女がそんな態度を見せるのか不思議に思うだろう。
だが、それは次の湊の言葉ですぐに理解出来た。
「そう考える事も出来なくなるんだ。何せ、影時間が消えればお前たちも同じように記憶を失うんだからな」
コツコツと硬い床で靴音を鳴らして歩く湊は、既に決定事項のようにそれを口にした。
今まではあくまで予想でしかなかった。けれど、美紀という実例が

生まれたことで、湊との思い出を持った者が影時間に関する記憶を失えば、その思い出も一緒に消えると分かったのだ。
影時間に出会ったアイギス、研究所で出会ったチドリは勿論、八雲のときに出会っていた七歌や美鶴も、百鬼一家は全員事故で死亡したと認識し、有里湊のことは同じ学校に通っていた生徒程度にしか記憶されないはずだ。
共に仕事をしているソフィアやシャロンの記憶は難しいところだが、あまり会ったことのないビジネスパートナーという素っ気ない関係になるのかもしれない。
「どれだけ長くても来年には終わるのですね」
「ああ、半年後にはそうなる」
湊はソフィアたちに決戦の日を教えていないが、本年度中には影時間を終わらせると伝えてある。
つまりはそれが今の関係の終わりということ。
出会いこそ最低なものであったが、今ではお互いに相手を認める良好な関係を築いているというのに、それが半年後には解消されるとなるとソフィアはとても辛かった。
その辛いという感情も消えるというのがまた悲しく、それと同時に高過ぎる適性のおかげで影時間が消えても他の者のように記憶を失えない青年の境遇を思うと胸が詰まった。
普段、辛いことがあれば彼と肌を重ねることで嫌な事は忘れられる。
だが、辛い気持ちを一時でも忘れるために彼を求めれば、他の者たちから忘れられたときに彼が余計に辛い思いをしてしまう。
そんな思いを味わせることは出来ないので、ソフィアは胸の痛みに耐えて正面を向くと、通路の奥に見えてきた巨大な鉄の扉に視線を向けて口を開いた。
「湊様、あれはまだ試作品です。軸の強度や攻撃時の衝撃吸収率に不安があります」
「それも使ってみないと分からないだろう。改良点があればちゃんと報告するさ」

湊のためを思っての忠告をしてみても、本人は大丈夫だと根拠のない自信を見せて返してくる。
最初からソフィアでは彼を止めることは出来ないので、彼が使うと言った時点で何を言っても無駄だとは分かっていたが、やはり乙女として心配せずにはいられなかったらしい。
扉の前に到着したソフィアは、はぁ、と深い溜息をして扉の横の壁まであるいてゆくと、生体認証で操作パネルを出し、複雑な暗証キーと網膜キーで鉄の扉のロックを解除する。
ロックが解除されれば、ゴゴゴゴッ、と静かに音を響かせながら扉が開き始めた。
解除すれば離れても問題がないので、ソフィアが湊の隣に戻ってくると二人は並んで扉の先へ入ってゆく。
そこは一見ただの倉庫のようだが、中はほとんど何も置かれておらず、部屋の中央に巨大な影が一つ存在するだけだった。
一歩一歩静かに二人が近付けば、部屋の中央にあった巨大な影の正体が徐々に明らかになってゆく。
それは、鉄塊と呼ぶに相応しい無骨で巨大な鉄の塊だった。
「名称はまだありません。ですが、湊様の出された条件をほぼクリアしております」
部屋の中央に鎮座する鉄の塊は、分類上はハンマーかメイスという扱いになる。
だが、この武器は柄頭だけでワンボックスカー並みのサイズをしており、そこからさらに五メートル近い柄が伸びている。
素材はレアメタルや隕石鉱を惜しげもなく使い、それらを名切りの技術で湊が形にしたあと、仕上げとして海に沈めて水圧で圧縮したのだ。
総重量は五千キロを優に超えているが、この武器は素材の時点で細かく分解された黄昏の羽根が含まれており、以前、湊とソフィアが話していた対シャドウ武装の一つの完成形と言える。
持ち運びや使う場面は限られるものの、九尾切り丸以上の硬度を持っているので防御にも利用でき、武器に含まれた黄昏の羽根との共

鳴によって影時間ならば何とか使うことが出来る。
　昨日の戦いでもこれを持って行っていれば楽に戦車を破壊出来ただろうにと考えながら、湊は影時間を身の回りに展開して太い柄を掴んで持ち上げた。
「……やっぱり重いか」
「当たり前です。どこの世界にバスを持ち上げられる人間がおりますか」
「前にグレイプニルという鎖を使われたときは持ち上げかけたぞ」
　グレイプニルとは久遠の安寧に戦争を吹っ掛けた湊を捕縛するため、蠍の心臓のナタリアたちが用意した一つ六千キロはあるスパイク付き合金鎖網だ。
　流石にそんなものを三つも使われてはペルソナを使うしかなかったが、この武器も影時間のブーストをフルに使わなければ持ち上げることも難しい代物。
　これはスペックを追求するあまり実用性を無視したツケかと嘆息しつつも、湊は一度武器をマフラーに仕舞ってから部屋を出て行く。
　その隣を歩くソフィアは口で言うほど彼が武器を持てたことを驚いていない様子だが、地上に戻る途中に彼に声を掛けた。
「湊様、武器に名前は付けられないのですか？」
「……必要か？」
「まぁ、なくとも良いのですが、あれば便利ではありますから」
　あんな武器が世界に二つとないことは分かっている。
　およそ人が使えるはずのない人間用の武器であり、その製作費は材料費も含め先進国の国家予算並みにかかっているのだ。
　そんな馬鹿みたいな無駄の塊など世界に一つしか存在するはずがない。
　よって、知り合い同士ならばアレだのソレだので通じると思われるが、名称があればもっと円滑に話を進める事が出来る。
　エレベーターに乗って地上フロアに戻り、建物から出る途中でソフィアがその話をすれば、湊は外へ通じる扉を開いてから武器の名を口にした。

「デュナミスだ」
「アリストテレスも驚きの名称ですわね」
「師のプラトンはレスリングでも有名だ。問題ない」
デュナミスはアリストテレスの哲学の概念だ。
大まかに言えば、鳥になる卵や植物になる種など、これから成長や発展することで何かになる可能性を内包するもののことをそう分類する。
彼の武器はまだ何も為していないが、これから為して結果を生むものとしてそう名付けたのだろう。
話を聞いていたソフィアは、先に〝エンテレケイア〟という完全に実現させたものとしての名を与えておけばいいのにと思ったが、湊には湊の考えがあるに違いないと思って何も言わなかった。
武器に名前をつけた湊は、外に出たことでデュナミスを手に持って空を見上げる。
それを見たソフィアが懐中時計で時間を確認すれば、もう僅かで影時間になる頃だった。
「では、行ってらっしゃいませ」
「ああ。行ってくる」
湊の背後に蒼い炎の鳥が現われる。美紀の適性が湊の力の影響を受けて変化したペルソナ、星〝フェニックス〟だ。
既に満月を終えてネガティブマインドの期間に入っているが、フェニックスは純粋な湊のペルソナという訳ではない。
故に、時期に関係なく呼び出す事が可能となっており。湊はその力を借りて空へと飛び上がっていった。
「……怒らせるから、こうなるのよ」
小さく呟いたソフィアの声が風に流れて消える。
天へと昇ってゆく蒼い炎をジッと見送る途中で世界は塗り変わり、遙か上空で小さな粒にしか見えないほどの距離が離れたとき、一瞬にして全身から冷や汗が吹き出るほどの悪寒を感じ、直後、上空から街の一画に向かって一条の光の筋となった炎が放たれた。

第二百六十三話　裏の住人同士で

――巌戸台分寮・屋上

「こんなとこにいたのか、アキ」

美紀の手術が無事成功した日の夜。幼馴染みの姿が見えなかったことで、寮の中を探し回っていた荒垣は屋上で相手を見つけた。

影時間まであと僅かだ。そんな時間に屋上で何をしていたのかと思えば、傍にダンベルが置かれていたことで、どうやらトレーニングをしていたのだと分かった。

美紀のことを今度こそ守れるようになる。それを実現するため、妹の手術が成功したその日のうちからトレーニングを始めるとは恐れ入る。

ただ、昨日もストレガ相手に激しい戦いをしたばかりなのだ。

その後も手術を終えた美紀が目覚めるのをずっと待っていて休めず、寮に帰ってから寝ていた他の者と違って、皆が部屋に戻る中、最後までラウンジにいた彼はあまり眠ってもいないはず。

荒垣だって先ほどまでは眠っていたというのに、一体いつから起きてトレーニングしていたんだと呆れ気味に幼馴染みへ尋ねる。

「お前、ちゃんと寝たのか？　いつからトレーニングしてた？」

「覚えてないな。妙に目が冴えて、どうせなら鍛えておこうと思ってずっとしていた」

自分が寝ていたせいでいつから起きているのかは分からないが、十一時には起きていたらしい七歌や美鶴は真田を見ていないと言っていた。

だとすれば、彼はそれよりももっと前、下手をすると二時間か三時間はトレーニングをしていた事になる。

普段の彼ならばあり得ない行動だ。いくら身体を鍛えるのが好きだと言っても、真田は頭は良いので怪我をしない範囲で効率的に負荷を掛けてトレーニングを行なっている。

けれど、今の真田は全身にビッショリと汗を掻いており、着ているトレーニングウェアで濡れていない部分を探す方が難しい。

こんなオーバーワークなど昔湊に試合で負けたとき以来だろう。
彼がこんな状態になっている理由など考えなくても分かる。妹を殺そうとした者への怒りが原因だ。
「俺にもっと力があれば美紀を守れたとは言わない。だが、新たに手に入れた力で、美紀の仇は取らせて貰う」
「テメェ、滅多なこと考えてんじゃねえだろうな？」
「……殺してやりたいほど憎い。だが、それじゃあいつらと同じだ」
もしや、真田は妹を殺されそうになった復讐を考えているのではないか。
それを危惧した荒垣が真剣な表情で彼を問い詰めれば、真田はそうしたい気持ちはあると本心を語りつつも、しかし、相手と同じところに落ちるつもりはないと断言する。
「殺そうとしてくる者を殺さずに完膚なきまで打ちのめす。それには圧倒的な実力差が必要だろ？」
「そのためのトレーニングか。まぁ、分かってるなら強くは言わねぇが、今日と明日くらいは休んでおけ。自分じゃ大丈夫と思ってるだろうが酷い顔だぞ」
荒垣と話している間もシャドーボクシングをしていた真田だが、動きにはキレがなく、頬も僅かに痩けていて不健康に見える。
このまま続ければ間違いなく倒れるに違いないので、荒垣はポケットを探してゼリーパックを取り出すと真田に投げ渡した。
受け取った真田はずっと動いていて気付かなかったか、今になって自分が空腹だと気付いたらしく大人しくゼリーを飲んでいる。
十秒もかからずに飲み終えた真田は一息吐くと、既にトレーニングを続ける空気ではないのでダンベル等を持って下に戻る準備を始めた。
それを見ていた荒垣ももう僅かで影時間になるので丁度良いと、真田の支度が終わるまで戻るのを待つ。
「では、降りるか」
「ああ。もう影時間になるが、明けたら風呂入って飯食って寝ろ」
屋上の入口に向かって歩きながらそう話していると、時間が来てし

まい空が緑色に塗り潰される。
遠く離れた場所に僅かに欠けた巨大な月を見た直後、
『っ!?』
荒垣たちはこれまで経験した事のない感覚を覚え、全身から嫌な汗が噴き出るのを感じた。
次の瞬間、遠く離れた遙か上空から街の一画に向けて蒼い光線が放たれる。
ここからでは落ちた場所は見えないが、上空から放たれた謎の攻撃は間違いなく街を襲った。
先ほど感じた嫌な気配の正体も含め、何が起きたのか理解出来ずに戸惑っていれば、屋上の扉が開いて七歌と美鶴が焦った様子で屋上に出てきた。
「荒垣、明彦！　お前たちも今の気配を感じたか?!」
普段冷静な彼女がここまで動揺するのは珍しい。
寮の中にいた彼女たちも自分たちと同じものを感じたことも驚きだが、けれど、感じ取ったからこそ焦っているのだろうと考え、荒垣も頭の中を整理しながら返事をする。
「ああ。そしたら次の瞬間には空から街に向かって光が落ちた。ありゃ、誰がどう見ても攻撃だぞ」
「……先輩たちも気付きましたよね。影時間になった途端、八雲君が殺気を放ったの」
先ほどの嫌な気配の正体。それは欠片も隠すことなく放たれた青年の殺気だった。
今までも、特定の対象や一定の範囲内に放つことはあったが、一切隠すことなく全方位に向けて殺気を飛ばすことなど初めてだ。
そも、湊は感情と思考を切り離せるので殺気など漏らさずに敵を討てる。その彼が殺気を飛ばすなど、牽制であったり、雑魚を蹴散らすためでしかなかった。
そんな彼がここまで届くほどの殺気を放ってから攻撃を仕掛けるなど異常事態でしかない。
何があったのかは分からないが、湊が何を目的として先ほどの行動

を取ったかは理解出来る。
美鶴同様、七歌も焦りを見せながらも情報を共有するため荒垣たちの方を見て口を開いた。
「さっきのは、八雲君がストレガを挑発したんだと思います。今から殺しに行くから待ってろって」
先ほどの攻撃は色が普通とは異なっているが火炎属性だ。
一撃で殺すのなら耐性の存在しない万能属性を撃てば良いはずだが、湊は抑えられる殺気を飛ばして火炎属性攻撃を放った。
これは敵に対する宣戦布告のメッセージであり、攻撃の着弾地点にはストレガたちがいるものと思われる。
湊とストレガは昔からの知り合いであり、仲間ではないが対立もしていなかった。それがここに来て明確に敵対行動に移ったからには何か変化があったに違いない。
考えなくともすぐに気付いていた真田が、どこか苦々しげにその原因について口にした。
「……美紀のことが原因なのか？」
「彼は自分のまわりにいる者の日常を冒される事を嫌っていた。美紀のためか、それとも吉野たちのためかは分からない。しかし、発端はそこだろうな」
その怒りは誰のためか。普段から読めない彼の心情など予想出来るはずもないが、全てはストレガが美紀を殺そうとしたことが発端だ。
こうやって話している間に彼らは戦闘に突入しているに違いない。
昨日、アルカナシャドウを倒したばかりで疲れているだろうが、七歌たちは他の者にも声を掛けてすぐに現場に向けて出発した。
――港区
依頼の仕事をこなすために街中に来ていたストレガたちは、影時間になった直後に放たれた殺気によって彼の存在に気付き、攻撃の予兆を捉えたジンがモロスを召喚することで直撃を回避した。
しかし、なんとか攻撃から身を守れたストレガたちと違い、周辺の建物や道路は酷い有様だ。

この辺りは古い建物の多い地域だったが、おかげでいくつかのビルは倒壊し、なんとか形は保っている建物も炎が燃え移ってしまっている。
今まで街中での戦闘では刀や素手で敵を倒し、周囲への被害を最小限に留めていた青年がしたとは思えない惨状。
けれど、今のタカヤたちにそんなものを気にしている余裕はない。
今日の依頼に出てきていた四人のメンバーであるタカヤ、ジン、スミレ、カズキは上空より高速で近付いてくる気配に冷や汗を滲ませながら戦う準備をする。
すると、彼らから三十メートルほど離れた道路に何かが降ってきて地面が爆発した。
飛んでくるアスファルトの欠片から腕で顔を守りつつ、そちらに視線を送れば巻き上がった砂埃の中に周囲の火災で照らされ一つの影が見える。
だが、その影の傍に存在したあまりに巨大な鉄の塊が武器だとは最初信じられなかった。
「――――真田は助けたぞ」
「敵の戦力を減らすために弱所を突いただけなので、助かったというのなら素直に良かったですねと言っておきましょうか」
右眼を失っていたはずが暗く沈んだ金色の双眸を妖しく輝かせ、砕けて陥没した道路の中心に佇む青年の持っている武器は一体何なのか。
見た目からすると打撃武器らしいが、ハンマーなのかメイスなのか判断がつかない。
ただ、もしも見た目通りの鉄の塊だとすれば、いくら影時間で肉体の耐久力があがっていたとしても喰らえば無事では済まない。
本当にソレを十全に扱うことが出来るのか。他の武器と同様に持ったまま走り回って振るえるのか。
警戒を最大まで引き上げながらタカヤは腰の銃を抜き、他の者たちも武器や召喚器をその手に持ちながら青年の言葉を聞く。
「お前たちには以前言ったはずだ。俺が戦っているのはチドリの世界

を守るためだと。なのに、お前たちはチドリの世界を壊そうとした」
青年を中心とした場の空気が張り詰めてゆく。周りが燃えていることだけが原因ではなく、視線の先にいる人物の放つ殺気によって口内が乾く。
研究所時代には彼が研究員を脅すために重圧を放っていたのを見たことがあったが、施設を脱走してからは一度も見たことがなかった。
それは湊とタカヤたちがお互いに敵対の意思を見せていなかったからだが、手合わせとして戦っていたときも彼は戦意というものを見せていなかった。
いくら相手が殺すつもりで来ようが、機械のように感情を消して人を殺めることが可能性な青年にとって、タカヤたちとの模擬戦など相手に望まれたから力を貸していただけに過ぎない。
よく言えば稽古や指導であり、事実として言えば単なる作業でしかなかったのだ。
そんな相手が今は明確に自分たちを敵として見ている。自分の姿が彼の瞳に映っているという喜びもあるが、自分たちが生命の危機にあるという現状を無視するほどではない。
「ほう。では、弔い合戦ではなくただの報復ですか？」
「いや、チドリの世界を壊そうとしたやつらを潰しにきただけだ。さっきは挨拶代わりに攻撃したが、ここからは同じ世界の住人である仮面舞踏会の小狼として――――殺してやる」
言い終わると同時に湊がマフラーから金色の装飾が為された漆黒の銃を抜いて発砲した。
銃声は三発、けれど飛んでくる銃弾の速度が並みの拳銃よりも遙かに速い。
掴んでいる巨大な打撃武器を使うと思っていた事で、不意打ち気味の早撃ちへの対処が僅かに遅れる。
自分たちが回避しようとする間に、普段からの癖でスミレが巨大ペルソナのテュポーンを呼び出し、その蛇の尾のような足で銃弾を全てガードする。

「っ、スミレ、ペルソナを消しなさい！」
回避しようとしたタカヤたちよりも、普段通りの行動を取って対処したスミレの方が速かったのはある意味当然だった。
しかし、敵がそれを予想して攻撃していたとすればどうなるだろう。
現在、攻撃を防ぐためにテュポーンは自分たちを蛇の尾によって囲んでいる。
おかげでカスタム銃と思われる敵の銃弾から身を守ることは出来たが、代わりにタカヤたちは相手の姿だけでなく周囲の状況を見ることが出来なくなった。
これは拙い。このままでは援軍の見込めない籠城戦を強いられることになってしまう。
そう思ったタカヤがすぐにペルソナを消すようスミレに指示を飛ばした瞬間、目の前の視界が開けて頭上を巨大な何かが吹き飛んでいった。
何が起こったのか一瞬理解出来ず、巨大な何かが吹き飛んだ方へ振り返る途中、タカヤはスミレが胸を押さえて呻くのが見えた。
そして、タカヤが振り返るのと同じタイミングでジンとカズキも振り返れば、巨大な鉄の塊を両手で掴み、それによって体長三十メートルを超すテュポーンを近くのビルに叩き付けている青年がいた。
普段、胸部に向かって突撃されたところでテュポーンが吹き飛ぶことなどない
意識していない方向から攻撃が来ても蹌踉ける程度で、召喚者を守るために呼び出されたテュポーンはスミレの傍に居続けるのだ。
それがどういう訳か今は近くのビルに倒れ込み、崩れた瓦礫に埋まってしまっている。
テュポーンの正面には十分の一以下の身長しかない青年が立っているが、彼はペルソナや異能らしきものは使っておらず、ただ淡い青色の光を纏った鉄の塊を手にしているだけだ。
「なるほど、あくまで裏の住人同士のいざこざ。そうやってペルソナを使わず、武器と己の力だけで我々を殺そうと言うのですかっ」

舐められたものだ。冷静でいようと思っていたタカヤの頭に思わず血が昇る。
ペルソナを使うまでもない。異能など使わずとも殺せる。それだけの実力差が存在すると言いたげな彼の振る舞いが勘に障る。
「来なさい、ヒュプノス！」
テュポーンの受けたダメージが返ってきた事で怯んだスミレを連れてジンが離れると同時に、タカヤはヒュプノスを召喚して湊に向けてメギドラを放つ。
青年に向かって地面をなぞりそのまま上に振り上げるように放たれた極光は、道路を焼き削りながら進むと最後にテュポーンが倒れ込んでいたビルを焼いた。
巨大ペルソナの衝突で脆くなっていたビルは、ヒュプノスの追撃を受けると限界に達して崩れてゆく。
すると、自分に向かって迫る攻撃を横に避けて回避した青年へ瓦礫が降り注いでいき、流石の彼も回避行動に移らされている。
「モーモス、ジオンガ！」
そんな回避行動に移った瞬間を狙ってカズキの召喚したモーモスが電撃を飛ばす。
速度の速い電撃ならば彼を捉えられるなどと楽観的に考えてはいないが、それでも他の攻撃よりも速いので相手の体勢を崩すくらいは出来るはず。
「ンなっ!?」
そう考えていたのに、湊は迫り来る電撃に向かって持っていた鉄の塊を投げてきた。
弾丸のようなスパイラル回転をしながら真っ直ぐ飛んでくる超重量の鉄塊など恐怖でしかない。
飛ばした電撃は鉄塊に当たると弾けており、相手の勢いを殺しきれないと判断したカズキは射線上から逃げる。
「カズキ、避けなさい！」
すると、僅かに離れた場所からタカヤの声が聞こえ、カズキは一体何だと視線の端で湊のことを見た。

そこには両手が空いて銃を持った湊が向かってきており、鉄塊は防御と同時に目眩ましが目的であったと悟る。
飛んでくる鉄塊を受けないようモーモスを消し、湊の攻撃を察知していたカズキは受け身を考えずに瓦礫の影に飛び込んだ。
背後では数発の銃声と射線上にいた者が消えて通過してゆく鉄塊が存在したが、その鉄塊は重力に従って地面に落ちると、進行方向にあった瓦礫を押し退け粉砕しながら滑っていた。
もしも、飛んできた鉄塊を喰らっていれば、カズキは走ってきたトラックに轢かれたようになっていた事だろう。
とんでもない重量物を簡単に投げてくる相手を改めて脅威と認識し、タカヤが攻撃している間に起き上がったカズキは、絶対に殺されてなるものかと自分も銃を抜いて発砲した。
＊＊＊
寮で彼の存在を感じた七歌たちのように、マンションにいて湊の殺気に気付いたチドリたちはすぐに現場へと急行した。
途中、ペルソナを用いた通信によって七歌たちも現場に向かっている事が分かり、両者は安全のことも考えて合流してからやって来たが、現場近くに来た時点で街の惨状に言葉を失っていた。
この辺りには古いながらも現役でオフィスや店舗として利用されているビルが並び、道路に面した一階にはカフェや雑貨屋などが入っていたことで、チドリやゆかりも訪れたことのある店も存在した。
しかし、彼女たちの知っている街の景色は最早どこにもない。
砕けて陥没した道路。ショーウインドウが割れて燃えている店。倒壊して瓦礫の山と化したビル。
大通りから少し奥に入っただけで、自分たちの知っていた景色が荒廃した世界に変貌している。
「これ、完全に街への被害なんて無視してるよね……」
「ええ、それはお互いにでしょうけど」
全力ではないにしろ湊の戦いを見たことがあった事で、普段の彼ならばこんな街を破壊するような事はないと理解出来る。
そんな七歌にチドリも同意で返し、けれど、この被害規模はストレ

ガも同じように周囲への影響を無視して戦っているためだろうと答える。
割れて歩きづらくなった道路を構わず進み、燃えている炎の熱気と煙を鬱陶しく感じながらも未だに存在している気配の方へ向かってゆく。
彼女たちの向かう先からは未だに爆発音や建物が大きく壊れるような音がしている。
ストレガとも戦ったことのある真田たちは、自分たちより遙かに強い者同士がぶつかればこうなるのかと、自分たちの持っている異能の危険度を再認識する。
それは他の者たちも同じようで、ペルソナ同士が本気で殺し合えば街がこうなってしまうという事実に少なからずショックを受けていた。
「反応、近いです。でも、有里君がストレガと交戦していた場合、私たちはどうすればいいんですか？」
大きなビルが横たわっていた道路を塞いでいたことで、七歌たちが迂回しながら先を目指していると風花が心配そうに尋ねた。
この先で両者は間違いなく戦っている。そんな事は風花だって分かっているのだろうが、現場に到着したときに自分たちはどうすればいいのかが分からない。
湊を止めるのか、それとも協力してストレガをここで倒してしまうのか。
一人で戦う事を選んでやって来た彼なら、もしかすると手伝おうとする者も一緒に排除しようとしてくるかもしれない。
その辺りが読めないのが非常に厄介だが、そもそもの前提として自分たちでは介入することも出来ないレベルの戦いが行なわれている可能性がある。
だからこそ、風花は現場に到着する前に対処の仕方を決めておいた方が良いのではと尋ねたのだが、それに普段よりもどこか余裕のない様子の美鶴がすぐ答えた。
「出来れば有里を止めたい。今の彼は間違いなくストレガを殺すため

に戦っている。私はそんな事を彼にして欲しくない」
「だが、美鶴。有里の事は止められても、同じくあいつを殺すつもりで戦っているストレガはどうするつもりだ？」
目的のためなら大切な少女たちの制止の声も無視する青年を簡単に止められるとは思えない。
しかし、仮にそれが上手くいったとしても、湊が止まれば相手も止まってくれる訳ではない。
戦闘を止めれば一番危険なのは敵の前にいる湊になるため、美鶴の気持ちは分かるが単純にはいかないと真田が言えば、今度は沈痛な面持ちのアイギスが口を開いた。
「……わたしが敵を銃で牽制します。その間に八雲さんが後退してくれれば、撤退も可能かと」
「無理よ。私たちが何を言おうと八雲は絶対に戦いを止めない。だって、八雲は知り合いを殺されそうになった復讐で動いている訳じゃないもの」
傍で彼を見ていたからこそチドリには理解出来る。
今、湊が戦っているのは、単純に自分にとって邪魔な存在だとストレガを認識したからだ。
そう考える経緯に美紀のことは間違いなく絡んでいても、復讐ではなく目的意識で動いているので、いくら他の者が「美紀はそんな事は望まない」と叫ぼうが関係ないと主張を切り捨てられてしまう。
家族ながら本当に厄介で面倒臭いと思ってしまうが、そんな彼だからこそ自分たちが現場に到着することが重要になってくる。
何故なら、
「ただ、八雲は私たちの前では人を殺さない。どんなに自分が危険な状態になろうと、八雲は自分の決めたルールは確実に守る」
そう。チドリやアイギスを平和で温かな光のあたる世界にいさせたいと願う青年は、彼女たちの前で人を殺したりは絶対にしない。
他の者が彼女たちの目の前で人を殺めようとするならそれも止めるし、既に死んでいるなら気にせず放置もするけれど、温かな世界と対極にある殺人だけは彼は彼女たちの目に触れさせないのだ。

だからこそ、自分たちが彼の許にいけば状況は確実に変化する。
そう断言してチドリたちが音の激しい方へ近付いてゆくと、角を曲がったところでついに湊とストレガの姿を発見した。
「……っ」
しかし、戦う彼らの姿を見て思わず言葉を失う。
身体の所々に切り傷と撃たれた痕を残しながら走る青年が、巨大な鉄塊を持って跳躍すると拳を振り上げたテュポーンと正面から衝突する。
殴られた青年はそのまま吹き飛んでビルの壁面に激突し、代わりに彼の鉄塊に拳で挑んだテュポーンが殴った拳が弾け飛んで仰向けに倒れる。
確かに彼が持っていた武器は人間用とは思えないサイズであったが、一体どれだけの体格差があると思っているのか。
テュポーンが倒れると傍にいたタカヤがペルソナを呼び出し、湊が激突したビルに向かって縦一閃にメギドラを放つ。
頭から血を流しているタカヤも体中に銃創や切り傷に打撲痕があるけれど、今はアドレナリンが全開になっているのか痛がる素振りはない。
だが、これまで七歌たちの目の前に現われるときは余裕のある態度を崩していなかったというのに、今は必死に目の前の敵を倒すことに集中して余裕がない。
それは他のメンバーたちも同じで、左腕が折れ曲がり紫色になっているカズキも、無事な手で召喚器を抜いてペルソナを呼ぶなり湊に仕掛けている。
「さっさとくたばれよ、テメェッ!!」
これまでジオンガを放っていたカズキだったが、感情の昂ぶりに呼応するように威力の増した電撃が放たれる。
戦場を焼きながら湊へと迫る攻撃は既にジオダインへと変化していた。
そんなヒュプノスの放つ極光とモーモスの放つ電撃が壁に埋まった湊へ迫る。

すると、壁に埋まっていた湊が動き出し、不安定な体勢ながらかなりの勢いをつけて鉄塊を投擲した。
投げられた鉄塊はそのままタカヤたちの近くに着弾し、衝突した道路を爆発させて傍にいたタカヤたちにアスファルトの飛礫をぶつける。
それによって意識が僅かに削がれた隙を狙って湊が地上に降りてビルから離れると、湊が直前までいたビルは二体のペルソナの攻撃を受けて崩れていった。
「こんな……こんなのが、ペルソナ使い同士の戦いだって言うんですか？」
両者の戦いを見ていた天田が誰にでもなく尋ねる。
再び一つのビルが瓦礫と化したにもかかわらず、二丁拳銃を抜いた湊とタカヤとカズキが銃で撃ち合い、新たな傷を互いに作っている。
普段の湊であれば蛇神の影を使って防ぐことも出来たはず。けれど、湊は蛇神の影どころかペルソナも召喚していない。
腹を押さえながら吐血しているジンが手榴弾を投げてきても、湊はそれを撃ち抜いて爆発させるだけで、飛んできた破片からは身体をほとんど守っていない。
新しい傷が出来ても構わず引き金を引き、ただ目の前の敵を殺そうと獣のような獰猛さで戦い続けている。
そんな普段の彼からは遠い様子で湊が銃を撃ち続けていれば、先ほど片手を失って転倒させられたテュポーンが起き上がり、落ちていた湊の武器を掴んだと思えばそれを振り上げ、上空に一度跳び上がって振り下ろした。
間一髪で青年はそれを避けるも、巨人に振るわれたことで威力が上乗せされ、鉄塊が衝突したときには道路が激しい爆発を起こす。
「な、なぁ、流石に止めないとマズくないか？」
互いに血塗れになりながらも、目の前の敵を殺さなければならないという本能に従い戦っている。
あまりの迫力に怯みながらも順平が「どうにかして戦いをやめさせないと」と言えば、目の前で繰り広げられる戦いに飲まれていた少女

たちの瞳に力が宿る。
このまま見ていてもどうにもならない。本当に止めたいのであれば介入するしかない。
止めるのなら湊の傍に行かなければダメだ。そう考えて七歌やアイギス、そしてチドリたちはお互いに目配せをすると、青年の方へと向かって駆け出そうとする。
戦いをやめさせたい。青年の事を止めたい。そう考えていたからこそ少女たちは気付かなかった。
戦闘の渦中にいながらやって来た者たちの存在に気付いていた者がいたことに。
タカヤとカズキが銃とペルソナを駆使して前線で戦い、スミレがテュポーンで湊を抑えていた。
そんな状況でチドリたちが近付いてくれれば、味方の援護をしながら敵の隙を窺っていた者はチャンスだと考えて当然だ。
もしものときのとっておき。召喚器とは別に腰に付けていた拳銃を抜くと、ジンは口元を吊り上げチドリに向けて発砲した。
「死に晒せぇっ」
それほど大きくない発砲音が響くと拳銃から青白い弾丸が飛び出す。
戦っていた仲間たちは彼の行動に気付いていなかったし、それはチドリたちも同じだった。この戦場においてジン以外の全員が湊に意識が向いていたのだ。
だからこそ、発砲音がしてからようやく気付く。ジンの放った弾丸が自分の方へ向かっていることに。
音が鳴ってから気付いても遅い。拳銃の射程距離はそれほど長くないと言っても、飛ばそうと思えば五十メートルまで届くこともあるのだ。
狙いだってチドリたちはほとんど一塊になって移動していた。これならば、狙い通りにチドリに当たらずとも、他の誰かには当たってくれる。
蹴られて折れた肋骨が痛むけれど、ジンはようやく目的通りに敵戦

力を一人排除できるのが嬉しかった。
気付いていなかったチドリたちでは反応出来ない。反応出来ない以上は当たる。
そんな風に確信していたからこそ、ジンもまた気付くことが出来なかった。
自分と同じようにチドリたちの接近に気付き、さらにはジンが攻撃しようとしている事に気付いている者がいたことに。
そう、この戦場においてジン以外の全員の意識が一人に向いていたが、その意識を向けられていた本人は、四人を一度に相手にしていたために広い視点で見ていたのだ。
あと僅かで凶弾がチドリに届く。そのタイミングで影が射線上に割り込み、自分の身体で凶弾を受け止めた。
「な、んで、八雲が……」
青年が自分の身体を使って銃弾を受け止めたことにチドリが目を見開く。
少し離れた場所で戦っていたはずが、ジンの動きを見て発砲される前に動き出して間に合ったようだが、彼は銃弾を心臓の辺りで受けてしまっていた。
チドリたちが来るまでにも何発かは喰らっていたようだが、今受けたものほど急所に喰らっているものはない。
彼が突然自分たちの前から消えたことにはタカヤたちも驚いていたが、口から血を吐きつつ湊が何かに耐えるように胸を押さえて膝を突いたとき、銃弾を放った本人が僅かに焦った様子で叫んだ。
「タカヤ！　いますぐ撤退や！」
「撤退？　面白いのはこれからでしょう」
偶然とは言えようやく湊に明確なダメージを与える事が出来たのだ。
何やら苦しんでいるようなので、このまま上手くいけば殺すことも可能かもしれない。
そんな状況で撤退などあり得ないとタカヤが言えば、誰よりも焦った様子でジンが再び撤退を進言した。

「アカン！　わしが撃ったんはあの弾や。ミナトが喰らうなんて想定しとらんかってん！」
その話が聞こえていたチドリたちは、彼が撃った銃弾が何か特殊なものであったと理解する。
ただ、もしも毒などであれば湊には効かないはず。全ての毒に耐性があるとは言わないが、彼は幼少期の実験と覚醒した名切りの血によって数多の免疫を持っている。
それによって致死量の毒を摂取してもほんの僅かに動きが鈍るだけで、短時間のうちに元通りになるはずなのだ。
しかし、チドリたちの視線の先で、湊は今の胸を押さえて膝を突いている。
ジンの言葉を聞いたタカヤも真剣な表情でそれを見ており、考える素振りを見せると他の仲間たちを呼んだ。
「カズキ、スミレ、すぐにこの場を離れますよ」
「ちっ、しゃーねェか」
「むぅ、もう少しミナト君と遊びたかったのです」
他の者たちも先ほどの銃弾が何かを知っているようで大人しく指示に従っている。
全員が集まるとスミレが召喚し直したテュポーンに掴まり、タカヤたちが空へと飛び上がってゆく。
だが、一体湊に何をしたんだとチドリらが問い質そうとすれば、去る直前に楽しげに口元を歪めたタカヤが親切に正体を教えてくれた。
「去る前に先ほどの銃弾の正体を教えてあげましょう。通称は狂騒弾。効果は制御剤の逆。シャドウの欠片を用いてペルソナを強制的に暴走状態にするのです。暴走の規模は適性に依存します。貴方たちも逃げるつもりなら早めにどうぞ」
それだけを言い残すと彼らは空を飛んでどこかへ去って行った。
しかし、最後に教えてくれたおかげで湊が苦しんでいることにも納得が出来た。
タカヤの説明が真実であれば狂騒弾は薬品由来のものではない。シャドウの欠片という異物を植え付け、それによって本来シビアなバ

ランスで存在するペルソナを暴走させるらしい。
現に苦しそうにしている湊からは力が漏れ出してきており、蛇神が出てきたときほどではないが重苦しい気が充満し始めている。
こんな街中で湊の力が暴走すれば、首都圏は軽く吹き飛ぶと思われる。
原因となっているシャドウの欠片とやらを取り出せば問題も解決しそうだが、それが可能であれば湊は真っ先に行なっているはずなので、美紀の適性を吸収したときのように既に湊の一部になっているのだろう。
「ぐ、がっ……」
「八雲さん、大丈夫です。気持ちを鎮めてくださいっ」
他の者たちがどうすべき考えている間にアイギスが近付いて湊に声を掛けていた。
そんな言葉で精神を落ち着かせる事が可能ならば苦労はしない。
案の定、特に何が変わった様子もなく、湊からあふれ出る力の濃度が上がっている事だけは理解出来る。
この場に満ちている力の片鱗だけで既に他のペルソナ使いの適性を超えているようだが。確かにこのままでは大変な事になる。
危険は承知の上で湊をどこかへ移動させるか。それとも上空に向けて力を解き放って地上への被害を最小に抑えられないかやってみるか。
どうするべきかと他の者が悩んでいれば、己の限界が近いことを感じ取ったのか湊は強行策に出た。
「がぁぁぁぁぁぁっ!!」
叫び湊の右腕が黒い影に覆われる。鬼の力を宿した状態で何をするつもりなのかと見ていれば、湊はそのまま黒い右腕で自分の胸を貫いた。
貫通して背中側から出てきた腕には心臓が握られており、湊の胸と背中からは鮮血が噴き出す。
あまりに突然の行動に他の者が驚いていると、湊はそのまま地面に倒れ込み動かなくなった。

「八雲さん!!　八雲さんっ!!」
心臓を失って倒れた湊の呼吸は止まっていた。死んだ人間に心の動きが起こるはずもなく、暴走しかけていた力は無事に止まったが、周囲へ被害を出さないために自害するなど意味が分からない。
目の前で大切な人が死んだ事でアイギスが取り乱しながら名を呼んでも返事はなく、心臓を失った以上は美紀のように助かることもないと分かっている七歌や美鶴が悲痛な表情で俯いた。
「馬鹿野郎っ」
妹が助かったばかりだというのに、その恩人が仇討ちが原因で帰らぬ人となりやりきれない気持ちになる。
まだ礼も謝罪も言い足りなかったというのに、これでは何も伝えられないではないかと真田は悔しさに拳を握り締める。
ゆかりと風花は突然のことに声も出さずに涙を流し、順平や荒垣はまたストレガのせいで犠牲者が出たことに強い憤りを感じていた。
だが、そうやって特別課外活動部のメンバーたちが、街に被害を出さぬよう自決した青年の死を嘆いていると、アイギスに抱かれている彼の死体を見ていた少女たちが静かに口を開いた。
「なあ、湊君まだ起きへんの？」
「さっさと蘇生しなさいよ」
死んだばかりの相手に対し、少女たちの反応はあまりに冷たい。
しかし、彼女たちの言葉に反応するように彼の指先が動くと、彼の身体を白い光が包んだ。
「やれやれ、虫共を殺す方法など何でも構わぬだろうに。〝私〟にも困ったものだ」
白い光が治まると湊だったはずの肉体は性別と容姿が変わっていた。
地面に届くほど長い白髪、氷のように冷たい銀の瞳、雪のように白い肌など、それらは湊と全く異なっている。
「あなたは……ベアトリーチェさんですか？」
「如何にもそれは私が〝私〟から貰った名だ」
湊の肉体が別の姿に変化したことで、以前聞いていた彼に宿る神の

人格が出てきたのかとアイギスは予想した。
すると、相手は予想通りの人物だったことで、肉体の蘇生が完了したのなら肉体の持ち主である湊も無事なのかと続けて尋ねた。
「あの、八雲さんは無事なんですか？」
「蘇生自体は私たちはどちらでも可能だ。だが、〝私〟はいま私の中で植え付けられたシャドウの欠片を排除している。故に、その間の肉体の管理を任されて出てきたという訳だ」
湊が自決したのは死ねば心の力など使えなくなると判断してのことだが、原因となったシャドウの欠片を排除するまでは蘇生しても安心できない。
だからこそ、一時的にベアトに肉体の制御を預け、現在彼は暴走を引き起こそうとした原因を取り除きに向かっているとのことだが、心臓を穿った傷が塞がっていても無事に蘇生されたなど簡単には信じられない。
本当に無事なのかと改めて確認を取っても、ベアトは自信満々に頷くだけでいつまでもその人格は元に戻らず。
やることがなくなったので帰るという彼女を見送っても、七歌たちの不安が晴れることは最後までなかった。

第二百六十四話　彼について思うこと

――港区・某所

湊との戦闘を終えて飛び去ったタカヤたちは、幾月から貰っていた特殊な腕輪を身に着けて自分たちの適性反応を消していた。

探査能力を持つペルソナには力の感知の仕方にいくつかの種類があるが、風花やチドリのような範囲内に存在する生体反応を基点として利用する能力が相手ならば、腕輪で自分たちの適性反応を消すだけで索敵網から逃れる事が出来た。

逆に、湊のように自分の知覚を広げてゆくタイプには効果がないのだが、自分の知覚を広げてゆくという事は、実際に視なければ存在していても気付かないという事でもある。

それは上手く隠れることが出来れば腕輪を付けずとも感知されないという事であり、彼のペルソナの能力を詳しく知らないながらも、未だに研究所の場所がバレていないのならば、そういう欠点のある探知能力なのだろうと予想されていた。

「おや、随分と酷くやられたようだね」

身体の至る所に傷と血の跡を作り、かなり疲弊した様子で戻ってきたタカヤたちを見て幾月が呟いた。

彼はずっとこの研究所から出ていなかったが、研究所にはマリアと一緒に探知能力を持ったメノウも残っていたことで、外でタカヤたちに何があったのかを聞いていたに違いない。

ただ、リーダーであるタカヤが認めた事で同盟こそ結んではいるが、かつては自分たちを実験用のモルモットとして扱っていた男から軽い口調で言われれば勘に障りもする。

「ンだ、テメェ。穴蔵でコソコソしてるクソネズミが偉そうにしてンじゃねエぞ！」

戦闘時に変なこだわりを持つ湊に全力も出さずに相手をされ、そんな彼に負けて帰ってきた苛つきもあり、肋骨を折っていたジンに肩を貸していたカズキが相手を睨むと怒鳴った。

彼が内心でかなり荒れていることは帰ってきた時点で分かってい

たが、こんな事で突っかかっていくほどとは思わず、研究所に残っていた者たちは少々驚いた。
しかし、だからといって怯えたりする者は一人もおらず、パソコンの前に座っていた幾月の傍にいた玖美奈が呆れた顔をするとペルソナを呼び出し回復魔法をかけた。
「別にお父さんはそんな意味で言った訳ではないわ。それに貴方たちがアレに負けたのは事実でしょう？」
黒く長い髪を持ち、漆黒のドレスを身に纏った女性型のペルソナが現われると、怪我をしていたカズキたちを魔法の力で包み癒やしてゆく。
その魔法は湊のペルソナに匹敵するほど強力で、折れていたジンの肋骨とカズキの片腕を痕も残さず治療して見せた。
いつも湊を格下のように見ながら話していた相手だが、タカヤたちがそのペルソナの力を見たことはほとんどない。
けれど、回復魔法でこれだけの力を持っているのなら、戦闘力も十分に期待できるだろうと認めつつ、自分たちも何もせずに逃げ帰った訳ではないとタカヤが肩を竦めながら反論する。
「一応、狂騒弾を当てて暴走状態に持ち込みはしたのですがね。どういう訳か不発に終わったようです」
「……フム。シャドウの欠片とはつまりは他人の心な訳だが、そんなものを打ち込まれれば拒絶反応でペルソナが暴走するはずなんだがね」
「ええ、実際にミナトは今にも力が解放されそうになっていました。抑え込んでいた精神力は大したものですが、一体あそこからどうやって暴走させずに済んだのやら」
ペルソナを意図的に暴走状態にする狂騒弾を作ったのは幾月だ。
原理は他人の心であるシャドウの欠片を打ち込むことで、ペルソナ使いの心のバランスを強制的に崩すというものだが、それは例えるなら凪いでいた水面に向かって大きな石を投げ込むようなものである。
時間が経てば元に戻るだろうが、しばらくは石を投げ込まれた事によって水面は荒れる。

タカヤたちが見ている目の前で苦しんでいたなら、それは湊も例外ではなく実際に暴走しかけていたのだろう。
だが、どうすればそこから暴走させずに済んだのか分からず悩んでいれば、こんな可能性はないかとソファーに座っていたメノウが口を開いた。
「もしかしたら、途中で意識を失ったとかじゃないのかな？」
「いや、君たちも知っているだろうが、眠っている状態でもペルソナが暴走することはある。意識を失ったくらいでは抑え込んだ力が解放されていただろう」
エルゴ研時代にも眠っている途中でペルソナが暴走し、そのままペルソナに首を絞められて死んだ者がいた。
タカヤたちも制御剤を使わなかったり、高熱などで体調を崩していれば同じような事が起きるため、確かにその線はないなと納得する。
すると今度は、傷が治ったことで部屋の隅に置かれた冷蔵庫からペットボトルの水を取り出していたカズキが、湊本人の力ではなく駆けつけていた桐条側の仕業ではないかと話した。
「桐条側には制御剤を持ってるやつがいンだろ。ギリギリでそいつをミナトに投与したンじゃねェのか？」
「あぁ、荒垣君だね。だがそれも考えづらいね。制御剤は言ってしまえば精神安定剤系の薬だ。薬の効果によって興奮物質等の分泌を抑えるものだから、前提として薬物の効かないエヴィデンスには使っても意味がないんだ」
他のペルソナ使いならば制御剤を使えば、確かに自前の制御力と制御剤の力で状態をイーブンに持っていくことは可能かもしれない。
けれど、幾月はエルゴ研から回収した飛騨のパソコンに残っていた湊の肉体改造について知っていた。
どれも信じられないような情報の数々であったが、幾月はそれらをより安全な状態で結城理にも施しており、理が実際に薬物が効かなくなっていることで制御剤も効果がないと理解している。
よって、いくら荒垣が持っている制御剤全てを湊に投与しようが、一時的に肉体への負担が増える程度で制御剤としての効果は発揮さ

れるはずがなかった。
「ほんなら、ミナトがそのシャドウを抑え込んだか、限界超えて死んでもうたんとちゃうんかい？」
「うん。それが一番可能性として高いかな。多分、死んではいないと思うから、ワイルドの力を使ってどうにか制御状態に持っていたんだろう」
　他の者たちが言った可能性がないのであれば、残されているのは湊が自力で制御したくらいしかあり得ない。
　それをジンが指摘すれば幾月もワイルド能力者ならばあり得ると笑って頷いた。
「折角の狂騒弾が不発に終わったというのに嬉しそうですね？」
　幾月が笑っているのを見たタカヤは、どうしてそんなにも嬉しそうなのだと彼に尋ねる。
　狂騒弾は幾月が秘密裏に作った物の中でもとっておきの自信作であった。
　カモフラージュ等、ペルソナ使いや桐条側から隠れるときに使用する適性反応を消す腕輪も自信作ではあるが、それらと違って狂騒弾は対ペルソナ使い用の弾丸であり、一般人でもペルソナ使いと戦う事が出来る。
　わざわざそんなものを作った理由など、後で不要になったペルソナ使いを殺すためか、もしものときに対抗できるよう備えたかだろう。
　だが、今回の結果だけをみれば狂騒弾の効果が失敗に終わったことになる。
　普通ならば自信作が効かなくて落ち込むところを、口元に笑みを浮かべるとはどういった心境なのかとタカヤが尋ねれば、幾月は笑顔のままショックは受けていると答えた。
「いやぁ、実際は残念に思っているよ。当時はまだなかったペルソナ使い殺しの魔弾だからね。まさか一人目から効かないとは驚きでいっぱいだよ。だけど、エヴィデンス並みの力がなければ抑え込めない事も分かったからね。狂騒弾は十分に使えそうだ」
　そう。失敗した理由はあくまで相手が湊だったからだ。

彼でも苦しんで一時的に行動不能になっていたのだから、他の有象無象では耐える暇もなくペルソナが暴走するに違いない。
その確信があるからこそ、失敗しても得る物があったと幾月は結果自体には満足しており、そういった理由を聞かされたタカヤも成程と納得した様子を見せた。
今回の突然の湊強襲には流石のタカヤたちも驚き疲れたようだが、どうにか無事に帰ってきて怪我も全て治療できた。
戦いの中で分かった事などの情報交換も終え、次の満月の動きについて話し合おうとしていたところ、回復スキルを使って以降は黙っていた玖美奈が会話に参加してきた。
「お父さん、次の満月だけど私たちも動こうと思うの」
「ほう。それはまた急だね？」
彼女がいった私たちとは玖美奈と理の事である。
彼女たちは理の容姿が成長前の湊にソックリである事から外に出られなかったが、ここに来てどうして急に戦いに出ようと思ったのか不思議に思う。
戦いに出ればどうしても特別課外活動部や湊と遭遇しやすくなるため、計画の最終段階まで日数がある次の満月で動く意図が知りたい。
それはストレガたちも同じようで、その場にいる全員の視線が玖美奈と理に集まれば、彼女たちはより確実な方法を取るためだと話した。
「ええ。でも、アルカナシャドウが出てくればあいつもペルソナを使うでしょう？　そのときは今回みたいに手加減されないでしょうから、横槍を入れに行ってもストレガでは抑えきれないと思って」
「それに残るアルカナシャドウは三体ですが、無気力症の増加ペースから言って次は二体。なら、どうせ後二回で終わるんだし僕らが出ても良いかなって思ったんです」
次の満月にもストレガは出て行くつもりだが、無気力症患者の見つかっているエリアからすると、次は二体のアルカナシャドウがほぼ同じ場所に出現すると思われる。

となれば、いくら湊が特別課外活動部と共闘する気がないとしても、両者が同じエリアにやってきて共通の敵を倒すことになるだろう。
一応、ストレガが敵の分断のためにと天田と荒垣の因縁を本人たちに伝えてきたが、彼らが使命を優先してアルカナシャドウの討伐に参加してしまえば意味がない。
よって、もしもストレガまで同じエリアに向かうことになったときを考え、ストレガが特別課外活動部と戦い、一番邪魔な湊を抑えられる自分たちもそこへ参加した方が良いだろうと彼女たちは語った。
「分かった。なら、次は玖美奈たちも出てくれて構わないよ」
「ええ、ありがとうお父さん」
ついに外に出て自由に戦えることになり、玖美奈と理は自然と好戦的な笑みを浮かべる。
その姿を眺めていたタカヤたちは、そちらが自由に動くなら自分たちもより自由に動けそうだと口元を歪め、同盟相手同士でありながらお互いに共闘について考えていなかった。
傍で子どもたちの様子を見ていた幾月はその点について理解しているものの、彼らがお互いの身内しか信用していない事は分かっていた。
もし、幾月の方から共闘するように指示すれば、表面的には納得したように見せてくれるだろう。
だが、それだと実際に戦う場面でお互いを守り合わなかったり、どさくさに紛れて信用ならない相手を亡き者にしようとするかもしれない。
そんな事になるくらいなら別々に働いて貰った方がいいので、幾月は別行動自体を許可してから当日の大まかな動きを話し合うのだった。

９月１７日（木）
放課後――月光館学園・図書室
美紀がストレガに襲撃され、湊がストレガを襲撃してからおよそ十

日が過ぎた。
湊は今まで通りに学校には顔を見せないし、ラビリスと住んでいたマンションにも帰っておらずほぼ行方不明だが、シャロンが言っていた通り、美紀は三日ほどで退院すると学校にも復帰して元気に通学している。
その姿を見た真田はとても嬉しそうにしていたけれど、妹の恩人である湊がストレガを殺そうと動いたことには複雑な心境なようでしばらく寮では元気がなかった。
さらに天田と荒垣もどこか様子がおかしく、以前ならコンビニ弁当などでは栄養が偏るからと荒垣が自分の分のついでに夕食を作ってやっていたが、最近はあまり迷惑を掛けたくないからと天田はコンビニ弁当を食べていて荒垣も何も言っていなかった。
そうやって一部の者がおかしな様子だと寮内に雰囲気が伝染してしまうのだが、幸いなことに現在は文化祭の準備があって他の者たちの事ばかり気にしていられない。
今も七歌は図書員としての文化祭の掲示物を必死に作っており、自分がこんな事をしなければならない原因を作った本来の図書委員であったクラスメイトの高橋にお菓子を要求したが、図書室では飲食が禁止なので彼女はストレスを感じながらも真面目に仕事をしていた。
(おのれ、許さんぞ高橋ィ!!)
心の中で高橋への怨嗟の声を吐きながら、七歌は歴史の資料集を眺めて模造紙に文章を書き込んでゆく。
彼女が担当しているのは古代ローマの歴史と文化についての掲示物だが、別に七歌自身は古代ローマに対する思い入れなど欠片もない。
それならば、自分や仲間のペルソナに関わるギリシャ神話について担当し、よりペルソナについて知識を深めても良かったかなと思わなくもないが、ペルソナの強さは本人の精神の強さなどに依存するので関係ないかなと思考を切り替える。
(けど、どうして八雲君はストレガを殺しきれなかったんだろう?)
目は資料集の文章を流すように読み、手はしっかりとそれらを模造

紙へと書き写しているが、今の七歌は先日の湊とストレガの戦いについて考えていた。
有里湊。いや、百鬼八雲という男は誰もが認めるほど強い。
単純な身体能力の高さだけで他の者を相手出来るだけでなく、およそ十年前から実戦の中で鍛え続けた技術と経験値がある。
そこへ血に宿った名切りの力とペルソナ能力まで加わるのだから、正直にいって彼と戦いたいと思う者は余程の戦闘狂に違いない。
だが、だからこそ七歌は先日の戦いが腑に落ちなかった。
自分たちと比べ、ストレガたちの方が個人の実力で勝っている事は、彼らをアナライズした風花の報告からも分かっている。
中でも眼鏡をかけた少女の持つ巨大ペルソナは規格外らしいが、そのストレガと比較して尚、湊は圧倒的に勝る適性値を持っているのだとか。
実際のところ、七歌たちは出会ったストレガたちの適性値は聞いているが、湊がどれだけの適性値を持っているのかは風花から聞いていない。
彼女は先月の満月に桔梗組で湊の適性値を計測していたので、桐条グループでも掴んでいない正確な数値を知っているはずだが、美鶴や真田が湊の適性値を尋ねても教えてはくれなかった。
桔梗組で出会った時点での正確な数値は分かっている。これに関しては彼女も認めており、知っている事を隠そうともしていない。
だが、それならばどうして教えてくれないのか。
湊の眼には複数の魔眼が宿っているらしく、その中に暗示や催眠能力を持つものもあるようなので、もしかすると事前に能力で口外できないようにされているのかとも思ったが、風花はそれを否定して教えた場合の悪影響を懸念して伝えないのだと説明した。
(私たちの適性値を足した倍以上とは教えてくれたけど、それだと余計にストレガの一件が引っかかるんだよなぁ)
テストの結果を比較すると相手との差をより明確に感じるように、正確な数値で比較できるようになってしまうと、どうしても精神面に影響が出てしまう。

唯一教えてくれたのは、特別課外活動部にチドリたちを足した数値を倍にしても届かないという事だったが、ペルソナとは扱う自分自身の心の力である。
そのため、彼女が言うからには合計の倍どころではなく、知ればショックを受けるほどの差が存在するに違いない。
しかし、だとすれば湊はストレガたちにも適性値で勝っているはずなのだ。
これはベルベットルームで聞いた話だが、ペルソナを喚べる者という括りならともかく、ペルソナ使いとしては湊が間違いなく最強らしい。
過去だけでなく未来に現われるであろうワイルド能力者を含めても、複数同時召喚であるミックスレイドを行える者は彼しかいない。
誰でも目覚め得る可能性のあるペルソナやワイルドと異なり、複数同時召喚に関しては完全に本人の素養に依存するとのことで、おかげで湊は単騎でありながら軍勢としての力を発揮できるのだ。
（そう。だから、八雲君ならストレガと同じ数かそれ以上のペルソナを呼んで対抗できたはず。けど、どういう訳か戦闘にペルソナを使っていなかった……）
チームとして行動していたストレガに数で対抗できるはずが、彼はどういう訳かペルソナも使わずに一人で戦いを挑んでいた。
もしや体調が悪かったり、既にペルソナが呼べないほど精神力が減少していたのかとも考えたが、狂騒弾と呼ばれる弾丸を喰らった湊は暴走状態ではあるがペルソナを呼び出せる様子だった。
本当に精神力が足りなければ呼び出せても意識を失ったはずなので、場の空気が重くなるほどの予兆など発生し得ない。
つまり、彼はペルソナを使えるというのにわざわざ武器を使って戦っていた事になる。
（八雲君が放った殺気は間違いなく本物だった。最初の一撃は挨拶代わりだとしても、本気で防がなければ死んでいた威力。なら、やっぱりストレガを殺すために戦いに行ったんだろうけど、殺そうっていうときに手を抜く意味が分からない）

あの日の湊は体調に問題はなく、ペルソナも使える状態で、さらに言えば人質などが取られている訳でもなかった。
最初に街ごと焼き払おうとしたように、やろうと思えばストレガの上空に着いてからペルソナのスキルの雨を降らせて絨毯爆撃も出来たに違いない。
到着したときにはあの地域一帯は瓦礫の山と化していたので、街への被害を考えてそれをしなかったとも思えず、一体何があって彼が全力を出していなかったのかが分からない七歌は、椅子に浅く座ると背中を背もたれに預けて頭の後ろで腕を組んだまま天井を見上げた。
「七歌ちゃん、お疲れさま」
「んー、おっつー沙織」
七歌が考えながら少し休んでいると、同じ図書委員である長谷川沙織がやってきた。
彼女は自分の担当である掲示物を既に完成させ、今日は展示コーナーの飾り付けなどをするようだが、友達である七歌が何やら考え込んでいる様子だったことで声を掛けてきたらしい。
七歌が手を挙げて挨拶すると沙織はフフッと小さく笑って七歌の隣に座り、彼女の書いている模造紙に視線を送りながら話しかけてきた。
「なんか困った顔をしていたけど、アイデアに行き詰まったりしていたの？」
「ううん。これ自体は面倒なだけで一切問題はないよ」
「じゃあ、何か別の事かしら？　あ、もしかしてクラスの出し物がまだ決まってないとか？」
「いや、そっちも大丈夫。うちのクラスはゆるーく喫茶店なのですよ」
掲示物を書きながら考えていたことで、何か詰まっているのかなと沙織が心配して声をかければ、七歌はこんなの年表から情報をピックアップするだけだと軽い調子で話す。
ならば、一体何に悩んでいるのかなと考え、沙織がクラスの方で問題があったのかと尋ねれば、そちらも問題はないと七歌は答えた。
月光館学園は有名進学私立ということもあって、他の学校のように

休憩所という出し物をすることが出来ない。
合唱や演劇などで舞台に出るか、真面目に研究したものなどを展示するか、クラスで考えた出し物なり飲食店なりをする必要がある。
だが、そんな面倒なルールがあろうと、ルールの範囲内で手を抜くことは出来る。
七歌たちのクラスでは喫茶店を開く事になっているが、専用の制服を用意したりはせず従業員は学校の制服の上からエプロンを着けるだけ。
メニューはというと、飲み物としてインスタントの業務用紅茶とコーヒーを用意し、食べ物はカレーライスとカレーパスタの二択というおかしな状態になっている。
メニューをみた時点で炭水化物の部分を変えただけの同じ物だと分かるが、文句があれば食べなければ良いだけなので、七歌たちのクラスは適度に手間をかけつつもしっかりと楽できるよう考えられていた。
そんな風に学校関連での悩みではないとなると、ここへ到着したばかりの沙織には想像が付かない。
けれど、何かしらの力になってあげたいと彼女が言葉を待っていれば、七歌は先ほどまで考えていた湊のおかしな点について、部分的に情報を伏せつつ沙織に聞いてみる事にした。
「あー、沙織に少し聞いてもいい？　最近読んだ漫画の展開でよく分かんない事があってさ」
「うーん。あんまり漫画は読まないから力になれるか分からないけど、私で力になれるのなら何でも聞いて」
以前自分で言っていたが、沙織は人から必要とされたいと考える人間だ。
だからこそ、友達である七歌が相談に乗って欲しいと言ってくれれば嬉しそうに笑い、しっかりと瞳を七歌に向けて話を聞く体勢になった。
「えっとね、あるキャラクターが仲間を殺されかけてメチャクチャ怒るんだけど、その犯人であるやつらに報復に向かうの。実力的には勝

てるから報復自体は良いんだけど、そのキャラクターは何故か戦い方を制限して挑んだんだよね。私はその理由が分からなくて一体何でなのかなって考えてたの」
ストーリーも何も説明せず、そんな一つの場面についてのみ聞かれても普通は困るだろう。
けれど、沙織は漫画の話だと言われても軽く考えたりはせず、年下の友人である七歌の力になってあげたいがために、自分がこれまで読んできた小説などを思い出しながら、そのキャラクターの状態や心情を想像してみた。
「そうねぇ。身体の調子だったり、そのときの装備に異常でもあったんじゃないかしら？」
「いや、そういう訳でもないっぽいんだ。武器で戦いはしてるし殺そうともしてたし」
「じゃあ、殺そうとした相手が知り合いだったとかかしら？　憎いけど憎しみだけじゃないみたいな」
身体と装備に問題がなければ心の問題だとしか思えない。
殺したいほどの憎しみがあったとしても、もしその相手が親しい知り合いであったなら決意が揺らぐこともあるかもしれない。
そんな可能性はないかなと沙織が僅かに顔を傾けつつ尋ねれば、七歌はよく知り合いと分かったねと彼女の鋭さに感心して見せた。
「うーん。確かにそれはあるのかな。昔の知り合いで助けたこともあったみたいだし。あ、でも、そのキャラクターって仕事モードに切り替えて、思考と感情を分けられる感じでもあったよ？」
「そうなの？　じゃあ、ただ殺すことが目的じゃなかったとか、後は何かしら殺せない理由があったとかじゃないかな？」
ただ殺すことが目的ではなかった。そう聞いたとき七歌はそこが理由かと何かを掴みかける。
以前、風花が行方不明になっていたとき七歌たちは路地裏で湊と遭遇した。
普段の彼ならば単に不良たちをのして終わっていたかもしれないが、あの時はわざわざ恐怖を植え付けるようにいたぶっていた。

それと同じように、ストレガと戦っていた湊は最終的な目的を敵の殺害に定めつつも、出来得る限りの手段でもって恥辱と痛みを与えようとしていたのかもしれない。
美紀を殺そうとした事を後悔させるために、二度とそんな真似が出来ないよう自分と相手の実力差を見せつけて。
「なるほどね。確かに沙織の言うとおりかもしれない。分かったらスッキリしたし、沙織に相談してよかったよ。ありがとう！」
「フフッ、お役に立てたなら良かったわ」
敵と認識した者は殺す。実際に彼は今までそうやって行動してきたのだろう。
だが、彼は誰よりも深く憎んでいたはずのソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインを殺そうとしたときには、久遠の安寧の構成員たちを次々殺すことで相手側にプレッシャーをかけ続けた。
おかげでソフィアの父は湊を強く警戒して拠点に籠もっており、他の幹部たちもいずれ鬼がやって来るのではと恐怖を抱いていた。
本当に何も知らないような他人であれば〝作業〟として殺せるのだろうが、誰よりも憎み続けるという負の執着によって相手を知ってしまった場合などは、それは作業でも仕事でもなく〝殺人〟になることで無意識に感情が乗ってしまうようだ。
感情の昂ぶりによって突発的に人を殺せてしまう他の者とは真逆。理性的、または感情的になった方が人を殺せず、むしろ作業のような無意識的な方が人を殺せる辺りにバランスの悪さを感じる。
それが良いことなのかどうかは七歌には分からないが、他の者が知らない湊の一面を知ることが出来たことで、彼女はその後の作業を上機嫌でこなしていった。

――ＥＰ社・工場区画
ＥＰ社工場区画の地下に存在する特別エリア。
そこは湊やソフィアなど一部の者しか立ち入ることを許されていない場所だが、学校の体育館ほどの広さを持つとある部屋で、青年が熱心に巨大な鉄の塊を振るっていた。

鉄の塊の名はデュナミス。分類上は巨大なメイスになると思われ、これを持って事を為そうという青年の意思を名として付けられた。
もっとも、この武器の初陣はなんとも中途半端な結果に終わってしまい。武器を持って帰ってきたのも青年ではなく、その身体に同居している他次元神の少女であったことで、彼の帰還を待っていたソフィアも驚いたものだ。
「湊様、やはりまだ武器に引っ張られている感が否めないかと」
「……そうか。これでも結構振るえているつもりだったんだが」
武器を振るっている青年の傍には、様々な角度から撮影した映像をモニターで確認していたソフィアがいた。
彼女がここにいるのはただ湊のトレーニングの付き添いである。
あまりに重すぎるせいでデュナミスを十全に使いこなせていないという問題を解決するため、湊は元に戻ってからは毎日のようにここで鍛錬を続けている。
ソフィアはその間ずっとここにいる訳ではないが、仕事の合間や仕事が終わってからなど、出来る限りここへ訪れて湊の鍛錬に付き合っている。
だが、ずっと見ていたソフィアだからこそ、湊でもこの武器を使いこなすことが出来ないと考えていた。
「確かに最初に比べれば振るえていると思います。ですが、どうしても振るときには踏ん張って溜めを作っているので、普段の戦い方と比べると隙が大き過ぎるのです」
湊の戦い方は速さを活かした高速戦闘や、次々と技を繋げて隙を作らない技術寄りのものが多い。
本人の性格からすると特大火力の一撃で済ます方が好みのようだが、その極地とも言えるデュナミスはそもそもの規格からして人間用ではない。
超重量の武器ならば九尾切り丸という名切りの最高傑作を既に持っている。そちらならば湊は完璧に己の一部として武器を扱える。
だというのに、湊は相手を叩き潰すようなタイプの重量武器が欲しいと言ってこれを作って、使えはするが使いこなせてはいないという

結果に留まっている。
振るう感覚を掴もうと汗だくになりながら振るう姿を見ていたソフィアとしては残念に思うが、使えると勘違いして危険な目に遭う方が辛い。
そうして、彼女がストレートに見ていた感想を述べれば、鍛錬中は腰に付けていたマフラーに武器をしまって湊も休憩のためソフィアの隣に座った。
「……先は長いな」
疲れた様子で呟く湊だが、ソフィアからすれば長いも何も永劫に辿り着けないと思っている。
そも、先日の戦いの結果に彼女は疑問を感じているのだ。
あの日、上空から街に向けて放った一撃を見て、さらに青年が飛んでいったことでソフィアは相手が確実に死んだと思っていた。
しかし、戻ってきたベアトリーチェに聞いたところ、湊は武器と体術のみで敵と戦って引き分けたのだという。
どうして彼がそんな無駄な戦い方をしたのかずっと不思議だったソフィアは、これも良い機会だからと湊にスポーツドリンクを手渡しながら尋ねた。
「あの、湊様。以前から聞きたかったのですが、どうしてストレガとの戦いでペルソナを使わなかったのですか？」
「また突然な質問だな。まぁ、理由はいくつかあるが、まずあれはデュナミスの性能をテストするという目的があった。だから出来る限りはデュナミスを使おうと思ったし、実際にほとんどデュナミスで戦っていた」
ストレガとの戦いのとき、武器というのは実戦の中でこそ真価が分かると、湊は初陣であったデュナミスの使い勝手を確かめていた。
おかげで空から地面に叩き付けようが、敵の攻撃を迎え撃とうが、持ち手になっている軸すら歪むことがないと分かった。
湊が戦闘中に一番困るのは全力で使って武器の耐久限界を超えて壊れてしまう事だ。
敵が強ければ強いほど武器を気にしていられないのだから、自分が

全力で使っても壊れない武器というのはそれだけで信頼できる。
さらに使っていて気になった部分も帰ってきてから報告し、既に改修してあるので、あの日の性能テストは非常に有意義だったと言えるだろう。
だが、新たな武器の性能テストのためだけにペルソナを使わなかったとは思えないので、まだ他にも理由があるのだろうとソフィアが話を聞いていれば、湊は先ほどよりも真剣な様子で話してきた。
「そしてもう一つが重要なんだが、強いやつが上から目線で全力も出さずに相手をしてきたらムカつくだろ？」
「……え？　あの、まさか、本当にそんな理由で？　ただ煽るためだけに自分もボロボロになりながらペルソナを使わなかったんですか？」
「効果は覿面だったぞ。タカヤもカズキも終始苛ついてたようだしな」
大層な理由があると思っていたソフィアはその理由を聞いて唖然とした。
どこの世界に腹や肩を銃で撃ち抜かれてまだ、ただ相手を煽るためだけに手を抜き続ける者がいるというのか。
チドリの世界を壊そうとした相手に怒っていた湊は、相手をすぐには殺そうとせず、怒りと屈辱の中で殺してやろうと考えたに違いない。
しかし、いくら煽るためだからといって、怪我をすればどうしてもパフォーマンスが落ちるし、それが原因で逆に負けるようでは目も当てられない。
これではチドリの世界を壊そうとした者を殺すという動機すらも怪しく、かつて同じような事をして一度失敗してるのに、どうしてまた繰り返すのかとソフィアは苦言を呈する。
「湊様。確か、わたくしを殺しに来られたときも同じような事をしていませんでしたか？」
「……詳しいな」
「まぁ、音声は届いていましたから。ですが、そのせいで腕を失ったというのに、また無駄なことに力を注いで敵を逃していては本末転倒で

はないですか」
「いや、最終的には殺せればいいと思っていたんだぞ」
「どう思っていようと失敗している時点で一緒です」
この男は普段は効率を求めるくせに、感情で敵を殺すときには、相手に屈辱を与えようとして途端におかしな方へ向かい出す。
別に本人がそれで良いなら構わないが、屈辱を与える事よりも殺すことを優先して欲しいと思うのは自然な事だろう。
ずっと引っかかっていた疑問は解決したが、逆に色々なモヤモヤを抱えることになったソフィアは、もうデュナミスを使った鍛錬に協力するのを止めようかなと心の中で思い始めるのだった。

第十章　―Ｓｈａｄｏｗ　Ｏｆ　Ｔｈｅ　Ｌａｂｙｒｉｎｔｈ　―

第二百六十五話　嵐の夜に

９月２０日（日）
影時間――タルタロス
雨と風の音が外から聞こえてくる日の影時間。
特別課外活動部のメンバーにチドリたち二人と一匹を加えたメンバーが、タルタロスのエントランスに集まっていた。
実は今週の土曜日と日曜日は学校で文化祭が開催される予定だったのだが、運悪く台風がやって来てしまったことで中止になった。
初めての文化祭を楽しみにしていたアイギスはとても残念そうにし、わざわざやりたくもない図書委員の掲示物を作った七歌は、片付けの際に無駄になったじゃねえかと元図書委員であった高橋に跳び蹴りを喰らわせていた。
しかし、いくら高橋に報復しようと七歌の気は治まらず、こうして鬱憤を晴らすために他のメンバーを招集してタルタロスへとやって来た訳である。
「お、七歌っちはまたベルベルか？」
ここへ来る度にエクスカリバーが抜けないか試している順平は、柄をしっかりと握って引っ張りながら姿の見えない七歌の行き先について尋ねる。
残念ながらエクスカリバーは欠片も動いてくれないが、毎度のことで気にしていない順平が握っていた柄から手を離せば、顔をあげた彼に美鶴が答えてくれた。
「ああ、新しいペルソナを作ってくると言っていたぞ」
「便利そうで良いですよね。僕も七歌さんみたいに複数のペルソナが使えたらなぁ」
他の者たちには見えないが、このエントランスにはベルベットルームと繋がる扉が存在し、七歌は探索前に新たなペルソナを得るべくそ

こを訪れていた。
彼女がベルベットルームにいる間は他の者は待っておくしか出来ないが、改めて考えるとワイルドの能力はとても魅力的だと槍で素振りしていた天田が羨ましがる。
天田も自分のペルソナは持っていて、それを使いこなそうと努力もしているが、弱点の関係でどうしても活躍できない場面が出てくる。
ワイルドであればそんな状況もペルソナチェンジで解決できるので、どうにか自分も他のペルソナが持てないかと考えていれば、助っ人として同行していたチドリが湊から聞いていたワイルドについての情報を一つ伝えた。
「……湊が言うにはワイルドは誰でも目覚め得るらしいわ。才能よりも精神の在り方が重要なんだとか」
実際のところ彼がそんな風に言っても一般人にしてみれば難しい事など多々ある。
あくまで、〝彼の基準にすれば〟という発言ばかりなので、ワイルドについても目覚め得る可能性は誰もが持っている程度に受け止めるのが正解だろう。
ただ、それでも十分に夢のある話ではあるので、天田たちが自分も鍛えていればワイルドになるのだろうかと考えていれば、シャドーボクシングをしていた真田が会話に参加してきた。
「俺はそんなに器用じゃない。だから、ワイルドよりも自分の力を一つ極めていく方が性に合ってる」
「確かに真田先輩の新しいペルソナはかなり力が上がっていましたね。僕のペルソナもカエサルみたいに進化すればいいのに」
真田は美紀が襲われた一件でペルソナが進化し、現在は皇帝〝カエサル〟というペルソナを所持している。
ペルソナが進化した事でスキル等の威力が上がったのは勿論、彼自身の適性も大きく跳ね上がって現在はワイルドの七歌よりも高いくらいだ。
しかし、まだカエサルの実力を十全に発揮できているとは言えないため、彼は以前にも増してトレーニングと実戦に力を入れるように

なっている。
　そんな真田の姿を見ていた天田は、最近やけに力を求めているようで、自分が中々強くならないことを悔しがっている。
　真田のペルソナが進化したときの事を思い出せば、そんな焦りを持っていてはダメだと分かるはずだが、分かっていても感情というのはコントロールが難しい。
　焦った様子でワイルドの覚醒やペルソナ進化を求めている少年に、他の者がアドバイスしようとしたとき、突然、タルタロスで不思議な鐘の音が響いた。
「え、なんやのこの音？」
「てか、タルタロスって鐘なんかあったっけ？」
　リンゴンと響く鐘の音にラビリスやゆかりが反応し、他の者はどこから聞こえるんだと身構える。
　こんな事は初めてで、周囲の状況を把握しようと風花が召喚器を手にしたとき、彼女は足下で何かが動いた気がして思わず短い悲鳴をあげた。
「きゃっ」
「どうした山岸？」
「い、いえ、今なんか蜘蛛がいたような気がして。すみません」
　影時間に虫などいるはずがない。周りを見ても何もいなかったことでそう思った風花は驚かせた事を謝罪する。
　それを聞いた他の者は特に気にせず、風花が無事ならば別にいいと再び周囲の警戒に戻る。
　だが、次の瞬間、彼らの視界は暗転した。
　――ベルベットルーム
　今日は憂さ晴らしにシャドウを狩るぞと意気込んでやって来た七歌は、そろそろ新しいペルソナを入手しようとベルベットルームを訪れた。
「こんばんは！」
　扉を開けて中に入ると、いつものエレベーター特有の浮遊感を感じながら席に着く。

今日はどの属性スキルを持ったペルソナを作ろうかと考え、そうして正面の席に目を向けるとそこには鼻の長い老人ではなく銀髪の女性が座っていた。
「あれ？　今日はエリザベスだけ？」
「はい。現在、主と姉上は別の用事で席を外しておりますので、今は私が一国一城の主でございます」
マーガレットがいない事はたまにあるが、イゴールまでいないのは非常に珍しい。
七歌の担当者はテオドアなので、普段の業務は彼がいれば良いのかもしれないけれど、今日はペルソナ合体を頼むつもりだったのでエリザベスにも出来るかが気になる。
少し考え込む素振りを見せると七歌はとりあえず頼んでみるかと顔をあげて口を開いた。
「あの、ペルソナ合体って出来る？」
「はい。特殊合体は出来ませんが三身合体までならばなんとか」
以前、七歌は湊との戦闘中に勝つための力を求め、四神による四身合体で黄龍を呼び出した。
しかし、あれは鬼血丸を使って能力にブーストが掛かっていて初めて出来た事である。
本来の七歌の適性値では黄龍を呼べるレベルに達しておらず、今もう一度同じ事をしてみろと言われても出来ない。
ならば、三身合体ならば出来るのかと聞かれれば、そちらも鬼血丸のブーストがないと出来ないので、エリザベスが普通の合体ならば可能だった事は七歌にとって幸運であった。
「良かったぁ。自分じゃペルソナ合体なんて基本出来ないし、これで出来ないって言われてたら困ってたよ」
「それは何より。ところで話は変わりますが、本日は〝レギオン〟しか召喚出来ませんので、そちらで宜しいですね？」
「ん？　いや、いらない」
レギオンとは〝愚者〟のアルカナを持つ低級ペルソナの事だ。
ペルソナ合体が出来るというのに、今日はレギオンしか作ってやら

ないと告げてきたエリザベスは、そのままレギオンの魅力について語ろうとするので七歌がすぐにいらないと切り捨てる。
この辺りの塩対応は流石は湊の親戚という感じだが、言葉を遮られる形となったエリザベスはやや不満そうに七歌を見つめる。
彼女はあくまで湊の担当者であるため七歌との繋がりは薄く、こういった状況での対応はどこか事務的になり易い。
彼女の意思を尊重して好きに喋らせて置けばその限りではないが、言葉を遮られたことでエリザベスが僅かに不満そうにしていれば、ベルベットルーム内にある扉の一つが開いてテオドアが出てきた。
「姉上、あまり私のお客人を困らせないでください」
「テオ、私は本日のオススメを厚意で伝えたに過ぎません」
「力を求めてやってきた相手にレギオンはないでしょうに。七歌様、姉がどうもすみません」
七歌の担当であるテオはやって来るなり姉を諌めて謝ってくる。
エリザベスも別に悪気はないのだが、真面目に本人の感性で話しているだけあって質が悪い。
もっとも、まだ何も被害は受けていなかったので、別に気にしていないよと返して七歌も口を開く。
「テオも留守番してたんだ？」
「ええ、まあ。主が不在のときはベルベットルームの存在が不安定になり易いので、こうして何人かの住人が残るようにしているのです」
「それに加え、現在、外の世界には嵐が来ているご様子。嵐というのは存在を揺らがせます。身体だけではなく、決心や葛藤と言った想いでさえ……」
テオに続いてエリザベスもこの部屋の状態について説明してきたことで、七歌は不思議な空間だけあって外の環境の影響を受けやすいのかなと考える。
そも、ここは客人の精神の在り方や立ち向かう試練への道のりで姿を変えるとも聞いている。
七歌が来る前からこの内装だったという事は、これは湊の精神の在り方か試練への道のりに関係しているに違いないが、彼女も途中から

でも影時間に関わっているので二人の道はきっと重なっているのだろう。
　そんな風に、複数の客人が同じベルベットルームを訪れる事もあるのだろうが、姿を変えるという事は元から変容しやすい性質を持っているという事でもある。
　主の不在、そして嵐、二つの条件が重なったことにより、不測の事態が起きてもおかしくはなかった。
「んあ？　この警報なに？」
「分かりません。こんな事などこれまで……」
　話していると突然アラートが鳴り響き、さらに警告を促すように赤いランプまで明滅し始める。
　このエレベーターにそんな機能が付いているなど初耳だ。何のための機能なのだろうと七歌が考えていれば、テオドアが様子を見に行こうと動き出そうとして突然電気が消えた。
「……おや」
　予備電源でもあったのか停電はすぐに回復した。
　けれど、明かりが再びついて室内が見えるようになると、停電前にはいなかったはずの者たちが七歌の背後に現われていた。
「な、なんだここは？」
「これ、エレベーターか？」
　聞き慣れた声が聞こえた事で七歌が振り返る。そこには美鶴や順平といった特別課外活動部のメンバーとチドリたちがいた。
　何故彼女たちがここにいるのか。相手の様子からすると向こうの意思でやって来た訳ではないようだが、突然やって来た大勢の来客にはエリザベスたちも驚いている。
「こんなに大勢がここを訪れるとは、珍しい事もあるものですね」
「言っている場合ですか」
　エリザベスとテオがコントのようなやり取りをしていると、順平たちもそこにいる人物に気付いたようで声をかける。
「あれ？　えーっと、そちらにいるのって前に有里と一緒にいた人ですよね？」

「ええ。その節はどうも」
「七歌もいると言うことは、ここが例のベルベットルームという場所なのか？」
「じゃあ、有里君って普段からペルソナに関わってる人と一緒にいたって事？」
二年生組のほとんどはエリザベスたちと会った事がある。
それはまだ湊とゆかりが付き合っていた頃、湊とエリザベスがデートしていた場面を目撃するという衝撃的なものであったため、彼女たちの記憶にも強く残っていた。
ただ、その相手がまさか自分たちのリーダーである七歌にペルソナ合体等で力を貸してくれている者だとは思わず、そんな相手を平然と外に連れ出していた湊にも驚きを隠せない。
けれど、いつまでも驚いていては話が進まないため、湊が普段訪れているベルベットルームの内装を頭に叩き込みつつチドリが尋ねた。
「それより何で私たちをここへ呼んだの？」
「いえ、チドリ様たちに特別用件はございませんので、全く欠片もこれっぽっちも呼んでおりません。むしろ、何用ですかとお尋ねしたいくらいでございます」
テメェらなんぞ呼んでねえ。薄い笑みを浮かべてそんな事を言われればチドリの頭にも血が昇る。
一人の青年について相手とはいくつか話し合わなくてはならない事もあるので、相手のホームではあるがここで話をつけても良いかもしれない。
そう思ってチドリが一歩踏み出そうとしたとき、上昇を続けていたエレベーターが突然停止した。
「お、止まった。こんなの初めてだよね」
「な、なんか不気味やね。急に止まるとか落ちそうな気ぃするし……」
暢気な七歌とは対照的にラビリスは不安そうに周囲を見渡している。
だが、こういったアクシデントに遭ったときは七歌のような反応が正解だったりする。

何故なら、ラビリスのように不吉な事をいうとそれが現実になるから。

『っ!?』

ラビリスが落ちそうだと口にした直後、ガシャンと音がしてその場にいた者たちは浮遊感に包まれた。

これは自分たちが上に昇っているのではなく、自分たちの足場であるエレベーターが急速に落下している事が原因だ。

突然の事態に風花は悲鳴をあげ、天田やコロマルは床に掴まるように踏ん張ることで浮き上がりそうになるのを耐えている。

「おい、マジで落ち始めたぞ！　このままだとやべぇだろ！」

「シンジ、それにお前らも、エレベーターが地面につく直前に飛ぶんだ！」

「明彦、それは迷信だ！」

荒垣、真田、美鶴の三人が緊急事態だというのにコントを始める。

本人たちにそのつもりはないのだろうが、周りで聞かされている方からすれば遊んでいる場合かと怒りたくなる。

そも、この状況でどうやって地面までの距離が測れよう。

探知能力持ちの二人ならば分かるのかも知れないが、そんな事をするくらいならペルソナに掴まって飛んだ方がマシだろう。

この状況をどうやって打開するか。自分たちはこのままどうなるのか。混乱する頭でそんな事を考えている間に、エレベーターは落下の衝撃に包まれた。

――???

急に落下を始めたベルベットルームにいた七歌たちは、どうにか怪我もなく生きていた。

強い衝撃を感じたものの、そのまま落下した衝撃に潰れて死ぬという事もなく、突然開いた出口から外に出ればそこは知らない学校に繋がっていた。

随分と年季の入った古臭い校舎、見慣れぬ制服、校舎内の様子からすると文化祭の最中のようだが、そこにいる生徒たちは話しかけても決まった言葉を返してくるだけで会話が成立しない。

ならば、ここは自分たちで情報を集めるしかないと分かれて行動していたのだが、戻ってきた者たちの情報を集めて分かったのは、ここが〝ヤソガミコウコウ〟という場所であり、どうやっても学校の敷地から外へは出られないという事だけだった。
「携帯も使えないとなると、ここは現実世界とは異なる法則を持った世界と判断するべきだろう」
「そうですね。ルキアで探ってみましたが敷地内を覆うように何かの力が張られていて外の様子は分かりませんでした」
今のところは特に危険などは感じないが、それでも自分たちがこの空間に閉じ込められているという事実は変わらない。
風花の力でも外の様子が分からないとなれば、美鶴たちに出来る事はこの学校内での調査に限られるのだ。
しかし、生徒たちは本物の人間ではないらしく言葉は通じず、さてどうしたものかと美鶴も頭を悩ませていると風花が何かを思い出したように声をあげた。
「あ、そういえば、この階にシャドウの反応を感じる場所があるんです」
「何だと？　……なら、そこを調べてみるか」
こんな場所でシャドウの反応があるなど見るからに怪しい。
自分たちがどういった状況にあるかも分からないというのに、そんな危険に飛び込んで良いものかと美鶴は悩む。
だが、エリザベスが言うにはベルベットルームは客人の運命と非可分な存在であるため、他のメンバーも一緒にここへ来たという事は、七歌たちにはここでやるべき事があるらしい。
現状、他に手かがりがある訳でもなく、校舎内にはシャドウがいないと風花も言っているので、一同は一先ずそのシャドウがいる場所の前まで行くことにした。
＊＊＊
エリザベスとテオドアは内装の変化したベルベットルームの調査をすると残り、他の者たちだけでフロアを移動してとある教室の前までやってきた。

そこは『不思議な国のアナタ』と書かれた看板と共に可愛らしいデザインの装飾がなされており、傍に置かれているチラシに「アナタも手軽にアリス体験！」書かれていることから、どうやら役になりきって遊ぶロールプレイ型の催しらしい。
「フフッ、やっぱりアリスって女の子の憧れだよね」
「え、そう？　私は別にそうでもないけど」
アリス体験に興味があるのか楽しそうに話す風花に対し、ゆかりはあんまり興味ないかなとさばさばとした反応を見せた。
二人の会話を聞いていた順平は、近くにいた天田に小声で「あれが女子力の差だぜ」と余計な事を吹き込んでおり、聞こえていたゆかりから即座に睨まれている。
デリカシーのない発言をして順平が睨まれるのは最早様式美と化しているため、他の者はそれを流してアリスで思い出したとラビリスが口を開く。
「そういや、湊君のペルソナにもアリスがおったよ」
「へぇ、そういうの好きなのかな？」
「んー、別に普通に可愛がってたけど、アリス自体は人工ペルソナやから湊君の好みは関係ないと思うわ」
アリスという童話には興味がないが湊の情報ならば知りたいとゆかりに訊かれ、ラビリスが思い出すのは湊の後ろや隣を嬉しそうに歩く金髪の少女の姿。
人工ペルソナとはいうが現在では他の自我持ちと同じように湊のペルソナとして活動しており、彼女の固有スキル〝死んでくれる？〟は雑魚を一掃するには便利な凶悪スキルだったと記憶している。
まぁ、そんなスキルを使いこなすには使役する側にも十分な実力が求められるのだが、ラビリスが家事も得意で良い子やでと説明していれば、彼女の言葉に引っかかる部分のあった美鶴が口を挿んできた。
「待ってくれ。人工ペルソナ使いならば聞いたことがあるが、人工ペルソナとはどういう事だ？」
「え？　どういうって別にそのまんまやで。こう、人工的に生み出されたペルソナやねん」

桐条グループではラビリスやアイギスのような、ペルソナ獲得を目的とした人格を人工的に生み出していたはずだ。
ラビリスはマザーの人格のコピー、アイギスは複数の被験者たちの人格をモデルにして作られたという差異はあるが、作られた人格がペルソナを生み出すというのは段階を踏んで人工的にペルソナを作っていると言えなくもない。
それなのに何をそんなに驚いているのか不思議に思いつつ、ラビリスは湊がアリスを手に入れるに至った経緯を説明した。
「シャロンさんの助手に武多さんっておるんやけど、その人が容姿からプロフィールまで考えはってん。元は湊君のジャック・ザ・リッパーがナイフに憑いた怨念の集合体って聞いて思い付いたらしいけど、人の強い想いを込めればペルソナが生まれるんちゃうかなって思ったみたい」
作品には作り手の魂が宿ると言われたりもするが、武多が行なったのは結局はそういう事になる。
身長やスリーサイズといった肉体の情報に加え、性格や彼女の得意な事など武多は本が出せそうなくらい本当に細かく設定していた。
彼女が宿ったカードが握り潰せないくらい愛情を持ち、夢を現実にしてしまうほどの強さを持っていた彼の想いはまさしく本物だった。
持ち主こそ湊になってしまっているが、外に出て彼女が自由にしているときなど、武多が娘を見るような優しい視線で彼女を見つめている事をラビリスは知っている。
だからこそ、本当に強い想いが必要ではあるが、人工ペルソナを生み出す事自体は実例もあるため不可能ではないと語れば、話を聞いた美鶴は難しい表情をしていた。
「君たちが人間になった時点でＥＰ社の技術は我々の先を行っていると思っていたが、まさかそんな技術まで確立していたとはな」
「ああ、流石にそんなん武多さんのアリスだけやで。そもそも、湊君が言うには怨念級に強い想いの受け皿になってそれをペルソナに変換できる人間が必要らしいし。再構築するには十万や二十万程度の適性じゃ足りひんみたいやわ」

苦笑気味のラビリスから追加の情報を貰った事で、美鶴は美紀の見舞い時に湊が言っていた高過ぎる適性値の影響力のことを思い出していた。
そも、シャドウやペルソナのように具現化出来るレベルに至っていないとはいえ、怨念級の強い想いの受け皿になるというのも難しいと思われるが、それが出来たとしても新たに怨念をペルソナという一つの存在に作り替えるのだ。一般人がやろうとしても途中で力尽きて存在の確立まで至らぬのだろう。
人工ペルソナの核となる部分を生み出し、それを取り込み存在の固定化まで為せる者がいる。
やはりＥＰ社の進めている研究は既に自分たちの遙か先だなと美鶴は認識しつつ、頭を切り換えると他の者たちに号令をかけた。
「よし。では、実際に入ってみるぞ。現場の指揮はいつも通り七歌に頼む。何名かはこちらに残って校舎内の散策と山岸の護衛を頼む」
校舎内はきっと安全だと思われるが、それでも警戒しておいて損はない。
実際に中に入って様子を見てくる前線メンバーの選抜はリーダーの七歌に任せ、彼女がメンバーの決定を終え次第ダンジョンに入ることにする。
美鶴が説明を終えると真田が俺を連れて行けと七歌に直談判を始めたが、そうしてメンバーを決めて中に向かおうとしていたとき、背後から知らない少年の声が聞こえてきた。
「待て、その中は危険だ」
突然声をかけられた事で一同は驚きながら振り返る。
そこにはこの学校の制服を着た男子と女子が立っていた。
一人は制服の上から黒いボロ布をマントのように纏った色黒の天然パーマ男子。
もう一人は制服に薄黄色のカーディガンを着た肌も髪も色素の薄い小柄な少女。
少女の方は知らない人間に怯えているのか男子の影にやや隠れているが、心配そうに七歌たちの事を見ながら忠告してきた。

「入っちゃダメ……その中、怖いのがいるよ」
怖いの、とはシャドウの事だろうか。
何故少女たちがシャドウの事を知っているのかは分からないが、自分たちから話しかけてきた彼女たちは会話も成立しており、文化祭で出し物をしている他の生徒とは明らかに違う。
見知らぬ学校、シャドウの気配のするダンジョン、突然現われた会話の成立する生徒。
七歌たちも自分たちの現状を把握することに忙しいが、この出会いは少なくとも悪い物ではないはずだと考え、現われた少女たちに笑顔を向けて挨拶をすると話をする事にした。

第二百六十六話　記憶のない二人

――ヤソガミコウコウ

シャドウの気配があるダンジョンへ向かおうとしたとき、突然後ろから話しかけられた事で振り返ると、そこには色黒の少年と色白の少女が立っていた。

二人はダンジョンの中が危険だと知っていて、だからこそ、そこへは入らない方が良いと忠告してくれたのだが、それを知っている二人は何者なのかという疑問が湧くのは当然のことだろう。

一同を代表して美鶴が二人に話しかければ、相手は特に警戒した様子もなく自己紹介で返してきた。

「私は善、彼女は玲。君たちは何者だ？　どこからやって来た？」

「私は桐条美鶴。我々は月光館学園に在籍する特別課外活動部、通称〝S・E・E・S・〟と呼ばれるチームの者たちだ」

少年の名は善、少女は玲という名らしい。それを聞いて美鶴が自分たちは東京都港区辰巳ポートアイランドに存在する月光館学園の生徒だと返せば、彼らは月光館学園の名を聞いたことがないのか首を傾げた。

一応、月光館学園の名は湊の評判もあって日本中で知られているはずだが、聞いたこともないのであれば詳しく説明しようと意味がない。

そう判断して頭を切り換えると、美鶴に代わって七歌が笑顔を向けて二人に話しかけた。

「私は九頭龍七歌。それで、善君と玲ちゃんって見た感じここの生徒だよね？　ここって一体どこなのかな？」

「ここ……？　その、やそがみこうこう……です」

「あ、うん。えっとぉ、都道府県とかの所在地は？」

詳しい情報が知りたかったのだが、改めてここがどこに存在するのかを尋ねると玲は黙ってしまった。

その様子は教えたくないという七歌たちを警戒したものではなく、自分では上手く説明出来ないという申し訳ない雰囲気が感じられる。

もしかすると、相手はここの制服を着てはいるが、自分たちと同じでここにやって来た存在なのかも知れない。
そんな風に考えて無理に聞いたことを謝ろうとすれば、玲に代わって善が口を開いた。
「私たちは気がついたらここにいた。その前のことは思い出せない」
「思い出せないって、それじゃあここからどう帰るのかも分からないの？」
状況が同じかは分からないが、どうやら二人も七歌たちのように気付いたらここに辿り着いていたらしい。
何かここから出るヒントがあればと思ったが、記憶がないなら帰る方法も分からないかとゆかりが溢せば、その言葉を聞いた玲が目を大きく開いて顔をあげた。
「ここから、帰れるの？」
「え？　んー、来たからには何かしら帰る方法はあると思うけど」
自分たちもその方法を探している最中なので断言は出来ないが、まさか一生ここに閉じ込められてもいられないだろう。
ゆかりにとっては父の意志を継いだ影時間の事もあるし、元の世界には大切な人を残してきてしまっている。
相手からも同じように思って貰えていないのは複雑だが、彼が大切にしている少女がこちらには三人もいるのだ。
なら、何が何でも帰らないといけないし、彼がまた無茶をする前にアイギスたちを元の世界に帰さないといけない。
そんな意味も込めて改めて絶対に帰るつもりだと口に出せば、出会ったときよりも瞳に力が宿った様子で玲が自分も帰りたいと告げてきた。
「わたしも、かえる。善、わたしも帰る！」
「帰るってどこへ？」
「んー、どこだろう？」
記憶がないのなら帰る場所が分からないのも無理はない。
だが、彼女もここを出て自分が元いた場所に帰りたいという思いはしっかりと伝わった。

同じ閉じ込められた者同士、どうにか協力して脱出を試みようと七歌は二人に提案する。
「私たちもここから出る方法を探すからさ。よければ二人も一緒にいこ？」
「うん。おねがいします！」
七歌から誘われ、これまでで一番の笑顔を見せて玲がペコリと頭を下げてくる。
その幼く愛らしい仕草に一同は和みながら、そういえば学年を聞いていなかった事を思い出した。
もっとも、二人がともに記憶を失っている事は先ほど聞いたとおりだ。
さらに詳しく聞けば本人たち曰く記憶は誰かに奪われてしまったらしいが、そんな存在がいるのであれば、ここに自分たちを閉じ込めてきた黒幕はそいつだと思われるものの、話を玲たちの学年についてへ戻すと、二人はとりあえず一年生として扱うことに決まった。
記憶がないことはやはり不安だったのか、ここを出て元の居場所に帰るという目的。そして、自分たちの所属する学年が決まったことで、玲は嬉しそうに笑ってコロマルの頭を撫でている。
それを横目で見ながら七歌たちの方を向いた善は、先ほどは危険だと忠告するため呼び止めたが話題をダンジョンへ移した。
「それで、君たちはこの迷宮に入るつもりだったのか？」
「ああ。山岸が言うには部屋の中はダンジョンが広がっていて、その中にはシャドウ、君たちが恐ろしいものと呼ぶ存在がいる。校舎内には存在せず、ダンジョンの中にはいるとなると何かあると考えた方が自然だ」
「そうか。だが、私も鐘の音を聞いてから迷宮に入るべきだと感じていた。良ければ私たちも連れて行って欲しい」
美鶴たちがタルタロスで鐘の音を聞いたとき、こちらの世界でも校庭に建っている時計塔の鐘が鳴ったらしい。
つまり、その時点で美鶴たちはこの世界の干渉を受けていたという事だが、シャドウのいる危険なダンジョンへ同行させてくれと頼んで

きた善に、順平はそれは玲も一緒という意味だよなと確認を取った。
「あー、私たちってことは玲ちゃんも一緒だよな？」
「ああ。だが迷惑は掛けない。私は玲を守り、君たちがシャドウと呼ぶ怪物と戦える」
「え、君らペルソナ使えんの？」
「ぺるそな？　それは知らない」
シャドウと戦えると言って背中に手を回した善は、その手にボーガンを持って見せてきた。
ゆかりの矢や美鶴の突剣でもシャドウにダメージを与えられる以上、ボーガンでも敵を攻撃出来て不思議ではない。
しかし、シャドウは適性値の低い一般人が攻撃してもほとんど効果はなく、倒そうというのならペルソナを融合させた無の武器か、黄昏の羽根を組み込んだ対シャドウ兵装などが必要であった。
やけに自信ありげに話すのでもしかすると経験談なのかもしれないが、実際に戦っているところを見ていない以上は判断が難しいだろうと美鶴も渋い顔をする。
「現状、二人に対する情報が少なすぎる。対シャドウ兵装があれば一般人でもシャドウ相手に戦えるが、耐性など防御に関しては無力だ。それが二人となると守るのも厳しいだろう」
「でも、本当に戦えるのなら戦力と見なせるんですよね。んー、じゃあ、軽い偵察に連れて行って判断します。二人もそれでいいかな？」
「ああ、感謝する」
「よろしくお願いします！」
とりあえずは偵察への同行を認め、そこでの動きや活躍から今後について判断することに決める。
二人の実力についてもそうだが、いくらタルタロスを探索してきた七歌たちでも、こちらの世界のダンジョンも同じように探索していけるかは分からない。
自分たちの状態や敵の強さを把握する意味も込めて偵察はするつもりだったので、そこへ二人を連れて行くくらいは問題なかった。
同行を認められると善もどことなく肩の力を抜き、玲は玲でホッと

した顔をして背中の方からドーナツを取り出して食べている。
「えへへ、安心したらお腹すいちゃった」
「へえ、玲ちゃんも湊君みたいな事できるんやね」
「みな？　えっと、誰ですか？」
「ああ、ウチらの知り合いの男の子やで。その人も玲ちゃんみたいに何もないとこからお菓子とか食べ物出したり出来るんよ」
　何も持っていないように見えた玲がドーナツを取り出した事で、まるで湊のようだと思ったラビリスが向こうの世界に残してきた青年について説明した。
　すると、玲はそんな人がいるのかと尊敬の眼差しになり、隣にいた善のマントをクイクイと引っ張り興奮気味にしゃべり出す。
「すごい。善、すごい人がいるんだって！」
「……玲も同じ事をしているじゃないか」
「ちがうよ！　その人はケーキもアイスもプリンもドーナツもスキヤキも天ぷらもハンバーグも好きなだけ魔法で出しちゃうんだよ！」
「……それはすごいな」
　湊の場合はではなく正式名称〝夜天の棺〟と呼ばれるマフラーに収納しているだけだ。
　既製品のお菓子や調味料だけでなく、加工前の食材であったり出来たての料理を入れていたりもするのだが、本人以外はお菓子も少し入れている程度の認識なので詳しい事は分からない。
　けれど、大興奮の玲の話を聞いて、善もすごい人物なのだなと認識したのを眺めていたアイギスは、このような場所でも尊敬を集めるとはやはり湊は素晴らしい人物だと鼻高々になっていた。
「会った事のない方にも尊敬されるとは、流石は八雲さんであります」
「やく？　えっと、誰ですか？」
「八雲さんは数字の八に空に浮かぶ雲という字を書きますが、わたしの一番の大切な方であります。現在、ある意味で遭難中と言える我々ですが、それに気付いた八雲さんがきっと助けに来てくださるので玲さんたちもご安心ください」
　新たに出てきた人物名に玲は首を傾げ、直前のラビリスと同じやり

取りを繰り返した。
だが、詳しい名前を教えて貰うと、彼女の中で湊と八雲を一人の人物の名前と認識したのか、多分こちらが名前だろうという方を選んであだ名で呼んだ。
「へー。善、はーちゃんってすごい人なんだって」
「ああ。どうやら食糧などの物資を運ぶ救難のエキスパートのようだな」
魔法のように食べ物を出し、こんな訳の分からない場所まで助けに来る。
そんな存在がいれば確かに救難のプロと言っても過言ではない。
だが、彼は確かに人助けもするけども、そこまで大規模な救助活動などは行なっていないはずなので、二人の中のイメージはどうだろうかとゆかりが頭を抱えた。
「どうしよう。二人というか主に玲ちゃんの中で有里君のイメージがすごく偏っていってる。てか、呼び方もはーちゃんて数字の八だから？」
「アイギスはああ言ったが多分だが彼はここには来られない。我々はベルベットルームごと移動してしまったんだからな」
普段ならば湊は直通の専用の扉でベルベットルームへと向かえる。
しかし、先ほど様子の変わったベルベットルームを見たところ扉は二枚だけになり、それも隣り合う扉を七五三縄（しめなわ）や鎖でグルグル巻きにするように四つの鍵が付いていた。
エリザベスたちが言うには彼の扉とは別物らしいので、仮に湊が鍵を使って扉を抜けてもこちらには来ない。むしろ、無人になっている本来のベルベットルームに行く可能性があるとの事だった。
七歌や美鶴にチドリといった面々はその情報を共有しているが、アイギスの中では助けに来ることは決定事項らしく、何も知らない玲たちに如何に湊がすごい人物であり、そんな相手と自分が深い絆で結ばれているかを語り聞かせている。
素直な二人は話を聞く度に驚き、また尊敬の念を強めているが、もし本人と出会えば二人もイメージは所詮イメージでしかないと気付

くことだろう。
なにせ、相手は興味のない相手にはどこまでも無関心でドライなのだから。
「まぁいい。では、七歌。改めて偵察に向かうメンバーを決めてくれ」
「了解でーす」
このままだとアイギスが延々と話し続け、善たち二人の中の湊のイメージがとんでもない事になる。
本人と会うことはないので最悪の事態は避けられるが、助けに来なかった場合もまたイメージを損なうことになるので、知らぬところで自分の株が下げられていては気分が悪いだろうと美鶴が話を進めた。
そして、善たちが来る前に既に偵察メンバーを決めていた七歌が構成を発表し、それに善たち二人を加えたメンバーがダンジョンへと足を踏み入れた。
＊＊＊
七歌たちがダンジョンに足を踏み入れると、風花に聞いていた通り中にはシャドウがいた。
バランスボールに口が付いたようなシャドウ、虚言のアブルリーのようにタルタロスでは見たことのないタイプもいたが、今は風花に加えてチドリもアナライズで補助してくれる。
そのおかげで敵の攻撃属性や弱点を素早く解析し、七歌たちは順調に進むことが出来ていた。
「どうやらタルタロスと比べると一つのフロアが大きいようだな」
「ああ。完全に中は異空間になっているようで、明らかに教室の広さを超えているしな」
「おう、敵だぞ」
真田と美鶴が話していると虚言のアブルリーが二体と臆病のマーヤが一体現われた事で、荒垣の言葉を受けて全員が戦闘態勢に入る。
雑魚にしか見えない相手にしては耐久力があるものの、幸いなことに敵の強さは風花の加入前に攻略していたタルタロスのフロア程度の強さだった。
横並び一列に現われた敵に対し、美鶴の召喚したペンテシレアが敵

同士の間に氷壁を出現させ分断すると、七歌のエウリュディケと真田のカエサルが疾風と電撃で両脇の敵を葬る。
残る正面の一体は荒垣のカストールが迎え撃つが、援護のために善がボーガンの矢を射ると敵は僅かに動きを止め、その隙を突いてカストールが敵を叩き潰した。
「みんな、お疲れさまです」
戦闘を終えた者たちを玲が労う。他の者たちは彼女に向かって手を挙げて、これくらいは大したことないと笑いかけた。
偵察にやって来た中で既に同じ敵を何度も倒していたことで、彼女たちはアナライズ結果を聞かずとも自分たちで敵の弱点を覚えて対処している。
善と玲も最初はかなり周囲を警戒していたが、七歌たちの実力を目にしたことで必要以上に警戒する事はないと思ったのか、今は無駄に入っていた肩の力を抜いてたまに会話をする程度の余裕を見せていた。
「君たちの力はすごいな。それがペルソナか」
「ああ。ペルソナは私たち自身の心の力を具現化して使う能力だ。生身で戦うよりも強い反面、疲労や精神状態がモロに影響してくるので過信は出来ないがな」
今倒した敵のいた場所を見てみると白紙のタロットカードが落ちていた。
倒したシャドウがアイテムを落とすことはたまにあるので、美鶴は一応持っていこうとそれを拾い上げながら善にペルソナについて説明する。
七歌たちが最初にペルソナを呼び出す際、頭に拳銃を突きつけて引き金を引いたときには、善も玲も共に驚いていたが、自分たちよりも大きなペルソナが現われると言葉を失っていた。
だが、何度も見ているうちに慣れたようで、コントロールが難しい力だと説明を受けてもシャドウと対等に戦う事の出来る異能には素直に感心した様子だ。
「私や玲もペルソナが使えればもっと安全に迷宮を進めるのだが

……」
「うん。七ちゃんも真ちゃんも格好良かったよ！」
「フフッ、ありがとう。でも、能力の獲得に関しては謎が多いし、こればっかりは私たちではどうしようもないんだよね」
玲は人の名前を呼ぶときには、名前を短くもじったものに〝ちゃん〟付けで呼ぶらしい。
順平は順ちゃん、アイギスはアイちゃん、風花やチドリは名前にちゃん付けだったが、基本的には誰が相手でも同じように愛称で呼ぶ。
それは彼女が自分たちを信頼してくれている証だろうと七歌たちも好きにさせているが、善や玲が迷宮攻略において七歌たちのペルソナを羨む気持ちは分かる。
ボーガンで戦う善のように、玲もどういう訳かペルソナの補助スキルのようなものを使って仲間を援護していたが、その力は微々たるもので〝現時点〟では使えているに過ぎない。
そもそも、生身の人間がスキルを使えることも不思議だが、人間の中には湊やチドリのようにペルソナとは別に個人の力で生命力を放出出来る者もいる。
玲の力もきっとその類いだろうと見られているが、もしも二人がペルソナに目覚めれば確かに迷宮攻略の効率は上昇するように思われた。
だが、七歌たちは勿論のことエリザベスたちでさえ能力に目覚める切っ掛けは分かっていない。
精神の変化であったり、影時間などの非日常の中で命の危機に陥った場合に目覚める事が多いとされているが、そのために二人を強いシャドウと戦わせたりは出来ないので、今のところは現状維持で行くしかなかった。
それを聞いた二人は残念そうにしているが、他の者がその反応に小さく笑いつつそれなりに奥まで来たとき、扉の向こうに大きなシャドウがいるのを発見して全員が足を止める。
《あのシャドウはとても強い力を持っています。アルカナシャドウや

フロアボス級ですね。他にも同じような個体がフロア内に数体確認出来ますが、危険なので戦闘は避けてください》
「厄介なやつがいたものだな。ダンジョンを守る役割を持った敵といったところか。他のシャドウとは別の呼称をすべきか」
トランプのカードのような顔を持ち、ピエロのような格好をしているせいで強そうには見えない。
しかし、明らかに他のシャドウよりも大きく雰囲気も異なっている。
風花が強いと言うからには、自分たちも十分に準備をした上で挑まねば勝てない相手なのだろう。
ならば、上位シャドウとでも呼べる存在として、彷徨いている迷宮の番人には何かしらの特別な呼称を付けるべきだと美鶴が提案すれば、顎に手を当てて考えていた善が口を開いた。
「フューシス・オイケイン・エイドロンだ」
「お、ギリシャ語ですな。でも面倒だから〝F．O．E〟と呼称しよう！　風花たちもそれでよろしく」
《了解しました。では、今後はああいった強大なシャドウは全てF．O．Eと呼びますね》
突然の横文字に真田や荒垣が首を傾げていたが、全体としての言葉の意味はともかく、それがギリシャ語であることは理解出来た七歌が略して呼ぶことに決める。
自分の付けた名前が勝手に略された事を善がどう思うかと見ていれば、彼は気にした様子もなく玲と一緒にF．O．Eの動きを扉に隠れながら観察していた。
本人に異論がないなら呼び方はそれで正式に決定することにし、迷宮の中にF．O．Eのような存在がいる事も確認出来たので、一度学校の方へ帰ろうと七歌たちは来た道を戻る事にした。
＊＊＊
迷宮に行っていた七歌たちが戻ってくると、他の者たちも自分たちが調べたこの学校の事を色々と報告してきた。
しかし、やはり外に出られそうなものはベルベットルームの扉しか

ないようで、しばらくは学校の空き教室などを拠点として利用しつつ迷宮を攻略するしかないらしい。
「コロマルが校庭の地面掘ったりもしてくれたんだけどさ。やっぱこの敷地内からは出られないっぽいぜ」
「そっか。じゃあ、やっぱダンジョンを攻略するまではここに滞在する事になりそうだね」
「分館の方ですけど、机置き場としてしか使ってない教室がありました。鍵は掛かってませんし、机を出して軽く掃除すれば使えると思います」
　校舎に残っていた順平が改めて脱出出来そうな場所が見つからなかったと報告してきたことで、七歌は当初より考えていた拠点作りをしなければとならないなと溜息を吐く。
　この世界に昼夜の概念があるかは分からないが、玲たちが言うには放課後のように夕方にはなるらしく、それならばある程度は昼夜のサイクルに沿って行動を決められる。
　となれば、寝て休むことも考える必要が出てくるので、天田が見つけてくれた空き教室を使うというのは非常に良い案と言えた。
「じゃあ、とりあえず拠点っていうか寝て休める場所を作ろうか」
「あ、そや。寝て休めるとこで思い出したけど、エリザベスさんがウチらの治療のために保健室を使うて言ってはったよ」
「……テオドアの方は同じ一階にある工芸室で装備とアイテムの製作とかを担当するらしいわ」
　七歌たちがいない間にベルベットルームの住人たちも動いていたようで、こちらでの活動が長期化すると考えて必要な施設を作ってくれていた。
　それなら探索に付き合ってくれれば良いのにと思うだろうが、二人が出来るのはあくまで〝手助け〟のみ。
　湊が暴走したときのように世界規模の影響が出たときには、暴走を止める程度の力添えはするが、客人の旅路の行く末を左右するような場面では彼らも傍観するだけなので、今回もそういった理由で手助けしかしてくれないのだろう。

だが、迷宮で拾った素材などを使ってアイテムを作ってくれるのであればありがたい。こちらの世界では物資の補給が出来ないので、滞在期間が長くなればいずれ限界を迎えていたはずだ。
治療場所としての保健室も同様で、探索から疲れて戻ったときに仲間を回復させる余力が残っているかなど分からない。
治療が遅くなればその分疲労や負担が蓄積するため、対価を払うことで彼女から治療が受けられるのならば安心して探索を進める事ができる。
自分たちがいない間にそんな準備をしてくれていた二人に感謝しつつ、それでは自分たちの寝床を兼ねた拠点を作ろうと七歌は実習棟の方へ移動することにした。
「やっぱり、男子は一階で女子は二階って感じでいいよね？」
教室棟から出て渡り廊下を歩きながら実習棟へ向かう途中で七歌が話す。
三階建ての教室棟に対し、実習棟は二階建てとなっている。
それぞれへの移動は一階からでも二階からでも可能だが、いくら大勢いると言っても流石に年頃の男女が同じ部屋で雑魚寝という訳にはいかない。
故に、修学旅行などの感覚でフロアを分けようと七歌が提案すれば、順平が驚いた顔をして分ける理由を問うてきた。
「ちょっ、こんな訳分かんねぇとこで別行動とか危ないっしょ！　教室の中で仕切り作ってもいいから部屋は同じにしようぜ？」
「んー、最もらしいこと言ってるけど、その裏に不純な動機のニオイがするから却下で」
順平のいう事にも一理あると思ったが、校舎側にシャドウが出ないことは分かっている。
もしもの可能性もなくはないが、そのときは探知能力を持った風花とチドリがいち早く気付くので問題ない。
よって、どうせ厭らしい事しか考えていないのだろうと意見を切り捨てれば、七歌の指摘は正しかったようで彼は肩を落としてガッカリしていた。

そんな順平のあまりに欲望に素直すぎる態度に美鶴は思わず嘆息する。このような状況でも自分の欲望に素直になれる余裕があるのは逆に尊敬するが、その下衆な思考は集団生活をする以上は頂けない。

やはり七歌の言うとおりにフロア自体を別にした方が良いと判断し、美鶴も男女それぞれで部屋を片付けようと指示した。

「女子は二階の空き教室を、男子は一階の空き教室をそれぞれ片付けよう。部屋に置く物など内装は自由にするといい。何かあればコロマルを伝令に送ってくれ」

一階の奥にある男子部屋になる予定の空き教室前に着くと、女子たちは男子とコロマルを置いて階段で二階へ向かおうとする。

しかし、美鶴たちと一緒に玲も二階へ向かおうとしたとき、男子と共に残された善がしっかりと顔をあげて女子たちを呼び止めた。

「待って欲しい。拠点というのなら私は玲と一緒が好ましい」

突然の彼の言葉に風花は頬を染め、ゆかりは気まずそうに「……大胆だね」と溢す。

無論、彼にそういった男女の仲として発言した意図はなく、一緒が良いと言われた玲も少し嬉しそうにしているので、二人がお互いを信頼しているのがよく伝わってきた。

けれど、だからといって善の意見を聞けるかと言えばノーだ。こちらの実習棟にはまだ空き教室が残っているが、あまりに拠点を分けすぎると有事の際に全体の統率が取りづらくなる。

何より、今のままでは二人は依存した関係となり、個々の精神の成長にも繋がらないので、美鶴は二人のためにもある程度の距離感は必要だと善を諭す。

「ずっと共にいた事で、二人でいる事が当たり前になっているのは分かる。だが、君は男子であり玲は女子だ。流石の君も彼女がお手洗いに行くときなどは同行しないだろう？」

「……ああ」

「なら、寝るときも同じだと分かってくれ。拠点で休んでいるときは私たちが彼女の傍にいて何かあっても守ってみせる。君も君でこれ

から共にダンジョンを攻略する仲間である男子と交流を深めるといい」
「……そうか。わかった」
完全には納得し切れていないようだが、彼も美鶴たちの実力と人柄は認めてくれていた。
だからこそ、彼も玲を美鶴たちに任せる事を了承し、離れている間にそれぞれの交友関係を築いてゆく事も考えるようになった。
最初は慣れないだろうが次第にそういう物だと受け入れられるようになるはず。そう考えて他の男子たちに善を任せると、美鶴たちは男子部屋の真上の空き教室を片付け、寝具はないもののとりあえずの拠点を築くのだった。

第二百六十七話　力の変化、新たな力

――ヤソガミコウコウ

実習棟の空き教室を片付け、男女それぞれの拠点を作り終えると一同は再び教室棟に集まった。

休憩がてら模擬店で買ってきたもので食事を取り、食べ終えると七歌がベルベットルームに用事があるからと三階にあがってくれれば、力の管理者の姉弟もテントの前で待機しており、全員で内装の変わったベルベットルームに入ってゆく。

外からは小さなテントにしか見えなかったが、中に入ってみるとおかしな歯車などが浮いた壁や天井の見えない謎の空間が広がっている。

もっとも、ベルベットルームだった場所には床が存在し、宙に浮いた状態で存在する床から落ちればどうなるか分からないので、部屋に入ってきた者たちは十分注意しながら部屋の中を見渡した。

「さて、七歌様は何やら用件があるとの事でしたが、今回は一体どのような用向きでお越しになられたのでしょうか？」

「あ、うん。えっとね。なんか、こっちに来てからエウリュディケ以外のペルソナが使えなくてさ。他のペルソナが消えたのか、それともワイルドの能力が消えたのか分かるかなって」

愚者〝エウリュディケ〟は七歌が最初に目覚めたペルソナで、疾風属性を得意とした女性型の存在である。

ワイルドの力を得てからも七歌の成長に合せて強くなっているため、彼女は今でもエウリュディケだけは変わらず使い続けているが、この世界に来てみれば彼女は他のペルソナを失っていた。

それを聞いた他の者たちは、彼女のペルソナが消失している事に驚いているようだが、エリザベスたちは普段通りの様子でテーブルへと向かい。調べてみるので七歌にソファーに腰掛けてくれと言ってきた。

「なるほど。では、あまり得意ではございませんが少し調べてみましょう。椅子にお掛けください」

「うん。よろしくお願いします」
丁寧に言って七歌がソファーに座る際、ついでだからと美鶴やゆかりも座って一緒に話を聞く。
他の者たちはテーブルを囲むように立っている中、メンバーたちに注目されていたエリザベスはタロットカードのデッキを取り出すなり、何度かシャッフルして裏向けたままテーブルに並べた。
彼女を見ている者からすれば、こんな占いで何が分かるのだろうかという感じだが、カードを広げたエリザベスが一枚選ぶように言ってきたため七歌は素直に適当に選んだカードをエリザベスに渡した。
七歌が引いたカードに描かれていたのは、ＸＶＩ〝塔〟のカード。塔はタロットの中でも珍しい正位置、逆位置ともにマイナスな意味合いを持つアルカナだ。
そんなものを引いたという事は、自分たちに今以上に何かよくない事が起きるのだろうかと不安に思うも、エリザベスは顎に手を当てて考え込みながら口を開いてきた。
「〝塔〟のカードですか……」
「えと、やっぱり何か悪い事が起きたりするの？」
「いいえ。これはお客人の未来を占っている訳ではございません。そういった事は姉上や八雲様が得意とされていますので、興味があるのであれば是非そちらへ」
占い自体に興味のないエリザベスは、カードの配置や意味などは知っているが、先に挙げた二人のように過去や未来を占う力は持っていない。
実際のところ、占いは一般的にはオカルトとして認識されているが、海外では専門に学ぶ学校や機関があるほど体系化している学問の一つである。
起きた事象や現在の状況から情報を精査し、過去に起きた似た事例などから原因や今後の進展を予想するなど、歴史学・統計学・心理学等々いくつもの分野を駆使して答えを導き出してゆくため、非科学的どころかむしろ科学的根拠に基づいている場合も多い。
とはいえ、数多いる占い師たちが全員その様な者かと言えば答えは

ノーで、口から出任せのペテン師もいれば、湊のように本当にオカルトな力を使っている呪術師のような者もいるので、相手の力を見極める事が出来ないのであれば、ニュースの星座占いなどで良い結果があるときにでも信じていればいいのが占いの良い点だ。

ただ、それはそれとして、今エリザベスが引いたカードにも何らかの意味があるはずなので、占いではないのなら、それはどういった意味があるのかと七歌が聞けば、エリザベスは引いたカードを元に戻してデッキをシャッフルしながら口を開いた。

「さて、今引いていただいたカードについてですが、注目すべきは〝塔〟が出た事ではなく、七歌様が〝愚者〟のカードを引かなかった事が重要でございます。〝愚者〟は数字のゼロ。〝始まり〟と〝無限の可能性〟を意味するアルカナ。その意味の通り、七歌様は多数のペルソナを自在に使いこなしていらっしゃる。私共はその能力を〝ワイルド〟と呼んでおります」

多数のペルソナを扱える能力を〝ワイルド〟と呼んでいるが、その能力を持つ者にも自分のアルカナというものが存在する。

美鶴が〝女帝〟であるように、ゆかりが〝恋愛〟であるように、七歌もワイルドの力を持ちながら〝愚者〟のアルカナを司っているのだ。

けれど、今引いたカードはその〝愚者〟ではなく別のカード。力を失っている訳ではないが、元々の能力から変質しているようだとエリザベスは話す。

「ですが、この場所の影響でしょうか。本来のワイルドの力は形を変えているご様子。他の方のように七歌様の〝エウリュディケ〟をここでは外すことは出来ないようです」

「七歌がペルソナを付け替えれないとなると、いくら吉野たちがいると言っても戦力的に不安が残るな」

七歌に最初に目覚めたエウリュディケが外せない。それは他の者と同じように固有ペルソナ使いになった事と同義だ。

チドリたちが一緒にいるので戦力的には充実しているし、偵察してきた不思議な国のアナタに出てくるシャドウならば補い合って進め

るだろうが、F．O．Eのように強力なシャドウが出てくれれば、状況に応じてどうしても様々な対応を求められてくる。
　このままずっと七歌のワイルドが元通りにならなければ、チームとしての戦い方も一部見直す必要があるなと美鶴が難しい表情を浮かべると、正面にいたエリザベスはそうとも限らないと首を横に振った。
「いいえ、ワイルドの力は失われた訳ではございません。このような現象が起こるとは……まさしく、〝無限の可能性〟と言ったところでしょうか」
「その、結局どういう事なんですか？」
「エウリュディケを外すことは出来ませんが、それとは別にもう一体、他のペルソナを付けられるようなのです。そして、そちらのペルソナならば以前のように自由に付け替えられるようですね」
　どうにもエリザベスは勿体ぶったような言い方をするため、単刀直入に言ってくれとゆかりが頼む。
　すると、相手は分かったと頷いて、エウリュディケは確かに変更できないが、それとは別に新たなペルソナを自由に付け替えられるようになった事を説明してくれた。
「同時に二体って事ですか？」
「ええ。ただし、付け替え可能なペルソナは本来の力を発揮できず、あくまで補助的な役割と捉えて頂いた方がよろしいかと」
　今度の説明ならば分かったと全員が納得したように頷く。
　なにせ、彼女たちには二体どころか十体以上のペルソナを同時に召喚出来る知り合いがいるのだから。
「なるほど、エウリュディケは固定のようだが、ペルソナをメインとサブに分けることで七歌も有里のように複数のペルソナが扱えるようになったのか」
「ほあー、私も常に進化してるって事なのかぁ。こりゃ、八雲君みたいに全ペルソナ一斉召喚も夢じゃないかもしれませんな」
　サブペルソナの出力は落ちるものの、七歌が新たに得た能力では同時にペルソナを装備することで、二体分のスキルを扱えるだけでなく

耐性と弱点も得るらしい。
疾風属性に耐性のあるエウリュディケと同時に、疾風属性に耐性を持つサブを付ければ疾風無効に、逆に疾風属性が弱点のサブを付ければ等倍になるなど、耐性と弱点については色々と考えていく必要もあるが、以前とほぼ同じ戦い方が出来て能力の幅が広がった事は確かだ。
あくまでそれらはこの世界でのみ有効な変化だとエリザベスは話すが、七歌にしてみれば湊のように複数のペルソナを同時に扱えるなど大歓迎な変化である。
よって、この世界で同時召喚に慣れて元の世界でも頑張って再現できるようになろうと考えていれば、エリザベスの後ろに立っていたテオドアが若干の誤解があることを指摘した。
「七歌様。一つ勘違いされているようですが、七歌様の能力は二体のペルソナを同時に装備できるようになっただけです」
「へ？　だから、こう気合いで同時召喚いくぜって事じゃないの？」
「いえ、二体とも装備したままですが、召喚出来るのはどちらか一体だけです」
この世界で七歌が可能になったのは、二体同時装備であって二体同時召喚ではない。
同時に装備出来るのならば召喚も可能なのだろうと七歌は考えたようだが、その部分から勘違いしていると気付いたテオドアは湊の召喚時の状態について説明する。
「そも、同時召喚可能な八雲様も装備しているのは一体だけです。後は力を籠めて具現化しているだけで、八雲様には耐性も弱点も付与されません」
「じゃあ、むしろそっちの方が全体の弱点とか気にしないで良い分強いんじゃないの？」
「一概には言えません。七歌様のように相互に弱点を補うことは出来ませんし、召喚しているペルソナが受けたダメージは全てフィードバックされますので」
同時召喚が可能な湊でも二体同時装備は出来ない。どんなスキル

を喰らっても平然としているときもあるが、それは単に痛みを無視しているだけであったり、攻撃の合間ごとに装備ペルソナを変えているのだ。
彼の同時召喚はあくまで遠隔操作する子機を複数飛ばしているようなもので、召喚している以上はそのペルソナが喰らったダメージは全て湊に還ってくる。
ペルソナという一体でも近代兵器を凌駕し得る異能を、個人でありながら小隊ほど動かせるのは脅威だが、当然数が増えれば召喚コストも増加していき召喚者の負担も増える。
その点、七歌の変化した能力は負担はそのままに、自分の長所を伸ばすか弱点を補う事が出来るのでリスクは皆無と言えた。
「加えて申し上げておきますと、自我持ち以外のペルソナを同時召喚したときには、どちらもマニュアル操作となりますので、二体とも普段の挙動を目指せば一般人では脳が処理しきれません」
将棋やチェスのように交代に動かすのならばまだしも、同時進行で別々の場所にいるものを動かすなど余程器用でなければ出来ない。
二体のコントロールは左右の手で別々の文字を書くなんてものではなく、左右の手の指それぞれで別の文字を書き、さらにどちらかの手は鏡文字を書くようなものだ。
テレビで放送している隠し芸大会などで実際にやっている者もいるため、絶対に無理という訳ではないものの、かなりの訓練が必要なことは間違いない。
さらにそんなレベルの事を状況の変化しやすい戦闘中に行なうなど、ハッキリ言って人の脳で処理しきれるものではなかった。
彼は男女の脳の優れた部分を併せ持ち、尚且つ探知型の適性もあるからこそ実戦でも使っているが、自我持ちでないペルソナを何体も同時に出して使っている事は稀だ。
一体を防御用に出し、もう一体で敵と戦うという風に使い分けることはあれ、流石の彼も複数のペルソナを複雑にコントロールすることは難しいのだろう。
それを聞いて七歌も実戦に向かないのならしょうがないと納得す

れば、新たにタロットをテーブルに広げていたエリザベスが美鶴の正面のカードを捲った。
「〝愚者〟……なるほど、珍しいこともあるものですね」
「む、まさか私もワイルドに目覚めたとは言わないだろうな？」
「目覚めた訳ではございません。ですが、桐条美鶴様以外の方にも〝愚者の加護〟が与えられております。どうやら皆様もサブペルソナが付け替えられるようになっているみたいですね」
なんとこの世界では七歌以外の者まで準ワイルドとも言える能力を手に入れている。
俄には信じがたい話だが、それが本当であれば自分たちの力も増した事になるので、他の者たちは半信半疑ながらその事実を喜んだ。
けれど、この世界に来ただけでそんな変化が起こるなどおかしい。テーブルに広げたカードを片付けていたエリザベスは、この事態の原因が分からず僅かに首を傾げた。
「ですが、何故このようなイレギュラーが？　愚者の力が強まったような……まるでワイルドがもう一方おられるような……」
「それはきっと八雲さんであります。八雲さんと言えばワイルド、ワイルドと言えば八雲さんですので」
「え、マジで有里君ってこんな訳の分からないとこに向かってきてるの？」
ワイルドがもう一人いれば共鳴して力が増すなど聞いたことがない。
しかし、もしそういう理由であれば、元祖ワイルドとも言える青年がここに向かっているからだろうとアイギスは自信満々に口にした。
本当にそうであればこんなに心強いことはない。そう思ってゆかりも期待に目を輝かせ、本当に彼がここに向かっているのかとエリザベスを見れば、期待の眼差しを受けた女性はそれはあり得ないと首を横に振った。
「ああ、いえ、残念ながらそれはないかと。あの方は確かにワイルドをお持ちですが、その本来のアルカナは〝世界〟ですので」
「それってどう違うの？」

「そうですね……。今回の件で説明するのならば、〝愚者〟である七歌様の能力も何らかの影響を受けて変化しております。逆にその影響を与えた側も同じく〝愚者〟と思われ、七歌様の力の影響を受けて同様の変化をしていると思われます」
メンバーたちは話の流れから、てっきりワイルド能力者は全員が愚者のアルカナだと思っていた。
だが、彼はそこから外れているようで、愚者の時期もあったけれどとエリザベスは説明しつつ、愚者と世界のアルカナという違いから来る能力の差を語る。
「ですが、〝世界〟である八雲様はそういった影響を受け付けません。彼の能力に変化があるとすれば、それは彼の内側で完結して変化が起きているのであって、外的要因の影響を受けて変化する訳ではないのです」
愚者は能力自体に干渉を受けることもあるが、世界の能力は外からの干渉は受け付けない。
安定を考えれば後者の方がいいが、前者は今回のように自分たちの利になる変化も存在する。
どちらが良いかはやはり意見も分かれるものの、心の力であるはずのペルソナで外的要因の影響を受けないと聞くと、彼が他の者を必要としていないように感じてしまう。
彼もコミュニティは持っているはずだというのに、どうしてそんな状態になっているのかは分からない。
ただ、今ここにいない人物の話をしていてもしょうがないので、七歌たちは頭を切り換えてサブペルソナの召喚方を聞くことにした。
「んで、サブペルソナはどうやって手に入れればいいの？」
「七歌様であれば可能性の芽から入手する事も出来ますが、サブペルソナを召喚される際にはこの〝白紙のカード〟をお持ちください。迷宮内やシャドウを倒した際に入手できると思いますので、こちらに持ってきて頂ければカードにペルソナの力を宿らせましょう」
言いながらエリザベスが手にしているのは絵柄の描かれていないタロットカードだった。

それはここに来る前の戦闘で美鶴が拾った物と同一であり、そういった使い方が出来るのなら積極的に集めていくことにしようと全員が前向きになる。
サブペルソナの装備やペルソナの使い分けについても、ワイルドの先輩である七歌が指導する事に決まった。
さらに、風花がベルベットルームからでも通信が可能と判明した事で、彼女の護衛をベルベットルームの住人に任せると探索には全員が参加することとなった。
――不思議な国のアナタ
メインペルソナとサブペルソナの使い分けのため、最初に呼び出したサブペルソナは七歌が装備した。
ワイルドでペルソナチェンジに慣れていた彼女にすれば、同時に二つの存在を感じるのは不思議だったようだが、召喚時には心の中に思い浮かべた方に意識を向けるだけで済んだので、ペルソナチェンジよりも使い分けの方が楽に思えた。
メインとサブを使い分ける彼女を見ていた者にすれば、普段のペルソナチェンジとどう違うんだという感じだったが、いざ自分がサブペルソナを装備すると違いをすぐに実感できた。
「なるほど、七歌や有里は普段からこんな感覚で複数のペルソナを所持しているのか」
「まぁ、普段はもっと多いんでちょっと違いますけどね。八雲君はさらに沢山持ってますし」
「私としては二体でもかなりギリギリだが、サブのおかげで弱点を消せるのは非常に助かる」
慣れている事もあって七歌はすぐに使い分けられているが、他の者はどうしても今まで通りの戦い方で対応しがちになる。
そこでもたついて敵の攻撃を受けるとマズいので、七歌は慣れるまでは各自のメインペルソナの弱点の耐性を持ったサブを装備させる事に決めていた。
不慣れでも十分に戦えているので今は問題ないが、F．O．Eのような強い敵と戦うことになればサブの力が必要になるかもしれない。

なら、どうあっても慣れて貰う必要が出てくるので、敵が弱いこのダンジョンで弱点を気にせずサブペルソナとの使い分けを学んで貰おうと考えたのだ。
「いいなぁ。善、わたしたちもペルソナ欲しかったね？」
「そうだな。だが、ペルソナがなくとも君の事は守ってみせる」
「……善」
他の者たちが新たな力を得て喜んでいる姿を見ていると、ペルソナを所持していない玲は羨ましいなと残念そうな顔をした。
サブペルソナのシステムであれば、彼女たちでもペルソナを使えるのではと思われたが、エリザベスたちが言うにはサブペルソナもペルソナには違いないため、力を宿して扱う下地が必要なのだとか。
残念ながら玲と善はその下地が存在しないのでサブペルソナを持つことは出来ず、当分は他の者の援護を担当しつつ自分にもペルソナが目覚める事を祈ることしか出来ない。
だが、他の者のように強い力はなくとも、絶対に君を守ってみせると善が真顔で伝えれば、玲は頬を染めて嬉しそうにアメリカンドッグを頬張った。
それを見ていた他の者たちは、二人の周りにキラキラとピンク色の光が見えるような気がして、つい見ていられず視線を逸らす。
「二人だけの空間なんて展開しちゃって。あーあ、オレっちも彼女欲しいなー」
「順平さんってやっぱりモテないんですか？」
「ちょ、やっぱりってなんだやっぱりって！」
天田の容赦ない言葉に順平が思わず反論する。
周りに強い敵がいないからこそ出来る事だが、弱い敵は存在するので、順平は疾風耐性を持つ法王〝アンズー〟を呼び出すとガルを放ち敵を倒してから天田に再び話しかけた。
「いいかい、天田少年。オレっちの渋めな魅力ってのは、もう少し大人な女性にしか伝わりづらいものなのよ。確かに今は真田さんや有里みたいな分かり易いイケメンがモテてるが、二十歳になった頃には立場逆転してるぜ？」

言いながら順平は決め顔で顎に手を当ててポーズを取る。
話しかけられた天田や何を言っているんだこいつはという顔をしている真田と荒垣は話を聞いているようだが、残念なことに女性陣は話が聞こえながらも全員があえてスルーを決め込んでいた。
何せ、話している順平は五代やシャロンに聞いた話を忘れているようだが、今現在の湊がまさに二十歳頃の姿なのだ。
大怪我を負った際に自分の肉体を成長させることで自然治癒させた当時、湊は中学二年生だったが影時間や夢を通じた力の管理者たちとの鍛錬によって、他の者より少しばかり長い一日を過ごしていた。
そのおかげで実際の肉体年齢は高校一年生くらいだった訳だが、彼はそこからさらに三、四年ほど肉体を成長させて現在の姿になっている。
よって、湊の姿は二十歳頃の姿となる訳だが、一般的な二十歳よりも彼の方が人生経験も豊富なので大人の色気も纏っている。
そんな相手に三、四年後の順平が勝てるとは到底思えないので、女性陣は心の中で「起きたまま寝言とは器用だな」と思いながら先を進んでいた。
しかし、彼の話題が出たとなれば黙っていられない少女もおり、他の女性陣が揃ってスルーする中、アイギスは遠くにいるシャドウをライフルで撃ち抜いてから順平に話しかけた。
「お言葉ですが、八雲さんのファンクラブには幅広い年齢の会員がおられます。下は二歳から上は八十九歳までと会長の雪広先輩が仰っていましたので、二十歳になったときも格差は現状維持かと」
「いや、マジかよ。つか、プリンスミナトって年齢制限ねーのかよ!?」
別に会員費を取っている訳でも無いので、プリンスミナトは名前、年齢、性別、メールアドレスさえ登録すれば誰でもなれる。
カードタイプの会員証が欲しければ送料込みの発行手数料と住所などの登録も必要だが、そうでなければ彼を讃える者ならば、老若男女問わずどんな者であっても自由に会員になることが許されているのだ。
ファンクラブの詳しい実態を知らなかった順平はあまりの年齢層

の幅に驚き、二人の空間から戻ってきた玲もより謎の深まる青年の話に興味を持つ。
「はーちゃんってお友達いっぱいいるの？」
「いいえ。お友達ではなく八雲さんを崇め奉る臣民の方々が沢山おられるのです」
「すごーい！　どこかの国の王子様みたいだねー！」
「はい。八雲さんは非常に大勢の方から皇子と呼ばれているであります」
　共にとても純粋なことで話が合うようだが、笑顔で会話している間にさらに玲の中で湊のイメージが更新されてゆく。
　今回で言えば、自由に食べ物を出すことが出来るのは、きっと皇子としての財力によるものなのだろうと玲は納得したらしい。
　そして、彼がここに助けに向かっているのは、自分の民を守る王族として義務だからと尊敬の念を抱いたようで、玲がさらに湊の話を聞きたそうにすれば、先頭を歩いていた七歌が前方に不思議なものを発見したことで足を止めた。
「お、皆ちょっとストップ。風花、私らの先にいる相手のアナライズお願い」
《了解です。ちょっと待っててください》
　足を止めた七歌たちの視線の先にいたのは、やけにツルツルとした見た目のピンクのウサギだった。
　全身がゴムやシリコンで出来ていそうで、他のシャドウと比べると危険は感じないが用心に越したことはない。
　風花が相手の情報を探っている間に、足を止めて遠目から観察していた美鶴や真田も敵に対する意見を交わす。
「何だ。あのピンク色のウサギは？」
「二足歩行しているし新種のシャドウじゃないか？」
「でも、なんや普通のシャドウより可愛らしい感じするわ」
　これまで見てきたシャドウはどこかグロテスクであったり、もしくは明らかな敵意を纏っていた。
　けれど、視線の先にいるウサギはキョロキョロと周りを見ているだ

けで、他のシャドウのように害を為してくるイメージが湧かない。
故に、ラビリスも仮にシャドウだろうと他のより可愛らしいと言えば、新しいアメリカンドッグを食べていた玲がご機嫌な様子でウサギを眺める。
「ねえ、善。ウサギだよ！　かわいいねー！」
「ウサギのミートパイにしてやるであります」
「ええっ!?　ダメだよアイちゃん！　ウサギはともだちだから撃っちゃダメー！」
敵かどうか分からないのであれば撃ってみればいい。そう言いながら両掌を合せて、その手に対物ライフルであるバレットＭ８２Ａ１を取り出したアイギスが銃口をウサギに向けた。
可愛いウサギを撃とうとするアイギスを玲が必死に止めるが、仮にアイギスの放つ弾丸が当たればウサギは木っ端微塵に吹き飛ぶだろう。
ミートパイにするまでもなく銃の威力だけでミンチになるのだ。
流石にそんなスプラッタはゴメンだと天田やラビリスも彼女を止め、そうこうしているうちに風花からアナライズの結果が返ってきた。
《すみません、調べてみたけどよく分からなくて。シャドウやＦ．Ｏ．Ｅとも違うようで、だけど敵意は持ってないみたいです。むしろ、皆さんを気にして待っているみたいで》
「ふむ、待っているとは私たちについてこいとでも言うのか？」
「面白いじゃないか。あれが敵の手の者であっても、親玉のところに案内してくれるのなら都合が良い」
拳を逆の掌にぶつけて不敵に笑う真田に美鶴は嘆息して首を横に振る。
こんな状況で怪しい存在が現われたのだ。善と玲というペルソナを持たない者もいるというのに、彼の行動や考えには慎重さが欠けている。
美紀の一件があって少しは落ち着きを持ったかと思ったが、戦いやスリルを楽しむ悪癖はまだ完全には抜けていないようだった。

「はぁ……だが、確かに現状他に手掛かりがある訳でもない。敵の誘いだとしても追うのも一つの手だな。七歌はどう思う？」
「んー、現われたからには意味があるんでしょうし。アリス的にもウサギは追うのが正解な気がします」
「そうか。なら、慎重に追跡しよう」
複数の階層に分かれた広い迷宮がどこまで続いているのかも分からない。
メンバーたちはサブペルソナという新たな力を手に入れたが、ダンジョンにはＦ．Ｏ．Ｅという強力な敵も存在する。
だが、それでも前に進んで迷宮とこの世界の謎を解かねばならないため、七歌たちは気を引き締めてウサギを追うことに決めた。
何やら言い合いをしている真田と荒垣はどちらが先に捕まえるか競争するようだが、子どもっぽい言い合いを続ける二人を置いて、七歌と美鶴は他のメンバーと共にウサギの追跡を開始した。

第二百六十八話　不思議な国のアナタ

――不思議な国のアナタ

ダンジョン内で遭遇したピンクのウサギを追うことに決めた七歌たち一行。

どちらが先に相手を捕獲するか真田と荒垣が勝負してもいたが、残念ながらウサギの捕獲は困難を極めた。

まず、相手は立った状態でコロマルと変わらぬ背丈と非常に小柄だ。

ウサギなので小さいのは当然かも知れないが、四足歩行で走っている獣と違い、二足歩行の人間が小さな敵を捕らえるにはしゃがむ必要がある。

けれど、しゃがんだ状態では素早く動くことが出来ないので、小柄ですばしっこい敵を相手するには不向きな体勢だ。

加えて、瞬間的に速く動く反射神経に自信のある者たちでも、流石に自分たちのリーチの外側に逃げられては何も出来ない。

ならばと全力で走って追いかけ、最後にヘッドダイブで捕獲できないかと順平が挑戦してみれば、順平が飛び込んだ瞬間に相手は高く飛んで回避し、順平の頭を踏んづけてから逃げていった。

踏まれた順平は獣如きがと怒り狂ったが、散々翻弄されている時点で相手を獣と侮る事は出来なくなっている。

何せ、三つ目のフロアまで降りて来ておきながら、現時点ではまだ自分たちが獣にも劣る存在だから。

「くっ、また壁をぶち抜いて行ったぞ」

行き止まりに追い詰めたと思えば、相手は勢いよく壁に体当たりをしかけて穴を開けて逃げてゆく。

ウサギの形に穴の開いた壁は非常にコミカルだが、追い詰める度にこうも逃げられると悔しさが募ると真田が苛ついた様子で右手に左の拳をぶつける。

全ての壁で同じように出来る訳ではなく、相手も逃走ルートの一つとして数ヶ所で行なっているだけだ。

しかし、このダンジョンにはただの壁に抜け道のギミックなどが仕掛けられているので、そういった物と組み合わせてくれれば捕獲はさらに難しくなった。
とはいえ、このダンジョンの秘密を探るのに、現在追っているウサギが秘密を握っている事は間違いないはず。
逃げられた悔しさを飲み込みつつ真田が壁の穴に向かうと、他の者たちも後に続いてウサギの開けた壁の穴を通っていく。
「善、なんか探検みたいで楽しいね！」
「そうか。だが、ここは危険な迷宮だ。皆が一緒にいるからと言っても油断してはいけない」
ペルソナを持たない玲だが、彼女はダンジョンを進むことや敵との戦闘中は怯えた様子で善の傍にいた。
七歌たちのようなペルソナ使いも、覚醒して間もない頃は敵と相対したとき不安を覚えたのだ。
いくらスキルのような力を持っていたとしても、敵を倒す力を持たない一般人の玲が怯えるのも無理はない。
だが、皆と一緒に進むにつれて彼女の怯えもマシになり、時には今のように状況を楽しむ余裕すら出ている。
流石に戦闘が始まれば今のような余裕を見せることはまだ出来ないが、常に不安を感じてストレスから倒れられても困るため、彼女を心配する善を理解しつつも順平が余裕も大事だぜと話しかけた。
「ま、敵がいないときはくらい良いじゃん。玲ちゃんのそういう素直で可愛い反応みてっとオレたちも癒やされるし」
玲のようなタイプの少女は自分たちの周りにはいなかった。
一番近いのは湊の後輩である羽入かすみだと思われるが、残念ながら順平は彼女とそれほど接点がある訳ではない。
となると、特別課外活動部を除くと部活もバイトもしていない順平には後輩がいないため、玲のように非常に素直で可愛い女子は貴重に思えるのだ。
急に褒められた玲は照れて顔を赤くしているが、そんな反応もまた新鮮であるため、順平は玲とは対照的な性格をしたピンクのカーディ

ガンの女子を見ながら言葉を続けた。
「やっぱ素直な子って良いよなぁ。女の子ってのはこうじゃなきゃ、な？」
「……なんで私を見て言うのよ」
「え、それ聞く？」
女子は素直な方が可愛いと言いながら順平が見てきたことで、ゆかりは喧嘩を売ってるんだろうかと思いつつも一応理由を聞いてみた。
すると、順平は聞かなくても分かるだろうと呆れ顔になり、他の者たちに聞いて貰いながらとあるエピソードを語る。
「だってさー。この前、オレとゆかりっちが廊下にいたとき、教室から〝岳羽さんってスタイルいいよなー〟って聞こえてきたんだよ。そしたら、ゆかりっちってば何て言ったと思う？」
ヒントは無し。直感で良いから予想してみてくれと七歌にクイズを出す。
まぁ、女子は素直じゃなきゃと言いながら順平はゆかりを見ていたのだ。そこから予想するに、きっと素直にはほど遠い言葉を吐いたのだろう。
だが、もしかすると、聞いた者が驚くような言葉を口にした可能性もあるとして、七歌はどうせならそっちに賭けてみようと思いクイズに答えた。
「んー、八雲君のおかげとか？」
「あ、いや、そういう生々しいのじゃねぇよ。つか、二人が付き合ってたの知ってるのって基本は中等部組だけだから」
男子の熱い視線を集め、女子からは嫉妬される事もある少女の身体は、とある一人の青年の手によって育てられたものである。
中等部の時点では、小柄である事を除いても風花の方が胸のサイズで勝っており、ゆかりは細身の体型でバランスは良くても男子の語る〝スタイルがいい〟には当てはまらなかった。
だが、二次成長が始まると女子は男子よりも明確に体型が変化してくる。
肩や腰など身体が全体的に女性らしく丸みを帯び、胸や尻などには

脂肪がついて腰はくびれてゆくなど、その変化は前後の姿を比較すれば一目瞭然だ。
ゆかりは元々弓道部で運動をしていたので身体はしぼられており、そういった身体の変化が始まると他の者よりも分かり易かった。
だが、さらにそのタイミングと重なってゆかりは湊と正式に付き合い。仮初めの恋人から正式な恋人になった当日に結ばれた。
恋人として一線を越えれば後は早いもので、二人は何度も肌を重ね、その際に湊が彼女の身体をマッサージする事もあったので、ゆかりはみるみるうちに女性らしい体つきになり、今では美鶴やアイギスに次ぐプロポーションを手にしていたのだった。
よって、七歌が先ほど口にした〝八雲のおかげ〟というのは事実なのだが、二人が以前付き合っていた事は公にされていないため、内容の生々しさも含めそんな事は言うはずがないと順平は否定してから正解を伝えた。
「んで、まぁ、そんときは一言〝うざっ〟だぜ？」
「あー。でもまぁ、そんなもんじゃない？　別にジャガイモに見せるためにスタイル維持してる訳じゃないし」
「七歌っちもそういう系かよ。やっぱ、玲ちゃんみたいな素直な子は稀少だわ……」
順平はゆかりがいかに可愛げがないかを説明しようとしたのだが、七歌もゆかりと同じように感じるタイプだったことで、ゆかりが特殊なのではないと現実を突きつけられた。
逆に玲のような素直なタイプこそが稀少であり、順平はポケットに入っていたスナック菓子を玲に渡しつつ、「玲ちゃんは素直なままでいてね」と真剣に願っている。
他の者たちはその様子にやや呆れているが、そんな事を話ながらも一同はダンジョンを進んでおり、現われる敵をサブペルソナを使って倒しながら新たな力に慣れていると扉に辿り着いた。
同じような扉はこれまでにも見ているので、またフロアの区画を隔てる部分に辿り着いたのかと気を引き締める。
こういった扉を抜けた先には、今までよりも強いシャドウであった

り、F．O．Eが縄張りを彷徨いていたりするので彼女たちの警戒は正しい。
そして、前衛である真田が最初に扉を潜れば、その先には木に生えたバラの花を絵の具で赤く塗っているF．O．Eたちがいた。
「またトランプのようなF．O．Eか。しかし、やつらは何をしてるんだ？」
「どうやらバラを塗っているようであります。花の色は日光などを浴びる事によって発色すると思っていましたが、実際はあのように職人たちが一つ一つ染めていたのですね。なるほどなー」
バラの花を塗っている敵は今までと同じようなトランプ兵の姿をしている。
ただ、アナライズした風花によればこれまでのF．O．Eよりも気配が強いらしいので、奥のフロアにいる分だけ強いのだろう。
そんな敵がバラの花を塗っている光景は異様としか言えないが、間違った知識を覚えようとしているアイギスに、美鶴がその知識が間違っていないことを指摘する。
「いや、君の知識は正しい。どうやらあれはおとぎ話の通りに赤いバラを作っているようだ」
「あ、塗り終わったら次のバラに向かってますね。塗ってる間は集中してるみたいだし、そこを利用したら上手く抜けられるかも」
美鶴も不思議な国のアリスは原書で読んだことがある。
その中には、赤いバラを植えるところを間違って白いバラを植えてしまい。女王に見つかる前に庭師たちが急いで赤く塗っているという場面がある。
ここにいるF．O．Eはきっとその再現だろうと思っていれば、バラを塗り終わったF．O．Eが次の白いバラに向かい、再びバラを赤く塗っていることに気付いた。
F．O．Eたちは自分たちの縄張り内で行動し、そこに敵が入ってきたときにのみ反応するため、上手く通れば戦闘を避ける事が可能だと判明している。
ならば、ここでは敵がバラを塗っている間に通るのが正解だろうと

七歌は判断し、敵が新しいバラを塗り始めたときに通ろうと皆に話す。
「んじゃ、次に敵が塗り始めたら慎重に通り抜けるよ」
「わん！」
「ん、コロマルどうしたの？」
他の者たちが七歌の言葉に頷いてタイミングを計っていると、少し離れた場所からコロマルが他の者たちを呼んだ。
一体どうしたのだとそちらを見れば、コロマルの傍に如雨露（じょうろ）と小さな池のようなものがある。
きっと本来はバラの木に水を与えるための物なのだろうが、ここを通り抜ける際にも役立ちそうだと荒垣がコロマルが呼んだ意図を察する。
「なるほどな。それを使って絵の具を落としちまえば、敵はそっちに気を取られて安全にいけるって訳か」
「その作戦ならば囮が多い分安全度も増すだろう。私も賛成だ」
「わん！」
ただ相手の隙を突くよりも、先に囮を沢山用意しておいた方が安全なのは確実。
ならば、玲のためにも囮作戦に賛成だと善が言えば、コロマルも誇らしげに尻尾を振って見せた。
他者たちからも特に反対意見は出ず、先に囮のバラの準備をすることに決まれば男子たちが率先して動いてバラの絵の具を落としてゆく。
このときに敵に見つかれば作戦は失敗するので、行動は常に慎重にしなければならない。
池で水を汲んで木まで走り、敵がいないうちにバラの絵の具を落として撤退する。
すると、敵が白いバラがある事に気付いて塗りに来るので、背後を通ってまた別のバラの絵の具を落とすことを何度も繰り返した。
おかげで複数いる敵をほぼ同じエリアに集めることも出来、一同はタイミングを計って素早く後ろを通り抜けることが出来た。

「おっし、何とか抜けられたぜ！」
「はぁ、なんか精神的に疲れた。Ｆ．Ｏ．Ｅも簡単に倒せるなら苦労せず進めるのに」
Ｆ．Ｏ．Ｅのいるエリアを無事に抜けられた事で順平が晴れ晴れとした表情になり、ゆかりは対照的に疲れたと深い溜息を吐く。
確かに彼女の言う通り、Ｆ．Ｏ．Ｅを倒せるなら策を弄する必要もない。
だが、今現在の戦力ではアルカナシャドウに近い反応を持つ敵を複数相手取るのは非常に危険だ。
パーティーには善と玲というペルソナを持たぬ者もおり、尚且つ先に何が待っているかも分からない現状では、今のように戦闘を出来るだけ避けて進んだ方が安全と言える。
ゆかりもそれは分かっているので強くは言わないが、やはり敵に見つかるのを恐れながら進むというのは精神衛生上よくはなかった。
「ゆかちゃん、元気出して。はい、ドーナッツあげる」
「ああ、うん。ありがとう玲ちゃん」
疲れた様子を見せるゆかりを気遣って玲がドーナッツを取り出した。
一体どこに持っていたんだという謎は尽きないが、彼女の心遣いが嬉しかったゆかりは素直に受け取り糖分を摂取する。
甘い物を食べてゆかりも少し元気が出たらしく、彼女が立ち直るとメンバーは移動を再開した。
進んでも進んでもほとんど景色に変化はないが、奥に進めば進むほど出てくる敵は強くなっている。
それがメンバーたちに進んでいる実感を与えてくれるのだが、少し進んだ場所で再びピンクのウサギを発見した。
「お、ウサギ発見！」
「いい加減この鬼ごっこも終わりにしたいものだな」
「あ、でも、また行き止まりに絵があります。これまで通りならまた逃げられますね」
先ほどのゆかりほどではないが美鶴も疲労は感じている。

ウサギを追うほど奥に進んでいるので、ここに来て追跡を止めようとは思わないが、いい加減目的地について欲しいのが本音だ。
しかし、先の通路に視線を向けたところ、天田はまた壁に絵が掛かっているのを発見する。
実はこれまでウサギを追っていると行き止まりで壁をぶち抜いて逃げられていたのだが、その壁には絵が掛かっている事が共通していた。
ならば、今回もきっと同じ方法で逃げられるだろうと思って追ってみれば、案の定、これまで通りウサギは絵の掛かった壁をぶち抜いて逃げていった。
「まぁ、これで先に進めると思えばマイナスではない。先を急ごう」
予想されていた事だけに美鶴は気にした様子もなくウサギの開けた穴を通ってゆく。
他の者たちもそれに続いて穴を通り抜け、さて今度はどこにウサギがいるのだろうかと移動すれば、南京錠のかかった一つの扉を発見した。
見るからに怪しいそれは嫌でも注意を引く。その場にいたチドリが扉にアナライズを掛けて危険がない分かると、湊と同じようにピッキングスキルを持つアイギスが鍵を調べ始めた。
「……ダメですね。とても丈夫なようで破壊は難しく、ピッキングで開けようにも特殊なタイプなようで難しそうです。これならば鍵を探した方が早いでしょう」
「そっか。むー、鍵があればいいけど、とりあえず別の道を行ってみるしかないか」
七歌の中でピッキングマスターの称号を持つアイギスで無理なら諦めるしかない。
このダンジョンに鍵があるのかは分からないが、扉とは別の道もまだ残っているので、そちらに希望を託すしかないかと七歌は歩き始める。
他の者たちも七歌に続いて進んで行こうとすれば、ラビリスとチドリとコロマルが扉の前に残っていたため、一体何をしているのだろう

かと足を止めた。
　すると、急にラビリスがペルソナを呼び出し、ストリングアーツと呼ばれる固有スキルの赤い糸を鍵穴に入れ始めた。
　それを見ていた他の者たちはまさかという表情になって扉の前に戻り、少し待っていれば、カチャン、という音と共に南京錠が外れた。
「ん、よし。ほら鍵なら開いたで」
「すっげー！　つか、前から思ってたけどその固有スキルって応用利きまくりだろ！」
「……応用が利く分、使い方を決めておかないと中途半端になるし、咄嗟に図形を思い浮かべたりで扱いづらいのよ」
　鍵開けはチドリが内部構造を把握し、その指示を受けてラビリスが糸を動かしたようだが、それにしても便利なスキルだと順平は絶賛する。
　しかし、強力な力を秘めたスキルではあっても元は丈夫な長い糸でしかない。
　これで剣や盾を瞬時に作り出し敵を屠るには、戦闘中だろうと発揮できる頭の回転と応用力が必要になるので、順平が言うほど簡単な物ではないとチドリが指摘した。
　加えて、ラビリス自身も他の者が言うほど自分がスキルを使いこなせているとは思っていない。
　それは以前、湊が若藻をアリアドネに変化させ、〝ストリングアーツ・椿〟というオリジナル技を披露したことがあったのだ。
　ストリングアーツは複雑な形状ほど構成に時間がかかるのだが、湊は非常に複雑な形状の椿を即座に作り上げて敵を倒していた。
　自分以上に複雑な形状を、技の発動からほとんどラグもなく構成し、尚且つ敵を倒すために工夫された形状と威力にも驚かされた。
　そんな自分以上に技を使いこなしている者を知っているからこそ、ラビリスはあやとりの本を参考にしながら作成可能な形状を増やし、それを出来るだけ速く構成できる特訓を行なっている。
　今の鍵開けは応用みたいなもので、言われるほどすごいことではないので、他の者から礼を言われた彼女は笑顔で気にしないでくれと返

し、開いた扉の先へ向かうことにした。
――不思議な国のアナタ・最終章
鍵付きの扉の先へ向かうと、ウサギとバラ塗りのＦ．Ｏ．Ｅが同じエリアにいる事が度々あった。
ウサギを追おうにもＦ．Ｏ．Ｅが邪魔で上手くいかず、かといって戦闘するのも躊躇われた事で、先にＦ．Ｏ．Ｅをバラの木におびき寄せ、その隙にウサギを追うという作戦に出た。
やはりというかＦ．Ｏ．Ｅは決まった行動パターンを取るらしく、バラの木におびき寄せさせすれば突破は簡単だった。
けれど、順調に行っていたと思われた探索も、とある部屋にさしかかったところで足止めを喰らった。
なんとそこには徘徊するＦ．Ｏ．Ｅが三体もいたのである。バラの木も三本あったので、それぞれに敵をおびき寄せれば良いのだが、部屋の北側にいたＦ．Ｏ．Ｅが丁度通路を塞いでいるせいで、その敵を離れたバラの木に誘導する必要があった。
だが、Ｆ．Ｏ．Ｅはバラの木一本に付き一体しか担当せず、担当するのは一番近いＦ．Ｏ．Ｅだという事で、他の者よりも離れている北側のＦ．Ｏ．Ｅを別の場所に誘導するには全員の知恵を絞らされた。
上手く北側のＦ．Ｏ．Ｅを誘導して道を通ることが出来たときには、思わずハイタッチをし合うほど喜んだものだが、その甲斐もあって一同は無事に最下層に辿り着いた。
これまでとは明らかに異なる雰囲気。先に待っていたウサギも最早逃げる気はないのか立ち止まっており、それならばと順平が捕まえようとする。
「よっし、ついにゲットだぜ！」
ようやく捕獲完了だ。そう思って手を伸ばせば、順平が触れる前にウサギはその場で消えてしまった。
風花に調べて貰っても反応が完全に消えているらしく、どうやら本当にここまでの案内役でしかなかったと推測される。
ずっと捕まえるために追っていたメンバーにすれば、最後の最後でなんだそれはとやる気を削がれるが、一同の視線の先には物々しい空

気を出している鉄門があったことで、何とか集中力は途切れていなかった。
「あれの向こうにボスがいるみたいだね。この場所を考えると多分〝ハートの女王〟かな」
「フッ、相手が誰だろうと敵ならば倒すまでだ」
「アキ、そういって油断すんじゃねぇぞ」
不思議な国のアリスが元になっているのならば、ボスは十中八九〝ハートの女王〟だと思われる。
風花もこの先からＦ．Ｏ．Ｅを超えるアルカナシャドウ級の反応を感じるそうなので、いよいよこのダンジョンのボスとの対面だと全員が武器を構えて戦闘モードに思考を切り替えた。
善と玲は最後尾に配置し、咄嗟に反応出来るコロマルとアイギスが脇を固める形で鉄門を開いて中に入る。
するとそこには、大きな宝箱に頬摺りしている、王冠を被り派手なドレスを着た巨大なシャドウがいた。
敵は七歌たちが入ってくると頬摺りをやめ、宝箱を壁際まで滑らせてから振り返る。
《危険、危険を感じるぅぅぅ！　ダメよ、これは絶対に渡さなぁぁぁぁい！》
宝箱に頬摺りをしているせいで分かりづらかったが、背筋を伸ばして立った相手は非常に大きかった。
大きさだけで言えばこれまでのアルカナシャドウを超えているほどで、それが強さに直結する訳ではないがシャドウが喋った事も含め自然と全員が警戒度を引き上げる。
《アンタはずっとここにいるの！　絶対にこの世界からは出さないわよぉぉぉ！》
「フン、お前の許可など知った事か。俺たちはお前を倒し元の世界に帰らせて貰う」
「ああ、私たちはここから出る。そう決めたんだ」
この場所から出さないと叫ぶハートの女王に真田と善が言い返す。
相手が何を言おうと関係ない。自分たちはお前に勝ってここを出

るのだと。
だが、二人の言葉を聞いたハートの女王は、何がおかしかったのか突然お腹を抱えるようにして大声で笑い始めた。
《あーはっはっはぁぁっ!!　おもしろい、おもしろいわぁ！　アナタが出してくれるだなんて、なーんてお優しいのかしらねぇ？》
相手はどうやら最初に逃がした宝箱を奪われまいとしているようだが、話を聞く限りこの世界に閉じ込めた元凶だと思われる。
ならば、これ以上の会話は不要。そもそも、会話がちゃんと成り立っていたとも思えないが、全員が武器を構えたところでハートの女王は持っていた扇を広げて声をあげた。
《来なさいあんたたち！　ロイヤル・ストレート・フラァァッシュ!!》
女王の声と共に敵と七歌たちの間に光が広がり、そこにトランプ兵の軍勢が現われる。
スペード、ハート、クラブ、ダイヤの四つのスートに分かれ、各スートごとに絵柄を除く一から十までの数字を司る兵が揃っている。
突然現われた女王を守る四十体のシャドウにメンバーらは気圧されそうになるも、こいつらを倒して自分たちは女王の許に辿り着かねばらないと気合いを入れ直す。
「全員、なんとしてでも女王に辿り着いて倒すよ！」
『おおっ！』
七歌のかけ声と共に前衛組がトランプ兵へと突撃する。一番槍を担った真田は、クラブの一を殴り飛ばして敵を数体巻き込むと、その隙にペルソナを召喚する。
「こい、カエサル！」
真田の呼び声に応え、その手に剣と地球を持った男性型ペルソナのカエサルが現われる。
進化した真田のペルソナは仲間のペルソナよりも強い気を発しているが、それがハッタリではないと証明するように剣に雷を纏わせて敵へと振り下ろした。
「カエサル、ジオダイン！」
振るわれた剣の軌跡に合せて迸った雷は、トランプ兵の一画へと落

ちて数体の敵を一度に消滅させる。
それを見て数は多いが一体ごとはそれほど強くないと理解すると、真田に続いて順平と荒垣もそれぞれの武器で間近の敵を切りつけた。
「おっらぁ！」
「くらいやがれ！」
順平と荒垣が切った敵が周りのものを巻き込んで倒れる。そのタイミングで後ろから走ってきたコロマルと天田が倒れた敵を切りつけて止めを刺した。
前衛がそのように敵に切り込んでいる間に、後衛組も魔法と遠距離武器で援護して敵を減らしてゆく。
前衛組のように簡単には倒せないが、二発、三発と当てて確実に数は減らすことが出来ていた。
ここまで来る間にシャドウとの戦闘で疲れていたが、ここが正念場だと全員が気力と体力を振り絞って女王を目指す。
だが、そんなとき最奥に控えて七歌たちとトランプ兵の戦いを観戦していたハートの女王の声が響いた。
《なかなか頑張るじゃなーい？　で・も、シャッフルターイム！》
戦いを見ていた女王が再び扇を広げて振ると、その瞬間、減ったはずのトランプ兵が復活して軍勢が再び四十体に増えていた。
相手がそれほど強くなかったことで突破は容易だと思っていた者たちは驚愕し、復活したトランプ兵が一斉に押し寄せてきた事で戦線を戻される。
集まってくるトランプ兵を必死に殴りながら後退する真田は、敵のデタラメな能力に苦い顔を浮かべた。
「なっ、倒しても復活するだとっ」
「ちょっ、これじゃあ、いくら倒したってキリがねーよ！」
戦線を押し戻されそうになりながらも前衛組は踏ん張り、何とか最初の位置で敵を叩いてゆくも、相手の〝シャッフルタイム〟とやらが無限に使えるのであれば消耗戦になり負ける。
今はまだ敵を後衛組の許に行かせるかと前衛が頑張ってくれているが、肉弾戦をしている前衛組の体力、スキルを使っている後衛組の

気力、それらがどこまで持つか分からない以上、雑魚を無限に生み出し続ける相手の能力は非常に厄介と言えた。
前衛組と後衛組の中間の辺りでどちらにも混ざって対応していた七歌も、このまま持久戦に持ち込まれれば負けることは理解していた。
だが、捨て身の一点突破で短期決戦に持ち込もうにも、四十体の敵の壁は流石に厚すぎた。
「くっ、流石にこう多いとっ」
「天田っ!!」
二体のシャドウに押され天田が倒れる。それを庇うように荒垣が飛び込んで敵を倒すが、その際に腕を切られて傷を負っている。
怪我をした二人が下がる隙を作るためコロマルがペルソナで炎を放つが、すぐに女王が〝シャッフルタイム〟で兵士を補充してしまう。
力が足りない。数が足りない。不利になってからないものを嘆いてもしょうがないことは分かっている。けれど、このままでは撤退も難しいため、何かないかと七歌は考え続けた。
そしてそのとき、
「――よう、待たせたな!」
自分たちの背後、この部屋に入ってきた鉄門の方から声が聞こえ、七歌たちは僅かに視線をそちらに向けた。
するとそこには、馬鹿としか思えないダサいポーズを決めた同世代の少年少女が立っていた。
自分たちが必死に戦っているというのに、そんなポーズを後ろで決められていると無性に腹が立つ。
七歌が怒鳴るよりも先にアイギスが真顔で彼らの足下にマシンガンを掃射し、当たらないよう配慮されていたとはいえ、現われた者たちは全員が驚いてあたふたしていた。
「おわっ、ちょ、タンマタンマ!　ふざけた事は謝るから、とりあえず助太刀させてくれ!」
「そっちは左舷を担当して!　混ざると指示が難しいから!」

「了解！」
相手が一体誰かは分からないが背後から攻撃して来なかったという事は敵ではないらしい。
アイギスの威嚇射撃を喰らっても助太刀させてくれと言っていたので、相手は最初から援軍としてここに来たのだろう。
その事を瞬時に理解した七歌が指示を出せば、ヘッドホンを掛けた少年と太刀を持った少年が駆け出し、七歌に言われた通り左舷の敵を吹き飛ばした。
先頭にいた敵が吹き飛べば、さらに後ろから走ってきた緑ジャージの女子がトランプ兵に跳び蹴りを放っている。
七歌たちの方にも徒手格闘で戦おうと思えば戦える女子はいるが、普通に考えて武器で戦った方が強いので実際にやるものはいない。
だが、緑ジャージの女子はフットワークを活かすために足技を選んでいるようで、敵を蹴り飛ばすとすぐに後退していた。
「来やがれ、タケミカヅチ！」
女子が後退するなりそこへ雷マークのような武器を持ったペルソナが現われ、そのままトランプ兵とクマの着ぐるみを薙ぎ払った。
いつの間に新手のシャドウが現われていたんだと七歌は気付くのが遅れた事を反省するが、先ほどのペルソナを召喚した厳つい男子が諸共薙ぎ払ってくれた事で危機が去ったことに安堵する。
援軍が左舷を抑えてくれている事で、七歌たちはスキルで回復するが、そのとき援軍組の赤カーディガンの女子がチアリーダーのようなペルソナを召喚して回復を手伝ってくれた。
その間に寄ってくる敵は、帽子を被ったボーイッシュな女子の小さなペルソナが素早く切りつけて倒してくれたことで十分に治療することが出来た。
これなら自分や美鶴も前衛組に合流しても良いかもしれない。七歌がそう考えていると、
《アハハハハっ！　むだ、むだ、むーだ！　いくらやってもアタシの兵士たちは倒せないわよ！　だって、一体いればぜーんぶ復活出来るんですからぁ！》

そう言うなりハートの女王は再びトランプ兵を復活させた。これを初めて見る援軍組は驚いたようだが、直前の敵の言葉で状況は把握したらしい。
折角稼いだ距離を押し戻されまいと、援軍組から細身のハンマーを持った黒髪の女子と身の丈ほどの棍棒を持った青みがかった髪の小柄な女子が前衛に合流する。
「これは流石にっ」
「無問題（モーマンタイ）……とは言えない、ね」
お互いにフォローできる距離で戦う二人も、人海戦術で攻められれば危険だと理解しているらしく表情は優れない。
だが、最初に敵に向かっていった太刀の少年が仲間を鼓舞するように声をあげる。
「全員踏ん張れ！　一体でもいれば増えるなら、増える前に倒せば良いだけだ！」
「おいおい、それが難しいからどうすんだって話だろ！」
「うっさい、花村！　そんなの気合いでどうとでもなるっしょ！」
恐らくリーダーは太刀の少年、そしてヘッドホンの少年と緑ジャージの女子は順平とゆかりのような関係だ。
戦いながら援軍の戦力を把握していると、視界の端で先ほど薙ぎ払われていたクマの着ぐるみ型シャドウが立ち上がるのが見えた。
援軍組はそれに気付いていないのかトランプ兵に集中している。
このままではマズいと思った七歌は銃を持っているアイギスに叫んだ。
「アイギス、クマ型シャドウを撃って！」
「了解であります！」
善と玲の護衛をしながら援護を担当していたアイギスは、すぐに照準を合わせるとクマの着ぐるみ型シャドウを狙い撃つ。
しかし、その指が引き金を引こうとした瞬間、前衛として戦っていた黒髪の女子が声をあげた。
「待って姉さん！　クマさんは味方です！」
クマの着ぐるみ型シャドウが味方と言われ、七歌たちは全員が頭に

クエスチョンマークを浮かべる。
けれど、援軍組の子が言うのならそうなんだろうと、アイギスも照準を他のシャドウに合せて攻撃を再開した。
最初にふざけたポーズを取っていた事も含めて、援軍組は訳の分からないメンバーが揃っている印象を持つ。
ただ、立ち上がったクマもクローでトランプ兵を切りつけているので、先ほどの黒髪女子のいう事が真実だったことは七歌たちにも理解出来た。
「けど、やっぱりこれじゃ埒が明かないっ」
援軍が来てくれた事で状況は好転した。消耗戦になって押され掛けていたところを、イーブンにまで巻き返せているだけ十分マシなことは確実である。
しかし、今の七歌たちには敵を突破する策がない。援軍組のリーダーの少年もそれは分かっているようで、どうにか誰か一人でも抜け出て女王の許に辿り着けないかと考えているようだが、今のところ解決策は何も思い浮かんでいないようだ。
ハートの女王はそんな七歌たちが兵士らを突破出来ないことが楽しいらしく、扇で扇ぎながらご機嫌で眺めている。
《なかなか楽しませてくれるわねぇ。そんなアンタたちにお礼として特別なものを見せてあげるわぁ！　来なさい、ジョーカーズ！》
そして、楽しませてくれるサービスとして、女王の目の前に二体のシャドウを新たに召喚して見せた。
一体は黒い鎧に長槍を持ったシャドウ、もう一体は黒い鎧に大剣を持ったシャドウ。
人間より少し大きい程度のトランプ兵と比べ明らかに異質。その身の丈は三メートルを優に超し、放つ気配はダンジョンのＦ・Ｏ・Ｅに匹敵していた。
新たに現われた敵を見た瞬間、戦っている間、女王がずっと余裕を見せていた理由が分かった。
一体でもいれば簡単に復活出来るトランプ兵団に加え、自分を守る近衛兵として強力な二体のシャドウを持っていたのだ。これで自分

が負けると考える方が無理がある。
「全員後退して！　密集して身を守って！」
ジョーカーズと呼ばれたシャドウが動く前に七歌は叫んでいた。
こいつらには勝てない。一体ずつ、いや、二体でも自分たちと援軍組で一体ずつ分担すれば倒せた可能性はある。
しかし、トランプ兵を相手にしながらでは倒すことなど不可能。
敵を見て思考が一瞬止まっていた者たちは、指示に反応してすぐに動き出していた。
前衛組が後退するのを援護するため後衛組がトランプ兵を銃とスキルで押し留める。
けれど、新たに現われたジョーカーズはトランプ兵たちを蹴散らしながら、一直線に七歌たちの方へ向かってくる。
このままでは撤退が間に合わない。そう考えた七歌が一人で敵に向かっていけば、援軍組のリーダーも同じように考えたのかもう一体の敵へ突撃していた。
「七歌っ!!」
「相棒っ!!」
美鶴とヘッドホンの少年の声が響く。
明らかに無謀としか思えないリーダーたちの特攻。仲間が逃げる時間を稼ぐためだとは理解出来ても、二人が犠牲になって時間を稼ぐなど納得できない。
他の者たちが苦い顔で二人を追おうとするが、その前に七歌たちとシャドウは衝突するだろう。
敵までは残り十メートルもない。一太刀当てて避けよう。このときリーダー二人の思考は不思議な事にシンクロしていた。
同時に武器を握り直し、同時に顔をあげて敵を見つめ、同時に地に足をついて武器を振り上げる。
そして、七歌たちとシャドウの丁度中間地点の空間がひび割れ、二人は思わず飛び退いていた。
最初に見えたのは黒い炎纏った腕。
それが勢いよく突き出されると空間を破壊しながら黒いロープを

纏った人型の何かが現われ、向かってきていたシャドウの腹をすれ違い様に殴って壁まで吹き飛ばしてゆく。
壁に衝突した二体のシャドウはそのまま靄になって消えてゆき、突然現われた存在にハートの女王は激昂する。
《ななな、なによ、なによ、なんなのよぉ!! 急に出てきて、わたしのジョーカーズを倒したですってぇ!!》
女王が叫んでいる間に乱入者の破壊した空間のひび割れは直り、場に静寂が戻るとそこには黒いローブを纏った者だけが佇んでいる。
敵も突然現われた存在に驚いているようだが、そんなものは七歌たちだって一緒だ。
二人のリーダーを追いかけていた者たちはリーダーたちに追いついて立ち止まっているが、そうしている間に乱入者はローブのフードを外し、状況が分からず混乱している七歌たちに話しかけてきた。
「――――はぁ、集団戦をすべき状況で何故複数の個人戦をしてるんだか」
やる気の感じられない気怠げな声、そして、他の者に呆れたような上から目線の話し方。
自分たちの聞き慣れたそれが耳に届いたとき、七歌たちは絶望的な状況が覆った事を確信した。
「八雲君!」
「有里!」
二人のリーダーが同時に彼の名を呼ぶ。言ってから同時に何故君たちが知っているんだと見合うが、フードを外した彼の顔を見たとき、直前まで希望に輝いていた者たちの表情が引き攣った。
何せ、その顔は彼のものと思われる血で濡れていたからだ。
見れば、ローブの袖や裾からは血が流れ出ており、立っている彼の足下には既に血溜まりが出来ている。
何故、現われたばかりの彼が満身創痍なのか。理由は分からないが、この場で一番重傷なのは間違いなく湊だ。
敵もそれが分かったようで、ジョーカーズを倒されたときの怒りは治まり、満身創痍で現われた湊に嘲笑を向けている。

《なーによ、アンタ。既にボロボロじゃなーい。ジョーカーズは不意打ちで倒せても、私の兵士たちの相手は無理みたいねぇ！　アハハハハッ！》
「いいか。こういった状況で重要なのは後衛だ。前衛はあくまで時間稼ぎの壁役。その間に後衛が敵を殲滅する広範囲攻撃を放つか、一点突破で敵の大将を狙うんだ。間違ってもお前たちがやったような前衛が敵に辿り着く時間稼ぎを後衛が担うことはない」
　青年は完全に相手の事を無視して他の者に戦い方をレクチャーしていた。
　それが勘に障ったのか女王がトランプ兵を差し向けるが、敵が辿り着く前に青年は実践してみせようとペルソナを召喚する。
「ペ　ル　ソ　ナ　」
《グルォオオオオオオオオオオオオオッ!!》
　大気を震わし顕現するは冥王の力を宿した死の神。
　背中から迸る黒い光の翼を広げ、宙に浮いた八基の棺が飛んで敵を包囲する。
　トランプ兵の先陣が青年に迫ろうとも彼は動じることなく大将に狙いを定め、彼が薙ぎ払えとばかりにその腕を振れば、八基の棺からは空間を埋め尽くすほどの雷が走り、死神の口からは混ざり合う赤と黒の奔流が放たれハートの女王を飲み込んでいた。
　空間を埋め尽くし眼を焼くほどの閃光がトランプ兵を蹂躙する。
　敵を包囲する八基の棺それぞれから電撃の最上級スキルが放たれているのだ。
　包囲されている以上、敵に逃げ場などなく連鎖的に消滅してゆく。
　そして、そんなトランプ兵を従えていた女王も、迫り来る黒き奔流から身を守ろうと腕で顔を守るが、ガードの甲斐もなく光に触れた先からその身を蒸発させ消えていた。
　一方、あまりの攻撃の規模に、その場にいた者たちは攻撃の余波で吹き飛ぶまいと地面に伏せる。
　光が止み、音が止み、そうして攻撃によって融解した床の熱が漂ってくれれば、顔をあげたときには敵は全て消え去り、後には悠然と佇む

青年だけが残っていた。

第二百六十九話　月光館学園と八十神高校

――不思議な国のアナタ・最終章

敵が全て消えると湊は八基の棺からマハブフを放って融解した床の熱を冷ます。

おかげで蒸し暑さと熱せされた空気による息苦しさは消えたが、仕事を終えて彼がペルソナを消すなり援軍組にいた黒髪のハンマー女子が怒った様子で彼に駆け寄った。

「兄さん！　もう、なんで来たんですか！　こんな酷い怪我までしてっ。それに冥王の力を引き出すだなんて、どこまで無茶したら気が済むんですか！」

彼がやって来てくれた事は嬉しいが、七歌たちにとっても彼の今の状態は好ましいものではない。

どうやらここへやって来るまでに怪我を負ったらしいが、自分たちよりも怒った様子で心配する少女を見ていると声を掛けるタイミングを失い、それならばと七歌は援軍組のリーダーの少年に声を掛けた。

「んー、よく分かんないけど、とりあえず援軍感謝します。助けてくれてありがとう」

「いや、結局は有里が来るまでの時間稼ぎみたいになったし、そんなお礼を言われるほどじゃないさ」

突然現われた謎のペルソナ使いたち。彼らもどうやら湊を知っているようで、七歌だけでなく美鶴たちも、一体どこで湊は彼らと知り合ったのだろうかと疑問に思う。

だが、とりあえず怪我の治療をしようと七歌たちがお互いに回復スキルを使っていれば、歩く度にビチャビチャと血を吸った布の音をさせている青年が入口付近に立っていたマーガレットに声を掛けた。

「……マーガレット、俺たちは先に上へ行っておくぞ」

「あら、見ていかなくてもいいのかしら？」

「事情は把握したからな。ここにいる意味がない以上、着替えと野暮用を済ます」

彼の言葉を聞いたマーガレットは僅かに驚いた顔をしているが、湊がそういうのならとマーガレットは先に部屋を出て校舎へと戻っていった。
そして、それに続いて出て行こうとする湊は、先ほど彼に駆けよって行った少女を呼んで同じように部屋の入口へと向かってゆく。
「行くぞ、メティス。中村は鳴上たちと宝箱の中身を回収してから上に来い」
「あ、待ってください兄さん。えと、皆さんは宝箱の方をよろしくお願いします」
中村と呼ばれた小柄な少女は湊の言葉に頷いて返し、鳴上と呼ばれていた援軍組のリーダーと共に宝箱への方へと進んだ。
去って行く湊を見ていたチドリやアイギスは一緒に校舎へ戻りたそうにしていたが、今はハートの女王が何を守っていたのか知ることも重要なので、気持ちを切り替えると善と玲を伴って七歌たちも宝箱の許へ向かう。
箱を縛っていた鎖は緩んで落ちており、これならば蓋を開けるだけで簡単に開けられるだろう。
チドリのアナライズによって罠の類いがない事も分かり、一同を代表して善が宝箱を開けると、中からは黒いジレを着たウサギのぬいぐるみが出てきた。
ウサギの足についたネームタグには〝ＮＩＫＯ〟と書かれおり、このウサギか持ち主の名前が〝ニコ〟だと思われた。
「フム、ニコか。恐らくこのウサギの名だろうが一体どういった意味なのやら」
「んー、たぶん、笑顔って意味だと思います！」
考えている美鶴に玲が自分の予想を語る。子どもならばそういった安直な名前を付けることは考えられるので、美鶴としても彼女の予想はいい線を行っているのではと思う。
ただ、ウサギの名と名の由来が分かったところで、この世界から出るヒントにはなり得ない。
けれど、ダンジョンのボスが大事に守っていたアイテムではあるの

で、何かしら脱出のヒントではあるのだろう。
　他の者もウサギについて気付いた事がないか話し合っていれば、ウサギを持って考え込んでいた善が頭に手を当てて険しい表情で口を開いた。
「少し、思い出した……この世界には四つの迷宮があり、それぞれに隠された物を番人が守っている……そして、私には何か使命があった。だが、記憶を失い、忘れてしまったらしい」
「それはウサギを手に入れたら思い出したの？」
「ああ。本当に僅かだが、触れたときに思い出すことが出来た」
　完全には思い出せていない事を善が申し訳なさそうにするも、他の者にすればこの世界についての貴重な情報が手に入ったのだ。誰一人として怒っておらず、むしろ無理に思い出そうと焦る必要はないと彼を気遣った。
　彼が話した迷宮の一つはここだろう。だとすれば、残るは三つ。そこでボスの守るアイテムを手に入れれば、善たちの記憶も戻って元の世界に帰れるかもしれない。
　一応、記憶を奪われた善が宝箱の中身に触れて記憶が戻ったのなら、もしかすると玲も同じように思い出すかもしれないと試したが、結果は不発に終わったことで一同は校舎へ戻ることにする。
　先に上に戻った湊の状態も気になり、さらに言えば援軍としてやって来た者たちの紹介も必要。
　ただ、自分たちでそれをやるよりも共通の知り合いである湊からして貰った方が早いため、七歌が援軍組の者たちに自己紹介は校舎に戻ってからと告げ、手に入れたウサギは善に預けたままダンジョンを後にした。
　――ヤソガミコウコウ
　メティスを連れて先に校舎へと戻ってきた湊は、ベルベットルームへ向かうマーガレットと別れて階段を下りてゆく。
　彼がどこへ向かっているか分からないまま隣を歩くメティスは、彼の歩いた後に血の汚れが残っている事から今も怪我を心配しているようだが、彼女のペルソナである法王〝プシュケイ〟には治療出来る

スキルがない。
故に、何も出来ない彼女は相手の大丈夫という言葉を信じ、先ほど戦った広間にいた者たちについて彼に尋ねた。
「あの、兄さん。さっきの場所にいた人たちの事なんですけど、覚えていますか？」
「……月光館学園の人間だろ」
「はい。でも、私たちのいる時代のではなく、どうやら戦っていた当時の方たちみたいです。姉さんも皆さんも少し若くて制服を着ていましたから」
湊の隣を歩くメティスは七歌たちが自分たちとは異なる時間の存在だと気付いていた。
何せ、元々はアイギスから生じた存在である彼女は、七歌たちから見て二年後の世界からやってきたのだから。
終わらない三月を抜ける前に彼女は自分の正体に気付き、そこでアイギスとしての記憶も思い出した。
だが、彼女はアイギスらと共に終わらない三月を戦う中で、〝メティス〟としての自我を得ていた。
ここにいるメティスは集団無意識の中を漂っていたその自我が肉体を得た存在であり、その有り様としてはシャドウから一歩進んだ存在であるファルロスに近い。
そんな彼女は援軍組のリーダーである鳴上悠たちと共にこの世界に来て、エリザベスたちから先に向かったペルソナ使いたちの援護に向かって欲しいと頼まれダンジョンに向かった。
タイミング的には非常にギリギリだったが、なんとか間に合い、最後には湊という更なる援軍が駆けつけてくれた事で無事に敵を倒すことが出来た。
けれど、二年後の世界から来たメティスとしては、〝自分と同じ世界〟から来た青年が月光館学園のメンバーと交流を持つことに不安を覚えている。
何故なら、二年後の世界で目覚めた彼は過去の記憶を一切持っていないのだから。

自分の姉やその仲間たちと会えた事を嬉しく思いつつも、兄の状態を考えると喜べないメティスは一階に到着したタイミングで湊の事を見上げ、不安に瞳を揺らしながら彼を呼ぶ。
「あの、兄さん。姉さんたちと、月光館学園の皆さんとあまり話さないでください」
「……それは別に構わないが」
「あと、ペルソナも使わないでください。戦うのは私がやりますから」
「……随分と過保護だな」
自分の言葉に苦笑する兄に、メティスは本気で言っているのだと僅かに怒る。
確かに彼の力は強力だ。タナトスを冥王まで覚醒させれば倒せない敵などいないとすら思える。
けれど、その力の代償として彼は寿命を削ることになる。他の者が精神力、気力というものを消費して召喚するのに対し、ここにいる湊は影時間を消す戦い以前と異なり自然回復しなくなった生命力を使ってペルソナを使役しているのだ。
「自分の身体の事を考えてください。無理してこの世界まで渡ってきて、死んでしまったらどうするんですかっ」
生命力が枯渇すれば生き物は死ぬ。本体が大丈夫でもバッテリーが切れた車が動かないように、生命力が枯渇すれば生き物も生命活動を停止する。
本人もその事は分かっているはずなのに、彼は道がなかったからと僅かに残った痕跡を頼りに空間をぶち抜いてこの世界にやって来てしまった。
終わらない三月で助けてくれた湊が未来に行けなかったように、他の世界へ渡ろうとした事でこの湊は身体を灼かれたのだろう。
辿り着けば自分たちの時代のベルベットルームを経由して存在する事を認められるが、物理法則すら存在しないような世界の狭間を通り、よくも原型を保って辿り着けたものだとメティスも感心する。
「無事に辿り着けたから良かったものの、下手をすれば世界の狭間で迷って一生出られなかったかもしれないんですよ？」

「……まぁ、その時はその時だろう」
真面目に話を聞いていないのか、湊は心配するメティスの言葉を聞き流し、保健室の隣にある職員室の向かいの教室前で足を止めた。
扉の上にある表札には〝生徒指導室〟と書かれているが、彼が何故ここに来たのか分からないメティスは首を傾げる。
すると、湊は扉に手をかざして目を閉じ、少し経ってから扉に手を掛けた。
「……な、何ですかこれ？」
彼が扉を開けるとそこにはマンションの部屋と思われる玄関が存在していた。
何故そんなものが生徒指導室の中にあるのか分からず、メティスは一度廊下に出てここが八十神高校に酷似したヤソガミコウコウだと確認し直すが、やはり扉の中にはマンションの部屋らしきものが広がっている。
扉を開ける前の湊の行動によってこうなったのだと思われるが、事態が飲み込めないメティスは部屋の中に入る湊を追い、一応、扉の鍵を掛けてから玄関で靴を脱いで中に入る。
「ここ、どこなんですか？」
「……別にどこって事もない。この世界は存在がイメージに引っ張られるらしい。それを利用して作り替えただけだ」
彼がこの世界に来てまだ三十分も経っていない。にもかかわらず、世界の有り様を解析し、干渉して作り替えるなど、記憶を失っている人間に出来るとは思えない。
廊下を進んでリビングに到着したところで、まさかとメティスが彼の事を見れば、彼の目の前には囚人服のようなものを着た少年が立っていた。
「貴方は……綾時さん、ですよね？」
《君の世界ではそう名乗っていたのかい？　でも、今の僕はまだ人としての名前を貰ってなくてね。ファルロスって名前なんだ》
湊の前に立つ少年、幼いシャドウの王は優しい表情でメティスに微笑む。

以前未来からメティスたちがやって来たとき、ファルロスも湊の中から見ていたので彼女のことは知っていた。
だからこそ、彼女と出会っても平然としている訳だが、メティスにすれば自分の時代の兄の中にいるはずのない存在がいたことで、ここにいる湊が姉と同じ過去の人間だと理解していた。
柔和に微笑む少年と戸惑い気味の少女が邂逅している中、傍に佇んでいた青年はというと、その手に死神のカードを具現化してファルロスの胸に投げ入れた。
「名前なら考えてある。メティスに先に言われたが、お前の名前は望月綾時だ」
カードがファルロスの中に入ると少年の姿に変化が起こる。
眩い光に包まれると身体が成長してゆき、小さかった背丈はメティスを超え、ここにはいない順平たちよりもさらに大きくなると、そこで光が治まり甘いマスクの美少年へと変化していた。
名を与えられ、さらに裏技のような方法とはいえ一時的にでも成長した姿にして貰った少年は、首に巻かれた黄色いマフラーに触れながら青年に心からの笑顔を向ける。
「美しい名前をありがとう。けどまさか、君のペルソナを核にして限定的に顕現させるとはね」
「元の世界では難しいが、この世界は色々と特殊みたいでな。こちらの時間経過は元の世界にほぼ影響しない。封印が解けるのはまだ先だし、参加出来る学校行事が修学旅行だけってのも寂しいだろ？」
成長したファルロス、望月綾時は封印が解けて外に出ている訳ではない。
元々、本体は湊の中に残したまま、非常に存在の薄いペルソナのような状態で意識体が外に出ていたのだが、湊はそこに核となるペルソナを入れる事で存在を補強した。
おかげで今の彼は自我持ちのペルソナのように確かな存在感を放っており、さらにペルソナを核に入れているので、湊が倒れようと込められたエネルギーが切れるまでは存在を維持できる。
本体は湊の中にいるのでアナライズされようとシャドウだとバレ

る心配もない。
綾時にこの世界で文化祭というものをただ楽しませるだけに具現化させたことは驚きだが、青年の優しさに触れた本人が喜んでいるので、血を洗い流してくると言って風呂に向かった兄を見送りながらメティスは綾時に話しかけた。
「兄さんは姉さんの時代の兄さんなんですよね？　でも、だったらどうして鳴上さんたちの事を知ってたんですか？」
「彼は未来人の君がいるのを確認した時点で、他の人たちの記憶を軽く読んだのさ。おかげでそちらの事情もおおよそ把握していて、混乱が起きないよう異なる時代の存在だという事を伏せて接する事に決めたらしい」
「そうですか。それは、私もその方がいいと思います」
綾時からの説明を聞いてなるほどとメティスも納得する。
確かに全盛期の湊ならば心を読むだけでなく、さらに進んで他人の記憶を読むことも出来るだろう。
この訳の分からない世界に引きずり込まれた事で、七歌たちも鳴上たちも同じように混乱しているため、自分たちの知り合いである強力な援軍が来たことに喜んでいる状況を壊す必要はない。
その分、湊には全体の精神的支柱になるという負担を掛けることにはなるのだが、その点については事情を理解した綾時とメティスでフォローすれば良いだろう。
十分に休息が取れそうな拠点も確保され、この世界の謎についてもおおよそ把握したらしい湊もいてくれている。
その事に安堵したメティスは、彼が風呂から出てくるまで掃除でもしておこうと、雑巾を見つけると彼の血の跡がついたフローリングを拭いてまわった。
＊＊＊
ぬいぐるみを手に入れた七歌たちが校舎に戻ると、力の管理者三人と一緒に風花と知らない二人の少女が立っていた。
一人はここ八十神高校の制服を着た茶髪の美少女。
もう一人は青い帽子を被ったパンクファッションの美少女。

どうやら援軍組とは知り合いのようで、茶髪の美少女がそちらのメンバーたちと楽しげに話しているが、そんな様子を眺めていると階段の方から湊と共に先ほど一緒に出て行った少女と知らない美男子がやってきた。
湊の怪我は完全に完治しているようで、今は服もどこも血で汚れていない。
トレードマークの黒いマフラーも首に巻かれ、彼が無事であった事を喜びつつ、助けて貰った礼を言おうとすれば、青い帽子の美少女が青年に話しかけた。
「あれ？　なんで店長（テンチョー）までいるの？」
「……逆になんでバイトがここに来てるんだ？」
「だからバイトじゃないし。てか、別に来たくて来た訳でもない。マーガレットに巻き込まれただけだから」
「そうか。一階の生徒指導室に俺の拠点を用意した。向こうみたいに居候したいなら勝手にしていいぞ」
言いながら彼は青い帽子の美少女に一つの鍵を投げ渡す。
それはどうやら彼が自分用に用意した拠点の鍵のようだが、彼が自分の知らない者を拠点に住まわそうとしているのを見て、数人の女子が険しい目付きをしている。
七歌たちは男女に分かれて拠点を用意しているのだ。当然、彼や新たに現われた援軍組もそこに合流することになると思っていた。
けれど、よく考えれば彼が他の男子らと一緒に生活するはずがなかった。
学校だけあって教室は沢山あるのだから、人数が増えた事もあり、話が纏まる前に自分の拠点を用意したのならそちらを利用して貰って構わないのだ。
援軍組から反対意見が出るはずもなく、七歌たちも感情論で反対することは出来ないため、彼が自分の拠点を利用する事が自動で承認されると、青い帽子の美少女と話し終わった青年に一人の少女が話しかけた。
「あ、あの、わたしは玲、こっちは善です。えと、お近づきの印にどう

ぞ！」
ポケットに手を入れて気怠そうな顔で立っている湊は威圧感がすごい。
彼に近付いた少女、玲もその威圧感に怯えつつ挨拶をせねばと彼に友好の証のドーナッツを差し出した。
それを見つめる青年の瞳は一切の関心を持っていないように見えるが、玲の隣にいる善が相手の動きに警戒していると、湊は「……ご丁寧にどうも」と言いながらドーナッツを受け取り食べた。
見知らぬ他人から貰ったものを簡単に口にした事は驚きだが、よく考えれば彼は大量の血を流しながら現われたのだ。
移動した後には血の汚れが残っていて、今現在は学校の生徒たちが掃除してくれているが、血を失っているなら彼も栄養補給が必要なのだろう。
無事に受け取って貰えて喜んでいる玲とドーナッツを食べている青年を見ながら、七歌たちがファーストコンタクトが無事に済んだことに安堵していると、今度はドーナッツを食べ終えた湊が口を開いた。
「……甘いものは好きか？」
「っ、はい、大好きです！」
「シュークリームは？」
「ここでは食べたことないです！」
この世界は学校の文化祭だけあって店のラインナップが偏っている。
文化祭では一般的なクレープ屋に加え、和菓子屋やアイス屋とドーナッツ屋があるのも珍しいくらいで、ケーキやシュークリームといった一般的な洋菓子は存在しない。
一番それに近い物で存在するのはパフェだが、そちらはアイスの延長のようなものなので、結局ここにずっといた玲はそういったものを食べられずにいた。
しかし、彼がそんなシュークリームについて尋ねてきたという事は、きっと彼はこの世界に存在しないそれを所持しているのだろう。

期待に瞳を輝かせながら玲が彼を見つめていれば、湊は玲に手を出せと言った。
「……そんな小さいもので良いのか？」
「え、えっと、こうですか？」
「随分と謙虚だな」
彼の言葉に戸惑いつつ玲が手の側面をくっつけながら手を出せば、湊はそれでもまだ小さいだろうに苦笑する。
玲はここにいる中でも小柄だ。彼女より小さいのは子どもである天田くらいなもので、メンバーの中では小柄な風花よりも小さいくらいだ。
それ故に彼女が頑張って指を広げても元が小さい手だけに、それにシュークリームの大きさを合せればあまり大きな物にはならなかった。
湊がその事を指摘すると、玲はくっつけていた手を離して自分の顔と同じくらいの大きさの物がそこにあるように構えてみせる。
周りから見ていた者にすれば極端だなと笑うしかない。いくら何でもそんなサイズにはならないだろうと。
だが、それを見た湊が「落とすなよ」と短く呟いて指を鳴らせば、彼女の手には顔と同じ大きさの巨大シュークリームが現われていた。
「すごい！　善、魔法だよ！　魔法のシュークリームだよ！」
「ああ、驚いた。アイギスから話は聞いていたが、君は本当に食糧物資を運搬する救難のプロフェッショナルなのだな」
「……そんなプロになった覚えはないが」
自分たちが瞬きをしている一瞬のうちにシュークリームは現われていた。
湊は一度指を鳴らしただけで他には何もしていない。
まさに、玲の言った通り魔法で出したとしか思えないが、口の周りに粉砂糖とクリームを付けながらシュークリームを頬張る玲を見ていると、他の者たちもシュークリームが食べたくなってきた。
そんな意味も込めて一同が彼のことを見れば、視線の意味を理解しているであろう青年は他の者の訴えを無視して口を開いた。

「さて、自己紹介やら挨拶は個人間でやればいいが、大まかにだけ説明してやる。とりあえず学校ごとに分かれろ。マリーはこっちに来い」
マリーと呼ばれた青帽子の美少女が彼の傍に移動すると、言われた通りに他の者たちは学校ごとで分かれて立つ。
援軍組の列に並んでいるクマの着ぐるみは相変わらず異彩を放っているが、その間も玲がシュークリームをハグハグ言いながら食べているので今更だと、着ぐるみや少女の事を無視して湊は説明を始めた。
「この学校と同じ制服を着ているのは現実世界の八十神高校の人間。グループ名は特別捜査隊で良いのか？　まぁ、グループ名はあくまで自称だがリーダーはワイルド能力者で二年生の鳴上だ」
「どうぞよろしく」
湊からの紹介を受け、援軍組であった八十神高校側のリーダーの鳴上が手を挙げて挨拶する。
順平と同い年とは思えないほどの落ち着きを見せており、戦闘中に味方を鼓舞していた姿を目にしていた事もあって、普段から頼りになる存在なのだろうと七歌たちは考える。
「もう一方は東京の月光館学園の人間だ。部活の体を取っているため名は特別課外活動部、リーダーはワイルド能力者で二年生の九頭龍。ただ、リーダーは九頭龍だが、組織としての責任者は部長で三年の桐条美鶴になる」
「よろしく頼む」
続けて湊が七歌たちの事を紹介すれば、八十神高校側の者たちが三年生がいる事に感心していた。
別に年上だからどうこうという訳ではなく、単純に同じペルソナ使いのチームであってもチームごとに構成員の年齢が違うのだなと思っただけのようだ。
それを眺めながら湊は「後は……」とどちらの学校にも属していない者たちを見て、ついでに紹介しておくかと残りのメンバーも皆に紹介する。
「その他のメンバーの説明も必要か……。ベルベットルームの住人は

上からマーガレット、エリザベス、テオドア。そっちのブタの着ぐるみはクマ、ペットの犬、居候のマリー、妹のメティス。そして、援軍として呼んだ友達の望月綾時だ」

一部おかしな紹介もあった気がするが、上下関係がハッキリしているようで着ぐるみは湊に何も反論できず落ち込んでいる。

一方、コロマルは普段から犬と呼ばれているので、大して気にせず挨拶に一鳴きして尻尾を振っていた。

この辺りの差は精神年齢によるものかも知れないが、両チームのマスコット的な存在が対照的な反応を見せている中、直前に紹介を受けたことで黄色いマフラーを巻いた少年が一歩前に出て爽やかな笑顔を浮かべた。

「やあ、どうも初めまして。君たちの事は湊から聞いていて、ずっと会うことを楽しみにしていたんだ。仲良くして貰えると嬉しいな」

「うっわ、有里とは別タイプな正統派なイケメンだ。爽やかな王子様タイプ……」

キラキラと眩しい笑顔で挨拶され、新たな敵勢力（イケメン）の登場に順平がゲンナリした顔をする。

どことなくミステリアスな雰囲気を纏っている部分は湊と通じるものがあるけれど、片や暗黒の王気（オーラ）を放つ魔王、片やどこぞの高貴な生まれと思われる王気（オーラ）を放つ爽やかイケメン。

どちらも季節外れなマフラーがトレードマークな事といい、雰囲気は対照的ではあるが自然と並び立っている事もあって互いを認め合っている事が窺える。

女性陣にすれば目の保養かもしれないが、男性陣にすればグループカーストの上位が新たに増えただけなので手放しに喜べる事ではない。

八十神高校側にも順平と同じ思いの者がいたのか、クマの着ぐるみがパカッと開くと中から金髪碧眼の美少年が出てきて綾時に文句を言った。

「ちょっとー、師匠（マスター）のお友達か知らないけど、クマとキャラ被ってるクマよー」

「どこがだよ！　お前は見た目だけだろうが！　あー、馬鹿の言ったことは望月も気にしなくていいからな」
「ははっ、面白いね君たち」
湊の事を師匠と呼ぶクマがキャラ被りを指摘すれば、すぐにヘッドフォンを付けた男子が黙れと言ってクマヘッドを押さえつけて中の人間を着ぐるみに押し込んでいる。
個人個人の自己紹介は後で行なうのでまだ名前は分からないが、ヘッドフォンの男子とクマは普段からそういうノリらしく他の者は溜息を吐いている。
だが、言われた綾時が気にしていない事で安心しているようでもあり、とりあえずこの場に二つの学校の生徒がいる事を他の者が理解したところで湊が話を続けた。
「さて……男子の拠点は実習棟一階の会議室、女子は二階の生物教室らしい。治療が必要ならエリザベスのいる保健室へ、武器や防具など装備が必要なら女子拠点の隣の美術室でテオドアに頼め」
「八雲さんの拠点はどこでありますか？」
「保健室の斜め向かいの生徒指導室だが？」
「なるほど。では、わたしはそちらにお引っ越しするであります」
確かに彼はここへやって来る前に自分の拠点を用意したという話をしていたが、湊の拠点の場所を聞くなり自分も準備に携わった拠点を放棄する宣言はどうだろうか。
アイギスに限らず湊と同じ拠点が良いと望む女子は何人もいる。
七歌だってその一人であるため、自分だけ狡いぞとアイギスが行くなら自分も行きたいと言い出す者が現われようとすれば、話がややこしくなることを見越して湊が先に移動希望者を尋ねてきた。
「……俺の拠点を拠点にしたい者がいたら挙手しろ」
彼に言われ両陣営とその他の者たちの中から次々に手が上がってゆく。
月光館学園側からは七歌、チドリ、ラビリス、アイギス、そして控えめにゆかりと風花。一応、コロマルも鳴いたので、男子と美鶴を除く全員が希望したことになる。

対して八十神高校側からはシュークリームを貰って懐いた玲、玲がいるならと善、女子がいるならとクマが挙手した。
残るその他の者はというと、綾時、メティス、マリーが挙手し、ベルベットルームの住人たちは自分の部屋を拠点にするらしく手を挙げなかった。
彼が拠点の主の時点で男子と同室である事が確定するというのに、月光館学園側の女子のほとんどが手を挙げた事に鳴上たちは驚いているが、質問した当人は大方予想通りらしく無慈悲に判定してゆく。
「とりあえず、綾時とクマは却下だ。なんで女子のいる場所に男を入れると思うんだ」
善は玲がいなければ自動で抜けるので問題ない。そう判断して湊は真っ先に綾時とクマを切り捨てた。
友達であるはずの自分が切り捨てられた事に綾時は驚愕していたが、家族であっても簡単に切り捨てる事のある青年が相手の時点で、友達という関係が無条件の優遇に繋がらない事は明白である。
それに気付いても友達に捨てられたという事実が辛いのか綾時は肩を落とし、女子との夢の相部屋計画が崩れたクマと一緒に慰め合っていた。
「後は……鍵もやったしマリーとメティスは許可しよう。残りは自分たちの作った拠点を使え」
「なっ!? 何故でありますか、わたしと八雲さんが他の部屋などありえません!」
「……メティスに言われてな。月光館学園の者たちとあまり話さないで欲しいと」
「ちょっ、ちがっ、兄さん!!」
確かにメティスは彼にそんな事を伝えていたが、本人たちの目の前でそれをバラすのは拙いだろうと、焦った顔で湊の口を押さえるメティス。
しかし、時既に遅し。彼の拠点への居住権という特別枠から自分たちが落選したのが、独占欲に駆られたと思われる一人の少女の言葉が切っ掛けと知れば、落選した少女たちからの怒りの矛先を向けられる

事は避けられない。
実際は、メティスが話さないでくれと言ったのは記憶喪失だとバレることを恐れてであり、健康体の湊ならばその限りではない。
ただ、メティスはその後に発言を撤回していなかったので、湊は言われた通りに月光館学園のメンバーとあまり話さずペルソナの使用も控えるつもりでいた。
融通の利かない性格の青年に頼み事をするという事は、こういったリスクも考えて細心の注意を払う必要がある。
落選した女子たちから冷たい視線を向けられた少女は、その事を改めて理解させられ、どうやってこの局面を乗り越えようかと脳をフル回転させていた。
そうして、一部の者たちは修羅場を迎えつつも、最低限の紹介を終えたところで湊の指示により一同は解散した。
後は、それぞれの自己紹介を済ませるもよし、自分たちの拠点を見に行くのもよし、と校内散策も兼ねて一時間の自由行動時間となるのだった。

第二百七十話　自己紹介

――あまあま地獄

湊から両チームの簡単な説明を受け、個人の自己紹介や校舎内の散策で一時間ほど自由行動時間が設けられると、湊は色々と準備があるからと単独行動を取ることを宣言して去って行った。

こんな状況でも集団行動を取ろうとせず、自分の目的を優先する辺り平常運転だなと逆に安心するが、他の者たちは自己紹介も兼ねていくつかのグループに分かれて行動することになった。

不思議な国のアナタの左隣にある、甘味処〝あまあま地獄〟の前に置かれたテーブルでは、両チームのリーダーに加え、美鶴と玲とマリーを除く女子全員が集まっていた。

リーダーズとアナライズ担当たちのテーブルでは気にした様子もなくあんみつを食べているが、もう一つのテーブル席では緑ジャージの女子と赤カーディガンの女子と一緒に座ったメティスが、対面に座ったアイギスたちから圧迫面接のような対応を受けていた。

「では、妹さんにお聞きするであります。何故、あなたは八雲さんにわたし達と話さないよう進言したのですか？　正当な理由があれば納得しますが、なければ独占禁止法違反として処罰の対象となりますので相応の覚悟の上発言してください」

「えっと、その、ここに来る前に兄さんに記憶の混乱が見られたんです。記憶喪失になっていて皆さんの事も忘れていたようなので、下手に混乱させては拙いと思って話さないよう言いました」

「今の八雲さんは記憶があるようですが？」

「あ、はい。その事を話した後に記憶が回復していることが分かりまして、それなら大丈夫だと安心したんですが、要求を撤回していなかったので兄さんの中でもそのままになっていたみたいです。どうもすみませんでした」

本当に申し訳なさそうに頭を下げる姿からは嘘を吐いているようには見えない。

湊はずっと一人で行動していたので、ここに来る前の状態を知らな

かったアイギスたちにすれば、以前も記憶喪失に陥っていた事もあり、またそんな状態になっていたのかと驚きを隠せなかった。
だが、だからこそメティスの言い分もある程度信用出来、それならばしょうがないなと納得も出来た。
メティスの説明を受けてアイギスたちも納得したことで、放っていたプレッシャーも霧散すると、そのタイミングで緑ジャージの女子が恐る恐る口を開いた。
「あー……話は終わったかな？」
「はい、ノーギルティで問題は解決しました」
「んじゃ、改めて自己紹介しよっか」
自己紹介をする前にメティスの裁判が始まったときには驚いたが、無事に誤解も解けたなら良かったと緑ジャージの女子は笑う。
そして、アイギスたちも自己紹介が出来る状態になったことで、緑ジャージの女子から自分の事を話し始めた。
「あたしは里中千枝。鳴上君と同じ二年生だよ。好きな物はカンフー！」
「私は天城雪子。千枝とは幼馴染みなの。あと、あんまり関係ないけど実家が温泉旅館をやってます」
快活な千枝とお淑やかな雪子。二人は対照的な雰囲気ではあるが、幼馴染みだけあって仲も相性も良いらしい。
ペルソナも千枝は物理寄りの氷結スキル持ちの戦車〝トモエ〟、雪子は魔法寄りの火炎スキル持ちの女教皇〝コノハナサクヤ〟と対照的だ。
七歌たち側にも幼馴染みの二人がいるけれど、彼らはどちらも物理寄りでステータスも似ており、同じ幼馴染みでも似た者同士である事がペルソナにも見て取れた。
千枝と雪子がそんな風に挨拶をすれば、次は自分たちの番だと七歌たち側のテーブルに座っていた青みがかった髪の小柄な少女が静かに口を開く。
「中村あいか、二年生。実家は中華料理屋。よろしく」
「私は久慈川りせ、高校一年生だよ！」

「僕は白鐘直斗と言います。久慈川さんと同じ一年生です」
静かながらどこか芯を感じられる小柄な少女、中村あいかは鳴上たち行きつけの中華料理店〝愛家〟の看板娘。
他のメンバーたちは鳴上たちに助けられ仲間になったのに対し、彼女は湊とメティスに助けられて彼らと共に行動していたらしく、七歌たちの方で言えばチドリやラビリスのような立ち位置で参加しているとのこと。
続けて飛び抜けたルックスと明るさを持った一年生のりせと、年不相応な落ち着きを持ったボーイッシュな少女の直斗は、共に一年生ながらアイドルと探偵として仕事をしており、職業柄大人の中で過ごしてきた事もあって、今回のように知らない者が突然増えてもそれほど気にしていないらしい。
彼女たちのペルソナは、あいかがスピード物理タイプの火炎スキル持ちの隠者〝モチヅキチヨメ〟、りせがアナライズ持ちで非戦闘タイプの恋愛〝ヒミコ〟、直斗がスピード物理に加え光と闇と万能スキル持ちの運命〝スクナヒコナ〟をそれぞれ所持している。
七歌たちは全員が外国の神話に縁のあるペルソナなので、鳴上たちが日本神話や日本史に関係のあるペルソナばかり揃っている事を興味深く思えた。
「ほーん、土地の違いかペルソナの系統にも違いがあるんだねー」
「そうみたいだな。でも、自分以外にワイルドを持ってる人間がいるって聞いたときは驚いた」
「あれ？　そうなの？　え、でも、八雲君もワイルドだよ？」
鳴上も七歌と同じようにペルソナの種類の違いを興味深く思ったようだが、それよりも自分以外のワイルドに初めて会った事の方が驚きだと話す。
それは七歌にしても同じ意見ではあったが、ただ一点、自分の知り合いにワイルドが一人もいなかったという部分だけは異なっていたため、知り合いなのに湊がワイルドである事を知らないのかと聞き返した。
すると、鳴上だけでなくメティスを除く他の八十神高校側のメン

バーが驚いた顔になり、そんな事は聞いていないと自分たちが見てきた彼の様子を語った。
「いや、有里がワイルドだとは聞いてない。そもそもペルソナもほとんど使ってないが、使うのはいつも死神のタナトスだった」
「うん。私もプロデューサーのことアナライズした事あるけど、悠先輩みたいに複数のペルソナの反応は感じなかったよ？」
　鳴上たちも湊が戦うところは何度か見たことがある。他とは隔絶した強さを持っている事は知っていたが、けれど、彼が自分のように複数のペルソナを使っているところは見たことがない。
　それを証明するように、りせもアナライズでは他のペルソナは見つからなかったと語り、一体どういう事だと不思議そうにしながら何か情報を持っていそうなメティスに自然と視線が集まる。
「鳴上君たちはこう言っとるけど、妹ちゃんは湊君がワイルドって知らんかったん？」
「いえ、知ってました。ただ、記憶を失っている間は能力に制限が掛かっていて、ペルソナ自体あまり召喚出来るものでもなかったんです。一応、出せば大概の敵は倒せるので、一番相性も良く消耗の少ないタナトスだけを兄さんは使っていました」
　聞いて成程と納得する。他の者たちは記憶喪失状態でペルソナを召喚したことなどないが、自分の事も分からない状態でまともにペルソナを呼ぶことなど出来ないだろうとは理解出来る。
　そんな状態でも呼び出して戦果を得ようなどリスクも高く、慎重を期してワイルドの使用を控えていたとしてもおかしくはない。
　ペルソナの反応が一体しかなかった理由は不明ながら、彼が一般的なペルソナ使いのように見えていた理由を他の者が理解したところで、おずおずと手を挙げてメティスが発言の許可を求めた。
「あの、私からも一ついいですか？」
「あ、うん。なんか質問あるん？」
「いえ、その、今更で非常に言いづらいのですが、私の名前は汐見メティスと言いまして、兄さんは義理の兄さんで実際はラビリス姉さんとアイギス姉さんの妹なんです」

彼女がここで自分が二人の妹だと切り出したのは、二人が揃ってメティスを湊の妹らしき人物として扱っていたからだ。
このまま話が進めばゆかり辺りが本当に妹なのかと尋ねていたはずだが、その前に自分が二人の妹、つまりは元対シャドウ特別制圧兵装であったという事をカミングアウトすれば、実の姉だと言われた二人を含めて他の者も驚愕せずにはいられない。
案の定、ラビリスは目を丸くしながら、彼からまだ妹がいるとは聞いていなかったと本人に伝える。
「え、ホンマに？　ウチら湊君から何も聞いてへんけど？」
「すみません、兄さんはそういう説明を面倒くさがる人なので……。さっきの紹介も本人は姉さんたちの妹のメティスと言ってるつもりのようでしたし」
姉からの質問に申し訳なさそうに答えるメティス。
彼女も自分の兄の面倒臭がりから来る説明不足については困っているらしく、そこさえなければ非常に優秀な指導者になれるのにと溜息を吐く。
本人にその事を伝えれば、教えを請う無能が図々しいと言うに違いないが、とりあえずの誤解が解けた事でラビリスとアイギスはメティスの事を自分たちの妹として呼び捨てにする事に決まった。
ようやく誤解が解けて姉たちから妹として扱われるようになったメティス本人は嬉しそうに笑う。
だが、そこで話を聞いていたチドリから待ったがかかった。
「あなたが二人の妹なのは良いけど、だったら義理だろうと八雲の妹なのはおかしいでしょ」
「いえ、兄さんとアイギス姉さんは相思相愛なので、何もおかしくないです」
「メティスは非常によく出来た妹であります。今後も八雲さんを兄として慕う事を許可しましょう」
「ありがとうございます、姉さん！」
今まではチドリも実妹か義妹かは別にして、彼が妹と呼んだメティスを彼の妹ポジションを与えられた人物として不承不承ながら容認

していた。
けれど、彼女がラビリスたち姉妹の末妹だとすれば話が変わってくる。
その状態で湊を兄と呼ぶという事は、湊が姉二人のどちらかの伴侶だと認識していることになるのだ。
チドリが立てている人生設計の中では、お互いに二十五歳まで特定の相手を作らずに過ごし、二十五歳になってからお互い相手もいないし結婚しようと自然な流れで籍を入れるつもりだった。
その予定の中にはアイギスたちの存在は結婚式に呼ばれる友人枠としてしか存在しないため、メティスを良い子だと頭を撫でているアイギス含め妄想は止めろと睨み付けた。
一方、そんな女同士の醜い争いを傍で見ていた八十神高校側のメンバーからは、グループ内でカップルが存在するらしいと聞いてりせが目を輝かせて詳細情報を強請りにゆく。
「え、アイギスさんってプロデューサーとそういう関係なの？　うっそ、グループ内でそういうのありなんだ！　他の人たちもそういう関係の人いるの？」
「お嬢ちゃん、アイギスはあくまで自称彼女でな。うちの組織は基本的に職場恋愛禁止だぜ？　ってか、本当はそういう決まりはないけど、単純に女子メンバーが基本的に八雲君狙いばっかりなので男が余っております」
渋い雰囲気を出しつつ格好付けながら話す七歌曰く、従姉で客観的に見ている自分以外の二年生女子はエグいくらいにドロドロの昼ドラ泥沼状態とのこと。
言われた他の女子らはアイギスとチドリ以外は気まずそうに視線を逸らしたため、七歌の発言が真実であると理解した鳴上や千枝も思わず引いている。
最初の自己紹介の時点でそんな話を聞かされた方にすれば不運としか言えないが、別に普段から貶し合いやら陰湿な嫌がらせをしていると言う事はなく、男が絡まなければ仲の良い友人であると七歌は付け加えた。

「ま、そこに触れなきゃ普通に友達だよ。って事で、まだ大丈夫ならそっちは戦いが終わるまでグループ内恋愛は禁止にした方がいいぜ？」
「……ああ、肝に銘じるよ」
八十神高校側のメンバーを観察していた七歌は、相手側も相手側で中々に危うい部分があると気付いていた。
その原因は間違いなく鳴上なので、きっとチーム内の女子たちから何かしらのアプローチを受けているのだろう。
身近に自分の末路と思われる青年がいた事で彼も危機感を覚えたようで、これならばしばらくは大丈夫そうだと安心した七歌は黒蜜抹茶白玉あんみつを追加で頼むのであった。
――屋上
七歌たちが三階で話している頃、その他のメンバーは屋上のフードコートに集まっていた。
最初は湊について行こうとしていたマリーも、ドーナッツでも買って玲と一緒に食べておけと彼に諭吉を一人貰った事で、今は紙袋いっぱいのドーナッツを食べながら他の者たちを見ていた。
「んじゃ、あらためて、俺は花村陽介。ウチのリーダーの相棒ってとこだな」
「ほう、なら君が彼の右腕として参謀を務めているのか」
「そんなかしこまったチームじゃないっすけど、一応、そういう部分もなくはないっすね」
リーダーの資質であるカリスマは鳴上に及ばないが、何だかんだでヘッドフォンの少年である花村はチームをまとめていた。
そんな彼の持つペルソナは、攻撃もアシストもバランスよくこなす疾風スキル持ちの魔術師〝ジライヤ〟。
彼がリーダーの相棒である事は他の者も認めているらしく、続けて湊と変わらぬ長身の厳つい男子が自己紹介をする。
「あー……オレは巽完二。一年生ッス」
「お前、見た目厳ついんだから、もちっと自分のプロフィールなり趣味も言っとけよ」

「ううう、うっせぇぞ！」
人目通りの乱暴者、という訳ではないようで、チーム内ではむしろ弄られポジションらしい完二の反応に他の者たちは小さく笑う。
だが、戦闘手段はストレートなパワータイプなようで、彼は物理とタフネスに特化した電撃スキル持ちの皇帝〝タケミカヅチ〟を所持していた。
その説明を聞いた真田と荒垣は、まるで自分たちのペルソナを足して割ったようだと興味を示す。
実際の実力は次のダンジョンに向かったときにでも見せて貰うが、先ほどからクマが自己紹介したがっているので、湊から少しだけ聞いているが彼の自己紹介も聞くことにする。
「フフーン、やっとクマの番クマね。クマは地元デパート〝ジュネス〟が誇る愛されゆるふわマスコットのクマクマ！」
中身は美少年だと言って彼はクマ皮を脱いでみせるが、それは先ほど見ているので他の者の反応は薄い。
ただ、魔法寄りの氷結スキル持ちの星〝キントキドウジ〟というペルソナは中々に強いらしく、ふざけているようでも実力は備えている事が窺えた。
そうして、全員の自己紹介が終わったと思いきや、その場にいた者の視線は黄色いマフラーを巻いた少年に集まっており。
あの湊から〝友達〟として紹介された者が、どのような人物でどのようなペルソナを持っているのか気になるようだ。
誰が声を掛けるかという空気になれば、同い年のようだからと代表して順平が声を掛ける。
「それで？　有里から友達って呼ばれてたけど、おたくはどんなペルソナ持ってるんだ？」
「フフッ、気になるかい？」
「そりゃ、この世界から脱出するまでは一緒に戦うんだし。戦力の確認は重要だろ？」
「僕としては戦力の確認よりも友好を深めたいけどね」
力を見たいというのならここで見せようと彼は静かに目を閉じる。

彼は召喚器を持っておらず、さらにカードを具現化してもいない。
まさか、湊のようにそのまま召喚出来るのかと見ていれば、〝ペルソナ〟という短い呟きが聞こえた後、彼の頭上に棺桶を背負った黒い死神が現われた。
ここにいる者たちはそれが何かを知っている。それは彼らの知る最強のペルソナ使いが使役している死の化身であり、間違っても他の者が使役できるようなものではない。
だが、現われた死神は平時の湊のペルソナと同等の存在感を放ち待機している。
何故それを少年が持っているのか理解出来ぬまま、呆然とした様子の美鶴は疑問を口にした。
「これは……有里と同じタナトスだと……？」
「正確に言えば湊のタナトスが僕と同じなのさ。これは僕が元々持っていた力でね。湊の力は本来の力を分割する時に僕の力に似せたんだ」
ムーンライトブリッジでの出来事を知らない彼らには分からないだろうが、綾時が口にした事は全て真実である。
デスとの戦闘を経て力に目覚めた湊は、扱い切れないもう一体の〝世界〟を司るペルソナを二体に分けた。
一体は守るための力であるアベルに、もう一体は彼にとって理不尽なまでの力の象徴であったデスの写し身であるタナトスに。
だからこそ、自分のタナトスこそがオリジナルであると彼は口にしたのだが、彼は具現化したタナトスを消すと人懐っこい笑みを浮かべて、驚いた様子で固まっていた者たちを見た。
「まぁ、さっきも言ったけど僕は皆と仲良くしたいんだ。幸いな事にこの世界でいくら時間が進もうと元の世界ではほとんど時間が経過しない事が分かってる。だから、この世界からの脱出方を考えながら、時には今みたいに一緒にお店でも冷やかして遊ぼうよ」
彼のペルソナから感じた力の規模は、湊と同列かそれに準ずるものであった。
しかし、そんな力を持っていながら、湊とは対照的なフレンドリー

な態度を見せられるとどうにも調子が狂ってしまう。
三階で話しているときも、彼は友達のはずの湊から男部屋で寝ろと捨てられており、自分たちと同じ拠点で生活している事が決まっている。
ならば、勝手に抱いていた苦手意識など捨て去り、相手の要望通りに仲良くした方が良いに決まっている。
「へへっ、有里の友達っつーからどんなやつかと思ったけど、そういう事なら一緒に全店制覇しに行こうぜ！」
「ああ、よろしく順平君！」
改めて握手を交わしてお互いのことを知り合えば、順平は相手を綾時と名前で呼ぶことに決め、花村たちを伴って全店制覇を目指して文化祭へと繰り出して行った。

――生徒玄関
それぞれの自己紹介を終え、他の者たちが思い思いに文化祭を楽しんでいる頃、一人で行動していた湊は、男子トイレと女子トイレの入口の間の壁前に腰辺りの高さの機械を設置していた。
白いボディに赤いラインの柄が入った機械は、小さなディスプレイとお金の投入口があり、どこからどう見ても電子マネーのチャージ機にしか見えない。
彼はこれと同じ物を両校舎の全てのフロアのトイレ前に設置し、さらに出店している店のレジに電子マネー用の精算機も設置していた。
先に全ての店舗に精算機を設置したので、残っていたチャージ機の設置もここで最後だが、何故彼がこんなものを設置しているかと言うと、この世界に迷い込んだ者たちを相手に商売をするつもりだからだ。
無論、経済的に裕福な湊にすれば、七歌や鳴上たちを相手に商売したところで小遣い稼ぎにもならない。
そも、全員が財布を一応持ってきてはいるが、この世界には銀行のＡＴＭがないので、シャドウと戦う以外に稼ぐ手段のない彼らはすぐに所持金が尽きてしまうのだ。

企業経営を任されている湊がそんな者たちを相手に本気で商売をするはずがなく、あくまでこちらの世界での生活に変化を与えるために彼はいくつかの店を出すつもりでいた。
最後のチャージ機を設置し終え、やれやれといった様子で立ち上がる湊。
するとそこへ、何やら慌てた様子の花村たちが体育館側の入口から入って来るなり駆け寄ってきた。
「おい、有里！　おまっ、体育館のあれは何だよ!?」
「……大衆浴場。所謂、銭湯だが？」
ここに来る直前、折角だからと文化祭をまわっていた順平、綾時、クマからなる花村たち一行は、体育館はどうなっているのだろうかと足を向けた。
フロアを回っているときや、店で金を払う時などに見慣れない機械がある事は気になっていたが、途中で出会った千枝たちが湊が設置しているのを見たと言っていた事で、彼らは後で聞けば良いかと体育館に向かうことを優先したのだ。
だが、そこで彼らが見たのは扉の前に置かれた〝ぬ〟と書かれた板、扉を潜った先にあったマッサージチェアや自販機の並ぶロビー、そしてロビーからさらに男女別に分かれた暖簾を潜った先にあった脱衣所と大浴場であった。
八十神高校側のメンバーだけでなく、こちらの世界に先にいた善や玲に確認を取っても分かることだが、文化祭で体育館を銭湯にするなどというふざけた話は出ていなかった。
体育館では舞台を使った有志の出し物と、ミス八高コンテスト用の飾り付けがされていたくらいで、後は普段通りの状態でしかない。
それが急に銭湯に変わり、尚且つ中に湊が設置していた精算機とチャージ機があったことから湊の仕業なのは確実だ。
一体どんな手を使って劇的ビフォーアフターしたのか教えろと詰め寄れば、湊は冷めた目で彼らを見ながらマフラーから取り出したカードを一人一人に渡した。
「……いちいち金を出すのが面倒だと思ってプリペイドカードを作っ

た。サービスで最初から五千円入れてあるが、残高が不足したら現金チャージするといい。チャージは千円単位、一回のチャージ金額が四千円以下は三パーセント、五千円以上九千円以下は五パーセント、一万円以上は十パーセント多くチャージされる」

カードの裏面には個人の名前が先に記入されており、落としたりしても安心である。

貰った綾時は「便利でいいね」と嬉しそうにしながらチャージ機の操作方法を聞いているが、残念ながら湊の説明では花村の質問に一切答えられていない。

質問をスルーされた事で花村がこの野郎と拳を震わせるも、殴れば何十倍にもなって返ってくる事を知っているクマが後ろから必死に止めている。

そして、そろそろ時間だなと湊が集合場所に向かい出せば、上で絶対に説明しろよと言いつつ花村一行も渋々ながら後に続く。

階段をのぼり三階に着けば、既に全員が揃っており全員の視線が湊に集まる。

他の者たちも彼が何やら怪しい機械を設置している事には気付いていたらしく、人数分のカードをポケットから取り出すと自分の分を取っていくように告げて、先ほど下で花村たち相手にした説明を始めた。

「チマチマと小銭を出すのは面倒なので、全ての店に電子マネーの精算機を設置した。カードには最初からサービスで五千円入れてある。チャージすれば金額に応じてサービスポイントが入るから、まぁ、使うかどうかは個人の判断に任せる」

ちなみに保健室で利用すればサーバ経由でエリザベスのカード残高に補填される。ベルベットルームならばマーガレットに、てづくりこ〜ぼ〜ならばテオドアにと、他の者たちの分も同様に使われた分だけ補填されるので、残高さえあればこの世界の買い物はカードだけで済むようになったのだ。

おかげで小銭を探す面倒や、お札を出してお釣りの小銭で財布が重くなる心配も解消されるため、最初から五千円分入っていることも含

めて女性陣から拍手があがる。
だが、まだ体育館の説明が終わってないぞと花村がジトッとした責める目で湊を見れば、面倒臭そうにしながらも湊はそちらの説明もした。
「……使われていなかった体育館を銭湯にリフォームした。シャンプーやリンスなどの備品は好きに使って良い。ただ、飲み物や特定の銘柄のシャンプーなどを望むなら追加料金がかかる。入湯料は一日百円。チケットなら八日分で七百円と一日分お得だ」
「え、お風呂にお金取るの？」
湊の説明を聞き終えるなりゆかりが尋ねる。それぞれの拠点を用意した流れで、お風呂なども共用として用意されたものだと思ったが故の発言だが、それを聞いた湊は呆れた表情で溜息を吐いた。
「はぁ……この学校は第二次世界大戦中の一九四四年に前身の学校が創立されたためプールがない。だから、シャワーすら浴びる事が出来ないし、出来ても用意した水やお湯で身体を拭くくらいだろう。それでも良いなら今すぐ体育館を元通りにするが……それで良いか？」
「コラ、ゆかり！　八雲君に謝れ！」
「百円如きケチってんじゃないわよ！　八雲の気が変わる前に謝罪しなさい！」
冷たい瞳で彼がそう口にした瞬間、七歌やチドリがゆかりの頭を押さえて下げさせた。
ここにいるメンバーは後方支援だった風花とりせを除き、ダンジョンに入った者たちは少なからず服や身体が汚れていた。
校舎に戻ってきてからトイレの水道で手や顔は洗えたが、汗も掻いているので出来ればシャワーを浴びてお湯に浸かりたい。
だからこそ、体育館を丸ごとリフォームして銭湯を用意してくれた事に非常に感謝していたのだが、馬鹿がたかが百円をケチろうとしたためにこの世界からお風呂が消えようとしたので、七歌たちは必死に彼に謝れとゆかりに頭を下げさせたのだ。
仲間から無理矢理に頭を押さえつけられ謝罪させられる姿は他の者の瞳には悲しく映る。

しかし、一部の者たちはゆかりと同じように金を取るのかと言おうとしていたため、言わなくて良かったと内心で冷や汗を掻いていた。
そんな彼らの心の中を見透かしている青年は、分かれば良いんだとマフラーから取り出した煙管を咥えて喉を潤す。
変わった道具に玲が興味を抱き、彼にそれが何であるかを尋ねている傍らで、少し考え事をしていた美鶴はある問題に気付いて全員で問題を共有するため口を開いた。
「……そういえば、寝具と着替えの問題がまだ残っていたな」
「拠点を用意してくれていたんじゃ？」
「ああ。だが、それはあくまで使えそうな教室を片付けただけでな。寝具も着替えも探したが調達できていないんだ」
美鶴の言葉に鳴上が疑問をぶつける。男女別に分かれているが、先に来ていた月光館学園の者たちが寝床となる拠点を用意している話は聞いていた。
ならば、そこには最低限の布団なり毛布くらいはあると思っていたのだが、この世界にそんなものはないと善が断言した事により、これでは風呂に入って身体が綺麗になっても十分休めそうだとは言えなくなった。
一応、保健室にならばベッドなどはあるが、保健室は現在エリザベスのテリトリーであり、仮に彼女が貸してくれたとしても人数分にはまるで届かない。
他に何かないかと全員が知恵を絞り、これならどうかと思い付いた雪子が口を開く。
「あ、なら体育のマットとかで代用したらどうかな？」
「やめとけって。あんなの硬いし埃臭いしで寝るどころじゃねーよ」
「そうは言っても他に使えそうなのないじゃん。文句あるなら花村が意見出しなよ」
雪子の意見も悪くはないのだが、残念ながら花村のいう事にも一理あった。
マットは確かに眠れない事はないけれど、昔から使っている事に加えて普段は体育倉庫に眠っているため酷く埃臭いのだ。

デリケートな体質ならばそれだけでクシャミが止まらなくなることもあるので、この世界にどれだけ滞在することになるかは分からないが、もう少しマシなものを探すべく考え込んで案を出し合う。
あーでもないこーでもない。コロマルを枕代わりに使ってはどうかという意見を真田が出したときには、荒垣からふざけてる場合かと怒鳴り声が上がったが、結局良い案が浮かばず議論が停滞していると、
「みんなー、お布団あったよー！」
そう言いながら楽しそうに笑う玲がノートサイズの何かを手に持ち、見て見てと興奮気味にピョンピョンと跳ねていた。
彼女が何を言っているのか分からないメンバーたちは、話し合いを一時中断すると彼女の傍に集まって話を聞く。
「玲ちゃん、お布団があったってどういう意味？」
「あのね。欲しいものがあれば通販に頼ればいいって、はーちゃんがこれを貸してくれたの」
貸してくれたという青年の姿がいつの間にか消えているが、言いながら玲はその手に持っていたノートサイズの物を他の者にも見せる。
大きさも厚さも授業で使うノート程度しかないそれは、片面がディスプレイになった見慣れない機械だった。
一瞬、ノートパソコンかと考えるも、それにしては薄いしキーボードがないと七歌や鳴上は浮かんだ考えを否定する。
すると、機械に詳しい風花が初めて見る機種だと驚きながら機械の正体を口にした。
「すごい。こんな薄くて軽いタブレット端末初めて見ました」
「タブレット端末？」
「えっと、画面に触れて直接操作できるパソコンみたいな物なの」
それはまだどちらの世界でもあまり普及していない電子機器だった。
無論、全く存在しないわけではないがただの学生が触れることはほぼないため、説明を聞いてそれは便利だなと玲に一言断って七歌が端末を持たせて貰う。

画面には玲の名前でログインした『優良通販サイト〝ＫＯＮＯＺＡＭＡ〟』という通販のページが表示されているが、そこには玲の言う通り〝大特集〟と銘打たれてベッドや布団が載っている。
しかし、いくら注文しようがここは現実世界ではない。そんな場所に頼んだ物が届くことはないだろうと思っていれば、いつの間にかいなくなっていた湊が発泡スチロールの箱を持って階段を登ってきた。
それを見た玲が「うわっ、はやーい！」とはしゃいでいるので、一体何をしているのかと他の者たちは二人のやり取りを見守る。
「……ご注文の〝パティスリー三船のレアチーズケーキ〟をお持ちしました。お受け取りのサインかハンコをください」
「サインでお願いします！」
湊から受け取ったボールペンで伝票にサインをすると、玲は彼から受け取った発泡スチロールの箱の蓋を開けて中を見る。
そこには透明なケースに収められた四号サイズのホールケーキが保冷剤と共に入っており、それを手にした玲はケースから出すなり一緒に入っていた樹脂製のフォークで食べ始めた。
「んんっ!?　すごい、流石お取り寄せグルメ！　口に入れた瞬間に口いっぱいにレアチーズの爽やかな酸味が広がって、その風味を一切邪魔することなく舌に乗った瞬間に溶けるように消えていくスポンジの甘さが食べた人を幸せで包み込み、一口食べるごとに交互に来る酸味と甘みが美味しさを無限に増幅させるこのケーキはまさに究極のチーズケーキと呼んでも過言ではないわけで！　ああ、でも、次のページにあったチョモランマ・モンブランもとっても気になってて、三号サイズ以上のホールケーキでありながら一つ六百円から千円というお手頃価格もあってわたしのことを誘惑してくるお取り寄せグルメは本当にすごいっていうか」
正直、早口で言っているのでまるで意味が分からない。
他の者が玲は何を言っているんだという顔になっていると、普段から彼女と一緒にいる善が冷静にツッコミを入れた。
「玲、君は何を言っているんだ？」
「つまり、すっごく美味しいの！　善も食べる？」

「いや、いい。それは玲が全て食べると良い」
彼女の反応からケーキがとても美味しいという事が伝わってくる。
ニコニコと嬉しそうに食べている姿を見ているだけで和み、善も玲が笑っている姿を優しい表情で見つめているが、他の者たちは玲の様子にだけ構っている訳にはいかず再起動を果たす。
そう。この世界に届くはずがないと思っていた通販が、まさかの有里湊プレゼンツだった事に対して物申さねばならないのだ。
ほとんどの者が微妙な表情で青年を見つめる中、物怖じせず鋭いツッコミを入れたのは花村だった。
「んだよ、通販サイトってお前の店かよ！」
「……それぞれの拠点に貸し出し用のタブレットと充電スタンドが置いてある。画面にカードを当てれば自動でログインするから、カードの残高に気をつけて注文すれば届けてやる」
この世界に彼が設置したタブレットは全部で八台。男子部屋、女子部屋、湊の拠点、ベルベットルーム、保健室、てづくりこ～ぼ～というそれぞれ拠点に加え、好きなシャンプーなどの注文用に銭湯の脱衣所にもそれぞれ一台ずつとなっている。
設置していない分を含めれば玲に貸している分などまだまだ余裕はあるが、当然、注文が来てから箱詰めをして配達するのは全て人力になる。
そういった作業場として湊は拠点の正面にある職員室をリフォームして、〝ＫＯＮＯＺＡＭＡ発送センター〟の看板も付けているが、銭湯の管理に加えて通販の配達業務までするのは大変ではないかと心配してあいかが声を掛けた。
「一人で大丈夫？」
「……若干名のバイトは募集してる。制服あり、食事補助あり、従業員割りありといった待遇だ」
「うん、手伝う」
独特なイントネーションで話しつつ親指を立ててサムズアップした彼女は、元の世界でも色々なところで修行も兼ねたバイトをしているため、こちらの世界でも湊を手伝うとすぐにバイトへ応募した。

バイトの人事も全て一人でこなす湊は彼女をすぐ採用し、新たなタブレット端末を取り出すとあいかの電子マネーカードを受け取って従業員割りの設定を施す。

そんな簡単に決めて良いのかと思う者もいたが、とりあえずは湊の通販サイトによって寝具と着替えも調達出来る事になり、一同はそれぞれの拠点に戻って必要なものを買い揃えるのだった。

第二百七十一話　二つ目の迷宮

――屋上・フードコート

この世界に来てから二日目の朝。

といっても、この世界には放課後のような夕暮れは存在しても、明確な夜というものは存在せず、気付いたら日中の明るさになっているのだが。

一組五百円という格安で布団セットをレンタルし、それぞれの拠点で無事に安眠を得た一同は、朝食を摂るためにそれぞれ好きな店の料理を買ってきてフードコートで食べていた。

男子はそれぞれ好きにお好み焼きやら焼きそばやらを食べているが、女性陣は朝から味の濃いソース系の食べ物はちょっとという事で、この世界にある中では比較的軽いホットドッグを食べている。

だが、朝食に何を食べるかという話になった時点で、彼女たちはこの世界に長期滞在する事になった場合の問題点に既に気付き、真剣に話し合っていた。

紙コップに入ったウーロン茶を飲みつつ、小さな口でホットドッグにかぶりついたりせは、しっかりと咀嚼して飲み込んでから真面目な顔で話す。

「文化祭の食べ物にクオリティ求めるのは間違いってのは分かるけど、それでもフレッシュ野菜がホットドッグのレタスくらいしかないってあり得なくない？」

心の底から信じられないという顔で話すりせだが、確かにこの世界には文化祭の店しか食べ物がない。

店がなくて餓死するよりはマシだが、それでも味の濃いジャンクフードが主流であり、野菜は焼きそばやお好み焼きに入っているものや、今彼女が食べているホットドッグのレタスくらいしかないのだ。

昼食のみであったり、一日や二日ならば我慢できる。

けれど、これから何日滞在することになるかは分からないが、少なくとも残り三つのダンジョンを攻略する必要があるのだ。

休息日を考えると攻略できても三日に一つだと思われるので、一週

間以上この食生活が続くとなると絶対に体調にも影響が出ると思われた。
　りせの言葉を聞いた他の女子たちは、よく分かっていない様子の玲とアイギスを除き頷いて返すが、一応、他にも食料を手に入れる方法はなくはないとどこか暗い表情で直斗がその方法を皆に伝える。
「昨日、有里先輩の通販サイトを見ていたら、玲さんが頼んだお取り寄せグルメ以外にも普通の食べ物も見つかりました。ですが、その……通常価格百円ほどのカップ麺が千円になっていたり、みかん一つが五百円だったりとかなり高額に設定されています」
「……なるほど、生活必需品の寝具や着替えが良心的な価格だった事への反動なのか、彼にとってこの世界でも獲得可能な食料品は嗜好品扱いなのかもしれないな」
　直斗の言葉に美鶴は難しい問題だと頭を悩ませる。
　確かに外から補給することが出来ないこの世界において、彼の所持している物品は数に限りのある稀少品だ。
　物の価値というのは希少性で変動するため、いくら元の世界の価値を基準に考えようと、条件の異なるこの世界では一つしかないカップ麺が元の世界における宝石ほどの価値を持ち得る。
　ただ、この緊急事態にそれはおかしいのではとゆかりが反論する。
「でも、今の食事事情を考えると絶対に数日で体調に影響出ますよね？　チーム全体のことを考えたらもっと歩み寄るとか譲歩するのが普通じゃないですか？」
「……だから、お金を出せば売ってくれるんでしょ」
「そうじゃなくって、こう、有里君だって私らが倒れたら困るでしょ？」
「んー、湊君にしたらウチらって基本戦力に数えへんし、別に倒れたとこで気にせんのちゃう？」
　他の者たちはこの世界で出会った者たちも含め、共にこの世界からの脱出を目指す仲間だと認識している。
　ただ、湊もそんな風に考えているかというと、彼をよく知るラビリスなどからすれば可能性は低いと思えた。

何せ、自分たちが危険な状態になれば彼に助けて貰えるが、彼が危険な状態になっても他の者では助けることが出来ないのだ。
これは他の者たちが彼を助けることを嫌がるという訳ではなく、ただ単に実力差から来る問題でしかない。
自分たちより遙かに強い青年が危機的状況に追い込まれるほどの敵を相手に、実力で大きく劣る者たちが集まったところで何が出来るというのか。
彼と一緒にタルタロスを訪れていたラビリスたちはそれを十分に理解しているので、湊が自分たちを対等な立場である〝仲間〟として認識する事はまずないだろうと告げれば、他の者たちもそれを理解すると僅かに暗くなった雰囲気の中で食事を続けた。
――三階
七歌たちが朝食を食べ終えて三階へ向かうと、既に湊がベルベットルームの三人に加え、メティス、マリー、あいかの三人と一緒に集まっていた。
別に何時に集合という風に話し合っていた訳でもないが、彼らが先にいた事で遅れた気分になった者たちは短く謝罪して彼の傍に集まる。
それぞれの自己紹介は昨日のうちに終わらせ、自分たちがどんな風にペルソナで戦ってきたのかもそれぞれの拠点で話し合ったようなので、改めてのお互いの立場を話し合う必要はないが、これから新たなダンジョンに向かうにはいくつか決めておくことがある。
全員が話を聞ける状態になったことを確認した美鶴は、最上級学年として代表して口を開いた。
「さて、まだ一つ目のダンジョンを突破したばかりだが、残る三つのダンジョンを攻略していくため、事前に次の目的地などを話しておかねばならない。山岸、既に次のダンジョンは分かっているか？」
「はい。一つ目のダンジョンを攻略した事で分かるようになりました。次のダンジョンは二年二組の教室です」
不思議な国のアナタを攻略し、元の世界に帰るための扉に掛かった鍵が一つ解除されると、これまでなかったはずの反応が生まれてい

た。
風花だけでなくりせの方も同じように気付いたらしく、四つあると言われているダンジョンは順番に攻略していく事で新しく発生する事が分かった。
これは、一つずつ順番に攻略する必要があり、もし仮に、どこかで行き詰まっても別のダンジョンを先に攻略するという事が出来ないという事でもある。
ただ、この場にいる者たちは、順番があるならその通りに攻略していこうという素直な考え方を持った者ばかりだったことで、同時に攻略を進められない事に不満を持ったのは効率を考える湊一人だけであった。
そして、湊が顔には出さずに順に攻略していく事を面倒に思っているとき、風花から次のダンジョンの場所を聞くなり花村がとても嫌そうな顔をして声をあげた。
「げっ、ウチってことは、まさか〝合コン喫茶〟はやってないよな？」
花村たちは現実世界のこの学校の生徒だけに、現実世界の学校基準ではあるがクラスごとの出し物はある程度知っていた。
自分のクラスならば当然完璧に把握しており、トラウマの記憶に幾人かがブルーになっていると、初めて聞く出し物だった事で美鶴がその内容を尋ねる。
「なんだそれは？」
「その、クラスの出し物で、合コンをやるんです……ちなみに発案者は花村君です」
「天城、おまっ、そういう裏話は言わなくていいだろ！」
学校の文化祭で生徒が合コンを主催するなど前代未聞だ。
合コンの詳しい内容については知らずとも、美鶴も〝若者が出会い目的に行なう飲み会〟という程度ながら知識としては知っていた。
もしも自分たちの学校でそれを出し物にしようとするクラスがあれば、問答無用に却下になるだろうと断言出来る。
学校公認で合コンが出来ると聞いて羨ましがっている順平や綾時は放置し、美鶴を含めた女子ら数名が呆れ気味に溜息を吐いていれ

ば、食後のおやつにアメリカンドッグを頬張っていた玲が不思議そうに他の者たちに質問した。
「あの、ごーこんってなに？」
「合コン、それは運命の交差点……この広大な宇宙の中で、赤い糸で繋がるたった一人の相手を探し求め、億千万もの愛の狩人が集う場所……」
玲の質問に答えたのはクマ皮を脱いで気取ったポーズを決めたクマだった。
彼の言っている事はあながち間違いではないのだが、そんな高尚なものではない事は確かなので、すごいと言って瞳を輝かせている玲を見かねた千枝が嘘を教えるなとクマを叱っている。
もっとも、クマ皮を着直したクマは叱られても気にした様子はなく、むしろ開き直って玲を放っておけないのだとのたまっている。
彼は昨日の時点で何やら玲を気に掛けている節があったが、同じように彼女の事が気になっていたアイギスやラビリスも彼の言葉には同意していた。
「確かに、クマさんの言うことは分かる気がします」
「でしょでしょ！　でもクマはー、アイチャンも放っとかない！　だから、逆ナ――――」
話している途中で彼の声が途切れる。
一体どうしたと彼がいた場所を見れば、両脚に黒い炎を纏って立っている湊がいた。
湊の脚の炎はすぐに消えていたが、一瞬のうちにクマと湊が入れ替わった理由が分からない。
そも、元々立っていたクマはどこに消えたのかと思っていれば、離れた場所、正確に言えば十数メートル離れた廊下の最奥にある非常階段の入口の方から〝ドゴンッ〟と何かが扉にぶつかった音が響いた。
他の者たちが音のした方へ視線を向ければ、そこには腹部に黒く焦げた靴跡をつけたクマが泡を吹いて倒れている。
一瞬で場所が入れ替わった二人、脚が燃えていた湊、クマの腹部に残る焦げた靴跡。

導かれる答えは一つだと、探偵が複雑そうな表情で今起きた一連の出来事を語った。
「先ほど、クマ君はアイギスさんに逆ナンの許可を求めようとしていました。そして、それにいち早く気付いた人物は彼に接近し、その腹部を蹴りつけることで強引に言葉を遮った。そうですね……有里先輩？」
実際は確認するまでもないのだが、いつものふざけた調子で〝逆ナン〟という名の普通のナンパをしようとしたばっかりに、クマが彼の逆鱗に触れたという情報を共有するため直斗は改めて本人に確認を取っていた。
たかがナンパの声かけをしようとしただけ。それだけで十数メートル蹴り飛ばされるなど、クマでなければ死んでいるところだ。
こんなにも大勢の女子がいるのだから、少しくらいお近づきになっても良いよねと密かに考えていた男子もおり、そんな男子にとっては湊の逆鱗判定がアイギス限定なのかが気になる。
そうして一同が緊張した面持ちで彼の言葉を待っていれば、ポケットに手を入れて気怠そうな表情で元いた位置に戻った彼は静かに告げた。
「……止まっていた虫を潰しただけだ」
『ダウト！』
その時、皆の心は一つになった。
彼の嘘はあからさま過ぎるので、むしろ隠す気はないようだが、今の反応をみるとアイギス限定のように思える。
という事は、他の女子はＯＫなのかと淡い希望を抱く者もいる中、先ほどナンパされ掛かったアイギスが湊に近付くなり、彼の左手を取って両手で包むように握った。
「大丈夫です、八雲さん。わたしは初めて会ったあの時から八雲さん一筋ですから」
「……知ってるさ」
「フフッ、知っておられましたか」
とても純粋で綺麗な笑顔を見せるアイギスに釣られ、湊も慈しみの

籠もった視線で彼女を見つめながら微笑を浮かべた。
ここ最近はすれ違いが多かっただけに、彼の貴重な笑顔を見られてアイギスもますます嬉しそうにしている。
そんな二人のやり取りを見た玲が、善の手を握って「仲良しでいいね」と自分の事のように喜び、善も小さく笑って頷く。
二組の男女のそういったやり取りを近くで見せつけられている方は堪ったものではないが、二年生の男子たちが何故か結束が強めている中、照れたように僅かに頬を染めた美鶴が咳払いをして話を戻した。
「んんっ……さて、話を戻すが、次のダンジョンへ行く前にチーム編成について改めて決めておこう。流石にこの大所帯では今まで通りに動くことは出来ないからな」
「んじゃ、最初に全体の指揮官とか決めますか。続けて、前衛と後衛なり、小チーム単位なりの隊長も」
この人数で同時に動けば僅かなミスで同士討ちしてしまう危険がある。
そんな事はしていられないので、指揮官は全体の流れを見ての指揮に専念し、細かな部分はいくつかの小チームを作って小チームの隊長が指示を飛ばせば良いだろうと七歌が提案した。
彼女の言葉に美鶴と鳴上を頷き、普段からまとめ役をやっている者たちに反対意見がないなら、他の者たちも文句はないため指揮官決めに入る。
指揮官とはいわば総大将。この大所帯のボスであるため、必然的に普段のチームのリーダーより偉くなる。
ならばと最高の決め顔をした順平が、自分の胸を右手親指で指してアピールするも、器じゃねーよと呆れ顔のゆかりが親指を下に向けた右手で首を切るジェスチャーをしてみせた。
それを見ていた花村が自分がやると手を挙げ、続いて綾時も余裕を見せつつ自分がと手を挙げる。
急に二年の男子たちが自分が指揮官をやるとアピールし始めた事で、皆がやろうとするなら自分もと天田が手を挙げれば、花村と綾時

だけでなく落ち込んでいたはずの順平まで揃って〝どうぞどうぞ〟と指揮官を天田に譲った。
無論、そんなふざけた方法で指揮官が決まることはないが、話し合いをするにしても能力の関係から指揮官を務められる者は実は最初から三人に絞られていた。
その三人の内の一人である鳴上は、深く考え込んだ状態でしばらく黙っていると、考えがまとまったのか一度頷いてから顔をあげる。
「俺は指揮官は有里が良いと思う。一応、そっちのメンバーの戦い方は聞いたけど、実際の動きを見てから指示に慣れるまで時間がかかると思う。その点、既に全員の能力を把握している有里は全体の指揮官として適任だと思う」
「だよね。私もリーダーをしていた経験から指揮官には八雲君を推薦します。戦いの経験値と戦場全体を見る視野があるし、この人数を動かすなら適任だと思う」
突然二人に推薦された青年はアイギスと話をしていて一切聞いていない。
単独行動の多い彼だが、本来は自身が心を許している誰かと一緒にいたいウサギのような性格なのだ。
この世界に来た初日はやらなければならない事が多かったので無視していたが、仕事さえ終わってしまえば現実世界の時間経過を無視できる分、この世界ではゆっくり出来る。
故に、自分と手を繋いだままアイギスが嬉しそうに話していれば、湊はそちらにばかり集中して他の雑音を意識してシャットアウトしていた。
もっとも、このままでは話が進まないのでメティスが彼の肩を叩いて呼び、全体の指揮官に推薦された事を伝えると途端に嫌そうな顔をしている。
他の者が真面目に話している状況で、女子といちゃついているやつに指揮官を頼むなど不安でしかない。
ただそれでも、一時期民間軍事会社で働き、現在は会社で大勢の人間を動かしている彼にとって、この程度の人数ならば寝ぼけていても

十分に動かす事が可能であった。
「全体を三つの分隊に分ける。部隊名は好きに決めていいが、仮にＡＢＣとするなら、Ａをメインとして Ｂを補助に当てＣを温存、途中からＢをメインにしてＣを補助に当てＡを休ませる。そうやって一つは常に温存しつつ先を目指すのを基本方針とする。分隊長は九頭龍、鳴上、メティスが務めろ」
Ａチームは七歌を分隊長にアイギスを除く特別課外活動部七人のメンバー。
Ｂチームは鳴上を分隊長に自称・特別捜査隊七人のメンバー。
Ｃチームはメティスを分隊長にチドリ、アイギス、ラビリス、コロマル、綾時、あいか、善と玲という九人のメンバー。
善と玲はあまり戦力にならない分、Ｃチームだけ人数が多くても全体のバランスとしては取れている方だろう。
まだ二つ目のダンジョンなので今は慣れた者同士でチームを組んだが、共に戦っていく中でお互いを知れば、またチームを組み直して学校ごとに拘らない混成チームを作ることもあり得る。
他の者たちにもそれを伝えて全体での戦い方を意識させると、湊は他の者たちに二年二組への移動を促し、ここに残る風花とりせにはお互いに自分たちのリーダーへのバックアップを中心にサポートするよう伝えてから移動しようとした。
すると、ベルベットルームの住人らと並んで立っていたマリーがやって来て、ダンジョンへ向かおうとする湊に声を掛けてきた。
「店長、よく倒れるんだから無茶しないでよ。その、いってらっしゃい」
「……ああ。行ってくる」
自分の身を心配してくれた少女の頭を帽子越しに撫で、湊はそのまま階段を下りてゆく。
それを見ていた他の男子は、心配して見送ってくれる女子がいるなんてずるいと嫉妬の炎を燃やすが、彼の周りに女子がいる事など日常茶飯事だ。
今から危険なダンジョンに潜るのだから、意識をしっかりと切り替

えてゆく事にし、真剣な顔になった男子らも彼の後を追った。

――ごーこんきっさ・一次会

二階に降りた一同が教室の前に到着し扉を潜ると、中はピンクを基調とした愛らしいデザインの内装のダンジョンになっていた。

明らかに教室の数十倍の広さがある事は一つ目のダンジョンで理解していたが、こちらのダンジョンには大きなクマのぬいぐるみらしきものや、ハートのクッションなどが至るところに置いてあり、文化祭の出し物の内装のレベルを完全に超えている。

現実世界で自分たちの出し物の内装を飾り付けた花村などは、自分たちのクラスはこんな内装ではなかったと驚いている。

「俺らあんなぬいぐるみとかクッションで飾り付けてねーぞ」

「なんか……カワイイっすね」

ここに置かれているものは、不思議な国のアナタとは違った趣ではあるがファンシーという共通点があった。

色合いと造りを見ていた完二の感性に訴えるものがあったらしく、彼が少し照れたように内装の可愛らしさを褒めれば、厳つい見た目とのギャップに少し驚いたように七歌が彼を見た。

「へぇ、完二君って可愛いのとか好きなんだ」

「コイツの女子力、俺らん中でダントツでナンバーワンなんだぜ？」

「え、料理とか裁縫とかの家事もできんの？」

「おう。裁縫に関しちゃマジで売り物と変わんねぇレベル」

花村から新たな情報が齎されると、月光館学園側の面々は意外だと目を丸くして完二を見た。

もっとも、男子である完二が女子力ナンバーワンと言われた事で、緑のジャージがよく似合っている某女子が異議ありと訴えていたが、お前に言う資格はねえと花村に即却下されていた。

そんな緑ジャージの空しい訴えをＢＧＭに、月光館学園の面々がいつまでも人は見かけによらないんだなという目で完二を見ていれば、無遠慮な視線に耐えられなくなった完二がうがーと吠えた。

「つーか、さっきから黙って聞いてりゃなんなんスか！　オレぁ女子

力どころか男子力もナンバーワンっスよ！」
「……でも、お前童貞だろ？」
その時、青年の発言によって空気が凍った。
別に湊は悪気があって完二を童貞呼ばわりしたわけではない。
女も知らずに男子力ナンバーワンを語って良いのかと、本当にただ純粋に浮かんだ疑問を口にしただけだ。
先頭の辺りにいた完二たちに対し、湊は指揮官のくせに殿のつもりなのか最後尾を歩いていた。
故に、今の発言はこの場にいる全員に聞こえていた訳だが、言葉の意味をよく理解していない一部の者を除き、全員が気まずそうにしている中で完二が再起動を果たす。
「なななな、なんだとコラァ?!　こっちはまだ高一だぞコラァ?!」
「……今日日、そんなの中学生には捨ててるものだろ？　女に縁がなかったのか？」
彼にとって女性は身近な存在だ。学校では他学年の者にも気軽に挨拶され、学外でも握手や写真を求められる事がある。
だからこそ、全員と深い関係になることはなくとも、一人くらいはそこまで進んだ相手がいても不思議に思っていなかった。
けれど、彼の言葉が耳に届くなり完二だけでなくほとんどの男子が湊を睨み、お前は良いよなと順平を筆頭に嫉妬に塗れた怨嗟の声を吐く。
「そりゃ、お前の常識だろうが！　こちとら生まれてからずーっと女子と縁のない生活送ってんだよ！」
「そうだそうだ！　自分がモテるからって上から目線で言いやがって！　そんなに非童貞なら偉いってのかよ?!」
湊はただ不思議に思って尋ねただけだが、それを聞いた男子たちは挑発として受け取った。
こういった状況で暴走した者を止めるべき立場である鳴上や荒垣すら真剣に湊を見ているので、順平と花村の言葉は男子たちの総意らしい。
まさか、ダンジョンに入って数メートルで仲間割れが起きると思っ

ていなかった女性陣は、この場合どちらを諌めるべきかと溜息を吐いている。
　もっとも、いくら責められようが認識が異なる湊は気にしていないため、何をそんなに怒っているんだと改めて不思議そうに他の者を見る。
「特に偉いと思った事はないが、劣等感を覚えたならお前たちにとってはそういう格付けなんだろ。別に綾時は気にしていないぞ？」
「僕は女性と仲良くしたいと思っているけど、それは素敵な女性と楽しい時間を過ごしたいだけだからね。そういった関係を結べるほど愛し合える事は素敵だと思うけど、行為自体には多少の知的好奇心以上の思い入れはないかな」
　一切の嫌味のない笑顔を浮かべた綾時は実に好青年といった印象を受ける。
　同じ童貞でもこうやって綾時は特に劣等感も抱かず爽やかに流しているため、過剰に反応した者たちは湊の言う通り、本人がその事に対して劣等感を抱いているだけと証明された形になった。
　おかげで順平たちは綾時に裏切り者めと詰め寄っているが、そうこうしていると急に上からスピーカー越しのような音声が聞こえてきた。
《ようこそ、迷える子羊さんたち。ここは二年二組の出し物だ。はじめましての人も、はじめましてじゃない人も、どうもどうもこんにちは。ここは、簡単な質問に答えるだけで〝運命の相手〟が見つかってしまう、最新技術を駆使した出し物なのだ。君はやってもいいし、やらなくてもいい》
　聞こえてきた音声は機械による合成音声なのか、発音がどこか不自然で言葉から人らしさが伝わってこない。
　現実世界の合コン喫茶とは中身が大きく異なっているため、八十神高校側の生徒も聞こえてきた音声には当然聞き覚えはない。
　という事は、これはこのダンジョンを攻略する上で必要なギミック。
　参加は自由と言っておきながら、きっと参加しなければ先に進めな

いようになっているのだろう。
遊びにしか思えないふざけたギミックに対し、美鶴は顔を顰めると呆れたように吐き捨てた。
「これも黒幕の趣味か？　随分と余裕があるみたいだな」
「けど、もし本当に運命の相手が見つかるなら面白くないですか？」
「さてな。自由恋愛というのは私には縁のないものだ。親が決めた婚約者がいる以上、ここでどう出ようと関係ない」
桐条グループの令嬢にとって結婚は家同士の繋がりという意味しかない。
桐条武治と英恵もそうであったように、美鶴も親が決めた婚約者と将来結婚する予定だ。
一般家庭の者からするとそれは不自由で不幸せな結婚に思えるが、美鶴の両親は共に愛し合っているので家同士の結婚が悪いとは言い切れない。
ただ、美鶴は父親譲りの頑固さと真面目で素直だからこその視野の狭さがある。
本人が心の底から嫌がれば婚約破棄もあり得るというのに、婚約が決まった時点で結婚するものと思っているからこそ、美鶴は自由恋愛について諦めて現状を受け入れていた。
今の言葉もそれ故の発言だったのだが、美鶴の欠点と別の未来があり得ることに気付いている七歌は、やんわりと美鶴の〝決めつけ〟に対して苦言を呈する。
「まぁ、ただのダンジョンギミックですし真面目に考える必要ないと思いますよ。朝のニュース番組の占いみたいに、軽い気持ちで楽しめばいいと思います」
「シャドウがいなければそうも出来たんだがな。まぁ、実際にどういった形式か分からないが、様子を見ることにしよう」
質問が行なわれるのはもう少し先らしい。なので、そこでどうやって質問に答えるのかは分からないが、休憩も出来るような場所ならば参加方法によっては美鶴も参加すると告げた。
まだ頭の固い部分はあるけれど、昔の彼女を知っている七歌にすれ

ば、美鶴も随分とマシになったように思える。
その理由は、桐条グループの行なっていた実験や湊の事を知ったことで、盲目的に父親を信じなくなったからだろうが、それは一種の親離れのようなものなので、七歌としても好ましい変化だ。
別に順平のように気を抜けとは言わないが、少しくらいの遊び心を持っていた方が心に余裕が持てるので、ここでもう少し美鶴にも成長して貰えたらと考えつつ、七歌たちがダンジョンを進むと大きな扉があった。
不思議な国のアナタにも扉はいくつもあったので別に驚かないが、扉の前で止まっているとベルベットルームにいるりせと風花から通信が入る。
どうやら向こう側に敵がいるとの事だが、それを聞いて三人の分隊長が指揮官からの指示を待っていると、青年は何故だか最後尾に立って暇そうに他の者を見ていた。
何故指示が来ないのか不思議に思っていると、通信を送ってくるりせと風花が湊が見つからず、そのせいで通信を繋げないという情報が入ってくる。
彼はどう見てもそこにいるのだが、りせたちから通信が来ていないから何の指示も出してこないと理解した七歌と鳴上が、暇そうにしている彼の方を向いて声をかけた。
「ねえ、八雲君。敵がいるらしいけど、どのチームから行くの？」
「というか、りせが反応が見えないし通信が繋がらないって怒っているぞ？」
「……ああ、ステルスか。そういえば癖で入れてたな」
探知型の能力を持っている者は、能力の強弱で程度は異なるがステルスをかける事が出来る。
それを使えば同系統の能力者に存在を感知されないメリットがあるのだが、逆に味方からも気付かれないデメリットが存在する。
どうしてステルスの癖がついているのかは尋ねないが、彼が自分のステルスを解除すると、すぐに存在を感知したりせから怒りの声が届く。

《あ、やっと見つけた！　ちょっとプロデューサー、なんで存在感消してるの！　どこにいるか分からないじゃん》
「別に存在感は消してない。癖でステルスを解除してなかっただけだ」
《次にステルスで消えたらサポートしてあげないからね！》
「……別になくても困らないけどな」
　自分がステルスで勝手に消えておきながら、通信を繋ぐなりサポートの存在を全否定である。
　本人が自前で探知能力を持っているからこその自信だが、未だに彼がワイルド能力者だと認識し切れていない八十神高校側のメンバーにすれば、りせのサポートもなしにどうやってシャドウと戦うのかと思わなくもない。
　もっとも、指揮官の彼のサポートをしなければ、それは全メンバーへの指示にも影響するのだが、通信越しに怒っているりせの罵声を他の者が聞いていると、湊はマフラーから赤い弓と黒い矢を取り出して扉に向かって構えた。
　扉の向こう側にはシャドウがいるので、まさか小チームへの指示も飛ばさず、それで貫通スナイプを狙うのだろうか。
　そう思っていれば、弓道経験者のゆかりにして、教科書のようだ思わせる見事な構えを取る彼の腕を黒い炎が走り、そのまま弓と矢を覆い尽くした。
　扉までの距離は十五メートル。近距離競技の距離のおよそ半分しかないが、弓道をした事のない者には弓の威力が最も発揮される距離が分からない。
　故に、全員が扉までの道を空け黙って指揮官の動きを見ていれば、常人では半分も引けない強弓を完全に引ききった湊が矢を放った。
　瞬間、弓より放たれた矢は漆黒の光線となり扉に到達する。
　けれど、矢はそのまま止まらずに扉を粉々に吹き飛ばし、扉の向こうのシャドウらを直撃していないにもかかわらず余波だけで消滅させた。
　小チームを組んでの初戦闘と思っていた者にすれば拍子抜けだが、

それ以上に指揮官の戦闘力がおかしいせいで誰も口を開かない。
本当に自分たちはいるんだろうかと心の中で思った者もいたが、湊が先へ進むぞと言ったことで他の者も動き出し、一同は微妙な空気に包まれながら二つ目のダンジョンへ潜ってゆくのだった。

第二百七十二話　ごーこんきっさ

――ごーこんきっさ・一次会

三つにチームを分け、交代で戦いながら進むことに決めた一行は、最初に七歌たちが前線組としてシャドウと戦闘を行なっていた。

召喚器を頭に当てて順平がヘルメスを召喚し、敵シャドウを切りつけるとすぐに下がり、天田が走り込んで槍で突く。

一体の敵が倒れると続けてその後方にいた敵へ、美鶴がブフーラで作った氷刃を飛ばす。

その目的は足止めだが、宙に浮いた台座の上で座禅を組んだ女型のシャドウ〝静寂のマリア〟は、氷結属性が弱点だったようで、攻撃を喰らうなり地面に落下した。

「出やがれ、カストール！」

敵が動けない今がチャンス。荒垣が呼び出したカストールは、現われた勢いのまま敵に向かい、騎馬の一本足で敵を踏みつけ殺してみせる。

床板がひび割れるほどの威力に後方で見ていた者たちは感心するが、全ての敵を倒し終えたことで風花から戦闘終了の声が掛かった。

《お疲れさまでした。敵の討伐完了です。近くに敵の反応はありませんので、少し休んでください》

「オッケー。んじゃ、息を整えがてらゆっくり進もう」

風花の言葉を受けて七歌は自分のチームメンバーに武器を仕舞って楽にするよう話す。

今現在、味方には後方支援の風花とりせだけでなく、ダンジョンに潜っているメンバーにも湊とチドリという探知能力持ちがいる。

その四人がいれば敵の見逃しはまずあり得ないため、四人のうちの誰かが敵の情報を伝えてくるまでは休憩する事が出来るのだ。

他の者たちもそれを理解しているため装備を仕舞えば、七歌たちの援護を担当する事になっていた鳴上たちが、自分たちの出番はなかったなと苦笑しながら合流した。

「お疲れ。やっぱり強いな」

「まぁ、影時間を終わらせるにはどうしても強さ必要だからね。文字通りに何度か死線も越えてきたよ」
鳴上たちはまだ一度共闘しただけだったが、その時既に七歌たちの強さを認めていた。
改めて確認した事でそれをより強く実感し、素直に相手の強さを讃えれば、七歌は必要に迫られて手に入れた力だと苦笑して話す。
鳴上たちはテレビに人が入れられなければ基本的にはテレビに入る必要はないが、七歌たちはシャドウの被害者を出さないために普段から戦う必要がある。
その辺りの環境の違いが戦闘に対する意識の違いとして現われているのだろうかと、鳴上がそんな風に考えていれば、召喚方法の違いについて聞いてはいたがと雪子が改まって召喚器について尋ねた。
「でも、何で〝召喚器〟って道具は銃型なの？」
「〝死〟を意識するためだ。己の死と向き合うからこそ、俺たちは潜在的な力であるペルソナを引き出す事が出来ている」
答える真田は実際に持ってみろと雪子に召喚器を渡す。
銃身の奥が詰められ、弾倉を入れる部分に黄昏の羽根を入れているので実弾を撃つ機能は排除されているが、その本体は間違いなく本物の拳銃だ。
小さくともズシリとした重さと冷たい鉄の輝きに思わず背筋が寒くなる。
確かにこんなものを使えば、いくら銃弾が出ないと分かっていても死を意識出来るだろう。
カードを具現化して召喚する自分たちには分からない感覚に、話を聞いていた完二も影時間の戦いにはそこまでの覚悟が必要なのかと疑問をぶつけた。
「その影時間ってやつを消すのは、んな大変なことなんスか？」
「まーな。世界平和ってか、世界を救うってんだから、マジで命懸けっつーか。そんくらいしなきゃ出来ないっつーか」
「世界を救う、か。すごいな。俺たちは自分の街の平和を守るので精一杯だ……」

「まぁ、そこらは戦う理由の違いでしょ。私たちは結果的に世界を救う事に繋がるだけで、実際は家族や友達とか大切な人を守りたくて戦ってる人もいる訳だし」
街の平和を守るために犯人捜しに奔走している鳴上たちにすれば、世界などどうやって救えば良いのか想像も出来ない。
しかし、そのために命懸けで戦っていると語る順平の言葉に嘘は感じられず、救う範囲の広さなど結果的なものでしかないと話す七歌からも確かな決意を感じた。
それらの覚悟が彼女たちの強さの秘密かと理解し、そういえばと花村は自分たちと同じように犯人捜しにも参加している青年の事を思い出して、両方に参加している彼はどういった思いで戦っているのかと聞いてみた。
「有里は掛け持ちしてるっぽいけど、影時間に関しちゃ世界平和のために命懸けてんのか？」
「……そんなどうでもいい事に懸ける訳ないだろ。くだらない事ばかり言ってないで先に進むぞ」
それだけ答えると湊はポケットに手を入れたままスタスタと先へ行ってしまう。
指揮官に任命されている者が先に行って良いのかという疑問もあるが、彼なら一人でもシャドウに後れを取る事はないという信頼がある。
故に、他の者もあまり心配せずにゆっくりと後を追うのだが、先ほどの彼の発言について鳴上たちが気まずそうにしていれば、やれやれと頭に手を当て溜息を吐いた美鶴がフォローを入れた。
「はぁ……あまり彼の事を悪く思わないでやってくれ。彼のああいった冷たい物言いには色々と事情があるんだ」
「いや、あたしらは別に良いですけど、そっちは仲間内で全否定って大丈夫なの？」
「有里先輩は僕らの仲間じゃないですよ。今は別に敵対してないだけで、前に戦って僕ら全員殺されかけましたし」
七歌たちを湊の仲間だと思っていた者たちは天田の発言に驚く。

彼は全身を血濡れにしてまでこの世界に辿り着き、他の者たちの危機を救ってみせた。
校舎に戻ってからもお金は取っているが、必要になる物資を格安で提供している。
そして、集団の指揮官を嫌々ながらでも受けて指示を出してくれているというのに、仲間ではないどころか敵対していたと言われても到底信じられるものではない。
知り合いらしい者たちを殺しかけたほどだ。きっと何かしらの理由があったのだろう。
この世界で一緒に過ごす以上、そういった不安の種は出来るだけなくしておきたい。そのため今後のことも考え、その時の事を詳しく教えて欲しいと直斗が頼む。
「有里先輩が仲間ではないという部分はまだ分かります。僕たちも厳密に言えば仲間ではないので。ですが、そんな風に敵対するほどとは何があったのですか？」
そう。直斗も言う通り、鳴上たちから見た湊は厳密には仲間ではない。
敵かと言われれば違うと否定出来るのだが、彼は基本的には単独かメティスやあいかを連れて行動しているので、同じように事件解決を目指していても鳴上たちとは異なるチームになるのだ。
七歌たちの方でも同じような立ち位置ならば、単純に属するチームが異なるだけと思う事が出来るのだが、先ほど天田は敵対して殺されかけたと言っていた。
ならば、同じ方向を向く別チームではなく、方針の違いによって明確に敵になり得る存在と認識する方が正しい。
直斗がそういった様々な可能性について思考を巡らせていれば、考えるように静かに目を閉じていた真田が瞳を開いてしっかりと答えた。
「俺たちにはペルソナ使いの敵がいる。その敵の情報に踊らされ、妹を攫われたと勘違いした俺が有里の実家に向かうなり待ち構えていたあいつに攻撃を仕掛けたんだ。そして、応戦した有里にやられ、そ

れを見た他の者たちも戦闘に入った」
経緯を聞いている鳴上たちは、現在一緒に行動している者たちがそんな風に戦った場面が想像できず困惑した様子を見せる。
一方で、彼の言葉を聞いていた仲間たちは、湊に突っかかっていた以前とは異なる客観的な事実を交えて話す真田の様子に驚いていた。
「結果から言えばこちらの惨敗。あいつの実家に襲撃をかけた形になったが、有里は大人しく退けば何もしないと言っていたんだ。だが、頭に血が昇っていた俺は信じなくてな。全員がやられたところで時間切れだと焼き払われかけた」
「焼き払うって、そんな……それじゃあ、本当に……」
「まぁ、吉野が止めていなければ殺されていただろう。だが、俺たちもペルソナを使って攻撃を仕掛けた。別に一方的にあいつが俺たちを殺そうとした訳じゃない」
美紀がストレガに殺されかけたあの日、真田は目を逸らしてきた事実を認めた事でペルソナが成長した。
ペルソナの変化は心の変化が形になったものだ。
故に、以前の自分の行動を客観的に見つめ直し、改めて自分の非を認める事が出来ているのだろう。
七歌たちを殺そうとした事が事実だと聞かされ、千枝や雪子が僅かに不安な顔をしたタイミングで真田がフォローを入れた事からもそういった変化が見られた。
内心ではどのように思っているかは別にしろ、後輩たちを導く立場にある三年生の真田がそういった視点でものを考えられるようになった事は良い変化である。
ただ、千枝たちが〝湊が知り合いを殺しかけた〟という事実に不安を覚えたという事は、彼女たちは彼の詳しい経歴を知らないということ。
それを彼女たちに伝えるべきか七歌たちは悩みつつも、知らないのなら変に怖がらせる必要もないだろうと考え、また何かあれば伝える事に決めて先へ進んだ湊を追う事にした。
＊＊＊

先へ進んだ湊を追いかけると、彼は今までの扉とは見た目の異なる白い扉の前で待っていた。
支援担当の風花とりせによれば、中には特に何もないが不思議な力の存在を感じるらしく、もしかするとここが最初に言われていた〝運命の相手〟が見つかる質問の部屋なのかもしれない。
敵がいないのなら無駄に警戒する必要もないが、一応用心しながら完二が扉を開けると他の者たちも続いて中に入る。
中にはカップルと思われるクマの置物と鎖で封鎖された扉があった。このままでは向こう側に出られないが、全員が入ったタイミングで入ってきた扉が閉まり、メンバーたちが突然の事態に警戒したタイミングで天井の方からスピーカー越しの音声が流れてくる。
《ようこそ、迷える子羊さんたち。ここは〝運命の選択部屋〟なのだ。これから運命の質問が出されるぞ。フィーリングか直感で答えよう。質問はいくつかあるぞ。最後まで答えると、君の運命の》
「――――説明が長い」
相手が話している途中、それもダンジョンの攻略に必要と思われる情報を語っている最中。
だがそんなものは関係ないとばかりに、湊は九尾切り丸をマフラーから抜き放つと鎖を全て断ち切ってしまった。
切られた鎖は床に落下する途中で消滅し、鎖が消えれば前方の扉も入ってきた後方の扉も開いた事で脱出が可能となった。
それを見届けた湊は武器をマフラーへと仕舞うも、正当な攻略法が存在すると言うのに強引に突破した彼を花村が呆れた様子で見る。
「ちょ、えー……そんな力業ってありかよ。絶対今の質問に答えたら通れるようになったパターンだろ……」
「なんでダンジョンのギミック如きに付き合う必要があるんだ」
「いや、そりゃそうだけどさ。一応、運命の相手が見つかるっていうゲーム要素のある体験型の催し物っぽいし」
既にダンジョンギミックの音声は聞こえなくなっている。
もしも順番に攻略しなければ運命の相手が分からないのだとすれば、これでもう既にゲームオーバーな訳だが、湊はそんなもの分から

なくても困らないと冷めた表情で先へ行こうとする。
しかし、少しだけ楽しみにしていた花村が折角のアトラクションがと嘆けば、指揮官のくせに先頭を歩き出した湊が振り返るなり口を開いた。
「……お前には大谷がいるだろ？」
「アバドンの話はすんな!!」
瞬間、割と大真面目に怒った顔になる花村。
話に出てきた大谷の事を知っている八十神高校側のメンバーは、ご愁傷様といった同情的な視線で花村を見るが、相手を知らずアバドンも何か分からない順平や綾時などはダンジョンを進みながらも興味津々に話を聞きに行く。
「え、何々？　おたく、色々言いつつも良い人いたの？」
「僕も興味あるな。その大谷さんって人とは親しいのかい？」
「冗談でもありえねぇよ！　大谷ってのはなぁ、俺の買ったばっかの原チャを座っただけでスクラップにしたクリーチャーだ……」
ちなみに、一般的な原付でも百キロくらいなら平気で乗せて走れる。
流石に百三十キロほどになると難しいが、それでも乗ったくらいで壊れる事はほぼない。
買ったばかりの新車なら尚更で、それを乗っただけで破壊した女子とは一体何者なのか。
当時を思い出して苦悶の表情で話す花村の言葉を聞いただけで、順平らが未知の存在に対し恐怖を抱いていると、見かねた鳴上が合流して大谷のフォローを入れる。
「大谷は悪い人ではないよ。陽介のバイクは確かに壊れたけど、有里がその場で修理してくれただろ？」
「お前は手にしたバイクを速攻で破壊されてないから言えんだよ。バイトして初めて買ったバイクだぞ？　どんだけ絶望したと思ってんだ」
自分で働いて貯めたお金で買った物というのは特別な価値を持つ。
他の者から見れば大したことのない物だろうと、自分にとっては掛

け替えのない宝物になるのだ。
　それを買ってすぐに遠出した先で破壊されれば、帰りの心配も含めて途轍もない絶望が降りかかって当然である。
　花村からその事をいわれてしまえば、叔父からバイクを譲って貰っただけの鳴上は何も言えなくなるが、男子たちがバイクについて話していた事で、少し後ろを歩いていた七歌が話に加わりに近付いて来た。
「お、鳴上君たちもバイク乗るの？　私も中型免許持ってるよ。愛車はゴールデンなドラッグスター４００さ。ちなみに美鶴さんはドゥカティ９００ｓｓに４００ｓｓのエンジン載せたカスタムマシン。荒垣さんはＺＥＰＨＹＲχだったよね？」
「ああ。まぁ、俺のは有里が乗ってなかったやつを譲り受けただけだけどな」
「あれ、そうなんですか？　カスタムパーツだけで本体代以上にお金掛かってそうでしたけど」
「ありゃ、受け取ったときからだ。バイク屋にこんなの譲るなんて相当なブルジョアか乗るよりカスタムが好きな人間だろうって言われたからな」
　正確に言えば中型免許ではなく普通自動二輪免許と呼ぶが、巌戸台分寮で暮らす者の中では七歌を含めて三人が免許と愛車を所持していた。
　一番高いのは美鶴のカスタムマシンだが、荒垣の乗っているバイクもパーツがいくつも変更されたカスタムマシンになっており、その性能は侮れない。
　ただ、いくら湊からタダで貰ったマシンだろうと荒垣は大切に乗っており、手入れが行き届いている事から、荒垣の愛車を見た事のある七歌と美鶴は彼がバイク好きである事に気付いていた。
　それだけに荒垣もバイクの話に興味を示しているようだが、七歌たちの言葉を聞いた鳴上が申し訳なさそうに自分たちの持つ免許を教えた。
「確かにバイクには乗るけど、俺たちは予算の都合で原付免許なんだ」

「なるほろぉ。でも、原付でも楽しいよね。色々なとこ行けるのはさ？」
鳴上が少し気恥ずかしそうに原付免許である事を伝えるも、確かに制限はあるけどそれでも楽しいよねと七歌は笑顔を見せた。
その眩しい笑顔を見た花村と鳴上は、密着作戦は失敗したがこういうバイク談義で女子とお近づきになれるなら免許を取った意味はあったと感慨深く思う。
田舎だけあって山道や海沿いを走ったときの事を話せば、美鶴もツーリングに良さそうな環境だと興味を示す。
雨の日などの苦労体験について話せば、荒垣がちょっとしたメンテについて教えてくれ、改めてバイクの良さを二人が感じていると、先頭を歩いていた青年が振り向かず正面を向いたままポソリと呟いた。
「……ちなみに、鳴上と花村が免許を取ろうと思った理由は、女子と二人乗りをして密着時の感触を味わいたかったからだ。原付じゃ無理なのにな」
「ヘイ、ボーイズ。バイクにロマンを求めるのは結構だが、そういう下心のある男に女は寄りつかねぇぜ？　切っ掛けを掴むにはルックス、誘うには中身を磨かないとな？」
直後、先ほどまでの笑顔が嘘のように七歌が物理的に距離を開け、不純な動機で乗ってんじゃねぇぞと首の前で親指を下に向けた拳を引くジェスチャーをしてみせる。
個人でバイクに乗る理由は違っていても、やはり動機が不純では純粋にバイクが好きで乗っている者には不評らしい。
折角の楽しい会話が終わった事で、余計な事をバラした青年に文句を言いたいが、いつかはバレていただろうと広い心で諦める事にした花村は、動機を抱いた理由は湊にあるんだと僅かに弁明する。
「でもさ。有里ってば特例でバイク登校認められてる上に、たまに女子と二ケツして登校してくるんだぜ？　男子なら誰でも夢見ちゃうだろ？」
「夢より現実を見ろ。それに女子と密着したいなら、そんな遠回しな事をせず直接言えばいい」

「それが出来んならとっくに彼女作ってるっつの！」
正しさだけが全てではないが、夢ばかり見ている少年に告げた湊の言葉は正しい。
自分から踏み出す勇気を見せずにモテたいなど考えが甘すぎる。
モテたいがために免許を取るという行動力があるのなら、後は直接女子を誘えるだけの勇気を持って、話術を磨き、身なりに気をつけて誘えば良い。
そうすれば、決して容姿が悪い訳ではない花村と鳴上なら、彼女くらい作れてもおかしくはなかった。
ただ、本人たちはその女子を誘うだけの勇気がまだ足りないようで、女子に直接密着したいだなんて言えるかと怒っている。
ダンジョンの中を進んでいる途中で、このような話題で熱くなれるのは結構な事だが、敵がいる事を忘れてはいけないとりせから通信が入った。
《みんな気をつけて！　近くにＦ．Ｏ．Ｅの反応があるよ！》
通信が入れば全員がすぐに緊張感を持った表情で武器を手に取り警戒態勢に入る。
今は湊が先頭を歩いているので前方からの脅威はほぼないと考えていいが、相手がＦ．Ｏ．Ｅとなると一つ目のダンジョンで敵を見ていた他の者たちは警戒せずにはいられない。
慎重にダンジョンの通路を進み、少し開けた大部屋に出ると、ブロックで周りを囲んだ人工的な池らしき物を挟んだ遠方の位置に悪趣味な見た目の存在がいた。
「うわぁ……。キューピッドの方は良いとして、それに乗られてる馬の覆面被った人みたいなのってどうよ？　あたし的にはないなぁ」
「でも、千枝。あれが多分Ｆ．Ｏ．Ｅだよ？」
「ああ。一つ目の迷宮にいたものとは異なるが、間違いなくＦ．Ｏ．Ｅだ」
千枝と雪子の会話を聞いた善が遠方にいる悪趣味な存在こそがＦ．Ｏ．Ｅだと断言する。
それは、馬の覆面を被った四つん這いの人間の上に、背中に羽根が

生え弓矢を持っているキューピッドが跨がっているという二体一組のF．O．E。
全身が金色なので遠くからでも非常に目立つが、キューピッドの持っている武器が弓矢という事で遠距離攻撃にも注意が必要だと思われる。
相手はその場から移動せず、同じ地点でグルグルと回って三百六十度を警戒しているようだが、敵が湊たちの方を向いても攻撃してこなかった事で、相手の攻撃は特定の位置取りをしたときか、もしくは有効射程に入ったときに行なわれるのだろうと予想された。
それならば慎重に移動していけば問題ない。前線組を交代した鳴上たちが先を行き、その後ろを補助であるメティスたちが歩いて進む。
すると、途中で集団を抜けた湊が幅十数メートルの池を跳躍で飛び越え、跳躍中に抜いていた刀を両手に持ち、敵の前に着地したかと思えばすぐにF．O．Eを切りつけた。
左手の振り下ろしで馬役の首がボトリと落ちる、相棒がやられたことでキューピッドが弓を構えようにも、その前に湊が右手の刀を横に薙ぎ相手の喉笛を切り裂いた。
喉を切られたキューピッドは傷から黒い靄を噴き出し、後ろに倒れてゆきながら馬から落ちる。
そして、そのまま地面の上に倒れていると、しばらくして黒い靄が噴き出ささなくなり消滅していった。
初めて見るタイプのF．O．Eに警戒していた者にすれば拍子抜けだが、あれだけ戦闘を避けるように言われていた敵が容易く屠られると反応に困る。
池の向こう側では湊が刀を仕舞っているが、欠片も疲れた様子を見せない青年に善が感嘆の声をあげた。
「これは驚いた。湊の戦闘力は私の想像を遙かに超えていた。まさかF．O．Eすら容易く屠るとは」
「敵を殺すときの兄さんの戦い方は無駄が少ないんです。敵の急所や弱所を切りつけますから、簡単に刃が通って敵を仕留めます」

「そうか。それに加えて黒い光の矢も放てるとなると、彼に苦手な距離というものはないらしいな」
先ほどの戦闘に湊は魔眼を使っていない。単純に必要がなかっただけの話だが、特殊な力を使っていないだけに彼の技量を知るには十分であった。
戦闘の型にオールラウンダーというのがあるが、それはどちらも器用にこなせるものであって、実際には得意な距離や戦い方というものがある。
その点、善から見た湊は、どのような距離でも器用に戦えるのではなく、どんな距離であっても必殺の間合いに出来るように映った。
一つ目のダンジョンでハートの女王とその軍勢を殺した力には驚いたが、改めて湊個人の戦闘力の高さを理解し、そんな者が味方にいるなら自分も玲を守る事に専念できると安心した様子で善が話していると、湊が再び弓矢を出して遠くにいるF．O．Eの別個体の頭を射貫いて殺していた。
黒い炎を纏わさずとも殺す事が可能ならば、銃声がないだけに狙撃にも向いている。
そうして、善の中で湊の評価がうなぎ登りになっていたとき、弓矢をマフラーに仕舞った直後に湊がバタリと倒れた。
「……彼はどうしたんだ？」
先ほどまで平然とした様子で戦っていた者が倒れた事で、善が何があったと不思議そうに他の者に尋ねる。
だが、それは他の者が聞きたいくらいで、敵の攻撃を受けたわけでもない湊が倒れる理由が分からなかった。
池を挟んだ場所にいる湊は倒れたまま動かず、意識がないと理解した者たちが池を迂回して彼の許へと行こうとする。
しかしその時、倒れていた彼の身体が光に包まれ始め、みるみるうちに小さくなると、そこには着ぐるみパジャマを着た赤ん坊が現われていた。
「……は？　え、有里のやつ縮んじまったぞ？」
「いや、花村それはないって。人間は縮まないし、そもそもあの赤ちゃ

ん有里君と性別違うじゃん」
急に湊のいた場所に赤ん坊が現われた事で、初めて見る者たちは状況が分からず混乱する。
ただ、寝転がっていた赤ん坊が身体を起こすと、フードが外れて長い髪の毛が見えた事で女の子なのだろうと千枝が予想した。
相手が着ているのはお腹に黒い半円のポケットがついた羊の着ぐるみだが、随分と可愛らしいなと思って少し和んでいる間に、立ち上がった赤ん坊はキョロキョロと不思議そうに周囲を見渡し、池の対岸にいるアイギスらを見つけて嬉しそうにジャンプしている。
「まう！」
相手を認識して喜ぶという事は知り合いだという事。
ならば、アイギスたちならあの赤ん坊が誰か分かるだろうと思って鳴上が尋ねようとしたとき、明らかに困った表情で赤ん坊を見ていたアイギスが目を見開き叫んだ。
「シャドウっ!? ダメです、八雲さん！ すぐに逃げてください！」
見れば赤ん坊の後方からシャドウ〝独占のクビド〟が迫っていた。
気付いたアイギスはすぐに狙撃ライフルを抜いてシャドウに攻撃をしようとする。
だが、相手を狙って撃とうにも、敵に気付いていない八雲は逃げずに笑顔でジャンプしており、そんな八雲が射線に入ってきて邪魔だった。
すぐにアイギスは移動して射線を確保しようとする。けれど、それに合せて八雲も移動するので、こんな時ばかりはアイギスも相手を怒鳴りたい気持ちになった。
そうしている間に七歌たちもペルソナを召喚し、ペルソナだけを向こう岸に渡して八雲を守ろうとするが、どう考えてもシャドウの到達の方が速い。
「う―！」
ようやく敵の存在に気付いた八雲はトテトテと赤ん坊にしては速い速度で駆けてゆくが、その方向はブロックで囲われた池の方向だった。

逃げるのなら横に逃げればいいものを、アイギスたちの姿を見つけて最短距離を選んでしまったらしい。
《ダメです、八雲君！　お池の方は危ないから！》
現場にいない風花が必死に通信で彼を制止するが、八雲は声が聞こえてきた事に不思議そうな顔をするだけで止まらない。
そして、シャドウが八雲に向けて矢を放つタイミングで、ジャンプした八雲が池を囲うブロックの上に乗るなり池に向かって飛んだ。
「――――っ」
誰かの悲痛な叫びがその場に響く。
矢が八雲を捉えるのが先か、八雲が不気味な色をした池に落ちるのが先か、どちらにしても赤ん坊である八雲の身が危険な事にはかわりがない。
そして、矢に射貫かれるのと着水がほぼ同時に起ころうとしたとき、突然、八雲の身体から蒼い炎が噴き出して彼を上空へ運んだ。
「あれは、美紀の……」
その光景を見ていた真田が思わず呟く。
急上昇した八雲は現在、蒼い炎の身体を持った鳥と共に天井付近にいた。
高同調状態で一緒に飛んでいるのだと思われるが、今の八雲が意識してペルソナを出せるはずがないので、全ては美紀の適性から生まれたペルソナ、星〝フェニックス〟が宿主を守るために行なったのだと思われる。
フェニックスは自我持ちのペルソナではないが、美紀が湊を守ってくれるよう想いを込めていたので、その想いの通りにこの場で顕現したのだろう。
八雲の危険が去ったのなら他の者たちは十全に戦える。
ケルベロスが炎の渦に敵を閉じ込め、エウリュディケが風の刃で切り裂き、ペンテシレアが敵の頭部を氷槍で貫けば敵は消滅した。
危険が去ると天井付近にいた八雲が空を泳ぐように楽しそうに降りてくる。
「ま――！」

「もう、八雲さん！　本当に心配したんですよ！」
そのままアイギスの腕に抱かれるとフェニックスは消えてゆく。
敵に襲われかけても一切怖がらずに八雲が嬉しそうにしているが、対照的にアイギスは心から安堵の表情を浮かべて八雲をキツく抱きしめている。
事情を知らぬ鳴上たちは説明をして欲しそうに見ているが、アイギスが八雲を解放するまでお預けだと荒垣が伝え、その間、フェニックスが湊に宿った経緯を知っている者は、この場にいない一人の少女に深く感謝していた。

第二百七十三話　エレベーターガールは見た

――ごーこんきっさ・一次会

二体のＦ．Ｏ．Ｅを屠った湊が突然倒れ、直後に光に包まれ赤ん坊の姿に変化した。

一時はシャドウの接近に肝を冷やしたものだが、湊に宿っていた星〝フェニックス〟が美紀の込めた〝湊を守る〟という想いに反応した事で赤ん坊を窮地から救ってくれた。

そうして、空を泳ぐように皆の元に戻ってきた赤ん坊をアイギスが強く抱きしめると、八十神高校側のメンバーと善と玲はその赤ん坊を初めて見るため、アイギスが普通の抱っこに移行したタイミングで集まってきて玲が最初に話しかけた。

「ねー、アイちゃん、アイちゃん！　わたしも赤ちゃん抱っこしていい？」

「はい。ですが、八雲さんは大人の時の記憶がないので、先にご挨拶してあげてください」

「うん。はじめまして、はーちゃん。わたしは玲って言うんだよ。よろしくね」

「ね！」

アイギスが後ろから抱っこする形で八雲を玲の方へ向けると、挨拶をされた八雲は自分なりの挨拶を返して小さな手で玲の指を掴んで握手する。

右手の人差し指を握られた玲は、そのあまりに細く小さな指と手に最初は不安を覚えるも、小ささからは考えられない力強さと温かな体温に命の存在を感じた。

そして、アイギスに支えて貰いながら八雲を抱っこすると、自分の腕の中に確かな命があることをより強く実感する。

他の物では再現不可能な温かさと柔らかさ。どんな高級な抱き枕でも八雲の抱き心地には敵うまい。その気持ちよさに玲は思わず笑顔になりながら八雲と頬を合せて赤ん坊というものを満喫する。

玲がそんな風に八雲と遊んでいる間、彼女の周りでクマや完二も八

雲のことを眺めているが、全員がそんな風に遊んでいては話が進まないので、鳴上が八雲の事を知っているであろう月光館学園側のメンバーにまず確認を取った。
「その、あれは有里本人でいいのか？」
「ああ、間違いなく本人だ。だが、記憶ごと退行しているので、あの年齢以降に会った者の事は覚えていない。本人にすればまだ会った事がないんだからな」
「だが、何故赤ん坊の姿に？」
「分からない。以前、あの姿になったのは酷く消耗していたときだった。今回はその条件から外れると思われるので、私たちも正直困惑している」
　続けてされた鳴上の質問に美鶴が難しい表情で答える。
　湊が退行して八雲になるのは二度目だが、前回と違って今回の彼は元気に戦っていたあと急に倒れていた。
　もしかすると疲れていたのかもしれないが、そんな兆候がなかっただけに美鶴たちとしても困惑するしかない。
　一応、今の八雲は前回の八雲と記憶が繋がっているようで、玲に抱っこされたままアイギスの顔を見て嬉しそうにキャッキャとはしゃいでいるが、もし退行した理由が前回と異なるならばいつ戻るかも分からない。
　指揮官でありながら最高戦力でもあった青年の離脱は作戦にも大きく影響するため、どうすれば戻るのだろうかと考えていると、ベルベットルームにいる風花から急に通信が入った。
《皆さん、有里君のことについてエリザベスさんが報せたい事があるそうです》
《皆様、聞こえますでしょうか？　先ほど八雲様が退行したとの事で、この度は理由の説明のため通信を繋いで頂いた次第でございます》
　ダンジョン内の状況はベルベットルームの住人たちもリアルタイムで把握している。
　彼女たちが直接助ける事はないが、七歌たちの危機を察知して鳴上らを援軍として送るなどの手助けをするためである。

そして、今回の湊の退行もしっかりと把握していたわけだが、前回と状況が異なっているにもかかわらず、何故エリザベスが倒れた理由を知っているのだと真田が尋ねる。
「説明と言ったが何か知ってるのか？」
《ええ。さて、まず八雲様が倒れた理由ですが、極度の疲労が原因でございます。この世界に辿り着くまでに常人ならば死んでいてもおかしくない状態にありましたが、その後、残っていた力のほとんどを綾時様をこの世界へ招くために使いました》
実際には招くためではなく、存在を維持させるためエネルギーを籠めたのだが、それを知っているのは綾時の正体に気付いているベルベットルームの住人と本人たちを除けば見ていたメティスだけなので、ここはちゃんと話を合わせて説明した。
《そのとき既にガス欠寸前だった訳ですが、皆様との話し合いや最低限の生活環境を整える必要があったために、八雲様は様々な設備の用意と皆様へ備品の配給を行ないました。この時点でいつ倒れてもおかしくない状態でしたが問題は皆様が休まれた後です》
怪我も完璧に治っていて血も風呂で洗い流していたので、傍目から見たところでは何の問題もないように思えた。
しかし、皆で話し合いをしている時点で限界を超えていて、そんな状態で体育館を銭湯にリフォームしたり、通販サービスで着替えや寝具を届けてくれていたとは頭が下がる。
彼の体調について一切気付いていなかった者らは、その時点で申し訳なさそうに赤ん坊の八雲の方を見やり、一体何があったのかと一同を代表して鳴上がエリザベスに話の続きを促す。
「俺たちが寝た後に何かあったんですか？」
《はい。八雲様は私共姉弟も拠点に招き夕食を振る舞ってくださりましたが、我々を含め全員がそれぞれの拠点に戻り就寝した後、一人で拠点を出るとそのまま銭湯に向かい。有料洗濯サービスで依頼された衣類を洗濯し、体育館屋上に作った物干しスペースに干した後、一人で銭湯の掃除をされていました》
有料洗濯サービスとは湊が銭湯に設置したオプションの一つであ

る。
　銭湯に置いてあるカゴに洗濯物を入れ、ログインしたタブレットでサービスを選び、カゴに書かれた数字かアルファベットを入力すると、翌日に洗濯された状態で衣類が帰ってくるという実にそのままな内容のサービスだ。
　この場にいる者たちは全員がそのサービスを利用し、起きたら拠点正面の壁に設置されていたロッカーから服を受け取っていた。
　シャツは皺一つなく襟元までパリッとして、ズボンには卸立てのようにしっかりと折り目がついていた。
　その見事な仕上がりにはズボラな順平も感動したほどで、アイロンやプレスもして貰えるのであれば、今日はついでに制服の上着も洗って貰おうかなと考えていたほどだ。
　それがまさか湊が一人でせっせと洗って干していたとは思わず、女子たちなど自分の下着を彼に洗わせていたと知って赤面して悶えている。
《掃除が終わると次に一つ目のダンジョンの調査へと向かわれ、黒幕についての情報やこの世界がどのように構築されているのかを調べていたようです。そして、洗濯物が乾いた頃に戻ってこられると洗濯物を取り込み、必要な物にはアイロン掛けや折り目をつけるプレスを掛け、皆さんの拠点前に設置されたロッカーに衣類を返却し、今度は通販サービスの発送センターへ移動》
　二十人以上の人間の衣類を洗濯して干していただけでなく、わざわざ一人でダンジョンに潜って再調査を行なっていた。
　そんな事までしてくれていたとなると、面倒臭がりどころか非常にマメで真面目な性格と言えるだろう。
　けれど、まだ終わりではないようで、エリザベスは皆が寝ている間の湊の行動について語った。
《移動した八雲様は、まだ登録の済んでいなかった商品をホームページに掲載する更新作業を進め、皆様から追加で来ていた注文の品の準備を終えるといい時間だった事で拠点に帰宅。他の方が起きる前に朝食の支度を終わらせ、起きてきてからは私共を再び呼んでくださり

朝食を共にしました》
湊たちが他の者たちと合流したのは、朝食を食べ終わって洗い物などを済ませてからだ。
皆が寝ている間も雑務を済ませ、そのまま朝食を摂って合流したという事は、限界を超えて倒れる寸前だったにもかかわらず彼は不眠不休で働いていた事になる。
風呂や洗濯が有料である事や、通販で一部商品が非常に高額な事に文句を言っていた面々も、自分たちが寝ている間も働き続けて最後には倒れてしまったと知ると、流石に申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになった。
玲に抱っこされたまま無邪気に笑う八雲を見て、こんなになるまで働かせて済まなかったと花村が猛省する。
「協調性のないやつとか思ってた自分にマジで自己嫌悪だわ……。全体のこと考えて生活環境整えるとか、一番冷静に動いてたの有里じゃねぇか。オマケに裏方の仕事全部こなしてくれてたとかさぁ。つか、お前ら男に下着洗わせて平気な顔してんなよ！　女として恥ずかしくねーのか！」
「うっさい！　てか、まさか有里君が洗って干してくれるとか思うわけないじゃん！　そっちだって洗って貰ったくせに人の事ばっかいうな！」
自分の事を棚に上げて糾弾してくる花村に千枝が反論する。
一人一人の洗濯物の数などそうは変わらないので、湊が女子の下着を洗う事に別段何も思っていなかったとすれば、男子のだろうが女子のだろうが何の違いもない。
それなのに女子は自分で下着を洗えと言ってくるのはおかしい。そんな事を言うなら男子も自分で洗うべき。
花村と千枝の二人がそんな風にギャーギャーと言い争えば、八雲が怖がるから止めろと周りの者が止めに入る。
その傍らに立っていたメティスは、同じ拠点を利用していながら家事を兄に任せ、体調の変化にまるで気付けなかった事を暗い表情で姉に謝罪する。

「すみません、姉さん。まさか兄さんが一度も休んでいなかったなんて、傍にいたのに気付かず先に寝ていました」
「八雲さんの体調に気付かなかったのはわたしも同じです。元に戻ってから一緒に謝罪しましょう」
「……はい」
いくら自分が倒れそうな状態でも湊が生活環境を整える事を優先したのは、一種の経験則によるものだ。
危険な世界で生きてきた事に加え、ベルベットルームなどの超常の世界に関わっていたからこそ、湊には他の者たちにない状況の変化を読む力が備わっていた。
一人で設備を整えていたのは説明する時間が惜しかったからで、休まずに働き続けたのは少し休んだ程度で回復するものではないと分かっていたから。
おかげで湊が倒れた後も他の者たちが交代で仕事を分担すれば、何とか現状の維持だけは出来るようになっている。
先ほど遠くにいるF・O・Eを倒したのも、せめて最後にもう一体倒してからという気持ちからの行動に違いない。
他者に誤解されがちな冷たく素っ気ない態度を取っておきながら、実際は全体のために頑張ってくれていた青年の働きを知り、玲は抱っこしている八雲の頭を優しく撫でながら謝罪した。
「はーちゃん、お仕事いっぱいさせちゃってゴメンね」
「あう？」
「ドーナッツ食べる？　おいしいよ？」
「まー！」
玲の謝罪に不思議そうに首を傾げる八雲。
それを見た玲は分からないよねと苦笑し、すぐに子どもが喜ぶであろう甘いオヤツをどこからともなく取り出して見せた。
彼女の持つオールドファッションのドーナッツを目にした八雲は瞳を輝かせ、ちょうだいと言いたげに手を伸ばす。
そんな素直な反応に優しい表情になった玲がドーナッツを渡そうとすれば、横から急に伸びてきた太い腕が待ったをかけた。

「おい、待て待て！　赤ん坊はミルクしかダメだろ！」
「そうなの？」
「ミルクしかダメかは分かりませんが、巽君の言う通り赤ん坊は内臓機能も含め身体が未発達なので、僕たちのように何でも食べられる訳ではありません。食べ物を与えるときには先にアイギスさんたちに訊いた方がいいかと」
　相手はまだ言葉も満足に話せない赤ん坊だ。親戚含め赤ん坊の世話などした事のない完二でも、流石に赤ん坊に食べさせてはいけない食べ物がある事くらいは知っていた。
　それ故、完二は玲の手からドーナッツを奪い取った訳だが、直斗が玲に説明している間、八雲はドーナッツを返せと「いー！」と不満顔で完二の持つドーナッツに身体ごと向かい手を伸ばしている。
　まぁ、本人は今も玲に抱っこされているので動けないのだが、いつまでも我慢させていると可哀想なので、近くで話を聞いていた七歌が大丈夫だと教える。
「八雲君は歯も生え揃ってるから大丈夫だよ。アレルギーもないし、栄養バランスだけ気をつければピーマンやタマネギもＯＫ！」
「よかったぁ。じゃあ、はーちゃん。一緒にドーナッツ食べよ！」
「まー！」
　ようやく手にしたドーナッツに満面の笑みでかぶりつく八雲。
　本当に幸せそうな顔で口いっぱいに頬張るので、周りで見ている者まで釣られて笑顔になってしまうほどだ。
　八雲を片腕で抱っこしながらドーナッツを食べている玲は、八雲が自分の服にドーナッツの欠片を落としても文句は言わず、むしろ口の周りに付いた物をハンカチで拭いてあげるお姉さんぷりを発揮する。
　やや大人びた部分のある小学生の天田を除けば、彼女が一番幼く見えていただけに、庇護対象が現われた事で起きたこの変化は好ましいものと言える。
　赤ん坊の世話を焼いている玲を善も微笑ましそうに眺めており、ダンジョンの中で怯えていたときよりも今の方が良いと彼も想っているに違いない。

最高戦力の離脱は痛いが、マイナスの面ばかり見ていてもしょうがない。
そうして、美鶴や鳴上たちが真面目に今後の事を話し合っている傍ら、他のメンバーたちが湊の離脱と八雲の加入を受け入れつつあるとき、着ぐるみパジャマのフードが脱げて背中に垂れた髪を結ってやろうかと考えていたチドリがある事に気付いた。
「というか、この八雲って前より少し成長してない？　前はうーとしか喋れなかったでしょ？」
「あ、確かにそうかも。なら、八雲くーん、ゆかりお姉ちゃんだよー。お姉ちゃんって呼んでみて？　ほら、ねーねって」
「ねーね？」
「うわ、やった！　呼んでくれた！」
本人は言われた事を真似しただけだが、聞いている者にすれば自分の事を呼んでくれたのだと受け取る。
おかげでゆかりは有頂天になり、羨ましく思った他の者が次は自分が呼んで貰おうと彼を囲むが、ダンジョン内でそんな暢気なことをしている者らに呆れつつ、話し合いを続けていた荒垣が分隊長の一人である鳴上に予定を尋ねる。
「んで、この後はどうすんだ？　まさか小さいガキ連れてダンジョンの奥に進むとは思わねぇが」
「そうですね。この後も探索をするにしても、先に有里を向こうに残ってる人間に預けた方がいいと思います」
《はい！　八雲君は私がしっかりと責任を持って預かります！》
ずっと通信越しに話を聞いていたのだろう。鳴上の意見に賛成だと風花が張り切った様子で言葉を返す。
きっと、心配よりも八雲の世話を焼きたい気持ちの方が割合的に強いと思われるが、子ども嫌いな人間に預けるよりは溺愛してくれる者に預けた方が安心である。
預かる人間も決まった事で全体に今後の方針を伝え、一部の人間が名残惜しそうにしながらも納得すれば、彼に一番懐かれているアイギスが八雲にこの後の事を話した。

「八雲さん、一度学校の方に戻るので、わたしたちが帰ってくるまで風花さんとお留守番していてください」
「やー！」
「え、その、嫌ですか？」
「うーうー！」
お留守番していてくれと伝えるなり、八雲はしっかりと玲に抱きついてお留守番を拒否した。
とても素直だった相手がこんなタイミングで我が儘を言ってくるとは思わず、かといって無理矢理に置いてきて泣かれても困るため、どうするべきかとアイギスは他の者に意見を求める。
「お留守番が嫌なようですが、どうしましょう？」
「嫌だっつってもしょうがねぇだろ。守っていられる余裕はねぇんだから」
「うー！」
我が儘を言ってもダメなものはダメ。相手の安全のために言っているんだと荒垣が八雲の主張をすぐに切り捨てる。
すると、怒った様子の八雲はお腹辺りについた黒いポケットに手を入れ、そこから直径九センチほどの球体を取り出し、そのまま池に向かって放り投げた。
投げられた球体は赤ん坊が投げたとは思えない飛距離を出し、ギリギリで向こう岸に届かないところで着水する。
だが、水面に触れた途端に破裂した球体から炎が上がり、見ていた者たちは軽くアギラオほどの威力があったのではと頬を引き攣らせる。
威力を考えると明らかに子どもが持っていて良いものではない。まだ持っているのならば取り上げねばと、チドリは真剣な顔で八雲に声を掛けた。
「八雲、今のなに？　何を投げたの？」
「いー」
「いー、じゃない。ほら、ポケットの中見せて」
「ちー！」

チドリがポケットの中に手を入れようとすれば、八雲は少し楽しそうに腕でポケットを隠し、身を捩らせる事で手の侵入を阻む。
本人は遊んでいるつもりのようだが、もしまだ持っているなら非常に危険な状態だ。
抱っこしている玲も八雲の左手を握ってガードを外す事に協力し、チドリがもう片方の手を持って完全にガードを解いてポケットの中を確認する。
確認されている間、八雲はくすぐったそうに笑っているが、確認作業をしていたチドリはそれとは対照的な真剣な表情で首を横に振った。
「ポケットの中は何も入ってない。一つだけ持ってたの？」
「うーう」
「まだあるの？　もしかして、そのポケットって湊の使ってるマフラー？」
今、八雲が着ているのは白い羊の着ぐるみパジャマだ。その中でお腹辺りの黒いポケットだけ異様にデザイン上浮いているので、もしや後付けかとチドリは考えた。
形状こそ異なるが、その不思議な光沢と肌触りは湊のマフラーそのもの。
中に何も入っていなかったのも、ポケット自体に道具が収納されていたなら関係ない。
ただ、チドリではそれを確かめる事が出来ないので、彼のマフラーに手を入れられる貴重な人物であるアイギスに頼もうとすれば、八雲は玲に降ろして欲しいと身振りで頼み、地面に降りるなりポケットから取り出した黒いバトンらしきものを得意気に振り回した。
そのバトンは明らかにポケットの中に入る長さではないので、確かめるまでもなく変形したマフラーだと確定した訳だが、楽しそうにバトンを振って、最後に万歳をするように頭の上でバトンを構えて決めポーズを取った八雲に雪子が拍手を送る。
「わぁ、八雲君バトン上手だね」
「ま！」

雪子に褒められて八雲が胸を張った瞬間、彼の持っていたバトンが急激に伸びた事で、その延長線上にいた者たちの股間を強襲する。
『あんぎゃぁぁぁぁぁぁっ!?』
左にいた花村、右にいた順平。彼らは別にすぐ傍に立っていた訳ではなかった。
けれど、僅か二、三秒で三メートル以上になるとは思っていなかったので、完全に気を抜いていた状態で喰らう事になり、二人は股間を押さえて涎を垂らしながら地面に倒れた。
そんな二人を襲った八雲の持つ道具の名は、美猴王〝天河鎮定神珍鉄〟。
無の槍と玉藻の前を融合する事で生まれる武器で、一般に知られる名では〝如意棒〟と呼ばれる伸縮自在の武器だ。
自我持ちは意識体を湊の中に戻せば、武器はそのままに新たに召喚し直す事が可能なので、今ここにある武器に玉藻は宿っていない。
ただ、それでも武器の持ち主の求めに応じて太さと長さが変わる機能は残っているため、感覚で使い方を理解してる八雲は二人を倒すと元の長さに戻してポケットに片付けている。
「大丈夫か二人とも？」
「ダメだ、相棒。しばらく立てねえ……」
「頼むぅ、誰かぁ、腰を擦ってくれぇ……」
倒れている花村と順平を鳴上と綾時で介抱する。
二人は八雲を叱りつけたい気持ちもあったが、今は痛みでそれどころではない。
まして、ダンジョンの中で油断していた事が原因の一つとなると、自分たちも反省する部分があるだけに強く言う事は出来なかった。
けれど、いくら二人の姿が無様に映ろうが、遊び感覚で棒を振り回して人に当てた事は注意しなければならない。
アイギスだと中途半端にしか叱れないと思われるため、ラビリスが彼女に代わって八雲に武器の取り扱いについて真剣に諭す。
「あー……コラ、人のいるとこで棒振り回したら危ないやろ。ちゃんと周り見てやらんとアカンよ？」

「うっうー！」
「そりゃまぁ、確かに順平君たちは倒したけど、シャドウはホンマに危ないんよ？」
　八雲の言葉は言語としては理解出来ない。しかし、コロマルとの会話時にも使っている〝相手のイメージを読み取る力〟を使う事で、ラビリスたち姉妹はおおよその内容を把握する事が出来た。
　それによると八雲はマジックアイテム系の攻撃手段を持っていて、尚且つ花村と順平も倒してついて行けるだけの実力を証明したらしい。
　先ほどシャドウに狙われているときも、一応攻撃から逃げてはいたが怖がっている様子はなかったので、緊急時には星〝フェニックス〟が守ってくれるのであれば危険度は低い。
　攻撃手段を持たない玲に預けておけば一緒に守る事が出来、尚且つ八雲が持ち前のバトルセンスで近付いて来た敵を屠るに違いない。
　そう考えると一緒に連れて行く事もありかもしれないと一部の者が考えていれば、ベルベットルームにいるりせから通信が入った。
《悠先輩、エリザベスさんたちがその子も連れて行った方がいいって。その状態でも総合的には綾時君以外の人より強いんだって》
「望月以外のメンバーよりって、本当か？」
《うん。体術とかは当然無理だけど、プロデューサーの持ってた異能は全部引き継いでるんだって》
　この場で彼の持つ異能とやらを全て把握できている者はいない。
　ただ、その一部でも知っている者は、八雲がある種のパンドラの箱のように思えた。
　何せ、今の彼は赤ん坊なのだ。判断基準が本能任せになっており、能力の制御もどの程度まで出来るか分からない。
　そんな危険な存在を傍に置いておくのは怖いものがあるけれど、玲と八雲を全員で守っていればその力が振るわれる事もない。
「ま、彼がこうなったのは僕のせいでもあるからね。大丈夫、ほとんどの敵は僕一人でも対処して見せるよ」
　言いながら今まで戦う機会のなかった綾時が軽い足取りで全員の

前に出ると、召喚器もカードも使わずタナトスを呼び出した。
湊のネガティヴマインドのペルソナと同じ赤と黒の奔流、その内から現われた黒き死神は、遠くから接近してくるシャドウを捕捉すると、まるでレーザーのように紫電を口から撃ち放つ。
攻撃の余波として巻き上がっていた煙が晴れれば、そこにシャドウの姿はなく、綾時は軽く微笑んでペルソナを消した。
その圧倒的な力の一部を垣間見た他の者たちは、伊達に湊から唯一人の友と認められている訳ではないのだなと改めて彼の力を理解した。
もっとも、今の言い方では他の者たちなど不要だと言っているようにも聞こえる。
彼の正体を知っている者ならば納得もするが、そういった偉そうな物言いは湊の専売特許なので、指揮官である湊から分隊長を任された少女が嘆息して自分の指示も聞いて欲しいと漏らす。
「一応、兄さんの指示で綾時さんは私の指揮下に入っているんですけどね」
「おっと、確かにそうだね。じゃあ、ここからは僕も前線に出るから指示を頼むよ。七歌さんたちAチームの皆は援護よろしく」
これまで待機や援護しかしてこなかったメティスたちが前線に出る。
先ほど見た綾時の実力を見れば彼一人でも本当に十分そうだが、他の者たちもそれに合せて陣形を取ると、最も安全な場所に八雲を連れて移動を開始する事にした。
「クマー、師匠も短くなったあんよとお手々で大変でしょう？　疲れたらクマが抱っこしてあげるからいつでも言いんしゃい！」
「みー」
「八雲さんが臭いから嫌だと仰られています」
「そ、そんなぁ、あんまりクマー……」
先頭をメティス隊の者たちが歩き、その後ろを援護の七歌隊がH字に並んで進む。待機組の鳴上たちはそのさらに後ろだが、H字の横棒の辺りでアイギス、七歌、八雲が並んでいるため、アイギスの耳にも

八雲とクマの会話が届いた。
どうやら鼻の利く八雲にとって、ジュースやお菓子をよく溢しているクマ皮は酷く臭うらしい。
花村が言うにはゴキブリに集られていた事もあるそうなので、そんな不衛生なものには近付きたくないという八雲の主張も理解出来る。
子どもに嫌われて落ち込んでいるクマを鳴上が慰め、バトンサイズになった如意棒を手にして元気に歩く八雲に雪子たちが付き添い、一同は次のチェックポイントである質問部屋を目指した。

第二百七十四話　動く歩道

――ごーこんきっさ

正面に現われた三体のシャドウが地面から突き出した氷槍に貫かれる。

それらが崩れ去る僅かな瞬間を狙って、新たに静寂のマリアが二体接近してきた。

「よし……マハジオダイン」

敵まではまだ距離がある。故に綾時は淡々とタナトスに攻撃を命じた。

迸るは光を吸収するほど深い漆黒の雷。

接近してくる敵を飲み込み無に還し、通路の先にいたまだ姿を見せていなかった敵までも巻き込んで雷は広がってゆく。

全てが治まったときには焼け焦げた臭いがその場に漂っていたが、雷の熱によって床から立ち昇る蒸気をタナトスの剣戟で払えば、周囲から一切の敵の反応が消えていた。

宣言通りに一人で広範囲の敵を屠った本人は、タナトスを消して穏やかな微笑で振り返る。

だが、彼の戦いぶりを見ていた者たちは、湊クラスの力を持つ者が他に存在したという事実に驚き言葉が出ない。

同等の力を持つから友と認められたのか。友だからこそ同等の力を得るに至ったのか。

本人の物言いや人格、そして経歴に思うところはあれど、湊の理不尽なまでの強さに僅かな憧れを抱いていた者にすれば、その彼と並び立つ資格を有する綾時に嫉妬に近い感情を覚えた。

「お待たせ。これで近辺にいる敵は倒せたかな？」

《うん。周りにシャドウの反応はないみたい。綾時君、お疲れさま》

「いや、これくらい大したことないよ。りせさんたちもサポートありがとう」

実際は綾時も自力でシャドウの位置は捕捉できるのだが、タナトスしか持たない彼がそんな力を見せれば怪しまれる。

だからこそ、自然な流れでりせたちに索敵を頼めば、狙い通りに周囲に敵影がないことを伝えてきた。
シャドウは床や壁から自然発生する事もあるので油断は出来ないが、直近の危険は排除できたことで一同は再びダンジョンを進むことにする。
最も会敵し易い先頭を綾時が進み、その後ろで前線組になっているメティス隊が隊列を組む。
そのさらに後ろをH字になって援護組の七歌隊が進み、休憩中の鳴上隊が後方に並ぶが、八雲は全体の真ん中辺りで千枝と雪子と手を繋いで歩いていた。
時折、手を繋ぐ二人がブランコのように八雲を振って、上に持ち上げる形で大ジャンプと言って遊んでおり、一気に移動したときには本人もキャッキャと楽しそうに笑っている。
今も全体が進み始めた事で、また八雲がして欲しそうにした事で二人が大ジャンプを実行すれば、ビュン、と勢いよく前方に向かった八雲が着地した瞬間に悲鳴をあげた。
「うーっ」
驚いたように悲鳴をあげた八雲は、繋いでいた手を振り払って離すとすぐに雪子のお腹辺りに飛びつく。
「うわっ、え、どうしたの八雲君？」
「うー！　うー！」
急に飛びつかれた雪子は少々蹌踉けるも、すぐ後ろにいた直斗が支えてくれたおかげで八雲を抱きとめる事が出来た。
だが、先ほどまで楽しそうに大ジャンプをしていたというのに、どうして急に腕を振り払ってまで雪子に抱きついたのか。
理由は分からないが八雲は恨めしそうに地面を睨んで怒っている。
もしや、大ジャンプした先で何かを踏んづけたのだろうか、と直斗が八雲の睨んでいる辺りにしゃがみ込み地面に触れたとき、
「熱っ、そうか。先ほどのマハジオダインで熱くなった地面を踏んで火傷したんですね」
直斗は八雲の行動の意味が理解出来たと、雪子に抱きついている八

雲の足に触れた。
そう。他の者たちもここまで気付いていなかったが、着ぐるみパジャマ姿で現われた八雲は当然のように裸足だったのだ。
小さな子どもはただでさえ肌が弱いというのに、蒸気が立つほど熱せられた地面を踏めば火傷して当然。
直斗が心配して八雲の足の裏をみれば、ここまで歩いてきた事で汚れているだけでなく、痛々しいほど真っ赤になってしまっている。
探偵という職業柄、応急手当などの知識を有する直斗が見た感じでは、これはすぐにでも治療しないと足の裏の皮膚が剥けてしばらく歩けなくなる可能性があった。
「酷く火傷してしまっています。すぐに清潔な流水で患部を冷やさないと、しばらく足を地面につくだけで強烈に痛み歩けなくなるかと」
「それは拙いな。だが、今から帰るにも時間がかかるぞ」
すぐに治療の必要があると言われ、美鶴は七歌が書いていた地図を確認して帰り道を確かめる。
とはいえ、治療のためにすぐに帰ろうにもそれなり進んでいるため時間がかかる。
そんな事をしていれば八雲の火傷が悪化することは避けられないが、湊のように時流操作を利用して高速移動が出来る訳ではないので、水がこの場にない以上は八雲に我慢して貰うしかなかった。
前線組として少し距離があったアイギスがすぐに戻ってきて雪子から八雲を預かると、足の痛みで悲しそうな顔をしている彼の頭を撫でる。
「すみません、八雲さん。ちゃんと貴方の装備にも気を配っていれば……」
「うー……まうっ！」
悲しそうな顔をしている八雲を見てアイギスも悲しい顔になれば、八雲がそれを見て急にやる気に満ちた表情になった。
一体何をするつもりなのかと思って見ていれば、八雲は両手の拳を握ってまるでいきんでいるような状態になる。
相手は赤ん坊でオムツを穿いているため、別にここでおトイレをし

てしまっても問題はないが、どうして今まで排泄をした事がなかったのに急に催したのかが分からない。
そう思って頑張っている八雲を他の者が見守っていれば、八雲の背中から蒼い炎が噴き上がり、そのまま星〝フェニックス〟が具現化した。
《――――――――ッ》
現われたフェニックスはアイギスと八雲の頭上で旋回しながら一鳴きする。
すると、キラキラと輝く蒼い炎が二人に降り注ぎ、炎が触れると二人の身体が光り始めた。
「これは……炎を使った回復魔法ですか？」
「みー」
光に包まれた二人は疲労や怪我が一気に回復してゆく。
元を辿れば八雲の力を利用しているので体力の回復に意味があるかは不明だが、フェニックスが消えて光が治まると八雲の足は完全に治っていた。
それを確認した他の者たちは安堵の息を吐くも、八雲が自力で治療したことで一応の問題が解決した瞬間、八雲を抱いたままのアイギスが先頭にいた綾時を険しい表情で睨んだ。
「綾時さん、敵を倒すのは結構ですが周囲への影響をちゃんと考慮してください」
「ああ、ゴメンね。まさか、彼が裸足だとは思っていなかったから」
「八雲さんが靴を履いていても、コロマルさんだって素足です。地面や壁を熱したなら、八雲さんのように終わってから冷やしてくださいっ」
どれだけ強かろうが味方に被害が出るようでは意味がない。
同じように周囲へ影響を及ぼす威力のスキルを放つ湊は、戦闘が終われば氷結スキルを使って冷却しているので、そういった細やかな心配りが出来ないようではダメだとアイギスは嘆息した。
「まったく……。やはり、綾時さんはダメであります。八雲さん、あなたは綾時さんに近付いてはダメですよ」

「うー？」
「はい。あの方はダメです」
ダメな人なので近付いてはならない。抱っこしていた八雲と視線を合わせてそう伝えれば、八雲は「ダメな人なの？」と首を小さく傾げて聞き返した。
細かな事情や理由も説明せずに一方的に言い切るのは良くないが、八雲は一番懐いているアイギスが言うのならば事実なのだろうとしっかり頷く。
そうして、彼が素直に理解してくれた事にアイギスは満足そうに頷き頭を撫でていれば、子どもにそんな事を教えてはダメだろうと順平が先ほどの発言を諌めた。
「おいおい、アイちゃん。いくら火傷の原因が綾時の攻撃の余波だったからって、急にメンバーを悪く言うのは感心しないぜ？」
「火傷の件は関係ありません。最初に会ったときから、わたしは綾時さんが八雲さんと一緒にいる事に反対でした。綾時さんはダメであります」
普段の彼女からは考えられないような一方的な拒絶。
見た目が整っているだけに、そんな彼女が真剣な表情で話すだけで妙な迫力がある。
話している間も抱っこしている八雲の背中を撫でてあやすことは忘れていないが、どうしてそこまで拒絶されるのか心当たりがない綾時は申し訳なさそうに尋ねた。
「えっと、僕が何かしてしまったのかな？　それならちゃんと謝罪したいんだけど」
「そういう訳ではありません。ですが、綾時さんは八雲さんに近付くことをご遠慮願います。あなたは八雲さんの教育に良くありませんので」
言いたいことを言い切るとアイギスはその場から離れた。
他の者たちが話している間、クマがキントキドウジのスキルで必死に床を冷やしていた事で、もう八雲を降ろしても大丈夫と判断して移動したらしい。

そんな彼女の背中を困惑した表情で見送った綾時に、随分と嫌ったものだなと不思議そうにしていた順平が声を掛ける。
「ま、気にすんなよ。赤ん坊の世話しててちょっと神経質になってるだけだから」
「そうだと良いけど、確かに僕も少しやり過ぎてしまっていたから、今後は自重して控えめに戦う事にするよ」
「折角の力を出し惜しみしたら勿体ないぜ？」
「うん。でも、継戦能力を考えると消費を抑えた方が長く戦えるからね」
確かにこのダンジョンがどこまで続くのかは分かっていない。
次のフロアで終わるかもしれないし、一つ目のようにまだまだフロアが続くことも考えられる。
流石に一日で踏破するつもりはないけれど、八雲の治療も無事に完了したことで一同はもう少し先へ進むつもりだ。
ならば、先ほどまでの広範囲を一気に殲滅する戦い方よりも、出てきた敵を最小限の力で仕留めた方が消耗も少ないので、外で自由に力を振るえてはしゃいでいた綾時も反省して戦い方を改める事にした。
そんな順平との会話によって綾時の不安もいくらか晴れて笑顔が戻ったとき、それを傍で見ていた鳴上がこれなら大丈夫そうだと心の中で安堵する。
彼は湊が指名した三人の分隊長の一人でしかないが、指揮官である湊が抜けた以上は分隊長たちがその役目をいくらか引き継がなければならない。
だからこそ、仲間内での不和があれば解消出来るよう気をつけるつもりだったが、他のメンバーもしっかりと仲間の事を見て動いてくれていた。
おかげで鳴上は自分の役目は当分必要ないかなと安心したのだが、話が一区切りした事で先へ進もうと思ったとき、何故だか女子たちが少し離れた場所に集まっているのが見えた。
一つの場所に長く留まるとシャドウが寄ってくるので、先に進みたいという意思を伝えるついでに何をしているのか聞くために近付い

てゆく。
「あの、先に進んだ方が良いと思うんだが、何をしているんだ？」
「あ、鳴上君は来ちゃダメだよ！　てか、男子は全員そっちで待ってて。いま、八雲君がお着替えしてるから」
鳴上が近付いてゆくと振り返った千枝が両腕を広げて通せんぼする。
他の女子たちは背中を向けたまま立っているが、肩を寄せ合うように並んでいるため、どうやら着替えている間の壁になっているらしい。
確かに着ぐるみパジャマと裸足では防御力もないにもないので、ここでせめて靴くらいは履いた方が良いとは思っていたが、女子たちが真剣に話し合っている声も聞こえてくるので、彼女たちは本格的に八雲を着替えさせているようだ。
だが、八雲の着替えを行なっている間の壁になるのはいいが、別に見たところで問題ないはずなのに気にしすぎではないかと花村が呆れ気味に漏らす。
「いや、小さくなったからって有里は有里だろ。別にわざわざ見るつもりはないけど、男子の着替えを見たところで問題ないだろうが」
「なに言ってんの花村君。こんなに可愛い子が男の子な訳ないでしょ？」
花村の言葉に雪子が真顔で返す。あたかも花村が悪い冗談を口にしたような空気が流れるが、それを見た他の男子は心の中で「お前が何を言っているんだ」と突っ込むも、本気で言っている相手の様子に小さな恐怖を感じた。
もし、いま男子の誰かが近付いていけば、彼女はきっと本気でペルソナを使って攻撃してくるだろう。
全員がその確信を持ったため大人しく待っていれば、それから五分ほど経って壁になっていた女子たちが離れてゆく。
ようやくかと待ちくたびれた真田が呆れた様子で立っていれば、七歌が着替えたばかりの八雲を全員の前でお披露目した。
「じゃーん。八雲君武闘家バージョンだよ」

両腕を組んで誇らしげに立つ赤ん坊が纏うは、青地に金の龍が刺繍されたチャイナ服。
深いスリットの入った服は、女子用のチャイナドレスにしか見えないが、その下に同じ生地の短パンを穿いているので問題はない。
長い髪はハーフアップに結われ、クマや鳴上が褒めるように拍手をすれば、八雲は背中を向けてそこに刺繍された文字を見せた。
「えーと、〝東西南北中央不敗〟クマか？」
「うん。八雲君のことはマスターユニバースって呼んであげて」
実は八雲の着ている服は色違いが存在し、白には黒で虎が、金色には赤で鳳凰が刺繍されていた。
そして、それぞれに背中に刺繍された文字も違っており、白は〝天上天下唯我独尊〟、金色は〝天下人〟となっていた。
女子たちが悩んでいたのはどの漢字がいいかという部分であり、最終的に龍のデザインも評価されて七歌と千枝の強い推薦で今の服に決まった。
そうして誕生したのが最強の赤ん坊たるマスターユニバースだが、そのお腹には着ぐるみパジャマから外して付けた黒いポケットがあり、そこから如意棒を出すと器用に振り回し始める。
「まー！」
自分の背丈ほどに伸ばされた如意棒を華麗に操り、落ちていた小石を見つけると八雲はそれを棒ではじき飛ばす。
飛んだ小石はかなりの速度で宙を舞うと、最後は赤ん坊の可愛らしさに緩みきった顔をしていた完二の股間を強襲した。
「あんがぁぁぁぁぁぁっ!?」
完全に油断しきっていた事で、完二は絶叫したまま股間を押さえると前のめりに倒れ伏す。
倒した本人は決めポーズを取って勝ち誇っているが、同じ被害に遭った者たちや次は自分かも知れないと考えている男子らは対照的に青ざめている。
このまま同じ場所に留まれば危険かも知れない。その考えが頭に過ぎった鳴上は、八雲の新しい服を褒めつつ先へ進むことを促した。

「せ、折角、戦うための服に着替えたんだ。近辺に敵の影はないし、そろそろ先に行こう」
「ああ、そうだな。八雲もちゃんと靴を履いたので、これで問題なく先へ進めそうだ」
八雲にちゃんと靴を履かせた事で、美鶴も心配の種が一つ消えたと安堵の表情で探索続行に同意する。
すぐ傍で股間を押さえて倒れている者がいても、美鶴は一切気にせず陣形を取らせると出発の号令を掛ける。
待機中の鳴上隊のメンバーなので戦闘に影響はないが、完二を気の毒に思った鳴上と花村が肩を貸してやり、一同は先を進むと新たな質問部屋でされた「一緒に遊ぶならインドア派かアウトドア派か？」という質問に八雲が「うー！」と答えて無事に通過出来た。
本人がどっちで答えたのか非常に気になるところだったが、二つ目の質問部屋を越えて強いシャドウのいる部屋を突破すると、その先にあった階段を下りて次のフロアへ向かった。
――ごーこんきっさ・二次会
二つ目のフロアへ下りてくると、階段の近くの部屋に開かない扉があった。
それは前のフロアにも存在したタイプの仕掛けで、どうやらフロア内に存在する全ての質問部屋を回る必要があるらしい。
すぐに入ることが出来ないのなら用はなく、別の道を使ってメンバーたちが進んでいると、到着した大広間に一風変わったギミックが置かれていた。
「動く歩道か。まさかダンジョンの中で見るとは思ってもいなかった」
言いながら真田が何でもありだなと溜息を吐く。
彼らの視線の先には今も動いているベルトコンベアのような物が存在し、部屋の中には向きが違う物も含めれば二桁に近い数があった。
流石にタルタロス内部でこんなものを見たことはなかったので、改めてこの世界のダンジョンが普通ではないと認識していると、田舎在

住故に生では見たことがなかった千枝が少しはしゃいだ様子で会話に参加してくる。
「あ、知ってる！　おっきな駅とかにあるやつでしょ？　テレビで見た！」
「そうか。君たちの街にはないのか。あれは正式にはトラベレーターやムービングサイドウォークと呼ぶ」
「そうなんだ！　あたし、一回で良いから乗ってみたかったんだよね。早く乗ろ、乗ろ！」
田舎者だからなのか、それとも千枝の生来の気質によるものなのかは分からない。
けれど、ダンジョンの中に存在するギミックにも物怖じせず、むしろ好奇心から試してみたいと言える度胸は大したものだろう。
美鶴などは安全を確認するまで待てと言って制止しているが、一同が足を止めていると八雲とクマが真剣な顔で頷くとトラベレーターに向かって走り出した。
「うー！」
「うおぉぉぉ！　クマも負けないクマー……ってぎゃーっ!?」
自分が一番最初に乗るんだと駆け出した二人。
タッチの差で八雲が勝利して先に乗り込んだが、彼は子どもとは思えない速さで足を動かし流れに逆らっている。
一方、先に到着する事だけに全力を注いだクマは、滑り込むような形で乗り込んでまで敗北した事で、そのまま流されていってしまった。
少しすると飽きたのか八雲は降りて戻ってきたが、遠くで道端に放り出されているクマを見ると、独断行動を取りつつも普通に戻ってきた八雲を注意するべきか悩んでしまう。
まぁ、勝手な事をした以上は注意しなければならないので、額に手を当てていた美鶴は八雲を抱き上げると目線を合わせて話しかける。
「八雲、私はさっき安全を確かめてからと言っただろう？　怪我をしたらどうするんだ。頼むから危ない事はやめてくれ。君が怪我をしたら悲しむ者が沢山いるんだ」

「う？　ぶーたん？」
「ブータン？　ふむ、流されていった彼の事を言っているのなら、そういう事だ。君があんな風になれば皆も心配する。だから一人で勝手に行かないと約束してくれ」
耳慣れぬ単語を口にして八雲が小首を傾げれば、そういえば湊がクマをブタと呼んでいたなと思い出して、美鶴は八雲がクマの事を言っているのだろうと理解した。
そして、クマのようになっていれば自分も他の者も悲しい気持ちになるので、今後はそういう危ない事をしないよう約束を求めれば、八雲は素直にコクコクと首を縦に振ってくれた。
ちゃんと約束してくれるのならこれ以上いう事はない。素直にいう事を聞いてくれる八雲の頭を撫でて褒めてやり、撫でられた方は美鶴の胸に顔を埋めてリラックスした表情をしている。
男子が胸に触れてくれれば彼女は即座に相手を地面に叩き付けているところだが、八雲が触っていても嫌そうな顔は一切せず、むしろ彼の頭を胸に当ててそのままあやしていた。
他の者たちより一歩引いて八雲の事を見ていた美鶴も、八雲が養子で義弟になっていた可能性もあったと知っているだけに、実際は赤ん坊の八雲の世話をしたい気持ちがあったのだ。
ただ、赤ん坊の世話をする知識がなく、チーム全体のことを考える必要があったからこそ、彼女は八雲の世話を他の者に任せて行動していた。
しかし、今は自分だけが八雲と接していることで、美鶴も八雲との触れ合いを十分に堪能するとゆっくり地面に降ろしてやっていた。
「よーし、とりあえずクマ吉も無事みたいだし、あたしらも早速乗ってみよう！」
美鶴が八雲を降ろしてやるのを確認したタイミングで千枝がレッツゴーと号令を掛ける。
最初に言っていた通り、ずっと乗りたくてしょうがなかったのだろう。
遠くでクマが地面に投げ出されながらも小さく手を振っており、た

だの移動用のギミックでそれ以外の仕掛けもない様子。
ならば、乗っても問題ないだろうと千枝が雪子を連れて乗り込めば、しょうがないなと他の者たちも続いてゆく。
「って、うおあ!?　これ、メッチャ速えぞ!?」
「くっ、八雲君はこんなのを逆走していたんですかっ」
だが、トラベレーターに乗った瞬間、他の者たちは横に引っ張られる感覚に耐えるので精一杯になり、どうやって八雲は逆走出来ていたんだと驚愕させられる。
思わず倒れそうになった直斗を完二が支え、全員がただ倒れぬようバランスに気をつけながら流されていれば、倒れているクマの姿が近付いてくる。
それによってゴールが近いことを頭の片隅で理解していたとき、鳴上がとある事実に気付いて思わず口を開いた。
「これ、どうやって降りるんだ？」
『……あ』
現在、鳴上たちが乗っているギミックは、通常のトラベレーターに比べ三倍以上の速度で動いている。
おかげで八雲とコロマルを除くメンバーは自由に動けない訳だが、そうなると当然最後に降りるときも慣性に任せて飛び出すことになる。
クマがクッションになればダメージは少ないだろうが、全員がクマのいる地点に飛ぶとは思えないので、無駄なところでダメージを受けることになると理解した一同の顔が青くなる。
「クマ吉、絶対にそこ動いちゃダメだかんね！」
「およ？　呼んだクマ？」
「おまっ、立つんじゃねー!!」
あともう僅かで到着するというタイミングで千枝が声を掛けたせいで、復活したクマが起き上がってしまう。
倒れたままでいればクッションになったというのに、これでは余計にぶつかったときに縺れるように倒れるので危険が上がったではないかと花村が文句を言う。

だが、そんな事を言ってもゴールに辿り着くまであと十秒もない。どうすれば少しでも危険を減らせるんだと全員が焦りを覚えた時、
「まう！」
全員の腰辺りの高さに急に手すりが現われた。
見れば八雲が両腕を挙げて如意棒をかなり伸ばしており、まるでこれに掴まれと言っているように見える。
そんなものを掴んだところで意味があるのかと疑う気持ちが頭を過ぎるも、怪我の確率を大幅に下げる事が可能かもしれないと七歌が彼の意見に賛同する。
「全員、八雲君の武器を掴んで！　最初の人が飛び出しても後ろにいる人が掴んで支えるから大丈夫！　飛び出した人はそのまま歩き続けて、後から行く人もそれに追従して立ち止まろうとだけはしないで！」
皆が不安に思っていたのは、自分が飛び出す勢いで如意棒まで飛んでいく事だった。
しかし、他の者が掴んでいればそれは起きない。一人が飛び出してもまだ十人以上いるのだ。どうやっても飛びようがなかった。
そして、最初に飛び出した者が徐々に普通のペースで歩いてリードしていれば、後方の人数が減っていっても先に抜けた者たちが一定の速度でコントロールしてくれる。
何もしなければ投げ出されて終わりなのだから、これに賭けようと七歌が言えば全員が如意棒を手に掴んだ。
そのまま時速にして十数キロで進んだ一同は、最初に乗り込んだ千枝と雪子から順に飛び出してゆく。
「うわっと！」
「っ、やった！」
トラベレーターの終わりの部分で慣性によって飛ばされそうになるも、千枝も雪子も前のめり気味にはなったが手すりのおかげで転倒を免れる。
二人に続いて完二と直斗も何とか転けずに抜けていき、天田と真田と荒垣、ゆかりに七歌に順平と全員が無事に降りてゆく。

コロマルと八雲は如意棒も使わず苦もなく降りて見せたが、全員が無事に降りきったところでメンバーはその場に座り込んだ。
「はぁー、まさか動く歩道なんかで怖い目に遭うなんて、思ってもみんかったわ」
「はい。今回は兄さんの機転に助けられました」
「はーちゃん、ありがとう！　お礼にドーナッツあげるね」
床に置かれた如意棒を縮めてからお腹のポケットに仕舞っていた八雲を呼ぶと、玲はどこからか取り出したドーナッツを彼に渡す。
受け取った本人は嬉しそうに両手で持ったままピョンピョンと跳ねており、今の年相応の反応を見ていると先ほど咄嗟に下した判断は本当に彼の物だったのかと疑わしく思える。
けれど、他の者たちと違って自由に移動出来る八雲だからこそ、あの状況で焦っている者たちを助ける方法を思い付いたのではとも考えられた。
欠片を落としながらドーナッツを食べる八雲を見ながら、少しだけ休むとメンバーたちは再び立ち上がって先を目指す事にする。
トラベレーターの速度は一度体感したので次は問題ない。どうしてもダメなら再び八雲に手すりを用意して貰えばいい。
如意棒は太さと長さだけでなく形状だって変えられるのだ。トラベレーターを使わないと行けない場所だって、形状変化させた如意棒で道を作ってしまえる。
なんで普段の湊がそんな便利な道具を使っていないのかという疑問も湧くが、今は八雲が自分の持つ道具を十全に使いこなしてサポートしてくれている事に感謝しておく。
そうして三つ目の質問部屋を目指して、ハプニングによって僅かに一体感の増したメンバーたちはダンジョンを進み続けた。

第二百七十五話　ＢＢＱ

――ヤソガミコウコウ

動く歩道ことトラベレーターをいくつも乗り越えて三つ目の質問部屋に到着した一同は、そこで新たな質問を受けた。

その内容は「好きな子に褒められた。どんな風に？」というもので、選択肢はこれまでと異なり「ステキ！」「かっこいい！」「ブリリアント！」の三つが用意されていた。

三つ目の選択肢は誰かの口癖を想起させたが、これまでの質問には湊と八雲で答えていたので、他の者たちはここでも彼に選択を委ねる。

選んで良いよと言われた彼は腕を組んで難しい表情で考え込み、真田が本当に言葉の意味を理解しているのかと訝しむ一幕もあったが、そちらは美鶴が一睨みすれば黙り込んでいた。

そうして、たっぷり考えた末に八雲が選んだ答えは「うっうー！」というもの。

他の者ではやはり理解出来なかったけれど、質問している存在はそれで十分だったらしく扉は無事に開いた。

おかげでさらに先進むことが可能になったところで、今日はここまでにしようという事になり探索は終了。全員が校舎に戻ってくれば、教室の前で待っていた風花がトテトテと小走りで廊下に出た八雲を満面の笑みで迎えた。

「皆さん、お疲れさまでした。おかえりなさい、八雲君！」

「ま！」

「こっちで見てたけど大活躍だったね。とっても格好良かったよ？」

「うー！」

褒められた八雲は胸を張りながら腕組みをして背中を見せる。

〝東西南北中央不敗〟の文字を見た風花はパチパチと拍手し、望んだ通りの反応を貰えた事で八雲は鼻高々だった。

そんな二人のやり取りを見ていた他の者たちは、八雲も沢山歩いていたのに元気だなと子どもの体力に軽く驚く。

戦闘は他の者たちが担当していたが、八雲も如意棒と魔法の籠められた道具を使って数体のシャドウを倒していた。
子どもがシャドウを見ても一切怯んでいなかったどころか、遠距離からでも攻撃して倒せるなど普通では考えられない。
となると八雲はただ湊が過去の状態に退行している訳でもないのかもしれないが、ここでは詳しい事を調べることも出来ないため、今は八雲も戦力になり得るとだけ頭に入れておくに留めた。
しかし、湊が抜けても八雲が戦力に数えられた事は朗報であったとはいえ、小さな子どもを連れての行軍はメンバーに少なくない精神的疲労を負わせてもいた。
窓の外は放課後の暗さになっているので、ここで一度解散してそれぞれ夕食なり風呂なりに向かうことにする。
男子たちは先に風呂に向かうらしいが、女子は八雲もいるしどうしようかという話になったとき、少し離れた場所にいたマリーがやってきて八雲を正面から見下ろした。
「店長、ホントに縮んでる……。背ちっちゃすぎ、性別訳分かんない……手ぷにぷに」
マリーは赤ん坊を見るのは初めてなのか、やや苦手そうな雰囲気を出していたが、最後には目の前にしゃがんで八雲の手を取っている。
小さくて柔らかい手を傷つけないよう優しく触れる彼女の顔には慈愛の表情が浮かんでいる。
その様子から察するに別に子どもが嫌いな訳ではなく、単に美鶴と同じく経験不足からどう触れ合えば良いのか分かっていないのだろう。
八雲は他の赤ん坊より知能が高いので世話は非常に簡単だ。食べた物も全てエネルギーに変換するのでオムツを汚す心配もない。
流石に食事の時は食べさせてやる必要があるし、寝るときには添い寝してやらねばならないが、ここには率先して世話を焼きたがる者たちが多数いる。
故に、マリーも徐々に慣れていけば良いだろうと思い、他の者がマリーと八雲のファーストコンタクトを見守っていると、不思議にそう

に自分を見上げている八雲をジッと見ていたマリーが何やら決心した瞳で頷いた。
「それじゃあ行くよ。部屋、こっちだから」
「おー……」
言いながらマリーは八雲を抱き上げて立ち去ろうとする。
抱っこされた方はよく分かっていないのかマリーに抱きついて運ばれるままになっているが、二人が階段の方へ向かっている事に気付いてアイギスが慌てて呼び止めた。
「お待ちください！　八雲さんをどこへ連れて行かれるおつもりですか？」
「どこって、私たちの拠点だけど？　店長も私もこっちだから」
「今の八雲さんに大人の時の記憶はありません。怯えて泣き出す前に返してください」
ここにいる八雲にあるのはこの年齢までの記憶と前回退行したときの記憶のみ。
八十神高校側の者たちとはダンジョン内で挨拶したので既に馴染んでいるが、校舎に残っていた者たちは風花以外初対面になる。
今はアイギスたちの知り合いと認識しているのか警戒はしていないものの、このままマリーが八雲を連れて行ったときは流石に不安を覚えて泣く可能性があった。
よって、アイギスがすぐに八雲を返すように要求すれば、階段の方へ向かっていたマリーは振り返る際に八雲を強く抱き寄せ相手の要求を拒んだ。
「店長が泣くわけないじゃん。……泣かないよね？」
「まう！」
湊が泣くなどあり得ないと絶対の自信を持って答えつつ、小さいと分からないと思ったのか最後は自信なさげに本人に尋ねるマリー。
すると、聞かれた八雲は「当然さ！」とばかりに不敵に笑って答えて見せた。
彼は強さに拘っている節があるので、涙という弱さを見せるつもりは一切ないのだろう。

赤ん坊がそんな風に強がる必要がどこにあるのか理解出来ないが、八雲を連れて行こうとするマリーに彼が泣かないと答えた以上、そのネタで相手を強く引き止めることは出来ない。
八雲を自分たちの拠点に連れて行くつもりだった者たちが焦る中、話が終わったなら自分たちは行くぞとマリーが再び歩き出す。
「八雲さんっ」
相手を引き止めるための言葉が思い浮かばなかったアイギスは、ただ八雲に行って欲しくない一心で彼の名を呼ぶ。
そんな行動に何の意味があるんだと、他の者が何か正当性のありそうな引き止めるネタがないか考えていれば、マリーに抱っこされていた八雲がマリーを押して身体を離すと、そのまま少し暴れて拘束から逃れた。
暴れられたせいで赤ん坊を腕から落とす形になったマリーは焦ったが、当の八雲は苦もなく着地してみせ、そのままマリーの横を通り過ぎると走ってアイギスに抱きつく。
「まー！」
「八雲さん！」
八雲が走ってきた事でアイギスが腰を落として屈めば、そのまま八雲がアイギスの首に腕を回すようにしっかりと抱きつく。
彼が自分の許へ戻ってきてくれた事に安堵の表情になったアイギスも強く抱き返し、そんな二人を周りで見ていた者たちは、八雲にとって誰が一番なのか現われる形になったなと少々残念に思った。
「はぁ、やはり八雲はアイギスに一番懐いているようだな。マリー、君の気持ちも分かるが八雲の母親代わりはアイギスなんだ。赤ん坊にとって母親は特別でな。どうか分かってやって欲しい」
「……別に呼ばれたから行っただけだし。私が呼んでも来るから」
自分よりもアイギスを優先された事でマリーが拗ねたようにそっぽを向く。
けれど、ここを離れようとしない辺り、別に八雲の事を嫌ったわけではないようだ。
異世界に隔離された閉鎖空間内で不和が起きていれば面倒だった

ので、メンバー内でそういった事が起きなかったのは幸運と言える。
心の中で安堵してから話が一区切りついたタイミングで直斗が口を開いた。
「ところで、この後はどうしますか？　男性陣は銭湯へ行ったようですが、僕たちも先に入浴を済ませて食事にしますか？」
「私はそっちの方がいいな。戦闘で汚れたり汗かいたりしてるし」
直斗の言葉にゆかりが賛成の声をあげる。
彼女は後方から援護射撃をする形で戦闘に参加していたが、ダンジョンを歩き続けるだけでもそれなりの運動量になっていた。
おかげで薄らと汗もかいており、さらに戦闘の中で塵や埃が舞ってもいたので、そういった汚れを落としてサッパリしてから食事をしたいという気持ちが強かった。
他の者たちもその意見に賛成したことで先に入浴を済ます事に決まれば、アイギスと手を繋いで立っていた八雲に玲が声を掛けた。
「はーちゃん、ここのお風呂とっても大きいんだよ。泳いだりも出来るの」
「きゃー！」
お風呂で泳ぐことが出来る。そう聞いた八雲は瞳を輝かせると、お腹につけた黒いポケットをゴソゴソと漁って色々と出してきた。
〝ケロヨン〟と赤い字でプリントされた黄色い洗面器、そこに入れられたアヒルの玩具が数匹と召喚器型の水鉄砲、さらに半分に切ったスイカ柄の膨らませ済み浮き輪に水色の水泳ゴーグル。
洗面器とアヒルたちは玲に預け、本人は浮き輪を潜ってゴーグルを掛けると準備万端とばかりに隣のアイギスを見上げた。
どうやら泳げると聞いて泳ぐ気満々なようだが、お風呂で泳ぐことは本来マナー違反。
浮き輪まで使うとなれば他の者たちの同意を得る必要があり、少し困ったようにアイギスが周りを見れば、皆が苦笑気味に頷いてくれた。
「あはは、アヒル隊に浮き輪にゴーグルとか完全装備やね……」
「……別に本人が作った銭湯だし泳いでも問題ないでしょ」

「兄さん、召喚器型の水鉄砲なんて作ってたんですね。知らなかったです」
他の者の同意が得られた事でアイギスが改めて泳いで良いことを伝えると、八雲は飛び跳ねて喜んでいる。
ただし、浮き輪を潜ったまま移動するのは危険なので、向こうに着くまでは洗面器と一緒に玲が運ぶことになった。
もっとも、各々の着替えの準備があるので、最初に八雲たちの拠点にマリーとメティスの着替えを取りに行くと、二人と八雲は先に銭湯へと移動して、他の者たちは自分たちの着替えを拠点に取りに向かってから合流することになった。
銭湯では生まれたままの姿になった八雲を見て、本当に男の子だったんだと八十神高校側の者たちが驚く場面や、勢いよく走って洗面器に足を入れた八雲が滑りながらお風呂に向かって最後に跳躍して飛び込む一幕も見られた。
勿論、後半の危険な行為はすぐにアイギスが叱って止めさせたが、器用だなと思った七歌と千枝が大きい大人用の洗面器を使って試してみたところ、滑走中のバランスを取るのが非常に難しく、そちらに気を取られて浴槽付近で跳躍して飛び込むことが出来ないと判明。
そんなに難しいのかとりせやラビリスも試してみたが、惜しかったのは浴槽の縁に着地できたラビリスの一回のみで、後は全員縁で引っかかって顔面から浴槽に突っ込むか、高さが足りずに臑を強打したり、そもそも飛べずに滑って後頭部をぶつける結末に終わった。
赤ん坊ですら自身の腰より高い四十センチのほどの縁を飛び越えられたというのに、身体は大人な自分たちが出来ない事は少なからず衝撃があった。
敗北感を感じてその事で落ち込んだ者たちは、今日は自分たちが掃除をすると告げ、湊が抜けた事で当番制になった風呂掃除を率先して行なうのだった。
――屋上・フードコート
一方その頃、男子たちも湊が抜けた事で風呂掃除や洗濯を自分たちで行なう必要があるという話題になり、とりあえずは全員でやれば良

いのではないかという方向で話が纏まった。
最初は当番制が良いのではとの意見も出たのだが、そうなるとメンバーによって出来に差が出来てしまう。
本人たちは真面目にやっているつもりでも、性格や器用さによってどうしても差は出来る。
ならば、全員でやって細かなチェックをすれば一人辺りの労力も少なく済み、メンバーごとの出来の差も生まれなくなる。
洗濯も同じように全員でやって全員で干せば、怠惰な性格の順平やクマもサボらず小まめにやると思われ、全体の衛生状況は清潔に保たれる事になるだろう。
そうして、全員で掃除を行ない。綾時、荒垣、鳴上、完二、善の五人が主なチェックメンバーに決まって最終チェックを終えて銭湯を出ると、入浴後でラフな部屋着姿になった男子たちは屋上で夕食を取ろうという話になっていた。
だが、そこにいるメンバーの表情は食事前とは思えないほど暗く、六人掛けの席に分かれて座っていた順平が溜息混じりに不満を口にした。
「はぁ……最初は楽しかったけど、流石に三食この調子だと飽きるのも早いな」
「栄養も何も考えられてねぇからな。強いて言えばカレーが一番マシっていう極端な状態だ」
愚痴を垂れる順平に荒垣がしょうがないだろと同意しつつも言葉で諌める。
この世界にある食べ物は基本的には文化祭の出し物の延長でしかない。
中にはジャンボパフェのような珍しい物もあるが、デザートを除く食事系に関しては屋台系のB級グルメばかりが並んでいるのだ。
これではいくらジャンク好きな男子高校生と言えども早々に飽きてしまう。
せめてラーメンがあれば違うのにと落ち込む順平に、外の世界の記憶がない善が不思議そうに尋ねた。

「玲は毎日美味しそうにドーナッツやタコ焼きを食べているが、君たちはここでの食事が不満なのか？」
「まぁな。別に不味くはないけど特別美味くもねぇし。濃いソース味ばっか続くと飽きるだろ？」
「ここで出されている食事は炭水化物がメインだ。作る手間の関係でそうなってしまうんだろうが、どう考えても栄養バランスが悪い」
「食事はモチベーションにも関係してきますしね。七歌さんたちも野菜が足りないって言ってました」
　順平に続いて真田と天田が改善点についても述べれば、善はそういうものなのかと難しい表情で考え込む。
　今までは玲が何でも美味しそうに食べている姿を見ているだけで満足し、自分はそれに付き合って少し食べる程度で済ませていた。
　元々、自分から何かを主張することも少ない少年だけに、〝そういう物〟と納得してここでの食事にも不満を抱くことはなかったのだろう。
　外から来たものたちが不満を口にしたことで、初めて食事の偏りも認識した様子だ。
「やっぱここは、有里先輩の通販に頼るしかないんじゃないっすか？　どうです。この野菜たっぷりチャーシュー麺とか？」
「なら、俺は中華丼にしようかな」
「そこはサイドメニュー的なサラダセットとかにしとけよ。つか、本人もいないのに通販してくれるか微妙だろ」
　完二と鳴上がタブレットで通販のページを見ながら暢気に話すのを聞いて、そういう野菜の摂り方なら焼きそばでも出来るだろと花村がツッコミを入れる。
　確かに最終的には完二の言う通りに通販に頼ることになるかもしれない。
　ただ、現在、その仕入れを担当している青年がこの世界にいない。
　一応、本人と同一の存在である赤ん坊はいるのだが、相手に通販の注文を頼んでも理解されない可能性が高い。
　となると、食事だけにかかわらず、当分の間は通販に頼らず自分た

ちで凌いでいくしかないのだ。
いなくなった彼と同等の力を持つという綾時がいるので、戦力的には足りているに違いない。
自分たちだけならば不安にも思っただろうが、異なる場所で戦いに明け暮れる同胞もいる。
今の戦力を考えればこの世界の謎を解いて脱出するのは時間の問題だろう。
「まぁ、今はある物で我慢しようよ。そのうち湊も元に戻ると思うから」
だからこそ、食事のラインナップについては我慢しようと綾時が他の者を宥める。
焼きそば、タコ焼き、お好み焼きにフランクフルト。唐揚げもあればホットドッグだってある。ちょっと違った物が食べたいならカレーライスやトッピングは皆無ながらうどんもあった。
ある意味遭難中とも言える状態で栄養バランスなど考えてはいけない。贅沢など言わずこれらをローテーションすれば少しくらいは凌げるはずだ。
「そうだな。じゃあ。俺はホットドッグにしよう。陽介はどうする？」
「俺はカレーライス……いや、うどんにカレーかけて貰ってカレーうどんでも作ってみるか？」
「お、それも美味そうだな。シンジ、俺たちもそれにするか？」
湊がいつ戻るかは分からない。それは消耗具合と回復スピードによるとしか言えないので、しばらくこの状態が続くとは思われる。
けれど、残るダンジョンを踏破していく途中できっと彼は復活する。
前に退行したときも強敵の出現を感知して無理矢理に復活して参戦したのだから、自分たちも今はある物に感謝して食事を頂こうと男子たちは立ち上がった。
鳴上と綾時はホットドッグを買いに端の屋台へと向かい、真田たちは花村発案のカレーうどんを作るためうどんを買いに向かう。

クマや天田はどうするか悩んでいたが、クマが椅子に座ったまま悩んでいるとフェンスの向こう側から女子の笑い声が耳に届いた。
「およ？　何やら向こうの方からチエチャンたちの楽しそうな声が聞こえてくるクマ！」
声が聞こえてくるのは教室棟と実習棟の間にある中庭の辺り。
そんなところに出店などあっただろうかとフェンスに駆け寄るクマに順平もついて行けば、そこには予想だにしない光景が待っていた。
「はぁっ!?　なんで女子らは楽しそうにＢＢＱなんてやってんだっ!?」
本来、そこには何もなかった。ただ何もない空き地のような空間があっただけだ。
だというのに、順平とクマが見たそこにはキャンプ場にあるようなブロックを組んで作られた竈、そして炭焼き用のグリルで肉や野菜を調理する女子たちの姿があった。
自分たちの食事を買いに行こうとしていた者たちも、順平の声が聞こえてくると走ってやって来るなりフェンス越しに中庭を見る。
するとやはり、そこにはベルベットルームの住人らと一緒にＢＢＱを楽しむ女子たちがおり、なんで彼女たちはそんな豪勢なものを食べているんだという疑問が湧く。
「あぁ、あの串に刺さった肉とかメッチャ美味そう……」
肉汁が下の炭に落ちるほどジューシーな牛肉が串に刺されて焼かれている。
屋上まで匂いが届きそうなほど見事な焦げ具合のそれを、調理を任されたのかテオドアが取ってアイギスの皿に載せた。
貰ったアイギスは礼を言ってから肉を一つ箸で外し、膝の上に座っている八雲に食べさせている。
口を開けた八雲にアイギスが食べさせてやるときなど、屋上で見ている男子らは善以外の全員が思わず一緒に口を開けてしまったほどだ。
しかし、八雲が美味しそうにモキュモキュと口いっぱいに頬張ろう

と、屋上で見ている者たちの口には唾液しか溜まってこない。
空しさとひもじさのピークに達した男子たちは、お互いに視線を交わして頷くと屋上から走り去っていった。
――中庭
入浴が終わり、今日の掃除当番たちがお風呂を掃除している間に洗濯の準備をしていた女子たちは、掃除が終わって当番が戻ってくると夕食をどうするかという話になった。
今は湊がいないので通販が使えないだろうという見解はこちらでも一致しており、そうなってくるとある物の中で八雲の栄養バランスを考えてゆく必要がある。
自分たちは肉体的に大人なのである程度は我慢していられるが、赤ん坊の八雲に同じようにさせるのは酷というもの。
よって、少ないなりに野菜も摂取できるよう知恵を出し合って考えていると、そういえばとマリーが自分が散策中に見つけた物について話した。
「あ、そういえば、発送センターの冷蔵庫に色々なんかあったよ。ジュース取るときに見た」
「なるほど、確かに銭湯とか生活環境を整える準備をしていた兄さんなら、自分がいなくなった後のことを考えて残していてもおかしくありませんでしたね」
彼は最初から自分が倒れる事が分かっていたように準備を進めていたので、予め準備をしていてもおかしくはない。
客の注文の品を除けば、マリーやメティスはフリーパスで利用できる業務用の冷蔵庫も発送センターには置かれている。
一応、拠点の冷蔵庫にもいくらかの食材は置いてあるだろうが、確認するなら大きい方からにしようと全員で向かえば、まず最初に発送センターの広さに驚かされた。
外から見た感じは普通の教室だが、中はまるで他のダンジョンのように別の空間が広がっている。
発送センターという名前の通りに、沢山の棚と置かれた商品の数々、さらに教室よりも大きいと思われる冷蔵室と冷凍室が並び、部

屋の隅には未使用の段ボールや発泡スチロールの箱が詰まれている。
体育館を銭湯に改造していたときも思ったが、湊はどうやって教室を作り替えているのだろうかと疑問に思いつつ、冷蔵庫ならぬ冷蔵室まで向かった一同はカード認証タイプのロックをあいかに外して貰い、分厚い扉を開けて中に入った。
「うわ、寒いね。八雲君は大丈夫かな？」
お風呂上がりで部屋着状態な事もあって冷蔵室の中は非常に寒く感じる。
自分たちでこれなのだから、パンダの着ぐるみパジャマの下はオムツしか身に着けていない八雲は凍えてしまうのではないかと雪子が心配した。
そして、アイギスに抱かれている八雲の方を見てみれば、寒いのが楽しいのかアイギスの胸に顔を埋めて遊んでいる姿があった。
「うぶぶぅ」
「八雲さん、寒ければ言ってくださいね」
「ふぉふぉふぅ」
ずっとアイギスの胸に顔を埋めたまま話しているので何を言っているのか分からない。
他の男子からすれば血涙を流すほど羨ましい状況だと思われるが、赤ん坊が母親に甘えているだけなのでアイギスも他の女性陣も特に何も思ってはいなかった。
八雲が大丈夫であるならば後は探すだけ。そう思って手分けして探そうとしたとき、マリーが自分が見つけた物のところまで歩いて指さした。
「ほら、これ。今日の夕食用って書いてるでしょ？」
彼女に続いて他の者たちもそこに向かう。
マリーが指さした先には、確かに今日の夕食用と書かれた紙が貼られたラップで包まれたバットがいくつも詰まれていた。
中はカットされた食材や下準備を終えた状態で串に通された食材が入っており、下の方にあった深いタイプのバットにはサラダまで入っている。

ジュースを探しにこんな場所に入ってきているマリーも謎だが、おかげで八雲に栄養バランスの整った食事を食べさせてやることが出来そうだと頷けば、背後から突然エリザベスの声が聞こえてきた。
「どうやら無事に発見出来たようですね。実は八雲様から本日の夕食についてお手紙を預かっていたのですが、説明する手間が省けました」
「え、手紙って兄さんは何て？」
「はい。そこに置かれた食材を使って中庭で〝B・B・Q〟をして欲しいとの事でした。赤ん坊の自分には量を食べさせておけば良いからと」
見ればエリザベスの手には白い封筒が握られている。
読んでも良いという相手から受け取ってチドリが目を通せば、シンプルに今日の夕食用に食材を用意した旨と大まかな準備はテオドアに頼んである事が書いてあった。
用意された食材は優に三十人前はあり、明らかに湊の拠点にいる者とベルベットルームの住人では食べきれないと思われる。
小さな八雲がどれだけ食べられるか確かめた事はないが、それでも湊ほどではないと思われるので、多い分は八雲の世話をしてくれる者へのお礼代わりなのだろう。
そんなチドリたちの推測を肯定するように、冷蔵室の扉を開けたエリザベスは食材を持って外へどうぞと案内をしてくる。
「中庭ではテオが既に竈とグリルの準備をしております。使い捨ての食器類やテーブルもセッティング済みですので、皆様は食材の運び出しと主賓の八雲様のエスコートをよろしくお願い致します」
「わたしもはーちゃんと一緒に食べて良いの？」
「ええ、全て八雲様の提供ですので、退行前に許可を貰っている私共とメティス様とマリー以外の方も許可を頂けば問題ありません」
湊はいないが八雲も同一人物なので、そちらから許可を貰えばＢＢＱに参加出来る。
それを聞いた女子たちは、新鮮な野菜のサラダや上質な肉を見たことで、是非ともご相伴に預かりたいという思いが湧いた。

本人は今もアイギスの胸に顔を埋めるので忙しそうだが、きっと寒い冷蔵室にいる間はずっと同じ調子だろう。
アイギスから顔を離して鼻が赤くなっても可哀想なので、とりあえず全員で食材を運び出してしまい。向こうについてから許可を取ることにする。
「皆、手分けして運んでしまおう。アイギスは八雲と一緒に中庭で待っていてくれ。せっかく温まったのに風邪をひかれては困るからな」
「すみません。皆さん、よろしくお願いします」
美鶴の指示に従ってアイギスは先に冷蔵室から出ると、他の者も手分けしてバットを中庭の方へ運んでゆく。
食べ物ばかりではあれだからと、フリーパスのメティスが置いてあったペットボトルのお茶やジュースも貰っていき、夕食用の食材が全て運び出されるとテオドアが竈とグリルで調理を開始する。
竈もグリルも複数用意されていたので、湊が残していた調理方法の書かれた紙を見ながら、七歌やラビリスもテオドアの手伝いをする。
グリルに置かれた肉が焼けるにつれて肉汁がしたたり網の下の炭に落ちる。
ジュッ、と一瞬で蒸発した肉汁は煙となって肉を燻し、辺りには炭火調理特有の香ばしい香りが漂った。
椅子に座ったアイギスの膝の上で大人しくしていた八雲も、良い匂いがしてくると視線でアイギスにまだかなと尋ねてきた。
「あーう」
「もう少しで焼けますよ。一番最初の一番美味しいお肉は八雲さんのものです」
「うー！」
一番美味しいという事は一番特別という事だ。アイギスの言葉の意味を分かっているらしい八雲は、特別なものを貰えると聞いて瞳を輝かせて楽しみにしている。
他の者たちは先に許可を貰って、「まう！」と返事を貰っているので準備を手伝いながら同じように待っている。

ベルベットルームの住人らはテオドア以外は働く気がないようだが、彼女たちも一番最初の肉を八雲に与える事には賛成なようなので、サラダをつまみながら最初の肉が焼き上がる瞬間を待った。
「お待たせ致しました。どうぞ。こちら、最初の一本にと仰せつかっていたシャトーブリアンでございます」
「ぴゃー！」
アイギスの前に置かれた紙皿に串が置かれると、待っていましたとばかりに八雲が興奮した様子を見せる。
肉の部位を聞いていた美鶴や千枝は目を見開いて驚いていたが、肉の部位など気にしないアイギスは礼を言ってから箸で肉を外してゆく。
表面は軽くカリッと焦げ目がついた肉は、そっと箸で掴むだけで肉汁がジュワッと溢れてくる。
このまま食べさせると火傷してしまうので、アイギスがフーフーと軽く冷ましてから口に運んでやれば、八雲は小さい口をいっぱいに開いて肉を受け入れた。
「美味しいですか？」
「まーも！」
「フフッ、それは良かったです。沢山あるのでご飯や野菜と一緒に食べましょうね」
「うー！」
一生懸命噛んでから飲み込んだのを確認すると、アイギスは続いて竈の方で炊いたご飯を一口分箸で摘まんで八雲に食べさせる。
そちらも八雲は美味しそうに食べているので、満足してくれているのなら良かったとアイギスも同じ物を食べてゆく。
食材は湊が全て下準備を終えていたと聞いているが、スパイスをまぶして寝かせていた肉には十分な味が染み込んでおり、余分なタレなどを掛ける必要がないくらいに旨みが感じられる。
ご飯の方もモチモチふっくらと炊きあがっており、七歌たちが担当したご飯に八雲もご満悦だ。
一方、ご相伴に預かることが出来た女性陣も、濃すぎる味付けに飽

きていた事もあって生野菜や丁寧に下準備された食材の味に感動を覚えている様子。
　せっせと焼いているテオドアも他のメンバーがたまに交代して食事をしており、湊のように一人だけに負担が行くことは避けられている。
　おかげでその場には笑顔と笑い声が響き、肉と野菜が交互に刺さった串を両手に持った玲がやってくると、最高の笑顔を見せて八雲に感謝の言葉を送った。
「はーちゃん、おいしいご飯ありがとう！」
「まう！」
「えへへ、一緒に食べると楽しいよね。おいしい物がもっとおいしくなるし」
　善と二人のときはこんな事を考えることもなかった。
　二人でいることが嫌だった訳では決してないが、皆と会ってからの方が食事を楽しいと感じている。
　笑顔と笑い声が響く食事風景を心に焼き付けながら、玲が新しい料理を食べてくると言って離れていくのを八雲が見送れば、急にドタドタと走る足音が響いて校舎の方から男たちが出てきた。
「ちょ、お前らなんでＢＢＱなんてやってんだよ!?」
「ああ。そんなのがあるなら俺たちも呼ぶべきだろう」
　急に何だと走ってきた者たちの方を見れば、自分たちだけで美味しい物を食べるなんて狡いぞと花村と真田が怒りをぶつけてくる。
　食べていた者からするとそんな事を言われてもという感じなのだが、隠れて食べていたと思われても困るので一応説明しておくかと真っ赤に染まったサラダを食べていたりせが口を開いた。
「花村先輩、これプロデューサーが小さくなった自分用に用意してたやつなの」
「ええ、僕たちは有里先輩と八雲君の厚意で同席させて貰っているだけなんです」
「じゃあ、俺たちも有里に許可を貰えばいいのか？」
「はい。僕たちもそうしましたから、鳴上先輩たちも同じようにして

ください」
後から許可を貰ってもＯＫだと分かると鳴上たちの瞳にやる気の炎が灯る。
食べている者たちの皿やグリルの方を見れば、こちらに来てからは不足がちだった野菜だけでなく、ご飯と相性抜群な〝ザ・肉〟といった品も並んでいる。
これは是が非でも許可を取らねばと意気込み、花村が先陣を切って八雲とアイギスに近付くと、本人的には普段とは異なる優しいつもりの声で話し掛けた。
「八雲くーん。お兄さんたちも一緒に食べて良いかなぁ？」
「ぶー！」
「ちょっ、そこはＯＫ出すとこだろ?!」
許可を求められると八雲は顔の前で大きくバツを作ってダメだと返す。
完全に許可を貰えると思っていた花村は驚きずっこけているが、八雲は許可を貰いに来ている者たちを見渡すと、急にアイギスの膝の上から降りてグリルの方へ向かった。
そこで何やらテオドアと話しているようだが、少しすると八雲は一本の串を持って戻ってくる。
一体それをどうするんだと見ていれば、彼は天田の前で立ち止まって串を掲げた。
「ま！」
「くれるの？　って、これピーマンの肉詰め串……」
くれるのは嬉しいが天田はピーマンだと分かるなり嫌そうな顔をしてしまった。
それを見ていた他の者たちは彼が子どもらしくピーマン嫌いと理解した訳だが、八雲が天田に串を渡すとアイギスの許に戻ってタマネギやピーマンを食べていたことで、自分だけ野菜を嫌がっていては子どもみたいじゃないかと天田もすぐにピーマンの肉詰めにかぶりついた。
まぁ、そんな対抗心を燃やしている時点で赤ん坊の八雲より子ども

な訳だが、嫌いなピーマンを食べていた天田は、最初は複雑な表情をしていたというのに咀嚼を続けていると不思議そうな顔になった。
「あれ、おいしい？　ピーマンの苦みはあるけど、ハンバーグの部分に下味がちゃんとついててこれなら食べられますよ！」
相手の嫌いな食材だろうと美味しく食べられるようにするのが一流の料理人だ。
湊はいくつかのジャンルはプロの許で学んでプロ級の腕前を持っており、その技術を駆使すれば野菜嫌いの子どもでも食べられる工夫くらいは出来た。
ピーマンの肉詰め串もその一つであり、天田が美味しそうに嫌いなピーマンを食べているのを横で見ていた完二が、思わずよだれを垂らしそうになりながら八雲の許に交渉に行った。
「な、なぁ、オレにも何かくれねぇか？　ほら、後でアイス奢ってやっから」
「むー……な！」
ただ頼むのでは虫が良すぎる。そう考えた完二は交換条件としてアイスを奢ることを約束した。
すると、八雲はそれなら良いよとばかりに再び椅子を降りてテオドアの許に行くと、今度は紙皿にスペアリブを載せて戻ってきた。
タレがよく絡まった熱々の骨付き肉を貰った完二は、ありがてぇと頭を下げて礼をしてから皿ごと受け取って肉を頬張る。
噛んだ瞬間に溢れてくる肉汁は火傷しそうなほど熱いが、旨みの凝縮されたスープを溢すのは勿体ないと我慢して飲み込む。
熱々の肉汁を飲みながら、甘辛いタレの絡んだプリプリの豚肉を噛んでいれば、いつまで経っても味がなくならないと感動した様子で完二が声をあげた。
「おほっ、これうんめぇ！　甘辛い味付けでいくらでもメシ食えそうだぜ！　アイスは五段にしてやっから期待しててくれよな！」
ご飯にも合いそうな甘辛い味付けは好みだったようで、完二がアイスは奮発して買ってやると快活に笑って伝えてくる。
それを聞いた八雲も嬉しそうにしているので、今なら行けるのでは

と綾時も頼みにやってきた。
「僕も貰っていいかな？」
「み！」
「焼きマシュマロかぁ……」
　他の者よりすんなり料理は貰えたが、残念なことに肉でも野菜でもなく串に刺さったマシュマロ一つのみ。
　これはこれで美味しいのだが、もっとお腹に溜まる物がよかったなと少し落ち込みながら綾時はマシュマロを受け取った。
「はーちゃん、善も一緒に食べていい？」
「う！」
「わぁ、ありがとう！　善、一緒に食べよ。ベーコンでポテト包んでるのがおいしいんだよ！」
「……そうか。それは楽しみだ」
　一方、善の食事の許可を貰いに玲がやって来れば、二つ返事で好きに食べて良いよと許可を出した。
　見ていた者たちはこれが男女差別ですかと心の中で涙を流しつつ善を見送ったが、そんな悲しみに包まれている仲間を見かねたアイギスが助け船を出す。
「八雲さん、皆さんにも分けてあげてはダメですか？」
「まーまう？」
「大丈夫です。鳴上さんたちが食べても十分な量を準備してくださっていましたから、分けてもわたしたちがお腹いっぱいになる量はあります」
　普段は優しい八雲が男子には簡単に許可を出さない。
　そこに何か理由があるのではと思ってアイギスが尋ねれば、どうやら彼は量が減るとアイギスたちがお腹いっぱいにならないのではと心配していたらしい。
　先に食べていた者が後から来た者のせいで我慢するのは可哀想。そう思ったが故に渋っていたようだが、湊が用意したのは全員で食べても十分な量だ。
　恐ろしいレベルの健啖家である湊がいれば違ったかも知れないが、

人並みの食事量しか取らない男子が相手ならば大丈夫。
その事を八雲に教えてやれば、まだ完全に心配は払拭された訳ではないようだが、ある程度は納得してくれたらしく首を縦に振った。
「なう」
「ありがとうございます。皆さん、八雲さんが手伝うのなら皆さんも食べて良いとの事です」
『よっしゃー!!』
許可が下りた途端に拳を突き上げ喜ぶ男子たち。八雲の許を離れる前に礼を言って散っていく彼らは、先にゴミを回収したり調理を代わって仕事を手伝い始めた。
ここでしっかりと信頼を得て今後に繋げる考えのようだが、料理が出来る荒垣、綾時、鳴上、完二がチェックしながら焼き加減を見るようなので、彼らだけに調理を任せても問題はないだろう。
後から集まった者たちの表情も笑みに変わり、良かったと安堵の息を吐いてからアイギスが八雲の頭を撫でようと隣を見れば、
「ま!」
「マ!」
青髪金眼の八雲が彼と少し似た容姿の白髪銀眼の赤ん坊と手を挙げて挨拶をしていた。
「八雲さんが増えてるであります……」
増えた赤ん坊の容姿にはアイギスも見覚えがある。
髪と眼のカラーリングから見て本人に間違いないだろう。
彼女こそ八雲の女性の側面を司る異界の神、その名は、
「あの、ベアトリーチェさん?」
「マウ!」
そうして、アイギスの許に厄介な赤ん坊がもう一人増えた。

第二百七十六話　倍プッシュ

――中庭

夕食として湊が用意してくれていた食材を使い、学校の中庭でＢＢＱをしていたメンバーたち。

途中参加した男子たちが率先して調理を担当していたのだが、そんな彼らも含めて視線はアイギスの隣に座っている赤ん坊たちに注がれていた。

「うー」

「アイ」

片やパンダの着ぐるみパジャマを着た青髪金眼の少年、八雲。

片やパンダの黒地の部分が薄ピンクな着ぐるみパジャマを着た白髪銀眼の少女、ベアトリーチェ。

どちらも地面につくほど髪が長いので、今は軽く結われてちょっとした侍ヘアになっている。

そんな二人はお互いに向き合って手押し相撲のようにタッチを繰り返して遊んでいた。

小さい手でパチンパチンと可愛らしい音が鳴り、それがコミュニケーションになっているらしく二人は楽しそうに笑っている。

だが、湊とベアトリーチェの関係を知っている他の者からすると、どうして湊と肉体を共有している彼女が一つの個体として出てきたのかが分からない。

隣に座っているアイギスは、とりあえず二人が椅子から落ちないよう気をつけて見ていれば、アルビノにしか見えない真っ白な肌の赤ん坊が増えた事に驚いていた千枝たちが寄ってきた。

「え、なんで赤ちゃん増えてるの？　てか、この子誰？」

「増えた理由は分かりません。ですが、こちらの方はベアトリーチェさんのようです」

増えた理由を聞かれたところでアイギスは答えられない。

目を離していた数秒のうちに隣で増えられた自分の方が知りたいくらいなのだ。

近寄ってきた千枝を不思議そうに見つめる赤ん坊の頭を撫でつつ、そういった理由でアイギスがとりあえず名前だけを伝えれば、似た顔つきながら東洋風の八雲と西洋風のベアトリーチェを観察していた直斗が口を開いた。
「すみません、そのベアトリーチェさんとは？　同じように縮んだ有里先輩の知り合いの方ですか？」
「はい。というより、男性的側面が八雲さん、女性的側面がベアトリーチェさんなので、二人は性格の違いを除けば完全に同一人物です」
「同一人物？　それは多重人格的な話ですか？」
「似て非なるものですが、大雑把に言えばそう思って貰って構わないかと」
湊とベアトリーチェの関係はアイギスたちも完全に理解している訳ではない。
だが、鬼と龍の始祖から聞いた話によれば、異界の神であるベアトリーチェを神の器としての機能を持った鬼の子孫の肉体に降ろし、鬼の子の魂を炉心として無尽蔵のエネルギーを有した神に成る事が本来の目的だったという。
それを受け皿として優秀だった湊が神を逆に取り込み、完全に魂ごと融合したことで一つの魂で二つの意思を持つ特異な存在となってしまった。
何も知らない直斗らにそれを伝えれば難しい表情になり、完全にはまだ信じられていないようだが、今ここにいる赤ん坊二人は男子が湊本来の魂を持ち、女子がベアトリーチェの魂を持っているに違いない事は理解して貰えた。
複雑な事情があっても今は目の前に二人の赤ん坊がいるだけだ。
対応も今まで通り八雲にしていたものと同じで問題ないはずなので、ただ賑やかになるのだろうと思って初めて会う者たちがベアトリーチェに挨拶しようとすれば、
「ま、あうあ！」
「マウ！」
「皆さんを紹介してあげるそうです」

八雲がベアトリーチェの手を引いて椅子から降りるなり、そこにいる者たちの傍に駆け寄りながら彼女に紹介してゆく。
彼がどんな風に紹介してくれるのか興味がある者たちは、料理の番をしている者たち以外はアイギスの翻訳に耳を傾ける。
「まーも、やい、もーも！」
「優しいお姉ちゃん、なんか知り合いの人たち、英恵おばさんの子どもの牛さんだよ、と言っておられます」
最初に紹介を受けたのはアイギス、そしてアイギスと美鶴以外の女子を指で指し、最後に美鶴のことを紹介した。
優しいお姉ちゃんと呼ばれたアイギスは嬉しそうに笑い。その他大勢扱いを受けた他の女子たちは残念そうに肩を落とす。
しかし、一人だけ牛さんと呼ばれた美鶴が何故だと首を傾げていると、調理していたはずの男子らが「成程」と頷いて胸の辺りを見ていた事に気付き、八雲の言葉の意味を理解した彼女は「――処刑する」と絶対零度の瞳で男子らを捉えて向かっていった。
それを見ていた八雲は持ち場を放棄して逃げ出した者たちを指さし、ベアトリーチェに彼らのことも紹介する。
「ぶーたん、ごーご、ぷー！」
「仕事の出来ないダメな子分、中々分かってるゴリラ的子分、使えない子分たち、だそうです」
クマ、完二、その他の男子の順に紹介してゆくが、当の本人たちは美鶴のペンテシレアから逃げていて話を聞いていない。
子どもの前で情けない姿を見せている男子に女子たちも呆れているが、美鶴のペンテシレアから逃げる際、ここは僕が囮になるから先に行けと綾時が足を止めて残っていた。
無論、彼のペルソナには氷結に対する耐性がないので一瞬で氷像に変えられていたが、その間に他の者たちは一歩でも遠くへ逃げることが出来ていた。
男子たちと美鶴がいなくなった中庭に残っていた八雲は、やりきった表情で凍っている綾時を指さして彼の事もベアトリーチェに紹介する。

「め！」
「メ！」
「ダメな人、まさにその通りであります」
　これはダメな人だよ、と八雲が真面目な顔で教えてやれば、ベアトリーチェもダメな人なのねと真剣に頷く。
　赤ん坊たちが正しく綾時のことを認識している事にアイギスは満足そうに頷き、さらに移動した八雲たちはコロマルの許に辿り着く。
「わんお！」
「お、これはあたしにも分かったよ。コロちゃんのことワンちゃんだよって言ったんでしょ？」
「いえ、違います。八雲さんは僕の愛馬だよと仰いました」
　八雲の言葉から答えを予想する千枝。しかし、彼女の予想よりも八雲は長く話していた。
　たった一つの単語にそこまで意味を込めている事に驚いたが、さらに言えばペットのコロマルを愛馬として認識している事も謎である。
　確かに二人は仲が良さそうであったがと思って八雲たちに再び視線を向けると、なんと伏せの状態で大人しくしていたコロマルに二人が乗ろうとしていた。
　前に八雲を乗せて歩いてはいたが、流石に倍の重量を乗せては立つのも辛いに違いない。
　期待に瞳を輝かせワクワク顔の二人には悪いが、このままではコロマルが潰れてしまうと判断したラビリスが慌てて二人を止めた。
「コラコラコラ、二人乗りはアカンて。流石にコロマルさんが潰れてまうから」
「ヤイ！」
「別に知り合いやなくても言うわ。ほら、今はご飯食べてはるから遊んで貰うのは後にしいて」
　ラビリスが止めに入るとベアトリーチェが〝知り合いの人〟が邪魔しないでと怒る。
　けれど、赤ん坊に言われた程度で引くラビリスではなく、コロマルに跨がっていた二人を順番に降ろすと二人にもご飯をちゃんと食べ

るように言いつけた。
八雲の方は慣れているのか素直に離れていったが、ベアトリーチェは八雲以外にはまだ心を許していないからか不満そうに去って行く。
そんな彼女を困った表情でラビリスが見送ると、その先で八雲がお腹のポケットからレジャーシートを取り出して広げていた。
赤ん坊である二人は大人用の椅子に登って座る必要があったので、そういった手間を嫌って八雲はレジャーシートを出したのだろう。
シートを広げ終わると八雲は先に座るようベアトリーチェに言って、自分は新しい紙皿を手にテオドアの許へ駆けてゆく。
今度は何を貰いに行ったのかと他の者が眺めていると、八雲は数本のソーセージを載せて嬉しそうに走ってシートに戻ってきた。
それだけでは栄養が偏ってしまうので、野菜も食べさせなければと考えるも、今は楽しそうにしている赤ん坊らをただ見守る。
「ま！」
「ナウ！」
お互いの間にソーセージを置いた八雲はポケットから子ども用のフォークを取り出し、ニコニコと笑ったまま相手に渡す。
受け取ったベアトリーチェも同じように笑顔を見せており、赤ん坊二人が仲睦まじくしている光景が非常に眩しく映る。
風花などは冒しがたい神聖な空間だとしてうっとりした目で眺めているが、再びお腹のポケットをゴソゴソと漁って八雲が取り出した物を見てしばし固まった。
「うー」
「ウー」
彼が新たに取り出したそれは二つのビールジョッキ。形状こそそっくりだが大きさは中ジョッキサイズで、さらに言えば材質もガラスではなく透明な樹脂製と思われる。
赤ん坊が持てばサイズ比で大ジョッキ並みになるが、なんでそんなものをと思っている間に、八雲が小さな瓶ビールを取り出して器用に開けるとベアトリーチェの持つジョッキに注ぎ始めた。
なんで瓶ビールなのに王冠ではなく捻って開けるキャップタイプ

なのかとツッコミたいが、赤ん坊がそんなものを飲んで良いはずがないので、交代してベアトリーチェが八雲のジョッキに注いでいるうちに雪子が取り上げに向かう。
だが、近くまで行った雪子はしばらく二人を見ると、そのまま取り上げもせずに戻ってきた。
このままでは二人がビールを飲んでしまうと焦った他の者が雪子に戻ってきた理由を聞けば、
「あれ、バター風味の子どもビールみたい」
と一切アルコールの入っていないジュースである事を告げてきた。
なんでそんなものを八雲が知っているのかは分からないが、子どもが大人の真似をしてお酒気分を味わおうとしているなら可愛いものだ。
男子たちを処刑し終えて戻ってきた美鶴も事情を聞き、食事を再開しながら二人を見ていれば、しっかりと泡の層が出来たビールを満足そうに持った二人がジョッキを掲げて乾杯をする。
「ちゃーず！」
「チャーズ！」
おそらく〝チアーズ〟と言っていると思われる二人は子どもビールを途中まで飲むと、フォークを使って可愛らしい仕草でソーセージを食べている。
焼きたてで熱くなっているため、火傷してしまわないか心配ではあるが、二人は美味しそうにソーセージとビールを交互に口に運びながら話をしているので、しばらくは好きにさせて問題はなさそうだった。
そんな二人を眺めていた七歌は千枝に肉焼きを代わって貰うと、自分もさらにいくつかの料理を載せて美鶴の向かいの席に腰を下ろす。
「レジャーシート広げて二人で宴会始めちゃったね。ソーセージに子どもビールってのが何とも子どもらしくないけど」
「まぁ、大人しくしてくれている分には構わんさ。それより、八雲とベアトリーチェが分離した事について話そう。ベルベットルームの住人から見て、八雲たちの状態で何か気付いた事はあるか？」

湊が用意していたのは本場ドイツのソーセージ数種。中には胡椒の利いた辛いものもあるのだが、バター風味の甘い子どもビールを飲んでいる二人にはいいつまみのようだ。
それを食べている間は二人も大人しくしており、さらに椅子から落ちる心配もないので周りで見ていれば問題ない。
故に、今は八雲とベアトリーチェが分かれた理由について考えようと、美鶴がベルベットルームの住人に尋ねれば、上品に焼きトウモロコシを食べていたエリザベスが顔をあげて答えた。
「ええ、まぁ。分離というより分裂と言った方が正しいのですが、その理由も概ね把握しております」
「その理由というのは？」
「回復量を倍にするためでございます」
分離と分裂は確かに言葉としては似ているが別の意味を持つ。
だが、それがどう八雲たちに当てはまるのか分からず、回復量を倍にするという意味も含めてさらに説明を聞く。
「八雲様は退行しておりますが、別に大人だった八雲様の肉体が消滅した訳ではありません。肉体を分解され小さな八雲様に作り替えられているだけなのです」
「待ってくれ。それが本当であれば、あのサイズで本来の重量のままという事になるんじゃないのか？」
「はい。だからこそ、八雲様は余分な分をエネルギー状態で保持していたようです。ただ、子どもの食べる量や寝る分では回復が遅いので、八雲様は余っている分をベアトリーチェ様に渡して二倍速で行こうと思われたのかと」
湊と八雲では身長だけでも倍以上異なる。体重で言えば七倍以上湊の方が重いので、湊の身体を分解して八雲サイズにすると漬け物石かと言いたくなる赤ん坊が出来る事になってしまう。
しかし、八雲を抱き上げた事のある美鶴は、八雲の体重が平均的な赤ん坊の軽さであったことを知っている。
故に、ただ分解して再構築したのではあり得ないと考えたのだが、どうやら湊から八雲に退行するときには複雑な処理が行なわれてい

るらしく、八雲の肉体構築に不要な分はエネルギーのまま保持されているとのこと。
そして、今回のベアトリーチェについては、身体を倍にすれば食事量も睡眠も倍になるだろうと、その保持していたエネルギーを使って肉体を構築して具現化したらしい。
判断したのが元の湊なのか、それともそこで宴会をしている赤ん坊なのかは分からないが、元の湊は仕事の失敗で上半身と下半身がさよならした状態から蘇生された事もあるらしいので、出血を伴わない分離ならいくらか健全かと美鶴は無理矢理に納得する事にした。
エリザベスのおかげで彼が二人に分かれた理由を理解したメンバーらは、彼らの言語で談笑する赤ん坊を眺めながら食事を再開する。
ベアトリーチェについては以前湊から反転して出てきたときもあまり言葉を交わせなかった。
なので、赤ん坊になった彼女とも一歩ずつ関係を築いてゆくしかないと、八十神高校側のメンバーにも伝えれば、処刑を免れた稀少な男子である天田と善と共に食事をしていた玲が、お皿に肉やサラダを載せてレジャーシートへ向かってゆく。
「はーちゃん、わたしもお話していいかな？」
「ま！」
「ビーチェ！」
「わぁ、自分のお名前言えるんだ。ビーチェちゃんっていうの？じゃあ、ビーちゃんって呼ぶね。わたしは玲だよ。よろしくね」
日本人の感覚で言えばベアトと略したくなるが、イタリアなどでのベアトリーチェの一般的な略称はビーチェとなる。
故に、ベアトリーチェが舌っ足らずに自己紹介をすれば、玲は二人の前に持ってきた料理を置きながら、とってもお利口さんだねと頭を撫でた。
八雲にしか懐いていなかったはずの彼女は、玲に頭を撫でられて不思議そうにしていたが、八雲が笑って拍手をすると褒められていると分かったのか嬉しそうにしている。

本来湊以外の他人に一切興味のない彼女に受け入れられるのは一種の才能と言って良い。
玲自身も赤ん坊の世話が好きなようなので、ベアトリーチェが他の者に懐くまで玲に手伝って貰った方がいいだろう。
赤ん坊たちと一緒にシートに座った玲が善たちを手招きで呼んでいるのを見ながら、美鶴は世話は大変そうだが事態は好転していると考えようと他の者に話す。
「有里の回復速度が上がった事をとりあえずは喜ぼう。二人の世話に関しては全員出来る限り協力してくれ。彼が戻ってきた方が安全性がまるで違うからな」
通常攻撃でＦ．Ｏ．Ｅを倒してくれる戦力は貴重だ。
綾時もペルソナを使えば簡単に倒せるようだが、ペルソナの連続使用は継戦能力を考えると避けたい。
湊がいない間は綾時に強敵を任せる事にもなってしまうので、負担の分散を考えると湊の復活は急務。
故に、ここにいた者たちだけではなく、処刑から復活した男子たちが戻ってくると、七歌から八雲とベアトリーチェが分裂した理由を伝えて二人の世話への協力を約束させた。
まぁ、彼らは八雲に〝使えない子分たち〟と見られている事が判明しているのだが、そのとき本人たちは美鶴の処刑から逃げていて話を聞いていない。
よって、彼らはＢＢＱへの参加を許可して貰った恩を感じたままなので、全員がすんなりと頷いて協力できる事があれば任せろと言ってくれた。
「ま、こんなウマイもん食わせて貰ったしな。一宿一飯の恩を忘れない男よ、オレっちは」
「そだな。けど、明日からまた祭りメシかぁ……。嫌いじゃねーけど、こういうの食べちまうと普通の食事が恋しくなってくるよな」
今回の夕食も普段の食事とは異なるが、ソース味の濃い味付けのものばかり食べていた者たちにすれば、丁寧に下拵えされた食事は何にも勝るご馳走だった。

肉のタレやサラダのドレッシングも複数用意されており、白ご飯がいくらでも食べられると思えるほどだ。
そんなものを食べてしまえば、こちらの世界の食事に戻るのは辛いと花村が肩を落とせば、鳴上や荒垣が材料さえあればと話す。
「焼き魚定食とかミックスフライ定食とか、そういうのも食べられると良いんだが材料がな」
「ああ。出来ても野菜炒めくらいだ。それも焼きそば用の野菜を流用したな」
「なんもねぇよりマシっすよ。流石に毎日ソース味じゃ参っちまうし」
一応、ホットドッグなどもあるがそれらは朝食か昼食用で、晩ご飯にはパンではなくもっとがっつりしたものを食べたくなる。
仮に焼きそばの野菜などを使った野菜炒めであっても、現状で作れるものがそれしかないなら、あるだけでもありがたいと完二が言えば、話を聞いていた女子たちも揃って頷いていた。
すると、玲や善にも子どもビールを渡して一緒に食べていた八雲も会話が聞こえていたらしく、一体何の話かと玲に尋ねる。
「ま？」
「えっとね。皆、学校のゴハンだけだと飽きちゃうんだって。お魚とかお味噌汁とかが食べたくなるんだって」
「おー」
彼はこの世界に来たばかり。食事も玲から貰ったドーナッツやアメリカンドッグしか食べていないので、この世界の食事事情などは把握していない。
しかし、他の者たちが悩んでいる事は理解したのか、それは難しい問題だなと言いたげに頷いていた。
本当に理解しているのかは分からない。一般的な赤ん坊より遙かに知能は高いようだが、それでも言葉の意味を理解出来ていない事もあるので、やはり赤ん坊は赤ん坊でしかないのだろう。
ただ、今の八雲たちの仕事は沢山食べて沢山休む事だ。二人がそれをしてくれれば湊に戻る期間は格段に早くなる。

八雲たちが湊に戻りさえすれば通販も再開できるはずなので、クマとコロマルを呼んで玲やベアトリーチェと一緒に話をしている赤ん坊に今は小さな期待をするのみであった。
そうして、湊とは別の拠点を利用していた者たちは、随分と久しぶりに感じるまともな食事を存分に堪能すると、赤ん坊は二人とも女子拠点で預かる事になり、アイギスと玲が二人の歯を磨いてやってからそれぞれの拠点で休んだ。

――ヤソガミコウコウ
翌朝、拠点で目を覚ましたアイギスは、抱いて寝ていた八雲がいないことに気付いて一気に覚醒を果たした。
部屋の中を見渡しても彼の姿はなく、オマケにベアトリーチェと玲とあいかもいない。
朝早くに目を覚ました赤ん坊らを二人が連れて行っているのなら問題はないが、もしも二人だけで出て行ったなら心配だ。
書き置きも何もないので、すぐに探しに行こうとアイギスが身支度をしていれば他の者たちも起きだし、そういう事なら全員で探そうと他の者もすぐに身支度を完了させて拠点を出た。
そして、結果から言えば風花の力で赤ん坊たちの反応はすぐに見つかった。拠点のある実習棟ではなく教室棟の一階、現実の学校にはない一年四組の教室に玲とあいかだけなくクマ、善、コロマルも一緒にいた。
「えっと、〝まんぷく亭〟ですか？」
ただし、アイギスたちが到着したそこは、昨日の夜まで間違いなく普通の教室だったはずが、壁と入口が和テイストになり、〝まんぷく亭〟と書かれた暖簾まで出されていた。
見た感じでは普通の定食屋のようだが、表に出された小さなホワイトボードには朝、昼、晩でそれぞれ二時間ほどずつの営業時間が書かれている。
ラストオーダーは閉店三十分前なので、ホワイトボードと一緒に置かれた時計を見るとまだ開店から三十分ほどなので一時間の余裕が

ある。
「とりあえず入ってみようよ。玲ちゃんたちも中にいるみたいだし」
「そうですね。では、ごめんくださーい」
七歌に言われてアイギスが先導して横引きの扉を開けると全員で中に入る。
中は現実世界に存在する定食屋のように、いくつかのテーブル席とカウンター席が並ぶ落ち着いた空間が広がっていた。
『いらっしゃいませー！』
そして、入店してすぐに元気な声で挨拶が聞こえてくる。
カウンター席の奥にある厨房へと続くと思われる出入口の方を見れば、黒い甚平を着て頭に三角巾を巻いた玲とクマが出迎えてくれた。
「わぁ、皆いらっしゃーい。来てくれてありがとー！」
「まんぷく亭にようこそクマ！」
流石にクマが着ぐるみの上から着られるサイズはなかったようで、クマは黒い前掛けと三角巾を巻いただけだが、しっかりと制服まで用意したからには真面目に商売するつもりなのだろう。
ただ、やはりどうしてこんな店が一晩のうちに出来たのか分からないので、姿の見えない赤ん坊たちの居場所とこの店が出来た経緯も含めてアイギスは聞き返した。
「お二人とも、ここは一体？　それに八雲さんとベアトリーチェさんは？」
「ここは皆に美味しいご飯を食べてもらうお店だよ！　はーちゃんが一緒におみせ屋さんしよって言ってくれてね。ビーちゃんとコロちゃんも善とあいかちゃんと一緒に厨房にいるよ！」
二人が無事ならば良かったとホッと息を吐く。
ただ、自分に相談もなくこっそりとおみせ屋さんなるものを始めようとした理由が知りたい。
そう思ってアイギスが奥の厨房へ向かおうとすると、クマが両手を広げて通せんぼして彼女を止めた。
「おっとぉ、お客様の厨房への立ち入りはご遠慮願うクマ！　ささ、

立ってないでお席へご案内するクマよ」
今のクマたちは店員でアイギスたちは客だ。ここは彼らが自分たちでやろうと思って作ったお店なので、そこで勝手な事をしてはまずいかとアイギスは渋々従って席に着く。
流石に全員で同じテーブルに座る事は出来ないので、アイギス・ラビリス・チドリ、美鶴・七歌・ゆかり・風花、千枝・雪子・りせ・直斗で三つのテーブルに分かれる。
すると、クマが各テーブルに二つずつ分厚いメニューを置いていき、入れ替わるようにやってきた玲がおしぼりとお水を置いてゆく。
店の内装だけでなくメニューも写真付きの本格派で、値段は三百円から五百円と破格な事もあり思わず悩んでしまう。
定食屋と思いきやトーストとサラダとスープに選べる卵料理一品のセットなどもあり、直斗はこれにしようと決めつつ他の者が選ぶ間に、素人がプロデュースしたとは思えないほど凝っている店について尋ねた。
「随分と本格的ですね。メニューとかは夜のうちに作っていたんですか？」
「ちがうよ。えっとね、ここは不安定な世界だからはーちゃんとかだと世界に浸食して部屋の一部として色々と作れるんだって。あ、勿論、ご飯とかは無理だよ？」
玲は素直な気持ちからすごいよねと八雲たちを褒めているが、話を聞いた他の者たちは世界に浸食するという不穏な単語に表情を強張らせる。
通販の発送センターも一人で作ったとは思えない出来だったが、そちらも同様に世界の一部を作り替えたのだとすれば、湊にとってこの世界で出来ない事などないのではと思ってしまう。
勿論、そうであればダンジョンを一本道にしたり、元の世界に帰る扉を開放しているはずなので、彼にも出来ない事はあるのだろうが、赤ん坊になっても教室を作り替える事が出来るというのは素直に驚きだ。
そんな事を思いつつ、全員が注文を決めるとクマと玲に伝えて料理

がくるのを待った。
昨夜に続いてまともな食事が取れそうだと分かった一同の表情は明るい。待っている間もリラックスした状態で雑談を交わし、どれくらいで運ばれてくるのだろうかと待っていると、入口の扉が開いてコロマルと一緒にメティスたちが入ってきた。
「あ、姉さんたちも来ていたんですね。おはようございます」
「何ここ……てか、犬が案内するって……」
「ワン！」
どうやら彼は途中で抜け出してメティスたちを呼びに行っていたらしい。
お客獲得に余念がない犬に対し、マリーが変な犬だと訝しんでいるが、彼女たちとベルベットルームの住人ら三人も席に着けば、そちらでクマと玲が応対し、代わりに厨房の方から伝票の挟まったバインダーを持ったベアトリーチェがやって来て各テーブルの横にバインダーを引っかけて回る。
「マウ」
「あ、伝票持ってきてくれたんだ。お手伝いして偉いね」
「イー」
「あ、女将はこの店で二番目にエラいクマよ。一番は師匠クマ」
雪子がベアトリーチェを褒めれば、彼女は何やら不満そうな顔をした。
どうして不満そうなのかと不思議に思っていれば、クマが彼女は手伝いではなく店で二番目に偉い人なのだと教えてきた。
つまり、彼女も立派な従業員であり、末端の店員たちに指示を出す管理職でもあったのだ。
勘違いに気付いた雪子がすぐ謝罪すれば、ベアトリーチェは別に良いけどとすました顔でカウンターに入っていき、そこにある台に上って店全体を眺める。
副店長ポジションの人間がそんなところで暇そうにしてて良いのかという疑問もあるが、メティスたちの注文を厨房へと通したクマが先に頼んでいた七歌たちの料理を持ってきたため、自分の前に置かれ

た料理を見た者たちは細かい事を考えるのを放棄した。
「ほわぁ、ホンマにお店の料理やな。クマさんたちすごいわ」
「八雲君たちはおみせ屋さんってごっこ遊びの感覚なのかもしれないけど、私らにとってはこの価格でちゃんとしたご飯食べられてありがたいよね」
ラビリスとゆかりが笑いあって話し、他の者たちも同意するように頷いてから「いただきます」と挨拶をして食べ始める。
頼んだ物は全員異なるが、どれも出来たてで美味しそうな香りがしており、今後はちゃんと開店時間を把握してここで食事をしようと全員の気持ちが一つになる。
朝からステーキ丼と味噌汁のセットを食べている千枝も、女子に嬉しいニンニク抜きの味付けなこともあって、これを作った人は天才だと感謝しながら丼と味噌汁のナメコ汁を味わった。
だが、そうやって彼女たちが食事をしていると、特等席から店の中を眺めていたベアトリーチェが急に険しい目付きになり、厨房の入口の方へ向くと声をあげた。
「ヤーモ！」
「ままう？」
「ブータン、メ！」
「め？　ぶーたん！」
彼女が声をあげると厨房から八雲がトテトテと歩いて出てきた。彼は他の従業員と異なり、若旦那と刺繍された黒い三角巾を巻いている。
それが店主の証なのかは分からないが、ベアトリーチェが何かを報告すると八雲は怒った様子で厨房に戻っていった。
アイギスたち姉妹以外は全員彼らの会話の内容は分からないが、〝ぶーたん〟がクマの事だというのは分かる。
また彼が何かをしたのだろうと気にせず食事を続けていると、八雲に連れられ落ち込んだ様子のクマが小鉢を一つ持って現われた。
「千枝ちゃん、ごめんなさいクマ……」
「あう……」

言いながら千枝の許までやって来ると頭を下げる二人。
赤ん坊に頭を下げさせていると罪悪感が半端ではないので、理由も分からないし、すぐに顔をあげてくれと返す。
「え、ゴメンって何のこと？　八雲君まで一緒にどうしたの？」
「実は味噌汁をクマが間違えてしまったのよ。本当は白だしじゃなくて赤だしだったんだクマ」
「うーな」
「だから、これはミスのお詫びクマ。デザートに食べてくれると嬉しいクマよ」
「あ、うん。別に気にしてないけどありがと」
言われて気付いたが、確かにメニューのナメコ汁は赤だしだった。
しかし、千枝が受け取ったセットの味噌汁は白だしのナメコ汁。
別にこれも美味しかったので気にしていないが、クマが見せてきたわらび餅が美味しそうだったので、千枝は素直に謝罪と共にそれを受け取る事にした。
厨房へと戻ってゆく二人を見送りながら食事を続けていた者たちは、先ほどのやり取りからごっこ遊びではなくプロ意識を感じたねと話す。
「すごくちゃんとしてるね。クマも普段みたいにふざけてないし、ミスがないかも八雲君とベアトリーチェちゃんがしっかり見てるみたい」
「でも、これ誰が作ってるんだろう？　あいかちゃんと善君が二人でやってるのかな？」
「そういう事はクマ君か玲さんに聞けば教えてくれるのでは？」
先に注文した七歌たちの分に加えて、後からきたメティスたちの分もすぐに完成して運ばれてきていた。
豚カツなどは揚げたてて湯気が見えるほどであり、どう考えても作り置きの線はない。
となると、誰かしらが作っているはずなのだが、それが可能そうなメンバーがあいかしかいないものの、仕事量を考えると今度は完成までの早さの説明がつかない。

そうするとやはり最低でも二人は調理を担当しているはずなので、一体誰がどういった役割分担で仕事をしているのか気になり、美鶴がテーブルの呼び出しボタンを押した。
「はいはい、お待たせしたクマ」
「クマ、一つ聞きたいんだが調理は誰が担当しているんだ？」
「調理？　ご飯は玲ちゃんで、お味噌汁はクマが入れてるクマよ。他は善とあいかちゃんが切ったり盛り付けたりしてるクマ」
ちなみに、ご飯と味噌汁はおかわり自由。トーストセットの人はコーヒーか紅茶がおかわり自由になっている。
なんとも嬉しいサービスではあるが、今はそれは関係なく、クマの言葉に引っかかる物を感じた直斗が言い回しがおかしいことを指摘した。
「いや、待ってください。今の言い方では善君たちも作っていないように聞こえます。まさか、八雲君たちに作らせているのですか？」
「そんなわけないクマ！　二人はレジとかテーブル拭いたりとか色々してるクマよ」
「じゃあ、善君たちが作ってるの？」
「二人にそんなスキルないクマ。おかずを作ったのは師匠よ」
クマの反論に今度はりせが尋ねれば、善だけでなくあいかにもプロ級の料理スキルはないとクマは断言する。
いくら中華料理屋の娘と言っても、彼女はあくまで手伝いをしているだけで、料理は全て父親が一人で作っていた。
手順くらいは見ていて覚えていても、流石に見ているだけで再現できるほど彼女は天才ではない。
色々なバイトを経験した事で多芸ではあるが、スキルのない彼女が料理を作れるはずもなく、実際に作ったのは湊だと話せばアイギスはすぐに八雲を呼ぶようクマに伝えた。
普段は優しい雰囲気のアイギスが僅かに怒った様子を見せた事で、クマは敬礼をするなり走って厨房に戻ってゆく。
そして少しすれば、玲に抱っこされた状態で八雲がテーブルまでやって来た。

「アイちゃん、はーちゃんに用事なの？」
「はい。玲さんたちもですが、八雲さんに危ない事はさせないでください。今の八雲さんは赤ん坊です。大人の時と違って、可能であっても火や包丁を使わせるのはよくありません」
「え？　はーちゃん、そんなのしてないよ？　危ないから切るのとかは善とあいかちゃんがしてるもん」
「どういう事ですか？　クマさんは作ったのは八雲さんだと……」
子どもに火や刃物の扱いを任せるほど玲も馬鹿ではない。
厨房には善とあいかもいるので、八雲とベアトリーチェが危ない事をしていないかは常に注意して見ている。
しかし、それが本当だとするとクマの発言と矛盾が生じることになるため、一体何が本当なのだろうかとアイギスが悩んでいれば、何かを理解したらしい八雲がお腹のポケットを漁って、そこから揚げたての天ぷらが載ったバットを取り出してきた。
「あ、なるほど、料理は全部兄さんが作ってマフラーに収納していたものなんですね。中は時間凍結されていますから、出来たてのまま入れておいたなら納得です」
天ぷらを見せ終わるとすぐに八雲は仕舞い直してしまったが、メティスの説明を聞いて他の者たちはようやく理解する事が出来た。
つまり、この店の料理は湊が保存食として保管していた料理を、在庫のある限り放出して提供しているという事だ。
この店で実際に作っているのはご飯と味噌汁、そしてトーストくらいなもので、味噌汁だってホテルの朝食バイキングにあるような、お椀に具材を入れて決まっただしを注ぐ簡単仕様。
そして、八雲が取り出したものを皿に盛り付けるのが善たちの仕事で、これならば八雲たちが危険な事をする心配もない。
店のからくりを理解したアイギスたちが思わず安堵の息を吐けば、話しているうちにラストオーダーの時間が来たようで、八雲を抱っこしたまま玲が全員に追加注文がないかを聞いて回った。
誰からも注文がないと分かると二人は特等席にいたベアトリーチェを連れて厨房に引っ込み、少ししてからクマや善にあいかといっ

たメンバーと一緒にお盆に料理を載せて戻ってきた。
どうやらラストオーダーが終わると彼らもご飯を食べるらしく、ベアトリーチェは玲に、八雲はあいかに食べさせて貰いながら焼き魚定食をメインとした和食を食べている。
「すみません、あいかさん。八雲さんのお世話を任せてしまって」
「気にしないで。ここ、従業員はまかない無料。給料は売り上げの二割と好待遇」
急に誘われたであろうあいかに、アイギスは八雲が色々と迷惑をかけて申し訳ないと謝罪するも、独特なイントネーションで話す彼女は気にしてないと返した。
ちなみに給料は善と玲も二割ずつであり、コロマルとクマは一割ずつで残りは八雲たちが貰える仕組みになっている。
コロマルとクマだけ一割しか貰えない理由は、コロマルはそも自分は金を使わないからと辞退したためであり、クマはまかないにデザートを一品付けて欲しいと要望したためである。
生姜焼き定食を食べ終えたクマは幸せそうに満面の笑みを浮かべ、あまあま地獄に置いていない抹茶生どら焼きを熱い緑茶と共に味わっており、そこに給料面での不満は一切感じられない。
この店は全員の食事事情を心配して八雲が始めようと言い出したらしいが、一緒にお店をやろうと集まって始めた店は、メンバー全員が和気藹々としていて非常に仲が良さそうに見えた。
ベアトリーチェもその一団には馴染んでいる様子なので、これならば彼女が他の者と関わってくれるようになるのも時間の問題だろう。
ベアトリーチェが馴染めるかという悩みも解決の兆しが見え、朝から満足な食事を取る事が出来た一同はベアトリーチェのレジで支払いを済ますと大満足で店を後にしたのだった。
余談だが、女子たちが食事をしていた頃、男子たちは屋上のフードコートで昨夜のＢＢＱは良かったよなと溜息を吐きながら焼きそばやお好み焼きを食べていたという。

第二百七十七話　この世界について

――ごーこんきっさ・二次会

朝食を食べ終えてから一休みして集合したメンバーたちは、前日のダンジョン探索で得た情報を共有するためのミーティングを行なった。

主な内容は敵シャドウの攻撃パターンと弱点属性についてだったが、流石にこれだけの人数がいれば自分の戦った感想から有効な攻略法も情報として寄せられ、メンバー全体でそれぞれとの戦闘時の動きをシミュレーション出来た。

もっとも、第二フロアとも言える場所ではＦ．Ｏ．Ｅには遭遇していない。

昨日は、ごーこんきっさ内では三つ目質問部屋に到着し、そこで八雲が質問に答えるとそのまま校舎へ帰ってきていたため、Ｆ．Ｏ．Ｅに遭遇するところまで進まなかったのだ。

前日の疲れが然程残っていない今日はこのまま探索に向かうので、きっと新たなＦ．Ｏ．Ｅに遭遇すると思われる。

一つ目のダンジョンを参考に考えれば、第一フロアにいたＦ．Ｏ．Ｅの強化種か変異種だろう。

基本パターンが一緒で力や硬さのステータスが上がっているならばやりようもある。

しかし、どういった相手かは会ってみるまで分からないので、各自十分な注意をしながらダンジョンへ行く事になれば、前回辿り着いた第二フロアに着いたとき、メンバーらは自分たちに同行している赤ん坊のせいで少し気が抜けていた。

「うっうーー！」

「ウー！」

いつも通り三隊に分かれたメンバーで組まれた隊列の中央。そこを歩く八雲とベアトリーチェは、トレーニングで使うゴムチューブで大きな輪っかを作り、一列に並んで電車ごっこしながら歩いていた。

人数が増えた事で二人とも留守番させようという話も出たが、人数

が増えたことで赤ん坊たちの総合的な戦闘力は上がっているらしく、不測の事態に備えるのなら連れて行くべきとマーガレットに言われた。
ベアトリーチェの戦闘力は分からないものの、八雲の機転や彼の持っている湊のマフラーに眠るアイテムは非常に便利で、様々な状況を打開する可能性を秘めている。
一応、アイギスは湊に渡されたリストバンドで自由に物を取り出せるのだが、彼女は中にどんなものが入っているのか把握しておらず、さらに言えば武器の貸し出ししか許可を得ていないので他の物を借りるつもりがない。
湊は気にしないのだろうが、本人がそう決めている以上はアイギスでは八雲のポケットから物を出せないので、八雲を同行させた上で状況に応じて事情を話して力を借りる必要があった。
故に、赤ん坊たちを同行させる事は全員が渋々認めているのだが、流石に危険なダンジョンで皆が気を張っている中、暢気に電車ごっこされては気が緩んでしまう。
今は鳴上隊が前線に立ち、メティス隊が補助しているが、八雲たちのせいで気が抜けて彼らが怪我をしては大変なので、休憩中の七歌隊のメンバーである真田が赤ん坊らを注意した。
「おい、お前たち。ベルベットルームのやつらが戦力になるからと同行は認めているが、ここは危険のあるダンジョンなんだ。もう少し大人しくしていろ」
「明彦、赤ん坊相手にそんな言い方をする必要はないだろう。注意するならもっと優しく諭せば二人も分かってくれる」
「そうやってお前たちが甘やかすから二人もつけ上がるんだろうが。赤ん坊なら大人しく帯で抱っこなりおんぶなりされていれば良いんだ」
今はまだ二人で遊んでいるだけだが、八雲は前回クマと一緒に勝手に走り出した前科がある。
子どもは気分屋なのでいつ同じ事が起きるか分からない以上、ダンジョン内では放し飼いのように自由にさせておくのではなく、手の空

いている者が帯を使って抱っこなりおんぶなりをさせておいた方が安心だ。
厳しい口調で二人を注意した真田を美鶴が諌めても、自分が間違った事を言ったと思っていない真田はそう返し、希望者がいればそいつが赤ん坊を捕獲しておくよう告げる。
「みぃ……」
「イー！」
「フン……それで、誰がこいつらを捕まえておくんだ？」
楽しく電車ごっこしていた二人は、八雲はとても悲しそうな顔で立ち止まり、ベアトリーチェは対照的に怒った表情で抗議しながら真田を睨む。
赤ん坊にそんな顔で見られても一切怖くない真田は二人を無視し、改めて誰が二人を捕獲しておくか問うた。
消去法で行くならのならば、ペルソナを持っておらず戦力としては他の者に数歩譲る善と玲が適任だろう。
丁度二人おり、彼らは八雲たちと一緒にお店を始めたので信頼関係も生まれつつある。
何より、玲が自分よりも弱い立場にある赤ん坊を強く気に掛けているので、誰も名乗りを上げなければ自分から名乗りを上げるだろうと思われたとき、ゴムチューブをお腹のポケットに仕舞った八雲が両手を横に広げてへっぴり腰で立ち始めた。
「う、うわわうー」
腰が引けて情けない声と表情でいる彼に何か既視感を覚える。
急にどうしたんだろうと思ってさらに見ていると、笑いを堪えた様子のベアトリーチェが少し離れたところまで移動し、機械の音のようなものを口ずさみながら地面を指さして八雲へと近付いてゆく。
「ヴヴヴン」
「わ、わばー」
ベアトリーチェが近付いてゆくにつれて八雲は焦った表情になる。
そこで見ている者たちは気付いた。これは昨日のトラベレーターの一件を真似ているのだと。

少しずつベアトリーチェとの距離が縮まり、ついにゴールが来てしまった瞬間、
「ぴゃ、ぴゃー!?」
八雲は大袈裟に跳んで地面を転がって見せた。
随分と派手に転がったが大丈夫だろうかと一部の者が心配するも、すぐに立ち上がると彼はベアトリーチェと一緒に大笑いしている。
確かに八雲が如意棒を使って助けなければ同じ結末を迎えていただろうが、赤ん坊にそんな情けない姿として認識されていたと思うと他の者は少し恥ずかしくなった。
だが、さらに八雲はネタを持っているようで、先ほどのへっぴり腰と情けない表情を作ると、今度はシャドーボクシングのような手の動きを始めた。
「ぽ、ぽぽぅっ」
「ヤーモ、ウププ！」
恐らく真田のモノマネと思われるネタに、ベアトリーチェはお腹を押さえて地面を転がるほど大ウケする。
分裂する前は記憶を共有していたからこそ、そのときいなかったベアトリーチェにもネタが通じるようだが、他の者たちはこれは笑ってはいけないんだろうなと必死に我慢した。
しかし、赤ん坊が予想外にクオリティの高いネタを見せてきたことで、耐えられなくなった雪子がついに噴き出してしまう。
「ブフッ、ふふ、アハハハハ！　や、八雲君モノマネ上手すぎっ、赤ちゃんなのにクオリティ高いし！」
「ぽ、ぽぽぅー！」
「ククク、アハハハっ、やめて、お腹痛いっ」
笑っている雪子の前までやって来てへっぴり腰シャドーをする八雲に、雪子はお腹が痛くなるからやめてとギブアップ宣言をする。
そんな、大和撫子な見た目の彼女の意外な一面に、月光館学園側の者たちはただただ驚いているが、八雲が明らかに特定の個人を真似している事で、真似された側の人間は眉間に皺を寄せて口を開いた。
「お前ら尻を出せ。そうやって大人を馬鹿にしたやつは、尻を叩いて

躾けるのが昔からの仕来りだからな」
「みー！」
「ミー！」
自分を馬鹿にしてきた赤ん坊らに真田が静かに近付いてゆく。
ある程度は手加減するだろうが、真田はそれなりの威力で赤ん坊らの桃のような臀部を叩く事だろう。
自分たちのお尻が狙われていると理解した赤ん坊らは、すぐに助けを求めてアイギスと玲の許まで駆けてゆく。
走ってきた二人をアイギスたちも抱き上げ、二人のお尻の辺りに手を当てながら真田から庇う。
「真田さんやめてください。八雲さんたちが怯えています」
「そうだよアキちゃん。赤ちゃんのお尻はやわらかいんだよ？　たたいたら真っ赤になっちゃう」
「これは日本に古くから伝わる躾方だ。甘やかしていては本人たちのためにもならない。分かったら、そいつらの尻をこちらに向けておけ」
これは立派な躾だと言いながら真田はアイギスたちに赤ん坊を押さえておくように伝える。
だが、そんな事をさせるつもりがない二人はしっかりと赤ん坊を抱きしめ、真田から八雲たちを庇って強くにらみ返した。
赤ん坊の悪ふざけ一つでムキになっている幼馴染みに荒垣などは嘆息し、いい加減見ていられなくなった美鶴も両者の間に割って入って真田を諌める。
「明彦、私の前で赤ん坊に暴力を振るうのを許すと思うか？」
「お嬢様の家では知らないが、悪い事をした赤ん坊の尻を叩くのは全国共通の躾だ」
「元はと言えばお前が楽しく遊んでいる八雲らに難癖をつけたんだろう」
確かに二人は遊んでいて味方の緊張感を弛めてしまっていたかもしれない。
けれど、メンバーの中にはそんな二人を絶対に守らねばと決意を固

くしている者もおり、全体のモチベーションとしてはむしろ高まっていたと言える。
前線の仕事を終えて交代した休憩中の者たちも、無邪気な赤ん坊の姿を見ながら時々コミュニケーションを取って癒やされてもいた。
だというのに、真田が一人で緊張感が保てないと文句を言い出したのが始まりなので、先に始めたのはお前だろうと美鶴は厳しい口調で彼を注意した。
一般人なら美鶴からそのように言われれば引くが。真田も付き合いの長い相手なので引かずに反論してゆく。
そうして赤ん坊らを放って二人が口論を始めると、これじゃあ進めないなと判断した鳴上が、全体に向かって休憩を提案した。
「ここらで一度休憩を取ろう。りせ、敵への警戒を任せていいか？」
《ＯＫ、わたしと風花ちゃんで見てるから先輩たちはしっかり休んでて！》
今、メンバーたちがいるのは見晴らしのいい大部屋だ。
部屋の入口は三箇所あるので、強敵が現われても逃げる事も可能である。
周辺の警戒はりせたちがしてくれるため、武器を近くに置いて全員が腰を下ろすと、校舎から持ってきていた水やカロリーフレンドというエネルギー食品のクッキーを食べながら休む。
勿論、休憩中もアイギスや玲は赤ん坊たちを膝の上に座らせて守っており、反対側で荒垣たちと座っている真田は不機嫌そうにパックゼリーを飲んでいた。
別に真田も赤ん坊憎しで責めていた訳ではなく、単純に好き勝手されては危ないし気が散るから誰かが抱いておけと言っていただけで、他の者も分かってはいるので話が終われば何も言っていない。
分かっていないのはお尻を狙われていた赤ん坊たちだけに違いなく、アイギスらの膝の上に座ってお腹のポケットから出したオニギリを食べている二人を眺めながら、この世界について考えていた七歌が口を開いた。
「けど、玲ちゃんたちをここに閉じ込めた敵の狙いってなんなんだろ

うね。私たちまで呼んだって事は、何かしらさせたい事があるんだろうけど」
「まぁ、こんだけ自由にさせてるんだから、別に憎いとかって理由で閉じ込めたとは思えねえよな」
言われて考えてみた順平だけでなく、他の者たちも自分たちがここまで自由に行動出来ている事には疑問を持っていた。
よくある何かの生贄にするというのであれば、抵抗されないよう牢屋などで拘束していた方が楽なのは確実だ。
しかし、現状、七歌たちは自由に校舎内を散策し、さらには元の世界に繋がっているであろう扉の鍵を外すため、こんなダンジョンの奥までやってきている。
ただ文化祭を楽しんで貰おうというエンターテイナーが仕組んだ事なら馬鹿かと言いたくもなるが、ダンジョンのみとはいえシャドウがいるならそうではないだろう。
結局、今の段階ではこの世界に善と玲を閉じ込めていただけでなく、追加で七歌と鳴上たちを呼んだ事にも意味があるのだろうと考えるしかない。
敵の狙いと目的がいまいちハッキリせず、こういった考察に向く探偵である直斗も悩んでいれば、オニギリを食べ終えた赤ん坊らがコロマルと一緒に直斗の許までやって来て上着を引っ張って呼んだ。
「まー」
「ん？　どうしたんですか？」
「うーま」
この赤ん坊たちは下手をすると大人以上に状況を理解している節がある。
それは湊のように部屋を作り替える事が可能という点から見ても間違いと言い切れない。
だとすると、彼らが何かを伝えようとするなら、きっと重要な意味があるに違いない。
そう思って直斗が彼らを見れば、最初に八雲がコロマルを抱きしめて捕まえて見せた。

これだけなら犬と赤ん坊の可愛らしい触れ合いでしかないが、続いて少し距離を開けたベアトリーチェが手招きをした。
「ワンオ！」
「わん」
呼ばれるとコロマルは八雲から離れてベアトリーチェの許に向かう。
二つの行動を端的言えば、八雲が抱きしめ、ベアトリーチェが呼んだだけだが、二人は明確に何かを伝えようとしている。
そうして考えていた直斗は、そうか、と何かに気付いて声をあげた。
「なるほど、確かにそれは盲点でした。可能性は十分にありますね」
「え、何々？　直斗君、二人がなんて言ってるか分かったの？」
「ええ、まぁ。現状、確かめる術はありませんが、玲さんたちの状況について納得がいく説ではあります」
やけにスッキリした明るい顔を見せ、一人で納得した様子の直斗には悪いが、他の者からすると赤ん坊の行動に深い意味があったとは読み取れない。
何かしら伝えたい事はあったのだろうが、直斗が何を理解したのか千枝たちが尋ねれば、直斗は先ほどの八雲たちの行動を解説し始めた。
「彼らの行動の中では、コロマル君が玲さんたちを表わしています。玲さんたちは最初に八雲君に捕獲された、これが二人がこの世界に来たときの状況です。続いて、八雲君によってこの世界に囚われていた二人を、ベアトリーチェちゃんが呼んで外に出しました。これは今の玲さんたちの状況を表わしているんだと思われます」
「あー……つまり、どういう事だ？」
「分かりやすく言うと、八雲君たちは玲さんをこの世界に閉じ込めた相手と、僕たちを呼んで外に出そうとしている相手は別人だと言いたいんだと思います」
最初の説明では理解出来ず完二が簡単に言って欲しそうにすれば、直斗はくすりと笑って謎の人物が二人いる可能性があると端的にまとめて話した。

この説は玲たちと自分たちが同じ状況だと思っていた者からすれば、まさに目から鱗な話だ。
やってきた時期が分かっていなかったので、勝手に玲も自分たちとほぼ同時期に来たと思っていたが故の見落とし。
同じように連れて来られたのではなく、七歌と鳴上たちが玲たちのいるこの世界に連れて来られたのだとすれば状況は全く変わってくる。
戦う力がなくて閉じ込められていた善と玲、そのため力を持っている事で自分たちが呼ばれたのだとすれば納得だと鳴上や雪子が話す。
「そうか。言われてみると可能性はあるな。だとすれば、ここは閉じ込めたやつが用意した箱庭か」
「玲ちゃんたちを守るために閉じ込めたのか、何かさせるために閉じ込めていたかで相手が敵なのか、味方なのか変わってくるね」
玲たちを利用するために閉じ込めた者が敵ならば、二人を出すためにメンバーらを招いた相手は味方になる。
だが、玲たちに何かさせようとする者から守るため、二人をこの世界に閉じ込めたならば、今の自分たちの行動は二人を危険に進ませている事になってしまう。
閉じ込めた者が敵なのか味方なのか。出そうとする者が敵なのか味方なのか。
今の状況では判断できないのが非常に悩ましいが、二人の危険を別に考えれば、七歌たちにとってダンジョンの攻略はこの世界から脱出するために必要な事だ。
よって、当面はこのままダンジョンを攻略しつつ、何かあったときのために玲たちにしっかり注意を向けておこうという事で話はまとまった。
「よし、では休憩も取ったしそろそろ行こう。次は我々がアイギスたちを補助する。鳴上たちは休んでおけ」
話がまとまったところで立ち上がって隊列を組み直す。
先ほどまで戦っていた鳴上たちは後方に、補助をしていたメティス隊は前線に、休憩していた七歌たちが補助に回り先を目指す。

途中で見つけた四つ目の質問部屋では、「彼女のお茶目なところは？」という質問に、〝エレベーターを真剣に逆走するところ〟〝食べこぼしに動物がよってくるところ〟〝部屋に来る度に家電を持って帰るところ〟という選択肢が用意され、八雲が満面の笑みで「みー！」と答えた。

やはり他の者では何を言っているのかいまいち分からないが、その答えで相手は満足したようで扉は開き、オマケに入口付近にあった封鎖された扉も開いたらしく遠くで音がしていた。

＊＊＊

質問部屋を全て通る事で開く封鎖された扉、そこには毎度強力なシャドウが待っているのだが、これだけの人数が集まれば大概の敵には勝てる。

もっとも、今回はぐーたらな行動を繰り返す王様タイプの敵が相手だったのもあるだろうが、他の者たちが弱らせていくと、瞳の銀色を揺らめかせたベアトリーチェが手をかざして敵を一瞬で氷に閉じ込め、八雲が金色の瞳を輝かせながらアザゼルを呼び出し粉砕した事で見事勝利を収めた。

「まう！」

「マウ！」

玲たちと一緒に後ろに控えていたはずの二人は、遠距離攻撃で敵を仕留めるとハイタッチして喜び合う。

だが、他の者からするとベアトリーチェがどうやってスキルを放ったのか分からず、さらに言えば八雲が明らかにサブペルソナではないペルソナを呼び出した事で、彼のワイルドがこの世界の影響を受けていない事が判明した。

仲間全体でみれば七歌と鳴上以外も二体目のペルソナを使えるのは良い変化だ。

しかし、元からワイルドの能力を使いこなしていた者からすれば、二体のペルソナでは臨機応変に対応出来ず歯がゆい思いをしていた。

そんなところに普段通りに能力を使える者が現われた事で、強力な敵を倒せて一安心していた七歌が八雲に近付いて優しく頬をムニッ

と摘まんだ。
「こら、ちゃんと玲ちゃんたちと待ってないとダメでしょ？　それに沢山ペルソナが使えるなら教えておきなさい」
「うふぁふぁー」
秘密にしておいてビックリさせようと思ったのか、ちゃんと能力を教えておきなさいと言われると、八雲は得意気に笑ってフフンと胸を張った。
実際に他の者は騙されていたのだからサプライズは成功と言えるが、七歌はこの悪戯坊主めと八雲の頬をムニムニと揉み込む。
頬を触られている八雲はくすぐったいのか身じろぎながら笑い、やっている七歌も戦闘で昂ぶっていた心が落ち着いてゆくのか八雲と戯れる。
周りで見ている者たちは周囲に敵の気配がないことで再び休憩を取ることにし、各々が好きな場所で休んでいると、動物が好きな千枝がコロマルを呼んで可愛がっていた。
「コロちゃーん、おいでー」
「ワン！」
頭を撫でられて気持ちよさそうにするコロマルに、千枝は自分の家の馬鹿な愛犬とは大違いだと笑う。
里中家で飼われているムクは、普段からボケッとしてヨダレを垂らしてばっかりらしい。
それと比べるとコロマルはしっかりと赤ん坊の世話をしつつ、呼ばれれば素直に応じているので賢さは段違いと言えた。
近くでそんなやり取りを見ていたラビリスは、コロマルの鳴き声から彼の考えている事を理解し、コロマルを可愛がってくれている千枝に伝える。
「コロマルさん、千枝ちゃんのこと気にいったんやって。頭撫でて貰うのが気持ちいいらしいわ」
「え、犬の言葉が分かるんスか？」
「ああ、うん。ウチら姉妹と湊君は動物の意思を読み取る能力持ってんねん。言葉とはちょっとちゃうけど、大体言いたいことは分かっと

るよ」
動物との意思疎通は多くの人類が憧れるものだ。
古くは聞き耳頭巾でお爺さんが雀や烏の声を聞いていたし、海外の童話でも人と動物が話をしているものが沢山ある。
現代では犬や猫の鳴き声から気持ちを把握しようとする機械も売っているので、そんな者たちからするとラビリスたちの能力は非常に羨ましい代物だ。
完二だけでなく雪子たちも一緒に「すごいね」と彼女たちの能力に驚いていれば、千枝が犬を飼っている者なら結構あるよと言い出した。
「飼い主あるあるだけど、あたしもムクの言ってること完璧わかるよ！　しょっちゅう、肉食わせろ、骨付きがいいって言ってる」
「ぜってー嘘だろ！　明らかに誤訳だわ！」
「嘘じゃないし。こっちの質問も分かってて、ビーフｏｒチキンって質問にワンってしっかり答えるもん」
質問がおかしい上に、ムクの答えも千枝の質問も全て内容が肉に偏っている。
そんな花村の疑問に鳴上がこっそり「ペットは飼い主に似るから」と言って納得させていた。
まぁ、そんな事で納得できても悲しいだけだが、周囲から見ても肉好きな少女の家庭事情だけあって説得力はある。
自分たちの仲間のある意味で恥ずかしい情報に花村がゲンナリしていれば、彼の肩に手を置いて順平が気にすんなと話しかけた。
「ま、うちにも似たような肉マニア的な人がいっから気にすんな」
言いながら順平が指し示す方を見れば、長時間の活動でお腹が空いてきたのか苛ついた様子の真田がいる。
一緒にいる天田と荒垣が呆れた顔をしていると言うことは、彼らの話題もプロテインかそういった方面である可能性が高かった。
「くっ、なぜこの世界には〝海牛〟がないんだ。今日はスペシャル牛丼の日なんだぞっ」
「異世界にあるわけねーだろ。現実世界だとしても学校にあるわけ

ねーが」
「全国チェーンでもないですしね。八十稲羽じゃ〝海牛〟は無理ですよ」
　気を紛らわせるように再びエネルギー食品のクッキーやらを食べているが、当然、そんなものではお腹は膨れない。
　もう少しで次の階層に向かう階段が見つかると思われるので、ある程度のところまで進めば一度学校に戻ることも視野に入れる必要があるだろう。
　彼らの会話に出てきた〝スペシャル牛丼〟という単語に反応する女子が一名いたり、そんな肉好きたちの様子に呆れる者が多数いる中、端の方で玲たちと一緒にいた八雲とベアトリーチェはお腹が空いたのか、敵の気配がないため本格的にレジャーシートを広げて休んでいた。
　あぐらを掻いた善の足の間にベアトリーチェが座り、正座した七歌に背中を預けるように抱っこされながら八雲が座っている。
　そんな二人に玲とあいかが持ち帰り用の使い捨て丼に入った何を食べさせており、周囲に漂ってきた匂いで他の者たちも気付いた。
『牛丼？』
　すき焼きに似て否なる芳醇な香り。醤油ベースの食欲をそそる匂いは、疲れから空腹を感じていた者たちの胃を刺激し、余計に空腹感を覚えさせた。
　だが、そんな中でも肉好きな二人はいち早く動き始め、即座に彼らの許まで駆け寄ると、玲とあいかの持つ丼を血走った目で見つめた。
　そこにあったのは紛れもない牛丼。たっぷりの牛肉を支えるようにタマネギと糸こんにゃくが入っており、丼の縁には真っ赤な紅ショウガがアクセントとして載っている。
　出来たてホカホカで湯気の立つそれは、一体どこの店の物だと千枝が見ていれば、隣で身体を震わせていた真田が絞るように声を漏らした。
「……何故、お前たちが……スペシャル牛丼を持っているんだっ……」

二人が食べているのは通常の牛丼ではない。限られた日にのみ、限定数出されるスペシャル牛丼なのだ。
頼めるのは一人一杯まで。にもかかわらず、八雲が二杯持っていたなら、複数人で行って数を頼んだか、わざわざスペシャル牛丼の日ごとに店に向かった可能性が高い。
彼の持つ在庫がいくつか分からないが、赤ん坊たちが自分の求める牛丼を美味しそうに食べていた事で、何故このタイミングでそれを食べているのかと問えば、七歌が八雲の口の周りを拭きながら答えた。
「いや、八雲君たちがお腹空いたっていうから、じゃあ、丁度話題に出たし牛丼があれば食べたらって言ったんですよ。そしたら持ってたみたいなんで、赤ちゃんのお腹空かせておくのも可哀想だから食べさせてるんです」
「予備は、予備はないのか?! 頼む、俺にも牛丼を売ってくれ!」
金なら出すから売ってくれ。そのあまりの必死さに玲はビクリと肩を揺らした。
しかし、赤ん坊たちは気にした様子もなく食べ続け、まだ真田がいると分かると二人揃ってアカンベと舌を出した。
「べー!」
「イー!」
「湊たちから嫌われたようだな……。これでは二人から譲って貰うのは難しいだろう」
先ほどお尻を叩こうとしていたくせに、どの面下げてやって来たのか。
傍から見ていても呆れるのだから、狙われた赤ん坊にすれば倒すべき敵として攻撃しないだけマシだろう。
善の言葉が止めとなって真田が崩れ落ちれば、自分なら大丈夫だろうと千枝が八雲に笑顔で話しかけた。
「じゃ、じゃあ、あたしは? あたしも八雲君たちと一緒にゴハン食べたいなー!」
「あい!」
「む、牛丼おにぎり……結構、おいしそうだね!」

一緒にゴハンを食べたいと千枝がレジャーシートに乗れば、八雲は一緒に食べていいよと笑顔でコンビニで売っている牛丼おにぎりを渡した。
本当は二人の食べているスペシャル牛丼が食べたかったが、牛丼おにぎりにもたっぷりの牛肉が載っている。
食べたことがない種類だったことで千枝も興味を持ち、これはこれでＯＫだと受け取って一緒に食べる事にした。
倒れている真田を無視して食べ続ける辺り千枝も大概だが、今回は真田が悪いので他の者も救いの手は差し伸べない。
他の者も集まってくれれば八雲がオニギリだけはくれたので、それを食べて少し気力を回復させると、もうひと頑張りしてから校舎に戻ろうと一同は第三階層に向かった。

第二百七十八話　F．O．Eの考察

――ごーこんきっさ・三次会

ついにこのダンジョンの第三階層に到達した。

ピンクや白を基調としたキラキラと光る装飾に彩られていた前二つの階層と異なり、この階層は黒や紫を基調とした装飾が多く、これまでと比べると少々暗い雰囲気になっていた。

《ちょっと待ってください。このエリア、急にF．O．Eの数が増大してます！》

《うん。でも、なんか動いてないみたい。何でだろ？　ちょっと分からないから、F．O．Eを見つけたら動きに注意して進んで》

雰囲気の変わったダンジョンに注意していると、ベルベットルームに残っていた風花とりせから通信が届く。

これまでのF．O．Eは色と能力は違えど、同じ場所に留まったままグルグルと周囲を見渡す動きをしていた。

敵が直線上にくれば矢を射って来ていたため、相手の動きに合せて直線上に立たないよう注意すれば問題なく、湊が退行してからはそのように戦闘を回避してきた。

だが、ここでF．O．Eの行動パターンが変わるとなると、慎重に進むようになる分、全体の進軍速度が遅くなってしまう。

メンバーらの安全を考えるとそうすべきなのだが、下手に長期化すると今度は精神的疲労も溜まり、戦闘に影響が出るだけなく、疲れがどうしても残ってくるようになる。

別に連日ダンジョンに潜らなければならない訳ではないが、早く攻略できる事に越したことはない。

この後、ある程度進めば一度探索を切り上げて昼食を食べに戻ることもあり、鳴上の提案によってメンバーたちはとりあえず第一目標を現フロアのF．O．Eの調査に定めて進む事にした。

「とりあえず、F．O．Eの行動パターンを調べよう。対処可能なら探索続行。難しければ対策会議も兼ねて一度撤退ってことで」

「うん。私もそれに賛成。今度は私たちが前線に立つからアイギスた

ちは休んでて。鳴上君たちはサポートお願い」
「ああ、任せてくれ」
先ほどまでアイギスたちに前線に立って貰っていたので、ここからは自分たちが変わると言って七歌隊のメンバーが前に立つ。
その後ろを鳴上たちが支え、メティス隊のメンバーたちはしばしの休憩に入る。
陣形を組み直し終えると、前衛役の順平と真田と荒垣が先導し、他の者たちも続いて移動を開始しようとした。
だが、メンバーらが動き始めたところで、後ろの方にいたアイギスが全員に待ったを掛けた。
「あ、皆さん、少し待ってください。八雲さんとベアトリーチェさんが」
言われて他の者たちが二人を見れば、とても眠そうにフラフラしていた。
全員が足を止めると二人も止まってその場に座り込み、さらに見ていればゆっくりと横になって寝始めてしまった。
二人は先ほどまでお昼ご飯を食べていたので、きっとお腹がいっぱいになって眠くなってしまったのだろう。
さらに、高校生が主体となったメンバーで構成されたチームと一緒になって行動していたので、赤ん坊たちの体力では厳しい部分もあったに違いない。
眠り始めてすぐに熟睡状態になった二人の頭を撫で、八雲はアイギスが、ベアトリーチェは玲が抱っこする事に決めて先に進む事にした。
「フン、飯を食ったらすぐに眠るとは随分と良い身分だな」
「相手は赤ん坊だぞ。仕方ないだろう。それに今の二人は少しでも早く有里に戻るため、食事と睡眠で回復に努めるのが仕事だ。私たちの補助はあくまで二人の善意でしかない」
自分にスペシャル牛丼を譲ってくれなかった事を根に持っていた真田は、言いながら先頭へと戻ってゆく。
彼は妹を助けて貰った一件から湊への態度を改めていたはずだが、

相手があまりに小さくなっているせいで、どうやら感覚的に同一人物と見なすことが出来なくなっているらしい。
おかげで敬意の欠片もない接し方になってしまい。庇護欲を抱いている美鶴によく睨まれていた。
「わん！」
「ありがとうございます、コロマルさん。でも、八雲さんはとても軽いので大丈夫ですよ」
眠った赤ん坊たちを抱っこしたことで、メンバーたちは進むのを再開する。
すると、コロマルがアイギスの足下に寄ってきて、疲れたら自分に乗せていいと言ってきた。
彼は大人状態の湊に大変な恩を感じており、それは小さな八雲になってからも継続している。
さらに言えば、小さな子どもは守るべき存在とも認識しているので、他の者たちよりも注意を払って傍に控えており、何かあれば誰よりも速く八雲の許に駆けつけるほどだ。
そんな彼だからこそ八雲も信頼しており、八雲と魂が繋がっているベアトリーチェからも全幅の信頼を寄せられている。
本当に犬しておくには勿体ないほどの忠臣ぶりに、思わずアイギスも笑ってしまいながら先を目指す。
すると、少し進んだところで、急にメンバーたちが立ち止まって周囲を警戒し始めた。
一体どうしたんだろうとアイギスが注意しながら近付けば、どうやら強い視線を感じるとの事だった。
「流石のオレっちも敵からの熱視線は勘弁して欲しいんだけどな。やっぱ、そういうのは可愛い女子から送って欲しいっつか」
「順平さん、彼女とかいたんですか？」
「おい、天田それ聞いちゃう？」
小学生の無遠慮な質問にダメージを負いながら順平が返す。
曰く、そんなものがいれば夏休み中、寮でぐーたらしてなどいないと。

まぁ、正確に言えば夏休み中も湊が退行して八雲になっていたので、それを気にして遊ぶ気になれていなかった事もあるが、彼女がいれば最低でも二、三日くらいは時間を作って遊んでいたはずだ。
そんな時間など欠片もなかったことを考えれば、順平だけなく寮生たちの恋人事情も察することが出来るはず。
大人びているとは言えど小学生。お子様な天田では理解出来なかったかと順平が肩を竦めれば、天田はムキになって子どもである事を否定しようとした。
もっとも、彼らが子ども染みた言い合いをする前に、チドリが熱い視線の発生源を発見した事でその一件は流れる。
「いたわよ……。そこの通路の先、大部屋になっているみたいだけど、その一番奥にF．O．Eの反応がある」
そこにいたのは凶暴そうな赤い目をした漆黒の馬に跨がる白いキューピッド。
キューピッドの表情は笑っているが、そもそも一切顔が変わらないので、相手が何を考えているかは分からない。
ただ、間違いなく敵は離れた場所にいるチドリたちを認識して、その場から何故か動かずジッと見つめている。
これまでのF．O．Eと同様に弓矢は持っているようなので、どうして射ってこないのかは不明だが、動かず遠距離攻撃もしてこないなら恐れる必要はないかもしれない。
何より、その場から動かずただ見ているという事は、相手はもしかすると自分から行動を起こすタイプではないのではないかと直斗が推測する。
「これまでいなかったタイプですが、もしかすると門番のようにそこにいるよう定められたタイプかもしれませんね」
「なるほど、それなら、出来る限り接近して観察することも可能かもしれんな」
そういう事ならばと真田が先頭に立ったまま敵のいる大部屋に向かって一歩踏み出す。
すると、何故だか敵もそのタイミングで急に一歩近付いて来た。

動かないと思っていた事で全員が戸惑いを隠せないが、その場で足を止めると相手も止まっている事に気付く。
「何だ？　こちらが近付かない限りは近付いてこないという事か？」
試しにもう一歩踏み出してみれば、相手も同じように一歩踏み出して近付いてくる。
自分たちの動きに連動しているのなら近付かない限りは大丈夫なのだろうが、そうなるとこの部屋へ立ち入り、Ｆ．Ｏ．Ｅの向こう側にある通路を通ることが出来ない。
ここは綾時に頼んで倒して貰うか、この部屋は後回しにして別の道を行くべきか。
メンバーたちが悩みつつ、とりあえず話し合うために元の通路へ一度戻ろうと後退したとき、近付いていないというのにＦ．Ｏ．Ｅが近付いて来ていた。
「な、なんであいつまでこっち来てんだよ!?」
「くっ、もしや、追尾型の敵だったのかっ」
今までの敵よりも強そうなＦ．Ｏ．Ｅの接近に驚く花村と、敵の行動パターンを読み間違えた事に苦虫を噛み潰した表情をする美鶴。
背を向けて逃げれば襲われて終わりだ。そう考えて後衛を先に逃がし、前衛組が敵の方を向いたまま後退する。
だが、やはりこちらが逃げれば相手も同じ間隔で接近してくるため、このままでは戦闘は避けられそうもなかった。
ズンズンと前進してくる敵を正面に捉えたまま、覚悟を決めて男たちが武器を構えたとき、残り八メートルの距離まで迫っていた敵に異変が起きた。
《ヒヒィーーンッ!?》
突然その場に響く敵の騎馬の嘶き。
先に逃げるよう言われていた後衛組も、一体何が起こったんだと通路の曲がり角から顔を出して見てくる。
すると、そこには手に持っていた矢で、自分の騎馬を何度も刺しているキューピッドの姿があった。
まさか騎手にそんな事をされると思っていなかった騎馬は暴れる

も、キューピッドは必死に相手に組み付いたまま何度も矢を持った手を振り下ろす。
矢が振り下ろされた箇所からは出血するように黒い靄が噴き出し、暴れていた騎馬も少しすればダメージが限界を迎えたのか痙攣しながら倒れ、さらに全身が靄になって消えてしまった。
「まさか、二体一組の敵が仲間割れを起こすなんてね。シャドウでは考えられない事だよ」
そんな行動を取るシャドウなんて自分は知らない。綾時がそう口にすれば、他の者たちもそれはそうだろうなと心の中で同意する。
自然とシャドウの強化版のように思っていたが、決まった行動パターンなどを持っているあたり、やはりシャドウとは似て非なる存在らしい。
今回の事でそれをハッキリと理解したわけだが、残ったキューピッドをどうしようかと話し合おうとしたとき、騎馬から放り出されて倒れていたキューピッドが、身体を起こすなり持っていた矢で自分の胸を何度も刺し始めた。
あまりに異常な行動に、ホラーやスプラッタが苦手なゆかりや千枝に玲といったメンバーは、小さく震えながら思わず目を固く瞑って顔を逸らす。
まるで先ほど相棒を殺した再現のように、今度は自分の事を何度も何度も刺したキューピッドは、その胸から黒い靄を出し、最後は矢を深々と刺したまま消滅してしまった。
いくら相手が敵とはいえ、流石にあんな自殺のようなものを見せられると気分が悪い。
一体何が起きたんだろうと先頭付近にいた七歌が武器を降ろし、他の者たちの推測などを聞こうと振り返りながら呟いた。
「喧嘩とかって感じじゃなかったよね。それなら自殺した理由も分からっ!?」
自殺した理由も分からない。そう言おうとして七歌は途中で言葉を止めた。
他の者たちは七歌が何故途中で言葉を止めたのか不思議に思い、驚

愕に見開かれた視線の先を辿る。
一同が振り返った先、そこには金髪碧眼の少女に抱かれて寝ていたはずの赤ん坊の薄らと開かれた右眼があった。
僅かに開かれた瞼の奥に見える瞳の色は妖しく輝く紫水晶。
一部の者だけが聞かされている、彼のもう一つの魔眼と同じものだ。
少しすればその瞳も閉じられて再び穏やかな寝息を立て始めたが、彼の右眼が使われたと理解した者たちは、シャドウやそれに近い存在にまで効力の及ぶ力を赤ん坊が使ったことに苦い顔をする。
一方で、何も知らない八十神高校側の者たちは、先ほどの敵の行動は八雲が起こしたものなのかと尋ねた。
「九頭龍さん、教えてください。先ほどの不可解な敵の行動。それは八雲君の右眼と関係があるんですね？」
「……うん。といっても、私も詳しくは知らない。八雲君の能力はチドリたちの方が把握してるから」
複数の魔眼を持っているらしい事は聞いているが、本来、七歌たちは湊の味方ではないので、詳しい能力の説明や解説は受けていない。
よって、聞くのならばチドリたちに聞いてくれと返せば、直斗の視線を正面から受け止めたラビリスが問いに答えた。
「湊君の右眼は〝暗示の魔眼〟いう、対象の脳に干渉して幻覚見せたり催眠術で操ったり出来る能力があるんやって。一回、クマに抉られたらしいけど、そこから治癒したら本来の魔眼やったそれが目覚めとったらしいわ」
クマに右眼を抉られたと聞いた瞬間、八十神高校側の者たちの視線が着ぐるみのクマに集まる。
急に仲間たちに一斉に見られた事で本人はギョッとしているが、自分がそんな事できるはずがないので、わたわたと慌てて首を横に振って否定した。
まぁ、実力差を考えると百パーセントないと思っていたので、ここにいるクマではなく野生動物のクマに襲われたのだろうという事はすぐに分かる。

ただ、クマに襲われて右眼を抉られながらも生存したという事実が衝撃過ぎて、どういった反応をするのが正解だろうかと悩んでいるうちに、真面目に湊の魔眼について考察していた直斗が再び口を開いた。
「待ってください。その能力が本当に脳に干渉する力だとすれば、脳という器官を持っていないシャドウたちには効かないのでは？」
「そうね。でも、私たちもそれ以上は聞いていないから、八雲が元に戻るまで真相は謎よ」
直斗がいくら疑問に思おうが、ラビリスやチドリはそれに対する答えを持っていない。
ただ、シャドウたちは骨格に合った動きをしており、胸部や頭部を吹き飛ばせば霧散して消えてゆくので、人間における急所がシャドウにとっても重要な器官なのか急所になっている事が多い。
そう考えるとシャドウも〝脳〟と同じ役目を果たす部位が存在し、先ほどの八雲はそこに干渉して操ったのではと推測することも出来る。
寝ていた赤ん坊が周りの騒がしさに起きて使ったにしては恐ろしい力だが、もし、あの力が誤って味方に掛かってしまうと大変な事になる。
そういった共通の認識を持ったことで、揺り籠に寝かせるよう横に抱いていたアイギスは、彼の身体を起こすと自分の胸に顔を埋めさせるような形で抱き直した。
これで能力が発動しても誰も彼と視線を合わせる恐れがなく、次に強敵が出れば自分がすぐに出ると綾時が約束してくれたので力を使わせる必要もない。
加えて、先ほどのF．O．Eについて直斗は気になった部分があるらしく、今度出会ったときには他の者たちは隠れて一人で検証させて欲しいと言ってきた。
相手の行動パターンが正確に把握できるのならそれに越したことはない。
故に、危なければすぐに助けに入ることを伝えつつも、他の者たち

は直斗に任せてみることにするのだった。

――食事処〝まんぷく亭〟

第二階層を抜けて様子見で向かった第三階層で出会った新たなＦ・Ｏ・Ｅ。

再びその相手と遭遇して直斗が一人でその行動パターンについて検証を進めると、検証が終わったと告げてきたタイミングで一同は昼食のため撤退を決めた。

第二階層を探索している途中、八雲からオニギリを一つ貰ったものの、それだけでは当然満腹には至らない。

さらに、長時間探索を続けても注意力などが落ちてゆくだけだからと、ダンジョン内で見つけた不思議なアイテムの力で校舎に戻ってくれば、八雲たちの店の存在を知らなかった男子たちが店を見て愕然としていた。

「マジかよ。昨日までここ何にもなかっただろ。ちゃんとしたメシ屋があるなんて聞いてねーぞ」

「クマたちが作ったのか？」

「そうクマよ。師匠と女将が一緒におみせ屋さんしよーって誘ってくれて。クマと玲ちゃんとあいかちゃんと善とコロマルでグランドオープンさせたクマよ！」

花村と鳴上に聞かれて答えるクマは、既に黒い前掛けと三角巾を装備している店員スタイルだ。

彼に紹介されたメンバーも戻ってきて少し休むと店に入って準備しており、クマが〝商い中〟の札を出すと店の前で待っていたメンバーが一斉に店内へ入る。

朝は男子たちを除いたメンバーだけだったが、昼は男子も含めたこの世界にいる者たち全員がやって来たので、クマと玲だけでなくあいかも手伝って水を運んでゆく。

続けて、校舎に戻ってきてから目を覚ました赤ん坊たちも、背中にバスケットをくくりつけたコロマルと一緒に出てくると、各テーブルの横でバスケットからおしぼりを取り出して配ってゆく。

そんな犬と赤ん坊の仕事姿に女性陣は思わず和んでおり、男子のテーブルでもあまりの愛らしさに完二が興奮気味に震えていたが、おしぼりを受け取る瞬間には良いお兄さんの顔を繕って赤ん坊たちを労った。
「アイ！」
「おう、サンキューな。ちゃんと手伝いしてエラいじゃねーか。後で昨日約束したアイス買ってやっから頑張れよ！」
「イー！」
良いお兄さんの顔で労ってやるも、ベアトリーチェは不満そうに怒って返した。
アイスを買ってやると言ったのにそんな態度を取られ、おしぼりを配り終えた事で八雲も一緒に厨房に帰ってしまったことで完二は訳が分からず困惑する。
すると、注文をすぐに聞けるよう店側で待機していたクマが、呆れたように深い溜息を吐いて先ほどの態度の理由を説明してくれた。
「はぁ、完二はやっぱり完二クマねー。このお店は師匠と女将が店長と副店長よ？　盛り付けの監修からレジ打ちだってするクマ。お手伝いじゃないクマよ」
「お、え、あ？　そ、そうだったんか。あー、悪いこと言っちまったな……」
「二人はちゃんと謝れば許してくれるクマよ。まぁ、売り上げに貢献して、二人のアイスは増量した方がいいと思うけども」
同じやり取りを今朝したばかりの雪子は、やはり最初はお手伝いだと思うよねと完二を見ながら頷く。
一方でプライドを持って仕事をしている赤ん坊たちを侮辱する事になってしまった完二は、クマに言われた通りに後で奮発したアイスを買ってやろうと心に決めつつメニューを開く。
そこにはファミレスかと見紛うばかりの品々が写真付きで載っており、店の外観から和食中心の定食屋だと思っていた男子らは良い意味で裏切られた。
ずっと牛丼を食べたがっていた真田も、メニューに美味しそうな牛

丼と追加出来るトッピング類があった事で、「俺は牛丼にするぞシンジ！」と嬉しそうに話していた。
「あ、クマ吉さぁ。悪いんだけど八雲君呼んでくれない？」
「およ？　別にいいけども、注文ならクマが聞くクマよ？」
「いやぁ、メニューにない注文って出来るか聞きたいんだよね。無理なら無理で良いんだけどさ」
　この店での料理はゴハンや味噌汁にトーストと言ったもの以外、全てが湊のマフラーに入ったストック依存になっている。
　店員たちはあいか以外誰一人料理スキルを持っておらず、そのあいかですらレシピを見ながらならば失敗しない程度の腕でしかない。
　だからこそ、千枝がメニューにない注文をしたいと言ったときには、クマも難しい顔になって「ダメ元クマよ」と決して期待はしてくれるなと言い残し、男子らの注文を聞いた伝票を持って八雲を呼びに向かった。
　クマが厨房に消えてから数分、先に決めていた男子らの注文を通しているのか少し待つ。それも少しすれば、八雲は玲に抱っこされながらすぐにやって来てくれた。
「あいあい」
「あ、急にゴメンね。実はメニューにない注文が出来るか聞きたくてさ。その、八雲君たちが食べてたスペシャル牛丼ってやつ、あたしも食べてみたくて」
　千枝がメニュー外の品の注文を希望したのは、ダンジョン内で八雲たちが食べていたスペシャル牛丼があまりにも美味しそうに見えたから。
　他の者たちもその時にはオニギリを貰いつつ良いなという目で見ていたので、千枝がここでそれを食べてみたいと話す気持ちは分かる。
　八雲を抱っこしている玲も、メニューにない料理を作って欲しいという希望でないことにホッと胸をなで下ろし、不思議そうに首を傾げていた八雲にストックの確認を取ってやる。
「はーちゃん、お昼に食べたスペシャル牛丼ってまだある？」

「あい。うな、ままうも？」
「あるそうです。ただ、メニューの牛丼は手作りで、スペシャル牛丼は元はお持ち帰りの品だけど良いのかと聞いておられます」
　最初に頷きつつ八雲が返事をしたので、ストックがある事は確認出来たが、その後の言葉の意味は他の者では分からない。
　よって、アイギスが通訳をしてやれば、千枝はそういう事かと納得しながら言葉を返す。
「うん、あたしは大丈夫だよ。あ、でも、お店で食べて欲しくないんだったら普通の牛丼食べて、お会計のときにスペシャル牛丼を持ち帰りにするけど？」
「うー」
「そこは別に構わないそうです」
　流石に同じ種類の品を取り扱っているというのに、わざわざ他店の商品を食べたいと言われれば気分も悪いだろう。
　そう思って千枝がスペシャル牛丼はテイクアウトでもいいよと言えば、ここにいる八雲自身が作った品ではないからか、マフラーから取り出す点は一緒なので構わないと答えた。
　そうして、千枝の要望通り裏メニューの品としてスペシャル牛丼のオーダーが通り、まだ注文していなかった者たちの分も戻ってきたクマと一緒に玲が聞いて回れば三人は厨房に戻ろうとする。
　だがそこで、千枝と八雲のやり取りを聞いていた男が一人声をあげて立ち上がった。
「待ってくれ！　裏メニューでスペシャル牛丼を取り扱っているなら、俺にもスペシャル牛丼をくれ」
「……けっ」
「しゃーなしな、だそうです」
　立ち上がった男の名は真田明彦。八雲とベアトリーチェの桃のようなお尻を叩こうとした下手人である。
　赤ん坊たちは自分たちに意地悪する彼の事を嫌っているが、ここでは出来る限り客の要望を叶えようと考えているのか、八雲は嫌そうな顔をしながらも了承してクマに追加伝票を書かせた。

後はもうないなと八雲は視線を一巡させると今度こそ厨房に戻っていった。
料理は盛り付け直すだけなのですぐ出来るが、流石に二十人分以上となると時間も掛かるだろう。
食べながらも話をする予定ではあるが、後方支援の者たちも含めて全員集まっているなら丁度良いと直斗が全員の視線を集めてから例のＦ．Ｏ．Ｅの行動パターンで判明した事を話し始めた。
「皆さん、第三階層のＦ．Ｏ．Ｅの事で分かった事をお伝えします。再度、僕一人で検証してみたところ、あのＦ．Ｏ．Ｅは僕たちの誰かが視線を合わせた状態で動くと連動して動くようです。その証拠に、横を向いたまま相手に一歩近付きましたが反応はありませんでした」
直斗が他の者に待機して貰った状態で試したのは四つ。
正面に向き合ったまま前後への移動。向き合った状態で横への移動。視線を外した状態での前後への移動。視線を外した状態で横への移動だ。
このうち相手が同じように一歩動いてきたのは先に試した二つだけ。
加えて、横への移動は最初の一歩のみ反応し、相手の正面から外れれば相手に視線を向けていても反応してこなかった。
そこから考えられる相手の行動条件は、正面から視線を合わせた状態で行動した場合に反応するという事。
また、ここで重要なのは正面から視線を合わせている者と、移動を行なう者が別でも条件が満たされてしまう点だろう。
直斗から補足でその説明を聞いた鳴上は、熱いお茶を一口飲みながら先の撤退時の謎に納得したように頷く。
「そういう事か。なら、一体目のときは殿を務めようとした俺たちが視線を合わせたまま、他の皆が後退した事で二つの条件を満たしてしまっていたのか」
「ええ、それで合っていると思います。後でクマ君たちにも伝えますが、もしあのＦ．Ｏ．Ｅと遭遇したときは全員壁の方を向いて移動すれば部屋に入れるでしょう」

相手が道を塞いでいるならわざと視線を合わせて行動し、Ｆ．Ｏ．Ｅを通路の入口から引き離してから視線を外して回り込めば問題ない。
八雲とベアトリーチェは好奇心から相手を見てしまいそうだが、その時は誰かが抱っこして視線を外してやれば大丈夫だろう。
直斗のおかげで強力なＦ．Ｏ．Ｅへの対処法も判明し、各隊の隊長や美鶴たち上級生から探偵の洞察力は流石だと賞賛の言葉が掛けられる。
急に大勢から褒められた直斗は少し恥ずかしそうにしていたが、これで第三階層の探索も少し楽になるだろうと全体の雰囲気が明るくなったところで、厨房の方から店員総出で料理を運んできた。
自分たちの前に置かれた料理に、今朝祭りメシを食べた男子たちから喜びの声が漏れ出す。
だが、待ちに待った牛丼が自分の許にやって来た真田は、クマが柄の異なる二つの丼を置いてきた事で待ったを掛けた。
「おい、待て。なんで牛丼が二つ出てくるんだ。俺はスペシャル牛丼に注文を変えていただろう」
「へ？　アッキー、一回も注文のキャンセルしてないクマよ。チエチャンが注文したとき、自分もスペシャル牛丼食べたいって言ったから、そのまま二つとも通っただけクマ」
自分はスペシャル牛丼に注文を変えたと言われても、クマはキャンセルなんて一言も聞いていないと困惑気味に答える。
他の者たちも真田の言葉を思い出してみるが、確かに自分にもスペシャル牛丼をくれとは言っていたものの、先に通した注文のキャンセルや変更するという旨の言葉は伝えてなかった。
本人も内容から察しても良いだろうにと思ったようだが、確かに自分の言葉不足が原因だった事で、渋々ながら二つとも食べるかと溜息を吐いた。
八十神高校側の者たちはそんな真田の反応に、体格が良いのに小食なのだろうかと不思議に思ったようだが、ゆかりや順平が彼はボクシング部で試合前の減量がある事を伝えると成程と納得する。

もっとも、今後のトレーニングで減量すると決めたからには、真田だって全力で二つの牛丼を堪能するぞと気合いと共に丼を掴み、山盛りの肉に向かって箸を振り下ろした。
「そういえば、こちらはまだ推測の域を出ないのですが、F．O．Eについてもう一つお話したい事があります」
真田と千枝がスペシャル牛丼を食し、全く同時に感動を覚えていたとき、そう言いながら直斗が顔をあげて他の者たちを見た。
彼女は食べながら聞いてくださいと話を進める。
「八雲君の魔眼という力について聞いてから考えていたんです。どうしてシャドウには効かない能力がF．O．Eには効いたのかと。シャドウには効かないという前提が間違っていれば話も変わってくるのですが、もし、本当にシャドウに効かないのだとすれば、シャドウとF．O．Eは似て非なる存在という事になります」
ここにいる者たちはシャドウとペルソナが本来同一な存在である事は知っている。
どちらも人の心から生じたもので、制御を外れて抜け出てしまった状態をシャドウ、自分の意識下で表出させた状態をペルソナと呼ぶ。
制御不能に陥るペルソナの暴走についてはややこしくなるので割愛するが、どちらも人から生じたものではあるが〝生き物〟ではないので、脳や心臓は存在しないからこそ八雲の〝暗示の魔眼〟に直接掛からないと考えられている。
だが、シャドウの強化種とも呼べそうなF．O．Eには魔眼がしっかりと効いていた。
それも自分が消滅するほど強烈なダメージを負っても解除されないほどに。
そこから考えられるのは、いくら見た目や気配が似ていてもシャドウとF．O．Eは根本的に異なる存在だという事である。
「シャドウとF．O．Eは近しい存在。それこそ猿とチンパンジー程度の違いのように思っていましたが、八雲君の能力で干渉出来る全く異なる存在だと考えると、F．O．Eについて一つの仮説が立てられます。そう、あれはシャドウを模して作られたダンジョンのギミック

だという仮説です」
直斗の口から聞かされた予想外の仮説に食事をしていたメンバーらの手が止まる。
F・O・Eはどこからどう見てもシャドウの強化種にしか見えないのだ。
戦闘時には何かに操作されているような反応もなく、自分たちを倒すため状況ごとに自分で判断して動いているように見えた。
それがどういった発想で考えていけば、質問部屋やトラベレーターのようなダンジョンのギミックの一つになるというのか。
口に入っていた芋天を飲み込んだ七歌は、魔眼の効果対象が限られている事も含めてそれはないのではと話す。
「ちょい待って。私も詳しくは知らないけど、八雲君の魔眼って多分生き物にしか使えないよ？」
「ええ、多分そうだと思います。だから僕は逆に考えてみたんです。どういった力ならF・O・Eに干渉出来るのかと」
湊の魔眼は、実際は自我のあるものならばイゴールのような人形にだって効果は発揮される。
ただ、それを知っているのはベルベットルームの住人と、機械の身体でも暗示を掛けられると聞いていたラビリスだけだった。
けれど、そういった情報がなかったからこそ、直斗は齎された結果から八雲の発揮した力が本当に魔眼によるものだったのかと疑問を持つ事が出来た。
彼女のその言葉から各々で考え込み、最初に直斗と同じ答えに達したアイギスが口を開く。
「つまり、八雲さんは寝ぼけて魔眼を出していましたが、実際は部屋を作り替えるようにダンジョン内の限定空間に干渉して作り替えたという事ですか？」
「はい、そういう事です。元々、シャドウに比べて行動パターンが限定的だったのもあって、本当にシャドウやペルソナの仲間なのかとは疑問を持っていたんです。そこで今回の件があったので、ダンジョン内で作られた自律人形（オートマータ）のような存在ではないかと考えました」

部屋を丸ごと作り替えた際、八雲は椅子やテーブルにメニューなどの小物も一緒に作っていた。
そんな細かい作り込みが出来るのであれば、ＡＩを搭載したロボットのようなものを作り出す事も出来るかもしれない。
視線を合わせなければどれだけ接近しても大丈夫、という第三階層のＦ．Ｏ．Ｅの行動パターンも妙に機械的すぎる事もあり、あながち直斗の考えも荒唐無稽とは言い切れない。
ダンジョンそのものには干渉出来ずとも、極限られた空間、それこそギミック一つに対してならば八雲も干渉出来る可能性があり。
ダンジョンの攻略をより安全にするのであれば、八雲の部屋を作り替える能力がＦ．Ｏ．Ｅに対して有効か確かめる価値はあるなと鳴上も賛同する。
「もしその推測が正しければ、相手に近付きさえすれば有里がいる限りＦ．Ｏ．Ｅを無効化出来るかもしれないな」
「でも、それが間違ってたら八雲君が危険な目に遭うかもって事でしょ？　私は赤ちゃんをそんな危険に晒すくらいなら検証しなくても良いと思う」
検証の価値ありと話す鳴上に対し、雪子は赤ん坊を危険に晒す時点で絶対に反対だと話す。
これについてはどちらの言い分も正しく、鳴上も積極的に赤ん坊を危険に晒そうと思ってはいないので難しい問題だ。
だが、本当にＦ．Ｏ．Ｅが八雲のようなこの世界に干渉出来る者の力の影響を受けるのであれば、今後のためにも相手がダンジョンのギミックなのかどうかはハッキリさせておきたい。
全体の安全のためにリスク覚悟で検証するか、八雲の安全には代えられないと諦めるか。
ラストオーダーの時間でベアトリーチェを抱っこした玲が厨房から出てきたタイミングで、深く考え込んでいた美鶴が顔をあげて全員に自分の判断を伝えた。
「天城の意見ももっともだ。八雲とベアトリーチェを育てていれば直に有里に戻る。八雲の能力が制御できているかも不明な現状では、余

計なリスクを冒す事は全体のためになるとは言えない。だが、白鐘の仮説は確かめる価値があると思えるものだった。検証については有里の意見を聞いて確かめていこう」
「そうですね。僕も解を得ようと気持ちが逸っていたみたいです。すみません」
美鶴の言葉を聞いて直斗も八雲を危険に晒してまで検証を急ぐほどではないと頷く。
ただ、今回の直斗の立てた仮説は、謎ばかりだったこの世界についても分かる事が増えて来たと思える立派な前進と言える。
元の世界に帰るためのダンジョンの攻略、玲と自分たちをここへ引き込んだ相手の狙い、この世界の事などやるべき事と知るべき事は沢山あるが、このメンバーならば全て乗り越えて行けるだろう。
そうして、店員たちも出てきて上等な料理に舌鼓を打ちながら昼食を楽しみ、午後の探索に向けてメンバーたちは英気を養うのだった。

第二百七十九話　運命の相手

――ごーこんきっさ・三次会

校舎に戻って昼食を摂り、全員がある程度休んだところで探索を再開する事になった。

第三階層のＦ．Ｏ．Ｅはこれまでの敵よりも遙かに強そうだったが、その行動パターンが直斗によって解析された事で、同じ部屋の中に複数体のＦ．Ｏ．Ｅがいようと詰め将棋やパズル感覚で誘導して攻略出来た。

有名進学私立である月光館学園で学年トップクラスの成績を取る者や、そういったゲームが得意なメンバーが揃っていた事も大きいだろう。

中には身長差からそもそも相手と視線が合わない八雲たちのような存在もいたが、途中で天田が離れ離れになっていたペアの人形を再会させてあげたいと言い出したり、六つ目の質問部屋で「宝くじ、当たるならどっちがいい？」と聞かれ「一回だけの大当たり」「半永久的に続く小さな当たり」に八雲が「なむ」と答えたり、新郎新婦の格好をしたぬいぐるみを嫉んでクマがキレたりというハプニングもありつつ、七つ目の質問部屋に到着した。

《さてさて、迷える子羊さんに質問だ。入れられるならどっちがマシ？》

聞こえてくる機械音声はそう尋ね、「サメの泳ぐ水槽」と「ライオンのいる檻」という選択肢を出してきた。

どちらも一般人なら襲われて死んでしまいそうだが、強いて言えばある程度の自由が利きそうなライオンのいる檻の方が助かる可能性もあるかもしれない。

「クマは水槽の方がいいクマよ。あれでしょ？　フカヒレっちゅーのがオイシイって聞いたクマ」

「たぶん、反対に食べられると思う」

自分ならば美味しいと評判の食材になるサメを所望するとクマが言えば、実家の中華料理屋でフカヒレを見た事のあるあいかが逆に食

材にされるはずと淡々と答えた。
それを聞いたクマは青い顔をしてブルブルと震えているが、今回の質問もこれまでと同じように八雲に回答を任せようと全員の視線が彼に集まる。
ベアトリーチェと一緒に手を繋いで立っていた八雲は、少し考えてから決まったとばかりに声をあげた。
「がお！」
元気いっぱいに答えるも、その答えはアイギスたち元シャドウ兵器の姉妹しか分からない。
ただ、選んだ後にも八雲が「がおー！」と言って笑っているので、他の者たちはきっとライオンの方を選んだのだろうと予想した。
子どもだけあって魚よりも動物の方が好きなのだろうか。そう思った完二が上着の内ポケットを漁ると、腰を屈めて八雲とベアトリーチェにライオンの編みぐるみを見せた。
「ライオンが好きなのか？　なら、これいるか？」
「ガオ！」
「がお！」
完二に編みぐるみを見せて貰うと、赤ん坊たちはすごいと驚いた表情になる。
そして、完二の手からそれを受けとると、ベアトリーチェが腕を伸ばした状態で持ったまま八雲の方へ向き直り、対する八雲はワクワク顔でシャドーを始めた。
可愛い編みぐるみに喜んでいると思っていたのだが、猛烈に嫌な予感がして見ていると、シャドーを終えた八雲がベアトリーチェの持ったライオンに近付くなり、赤ん坊とは思えない鋭い拳がライオンのボディに突き刺さる。
続けてジャブ、ジャブ、フック、ジャブ、顔面へのストレート、再びフック、止めとばかりにアッパーが見事に決まってライオンはベアトリーチェの手を離れて吹き飛んでいった。
自分の作った編みぐるみを赤ん坊にサンドバッグにされた完二は呆然と見ているが、放物線を描いて飛んでいったライオンが地面に落

ちれば、八雲は人差し指を伸ばした左手を高々と挙げて勝利宣言する。
「まう！」
「ヤーモ！　ヤーモ！」
傍らに立っているベアトリーチェは格好良いよと盛大な拍手を送っており、二人の中では八雲はライオンのいる檻の中に入れられて戦い勝利を収めた事になっているらしい。
他の者たちにすれば、この歳で動物を憧れの対象と捉えず、倒すべき敵として認識していて良いのだろうかという疑問を抱く。
ただ、今はそれよりも折角完二がくれたプレゼントをボコボコに殴った事を謝らせる方が先だ。
アイギスは地面に落ちたライオンを拾うと、そのまま八雲たちの許まで行ってしゃがんで目線を合わせた。
「八雲さん、ベアトリーチェさん。せっかく完二さんがプレゼントをくださったのに、こんな風に乱暴に扱うのはよくありません。ちゃんと完二さんにゴメンなさいをしましょう」
「まーう、がお！」
「確かにライオンのいる檻にいたら戦う事になると思います。でも、完二さんのくれたライオンは八雲さんたちを傷つけませんよ？　八雲さんたちと仲良くしたいと思っているはずです」
「……あい」
「……ミィ」
優しくも真剣にアイギスが二人を諭す。
二人にとっては質問部屋の話の延長で戦っただけだろうが、ちゃんと話を聞けば完二の編みぐるみは何も悪くないと分かるはずだ。
そんなアイギスの思った通り、ちゃんと説明してやれば二人も自分たちが悪い事をしたと理解したらしく、反省した様子でライオンの編みぐるみを撫でている。
まるで以前初対面のコロマルを叩いてしまったときのように、痛くしてゴメンねと言っているようだ。
悪い事をしたと分かったなら良かったとアイギスも心の中で安堵

し、改めてベアトリーチェにライオンを渡すと、今度は二人を連れて完二の許へ謝罪に向かう。
「すみません、完二さん。せっかく頂いたものを乱暴に扱ってしまって。ほら、八雲さん、ベアトリーチェさん、完二さんにゴメンなさいですよ？」
「ごーご、めんめ……」
「メンメ……」
八雲の口にした〝ごーご〟とはゴリラのような子分という意味で完二の呼び名らしい。
本来はそこもツッコミどころになるが、赤ん坊二人がすっかり萎れた様子で頭を下げてきたので、先ほどの二人の行動に驚いていた完二も笑って気にしてないと許した。
「ああ、いや、別にいいっすよ。男として強いやつに勝ちたいって思う気持ちはオレも分かるんで。な？　おめぇらもライオンに勝てるって証明したかっただけだよな？」
「あい！」
「ガオ！」
そうだよとばかりにやる気に満ちた顔を見せる二人に、完二も笑って気持ちは分かるぜと頭を撫でた。
自分たちのした事を反省し、プレゼントを贈った本人も許したのならこれ以上言う必要はない。
最後にもう一度だけアイギスは完二に謝罪すると、赤ん坊たちの許を離れて先への扉が開いた事で話し合いをしていた鳴上と七歌の許に向かう。
「これで七つ目だな。遠くで試練の扉が開く音もしたし、このフロアを越えてもまだ先がありそうだ」
「最初のアリスの方を参考にするなら、次のフロアを抜ければダンジョンの番人に会えそうだよね。このペースなら今日中に何とか行けそうではあるけど、消耗を考えて途中で切り上げるか、一気に行っちゃって明日しっかり休むか悩むね」
全体の疲れを考えるのであれば、今日は抜け道などを開けるだけ開

けてボスまでのルートを用意し、ボスとの対決は明日に持ち込んだ方が良いだろう。
だが、連日ダンジョンに向かうのも疲れを長引かせるだけなので、むしろ今日で一気にダンジョンを攻略し、明日は完全に休みにした方が良いようにも思える。
本来、こういった判断はアナライズでメンバーらの体調を把握できていた指揮官の湊が下すところだが、彼は現在そんな判断を下せる状態ではない。
後になってからダラダラ決めては進行にも影響が出るため、七つ目の質問部屋を越えたところでこの場に集まった各隊の隊長とブレイン担当の者たちで決める必要があった。
鳴上と七歌の話を聞いたメティスはメンバーらの表情を見て、昼食休憩後もあり余裕はありそうに見えると伝える。
「皆さん、昼食明けってのもあって余裕はありそうですけどね。このフロアだとF．O．Eを避けるために戦闘回数も抑えてますし」
「確かにそうだな。番人が前のダンジョンと同じ程度の強さなら、望月を全員で援護すれば倒せる可能性は高いだろう」
「僕は別に構わないよ。消耗は激しくなるけど、これまでの敵にはまだ全力の一撃を撃ってないしね」
まだ自分の実力の底を見せていない綾時は軽く答えて笑みを浮かべる。
彼が湊から貰ったエネルギーはこの場にいる他の者たちの総量は遙かに超えているのだ。
どの程度まで力を失えば顕現状態を保てなくなるのかは不明であるが、このダンジョンのボスを一撃の下に屠るくらいは容易いだろう。
そんな彼の頼もしい言葉を聞いた美鶴たちも頷いて返し、今日中にこのダンジョンを攻略する事に決めるとメンバーたちは先へと向かった。
――ごーこんきっさ・四次会
強い敵のいた試練の間を抜けて次のフロアへ降りた七歌たち。

この次のフロアに強力な反応を感じるとりせたちから報告があり、どうやらこのダンジョンも終わりに近付いているらしかった。
新たなフロアは敵の数が増えている以外はそれほど変化がなく、想像よりもあっさりと進み、いくつもの質問部屋を抜けていくと、今までの質問部屋と同じ見た目ながら新郎新婦の格好をしたクマのぬいぐるみのいる部屋に到着した。
これまでの質問部屋とは異なる雰囲気。さらにこの部屋には入ってきた入口しか扉がなかったことで、ついに最後の質問部屋に辿り着いたのだとメンバーたちは察する。
何だかんだと質問をする謎の声に振り回されてきたが、思い返してみると赤ん坊らの予想外の行動に振り回される事の方が多かったこともあり、このダンジョンのテーマである〝合コン〟の要素をあまり感じられなかったと順平が感慨深く話す。
「てか、合コン喫茶っていう割に合コン要素は別になかったな」
「まぁ、本物のウチのクラスも半分は休憩所みたいなもんだったからな」
「俺たちがサクラになってまで客呼ぼうとしたくらいだぜ？」
「おう。そりゃまたお疲れさんな事で……」
その場のノリで決まってしまった出し物は、当日、周囲の賑わいなど関係ないとばかりにとても寂しい状況だった。
今思い出しても苦い経験だったと語る鳴上と花村の背には濃い影が見える。
この話題はあまり触れない方がいいと判断した順平は、相手を労いつつ苦い思い出は上書きすればいいと慰める。
「つーか、こんだけ若い男女が集まってんだしさ。合コンの真似事でもちょっとは楽しい思い出にしたらよくね？」
「マジで？　そっちの女性陣と楽しくお食事してもいいのか？」
「もちろん、オッケーよ。そん代わり、オレたちもそちらのレディたちとディナーを楽しみながらお喋りさせてくれよな」
順平と花村は勝手に女子たちを巻き込んで、他校の異性との交流食事会と銘打った合コンを計画し始める。

クマと綾時はそれに乗って打ち合わせに参加し、自分たちのリーダーだからと鳴上も巻き込まれてゆく。
ダンジョンのボスと戦う前から倒した後の遊びの相談をするのは気が抜けているとしか言えないが、それがモチベーションの維持に繋がるのであれば一概に否定出来ない。
合コンの内容を詳しく知らない玲も、皆と仲良くお喋りして晩ご飯を食べるパーティーのようなものと聞いて参加に前向きになっている。
善は玲が参加するなら参加するというスタンスなので止めに入らず、自分たちが拒否する前に善と玲を抱き込まれた事に、千枝が呆れを含んだ微妙な表情を浮かべゆかりたちに話しかけた。
「なーんか勝手に決められてるけど、皆は花村と鳴上君と合コンＯＫなの？」
「え、いや、私は遠慮しとくけど。食事って言っても料理は八雲君に出してもらうんでしょ？　赤ん坊に食事の世話させてって流石にねぇ」
本人たちはおみせ屋さんとして頑張ってお仕事してくれるかもしれないが、ゆかりとしては赤ん坊を働かせて興味のない男子と合コンもどきをする気にはなれない。
まして、その赤ん坊が自分の思い人本人であるなら尚更だ。
先日のような全員でのパーティーならば参加もするが、そうでないなら参加する気になれない。
ゆかりがそう話せばチドリなども同意するように頷き、千枝の隣にいた雪子も手を繋いで新郎新婦の格好をしたぬいぐるみのクマを見ている赤ん坊たちに視線を向けながら口を開いた。
「フフッ、八雲君もベアトリーチェちゃんも仲良しさんだよね」
「あー……雪子？　男子たちの合コンについての意見は？」
「え？　鳴上君たち誰かと合コンするの？　でも、赤ちゃんの教育に悪いから、するなら二人の見えないところでしてね」
「ああ、うん。興味なくて聞いてなかったんだね。さすが雪子らしいや……」
雪子は旅館で酔っ払いやセクハラオヤジの相手をしてきたので、そ

ういった輩の話を聞き流す癖がついている。
自分が興味のない話題であったり、今のように強く関心を寄せるものがあるときには、他人の話をくだらない雑事として一切聞いていないのだ。
そんなマイペースな幼馴染みに千枝はこっちの方が上手だったかと苦笑し、この流れだと男子が楽しみにしている合コンとやらは実現しないだろうと思った。
他の者たちの話も一段落すると、ようやく最後の質問を聞く気になったのか全員が少し身構える。
謎の声もその気配を感じ取ったのか、皆が静かになったタイミングで話しかけてきた。
《君たちは数々の難題を乗り越え、ついに最後の部屋へと辿り着いた。というワケで、泣いても笑っても最後の問題だぞ。君たちは答えてもいいし、答えなくてもいい》
ここまで来ておいて答えない選択肢などあり得ない。
まぁ、最初の質問は湊が鎖を九尾切り丸で断ち切って強引にクリアしてしまったのだが、相手の反応をみるに無事最後の質問をしてくれるようだ。
これで最初からと言われていれば全員の心が折れていた可能性があるため、相手の寛容さに僅かに感謝しつつ待っていれば、ついに十個目になる最後の質問が出される。
《生まれ変わるなら、男？　女？》
「これは……」
最後の質問内容を聞いてアイギスが困ったように八雲を見る。
周りを見れば他の者たちも同様に何とも言えない表情をしている。
その理由は実に単純で、回答者である八雲は既にどちらでもあるからだ。
本当ならば今と同じ性別がいいか、それとも反対の性別になりたいか選ぶところなのだろう。
だが、八雲はどっちでもあり、どっちでもいられるので、わざわざ不便な状況になることを選べと言われているようなものだった。

まぁ、それでも八雲には選んで貰わなくてもならないので、ベアトリーチェと手を繋いだまま考えている八雲に全員の視線が集まれば、たっぷり時間を掛けてから八雲が口を開いた。
「うー！」
「兄さん、さすがにそれは……」
元気いっぱいに答えた八雲にメティスが思わず呟く。
周りにいた者たちは一体なんと答えたんだと気になったが、それを尋ねる前に謎の声が再び話し始めた。
《君たちは、ある一つの答えを自らの意思によって選択した。これで全ての質問は終了した。正解はなく、ただ、君たちの後ろには選んできた道があるのみだ。それではいよいよ運命の相手を発表しちゃうお時間だぞ》
言い終わると同時に部屋の照明が落ち、二つのスポットライトが移動しながら部屋内を照らす。
回答者は全て八雲だったので今回見つかるのは彼の運命の相手という事になるが、いざとなると他の者たちも妙に緊張して発表の瞬間を待つ。
この場にいる者の中には、自分が選ばれればいいなと思っている者が少なからずいる。
またベルベットルームにて通信越しに聞いている者たちも、この場にいる者と同じくらい発表の瞬間を待っている者もいるだろう。
謎の声が言っていたように、泣いても笑っても質問は既に終わっており結果を待つのみ。
一体誰が八雲の運命のパートナーとして選ばれたのか、ドラムロールまで聞こえてきて全員の緊張が最高潮に達すると、
《あなたの運命の相手は……ずばり、この人なのだ》
最後に〝ジャン〟という音と共に、二つのスポットライトは八雲とベアトリーチェを照らして止まった。
「おー」
「マ！」
なるほどと言った表情の八雲に対し、ベアトリーチェは当然だとい

う顔で胸を張っている。
　そもそも、二人は一人の人間が分裂した存在なので、ある意味では運命の相手であって当然なのだが、一部の女子はそういう結果を望んでいた訳ではないと落胆した。
　ただ、これはこれで良かったのかなと笑いあっている赤ん坊を微笑ましく思っていると、突然、二人の足下の床が消滅し、足場が消えた二人が急速に落下してゆく。
「ぴゃー！」
「ナー！」
「八雲さん、ベアトリーチェさんっ」
　驚いた顔で落下してゆく二人にアイギスが手を伸ばす、他の者たちも僅かに反応が遅れたが必死に掴もうと手を伸ばした。
　だが、その甲斐も空しく二人は暗い穴底へと消えていき、伸ばされた手は何も掴むことなく空を切った。
　二人が消えると部屋の照明が回復する。明かりが点けば敵に囲まれていたなどというトラップはなく、入ってきたときと同じように背後の扉が開いているだけで変化はない。
　薙刀を手にした七歌が二人の消えた床を必死に突き刺してもう一度開かないか試し、直斗と鳴上は他の者に指示を出して、どこか別の地下への入口がないかと探し始める。
　その間に風花とりせが二人の反応を探ってくれているが、大切な二人を目の前で奪われる形になったアイギスの瞳に憤怒の炎が宿った。
「……絶対に赦しません。二人にもしもの事があれば、わたしは八雲さんの持つ全ての兵器を開放してダンジョンごと敵を葬ります」
　かつて彼の危機を察知する事が出来た八雲との繋がりは消えていないので、まだ二人が生きている事は確実だと思っていい。
　ただ、いくら二人が生きていようと怪我の一つでもしていようものなら、アイギスは湊に許可されている武器の使用を全力で行なう覚悟があった。
　二人を攫ったのは黒幕なのかダンジョンのボスなのかは分からないが、アイギスだけでなく雪子やあいかとメンバーも赤ん坊を狙った

卑劣な敵に怒りを覚えていると、二人の居場所を探ってくれていた風花から通信が入った。
《皆さん、地下への入口が分かりました！　その部屋を出て左に曲がってください！　その部屋から壁伝いに進むと地下への階段があるので、それで二人のところへ行けると思います！》
《二人への通信は阻害されてるみたいで出来ないの。きっと不安に思ってるだろうから急いで助けてあげて！》
通信が終わると同時に全員がすぐに陣形を組んで部屋を出て行く。
途中にシャドウがいれば少数が倒すために残り、後のメンバーは先へ進むことを優先する作戦で二人の許を目指す。
アイギス同様、自分が守るべき相手を奪われたコロマルが誰よりも先行して走っていき、流石に動物の全力疾走について行けない者たちはコロマルが単独で先に向かうことを許可する。
本当ならばアイギスやラビリスもオルギアモードを使って向かいたいが、小柄なコロマルと違って彼女たちはシャドウの足下をすり抜けていく事は出来ない。
なので、先に向かうコロマルに二人のことを頼むと、他の者たちも最低限の敵だけ撃破して二人の許を目指した。
――ごーこんきっさ・ゴールイン
急に床が消えて落とされた二人は、お尻をぶつけて痛がりつつも、部屋にいたときと同じように手を繋いだまま立ち上がった。
「ヤーモ！・ネ！」
「あい！」
二人は立ち上がると自分たちがとても綺麗な景色に場所にいることに気付く。
正面に伸びる道の両脇には花々が咲き誇り、虹の架かった青空の下、風で舞い上がった花びらがシャワーのように降り注いでくる。
地下だというのにこんな空間が広がっている事は不思議でならないが、綺麗な景色に二人は瞳を輝かせながら走り出した。
「きゃー！」
「キャー！」

子ども故に二人は無邪気に走ってハート型のゲートを潜って道なりに進んでゆく。
繋いだ手が離れないことにも気付いてはいるし、何やら上で聞こえていた謎の声が何かを言っているが、今の二人はそんなものに興味ないとばかりに花吹雪の中を走ることに夢中になっていた。
赤ん坊らしからぬ速度で二人が走り続けていると、前方になりやら看板のようなものが見えてきた。
謎の声はそれについて説明しているようだが、興味のない二人は速度を落とさず進み、それが皇子の格好をした八雲がお姫様の格好をしたベアトリーチェをお姫様抱っこしている写真だと気付くと、走りながら二人はお互いを見合って頷き、なんとそのまま写真に向かって飛び込んだ。
「わきゃーー!」
「パーー!」
明らかに二人の顔を合成しただけの作り物だったが、それでも立ち止まって着飾った自分たちの姿を見ても良かったはず。
ただ、赤ん坊である二人はテンションが上がっている事もあって、変な絵があるぞ、ぶち破れと勢いだけで突っ走り、まるでバラエティー番組のマルバツクイズのように写真を体当たりで破って抜けた。
元は一人の人間だけあって息はピッタリ、写真をぶち破った二人は勢いを利用して前転で立ち上がるとさらに先へ進む。
子どものパワーというのは底知れないもので、押さえきれない好奇心だけで今の二人は走り回っていた。
もし、他の者たちが二人に付き合っていれば、半日と持たずにヘトヘトになるだろう。
ある意味でメンバーらと離れていて良かった訳だが、二人がそのまま進んでいると正面に大きな真っ白い教会が見えてきた。
普通の扉は流石にぶち抜けないので二人は白い扉の前で立ち止まり、一度見合って頷くと八雲が左を、ベアトリーチェが右の扉に手を当て勢いよく押し開けた。

中には真っ直ぐ奥の祭壇までブルーカーペットが敷かれ、その脇に並ぶ長椅子辺りでは外と同じように花びらが降っている。
ただ、そんな綺麗な教会の内装に感動している余裕はない。
祭壇に佇んでいた牧師が四本の腕を広げ、振り返るなり八雲たちを見つめてきたのだ。
《祈りナ・サーイ!》
そう呟くと相手は〝Ｈｏｏ！　Ｙｅａｈ！〟とテンション高く祭壇から跳躍し、天井から下げられた巨大なベルに捕まると、ブランコのように勢いをつけて再び跳んで空中で一回転した。
中々にキマっているファンキーな敵だと八雲らが認識していれば、敵はどこから取り出したのか棺桶に跨がり空中に浮遊し、四つの手にそれぞれ色の異なる教典を持っていた。
Ｆ．Ｏ．Ｅより強い気配を感じるものの、シャドウと遭遇しても恐れない二人は、手が離れるようになっていることを確認すると戦う事を決意する。
「うー！」
「ウー！」
全力でぶっ飛ばす。自分たちに勝てると思うな。
その様な事を敵に向かって話す二人は、〝誓いナ・サーイ……〟と言っている相手を無視して行動に移った。
「マァ！」
気合いと共にベアトリーチェが飛び出すと、敵に向けて腕を振るい地面に氷を走らせる。
即座にカーペットが凍りついてゆき、そのまま牧師に向かっていくと牧師は地面から生えるように伸びてきた氷を天井付近まで飛んで回避した。
だが、彼女は力の規模は小さくなってもニュクスに劣らぬ神格を持つ異界の神だ。
床から生えてきた氷から枝分かれするように新たに氷が生えてゆき、天井付近へと逃げた牧師を追尾してゆく。
流石に床を走っていた魔法が自分を追尾してくると思っていな

かった牧師は反応が遅れ、新たに伸びてきた氷が棺桶を掠める。
すると、ほんの僅かに掠っただけだというのに、そこから棺桶が凍りついてゆき、飛行ユニットである棺桶が氷に捕まった牧師は空中で動けなくなる。
《ワ、ワタシを殴らないと誓いナ・サーイ!》
動きを止められたとなれば、次に来るのは自分への直接攻撃だろう。
そう考えたらしい牧師が八雲たちの方を見れば、赤ん坊たちの正面に教会にあってはならない近代兵器が置かれていた。
十字に伸びる黒い鉄の脚、牧師に向かって真っ直ぐ向けられた長大な大口径の砲身。
もし牧師に人間並みの知能があれば叫んでいた事だろう。
何故、赤ん坊が〝８８ｍｍ高射砲〟など持っているんだと。
《ち、誓いナ・サーイ!!》
必死に逃げようと牧師は足掻くが、ベアトリーチェの氷は棺桶を伝って牧師の身体まで氷に閉じ込め始めていた。
力が弱った彼女に相手を一撃で屠るだけの力はない。しかし、己の半身である八雲は多数のペルソナを従えるだけでなく、お腹のポケットに湊が収集した多数の高火力兵器を持っていた。
自分が相手の足止めをすれば、止めは八雲がやってくれる。
その信頼故にベアトリーチェが敵を捕まえる事に全力を注げば、八雲はきっちりと敵を屠る力を持った兵器を準備していた。
そして、
「ワンワン!」
「わんお!」
「ワンオ!」
さぁ敵を屠るぞと八雲が機械を操る力で砲身を敵に向ければ、二人を心配したコロマルが息を切らせながら駆け込んできた。
信頼しているコロマルの登場に赤ん坊らも嬉しそうな顔をする。
そして、二人と一匹が再会を喜んでいると、牧師が顔以外の全てを氷に閉じ込められた頃に、大勢の足音が聞こえてきてアイギスを先頭

にメンバーたちが教会に飛び込んできた。
「八雲さん！　ベアトリーチェさん！　ご無事ですか!?」
「ちょっ、ええっ!?　これどういう状況だよ!?」
飛び込んだ先で目にした光景に思わず花村が声をあげる。
二人を心配して来てみれば、既に敵は地面から伸びた氷に閉じ込められ空中で身動きが取れなくなっていた。
オマケに二人の前には巨大な兵器が鎮座しており、その砲身が敵へと向けられている。
タイミングを考えると完全に二人だけで敵を仕留めようとしていたようだが、いくら幼少期の湊だとしても、赤ん坊だけでダンジョンの番人を完封できるとは思っていなかった。
それが蓋を開けてみれば、自分たちが戦うよりも見事な手際で敵を追い込んだらしい。
二人を守っているつもりでダンジョンを進んでいたが、こうして結果だけ見ると自分たちはいらなかったのではと考えてしまう。
ただ、二人はやってきたアイギスに笑顔で抱きついているので、頼れる者のいない状況に不安を感じていたようではあった。
「本当に無事で良かったです……。それで、アハト・アハトを出したのは八雲さんですよね？　ダメじゃないですか、あんな危ない物を使って敵を倒そうとしては」
「あい……めんめ」
「いえ、怒ってはいません。ただ、これからはわたしたちが来るまで待っていてください。絶対にお二人の許へ辿り着きますから」
危ない事はしてはダメだと怒られたと思った八雲が謝れば、アイギスは別に怒ってはいないと優しく諭す。
すると、八雲は安心したように再び強く抱きつき、アイギスがその背中を撫でた。
感動の再会を果たしたアイギスたちを見て、完二や千枝は涙ぐんで鼻を啜っているが、そんな事をしている間も敵は氷に閉じ込められた状態なので、先に倒してしまおうとメティスがアハト・アハトに近付いてゆく。

「姉さん、敵はベアトリーチェさんが完全に捕らえているので、これ撃って終わらせちゃいますね」
「あ、わたしがやります。お二人を危険な目に遭わせた相手を絶対に倒そうと思っていたので」
メティスに話しかけられたアイギスは八雲たちをチドリらに預けると、そのままアハト・アハトまで進んで途端に冷たい瞳を敵に向ける。
相手は何やら呟いているようだが、天井付近にいるためアイギスたちの許に声は届かない。
「……消えてください」
思わず背筋がゾクッと寒くなるような言葉を吐き、アイギスは一切の表情を消したままアハト・アハトを発射した。
瞬間、炎と粉塵を撒き散らしながら砲弾が敵へと突き進み、一撃で全身をバラバラに散らせて消滅させた。
八雲とベアトリーチェが口を開けて耳を塞いでいたので、他の者も真似して床に伏せていて助かったが、ここに集まったのが何の知識もない者たちだったなら、鼓膜が破れてしばらく戦線から離脱していた者も出ていただろう。
普段や丁寧な物腰のアイギスだが、やはり湊に関わることだと性格が変わるらしいと認識した男子たちは、今後絶対に彼女を怒らせないようにしようと固く心に誓うのだった。

第二百八十話　玩具の指輪

――ごーこんきっさ・ゴールイン

ベアトリーチェが敵を氷漬けにして拘束し、八雲がアハト・アハトで屠ろうとすれば、そのタイミングで追いついてきたアイギスたちが到着した。

無事に再会できた赤ん坊たちはアイギスに抱きついて再会を喜び、二人の無事を確認出来たことで他の者たちも安堵の息を吐いた。

もっとも、追いついたメンバーからすると、ダンジョンの番人が赤ん坊二人で討伐寸前の状態になっていたことは驚きだったのだが、赤ん坊を危険な目に遭わせた相手を赦さないと怒りに燃えていたアイギスがアハト・アハトを使い見事に撃破することが出来た。

そうして、使用した兵器はアイギスが湊のマフラーと繋がっているリストバンドで収納し、改めて赤ん坊たちのどこにも怪我がないかを確認すれば、全員の視線が教会最奥にある宝箱に集まる。

「やっぱり、こっちにもあったね」

「ああ、私が開けよう」

ある意味で予想通りだったことで、雪子がダンジョンの番人と宝箱はやはりセットのようだと頷く。

善も他の者たちと一緒にそれに頷いて返すと、一つ目のダンジョンのように自分たちの記憶に繋がる物が入っている可能性が高いと睨み、祭壇を登って奥まで進むと大きな宝箱の蓋に手を掛けた。

宝箱に善が向かっていけば赤ん坊たちもワクワク顔で傍まで近付いてゆく。

きっととても良い物が入っていると思っているのだろう。だが、蓋を開けた善は上半身をまるごと宝箱に入れるようにして手を伸ばし、何やら小さく光る物を手に持って出てきた。

他の者たちは小さなそれを何だろうと目を細めてしっかり見ようとする。

「触っちゃダメ！」

しかし、傍にいて何やら怯えた様子だった玲は、善がその手の物を

近づけてくると大きな声を出してその手を払った。
　玲に手を払われた善は彼女の行動に目を見開いて驚き、彼の手を離れて飛んでいった小さな物は宝箱の近くに寄っていた八雲の顔に向かっていった。
　他の者たちはそれが何か確認しきれていなかったが、善が持っていた物が玩具の指輪だと気付いていた玲は、自分が善の手を払ったことでそれが赤ん坊に飛んでいった事で焦ったように手を伸ばす。
　だが、手を伸ばしたところで届くわけもなく、指輪が八雲の顔に当たると思ったところで赤ん坊が大きく口を開いた。
「まむっ！」
　勢いよく飛んでいった指輪は、直前に開けられた八雲の口に飛び込んでゆく。
　見事に口でキャッチした八雲は得意気にしながら口をモゴモゴとしているが、ダンジョンの奥にあった怪しげな宝箱に入っている物など信用出来るはずがない。
　慌てて彼に駆け寄ったアイギスが背中を叩きながら吐くように迫る。
「八雲さんいけません！　すぐに吐き出してください！」
「はーちゃん、ほら、べーって。口の中のもの出して！」
「むー！」
　彼が口に入れる原因を作った玲も一緒に吐くように言うが、八雲は口から出したくないのか両手を口に当てて吐き出すまいとする。
　大人たちからすると危険だから出しなさいと言っているというのに、子どもにすれば自分の物を取られると思っているのかもしれない。
　ただ、このままでは本当に誤飲して喉を詰まらせる可能性があるため、八雲の背後に回り込んだ七歌が脇の下から両腕を入れて上腹部圧迫法を使って吐き出させる。
　ちなみに、この対処法は誤飲した場合に使うものであったり、一歳児未満の乳児には使わないよう指導されてもいるのだが、口から出さないし年齢的にもほぼセーフだろうと判断して七歌は実行に移した。

「べぇっ」
「アイギス、すぐに確保！」
「はい、ありがとうございます！」
相手に負担を掛けてしまうが効果は覿面。すぐに八雲は口を開いて指輪を吐き出した。
そしてベアトリーチェが同じように口に入れてしまわぬよう、すぐにアイギスが確保すると続けて八雲の様子を心配する。
急に飛んできたものをキャッチして得意気にしていただけで、お腹を押されて吐き出させられたのだ。
八雲には可哀想なことをしてしまったとしゃがんで彼の事を見れば、嘔吐いて涙が目に滲んでいた相手はキッとアイギスたちを睨み、小柄と身体能力を活かした跳躍で顎に頭突きをかましてゆく。
「たい！」
「きゃっ」
「ぐあっ」
アイギス、そして七歌が順に顎に頭突きを喰らって倒れこむ。
八雲の怒りはそれでも治まらないようで、ベアトリーチェまで一緒になって倒れた二人に飛び乗って踏んづけているが、流石に心配してくれた者にそれはないだろうとゆかりや直斗が止めた。
「ストップストップ！　二人は八雲君が変なものを飲み込まないように心配してくれたの。急にされて怒るのは分かるけど、心配してくれた人にそれはダメ」
「いー！　め！　めんめも！」
「ちょ、なに言ってるのか分かんないって。ラビリスかメティス通訳してー」
八雲をゆかりが、ベアトリーチェを直斗が確保してアイギスたちから降ろす。
赤ん坊に踏んづけられていた二人は、顎に勢いよく一撃食らったことで少しふらついているが、雪子が回復魔法を掛けてやれば問題はない様子だ。
一方で、ゆかりに後ろから抱えられて逃げられないものの、暴れて

逃げようとしている八雲はまだ怒っていて、彼が何を言っているのか理解出来ているメティスはとても言いづらそうに通訳した。
「えっと、兄さんは〝関係ないやつは引っ込め、人のもの返せ、戦争だ！〟と」
「ず、随分と物騒な言葉を知っているんですね」
「あくまでニュアンス的にそんな感じなだけですけどね。多分、実際は兄さんが作ったライフラインをいくつかストップさせるとかって事になるんだと思います」
赤ん坊が戦争などと恐ろしい言葉を知っている事に直斗が頬を引き攣らせれば、メティスは実際に言っている言葉は違うがニュアンスが近いのがそれだったと話す。
もしも、本当に八雲がそれほど怒っていて、メティスの言う通りの事態が起きれば大変な事になるだろう。
他の者たちは湊や八雲がどのようにして教室を改造しているのか知らない。
一応、世界に干渉しているとは聞いているが、そも、どうやって世界に干渉しているのかが分からないので再現のしようがないのだ。
故に八雲が臍を曲げてライフラインの切断に踏み切れば、音を上げることになるのは間違いなく他の者たちであった。
順平や花村などは顔を青くして、なんとか八雲を宥めようぜと小さな声で鳴上らと話している。
彼らの反応もある意味当然と言えるが、怒っている赤ん坊の事よりも自分たちの不利益を考えてというのは少々頂けない。
美鶴や雪子が男子たちに冷めた視線を送る一方で、自分で立てるようになったアイギスが先ほどの事を少年に謝罪する。
「ごめんなさい八雲さん。でも、変な物を口に入れるのはとても危ないんです」
「べー！　てっても！」
「そんな……」
怒った八雲はアカンベと舌を出して話など聞かぬと拒絶する。
さらに続けてあっち行けという意味の言葉を吐き、最後にはフンと

顔を逸らしてアイギスと七歌を視界に納めないようにした事で、アイギスはとてもショックを受けていた。
こんな状態では宝箱から出てきた玩具の指輪についてや、善と玲の記憶が戻ったかどうかなど話していられない。
だが、いつまでもダンジョンの中にいると危険な事もあり、美鶴がゆかりと直斗にそのまま赤ん坊を捕まえておくように指示して、全員で一度校舎の方へと戻る事にした。
――ヤソガミコウコウ
落ち着いて話をするため校舎まで戻ってくると、ゆかりたちに抱っこされていた八雲とベアトリーチェは今だとばかりに暴れて拘束から逃れた。
廊下に着地した二人はそのまま走り去ってゆき、後を追おうとするもベアトリーチェの力で床が凍っていてまともに追えず、結局、二人が階段を下りていくのを黙って見送るしかなかった。
まぁ、ダンジョンに行ったりするとは思えないので、学校の敷地内から出られない事もあって大丈夫だとは思うが、ダンジョンの奥で見つけた玩具の指輪について話し合う者らと二人を追う者らに分かれる事になった。
残ったメンバーは各隊の隊長に三年生たち。さらに直斗と善と玲に、花村と順平と天田もいた。
まずは指輪を手に入れた事で二人が何か思い出した事はないかと美鶴が尋ねた。
「それで、一つ目のダンジョンのように何か思い出した事はあるか？」
「……私はこの世界で何かを探していた。玲が泣いたから、探していたが……私にはその〝何か〟が見つけられなかった」
思い出した記憶を辿って何を探していたかを特定しようとするも、善はそこまでは思い出せないようで心苦しそうに首を横に振った。
その探していたものが判明すれば、この世界についてや二人が閉じ込められていた理由も分かりそうなものだが、分からないというのなら諦めるしかない。
今後のダンジョンでさらに記憶が戻れば思い出すだろうと、申し訳

なさを感じている善を慰めながら、一同はダンジョンの奥で見つけた玩具の指輪について話題を移した。
「それで、その指輪について心当たりは？」
「これは、玲のものだ。ウサギのぬいぐるみもこの指輪も。玲、君のものだろう？」
「し、知らない。分かんないもん……」
指輪が玲のものだとハッキリ答える善に対し、玲は指輪から目を背けて分からないと答える。
一つ目のダンジョンのときもそうだったが、彼女はどういう訳かダンジョンの奥に隠された道具を見ると酷く怯えていた。
それは記憶が蘇る事への不安なのか、それとも自分の物が何故ダンジョンの奥にあるのかという分からない事への不安か。
彼女は自分から話してくれないので理由は分からないが、他の者と話す余裕のある善も詳しい事は思い出せていない。
ならば、このままダンジョンの攻略を進め、二人の記憶がある程度蘇ってから事情を聞いても遅くないだろう。
玩具の指輪と二人の記憶については一度置いておき、さて、と次の話題に移ろうと美鶴が話を進める。
「さて、二つ目のダンジョンを攻略した事で、ベルベットルームにある扉の鍵がまた一つ外れた。残る鍵は二つ。つまり、残るダンジョンは二つという訳だ」
「二つの扉は俺たちの町と桐条さんたちの街に続いてるって事で良いんですよね？」
「ああ。ベルベットルームの者たちもそう話していた。善と玲は鳴上たちについていく事になる」
少しずつだが着実にこの世界の脱出に向けて事態は進んでいる。
残るダンジョンは二つ、その場所は探知型の力を持っているバックアップの二人が既に特定を終えており、りせから話を聞いていた直斗が代わりに伝えた。
「久慈川さんによれば次のダンジョンは現実にはない二年四組。〝放課後悪霊クラブ〟という出し物だそうです」

「なんだ。お前らの学校は三クラスずつしかないのか？」
「ええ、過疎化の進む地方ですからね。公立なので一定の人数は集まりますが、人口の減少はどうしようもないようです」
団塊世代やそのジュニア世代が入ってきたときには、教室が足りず今の実習棟を新設してまで教室棟として利用していたほどだったが、少子化が問題となっている近年では受験してくる子ども自体が少ない。
一応、八十神高校は地元就職に有利になるからと定員割れした事はないものの、街の人口と交通の便を考えると都内にある月光館学園とは比べようもなかった。
自分たちが思っている以上に田舎の過疎化が進んでいると知った真田は気まずそうにするが、鳴上も花村も気にしていないと返し、花村と七歌が再び話題を次のダンジョンに戻す。
「つか、聞くからにお化け屋敷てーかホラー系っぽいよな。そっちは全員そういうの大丈夫か？」
「んー、どうだろ。苦手な人もいるっちゃいるけど、赤ん坊二人が大丈夫かなってのが一番の心配かな」
「だ、ダメだよ！　赤ちゃんを怖がらせちゃ！」
赤ん坊たちの機嫌はダンジョンに向かうまでに治る事だろう。
故に、彼らが同行することは何も心配していないが、二人がホラー系まで大丈夫かという問題が残っている。
湊の様子を見ている限りでは、七歌と同じように霊視が可能なので大丈夫だと思われる。
迷宮の番人にも二人で挑んだほどなので、きっと問題はないはずと七歌が言えば、赤ん坊を怖い目に遭わせてはダメだと玲が口を挟んだ。
二人の話を聞いていただけで震えている彼女は、どうやらお化けなどのホラー系が苦手なようだが、自分よりも弱い存在がいると守るために頑張れるらしい。
別に二人が嫌がれば連れて行く気はないので、そこは安心して欲しいと伝えていると、赤ん坊を探しに行っていた風花から通信が入っ

た。
《皆さん、八雲君とベアトリーチェちゃんが見つかりました》
「本当か。それで、二人は今どこに？」
《体育館にいます。ただ、中の空間をいじったようで銭湯ではなくなっています》
「分かった。とりあえず、私たちもそちらに向かう。少し待っていてくれ」
風花からの通信で二人の居場所は判明したが、話を聞いていると銭湯を別の建物に変えて籠城しているらしい。
食べ物と衣類はどうにかなる現状で、替えの効かない風呂が真っ先に消されたのはかなりの痛手だ。
ダンジョンから戻ってきてまだ風呂に入れていなかった事もあり、どうにか二人には機嫌を直して貰わなければと思いつつ、美鶴たちはすぐに体育館へと向かった。
――体育館
美鶴たちが体育館前に到着すれば、他の者たちも揃って待っていた。
通信だけではどういう状況なのか分からなかったが、とりあえず銭湯で使っていた〝ぬ〟と書かれた木の板や暖簾がなくなっているので、本当に八雲たちは体育館の中身を作り替えてしまったようだ。
話し合いが終われば風呂に向かおうと思っていた者たちにすれば、この状況は非常に残念でならないが、このままずっとお風呂がない状態になってしまう方が問題である
それは流石に困るのでどうにか二人を宥めようと考えるが、まずはどういう状況になっているのか七歌はアイギスに尋ねた。
「アイギス、二人は？　中はどうなってるの？」
「それが中はお城の玉座の間のようになっているんです。お二人は大きな玉座に並んで座っています」
入口が開いているので中を覗いてみれば、確かにレッドカーペットが敷かれた玉座の間に変わっていた。
最奥には一つの玉座が置かれ、そこには頭に王冠を乗せた八雲とベ

アトリーチェが並んで座ってアイスを食べている。
見た感じでは既に機嫌が治っているようにも見えるが、誰も中に入っていないという事は、きっと中には入れない事情があるのだろう。
何故だか既に疲れた様子のクマに鳴上がどうしたのか聞いてみた。
「クマ、中に入ってみたのか？」
「は、入ろうとはしてみたクマ。けど、入った瞬間に落とし穴があって酷い目に遭ったクマ……」
「悠先輩、ここすごい沢山の罠が仕掛けられているみたいなの。私と風花ちゃんでアナライズしてみようと思ったんだけど、中は索敵無効空間になってるみたいでお手上げ」
見ればクマだけでなく完二や綾時も疲れた様子でしゃがみ込んでいる。
パイでも投げられたのか完二の顔にはクリームがベッタリと付いているし、綾時は頭も服も葉っぱだらけだ。
いったいどれだけの種類の罠が用意されているんだと不安になるが、アイギスが早く二人の許に向かいたそうにしているため、彼女が耐えきれず飛び出してしまう前に合流したメンバーも一緒になって作戦を考える。
「フン、所詮は赤ん坊の浅知恵だろう。そんなのは高速で飛び込んで罠が発動する前に突破すれば良いんだ」
「お、おい。待て、アキ！」
見ていろと言って真田は体育館から少し距離を取って構える。
他の者が危険だからと止めるのも聞かず、短距離走選手並みの加速で走り出したかと思えば体育館の入口に入る寸前で跳躍しようと踏み切った。
だが、
「へぶっ!?」
今まさに体育館入り口の境界を越えようとしたとき、いつの間に現われていたのか透明な壁が存在したことで真田は顔面から激突しひっくり返って倒れた。

かなりの勢いでぶつかったせいか倒れた真田は鼻血を出して気を失っている。
哀れに思った他の男子が移動させてやり、呆れつつもゆかりが回復魔法を掛けて休ませたが、赤ん坊の浅知恵とやらに高校生が完全敗北した事実がとても悲しい。
自分たちの仲間が一瞬で散ったことを気まずく思いつつ、咳払いをして切り替えた美鶴が確かに難しいなと顎に手を当てた。
「確かにこれは一筋縄ではいかないな。今のは明らかに明彦に対処したトラップだった。となれば、クマや望月に巽の様子から察するに二人は侵入者に対応したトラップを作動出来ると考えるべきだろう」
「なら、反対側の壁から回り込んでみたらどうだろう」
「相棒、壁でも壊す気か?」
それぞれに対応した罠を用意してあるのなら、相手の死角をついて背後から奇襲を掛ければ良いのではと鳴上が提案する。
確かにそれならば大幅にショートカット出来そうだが、一つ間違えれば壊した破片が八雲たちに当たることになる。
誤飲を防ぐためとはいえ二人を怒らせてしまった事が原因だけに、そういった危ない方法は取りたくないとアイギスがすぐに異を唱えた。
「賛成できかねます。お二人を危険に晒すのは勿論ですが、八雲さんたちはとても聡明です。知識は赤ん坊になっていても、知能で言えばわたしたちより上だと思います。当然、背後からの奇襲にも対処出来る用意があるかと」
八雲が湊の全ての異能を引き継いでいるのならば、ペルソナを使った索敵も使えるだろう。
何より、二人に直撃しない場所から侵入するのであれば、当然、玉座の間のどこかには着地する必要がある。
二人ならばそこに罠を仕掛けてくるに違いないとアイギスは読んでいた。
先ほどの真田への対処を見れば可能性は高く、やはり正面から作戦を立てて行くしかないかと全員が悩み出す。

無駄に相手の知能が高いせいで自分たちで上回れるだろうかという不安が過ぎるが、赤ん坊との知恵比べで負けるというのはプライドが傷つけられる。
既に四人の犠牲者を出している以上、自分たちは同じ轍を踏むわけにはいかないとさらに考え込んでいれば、同じように二人に会って話をする方法を考えていた玲が思い付いたと声をあげた。
「じゃあ、はーちゃんとビーちゃんにお城に入れてって言えばいいんだよ！　失礼します！」
入れてと言って入れて貰えるのであれば苦労しない。もう少し真面目に考えようぜと順平が言おうとすれば、玲は善と一緒に入口で一礼して中に入っていってしまった。
どうして二人は入れるんだと驚いている間も、二人はスタスタとレッドカーペットを進んでゆく。
玲たちが歩いても罠が一つも作動していない事で、どうやら今なら行けるらしいと順平と鳴上が走って後を追おうとした。
しかし、そこで一歩入ろうした二人の足下が突然開き、
『あーーーーーーっ!!』
二人はそのまま奈落の底へと落ちて行った。
「相棒!!」
「ちょ、順平!?」
二人が消えていった穴はすぐに閉じて元の床に戻る。
おそらくクマと同じ罠に掛かったと思われるので、しばらくすれば二人もどこからか脱出してくるだろう。
ただ、玲たちが普通に入って行けたからといって、罠が解除されている訳ではない事は理解出来た。
順平と鳴上という尊い犠牲によってその事実を理解した直斗は、きっと二人が入るときにした行動に意味があるのだろうと考え、帽子を脱ぐと玲に倣って「失礼します」と一礼してから中に入ってみた。
大丈夫だろうかと他の者が緊張した面持ちで見守っていれば、直斗も無事に中に入ることに成功しレッドカーペットを進んでゆく。
どうやら罠が発動するのは王に無礼な態度を取った場合に限るら

しい。
それが分かればこっちのものだと他の者たちも一礼してから入るが、荒垣が入ったときには上から金タライが降り、クマと完二と綾時が入ろうとしたときにはボクシンググローブのついたマジックアームが伸びてきて、金タライを喰らって足を止めていた荒垣ごと三人を体育館の外へ殴り飛ばした。
荒垣はニット帽を被ったままだった事が減点され、他の三人は一度失敗している事か服や顔が汚れている事が原因だと思われる。
赤ん坊なのにとてもマナーに厳しいのだなと他の者は背筋が冷たくなるも、どうにかレッドカーペットの終わりである玉座の前にやってくると、ムスッとした顔でアイスを食べている赤ん坊に話しかけた。
「はーちゃん、ビーちゃん、お話を聞いて。さっき苦しくさせちゃったのは、はーちゃんが玩具の指輪を飲み込んだら危なかったからなの。喉に詰まったら息が出来なくなるし、飲み込めてもお腹を壊しちゃってたかもしれないんだよ」
「いー!」
「ンベー!」
そんな事知らないもんねと二人はアカンベと舌を出す。
二人の言い分としては、もっとちゃんと言ってくれれば素直に口から指輪を出したらしい。
だが、アイギスたちは焦って八雲の許に辿り着くなり、ろくな説明もせずに口から出しなさいと言って背中を何度も叩き、最後には七歌が柔らかいお腹を強く圧迫して苦しい思いをさせてきた。
あのままでは危なかったと言いながら、結局は八雲に痛く苦しい思いをさせてきた者を信用する事など出来ない。
これ以上話すことなどないとばかりにアイスを食べ終えた八雲が手を挙げれば、全員の足下の床が消えて十センチほど下にあった餅らしき物に着地する。
そこへさらに入口側から強風が吹いてきて、足が餅から抜けなかった事で全員がバランスを崩し、前のめりに四つん這いになって倒れ

た。
「ちょっと何これ！　くっついて取れないー！」
「これただのお餅やなくて、お餅っぽい粘着性の罠や！」
りせやラビリスだけでなく全員が餅から脱出しようとするも、餅は引っ張っても多少伸びるだけで、全員をその場に拘束していた。
玉座からみれば全員が土下座をして頭を垂れているように見える事だろう。
八雲たちの世界に干渉する能力を十全に使えば、ここまで凶悪な性能を発揮するのかと改めて全員が驚愕していると、何やら頭上から鎖の伸びる音が聞こえてきた。
まださらに何かあるのかと何とか身体と首を捻って上を見てみれば、なんと天井がゆっくりと降下してきていた。
このまま天井を使って全員を押し潰すのだと思われるが、天井を使った罠が単純な質量による攻撃だけではない事に直斗が気付く。
「皆さん、倒れるときは顔を横に向けてください！　この罠は餅による窒息と天井の質量による圧迫の二段構えです！」
きっと痛く苦しい思いをさせられた仕返しなのだろう。
赤ん坊が考えるにしては残虐にもほどがあるが、餅に手足を取られているメンバーたちは、天井の重みに耐えかねて餅に顔からダイブする事になるに違いない。
しかし、手も足も抜け出す事が出来ないほどの粘着性があるという事は、顔から突っ込んでしまえば鼻と口を塞がれて呼吸できなくなるという事だ。
これまで誰一人殺していないことから、天井は痛みを与えつつもギリギリ潰れないところで止まってくれるに違いないが、無様に顔から餅に突っ込んだ場合は生命を保障しない。
抜け道を用意しつつも死ぬ可能性もある罠を仕掛けて来たことで、如何に八雲たちが本気で怒っているのかが理解出来た。
そして、一分もしないうちに天井が全員の背中まで降りてくると、予想以上の重みに全員が歯を食い縛って耐えた。
「ぐっ、これは……玲、君は無茶をするな……」

「ううんっ……はーちゃんが怒ってるんだもんっ。ちゃんと分かってあげて、それからもう一回あやまるのっ……」
ここにいるのは主に女子ばかり。男子は善と花村と天田だが、女子よりも非力な天田は戦力として数えられないだろう。
元シャドウ兵器の三姉妹は男子以上のパワーを発揮できるが、あの優しかった八雲がここまでの怒りを露わにしてきた事実を考えると力業で抜け出していいとは思えない。
そうして、全員が必死に耐え続けるも、背中にのしかかってくる重みに耐えかねて、一人また一人と餅の海に倒れ込んでゆく。
先ほどの直斗の言葉があったので、倒れるときには何とか横を向いて呼吸できるようにはしているが、支えるメンバーが減ったことで残った人数で支えきれなくなり、最後には全員が餅の海に倒れてしまった。
支える者がいなくなれば天井の降下が再開し、倒れている者たちの背中や肩を容赦なく地面に押しつけてゆく。
「いでででっ!? ま、マジでシャレになんねぇって!」
「アイギスっ、これ以上は流石に八雲に遠慮してる場合じゃないわよ!」
「で、ですが、これはわたしたちが八雲さんに与えてしまった痛みでっ」
天井の圧力によって骨がミシミシと嫌な音をさせ始めた。
本当にギリギリで止まるのかどうかも怪しく、これ以上は待っていられないとチドリが叫ぶも、アイギスは相手を怒らせてしまった負い目からオルギアモードやペルソナの召喚を躊躇った。
そして、アイギスがやらないなら自分がやるとラビリスとメティスがオルギアモードを発動しようとしたとき、パチンッ、と高らかに指を鳴らす音が聞こえ天井と餅が一瞬で消滅した。
やはりギリギリのところで終えるつもりだったのかと安堵の息を吐きつつ、全員がその場から身体を起こせば、玉座にいる者の姿をみて思わず硬直した。
何せ、そこには成人状態になったベアトリーチェとその膝に座る赤

ん坊の八雲がいたのだから。
「フン……虫共よ。〝私〟の痛みを少しは理解出来たか？」
「うー！」
雪のように白い肌に、白髪に近いほど透き通った金髪を揺らし、ベアトリーチェは八雲を抱き上げて立ち上がると起き上がっていた者たちを見下す。
何故、一人だけ成長して元の姿に戻っているのか、成長した状態でも分裂したままでいられるのか、いつから元の姿に戻れるようになっていたのかなど疑問はいくつもある。
だが、倒れる前に湊が着ていたブカブカな服を着ている彼女は、アイギスたちを氷のように冷たい瞳で見ながら、一方でとても愛おしそうに抱いた八雲の頭を撫でていた。

第二百八十一話　復帰、次の迷宮に向けて

――体育館

第二ダンジョンの最奥で見つかった玩具の指輪。それを取った善の手を玲が払った事で、彼の持っていた指輪は近くにいた八雲の口に入ってしまった。

このままでは誤飲して危険だからと、ろくに話もせずにアイギスと七歌が無茶な方法で吐き出させれば、八雲は体育館を改造して多数の罠でアイギスたちに仕返しを敢行した。

餅のような粘着物で拘束され、畳み掛けるように天井落としで全身の骨が軋むほどの重量で床に押しつけられ、八雲の持つこの世界に干渉する能力が改めて規格外だと認識出来た。

実際に八雲に指輪を吐き出させようとした者以外にすれば巻き沿いを喰らった形だが、彼が怒っている間はまんぷく亭も風呂も使えないので、彼がこれで落ち着いたというのなら結果オーライだと流すことが出来る。

そうして、痛む身体を擦りながら顔を上げてみれば、先ほどまで赤ん坊が並んで座っていた玉座に、明らかに人のそれとは異なる神秘的な雰囲気を纏った女性と膝に座る八雲がいた。

初めて相手をみる花村はぼーっと見惚れるが、愛おしそうに八雲を抱き上げて撫でながら立ち上がった女性は、他の者を冷たい瞳で見つめどぎつい言葉を放ってくる。

「フン……虫共よ。〝私〟の痛みを少しは理解出来たか？」

「うー！」

抱っこされた八雲は「そうだ、そうだ」と相手の言葉に同意するように声をあげる。

彼の事を考えての行動だったとは言え、アイギスと七歌にも反省すべき点はあったので、その言葉は素直に受け止めて反省する。

だが、湊本来の肉体をエネルギー状にして分けることで分裂していた相手が、完全に元の大人状態で八雲と分かれている理由が知りたかった事で、しっかりと立ち上がったアイギスが相手に話しかけた。

「何故、ベアトリーチェさんは成長なさっているのですか？　というより、成長した状態でも分裂出来たのですか？」
「無論、〝私〟が此度の休養を終えたからだ。そして、私と〝小さな私〟を足しても〝私〟の質量には届かぬ」
やや固い言い回しで話すベアトリーチェの言葉を聞いて、八十神高校側の者たちはほとんどが首を傾げた。
一応、相手が回復した事は理解出来、さらに八雲とベアトリーチェの分裂が、湊の肉体の質量を基に配分して行なわれていたことで、ベアトリーチェだけ大人状態になっても問題ないらしい事は分かる。
湊は身長一八三センチで体重は七十三キロ。筋肉の質が上がったことで昔ほど量が必要なくなったため、力士やアメフト選手のように筋肉の鎧を纏わず馬鹿げた怪力を発揮できている。
一方で、出るとこは出ているが細身なベアトリーチェと一歳児ほどの八雲の体重を足しても、到底七十三キロには届かない。
二人がどんなに重くても六十キロほどだと思われるので、もしまだ彼の中に魂があるのなら赤ん坊をもう一人出すことが可能なくらいだ。
ダメージと疲労が蓄積すれば身体が縮み、余裕が出てくれば分裂してブースト、さらに回復が完了すれば分裂したままでもベアトリーチェは大人になれるとは、随分と便利な共存関係なのだなと思ってしまう。
しかし、やはり相手が何を言っているのかいまいち分からなかったので、りせが他の者に彼女がなんと言っているのか尋ねた。
「ねえ、あの人がなに言ってるのかよく分からないんだけど？」
「えっと、ベアトリーチェさんは自分と兄さんの両方を私と呼ぶんです。今の文脈から考えると兄さんの回復が完了した。彼女と縮んだ兄さんを足しても元の兄さんの方が重いから大丈夫って感じかと」
「成程、以前から不思議に思っていたが、妙に違和感を覚える話し方に聞こえていた理由はそこか」
湊たちから見れば未来人にあたるメティスは、経験則か未来のどこかで説明を受けたのか、ベアトリーチェの使う一人称と二人称につい

て把握していた。
おかげで美鶴や七歌も彼女との会話で微妙に噛み合わない理由が理解出来たらしく、文脈から彼女の事を指しているのか、それとも湊の事を指しているのかを判断する必要があることに少しゲンナリしていた。
ただ、それが分かれば少しは会話もし易くなるはずなので、改めて七歌は玉座の前で立ったままの彼女に話しかけた。
「てか、回復するの早くない？　前は三日くらい掛かってたよね？」
「疲弊の度合いが異なるからな。私も共に回復に努めていた事で、およそ一日もあればどうにか〝私〟の身体を維持できる程度には癒えた」
前回彼が縮んだときには戻るまで三日ほど要した。
戻ったのは現実世界での適性を持っていた超巨大なキメラシャドウが現われ、人々の騒ぎが大きくなる前に対処が必要になり、彼しかそれが出来なかったという理由はあった。
そう、一応彼が再び目覚める理由はあったのだが、今回はそういった理由も見当たらずあまりに期間が短縮されていたので、ベアトリーチェから疲弊の度合いが違うと聞くと前回が如何に彼の負担になっていたのかを思い知らされる。
まぁ、本人は既に気にしていないらしいが、前回を知る者たちが暗い雰囲気になる一方で、この世界に閉じ込められたメンバーからすると湊の復帰は喜ばしい話だ。
チドリがそれを改めて思い直すと、それでと言いながら空気を変えるように話しかける。
「……それで、いつになったら八雲は元に戻るの？」
「私が〝私〟の中に還れば自然と戻ろう。私が出ている〝小さな私〟は、お前ら虫共から汚泥が漏れ出た状態と然程変わらぬ故」
チドリの質問にちゃんと答えつつ、ベアトリーチェは抱っこしている八雲に指を握らせて握手をしている。
姿が変わっても自分の半身だと分かっているように、八雲も成長した状態のベアトリーチェに心を許しているのが窺える。

ただ、やはり他の者ではベアトリーチェの言葉が半分も理解出来なかったので、アイギスが出番だぞと先ほど相手の言葉を理解していた妹に通訳を頼んだ。
「メティス、通訳を」
「あーえっとぉ、虫って言うのは人間の事です。で、汚泥は確かシャドウのことなんで、ベアトリーチェさんっていう魂の一部が外に出てる兄さんは、人からシャドウが抜け出した無気力症と似た状態だと」
相手は地球の全生命にシャドウを与えたニュクスと同じ神格を持つ、別次元から召喚された異なる理の世界の神だ。
そんな神のスケールで世界を見れば、人間など惑星を食い潰そうとしている虫にしか見えない。
人間から抜け出たシャドウも本来は心の海に存在する物なので、そこから人を経由して溢れ出てきた汚泥という認識だった。
なんとかそういったベアトリーチェ語録から当時の記憶を思い出し、正確にメティスが通訳を終えれば、ツッコミどころがあり過ぎるぞと美鶴が声をあげた。
「待て。人からシャドウが抜け出るという部分も気になるが、八雲は無気力症状態で活動しているのか？」
「厳密には違いますよ。多分、この閉じた世界だからこそ可能なだけだと思います。でも、兄さんの意識が完全に覚醒するためにベアトリーチェさんが必要って点では、抜け出たシャドウが戻って回復する無気力症に近いかと」
何を今更といった感じでシャドウと無気力症の関係についても触れたメティスは、そういえばこの時期の桐条側は無気力症の本当の症状を理解していなかったかと思い出す。
もっとも、そういった部分の説明は基本的に湊に任せているので、メティスがそれ以上の説明を控えていると、ベアトリーチェが八雲を床に降ろし手を握って話しかけていた。
「さて、〝私〟よ。名残惜しくはあるが、再び一つに戻ろう」
「あい！」
元気いっぱいに八雲が頷いて返せば、ベアトリーチェは優しく微笑

んで光に包まれてゆく。
そして、徐々に身体が光の粒になってゆき、それらが八雲の身体に吸収されると今度は八雲の身体も同じように光り始めた。
まるで先日の逆再生のようだと思いながら見ていれば、完全に光に包まれた八雲の身体が巨大化していき、他の者たちよりも頭一つ分ほど高い背丈で成長が止まり、最後に光が弾ければそこには黒いマフラーを巻いた青年が立っていた。
「……ベアトリーチェとの同調完了。とりあえず、全員外に出すぞ」
元に戻るなり青年が指を一度鳴らせば、床がトラベレーターに変化して全員を入口へと運んでゆく。
だが、その速度があまりに速かった事で、体育館の入口でトラベレーターが終わっていると、湊とコロマル以外の全員が転がるように外に投げ出されてしまった。
「いつつ……。おい、もうちょい丁寧に運べよ！」
固い床の上を転がった者たちは腕や肩を押さえつつ立ち上がり、かなり痛かったぞと花村が文句を言う。
彼以外のメンバーも不満そうな顔をしているため、ほぼ全員が同じ気持ちらしいが、そんな事は知らないなと港が再び指を鳴らせば、体育館近くのマンホールから水柱が噴き上がり、体育館の地下へと消えていったはずの順平と鳴上が出てきた。
『うわぁぁぁぁぁぁぁ!?』
地上三メートル辺りまで上昇すると、二人はそのまま悲鳴をあげて落ちてくる。
二人が無事だった事はとても嬉しいものの、他の者たちはそれぞれダメージを負って動けないので、無様な体勢で落ちてくる仲間に同情的な視線を送ることしか出来なかった。
「とりあえず、銭湯を作り直すか」
後ろでドスンと大きな音がしていても、湊は気にした様子もなく体育館の方へ向き直って手をかざす。
彼が罠の発動以外で直接世界に干渉する場面など初めて見る。一体どのようにして部屋を書き換えるのか興味を持って見ていれば、湊

が窓ガラスの曇りを掌で拭うように手を横に振り、次の瞬間には体育館の入口が銭湯の暖簾が掛けられたものになっていた。
世界を作り替えるのではなく、まるで世界の一部を塗り潰したかのような、過程を丸ごと無視した所行には〝魔法〟という言葉しか思い浮かばない。
体育館を再び作り直して銭湯に変え終わると青年はすたすたとその場から去って行く。
「あ、八雲さん！　待ってください！」
アイギスはすぐに立ち上がって彼を追っていったが、他の者たちはこれなら腕白ながらも八雲の方が素直だった分マシだったかもしれないと思った。
そして、少し経ってから立ち上がったメンバーたちは、とりあえずダンジョンでの戦いで汚れた身体を綺麗にするべく、それぞれの拠点に荷物を取りに戻ってから銭湯に入った。
＊＊＊
他の者たちが銭湯に向かった事を確認していた湊は、まんぷく亭に〝臨時休業〟の札を出してから発送センターに籠もり作業を進めていた。
八雲が消耗した分の食材の把握や、まだ登録を終えていなかった商品を通販サイトにアップするなど、元に戻ってからも彼のやるべき事は多い。
一緒についてきたアイギスは現在発送センターの事務所部分に増設した風呂に入っているが、彼女が上がってくれれば一緒にご飯を食べようと言われているので、湊が再び過労で倒れることはないと思われる。
とはいえ、ベアトリーチェと同調して得た二つ目のダンジョンの情報や、三つ目のダンジョンである〝放課後悪霊クラブ〟についても考える必要があり、湊がこちらの世界でも忙しいことに変わりはない。
（……あと二つか。善を殺して終わりなら楽なんだが）
この世界に来た時点で湊はここを構築した存在と核の存在を理解している。

どうしてその二人が記憶を失っているかは分からないが、善と玲がただの被害者でない事は断言出来るのだ。
魔眼を使って扉を封じている鍵を破壊し、そのまま他の者たちを元の世界に帰してしまうことも可能ではあるが、問題の元凶を叩かずに出て行くと再び他の者たちがこの世界に呼ばれる可能性があった。
(本当に面倒臭い。他のやつらにも異なる時間から来ている事を理解して貰った方がいいかもしれないな)
敵を倒して終わりであればどんなに楽だったか。
パソコンのキーを叩きながら考えていた湊は、他の者たちのメンタルケアを考慮した行動を面倒に感じ始めていた。
何もしなければそれぞれが勝手な行動を始めるなどとは思っていないが、指揮系統の異なる二つの集団を円滑にチームとして機能させるには仲介役が必要だった。
特別課外活動部のメンバーが湊にどういった感情を抱いているかは別にして、全員が湊の実力を認めている以上は全員を知っている彼の判断を重視することは明白で、おかげで湊が八雲になっている間もちゃんとシャドウと戦えていたらしい。
自分たちだけで攻略を進められたのならば、合流してから一つのダンジョンを攻略した実績もあるので、そろそろ湊を精神的支柱にする必要はなく各々の判断で行動させるべきだ。
そんな風に考えをまとめた湊は、次のダンジョンで彼らに別々の時代から来たことを気付かせようと決意し、八雲が消費した備品の把握を終えたところで近くの扉が開き、バスタオルを巻いたアイギスが出てきた。
「すみません、お風呂あがりました」
「……髪を乾かして、ちゃんと着替えてから出てきてくれ」
「はい。少し涼んでから着替えます。八雲さんは何を見ていらしたんですか?」
お風呂で少しのぼせたのか、アイギスは白い肌を紅潮させながら出てきた。
そういう事なら下手に着替えさせると熱が身体に籠もって気分が

悪くなるので、湊はしょうがないなと嘆息しつつ好きにさせ、相手が画面を覗き込むように近付いて来ても淡々と答える。
「消耗した備品のチェックをしてた。後は、まだ載せきれていなかった商品をサイトに掲載したり、俺がいない間に来ていた注文を発注書として出したりだ」
「あまり無理をしないでくださいね。皆さん、自分たちで当番を決めて銭湯の掃除と洗濯をするようになりましたから、八雲さんばかりが仕事をする必要はありませんので」
少女にとって彼の体調に気付けなかった事は一生の不覚と言える失態である。
その事を深く反省しているアイギスは、湊の事を心配してこうやって今も傍についている。
心配されている青年からすると極端だなと笑えるのだが、別に彼女がいても気にしない彼は、他の者が自分たちの事は自分たちでするようになったと聞いて負担が軽減する事を喜んだ。
別に他人の下着を洗うのが恥ずかしかったり、他人の汗を吸った衣類に触れることに嫌悪感を覚えるという事はないが、自分の仕事が減って楽になれば他の事に時間を割ける。
善と玲をそのままに黒幕を殺せるかなど、湊にだって色々と考えたい事はあったので、心配そうに自分を見つめるアイギスに小さく笑って返すと、そのタイミングでロック付きの扉が開いて廊下側から誰かが入ってきた。
「店長、いるー？　赤ん坊じゃなくなったって聞いたんだけどー？」
声の主は青い帽子にパンク系のファッションを着こなしているマリーだった。
体育館に来ていなかった彼女は、どうやら他の者から湊が元の姿になったと聞いて彼を探していたらしい。
探していた理由などきっと夕食についてだろうが、パソコンの画面を見るために前屈み気味で傍にいたアイギスから視線を外すと、湊は座っていた椅子を引いてマリーに顔を見せた。
だが、マリーは自分の探していた人物のすぐ隣に、バスタオルを巻

いただけというあられもない格好の女が立っていると気付いて激しく動揺する。
「は？　ちょ、うわぁっ!?　な、なんでそんな格好でいんの！　近付きすぎだし、無防備にもほどがあるし、てか、店長もそんな格好してる人に注意しなよ！」
「風呂で軽くのぼせたらしい。一応、髪を乾かして着替えてから来いとも言ったしな」
「のぼせたなら水飲めばいいじゃん！　はい、お水！　ほら、それ飲んで店長から離れてよ！」
発送センターは倉庫と事務所に分かれているが、事務所側には備え付けの冷蔵庫があったりする。
そこで冷えていたミネラルウォーターのペットボトルを急いで取り出したマリーは、アイギスに無理矢理それを渡して彼女を増設されていた脱衣所の方へ押し込んだ。
急にペットボトルを渡されグイグイ押されたアイギスは驚いていたが、脱衣所に押し込まれるなり扉を閉められたので反応する暇がなかった。
アイギスが再び出ようとする前に、ちゃんと着替えてから出てきてと言われてしまえば従うしかなく、すぐ隣の部屋でアイギスが着替えている中、部屋に二人になったマリーは動揺が抜けきらない状態で湊に話しかけた。
「まったく、赤ん坊じゃなくなったと思ったら、店長ってばいつも面倒に巻き込まれるよね」
「……お前も押しかけ組だろうに」
「押しかけてないし。店長が好きにしろっていうから、別に行く場所なかったし、一緒に暮らすようになっただけで」
自分を他の面倒ごとと一緒くたにされるのは不満なのか、マリーはムスッとしながら湊の言葉を否定する。
湊からすると自分目線では知り合いになっていないこの少女も謎に思っていたりする。
見た目こそ超が付く美少女で、着痩せするのか脱げばすごいスタイ

ルの持ち主ではあるが、彼女が人間ではない事はあった当初から気付いていた。
クマのような突然変異のシャドウという訳ではなく、どちらかと言えばシャドウから一歩進んだメティスや綾時に近いのだが、この世界では彼女の生い立ち等を調べる事が出来ない。
悪い人間ではないし、彼女からは自分に対する絶対の信頼を向けられていることも分かっている。
それ故、湊は面倒に思いつつも彼女を遠ざけたりはしていないのだが、もし、自分が他の時代の湊であるとばらしたらどうなるだろう。
稲羽市側から来た者たちの記憶を読み、そのまま会話に参加していたので違和感を覚えることなど不可能に思えるが、ばらした後に嘘つき呼ばわりや贋物扱いをされても困る。
どうせなら他の者がダンジョンの攻略をしている途中に気付かせ、あくまで全体の事を考えてそういう行動を取るしかなかったと思わせたい。
相手の良心につけこんだ姑息な手ではあるが、完全な嘘ではないので許されるだろう。
マリーへの対応を考え終えた湊はパソコンを待機モードに切り替えると、席から立ち上がって不満顔のマリーの頭を撫でてやる。
「ちょ、急になんなの？」
「別に。拗ねられても困るからな。あやしてるだけだ」
「何それ、子ども扱いしないでよ」
学年的には同級生かマリーが一つ後輩になると思われるが、湊は小、中学生を相手にするような態度で頭を撫でていた。
これにはマリーも憤慨し、子ども扱いされるくらいなら放置された方がマシだと湊の手を払い除ける。
そんな相手の反応はどこかチドリやゆかりを彷彿とさせるが、湊にすれば構って貰いたがりの反応はどこか似通っているため、ここは敢えて放置しておく事にしてアイギスが戻ってくるのを待った。
「すみません、お待たせしました」
「別に待ってないし。てか、そうだ。店長、晩ご飯は？　まんぷく亭っ

てとこ休みなんでしょ？」
脱衣所の扉が開いてTシャツに膝丈のパンツルックというラフなルームウェア姿でアイギスが出てくる。
二人を待たせてしまったと本人は思っているようだが、湊もマリーも勝手に話をしていたので待っていた自覚がない。
なので、待たされていたという部分は聞き流しつつ、マリーがここに来た最初の理由を思い出して湊の方へ振り返れば、そこには青年の呆れ顔があった。
「……ふぅ、店が休みなら屋台で食事したらいいだろうに」
「はぁ？　店長がいるんだから店長に作って貰えば問題ないのに、わざわざ味の濃い屋台で晩ご飯済ます訳ないじゃん」
「また縮んでも文句言うなよ」
湊をこき使えば再び過労で縮む可能性がある。
正確に言えば、生命力が枯渇すれば縮む事すらなく死ぬのだが、そんな詳しい事まで話す気のない湊は人使いの荒いお姫様に愚痴で返しつつ、アイギスも連れて夕食を食べに発送センターを出て行く。
明日からは第三の迷宮を攻略していく事になるはずなので、校舎に残るマリーはともかく実際に戦うアイギスには十分な栄養を取らせなければならない。
さて何を作ったもんかなと考えつつ、湊は拠点よりも充実したまんぷく亭の調理設備を使いに行き、久しぶりに中華で腕を振るうことに決めた。
三人で食事をしているとベルベットルームの住人らが訪れたり、中に人がいたことで自分も食べたいと言い出す者が現われたりもしたが、一部の女子たちだけは次のダンジョンの名前を聞いて食事がろくに喉を通らなかったという。

第二百八十二話　学校で怪談

――ヤソガミコウコウ

湊が復帰した翌日、今朝もまんぷく亭が臨時休業だった事で一同は祭りの屋台で食事を取った。

昨日の晩に引き続き、久しぶりに二食続けて雑な食事を取った者たちは、いまいち次のダンジョンに挑むモチベーションを保てずにいた。

だが、それでも次のダンジョンに向けての話し合いが必要だと理解しているので、食事を終えてから次のダンジョンである二年四組〝放課後悪霊クラブ〟の教室前に向かえば、どこからか調達したらしいテーブル席でハンバーガーを食べている湊たちがいた。

食べているメンバーは湊、メティス、マリー、そして女子の拠点に昨日は戻らなかったアイギス。

こちらの世界にハンバーガー屋はなく、新鮮なトマトとレタス、チーズと分厚いパティがサンドされたバーガーは明らかに手作りだが、四人は他の者が集まってきても気にせずサイドメニューのフライドポテトとフライドオニオンをたまに摘まみつつ、ナイフとフォークを使ってハンバーガーを食べている。

「んっ、店長お茶欲しいんだけど？」

「ウーロン茶でいいか？」

「うん。濃いめの方がいいかな」

お茶が欲しいとマリーに頼まれれば、湊はマフラーから冷えたペットボトルを出して、アクリル製のカップに黒ウーロン茶を注いで渡す。

カップを受け取ったマリーは白い喉をこくこくと鳴らしながら飲み干し、カップをテーブルに置くと再びパティから肉汁の溢れ出ているハンバーガーを食べに戻る。

周囲には揚げ物の匂いと共にハンバーガーのソースだろうか。トマトベースのスパイシーな香りが漂っており、先ほど食事を終えてきたばかりだというのに、男子や千枝に玲といったメンバーがゴクリと

喉を鳴らした。
すると、キンキンに冷えた瓶コーラを飲んでいた湊が瓶をテーブルに置いてから口を開いた。
「さて、次の迷宮に向かう前にいくつか話しておこう」
「その前にお前らは食べるのやめろよ。つか、なんでこんなとこで食ってんだよ」
彼らの食べているハンバーガーは実際に美味しいのだろう。だが、あまりにも美味しそうに食べているものだから、順平はつい口調がキツくなりながら話をするなら食べるのをやめろと言ってしまう。
まぁ、他の者たちも大体は同じ意見だったので、それに湊がどう返すか見ていれば、湊は気にした様子もなくフライドオニオンを摘まみつつ話を続ける。
「……次の迷宮は〝放課後悪霊クラブ〟。文化祭にありがちなチープなお化け屋敷だな」
湊が順平の言葉を無視して話を続ければ、他の者たちは彼が帰ってきたんだなという実感がしみじみ涌いてくる。
八雲は少々悪戯っ子なところがあったが、年齢を考えれば普通のことであり、根が素直な事が分かっているため、そういった部分も可愛いと思えるだけの余裕が他の者にもあった。
だが、それが成長した青年は何があればここまで歪めるのかというほど捻くれている。
自分の父や祖父が原因を作ったため、数名の少女はそういった部分に強く言うことは出来ないのだが、ここで意外な事に彼が他の者を気遣うような言葉を口にしてきた。
「そこで先に聞いておく。この中でホラーやら幽霊やらが苦手な者は手を挙げろ」
戦力を考えれば多いに越したことはない。チームで動くのならば突出している湊と綾時以外は補い合って戦っているのだから。
けれど、ホラーや幽霊が苦手な者は探索中も怖がり、戦闘に支障が出る可能性が高い。
足手纏いがいる状態で戦うのは非常に危険なので、先にメンバーか

ら外すことで本人たちと探索メンバーの安全を確保しようと考えたのだろう。
捻くれつつも全体の事を考えて動いてくれる青年がした質問だけに、ここで強がっても意味はないとして、ゆかり、千枝、玲の三人がおずおずと手を挙げた。
実際は得意ではない者もいるのだが、今は三人しか手を挙げなかったので、湊はその三人に視線を向けると再び口を開いた。
「そうか。一応言っておくと幽霊と呼ばれるものは実在する。だが、殺すことは可能だから心配する必要はない。さて、隊の分け方の話に移るが」
「ちょっと待った！　え、それだけ？　苦手なら行かなくていいよとか、こうしたら身を守れるとかのアドバイスをするパターンじゃないの？」
予想外の相手の言葉に驚きつつも、勝手に次の話題へ移ろうとする湊をゆかりが止める。
苦手かどうか聞いておきながら、幽霊は実在すると断言してアドバイスとも言えぬ言葉を贈ってくると誰が思おうか。
今も食事を続けている青年に〝普通〟を求めるなど自分でも馬鹿だと思いながら、それでも言わずにいられなかったゆかりがこちらでの待機指示かアドバイスを求めれば、話を聞き終わった湊は心底呆れた顔で言葉を返してきた。
「何を甘えた事を言ってるんだ。ピーマンが嫌いだから食べませんと言ってるようなものだぞ。苦手なのはお前の都合だ。それを理由に楽をしようとするな。それに幽霊なんぞ殴れば殺せる。アドバイスもなにもない」
幽霊が苦手だからお化け屋敷に入らない。ピーマンが嫌いだから食べない。
事実のみを書き出せば確かに同じように聞こえるが、当人たちにすればそれらは全く別ベクトルの話である。
得体が知れないから、自分たちとは住む世界が違うから、物理的に干渉出来ないからなど、幽霊を苦手に思う理由は沢山あるのだ。

それを湊は殴れば殺せる程度の相手だと切って捨てた。
ゆかりたちだけでなく他の者も突っ込みたいに違いない。そんな事が出来るのはお前だけだと。
だが、他の者がツッコミを入れるよりも速く、七歌が何故か感心した様子で湊に話しかけた。
「八雲君って幽霊殴り殺した事あるの？」
「ナイフで刺したり、拳で腹を貫いたり、色んな方法で殺してきたが？」
「私たち神道の家系だし、名切りは陰陽師もやってたもんね。そういう適性が高くて当然か」
二人のルーツを遡れば龍神である豊玉姫命に行き当たる。そこからさらに遡れば、天照や伊邪那岐と伊邪那美にも辿り着くのだ。
神道の最高神格である天照の血を引くため、二人の家系は一応神道の家系という事になっている。
おかげで名切りは妖怪退治屋紛いの仕事も過去にしており、その時代には正式に陰陽師の一族としても認められていた。
百鬼の実家の蔵を探せば今も退魔は破魔の道具が多数眠っており、それら全てが表に出れば騒ぎになる代物なのだが、湊は高い適性を持っている事で肉体一つで霊体にも干渉出来る。
霊視が可能な七歌でも流石にそれは出来ないので、家柄の違いは大きいなと苦笑して素直に彼を褒めた。
そして、七歌に続いて完二までもが幽霊など殴り殺せとのたまった湊に感銘を受け始める。
「そうか。幽霊が殴り飛ばせるってんなら、オレでもどうにかなりそうッスね」
「真に受けんな。んなの一般人には無理だから」
「なーに言ってんスか。シャドウも幽霊も大差ないっスよ。わけ分かんねえやつをぶん殴ってぶっ飛ばす。シンプルで良いじゃないッスか」
確かにシンプルなのは非常に結構だ。それだけ単純ならば花村としてもありがたく思うほどに。

しかし、現実的な問題として一般人はそも幽霊に触れることが出来ない。
相手は怨念パワーで攻撃出来るかもしれないが、触れることが出来ない以上はこちらからは手が出せないのだ。
完二には早くその事に気付いて欲しいのだが、既にやる気満々になっている相手には言葉は届かないのだろうなと花村は遠い目をした。
そうして、湊たちが食べ終わるのを待つ意味も含め、他の者たちが口々にお化け屋敷について話し始めると、皆の様子を眺めていた風花がやり取りに笑いつつ、少しばかり残念そうな表情で溢す。
「ふふっ。でも、私はちょっと入ってみたかったなぁ」
「え、風花ちゃん怖いの大丈夫なの？」
「んー、怖いけどそれが楽しいところっていうか。りせちゃんは苦手？」
「私は皆と一緒なら割と大丈夫だけど、苦手って部分は変わらないよ」
サポート役である二人の少女は、年上である風花の方は割と平気で、りせは対照的に苦手なようだ。
今回ばかりはバックアップで良かったと、りせはダンジョンに入る必要がないことに安堵する始末。
それを羨ましそうに見ているゆかりと千枝は、何故自分のペルソナにはバックアップ出来るサポート能力がないんだと嘆いた。
すると、食事を終えてメティスらがゴミを片付けている間、のんびりとコーラを飲んでいた湊が風花らの会話に口を挟んだ。
「……行きたいなら代わるぞ。別にサポートなんて俺やチドリでも出来るしな」
「あ、ううん。いいの。ていうか、私のペルソナは戦闘タイプじゃないし」
「だが、この世界ではサブペルソナで戦えるだろ？　何なら俺のペルソナを貸してやってもいい」
言いながら湊はマフラーからチェーン付きのカードホルダーを取り出し、そこに具現化したカードが一枚収納されたまま風花の手に渡

る。
受け取った風花は不思議そうに眺めつつ、これは一体どうやって使うのだろうと首を傾げた。
「あの、これってどうやって使うんですか？」
「俺がいつもやっているようにカードを握り砕けばいい。そうすれば、耐性の付与こそ出来ないがペルソナを召喚して自由に使役出来る」
使い方を聞いた風花は他の者から少し距離を取ってカードを砕いてみる。
パリンッ、とガラスが砕けるような音をさせながらカードが砕ければ、水色の欠片が渦巻き、その中心に鷲の上半身とライオンの下半身を持つ幻獣が現われた。
鋭い爪による斬撃と疾風属性を司る幻獣、皇帝〝グリフォン〟である。
馬ほどの大きさのあるグリフォンは廊下に降りると、そのまま風花の正面で立ち止まっている。
雄々しさの中に気品を感じるその姿に思わず目を奪われるも、普段バックアップを担当している癖で相手の耐性やスキルが気になれば、風花は相手の情報が自然と頭に浮かんでくることに気付いた。
「あ、すごい。これ、頭の中に使えるスキルが浮かんでくるんだね」
「消費するエネルギーとダメージのフィードバックは全部俺に来る。使うやつは一切の消費を気にせず戦えば良い」
湊に全ての負担を押しつける形になってしまうが、何の制限もなくペルソナを使えるのなら戦闘慣れしていない風花でも扱えそうだと思える。
装備しているサブペルソナとグリフォンがいれば、風花も二体の戦闘向けペルソナを手にしたことになるので、本当にバックアップを湊やチドリに代わって貰っても問題がなくなる。
危険のあるダンジョン探索にこんな気持ちで参加するのは不謹慎かもしれないが、普段はサポートしか出来ない事もあって、風花は自分も皆と一緒にダンジョンにいける事を喜んだ。

「ね、ねぇ、はーちゃん。はーちゃんのペルソナならわたしたちも使えるの？」
「私と玲も使えるのであれば、自衛のために借りたいのだが」
湊が風花にペルソナを貸す場面は他の者たちも見ていた。
だからこそ、そんな簡単に自分の心の欠片であるペルソナを貸せることに驚いたものだが、善と玲は自分たちはサブペルソナも使えないと聞いていたので、もしも湊のペルソナが使えるのならと一縷の望みに賭けた。
あくまで武器や盾の延長。自分の受けるダメージを減らす効果は期待できないと分かっている。
ただ、もしも味方と分断されたとき、ペルソナを持っていれば逃げる時間を稼ぐくらいは出来るかも知れない。
そんな思いを込めて二人が湊に尋ねれば、湊はマフラーから二つのカードホルダーを取り出し、〝正義〟のカードが入ったものを玲に、〝皇帝〟のカードが入ったものを善に投げ渡す。
「……一般人でも使えるが、お前たちが強化される訳じゃない。カードがホルダーから抜けた状態で召喚すれば戻ってこなくなるし。使うときは気をつけて使え」
受け取った二人は僅かに緊張した様子でホルダーを持ち、視線を合わせてから頷いてカードを握り砕く。
パリンッ、とガラスの割れる音がして水色の欠片が回転すれば、玲の頭上にはアルビノの白獅子である正義〝レグルス〟が、善の頭上にはメラニズムの黒獅子である皇帝〝レーヴェ〟が現われた。
本来のライオンよりもサイズは大きく、馬くらいはあるのでペルソナの背中に乗ることも可能だろう。
一般人に貸し与える事が可能な事だけでなく、対になったペルソナを持っている事にも他の者たちは少し驚いていたが、風花に貸したグリフォンも含めて湊がこんなペルソナを使っていた姿を見たことがなかったチドリが疑問に思い口を開いた。
「ねぇ、湊。こんなペルソナいつ作ったの？」
「かなり前だぞ。普段使いは表が十五体、裏が十二体だからな。無難

な貸し出し用にホルダーのいつくかに事前にセットしておいたんだ。テオドアが作ったホルダーは七つだが、そのほとんどは貸し出せるようにカードを入れてあるぞ」
　言いながら湊はもう一つホルダーを取り出し、話を聞いていたりせに向かって投げ渡す。
　〝魔術師〟のカードが入ったそれをりせがキャッチし、そのまま握り砕けば薄緑色の毛並みをしたフェネックに似た動物が現われた。
　その額には赤い宝石がついており、毛の色も含めて綺麗だなと見ていれば、風花がこれ知ってると名前を告げた。
「あ、この子ってカーバンクルですよね？　前に神話系の本で読みました」
「……よく知ってるな。身体は小さいが魔法の威力はそれなりだ。久慈川もそいつと一緒にダンジョンに潜ってこい」
「えー……正直、こっちでサポートしてたいんだけど？」
「お前、こっちの世界じゃろくに運動せず食べてばっかりだろ。少しは動け」
　今は活動休止中とはいえりせはアイドルだ。元々、かなり厳しいレッスンをこなしていたので、迷宮に入っている直斗よりも動くことは出来る。
　ただ、確かにこの世界ではあまり運動していないので、体型維持のためと言われると辛いものがあった。
　苦手ながら渋々りせも行くことに同意すれば、メンバーが揃ったという事でこれまで通りの三隊にチームを分けて中に入ることにする。
　バックアップを担当する湊とチドリは留守番だが、マリーと一緒にテーブルにお菓子や飲み物を広げて完全に談笑モードに入っているのを見たメンバーたちは、彼らにバックアップを任せることに不安を隠せない。
　しかし、湊が最初に倒れた際に、彼ばかりに頼らないと決めていた事で、一同は意を決して中に入ってゆく。
「――――ああ、そうだ。お前たち、最初の曲がり角まで絶対に後ろを振り返るなよ」

もっとも、扉が閉まる瞬間に湊がそんな不穏な言葉を残した事で、入ってゆく者たちは全員嫌な汗が背中を流れた。

――放課後悪霊クラブ・壱ノ怪

全員が中に入って入口の扉が閉まると、中はとても薄暗くなった。どこか廃校を思わせる雰囲気の建物は、至るところにガラスが散乱しており、割れた窓と薄汚れた布きれなどが配置されている。

中の雰囲気と合せて湊の直前の言葉が気になり、誰一人背後を見ようとせず順平が前を向いたまま口を開く。

「お、おう。中は結構本格的だな。つーか、有里の最後の言葉ってどういう意味だ？」

「さあ？　けど、ダンジョンのトラップ的なものが理由かもね」

彼がどういった意図でそれを口にしたのかは分からない。

まぁ、すぐに通信が繋がると思うので、そちらで聞いてみてはと七歌が返せば、りせや風花が行なっているように頭に湊の声が聞こえてきた。

《白い人影》

敵の情報や地形について教えてくれるかと思いきや、急に変な単語だけ伝えられてほとんどの者は首を傾げる。

ホラーが苦手な者たちは想像力が豊かなのか、どこかに白い人影があると思って怖がっているが、ここに入る直前に湊が振り返るなと言っていた事で戻ることが出来ず怯え続けている。

このままでは動きようがないので、再び湊にどういう意味か聞こうとすれば、湊は淡々とした声色で再び通信を繋げてきた。

《私が保育園に上がる前、私たちは父の実家に同居する事になった。祖父母、父母、私と弟の六人家族。でも、家には私にだけ認識できるもう一人がいた》

「おい。なんか始まったぞ」

それは明らかにダンジョンのバックアップとは関係のないもの。

状況を考えるに怪談を話しているとしか思えないが、人がダンジョンに入っているというのに何を考えているんだと真田は思わず呆れ

る。
　もっとも、一部の人間には導入部だけでも効果は覿面なようで、必死に耳を塞いで聞かないようにしている。
　だが、彼らは通信機能を持つペルソナの恐ろしさを理解していなかった。
《最初はただの見間違いだと思って、誰にも言わなかったし気のせいですませていた。しかし時折視界の端に白い人影が映り、顔を上げてそちらを見ても誰もいないという事が続いていた》
「ちょ、やだやだ聞きたくない！　通信止めて！」
「風花、りせちゃん、通信ってどうやれば切れるの!?」
「え、えっと、そういえばどうやるんだろう？　同系統の力を持ってると干渉を防いだりは出来るんだけど……」
　千枝やゆかりがどれだけ耳を塞ごうとも通信は止まらず声が聞こえてくる。
　そう、りせや風花も今まで気付かずにいたが、ペルソナを使った通信は同じ力を持っている者でないと基本的には遮断できないのだ。
　遮断できない以上は他の者たちは相手が話し終えるまで聞き続けるしかない。
　どんなに耳を塞ごうと、歌や大声で聞かないようにしていても、頭に直接入ってくる言葉はそれぞれにしっかりと伝わる。
　恐怖でパニックに陥った者たちを見ながら、通信系の力はこんな使い方も出来たのかと鳴上は恐ろしさを感じた。
「サポート的な使い方しか知らなかったけど、こういった攻撃的な使い方も出来たんだな」
「まぁ、これで狙えるのは精神的ダメージくらいだけどな。つか、有里も復帰早々に遊ぶなよ……」
　お化け屋敷に入りたい風花に気を遣って交代したかと思いきや、怖がる者たちを煽って遊ぶためだったとは呆れて何も言えない。
　中等部時代の彼を知る者にすれば、そういえばこういうやつだったという印象なのだが、普段は真面目なだけにこの行動は読めなかった。

彼の友人である綾時も怖がっている女性陣を見つつ、湊の数少ない年相応な悪戯っぽさに苦笑している。
「やれやれ。僕としては怖がっている女性は放っておけないんだけど、湊に最初の曲がり角まで振り返るなと言われてるからね。戻ることも出来ないし、どうにか最初の曲がり角まで行かないと」
湊の話自体は語りの上手さもあって興味を惹かれる。
勝手に話が頭に入ってくるので注意して聞かなくても良い点は楽だが、おかげで半狂乱になりかけている者たちをどうにかして最初の曲がり角につれて行かなければならない。
入る直前に言った言葉はあくまで雰囲気作りのフェイクかもしれないものの、理由があるのなら忠告として素直に聞いておくべき。
そう判断して大丈夫な者たちは怖がっている者たちが振り返らないよう両側から支えて歩き、かなり先にある最初の曲がり角まで連れて行く。
「やだやだ！　行きたくない、帰りたいから離して！」
「最初の曲がり角まで振り返ったアカンて言われたやろ？　すぐに済むんやから目瞑って我慢してや」
「うわーん、もうやだー！　あたし、家にかえるー！」
「ほら、もう少しだから頑張って千枝」
ゆかりはラビリスと七歌に押さえられ、千枝は雪子とあいかに押さえられる。玲には善とアイギスがついており、美鶴と直斗はびくつきながらも自分で歩いて奥を目指す。
話はその間ずっと続いており、どうやら白い人影は話し手の父とその兄の間に生まれるはずだった人物の魂らしい。
流産して産まれることが出来なかったが、祖母があまり供養しなかったせいで残ってしまったのだとか。
話し手にだけ視える理由は、話し手を母が身ごもったときに年若い事もあって祖母がおろせと言ってきた事で、自分と同じ境遇になりかけた話し手を白い人影は心配しているのではという事らしい。
相手からの悪意は全く感じず、基本的には興味ないようなので悪い存在ではないのだろう。

ただ、お化け屋敷でそんな話を聞くと嫌でも怖く感じてしまう。
最初の曲がり角まで後もう少し、湊の話ももう終わりそうなので、怖がっている者たちもあと少しの辛抱だ。
《ちなみに雰囲気で分かるが、白い人はまだ家にいるらしい》
ゆっくりした足取りながら一歩一歩進み、曲がり角に入りかけたところで湊の話が締められた。
怖がっていた者たちを両側から押さえていた者たちは、相手の抵抗が少しマシになった事で、通信が終わって一安心していたのだろうと察する。
だが、通信が止んだことで僅かに気が緩んでしまったのだろう。曲がり角に辿り着き、さぁ一度帰ろうと振り返りかけたそのとき、曲がった先の壁際に人が立っていることに気付くのが遅れた。
《――――気をつけて、ね》
『うわぁぁぁぁぁぁっ!?』
急に横から話しかけられて全員の肩がびくんと跳ねる。
暗闇に白い顔がポツンと浮かんでいる。そう錯覚してしまうほど白い顔の少女が、暗い紺色のドレスを着てそこに立っていた。
精神が限界を迎えたのか両側から押さえられていた者たちは拘束を解き走って入口へ戻ってゆく。
他の者たちもそれに釣られて走って入口に向かうも、入口の前に誰かが立っているのが見えた。
向こうで待っているはずの湊でもチドリでもなく、一緒に残ったマリーでもない。
誰も見たことがない黒衣の女は、メンバーらが近付いてくると振り返り、意味深に笑ってみせるとその場で消えた。
『ひぃ……っ!?』
人が突然目の前で消えるなど普通ではあり得ない。明らかに霊としか思えない存在を見てしまったゆかりたちは、これは悪い夢だと思うことにしたのか、口から泡を吹いてそのまま夢の世界へ旅立っていった。
――ヤソガミコウコウ

気を失ったゆかり、美鶴、千枝、直斗、玲の五人を他のメンバーで支えつつ外に出ると、湊たちは他の者たちがダンジョンに入る前と同じように飲み物を飲みながらお菓子を食べていた。
ただ、一つ違う点があるとすれば、それは湊の膝の上に先ほど曲がり角で話しかけてきた〝座敷童子〟が座っている事だろう。
メンバーたちが走り去った時点で消えて湊の中に戻り、再び顕現したことで先回りした。
ただそれだけの事なのだが、怖がってはいても気を失わなかったりせが座敷童子を指さして声をあげた。
「ああー！　さっき曲がり角で驚かしてきた子ども！」
《……ただ、気をつけて……って、言っただけ……》
「うっさい！　てか、その子だれよ！」
相手が何を言おうと暗闇で急に話しかければビックリする。
明るいところでみれば可愛い少女だと分かるが、廃校の中に一人で少女が立っていれば途端にホラー要員になる。
おかげでりせが敵意剥き出しで誰だと尋ねれば、座敷童子はクッキーを食べながら自己紹介した。
《わたし、座敷童子……八雲の、ペルソナ……》
「やっぱ、アンタが元凶じゃないのー!!」
怪談から何から全て湊が元凶だった事でりせは切れた。
もう二度と湊にバックアップは任せないと怒り続け、それは気を失った五人が目を覚ますまで続くのだった。

第二百八十三話　放課後悪霊クラブ

――放課後悪霊クラブ・壱ノ怪

気を失っていた五人が目を覚ますと、満場一致で湊はバックアップから解任された。

バックアップ能力だけを見れば確かに最も優れているのは彼かもしれない。

次点で優れている風花がダンジョン探索に参加するのであれば、彼が代わりに残るというのも理解出来た。

しかし、彼は探索メンバーに綾時とメティスが入っているからか、あまり危険だと思っていないようで悪戯を働いてしまった。

おかげでほとんどのメンバーから〝人格面に問題があり、バックアップ役としての適性無し〟という評価を頂き、りせとチドリでサポートをこなし、湊は全員の目が届く先頭を歩かせようという話でまとまってしまう。

指揮官に置いても彼はどうせ一人で勝手に戦うのだから、先頭を歩かせようが最後尾を歩かせようが変わらない。

むしろ、一部の者たちからはどうせ攻撃を喰らっても大丈夫なのだから、お前が弾除けになれとすら思われていた。

指揮官に対してそんな感情を抱くなど論外だが、ここに集まっているのは正確に言えばチームではない。

あくまで複数の集団をチームとして機能するように配置しただけの素人の集まりだ。

戦闘に関してプロと言える青年とは経験値から何から異なるため、規格の合わない部品である湊を集団の外に置いた方が全体として上手く回る。

各分隊の隊長たちは口にこそ出さないものの、それを理解しているからこそゆかりや千枝が湊を先頭にしろと言ったときも反対はしなかった。

そう、反対しなかったのは七歌や鳴上も一緒なのだが、だからといって湊がさらに勝手に動き出す事までは流石に想定していなかっ

た。
薄暗く目をこらさないと先が見通せない暗い校舎に入ると、湊は先頭に立った状態でカードを具現化して握りつぶす。
「来い、麒麟（チーリン）」
青年の前に現われたのは、淡い白光を纏った古代中国の聖獣、審判〝麒麟〟。
七歌の最強の手持ちである黄龍と同時に生み出されたペルソナであり、雷帝の名を冠する白雷によって夜天を払うほどの力を持っている。
敵も現われていない状態で、大型の馬より一回り大きいそんなペルソナを呼び出した湊は、麒麟の背に手を掛けて鞍も付けていないのに飛び乗った。
神聖な空気を纏う白銀の聖獣に、魔王を思わせる黒衣の青年が跨がっている姿は非常に絵になる。
きっと移動用の足として出しただけなのだろうが、乗り物に乗っただけで魅力値にブーストが掛かるなど卑怯だと一部の男子が妬ましく思っていれば、金髪碧眼の少女がとてとてと近付いていき青年に声を掛けた。
「八雲さん」
「……乗りたいのか？」
「はい」
「分かった。手を伸ばしてくれ」
湊の許に向かったアイギスが乗りたいと強請れば、青年はしょうがないなと口では言いながらも素直に彼女を引っ張り上げた。
引っ張り上げられたアイギスは横座り状態で湊の前に腰を下ろす。
鞍も鐙もなく素人では踏ん張りが利かず落ちてしまうので、ちゃんと乗れる自分の前に座らせることで彼女を支えるつもりなのだろう。
そんな意図は他の者たちも理解出来ているのだが、自分たちが夢見たバイクで密着作戦の変化系をさらりと実現している湊に花村が妬みの言葉を吐く。
「チクショウ……。俺だって、俺だって金があれば女子とバイクであ

んな風に出来たってのによぉ」
「いや、先輩にゃ相手がいないじゃないッスか」
「うっせぇ！　つか、有里もこんなとこで馬出してんじゃねぇよ！　降りろ、むしろ乗せろ！」
一人だけ乗り物なんてずるい。女子と二人乗りなどずるすぎる。
そんな思いから花村が怒鳴りつければ、青年はアイギスを自分の胸元に抱き寄せてから麒麟を出発させてしまう。
花村がそれにさらに怒りを燃やそうとすれば、他者に興味ない青年が相手だけにこれ以上は怒っても体力の無駄だと鳴上が窘めた。
相棒にそう言われてしまうと花村としても無視できず、釈然としないものの黙って先頭をゆく湊の後を追い始める。
暗い校舎の中はところどころに墨でつけたのか黒い手形が描かれていたり、半透明な白い手のようなものが天井から下がっていたりする。
半透明な白い手はゆらゆらと揺れているが、ダンジョンのオブジェなので現実世界には存在しないもので出来ていそうだが、麒麟から一定の範囲に入ると白雷が爆ぜて消滅させている。
攻性結界と呼べそうな力は、一体どんなスキルなのか気になるところだが、彼が先頭を歩いていれば正面からの敵の襲撃は警戒せずに済みそうだ。
ダンジョンに配置されたオブジェを次々と消滅させている湊を見つつ、他の者も後に続いて先を進んでいれば、区画を区切っているガラスの扉が正面に見えてきた。
扉のある空間の左右は開いているようなので、どうやら横にも道があるようだと鳴上がどのルートに向かうかを他の者に尋ねた。
「扉が見えてきたな。横にも行けそうだが、どうする？」
「僕は正面の扉が気になるな。まぁ、三隊あるし分かれて探索するのもありだと思うけど」
お化け屋敷というアトラクションを素直に楽しんでいる綾時は、興味深そうに周囲を眺めながら分かれるのもありだと提案する。
幸いな事に、道は左右と正面で隊の数と合っている。これだけの人

数がいればすぐやられることもないので、どうせなら少数で探索するのも楽しそうだと綾時が言えば、いつの間にか湊の近くに来ていた美鶴が自分たち七歌隊は湊と同じルートを行くぞと宣言してきた。
「よ、よし。我々の隊は有里と同じルートを行くぞ。彼を放っておくと色々と危険だからな」
「はい。私も桐条先輩に賛成です！　有里君のことはちゃんと見張っておくから皆も安心して！」
美鶴に続いて同じ七歌隊であるゆかりも湊の近くにやって来て彼女の意見を支持する。
元彼女だけあって湊に振り回される苦労は知っており、これを他の者に押しつける事など出来ない。
そういった苦労は経験者である自分がするから、他の隊の人たちはそれぞれのルート探索を頑張って欲しい。
やや強張った笑顔でゆかりがそう言えば、彼女たちの意見に直斗と千枝が待ったを掛けた。
「僕は戦力的に充実したメティスさんの隊、そして三年生のいる九頭龍さんの隊には単独での行動をお願いしたいです」
「そうそう！　うちにはクマ吉もいるしさ！　有里君に見張っておいて貰わないと不安だからね！」
メンバーの平均レベルが突出しているメティス隊、三年生もいる事で様々な事態にも落ち着いて対応出来るだろう七歌隊。
それに対し、自分たちの隊は勝手な行動を取るクマがいるので、湊には手綱を握っておいて欲しいと直斗たちは話す。
言われた湊にすれば、勝手な行動を取ったなら見捨てておいていけばいいと思うのだが、限られた戦力しかない現状ではクマを捨てていくことは出来ないのだろう。
馬上で聞いて相手の意見に湊が一定の理解を示していれば、美鶴たちや直斗たち同様なぜか湊の傍にやって来ていた玲が怯えながら口を開いた。
「うー……はーちゃんのこのペルソナと一緒がいいよぉ。暗いと見えなくて危ないし、ドーナッツも普段より甘くない気がするし」

「玲、ドーナッツの味に変化はないぞ」
お化け屋敷の不気味な雰囲気に怯えながらドーナッツを食べている玲。共にいる善が隣で冷静にツッコミを入れているが、二人の顔は湊の麒麟が纏っている淡い光で照らされている。
おかげで湊も何故隊の分け方について話している者たちが自分の周りにいるか気付けた。
そう、このお化け屋敷に怯えている者たちは、常に淡い白光を纏って周囲を照らしている麒麟に集まってきていたのだ。
暗いというのに誰一人として明かりも持ってきていないため、つい明るい方へ行きたくなる気持ちも分からないでもない。
だが、あまり傍に寄ってこられると鬱陶しいので、湊はアイギスに一声掛けるとペルソナを消して地面に降りた。
『ああーっ?!』
途端に抗議の声をあげてくるゆかりたち。
まぁ、湊にすれば知った事ではないので、麒麟を消したまま呆れた様子で言葉を返した。
「はぁ……お前らは虫か。光に寄ってくるな鬱陶しい。そんなに怖いのなら明かりの一つでも持ってくれば良かっただろう」
「いえ、一応ペンライトくらいの備えはあります。ただ、突然戦闘になると考えると手が塞がるのは危険だと思いまして」
懐中電灯でもヘッドライトでも構わないが、明かりも持たずに暗いのが怖いと言われてしまえば、湊としては出来る限りの努力もせず何を言っているのだとしか思えない。
ただ、直斗は職業柄か色々なグッズを持っているらしく、制服の内ポケットから油性マジックほどの太さのペンライトを出して見せた。
周囲を控えめに照らしていた麒麟に対し、ペンライトは一つの方向だけだが強力な光を放っている。
探索には十分なその明るさは直斗も自覚しているものの、やはり持っている片手が塞がってしまうデメリットが大きい。
交代制を取っていた今までならいざ知らず、三隊に分かれての探索になれば必然的に戦う場面が出てくる。

そうやって色々と考えたからこそペンライトを使えないのだと直斗が明かりを消せば、麒麟が消えたことで話が振り出しに戻った各隊の探索ルートについて湊が話す。
「……現時点では隊を分けて探索するメリットがほぼない。同時進行にすることで時間が短縮できても、合流に時間がかかれば一緒だからな。こういった場所では時間より安全の方が重要ってのもあるが」
「じゃあ、湊はどういった方針で行くんだい？」
「とりあえず、正面にある扉の向こうへ行こう。このダンジョンのルールなりを調べる」
一つ目のダンジョンが不思議な国のアリスをモチーフにしていたり、二つ目のダンジョンが運命の相手探しをこなしていったように、このダンジョンにも何かしらのテーマやルールが存在するはず。
それが分かれば探索の進める上での指針にもなり得るので、湊は横道には後でも行けるからと直進を選んだ。
こんな見通しの悪い場所でのセオリーなど知らぬ一同からは反対意見も出ず、湊の決定がそのまま全体の方針に決まれば、湊とアイギスを先頭に金属のフレームにガラスの嵌まった扉の先へ移動する。
扉の向こうはどうやら大部屋になっているようで、暗くて見えづらい事もありそれぞれ武器を手に周囲を警戒する。
ただ、湊は他の者と違って暗くても見ているからか、すたすたと先へ行くと地面に落ちている紙切れを見つめた。
彼と一緒にいたアイギスもそこまで行けば、何か赤いインクで文字が書かれている事に気付く。
「何か書いてありますね。〝探し物は一番奥に〟〝鍵の掛かった扉を全て開かなければ一番奥には行けない〟……なるほど。二つ目のダンジョンで質問部屋を経由することで開く扉があったので、それと同様のギミックが存在するようです」
チェックポイントを回って行けば最後の扉も開く。言ってしまえばそういう内容でしかないため、探索を続ければ自然とクリア出来そうだとアイギスも頷いてみせる。
こういった場所ではもっと無理難題を出されるのがセオリーだと

思っていただけに、この程度ならば時間を掛ければ苦もなく突破出来る事に他の者もホッと安堵の息を吐く。
実際には鍵の掛かった扉と開くための鍵を探す必要があるのだが、普段からそれぞれのチームでサポートをこなしている風花とりせに加え、同等かそれ以上に強力な探知能力を持ったチドリと湊もいる。
これだけのメンバーがいればフロアの地理の把握には困らないので、奥を目指す上での方針が決まった事で再びメンバーたちは部屋の奥の扉に向かって歩き出した。
＊＊＊
壁や床だけでなく天井にまで現われる手形の染み、割れた窓ガラスに怪しく光る赤い明かり。扉の近くにはどういう訳か市松人形が置かれており、湊の悪戯で気を失ったメンバーは進むにつれて精神がガリガリと削られていた。
「うぅ……暗いよぉ、怖いよぉ……」
善のマントを掴みながら怯えている玲は、怖がりながらも付いてきているものの、誰かが歩いて床板が軋むだけで肩をビクリと跳ねさせている。
七歌の腕を掴んでいるゆかりや、雪子の腕に掴まっている千枝も顔色が悪くなっており、このままでは再び気絶する者が出てもおかしくない。
進行が遅れることに内心で舌打ちをしつつも、ダンジョンの攻略自体は余興のようなものと考えている湊は、ここらで一度休んだ方が良いかと疲れている面々に話しかける。
「ずっと気を張っててもも疲れるだけだぞ。ここらで一度休憩でもいれるか？」
「ハァッ!?　ばっかじゃないの！　こんなとこで休める訳ないでしょ！」
「あたしらは有里君と違って暗いとこ好きじゃないっての！」
「……理不尽だろ」
相手を気遣って休憩をいれようかと提案しただけで、湊はゆかりと千枝から謂われのない罵倒を受けることになった。

二人ともあまりの怖さで余裕がなくなっている事が原因だが、今回ばかりは湊に落ち度はないので他の者たちも彼に同情的な視線を送る。
まぁ、休憩がいらないというのなら先へ進むだけなので、湊が再び正面を向いて歩き出せば、少し進んだところでどこからか赤ん坊の泣き声のようなものが聞こえてきた。
いくら何でもこんな場所に赤ん坊がいるはずはない。そう思いながらも聞こえてきたため、順平が少し驚きながら今の声が聞こえたかと他の者に確認を取る。
「なぁ、今なんか赤ん坊の泣き声が聞こえなかったか？」
『ひっ!?』
お化け屋敷で赤ん坊の泣き声は定番と言えば定番だ。
本物はとても可愛いというのに、どうしてホラー系だとあんなにも怖く不気味に聞こえるのか。
その謎は今ここでは解けないだろうが、順平の言葉を聞いて声にならない悲鳴をあげかけたゆかりは、キッと鋭い視線で先頭にいた青年を睨むと、千枝と共に駆け足で近付いて背中を強く叩いた。
「もう！　いい加減にしてよ！」
「そんなに怖がってる人を見るのが楽しいの?!　そっちがその気ならこっちだって相手になるよ！」
こんな場所に赤ん坊がいるはずがない。ならば、泣き声の発生源は昨日まで赤ん坊になっていた青年に違いない。
今朝、悪戯で怖がらせてきた事もあり、そんな短絡的な思考で二人が青年に怒りをぶつければ、再び殴りかかりそうなゆかりたちを七歌とラビリスで止めに入った。
「ゆかりも千枝ちゃんも落ち着きなよ。八雲君はいま何もしてないから」
「そうやで。いくら何でも縮んでないときに赤ちゃんの泣き真似したりせんて」
たまに馬鹿みたいな事をしてくる青年ではあるが、こんなところで意味もなく赤ん坊の泣き真似などするはずがない。

彼の隣にいたアイギスも彼が泣き声の発生源ではないと断言出来るため、一方的に犯人と決めつけて彼の背中を叩いたゆかりに不快感を露わにしている。
これ以上やるなら相手になるぞと言った千枝に対しても警戒しており、もしも千枝が湊に攻撃を仕掛ければアイギスは迷わず制圧に移るだろう。
怖さで余裕のなくなった者たちと、流石に決めつけてで湊を責めることは許容できないと止めに行った者たちが互いに牽制し合い動かずにいれば、第三者として成り行きを見守っていた花村が冤罪で叩かれた青年にヤジを飛ばした。
「有里、普段の行いだぞー」
普段から他人を見下していたり、無神経な言動で煽ったりしているからこそ、こういったときに真っ先に犯人と思われるのだ。
全ては普段の振る舞いが原因の因果応報。
順平や真田もそれを聞いて頷いていれば、カランカラン、と赤ん坊をあやす玩具の音が急に聞こえてきた。
『っ!?』
赤ん坊の泣き声に続き、赤ん坊をあやす玩具の音が聞こえてきた。
どう考えても二つが無関係とは思えないので、いよいよ何かが起こるのかもしれないと全員が警戒を強める。
《皆、近くに強い反応があるよ！　気をつけて！》
《これは……後ろから来るわよ》
すると、丁度良いタイミングでサポートの二人が敵の反応を察知し、全員がその声に反応して後ろに振り返る事が出来た。
直後、言いようのない重圧と共に大きな物体が上から降ってきた。
ぐちゃり、と水気を含んだ物が落下した音と共に現われたのは、銅像のような緑の肌に、ボロ布らしきもので出来た袋を頭に被った不気味なF・O・E。
相手は豚ほどの大きさがあり、落下の衝撃だけで死んだのではと淡い期待を持つも、敵はノロノロと身体を起こすとハイハイの体勢を取った。

ハイハイとは赤ん坊が動く起きに使う体勢なので、落下してきたF．O．Eはハイハイで向かってくるつもりなのだろう。
「おい、すぐに逃げんぞ！」
こんな場所でF．O．Eに襲われるなど堪ったものじゃない。
荒垣が恐怖で硬直している女子らに声を掛けて逃げるように促す。
その声で正気を取り戻した者たちは、すぐに逃げるため再び振り返って駆け出す。目指すは十数メートル先の廊下の終着点である扉だ。
そこまで逃げ切れば扉を閉めて追跡を逃れる事が出来るかもしれない。
女子の安全を優先するため、彼女たちを先に行かせてから男子も走り出せば、そこで一人だけ立ち止まって動いていない者がいる事に気付く。
敵が向かってきているというのに、どうして動かないんだと鳴上が声をあげた。
「有里、何をしてるんだ！　お前も一緒にっ」
一緒に来い、と言おうとしたとき鳴上は見た。
敵がハイハイとは思えない速さで追って来ていると、立ち止まってF．O．Eを見ていた湊がおもむろに右脚を引くのを。
そして、敵との距離が縮んでゆき、あともう僅かで衝突するというタイミングで湊が上半身を右に捻ったかと思えば、次の瞬間、捻った身体を戻す勢いのまま右脚で神速の蹴りを放った。
ブレて見えなくなる青年の右脚、コンマ数秒遅れて聞こえてくる破裂音、それと同時に何かがF．O．Eの後方に飛び散り、少し経ってから首から上がなくなったF．O．Eがドサリと倒れた。
倒れたF．O．Eは頭部を完全に失っているので、そのまま黒い靄になって消滅していったが、湊がF．O．Eの足止めのために残ったと思っていた者たちは、予想外の事態にポカンとしながら足を止めていた。
先ほどの湊は、蛇神の力の欠片である黒い炎を纏うことすらせず、完全に己の身体能力のみでF．O．Eの頭部を蹴りで破裂させてい

た。
例えとして〝潰れたトマトみたいになる〟という言葉が使われる事があるが、先ほどのＦ．Ｏ．Ｅはまさにそんな惨状になっていた。
武器も使わずそんな事が可能であるとは初めて知ったが、湊はかつてラナフの蠍の心臓に滞在していた際、反政府組織のテロリスト狩りで標的の頭部を蹴りで吹き飛ばした事があった。
あの時よりも今の方が身体能力は上がっているため、本人は出来ると確信を持って行動に移したわけだが、他の者からすればこれまでのダンジョンに出てきたＦ．Ｏ．Ｅよりも強いはずなのにという思いが強い。
まぁ、どちらにせよ直近の脅威が排除された事に変わりはないので、逃げるのを止めていた者たちが湊の事を労おうとすれば、蒼い瞳になっていた青年の冷たい声が響いた。
「……これがお前らの十秒後の姿だ」
『すみませんでした』
普段は対等な立場を心掛けて接している真田や荒垣ですら、押し殺した静かな怒りを放つ青年には思わず頭を下げてしまう。
雰囲気と瞳の色によって全員が彼の苛立ちを察した訳だが、思い返してみれば湊が苛立っていたことも納得できる。
善意で休憩するかを尋ねれば罵られ、他の者が異変に気付けば自分のせいにされ、あげくには自業自得や因果応報だと言われれば、誰だって少しくらいはイラッとくるだろう。
本気で他の者たちの頭部を蹴りで粉砕するつもりはないと思われるが、この世界に来てからまだ彼に頼っている部分はあるので、そういった部分に対する感謝を忘れずにいようと先ほど煽ったメンバーは固く心に誓う。
一方、恐怖で余裕がなくなっていたとは言え、あまりに無礼な行動ばかりとっていた事に気付いたゆかりたちも、先ほどは本当に失礼しましたと深々と頭を下げた。
それをみた青年は敵に八つ当たりすることで怒りは発散したので、これ以上言うつもりはないのか再び先頭に戻って歩き始める。

拳の一発や二発は覚悟していた男子らは、何事もなく済んだことに安堵し、嫌な汗が背中を濡らすのを感じつつ探索に戻ってゆく。
そして、湊に理不尽に当たっていた者たちも、恐怖は徐々に心を蝕んでゆく物だが、あまりに予想外の事が起きると心はリセットされるらしく、先ほどよりも僅かに恐怖が薄れて冷静さを取り戻すことが出来ていた。
急に上から降ってくるF．O．Eの謎に加え、まだ見つかっていない鍵付きの扉を探すなどやることは多い。
けれど、恐怖で余裕がなくなっていた者たちが少しは冷静になったのなら、それらも徐々に見つけていく事が出来るだろう。
敵の出現には驚いたが結果的に事態は好転した。そう考えながら一同はさらに奥を目指し進んで行くのだった。

第二百八十四話　お化け屋敷探索

――放課後悪霊クラブ・壱ノ怪

赤ん坊をあやすガラガラの音が聞こえてくると、再び天井の方から頭にボロ布の袋を被ったＦ．Ｏ．Ｅが降ってきた。

敵が現われた事で全員が身構えるも、相手が動き出す前に正面に着いた湊が相手の頭部を左右から挟むように掴み、そのまま首をねじ切って一瞬で絶命させる。

基本的にどんなシャドウが相手でも簡単にダメージを与えて倒している印象があったが、相手が人間と同じ身体の構造になっていると湊はさらに強かった。

それだけ人の身体の仕組みに精通しており、壊す方法を熟知しているという訳だが、仕事屋としての経験か医者としての経験か真相は謎である。

だが、湊がいるとやはりあれだけ警戒していたＦ．Ｏ．Ｅも簡単に倒せるため、Ｆ．Ｏ．Ｅとの遭遇を警戒していた者たちは、少しばかり精神への負担が減った状態で探索する事が出来ていた。

赤ん坊型の敵の首を容赦なくねじ切って殺した湊が戻ってくれば、お疲れさまですと言ってアイギスが彼を迎える。

「八雲さん、お疲れさまでした。惚れ惚れするような手際であります」

「……実際の人間より身体の重心が座ってるからな。人で同じようにすれば身体も一緒に回ってしまうので、三倍以上の速度で頭部を捻る必要があるだろう」

「なるほど。ですが、そんな事が可能なのですか？」

「普通は無理だろうな。それなら首の骨を折った方が速い」

何でもないことのように話をしているが、その内容はえらく物騒な物である。

しかし、本人たちにとっては会話をしていること自体に意味があるらしく、ここまで進んでくる間に見つけた鍵付きの扉のヒントに至る間も、他の者には何が楽しいのか理解出来ない会話をしばしばしている。

ちなみに見つけたヒントは〝一つ目の鍵は時間割の中に〟、〝技術の後は美術、数学の前は理科〟というものだ。
どこかに時間割があって、そのときに先の情報が役に立つのだろう。
順平や完二は早々に覚えることを放棄したが、七歌や鳴上に直斗といったメンバーがメモを取っているので問題はない。
そうして、道中に現われるシャドウを天田が槍で突いたり、コロマルがケルベロスで燃やしつつ進んでいると、少し開けた場所に出た。
赤ん坊型のF・O・Eを呼んでしまうガラガラの音は、特定の床板を踏むと鳴る仕組みだったので、一同は慎重に足下を見ながら部屋の奥まで進んでゆく。
すると、前方に大きな掲示板が見えてきたことで、何か鍵について参考になりそうな情報はないだろうかと全員で見て回る。
暗いので見えづらかったが途中で湊がフェニックスを呼び出し、フェニックスが身体を構成する炎を部屋の床一面に広げたことで、部屋の中が明るくなり見えるようになった。
足下を蒼い炎が覆っており、たまに炎が爆ぜてもいるというのに熱くはない。
その辺に落ちているボロ布や紙も燃えていないので、あくまで炎の性質を持った流動系の肉体という扱いなのだろう。
久しぶりに周囲が見渡せるほどの明かりと出会えた事で、ここまで怯えていた者たちも安心した様子で部屋の中を探索する。
すると、玲が他とは異なる部分があるよと掲示板に書かれた赤い文字を指さした。
「あ、みてみて！　ここに変なのが書いてる。〝月曜日の四時間目と、金曜日の三時間目を教えて〟だって」
「といっても、肝心の時間割がないとな……」
どうやら玲が見つけたのは扉を開けるための鍵に当たるもののようだが、ここに来るまでに時間割などなかったので、鳴上がこれでは答えようがないと肩を竦めた。
「これ、時間割。これで分かる？」

すると、掲示板を見ていたあいかが時間割表を見つけ、これがあれば答えることが出来るのではと尋ねた。
ダンジョンの仕掛けがそんな簡単にクリア出来るのかと疑いつつも、しかし、時間割表を見ないことには答えることが出来ない。
全員があいかの許に集まれば、掲示板に貼られた日焼けし古ぼけた紙の時間割表に視線を向けた。
月：社会、技術、――、？、音楽
火：理科、――、家庭科、――、――
水：保健体育、社会、――、――、国語
木：音楽、理科、――、――、英語
金：総合、――、？、技術、――
時間割表はこれで間違いないと思われるが、すり切れて文字が読めなくなっている部分もあれば、破れて読めなくなっている部分もある。
これじゃあ解読にも一苦労だと頭を掻きながら完二が溢した。
「あー、なんつーかボロくて読めないッスね」
「でも、分かるところもありますよ」
「ええ。ですが、肝心の〝月曜の四時間目と金曜の三時間目〟は完全に読めません」
なんとか分かる部分から予想出来るのではないかと天田が言えば、直斗もそれに同意しつつジッと時間割表を見て考え始める。
途中で見つけた〝一つ目の鍵は時間割の中に〟、〝技術の後は美術、数学の前は理科〟というヒントもここでようやく出番が来た。
ただ、推理は探偵である直斗の得意分野であるものの、流石に情報が少なすぎて難航しているらしい。
ここには他にも成績優秀な者が多数揃っているので、善から最初に渡されたマッピング用のメモ用紙を使って全員で考え込む。
雪子と千枝が意見を出し合い、あーでもないこーでもないと言えば、荒垣と一緒に考えていた真田がもっと体育を入れるべきだろうと変な突っ込みを入れる。
そうして、十分ほど全員で考えても答えが出ず、少し休憩しようと

メティスが顔を上げれば、煙管を咥えて暇そうに他の者を眺める兄の姿がみえた。
「あ、兄さん。答えは分かりましたか？」
「……いいや、全然」
言いながら湊は七歌に渡されていたメモ用紙をメティスに渡す。
そこには、
月：社会、技術、美術、『国語』、音楽
火：理科、数学、家庭科、英語、総合
水：保健体育、社会、技術、美術、国語
木：音楽、理科、数学、家庭科、英語
金：総合、保健体育、『社会』、技術、美術
といった具合に全ての時間割が埋まった状態で書かれていた。
答えが分からなかった者、答えに確信が持てなかった者、それぞれが湊の答えとやらを見にメティスの許に集まってくる。
ただ、ほとんどの者はそれが正解であるかどうかが分からないため、一応答えまで辿り着いていた直斗が自分の手帳に書いていた答えと比較し、全てが一致していた事でフッと柔らかい笑みを浮かべた。
「良かった。やはり、法則通りですね。先輩、流石です」
「え、直っちも一緒だったん？　なしてあれで解けんの？　学校のカリキュラムとか覚えてる系？」
「いえ、それは流石に。ですが、この時間割はそのカリキュラムからあまりに離れているので、一定の法則で割り振られているんだと気付けました」
時間割表に途中で見つけたヒントの〝技術の後は美術、数学の前は理科〟を当てはめると、
月：社会、技術、〝美術〟、？、音楽
火：理科、〝数学〟、家庭科、――、――
水：保健体育、社会、――、――、国語
木：音楽、理科、〝数学〟、――、英語
金：総合、――、？、技術、〝美術〟
となる。

続けて並んでいる科目を見ていけば、月曜の五時間目から火曜にかけて、〝音楽、理科、数学、家庭科〟と並んでいるが、木曜にも同じように〝音楽、理科、数学〟と並んでいる事に気付く。
本来ばらける事のある時間割で、週に複数回入っている科目が〝技術の後は美術、数学の前は理科〟と並びが決まっている事もあり、先に挙げた三科目の並びが偶然ではない事は分かる。
そこまで分かれば後は他の曜日の並びを見て、音楽の前や技術の前に何の科目が入っているかを確かめれば答えはすぐに出た。
直斗からそういった説明を受けると一同は納得し、湊と直斗の答えを時間割表に書き込んだ。
すると、カシャンと小さな音が鳴り、チョーク入れの中から〝実習棟〟のプレートがついた鍵が現われた。
無事に鍵を手に入れることが出来、問題を簡単に解いた直斗らを玲が拍手で褒める。
「わー、直ちゃんもはーちゃんもかっこいい！　本物の探偵みたいだったよ！」
「……ただのクイズだろ。いいから先へ行くぞ」
褒められたところでな、と冷めた態度で湊は部屋の床一面に展開していたフェニックスを消す。
途端に辺りに暗闇が戻ってきた事で、明るい状態に安心していた千枝たちから何故に消すのかと抗議の声が上がる。
「ちょちょっ、消さなくていいじゃん！　明るい方が安全でしょ！」
「そうそう！　暗いと敵への反応も遅れるしさ！」
「……フェニックスは形状変化が可能だが、その間は非常に燃費が悪くてな。この部屋の床一面に広げていた間にお前たちなら三人分に相当するエネルギーを使い切るくらいには消耗してる」
湊は一応病み上がりという扱いになっている。消耗の激しさから退行していたので、元に戻りはしていても無茶はさせられない。
自分たちのエネルギーの三人分も謎解きの時間稼ぎのために使わせた以上、流石に我が儘は言えないなと二人も諦め、大人しく暗闇を警戒しながら先に進むことになった。

時々現われるシャドウを倒しつつ、先を目指していると他の扉と違って厳重そうな鉄の扉があった。
扉の上には薄らと〝実習棟〟と書かれているため、先ほど手に入れた鍵を使うと見事に開いた。
「よし。これで先へ進むことが出来るな」
「おい。あんま先に行こうとすんなよ。こんな場所ではぐれたら面倒だ」
「なっ、人を子ども扱いするな！」
次のエリアへと足を踏み入れるなり、真田と荒垣が何やら騒いでいる。
こちらの棟では床板がなくなっている場所があるので、あまり暴れると落下する危険がある。
そのため、傍で聞いていた美鶴は額に手を当てて呆れているが、雪子にはまるで兄弟のように見えたため、同じチームの仲間として以上の繋がりがあるように思えた。
「真田さんたち仲良いよね。幼馴染みだったよね？」
「そうそう。そういう雪子ちゃんも千枝ちゃんと幼馴染みでしょ？」
「うん。小学生くらいからの付き合いだから結構長いよ」
二人が幼馴染みである事は自己紹介のときに聞いていたが、七歌に言われ自分と千枝も幼馴染みではあるが、流石に姉妹のような関係とは言えないなと考える。
家庭環境の違いか、それとも性別の違いが大きいのか。
今も真田と荒垣は言い合いがヒートアップしてきて、今にも取っ組み合いの喧嘩を始めるのではという状況になっているが、千枝と雪子はそんなキャットファイトを演じるような喧嘩はした覚えがない。
多少の口喧嘩がせいぜいで、怒りという意味では最近になって出会ったクマを含めた男子たちに抱いた回数の方が多い。
ほとんどはスケベな理由だったと思うが、そう考えると衝突が少ない分仲が良いと言えるのだろうかと考えていたとき、前方に見える扉の方から何やらピアノの音らしきものが聞こえてきた。
暗い夜の学校でピアノの音とくれば怪談の定番である。おかげで

一部の女子たちは怖がっているものの、美鶴は耳を澄ませて聞こえてくる曲を言い当てる。
「これは……ブラームスの子守唄だな」
「え、聞いただけで分かるんスか？」
美鶴が曲名を言えば、順平がよく分かりますねと驚いた顔をする。
ここにいるメンバーで曲名が分かったのは美鶴と七歌くらいなもので、後のメンバーは直斗ですら聞いたことはあるが曲名は知らなかったという感じだった。
二人は社交界にも出るほどの上流階級の出身であるため、音楽についての教養があっても不思議ではないが、ここで湊が何も言わなかった事で花村がニヤニヤとからかう様子で絡んでゆく。
「へへっ、流石の有里君もこういった教養はなかったみたいだなぁ？」
頭脳明晰で様々な事に精通している湊でも、育ちが影響する音楽や芸術と言った分野の教養は上流階級の者に劣るらしい。
普段、色々な部分で劣る他者を見下している青年が相手だけに、花村はこれを機に少しは謙虚になれよと湊の肩を叩いた。
その様子をメティスなどはハラハラした様子で見ていたが、肩を叩かれた青年は無言のままマフラーに手を入れると、少し古びたヴァイオリンのケースを取り出した。
音楽の知識で劣っていたからか、ここでヴァイオリンを弾いて音楽もいけると証明するつもりなのかと一同が彼を見守る。
彼がケースを出した時点でメティスがそれを受け取り、湊はダークブラウンのヴァイオリンと弓を取り出して構えた。
容姿が整っていることに加えて長身な事もあり、楽器を構えただけでやけに様になっている。
その時点で色々と卑怯に思えるが、青年は瞼を閉じると静かにヴァイオリンを弾き始めた。曲目はブラームスの『子守唄』。
前方の扉から漏れて聞こえているピアノの音に合せて、湊はただ静かに演奏を続ける。
生でヴァイオリンの演奏を聴いた事がある者など限られているが、それ以外のメンバーでも音の安定感と深みを感じることが出来る。

即興ならばあり得ない。これは紛れもなく曲と譜面を知っていると理解出来たところで、曲が終わり湊はメティスの持っていたケースに楽器を片付けた。
そっち方面の知識で劣っていると煽られてのこの返し。知っているどころか演奏まで出来ますよと証明して見せた形であるが、湊は楽器をケースに片付け終えるとそのままマフラーに仕舞ってそのまま歩き出そうとする。
これには花村も思わず突っ込んでしまった。
「いや、何も言わねーのかよ！」
「……俺が曲について知ってたかどうか知りたかっただけだろ？」
「おまっ、嫌味っぽく自分のインテリっぷり披露しやがって！　こんな曲名一つ知ってるくらいで威張ってんじゃねーよ！　日常生活じゃなんの役にも立たないっつの！」
「……そうだな。だが、そういうのは最初に曲名を口にした人間に言ってやるといい」
別に自分が言い出した事ではない。最初に自分の知識を披露したのは美鶴である。
湊がそう言えば、美鶴は気まずそうに知識をひけらかしてすまないと謝罪する。
「その、すまない。別に知識をひけらかそうという意図はなかったんだが……」
「ちがっ、いや、あの！　全然大丈夫っすから！　有里に言っただけで、桐条さんのことは別になにもっ」
途端に花村がそういった意味で言ったのではなく、そもそも美鶴のことを責めた訳ではないと必死に弁明した。
全身に嫌な汗をびっしょりと掻きながら、焦ってパニックになりつつ花村が弁明している間、話は終わったからと湊は先へ進み続ける。
前方にあるピアノの音が聞こえてくる部屋の扉は壊れており、これでは開かないねと押したり引いたりしてみた七歌が残念そうに溢す。
だが、次の瞬間、湊は扉の前で身体を回転させると、回し蹴りの要領で勢いをつけて扉を蹴破った。

ガシャン、と音を立てながら部屋の中に倒れ込む扉。それを見て一同はポカンと口を開けるも、風花は少し言いづらそうにしながらも後輩への影響を考えて彼の行動を諌める。
「あ、あの、有里君。一応は学校だし、もうちょっと行儀良くした方が……」
「……俺も山岸も今更だろ」
普段の学校での振る舞いやこれまでの学校生活を思い出せ。
青年が静かにそう返すと風花は何故だか顔を真っ赤にして俯いてしまった。
ラビリスやメティスなどはその理由に気付いたようで、一人は湊を責めるような視線で睨み、もう一人は気まずそうに視線を逸らす。
それを見ていた雪子は優等生にしか見えない風花が何故おかしな反応をするのだろうと思いつつ、部屋の中に入ると誰もいないのに音色が聞こえてくるピアノを見て首を傾げた。
「あれ？　誰もいないのにピアノが動いてるね」
「き、きっと、自動演奏機能なんだよ。うん、きっとそうに決まってる！」
「待ってください。鍵盤は動いてませんよ？」
頭を抱えながら必死に何でもない風を装いつつ千枝が音の聞こえる理由を言えば、そもそも壊れているようで鍵盤は動いていないと直斗が指摘する。
それを聞いたゆかりと玲がもうやだと半分泣きかけていたとき、その異変は起きた。
《あはははははははは！》
《アハハハハハハハハ！》
急に子どもの笑い声が聞こえてくると、メンバーたちは何かの気配に囲まれる。
一人や二人ではない。もっと大勢。十人やそこらではきかず、かなりの数の気配を感じる。
思わず警戒して戦闘態勢を取ろうとするも身体の自由が奪われ、顔は動かせるのに身体だけは指先一つ動かせない。

こんな状態で敵に襲われれば味方は全滅。恐怖と焦りで額を汗が濡らせば、
「――――耳障りだ」
湊の身体から黒炎が噴き出して部屋中を覆ってゆく。
周りにいた者たちも当然炎に飲み込まれるが、実体と炎の切り替えは湊がコントロール出来る。
おかげで黒炎は他の者を守る盾の役割を果たしながら、自分たちを囲んで笑っている存在だけを襲った。
相手が危害を加える存在かどうかは関係ない。ただ、鬱陶しいから。そんな理由で湊は姿を見せない気配に攻撃を仕掛けた。
シャドウやペルソナだけでなく、実体を持たない霊にも攻撃可能な蛇神の力は、湊たちを囲んでいた存在を容易く屠ってゆく。
聞こえていた笑い声は悲痛な叫びに変わり、気配は逃げようと部屋の出入り口を目指すが相手よりも速く広がる炎がそれを赦さない。
そうして、最後には子どもの声は怒りと憎しみの籠もった怨嗟の叫びとなり、自分たちを殺した青年を呪いながら消えていった。
おかげで全員の身体が無事に動くようにはなったが、相手が子どもの幽霊だったのなら、先ほどのあれはやり過ぎではないかと玲がおそるおそる尋ねた。
「あ、あの、はーちゃん。どうして子どものお化けまで攻撃したの？」
「……別に、強いていえば鬱陶しかったからだ」
どこの世界に鬱陶しいからと幽霊を殺す者がいるというのか。
尋ねた玲ですら予想外な理由だった事で思わず固まり、部屋を出て行く青年を見送る。
りせやチドリのサポートなど不要とばかりに彼は先へ進んでゆく。
同じ力を持っているからこそ、彼にも先の地形や進むべき道順が視えているのだろうが、一切の怯えを見せず幽霊すら殺してみせる青年に玲は興味を抱いた。
他の者に促されて彼の後に続きながら、視線で彼の背中をジッと見つめていると玲の変化に気付いた善が彼女に話しかけてくる。
「……玲、どうかしたのか？」

「あ、うん。あのね、どうしてはーちゃんは怖がらないんだろうって思って。さっき、本物の幽霊も倒してたし」
その強さはハッキリと言って異質だ。真田や美鶴であればこれまで鍛えてきた自分の強さに自信を持っており、それで敵わぬ敵が出たときに初めて悔しさなどを覗かせる。
一方でリーダーとして戦ってきた七歌と鳴上は、敵戦力の分析と割り出しを行ないつつ、それらが終わると状況の変化に注意しながら相手を倒せるだけの味方戦力を割り振っている。
前者は駒としての目線で、後者は駒を動かすプレイヤー目線で戦闘しているのだろう。
二つの立場に優劣はなく、戦闘時の役割の違いでしかないが、湊だけはそのどちらでもなく淡々と作業のように敵を屠っていた。
自分も前線にいて実際に戦っているというのに、どうしてそこまで戦いに感情を乗せないのか。
考えていても答えが出ないことは分かっているが、湊が本物の幽霊を倒したのを見ていた事で玲は彼の強さの理由が知りたくなった。
それを聞いた善はしばらく黙っていたが、玲が進んで何を知りたいと思ったのなら、その気持ちを優先してあげたいと思ったらしく、玲を連れて湊の許まで歩いて行く。
「湊、少しいいか？　玲が君に聞きたい事があるんだ」
「……手短にな」
再び通路を抜けて大きな部屋に出たところで話しかければ、湊は部屋の中を見渡しつつ善たちの話を聞く姿勢を見せる。
ここもまだ安全圏という訳ではないので、周囲の警戒をしている相手のいう事を聞いて、玲も出来るだけ手短に話そうと口を開いた。
「あ、あのね。どうしてはーちゃんは相手を気にせず戦えるの？　わたしはその、今もすっごく怖いんだけど、はーちゃんはさっき幽霊が出たときも気にしてなかったよね？　どうしたらわたしもそうなれる？」
「……戦って戦って戦い続けて、飽きるほど多くの敵を殺せばこうもなる。どうすれば簡単に殺せるか。それを突き詰めて、自分の動きを

効率化していき、殺すための装置として戦闘を行なうと俺みたいになるんだ」
それはある意味で駒とプレイヤーの双方の視点で物を見ていると言えた。
頭はプレイヤーとして働かせ、自分の身体を駒として動かし戦う。
駒個人の感情等は全て排除し、個々の戦闘ではなく一帯の戦闘行為を終わらせることを目的として動き続ける。
そんな機械のような者になれば、玲も湊のように怖がることなく戦闘に参加出来るようになるだろう。
ただ、これは一朝一夕で身に付くものではないので、今現在怖がっている玲にはどうやっても習得不可能。
善がそのことを指摘する前に玲も分かっていたらしく、簡単に強さを手にして怖くなくなる方法はないんだなと肩を落とした。
そして、新たにやって来た部屋の中を全員で物色し、置いてあった掃除道具のロッカーから〝北棟の鍵〟を入手すると、これで先へ進めるぞと着実に進んでいる事実を喜んだ。

第二百八十五話　気難しい青年

――放課後悪霊クラブ・壱ノ怪

無事に〝北棟〟の鍵を手に入れ、鍵付きの扉までやってきたメンバーたちは扉を潜った。

しかし、何やら近くにＦ．Ｏ．Ｅの気配があるとの事で、追いついてくる前に移動するべく別の部屋に入れば、周辺を索敵していたチドリから通信が入った。

《……なんかＦ．Ｏ．Ｅがついてきてるわよ。扉のすぐ前で扉を押さえてる》

「なんだそりゃ。閉じ込め妖怪か何かか？」

扉のすぐ向こう側にＦ．Ｏ．Ｅがいるのは怖いが、そこまで来ておきながら扉を押さえているだけと聞いて順平が思わず呆れた顔をする。

一応、すぐに戦闘に移れる準備をしつつ、真田や荒垣に完二といった力自慢のメンバーが扉を押してみても、相手の方が押さえる力が強いらしくビクともしない。

現時点では扉を押さえて開かなくしているだけなので実害はないが、もし、このまま進んで行き止まりに行ってしまうと困ることになる。

全員が部屋から出た時点で押さえるのなら、誰かしらが部屋に残っていれば閉じ込められる事はないものの、ほとんどの者が移動した時点で追ってくるとなれば、残った者がＦ．Ｏ．Ｅと対峙するはめになる。

相手の追ってくる条件が分からない内は何も出来ないので、さてどうしたものかと移動について悩んでいれば、マフラーに手を入れた湊が白銀のフレームに青い縁取りがされた銃を取り出し扉の前に向かった。

「ガキみたいな事をするな」

言いながら湊は銃口を扉に向けて静かに引き金を引く。

通常の拳銃では考えられないほど大きな発砲音。銃が火を噴いた

ときには瞬間的に部屋の中が照らされるほどだ。
見ている者は一体どれだけの威力を持っているのだろうかと思いつつ、湊が続けて二発、三発と撃ったところで銃弾の威力によってガラスが割れ、フレームが裂けた扉の向こうから断末魔が聞こえた。
流石のＦ．Ｏ．Ｅも扉の向こうから銃撃を喰らうとは思うまい。
断末魔の余韻と共に黒い靄が霧散するのを確認すれば、愛銃ファルファッラをマフラーに仕舞いこんで湊は壊れた扉を蹴つけて床に倒した。
扉がなくなった向こう側には敵は存在しない。これで直近の危険はなくなった訳だが、扉を押さえられたくらいで拳銃を抜き、さらに最後には扉を蹴り倒すという粗暴な行動に、今度は風花に代わって雪子が苦言を呈する。
「有里君、あんまりそういう事ばっかりしてると、育ちが悪いと思われるよ？」
「……小学校に通えなかったからな。そのせいだろ、きっと」
言うだけ言って湊は振り返って再び先頭に戻ると歩き始める。
先へ進んでゆく湊をどこか悲痛さを感じさせる表情をしたアイギスが追っていったが、他の者たちは遅れて湊の後を追いつつも、先ほどの話について八十神高校側の者たちは何も知らなかったため、何か知っているかと鳴上が遠慮がちに尋ねた。
「あの、有里が言ってた事について聞いても大丈夫ですか？」
「あぁ。彼の両親は桐条グループが起こした事故によって亡くなった。被害者遺族には補償も行なっていたが、彼は私の父の主導により世間では死んだ事にされ、その裏でペルソナ使いの貴重なサンプルとして実験体にされていたんだ」
こういった事は加害者である桐条家の自分が話すべきだろうと美鶴が説明する。
実験内容については美鶴も詳しくは聞かされていないが、湊から得られたデータを人工ペルソナ使いたちに反映させてデータを取っていたとチドリから聞いている。
なので、湊自身は本人が望んだ肉体改造しか実験を受けていないと

思われるが、湊が小学校に通えなかったのは間違いなく桐条グループのせいだ。
　その事を話せば鳴上たちは言葉を失いつつも、湊が歳不相応な戦闘技術を持っている事にどこか納得した様子を見せていたので、彼自信の努力を否定される前に美鶴が訂正を加えた。
「勘違いしないで欲しいのは、彼の強さは彼個人の才能と努力によるものだ。桐条グループは天然の原石を研究し、人工的にそれを再現しようとしていただけだからな。彼の力は本人が鍛錬で手に入れたものだ」
「ちなみに、私と姉さんたちは桐条グループがシャドウ討伐用に作った、対シャドウ兵器のロボットなんですよ？」
『ええっ!?』
　美鶴の話が一区切りしたところで、話が暗い方に行きそうだと思ったメティスは、これまで話す機会のなかった自分たち姉妹の出自を明かす。
　湊が実験体にされていたと聞いて同情的な視線を彼の背中に向けていた者も、流石にこのカミングアウトには驚きを隠せず口を開けてポカンとしている。
　中でも姉妹揃って美少女だなと眼福に思っていた花村は、自分がドキドキしていた相手が人間じゃないなど信じられないと激しく動揺を見せた。
「ロ、ロボットってマジで言ってんの？　つか、いや、どうみても人間なんだけど?!」
「そうそう！　だって、一緒にお風呂入ったけど機械の部分なんて一つもなかったし！」
　花村に続いて千枝も自分が見たメティスらの身体は、間違いなく人間のそれだったと断言する。
　小さい八雲をお風呂に入れていたときなど、湯船で枕代わりにされていたアイギスの胸は八雲の頭の重みで潰れていた。
　むしろ、潰れながらも弾力があるため、豊かな双丘で八雲の頭を包み込んでいたと言える。

ロボットならそんな事はあり得ないはずだと言えば、話が聞こえていたのか後ろの組に合流したアイギスが千枝の疑問に答えた。
「正確に言えば元ロボットです。今のこの身体は八雲さんが作った生体ボディなので、骨格こそ人工物ですが細胞は全て生きた細胞であります」
「そ、それはつまり、ロボットから人間、いや人造人間やサイボーグと呼ばれる存在になったという事ですか？」
「はい。針で刺せば血が出ますし、皆さんと同じように歳も取ります。妊娠や出産も可能とのことで、普通に生活している限りではバレることはほぼないかと」
昔から秘密道具や機械が好きだった直斗は、アイギスたちが元ロボットだと聞いて目の色を変える。
ただ、やはりどこか信じられないようで、もう少し詳しく聞かせてくださいと質問を重ねる。
「まさか、現代でそこまで高度な人型ロボットが既に完成していたとは。というより、有里先輩が作ったというのは？」
「ああ、そのまんまやで。湊君は昔からウチらの事を人間として世界に認めさせたかってん。けど、どうやっても機械は機械でしかないやろ？　で、力ずくで認めさせようと思ってたのをアイギスに止められてから別の方法をずっと研究しとってな。考えた末に辿りついたんが生体ボディで人間にする方法やってん」
人から機械の身体になるというのなら話は分かる。生身と同等の性能を持つものは未だ完成していないが、それでも手や足など機械義肢の研究は世界中で行なわれているのだから。
しかし、機械という命を持たないただの物に、どうやれば命を吹き込めるというのか。
そんな事が可能ならば世界の常識は覆る。物を壊しても器物損壊でしかなかったものが、命を持っているから殺人や虐待として扱われる事もあり得るのだ。
現代の科学技術がそこまで進歩しているとは思えないので、いくら何でもあり得ないだろうと直斗は半信半疑で言葉を返す。

「流石にそれは現代の技術では不可能なのでは？」
「まぁ普通はそうやけど黄昏の羽根っていうオーパーツがあってな。情報記録媒体として使えたそれに設計図を打ち込んで、極小サイズにしてから細胞核と入れ替えてん。ほんならウチらの身体の情報を持った細胞が出来るから、後は人工的に用意した骨格をベースに培養して完成って感じやで」
「え、それを先輩がされたんですか？」
「湊君は研究者やなかったから普通の新型ボディ開発から学び始めてんけどな。一年くらいで学び終えて、二年しないくらいにはほぼ自力で生体ボディの製作と調整が出来るようになっとったで。だから、ウチは湊君とシャロンさんっていう研究主任の人らの共同開発やけど、アイギスに関しては完全に湊君一人で作ってはるわ」
　確かに直斗の言う通り現代の技術だけでは不可能だった。これを否定出来る者はいないだろう。
　けれど、桐条グループと湊はオーパーツである黄昏の羽根を持っていた。
　おかげで桐条グループでは機体ごとに自我を持たせることに成功したし、湊は設計図の情報を入れた極小の黄昏の羽根をＤＮＡ代わりにすることで、アイギスたちの生きた細胞を作る事が出来た。
　対シャドウ兵器としての性能を発揮できるほど丈夫なだけでなく、負担を軽減するためにある程度の柔軟性も持った骨格の素材を準備するのは大変だったが、苦労したおかげで生体ボディになった後も彼女たちはオルギアモード等のブースト機能の発動ができる。
　こうなってくると人から一歩進んだ新人類と呼ぶ事も出来そうだが、アイギスたちの身体が人工的に作られた物であると聞いて、花村が閃いたとばかりに瞳を輝かせて口を開いた。
「なぁ？　って事はさ。その技術を使えば理想の見た目の理想の彼女がって……うむぅ⁉」
「ダメです、花村さん！　そういった話題は兄さんの逆鱗なんですから！　冗談ぽく言っても四肢粉砕されますよ！」
　花村が大変な事を口走りかけたことで、メティスが手で口を塞いで

すぐに黙らせる。
湊は彼女たちを人間として認めさせるために世界に喧嘩を売れるような男だ。
人間にする事が出来るのならばと、命を創造するという神の領域に手を出してもいる。
そんな湊がいる傍で、彼女たちの存在を己の欲を満たすための都合の良い道具のように語るなど、例え冗談であろうと命を放棄すると宣言するに等しい愚行であった。
慌ててメティスが口を塞いだものの、花村はほとんど言葉を発してしまっていた。
湊とは五メートルも離れていないので先ほどの発言は全て聞こえていた可能性が高い。
彼がキレている姿を見たことのある者たちは、湊の次のアクションに備えて身構える。
全身から嫌な汗が噴き出し、ただ立ち止まって湊の背中を見ているだけだというのに膝が震えてくる。
もしも逆鱗に触れていれば知り合いだろうと命はない。チドリが止めようが、アイギスがやめてくれと懇願しようが、湊は己の大切な者を侮辱した者を絶対に赦しはしない。
一秒が数十倍に引き延ばされたような感覚の中、一同が湊の背中を見つめたまま三十秒ほど待っていたとき、その場で立ち止まった湊が皆の視線が集まる中、横に伸ばされた右手が〝審判〟のカードを握り砕いた。
《――――――――ッ!!》
直後、時折爆ぜる激しい白雷を帯電させた状態で麒麟がその場に顕現する。
白銀の毛並みを持ちながらも瞳だけは翡翠色だったはずが、今の麒麟は激昂しているかの如く瞳が真紅に染まっていた。
顕現した時点で空気がひりつき、周辺一帯を途轍もない重圧が包み込む。
それだけで戦闘慣れしていない玲や風花は地面に膝を着きそうに

なるが、問題の花村は全身を恐怖に震わせながら歯をガチガチと鳴らしていた。
花村の持つジライヤは電撃属性が弱点だ。麒麟の放つ一撃を受ければ本来より多くのダメージを受ける。
そも、帯電状態で既に熱を放っている麒麟の一撃を喰らい。それで無事に済む者がいるとは思えないが、弱点を持つ花村が喰らえば肉片一つ残さず蒸発するかもしれない。
このままでは拙いとアイギスが制止の声を掛けようとするも、麒麟の放つ重圧が増して相手の足下が赤く融解し、周辺には球体のプラズマが発生し始める。
既にこの場にいる者らの適性値の総量を超える力を籠められていたというのに、ここからさらに力が跳ね上がるなど誰一人予想出来ていなかった。
せめて直撃だけは避けようと鳴上はイザナギを呼び出そうとするも、果たして電撃耐性を持っているくらいで耐えられるのかという不安が頭を過ぎる。
だが、もう時間がないとペルソナを召喚しようとすれば、全員の前に黒い死神が躍り出た。
「タナトス、相殺に持ち込んでくれ！」
《グルォオオオオオオオオオオッ!!》
綾時が呼び出したタナトスが他の者を庇うように立てば、不気味な輝きを持つ赤と黒の光を麒麟に向けて撃ち放つ。
タイミングで言えばタナトスの方が先ではあるが、籠められた力の総量は圧倒的に麒麟が勝る。
この僅かなアドバンテージでどこまで粘れるか。綾時がそう考えたとき、
「麒麟、九天応元雷声普化天尊」
《――――――――――――ッ!!》
麒麟が嘶き、放たれた光が全てを飲み込んだ。
＊＊＊
眩い光に全てが飲み込まれた後、あまりの光量によって一時的に失

われた視力が回復してきたところで、七歌が周囲を見渡してみれば、辺りは炎の海に姿を変えていた。
雷帝の雷によって通路の壁は全て消滅し、遠くに見えるダンジョンの入口と次のフロアへの階段だけが残っただだっ広い一つの部屋になっている。
だが、そのフロアの床は七歌たちの立っている場所を除き、全てが融解して今も熱で赤く染まりながら時折蒸気を出しており、よくもこれだけの攻撃を受けて無事だったなと軽く目眩がした。
ただ、このまま呆然としている訳にもいかないので、両手で頬を叩き活を入れると、メンバーたちの状態を確認してゆく。
「全員無事かな？」
「あ、ああ、なんとかな。けど、これは……すごいな」
七歌に問われて鳴上もメンバーたちを確認して答える。
自分は勿論のこと、狙われていた花村も顔は真っ青になっているが無傷で生きている。
どうやら綾時のタナトスの攻撃で自分たちへの直撃は避けられたらしい。
地面に膝を着いて肩で息をしている少年の許まで進み、あの咄嗟の行動でよくやってくれたと労う。
「綾時君、咄嗟に動けなくてゴメンね。助けてくれてありがとう」
「いや、僕は何もしてないよ。というより、流石にあの規模の威力が相手じゃ欠片も抵抗出来なかったんだ」
「え？　でも、全員無事だよ？」
「ああ。これは湊が蛇神の頭骨で僕らを覆ってくれたんだよ。あれは一種の絶対防御だからね」
そんなまさかと自分たちのいる場所を見てみれば、今もまだ半透明な何かがドームのように自分たちを覆ってくれている事に気付く。
湊の麒麟の一撃によって死にかけたというのに、どうして彼の持つ蛇神の力が盾となってくれているのか。
訳が分からず混乱していると、隅の壁際の方でメティスが湊に向かって激怒していた。

「もう兄さん！　いくら何でも脅しのレベルを超えてます！　ダンジョンの階層一つがワンルームになっちゃったじゃないですか！」
「……楽で良いじゃないか」
確かにこれなら探索の必要などないだろう。入口から次のフロアへの階段が見えているのだから。
しかし、少女の怒りはそういう事ではないので、メティスがさらに抗議を続けているのを視界の納めつつ、七歌は湊のあれは嘘だったのかと綾時に聞いてみた。
「えっとぉ……キレたフリしてたって事？」
「まぁ、湊は確かに気難しいけど、皆が思ってるほどじゃないからね。花村君の発言を不快に思ったのは事実だけど、メティスたちが彼を責めようとはしていなかったから、次はないぞって脅しだけで済ませたみたい」
なんという人騒がせなと七歌はどっと押し寄せてきた疲れによってその場に座り込む。
壁が消えた事で正確な広さが把握できる状態になっているが、想像以上の広さを持っていたフロア一つをワンルームに出来る規模の攻撃をしておいて、脅し目的の冗談だったなど誰か信じるだろうか。
これには他のメンバーらも脱力しており、しばらくは動く気になれないと口々に溢す。
「ねぇ、有里君のこと外の地面で転がしちゃダメかな？」
「いや、おやめなさいって。それに火炎耐性があるからって雪子も無事に済むか分かんないでしょ」
「じゃあ、ちょっと開けて外に向かって押すとか」
「押そうとした腕を掴まれて反対に投げられるって……」
こういったとき、雪子はかなりドライというか黒い反応を見せる。
雪子と湊が戦闘に入れば、一秒と持たず間違いなく雪子が死亡するだろう。
他の者はその危険性を理解しているというのに、雪子本人だけは気にせず本気で実行に移す可能性がある。
だからこそ、近くに腰を下ろしていた千枝が絶対にやってはダメだ

と止めていた。
八十神高校の幼馴染みコンビがそんな風に話をしていれば、蛇骨の結界内から外を見ていた玲が、これだけ明るいと怖くないやと少し明るい表情で善に声を掛けた。
「善、お化け屋敷なくなっちゃったね」
「ああ。この階層のみだが、ペルソナとはこれほどの力を持っているのだな」
「うん。わたしたちも借りたペルソナの取り扱いには気をつけなきゃだね」
二人は風花と同じように湊のペルソナを借り受けている。
どちらも大型のライオン型のペルソナであり、エネルギー源が湊であるため他の者たちよりも強力なスキルを放つことが可能だ。
ただ、たったの一撃で広い迷宮の階層一つを吹き飛ばし、今も床だった場所がマグマのように赤く燃えている事から、強力だからこそしっかりと扱いに気をつける必要があるだろうと二人は確認し合った。
新たな力、強大な力を手に入れると人は増長しやすい。しかし、善と玲は戦いを望まぬ性格だからこそ、出来る限りその力には頼らないようにしようと考える事が出来た。
湊も二人のそういった性質を見抜いていたからこそ、ペルソナを貸し与えたのかもしれない。
「思ったんだけどさぁ。こんな事が出来るなら有里君にフロア一掃して貰ってから向かった方が早くない？」
「いやぁ、それもどうだろうな。あんなんポンポン出せるとは思えねぇし。下手するとまた赤ん坊になるかもだぜ？」
「僕はそっちの方がいいです。有里先輩がいるとちょくちょく心臓に悪いんで」
「ははっ、言えてらぁ」
対照的に、もし湊からペルソナを借りたら全力で酷使するであろうゆかりや順平は、天田と一緒に効率的に探索を進める方法について話していた。

ゆかりとしてはお化け屋敷など土台から全て吹き飛ばして貰いたいが、この規模の攻撃を連発するのは流石に無理だろうと順平を予想する。

そんな事を続ければ再び赤ん坊になる恐れがあり、残りの迷宮の攻略にも支障が出ると言えば、天田としては何度も死ぬような目に遭いたくないので赤ん坊の方がマシに思えると正直に口にした。

頼りになるが心臓にも悪い湊に対し、あまり頼れないが癒やしにはなる八雲。

どちらが好みかは人それぞれだが、少なくとも現時点では八雲の方が絶対にいいと断言するりせは通信越しに激怒していた。

《ちょっと！　今の絶対にプロデューサーのペルソナでしょ！　さっきの攻撃のせいで教室のドアが吹っ飛んで来たんだからね！》

《少しずれたテーブルにいなかったら当たってたんだけど？》

「……いや、ダンジョンのトラップが原因だ。〝押すな〟と書かれたスイッチを花村が押したら、ダンジョンの自爆スイッチだったらしく急にフロア中が爆発したんだ。花村、次からは迂闊な行動は控えろ」

「ちょっ、俺!?　あ、えーっと、すんませんしした！」

廊下と迷宮を隔てる壁は破壊が不可能なのか無事であっても、入口の扉だけはその限りではなかったらしく、先ほどの攻撃で吹き飛んできたぞとクレームが飛んできた。

急にその責任を擦り付けられた花村は、死の恐怖が抜けきっていないようで湊には従順な態度で接する。

近くにいるクマや鳴上は彼を不憫に思うも、元を辿れば彼の軽率な発言が今回の事態を引き起こしたのだ。

湊はそれこそ命懸けでアイギスたちを〝人間〟にしようと動いていた。途中から方向転換して本物の人間にする研究に移っていったが、その研究だって並みの苦労ではなかった。

何度も失敗して、苦悩して、挫折しかけて、それでも諦めずに研究を続けてようやく望んだ結果を得られた。

そんな苦労の結晶を下衆な目的で利用しようなど、例え冗談であったとしても口にすることは赦されなかった。

今回は脅しとして蛇骨で守ってくれたが、次は他の者が止める暇もなく花村を灼くに違いない。
それが分かっているからこそ花村も少しでも心象をよくするため、湊が外を冷やし終えて次の階層に降りるまでは、ジュネスの接客で鍛えた技術をフル活用して働いてみせた。
――放課後悪霊クラブ・弐ノ怪
壁が全て消失したことで簡単に次のフロアへ降りてゆくと、一同は警戒しつつ先を目指した。
このフロアも校舎がモデルらしく、前のフロアとそれほど違いはない。
しかし、いくつも扉を潜っていると、途中で急に暗くなっているエリアに入った。
ただでさえ照明が少なかったというのに、これまでよりさらに減ったらしく隣にいる者の顔もろくに判別できないレベルだ。
これでは慎重に進まざるを得ないなと自然と全体の歩みも遅くなる。
先頭を歩いている湊だけは両手に拳銃を構え、たまに遠くに向けて撃っては、ナビ役の二人からシャドウ反応消滅という声が返ってくるが、この暗がりでそんな事が出来る変態は湊くらいなものだろう。
そして、途中で〝南棟〟と〝理科準備室〟と書かれた鍵の掛かった扉を見つけ、ラビリスのペルソナであるアリアドネーのストリングアーツで解錠出来ず、その鍵を探しにさらに奥へ進んでいたときだった。
暗い上にそれほど広くない学校の廊下が舞台なせいで、こうも人数が多いと逆に動きづらいなと美鶴もつい愚痴をこぼしてしまう。
「ふぅ……こんな暗い場所を大勢でゾロゾロと歩くのは疲れるな。せめて足下だけでも見えれば違うんだろうが」
「フフン、美鶴さんは修行が足りないなぁ。こういうときは心の目で周囲の気配を察知するんだぜ？」
視覚がほとんど封じられているからこそ、音や空気の流れに敏感になっている。

だが、大勢で固まったままゆっくり進んでいるせいで、ほとんど足音と衣擦れの音しか聞こえてこず、空気の流れも人が動いたときのものしか感じ取れない。
このままでは神経だけがすり減っていくだろうと危惧すれば、七歌が見えないのに少しでも見ようとするから疲れるんだと返した。
彼女曰く、耳や空気の流れに頼るのもいいが、こういうときは本能で人の気配を探った方が分かり易いらしい。
少し集中してみるだけで、目を閉じてもなんとなくで近くにいる人や物との距離が分かる。
この感覚を鋭くしていく事で心眼を習得出来るらしく、戦いで敵や味方との距離を掴むことに慣れている者なら習得はそう難しくない。
七歌にそう言われて他の者は素直に目を閉じ、自分たちの周りの気配を探ってみる。
目で見ず、声を掛けることもなく、ただ近くにいる気配を掴んでゆく。
最初は一番近い相手の気配しか感じ取れなかったが、確かにやってみると二、三メートルくらいの範囲内なら気配も感じ取れるようになってきた。
未知の技術を自分が使えていることで、まるで武術の達人になったようだと順平は喜ぶ。
「おっほ、オレっちもついに達人の仲間入りか？　鳴上と綾時が近くにいんのが分かるぜ」
「確かに慣れてみると結構分かるもんだね。僕の斜め右にいるのが鳴上君、少し離れた左にいるのがあいかさんだね」
七歌に言われるまではボンヤリとした位置関係しか分かっていなかったが、慣れてくると誰が近くにいるのかまで分かってきた。
暗くなったことで余計に見ようと頑張っていたが、そんな事よりも戦いの中で培われてきた感覚の方が役に立つ。
その事を教えて貰えた一同は七歌に感謝しつつ、暗い中を進んでいると急に湊が足を止めた。
「兄さん、急に止まってどうしたんですか？」

「……そこの机の下に鍵が落ちてる」
『机？』
そこの机と言われても他の者では暗くて場所が分からない。
周囲の気配を探ることを覚えようと、流石に完璧に周りの地形を把握できる訳ではないのだ。
よって、他の者では分からないからと湊に拾って貰えば、ペンライトを使って直斗がどこの鍵かを調べた。
「これは……〝理科準備室〟の鍵です。先輩、よく見えましたね」
無事に片方の鍵を手に入れられた事で直斗が喜ぶ。
他の者も同じように喜びつつも、湊の夜目がどれくらいまで利くのだろうかという点も気になった。
本人にすれば見えないという感覚の方が分かりづらいのだが、ここではなにも言わずただ元来た道を戻って理科準備室を目指すのだった。

第二百八十六話　驚きの連続

――放課後悪霊クラブ・弐ノ怪

理科準備室の鍵を手に入れた後、移動した先で南棟の鍵も入手することが出来た一行は、そのまま南棟へ進んでいた。

辺りは暗く見張らしも悪い。しかし、足下くらいはぼんやりと見えたことで、真田がそこに落ちていた紙を拾い上げた。

「なんだこの紙切れは？　〝はしるな、ろうか、ぶつかるぞ〟、標語か何かか？」

「よくあるやつですね。俺たちの学校にもありました」

「あったあった。小学校とかだと〝お・か・し〟とかな」

書かれている内容に違いはあれど、こういった標語というのはどの学校にもある。

高校にもなると気にしなくなってしまうが、小学校のときの物は妙に印象に残っているため、鳴上と一緒に花村はそれぞれの小学校時代の話に花を咲かせる。

ただ、こんなダンジョンの中で書かれているものだ。何かしらの意味があるのではと直斗が考えていたとき、外にいるりせから通信が入った。

《皆、ちょっと聞いて！　この部屋の中にF・O・Eの反応があるの。正確な場所は掴めないけど複数の反応があるから》

部屋の中に複数の反応があるので標語の通り走らない方がいい。

りせがその様に言おうとしかけたとき、言い終わるより速く湊がカードを砕き、太陽〝茨木童子〟が姿を現わした。

その手にはあまりの高温で黄色く光る炎が溜められ、腕を横に薙ぐと同時に炎の津波が部屋の中を焼き尽くしてゆく。

所々で黒い靄が上がりつつ、津波が壁に当たりそうになれば、茨木童子が曲を止める指揮者のように拳を握ると炎は跡形もなく消えていった。

部屋の中に敵が複数いることが分かっているのなら、確かに入口から全て薙ぎ払ってしまえば簡単に済む。

しかし、本来強敵であるはずのＦ．Ｏ．Ｅを、何体も飲み込んで倒せるスキルを放てるなどサポート組の想定にはない。
そんなものをポンポンと連発できるのであれば、作戦も連携もあったものではない。他の者を退げて一人を戦場に投入するだけで終わってしまう。それこそ戦略兵器と呼ぶしかないだろう。
故に、ダンジョンを探索している者たちのサポートに全力を注いでいる者にすれば、自分たちの助けなど全くいらないではないかと憤るのも無理はなかった。
《もう、プロデューサー嫌い！　私のサポートなんて全然意味ないじゃん！》
「……なら、もう少し意味のあるサポートをしてくれ。敵の正確な位置と数、弱点属性や行動パターン。それらをこちらの戦力を考慮して伝えてくれれば情報も役に立つ」
《だから、ダンジョンの中は変な力でフィルターが掛かってて難しいんだってば！》
「なら、文句言うな。こっちは現地にいて正確に情報を把握して動いてるんだ。そも、索敵しながら戦力を出せる俺にサポートはいらない」
りせがどれだけダンジョン内のサポートが難しいか語ろうとも、現地で索敵とアナライズをしながら行動している者にとっては、なら現地で力を使えば良いだろうという結論になってしまう。
普段は後方支援しかしていない者でも戦えるよう、湊は彼女たちにペルソナを貸し与えたのだ。
湊の悪戯が原因と言えど現地でのサポートを断った以上、どれだけ理由を並べようが情報が不足している時点で彼には無用の長物。
はっきりといらないと断言すれば、りせが通信越しに息を呑む音が聞こえてきたため、いくら何でも強く言いすぎだとラビリスが諌めた。
「湊君、もうちょい優しい言葉でいったりぃや。りせちゃんやって頑張ってサポートしてくれてるんやし」
「だから俺にはいらないと言ったんだ。仲間とつるんでる他のやつら

には有効だろうさ」
「有里だって仲間だろ？」
ラビリスに反論する湊の言葉が気になり鳴上が後ろから尋ねる。
ここまで一緒にやって来たのだ。自分たちはとっくに仲間だろうと彼は言いたかった。
しかし、声を掛けられた湊は酷く呆れた表情で淡々と言葉を返す。
「一方的にお守りと尻拭いばかりさせられる関係を仲間と呼ぶんならな」
それだけ言うと湊は一人で先へと進んで行ってしまう。
慌ててアイギスとメティスが他の者に謝罪するように一礼してから追っていったが、湊本人の口から出た言葉を受けた他のメンバーたちの表情は苦い物になっている。
そのまま行かせる訳にはいかないので他の者も動き出すが、頭の後ろで手を組んだ順平がはぁっと溜息を吐きながら愚痴をこぼした。
「まーた始まったよ。あいつも飽きねぇな」
「そう言ってやるな。有里はずっと我々の戦力の穴を補ってくれているんだ。同じ状況が続けば文句の一つも言いたくなるだろう」
戦闘時の隊列や役割は湊が参加した時点でほとんどなくなっている。
チームで連携を取るよりも彼が勝手に動いた方が効率がいいためだ。
一応、他の者たちも戦闘には参加しているものの、湊がサポートしている場面も多々あった。
最前線にいて支援も行える希有なポジションの彼は実に重宝し、皆が自然と頼ってしまうのも無理はない。
ただ、それが彼の負担になっていたのであれば、反省こそすれ先ほどの言動を責めることは出来ないと美鶴は言う。
けれど、美鶴が言い終わると同時に、それはおかしいだろうと真田も口を開いてきた。
「以前のように突っかかるつもりはないが、美鶴はいくら何でも有里に甘すぎるぞ。あいつと俺たちの実力に開きがあるのは分かるが、だ

からといって集団の空気を乱す行為は正当化されないだろ」
「そうっすよ桐条さん。俺や相棒が言っても無駄だろうし。ここは一つ、上級生として有里を叱ってやってくださいよ。ちゃんと集団行動も取れって」
「い、いや、それは……」
美鶴は自分が負い目を感じている事は自覚しているが、それが原因で湊に無意識に甘くなっている自覚はない。
真田たちに指摘されてもそんなつもりはないと思っている辺り重症だが、美鶴の方から湊を叱ってくれと花村が頼むと途端に口ごもってしまう。
八十神高校側のメンバーはそれを不思議そうに見つめれば、見かねた荒垣が二人の関係を説明してくれた。
「無駄だ。あいつは桐条と口をきかねぇ。中等部の頃から見てるがそこは徹底してる」
「中等部の頃からって……五年間で一度もですか？」
言葉を交わすことはないが実際には色々と彼女を気遣った行動も取っている。
おかげで美鶴も胸中複雑な相手の妥協点がそこなのだろうと理解している訳だが、やはり周囲からは単に喧嘩しているようにしか見えないらしく、玲が心配した不安げな表情で声を掛けてきた。
「みっちゃん、はーちゃんと喧嘩してるの？」
「喧嘩じゃない。ただ、さっきも話しただろう。桐条グループが彼の両親を殺して、彼自身も被験体にしていたと……。この溝はそう簡単に埋まる物でもないのさ」
つらくない訳ではない。しかし、彼なりの優しさも美鶴は見ている。
以前、謎の大型シャドウに襲われたときには命を救われたし、ボロボロの服装を見て上着も貸してくれた。
さらに彼は美鶴の母である英恵の許を訪れては彼女に生命力を分け与えている。
一般人に出来る事ではないが、おかげで英恵の体調は以前と比べて

格段に良くなっているのだ。
そういった姿を見ているからこそ、美鶴は彼の行動をある程度は容認しているのだが、周囲から見ればそれは贔屓しているように感じるらしい。
客観的に見ることを怠っていた美鶴はそれらを反省しつつ、ただやはりと戦闘面における湊の功績を考慮してある程度の事は自由にさせてやって欲しいと他の者に伝えた。
一部の者はやはりというかいい顔はしなかったが、湊に抜けられると戦力的に厳しくなるのは事実。なら、ここは自分たちが大人になって彼の我が儘をきいてやるかと心に折り合いをつけて先へと向かった。
＊＊＊
次の部屋へ向かうと湊たちは入口で待っていた。
一応、他の者より進みすぎないという配慮はあったようで、扉を潜ったらもういないという事がなくて他の者も安堵する。
「……先に進め。サポート役が拗ねるから、俺は殿を務める事にした」
《拗ねてないし！》
「……通信はもう切っておくか」
同じ系統の力を持っている者ならば相手の通信を切ることは可能だ。
ただ、それにも力の強弱は関係するし、似た力でも原理が異なれば干渉出来ない場合もある。
湊の力は他のサポート役と原理が異なるので、干渉を拒否すれば一方的に通信を遮断することが出来た。
おかげでいくら相手が文句を言おうと既に聞こえておらず、逆にまだりせの声が聞こえている者たちはここにいない少女に同情した。
「まぁ、そういう事なら八雲君を最後尾にして隊列を組み直そうか。後方からの襲撃の心配もないし、完全に攻撃型の陣形でいいよね」
湊が最後尾を歩くのなら背後から襲われる事はないだろう。
ならば、警戒は前方と左右に限定されるので、善と玲を安全な真ん中に配置しつつ、攻撃力の高いメンバーを前方に固める攻撃的な布陣

で行くことに決まった。
まぁ、その陣形だと最前線に立つことになる千枝がぐずっていたが、彼女もシャドウが相手ならば戦えるはず。
そうして陣形を組み直し、改めて進み始めたところで千枝の目の前の床から〝キャハハ！〟と笑う市松人形が飛び出してきた。
「ぎゃーー!!」
『うわぁぁぁぁっ!!』
尻餅をつきながら叫ぶ千枝に釣られてゆかりと玲も抱き合って悲鳴をあげる。
まぁ、薄暗い場所で急に床から不気味な人形が飛び出してくれば誰だって驚くだろう。
普段は動じない荒垣や真田に完二といったメンバーも驚いた顔をした後、慌てて武器を構えている事からもメンバーの動揺が窺える。
「くっ、突然地面から現われるだとっ」
「この野郎！　だまし討ちしようなんざナメやがって！」
「待て、お前ら！　敵は動いてねぇ！」
相手に攻撃を仕掛けようとする二人に対し、荒垣は敵が襲ってこないことを不思議に思って制止を掛けた。
見れば確かに相手は飛びだしてきたものの、その後はびっくり箱から飛び出してきた人形のようにその場でビョンビョンと動くだけで移動していない。
どうやら追跡型の敵ではないようで、これならば迂回して戦闘は避けた方が楽だろうと直斗が提案した。
「相手はその場から動かないようですね。これなら避けて通った方が消耗せず済むでしょう」
「そうだな。先ほどの走るなというのもこれの事を言っていたに違いない。全員、F・O・Eに気をつけてゆっくり進もう」
「ちょ、ま、待って。今ので腰が抜けて……」
全員がF・O・Eの対策と今後の方針を聞き終わり進もうとすれば、未だに尻餅をついたままの千枝が腰が抜けてしまったと申し訳なさそうに言ってきた。

別に誰も彼女を責めたりはしないが、このままだと彼女が回復するまで動けないのも事実。
ゆかりと玲は一秒でも早くここを抜けたいようなので、何とかして先へ向かえないものかと考えていれば、
「……回復したら降りろ」
そう言いながら殿にいた湊がやって来て、千枝をお姫様抱っこで抱き上げたまま殿に戻った。
他の者からするとそれで良いのかという対処法だが、案外乙女な千枝はお姫様抱っこが恥ずかしいのか身体を小さくして黙り込んでいる。
本人が嫌がっていないのなら問題もない。これ以上彼の行動について考える事を放棄したメンバーたちは、地面から突然飛び出してくるF・O・Eを避けながら先へ進む。
「ちょちょっ、有里君ってば！　それやらなくていいやつだから！」
そう、メンバーたちは進み始めたのだが、殿に抱っこされている千枝の慌てた声が聞こえてきたので、もしやセクハラでもしているのではと振り返ってみれば、千枝を抱っこしたままF・O・Eを蹴り殺している青年の姿があった。
蹴る際にはF・O・Eに近付く必要があるため、千枝は怯えたように湊のシャツを握り締めてその胸板に身を寄せている。
しかし、千枝がいくら怖がっていても湊はそれを無視し、F・O・Eを蹴り上げて殺したり、踵落としのように上から潰している。
あんな状態でも殺せるんだなと思わず感心させられるが、避けて行こうと提案した直斗や美鶴は、殿に置いている彼が殺してしまうのなら避ける意味はないのではと思ってしまった。
彼が殿に着いたのもりせがサポートの意味がないと文句を言ったことが理由なので、これならりせに我慢して貰って湊の自由にやらせた方が進行も速い。
サポート役の機嫌を損ねるのは本来避けたいが、メンバー全体の事を考えて我慢して貰うべく直斗は湊に自由にさせる事にした。
「あの、先輩。その状態でもF・O・Eが倒せるのなら、殿よりも先頭

にいって頂けませんか？」
「……久慈川が拗ねるだろ。拗ねたどブスの相手は面倒だぞ」
「どっ……いえ、大丈夫です。戦力の効果的な配置を考えての判断ですから」
休業中とはいえ人気アイドルの少女を〝どブス〟と言ってのけた事で、直斗は一瞬驚愕に固まってしまうもすぐに言葉を続けた。
湊が先頭に立ってＦ．Ｏ．Ｅを排除してくれるのであれば、わざわざ迂回する必要がないので最短ルートで進むことが出来る。
なので、直斗だけでなく美鶴や鳴上もその意見に賛成とばかりに頷き、それならばと湊はカードを砕いて大口真神を召喚すると、その背中に千枝を乗せてから先頭へと移動した。
湊が移動した後ろの方では、牛ほどもある大きな狼に乗った少女が、白狼のフサフサの毛並みを撫でつつどこかご満悦の様子でいる。
それを羨ましそうに見ていた玲が一緒に乗りたいと言いだし、なら私もとゆかりまで乗ったようだ。
怖がりの三人に歩調を合わせていると遅くなるため、三人一緒に運べるのなら少しペースを上げてもいいだろう。
先頭を歩き始めた湊は敵の存在など気にしないとばかりに真っ直ぐ扉を目指す。
その間に彼の背中からは黒い炎で出来た腕が何本を現われ、そのまま部屋の数ヶ所に伸びて床を殴りつけた。
見ている者はまるで虫を潰しているようだと思ってしまうが、相手は歴としたＦ．Ｏ．Ｅである。
あまりに簡単に倒しているので忘れそうになるものの、その強さはメンバーが力を併せてやっとというレベル。
敵の強さを正確に把握していれば実力差を痛感するところを、湊がわざと簡単に倒しているように見せている事で嫉妬に駆られる者はいなかった。
＊＊＊
怖がる女子三人を大口真神に乗せ、湊が先頭を歩いてダンジョンを進むとこれまでよりも遙かに速いペースで移動することが出来た。

いくつもあった分かれ道も湊は迷いなく進み、鍵が掛かっているのに鍵穴のない扉の到着してしまった。
多分、途中にあった分かれ道の先に攻略のヒントが書かれていたと思われるが、本当に最短ルートで来てしまったので、さてどうしたのものかと直斗が顎に手を当てて考え込む。
扉には〝この先に進みたければ順番に踏め〟と書かれており、何かを正しい順番で踏めばこの扉も開くのだろう。
頭脳労働担当のメンバーたちが集まり、怪しいのは今いるこの部屋だなと相談し合う。
ここは他の場所と違って扉で区切られず、短い通路で繋がった四つの部屋が四角形のような形で配置されている。
謎解きなどが得意でないメンバーが調べたところ、部屋の床が何ヶ所かスイッチになっているらしい。
ならば、それを順番通りに踏みさえすれば鍵は開くはず。
部屋の配置やスイッチ床の位置から何か分かることはないかと考え込み、その間に肉体労働派のメンバーが適当にスイッチを踏んで試してみる。
あーでもない、こーでもないと議論は白熱し、スイッチを踏むことに飽きたらしい他のメンバーが戻ってきたところで、今までアイギスと一緒に並んで議論しているメンバーを見ていた湊が口を開いた。
「……入ってきた部屋、この隣の部屋、ここの対角にある部屋、最後にこの部屋のスイッチを踏めば開くぞ。面倒なら扉を斬ってもいいが」
湊の言葉に一斉に全員が振り返る。
彼の隣のいる少女だけは当然とばかりに頷いているが、他の者からするとヒントも無しにどうやって順番が分かったのか知りたい。
一応、肉体労働派のメンバーが言われた順にスイッチを踏んでみれば、カチャリと音がして掛かっていた鍵は確かに開いていた。
知っていたならもっと早く言って欲しかった。そんな言葉をぐっと飲み込みつつ、彼が臍を曲げないよう気をつけて七歌が答えが分かった理由だけをシンプルに尋ねる。
「えっと、八雲君さ。どうして順番が分かったの？」

「どうしてってフロアの中を見て回ればヒントくらい書いてるだろ」
言いながら彼は〝ＳＥＴ〟と呟き、左手首に巻いていた黒いリストバンドを小さな機械に変化させた。
見た目は風花が持っている簡易適性測定器のようだが、湊の物はもっと高性能なウェアラブル端末になっており、彼がいくつか操作すると端末から立体映像のように大きな画面が現われた。
最初は湊の腕にあるＥデヴァイスの上に出ていたのだが、湊が画面の縁を指でなぞって飛ばすような動作をすれば、画面は壁に張り付くような形で移動した。
どうして投影されている映像に触れる事が可能なのか。そんな事が頭を過ぎるも、画面にはこのフロアの映像が映っており、まるで誰かの視点で見ているかのように映像は流れている。
そうして、自分たちが通ってこなかった部屋に到着すると、壁際まで移動した映像の中に張り紙らしきものが見えた。
書かれているのはサイコロの展開図のようで、何故だか五と六の目の部分が黒く塗り潰されている。
初めは彼の言っている意味がよく分からなかったが、確かにこれなら皆と一緒に移動していてもヒントを見て回る事は可能だろう。
そんな風に思ってさらに流れていく映像を見ていれば、思い出したかのように風花が小さく声をあげた。
「あ、そういえば有里君の探知能力って外部出力出来たんだね。すごく便利だから羨ましいな」
彼女の発言を聞いて美鶴や七歌など、チーム全体の行動指針について考えていた者たちは風花を見た。
なにせ、こんな力を持っている事が分かっていれば、実際にダンジョンの中を歩くことなく探索と同等の効果を得られるのだ。
仲間を危険に晒す必要もなく、さらに長時間の戦闘で疲労が溜まることもない。
どうして知っていたなら教えてくれなかったのだと、表情は普段通りながらやや恨みがましく美鶴が言ってしまうのも無理はないだろう。

「山岸、知っていたなら先に教えておいてくれ。彼の能力を使えば、下手に歩き回る必要もなく済んだだろう」
「すみません。私も学校を休んでいた時期に通信授業として見せて貰っただけだったので」
風花が見たのは大型テレビに映像を送ってという使い方だった。
それも通信授業のときに見ただけだったので、こんな風に端末から立体映像で画面を出せることも知らなかった。
おかげで湊の探知能力が情報共有に適している事を伝え忘れてしまっていた訳だが、他の者たちはまだ映像の方に夢中になっている。
実際には暗かったはずの部屋が明るく見えており、F．O．Eの周りをグルグル回っている映像や、扉を開けずに隣の部屋に進んだりすることで、湊の探知能力に実際の視界は関係ない事が分かる。
となれば、もはやこれは遠視と透視の複合技だと鳴上は思わず感心してしまった。
「すごいな。これは壁の向こう側とかも見れるのか？」
「……まぁ、探知能力で視ている状態だからな。力が届く範囲なら壁とかは無視できる」
湊の言葉を聞いてやはりかと納得して頷く。
探知能力を持っていなかった者にすれば、能力を持っている者にはこう見えていたのかという新鮮な驚きもあり、こんな映像を見ながら仲間の戦闘のサポートもしてくれていたというありがたみを強く感じる。
複数の情報を同時に処理するとなれば頭を使って糖分が欲しくなるに違いない。
校舎に戻ったらサポート役の者たちに甘い物をご馳走してやろうと心に決めていれば、何やら真剣な表情で画面を見ていた花村がおもむろに湊に声を掛けた。
「な、なぁ。こ、これってもしかして、服の中とかも見れちゃったりする系？」
「……壁も服も同じだ。視ようと思えば視える」
『おおっ!!』

言いながら湊は自分たちのいる部屋に画像を切り替え、能力の眼を使って白狼に乗っている千枝を視る。
すると、実際の千枝は何もしていないというのに、画面の中の千枝は緑のジャージが出たり消えたりしていた。
これはつまり、壁の向こうを視る要領で服の向こう側を視ているという事で、ジャージの下のカッターシャツ姿が見えているだけだが、自分の服の中が視られていると気付いて千枝は大慌てで胸元を腕で隠した。
一部の男子たちは下着が見えている訳でもないのにやたら画面を凝視しており、そんな男子たちを女性陣は冷たい視線で見ている。
そして、湊が画面を凝視している順平、綾時、花村、鳴上、完二を後ろから視ている視点に切り替え、さらに服装の透過率を全裸の状態にしてやれば、男子たちは全裸の男の尻を見せられたせいで一斉に口元を押さえて嘔吐いていた。
「おえっ……おま、急に男の尻を見せるとか卑怯だろ……」
「花村。お前、普段は里中のこと女扱いしてないくせに、こんなときだけ下衆な視線で見るなよ」
「いや、今のはその、説明しがたい何かがあったというかだな……。相棒、パスだ！」
「っ!?」
急にそんな話題でパスを送られてもなんと言って良いのか悩む。
ただ、何故自分が花村たちと一緒に食い入るように千枝の映像を見ていたのか。それを正直に話してしまうと女子たちから白い目を向けられるので、ここは勢いで乗り切るしかないと覚悟を決めて鳴上は立ち上がった。
「有里、お前も男なら分かるはずだ。普段は隠されているからこそ、それを見たときに感動を覚える事を!!」
「……いや、分からないが。というか、夏服のときはジャージを脱いでるだろ」
「……確かにそうだな」
冷静に返されたツッコミに鳴上を素面に戻って頷いてしまう。

まぁ、あくまで本当の理由を隠すための言葉だったので同意を得られなくても問題はない。
ただ、男子たちが自分について話しているとこそばゆいのか、白狼に乗ったままの千枝が頬を僅かに染めながらそろそろ別の話題にしてくれと言ってきた。
「君ら、真面目に人の服装について議論せんでくれんかね……」
「こいつらは別に服装について語ってるんじゃないぞ。ただ、ジャージからカッターシャツ姿に切り替えていた事で、服を脱いでいってるように見えたらしい」
『あー！　てめ、それバラすのは男じゃねえだろ！』
鳴上の機転によって上手く切り抜けたと思いきや、読心能力で真実を理解した湊によって本当の理由をバラされてしまう。
途端に順平と花村が抗議してくるも、一斉に女性陣から軽蔑の眼差しを向けられ彼らは身体を小さくした。
ある意味、身から出た錆びなのでその視線はしょうがない。ただ、女性陣は下衆な視線を向けてきた男子たちよりも、彼らの夢を叶えられる力を持った青年の方を警戒しているらしく、雪子が歩いてきて湊に言葉で釘を刺した。
「有里君、さっきので私のこと見たら目潰すから」
「……意識してフィルターを掛けない限り透過しないから大丈夫だ。別に興味もないしな」
「千枝、こんな事いわれてるよ！」
「あたしじゃないっつの！」
頭の中でスイッチを切り替えない限り湊に性欲は無い。
なので、欲情することなどあり得ないとばかりにバッサリ切り捨てれば、雪子はいつも通りの天然さで千枝に馬鹿にされているよと告げた。
言われた方は慣れっこなのかすぐにツッコミ返しながらも、湊に限ってそういう使い方はしないだろうという信頼もあるのか何も言わなかった。
軽蔑の眼差しを向けられた男子たちは差別だと嘆いていたが、その

辺りは普段の行いの差だとしか言えない。
湊がEデヴァイスをリストバンドに戻したところで一同も移動を再開することにし、鍵の開いた扉を潜るとその先にあった階段を使って下の階層へと下りていった。

――放課後悪霊クラブ・参ノ怪

全員で一緒になって階段を下りてくると、そこはこれまでと違った雰囲気の建物だった。
暗さはそれほど変わっていないが、壁や床に置かれている小物などが明らかに学校ではない。
そう思って辺りを見渡せば、雪子が〝診察室〟と書かれている看板を発見した。
「診察室って書いてるね。さっきまでは学校みたいだったけど、ここは病院みたい」
「おおー！　ヨースケ、病院っちゅーことはナースもいるクマよ！　ヨースケの好きな美人ナース！」
「おっま、ちょっと黙れ！」
自分の性癖を暴露された事で、花村はクマに後ろからのしかかって地面に倒している。
これ以上は何も言わせないとうつ伏せにして黙らせているが、そんな必死な花村の肩に順平と綾時が手を置いて〝自分たちは分かっている〟とばかりに生暖かい視線で彼を見た。
男たちからのそんな同情的な視線など欲しくはないが、先ほどの一件もあって彼らのチーム内での地位は最下層まで落ちている。
ならば、仲間同士仲良くしようと握手を交わしたところで、校舎にいるりせからノイズ混じりの通信が入った。
《先、輩たち……聞こえる……？　そこ、通信が入りづらいみたいで、サポートも万全とはいかない……から……はぐれないよう気をつけて！》
「うおっ、流石の生アイドルボイスもこうノイズが入ると怖ぇな……」
ノイズ混じりに聞こえるりせの声は状況も相まって中々に不気味

だ。
順平たちと男の友情を育んでいた花村も、これには流石にギョッとして言葉を溢す。
すると、花村の言葉に気になる部分があったことで、思わずゆかりが聞き返した。
「え、りせちゃんとマジでアイドルなの？」
《え？　自己紹介のときに言わなかったっけ？》
「うん。というか、いっぱいテレビにも出てたよ？」
りせ本人だけじゃなく、雪子も一緒になって驚いているゆかりに説明する。
一応、最初の自己紹介のときに女性陣には伝えていたはずだったが、一度に沢山の人間に挨拶をされたこともあってしっかりと覚えていなかったようだ。
ただ、本物のアイドルで、さらにいっぱいテレビにも出ていたと言われると、ゆかり以外の月光館学園のメンバーたちも首を傾げてしまう。
名前を聞いたことはある気がする。聞いたことはある気がするのだが、その相手は中学生だったはずなのだ。
見た目もこちらの世界で出会った相手と少々違っており、もしかして姉妹でアイドルだったのかなと風花が尋ねる。
「えっと、りせちゃんって妹さんいる？　夏休みに港区で野外コンサートしてた」
《ううん、一人っ子だよ？　てか、夏休みの野外だったら、二年前にプロデューサーと一緒にフェスしたけど》
「え、二年前？」
二年前と言われて風花は困惑する。湊がアイドルと一緒に野外フェスに出た事は知っているが、風花たちの記憶ではそれは一ヶ月前の出来事なのだ。
訊かれたりせの方もどこか不思議そうにしており、どこか話が噛み合わない事で、一つの可能性に思い至った直斗が慌てて一つのことを尋ねた。

「ちょっと待ってください。いま、そちらは西暦何年ですか？」
「二〇〇九年だ」
直斗の質問に荒垣が答える。彼はこういった質問に対し嘘や冗談をいうタイプではない。
となると、本当に月光館学園の者たちは二〇〇九年からやって来たことになるのだが、別の時間からやって来ているなどとは思っていない千枝が間違ってるよと指摘する。
「ええっ、今は二〇一一年っしょ」
「いや、確かに我々は二〇〇九年から来た。その様子だと、まさか君たちは二〇一一年から来たのか？」
「ええ。……そうなると、僕たちと皆さんは別の時間軸の世界からやって来たという事になりますね」
これまでずっと同じ世界の別の場所からやって来たと思っていた。その前提が崩れ、美鶴たちから見れば直斗たちは未来人で、直斗たちから見れば美鶴たちは過去の人間だった。
時間のずれが二年と短いことも気付くのが遅れた理由だろうが、こんな不思議な世界に閉じ込められて、出会った相手がいつの時代から来たか気にする者の方が珍しいだろう。
おかげで双方時間軸のずれに気付けなかった訳だが、一緒に行動していた者たちが違う時間軸の人間であると聞いてもあまり実感が湧いてこない。
それは、既に一緒に戦う仲間として認めているからこそ、時間軸のずれなど些細な問題としか思えないからだろう。
ただ、改めて相手が別の時間から来たのだなと考えていたとき、七歌は一つ気になることが思い浮かんだ。
校舎からサポートしてくれているりせが二年後の存在ならば、その仲間である鳴上たちの事を知っていた青年は何者なのか。
これまでずっと自分の知る人物だと思って接していただけに、双方の情報を持っていたなら彼は時間軸のずれにも気付いていたはずだ。
「ちょっと待って。私たちと鳴上君たちが別の時間から来たのは分かったけどさ。だとすると、ここにいる八雲君は未来人ってこと？」

七歌の一言で場の視線が一斉に湊に集まる。
彼は最初から全員の名前を知っていた。なら、当然のように彼も二〇一一年からやってきた人物に違いない。
しかし、二〇〇九年の彼とあまりに違いが見られないので、一体どちらだとアイギスやラビリスも不安な顔で見つめれば、煙管を咥えていた青年は薄く笑って言葉を発した。
「――――大学生にもなって高校の制服着て恥ずかしくないのか？」
言われた瞬間に月光館学園のメンバーは騙されたと理解し、頭を押さえたり地団駄を踏んだりそれぞれ悔しそうにする。
確かに二年後の世界ならば、天田以外のメンバーは卒業して進学なり就職なりしている事だろう。
湊目線では確かに大学生となっている知り合いが、高校の制服を着ているように見えるかもしれない。
けれど、そういた時間軸のずれに気付いていたなら教えてくれてもいいはず。そう思って彼に文句を言おうとしたとき、メティスが慌てて訂正を入れてきた。
「ちょっと、兄さん！　皆さん、違いますからね！　兄さんは二〇〇九年からやってきた兄さんですから！」
「いや、でも、八十神高校の人たちの事も知ってたじゃん」
「あれは能力で皆さんの記憶を少し読んだだけです。共通の知り合いがいた方が交流もスムーズにいくだろうからって、兄さんはあえて時間軸のずれを隠して皆さんに接していたんです。その事は私と綾時さんが聞いてました」
メティスだけでなく綾時も時間軸のずれを把握していたと聞き、他の者たちの視線が彼に集まる。
別に騙していたつもりはないが、隠していたことは事実なので、その点についてだけ謝罪しながら自分たちが気付くに至った経緯を簡単に話す。
「ふふっ、ゴメンね。僕は二〇〇九年から来たけど、メティスは二〇一〇年以降に稼働する機体だからね。彼女がいた時点で湊は気付いていたんだよ」

「え、なんでメティスが二〇一〇年に稼働するって知ってるん？」
「……俺は元の世界で未来から来たお前たちに会ったことがあるんだ。だから、そこに同行していたメティスの事も知っていて、綾時にもそれを伝えていた」
新たに青年から齎された情報に月光館学園のメンバーたちが「は？」と疑問符を浮かべる。
自分たちが過去にいった記憶などないというのに、青年は未来から来た七歌たちに会ったことがあるというのだ。
冗談を言うことはたまにあるが、こんな事で嘘を吐く相手ではないので、彼が言うからにはそれは事実なのだろう。
しかし、未来から自分たちがやって来たというのなら、一言こんな事があったと言っておくべきではないのかと校舎にいるチドリも苦言を呈してくる。
《八雲、貴方なんでそういう重要な事を話しておかないの？》
「……重要か？　別に大した用事じゃなかったみたいだぞ？」
《過去へ行く状況がそもそも普通じゃないでしょ！》
「……ペルソナやシャドウが跋扈しているのに今更だろ」
とっくの昔におかしな状況に世界はなっている。
ならば、時を越えたところで普段より〝少し〟不思議なことが起こった程度でしかないだろう。
もっと言えば、湊は時流操作で時の加減速が出来る分、他の者より時の概念に対する認識が深く、だからこそ時に関する異常事態が起きようと動じない。
他の者からするとその感覚が分からないのだが、全くの無知な者は〝トラブルが起きた〟という事態に反応してしまうのに対し、湊はトラブルの種類や程度が分かるから反応が薄いだけなのである。
これに関しては知識や経験の差としか言えないため、そう説明されるとチドリたちも黙って納得するしかない。
ただ、月光館学園の者たちも八十神高校側の者たちも、やはり相手が別の時間軸から来たというのは衝撃だったらしく、全員が落ち着いて話が出来るようになるまでしばらくの時間を要した。

第二百八十七話　質問タイム

――ヤソガミコウコウ・江戸前鮨〝まんぷく亭〟

ダンジョンの第三階層に着いた後、それぞれのいた時代に二年のずれがあると分かった事で、一同は区切りもよく情報整理も必要だろうと校舎に戻ってきた。

探索に出ていたメンバーは疲れていることもあり、先に風呂に入って身体を清めてくると、今日は湊が〝まんぷく亭〟を営業すると聞き全員が店の前に集合する。

しかし、いざ店の前にやって来てみると何やら暖簾が変わっており、そこには〝江戸前鮨〟の文字が増えている。

おそらく定食屋から寿司屋に変えたのだろうが、彼の寿司を食べたことがないメンバーからすると本当に寿司など握れるのかという不安がある。

従業員である善、玲、あいか、クマ、コロマルはこれまで同様先に入って準備しており、クマか誰かが準備中の札を変えに来るまでは誰も入れない。

彼の寿司を食べたことがあるゆかりや順平は素直に楽しみにしつつ、未体験のメンバーが寿司という高級品を楽しみにしつつも不安を募らせていれば、少ししてからようやくクマが出てきて札を〝商い中〟に変えた。

「皆、おまたせしたクマー。今日は師匠がお寿司屋さんにしたから、メニューは改めてご確認くださいクマ！」

ようやく食べられると聞いてお腹を空かせたメンバーたちが中に入ってみれば、そこは以前のまんぷく亭とは全く異なる内装になっていた。

以前の倍ほども広くなった店内のど真ん中に置かれた専用の〝0字〟型レーン。

レーンの内側にはしっかりと髪を結い上げた青年が立っており、今も彼は慣れた様子で寿司を握っている。

本格派の寿司屋かと思いきや、学生たちにも優しい〝回転寿司〟形

式だったことで一般庶民な者たちは安堵の息を吐くが、逆に回転寿司など初体験な美鶴は寿司の皿がレーンに乗って回っている事に困惑している。
しかし、このままでは誰も食事が出来ないので、レーンを囲むように設置されたカウンター席とテーブル席へ玲たちが案内すれば、男子は全員がカウンター席へ、女子たちはテーブル席へと分かれて席に着いた。
客は席に着けば玲とあいかがテーブル席におしぼりとお茶を配り、カウンター席はクマと善がお茶を配りコロマルがおしぼりのバスケットを背中に乗せて配る。
そうして配り終えれば、従業員たちも厨房に一番近いテーブル席に座り、自分たちのお茶や醤油皿を準備すると客よりも先に食べ始めた。
「むっほほー！　くるくる回るお寿司なのにお高級な味がするクマ！」
「善、次は穴子とホタテとウニがいい！」
「……ああ、流れてくるまで待て」
クマや玲の食べっぷりには一切の遠慮がない。メンバーの中でも随一の常識人であるあいかも食べている事から、彼女たちの食事については事前に許可が出ていたのだろう。
そういう事ならば気にするだけ無駄かと思考を切り替え、七歌が美鶴に回転寿司のシステムを伝えている間に他の者も食べ始める。
「うっほー！　前にも一回食ったことあるけど、やっぱ有里の寿司うめぇ！」
「なっ、おい順平！　そのウニは俺がいま取ろうとしたやつだぞ！」
「へへっ、早い者勝ちッスよ！　勝負は席順を選ぶ時点で始まってるってね！」
いきなり大トロを食べるという邪道にもほどがある食べ方をした順平は、続けて鯛やウニなど高級なネタばかりを食べてゆく。
目の前でウニを奪われた事で真田が激怒するも、そんなのは知らないと順平が流れてくる寿司を次々と奪っていけば、全然寿司が流れて

こない事でキレそうになった真田が立ち上がり掛けた。
けれど、真田が腰を浮かせ掛けたタイミングでコトリ、と音をさせてウニの載った皿が彼の前に置かれる。
なんだと思って顔を上げれば、呆れ顔の湊が立っており静かに口を開いてきた。
「……なんのために俺がいると思ってるんだ。流れてないネタがあれば注文すれば握る。小さいことで騒ぐな」
「む、ならフグはあるか？」
「ある。一皿でいいのか？」
「いや、三皿で頼む！　それとイカとイクラもだ！」
普通の寿司屋でも回転寿司でも注文して握って貰うなど当たり前のサービスだ。
ここでも当然それは可能であり、現にチドリなどはほぼ最初から湊に注文して握らせている。
他の者もそうした方法で好きなネタが食べられると分かると、順に注文していき湊も即座に対応してみせる。
メモも取らずに頼まれたものを覚えておき、手早くそれらを握りながら次の注文を受けて次々と皿を出してゆく姿はまさに職人。
多芸だとは思っていたが、美食家の美鶴も思わず顔を綻ばす寿司が握れるとは驚きだと八十神高校側のメンバーたちが見ていれば、ある程度注文が落ち着いてきた段階で湊が全員に向かって話しかけた。
「さて、自分たちが別々の時間から来たと認識した事で、こちらもいくつか話せる事が増えた。それぞれの陣営に対する質問も含め、知りたい事や訊きたい事があればこの時間に尋ねるといい」
この世界についての理解度で言えば、月光館学園のメンバーも八十神高校側のメンバーも大差ない。
湊から時間軸のずれについて聞いていたメティスと綾時も、別にアナライズが使える訳ではないので、時間軸のずれを除けば知っている事は他の者と変わらない。
となれば、その質問は自然と湊やベルベットルームの住人に集中すると思われたが、他の者が質問する前に茶碗蒸しを食べていたマリー

が湊に話しかけた。
「ねぇ、店長が私のこと知らないってホント？」
「……ああ、マリーたちから見れば俺は過去の人間だ。記憶の表層を読んでそちらの俺を演じてはいたが、実際にはほとんどのやつが初対面だ」
「そう、なんだ……。まぁ、ご飯くれるし。住むとこくれるならいいけどさ」
相手が自分の事を知らないと言われた彼女は少しショックを受けた顔をする。
二〇〇九年の湊が来たことは別に彼が悪い訳ではないし、彼も全体の事を考えて知り合いのフリをしていて、実際にそのおかげで両陣営の挨拶は円滑に進んだので責めることは出来ない。
マリーもその事は分かっているようで、未来の彼との違いがほとんど感じられないことから赦すことにしたらしい。
再び茶碗蒸しを食べ始めた彼女の前に湊がエンガワを置き、黙って彼女がそれを受け取った事で二人の話は終わったようだ。
ならば次は自分たちが彼に質問をしようと、全員が箸を動かして食事を続けながら訊く内容を考える。
無論、ここで美鶴が訊いても湊がストレートに返事をするとは思えないので、その辺りは他の女子が代わりに訊くようにはするつもりだが、湊を挟んでテーブル席とカウンター席でお互いに視線を交わして誰から質問していくかを相談した結果鳴上からという事になった。
自分からかと決まれば鳴上は流れてきたウナギを取りつつ、熱いお茶を一口飲んでから湊に尋ねる。
「有里、さっきマリーとの会話にも出てきた記憶を読むっていうのはどういう事なんだ？」
「そのままの意味だ。他人の心を読む力の延長にあって、俺は相手の記憶を実感を伴って読むことが出来る」
「実感を伴う？」
「当時の感情や五感で感じ取ったものも含めてという意味だ。簡単に言うなら完全な形で追体験出来るんだ。本人が忘れている事でもな」

以前は自動で周囲の者の心を読んでしまっていたが、今では能力のオンオフが利くようになっているのでその心配はない。
湊だって最低限のプライバシーは尊重する。女性ならば男子には知られたくない事だって沢山あるだろう。
故に、青年はわざわざ他人の記憶など知りたくないため、常に考えている事を読まれてしまうと危惧したらしい完二や千枝に力は制御できていることを伝えた。
すると、今まで人一倍早いペースで寿司を食べていたクマが、急に真面目な顔になって湊に話しかけてくる。
「な、なら、師匠はクマの事とかも分かるクマ？　クマはセンセイやヨースケと会う前の記憶がほとんどないクマよ。なしてテレビの中にいたのか、クマは一体何者なのか、分かるなら教えて欲しいクマ」
この場には現在記憶を失っている者が四人いる。
鳴上たちと出会う前の記憶がほとんどないクマ、二〇一一年の湊と出会って以降の記憶しかないマリー、この世界に来るまでの記憶を失っている善と玲。
メティスたちの話によれば未来の湊も記憶喪失になっているらしいが、ここにいる湊は反対に他人の失った記憶すら読むことが出来る。
その力を使えば自分の事も分かるのではと思ったクマが縋るような視線で見てくれれば、湊はエリザベスにノドグロを渡しつつ答えた。
「……まず、お前に記憶がないのはそれ以前が存在しないからだ。記憶は自我の発露と共に発生するからな」
「ほえ？　じゃあ、クマはどっから来たクマ？」
「どこからも来てない。お前はテレビの世界で生まれたシャドウだ。偶然にも自我を得たようだが、自我を持ったペルソナやシャドウはお前以外にも確認されている」
現にここにも綾時とメティスという二体のシャドウがいる。
それぞれ、ニュクスの息子でありシャドウから一歩進んだ宣告者と、ペルソナ使いのシャドウとして分かれながら固有の自我を確立した特別な存在である。

一方のクマはというと二人のような特別な背景はなく、偶然にも自我を得たというレアなシャドウでしかない。
青年がそれを淡々と告げるとクマはショックを受けているようで、流れてくるサーモンやエビの寿司を静かにパクついている。
「ねぇ、私は？　私も記憶ないんだけど。店長と会ってからは大丈夫だけど、その前の記憶がなくて……」
そんな風にクマがショックを受けていると、今度はマリーが自分の事を教えて欲しいと聞いてきた。
クマの過去を理解出来たのなら自分の事も分かるはず。真剣に湊を見つめてくるマリーの目には、湊に対する信頼のようなものが感じられた。
ならば自分もそれに応えようと湊は彼女の記憶を探り、さらにアナライズを掛けながら鯛と大葉の巻き寿司をマーガレットに渡す。
「……マリーは何かから分かれた存在だな。繋がりが切れているせいで遡れないが、お前もクマと同様に人間じゃない。ただ、シャドウよりは上位の存在というか、かなり弱いが神気を感じるし神か何かだろ」
湊の読心能力を応用した記憶の解析は、あくまで本人の中に残っている記憶を情報として吸い上げてゆくものだ。
脳にダメージを負って回路が切断されていても、脳の中に情報が残っているのであれば取り出すことが出来る。
ただ、逆を言えば本人の中にない情報は読めない訳で、マリーの記憶は未来の湊と出会う少し前の状態から始まっており、それ以前の情報は存在しなかった。
つまりは彼女もそこからスタートした存在という事になるが、湊は彼女の身体などからペルソナやシャドウに近いがそれよりも上位の存在の残滓を感じ取った。
今のマリーの身体は完全に人間のそれであるが、読み取った情報から推測すれば彼女が何かしらの神と繋がりがある事は分かる。
故にマリーも神性を失った神か何かだろうと湊が告げれば、厚焼き卵を食べていた直斗が驚いた表情で聞き返してきた。

「待ってください。平然と言っていましたが、神とは実在するものなんですか？」
「宗教的な神とは異なるが、怪異や精霊のような存在としてならいるぞ。現に俺や七歌はその血を引いているし、ベアトリーチェだって神と呼べる存在だ」
どういった経緯でそんな者たちが生まれるに至ったかなど分からない。
しかし、一般的に神と呼ばれるものは実在してこの世界にもいた。
七歌や湊の身体に宿る不思議な力はその名残であり、全く別の系譜ではあるがベアトリーチェも神の一柱だ。
同じペルソナ使いの中でも特殊な力を持った二人を見てきたからこそ、直斗もそれらが普通の力ではないと理解しており、神をペルソナやシャドウの上位存在として認識したようだった。
「はーちゃん！　わたしの事も教えて！」
クマとマリーの事が分かったのであれば、当然自分たちの事も分かるだろうと玲が期待した目で見てきた。
教えて欲しいと頼まれた湊は彼女を見返してしばし考え込む。
玲と善について湊が分かっている事はいくつかあるが、それをここで伝えてしまうと世界の核となっている玲の影響で何が起きるか分からない。
オマケに玲の過去については分かることの方が少ないので、ここは安全策を採らせて貰おうと湊は分かっている事があるのは伏せながら言葉を返した。
「……君と善の記憶はダンジョンの奥にある宝を手に入れることで戻る。それまではお前たちの中から抜けていて読めない」
「そうなんだぁ……。じゃあ、なんでこの世界にいたのかも分からないね」
「ああ、役に立てなくてすまない」
自分たちの事が分かると期待していただけに、玲は明らかに落ち込んだ様子でいた。
期待していた少女を騙すことになった青年は申し訳なくも思った

が、この世界から脱出出来るようになるまでは世界を維持して貰わなければ困る。
　玲本人が世界の核となることを希望したとは思えないが、それまでは彼女に事の真相を話すのは避けようと青年が密かに決めていれば、湊がマグロの食べ比べセットをアイギスに渡したタイミングで雪子が質問してきた。
「ねぇ、この世界ってどっちの時代のものなの？」
「……別にどっちという事もない。この世界は心の海に浮かぶ島みたいなものだ。そこに時間の概念はない」
　自分たちと七歌たちのいた時代が異なるのであれば、今いるここはどちらの世界なのだと気になるのは当然だ。
　雪子の質問を聞いて数名のメンバーが確かに気になると湊を見れば、スズキと炙りサンマをメティスに渡しながら湊はシレッと他の者に取っては耳慣れぬ言葉を交えて答えた。
　話を聞いていたベルベットルームの住人らは、確かにそうだとばかりに頷きつつ寿司に舌鼓を打っている。
　けれど、他の者ではどこに頷けばいいのか分からないので、荒垣がコハダとサヨリを受け取りながら改めて質問を重ねる。
「有里、俺たちにも分かるように説明してくれ。そも、心の海ってのは何だ？」
「心の海は集合無意識、人間に限らず生き物の精神の繋がる場所です。時代によっては根源であったり、アカシックレコードと呼んだりもするようですが、死んだ者の心も記録されているので魂のコミューンと呼ばれることもありますね」
　心の海には様々な呼び名がある。どれもが正しく、しかし、明確な正解がある訳でもないので好きな呼び方をすればいい。
　そこには既に死んだ者たちの魂の記録があり、今も生きている者たちの魂とも繋がっていた。
　だからこそ、それこそが死者が辿り着く天国であると考えた者もいるのだが、湊やベルベットルームの住人らの見解は少々異なり、心の海は数多の情報が混在する次元規模のサーバのようなものだと思っ

ていた。
次元規模でみれば地球が誕生し、そこで流れる一、二年の時間など一瞬にも見たぬ出来事に違いない。
となれば、その一瞬の中で生きる情報の一つでしかない人間からは全容など把握できるはずもなく、それこそ過去から未来まで全てが繋がっているようにしか見えないため、湊たちが今いるここがどちらの時代に属するかと聞かれれば両方に繋がっているとしか答えようがなかった。
「心の海には時間の概念がほとんどない。だから、どちらの時代とも言いづらいんだ」
「まぁ、現に二つの時代を繋いじゃってる訳だしな。信じるしかねーか」
湊の説明を聞いても分からない事は出てくるが、心の海とやらが不思議な空間で、時間の概念も曖昧になるから異なる時代と繋がっていられる事は分かった。
これを使えば時間旅行も出来そうだなと続けて花村が冗談交じりに言えば、テーブル席で食べていたエリザベスがその言葉に頷いた。
「はい。確かに心の海を経由出来れば過去に行くことも可能でございます」
「え、それマジで言ってんすか？」
「ええ。マジもマジ、大マジでございます」
意外なところで時間旅行が可能であると教えられた事で、花村や順平は瞬時に悪知恵を働かせ始める。
もしも、記憶を持ったまま過去へ移動出来るのなら、数字を選ぶタイプの宝くじや競馬などの結果をメモしておくだけで億万長者になれる。
株の変動などとは言わぬ辺りが高校生らしいが、既に億単位の金を持っている湊にすれば、そんな事のために危険な時間移動をするのかという感想だった。
無論、そんな事を言えば金持ちだから言えるんだと騒がれるので、湊は黙って寿司を握り続ける。

その間に他の者たちはそれぞれの時代について話しており、湊たちに訊きたい事は一区切りついたらしい。
また分からない事がそればその都度聞いてくるだろうが、食事時にあまり難しい事を考えてばかりというのもよろしくない。
自然と一同の会話はただの雑談になっていき、その間も飛んでくる注文を受けながら湊はひたすらに寿司を握り続けたのだった。

第二百八十八話　マリーとの会話

――放課後悪霊クラブ・参ノ怪

それぞれの時代に二年のずれが存在すると理解した翌日。

自分が人間ではないと知ったことで、昨日のクマとマリーはどこか暗い表情になっていたが、起きてくれば何事もなかった様子で食事をしていた。

マリー曰く、自分が人間ではなく神と呼ばれる存在である事はショックだったらしい。

だが、湊も同じように神の血を引いて、異界の神と魂レヴェルでの融合を果たした末に意識を譲渡すれば神格へ至れるという。

という事は、自分と湊は同類という事になるので、自分一人でないのなら別に気にする必要はないと思ったのだと他の者に語った。

もっとも、他の者から見てもマリーと湊のどちらが人間かと聞かれれば、ほとんどの者がマリーの方が人間と答える。

彼女もその点は同じらしく、同類に化物がいるなら特殊な力を持たない自分など大したことないとのことだ。

そして、クマにいたってはもっと単純で、鳴上や花村といったメンバーからある意味予想通りだったと言われ、付き合い方がそれで変わる訳ではないので本人も今まで通りでいることにしたらしい。

そういう事ならばと他の者も納得し、今日も再び探索の続きを始めたのだが、病院のような内装になっていた第三階層はこれまでの複合パターンで構成されていた。

追ってくる赤ん坊タイプのＦ．Ｏ．Ｅに、通せんぼしてくる市松人形タイプのＦ．Ｏ．Ｅ。

どちらも普通に戦えば面倒な相手なのだろうが、今日の湊は鞘のない大太刀を手に持っていた。

人斬り包丁〝仇桜〟。天目一箇神を名乗った刀工が名切りの刀に魅せられ、より優れた人斬りの道具を作ろうと鍛えた曰く付きの刀だ。

他には太刀ほどの長さの〝霞桜〟、脇差程度の小刀の〝彼岸桜〟、

長巻の〝枝垂桜〟、簪に仕込んだ〝富士桜〟、直刀の〝寒緋桜〟がある。
どれも妖刀に分類される武器だったが、湊の手にはよく馴染んだのでベレスフォードの伝手を使って蒐集し、現在は全てが湊のマフラーに眠っている。
落下してきた赤ん坊型F・O・Eまで一足飛びで距離を詰め、勢いのままに湊が突きを放てば敵は割れた風船のように弾けて消える。
黒い靄となった敵が消える前に振り返った湊は、振り向きざまに腰のプッシュダガーを投げつけてメンバーたちの正面から近付いて来ていたシャドウの動きを阻害。
動きが鈍った隙を見逃すはずもなく、間にいる者たちを邪魔に思った湊は壁を走って先頭に躍り出ると袈裟切りで敵を屠った。
F・O・Eとシャドウの出現には四秒ほどのラグしかなかったが、他の者たちがペルソナを呼び出す前に湊が倒してしまったことで、全員が随分とあっけなく終わってしまったなと身体に入っていた力を抜いた。
「なんつーか。マジで俺らいらねえよな」
「陽介なら賑やかし担当でもいけるはずだ」
「職業遊び人じゃねーか」
戦闘中の湊は本気になるにつれて速度が増してゆく。
時流操作は消耗が激しいので多用しないが、純粋な体術に速度上昇のスキルを掛けるだけで彼は他者の視界から消える。
先ほどの戦闘では敵が二体だったので見ることはなかったが、ほぼ同時に六体の敵が現われたときなど、湊の姿が分身してほぼ同時に六体と戦っているように見えた。
壁走りや天井を足場にするなど、建物の中で立体的に動ける事に加えてそれだ。
善と玲はまるで忍者のようだと感動を覚え、彼がいれば地面が消えたり天井が落ちてこない限りは大丈夫だろうと思えた。
それは他の者たちも同様で、戦う準備をしていた鳴上と花村が出番はなかったなと肩を竦め合っている。

戦闘直後だというのに二人の間にはリラックスした空気が流れており、それは他のメンバーにも言える。
戦闘は全て湊がやってくれるという彼の実力を信用した上での反応のようだが、敵を殺し終えた青年はそんな全体を見て少し考え込む様子をみせた。
彼のそんな様子に気付いたのはアイギスとコロマルだけのようだが、気付いていないメンバーたちは隊列を乱さぬよう気をつけながら先を目指す。
「そういえば、稲羽市立病院ってお婆さんの幽霊が出るんだって」
「ちょっ、急に何でそういう話をしたのさっ!?」
雪子が千枝に地元病院の怪談を語っており、近くにいて聞こえたらしいゆかりや直斗が怖がっている。
少女らの反応を見て順平や綾時が苦笑し、恐怖を紛らわすようにタコ焼きを食べている玲を善がジッと眺める。
「あ、こっちに抜け道があるよ!」
全体的にどこか気の抜けた状態で進んでいれば、七歌が隠れた抜け道を発見したと報告してくる。
壁の向こう側にはシャドウの反応がないようで、ここまで歩き通しだったこともあり一同は移動して小休憩を取ることにした。
「ふぃー、歩き続けてたから足が棒になってきたクマ」
「オメーの足はどう見たってぶっといパイプだろうが」
「ぬぬぬっ! カンジにはこの脚線美が分からないクマか!」
抜け道を通った先には大きな部屋があった。
ここからどこへ行けるのかは分からないが、自分たちの通ってきた場所を七歌がマッピングしている間、他の者たちも座って休んだりしている。
一部の者はこんな場所で休むくらいなら先を急ぎ、一刻も早くこのダンジョンから出たいと言っている者もいる。
だが、そんなメンバーたちが休む姿を見ていた湊が、唐突に口を開いて言葉を発した。
「……気になることがあるからしばらく別行動を取る。お前たちは先

に進んでおいてくれ」
言い終わると同時に湊の姿がその場から消える。
他の者が詳しい理由を尋ねる暇もなく、校舎に残っているりせとチドリの索敵範囲から反応が消え、近くにいた風花ですら欠片も相手の気配を感じ取れず完全に見失う。
湊の突飛な行動に慣れていた者たちでも、流石に敵が強くなってきたこのタイミングで彼が抜けるとは思わず、ポカンと口を開けて呆けていた。
＊＊＊
他の者たちが突然消えた湊に驚いている頃、青年は一人ハデスの隠れ兜を被ってからカエレールを使用して校舎に戻っていた。
彼が急に校舎に戻ったのは、あのまま戦闘が湊頼りになっては全体のためにならないと思ったことと、もう少しこの世界について調べたいと思ったからだ。
（……敵の狙いは玲の解放。留まってしまっている魂を輪廻の環に乗せるためと言ったところか）
この世界から戻ったときにはこの世界で過ごした間の記憶が消えると思われる。
それは影時間の記憶補整のようなもので、本来得るはずのない未来の情報や過去との接触を〝なかった事〟にして辻褄を合わせるためだ。
ただ、ここにいた間の記憶が消えたとしても、この世界で経験した事がなかった事になる訳ではない。
もしも、このまま湊頼りの状況が続いてしまえば、元の世界でも無意識に〝誰かが何とかしてくれる〟と思ってしまったり、戦闘勘が鈍っていることに気付かず大きな失態を犯すかもしれない。
別に彼らが死んでも大した問題はないけれど、自分が一緒にいるせいで弱体化するというのなら離れてやるくらいの気遣いは出来た。
そうして、校舎の中を歩いていた湊が自分の拠点に戻ると、マリーがリビングのソファーに寝転びながら何かを書いていた。
今の湊はハデスの隠れ兜を被っているので姿は見えず、探知系の能

力を持っていても気配を探れなければ、コロマルの耳や鼻を使って衣擦れや足音に匂いといったものを辿ることも出来ない。
よって、彼が踏んだ床が軋んだり、彼が動くことで発生する空気の流れから居場所を推測する事しか出来ない状態な訳だが。
拠点に戻った湊は、静かに扉を開け閉めして入ってきたことで、マリーは誰かが部屋に入ってきたことに気付かず、何やらボソボソと呟きながら便箋と向き合っている。
「んー……ティータイム、ティータイム……ワンダーティータイム、アリスｉｎザ・ティータイム、午後のティータイム……なんか違うなぁ」
「全体的にずれてるだろ」
「ほわあああああああああっ!?」
拠点まで来た湊はりせとチドリに見つからぬよう、対索敵のステルスを掛けてからハデスの隠れ兜を脱いで突っ込みを入れる。
すると、誰もいないと思ってリラックスしてポエムを書いていた少女は、急に話しかけられたせいで驚き、そのままソファーの上から転げ落ちた。
転げ落ちた拍子に彼女の手を離れた便箋は、湊の足下までヒラヒラと飛んできて止まる。
彼女が度々ポエムを書いていた事は知っていたが、その内容まではあまり気にしたことがなかった。
記憶を失った未来の湊はわざわざ読んでいたようなので、自分も試しに読んでみるかと便箋を拾い上げて読み上げる。
「……ミルクティーにシナモンでキミの」
「うわぁぁぁぁぁっ!!」
と、途中まで読んでいると転げ落ちて帽子が脱げてしまったマリーが、落ちた帽子を拾い上げもせず飛び起きるなり、湊が手にしていた便箋を乱暴にひったくった。
せっかく読んでいたのに邪魔をされて湊は少しイラッとするが、少女の方に視線を向けると相手は顔だけでなく耳や首まで真っ赤にして、羞恥からか目に涙を溜めた状態で睨んできている。

「なんで店長がいるのっていうかいつ帰ってきたの帰ってきたら普通はただいまっていうじゃん急に人の横に立って独り言に返事するとか訳分かんないしていうか声に出して読むとかありえないからホントにありえないっていうか読まないでよばかきらいごっつぁんふぁんたじー！」
「……ごっつぁん何だって？」
　彼女はポエムを読まれた際、焦りからかそこに使われている言葉を使って罵倒してくる癖がある。
　故に、息継ぎもせず言葉で捲し立てて来るマリーに対し、湊は変な単語が混じっていなかったかと聞き返した。
「あ、その、それは、どうでもいいでしょ！　てか、何でいるか答えてよ！」
「他のメンバーに経験を積ませるために先に戻ってきた。今頃、あっちはあっちで頑張ってダンジョンを攻略してるはずだ」
「へ、へー。そうなんだ」
　話題を逸らすように湊がここにいる理由を尋ねると、その理由を聞いてマリーは何やら考え込む様子を見せて落ちていた帽子を拾い上げる。
　彼女はベルベットルームの仕事の手伝いをすることもあるが、基本的には未来の湊がやっている〝眞宵堂〟のバイトという扱いだ。
　なので、他の者がダンジョンに行っている間、マリーはベルベットルームで自由に過ごすか、拠点で気ままにポエムを書いていた。
　本人が言うのにはココロ（パトス）の叫びらしいが、それはあくまで趣味なのでずっと書いていられる訳ではない。
　インスピレーションを刺激するような、体験や発見が必要となってくるのだ。
　そういった意味ではこの文化祭は中々に良いイベントに思えるが、一人で回ってもすぐに飽きてしまい楽しくない。
　やはり誰かしらと一緒に回る方が楽しいので、帽子を被り直したマリーは湊を見上げながら口を開いた。
「じゃあ、一緒にあそべるの？　暇なんでしょ？」

「別に暇ではないな。少しこの世界について調べようと思ってる」
「調べるって、出れないってことくらいしか分かってないでしょ？」
せっかく一緒に遊べると思ったのに、まさかの忙しい発言にマリーはムスッとしながら言葉を返してくる。
湊が抜けている状態とはいえ、他のメンバーたちがダンジョンを攻略しているなら、最下層まで到達してボスだって倒してくるに違いない。
そうなれば元の世界に帰る扉を封じている鍵も外れるので、出ることが出来ないという事しか分かっていない状態で、今更調査しても無駄ではないかとマリーは考えた。
「じゃあ、何で出られないか分かるか？」
「なんでって、誰かが閉じ込めてるから、って他の人は言ってたけど」
このままこの世界から脱出できそうだからと、この世界の謎に対する思考を放棄することは簡単だ。
現に順平や完二などダンジョンに潜っているメンバーの中にも、最初から考えないようにしている者だっている。
だが、情報を整理してゆく事で、今後同じような状況に陥っても対処することが可能であったり、メンバーたちをこの世界に招いた相手の正体を探る切っ掛けになるかもしれない。
「じゃあ、その誰かっていうのは誰だ？　閉じ込めている理由は？」
「誰って……分かんないよ。知るわけないじゃん」
「だろうな。だからそれを調べるんだ」
調査の重要性を理解して貰えたところで、湊は先ほどマリーが寝転がっていたソファーに腰掛ける。
続けてマフラーから紅茶の入ったポットやケーキの載った皿を出し、それらをマリーに渡してから自分も紅茶に口を付けた。
今頃、ダンジョンに残されてきたメンバーたちは、視界の悪い薄暗闇の中で戦いながらギミックの攻略に励んでいるに違いない。
湊が拠点に戻って女子と二人きりでお茶をしていると聞けば、普段は温厚な風花ですら怒ってくると思われる。
しかし、これまで放置気味だったマリーの相手をするのも必要な事

なので、湊は調査を後回しにしてマリーと話をするべくケーキを一口頬張る。
「店長は誰が閉じ込めたか分かるの？」
「ん……他言するなよ」
「しないよ。別に話す相手もいないし」
「……淋しいやつだな」
いくら遊んでばかりいるマリーでも、自分たちをここに招いて閉じ込めている相手に興味がないと言えば嘘になる。
青年の様子からすると既に相手の見当がついていそうなので、誰にも話さないから教えて欲しいと言ってマリーも紅茶のカップに手を伸ばす。
中々良い茶葉を使っているのか、カップを顔に近づけるだけで紅茶の香りが届いて気持ちが落ち着いてくる。
そんな風に隣でリラックスしている少女を見ながら、湊は先ほどの質問に答える前にいくつか確認しておきたいと口を開いた。
「まず、順番に考えてみるといい。最初にこの世界にいたのは誰だ？」
「最初って店長の世界の人たちが来るより前って事だよね？」
「ああ。俺たちとお前たちは後から招かれた側だからな」
「じゃあ、あの善と玲って二人じゃないの？」
「そうだ。つまり、この騒動の中心にいるのはあの二人だ」
一見、善と玲は巻き込まれた一般人のように見えるが、二人は七歌たちがやってくるまで二人で文化祭を回っていた。
こんな訳の分からない世界で文化祭を楽しめる一般人などいるはずがない。
その証拠に二人はまるでペルソナのように不思議な力を使う事が出来た。
不思議な力を持っている事も含めて考えれば、二人がこの世界に閉じ込められていた事は偶然とは思えない。
「あの二人は他の者と一緒に外に出ようとしているが、善と玲ではスタンスが違う」
「んー……善が玲の言いなりってこと？」

「言いなりって訳じゃないが、玲の決定に従ったり意思を尊重している。今でこそ玲をここから出すために頑張っているが、善個人は当初ここから出たいとは別に思っていなかったみたいだ」
その話題が出たとき、まだ湊はここに到着していなかったが、皆がどうやれば脱出できるかと話していると玲は一緒に出たいと言い始めたらしい。
対して、善は玲にここから出たいのかと尋ね、ならば自分もそれに協力しようと告げたとか。
閉じ込められている状況に危機感を覚えているかどうかで反応も変わるので、強く外に出たいと思っていないからといって犯人と決めつける事は出来ない。
もし湊がこれを他の者に話しても、そんなのは揚げ足取りではと言われるだろうが、マリーは湊がそれだけで犯人と断定している訳ではないと分かっているので、素直に善が犯人で良いのかと確認を取ってきた。
「じゃあ、善が閉じ込めてる犯人ってこと？　あ、その、記憶を失う前の状態での話かもしれないけど」
「ああ。十中八九そうだろうな。玲はあくまでこの世界の核として利用された人間でしかない」
玲を核として善がこの世界を作り出した。
どうすればそんな事が可能なのかと気になるが、今の善はこの世界を作ったときの記憶を失っている。
ならばどう聞いても答えようがないと思われるので、また記憶が戻ってから聞いてみようと考えたところで、マリーが根本的な謎に気付いて紅茶のカップから顔をあげて湊を見た。
「ねえ、それじゃあ善ってもしかして人間じゃないの？」
「気付いてなかったのか？」
「店長のことにも気付いてないのに気付くわけないじゃん」
見た目も装備も変わっていない事が原因だが、未来から来た者たちはマーガレットを除いて全員が湊が二〇〇九年の人物だと気付いていなかった。

湊がバレぬよう意識して行動していた事も理由として挙げられるが、よく知っている人物が別人である事にも気付けなかったというのに、どうやって会ったばかりの相手が人間かどうか分かるというのか。
マリーが気付いていなかった事に少し驚いてみせる湊に、マリーは絶対に無理だからと呆れた顔で返す。
そうして、紅茶とケーキを食べ終えたところで湊は席を立ちながら、
「まぁ、あくまで閉じ込めた犯人は〝記憶を失う前の善〟だ。本人に閉じ込める意思があったかは不明だが、今現在も玲に執着しているところをみると悪意はなかったみたいだけどな」
といって使った食器を持ってキッチンへ向かう。
マリーもカルガモの雛のようにその後ろを着いていき、洗い物をしている青年の背中に話しかけた。
「でもさ。もし、記憶が戻った善が悪いやつならどうするの？」
「邪魔なら殺す。けど、校庭の時計塔の中に似た気配を感じるんだ。もしかすると親玉はそっちで、善はそいつの作った端末かもしれない」
この世界には湊たちを招いた存在がいるはずだ。
最初は記憶があった当時の善が行なったと思っていたが、玲の話を聞いた限りでは時期が合わない。
となれば、時計塔の中にいる存在が招き寄せた大本で、そいつさえ倒せば仮に記憶の戻った善が悪人であっても全てを終わらせる事が出来る。
邪魔なら排除することも検討するが、アイギスたちの前でそれを行なうのは気が引ける。
故に、湊は善と親玉が別の行動指針を持っていることに期待しつつ、洗い物を終えるとマリーと一緒に拠点を出てこの世界の調査に向かった。
一方その頃、ダンジョンの中では七歌や鳴上たちが明るいと消えてしまう魔法の鍵に四苦八苦していたが、直斗が中心になり暗闇の中で

のＦ．Ｏ．Ｅの位置を把握し、扉までのルートを割り出すことで何とか先へ進んでいた。

急にいなくなった湊に思うところはあるようだが、戦闘を湊に任せ過ぎている事は気にしていたらしく、大きく不満が出ることはなく彼らも先へと進んでいった。

第二百八十九話　参ノ怪を抜けて

――放課後悪霊クラブ・参ノ怪

青銅のような不気味な肌の色をした赤ん坊型のＦ．Ｏ．Ｅが巨体に見合わぬ速度で突進してくる。

いくらペルソナ使いたちが耐性でダメージを軽減出来ると言っても、それには限度があり敵の体当たりを喰らえば衝撃で吹き飛ぶ。

味方をそんな目に遭わせる訳にはいかないので、突進してくる敵の進路上に立つと二人の少年が同時に吠えた。

「来やがれ、カストール！」

「ぶっつぶせタケミカヅチ！」

後ろに控えている者たちの許には行かせない。

敵の正面に現われた二体のペルソナは、その拳を振り下ろして敵とぶつかる。

パワータイプのペルソナ二体による同時攻撃だ。いくらＦ．Ｏ．Ｅと言えども簡単に突破することなど出来ないだろう。

「ぐっ、こいつ止まらねえっ」

二人がかりでなら止められる。そう思っていた荒垣はＦ．Ｏ．Ｅと衝突したカストールの衝撃の一部がフィードバックした事で苦悶の表情を浮かべる。

還ってくるダメージは実際のダメージの数割だ。それでもこれほどのダメージがあるのかと思わず膝を突き、予想以上の力によって止めることが叶わないと味方に伝える。

カストールとタケミカヅチが撥ね飛ばされるように吹き飛べば、これ以上先へは行かせないと真田が正面に立った。

「任せろ！　カエサル、ジオダインだ！」

荒垣と完二が敵とぶつかった事で勢い自体は落ちている。

ならばと唯一ペルソナが進化している真田が敵と対峙し、カエサルが手に持った剣を振り下ろすのと連動して皇帝の雷がＦ．Ｏ．Ｅを襲った。

《アギャァァァァァァァァァッ!!》

光の柱と見紛う雷がＦ．Ｏ．Ｅの身体を捉える。
流石の敵も高威力の攻撃が直撃すれば無視できないダメージを負うのか、その場で動きを止めると痛みに悶え始めた。
「モチヅキチヨメ、獄炎刀！」
その場で痛みに悶えるだけで敵の足は止まった。
今が好機と判断したあいかがペルソナを呼び出すと、くノ一型のペルソナであるモチヅキチヨメが炎を纏った刀で敵の首を切り裂き仕留めた。
首を切られたＦ．Ｏ．Ｅはまるで血が噴き出すように黒い靄を放出し、そのままぐらりと揺れて地面に倒れ込む。
傍で見ていた者たちは仕事人がいると驚愕したものだが、無事にＦ．Ｏ．Ｅの消滅を確認すると全員が少し疲れた様子で安堵の息を吐いた。
「ふぃー、なんとか倒せたな」
「ああ。完二、荒垣さん、足止めありがとう」
これまでも度々Ｆ．Ｏ．Ｅが現われる事があったが、別の部屋に逃げ込んだりピアノの音を聞かせる事で寝かしつけてやり過ごす事が出来ていた。
しかし、これまでの探索で足に疲労が来てしまったのか、今回は逃げる途中で天田が転倒し、すぐに他の者たちがフォローに入って敵を撃退することが出来た。
とはいえ、相手は強力なＦ．Ｏ．Ｅだ。総力戦とばかりに全員が戦い、弱ってきたところで真田やあいかが止めを刺して何とか倒せたに過ぎない。
疲労から深く息を吐く花村の肩に手を置きつつ、鳴上が足止めという難しい役割をこなしてくれた二人に声を掛ければ、揃って気にするなと手をヒラヒラと振ってこたえた。
がたいの良い二人が揃って同じリアクションを取った事で思わず笑うと、他の者も同じように感じたらしく吹き出して笑っている。
暗く先が見通せない視界の悪いダンジョンの中で、ガリガリと精神を削られていたメンバーたちも少し明るい雰囲気になれば、そのタイ

ミングで外にいるりせから通信が入った。
《皆、おつかれさま！　今のフロアはあともう少しみたい。次のフロアに一回下りてから帰ってきたらどうかな？》
「そうだな。思った以上に手こずって進めなかったけど、何とか一つのフロアは攻略出来た。今日は軽く次のフロアを見たら帰ろう」
まだまだ先が長いなら今の時点での帰還も考えたが、あと少しだと言うなら切りの良いところで切り上げた方がいい。
全員でその事を確認すると隊列を組み直し、さらに先ほどの戦闘で負った怪我をゆかりや雪子が中心になって癒やしてゆく。
二人のスキルでは疲労まで回復させることは出来ないが、それでもいくらかはマシになったので通常のシャドウと戦う分には問題ないだろう。
準備が出来たところで再び歩き出せば、先ほどのＦ．Ｏ．Ｅとの戦いを思い出していた完二が呆れ気味にＦ．Ｏ．Ｅの理不尽なパワーについて愚痴をこぼす。
「つーか、ペルソナ二体で押さえても止められないって、赤ん坊のくせになんスかあのパワー」
「まぁ、赤ん坊ってのはそういうものだろ。有里たちだってどこにそんな体力があるんだってくらい動き回ってたじゃないか」
子どもは元々大人でも驚くぐらいに底なしの体力を見せてくる事がある。
その反面、急にスイッチが切れたように眠ってしまうこともあるが、二つ目のダンジョンで見た八雲たちを思い出して鳴上は赤ん坊なら普通なんじゃないかと返す。
だが、不気味なＦ．Ｏ．Ｅと本物の赤ん坊を一緒くたに語った事で、後ろを歩いていた七歌が声をあげた。
「異議あり！　流石に可愛い八雲君とあのＦ．Ｏ．Ｅを同じ赤ん坊のカテゴリーに入れるのは許容できません！」
「そうですよ！　八雲君たちは柔らかくて温かくて可愛いんです！あんな不気味な敵と一緒にしないでください！」
七歌に続いて風花も一緒に語るなどあり得ないと真剣な表情で怒

りを見せる。
周りをみれば彼を可愛がっていた女性陣が同意するように頷いているので、今後の事を考えて鳴上も己の失言を謝罪するしかない。
こういった集団でのヒエラルキーでは女性の方が上に来るのだ。男性などペットのコロマルにも劣る存在としか見られない。
もしも、ここで女性陣よりも上の地位に行こうとするならば、湊のように集団にとって必要不可欠な何かしらの価値を示さなければならないのだ。
鳴上もダンジョンの探索中は分隊の隊長にはなっているが、先ほどのＦ．Ｏ．Ｅとの戦闘のように強敵との戦いでは乱戦になるので、今後さらに厳しくなるとすれば活躍の機会も減り地位向上は見込めないだろう。
その事に小さく悲しさを感じていれば、八雲の話題が出たからかゆかりが疲れた様子で切実な願いを口にした。
「はぁ……っていうか、こんなとこにずっといるから癒やしが欲しい」
「ユカチャン、ユカチャン。特別にクマのことモフッていいクマよ？」
「……はぁ、早く外に出たいなぁ」
クマが頬を染め照れた様子で話しかけても完璧なスルー。
単に相手をするほどの元気がないだけだが、クマも相手を元気づけようと思っていただけに小さく傷ついている。
落ち込んでいるクマの背中を順平と綾時が叩き、あまり気にするなと慰めていれば次のフロアへの階段を発見した。
これまでのパターンからすると次も同じように病院の内装だろう。
警戒しながら下りてみれば予想通りだったが、どうやら一つ下のフロアに強い反応があるらしい。
となれば、四つ目のフロアを抜ければいよいよ迷宮の番人とご対面という訳だ。
第四階層での探索に湊が参加するかは分からないが、とりあえずこの情報を彼に伝えなければと思いながら一同は校舎へと戻った。
――ヤソガミコウコウ
カエレールを使って校舎に戻れば、外で待っていたりせとチドリが

一同を迎えた。
ようやく明るい場所に戻ってくることが出来て、ゆかりや千枝や玲といったメンバーが抱き合って喜んでいる。
夜がない世界なので外はまだ明るいものの、時刻で言うと夕方頃になっているため、風呂に入ってから今日もまんぷく亭が開店するか湊に聞かねばならない。
校舎に残っていた二人に湊はどこかと尋ねれば、二人はずっとここにいたから知らないという。
軽く探知を掛けてみれば一階にマリーがいるようだが、とりあえず湊の気配は感じないらしい。
ダンジョンで消えたことで校舎に戻ったとばかり思っていたが、もしかすると他のダンジョンなどを再び調べているかもしれない。
とりあえず、戦闘の汚れなどを落としたいので風呂に向かいつつ、ベルベットルームの住人やマリーに湊を見ていないか尋ねることにして全員が移動する。
そうして、階段を下りて一階まで辿り着くと、階段の前にマリーが一人立って何かをしていた。
普段の彼女はとくに何もせず自由に過ごしているが、今日はまた何をしているのだろうかと鳴上が声を掛けた。
「マリー。ここで何をしてるんだ？」
「え？　ああ、戻ってきたんだ。おかえり。ちょっと待ってて。もうすぐ来るから」
声を掛けられた彼女は帰ってきたメンバーたちに「おかえり」と言いつつ、すぐに視線を外すと下駄箱の方へ向き直った。
何故だか彼女はストップウォッチを持っており、一体何が来るんだと他の者も待っていれば、甲高いエンジン音のようなものが耳に届く。
系統でいえば５０ｃｃの原付のような軽く高い音だ。しかし、こんな場所でそんなものを乗り回す馬鹿はいないはず。
というより、今現在ここにいない青年ならやりかねないが、彼ならばもっと大型のバイクを持っているのでそちらで走るのではと思っ

たのだ。
　そうしてマリー以外のメンバーが色々と不安に思いつつ待っていれば、どんどんと音が近付いてきて下駄箱の置かれた入口からそれが姿を現わした。
『!?』
　凄まじい勢いで校舎に入ってきたのは子ども一人が乗れるサイズの赤いオープンカー。
　他の者たちも子どもが乗る電動自動車の玩具の存在は知っていたが、自分たちの知る玩具はこんな速度が出るものではないぞと驚愕する。
　そして、校舎に入ってきた車は後輪を滑らせながら直角カーブを曲がると、そのままアクセルを踏み込んで階段前を通過してゆく。
　子どもとは思えないテクニックに度肝を抜かれていれば、タイムを計っていたマリーが満足げに頷いている。
　きっと中々の好タイムを叩き出したのだろうと思っていれば、階段前を通過していった車が〝P〟と書かれた場所に車を止め、その場でヘルメットを脱ぐとトテトテと走ってやってきた。
「うー!」
「うん。三秒縮まったよ。やるじゃん」
「まう!」
　やったとばかりに喜ぶ八雲の頭を撫でてマリーが褒める。
　どうして調べ物をしてくると言っていた彼が遊んでいるのか。
　そも、なんでまた縮んでしまっているのか。
　色々と聞きたい事はあるが、八雲がいるなら丁度良いとばかりゆかりが近付いていき、彼を抱き上げるとギュッと抱きしめた。
「あぁー、八雲君だぁ。ありがとう。いてくれてありがとう」
「う?」
「お姉ちゃん、すごく疲れてるの。だから慰めてー」
　急に抱き上げられて驚いた顔をしていたが、疲れてるんだとゆかりが言えば、八雲はそうなのかと頷きつつゆかりの胸に両手で触れている。

正面から抱きしめられてる形なので、他にどうしようもないのだが、八雲が小さい手でもにもにと触っていてもゆかりは一切怒っていない。
むしろ赤ん坊だからまだおっぱいが恋しいのかなと慈しみの目で見て、片方の手で彼の頭を撫でてやっている。
彼女がそれで元気になるなら気にしないが、どうして湊が縮んで八雲になって遊んでいたのか。その理由を知る必要があるので、八雲に癒やしを求めていった者以外でマリーに事情を聞いた。
「マリー、どうして有里がまた縮んでるんだ？」
「なんかこの世界を調べるって一回外に出たの。空間っていうの？それをバリバリって割って消えたんだけど、少ししてから血だらけで戻ってきてさ。前ほどじゃないけど少し疲れたから省エネモードに入るって言って、鏡の前で紫の目になったと思ったら縮んでた」
マリーの説明を聞いていた者たちは、湊が最初にこの世界に現われた時のことを思い出す。
それはメンバーたちが不思議な国のアナタで番人と戦っているときのことだった。
何もない空間をガラスのように割れ、そこから彼は血だらけの状態で出てきたかと思えば、そのままタナトスを召喚してトランプ兵の軍勢と番人を諸共吹き飛ばして消滅させた。
今回の調査とやらもその応用だったのだろう。無理矢理に空間に穴を開けて外に出てから戻ってきたらしい。
最初の時と同じように全身が血だらけになっていたことから推測するに、正規のルート以外で外の空間に出ると大怪我を負う事が分かった。
ならば、やはり他の者たちは全ての番人を倒して扉の鍵を外し、ベルベットルームにある扉から元の世界に帰るしかない。
情報を整理し終えた鳴上たちが納得したように頷き、ゆかりや千枝たちに代わる代わる抱っこされている八雲をみて、そういえば話を聞いた感じだと自由に縮めるのだなと改めてマリーに聞いてみた。
「マリー、有里って簡単に赤ん坊になれるのか？」

「知らない。けど、わざわざ鏡の前に立ってたし、なんか方法があるんじゃない？」
「紫の目になってたって言ったよね。じゃあ、多分だけど魔眼で自己暗示か催眠術をかけたんじゃないかな？」
湊からベアトリーチェに切り替わるときには、彼の消耗の他に感情の爆発をトリガーとする方法などがある。
七歌の予想が正しければ、その応用として自身に強力な暗示を掛けることが出来れば、きっとベアトリーチェを経ずに退行する事も可能だと思われた。
まぁ、あくまで消耗しているからこそ強制的に省エネモードに切り替えただけなので、普段の彼が同じ方法で退行できるかは不明であり、今回の八雲がどれほどで元の姿に戻るのかという疑問もある。
おそらく明日の朝までは縮んだままだと思われるが、七歌たちが再び八雲の方を見れば、千枝に抱っこされた八雲が雪子に話しかけられていた。
「ねぇ、八雲君。お姉ちゃんたちが美味しいご飯作ってあげようか？」
「おお、いいね！　いつも有里君ばっかりに作らせるのは申し訳ないし、一緒に食べられるお鍋でもしちゃう？」
「なら、私も一緒に作るよ！　赤ちゃんの時からアイドルの手料理が食べられるなんてこの幸せ者！」
「あーう」
幸せ者といいつっりせが八雲の頬を指で突いている。
何となくご飯を作って貰えると理解して八雲も喜んでいるようだが、近くにいたことで会話の内容が耳に届いた八十神高校側の男子メンバーは彼女たちの許へ駆け寄り、一切の遊びのない本気の表情で彼女たちを注意した。
「おい、お前らやめろ！　赤ん坊を殺す気か！」
「そうだぜ。流石に赤ん坊の命が掛かってるってなりゃ、オレらも全力で止めなきゃなんねぇ」
「里中、天城、りせ、全員少し落ち着け」
千枝たちの許に向かった花村、完二、鳴上というメンバーはいつに

なく真剣な顔つきで彼女たちを見る。
女子たちが料理を作るというだけで、どうしてそこまで彼らが怒るのかが七歌たちには理解出来ないが、赤ん坊である八雲が死ぬかもしれないという物騒な言葉まで聞こえてきた。
千枝に抱っこされている八雲は剣呑な雰囲気になり始めた両者をキョロキョロと見ているが、八雲を除く六人はそのまま強い口調で言い争いを始める。
「はぁ？　あたしらは普通に八雲君にご飯作ってあげるって言ってるだけなのに、急に話に入ってきて殺す気かって失礼にもほどがあるっしょ」
「里中先輩、相手はこんな小さい赤ん坊だぞ。林間学校のオレらみてーに気絶で済むわけがねぇ。なんかあったとき責任取れるんスか？」
「料理でそんな事になるわけないじゃん。八雲君だってアイドルの手料理食べたいって言ってるのに、完二も先輩たちも赤ん坊に嫉妬しないでよね」
「頼まれてもいるかよ！　こっちは散々お前らの料理で死にかけてんだ。実体験で分かってるからこそ止めてんだよ」
彼らが女子たちを止めるのは冗談でも嫉妬でもない。純粋に八雲の身を案じての行動だ。
彼女たち三人はそれぞれ異なる料理の欠陥を抱えている。
普通に不味い千枝。下手な上に魚介を混ぜたがる雪子。味覚障害なのかひたすら辛くするりせ。
この中で一番マシに思えるのは普通に不味い千枝なのだが、彼女たちが一緒に料理を作るとそれぞれの問題点が足し算ではなく掛け算される。
結果、一口で泡を吹いて倒れてしまうような劇物が誕生するため、消耗して省エネモードに入っている八雲にこれ以上のダメージを与える事は出来ないと男子たちは立ち上がったのだ。
しかし、現時点では手元にそんな劇物は何もないので、女子たちはただの妄想で失礼なことを言うなとさらに反論する。

過去の事件の被害者と加害者だけあって、双方共が譲らず言い争いはヒートアップしてゆく。
このままでは拙いと思って美鶴たちが止めようとすれば、千枝の胸に抱かれたまま両者の間に挟まれる形になっていた八雲が不安そうな顔で声をあげた。
「うう……やーの！」
声をあげると同時に八雲は千枝を手で突き飛ばし、その腕から逃れて落下を始める。
赤ん坊を落としてしまった千枝は慌ててキャッチしようとしたが、その手が届く前に無事に床に降り立った八雲は一目散に駆け出してマリーの許に逃げた。
先ほどまで一緒に遊んでくれていた事で懐いているのだろう。マリーに抱き上げられると八雲はひしっと強く抱きついている。
どうやら花村たちの言い争いが嫌だったらしい。
泣いてこそいないが、信頼できる相手に強くしがみついて離れようとしない。
そんな様子を見たマリーは八雲の背中をトントンと叩いてあやしつつ、感情的になって赤ん坊の前で言い争いをしていた者たちを睨む。
「あのさ。別に喧嘩なら好きにすればいいと思うけど、赤ん坊の店長がいる前でしないでくんない？」
「あ、その……悪い」
最初は確かに八雲の事を考えて女子たちを止めようとしていたが、売り言葉に買い言葉をしているうちに以前の怒りが蘇って感情的になってしまっていた。
おかげで八雲は怯えてしまったのかマリーの強く抱きついて顔を隠してしまっている。
これではいくら千枝たちの料理を阻止できても意味ないと反省し、言い争いをしていたメンバーたちは全員が沈んだ表情で八雲に謝罪した。
こうなる前に止めようとした美鶴は一歩遅かった事を僅かに後悔

しながらも、ようやく話が出来る状態になったことで花村たちに一つ折衷案を出す。
「はぁ、お互いに悪気があって言った訳ではないのだろう。なら、実際に料理を作ってから八雲に食べさせられるか考えてみればいい。心配なら花村たちも作れば食べさせられる料理が出来る可能性はある。幸いなことにまんぷく亭の厨房を使えば同時に複数の鍋が調理可能のようだしな」
今回のお題は鍋だということで、それならば厨房だけでなく各テーブルを鍋も出来る物に変更してしまえばテーブルだけで料理は出来る。
食材の調達だけは八雲の機嫌が戻るか、メティスかマリーかあいかに倉庫を開けて貰わなければならないが、そちらもそれほど問題とはならないだろう。
よって、今回はチーム対抗での料理対決をするように美鶴が言えば、そういう事なら自分も参加したいと料理好きのラビリスが参加を表明した。
「あ、ならウチも何か作るわ。こっちきてからほとんど料理してへんし」
「姉さん、わたしも手伝ってよろしいでしょうか？　小さい八雲さんにも手料理を食べてもらいたくて」
「うん。ええよ。ほんなら、メティスはどうする？」
「お手伝いします。料理は兄さんに習って一通り出来るので」
アイギスはまだまだ食材を切るのも練習中という段階だが、他の二人は同じ人物から料理を習って既に習得済みであり安心できる。
料理を作る事に関して妥協を許さない湊から認められているという事は、一般的なレベルよりも上の実力を持っている事に他ならない。
自分たち以外にもまともな料理が出来るチームが参加する事に鳴上たちが感動を覚えていれば、汐見三姉妹には負けてられないと七歌たちも声をあげた。
「ゆかり、私たちも負けてられないよ！」

「分かってる。赤ちゃんにとってご飯は重要だもん。ここで他に差を付けさせて貰うから！」
ちなみに七歌はかなりの料理上手でゆかりも一般的なレベルで料理が出来る。
月光館学園側にはそんなにも料理が出来る女子がいるのかと花村の目頭が熱くなれば、女性陣ばかりに仕事はさせられないねと笑顔を浮かべた綾時が一歩進み出た。
「なら、僕も少しやってみようかな。ご馳走になるばっかりじゃ申し訳ないし」
「お、綾時も有里みたいに料理出来んのか？」
「流石に湊には及ばないけど人並み程度にはね」
「……なら、俺も手伝ってやるよ。材料切る程度だけどな」
順平に腕前を聞かれ自慢できるほどではないと苦笑する綾時に、チーム戦なら助手が必要だろうと荒垣が協力を申し出た。
彼は特別課外活動部を離脱していたとき、湊の紹介で紅花の実家である中華料理店などでバイトをしていた事もある。
それらは生活費を稼ぐためでもあったが、半分はプロに学んで様々な技術を吸収したかったからだ。
プロの許で学べば誰でも簡単に料理が上手くなる訳ではない。それでも殻を破るには必要な事だと考えて行動した結果、荒垣は和食や中華の技法を他のジャンルの料理に応用できるようになった。
鍋は一見好きに具材を入れて煮込むだけの簡単に出来る料理だが、具材の入れる順番や下処理の出来で大きく味が変わる繊細な料理でもある。
赤ん坊なら大人よりも味覚が鋭いため繊細な味もきっと分かるに違いない。
そう考えて密かにやる気を見せた荒垣の協力を綾時も快く歓迎し、総勢五チームによる鍋対決の開催が決まった。
鍋は各チーム二つ。味は同じでも別でも構わないが、先に入浴を済ませてから料理に移ることに決まると、それぞれのチームが入浴中に相談し合っていた。

あるチームは審査員が八雲だという事を忘れていたのか、個性がぶつかり合った結果、片方の鍋が激辛唐辛子鍋になっていたりもしたが、ほとんどのチームは大きな問題なく鍋を完成させる事が出来た。

ただし、とある問題のチームだけは汁を飲んだ時点で八雲が不味いと激怒し、あまりの怒りようにチームメンバーは赤ん坊に平謝りするという事態になった。

そんなに不味いかなと玲が食べ進めると、時間差でダメージが来たのか白目を剥いて倒れた事もあり、料理対決前の言い争いについて正しかったのは男子の方だったのかと月光館学園側のメンバーたちも全員が納得した。

そうして、開かれた夕食の鍋対決の結果は、短時間で仕上げたとは思えないほど味の染み込んだ湊直伝のおでんを作ったラビリスたちのチームが見事勝利を収めたのだった。

第二百九十話　小さくても一人前

――放課後悪霊クラブ・四ノ怪

急遽決まった鍋対決をした翌日。縮んでいた湊も無事に成長しているかと思われたが、残念なことに彼は縮んだまますやすやと眠っていた。

このまま寝かせておいてあげたいという気持ちもあるが、彼が回復してくれないとどうしても戦力的に厳しいものがある。

そのため、アイギスが彼の事を起こしてから洗面所で顔を洗ってやり、着替えに食事といった面倒をみてやれば、彼も途中でしっかりと目を覚ましたようで元気な姿を見せていた。

今から行くのがお化け屋敷だと説明しても気にしておらず、そも、話が通じているのかも分からないが、抜け道を通ってショートカットしながら四ノ怪まで下りてくると彼は廃病院を珍しそうに見ている。

「うー！」

「こらこら、勝手に行ったりせんの！」

ごーこんきっさよりも建物らしい内装であるからか、八雲は探検だとばかりに走り出そうとする。

こんな暗い場所で小さい彼を見失うと大変だ。湊の場合は死んでも蘇生がかかるが、八雲に退行している時にも同じように効果が発揮されるか分からない。

故に、絶対に見失ってはダメだと彼がスピードに乗る前にラビリスが後ろから抱き上げた。

抱き上げられた八雲は嫌がってもがいているが、それを傍から見ている花村は子ども故に怖れ知らずなのだろうかと考えた。

「お子様はマジで怖い物知らずだな。シャドウやＦ．Ｏ．Ｅがいるって知ってりゃ大人でも足が重くなるってのに」

「退行してはいても湊にとっては脅威ではないのかもしれない。怖れを抱く必要がないか、知らない物を怖れる必要はないと思っているのかもしれないが」

「随分と達観した戦士のような視点を持ってるんだな」

花村の言葉に善が自分の予想を話せば、鳴上はそれが事実であれば恐ろしく戦士としての才能に恵まれているだろうと考える。
本来、人に限らず野生の動物たちであっても未知の存在は怖れる。
相手の能力が分からないのだから、下手に手を出して返り討ち遭うのは避けたいのだ。
だからこそ、動物たちは広い範囲で警戒するし、縄張りの主であっても隠れて様子を窺うことがある。
けれど、それらの行動は警戒するあまり自分の動きを鈍らせるデメリットもあった。
下手に手を出せない、相手の動きを見て判断する、そういった考えが重圧となってしらず萎縮する。
実力で圧倒的に勝っているのならそれでも問題にならないが、拮抗しているなら普段のパフォーマンスを発揮できない分だけ不利だ。
八雲にその心配がないとすれば、彼は戦士に必要な才能を生まれつき持っていたのだろう。
成長した湊を見れば無駄に警戒している事があり、むしろ戦士に向かない性格をしているのだが、それを知らない鳴上たちはラビリスに注意を受けている八雲を見てそんな風に考えていた。
「ここは危ないから勝手に行ったらアカンの。分かった？」
「まう」
「うん。じゃあ、約束やで」
しっかりと注意を聞いて頷いた八雲の頭を撫でると、ラビリスは優しく彼を地面に降ろしてやる。
別に彼女だって彼の冒険心を悪いとは思っていないのだ。ただ、ここでは危ないので、もう少し場所を考えて行動するように言っただけで。
「ぴゃー！」
「こら、なんも分かってへんやないの！」
しかし、ラビリスのそういった思いは赤ん坊には理解されなかったようで、八雲は地面に降りるとすぐに笑いながら走り始めようとした。

スピードに乗った彼は確かに脅威だが、走り始めならば元対シャドウ兵器の姉妹たちなら簡単に捕獲できる。
再びラビリスが軽く走って彼を後ろから抱き上げると、逃げようとして捕まった事で笑っている八雲を再び叱る。
「いま言うたばっかやろ！　危ないから一人で行かんでって。約束したやろ」
「いー！」
「コロマルさんは別や。コロマルさんは心配して追いかけてるだけ」
どうやら八雲の言い分ではコロマルと二人で探検に行こうとしたらしい。
実際は勝手にどこかへ行ってしまう八雲からコロマルが目を離さないようにしているだけなのだが、赤ん坊にその辺りの違いを理解させるのは難しいようだ。
「はぁ……。アイギス、湊君のマフラーからなんか帯みたいなん取り出してくれる？」
「おんぶか抱っこしておくのですか？」
姉から帯をくれと言われたアイギスは、手頃な長さと太さの帯を中がマフラーと繋がるリストバンドから取り出して渡す。
ただ、どこかへ行こうとする八雲をずっと背負ったり抱っこしておくとなると、赤ん坊の八雲が強いストレスを感じてしまうのではと懸念した。
すると、ラビリスは妹の言葉に首を横に振り、八雲が逃げないよう捕まえながら帯をたすき掛けに巻いてゆく。
「ううん。たすき掛けして、そこにコロマルさん用のリード付けよかなって」
たすき掛けが終わると続けてアイギスからコロマル用のリードを出して貰う。
リードは片方が首輪に掛けられるようフックになっているので、たすき掛けした帯の背中側でクロスしている部分にそれを掛けた。
元の世界でこれをやれば幼児虐待と言われるかもしれないが、たすき掛けをして貰った八雲はキリッとした表情で満足げなので、リード

に関してもコロマルとお揃いと言えば気にしないだろう。
あんまりと言えばあんまりな処置だが、本人が勝手に冒険に出ようとするのでグループ全体の安全を考えると仕方がない。
八雲にリードを付け終えたラビリスは、リードの範囲内だけ自由に動いて良いことを八雲に伝えた。
「もう勝手せんようにコロマルさんと同じの付けたからな。この紐が伸びる範囲で冒険するんやで」
「ま！」
もうこれで一安心。他の者も戦力になると分かっていても八雲が勝手に行動する事にはヒヤヒヤしていた。
いざとなれば美紀の想いが込められたフェニックスが彼を助けると言っても、それが確実に発動するかなど誰にも分からない。
ならば、自分たちで出来る範囲では彼の安全を確保する必要があるので、ラビリスがリードを付けても誰も口に出して反対はしなかった。
そうして、八雲がリードの伸びる範囲でチョロチョロしつつ先を目指していると、おもむろに七歌がこの迷宮について話し始めた。
「けど、なんでここって急に内装変わったんだろうね。一個目のダンジョンも二個目のダンジョンも空気は確かに変わってたけど、基本的なコンセプトは変わってなかったじゃん？」
「言われてみればそうだな。学校から病院か。馴染みがあると言えばあるが、何故変化したかは不明だな」
単純にお化け屋敷にあるエリアが変わったという演出なのか、それとも敵側の何か意図があるのか。
七歌の言葉に美鶴も顎に手を当て考えるが、あまりに判断材料が不足していて予想すら立てられない。
他の者たちも少し気になるようだが、扉を潜って新たな部屋に入ると何かを見つけたように八雲が走り始めた。
「う！」
「はいはい、分かったから」
八雲が先行して走り出すも、彼にはリードが繋がっているので一定

以上は離れる事が出来ない。
それでも八雲は前に進もうとするので、引っ張られる形でラビリスがついていけば、掲示板とそこに貼られたノートの切れ端があった。
切れ端には〝几〟〝メ〟〝木〟と書かれており、そこ以外は破けてしまっているので全体像は分からない。
「暗号みたいですね。でも、これだけだと何とも……」
「ええ。天田君の言う通りこのフロアの仕掛けに関連した暗号の可能性があります。ですが、この切れ端はノートの上部分だけなので、下部分もどこかにあるかもしれません」
一つの暗号だけで答えが分かれば簡単だが、ダンジョンのギミックは面倒なものが多い。
きっとここの他にも暗号があると思われるので、直斗はメモを残して他の暗号を探そうと他の者に移動を促した。
メンバーたちもその意見に賛成なので動き始めるが、八雲がジッとノートの切れ端を見ていたので、アイギスは何か気になるのだろうかと声を掛けた。
「八雲さん、どうしました？」
「うー」
「これは……暗号のヒントですか？」
声を掛けられた八雲は近くに落ちていた石を拾うと、それを使って床に文字を書き始める。
赤ん坊なのに書けるのだろうかと疑問に思ったが、八雲が手を止めるとそこには〝殺〟という、先ほどの暗号がパーツとして入っている文字が書かれていた。
確かに言われてみると〝又〟というパーツがあれば完成する状態だ。
赤ん坊なのに柔軟な発想と予想外の知識があるなと感心していれば、他の者たちも戻ってきて、お化け屋敷ならこういった暗号もありそうだと納得している。
「師匠は赤ちゃんになっても漢字が書けるクマね。すごいクマ」
「うん。完二君よりもお利口さんだね」

「いや、天城先輩。さすがのオレでも殺くらい書けるッスよ？」
「そっか、特攻服には必須だもんね」
完二は以前町の噂で暴走族のように語られていたが、実際にはそういった者たちを近所迷惑だからと壊滅させていた。
しかし、見た目や行動がどうにも不良側なせいで、雪子が口にした〝特攻服〟について誰も否定出来ずにいた。
彼が身に纏えば実に様になるだろう。むしろ、着ている方が自然に思える。
そんな感想を抱いた者たちは表情に出さないよう注意し、八雲に行くよと声を掛けて先を目指す。
完二は他の者たちのそんな様子に釈然としないようだが、一人だけここに残る訳にはいかないため、一つ溜息を吐いて気持ちを切り替えると皆の後を追った。
＊＊＊
掲示板で暗号らしきものを発見した一行が進んでいると、とある部屋に差し掛かったところでコロマルが低い唸り声を上げた。
どうやら彼は何かを警戒しているようで、釣られるように他の者たちも武器を手にする。
――――ウフフッ
すると、少し離れた場所から少女の笑い声のようなものが聞こえてきた。
この声に聞き覚えのあったメンバーたちは、湊の手によって可哀想な最期を遂げたあのＦ．Ｏ．Ｅかと思い出す。
「これ、あの扉を押さえてくるＦ．Ｏ．Ｅの声ですよね？」
「ああ。きっと近くにいるのだろう。今の八雲に有里と同じ事は出来ない。進むときには十分に注意するぞ」
ゆかりが相手の正体を口にすれば、そうだろうなと美鶴も頷いて返す。
自分たちを後ろから追いかけてきて、元来た道に引き返せないよう扉を押さえてくるだけの相手だ。
厄介だと言えば厄介だが、直接戦闘に突入しない点だけは他のＦ．

Ｏ．Ｅよりマシかもしれない。
　しかし、すぐ近くにＦ．Ｏ．Ｅがいるとなると危険だ。ここからは八雲を抱き上げて連れて行くべきだろうと、彼に付けていたリードと帯を外してアイギスが抱き上げた。
「八雲さん、すぐ近くに敵がいるのでしばらく抱っこさせてもらいますね」
「あい！」
「フフッ、ありがとうございます。では、危なくなったときはお願いしますね」
　敵がいることを教えれば、八雲はお腹のポケットから白銀に輝くピコピコハンマーを取り出して掲げた。
　アイギスの反応を見る限り、どうやら八雲自身が倒してみせると言ったようだ。
　彼ならば赤ん坊状態でやりかねないから油断できないが、メンバーの中で唯一人、メティスだけは八雲が手にしている玩具のハンマーを見て驚きの表情を浮かべた。
「えっ、兄さん、この時期に既にそれを持っていたんですか？」
「妹ちゃんってば、この玩具のハンマー知ってんの？」
「不用意に近付かないでください！」
　メティスが八雲の玩具について知っているようなので、順平が近付いてジッと観察しようとするとメティスが大きな声で怒鳴った。
　普段の彼女からは考えられない行動だけに、ビクリと肩を揺らすと順平も八雲から離れる。
　ハンマーを持っていた八雲は近付いて来た順平を叩けず残念そうにしているが、メティスは八雲の子ども故の危うさに気付いて良かったと安堵の息を吐いてから話し始める。
「すみません。でも、その武器はとても危険な代物なんです」
「っても、普通にただのピコピコハンマーだろ？」
「いえ、それは一見ただの玩具のハンマーですが、浄化系の最上級スキルと同等の力を確率で発揮するんです。対シャドウ兵装の研究中に実験的に作られたそうですが、シャドウやペルソナ使いが喰らったと

きに効果を発揮すれば……一撃で死にます」
『っ!?』
一切の遊びのない低い声でメティスが語ったせいで、軽い気持ちで近付いていた順平が死ぬ寸前だったかもしれないと知って腰を抜かす。
八雲を抱っこしているアイギスも緊張した様子で彼の手にあるハンマーを見つめ、それから再び妹に視線を向けて尋ねた。
「本当にこのような玩具でシャドウを倒せるのですか?」
「打撃力では玩具でしかありません。ただ、大僧正というペルソナの固有スキルに回転説法というのがあるんです。そっちは広範囲スキルですが、そのハンマー……破魔に掛けて破ン魔ーと呼ばれていますが、叩いた相手に同等の威力で効果を発揮します」
大僧正の回転説法は他の浄化系スキルとは一線を画す力を持つ。
単純な威力では他の属性スキルと勝負にならないものの、ハマやムドは浄化や呪詛によって敵を一撃で戦闘不能に追い込むのだ。
運が良ければ気絶で済み、悪ければ即死もあり得るのでどうしても危険が伴う。
集団で行動しているときにそんなリスクなど背負いたくはないので、アイギスがやんわりと武器変更をしましょうと持ちかけた。
「八雲さん、今日は以前見せてくださった武器にしましょう。そちらの方が良くお似合いでしたから」
「うー」
似合っていると言われれば、八雲は素直に破ン魔ーを片付けて如意棒を取り出した。
湊がどういった経緯で玩具の見た目で危険な効果を持った武器を製作したのかは分からないが、直近の危険が去ったことで他のメンバーは疲れた顔をしつつも探索を再開する。
片方の入口はF・O・Eに押さえられているので、自然ともう一つの扉から次の部屋へ行くしかない。
全員が集まっていることを確認し、次の部屋へ移動すれば、扉が閉まったタイミングで扉を一枚隔てた向こう側に嫌な気配を感じた。

強い敵から逃げている状況なので、その事に僅かな不満を感じている真田が小さく溢す。
「やはり追って来たか。ただの嫌がらせにしてもご苦労な事だ」
「ご丁寧についてくるだけで良いじゃねぇか。それより奥にスイッチがあるのが見えた。敵避けに電気付けるぞ」
スイッチがあるならばこの部屋にも明かりを点けられる。
部屋全体を照らすようなものではないが、それでも少しだけ周りが見やすくなるのだから効果はあるだろう。
怯えている千枝やゆかりも一緒になって周囲を警戒しながらスイッチまで進む。
周囲のシャドウは他の者が抑え、最初に辿り着いた善がスイッチを入れた。
すると、部屋の中に数ヶ所明かりで照らされた場所が出来る。それを見て玲が少しだけ安心していると、キィ、という音がして自分たちが入ってきた扉が開く音がした。
《ええっ!? 皆、F．O．Eが部屋に入ってきてるよ！ 急いで逃げて！》
「なんだとっ」
りせからの通信を聞いて鳴上が扉の方へ振り向く。
これまで扉を押さえていたF．O．Eは後を追ってきても、こちらに入ってきた事は一度もなかった。
フロアが変わると敵の強さも変わってくるが、F．O．Eの行動パターンにまで影響があるとは思わなかったため、強敵に狙われている事を把握したメンバーたちに緊張が走る。
どうやって追いかけてくるF．O．Eから逃げるか。これまでは別の部屋に逃げれば巻くことが出来ていたが、今回の敵は扉を開けてわざわざ追いかけてくる。
下手をすると他のシャドウとの戦闘に乱入されたり、もしくは上のフロアにいた赤ん坊型のF．O．Eまで現われるかもしれない。
可能性を考えていくと切りがないとはいえ、袋小路に追い詰められて戦闘というパターンだけは避けたい。

そのために、頭脳担当の者たちが待避ルートを考えていると、アイギスに抱っこされていた八雲が何やらゴソゴソしており、アイギスが声を掛けようとする前に八雲はそれを完成させていた。
「ま―!」
彼の手にあるのは如意棒によって持ち手を大幅延長された破ン魔ー。
如意棒は自由に長さと形状が変更できるので、破ン魔―の持ち手を丸ごと覆う形に変化させ、後は如意棒を伸ばせば遠距離攻撃も可能という訳らしい。
やる気に満ちあふれた八雲は、まるで釣りでルアーを飛ばすように破ン魔―を振りかぶる。
入口の方からは紫の着物を着た市松人形のような敵が接近してきているので、八雲も相手に照準を合わせたらしく、敵の頭上から破ン魔―で強襲した。
相手の頭上から勢いよく落ちてきたハンマーは、ピコン、と小さな音を立てて攻撃を当てる。
だが次の瞬間、市松人形の下からＦ．Ｏ．Ｅの本体らしきものが飛び出て、そのまま苦しそうに悶えると弾けるようにして消滅した。
「う―!　う―!」
見事に敵を屠った八雲は如意棒を元に戻し、破ン魔―を仕舞ってから突き出した拳を頭上に掲げた。
相手は全員で掛かっても苦戦するような相手だったのだ。この後、一つ下のフロアへ下りればダンジョンの番人との戦いも待っている。
だからこそ、そういった戦闘を避けることが出来たメンバーたちは安堵し、今日のＭＶＰは確実に八雲だなと無駄に入っていた肩の力を抜いた。

第二百九十一話　破魔と呪詛を操る者

――放課後悪霊クラブ・四ノ怪

今まで扉を押さえてくるだけだったＦ．Ｏ．Ｅが追って来た時には驚いたが、八雲が破ン魔――と如意棒を連結させて遠距離から敵を浄化したことで、一同は落ち着きを取り戻して探索を続けていた。

このフロアにいる扉を押さえるＦ．Ｏ．Ｅは部屋を越えて追ってくるタイプらしく、全員が警戒しながら進んでいるが個体数は少ない。

故に、必要以上に気を張ることなく進んでいれば、再び鍵穴の存在しない鍵の掛かった扉を発見した。

これもどうやら何かしらの方法で鍵を解除出来ると思われるが、ここまで見つけたのは暗号一つのみ。

まだ情報が足りないので探索を続けるしかなく、別の部屋へ移動すると部屋の隅にレントゲンの貼られたホワイトボードを見つけた。

レントゲン写真が本物かどうかはともかく、こういった暗い廃病院で人の骨を写した写真を見ると不気味に感じる。

発見した花村はややうんざりした様子で愚痴をこぼした。

「はぁ、演出かしらねーけど、紛らわしいからこんな不気味なもん置いておくなっての」

「ホントだよまったく！　ここ作ったやつに会ったら顔に足形付けてるんだから！」

この迷宮に入ってから千枝は散々怖がらされている。

一部は湊のせいでもあったが、そもそもこんな迷宮でなければその悪戯も起こり得なかった。

故に、千枝は絶対にこの迷宮の番人か制作者本人に出会ったら顔に蹴りで足形を付けてやろうと心に決める。

しかし、彼女のそんな発言を聞いたクマは、千枝が骨の写ったレントゲンに怖がっていると解釈して自分ならそんな心配はないよと笑顔を見せた。

「ムフフー。チエチャン、クマはレントゲン撮ってもなーんも写らな

いから怖くないクマよ。安心して胸をお貸しするクマ！」
「……いや、それは逆に不気味だろ」
荒垣の冷静なツッコミが入る。中身は金髪碧眼の少年で、どうみても人間にしか見えない見た目だというのに、レントゲンを撮っても彼は骨のあるべき場所が空洞になっているのだ。
湊が言っていたので彼がシャドウである事は全員が把握している。
もしかするとシャドウの身体はＸ線を透過させてしまう性質を持っているのではと考えられた。
クマの身体を触れば骨らしき物の感触はあるのだ。ならば、それがレントゲンに写らない理由は身体も骨もＸ線を遮っていないという事になる。
随分と不思議な話でやや不気味にも感じるが、クマ本人がレントゲンの原理等を詳しく知らないからか気にしていないのはある意味幸運だった。
ただ、そんな事を他の者たちが話していた事で、八雲は不思議そうにレントゲンとクマを交互に見てからシャツをまくり上げて自分のお腹を出してしまう。
「うーう？」
「いけません、八雲さん。お腹を出したら風邪を引いてしまいます」
「フフッ、八雲君は健康だから大丈夫だよ」
八雲がお腹を出すとすぐにアイギスがまくり上げられた服を整え、こんな場所でお腹を出してはいけないと注意して抱き上げる。
傍で見ていた雪子が続けて「変じゃないよ」と答え、赤ん坊が何を尋ねていたか他の者もおおよそ理解して思わず笑った。
「フフッ、こうも暗い場所だと敵の警戒もあって神経をすり減らしますが、八雲君がいい癒やし要素になってくれますね。有里先輩の強さは頼りになりますが、精神の消耗を軽減してくれる八雲君の方が正直ありがたいです」
「白鐘は有里と共に暗号解読の主戦力だからな。君の消耗が軽減出来るのであれば、八雲を抱いて出来る限り休んでいてくれても構わないぞ」

この迷宮でもＦ．Ｏ．Ｅを一切怖れない八雲は貴重な戦力だ。
彼は色々と不思議な武器も持っているので、特殊な効果で敵を一撃で倒すことも出来る。
ただ、それでもやはり基本的には戦闘から離れさせようという方針があるので、八雲に癒やしを感じているという直斗に、美鶴が一緒にいて少しでも平静を保っていて欲しいと告げる。
「八雲さん、直斗さんがお疲れのようなので元気づけてあげてください」
「あい！」
「あ、いえ、そこまでお気遣いいただかなくてもっ」
美鶴の言葉に従ってアイギスは八雲を直斗に手渡す。
赤ん坊を抱き上げた経験の少ない直斗は最初は戸惑った様子だったが、抱っこされた八雲が直斗を見て無邪気に笑っていたことで彼女も自然と慈愛の籠もった笑みを浮かべた。
まぁ、少しすると八雲が不思議そうに直斗の胸を凝視し、僅かに驚いた顔をして「ないない！」とお風呂で見たときはあった胸がなくなっていることを他の者に聞いていたりもしたが、アイギスたちの通訳でその理由もちゃんと伝えられる事だろう。
そんな女子たちと赤ん坊のやり取りを見ていた花村は、八雲と湊が同一人物である点を挙げて完二にからかうように尋ねた。
「完二、いいのか？　直斗が有里にご執心だぞ？」
「先輩、赤ん坊は可愛がられてなんぼッスよ。女が赤ん坊の世話してるなら、オレたち男はそれを守んのが仕事だろ」
「ワンワン！」
「コロマルさんが〝その通りだ。自分たちが若をお守りするんだ〟と仰ってます」
完二の言葉に同意するようにコロマルが尻尾を振って鳴く。
これまでコロマルがあまり近付いてくれなかった完二は感動して頭を撫でるも、アイギスがついでのように通訳してやれば、千枝がコロマルの男気溢れる言葉遣いに驚いた表情をした。
「え、コロちゃんっていつも有里君のこと〝若〟って呼んでたの？」

「兄さんとチドリさんは極道の家の養子ですからね。コロマルさん自身も人間でいえば四十代くらいですから、色んな条件が重なって普段から割と任侠っぽい口調ですよ」
「うそぉ……なんかイメージと違う」
可愛い見た目とのギャップがすごい。忠犬属性を考えて紳士的なイメージを持っていたのだが、兄弟契りを交わすような血生臭い世界感だったのかと千枝は肩を落とした。
同じようにコロマルを可愛がっている完二や玲は気にしていないようだが、千枝も何だかんだと乙女な部分があるのでその影響でショックを受けたようだ。
そうして、一同が行き止まりで話していると、敵の反応が近くにないことで少し休憩を取ることになった。
あまり長くは休んでいられないが、飲み物や携帯食料で補給をしていると、直斗に抱っこされた八雲と話していた玲の許に雪子が来て紙の包みを取り出した。
「あ、そうだ。八雲君、玲ちゃん、クッキー食べる？　ダンジョンの中で補給がてら食べようと思って作ってきたの」
「むきゃう！」
「八雲さんは〝この野郎、ぶっとばすぞ〟と仰られています。昨夜の鍋対決の事で雪子さんの作った品を警戒しているようです」
愛らしい笑顔が一瞬にして怒りの表情に変わり、八雲は最大限の警戒でもってお腹のポケットから如意棒まで取り出した。
彼は一応、雪子たちのチームが作った鍋を一口ずつは食べていたが、あまりの不味さに赤ん坊とは思えないほど怒り、クッキーを作ってきたと聞いて昨日の今日でよくそんな真似が出来るなと激怒している訳だ。
昨日も平謝りとアイギスたちが宥めてくれた事でようやく赦して貰えた雪子は、八雲の怒りももっともだと申し訳なさそうな表情になるも、今回のクッキーは少し事情が違うことを説明する。
「あ、その、昨日はゴメンね？　今日のはそのお詫びっていうか、お詫びのために作るつもりだったんだけど、私のは失敗しちゃったから荒

垣さんの作ったやつを渡すつもりだったの……」
「わぁ、コロちゃんのクッキーだ！　ゆきねぇちゃん、真ちゃん、ありがとう！　はーちゃんも一緒に食べよ？」
「ぴゃー！」
雪子が包みを広げると中からコロマルの顔の形をしたクッキーが現われる。
荒垣が作っただけあって形は統一され、描かれた顔もちゃんとコロマルだと判別することが出来た。
これならば是非食べたいと二人は手を伸ばし、サクッ、と音を立てて食べた途端に二人の顔が満面の笑みに変わる。
「まーも！」
「ね！　このクッキーすごくおいしいよ！」
荒垣の作ったクッキーにご満悦の二人は、まるでリスのようにサクサクと食べたクッキーで頬を膨らませる。
誰も取らないのでゆっくり食べて良いと他の者も笑い、二人は荒垣特製クッキーを満喫した。
だが、そこで止めておけば良かったのだが、荒垣のクッキーがほとんど食べ終わると、そういえばと玲が雪子に話しかける。
「ゆきねぇちゃん、わたしその失敗したっていうゆきねぇちゃんのも食べてみたいな！」
「え、そう？　その、一応は持ってきてるけど、見た目もすごく不細工になってて……一応、クマさんの形にしたんだけど」
荒垣がコロマルだったのに対し、雪子はクマの形のクッキーにしたという。
失敗したからか彼女が控えめに取り出した包みには、なんとも言えない形状の焦げたクッキーらしきものが乗っていた。
ただ焦げただけならばまだ食べられるだろうが、どういう訳か雪子のクッキーは緑や紫色になっている部分がある。
別に食紅やトッピングで色を付けた訳でもないらしく、これに関しては作り方の指導をした荒垣も一つの才能だと匙を投げていた。
けれど、ほとんどの者には見た目の時点で不評だったが、八雲は

クッキーをジッと見つめてからクマを指さした。
「あーう」
「〝見た目は割と似てる〟だそうです」
「ちょっ、師匠から見たクマってこんな生き物クマか!?」
「うーな」
クマをブタと言ってのけるセンスの持ち主にすれば、完二が〝豚の泥団子〟と称した物体もクマのクッキーと判定されるらしい。
まぁ、だからといって進んで食べたりはしないようだが、玲は気にしないのか他の者が止めるもクッキーを手に取り口に運んでしまった。
「んー、新食感でおいしいよ!」
「ホントに? そっか、良かったぁ。ポケットに入れてて温まったのが良かったのかな? カレーも一晩寝かせた方がおいしくなるって言うもんね」
玲に美味しいと言って貰えた雪子はホッとした顔になり、良かったら皆もどうぞと勧めている。
だが、雪子のクッキーは荒垣のものと違って、部分的にドロドロに溶けており、さらには甘酸っぱい臭いまでして口に運ぶ前に手が止まる品だ。
玲に勧められて善も食べているが、彼の噛む音は〝ガリゴリッ〟であったり〝ジャリジョリ〟であったり、どうして溶けているクッキー的なものからそんな音がするのか不思議でならない。
さらに一切悪意のない笑顔で雪子が男子たちにクッキーを勧めるので、ここで断れば男が廃るかと決死の覚悟を決めた順平や綾時が手を伸ばし始めたところで、
「たい!」
身体を乗り出すように八雲が手を伸ばしてクッキーを手に取る。
物体Xとしか呼べないものを赤ん坊が食べて良いはずがないので、七歌が「そんなの食べちゃダメ!」と取り上げようとするも、クッキーを手にした八雲は暴れて直斗の腕から脱出し、クッキーを持ったまま走り出してしまう。

そんなものを持って一体どこへ行こうというのか。コロマルを先頭にメンバーたちが追いかけ始めると、八雲は入ってきた入口の扉へ向かっているようだ。
この部屋に敵の姿はないが、他の部屋にはシャドウやＦ．Ｏ．Ｅがいる。
速度に乗った八雲を止めるのは大人でも難しいが、何とか彼が出て行く前に止めなければと思っていると八雲の向かう正面の扉が開き何かが入ってきた。
《八雲、戻りなさい！　Ｆ．Ｏ．Ｅに近付いてはダメ！》
入ってきた敵が部屋を越えて追跡してくるＦ．Ｏ．Ｅだったことで、チドリが通信で八雲に戻るよう説得する。
けれど、何かの目的を持って勝手に走り出した赤ん坊がそんな声を聞く訳もなく、八雲は走り続けてＦ．Ｏ．Ｅとの距離が縮まってゆく。
このままでは拙いとアイギスがＥ．Ｘ．Ｏ．で加速しようとする。だが、その前に立ち止まった八雲が、走っていたスピードを利用するようにクッキーを投げた事で全員が僅かに動きを止める。
ブォン、と音が聞こえてくるような速度で腕を振るい投げられたクッキーは、ほとんど真っ直ぐな軌道で迫るＦ．Ｏ．Ｅへ向かってゆく。
他の者にすれば、そんなものをぶつけるくらいならば、破ン魔ーを取り出して戦えば良いのにと考えてしまう。
しかし、敵がクッキーを無視して八雲に近付いてゆくと、そのクッキーが敵の人形部分にぶつかった瞬間に悶えるようにして靄になって消滅してしまっていた。
『え？』
Ｆ．Ｏ．Ｅとの直接対決を覚悟していた者たちにすれば、どうしてクッキーが当たったくらいで消えたのかという疑問が湧く。
弱っていた状態でやってきてクッキーがダメ押しになったのかとも考えるが、それなら扉を開くときの負荷で死ぬような気がする。
とりあえず戻ってきた八雲をアイギスは保護するが、全員が状況に

ついて混乱していると後ろから、
「やだっ、二人ともしっかりして！」
雪子の叫ぶような声と倒れている玲と善の姿が見えたことで、周辺の敵について警戒しながら彼女たちの許に戻った。
＊＊＊
「つまり、八雲は天城の作ったクッキーでＦ．Ｏ．Ｅが倒せると思ったのか？」
「あい！」
「そうか……」
気を失った二人が起きるまでの間に戻ってきた八雲から事情を聞いた。
どうやら彼は赤ん坊の状態でもアナライズに近い能力を持っているらしく、無意識に〝物体Ｘ〟が危険なものだと理解していたらしい。
ただ、他の者よりも細かく情報を理解出来た事で、これなら敵もやっつけられるかもと思ったようだ。
武器として使えるなら実験するしかない。そう思ってＦ．Ｏ．Ｅの気配を察知し、これでも喰らいやがれと投擲したのが一連の行動の真相だった。
事情を聞いた美鶴はどう注意すべきか悩んでしまうが、八雲はちゃんと物体Ｘが武器になると考えて検証を行ない。そして実際に敵を倒してもみせた。
バックアップの二人が解析したところ、系統的には呪詛である〝ムド系〟に分類されるらしいが、〝ムドオンクッキー〟なる不名誉な名前を付けられたクッキーの製作者は、目を覚ました玲たちに謝罪をしている。
「二人とも本当ゴメンね。まさか、食べただけでこんな事になるとは思わなくて」
「ううん。作ってくれてうれしかったよ？　ゆきねぇちゃん、またクッキー作ってね！」
「玲ちゃん……。うん。今度こそ失敗しないように頑張るから、また

作ったら食べてね」
自分たちのために作ってくれただけで嬉しい。そう笑顔で話す玲に抱きついて雪子が次こそ失敗せずに作ってみせると約束した。
その傍らではスポーツドリンクを飲んで回復に努める善の姿や、また敵が出たら使おうと雪子のクッキーを包みごとお腹のポケットに仕舞う八雲の姿がある。
おかげで第三者の目線ではかなりシュールな状態なのだが、いつまでもここに留まっているとまたF．O．Eが現われるかもしれない。
今度も八雲がムドオンクッキーで楽しく撃退という訳にはいかないので、全員で隊列を組み直すと奥へ向かって進み始めた。
途中、上下が破れた〝又〟〝几〟〝又〟というメモ、全てのページに〝メ〟と書かれた漢字辞典、上が破れた〝木〟〝又〟〝几〟というメモなどを見つけたが、直斗が言うにはこれらは暗号文であって解く上で最も重要な暗号キーの部分がないらしい。
それを見つけない限りは解きようがないという事で、さらに奥へ向かうと何故か上に向かう階段を見つけた。
これまではずっと下を目指していたので、新たな階段を登っても三階に戻るだけだ。
しかし、もしかするとそちらに何かあるかもしれないので、一同は警戒しながら再び三階に戻った。
――放課後悪霊クラブ・参ノ怪
階段を登った先にあったのは、これまで向かうことが出来なかったエリアだった。
七歌が描いている地図によれば、見えてはいたが行き方が分からなかった部分らしい。
となると、やはりこちらに探索に来て正解だったかと扉を潜って正面の部屋に入る。
随分と広い部屋だが特に何かがあるようには見えない。バックアップの二人が通信が入りづらく、状況を見ることも出来ないと言っているので、どうやら通信圏外になる怖れもあるようだ。
《先輩、たち……上手くナビ出来ないから、気をつけてね》

「ああ。皆もあまり離れないよう注意してくれ」
現地組に風花というナビ役が一人いるが、外の二人が通信出来ないのであれば風花の能力もどこまで使えるか分からない。
そんな状況で分断されれば再会に時間がかかり、尚且つ強敵と出会って討たれる可能性も出てくる。
こんなところで仲間を失う訳にはいかないので、全員でやや密集陣形を取りながら部屋の中へ入ってゆく。
すると、
――――ゴゴゴゴッ
突然、地面が揺れ始めて動けなくなる。
異世界に来て地震など起こりうるのかという疑問はある。
けれど、そんな事を考えている間に部屋の床が徐々に崩れ始めた。
「うおっ!?」
「きゃぁぁぁっ!?」
「玲っ!!」
ついにメンバーたちの足下まで崩れてゆき、抵抗する間もなく暗闇に向けて落ちてゆく。
善はどうやら近くにいた玲を抱き寄せることが出来たようだが、他の者たちは近くの者と手を繋ぐことも出来ずに落ちて行った。
「あーう?」
フェニックスに助けられ飛んでいた八雲を除いて。
＊＊＊
地面に落ちた衝撃に顔を顰めながら立ち上がった七歌は、ペルソナで自分の怪我を治療しながら辺りを見渡した。
彼女が現在いるのは一つ下だった四ノ怪だろう。部屋自体はあまり広くないが、すぐ近くには玲を抱きしめた状態で倒れる善がいた。
よく咄嗟に彼女を守ったなと感心するところだが、二人とも意識があったので手を貸して立ち上がらせる。
「大丈夫、二人とも？」
「う、うん。善が守ってくれたから」
「私も大丈夫だ。他の皆はどこに？」

七歌たちがいる部屋には他に誰もいない。
あるのは金属製の扉と、自動ドアのように見える大きな扉の二つ。
ただ、金属製の扉の横にはカードキーのリーダーらしきものがあり、そちらを開けるにはカードキーが必要なようだ。
《オーイ！　そっちに誰かいるかー？》
七歌が部屋の中を観察していると、金属製の扉の向こうから順平の声が聞こえてきた。
どうやら他のメンバーたちはそちらに落ちて閉じ込められたらしい。
「順平、そっちは大丈夫？」
《おっ、七歌っちか！　こっちは暗いけど大丈夫だ。ただ、中からじゃ鍵が開かねぇ。そっちのメンバーでどうにか開けてくれねぇか？》
「順ちゃん、みんな、任せて！　わたしと七ちゃんと善で何とかしてみる！」
助けを求められて玲は頑張るよとやる気を見せる。
彼女は善と一緒に部屋の中にカードキーがないか物色しているが、七歌も一緒に探そうと動き始めたタイミングで扉の向こうからアイギスの声が聞こえた。
《待ってください！　そちらに八雲さんはいないのですか？》
「こちらにいるのは私たち三人だけだ。湊はいない」
《そんなっ》
どれだけ物陰を探しても八雲の姿ない。金属製の扉の向こう側にもいないとなれば、位置がずれて自動ドアらしきものの向こう側に落下した可能性もあるだろう。
ただ、状況を把握するために情報が欲しい。何か落下時に気付いた事がなかったかと七歌は尋ねた。
「アイギス。八雲君がいないの？」
《はい。天田さんが落ちてくるときに蒼い光が見えた気がするそうで、もしかするとフェニックスが落下から助けたのかもしれません》
「なるほど、流石に予想外だったね。でも、八雲君には自我持ちのペルソナもついてるから、まずはこっちで脱出する方法を探ってみるよ」

金属製の扉はとても頑丈そうで壊すのは不可能。壁や床も同じで壊せるとすれば湊のペルソナくらいのものだろう。
となれば、なんとかカードキーを見つけて正攻法で脱出するしかない。
問題はそのカードキーがどこにあるのかだが、七歌が考え込んでいると上から何やら音がして少しするとパネル上になった天井の一部が落ちてきて赤ん坊が顔を出した。
「あいあー！」
「あ、はーちゃんだ！」
七歌たちのいる部屋は落とし穴のトラップがあったせいか異常なほど天井が高い。
天井裏から元気そうな顔を出した八雲までは五メートル近くの距離があるのだ。
けれど、安否不明で心配していた相手が無事にここまで降りて来た事は朗報だ。
すぐに穴の開いた部分の真下に行き、おいでおいでと彼を呼ぶ。
だが、呼ばれた八雲は面白そうに笑うと顔を引っ込めて、何やら天井裏でバタバタと音をさせて移動し今度は金属扉の向こう側から声が聞こえた。
《まー！》
《八雲さん！　良かったです。ご無事でっ》
《わんわん！》
その後も八雲は二つの部屋の天井裏を行き来して顔を見せてくる。
ペルソナを使ってこっちに降ろそうかと考えていると、途中から八雲は破ン魔―を穴に向けて振り下ろし始めていた。
本人にすればモグラ叩き気分なのかもしれないが、彼を迎えに行った者が浄化スキルの餌食になれば不憫すぎる。
アイギスたちも破ン魔―を仕舞うよう注意しているが悪戯っ子モードに入った赤ん坊に話は通じない。
「あー……天井裏にいる八雲君は行き来できるっぽいね」
《そうみたいだな。俺たちを運んでくれれば楽に脱出出来そうだが》

とりあえず、七歌も鳴上も自由に行き来できる彼に手伝って貰い。
現在のこの状況を打開できないかどうかを八雲に訊いてみる。
「八雲君、皆をこっちに連れてこれる？」
「いー」
「あ、難しい？」
「あい」
「そっかぁ」
申し訳なさそうに首を横に振る八雲に、七歌は気にしないでと返すが何故難しいのかは分からない。
天井裏にスペースがないのか、天井パネルにそれほど重量を掛けられないのか、色々と考える事は出来るが八雲と細かい部分まで意思疎通を図るのはアイギスたちでも難しい。
彼の考えている事を理解すると言っても、それはあくまでイメージを読み取っているだけで本当に彼の言葉で伝わる訳ではないのだ。
ただ、八雲が天井裏にいてくれれば何か出来るかもしれない。
そう考えて彼にその場での待機を頼むと、七歌たちはカードキーを探すため怪しい自動ドアを調べ始めるのだった。

第二百九十二話　脱出ゲーム

――放課後悪霊クラブ・四ノ怪

床の崩壊によって第四階層の小部屋に閉じ込められたアイギスたち。

どうして上から降ってきたのに天井があるのかという疑問はあるが、迷宮の中は時間が経てば壁や床の戦闘痕が修復されていることから、似たような効果で罠に掛かった者が部屋に入ってから天井が出来たのだろう。

そんな事を考えながら脱出する方法を考えるが、残念なことに中からでは鍵穴すらない扉のロックを解除することは出来ない。

唯一の救いは部屋の外に七歌、善、玲の三人が残っており、彼女たちに自分たちの救出を頼むことが出来るくらいか。

一応、もう一人無事だった者もいるが、彼は床の崩壊による落下に巻き込まれず、単独で天井裏にいて現在も元気に二つの部屋の上を行き来している。

顔を出すためにパネルタイプの天井の一部を壊し、顔をひょっこり出して笑ったかと思えば隣の天井裏へ移動する。

アイギスがおいでと呼んでも悪戯をしている気分なのか、口に手を当てて笑うと去ってしまう。

まぁ、風花が言うには天井裏に敵の気配はないので、高さ五メートルもある天井裏から落ちてこない限りは大丈夫だろう。

「いっせーのーで、四！」

「あっ、クソォ」

「悪いね君たち。へへっ、これでオレっちも片手だぜ」

やることがないのか部屋の隅に集まって順平や花村があげる親指の数当てで時間を潰している。

メンバーは二人に加えて綾時、鳴上、完二、天田の計六人だが、既にあがっている天田と鳴上は残る四名の戦いを見守る。

綾時に加えて順平まで残るは片手になったことで、花村たちは悔しそうにするも、ふと顔を上げたときに壊れた天井の穴が見えてゲンナ

リした表情を浮かべた。
「つーか、有里のあれはどういう意図があるんだ？」
花村に言われて他の者も視線を向けると、そこには天井の穴の縁辺りに座ってフリフリとお尻を振っている八雲がいた。
彼はちゃんとズボンを穿いているものの、わざわざ閉じ込められている者たちにお尻を振って見せている事から、普通なら挑発しているのだろうと考えるところだ。
男性陣は何じゃそれはと呆れ気味に見ているが、女性陣は落ちたら危ないからやめなさいと心配する者と、カメラがあれば動画で撮影するのにとお尻フリフリダンスを可愛いと感じている者に大きく分かれる。
救助されるまでこれがずっと続くかと思うと気が滅入るが、閉じ込められた事に怯えていた千枝やゆかりも今は八雲のお尻を見て平静さを取り戻している。
「八雲さん。そんなところで遊んでいると落ちてしまいますよ。ちゃんと受け止めますので、どうぞ降りて来てください」
「そうだよ、八雲君。ほら、お姉ちゃんたちと遊ぼ？」
「いー！」
八雲は今の状態が楽しいのかアイギスと風花の返事に首の代わりにお尻を振る。
見ている者にすれば、先ほどよりも高速で振られるため、いつバランスを崩すか心配になる。
もっとも、赤ん坊の状態でも五メートル程度の高さなら彼は問題なく着地可能だ。
女性陣の心配は全て杞憂でしかないのだが、分かっていても心配してしまうのが保護者というものだった。
《八雲君、ちょっと来てー》
「あーい。ま、ばいば！」
そして、隣の部屋から七歌に呼ばれると、八雲は立ち上がってから手を振って隣の部屋の天井裏へと移動する。
八雲の姿が見えなくなったアイギスたちは露骨に不安そうな顔を

見せ、それを見た男性陣は早く部屋から出られないかなと七歌たちの活躍に期待を寄せるのであった。

＊＊＊

順平たちを助けるためには三枚のカードキーが必要だと判明した。

七歌たちは自分たちのいる部屋をくまなく探したが、残念なことにカードキーは存在せず、どうやら外へと探しに向かう必要があった。

しかし、外へ出ようと扉の前に立っても一切反応せず、手で無理矢理に開けようとしても手が痛くなるだけで無理だった。

ならばどうするかと悩んだ末に、扉の左右にある台座のようなものを善が発見し、彼がそれに乗ると台座が沈み込んだ。

「……沈んだ。だが、扉に変化はなしか。やはりもう一方にも誰かが乗る必要があるのだろう」

「ＯＫ、私が乗ってみるよ」

二つの台座に同時に乗っておかないと扉が開かない。

そう予想したことで七歌が台座に乗ってみたが、どうしてだか善の時のように台座は沈み込まなかった。

「あれ？　もしかして乗る人に制限あんのかな？」

「いや、この場合は重量の問題だろう。玲、君も一緒に乗ってやってくれ」

「うん。七ちゃん、わたしも乗るね！」

台座の大きさの関係で七歌と玲は抱き合うような形で一つの台座に乗る。

すると、今度は規定の重量を満たしたのか台座が沈み込み、ズズズと音を立てて扉は無事に開いてくれた。

「お、ちゃんと開いたね。じゃあ、気をつけて探しに行こうか」

「ああ、湊のペルソナの力を借りるとしよう」

無事に扉が開いたことで七歌たちが台座から降りて探索に向かおうとする。

だがその瞬間、せっかく開いていた扉が勢いよく閉まってしまった。

今から通ろうとしていた七歌たちはポカンと数秒呆け、事情を理解

して苦い表情を浮かべた。
「これは……台座に乗っている間だけ扉が開く仕掛けのようだな」
「ええっ。でも、わたしと七ちゃんは二人で乗らないとダメなんだよ？」
「あと一人いればどうにかなったのだが……」
同時に台座に乗る必要があるというのに、女子で体重が軽い七歌と玲は一緒に乗らなければ台座が沈まない。
周りに何か重りになりそうなものはないかと探してみるも、効果はほとんどなく二人が一緒に乗るしか手はないようだ。
これではどうあっても閉じ込められた仲間を助ける事が出来ない。それ以前に自分たちも脱出することが出来ない。
どこか悔しそうに諦観の言葉を吐く善を見ながら、七歌は顎に手を当て少し悩んでから天井に向けて声をかけた。
「八雲君、ちょっと来てー！」
《あーい》
天井裏からバタバタと走る音が聞こえ、壊された天井の穴からすぐにヒョコッと八雲が顔を出す。
どこかワクワク顔なのはきっと用事があって呼ばれたと分かっているからだろう。
出来る事なら先に降りて来て欲しいが、今の状態でも話は出来るので七歌たちは上を見上げながら八雲に話しかける。
「あのね。そこの扉を開けるためのカードキーを探しに行きたいんだけど、奥の扉を開けるには二箇所の台座に人が乗ってなきゃいけないの。だけど、私と玲ちゃんだと重さが足りないから、八雲君も一緒に乗ってくれないかな？」
「うー！」
いいよ、と元気に頷いて八雲は天井からジャンプして降りてくる。
赤ん坊が高さ五メートルから落下すれば命の危険があるので、慌てて七歌がキャッチして彼を抱きしめたが、飛んだ本人は楽しそうにキャッキャと笑っている。
「はーちゃん、危ないから高いところから飛んじゃダメだよ」

「めー？」
「そう。みんな心配するからね」
「うー、めんめ」
七歌に抱きしめられた八雲はそのまま玲の手へと移動する。
この中で最も戦闘力が高いのは七歌だ。故に、彼女を扉の向こうへ向かわせるには善と玲がこちらに残るしかない。
あちらで戦闘になることを考えて七歌も準備し、八雲も玲の腕の中で大人しくしている間に全員で扉の前に向かう。
現在、チドリとりせからの通信は途絶えているので、サポートなしで探索に行くしかないのは非常に不安だ。
それでも今は自分がやるしかないと七歌が気合いを入れたところで、善と玲たちが台座に乗った。
「……玲、残念だが君と湊ではまだ重さが足りないようだ」
「ええっ、はーちゃんの体重っていくつなの？」
《6．4キロであります！　羽根のような軽さです！》
どうやって会話が聞こえていたのか分からないが、玲が八雲を高い高いしながら体重を尋ねると隣の部屋からアイギスが答えてくれた。
七キロ近い羽根など誰も知らないが、どちらにせよ八雲は平均より少々軽いらしい。
これでは玲と合せても五十キロくらいにしかならないだろうと、今度は七歌が八雲を抱っこした状態で台座に乗ってみた。
「ダメかぁ。多分、六十キロくらいを想定した仕掛けっぽいなぁ」
「あーう？」
「えっとね。八雲君は身体が軽くて女の子の憧れだねって話だよ」
「ま！」
高校生ならば女子基準で褒められても嬉しくないだろうが、赤ん坊の八雲は素直に喜んで得意気な顔をしている。
一方の七歌たちは八雲の体重を足してもダメとなると、一番避けたかった手段を選ぶしかないかと苦悩する。
そう。八雲一人に探索を任せるという手段だ。
「こうなると八雲君頼みになってきちゃうなぁ。でも、うーん……」

「だ、ダメだよ！　はーちゃんは赤ちゃんなんだよ？」
「だが、玲。取れる手段がそれしかないんだ」
片方の台座に善、もう片方に七歌と玲が乗る必要があるならば、自由に動ける八雲が探索に向かうしかない。
玲は赤ん坊にそんな事を任せられる訳がないと反対するも、そうしなければ自由に動ける八雲以外は誰一人帰ることが出来ない事は理解している。
帰還用アイテムのカエレールが使えれば良かったのだが、帰還用アイテム無効エリアのようでその手を使うことは出来なかった。
抱っこしていた八雲を地面に降ろした七歌は、腰を落として出来るだけ目線を合わせるとしっかりと八雲の目を見て話しかける。
「八雲君。ここから出て三枚のカードを探して来て欲しいの。上にいたような敵がいるかもしれないけど、一人で出来る？」
「まう！」
「うん。ゴメンね。敵がいたらすぐ戻ってきていいから、無理だけはしないで」
せめてチドリたちのサポートが使えれば敵の位置情報や安全なルートを指示できるのだが、出来ない以上は彼の安全は先天的に持つ気配を察知する力に賭けるしかない。
通常の赤ん坊よりも遙かに高い戦闘力を持つが、敵と戦わないように強く言い聞かせてから七歌と玲も台座に乗って扉を開ける。
「まー！」
扉が開くと八雲はお腹のポケットから破ン魔ーを取り出して駆けていった。
飛び出してゆくときに七歌が「走っちゃダメ！」と注意したがきっと聞こえていないだろう。
扉の向こうはとても暗くてどうなっているのかは分からない。ただ、時折、金属に硬い物がぶつかったような音が聞こえる事から、彼は約束を守らずに敵と戦っていると思われた。
彼がいつでも戻ってこれるよう台座から動くことが出来ない三人は、ただ待っているだけの時間がとても長く感じる。

隣の部屋で待っている者たちはこちらでの出来事を分かっていないはずだが、無事に助けてから事情を話せば何て危ない事をさせるんだとアイギスや美鶴が激怒する事だろう。
自分も苦渋の決断で送り出したのだが、怒られるのはしょうがないよねと七歌が考えていると、向かいの台座に黙って立っていた善がポツリと呟いた。
「……そういえば、湊のポケットなら重りになる物もあったのでは？」
「ああっ!?　もう善ってば！　そういうのは早く言ってよ！　はーちゃんが行ってからじゃ意味ないでしょ！」
「すまない。人が乗るという前提で考えていたんだ」
言われてから七歌も自分の失態に気付く。自分たちしかいないときには重りになる物を探したというのに、どうして八雲の時も同じように考えなかったのか。
彼のポケットなら重りになる物もあれば、扉が閉まらないようにつっかえ棒の役割を果たす物だってあったに違いない。
それを使えば赤ん坊を一人で探索に向かわせる必要などなかったと後悔するも、ここから大声で呼んでも彼はきっと戻ってこないだろう。
戦闘音や彼の走るトテトテという音が聞こえている間は待つしかない。
そうしてさらにしばらく待っていると、少し服が汚れた状態で八雲が戻ってきた。
出て行くときに持っていた破ン魔ーは仕舞ったようで、その手には色違いのカードキーが三枚握られている。
「まいま！」
「おかえり、はーちゃん！　すっごく心配したんだよ！」
無事に帰ってきた八雲を玲がしっかりと抱きしめる。
彼女の目には涙が溜まっており、すぐにでも助けに行きたいほど心配したのだろう。
強く抱きしめられている八雲に善も労いの言葉を掛け、七歌も彼の頭をしっかりと撫でてやると彼の無事の帰還を喜んだ。

そして、玲の抱擁から解放されると八雲は三枚のカードキーをそれぞれに配っていく。青いカードキーは玲に、黄色いカードキーは善に、赤いカードキーは七歌に渡して全員がちゃんと確認する。
「よかったぁ。お医者さんが持ってたカードと同じだよ！」
「ああ。造りを見る限りこれも他二枚と同様だろう」
「八雲君、ご苦労様。これでアイギスたちを助けられるよ」
「あい！」
これを使えば彼が大好きなアイギスやコロマルを助けられる。
そう伝えると八雲は嬉しそうに笑って奥の扉へと駆け寄り、小さい手でバンバンと金属の扉を叩いた。
そんな硬い物を叩いたら手が痛くなってしまうよと心配になるが、彼もきっと早くアイギスたちに会いたいのだろう。
他の二人も同じように思ったらしく、すぐにカードキーを機械に通してやろうと近付いていけば、
「あ、扉が開きました！」
「まいま！」
「八雲さん！」
三人がカードを通す前に何故だか扉が開いて八雲が中へ入ってゆく。
中に入っていった八雲はアイギスと再会の抱擁を満喫しており、それを横目で見ながら出てきた鳴上たちがカードキーを持った七歌たちに感謝の言葉を伝えてきた。
「ありがとう。おかげで出られたよ」
「ああ。七歌、少ない人数でよくやってくれたな」
自分たちではどうすることも出来なかった状況とはいえ、たった三人に危険な事を頼んでしまい申し訳ない気持ちはある。
しかし、彼女たちはそういうときはお互い様だと言ってくるだろう。
だからこそ、鳴上も美鶴も心からの感謝の言葉を三人に送った。
二人が礼を言えばそれに続くように他の者たちも彼女たちに「ありがとう」と感謝した。

助けてくれた者たちに礼を言い終われば、狭い部屋から出られたことで順平は筋肉を伸ばすようにストレッチをする。
すると、礼を言われた七歌たちが何やら微妙な表情をしていたことに気付き、何かあったのかと心配して声を掛けた。
「ん？　七歌っちどうかしたのか？」
「いや、あの……私たちまだカード通してないんだよね」
「は？　いや、そんな訳ないだろ。現に扉も開いてるし」
「いいや、事実だ。私たちが扉の前に到着する前に、湊が扉を叩くと勝手に開いたんだ」
カードキーを使わずに扉が開くはずがない。逆を言えば、扉が開いたという事はカードキーを使ったはず。
七歌が何を言いたいのか分からず順平が首を傾げれば、七歌と同じように善まで自分たちは何もしていないと返せば、話を聞いていたラビリスが分かったと頷いて口を開いた。
「あ、分かったわ。湊君ってエールクロイツを使って機械を遠隔操作できるんよ。多分、小さくなってもそれが使えたんちゃうかな」
「兄さん、兄さんが自分で扉を開けたんですか？」
「あい！」
『えー……』
メティスに聞かれて八雲は元気いっぱいに頷く。
そんな裏技があったのなら初めから苦労せずに済んだだろうに、しかし、相手は赤ん坊なのでどれくらい状況を理解していたか不明だ。
一応、問題は解決したので強くは言わないが、愚痴くらいは許されるだろうと花村が小さく溢す。
「なぁ、寂しく遊んでた俺たちの苦労ってなんだったんだ？」
「いや、それを言うなら善たちの方だろ。三人で俺たちのために頑張ってカードキーを探してきてくれたんだからな」
あくまで花村たちは待っていただけだ。もっと早く助かった可能性もあったようだが、最終的に助かったのでその点に文句はない。
ただ、花村の愚痴を聞いていた鳴上が、もっと苦労した人間が他にいることを指摘する。

落ちてくる場所が少しずれただけで、彼らは三人でカードキーを探してきたんだぞと。
だが、本当にカードキーを探してきてくれた人物を知っている玲は、少々言いづらそうにしながらも自分たちがいた部屋にも仕掛けがあったんだと話す。
「あ、あのね。実はそっちの部屋にも仕掛けがあってね。二つの台座に人が乗ってないと扉が開かなかったの。でも、わたしと七ちゃんだと軽くてダメで、二人で一緒に乗らないとダメだったんだ」
「いや、それだと人数足りねえだろ」
「う、うん。だからね。その、カード探しははーちゃんが一人で……」
二つの台座があり、一つに善が乗って、もう一つに七歌と玲が乗った。
そう告げると荒垣からじゃあ誰が探したんだと訊かれたので、今もアイギスに抱っこされている八雲を指さして彼が一人で見つけてきたと玲は真相を話した。
それを聞いた者たちは一様にポカンと呆けた顔をしていたが、直後、思考が追いついたアイギスが七歌や玲たちの行動を強く批難する。
「な、なんて事をさせるんですか！　八雲さんに何かあったらどうするんです！」
「ご、ゴメン。私たちも八雲君が出て行ってから重りを出して貰えば良かったって気付いて……」
こうなることが分かっていた七歌はやっぱり怒られたかと思いつつ反省して頭を下げる。
あの状況ではとれる選択肢があまりなかったのは事実だが、少し考えれば八雲のポケットからアイテムを取り出すことは思いつけたはずなのだ。
だからこそ、しっかりと八雲の安全確保に最善を尽くせなかった事を謝ったのだが、八雲はアイギスが七歌たちを苛めていると思って彼女を止めた。
「めーめ！」

「ですが、八雲さんを一人で探索に向かわせるなんてっ」
「むぅ、やーの！」
　八雲に苛めてはダメだと言われても、自分の大切な人を危険に晒された怒りは簡単には治まらない。
　ただ、そんなアイギスの気持ちを理解出来ない八雲はアイギスの胸を手で突き飛ばし、彼女の腕から抜け出すと走って七歌の許に向かった。
「あー、八雲君。アイギスは八雲君の事を心配して言ってるだけなんだよ？」
「いー！」
「うん。ありがとね」
　今回の件に関して八雲は七歌たちの味方だ。
　ただ、アイギスが怒っているのは全て八雲のためなので、七歌がそう説明してみるも、七歌たちが自分を心配してくれていたと知っている八雲はいじめっ子なんか嫌いだと七歌に抱きついた。
　その姿を見たアイギスは自分がとても理不尽な八つ当たりをしていたことに気付かされ、何てことをしてしまったんだとすぐに頭を下げる。
「すみません、七歌さん、善さん、玲さん。自分は何も出来なかったというのに、皆さんに当たってしまって……」
「いや、君の怒りは正しい。もし逆の立場で玲一人に探索を任せる者がいれば、私もきっと同じように言うだろう」
「うん。わたしたちこそゴメンね。はーちゃんに危ないことさせちゃって」
　無事だから良かったという結果論で話すのはとても危険だ。
　今回は偶然上手く行ったかもしれないが、次も同じように行くかは分からない。
　それが分かっているからこそ、善たちはアイギスの怒りを正当な行為として受け入れる。
　そうしてお互いにお互いの悪かった部分を認め合うと、八雲も安心したのかホッとした顔で再びアイギスの許に戻った。

どうやら丸く収まったようだと見守っていた美鶴は、全員が揃ったところで移動を提案する。
「さて、全員の無事も確認出来たので、そろそろ移動しよう。吉野や久慈川もきっと心配しているだろうからな」
奥の扉のロックが解除されたからか、先ほどまで台座に乗って開けていた扉が普通に開くようになっていた。
もしもダメなら八雲に開けて貰うか、何か重りになるものを置いて行かなければならなかったので、これから簡単に出られると全員で隣の部屋へ移動する。
そこには想像以上に広い大部屋が存在し、所々にひび割れた床板も見つかった。
八雲はこんなところを一人で探索して敵と戦ったのかという驚きと共に、本当に無事で良かったという思いが強くなる。
彼を行かせた三人は改めて八雲に謝罪し、アイギスは彼の無事を噛み締めるように強く抱きしめて大部屋を後にした。

第二百九十三話　第三の番人

――放課後悪霊クラブ・四ノ怪

八雲がカードキーを回収してきたにも関わらず、本人が結合した黄昏の羽根であるエールクロイツの機械に干渉する力を使用して扉を開けたことで、閉じ込められていたメンバーたちと無事に合流することが出来た。

彼らが閉じ込められていた部屋の扉と外にあった扉の鍵は連動しており、外に出てみると通れる扉が増えていた。

おかげで一同は『木、メ、几、又』で構成される暗号を解き、通信が回復した事でりせが伝えてきた大きな反応のある部屋に徐々に近付いていた。

「うぶぶぶぶぶぶー」

精神的な疲労はともかく、閉じ込められていたことで肉体的には休むことが出来た。

それに部屋から解放された事が重なり、メンバーたちが順調に敵を倒していると、アイギスに抱っこされている八雲が彼女の胸に顔を埋めて遊んでいる。

胸に埋めたまま顔を左右に振っているので、アイギスの胸もつられるように揺れている。

彼女の胸はこの場にいる女性陣の中では美鶴に次ぐサイズで、さらに形も非常に綺麗なので男子の視線が思わず行ってしまうのも無理はない。

あくまで自分は八雲を見ているんですよとアピールするように花村が口を開く。

「お、おいおい、随分と荒ぶってるけどどうしたんだ？」

「あんま暴れてっとアイちゃんが疲れちまうぜ？」

花村に続くように順平も呆れ気味に話すが、その視線は八雲よりもアイギスの胸に固定されている。

彼女がおらずデートの経験すらない悲しい男子たちにとって、美少女の揺れる胸は魔性の魅力があるらしい。

だが、女性陣は男子のそういった視線に慣れているためか、巧妙に隠しているつもりの花村と順平に冷ややかな視線を向けて七歌が言葉を返した。
「多分、少し離れて一人で頑張ったから反動で甘えてるんだと思うよ」
「無理もない。八雲はまだ赤ん坊なんだ。本来、我々と一緒にダンジョンに潜る必要もないのだが、実際に戦力として当てになるのが悩ましいところだ」
閉じ込められていた部屋を出てから通信が回復して分かった事だが、りせとチドリは通信が繋がらないものの皆の動きは感知出来ていたらしい。
小さな八雲の反応が一人で外に出たかと思うと、F・O・Eのいる大部屋を走り回って何かをしていた。
それだけでも現場の人間は何をしているんだと問い質したい所だったが、さらに驚くべき事に八雲は部屋にいた五体のF・O・E全てに破ン魔ーで挑んで勝利したらしい。
二体は一撃で倒す事が出来たものの、他の三体は一撃では倒せず戦闘に突入した。
相手からの攻撃もあり、八雲は地面を転がるようにして回避し、何度も攻撃を当てることで何とか浄化の効果を発揮させたのだ。
他の者たちでもF・O・Eが相手では僅かに腰が引ける。それを赤ん坊が単独で挑むなど自殺行為だろう。
しかし、八雲にとっては仲間たちのために敵を倒し、目的のアイテムを回収するまでが自分の仕事だと思ったようだ。
文句も言わずに他の者のために必死になるところが湊と一緒。そう思うとやはり八雲は湊の過去であり、湊は八雲の未来なのだろう。
適性があった以上、彼はエルゴ研に回収されていなくてもきっと戦いに身を投じていた。
運命と言うよりは世界が用意した呪いだ。こんな赤ん坊の頃からそんなものに翻弄される事が確定している事を美鶴は不憫に思うが、何も知らない赤ん坊は首を振ることに飽きたのか一度顔を離すとアイギスの左胸を掴んで服の上から口を付ける。

「あーむ」
「あ、いけません八雲さん。汚いですよ」
軽く噛むように八雲がアイギスの胸に吸い付いている。
そんな事をしても母乳は出ないし、仮に母乳が出る状態であっても服越しでは飲むことなど出ないだろう。
けれど、彼女の胸を見ていた男子たちは、アイギスが変な物を八雲の口にさせられないと自分の胸を卑下したと思ったらしく、言葉を被せるように勢い込んで彼女の言葉を否定してきた。
「いやいやいや、全然汚くねぇって！」
「ああ。むしろ、綺麗だ。自信を持っていいと思う」
「うん。僕もとても魅力的で美しいと思うよ」
「そうだぜ、アイちゃん。世の中のお嬢様方からすれば羨ましいくらいだ！」
花村、鳴上、綾時、順平の四人がアイギスに自信を持てと笑顔を向ける。
彼女の胸がダメだとすれば、世の中のほとんどの女性がアウトという事になってしまう。
思春期故に大人の教科書で勉強した彼らは、服を着た状態でしか見たことのないアイギスの胸を教科書に載っていた女性たちよりも魅力的だと評価していたのだ。
そんな事を急に男子から言われたアイギスは少々驚いた後、八雲に口を離させてから淡々と言葉を返す。
「お気遣いはありがたいのですが、〝汚い〟というのは戦闘や埃で汚れている服の話であります。わたしの身体は八雲さんに作って頂いたものですので、恥じる部分など一つとしてありません」
別に八雲が直接胸に吸い付いてきたのならば、戦闘で汗を掻いているでもなければ好きにさせていた。
ただ、彼が口を付けたのは戦闘で汚れてしまっている服だった。
着替えた後ならば別に構わないので、校舎に戻って入浴などを済ませてからならアイギスも咎めない。
今注意したのは現在の状況では彼の身体に悪影響があると思って

の判断だったので、男子たちの言葉はまるで見当違いなセクハラ発言に過ぎなかった。
その事を指摘したアイギスは踵を返して八雲にお腹が空いたのか尋ねながら去って行く。
他の女子たちも四人にゴミを見るような視線を送って後に続くと、
「……気持ち悪い」
最後に雪子がぼそりと呟いて離れていった。
なにも言われないのも辛いが、好感度がマイナスまで振り切ってストレートに言われるのはもっと心に来るものがある。
他の男性陣は呆れつつもやや同情的な視線を向けてから女子の後を追い。残された四人も目頭が熱くなりながら後を追った。
＊＊＊
さらに奥へ進むと次第にダンジョン内の空気が重くなっているように感じる。
これまでの戦闘経験によって勘が培われてきたのだろう。全員が番人が近いことを確信していた。
「あっ、階段あったよ！」
りせたちのサポートがなくても敵の存在を感知した頃、さらに下へと向かう階段を玲が発見した。
非常口の案内看板がいくつもあり、暗闇でみる緑色の明かりがやけに不気味に感じる。
「よし。おりるぞ」
だが、この先にいる敵を倒せばようやくこの場所から離れる事が出来る。
美鶴の号令に頷いたメンバーたちは慎重に警戒しながら階段を下りてゆく。
階段自体はそれほど長くはなかった。言ってしまえば多少天井が高い建物でフロアを移動するのと大差ない。
けれど、階段を下りた先にあった一本道の終着点。番人のいる部屋の入口に付けられた看板が不安を煽る。
「おい、〝手術中〟の看板が光ってるぞ」

妹がストレガに襲われたときの事が蘇り、真田は赤く光る〝手術中〟の看板を見て顔を顰める。
緊急を表わすためにそんな色をしているのだろうが、待つ者にすればわざと不安に感じる色にしているのではと疑いたくなる配色だ。
看板が光っていると言うことは番人はきっと中にいるのだろう。
今回のダンジョンの番人について色々と予想されていたが、直斗が口にした「病院に関係のあるもの」という予想が当たる可能性が高そうだった。
「うー……」
「八雲さん？　大丈夫ですか？」
そして、どういう訳かここに来て初めて八雲が不安そうな顔を見せた。
彼は湊の持っている異能を所持しているので、どこか怖がるようにアイギスに抱きつくと、もしやそれほど強い敵なのかという緊張がメンバーたちに広がる。
「こいつがビビるってこたぁヤバい相手なのかもしれねぇな」
「フッ、どんな相手でも拳で倒すだけだ」
八雲の危機感知は一級品だ。りせたちのサポートが入る前に敵の現われる方向を何度も見ていたので、状況下で外部の影響を受けない能力は信頼できる。
荒垣がそれを考えて警戒を強めると、対照的に真田は強敵なら望むところだと左拳を右掌へ打ち付けた。
戦闘が好きな彼がそんな風に喜ぶのはある意味予想通り。しかし、対照的にゆかりなどが暗い表情になるのも予想通りである。
「あー、帰りたいなぁ。八雲君、危ないからお姉ちゃんと一緒に校舎に戻っておかない？」
「そうそう。あたしも一緒に送ってあげるよ！」
「ゆかりちゃんも千枝ちゃんもここまで来てんから観念しぃや」
ここまで来たら後は番人を倒して宝物を回収するだけだ。
敵の反応は三つ。内一つが大きくて、他二つは大きな反応には劣るがＦ．Ｏ．Ｅ並みらしい。

そんな強い敵が三体もいるのなら全員で相手にする必要があるだろう。
怖いのは分かったが二人が可愛がっている八雲の安全のため、しっかりと戦って欲しいとラビリスが言えば二人は青い顔で頷いていた。
「よし。いくよ、皆」
七歌が号令をかけて部屋へと向かう。手術室への扉はまるでＳＦ作品のように横開き、縦開き、斜め開きの三重構造になっていた。
随分と仰々しいなと思いつつ中に踏み込めば、そこは赤いライトで照らされる不気味な空間が広がっていた。
「な、なに……あれ……」
部屋の奥を見た天田が震えた声で呟く。
そこにあったのは大きな手術台で、寝かされた小さなシャドウがナース型の大型シャドウに身体を押さえられ、その頭部を右腕だけが膨れあがった医者らしき大型シャドウが巨大医療用ペンチで挟み込んでいる。
苦しそうに暴れるシャドウを無理矢理に押さえつけ、三人がかりでシャドウの頭部を潰すことが手術なのだろうか。
あまりに異常な光景にホラー耐性の低い女子や天田が腰を抜かす。
すると、その音が聞こえてしまったのか、ナース型シャドウと医者型シャドウが同時に振り返った。
《あらぁ、そんなところでなーにをしているのかしらぁ？》
《アハハッ、手術の時間だよぉ！》
血色の悪い継ぎ接ぎだらけの灰色の肌をしたシャドウたちは、押さえつけていたシャドウの頭部を潰して殺す。
そして、子どもほどもある大型注射器などを手に振り返ると、戦うつもりなのか徐々に近付いて来た。
「美鶴さんっ、ゆかりっ、千枝ちゃんも立って！」
左右にナース型シャドウを従えた医者型シャドウがやって来たというのに、腰が抜けて立てない者が複数いる。
これは不味いと七歌は焦りを感じながらも、近くにいる者たちに腰の抜けたメンバーを壁際へ急いで移動させた。

敵を分散して同時に戦いたかったが、一度に数人抜けた事で下手に分かれると危険が増す。
となると、医者とナースたちだけでも分けて、自分たちも二手に分かれて戦った方が良いのではと七歌が考えたとき、八雲を心配するアイギスの声が聞こえた。
「うーうー！」
「八雲さん、しっかりしてください！　八雲さん！」
大人たちが腰を抜かすほどだ。赤ん坊の八雲にはショッキング過ぎたのかもしれない。
ただ、それならアイギスと一緒に下がっていて貰いたいのだが、どうやら事情が違うようで頭を押さえていた八雲の身体が青い光に包まれた
光に包まれた八雲の影が徐々に大きくなる。まさかこのまま元に戻るのだろうか。
その可能性に僅かに期待していると、八雲の影は天田より少々小さいサイズで止まり、光が治まると入院着を身に着けた蒼い瞳の少年の姿があった。
「はぁ……最悪の目覚めだ。エルゴ研の人間は全員殺したつもりだったんだけど、まだ生き残りがいたのか」
アイギスの腕の中から抜け出すと、小学校低学年ほどの身長の少年は黒いマフラーから黒漆仕立ての短刀を抜き放つ。
どうして異形のシャドウを見てエルゴ研の生き残りと口にしたのか。そういった疑問が場にいる者の頭を過ぎるが少年は目の前の存在を敵と認識した。
手に短刀を持ったまま進む彼には他の者の姿が映っていないようで、酷く冷たい視線でシャドウらを睨む。
《八雲っ》
「大丈夫だよ、チドリ。俺が全員倒すから。君たちを苦しめるこいつらを一人残らず殺してやるっ」
校舎にいるチドリたちにもこちらの状況は伝わっていたのだろう。
自分と出会った頃の彼の姿にチドリが思わず呼びかければ、八雲は

短刀を逆手に持って前傾姿勢で身を屈めると、強く床を蹴ってその場から飛び出す。
人の限界を超えた加速。身体が小さいこともあって、薄暗い部屋の中では目で追うのも難しい。
それでも、迫ってくる八雲に向けて右側のナースは持っていた巨大注射器を振り下ろす。
《あがっ》
だが、次の瞬間には右側にいたナースの首が刎ねられ宙を舞っていた。
ゴトン、と音がして首が床に落ち、血のように黒い靄を噴き出して身体が床に崩れる。
きっと魔眼で光の線を視てから切ったのだろう。躊躇いもせず人型のシャドウの首を刎ねた少年に対し、見ていた者たちは僅かに怖れを感じる。
ただ、そんな風に他の者が固まっている間に、着地していた少年は今度は左側のナースに向かって跳躍していた。
《なんなのよ、アンタはぁぁぁっ》
「……エヴィデンス、そう呼んだのはお前らだろ」
仲間がやられたナースが叫び声をあげながら、頭部を狙って跳んできた少年に向かって大型注射器を振るう。
喰らえば丸太で殴られたようなダメージを負うことは必至。
けれど、少年は開けた左手で迫ってきた注射器に触れ、そこを基点に横回転して攻撃を受け流すと、四つ足で着地してすぐ相手の足の間を通り抜けざまに両脚を切断した。
《ぎゃぁぁぁぁぁぁぁっ》
「うるさいよ」
両足首を切断されたことでナースがバランスを崩し倒れる。
その叫び声が酷く不快だと眉根を寄せた少年は、背後から相手の心臓を一突きして敵を霧散させた。
彼の蒼い魔眼の効果は大きく分けて二つ。
一つは右側のナースの首を刎ねたように、死の線を切ることで防御

を無視した回復不能のダメージを与える事。
もう一つは、いま殺した相手のように死の線を深く切って、存在の寿命を完全に殺してしまう事だ。
湊のときも同じように魔眼の力を使っていたが、幼少期から同様の事が出来たと改めて認識すると背筋に寒いものが走る。
本当に彼は敵だけを殺すのか。もしかすると、今度は自分たちにその刃が向けられるのではないか。
見ている者がそんな事を考えてしまうのも無理はない。
ただ、残った最後の医者型シャドウと少年の戦いはまだ続いていた。
続けて二体の仲間を失ったというのに、医者型シャドウは動揺した様子もなく開いたペンチで八雲の頭部を挟もうとしてくる。
《さぁ、大人しくしてぇ……すこーしだけ痛いけど、すーぐ楽になるからねぇ》
風船のようにパンパンに膨らんだ身体からは想像も出来ない速度で繰り出される一撃。
喰らえば子どもの頭部など簡単に潰されてしまうだろう。
それに対して、八雲は何を考えているのか武器を仕舞い。両手を広げて閉じようと迫るペンチを掴んだ。
大型シャドウの力など成人男性だろうと勝てるものではない。
案の定、八雲は体格差で押し倒される形になりながら、徐々に力負けしてペンチが閉じてきていた。
《大丈夫だよぉ。さぁ、先生に任せてねぇ》
「ふざけるな……そうやってお前たちは、一体どれだけの子どもを殺したんだっ」
もっと自分に力があれば子どもたちを助ける事が出来たかもしれない。
その想いはずっと彼の中にあったが、現実として幼い少年一人に出来る事には限りがあった。
だから、彼は助ける相手に優先順位を付けた。アイギスやチドリを最上位に置き、小さいマリアや他の被験体たちを次点に置いた。

他の者たちを助けるのはチドリたちの安全を確保してからと決めていたし、難しければ他の者を見捨てようと決めてもいた。
ただ、頭ではそんな風に理解していても、感情というのはそう簡単にコントロール出来るものではない。
目の前に敵がいる。子どもたちを苦しめて殺した相手が、両親のような無関係な人々が命を落とす一因となった者がいる。
なら、今ここで殺すしかない。
「死ねっ、死ねっ、死ねぇっ!!」
吠えながら少年は掴んでいたペンチに視える死の線を指で突く。
彼の反応速度を持ってしてもギリギリだったが、死の線を突かれたペンチは目の前で崩れていった。
《こーら、悪戯はダメだよぉっ!!》
持っていた武器を破壊され、僅かに怒った様子を見せるシャドウは巨大な右手を振り上げて仰向けの八雲に振り下ろす。
振り下ろされた拳は床にぶつかると小さなクレーターを作り、辺りには濛々と埃が舞い上がった。
もっとも、シャドウの攻撃は真っ直ぐ床に振り下ろされていた。そこにミンチになった少年は存在せず、血の一滴たりとも落ちていない。
それに気付いた敵が辺りを見渡せば、舞い上がった埃を突き抜けて真横から短刀を持った少年が飛来した。
「死ねぇぇぇっ」
埃で視界を封じられたところへ死角からの奇襲を受けた。
当然、敵は反応が間に合わず、僅かに身体を捻ったところへ短刀が振り下ろされ異形の右腕が宙を舞う。
言葉を操る以上は敵にもある程度の知能はあるのだろう。右腕を失えば当然動揺すると思われた。
しかし、
《悪い子はお仕置きだぁ!》
右腕を切り飛ばされたというのに、相手はそのまま左手で着地直後の八雲を殴ろうとしてきた。

大きな右腕はその分重かったのだろう。重りを手放した敵は先ほどよりも素早い動きで八雲の背中を殴りつけようとする。
「八雲さんっ」
今まさに少年が殴られようとしたとき、咄嗟にアイギスが拳銃を抜いて引き金を引いた。
狙いは敵の頭部だが、まともに当たったとしても数発で倒せるほどの威力はない。
しかし、攻撃が迫ると敵が認識した事で、ほんの僅かにだが集中に乱れが生じた。
そのタイミングで八雲は宙返りで敵の攻撃を避け、着地と同時に目の前に振り抜かれた敵の左手を切り飛ばす。
《うわぁぁぁぁっ》
「死ねっ、死ねっ、死ねぇっ」
続けて怯んで退がる相手の腹部を袈裟切りに斬りつけ、流れるまま横に薙いで右脚を切り、最後に切り上げながら左脚を切る。
四肢を失って腹も切られた敵は芋虫のように藻掻きながら床の上を転がる。
そんな敵の姿を見て口元を吊り上げた少年は、
「死ねっ!!」
敵に向かって跳躍すると、その喉目掛けて両手で短刀を振り下ろした。
いくらシャドウと言えど四肢を奪われ、急所を突かれれば過剰ダメージで存在を維持できなくなる。
最後にビクリと身体を震わせると、そのまま黒い靄になって消滅していった。
後には床に短刀を振り下ろしたまま動かぬ少年だけが残り、耳が痛くなるほどの静寂が場を包む。
すると、ここにはいない少女が少年に向かって声を掛けた。
《八雲、もう大丈夫よ。敵はいないから、今の敵で最後だから、少し休んで》
「チドリ……うん、分かった。少し疲れたから、ちょっとだけ眠るね」

《ええ。後で起こしてあげる。おやすみなさい、八雲》
立ち上がった少年は武器をマフラーにしまうと、そのまま糸が切れたように力を失い倒れる。
咄嗟にアイギスがＥ．Ｘ．Ｏ．を起動し接近して受け止めたが、本当に眠ってしまったようで八雲は年相応の可愛らしい寝顔を晒していた。
どうして急に中途半端に成長したのか、どうしてここをエルゴ研だと誤認していたのかなど、いくつかの疑問が残る。
完全に脱力して寝ている八雲を抱き上げて皆の許にアイギスが戻ると、八雲の身体が再び光に包まれて赤ん坊の姿になった。
「あ、また小さくなってしまいました」
「うん。けど、さっきの様子を考えると記憶のない赤ちゃんの方が良いかも。ほら、ここには美鶴さんもいるし」
先ほどの八雲はエルゴ研に回収された後の姿だったのだろう。エルゴ研、そして桐条グループに対して怒りと憎しみを抱いていた。
そんな彼が目を覚ましたとき、近くに桐条家の人間である美鶴がいればどうなるか分からない。
力負けしたとはいえパワータイプらしき大型シャドウの攻撃に、ある程度耐えられるほどの腕力もあったのだ。
相手が子どもでまともに戦えそうな者がいない以上、彼にはエルゴ研への憎しみを抱く前の姿か、理性である程度の感情を制御できる元の姿でいて貰いたいというのが七歌の本音だった。
他の者たちも色々と聞きたい事はあるのだろうが、先ほどの八雲の様子に戸惑い上手く言葉に出来ないでいる。
すると、再びチドリの声が聞こえてきて、彼女なりの推測を他の者に語った。
《さっきの事だけど、多分、無理矢理に押さえつけられている患者の姿が被験体と被ったんだと思う。八雲は誰よりもまだ引き摺ってるから……》
「そう、か。すまない、吉野」
《……貴女のせいじゃないでしょ》

チドリにとって湊は大切な家族だ。
その家族を未だに苦しめているのは、美鶴の父が総帥を務める桐条グループである。
被害者を生き返らせる事など出来ないし、簡単に湊の心の傷を癒やす事も出来ない。
だからといって平然と開き直る事など出来るはずもなく、美鶴はただ申し訳なさそうに謝罪を口にした。
それに対する少女の言葉は美鶴に対する気遣いが混じっていたが、美鶴にもチドリにも湊の中にある黒い感情をどうする事も出来ないのは事実だ。
ならば、ここでそんな無駄な事に時間を使うのではなく、番人の守っていた物を回収して早く八雲を休ませた方がいい。
チドリの言葉に含まれたそんな意図を察した美鶴は、他の者たちに声を掛けて動くように伝えると、宝箱の中に入っている物を回収して校舎へと戻る事にした。

第二百九十四話　当時の事

――ヤソガミコウコウ・銭湯

八雲が戦闘を終えてから倒れてしまった事で、一同は番人が守っていた物を回収してすぐに戻ってきた。

宝箱の中にあったのは紙で束ねられた綺麗な白髪。

善が言うには番人が守っている物は玲に関係があるものらしいが、再び僅かな記憶を取り戻した善は戻ってくるとき思い詰めた表情をしていた。

話は戻ってからと先に決めた事でその分悩んでいるらしく、どうやらそれなりに重要な事を思い出したらしい。

だが、いつまでも暗い病院の中にいると精神的にも参ってしまうため、メンバーたちが戻ってくると先に入浴などを済ませて集合する事にした。

時間が開けばそれだけ善も自分の気持ちを整理することが出来るはず。

そんな気遣いと純粋にお風呂で疲れを癒やしたいという想いから七歌たちが拠点から荷物を持って銭湯に向かえば、アイギスがメティスに八雲を預けて洗面器を大きくしたような赤ん坊の沐浴用桶にお湯を張っていた。

二人は身体にタオルを巻いているが、眠ったままの八雲はすっぽんぽんの状態で抱っこされている。

それを見た風花は八雲をお風呂に入れるなら自分も洗ってやりたいと近付いていった。

「アイギス、私も八雲君のこと洗ってあげてもいいかな？」

「ダメであります。これはわたしと八雲さんの大切なコミュニケーションなのでご遠慮ください」

お湯の量と温度をしっかりと計測したアイギスは、メティスから八雲を受け取ると慈愛の眼差しで見つめながら彼をお湯に浸からせる。

寝ている状態でそんな事をしていいのかという疑問はあるが、八雲はお湯に触れた時に身体をビクリと震わせただけで、後は眠ったまま

ではあるが気持ちよさそうに緩んだ表情をみせた。
「八雲さん、しっかりと綺麗にしましょうね」
首の後ろを左手で支えながら、右で優しくお湯を掛けながら身体を撫でてやる。
赤ん坊の若く瑞々しい肌の表面でお湯が珠になり、それらが滑り落ちるのを眺めながら汗を掻きやすい関節部分を強めに擦る。
首や鎖骨に脇や肘の内側。撫でられるとくすぐったいのか身を捩らせるが、まだまだ目を覚ましていないのでアイギスも大人しい内に身体を洗ってしまおうと作業を続ける。
普段は起きている状態で入浴するため、八雲はシャンプーハットを被った状態でシャワーで洗われていたが、こういった洗い方の方が八雲とより触れ合える事もありアイギスは継続しようと考えていた。
「さぁ、八雲さん。次は下半身であります」
上半身は洗い終えたので今度は下半身に向かって手を伸ばす。
今の彼は生まれたままの姿なので、見た目こそ長髪の女児だが股にはご立派様が存在する。
いくら赤ん坊のものと言えど初心なメンバーは少し照れるようだが、アイギスはそんな事は気にせず一切の躊躇いも見せず触れて洗った。
「とても大切なものなので念入りに洗っておきましょう」
「ア、アイギス。デリケートな部分だから優しくね」
自分の髪や身体を洗いつつ、アイギスの様子も見ていた風花が心配になって声を掛ける。
綺麗にしようと思うあまり、触りすぎて炎症を起こしては意味がない。
男子のそこはとても敏感で繊細な部分であるため、張り切る気持ちは分かるがほどほどにと彼女は注意した。
「ご安心ください。以前、八雲さんが小さくなられた事を受け、わたしは密かに病院の赤ちゃんお風呂教室を受講し、子育ての学術本を読んでおきましたから」
「そ、そうなの？　準備いいね……」

「ええ、全ては八雲さんのためです」
ちゃんと学んでからやっているのであれば、大人の湊のものにしか触れた事のない風花などより余程任せられる。
実際、今も洗われている八雲はくすぐったそうにはしているが痛がってはいない。
アイギス本人がとても丁寧に洗っている事に加え、学んだ技術をしっかりと駆使しているからこその反応だろう。
心配していた者たちを納得させるだけの準備と腕前を見せ、八雲の身体をしっかりと洗い終えるとアイギスも納得したように頷いていた。
――まんぷく亭
全員が風呂からあがってくると、ダンジョンの奥で見つけた物や成長した八雲について話し合うため一同はまんぷく亭に集まっていた。
お風呂で身体を洗われていたときには眠っていた八雲も目覚めており、しっかりと店主としての役目を果たしてからあいかの膝の上でご飯を食べている。
「おいしい？」
「まーも！」
「そう。沢山食べて」
「あい！」
あいかは膝の上に乗せた八雲のために、エビフライをナイフで一口サイズにカットしてから八雲の口に運ぶ。
小さな口をいっぱいに開けて頬張る姿は思わず頭を撫でてやりたくなり、口の中の物を飲み込むと催促するように再び口を開けてくるため、ついつい好きなだけお食べと自分の分まで食べさせてしまう。
普通の赤ん坊ならば自分の分を食べた時点で苦しくて動けないというのに、本当にその小さな身体のどこに入っているのだろうと鳴上たちは八雲を眺めていた。
すると、同じように八雲の食べる姿を見ていた美鶴が、これでは話が進まないと頭を振って本題に入った。
「さて、ダンジョンの奥で見つけた白髪だが、あれについて皆の意見を

聞こう」
宝箱の中に入っていた白髪は本当に綺麗な状態だった。
長さで言えば雪子と同じくらいらしいが、それほどの長さになるとケアがとても大変で、見つかった髪の毛の束が非常に綺麗な状態だった事もあり、雪子の推測では持ち主にとってその髪は自慢だったのではとの事だった。
ただ、見つかったのがお化け屋敷の最奥という事もあり、いくら綺麗と言っても人の髪ということもあって順平などは不気味に感じていた。
「オレっち的には最後にビビらせるためのトラップじゃねぇかなって感じッス」
「いや、番人倒してから最後にビビらせても意味ねぇだろ」
「逆だよ。悔しいから最後に一泡吹かせようって話」
花村が番人を倒されてから驚かせても意味がないと言えば、順平はだからこその嫌がらせだと笑ってカツ丼を食べる。
もしも、本当にそんな理由で髪の毛を用意していたとすれば、この世界にメンバーたちを閉じ込めている黒幕は真性の馬鹿だろう。
無駄な事に労力を割くくらいならば番人を強化するか、番人に付属していたナースを三人か四人にした方がマシだ。
子どもの天田でもそう思うのだから、順平の予想だけは絶対にハズレだと皆が思いつつ、従業員の集まるテーブルにいた善が自分が思い出した事も何かの役に立つだろうかと口を開いた。
「……この学校は玲が作ったものだった。何故、玲が学校を作ったのか。どうして今出たがっているのか。それは分からないがこの学校を作ったのが玲だという事は思い出せた」
彼の言葉を聞いてメンバーたちは怪訝な顔をする。
この学校を作ったのが玲であるならば、彼女は自分で自分が作った建物に閉じ込められている事になる。
どういった状況ならばそんな事が起こるのだろうか。可能性としては自分がいる事で何かしらの不都合があり、自分で自分を封印するといった事が挙げられる。

ただ、迷宮の奥に隠された物を手に入れると記憶が僅かに戻る事はこれまでもあったが、実際の所善の持つそれが本物の記憶であるかは誰も証明できない。
疑ってばかりいても話が進まなくなるので〝真実である〟という前提で考えるしかないが、顎にえ手を当てて考え込んでいた直斗が顔をあげた。
「善君は以前言っていましたね。迷宮の奥に隠されているのは玲さんのものだと。そして、本当にこの学校を作ったのが玲さんだとすれば、僕たちが黒幕と呼んでいる相手は存在しないかもしれませんね」
「んー、流石にこの世界の外までは探知できないけど、そういうのってプロデューサーが詳しいんだよね。いつになったら元に戻るんだろ？」
直斗の隣に座っていたりせは熱いお茶の湯呑みに口をつけながら、あいかにご飯を食べさせて貰っている赤ん坊に視線を向ける。
今現在、メインでバックアップを担当できる者は四人いるが、全員とも少しずつ能力に違いがあり、それぞれに得意分野があった。
情報をより深く知る事が出来る者や、効果範囲が広い者など色々といるが、チドリと風花とりせが探知できるのはあくまでこの閉じられた世界の内側だけだ。
逆を言えば、外を探る事が出来ない以上、ここが完全に隔絶された空間だと証明できる訳だが、湊は元いた世界からこの場所を探り当てて辿り着いていた。
エリザベス曰く、太平洋の真ん中に落とした一本の針を日本から泳いで探しに行くようなものらしい。
そこへさらにマーガレットは、泳ぐ者は目隠しと耳栓をした状態でという条件まで追加していた。
ハッキリ言って不可能。世界中探してもそんな事が出来る者など絶対にいないと断言出来る。
けれど、湊が渡ってきた空間は世界の理が生まれる前の世界がひしめき合っており、地球の数十倍の重力が存在する世界であったり、僅かでも吸えば喉も肺も焼かれるような灼熱の空気しかない世界も

あった。
そんな世界らを時に躱し、時に突破して彼はこの世界にやってきた。
本人が言うには契約を結んでいる相手との間にパスが存在し、それを辿ってきただけなのでエリザベスらが言うほど見つける事自体は難しくない。
どちらかというと異なる理を持つ世界を突破して目的の世界に近付く方が大変だったが、苦労してこの世界に辿り着いた本人は苦労したという記憶も退行で失っている。
りせたちがこの世界の外まで探知するならば、湊のそういった部分の情報が必要なだけに今の状態は歯がゆく感じる。
すると、宝箱から見つかった髪束に関する意見があまり出てこなかった事で、気になっていたもう一つの事柄について雪子が月光館学園の者たちに尋ねてきた。
「あの……番人と戦った成長した八雲君について聞いてもいい？」
その話題が出るとマリーが席から立ち上がり、ご飯を食べ終えていた八雲をあいかから受け取ってまんぷく亭から出て行く。
外に連れ出される八雲は不思議そうな顔をしていたが、マリーが「アイス食べたいから一緒に来て」と告げると笑顔で頷いていた。
今の八雲が再び僅かに成長した姿になるかどうかは分からないが、可能性を考えて話を聞かせない方がいいのは確実だ。
気を利かせて八雲を連れ出してくれたマリーに感謝しつつ、美鶴は自分も又聞きした情報しか持っていないがと口を開いた。
「我々も詳しくは知らない。ただ、エルゴ研から脱走した後の姿……でいいのだろう？」
「ええ。私の事も知っていたし、魔眼も両眼で発動してたから脱走直後くらいの時期の八雲でしょうね」
湊の物に限らず、本来魔眼は両眼で発動して初めて完全な効果を得る。
ただ、湊の魔眼は常時発動型でもあるので、精神を強く持つ事で擬似的にオンとオフを切り替える事が出来ていた。

そんな湊の眼は一時期精神が不安定なせいで完全には切り替える事が出来ず、片目だけが魔眼のままであった時期があった。
けれど、ダンジョンの番人と戦っていたときには完全に両眼で発動していたので、脱走直後から仕事屋として活動し始めたばかりくらいの姿だと思われた。
それを聞くと戦闘中の八雲の姿を思い出したのか、千枝が小さくぶるりと身体を震わせて言葉を溢す。
「そういえば、結構物騒なこと言ってたりしたよね。途中からは何か鬼気迫るものがあったし」
「先輩たちも探り探り聞くのはやめましょう。単刀直入に聞きます。有里先輩は過去に人を殺めた事があるんですか？」
雪子や千枝が何を聞きたいのかは全員が分かっていた。だからこそ、マリーは赤ん坊には聞かせられないと八雲を連れ出したのだ。
内容が内容だけに聞きづらいのは分かるが、こういった事はちゃんと聞かなければ後で気まずくなるだけだと直斗がストレートに尋ねれば、しっかりと視線を合わせたチドリが頷いて答えた。
「……ええ。本人も別に隠してないから答えるけど、エルゴ研から脱走するときに研究員の八割以上を殺したわ。相手も銃を持って殺しにきたからって理由もあるけど、脱走されるくらいならって被験体を殺してきた敵を一夜で百人以上殺して私と合流したときには全身血濡れで酷い状態だったわよ」
自嘲するように嗤うチドリは、あの日の事を今でも鮮明に思い出す事が出来る。
研究員を脅すために力を振るう事はあったが、それは人として踏み越えてはならない一線を踏み越えないため、抑止として力を見せていただけだった。
そんな少年が全身を返り血で染めた姿でやってくれば、何があったかなど容易に想像がついた。
あいつらは彼の中の鬼を目覚めさせた。そして、自分たちが彼に踏み越えさせてしまったのだと。
昔の事を思い出してチドリが感傷に浸っていれば、こんな話を聞い

ても相手の事を心配できてしまう鳴上が続けて尋ねてくる。
「有里は大丈夫だったのか？　普通、そんな事をしてしまったら精神的に辛い物もあったんじゃ？」
「八雲は免疫力が異常に高いから病気にならない。そんな八雲が四十度近い熱を出して一週間も苦しんでたわね。でも、本当の地獄はその後で、熱が引いてまともな思考力が戻ってたときは、発狂したように暴れて死が視える自分の両眼を抉ろうとしたわ」
　彼の叫び声で目を覚ましたチドリが押さえつけ、すぐに栗原が来てくれなければ湊は自分の両眼を抉っていただろう。
　全身が血塗れになるほど人を殺した後で、万物に存在する死を視れば誰だって頭がおかしくなりそうだと感じる。
　そうなれば原因の排除を第一に考え、命の危険があっても両眼を自分で抉ろうとしても無理はない。
　あのときは直接モノを見れないよう両眼に包帯を巻いて視界を封じたが、湊の魔眼は視力を失っても死を視れると後で聞いて、あまり意味はなかったのかなと思ったりもした。
　とはいえ、他に何か取れる方法が会った訳でもなく、視界を封じるというのは湊本人が言ってきた事なので、あの時出来る中では最良の手段だったと思うしかない。
　しかし、思い返してみると追い込まれていたはずの少年が、所々で自分たちを気遣っていたと思える部分がいくつもある。
　そういった根幹の部分はずっと変わらないのだなとチドリは小さく笑って、湊が今のような酷く冷たい雰囲気になった切っ掛けは当時の事が原因だと結論を告げた。
「元から壊れてたけど、完全にずれてしまったのは人を殺してからよ。自分のためじゃなく人のために手を汚したのに、他人のせいには絶対にしないの。自分の中で理由をつけるから心のバランスが崩れてしまうのよ」
「……そうですか。何と言って良いのか分かりませんが、教えてくれてありがとうございます」
「別にいいわ。聞けば本人も簡単に答えるでしょうし」

相手がただの学生や教師であれば教えないだろうが、それは相手を巻き込まないために隠すだけだ。
この世界にいる者たちは全員が超常の存在に関わってしまっているので、そんな相手であれば湊も気にせず教えてくれる。
人体の壊し方、一撃で相手を殺せる部位、口を割らす拷問の仕方など、日常生活ではまず役に立たない知識だって彼は沢山持っている。
覚えたところでシャドウ相手には使えないだろうが、状況によっては自分は彼の過去を気にしていませんよというアピールにはなるだろう。
頭の隅でそんな事を考えている者もいる話を聞いた八十神高校側のメンバーたちは、彼を怖がるよりも不幸な目に遭った彼に同情している部分が強い。
一方的に怖がるのではなく、話を聞いた上で相手を気遣えるというのは貴重な才能だ。
それを理解しているチドリは、マリーに七段アイスを買って貰って上機嫌な八雲が戻ってくる気配を感じながら、湯呑みに口をつけて小さく笑みを漏らした。

第二百九十五話　稲羽郷土展

――まんぷく亭

第三の迷宮を攻略した翌日の朝。昨日の時点で次の迷宮が三年四組の〝稲羽郷土展〟だと聞いていた事もあり、メンバーたちは一体どんなダンジョンの造りになっているか想像して話し合っていた。

「俺たちの学校にも似たものがあった。中は展示系で、土器がいっぱい並んでたな」

「ほう。だとすると、そんな真面目なダンジョンは初めてじゃないか？　物語をモチーフにした体験型アトラクション、合コン、お化け屋敷と続いたからな」

鳴上が現実世界の文化祭を思い出しながら話せば、朝からすき焼き定食を食べていた真田がややからかう様子で返す。

ダンジョンも四つ目となると慣れも出てくるのか真田の言葉には余裕が見えた。

無論、中に入れば気を引き締めるだろうが、今はどんなところか予想を話し合っているだけだ。

作戦前のミーティングでもないため真田の軽口を美鶴も諌めるつもりはなく、八十神高校側のメンバーたちがただ恥ずかしそうに顔を俯かせていた。

「いや、ほんと合コンとか……すんません」

「合コンは花村君のせいだけど……田舎の悪ノリでゴメンなさい」

花村と雪子が同時に謝罪を口にするが、それには二つの学校の文化祭における出し物の系統が関係していた。

月光館学園と八十神高校の文化祭の出し物を比較すると、八十神高校の方が祭り色が強い。

食べ物屋にヨーヨー釣りや射的といった出店系、合コン喫茶は八十神高校でも浮いているが、とりあえず文化部を中心とした芸術関連の出し物よりも普通のお祭りのような出し物が圧倒的に多いのだ。

対して、月光館学園は都内の有名進学私立であるため、外部へのアピールとして文化部の出し物には力を入れており、クラスの出し物も

休憩所は認めずに最低でも何かしらの展示発表などをさせている。
花村たちは月光館学園のメンバーらとの雑談でその話を聞いていたため、比較すると月光館学園の方が学び舎での催しとしては正しい姿だと感じていたのである。
ただ、二つの学校でそれぞれ特徴が異なるのにはしっかりと理由が存在していた。
「まぁ、うちの文化祭は高校の行事ではなく、人口の少ない田舎故に地域のイベントとしての意味合いが強いですからね」
そういってトーストをかじる直斗は稲羽市の抱える人口問題に苦笑を浮かべる。
八十神高校のある稲羽市は田舎だ。普通の田舎ではなくドが付くほどの田舎なのだ。
今でこそジュネスができたので色々な物が手に入るようになったが、それまでは昔ながらの商店街で買い物するしかなく、若者はわざわざ隣の沖奈市まで行って買い物をしていたほどである。
田舎の不便さに嫌気が差した者たちは地元を離れて進学や就職してゆく。
おかげで過疎化が進み、人がいないせいで地域のイベントも年々規模が縮小傾向にあった。
高校のある市自体でそういった問題を抱えているからこそ、イベントに飢えている地域の人々が高校の文化祭にも参加してくるため、どうしても幅広い層を楽しませる出し物になりやすいのだ。
「我々の方は次年度以降の入学希望者へのアピールを含んでいる。有里が総合芸術部という文化部に所属している事もあって、文化部の活動への注目度が高いのでな。どの部も張り切って展示や発表を行ない、おかげで文化祭を見て進学を決める者もいるんだ」
一方、美鶴たちの通う月光館学園は有名進学私立として有名で、元から定員割れなど起こさぬほどに受験生が集まっている。
だがその分、受験の成績上位を取るからと入学者の基礎学力は上昇傾向にあり、優秀な人材が増えた事で部活動のレベルも引き上げられていた。

おかげで運動部も文化部も周囲から大きく注目されており、一般の人間にも解放している文化祭は文化部の大きな発表の場として機能している。
一般の学生と運動部はお祭り的な出し物を、文化部や休憩所狙いのクラスなどは真面目な研究発表を、そんな風に学生のタイプによって月光館学園では出し物が選ばれる傾向にあった。
直斗と美鶴の話からそれぞれの学校の事情について聞いた者たちは、そういうものなのかと感心したように頷いて食事を続ける。
いくらこの世界で初めて真面目な内容と思われる出し物だとしても、だからといってダンジョンまでまともな造りになっているかは分からない。
それが分かっているからこそ、メンバーたちは朝食の時間をゆっくりとすごし、この後に待っている探索に向けてコンディションを整えてゆくのだった。
――稲羽郷土展・第一夜
第四の迷宮に挑むにあたり、バックアップは風花とりせが務める事になった。
これは、再び八雲がエルゴ研脱走時の姿に成長した場合、彼を制御出来るのがアイギスとチドリしかいないためだ。
彼の記憶通りの姿をしているのはアイギスしかいないが、バックアップを担当していたチドリの声にはしっかりと反応を返している。
よって、何かあればチドリの声とアイギスで彼に干渉し、狙われる可能性のある美鶴を逃がす時間を稼ぐ予定だ。
とはいえ、ベルベットルームの住人に聞いても、八雲が限定的な成長を見せたのはあくまで状況が過去の記憶と重なりすぎていた事が原因なので、次に成長するなら元の大人の姿に戻るだろうと話していた。
そういう事ならば無駄に警戒して疲れる必要もないので、出発前に風花が借りていたカードホルダーを八雲に返したが、彼はそんな物を貸した覚えがないため不思議そうにお腹のポケットに仕舞っていた。
バックアップのメンバーが配置につき、全員が装備を整えると三年

四組の教室の扉を潜る。
　これまで同様ダンジョンの内装は何かしらのテーマがあると思われていたが、いざ入ってみるとメンバーの目に入ってきたのは風車や七五三縄に太鼓などで飾り付けられた、まるで神社のお祭りのような光景だった。
「お祭り？　わぁ、すごいね。わたし、お祭りだいすき！　お店いっぱいあるかな？　チョコバナナにリンゴ飴、あとベビーカステラははずせない！」
「ふふっ、玲ちゃん少し元気でたみたいだね。昨日のダンジョンの後は疲れてたみたいだから良かった」
　お化け屋敷のダンジョンで精神的に疲弊していた玲を心配していた雪子は、お祭りの風景を見て瞳を輝かせている玲に笑みを向ける。
　流石に玲ほどはしゃいでいる訳ではないが、ホラーが苦手な千枝やゆかりと言ったメンバーも、明るい楽しげな雰囲気の造りである事に安堵しているようだ。
　しかし、どうしてこのダンジョンの内装はお祭りなのか。出し物のテーマから外れているのではと天田が首を傾げる。
「でも、なんでお祭りなんでしょう。ここ、あくまで〝郷土展〟ですよね？」
「郷土展はすなわち現地の文化を広く伝えるものであります。文化の違いが色濃く出るのは祭祀である、とも言われますので、ここは祭りを模した造りになっているのではないでしょうか？」
　日本と海外では大きく祭りの形式が違うように、文化によって祀る対象だけでなく祭りの意味も異なっている。
　だからこそ、ここもそれを意識した内装になっているのではとアイギスが言えば、天田も納得したのか感心して頷いていた。
　もっとも、ここが八十稲羽の文化に沿ったものなのかと考えると疑問が残る。
　神道の家系である七歌から見れば、色々とごちゃ混ぜになっていて土着信仰にしても統一感がないと感じる。
　初詣に盆やハロウィンにクリスマスと何でも行なう日本らしいと

言えば日本らしいが、ここはきっと〝祭り〟という大雑把なイメージだけで作られている可能性が高い。
ただ、そんなことが分かるほどの知識を持っている者が七歌と湊しかないため、花村などは祭りの雰囲気に対してどこか楽しそうに呟いた。
「祭りの中の祭りだな……」
「いや、なに急に男の中の男みたいな事いってんの？」
「文化祭って祭りの中にある祭りだからだよ」
「ああ。ま、最後の迷宮だしここが中心なのかもね」
急に何を言っているんだと千枝が尋ねれば、花村は深いのか特に考えていないのか分かりづらい言葉を返す。
むしろ、それに対する千枝の返しの方がダンジョンの真相に触れていそうではあるが、本人は特に気にしていないようで、ここが祭りならばと笑顔で口を開いた。
「てか、お祭りだし御神輿とかあるかな？」
「千枝、御神輿かつぐの好きだったよね」
「うん。お菓子貰えたからね！」
稲羽市の祭りでは御神輿を出しており、子どもたちは子ども神輿を担げば参加賞のお菓子を貰う事が出来た。
それを思い出して千枝は御神輿があるか気になったようだが、当然、この世界で御神輿を担ごうとお菓子をくれる相手などいない。
「完二も御神輿あったら担げよ。お前似合いそうだし」
「花村先輩、担ごうにもフンドシがねぇっス」
「いや、どこまで本気でやる気なんだよ……」
完二は「やるからには全力で」というタイプの男だ。
別にフンドシじゃなくても股引きなどでも良いのではとも思うが、本人は御神輿をフンドシスタイルで担ぎたいらしい。
後輩のあまりの本気っぷりに言いだした花村が思わず呆れていると、彼らの話を聞いていた善が興味を持ったらしく近くにいたゆかりや鳴上に質問をぶつけた。
「御神輿にはフンドシがいるのか？」

「あー、そういうお祭りもあるにはあるね」
「フンドシ姿の男たちが水を掛け合ったり、棒に登ったり、御神輿の上で踊ったりするんだ」
「なるほど、外でやっている文化祭とは随分趣が異なるようだ」
稲羽郷土展の祭りは本格的な祭祀の形を取っている。対して、校舎の文化祭はあくまで祭りの中の出店要素を切り取ったものだ。
どちらが正しいという訳でもなく、単純に祭りの内容が異なるだけだが、善は祭りにも色々な種類があると聞いて隣にいる玲と一緒に興味深いと頷いていた。
祭りの雰囲気に当てられ調子が戻りつつあるそんな二人を見ながら、ここがお祭りならそれに合った服装を着るべきではと考えた雪子は、アイギスに抱っこされている八雲に視線を向ける。
「ねぇ、八雲君に法被とか着せる？　あと、赤ちゃんってフンドシ巻いても大丈夫かな？」
「う、うーむ。赤ちゃんは粗相しちゃう事があるからやめた方がよくない？」
赤ん坊がフンドシを締めないのは、肌が弱い事、お尻を出してお腹を壊す可能性がある事、単純に粗相をしやすいからといった理由が挙げられる。
雪子に言われてフンドシを締めた八雲を想像した千枝は、確かにお尻を出して可愛いかもと思ったが、粗相をしたら大変だからと考えて反対した。
「八雲さんは食べた物を全てエネルギーに変換するため、排泄行為を一切しないので粗相の心配は無用です」
「あい！」
しかし、そんな千枝の言葉にアイギスは自信を持って大丈夫だと返す。
オムツを穿かせてはいるが八雲は排泄行為を全くしないためだ。
それなら普通のパンツを穿かせても良いのではと思うところだが、パンツよりもオムツでお尻が盛り上がっている方が可愛いからと現在もオムツスタイルで来ている。

八十神高校側の女子メンバーに限らず、月光館学園側の女子メンバーも中々に業が深かった。
《へぇ、じゃあ私と一緒でアイドル出来るね。ウンチもオシッコもしないってアイドルになる必須条件だから！》
「あーう」
「この前トイレから出てきたよ、と八雲さんが仰っています」
《女の子は身だしなみに気をつけるものなの。だから、トイレの鏡とかで髪型が崩れてないかチェックしたりするのよ》
「おー」
りせが通信で会話に参加してくると、八雲は話を聞いてそうなのかと頷いている。
きっとアイドルとしてのイメージを守るため、りせは色々なツッコミに対する返答を予め用意しているのだろう。
小さな事で彼女のプロ意識を見た女性陣は心の中で拍手を送り、雑談はここまでにしようと通路の先へ視線を向け歩き出す。
迷宮も四つ目となると出てくる敵もかなり強力になっている。
その分、警戒しながら進まなければならないが、入口から真っ直ぐ進んで開けた場所に出たとき、メンバーの視界に地下への階段が見えた。
「おっと、まさかの入ってすぐに階段を発見伝」
「うん。でも、堀の向こう側だね」
順平と綾時が軽い調子で言葉を交わす。
通路を抜けて大きな部屋に出ると地下への階段を見つける事が出来たが、階段があるのは堀を挟んだ向かい側だった。
堀の幅はジャンプして越えられるようなものではなく、近くには橋も船も存在しない。
となると回り道をしないといけない訳だが、ここで真田が閃いたと声をあげた。
「おい、有里を向こう岸に投げてみたらどうだ？」
「そうか。お前を堀に落とせばいいんだな。明彦」
「違う！　おい、岳羽も九頭龍も押すな！　本当に落ちるだろうが！」

真田が急に赤ん坊の八雲を投げて向こう岸に渡そうと言いだした事で、女性陣は冷たい視線を彼に向けた。
無論、彼はただ向こう岸に渡れるか試そうとして言ったのではなく、八雲を向こう岸に渡してから如意棒など不思議アイテムで橋を架けて貰えばと思って意見したのだ。
しかし、真田はこれまで何度も赤ん坊の八雲に冷たくあたっている。
未成年ではあるが赤ん坊と比べればいい歳した大人だというのに、主に女性陣が八雲を甘やかしてばかりいるからと厳しく接していた。
そんな前科があるせいで真田の考えの裏は読んで貰う事が出来ず、美鶴の指示通りにゆかりと七歌で真田の背中を押して堀に落とそうとした。
もっとも、本人の必死の抵抗もあって未遂に終わるが、落とされまいと全力で抵抗したせいで酷く消耗した様子の真田に、直斗がやや呆れた表情で声を掛けた。
「ショートカットした場合、全員が渡りきる前に敵が急に出現したら孤立や分断される事になります。確かに簡単に進めるに越した事はありませんが、ここで時間を掛けても現実世界に影響はないようですし。安全策で行きましょう」
「あ、ああ、分かった……」
試せる事は何でも試すべき。そういった考えからの発言だったが、残念な事に言葉が足らなかった。
アイギスは絶対に八雲は渡さないと強く抱きしめて距離を取り、真田とアイギスの間には女性陣が立っている。
消耗した今の状態で八雲を奪う事など出来ないし、そもそも無理矢理に八雲を投げ飛ばそうと考えていた訳でもない。
よって、真田は直斗の言葉に頷いて返すと、黙って他の者たちの後に続いて進む事にした。
仲間から堀へ落とされそうになった真田に他の男子らは同情的な視線を送りつつ、階段のある通路へと繋がる道を探してさらに進む。
すると、いくつかの部屋を抜けていった先で、〝封〟と書かれた札

が貼られた扉を発見した。
押しても引いても扉は開かず、よく観察してみれば扉の隅の方に文字が書かれている。
〝聖なる炎を神の御許に奉れ、資格無きものには開扉を封ず〟
お化け屋敷で見たような難解な暗号ではなく、言葉自体は読めば理解出来る。
ただ、聖なる炎や神の御許など分からない単語がまじっているせいで、文章を読んだ者たちは首を傾げた。
「聖なる炎ってなんだ？」
「火炎スキル、使ってみる？」
「ああ、頼む。中村」
分からないなら関係がありそうなものを試してみるしかない。
聖なるの部分は一致しないものの、炎と書いてあるので火炎スキルが関係するかもしれないとあいかはペルソナを呼び出し扉に向かって火炎スキルを放つ。
くノ一型のモチヅキチヨメが燃える手裏剣を投げれば、扉に刺さったまましばらく燃えていたが、しばらくしても何も怒らず最後は消えてしまう。
扉の方も燃えて煤けたりもしておらず、どうやらペルソナの火炎スキルとは無関係だと知る事が出来た。
「どうやら〝聖なる炎〟ってやつをまず見つけないといけないらしいな」
「うん。面目ない」
「中村のせいじゃないさ」
もしかしたら、と僅かに期待していただけに、火炎スキルが不発に終わるとあいかは申し訳なさそうな顔をした。
けれど、元からそれで上手く行けばいいという程度に考えていた他の者にすれば、やはりそう簡単にはいかないかと確認出来ただけで十分だった。
謝罪してくるあいかに鳴上が気にするなと返し、まだ続いている通路の先を目指そうと促す。

風花やりせも近くに熱反応があると言うので、奥へと向かえば轟々と燃える大きなかがり火を見つけた。
「あ、火があったよ！　すごく大きいね！」
「まー！」
「いけません、八雲さん。近付いては危険です。それに子どもが火を使うとおねしょをしてしまうという言い伝えがあります」
火を見つけて玲が楽しそうに近付いていけば、八雲も近くで見たそうに身体を乗り出す。
だが、赤ん坊が火に近付くと危険なので、アイギスは彼を抑えるように抱き直した。
八雲が勝手に歩き回らないのなら他の者も安心して調べる事が出来る。薪も足されずどういった原理で燃え続けているのか、かがり火の台ごと移動させる事は出来るか。
色々と調べた結果、かがり火自体の移動は出来ないという事が分かり、周囲を警戒してくれていたメンバーに直斗が情報を伝える。
「どうやらかがり火自体を移動させる事は出来ないようです。なので、何かしらに火を移し、先ほどの扉まで持っていくしかないと思います」
「ま！」
「それは……ライターオイルですか？　流石に油を撒いて引火させるのは危険だと思いますよ」
火を持っていくと聞いて、八雲はお腹のポケットから小さな缶を取り出して直斗に渡した。
そこには補充用ライターオイルと書かれており、確かに扉からかがり火まで油を撒いて引火させれば簡単に終わりそうではあった。
ただ、失敗すればダンジョンの中で火災が発生し、下手をすると自分たちにも危険が及ぶかもしれない。
そんなリスクは負えないため、直斗は八雲の気持ちは嬉しいと頭を撫でてからライターオイルを返した。
「わんわん！」
「むむむ、犬っころが棒きれを拾ってきたクマ」

「丁度良い。そいつで松明を作れば何とか持っていけんだろ」
「なら、私のマントの切れ端を使うといい」
コロマルが見つけてきた木の棒を荒垣が受け取り、善がボロボロだったマントの一部を破いて渡せば、木の棒に布を巻いただけの簡素な松明が完成した。
あまり上等な造りとは言えないため長くは持たないだろうが、かがり火から扉までくらいなら何とかなりそうだ。
荒垣が松明を持つ係に決まれば、他の者たちは移動経路の確保と敵への警戒に当たる。
何故だかお腹のポケットから召喚器を取り出した八雲が気になるが、荒垣が慎重に進んで扉を目指せば、
「ちょわ！」
「お、おい!?」
アイギスと八雲の前を通過する瞬間、八雲が召喚器を荒垣の持っている松明に向かって引き金を引いた。
どうやら彼が持っていたのは以前見せてきた召喚器型の水鉄砲だったようで、勢いよく飛び出した水が松明を襲い、そのまま聖なる炎は消えてしまった。
まだかがり火の前から出発したばかりだというのに、いきなり味方から妨害を受けるとは思っていなかった荒垣は、困惑気味に消えた松明と八雲の間で視線を往復させる。
他の者たちも流石にここで八雲が悪戯してくるとは思わなかったらしく、一度かがり火の前に戻るとラビリスが叱りつけた。
「コラ、大事なもんに悪戯したアカンやろ。荒垣さんにちゃんと謝り！」
「なーう」
「え？　いや、荒垣さんはええの。これ持ってかんと扉が開かんから」
「いー！」
叱られた八雲は反論してからだだをこねるように激しく動いている。
別にアイギスの腕から逃げようとしている訳ではないが、とりあえ

ずラビリスに叱られた事が不満なのは伝わった。
ならば、幼いなりに彼にも言い分があるはずなので、どういった会話をしていたのか美鶴がメティスに尋ねた。
「八雲はなんと言ってるんだ？」
「えっと、直斗さんがダメって言ったのに危ない事をしようとしているから消したらしいです。ただ、荒垣さんだけ良いなんてずるいとも言ってます」
「……なるほど」
八雲は自分なりに他の者たちの手助けをしようと考えていた。
ただ、先ほど直斗に危ないからゴメンねと断られたので、きっと安全性が確保された他の手段があるのだと彼は思い込んだ。
そうして見ながら待っていれば、荒垣が粗末な松明を持って視界を横切ろうとしている。
他の人のためにも危ない事はさせられないと消火してみれば、予想外のお叱りを受けたので八雲は不満に思っていた。
これはどう説得したものかと顎に手を当てたまま美鶴は考え込み、どうにか八雲にも納得して貰おうとしばらくその場で足止めをくらうのだった。

第二百九十六話　赤ん坊との付き合い方

――稲羽郷土展・第一夜

コロマルが拾ってきた棒と善のマントの切れ端を利用して作られた松明により、かがり火の炎を持って移動出来るようになった。

とはいえ、お粗末な出来という事もあって炎は簡単に消えやすく、切れ端に火を移しているだけなので長時間持っておく事もできない。

案の定、開くために聖なる炎とやらが必要な扉も通る事が出来たが、扉を潜って少しすると切れ端が燃え尽きて火が消えてしまった。

炎が消えると潜った後でも扉は開かなくなるので、今回のダンジョンではダンジョン内に点在するかがり火の位置と炎が必要な扉の位置を考えて行動する必要があるだろう。

だが、無事に一つ目の扉を潜る事が出来たメンバーたちは、今現在、不機嫌そうな赤ん坊の対応に頭を悩ませていた。

「おいおい、めっちゃガム噛みまくってるぞ」

そう口にした花村の視線の先では、アイギスに後ろから抱えられるように抱っこされた八雲がいた。

彼は現在ムスッとした顔でガムを噛んでおり、お腹のポケットから取り出して次々と追加するため、今では食事中のハムスターのように頬が膨らんだままガムを噛んでいた。

赤ん坊に似つかわしくないこの行動は、危ないからダメだとかがり火への接近を禁止されたというのに、後で他の者たちがかがり火から炎を移した松明を持って歩いていた事が原因だ。

どうして自分はダメで他の者はいいのか。炎の扱いで言えば炎の身体を持っているフェニックスを宿している八雲の方が優れている。

しかし、他の者たちは相手が赤ん坊なので、〝常識〟という基準で他の赤ん坊と同じように扱った。

その結果、誰一人として彼を納得させる事が出来ず、今現在、八雲は他の者を嘘つきと認定して敵視までしていた。

シャドウに対する恐怖心が一切無い八雲は他の者よりも行動が速い。

赤ん坊とは思えない身体能力に加え、湊が集めていた不思議な道具も使って敵を倒す事が出来る。
筋力で言えばチーム最弱だろうが、戦力してならトップクラス。
そんなアンバランスな力を持った赤ん坊は、他の者が対応について悩んでいると妙な表情になってからクシャミをした。
「はっくちゅんっ」
「ちょおっ!?」
赤ん坊という事もあって彼は口を手で押さえたりはしなかった。
だが、口の中で食べ物を噛んでいる状態でクシャミをすれば、当然クシャミの勢いで食べていた物は口から出てしまう。
小さい口の中いっぱいに放り込まれていたガムは勢いよく彼の口から飛び出すと、そのまま正面の直線上にいたラビリスに向かって飛んでゆく。
危険に気付いたラビリスはポニーテールを守るように頭を振って見せるが、咄嗟に出来たのはそこまでで跳んできたガムは彼女のスカートにベッタリと張り付いた。
別に彼の噛んでいたガム自体は汚いとは思わない。しかし、粘着力のあるガムが衣類に付いてしまうと処理が大変だ。
ポケットティッシュで掴んでガムを剥がしたラビリスは、ガムが付着した部分を確認して肩を落として溜息を吐いた。
「あー、アカンわぁ。後でちゃんと洗わんと……はぁ」
「すみません、姉さん。八雲さん、次からは口を押さえてクシャミをしましょうね？」
「いー！」
子どもにマナーを教えるときには、小さい頃からちゃんと教える必要がある。
幼い頃の習慣というのは大人になっても中々忘れず、逆にそういったまともな躾をろくに受けずに育つと、公共の場でも構わず大声で唾を飛ばしてクシャミをするような大人になってしまう。
八雲にそんな非常識な大人になってほしくないアイギスがしっかりと言い聞かせようとするも、八雲は知らないよとばかりにアカンベ

をして返した。
普段は聞き分けのいい賢い赤ん坊だというのに、どうしてそんな事をするのだろうとアイギスは困惑する。
すると、傍でそんなやり取りを見ていた七歌が顎に手を当て考えながら声を掛けた。
「いや、八雲君って普段はちゃんと手で押さえてクシャミしてたよ？菖蒲おば様も英恵おば様もそういったマナーはしっかり教える方だから」
「じゃあ、もしかして今のは……」
「うん。多分、わざとじゃないかな？」
クシャミした八雲の鼻や口をセレブティッシュで拭いてやっていたアイギスは、八雲はわざと姉のスカートにガムを飛ばしたと聞いて驚く。
賢いこの子がどうしてそんな事をしたのか分からなかったのだ。
だが、他の者たちはすぐに先ほどの事が原因だと思い至ったため、年長者である美鶴が代表で彼を諌めた。
「八雲、確かに私たちの言い方が悪かった事は認める。だが、それは君の安全を考えての事だ。火はとても危険で、少し扱いを間違えただけでも大怪我してしまうんだぞ」
「んべー！」
「コラ、そんな事をしてはいけない。私たちは八雲が大切だから言っているんだ」
「やーの！」
美鶴が八雲の事を叱ろうとしても、八雲は話なんて聞きたくないと再びアカンベと舌を出した。
それでも諦めずに話を聞かせようとすれば、今度は身体を反転させアイギスに抱きつく形になってから自分の手で耳を塞いで相手の声を無視する。
成長した彼からも分かる通り、八雲の性格はとても頑固だ。
優しい事は分かるのだが、変なところで融通が利かないので、赤ん坊の時にこうなってしまうと誰もどうにも出来なくなってしまう。

美鶴の母である英恵がいればしっかりと対応出来るのだろうかと周りが悩んでいれば、呆れた様子で見ていた真田が八雲たちに近付くなり、耳を塞いで話を聞こうとしない八雲の頭に拳骨を落とした。
「ちゃんと話を聞け！」
「みっ?!」
相手が赤ん坊という事もあってかなり手加減したが、ボクサーの拳は硬くなっているため一般人のものよりも痛い。
急に殴られた八雲は驚いた顔をした直後、目に涙を溜めて殴られた部位を押さえている。
真田の事を怒りたいアイギスも、流石に目の前で八雲が泣き出しそうとなればそちらに掛かりきりにならざるを得ない。
なので代わりに美鶴がキッと鋭い視線で真田を捉えると、ついに手を挙げた相手にかなりの剣幕で近付いた。
「明彦、何てことをするんだお前はっ」
「お前らが甘やかすからこうなるんだ。いいか。叱るべきときはしっかりと叱れ。いざという時は体罰も必要だと認識しろ」
「自分の言葉の不器用さを棚に上げて、暴力を正当化するな。八雲に今すぐ謝罪しろっ」
赤ん坊は脳がまだ未発達で、理性より本能や感情を優先して行動する傾向にある。
成長していけばそういった行動は減っていくが、一歳にも満たない状態だと動物に近い部分があった。
それを考えると、上下関係を意識させてからと考えている真田の行動も間違いだとは言い切れない。
最初にどちらが上かを教え、その指示に従わなければ酷い目に遭うと覚えさせれば、後は特に手を出さずとも自然と話を聞くようになる。
ただ、児童虐待などに厳しくなっている現代においては、真田のような昔ながらの躾け方はあまり理解されない。
真田の行動に一定の理解を示している男子たちも、流石に女性陣の前でそれはまずいだろうと苦い表情だ。

メンバー内では年長者になる美鶴と真田が八雲の教育方針で言い争っていれば、痛みに耐えきれなくなった八雲が声をあげて泣き出した。
「――――――っ」
瞬間、あまりの声量に全員が耳を押さえる。
八雲を抱っこしてあやしていたアイギスは耳を押さえる事が出来ず表情を苦悶に歪ませるが、他の者たちは八雲の泣き声で身体がビリビリと衝撃を受けている事に気付く。
音というのは空気の振動で伝わる物なので、人の声でも衝撃を与える事が出来ることは理解出来る。
だが、その場にいる者たちが動けなくなるレベルの泣き声というのは流石に想定外だったため、分隊長を命じられている七歌たちは、ここでシャドウが現われたらまずいと焦り出す。
「ちょっと、流石にこれは想定外なんだけど。てか、いま敵に襲われたら対処出来ないっ」
「姉さん、兄さんと一緒に隅の壁際まで移動してください！　敵の来る方向を絞らないと守り切れませんっ」
今の七歌たちは聖なる炎を持って潜った扉のさらに次の部屋にいる。
そこは堀のある開けた部屋になっているため、今の場所では正面と背後の両側から敵がやって来る可能性があった。
八雲の泣き声のせいでまともに戦いづらいというのに、さらに挟撃など受ければ全滅してしまう。
メティスの指示を聞いたアイギスは頷いて返すと、抱っこしている八雲を上下に揺すりながら部屋の隅まで移動した。
これでどうにか他の者たちは二人を守る配置に着く事が出来るようにはなったが、今現在も八雲は信じられない声量で泣き続けている。
彼の声がジャミングになっているのか風花とりせからの通信も聞こえず、このままではどうしても敵の接近に気付くのが遅れる事になる。

一刻も早く八雲に泣き止んで貰うにはどうすれば良いかとメンバーたちが考えていれば、手に鎖付きのハンドアックスを持っていたチドリが大声でアイギスに話しかけた。
「アイギス、おしゃぶりかほ乳瓶を咥えさせて！」
「は、はいっ」
泣いている赤ん坊の口を押さえて無理矢理に黙らせる事など出来ない。そも、真田に殴られた痛みと驚きで泣いているのだから、そんな事をしては可哀想だろう。
ただ、今の状態は敵に気付かれたり、味方がまともに戦えなかったりと非常に危険だ。
そこでチドリは他の物で気を逸らしつつ、物理的に口を塞ぐ方法としておしゃぶりやほ乳瓶を挙げた。
八雲のマフラーの中には色々な物が入っているので、そこと繋がっているアイギスのリストバンドなら希望の品を簡単に取り出せる。
これで泣き止んでくれればいいのだがとほ乳瓶を取り出したアイギスは、泣いて口を開けている八雲にほ乳瓶の先を噛ませた。
急に口に物を突っ込まれた八雲は僅かに警戒するも、それがほ乳瓶の先だと気付くとすぐに吸い付く。
一生懸命に吸い込めば中から桃ジュースが出てくるので、涙をポロポロと溢しながら飲んでいた。
「はぁ、良かったです。チドリさん、ありがとうございました」
「別に良い。けど、そっちの馬鹿は反省して。こんな小さい身体でも保持してるエネルギー量は湊と変わらないんだから」
赤ん坊の状態でもペルソナが呼び出せるという事は、一つ間違えれば街一つを灰燼と化す事もあり得るという事である。
この閉じた世界でそんな力が発揮されれば全員が時空の狭間に投げ出されるかもしれない。
相手をただの赤ん坊として叱りつけた真田は、チドリの指摘で自分の行動が爆弾を殴りつけたようなものだと理解して顔を青くしていた。
「わ、悪い。考えが足りていなかった……」

「謝るなら本人に謝って。もしウチで同じ事してたら東京湾に沈められてるわよ」
チドリが言ったウチというのは桔梗組本部の事だ。八雲が赤ん坊の状態で桔梗組本部に行った事はないが、夏祭りなどで組員にも顔を覚えられているので、八雲が湊の関係者だと認識されている。
一人娘の桜が八雲をとても可愛がっていた事もあわせて考えれば、他所の人間が八雲に手を挙げるというのは組への宣戦布告とも言える。
真田本人にそんな認識は当然なかっただろうが、彼の妹の美紀も八雲を非常に溺愛していたので、湊との記憶を失った現在でも赤ん坊に手を挙げた兄を許す事はないだろう。
ここが異世界で良かったなとチドリが釘を刺せば、真田は青い顔のまま頷いて、すぐにアイギスと八雲の許にいって頭を下げていた。
「悪い。そんなに強く殴ったつもりはなかったんだ。本当に悪かった」
「むー！」
ほ乳瓶を一生懸命吸っていた八雲は、真田が謝りに来ると嫌そうな顔になり、右手でほ乳瓶を持ったまま左手で取り出したピコピコハンマーで真田の頭を叩いている。
本来、そういった暴力的な行為をしたときは周りの者が諌めてやめさせているが、今回は先に手を出した真田が悪い。
なので、真田本人も頭を下げたまま甘んじて殴られているし、泣き止んで一安心しているアイギスも一切止めようとしていない。
ただ、高校生が赤ん坊に怒られ玩具で殴られているという残念な光景を見ていた天田が、ある事に気付いて慌て始めた。
「あ、あの、あれって玩具じゃなくてシャドウを殺してた破ン魔―じゃないですか？」
「ちょっ、マジじゃねーか!?　アイちゃん、その武器はヤバいからやめさせろ！　ハマの効果が発動したらマジで真田さんが死ぬぞ！」
順平の声が聞こえるなり、今まで黙って殴られていた真田は地面を転がるように回避行動を取った。

彼は既に十回以上殴られていたが、武器の特殊効果が発動すれば肉体のダメージなど無視して死亡する。
よく無事だったなと全身に冷や汗を掻いて真田が八雲を見上げれば、本人はまだ殴り足りないとアイギスに近付くよう催促していた。
もっとも、実際は破ン魔―の原型になったただの玩具なのだが、他の者たちはその事実に気付くまで、八雲が本気で真田を殺そうとしていたと勘違いし修羅場に陥っていたのだった。
＊＊＊
八雲が泣き止んでから一同が先へ進むと、聖なる炎が灯っていないかがり火の台をいくつも見かけた。
近くに炎はなかったので、どうやら別の場所から持ってきて点火する必要があるらしい。
元となる炎を探しつつ進むと今度はひょうたん型のＦ．Ｏ．Ｅを見つけたが、通信が回復した風花によると相手は一歩も動いていないとか。
八雲が泣いたときにはフロアにいたシャドウたちが何故か消滅したので、一緒に消えないかと思ったらしいが、そこまで上手くはいかず敵は健在。
しかし、動かないのであれば近付かなければいいだけだ。
もしも急に動いて襲ってきたときの事を考え警戒しつつ、聖なる炎を探して移動する真田が途中で口を開いた。
「はぁ……結婚して子どもが一人か二人いる家庭を作る。そんなぼんやりとした将来の事を考える事もあったが、結婚してもしばらく子どもはいらないな。育てられる気がしない」
「そりゃ、お前がガキだからだろ。ガキにガキの世話は無理だ」
普段はこんな話題に興味のない真田が急に話し始めたのは、先ほど八雲を叩いて泣かせてしまった事が原因だろう。
これまで八雲は一度も泣いたりしていなかったので、赤ん坊の世話をしたことがない真田は聞いていたほど育児も難しくないんだなと認識していた。
だがそれは大きな間違いで、躾と称して頭を叩けば八雲も普通の赤

ん坊のように泣き出してしまった。
泣き声のレベルは普通とは言い難かったが、そも、真田の拳が赤ん坊を殴るにしては強かった事も泣いた理由の一つである。
彼がボクサーであったこと、八雲がシャドウ相手でも果敢に挑んでいく命知らずだったこと、いくつもの要因が重なって強く殴られた。
八雲は我慢強いだけで痛みに鈍感な訳ではない。そのため、殴られた痛みと驚きで普通の赤ん坊のように泣き出した訳だが、事情を理解していない幼馴染みに荒垣が呆れた様子を見せると、真田はムッとした表情で反論した。
「なら、美鶴や九頭龍は大人だと？」
「大人の定義にもよるが、ここにいる男連中よりは大人だろ」
言いながら荒垣は自分たちの周りを歩いている男子の姿を見渡す。
真田ほどガキかと聞かれればそこまでではないと答えるが、比較的大人と言えそうな鳴上ですら女子に比べれば年相応でしかないと荒垣は思っている。
この世界にいる女性陣は妊娠も出産もした事はないが、八雲を見る眼差しや接し方の端々に母性を感じるのだ。
何があってもこの子は守る。絶対にこの子は助けなければならない。
そんな、赤ん坊に対する深い愛情と強い決意を見せられれば、誰だって女性陣の方が大人だと言いたくもなった
しかし、荒垣のその言葉に異議ありと話が聞こえていた花村が近付いてくる。
「いやいや、そいつは聞き捨てならないっす。普段から肉々言ってる里中に比べりゃ俺や相棒の方が断然大人でしょ。俺ら食べれるもんは作れますし」
「そういう意味じゃねぇよ。自炊できなくても親にはなれるしな」
自分たちの方が料理だって出来ると得意気な花村は、どうやら本気で自分たちの方が千枝よりも大人だと思っているようだ。
家事は出来た方が良いと思うが、料理が出来ないからと言って親になれない訳じゃない。

そういった部分を分かっていない内は彼も大人とは言えないだろうと思いながら、荒垣はまだまだガキな男子たちの話を聞いて時折呆れつつ、ダンジョンの構造把握と聖なる炎探しに精をだすのだった。

第二百九十七話　マッスル

――稲羽郷土展・第一夜

通る際に聖なる炎を持っていなければならない扉に阻まれ、聖なる炎を探していた一同は、炎が燃えさかるかがり火から松明で炎を運び、炎が燃えていないかがり火の台に炎を移して回った。

炎を移したおかげで新たな中継地点が出来、燃焼時間に難のあった松明でも新たなかがり火に炎を移すことが出来た。

そうして、何とか元来た道の途中にあった封印された扉を潜ることが出来たのだが、その頃になるとアイギスに抱っこされた八雲がウトウトと船をこぎ始めていた。

「八雲さん、眠いのなら眠っていいですよ」

「みぃ……」

背中をトントンと優しく叩きながら小刻みに上下に揺らしてあやすアイギス。

ほとんど瞼が降りていた八雲は、一定のリズムで身体が揺れるとリラックスしたのか、そのまま瞼を完全に閉じて小さく寝息を立て始めた。

小さな右手でアイギスの服を掴みながら寝る姿は、ここが危険なダンジョンだと忘れてしまうくらいに穏やかだ。

気持ちよさそうに寝ている八雲を見てアイギスも微笑むと、リストバンド経由で小さな毛布を取り出し、メティスに手伝って貰いながら寝ている八雲を包む。

聖なる炎が燃えるかがり火もあるので、このダンジョンは比較的暖かいが油断は禁物だ。

寒くないようにしっかりと毛布で防寒対策し、さらに何かに包まれることで赤ん坊は安心感を覚えるため、こんな場所でも八雲が気持ちよく眠れるように手配する。

しっかりと毛布で包んでから抱っこ紐で固定してやれば、アイギスはこれで大丈夫だと満足げに頷いた。

「泣き疲れた事もあって、ぐっすり眠っているようであります」

「そうか。泣き疲れてしまったのでは無理もない。アイギスは後方で八雲を休ませてやれ」
アイギスが八雲が深く眠っていることを報告すれば、美鶴もそうかと頷いて彼女を隊列後方へ向かわせる。
その際、八雲が泣き疲れたという部分を強調して話していたが、二人は数瞬だけ真田の方へ視線を向けながら口にしていた。
二人の視線の意味を理解した真田は非常に居心地が悪そうだ。
ただ、ここでムキになって泣き疲れた事だけが原因じゃないと反論すれば、二人の傍で冷たい視線を向けてきている女性陣から総攻撃にあうに違いない。
八雲からガム攻撃を受けて怒っていたラビリスでさえ、真田の行動は躾ではなく暴力だと批難していた。
他の女性陣はもっと露骨で、赤ん坊を殴るなんて人として最低だと敵意を向けてきている。
このままでは危険なので、また八雲が目を覚ましてから彼のご機嫌取りをするように男子からアドバイスを貰い、そのまま大人しく進んでいると広い部屋に出た。
「む、これまでのとは色違いのF．O．Eがいるぞ」
ここに来るまでに見た瓢箪型のF．O．Eは緑色をしていた。
こちらから近距離まで接近しない限りはその場から動かないものの、聖なる炎が燃える松明を持っている時だけは逃げるように離れて行っていた。
しかし、新たに見つけたオレンジ色の瓢箪型F．O．Eは、不思議の国のアナタにいたトランプ兵のように決まった範囲を移動している様子だ。
相手の移動する範囲のエリアがなわばりのようなので、そこに入りさえしなければ対処は容易。
今は八雲が眠ったばかりなので、まわりが五月蝿くなってしまう戦闘を避けたかったアイギスにとっても敵の習性はありがたかった。
《一定の範囲を動いているようです。行動パターンが色違いのF．O．Eとは異なる可能性があるので、聖なる炎を持っているときには

特に気をつけてください》
「そうだな。前のやつは動かない、逃げるって消極的なタイプだった。なら、今度のやつは動く、向かってくるって行動的なタイプかもしれない」
色が違うだけでなく行動パターンにも違いがあるのであれば、対極な動きをする可能性が考えられる。
そう判断して鳴上が炎を持っているときは向かってくる事も考えておこうと伝え、一同は相手のなわばりを避けるようにして先へと進んでゆく。
色違いのＦ．Ｏ．Ｅがいるエリアになってすぐに見つかった封印された扉は、そこを抜けると最初に入ってきた場所から見えた地下への階段があるところに繋がっているらしい。
構造を把握する事が出来ても、ダンジョンのギミックに苦戦させられるせいでモチベーションの維持に苦労する。
それでも現われる枯れ木のようなシャドウやレスラータイプのシャドウを倒し、メンバーたちは火の着いていないかがり火に聖なる炎を移しながら、着実にダンジョンの第一層を攻略していった。
――稲羽郷土展・第二夜
「これは……」
聖なる炎を使ったギミックを攻略し、メンバーたちと共に何とか第二層へと足を運ぶことが出来た途端に鳴上が呟く。
上の階から降りて来たメンバーを待っていたのは、サウナを思わせる蒸し暑さと壁際に配置された灯籠に映るマッスルなシルエットだった。
マッスルなシルエットはボディビルの基本ポーズである〝フロントダブルバイセップス〟、〝アブドミナル・アンド・サイ〟、そして有名な〝サイドチェスト〟と一定の時間で形が変化している。
花村や荒垣は嫌な予感がするのかゲンナリしているが、自分の肉体を鍛え上げる事を趣味としている真田は興味深そうに「ほぉ……」と口元を歪めている。
別に真田に男色の趣味などないが、鍛え上げた筋肉を持つ者として

何か感じるものがあるようだ。
他のメンバーは急な温度の上昇に戸惑っているというのに、変な部分で楽しめるとは元気な物だと美鶴たちが思わず呆れていたとき、
「むぅ……」
アイギスの胸元から苦しそうな声が聞こえてきた事で、アイギスたちの視線が八雲に集まった。
「あ、姉さん、このままだと不味いです。兄さんが熱中症になってしまいます」
「アイギス、毛布を取ってから濡れタオルとかで冷やしてあげて」
今の八雲は薄手の毛布に包まれて抱っこされている。
ただでさえ赤ん坊は体温が高いというのに、日本の夏のような蒸し暑い場所で毛布に包まれていれば暑さで参ってしまう。
メティスと七歌に言われてアイギスは迅速に行動し、彼を包んでいた毛布をリストバンドに収納すると、今度は持ってきていた水筒の水でハンカチを濡らして八雲の首筋にあててあげた。
先ほどまで暑さで寝苦しそうにしていた彼は、濡れたハンカチが触れたときにはビクリと身体を揺らしていたが、すぐに慣れて気持ちよさそうに安定した呼吸を繰り返している。
汗で額に張り付いた前髪を整えてあげながら、アイギスはこれで大丈夫だと頷いた。
「状態、安定したようです。ですが、このフロアの環境は幼い八雲さんには厳しいかもしれませんね」
「起きたら大丈夫かもしれんけど、赤ちゃんやから体温調節が難しいかもしれんね。時々そうやって首のとこ冷やしてあげたり」
寝ている間の方が体温が高いので、起きてからならば問題ないかもしれない。
しかし、赤ん坊は自分たちが思っている以上に弱い存在だからと、ラビリスは妹にしっかり様子を見ておくよう言いつけた。
普段は色々と八雲に厳しく当たることもあるが、それは母親代わりであるアイギスが中々叱ることが出来ないでいるからだ。
そういった事がなければラビリスだって基本的には八雲にだだ甘

であり、常に彼の身の安全や機嫌を気にしている。
妹であるアイギスもその事を理解しているため、姉の言葉に頷いて返すとリストバンドから団扇を取り出して八雲を扇ぎ始めた。
女性陣がそんな風に八雲の体調を気にしているとき、雰囲気が変わったダンジョンについて考えていた花村が、近くにいた鳴上に少し青ざめた顔で話しかける。
「なぁ、相棒。お前、このフロアをどう見る？　俺は嫌な予感しかしねぇ」
「……そうだな。完二、前衛を任せていいか？」
「あ？　そりゃ、別に構わねぇッスけど、急になんスか？」
完二のペルソナは電撃系のスキルが使えるものの、その真価は敵に接近して繰り出す物理攻撃で発揮される。
その点を考慮してこれまでも戦闘になれば前衛を務めて来た訳だが、急に改まって前衛を頼まれた理由が分からない。
不思議に思って完二が聞き返せば、鳴上はどこか視線を泳がせながら理由を告げた。
「いや、そこの影みたいな敵が出るかもと思ってな。そういうのは完二の担当だろ？」
「なななな、何言ってんだコラァ!!　んなモンの担当になった覚えなんざねぇよ！」
そこの影というのは様々なポーズで肉体美をアピールしているマッスルたちの事だ。
月光館学園の者たちには理解出来ないが、八十神高校側のメンバーたちは完二救出の際に似たようなものを目にしたことで既視感を覚えている。
完二もそれを察したのか、葬り去りたい過去の話題を掘り返された気になって必死に反論する。
ただ、完二と鳴上たちのやり取りの意味を理解していないのか、純粋に戦闘の向き不向きで考えていた綾時が真面目な様子で口を開いた。
「でも、僕たちの中でパワータイプと言えば君か真田さんか荒垣さん

くらいだからね。湊がいればアザゼルとかで対抗出来るだろうけど」
「あー、確かにそうだな。瞬間的なパワーならともかく、タフネス込みなら先輩ら三人しかいねーな」
綾時がそれぞれの能力を元に隊列について意見を言えば、頭の後ろで腕を組んでいた順平も同意して頷く。
このままでは収拾がつかなくなるどころか、非常に嫌な予感しかしない敵の相手を押しつけられるかもしれない。
ならば、話の流れを修正して完二に押しつけてしまおうという打算があったにせよ、綾時に続いて順平にまで言われたことで、完二は自分が勘違いをしていたと思ったのか冷静さを取り戻した。
「ああ、なんだ。そういう事ならそう言ってくださいよ」
「悪い。陽介の言葉で誤解させたみたいだ」
「そっスね。花村先輩だけはガチで嫌なモン押しつけてただけッスけど」
「俺だけかよ！　ぜってぇ、伊織もそうだっただろ！」
実際に自分が悪いので花村も強くは否定出来ないが、自分だけが嫌な物を他人に押しつけるクズだと思われるのは納得がいかない。
ならばと自分と同類の臭いがした順平も巻き込んでみたが、男子の話し合いが一区切りついたと思った美鶴が声を掛けてきた。
「話はまとまったか？　なら、近接向きの者たちを前衛に配置した隊列で頼む。この暑さで体力の消耗も増えるだろう。休憩は小まめに取るぞ」
『了解』
結局、自分だけがクズ扱いされて終わってしまったが、花村もここでずっと話していても意味がないことは分かっている。
ただでさえ暑いのだ。このフロアにいるだけで体力も精神も消耗してゆくのだから、少しでも早く攻略して次のフロアに行くなり、ダンジョン自体を制覇してしまった方がいい。
メンバー全体の事を考えて言葉を飲み込んで隊列を組み、全員の準備が整ったところで階段前から出発する。
嫌な予感を感じている一部の男子たちとは対照的に、女性陣やコロ

マルなどはスヤスヤと眠っている八雲を見てモチベーションを維持できている。
　これなら、彼を守るために全員で団結して戦えるだろうと思って進んでいると、区画を仕切る扉が見えてきた。
　封印されていた扉とは異なり、前方に見えている扉は問題なく開く事が出来る。
　そうして、到着した扉を全員で潜ってみれば、入ってすぐにある堀の向こう側に異形の存在がいた。
《み、皆さん、そこにいるのはＦ．Ｏ．Ｅです！　完全に皆さんを狙っています。すぐに逃げてください！》
　校舎から索敵をしていた風花から慌てた様子で通信が入ってくる。
　彼女が伝えてきたＦ．Ｏ．Ｅとは堀を挟んだ向こう岸で自分たちを見ている敵のことだろう。
　顔には鬼を模した目元を隠す面を被り、右半身が赤、左半身が黄色と身体の左右で色が分かれている。
　それだけならば変わった配色だと思う程度だが、視線の先にいるものはボディビルダーのようにポーズを決めたフンドシ姿のマッスルであった。
　身体の表面が汗で光っているようにも見える敵は、面の下に見える口元を歪めて良い笑顔（グッドスマイル）を向けてきている。
　女性陣は生理的に受け付けず、男子たちは本能で逃げなければと判断した。
《その敵ヤバいよ！　普通の敵より速いみたい！》
「んなの見れば分かるっーの！　おい、全員急いで逃げるぞ！」
「花村君の言う通り、全員で逃げるよ。あっちに扉があるからそこまで走って！」
　花村と七歌の言葉に頷いたメンバーたちは一斉に走り出す。
　逃げるメンバーたちを追ってＦ．Ｏ．Ｅも走ってくるが、サイドチェストを崩さずに走ってくるので余計に恐怖を煽ってくる。
　堀を迂回してまで追ってくる筋肉の化物。
　踏み出した足が地面に着く度に筋肉は隆起し、右足が着いたときに

は右胸筋が、左足が着いたときには左胸筋がピクリと跳ねている。
そんな怪しげな筋肉の動きだけでも夢に見そうだが、フンドシで覆われた股間の盛り上がりもいつの間にか目に焼き付いてしまって離れなくなっている。
次の扉まで逃げる途中、最初にF．O．Eがいた場所の傍に地下へ向かう階段が見えた。
残念なことに間に堀があるのでフロアに来てすぐ次のフロアへと言う訳にはいかないが、目的地がハッキリした事は朗報である。
筋肉の化物に勝つ手段がない以上は逃げるしかないが、どうにかF．O．Eを回避か排除するかして次の階へ向かうことを心に決める。
「あと少しだ！　全員中に駆け込め！」
迫り来る筋肉の恐怖に足が止まりそうになるも、鳴上は仲間たちを鼓舞して扉まで走り抜けと叫んだ。
あの筋肉に追いつかれたらどんな目に遭うか分かったものではない。
その恐怖を糧に全員が隣の部屋まで走り抜けると、扉が閉まってF．O．Eが追って来ない事を確認し、全員が安堵の息を吐いた。
「あっぶなー！　なんとか逃げれたよー！」
「ギリッギリセーフだぜホントに！」
なんとか逃げ切れた事で、千枝と花村がかなり危なかったと改めて安堵する。
仲間たちもそれに全力で同意して頷き、一部の者は座り込んで呼吸を整えている。
周囲に敵の反応がないからこそ休めている訳だが、出鼻からこれでは先が思いやられるとゆかりが大きな溜息を吐いた。
「はぁ……あんなのがいるとか聞いてないんだけど。てか、次の階段があったのアイツの傍じゃなかった？」
「ええ、それは僕も確認しました。回り込むか倒すか。もしくは何らかの手段で足止めをするかですね」
逃げることに集中している者もいたが、ゆかりは僅かに周囲を見る

余裕があったようで、堀の向こう側に地下行きの階段がある事に気付いていた。
運動が苦手なはずの直斗はしっかりと見る余裕はなかったものの、職業柄少しくらいは周囲を見ていたことでゆかりと同じく階段を見つけていた。
自分たちを追って来ていた色んな意味で恐ろしいＦ．Ｏ．Ｅが階段の傍にいたので、そんな相手に気付かれないよう階段へ向かうのは非常に骨が折れそうだ。
とはいえ、倒さないのであれば何とか気付かれないよう階段へ向かうか、何かしらの方法で相手を足止めしてその間に階段を降りてゆくしかない。
一つ前のダンジョンでは精神をすり減らしたが、今回はそれとは違った意味で心身共に消耗しそうな予感がする。その事でゆかりらが溜息を溢していれば、呼吸を整え終わった玲がどこか楽しそうに善と話をしていた。
「ねぇねぇ、さっきのＦ．Ｏ．Ｅみた？　フンドシつけてたよ、フンドシ！」
「ああ、そのようだ。やはり、ここは祭りを模した迷宮のようだ」
玲が喜んでいるポイントがおかしい気もするが、確かに先ほどのＦ．Ｏ．Ｅはフンドシを締めていた。
股間部分がやけにもっこりしていたせいで直視することは出来なかったが、玲以外にも見ている者は何人もいた。
フンドシ野郎と呼びたくなる敵が出てきたと言うことは、下手をすると御神輿なども出てくるかもしれない。
ダンジョンのギミックにはこれまでも驚かされてきたが、今回はひと味もふた味も違いそうだと思っていたところで、アイギスが抱っこしていた八雲が目を覚ました。
「くぁ……あむ」
Ｆ．Ｏ．Ｅから逃げる際に激しく揺れたことが原因だろう。まだ眠そうな顔で目を覚ました八雲は、小さな口をめいいっぱい開いて欠伸をするなり、そのままアイギスの胸に口をつけた。

まだ半分寝ぼけているのか八雲は服越しに吸い付いており、もしかすると喉が渇いているかお腹が空いているのかもしれない。
そう思ったアイギスは先ほどの残りである桃ジュースの入ったほ乳瓶を取り出し、ほ乳瓶の乳首で八雲の口の辺りを突いてやる。
すると、目を閉じたまま吸い付いていた八雲もほ乳瓶の存在に気付いたのか、まだ目を閉じているがアイギスの服から口を離してほ乳瓶の方へ吸い付いた。
一生懸命に吸い付いてジュースを飲んでいる様子から察するに、どうやら喉が渇いていたらしい。やはり赤ん坊にこの蒸し暑い環境は辛いのだろうと思いつつ、アイギスは再びハンカチを濡らして八雲の首を冷やしてやる。
「八雲さん、本当に辛いようなら校舎に戻って良いですよ。お留守番している間はマリーさんが遊んでくれますから」
「むー」
「そうですか。でも、帰りたければ言ってくださいね。無理をするのはダメですよ」
相手の体調を気遣って校舎で留守番しておくことを提案してみたが、八雲はいやいやと首を横に振って見せた。
マリーと一緒に遊ぶのは好きなようだが、だからといってアイギスから離れて留守番するのは嫌らしい。
ジュースを飲みながら左手だけでほ乳瓶を持ち、空いた右手でアイギスの服を掴んで離れない事をアピールする。
赤ん坊のそんな素直な態度にアイギスも苦笑すると、相手の意思を尊重して彼をこのまま同行させる事にした。
本当に辛くなればいつでもアイテムで校舎に戻ることが出来る。だからこそ、他の者たちもアイギスの決定に異論は挟まず、全員の体力がある程度回復して先へ進むことにした。

第二百九十八話　熱気

――稲羽郷土展・第二夜

夏祭りを模しているのか蒸し暑い空気が漂う第二層。

時折ある〝尻〟と書かれた布看板が気になるも、メンバーたちは敵が現われると陣形を組んで排除していた。

「やっちまえ、ヘルメス！」

呼び出され上空に飛び上がったヘルメスは、着物を着た枯れ木のようなシャドウ〝招きの女御〟に向かって急降下してゆく。

金属の翼を刃にして敵を切りつけ、すぐに離れて味方の射線を確保すれば、体勢の崩れた敵に向かって待っていたとばかりにコロマルのケルベロスが炎弾を放つ。

「アオーン！」

三つの頭それぞれが炎弾を形成し、時間差でシャドウ目掛けて雪崩れ込む。

一発ならば耐えられる攻撃でも、続けて二発、三発と続けば防ぎきれず、まともに喰らった敵は炎の爆発に呑まれて消滅していった。

「はあっ!!」

一方、順平たちが戦っている裏で別のシャドウの相手をしていた七歌は、竹で組まれた椅子に腰掛ける老人型シャドウ〝浅薄の翁〟に接近すると自ら薙刀で切りつけて待避する。

この攻撃でバランスを崩してくれれば儲けもの。そうならなくても、味方が攻撃する隙が出来ればいい。

そうして、椅子の脚の一つを切って七歌が離れれば、シャドウがそれを追おうとしたタイミングでゆかりが弓を放った。

「させないっつーの！」

「援護します。すぐに後退してください」

ゆかりの弓がシャドウ本体の頭部に向かって飛べば、敵は七歌の追跡を諦め後退して避けた。

だが、まだ完全には安心できないため、アイギスがサブマシンガンの掃射で七歌が戻るための時間を稼ぐ。

一発一発は大した威力ではないが、続けて当たればシャドウにもダメージが通る。
敵もそれが分かっているようで深追いはしてこず、七歌が味方の許に戻ってきたところでアイギスも攻撃をやめた。
しかし、七歌たちの攻撃はこれで終わりではない。味方が完全に逃げ切った事を確認したタイミングで荒垣のカストールが敵に向けて飛び出す。
「ぶっつぶせカストール！」
砲弾のように勢いよく飛び出したきたカストールが一本脚の騎馬で敵を押し潰さんと迫る。
パワーと重量を兼ね備えたカストールの一撃だ。かつては、戦車型のシャドウですら重厚な金属で出来たボディが蹄形に陥没して本体がひしゃげていた。
そんな攻撃を老人型のシャドウが喰らえばひとたまりもない。敵は大慌てで着地予想地点から飛び退き、直後、カストールが着地した床が爆発したように割れて砂埃が舞い上がった。
無事に回避できた敵は安堵の息を吐いているのかもしれないが、そんな余裕を七歌たちが与えるはずもなく、砂埃で視界が悪くなったところに上から氷槍の雨が降り注いだ。
「フゥ……こんなところか」
ペンテシレアを敵の頭上に回り込ませていた美鶴は、氷槍の雨に打たれて敵が消滅したのを確認するとペルソナを消して呼吸を整える。
蒸し暑かったフロアも氷槍の冷気によって少し温度が下がり、辺りに涼しい風が吹き抜けた事で戦闘を終えた者たちは心地よさを感じた。
《敵の反応全て消滅、戦闘終了です。おつかれさまでした》
周囲の反応を探ってくれた風花からも戦闘終了の通信が入ると、戦っていたメンバーたちは警戒を解いて待機組の許まで戻ってゆく。
彼らにはりせから戦闘終了の通信が入っていたようで、全員が落ち着いた様子で戻ってきた者たちを労う。
七歌たちもそんな仲間たちに笑顔で返していると、ゆかりはチドリ

に抱っこされている八雲が何かを食べている事に気付いた。
「あ、八雲君いいの食べてるねー」
「ま！」
美味しそうだねとゆかりが笑顔で話しかければ、八雲はどこか自慢げに手に持ったビニール製の容器を掲げてみせた。
昔ながらのジュースのガラス瓶を模したデザインになっているそれは、百円程度で売られている〝パピッ子〟というソーダ味のシャーベットだ。
蒸し暑いダンジョンの内部では冷たい飲み物などがどうしても欲しくなる。
しかし、水分の過剰摂取は戦闘を控える者に取っては避ける必要があり、さらに言えばメンバーたちの持ってきている水などの物資にも限りがある。
それ故、他の者たちは前線組に優先的に水を回して節約しているのだが、八雲は精神的にも肉体的にも我慢が難しい赤ん坊だ。
元から大人より体温が高く、さらにダンジョン内の移動では抱っこされている事が多いので他の者よりも暑く感じる。
さらに、身体が未熟な赤ん坊はちょっとの事で体調を崩してしまう恐れがあるので、八雲には他の者と違って水や食料を気にせず摂取させているのだ。
勿論、彼に与えられる水や食料はメンバーたちが持ってきている物とは別であり、八雲に関わる物だけは湊のマフラーに貯蔵されているものを与えている。
それを見ていた一部のメンバーからは、自分たちも湊のマフラーから分けて貰えば良いのではという意見も挙がったが、アイギスやチドリが湊に集るような真似はさせないと禁止し、さらに七歌や鳴上からも物資の減りは自分たちの疲労の目安になるので、撤退すべきタイミングが分からなくなる状況は避けるべきだと反対していた。
おかげでダンジョン内で自由に飲食できるのは八雲だけとなっているが、こうも暑いと流石に羨ましさが理性を超え始めるのか、戦闘で疲れていた順平が優しいお兄さんを演じて八雲に話しかけた。

「なぁなぁ、八雲君。お兄さんも一緒にアイス食べたいなぁ」
「う？」
「ご飯は皆で一緒に食べると美味しいだろ？　アイスも同じで皆と一緒に食べた方が美味しいんだぞ」
「おー」
　八雲は赤ん坊なので他の者にご飯を食べさせて貰っているが、その時は一緒に食べるのが楽しいのか笑顔でいることが多い。
　順平の話を聞いてそれを思い浮かべたのか、納得したように頷くと残っていた中身を全て飲み干し、ゴミをお腹のポケットの無限収納内に取り込んでから何かを探し始めた。
「……ちょっと、うちの八雲に変なこと吹き込まないでくれる？」
「いやいや、オレっちは何も嘘は言ってねーよ？　一緒に飯食った方が美味いのは事実だし、オヤツだって一緒だろ？」
「そうやって赤ん坊を利用して……」
　順平が言っていることは理解出来るが、その行動は完全に彼個人の利益のためだ。
　純粋な赤ん坊を騙すようなやり方にチドリは嫌悪感を覚え、八雲がこんなやつにアイスを渡さそうとすれば止めようと決意する。
　チドリがそんな事を考えているなどと思ってもいない順平は、八雲がアイスをくれることに期待して取り出すのを待っていた。
　少しすると目的の物を見つけたようで、八雲はお腹の黒いポケットから〝パピッ子ツインズ〟と書かれたアイスの袋を取り出した。
　今度のアイスは先ほど食べていた物の小型版で、代わりに一袋に二つ繋がって入っている。
　これならば順平が言ったように一緒に食べることが出来ると考え、八雲は袋を乱暴に破ってアイスを取り出すと、繋がっている容器を器用に切り離して一つをアイギスに向けて差し出した。
「あい！」
「わたしにくださるんですか？　嬉しいです。どうもありがとうございます」
「ちー！」

「もう一つは私にくれるの？　ふふっ、ありがとう」
二つの容器の片方はアイギスに、もう片方は自分を抱っこしてくれているチドリに渡す。
アイギスに渡すことはやや予想出来ていたが、もう一つは彼が自分で食べると思っていただけに、受け取って貰えて嬉しそう笑っている八雲を見てチドリは胸に温かい物が広がるのを感じた。
いつまでも食べないと不思議がられてしまうので、貰った二人は他の者に悪いと思いつつも八雲の見ている前で食べ始める。
視界の端で帽子を被った顎ヒゲ面が愕然としているのを無視しつつ吸い込めば、パピッ子ツインズ限定のメロンソーダ味のシャーベットが身体と頭を冷やし、甘さが疲れを癒やしてくれる。
水分補給ではここまでリフレッシュできなかったので、このダンジョンでは自分が思っている以上に疲れていることに気付かされた。
一気に食べ過ぎると頭が痛くなるので、ある程度のところで口を離すとフゥと息を吐いてから八雲に改めて礼をいう。
「ありがとう、八雲。おかげで元気になれた」
「うー！」
片手で抱っこしながら食べているので頭を撫でてやる事は出来ないが、穏やかな表情でチドリが礼を言えば八雲は喜んで貰えた事に嬉しそうにする。
そんな、自分の事よりも他人の事で喜ぶところを見ると、彼の性格はやはり湊のままなのだなと納得できる。
もっとも、年齢的に言えば八雲の方が下だが、ここにいる八雲は正確に言えば湊の過去ではないのだが、今はそんな事はどうでもいいかと考えてチドリは再びアイスに口をつけた。
すると、八雲がアイギスとチドリにアイスを渡すのをすぐ近くで見ていた順平が、アイスを貰えると思って伸ばしかけた手をどうしようか迷いながら話しかけてきた。
「ちょ……えー、オレっちには？　お兄さんにはくれないの？」
「うーう、あーぶぶ」
「あ、あはは……兄さんが知らない人にはあげちゃダメって英恵さん

に言われたと」
「うっそだろ⁉　オレってば有里が縮んだ頃からずっといたぞ⁉」
順平だって付き合いの長さではアイギスやチドリと変わらない。
だというのに、未だに自分の事を知らない人と認識していたとなれば、流石にそれは酷いだろうと順平は抗議の声をあげた。
やや本気さを感じる順平のそんな言葉を聞いた八雲はというと、あまり気にしていないのかチドリにアイスを分けて貰いながら言葉を返す。
「まう」
「八雲さんが冗談だと仰っています。ただ、わたしたちにアイスをくれたのは抱っこしてくれているお礼だと」
「やだ、赤ん坊なのに律儀で健気……でも、オレっちも食いたかった」
八雲が二人にアイスをあげた理由を聞いて、順平は思わず良い子だなとほろりと来そうになる。
そういう理由であれば八雲を抱いていた事のない順平が選ばれなかったのも無理はない。
男子で彼を抱っこしたことがある者など、ダンジョン内での食事のときに椅子になっていた善くらいではないだろうか。
女性陣は皆一通り抱っこしていたが、八雲にも好みがあるのでメインはアイギスで後はチドリや玲にあいかなどが主に抱っこしている。
今回は暑いダンジョン内で抱っこしてくれている二人にあげたようなので、理由を理解した順平は次こそ貰えるよう様々な手段を考えて自分の持ち場へと戻っていった。
＊＊＊
休憩を挟みつつ奥へと進んでゆくと、再びあの筋肉の化物がいた。
相手は元気に自分の縄張り内を彷徨いており、敵を観察していた鳴上がどうしたものかなと顎に手を当てる。
「さて、また例のＦ．Ｏ．Ｅがいるな」
《見つかったら厄介だから、アイツの視界に入らないように注意してね》
あくまで敵に感知能力がない事が前提だが、マッスルなＦ．Ｏ．Ｅ

は人間と同じように自分の視覚を頼りに追って来ているようだった。
相手の視界に入らないように気をつければ、ある程度はまでは近付いても問題がないはずだとりせは言う。
ただ、相手と初めて会ったときに眠っていた八雲は話が分からないのか、何の話をしているのかと首を傾げている。
「ま？」
「八雲さん、あのＦ．Ｏ．Ｅはとても足が速いんです。見た目通り鍛えられた肉体が武器といったところでしょうか。パワー、スピード、タフネスを兼ね備えた強敵と言えるでしょう」
「おー」
チドリから交代したアイギスに抱っこされている八雲も、アイギスと一緒に壁に隠れながら遠くにいるＦ．Ｏ．Ｅの姿をこっそり見る。
確かに相手の肉体は鍛え上げられていて、魔法などの小細工に頼らずともその身を武器に戦うだけで大概の敵には勝てそうではあった。
客観的に評価しようとすればするほど、相手のその無駄につき過ぎているとも言える筋肉を褒めるしかない。
アイギスがどこかうんざりした様子で相手のスペックを説明して少し道を戻り、完全にお互いの姿が見えない場所にくれば、八雲がアイギスに降ろして欲しいと身振りで示した。
ダンジョン内は危ないので出来るだけ抱っこして一緒に行動したいのだが、こういうときの八雲は何かしらしたいことがあるパターンが多い。
故に、彼を床に降ろして見守っていれば、八雲はシャツを脱いで上半身を出すと両腕を上げた状態で力こぶを作って見せた。
「むきゃ！」
急に何がしたいのだろうと見ていた者たちはしばし呆ける。
だが、すぐにＦ．Ｏ．Ｅに対抗して見せているんだと気付き、赤ちゃんのプニプニお肌でマッチョポーズを取っている赤ん坊に雪子が微笑みかけた。
「フフッ、八雲君の方が強そうで格好良いよ」
「むふー」

ガチムチのマッスルよりも八雲の方が強そうで格好良い。
実際は格好良いというより可愛らしいのだが、今回はこう褒めた方が喜ぶと思って雪子は言葉を選んだ。
おかげで八雲も得意気に胸を張っており、旅館の接客の中で磨かれた対人コミュニケーションが見事に発揮されたと言えるだろう。
思わず可愛いと言いそうになった女性陣は小さく反省しつつ、鳴上が先ほど言った通り、どうやってＦ．Ｏ．Ｅを攻略するか意見を出し合う。
完全に別の道へゆくか、それとも視界にだけは入らないよう注意して隠れて近くの道へ行く。いっそ実際に戦って相手の強さを正確に把握してみてはという意見も出た。
しかし、ナビ役の二人が揃ってそれは推奨できないと言ってきた事で、これまでのダンジョンに出てきたＦ．Ｏ．Ｅとは比べものにならない強さなのだとメンバーも暗に理解する。
強さだけでなく生理的にも厄介な敵を前に話し合いが続いていれば、
「ワンワン!!」
「うわっ、ビックリした。どしたのコロマル？」
急にコロマルが吠えたことで七歌が一体何と彼に尋ねる。
だが、コロマルは答えもせず駆け出し、Ｆ．Ｏ．Ｅのいる方へ向かっていった。
そっちへ行ってしまうとＦ．Ｏ．Ｅに見つかって相手を呼び寄せる事になる。それは不味いと全員が止めるために追いかけると、曲がり角に着いたところでコロマルが駆け出した理由を理解した。
「あいやー！」
一体いつの間にいなくなっていたのか。上半身裸で右手にシャツを持った八雲が、一人でＦ．Ｏ．Ｅの正面に立っていた。
無駄にやる気満々で、既に相手にも見つかっているので介入しようにも間に合わない。
とはいえ、何もしなければ八雲がＦ．Ｏ．Ｅの餌食になってしまうため、アイギスが即座に対物ライフルを構えると、対峙する二人に動

きがあった。
《フンッ!!》
「ちぇい！」
四メートルを越す巨体が繰り出すは、筋肉のきしみが聞こえるほど見事なサイドチェスト。
対する一メートルにも満たない幼児が繰り出すは、思わず微笑ましくなるフロント・ダブル・バイセップス。
続けてＦ．Ｏ．Ｅはアブドミナル・アンド・サイで全身の筋肉をアピール。
負けじと八雲はなんちゃってモスト・マスキュラーで対抗している。
Ｆ．Ｏ．Ｅと赤ん坊のそんな対決を遠くから見ていた者たちは、二人は一体何の戦いをしているんだと困惑する。
そも、いま八雲と謎の勝負をしているＦ．Ｏ．Ｅは好戦的な追尾型なので、目の前に来た者を敵と認識して戦い出さないのはおかしい。
ポージング対決も戦いではあるのだろうが、いまいち納得がいかない上に、いつまで二人はポージングしているのかも謎である。
このまま八雲がいつまでも敵の前から逃げられないと危険なので、どうにかして救出できないかを話し合う。
男子たちが代わりにポージング対決を挑めば良いのではと雪子が言えば、他の女子たちもそれなら行けそうだと賛同する。
だが、言われた男子たちは、失敗すれば間抜けな格好で死ぬかもしれないんだぞとその作戦を拒否。
完二だけは赤ん坊のためならとやる気を見せたが、他の者たちがもっとマシな作戦を考えるべきだと止めた。
そうして、いつまでも意見が纏まらずにいれば、Ｆ．Ｏ．Ｅの正面にいた八雲の身体が光に包まれていた。
まさかこのタイミングでか、と一同が彼の復活に僅かな希望を抱く。
すると、光に包まれた身体が徐々に大きくなり、一メートルもなかった身長が二倍ほどになったところで光が弾けるように消えた。

「はぁ……暑苦しいやつの前に出たもんだ。その面は鬼のつもりか？」
そこにいたのは、アンニュイな表情のまま上半身裸で右腕に黒いマフラーを巻き付けた青年。
正面に立っている筋肉の化物に比べれば細いが、遠くから見ていて背中や肩周りの筋肉が盛り上がっているのがハッキリと分かるほど見事な身体をしている。
F・O・Eも対峙する青年の肉体がかなりのレベルだと分かるのだろう。取っていたポーズを解くなり、ここからはどちらの肉体が優れているかの勝負だと言いたげに戦闘の構えを取った。
《フンヌッ!!》
気合いと共にF・O・Eは丸太のように太い右腕を振るって殴りかかる。
通常のシャドウの倍速以上の豪速で拳が迫り、握り締められた鋼の拳が青年の頭部を捉える。
「遅いし、攻撃が雑だ」
だが、上体を横に反らすことでそれを寸前で躱した湊は、カウンターで敵の腹筋に自分の拳を叩き込んでいた。
身長差は倍近いが、彼が元から持っている剛力に相手の攻撃の勢いが加わり、その拳は恐ろしい威力を発揮する。
カウンターを喰らった敵が僅かに身体を浮かせると、そこから湊は攻勢を強めてゆく。
浮いた相手の足が地面に着くなり、左手で脇腹を殴りつけ、敵の重心が左に寄れば、今度は殴った左腕を引きながら右手で腹筋を殴りつける。
殴られて今度は右に重心が寄った敵は、それを利用して右足で踏ん張ると右腕を横薙ぎに払って見せるが、湊はウィービングでしっかりと攻撃を掻い潜り、がら空きの右脇を左で強く殴りつけた。
倍近い体格差に加えて湊は素手だ。上手くカウンターを合せることで攻撃を決めるが、鍛え上げられた筋肉の鎧を持つF・O・Eは頑丈さに自信があるのか、攻撃を喰らいながらでも滅茶苦茶に殴り返し

てくる。
けれど、湊は持ち前の動体視力と反射神経を駆使し、ウィービングで攻撃を躱しながら完璧なシフトウェイトで動きを繋げて攻撃の手を休めない。
躱して右で殴ったかと思えば、すぐに入れ替わるように左を繰り出し。左で殴り終わればすぐに躱しながら右が打ち出される。
続けて左、右、左、右、左、右、左右、左右、左右、左右左右左右左右――――。
彼の周りだけ空気が渦巻いていると錯覚するほどの交互に繰り出される左右による滅多打ち。
はじめは攻撃を喰らいながらも反撃していた敵は、いつしか身体を丸めて両腕を使ってガードしている。
だが、完全にリズムに乗った湊は相手がガードしていようが関係ないとばかりに、重い音を響かせる拳の連打を浴びせ続けた。
素人からすればただ一方的にタコ殴りにしているようにしか見えないだろう。
けれど、格闘技を囓った者からすれば、湊の動きは全て計算され尽くしたものだとハッキリ分かる。
F・O・Eのガードを横から殴りつけてずらし、相手が再び元の位置に腕を戻そうとしたタイミングで空いた肋骨を真横から抉り込むように打つ。
あまりの衝撃に相手の膝ががくんと落ちかければ、そこから湊はさらにペースと回転数を上げて拳打を浴びせた。
殴る度、ドンッ、と腹の底に振動が伝わってくるような音が鳴り響き、そんな重い拳で殴られすぎて変色した腕は上げることもままならず、ガードをこじ開けられれば防ぎようがないと敵はただ一方的に殴られ続ける。
完全に湊の攻撃のペースに嵌まった敵は抜け出す事が出来ず、そのまま数十発の拳撃に翻弄されると最後に湊が放った左のフィニッシュブローで吹き飛び仰向けに地面に倒れると消滅していった。
まさかの殴り合いで強敵のF・O・Eを倒してしまった青年に女

性陣はポカンと呆けるが、一方で男子たちはどこか満足げに笑っている。
「あいつ、いつの間にデンプシーロールなんて覚えたんだ。だが、良い拳だった。俺も負けてられん」
「ああ。拳のタイマンで勝つたぁ、最高にシビれたぜ」
途中から腕組みをして真剣に見ていた真田は、自分がアウトボクサーであるため、先ほどの湊のような戦い方は出来ないと分かっている。
だが、一人の男としては自分の力で相手をねじ伏せるようなインファイトに憧れもあった。
同じ感性を持つ完二も最高に男らしい戦い方だったと賞賛し、どこか自分も湊と拳の殴り合いで戦ってみたそうにしている。
そんな熱血系の二人を見ていた花村は、確かに熱い戦いではあったけどなと苦笑する。
「おいおい。なんか熱いやつらが感化されてっぞ」
「けど、陽介も正直格好良いと思っただろ？」
「まぁ、男としちゃあ軽く嫉妬は覚えるけどな。流石に自分もああなれるとは思わねぇよ」
あれだけの近距離だとお互いの間合いが重なり合うので、後は肉体の性能と技術の勝負になってしまう。
大人と子どもほどに体格差があれば、身体が大きいＦ．Ｏ．Ｅが圧倒的に有利。
それを湊は人の限界を超えた身体性能で強引に迫り、己の持つ技術を合せることで完全に上をいった。
確かに格好良かった事は認めざるを得ないが、花村は自分が彼と同じように出来るとは思えない。
故に、真田や完二とは温度差があるんだと鳴上に笑って答えた。
敵を倒し終えた湊は右腕に巻き付いているマフラーからシャツを取り出し、それを着ながら戻ってくれば真田が楽しそうに話しかけた。
「有里、お前いつの間にボクシングなんて学んだんだ？　ウィービン

グもシフトウェイトも部のやつらに見せたいほどだったぞ」
「……留学中に民間軍事会社の人間に習いました。何でもありだと有利過ぎたんで、キックを封じるためにボクシングだけで戦ってる内に、掻い潜って殴るのが上手くなりました」
「なるほど、当時のお前は小さかったからな。腕力はあるもののリーチで負ける分、小柄だからこその戦い方を編み出した訳か」
湊は攻撃を躱すのも見事だったが、真田としては攻撃時の腰の回転や腕を引き戻す際の勢いを利用し、全て次の攻撃に活かすシフトウェイトの方が気になっていた。
ああも見事に全ての動きを攻撃のために繋げて行くことが出来れば、ほとんど足を止めた状態でも自分の攻撃力をフルに発揮する事が出来るだろう。
勿論、やろうとして簡単に出来る事ではないし、近距離故に相手の攻撃を見切って躱せなければピンチに陥るリスクの高い戦法だ。
これまでエースと呼ばれる者たちを打ち破ってきた真田だからこそ、湊がどれだけ難しい事をしていたのか理解する事が出来る。
ただ、真田が求める強さの理想の形の一つがまさに湊の戦い方なのだ。
インファイトが出来ないなどと言っていられる状況ばかりとは限らない以上、アウトボクサーとインファイターを切り替えられるようにしておく必要がある。
「フッ、ここでお前の戦いを見られて良かった」
プロの試合の映像を見て研究することもあったが、F．O．E相手にボクシングのみで戦っていた先ほどの戦闘の方が何倍も刺激を受けた。
今も真田の瞼の裏に湊の動きの一つ一つが鮮明に焼き付いている。
この後、いきなり真似をしてF．O．Eに挑むつもりはないが、湊の動きを取り入れて納得できるレベルに至れば、自分もF．O．E相手にどこまで通用するか試してみたかった。
ダンジョンの暑さに集中力が乱れ始めていたはずが、湊の戦いで火がついた様子の男子たちは、真田を先頭に勝手に前線組の配置につい

てしまう。
月光館学園と八十神高校の男子複合チームでちゃんと機能するかは不安ではあるが、本人たちがやる気ならばそのままにしておく事にした。
勿論、そのメンバーの中に湊は入っておらず、マフラーをコート型にして着込んだ彼はアイギスの隣で煙管をふかしている。
先ほどまでの男らしい姿と今のギャップには少々困惑するが、強力なＦ．Ｏ．Ｅを倒して疲れているのかもしれない。
そう考えた他の女子たちは復活したばかりの湊を休ませつつ、男子たちの戦いを補助して先を目指した。

第二百九十九話　戦いのルール

――稲羽郷土展・第二夜

湊が復活直後に見せた戦闘に触発された男子たち。

シャドウとの戦闘ではしっかりとペルソナを使っていたものの、ペルソナに使わせるスキルが物理寄りであったり、ペルソナを使わず自ら武器で攻撃しに向かったりと湊の戦闘を意識している事がはっきりと理解出来た。

本人たちのモチベーションが高いことは良いことで、しっかりと敵を倒せているのも事実。

故に、いくつか言いたいことはあったが美鶴も何も言わず好きにさせ、ダンジョンを進み続けると二体のＦ．Ｏ．Ｅがいる部屋に着いた。

「むむっ、二体もあのＦ．Ｏ．Ｅがいるよ？」

部屋に入るなり目を細めて千枝が呟く。自分たちが入ってきた入口から見て正面の壁際にそれはいた。

鬼を模した面で顔の上半分を覆い、股間部が盛り上がったフンドシ姿のマッスル型Ｆ．Ｏ．Ｅ〝あしばや野郎〟だ。

正面にいると言っても敵までは距離がある。その前に近くにある別の扉に入ってしまえば問題ない訳だが、今は味方に対Ｆ．Ｏ．Ｅ最終兵器である湊がいる。

彼ならばあしばや野郎に格闘戦でも勝利できる事は実証されているので、倒すか無視するか、他の者たちは湊本人の返事を待った。

すると、この蒸し暑いダンジョン内で黒のロングコートを着ていた青年は、気怠そうに前に進み出て敵を視界に捉えた。

「……その鬼の面が不快だ」

彼は自分が鬼の一族という事もあってか、筋肉の化物が鬼の面を被っている事が気にくわないらしい。

となれば、後はもう殲滅するしかない訳で、相手も湊の姿を確認するなり走って近付いて来た。

敵がスタートすれば青年も迎え撃つために走り出す。

僅かに身を屈めると、ダンッ、と地面を強く踏み締める音をさせて砲弾のように飛び出してゆく。
敵も通常のシャドウとは比べることが出来ないほど速いが、その敵に向かって飛びだしていった青年はそれを上回る速さを見せる。
両者が信じられない速度で近付けば距離はすぐに縮まり、一人の青年と二体のF・O・Eが衝突する。
《オグゥッ》
両者が衝突する。そう思った直後、向かって右側にいたF・O・Eが身体をくの字に曲げて後方へ吹き飛んでいった。
湊が床を踏み砕くほどの震脚と共に八極拳の頂肘を繰り出し、相手の接近速度も利用してかなりの威力を発揮したようだ。
二倍の体格差のある相手に力勝ちして吹き飛ばすほどの威力など、想像するだけで恐ろしいが、一体を吹き飛ばしてももう一体が残っている。
相棒をやられたF・O・Eが大きく拳を振るって殴りかかれば、湊は身体を引きつつそれを手の甲でいなして受け流す。
渾身の攻撃を受け流され身体が泳いだ相手に、さらに湊は脇腹へ掌打を当てて完全に体勢を崩させる。
前のめりになった状態で横から押された相手は、足をもつれさせながら地面に四つん這いで倒れた。
そこへすかさず近付いた湊は、跳躍して相手の首に跨がり肩車の状態になる。
見ていた者たちがそこで嫌な予感を覚えれば、
――――ゴキンッ
両脚で相手の頭を挟み込んだ湊はそのまま身体を横に傾け、首を捻じ切るようにしてへし折った。
思った通りの展開に何名かが「うわぁ……」と呟くが、頭部とほぼ同じ太さの丈夫な首をよくも一息でへし折れるものだと逆に感心する。
首を折られたF・O・Eはそのまま力なく地面に倒れて消えてゆき、残るは先ほど吹き飛ばされた一体のみとなった。

しかし、同時に向かっても即座に分断されて各個撃破されてしまっているのだ。
出会い頭に攻撃を喰らっている相手では、どうあっても湊に勝てないだろうと花村が敵に思わず同情する。
「こりゃ、余裕だな」
「ああ。戦い方としては参考にはならないけど、有里なら複数相手でも勝てるって分かったのは大きい」
残りはもう消化試合だと花村と一緒に鳴上も観戦モードに入る。
吹き飛ばされたF．O．Eが立ち上がって走ってきているが、今度はどんな負け方をするんだと既に敗北前提で考えていた。
だからこそだろう。花村たちは自分たちが油断している事に気付かなかった。
危険なダンジョン内では常に気を抜いてはいけないというのに、湊がいれば安心だと緊張の糸を弛めてしまっていた。
テレビの画面越しにスポーツ観戦するような気楽さで見てしまっていたが故の失態。
接近してくるF．O．Eと湊の距離が縮んでも、花村たちはそれを殺し合いとしては見ていなかった。
そして、次の瞬間、両者の距離がゼロになる直前に足を大きく引いた湊がそれを振り上げ、鉄板入りのブーツが敵の股間を直撃した。
攻撃を喰らった途端に敵は上に跳び上がり、そのまま空中で一瞬にして弾け死ぬと男子たちは内股になって顔から血の気が引いてゆく。
敵を蹴り殺した青年は何事もなかったように足を地面に降ろしているが、戻ってくる相手を見て男子たちは身体が震えてしょうがない。
どうしてお前はそんな悪魔のような真似が出来るんだと戻ってきた湊に順平が食ってかかる。
「おいおいおいおいっ、いくら何でもそりゃねーだろ！」
「先輩には血も涙もねぇんスか！　男の喧嘩じゃそこだけは反則だろ！」
F．O．Eを一発で昇天させるほどの蹴りなど想像するだけで下

腹部が痛くなる。
嘘でも誇張でもなく自分たちのイチモツが青年の攻撃を見て縮こまっているのだ。実際に喰らった敵はどれほどの苦痛と屈辱の中で散っていった事か。
いくら敵とは言え、同じ男として先ほどの攻撃を許せない。
復活直後の殴り合いでは彼を持ち上げていた者たちは、一斉に敵へと寝返って湊に冷たい視線を向ける。
一方、女性陣は湊がせっかく敵を倒してくれたというのに、男子は何が不満なんだと困惑気味だ。
「おい、明彦。お前たちも。有里は敵を倒したというのに、何故そんな風に突っかかっているんだ？」
「そうだよ。花村も鳴上君もさっきはあんなにのんびり戦いみてたじゃん」
美鶴と千枝が揃って男子たちに急に態度を変えた理由を問う。
湊は今回も正面から体術のみを用いて戦っていた。
確かに真田たちが感動したような、拳での殴り合いという訳ではなかったが、八極拳の技を使って見事に敵をコントロールして勝利を収めていた。
これがミサイルを一斉掃射して敵を薙ぎ払ったというのならまだしも、使う技が変わったくらいで湊が責められるのはおかしい。
そうして女性陣が湊の擁護に回れば、男子たちは暗く沈んだ表情で床に視線を落とし、真田も同じく散っていたＦ．Ｏ．Ｅの無念に胸を痛めつつ美鶴たちに言葉を返した。
「お前たちは女だから分からんのだ。身体に急所はいくつも存在するが、同じ痛みを知る者として股間だけはお互いに攻撃しないという暗黙の了解が男にはある。有里はそれを破った。断じて許されることではないっ」
『そーだ！　そーだ！』
普段は一歩引いたスタンスを取っている天田も、今は他の男子と一緒に真田の後ろに立って同意している。
男子にとって湊の行いはそれほど許されざる悪魔の所行だったの

だろう。
　まぁ、女性陣はやはり訳が分からないと呆れたように男子を見ている訳だが、強敵を倒したというのに湊が悪魔呼ばわりされていることを見かね、アイギスが男子たちの前に立つと異議を唱えた。
「お言葉ですが、八雲さんは遺伝子キメラなので中性です。男性でもありますが女性でもあるので、真田さんたちの仰る暗黙の了解を守る必要はないかと」
「てか、前に私が思いっきり股間を蹴り上げても効いてなかったしね。同じ痛みを知らないならしょうがないんじゃないかな」
　アイギスに続けて七歌も湊を擁護する。彼女が話したのは以前、風花が湊に騙されて純潔を散らせたと勘違いしたときの話だ。
　実際は物理無効のペルソナで無効化しただけだが、その事実を知らない者からすれば七歌の金的を喰らっても湊が平然としていたように映る。
　当時、真田や順平もその現場にいたので、七歌が二人も見てたでしょと言えば二人は視線を逸らして黙ってしまった。
　医学的な面からアイギスが攻め、七歌が実体験から攻めた事で、上手く反論できない男子たちの旗色が悪くなり始める。
　だが、ここで言い負かされてしまえば今後も湊は同じ手段でF・O・Eを殺すだろう。
　未だ純潔を保っている自分たちの股間の息子の平穏のため、ここで負ける訳にはいかないと鳴上は上着の内ポケットから取り出した眼鏡を掛けて顔を上げた。
「異議あり！　有里は自分で言っていた。童貞ではないと！　なら、有里も立派な男だ！」
「そ、そうだ！　相棒の言う通りだ！　遺伝子がどうだか知らねぇけど、男として女を抱いた事実は覆らねぇ！」
　これぞ起死回生の一手。ごーこんきっさでの発言を覚えていた鳴上が繰り出した一撃に女子も怯む。
　実際にどのように行為が行なわれたのかは当事者しか知らない。
　しかし、湊が男として女性を抱いたことだけは確かなはずだ。

鳴上たちは正確な人数や相手を把握していないが、この場にいる三人とバックアップの一人の計四人が証人となる以上、断固として湊が男ではないとは言わせない。
鳴上の言葉に息を吹き返した男子たちの瞳に力が戻れば、湊の処遇を巡って男子と女子の間に緊張が走った。
このままではチームの分裂もあり得る。そう考えたサポートの二人が仲裁しようとしたとき、湊の隣に立って男子を冷たい瞳で見ていたチドリが口を開いた。
「……なら、貴方たちは湊の敵で良いのね。F・O・Eの味方をして、同じように股間を潰されても文句はないと」
『っ!?』
チドリの言葉を聞いた瞬間に男子たちの顔色が変わる。
彼らにすればどうしてそうなるんだと言いたいところだろうが、チドリに限らず女性陣からすればF・O・Eの肩を持つという事は湊と敵対すると同義だ。
そうなれば放課後悪霊クラブで麒麟を召喚したときのように骨も残らず消滅させられるか、先ほどのF・O・Eと同じ末路を辿っても不思議ではない。
安いプライドのために男としての証を失うか、自分たちが愚かだったと認めて謝罪するか。
お前たちはどちらを選ぶんだとチドリが冷たい瞳でジッと見つめる。
男子たちは真っ青な顔色で唇を震わせその場に立ち尽くしているが、罵倒しておいてなぁなぁに済ませる気はない。
チドリは近くに落ちていた石を一つ拾うと、それを湊に見せてから彼の方へ山なりに投げた。
彼女が投げた石の大きさは男子たちの玉一つと同じくらいだろう。
それが湊に向かって放物線を描いて飛び、湊の頭一つ分ほど高い位置まで落ちてくれば、青年が目で追えない速さの回し蹴りを放ち一撃で粉砕した。
蹴り飛ばすでも、蹴り砕くでもなく、その場でパンッと弾けるよう

な音をさせて砂になったのだ。
カンフーの中でも蹴り技主体で戦っている千枝は、自分が使っているようななんちゃってではない本物の武術の蹴りを見て、感激したように瞳を輝かせ拍手をしている。
ただ、今のデモンストレーションは敵対した男子たちの股間が辿る末路である。
案の定、男子たちはやや内股になって俯いており、先ほどまでの威勢はどこへ行ったのか消沈していた。
「……ねぇ。早く選んでくれる？　ここで潰されるかどうかを」
チドリにすれば湊以外の男が男性機能を失ったところで痛くも痒くもない。
男性機能を失うと男性ホルモンが減るという話も聞くので、むしろ下衆な視線を向けられる事が減る分ありがたいかもしれない。
誰か一人くらいな無謀な馬鹿が出ないかと小さく期待していれば、色が変わるほど拳を握り締めた鳴上が申し訳なさそうに花村を見た。
「悪い、陽介。俺はまだ男でいたい。菜々子の兄でいたいんだ……」
「相棒、俺も同じ気持ちだ……。完二、真田さん、伊織。お前らの事は忘れねぇ」
『おまっ!?』
ほとんどシンキングタイムなしに裏切りを図る二人。置き土産に数名の男子の逃げ道を塞ぐ悪辣さだ。
さらに綾時、クマ、荒垣、天田も一緒に移動して湊や女性陣たちの後ろに回った。
これで湊らと向き合っているのは三人だけになった訳だが、残っている三人もこの年で男を辞めたくはない。
すぐにでも謝って軍門に降るべきだとは分かっている。
ならば、最後の一人にならないよう迅速に行動するのみだと真田が動いた。
「お前たち、後は頼んだ。俺はまだ美紀の兄でいなくてはならんのだ」
「へへっ、後輩に後を託すのは先輩の務めってね。あばよ、巽」
真田に続いて順平もちゃっかりと移動して完二だけが取り残され

た。
　こういったときは頭の回転の速さが勝負を分けるのだ。空気の変化を感じ取るのが上手い天田を除けば一番年下な完二は、人生経験の差もあって卑怯な先輩らに貧乏くじを押しつけられてしまった。
「テメェらキタねーぞ！　有里先輩と比べらんねぇくらい男の風上に置けねぇクズじゃねぇか！」
　湊は湊でかなりの悪党だったが、そこには効率的に敵を倒すという目的があった。
　一方、寝返った者たちは我が身可愛さから裏切ったに過ぎず、恥もプライドも知った事かという清々しいほどの自己保身しかなかった。
　これでは裏切り者たちの方が質が悪いとしか言えない。怒った完二がどうせ死ぬなら道連れにしてやろうと動き始めたとき、湊の足下から黒い腕が伸びて男子たちを一斉に捕まえた。
「ま、待ってくれ!!」
「おい、やめろ！」
　咄嗟の事で避けきれなかった男子たちは、まさかこのまま自分たちの男性機能を破壊するのかと顔面蒼白になりながらも暴れて逃れようとする。
　勿論、湊の出した影の腕は並みのシャドウより強い力を持っているので人の力では解けない。
　そこで、鳴上たち八十神高校側の男子はペルソナを使って脱出を試みるが、彼らを見る湊の左眼が紫水晶色になっている事が関係するのかペルソナを呼び出すことが出来なかった。
　こうなれば後は話術でどうにか切り抜けるしかない。そう思った鳴上は湊に話しかけた。
「待て、落ち着け有里。俺たちの股間を潰しても何も解決しない。むしろ、俺たちが動けなくなる分デメリットしかないじゃないか」
「そ、そうだよ、湊。僕にこっちでの生活を楽しむように言ったのは君だろ？　ここで股間を潰されたら楽しむどころじゃなくなってしまうよ」
　鳴上と一緒になって綾時もまだ男でいたいという思いから彼を説

得する。
湊のペルソナを核に仮顕現しているだけなので、ここで股間を潰そうと綾時はどうとでもなる気もするが、万が一を考えてここで保険を掛けているのだろう。
そんな二人の必死の説得に青年がどう答えるかと思えば、湊は左眼を金色に戻してから呆れ気味に答えた。
「……いや、お前らの粗末な物はどうでもいい。ただ、五月蝿いから拘束しただけだ。大人しく配置についてシャドウと戦ってろ」
チドリに言われてパフォーマンスにも付き合ってはいたが、わざわざ鳴上たちの股間を潰して回るほど湊も暇ではない。
敵対するなら排除することもあるとは思う。しかし、現状では鳴上たちが束になったところで湊には勝てない。
これでは敵として認定しても、障害としては認識することが出来ないため、湊は男子たちを解放するとさっさと持ち場に着くよう急かした。
命じられた者たちも素直に従っておけば助かると分かったようで慌てて移動してゆく。
そんな男子たちの背中を見送りつつ、女性陣も移動を再開するのだった。
＊＊＊
湊がいればF．O．Eのあしばや野郎が敵ではないと判明した事で、一同はこの世界の謎を解くヒントがないかとダンジョンを探索していた。
次のフロアへの階段の位置は序盤に判明しており、その障害となるF．O．Eも倒す算段がついた。
ならば、後はこの世界についてやダンジョンについての謎を解くヒントを探すため、最短ルートを選ばずダンジョンの中を見て回っているのだ。
「八雲さんは眠いとよくわたしの胸に吸い付いていましたね。起きているときも胸で遊ぶのがお気に入りだったようで、よく顔を埋めて楽しんでおられました」

「……なるほど」
「あ、わたしが特別という訳ではなく、他の方の胸も触っていましたよ」
「そうか」
道中を行く中でアイギスは八雲の隣を歩いて彼に話しかけていた。
話しているのは彼が縮んでいた間の事だが、そこだけ切り取って聞くとまるで八雲がエロガキだったように聞こえてしまう。
勿論、アイギスはそういった意図で話している訳ではなく、そういった姿が愛らしかったと自分の印象に残っている八雲の姿を彼に聞かせているだけだ。
湊本人としてはどう返すべきか悩んでいるようだが、周りでこっそり話を聞いている男子たちはもっと困れと心の中で思っていた。
人として、男としてあまりに小さいとは思うが、彼らにすれば数少ない湊の窮地なので、これまでの恨みから存分に苦しむがいいと思っても無理はない。
男子たちがそんな事を考えているなど欠片も想像していないアイギスは、小さい八雲を思い出して慈愛に満ちた表情なると、八雲がどうして女性の胸を触っていたのか湊に尋ねた。
「やはり、赤ん坊と言うこともあってお母様が恋しかったのでしょうか？」
「いや、多分手持ち無沙汰だっただけだろ。丁度良い場所に手頃なものがあった感じだと思う」
質問を受けた湊は顎に手を当てて少し考えると、自分を基準にして理由を口にした。
八雲と湊は正確に言えば過去と未来という関係ではない。無関係では勿論ないが、仮に八雲が湊の過去であれば縮む度に成長後の湊の記憶が変化することになってしまう。
しかし、実際には湊も八雲もそれぞれで独立した記憶を持っているので、根本的には同一人物ではあるが赤ん坊の時点で分岐したＩＦの存在と考えるのが妥当なところだろう。
だからこそ、湊は八雲が自分と同じ考えで行動していたはずと考え

て発言する。
　それを聞いたアイギスは二人を同一人物と見なして、成長した湊も八雲と同じ感性なのかと質問を続ける。
「八雲さんは小さい八雲さんの延長線上にあるものだと考えているのですが、八雲さんは今も女性の胸がお好きなのですか？」
「……別に嫌いではないが、特別好きって訳でもないな。さっきも言ったが丁度良い場所に手頃なものがあって触れると言えばいいのか。授業中にペン回しで遊ぶそれに近い」
「ふむふむ、なるほどなー」
　真顔のまま真面目に質問に答え湊と、彼の言葉に納得したように頷くアイギス。
　その周りでは、そんな羨ましい贅沢なペン回しなどあるかと男子たちが心の中で叫んでいた。
　彼らは女性の胸など触った事がない。まだ記憶もハッキリとしていない乳幼児のときに母親の胸を触ったのが最後だろう。
　一方、湊は同級生の知り合いだけでなく、学外の知り合いとも色々と複雑な関係を持っており、順平たちが聞けば血の涙を流すほど羨ましい経験もしている。
　そんな裏の事情を薄らと理解している月光館学園側の女性陣は巻き込まれないよう黙っているが、誰も二人を止めないせいで、アイギスは湊の事をもっと知りたいという知識欲から同じ話題を続けた。
「では、八雲さんから見てどなたの胸がお気に入りですか？　人によってサイズや形状に硬さなど異なるので、やはり八雲さんにも好みなどがあると思うのですが？」
「……これといって考えた事もなかったな。縮んでる間の記憶がないから全員分を比較する事も出来ないし」
「なら、今の八雲さんが覚えている範囲でも構いません」
「そうだな……」
　この世界にいる女性陣の胸を全員分触ったのは縮んだ八雲だ。
　彼と記憶を共有していない湊では八十神高校のメンバーを中心に、数名の女性は胸を触った覚えがない。

触った覚えがない相手のことなど話しようがないと言えば、アイギスが分かる相手の中で良いと告げたことで、湊は周りにいる女性の事を見ながら考え始めた。
その視線にいやらしさはなく、湊もあくまで記憶を引き出す際の補助として相手を見ているに過ぎない。
ただ、次の部屋も近付いて来ているので、そろそろ胸について話すのはやめないかとメティスが話に割り込んだ。
「あの、兄さんも姉さんもいつまで胸の話題を続けるんですか？　周りの皆さんがどう対応すべきか悩んでいるようですし、そろそろ次の部屋も近いので話を切り上げた方が良いと思うのですが」
言いながら歩き続ける一同の正面には扉が見えている。
サポートの二人は扉の向こうから複数の強い気配を感じると告げており、F・O・Eが複数体いるのであれば湊にもう少し緊張感を持ってもらいたい。
そう思って発言すれば二人も大人しく頷き、いつでも戦闘に移れるという表情になった。
まだどんな敵がいるかも分からない状態なので、そこまで戦闘モードに切り替えなくてもと思う。
だが、二人にとってはこれが普通かもしれない。そう思ってメティスはそれ以上何も言わず、扉までやって来ると警戒しながら中に入った。
するとそこには、
「あ、あ、あ……あんじゃこりゃーっ!?」
中にいたF・O・Eの姿を目にした花村の叫びが響き渡る。
強い敵がいることは分かっていたが、扉を潜ったメンバーたちが目にしたのは、御神輿らしき物を担いで移動する四体のマッスルたちだった。
いくら何でもF・O・Eが四体もいるとは聞いていない。加えて、何でF・O・Eが御神輿なんて担いでいるんだという疑問が浮かぶ。
御神輿を担ぐF・O・Eを見た玲は「わっしょいわっしょいしてるー！」と喜んでいるものの、他の者からすれば御神輿を担いでいる

なら分断は出来そうもないと頭を悩ませる。
見た目があしばや野郎とソックリだけあって、御神輿から離れれば並みのシャドウの数倍の速さで動けるだろう。
そうなると湊だけで対処出来るか分からないので、一度作戦を練り直そうと一同は一つ前の部屋に戻って作戦会議を行なうのだった。

第三百話　星になる

――稲羽郷土展・第二夜

御神輿を担いだ四体一組のＦ．Ｏ．Ｅという異形の存在。

法被にフンドシ姿という見た目は勿論のこと、単体でも強力な戦闘力を持った敵が四体で連携を取ってくるのは脅威だ。

これはまず作戦を立てた方が良いという花村の言葉に他のメンバーも頷くと、一つ前の部屋に戻って対策について話し合った。

「やはり、直接の戦闘は避けるべきだと思います。これまでのＦ．Ｏ．Ｅと同様に動きが法則性を持っているのなら、それを利用して突破すべきかと」

「ああ。私も白鐘の意見に賛成だ。有里はともかく我々では生身で敵の攻撃を受ければ戦闘不能に陥るだろう」

四体一組になっているからと言って、単独で行動しているあしばや野郎よりも弱いという事はない。

それについてはサポートの二人だけでなく、現場にいるチドリと湊もアナライズで確認して単体でもあしばや野郎より強いと断言している。

ふざけた見た目とは裏腹に鍛え上げられた肉体を見ると納得できてしまう。

あれと正面からやり合うなど自殺行為。正気の沙汰ではないと。

直斗と美鶴は味方の損害を考えて、今回は湊も含めて戦うべきではないと判断した。

不思議な国のアナタのトランプ兵をはじめ、現われてきたＦ．Ｏ．Ｅには一定の行動パターンがあった。

ならば、サポートの二人が今回の敵の行動パターンを解析してくれるはず。自分たちが動くのはそれが分かってからで良い。

そんな風に二人が言えば、相手が御神輿を担いでいたことが気になっていた完二が口を開いた。

「そーいや、あいつら御神輿担いでたッスよね。先輩、俺らも担いだら喧嘩神輿で突破出来るかもしれないッスよ？」

「完二、担ぐための御神輿がないぞ」
「あー……有里先輩、御神輿持ってないッスか？」
喧嘩神輿とは御神輿同士を激しくぶつけ合う荒っぽいものだ。
Ｆ．Ｏ．Ｅとそんなもので戦えば、普通の戦闘以上に危険なのではと考えるが、完二や鳴上は良い作戦だと思っているのか湊に御神輿を持ってないか聞いた。
確かに湊のマフラーは無限収納になっており、設置型である巨大なアハト・アハトを入れていたこともあった。
しかし、それらは仕事屋として人を殺す依頼を受けていた名残であり、仕事道具以外に御神輿のような大きな物を入れているとは思えない。
これは流石にないだろうなと思って他の者も彼を見ていれば、煙管を口で遊ばせていた青年はロングコートになったマフラーに手を入れて煌びやかな御神輿を取り出した。
「……二尺半のでよければ」
『あんのかよっ!?』
まさかの御神輿登場に一斉にツッコミが入る。
完二たちもここまで立派な御神輿が出てくるとは思わず、素人から見てもはっきりと分かる御神輿の見事な造りに興味津々になっている。
「うわー。はーちゃんの御神輿すごいね！」
「うん。これ、ちゃんとした祭事に使うようなやつだね。すっごく高いはずだよ」
老舗旅館の娘である雪子は、町の祭事などでは付き合いから大人が担ぐような御神輿も近くで見てきた。
子どもが担ぐようなちゃちな造りではなく、飾り一つ一つが職人の手作りという完全なオーダーメイド。
当然、素材にも拘ってあるので相応の値段がするのだが、雪子が見たところ湊の御神輿は稲羽市のお祭りで使っているものより遙かに上物だった。
少なくとも五百万では利かないだろうと呟けば、ならば実際の値段

を聞いてみようと七歌が湊に尋ねる。
「八雲君、これっていくら？」
「……多少弄った分を含まなければ八百万くらいだったと思う」
「弄ったっていうのは？」
「派手さが足らなかったから細工を増やした。その分で四百万くらい上乗せか？」
総額千二百万。あくまで製作費にそれだけ掛かったという話なので、価値などを考えるとさらに値が上がると思われる。
いくら何でもそんなもので喧嘩神輿など出来ないと男子が震えていれば、それを眺めていた湊が再びコートに手を入れて見た目だけは似ている安っぽい御神輿を出した。
「段ボール製の子ども神輿もあるぞ。こっちは十五万くらいだ」
「……完二、こっちにしよう」
「うっす。当然ッス」
段ボール製と言えど、そこはＥＰ社の最新技術で作られた強化段ボール製である。
トラックに撥ね飛ばされてもへコむ程度で済むほど丈夫で、特殊コーティングで水に一時間沈めておいても大丈夫という防水仕様。
それ故に材料費で相応の値段になってはいるが、千二百万を担いで敵に突進するよりはマシだ。
玲が担いでみたいというので善やクマに千枝といったメンバーが手伝って担いでみている。
女子や子どもでも簡単に担げるほどならば、男子だけで漢神輿をすれば高速機動も実現できる。
これならＦ．Ｏ．Ｅ相手の喧嘩神輿でも負けないのではと鳴上が不敵に笑っていれば、横から肩を叩かれた。
「ん？　どうした陽介」
「いや、お前らノリノリだけどメンバーはどうするんだよ？」
「男子だけでいいだろ。俺たち四人と伊織たち四人の計八人だ」
「あー……有里と天田と善は？」
「天田は身長が足りない。善は玲の護衛、有里は性別不明だから無し

だ」
八十神高校側のメンバーは鳴上、花村、完二、クマ。
月光館学園側のメンバーは順平、真田、荒垣、綾時。
この合計八人で担いで戦う事にするつもりだと鳴上は自信満々に話す。
一番力がある湊を省いたのは、先ほどのＦ．Ｏ．Ｅ金的殺人事件のことがあっての事だろう。
人数を考えると妥当ではあるので何も言わなかったが、身長が足りないと言われた天田が不満そうにしていたのはご愛嬌だ。
メンバーが決まれば後は衣装があれば戦える。クマ皮を脱いだクマも集まり、八人は期待した瞳で湊を見た。
「……お前ら、俺を何でも屋だと思ってるだろ」
言いつつも法被とフンドシと股引きを取り出し、ついでに鉢巻きと足袋も渡す。
やったぜと喜んでいる男子たちが御神輿の影に着替えに向かうと、彼らが着替えている間に残った女子が湊に実際に戦えるのかと尋ねた。
「ねぇ、八雲。大丈夫なの？」
「……無理に決まってるだろ。最初に出した御神輿は三百キロ。これでも軽い方だが、子ども神輿は三十キロくらいしかないんだ。敵一体のタックルで吹き飛ぶさ」
喧嘩神輿というのは勢いも大事だが、そのパワーの源は御神輿自体の重量である。
重い物が高速で動くからパワーを発揮するのであって、軽い物を担いで高速機動出来たとしても、ぶつかり合うときにパワー負けして吹き飛ばされるのがオチだ。
こんなのは小学生の知識でも簡単に判断できることなので、湊は最初に値段は張るが重い普通の御神輿を出して見せた。
それを拒否したのは鳴上たちなので、あとは死ななければ治療だけはしてやろうと放置することを選んだ。
彼の言葉を聞いた女子たちはやっぱりかと溜息を吐いている。

そうして、少し待っていると御神輿を担ぐ正装に着替えた男子たちが現われた。
皆、戦いの中で身体が絞れているため、一般的な同年代の男子よりも中々の見栄えである。
「フッ、やるからには勝ちに行くぞ」
「たりめーッスよ。総指揮は鳴上で、パワーに自信のあるメンバーで後ろから押す作戦でいくぜ！」
四箇所から出ている担ぎ棒の前側を鳴上、花村、クマ、綾時が担当。後ろ側を真田、荒垣、順平、完二が担当する。
敵が四体なのに倍の人数で良いのかという疑問はあるが、本人たちが言うには身長差が倍ほどあるので倍の人数でＯＫらしい。
そんな曖昧なルールのまま子ども神輿を担いだ八人は、童心に返った瞳で楽しそうに担いでいる。
傍でそれを見ていた玲が「わっしょい、わっしょい！」と言えば、八人も同じようにかけ声を言いながら扉へ向かってゆく。
本当にこんなふざけた事をダンジョン内でさせて良いのかと複雑な表情を浮かべる美鶴の心配をよそに、扉を潜った男子たちは敵の姿を捉えて加速しながら突き進む。
『わっしょい！　わっしょい！』
腹の底から声出して向かってくる鳴上たちに敵も気付く。
自分たち同様正装に着替えて御神輿を担いできた。ならば、ぶつけて戦うしかない。
《ソイヤ！　ソイヤ！》
敵もかけ声を叫びながら鳴上たちへ向かう。
一歩ごとに加速し、されど上下にしっかりと揺らすことも忘れない異様な光景。
『わっしょい！』
《ソイヤ！》
本人たちはいたって真剣なのだろう。楽しげなかけ声には相手を圧倒しようとする強い意志を感じる。
絶対に倒す。お前たちには負けない。

鳴上たちもＦ．Ｏ．Ｅも敵に向かって行き、そのまま道を譲れとばかりに衝突する。
『うわぁぁぁぁぁっ!?』
そして、当然のように吹き飛んでゆく子ども神輿。
欠片も耐えられずに担いでいた者たち諸共吹き飛んで床に倒れた。
敵もまさかここまで弱いとは思っていなかったのだろう。
吹き飛ばしてから少し困惑気味に下がってくれた。
吹き飛ばされた者たちは地面を転がったダメージはあるようだが、普段の戦闘に比べれば軽傷と言える。
その程度で済んで良かったなと思いつつも、入口に立って男子たちの戦いを見ていた美鶴は深い溜息を吐いて額に手を当てた。
「はぁ……予想通りこうなったか。岳羽、天城、彼らを治療してやってくれ」
「は、はい。けど、遊んで怪我した人を治療するみたいでなんだかなぁ」
「消毒液でも渡しておけばいいんじゃないかな?」
地面を転がっても汚れただけで一切破損していない子ども神輿。
一方、担ぎ手たちは擦り傷と汚れでダメージ以上にボロボロに見える。
ただ、その怪我の理由を考えると同情できないので、そんな人間の治療に精神力を消耗するのは嫌だなとゆかりが眉を寄せる。
同じく治療を頼まれた雪子は、備品の救急セットから消毒液のボトルを取り出してこれで良くないかと真顔で話す。
勿論、そんなもので良いはずはないのだが、彼らのあまりに見事な負けっぷりに誰も助け船を出そうとはしなかった。
少しして、倒れていた男子たちは痛む身体を押さえつつ立ち上がると、近くに転がっていた子ども神輿を回収してすごすごと戻ってくる。
誰一人として口を聞かず、見守っていた者たちの横を抜けて扉を潜ると、そのまま隣の部屋の隅で座り込んでいる。
治療を頼まれた二人がしょうがなく回復スキルを使って傷が癒え

ても、心の傷までは癒えていないのか動こうとしない。
これは重症かなと思いつつも時間は有限だ。今のうちにちゃんとした対策を考えようと残っている者たちで会議を開く。
話す内容は主に二つ。どうすれば相手を避けて通れるか。もう一つはどこまで戦えるかだ。
あしばや野郎と戦えた湊ならば、それなりに戦って数を減らせるかもしれない。そう思った善が率直に尋ねる。
「湊、君の力でどの程度まであいつらと戦える？」
「……素手だと流石に面倒だ。武器を使えば倒しきるまで行けると思う」
元々、湊は一人で複数体を相手することに慣れている。
幼少期から自分を鍛えてくれていた力の管理者たちが、途中から二人同時や三人同時で攻撃してくるようになっていた事も関係しているだろう。
ただ、どちらかと言えば組織の壊滅や、家名断絶のため一族全員を狩る事が多かった名切りの血の効果と言える。
敵の気配や空気の流れから周囲の状況を把握し、背中に目がついていると言われるほど正確に背後への対応もこなせた。
湊はさらにペルソナの力で気配を読んでいるので、相手の速度に気をつければ同時にでも相手は出来るだろうと告げた。
善は自分で聞いておきながら驚いているようだが、湊はその間に無の槍を取り出し〝星〟のカードと融合させ、穂が幅広い白銀の槍を作り出していた。
全体的にシンプルなデザインだが太刀打ちに炎の様な模様の装飾がなされており、見た者たちは綺麗な武器だなと感じる。
それを手にした青年はＦ．Ｏ．Ｅのいる部屋に向かうと、扉を潜ったところで武器を持っていない右手を左胸に当てて呟く。
「Ｅ．Ｘ．Ｏ．――――起動」
起動と呟き終えると同時に湊の身体から青白い光が放出される。
アイギスの戦いを見て知っていた者は、それがオルギアモード発動の証だと分かる。

だが、湊までオルギアモードの改良版であるエクストリーム・オルギアモードを発動できるとは思っていなかった。
オルギアモードはペルソナ召喚に用いるエネルギーを不安定なまま過剰供給し、溢れ出たエネルギーで自分を覆う技だ。
エネルギー状の鎧と化したペルソナの力で己を強化する分、身体にはかなりの負担が掛かってしまう。
強化人工骨格を持っているアイギスたちだからこそ、そんな無茶な自己強化技を使えるのだと思っていたため、生身の人間である湊が青白い光を身体から放出して飛び出してゆくと本当に大丈夫かと不安を覚えた。
「はぁっ!!」
弾かれるように飛び出していった湊は、敵との距離を一気に詰めると勢いのまま突きを放つ。
予想外の速度で接近した湊に対応しきれなかった敵は、なんとか腕でガードするも腕に深い傷を負って壁まで吹き飛んでゆく。
しかし、巨体の敵は当然ながら重量もあった。それを吹き飛ばすために突進の勢いを使ってしまった湊へ、御神輿を捨てた他の三体が殺到した。
手刀を振り下ろしながら飛んできた敵を大きく後退する事で躱す。
躱した地面を見れば鋭利な刃物で切られたような痕が残っていた。おそらく斬撃系のスキルを使った攻撃だったのだろう。
打撃専門かと思いきや物理系ならば斬撃と刺突も出来るのかも知れない。
思っていたよりも面倒かもしれないと考えながら距離を取る湊に、残っていた二体のF．O．Eが接近してくる。
片方が殴りかかってきたのを躱してカウンターで切りつけながら走り抜ける。
その先にもう一体が待ち構えていたが、その敵は大きく息を吸い込んで胸を膨らませると、次の瞬間広範囲を埋め尽くす炎を噴いた。
「ちぃっ……」
炎が迫ってくると湊は後ろに飛びながら前方で槍を回転させ、即席

の盾を作って炎から身を守る。
今も炎を噴いている敵の姿は火噴き芸のそれにしか見えないが、物理以外にも遠距離の攻撃手段があるというのは厄介だ。
炎を使えるというなら相手はその属性の耐性を持っているに違いない。
なら、Ｆ．Ｏ．Ｅたちは同士討ちを気にせずに魔法スキルを使ってくるだろう。
足を止めて槍の盾で身を守りながら敵をそう分析していた湊は、他の気配が動いたことに気付き警戒する。
すると、炎を迂回するように回り込んできた一体のＦ．Ｏ．Ｅが、離れた場所からブンブンと手刀を振るってきた。
そんな距離から攻撃しても意味が無い。普通はそう考えるところだが、同じ技が使える湊は敵が斬撃を飛ばして来たと理解する。
炎と斬撃では斬撃の方が面倒だと判断した湊は、炎を喰らうことを覚悟して槍の盾を解除すると、ロングコートから出ている生身の部分を炎に晒しながら迫る斬撃を切り伏せた。
敵が噴いていた炎はマハラギダイン。生身で受ければ重度の火傷を負うどころか肉が炭化するだろう。
だが、今の湊はＥ．Ｘ．Ｏ．のエネルギーで身体を覆っている。
そのため触れようとする炎を纏ったエネルギーで防ぎながら斬撃に対処すれば、敵も遠距離攻撃では意味が無いと理解したのか炎が止んだ。
相手の攻撃の手が緩んだのなら攻撃に転じるチャンス。
炎が完全に消えきる前にスタートの構えを取り、先ほどまで炎を噴いていた敵に向かって駆け出す。
敵も炎の向こう側から湊が接近してくるのが見えたのだろう。湊が突きを放って迫れば、その穂先を真剣白刃取りの要領で止めた。
《フンヌッ!!》
勢いに押されて僅かに後退するも、敵はすぐに足を止めて湊の攻撃を完璧に封じた。
純粋なパワー勝負ならば倍の身長差があるＦ．Ｏ．Ｅが負ける道

理はない。
止められても尚進もうとしてくる湊を相手に気を抜くことは出来ないが、Ｆ．Ｏ．Ｅには他に三体の仲間がいる。
ここで湊の武器を封じているＦ．Ｏ．Ｅだけでは何も出来ないが、味方がくれば途端に形勢は傾いてゆくだろう。
だが、そんな事は湊も勿論分かっていた。分かっているからこそ、絶対に目の前の敵が逃げられない状況を利用する。
「はあぁぁぁぁぁっ!!」
湊の声に反応して槍が淡い光を放ち始める。
光は徐々に強さを増し、槍全体が光ったかと思えば穂先と石突きから蒼い炎が噴き出した。
炎は徐々に勢いを増して湊に前進する力を与える。最初は耐えていた敵も、炎が槍全体を覆うほどの勢いになると耐えきれず身体が浮いた。
その瞬間、押さえられていた槍が解き放たれ、一条の光の矢となって敵を飲み込んだ。
仲間を助けようと思っていた他のＦ．Ｏ．Ｅたちも、速度が乗った湊を捉える事が出来ず右往左往している。
そんな相手の状態を理解したのか、光の矢は部屋の中を縦横無尽に飛んで次々と敵を飲み込んでゆく。
これで全てのＦ．Ｏ．Ｅを倒したのかと思いきや、離れた場所からよく見れば飲み込まれた敵たちは生きていた。
四体が重なるように風圧で槍の穂先の前に押さえつけられているようだが、最初に真剣白刃取りしていたＦ．Ｏ．Ｅが穂先を掴んだままいた事で貫かれずにいる。
大部屋の中を縦横無尽に飛んでいるというのに、両手で挟んだ穂先を離さない根性は認める。
しかし、死んでいないというだけでピンチである事に変わりはない。
湊は敵をこのまま貫くことを諦め、進行方向を天井へと変更する。
光の尾を引きながら天井へと向かう湊は、そのまま敵を天井へと叩

き付けた。
「おぉぉぉぉぉっ!!」
敵を天井へ叩き付けた衝撃でフロアが僅かに揺れる。
ぶつかった衝撃で手を離しはしないかと期待したが、相手はまだしっかりと刃を掴んで腕の筋肉と腹筋で貫かれるのを防いでいた。
その後ろに重なっている他のＦ．Ｏ．Ｅも、身動きが取れないだけであまりダメージを負っているようには見えない。
想像以上のタフさには思わず呆れてしまうが、なら、ここからは我慢比べだと湊は槍から炎を、自分の身体からはＥ．Ｘ．Ｏ．の光を激しく放出させる。
魔法スキルのように敵を焼く事は出来ない。けれど、光が強くなればなるほど進もうとする力は増す。
ほんの少し。数ミリ単位で徐々に敵の筋力を上回って穂先がＦ．Ｏ．Ｅへ近付いてゆく。
相手も必死になって腕に力を籠めているが、徐々に距離を詰められ、遂にその身体に穂先の先端が刺さる。
《グゥゥっ》
高熱になった槍の先端が体内へと入ってくるなど、想像を絶するような拷問だろう。
思わず唸ったＦ．Ｏ．Ｅは腕の力を弛めてしまい、押し留められていた槍の一撃が敵の身体を完璧に捉える。
一体、二体、三体、四体と続けて貫き、それでも勢いが死ななかった湊はそのまま天井を貫通して消えていった。
確かにタルタロスを似たような方法でショートカットした事はあったが、異世界のような場所のダンジョンでも同じ事をするとは思わなかった。
青年が光と共に去って行ったのを見ていた者たちは、通信越しに爆発音や風花とりせの慌てる声を聞きながら、一足先に校舎に帰った青年の非常識さに溜息を吐くのだった。

第三百一話　我慢強さ

――稲羽郷土展・第二夜

天井を突き抜けてＦ．Ｏ．Ｅ四体を一気に倒した湊は、少しすると槍を持ったまま天井から降ってきた。

数十メートルある天井から降りて来ても無事に着地できる事に驚愕している者もいたが、無事に戻ってきた湊の身体からは青白い光が湯気のように立ち上っている。

彼から出ている光は黄昏の羽根に過剰にエネルギーを供給し、ペルソナ顕現時に発生するエネルギーを疑似暴走状態で発生させたエクストリーム・オルギアモードによるもの。

すなわち、彼は今もペルソナを纏っているようなものなので、敵を見事倒してくれた湊に近付くとアイギスがＥ．Ｘ．Ｏ．について触れた。

「八雲さん、Ｅ．Ｘ．Ｏ．の光が出ていますよ」

「……ああ、敵のガードを突き破るときに力を籠めすぎてな。しばらくはこのままだ」

流石の湊も強敵のＦ．Ｏ．Ｅを四体同時に貫くのは大変だったらしい。

少しだけ疲れた様子を見せて溜息を吐くと、手に持っていた槍からペルソナのカードを抜いて無の槍をコートに仕舞っている。

その間も青白い光は治まっていないが、彼が言うにはもうしばらくすれば治まるようなので、敵が消えたこともあってメンバーたちは先へ向かうことにする。

戦闘を終えたばかりの湊は後方で休んで貰い、間抜けな戦いを挑んで敗北した男子たちは今度は真面目に戦うというので再び前線に立って貰う。

アイギスと並んで歩いている湊の足下から、一歩進むごとに地面が割れる音が聞こえるのはご愛嬌。

どうせダンジョンの内部は後で修復されるのだ。戦闘で出来た傷もあるので、天井に空いた穴に比べれば地面のひび割れくらい問題な

い。
そうして、扉を潜って先へ進むと再びあしばや野郎が二体いる部屋に辿り着いた。
敵までの距離はそれなりにある。ただ、相手が怖がり近付いて来なくなるための聖なる炎がない。
「おっと、まーたあいつらだ」
敵に気付かれる前に足を止めた順平がＦ．Ｏ．Ｅのいる方向を見ながら呟く。
部屋に入って斜め右の方を見れば、確かに二体のＦ．Ｏ．Ｅが立ったまま待機している。
相手が炎を苦手としており、聖なる炎を持っていれば勝手に逃げてくれることも分かっているので、近くにかがり火がないか探してみる。
しかし、残念なことにこの部屋にはかがり火がなく、一つ前の部屋も同じようになかったので、ここは実力で敵を排除するか頭を使って敵が接近してくるまでに隣の部屋への扉を潜らなくてはならない。
聖なる炎がない以上は相手も全速力で向かってくるだろう。
これまでのデータから味方全体の移動速度を計算し、扉まで辿り着くのにどれだけかかるか算出したアイギスは、やや残念そうに口を開いた。
「敵の速度とわたしたち全員の速力を比較した上で計算したところ、敵に追いつかれること無く全員が無事に扉へ到着する可能性はゼロです。どう頑張っても全員が扉を潜る前に敵が来ます」
「……ここから殺せばいい」
どう頑張っても追いつかれてしまうのなら、敵が自分たちに気付く前に殺せばいい。
そう口にした湊は紅緋色の短弓〝暁〟をコートから取り出し、そこに鉄製の捩れた矢を番える。
同じように弓矢を武器として使用しているゆかりや、遠距離武器の銃火器を使っているアイギスは、ここからそんな短い弓で届くのだろうかと疑問を抱く。

湊が持っているのはどう見ても短弓だ。馬上や木々の生い茂った山の中などで取り回しがし易い分、和弓やロングボウと呼ばれる物に比べて飛距離や威力に難がある。
加えて、湊の弓に張られている黒い弦はおそらく動物由来の素材だろう。
伸縮性などを考慮するならそれで良いのだが、彼が今回選んだのは重い鉄製の特殊な矢だ。
これでは飛ばすための力が足りず、目標に届くことなく矢が地面に落ちるのではないか。
そう思って他の者より専門知識のある二人が見ていれば、湊は身体から青白い光を出したままギリギリと音をさせて番えた矢を引く。
限界まで引かれた矢を構えた湊が鋭い視線で敵を睨めば、次の瞬間、キンッと甲高い音をさせて矢が放たれた。
動体視力に自信のあった真田でも目で追えない速度で飛んだ矢は、一瞬のうちに敵へと到達すると二体いるＦ．Ｏ．Ｅの片割れの首を捉え、敵の頭部を撥ね飛ばす。
まるで鋭利な刃物で斬られたかのように、首から上を切断されたＦ．Ｏ．Ｅは飛んだ頭部が地面に落ちると同時にゆっくりと身体も倒れて消えてゆく。
一同がそんな光景に唖然としていると、続けて湊は矢を放ってもう一体のＦ．Ｏ．Ｅの股間を射貫き、相手は股間を押さえながら痛みのあまり消滅していった。
二体目のＦ．Ｏ．Ｅが倒されるのをみた男子たちが内股になって青ざめている頃、湊が持っている弓が名切りの武器である事に気付いた七歌は、やはり鬼の伝承は全て事実であったらしいと苦笑気味に溢す。
「あははは……いやぁ、実家の古い文献に名切りの事も書いてあったけど、本当に人間の手足や頭部を矢で切り飛ばしてたとはね」
「ほう。歴史的価値も相当なものだろう。九頭龍家にはそのような文献が残っているのか」
「伊達に数千年続いてませんからね。外に出せば騒ぎになる国宝級の

代物が大量にありますよ」
考古学に興味がある美鶴に訊かれた七歌は笑って答える。
名切りの蔵に比べれば数は少ないだろうが、常に共に在ったこともあって九頭龍家にもかなりの数の国宝級が眠っている。
七歌はその中に名切りの鬼たちの戦いぶりを書いた物があると知って目を通していたことで、先ほどの湊が古文書通りの戦いぶりだったと感じていた。
刀や槍で相手を切り飛ばすのではなく、矢という貫通力に特化しているであろう武器で敵の四肢や首を切り飛ばす。
対物ライフルで撃つように当たった部位の周辺ごと吹き飛ばすのではない。文字通りに綺麗な切断面で無駄な破壊をせずに切り飛ばすのだ。
過去の名切りたちも湊のように敵を殺していたのならば、敵対した者たちは何が起きているのか分からず恐怖に支配された事だろう。
もっとも、実際には過去の文献に残っているのは全て事実と異なり、そんな風に見えた者たちが勘違いして書き残していたに過ぎない。
湊が矢で敵の首を切り飛ばせたのは、アナライズで敵の弱所をミリ単位で把握し、現代科学の粋を集めた特殊合金製の矢をE．X．O．で筋力にブーストが掛かった湊が放ったからだ。
久遠の安寧との戦争中は瞬間最高速度で秒速一五二メートルを記録していた矢は、最適化が終わってからさらに速くなっており、E．X．O．のブーストを合せれば音速に近い秒速二九〇メートルまで伸びていた。
その際、特殊な溝が掘られている矢は真空の刃を纏うことで、貫通時に相手の傷口を切り広げて進む。
敵の首が切り飛ばされた真相はそれなのだが、わざわざ説明する気のない湊は既に武器を仕舞って移動を待っていた。
それを見た美鶴は疲れている湊の事を考え、出来るだけ速く先へ進もうと全員に声を掛ける。
「有里のおかげでここも無事に通れるようになった。先へ進もう」

『了解』
他のメンバーたちも美鶴の言葉に返事をして先へと進む。
しかし、数ヶ所でかがり火が燃えているせいか、蒸し暑くてメンバーたちの足取りは普段よりも重い。
いつもと変わらぬ様子で歩いているのは、Ｅ．Ｘ．Ｏ．の効果が切れた湊と隣を歩くアイギスくらいだろうか。
そんなに暑いのなら男子たちは祭り姿のままでいれば良かったのにとも思うが、彼らは喧嘩神輿で負けてすぐに私服に着替えてしまっている。
ニット帽とロングコートを着ている荒垣や、クマ皮と呼ばれる着ぐるみを着ているクマなど見ているだけで暑苦しい。
湊のように黒いロングコートを着ていても一切動じること無く歩くのなら認めるが、フラフラしておきながら周りにまで悪影響を与えるのはいただけない。
七歌や美鶴がそんな事を考えながら扉を潜ると、轟々とかがり火が燃えている今まで以上に蒸し暑い部屋に到着した。
「くそ……こうも暑いと流石に参るぜ」
「なら、帽子を脱げばいいだろう。いつも被ってると順平みたいに禿げるぞ？」
「いや、オレっちのは坊主っていうヘアスタイルですから！」
暑がっている荒垣に真田が真っ当なツッコミをいれるも、流れ弾を喰らう形になった順平が別に禿げている訳ではないと反論する。
必至になればなるほど余計に暑く感じるというのに元気なものだ。
ただ、こんな状況でもコートや帽子を脱がないことを不思議に思ったのか、最近ではあまり話しかけなくなっていた天田が荒垣に質問をぶつける。
「あの、なんでいつも厚着なんですか？」
「いや、ちっとな……」
訊かれた荒垣は少し驚いたようで目を大きく開くも、結局言葉を濁して答えはしなかった。
それは、彼が飲んでいる制御剤の副作用が関係しているため、説明

しようとするとどうしても仲間に制御剤を飲んでいるとバレるからだ。
ストレガのメンバーの服装をみれば分かるが、彼らは極端に着込んでいるか薄着でいる者に分かれている。
実は制御剤の副作用は内臓機能の低下だけでなく、体温調節の機能が正常に働かないというものもある。
そのためタカヤは冬でも上半身裸でいるし、カズキは夏場でもダブついたカーゴパンツとパーカーで厚着をしていた。
荒垣もそれと同じように、制御剤を飲んで体温が急激に下がったときのことや、激しい動悸で動けなくなったときの事を考えて厚着でいる。
もっとも、彼が飲んでいるのは湊が作らせている偽物の制御剤なので荒垣自身の体温調節機能は正常に働いており、彼が懸念している副作用も最近は薬を飲んでいないので発揮されない。
湊がカストールを預かっている間に荒垣の適性も伸びており、預かっていた湊の方でもカストールに少しだけ干渉した事で、実は荒垣のペルソナが暴走する可能性は極めて低くなっている。
精神的に追い詰められたり、四十度の熱で意識が朦朧としているなら話は別だが、そういう状況でもなければ他のメンバーと暴走の危険は変わらないのだ。
湊はその事を本人に話していないのでいつ気付くか分からないものの、少々訳ありな荒垣と天田の間に気まずい空気が流れると、おそらく偶然だろうがクマが隅の方で情けない声をあげた。
「ほよよー、暑さでお腹と背中がくっつきそうクマぁ……」
「な、なんだその姿は!?　敵の攻撃か!?」
急に変な声をあげたクマの方を見れば、何故だか彼の身体が毛皮のカーペットのように薄くなっていた。
クマ皮だけならば形状変化としてギリギリ納得できるものの、今の状態では中身の少年体までローラーを掛けられたようにペシャンコになっていると思われる。
湊と八雲の変化で人の身体が大きくなったり小さくなったりする

ことには耐性が出来ていたというのに、ここでさらに別の変化を見た美鶴が狼狽えていれば、これまでにクマが似たような姿になったのを見ていた直斗が助言した。
「いえ、敵の攻撃ではありません。暑さで干からびているだけだと思います。水をかければきっと元通りになりますよ」
「そ、そうなのか？　岳羽、悪いがクマに水を」
「あ、はい。了解です」
後衛組として水筒を持っていたゆかりは、美鶴に言われるとすぐに水筒の中身をクマにかけた。
残り少ない水をこんな事に消費するのは癪だが、一応、仲間の命が掛かっている場面だと思われる。
そうやって自分を納得させてゆかりがクマの全身に水を掛けていくと、カーペットが水を吸うように全て吸収されていき、少し経ってクマの身体は元の立体感を取り戻した。
「ふぃー……生き返ったクマよ！　危うくクマの干物になるとこだったクマ！　ミッチャン、ユカチャンありがとうクマ！」
「ああ、うん。無事に復活出来たならいいけどさ。おかげで水が底をついたんだけど」
仲間が復活した事は純粋に喜ばしい。助けられた彼もしっかりと感謝して礼を言っているので、その点については良かったと納得できる。
ただ、こんな暑い場所でクマ皮というふざけたものを装備し、そのおかげで死にかけたとなれば、はっきりいって自業自得としか言えない。
砂漠で水が貴重なように、こんなサウナのようなダンジョンでは水の有無で生死を分けるかもしれないのだ。
水がなくなった時点で撤退する以外に選択肢はなく、まだもう少し先へ行けると思っていた美鶴たちはクマの軽率な行動を咎めた。
「クマ、君が自分の装備を好きに選ぶのは勝手だ。だが、それは他のメンバーに迷惑を掛けないことが大前提。君同様、有里や荒垣のように厚着をしている者はいるが、君と違って倒れたりはしていない。また

倒れるのならその装備は置いてこい。他の者を危険に晒すことになる」
「はい、クマ……」
キツい口調で話す美鶴も意地悪で言っている訳ではない。
本当ならある程度の自由は認めたいし、これまでもクマや八雲などふざけてるとしか思えない装備だって認めてきた。
けれど、クマはその装備が原因で倒れ、回復に貴重な水を大量に消費したことで全体の進行に影響が出てしまった。
今後も同じ事を繰り返すのであれば、チーム全体のことを考えてクマをメンバーから外すしかなくなる。
それが嫌なら倒れないように努力するか、原因となるクマ皮を置いてこいと正論しか言っていないのだ。
ただ、鳴上たちはそのクマ皮こそがクマの本体だったと知っているので、後から生えてきた中身とクマ皮を離すことに不安を覚えた。
「桐条さん、その……クマの本体はクマ皮の方なんです。中身の人間は後から生えてきたというか」
「その話はメティスから聞いている。だが、今は中身だけで活動可能なのだろう？　そも、シャドウなのに飲食が必要であったり、気候の変化に対応出来ないというのが不思議だが」
美鶴の知っているシャドウは人の心は食べるものの、人間と同じ食べ物を摂取する個体がいるなど聞いたこともない。
さらにいえば、海に落ちたり火の上を平気で移動したり、個々の耐性も関係しているのだろうが周囲の温度や気候にあまり影響を受けない。
となれば、湊のアナライズで正体がシャドウの変異種だと判明しているクマも、他のシャドウ同様に飲食など不要で暑さも効かないはずなのだ。
それが誰よりも先に根を上げているのだから、シャドウなのに人よりも軟弱でどうすると言いたくなっても無理はない。
美鶴のそんな考えに苦笑いで返すことしか出来ない八十神高校のメンバーたちは、身内が迷惑を掛けたことを申し訳なく思いつつ、同

じ厚着をしていながらダンジョンの温度に一言も文句を言っていない青年がいたなと千枝が口を開いた。
「てか、クマ吉と荒垣さんは暑がってるのに、有里君って全くそういうの顔にも口にも出してないよね。江戸っ子だから熱いのと一緒で暑いのも大丈夫とか？」
「……江戸っ子は夏の暑さに文句たれてばかりだぞ。俺は単純に暑くないだけだ」
「へー。確かに汗も掻いてないし、この暑さも問題ないってすごいね」
江戸っ子が耐えられるのはお風呂の熱さくらいなもので、他の熱さや暑さへの耐性は他の地域の人間と変わらない。
それを聞いた千枝はそういうものなのかと感心しつつ、実際に湊が本当に暑く感じていないのか近付いて観察している。
外に出ているのは顔と手くらいなものだが、見た限りでは顔にも汗一つ掻いていない。
似たような状況のクマと荒垣は汗だくなので、確かに湊の言う通り彼はこのダンジョンを暑いと思っていないのだろう。
そうして、納得した千枝がそのまま湊の傍にいれば、彼の隣に立っていたアイギスも平時と変わらない様子で他の者に質問した。
「皆さんはまだ暑さに慣れていないのですか？　わたしは最初に比べて随分と楽になっているのですが」
「私はまだ慣れていないな。玲、君は大丈夫か？」
「うーん。わたしもまだ慣れてないかな。ていうか、ここは特に暑いというか冷たくておいしいアイスクリームが食べたいです！」
平時と変わらぬ様子のアイギスは、実際に湊同様ここを暑いと感じていなかった。
姉妹機だったラビリスとメティスは暑がっているので、元対シャドウ兵装シリーズという共通点があっても、暑さへの耐性などは個人差があるのだろう。
そんな彼女がまだ暑さに慣れないかと尋ねれば、暑さで少し疲れた様子の善が玲を気に掛けた。
聞かれた少女も疲労が顔に出ているものの、こう暑いと頭もぼんや

りしてくるので、冷たくて美味しいアイスクリームを食べてリフレッシュしたいと笑顔を見せる。
水筒の水もなくなってしまったので、向こうに戻って風呂でさっぱりしてからアイスクリームを食べるのもいいかもしれない。
他の者たちがそんな事を考えていれば、周囲の状況を探っていた風花が通信越しに戸惑いの声をあげた。
《あ、あれ？　いま調べたらアイギスの周りだけ温度が違うみたいなんだけど》
「へ？　なにそれ、どういう事？」
急に言われても状況が上手く飲み込めない。風花の言葉に首を傾げつつ、ゆかりがアイギスの方へと近付いてみると、確かに彼女の傍だと室温が他よりもマシというか、むしろ涼しいくらいだった。
「あ、なんかホントだ。ここらへん涼しいかも」
「てっきり暑さに慣れたのだと思っていたのですが、どういう事なのでしょう？」
アイギスは自分がダンジョンの温度に慣れて暑いと思わなくなったのだと思っていた。
しかし、実際には彼女の周りだけ他よりも涼しく、それが分かった事でゆかりもその場に居座っている。
そんな彼女たちを羨ましいと思ったのか、他のメンバーもアイギスの傍に寄ってこようとすれば、そのタイミングで風花と一緒に調べていたりせが声をあげた。
《分かった！　プロデューサーだ。プロデューサーを基点に一定の範囲だけ気温が下がってるんだよ！》
現場にいる人間には分からないだろうが、校舎からアナライズで調べていたりせはサーモカメラのように温度が見えないか試してみた。
その方法はかなり効果的だったらしく、部屋の中をサーモカメラのように温度別に見ることが出来た。
おかげでアイギス周辺だけ緑から薄い水色のように見えていたのだが、さらによく見るとアイギスの隣にいる青年の周辺は青を越えて黒に限りなく近い色で表示されていた。

湊が汗を掻いていないか確認しにきた千枝が傍に残っていたのも、きっと他よりも涼しいと思ったからだろう。
原因を理解したことでチドリが湊に近付いていけば、彼女は湊のコートに手を掛けて前を開いた。
「っ、貴方何してるのよ。自分の身体が凍りついてるじゃない」
「……ペルソナを出さないと自分を基点にしかスキルが使えないんだ。俺だけならともかく、隣にいるアイギスまで影響下に置くならこうなる」
湊に近付いた時点で涼しいどころか寒いくらいだと思ったチドリは、勢いよくガバッとコートの前を開いた。
するとそこには、霜が降りて固くなったシャツや、既に透明な氷で覆われている身体があった。
ペルソナを召喚せずにスキルを限定的に使った事が原因とのことだが、そんな事なら普通にペルソナを召喚してくれた方がいい。
思わず溜息を吐いてチドリがそう伝えれば、湊はそういうものなのかと納得して座敷童子を召喚した。
《……せっかく……八雲と一緒だった、のに……》
「その八雲の身体が凍りついてるのよ。わざわざ八雲の身体を傷つける必要ないでしょ」
お嬢様の普段着といった派手すぎないドレス姿で現われた座敷童子は、高同調状態が解除された事を不満に思いつつ、湊と手を繋いで周囲の温度を氷結スキルで下げてゆく。
効果範囲は湊を中心に半径二メートルほどだが、先ほどまでと違って効果範囲内は基点を含め一定の温度に保たれている。
身体が凍っていた湊もフェニックスの炎で全て溶かし、今度こそ快適な温度で過ごせるようになった。
ただし、彼の周りだけ涼しいと分かった事で、今は他のメンバーたちも集まってきている。
「……鬱陶しいから離れろ。勝手に入ってくるな」
「まぁ、そんなケチケチすんなって。助け合いの精神が大事だって小学校で習っただろ？」

最初から一緒にいたアイギスや湊の身体を心配して寄ってきたチドリが範囲内に残るのは分かる。
ただ、千枝やゆかりはまだしも男子まで半径二メートルの円の中に入ってくると、人口密度が高くなって鬱陶しい。
これではちゃんと歩くことが出来ず、そもそも戦う役目を与えられた者らが何をサボっているんだと湊が怒れば、順平が調子のいいことを言ってきた。
「……生憎と俺は小学校に通ってない。というか、お前らいい加減にしろ。街灯に集まる虫か」
言いながら湊は座敷童子にスキルを止めさせると、茨木童子を呼び出して火炎スキルを応用した高熱の範囲スキルを発動させる。
今度は湊を基点に半径五メートルの距離を対象に、範囲内が気温にして四十二度に保たれる効果があった。
涼しい場所でクールダウンしていたはずが、炎が燃えている部屋の温度よりも急に高い温度にされたことで彼の周りに集まっていた者たちは散ってゆく。
地味に先ほどよりも効果範囲を広くした事で、他の者たちはどこまでが効果範囲なんだと余計に距離を取っている。
快適な空間から追い出された男子や七歌が不満顔で、「ケチ」「悪魔」「ドM野郎」ととんでもない事を言ってくるも、茨木童子が火球を作って足下へ放り投げてやれば罵声も止んだ。
それを見た湊はようやく離れたことに小さく溜息を吐けば、近くにアイギスとチドリが残っていたので再びスキルを切り替え、座敷童子に半径二メートルを快適な温度に保たせると先へと進むのだった。

第三百二話　一時撤退

――ヤソガミコウコウ

稲羽郷土展の第二階層を回り終わった一同は、湊を除くメンバーの水が底をついたことで校舎に戻ってきた。

次にダンジョンに潜るときには湊がＦ．Ｏ．Ｅを排除することで、すぐにでも第三階層への階段へ向かう事が出来る。

そのため、戻ってすぐにマリーと一緒に自分の拠点に行った湊を除き、他のメンバーたちはお風呂に入ってさっぱりすると、夕食の前に翌日の準備を進めていた。

矢筒に新しい矢を補充し、弓に張っている弦の調子を見ていたゆかりは、同じように傍で武器の手入れをしていた七歌になんとなしに話しかける。

「ねぇ、そういえば元に戻った有里君の雰囲気なんだけど、これまでのダンジョンと比べると少し静かじゃなかった？」

「ほえ？　んー、この世界じゃあんまり大人の姿で会ってないからなぁ。さっきは身体が凍ってたのもあったし。特別静かとは思わなかったけど」

ゆかりに言われて彼の様子を思い出そうとする七歌は、顎に手を当ててうんうんと唸りつつ記憶を辿る。

しかし、比較しようにも放課後悪霊クラブの暗闇で淡々と敵を殺していた姿が基準になるので、それと比べれば激しい攻撃が増えた分だけ静かとは言いづらい。

ダンジョンの中を進んでいたときの事を言っているのであれば、稲羽郷土展ではアイギスが暑くないよう自分の身体を凍りつかせてまで氷結スキルを使っており。

身体が凍りついている事もあって、その時の湊は普段以上に静かで当然と言える。

ゆかりがどの部分について言っているのか分からず、これでは判断しようがないと思った七歌は、手を止めて顔を上げると素直に返した。

「ゆかりが言ってるのっていつと比べての話？」
「いつってダンジョンを歩いてるときと比べてだけど？」
「ダンジョンの構造が違うから比較しづらいんだよね。ぶっちゃけ赤ん坊状態の方が多かったし」
普段から五月蝿く騒ぐタイプではないので、七歌からすれば湊はいつも静かにしているイメージだ。
ダンジョンの中では敵の反応を感知して即座に反応し、相手を倒すまでは声を出しもしていたが、基本的には黙って歩いているだけだった。
それでもゆかりは何かが気になったようで、作業の手を止めて完全に七歌の方へと向いて口を開く。
「ただの勘だけど有里君なにか隠してると思うんだよね」
「隠してるって……例えば？」
「んー、敵の正体とかかな」
全てのダンジョンをクリアすればベルベットルームにある扉の封印が解ける。
封印さえ解ければ扉を潜って元の世界に帰れるので、自分たちをこの世界へと引き込んだ黒幕と戦う必要はない。
だが、こんな大変な事件に巻き込んだ黒幕の正体はやはり気になった。
湊ならばその正体にも既に気付いていて、けれど黙っている可能性は十分にあり得る。
彼はこれまでにも訊かれなかったからと重要な事を黙っていたり、他のものが聞けば心配するような事を隠したままでいたことがあった。
ゆかりが湊の雰囲気に違和感を覚えたのは、無意識にそういったときと似た空気を察知したのかもしれない。
ただ、ゆかりからそんな事を聞いた七歌は、他の感知型のペルソナを持つメンバーの事を思い浮かべながら言葉を返す。
「敵の正体って……風花とりせちゃんは感知出来てないのに？」
「ついでにチドリもだけど、有里君の感知能力って三人とタイプ違う

らしいじゃん。なら、有里君の感知能力の特徴は分からないけど可能性はあるでしょ」
二人のペルソナは一切の感知能力を持っていないので、能力の細かな違いなど詳しい事は分かっていない。
けれど、以前風花に聞いた話では風花とチドリの能力は受動的か能動的かの違いだけで、ベースとなる理論などは共通しているらしい。
アプローチが違うだけで同じ系統の能力ならば、出来る事も似通っているに違いない。
となれば、湊の感知能力がそれらとは異なる系統の能力ならば出来る事にも差があるはず。
もっとも、その〝差〟とやらが分からない以上はこれ以上話を広げようがないのだが、二人が話をしていると階段の方から人がやって来た。
「ねえ、わたしの名前が聞こえたけど何の話？」
「ああ、りせちゃん。それに直斗君も」
「どうも」
声を掛けられ顔をそちらに向ければ、りせと直斗が並んで立っていた。
二人は稲羽郷土展のマップを見て何やら話をしていたようだが、ゆかりと七歌の会話の中に自分の名前が出てきたのが聞こえて気になったらしい。
別に陰口を叩いていた訳でも無いのでりせが会話に参加しても問題ない二人は、せっかくだから他の人の意見も聞いてみようと七歌が自分たちが話していた内容を伝える。
「いや、ゆかりがさっきのダンジョンで八雲君の様子が普段と違ったって言ってきてね。何でもダンジョンの中を歩いてるとき、他のダンジョンのときより静かだったって」
「僕自身は気付きませんでしたが、久慈川さんはどうです？」
「わたしも気付かなかったかなぁ。ナビはあくまで全体を俯瞰する感じで、一応は皆の体調の変化とかにも気をつけてはいるけど、プロデューサーに関してはほとんど心配してないから」

ゆかりや七歌と同じように現場にいた直斗は気付かなかったという。対して、周辺の警戒をしつつメンバーの体調変化を見ていたりせは、湊の事は見ても無駄だから見ていなかったと答えた。
ナビ役がそんな事で良いのかというツッコミが入りそうなものだが、実際は他の者たちも確かに気持ちは分かると逆にりせに同情的な視線を向ける。
どこの世界にＦ．Ｏ．Ｅと素手喧嘩で戦う馬鹿がいるのか。
体力を大幅に消耗したからといって縮むなどどんな身体をしているのか。
味方の体調を気遣って自分の身体が凍りついてでもスキルを使うなど常軌を逸している。
そんな風に湊は非常識な行動を重ねているにもかかわらず、本人は何事もなかったかのようにシレッとしているので気にする方が馬鹿を見る事になる。
最初は気にしていたりせも途中で無駄だと気付いたのか、彼の居場所などは把握するようにしつつも細かな状況把握はやめたとの事だ。
そういう事ならば、現場にいなかったりせが湊の微妙な変化に気付けるはずがないので、直斗が気付かなかったと答えた時点で七歌はやはりゆかりの勘違いではと思った。
ただ、もしもの事を考えて、感知能力の専門家であるりせに細かな能力の差について聞いておくことにした。
「あ、話は少し逸れるけど、りせちゃんたちの感知能力の違いについて教えてくれない？　具体的に言うと、他三人が気付けない事に八雲君の能力なら気付く可能性があるか」
「んー、可能性で言うならあり得ると思う。わたしたちは仲間と生体情報を共有して地形とか敵の情報を把握してるんだけど、言っちゃうと皆の潜在能力いっぱいまでが共有の限界だから、それ以上の範囲とかだと精度がどうしても落ちるの」
風花、チドリ、りせの能力は基本的には同じ系統の能力だ。ただし、先ほど七歌たちが言っていたように、風花は受動的な能力なのに対し、チドリとりせは能動的な能力の使い方をしているという細かな違

いはある。
この三人の中では風花が最も強力な感知能力を持っているが、彼女のペルソナではチドリのように戦闘は出来ないし、能力を通じて相手に干渉するといった使い方も出来ない。
情報のスペシャリストと情報戦も出来るオールラウンダー。どちらが優れているかはチームメンバーのバランスによるだろう。
完全に役割を分担できるのであれば、情報の精度を優先してスペシャリストに頼んだ方がいい。
逆に人数の関係で役割分担が難しければ、オールラウンダーにアナライズ完了後に戦闘にも参加して貰う事になる。
同じ系統の能力でも細かな違いで運用法が変わってくるのだから、異なるメカニズムによって情報を集めている感知能力持ちならば、別系統の類似能力持ちには出来ないことが出来てもおかしくない。
りせ自身も湊の能力の詳細は把握していないようだが、風花やチドリから聞いた話を交えて湊の能力について説明する。
「プロデューサーの感知能力ってあくまでプロデューサーの知覚を伸ばすタイプなんだって。わたしたちみたいに他の人と生体情報を共有したりは一切無くて、個人で完結した能力だから干渉を受けないらしいよ？」
ざっくりと説明するのであれば、風花たちの能力は防犯カメラのモニターのようなものだ。
メンバーたちがカメラ役になって、風花たちはカメラ役の得た情報を入手するのである。
対して、湊は衛星カメラのような能力で、非常に広範囲を自由に見ることが可能な分、細かな設定を自分でやる必要がある。
調べた範囲内で自由の利く前者と扱いが難しい分制限がほとんどない後者。
そんな違いがあるからこそ、自分たちが気付けない情報を湊だけが入手している可能性は十二分にあるとりせは断言した。
同じ感知能力を持つ者の言葉だけあって、ゆかりの勘と比べて信憑性が格段に増した。

しかし、湊が他の者が握っていない情報を持っているとしても、相手が相手だけに聞いたところで素直に教えてくれるだろうかと直斗が考え込む。
「先輩が相手となると情報収集は難しいのでは？　あの人は僕たちが持っていない情報、欲しい情報を持っている事がよくあります。ですが、僕たちはそれが真実か判断する術を持ちませんし、先輩が意図的に誤情報を渡してくる事も考えられます」
「意図的に誤情報を渡すって、そんな事してなんの意味があるの？」
この世界から一刻も早く出たいのであれば、湊も他の者に協力するのが自然だ。
だというのに、直斗は誤情報を渡してくる可能性が存在すると口にした。
誤情報を受け取ったメンバーはきっと湊の言葉を信じて行動するに違いない。騙されたまま行動した結果、メンバーたちの身に危険が迫れば彼が助けてくれることだろう。
ただ、自分が騙して味方を危険に晒しておいて、わざわざ危険が迫れば助けるというなら、それは酷いマッチポンプではないかと思ってしまう。
人から良く見られようと思っていない湊がそんな事をするだろうかとゆかりが首を傾げれば、直斗は苦笑しながら「確かにそんな自作自演はしないでしょうね」と言葉を返す。
「僕たちに知られる事で何か不都合が発生するか、騙されている僕たちを見て楽しむか。先輩の性格ならまず前者でしょうが、後者の可能性も否定しきれないところが厄介です」
『あー……』
湊が情報を秘匿するのは自分に不利益が発生するか、湊にとって守る対象である人物に不利益が発生するパターンだ。
そういった理由であれば、後で隠していたことを知らされようと、誰かを守るためならしょうがないと納得も出来る。
仲間の事なら色々と知りたいとは思うが、誰にだって秘密にしておきたいことはあるのだから、何かの拍子で湊がその情報を得ていよう

と無理矢理に聞き出すつもりはない。
しかし、相手があの湊となると悪戯の可能性を排除できないため、彼の悪質な悪戯の被害に遭ったことのある七歌たちは揃って気の抜けた声を漏らす。
普段はとても真面目なのだ。他の男子たちがフンドシ姿で御神輿を担いでＦ．Ｏ．Ｅに突進するような馬鹿なのに対し、湊は冷静に敵の動きを見極めて安全圏から平気で急所を撃ち抜く仕事人気質。
それらは全て裏の仕事の経験によって培われてきた思考と技術なので、戦いは経験していてもあくまで一般人である七歌たちにすれば、戦闘のプロが味方にいるとあって非常に心強く感じている。
ただ、戦闘のプロだからこそ他の者と安全の基準が大きく異なるようで、皆が警戒してダンジョンを進んでいるとき、湊は気にせず食事をしたりアイギスと雑談をしていたりする。
敵の位置が自分でも分かるからこそ、湊はダンジョン内でもオンとオフを完全に切り替えているようだが、オフのときは平然とボケボケな発言をしたりもする。
チドリやラビリスをからかうような発言をしたり、校舎からサポートしてくれているりせを煽ったり、表情だけは普段通りなせいでアンバランスさが目立つがやっていることは本当に子どもだ。
そんな湊だからこそ意味もなく騙してくる可能性を排除できないのだが、彼のそう言った悪癖について考え出すと切りが無いので、七歌がこれまでの情報から黒幕に繋がるヒントがあるのではと話題を変える。
「そういえば、前のダンジョンの宝箱から人の髪束が出たでしょ？それを手にした善君がこの学校は玲ちゃんが作ったって言ってたよね。ってことは、もしかして黒幕って玲ちゃんの関係者なんじゃないの？」
「あまり憶測で話すものではありませんが、確かに可能性としてはあり得ますね。どういった関係かは分かりませんが、呼ばれてこの世界にきた僕たちと玲さんたちでは立場が異なるようですし」
これまでも何度か黒幕やこの世界について話してきたが、一番真相

に近いと思われた意見は、八雲とベアトリーチェが説明した黒幕が二人存在するという説だ。
そのとき二人が話したのは、善と玲をこの世界に閉じ込めた存在と、七歌たちを外から呼んでまで二人を出そうとしている存在は別だという事。
仮に八雲たちが言っていた通りだとすれば、閉じ込めた存在と出そうとしている存在のどちらか味方なのかという判断が必要になる。
状況を考えると玲たちの味方として七歌や鳴上たちを呼んだ存在の方が、玲たちの事を考えて行動しているように思える。
だが、もしも二人を悪用しようとしている者がいれば、手出しできない現状を打破するために七歌たちを送り込むくらいはするだろう。
考えれば考えるほど深みに嵌まって全てが疑わしく思えてくる。
これ以上は考えても疲れてしまうだけなので、七歌とゆかりは武器の整備を終えると立ち上がって背伸びをした。
「んー……はぁ。やっぱ考えるにしても情報のピースが足りないね。これ以上は考えても無駄だろうし、皆と合流してご飯でも食べようか」
「賛成。サウナみたいなとこ歩いてたから、普段以上に疲れてるし。今日はサッパリした感じのもの食べたいなぁ」
「そういう時は魚が良いらしいですよ。食欲がなくても身体は疲れている訳ですから、普段通りか普段以上に食べる必要があるんです。サンマならすだちとおろし醤油でサッパリ食べれますしオススメですよ」
どうしても疲れからあっさりとしたものやサッパリとしたものが食べたくなる。
ゆかりとしては冷たいうどんであったり、冷やし中華とかでいいかなと思っていたが、直斗がそれでは必要なエネルギーを摂取できませんとアドバイスした。
直斗が挙げたメニューなら、確かにガッツリと食べつつもサッパリしているので、希望に沿いつつゆかりの身体のためにもなる。
明日もまたダンジョンに潜るとなれば、回復のために今日できるこ

とはやっておくべきだろう。
武器整備の片付けを終えた七歌たちは、直斗たちと共に一度拠点に荷物を置きに戻ってからまんぷく亭を目指すことにし、その道すがらで疲労回復に効果的な料理の話題に花を咲かせた。
――まんぷく亭
七歌たちが荷物を置いてからまんぷく亭に向かうと、またしても店の外観が変わっていた。
暖簾には『炭火焼き肉〝まんぷく亭〟』と書かれており、サッパリしたものが食べたかったゆかりの希望は打ち砕かれた。
しかし、湊が用意するからには出てくる肉は全て国産の高級品に違いない。
焼き肉と聞いた時点で男子と千枝のテンションがＭＡＸまで上昇し、クマが出てきて札を『商い中』に変えると同時に中へと駆け込む。
期待に胸を膨らませた者たちが中へ入ると、そこには四人掛けのテーブルの中央に焼き肉用の七輪が設置された〝ザ・焼き肉店〟という光景が広がっていた。
店のルールはオーダー八〇分、席一〇〇分の食べ放題制。小学生は一五〇〇円、女子は一八〇〇円、男子は二〇〇〇円となっている。
一度の注文で頼めるのは一種類につき人数分まで、ご飯と水は店内に炊飯器とピッチャーが置かれるセルフ形式だ。
じっくりと店のルールを熟読したメンバーたちは、メニューを見ながら各テーブルに設置された電子パネルで注文してゆく。
「シンジ、適当に頼んでてくれ。水とご飯を持ってくる」
「待て。牛タンが厚切りと薄切りがあんだ。そこはどっちにするか決めてから行け」
ササッと炙るように焼くだけで食べられる薄切りと、タンのこりこりとした食感が楽しめる厚切り。これらは好みによるので、最初の一品としてどちらを頼むか決めようと荒垣が真田を引き止める。
すると、同じテーブルについていた完二が選ぶ必要はないんじゃと会話に参加する。
「いや、別にどっちも頼めばよくないッスか？　色々食いてぇなら二

人前ずつとかでいいっしょ」
「あ、ここポテトとかも置いてるんですね。有里先輩って個室の高級焼き肉にしか行かなそうなのに、庶民的な店のメニューとかシステムも知ってるのは意外ですね」
至極真っ当な意見を言った完二の隣に座ってメニューを見ていた天田は、おつまみ系の一品モノの種類が豊富なことが意外だと口にする。
確かに湊は生家も実家も富裕層なので、庶民的な店に行く機会などはあまりなかった。
その点から言えば天田の推測は正しいのだが、彼はＥＰ社で働くようになってから様々な分野の店を研究し、新しくＥＰ社で子会社を立ち上げてオープンさせてきた。
近代の日本におけるファミレスや回転寿司の電子パネルを使ったシステムは非常に画期的で、それらは居酒屋や焼き肉店にも流用され効果を発揮している。
湊もそのデータを知っていた事で、自社の店にも真似してシステムを導入するようにしたのだ。
もっとも、そんな店側の情報など客には関係ないので、荒垣は完二が言った通りにどちらも頼むことにして、さらにカルビやハラミなど様々な種類の肉を頼んでゆく。
「おまっ、それ俺が育ててた肉だぞ！」
「あ、そうなの？　いやぁ、食べ頃だからつい」
「ぜってー、わざとだろ！」
荒垣が注文を終え、真田が人数分のご飯と水を乗せたお盆を持って戻ってくると、隣のテーブルから花村の怒声と順平の調子のいい声が聞こえてきた。
せっかく破格の安さで高級な肉が食べ放題で食べられるというのに、スタート直後から騒いでどうすると真田も呆れ顔を浮かべる。
足りないなら追加で頼めばすぐに持ってくる。肉が焼けるまでなど一分もいらないので、怒るほどのことではないだろう。
これ以上騒がれると鬱陶しいので、真田は通路を挟んで隣の席にい

る順平たちを注意した。
「おい、お前ら。せっかくの肉が不味くなる。騒ぐのなら出て行け」
「いや、だって伊織が人の肉を食ったんですよ？　一人につき三枚って感じで持って来てんのに、それ超えて食うとかありえないっしょ」
通常の店ならグラムなどで一人前を設定する。けれど、それを基準にしてばかりいると、四人いるのに肉が七枚しかないという状況が発生する事があった。
そういう場合、足りないよりは良いだろうと一人前多く頼んで回避する客も多数おり、食べたい分以上に頼む必要が出てくる。
これでは結果的に店側も損しやすくなるので、湊はグラムでの設定に加えて人数で均等に割れる枚数を乗せるように指導していた。
全員が同じ枚数を食べられる訳ではないが、多ければ他の者に譲ればいいだけなので、足りなくて一人前多く頼まれるよりは出て行く量は少なく済む。
湊がそんな風に客のことも考えて設定したルールだったが、順平は食べた者勝ちだと他の者の分まで焼けるなり食べていた。
肉が最高に美味しいからこそ花村が怒るのは当然と言えるが、真田たちのテーブルも女子たちのテーブルも平和なものだ。
騒いでいるのは花村たちのテーブルだけなので、クマが持ってきた牛タンの二種盛りの皿を受け取りつつ、真田は事情は分かったが落ち着けと返す。
「花村が怒るのは分かる。だが、どうせ八〇分も食い続けるなんて無理なんだ。多少のことはこんな上等な肉を用意してくれた有里に免じて流せ」
「……はぁ、了解です」
「順平、お前は反省しろ。他のやつの分まで取るような卑しい真似をするな」
「あ、あはは……すんません」
美味しいからこそ次々食べたくなる気持ちは分かる。だが、自分さえ良ければいいという考えはよくない。
肉を前にしているからこそ、真田が普段以上に真剣に諌めれば、花

村と順平も反省したようで静かに食事を再開した。
その様子を横目で見ながら肉が焼けるのを待っていると、最高の焼き加減というところで荒垣が「焼けたぞ」と声を掛けてきた。
肉の焼ける香ばしい匂いが暴力的なまでに食欲を刺激してくる。
焼きすぎると旨みである脂が抜け、さらに身も固くなってしまうので、すぐに箸をのばして小皿に乗せた真田は、薄切りの牛タンをサッとレモン汁に通してから口に運んだ。
「……うまいっ」
網に乗せてサッと焼いただけの薄切りは、限界まで空腹を我慢していた身体を一瞬で食事モードに切り替える。
もっと肉を、もっと食わせろという欲求が脳と身体を占めてゆく。
薄切りと並行して厚切りを焼いているが、どうしても焼けるまでに少し掛かるので、その待ち時間がもどかしい。
順平に卑しいことをするなと言った手前、流石に他の者の分まで食べようとは思わないが、これは常に肉を焼きながら食べるしかないなと真田は追加で肉を頼んでおく。
最初の一枚は間違いなく最高のスタートだったと言える。普通、薄切りは瞬間的な味のみで余韻などはほとんどなかったりするのだが、湊が選んで集めた肉だけあって薄切りでさえも肉汁のスープが楽しめた。
続けて食べた厚切りはこりこりとした食感とぷりぷりとした弾力を噛んで楽しむ度、肉から旨みの濃厚なスープが溢れ出てくる。
レモンの果汁がアクセントとなってくどさを消し、ほんのりと爽やかな余韻が残ることで次の肉へとつい手を伸ばしてしまう。
厚さを変えた二種類の牛タンだけでこれだけ楽しませてくれるのだ。運ばれてくる肉にさらなる期待を寄せながら、真田は灼熱のダンジョンで疲弊した身体に最高の栄養を取り込んでゆくのだった。

第三百三話　怪しいモニュメント

――稲羽郷土展・第三夜

稲羽郷土展の第二夜を探索し終えた翌日。

消耗した体力が回復した事で湊が八雲から戻り、戦力が強化された事で階段の傍にいるＦ．Ｏ．Ｅたちを無事に突破する事が出来た。

今回の湊は遠距離からアザゼルのメギドラオンで敵を焼き払うという手段を使い。おかげでその周辺だけ床や壁が融解してしまったが、本人はどうせ後で直るだろうと無視して進んだ。

敵とはいえど相手は人型だった。そこへ地形を変えるほどの威力を持つ攻撃を躊躇いなく放つ。

表情一つ変えず淡々と敵を処理する姿を見ていた者たちは薄ら寒いものを感じ、彼が味方で良かったと心の底から思った。

自分がいれば隊列など意味が無い。背中でそう語る青年はダンジョンの熱を氷結スキルで中和している座敷童子と共に歩き、ゆっくりと階段を下りてゆく。

今日はアイギスもラビリスたちと一緒に歩いているので、湊と座敷童子だけが先行する形になっているが、アイギスが後方にいるので座敷童子のスキルの効果範囲は陸上のトラックのような縦長になっていた。

おかげでその間にいる者たちもスキルの恩恵を受けられ、今のところは快適だとリラックスした様子を見せている。

そのため昨日よりも思考に余裕があったチドリは、階段を下りている途中で湊に違和感を覚えた。

「……ん？」

何か引っかかるものがある。そう感じたチドリは湊と座敷童子の背中を見つめる。

一体何が引っかかるのか。二人の様子は普段と変わらず、時折、座敷童子の方から話しかけて湊がそれに返す形で会話をしているが、これと言っておかしなところは一切無い。

チドリがジッと湊たちを見つめていると、それに気付いたゆかりが

どうしたんだと彼女に声を掛けた。
「チドリ、そんなに有里君のこと見てどうしたの？」
「……別に。ただ、さっきから何か引っかかってて」
自分でも何が引っかかっているのか分からない。
けれど、先ほどアザゼルを召喚して敵を倒した彼に、何かしらの違和感を確かに覚えたのだ。
今の湊は普段と変わらない。仕事モードや戦闘モードに近い精神状態になっているのか、普段以上に静かになってはいるが座敷童子とも言葉を交わしているので、他の者が話しかけてもきっと返事をしてくれる事だろう。
ならば、どうしてこんなにも何か引っかかるのか。チドリが顎に手を当てて考えていれば、チドリとゆかりの会話が聞こえていた他の者も青年の事を観察する。
彼と一緒に育った家族だからこそ、誰も気付けない小さな違和感にも気付いた可能性がある。
湊は怪我をしたり体力が消耗していてもそれを口には出さない。おかげで体調や精神状態に変化があれば、他の者よりも症状が酷い場合があるのだ。
ここでまた八雲になってしまったり、何かが切っ掛けで力が暴走すればダンジョンの探索に影響が出る。
それを避けるために違和感の正体を突き止めようとチドリと共に観察していれば、湊と座敷童子を交互に見ていたラビリスが「あっ」と小さく声をあげ口を開いた。
「あっ……チドリちゃんの違和感の正体わかったかもしれん」
「……なに？」
「ああ、うん。ほら、湊君って今日はダンジョンに入る前から座敷童子だしとったやろ？」
朝食を食べ終えて少し休むと、ダンジョンに潜るメンバーたちは自分たちの装備を確認してダンジョン前に集合した。
他の者よりもやや遅れて登場した湊は、そのとき既に座敷童子と一緒に歩いており、ダンジョンに入った時点で暑さ対策の氷結スキルを

使用していたのだ。
　そのおかげでただ最短ルートを進む以上に今日は体力の消耗を抑えられている訳だが、その事が違和感の正体に関係あるのかと一同の視線がラビリスに集まる。
　すると、本題はここからだとラビリスが先ほどの戦闘を思い出すよう皆に告げる。
「んで、思い出して欲しいのはさっきの戦闘なんよ」
「さっきの戦闘？　えーっと、あの青い天使でビーム撃ったやつの事だよね？」
　彼の戦闘について思い出して欲しいと言われ、千枝が代表して戦闘の流れを口にした。
　背中に翼を生やし、どこか鳥を模したような仮面をつけた青い大型のペルソナが現われると同時に、湊たちの存在に気付いて近付いて来ていた敵を一撃で屠った。
　極光の奔流に飲み込まれた敵は跡形もなく消え去り、攻撃が着弾した地点が融解しつつもクレーター状になっていた事が印象に残っている。
　ただし、この世界に来るまで湊がワイルドだと知らなかった千枝は、彼の持っているペルソナの名前をあまり覚えていなかったので、すぐ隣に立っていた雪子がこっそりと教える。
「千枝、あのペルソナはアザゼルって言うんだよ」
「そうそう。そのアザゼルがチドリちゃんの違和感と関係あんの？」
　言われて確かにそんな名前だったと思い出した千枝。
　名前を忘れていた彼女は少し照れくさそうに頭の後ろを掻いていたが、アザゼルがチドリの言っていた違和感とやらに関係しているのかと聞き返した。
　再び聞かれたラビリスは一度頷くと、召喚出来ていること自体がおかしいと答えた。
「うん。さっきアザゼル出しとったけど、アザゼルってネガティブマインドのペルソナのはずやねん。で、その前から出しとった座敷童子はポジティブマインドのペルソナやから、どういう訳かゴッチャに召

喚出来てるみたいなんよ。チドリちゃんの違和感ってこれのことやろ？」
「ええ、その通りよ。なんでどっちも呼び出せてるのかしら？」
湊の力が二つに分かれているのは、名切りの鬼として覚醒した事で名切りの業である蛇神が目覚めた事が関係している。
元は正の心の領域であるポジティブマインドのみを使ってペルソナを召喚していたが、血に目覚めた湊は蛇神を手に入れて負の心の領域であるネガティブマインド側も使えるようになった。
蛇神は血に目覚めた時点で既に湊の支配下に置かれているが、その正体は鬼たち数千年分の負の感情が詰まった呪いである。
恨み、辛み、憎しみに絶望。人を、世界を、運命を呪いながら死んでいった者たちの負の感情。
はじめは心のしこりでしかなかった暗い感情が能力と共に受け継がれ、次第に自分たちではどうしようもないほど強大になり、一族の悲願であった愛子に受け継がれた時には宣告者〝デス〟をも超えた存在に至っていた。
湊が一〇年前の姿になったときに判明した事だが、蛇神の力を完全に制御することが出来れば、宣告者の到来を待たずともニュクスを呼ぶ事が出来る。
一〇年前に桐条鴻悦が作り出したデスも、本来ならば終末を望んだ者たちの心が合わさり十二体のシャドウが生まれ、そのシャドウたちが融合する事で宣告者として誕生する。
桐条鴻悦はその過程を省略するため、人為的に多数のシャドウを融合してデスを作り出した訳だが、蛇神も一族の人間に代々受け継がれてきたという違いはあれど、結果だけを見れば何千、何万という人間の負の感情が集まって生まれた存在だ。
綾時に言わせれば蛇神は便宜上ペルソナと呼ばれてはいるが、数多の名切りたちが抱いた世界への呪いが神格を得た存在だとか。
使い方によっては世界規模で影響を及ぼしかねない存在だからこそ、手にした湊も完全にはコントロールすることが出来ず、一定の周期で使える心の領域が切り替わるようになった事で、ネガティブマイ

ンドの期間にまともにペルソナが使えなくなる事態に陥った。
もっとも、その問題は蛇神の力をいくつかに分割し、それぞれをペルソナとして扱えるようにした事で解決した訳だが、問題が解決した後も周期ごとに使えるペルソナは決まっているはずだった。
新月の影時間明けから満月の影時間まではポジティブマインドのペルソナを、満月の影時間明けから新月の影時間まではネガティブマインドのペルソナをそれぞれ使える。
七歌たちがこの世界に来たのは二〇〇九年九月二〇日の影時間。前日の十九日が新月だったので、今の時期であれば湊はポジティブマインドのペルソナしか使えない。
よって、座敷童子たちが呼び出せても何ら不思議はないが、アザゼルを初めとした悪魔や堕天使で構成されたネガティブマインドのペルソナは呼べないはず。
どうしてどちらも呼べているのか気になったチドリは、先頭を歩いている二人に後ろから声を掛けた。
「ねぇ、八雲。貴方、どうして召喚周期の制限が外れているの？」
チドリとしては使えるペルソナが増えて便利そうだという気持ちが強い。
この世界では七歌と鳴上のワイルドが共鳴したことで変質し、他の者まで付け替え可能なサブペルソナという能力が備わった。
今まで自分の固有ペルソナしか使えなかった者たちは、擬似的にワイルドの能力を得られて喜んでいるが、元から力を持っていた二人はメインとサブの二体しかペルソナが使えないせいで不便そうにしている。
その点、個人で能力が完結している事で影響を受けないはずの湊は、召喚周期の制限が外れて二〇体以上のペルソナを扱える状態にあるらしい。
あまり多過ぎても悩んでしまいそうなものだが、戦闘慣れしている湊にすれば戦術がパターン化されているので悩むことはないという。
ただ、どうしてそんな制限が解除された状態にあるのかは知っておきたい。そう思って答えを待っていると、湊との会話を中断させられ

てやや不満そうな座敷童子が振り返って答えた。
《……ここは……世界の狭間、二つの世界が繋がったように……時間の概念が曖昧……》
「時間の概念が明確じゃないから、どっちの周期とも言えないってこと？」
《……そう……》
湊の力の変化する周期は聞いていたが、厳密に言うとどうしてその周期なのかはチドリも知らない。
単純に経過日数が関係しているのか、それとも月齢の影響を受けているのか。
チドリの勘では後者だと思っているが、確かにこの異世界では独自の理が存在しているようで、現実世界の理の中で定められた制限があっても十全に効果を発揮するとは考えづらい。
おかげでこの世界限定で湊はさらに能力が拡張されているらしい。
座敷童子の話を聞いて便利そうで良いなと他の者が羨ましがっていれば、七歌が疑問を感じて首を捻ると質問をぶつけてくる。
「あれ？　でも、八雲君の力って自分の中で完結してて、外的要因では変化しないんじゃなかったの？」
この世界に来たばかりにエリザベスから聞いた話では、湊の力は自己完結型であるため、外的要因で能力が変化することはないらしい。
彼の力が変化するとすれば、それは彼の中で何かしらの変化が起きてのこと。
ただ、そうなると時間の概念が曖昧だからといって制限が解除されるのはおかしい。それでは湊の能力も外的要因で変化する事になってしまう。
七歌がそれを指摘すれば座敷童子は小さく首を横に振った。
《……変化はしてない……正も、負も、最初から八雲の中にある……。ただ、普段は……月の満ち欠けで、シャドウが力を得るように……性質として力を使い易い時期があるだけ……》
「ほえ？　んじゃ、元の世界でも無理したらどっちも呼び出せるの？」
《……八雲は強い子……だから、できる。……でも……無理

をすると力が不安定になる……蛇神……〝无窮〟が暴走する、かも……》

彼女が口にした〝无窮〟とは蛇神のペルソナとしての名前だ。

无窮は無窮、つまり永遠や無限という意味を持つ。

死と再生の象徴である蛇。血に宿り受け継がれる事で終わりのない名切り。その二つの存在を表わすが故に蛇神は无窮という名を持った。

ただ、七歌たちにすれば名前の由来などどうでもいい。単純にあの化け物が湊の制御を外れて暴れると聞いて、その場面を想像しただけで背筋が寒くなっていた。

「いや、それはヤバい。マジでヤバいから勘弁して……」

「有里の持ってる蛇神ってペルソナはそんなにすごいのか？」

月光館学園のメンバーと異なり、話に出てくる蛇神とやらがどれだけのサイズか知らない八十神高校のメンバーは、何故そこまで怯えるんだと不思議そうに彼女たちを見る。

持ち主が湊の時点で並みのペルソナでない事は分かるが、それでもペルソナはペルソナのはず。

一体何がそこまで恐ろしいのだろうかと尋ねれば、完全に顕現した蛇神を思い出して顔色を青くさせた順平が口を開いた。

「すごいとかそういうレベルの話じゃないんだって。空を飛んでたけど街一つ覆えるサイズだぜ？　ほら、お化け屋敷で有里の麒麟がフロア一つ破壊した事あっただろ。あのとき守ってくれた骨がその蛇神の頭の骨だ」

順平の話を聞いた鳴上たちは驚きで目を見開いている。

もっとも、放課後悪霊クラブでメンバーたちを守ったときの骨は、蛇神の頭骨そのものではなく、湊の力で蛇神の骨を再現したものだ。

そうでなければ街一つ覆える規格外のペルソナを、頭骨限定といえ室内で顕現させるなんて出来るはずがなかった。

順平から蛇神のサイズを聞いた者たちは、この世界でそんなものが暴れれば最悪この空間が崩壊する可能性もあると理解した。

この世界であれば正負の制限が外れるにしても、出来るだけどちら

か一方にしてくれと頼み、湊がそれに適当に手を振って返すと階段が終わった。
　ようやく辿り着いた第三階層はこれまでより少しだけ落ち着いた雰囲気を感じる。
「ようやく着きましたね。僅かに内装に変化が見られますが、室内温度などは以前そのままであります」
「出来る限り有里先輩のスキル内で行動するようにしましょう。僕たちにとってはダンジョンの環境そのものが脅威ですから」
　一度座敷童子のスキル内から出て温度を確かめたアイギスは、厄介な温度はこのフロアでも健在だと嘆息する。
　それを聞いた直斗は他の全員に出来るだけ密集し、座敷童子のスキル内から出ないよう呼びかけた。
　サウナのような温度は体力を奪うだけでなく、ストレスを与えたり集中力を乱す効果がある。
　そのせいでメンバー同士が衝突すればそれだけ進行が遅れるので、余計な体力を使うくらいなら先を目指すことを優先する。
　湊以外の者たちが全体の方針を確認し終えたところで、先を目指そうと全員が歩き出した。
　だが、いざ進もうとしたところでいきなり封印された扉に行く手を阻まれる。
「あー……また聖なる炎の扉っスね」
「かがり火はあるが火が着いてねぇな。クソ、また上から持って来いってのか」
　聖なる炎が無ければ通れない扉を前に、面倒臭いと荒垣が愚痴をこぼす。
　降りて来た階段の傍にかがり火があったので、松明に火を移して持ってくれば、なんとか今いる部屋のかがり火に火を移せそうだ。
　ただ、わざわざ持ってくるのが面倒なので、敵がいないのだから代表で誰かが持ってこようという話になる。
　そんな事を話している間に全員で行った方が速く済みそうだが、座敷童子が維持している快適空間から離れたくないという思いが働い

てしまっているらしい。
「完二、任せたぜ」
「ああ？　いや、ここは先輩が行くとこっしょ」
「学校は縦社会なんだよ」
「なら、クマでいいッスね」
「クマは学校に通ってないクマ」
男子たちがお前が行ってこいよと押し付け合いを始める。
傍から見ていればなんとも見苦しいが、全員の頭に昨日の苦労が残っているため、余計な事を言って押しつけられるのを避けるためか女性陣も黙っていた。
「……はぁ、お前ら一つも仕事しないなら帰れ」
探索を開始したばかりでこんな雰囲気になり、それを見ていた湊は呆れた表情で溜息を溢す。
今の彼らはただ湊の後ろをゾロゾロと着いてくるだけのお荷物だ。
敵が出たときに戦ったり、ダンジョンのギミックを攻略するために奔走したり、何かしらの手伝いをするなら湊も少しくらいは範囲スキルの中で休んでもいいと思っている。
けれど、階段を上って火を移した松明を持ってくる程度の仕事もしないなら、いっそスキルを完全に解除しても良いんだぞと視線で釘を刺す。
快適な状態を知ってしまった者たちにすれば、今更暑いダンジョンの中を探索するなど地獄でしかない。
そんな地獄を味わうくらいなら一時の苦労を選ぶ方がマシ。すぐリスクを計算した順平や花村が駆け出そうとすれば、右腕に黒い炎を纏わせた湊が封印された扉に近付いた。
「すごい。はーちゃんが近付いただけで扉が開いた……」
腕に黒い炎を纏わせた湊が近付けば。それだけで封印されていた扉が完全に開いてしまった。
色で判断するなら魔界や地獄の炎にしか見えないというのに、扉が開いた以上は湊の炎も聖なる炎の性質を持っているに違いない。
これで今後は湊がいれば聖なる炎の封印は完全に無視できる。

ラッキーだったと思いつつも、先ほどまでの自分たちの行動を反省しながらメンバーたちは湊の後を進む。
「おっし、クーラーの部屋から出れない病はここまでにしとこう。じゃねーと次はマジでスキル解除されっから」
「ああ。流石に有里ばかりに負担を掛ける訳にはいかないしな」
次こそ自分たちもちゃんと働くぞと花村と鳴上が気合いを入れる。
他の者は楽できていたせいで意識していなかったが、よく考えれば快適空間を維持しているスキルは、常に湊の適性値を消耗し続けているのだ。
彼は疲労が顔に出ないので負担が分かりづらいが、自分たちが思っているよりも負担が大きいに違いない。
ならば、楽をさせて貰っている分、今度こそしっかり働いて彼の負担軽減を目指す。
二人以外のメンバーも彼らの言葉に頷いているので、ここからはメンバーらの態度ももう少しマシになるはず。
まぁ、湊の性格を考えると欠片も他人に期待していないと思われるが、自分でやると決めた以上はやるのだ。
腑抜けていたメンバーたちの目にやる気が宿り、歩いていた通路から扉を潜って新たな大部屋に到着する。
だがその瞬間、視界に飛び込んできた巨大な下半身に順平が驚きの声をあげた。
「うおぉぉぉぉぉぉっ!?」
「なんじゃこりゃー!?」
順平に続けて花村も思わず叫んでしまう。
扉を潜って大部屋に到着したメンバーたちの視界に飛び込んできたのは、高さ十数メートルはあると思われるフンドシ姿の下半身。
フンドシには〝青竜〟と書かれており、さらにそこから提灯が一つぶら下がっている。
こんな巨大な敵が相手となると自分たちでは太刀打ちできないため、どうしても湊に頼ることになりそうだが、自分たちが部屋に入ってから相手は欠片も動いていない。

そう思って観察しているとりせから通信が入ってくる。
《んー、それ多分建造物みたい。トンネルっていうかゲートみたいか感じ？》
「祭りのためのモニュメントか……。確かにそういった類いの祭りもあるが、これは……」
巨大な下半身の正体はシャドウやＦ．Ｏ．Ｅではなく、ただのダンジョンの飾りのようだった。
一応、子宝祈願に下半身に関係してくるような祭りもあるので、それに倣ったモニュメントなのかもしれないが、流石にインパクトが強くて目に毒だと美鶴も視線を逸らす。
すると、視線を逸らした先にこれまでと異なる封印の御札が貼られた扉があった。
「む、どうやらあれは扉の封印を解くためのギミックらしい。正しい順番であの鳥居を回り、全ての鳥居の提灯に灯りを灯せば封印が解けるようだ」
封印の解除は巡礼という形で行なわれるようで、『玄武、白虎、青龍、朱雀』の順に回る必要がある。
フンドシに書かれているのが青竜で、巡礼順に書かれているのが青龍になっているが、その辺りの細かな違いはご愛嬌だ。
あの下半身のモニュメントが鳥居で、回る順番も理解したなら後は指示通りに回って行けばいい。
だが、巡礼を始める前に注意点があるよと雪子が口を開いた。
「あ、神社とかの巡礼って決まりがあってね。引き返しちゃ行けないんだって。ちゃんと帰り道も決まってるから」
「なるほど。では、一筆書きのように一方通行で潜り抜けて行く必要があるみたいですね」
逆走すれば巡礼失敗としてやり直しになる可能性が高い。
無駄に移動して消耗するのは嫌なので、しっかり注意して進もうと確認すれば、周辺を確認して『玄武』の鳥居を探し始める。
ただ、やはりフンドシ姿の下半身の股下を通ることに抵抗があるのか、遠くに見える鳥居の方を向いてゆかりが愚痴をこぼす。

「はぁ……やだなぁ近付くの」
「今更初心なふりをするな。男の下半身なんて見慣れたもんだろ」
「ちょっ、なっ、んな訳あるかぁっ!!」
ゆかりが愚痴をこぼすと近くにいた湊がとんでもない事を言っていた。
言われた瞬間は呆気にとられてしまったが、すぐに何を言ってくれてんだと耳を赤く染めたゆかりが彼の背中をビンタする。
バシンッ、と痛そうな音が辺りに響くが自業自得だ。
彼らしいと言えば彼らしい発言だったが、デリカシーのない発言をした湊を直斗が諌めた。
「先輩、事実がどうであれ今の発言はセクハラですよ」
「……白鐘は海外でも日本の法律基準で考えるのか？　残念ながらここは異世界。日本の法律は通用しない」
「いやその……確かにそうですが……」
そう言われてしまうと直斗は何も言い返せない。
アフリカで原住民が全裸でいようと猥褻物陳列罪にならないように、日本基準なら罪になったとしても、地域や時代が異なればルールも違ってくる。
いま湊たちがいるのは八十神高校を模してはいるが、ここはあくまで異世界なので日本の法律は通用しないのだ。
「やっぱ都会って進んでるんスね」
「いや、俺も元は都会っ子だけど全然だったぞ。相棒の方は？」
「俺も全然だったよ」
ローカル線の電車に揺られること数時間な稲羽市に来る前、元々東京に住んでいた花村と鳴上。
ゆかりの性事情から田舎と違って都会は進んでいると判断した完二に、先輩である男子二人は都会での生活を思い出して田舎も都会も関係ないと教えてやった。
だが、そんな彼らの会話はゆかりの耳にも入ってきており、やっぱり誤解されちゃったじゃないと再び湊に抗議する。
「有里君のせいで変な誤解受けちゃったじゃない！」

「誤解って……実際、何度も俺の身体を見ただろ。あのときは別に照れてなかったじゃないか」
「顔に出なくなってただけで照れはずっとあったの！　てか、恋人とその他じゃ違うでしょうーが！」
湊が先ほど見慣れているだろうと言ったのは、付き合っているときに何度も肌を重ねていたからだ。
最初は電気を消して欲しいと頼んでいたが、慣れてくれば明るい部屋で情事に耽ることもあり、ゆかりは何度も湊の身体を見ていた。
そのときに照れた様子がなかったので、てっきり慣れて照れが消えたとばかり思っていたが、それは顔に出ていなかっただけで照れはずっとあったらしい。
そも、恋人のは大丈夫でもその他の男の下半身など見たくもないのだが、湊は彼女がいるときでも羽入やラビリスと一緒にお風呂に入っていたので、恋人以外の異性の身体を見ることに抵抗感がない。
大概の男はスケベ心からそういうものなのかもしれないが、ゆかりの言葉を聞いて女子はそういうものかのかと学習している青年を見て、鳴上は二人が付き合っていた事に純粋に驚く。
「有里と岳羽さんは付き合ってたのか」
「昔な。よく知んねーけど、特別課外活動部の方に集中するために別れたらしいぜ」
鳴上の呟きに順平が又聞きした内容だがと前置きして答える。
シャドウとの戦いに集中するため、愛している恋人と別れるなど年頃の少女としては相当の覚悟が必要だったに違いない。
今もゆかりが少々怒った様子で湊に突っかかっているが、過去の事情を聞いた後だとゆかりが構って貰いに行っているようにも見える。
鳴上は仲間と出会って一年も経っていないが、自分たちを結ぶ絆の強さは負けていないと思っている。
ただ、昔から一緒にいたことで積み重ねてきた思い出や歴史については、どうやっても勝つことが出来ない。
言葉に出さなくても通じ合っている。そんな関係を少し羨ましく思った鳴上は、小さく口元を歪めると最初の鳥居に向かって歩いて

行った。

第三百四話　恋愛トーク

――稲羽郷土展・第三夜

新たな封印の扉を開くため、人の下半身型の鳥居を潜り巡礼する一同。

現われる敵は湊が黒と白銀の二丁拳銃で撃ち殺し、距離が近ければ黒炎を尾のように伸ばして貫いた。

近距離も遠距離も対処可能とは知っていたが、彼の持っている道具は通常兵器ですら威力が桁違いなのかと思わず呆れてしまう。

そんな青年に戦闘のほとんどを任せきりになっていた時、先ほど湊とゆかりが昔付き合っていたと聞いた千枝が、好奇心に瞳を輝かせながらゆかりに近付いて声を掛ける。

「ねぇねぇ、有里君と付き合ってたって話だけどさ。恋人同士のときってどんな風に過ごしてたの？」

「えっ!?　きゅ、急にどうしたの？」

「いやぁ、同年代の人のそういう話とかって聞く機会ないからさ。漫画みたいな甘い感じだったりするのかなーって」

えへへと少しだけ照れたように笑ってみせる千枝に対し、ゆかりはダンジョンの中でそんな話題で盛り上がって良いのかという考えが頭を過ぎる。

視界の端では湊が投げナイフで敵を屠り、一瞬だけゆかりの方にも視線を向けてきたが、彼女たちの会話を止めさせる気はないようで敵を倒し終えると再び黙って進んでいる。

ここで湊が止めてくれれば話すつもりはなかったが、彼が止めないという事は好きにして良いのだろう。

ならば、少しくらいは教えても問題ないかとゆかりも当時の記憶を掘り返し、いつの間にか集まっていた千枝以外の女子たちにも話して聞かせる。

「べ、別に普通だったと思うけど。買い物に行ったり、ＤＶＤ借りてきて映画みたりとか。あとは宿題やるときに勉強も教えて貰ったり」

「ザ・王道って感じだね！　あ、なら悪い人に絡まれて助けてもらった

りは？　ヒロインのピンチに彼氏が駆けつけるって定番だし」
雪子もこういった話題に興味があるのか、千枝以上にグイグイと話に乗ってくる。
彼女の中では映画や小説の中に出てくるような恋愛が王道らしく、湊のように身体を鍛えている男子が彼氏だったなら、悪漢から守って貰えた事もあるのではとヒーロー的エピソードを期待している。
ただ、聞かれたゆかりとしては余り記憶にないので、どうだったかなと顎に手を当てて昔の記憶を深く探る。
そもそも、湊は中等部の頃から人助けをしていた。相手が高校生や大人だろうと構わず向かい、絡まれて困っている学生だけでなく、全く知らない大人であっても助けていたのだ。
桔梗組のある六徳市から港区へ向かうローカル線と港区と辰巳ポートアイランドを結ぶモノレールでは、湊が即座に痴漢を発見して拘束していたことで、最も痴漢が難しい路線と話題になった。
あまりにも湊が即座に発見して捕縛してくれるため、情報提供のせいで湊が学校に遅刻しないよう、鉄道会社側が湊に痴漢担当部署への直通電話を教えていたりする。
そんな彼だからこそ人を助けるのは当然という認識を周りは持っており、逆に悪事を働いている者も彼の傍では悪い事をしないようにしようという認識があった。
おかげでゆかりも小さいことならあったかもしれないが、そんな大きなトラブルに巻き込まれた事はなかったと思ったが、全くなかった訳ではないなと一つのエピソードを語る。
「ん、んー……付き合ってるときは流石になかったかな。あ、でも、そうだなぁ。お父さんのお墓参りに行ったときに、同じ事故で親戚が亡くなったらしい一家がいたんだけどさ。墓参りが面倒だったみたいで、原因作った桐条グループとお父さんの悪口言ってたの」
「何それ、親戚のことで怒ってるんじゃなくて、墓参りを面倒くさがって怒ってたの？」
「うん。亡くなった人の事は見下して笑ってたよ。補償金が手に入ったから死んでくれてラッキーみたいに言ってたし」

聞いた千枝は度しがたいなと眉根を寄せて顔を顰める。
親戚が亡くなったことを悲しみ、原因を作った者に怒りをぶつけるのなら分かる。
霊園で騒ぐのはどうかと思うが、大切な人を失ったならば感情的になってもおかしくない。
しかし、そうでなく故人を悼むどころか貶し、ただ墓参りが面倒だからと原因を作った者に怒りを持つなど千枝の常識からは考えられなかった。
想像して信じられないと怒りを見せる千枝にゆかりも頷いて返す。
「霊園の中で大声で言ってたからさ。お父さんの事は頭にきたし、亡くなった人も可哀想だと思って怒鳴りに行こうとしたの。でも、相手は成人してる男が二人いて、私はお母さんと二人だったから、お母さんが危ないから止めなさいって止めてきてね」
「あー、確かにそれは危ないかもね。でも、あたしだったら振り切ってカンフーキックしてるよ」
「うん。私も振り切って文句を言おうとしたんだけど、急に悪口言ってた人が奇声上げて苦しみだしてさ。驚いてたら有里君が薄く笑いながら登場したんだよね」
あの時は本当に何が起こったのか分からなかった。怒鳴りつけてやろうと思った相手が急に奇声を上げて地面の上でのたうち回っていたのだ。
直後に湊が来なければ、場所が場所だけに幽霊に呪われたのではと思った自信があった。
雪子たちもそれに近い想像をしたのだろう。死者を冒涜するような非常識な相手なら、違法薬物に手を出していても不思議ではないと思ったままを口にする。
「え、何それ？　危ない薬？」
「いやいや、そんな訳ないから。一緒に来てた桐条先輩のお母さんと付き人さんが言うには、有里君が遠距離から殺気を飛ばしたんだって。相手が急に暴れたのは恐慌状態になってたからしいよ」
殺気を飛ばして相手が恐慌状態になるなど、どんな特技だと千枝た

ちは呆れた視線を先頭の青年に向ける。
言われたところでどんなものなのかは分からないので、あくまで自分に出来る範囲の想像でしかないが、逞しい体躯をした長身の青年がキレた様子で目の前にくれば腰を抜かすに違いない。
きっと相手もそんな感じで発狂しかけたのだろうと思っていれば、ここで七歌も会話に参加してきた。
「八雲君って結構いつもタイミングいいよね。前に不良の溜まり場に行ったとき、私たちが不良と衝突しそうになったら、急に来て全員に重圧かけて動き止めてきたし」
「ああ、そっちもあったね。まぁ、何故か桐条先輩の胸触ってから帰って行ったけど」
「……別に帰る前にわざわざ触った訳じゃないだろ。誤解を招くような言い方をするな」
「いや、事故ならともかく自分で触りに行ってたでしょ」
ヒーローのように登場して人助けをするという話題だったはずが、急に湊が帰り際に痴漢をして去って行ったように言われたことで、湊は振り返ってゆかりの発言を訂正した。
けれど、湊はあのとき自分の意思で触っていたはず。事故で手が当たったとかではなく、完全に自分から美鶴に近付き、背後から両手で双丘を鷲掴み弄んでいたのだ。
これでは言い逃れ出来ないだろうとゆかりが冷たい視線を送れば、密かに話を聞いていた男子たちが反応し、花村が驚いた表情で美鶴の胸あたりを指さして湊に質問する。
「え、お前マジでアレを触ったの？　つか、ホントに触っただけか？　揉みしだいたとかじゃなくて？」
「……不良たちが身体目的ぽかったからな。どこが良いのか不思議で確認してみただけだ」
あくまで性欲ではなく理解出来ない事への興味からの行動。
相手がゆかりならともかく、桐条家の人間である美鶴ならそれが事実なのだろう。
もっとも、それが理解出来るのはごく一部の人間であり、理解出来

る少女たちも頭では分かってはいるが、彼に想いを寄せる年頃の少女の感情としては理解出来なかった。
故に、その場に不穏な空気が漂い始めれば、そういった事をあまり気にしない七歌が暢気な声で美鶴の胸の感想を青年に尋ねた。
「んじゃ、あのときの感想は？　私的にはずっしりとした重みがありつつ、しっかりと柔らかさと弾力があって良かったんだけど」
「……まぁ、普通だったな。とりあえず本物ではあったが」
「当たり前だっ!!　というか、君たちは真面目に人の胸について話し合うのをやめろ！」
何故こんな大勢の前で自分の胸について語られなければならないのか。
今からあのときの事で湊を怒るつもりはないが、羞恥で耳まで真っ赤に染まった美鶴は七歌たちを注意する。
しかし、これはとても大切な事なのだと七歌は美鶴に食い下がった。
「えー……でも、美鶴さんも気になりません？　おっぱいマイスターの八雲君が選ぶベストバストが誰のかって」
「年頃の女子が大っぴらにする会話じゃないだろう」
「あ、興味について否定はしないんですね」
言われて美鶴は気まずそうに視線を逸らす。
確かに美鶴も下品な話題だと思いつつも、彼が誰を選ぶのかという興味はあるのだ。
勝手にそんな話にされている青年にすれば、誰がおっぱいマイスターだと言いたいに違いない。
だが、女性陣は知っているのだ。赤ん坊の姿になっていた八雲が女性の胸が大好きだったと。
あくまで母親を求めての行動だったにしても、彼はよくアイギスの豊かな双丘に顔を埋めてリラックスしていた。
そこに今回の話題が出たことで、湊が胸好きという認識を全員が持ってしまい。湊がそれを否定する前に七歌が単刀直入に聞くねと話し掛けてきた。

「で、八雲君は誰の胸が好みだった？　色や形、大きさに感触と条件は色々あるけど」
「……その質問に意味があるとは思えないが」
「いやぁ、乙女としては好きな人に自分の身体も好かれてたいと思うもんだよ」
女子である七歌にそう言われると、湊としてはそうなのかと考え込む。
彼は女性陣にとっては真面目な話しなのだろうと認識して真剣に考えているが、実際にはただ湊の胸の好みが知りたいという下衆な話題でしかない。
女性陣だけでなく男子たちもその事は分かっているが、これはこれで面白いので黙って耳を澄ます。
一部の女子はきっと自分に違いないと自信を持ち、また一部の女子は自分だったら良いなと淡い希望を抱く。
そうして考えながらも敵を倒して湊が進んでいれば、やや苦笑気味にラビリスが口を開いた。
「いや、湊君が好きなんてかすみちゃんのやろ？」
「……ああ。そうだな。あいつのが一番感触としては良かった」
ラビリスの言葉を湊が肯定した瞬間、まさかのダークホースに月光館学園の人間は驚愕の表情を浮かべる。
対して、知らない名前が出てきた八十神高校のメンバーは首を傾げ、傍にいる月光館学園の者にどんな人間か尋ねている。
曰く、一つ下の後輩。高校生だけどロリ系。ペット系少女。ゆかりの身長で美鶴以上のボディ等々。
話を聞いて情報が集まりにつれて八十神高校の湊を見る目が汚物を見るように濁ってゆくが、伝えられている情報に悪意があると感じた湊は、着ていたコートを脱いで頭から被って一瞬身体を隠すと、被っていたコートを脱いだ次の瞬間には姿が羽入かすみに変えていた。
「ちょっ、ええっ!?　だれ!!?」
「えへへ、にゃっちー」

驚く千枝に羽入が人懐っこい笑みで朗らかに手を振る。
つられて千枝も「ど、どうも」と挨拶を返すが、彼女に限らず他の者たちも一瞬で湊が別人に変化した事に驚いていた。
月光館学園の制服を着ているものの、靴とリュックには天使の羽根のような模様が描いてある。
身長は確かにゆかりくらいだが、身に着けているアイテムや雰囲気から確かにロリっぽさが出ていた。
しかし、その視線を身体に向けると胸元の凶悪な膨らみが目に飛び込んでくる。制服のジャケットで多少は潰れているはずだが、分厚いジャケットを着ていても尚主張しているのだ。
だからといって、腹回りや腰の辺りにも余分な脂肪がついているかと言うと答えはノー。運動している訳でもないのにゆかり並みに絞れており、すらりと伸びた手足の白さが実に眩しく映る。
これが湊が認めた胸を持つ少女かと八十神高校の者たちが思わず納得していれば、他の者よりも復帰が速かったチドリが羽入に話しかけた。
「……あんた玉藻でしょ」
「ちがうよ？　えっとね。玉藻のスキルは自分と湊君に効果があるんだよ」
「なら、八雲が自分で真似してるの？」
「真似じゃなくて人格の複製なんだよ。湊君は記憶を丸ごと読み取れるから、完全に切り替えれば他人になっちゃうの」
最初、チドリは湊が玉藻と完全に同調して彼女に変化させたと思った。
しかし、それを相手が否定したことで、ここにいる羽入は湊が変化した姿と言うことになる。
もしも湊が裏の仕事で鍛えた演技力を発揮しているのなら、気持ち悪いからやめろと即座に止めさせたが、完全に人格を入れ替えているなら無理矢理とめても良いのかと考えてしまう。
仕草も雰囲気も本人そのもので、彼女と一番一緒に過ごしていたラビリスも本人だと思ってしまうと認めている。

姿を完全にコピー出来る玉藻と相手の記憶ごと人格をコピーできる湊。
今まで彼がこんな組み合わせで力を使ったことがなかったので分からなかったが、人間社会においてこれほど恐ろしい能力はない。
男子たちはメンバーにいないタイプの羽入の姿に注目しているが、女性陣は別の部分に注目して驚いていると、羽入は手に持っていた黒いコートを頭から被って姿を隠した。
別に変化する条件に姿を隠すというのは含まれていないが、変化する瞬間を隠した方が夢がある。
そんな割とどうでもいい理由でコートを被った羽入がコートを脱げば、そこには元の姿に戻った湊がつまらなそうな顔で立っていた。
「……さて、羽入を選んだ理由だが、一番感触が面白いからだ。手に馴染むと言ってもいいが、別に大きさで選んでる訳じゃないぞ」
「ツッコミどころそこじゃないんだけど。ていうか、八雲。貴方あいつの胸も触ったの？」
「まぁ、風呂で身体を洗うときにな。流石に二人ではほとんどないが、ラビリスと三人で入ったりはしていたから」
手に馴染むと言われても、ここにいるメンバーは手に馴染むほど人の胸を触った事がないので感覚を共有できない。
ただ、ラビリスは彼のそんな特殊な感覚を頭では分かっているらしく、だからこそ彼が羽入の胸が一番好きだと言い当てることが出来た。
昔付き合っていたゆかりですらそこまで深く理解出来ていないのに、一緒に風呂に入ったりしている事も含め、もしや現在の彼女はラビリスなのかと直斗が尋ねた。
「有里先輩とラビリスさんは付き合っているのですか？」
「ううん。一緒に住み始めたときにお風呂の使い方聞いたんやけど、そのとき一緒にお風呂入ったから以降も続いてるんよ。ほんで、お隣のかすみちゃんが泊まりに来はったときは、かすみちゃんが一緒に入りたい言いはるから三人で入ってたりするんよ」
時間が合わなければ別々に入っているし、羽入が泊まりに来たとき

もラビリスだけ彼女と一緒に入ることもある。
しかし、この辺りの事は普通の家庭で育った者には理解出来ないだろう。
天然が入った三人が揃ったからこその奇跡であり、もしもそこにチドリやゆかりがいればラビリスとの入浴すら定番化していないだろう。
本来ならそんな関係は不潔だと批難されてもおかしくないが、あまりに世間とずれていることでツッコミが追いつかないでいると、スタイルの良い美少女と二人と一緒に入浴するシーンを想像したのか順平が悔しそうに拳を握る。
「そーいや、前に勉強会で有里ん家に行ったとき、三人で川の字で寝てたな。チクショウ、まさか風呂まで一緒だったとはっ」
「有里、そんなに誰彼構わず手を出してると刺されるぞ」
悔しがる順平を横目に鳴上が親切心から忠告する。
彼も湊と同じような状況になりそうになっているが、幸いなことに仲間内がギスギスなりそうな状況は避けられている。
複数の女性と同時に良い仲になるほどのキャパシティなどないし、切実な問題として居候の身である少年には甲斐性がない。
友人としてならば仲良くもするが、色々な女子を部屋に連れ込んでいると従妹である菜々子の教育に悪いと堂島にも怒られるだろう。
だからこそ、彼は他人事として忠告することが出来たのだが、言われた湊は煙管の煙を意味もなく吐きながら言葉を返す。
「そんな訳ないだろ。これまで付き合ったのは岳羽だけだ」
「ん？　でも、ごーこんきっさで経験人数はもっといるように言ってなかったか？」
「……別に付き合わなくても抱けるだろ。ソフィアは少し特殊だが、チドリもラビリスも山岸も何も言ってこないし。同時に相手した事だってあるんだ。刺されるならその時に刺されてるだろ」
『同時？』
一瞬、彼が何を言っているのか理解出来ず、全員が首を傾げて名前の挙がった少女たちを見る。

だが次の瞬間には意味を理解し、ほとんどの者が顔を真っ赤に染め、まさかそんなはずはと口にする。
男女の営みすら未知の領域だというのに、そんな大勢でなどどうやってするんだと首まで赤くなった千枝が尋ねる。
「え、えええええっ!?　そそそ、それってもしかして、有里君一人と女子四人で一緒にそういう事したってこと!?」
「いや、ソフィアは別だ。あいつとは二人でしかしてない」
テンパりながら尋ねている千枝を冷めた視線で眺めながら、湊はそれが当然であるはずなのにソフィアとは二人きりでしかしてないと答えた。
その答えを聞いた千枝はああそうかと僅かに安堵しかけるも、いや女子三人でも多いぞと思い直す。
他の者たちも同じように感じたようで、隅の方で姉の肩に手を置いて詰問しているアイギスを視界に収めつつ花村が湊に突っかかった。
「なんだよそれ。女子二人とだってあり得ないのに、三人同時ってどうなりゃそんな状況になるんだよっ」
「実家で山岸を保護しているときにな。三人とも部屋にいたから丁度良いと思ったんだ」
「お前の棒は一本しかねぇだろうが！」
二対二ならペアで出来るが、一対三ではどう考えても棒の数が足りない。
道具を使えば可能かもしれないが、湊が相手だとそういった事はしてないと思う。
だからこそ、どうやって女子三人を同時に相手にしたのか分からない訳だが、こちらでの会話が聞こえていたバックアップ組の方でも何やら会話していた。
《風花ちゃん、見た目によらず進んでたんだね……》
《ち、ちがうの。その、元々は二人きりだったのに、私とチドリちゃんが一緒にいるから丁度良いって有里君が言い始めてっ》
《でも、その後にラビリスさんも一緒になってしたんでしょ？》
《私たちは抵抗したんだよ？　けど、有里君は影が使えるから、あれで

拘束されたらどうしようもなくて……》
りせと風花の会話が聞こえた一同は、湊の影と言われて彼の足下を見る。
そこには他の者と同じような暗さの影があるが、そんなものがあったところで人を拘束するなど出来ない。
ならば、一対どうやったんだとゆかりが視線だけで彼に尋ねれば、湊は面倒臭そうに蛇神の影で出来た腕を伸ばし。実際にゆかりの四肢を拘束して自分の許に引き寄せた。
拘束されているゆかりは藻掻いて抜け出そうとするも、蛇神の影はシャドウやペルソナと同じ異能である。
人間の腕力でそんなものに勝てるはずがないので、頑張っていたゆかりも少しすると大人しくなり、そのタイミングで湊も拘束を解いた。
だが、彼が抵抗した三人を無理矢理に拘束した事が判明した事で、自由になると同時にゆかりの拳が青年の顔面を捉える。
「思いっきり犯罪でしょうがっ!!」
「……ぐっ」
殴られた衝撃で湊の身体が数歩後退する。そこへさらに追撃をかけようとすれば、湊を守るように氷壁が現われてゆかりの進行を阻む。
邪魔をするのは誰だとゆかりが視線を動かせば、湊の傍に立っている少女がゆかりを睨んでいた。
《……やめて……八雲を苛めちゃ、ダメ……》
「悪いのは有里君でしょ!」
《ちがう……三人とも……一緒は、イヤって言っただけ……見られるの……恥ずかしいって……》
女子を拘束して無理矢理に行為へと及んだ。そんな性犯罪者にゆかりは天誅を下すつもりだった。
けれど、彼を守るように立っている少女は、湊の仲にいたからこそ当時の状況を正確に知っている。
風花たちが嫌がったのは湊に抱かれることではなく、あくまで他の

者に行為を見られる事だったと。
《……全員、淫乱……でも……体力ない……だから丁度よかった、の……》
「体力って……また一晩中？」
《……そう……八雲、わんぱく……》
ゆかりも経験者として湊の底なしの体力については知っている。
湊もかなり手加減してくれていたようだが、それでも湊のリードで行為に及ぶと女性が先に体力切れでダウンしてしまうのだ。
気絶しても無理矢理に意識を戻され、再び絶頂によって意識を失うといった事を繰り返すため、湊が満足するまで相手をするのは普通の女性ではまず不可能。
一般人より遙かに強いラビリスですら彼の体力に勝てず、翌日は疲労と寝不足で身体がだるくなる。
ならば、座敷童子の言う通り、女子が三人くらいいないと湊の相手を十全にこなすのは難しいのかもしれない。
そうして妙に納得してしまった事でゆかりが握っていた拳を解けば、氷壁の向こう側では座敷童子が湊の殴られた顔を冷やしていた。
別に一時的に痛みを感じただけなので怪我はないが、可愛い愛子の事なので彼女も心配しているのだろう。
それを見た他の者たちも冷静さを取り戻すと、まだどこかぎこちなさは隊列を組んで移動を再開する。
自分よりも先に湊と関係を持っていた姉を睨んでいる少女もいるが、周りはこれ以上湊のそういった方面の話に首を突っ込むのはやめておこうと誰一人話題に触れる事はなかった。

第三百五話　複雑な思い

――稲羽郷土展・第三夜

湊に対する周囲の視線がやや冷たいものになりつつ先を目指す一行。

姉であるラビリスを問い詰めていたアイギスだけは、黙って湊の背後に立って彼を睨んでいるが、それに気付いてる青年は一切話しかけようとしない。

アイギスはただ黙って湊を睨んでいる。端正な顔をしているだけに、刃のような鋭さを持って人を睨んでいると凄みがある。

周りにいる者たちは、空気が重いからなんとかしろという念波を送っているが、他者の心を読める青年は普段その機能をカットしていた。

まぁ、カットしていようと場の空気を読めれば対応可能なのだろうが、残念なことに彼は空気を読むことを嫌う。

別に普段なら空気を読んだ行動を取って場をスムーズにやり過ごす。

ただ、今現在、ここでは他の者たちにとって都合が悪いだけで、湊個人にとっては無視していれば何の問題もない。

そんなにも居心地が悪いなら離れればいいし、もっと言えば自分からアイギスに話しかければいい。

湊がその様に思って投げナイフで遠くにいるシャドウを殺せば、そのタイミングで静かにアイギスが口を開いてきた。

「……八雲さん、何故姉さんと関係を持たれたのですか？」

「……俺にとって必要だったからだ」

湊がラビリスと関係を持ったのは、彼女が人間の身体になって八日目の事だ。

その前に一年以上一緒に暮らしており、二人はお風呂もベッドも同じという生活をしていた。

機械の身体であったときも、ＥＰ社の開発した擬装用スキンによって人の肌の質感は再現できており、胸や臀部の柔らかさもしっかりと

女性らしいものに出来ていた。
技術的な問題と余計な機能を積む余裕がなかった事で、ＥＰ社製ボディに男性を受け入れる機能はなかったが、それ以外の部分の質感が再現できていたのであれば、女性器以外を使った行為ならば可能だったのだ。
けれど、湊とラビリスはまだ人間とロボットだからという認識により、恋人以上に親密な同棲生活を送りながらも健全な関係を維持していたのである。
とはいえ、種族が違うからという常識によって保たれていた関係は、どちらかが常識を捨てれば簡単に崩れ得る脆い関係でもある。
そんな脆い関係だったからこそ、ラビリスが人間になって問題が解決してしまえば、湊から誘ったことを切っ掛けにすぐ一線を越えてしまった。
「……元々、俺とラビリスは一緒に風呂に入っていたし、寝る場所も一つのベッドだった。身体を見ることと触れることに慣れていたんだ」
「深い関係になることへの抵抗感がなかったことで、人間になってすぐに行為に及んだと？」
「……逆だぞ、アイギス。行為はお互いの距離が縮まった結果だ。することを目的に彼女に近付いた訳じゃない」
当時の湊がどういう状態だったのかはアイギスも聞いている。
ゆかりと別れた事で覚えた喪失感がチドリを抱いたことで和らげられると知り、以降は複数の女子たちと正式に付き合いもせず肉体関係だけを維持し続けた。
傍から見れば最低な男でしかない。相手の女子たちが彼の行動を黙認しているからこそ成り立っていただけで、部活という狭いコミュニティーの中にいる者たちばかりを選んだ彼の無謀さには呆れるしかない。
個の意識の上では生への執着を持たない彼は、その反動により無意識に生の実感を求めている。
人の数倍の食事を摂ることも、無尽蔵の体力で女性を抱くことも、全て間接的に生の実感を求めるが故の行為。

摂食障害に性依存症。医者であるシャロンが下した湊の診断結果がそれだ。
ＥＰ社で自分が眠っていた間の湊の様子を聞いたとき、湊がそういった症状を意識的に抑え込んでいるとアイギスは聞いていたのだ。
だからこそ、湊の話している言葉の意味は理解出来ているのだが、自分がいない間に彼が姉を女性として求めたと聞いて冷静でいられるほど少女は物わかりの良い女ではない。
一度や二度の過ちはあるだろう。彼だって人間だ。年頃の青年として身体を持て余す時もあれば、人肌を恋しく思うこともあるはず。
ゆかりと別れた事でぽっかりと空いた心の穴を、チドリを抱くことで埋めたように、ふとした寂しさからラビリスと過ちを犯した程度ならアイギスも許した。
しかし、彼は同棲していることを良いことに、二日と空けずにラビリスと致していたという。
自分の大切な人にこんな事は言いたくないが、慣用句でいうところの〝発情した猿〟だと彼のことを思ってしまった。
「……八雲さん、今のわたしの気持ちが分かりますか？　信頼していた方に裏切られ、味方だと思っていた姉が最大の敵であったわたしの気持ちが？」
「いや、分からないな。俺は一人っ子だから」
兄弟どころか親もいないのに、身内が敵であった者の気持ちなど分かるはずがない。
肩を竦めてそう返す青年を見た他の者たちは、何故そこで余計な事をいうんだと彼の後頭部を叩きたくなった。
そこは反省した様子を見せ、「すまないが分からない」程度で止めておくところだろう。
だが、アイギスもアイギスで世間とは大分ずれた感性を持っている少女だ。
湊がそんな風に返すとある程度は分かっていたのか、彼の言葉に特別反応したりせず、あくまで淡々と彼に語り続ける。
「では、想像してみてください。わたしが綾時さんや順平さんに暴力

を振るわれ、無理矢理に純潔を奪われたことを。その綾時さんや順平さんへ抱いた気持ちが、今わたしが姉さんに抱いている気持ちと同じものです」

急に二人の会話に名前を出された二人は、どうしてよりにもよって性犯罪者という役割を与えたのかと彼女を問い詰めたい気持ちに駆られる。

湊の愛は非常に重い。冗談や軽口だろうとアイギスを口説こうとした者は一撃で沈められてきたのだ。

この世界でまさに被害に遭ったクマなど「ごめんなさいクマ、ごめんなさいクマ」と呟きながら身体を震わせている。

冗談でナンパした者がこれだけのトラウマになっているというのに、想像の中だろうと彼女を力で組み伏せ犯した者たちを彼が許すとは思えない。

彼の怒りはそのまま現実の少年たちに降りかかるはず。八つ当たりでも何でもなく、単なる被害妄想による理不尽な暴力。

そんなものを喰らって堪るかと綾時と順平が距離を取れば、顎に手を当て想像していた湊が、怒りで瞳孔の開いた魔眼を輝かせたままアイギスへと振り返り答えた。

「……なるほど、原子一つすら残さずこの世から消し去りたいのか」

「すみません、違ったようです。流石にそこまでは思っていません」

これくらいで同じだろうとアイギスは例えを出したが、想像以上に湊の怒りが振り切れていたことで、そこまで実の姉に思ったりはしていませんよと訂正する。

怒りと悲しみが混じった感情を理解して貰いたい。そう思っての例えだったが彼は怒りを超えて憎悪を抱いたらしい。

蛇神という負の感情の塊をその心に宿せている以上、彼もそれに匹敵する負の感情を発露できるようだが、ここまで攻性の傾向が強いとは思っていなかった。

そうしてアイギスは相応しい例えが思い浮かばなかったことで、ここは素直に自分の気持ちを彼に伝えることにする。

「わたしは深く傷つきました。ドイツで戦った後、お互いの気持ちを

確認し合ったはずなのに、八雲さんが姉さんと浮気をしただなんて……」
「……別にアイギスとも付き合ってはないが」
「っ……両思いでカップル誕生と言ったではないですか！」
「好きか嫌いか聞いてきただけだろうに」
アイギスの中では湊と気持ちを確かめ合った時点で自分たちはカップルのつもりだった。
だからこそ、実の姉に湊を奪われたと聞いて怒りを覚えたし、逆にどうしてそんな事をと悲しくも感じた。
それなのに湊はそもそもカップルじゃないと冷たく言い放ってきた。
自分たちは付き合っていないので、ラビリスと何をしようと自由であると。
驚きに目を見開いてアイギスが彼を見れば、先ほどの発言が本心からの言葉である事が理解出来る。
今の湊は一切の嘘や冗談を言っていない。ただ彼にとっての真実を告げただけだ。
アイギスにすればそれは心の支えの一つを失うに等しい言葉だったが、何とか膝に力を入れて踏み留まると、カップルでなくとも関係を築けたなら自分も同じように扱って貰えるはずと再び彼に話しかける。
「なら……なら、わたしも姉さんと条件は同じはずです。付き合っていなくてもいいのなら、わたしだって同じようにして貰う権利があるはずです」
「権利の有無は知らないが俺にそのつもりがない以上、君の願いを聞き届ける事は出来ない」
「どうしてですかっ。そんなにも、そんなにも姉さんやチドリさんたちの方が良いというのですか?!」
何が彼女をそこまで必死にさせるのかは分からないが、今のアイギスは酷く焦っているように見えた。
そんなにも実の姉が彼に女性として求められた事が悔しいのだろ

うか。
湊は相手がどうしてそこまで焦っているのか分からないまま、彼女と肉体関係を結ぶ事を拒否する理由を挙げた。
「どちらが良いとかはない。ただ、断る理由はいくつかある。まず、君の言葉を受け入れてしまうと身体目的になってしまうこと。次に、そういった関係になったときは場のムードであったり、関係を結ぶ理由があっただけで、別に最初からそうするつもりがあった訳じゃない」
アイギスは焦っているようだが、湊には一切焦る理由が存在しない。
だというのに、ここで彼女の頼みを聞いて抱いてしまえば、本当に身体だけが目的だと言うことになってしまう。
湊が大切に想っているのは彼女自身だ。彼女と思い出を作っていくことは構わないが、それはあくまで相手のことを尊重した上での話。
欲を満たすために身体だけが目的ならば、湊は相手に一切困っていないのでアイギスである必要がないのだ。
さらに言えば、ゆかりと別れてからチドリに会いに行ったのは無自覚に寂しがってであり、そういった行為を彼女としようと思っていた訳ではない。
風花の時もお互いに勘違いをしてそうなっただけで、ラビリスの時はお互いにそういう雰囲気になったときに湊から誘った形だった。
なので、言い方は悪いが今のアイギスのようにムードの欠片もなく、最初からそれを目的としてという話なら湊は受け入れるつもりはない。
「そして、これが一番の理由なんだが――――」
言いながら湊はこれまでよりも真剣な瞳でアイギスを見つめる。
彼女も青年の雰囲気からこれが真面目な話だと察し、その最大の理由は何だと真剣な瞳で見返し聞く体勢になる。
周りにいる者たちも真剣な二人の雰囲気に固唾を呑んで見守れば、顔を上げた青年がはっきりとした口調で理由を口にした。
「――――そもそも、俺と君はまだ一ヶ月ほどしか一緒に過ごしてい

ない」

『――――――え？』

彼の言葉を聞いた者たちは思わず呆けた声を出す。

あれだけ深く心で通じ合い、お互いのことを大切に想い合っているというのに、まだ会って一ヶ月と聞けば誰だって驚くだろう。

しかし、月光館学園側のメンバーたちは、二人が十年前に出会ったと聞いていたので、色々とおかしくないかと七歌が代表して湊に尋ねる。

「ん？　え、二人って十年前に会ってたんじゃないの？」

「ファーストコンタクトはそれで合ってる。だが、本格的に再会したのは七月下旬。それ以降はよく会ってたが毎日会っていた訳ではないので、一緒に過ごしたのは一ヶ月ほどでしかないんだ。それで肉体関係を持つのはおかしいだろ」

確かに七歌たちの知る通りに二人は十年前に出会っている。

ただ、最初に会った日は影時間に戦闘しただけで、そこから再会まで何年も時間が空いていた。

再会したドイツの町では戦闘終了後に別れ、深い雪に閉ざされた森の中でもほんの短時間しか会っておらず、巌戸台で再会するまでに二人が過ごしたのは日数だけで言えば三日だが、時間にすれば合計で二時間にも満たない。

よくもそれでここまで想いが育ったなと思うところだが、世の中には運命の出会いというものもある。二人にとって互いとの出会いがまさにそれだったのだろう。

会わない期間が長すぎて逆に想いが育ったパターンの可能性も捨てきれないが、順平や花村の湊を見る視線が妬み一色になった頃、共に過ごした時間が短すぎると指摘されたアイギスが彼に反論した。

「異議ありであります！　それを言うならソフィアさんは一ヶ月未満で関係を持たれているはずです」

「あいつは特殊だ。戦争して、殺し合って、だけど俺は相手を殺せなかった。その代わりに恐怖と恥辱を与えてやろうと殴りつけながら犯してやったんだ。甘さの欠片もない関係だったんだぞ」

アイギスの求める関係はきっと恋人の甘さに満ちた幸せなものだろう。
それを基準にするのであれば、湊とソフィアの関係はそれの真逆。殺したいほどの憎しみを抱きながら、殺さない代わりに人としての尊厳を根こそぎ奪い去るためだけに陵辱しただけだ。
まともな神経をしていればそれを羨むなどあり得ない。湊は左手につけたリストバンドをEデヴァイスにすると、立体映像の画面を呼び出した。
「……善は玲と天田と一緒にどこか別の場所を見ていろ。女性陣、とくに岳羽と里中は見ない方がいい。胸糞悪くなるだけだからな」
子どもと女性は見るなと言う彼は、Eデヴァイスを操作して薄暗いどこかの映像を画面に表示していた。
後はボタンを押すだけで映像が再生されるようだが、話の流れからすると湊がソフィアを陵辱したときの映像に違いない。
何故そんな映像があるのかとチドリが視線で尋ねれば、自分とソフィアの記憶から出力した再現映像だという。
完全に記憶を読み取れるので全て現実に起こった事だが、あくまで再現映像なので第三者視点のカメラワークで見ることが出来る。
観客のことを考えた仕様は素晴らしいが、その分、本気で人を殺しに行っている湊の姿も映るのだ。
当然、平和な日本では考えられない暴力シーンもあるし、最後には相手を殴り痛めつけて犯すシーンが入る。
これを見ればソフィアを羨ましいなど二度と思わなくなるだろう。
グロテスクな場面や、胸糞悪いシーンが多数ある。それでも見るかと視線で尋ねれば、アイギスがしっかりと頷いたので湊は他の者にも忠告しつつ再生ボタンを押した。
「……耐性がないやつは早めに見るのをやめろよ」
そこに映っていたのは血で髪や服が汚れたまま、恐怖に顔を歪ませ必死に走る美しい少女の姿。
不思議な緑色の暗闇に染まった建物の中を少女が必死に走り、階段を上りきったところで少女が受け身も考えず前に飛べば、彼女が上っ

てきた階段が黒い火柱に飲まれて消滅した。
倒れ込んだときにぶつけた痛みに顔を顰めていた少女も、背後で階段が消えたのを見ると恐怖で表情が凍りついている。
だが、階段が消えたのならすぐ傍まで迫っているという事だ。少女は痛みに耐えて立ち上がると再び走り出した。
走って走って走り続けて、どれだけ足や脇腹が痛もうとも止まらなかった少女が突然、バランスを崩して廊下に倒れ込む。
見れば左肩から血が出ており、映像の中の少女も自分が撃たれたと把握したらしい。
それでも生きることを諦めず、匍匐前進で僅かでも前に進もうとしていた少女の許へ男がやってきた。
ボロボロの服に身を包み、全身が血塗れになっていながら、それでも死のイメージを周囲に撒き散らしている。
相手の姿を見た途端に少女は命乞いをしながら首を横に振って涙を流している。
見ているだけで辛くなってくるそんな少女を、画面の中の男は一切躊躇うことなく蹴り飛ばした。
彼が蹴った少女の脇腹からは耳に残る鈍い音をしていた。蹴り飛ばされた少女は地面を転がった後、血の混じった吐瀉物を吐き出している。
そこで何名かは見るのを止めたが映像はまだ続き、少女は近付いて来た男の方へと自分から寄って靴を舐めて隷属を誓っていた。
人としての尊厳を失ってでも生きたい。少女の行動からはそんな意思が感じられる。
普通の善人ならばここまでされれば少女を奴隷として飼うのだろう。
しかし、湊は自分の靴を舐めていた少女の顔面にブーツのつま先を叩き込み、鼻血を出して倒れた相手の首を黒い腕で掴んで持ち上げた。
お前の命に価値などないと存在を否定し、徐々に力を籠めて死が近付いてくる恐怖を相手に教え込む。

どうしてここまで酷い事が出来るんだと複雑な表情を浮かべる者もいるが、少女が彼の本当の名を呼んだ瞬間に男に変化が起きた。
相手を殺したいほど憎んでいる。この女はこの世にいてはいけない。そう考えているのに身体が動かない。
あと少し、もうほんの少し力を籠めるだけで殺せるというのに、身体の自由が利かず殺すことが出来ないことで男の方も悔しそうに表情を歪める。
そうして、殺したいほど憎んでいる相手を殺せない自分への怒りに叫んだ男は、相手を掴んでいた腕を放して少女を床に落とすと、カグヤを呼び出して傷を回復させた。
見ているだけで痛々しい姿だったので、回復して貰えて良かったなと思った直後、男が相手の口を塞ぐように左手で顔を掴むと、そのまま空いていた右手でドレスの胸元を掴んで引き裂いた。
映像は男の背後からのアングルなので少女の裸身は映っていないが、驚きと恐怖で抵抗しようとする相手の顔を殴りつけて黙らせると、残っていたドレスの肩辺りを掴んでさらに引き裂きながら脱がせてゆく。
そこで画面が暗転すると湊はEデヴァイスを待機モードのリストバンドに戻し、真剣に映像を見ていたアイギスに話しかけた。
「……こんなまともでない方法で純潔を奪われたあいつを羨むのなら、流石に俺はついていけない」
「……はい。わたしの想像力が足りていませんでした。お二人の関係がそれなりに良好だったので、もう少し平和的な解決がなされたのだとばかり思っていました」
「そんな訳ないだろう。この後、俺はあいつに命じて自分の父親を含めた幹部たちを殺させている。母親を殺された復讐だからな。それでもまだ気は治まらなかったが、俺とソフィアはいくところまでいってしまったからこそ今の状態で落ち着いたんだ」
アイギスも湊に関わる中で裏の世界の一部を見ていたが、彼女が見ていたのはあくまで表面的な部分に過ぎない。
湊とソフィアはそんな表面的な部分ではなく、世界に影響を及ぼす

レベルでお互いを殺すための戦争を行なった。
その結果、湊が相手の全てを奪って勝利した訳だが、それほどの戦いをすれば勝者も疲弊して当然である。
平和的な解決が出来たから良好な関係になったのではなく、互いに燃え尽きてしまった事でもう争う気が起きなくなり、それなりの関係を築く余裕が生まれたに過ぎない。
そんな相手が得られることなど稀なので、アイギスにソフィアは例外だから参考にするなと伝えると、湊は再び歩き出して新たな扉を潜って部屋に入った。
他の者は衝撃的な映像を見たせいで復帰にしばらく掛かりそうだが、戦闘に関しては湊がいればそれで足りる。
《新型のF．O．Eです！　なんというか、今回のF．O．Eはすっごく特殊な感じです！》
部屋に入ると全身がオイルでテカった新型のF．O．Eがいた。
頭の後ろで両手を組み、しゃがんだ状態で膝を開いたポーズで止まっている。
左半身が赤で右半身が紫という怪しいカラーリングだが、少し時間が経つと斜め方向に大きく跳躍して移動している。
どうやらこれまでいた追跡型のF．O．Eと異なり、今回のF．O．Eは決まった範囲を斜めに跳んで移動するようだ。
それなら相手を基準に斜め方向へは行かないようにし、上手く移動すれば完全に無視することも出来る。
けれど、殺しておけば気にする必要もなくなるので、湊は対物ライフルを構えてF．O．Eへと撃ち込んだ。
「……銃が効かないのか？」
「どうやらあの汗のようなもので滑ってしまったようですね。とても厄介であります」
湊が撃った弾丸は真っ直ぐ相手へ向かって行ったが、当たった瞬間に敵の身体の表面を滑って逸れてしまった。
人の頭蓋骨など硬い物に当たると弾が骨の表面を滑って貫通しない事は稀に起こり得る。

今回もそれと同じように固い筋肉に当たり、その表面を汗か油が覆っている事も助けて弾丸が滑ってしまったようだ。
飛び道具が効かないとなると非常に面倒だが、それならそれでやりようがあると湊は〝恋愛〟のカードを砕いてペルソナを呼んだ。
「アリス、座敷童子と共に全てを凍らせろ！」
現われた金髪碧眼の少女は、ハートの杖を振るって広範囲に氷結魔法を放つ。
ずっと出ていた座敷童子も同じように広範囲に氷結魔法を放ち、湊たちとF．O．Eのいる部屋の中を凍らせてゆく。
斜めにしか移動出来ない敵は、部屋の中がどれだけ寒くなっても逃げることが出来ない。
そう考えた湊が敵の来ない場所に避難してからスキルを使えば、部屋の中は急激に寒くなって床や壁が凍りついてゆく。
氷は徐々に範囲を広げ、ついにはF．O．Eの足下へと到達した
足下が凍ったF．O．Eは自分ごと凍らされてはまずいと逃げだそうとするも、寒さで身体の自由が利かなくなっていたのか逃げ出す前に氷に捕まった。
足下から徐々に凍り始めた敵は藻掻いているが、足首から膝へ、膝から腰へと少しずつ身体の自由が奪われてはどうしようもない。
腰を越えてさらに氷が胸まで達すれば、湊はそのタイミングで再び対物ライフルを抜いて敵の腹部に弾丸を撃ち込んだ。
ほぼ一瞬で距離を詰め、今度は相手の汗で弾丸が滑ることもなく、真っ直ぐ届いて敵の腹部を貫通してみせる。
砕けた氷が舞う中、腹に大穴を空けられた敵はそのまま後ろに倒れるようにして消滅してゆく。
動き方が斜め方向への跳躍で、体表を粘液が覆っているせいで飛び道具が効きづらい。
今回の戦闘で得た情報をバックアップの二人にも送ると、湊はナイフで地面を刺して床を覆っていた氷を消し去る。
「……よし、先へ行くぞ」
第三層は巡礼のために移動範囲が広いようだが、それほど凝った構

造している訳ではない。
敵さえ簡単に倒せるなら攻略にも時間は掛からないだろう。
湊が戦っている間に他の者たちも復活したようなので、再び移動を開始すると一同は次のフロアへの階段を目指した。

第三百六話　ダンジョンのこと、帰ってからのこと

――稲羽郷土展・第四夜

封印された扉の指示に従い。四神の鳥居を巡礼して回った一同は、そのまま下層への階段を見つけて下りてきた。

斜め方向へ跳躍する新たなＦ．Ｏ．Ｅも移動する方向にさえ気をつけておけば対処は容易く、四体一組のＦ．Ｏ．Ｅも広範囲攻撃で殲滅すれば楽に済む。

そうなると、このダンジョンでは湊の脅威になり得る存在はいないため、番人のいるフロアまでもうすぐな第四層でも一同の歩みは普段通りのペースを保っていた。

非戦闘員の玲や子どもである天田を連れた状態でも進行が遅れない。

体力的にも精神的にも余裕がある証だが、第四のダンジョンの終わりが近付いている事で、花村が今回のダンジョンは変わっていたなと話す。

「つか、今までは何となく出し物っぽさがあったけどさ。ここだけ雰囲気違うっつーか。なんで祭りの中に祭りがあるんだろうな？」

これまで巡ってきたダンジョンは、体験型アトラクションだった『不思議な国のアナタ』、フィーリングカップル要素を組み込んだであろう『ごーこんきっさ』、最も定番であり迷宮らしさのあった『放課後悪霊クラブ』の三つ。

どれも本来の教室の広さからは考えられない広大さだったが、そういった要素を抜いて出し物として考えると、それぞれがテーマに沿いながらも文化祭らしいチープさもあった。

放課後悪霊クラブに関してはチープな部分よりも本格的な要素の方が強すぎたが、それでもやはり安っぽいところであったり子供だましな部分もあった。

一方で、今メンバーたちが巡っているこのダンジョンは、文化祭のような手作りのお祭りではなく、神社仏閣や街全体で行なわれる大きなお祭りに近い空気になっている。

ところどころで現われるマッスルＦ．Ｏ．Ｅたちに関してはツッコミを入れたいところだが、彼らも祭りを盛り上げる者たちだと思えば、やはり文化祭ではなく普通のお祭りを模していると見るべきだろう。

そうした点が気になった花村が歩きながら首を傾げれば、顎に手を当てた順平が少し考える素振りを見せてから口を開く。

「そりゃ、あれじゃね？　校舎の方は一日中明るい感じだから、夜店的な要素も欲しくなったとか」

「なら、文化祭の方で夜を作って後夜祭風にすればいいだろ。こんなダンジョン一つ使ってやることじゃないと思うんだよなぁ」

何故か朝から夕方までしか存在しない校舎の一日。

順平の言う通りに夜のお祭りが楽しみたいのであれば、湊がやっているように建物を改築するかダンジョンのように空間を弄ってしまえばいい。

もっとも、全てのダンジョンに繋がり、この世界の基礎になっている校舎は弄ることが出来ないのかもしれない。

弄ることが可能なのはダンジョン含めあくまで建物の構造のみ。Ｆ．Ｏ．Ｅなどはダンジョンを構築するギミックのような扱いで、それ故に玲の意思やイメージを反映して作られているのだろう。

もっとも、そこまで細かくダンジョンの構成に玲のイメージが反映されている事を他の者は知らない。

正規のルートを外れ空間の外から訪れた湊は、この閉鎖空間を外から観測しある程度の事情を察しているが、他の者からすれば記憶を取り戻しつつある善が口にした「この学校は玲が作った」という言葉しか情報がないのだ。

それ故、花村と順平があーでもないこーでもないと推測を語っていれば、前方の通路に走り回るマッスルＦ．Ｏ．Ｅの姿を発見した。

相手はまだこちらに気付いていないのかゆっくり歩いている。ここまで距離があれば相手には何もさせず、完全に湊の一方的な攻撃で相手を殲滅できる。

話の続きは彼が敵を殺してからにしようと口を閉じれば、つまらな

そうな湊がパチンと指を一度鳴らすだけで敵が黒い光に呑まれて消えていった。
そんな簡単にF・O・Eを殺してしまって良いのか。というかどういった攻撃手段を使ったのか。
自分たちが必死に戦っても勝てない敵を容易く殺す青年に、一同は様々な感情の混ざった複雑な視線を送る。
すると、口元で煙管を遊ばせていた青年は、ゆっくりと煙管を口から離して呟いた。
「……あいつの体内に直接〝死んでくれる？〟を送り込んだだけだ」
〝死んでくれる？〟というのはペルソナであるアリスの固有スキルだ。
本来のアリスはアルカナが〝死神〟なのに対し、湊の所有するアリスのアルカナは〝恋愛〟だったりするが、使用可能なスキルは魔法に特化しているなど差がない。
まぁ、湊自身は一度も〝死神〟のアリスを所持したことがないので、どういった違いがあるのか知らないが、今回は目視で座標を固定し、そこに呪いで構成された黒いダガーを一本送り込んだだけだ。
いきなり体内に呪いで出来た刃物を送り込まれれば、如何に身体を鍛えていようと抵抗することは出来ない。
苦しむ暇もなく一瞬にして絶命した相手の死因を聞いた者たちは、本当に今回は彼が味方で良かったと心の中で想いながら移動を再開する。
このフロアは今までの複合系で、聖なる炎を使った松明と巡礼のギミックが設置されている。
F・O・Eも同じように勢揃いしているらしく、風花とりせから離れた場所に強い気配があるという報告を聞きながら、今度は千枝が先ほどの話に参加した。
「んで、ここが祭りになってる話だけどさ。お祭りって神様とか関係してるらしいじゃん？　なら、ここの最後も神様が出てきたりすんのかな？」
「んー、確かにそういうのが多いけど、神様って現実にはいないし具体

的な姿とかなくない？」
千枝の言葉に苦笑しながらゆかりが返す。
ペルソナやシャドウという異能に関わっているせいで感覚がおかしくなるが、神様などという超常の存在などこの世に存在しない。
湊と同化している異界の神とやらがいるとは聞いているものの、それが現実に降臨した場面を見ていない。
ベアトリーチェがそうなのだと言われても、玉藻の力を使って完全に別人になれるのを見た後では、彼女も特殊なペルソナの一体なのではと思っても無理はなかった。
そんな少女たちの話を傍で聞いていたアイギスは、完全に顕現した蛇神〝无窮〟を見ても神がいないと思えるのはすごいと素直に尊敬する。
神の子孫を名乗っている青年も存在する以上、アイギスにとって神は実在するものだ。
そして、そんな神の子孫である青年からは、このダンジョンがどのように見えているのか。そこが気になった少女はぼんやりとした様子で歩いている彼に声を掛ける。
「だそうですが、八雲さんの見解はいかがですか？」
「……まぁ、良いところは突いてる。ただ、この祭りは神に捧げるものじゃない。鎮魂が目的のものだ」
湊がそう呟くと全員の視線が彼に集まる。
思い付きで言った千枝も「惜しいの？」と驚いた顔をしているが、他の者たちの様子に構わず青年は言葉を続ける。
「確かに神を祀る、神に捧げるといった意味を持つ祭りもある。だが、ここはそういった場所じゃない。ただ一人のために用意された、魂を鎮めるための場所だ」
「魂を鎮めるって……誰の？」
彼の言葉を聞いた七歌が尋ねる。
魂を鎮めると言ったが、それはつまりここは故人のために用意された場所という事だろうか。
ここはあくまで世界と世界の狭間に一時的に存在する浮島のよう

な場所。
周囲の影響を受けずに独立した存在として状態を保っているが、いずれは波に呑まれて消えてゆくに違いない。
けれど、そんな場所で故人の魂を鎮めるための祭祀が行なわれている。
そこから考えられるのは、七歌たちをここへ呼んだ存在の目的が、その祀られている故人と深く関係しているということ。
「ねぇ、八雲君。そのただ一人って誰なの？　どっちの時代に関係ある人？」
「時代は俺たちで、場所は八十稲羽だから両方に縁があると言える。名前は……ニコだ」
どちらか一方ではなく、どちらにもある意味で関係がある。
だからこそ、二つの世界から人が呼ばれたのだろうと気付く。
黒幕がペルソナ使いたちを呼んだのは、何も力を持っていた事だけが理由ではない。
この孤立空間に関係のある人物〝ニコ〟と縁のある時代と場所に空間を繋げ、そこから力を持つ者たちを呼び寄せたのだ。
何の縁もないところから呼び出すのとは異なり、時代や場所だけでも分かっていればそれを縁として手繰り寄せる事が出来る。
七歌たちの知らない手段を使ったにせよ、呼ばれた理由が判明した事で他の者たちは少しだけスッキリしたらしい。
だが、他の者たちが自分が呼ばれた理由に納得をみせていると、その中で玲だけが湊が口にした人物名が気になったようで首を傾げた。
「ニコ……？　ねぇ、はーちゃん。ニコちゃんってウサギのぬいぐるみに書いてた名前だよね？　ここはその人のための場所なの？」
彼女がその名前を聞いたのは一つ目のダンジョンでの事だった。
不思議な国のアナタでハートの女王が守っていた宝箱。そこから出てきたウサギのぬいぐるみのタグに書かれていたのが〝ＮＩＫＯ〟という名前だ。
最初はぬいぐるみの名前なのかと思われていたが、湊がその名前を出したという事は人の名前なのだろう。

しかし、時代的には合っているとは言え、影時間やタルタロスに挑んでいる彼がわざわざニコという人物のいる八十稲羽で活動したのかが分からない。
一体どこでその人物と知り合ったのだとチドリが訊いた。
「八雲、どこでそのニコってやつと会ったの？」
「会った事はない。名前を知ったのもここに来てからだ」
「そうなの？　でも、そういう事なら黒幕の正体とかも分かったって事？」
普通に考えれば湊がド田舎である八十稲羽に向かう理由はない。
昔、総合芸術部の活動で一度訪れた事はあるが、あのときは日本家屋に興味を持っていたターニャの趣味にあう旅館と染め物体験が出来る場所が揃っていたから選ばれただけだ。
だからこそ、彼が八十稲羽でその人物と知り合った訳ではないと答えれば、そりゃそうかとチドリも小さく息を吐いて納得した顔をする。
彼がそのニコについて知ったのはこの世界で、第四のダンジョンである稲羽郷土展は丸々その人物のための鎮魂の儀式場。
そういった情報を集められたのなら、きっと彼は既にこの世界に皆を閉じ込めている黒幕についても分かっているに違いない。
チドリの言葉で他の者たちも湊に期待の籠もった視線を送れば、青年は背を向けたまま右手を振って分からないと答えた。
「……いや、そう上手くは行かない。ここがニコのための鎮魂の場なのは感覚で分かったが、敵の正体についてはもう少し情報が必要だ」
「……そう。こっちの探査型全員の目から逃れるなんて、余程、慎重なのか臆病なのね」
「多分、時期が来るまで動けないんだろうさ。このダンジョンさえクリアすれば敵も正体を現わすだろう」
正体の判明を怖れているというよりは、単純に自分たちの前に姿を現わすことが出来ないのだろう。
満月に現われるアルカナシャドウを知っている者にすれば、そういったタイプは力を溜め込んでいるので非常に厄介に感じる。

この世界の謎も少し興味があるが、出来るならば黒幕と出会わずにすぐに帰りたい。
四つ目のダンジョンをクリアすれば最後の鍵が外れる。そうなればすぐにベルベットルームの扉を潜って元の世界へ行くことが出来るのだ。
わざわざスルーしたＦ．Ｏ．Ｅを殺して回った湊じゃあるまいし、他の者たちは出来る限り戦闘を避けて無事に元の世界に帰る事を優先する。
再びこちらに呼び出されるような事がないよう、きっと元の世界に帰る際に湊が何かしらの細工をすることだろう。
ならば、元の世界にさえ帰ってしまえば、この世界での事もあの時は大変だったと笑い話に出来るはずだった。
「有里、このダンジョンをクリアすれば俺たちは元の世界に帰れるんだよな？」
「……まぁ、そうだな。番人を倒して、扉の封印さえ解けば後は帰るだけだ」
鳴上が湊に一応の確認を取れば彼も素直に頷いて返す。
最後のダンジョンであるここも、今いるフロアを越えてしまえば残るは番人のみ。
そいつを倒せばここでの奇妙な生活も終わりを告げ、それぞれの世界に帰って自分たちの戦いと再び向き合う生活が始まる。
「有里はこの世界の時の流れが現実と異なると言っていたが、帰ってみれば百年経っていたなんて事になっていれば笑えないな」
「美鶴さんの家は一人っ子ですもんね。宗家の跡継ぎがいなくなって分家が宗家扱いになってたらどうします？」
「行方知れずになっていた者としては強く出れないな。まぁ、そうなっていたら影時間も解決しているのだろう。桐条家から離れて、私人として生きるのも良いかもしれない」
もう少しでこの世界と別れるという実感が出てきたことで、美鶴は思わず帰ってからの事を心配し始める。
帰った後のたとえばの話ではあるが、浦島太郎のように百年経って

いたとすれば影時間の戦いはきっと終わっている事だろう。
それなら、美鶴自身がこれ以上戦う理由はなく、家を乗っ取られていてもお家騒動時に居合わせなかった自分が悪いのだと受け止める事が出来た。
影時間の戦いだけではない。桐条グループ総帥の娘という、家や地位からも解放されて自由になる。
責任逃れで不謹慎だとは思うが、そんな事になればどれほど開放的なのだろうかと想像して本人は苦笑した。
その横顔を見ていた七歌は、やはり美鶴にとって桐条家のご令嬢という立場は重すぎるのだろうと少し同情する。
自分のように先祖が紡いできた歴史よりも己を優先する性格であったり、湊のように全てを背負いきるだけの能力があれば、きっと彼女も責任と両立して年頃の少女として青春を謳歌していたに違いない。
だが、美鶴は七歌ほど図太くなければ、湊ほど器用に何でもこなせる訳でもない。
世間では優秀な天才と呼ばれる彼女も、実際は努力を重ねて今の地位を得た秀才だ。
元から天才タイプだった七歌たちの真似事など出来るはずもなく、こうしたちょっとした部分で弱さを見せることもある。
ならば自分は仲間の弱さを受け止めフォローするだけだと、七歌は集団の少し先にいる湊に話しかけた。
「八雲君、美鶴さんが桐条家やめるってさ」
「別に好きにしたらいいだろ」
「でも、もし百年後だったらさ。住む家もお金もなくて簡単に死んじゃうよ？」
「……経済的な支援をしろと？」
「うん。胸揉んだしその代金で」
全員が百年後の世界に行ってしまえば、頼れるのは様々な道具を持っている湊だけになる。
こちらに持ってきているお金はそれほど多くはないし、もしかする

と紙幣が刷新されていたりお金の価値も大きく変動している恐れがあった。
そうなってくると、頼れるのは湊のマフラーに入っている貴金属や外貨になってくる。
いくら日本円の価値が下がっていたとしても、キャッシュで数億円持っていれば大丈夫だとは思うが、それらが役に立たなくても他のもので補うことが出来る。
さらに言えば何年も暮らすだけの食料も備蓄してあるので、日本がダメでも誰もいない無人島で生活するくらいは出来るだろう。
彼が言うからには時間の流れは問題ないと思うが、〝もしも〟の保険として戻った後にトラブルが起きても大丈夫だという保障が欲しい。
過去に思い切り美鶴の胸を弄んでいったのだから、美鶴が何もかもを失ったときは助けてやれ。七歌がそう話せば振り返った湊はとても嫌そうな顔で美鶴を数秒見つめた。
「……まぁ、使い道もあるか」
湊が美鶴を直視するなどいつ以来か。見つめられた本人はやや身体を硬くして相手の反応を待つが、聞こえてきたのは非常に不穏な呟きだった。
言うだけ言って湊は再び正面を向いて歩き出してしまったが、美鶴としては彼が自分に見出した〝使い道〟とやらがまず真っ当ではないと思っている。
おそらくは美鶴の性別が関係しており、さらに言えば母親譲りの豊満なスタイルも無関係ではないだろう。
そうなってくると、今度は誰が使うのかという問題が出てくる訳だが、百歩譲ってそれが湊本人であるなら、彼に罪の意識を持っている美鶴は悩み抜いた末に受け入れるはず。
ただ、それがもしも名も知らぬような相手であれば――――と、そこまで考えて美鶴は彼がそんな事をするはずがないかと考えを打ち切った。
無事に最後の番人を倒せるかという不安はあるし、本当にちゃんと

帰ることが出来るのかという心配もある。
しかし、こんな場所までアイギスやチドリを助けに来た青年が、わざわざ時の流れなどという彼しか分からない事で嘘を吐くとは思えない。
なら、ここはしっかりと彼の言葉を信じて最後のダンジョン攻略に集中すれば良い。
「帰ってからの心配は番人を倒してからだ。あと少しだが集中して行こう」
意識を切り替えて顔を上げた美鶴は、自分を見ていた七歌に笑いかけると先を進む湊の後を追ってゆく。
他の者たちも美鶴の言葉に頷いて返すと、時折現われるシャドウを倒しながら最後の番人を目指して進んだ。

第三百七話　影との対面

――稲羽郷土展・最終夜

全ての鳥居を回って封印された扉を開け、メンバーたちは最後の階段を見つけた。

それを下りた先に最後の宝箱を守る番人がいる。

ふうかとりせによれば今までとは雰囲気が異なるらしいが、強大な気配である事だけは共通している。

〝不思議な国のアナタ〟のハートの女王。

〝ごーこんきっさ〟の慈悲深い聖職者。

〝放課後悪霊クラブ〟の優しいドクター。

メンバーたちの知っている大型シャドウと違い、これまでの番人たちはどれも知性があった。

会話が通じたのはハートの女王くらいだったが、他の二体もその姿に関連した言葉を話していたのだ。

番人はF・O・E同様あくまでダンジョンのギミックであり、人の無意識から生じるシャドウとは似て非なる存在かもしれない。

そういう事ならば番人だけが知性を持って言葉を操っていた事も納得できるが、階段を下りた先にいるのはこれまで以上の力を持った番人だ。

ハートの女王のトランプ兵やドクターの引き連れていたナースのような伏兵もいるかもしれない。

味方側に成長した状態の湊がいるものの、彼は放課後悪霊クラブで精神的に不安定になっていた事もあり完全に安心することは出来ない。

なので、全員が気を引き締めてから階段に向けて歩き出すと、不安そうに震えている玲に善が手を差し出した。

「玲、怖いのなら私の手を握っておくといい」

「う、うん。ありがとう、善。でも、皆と一緒だからあんまりこわくないよ！」

「……ああ、そうだな」

玲が善の手を握って笑顔を見せれば、善もその通りだと彼女に微笑み返す。
この世界で出会った二人はどういう訳か生身でシャドウたちと戦う事が出来ていた。
他の者に比べてその力は微々たるものであり、ダンジョンを進むにつれて敵の強さに対抗出来なくなっている。
けれど、二人は記憶を取り戻してこの世界から出るために、人任せにしないでダンジョンまで着いてきて一緒に戦った。
善の後ろに隠れていた玲は徐々に明るさを見せ、自分から進んで赤ん坊の八雲の世話をするなど積極的な部分も見せた。
八雲の世話は他の女子たちも一緒に手伝い、そういった行動の積み重ねによって彼女も友情を育んで、いつの間にか善の後ろにいるだけの弱い少女から成長していた。
自分だけが頼られていた善はその事に少し寂しさを覚えていたようだが、彼も他の仲間と一緒に過ごす中で玲を任せられるようになっていった。
自分と相手しかいない依存し合う関係から、頼れる仲間が出来た事で二人の世界は広がり、精神的に一回りも二回りも成長したのである。
頼れる仲間と一緒にここまで来た。だから怖れることなどないと二人が視線を階段の先へ向ければ、まわりにいた者たちも二人に同意するように笑顔を見せる。
両手に小刀を持っていた花村は、階段の先から敵が来ても対処出来るよう警戒しつつ、いよいよ最後の敵となると感慨深いものがあると語る。
「へへっ、この先にいるやつを倒したら終わりって考えると、少しだけさみしく感じるな。元の世界に戻ったらそっちの面子で会えるのは記憶失ってる有里だけだし」
「そういや、そっか。オレっちたちの世界とは二年もずれてんだもんな。こっちの君らに会いに行っても中学生への声かけ事案オチになりかねないわ」

青い制服を着た国家権力のお兄さんたちの厄介になるのだけは簡便だと順平が身を震わす。

順平たちから見れば、元の世界の花村たちは受験勉強真っ最中の中学三年生と中学二年生だ。

当然ながら、花村たちの過去の姿である本人たちに未来の記憶はないので、女子や湊が声を掛けるならともかく、順平や真田に荒垣といったメンバーが声を掛ければ通報待ったなしだだろう。

逆に花村たちから見れば、元の世界の順平たちは天田だけは中学生だが、後のメンバーは高校卒業してそれぞれの進路を歩み出している。

そちらの順平たちは成長した姿なので、女子たちは大人っぽくなっているだろうし、男子はオッサン化が進んでいるはず。

となると、こちらの世界のようにタメ口を利く訳にもいかないよなと花村が苦笑していれば、八十神高校側で唯一りせだけが二〇〇九年時点で接点のあるため、七歌がりせに昔はどんな風に接していたのか尋ねる。

「一応、りせちゃんと八雲君は面識あるんだよね？」

《うん。フェスが終わった後は契約終了で事務所に戻って仕事してたけど、プロデューサーとはプライベートの連絡先も交換してたから、たまにだけど雑談がてら近況報告とかしてたよ》

「え、そういうのって売り出し中のアイドル的にＯＫなの？」

《別に会ってデートしてた訳じゃないし、徐々に忙しくてメールも出来なくなったから大丈夫だよ。正直、私よりサーヤさんの方がマスコミのマーク強かったしね》

りせが口にしたサーヤとは二〇〇九年時点のアイドル界でトップの座に君臨している柴田さやかの事だ。

彼女は湊が仕組んだ炎上商法で湊の恋人役を務め、トップアイドルのスキャンダルとして非常に注目を集めたが、炎上商法のために知り合いの新聞社に偽情報を流させたとネタばらしした後もマークは減らなかった。

というのも、二人は野外フェスの宣伝のためにバラエティ番組やド

ラマに共演し、特撮のゲストキャラとして映画に出たときには恋人役を演じていた。
おかげで世間では徐々に二人をセットとして見る認識が広がり、実際に付き合っているのではないかと考えられていたのだ。
年齢的にも釣り合う高校三年の柴田がいるというのに、中学二年のりせと噂になどなるはずがない。
故に、りせの所属するタクラプロとしても、りせの存在を大々的に世間に広めてくれた湊とプライベートで交友を持つことに反対する気はなく。
電話やメールだけでなく、羽目を外しすぎなければ会って遊ぶことも許していた。
芸能界のそういった裏事情を聞いた七歌は、湊に振り回されるマスコミに思わず同情してしまう。
「なるほろぉ。サーヤもすごく頭良さそうだし、八雲君と揃って相手にするなんて想像するだけで胃が痛みそうだよね」
《普通はマスコミを振り回すなんて出来ないんだけどね。相手が悪かったというか、悪いやつがお金も地位も持っていたというか……》
ゴシップ誌の三流記者が相手ならばともかく、キー局も含めた大手マスコミ各社を手玉に取ろうとするなどまともな発想ではない。
ずっと人助けをしてきた好青年という下地があるからこそ許されているが、彼の行なった炎上商法は普通ならそのまま干されているところだ。
まぁ、湊なら自分が干されてもりせと柴田の売り込みを続け、最終的に野外フェスを成功に導いていたと思われるが、業界を知っている者ほど驚く行動を取った本人は静かに階段の先を見ている。
普段以上に静かな様子を七歌が横目で見ていれば、いつまでも雑談を続けている者たちを美鶴が注意した。
「君たち、雑談はそれくらいにしておけ。もう着くぞ」
美鶴の言う通り視線を正面に向けると、長い長い階段の終わりが見えてきた。
祭りをテーマとした熱気と喧噪を感じる造りになったダンジョン

だったが、番人のいる最後のフロアは雰囲気がまるで異なっている。
色褪せた木で出来た鳥居やいくつもの柱が聳え立ち、鳥居や柱同士を繋ぐように七五三縄が結ばれている。
サウナ状態だった上のフロアで温度を調節してくれていた座敷童子を湊が消しても、周囲は暑いどころか妙な肌寒さを感じた。
階段を下っているときには聞こえてきていた上のフロアの音が消え、植物を含めた生き物の気配が一切感じられない不思議な場所。
どうしてこうも急に雰囲気が変わったのか分からぬ順平は、結ばれている七五三縄に近付きながら変な場所だと小さく呟く。
「おわ、なんだコリャ？　ここだけ雰囲気ちがくないっすか？」
「クマぁ……なんかお化け出そうクマ」
汚れた石で出来た柱からは長い年月を感じ、まるで山奥や森の中にある忘れ去られた神社を想起させる。
どうして急に雰囲気が変わったのかは不明だが、柱の形状や七五三縄の結び目の数から分かることはないか直斗は入念に観察する。
「確かにここだけ雰囲気が大きく違いますね。鳥居も柱も七五三縄も古いもののように見えます」
「探偵の知識で年代とかも分かるんですか？」
「いえ、流石にそれは。そういった考古学的な知識は有里先輩の専門かと」
階段周辺を調べていた直斗の傍にいた天田は、探偵はこんな物からでも何かの情報を得られるのかと尊敬の眼差しを向ける。
しかし、直斗は鳴上たちの学年のテストは分からないといった感じで、いくら探偵として様々な知識を学んでいようと情報には偏りがある。
こういった鳥居に石柱や七五三縄といった民俗学や考古学の分野のことは流石に分からないので、役に立てなくて申し訳ないと素直に謝罪してから直斗は湊に視線を向けた。
「先輩、ここにあるものから分かる情報はありますか？　年代であったり、どこの地方に見られる特徴かなど、分かることがあれば些細な事でも構わないのですが」

直斗の知っている湊は二年後の世界にいる記憶を失っている状態が基準となる。
けれど、その湊を基準にしても直斗は彼ならば考古学についても詳しい知識を持っていると考えた。
どうやら元の時代で彼がそういった知識を持っていると知る機会があったようだが、直斗に言われて七五三縄や石柱を一通り観察すると、湊は首を横に振ってから口を開く。
「……見た目だけだな。確かに風化具合や汚れなど、古い質感は本物と遜色ないレベルで再現されている。だが、ここにあるものには年月が感じられない。それが辿ったであろう過去が見えない」
「では、ここにあるものは最初からこの形で作られたという事ですか？」
「ああ。本物も出来てから二百年かそこらだろうが、どこかに実在するものを丸ごとコピーしたってところだろう。考察は無意味だ」
ここに置かれているものは全てが模造品。
汚れや傷など本来再現不可能な部分までも、本物と全く同一に再現されているため、普通の学者や鑑定士が見れば本物だと騙されてしまう。
眞宵堂でのバイトや仕事に使う知識を集める内に詳しくなっていた湊も、アナライズしてもおかしな点がない事から騙されて当然だと認める仕上がりだ。
ただ、構造を含めた外見は完璧にコピー出来ているが、実際に触れてみたとき、そこに宿っているはずの年月の重さを感じる事が出来なかった。
日本には付喪神のように、物に魂が宿るという考え方がある。
当然、実際に魂が宿って物が動き出すという事はないが、そこに意思は感じられないものの、その物が纏う空気や雰囲気と言ったものは感じるようになってくる。
湊が言った年月や過去というのはそれの事で、ここにあるものは〝ただ古い〟だけのものでしかなかった。
この場にあるもの全てがコピー品と聞いた直斗は納得したように

頷くと、ならばここにようはないと通路の先へ視線を向ける。
「本物でないなら調べる意味はありません。では、奥へと向かいましょう」
下りてきた階段周辺を調べていたが、ここにあるものでは何の情報も得ることが出来ないので調べる意味がない。
となると、残るは奥へと伸びている道を行くしかないため、急に敵が現われても大丈夫なよう鳴上が全員に声を掛けた。
「皆、十分に注意していこう！」
『了解！』
全員が武器を手に持って警戒しながら進むと、奥へと続く道が途中で七複数の五三縄と御札によって塞がれている。
まるで結界を張っているかのようで、この先が特別な場所だと言われているようだ。
幸いなことに道を塞いでいる七五三縄には大きな隙間があるので、その間を潜って通り抜ける事も可能である。
ただ、自分たちは最後の番人を倒しにここまで来たのだから、ここで変に遠慮する必要もないだろう。
邪魔な結界など破壊してしまえばいい。そんな意味も込めて全員が湊に視線を向ければ、青年はコートの内側から人斬り包丁〝徒桜〟を引き抜いた。
「……一応言っておくが、自分で出来る事は自分でやれ。万が一呪われたら嫌だからと人に押しつけるな」
言いながら湊は魔眼のまま袈裟切りに大太刀を振り下ろし、寿命を断たれた七五三縄と御札が朽ちて消えてゆく。
それを傍で見ている者の中には、呪われたくないという本音がバレている事に気まずそうにしている者もいる。
現実世界での話ならまだしも、こんな隔絶された異世界の中で結界の触媒を切り裂いたところで呪われるはずがない。
しかし、頭では分かっていても簡単には割り切れないのが人の心だ。
本人たちも悪いとは思っているのだが、湊なら即死級の呪いを受け

ても呪詛破りや呪詛返しが出来そうなので、ここは適材適所だと開き直って開いた通路の奥へ視線を向ける。
通路の奥はかなり広い大部屋になっているようで、階段周辺と同様に中にも大きな七五三縄や紙垂が張られている。
ただ、装飾は同じような感じになっているが、一歩大部屋に入ってみると中と外で空気が違うことに嫌でも気付かされる。
静けさで耳が痛くなるような静寂、何がいる訳でもないのにしんと張り詰めた空気。
その二つのせいで妙な緊張感を覚えるのかと警戒を強めるメンバーだが、大部屋の奥へと進んでいけば、石で出来た祭壇らしき台座に安置された銅の箱が見えてきた。
「あれか……」
見つけた台座へと近付いてゆきながら美鶴が小さく呟く。
外にあった鳥居や石柱同様、ここにある台座と箱も随分と年季が入っているように見える。
元はきっと赤褐色をしていたであろう箱は、もはや酸化していない部分を見つける方が難しいほど全体が薄緑色になってしまっている。
だが、これが他の物と同じであれば、古く見えるだけで実際は置かれてからそれほど経っていないのだろう。
場所を考えると安置された銅の箱がこれまでの宝箱に当たるものに違いない。
そう思って一同が箱の置かれた台座へと向かって行けば、
《こないで……》
急に感情の籠もらない少女の声が聞こえてきた。
今いる大部屋には自分たちしかいないと思っていた者らは、ここが番人の待つダンジョン最奥だと思い出して警戒する。
高い天井は一体どこまで離れているのか暗くて見えず、その暗闇から番人が降ってくる可能性を考慮すると、あまり密集陣形を取っていられない。
なので、全員が適度に離れたポジションで警戒を強めていれば、箱が安置された台座の正面に黒い靄が集まり始めた。

もしや番人が出てきてすぐに戦闘に突入するのかと武器を握る手に力が籠もる。
だが、他の者たちの警戒とは裏腹に集まっている靄は徐々に小さくなり、小さくなった靄がパンッと弾けるように消えれば、そこにはウサギのぬいぐるみを抱いた入院着の玲がいた。
「おいおい、玲ちゃんが分身してっぞ」
「順平、よく見て。あっちの玲ちゃんは八雲君みたいな金色の瞳してるよ」
少し距離を開けた正面に現われたのは玲だが、自分たちとずっと一緒に戦って来た玲は善と手を繋いで立っている。
彼女は自分と同じ姿をした何者かを酷く警戒しているようだが、両者の間には距離があるし、メンバーたちが善と玲を守るように陣形を組んでいる。
この状態で相手が玲に何かしてくるとは思えないので、全員が瞳の色が異なる玲を見つめて足を止めた。
《これは、だめ。だめなの……》
金色の瞳をした玲はメンバーたちに近付かないでと告げる。
抱いているウサギのぬいぐるみに顔を埋めながら話す彼女は、味方の玲と異なり快活さなど欠片もなく、酷く怯えた表情で箱への接近を拒む。
これまでのパターンを考えると、箱の中身を渡すまいとする行動から相手が迷宮の番人だと思われる。
しかし、見た目が知り合いと同じなので、強引に突破して奪い取るのも気が引けると真田が困った表情を浮かべた。
「これはどういう事だ？　あっちの玲が番人という事でいいのか？　有里といい、玲といい、分裂するのが流行っているのか？」
「アホか。どうみてもあっちは偽もんだろうが。分裂なんて馬鹿みたいな真似できるやつなんて、そう何人もいてたまるか」
湊の場合は退行時に八雲とベアトリーチェに分かれただけだが、真田と荒垣からすれば分裂した事実は変わらない。
そのため、同じように増えた玲も同類として扱いたくなるが、入院

着の玲は瞳の色も雰囲気も違っていてどこか不気味だ。
おそらく玉藻のように他人に化ける力を持つ敵に違いないと、荒垣が斧を握る手に力を籠めて相手を睨めば、似たような存在を見たことがある鳴上たちが止めてきた。
「少し待ってください。あっちの玲は多分、陽介や里中たちの時と同じだと思います」
「だな。つーことは、あっちの玲ちゃんは玲ちゃんのシャドウか……」
箱の前にいる玲は本人ではないが、荒垣が言ったように偽物かというとそうではない。
どうして最後の迷宮の番人が玲のシャドウなのかは分からないが、これまでと異なりただ倒せばいいという訳ではなくなった。
己のシャドウとの戦いを知る八十神高校側のメンバーが難しい表情をしていると、相手の正体が分かったのなら教えてくれと美鶴が声を掛ける。
「花村、詳しく聞かせてくれ」
「はい。えっと、テレビの中の世界だと、自分自身でも気付いていない自分の見たくない一面がシャドウとして出てくるんです。自分のシャドウと向き合って、弱い一面を受け入れる。そうやって俺たちはペルソナを得たんです」
お互いのペルソナの獲得方法に違いがあるとは聞いていたが、詳しい経緯を聞いていなかった事で、月光館学園側のメンバーは変わった獲得方法だなと感じる。
月光館学園側のメンバーがペルソナを得たのは完全に自力だ。
影時間の適性を持った者が、十分な高さの適性を持っている場合に覚醒してペルソナを得る事が出来る。
一方、八十神高校側の者たちは基本的にペルソナを持っていないとテレビの中に入れないというのに、テレビの中の世界で自分のシャドウと向き合わないとペルソナが手に入らないという。
力を持った者が一緒なら連れて行って貰う事も出来るが、そうでなければ無理矢理にテレビに入れられない限りシャドウと対面する事は出来ない。

ペルソナを手に入れに行くためにペルソナが必要など、矛盾しているとしか思えないが、そういう事ならここで玲が自分のシャドウと向き合えば、獲得条件を達成したことになるのではとラビリスは問いかける。
「なら、玲ちゃんもペルソナ使いになれるん？」
「あたしらの時はそうだったって話だから、玲ちゃんも同じようになるかは正直分かんないなぁ」
「うん。それに、弱い自分を受け入れればいいって言っても、実際にやってみようとすると難しいから」
千枝も雪子も他の者の手を借り、暴走したシャドウを弱らせて貰ってから何とか受け入れた形なので、間違っても簡単だなどという事は出来ない。
シャドウは押し殺して見ないフリをしていた一面が顕在化したものだ。自分がこれまで否定していた部分をすぐに受けいれるなど誰にも出来ないと思うと花村たちは話す。
「いきなり受け入れろっても無理だと思う。だからまずはシャドウに好きに言わせてやって、暴れさせてやって、そんな自分を見てようやく受け入れられるようになるんだと俺は思う」
シャドウはある意味で自分の本心だ。その本心に好きなようにさせてやり、ちゃんと見つめ直す事でシャドウを受け入れられるようになる。
だからまずは、玲のシャドウの言いたいことを聞いてやろうと全員が玲のシャドウの方を見た。

第三百八話　おともだち

――稲羽郷土展・最終夜

シャドウを受け入れるには、本人の抑圧された側面であるシャドウの本音を聞く必要がある。

そう話す花村や直斗に従い、一同はウサギのぬいぐるみを抱いた玲ソックリな少女と向き合ったまま相手の言葉を待つ。

《どうして、どうして生まれたの？　私、どうして生まれてきたの？》

ぽそりぽそりと少女の小さな口から言葉が紡がれる。

皆の耳に届く声は玲とそっくりだ。けれど、シャドウらしき少女の声には覇気どころか生気すら感じられない。

湊に似た金色の瞳は絶望に濁り、声には悲痛さが籠もっている。

見ているだけで、聞いているだけで、自分の心までもが暗くなってゆく錯覚を覚える。

だが、それらは負の感情ではなく、相手の少女に対する同情の念の部分が大きい。

彼女は一体何に絶望しているのか。どうして自分が生まれた事を後悔しているような言葉を吐くのか。

これではまるで死を望んでいるように感じてしまう。

「な、なにこの子？　善、怖いよ！　ねえ、戻ろうよ！」

「駄目だ、玲。戻らない」

自分ソックリな少女に対し、玲はこれ以上相対していたくないと帰還することを提案する。

第三者から見ても玲のシャドウらしき少女の様子は不気味に感じる。

ならば、本人は誰よりも相手に対して強い感情を抱いていることだろう。

今の様子からすると玲は恐怖がその頭を占めているようだが、帰りたがる少女の腕を掴んで善は相手を見ているように言った。

すると、これまで怯えた様子を見せていた玲のシャドウが急に頭を押さえて叫ぶように声をあげた。

《来ないで……私を、連れてかないでえええっ!!》
絶叫に近い声をあげ、玲のシャドウは自分の身体ごとウサギのぬいぐるみを強く抱く。
心理分析をするならば、ぬいぐるみは不安な心の表れ、そして他者と共にいたいという思いの表れでもあり、そういった者は癒やしを求めているという。
だが、今の玲のシャドウからは怖れしか感じる事が出来ず、叫んだ少女はどこからか現われた土のような物に身体が飲み込まれ始めていた。
思わず助けに向かいそうになるも、鳴上たちが腕を掴んで止めてくるので黙って見ていれば、少女を飲み込んだ土は肉のような質感を持ち始める。
色は土色だというのに、生物のような生々しい質感が不気味に映る。
だが、それをさらに見守っていると、ぐにゅぐにゅと音を立てて蠢いていた物が徐々に何かの形を作り始めた。
人間のシャドウとはこうも不気味に生まれ出るのか。そんなことが頭を過ぎるが、あくまでこれはシャドウの暴走だと七歌たちは自分に言い聞かせる。
ここでそう言い聞かせておかねば、自分のペルソナも一歩間違えれば同じような状態になってしまうのではという不安が過ぎりそうなのだ。
シャドウとペルソナは本来同一の存在。だからこそ、〝暴走〟状態のシャドウの姿を覚えていようと心に決める。
七歌や美鶴がそんな事を思いながら見つめていると、視線の先で暴走したシャドウに更なる変化が起きていた。
「ウサギの耳?」
急にピョコンとウサギの耳が出てきた。少女が抱いていたぬいぐるみの物だろうか。
そうだとすると少女が中から出ようと藻掻いている可能性が出てくる。

しかし、今はまだ近付かないように鳴上たちが止めてくるので、玲のシャドウらしき少女の身を案じながら待っていれば、飛び出していたウサギの耳がぴくぴくと動いた。
あれがもしも本当にぬいぐるみの耳ならば、魂の籠もっていないぬいぐるみが動けるはずがない。
となると消去法でウサギの耳はシャドウのものになるが、一体どんな姿に変化するのか気になってみていれば、土らしきものがぐにょぐにょと動き出し、全員の視線が集まったところで鋭い牙を持った獣の頭部が勢いよく飛び出してきた。
『ヒィッ!?』
ホラーやパニック系に耐性のない何名かは、勢いよく飛び出してきた獣の頭部を見て思わず後退る。
よく見ればその頭にウサギの耳がある事に気付けるが、誰がどう見てもそれはウサギではない。
頭部が出てくると続けて筋肉質な腕や、鋭い爪の生えた太い足などが現われる。
ウサギだとすれば足が非常に発達していてもおかしくはないが、腕や腹筋など全身の筋肉が非常に固そうで、戦う前から物理が通りづらいことは分かる。
特撮で見る怪獣や図鑑に載っているティラノサウルスのような姿勢で立つ相手は、ビリビリと空気を震わす咆吼をあげた。
最初に頭部が見えたときに後退っていた者たちは、全長四メートルを超える巨大な敵を前にした事もあり、咆吼を聞いた時には怯んでしまって動けなくなっている。
ダンジョンの番人を前に恐慌状態になってしまうとは厄介だが、幸いなことに恐慌状態になっているメンバーは他の者よりも後ろへと逃げていた。
腰が抜けてしまっている者も含めて、恐慌状態の者たちを数人で護衛しながら部屋の入口付近まで退がれば、残った者たちでウサギの化け物と戦う事が出来る。
何より、こちらには成長した姿に戻った湊がいる。

この世界にやってきてすぐにハートの女王を一撃で屠り、二つ目のダンジョンでは赤ん坊状態でも敵の身動きを封じて大型兵器で倒そうとしていた。
三つ目のダンジョンでは、僅かに成長した姿で三体の敵を倒している。
これまで全てのダンジョンで勝利を収めてきた彼がいれば大丈夫。
誰もがそう思って彼に視線を向ければ、本人はコートのポケットに手を入れたままウサギ型の怪獣をジッと見つめていた。
これからどう倒そうか考えているのか、それともアナライズで敵の弱点を探っているのか。
他の男子たちが恐慌状態の者たちを移動させながら観察していれば、再び怪獣が咆吼をあげたときにようやく湊が口を開いた。
「……中に取り込まれているニコにダメージが通らないか心配だな」
言いながら湊は大型の二丁拳銃を抜いて時計回りに走り出す。
走りながら怪獣に向けて銃弾を放てば、威力特化のファルファッラから放たれた弾丸が当たった部位が小さな爆発を起こして削げてゆく。
連射性と貫通力を高めたカラブローネの弾丸は敵の膝を正確に撃ち抜き、四発、五発と当たれば敵がバランスを崩して膝を着いた。
《ギュラァァァァァァァァッ!!》
肩や背中の肉が削がれ、片膝を潰された怪獣が怒りに震えながら吠える。
あまりに簡単にダメージを通しているので、凶暴そうな見た目よりも弱いのだろうかと考えてしまう。
しかし、湊を真似してアイギスが突撃銃で銃弾の雨を浴びせてみても、敵の身体に当たった銃弾が硬い金属にぶつかったような音をさせて弾かれた。
これで駄目ならと銃の種類を変えてみるも、対物ライフルクラスでないと十分なダメージは見込めない。
湊の使っているハンドガンに対物ライフルクラスの威力があるとは思えないが、仲間との連携を考えると対物ライフルは危険で使えな

い。
何より、先ほどの湊が言っていた、「中に取り込まれているニコ」というフレーズが気に掛かる。
玲の傍でボウガンを持って立っている善も、その部分が気になるのか湊に声をかけたそうだ。
敵を間に挟んで反対側に辿り着いた湊が武器を刀に変えたタイミングで、七歌はペルソナを召喚して疾風魔法を放ちながら大声で湊に話しかける。
「エウリュディケ、ガルーラで動きを封じて！　八雲君！　さっきの言葉ってどういう意味?!　取り込まれてるのは玲ちゃんのシャドウじゃないの?!」
現われたエウリュディケが巨大な空気の塊を放ち、片膝を着いていた怪獣にそれをぶつける。
倒れた状態で喰らった敵は僅かに身体を揺らしたが、思った以上にダメージは通っていない。
他人のシャドウと戦うのは初めてだが、こうも通常のシャドウより強力だと鳴上たちが今までどう戦って勝利してきたのか気になる。
だが、そんな事に思考を割きかけたところで、刃を寝かせて構えた湊が駆けながら言葉を返してきた。
「そのままの意味だ。取り込まれているのは玲のシャドウだが、その人格は元の記憶を持ったニコのもの。玲というのは記憶を失った彼女に善が与えた名前だからな」
話しながら接近してくる湊に気付き、怪獣は顔を後ろへ向けると湊が近付いて来たタイミングで負傷した足を思い切り蹴り出す。
強化されたウサギの脚力で思い切り蹴り出せば、ボッ、と激しい音を立てて空気の砲弾が飛ぶ。
その威力は七歌のペルソナが放ったガルーラを優に超えており、身体能力のみでそれを放つ脚力の恐ろしさに七歌の背中で冷たい汗が流れる。
だが、身体能力の恐ろしさでは青年も負けてはいない。
「ハァッ!!」

大木をなぎ倒せるほどの威力を持った空気の砲弾も、青年が刀を振るえば霧散して消えてゆく。
続けて二発、三発と続いても湊は流れるような動きで全て切り払ってみせた。
それを見ていた敵もこれでは効果がないと理解したのか、身体を反転させて湊の方へ向くなり、両脚を揃えた状態でロケットスタートの構えを取った。
まさか、と見ていた者たちが思った次の瞬間、怪獣は他の者の視界から一瞬で消える。
「はやいっ!?」
敵の姿がブレたと思えばその場から消え、湊がいた場所にはウサギの耳と刀だけが落ちており、急いで両者がどこに行ったのか部屋中を見渡す。
しかし、他の者たちが見つけるよりも先に、壁の一画から衝突音が響いて爆発したことで全員の視線がそちらに向く。
そこには片耳を切り落とされながらも、頭突きで湊を壁に叩き付けた怪獣の姿があった。
「八雲さんっ」
衝突した壁には天井に届くほど大きなヒビが入り、ぶつかった箇所と周辺の壁は完全に崩れ落ちている。
敵の頭突きで壁にめり込んだ青年の姿は怪獣の影で見えないが、壁際には血溜まりが広がっており危険な状態が予想される。
このままでは不味いとアイギスだけでなく七歌や鳴上が怪獣にペルソナのスキルを叩き込むが、あまり激しく攻撃すると湊まで巻き込んでしまう恐れがあった。
おかげで中途半端に相手の意識を逸らす程度の攻撃しか出来ず、今も壁のところにいる怪獣を湊から引き離せずにいる。
《ガァァァァァッ!!》
今まで頭部で湊を押し潰していた敵が顔を離す。
けれど、そのまま鋭い牙を剥き出しにして威嚇すると、青年を喰らい殺さんと噛み付きに行った。

怪獣の顔が壁の穴に入ると、ゴキリやグチュリ、と耳障りな音が聞こえて壁際の血溜まりが広がる。
こうなれば直接しかないと判断した鳴上が完二に視線を送れば、完二は分かったと頷いてタケミカヅチを呼び出した。
「来い、ペルソナァッ!! あいつを横からぶっ叩け!」
呼び出されたタケミカヅチは雷の形をした武器を振り上げ、敵の真横に到着するなりバットのフルスイングのように振り抜いた。
脇腹から浮き上がるように殴られた敵は、口から血を流しながら宙を舞って離れた場所へと落ちる。
もっとも、シャドウは血を流したりしない。元から生き物ではないのだから、他の生き物とは身体を構成する物質からして異なっているのだ。
そんな怪獣の口からおびただしいほどの血が出てくると言うことは、襲われていた青年がかなりの重傷を負っているという事。
怪獣の動きを警戒しながら誰かが青年を回収してくる必要があるため、床の上を転がった敵が起き上がってくるのを注意して見ていれば、立ち上がる際に相手の口から何かが出てきて地面にボトリと落ちた。
一体何だと視線を向ければ、それは紛れもなく人の右腕だった。
何故そんな物がと血濡れの右腕を見た鳴上は、胃の中のものが迫り上がってくる感覚に耐えつつ、状況を把握しようと思考を続ける。
そして、それが絶体絶命の青年が咄嗟に下した判断の結果だと理解するなり声を張り上げた。
「っ、完二! タケミカヅチにそのまま有里を回収させるんだ!」
「わかったっす!」
怪獣が食らい付きにきた瞬間、彼はきっと片腕を犠牲にして胴体へのダメージを防いだのだろう。
壁に叩き付けられた状態でよくも動けたなと思うところだが、身体の一部を犠牲にしても生きながらえる判断が下せるのは経験によるものなのだろう。
対シャドウ兵器の三姉妹と七歌やチドリが怒りの表情で怪獣に攻

撃している間に、敵を吹き飛ばしたタケミカヅチに壁に埋まっていた湊を回収させた。
戻ってきた湊を後退がっていたメンバーの傍に寝かせれば、不自然に腹部が薄くなっており、臓器のほとんどが潰れてしまっている事が窺える。
先ほど敵の口から落ちた右腕も、肘の辺りから先がなくなっており、そこからは大量の血が流れ出ていた。
湊を相手にこれだけのダメージを与えられるなど完全に想定外。番人の強さを見誤り、さらには一番強いからと湊に戦いのほとんどを任せてしまっていた事を反省する。
「天城、すぐに有里の治療を。岳羽さんも頼む」
「分かった。任せて」
「うん。その間、あっちは任せるね」
回復魔法に優れたペルソナを持つ少女らに湊を任せると、鳴上は自分も番人の相手をするべく七歌たちの戦列に加わりに向かう。
相手の突進攻撃は防げない。湊でも反応しきれなかったのだから、他の者ではガードも間に合わず、壁に叩き付けられた時点で即死だろう。
ならば、そうならないよう立ち回って、自分たちに出来る方法で相手を削って行くしかない。
自分たちだけで出来るかは考えない。一度撤退するにしても湊を動かせる状態まで回復する時間を稼がないと行けないのだから。
「ペルソ――――っ!?」
そうして、鳴上がイザナギを呼び出そうとしたとき、部屋の中の温度が急激に下がった気がして思わず発信源の方へ振り返る。
「あり……さと……？」
突如、部屋の中に巨大な気配を感じ、鳴上だけじゃなく戦っていたアイギスたちと敵までもが気配の主へと視線を送る。
そこには治療が不十分なまま、血を吐き口元を吊り上げて立っている青年がいた。
彼の後ろでは雪子とゆかりが動いては駄目だと言っているようだ

が、少女たちの話を聞いていない彼は、左手で残った右腕を掴むと肩の一歩手前ほどの位置から引き抜く。
ブチブチと耳に残りそうな嫌な音を立てて彼が右腕の残っていた部分を捨てれば、他の者が驚いている間にコートから新しい腕を取り出した。
「……そう何本も予備はないんだがな」
そう言って彼は新しい右腕を肩口に合せると、カグヤの回復スキルで腕を繋げながら臓器も再生させる。
彼の右腕は久遠の安寧との戦いで失って以降、アイギスの三連装アルビオレ改やＥＰ社製の機械義手を経て、今では人工骨格ではあるものの自分の細胞から作った生体義手になっている。
おかげで腕が千切れたところで接続面からパージし、予備の生体義手と繋いで戦う事が出来るのだ。
もっとも、神経や血管の通っている生体義手をパージするときには、それこそ神経をすり潰される以上の激痛が走り、常人ならば痛みで失神してもおかしくないのだが、湊は自分の身体がダメージを負ってもどこか他人事のように考えている。
痛みなど一過性のものでしかなく、そんな事を気にするくらいなら腕を潰してきた者を殺す方法を考えた方が建設的。
そんな戦闘狂も真っ青な思考パターンを持つ青年は、繋いだ右腕の感覚を確かめるように拳を握り、イメージと感覚のずれが治まったところでコートから片手持ちの大剣である九尾切り丸を出した。
「……よし、いくか」
彼の手にある大剣の表面に青白い光の紋様が走る。
全員の目にその光が残っている間に、彼は地を蹴って怪獣の許へ向かう。
鳴上を追い抜き、アイギスとチドリの傍を走り抜け、七歌とメティスの横を通る瞬間に消えると、ラビリスの目の前に現われ三歩で敵との距離を詰めた。
最大の脅威と認識していた湊に懐に入られた事実に、怪獣は本能からか身体を捻りながら腕を振るう。

だが、目の前に現われたはずの湊の姿はすぐに消え、怪獣の腕がむなしく空を切ると思われた時、怪獣の腕は宙を舞っていた。
《ギュラァァァァァァッ!?》
やった事は非常に簡単だ。相手が攻撃をしようとしてきた瞬間、身体を限界まで地面すれすれに倒して相手の足の間を抜けただけ。
そうして自分の腕が影になって湊を見失った直後、背後から側面に回り込んで大剣を振り上げて彼は腕を切断した。
これでお相子だと言わんばかりの攻撃には、やはり彼は戦闘面では色々と根に持つタイプなのだなと思わされる。
腕を切られた痛みにもがき苦しむ怪獣の傍で、湊はそのまま大剣を振り上げると右足を膝の上から切断。
バランスが取れなくなり倒れる際、さらに続けて左足も膝から切り飛ばす。
残る相手の武器は左腕と鋭い牙の生えた口だけだが、面倒に思ったのか湊は相手の背中に乗ると震脚で踏みつけ、相手の身体を床にめり込ませて動きを封じる。
これはきっと突進で壁に埋め込まれた報復に違いない。そう思って見ている者たちの目の前で、彼は背中に乗ったまま首と左腕を袈裟切りに切り落としたのだった。

第三百九話　隠されていた真実

――稲羽郷土展・最終夜

怪獣のような姿になったウサギを倒し終えると、湊はその背中から下りて武器をコートに仕舞う。

敵のタックルを喰らった際、かなりの出血とダメージを負っていたはずだが、本人は気にした様子もなくコートをマフラー状態にすると血濡れになったシャツを脱ぎ捨てている。

そして、先ほど自分が捨てた右腕のパーツと怪獣に喰われて損壊した腕の残りを一箇所に集め、フェニックスを呼び出して焼かせると、マフラーから出したペットボトルの水を頭から浴びて血を洗い落としていた。

戦闘のダメージが残っていないのであれば構わないが、新しく繋いだ右腕がちゃんと動いているのを見た直斗は不思議そうに顎に手を当て呟く。

「ペルソナの回復スキルで潰れた臓器の再生や腕を繋ぐことが可能とは知りませんでした。しかし、有里先輩が持っていた予備の腕とやらは一体……」

「ああ、湊君の右腕はウチらと同じ生体パーツでできとるんよ。元々の腕は建物の倒壊に巻き込まれて千切れてしもたんやて」

建物の倒壊に巻き込まれて腕を失うというのは、本来、かなりハードな出来事のはず。

けれど、直斗に説明したラビリスがその場面を直接見た訳ではないし、湊のこれまでの戦闘などを見ていると、腕が一本なくなった程度なら軽傷だと思えるようになっていた。

自分で胸を貫き心臓を取り出しても生きているのだから、生体パーツによって生身の腕が手に入った今では腕を失った件も大した話ではない。

そう笑って話すラビリスを見た直斗は、いまいち納得しきれないものがあるものの、大怪我をしたはずの湊が無事なこともあって何も言わない事にした。

血を洗い落とした湊がフェニックスの不思議な炎で全身を覆い。水気と汚れを浄化してから戻ってくると、一同は湊によって四肢と頭部を斬られ倒れている怪獣に視線を向ける。

頭部を切り落とされた段階では動こうとしていたのだが、湊が震脚で踏みつけた後は完全に沈黙している。

これまで自分たちのシャドウが暴走する場面を見てきた八十神高校のメンバーたちは、ここからが重要なんだと敵に近付こうとする月光館学園の者たちを制止する。

すると、鳴上たちの言う通り、沈黙していた怪獣の身体が溶け始め、中から入院着を身に着けた玲のシャドウが現われた。

暴走する前と違って今はどこか疲れた様子で立ち上がり、そのまま黙って視線を地面に落としている。

一方、シャドウの持ち主である玲はというと、自分のシャドウと相対するのが恐ろしいのか震えたまま視線を逸らして直視しようとしない。

誰だって自分の見たくない一面と正面から向き合うのは難しい。玲は特に怖がりなので、自分だけでは受け入れる事は出来ないだろうと雪子が助け船を出す。

「玲ちゃん、人には色々な一面がある。見たくない、認めたくない一面は誰にだってあるんだよ。だから、私たちで良ければ話して欲しいな。玲ちゃんが抱えているもの。私たちじゃ分かち合えないかな？」

シャドウとして現われるのは自分がこれまで見ようとしてこなかった、認めようとしてこなかった一面だ。

鳴上を除く全員がそうした自分の一面と戦って、相手の本心の叫びを聞くことで紛れもなく自分だと認めるに至った。

しかし、相手を自分だと認めるというのは、そのまま自分の嫌な一面を受け止めて乗り越えたという事ではない。

あくまで向き合う事に決めただけ。スタートラインに立ったに過ぎず、実際にそんな自分とどう付き合って行くのか、自分がどうなっていきたいのかはその後の課題だ。

ただ、そのスタートラインに立つのが難しいと、一人で受け止める

ことが出来ないのであれば、仲間として自分たちも支えてゆく。
少しずつでもいい。まずは相手も自分の心の一部なのだと認めるところから始めないかと雪子は提案した。
すると、雪子に話しかけられた少女ではなく、少し離れた場所に立って煙管を咥えていた湊が薄い笑みを浮かべて口を挟んできた。
「……やめておけ、天城。ソレを簡単に受け止めるのは無理だ」
「どうしてそんな事を言うの？　確かに自分の最も見たくない部分を受け入れるのは難しいよ。でも、玲ちゃんは弱くない。怖がって、泣いて、それでも皆と一緒に外に出るために戦って来たんだよ」
「そうだ、有里。玲はペルソナを持たない身で、ここまでずっと戦って来た。臆病でも諦めず、怖がりながらも前に進んできたんだ。そんな玲を侮辱するような言い方はやめてくれ」
湊はソレと言って玲のシャドウのことを見ていた。
八十神高校側のメンバーの記憶を読んでいた彼なら、シャドウを受け入れてペルソナを得るという一連の流れも映像として知っているはず。
だというのに、ここで玲がシャドウを受け入れられるはずがないと断言されれば、玲のこれまでの頑張りを見ていなかったのかと鳴上たちが憤りを覚えるのは当然だった。
複数の厳しい視線を向けられた湊は、自分に怒りが向こうが気にした様子もなく煙管を手で遊ばせ、別にそういった意味で言った訳ではないがと返す。
「……別に玲個人の心の強さの問題じゃない。まともな精神をしている普通の人間なら、そんな〝現実〟はそう簡単に受け入れられないと思うぞ？」
どう見ても相手は玲のシャドウでしかないが、湊にはもっと別の物に見えているのか言葉を取り消さない。
彼は戦闘中もシャドウの事をニコと呼んでいたり、善と玲の記憶が奪われている理由なども分かっている様子だった。
そんな彼ならば既に玲の奪われた記憶についても把握し、どうして彼女たちがこの世界に閉じ込められているのかも分かっているかも

しれない。
だが、彼が自分だけ知っている事を話すよりも先に、自分ソックリな少女の存在に耐えきれなくなった玲がキッと鋭い視線をシャドウに向けて叫んだ。
「わ、わたし、こんな子知らない！　あんなのわたしじゃない！」
言った直後、シャドウはとても悲しそうな顔をして黒い靄に包まれ消えていった。
シャドウが消えていく際、雪子や千枝は「待って！」と手を伸ばすがシャドウは待つことなく消滅した。
暴走したシャドウを倒して沈静化させ、それから持ち主に向き合わせると聞いていた月光館学園のメンバーたちは、一体何がどうなっているのかと玲と消えていったシャドウのいた場所を交互に見る。
誰か分かるように状況について教えてくれないかと七歌が控えめに尋ねる。
「えっとぉ、こういう時ってどうなるの？」
「現状維持って感じです。玲さんは向き合う事を拒んだので、シャドウが出てくることもないかと」
持ち主が向き合う事なく否定を続け、シャドウが消えてしまった以上は何もすることが出来ない。
小さな声でメティスがそう話せば、そういうものなのかと七歌たちも納得したように頷く。
ならば、シャドウを受け入れられなかった玲のことは気になるが、この世界から脱出するため番人が守っていた宝物を回収しようと善が箱に向かって進んだ。
箱へと向かう善の背中を見つめる玲の瞳には不安の色が見える。
雪子やアイギスはそんな玲を心配して肩に手を置き、一緒になって善が箱の中身を取り出すのを待った。
大きな石で出来た箱の名から何かを取り出した善は、取り出した物をその手に持って皆の許に戻ってくる。
随分と小さくて薄い物だなと思った鳴上が、一体それは何だと善に訊いた。

「善、それは？」
「手紙のようだ」
中に入っていたのは、可愛らしいウサギのイラストが描かれた薄緑の便箋。
そこには女子に多く見られる丸っこい文字で〝にこちゃんへ　安らかに眠ってね　有希〟と綴られていた。
善が読み上げた内容を聞いた者たちは、まるでその手紙が死者に宛てたものではないかと感じてしまう。
さらに、ここで再び〝にこ〟という名前が出てきた。
最初の宝箱に入っていたウサギのぬいぐるみの持ち主で、このダンジョンはその人物のための鎮魂の儀式だったという。
ただ、先ほど現われた玲のシャドウは同じウサギのぬいぐるみを抱き、彼女の事を湊がニコと呼んでいた。
それらの情報を統合していくととても不安な想像が頭を過ぎるが、善が自分の手の中にある便箋に視線を落としていると、顔を上げて湊の方を向くなりどこか悟った様子で口を開いた。
「湊……君は、最初から分かっていたんだな」
「ああ、俺は〝そういう存在〟だからな」
「なるほど。だが、それでは君も生きづらいだろうに」
「どうでもいい。さぁ、さっさとくだらない話を終わらせろ」
お互いに何かを分かり合っていて、湊は心底つまらなそうに善に話を進めるように言う。
善自身もそれが良いと思ったのか頷いて返し、そのまま玲へと近付きながら言葉を続ける。
「人には色んな一面がある。確かにそうだ。だが、だからと言って〝認める〟など、出来るはずがないんだ」
それは先ほどの雪子の言葉に対する彼の意見。
雪子が言っていたように人には色々な一面がある。中には見たくもない、到底認めることなど出来ないような一面だってある。
雪子や鳴上はそれも含めて自分だからと、すぐに認める事は出来なくても向き合っていこうと言った。

しかし、そう言った彼らの基準はあくまで自分を含めた仲間たちが遭遇した事件。他の仲間の手を借りて、暴走状態のシャドウを倒してから、何とか自分が見ないフリをしてきた一面と向き合えただけ。

だからこそ、善は鳴上たちの件と玲の件は似ているが別物である事を強調する。

「玲……私は全てを思い出した。私の名はクロノス、時を支配するもの。私は君を迎えに来ていたんだ」

「わ、わかんない。わたし、何にも知らないっ」

番人の守っていた物に触れた事で善は全ての記憶を取り戻す事が出来た。

彼は自分が忘れてしまっていた使命も思い出し、今こそ使命を果たそうと徐々に玲との距離を詰めて行く。

「君はずっと迷宮を恐れていた。七歌たちが来るまで絶対に近付こうともしなかった。それは君が迷宮の奥に隠した〝真実〟に触れることを恐れていたからだったんだな」

記憶を取り戻した善は、どうして玲があれほどダンジョンを怖がっていたのか理解した。

彼女がダンジョンを怖がっていたのは、ダンジョンを進む度、攻略する度に自分が認めたくない〝真実〟に近付いると無意識に気付いていたからだと。

善と玲の記憶は敵によって奪われたのではない。ただ、彼女をここへ閉じ込めた存在が、記憶があっては不都合だからと封印しただけだった。

封印はあくまで記憶を取り出す事を阻むための鍵でしかなく、彼女の記憶自体は封印されている間も彼女の中にあり続けた。

だから、彼女は〝無意識〟にダンジョンを恐れ、ダンジョンを進むことを怖がり、既に自分の〝真実〟を見抜いていながら平然と接する湊にも懐いていた。

「だが、君は彼らと一緒にいたかった。一緒にいるために、君は恐れていた迷宮にも無理をして入っていった。何故なら、彼らと〝同じように〟なりたかったから、〝同じところ〟に帰りたかったから。でも、

違うんだ。玲と七歌たちでは違うんだよ」
「ちがわない！　何もちがわない！」
この世界にいた者と呼ばれて来た者。
一般人とペルソナ使い。
怯える者と戦う者。
それぞれの持つ属性を比較すると対称的ではあるが、善が言っているのはそういう事ではない。
彼が指摘しているのは〝どういった存在か〟の一点のみ。
玲の正面までやってきた善は、とても申し訳なさそうに彼女の事を見つめながら手を伸ばす。
「あの時の私は間違っていた。君は私と、行かなければならないんだ」
「善、やめて……」
「君の記憶を解くよ……すまない、玲」
伸ばされた善の手が震える玲の頭にかざされる。
そして、善の手が淡い桃色の光を発すると、玲の身体が同じ光に包まれた。
彼女の身体を包んだ光は眩さを増して暗い部屋を照らす。
だが、その眩さが頂点に達すると光は弾けるようにして消えていった。
自分を包んでいた光が消えると、玲はハッとした表情で覚醒して辺りを見渡す。
「っ……私、何して……」
急に記憶が戻った事で混乱しているのか、玲は自分が何故こんな場所にいるのか分かっていない様子だ。
しかし、その瞳の色は淡い緑色から日本人らしい漆黒へと変化しており、口調もこれまでよりもどこか大人びて感じる。
記憶が戻ったことで大きく性格が変わっていたりはしないか。七歌たちが心配そうに見ていれば、少女の記憶が無事に戻った事を確認した善が改めて玲に声を掛けた。
「〝時〟は来たんだ。私と一緒に行こう……玲」
「い、いや……」

共に行こうと善が手を差し出せば、玲は恐ろしいものを見るように数歩後退る。
彼の手には何もなく、少女が何をそこまで怯えているのかも分からない。
ただ、玲が嫌がっている事だけは理解出来るので、無理矢理にどこかへ連れて行こうとするのは止めた方がいいのではと千枝と雪子が口を挟んだ。
「ね、ねぇ、行くとか行かないとかって何の話？」
「うん。玲ちゃんも嫌がってるし。嫌なら止めてあげた方がいいんじゃないかな？」
「それはできない」
少女たちの提案を善は首を振って無理だと切り捨てる。
善だって玲が嫌がっていることは理解しているし、彼女がとても怖がっているのも見れば分かる。
「善、やめて……」
「玲は……ここにいてはいけない。いや、どこにも……いられない」
出来れば彼女の望む形で事を進めたいが、まともな精神をしていればこんな現実を突きつけられれば誰だって玲のように拒絶する事が分かっていた。
だからこそ、善は玲が自分を拒絶しようが目的を進める事をやめない。
何故なら、
「玲は――――――死んでいるから」
この事実はどうやっても覆らないのだから。
「やめてぇぇぇぇぇぇっ!!」
面と向かって認めたくない事実を指摘された少女は、絶望に染まった絶叫をあげると走り去ってしまう。
「玲っ!!」
「玲ちゃん!!」
その後を善や雪子が走って追い掛けていったが、どうせ部屋の外にある転送装置で校舎に戻っただけだろうと分かっている湊は冷めた

目で出て行った者たちの背中を見送った。
ずっと一緒にいた玲が既に現実世界では死んでいたと聞かされ、他の者たちは少なくない動揺を覚えたというのに、彼だけはあくまでいつも通り。
玲の本当の名前についても分かっていたのだから、きっと彼は全てを知ってこれまで黙っていたに違いない。
それでも、一応は訊いておかなくてはならないと、部屋の出口から彼に視線を移したアイギスが青年に質問をぶつけた。
「八雲さんは知っていたんですか？」
「何がだ？　会話には主語が……」
「はぐらかさないでくださいっ!!」
湊の様子はあくまで普段通り。一切の動揺なく極めて冷静で、相手を小馬鹿にしたような口調も平常運転と言えるだろう。
だからこそ、動揺している他の者たちと温度差が生まれているのだが、普段通りでいる者が一人しかいないこともあって、アイギスは彼がわざとふざけているように感じてしまった。
彼を怒鳴りつけるつもりなど一切なかったのだが、思っていた以上に強い口調で彼を追及する形になると、そこからは鳴上が会話を引き継ぎ、改めて湊に聞き直した。
「さっきの善との会話から大体は想像できる。有里、お前は玲が既に死んでいると知っていたんだろ？」
「……ああ、最初に会った時点で気付いていた。クマやマリーが人間ではないと気付くことが出来るんだ。それと同じで玲が魂の欠片から再現されたものだとは分かっていた」
湊の瞳には霊視の力が宿っている。それは一定以上の格を持つ九頭龍家の生まれならば全員が持つ力だが、彼はさらに解析するための能力と死を視る魔眼を持っていた。
人の身体を構成する成分は基本的に同じだが、生者と死者では直死の魔眼で視える赤白い光の傷が視える位置が異なっている。
そのため、湊は玲を視た時点で彼女が生きた人間ではないと知っていたが、出会った時点で分かっていたなら話す機会はいくらでもあっ

たはず。
何故教えてくれなかったんだと、少し拗ねたように口を尖らせながら千枝が尋ねた。
「どうしてそれを教えてくれなかったのさ？」
「教える意味がないだろ？　〝こいつは既に死んでます。今の姿は記録から再現したものであり、死ぬ直前の姿ではありません〟とでも言えば良かったのか？」
玲が既に死んでいるという事実。入院着を着ていたシャドウ。三つ目のダンジョンにあった美しい白い髪の束。
それらの情報から推測すれば、今の玲の姿が死んだときの姿でないことはすぐに分かる。
薬の副作用で抜け落ちていったのか、それとも治療するときに髪を剃らなければならなかったのか。
生前の彼女の細かな情報など誰も知らないが、女子たちは同性として髪を失う事の辛さを想像することが出来た。
そんな可哀想な少女の事を話しているというのに、湊からはくだらないと感じている気配があったことで、直斗が途中で口を挟んで感じたままの疑問を訊いた。
「先輩は玲さんが嫌いなんですか？」
「ハッ、俺の態度が冷たいと思ったのか？　逆だ。俺は心底彼女に同情している。別に彼女がどう生きたか何て興味ないし、あの歳で死んだところでだからどうしたとしか感じない」
死を理解している湊にすれば、どうしてそこまで必死になるのかが分からない。
大切な者のためにならば彼も動くが、自分の命に価値を感じることが出来ない湊は、己の死を認めようとしていなかった玲のことを理解出来ない。
彼女の死は純粋な結果であり、そこにはクロノスも一切干渉していない。
外国ではもっと幼い命が平然と奪われている事もあるので、病院のベッドの上で亡くなったのならマシな方ではと思ったくらいだ。

そのような考え方の青年だからこそ、どんなに突き放すような事を言っていたとしても、別に玲を嫌っているという事はなかった。
だが、彼は玲のことは嫌っていなかったが、赦せないことが一つあると鋭い視線で部屋の出口を見ながら話す。
「だがな。記録の運び屋風情が意思を持った事で己を神と勘違いし、その驕りによって玲を苦しめた事は別だ。何もしなければ、あいつが余計な事をしなければ、今回のようにニコが余計に傷つくことなどなかったっ」
激情のままに青年が吠えると彼の足下で黒い炎が揺らめく。
魔眼の蒼い瞳が数瞬だけ銀色に変わっていたほどだ。彼は既に何者かを敵として定めているのだろう。
「さぁ、二人を追うぞ」
言いながら湊は他の者がついてきているか気にすることなく、一人で部屋の出口へと進んで行ってしまう。
他人などどうでもいいと冷たい態度を見せながらも、この中で誰よりも玲のことで怒りを感じているのは間違いなく彼だ。
湊が敵と定めた者は玲に何をしたのか。先に出ていった玲たちはどうなっているのか。
それを知るためにも校舎へと戻らなければならないため、一同は視線を交わすと先行している青年の後を追い、走り去ってしまった玲たちの許を目指した。

第三百十話　少女の求めるもの

――ヤソガミコウコウ

他の者たちが転送装置を使って校舎に戻ってくれば、玲と彼女を追っていた雪子と善が時計塔の前にいた。

玲は時計塔に手を当て背中を向けており表情が見えない。

だが、あの場から逃げ出したときの事を考えれば、今の彼女の精神状態は冷静とは言えないだろう。

先に少女を追っていた二人が他の者がやって来たことに気付き、皆が集まって足を止めたタイミングで雪子が善に尋ねる。

「ねぇ、さっきの話ってどういう事？　玲ちゃんがもう死んでるって……」

下に残った者たちは湊から玲が死んでいる事は聞いていた。

〝死〟が視える彼にとって、如何に精巧に出来ていようと生者と死者を見分けるのは容易い。

その魂が本物だろうと、しっかりとした自我や心が残っていようと、死者にはより濃く死の線が視えるのだ。

ただ、それを聞いた他の者からすれば、既に死んでいるのにどうして死の線が視えるのかという疑問が湧くに違いない。

彼が言うには死は万物に存在するものであり、死者も完全な無に還らない限りは消滅させられるらしい。

そのため、魂だけで存在する玲は他の者よりも存在があやふやで、湊の魔眼を通して視れば全身に存在の綻びが視えていた。

青年からその話を聞いていない雪子は、彼女が既に死んでいるのは事実なのだろうと察しながらも、彼女がここに来るに至った理由などを聞くため善の答えを待つ。

すると、善は目を閉じてしばらく黙り込み、話す内容を頭の中で整理したのか口を開いた。

「ここは狭間の地。無意識の海へと繋がる場所だ。玲は死んで身体をなくし。心も消えゆくほんの一時の間、この世界に迷いこんだ……だから私は来たんだ。迷いこんでしまった玲に、時の終わりを告げるた

めに」
通常、死んだ者の魂はそのまま消滅するが、心の一部は無意識の海へと向かう。
宗教や文化によってその呼び名は変わり、ある文化ではそこを死後の世界と定義して天国やあの世、また別の文化では星の記憶や魂のコミューンと呼ぶ事もある。
事実、そこには過去の人間たちの心の一部が記録として残っており、もしも辿り着くことが出来れば過去の人間にだって会えるに違いない。
だが、若くして死んでしまった玲の心は、無意識の海へ向かう途中に偶然発生したこの場所に辿り着いた。
天地の向きだけが定まった何もない空間。世界としての理もなく、本当にただ偶然世界の狭間に浮かんだ孤島のような場所。
そんな場所に偶然にも玲が迷いこんだことで、善は彼女をあるべき流れに乗せるために遣わされたのだ。
「うそ……うそだよ……っ」
善の口から語られる真実は玲にとっては無慈悲な内容ばかり。
けれど、告げられた真実を受け入れない彼女に、善は本当は分かっているのだろうと話す。
「玲、君の記憶は既に戻ったはずだ」
「……こわい」
絞り出すように玲が言う。
それに善が優しい声色で答える。
「怖くない。私が一緒だ」
この世界の玲にはしっかりとした自我がある。
過去の記憶を取り戻したが、皆と一緒にダンジョンを攻略した記憶もあれば、一緒に食事をしたり赤ん坊の世話をした思い出もあった。
だからこそ、自分が死んでいるという実感がない。または死んでいるという実感が薄れているのかもしれない。
そう思ったからこそ、善は自分も一緒に行くから大丈夫だと彼女を安心させようとした。

死ぬと考えるから怖いのだと、自分と共にこの閉じた世界から旅立つと思えば良いと。

しかし、そういって善が彼女に近付いてゆけば、玲は振り返って記憶が戻った事で日本人らしい黒色が変化した瞳で善を真っ直ぐ捉え、その心の内を叫ぶように話す。

「……怖いのは、死ぬことじゃない。何も〝無かった〟ことが怖いの……生まれてきて、〝無かった〟まま死ぬことが怖いの！　私はどうして生まれたの？　苦しみばかり、人を羨んでばかりで学校に行くことさえ叶わなかった……！」

玲は善によって封じされていた記憶を取り戻した。

自分が本当はどんな存在で、どういった人生を生きてきたのかも思い出すことが出来る。

ただ、その封じられていた記憶にあったのは、〝どうして自分ばかりが〟という己の境遇に対する不満と、平凡ながらも彼女からすれば十分に恵まれた他の者たちの境遇に対する羨望ばかり。

自分の足が遅いからと体育を嫌う少年。

――走れるだけ良いではないか。

雨だから学校に行くのが面倒だという少女。

――なら自分が行くから替わってくれ。

ようやく授業が終わって自由だと笑いながら帰って行く少年。

――ああ、自分もそんな風に友達と一緒に通学路を歩きたかった。

玲はこの世界に七歌たちが来てから校門の外に出ようとしてみた事があった。

順平や荒垣が調べてみたところ、学校の敷地外に見えている稲羽市には行くことが出来ない。

学校の門やフェンスを境界として、外に出たつもりが中に戻される。

そう聞いてはいたが、外から人がやってきたなら変化が起きているかもと彼女も試してみたのだ。

しかし、結果は他の者たちと同じで、玲が校門から一歩出てみれば、

気付けば校門から校舎に向けて一歩踏み出した状態になっていた。
その時に僅かな寂しさを覚えたような気がしていたが、記憶が戻ったことで玲は寂しさの意味を理解した。
こうやって再現された世界であっても、玲は学校の授業を受けることは出来なかったし、皆と一緒に放課後の街へと出かけることも出来なかった。
善が行なった世界をイメージ通りに作り替える魔法をもってしても玲の小さな願いは叶わなかったのだ。
「そこに、意味があるならいいよ。意味があったなら……耐えられるよ。でも意味が無いなら……認められない……死ぬなんて……終わりだなんて!!」
大きな瞳から涙を溢しながらの玲の叫びは、聞いている者たちの心を強く締め付ける。
自分たちが当たり前に過ごしていた時間が、平凡な日常だと思っていた物が、彼女が何よりも求めたものだったのだ。
自分にも望んでも手に入らなかった物があるから気持ちは分かる。などとは一時の慰めのためだろうと言う事は出来ない。
中でも、自分の人格の基になった少女や、自身が同じ願いを持っていたラビリスにとって、玲の焦がれるほどの気持ちは理解出来るのだが、自分が望んでいた以上の結果で願いを叶えて貰った立場であるため、〝未来がない〟少女には何も言うことが出来なかった。
「まだ、何もしてない……まだ――――何も見つけてないっ!!」
彼女は別に歴史に名を刻みたい訳じゃない。そんな大きな事なんて考えた事も無い。
望んでばかり、羨んでばかりのまま死んだ玲は、ただ自分が生きていたという証が欲しいだけだ。
何一つ成し遂げることもなく、ただ生まれて死んだのでは自分が生きたことの意味が見いだせない。そんなものはいてもいなくても同じだから。
そう言った玲が小さな肩を震わせて泣いていると、彼女にかける言葉を持たない者たちは黙って俯くことしか出来ない。

彼女を連れて行こうと思っていた善も、玲が胸の内に抱えていた本当の想いを聞いて何も言えずにいる。
無理矢理に彼女をこの世界から連れ出し、他の者たちはベルベットルームにある全ての鍵が外れた扉から元の世界に帰ることも出来る。
だが、それでは七歌や鳴上たちだけが助かり、誰よりも救いを求めている玲だけが何も救われない。死して尚、誰かを妬みながら消えるなどあまりにも辛すぎる。
そうして、それぞれが何か一つくらい掛ける言葉がないか探していれば、集団の隅で冷めた目をしていた青年が小さく嗤いながら呟いた。
「……死んだ後まで悩むとは随分と贅沢だな」
青年の言葉が耳に届いた者たちは、どうして玲を煽るような事を言うんだと驚いた顔で彼を見る。
案の定、彼の言葉を聞いた玲は表情を怒りに変え、その瞳をシャドウの金色の輝かせながら、知った風な事を口にした青年へ言葉を返した。
「何が分かるの!? まだ生きてるあんたに!!」
「何が分かる、か。確かに俺は生きてはいるが、〝死〟については誰よりも理解してるぞ」
玲がどう言い返してくるかなど分かっていたと、湊はさらに口元をつり上げて嗤う。
そして、右手に玉藻の前が宿る死神のカードを、左手に鈴鹿御前の宿る運命のカードを呼び出して同時に握り砕いた。
カードが握り砕かれると彼を中心に不思議な力が広がってゆく。傍にいた者たちだけでなく、時計塔や校舎まで不思議な力に包まれ、全員が何をしたんだと彼を見た。
「なんだ……これは……」
湊の方を見たとき、鳴上は自分の視界に映る全てのモノに赤い光の線が入っている事に気付く。
仲間たちの着ている服だけじゃない。仲間の顔や手にも見えるし、地面や校舎などにも同じように光の線が見える。

光の線は規則的に入っている訳ではなく、斜めに入っている事もあれば、他の線と交差しているものもあった。
それが何であるかは理解出来ないが、地面や自分たちにまで線が見えているせいで不安な気持ちになってくる。
一体これが何なのか青年に説明を求めようとしたとき、マフラーからレンガを一つ取り出した湊が、全員に見えるようにそれを掲げながら、レンガに走っていた光の線を指でなぞった。
すると、頑丈そうなレンガが彼の指でなぞられた線に沿ってずれてゆく。
ズズズと小さく音をさせながらずれたレンガは、最終的に上下に分かれて上側だけが地面に落下した。
光の線に触れてみようと思っていた者たちも、指でなぞるだけでレンガが切れたのを見れば、そんな危険な印だったのかと思わず動きを止める。
自分や仲間の身体に走っている線は勿論、地面に見えている線も怖くて踏むことが出来ない。
全員が光の線に対して恐怖を感じて汗を滲ませれば、湊は指を鳴らして全ての線を消し、蒼い魔眼でしっかりと玲を見つめて話しかける。
「……これが俺にとっての世界だ。光の線を指でなぞるだけで物は壊れ、生き物は癒えない傷を負う。こんなものを見ながら十年生きてるもんでな。死についてはお前より詳しいぞ」
「何それ……だって、自分の身体や建物にだって見えてたじゃない……。触れれば壊れるって分かってたら、恐ろしくて一歩も動く事なんて……」
未だ金色のままになっている玲の瞳が戸惑うように揺れる。
先ほど湊が見せたのはミックスレイドで自分の視界を再現しただけのものだ。
他の者が見ているのはただの映像なので、彼らが光の線に触れようとしてもそこにある物体に阻まれるだけだが、湊の魔眼には本物の〝死の線〟が視えていた。

だからこそ、他の者の安全を確保しながら実演する事が出来たのだが、玲以外の者たちも同じように感じたのか、心配した視線を湊へと向けてくる。
月光館学園に通っている者たちには、今までにも何度か魔眼の説明をしていたはずだが、実際に視覚でそれを捉えて初めて〝死が視える〟ことの恐ろしさを理解出来たらしい。
それを見た湊は理解の遅い奴らだと心の中で呆れつつ、シャドウと精神が同化している玲に言葉を返す。
「……そうだな。少しずれるだけで床が崩れ、天井が落ちてくるんじゃないかという不安はあったし。自分が触れて相手を傷つけたらどうしようとも思った。死に囲まれているせいで現実にいるという実感が薄れてゆくし、この力は目を閉じても感覚的に分かってしまう」
「なら、あなたはどうやって生きてこられたの？」
「この命の使い方は決めてある。ただそれだけだ」
玲の問いに湊はただそう返す。
生きてきた訳じゃない。彼にとってこれまでの時間は求める結果に向かう過程でしかないのだ。
その過程の中で大切なものと出会い、絶対に忘れることの出来ない思い出も出来た。
ただ、それらを惜しいと思う気持ちがありながら、彼は躊躇うことなく自分の命を使うことが出来る。
自分の求める願いのためならば、彼にとって自分の命も、人生も惜しむ必要がないのだろう。
自分の生きた意味を求める少女は、そんな彼の自分とも他の者とも違う在り方を悲しいと感じながらも、そうまで強く生きられる姿が眩しいと思った。
冷静さを取り戻した玲の瞳の色が黒に戻る。そして、既に生き方を決めてしまっている青年を見て口を開いた。
「だめだよ……。わたしは、そんな風に……強くなれない……」
湊を見つめる玲の瞳の端から一筋の涙が流れる。

自分も生きている間にそこまで想える存在に出会っていれば違ったかもしれない。
自分の生きた意味を、他者を通じて感じる事が出来ていれば、こんな風に迷いこむこともなかっただろう。
だが、そうではないから自分はここにいる。
湊が自分のためにわざと強く言ってくれたのだと理解しながらも、玲は生まれた意味や生きた証が欲しいと、まだここで消えたくないと強く思ってしまった。
次の瞬間、地面が揺れ出し、何やら校舎の方が騒がしくなる。
「……なんだ？」
突然の地震に善が周囲を警戒する。揺れが強くなるにつれて、校舎の方もザワザワと騒々しさを増している。
同様に他の者たちもこれまでとは違う様子に警戒していれば、校舎の方で窓ガラスが割れる事が響き、校舎の窓ガラスや扉をぶち破って大量のシャドウが溢れてきた。
溢れてきたシャドウは他の者には目もくれず、黒い大波となって時計塔の前にいた玲を飲み込み時計塔の壁を登ってゆく。
「なっ……しまった!?」
玲がシャドウの波に呑まれ焦る善。下手に動けば自分もシャドウの波に呑まれ、そうなっては玲を助けることは出来なくなるだろう。
誰か助けに行くことは出来ないかと見渡せば、他の者たちも下手に動いてシャドウの波に呑まれる事を恐れて動けずにいる。
これでは誰も玲を助けられないと善の焦りが増していけば、シャドウの波に呑まれ、訳も分からず助けを求めるように手を伸ばし藻掻いていた玲の身体が沈んでゆく。
「きゃっ……いやぁっ!?」
「玲いいいいっ!!」
最初は藻掻いていた玲の姿がシャドウの波の中に消える。彼女の白く細い指が完全に見えなくなると善が助けに行こうとしたため、近くにいた完二が善のマントを掴んで止める。
邪魔をされた善が完二の拘束から逃れようと暴れている間に、時計

塔へと集まったシャドウの一部が塔自体に吸収され、塔が徐々に巨大化しながら姿を変えてゆく。
「なんだよ、これ……」
校舎からのシャドウの流出が治まり、時計塔の変化が終わったタイミングで塔を見上げた花村が呟く。
最初は校舎とそれほど変わらない程度の高さだった時計塔は、今や見上げるだけで首が痛くなる巨塔になってしまっていた。
頭を抱えたくなる事に、その塔の天辺には銀色の機械仕掛けの大蜘蛛が見えている。蜘蛛の尻にあたるガラスらしき透明な材質で出来た部位の中に、膝を抱えるようにして眠っている玲が閉じ込められた状態でだ。
玲が攫われ、時計塔が姿を変えてゆくのを見ているしかなかった一同が呆然としていると、変化して現われた大きな時計塔の入口の扉が勝手に開く。
それはまるで助けたければ登ってこいと言っているようだった。

第三百十一話　善の犯した罪

――ヤソガミコウコウ

校舎にあるダンジョンから溢れてきたシャドウたちが玲を攫い。グラウンドの時計塔へと吸収されると、校舎と変わらぬ高さだった時計塔は入口からでは天辺が見えぬ巨塔になってしまった。

今まで青空が広がっていたというのに、時計塔の変化に合せて今では暗雲が空を覆っている。

玲の心の内を聞いた直後、突然シャドウが溢れ時計塔も変化してしまった事で、一同は状況が理解出来ず困惑している。

だが、善はシャドウたちが今回の行動を取った理由が想像できたのか、塔の天辺で玲を捕らえている機械仕掛けの大蜘蛛の方を睨んでいた。

そんな彼に事情を聞こうとりせが口を開こうとすれば、彼女よりも先に後ろにいた湊が声を発した。

「……もう良いだろ？」

「っ……そうだな。君たちの世界へ繋がる扉は既に開いている。ここまでして貰えれば十分だ。玲の事は私の方で何とかする。本当にありがとう」

湊に声を掛けられてハッとした表情で振り返った善は、すぐに驚きを隠すと真剣な顔でそう言った。

元々、七歌や鳴上たちは無理矢理にこの世界に連れて来られ、元の世界に帰る方法を探していたのだ。

一番可能性の高い方法だと思われていたのが、ダンジョンを攻略する事で鍵が外れてゆくベルベットルームに置かれた扉で、全てのダンジョンを攻略し終えた事で扉は開く状態になっている。

二枚ある扉はそれぞれが七歌たちの時代と鳴上たちの時代に繋がっているため、既に帰る手段を手に入れた彼らがこの世界に留まる理由はない。

そのため善がこれまでの事に礼を言って頭を下げれば、捕まった玲をそのままにこんな中途半端な状態で帰れるかと花村が反論する。

「ちょ、待てって！　いくら何でもこのまま帰るなんて出来ねーよ！」
「ああ、陽介の言う通りだ。仲間が捕まった状態で帰る事は出来ない。それに善だって自分一人でどうにかなるなんて思ってないんだろ？」
「それは……」
　封じられていた記憶が戻ったことで善の持っていたクロノスの力は少し回復している。
　だが、その大部分は失われており、一人では二つ目のダンジョンのF・O・Eを倒すのも苦労するだろう。
　ダンジョンは後に見つかったものほど敵が強くなっていたので、最後に現われた時計塔も稲羽郷土展と同レベルかそれ以上の強さを持った敵がいるはず。
　そんなところへ一人で潜入し、敵に見つからずに玲の許に辿り着くことなど不可能。
　仮に辿り着くことが出来たとしても、玲を捕らえている機械仕掛けの大蜘蛛に勝てるビジョンが浮かばなかった。
　図星を突かれて言葉に詰まって俯く善に、しょうがないなと苦笑して七歌が助け船を出す。
「善君、そういう時は一緒に玲ちゃんを助けて欲しいって言えば良いんだよ」
「だが、君たちの目的は既に達したはずだ。無理矢理にこの世界に呼ばれた君たちには、元の世界に待つ者もいるだろう」
「確かに向こうにゃオレっちの帰りを待ってる女の子たちがたくさんいるけど、女の子見捨てて帰ったらヒーローの名折れだってのの」
　頭の後ろで腕を組んだ順平がおちゃらけて言えば、他の者たちは思わず笑ってしまう。
　それにつられて善も小さく笑えば、玲のために帰還を延期させた事を申し訳なく思って頭を下げた。
「本当に、すまない」
「こういうときは〝ありがとう〟だろ？」
「ああ、ありがとう」
　謝られるよりも礼を言われた方が気分が良い。順平が小さく訂正

すれば今度こそ善は笑顔で礼を言った。
これから先ほどのシャドウの行動や時計塔の変化、さらに善と玲が出会ったときの話などを詳しく聞く必要がある。
ただ、その前にこれから玲を助けに行くという方針が決まった事で、玲が攫われた直後も冷静に帰ろうとしていた青年にアイギスたちがもう少し待って欲しいと頼んだ。
「八雲さん、そういう訳ですので帰るのはもう少し待っていただけませんか？」
「ウチらも玲ちゃんを助けてから帰りたいねん」
アイギスと一緒にラビリスも玲が心配だと言ってもうしばらくこの世界に残る事を望む。
そも、ベルベットルームごと引き込まれたせいでやってきたエリザベスたちと異なり、湊ほどの力を持った存在ならベルベットルームに強制転移させてから招くという手段は使えない。
そのため転移時に別行動だった彼だけは呼ばれず、無理矢理にこの世界に渡ってきた訳だが、その目的はアイギスたち姉妹とチドリを元の世界に連れ帰る事だ。
本人たちも彼が自分たちを助けるためだけに来てくれた事は理解している。
他の者たちにとっても必要な生活環境を整えたのは彼の善意であり、本当なら彼がここまで頑張る必要もなかった。
だというのに、帰る手段が手に入ってからも待って欲しいと頼むのは単なる我が儘だ。
仲間だから放っておけないと言っても、それはアイギスたちにとっての話であり、湊までその意見に従う理由はない。
逆に、彼がこれまでしてくれた事を思えば、他の者たちは湊の意見こそ優先すべきで、ここで湊が全員を眠らせて元の世界に繋がる扉へ放り込んだとしても文句を言えない立場だ。
それを分かっていながらアイギスたちが自分の気持ちを伝えたのは、彼も玲の事が気になっていると思ったからであった。
そうして、湊がどう返してくるのか待っていれば、彼は小さく嘆息

しつつ答えた。
「……別に玲を見捨てるつもりはない。ちゃんと助けてから帰るつもりだった」
稲羽郷土展の番人がいた部屋で話した通り、湊は玲の境遇などに同情を覚えて気に掛けていた。
先ほど彼女が吐き出した胸の内を聞けば、有里湊という人間は尚更彼女の事を〝助けなければならない〟と考えるようになっていた。
だからこそ、アイギスたちを先に元の世界に帰せば一人で助けに行こうと思っていたのだが、全員が帰るのを延期してまで玲を助けに行くというのなら同行するだけだ。
そう話しながら湊が時計塔の入口へと向かって行けば、やはり湊も玲の事を考えてくれていたと分かり他の者たちの口元に笑みが浮かぶ。
しかし、途中まで進んでいた湊が善の前で足を止めると、
「だが、お前はここまでだ」
次の瞬間、彼は善の胸ぐらを左手で掴み、そのまま力任せに一本背負いのような形で地面に叩き付ける。
「ぐあっ!?」
完全に予想外な形で攻撃を受けた善は、一切受け身を取れず地面に叩き付けられると、痛みに表情を歪ませながら声をあげる。
傍にいた者たちは突然の湊の凶行に反応が遅れてしまい動けず。その間に湊は地面に叩き付けた勢いによってバウンドして浮いた善の腹に容赦のない回し蹴りを入れる。
蹴りを入れられた際に肋骨の辺りから鈍い音をさせた善は、身体をくの字に曲げたまま校舎に向かって十数メートル吹き飛ぶ。
ただの蹴り一発で大人と変わらぬ体格の男が十数メートルも吹き飛ぶなど信じられないが、他の者が目を見開いている間に青年は〝審判〟のカードを握り砕き追撃を入れた。
「――――アザゼルッ!!」
カードが砕けると同時に空気が震え、赤い光と渦巻く黒い欠片の中心から仮面をつけた青い天使が顕現する。

顕現したアザゼルは既に攻撃態勢に入っており、他の者がやめろと伸ばした手が届く前に極光を放った。
アザゼルのメギドラオンは空中にいた善を飲み込み、そのまま校舎に突き刺さって校舎の一部を崩壊されてゆく。
校舎にはまだベルベットルームの住人やマリーなどが残っていたのだが、もしも攻撃や校舎の部分崩壊に巻き込まれていれば無事だとは思えない。
アザゼルが攻撃を放った先を蒼い魔眼で見つめる青年に、男子が唖然とし、女子たちが顔を青くしていると極光が徐々に治まってきた。
攻撃の余波でグラウンドの一部が融解し、射線に沿って赤々とした線が校舎に向かって伸びている。
同じように校舎の壁なども一部が溶けて赤くなっているが、そんなものを生身で受けて無事でいられる人間などいない。
どうしてこれから一緒に玲を助けに行こうというときに、仲間であるはずの善を襲って殺したのか。
思考が追いついた鳴上が後ろから湊に掴みかかった。
「有里っ!! どうして善を殺したんだ!!」
「……まだだ。まだ殺せてない」
掴みかかられた湊は、鳴上の事など気にしていない様子で校舎の方をジッと見ている。
つられて他の者たちも視線を向ければ、溶けた校舎から出ている蒸気の中に少し曇ったガラスのような物が見えた。
普通のガラスであれば今の攻撃で溶けて液状になっているはずだが、さらに目をこらしてみれば、曇ったガラスの向こう側に手をかざしている善がいた。
どうやら力を取り戻した事で防壁を張ることが出来たらしく、かなり疲弊した様子だが五体満足で生きている。
タイミングを考えると絶対に死んだと思っていただけに、善がどうにか無事でいてくれた事に他の者たちは安堵の息を吐く。
だが、殺そうとした者がまだ生きていた事で、湊はその瞳に殺意を宿らせると鳴上の手を振り払い、マフラーから中華剣〝星噛〟を取り

出して駆け出そうとする。
『E．X．O．、起動っ!!』
それを察知した元対シャドウ兵器の三姉妹は、同時にE．X．O．で身体能力を限界まで引き上げて湊の行く手を阻む。
アイギスが湊に向けてライフルを掃射し、彼が回避したところにラビリスが戦斧を振り下ろす。
車だろうと一撃で両断出来る威力を持った斬撃を、青年は左手で持った星噛で撫でて軌道を逸らし、相手の戦斧が地面に食い込んでいる間に善の許へ向かおうとした。
だが、そのタイミングで正面に回り込んでいたメティスが細身のハンマーを横薙ぎに振るい。進路を塞がれる形になった湊は忌々しそうに一歩後退する。
「……邪魔をするな。敵を殺すだけだ」
「その前に説明をしてください！　今の状態じゃ姉さんたちだけじゃなく、他の皆さんも状況を把握できません！」
湊が今回の事件の黒幕を殺すつもりなのは分かっていた。
善がその黒幕と関係していることもメティスは察しているが、記憶を取り戻した今でも善の力はほとんど戻っていない。
アザゼルの攻撃を一発防ぐだけの防壁を張ることは出来ているものの、もう一度やれば今度こそ防壁は突破され善は灰も残さず消滅するだろう。
ペルソナ使いならば誰でも善を殺すことが出来る。だからこそ、近接格闘でも彼を十分殺し得る力を持った湊なら、他の者に事情を説明してからでも遅くはないはず。
湊の動きにいつでも反応出来るよう武器を構えたままメティスがそう言えば、湊は武器をマフラーに仕舞いながらゆっくりと善の方へと歩き出す。
他の者たちは湊が再び善に攻撃しないよう警戒しつつ後に続き、雪子やゆかりなど回復スキルを持った者たちは先に善の許に向かって治療を施した。
＊＊＊

ゆかりたちが善の治療をしている間、湊は殺意の籠もった魔眼状態で校舎の修繕を行なった。
メギドラオンで消滅した部分も攻撃の余波で融解した部分も綺麗に元通りになり、イメージで作り替えているだけだと聞いても見ている者には魔法だとしか思えない。
もっとも、そんな魔法のような事をしている本人は、これまで一緒にダンジョンを攻略してきた仲間を躊躇いなく殺そうとしたため、今現在はベルベットルームなどから呼ばれて来たエリザベスたちに監視されている。
マリーは正確にはベルベットルームの住人ではないし、そもそも湊を止めるだけの力を持っていない。
ただ、湊の事を心配して周りをチョロチョロしているので、湊の動きを封じるという意味では効果的なのかもしれなかった。
そうして、善の治療と校舎の修繕が全て終わると、一同は一階の生徒玄関ホールに集まった。
先ほどの湊の凶行を警戒した七歌たちの頼みで湊の隣にはエリザベスが立ち、襲われた善の隣にはテオドアが立っている。
他の者たちは対峙する湊と善が見える位置にそれぞれ並び、今も冷たい殺意を宿した魔眼で善を見る湊と、何故だか被害者のくせに湊に申し訳なさそうにしている善を見つめる。
ここに集まったのは湊が先ほど見せた行動の説明を聞くためだが、切り替わっている時の湊に平然と話しかけられる一般人などまずいない。
そのため、彼が自分から話し始めてくれれば助かるのだが、湊はあくまで説明を求められた側で自分から話そうと思った訳ではない。
こうなると誰かが進行を務めるしかないかと思ったところで、エリザベスが湊の肩を叩いて声を掛けた。
「どうやら場が整ったようでございます。皆様から善様へ攻撃した理由の説明を求められていると聞いておりますが、行動に至った経緯なども含めお聞かせ願えますか？」
「簡単な話だ。そいつが全ての元凶。お前たちが黒幕と言っていた存

在の正体。玲をこの世界に閉じ込め、チドリたちがこの世界に呼ばれる原因を作った張本人だ」
これまで聞いたのは善がクロノスという死神であること、迷いこんだ玲を本来の流れに戻すために遣わされた存在だということだけ。
後の詳しい説明は誰も聞いていなかったので、湊の口から聞かされた事に少なからず驚きを見せる。
彼が黒幕であるというなら、チドリたちを呼んだのは停滞した状況を動かすためだろうか。
いつまでも学校から出て行こうとしない玲に痺れを切らし、元の世界に帰ろうとする者たちを使って玲の心境に変化を与える。
さらに、自分たちだけでは倒すのが難しい番人らの相手をさせようとした。
話を聞いてそう考えた七歌たちだったが、よく考えればこの発想はおかしい。
もし本当に善が黒幕であるならば、自分の力でこの世界をなかった事にしてしまえば、そのまま玲の魂の欠片だけを連れていけたはずなのだ。
そう出来なかった理由とやらが存在するのかもしれないが、そこを含めて湊の話の続きを聞こうと全員が耳を傾ける。
「この学校は玲が作ったものじゃない。玲の記憶を基にそいつが作り出したものだ。運び屋如きが神を騙り随分と粋がったものだ。くだらない好奇心のためだけにこの学校を作ったんだからな。……そいつが迷いこんだ玲の許に案内人として現われたのは事実だ。だが、玲は死神を騙るそいつの存在にも、自分が死んでいるという事実にも強い反応を示さなかった」
湊は善と玲の本来の記憶を全て読み取っている。二人が狭間の地で出会い、この学校が作られることになった経緯も理解している。
死後、この世界で目覚めた玲の許にクロノスは現われた。
クロノスは自分が死神であること、玲が既に死んでいること、そしてすぐにその魂も消えて行くことを伝えた。
それを聞いた玲はただそうなのかと事実を事実として受け止め、そ

れ以降はクロノスが話しかけても一切の反応を返さなくなった。
彼のこれまでの経験では事実を告げられた者たちは、何で自分が死ななくていけないんだと不服に思うか、十分に生きたからと常世へ行くことを了承する者が多く、玲のように何の反応も示さないタイプは初めてだった。
「寿命や病の進行で死ぬ者の中には衰弱と共に心が摩耗し感情も希薄になってゆく者もいる。玲本人の自我もその関係で薄くなっていたが、そいつはそれを不思議に思って彼女の意識を覚醒させようとしてしまった」
こんな人間は初めてだと思ったクロノスは、どうにかして玲に口を開かせたくなった。
喜びでも、怒りでも、悲しみでも、どんな反応でも良いから少女の口から言葉が聞きたい。
そう考えたクロノスは彼女の記憶を読み取り、最も強く印象に残っている場所を狭間の地に再現する事で〝ヤソガミコウコウ〟を作り出した。
おかげでようやく玲もこの場所がどんな所であるか、自分がどんな風に生きてきたかなどを話してくれるようになった。
だが、彼女の口から聞かされた内容は、人間への理解が不十分な死神であっても口を噤むようなものであった。
「さっき聞いた言葉が彼女の全てだ。そのまま無意識の海へ連れて行けばいいものを、己の役割を勘違いしたそいつは彼女の記憶から学校を再現した。彼女の記憶に強く残るものを再現すれば反応を返してくる。そんな軽率な判断で彼女の未練を、死んでも消えることのなかった心の傷を抉ったんだ」
この学校は彼女の記憶から再現された場所だが、玲自身は一度も八十神高校に行ったことはない。
中学校を無事に卒業すればこの学校に通う予定だったが、入院していた彼女は病室の窓から聞こえてくる時計塔の鐘の音色と学生たちの声を聞いている事しか出来なかった。
実在した時計塔よりも大きかったのは、病室まで聞こえてくるなら

立派な時計塔があるのだろうと思ったから。
実在する学校と教室の数などが違うのは、玲はパンフレットなどでしかこの学校を知らなかったから。
そうして、彼女はいつか通えることを夢見ていたが、毎日のように学校へ通いたいと神に祈りながらも願いは聞き届けられる事なく生涯を閉じた。
全国をみれば彼女のようなケースはそう珍しくもないだろう。もっと辛い境遇で死んでいった者だっているだろうし、どんなに苦しくても病院に行くことすら出来なかった者だっているはずだ。
ただ、そんな不幸な境遇を比べることに意味はない。彼女の記憶を読んだ湊は、その境遇にエルゴ研の被験体たちに似たものを感じてしまったのだ。
「……お前も相手が魂ならある程度は記憶を読めるんだろ。読心とは違うんだろうが、そういった力は本来お前みたいな心を持たない存在が持つべきなんだろうな」
彼女の記憶からこの学校を作れたなら、クロノスには読心能力に近い異能が備わっているのだろう。
流石に対象は死者の魂だけだと思われるが、湊はそういった力は心を持たない者が持っている方が正しいのだろうと皮肉を込めて言う。
もし人の心を持っていたらならば、彼女の記憶を読んだ時点で彼女にこの学校を見せようとは思わなかったはずだから。
「お前はあの子が不要だからと親に捨てられたなんて想像もしなかっただろう。病と治療の痛みに耐えながら、学校に通いたいという小さな願いを抱き続けたなんて思いもしなかっただろう。心がないからか、それとも記憶の細部までは視えないからか。一体どっちだ？」
「……後者だ。私が出来たのは記憶に強く残ったイメージを読み取ることだけだった」
「そうか。だから、お前は逃げたのか。余計な真似をしてあの子の傷を抉っておいて、自分にはどうする事も出来ないからと記憶を封じて問題を先延ばしにしたのか」
彼女が親に捨てられていたと聞いて他の者たちは目を見開く。

ここにも両親がいない者、親を片方亡くしている者はいるが、先ほど聞いた心の叫びにさらに親に捨てられていたという情報まで足されると、もはや境遇が違い過ぎて何も言えなくなる。
けれど、他者の心の痛みまで理解出来てしまう青年は、死して尚苦しめられた少女を想って全身を怒りに震わせた。
「ふざけるなっ!! お前の身勝手な行動がどれだけあの子を苦しめたと思っている! 見たくもない現実から、苦しみから逃れるために、自らの両眼を抉ろうとする者の絶望をお前は知っているのか!!」
如何に追い込まれている者でも、普通ならば自分の両眼を抉ろうなどとは考えない。
目が重要な器官である事は誰でも知っており、その目が傷つけば想像を絶する痛みを感じる事も同じく知られている。
だが、それを知っていながら目を抉ろうとするのであれば、その人物にとっては見えている方が地獄の苦しみを感じるということだ。
両眼を失ってでも、光を閉ざしてでも、今いる地獄から抜け出したい。
この学校を見た後に玲が自分の目を抉ろうとした以上、ここにいる事に彼女の心は耐えられなかったのだろう。
驚いたクロノスは彼女の行動を止めてから記憶を封じ、絶望に染まった少女が少しでも楽しめるよう学校を文化祭に変えたようだが、そんなものは問題の先送りであり時間稼ぎに過ぎない。
湊の指摘に何も言い返す事が出来ない善が顔を俯かせれば、瞳が蒼から銀に変化した湊が相手の胸ぐらを掴むため飛びかかろうとする。
しかし、隣にいたエリザベスが後ろから抱きついてそれを阻止すれば、湊は後ろから止められながら言葉を続けた。
「今のお前がどうあろうと関係ない。最初にお前が余計な事をしなければ彼女は苦しまずに済んだんだ! 詫びる気持ちがあるなら腹を切れ、償う気持ちがあるのなら首を刎ねろ! 出来ないというのであれば俺がお前を殺してやる。あの塔にいるお前の半身と共に無に還してやるっ!!」
エリザベスに止められている湊の身体から黒い炎が漏れ出す。

出会ったばかりの少女のために、自らを阿眞根に変革させるほどの怒りを彼は覚えた。
人によってはただの独善だと思うだろう。勝手に記憶を視て、勝手に相手のためにと言いながら怒り散らしているだけだと感じるかもしれない。
しかし、百鬼八雲とは元からそういった存在だ。誰かのために、弱者のために、その力を使おうとする。
今回の件は彼にとってトラウマの一つになっているエルゴ研の被験体と境遇が似ていた。
だからこそ余計に、湊はその元凶を赦そうとは思わないし、何があっても玲の事は助けようと思っている。
一方的に善を殺そうとしていたと思っていた者たちも、湊の話を聞いた後では彼が善に殺意を向ける理由は理解出来た。
エルゴ研での出来事について知っている者や聞いている者たちは、どうして彼がここまで怒りを覚えているのかも分かっている。
だが、それでも今ここで善を殺させる訳にはいかない。何故なら善自身も自分の行いを悔いている事が伝わってくるから。
アイギスはどうやって湊を説得しようか考えるため、湊を拘束しているエリザベスにもう少し時間を稼いで欲しいと頼む。
「エリザベスさん、もう少しだけ八雲さんをお願いします」
「承知致しました。ですが……なるべく早くお願いします。八雲様から漏れ出た黒炎にて私の腕も絶賛燃焼中ですので」
アイギスの頼みを聞き届けたエリザベスだが、その額には玉のような汗が滲んでいる。
湊を拘束しているエリザベスの腕は漏れ出す黒い炎で僅かに焼かれており、いくらベルベットルームの住人だろうと神に力を帯びた炎は完全には防げない。
加えて、今の湊は阿眞根になりかけているせいで力も増しており、腕力の関係からエリザベスやテオドアでないと拘束しておけないので、痛みから限界が近いことを悟っているエリザベスはアイギスたちに急ぐようにと伝えた。

それを聞いたアイギスらは慌てて意見を出し合い。クロノスの半身が時計塔にいると先ほど湊が言っていたことで、玲の救出とそちらの討伐を優先し、善のことは後回しにしてくれるよう必死に頼み込むのだった。

第三百十二話　救出前夜

――ヤソガミコウコウ

アイギスたちによる必死の説得により、善を殺すのは時計塔にいるクロノスの半身を殺して玲を助けた後にする事を湊は約束した。

もっとも、湊側にそれを守るメリットはなく、あくまでアイギスたちがどうしてもと頼むから了承したに過ぎない。

途中で気が変わったからと殺しに行く可能性もあるため、他の者たちは常に彼の行動に警戒して善を守りながら動くつもりのようだ。

そんな彼らの姿を見ていたエリザベスやチドリは、他の者たちの行動を〝無駄な事〟と認識していたようだが、わざわざ彼らにそれを伝える意味もない。

湊が本気で殺しに掛かればアイギスたちの制止も無駄で、実力行使で止めようとしたところでエリザベスたちでなければまともに相手すら出来ないのだ。

七歌などはそれを分かっているはずだが、今は考えないようにしているのか、それとも湊の善性を信じているのか他の者たちを止めなかった。

そうして、善の排除にしばらくの猶予が出来ると、一同はダンジョンから戻ったばかりだったこともあって今日は休み、明日になってから玲を助けに向かおうと話し合いで決まった。

他の者たちは探索の疲れと汚れを落とすために銭湯に向かったが、湊はその輪に加わらず屋上に来て境界の外に広がっている稲羽市を眺めていた。

「それで、用件は何かな？　わざわざ皆と離れて呼んだからにはそれなりの理由があるんだろ？」

フェンスの傍に立って景色を眺めていた湊に後ろから声が掛かる。

湊が声の方へと振り返れば、そこには口元に柔らかい笑みを浮かべた黄色いマフラーの少年が立っていた。

彼をここに呼び出したのは湊で、他の者がいないときに来てくれと頼んでおいたのだ。

皆は入浴が済めばきっと食事のためまんぷく亭に行くことだろう。
今の湊にそちらを担当する気はなく、まんぷく亭には自我持ちのペルソナたちを待機させているので、他の者が食事をしている間に来てくれればいいと思っていたのだが、綾時は湊からの呼び出しの重要度を高く見ていたらしい。
そのため、すぐに話を聞こうとこうしてやって来た訳だが、振り返った湊の瞳は不思議な輝き方をする〝蒼色〟だった。
戦闘から離れて時間も経っているというのに、未だに魔眼が解除されていないという事は、湊は現在進行形で戦闘のスイッチが入っているのだろう。
感情を見せるときには誰よりも激しいというのに、逆に静の状態に入ると感情が抜け落ちて機械のような冷たさを感じるのだから不思議だ。
だからこそ、他の者たちは彼を薄気味悪く思って警戒するのだろうが、元々、彼の中にいた綾時には今の湊がどういった状態か分かる。
表面的、思考的には感情を排除して目的を遂行するための機械と化しているが、心の奥ではどす黒い炎を燃やして敵への怒りや憎悪を募らせているのだ。
腹に穴を空けようが心臓を貫こうが止まらぬ彼に睨まれた敵には同情する。
相手にも何かしらの理由があっての行動なのだろうが、だからこそ湊も自分のエゴを押しつけて敵を排除しようとする。
お互いに自分勝手な事をするのだから敵にも文句は言わせない。
そう言わんばかりの行動には思わず苦笑するものの、それは自分が第三者だから出来る事だろう。
狙われた敵にすれば、急に無関係な人間が割り込んで来るのだから堪ったものではないはず。
本来ならば綾時も敵として相対した側で、全ての事件の始まりだと思えば殺された当然。
しかし、今は何の因果か湊に力を与え、彼にとって唯一の〝友人〟という味方側の立場に収まっている。

だからこそ、落ち着いて湊の話を聞くことが出来る訳だが、戦闘状態の思考になっている湊に呼ばれたことで、綾時はかなり重要な話なのだろうと考えていた。
「……綾時、これを持っておけ」
綾時が用件を尋ねて待っていれば、湊はマフラーから大きめの黄昏の羽根を一つ取り出して投げてきた。
受け取った綾時は宣告者である自分が、シャドウらの母たるニュクスの欠片に触れて良いものかと悩む。
けれど、以前湊が言っていた〝自分は常にニュクスに触れている〟という言葉を思い出し、そのまま手を伸ばすと青白い光を放つ羽根を受け取った。
受け取ったばかりの羽根を綾時は観察してみる。見たところサイズが大きめである事を除けば、これといって変わった点は見られない。
一応、湊の力がかなり込められているようで、ペルソナなどのバッテリー代わりには使えそうだが、綾時は最初にこの世界に来たときに受け取った力がかなり残っている。
湊は自分が弱っている間を任せようと多めに力を渡したようで、普通に戦闘を続けても十分余裕がある量を貰っていたのだ。
しかし、湊は弱って縮んでいる間でも戦う事が出来た。加えて、復活したらほとんどを自分一人で処理していたことで、綾時が前に出て戦う場面などほとんどなかった。
なので、ここでさらにバッテリー代わりを貰った所で、余分な力でしかないのだが、綾時は素直にどういった意図があるのかを訊くことにした。
「これは？」
「……コアの代用品だ。元の世界じゃ無理だろうが、この世界ならそれでも十分に身体を維持出来る」
「代用品……ってことは、タナトスを返せって事かな？」
今の綾時の身体はタナトスのカードを核に埋め込み、デスの力を無理矢理に回復させているようなものだ。

タナトスのカードを抜いてしまえば身体を維持出来なくなり、すぐに元のファルロスの姿に戻ってしまう。
タナトスが再び必要になった湊がそれを防ぐために考えたのが、綾時の姿を維持する事が可能な物と核を交換することである。
力をかなり込めたニュクスの欠片である黄昏の羽根は、ニュクスの子であるシャドウの王との親和性も高い。
さらに、この世界ではイメージによって姿形が変化しやすい性質がある。
それらを組み合わせれば、綾時は死神の力を抜かれても自分の今の姿を維持したままでいられるはずだった。
綾時がこれまで使っていたタナトスは本当に自分の力なので、ここで核として使っているタナトスを失っても戦闘に影響はない。
友人が自分に貸してくれていたものを返せと言ってきたなら素直に言う通りにしようと、綾時は自分の胸の中に黄昏の羽根を入れ、力を取り込めた事を確認してから今度は死神のカードを抜き出す。
核にしていたカードを体外に出しても綾時の姿を維持出来ている。無事に湊の推測通りに事が済んだところで綾時はカードを投げた。
「タナトスなんて何に使うんだい？　力で言えばアザゼルと変わらないだろ？」
「……使うかどうか分からない。ただ、阿眞根になったときにアベルだけじゃ足りないかもしれない」
「阿眞根になるって……」
青年の言葉を聞いて綾時は目を見開いて驚く。
阿眞根とは湊を器として顕現した異次元より来た神の名である。
今でこそベアトリーチェという人格を得ているが、それは湊と魂レベルで融合した事で湊の知識を得たためであり、本来は湊の心に引き摺られて力を振るうだけの存在だった。
湊と融合してからは完全な阿眞根として顕現した事はなく、ベアトリーチェとして力の一端を使っていても、二つの人格を持った魂によって引き出される力の規模がどれほどになるか分からない。
湊だけでも天災級の力を引き出せるのだから、そこに彼を大切に

想っているベアトリーチェの感情まで上乗せされれば、この閉じた狭い世界など簡単に崩壊するのではと思ってしまう。
少々引き攣った顔をした綾時は、七歌たちの事も考えた上で阿眞根として力を振るう理由を尋ねる。
「どうしてここで阿眞根の力を？　善君の力を見た限りじゃ、君一人でも十分に倒せると思うけど」
「……その可能性は高い。だが、相手は格が低くても〝神クラス〟だ。人類の集合意識から生まれたなら、〝そういった存在〟としての異能くらい持ってるだろうからな。備えておいて損はない」
善が話していた彼の正体である、時の神〝クロノス〟。
神話で語られている存在そのものではなく、あくまで人々のイメージから生み出されたものに過ぎないが、大勢の心が集まってそのまま力になっているため、ペルソナやシャドウなどでは持てないような特殊な力などを持っている可能性があった。
そして、クロノスは死後の魂を運ぶ死神というイメージと時の神としてアバターを与えられている。
湊自身も死神であるデスを身に宿しているから分かるが、死神としての属性を持っている者は生者に対して優位に立てる。
ここでの死神とはタロットの死神ではなく、魂を狩る存在として語られる死の神の事だが、死神としての力は生者へ文字通りに死を与えられる。
湊で言えば直死の魔眼、デスで言えばＤＥＡＴＨがそれに当たるが、これらは攻撃自体に死の概念や死の概念を発現させる力が付与されているのでまともな方法では防ぐことが出来ない。
クロノスも死神ならばそんな厄介な力を持っているはずで、さらに時の神として時間や時流に干渉する力を持っている可能性が高い。
能力だけで言えば湊も同系統の力を持っているので、そういった攻撃を喰らった場合の対処も考えてはいる。
ただ、同じ力を持っているなら湊から相手への攻撃も通りづらい可能性があった。
その場合は最終的に出力での勝負になり、人としては破格の力を

持っている湊と言えど、大衆の心の欠片から生まれた存在にどこまで対抗出来るか分からない。
「だから、君は神には神で対抗しようって考えているのか」
「ああ。相手がどれだけの人間の意識が集まって生まれたのか知らないが、質で言えば蛇神だけで十分上回るだろう」
「なら、別にタナトスは必要ないんじゃ？」
「俺本来のペルソナはアベルとタナトスに分かれているらしい。蛇神を出すならバランスを取る役目としてそっちもいるかもしれないんだ」
湊自身は自分の本来のペルソナがどういった姿や能力なのかは知らない。
二つに分かれているというのも茨木童子たちに聞いただけでしかないが、それらが事実であるとすれば、元々コントロールが利かない蛇神を出すときに精神のバランス調整役が必要というのも理解出来た。
蛇神を出しておきながら完全に制御出来ないでは困るので、それを防ぐための保険だと聞いた綾時の不安は少しだけ和らぎ、そういう事なら良かったと笑みを浮かべる。
「そっか。なら、僕は安心して君の戦いを見ていてもいいかな？」
「さてな。相手が無差別攻撃を放ってくる可能性もある。一応、阿眞根になろうとアイギスたちへの攻撃は防いで見せるが、自分は無関係だと観戦モードでいて攻撃の余波を喰らっても責任は取れないぞ」
神同士の戦いは人間の戦いの規模で語ることは出来ない。
無理矢理に表現するとすれば、大国同士が全兵力を投入して戦争をするようなものだろうか。
兵器を惜しみなく使い、敵国の文明の痕跡全てを塵に変えてしまうような戦いが起きれば、神同士の戦いに近しい光景が見られるに違いない。
青年がどうやってそんな戦いの余波からアイギスらを守るつもりなのか疑問だが、過去にも蛇神の骨を使って街へと押し寄せる波や瓦礫を防いでいた。

今回もきっとそんな風になるのだろうと勝手に想像しながら、湊からの用件を聞き終わった綾時は話が終わったなら銭湯に行ってくると屋上を後にした。

――まんぷく亭

綾時も後から合流して入浴を済ませると、湊を除くメンバー全員がまんぷく亭に集まっていた。

湊がいないと誰も料理を準備出来ないのではと思ったが、そこは赫夜たちが代行して用意してくれるらしい。

今日は善やクマたちも手伝う必要はないと伝えれば、アリスや出雲阿国が各テーブルを回って注文を聞いてゆく。

アイギスやチドリは湊がいない事を気にしていたが、今も彼の目が魔眼のままである事を聞くとしょうがないと納得したらしく、彼女たちも注文を決めて頼んでいた。

注文を聞いたペルソナたちが厨房へと入っていくと、料理が来るまで暇そうに熱いお茶に口をつけた順平が誰となしに話し始めた。

「つか、さっきの有里見てて思ったんだけど、あいつが善に全力で攻撃かましたのは意外だったわ」

「そりゃ、誰だって急に仲間に攻撃すると思わねーだろ」

その話題を蒸し返すのかと呆れた表情をしつつも、花村がそりゃ普通に予想出来る訳ないだろと返す。

誰だって急に味方を攻撃する者がいるだなんて思わない。

敵に操られている訳でもなく、別に仲間を裏切っている訳でもない。それなのに攻撃してくれれば、一体どうしたんだと混乱するのが普通だ。

けれど、順平が言いたいのはそういう事ではないらしく、顔の前で違う違うと手を横に振りながら再び口を開いてきた。

「いや、そういうんじゃなくてさ。あいつってなんかコロマルとかアイちゃんたち助けてるじゃん？　だからって訳じゃねぇけど、人間じゃないやつには優しいって思ってたんだよ」

「有里先輩はシャドウを容赦なく倒していたと思いますが？」

「あーいや、人の心があるっていうか意思疎通が可能な相手限定って

意味で」
途中で直斗が順平の言葉の矛盾にツッコミを入れたが、すぐに訂正した事で話を聞いていた者はそうだったかなと考え込む。
彼がアイギスたち元対シャドウ兵器の姉妹に優しいのは知っているが、飼い犬になったコロマルにも何だかんだ世話しているのは見ていた。
さらに加えるなら、自分の力だからというのもあるかもだが、彼は自我持ちのペルソナたちにも優しくしているようで慕われている。
思い出してみると順平が言っていた通りだったので、確かにその条件に当てはまる善に攻撃を仕掛けたのは不思議に思えた。
けれど、湊の事をよく知っているチドリにすれば、別にそんな条件はないけどと反論する。
「……八雲は別にロボットとか犬とか限定で優しい訳じゃない。困ってる人とか、弱い立場の者に対して優しいのよ」
「なら、なんで困っていた善には攻撃したんだ？」
「それ以上に弱くて助けを必要としていた存在がいたからよ。そして、その存在に危害をくわえた張本人がいたから排除行動に移ったわけ」
チドリが言った助けを必要としていた存在というのは、記憶もなくこの世界に閉じ込められていた少女の事だ。
順平からすれば善も同じような立場に思えたが、今の状況を作ったのが善であるなら、全ての元凶であり少女を苦しめた敵として湊が排除行動に出たのも納得出来る。
ただ、自分がいなくなっている内に善が消えていれば、助けられ戻ってきた少女は色々と気にするのではとも思ってしまい。
その辺りは湊の基準でどうなっているんだと真田が尋ねた。
「あいつが善を殺したと知った場合、玲もショックを受けると思うんだが、有里はその辺りの事はどう捉えて行動してるんだ？」
「さぁ？　別に八雲はヒーローを気取ってる訳じゃないもの。基本的には同じ穴の狢を殺して、そういった者の被害者を助けているだけ。被害者のケアは専門家や出来る人間に丸投げじゃない？」

助けておいて助けっぱなしで済ますのかと首を傾げる者もいるかもしれないけれど、別に湊には助ける義理も義務も元々はない。
彼の行動は基本的には自分のせいで死ぬことになってしまった者たちへの贖罪だ。
適性を得ていた自分の傍にいたばかりに事故に巻き込まれ死んだ両親。
同年代の子どもならペルソナを得やすいのではと集められ殺された被験体。
ただ一緒にいるだけで邪魔だからと殺されたイリス。
他にも湊のせいで死ぬことになった者たちは大勢おり、その者達が為したであろう事を湊は代わりにやっているに過ぎない。
そして、これ以上の被害者を出さないよう、湊は自分の同類を狩ってもいるのだ。
そういった感覚で動いているからこそ、湊は被害者の心のケアなどはあまり考えていない。
当然、身体の傷やショックを受けた様子があれば、自分の病院を紹介するくらいの事はするものの、専門家でもない人間が余計な事をして心の傷が拡がれば目も当てられない。
だからこそ、リスクを回避する意味も込めて彼は助けた後の事は専門家に任せるようにしていたが、他の者にはどうやら無責任に思えるらしく納得していない様子。
別に他の者たちの納得を得る必要などないと思っているチドリはそれを無視したが、善だけは湊の行動に対して他の者と違うことを考えているのか、どこかボンヤリとした様子で料理が運ばれてくるのを待っていた。

第三百十三話　時計塔

――ヤソガミコウコウ

玲が攫われた翌日の朝。七歌たちが朝食を食べてから準備を終えてベルベットルームの前に集まれば、エリザベスたちと共に湊が昨夜と同じ蒼い魔眼で冷たい空気を纏って待っていた。

ただ立っているだけだというのに空気が張り詰め、傍に寄ると肌がピリピリと痛むような錯覚すら覚える。

戦闘員ではない風花などはとても息苦しそうにしており、このままでは一緒に行動するメンバーが気疲れで先にダウンすると思った鳴上が声を掛ける。

「有里、玲の事が心配なのは分かる。けど、今の状態じゃ一緒に行くメンバーの方が先に倒れるかもしれない。もう少し落ち着いてくれ」

「……別にお前らを戦力として当てにしてない。倒れたやつは置いて行くだけだ」

湊からすれば他の者など自分の歩みを遅くする枷でしかない。

彼が大切に想っているアイギスやチドリでもそうなのだから、他の者など倒れた時点で捨ててきてもいいとすら思っている。

しかし、それを直接言えば文句が返ってくるため、あえて置いて行くから勝手に帰還しろというニュアンスの言葉で返せば、多くの者は彼に対して何か言いたそうに睨んでいる。

それを見ていたラビリスは、出発前からどうして味方に喧嘩を売るんだと頭を押さえる。

七歌も同じ気持ちだったようで苦笑いを浮かべているが、実際に戦力差を考えると湊単独の方が迅速に救出出来る可能性が高い。

それが分かっているので彼に言い返す事はせず、皆を宥める形で口を開く事にした。

「まぁ、本気モードの八雲君がいれば戦闘で苦労しないだろうし。私たちは自分の身の安全だけを考えてついていこうよ」

「はぁ……確かに七歌の言う通りだ。一人に負担が集中するが、我々は彼の足を引っ張らない形で進む事にしよう。それが最も迅速だろ

うからな」
自分たちを完全に足手纏いと断ずる物言いに、他の者たちが色々と言いたいことは分かる。
湊を擁護する側である七歌や美鶴だって、先ほどの発言には少しは言い返したい気持ちがあるのだ。
けれど、ここでそんな言い合いをしても時間の無駄でしかない。
アナライズが出来るからこそ、湊は客観的事実を交えて他の者たちが枷でしかないと言っているのだ。
悔しいと感じる気持ちが少しでもあるのなら、青年に文句を言う前に純粋な実力か何かしらの技術を磨くべきだろう。
信念なき力に価値はなく、力なき信念に意味はない。湊自身がそのように思って行動しているのだから。
――時計塔・一階
全員が集まった事でサポート役の風花とりせ、さらにベルベットルームの住人たちとマリーを除いたメンバーが時計塔へと足を踏み入れた。
普通の時計塔は管理人の部屋と倉庫があるくらいで、後は基本的に上に向かう階段くらいしかないものだが、この世界の時計塔はやはりというかダンジョンと化していた。
どこか神殿のような造形をしつつも、至るところに歯車や金属の部品などが浮いている。
ただのオブジェなのか何かしらのギミックなのか。ここが黒幕の待ち構える場所だと言うこともあり、順平は警戒した様子で武器を握り直す。
「外から見る以上にやっぱ広いな。つか、そこらへんの歯車が急に飛んで襲いかかってきたりしねぇよな？」
「どうでしょう？　そういったタイプのトラップがある可能性もありますが、その場合は敵が任意にコントロール出来るとは思えません。最も近い相手を狙うか、人物を認識し敵にとって厄介な相手を狙うか。その辺りになると思います」
直斗は職業柄そういった仕掛けなどがないか注意深く確認するが、

ダンジョンは見た目こそ人工的だが実際には人工物ではない。
資材を使って人や機械で作っているなら、そこには設計段階で必ず人間の手が入るため、相手の心理を読んだりこちら側の行動パターンから死角を狙った場所にトラップを設置されていると警戒することも出来る。
けれど、ここは古い時計塔にシャドウらが融合する形で作られた場所。
シャドウたちの意識が僅かにでも残っていれば、探知型の誰かが気付くはずなので、その点に関しては心配していないが、シャドウの力を吸収して作られた場所である以上は何が起きても不思議ではない。
警戒しない訳にはいかないものの、警戒したところで何が起きるか分からない。
非常に厄介なものだと直斗が肩を竦めれば、他の者たちも彼女の言葉を聞いて周囲の警戒を始めた。
だが、次の瞬間、先頭を歩いていた湊を中心に寒波が広がり、浮いていた歯車や部品を含めたフロア全体が凍りついていた。
急激に下がった気温に寒そうに腕を擦る花村は、一体何をしたんだと青年に尋ねた。
「おいおいおい、フロア全部丸ごと凍ってんぞ！　これなんのスキルだよ？　つか、なんのために凍らせたんだ？」
「……ミックスレイド〝ヘルヘイム〟。通常のスキルじゃない。罠があろうと凍って作動出来なくすればないのと一緒だろ？」
ミックスレイド〝ヘルヘイム〟はタナトスと座敷童子を同時召喚して発動し、一定範囲内を自在に氷の世界に変える事が出来る。
そして、全てを凍らせたのは他の者たちが無駄に罠の存在を気にしていたから。
壁も床も凍って白くなっているが、これならば踏んで作動するタイプのトラップも簡単には沈みこまない。
トラップを気にする必要がなくなれば全体のペースも速くなるだろうと、同行者を除く全てを凍てつかせた青年は白い息を吐きながら歩き始める。

入ってすぐにこれほどの威力の魔法を使い。今後も同じような事を続けるとすれば、玲の許に辿り着く前にガス欠になってしまうのではと心配になってくる。
「八雲さん、継戦を考えるとあまり大技を出すのは推奨出来ません。進む度に同規模の魔法を使うとなれば、玲さんの許に辿り着く前にエネルギーが枯渇すると思われます」
「……こんなの千発撃とうが問題ない。死ぬ度、死にかける度に適性値が上がってるんだからな」
測定上限が十万（レベル100）と思われていたときを基準に考えていたアイギスが注意すれば、湊は振り返りもせずヘルヘイムでは千発撃とうがガス欠などならないと返した。
これはペルソナ使い全員に言えるのだが、ペルソナ使いたちは実戦やトレーニングで鍛える他に、死に近付くことで適性値を大きく上昇させることが出来る。
死と向き合って召喚する月光館学園の者たちならば、その方法で適性値があがるのも納得だが、鳴上たちのように死と無関係なタイプでも効果が出るのだ。
詳しい理由は分かっていないが、魂と心がとても密接な関係にあり、死に瀕した魂が刺激を受けて心にも影響が出ているのではと推測されている。
そして、この場にいる者の中で最も死を体験し、死に瀕してきたのが湊だ。
普通ならば上限とされる十万に近付くほど適性は伸びづらくなり、十万に達すればそこで成長を止めてしまう。
しかし、死を経験した者や近付く己の死期を見つめる者は、殻を破りその上限を突破してさらなる力を得ることが出来るのだ。
これまで何度も死んではファルロスに蘇生され、さらに普段から魔眼で死を視続けている湊の適性値は現在も上昇している。
それ故、他の者の感覚では大技に分類される魔法を出し続けようと、今の湊はそう簡単にはエネルギーが尽きないくらいの余裕があった。

ただし、彼の場合はなにも言わずに平気で無理をし、そのまま動けなくなるほど力を使い果たす事もあるので注意が必要だ。
通路を進んで道が左右に分かれている場所まで来ると、湊が右の通路を選んだので他の者も後に続く。
風花やりせからの通信がないので、湊の選んだ道が正しいのだろうが、一切の説明がないことで不安に思っていたゆかりは、空気を変えるために玲を敵の手から取り戻した後の事について皆に話しかけた。
「そういえばさ。塔の天辺まで行って玲ちゃんを助けた後はどうする？　玲ちゃん、すっごく悩んでたっていうか。まぁ、自分が死んでたなんて聞いたら誰だって取り乱すと思うんだけどさ」
玲が死んでこの世界に迷いこんだのは現実で、それはどうあっても覆りようがない。
さらに彼女は人よりも不幸な境遇で生きてきたらしく、彼女から見れば〝恵まれた環境〟で生きてきた者たちの言葉など届くとは思えない。
彼女の事を誰よりも気に掛けていた雪子も顔を俯かせ、どうすれば玲の心を救えるのだろうかと様々な方法を考えるが、どのような言葉も彼女に届く気がしなかった。
「……私、玲ちゃんに酷い事言っちゃった。認めたくない一面は誰にでもあるから、それを話して分かち合えないかなって」
「別に天城も悪気があって言った訳じゃないだろ。これまで一緒に過ごしてきた仲間が、まさか既に現実世界で死んでるなんて思わないさ」
雪子は自分が鳴上や千枝に助けられたときのように、悩んで苦しんでいる者の話を聞いてあげようと思っただけだ。
自分なら相手を助けることが出来るだとか、誰だって悩みはあるもんだと上から目線で見ていた訳ではない。
ただ玲の悩みを聞いて、手助けすることが可能であれば手伝わせて欲しい。
そういった想いから己のシャドウを認めようとしなかった玲に声を掛けたのだが、記憶が戻った善と彼女が語った〝真実〟と〝本音〟

は雪子に解決出来るレベルを超えていた。
塔の頂上に辿り着くまでには時間があるものの、どんな言葉を掛けても玲が何よりも望んだ日常を生きている者の言葉が彼女に届くとは思えなかった。
助けたいのに助ける方法が見つからない。暗い表情で悩んでいる雪子を見ていたメティスが口を開いた。
「最悪心を救う必要はないと思います。私も助けたいと思いますし、皆さんの気持ちは分かりますけど、あくまでこの世界にいる玲さんは魂の欠片ですから」
「魂の欠片？　ふむ、死後の魂がどうなるのか君は知っているのか？」
メティスが玲の心を救う必要がないと口にしたとき、一部の者はどうしてだと驚いた顔をした。
しかし、その後の言葉を聞いたところで、善たちの話で死後の世界が実在する可能性を理解した美鶴が詳しく教えて欲しいと尋ねた。
聞かれたメティス自身もそう詳しく知っている訳ではないのだが、自分が分かる範囲で良ければと答える。
「基本的には肉体を離れた時点でただ消えます。でも、人の心は集合無意識に繋がっているので、一部は星の記憶や心の海、魂のコミューンと呼ばれる場所に保管されるんです」
「では、玲もその保管される魂という事か」
「はい。ですよね、兄さん？」
そういってメティスは先頭の青年に視線を向ければ、彼は黙ったまま時計盤のような形をした扉を押し開けて先へ進んでしまう。
死を理解しているからこそ、彼がそういった事にも詳しいのかと思った者らは、彼が何も答えなかった事で実際はどうなのだとやきもきする。
だが、メティスが無駄に嘘を吐く理由がなく、玲の魂を運ぶために遣わされた善がいる。
それが既に答えなのだろうと思って後に続けば、扉を潜った先で右腕を黒い異形の巨腕に変えた湊が、部屋の中を高速で移動している蜘蛛型のＦ・Ｏ・Ｅを床ごと粉砕している場面に出くわした。

相手の移動速度はギリギリ目で追えるレベルだったというのに、青年はその移動ルートとタイミングを読み切り、一気に跳躍で接近して殺したようだ。
初見の相手でも躊躇いなく近付いて殺せる強さが羨ましい。理不尽や不条理を押しつけられるだけの強さについ嫉妬を覚えてしまう。
黒い腕を消した湊を見ながらそう思った善は、相手が自分の存在を赦していないと理解しながらも彼ならば分かるのではと思い尋ねた。
「湊、君は玲を救う方法を知っているのか？」
「……お前の片割れを殺せば終わりだ」
「違う。私が聞きたいのは、彼女の心を救う方法だ。償いたい訳じゃない。ただ、哀しみに囚われたまま玲を旅立たせたくないんだ」
殺されかけておきながら善が話しかけた事も驚きだったが、それ以上に湊がちゃんと善の質問に答えた事は更なる驚きだった。
玲を捕らえている片割れを殺すまでは殺さないと約束したからか、それともただ問われたから返しただけなのか。
やや緊張した様子で他の者が二人のやり取りと見ていると、再び歩き始めた湊が善の質問に答えた。
「救いなんて個人の自己満足だ。詭弁でも何でもいい。玲が納得する言葉を贈ればいい」
「私は人間じゃない。君も言った通り、私には人の心というものが理解出来ない。玲が他の者たちのように生きたかった事は分かったが、それを知らない私では彼女を納得させる言葉など……」
「……前提が間違ってる。玲が羨み、嫉んだのは生前の話だ。彼女は〝そう生きたかった〟と言っただけでしかない。旅立てない理由はそこじゃない」
視線はあくまで前を向いたまま、遠くに見える蜘蛛型F．O．Eにマフラーから取り出した対物ライフルを放つ。
口調は淡々としているが、その言葉の端々に善や先ほど悩んでいた雪子に対する呆れが見える。
しかし、記憶が蘇った彼女が時計塔の前で吐き出した言葉は、全て玲が心の奥底に仕舞っていたはずの本音だろう。

あれが嘘だとはどうしても思えず、けれど、湊が意味のない事を言うとも思えない善は顎に手を当てて深く考え込む。
「玲が旅立てない理由？　己の死に納得出来ないからではないのか。何だ。彼女は本当は何を望んでいたんだ……」
そう呟いた善は湊の後を追いながら思考の海に潜り続けた。
＊＊＊
湊を先頭に進み続け、階段を見つけた一同は二階へと上がってきた。
見た限りは一階とほぼ変わらない雰囲気。このまま蜘蛛型のＦ．Ｏ．Ｅがたまに出る程度ならば、そう苦戦せずに頂上に辿り着くことが出来るだろう。
青年に言われた言葉について考え込んでいる善も、このまま問題なく玲の許に辿り着けるのならそれに越したことはないと思っていた。
しかし、階段で上がってきた部屋から扉を潜って次の部屋へ移動したとき、全員の耳に鎖を引き摺るような音が届いた。
瞬間、ハッとした表情で顔を上げた善が叫んだ。
「まさか、皆を排除するために狩人まで放ったというのかっ!?」
「お、おい。その狩人ってのは何だよ？」
急に大きな声を出した善に驚いた完二が尋ねる。
普段は湊並みに冷静で静かな善がこれだけ焦ったように驚いているのだ。きっと拙い事態になったのだろう。
ならば、その状況に対処するために情報が必要だ。完二が尋ねて善の答えを待っていると、少し慌てた様子でりせから通信が入った。
《み、みんな気をつけて！　このフロアに刈り取る者がいるよ！　それもすごいスピードで近付いて来てる！》
「そうか。君たちはあれを刈り取る者と呼んでいるのか。やつの危険性を理解しているのなら話が早い。ここは撤退しよう。君たちは十分良くしてくれた。私の我が儘のために危険に晒すことは出来ない」
りせの通信で皆が敵の正体を知っていると分かった善は、あれには勝てないと撤退を進言した。
ここで戦っても無駄な犠牲が出るだけだ。蜘蛛型のＦ．Ｏ．Ｅだ

けならばともかく、F．O．Eすら超える最凶のシャドウが自分たちを狙って近付いて来ている以上逃げるしかない。
上を目指すのならどうあっても刈り取る者のいる部屋を抜けていく必要があるが、幸いなことに七歌たちは元の世界に帰る手段を既に持っている。
なら、後は自分だけでやるから皆は無駄に身を危険に晒すことなく、どうか無事にこのまま帰って欲しいと善は言った。
それを聞いた他の者たちはムッとした表情になる。玲が捕らわれたままだというのに、我が身可愛さから逃げるなど出来ない。
撤退などあり得ないと七歌が善に言い返そうとしたとき、通路の奥から血に汚れた黒いロングコートを身に纏った狩人が現われた。
身体の周りに二本の鎖を浮かせ、その両手にはライフル以上に長い超ロングバレルのリボルバーを手にしていた狩人。
その姿を見ただけで死を連想し、挑むつもりだった者たちの本能が逃走するよう働き掛けて身体の自由が利かなくなる。
宙に浮きながら高速で迫る狩人によって、周囲の温度が数度下がり、血の臭いなのか錆びた鉄臭さが鼻腔に届こうとした。
「――――邪魔だ」
だが、残り二〇メートルまで敵が迫ったとき、相手の姿が真横にぶれてそのまま直近の壁が爆発した。
先ほどまで感じていた死の気配も霧散し、気温が下がったように感じていた寒さも消えた。
飛んでくる壁の小さな破片が通路に転がり、舞い上がった埃が徐々に治まってくれれば、そこには先ほどF．O．Eを殺していた黒い巨腕で刈り取る者の頭部を掴んで壁に埋め込んだ湊がいた。
相手はまだ生きていて藻掻いているようだが、黒い腕の掌から赤黒い光が弾けると、刈り取る者は頭部を失ってそのまま靄になって消滅した。
全力で逃げねばならないと思っていた善は、最大の障害が排除された安堵を感じるも、その障害を容易く屠った青年に別種の怖れを感じている自分がいる事に気付く。

一度殺されかけたときにはそれを感じる余裕などなかった。
しかし、冷静に彼の戦いを見る事が出来る立場になったからこそ、これまでのダンジョン探索では感じなかった別の気配が濃くなっている事に気付いた。
「……君は、一体なんだ？　ベアトリーチェじゃない。湊に感じるソレは別の何かだ。君の中には何がいる？」
敵を排除し、黒い腕を振って霧散させた湊が振り返る。その瞳は蒼と銀が中途半端に混ざったような色をしていた。
すぐに瞳はただの蒼色に戻ったが、彼は善の言葉に何も返さず再び歩き始める。
今の湊の強さが戦闘状態に切り替わった事で生まれたものならばいい。だが、もしもまだ何か彼に秘密があるとすれば味方であろうと油断出来ない。
己が殺される姿を幻視する動物としての本能で恐れた刈り取る者に対し、その力の根源が理解出来ないからこそ恐ろしい湊。
その離れていく背中をジッと見つめていた善は、短く息を吐いて呼吸を整えるとこれまで見てきた彼を信じて後に続く事にした。

第三百十四話　神の天敵

――時計塔・四階

先頭をゆく青年が走りながら一枚のカードを砕く。

渦巻く光の中から白銀の毛並みを持つ聖獣が現われ、通路を埋め尽くすほどの雷を放つ。

青年へと向かってきていたシャドウらは雷に灼かれ消滅し、最奥にいた狩人も防御態勢を取ったのだろうがコートから白い蒸気を立てて身体が半分壁に埋まっていた。

射線上にいる複数のシャドウを倒しながら、最凶のシャドウである刈り取る者に明確なダメージを与えるほどの力を褒めるべきか。通路の床や壁を融解させるほどの威力を持つ雷を防いで見せた敵の力に驚愕するべきか。

彼に遅れて追いついてきた者たちは、帯電状態の聖獣の傍らに立ち敵を睨んでいる青年に声をかける。

「八雲さんっ、あまり先行しないでください！　分断される可能性があります！」

ここまで上ってくる間に倒したシャドウの数は百や二百ではない。

そのほとんどを湊一人で倒しているが、階層が上がるにつれて敵の強さと数が増しており、刈り取る者の出現数も飛躍的に増えているのだ。

湊の力ならば刈り取る者を相手にしても負けはしないにしても、塔の天辺でクロノスの片割れが待っている以上、今のペースで敵を倒し続けるのは危険。

刈り取る者の狙いが湊に集中している事もあって、おそらくクロノスはシャドウたちに湊を優先して倒すように命令していると思われる。

ここで他のメンバーと分断され、湊だけ多数の刈り取る者を相手に戦う事になれば玲の救出に支障が出るかもしれない。

故に、他の者たちがフォロー出来る距離を保って欲しいとアイギスが言えば、青年は彼女の声がまるで耳に届いていないかのように床を

蹴って敵へと進む。
「ああ、もうっ」
他の者たちからはブレて見えるほど加速し、麒麟と併走しながら刈り取る者に近付いた湊は黒い鬼の腕を振り下ろし、壁ごと敵を粉砕する。
その背後では麒麟が嘶き落雷を引き起こして、周辺にいたシャドウたちを一掃したようだ。
電撃属性に対して耐性を持っているシャドウもいるだろうに、どれほどの力を込めてスキルを放っているのか。
まるで言うことを聞いてくれない青年にアイギスが苛立ちを募らせていれば、融解して赤くなっていた壁や床をプシュケイの氷結スキルで冷ましていたメティスが声をかけた。
「姉さん、今の兄さんに言っても無駄です。戦闘が増えるにつれ、余計に阿眞根に近付いているみたいですから」
瞳の色こそ再び魔眼の蒼に戻っているが、彼の放つ気配や空気が徐々に変わっている事には全員が気付いている。
それが湊が人から神に変ずる予兆である事や、変化した〝阿眞根〟がベアトリーチェと別の存在だという事はよく分かっていないようだが、月光館学園側の者たちはベアトリーチェの力で自身の時を逆行させた湊が蛇神〝无窮〟を完全に呼び出した場に遭遇した。
今の湊の放つ、張り詰めたような気配は、无窮が周囲に重圧を撒き散らしていたあの世界が終わる寸前の空気に近い物がある。
「阿眞根……また、ドイツの時のような姿になるんでしょうか……」
「それはないと思います。姉さんがドイツで見たのは器慣らしで、神降ろしを想定したレベルのエネルギーに身体を慣すためのものでした。まぁ、兄さんの中に眠る黒い感情が茨木童子の想定を超えていたので、危うく肉体が消滅するところだったようですけど」
アイギスが阿眞根と聞いて思い出すのはドイツで力を暴走させていたときの姿だ。
全身から光を放っていた青年の背から翼のように光の触手が伸び、彼の感情に呼応して破壊の限りを尽くしていた。

周囲から受けた攻撃全てを叩き落とし、武器でありながら鎧の役目も果たしていた。
あんなものをこの世界で展開されると流石に逃げ場がなく。湊の目を覚まそうにも触手を突破出来るほどの攻撃力も機動力もない。
しかし、あれはあくまで器慣らしの仮顕現でしかなく、完全体の阿眞根としての姿や力はもっと別の物だとメティスは説明した。
それを聞いたアイギスはそうなのかと納得したようだが、ならば、以前自分たちが転移したトーキョーで見たものがそれかとチドリが尋ねる。
「なら、私たちが全力を見せてって言った時に見たのがそれかしら？
瞳だけ銀色になって身体が光を纏っていたんだけど」
「そうですね。中身がベアトリーチェさんに変わっていたんじゃなければそうだと思います。よく似た状態に人格だけ切り替わるってのがあるので」
湊の肉体のままで瞳が銀色になることがあるが、その際、湊を主人格としながら人間性が欠落したものが阿眞根となっている。
ただ単に人格がベアトリーチェに切り替わっていても瞳の色が変わり、さらには神としての神威を纏っているので紛らわしいが、阿眞根とベアトリーチェでは後者の方が人間味がある。
自分の半身である湊の事をよく気に掛けているため、下手をすると湊よりも人間らしいのではと思われるのが現在のベアトリーチェだ。
チドリたちが遭遇した時期ではまだベアトリーチェは今ほど人間らしさを得ていなかったので、人格だけ切り替わっていても区別はつかないが、恐らく阿眞根だろうとメティスが答えればチドリはそうかと頷いた。
あの時の湊は、先日无窮の召喚が行なわれた時並みに対処しようがないと感じた。
エリザベスたちと言葉を交わしたと聞いているので、判断力や知性はしっかりと残っていると思われる。
ただし、顕現時に湊が定めた目的を完遂するために阿眞根は現われるので、その目的を阻むような真似をすれば即座に排除しようとして

くるだろう。
言葉は通じるが会話は成立しない。これは阿眞根と邂逅したエリザベスの言葉だが、まさにその通りの存在と言えた。
周りでメティスたちの会話を聞いていた他の者らは、厄介な事態になりそうな気配がしていることで思わず顔を顰めている。
けれど、善だけはまだ湊の事が気になっているのか、通路を抜けた先でシャドウたちを殺している青年に瞳を向け、メティスらの話は理解したが納得しきれない部分があると口にしてくる。
「だが、やはりおかしい。確かに湊の力は脅威だが、現われるシャドウもこれまでとは比べものにならない強さを持っている。それがあぁも容易く屠られるとなれば、何かしらの理由が存在するとしか思えない」
両手に刀と中華剣を持った湊がシャドウを細切れにし、相手が靄になって消滅する間に次へと迫って刀を振り下ろすと敵の身体を両断した。
容易く斬っているように見えるが、おそらくは魔眼で視えている死の線を斬って切断しているのだろう。
だが、もしも魔眼を使っていないとすれば、確かに今の湊が見せる強さは異常に映る。
いくら湊が強くなろうと敵にも耐久力や防御力というものが存在し、相性によっては名刀の斬撃を受けようと弾く者もいる。
一方、湊の使う武器はどれも十分に業物と呼べる物ばかりで、そこに本人の技量が合わされば武器の性能は十二分に引き出されている事は分かる。
だが、この両者がぶつかったときどちらに軍配が上がるかといえば、普通ならば相性通りに敵が耐えて終わるはずなのだ。
刀で切れないなら鈍器で、鈍器も効かないのであれば魔法で、そうやってあらゆる手段を使いこなすのが湊の真骨頂であるため、最終的には湊が勝つという結果に変わりはない。
しかし、今の湊は相性を無視して敵を倒せてしまっている。湊だけでなく彼の召喚するペルソナでもゴリ押しに近い形の勝利を収めて

いるのを見れば、善でなくとも不思議に思ってもしょうがない。
とはいえ、ここにいる者たちは全員湊の本気や手札の全てを知っている訳ではない。
ずっと一緒にいた綾時でも知らない領域があるのだから、他の者にすれば知らないことの方が多いくらいだろう。
だからこそ、分かる範囲で今の湊の強さについて考えてみた真田は、黒幕の用意した敵が湊にとってカモでしかなかったのではと予想を話す。
「相性の問題ではないのか？　山岸が言うには有里にはアナライズが通らない。そのため、黒幕のやつも上手く対策を取れないんじゃないのか？」
「……数多の力を使いこなす技量は確かに認めるが、湊は相性を無視した攻撃も放っている。流石に無効や吸収持ちは他の攻撃で対処しているものの、耐性程度であれば無視しているのを何度か見た」
そういった可能性は善も考えていたが、流石に相性を無視して戦い続けているのを見ていれば、敵側に問題がある訳ではないと理解出来る。
ならばと他の者たちも考えてみれば、相性を完全に無視出来る魔眼を使ったのではと千枝が思い付いた事を口にした。
「なら、魔眼だっけ？　ほら、そういう相性を無視出来る攻撃が出来るんじゃない？」
「兄さんの魔眼は概念ごと殺したりも出来ますが、地味に制限が多いですよ。もっと言えば、万能属性とかでもなきゃ相性は無視出来ませんし」
確かに直死の魔眼ならば相性も防御も無視出来ると説明していた。
けれど、それを使うには魔眼の持ち主が接近し、視えている死の線を己の身体や武器で切りつける必要があるのだ。
視えている線を狙ってペルソナのスキルを当てた場合、対象に死を発現させることは出来ず純粋にスキルのダメージのみが通る。
その辺りの詳しい話をメティスが説明すれば、話を聞いていた者たちは彼の魔眼は優れた体術を持っているからこそ使いこなせる代物

だと理解したようだ。
　もっとも、これで湊が敵との相性を無視し続けられている理由が分からなくなった訳だが、一人で考え込んでいた善はメティスの言葉からヒントを得たらしくハッとした表情で顔を上げた。
「……いや、そうか。それならば可能性はある」
「おいおい、なんか分かったのか？」
「確証はないが仮説としてなら思い付いたものがある」
　今の会話のどこに気付く要素があったのか。不思議そうに善を見る花村。
　だが、相手の視線を受け止めている善は、万能属性がヒントになったのだと仮説を話し始めた。
「万能属性が最初から相性を無視出来るように、今の湊はここにいるシャドウたちに対して優位に立てる特性を持っているのかもしれない」
「優位に立てる特性って、ここのシャドウって特殊なのか？」
「ここのシャドウは私が学校を作ってから生じたものだ。ある意味でクロノスの眷属と言える。それに優位となれば神殺しの特性を持っている可能性が出てきた」
　ダンジョンにいるシャドウは元の世界のものとは微妙に異なる。
　ここが世界の狭間にポツンと存在する浮島のような世界だからこそ、その存在を維持するために依り代を必要としていた。
　その依り代となったのが学校を作り出したクロノスである。
　依り代になった事でシャドウへの命令権を手にしたクロノスだが、シャドウたちはクロノスの恩恵でほんの僅かにクロノスの性質を得ていた。
　性質を得たところでなんら力に変化はないが、神に対して何らかの逸話などを持っている存在と戦うときには影響が出ることも考えられる。
　そのため、善は湊が神殺しの特性を持っていると判断したのだが、最近になって神と呼ばれる存在が実在すると聞いたゆかりは半信半疑のようで、湊の生家に詳しい七歌に意見を求めた。

「七歌、有里君の実家って神様とか殺してたの？」
「うーむ。妖怪退治的な事はしてたから、その延長と言えばそうかもしれないけど……言って私ら龍神の子孫だからね。戦闘系ではないけどポテンシャルはあると思う」
「ポテンシャルって……えらく曖昧だなぁ」
神殺しの逸話は流石に名切りにも九頭龍家にも残ってはいない。
そういった存在は遙か昔に人の前から姿を消しているため、二つの家が力を持ってから跋扈していたのは妖しの類いなのだ。
恨み辛みや人の欲望を糧に生まれてきた妖しは、性質を考えると綾時のような高位のシャドウや善のような概念から生まれた神格に近い。
それらを龍の命令で屠ってきたならば、名切りには怪異殺しの特性が伝わっている可能性は十分にあった。
ただ、名切りがそういった仕事をしていたのは千年近くも前の事。
そんなものが正常に機能するかは不明であり、もっと言うと日本の怪異ばかりを殺してきた者に、西洋の文化と思われる存在を殺す特性が効くとは思えない。
善の言っている事が間違いだとは思わないが、意見としては弱いのではと話が振り出しに戻る。
こうして他の者たちが考えている間も湊はシャドウへ向かって行き、呼び出したタナトスが紫色の雷で周囲を薙ぎ払うと最後は雷を収束させてレーザーのように撃っている。
あそこまで簡単に敵を殺すことが出来れば楽しいのだろうなと七歌が暢気に思っていれば、湊の戦いをジッと見つめていた美鶴が口を開いた。
「……善、君は自分の正体がクロノスだと言っていたが、それはギリシャ神話の存在か？」
「ああ。本物ではないが人々の想いや願いが集まり近しい存在として生まれたものだ」
「想いや願い……それはイメージによって能力などが変わると言うことか？」

「どういった能力を持って生まれるか、という話で言えばそうだ。死神や時の神としての側面が強いが、もしも死者に有無を言わせず冥府に連れて行くというイメージが集まっていれば、剛力など肉体面での能力を持っていた可能性はある」
あくまで善は時の神クロノスとしてのアバターを得て生まれただけの神だ。
そこに死神など他の属性を合わさっているので、ギリシャ神話に語られるクロノスとは別物でしかない。
自分がいつから存在するのか。自分以外にも同じような役目を与えられた存在はいるのか。
詳しい情報を善自身は持っていないものの、おそらく地域単位で似たような者らがいるのではと彼は思っている。
そういった話が役に立つのかと思って善が話せば、顎に手を当てて考え込んでいた美鶴が再び質問してきた。
「善、しつこいかもしれないが君は本当にギリシャ神話の時の神として生まれたのか？」
「ああ。私も神話についての知識は多少持っているが、自分の事は時の神クロノスとして認識している」
「そうか。……なら、そこに同名の存在の属性が混ざっている可能性は？」
「同名の存在……？」
美鶴の質問の意図が分からず善が首を傾げる。
どうやら彼の持つ神話の知識は穴が多いらしく、時の神と同名の神がいる事を知らないらしい。
そして、善と同じように神話系の知識を持っていない順平も、先ほどから何の話をしているんだと説明を求めた。
「えっと、桐条先輩は何の話をしてるんすか？」
「簡単に言うとギリシャ神話にはクロノス神は二柱いるんだ。片方は善が言っていた時の神、そしてもう一方は古い神々の王とされた大地の神だ」
ギリシャ神話にもいくつかの神話サイクルが存在するが、大地の神

クロノスは原初の神々の一柱と言える存在だ。
時代を考えれば時の神よりも先に生まれており、その力も大地の神の方が圧倒的に強かった。
「両者は全くの別物で綴りなどが異なるんだが、現地でもよく間違われたり混同されていたらしい。そして、先ほど善から人々のイメージで能力が変わると聞いて思ったんだ。もしや、大地の神の性質も混じっているのではと」
だが、名前が同じせいで二つの神を同一の存在としてみたり、逸話が混ざって伝わることも多々あった。
神話が作られた現地ですらこれなのだから、日本や周辺の国でも詳しい者以外は両者を同じ神と認識している者も居るかもしれない。
その影響で善にも大地の神の性質が混ざっている可能性は確かにあるが、順平と同じように神話の知識に明るくない真田が性質が混ざれば何かあるのかと聞いた。
「大地の神の性質が混ざってたら何かあるのか？」
「あぁ、時の神と違ってそちらには明確な天敵がいるんだ。雷を己の武器とした神々の王〝ゼウス〟という天敵がな」
そう答えた美鶴の視線を追えば、そこにはタナトスの雷で敵を薙ぎ払う湊の姿があった。
先ほどまで麒麟でも電撃属性のスキルを多用していたので、ペルソナを変えてからも同じ属性を使っているのを見ると、美鶴が口にした雷を武器とした神々の王の存在を意識してしまう。
だが、他の者たちがまさかと頭を過ぎった考えを否定しようとしたとき、美鶴の言葉を聞いてから湊を見ていた善が驚愕に目を見開いていた。
「っ……そういう、事か」
「何か分かったのか？」
「あぁ。先ほどの推測は当たっている。確かに私には混同されたイメージによって大地の神の性質もある。そして、確かにいたんだ。この世界を閉じる前に、どこからか流れ着いた〝ゼウス〟が」
どこか震えたように話す善は、自分で記憶を封じる前にその存在と

会っていた。
それが来たのは七歌たちの時代からでもなく、鳴上たちの時代からでもない。
もっといえば、そもそもこの世界の存在ですらない。
「自分の記憶を封じる前に、私はゼウスがこの世界に入ってこれないよう閉め出した。世界を閉じてしまえば相手は介入してくる事が出来ない。だからこそ、そこでもう大丈夫だと安心していた。だが、相手はこの世界のすぐ外で未だに待っていたらしいな。世界の境界を破壊出来る湊が現われるまでずっと」
閉め出した側にすれば相手の諦めの悪さに笑うしかない。
元々、この世界を目的地にしていた訳でもないのだろうが、ゼウスの名を冠している以上、クロノスがここにいると知って狙っていたらしい。
「クロノスとしてなら最悪と言っていい事態だ。最もその力を持ってはいけない存在に力が渡ってしまった」
「では、今の八雲さんはゼウスの支配下にあるのですか？」
「違う。彼を見て分かった。あれの精神を支配することなど不可能だ。だが、湊は確かにゼウスの力を得ている。ならば考えられる事は一つ。彼はゼウスを取り込んだんだ」
クロノスが恐れた敵の力を我が物としていた青年。
どうして彼がシャドウらを容易く殺せていたのかもこれで理解出来た。
世界と世界の狭間を渡ってきた彼は、閉め出されていたゼウスと出会って相手を取り込み、そうしてから平然と次元の壁を破壊してこの世界に侵入したのだろう。
これまでは力をセーブして自分の力だけを使っていたが、黒幕がクロノスと分かったからこそ今はゼウスの力も解放しているに違いない。
ペルソナとして取り込んだのか、それとも蛇神に喰わせて性質だけ得たのかは分からない。
だが、クロノスを相手にするにあたって、これ以上の切り札は存在

しない。
湊の中に感じていた別の気配。そして、湊に抱いた底知れぬ恐怖の正体を善はようやく理解した。
「君がこの世界に来たとき、既に私の運命は決まっていたんだな……」
怒りのままに彼がその力を振るうのであれば、己と半身が生き残ることはあり得ない。クロノスにとってゼウスはまさしく天敵なのだから。
そう。自分が死ぬという運命は変えられない。ならば、せめて玲に何かを伝えてから死ぬことにしよう。
そう考えた善は敵を殺しつづける彼の背中を追いながら少女に伝える言葉を考えるのだった。

第三百十五話　玲を救う方法

――時計塔・八階

通路を抜けた先の大部屋に入った途端、侵入者を排除しようと数多のシャドウらが群がってくる。

凄絶な憤怒を宿した蒼い瞳でそれらを睨んだ青年は、右手に死神を、左手に審判のカードを呼び出して握り砕く。

現われるは敵と定めた者を冥府へと堕とす死神、そして異形の者らを無へと還す翠玉の騎士。

迸る黒い光の翼を開いたタナトスが一条の紫電を放てば、アベルが光を纏った剣を振るい紅刃を幾重にも飛ばす。

紫電の射線上と周辺にしたシャドウらは、その熱量に灼かれながら消える。

飛来した紅刃に触れたシャドウらは、その身を細切れにされながら消滅していった。

二体の攻撃によって襲ってきたシャドウのほとんどが倒されたが、タナトスの攻撃の射線上から離れた場所に待避し、他のシャドウらを盾にすることで紅刃からも生き残った個体もいる。

紫電の熱で濛々と立ち上る蒸気を抜けて現われた刈り取る者は、攻撃直後の二体のペルソナに向けて呪詛の籠もった凶弾を放つ。

刈り取る者が放った呪詛の籠もった弾丸は、物理的な攻撃でありながらそれそのものが強力な呪いであり、純粋な破壊力と同時に喰らった者に呪詛のダメージを与える。

生身で刈り取る者の弾丸に耐えられる者はまずいないが、ペルソナで受けた場合には召喚者に呪いが伝達し、良くて昏倒や恐慌状態に陥り、最悪だと精神を破壊され死に至る。

湊の精神力の強さを考えれば、例え喰らったところで最悪のケースを想定する必要はまず無いだろうが、この後に神クラスの敵を相手にする以上消耗は避けるべき。

ならば、ここで素直に敵の攻撃を受けてやる必要はないと、常人では視認不可能な速度で迫る凶弾を蛇神の影である黒炎の腕で焼き

払った。
「――――仕留めるぞ」
《グルォオオオオオオオオオオオオオオ!!》
吠えたタナトスの周囲に浮いていた八基の棺が四基ずつの二手に分かれ、四枚の花弁が開いた花のように空中で待機する。
タナトスの左右に分かれて待機していた花はその場で回転すると、中心に紫の光を集めながら時折電気を弾けさせた。
二輪の花の中央にいるタナトスも続くように全身から放電を始めると、タナトスを中心にバチバチとけたたましい音を立てながら空間に力が満ちてゆく。
攻撃のためのチャージ状態で既に目が眩むような光を放つそれらを前に、刈り取る者は両手の拳銃を頭上で交差させて極光を集めていた。
コンセントレイトによる魔法の威力の底上げ。それと並行して万能属性スキルを撃てるように力を収束させている。
最凶と呼ばれるシャドウの全力の一撃。まともにやり合えば防ぐことも相殺する事も難しいだろう。
だが、相手がまともでないように、天空神の雷の力を己のペルソナに付与した青年も感情をエネルギーに変換してさらに力を高めた。
「おいおいおいおいっ!?　全員伏せろぉぉぉぉぉっ!!」
遅れてやって来た他の者たちは、状況を一瞬で把握すると慌てて地面に倒れて対ショック姿勢を取る。
ダンジョンという閉鎖空間でどれほどの規模の攻撃を放とうとしているのか。
少しは加減をしろと花村は言いたくなったが、最早そんな言葉を口にしている時間は無い。
女子たちはお互いに身を寄せ合って伏せ、男子たちは少しでも女子の盾になれる位置で衝撃に備える。
そして、
「――――消えろぉぉぉぉっ!!」
《グルォオオオオオオオオオオオオオオ

青年の咆吼と同時に死神たちが力を解放する。
三条の紫電が集まり極大の一条の光線となって空間を灼きながら敵へと走る。
対抗するように刈り取る者も強化されたメギドラオンを放ち、空間に歪みを生じさせながら敵へと迫る。
両者の放った超密度の攻撃によってダンジョンが激しい揺れに襲われる。さらに進行方向の空間が歪んで像が歪になって見えるが、そんなものを気にしている間もなく二つの光が衝突した。
ぶつかった途端、衝突したエリアを中心に壁や床が衝撃波で崩壊してゆく。
もはや、その空間は太陽の如き光によって視認することは敵わず、対ショック姿勢を取っていた者らも床にしがみついていられないほどの暴風に煽られて元来た道へと吹き飛び転がされた。
だが、ダンジョンや周りにどれだけの被害を出そうと、戦っている者たちはその場に残っていた。
敵を前に退くなどあり得ない。退けば終わり、退くなど負けと同義であると、両者はただ敵を殺すために力を絞り出す。
「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ!!」
青年は吠えながら前に出した左手を右手で支えながら己の死神へと力を送る。
一撃の込める限界を超えているのか、反動によって力を送っている左腕に裂傷が走り、腕から血が流れ落ちる。
それでも怯まず敵を見続ける青年の瞳が僅かに銀色になると、タナトスの放っていた紫電が黒く染まり敵のメギドラオンを飲み込んでゆく。
黒き雷の龍が極光を飲み込み、術者である死神すらも飲み込めば、勢いのままに直進したそれはダンジョンの壁を喰らい尽くし塔の一画に風穴を開けた。
外から吹き込む風が熱せられたダンジョン内の空気を流し、青年の束ねられた髪が風に揺れる。
そうして、青年が敵が消滅した方向を見つめ、その瞳の色が戻りタ

ナトスが消えてゆくと、痛みに顔を歪ませた者たちが立ち上がって戻ってくる。
「くっそぉ……いててて。つか、マジでなんだよさっき……の……は？」
「流石に建物の中であの規模でやり合ったらもた……ない……ぞ」
花村と鳴上がお互いや仲間の状態を確認しながら戻ってくれば、青年の立っている部屋についた時、思わず唖然としてしまった。
青年が立っている場所より後ろには壁や床が存在しているのだが、彼の正面、言って敵がいた方向には壁が一切無かったのだ。
床や天井も荒く削られており、熱によって赤く融解している様には慣れたと思っていたが、今回は遠くに青空が見えている事で、ついに外壁まで貫通したのかと馬鹿げた威力に言葉を失う。
死神同士の戦闘によってこれほどの被害が建物に出ているが、両者の攻撃が一時的に拮抗した事もあり、攻撃が衝突した地点から上下左右にはより深い破壊痕が見えた。
湊のタナトスもそうだがそれと対峙した刈り取る者も並みの個体ではなかったのではないか。
戦いの痕を見てそう思った者たちは、敵が本気で湊を殺しに来ていることを余計に実感した。
「……湊、君の力はあとどれだけ残っている？」
部屋の奥から流れてくる風に乗った熱気にマントを揺らしながら善が尋ねる。
現状、敵であるクロノスの放つ刺客は湊に集中している。
それだけ相手から脅威と認識されており、逆に他の者だけなら問題なく対処出来ると思っているのだろう。
相手が搦め手で他の者を狙い、湊がフォローに回ったところを狙ってこないのは、きっとその様な小細工をしたところで意味が無いと分かっているからだ。
確かにメンバーの中には湊が何を犠牲にしても守ろうとする者がいる。
彼女たちが狙われれば湊は防衛に回らざるを得ないが、その他の者

が狙われたとしても彼が動く必要ない。
そして、敵であるクロノスはそのメンバーを特定しきれていないのだろう。
確実に狙われる可能性があるのはアイギスだが、そのアイギスはメンバーの中ではトップクラスの身体能力を持っている。
さらに姉妹であるラビリスとメティスとの連携は、湊を一時的に抑え込む事が可能なレベル。
湊の隙を狙うために相手を襲っても、これでは時間を稼がれその間に湊が到着するに違いない。
現時点で神に変化しかけるほどの怒りを燃やしているというのに、アイギスまで狙われればその場で阿眞根になる可能性もある。
現時点で最高戦力である刈り取る者を複数放って止められていないのだ。
ここからさらに彼が力を解放すれば、クロノスが全ての権能を使おうと手がつけられなくなる。
敵もそれを理解しているからこそ、このように強いシャドウを何体もぶつけて湊の力を徐々に削ぐことに専念していると善は考えた。
時計塔を登りはじめてからの戦いで湊が消費したエネルギー量を計算すると、他のメンバー全員を合せた合計値の五倍以上。
いくら湊が強くてもそろそろ限界が来ておかしくない。
彼一人が先行している分、ここまで他の者たちを温存する事が出来ているが、ゼウスを取り込んでいる湊はクロノスに対する切り札だ。
頂上に辿り着いてから機械仕掛けの大蜘蛛から玲を取り戻し、さらに黒幕であるクロノスを倒すとなれば、どうしても湊の力は残しておく必要がある。
だからこそ、善は湊の適性値がどれだけ残っているか気にしたのだが、尋ねられた方は死神と節制のカードを砕いて再びミックスレイド〝ヘルヘイム〟で融解した床や壁を凍りつかせてゆく。
見ている限りは疲れた様子もないが、本当にこのままでは湊の力が保たない。そう思ったチドリが彼を止めようとすれば、湊は先の通路の方を向いたまま口を開いた。

「……今の俺にエネルギーの枯渇はない。怒りや憎悪といった激しい感情。それらを生み出し続ける俺を炉心にして得た無尽蔵のエネルギーを使って願いを叶える存在が阿眞根だ」
「今の君はまだ阿眞根という存在になっていないだろう？」
「片足だけ境界を越えて感情をエネルギーに変換し、そのまま俺に戻ってしまえば俺のまま力を回復出来る」
流石の湊も先ほどの刈り取る者との戦いのような規模で戦闘を続けていれば、この階層に辿り着くよりも早くにエネルギー切れを起こしていた。
アイギスたちが心配するように、玲の事を心配しているにしても今の彼は完全なオーバーペース。
だが、かつては様々な依頼を受けて裏の世界で生きていた者が、他の者たちでも分かる事を分からないはずがない。
自分の技量や体力を過信して失敗すれば死ぬ世界。そこで生きてきた事で湊は自分がどれだけ戦えるか把握する癖がついている。
だからこそ、自分にアナライズを掛けて残りのエネルギーなどを把握していた訳だが、敵の強さから温存してもいられないと判断し、湊は力を振るい続けても戦える方法を考えた。
それが感情の昂ぶりによって阿眞根になりかける事を逆に利用したエネルギー変換術。
敵がまだ見える範囲におらず、先に玲を敵の手から奪い返す必要があるからこそ、今の湊は感情の針が振り切れて阿眞根になることがない。
ただ、強敵との戦闘中に少しだけ昂ぶったときに阿眞根になりかける事はあった。
湊が狙ったのはその瞬間で、一時的に阿眞根の持っている〝感情をエネルギーに変換する〟機構が使えるようになるため、刈り取る者などとの戦闘時には湊は感情のリミッターを解除して阿眞根化しかけることを止めなかった。
おかげで僅かな時間の阿眞根化で変換したエネルギーを取り込み、残りの階層での戦闘にも不安を覚えることなく進むことが出来る。

話を聞いていた者たちはデタラメな永久機関に呆然としているようだが、先ほどの話が事実であればクロノスとの戦いまで湊がエネルギー切れになることはない。
むしろ、玲さえ取り返せば、後は阿眞根に全て任せてしまってもいいくらいだ。
湊がここまでペースを考えずに戦ってこられた理由を理解した善は、そういう事ならば己の半身との決戦も問題ないだろうと安堵する。
床や壁が凍りついた事で進むことが出来るようになり、先頭にいた湊が再び歩き出すと他のメンバーも彼を追って進み出す。
善もそれに続いて歩き出すが、頂上まであと少しになった事で改めて玲へ贈る言葉について考えはじめる。
すると、すぐ近くにいた七歌が考え込んでいる善に気付いて声をかけてきた。
「ん？　善君どうしたの？　八雲君とクロノスの事で何か心配してる？」
「……いや、それは心配していない。ゼウスの力を持った彼がこの世界に来た時点で、私たちが消えることはきっと決まっていたんだろう」
「なら、何をそんな難しい顔で考えてるの？」
「……玲のことだ。どうすれば彼女の心を救えるのか。それを考えていた」
最初にこの学校を作ったときも、記憶を取り戻したときも玲は自分の死に納得出来ず泣いていた。
こう生きたかったと、他の者たちが〝当たり前〟と思っている平和な日常を生きたかったと、自分の内にあった羨み嫉む心をさらけ出して叫んでいた。
彼女の言う〝当たり前〟の日常を知らぬ善は、どうして彼女がそうまでそれを求めたのか分からない。
アイドルになりたかった。大金持ちになりたかった。そんな分かり易い望みであれば、ただの欲望からくる願いでしかないと無視する

ところだ。
しかし、彼女の求めたものはそうではなかった。
言ってしまえば特別さの欠片もない、つまらなくてくだらないもの。
そんな物を求めていながら、自分の死を納得出来ないと言った彼女の心をどうすれば救う事が出来るのか。
湊は彼女が本当に求めるものを、どうすれば彼女を救えるかを理解しているようだった。
つまり、彼女の心を救える方法は存在するのだ。
「思えば、湊は玲にずっと優しかった。彼女が死んでいると最初から分かっていて、これから消える存在だと分かっていながら、それでも彼は玲にとても良くしてくれたんだ」
「うん。八雲君は弱い者の味方で、とっても優しいからね」
無駄を嫌う彼なら意味が無いからと玲を存在しないものとして扱う可能性もあった。
だが、実際に彼がとった態度はその真逆で、戦闘では他の者たちの役に立てないと悩んでいた彼女に〝まんぷく亭〟という役割を与えてくれた。
あの時は小さくなった赤ん坊の状態で、成長した姿の湊とは記憶のリンクがないようだが、元の身体に戻ってからもまんぷく亭は続けられていた。
食事など屋台や出し物からいくらでも得ることが出来たというのに、彼はそのまま彼女に与えられた役割を奪わずにいてくれたのだ。
「私と二人だった時の玲はあまり笑わなかった。楽しそうに、美味しそうに文化祭を回っていたが、どこかそれは私に気を遣っているようだった」
お互いに記憶を失っており、周りにいる学生たちは与えられた役割以上の事は出来ない。
そんな何も分からない状況にいたからこそ、玲は善を困らせないように努めて明るく振る舞っていたように思う。
「だが、君たちが来てから玲は変わった。怖がりは治らなかったが、自

分も皆の役に立ちたいと考えるようになり、時には赤ん坊である湊を守ろうとする強さも見せた。そして、皆と一緒にいるときは本当に心から笑っているようだった」
「そうなんだ。私は最初から玲ちゃんは強い子だなって思ってたけど、善君から見ると短い期間で玲ちゃんも成長したって感じだったのかな？」
「む……いや、成長した訳ではないのかもしれない。元から玲はそういった人間で、私と二人だった時にはそうする余裕がなかっただけなのかもしれない」
　二人しかいないときの善はただこの子を守らなければと漠然と考え、しかし、どうすれば今の状況から抜け出せるのか分からず文化祭を一緒に回っていただけだった。
　様々なものに興味を持つタイプではなかったので、基本的に玲について行くばかりで、今考えると玲に相当な苦労をかけていたように思う。
　湊たちがやって来てから戦闘は彼らに任せており、玲を守るという役目もほとんど果たせていなかった。
　だからこそ、今になって善は気付くことが出来た。自分が玲を守っているつもりで、実際はあの怖がりな少女に自分が守られていたのだと。
「……ああ、そうか。自分が玲を守っているつもりだったが、本当は彼女が何も出来ない私にずっとついていてくれたのか」
「んー……それも違うんじゃない？」
「違う？　何故そう思うんだ？」
　善にしてみればこれまで自分は〝玲を守る〟と己に課すことで生きてきた。
　彼女のために、彼女を守るために自分は玲と一緒に生きると。
　それは無意識に死神として彼女の魂を運ばなければならないと使命を感じていたのかもしれないが、どちらにせよ善がこれまで人として存在を保っていられたのは玲が傍にいてくれたからだ。
　だからこそ、善は自分が彼女に助けられていたと思ったのだが、七

歌にすれば人との関係はそんなに一方的なものではないらしい。
「確かに善君が玲ちゃんに助けられてた部分もあるかもしれないけど、玲ちゃんだって善君が一緒にいてくれて助けられたって思ってるかもしれないでしょ？　お互いがお互いに感謝してる。二人を見てて私はそんな風に感じたけどね」
「だが、私は玲にそれほど多くの事はしていない。シャドウから守ったのだって君たちで……」
「でも、善君と玲ちゃんはまんぷく亭でご飯運んだりしてくれたよね？　出来る事に違いはあるけど、そういうのってお互い様だと思うよ」
善は玲や七歌たちに一方的に助けられてきたと思っているようだが、七歌はそんな風には考えていなかった。
ダンジョンの中で善のアイデアに助けられた事もあれば、善たちもダンジョン探索で疲れているだろうに、まんぷく亭の店員として戦闘でくたくたになっていた七歌たちの許へ食事を運んでくれた。
本人たちは小さいことだと思っているかもしれないが、その小さな事にこれまで七歌たちは助けられてきたのだ。
「てか、私らがダンジョンで頑張ってたのって二人の影響でもあるんだよ？」
「私たちの影響？」
「うん。ペルソナを持ってない二人が頑張ってるのにさ。戦う力持ってる私たちが負けてられないじゃん？」
「それはお互い様だ。君たちが戦ってくれているから、せめて食事の用意はと働いていただけで……そういう事、なのか？」
そこで善はようやく少し理解出来たと視線を地面に落とした。
人との繋がりというのは一方的なものではない。良いか悪いかは別にしても、お互いに何かしらの影響を与え合っている。
この世界で出会った者たちは相手を好ましく思い合ったからこそ、恩には恩を返す形で動いてさらに深い繋がりが生まれたのだ。
そして、それは玲も同じだ。彼女も皆から影響を受けたように、皆も彼女から影響を受けた。

「玲は自分の死に納得がいっていないのだと思っていた。だが、そうじゃないのか。彼女は言っていた。何も〝無かった〟ことが怖いと。それはつまり、生きた証が欲しかったのか？」
死んだという結果を受け入れられないのだとばかり思っていた。
だが、七歌に人との繋がりについて聞き、そうしてから玲の言葉を思い出すと玲が本当に欲しがっていた物の正体が見えてきた。
この階層ももうすぐ終わる。そうすると次の階層を抜ければ頂上に着いてしまう。
なら、聞くには今しかないと、善は顔を上げると前を向いて駆け足で先頭にいる湊の許に向かった。
「湊、教えてくれ！　玲は、玲が本当に欲しかった物は〝自分が生きた証〟なのか？」
もしも、これが正解であるならば自分にも彼女を救うことが出来るかも知れない。
そう思った善はどこか縋るような瞳で湊の背中を見つめた。
他の者たちは急にどうしたんだと足を止めて二人を見る。
すると、声をかけられた事で足を止めた湊が振り返り善と視線を合わせた。
「……最初から玲はそう言ってただろ。まぁ、生前の付き合いが狭かったせいで気付けなかったんだろうが、本人が自覚していないだけで彼女は既にそれを持っている」
「この世界で君たちと育んだ繋がりも証なんだな？」
「……自分を抜くな。お前も既にその一つだろ」
湊に指摘された善はハッとした表情をして、どう返せばいいか分からず言葉に詰まる。
周りはそんな善の反応に苦笑しているが、呆れたように善を見つめる湊の瞳からは善に対する怒りが感じられなくなっていた。
それを不思議に思って皆の視線が湊と善を行き来していると、ハァ、と溜息を吐いて再び歩き出した湊が背中を向けながら言葉を続けた。
「……人として理解出来たなら生かしておいてやる。殺すのはお前か

ら抜け出た神の力だけにしよう」
「君はそれで良いのか？」
「どっちにしろ彼女を送る者は必要だからな。玲が望めば殺すし、拒めば生かすが、生かされた時には役目を果たせ」
「……すまない。ありがとう」
一度は殺されかけておいて変なものだが、善は湊が玲のために怒っていたのだと理解している。
きっとこの世界で最も彼女の心を理解してくれたのが彼なのだろう。
だからこそ、そんな彼が玲のために怒って自分を殺そうというのなら、罪を犯した者として裁かれるのが当然だと思っていた。
だが、ここに来てようやく善も彼女が本当に欲しかったものに気付くことが出来た。
人との繋がりを理解し、玲の心を救える可能性を見つける事が出来た事で、湊も善を神を騙る運び屋ではなく一人の人間として認めてくれたのだ。
当然、彼女を苦しめた罪は消えず、その贖罪はしなければならない。
ただ、それは彼女が無いと思っている生きた証を教える事で叶うかもしれない。
既に自分が玲にしてやれる事などないと思っていた善の身体に力がみなぎる。
他の者たちも湊が善を狙わなくなった事で安心したのか、ならば後は玲を助けて黒幕を倒すだけだと顔にやる気が満ちている。
決意をあらたにした者たちは、絶対に玲を助けようと頷き合うと先を行く青年の後を追い掛けた。

第三百十六話　大蜘蛛

――時計塔・九階

湊が自ら阿眞根になりかけるというデタラメな手段を使い。エネルギーを回復させながら敵を薙ぎ払い続ける事でようやく頂上へと続く階段までやって来た。

途中、空中を移動する床に、複数の階層を貫通して跨いでいる柱型のギミックなどもあったが、それらをくだらないと断じた湊によって破壊されており、空中を移動するときには湊が影の腕で全員を掴んで空を飛ぶことでギミックならば受けたであろう制約を無視した。

空中を移動している際に刈り取る者が襲ってきた時には、流石に他の者たちは動きようがないので焦っていたが、相手を睨んだ湊の頭上から出てきた星〝フェニックス〟が自動で迎撃し事なきをえた。

フェニックスは自我持ちのペルソナではなく、そもそも身体が炎で構成されているため実体すらあるとは言いづらい。

けれど、どういう訳か湊の意思すら無視して彼を守ろうとしている節があり、そこには美紀が込めた想い以上の何かが宿っているように見える。

美紀の適性を抜き取った事で生まれたペルソナだが、影時間に活動可能なだけの低い適性を抜き取ったところで、どうしてペルソナが得られるのかという疑問もある。

詳しい事は持ち主である湊しか分からないものの、今は状況を考えて誰も質問したりはしなかったが、他の者たちに見られていた青年が階段の傍にあった校舎に繋がる転送装置を起動したところで口を開いた。

「……山岸、ベルベットルームの住人たちも連れてこっちへ来い」

《え？　えっと、エリザベスさんたちと私だけそっちへ行くの？》

「久慈川とマリーも一緒だ。校舎に残っている方が危険な可能性がある」

戦闘は湊に任せていたものの、ここまで常に駆け足気味に来たことでメンバーたちが乱れた呼吸を整えていると、湊が何故だか校舎に

残っている者たちを呼び寄せた。
頂上にいるのは各ダンジョンの番人以上の力を持つと思われる機械仕掛けの大蜘蛛。そして、善が手放した神としての力のほとんどを所持しているクロノス。
おそらく今度の戦闘は湊だけに任せておくことは出来ず、そんな者たちとの戦いの場に連れて来る方が危険だとしか思えない。
風花も他の者たちと同じように考えているのだろう。湊が校舎に残っている方が危険かもしれないと言われても、どことなく納得しきれていない様子が声から伝わってきた。
そこへさらに、風花の傍で同じくサポートを務めていたりせからも通信が飛んでくる。
《ねぇ、プロデューサー。どうして校舎に残ってた方が危ないかもしれないの？》
「単純に守る範囲の問題だ。塔の頂上程度なら蛇神の中で最も堅い頭骨で簡単に守れる」
《そんなに広範囲に被害が出るような危ない戦いになりそうなの？》
「……どの程度の規模になるか分からないから備えるんだ」
あくまで備えるだけだと彼は返したが、最も戦い慣れている彼がそこまで言う事態が起こり得る可能性があるという事でもある。
ここに来るまでの湊の戦いを見てきた者たちにすれば、まだ上があるのかとうんざりするのも無理はない。
ただ、それでも湊が守ってくれるというのであれば、今回は素直に言うことを聞いておこうと風花たちも答えた。
《分かりました。マリーちゃんたちと合流してから行くから少し待っててください》
《私たちが行くまで皆は休んでて！》
二人がそう言い終わると通信が切れて辺りに静寂が戻る。
待っている間に少しでも回復しようとその場に座り込む者もいれば、水分や軽食でエネルギー補給する者もいた。
だが、そんな中でしきりに頂上への階段に視線を向けている者がいたことで、気付いた鳴上が落ち着けと声をかけた。

「善、焦る気持ちは分かるけど落ち着け。戦いは俺たちの仕事なんだ。お前が一人で行っても玲は助けられないだろ？」
「あぁ……だが、玲が今も苦しんでいると考えるとどうしてもな」
肉体的な面では玲が無事なことはほぼ確実だ。何せ、彼女を失えばこの世界は閉じてしまうのだから。
善が心配しているのは彼女の心。己の死を思い出し、生きていた頃の暗い感情まで蘇った少女は、自分の心の内を吐き出した際に仲間にキツい言葉を吐いたことを後悔しているようだった。
だが、それ以上に彼女は何の意味もなかった自分の人生に嘆き苦しんでいる。
何もなかった人生、ただ自分が辛かっただけの人生、それでは自分が存在しようとしまいと同じこと。
世界に己の存在を否定されたと思っている少女を救うことなど出来るのか。そう考えた花村が座ったまま善に尋ねた。
「つか、どうやって玲ちゃんを救うのか思い付いたのか？」
「自信はない。しかし、湊がくれた助言によって、玲が求めているものが分かった。私はそれを彼女に贈るだけだ」
塔を上っている時にはどうすれば玲を救えるんだと悩んでいたと言うのに、今の善の瞳には決意とやる気が満ちていた。
彼女の求めているものが分かった事での自信なのだろうが、こうも様子が変わるとその原因についても気になってくる。
床に寝転がっていたクマが身体を起こすと、その分かった答えについて教えてくれと善に話しかける。
「玲チャンが欲しいものって何クマ？　アイスだったらクマがいっぱいプレゼントしちゃるクマ。……ヨースケのお金で」
「自分の金でやれよ！」
何故バイトしているくせに自分がオヤツ代を持たなければならないのか。
シレッと奢らせようとしてくるクマに、花村は絶対に奢らないからなとやや怒り気味に断言した。
そんな二人の漫才のようなやり取りを傍で見ていた善は、彼らのや

り取りに構わずクマの質問に律儀に答える。
「玲が求めたのは、自分が生きたという証。ただ生まれて死んだのではなく、この世界で生きていた痕跡を彼女は残したかったんだ」
「でも、今から元の世界に探しに行ったり出来ないよね？」
善が玲の求めた物を答えれば、そういって雪子が真剣に尋ねた。
彼女が生きていた証などこの狭間の世界にあるはずがない。ならば、元の世界に探しに行くしかないと考えた。
しかし、今から探しに行ったとして、彼女が住んでいた場所や入院していたという病院を探すところからのスタートである。
仮に上手く情報を手に入れられたとして、そこから彼女が納得出来るような生きた証を見つけて戻ってくる。
普通に考えて時間が足りない。そんな事をしている間に玲の救出は終わるだろう。
「ああ。それは元の世界に戻った君たちでも出来ないだろう。この世界での記憶は元の世界に持ち帰ることが出来ないからな」
雪子の言葉に善もその通りだと頷いて返す。
玲の生きていた痕跡を見つけてくるなど、どちらの時代の人間に頼んだところで成功することはない。
何故なら、元の世界に帰った時点で彼らはここで過ごした記憶を失うから。
記憶を失えってしまえば、仮に玲に関する情報を手に入れても、それが何の情報か忘れているのでここへ戻って来るという発想にならないのだ。
ただ、そんな善の話を聞いていた者たちは、自分たちでは玲の生きた証を探せないという部分ではないところに驚き、千枝や直斗がどういう事なのかと会話に加わってくる。
「えっ!?　ちょ、いまサラッとすごい爆弾発言しなかったっ!?」
「ええ。元の世界に記憶が持ち帰れないというのはどういう事ですか？」
「そのままの意味だ。今ここは二つの時代に繋がっていて、湊たちの時代でもあり悠たちの時代でもある。ただ、君たちがこの世界から離

れればここは消えて〝なかった事〟になる。そして、元の世界に戻った時点で記憶の整合性が取られるようになるんだ」
言ってしまえば、存在が不確かなこの世界にいる間、ほとんどの者たちは同時に二つの時代に存在している事になっている。
今はまだ曖昧な状態なので記憶を維持出来ているが、この世界が閉じて消えれば、この世界自体が〝存在しなかった〟という情報で上書きされ、元の時代に戻った者たちの記憶にも〝存在しなかった世界の記憶など持っているはずがない〟と補整が掛かるのだ。
似たような現象を知っている真田と美鶴は、影時間の適性を持っていても関係ないかと少し残念そうにしながらも一応の納得を見せる。
「つまり、俺たちの世界で言えば影時間に迷いこんだ者と同じような感じか」
「こちらで数週間過ごそうと元の世界では時間の経過がほぼない。となれば、ここで過ごした記憶を消すしか整合性の取りようがないという事だな」
この世界での事など公言するつもりはないし、誰かに話したところで影響があるとは思えない。
しかし、世界の構造はよく言えば厳格であり、悪く言えばお役所仕事的な処理の仕方をされるようだ。
惜しくても自分たちで記憶の処理に抗う事が出来ないのなら抗議しても意味がない。
そうして、他の者たちも渋々ながら話を受け止めている中、荒垣が先ほどの話題に戻るがと玲を救う方法を改めて聞いた。
「んで、記憶を失う俺たちじゃ探せないってんならどうするんだ？」
「別に何もする必要はない。既に彼女はそれを持っている。私はそれを教えるだけだ」
元の世界で探すことは出来ないが、善は最初からそんな方法で彼女を救おうとは思っていなかった。
既に彼女は生きた証を持っている。この世界での出会いだけじゃない。病院で出会ったという少女たちとの関わりで既にそれは在った。

善が何を伝えるつもりか分かっていない者たちは、首を傾げて善のことを不思議そうに見ているが、話が一段落したタイミングで転送装置が稼働して光の柱の中から風花たちが現われた。
「すみません、お待たせしました」
「皆、お疲れさま！」
「うわ、何ここ？　ていうか、店長の雰囲気余計に怖くなってるし……」
やってきた風花たちが挨拶してくれれば、ダンジョンの中を不思議そうに見渡していたマリーが冷たい雰囲気の湊を見て複雑な表情を浮かべる。
力の管理者の三人は会釈するだけで、後は他の者たちの背後に控えているが、全員が集まったなら頂上についてからの事を説明しようと湊が全員に視線を向けた。
「……頂上に着いてからの動きだが、お前らは基本的に一箇所に集まっておけ」
「え？　湊君最後まで一人で相手する気なん？　てか、戦うんやったらエリザベスさんらに手伝ってもうた方が確実ちゃうん？」
「そいつらに期待するな。この期に及んで職務を理由に傍観者でいる人形に用はない」
突き放すような冷たい言葉を吐いた湊の瞳は魔眼の蒼に僅かに銀色が混じっていた。
彼はベルベットルームの住人らとは良い距離感で関わっていたはずだが、阿眞根になりかけている状態では精神への影響もあるのだろう。
傍観者でいる事を指摘され心苦しそうに目を伏せたテオドアを除けば、姉二人は普段通りの薄い笑みで湊を見ていた。
ならばと戦力としては期待出来ない者らに現場での動きについて湊は確認しておく事にした。
「エリザベス、自衛くらいはするんだろ？」
「必要があれば、といった感じでございます。まぁ、心配なさらずとも八雲様の攻撃の影響が出れば、自衛のついでに周りの方もお守りしま

すが」
「……そうか。なら、十分だ」
エリザベスが他の者たちを戦いの余波から守ってくれるのであれば、湊は神を騙る存在の相手に集中することが出来る。
保険として自我持ちたちを召喚しておき、彼女たちにもアイギスたちの防衛を命じておけば安心だろう。
湊が準備を進めることで他の者たちも腰を上げて移動の準備をしている。
そして、全員の準備が済んだところで一同は玲と敵の待つ頂上への階段を上った。
――時計塔・頂上
階段をのぼり、ダンジョンを抜けた先の頂上。
歯車で出来た床を歩き辺りを見渡せば、大きな時計盤と遠くまで音が響き渡るであろう巨大な釣り鐘があった。
この世界にも風は存在しているようで、高所特有の強めの風が髪や制服を揺らしてゆく。
平時であれば安全のための柵もない塔の頂上など御免被ると思っている者でも、今は視線の先に巨大な機械仕掛けの蜘蛛がいる事で高所であることなど思考に端に追いやる事だろう。
「……玲っ」
自分たちがいる場所よりもさらに高い位置。塔の先端にいた大蜘蛛を見ていた善が、そのガラス製の体内に玲の姿を見つけて思わず彼女の名を呼ぶ。
敵の尻の部分についたガラス製の容器の中で眠っている彼女は、こちらの声が聞こえていないのか一切の反応を示さない。
おかげで寝ているのか死んでいるのかも分かりづらく、この世界が維持出来ているため生きていると分かっていても不安な気持ちにさせた。
「つか、流石にデカすぎだろ……」
同じように敵のことを見ていた順平がポツリと漏らす。
大型シャドウやF・O・Eと戦って来た事で大きな敵というもの

には慣れていたつもりだったが、視線の先で八本の脚をギシギシと鳴らしている敵は、控えめに言って大型シャドウ二体分以上の大きさをしていた。
そんな者とこの狭く危険な場所で戦うなど正気の沙汰ではない。
しかし、玲を取り戻すには今も自分たちを見下ろしている相手を倒すしかなかった。
「……どうでもいい。さっさと降りてこい」
巨大な敵を前にして呑まれつつあった者たちは、首筋に刃を当てられているかのような悪寒を感じて声の主の方へ向き直る。
青年が呟くだけでその場の温度が数度下がったような錯覚に陥ったが、今はその瞳に宿る底なしの敵意に竦みそうになる。
今の彼は敵を殺す事しか考えていない。相手の大きさや強さなど一切関係ないとばかりに、今すぐ殺してやると瞳が雄弁に語っていた。
その声に反応したのかどうかは分からないが、湊が降りてこいと言ってすぐに大蜘蛛は跳躍してメンバーらの正面で着地する。
遠目からでは気付けなかったが、八本ある脚の内四本には分厚い金属の盾がついており、本体も金属で出来ている事から非常に攻撃が通りづらそうだ。
とはいえ、敵が降りてきた事で湊の方も臨戦態勢に入っている。
フォーメーションの確認や他の者たちがどう動くかの指示もない。
まさか先ほど言っていたように一人で戦うつもりなのか。
七歌たちがそう考えている間に大蜘蛛に動きがあり、相手は急に盾が横一列に並ぶように前脚を突き出していた。
攻撃が始まる前から防御を固めるとは珍しいタイプ。シャドウやそれに類する者としては非常に知能が高いのではと思わされる。
だが、次の瞬間、
「あぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
右腕を黒い鬼の巨腕に変え、青年が吠えながら一歩の踏み込みと共に敵に向け跳躍した。
跳躍した湊はそのまま黒い腕で敵の盾を殴りつけ、数十倍の体格差

の相手を時計盤まで吹き飛ばした。
敵が防御を固めたのは、野生の勘か何かできっと湊が攻めてくると察知したに違いない。
吹き飛びぶつかった時計盤を壊しながら瓦礫に半分埋もれている相手は、湊の攻撃をガードした盾がひしゃげて既に使い物にならなくなっている。
人の身体の厚みほどもある金属をどうやれば素手で破壊出来るのか。
攻撃した本人の腕が無事か心配になってくるが、視線の先で湊が麒麟を呼び出していた事で全員が広範囲攻撃を警戒する。
ほとんど逃げ場のないここで広範囲攻撃を撃たれると、その余波だけで他の者たちは吹き飛び塔から落下するかもしれない。
もっと言えば、そもそも大蜘蛛の中には未だ玲が眠ったままである。
刈り取る者を蒸発させるほどの熱量を持ったスキルを放った事も過去にはあり、そのイメージが頭に残っていたのか善が止めるために駆け出そうとして茨木童子に首根っこを掴まれる。
「くぅっ……やめてくれ湊っ!! それでは玲まで消えてしまう!!」
善が必死に呼びかけるも足下から黒い炎が噴き出している青年は、麒麟に目が眩むほどのエネルギーをチャージさせて攻撃の準備を進めている。
下のフロアでみたタナトスよりは威力が低いのかもしれないが、傍から見れば十分に敵を屠るだけの威力があるように見える。
麒麟の周囲では砕けた塔の破片が浮き上がり、既に彼らの周囲は高密度のエネルギーによって一種の異界と化しているのかもしれない。
善だけでなくアイギスらも彼を止めに向かおうとするが、向かおうとする者たちは全員が自我持ちのペルソナらに捕まり向かう事が出来なかった。
そうしている間にチャージが終了したのか、麒麟を包む眩い光は柱状になっている。
放てば確実に大蜘蛛と共に玲も消え去る攻撃の準備を終えた湊は、

マフラーから九尾切り丸を取り出すと、その刀身に淡い光の紋様を浮かび上がらせた状態で剣を光の柱に突き刺した。
途端、麒麟を覆っていた光が九尾切り丸に吸収されていき、今度は九尾切り丸が時折電気を爆ぜさせながら光を纏っている。
まさかペルソナのスキルを武器に喰わせるとは思わなかったので、これにはベルベットルームの住人らも目を見開いているが、光を纏った武器を手にしていた湊は片手でそれを持ったまま構えると、敵を睨み付けたまま音を置き去りにするような速度で剣を横薙ぎに振り切った。
《ギュラァァァァァァッッ!?》
横一閃に敵を切り裂くように伸びる雷の刀身。
極限まで密度を高めた雷は、名刀を超えるほどの切れ味で残っていた盾ごと大蜘蛛を切り裂き消滅させた。
囚われていた玲は敵の消滅と同時に解放され、床の上に降りてくると目を開いて何が起こったのかと困惑した表情を浮かべている。
だが、そんな玲の様子とは対称的に、彼女が無事に敵から解放された事にメンバーたちは安堵の息を吐いていた。
直前までは湊が敵ごと殺すのではと焦っていただけに、今はどうにか無事だった事に心底ホッとしていた。
湊も光が治まった九尾切り丸をマフラーに仕舞っており、それを確認したメンバーらは今のうちに玲を保護しようと歩き出すのだった。

第三百十七話　時の神

――時計塔・頂上

湊が雷の力を宿らせた斬撃を放ち機械仕掛けの大蜘蛛を倒せば、囚われていた玲は解放され意識を取り戻した。

状況が把握出来ず混乱しているようだが、善たちが彼女に近付いて行くと、時計塔の前で彼らに吐いた言葉を思い出してか玲は顔を俯かせる。

だが、そんな彼女の苦悩を理解している善は、構わず彼女の前に立って優しく声をかけた。

「玲、大丈夫か？　君を助けに来た」

「……善」

声をかけられ玲が顔を向ければ、どこか疲れた様子で笑う善の姿があった。

囚われている間、玲はただ眠っているような状態にあったが、どこか夢を見ているような心地の中で外の情報を得ることが出来た。

自分が捕まってからまだ一日も経っていない。

だが、これまでのダンジョンよりも遙かに広くて階層の多い時計塔を、彼らはたった一日で全て攻略して助けに来てくれた。

一人の青年だけ無傷なのはどこか不思議な感じだが、他の者たちは服などが汚れて疲労が顔に出ている。

それでも玲の無事を喜んで笑顔を見せ、玲の前までやってくると雪子が少女に手を差し伸べた。

「玲ちゃん、一緒に帰ろう？　校舎に戻って、それからちゃんと話をしようよ」

「……駄目。駄目なの、まだ……」

玲の事情は分かったし、それを自分たちで解決することが出来ないことも理解はしている。

ここにいる者の中で〝死〟というものを正確に理解出来る者など、そういった機能を持って生まれた湊しかいない。

だが、仲間が苦しんでいるというのに、理解出来ないからと言って

諦めるなんて事は出来ない。
完全に理解出来なくとも理解しようと努力し、相手の心の重荷を少しでも負担することは出来るはず。
まだ帰れないと雪子の手を拒む玲に、鳴上と花村も笑顔を向けて話しかけた。
「玲、君の境遇を知った今じゃ気持ちが分かるなんて言えない。でも、君の話をしっかりと聞いて、そして俺たちの話も聞いて欲しいんだ」
「ああ。ここに来るまでに善も大変だったんだぜ？　玲ちゃんを苦しめたっつってブチ切れた有里に殺されかけたりな」
花村の話を聞いて玲は心配してハッとした表情で善を見る。
湊の強さの秘密などは何も知らないけれど、他の仲間たちの力を足し合せても彼に届かない事は知っている。
そんな青年が本気で善を殺そうとしたと聞けば、誰だって心配して当然だ。狙われたというのが自分とずっと一緒にいてくれた少年で、さらに自分に関することが原因であれば尚更。
少女の瞳が善の全身に向けられ、最後にジッと自分を見ていた瞳と視線が合う。
対して、揺れる瞳で見つめる玲の不安を読み取った善は、こんな状況になっても彼女が自分を心配してくれる事に安堵と喜びを感じながら、ただ相手を安心させるように腕を広げて怪我がない事をアピールしながら微笑む。
「大丈夫だ。湊の行動は君を想ってのものだった。そして、間違っていたのは、考える事を、君を理解しようとすることを放棄していた私だった」
湊に指摘されるまで善は自分の罪を明確に認識出来ていなかった。
自分のした事が原因で彼女を苦しめた事は分かっていたが、どうして彼女が自分の瞳を抉ろうとするほど苦しんでいたのか分からなかった。
今も彼女の気持ちは理解出来ていないし、人として生まれず人々の中で生きてこなかった以上、玲の痛みと苦しみを本当の意味で分かる事はないのだろう。

ただ、それでも考える事を、理解しようとすることをやめてはならないと湊から教わった。
考えて、気付けたからこそ、善は彼女に言葉を伝えようと思うことが出来た。
ここから戻ってからそれを伝えようと思っている善が、雪子らと共に玲に帰ろうと伝えれば、それを聞いた玲はどこか怯えた様子で声をあげた。
「ちがうの。そうじゃない。皆、皆にげて！」
玲の叫びが辺りに響くと、突然、時計塔が揺れ始めた。
何が起こったのか混乱する者たちは、その場にしゃがみ込んで揺れに耐える。
すると、機械仕掛けの大蜘蛛がぶつかった事で割れていた時計盤から針が動き出し、丁度十二時の状態になると時計盤から外れて、傍にあった歯車の中央に突き立った。
どこか鍵穴に鍵を差し込んだような印象を持たせるそれは、垂直に刺さったまま時計回りにカチャリと動き、本当に鍵の外れるような音が響くと魔法陣が展開する。
だが、魔法陣の展開と同時に皆の足場の歯車が動いて広がって行き、周囲の光景を気にする余裕がなくなっているとそれは天より現われた。
《我はクロノス、時を定め時を与うる者……今こそ、己が蒔いた種を刈り入れよう……》
背には翼のように広がる複数の金色の歯車、鎧のような鋼に覆われた巨躯、赤い翼の付いた座のような浮遊機械、そして同じ赤い翼の飾りを頭に付けて善たちを見下ろすは時の神クロノス。
現われただけで膝を屈しそうになるほどの重圧を放つそれは、一目でシャドウやF・O・Eとは異なる格を持つ存在だと理解させられる。
湊の持つ蛇神が現われた時もそうだったが、神というのは顕現するだけで世界に影響を及ぼすらしい。
クロノスに最も近い場所にいた善は、玲を雪子に預けると風花たち

のところまで下がらせるように伝えてからクロノスを真っ直ぐ見つめ返した。
「そこにいたのか。私の、クロノスの〝力〟そのものである半身。何も感じない、何も悩まない。使命に従い残された時を狩る神。……玲と会う前の私よ」
《我よ。我の一部だった者よ。我の許に戻れ。さもなくば永遠の下に還るがいい……》
「……断る。私には、まだやるべき事が残っている。お前の許には戻らない」
クロノスとしての真の力を取り戻すため、敵は善に再び一つになれと言ってきた。
だが、善はそれをすぐに断った。
今の相手との力関係では、善が戻れば相手に取り込まれて善という人格が消える。
それでは玲に謝ることが出来ない。彼女が求めた物の答えを教えてやることが出来ない。
だから、お前を倒して自分は玲と共に帰るんだと善はボーガンを手に戦う意思を示した。
それに追従する形で他の者たちも武器を手に取り、機械仕掛けの神を真っ直ぐ見つめると、相手は抑揚のない声でありながら心の底から呆れた様子で言葉を返してきた。
《……愚かな。ならば、その身に刻まれし時をもって生を終えよ》
そう口にしたクロノスは魔力を集めた両手で親指と人差し指で三角形を作ると、それを善たちに向けて何かの力を放って来た。
目に見えないそれはどういった類いの攻撃なのか理解出来ず、攻撃自体が目に見えない事もあって全員の反応が遅れる。
すると、集団の中程にいた湊が一瞬で先頭へ移動すると、全身から黒い影の炎を放出して背後を守るよう壁を作り出した。
クロノスの放った攻撃はそれによって防がれ、先頭にいた湊以外は誰一人喰らうことなく終わる。
ただ、先ほどの攻撃がどういったものなのか気になった風花はアナ

ライズを掛けると、炎の壁を消していた湊に何かの力で焼き付いた数字のようなものが見える事に気付く。
「今の攻撃はなんでしょう？　何か、有里君にカウントのようなものが出ているんですが」
「〝刻命の歯車〟だ。そのカウントは時間と共に減少し、カウントがゼロになると死に至る……」
風花の問いに苦々しい表情を浮かべた善が答える。
クロノスだった彼は、クロノスの力そのものである敵の能力も当然知っていた。
しかし、途中まで自分についての記憶を失っていて、記憶を取り戻してからも玲を助けることだけを考えていたせいで、相手の持つ凶悪な能力について思い出すのが遅れてしまった。
幸いな事に湊が他の者が喰らうのを防いでくれたため、命の刻印を刻まれたのは湊一人。
けれど、最大戦力である湊がいきなり死の呪いを受けたと聞けば、他の者たちにも動揺が広がる。
最初に声をあげたのは、風花と共に湊をアナライズしていたりせだ。
「嘘っ、本当に数字が減っていってる!?　ちょっと、これヤバいよ！」
「解除方法はないんですか？」
「あれは時の神としての権能。魔法やアイテムでいくらかは遅らせる事は出来るが、死なない限りカウントを消すことは出来ないんだ。……すまない。私の落ち度だ。しっかりと思い出して伝えるべきだったというのにっ」
敵は明確に湊を脅威として認識していたはず。
己を殺し得るゼウスの力を宿す存在を警戒するのは当然。
だからこそ、確実に勝てるように初手から強制的に寿命を発現させる死の呪いを使ってきた。
相手の力を知っていながら、むざむざと仲間にそれを使われそうになり、あげく自身ごと他の仲間たちを救ってくれた青年だけに呪いを受けさせてしまった。

クロノスを殺せば呪いは解けるだろうが、タイムリミットまでに時を司る神相手に勝てる訳がない。
己の迂闊さで恩人を死に向かわせてしまった善は、後悔から色が変わるほど拳を握り締めた。
クロノスはそんな己の半身の姿に気をよくしたのか、先ほどの呆れた様子から一転して見下した様子で口を開いてくる。
《演者よ、お前たちはよく働いた。しかしなぜ帰らぬのだ。舞台の幕は下りている……。死ぬ定めの人ごときがなぜ我に立ち向かうのだ。人よ。庇護されるべき弱い種よ。望みとあらば、我の一部と共に消去せん……》
最大の脅威の死が確定した以上、残る者たちなど楽に倒すことが出来る。
湊と同じように死の呪いを刻むでもいい。時を止めてその間に魔法を放ってやるのもありだろう。
時に縛られる人の不自由さを知っているクロノスは、己の優位が動かない事を確信していたが故にそれに気付かない。
「――――ニコを苦しめたのはお前か」
クロノスの言葉を無視して青年が言葉を発した。
全身から薄らと影の炎を立ち上らせ、蒼い瞳の奥に怒りを宿す青年は拳を握り締めながら敵を睨む。
そこで彼を見ていたりせがある変化に気付いた。減少して行く呪いの数字が巻き戻っているという変化に。
「え、あれ？　カウントが巻き戻ってる。ていうか、どんどん増えていってるんだけどっ!?」
最初は〝七〟と表示され時間と共に減っていた数字が、見れば十三や四十と徐々に増えていた。
見ている間もさらに数字は増え続け、増える速度は徐々に加速すらしている。
もしも、先ほど善が言っていた事が事実だとすれば、今も敵を睨んでいる湊が自身に延長をかけ続けているのだろう。
ただ、その増えている数字と状況を説明すると、善と一緒にクロノ

スまで驚いた顔で湊を見ている。
《……馬鹿な。時の逆行。いや、己の持つ定命の改竄か。いずれにせよ、人という種に出来る事ではない》
クロノスがかけた〝刻命の歯車〟は言ってしまえば、湊の直死の魔眼と同系統の力を持った呪いである。
対象は寿命を持つ生物限定。即座に効果が発現するのではなく、カウントがゼロになることで寿命を終えさせるという遅効性ではあるが、刻んでしまえば強制的に死に至らしめる事が出来るのだ。
だが、今も身体から揺らめく黒炎を出している青年は、その呪いを力業で打ち破ろうとする。
終わり在る命が原因で死が発現するのならば、その終わりを時の彼方に追いやればいい。
人に不可能であるならば人である事を捨てよう。存在の変革。人から鬼へ、鬼から神へ。
立ち上っていた黒炎の勢いが増し、渦を巻きながら天へと昇ったとき。
「――――お前かぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
憤怒の咆吼によって、バキンッ、と呪いの壊れる音が鳴った。
蒼い瞳は凄絶な怒りと憎悪を宿した銀色に変わり、呪いを破壊するために使われていた力が解放され一瞬で形成された蛇骨がクロノスへと襲いかかる。
アルカナシャドウやF・O・Eを遙かに超えた巨躯を持つクロノスをして、馬鹿げた大きさだと感じるほど巨大な顎が開き迫れば、
《愚かなっ》
両腕を突き出して魔法陣が展開すると、クロノスは一瞬にして遠く離れた場所へと移動していた。
目標を見失った蛇骨は空しく顎を閉じるが、そのまま宙を泳いでクロノスを追い掛ける。
蛇骨が動く際に起こった暴風で他の者は立っていられず、その場にしゃがみ込んで何とか飛ばされないよう耐える。
『ぐっ……』

『きゃあっ……』
もしも、こんな場所から吹き飛ばされて転落すれば命はない。
皆それが分かっているからこそ、何とか耐えようと必死に床に掴まるようにして暴風に耐えた。
だが、クロノスしか見えていない青年は、何かに耐えるように身体を震わせながら歯を強く食い縛ると、身体から青白い光を放出して敵に手を向ける。
すると、クロノスを追って身体を蛇行させながら宙を進んでいた蛇骨に変化が起き、骨を黒炎が包みだすと何もなかった頭骨に銀色の瞳が現われた。
続けて骨を覆うように筋肉が形成され、さらに妖しい光沢のある黒い鱗に覆われた皮が出来れば、蛇骨は世界〝无窮〟として完全な姿で顕現し口の端から黒炎を漏らした。
「あああああああっ!!」
塔の頂上で敵を睨みながら湊がその場で拳を振るう。
何もない空間で拳を空振ったようにしか見えないが、空振った湊の腕には裂傷が出来て血が流れている。
一体何の反動なのか。彼の視線の先に答えがあるのかと他の者が視線を向ければ、完全体となった无窮が目に見えない何かを、バリンッ、と砕きながらクロノスを猛追していた。
敵の掛けてきた術なのか、それとも相手が身を守るために用意した術なのか。
ここからでは何も分からないが、魔法陣を展開して一瞬で離れた場所へ移動するクロノスに徐々に距離を詰めている。
敵もそれを認識しているのか、移動と同時に様々な属性のスキルを放っているが、それらは无窮の咆吼で掻き消されている。
「まだだっ、まだ……もっと力をっ!!」
現状、敵に无窮を倒すだけの手はなく、逆に无窮は徐々にだが距離を詰めているため、このままでも勝てるかもしれない。
しかし、青年はそれを良しとしない。玲を苦しめた存在を無へと還すため、さらなる力を求め二枚のカードを空へと投げた。

投げられたカードは死神〝タナトス〟と審判〝アベル〟。
湊本来のペルソナの力が分かれて生まれた二体のペルソナである。
その二枚を投げた彼は、今この場で自分の力を引き出すためカードを融合させようとする。
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
吠える彼の腕や身体には、无窮を呼び出す時と同様に湊の腕や身体に反動の傷が出来ていた。
この世界はかなり特殊で、イメージで力が変化する事もあれば、世界からの後押しのように力が得られることもある。
他の者にすればペルソナが通常よりも召喚しやすくなる程度の恩恵だが、そういった恩恵を使っても湊の行なおうとする召喚は多大なリスクを負っていた。
まず、今の湊には本当の意味で自分本来のペルソナを喚ぶだけの力が無い。
己の内に常に存在する无窮すら阿眞根になって初めて呼び出す事が可能になり、それと対を為しバランスを取っているペルソナもまた同様に召喚の難度は高いのだ。
だというのに、そんなペルソナがいるというのも茨木童子たちに聞いて知ったくらいだ。当然、どんな力を持ったどんなペルソナなのか知るはずもない。
それを通常よりも召喚しやすいという条件があるだけで呼び出そうとしている。
彼にどれだけの力があろうが関係ない。無謀を超えて浅はかと言うしかない愚行だろう。
それでも阿眞根となった事で部分的に自我を残しているだけの状態にある彼は、無理矢理に二つの力を一つにしようと試みた。
頭上のカードに向けて手を伸ばす彼を中心に魔力を帯びた風が吹き荒れる。湊の力を受けてカードを囲うように魔法陣で六面体が形成され、中は白い光に包まれ時折雷のような物が爆ぜているのが見えた。
今も无窮はクロノスを追って、何度か虚無属性である〝ＤＥＡＴＨ

〝の赤と黒の光線を放っているが、その攻撃は時を操るクロノスを捉えることが出来ないでいる。
だから新たな力をここで呼ぶ。通常のペルソナでは対抗出来ないのなら、神に届くだけの力を持ったペルソナをもう一体召喚するだけだ。
「――――来いっ!!」
暴れて溢れ出しそうになる力を無理矢理に押さえつけ、湊は魔法陣で囲われた二枚のカードを一つに束ねた。
そうして、魔法陣が消えて降りてきたのは〝世界〟のカード。湊自身も見たことのない彼本来のペルソナがそこには宿っているはず。
降りてきたカードのアルカナを確認した湊は、そのままカードを掴むと急に駆け出して塔の頂上付近にあった足場から飛び降りた。
「ちょっ、何やってんのっ?!」
思わず驚いて目を見開いていたりせが青年の突然の行動に困惑した声を出す。
他の者たちも彼女と同じ気持ちだったが、りせが声を発した直後に塔の下の方から何かが凄まじい速度で飛び上がっていった。
急に現われたそれは无窮に追われているクロノスの許へと一気に距離を詰め、相手の目の前まで出ると拳を振り抜いて敵を殴りつける。
相手を殴る直前に再び何かが割れるような、バキンッ、という音がしていたが、振り抜かれた拳はクロノスの胴体へと直撃し相手を大きく後退させた。
攻撃を喰らうと思っていなかったのか、クロノスは目を見開いて驚愕しているが、その視線の先には瞳の色が銀色になった湊とその背後に控える白銀の鎧を着た天使がいた。
白銀の天使はアベルとタナトスが融合し一つに戻った姿だが、今のそれはドイツで阿眞根になりかけた時に現われていたような不安定な顕現ではない。
目元を隠す黒いバイザーの付いた兜、身体を覆う細身の鎧には植物の蔦を模した金色の装飾が為され、背中には六対十二枚の光の翼が開

いている。
　大きさこそ通常のペルソナと変わらぬ程度だが、その身が纏う気配は対峙しているクロノスに勝るとも劣らぬ強さ。
　塔の頂上から対峙する両者を見ていたチドリは、初めて見る天使型のペルソナから感じる力に僅かに気圧されながら口を開く。
「何なの、あのペルソナ？」
《あれに本来、名など無い。蛇神が我らより生じた世界に向けられた怨嗟の呪いであれば、あれはこの世に溢れる助けを求める声を、願いを聞き届けようとする救済システム》
　光の翼を広げた天使と湊がクロノスへと肉薄する。
　二度もやらせるものかとクロノスは攻撃で牽制しながら、その場から離脱しようと魔法陣を展開した。
　逃げ出す敵を見ていた湊はマフラーから九尾切り丸を取り出し、それを上に放って天使にキャッチさせる。
　すると、九尾切り丸は突然蛍火色の光に包まれ、光が収まった時には天使に適合した大きさにリサイズされ金色の意匠が加わった大剣が現われていた。
　どのような能力で武器を造り替えたのかは分からないが、天使は手にした大剣を大きく横薙ぎに払い、クロノスが現われた一帯に光刃を飛ばした。
《何故、あんなものが八雲の心から生まれたのかは分からない。蛇神と均衡を保つに丁度良かっただけなのかもしれないが、あれは本来ならば現実世界で飽和した人々の願いによって〝現象〟として生まれるだけだった》
「現象としてって、完全に個としての姿を確立した存在になってるじゃない」
《ああ。八雲という意識体としての核を得たあれは、既にその役割を変えている。今のあれは救いを求める者を、弱者を救うためだけに八雲を願いを叶える存在へ昇華させるだけだ》
　アナライズなど使うまでもなく、それが通常のペルソナではない事は一目で分かる。

光刃を飛ばした天使は剣を手放し、今度は湊が投げた対物ライフルをその手に取った。
天使が手にした対物ライフルは先ほどの大剣と同じように光に包まれ、今度は白銀の砲身に金色の蔓の意匠が施された荘厳で美麗な銃に変化している。
「まさか、武器を取り込み己の一部にしているのか？」
湊が離れた事で立ち上がれるようになった美鶴が呟く。
大剣に続けて銃まで己の武器に変化させた事で、あの天使には通常兵器や武器をペルソナ用の武器に変化させる力があるのは確実だ。
シャドウの中にはモノレールのコントロールを乗っ取ったものや、旧日本軍の戦車に寄生していたものもいた。
それを思えば近しい存在であるペルソナに似た能力があってもおかしくないが、自在に武器を造り替えられるならば、ある意味、無限に対シャドウ兵器を造り出せるという事になるだろう。
単純な力も先ほどの飛翔速度や飛ばした光刃をみれば、タナトスだった時以上のものがあるのは分かる。
ならば、銃も同様に対シャドウ用の力を付与された状態で弾丸を放つのだろうと思っていた。
しかし、自身より上空にいるクロノスに向けて銃を構えた天使が引き金を引き絞り放ったのは、時計塔を飲み込めるであろう太さを持った極大の蛍火色の光線だった。
大気を振動させ轟音と共に放たれた光線は、回避しようとしていたクロノスの右腕を飲み込んで遙か上空へと消えて行く。
回避が間に合わなかった事で攻撃を喰らったクロノスは苦々しげな表情を浮かべているが、その右腕があったはずの部位は空間ごと抉り取られように綺麗に消失している。
无窮に追い立てさせながら天使と共に湊自ら攻勢に出ることで、ようやくダメージらしいダメージを与えられた。
時を操る権能の反則的な強さ見ていた一同は、時を操ることが出来ようが無敵ではないと理解して胸をなで下ろす。
だが、安堵の息を吐いている一同とは対照的に、先ほどの攻撃を見

ていた自我持ちのペルソナたちは険しい表情を浮かべていた。
どうしてそんなにも怖い顔をしているのか。疑問に思った七歌が赫夜比売に尋ねた。
「ねえ、どうして貴女たちは怖い顔をしてるの？」
《っ、あなたは先ほどの光がなんであるか分からなかったのですか？》
「え？　うん。初めて見るスキルだけど綺麗な色だなとは思ったけど」
あんな色の光をした攻撃スキルは見たことがない。
どこか温かさを感じる優しい光だったので、戦闘中ではあるが七歌は素直に綺麗だなと思っていた。
しかし、その言葉を聞いた赫夜比売たちはどこか怒りの籠もった瞳で天使を見つめる。
《あれは命の光。八雲自身の生命力を力に変換して放っているのです》
《攻撃すればするほど、八雲自身の命が失われてゆく。他者を救うため、強大な力を振るう代償に召喚者自身を食い殺す。それが貴様の能力か、セイヴァーよっ!!》
人の身で多くの奇跡を起こそうとする代償。そのために召喚者である湊の命を食い殺す救済者（セイヴァー）のペルソナ。
時を操る神に対抗するためとはいえ、あまりにデメリットの大きい力に七歌たちの表情は曇った。

第三百十八話　神殺しの槍

――時計塔・頂上

この閉じられた特殊な世界だからこそ、今の湊でも呼び出せた彼本来のペルソナ。

その名は、世界〝セイヴァー〟。

理不尽に晒される弱者を、救いを求める者たちを助けたい。そんな湊の想いを受け、湊自身をそれが実現可能な存在に至らせる特殊なペルソナだ。

シャドウと同じように武器を取り込み対異能の力を付与して造り替える力を持ち、それらは湊の意思で自由に解除出来る事から、セイヴァーさえいれば黄昏の羽根を使わずに対シャドウ兵器を量産する事が出来る。

ただし、武器を造り替える度に召喚者の生命力を消費するため、並みの人間であれば二つも作れば動けなくなるほど衰弱してしまう。

《それに加えて先ほどの攻撃だ。蛇神は八雲の心を喰らおうとするが、セイヴァーは八雲の命を喰らっておる。他の攻撃手段を持たぬのであれば、八雲は己のペルソナによって命を奪われるぞ》

高速で飛びながらクロノスを追う湊は、セイヴァーに持たせた銃から何度も蛍火色の光線を撃っていた。

それは湊の生命力をエネルギーに放たれており、クロノスの片腕を完全に消失させる威力を持っているようだが、撃つ度に湊の命が失われ死が近付いている。

自分たちでは時の神の権能に抗えないと分かっている茨木童子は忌々しそうにみているが、他の者たちは遙か上空で行なわれる神同士の戦いに言葉を失っていた。

＊＊＊

クロノスが現われた時点で学校の敷地に掛けられていた結界が消え、今は自由にこの世界を飛び回る事が出来ている。

湊は自分がセイヴァーと共にクロノスを追って飛んでいる間に、无窮を遙か上空へと送って旋回させていた。

あれは本来、門としての力を持っている。ここで門を開けばどこと繋がるのか分からないのでやめておくが、門として使う以外にも鏡として使う事も出来た。
（无窮が鏡になるまで時間を稼ぐ。あいつも、この世界も、すべて破壊する）
攻撃を放つ度に自分の生命力がごっそりと消えている事は分かる。
今はほとんど阿眞根になりかけているのですぐに死んだりはしないが、今のペースで戦っていれば五分もせずに生命力が枯渇し完全に死ぬだろう。
いくら死んでも蘇生が掛かる湊であっても、素になる生命力が枯渇すれば蘇生する事は出来ない。
初めて召喚した事でセイヴァーの能力を知った湊は、どうして神クラスのペルソナはどれもピーキーな性能をしているんだと心の中でうんざりする。
けれど、そんな事に僅かに割いた思考もすぐに視線の先にいる存在への怒りで塗り潰される。
《愚かなっ。弱き人が何故神に楯突くかっ!!》
ゼウスの力を警戒して逃げ続けるクロノスを追えば、敵はいくつもの魔法陣を展開してそこから炎や氷を撃ちだしてくる。
どれも広範囲に向けて放たれているが、その威力は大型シャドウを一撃で消し去る事が可能なレベル。
直進していた湊は大きく迂回して躱しながら、再びセイヴァーに銃を構えさせて攻撃を放つ。
セイヴァーの使う攻撃はデスや无窮の放つ虚無属性〝ＤＥＡＴＨ〟とは対極な力だ。
生き物だけが持つ生命力をエネルギーとして増幅させ放っているに過ぎないが、生命に死という概念を与えたニュクスの子であるシャドウやペルソナは、生の概念をぶつけられると存在を維持出来なくなる。
クマや綾時のように自我を確立していれば消える事はないが、それでもシャドウとしての力に干渉を受けてダメージを負い。しばらく

はただの人間と同じ力しか使えなくなる。
逆に普通の人間であれば喰らったところでダメージはない。
命を素にした生命属性の力は言ってしまえば回復魔法の一種なのだ。
それ故、建物などに当たっても破壊する事がないので、完全に異能殺しとしてだけ存在する力と言って良い。
シャドウを憎む湊だからこそ得た力。それを今は神を騙る存在にだけ向けて放つ。
ゴウッ、と音を響かせながら空を走る命の光は、射線上にあった魔法を貫いてクロノスへと迫る。
回避が間に合わないと判断したクロノスは、氷で物理防御を張って弾かれながら後退したが、よく見れば座のような乗り物の翼が一部消えている。
それを見た湊は口の端を吊り上げてクロノスへと再び迫る。
《度し難いほどに愚かだ！　ならば、時の流れに呑まれるがいいっ！》
再び傷を負ったクロノスは背後に一際大きな魔法陣を展開した。
そこから何かの力は放たれると、彼らのいた閉じた世界の時が完全に停止した。
クロノスへと迫っていた湊も、遙か上空で環になって旋回していた无窮も、全ての存在がその場で停止している。
これまで何度も〝時の跳躍〟で攻撃を回避していたクロノスは、湊がそれを何度も妨害してきた事で、彼に時への耐性がある事は気付いていた。
だからこそ、今発動した奥義〝時の停留〟にも対応される事を危惧していたのだが、どうやら彼は時が加速する程度までしか対応出来なかったようだ。
無事に相手を止める事が出来たクロノスは、しかし、いつまでも時を止めておく事が出来ないと分かっているからこそ知恵を絞る。
普通に考えれば湊を攻撃して排除するのが正解だろう。
明らかに一人だけ実力が異なっている。時の跳躍という時流操作を用いた加速回避を行なっているクロノスを、純粋な力のみで追いつ

き追い詰めてくるのだ。
今の状態で徐々にダメージを負い始めている以上、長引けば先に倒れるのは自分かもしれないという恐ろしさが相手にはあるとクロノスも気付いている。
だが、湊は他の者たちを守って一人だけで神に挑んでいる。
もしかすれば、他の者でもいくらかはダメージを与えられるかもしれないが、湊ほど明確に戦える力を持つ者がいないという事だろう。
それを思えば先に湊が守っている者たちを排除し、仲間がやられている事に動揺した隙を突いた方が良いかもしれない。
何度も攻撃を受けたことで憤っていたクロノスは、ここで人間のように敵が苦しむ事を望んで攻撃を放ってしまった。
しかし、この時クロノスは神として己の力と存在に自負があったからこそ、湊ではなく他の者を狙った本当の理由に気付けないでいた。
圧倒的に有利な状況であっても、湊を殺せるヴィジョンが全く思い浮かばなかったという本当に理由に。
そうして、停止した世界で自分だけが動けるため、出来る限りの威力を込めてメギドラオンを放つ。
塔目掛けて天より降る極光は、神話の一ページにある神の裁きを彷彿とさせる。
誰一人己の死の瞬間を知る事なく消えて行く。そして、それを知った神に楯突く愚か者も後を追う。
自分の思い通りに事が進むと確信していたクロノスは、そこでギギギと油の切れた機械から聞こえるような異音が鳴っていることに気付く。
音の出所は二箇所。遙か上空の蛇神と空中で停止している天使だ。
時の停留が解けるまではまだ時間がある。だというのに、〝世界〟に至った二体のペルソナは術に抗い動き出そうとしている。
時が止まった世界は、時の神だけが自由に動くことを許された世界。
その理を捻じ曲げようとする存在とは一体何なのか。
人という弱い種から生まれながら、己の理解を超えた力を持った存

在に、クロノスは生まれて初めての恐怖を感じた。
速く、出来るだけ速く、塔にいる者たちを消し去れと、自分が放ったメギドラオンに思わず願う。
もう十秒と掛からず直撃するだろう。それが済めば自分の勝ちだとクロノスが湊への追撃準備に移れば、天使の方からバキンッと何かが壊れる大きな音が響いた。
そして、
「させるかぁぁぁぁぁぁっ!!」
時の停留から自力で抜け出した天使と青年から時を操る気配を感じた直後、天使が先ほどのまでのクロノス同様一瞬でメギドラオンの射線上に現われる。
そのタイミングで時の停留が解除され、時計塔にいる者たちは急にメギドラオンが自分たちに迫っていて焦っている。
けれど、射線上に自ら移動していた青年は、天使を操り両手を前にかざさせる。
「セイヴァー、アイアスの盾を展開しろっ!!」
青年の言葉に従うように、天使はそこに時計塔を覆い隠すほど巨大な虹色の盾を展開した。
アイアスの盾とは、ギリシャの英雄である大アイアスの持っていた多重構造の堅牢な盾の事。名だたる英雄の矢や投げやりを全て防いだという逸話を持っている。
だが、ただ丈夫であれば良いのなら湊はこれをアイギスに因んで〝イージス〟と名付けただろう。
それを敢えてアイアスの盾と名付けたのは、その所有者が死の際に流した血からアイリスの花が咲いた伝説があるからだ。
百鬼菖蒲とイリス・ダランベール。二人の母親との繋がりを大切にしているからこそ、青年は母の名を冠する花と縁のある盾の名をスキル名として付けた。
全てを守る虹の盾、アイアスの盾と。
「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ!!」
展開した虹の盾がクロノスの放った極光と衝突する。

バチバチと魔法同士が衝突して弾ける事が響くが、アイアスの盾は防御不可能なはずのメギドラオンを受け止め防いでいた。
これが破られれば全員が死ぬ。そんな事はさせないと湊が強く〝守る〟意思を持ったとき、彼の精神において盾の側面を司るセイヴァーに変化が起きる。
「セイヴァーの姿が変わっていく……」
自分たちを盾で守ってくれている湊を見ていたアイギスが小さく呟く。
先ほどまでのセイヴァーは白銀の鎧に身を包んだ騎士のような天使だった。
だが、今はその頭上に極光の光輪が現れ、目元を覆っていた黒いバイザーの奥に右眼三つ左眼四つの計七つの赤い瞳が光り、背中の翼が光の粒子状態で放出され始めていた。
冥王状態のタナトスの翼も似たような形状だったが、セイヴァーのそれは規模が違う。
塔から少し離れた場所にいるため大きく開いた翼がよく見える。それは神に等しき力を持っていたと言われる大天使メタトロンと同じ三十六対の翼だった。
光の粒子状態で放出されていながら、多数の翼を形作っている不思議な光景。
だが、真に驚くべきはその翼がアイアスの盾とぶつかり弾かれた攻撃の余波を防ぐ盾になっていることだった。
頭上からの攻撃をアイアスの盾で防ぎ、逸れてしまった攻撃の余波を翼で包み盾にする事で完全に守り切る。
塔から見ている者は虹の盾と光のヴェールに守られているようにしか見えないが、盾が破られれば死ぬという状況に置かれながらも誰一人として恐怖を抱いていなかった。
そして、神の裁きを模した天上からの一撃は、天使によって全て防がれ終わりを迎える。
遙かな高みから全てを見ていたクロノスは、時計塔だけでなく学校の敷地全てを守っていた虹の盾を忌々しく睨み付けた。

あの盾さえ、あのペルソナさえ居なければと。
しかし、この時、クロノスは己の感情に従うのであればすぐにでも逃げ出しておくべきだった。
自分の最高の攻撃を防がれ、逆に敵には自分を消し去るだけの力があると認識していたのだ。
それが分かっているなら、この閉じた世界での〝やり残し〟でしかない玲の事は諦め、力のない自分の半身など見逃してやればよかった。
使命を優先しながらも、自分の力に驕っていたからこそ、消えてゆく虹の盾の向こう側に雷を纏う捩れた金色の槍を構えた天使がいる事に気付くのが遅れた。
「――――ロンギヌス」
それはイエスを刺したローマ兵の名を冠したあまりにも有名な聖槍の名。
神話にて神々が扱った武器ではなく、只人の持った武器が祀り上げられたからこそ力が宿る。
上体を反らし勢いをつけながら投擲された金色の槍は、音速を軽く超えて空気の壁を突き破り天へと昇ってゆく。
時計塔から天まで金色の軌跡を残しながら放たれたそれは、攻撃に気付いて慌てて展開した魔法陣ごとクロノスを貫き一撃で消滅させる。
ゼウスの雷霆を付与した神殺しの槍だ。全ての弱点を込められた事で、それはクロノスにとって文字通り必殺の一撃となった。
弾けるようにバラバラになって消えたクロノスの欠片が雨のように降り注ぐ。
善と玲はそれを複雑な表情で見ているが、他の者たちの視線はクロノスが元いた場所のさらに上空に向けて固定されていた。
「あれって……前に八雲君が開いた門だよね？」
「たぶん。けど、あの槍そこに向かってない？」
話していた七歌とゆかりの視線の先には、无窮が姿を変えた巨大な神鏡があった。

二人は神鏡と神門の違いをよく理解していないようだが、以前より少しばかり小さいそれは複雑な模様が刻まれた銀色の縁に黒い鏡面が妖しく光っている。
かつて、退行した八雲がそれを利用して世界を終わらせようとした事があるため、こんな場所で何をしようとしているのかと不安になるのはしょうがない。
だが、さらに問題なのはセイヴァーの投擲したロンギヌスが神鏡へ真っ直ぐ向かっているのだ。
神殺しの槍と蛇神の鏡が衝突した時、何が起こるかなど自我持ちのペルソナやベルベットルームの住人たちですら分からない。
ただ、神を殺そうとしていたあの青年の考えた事だ。どうせろくでもない事なのは確実だろう。
全員が嫌な予感を感じて見ていれば、天を突く光の柱と化した聖槍が黒い鏡面へと吸い込まれてゆく。
金色の槍が吸い込まれた鏡面は、一瞬だけ同じ金色に光り輝くと直後に火山の噴火のように無数の炎の槍を吐き出した。
吐き出された炎の槍は玲の記憶から再現された稲羽市へと降り注ぎ、次々と道路や建物を破壊し尽くしてゆく。
「あわわわ！　クマたちの住んでる街がなくなっていくクマよぉ」
「なんつーか。偽モンって分かってても複雑な気分っすね……」
降り注ぐ炎の槍は一つ一つが数十メートルあり、それが遙か上空から落ちてくるのだから一種の質量兵器と化している。
さらにそれが炎を纏っているため残った瓦礫すらも燃やし尽くしてしまう。
自分たちの知っている街が完全に破壊され、燃える荒野になっていくのを見ていたクマや完二は偽物だと分かってはいるが止めて欲しそうにしている。
けれど、その攻撃を放った青年はまだ塔へと降りてきておらず、変化した姿のセイヴァーに二叉の金色の槍を持たせて、二叉になった部分から光の刀身を出して巨大な剣にしていた。
まさか、それを使ってさらに街を壊すつもりなのだろうか。

そう思っていると光の刀身を黒い炎が覆い。そのまま剣を振り上げて湊がスキル名を呟いた。
「――――ラハット・ハヘレヴ・ハミトゥハペヘット」
聞いている者たちは何を言っているのか分からない。
そも、今どうやって発音したのだと聞きたいくらいだったが、青年がスキル名を呟くと刀身に纏っていた黒炎が激しく燃え上がり、セイヴァーはそのまま剣を振り下ろして黒炎で街の全てを薙ぎ払い燃やし尽くした。
炎の槍が止み、黒炎が治まれば、そこには濛々と煙が立ち上っている不毛の大地だけが残っていた。
一応、ここは玲の思い出から作られた世界なので、自分の記憶にあった景色が荒れた大地の広がる姿にされて玲は少し泣きそうになっている。
どうして彼がこんな事をしたのかは分からない。けれど、上空に居た蛇神を消し、セイヴァーのみを残した状態で空にいた彼は、合掌した体勢で瞳を閉じて集中していた。
「もうやめてよぉ。あたしらの街に何の恨みがあるのさー！」
「いや、別に先輩は街自体には何の恨みもないと思いますよ」
「うちの旅館もなくなっちゃった……」
「だ、大丈夫だって。プロデューサーが壊したのはこの世界の街だから！」
自分の街が完全になくなり涙目になっている千枝と、あれだけ嫌っていたというのに実家がなくなって落ち込んだ様子を見せる雪子。
転校してきた後輩たちが頑張ってその二人を慰めるが、慰めている二人もこれ以上は止めて欲しいと内心では思っている。
けれど、まだ何かしようとしているのは見ていれば分かるので、どうか街だった土地を壊す以外の方向で頼むと八十神高校側のメンバーは祈りを捧げた。
すると、合掌していた湊が目を開いて両手を左右に広げている。
ついに来るのかと全員が身構えれば、彼を中心に何かの力が拡散していった。

「……っ、周りの風景が変わっていく」
彼が何をしたのか不思議に思っていれば、善が最初にその変化に気付いた。
荒れ果てた大地だった場所が緑に覆われ始め、平坦だった場所に自然豊かな山が連なってゆく。
丘には花が咲き誇り、谷には大きな川が流れ、山の中程にある岩肌から滝が流れ落ちていた。
太陽の光が反射して輝く緑の美しさ、風に運ばれて届く草木の匂い、そしてどこまでも澄んだ空気という現代では失われた風景を前に一同は思わず呆けてしまう。
だが、かつて存在したこの風景を知っている自我持ちのペルソナたちは、どこか懐かしむように景色を目に焼き付けている。
何故世界が塗り替えられたのか。この風景は一体どこのものなのか。様々な疑問を持った者たちはゆっくりと降りてくる青年が到着するのをひたすらに待っていた。

第三百十九話　少女の生きた意味

――時計塔・頂上

セイヴァーによって破壊し尽くされた稲羽市は、湊の力によって自然豊かな世界に塗り替えられた。

現実世界からやって来た湊や鳴上たちを除き、この世界には命が存在しない。

学校にいる生徒たちはあくまで人を模したシャドウの亜種だ。

しかし、湊によって塗り替えられた世界には鳥や蝶が飛んでいるのが見えた。

流れる清流には魚がいて、山の中には鹿や猪だっているかもしれない。

どうして命が存在しないはずのこの世界に生き物がいるのか。

不思議に思いながら七歌たちは情報を持っているであろう湊が降りてくるのを待った。

クロノスを完全に消滅させて戻ってきた湊は、瞳の色がまだ銀色のままだ。

クロノスを殺し終えた事で目的は果たされたはずだが、どうして阿眞根から戻っていないのか。

彼が着地すればセイヴァーは再びタナトスとアベルに分かれて湊の中に戻る。

けれど、湊の瞳は変わらず、その放つ気配も薄まりはしているが人のそれではない。

今の彼が阿眞根なのか湊なのか分からないままでは不安なアイギスは、意を決して湊に声を掛けた。

「八雲さん？」

「……なんだ」

「あ、いえ。瞳の色が銀色のままでしたので」

「エネルギーが多過ぎるんだ。しばらくは治らない」

今の湊は生命力は減少しているが、ペルソナを呼び出す際に消耗するエネルギーは膨大に持っている。

本人も非常にアンバランスな状態だとは思っているものの、わざわざスキルを無駄撃ちしてまでエネルギーを減らす必要はないだろう。
半分だけ神になっているだけでそこには湊の意識がしっかりと存在する。
アイギスが確認したことで言葉も通じると分かった。
ならばと茨木童子が変化した景色に視線を向けたまま青年に話しかける。
《八雲、お前はこの景色を見たことがあるのか？》
「……ない。ただ、クロノスが維持していた部分を自分の力で覆った結果がこれだ。よく分からないが俺由来の何かなんだろうな」
湊自身も色々な場所に行って過ごしていたので、秘境とも呼べそうな自然豊かな場所にもいくつか心当たりがある。
けれど、今ここにある景色はそのどれとも違うとハッキリ分かる。
あくまで作られたものだからそう感じるのだと本人は考えたが、違っていて当然だと赫夜比売が微笑みながら答える。
《八雲。この景色はわたしたちが生きていた時代の景色に似ています。神が自然に宿り、世界に根を下ろしていた時代に》
《まぁ、これは八雲の精神世界が浸食しただけだがな》
どこまでも自然が広がる命の息吹に溢れた世界。それが湊の精神世界だと聞いて他の者たちは驚く。
湊の敵への怒りと憎しみは世界を灼くほどのものだ。片鱗に触れただけで他の者では動けなくなるものを、十年も彼は色褪せさせる事なく抱き続けている。
そんな彼の精神世界が今目の前に広がる美しい世界だと聞いて誰が信じられるだろうか。
流石にそんなはずはないだろうと思ったが、あえて口にする者がいなければ、メティスがどこか納得したように頷いている。
「あ、やっぱりそういう感じなんですね。これなら魂の受け皿としては最上級というか。染まらずにいられるのも納得です」
魂の受け皿という不穏なワードは恐らく身に宿した神〝ベアトリーチェ〟に関するものだろう。

意思を持った他人を自分の精神に入れれば、その分だけ心が染まって人格にも影響を及ぼす。
それを何の変化もなく、これまでずっと心の中に住まわすどころか魂レベルで融合まで果たしている。
これは全て青年の受け入れる力が、他の者の想定を遙かに超えて高いからこその芸当だ。
ただ、どうして綺麗な景色を見ただけでそう思ったのか理由が知りたい。
そう思った鳴上や花村が理由を知るメティスに教えて欲しいと声を掛けた。
「どうしてメティスはこれが有里の心の世界だと納得出来るんだ？」
「皆さんがテレビに落とされたときも世界が作られたでしょう？　それと同じですよ」
「いや、俺たちの場合はあの世界で関係する場所に落ちただけだろ？」
「それは稲羽市の人たちの共通意識で作られた世界だからです。皆さんの意識もそこに繋がっていたから、その世界の中で自分の心の姿が反映されたんです」
自分から迷いこんだ形だった鳴上、花村、千枝は若干異なるが、雪子や完二といったテレビに落とされた者たちは、全員が自分の精神にマッチしたような場所にダンジョンを形成していた。
あれはそういう場所にそれぞれが飛ばされたと思っていたのだが、実際には彼らがそこに居たからこそ出来た施設だったのだ。
つまり、湊がクロノスから支配権を奪った事で形成されたのであれば、それは即ち湊の精神に由来するものであるということ。
メティスがそのように説明すれば、しかし、いまいち信じられないのか千枝とりせが疑ったような視線を彼に向ける。
「んじゃあ、マジでこの半端なく綺麗な景色は有里君の心の世界ってこと？」
「プロデューサーってば似合わな過ぎでしょ。汚いダウンタウンとかのがピッタリなイメージなんだけど」
「……どうでもいい。それよりクロノスは排除したんだ。用事を済ま

す」
この世界の景色が変わった理由が湊にある事は事実で、その景色も確かに彼の精神に由来するものなのだが、元からベルベットルームの住人たちの許で魔法に触れてきた湊ほど他の者の理解は深くない。
そのため、これ以上の説明は無駄だと湊は背を向けて歩き出し、そのまま善の傍にいた玲へと向かってゆく。
彼女は自分が原因で皆が強大なF．O．Eやクロノスと戦う事になったと思っているようで、とても申し訳なさそうにしながら視線を俯かせていた。
少女のそんな様子に構わず近付いた湊に、善は少しだけ警戒した様子を見せる。
「湊、今の玲は……」
「それはお前の仕事だ。俺は俺の用事を済ませる」
彼女が己の死と向き合えないのは、その生に意味を見出せていないから。
ならば、彼女が納得するような形で命の意味を教えてやれば良いだけの事だが、湊は自分がその役目を果たす気はない。
誰よりも彼女の事を考え、人としての心を手に入れた善の言葉だからこそ届くものがある。
そう思っているからこそ、青年は善に自分の役目をしっかりと果たすように伝えた。
それを聞いた善は少しだけハッとした表情をしてから、すぐに強い意志の宿った瞳で見返して頷く。
善は玲を助け、彼女の心を救うためにここまでやってきたのだ。
今更その想いがぶれることはないし、助けた以上は心も救ってみせる。
自分をここまで連れてきてくれた仲間のためにも、己の過ちによって苦しみ続けている少女のためにも。
そうして、短いやり取りで善が納得したように場所を開ければ、湊が目の前に立ったことで玲の肩がびくりと震える。
先ほどまで大気を震わすほどの怒りを放ち、その力によって閉じた

世界を支配していた神を殺して見せたのだ。
あれだけの力を持つ者であれば、魂の欠片でしかない玲の存在など腕の一薙ぎで消せるだろう。
自分が彼らに迷惑を掛けたと思っている少女は、その罰を受けさせられるのだと思って俯いたまま瞳を強く閉じる。
そして、衝撃が自分を襲うと思って構えていれば、次の瞬間、玲の顔や手に生暖かい液体が掛かった。
「……え？」
「湊、君は何をっ!?」
「八雲さんっ!?」
善やアイギスなど、周りの者の驚きの声に反応して目を開ければ、少女の目には強烈なまでに鮮やかな赤色が飛び込んでくる。
少女はその色を知っている。自分の顔や手を濡らした赤い液体の正体が何かも。
だが、何故それが今ここにあるのか。そして、視線を上げた所にあった青年の手にある脈動するモノは何なのか。
理解が追いつかず頭は混乱したままだが、それを失った青年が死んでしまうと思った玲は、かつて別の少女がしたように彼の手で脈動するモノを奪って彼の胸に空いた穴に戻そうとする。
「ダメっ……死んじゃ、ダメっ……!!」
どうして彼は自分の心臓を抜き出したのか。
ここまで来て、あと少しで元の世界に帰ることが出来るというのに。
必死に彼の心臓を胸に戻そうとする玲だったが、その手を青年本人に掴まれて動けなくなる。
心臓がなくなって何故平然と動けているのか分からないが、焦る玲の目を覗き込むように見つめる銀色の瞳が不思議な光り方をしていると認識したところで、彼の心臓が蛍火色の光に包まれる。
「――――龍玉を」
《――――やめろ、八雲。その娘は反魂で蘇生させる事は出来ぬ》
《龍の心臓は肉体のあるものにしか効果がありません》

蛍火色の光は湊の生命力のはず。湊がそれで包んだ心臓を玲に与えようとすれば、自我持ちのペルソナたちが一瞬で彼の周りに現われ、その腕や身体を掴んでそれ以上動けないようにする。
古代中国などでは他の生物の爪や角を龍の爪や麒麟の心臓として重宝していたという。
本物の神の血をひき、神の器として作られた青年の心臓だ。
血だけでも瀕死状態の人間を癒やすだけの力を持っているのだから、茨木童子と赫夜比売が言ったように死者を蘇らせる力があってもおかしくはない。
湊が既に死んでいる玲を生き返らせようとした事に驚きながらも、しっかりと茨木童子たちの言葉も聞いていた七歌は、彼の心臓が〝龍玉〟や〝龍の心臓〟と呼ばれていた事である可能性に思い至る。
「……もしかして、特級五爪だけに許された力って」
神の血をひく九頭龍家は現代まで伝わる異能を持ち、それらは強さごとに分かれた等級が存在する。
最も弱いのが異能を持たない四級一爪、体内の気を多少操れる三級二爪、霊視が出来る二級三爪、魔眼が宿る一級四爪、そして始祖以来一人として存在しなかった最上位が特級五爪。
一級四爪までは過去にも数人目覚めており、七歌を含めて全員が瞳に異能を宿していた事で魔眼が真実だと理解されている。
だが、始祖であるユーリ以外に存在しない特級五爪の異能だけは、〝使用した者は死ぬ〟と、それだけの情報のみが伝わり、その具体的な力がどういったものであるか伝わっていなかった。
かつては、始祖の力を神聖視させるために存在しない等級を作り伝えていたのではとも言われた事もあったが、先ほどの会話に出てきた言葉が事実なら使用者が死ぬという話も頷ける。
「自分の、龍の心臓を与える事で対象を蘇生させる。それが特級五爪の力なんだ。だから、伝承で使用者が死ぬことのみ伝わってた」
普通の人間は心臓を抜き取れば死ぬ。けれど、特級五爪ともなると常人より生命力が高く、恐らくは反魂の術を掛けるまで生きられたのだろう。

始祖が自分の命を捧げてまで誰を蘇生させたのかは分からない。本人に聞けば教えてくれるだろうが、今の彼女は真剣な表情で八雲を止めていて話しかけることが出来ない。
ただ、心臓を破壊されても心臓が再生して生きている彼を、どうしてそこまで真剣に止めるのかという疑問が湧いた。
彼ならば使用者が死ぬという条件を無視出来る。それこそ心臓が再生する度にそれを与えて反魂の術が使えるはずなのだ。
誰よりも自分たちの異能に詳しい彼女たちならば当然気付くはず。それを止める理由として考えられるのは、反魂の術に必要な対価が〝龍の心臓〟だけではなく、使えば湊であっても死んでしまうからだろうか。
自我持ちのペルソナたちが一切の遊びも見せずに湊を止めていれば、彼も玲の蘇生を諦めたのか心臓を包んでいた蛍火色の光を消し、ペルソナたちの拘束が緩んだところで己の心臓を口に入れて飲み込んだ。
まだ脈打っている自分の心臓を丸呑みした彼を見て、グロテスクなものへの耐性が低いゆかりや千枝は固く目を瞑って震えている。
目の前でそんな事をされた玲は状況が飲み込めないようで目を白黒させているが、湊がフェニックスを呼び出して、自分と玲を炎に包んで汚れを浄化すると少し安心した顔を見せた。
「……よかった。はーちゃん、死んじゃうかと思った」
「別にこの程度で死んだりしない」
《たわけ。龍玉を使えば生命力が枯渇して死ぬわ》
《気をつけなさい、八雲。あなたの命を使うべきは此所ではありません》
やはり七歌の予想通りだったようで、反魂の術は湊であっても自分の命を対価に発動するような代物らしい。
それをよく知らない状態で使おうとするとは何とも湊らしいが、アイギスとチドリが怒った様子で彼の許に向かい。そのまま玲から引き離したところで叱っているので、彼が説教を受けている間に善に玲と話すように他の者が視線で促す。

他の者と視線を交わしてから頷いた善は、一度湊のことでパニックになったからか意識がはっきりした玲の前に立った。
「……玲、君と話がしたかった。」
「なんで？　こんなに皆に迷惑かけて、皆を沢山傷つけたんだよ？　死んでも迷惑かけて、私なんか、私なんか生まれない方が良かったんだよ！」
善が話しかけると、玲は己のせいで皆がシャドウと戦う事になり、怪我を負った事に対して罪悪感を感じていた。
クロノスの放った一撃を喰らっても湊が生きていたのは、偶然にもそういった術に耐性をもっていたからだ。
一歩間違えれば他の者たちも巻き込んで死んでいた。自分が死を受け入れてそのまま消えていれば、優しい人たちをそんな目に遭わせる事もなかった。
弱い自分が嫌になる。仲間に申し訳ないと思っているのに、まだ他の者たちを嫉む気持ちが残っている自分の浅ましさに情けなくなる。
「皆は学校に行けて、家族だっていたのに！　どうして何もない私は一人で死んだの⁉　私は何のために生まれたの？　ずっと苦しくて、死ぬまで嫉むことばっかりで！　私、何のために生まれて来たの⁉」
こんな事を目の前の者たちに言ったところで何も変わらない。
死に囲まれ、己の死すら視ても生き続けている青年だっているのだ。
そんな恐ろしい状態で世界に放り出された者と比べれば、自分など理不尽な境遇に不平不満を言ってるだけの我が儘な子どもなのだろう
それでも、だがそれでも、何も知らない者たちに少しでも良いから知って貰いたい。不満ばかり言っていた馬鹿がいたという形で良いから覚えていて貰いたい。
玲が心からの叫びをあげれば、少女の正面に立っていた少年が穏やかな表情で諭すように語り始めた。
「玲、私も湊から教えてもらった。〝生きた意味〟なんていらない。そんなもの、誰だって持ってやしない……。君がいた。君が生きてい

た。それだけで良かったんだ」
　善もずっと勘違いしていた。湊のように、七歌や鳴上のように、何かを為すことが出来る者しか〝生きる意味〟〝生きた意味〟を持たないと思っていた。
　しかし、それは違うのだ。何故なら、彼らの代わりが他の者には務まらないように、玲という少女の代わりをすることは誰にも出来ないのだから。
「君という存在は唯一のものだ。ヒトという種が生まれてからこれまで、そして、これからも未来永劫、君という存在は今この君しかいない。君は、他の誰でもない。だから君が為すことは全て、君にしかできないことなんだ」
「そんなのっ……」
「君がいたことで、君の周りはほんの少し変わっただろう。君の言葉で、嬉しいとか悲しいとかの気持ちを貰っただろう。そうやって、君はきっと誰かを変えた。反対に君も誰かに変えられてきた。その変化は君がいなければ存在し得なかったんだ」
　それは少女の求めた答えではないのかもしれない。
　話している本人ですらも、これが正解だとは自信を持って言えないような言葉だ。
　ただ、それでも少年は彼女に伝えたかった。今も続く世界に君は確かにいたのだと。
「君がいなくなっても世界は続くだろう。だけどその世界は、君が生きた世界だ。君が生きたことで、ほんの少しでも変わった世界なんだ。その世界の、小さな小さな歯車として君はいたんだよ。何かを為したから、生きたんじゃない。〝君は生きた〟。それこそが、君が、生きた意味じゃないのか？」
　彼女は自分の人生を最後まで懸命に生きた。
　それが彼女の生きた意味。何かを為すとか、何かを残す必要などない。
　生きただけで、玲は既に自分にしか出来ない事を為し、自分にしか残すことの出来ないものを誰かの中に残している。

善がそう告げれば、目に涙を溜めて玲は震える声で問い返した。
「私は……生きた……。私……生きたの……？」
「ああ。君は立派に生きた」
「……ありがとう。私、きっと……誰かにそう言ってほしかった……」
玲はそういうと大粒の涙を流しながら善に抱きつき、彼の胸の中で静かに泣き続けた。
彼女はただ見えなくなっていただけなのだ。自分の事に一生懸命で、ただ頑張って走り抜けるように生きてしまったから、簡単なことを見落としてしまっていただけ。
ようやく、玲の求める言葉を送ることが出来た善は安堵するが、それと共に彼女をこんな世界に閉じ込め苦しめ続けた事に後悔が押し寄せる。
「こんな、たったこれだけの言葉を求めていたなんて……。君をこんなに長く苦しめて、私は……ごめん」
「ううん。善、私、うれしいよ。私は生きたんだ。精一杯生きたんだって、この世界でそれを知ることが出来たんだから」
少し回り道をしてしまったかもしれない。
けれど、善はこの世界で玲を守り、彼女が旅立つ時をずっと待ち続けていてくれた。
人間よりもどこか人間らしい死神に、玲は心からの感謝を告げる。
「善、ありがとう。待っててくれて……。私、あなたと行く」
「……ああ。一緒に行こう」
自分の生きた意味を知った少女と、少女の心を救う事が出来た少年は、身体を離すとお互いに向き合ったまま微笑み合う。
そして、仲間たちの方へと振り返ると、手を繋いでこの世界を去ることを告げた。

第三百二十話　二人の旅立ち

――時計塔・頂上

玲を救出し、クロノスを倒し、彼女と善が話し合った事で少女は自分の死を受け入れる事が出来た。

周りで二人の話し合いを見届けていた者たちも、彼女の心が救われたのだと理解して安心した顔をしている。

もっとも、先ほどまでアイギスとチドリから説教を受けていた青年だけは、その手に煙管を遊ばせて暇そうにしており、本当にここから見える絶景が彼の心なのかと疑わしく思えてくる。

ただ、彼は己の心臓である龍玉を使った反魂の詳細を知らなかったのか、代償として自分が死ぬ術を玲に使おうとした。

優しさから彼女にもう一度命を与えようとしたのか、それとも己に課した他者を救う呪いの影響か。

どちらだったのかは本人にしか分からないが、少女が自分の死を受け入れた今ならば、彼が自分の命を使って生き返らせる必要もなくなった。

そうして、どこか晴れやかな表情になった玲が皆の前に立つと、深々と頭を下げて礼を言った。

「皆、助けてくれてありがとう。それと、私はもう大丈夫だから、善と一緒にこの世界から旅立ちます」

「ああ。私が責任を持って玲を送る。君たちには本当に世話になった。ありがとう」

力のほとんどを持っていたクロノスを倒した事で、時の神として力を善は失った。

玲の記憶の封印を解いた時に戻ってきた力では、死神として玲の魂を正しき流れに向かわせる事しか出来ない。

しかし、善はそれで良いと思っている。彼はもう小さな人と変わらぬ存在になってしまったが、おかげで玲と共に消えて行く事が出来るから。

他の者たちも彼らとの別れは惜しいが、それよりもずっと苦しんで

いた少女が笑顔で迎えようとする旅立ちを祝福したい。
だから今は、最後の時間を楽しく一緒に過ごそうと七歌が提案する。
「ねえ、帰る前に最後に遊んで行かない？」
「そうだな。俺もそう言おうと思ってた。善、玲、最後に皆で文化祭を楽しもう」
「ああ」
「うん！」
確かに黒幕を倒してこのままお別れでは少し味気ない。
もう一日待ってという事になれば、その後もダラダラと別れを先延ばしにしてしまいそうだが、
所謂遊び納めというのであれば学生パワーで全力ではしゃぐ事が出来る。
元の世界に帰ってから疲労で寝込んでしまうと分かっていても気にしない。
大切な仲間の門出を祝うというのだから、むしろぶっ倒れるくらいで丁度良い。
そう思ってメンバーたちが盛り上がっていれば、その輪の外から眺めていたエリザベスが暇そうにしている湊に声を掛けた。
「では、八雲様。今しばらく空間の維持をお願い致します」
「……まぁ、二、三時間の事なら大丈夫だ」
「リミットは三時間ほどですね。では皆様、その時間内で祭りをお楽しみください」
遊べる時間は最大で三時間。それくらいあれば十分遊べるはずなので、残りの時間を存分に楽しんでくれとエリザベスが説明する。
だが、何故残り時間を湊に確認したのか、そして、タイムリミットという不穏な響きの言葉を使った理由が気になった順平が理由を尋ねた。
「えーっと、なして有里に時間確認したんスか？　あと、時間を過ぎたらどうなるんで？」
「今、この世界はクロノスから八雲様に支配権が移っています。ただ、

八雲様も消耗しており、空間を維持出来なくなれば、この場の全員が時の狭間に放り出されます。時の狭間は理が不安定なので何が起こるか分かりませんが、とりあえず人がいきられる環境ではないので死ぬと思って頂いて結構かと」

世界の一部が塗り替えられた時点で薄々気付いている者もいたが、黒幕を倒した事でこの閉じた世界もかなり不安定な状態になっていたらしい。

皆が帰るまでに崩壊すれば大問題なので、そこに気付いていた湊はしっかりとクロノスを倒してから自分の力を世界に浸透させ、何とかしばらく維持しているのだとか。

けれど、湊は阿眞根化した際に生命力をスキルとして撃ち出していた。

精神力は感情をエネルギーに変換して余っているくらいだが、生命維持に必要な生命力はそうはいかず、不足していると常に疲労感や倦怠感を覚えて早急な休息が必要になる。

そこを押して皆がしっかりと別れるための時間をどうにか確保しているのだから、事情を聞いた者たちは頭が下がる思いだった。

「よっしゃー！　八雲君が時間を稼いでる内にいっぱい遊ぶぞ！　全員急いで校舎に戻れー!!」

『おぉぉぉっ!!』

時間がないなら少しでも急いで戻り、限界まで遊ぶしか方法はない。

七歌の号令に合わせて他の者たちも拳を突き上げ、走って時計塔の中へ戻ると転送装置を目指す。

ベルベットルームの住人らと共にそれを黙って見送った湊は、喉の奥から迫り上がってきた血をその場に吐き出すと、口元を拭ってからゆっくりと後を追った。

――校舎

最後の時間を共に過ごそうと、メンバーたちは玲と善を誘って文化祭の出し物を次々と回った。

初めてこの世界で一緒に遊んだ時のように、真田たちとタコ焼きを

食べたり、全ての味のアイスを重ねて絶妙なバランスで落とさないように食べたり、アイギスらと共に射的をして自分の力で景品を取ったりと時間はすぐに過ぎてゆく。
　この世界ともあと一時間でお別れ。そう思うと途端に寂しくなるが、ここで泣いては勿体ないからとアメリカンドッグを咥えて玲たちが次の場所を目指し走っていれば、ベルベットルームの住人たちと一緒に湊が椅子に座っていた。
　彼は遊ばなくても良いのかと思ったが、そちらを見ていると七歌が小さな声で、
「多分、八雲君は限界が近いんだと思う」
　と耳打ちをしてきた。
　この世界を維持するのにどれだけの力を消耗するのかは分からないが、彼は力業で死の呪いを解除したり、皆を守るために神の一撃を盾で防いで、さらにはクロノスを消滅させてくれた。
　玲のために限界を超えて神殺しを為してくれた事を思うと、少しでも消耗を抑えるために休んでいる彼を呼ぶべきではないのかもしれないが、最後に彼とも過ごしたかった玲が湊に声を掛けた。
「はーちゃん、大丈夫？」
「……気にするほどじゃない。俺は良いから遊んでこい」
「うん。……あ、でもね。小さいはーちゃんとも遊びたいなぁって」
　今、湊がこの世界を頑張って維持してくれているのは分かる。
　けれど、そうなると小さな八雲にお別れを言えないまま去る事になってしまう。
　だから、どうにかならないかなと湊をジッと見ていれば、彼は小さく溜息を吐いてから目を閉じると身体が光に包まれた。
　大きかった身体のシルエットは徐々に小さくなり、そのまま縮んでいくと思えば七歌たちくらいのサイズで止まった。
　随分と中途半端だなと思って光が治まるのを見ていれば、そこには小さな八雲を膝に乗せたベアトリーチェがいた。
　どうやら暗示で小さくなると戻るタイミングが不明になる事から、今回はベアトリーチェと交代して八雲を分離する方法を取ったらし

い。
急に呼び出された八雲はキョロキョロと辺りを見渡して、目の前に玲がいると分かると抱っこを強請るように手を伸ばす。
「まいまー」
「わぁ！　ありがとう、はーちゃん」
小さな八雲を抱っこすると玲は嬉しそうに頬をすり合わせて挨拶する。
モチモチでスベスベな赤ん坊の頬は温かくて気持ちが良かった。
逆に八雲の方はくすぐったいのか笑いながら身を捩っている。
自分の膝の上から八雲を取られたベアトリーチェは、それほど気にしていないのか八雲と目が合えば手を振っている。
八雲もくりっとしたどんぐり眼をベアトリーチェに向けると、信頼の乗った笑みで手を振り替えしている。
二人は元が一つの存在なので、離れていてもお互いの場所や状況を理解出来る。
だからこそ、ベアトリーチェが椅子に座ったまま待っているという事は、湊からの指示で八雲を貸し出す事に同意しているという事だった。
残り時間を小さな八雲と一緒に遊べると分かった玲は、八雲を高い高いしながら今日でお別れである事を先に告げた。
「はーちゃん。あのね。今日でお別れしないといけないんだよ」
「うー……まあ！」
最初は不思議そうに首を傾げていた八雲。お別れという言葉の意味が理解出来ないのかと思ったが、それほど難しい言葉でもないので賢しい彼なら分かるはず。
ならば、どうして首を傾げるのかと思って見ていれば、何かに気付いたようにハッとした顔をすると、周りを見渡して真田や順平たちの姿を発見するなり笑顔でブンブンと手を振っている。
「ばいば！」
「おーう。めっちゃ良い笑顔で元気に手振ってくれてるなぁ」
「まぁ、別れるのは俺たちではないがな。だから、その嬉しそうな顔は

やめろ」
八雲にとって真田や順平は使えない子分でしかなかった。
完二はゴリラではあるがアイスやおやつを献上するため、なかなか分かっている子分という扱いで、他の男子は善とクマとコロマルを除けば基本は真田らと同列扱いだ。
だからこそ、そんな彼らとお別れだと聞けば、ようやく邪魔なものを処分出来ると清々しい気持ちになったらしい。
赤ん坊としてはよろしくない発想だが、将来的に湊になると思えばこれくらいは可愛いものだと思える。
ある意味でとても素直な反応に苦笑しながら玲が頭を撫でれば、彼に正しい情報を伝えた。
「あのね。お別れするのは私と善なの。あと、はーちゃんはアイちゃんたちと一緒に帰るから、ゆきねぇちゃんたちともお別れなんだよ？」
「うー？　めめもぉ！」
一緒に帰るのはアイギスたちだけで、他の皆とはお別れしなければならない。
そう伝えれば途端に八雲は泣きそうな顔で玲の服をギュッと掴んで、このまま絶対に離れまいとしている。
短い時間でこれほどまでに懐いてもらえて嬉しい気持ちと、赤ん坊に悲しい想いをさせてしまう事に罪悪感を覚える。
けれど、どうしても小さな八雲ともしっかりとお別れをしておきたかったのだ。
「はーちゃん。私と善は新しく生まれ変わるために旅立つんだよ。それでね。今の私ははーちゃんよりももっともっと小さな粒になって世界と一つになるの。だから、はーちゃんともずっと一緒なんだよ？」
「みぃ……」
ここにいる玲の心が輪廻の輪に乗って新たな命として生まれる可能性は低い。
通常、魂の一部が集合無意識に残るだけで残りの大部分は消えて行

くのだ。転生は存在しない訳ではないが、余程強い魂を持っていても運の要素が強い。
本体の魂から溢れた魂の欠片に過ぎない玲と、死神の残り滓である善の魂が新たな命に生まれ変わるとは思えない。
だがそれでも、今ここにいる二人の魂は分解され世界の一部になって残り続ける。
八雲の事もずっと見守り続けておくから安心してと頭を撫でてやれば、八雲は悲しそうな顔をしながらもどこか理解した様子を見せた。
今の状態ならば行けるだろうと歩き始めた玲は、次はどこへ行くと聞かれて最初から決めてあった事を口にした。
「あのね。皆で最後にダンジョンを見て回りたいの。もうシャドウはいないから安全だし」
「それ賛成！　私、風花ちゃんとナビしてて入ってないとこあるし！」
「そうですね。りせちゃんと仲良くなれたけど、皆と一緒に回るのも楽しそうだなってちょっと思ってたから私も行きたいな」
ナビ役だった二人はチドリが一度交代した時を除いてダンジョンに入っていない。
他の者たちが大変だったのは分かっているし、風花たちも皆の安全のために頑張ってはいたのだが、ダンジョン内で休憩している雰囲気などを聞いているととても楽しそうで少し羨ましかった。
特に小さな八雲と一緒に行動している時など、現地でナビをしては駄目ですかと聞きたいくらいであった。
この世界のシャドウは全て消えているので、今ならば武器も持たずにダンジョンに入っても問題ない。
そうして、玲の希望を聞いた一同は〝ごーこんきっさ〟から順に巡っていく事にした。
――ごーこんきっさ
最後に全員でという玲の希望もあって、休んでいたベルベットルームの住人たちとベアトリーチェも一緒になってやってきた。
このダンジョンでは湊が小さな八雲になったり、八雲と分裂したべ

アトリーチェも一緒になって探索したりと非常に賑やかだった。
その時の様子を思い出してベアトリーチェが口を開く。
「……私の運命の相手は私だったな」
「そりゃ、湊君と身体共有しとるんやから当たり前やろ」
ごーこんきっさでは運命の相手が見つかるという事だったが、代表して回答していた八雲の運命の相手は同じく赤ん坊状態だったベアトリーチェだった。
顔の造形はほぼ同じだというのに、瞳や肌の色が違うだけで二人は東洋風の顔立ちと西洋風の顔立ちにそれぞれ見えた。
やはり、様々な国の血が入っているからこそ、そういった不思議な事もあり得るのかなと思ったが、不遜な物言いをしているベアトリーチェにラビリスは突っ込みをいれておいた。
別に自分が湊の運命の相手だと思って嫉妬している訳ではない。アルカナは確かに〝運命〟だが、彼女は妹の幸せを願う良き姉なのだ。
そうして、他の者たちもラビリスの突っ込み以外ベアトリーチェの発言を聞き流していると、そういえばと疑問を持っていた直斗が善と玲に質問した。
「そういえば、ここと現実の〝合コン喫茶〟は結局関係なかったのでしょうか？　共通点は名前くらいで他は全く似ていませんが」
「無関係ではない。文化祭は玲の記憶を基に作られたが、それらは変容するものでもあった。君たちと出会い、会話する中でイメージに変化があればその影響をダンジョンも受けていたんだ」
イメージで変化するというのは、湊が実際に校舎を造り替えて見せてくれたので分かる。
この世界が文化祭だった事も、玲のための鎮魂の儀式だったと説明を受けているので分かるが、ダンジョンの中身が他のメンバーたちとの会話の影響を受けていたと聞いて千枝が男子たちを睨み付けた。
「ちょっと、ここ絶対クマとか花村の影響受けてるじゃんか！」
「いやいや、あくまで玲ちゃんのイメージだろ？　別に俺らが変なもんを教えた訳じゃねーよ」

クマは合コンって何と聞かれておかしな事を教えていたが、花村はそういった変なイメージを与えた覚えはなかった。
それに言葉からどんなものをイメージするかは玲次第。そこまで責任は取れないと反論する。
花村と千枝が言い合いを続けていれば、少しだけ不安そうな顔をした玲がここでの生活はどうだったかと七歌たちに尋ねた。
「皆はここの文化祭楽しかった？」
「もちろん！　私らの学校は台風で中止になったからね。予想外な形だったけど遊べてラッキーだったよ」
「そうそう。おかげで友達も増えたし、コロマルも一緒に遊べたしね？」
確かに現実の文化祭ならコロマルは留守番するしかなかっただろう。
赤ん坊の八雲も連れて来られたかは分からない。
何より、違う時代の仲間との出会いもなかったはずなので、こうして無事に帰れるようになった今なら文句なしに楽しかったと七歌とゆかりが答えるのも当然と言えた。
それを聞いた玲はホッとした顔になって笑い。抱っこしている八雲にも楽しかったか聞いている。
お別れは悲しいと思っていても、一緒に遊んでもらえた事を嬉しく思っていた八雲はしっかりと頷いて返した。
――放課後悪霊クラブ
続けてお化け屋敷にやってきたが、ここでは湊が通信を利用して怪談を強制で聞かせた事もあって一同の表情は強張っている。
シャドウはいないし、今は少しだけ明るくなってはいるのだが、やはり独特な雰囲気もあって怖がりな面子は八雲を抱っこしている玲の周りに集まっていた。
それを傍で見ていたマリーは彼女たちの行動が理解出来ないと首を振ってから、どうしてそんなに怖がるのかと尋ねた。
「ねえ、何をそんなに怖がってるの？　お化けとか本気で信じてるの？　てか、もしかして〝玲〟って〝幽霊〟から取ってる？」

「……え？」
急にマリーに聞かれた玲は戸惑ったように声をあげてから善を見る。
そも、彼女の名前を付けたのは善だ。その名前の意味を知っているのは善だけであり、玲本人は自分の名前に意味がある事すら知らない。
故に、玲がどうなのかとジッと見つめていれば、大切な少女の名前をダジャレかと聞かれて僅かにムッとしたように否定した。
「……違う」
「じゃあ、どういう意味？」
「……言わない」
意味はしっかりとあるのだが、それをここで説明するのは恥ずかしい。
最初に比べて随分と人間らしくなった少年が黙秘権を行使していると、ジッと善の事を見つめていた八雲が楽しそうにある名前を口にした。
「ふぃえい！　ふぃえい！」
「湊、よせ。今は静かにしているんだ」
「ふぃえい？　あ、もしかしてギリシャ語の〝フィレイ〟？　じゃあ、善君も同じく〝ゼン〟から来てるんだ……へぇ」
読心能力なのか湊の記憶から引き継いだのか、八雲は玲の本当の意味を知っていた。
まさか、赤ん坊にバレているとは思っていなかった善がすぐに八雲の口を手で塞ぐも、ここにはそういった言語に詳しい七歌がいた。
すぐに名前の意味を理解した七歌が善をニヤニヤと笑って見ていれば、ずっと意味を知りたがっていた玲が教えてと尋ねた。
「ななちゃん、フィレイとゼンってどういう意味なの？」
「んー……私の口から言ってもいいのかなぁ」
「七歌、頼む。ここでは何も言わないでくれ」
「しょうがないなぁ。でも、ちゃんと後で玲ちゃんには伝えるんだよ？」

「……わかった」
七歌が教える事は確かに出来るが、それをしてしまうと色々と台無しになってしまう。
彼女もそれを分かっているので、善の口から伝える事を条件にここでは秘密が守られる事になった。
――ベルベットルーム
残るダンジョンは昨日の今日という事もあって軽く眺める程度で済ました。
最初の二時間で遊び回った校舎をゆっくりと見て回り、自分たちの拠点にしていた場所を名残惜しそうに眺めてから、ようやく一同はベルベットルームに集まった。
「はーちゃん。一緒にいてくれてありがとう。離れてても、ずっと大好きだよ」
「あい……ばいば！　ねーね、めん！」
玲の腕からベアトリーチェの腕に移動した八雲は、寂しそうにしながらも最後は笑って玲と善に別れを告げた。
そして、八雲とベアトリーチェの身体が光に包まれれば、元の姿に戻った湊が立っていた。
「……赤ん坊との別れは済ませたんだな？」
「うん、ありがとう。我が儘言ってゴメンね」
「いや、大したことじゃない」
最後の別れくらいはちゃんとさせてやりたい。そう思っている湊にすれば本当にこの程度は大したことではなかった。
残り時間もあと僅か。その状態でベルベットルームに集まっているという事は、これで全員がこの世界から離れるのだろう。
順番からすると善と玲が旅立ち、その後でそれぞれの世界への扉を潜って元の世界に帰る事になる。
だから、二人に物を渡すなら今しかないと、湊はマフラーから二枚の大きな紙と黒い筒を取り出し、紙は美鶴に、筒は鳴上に、そして新たに取り出した二つのコサージュを七歌に渡した。
説明もなく渡された三人は驚いた顔をしたが、すぐに意味を理解す

るとおかしそうに笑って七歌が玲と善の制服の胸にコサージュを付ける。
急にどうしたんだと驚いている二人の前に美鶴が立つと、一枚の紙は傍に立った七歌が持っておき、美鶴がその紙に書かれた文章を読み上げる。
「卒業証書、善殿。あなたは精一杯生き、本校の過程を修了し卒業する事をここに証する。おめでとう、善」
何が起きているのか分からないといった顔をしていた善は、美鶴から卒業証書を受け取り、さらに鳴上から筒を渡されるとそれも黙って受け取る。
周りで見ていた者たちが拍手を送れば、七歌からもう一枚の紙を受け取った美鶴が玲の前に立って読み上げた。
「卒業証書、玲殿。あなたは精一杯生き、本校の過程を修了し卒業する事をここに証する。おめでとう、玲」
それが何であるかを知っている玲は、呆然とした様子で受け取って証書をジッと見つめている。
まさかのサプライズプレゼントを用意していた湊に対し、女子たちが笑って背中を叩いているが、その間も玲が動かないことを心配した善が声を掛けようとしたところで玲が口を開いた。
「……これ、学校の卒業のやつだ」
「すごい物なのか？」
「うん。うん。ちゃんと、学校に行って、そこから旅立って行く人しかもらえない物なの。私は、もらえないと思ってたのに……」
説明する途中で玲の声が震えて聞こえづらくなってゆく。
今の彼女は笑いながら泣くという器用な事をしており、それを見ていた周りの者たちももらい泣きして、女子たちが次々に玲に抱きつきにいく。
最初は玲が泣いている事に不安そうにしていた善も、彼女が嬉しくて泣いていると分かると、卒業証書を筒にしまってから湊の前に移動してきた。
「……ありがとう湊。これは玲にとってとても意味のある贈り物だっ

たらしい。君はやはり物資を運ぶ救難のエキスパートだった」
「別に贈り物一つで救ってはいないがな」
「いや、私たちは随分と君に助けられた。君がいなければ、この結末はなかったかもしれない」
七歌たちとも鳴上たちとも異なる手段でこの世界へやって来た異分子。
だが、その異分子がなければこの結末はなかっただろうという核心が善にはある。
受け取った筒に入った卒業証書を嬉しそうに握り締めると、女子たちに囲まれていた玲が紙の束を持って嬉しそうにやってきた。
「善、七ちゃんに地図貰ったよ。ずっと七ちゃんが描いてくれてたこの世界の地図！」
七歌が描いてきた地図には、番人が守っていたダンジョンの地形が描かれていた。
そのダンジョンは生前の玲の人生を表わしていた内容で、それを順番に進むというのは一種の追体験だった。
そう考えれば、玲の手にある地図はただの道順を描いた紙ではなく、玲の人生の軌跡を表わしているとも言えた。
自分の人生の軌跡が描かれた地図を大切そうに持った少女は、一緒に持った卒業証書の入った筒も胸に抱くと改めてメンバーたちに礼を言って頭を下げる。
「皆、本当にありがとうございました。とっても素敵な贈り物もありがとう」
「私からも改めて礼を。本当に世話になった。そして、巻き込んでしまってすまなかった。君たちに助けられ、ようやく私は玲と共に〝永遠〟へ行ける」
そこは全ての命が還る場所。クロノスではなく善という一つの存在になったからこそ、彼も玲と共にそこへ旅立てる。
途切れた上り階段へと向かった二人は、改めて仲間たちに礼を言うと手を繋いでゆっくりと階段を登ってゆく。
「共に行こう、フィレイ」

「ねぇ、教えて善。私の名前の意味」
「ああ。〝愛しい〟という意味だ。そして、私の名は〝生きる〟という意味があった。〝愛しい君と共に生きる〟という意味が」
「ふふっ。ありがとう、善」
幸せそうに笑い合う二人は、徐々に身体が光の粒になって静かに消えていった。
二人の旅立ちを見送った者たちは、次は自分たちだなとそれぞれの世界へ繋がる扉へと向かって歩き出す。
ここで足を止めれば余計に別れづらくなるだけだ。不思議な光に満たされた空間に向かって、真田は扉を潜りながら挨拶する。
「じゃあな。お前らも元気で」
「アッキーたちも元気でクマぁ！」
それに返すようにクマも泣きながら自分たちの世界への扉を潜ってゆく。
真田に続いて天田、コロマル、順平、荒垣もそれぞれ挨拶をして扉の奥へと消え、クマに続いて完二、花村、直斗もお礼とエールを送って扉の中へ入っていった。
「皆、そっちの私も応援してね。プロデューサーは私に優しくするように！　それじゃあ、またね！」
「りせちゃん、ずっと一緒にナビ出来て楽しかったよ。皆さんも本当にお元気で。また会おうね」
りせと風花がそれぞれ入っていけば、他の女性陣たちも続くように挨拶をしながら入ってゆく。
ただ、あいかとメティスは湊に言いたい事があるのか少し足を止めた。
「ん……向こうの貴方は任せて」
「記憶のない兄さんは私たちで補助してますから安心してください。それではまた」
二人は自称特別捜査隊ではなく湊と同じチームで探索していたらしい。
しっかりしている二人と一緒ならば記憶を失っていても安心だろ

うと湊が頷いて返せば、二人も笑って扉の中へと入っていった。
そして、後はそれぞれのチームのリーダーとベルベットルームの住人、それに綾時と湊だけが残っている。
湊は世界の維持で最後に入る必要があるため、先に七歌と鳴上を送り出す。
「じゃあね、鳴上君。最初の救援、本当に助かったよ」
「まぁ、美味しいところは有里に持って行かれたけど、俺も同じワイルドに出会えて良かったよ」
「フフッ、それじゃあまたいつか」
「ああ。いつかどこかでまた会おう」
固い握手を交わした二人は残っている者たちにも礼をしてから扉へと消えて行く。
ベルベットルームの住人たちは、戻っても同じ顔の人間とすぐに会うらしいが、とりあえず別の時代の姉妹弟とはお別れなので「失礼します」「またね」と短い挨拶で去って行った。
そして、お前はいつまで残っているんだと湊がマリーに視線を送れば、彼女はポケットを探って一本のペンを取り出すとそれを湊に渡してきた。
「店長。これ、一応もっといて。そしたら、多分、未来で会えるから」
「……別に会えなくても困らないだろ」
「わ、私が困るの！　店長の家がなかったら、マーガレットと長鼻と一緒に車に乗りっぱなしなんだからね！」
「……イゴールも名前で呼んでやれ」
鳴上のベルベットルームは車なので、湊のベルベットルームに比べると随分と狭い。
ベルベットルームの広さは客人の出会う困難の大きさによって変化するらしいが、とりあえずサディスティックなマーガレットと不気味なイゴールと同じ車内にずっといるのは嫌だろう。
そう考えると縁を残しておく理由も分かるとして、湊は受け取った白いペンをマフラーに入れておいた。
「じゃあ、湊。僕もそろそろ君の中に戻らせてもらうよ」

「ああ。文化祭は楽しかったか？」
「勿論さ。皆と一緒に過ごす時間をくれてありがとう。君と違って僕はここでの事を忘れてしまうけど、思い出を貰った事実は消えない。だから、覚えている今のうちにお礼を言っておくよ」
柔らかい笑みを浮かべて礼を言った綾時は、その胸から黄昏の羽根を抜いてファルロスの姿に戻ると、羽根を湊に手渡してから湊の中に戻った。
全員が元の世界に戻り、この世界も扉の周囲数メートルしか残っていない。
きっと既に他の者たちはこの世界での記憶を忘れているだろう。
どうあっても抗えない世界からの干渉という物は存在するのだから、忘れた彼らを責める事は出来ない。
だが、旅立っていった二人のためにも〝なかった事〟にする事だけは出来ない。
〝特異点〟故に記憶を保持したまま元の世界に帰る事でどんな影響が出るのか。小さく口の端を歪めた湊は最後に一度振り返ると、崩壊を始めた扉の中へと消えていった。
そうして、不思議な世界で起こった奇妙な出会いと冒険は静かに終わりを迎えた。

第十一章　―Ｆａｒｅｗｅｌｌ―

第三百二十一話　後片付け

９月２４日（木）
午後――月光館学園

無事に台風も過ぎ去り、シルバーウィークとも呼ばれる連休も終わった。

けれど、その台風のせいで文化祭は中止になり、何もお祭りを楽しむ事が出来なかったというのに午後は片付けに駆り出されていた。

七歌たちも自分たちが割り当てられた教室の展示を外していくのだが、釘を使っている部分もあるので男子が釘抜きを取りに行っている間、七歌とゆかりとアイギスは小休憩を取る。

「はぁ……文化祭なーんも出来なかったのにね」

「片付けだけはしっかりとやらないと行けないんだもんね」

「わたしは〝学生の作る祭〟というものに興味がなかった訳ではありませんが、八雲さんが来ないのであれば意味がなかったのであまり気にしません」

他の者たちの前から姿を消した湊だったが、先日の満月にはアルカナシャドウとの戦いに参戦し、その裏でストレガの凶刃に倒れた美紀を救う活躍を見せた。

美紀を助けた翌日にはストレガと戦っているので、彼が無事に生きている事だけは確認出来ているのだが、残念な事に彼は退学届を出して以降学校に来ていない。

本人にしてみれば高校など通う意味がなく、最初の一年間通っていたのもラビリスが学校に慣れるまではという意味合いが強かった。

学力が足りていたとしても、高校は人との付き合いを学ぶ場だと言う者もいるだろう。

だが、彼は既に社会に出て働いている。むしろ、高校の教師たちよりも大人を含めた多くの人間の相手にしているくらいだ。

そんな状態にあるからこそ、湊が高校で学ぶ事など殆ど無く、今後

も復帰する事はほぼないと思われた。
湊の事を中心に物事を考えるアイギスが文化祭の中止を気にしないと言えば、相変わらずな彼女に七歌とゆかりは苦笑して画鋲で留められた写真を掲示板から外して行く。
大きなものは釘抜きの到着を待つ必要があるけれど、小さなものなら手で外せるのだ。
「けど、正直なんかそこまで惜しいって気もしてないのは確かなんだよね」
再び作業を開始して少しすると七歌がそんな風に呟き、急にどうしたとゆかりがそちらを向く。
七歌はそれなりに文化祭を楽しみにしていた側だったはずだが、どうして急にそんな風に心変わりしたのか不思議に思ったのだ。
本人もその自覚はあるようで、どうしてだか自分でも分からないと答える。
「いやぁ、何か分からないんだけど、結構、遊んだみたいな気がしてて さ」
「遊んだってどこでよ？」
「んー……分かんない」
上手く説明出来ないが、七歌は既に欲求が満たされた状態にあるんだと答える。
連休中にどこかの文化祭に行ったのかと聞かれるも、七歌は映画を見に行ったくらいで文化祭には行っていないため首を横に振る。
どうして遊んでないのに遊んだ気がしているのか。本当に不思議でしょうがないが本人が文化祭の中止に悩んでいないのなら良いのかも知れない。
そんな風に考えてゆかりと七歌が作業の手を再び動かしていると、外した写真をサイズ別にまとめていたアイギスが口を開いた。
「そういえば、台風が過ぎ去った日の影時間に急に八雲さんいましたね。ビックリであります」
「あ、それね。ラビリスたちも一緒だったから、もしかして様子を見に来たのかもしれないけど、急に来たと思ったらすぐに帰ってなんだっ

たんだろ？」
あの日、ラビリスとチドリは文化祭の準備もあって、巌戸台分寮の風花とアイギスの部屋に分かれて泊まっていた。
しかし、無責任な前任に押しつけられる形で委員会に入った七歌が、せっかく頑張って作った委員会の掲示物が台風のせいで無駄になったからと、ストレス解消のためにシャドウ討伐に打って出た。
他の者たちも台風が過ぎた後ならば構わないと同行した訳だが、その時、気付けば湊がその場にいて何をするでもなく帰って行ったのだ。
台風が来た事もあってアイギスたちの事を心配して様子を見に来たのか、それとも何か別の理由があってタルタロスを訪れたのか。
どちらの理由であっても本人に真相を聞くまで答えは分からないが、ごく短い時間だけであっても彼に会えたアイギスは嬉しそうにしている。
その辺りが女子力や乙女度の違いないのかとゆかりが密かにダメージを負っていれば、釘抜きなどを取りに行っていた男子らが戻ってきた。
「おーっす。釘抜きとか取ってきたぞー」
「んじゃ、早速そっちの壁のやつ引っこ抜きまくって。作品は壊さないようにね」
「おーう。てか、戻ってきていきなりかぁ……」
道具を取りに行かされたかと思えば、戻ってきても休みなく次の作業に取りかかれと言われた順平が疲れた顔をする。
一緒に取りに行っていた宮本と友近は何も言っていないが、どことなく順平と同じ事を思っているような雰囲気があった。
七歌としては別に少しくらいは休んでも構わないが、そのせいで作業が遅れれば三人だけで残業をするのかと尋ねたい。
釘抜きやガムテープを取りに行くのに男子三人など必要ない。
必要ないというのに三人で行ったのは、少なからずサボって休む思惑があったからではないのか。
画鋲をケースに仕舞いながらジッと男子たちを見ていれば、三人は

やはり後ろ暗い部分があったようでいそいそと作業へと移っていった。

――稲羽市

他の者たちが文化祭の後片付けをしている頃、湊は一人稲羽市へとやって来ていた。

最初に訪れたのは八十神高校に近い場所にある病院。それほど大きくない時計塔の鐘の音が聞こえる範囲にあった稲羽市立病院だった。

そこで少女の世話をしていた看護師から話を聞いて、地図を書いて貰うと湊は病院をすぐに立ち去った。

(やはり、俺たちの時代の人間だったか。もう少し早く知っていれば違っていたんだろうが、親に娘を治す気がなければ無理な話だ)

ベルベットルームの住人ですらあの世界での出来事は忘れており、そんな夢を見たような気がするという認識だった。

けれど、湊は〝固有存在〟に至っているが故に記憶への干渉を受けずにいた。

善と玲の事は勿論、数年後にペルソナ使いとして覚醒する鳴上たちの事も当然のように覚えていた。

自分が以前泊まった旅館の娘であったり、染め物体験を受けた染物屋の子どもがペルソナ使いになるとは思っていなかったが、東京で仕事の世話をしてやったアイドルが休業して田舎に行く事になるとも思っていなかったので、人生何が起こるか分からないなと考えながら湊は病院で教えて貰った地図を頼りに道を行く。

病院からそれほど遠くない小高い丘の上にある霊園。

そこからは少し離れた場所にある八十神高校を見る事が出来た。

高校も霊園と同じように坂を上った場所にあるため、お互いを見る際に遮るような高い建物も存在しない。

音を聞くだけ、窓から眺めるだけの彼女には辛いかもしれないが、せめて学校を見る事が出来る場所にとここへ埋葬したのだとか。

親は病院に手続きを丸投げし、お金だけ払って葬儀にも出ていない。

玲自身も母親には見切りを付けていたようなので、このような結果は十分に予想出来たが、玲の事を話す看護師が彼女の事を想って涙を流し、知り合いならば亡くなる前に会いに来てやって欲しかったという言葉は青年の心に僅かに響いた。

（どうせ俺は世界中の全てを救える訳じゃない。今も知らないやつが知らない場所で死んでる。だが、縁が出来てしまうと〝もしも〟を考えてしまう）

玲の心は善の言葉で救われて無へと還っていった。

ならば、湊がそれ以上何かをする必要はない。彼女が還るにあたってせめて生徒として去れるよう、卒業証書を贈るという演出をしてみせたが、出来る事など精々それくらいだ。

けれど、湊の心の奥にある何かが弱者を救うように語りかけてくる。

アイギスとラビリスを救ったように、玲のＤＮＡから生体ボディを作って魂を呼び寄せてしまえば、彼女を普通の人間のように人生をやり直させる事が出来る。

人としてはおかしくて、これ以上、神の領域に手を出すべきではない事は分かっているのに、無意識に自分が他とは違うと思っているのか傲慢な考えが浮かんでしまう。

もっとも、看護師から彼女の血や細胞などは冷凍保存されていないと聞いており、流石に墓を荒らして遺骨などからＤＮＡを採取する気はないので、今回はただの墓参りをするためにやってきただけだった。

看護師から聞いた区画まで行き、そこからは墓石に彫られた名前を見て目的地を発見した。

小さめの黒い墓石。そこに彫られていたのは〝天草ニコ〟という名前。

誰も来ていないのか少し汚れており、マフラーから取り出した掃除道具で墓石を綺麗にしてやる。

彼女が髪に付けていたアクセサリーに似た白い花を飾って、最後にパック詰めされたアメリカンドッグを置くと線香に火を点けてから

手を合わせた。
「……ニコ、おそらく君は俺を知らないだろうが会いに来た。他の者たちは忘れてしまったが、俺はこうやって覚えている。君を変えた。君に変えられた人間として、君が生きた証がある事を伝えに来た。他の誰にだって生きられない、君は君にしか生きる事の出来ない人生を精一杯生きたんだ」
あの世界では善がそれを彼女に伝える事で彼女の心を救う事が出来た。
だが、もしもここにまだニコの未練があるのなら、それは記憶を持っている湊にしか救う事が出来ない。
湊の事を知らないニコからすれば、急にやってきた男が知った風な事を言っていると思うかもしれない。
けれど、湊には善が言っていた言葉以上に彼女を救う言葉はないと思った。
彼女を救う事だけを考え、ただ伝えようと思って考えられた言葉には確かな力がある。
ニコにもどうか届いて欲しい。そう思って湊が彼女の事を想いながら言葉を贈れば霊園に暖かな風が吹いた。
〝ありがとう、はーちゃん！〟
〝大丈夫だ、湊。君の心は彼女にも届いた〟
その風に乗って湊の頭に還ったはずの二人の声が響いた。
感傷に浸っていた事で都合の良い幻聴を聞いたのだと考えたが、湊は自分の内に新たな力が目覚めている事に気付く。
二人との出会いが自分の中に何かを残し、その力がイメージによって肉付けされて行く。
ゆっくりとそれはカードという形になりながら現われ、永劫のアルカナが刻まれると湊はカードを握り砕いてそれを呼んだ。
「こい。永劫〝稲羽之素兎〟」
水色の力の欠片が渦巻いて徐々に小さなペルソナの姿を具現化してゆく。
現われたのは、玲が善に贈った花の飾りがついた首輪と同じもの首

に巻き、その手に金色の懐中時計を持った真っ白な兎。
ピンと上に伸びた耳を含めれば大人の膝ほどまでの高さがあるので、普通の兎に比べれば大きいと言えるだろう。
使えるスキルは回復系ばかりなので、玲が持っていたクロノスの力を湊の中で再現したような形だ。
名前は日本神話のそれだが、見た目はどちらかというと不思議な国のアリスの白ウサギに近い。
丁度アリスもいるので揃って運用する事もあるだろうと考えながら、湊は稲羽之素兎を自分の中に戻してからニコの墓石に笑いかける。
「君の生きた証が一つ増えたぞ」
それだけ言うと湊は振り返ってその場を離れてゆく。
お供え物は霊園の管理者が定期的に回収してくれるので、そのまま放置で構わない。
あの世界から戻ってきてから力を手に入れるとは思っていなかったが、青年も自分でも気付かぬうちにあの世界での事を大切な思い出と認識していたらしい。
今までは悲しい別れなどの際に新しい力に目覚める事が多かった事もあり、毎回こういう形ならば良いのにと思いつつ湊は町の方へと降りてゆく。
次に目指すのはメティスとマリーの記憶にあった。未来の自分が暮らしている家を管理する不動産会社だ。
＊＊＊
不動産会社を探そうと考えたが、小さな稲羽市でも不動産屋は何個もあって、どこが目的の家を管理しているのかなど分かるはずもなかった。
下手をすると隣の沖奈市の不動産屋が権利を持っている可能性もあるので、湊は先に家の方へ向かって、家の門扉に掛けられていた小さな看板で不動産屋を特定してから店に向かった。
店に行った時には皇子が来たと驚かれもしたが、稲羽市の中でも大きな家の集まる地区にあるお屋敷を見せて欲しいと言えば、わざわざ

店長がやってきて直々に案内してくれる事になった。
そこは昔からこの地に住んでいるような人たちの中でも特に裕福な人が住む地区で、湊が目を付けた屋敷はその中でも群を抜いて立派な日本家屋だった。
桔梗組の本部には遠く及ばないが、それでも綺麗で広い庭と旅館が開けそうなくらい立派で大きな屋敷がある。
さらには前に住んでいた者が、次にこの屋敷に住む者へ譲ると言って中身が残った蔵もあった。
蔵の中身は随分と古い物が多く、おかげで不動産屋が勝手に盗んだりもしていなかったようだが、湊はこの屋敷の建っている土地に違和感を覚えていた。
（ここはここら一帯の地脈の合流地点なのか。おかげで土地その物が元気だし、古い物が多いってのに蔵や周辺にはおかしなモノが寄ってくる気配もない）
普通、蔵などに古い物を入れておくと、自分たちの時代のモノに惹かれて霊などが集まってくる。
湊のように集まってきても殺せるなら問題ないが、そういった攻撃的な力を持っていないのであれば、力を持った術者に結界を張ってもらうのが普通の対処法だ。
それをこの土地は地脈の流れで自然に行なっていて、力を持つ者ならば別の強力な術を使う事が出来るくらいだ。
あの世界で出会った鳴上たちの世界が湊がいるこの世界の延長にあるかは分からない。
だが、どうやって未来の湊がここの存在を知ったのか不思議に思いながら、湊はここならば隠れ家のように使うには丁度良いなと購入を決意する。
「……ここ、買います。とりあえず、頭金だけ払っておくので、後日残りも現金一括で買うので書類をまとめておいてください」
「え？　あの、現金一括でございますか？　そのぉ……ここはかなり高額になっていまして、しっかりと金額を出してからお決めになった方がよろしいかとぉ」

「大丈夫です。二億か三億か分かりませんが、それくらいなら現金ですぐ用意出来ます。とりあえず、頭金で一千万渡しておくので鍵だけ預かって良いですか？」
相手から見えないようマフラーから一千万円を取り出し、それを相手にポンポンと手渡してゆく。
本契約前の頭金ならこれで足りるだろうと思ったのだが、急に一千万もの現金を渡された不動産屋の社長はプルプルと震えながら現金を鞄に仕舞い。すぐに頭金を受け取ったという証明書を渡してきた。
「こちらが頭金の領収書になります。諸々の手続きで数日かかりますが、それらが終わればすぐにでもお引っ越しいただけます。手続き完了までに各ライフラインの契約を各所とお済ましになられる事をおすすめしますので、こちらそういったパンフレットとこの家の鍵と一緒にお渡ししておきますね」
「ええ、ありがとうございます」
「いえいえ。こちらこそ、本日はありがとうございました。これより店に戻りましてすぐに手続きの用意に入りますので、終わり次第また本契約日のご相談にお電話致します。家の中はこの後もご覧になられて構いません。では、失礼致します」
現金一括でこの豪邸を買われるとは思っていなかったのか、社長は現金がすぐ手に入る事を喜びながら店に帰っていった。
後に残った湊は過去の名切りたちの記憶で検索を掛け、こういった場所に張るための結界を色々と調べてゆく。
ただの霊ではここに侵入することは出来ないので、結界を張るなら対人向けのものになるだろう。
結界と聞いて一般人が想像するのは見えない壁のようだが、実際に本職が張るのは人の意識に働き掛けて近付くのを無意識に回避させるようなタイプが多い。
未来の湊たちは色々と訳ありだったようなので、方法を検索し終えた湊は家の者が許可しない限り、この家の場所を正確に把握出来ない認識妨害系を掛けておく事にした。
さらに続けて招いた者のみが入ってこれるようにする結界も重ね

るように掛け、これでここは一種の霊界と化したようなものだった。
後は未来で湊が記憶を失ったという事なので、現時点でマリーが迷いこんで来られるよう結界に許可を出しておく。
これでもしもこの世界の未来に彼女と会う事があれば、記憶のない彼女が自分でこの屋敷の敷地内に入ってくる事が出来る。
あの世界から去る前にマリーに貰った万年筆を見つめながら、どうか彼女との縁が切れませんようにと願えば、湊は東京へと戻るために万年筆と入れ替わりでマフラーからバイクを取り出すのだった。

第三百二十二話　備える者たち

９月２７日（日）
影時間――七歌私室
世界が緑色に塗り潰され、窓の外で大きな月が眩しく輝く夜。
今日はタルタロスに向かわないからと七歌も部屋でゆっくりしていれば、ふと近くに人の気配を感じてそちらに視線を向ける。
そこには人懐っこい笑みを浮かべた囚人服の少年が立っていた。
《やあ、こんばんは。久しぶりだね》
「こんばんは。って言ってもあんまり久しぶりの感じしないけどね」
《ははっ、そうかな？　どうしてだろ？》
「うーん……分かんない。ま、会ってる時間の長さじゃなくて濃さが重要って事じゃない？」
あの世界での事は七歌もファルロスも忘れている。
もっとも、覚えていたとしても七歌はファルロスと綾時が同一人物だとは気付いていないので、雰囲気が似ている少年と一緒にいたという認識になるのだが、ファルロスが現われるのは毎回それなりに意味がある。
ある時はアルカナシャドウの出現を予知し、またある時はアルカナシャドウが現われる兆候について助言しに来てくれた。
彼が自分たち以上に影時間について知っているのは判明しており、彼がその知識を全て教えてくれれば特別課外活動部も方針を決めて動けるに違いない。
ただ、ファルロスが自分の知っている事を全て教えないのには意味がある。
教える事で七歌たちに何かデメリットがあるのか、それとも別の要因によって話す事が出来ないのか。
七歌が以前聞いた限りであれば、敢えて伝えないようにしている事から、恐らくはファルロスが自分の意思でまだ教えるべきではないと判断していると思われる。
そうなってくると、自分たちの戦いにはまだまだ先があり、備える

べきものが多そうだと心配になってくるのだが、短い時間でそんな思考を巡らせた七歌は今はこの友人との時間を楽しもうと机の引き出しを開けて個別包装されたクッキーを取り出し、それをファルロスに手渡した。
「はい、これ。せっかく来たんだしどうぞ」
《わぁ、ありがとう。もしかして、普段からお菓子を常備しているのかい？》
「うんにゃ、これは偶然。お菓子は置いてると食べちゃうからね。欲しい時に買うようにしているのさ。買いに行くのもちょっとした運動になるし」
《部活とタルタロスで運動は十分に思えるけどね》
キャンディーくらいであれば常に少しくらいは置いているが、クッキーやポテトチップスなどのお菓子を常備するような習慣はない。
七歌のお財布事情を考えれば余裕で箱買いする事も可能で、以前は動物の小さな模型が入った卵形のチョコの絶滅危惧種バージョンを二箱ほど買ったりもしたが、いくら運動していようと彼女も年頃の女の子。
余計なお肉は付けたくないし、甘いものや油ものを食べすぎて肌が荒れるのも断固拒否の構えだ。
そのため、食べるのならばその分だけ運動するように自分ルールを決めてあるし。なければそもそも食べられないからと、自分を誘惑してくる可能性を考慮して部屋にお菓子はなかった。
運動と戦闘で十分にスタイルの良い少女が、さらに自己管理を徹底している姿勢にファルロスは思わず驚嘆したが、彼は見た目は子どもだが考えは大人なようで頑張る女性はそれだけで美しいと素直に賞賛した。
言われた七歌も得意気にそうでしょと不敵に笑い。その場に笑い声が響けば、クッキーの包み紙をゴミ箱に捨てたファルロスが改まって口を開いた。
《さて、言わなくても分かってるかな？　あと一週間で満月だ》
「うん。兆候からすると次は二体だよね？」

《恐らくはそうだね》
七歌が言った兆候とは、アルカナシャドウが出現前に一定の範囲で人々の心を食べる性質を利用して、無気力症になった人間が発見された地域と人数から敵の出現場所と数を予測するというものだ。
アルカナシャドウは後から現われる個体の方が強いため、よりエネルギーを必要とするのか被害者の数は増える傾向にある。
しかし、それでも一体当たりの食事量には限度があるらしく、仮に二体で千人の被害者が出た翌月に八百人の被害者が出ていれば一体しか出ないと予測出来るのだ。
これらの情報はそもそもファルロスが七歌に教えたのだが、彼女が上手くそれを活用出来ていると知ってファルロスもどこか嬉しそうにする。
ただ、出現場所と敵の数が分かっていても油断は出来ない。
何故なら今の七歌たちには同じ人間の敵が存在するからだ。
《前回は大変だったみたいだね。君の仲間の家族は無事だったみたいだけど、今回も大丈夫だといいね》
「うん。流石に適性も失った美紀がまた狙われるとは思わないけど、その前に寮にいた理事長が襲われたのもあって、桐条グループの方でも警戒はしてるみたい」
先々月はリーダーであるタカヤが七歌たちの前に姿を現わし、湊が裏社会の人間だとバラす事で衝突するように誘導してきた。
実はその裏ではストレガの別働隊が寮を襲撃しており、湊とぶつけたのは完全に時間稼ぎで、本命は特別課外活動部と桐条グループを繋いでいた理事長の殺害の方だったのだろう。
七歌たちは七歌たちで最強の敵である湊と戦い敗れ、他の事を気にする余裕など欠片もなかったことで、翌日やってきた桐条武治に聞くまで幾月の死を知らなかった。
普段は冷静である美鶴ですら味方が殺された事で動揺していたし。桐条グループ内では湊も敵の作戦に時間稼ぎとして荷担していたのではという意見も挙がっていたらしい。
それまでは一部の者しか知らなかった、湊が過去に行なわれた桐条

グループの違法実験の被験体の生き残りであるという情報が公開されれば、そのように考えてしまうのもある意味当然。
彼は事実として桐条グループを憎んでいるし、幾月は人工ペルソナ使いを生み出すという非道な実験にも直接関わっていた。
湊とストレガには幾月を殺すだけの理由があり、幾月も殺されるだけの事を十分してきた。
だからこそ、幾月殺害はストレガと湊による共同作戦だと思われたのだが、その可能性はないとトップである桐条自ら湊が無関係である事を断言した。
どうやら桐条は湊が特別課外活動部を裏で手助けしていることに気付いていたらしい。
その思惑は不明のままだが、湊は特別課外活動部に一定の価値を見出していた。傍に幾月がいると分かっていても助けていたのだから、急に方針を変えるとは考えづらい。
トップがそう言えば他の者は黙るしかなく、グループとしては湊とストレガは知り合いだが仲間ではないという認識でいた。
そして、それが正しかったと証明されたのは次の満月での出来事だ。
《前は離れた場所だったから個別に対応を迫られたけど、次は一箇所だから大丈夫じゃないかな？》
「それはそれで背後から襲われる心配があるんだよね。ストレガの人数や能力も分かってないし」
ストレガに妨害されたせいでアルカナシャドウを倒すことが出来ず、アルカナシャドウが満月にしか姿を現わさなかった事から、その次の満月には別々の場所に現われる敵と戦う事になった。
一方は二ヶ月分の力を溜めた二体のアルカナシャドウ。もう一方は後で現われた分だけ強い一体のアルカナシャドウ。
どちらも強敵だが前者の方が力を溜めている上に数が多いと厄介な敵だった。
当初の予定では主戦力をそちらに投入し、残りのメンバーで一体の方を相手するつもりでいたが、ストレガの妨害を警戒して悩んでいる

タイミングで湊が現われた。
彼は新たな顧問に就任した栗原が仕事用のメールを送って呼ばれてきたらしいが、七歌たちの動きを聞いただけで二体いる方を担当すると告げて出て行ってしまった。
七歌たちは無駄に戦力を割くことなく一方に集中出来たので良かったが、重要度の高い二体の方に現われると思っていたストレガは一体の方に現われ、結局、七歌たちは数名のメンバーをストレガの足止めに残すことになる。
影時間の存続を願っている彼らが邪魔してくるのは分かるが、七歌たちは力を失うと分かっていても影時間を消したいと思っているので敵対しか道はない。
だが、裏の世界で活動していただけあって、相手の弱所を突く事に関してはストレガたちの方が何枚も上手だった。
アルカナシャドウ討伐を妨害するように見せかけておいて、実際には別働隊が仕事を終えるまでの囮と時間稼ぎとして彼らは現われていたのだ。
桐条側としては幾月を殺した人物と同じ人物が動いていたと見ているが、湊と七歌がそれぞれの場所でアルカナシャドウと戦っている時、ストレガの別働隊は美紀を狙って真田家へ訪れていた。
簡単に殺すことも出来ただろうに、わざわざすぐには死なない部位をナイフで刺し、特別課外活動部のメンバーらが助けられない事に絶望するように仕向けられていた。
適性しか持たない美紀には回復魔法が効かず、あまりの出血量から病院へ辿り着く前に命を落とす状況。
事実として七歌たちはストレガの思惑通りに何も出来ない無力感を味わい。さらに友達や家族を助けられない絶望感を覚えた。
だが、相手も流石に湊の能力までは把握しきれていなかったのだろう。
美紀の適性を奪う形で強制的に象徴化で時を止め、その間に外で手術の用意を全て済まし、象徴化を解くと同時に治療を行なうことで美紀は一命を取り留めた。

《いくら相手が襲ってきても、今回も君の従弟君がいれば大丈夫だろう？》
「まぁ、あのストレガを生身で相手出来てたくらいだし。そうかもしれないけどさ」
湊とＥＰ社の協力によって美紀を助けることは出来たが、彼女は適性を失った事で影時間に関する全ての記憶を失った。
その中には湊と共に過ごしてきた日常の思い出も含まれており、どうやら彼の傍にいた事で適性が強化された者が影時間の記憶を失うと、彼の事もその中に含まれ忘れてしまうらしい。
妹を助けるために助けてくれた恩人が割を食う羽目になったことで、真田は今も湊に対して申し訳なく思っているようだが、湊はそんな事はどうでもいいと言って翌日にストレガを殺しに行っている。
どうやらチドリやラビリスの日常を壊そうとした相手を消そうと思ったようだが、彼らは本気で相手を殺そうとして戦っていた。
湊に殺されかけた七歌たちは彼の本気を甘く見ていた。自分たちと戦った時は本当にただあしらっていただけで、最後の最後まで殺す気はなかったのだと、彼らの戦いを見ただけで理解出来てしまったのだ。
しかし、その戦いがあったからこそ、桐条グループ内でも湊とストレガが仲間ではないとはっきり理解されたらしい。
一方はペルソナを召喚せず馬鹿でかい鉄塊にしか見えないメイスで戦っていたが、湊とストレガの戦いの余波で都心の一部が更地なった事で、ペルソナ使い同士が殺し合えばどうなるかを桐条グループも理解した。
あの惨状を実際に見てもまだ仲間の可能性を疑えるのならば、その人物は最初から湊を排除しようと考えているとしか思えない。グループ内にそんな人物がいなかったのはある意味幸運だった。
《まぁ、未来というのは何が起こるか分からない。だから、くれぐれも気をつけてね》
「うん。ファルロスも色々と気をつけてね。なんか悪巧みしてそうだし」

《まさか。僕はいつも君たちの安全を第一に考えているつもりだよ？》

七歌も本気で言っている訳ではないが、友達と言えどファルロスは明確に何かを隠している部分もある。

明らかに人ではないからと言って、今更友達を悪い存在だと疑うつもりは彼女にもない。

ただ、ファルロスは本人が意図しない部分で何か悪い事に荷担させられている雰囲気があった。

本人が自覚していてもどうしようもないのか、それとも自覚すら出来ていないのかは分からないが、友達に後悔して欲しくないからこそ七歌は彼にも注意しておくように言ってから別れた。

消えていくファルロスは最後まで笑顔で手を振っていたが、次の満月まで一週間を切ったことで七歌はアルカナシャドウとストレガの対策のために少し遅くまで作戦を練っていた。

昼――天田私室

本来は夏休みの期間中だけという縛りでこの寮へやって来た天田。

しかし、寮にやって来てすぐに影時間の存在を知り、さらにペルソナにも目覚めた事で二学期が始まってからも厳戸台分寮に残っていた。

そんな少年は休日の昼間だというのに部屋に籠もって、机の傍に飾られたフェザーマンのソフビ人形にぼんやりと視線を向けて考え事をしていた。

（本当に、僕のお母さんを殺したのは荒垣さんなのかな……）

初めてタルタロスに行った日、天田は騎士系のシャドウを見て事故当時の記憶を思い出した。

緑色の世界で暴れる黒い馬の化け物。周囲のものを壊して、物音に気付いて外に出た天田の母がいたすぐ傍の建物にぶつかり、天田の母は落ちてきた瓦礫に潰されて死んだ。

色々と不幸な出来事が重なった末の事故だというのは天田も理解している。

母に影時間の適性がなければ、シャドウが暴れたのが家の傍でなけ

れば、物音が気になっても母が外に出ていなければ。
本当にちょっとした事が少しずれているだけで、きっと少年の母は今も存命で彼はここにはいなかっただろう。
だが、現実として事故は既に起きており、天田はストレガの言っていた事が事実であったと認識しつつある。
あの時暴れていたのはシャドウではなく、荒垣のカストールが暴走したものだったと。
(なんで……なんでよりにもよって……お母さんの仇が仲間の一人なんだよっ)
声に出して叫びたい気持ちをグッと堪えて、天田は強く握り込んだ拳を机に向けて振り下ろす。
同級生より少しばかり精神年齢が高い天田は、あまり友達と遊んだりもせずどこか距離を置いて過ごしていた。
けれど、この寮にやって来てからは共に戦う仲間として、学校の友達なんかよりももっと近い距離で他の者と関わり、その中にいることに居心地の良さを覚えていたのだ。
高校三年生組の三人は小学生とどのように接して良いか分からないのか、順平やゆかりたちと比べてどこか天田を気遣うような部分もあったが、子どもが苦手な人もいると分かっていたので、天田も特に気にすることなく良い距離感の関係を築けていたと思っている。
だが、先日のストレガが話していた事が事実であれば、彼らは年下との距離感を掴めていないのではなく、事故の被害者と加害者がいる事で真実がバレることを気にしていたのではないか。
一度そう考えてしまうと事実とは違っていても、どうしても悪い方悪い方に想像して行ってしまい。天田は一時期憧れていた真田の事すら信じられなくなっていた。
(でも、有里先輩がカストールを持っていた時期もあったはず)
あの事故がカストールの暴走で起きた事はほぼ確実だと思っている。
ただ、湊という他人のペルソナを奪える裏社会の人間がいる事で、天田はその犯人が本当に荒垣だったのかと疑うだけの思考は残って

いた。
自分よりも先に特別課外活動部に入っていたゆかりたちから聞いた話では、湊は荒垣のカストールを使って荒垣になりすまし、何度か特別課外活動部のメンバーらの窮地を救っているらしい。
どうして彼がカストールを持っていたのかまでは聞けていないが、湊が裏の仕事をしているのは今の天田より小さい頃からなので、真田たちが三人で活動していた時期には既に湊も戦っていたのだろう。
だとすれば、荒垣が一時期ここを離れていたという話も、湊にカストールを奪われて戦う力を失っていたからと考える事も出来る。
荒垣が正確にいつから部活を離れていたのかは分からない。
ただ、間違って無関係の人間に刃を向けるつもりはないので、天田は詳しい情報を手に入れなければと椅子から立ち上がると誰か話を聞ける二年生組のメンバーが寮に残っていないか見に部屋を出て行った。

第三百二十三話　求める情報

９月２８日（月）
放課後――喫茶店〝フェルメール〟
巌戸台港区のはずれの裏路地へ少し入った場所にある、隠れ家的喫茶店〝フェルメール〟。
店のマスターである五代が情報屋をやっていることもあり、基本的には裏の人間ばかりが訪れるのだが、扉が開いてカランカランとベルが鳴ったので視線を向ければ、そこには学校の制服に身を包んだ天田が立っていた。
以前、湊の過去について話を聞きにこの店を訪れた時と、独自の情報網で調べたところ、背伸びしたい年頃の少年という印象を持っていたので、今日は大人の雰囲気でも味わいに来たのかなと予想する。
「やあ、いらっしゃい。天田君……だったよね？」
「あ、はい。天田乾といいます」
「僕は前にも自己紹介したと思うけど、この店のマスターをやってる五代だ。見ての通り店はガラガラだから好きな席に座ってくれ」
今現在、この店の中にいるのはマスターである五代を除けば、ほぼ定位置であるカウンター席の奥から二番目に座っているロゼッタのみ。
彼女は情報屋と仲介屋を兼任しているので、暇な時は友人の店で寛ぎながら仕事の話を色々としているらしい。
後から来た身ではあるが、天田は人がいる事でどこか気まずそうにしながらもカウンター席の一つに腰掛ける。
こういった時、相手がどこに座るかによって心理を読むことが出来るのだが、少年はロゼッタから三つほど離れたカウンター席のほぼ中央に座った。
あくまで素人の子どもにしてはという条件が付くが、超常の存在と戦っている事もあって十分にロゼッタのことは警戒しながらも、敢えてカウンター席の真ん中に座ったという事は、彼は余程の理由があって五代と話がしたいのだろう。

小さな子どもが見るからに訳ありな様子でやって来ると、つい湊とチドリが初めて店に来たときを思い出して懐かしくなる。
それだけ五代とロゼッタも歳を取ったという事だが、自分たちの歳のことを考えていると悲しくなってくるので、ロゼッタが意識して気配を薄めれば、天田が注文もせずに用件を切り出した。
「あの……情報を買いたいんですけど」
この店が裏社会に繋がる情報屋をやっていることは、チドリ経由でゆかりが紹介された事もあって、桐条側にもしっかりとバレてしまっている。
当然、本来ならば一般人である子どもらにそんな情報が伝わるのは好ましくない。
確かに五代たちは情報を求めてやって来た者らに、報酬次第で情報を売ることもしているが、そこには裏社会における暗黙の了解を含めた独自のルールがある。
湊はそれをしっかりと理解した上でここを利用し、チドリたちも最低限の事は湊から聞いて守った上でここを利用している。
だが、チドリから湊の話をするならここが相応しいと紹介されただけのゆかりは、報酬を払えばどんな情報も売ってくれる相手という認識で、ルールなどまるで知らなかったために表の人間である友人らをぞろぞろと連れて来てしまった。
変な言い方ではあるが、まともな裏の人間ならばそんなふざけた事をする人間などすぐに追い出す。
公に出来ないからこそ〝裏の〟と言っているのに、そんな所へフラッとやって来て情報を売ってくれは流石にないだろう。
訳ありな様子でここへ来た時点で五代たちも察していたが、案の定、天田が何の条件も満たしていない状態でただ情報を売って欲しいと口にしたことで、少々呆れつつもやんわりと少年を窘める。
「真っ当な世界で生きたいなら利用は勧めないね。分かっているかい？　ここを利用するってのはそれだけで君の弱みの一つになるんだ。裏の人間と繋がりがあるっていうね」
「というか、桐条家のご令嬢と一緒にいるんでしょ？　ジャンや私に

お金払って話を聞くより、そっち経由で情報を集めた方が安全且つ経済的よ？」
ジャンというのは親しい者が使う五代の愛称だが、五代に続けてロゼッタも横から口を挟む形で少年にアドバイスをする。
五代とロゼッタは共に情報屋なので、相手が情報屋としてどれくらいの腕を持つのか把握している。
さらに、他所の情報屋や大企業の情報部がどれくらいかという話もするため、桐条グループの情報部ならば大概の情報が手に入るだろう事も知っていた。
桐条グループのご令嬢である美鶴の仲間という事ならば、情報部もかなり頑張って調べてくれるはずなので、今現在では分かっていない事も数日の内に調べてきてくれるだろう。
五代やロゼッタでも同じ情報を渡すことは出来るだろうが、そこは仕事として子どものお小遣いでは到底払えない対価が必要になる。
いくらシャドウ討伐でそれなりに稼いでいるにしても、無料で情報を手に入れる手段がありながら、わざわざお金を払ってまで裏の人間から情報を買う危険を冒す理由が分からない。
どうして桐条グループに頼らないのかとロゼッタが尋ねれば、天田はテーブルに視線を落としたままポツリと答えた。
「……桐条グループ側が把握した上で隠しているかもしれない情報なんです」
俯いているのでその表情はあまり見えないが、〝かもしれない〟と言いつつも天田はどこか確信しているようだった。
五代も湊関連で情報が必要になるかもしれないと考え、過去に様々なパイプを駆使して桐条が過去に行なっていた影時間関連の情報は手に入れている。
だが、以前ゆかりたちが湊の過去を聞きに訪れた時の様子から察するに、子どもたちはそのほとんどの情報を知らされていない。
桐条グループには〝警備部門〟という名目で、私兵とも言える情報部の特殊部隊が存在するのだが、そんな戦闘に慣れた者たちを擁していながら、ただの学生でしかない子どもたちを命懸けで戦わせている

のが現状だ。
適性がないからしょうがないというのは分かるものの、適性がない人間に一時的に適性を付与する簡易補整器の指輪を使えば、誰でも影時間に活動出来るようにはなる。
さらに黄昏の羽根を内蔵した銃器ならば対シャドウ兵器として使えるので、桐条グループが言っているペルソナ使いしかシャドウを倒せないという情報は誤りだ。
子どもたちがその事に気付いているかは分からないが、大人の尻拭いのために命懸けで戦ってくれている者らに、聞かれていないから教えていないというのはあまりに不誠実。
天田が僅かにでも不信感を覚えるのはしょうがないなと五代は小さく嘆息し、情報屋の思考に切り替えるため煙草を吸っても良いかなと一言断ってから咥えた煙草に火を点けた。
「フゥ……とりあえず話を聞こう。その後に君が求める情報を持っているか答える。情報料もその時に伝えるから、予算と相談して何を聞くか決めるといい」
「分かりました」
五代が話を聞いてくれると分かり、天田は少し安心した表情で顔を上げると頷く。
ここで断られていれば、母親を殺した張本人の可能性がある湊に情報を求めにいく必要があったので、話だけでも聞いて貰えるというのは非常にありがたかった。
天田が話しやすいようにと五代がオレンジジュースをサービスで出せば、受け取ってお礼を言った天田は一口飲んで喉を濡らしてから自分が知りたい情報について話し出した。
「僕が知りたいのは、二年前の十月四日にポートアイランド駅の路地裏であった交通事故についてです。深夜、居眠り運転していたトラックが民家に突っ込み、その家に住んでいた女性が一人死亡した。世間ではそういう事になっていますが、その時に現場にいた人間として事実ではないと否定させてもらいます」
具体的な日時まで分かっているのであれば、情報屋としては簡単に

調べられるので非常にありがたい。
居眠り運転のトラックが民家に突っ込み住民が死んだなら、地方ニュースだけでなく全国ニュースでもそれなりに取り上げられているはず。
天田の話を聞きながらノートパソコンを開き、五代が一般的な検索エンジンで調べれば、先ほど少年が話した通りの内容が様々な新聞で記事として取り上げられていた。
「あの場で一人の女性、僕の母が死んだ事は事実です。でも、民家に突っ込んだトラックなんてありません。僕の母は物音がしたからと外に出て、その時に近くの建物が壊れて出た瓦礫に潰されて死んだんです」
幼少期に離婚した事で母と二人で暮らしていた少年にとって、母の死は世界が崩壊するのと同義だった。
あの日、緑色に塗り潰された世界でトイレのために目を覚ました天田は、外から物音がするからと様子を見に行った母を追って遅れて家を出た。
結果から言えば、家の外にはその時の判断を悔やむほどの絶望が待っていた。
暴れて建物を破壊する黒い馬の化け物。恐怖で動けなくなった母親。そして、そんな母親へと降り注ぐ崩壊する建物の瓦礫。
「当時、警察にもその事を話しましたが、母親が死んだショックで夢と現実の区別がつかなくなっているんだと判断され、僕の話した内容は一切記録に残されることなく終わりました」
暗い表情でその時のことを話してくれる少年には悪いが、聞いている五代とロゼッタは共にそれはそうだろうと思っていた。
その警察官が欠片でも影時間について知っていれば、恐らくそこでの会話をメモし、警察としての公式な文書にも残しつつ桐条グループに連絡をいれていただろう。
だが、何も知らぬ一般人であれば心に傷を負った少年を心配するだけで終わる。
当時は相手の雑な応対に対してショックを受けた天田も、少し考え

る余裕が出来ると話を聞いてくれただけマシなのだと考えるようになっていた。
「正直、僕も影時間について知るまでは、もしかしたら警察の人が言っていた通りにショックで夢を見ていたんじゃって考えるようになってたんです。でも、影時間を知って、記憶に残っていた黒い馬の化け物に似たシャドウがいると分かった事で、やっぱりあの事故は夢じゃなかったんだと思いました」
事故が起きた日に揃って影時間に迷いこんだのは偶然だ。
元から高い適性を持っていたのだろうが、天田に関してはペルソナに目覚めるまで適性は安定していなかった。
おかげで影時間に迷いこむのもランダムで、安定した適性とペルソナを手にするまで随分と時間が開いてしまった。
「でも、先月の満月の日に敵のペルソナ使いの一人が言ったんです。僕のお母さんを殺したのは確かに黒い馬の化け物だけどシャドウじゃなくてペルソナだって。確かに仲間の一人に黒い馬に跨がったペルソナを持ってる人がいるんです。敵がその話をした時に一緒にいたんですけど、その人は否定も肯定もしなくて……」
そこまで話すと天田は膝の上に置いた手をぎゅっと強く握り締め、再びテーブルの上に視線を落として俯く。
今まで仲間として信頼していた相手が母親の仇かもしれないという状況は、確かに年頃の少年でなくとも非常に悩む問題だ。
もしも、桐条グループがその事を把握していても、自分たちの持つ戦力が減ることを恐れて黙っている事は十分に考えられる。
下手をすれば天田が相手に仇討ちとして武器を向ける事もあり得るのだ。
子ども同士で戦う状況に陥るリスクを考えれば、やはり把握していても黙っている事が正解のように感じる。
だが、いくら桐条グループがその件について隠していても、裏の世界で生きている敵に情報が漏れていて、さらにそれをチームの内部分裂のために使われていては世話がない。
その敵のペルソナ使いらには拠点への侵入を許して裏方としてサ

ポートしてくれていた顧問を殺害され、その次の月にはメンバーの実家がバレていて親族を危うく殺される状況にあったという。
恐らくは探知型のペルソナを使い、特別課外活動部がどういった動きをしているか把握しながら、事前に決めていたパターンの中から作戦を選んでいると思われる。
桐条グループもそこまでは分かっているはずだが、狡猾な裏の住人を相手に一般人の学生らが対応しきれる訳がない。
現にこうして天田は桐条グループを信用出来なくなって別の情報源を求めて訪れているのだ。
完全な内部分裂には至らなくとも、チーム内で不穏な空気が流れるだけでも戦力は大幅に下がるので、この状況を狙って仕組んだ相手側のブレーンの作戦は既に成功していると言えた。
話を聞き終わったところでストレガの方がやはり上手だなと考えていた五代は、どこまで話すかなと既に持っている手札の切り方を考える。
天田が何の情報を買いたいか話し始めた時点で、五代もロゼッタも湊から聞いていた話だと分かっていたのだ。
どういった経緯で事故が起きたのかも把握しているし、被害者と加害者が一緒のチームにいるというのも聞いている。
つまり、二人は一切自分で動くことなく小遣い稼ぎをする事が出来るのだが、相手が子どもであっても情報屋が自分の持つ情報を安売りするような事はあり得ない。
業界のルールも知らない素人が持ち込んだ突発的な依頼なので、相手が諦めるならそこまでという一種の遊び感覚でいながら、それを欠片も表情に出すことなくロゼッタは薄い笑みを浮かべて少年に声をかける。
「その事故……いいえ、事件についてはいくらか知っているわ。貴方が知りたいのは真犯人の名前？　それとも事件に至る経緯？　もしくは両方かしら？」
「出来れば両方知りたいです。それと桐条グループがそれを把握して隠していたのかも分かるなら教えてください」

余裕すら感じる口調と仕草で天田を見つめるロゼッタの言葉に、天田はそれが求めていた情報ですとすぐに食いつく。
当然、ロゼッタは少年が食いつくように話したのだが、ここまで簡単に釣れてしまうと情報を売る側としては完全なカモだなと心の中で笑うしかない。
これが高校生組ならばもっと疑って下手なりに交渉してくるのかもしれない。
だが、やはり精神的に追い詰められている小学生ではこれが精一杯かと小さく笑って、ロゼッタと五代であくまで適正な範囲での値段設定を教える。
「こういう時って段階的に情報を開示するのよ。そして、そこで値段も変わってくるの」
「相場は名前だけなら十万、経緯を含めれば三十万、プラスアルファの情報も欲しいなら五十万から百万ってところだね」
「っ……そんなにするんですね」
考えていたよりも高い値段設定に天田は思わず言葉に詰まる。
天田がどれだけを想定して予算を組んでいたのかは分からないが、シャドウ退治で稼いでいても出せるのは真ん中の三十万が限度だろう。
仮に一番最後のプラスアルファまで情報を求めるのであれば、その時は問答無用で百万が請求されるという罠もあったりする。
情報は欲しいが出来る限り値段を抑えたい少年は顎に手を当てて考えると、相手から情報を多く貰うから駄目なのではと発想を変えてみた。
「じゃあ、僕が知っている事が事実かどうかの判定ならどうなりますか？」
「解説も何もなく事実か否かの判定かい？　まぁ、ほとんど変わらないよ。それって真犯人の名前を聞くのと大差ないだろ。どんなにまけても二万円引くくらいかな」
確かに天田の考えた方法ならば情報屋としては出す情報は少なく見える。

けれど、それは見方を変えただけで、実際には犯人の名前を教えるのとほとんど変わらない。
そのため、家電量販店の値切りみたいだが二万円ほどしか下がらないよと答えれば、天田は難しい表情で考え込み、最後には意を決したように口を開いた。
「……分かりました。じゃあ、犯人の名前だけおしえてください」
「前金で十万だ。持ってきてるかい？」
「はい」
本来ならば前金で全額貰う事はほぼない。信用第一な情報屋として長くやっている人間なので、嘘を言う可能性はほとんど無いのだが、天田はそういった警戒を欠片もしてないのか素直に財布から十万円を取り出したテーブルに置いた。
小学生が財布に入れてくるにはあまりの高額。まぁ、中には湊のように数百万から数億単位で持ち歩いている者もいるが、天田のこれは依頼のために財布の中身を重くしてきただけだ。
少年が出したお札を確認した五代は、相手が早く情報を聞きたいと分かっていながら、敢えてゆっくりと煙草の煙を吐いて勿体ぶる。
視界の隅では五代な露骨な時間稼ぎにロゼッタが笑いを堪えているが、天田は拳を強く握り締めて言葉を待っているのでそれが視界に入っていなかった。
そして、煙を吐き終えた五代は再び煙草を咥えると静かに答えた。
「……君のお母さんを殺したのは月光館学園高等部に通う荒垣真次郎だ。どうだい。君の中にあった答えと一致したかな？」
「……はい。元々、カストールは荒垣さんのペルソナなんです。でも、有里先輩が使っていた時期もあったので、もしかしたらって思ってたんですけど」
一連の経緯は五代たちも知っているので、天田が荒垣ではなく湊が犯人である可能性に賭けていたのは察していた。
まぁ、湊は散々人を殺しているので、その感覚で母親も殺していてもおかしくないと思ったのだろう。
けれど、彼や彼の仕事を知っている者にすれば、むしろ無関係な他

人を巻き込むような殺しはあり得ないという印象の方が強い。
未だに湊に負けて死にかけた事を引き摺っているのかと思ったロゼッタは、湊のマイナスイメージを少しでも減らせないかと少しだけ情報をサービスする。
「サービスで教えておくけど、小狼君がその荒垣って子のペルソナを持っていたのは、荒垣って子が人を殺した事実から離れたくてらしいわよ。部活やあの寮を離れて、最後に力を手放してって感じでね」
「そう、なんですか？」
「ええ。元々はストレガに頼んだけど、嫌がったストレガが小狼君を紹介して以降は小狼君が担当してたらしいわ」
「……なんだよ、それ」
ロゼッタが話したのは事故やその経緯ではなく、真犯人のその後についてである。
故に、その情報はプラスアルファの部分にも含まれないという適当な理屈なのだが、話を聞いた天田は荒垣が人を殺した事実から離れたがったと部分に強く反応し、肩を震わしながら拳を握り締めると、席を立ってそのまま店を出て行った。
しっかりとお金は受け取っているので別に構わないが、貰った内の半分をロゼッタに渡しながら五代が先ほどの彼女の発言について僅かに責めるように諌めた。
「ロゼッタ……君、わざと誘導しただろ」
「あら、情報の受け取り方は自由よ？　最初から目が曇ってるみたいだから、下手にブレーキをかけるより当事者間で好きにどうぞって勧めただけじゃない」
「それで小学生が道を踏み外すかもしれなくても？」
「生き方を選べない子だっているのよ。選択肢があって選んだなら後は自己責任よ」
先ほどのロゼッタの言葉は天田が余計に犯人を憎むように仕向けたものだ。
力を手放すことで罪から逃げようとして、その人物が期間をおいてから部活に復帰していれば、もう時間が経っているから良いだろうと

思っているようにも見える。
勿論、それはあくまで一つの見え方であって事実ではないのだが、天田が湊を都合良く悪人として見ようとした事にロゼッタは小さく怒っていたので印象操作しておいたのだ。
確かに自分が見聞きした情報が全て正しいかは分からないので、間違った情報に踊らされるかどうは自分次第になってくる。
だが、いくらムカついたからといって、いい歳した大人が小学生を煽るなんて大人げない。
小さく溜息を吐いてからお金をポケットに入れた五代は、扉の方へと視線を向けてから天田が使っていたグラスを洗いにシンクへと向かって行った。

第三百二十四話　裏で動く者たち

夜――喫茶店〝フェルメール〟

天田が店を去った後、五代は湊の仕事用のアドレスに一通のメールを送った。

内容は、天田が母親の事故の真相を探っており、依頼として犯人の名前を教えたというもの。

加えて、ロゼッタがわざと煽るような言い方をしたため、天田の犯人に対する憎しみと怒りが増しているとも。

信用第一な情報屋として印象操作はどうだという意見もあるだろう。

だが、情報を武器にしているからこそ、そういった印象操作で有利な状況や望む状況を作り出すことも出来るのだ

もっとも、今回のロゼッタの行動はただの八つ当たりであり、天田がドツボに嵌まるようにと悪意だけで行動した結果なので、もしかしたら迷惑をかけるかもしれないと思って五代は湊に連絡を入れた。

彼が桔梗組を去って以降はプライベートの連絡手段はほとんど通じないため、栗原も連絡が必要な時に利用した仕事用連絡先にメールすれば、五分ほど経ってから湊から後で店に向かうとの返事が来た。

色々と多忙な彼がわざわざやってくるなど最近では珍しい事である。

今の湊は学校に通っていない分、ＥＰ社の仕事に掛かっていて、それと並行して様々な研究を進めている。

主な研究内容は一般人でも使用可能な対シャドウ兵器の開発であったり、自分用に作った超重量大型メイス〝デュナミス〟の調整、そして生体義手を手に入れた今は必要なくなったが機械義肢の開発も一応はしているらしい。

元々、ＥＰ社で研究主任であるシャロンも、自分の研究テーマである新型義肢の開発が出来るからと参加している身だ。

彼女が言うにはＥＰ社と湊が持っていた技術のおかげで、サイズと性能が生身とほぼ同じレベルの義肢が一般向けに販売出来そうなと

ころまで来ているという。
個人で研究していた時には、生身と同じレベルの細かな動きは到底不可能で、それに出来る限り近づけたロボットハンドは競輪選手の太股並みの太さになっていた。
それでも十分すぎるほど小型化に成功していたのだが、当然、そんな巨大なものを腕につけられる訳がない。
だが、癒着や汚職に塗れた派閥に入ることを嫌って、おかげで業界では異端児と呼ばれ流れの医者としてしか活動していなかった彼女が個人で研究するにはそこが限界だった。
スポンサーは欲しいが一部の権力同士による余計な争いに巻き込まれたくない。
そんな考えを持っていた彼女にすれば、権力者たちを力でねじ伏せて自分の道を突き進んでいた青年は非常に優良物件に映ったようだ。
今では湊の無茶ぶりも何だかんだと研究してある程度の成果を出し。自分のメインの研究に活かせる部分は流用しているという。
そんな以前聞いた話を思い出しながら、五代が自分の淹れたコーヒーを飲みながらノートパソコンで地下教会の情報サイトを流し見ていると、入口のベルが鳴って黒いマフラーを首に巻いた青年が店に入ってきた。
「やあ、いらっしゃい」
「……ホットのブレンド一つ」
「ははっ、了解」
席に着く前に注文を受けた五代は笑いながら準備を始め、カウンター席に勝手に座る青年の様子を眺める。
今でも時々は連絡を取っているが、湊の立場というのもあって直接会うのはかなり久しぶりだ。
見た目の変化は感じられず、雰囲気もいつも通りで変わりがないように見える。
「随分と久しぶりだね。調子はどうだい？」
「……別に。主な研究も大体は終わってるし、今は表向きの仕事の方が増えているくらいだ」

最初に湊がＥＰ社で進めた研究は失った腕の代用品である高性能な義手製作。
そして、いつか目覚めるだろうと言われていたアイギス用の新型ボディである生体パーツの開発だった。
五代もロボットを生身の人間にすると聞いた時には驚いたが、人間と違って明確に意識や魂というものがどこに宿っているのか分かっていれば、後から作った器に意識体を移して肉体にする事も可能なのかと納得させられた。
無論、どういった手順を踏めば生きているのに魂がない肉体が作れるのかという疑問はある。
ただ、そういった好奇心からＥＰ社を探ろうとすれば、知り合いであろうと湊が動き始めるので命が惜しい五代は彼ら側の事情には踏み込むつもりがなかった。
「はい。お待ちどおさま」
「……ああ」
コーヒーの淹れ方自体は情報屋としての師匠だった男から学んだ物だが、それで他の者たちが美味しいと言ってくれるので五代はずっと同じ淹れ方をしている。
無論、豆の種類によって蒸らす時間を変えたりはしているが、今日もいつもと同じ味を出せばカップを受け取った青年も、いつも通り感情の読めない瞳でカップの中に視線を落として黙って口をつけた。
味を尋ねれば彼はきっと素直な答えを返してくれる事だろう。ここで変にお世辞を言ったりしない性格なのは五代も分かっている。
ただ、五代は美味しいと言ってもらえるコーヒーを出す努力はするが、この店のコーヒーとして変えるつもりがない物もある。
湊が飲んでいるブレンドがまさにそれで、この店のブレンドは五代が自分なりのセンスで選んだ数種類の豆を混ぜて作った物だ。
豆の種類と割合は他の者に教えるつもりはなく、生前の師とイリスも美味しいと言ってくれたブレンドに関しては店をやり続ける限り今のままでいようと思っている。
そうして、湊がある程度までコーヒーを飲み続ければ、彼が視線を

上げたタイミングで五代も今日の天田の様子について話すことにした。
「君がいた学校の初等部に通っている天田って少年がいるだろ。今日、彼がやって来て自分の母親が死んだ事故の真相を尋ねてきたんだ。ただ、こっちも仕事だからね。お金が掛かるからって先に聞きたい事を尋ねて、後は情報ごとの金額を提示したんだ」
五代は学校が終わってから真っ直ぐ来たであろう天田が来店した時の様子を語る。
背伸びした小学生がコーヒーを飲みに来たのかと思えば、以前ゆかりからここが裏の情報屋である事を聞いたことで頼ってきた。
正直に言えば完全にフリーで好きにしているロゼッタはともかく、拠点を持っている五代としては一般人が軽々しく情報屋として尋ねてきて欲しくはない。
裏の人間にバレやすくなるというリスクは勿論、下手をすれば表の国家権力にバレるかもしれないのだ。
警察や公安にバレれば五代もここにはいられなくなる。別に海外に伝手がない訳ではないが、この店には愛着があるので離れたくはない。
それ故、五代にとって天田は招かれざる客だったのだが、だからといって天田に教えた情報料は特別高く設定している訳ではない。
「彼、十万ちょっと持ってきててね。よくもまぁ小学生がそんなに貯めたもんだと驚いたよ」
「……桐条側から出た報酬だろ。夏頃から参加したにしても一月くらい狩ってればそれくらい払われるさ」
「まぁ、その報酬が適性かどうかは分からないけどね。蜂の巣駆除なら一万円もしないけど、もう少し危険と考えれば時給二万弱くらいにはなってるのかな？」
影時間は毎日一時間。つまり、彼らがタルタロスに向かっても、実質一時間ほどしか活動しない。
出動するだけで一定の金額は保証され、残りは出来高で報酬が払われるとすれば、人数で割って二万円に届かないくらいだろうか。

子どものバイト代と考えればかなり高額な方になり、順平辺りは影時間がなくなってから一般のバイトの拘束時間と得られる金額の少なさで苦労しそうだ。
「……命懸けだがどうせ化け物相手だ。いくら殺しても気にならない以上、割が良いバイトとして今の内に貯金でもしておけとしか言えないな」
「ま、確かにね。彼らは人数も多いし、索敵系のバックアップもしっかりしている。出てくる敵も階層単位でほぼ変わらないなら稼ぎやすそうだ」
湊や五代の小遣い稼ぎと言えば、専ら裏の人間を殺すことだった。
チドリに合わせて栗原の店でバイトしたり、暗器系の使い方を教わる対価に紅花の中華料理屋でのバイトも経験しているが、あんなものは湊にとっては小遣い稼ぎというより技術や経験を得るための場でしかない。
話している二人はお互いにろくなバイトを経験していないなと思いつつ、脱線していた話を戻して天田について五代が続きを話す。
「彼はストレガから母親の事故について聞いたらしい。それまでは黒い馬のシャドウが殺したと思っていたみたいだ」
「まぁ、カストールに似た騎兵型のシャドウもいるしな」
「そういう事。で、彼の知っている限り、カストールを所持していた人物は二人いた。だから、本当にペルソナの起こした事故なのか、また当時持っていたのはどっちかを知りたがったんだ」
報酬の関係で事件の経緯については教えられなかったが、真犯人について聞ければ原因がシャドウなのかペルソナなのか分かるだろう。
加えて、少年が最も知りたかった〝どちらが犯人なのか〟という悩みも解消出来る。
天田としては湊が犯人であって欲しかっただろう。
弁当ばかり食べている少年のことを気にして、自分の分のついでだからと言いつつ手料理を振る舞い。活動中は天田が失敗したときによくフォローに入って助けてくれた。
兄弟のいない天田にすれば、兄がいればこんな感じだろうかと思え

るくらいに信頼していた相手で、だからこそ自分が探していた母親の仇であって欲しくなかった。
大量殺人鬼である湊ならば、やっぱり悪党なんだと素直に恨み、母を殺された憎しみをぶつけることも出来ただろう。
コーヒーを飲み終えてマフラーから取り出した煙管を咥えた湊は、随分とまたこじれているなと敵側の事情ながら小さく呆れた様子をみせる。
「……別にこっちに押しつけても構わなかったが？」
「そこは情報屋として嘘は付けないよ。嘘を吐くメリットもないしね」
湊としては特別課外活動部など戦力にならないので不要と考えている。
だが、邪魔しないのであれば、他所のペルソナ使いの受け皿として使えるので残っていても構わない。
その関係から、組織として崩壊しないよう内部の問題を湊に押しつけて沈静化を図るくらいなら湊も許可した。
いくら天田が湊を憎んで殺しに掛かろうと、首を刎ねでもしない限りは死ぬことはない。
そも、二人の実力差を考えれば一撃当てるのも難しいと思うが、天田の憎しみが募り続けようと特別課外活動部には影響ないだろう。
だからこそ、適性は持ってないが影時間の事情は知っている五代が、特別課外活動部の存続のため個人の判断で真犯人を湊だと騙っても構わなかったのだが、彼は情報屋が大した理由もなく嘘をついては駄目だろうと苦笑した。
「そういう訳で彼は、母の命日である十月四日、奇しくも満月の日だが動くつもりだろうね」
「まぁ、二人消えたところで問題ないな」
「おいおい。仮にもアイギスさんの仲間だろう？」
「俺と無関係な問題だ」
確かに二人が争ってどちらか死んだところで、湊に対して責任を問うのはおかしい。

五代から情報を得て、天田が動くと知っていたなら何故止めなかったと言われれば、そもそも当時の事を知っている美鶴と真田が予め動いておけという話だ。
一応、そういう事があり得るとして頭には入れておくが、自分が特別何か動くことはない。
そう告げて湊はマフラーから一万円札を取り出してカウンターの上におけば、「じゃあな」とだけ言って店を出て行った。
コーヒーくらいサービスするつもりだった五代は、何とも律儀な青年だと笑ってからお札をレジにしまった。
深夜――都内・某所
港区のはずれにある地下に作られた個人の研究室。
以前より桐条グループの金を一部横領して作ったそこでは、幾月の娘である玖美奈が次の満月に向けて武器の手入れをしていた。
彼女が手に持っている武器は、まるでサバイバルナイフをそのまま巨大化させたような大剣。
恐らくは切れ味などより強度を優先して作られたのだろう。硬い敵を切りつけても刃こぼれ一つしなさそうな重厚さを感じる。
花の女子高生がそんなものを楽しそうに手入れしていれば、裏の住人だろうと少しは気になるのか、離れたソファーで銃弾の検品をしていたタカヤが声をかけた。
「次の満月、私たちは別働隊を叩くつもりですが、貴方たちはアルカナシャドウへ向かうという事で宜しいですか？」
「ええ。生贄に必要な数は七人ですもの。そろそろ、削っておく必要があるでしょう？」
幾月が調べた情報によれば、ニュクス降臨のために捧げるべき生贄の数は七人。
全てのアルカナシャドウが倒され、現われたデスに七人の生贄を捧げればニュクスが降臨する。
ニュクスが降臨すれば今の世界は滅ぶが、その後は生と死の存在しない新たな世界が幕を開け、そこで幾月が闇の皇子として君臨してゆく事になる。

もっとも、その部分についてはタカヤたちストレガは信じていないのだが、ニュクス降臨に関しては、以前退行した湊が无窮を門にしてあちら側と繋いだ事で実在すると確信出来た。
なので、最終目標さえぶれなければ協力者たちをわざわざ煽る必要もないかと、タカヤは闇の皇子のくだりには触れずに次の満月について話を進める。
「まぁ、桐条側のペルソナ使いはどうとでもなるでしょうが、ミナトが出てきたときにはどうなさるおつもりで？」
「特別な事はしないわ。ただペルソナで殺すだけよ」
「貴方たちも海外で鍛えたのでしょうが、そう簡単にアレを殺せるとは思えませんがね」
単純な身体能力では勝てない。その点については玖美奈も分かっているので、あくまで上回っているペルソナ能力で殺すつもりだ。
けれど、タカヤは単純な数値では測れない彼の怖さを知っている。
実際に敵として相対すれば、あれが人という規格で語って良い存在はないとハッキリ分かる。
玖美奈や理がどれほどの実力を持っているかは、ここで全力を見ていないため判断が難しいけれど、敵のことを知っているからこそタカヤは相手が楽観的すぎるように思えた。
一方、自分の実力と理の力を把握している玖美奈は、自分たちの力を理解しているからこそ大丈夫だという自信があった。
「アレがどれだけ強かろうが関係ないのよ。火力勝負でも負けるつもりはないけど、そんな原始的な戦いだけをするつもりはないわ」
「ほう……。まぁ、私たちも空振りであったり、事が済めば向かう予定です。あのミナトが本当に死ぬのかという興味もあるので、是非とも頑張って頂きたい」
「ええ。貴方たちが一度として勝てなかったあいつの首を見せてあげるわ」
不敵に笑って立ち上がる玖美奈は、手入れが終わった武器を専用のケースに仕舞いこむと、それを肩にかけて部屋を出て行く。
去って行く後ろ姿を見ていたタカヤは、迫る満月の日を思って小さ

く口元を歪めた。

第三百二十五話　復讐の牙を研ぐ

影時間――タルタロス１３５Ｆ
もうすぐ満月の日がやって来る。
次の満月にやって来るアルカナシャドウは、無気力症患者の人数から二体と予測された。
これまで現われたアルカナシャドウは九体。よって、次の満月に出てくるのは運命と剛毅のアルカナシャドウという事になるだろう。
ここ一月の無気力症患者の分布から割り出された出現ポイントは、巌戸台分寮の最寄り駅でもある巌戸台駅前の辺り。
移動に時間が掛からない分、確実を期して慎重に戦う事が出来そうなものだが、特別課外活動部のメンバーはそんな風に楽観視している者はいなかった。
「順平、コロマル、盾になって！」
「あいよ！」
「アオーン！」
フロアボスである魔術師〝眠るテーブル〟が広範囲に炎を放つと、七歌が火炎耐性を持つメンバーに指示を出して味方の盾になるよう頼む。
本来、コロマルは特別課外活動部のメンバーではないので七歌の指示を聞く必要はないのだが、湊捜索のために一時的に参加していたチドリたちが今も活動に参加しており、指揮系統が分かれると咄嗟の対応が遅れるからと七歌の指揮に従っていた。
他のメンバーを守るため順平のヘルメスとコロマルのケルベロスが現われ炎を防ぐ盾となる。
二体のペルソナに防がれた炎はそこから二つに分かれて広がり、ペルソナの背後にいた者たちには火の粉一つ届かない。
盾となっているペルソナの持ち主も戦闘中のため真剣な表情だが、攻撃自体はまるで効いていないようで余裕が感じられる。
そうして、二体のペルソナが盾になったまま数秒間耐えていれば、注ぎ込んだ魔力が切れたのかシャドウの放つ炎の勢いが弱まり最後

には消えた。
魔法を放ち終わったばかりで敵は次の行動に移るまで時間が掛かる。
ならばここで一気に攻めるべきだと判断して、七歌は味方へと即座に指示を飛ばした。
「行って天田君！　アイギスは天田君が敵に辿り着くまで牽制して！」
「了解であります！」
十文字槍を手に持った天田が、ヘルメスとケルベロスの横をすり抜けるように飛び出す。
子どもながら中々の俊敏さを見せる彼ならば、槍のリーチと合わせて敵が動き出す前に攻撃を繰り出すことが可能と七歌は判断した。
さらにアイギスが弧を描くように走りながら銃弾の雨を敵に向けて浴びせ、天田の接近に気付いている敵が対処出来ないよう妨害を入れる。
銃弾が鬱陶しいのか敵は後退を始めるも、その時には天田が敵の目前まで迫っていた。
「はぁぁぁぁぁっ!!」
吠えた天田は助走の勢いと共に飛び込み、全体重を掛けた必殺の突きを放つ。
空気を切り裂く音をさせながら敵へと迫る穂先は、真っ直ぐ吸い込まれるように敵の仮面を穿つ。
直後、ピシリ、と硬い何かが割れる音がすれば、槍の先端が突き刺さったシャドウの仮面に亀裂が走り黒い靄を噴き出しながら割れた。
仮面はシャドウの中でも強度の高い部位だが、その分ダメージを負えば致命傷に至る弱点の一つだ。
その仮面に回復不可能なダメージを負った以上、フロアボスだろうと長くは持たない。
割れた仮面から血のように靄を溢れさせたシャドウは、そのまま数歩後退すると最後には弾けるように消滅した。
「……フロアボスの討伐確認。風花、一応周囲の敵を探って」

《はい。周辺に敵の反応はありません。やっぱり、フロアボスのいる階層はフロアボスしかいないみたいです。戦闘おつかれさまでした》
フロアボスだけあって中々のタフさを見せた敵だったが、一体しかいなかったこともあって攻撃パターンを読めば対処自体は可能だった。
相手の持つスキルを把握し、自分たちが遠距離と近距離にいる時の動きをそれぞれ把握すれば、後は詰め将棋のように着実に対処して攻めるだけで勝てた。
戦闘が終わってからの皆の様子を見て、消耗が激しい者や怪我をしている者がいないことを確認すると、七歌はここで少し休憩しようと全員に伝える。
「とりあえず息が整うまで休憩しようか。休憩が終わったら次の階の様子を見てから今日の探索終了って事で」
『了解』
風花から敵がいないと言われたことで、先ほどまで戦闘していたメンバーらはその場に腰を下ろして短い休憩を取る。
満月戦に向けての最終調整としてタルタロスへやって来たが、今日はフロアボスを倒すなど十分戦ったと言える。
本日の影時間の残り時間も気になる頃なので、休憩が終われば次の階を少し見て帰る予定だ。
おおよそ一定の間隔で存在するフロアボスのいる階を攻略したときには、決まってそのパターンでやって来たので、この後に激しい戦闘がないと分かっているゆかりや順平は呼吸を整えつつも席ほどの戦闘を話題に雑談を交わす。
「にしても、天田君の最後の突きすごかったね。シャドウの仮面が完全に割れてたし」
「んだな。電光石火！　って感じでメッチャ速かったな」
七歌の指示を聞いて飛び出してから、一気に敵へと駆けて放った一撃の鋭さにはゆかりや順平も驚いた。
小学生の小さな身体でよくシャドウの仮面を割るほどの威力が出せたものだと、これまで共に戦ってきた時には見せていなかった彼の

新技を二人は褒める。
一方、自分より戦闘経験が豊富な先輩らに褒められて天田も照れたのか、そこまで褒められるほどのものではないと否定しつつ新技について説明する。
「やっぱり体格的なハンデがあるんで、僕が順平さんたちみたいな威力を出そうとすると、ある程度の距離から助走の勢いのまま突きを放つしかないんですよ」
「なるほど、威力をカバーしようとする分パターンがないわけか。穿てば勝利を引き寄せ、耐えられれば窮地に陥る諸刃の剣だな」
自身の欠点をしっかりと認識している天田が威力のある技の引き出しがないと話せば、確かに方法は非常に限られていると真田が同意した。
天田の持つ槍はそれなりの業物だが、特殊な力が宿っていたり最新技術で作られたギミックが搭載されている訳ではない。
元々、武器として槍を選んだのも体格差のハンデを認め、長物のリーチと遠心力から放たれる威力でカバーしようと思っての事だった。
その目論見は成功し、これまでの戦闘で槍にも慣れてきたのだが、天田自身は自分の欠点として決定打となる威力のなさを常々感じていた。
体格で劣るからと槍を選んだものの、あくまでそれは普通に武器を振るう範囲の威力で他のメンバーに近付いたに過ぎない。
七歌や順平に真田といった近接戦闘をこなすメンバーたちは、普通に攻撃する時は余力を残しており、ここぞという時には全力の一撃を放ってシャドウを屠っているのだ。
少年はもっと威力を出すために長い槍を探そうかと考えた事もあったが、今以上に長くなると取り回しに不便で通常戦闘がこなせなくなる。
そんな風に、武器選びでこれ以上どうしようもないなら、後は自分が動いて威力を上乗せするしかなかった。
結果的にその新たな試みは成功し、高校生らの全力の一撃には届か

ないがそれなりに威力の差は縮まった。
「んじゃ、そろそろ行こうか。次の階を軽く見学して帰ろう！」
指揮官である七歌の号令に従って他のメンバーたちも腰を上げて動き出す。
天田もそれに続いて歩き始めるが、満月の日を前に練習してきた技が完成した事で、誰にも見えない角度で小さくその口元を歪めるのだった。

１０月２日（金）
放課後――ポートアイランド駅・路地裏
ポートアイランドの裏手にある古い建物が並ぶ地域、そこがかつて少年が母と共に暮らしていた場所だった。
古い建物が多い事から分かるようにそのエリアは経済的にあまり裕福でない者が多く住んでおり、さらには不良たちの溜まり場にほど近い事もあって、今現在も同じ街で暮らしていながら天田はあまり近付くことはなかった。
だが、今日の彼は学校帰りに花屋によって仏花を買うと、そのまま自分の母が死んだ場所まで行って花を手向けた。
これまでほとんど近付こうとして来なかったというのに、一体どういった心境の変化があったのか。
手向けた花に向かって目を閉じて手を合わせる少年は、心の中で死んだ母へと語りかける。
（母さん、やっと本当の犯人を見つけたよ。母さんを殺しておきながら、自分の罪から逃げ出した卑怯者をようやく見つけたんだ）
彼の心の中に映っているのは同じ寮で暮らすコートにニット帽姿の少年だ。
天田が特別課外活動部の仲間になってすぐに彼も合流し、共に戦う中で何度も助けられた心強い存在。
体格的に劣り、戦闘経験も浅いことで、天田が荒垣を助けるという事はほとんど無かった。
逆に天田が不利な状況に陥れば、ややぶっきらぼうながらすぐに助

けに入ってしっかりしろと叱咤してくれた。
特別課外活動部が活動し始めた当初、美鶴と真田と一緒に三人だけで活動していた事もあって、相手の動きに対応しやすい位置取りが上手く。エースアタッカーを自称する順平のような目立った活躍はないが、仲間のフォローに入れるよう準備しながら敵に対処する姿に確かな実力を感じた。
強さに憧れやすい少年としては、中等部の頃から公式戦無敗の高校ボクシングチャンプの真田も尊敬しているが、荒垣のように淡々と戦闘をこなすようなタイプにもプロ意識を感じて憧れていた。
天田が荒垣に憧れていたのは戦闘においてだけではない。
彼は天田がコンビニ弁当ばかり食べていることを気にして、よく自分の分を作るついでだからと手料理を振る舞ってくれた。
ピーマン嫌いという子どもらしい好き嫌いをしている天田に、彼はピーマンを細かく丁寧に刻んだオムライスを作って、まずは慣れるところから始めてみろとアドバイスをくれる事もあった。
荒垣は料理の本を読んで自分で作るくらいには料理を趣味としており、その実力とレパートリーは素人のレベルを超えている。
そんな彼が天田の事を考えてわざわざ作ったのだ。ピーマン入りだと分かっていても美味しければ問題ない。今では天田の大好物になっており、図々しいと思いながらも何度か頼んで作って貰った事もあった。
日常でも、非日常でも、とても頼りになる優しい人だと、兄がいればこんな感じだろうかと思うくらいに天田は彼を慕っていたのだ。
(だけど、それは全部嘘だったんだ。あの人のあれは、母さんを殺した罪悪感から罪滅ぼしでやっていただけだった!)
母を殺したシャドウを倒す事を目標に、それが見つからなくとも同じような被害者が出ないよう影時間を終わらせるために戦って来た。
しかし、本当の敵は仲間だと思っていた味方の中に存在した。
あのタイミングでストレガが情報をバラしたのは、特別課外活動部という影時間を終わらせようとしている者たち、つまり影時間の存続を願うストレガたちにとって邪魔な組織が内部から壊れていく事を

狙ってだろう。
実際、あの日から荒垣はあまり天田に近付かないようになった。
混乱していた天田に気を遣っていたのだろうが、天田からすれば自分の犯した罪から逃れようとしているように映る。
ロゼッタが教えてくれた情報は印象操作を仕組んだものだったが、荒垣が戦いと組織から離れ、さらに罪を犯した自分の力を手放そうとしたのは事実だ。
これ以上誰も傷つけないよう、暴走の恐れがある力など捨てるべきだと考えた彼の行動は、被害者からすれば力を捨てれば罪も消えると思っているように見える。
事実など関係ない。母の命を奪った者への復讐を誓う天田にとってはそれが真実なのだから。
(安心して、母さん。絶対にあいつを逃がしたりはしないよ。母さんの命日に、ここであいつに自分の罪と向き合わせる。そして、報いを受けさせてやるっ)
天田の中で黒くドロドロとした感情が激しく渦巻く。
母親を殺した犯人に対する憎しみだけではない。仲間だと信じていた相手に裏切られた怒りもそこには混じっていた。
母の仇討ちを誓っている少年は黒い感情に振り回され、自分の心すら分からなくなってしまっているが、母の命日である次の満月に荒垣をここへ呼び出す事だけは決定している。
その時、どうするかを具体的には考えられていないものの、もう少しだけ待っていて欲しいと母に伝えて天田が立ち上がり、元来た道の方へと振り返ればそこには金色の瞳の青年が立っていた。
「な、なんであなたがここにいるんですか……」
「ただ通り道がこっちだっただけだ」
荒垣への復讐を心に誓っていただけあって、その場を知り合いに見られた天田ははっきり分かるほど動揺している。
相手が文字通りに神出鬼没で、最近ではチドリやアイギスですら会えない青年だったことも関係ありそうだが、ポケットに手を入れたまま静かに立っている湊の視線が天田の背後に置かれた仏花に向いて

いる事で、天田は慌てて身体で隠しながら誤魔化しに走る。
「っ、これはその、別になんでも」
「……命日が近いから母親に供えただけだろ。別に隠す必要もないと思うが」
「なんで、その事を知ってるんですか？」
「……一応、ニュースになって新聞にも載ってただろ。まぁ、そっちはともかく真相についても知ってるからな。カストールが暴れて、お前の母親が瓦礫に潰されるのは視えていた」
　湊なら知っていてもおかしくないと思いつつも、天田は彼の最後の言葉を脳が認識した瞬間、カッと頭に血が昇って鋭い視線で相手を睨み吠えた。
「お前もあの時その場にいたのかっ!!」
「いいや。俺はラビリスと一緒にタルタロスでシャドウを狩ってた。事故については不自然なペルソナの反応を感知して赫夜比売の探知能力で視ただけだ」
　母親を殺したのは荒垣だが、その罪を隠そうとした共犯者がいても不思議ではない。
　また共犯者とは言えなくても見殺しにしたのであれば同罪だ。
　そう思って相手を睨んでいた天田だったが、彼が鋭い感覚を持った探知能力者だったと思い出し、風花も街中のシャドウを感知出来ているため、湊なら遠く離れた場所のペルソナの反応に気付いてもおかしくないかと納得した。
　ただ、そういう事であれば湊はあの事故を見ていた貴重な第三者だ。
　経済的な理由で情報屋から詳しい事情を聞けなかった少年は、裏の仕事を辞めた彼なら教えてくれるかもと淡い希望を持って尋ねた。
「あなたは事故で何があったか知ってるんですよね。あの日、どうして事故が起きたのかも。教えてくれませんか？」
「……情報屋じゃなければ金を取らないと思っているのか？」
　考えを読まれたと思った天田は小さく肩を震わすが、そこで言葉を撤回するくらいなら復讐など考えたりしない。

ここで真相を聞けなくても、いつかは調べて真相に辿り着いてみせる。
そんな決意を少年の瞳から読み取った湊は、小さく嘆息してからあの日の出来事と荒垣らの事情を併せて話し始めた。
「……別に何か特別な事があった訳じゃない。元々、カストールの性能に対して荒垣先輩は適性が不足していたんだ。ペルソナは人の心の一側面を切り取って象徴化させた存在。見た目も能力も千差万別だが、人が完璧に感情をコントロール出来ないように、自分から生まれ出たものであっても完璧に制御出来るとは限らない」
ペルソナは心の一部が形を持って抜け出たものであって自分の分身ではない。
感情のコントロールは難しいように。同じ心から生まれたペルソナもコントロール出来るとは限らない。
「真田先輩と荒垣先輩はほぼ同時に力に目覚め、その適性値もほぼ差がなかった。だが、ポリデュークスとカストールではポテンシャルが違い。カストールの制御には当時で言えば二倍近い適性値が必要だった」
そして、近い能力を持ったペルソナ使いが二人いたとしても、お互いのペルソナまで近い能力やポテンシャルを持っているとは限らない。
事実、カストールは他の特別課外活動部のペルソナを含めてトップのポテンシャルを秘めていた。
カストールにポテンシャルで勝てるペルソナなど、湊のペルソナを除けばコロマルのケルベロスやタカヤのヒュプノスにスミレのテュポーンくらいだろう。
ポテンシャルが高いという事はしっかりと鍛えればその分強くなるという事だが、強い力はそれだけ召喚者にも能力を求めてくる。
もう少し後に力が目覚めていたり、ペルソナを使わず自分の鍛錬を続けて適性が追いつけば違った結果もあったかもしれないが、美鶴と真田と三人しかいない状況では荒垣も自分が離脱する事は出来ないと思っていた。

「適性が不足しているといっても、エルゴ研の被験体のように無理矢理に目覚めさせられた訳じゃない。使わなければ暴走の恐れはなかったが、あの人は制御剤……まぁ、適性が不足していてもペルソナを制御出来る代わりに寿命を削る劇薬だな。それの服用を義務化されること恐れて他のメンバーに隠していたんだ」

桐条グループは戦力を求めていて、その時は三人しかいなかった。そこで一人抜ければまとも活動出来なくなるので、桐条グループが制御剤を使って活動するよう荒垣に告げる可能性はあった。

高校一年生でしかなかった荒垣にすれば、他人のために己の寿命を犠牲にするよう言われるなど恐怖でしかない。

そんな最悪の未来を回避するため、荒垣が自分の不調を隠していたのも心情としては理解出来る。

だが、そうやって問題を先送りにし続けた事であの事件は起きたのだ。

「結果、戦いを続けてさらに力を増すカストールをコントロール出来なくなり、運悪く暴走したタイミングに影時間の適性を持っていた女性が乱入して事故に巻き込まれたんだ。他の二人は苦しむ荒垣先輩と暴れるカストールを見て咄嗟に動けなかった。まぁ、目の前で交通事故が起きて冷静に対処出来る人間ばかりじゃないのと同じだな」

「なんですかそれ。その言い方だと、まるで母さんがただ運がなかったから死んだみたいじゃないですかっ」

「それもある意味事実だろ。イレギュラーシャドウ退治に出動して、そこで限界を迎えて暴走して、そこに貴重な適性持ちが来てしまっただけだからな」

湊は別に荒垣を擁護するつもりはないが、異常事態において天田の母親が軽率な行動を取ったのは事実だと思っているし、彼女の存在はかなりのイレギュラーで風花やチドリ級の感知能力がないと気付くのは難しい。

仲間の突然の暴走に頭が真っ白になった他二人は勿論、ペルソナが暴走している荒垣にだって乱入者を気に掛ける余裕などなかった。

しかし、そんな話を聞いても今の天田は欠片も理解を示さないだろ

う。彼にとっては殺した者が悪で、母親はただ巻き込まれた被害者なのだから。
「だが、お前にとって重要なのはそこじゃないだろ。母親を殺したのに裁かれていない男がいて、お前はそいつを裁くだけの力を持っている。二年前と違って今のお前は無力じゃない。まぁ、どうするか選ぶのはお前だが、自分の行動には責任を持てよ。あの人も天涯孤独って訳じゃない。あの人を慕っていた人間に恨まれる覚悟や憎まれる覚悟はしとけ」
それだけ話すと湊は予定があるからとその場を立ち去った。
あの日の出来事を聞いた少年は、荒垣側の事情に一定の理解は示したが、やはり胸の内に宿るドロドロとした黒い感情を消す事は出来ず復讐のためにその瞳を曇らせる。
自分は母親を奪われた被害者でしかない。犯人を殺すのは当然の権利。故にそこに負うべき責などないと。

第三百二十六話　復讐と悪意

１０月４日（日）
午前――厳戸台分寮

二日前に母が死んだ事故現場で湊に出会った天田は、頭では彼の言った言葉を否定しながらもどこか踏ん切りが着かないでいた。

荒垣は悪だ。どんな原因があったにせよ、自分の犯した罪から逃げていたのだから。

そんな男を殺すのに被害者遺族である天田が何かを背負う必要などない。

奪われたのだから奪い返す。相手の罪を裁く。ただそれだけなのだから。

けれど、湊は天田の復讐を肯定しながらも、行動の責任を持つように言ってきた。

荒垣を殺せば仲間たちには恨まれるだろう。特に真田や美紀は同じ孤児院で育ち、月光館学園で再会した幼馴染みなので、家族を奪われた天田と同じように荒垣を殺した相手を憎むかもしれない。

殺したいほど憎くんだ犯人が傍にいるというのに、それを殺せば自分のような悲しい被害者を作る可能性がある。

何としても母親の仇は討ちたい。だが、他の仲間を自分の復讐に巻き込むつもりはない少年は、どうすればいいのか分からず机に強く拳を振り下ろした。

「でも、ならどうしろって言うんだよっ!!」

机に振り下ろした拳からはジンジンとした痛みが返ってくる。

けれど、そんな痛みを感じても天田の悩みは一つも解決せず、どうすれば胸の内に渦巻いている黒い感情が晴れるのかも分からない。

復讐を誓う少年は、相手を殺せばその後は自分も責任をとって命を絶つつもりだ。

メンバーから二人も抜ければ迷惑が掛かるかもしれないが、その点についてはチドリたちが協力し、さらに背後に湊が控えているとなれば問題ないだろう。

今日の影時間には全てが終わる。そう考えると謝罪も込めた遺書を用意すべきなのかもしれないが、今のままでは復讐すら出来ないのではないかと天田は悩んでいた。
自分も復讐のために動いているくせに、どうしてこんな置き土産を残したんだと天田は湊を恨む。
あの場所には偶然通りがかっただけのようだったが、それもどこまでが本当か分からない。
情報屋から犯人についての情報を得た事を知っていた彼は、恐らく五代たちから自分の件を聞いていたのだろうと少年は予想する。
情報屋が客の情報を簡単にバラして良いのかという怒りはある。
ただ、少年が情報を求めて店を訪れた時、情報屋である五代はここを利用すればそれが天田の弱みの一つになると言っていた。
五代は湊に裏社会での生き方と銃火器の扱いを教えた人物の一人。どう考えても天田よりも湊を信用して、何かしら騒動の引き金になりそうなら情報を教えてもおかしくない。
湊と桐条グループで共通しているのは影時間を終わらせる事だけだ。
湊には湊の計画があり、それは桐条グループだけでなくチドリやアイギスにも邪魔させないようにしている以上、イレギュラーになりそうな存在は排除する必要がある。
つまり、天田がしようとしている事を知っている湊があの場に来たのは、全てを理解した上で何もするなという忠告だったのかもしれない。
(もし、あの人が本気でくれば僕はどうやっても勝てない。でも、そんな簡単に諦められるもんかっ)
湊の強さは知っている。どうやっても勝てない。あれに勝てるほどの強さがあれば、母の事も吹っ切り荒垣の事で悩む事もなかっただろう。
しかし、勝てない相手が妨害してくるとしても、天田は簡単に諦めるつもりなどなかった。
相手には相手の事情があるのだろうが、少年も知ってしまった以上

は母の仇討ちをする必要がある。
唯一の懸念があるとすれば、それは荒垣を失った真田たちの心情だけだ。
妹や友人を失いかけた真田やゆかりに風花の姿は今も記憶に強く残っている。
あの時は、湊が代償を払いつつも無事に助けた事で彼らも以前と変わらず過ごしているが、天田は湊の妨害が入ろうとも助けられないよう殺すつもりだ。
彼のペルソナが使う回復スキルは確かに驚異的な治癒効果を齎す。
スキルを使う対象がペルソナ使いであるという条件は付くが、全身大火傷だろうと元の状態に戻し、切れた腕だろうと後遺症も残さず繋げてしまう。
だが、流石の湊でも既に死んだ者を蘇生させる事は出来ないし、欠損したものはどうやっても復元出来ない。
湊は無くなった心臓や眼球が元に戻っているようだが、あれは生命力の高い鬼と龍の力を宿した肉体である事と、その身にデスを宿しているからこそ出来る芸当だ。
天田はデスについては何も聞いていないが、彼が蘇生出来るのはその生まれが理由である事は他の者から聞いている。
ならば、荒垣を討つ際に一撃で殺すか、治療出来ないように心臓を身体の外に引っ張り出してしまえばいい。
(そうだ。あの人でも出来ない事はある。殺せば、殺してさえしまえば助けられない。だから僕はあの人を殺す)
決意は最後まで固まらないかもしれない。それでも、やるしかないんだと自分に言い聞かせる。
アルカナシャドウと戦う満月の日にメンバーが二人も抜けると迷惑が掛かるが、どうか湊たちが力を貸して倒してくれる事を願う。
そうして天田は席を立つと、荒垣に今日の影時間に事故現場へ来るよう伝えるため部屋を出て行った。

夜――都内・某所

今夜の影時間にアルカナシャドウが現われる。その情報は桐条グループにいた時点で判明していた事もあり、幾月とストレガたちも当然のように把握していた。
その出現場所も十年前の事故で集められたシャドウが飛び散った場所だと言う事で、幾月からストレガに伝えられている。
だが、今日のストレガたちは特別課外活動部の戦力を削る事を第一に考えており、以前仕掛けておいた精神的な罠に引っかかった者を狩るつもりでいた。
天田が荒垣を殺すのであれば残った天田を、天田が殺さないのであれば二人まとめて殺す。
そもそも二人が現場に現われなければアルカナシャドウの許へ向かうが、そちらには玖美奈と理が最初から向かうので、アルカナシャドウと四人のワイルドがぶつかる戦場に参加するつもりはあまりなかった。
影時間まではもう少しあるが、遅れて行くよりは現場に先に着いて動けるように準備した方がいい。
ベルトにロングバレルのリボルバーを差したタカヤは、楽器ケースに偽装した専用のケースに大剣を仕舞いこむ玖美奈と同じく楽器ケースに対物ライフルを仕舞い込んでいる理に声を掛ける。
「そちらは二人で大丈夫ですか？　足止めが必要という事なら手伝いもしますが？」
「必要ないわ。別に全滅させる事が目的ではないもの」
「というか、僕や姉さんとまともに戦えるのは同じ力を持ったやつくらいだろ。他のメンバーじゃ姉さんのノートの守りを突破出来ない」
玖美奈と理は湊や七歌のように複数のペルソナを使う事が出来る。
純粋な適性値で言えば湊と力の管理者を除き最も強いソフィアを超えているため、特別課外活動部のメンバーだけでなくチドリやラビリスらを複数同時に相手しても問題ないだけの実力があった。
そんな彼らからすれば普通に戦っても勝てる相手に、アルカナシャドウの相手をしている所へ横槍を入れるとなれば余裕すらあるほどだ。

ここでさらにストレガのメンバーを助っ人に呼べば過剰戦力過ぎて、久方ぶりの戦いを楽しむ事が出来なくなってしまう。
幾月の調べによれば必要な生贄の数は七人なのだ。それ以上はいらないから間引くだけで、全滅させてしまっては計画が破綻する。
加えて、もしかするとストレガ以外にも敵対するペルソナ使いがいると思ってくれるかもしれない。
自分たちの計画を順調に進めながらも、相手から見た状況をかき回したい悪戯心もあるため、玖美奈が自分と理だけで十分だと答えればタカヤも納得したように頷いた。
「そういう事なら、我々は自分たちの仕事に集中します」
「敵を排除するか、現場に来なかった時は帰還していいけど、その時は僕に連絡を入れてくれ。間違って殺し過ぎたら生贄の用意が面倒だからな」
「ええ。その時はメノウから連絡を入れます」
今日の現場にはストレガも全員で行く予定だ。実際に戦うのは男たちだけだろうが、相手側にワイルド能力者がいなければ敵が一人多くても勝つ自信がある。
タカヤとカズキは出来れば湊が来ないかと思っているが、ワイルド能力者が四人も集まるという状況にも興味があった。
そのため、自分たち側に来た特別課外活動部の人間を殺せば、後は玖美奈たちの戦いを遠くから眺めるつもりでいる。
理はそれを嫌がるだろうがストレガたちは別に幾月の部下ではない。あくまで世界に滅びを齎すという共通の目的のために手を組んだ同志、同盟でしかないのだ。
「じゃあ、お父さん。行ってくるわ」
「ああ。玖美奈も、他の者たちも頑張ってくれ。来たるべき祝祭に向け、余計な者は全て排除してきて欲しい」
幾月の言葉にストレガたちは何も答えない。タカヤだけは笑って頷いたが、他の者たちは黙ってタカヤの後に続いて研究所を出て行く。
そんな彼らの反応に理は眉を顰めているが、玖美奈が肩に触れて気

にしないように言うと、落ち着いたらしい理は幾月に会釈し、玖美奈は手を振ってから研究所を出て行った。

影時間――巌戸台分寮・作戦室

ついに満月の影時間がやって来た。アルカナシャドウの存在も感知されており、その反応は予想通りに二体いると風花とチドリが断言した。

二体の感知型ペルソナで調べたならば恐らく間違っていないのだろう。

今日もチドリとラビリスとコロマルが助っ人で参加してくれるため、早速作戦について話し合おうとしたとき、七歌は自分たち特別課外活動部側のメンバーが足りない事に気付く。

いつもは早めに集まって待っている天田と荒垣がいない。天田はもしかすると子ども故に寝てしまっている可能性もある。

だが、順平ならともかく責任感の強い荒垣が遅れるとは珍しいなと七歌は首を傾げた。

「およ？　天田君と荒垣さんがまだ来てないね。天田君はおねむかもしれないけど、荒垣さんはもしかしておトイレかな？」

「ったく、あいつは何をしているんだ。俺が見てくるから少し待っててくれ」

子どもで眠気に勝てなかったならばしょうがないが、高校三年生が後輩の前で遅刻するのは頂けない。

トイレも生理現象なので一定の理解は出来るものの、そういうのは早めに行っておけと呆れながら真田が席を立って呼びに出て行こうとする。

だが、彼が部屋を出るよりも先に扉が開き、荒垣が遅れてやって来たのかと思ったメンバーらは現われた人物に少しだけ驚いた顔をする。

「八雲さん、こんばんはであります。今回も参加していただけるのですか？」

「……ああ。栗原さんから依頼を受けたからな」

「満月の度に悪いね。けど、今回もストレガの襲撃があるなら警戒しない訳にはいかないからさ」
子どもたちの命を預かる以上、栗原も出来るだけの事はしようと思って湊を呼んでいた。
他のメンバーからすると戦力としては非常に頼りになるが、他のメンバーと連携が取れないのである意味で劇薬のような扱いになる。
けれど、今回のアルカナシャドウは二体いる。一体を湊に任せて、残りの一体を倒せば時間とメンバーの負担を少なく済ませられるだろう。
現場で指揮を執る七歌が湊をメンバーに組み込んだ作戦を考え始め、仮にストレガが妨害しに来たときに誰が相手をするか決めようとしたとき、他の者たちが集まるテーブルではなくモニター前の椅子に座っていた栗原に近付いた湊は感情の読めない表情のまま栗原に話しかけた。
「あいつらを警戒するのは結構だが、さっさと先月分を払ってくれ。アルカナシャドウ二体の討伐、対シャドウ部隊構成員親族の治療、それら支払いの遅延による利子と今回の依頼の前金で三二〇〇万だ」
「っ……わ、悪い。前回ゴタゴタしたせいで桐条グループに報告し忘れてたんだ。すぐには用意出来ないが今回の影時間が終わったらすぐ報告して大至急用意する。だから、今回もどうか手を貸してくれないかい？」
メンバーたちが湊からの桁違いな請求額に驚く中、自分のミスで湊に報酬が払われていないと分かった栗原が焦った様子で頭を下げる。
というのも、他のメンバーは助っ人のチドリたちも含めて先月の満月戦の報酬が既に支払われているのだ。
アルカナシャドウは他の個体よりも圧倒的な力を持っているため、普段のシャドウ狩りよりも随分と奮発した金額を報酬として払っている。
だが、湊の場合は裏の人間に仕事を頼んだ形になるので、メンバーたち全員に払った報酬を合計したよりも遙かに高い金額になっていた。

それこそ桐条グループのそれなりの役職持ちの年収に匹敵する額で、簡単には用意出来ないため、桐条総帥に事情を説明してお金を用意してもらわなければならない。

つまり、どうやっても今すぐ用意する事は出来ないのだが、栗原としてはストレガが来る事を考えるとどうしても湊を味方側に置いておきたい。

そうして栗原が頭を下げながら湊の返事を待てば、湊が小さく溜息を吐いてから再び口を開いた。

「……俺が優しい仕事屋で良かったな。そうじゃなきゃ、今頃お前ら全員生身か臓器（パーツ）で外国に運ばれてるところだ。今回の報酬も合わせて三日以内に四五〇〇万払え。期限を過ぎればここを更地に、眞宵堂は空きテナント、そしてお前ら全員仲良く戸籍をなくした状態で船旅に出てもらう」

日本人の戸籍というのはそういった筋の人間には非常によく売れる。

さらに高校生の若い身体なら生身でも臓器でも買う人間はたくさんいるので、ここにいる人間を全員売れば違約金を含めた報酬分は全て回収出来るはずだ。

無論、助っ人であるチドリたちは組織の人間ではないので取り立て対象に含まれず、ラビリスの家族であるアイギスにも恩赦が掛かって免除される。

これで自分の大切な者たちだけ対象から除外した上で請求出来るなと湊が考えていれば、この青年ならば実際にそうするだろうという確信がある栗原は青い顔をしつつも、どうにか今回も手伝ってもらえる事になり小さく安堵の息を吐く。

もっとも、他のメンバーからすれば欠片も安心出来る要素はないのだが、栗原も言った通りとりあえず今すぐどうこう出来る問題ではないのは事実。

よって、湊と入れ替わりで荒垣を呼びに出て行った真田が戻るのを待ってから、改めて湊も組み込んだ作戦について七歌が全員に説明しようと考えていると、入口の扉が勢いよく開いて真田が焦った様子で

駆け込んで来た。
「おい、シンジも天田も寮内にいないぞ！」
「っ、まさか既にストレガが仕掛けて来たのか!?」
仲間の内二人が寮内から姿を消していると聞いて、また幾月や美紀の時のようにストレガが攻撃を仕掛けて来たのではと美鶴が警戒する。
話を聞いた時点で風花もペルソナを召喚してルキアの中から二人の反応を探り、他のメンバーらが心配した様子で風花の探知の結果を待つ。
先ほどまで別の意味で顔を青くしていた栗原も、まさか影時間になる前にストレガが仕掛けて来ていたとは思わず、子どもを預かる立場でとんだ失態だと苦い表情を浮かべた。
風花の結果を待つ間、妹に続いて幼馴染みまで敵に狙われたと思い真田が怒りから拳を強く握っている。
その不安が分かるのか他のメンバーたちが静かに待っている時、焦っている他の者たちを冷めた目で見ていた湊が何をそんなに焦っているのかと不思議そうに声を掛けた。
「……別に二人とストレガは関係ないだろ。今回の事は完全に別件だ」
「八雲君は何か知ってるの？」
そういえば湊も風花と同等の探知能力を持っていたと、七歌が事情を知っているなら教えて欲しいと説明を求める。
湊が平然としており、ストレガと別件と断言しているなら恐らくは事実なのだろう。
ただ、どうしても先月と先々月のストレガの事が頭を過ぎってしまうので、出来るだけ速く教えて欲しいと思っていれば、湊は聞かれた事に素直に答えた。
「一応な。二人は揃ってポートアイランド駅の路地裏辺りにいる」
「なんでそんな所におるん？」
「母親の命日に、天田が先輩を殺そうと思って呼び出しただけだ」
七歌に続いてラビリスが尋ねれば、何でもない事のように湊はさら

りと答える。
　けれど、その内容は欠片も落ち着いていられるようなものではなく、慌てて立ち上がった順平がどういう事だと状況が理解出来ず混乱した様子を見せる。
「だけってお前それかなりヤバい話じゃねーか！　つか、何でそんな事になってんだよ！」
「親を殺した犯人を見つけたら普通は殺すだろ」
「はぁ？　いや、天田の母親を殺したのはシャドウじゃねぇか。荒垣さんなんも関係ねぇだろ！」
　何をトンチンカンな事を言っているんだと順平が湊の言葉を否定する。
　けれど、湊の言葉の意味を真に理解している真田は、やや青ざめた表情になりつつもすぐに正気に戻って入ってきたばかりの扉へと駆け出す。
「美鶴、悪いが俺はあいつらの許へ行くっ」
「明彦っ!!」
　焦った様子で出て行く真田を美鶴が止めようとするも、幼馴染みの命が危険だと知った少年は一秒たりとも待っていられないようで出て行った。
　確かに今この瞬間にも荒垣が殺されようとしているなら、間に合ってくれと祈り、少しでも速く辿り着きたい事だろう。
　しかし、ここに残された者たちとしては、アルカナシャドウとの戦いも控えているので、少しでも今の状況を整理しておきたい。
　まず、先ほど湊が口にしていた天田と荒垣の因縁が事実なのか。ここで知るのは美鶴しかいないはずなので、七歌が代表して美鶴に質問をぶつけた。
「美鶴さん、どういう事ですか？　天田君のお母さんの件と荒垣さんって無関係なんでしょ？」
「……いや、先ほど有里が言ったことは事実だ。天田の母親は荒垣が起こしたペルソナ暴走事故に巻き込まれて死んだんだ」
「じゃあ、天田君が言ってた黒い馬の化け物って騎士系のシャドウ

じゃなくてカストールって事？」
「ああ。そういう事になる。私と明彦もそれは知っていたんだが、勘違いしている天田に事実を伝えても混乱させると思って話せなかったんだ。それがまさかこういった形になるとは……」
美鶴たちもただ荒垣を庇うために黙っていた訳ではない。
母親の仇がシャドウだと思っている少年に、真実を伝えてしまえば彼の心がどうなってしまうか分からない。
もしかすると全ては影時間が悪いと言って変わらなかったかもしれないし、今回のように荒垣への復讐を誓う事も考えられた。
最悪のパターンとして自ら命を絶ったり、絶望から廃人のようになることもあり得たので、美鶴たちも出来る限り慎重に進めたかった。
けれど、こうなってしまうと現場に向かう人間以外は手の出しようがない。
真田が到着するまでどうか無事でいてくれと祈りつつ、美鶴はこちらに残ったメンバーで自分たちのすべき事をしようと思考を切り替え、湊を含めたメンバーでのアルカナシャドウ討伐について話し合うことにするのだった。

第三百二十七話　戸惑い

影時間――ポートアイランド駅・路地裏

前回の満月の日、ストレガによって荒垣の過去の罪が暴露され、それ以降天田はずっと荒垣を避けていた。

ずっと仲間として親切に、むしろ親身になって接していただけに、自分の母を殺した犯人だったと知って胸中複雑だったのだろう。

ストレガの言葉は自分たちを混乱させるためのでまかせだと否定する事は簡単だった。

だが、これまで自分の罪から目を背けて逃げ続けてきた以上、被害者の少年に嘘を吐くことだけは出来なかった。

だから、今日の昼頃に彼から影時間にポートアイランド駅の路地裏に来て欲しいと言われた時には、ついに裁かれるときが来たのかとすんなり了承していた。

空が怪しい緑色に染まり、巨大な月が街を照らす中、血溜まりを踏みつけながら進む荒垣はこれから自分が殺されると思いながらも心は落ち着いていた。

（なんつーか、意外とその時が来ると一周回って冷静になるもんだな）

自分のせいで少年から母親を奪ってしまった時には、女性が瓦礫に潰される生々しい音と少年の絶叫がずっと耳から離れず、眠れない日が続いた事をよく覚えている。

どうやっても償えない。そもそも、世間ではそれが自分の罪として認められていないのだ。

最初は桐条グループが戦力確保のために手を回したのかと思ったが、実際には人の手で起こし得ない破壊痕から、トラックが突っ込んだ事故として記憶の補整が入ったらしい。

おかげで荒垣は経歴に傷が付くことなく、今も真っ当な世界で生きていられるのだが、真実を知る仲間は勿論誰からも自分の罪を責められなかった事で荒垣はどうすればいいか分からなくなった。

罪には罰を、これは悪い事をしたら報いを受けると認識されているが、実際には加害者の救済の要素もある。

罰を受けることで、犯した罪が許されるという安心感を得られるのだ。
（まぁ、それも逃げてるって事になるんだろうが、有里がいなきゃ気が狂って勝手に死んでたかもしれねぇ）
自分は確かに罪を犯したというのに、その罪がなかった事になってしまったことで荒垣は裁かれる機会を失った。
気にするな、あれはただの事故だ、お前のせいじゃない。
仲間たちのそんな言葉が荒垣の事を想っての言葉だったというのは理解出来る。
けれど、当時の荒垣にすれば責めてくれた方が気が楽だったのだ。
初めて自分の罪をしっかりと罪だと突きつけてきたのが後輩になるとは思っておらず、ペルソナ使いだとは知らなかったこともあって取り乱したが、荒垣はあの出会いがなければ頭がおかしくなって自殺していたかもしれないと苦笑する。
特別課外活動部に復帰してからは飲んでいないが、今もコートのポケットに入っている錠剤で自分の身体がボロボロになり寿命が縮んでいるというのも罰として丁度良かった。
すぐに死ぬような毒なら荒垣は臆病さから飲む勇気がでなかっただろう。
あくまでゆっくり、着実に死に向かってゆくから彼は飲むことが出来た。
ただ、副作用による死が来る前に被害者の少年から復讐で殺される事になると知っていれば、もっと速く寿命が尽きる物の方が良かったと少し考えてしまう。
母親を奪われた少年が復讐するのは当然の権利だ。けれど、そのせいで少年が殺人を犯したという罪悪感に苦しむかもしれない。
（悩むなって言えたらいいんだけどな。あいつは真面目だから背負い込んじまうだろうな）
荒垣は天田の行為を正当な物だと認めている。
だが、復讐を終えてから少年は苦しむかもしれないし。もっと言えば他の仲間が彼にどうあたるか分からない。

美鶴と真田は荒垣と天田の関係について知っているので、彼らがどうにか納めてくれれば良いのだが、妹が死にかけた時の真田の姿を思い返すとそれは期待出来ないだろう。
少年が復讐を終えてからもしっかり生きていってくれれば良いのだがと、そんな事を考えている間に荒垣は目的地に到着した。
「ちゃんと来てくれたんですね」
声が聞こえた方へ視線を向ければ、落ち着いた表情で手に十文字槍を持った天田が立っていた。
自分が殺されるのはいいが、少年に背負わせたくないと思っていた荒垣としては、彼がその手に槍を持っていた事に僅かに残念な気持ちが湧く。
だが、ここ最近の天田は様子がおかしかったので、これも彼なりに考えて出した結論なのだろうと受け入れる事にした。
「……ああ。そういう約束だったからな」
天田と荒垣の間は五メートル以上離れている。
けれど、リーチの長い武器を持った天田ならば、その程度の距離は一秒で詰めて命を奪える。
既に天田の間合いに入っている事で、じんわりと首筋に緊張から汗を掻いた荒垣が静かに答えれば、天田は普段よりどこか平坦な声で質問してきた。
「どうして僕が貴方をここへ呼んだか分かりますか？」
「先月、ストレガに言われた事が理由だろ」
「ええ、そうです。貴方は否定も肯定もしなかった。だから、情報屋に聞きに行って、有里さんにも事実か確かめたんです」
こんな子どもが裏の人間の手を借りてまで真実を求めたと聞き、荒垣は内心で以前会った情報屋の喫茶店店主と湊に怒りを抱く。
二人は求められたから情報を渡しただけであり、荒垣が怒りを覚えるのはお門違いなのだが、彼としては少年とそういった人間が関わりを持つのは認めづらかったのだ。
もっとも、リスクを冒したおかげで少年は真実に辿り着くことが出来た。

「ストレガの言った事は本当だった。二年前、僕の母さんを殺した化け物の正体は、お前のペルソナだったんだっ!! 戦いから逃げ出し、力を捨てれば罪が消えるとでも思ったのか? そんな事でお前の罪は消えたりしないっ」
怒りと憎しみから瞳孔が開いた瞳で荒垣を睨み、天田は戦闘時のように槍を構えて穂先を向ける。
もしかしたらと荒垣も召喚器と武器を持ってきているが、荒垣の武器は今は擬装用のケースに入って肩に掛けたままだ。
一応、ケースに入れたままでも盾に使うことくらいは出来るものの、その気がない荒垣は落ち着いた表情のまま天田を見つめる。
すると、武器を向けられても平静でいる荒垣を怪訝に思ったのか、天田は穂先を向けて構えたまま再び口を開いた。
「随分と落ち着いてるじゃないか。大人しく裁きを受ける気になったのか?」
「……ああ。最初からそのつもりで来たからな」
「フンッ、逃げ出したやつのいう事なんて簡単に信じられるかっ」
天田からすれば相手が武器を持ってきている事もあって、油断させておいて反撃してくる事を警戒しない訳にはいかない。
まぁそうだろうなと少年の考えを読んだ荒垣は、肩に掛けていたケースを放り投げてこれで武器はないぞとアピールした。
「自分の犯した罪だ。報いは受ける。だが、復讐を終えたお前が背負っちまうかもしれないからな。これだけは言っておく。〝お前は悪くない〟」
そう。荒垣から見れば、少年がしようとしている行為は正当なものだ。
荒垣の罪が影時間によって無かった事になったのだから、少年が荒垣を復讐で殺しても影時間の中ならば無かった事になる。
だから気にするなと荒垣が静かに言えば、少年の持つ槍の穂先が僅かに揺れた。

――巌戸台駅前広場

荒垣と天田の許へ向かった真田を除くメンバーたちは、そのままアルカナシャドウの待つ駅前へとやって来た。
今日現われたアルカナシャドウの数は二体。運命と剛毅を司る者たちだ。
寮生たちにしてみれば自分たちが普段から利用している場所だけに、そこに異形の怪物が二体もいる事で余計に非日常というものを意識させられる。
「おう、今回の敵も見慣れないタイプだな……」
段差登り駅前までやってきたところで敵の姿が見え、剣を持っていない空いた手で帽子の鍔に触れながら順平が呟く。
一体は複数の金属のパーツを組み合わせて作った身体を持った鉄の獣。
もう一体は鉄の柵を周囲で漂わせ、ブーケのような花の足場で宙に浮いた女性型シャドウ。
獣の方は身体自体が金属で出来ているため硬そうであり、もう一体も周囲で浮いている鉄の柵を防御に回せるとすれば同じく硬そうで厄介。
どちらかを湊に抑えて貰い、その間に他のメンバーでもう一体を倒す予定だったが、担当をどうしたものかと七歌は僅かに悩む。
ここで悩めば真田たちとの合流が遅れるため、すぐに決めようと相手の戦力を感覚で判断し強そうな方を湊に担当して貰うべく指示を飛ばす。
「八雲君が左っ」
左側にいる獣型と戦ってくれ。そう言いかけた時、背後から飛んだ影が頭上を越えて敵へと迫り、二体の中間地点に着地すると同時に回し蹴りで二体を吹き飛ばす。
ワンボックスカーより巨大な大型シャドウが人間の蹴りで飛ぶのか。そんな疑問が頭を過ぎっている間に、二体のシャドウを蹴り飛ばした影である湊はそのまま自分が蹴り飛ばした獣型を追って走り出す。
蹴り飛ばされて空中にいたシャドウに走って追いつくと、そのまま

自分も飛び上がり高飛びのベリーロールのような回転を見せ、踵落としで相手を路上駐車されていた白い車に叩き付けた。
路上駐車されていた車の中に棺桶のオブジェはないため、運転手が完全に車から離れた違法駐車していた車のようだが、車の屋根が陥没して車がV字に折れ曲がっている。
敵を倒す事を優先するため周囲に被害を出すなとは言わないが、欠片も躊躇せずに戦闘開始から僅か五秒で車を一台スクラップにするのは如何なものか。
叩き付けられた獣型シャドウは車をクッションにしながらも、その重量と湊の蹴りの威力によって路面を割って道路に僅かに埋まる。
けれど、それで青年が終わらせる訳も無く、埋まったシャドウを青年が左手で掴んだと思えば、片腕で持ち上げながら無理矢理なオーバースローで近くのビルに向けて放り投げた。
金属の見た目通り丈夫なのか、シャドウにはダメージらしいダメージは通っていないようだが、それでも湊の攻撃速度について行けないのか投げられたままビル一階の不動産屋に突っ込んだ。
衝突した勢いでガラスが割れて飛び散り、中にあった机やプリンターなどが壊れる激しい音が響く。
戦闘開始から五秒で車一台が廃車、さらにそれから五秒後に店が一つ営業停止に追い込まれている。
自分たちの知っている日常の風景が次々に破壊されてゆくことで、ようやく正気に戻った七歌たちは湊に蹴られて倒れたもう一体のシャドウから視線を逸らさず声だけで注意する。
「八雲君、もうちょっと周りを壊さないように戦って！　ここ私たちの通学路でご近所さんだから！」
「てか、有里君それわざと壊してるんじゃないでしょうね？　いくら桐条グループが嫌いだからって流石にそういう理由なら怒るよ？」
この辺り一帯は一応桐条の土地ということになっている。
なので、物が壊れれば少なからず桐条グループのダメージになるのだが、もしもそれが狙いで周囲を破壊して戦っているならゆかりたちも流石に止めざるを得ない。

そう思って後衛として女性型シャドウから距離を取っていたゆかりが湊の方を見れば、ビルの中に投げ込まれた獣型シャドウがライオンのように湊に飛びかかっていた。
青年はそれをマフラーから出した九尾切り丸を横薙ぎに払う事で弾いたが、弾かれて着地した獣型シャドウには傷らしい傷が見当たらない。
やはり相当に硬いようで、湊もそれが分かっていたから車やビルなど硬い物に叩き付けていたのだとゆかりは判断した。
「七歌、あっちも相当硬いみたい」
「うん。でも、八雲君のおかげで二体は完全に分断出来て距離も開いた。これで何とか戦えそう」
七歌の視線の先では倒れていた女性型シャドウが起き上がろうとしている。
相手が体勢を整えるのを待っている必要はないため、走って近づき順平が大剣で切りつけるも、大剣は敵の周囲にある鉄の柵に防がれて攻撃はまるで通らなかった。
弾かれた順平は硬い物を切りつけた事で手が痺れたのか苦い表情で後退する。
「ペンテシレア！」
順平が後退する時間を稼ぎつつ、完全に起き上がる前に美鶴がペルソナを呼び出し氷の針を多数飛ばす。
細い針ならば鉄の柵も通り抜けて敵へとダメージを与えるだろう。
そう思って氷をわざわざ針の形状に変化させて放ったのだが、女性型シャドウのワンピースにあたった針はそのまま弾かれて地面に落ちた。
ペルソナの攻撃もダメージを与えられなかった事で、女性型シャドウが完全に起き上がってしまう。
すると、女性型シャドウの周りを囲っていた鉄の柵が突然動き出し、七歌たちを貫かんと槍の穂先のように尖った柵の先端部分が伸びて襲いかかってきた。
「全員回避っ!!」

相手の近くにいた順平や七歌だけでなく、後衛として下がっていたゆかりやアイギスに向かっても柵が伸びてくる。
上空から降るように襲いかかってくる柵は、大本と繋がっているからか伸ばしてからも操作可能なようで、まるで追尾機能が付いた矢のようである。
余裕を持って避けようとしても軌道を修正して追い掛けてくるため非常に厄介だ。
武器を簡単に変更出来るアイギスと異なり、弓矢を持っていたゆかりは避ける以外に対処しようがない。
そのため、ラビリスが戦斧の加速器を使ってゆかりの許まで向かうと、そのままゆかりを狙っていた柵の先端を横から切りつけて軌道を逸らす。
軌道を逸らされた柵の先端は道路にぶつかって赤い火花を飛ばすが、直角に曲げるような形状変化は出来ないようで、攻撃が不発に終わるとすぐに女性型シャドウは柵を縮めて戻した。
「ゴメン。ありがとう、ラビリス」
「ううん。気にせんといて。けど、流石に今ので切れると思ってんけどな……」
戦斧を叩き付けたラビリスは、自分の武器が刃こぼれしていない事を確認すると、伸ばした状態でも戦斧の一撃に耐えた女性型シャドウの鉄柵の強度に表情を歪める。
先ほどのラビリスの一撃は丈夫なマンホールでも叩き切れるだけの威力はあった。
ペルソナを除く単純な攻撃力でいうならば、湊の持つ巨大メイス〝デュナミス〟や九尾切り丸に次ぐ威力。
もしも、敵が特殊な魔法効果などで守っていないとすれば、ラビリスの攻撃でも破壊出来ない以上他のメンバーの攻撃は効かないだろう。
これでは後衛の出来る事が非常に限られてくるため、作戦を色々と変えなければと七歌も頭の中で思考を続ける。
「アイギスは敵を撃って時間稼いで！　チドリとコロマルで敵に炎を

！」
「了解であります！」
指示を受けたアイギスは合掌してリストバンドから武器を呼び出すと、両手にサブマシンガンを出して移動しながら連射する。
続けて後退した順平の傍にいたコロマルとチドリがペルソナを呼び出し、タイミングを合わせて敵に火炎をぶつける。
先ほど美鶴が放った氷の針は効かなかったが、それよりも大きな銃弾や柵で防げない炎ならば効くのではと思って試す。
味方が攻撃している間に作戦が思い付けばいいが、間に合わなくても敵に何が効くかという情報が得られる。
そう思って七歌が今回のメンバーで誰も持っていない電撃スキルが使えるペルソナを呼ぶべく、薙刀を片手持ちに切り替えながらホルスターから引き抜いた召喚器を頭に当てた。
「来て、ドミニオン！」
七歌が引き金を引くとガラスの割れるような音が響き、彼女の頭上で水色の欠片が渦巻いてゆく。
渦巻く欠片の中から現われたのは、片手に分厚い本を持った青髪の男性型天使である正義〝ドミニオン〟。
有名なミカエルたちよりも僅かに劣るが、様々な天使らを管理する高位の天使である。
現われたドミニオンはペルソナ召喚するエリザベスらのように片手に持った本を開くと、敵を鋭い眼光で睨みながら光を纏った本を勢いよく閉じた。
直後、ドミニオンの頭上から発生した雷が銃弾と炎を喰らっている女性型シャドウへ落ちる。
いくら柵や本体が丈夫なシャドウでも、これだけ連続で攻撃すればどれかはヒットするはず。
そう思って敵の様子を観察すれば、炎と雷が消えてはっきり見えるようになった敵は身体が僅かに汚れてダメージが通っているようだった。
「よし、魔法ならなんとか効くっぽいよ！　牽制するアイギス以外は

魔法メインに切り替えて！」
『了解！』
恐ろしく硬くて頑丈だと思ったが魔法耐性は物理ほどではないのか攻撃が効いた。
これならば何とか攻略出来そうだと七歌が続けて味方に指示を飛ばそうとしたとき、女性型シャドウが手に持っていた一輪の花のような杖を振って花びらの渦を作りだした。
「なんだこれは……これが敵の攻撃スキルなのか？」
敵の頭上で渦巻く花びらを見て美鶴が警戒しながら口を開いた。
あれで攻撃されれば視界が覆われて地味なダメージを負いそうだが、言って花びらなのであまり深刻なダメージはないと思われる。
けれど、もしかすると長期戦を見越して小さくでもダメージを与えるのではと思っていれば、女性型シャドウは再び杖を振って頭上の花びらの渦を湊と獣型シャドウが戦っている方に向けて飛ばした。
「八雲っ!!」
獣型シャドウと戦う湊は背中を向けているため、背後から迫ってくる花びらの渦に対して反応が遅れる。
このままでは青年が危険だとチドリが声を掛ければ、湊は敵の方を見たまま持っていた九尾切り丸をヌンチャクのように背中側に振って迫る渦を切り、そこから再び逆の手で掴み直して下から振り上げて飛びかかってきた獣型シャドウを弾き飛ばす。
どうやれば二メートル弱で百キロ以上ある武器を、そんな曲芸風に振り回すことが出来るのか。
彼の事を心配して視線を向けていた者たちは思わず言葉を失っていたが、青年が無事である事を喜ぼうとしたとき、九尾切り丸で切られたはずの花びらの渦が崩れたまま流れていき獣型シャドウの許を辿り着くと急に光を放った。
光ったのは本当に一瞬だけだったが、それが収まると獣型シャドウが半透明なドームに覆われてその中を花びらが舞っている。
花びらは獣型シャドウにダメージを与えておらず、そんな状態で半透明な光のドームに覆われているということは、恐らく先ほど女性型

シャドウが出した花びらの渦は味方を助けるためのバリアを発生させる魔法だったのだろう。
多人数で相手しておきながら自分たちが足止めを失敗したせいで、一人で敵を抑えていてくれた湊を邪魔する形になってしまった。
ただでさえ硬い敵だというのに、これでバリアまで張られては攻撃が一切通らなくなった可能性もある。
本当に申し訳ないと美鶴が謝ろうとしたとき、九尾切り丸を持った湊は先ほどまで同じように獣型シャドウに向けて走って近付いた。
そして、バリアがあろうが関係ないとばかりに武器を袈裟切りに振り抜き、バリアに覆われた敵を大きく後退させる。
バリアを一撃で破壊出来なくとも、バリアに触れることが出来るなら干渉する事自体は容易い。
まるでそう言いたげな青年の行動には驚くばかりだが、ダメージが通らないという厄介な強敵の相手をしようという状況だと、あまりに普段通りな彼は非常に頼りに思えてくる。
湊の強さは完全に規格外。心配するだけ無駄なので、どんな事があってももう一体は彼に任せておけば大丈夫。
だから、もう一体の女性型シャドウは何としてでも自分たちが抑え、そのまま倒してみせると気合いを入れ直す。
現在、七歌たちは敵に対して扇型に展開した陣形を取っている。
一番湊たちが戦っている側に近い位置にいるのが美鶴とゆかりとラビリス、続けて女性型シャドウの正面にいるのが七歌とアイギスと風花、そしてシャドウと対峙した状態で右側に広がっているのが火炎属性持ちである順平とコロマルとチドリ。
一つの方向に火炎属性持ちが固まっているのは、その方が弱点に対するフォローが入れやすい事と攻撃する際にスキルを合体させやすいという理由がある。
先ほどは火炎と電撃でダメージを与えたので、今度は氷結属性を試し直してくれと七歌が声を張り上げた。
「全員敵の鉄柵に注意しながら魔法で攻撃！　美鶴さんも形状変化より範囲制圧で攻めてください！」

「分かった！　岳羽、タイミングを合わせてくれ！」
「了解です！」
先ほどの美鶴の攻撃は氷結魔法ではなく氷の針として処理された可能性が高い。
ならば、今度はしっかりと氷結魔法を喰らわせてやると、美鶴はゆかりに風でのフォローを任せながらペルソナを呼び出して女性型シャドウに向けてマハブフーラを放つ。
そこへ続けてゆかりのイオがマハガルーラを放てば、二つの魔法が合体してもう吹雪となって周辺ごと敵を白い冷気で覆い尽くした。
これで敵が氷像になってくれていれば全員で氷ごと砕くように追撃を入れればいい。
視界が冷気で遮られながら七歌が警戒していたとき、
「っ……何か来ますっ!!」
突然最後方でルキアの中にいた風花が何かの接近を感知して声をあげた。
直後、アイギスのすぐ傍で金属同士が衝突する甲高い音が響き、音の発生原因となったものの衝撃によって冷気が吹き飛ぶ。
冷気が吹き飛び視界が確保された事で全員がそちらを見れば、もう一体のシャドウと戦っていたはずの湊がアイギスを背に庇うように立ち、先ほど風花が感知した接近してきた相手がサバイバルナイフをそのまま巨大化させたような大剣で湊の九尾切り丸と鍔迫り合いをしていた。
こんなタイミングでストレガの襲撃かと七歌が敵をみれば、湊と鍔迫り合いしていたのは月光館学園の制服を着た女子だった。
「うそ……なん、で……」
敵の顔を見た七歌が目を驚愕に見開いて言葉を溢す。
視界を覆っていた冷気が晴れた事で、七歌の位置からでも相手の顔はハッキリ見えた。
肩に掛かる長さのウェーブがかった茶髪、育ちが良いのかどこか品のある大人びた容姿に、チャームポイントである左眼の下にある泣き黒子。

七歌にすれば奇妙な縁で関わるようになった相手だが、休日に何度か遊んだ事のある大切な友人の一人だった。
何故、そんな彼女が影時間に物騒な武器を持って、薄い笑みを浮かべて湊に斬りかかっているのか。
湊が敵から離れてこちらに来たという事は、恐らくその攻撃は今湊に庇われているアイギスを狙っていたのだろう。
どうして優しい彼女がそんな事をしたのか。アルカナシャドウに囲まれたままだという事も忘れ七歌は叫んだ。
「どうして沙織がここにいるの!!」
今、七歌から数メートル離れた距離で湊に斬りかかっている少女。
それは七歌と共に月光館学園で図書委員を務めていた長谷川沙織だった。

第三百二十八話　敵の狙い

――巌戸台駅前広場

女性型シャドウであるストレングスを狙い。美鶴とゆかりの放った魔法によって視界が塞がれた瞬間を狙って敵が現われた。

風花が高速で接近する敵に気付いて声をあげれば、サバイバルナイフを巨大化させたような大剣でアイギスを狙ったのか彼女の傍にいた。

もっとも、その一撃は先ほどまで獣型シャドウと戦っていたはずの湊によって防がれたが、敵である月光館学園の制服を身に纏った女子は、今も薄く笑ってその細腕のどこにそんな力があるのか湊と鍔迫り合いを演じている。

冷え切った瞳で敵を見ている湊に対して、敵の女子である長谷川沙織は余裕の感じられる薄い笑みを浮かべている。

おかげで沙織の方が押しているように思えるが、湊が僅かに身体を沈めて踏み込めば、沙織は弾かれたように後ろに飛んで距離を開けて着地した。

「へぇ、瞬間的に発揮出来る力は相当なものみたいね。これは遠距離攻撃の方が有利かしら」

アルカナシャドウと戦っている最中に攻撃を仕掛けて来た以上、相手はこのタイミングを狙って介入してきたに違いない。

だが、どうして彼女が〝敵〟として現われたのか。今も湊の力について分析している様子の相手に七歌は訳が分からないと声を掛ける。

「沙織、なんで貴女がここにいるの!?　それに、今、どうしてアイギスを狙ったの？」

「ゴメンね、色々と説明してあげたいんだけど時間が無いの。でも、どうして狙ったのかは簡単よ。ただその方がスムーズに事が進んだから」

言い終わる直前に湊が九尾切り丸を振るって斬撃を飛ばす。

沙織はそれを簡単に大剣で弾いて打ち消し、お返しとばかりに刀身を向けたかと思えば柄にあったトリガーを引いて銃弾を放った。

サバイバルナイフを巨大化したような変わった見た目をしている上に、まさか銃としての機能もついているのかと他の者が驚いている間に弾丸が青年に迫る。
弾丸が完全に見えている青年は、細かな鎖を編んで作られた手甲を装備した右手の裏拳で弾いた。
相手もそうなると分かっていたのか弾かれても動揺した様子はなく、そのままさらに後退して距離を取ったところで口をつり上げると小さく呟いた。
「――――ペルソナ」
召喚器を使わず、湊のようにカードを砕くこともなく、ただ静かに呟くだけで沙織の頭上で水色の欠片が渦巻いた。
渦の中心に力が収束してゆき、徐々に彼女のペルソナが姿を現わす。
現われたのは黒い髪に灰色の肌、黒いドレスを身に纏った女性型のペルソナだ。
敵として現われた相手がペルソナを召喚したという事はろくでもない理由に決まっている。
相手を傷つけるつもりはないが、仲間や湊たちを襲うつもりならば止めなければと七歌は召喚器を頭に当ててペルソナを呼んだ。
「きて、エウリュディケ！　風で相手を止めて！」
七歌が呼び出した白いキトンを身に纏った女性型のペルソナは、空中で左右の手を交差させるように両手を振るう。
それにより二つの風が巻き起こり、沙織をペルソナごと風で押さえ込もうとした。
「ノート――――〝夜の帳〟」
僅かな砂埃を巻き上げながら迫る風に対し、沙織のペルソナは両手を前に向けるだけで動こうとしない。
しかし、ノートと呼ばれたペルソナが手を前に向ければ、そこには視認出来ない何かが展開している気配があった。
嫌な予感がしたが攻撃をやめれば敵が自由に動けるようになってしまう。

ここはとりあえず様子を見なければと七歌が相手の動きに注目すれば、エウリユディケの風がノートの展開したものに触れた途端、風が七歌のコントロールを離れて味方に向けて跳ね返ってきた。
「うおっ!?」
「これは、攻撃を跳ね返したのかっ」
跳ね返ってきた風を喰らって順平はバランスを崩し、美鶴は倒れぬように身を屈めて風に耐える。
相手の動きを制限するために放った攻撃だったため威力は制限されていたが、もしも敵を倒すために全力で放っていれば今頃自分たちも無事では済まなかった。
動きを止めるための攻撃を狙ってのカウンターならば、完全に相手の思惑通りに動いてしまった事になる。
ただ、沙織のペルソナがそういったタイプだとすれば、様子見で相手の特性を理解出来たのは幸運と言える。
ここからは相手のカウンター魔法の持続時間や、跳ね返せる威力上限や種類を特定していくべきだろう。
そう考えた七歌が味方に指示を出そうとすれば、アイギスの傍にいた湊が沙織に背を向けたかと思うと九尾切り丸を持って駆け出す。
どうしてこのタイミングで戦線を離れるのか。そう考えるもすぐに理由を理解する。
背を向けて駆けだした湊は走りながら刃を寝かせて構え、正面から獣型シャドウが飛びかかってきたところで武器を振り抜く。
空中で硬い金属同士がぶつかり合った音が響き、火花を散らして獣型シャドウが大きく後方に飛ばされて着地する。
敵を弾いた湊はそのまま今度は獣型シャドウを横目に見ながら、腕を伝った黒炎を刀身に纏わせ、横一閃に黒い斬撃を駅の改札に向けて飛ばした。
すると、斬撃を飛ばした先では起き上がった女性型シャドウが今にも鉄柵を伸ばして攻撃を仕掛けようとしており、相手が動き出す前に到達した斬撃に吹き飛ばされ女性型シャドウは壁に衝突した。
「っ、ゴメン八雲君!」

急に沙織が現われた事、敵が明確に仲間を狙ってきた事で、メンバーらの思考は完全に沙織に向いてしまっていた。
おかげでまだまだ体力に余裕のある二体のアルカナシャドウが完全にフリーになっていて、湊が対応してくれなければそのまま襲われ窮地に陥っていたかもしれない。
いくら彼が桁外れな場数を踏んでいるにしても、指揮官である七歌だけは湊と同じように全体に対して目を向けていなければならなかった。
友達が敵として現われたとしても関係ない。相手の事情を聞きながらでも他の敵に対処することは可能だ。
反省した七歌は湊に獣型シャドウと引き続き戦って貰う事にして、もう一体のシャドウとはアイギスたちに戦って貰い。
自分たちが沙織の相手をしようと指示を飛ばす。
「八雲君は獣型と戦って！　もう一体のシャドウはアイギスとラビリスとコロマルで対処！　残りのメンバーで沙織の相手をする！」
対人戦となればどう考えても湊の方が強い。相手を殺すなといえばその通りに動いてくれる可能性も高いので、他の者たちでシャドウの相手をしながら湊が沙織を無力化するのを待った方が確実ではある。
だが、七歌は自分の友人が湊と戦う姿を見たくなかった。
全体の指揮を執っている人間として、感情に左右されるなど論外。
けれど、誰もが湊のように機械的に判断が下せる訳じゃない。感情という不確定要素を考慮すれば、気が散ってまともに指示が出せなくなるよりは断然良い。
指示を聞いた者たちは短く返事をしてそれぞれの敵と向き合っては戦い始める。
湊は再び襲いかかってこようとする獣型シャドウに頭上から剣を振り下ろし、女性型シャドウが掛けた花の渦のバリアごと敵を石畳に埋めようとする。
完全に湊が相手のスペックを上回っている様子なので、獣型シャドウの相手は湊に任せておけば問題ない。

続いてアイギスたちも、湊に吹き飛ばされた女性型シャドウに銃弾とスキルで牽制しながら、ラビリスがどうにか加速器付きの戦斧で鉄柵のガードを突破出来ないか試している。
並みのシャドウであれば戦斧の一撃でかなりのダメージを与えられる。
それを鉄棒ほどの太さで完全に耐える鉄柵の強度には舌を巻くが、恐らくはその強さの秘密の一つは自在に変形する柔軟性だろう。
攻撃を喰らう瞬間に弛ませれば勢いをある程度殺せるため、ただ防いでいるように見せて硬さと柔軟性の両方で対処する事で戦斧の攻撃も受けている。
けれど、その二つを用いた防御にしても完璧ではない。アイギスたちには全てのスペックを数倍に跳ね上がらせる〝E・X・O・〟だってある。
姉妹の連携と湊が認める戦士として力を持つコロマルならば、きっと敵の能力を探って的確なタイミングで切り札を使う。
ならば、自分たちは乱入してきた沙織の相手をして、敵ならば無力化を、敵でないにしてもアイギスを狙った理由を含めた情報収集をする。
薙刀を握り直して沙織の方へと向き直った七歌は、他の全員が相手を警戒していることを確認しながら声を掛けた。
「……沙織、どうしてさっきアイギスを狙ったの？」
「別に汐見姉妹ならどっちでも良かったわ。ただ、姉の方は斧を持ってたから、狙い易い妹の方を狙っただけ」
答える沙織の声や表情は学校で話していたときと同じだ。
けれど、どうしてだか今の笑顔は仮面を貼り付けているようで違和感がある。
もしや誰かに操られているのか。相手の動きに警戒しながら再び質問しようとすれば、沙織はノートを消して、別のペルソナを呼び出すべく頭上に力を収束させる。
このまま素直にさせて堪るかと七歌は順平に指示を飛ばす。
「順平、ペルソナで対処！」

「あいよ！　こい、ヘルメス！」
勢いよく飛び出したヘルメスが召喚途中の沙織のペルソナに斬りかかる。
順平のヘルメスは火炎属性を操るが、物理攻撃にも優れたペルソナだ。
素早い動きで敵まで近付き、完全に顕現する前に排除する。
これでこちらに流れが来ると思ってヘルメスの攻撃が届こうとしたとき、
「切り伏せなさい。フレイ！」
召喚光に包まれた状態の敵のペルソナが、その手に持っていた細身の剣を横に薙ぎ、ヘルメスの斬撃を弾き返した。
そうして召喚光が治まり現われたのは、ウェーブのかかったくすんだ金髪を肩まで伸ばした筋骨隆々な男性型のペルソナ。古代ローマの服の上に金色のマントを身に着け、その右手には煌びやかな装飾のされた細身の剣を持っている。
七歌たちからすれば湊に続けて二人目のワイルド能力者の登場に少なからず驚きを受ける。
だが、そんな事を考えている暇も無く、現われたフレイはそのままヘルメスへと斬りかかった。
ヘルメスは両腕の金属のパーツで相手の剣を受け止めるが、相手の突進を受け止める事が出来ずそのまま押し切られる形で近くの店に背中から突っ込む。
「んなっ……こ、いつ、パワー負けするっ!?」
ヘルメスはパワータイプではないが決してパワーがない訳ではない。
それを一方的に押し切り衝突したビルを破壊してヘルメスを消滅させた力を見せた敵に、順平はフィードバックダメージの痛みで表情を歪ませながら悔しそうに敵を見る。
魔法を反射させたノートに完全なパワータイプのフレイ。
この二体だけでも敵の強さが現在の特別課外活動部よりも上だと理解出来た。

相手が何体のペルソナを持っているのかは分からないが、単騎で攻めても勝てる可能性は低い。
ならば、連携をとって複数のペルソナで一度に攻めようと、フレイを自分の傍に戻した沙織を見ながら七歌が考えていれば、膝をついていた順平に手を貸して立たせていたチドリが真剣な表情で相手に話しかけた。
「……なんで貴女がセイヤのペルソナを持っているの？」
「セイヤ？　ああ、被験体だった子どもの事？」
チドリに質問された沙織はセイヤが誰のことだか分からなかったようだが、少し考えてそれがエルゴ研にいた人工ペルソナ使いの被験体だと分かったようで納得したような顔をした。
そう。先ほどヘルメスを倒し、今は沙織の傍で待機しているペルソナ・皇帝〝フレイ〟はかつてチドリたちと共にエルゴ研にいた少年のペルソナだった。
セイヤはタカヤとカズキと共に湊と模擬戦をしていた事もあり、チドリもそのペルソナをよく覚えていた。
だからこそ、相手が使っているペルソナが同種のペルソナではなく、セイヤのペルソナだと気付くことが出来た。
他の者たちもチドリの雰囲気と沙織が口にした〝被験体〟という単語から、相手が桐条グループの暗部に繋がっていると理解して様子を見る。
そうして、相手が答えるのを静かに待っていれば、沙織はクスクスと笑ってから答えた。
「理由は簡単。あの被験体より私の方が上手く使えるから貰ってあげたの」
「他人のペルソナを奪ったの？」
「フフッ、別に悪い事ではないでしょう？　だって、あそこで戦ってる有里湊も同じ事が出来るのだから」
確かに沙織の言う通りで他者のペルソナを奪う能力を湊は持っている。
実際にそれを他の者に使ったこともあれば、奪ったペルソナを使っ

て活動していた事もあった。
チドリはそれを悪い事だとは思わなかったし、むしろその力があったからこそ守れた物もあったくらいだ。
そのため、相手の言葉を否定するつもりはないが、奪う過程によってはチドリは相手の行いを湊と同じ物だと思うつもりはなかった。
「ええ、能力自体に善悪はないわ。でも、ペルソナを奪った後のセイヤはどうなったの？」
「おかしな事を聞くのね。当然、死んだわ。影人間が長生き出来る訳ないでしょう？」
湊のアベルの〝楔の剣〟はかなり特殊な能力だ。他人のペルソナや適性を奪っても相手を傷つける事がない。
だが、普通はペルソナを奪われればシャドウが抜け出た状態になり、無気力症患者のように影人間となってしまう。
セイヤも当然その様になったようだが、自分がペルソナを奪ったせいで被験体が死んだというのに、沙織はまるで何でもないことのように話した。
相手の態度にチドリは小さな怒りを覚え、軽く睨みながら間違いを指摘する。
「死んだんじゃないでしょ。貴女やそのバックにいる人間が殺したんじゃない」
「んー、でも結局それは桐条グループの罪でしょ？　被験体はどうやっても寿命を全う出来ない定めにあった訳で、ならせめて力だけでも有効活用してあげようって優しさからペルソナを残したのよ？」
「どこが優しさよ。自分のためでしょうに。私は貴女みたいな被験体なんて知らない。脱走後に作られた後期型か何か？」
「フフッ、随分と知りたがりなのね。でも残念ながら天然よ。ワイルドは疑似能力だから人工ワイルド能力者ではあるけどね」
ワイルドはペルソナ使いの進化型だ。さらに進むと湊のような複数同時召喚が可能な完成形になっていく。
それを人工的に作る事が出来ると驚くなという方が無理がある。
だが、人工ワイルド能力者を作るにはペルソナ能力者が必要で、沙

織たちの持つ技術ではペルソナを奪った相手は無気力症になるらしい。
どうやって奪うのか。どうやって他人のペルソナを移植したのか。そもそも、相手のバックにいるのは誰なのか。
ストレガと面識があるからこそ、相手がその仲間ではないとチドリには分かる。
相手に対する情報があまりに少ないため、もう少し情報を集めたいところだが、沙織がふと視線を逸らすと獣型シャドウと戦っている湊の方を見て残念そうな顔をした。
「ああ、フォーチュンは持ちそうにないわね。しょうがないか」
つられて他の者たちが湊の方に視線を向ければ、いつの間にか一人だけ随分と離れた場所で黒炎を纏った九尾切り丸を振るっていた。
獣型シャドウの硬さと花の渦のバリアを突破するためか、湊は一度も攻撃を途切れさせること無く連続で相手を斬り続けている。
大剣とは思えぬ剣速と絶え間ない攻撃によって、湊の周りに黒炎の軌跡で斬撃の結界が生成され、結界が徐々に相手のバリアを侵食している。これでは確かに敵は持たないだろう。
「うん。アレが来たら面倒だから先に目的の一つを果たさせてもらうわ」
湊は沙織に対抗出来ていたため、彼がこちらに戻ってくれば沙織の相手は湊に任せればいい。
本人は負ける気など欠片もないようだが、この中で湊だけは厄介な相手と認識しているようで、目的の一つを果たすと口にすると改札口の方で戦っているアイギスたちを見て薄く笑った。
「ダメ、沙織っ」
「フレイ――――〝勝利の剣〟」
相手の狙いが分かった七歌が黄龍を召喚して攻撃を阻もうとする。
しかし、黄龍の攻撃が届く前に黄金の光を纏ったフレイの剣が振るわれ、光の柱と見紛う斬撃が進路上に現われた黄龍を蒸発させながらアイギスたちに向けて振り下ろされた。
眩い光に視界がホワイトアウトし、攻撃の余波で起きた風で七歌た

ちは地面を転がる。
「つぅ……アイ、ギス」
「くっ……ラビリスとコロマルは？」
相手は駅ごと叩き切るように光の柱を振り下ろしていたが、いったいどうなったのか。
転がる中で出来た小さな傷から血を流し、身体が止まってから七歌と美鶴は半分ほどぼやけた視力で何とかアイギスたちの様子を見ようとする。
だが、未だに光の柱があり、眩しさのせいで上手く改札口の方を見ることが出来ない。
沙織は念入りに相手を灼き滅ぼそうとしているのだろうか。
攻撃を喰らった直後である今ならばまだ生存や回復の可能性がある。相手を止めねばと痛む身体を無理矢理立たせれば、七歌だけでなく美鶴とゆかりも光の柱が消えていない理由を理解した。
改札口の方を見れば、湊の左腕から発生した黒炎が蛇神の頭部を形作り、その強靭な顎によって光の柱を受け止めていたのだ。
「っ、助かった……」
獣型シャドウを殺してすぐに駆けつけてくれた湊に七歌は心の中で感謝する。
守られたアイギスたちは自分たちが狙われた攻撃に目を見開いて驚いているが無事らしい。
二人と一匹が戦っていた女性型シャドウの姿がないのが気になり探せば、何故か、光の柱と蛇神の顎の間に挟まれて消滅しつつあった。
どうやら湊が顎生成時にシャドウを咥えて相手の攻撃を利用したらしい。
あの数秒の間によくも頭が回る物だと青年の咄嗟の対応に思わず感心する。
だが、おかげで味方が無事なまま敵を倒す事が出来た。これで残るは沙織だけだと光の柱が消えて行くのを見ながら七歌が相手を見れば、攻撃を防がれたはずの沙織が笑っていた。
その笑みの意味を七歌が考えようとしたとき、攻撃の余波で転がっ

た時に距離が開いたのか、離れた場所から順平の必死な声が聞こえて来た。
「おいっ、おいっ！　目ぇ、開けろって！　ダメだっ、死ぬなっ!!」
「チドリちゃん、死なないで！」
そこには手や服が血まみれになった順平と風花がいた。
二人の間には血まみれのチドリが倒れているのだが、七歌の見間違えでなければその胸に大きな穴が空いて、下の地面が見えている。
彼らの周りには血だけではなく、元は制服だったものらしき焦げた布きれや大小様々なサイズの肉片と骨が散らばっていた。
一際大きな塊の中に青白く発光する何かが入っており、胸に大穴を空けて血溜まりに倒れている少女というあまりに非現実的な光景を前にして、七歌は発光している物体は何だろうかと関係のないことを考えていれば、
「――――チドリぃぃぃぃぃっ!!」
蛇神の顎を消して少女の許へ向かおうとする青年の絶叫が響いた。

第三百二十九話　少年の決意

――ポートアイランド駅・路地裏

母親の仇である荒垣の命ですら背負ってしまいそうな少年に、荒垣は〝お前は悪くない〟という言葉を送った。

それは自分の犯した罪の被害者である少年が、今よりも不幸にならぬようにと思っての事だった。

だが、その言葉を聞いた少年は、母親の仇である相手がわざわざ自分の今後のためを思って言葉を掛けてきたことで混乱した。

「なんで……なんで、言い訳しないんだよ！　自分じゃないって、あれはただの事故だって言い逃れして、そもそもここにだって来なければ、僕はお前を逃げ出した卑怯者として殺せるのに！　なんで僕に優しくするんだよ!!」

相手が湊やストレガのように理解出来ない相手であれば、その罪を持って天田も揺れる事なく殺すことが出来た。

しかし、荒垣は何も言い訳せず、ただ天田の言葉や要求を受け入れている。

そこに自分の今後を思っての言葉を送られれば、復讐のために蓋をしていた仲間として過した記憶が頭をよぎり、どうして平静でいられるのかと少年が困惑するのも無理はない。

対する荒垣は天田の言葉を聞いて首を横に振ると、そんな大層な理由がある訳ではないと返す。

「……十分逃げたさ。お前があの時の被害者だって知ってて、けど、自分が犯人だって言い出せず、バレなきゃいいなんて虫のいいことを思ってたんだ」

「僕だって同じ立場ならそう思うさ！　誰が好き好んで裁かれたいって、殺されたいって思うんだよ！」

荒垣の考えはまともな人間なら誰でも考え得る事だ。

人を殺して平然としていられる湊やストレガが異常なのであって、平和な日常を生きてきた者であれば、自分が加害者になった事で様々な感情と罪に押し潰されそうになる。

荒垣だってバレなければ良いと考えながらも、天田に対する贖罪については常に考えていただろうし、常に自分が裁かれることを思って不安になっていたに違いない。
言葉の端々からそういった後悔や申し訳ないという気持ちが伝わってくる事で、天田は憎しみと共に向けていた槍の穂先をおろし、どこか疲れた様子でぽつりぽつりと言葉を溢す。
「頭では分かってたんです。荒垣さんだって別に暴走させたくて暴走させた訳じゃないって。そもそも、母さんが外に出なければ誰も死ななかった事故だったんだって……」
カストールの暴走が原因で事故が起きたことは間違いない。
原因はそこであり、加害者が荒垣で天田の母が被害者だという事ははっきりしている。
ただ、天田だって事故について考える中で、それが故意に起こされた殺人ではない事は分かっていたし、不用意に近付いた母親に落ち度がなかったとも思っていなかった。
「最初は罪滅ぼしだったのかもしれないけど、荒垣さんが僕の世話を焼いてくれたのは本人の優しさだって知ってるんです。他の皆さんより一歩引いて皆の事を見てて、それで誰かが困ってればちょっとだけ手を貸してくれて、だから今日は僕が前に進むために殺されようとするって分かってました」
この世界には特別な感情を抱くことなく人を殺せる人間がいる。それこそ蚊や蝿を潰すように、ただ邪魔だからと一方的な理由で殺して一切罪悪感を覚えない者がいるのだ。
天田のここ最近の出来事でそういった人間を見る機会があり、だからこそ荒垣はそれとは違うと思うことが出来た。
話ながら手に持った槍を握り直し、けれど、その穂先を相手に向ける事なく天田は顔を上げて真っ直ぐ相手と視線を合わせる。
「ただ、荒垣さんが僕に裁かれたいって気持ちも本当だと思うんです。不運が重なったんだとしても人を殺した。その罪の重さに耐えられなかったから、寮から離れて力を手放そうとしたんでしょう？」
情報屋でロゼッタから聞いた情報は事実ではあったが、意図的に天

田を荒垣に仕向けるものであった。
一方で、後で湊から聞いた情報は事実とほんの少し荒垣側の事情を付け加えた真相と言えるものだった。
おかげで自分と相手をただの被害者と加害者と考え思考放棄するのではなく、これまで過してきた中で自分が見た相手の姿から、その事故が不幸が重なって起きたものだと認識するに至った。
無論、相手が我が身可愛さから言い訳や命乞いをするなら殺していたが、荒垣は最後まで天田の事を考えながら裁かれることを受けいれていた。
そんな相手を復讐として殺すのでは、母親の仇討ちにはならない。ただ自分の憂さ晴らしに殺人を犯そうとしているだけだ。
「なら、僕は貴方を殺しません。ずっと罪を背負い続けて、二度と母さんみたいな犠牲者が出ないよう影時間が終わるその日までシャドウと戦い続けてください。それが僕が貴方に与える罰です」
罪を背負い続けろと厳しい事を言ったが、その意味はこれからも仲間として共に戦っていこうというものだ。
小学生という幼い少年にとって、母親の仇を前にその結論に達するまでどれだけの葛藤があったことだろう。
少年の言葉に驚きながら荒垣がその顔を見れば、天田は涙を流しているが小さく笑っていた。
「……本当にそれでいいのか？　お前はそれで納得出来るのか？」
「正直言って分かりません。犯人を殺したいほど憎む気持ちもあるけど、荒垣さんにお世話になって仲間だとも思っているから死んで欲しくないって気持ちもあるんです。何より、美紀さんが死にそうな時の皆さんを見た後だと、自分がそんな顔させる訳にはいかないって思うから……これでいいんです」
「……そうか。分かった、しっかり償わせて貰う」
少年の覚悟を見た荒垣は、彼の想いを無駄にしないようしっかり償っていく事を誓う。
荒垣の返事に満足したように頷いた天田は、直後、ハッとしたような表情になり自分の胸に手を当てた。

「どうかしたのか？」
「あ、はい。なんかペルソナが変わったみたいです」
「アキと同じように進化したのか？」
「多分、そうだと思います。新しいペルソナはカーラ・ネミって名前みたいです」
　真田の時は、美紀を失いかけた後悔から本当の強さを求めようと決意してペルソナが変化した。
　天田の場合は、恐らく母親を殺した犯人への復讐を別の形で清算しようと考え、そうして一つ乗り越えた事で心と共に変化したのだろう。
　ペルソナが変化するほどの決意を抱いた少年の強さを荒垣が眩しく思っていれば、少年が新たな一歩を踏み出した瞬間を汚すように招かれざる客が路地から現われた。
「やれやれ、せっかくの仕込みが台無しです。少年の復讐が遂げられるまで待っていたというのに、このような茶番を見せられるとは」
　声のした方へと荒垣と天田が振り返る。
　そこには詰まらなさそうに眉を寄せて溜息を吐くタカヤがおり、彼の後ろからストレガのフルメンバーが続いて出てくる。
　天田は初めて見る相手もいるのだろうが、荒垣は一度会っていた事で天田よりも動揺が少なく斧を構えて敵と向き合う。
「そうか。俺たちがあいつらから離れる時を狙ったのか」
「ええ。個人の能力はともかく数では負けていますからね。少しずつ削っていこうと思った次第です。まぁ、少年が貴方を殺してくれれば手間も一つ省けたのですがそう思い通りにはいかないようです」
　荒垣はこれからすぐにアルカナシャドウの許へと向かおうと思っていた。
　大凡の場所は聞いているので、走ればそれほど掛からずに到着出来るはずだった。
　しかし、全長三〇メートルという規格外なペルソナ・テュポーンを持つスミレを含めた六人の敵を前に、二人だけでは防衛も撤退も非常に難しい。

出来ればあちらの戦いを終えた仲間が加勢に来てくれないかと考えるが、天田が荒垣と同じように武器を構えるのを横目で見ていれば、タカヤが余裕を感じさせる笑みを浮かべて口を開いた。
「貴方はおそらくお仲間の到着を待っているのでしょう。ですが、あちらにもそれほど余裕があるとは思えません。期待するだけ無駄でしょう」
「お前ら、他の皆に何かしたのか!?」
特別課外活動部の戦力を削るため、自分が荒垣を殺すように仕向けたタカヤを睨んで天田が問いかける。
相手は湊と同じ裏の人間。ある程度の秩序を守ろうとする湊に対し、相手は目的のためならどんな手段でもストレガの方が質が悪いので、そういった意味でも油断が出来ない相手だ。
強く警戒しながら天田が静かに敵を睨んでいれば、タカヤは余裕の態度を崩さず楽しげに口元を歪ませる。
「別に我々は何もしていませんよ。ただ、人の恨みはどこで買っているか分からないものです」
「お前らの他にも誰か僕らを狙っているやつがいるって言うのか?」
「さぁ、どうでしょう?」
「おまえっ!!」
からかうように惚けてくるタカヤに対し、天田が馬鹿にするなと攻撃を仕掛けようとする。
だが、すぐにカズキが間に入ってきてペルソナ・モーモスを呼び出した。
ボロマントに身を包んだやせ細ったペルソナは、その手に持った大鎌を天田に向けて振り下ろしてくる。
敵が動き出すのを見ていた荒垣が天田に前に出て、その一撃を斧で受け止め勢いのまま後退し、すぐに天田の無事を確認して挑発に乗るなと諌める。
「落ち着け、天田! あっちには有里もいる。まず戦力で負けることはねぇ」
「す、すみません。来い、カーラ・ネミ!」

召喚器を顎に当てて引き金を引き、天田の頭上で水色の欠片が回転して機械的なオレンジ色の身体を持ったペルソナが現われる。
新たなペルソナは存在感もスペックも跳ね上がっており、召喚光が消えきる前にモーモスに向かって拳を振り下ろす。
速さに自信のあるモーモスはそれを回避したが、空振った腕の一振りで路地裏に風が吹き荒れた。
吹き荒れる風で揺れる髪を手で軽く押さえながら、以前とは異なるペルソナを呼び出した少年をタカヤは興味深そうに眺め、先ほどの荒垣の台詞と合わせて笑いながら言葉を返す。
「フフフッ、成程。そちらもミナトの強さについては正当に評価しているのですね。ですが、彼がいれば大丈夫だというのは早計ではないでしょうか？」
「なんだ。テメェの知ってる他の敵ってやつが有里並みだとでも言いたいのか？」
「ご本人たちはそう言っていましたが、今回はそういった意味ではありません。純粋にミナトにも弱点があるという話です」
敵の言葉を素直に聞くものではない。だが、湊の弱点と聞いて荒垣たちの頭にも三人の少女が過ぎった。
湊の強さは異常だ。どれだけ鍛えても自分たちが同じレベルになれるとは思えない。
ただ、その弱点となる少女たちは自分たちよりも強いが、その強さはあくまで常識の範疇。ストレガたちと同程度か僅かに上回るくらいなものだろう。
もしも、タカヤたちの話が真実で湊クラスの敵が存在するならば、アルカナシャドウの相手も必要と考えればどうやっても湊だけでは全員を守り切れるとは思えない。
「確かに彼は強い。我々が全員で掛かっても恐らくは勝てないでしょう。ですが、彼には守る物が多過ぎる。チドリを狙われれば守るでしょう。ラビリスという少女を狙われても守るでしょう。その妹を狙われても当然守るはず。ですが、同時に狙われれば？　彼は全てを守りきれるでしょうか？　そして、もしも守れなければ彼はその瞬間

に大きな隙を晒すのでは？」
タカヤにとっても湊は古くからの知り合いのはずだが、彼がピンチと分かっていてタカヤはこれ以上無いほど楽しそうに笑っている。
強敵が倒れることが嬉しいのか。それとも湊が困難に襲われるのが楽しいのかは分からない。
だが、こちらと同時に襲撃されているのか、それとも既に襲われているのか情報が不足している荒垣たちは、すぐにでも向こうの救援にいかねばと焦りを覚えた。
そんな荒垣たちの胸中を察しているのか、タカヤの後ろにいたジンがお手製の手榴弾を投げてくる。ご丁寧に荒垣たちの頭上を越えて後ろに伸びている路地に落ちるよう計算して。
逃走するにしても、味方の救援にいくにしても、敵を突破出来ない以上は後ろに逃げるしかない。
その退路が塞がれようとしている事で、荒垣たちがすぐに空中で手榴弾を破壊しようと考えるも、大きく山なりに投げられた手榴弾には攻撃が届かず、間に合わないと悟った二人は身体を横に向けて横からの爆風とタカヤたちの攻撃に備える。
『ぐっ!?』
地面に落下した手榴弾は予想よりも大きな爆発を起こした。おかげで二人は体勢を僅かに崩してしまい。その瞬間を狙ってタカヤがヒュプノスを呼び出し、カズキのモーモスと共に迫ってくる。
拙いと思って荒垣は咄嗟に斧で応戦しようと考えるも、敵のペルソナたちは二人に向けてスキルを放つ体勢に入っていた。
荒垣も天田も重量や長さのある武器を使っているせいで、咄嗟に召喚器に持ち替えるのが難しい。
そのため、二人はすぐに召喚器に手を伸ばしたが、爆風で体勢が崩れていた事もあってどうやっても敵のスキルが発動するまでに召喚が間に合わなかった。
だが、
「――――ジオダイン！」
敵のスキルが放たれる直前、荒垣たちの背後から青白い電撃が走り

敵のペルソナを襲った。
　爆風で姿が隠れていた敵からの攻撃に反応しきれず、直撃を受けたペルソナは消えていき、召喚者の二人は電撃で晴れた爆風の向こう側にいた人物を睨む。
　そこには召喚器を手に持ち肩で息をしている真田が立っていた。
「お前たち、無事か？」
「ああ。助かった」
「あ、あの、真田さん、僕がその……」
　肩を並べる存在である幼馴染みに助けられたのは癪だが、それ以上に心強い援軍が来たことで荒垣は口元を小さく歪めながら武器を構えて立ち上がる。
　一方、彼の幼馴染みを殺そうと思っていた天田は、その負い目から真田とまともに視線を合わせることが出来ず口ごもってしまう。
　そんな少年の傍までやって来た真田は、悪い事をした子どもを叱るようにやや強めの視線と口調で声を掛けた。
「フン、勝手な行動を取ったことは後で美鶴からの説教を覚悟しろ。だが、もう大丈夫なんだな？」
「……はい！」
　荒垣と天田の間でどういったやり取りがあったのかは知らない。
　だが、今の二人を見れば一応の解決を見せた事が理解出来る。
　ならば、もうこれ以上は何も聞かないと敵を睨んだまま真田は好戦的な笑みを浮かべた。
「よし。なら、今度は前回のリベンジマッチといくぞ」
　前回はスミレのテュポーン一体にやられたが、今回は場所が狭いのでテュポーンは出せない。
　となれば、残りのメンバーと戦う訳だが、カエサルの一撃が敵に十分なダメージを与えていたので今回は勝たせて貰うぞと真田は既にやる気だ。
　しかし、真田がここへやって来る間に味方に危機が迫っている事を聞いていた荒垣が待ったを掛けた。
「待て、アキ。向こうも狙われてるらしい。むしろ、今回は有里潰しに

吉野たちを狙ってるやつらが動いてるって話だ。正直、こっちよりも拙いかもしれねぇ」
「何？　そうなのか？」
　真田にとって湊は妹の命を救ってくれた恩人であり、助けてくれた相手に美紀との思い出という代償まで払わせる事になってしまった負い目がある。
　本人はそれで美紀が助かるなら自分が忘れられる程度悩むまでもないと言ってくれたが、美紀の記憶が戻らないのであれば、真田は何かしらの形で恩を返さねばと考えていた。
　そんな相手と彼が大切に想っており妹の友人でもある少女らに危機が迫っていると聞いた以上、自分のリベンジマッチなどどうでも良いとすぐに思考を切り替え、視線で荒垣と天田に合図をしてからすぐに仲間の許に向かう策を講じる。
「シンジ、天田、走れ！　カエサル、マハジオダイン!!」
　恩人の窮地に一秒たりとも無駄には出来ない。その想いがペルソナとのシンクロ率を上げて過去最速の召喚を可能にした。
　タカヤたちも真田が行動に移ると察して妨害しようとしていたが、真田のカエサルが現われ攻撃を放つ方が速く、それほど広くない路地裏の広場を眩い電撃が覆った。
　閃光による目眩ましと高威力広範囲の攻撃によってストレガたちは下手に動けず、その間に真田たちは背を向けて路地裏から走り去って行く。
「チッ、テメェのミスだぞタカヤ」
「ええ、少し遊びすぎました。ですが、一人がこちらに来ていたことで向こうの戦力は減っていた。なら、あの二人も一人くらいは仕留めている事でしょう」
　圧倒的に有利な状況にありながら、リーダーであるタカヤが敵との会話を願ったせいで戦力を一人も削ることが出来なかった。
　おかげで弱点の電撃属性の攻撃を受けて苛立っていたカズキがタカヤを強く睨んだが、今から追っても無駄だと分かっているタカヤは、玖美奈たちの戦果に期待しようと言ってアジトへ帰還しようとす

る。
「フフッ、神の怒りか、神殺しか。どちらが見れるか楽しみです」
大切な者を奪われた青年の怒りか。それとも、己の命を賭して大切な者を守りきって青年が死ぬのか。
どちらに転んでも面白そうだと、タカヤは遠く離れた戦場に思いを馳せた。

第三百三十話　さようなら

――巌戸台駅前広場

アイギスとラビリスが狙われている事は分かっていた。

相手もその様に言っていたし、最初にここへ現われた時もハッキリとアイギスを狙っていたので、青年がわざわざアルカナシャドウとの戦闘を中断して守りに入ったくらいなのだ。

それだけの情報があれば、七歌たちと戦いながらも余裕があった敵が、アルカナシャドウの相手をしているアイギスたちを途中で攻撃すると予想する事は簡単に出来た。

獣型のアルカナシャドウを倒し、光の柱と見紛うばかりの斬撃が振り下ろされる軌道へと割り込み、アイギスたちが戦っていたアルカナシャドウをクッション代わりに蛇神の顎で咥えたまま斬撃を受けた。

確かに相手の攻撃は並みのペルソナを遙かに凌駕し、タナトスやアザゼルなど最上級の力を持つペルソナでなければ相殺も難しい威力だった。

もっとも、湊に宿る蛇神はペルソナに分類されてはいるが、二千年以上の時を経て集められた名切りの負の感情の集合体である。

地球に存在する全ての生命に自身の欠片を与えたニュクスには及ばないものの、それに満たぬ神格しか持たない神が相手ならば上回るだけの力を持つ破壊の化身。

不完全な顕現と言えどもペルソナの域を出ない存在の攻撃など通すはずもなく、湊の狙い通りに蛇神の顎は敵の攻撃を完全に防いでアイギスらを守りきった。

それが表の世界で生きるため〝長谷川沙織〟という偽りの名を持った玖美奈の思惑通りだとも知らずに。

「おいっ、おいっ！　目え、開けろって！　ダメだっ、死ぬなっ!!」

「チドリちゃん、死なないで！」

胸に風穴を開けて地面に倒れた少女の周りで、自分が血に汚れることも構わず順平と風花が必死に声を掛ける。

それは本当に突然の出来事だった。玖美奈の召喚したフレイが〝

勝利の剣〟という光の柱をアイギスに向けて振り下ろした際、他の者たちと同じように順平、風花、チドリの三人も攻撃の余波で倒れて地面を転がった。
身体は痛むし、服も汚れてしまい、仲間が狙われた事も併せて気分としては最悪だった。
だが、地面を転がった割に大きな怪我はなかったので、少し離れた場所へと振り下ろされた光の柱とそれを防ぐ蛇神の骨を見ながら三人は立ち上がった。
そして立ち上がった次の瞬間、チドリが胸から背中側に向けて風穴を開けて倒れた。
攻撃を受けた本人も一瞬の事で何が起こったか分からなかっただろう。
地面へと仰向けに倒れゆく最中に少女の瞳から光が消え、倒れた彼女の周りには黄昏の羽根が入った心臓や肺だった肉片と崩れた骨が血溜まりと共に散らばっている。
「ふふふ、うふふふふ、あはははははははっ!!」
その状況を作り出そうとアイギスへと攻撃を仕掛けた玖美奈は、あまりにも作戦が上手く行きすぎて敵の前だというのに大きな笑い声を上げた。
同じ学校に通っていた者が死んだというのに、悪戯の成功を喜ぶ子どものような顔で笑う彼女の瞳にはどこか狂気の色が混じっている。
チドリの死を喜んでいる彼女が立てた作戦は実にシンプルなものだった。
玖美奈は自分たちが湊に勝てると考えていたが、その強さ自体は玖美奈たちも認めており、勝てるレベルだとしても面倒な相手ではあった。
しかし、いくら相手が強かろうが明確な弱点があるなら、そこさえ狙えば大した苦労もなく無力化出来る。
湊ならば敵がアイギスを狙えば確実に守りに入るだろう。そう予測した玖美奈がアイギスを狙い。実際に湊が守りに向かうのとほぼ同時に、銃声が届かないほどの遠距離に隠れた理がチドリを狙撃し

た。
理が使用したのは風さえ読み切れば二キロ以上の距離からでも届き、さらに対象を貫通するのではなく破壊する事が可能なアンチマテリアルライフルだった。
結果、チドリの胸に着弾すると同時に、胸部を骨や臓器ごと吹き飛ばして相手を即死させた。
湊のペルソナが使う回復スキルならば、致命傷と思われる傷があろうが腕が千切れるような重傷であっても、回復対象がペルソナ使い限定で傷を塞いで対処する事が出来る。
けれど、いくら湊であっても死んだ者を生き返らせる事は出来ない。どれだけ手を尽くそうと死体は回復スキルを受け付けないのだ。
「――――チドリいいいいっ!!」
順平たちの必死な声と玖美奈の嘲笑から事態を理解した湊の叫び声が響く。
彼はすぐに蛇神の顎を消し、背中から黒い炎の翼を出してチドリの許へ真っ直ぐ飛んで向おうとする。
その瞳は倒れたチドリしか見ておらず、不安と焦燥に染まった表情のまま周囲の動きも気にせず飛んだ。
「――――はい、だぁめ」
大切な少女が倒れれば流石の彼でも一切の余裕をなくす。
むしろ、エルゴ研時代の様子からすれば他の何も目につかなくなる可能性もあった。
だからこそ、玖美奈はその瞬間を狙ってフレイを進路上に呼び出し、隙だらけな青年に斬りかかる。
勝利の剣のような溜めの動作を必要としない神速の斬撃。
防ぐために受けようとすれば、武器や防具ごと敵を切り伏せる必殺の一撃だ。
金色の軌跡を空中に残しながら青年の頭部を切りつけようとしたその斬撃は、
「どけえええええっ!!」
彼を切りつける直前になって、邪魔をするなと憤怒の形相に変わっ

た青年の黒い炎を纏った左腕の裏拳で砕かれた。
フレイの剣を砕いた左腕はそのまま巨大化して異形に成り果て、邪魔なフレイだけでなく召喚者の玖美奈を巻き込み横薙ぎに振り抜かれた。
平時ですら対処困難なタイミング、それを冷静さを欠いた状態で不意打ちに襲われたのだ。
そんな状態で対応出来ると思っていなかったため、予測不可能な反撃で完全にガードが間に合わなかった玖美奈の殴られた脇腹から鈍い音が鳴り、一〇メートル以上吹き飛んでその先にあった乗用車に衝突した。
通り道にあったから邪魔だと排除した青年は、自分が殴り飛ばした敵のその後など気にせず、チドリの許に辿り着くと風花と順平を押し退けてチドリの容態を診察する。
もっとも、彼女の容態は調べるまでもなく即死だ。
心臓や肺など胸部にあった主要な臓器が全て体外に出ており、直径にして二〇センチほどの大きな穴がぽっかりとあいて地面が見えている。
驚愕のまま固まった瞳からも光は消えており、湊や風花はアナライズが出来るからこそチドリの生命活動が停止していると分かってしまう。
「カグヤ！　今すぐに最上級の回復スキルをかけろ！」
だが、分かっているからと言って簡単に納得出来るものでもない。
湊は赫夜を呼び出すと今すぐにチドリの傷を塞ぐんだと命令した。
その顔には一切の余裕がなく、今もどうにか散らばった臓器を体内に戻して処置出来ないかと頭を働かせているらしい。
しかし、普段はブレーンとして動く彼が冷静でないからこそ、呼び出された赫夜は憂いを帯びた表情で青年の肩に手を置いて事実を伝えた。
《無駄です、八雲。チドリは既に死んでいます。術を使おうとその胸の穴を塞ぐことも出来ません》
「嘘を吐くなっ！　いいからやれ、今すぐにだっ!!」

チドリの胸に開いた穴からは今も血が流れ出ている。
循環すべきものがその要となる臓器を失った事で、ただただ無駄に地面を赤く染めていた。
けれど、そのような状態であっても湊はチドリの死を認める事が出来ないため、散らばっていた肉片を蛇神の影で作った腕でかき集めて傍へと持ってくる。
どうやってもその肉片がチドリの身体に戻ることはない。
大きな穴が身体に開いているのだ。医者として診なくとも素人だって分かる事だ。
湊がその事実を受け入れようがいまいがチドリの結末に変化は訪れない。
ならば、これ以上ここで時間を無駄にしても意味はないと赫夜が青年を諭す。
《現実を見なさい。心臓が止まっているだけならば救いようもあったでしょう。ですが、生命活動が停止したその損傷の激しい肉体ではどうすることも出来ないのです》
ペルソナ使いならば大概の怪我は回復スキルで治療することが出来る。
しかし、その怪我にも限度はあり、肉体の欠損までは直すことが出来ないし、死んだ状態から蘇生することなど出来る訳もない。
「チドリはまだ死んでいない。こんな所で終わって良いはずがない。まだ彼女の寿命は残っているんだぞっ」
《全ての生命が天寿を全う出来る訳ではありません。いいえ。むしろ、これが彼女の運命だったという事でしょう》
冷静でいられるような状態ではないからこそ、赫夜の言葉は湊を酷く苛つかせてくる。
頭ではそんな事は分かっていても、感情がそれを認める事が出来ず湊はガシガシと頭を掻き毟って解決策を探す。
先ほど押し退けられた風花と順平も、湊の初めて見せる姿には困惑しているようだが言葉を掛けては来ない。
以前の真田がそうであったように、家族の死に直面して冷静でいら

れる方が難しい。
むしろ、徐々に死に近付いていた美紀と異なり、チドリは本当に訳が分からない内に殺されてしまったのだ。
心の準備も何も出来ていない状態で、〝彼女は死にました。どうしようもありません〟などと言われて納得しろという方が無理だろう。
「運命だから受け入れろと言うのかっ。全て決まった事だから、人の身では神には逆らえないからと。ふざけるなっ、己の無力を棚に上げて思考停止に陥った敗者の戯れ言になど付き合っていられるかっ」
赫夜の言葉は正しい。どう見てもチドリは死んでいて処置のしようが無いのだ。
対して、今の湊は少女の死を受け入れられずに取り乱しているだけ。そこには正しさも何もない。
ただ、青年もただ喚いているだけはない。回復スキルで出来ないなら他の手段はないかと今も頭を働かせ続けている。
「まだだ。まだ方法はあるはずだ。コールドスリープさせて一度状態を止め、その間に新しい臓器を作って彼女に移植するか。いや、周辺の筋肉も失っているとなれば器の方から作り直す必要もあるか。彼女の体細胞から細胞核を取り出し、アイギスたちのように新しい肉体を作ってしまえば……いやダメだ。チドリの魂はこの肉体にある。それを黄昏の羽根に移し替える方法が分からない以上、新しい肉体を作っても魂の移植が出来ない。となればこの肉体の損傷を現時点で出来る限り修復して不足した部分を」
医者として活動し、科学者としてアイギスたちの肉体を作っていたからこそ、彼の頭の中では他の企業では実現不可能な救済方法を次々と思い付いて可否を探ってゆく。
部分的に可能なものもあれば、まるで役に立たないものもあるが、ほんの一筋の光明でもあれば湊はどんな手を使っても少女を助けるつもりだった。
もっとも、他では不可能な救済方法も思い付くからこそ、考えれば考えるほどチドリを救う方法がないことが現実として突きつけられていた。

「何か一つ。どんな困難でも何とかする。たった一つで良いんだ。何か、何かないのかっ」
一切の余裕をなくしてそう呟く青年の姿に風花が静かに涙を流し俯く。
湊に救えなければ他の者に救えるはずもない。本人も恐らくそれが分かっているからこそ、赫夜に回復スキルを使えと命令した以外に誰にも助けを求めないのだろう。
血を失って肌の色が悪くなっていく身体と集めたチドリの臓器だったものを見つめながら、必死に考え続けていた湊はふとチドリの心臓が淡く光っている事に気付く。
「……これは、ペタル・デュ・クール……」
チドリの心臓が光っていたのは、その中に三枚の黄昏の羽根が結合した〝ペタル・デュ・クール〟が入っていたからだった。
湊と違って彼女の羽根は内蔵しただけで肉体とパスが繋がった訳ではない。
物質化したまま心臓に納めても血流の邪魔だけはしないので、彼女の適性を高めて助けてくれていたのだが、その器となっていた心臓が体外に出てしまえば羽根も一緒に外に出るしかなかったようだ。
どこか生気を失った瞳でぼんやりとそれを見つめていた湊は、左手で自分の目元を押さえてしばし沈黙する。
傍にいた順平や風花からは、その姿が損傷した心臓を見たことで現実を受け止めたように映った。
無理もない。胸に大穴を開けて倒れる少女の傍に、段々と温度を失ってゆく心臓があるのだ。
単純なグロテスクさよりも通常ではあり得ない光景が嫌でもこれが現実だと教えてくる。
いくら強くても湊にも出来ない事はある。沈黙する青年を見て順平たちもそれをはっきりと理解しようとした。
だが、二人の頭がその事実を認識する前に、青年が目元を押さえていた手をどければ、そこには先ほどとは打って変わって優しい笑顔が浮かんでいた。

「……さようならだ。チドリ」
あっさりと告げられた少女への別れの言葉。
少女の蘇生を諦めようとしなかった青年の言葉とは思えず、順平たちが言葉を認識するしばらくの時間を要した。
けれど、次の瞬間さらなる驚愕の光景を目にする。
なんと少女へ別れを告げたその口で、青年は手に持っていた少女の心臓を食べたのだ。
中にあった黄昏の羽根ごと血の滴る心臓を口に入れ、ほとんど噛まずに飲み込んで体内に入れた。
まさか、これでずっと一緒などと言うのではないだろうなと、傍にいた赫夜も湊の事を驚きの目で見ている。
しかし、その想像は簡単に裏切られ、湊は自分の胸に手を当てて静かに呟いた。
「――――E．X．O．起動」
瞬間、湊の全身を蒼い光が包む。これまで発動してきたE．X．O．とは比較にならないほど眩い光に包まれ、風花と順平は目を開けていられなくなる。
対して、ジッと湊を見つめていた赫夜だけは、その光の強さの意味と彼のしようとしている事を理解していた。
《八雲、貴方はチドリの羽根の力も使って……》
「チドリ、今こそ契約を果たそう。最期まで君を守り続けてみせる」
物質と情報という二つの特性を持った黄昏の羽根には力を増幅させる効果がある。
湊のエールクロイツでも最大級とされるアイギスのパピヨンハートに次ぐだけの力があり、三枚の羽根が結合したペタル・デュ・クールは単体で見れば最上級の増幅器と言えた。
けれど、そのどちらでも湊の果たそうとする目的に力が足りなかった。
だから、湊はチドリの心臓ごと黄昏の羽根を取り込んだ。ただ取り込んだのでは馴染むのに時間が掛かるため、E．X．O．で無理矢理に同期させるという裏技を使って。

二枚と三枚、合わせて五枚の羽根が共鳴して湊の力を増幅させてゆく。
その増幅した力を使ってチドリを助けると誓った青年は、己の胸を腕で貫き脈動する心臓を取り出す。
取り出した心臓をそのままチドリの胸に開いた穴に移動させ、瞬間、湊の全身から蛍火色の光が噴き出しチドリへと注がれる。
傍にいた順平たちはその勢いで吹き飛ばされるが、近くまで来ていた仲間に支えられ、湊とチドリを包むように立ち上る蛍火色の光の柱を見つめた。
先ほどまでは回復スキルを使おうとしていなかった赫夜も、今はチドリの傍らにしゃがんで力を使っている。
二人が何をしているのか分からなかったゆかりは、誰かどういう状況か分かるか尋ねた。
「ねえ、あれってどうなってるの？　風花、アナライズで分からない？」
「ちょっと待って……っ、そんな、まさか!?」
言われて能力で探ってみた風花は湊の行動の意味を理解して言葉を失う。
どういう状況か説明が欲しい美鶴が、急かすようで悪いがと風花に湊の行動の意味を問う。
「山岸、説明してくれ」
「あ、あの光は、有里君の生命力です！　リミッターを無理矢理に壊して、チドリちゃんに命を分け与えようとしていますっ」
説明する風花の声は震えている。高い解析能力を持っている彼女だからこそ、今の湊がどんなことをしているのか理解出来て驚いているのだろう。
だが、どんな無茶な方法だろうとチドリを蘇生出来る可能性があるならそれに賭けるしかない。
自分たちの活動に付き合わせていた自覚がある分、彼女が殺されたと聞いて麻痺していた頭でも責任を感じていた美鶴が暖かな色の光を見つめていれば、どうかチドリを助けてくれと青年に祈っていた者

たちへ風花が言葉を続けた。
「でも、仮に助けられたとしても、出力を上げるためにリミッターを壊した以上あの光はもう止められないはずなんです」
「……止められなかったらどうなる？」
「生命力は命その物です。全て失えば当然死にます。恐らく、そうなれば有里君自身の蘇生も機能しないはず。有里君は、チドリちゃんを助ける代償として自分は死ぬつもりですっ」
ビルよりも高く立ち上る光、それが湊自身の命だと聞いて他の者たちは目を見開いた。
そして、死んだ人間を生き返らせるために、自分の命を全て与えようとしていると聞いて、アイギスがすぐにやめさせようと動き出した時、目の前に茨木童子が現われて彼女の行く手を阻む。
《邪魔はさせんぞ》
「どいてくださいっ、このままでは八雲さんが！」
《貴様に八雲の命の使い方に口を出す権利はない！　チドリを失えばどのみち彼奴は命を絶つ。救って死ぬか、絶望のまま死ぬかしか選択肢はないっ》
アイギスたちを行かせまいとする茨木童子だが、彼女からいつもの余裕を感じなかった。
邪魔はさせないと言いながら、どこか無理をしているように見えたのだ。
それを見た者たちは恐らく茨木童子も湊の行動に賛成していないのだと察する。けれど、彼女の言った通りチドリを失えば湊も命を絶つ可能性が高い。
ならば、最期にせめてチドリを救わせてやりたい。そうして自分の気持ちを押し殺して湊に協力しているのだろう。
相手の覚悟の籠もった瞳にアイギスたちが動けなくなっていれば、少し離れた場所に鈴鹿御前やジャックたちが現われた。
《無粋な者の何と多い事か。八雲がようやく見つけた命の使い道だ。邪魔はさせぬ》
彼女たちの視線の先には、口から血を吐きながら大剣を地面につい

て睨んでいる玖美奈がいた。
よくあの一撃を喰らって無事だったと思うところだが、彼女はチドリの蘇生を妨害しようとしているらしく、湊を睨んだまま女性型ペルソナの〝ノート〟を召喚した。
敵が動いたところで鈴鹿御前たちも相手を排除しようと動き出す。
相手には攻撃を反射するスキルがあったはずなので、湊のペルソナたちでも手こずるかもしれない。
ただ、彼女たちが敵を押さえていれば湊はその間にチドリを助けるだろう。
今もチドリの胸に己の心臓を当てて、青年はチドリに生命力を与えながら赫夜に回復スキルを掛けさせている。
「戻ってこい、チドリ！　約束しただろう。君を最期まで助けるって。俺にその約束を果たさせてくれ！」
分け与えた生命力で無理矢理にチドリの生命活動を再開させようとする。
無論、ただやったところで無駄に力を垂れ流すだけだが、湊の心臓は神としての権能を一度限り使える特別製だ。
特級五爪守護龍憑き、その力に目覚めた者が得られる異能は〝龍玉〟と呼ばれる自分の心臓を使った反魂の術。
その龍玉を生命力で無理矢理にチドリの身体とパスを結び、それを伝って赫夜がチドリの身体を〝生きている〟として回復させる。
けれど、いくら強力な回復スキルだろうと失った臓器までは再生出来ない。
だからこそ湊は回復スキルが掛かり始めたと同時に己の内に宿る者の封印を解いた。
「頼む、ファルロス！　今この一時、俺の力をチドリへと与えてくれ！」
不完全な状態での封印の解除。一歩間違えればニュクスを降臨させかねない危険な行為だったが、湊の身体から赤い光と共に現われた死神は、湊の生命力の流れに乗ってチドリへと移ってゆく。
本来ならばチドリにはデスを封印する器としての容量はない。た

だ、今のデスには己の力を抑えるだけの自我があり、チドリはペタル・デュ・クール以上の力を持つ龍玉をその身に宿そうとしている。
それだけの条件があれば正式に封印が解けるまでチドリを壊さずに宿っていられる。
チドリの中に消えて行く際、死神がどこか寂しげな赤い瞳で青年を見ていたが、最後にはしっかりとチドリに封印されて湊の力を借りて蘇生能力をチドリに使う。
龍玉の細胞から他の臓器を作り、高速で細胞分裂させることで失った臓器を再生させる。
千切れていた部分とも自動で繋がり、まるでビデオの逆再生のようにチドリの身体が治っていった。
その間も湊の命の光は徐々に勢いを失いつつチドリに流れているが、臓器や骨に筋肉と言ったものまで全てが再生され、むしろ、湊の細胞が素になった事もあり以前のものよりも強くなった。
最後に皮膚が元通りになったのを確認し、湊はチドリの口内の血を吸い出すと息を吹き込んで呼吸を再開させる。
血色も良くなり静かに呼吸を再開したチドリを見た湊は、脂汗を掻きながらも安心したように優しい笑顔を向けてマフラーから取り出した上着をチドリに着せた。
それを確認したところで存在が維持出来なくなったのか赫夜の姿が薄れて消えて行く。
アイギスを止めていた茨木童子もどこか悲しそうに湊を見て笑うと消えて行き。玖美奈の足止めをしていた鈴鹿御前たちも、消える直前にメギドラオンを放って相手にダメージを与えると笑って消えていった。
「八雲さんっ」
最初はビルよりも高く立ち上っていた光が、今では他の者たちの身長ほどの高さになっている。
勢いも大人しく、見ている者に〝風前の灯火〟といった印象を抱かせる。
今も静かに俯いてチドリを見ている青年が今から死ぬなど想像も

つかない。
チドリが不意打ちで殺された時以上に実感が湧かず、湊とチドリを囲むように呆然と立っていれば、突然空から声が降ってきた。
「姉さんっ!!」
青年とよく似たような声が突如聞こえた事で振り向けば、空から歌舞伎の獅子ようなものが降りてきて、その前にいた少年が倒れていた玖美奈を抱きかかえた。
現われた相手がチドリを狙撃した犯人かと警戒すれば、顔を上げて睨んできた相手を見て全員が言葉を失う。
玖美奈を抱き上げた少年は、髪の長さこそ短めに切り揃えられているが、何から何まで身長が伸びる前の湊にソックリだったのだ。
もっとも、その瞳は今は憎悪に染まっており、すぐにペルソナと共に空へと飛び上がると距離を開けて声を張り上げた。
「有里湊！　僕の居場所を奪っただけでなく、よくも姉さんを傷つけたな!!　その命で贖えっ！」
少年の声に呼応するように獅子のペルソナの頭上に極光が渦巻き収束してゆく。
これまで湊のペルソナや刈り取る者の戦いを見てきた者たちは、それが途轍もない威力を秘めたメギドラオンだとすぐに理解する。
鈴鹿御前のようにコントロールして放つのならばともかく、怒りのまま放たれたスキルが街中に落ちればどれだけの被害が出るか分からない。
敵の狙いは湊だろうが、当然、傍にいる者たちも無事では済まず、どうやって攻撃を防げば良いかと焦りを覚えた。
すると、これまで俯いていた湊がどこか焦点の合わない瞳で声のした方を向くと、傍にいた順平の腕を強く掴んで立ち上がり呟いた。
「……チドリを頼む」
恐らく今の湊は目が見えていない。けれど、自分の命が消えると分かっているからこそ、最後にこの場にいる者の誰かにチドリを頼みたかったのだろう。
蛍火色の光も最早青年の身体を覆っている程度。敵に狙われてい

る状況だという事も忘れ、その最期の瞬間に彼が何をしようとするのか見守っていれば、空から極光が降ってきた。
距離があっても感じるほどの熱量、道路だけでなく周辺のビルも同時に飲み込むほどの大きさ、そんなものが降ってくれば人間など一瞬のうちに蒸発して消えるだろう。
けれど、立ち上がった青年はその光の方へ向き直ると両手を極光にかざした。
「ペルソナ」
弱々しく震えながらも、どこか重さを感じる青年の声に呼ばれペルソナが現われる。
白銀の鎧、光の翼、他の者たちが初めて見たその天使型のペルソナは、恐ろしいほど存在感を放っていた。
「俺が……守るっ」
湊の言葉に反応して飛び上がった白銀の天使は街のビル群よりも高い高度で止まり、両手を極光に向けてかざすと湊の生命力と似た色の光を放出した。
放出した光は円形の盾のように展開すると、正面から来た極光を受け止めた。
「ぐっ……」
本来、ペルソナのスキルに攻撃を受け止めるだけの盾のようなものはない。
物理攻撃を反射、魔法攻撃を反射するといったものはあるが、万能属性はそういったものの影響を受けない特性を持っている。
けれど、苦しそうにしながらも右手で左手を掴んだままかざす青年は、白銀の天使の盾を維持させて攻撃を受け止めていた。
後ろにいる者たちのために、街をこれ以上焼かせないために、青年は守るために最後の力を使うことを選んだ。
ペルソナは心の力。命を賭して守ろうとする想いは、守護するために生まれたペルソナに力を与え盾の強度が増す。
徐々に押されていた白銀の天使は、盾の強度が増すとその場に留まり攻撃を完全に防ぐ。

攻撃を防がれると思っていなかった少年は、光の向こうで忌々しげに白銀の天使を睨む。
そうして、籠めた力を全て使っても盾を打ち破ることが出来なかった少年は、抱えた少女の治療もあってか消えて行く天使と倒れた湊を睨むと遠い空へと去って行った。
それを見届けた者たちは助かったことに安堵の息を吐くが、すぐに倒れた青年の許に向ってアイギスが彼を抱き起こす。
「八雲さん、目を開けてください……」
やり遂げた青年の表情は少しだけ笑っていた。
呼吸がなく、脈拍も止まっている。抱き起こしているアイギスも、そこにあったはずの熱が、輝きが消えている事には気付いている。
けれど、そんな事で大切な青年の死を素直に受け入れる事など出来ない。
「お願いします。目を開けてください、八雲さんっ！」
また以前のように生き返るのではないか。そんな淡い希望を抱きながら、少女は涙を流しながら青年に声をかけ続けた。
けれど、離れた場所で空から光が降るのを見ていた真田たちが駆けつけ、そのまま湊とチドリを病院へ運んでも、彼が蘇ることはついになかった。

第三百三十一話　遠い旅路の果てに

――ベルベットルーム

現実世界で二人の八雲が衝突し、その戦いが終わるのを見ていた住人たちは、青年が倒れるとマーガレットの持っていたペルソナ全書を見た。

マーガレットが開いたそのページには湊が結んでいた四つの契約が書かれている。

第一の契約：アイギス：デスを倒すために力を貸す

第二の契約：エリザベス：契約を果たすまで死なない

第三の契約：チドリ：最期まで守り続ける

第四の契約：マーガレット：命のこたえをみつける

これまで四つもの契約を結ぶ者はいなかった。この部屋を訪れるなら一つで十分で、数が増えるほどサポート内容も充実するが、魂に刻まれる契約は一つでもかなりの負担が掛かる。

複数結べばその重さだけで死ぬ可能性もあり、それに耐えられる青年の魂は常人とは異なる格を有していたのだろう。

けれど、倒れた青年がその生命活動を終えると開いていたページに変化が起こっていた。

チドリと結んだ第三の契約。その文字が燃えるようにして消えて行く。

ページ自体には影響はなく、あくまで第三の契約の文字だけが燃えながら消えているだけだ。

その変化を見ていたマーガレットは、小さく溜息を吐きながら主にその事を告げた。

「私のお客人の契約が一つ果たされました」

「……己が死ぬまで少女を守る契約が果たされた。ならば、お客人も旅立たれたのだろう」

これまで湊は何度も死んでいたが、蘇生が起こる限りは第三の契約が消えることはなかった。

しかし、今回の戦いで倒れた湊は蘇生が起こらず、さらに第三の契

約も条件を満たしたことで達成となり消えた。
長い付き合いだっただけに彼との別れに対し、ベルベットルームの住人たちは複雑な想いを抱く。
中でも自分と結んだ契約が不履行に終わった姉妹らは彼に文句の一つも言いたいに違いない。
湊にそれなりに世話になっていたテオドアも、自分が知る中で最も強大な力を持っていた契約者が死んだ事に驚きを隠せないが、彼を担当していた姉たちの方が色々と思うことがあるはずだと黙っていた。
すると、マーガレットが開いたままにしていたペルソナ全書のページが、果たされた契約の文字が消えたばかりだというのにさらに変化を起こし始めた。
住人たちの見ている目の前でページが灰色になってゆく。
黒い文字が僅かに薄れ、白いページが灰色になる様は、まるで本が石に変わっていくようにも見える。
だが、マーガレットが本に触れても感触は紙のままだった。
この変化に覚えがあったマーガレットは、湊の所持しているペルソナが書かれたページやコミュニティのページを確認していく。
そちらも契約について書かれたページ同様に色を失っており、やはりかと担当業務の終了を理解した。
「担当者の死亡により彼に関するページが凍結したようです。これにて百鬼八雲様の担当業務を終了させて頂きます」
マーガレットが湊と会ったのは現実世界の時間にして九年前。
実際は時の流れが異なるのでそこまで長くはなかったが、それにしても一人のお客人の担当になった時間にすれば過去最長だ。
こんな中途半端なところで担当を外れることに思うことがない訳でもないが、青年と同じ困難に立ち向かう運命の少女がまだ残っている。
そちらはテオドアの担当だが、担当者がいなくなったマーガレットたちもサポートに回ることはあるので、まだまだ休むことは出来そうにない。
だが、そう考えていたのはマーガレットだけだったようで、マーガ

レットのように自分のペルソナ全書に視線を落としていたエリザベスが背を向けるなり居住スペースに繋がる扉へ向かい始めた。
「では、私はしばらくの間、お暇を頂きたいと思います」
「エリザベス、勝手な事は許されないわ。彼の担当を外れてもテオドアのサポートや新たにここを訪れるお客人を担当する事もあるのよ」
背を向けて歩いて行くエリザベスを追って肩を掴むと、マーガレットが勝手な事は許されないと止める。
長く担当していた仕事が打ち切りになり、ここで少し休みたい気持ちは分かる。
けれど、今なお上昇するベルベットルームが停止しないという事は、自分たちの仕事もまだ終わっていないという事だ。
ここで一人だけ勝手に休まれては困ると妹を止めたマーガレットは、いつまでも自由奔放な妹に小さく頭を痛めかけたところで掴んだ肩が小さく震えている事に気付いた。
「エリザベス、貴女……」
普段ならば肩を掴んで止めたところで振り返って何かしらの言い訳をしてくる。
だというのに、今のエリザベスは僅かに俯いたまま振り返ろうとせず、黙って居住スペースに向かおうとしている。
その意味をマーガレットが理解したところで、部屋の主が静かに口を開いた。
「マーガレット、自由にさせなさい」
「……分かりました」
主に言われてマーガレットが渋々掴んでいた手を離せば、エリザベスは小さく「ありがとうございます」と返してから扉の向こうへ去って行った。
昔はどこか人形のような印象を受けた彼女が、随分と感情豊かになったものだとイゴールが考える。
十年前、彼が初めてここへ訪れた時も真っ先に彼と関わろうとしたのはエリザベスだった。
幼い少年が成長して青年になり、その中で二人の関係も少しずつ変

化していたようだ。
エリザベスがどういった感情を彼に抱いていたのかは分からないが、今のままではどうあっても仕事にならない。
ならば、今回の件を通して〝自分は何者なのか〟という疑問に対して改めて考えてみるのも良いだろう。
そうして、一人減った部屋の中で不気味な老人は青年の死を悼みながら、残されたもう一人の客人の少女がどのような旅路を辿るのか見守ることにした。

深夜――都内・某所
影時間が終わりビルの地下に隠された研究所へと戻ってきた理は、右手に玖美奈の大剣を持ち、左腕で意識を失っている玖美奈を抱えながら憤怒の形相で幾月たちのいた部屋へ入ってきた。
「幾月さん、すぐに姉さんに治療を！」
「っ、玖美奈がやられたのかい？」
「ああ、そうだよ！　あいつが、有里湊が姉さんを傷つけた！　クローンのくせに死ぬ前に余計な事をしやがって！」
幾月に玖美奈を渡しながら理は玖美奈を傷つけた湊に対する怒りの言葉を吐き出す。
理の持つペルソナに回復魔法を持つ者もいるが、その効果はあまり強くない。
その理由は彼の持つ赤いオルフェウスが〝勝利の雄叫び〟という、召喚者に対して高速治癒を施すスキルを持っているからだ。
ワイルド能力者は可能性の芽で手に入れるペルソナ以外は、自分の弱点を補うように新たな力に目覚める傾向がある。
おかげで回復を必要としない理は強力な回復スキルを持つペルソナを手に入れる機会が無かったのだ。
玖美奈を受け取った幾月が彼女をソファーに寝かせると、ストレガで回復役を担うようになったメノウがスキルを使って玖美奈を治療する。
それを少し離れた位置で見守っている理は、湊への怒りで玖美奈の

大剣を持つ手に力を籠めていた。
　随分と苛ついているようだが、先ほど彼の言葉に気になる点があったことで、壁に背を預けて立っていたタカヤが声を掛ける。
「死ぬ前に、と仰っていましたがミナトを殺せたのですか？」
「僕が被験体の女を狙撃して殺したら、どんな方法を使ったのか分からないけどあいつがその女を蘇生させたんだ。けど、その代償かあいつはその後に死んだ。戻ってくる間に探知で様子を探ったけど死んだままだったさ」
　ペルソナのスキルに回復魔法はあるが蘇生魔法はない。
　出来ても気を失っている者に活力を与えて、気絶から回復させるくらいなものだ。
　けれど、湊は蛍火色の光を立ち上らせながら、どういった手段を用いたのか分からないもののチドリを蘇生させた。
　玖美奈の許を目指していた理からは光に包まれて何をしているのか見る事は出来なかったが、その前にスコープ越しにチドリが胸に風穴を開けて死んだのを確認している。
　その傷を塞いで蘇らせ、代わりに自分が死んだという事は一種の禁術だったに違いない。
　研究所へ戻ってくる前にペルソナを使った探知でも湊は死んだままであり、代わりにチドリの生体反応を確認する事が出来たため、理は自分の手で殺したかったという想いを抱きつつ湊の死は確定事項だと告げた。
「なるほど、殺しても死なないと思っていたのですが、そういう最期を選んだのですね。彼らしいと言えば彼らしいのですが、もう二度と殺し合えないと思うと寂しくもあります」
「フンッ、最初から数年と生きられない命だったんだ。長く生き過ぎていたくらいだ」
　望んだ通りとはいかなかったが、当初の予定通りに湊を始末する事が出来た。
　これで最大の障害となり得る者は消えたので、後はそこまで小難しい事を考えず純粋な実力差で押し切って敵戦力を削ればいい。

理がその様に言えば、タカヤは自分なりの美学があるのかそれではつまらないと返した。
だが、くだらないことに拘った結果、タカヤたちは美紀を殺し損ねただけでなく、翌日に襲ってきた湊に殺されかけていた。
今後も同じような事を繰り返すのであれば、理や幾月の目的に影響が出る恐れがある
幾月はストレガたちを同志と認めているものの、娘の玖美奈や理は相手の過去が過去だけに実力も含めて信用していなかった。
それを言えばタカヤ以外のメンバーらもお互い様だと答えるだろうが、理がタカヤとの会話を終えたタイミングで視界の端で何かが動き、そのまま高速で理へと飛びかかってきた。
「おまえぇぇぇぇぇっ!!」
理に向かって飛びかかってきたのは、殺意に染まった瞳から涙を流し手にナイフを持ったマリアだった。
彼女は被験体の中でもトップクラスの身体能力を持っており、成長した現在ではアイギスたちでもオルギアモードを使わなければ追い付けないほどだ。
そんな少女が明確に理への殺意を抱いて襲いかかってきた。
急に何だと考えながら理は手に持っていた玖美奈の大剣で攻撃を弾き、相手の身体が浮いた瞬間に一歩距離を詰めて突きを放つ。
「鬱陶しいんだよ!!」
自分の偽物に玖美奈を傷つけられ、その偽物に攻撃を防がれ、結局自分の手で殺すことも出来なかった。
そういった苛立ちが募っている時に襲われた事で、理は半分八つ当たりのようにマリアを本気で攻撃し、その胸を躊躇いなく大剣で貫いた。
心臓を完璧に貫き剣が背中まで貫通している。チドリが受けた傷ほどではないがこちらも十分に致命傷だ。
少女を貫いた理は剣を抜くと、倒れゆくマリアを壁まで蹴り飛ばす。
その段階になって仲間が殺されたと頭が認識できたジンやカズキ

が声をあげた。
「お前、何さらしとんねんっ」
「そンなに殺し合いてェなら、今すぐにぶっ殺してやるよォ！」
壁に背をぶつけてから床に倒れ込んだマリアはピクリとも動かない。
胸を貫かれ致命傷を負ったことでショック死を起こしたのだろう。
倒れた彼女から流れ出た血液が床を赤く染めるのを視界に捉えながら、ジンとカズキは武器を持って理を睨み付ける。
対して、理も掛かってくれば容赦しないとばかりに大剣を握り締めた。
だがそこで、
「そこまでだ！　結城君も君たちも武器を下ろすんだ！」
メノウに治療される玖美奈を見ていた幾月が真剣な表情で理らを一喝し、すぐに武器を下ろすように告げた。
ここは地下で今いる部屋は然程広い訳でもない。
そんな場所でペルソナ使いが戦えば甚大な被害が出ることは容易に想像がつく。
何より、ここにいる者たちは世界の終末を求める同志だ。
せっかく湊という敵方の最高戦力を排除出来たというのに、ここで仲間割れして戦力を失っては意味がない。
同じように考えたタカヤもジンとカズキに武器を下ろすように言いながら、マリアの死は彼女自身の行動が原因だと話す。
「今回の件は先に手を出したマリアに非があります。ミナトを殺された事で、仇を取ろうとしたのでしょう。まぁ、彼がいない世界など彼女にすれば生きる意味もなかったでしょうし。そういった意味では彼と同じ日に死ねたことは幸運かもしれません」
湊に救われたマリアは彼の存在を心の支えにしていた。
けれど、その彼ももうこの世にいない。そんな世界で生き続ける意味など彼女にすれば無かっただろう。
だからこそ、タカヤはマリア本人にとっては死んだ方が幸せだったはずだと理を責めなかった。

仲間が殺されたというのに随分と冷静に見える事をジンとカズキは訝しむが、マリアの死にある程度の納得を見せていたタカヤも完全に何も思っていない訳ではないらしい。
倒れていたマリアに近付いて開いていた瞼を閉じてやると、理を見てから幾月に視線を向けて一つ忠告した。
「ですが、我々の仲間をそちらが殺めたのも事実。次はないように頼みますよ」
「ああ、勿論だとも。結城君、力があるのなら使い方も考えなければいけないよ。怪我で玖美奈が動けない以上、彼らと君でこの後に一つ仕事をして貰わなければならないからね」
「……はい。分かりました」
玖美奈の怪我は回復魔法である程度治ったようだが、スキルの強さの問題で完治とは言い難い。
しばらくは安静にしておく必要があるので、すぐに予定している仕事には理とストレガで動いて貰わなければならなかった。
それを幾月に聞いた理は、確かに先ほどの自分は感情的になりすぎていたと反省し、素直に返事をすると血のついた大剣を部屋の奥にある作業台に置いて、そのままソファーに寝かされた玖美奈を抱き上げて部屋を出て行く。
タカヤ以外のメンバーは去って行く理を敵意の籠もった視線で見ていたが、彼が部屋からいなくなると自分たちでマリアの遺体を処理すると言って、作業に取りかかっていった。

――???
ふと青年が目を覚ますとそこは淡い桃色の空が広がる暖かな気候の花畑だった。
青々とした草と色とりどりの花が咲き乱れ、優しい風が吹いて草花が静かにサァーっと揺れる。
空の色も含めてこんな場所に心当たりがなかった青年は、ここはどこだろうかと場所を特定出来そうなものがないか辺りを見渡した。
すると、急に背後から衝撃が襲ってきて、何とかバランスを取りつ

つ衝撃を与えてきたものの正体を突き止めるべく身体を捻って顔を向ける。
「えへへ、ミナトいた！」
「……マリアか。というかここはどこだ？」
衝撃を与えてきたものの正体は、肩に掛かる明るい金髪をした少女だった。
どうして彼女もここにいるのかは分からないが、自分以外にも知り合いがいた事で彼女に何か知っているか聞くことが出来る。
相手は精神的にはかなり幼いが、頭が悪い訳ではなく年相応の知識は持っている。
故に、抱きついてきた相手にちゃんと立つように言って、彼女と並んで立ちながら花畑を見て話をする。
「マリア、君はどうやってここに来たんだ？」
「ん、マリアね。ここに来る前に剣で胸を刺されたの。ミナトの仇取りたかったけどダメだった……」
剣で刺されてここへ来た。少女のその言葉で湊は自分がここに来る前にどういった状況だったか思い出した。
チドリが殺されて、その現実を否定するために彼女に自分の命を与えた事で彼は倒れた。
最期にチドリを託した他の者たちの事も守る事が出来たので、それなりに満足な結果だったなと苦笑していれば、仇討ちが出来なかったと落ち込んでいたマリアが湊を見て満面の笑みを浮かべる。
「でも、ミナトと会えたから嬉しい！　ミナトと一緒にいられる！」
「……そうか」
自分の死を嘆くよりも、例え死んででも好きな人と一緒にいられることを望む。
そんな少女の純粋な想いを受けて、湊が小さく笑っていれば、花畑の奥の空間が小さく揺らめきそこから人が出てきた。
「湊、まさか君がすぐにこちらに来るとは思わなかったぞ」
「でも、はーちゃんはちーちゃんを助けたもんね。うん、とっても立派だったよ！」

八十神高校の制服の上にボロ布のようなマントを纏った少年と、同じく制服に黄色いカーディガンを羽織った少女が笑顔でやって来る。
二人はあの閉じられた世界から旅立って行ったはずだが、湊がいるここはあの閉じられた世界よりも奥に存在する場所だ。
という事は彼らも無事に辿り着くことが出来たという事だろう。全ての魂が還る心の海、集合無意識の世界へと。
「――――はぁ、アタシは幸せに生きろって言ったはずなんだけどな」
そして、さらに続けて現われた人物の声を聞いて湊は目を見開きながらそちらを見た。
黒いジーンズに黄色いTシャツ、その上からジャケットを羽織ったラフな服装。肩に掛かる茶髪を揺らし、切れ長な瞳をしながらも湊を見つめる視線には柔らかな雰囲気が感じられる。
ここが死後の魂が辿り着く場所ならば確かに彼女がいても不思議ではない。
けれど、青年は自分が地獄に落ちると思っていただけに、こんな綺麗な花畑で彼女と再会出来た事が嬉しかった。
「……久しぶりだな。イリス」
「ああ、随分と大きくなったね。けど、こんな早くに死にやがって。後でみっちり説教してやるから覚えておけ」
彼女は死ぬ間際も湊の幸せを願ってくれていた。仕事屋などやめて、チドリたちと一緒に平和な日本で普通の子どもとして生きていって欲しいと。
だが、湊はチドリを助けるためとは言え死んでしまった。
その行為自体は間違っていない。湊にとってチドリは己の命を懸けてでも救うべき相手だったのだから、しっかりと彼女を助けて死んだのなら玲が言ったように賞賛されるべきだろう。
イリスもそれは分かっているが、それでも母親代わりに彼の傍にいた者として親不孝者と言わずにはいられないらしい。
「けどまぁ、最初にお前を叱るのはアタシの仕事じゃない。ほら、ちゃんと顔見せてやれ」
後で叱ることは確定事項だが、最初にそうするのは自分の役目では

ない。
言いながらイリスが自分の背後を親指で指せば、再び空間が揺れて一組の男女が現われた。
男性の方は湊を少し大人しくしたような優しい顔つきの人物。女性の方は湊に可愛らしさを足したような美しさと可愛さを絶妙なバランスで両立させた人物。
そちらを見た湊の瞳が揺れる。女性の方には退行した時に会っていたらしいが、その時の記憶が無い湊にすれば約十年ぶりの再会だ。
十年、人によってはあっという間に過ぎる時間。
けれど、目的のために走り続けた青年にとっては本当に色々な事があり、短いようでとても長い時間だった。
今の自分を見れば彼らはきっと拒絶してくる。そんな事を考えたこともあったが、今の二人の心から再会を喜んでいる顔を見れば不安など吹き飛んでしまった。
会いたかった。話したかった。あの日だって自分など助けず、二人にこそ生きていて欲しかった。
ずっと青年の心の奥底にあったそんな想いも、この世界では最早関係ない。
善と玲が道を開け、イリスが横にずれて男性と女性を通す。
湊の前までやって来た二人は、湊の顔をしっかりと見つめて口を開いた。
「八雲、よく頑張ったな」
「……父さん」
今では湊の方が身長も高く体格でも勝っているが、男性、湊の父親である百鬼雅は成長した我が子の姿を見られて嬉しそうに笑って青年の頭を撫でた。
湊は母親っ子だったので父親とは休日くらいしか遊んでいなかったが、それでも撫でられた感触に懐かしさを覚えた。
頭を撫でる手から伝わってくる愛情と優しさに、目的のためには不要だからと自ら凍らせていた一部の感情が徐々に解けて行く。
おかげで湊が何も言えなくなっていれば、雅と同じように湊を優し

い瞳で見つめていた女性、湊の母親である百鬼菖蒲は少し背伸びをして湊の頭を自分に抱き寄せた。
「変な言い方かもしれないけど、お帰りなさい。八雲」
「……ただいま、母さん」
父とは違った髪を梳くように頭を撫でる手の温もりと感触。
どこまでも安心出来るそれに身を委ね。湊も母親の背に手を回して抱擁を交わす。
随分と遠いところまで来てしまった。もうあの温かな時間に戻ることはないと思っていた。
だが、湊は二度と手に入らないと思っていたものをここで再び手にする事が出来た。
両親からの無償の愛。自分はここに居て良いのだと、望まれてこの世に生を受けたのだと心から思えたのだ。
確かに青年の旅路はここで終わりかもしれない。けれど、その最後に彼はただ心からの笑顔を浮かべることが出来ていた。

第三百三十二話　のこされたもの

――???

白い壁と天井の部屋に一つベッドが置かれた空間。

そのベッドには水色の入院着を身に着けた赤髪の少女が一人寝ていた。

規則的な呼吸をしていた少女の瞼がぴくりと動き、少しすると目覚めたようでゆっくりと目を開く。

「ん、ん……」

目が覚めたばかりで意識がハッキリしていないのか、どこかボンヤリと表情で身体を起こし自分の服装を見てから部屋の中を見渡す。

ベッドの質の悪さや服装から場所は病院のようだが、今いる部屋にはどういう訳か窓も入口もない。

こんな場所は現実ではあり得ないため、まだ夢の中にいるのだろうかと考えたとき、ベッドの傍に水色の光が集まって囚人服のような格好をした少年が現われた。

「やぁ、目が覚めたかい？」

「……誰？　ていうか、ここはどこ？」

チドリの記憶の中に目の前の少年と出会った記憶は無い。

もしかすると、出会ってすぐに死んでしまった被験体に似たような少年がいたかもしれないが、そうなると相手が囚人服のようなものを着ているのはおかしい。

エルゴ研にいた被験体は辰巳記念病院と同じ薄水色の入院着を着ていた。

おそらくそれが桐条グループ傘下企業で作っていた入院着だったのだろう。グループ内の研究施設で会ったエルゴ研にも同じ物が支給されていたに違いない。

となれば異なる服装の少年はそれ以外の存在の可能性が高かった。

覚えのない少年が自分の夢に出てきている割に相手は非常にフレンドリーな雰囲気。

その事をチドリが訝しんでいれば、少年はにこやかな表情のまま尋

ねてきた。
「君、自分が意識を失う前の事は覚えているかい？　思い出しやすいように補足すると十月四日の満月の日、アルカナシャドウとの戦闘中に乱入者が現われてからの事だけど」
「……どこからか攻撃されて、胸に痛みが走ったところで意識が落ちた……もしかして、ここは死後の世界なの？」
病室のようでありながら窓も入口もない。
そんな場所に突然ペルソナが顕現するように少年が現われた。
これで今いる場所を現実世界だと認識する方が難しい。
風穴があいたはずの自分の胸元に触れて、そこに一切の怪我も痛みもなかったことでチドリが少年に死後の世界かと尋ねれば、少年は微笑を浮かべたまま首を横に振った。
「いいや。現実世界の君は生きているよ。正確には蘇生された。まぁ、ここは君の精神世界ってやつさ」
生きていると聞いてホッとしたのも束の間。少年から蘇生されたと言われ、チドリはやはり一度は死んだのかと背筋が寒くなる。
胸に痛みが走った瞬間、自分の中から何かが抜け落ちて行く感覚を味わいながら意識を失った。
あれが〝死〟なのか。意識がなくなった後、自分の魂がどうなったのかは覚えていないし、霊感がないため分かるはずもないが、二度と味わいたくない感覚であった事は断言出来る。
ただ、無事に生き返ったというのなら、どうして自身の精神世界とやらに見知らぬ少年がいるのかがチドリには理解出来ない。
死んだ人間を生き返らせる。そんな事が可能と思われる人物は少女の中で一人しか思い浮かばない。
となれば、目の前にいる少年は恐らく湊がやった事に関係した存在に違いない。
そうして頭を働かせて相手の正体について考えていれば、状況が飲み込めていないと思ったらしく少年の方から説明を始めてくれた。
「訳が分からないって顔をしているね。なら、君が死んだ後の出来事を話そう。銃声が聞こえない距離から狙撃された君は、心臓を含めた

胸部周辺の臓器を破壊され胸に大穴を開けて即死したんだ。いくらペルソナの回復スキルでも死者は癒やせない。そこで彼は自分の心臓を君に与える事にした」

湊とチドリでは体格が違う。美紀に輸血した時の話を聞いていたので、血液型の違いについては考える必要はないのだと思われるが、体格の良い男性の心臓を貰っても少女の身体に適合するとは思えない。

けれど、チドリが考えた問題点を医者として働いていた湊が思い付かなかったはずもない。

彼が蘇生のために自分の心臓を使ったのであれば、それでチドリを無事に生き返らせる事が可能だと確信していたのだろう。

今の自分の胸に中で感じる鼓動。それが湊の心臓のものだと考えると胸の奥が熱くなるが、チドリは湊が自分に心臓を与えたと聞いて言いようのない不安を覚えた。

湊は過去に何度か心臓を破壊され、時には完全に体外に抜き出していた事もあった。

それでもいくらか時間が経てば蘇生が発動し、新たな心臓を作って生き返っていた。

他者に心臓を与えても、湊ならば生き返ることが出来る。そう理解しているのにチドリの中から不安は消えず、ファルロスは微笑を浮かべたまま言葉を続ける。

「龍の一族、その中でも最上級の力を持つ者を特級五爪守護龍憑きと呼ぶらしい。普通の龍は四級一爪から順に一級四爪までの中のどれかに目覚める。潜在値が高いほど階位が上がり、持てる異能も増える。だけど、鬼と龍の血を持つ者は始祖と同じ特級に目覚めるんだ」

チドリも龍の一族については七歌から話を少し聞いていた。

二千年以上続く龍の歴史の中でも数名しか確認されていない最高位が一級四爪。

湊の父である百鬼雅とその姪である九頭龍七歌。同じ時代に二人もの一級四爪守護龍憑きが目覚めた事はある意味奇跡だった。

二人の存在によって一級四爪に目覚める異能が魔眼だと言うこと

も証明され、そして始祖だけが目覚めていた特級五爪と呼ばれる階位が実在することも一級四爪の二人には理解出来ていた。
ただ、その特級五爪の発現条件だけは二人にも分からなかった。湊が龍の力に目覚めるまでは。
「始祖以来誰一人として目覚める者のいなかった特級。その特級のみに赦された異能は龍玉と呼ばれる己の心臓を他者に与える事で蘇らせる〝反魂の術〟だ」
始祖と同じ力に目覚めるには、始祖と同じ血を持って生まれる必要があった。
考えてみれば実にシンプルな理由で、これまでどうして一人として目覚める者が出なかったのかもすぐに理解出来た。
妹の一族を守ろうとする姉の優しさを継いだ鬼の一族に守られている内に、龍たちは増長し、自分たちよりも鬼の能力が優れていると知りながら、自分たちが鬼の飼い主だと勘違いを起こした。
血に宿って全てを視ていた始祖が嘆くほどの愚かさ。
それ故に二つの一族は傍にありながら、日本が平和な時代を迎えるまで主従の関係を変えず、一族同士の中で番いになろうとする者も現われなかったのだ。
戦乱の時代にこそ求められた最も強い力を持った子どもが、戦う力が不要になった現代だからこそ一緒になる者が現われ生まれたというのはなんたる皮肉だろう。
「だけど、君は心臓以外にも失い過ぎていた。完全に破壊された臓器なんて回復スキルじゃ再生出来ない。だから彼は過剰に生命力を注ぎ込み、さらに僕を君に封印することで、これまでの自分にしたように彼の細胞を媒介にして与えた心臓以外の臓器や骨を作って肉体を回復させた」
特級五爪には最も強い力を持った龍が目覚める。ただ、その龍にのみ赦された異能は他者を助ける蘇生の力だった。
その力があったからこそ湊はチドリを助けることが出来た。心臓を貰い助けてもらった事にチドリは深い感謝を抱く。
だが、目の前にいる少年をチドリに封印し、今まで湊が持っていた

心臓を再生させていた力と同じ力を使ったと聞いて、チドリは先ほどから感じていた不安の正体に気付いて最悪の事態を想像してしまった。
湊の蘇生は彼だけの力ではない。彼に封印されているという死の化身〝ファルロス〟の力を利用しているのだと以前聞いた事があった。
なら、自分の心臓を失って、さらに蘇生の核と言える存在を失った彼はその後どうなったのか。
湊に限ってそんなはずはないと頭の中で否定しながら、チドリは震える声で少年に尋ねた。
「……心臓を与えて、貴方を失った八雲はどうなったの？」
「……死んだよ」
短く事実を告げた少年の顔から笑みが消えた。
ずっとチドリを不安にさせないよう我慢していたようで、チドリが目を見開いて動揺している事に気付かず、ファルロスはどこか悔しさを滲ませながら視線を落として話し続ける。
「普通に生命力を与えたんじゃ足りなかったんだ。だから、彼はリミッターを外して内包する常人の数十倍の量を無理矢理に注ぎ込み君を蘇生させる手段を取った。結果、君は無事に生き返って、彼はそれを確認した後に残った力で最後に敵の攻撃から他の皆を守って息を引き取った」
チドリを救い。アイギスたちを守って彼はこの世を去った。
実に彼らしい最期だと言えるだろう。本人もどこか満足そうな表情をしていた事をファルロスも覚えている。
ただ、本人がどれだけ自分の最期に満足していようと残された者にとっては関係ない。
「僕の封印は最後のアルカナシャドウが倒されるまで解けない。だけど、湊君と違って君の肉体は封印の器としての強度がない。だから、君の肉体が壊れないよう僕は君の奥底でジッとしているしかない。いくら君が危険になろうと守ったりは出来ないし、蘇生はおろか治癒力を増す事すら不可能だ。その事だけはしっかりと頭に入れておい

て欲しい」
ファルロスも友達を失って辛かった。
出来る事なら彼の最期の意志を継いでチドリを守ってやりたい。
けれど、それをするにはただの人間の身体はあまりに脆弱すぎた。
封印が解けてからならともかく、少女の中にいる内はどんな手助けもする事が出来ない。
その事に悔しさを滲ませながら、ファルロスは彼の最期を伝え終わると時間だからと別れを告げて光になって消えていった。
少年の言葉にショックを受けたチドリは、その動揺が抜けきらぬまま妙な浮上感を覚えて光に包まれた。

１０月５日（月）
午前――辰巳記念病院
目が覚めたチドリは先ほどまで見ていた夢らしきものの内容を思い返しながら辺りを見渡した。
戦いの途中で意識を失った後、自分や他の者がどうなったのか。
それが気になったチドリは自分が病室にいて、部屋の中にあったものから辰巳記念病院にいると理解すると、すぐに探知能力で他の者たちの居場所を確認して裸足のまま部屋を飛び出した。
探せばアイギスたちはとある部屋の前で固まっていた。廊下にある長椅子に座っているようで動いておらず、そこへ行けば何故か存在を感知出来なかった青年の居場所も分かるはず。
夢の中で聞いた話は嘘だ。彼に限ってそれはあり得ない。
胸中は不安でいっぱいで、今の自分が欠片も冷静でないと気付いていない少女は、頭の中で夢を否定する言葉を繰り返しながら廊下を走る。
途中、すれ違う他の患者や見舞い客に病院のスタッフらしき者たちが、必死な表情で走る少女を見て驚いた顔をしていたがチドリは止まらない。
フロアが違った事で階段を数段飛ばして飛び降りるように降下し、目的のフロアに着いた事でさらに速度を上げる。

廊下の奥へと視線を向ければ、どこか呆けた様子の七歌たちの姿が視界に入ったが、そのすぐ傍の部屋に桜や英恵の気配を感じた事で彼女はそちらへ向かう。
入る前に美鶴から「待て、吉野」と声を掛けられたがチドリはそれを無視した。
金属のバーに手を掛けてドアを横へスライドさせる。少し開いた瞬間に女性の泣き声が聞こえてきて、どうして泣いているんだと考える。
ただ、ドアを開けて中に入って、部屋の真ん中に置かれた台の上で横たわっている青年の姿を確認してチドリも意味を理解出来た。
そこにある身体には魂がない。本当に綺麗な顔で寝ているようにしか見えないというのに、そこに湊の存在を一切感じる事が出来ないのだ。
「……ねぇ、八雲？」
これまで彼が死んだときには、心臓や呼吸が止まっていても、身体からは彼の存在を感じる事が出来ていた。
だが、今ここにある肉体からは何も感じない。本当に空っぽだという印象だけを受けた。
少女の視界の端で桜と英恵が湊の身体に縋り付くようにして泣いている。
壁際には鵜飼と渡瀬が静かに立っているが、それには一切反応をみせずにチドリは青年の遺体に近付いた。
「ねぇ、八雲。そろそろ、起きて。私、昨日倒れてから何があったか知りたいの。貴方なら知ってるんでしょ？　だから、起きてちゃんと説明して？」
声を掛けても青年は目を閉じたまま答えない。
心臓を抜いたという胸に視線を向けても、彼が着ているチドリと同じ入院着の胸元は綺麗な形をしており傷があるようには見えない。
ならば、彼の心臓は無事に再生し、蘇生も行なわれているはず。今日はいつもより起きるのが遅いだけだと、チドリは体温のなくなった彼の肩に手を当てて身体を揺さぶる。

「八雲、桜たちも心配してるわよ。紛らわしいから、早く起きてよ……」
チドリが身体を揺さぶっても青年は目を開けない。
どこか穏やかな表情で眠ったまま、揺さぶられるままになっている。
声を掛けている少女も本当は気付いているのだ。もうここに彼はいないと。
だが、それを素直に認めるだけの余裕がない。視界が歪み、頬を温かいものが伝うのも気付かずチドリは声をかけ続ける。
「ねえ、ちょっと、聞いてるの？　八雲、目を開けて。お願いだから、起きてよ！」
どうして目を覚まさないのか。怒ったような口調だった少女の声が震え、遂には懇願の色が混じる。
ただ寝坊しただけだと、深く眠り込んでいていたから起きるのが遅れたのだと、そういっていつもの不遜な態度で目を開けてくれるだけでいい。
彼の身体を揺らす少女はそれだけを願うも、既に魂が現世を離れた彼にはその声が届かない。
「なんでよっ！　何で、何で貴方が死んでるのよ！　私が、私なんかを助けなければ貴方は生きていられたじゃないっ！」
助けてくれた事への感謝は当然ある。死を経験したからこそ、二度と自分が抜けていく奇妙な感覚を味わいたくないと思う。
けれど、自分を助けたせいで大切な人が死ぬというなら話は別だ。
チドリが涙を流しながら叫べば、同じように涙を流していた桜がチドリの身体を抱きしめた。
湊が死んでしまった。その事実に立っていられなくなったチドリは、床に座り込んだまま桜の胸に抱かれて心の内を吐き出す。
「私、私はまだ八雲に何も返せてない！　次は私が助けるんだって、そのために強くなろうとしてたのに、なんで八雲が死ななきゃいけないのよ！　なんでよ、返してよぉ！　うあぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
自分は彼に何も出来なかった。自分を生き返らせるために彼が死

んでしまった。
その二つの事実が彼女を苦しめる。
だが、この場にいる誰もチドリの気持ちなど分からない。
少女は疲れて意識を失うまで、ただ大声を上げて泣き続けた。
＊＊＊
チドリの声は廊下にいる者たちの許にも届いていた。
これまでどこか現実感がなかったことで呆けていた者たちも、チドリの泣く声で彼が死んだのだと理解が追いついてきた。
そうして、彼と親しかった少女たちも静かに涙を流し、ソファーから立ち上がった真田も何も出来ない自分に苛ついたように壁を殴りつける。
「畜生！」
美紀の手術を待っている時は、他人に任せることしか出来ないもどかしさもあった。
けれど、今回は違う。現場を離れている間に仲間たちを襲われ、真田にとっても恩人であった青年が敵の罠によって殺されたのだ。
チドリを助けるために命を使ったなど問題ではない。そもそも、そうなる原因を作ったのは敵なのだから、湊はストレガとは異なるグループの人間と思われる者に殺された。
真田にとってはそれが真実であり、彼が命を落とす際に自分が何もしてやれなかったことが悔しかった。
チドリと同じように受けた恩を返すことも出来ず、幾月に続けて仲間がまた一人殺された事に真田が激しい怒りを燃やしていれば、ソファーに座って俯いていた天田がポツリと溢した。
「僕のせいだ……。僕が、勝手に持ち場を離れなければ、こんな……」
「お前のせいじゃねぇ。それを言うなら原因作った俺の責任だ」
「でもっ……」
戦力が分散したのは確かに天田の行動が原因だ。
しかし、そうなる原因を作ったのは自分だと荒垣が責任を感じている少年を宥める。
ストレガと長谷川沙織たちが繋がっているのかどうか七歌たちは

知らない。
ただ、もしも手を組んでいるのなら、特別課外活動部や湊の弱所を上手く突いたものだと感心せざるを得ない。
湊は特別課外活動部のメンバーという訳ではなかったが、チドリやアイギスが助っ人を続けている限りは彼という最大戦力を味方に出来る事があった。
だが、その彼を搦め手で落とされた事で味方の士気はガタガタで、ここで折れて戦えなくなりそうな者すらいそうだ。
普段は五月蝿い順平も黙って椅子に座っており、ふと袖をまくると自分の腕を見て乾いた笑いを漏らした。
そこには腕を掴むような形で、人の手の痕が内出血として残っていたのだ。
隣に座って泣いていたゆかりは、順平の腕の怪我をみて涙声のまま話しかけた。
「順平、その怪我……」
「あいつ、どういう気持ちでチドリを頼むって言ったんだろうな。立つにも支えが必要で、目だってろくに見えてなかっただろうに、それでも頼むっつった時にこんなくっきり痕が残るほど強く握ってきたんだぜ？」
順平の腕に残っていた痕は、チドリを助けた湊が敵からの攻撃を防ぐ前に、立ち上がろうとして掴んだときの物だ。
ただ、順平は立ち上がるために強く掴んだ訳ではないと理解していた。
一人では立てず、目も見えていない状態でありながら、彼は自分が死んだ後の少女の安全を願って腕を掴んだ相手に〝託した〟のだ。
それが順平だったことは偶然だろう。他の者だったとしても彼は同じように託したに違いない。
ただそれでも、彼が命を懸けてでも守りたかった者を託された少年としては、湊の最期の願いをどうにかして叶えてやりたいと思った。
そうして、しばらくすると別室で栗原から話を聞いていた桐条武治がやってきて、体調を崩した英恵に付き添い本家へ戻ると言って病院

を後にし。諸々の手続きがあるからと鵜飼たちがチドリを車に乗せて帰った頃。
まだ霊安室の傍から動けていなかった七歌たちは、ゆかりと風花も泣き止んだことで美鶴が昨夜の敵について話を切り出した。
「皆、あの時最後にやってきた敵の姿を見たか？　私の見間違えでなければ中学時代の有里と瓜二つに見えた。だが、彼には七歌たち以外に血縁者はいないと聞いている」
「はい。百鬼家は八雲君以外にもう誰もいませんでした。遠縁というのもなくて、百鬼家の関係者っていうのはあり得ないはずですけど。ただ、あの顔は……」
美鶴も七歌も湊の死にショックを受けている。
二人は彼の幼い頃を知っているので、他の者たちよりも思うところはあるのだろうが、敵が湊にソックリだったことは無視出来ない案件だ。
七歌は百鬼の血筋に分家がいない事を知っているので、敵が百鬼家の人間では無いと断言出来る。
ただ、あまりにも湊に似ていたので、整形したので無いとすれば、百鬼家に関わりのある人間としか思えない。
正体不明な敵の少年について、七歌たちが考えられる正体を挙げていけば、これまで黙っていたアイギスが静かに口を開いた。
「……あの方は恐らくもう一人の八雲さんです」
「もう一人の？　君は何か知っているのか？」
もう一人の八雲と言われて美鶴が怪訝な顔をする。
どちらも八雲に見えたが、同じ人間が二人もいるなどあり得ない。
相手の正体に心当たりがあるのであれば、詳しく話して欲しいと頼めば、アイギスは少しだけ顔を上げて他の者を見ながら説明した。
「詳しくは知りません。ただ、八雲さん。いいえ。湊さんとドイツで戦った後に聞いたんです。彼はエルゴ研の研究員が秘密裏に作ったエヴィデンスのクローン体、つまり百鬼八雲の細胞から作られた存在だと」
アイギスの言葉に全員が目を見開いた。

姉であるラビリスですら彼から聞いていなかった出生の秘密だ。
彼から直接聞いたアイギスでもかなりの衝撃を受けたのだから、彼の死にショックを受けている者たちにすれば、余計に理解が追いつくのに時間が掛かるだろう。
美鶴はアイギスの話した内容に混乱を見せながらも、必死に理解しようとしてさらに質問をぶつけた。
「彼が、八雲のクローン？　待て、どういう事だ。どうして八雲のクローンをエルゴ研の人間は求めた？」
「当時、エルゴ研は対シャドウ戦力として人工ペルソナ使いを生み出しました。ただ、その研究は被験体の適性値不足のため制御剤が不可欠という段階までしか進める事が出来なかった。なら、実戦経験を持つ自然ペルソナ獲得者と同一の細胞を持つ者なら、と考えた人がいても不思議ではありません」
同年代の子どもたちでダメならば、成功体のクローンを作れば上手く行くのではないか。
そんな単純ながらも、禁忌とされる技術に手を出した研究者が過去のエルゴ研にいた。
美鶴は流石にそんなはずはと否定したかったが、子どもたちを集めて人工ペルソナ使いの実験の中で多数殺していた事を思えば、クローンを生み出していたところで不思議ではないと思ってしまった。
しかし、アイギスの話にはおかしな点がある。それに気付いた真田が尋ねた。
「だが、おかしいだろう。あいつは美鶴の母親やお前の事を知っていたらしいじゃないか。事故の後に作られたというのなら面識などなかったはずだろ？」
記憶の矛盾。クローンはオリジナルの細胞から作られるが、それは同じＤＮＡを持っているだけでコピー人間という訳ではない。
一卵性双生児というものがあるが、あれも言ってしまえば天然のクローンだ。
だが、同じ姿をしていても双子は別人であるように、人工的に作られたクローンも記憶は自分の分しか持っていない。

湊が英恵やアイギスの事を知っていたのなら、それは本人たちと会った経験を持つ八雲本人しかあり得ない。
真田がそう指摘すれば、アイギスは言いづらそうに視線を床に落として答えた。
「……鬼と龍の一族には血に宿る力があり、八雲さんは血を介して自分の子どもに乗り移り、その人格を上書き出来る力があったらしいです」
アイギスの言葉を聞いて他の者たちは一斉に七歌を見た。
鬼と龍の一族には本当にそんな力があるのか。彼らの視線がそう尋ねれば、七歌はとても苦しそうに頷いた。
つまり、クローンであった湊がオリジナルである八雲の記憶を持っていてもおかしくないという事だ。
「待て。待ってくれ。なら、彼はそれを知ってて戦っていたのか？八雲の記憶を持っていても、自分がシャドウと戦うために生み出されたと、本当の意味での血の繋がる肉親などいない存在だと知っていたのか？」
彼の出生の秘密を聞かされ、美鶴の思考はぐちゃぐちゃになっていた。
シャドウと戦うために作られ、作られた用途通りにエルゴ研を脱走してから九年間も戦い続けていた。
これではまるで以前のアイギスたちと同じ対シャドウ兵器のようだ。
オリジナルと同じ見た目、同じ記憶、それらを持っているのに自分はシャドウと戦うために作られた人造人間。
その事実を知った時、湊はどれほどの絶望を覚えたのかと想像するだけ胸が苦しくなった。
「なんだ、それは……。それじゃあ、彼の人生は……」
どれだけ彼を苦しめれば気が済むのか。美鶴は父を含めたグループの人間に対し、怒りと情けなさを感じ。そんな彼を戦いに駆り出し死なせてしまった事への後悔から再び涙を流した。

影時間――辰巳記念病院
青年が死んでから丸一日経った影時間。
葬儀の準備に鵜飼たちは帰り、七歌たちも寮へ帰っており、現在、湊の遺体がある病院には桐条グループの研究員を兼ねた医者が数名いるだけだった。
だからこそ、それを探知能力で知っていた者たちは、武装した状態で病院へやって来ると我が物顔で病院内を歩いて目的地を目指す。
「ふむ、どうやら貴方の話は真実だったようですね」
「最初から言っていただろ」
ジーンズに通したベルトに無造作にリボルバーを差しているタカヤは、玖美奈の武器である大剣を持って不機嫌そうに歩く理に話しかけた。
病院内の見取り図は幾月経由で入手しており、それに照らし合わせて湊の遺体が霊安室にある事は分かっている。
昨日の時点では湊が死んだなど信じられなかったが、今も象徴化せずに遺体があるとなれば、流石に彼が死んだのは事実だと受け止めざるを得ない。
二人の後ろを歩いているカズキとジンは、昨夜、理がマリアを殺した事で今もその背中を睨み付けている。
だが、幾月から依頼された仕事が重要であるとは理解しているようで、理を入れた四人組で桐条グループの施設に向かうという指示には従っていた。
「さて、この先のようですね」
緑色の光に照らされ、普段以上に不気味な様子の病院内を進むタカヤ。
彼は来る前に見ていた地図と現在地を比べ、今いる廊下を進めば目的地だと告げて薄く笑う。
隣を歩く理はただ真っ直ぐ正面を睨んでいて、どことなく余裕がないように見えた。
それを横目で見ていたタカヤは、彼がそんな態度でいる理由が分かっているからか気にした様子もなく廊下の奥を目指す。

「……ここか」
目的地に着いた理は金属のバーを掴んでドアを横にスライドさせて開けた。
彼が中に入れば、影時間だというのに冷房が効いているのか冷気を感じた。
部屋の用途を考えれば当然なのだが、廊下の明かりは落ちているというのに、決まった部屋はしっかりと影時間でも電源を確保しているのだなと小さく感心した。
もっとも、そう考えたのは部屋に入ってから数瞬のことで、部屋の真ん中に置かれた台の上に横たわる青年を見ると理は目を僅かに細めてそちらに近付いた。
顔には白い布をかけられ、服装は昨夜のものから薄緑色の入院着に着替えさせられている。
流石に血に染まり胸に穴の開いた服を着せたまま霊安室に入れる気にはならなかったのだろう。
理が黙って湊の遺体を見つめていれば、タカヤが顔の布を取り払って脈を測るように首に手を当てた。
「……冷たいですね。それに、ここに彼はいない。見ただけでそれが分かりました」
「見た目は寝とるようにしか見えへんのに不思議なもんや」
「何言ってやがンだ。死体なンざ今まで散々見てンだろ。他のやつらと何も違わねェよ」
あれだけ強烈な力を見せていた青年が冷たくなって静かに寝ている。
外傷もなく、触らなければ、ただ寝ているようにしか見えない。
カズキは強がって同じだと言ったが、これまで依頼で何人も殺して死体を見ていたタカヤたちも、湊の遺体は他の者とはどこか違うように感じていた。
人から一歩進化した存在故か、それとも彼の強さに憧れや恐れを抱いていたからこそ思う事があるのか。
脈を測るために首に触れていたタカヤが離れ、三人がただジッと湊

の遺体を眺めていれば、今まで黙っていた理が他の者にどくように言った。
何をするつもりかと思いつつ場所をあければ、理はその手に持っていた大剣を振り上げ、そのまま湊の首に向けて振り下ろした。
「……蘇生されたらかなわないからな。幾月さんの命令は遺体の回収だ。これでどうやっても蘇生出来ないだろ」
振り下ろされた大剣は湊の首を骨ごと断ち切り、遺体を寝かせていた台に食い込んだ。
切られた衝撃で転がった頭部を笑って掴んだ理は、持ってきていた袋にそれを入れ、残りの身体とは別にしておく。
エルゴ研の研究員だった飛騨のパソコンから、過去に湊が蘇生した事があるという情報を入手しており。それを警戒しての措置だが、彼の優越感に浸った笑みを見ていたタカヤたちは、それだけが理由ではない事は察していた。
確かに力はあるようだが、どこか幼稚な部分があり精神的に未熟と言える。
無論、それでも仕事さえしてくれれば、手を組んだ者としては文句はないのだが、コンプレックスの原因である湊が死んだ事で少しは改善すればいいがと淡い希望を抱きながら、タカヤたちは死体を入れる用の袋に首のなくなった湊の身体を収納した。
「さぁ、仕事は終わりだ。研究所に戻るぞ」
「ええ。あちらに気付かれても面倒です。出くわす前に帰るとしましょう」
右手に大剣を持ち、左手に頭部の入った袋を持った理を先頭に部屋を出て行く。
研究用に湊の遺体を回収してきてくれという幾月の依頼はこれで達成した。
特別課外活動部たちがやって来ても返り討ちに出来る自信はあるが、今は彼女たちと遊ぶ気分ではない。
先を行く理を追うようにタカヤたちも湊の身体が入った袋を担げば、少し足早に病院を出てアジトの研究所へと帰っていった。

第三百三十三話　知ること

１０月８日（木）
午前――月光館学園
湊が死んでから三日後。彼が通っていた月光館学園では講堂に生徒を集め、彼の告別式が行なわれることになった。
本来ならば彼の死亡が確認された翌日にでも行なうべきなのだろう。
だが、影時間が明けた十月五日に関係者が彼の死を確認した後、その日の影時間にストレガたちが病院に侵入し、彼の遺体を盗んでいった事で対応が遅れた。
《彼は弱い立場の人たちを助ける心優しい少年でした。それだけに今回の件は残念としか言いようがありません》
壇上で校長が生徒たちに向かって話しているが、その言葉を真剣に聞いている者は少ない。
会場中からすすり泣くような声が聞こえ、中には嗚咽を漏らして号泣している者までいる。
俯いてそんな会場の声を聞いている特別課外活動部のメンバーたちだが、その中にアイギスの姿はなかった。
あの日、あの戦いに参加した高等部の生徒ではチドリとアイギスだけがこの場にいない。
ストレガが病院に侵入し、湊の遺体を盗み出していったと報告されたのは、影時間が明けてすぐの事だった。
病院の医師から桐条へ、そこからさらに特別課外活動部と桜たちにも情報が伝えられた。
確認のために大急ぎで病院へやって来た者たちは、寝台につけられた大きな切り傷と散らばった湊の髪だけが残った部屋に愕然とした。
傷の位置と散らばった髪から、敵が湊の遺体の首を切断したのだろうという事は容易に想像がついた。
チドリを助けて役目を終えたのだと、彼はもう休むことが出来たのだと、そう思おうとしていた者たちは、その光景を見て激しい怒りを

覚えた。
前日は桜やチドリの前もあってか静かだった鵜飼ですら、そのとき病院に残っていた医師に掴みかかって怒号を挙げた。
盗んだのはストレガかもしれないが、影時間の適性を持っている者が病院に残っていながら、どうして湊の遺体を盗まれているのか。
これでは湊の魂が一生安まることは出来ない。盗まれたまま遺体も無しでは葬儀をあげてやることも出来ないと。
《彼には彼の思い描く未来があったのでしょう。そんな彼の姿を見続けることがかなわなくなった事に――》
鵜飼が医師に掴みかかった現場には、桐条武治もやって来ていた。
彼も病院を経営する責任者として謝罪していたが、謝罪したところで遺体が戻ってくる訳ではない。
加えて、桐条グループには前科があった。百鬼八雲の死を偽装し、彼を被験体として回収した前科が。
だからこそ、湊の死と遺体が盗まれた事で冷静さを欠いていたアイギスが、その場で美鶴を人質に取って桐条を問い質したのもある意味自然な流れだった。
アイギスはオルギアモードを発動した状態で美鶴を後ろから拘束、そのままリストバンドからナイフを取り出して首筋に当てた。
彼女の瞳は暗い光を宿していて明らかに正常な状態ではなかったが、「また八雲さんを研究に利用するのか」と言う言葉で全員が行動の意図を理解出来た。
その時のアイギスが要求したのは遺体の返還、ストレガが侵入したという証拠の提示のみ。
人間になったアイギスだが、その思考は対シャドウ兵器だった頃と変わらない。
むしろ、誰の命令も受けず自分の意思のみで湊の傍にいようとしていた分、依存度で言えば今の方が強いくらいだ。
だからこそ、他の者たちはアイギスが本気で桐条グループを疑い。そして、要求に従わなければ美鶴を切りつけるつもりだと理解する。
相手の本気を感じ取った桐条は、すぐに医師に防犯カメラの映像を

見られるようにする事を指示、そして全員を別室に案内したところで影時間の映像を見せた。
そこに映っていたのはストレガの男三人と共に歩く理の姿。
中学時代の湊にそっくりな敵がいることが改めて証明された事になる。
彼らは病院に入ってきてどこかへ行くと、少し経ってから小さな袋と大きな袋を持って戻ってきた。
小さな袋には頭部が、大きな袋には身体が入っているのだろう。
映像で見たことでようやく全員がそれに納得できたわけだが、途中で美鶴の拘束を解いていたアイギスは、俯いたままその場でへたり込んでしまい。しばらくは自分が面倒を見ると言ってラビリスが自分のマンションに連れ帰った。
そういった経緯もあって学校に湊の死亡が伝えられるまで期間が開いた訳だが、教師から生徒に湊の死が告げられると、数名がその場で意識を失って倒れ、さらに十数名が過呼吸を起こし、大勢の女子生徒が泣き始めるという大混乱が起こった。
彼のファンクラブの会員数や助けられた生徒の数を考えればある意味当然の結果だが、倒れた生徒や過呼吸を起こした生徒を畳のある剣道場に集めて、養護教諭の江戸川と補助の教師が数名つくことで一先ず対処し、泣いている者たちは講堂へ移動させることでどうにか式を始めることが出来た。
もっとも、彼のファンだった者たちにすれば悲報だが、関わりも少なくあまりよく思っていなかった生徒にすれば、どうしてこんな面倒なものに参加しなければいけないのかと思うのも無理はない。
真田や荒垣の座っている前の列にいる三年生の男子が、どこか飽きた様子で小さな声で隣の男子に話しかけている。
「つか、女子庇って死んだってすごくね？」
「まぁ、らしいっちゃらしいけどな。そりゃ、あんだけ年中人助けしてたらいつかこうなりもするっしょ」
湊の公的な死亡理由は人を庇って暴力事件に巻き込まれ、その時に頭部に怪我を負って死んだ事になっている。

助けられたという人間も、彼に怪我を負わせたという人間もおらず、しかし、影時間の記憶の補整を利用した情報操作でそういった理由で死んだ事になってしまっている。
真実を知っている者にすれば、男子らの話しているような軽い最期ではなかったのだが、男子たちは校長の話を聞く気がないようで会話を続けている。
「つーかさ。一昨日、母ちゃんが婆ちゃんの見舞いで辰巳記念病院に行ったんだけどさ。その時に病院の廊下で聞いたんだって」
「聞いたって何をだよ？」
「いや、マジですげーのよ。何でも有里君の死体が夜の内に盗まれたらしいわ」
「……マジで？　うわ、何それこええ。え、ファンクラブの人か何かが盗んで行ったって事でしょ？　いくら何でもそれは怖すぎるわ」
母親から聞いたという話を伝えると、聞いていた友人の男子は明らかに引いた様子を見せる。
誰だって死体を盗んだ者がいると聞けば驚き、その猟奇的な発想に恐ろしさを覚えるに違いない。
湊のファンクラブは有名事務所のアイドルに近い規模を誇っていたので、犯人候補は人数が多すぎて特定も難しいだろう。
残るは日本の警察の力を信じるしかないため、すぐに話題への興味を失ったのか最初に口を開いた男子が湊の最期について知った風な口をきく。
「死ぬときも人庇ってヒーロー扱いだもんな。そんなタイミング良くいって羨ましいわ」
「嘘吐け。まぁでも、これはこれで良かったんじゃね？　あんだけ人助けしてたんだし。助けて死んだんなら本望だろ。本人も満足してんじゃねぇの」
死んでもチヤホヤされる上に、本人も恐らく望んだ通りの結果になったのではないか。
そう笑って話す二人の言葉の端々にどこか茶化す雰囲気があったからか、最後の言葉で我慢の限界が来た真田は前にいた者たちの会話

に割って入った。
「おい、お前。本気で言ってるのか？」
「……え？」
急に声をかけられキョトンした顔で振り向く男子。
周りに話を聞かれていると思っていなかったのか、それともこれまであまり話した事のなかった真田に声をかけられ状況が分かっていないのか。
どちらにせよ真田の問いの意味を理解出来ていないようで、その反応が余計に勘に障った真田は感情が振り切れその場で立ち上がり相手を怒鳴っていた。
「助けて死んであいつが満足しているだと？　そんな訳がないだろ!!
まだ何も解決していない。何一つ安全が確約されていない世界に大切な者たちを残していったんだぞ！　ずっと守り続けていた者を他の者に託す事しか出来なかったあいつの無念も想像せず、本気で満足して死んだと思っているのかっ!!」
一時期は真田も男子らと同じ側に立っていた。相手を知らず、知ろうともせず、ガキっぽい理由で嫉妬して一方的に敵視していた。
しかし、真田は知った。自分以上に本気で大切な者を守ろうとしている彼の姿を、そしてそんな彼が自分の妹の事も守ってくれていたのだと。
虫のいい話かもしれないが、美紀が殺されかけて以降は、真田は真田なりに自分のこれまでの行動や態度を反省して時には湊を擁護する立場も取ってきた。
湊にすればどうでも良かったに違いない。それでも真田なりのケジメとして恩を返そうとしていたのだ。
だが、もうその恩を直接返すことは出来ない。
だから真田は考えて決めた。彼が死ぬ間際に仲間に伝えた〝チドリを頼む〟という言葉と、その裏に秘められた彼の心残りを理解出来たからこそ、真田は湊が叶えられなかった最後の願いを叶えてやろうと思っている。
それを欠片も理解せず、ヘラヘラと笑って満足して死んだのだろう

と口にした相手が許せない。
「同じように考えているやつがいれば出てこい！　二度とあいつの想いを侮辱出来ないよう俺が相手をしてやる！」
　真田は今にも殴りかかりたい気持ちをギリギリのところで抑え、目の前の男子やそれと同じように考えている者に向けて大声で宣言した。
　湊の死や、その想いを侮辱するのであれば、例えボクサーとしての資格を失う事になっても自分が相手をすると。
　真田の言葉に込められた意思や、その瞳の迫力に飲まれた男子たちは何も言えずにいる。話していた校長も思わず黙り込んでいるほどだ。
　すると、立ち上がっていた幼馴染みの服の腕を掴み、気持ちは分かるが落ち着けと荒垣が声をかけた。
「そんぐらいにしとけ、アキ」
「……フン」
　男子たちが黙ったからか、言いたいことは言ったからか真田は不機嫌そうにしながらも大人しく座った。
　ここで手が出ていれば真田の謹慎もあり得たので、そうならなくて良かったと安堵の息を吐きつつ、荒垣は話していた男子らにも一応の忠告をしておく。
「人が死んでんだ。お前らもいい加減にしとけ。……じゃねぇと次は俺も手が出そうだ」
「わ、悪い……」
「ああ、分かった……」
　最後にややドスの利いた声で念押ししておけば、二人は謝罪してから前を向いて静かになった。
　それを確認して荒垣は静かに息を吐いたが、冷静に見えて荒垣も内心では真田と同じように思っていたのだ。
　自分以上に熱くなっている者がいたから冷静になっていただけで、もしも真田がここにいなければ荒垣が同じように言っていたかもしれない。

一時は彼との間にわだかまりを持っていた者たちも、彼の死を受けて様々な事を思っているようだ。

――チドリ私室

湊が死に、彼の遺体が盗まれてから、チドリは一人で部屋に籠もってベッドで寝ていた。

今もカーテンを閉め切った状態で毛布を頭から被ってベッドに入っており、赤く腫れた目で携帯の画面をぼんやりと眺めている。

そこには以前撮った湊の姿が映っており、この時はこんな事があったっけと少女を思い出の世界に浸らせていた。

しかし、少女も分かっている。そんな事をしていても湊は戻ってこない。彼はきっと喜ばないと。

（八雲はもういない。どこにも、いない。身体もなくなって、供養もしてあげられない。なら、私に出来る事ってなに？　身体を取り返す事？　それとも……）

彼に何も返せぬままに終わった事を後悔している少女は、自分には何が出来るのかを考える。

湊が何をしたかったのか、何のために生きようとしていたのか、本当の意味で彼の事を理解していなかった事に気付いた少女はただ考える。

せめて彼の願いだけでも叶えたい。自分にはそれくらいしか出来ないからと、少女は少しずつ歪んだ形だろうと前を向き始めていた。

深夜――都内・某所

ストレガと理に依頼して湊の遺体を手に入れた幾月は、理が頭部を切り離していた事に苦笑しつつも、頭部を容器に入れて保存液につけ込み、身体の解剖に取りかかっていた。

幾月が一番欲しかったのは湊の心臓部にある結合した黄昏の羽根だ。

いくら黄昏の羽根を埋め込んで理と玖美奈を強化しようにも、単独の羽根では出力に限界があった。

その点、パピヨンハートのように結合した羽根ならば、羽根同士が共鳴して力を増幅させることもあり、ただ二枚の羽根を用意する以上の効果があった。
加えて、飛騨の残した情報が確かであれば、湊の心臓部に移植されたエールクロイツには装備者が機械を遠隔操作出来る機能もあったという。
最後のアルカナシャドウを倒せば、特別課外活動部や桐条グループを相手することになるかもしれない。
その時のことを考えて準備しておくに越したことはないと、幾月は湊の胸をメスで切り開いてみたのだが、そこには普通に臓器が並んでいるだけで黄昏の羽根はなかった。
（ふむ、被験体だったマリア君を処分する前に羽根の回収をさせてくれるよう頼んだ時と一緒か）
心臓の内部にあるのかもしれないと考え、幾月は心臓も切り開いてみたが、中には固まって変色した血があっただけだった。
その結果に少々残念そうな顔をするも、幾月は可能性自体は考えていた事で小さく嘆息するに留め開いた胸を閉じて縫合する。
実は数日前に理がマリアを殺したとき、ストレガが処分する前に彼女の心臓に納められた黄昏の羽根を回収させて欲しいと頼んだのだ。
他の者は渋っていたようだが、タカヤが手短に済ますのならと了承し、理が貫いた傷口を利用して黄昏の羽根を回収しようとした。
けれど、結果から言えば黄昏の羽根はなかった。
大剣で両断されたのかと思ったが、心臓から体内に流れ出たという事もなく、羽根は結局見つからずじまいだった。
そこに今回の結果も重なったことで、もしかすると所持者が死ぬと羽根も機能を失って消滅するのかもしれないという予測が立った。
この予測を検証するには、新たに心臓に羽根を埋め込んで誰かで実験するか、もしくは幾月の知る中では心臓に羽根を移植した最後の一人であるチドリの死後に羽根がどうなるかを観察しなければならない。
（とはいえ、一度狙われた以上は向こうも警戒するだろう）

次にまたチドリを狙ったとしても今回のように上手く行くとは思えない。
玖美奈の怪我も治ってそろそろ復帰出来そうだが、桐条側も一人死んだ事で次からはストレガや理たちを相手に躊躇う事もないと思われる。
単純な実力なら理たちの方が上だと断言出来るものの、仲間を奪われた事で躊躇いが消えた集団の相手は中々に骨が折れる。
そんな状態でチドリを殺して遺体を回収しようにも、リスクの方が高く全員が無事に戻ってこられるかは分からない。
全体に指示を飛ばす立場になっている者として、幾月にはストレガの安全も考慮する必要があるため、所持者が死亡した後の羽根の反応消失に関する研究は考察に留めておくことにした。
そして、次に幾月は湊の腕を掴んで硬さを確かめると、胸の時と同じように躊躇いなくメスを入れた。
皮膚を切り裂き、筋肉をどけて奥にある骨を目指す。
(ほう。これが人工骨格か。確かに人工物の骨に筋肉がしっかりついている。これでアイギスたちを人間にしてみせたのか)
アイギスたちの人間化は幾月が桐条にいる時に行なわれていた。
どのような方法を使ったのかは分からなかったけれど、アイギスから断片的に情報をもらって、人工骨格を利用していたとは聞いていたのだ。
そして、湊が留学から戻ってすぐの頃、彼と会ったというストレガから湊が義手をつけていたという話を聞いたことで、生身にしか見えない彼の腕が生体義手ではないかと幾月は睨んでいたのだが、その予想は大当たりで非常に丈夫で軽そうな人工骨格が中に入っていた。
関節部の辺りまで切り開き、素材はともかく配置や構造は本物の人骨と全く同じだなと興味深そうに調べていく。
(この技術があれば、茜の肉体を再現する事も……いや、その必要はない。祝祭の日がくれば再び会えるのだから)
湊はこの技術を使ってロボットに人間の肉体を与える事に成功した。

それを考えれば死者の新たな肉体を作り、魂を込められれば生き返るのではと幾月は考えた。
だが、そんな事をする必要はないとすぐに思考を切り替えた。
全てのアルカナシャドウを倒し、宣告者たるデスの封印が解かれればニュクスがこの地に降臨する。
そうなれば世界の理が崩れ、妻である幾月茜と再会し、玖美奈やその想い人である理も一緒になって暮らす事が出来る。
故に、今はただ敵方の技術力について調べようと、かつてその強さに羨望と憎悪を覚えた青年の身体にメスを入れ、幾月は少しでも湊の強さの理由を知ろうと解剖を続けた。

第三百三十四話　動き始めるものたち

１０月１１日（日）
午前――ベルベットルーム
タルタロスの新たな階層が開いた。
テオドアからそんな電話を受けた七歌は、新しいペルソナを得ようと久しぶりにベルベットルームにやって来ていた。
ポロニアンモールの奥の扉を潜り、上昇を続けるエレベーターという形で存在するベルベットルームに到着すれば、いつもより一人足りていない事に気付く。
どうしたのだろうかと思いつつ、椅子に座った七歌は自分の担当者である男性ではなく、その姉であるマーガレットに尋ねた。
「あの、エリザベスは？」
「申し訳ありません。あの子はしばらく暇を頂きたいと出奔中でして」
今現在、エリザベスはベルベットルームどころかその居住スペースにもいない。
マーガレットたちもいなくなってから気付いたので、外の世界に行っている事は分かっているが、彼女がどこで何をしているかまでは把握していなかった。
ただ、このタイミングでエリザベスが暇をもらったとなれば、やはり理由は青年の死が関係しているのだろうと考え、七歌は少し躊躇いつつも正直に聞いた。
「それって八雲君……ああ、えっと、ややこしいな。有里湊君の事があったから？」
七歌にとっては有里湊こそが八雲だった。
しかし、その湊が自分がクローンであるとアイギスに伝えていたと聞いたことで、今更呼び方を変えるのは面倒だと思いつつも呼び分けのために湊を湊と呼ぶ事にした。
改めてエリザベスが一時的にでも休暇を取ったのは、担当者であった彼の死があったからか聞けば、マーガレットはすんなりと頷いて答

えた。
「ええ、あの子やテオは私よりも長くお客人と接していました。現実の時間にして十年。これほど長く担当になるというのは非常に稀でして、区切りという事もあって主からも自由にする許可が下りたのです」
「そっか。……ねえ、貴方たちは八雲君が二人いるって知ってたの？」
ここの住人たちは訪れた客人との間に一線を引いており、それを超えた協力や干渉はしないようにしている節がある。
けれど、湊の死を理由にエリザベスが職務から離れたと聞けば、相手にもしっかりと感情があって、ただビジネスパートナーとしてだけ見ている訳ではない事が分かった。
出会って半年程度の七歌との間にそれほどの信頼関係は築けていないが、現実世界の時間にして十年という月日を過した湊との間には確かな繋がりが見える。
だからこそ、七歌は彼らなら同じ人格を持ったもう一人の八雲についても知っていたのではないかと考えた。
別に今更知っていたなら教えろと言いたい訳ではない。湊もアイギスにしか話していなかったのだから、客人が秘密にしていた事を話せる訳がないとは分かっている。
ただ、こんな事になってしまった事もあり、七歌は少しでも相手側の情報が欲しかった。
そう思ってジッと正面に座る老人がその傍らに控える従者らを見ていれば、七歌の担当者であるテオドアが静かに口を開いた。
「我々が八雲様と呼んでいた方とは別に、八雲様と瓜二つな方がおられる事は存じておりました。ですが、そちらの方はお客人ではないため、素性やどこで何をしているのかも分かりません」
「そうなんだ。何でも知ってるかと思ってたけど、色々と制約みたいなものがあるんだね」
「私共の役目はお客人の旅路を見守り、時にほんの少しばかり助力することでございます」
ほんの少しばかり助力する。それがどの程度なのか七歌には分か

らない。
ただ、彼らの強さが自分どころか湊すらも超えているのは少女も気付いていた。
テオドアたちが力を貸してくれていれば、二人の八雲の存在について教えてくれていれば、そんな過ぎたことに対して八つ当たりでしかない黒い感情が七歌の胸の内に広がる。
だが、そんな事で相手を責めることは出来ない。あの場にいながら敵となった長谷川沙織一人満足に足止めする事が出来なかったのだから。
何故彼女がペルソナを持っていたのか。どこでもう一人の八雲やストレガと知り合ったのか。
未だに湊が八雲のクローンだったという話も受け止めきれていないのだが、この数日で起きた事に加えて知らないことが多過ぎて七歌の頭はパンクしそうだった。
「私、湊君に会ったときに八雲君だって一目で確信したの。でもさ。実際には違ったみたいで、今もよく分かってないんだけど……本物の八雲君は自分の居場所を奪った湊君のことを恨んでるみたいだった」
七歌は正直に言って心が弱っていた。泣いたのは湊が死んだ日だけだったが、それだって強がっているに過ぎない。
アイギスから八雲が二人いて、そして、敵として現われた方が本物だと聞いていなければ、今も部屋で落ち込んでいたかもしれない。
しかし、七歌はどんなに辛くてもそれを仲間には話せない。皆、湊の事で少なからず落ち込んでおり、彼らも七歌のように何とか納得しようとしているのだ。そんなときにリーダーが弱音を吐けば組織は瓦解する。
「シャドウは人間の敵。シャドウに襲われる人がいるから、守るために、助けるために戦ってるつもりだった」
だから、ここで気持ちをリセットしようと七歌は彼らに正直な心の内を話す。
俯いて膝の上に置いた手に視線を向けながら、オリジナルの八雲の事、クローンである湊の事、そして自分が戦っていた理由について

思ったことをただ吐き出す。
「けどさ。私はこうやって自由に楽しく過ごせてるけど、シャドウを倒すために力を求めて、その力を持っている人を集めた結果、不幸になってる人がいっぱいいるんだよね」
特別課外活動部に集まったメンバーは素質を見込まれて集められた者たちだ。
荒垣と天田のように因縁のある者もいたが、普通に学校に行って、普通に友達と遊んで、普通に青春を過すことが出来ている。
確かにシャドウと戦うのは大変で、何度も命の危険を感じたことはあるが、そういった活動はあくまで日常の傍らで行なっているものに過ぎない。
だが、七歌たち以外の関係者はほとんどが不幸な目に遭っていたり、過酷な環境の中で必死に生きていた。
「湊君は優しかったんだよ。そりゃ、冷たかったり殺されかけたりもしたけど、それ以上に守ったり助けられたりもしてた。ただ、その湊君に居場所を奪われたって、彼を恨んでいる人がいた。少ししか見えなかったけど、彼も八雲君なんだって何となく分かった」
人々の平和を守るために戦う。それは正しく立派で、とても耳障りの良い言葉だ。
七歌だってヒーローに憧れはするし、自分に出来るなら力を貸そうとも思う。
だが、彼にはその選択肢がなかった。戦うために作られた存在、シャドウを殺す事が彼に与えられた存在理由だった。
「居場所を奪われた八雲君が湊君を殺すことは正しかったの？　奪われた物を奪い返しただけかもしれないけど。湊君だって別に平和にのほほんと十年間生きてきた訳じゃなかったんだよ？」
湊はそういった存在として生み出され、エルゴ研を脱走してからも、結果的には作られた目的通りに活動していた。
生身の命が、意思を持つ人間が、まるでプログラムされたロボットのようにシャドウ討伐のために日常を犠牲にしていたのだ。
「戦って、戦って、戦って、そうやってやっと手に入れた居場所だった

はずなのに。私なんかじゃ想像も出来ないような道を進んできたはずなのに、それでもクローンだからってオリジナルに命まで奪われなきゃいけなかったの？」

本物の八雲がそんな道を生きたはずがない。湊がいたのは湊が自分の力で手に入れた居場所だった。

確かに、七歌や美鶴に英恵といった知人が、他の人間を自分と勘違いして接していれば不愉快だったかもしれない。

だが、そうだとしても八雲が湊を殺す正当な理由にはならない。湊は他人の都合で作られてこの世に生を受けただけのだから。

「けど、何より私が一番分からないのは自分の感情なの。湊君を八雲君だと思ってた。だから、八雲君への情が湊君に向いている事は分かってる。……ねえ、湊君を殺された怒りとか悲しさって誰のためのものなのかな？」

敵として現われたのがオリジナルの八雲だと聞いても、今の七歌は湊を間接的に殺した相手への怒りを覚えている。

ただ、湊に対して抱いている感情は、本物の八雲に向けてのものが根底にあるため、七歌は自分が本当に湊のために怒りを覚えているのか判断がつかない。

八雲のための怒りか、それとも湊のための怒りか。

他人に聞いても分かるはずのない答えを求め七歌が顔を上げれば、正面に座っていた老人は小さく口元を歪めながら質問してきた。

「お客人、貴女はご自分が結んだ契約について覚えておいでですかな？」

聞かれた七歌は会話の内容が急に変わった事でキョトンとする。

その質問が自分の抱いている疑問の答えに繋がるのだろうかと訝しみつつ、ここへ訪れる切っ掛けになった少年との契約の内容を思い出す。

「〝我、進みし道の先にある、いかなる結末も受け止めん〟。どんな結末だろうと見届けて受け入れろって意味だよね？」

「いいえ。受け入れると受け止めるでは意味が異なります。現実を認

識した貴女には、その後の行動に選択の自由があるのです」
「進んでも良いし、全てを放り出しても良いって事？」
「その通りでございます」
〝受け入れる〟と〝受け止める〟は似て非なる言葉だ。
もし、七歌の契約が〝受け入れん〟で締められていれば、それは自分の選択に責任を持て、どのような結果に終わることになっても受け入れろという意味になっていた。
しかし、〝受け止めん〟で締められている契約ならば、結果は結果として認識すれば、その後の行動については何の制限もない。
七歌が口にしたように、今回の件を受けて自分がどうしたいか好きに選んでいいのだ。
それは七歌が求めた答えではないし、イゴールは彼女の質問に一切答えていない。
だが、彼女が戦う理由を見つめ直すヒントにはなったのだろう。目を閉じて考えていた少女が再び刮目すれば、そこには決意の光が宿っていた。
「……うん。まだ完全に納得した訳じゃないけど、とりあえずの方針は決まったよ」
「お役に立てましたかな？」
「それはこれからかな。って事でペルソナ合体をお願いします。近接主体のペルソナが欲しいんだ」
敵側にいる八雲と戦うのかそれとも見逃すのか。どちらを選んでも後悔する部分は出てくる。
ならば、せめて流されるのではなく自分の意思で選びたい。選んだ結果自分や仲間が不幸になるのだとしても、その時はその時でまた考えればいい。
そんな風に方針を定めた少女はイゴールに新たなペルソナを作って欲しいと依頼した。
彼女の手持ちのペルソナは各魔法と近接と補助をバランス良く揃えていたが、先日の戦いからもう少し近接主体を強化しようと思ったらしい。

七歌の言葉に頷いたイゴールはテオドアの持つペルソナ全書から二枚のカードを取り出すと、それをテーブルの上に並べてから魔法陣を起動させる。
魔法陣とカードが光に包まれ、一際眩しく輝くと光が徐々に治まっていく。
そして、テーブルの上には一枚のカード、剛毅〝ジークフリード〟が現われていた。
「フフッ、力強い波動を感じます。お気に召しましたかな？」
「試してみないとなんとも。けど、これまで通りじゃ沙織には届かないと思ったから、何とかしてみせるよ」
受け取ったカードを自分の中に入れると、七歌は笑って席を立つ。
そう、七歌にとってやりづらい敵は八雲だけではない。友人だと思っていた長谷川沙織もいるのだ。
相手はいつ力に目覚めたのか、何を目的に動いているのか、ストレガの仲間なのか。知りたい事は沢山ある。
だが、話をする前に一発殴ってやろうと決めていた。急に敵として現われ、湊の死の原因を作った一人でもあるのだから。
次にいつ沙織たちに会えるかは分からない。だからこそ、出会った時にはしっかり戦えるように準備しておく。
ベルベットルームを出て行く七歌の表情には以前のような活力が戻っていた。
――ＥＰ社
他の者たちがそれぞれの場所で悩んでいる頃、トップ不在となったＥＰ社では研究区画の会議室にソフィアたちが集まっていた。
現在この部屋にいるのは表向きのトップであるソフィア、研究主任であるシャロンとその部下である武多とエマ、さらにアイギスの人格モデルの一人になった水智恵とソフィアが使えると判断した数名の社員もいる。
会議室の長テーブルに着いた者たちの視線の先、ホワイトボードの真ん前である上座には本来の狐耳と尻尾を消し、人間の姿で現代人の服装をした玉藻御前が座っていた。

《皆さん、お集まりいただきありがとうございます》
「別に集まるのは良いんだけどさぁ。なんでそっちはまだ残ってるわけ？　死体も盗まれたって話だし、もしかして、坊やの死亡って偽装だったりする？」
《いえいえ、そこに嘘はありません。単純に私が独立して動けるようになっていただけです。八雲さんに何かあったときの保険ってやつです》
　シャロンは相手が湊のペルソナだと知っている。だからこそ、彼が死んでもまだ現世に残っている理由が分からなかったらしい。
　玉藻もそこについては説明する必要があると思っていたようで、ソフィアが使えると判断して呼んだ社員らもペルソナについて知っていると分かると、自分が大妖の九尾である事や心臓があるため飲食でエネルギーを賄える事を教えた。
　まあ、元々、彼女は湊から特別な役割を与えられており、普段は一緒に行動していなかったので、そういったカラクリがあったと分かるとシャロンたちも納得していた。
「それで、湊様からの指令とは？」
　全員が玉藻について情報共有すると、本題に移るべくソフィアが口を開く。
　今日、ここに集められた者たちは、玉藻から湊の遺言である指令を伝えると聞いていた。
　自分の命に執着がなかった青年なので、自分が死んだときの事を考えて冷静に色々と手を打っていても不思議ではない。
　ただ、社員は別として他の者たちは湊の死に少なからずショックを受けている。
　そんな状態で一体何をさせるつもりなのか、ソフィアが紅玉色の瞳を細めながら玉藻に向ければ、玉藻は持ってきていた鞄を開けて中から書類の束を取り出した。
《多分、ソフィアさんは聞いたことがあると思います。作戦コード〝悪食〟なんですけど》
　言いながら玉藻が全員に資料を配れば、初めて聞く者たちは書類の

内容に目を通して正気かと玉藻を見る。
そして、玉藻が言ったように作戦コード〝悪食〟について湊から聞いていたソフィアは、ここで動くことのメリットについて頭を働かせながら、事前に湊本人から話を聞いていた相手に理由を尋ねた。
「何故このタイミングで？」
《余裕を持ってあたらないと難しいからです。八雲さんからは自分が死ねばすぐやるように言われていました》
本来ならば死後数日中には動き始めておきたかった。
しかし、湊の遺体が盗まれるという事件が起こり、湊が抜けた分ソフィアの仕事量が増えたこともあって集まるのが遅れた。
これ以上はスケジュール的にも厳しくなるので、出来るだけ早く動いて欲しいと改めて玉藻が伝えるも、作戦の内容が容易ではないと知っているソフィアは再度質問をぶつける。
「今回の敵はストレガ及びその同盟関係にある者だったと聞いています。それが桐条にも牙を剥くと？」
《最大の障害を排除した以上、残る敵は桐条ぐらいですからね。狙われる可能性が高い以上は混乱を最小限にするため動いておくべきかと》
作戦コード〝悪食〟は影時間の関係者のためのものではない。
その内容は無関係の者を巻き込むことを嫌った青年らしい、一般人の混乱を最小限に抑えるためのものだった。
その分、動く者たちは一般人を相手に様々な交渉を進めていく必要があるのだが、ＥＰ社の資金力と人材を考えれば十分に実行可能なものである。
彼が遺言に遺すほどとなれば無碍にも出来ないため、額に手を当てて考え込んでいたソフィアはゆっくりと息を吐くと玉藻を見つめて出した答えを伝えた。
「……分かりました。では、直ちに動くことにします」
《ありがとうございます。数がとにかく必要になりますから、出来る限り小さいところから狙ってください》
「ええ、分かっています。まぁ、こちらにも利益はありますし。迅速に

行動を開始しましょう」
話の内容が上手く理解出来ていない水智たちは首を傾げている。
一方、青年の狙いも含めて理解出来てしまったシャロンたちは、一般人の混乱を抑えるという名目で桐条潰しを狙っているようにしか思えなかった。
そうして、作戦コード〝悪食〟、桐条傘下の子会社や下請けの乗っ取りのためにＥＰ社が動き始めた。

夜――桔梗組・チドリ私室
ベッドから抜け出した少女は制服に着替え、動きやすいように髪をまとめる。
数日引きこもっていた事で体力は落ちているが、今の彼女にそんな事を気にする冷静さなどない。
彼から貰った刀と愛用のハンドアックスを擬装用ギターケースに収納し、召喚器もしっかりと入れた事を確認して部屋の入口へ向かう。
（八雲、貴方の代わりに私がシャドウを殺す。影時間を終わらせてみせる）
少女の瞳にはくすんだ光が宿っている。死んだ青年の意思を継ぐ、ただそれだけが今のチドリを支えていた。
湊が本当に望んでいたのはチドリやアイギスたちの平穏であり、影時間の終わりは確かに望んでいたが、チドリが戦いに参加する事はむしろ反対していた。
それを忘れ、いや、考えないように頭の隅へと追いやった少女は、青年の代わりにシャドウと戦うため静かに部屋を出て港区へと向かった。

第三百三十五話　報告と相談

深夜――都内・某所

桐条グループや探知系能力を持った者からばれぬよう、特殊な器具を設置することで未だ存在を隠し通せている地下に作られた研究所。

そこを拠点にしていた理とストレガたちは、湊の解剖が一段落したことで彼の身体について幾月から話があると集まっていた。

ソファーに座った幾月とその後ろで適当な椅子に座っている理と玖美奈、テーブルを挟んで向かいのソファーに座るタカヤとジン、その後ろに立っているメノウとスミレ、そして壁に寄りかかっているカズキ。

これが終末を求める者たちの全戦力だが、幾月たちとストレガはトップ同士が同盟を結ぶことに利があると手を組んだだけであり、それぞれの他のメンバーは相手側を信用していない。

そもそも、ストレガたちが終末を求めるに至ったのは、幾月たちエルゴ研によって無理矢理にペルソナを目覚めさせられ、寿命を縮める制御剤の服用を余儀なくされ、おかげでストレガ全員の余命が一年も残っていないからだ。

余命がないなら好きに生きればいい。故に、ストレガは今を生きる事を第一としている。

刹那的なようでありながら、その奥底には生への羨望が見て取れるが、ニュクスが降臨すれば世界の理が書き換えられる。

だからこそ、お互いにその点について今更議論するつもりはない。

敵意を隠していなかったり、ビジネスパートナーとしてのみ関わるような形になっているが、大人しく集まった者たちは幾月の前に置かれた大小二つの瓶に視線を向けていた。

大きな瓶には瞼を閉じた青年の頭部が、小さな瓶には二つの眼球が保存液と共に入っている。

耐性のない者がみれば一瞬で気を失いそうなグロテスクさだが、ここにいる者たちは気にした様子もなく幾月の話を聞いていた。

「さて、エヴィデンス……まぁ、有里湊と呼ぼうか。あれの解剖が終

わったよ。人工骨格が使われていたが、その点を無視すれば身体に外傷は無し。臓器も全て揃っていて、死因はまるで特定出来なかった」
あの時、倒れていた玖美奈は意識がほとんどなく、彼女を助けに飛んできた理は湊が蛍火色の光に包まれた事しか見えていない。
どうやってチドリを生き返らせたのか。どういった代償で湊が死んだのか。
それらが不明だったからこそ、幾月は死者蘇生を為した者の遺体を調べるために欲したのだ。
けれど、ペルソナにも言えることだが、異能は体組織を変化させるようなものではない。
自分の精神と結び付いているだけで、ペルソナ使いの身体能力が上がる理由は適性に応じた恩恵を付与されるからであり。現実の時間に戻ればペルソナ使いの身体能力はほぼ筋力相応になる。
幾月もその可能性については理解していたが、死者、言い換えればモノになった損傷した死体を復元し、そこに再度魂を込める蘇生というのは体組織の変化にあたる。
奇跡とも言える秘術を行使した術者の死因が分からないとなると、次は被験体になったチドリを調べるべきかと幾月は考えたが、その事については思考を頭の隅に追いやって報告を続ける。
「死んだ理由は分からなかった。ただ、データにあった黄昏の羽根は先日の彼女同様に消えていた」
「なるほど、となると黄昏の羽根を内蔵している者が死ぬと、魂と共に羽根も消失する可能性が高い訳ですね」
「ああ。データは彼女と今回の二件しかないが現状ではそう考えた方がいい」
湊とマリアがそうだったからと言って、確実に黄昏の羽根が消えるとは思わない。
同じような結果が百件もあれば別だが、いくらなんでも二件だけでは統計的に有意な結果とは言えないのだ。
研究者である幾月としては真偽を確かめたい。
心臓に黄昏の羽根を内蔵する必要があれば難しいが、ただ黄昏の羽

根を内蔵するだけでいいなら幾月でも可能で、影時間を利用すればいくらでも実験台は用意出来る。
ストレガが依頼で殺してきた者たちも、影時間が終わればほとんどが事故死になっており。一部は変死や事件として取り上げられていたが、それらがストレガに辿り着くことはなかった。
故に、幾月も実験台が必要になれば影時間に調達に行くつもりだが、問題は内蔵している者が死ねば羽根が消えるという仮説が事実であった場合だ。
黄昏の羽根は非常に貴重で、幾月の研究所に予備の羽根は十枚もない。
桐条グループにいた時にはグループの情報網を使って世界中から探したのだが、ある時からぱったりと噂レベルの情報すら入ってこなくなった。
実際は〝どこどこにあった〟という情報は入ってきたのだが、全てが過去形でその後にどこに行ったのか分からなくなったのだ。
それらの真相は湊がＥＰ社とベレスフォード家の情報網を使って世界中の羽根を集めただけで、単純に幾月や桐条以外にも同じ事を考える者がいただけの話である。
おかげで現在ＥＰ社側には百枚を超える羽根があったりするのだが、それを知らない幾月はどうすれば持っている羽根を節約して実験出来るかを考える。
すると、幾月が自分の思考に没頭しかけている事に気付いたのか、タカヤがテーブルの上にある頭部と眼球の標本を見ながら話題を戻した。
「それで？　死因不明という事でしたら、こちらの眼球について何かあるのですか？」
「まぁね。ここにあるのは有里湊の眼球だ。頭部の方には義眼を入れて形が崩れないようにしているが、そちらは今は関係ないから置いておこう。問題は何故彼の瞳が黒いか、だ」
腕を組みつつ片手を顎に当てて話す幾月が、眼球に注目するよう他の者たちにも呼びかける。

言われて離れた場所にいた者らも寄ってきてテーブルの上に置かれた物を見れば、液体の中に浮いている眼球は虹彩の部分が黒かった。

日本人としては珍しくもない。むしろ、これが日本人の標準であると言えるくらいだ。

しかし、ここにいる者たちは知っている。有里湊という青年が非常に珍しい不思議な輝きをした金色の瞳をしていたと。

「先に言っておくと彼の瞳は元々黒かった。君たちが知っている金色の瞳は、飛騨博士がエールクロイツを移植してから変化したものだ。他の二人も髪色が変化していたし。結合型の黄昏の羽根を移植すると身体に変化が起きるようだね」

湊の身体については彼がエルゴ研で目覚めるまでに色々とデータを取っている。

その際、本当に生きているのか確かめる意味もあって、閉じていた瞼を手で開けて瞳孔を含めた瞳を見ている。

だからこそ、幾月も湊が元々は黒い瞳だったと覚えており、後で手に入れた飛騨の研究データから黄昏の羽根を移植してから虹彩の色が変わったのだと知っていた。

湊以外の二人、チドリとマリアの髪色が変わったことについても、同じように飛騨データの中に記述があったため、結合した黄昏の羽根を移植すると身体に変化が起きる事が分かっている。

ここで重要なのは身体に変化が起きるのは、〝結合した〟黄昏の羽根を移植した場合のみという事だ。

理は赤いオルフェウスの他に酒呑童子というペルソナに目覚めたが、他のペルソナが目覚めなかった事で、玖美奈と一緒に人工ペルソナ使いらのペルソナを移した黄昏の羽根の移植手術を受けている。

枚数にすれば三枚以上で湊たちよりも多いくらいだが、二人の瞳や髪の色に変化はない。

羽根の持つ力を増幅する機能は効力を発揮しており、ペルソナもしっかりと定着しているので、移植した羽根を摘出しても力を失うことはない。

だというのに、身体に変化がないとなれば可能性として考えられるのは二つ。
一つは幾月が言ったように変化が起こるのは結合した黄昏の羽根を移植した場合であること。
もう一つは身体に起こるはずの変化は、ペルソナを移植しようとした事で精神面に現われ、最終的に他人の心であるはずのペルソナを取り込み自分の精神に定着させるという形で起きたのではないか。
この問題についてもデータが不足しているので、幾月が思い付いた可能性が正解であるかは分からない。
様々な用途に使える予備の羽根は十枚もないが、被験体のペルソナを移した羽根はそれとは別にしてあり、枚数で言えば十数枚あるのでストレガの誰かに移植して結果を見ることも出来る。
ただし、理が黄昏の羽根を利用した疑似ワイルド能力を得たのは、同一の遺伝子を持つ湊がワイルド能力を持っていたからであり、玖美奈に関しては自分も理と同じようにしたいと本人が強く希望したからだ。
理の方は湊の事もあってある程度は高い勝算があったものの、玖美奈については偶然彼女も適性があって上手くいったに過ぎない。
元々の適性が二人よりも低いストレガたちに移植しようとすれば、今度こそ失敗して廃人になることも考えられる。
単純な個人の実力で言えば幾月たちの方が優れているものの、特別課外活動部も決して弱い訳ではなく数の力も侮れない。
ここで戦力が減るのは痛い。黄昏の羽根を失うリスクも考えると、十分な戦力はあるのだからと幾月は現状のまま行こうと考えて話を続ける。
「有里湊の身体に黄昏の羽根がなかったのは話した通りだ。そして、瞳が黒くなっていた事から、もしやと思って測ってみれば、あの死体からはペルソナ使いとしての反応も消失していた」
「死んだらそこまでやろ。ペルソナ使いは死体が腐らんとかでもあるんか？」
「流石に死後経過は一般人と同じさ。ただ、被験体たちの死体からは

微弱なペルソナ反応の残滓が計測されていた。それがないとなると、あれは本当にただの死体になってしまっているって訳だ」
ペルソナ使いの死体を調べる機会は何度もあった。エルゴ研で散々人工ペルソナ使いたちを死なせていたのだ。研究サンプルには事欠かなかった事だろう。
当時のデータは今も残っており、最高戦力としてみられていたペルソナ使いの死後のペルソナ反応がどれほどのものかと思っていた幾月にすれば、計測器が完全な無反応であった事に逆に驚かされたくらいである。
「結合した黄昏の羽根を内蔵していると、死と共に適性も含めて消滅する可能性がある。もしも羽根が残っていれば、相手が所持していたペルソナが得られるかもしれないなんて思ったりもしていたが、予想は大外れだったよ」
幾月が湊の眼球を持ってきたのは、瞳の色が元に戻る形でハッキリと視覚情報で湊の適性が失われたと伝えるためだったらしい。
頭部も持ってきたのはただのオマケのようだが、幾月の調査で分かったのは湊の死体には研究材料としての価値がないという事だけ。
期待はずれにもほどがある結果に、わざわざ話を聞くために集められたストレガのメンバーらは呆れた顔をしている。
「やれやれ、苦労して重い遺体を運んだというのに無駄だったとは……」
「ははっ、その点についてすまなかったと謝らせてもらうよ。一応、この頭部と眼球は残しておくが、他は廃棄処分する事になる。けど、運搬して貰った依頼料は払うから安心してくれたまえ」
ペルソナ使いの脳や黄昏の羽根の影響で色が変化していた瞳には一定の価値がある。
今後、どのような形で研究に活かすかは決まっていないけれど、生首状態の頭部と眼球の入った容器を置いておくスペースは十分にあるのだ。
テーブルに置いていた容器を持って立ち上がると、それらを保管場所に移動させながら、今回の遺体運搬の依頼料についてストレガたち

と話をするのだった。

１０月１４日（水）

放課後――巌戸台分寮

十月の中旬になり月光館学園の高等部では二学期の中間テストが始まった。

学生の本分は勉強。定期考査はその成果を発揮する重要な行事と言える。

しかし、色々な事があり、未だに精神的に不安定な者や、勉強しようにもどうして彼が死んだという話が頭の中にちらついて集中出来なかった者などが多数いたため、今回のテストは過去最低の平均点になると予想されていた。

特別課外活動部のメンバーは、目の前で知り合いが死んだ事もあって、他の者たちよりもむしろダメージが多かったくらいだが、それを言い訳には出来ないと自分たちなり頑張っていた。

ただ、テスト期間中にもかかわらず、美鶴から今日は学校が終わったらすぐに寮に集まるよう連絡があったことで、アイギスを除く寮生とラビリスと栗原が寮の作戦室に集まっていた。

ここにアイギスがいないのは彼女は湊が住んでいたラビリスの家に引きこもっているからだ。

コロマルが傍についているので、ラビリスは妹を気にしつつも彼のおかげで通えるようになった学校をちゃんと卒業するため通い続けている。

けれど、やはり妹のことが気になるのか、招集をかけられてやって来てからもどこかそわそわして落ち着きがなかった。

「ほんで、今日は何の用事で呼んだん？　栗原さんもおるって事は桐条関係なん？」

「いや、今回来て貰ったのはチドリの件だ。昨日の夜に桜さんから連絡があって、日曜の夜にいなくなってから家に帰っていないらしい」

日曜日の夜にいなくなって、今日で三日も経っている。

家族を、最愛の人を失った彼女はまともな精神状態とは言えなかっ

た。
　そんな状態の少女が行方を眩ましたとなれば、最悪の事態を想像しても無理はない。焦った様子で順平が椅子から立ち上がって今すぐに探さなければと栗原たちに迫る。
「ちょ、それってやばいじゃないッスか！　有里が死んだ直後で失踪って、下手したらあいつまで！」
「いや、どうやら制服と武器類がなくなっていたらしい。多分だがあの子はタルタロスにいる。理由はまぁ……あいつのやり残しを引き継ごうとしているってとこだろう」
　確かにチドリは精神的に不安定ではあったが、彼に繋いで貰った命を自ら絶とうとするほど弱くはない。
　大切な者が自分を生き返らせるために死んだ。ならば、貰った命は彼が成し遂げられなかった事のために使うべき。
　それはチドリに守られたことを切っ掛けに、彼女を守るために生きた湊と同じ生き方だ。
　似ているから惹かれたのか、惹かれたから同じ結論に辿り着いたのか。それは分からないが、きっと少女はそう考えてタルタロスにいるはずだと栗原に言われて他の者たちはハッとする。
　湊の死を受け止めて進もうと思いながらも、どこか流されるようにテストという目の前の事だけに意識を向けていた事に気付かされた。
　止まっていたはずの少女が再び立ち上がって歩き出しているというのに、自分たちはいつまで同じ場所にいるのか。
　このままではいけないと思った七歌は気持ちを切り替えるため、自分の頬をパンッと掌で両脇から挟むように叩いて気合いを入れる。
「よっし！　チドリの事が心配だから今夜はタルタロスに行くよ。彼女の保護が第一目標、出来れば未到達階層の探索もしたいけど、そっちはオマケだから皆もそのつもりでいて」
　三日分の影時間と言うことは三時間ほど探索しているという事だろう。
　以前、風花が一週間迷いこんでいると考えていた時も七歌たちは希望を捨てなかったので、今回も何としてでもチドリを保護しようとや

る気を見せる。
風花の時は結果的に言えば本人は初日に保護されて隠れていただけなのだが、チドリは影時間にも慣れていて探知と戦闘のどちらもこなせるタイプのペルソナを持っている。
ならば、敵のいない場所を見つけて休息を取りつつ、行けるところまで行こうと上の階を目指しているはずだ。
一人で敵と戦いつつ進んで三時間ほどの距離なら、大勢で敵を撃破しつつ進めば今日の影時間に追いつくと思われた。
他のメンバーも友達のためにとやる気を見せており、湊が死んだ日以来の探索だがこれなら上手くやれるだろうと考えた時、七歌はラビリスが僅かに不安そうな顔をしていた事に気付いた。
もしや、今日は来ていないアイギスとコロマルにも参加してもらおうか悩んでいるのか。チドリの事は心配だが、七歌も流石に無理に参加させようとは思っていない。
故に、相手が言いづらいならと七歌の方からラビリスに声をかけた。
「あ、えっと、アイギスとコロマルは行けそう？」
「ん、ちょっとまだ無理やと思うわ。タルタロスに行っても心が揺れんとペルソナも使えんやろうし。アイギス一人は怖いからコロマルさんについてて貰わんと」
七歌たちは湊の遺体が盗まれたと病院に向かった日からアイギスに会っていない。
湊の遺体が敵の手に渡り、供養も別れも出来ていないせいでアイギスの心は今も殻に閉じこもっているらしい。
そんな妹を独りにするのは不安だからと、ラビリスはコロマルに妹を見て貰っているようだが、有事の際に犬であるコロマルにどれだけの事が出来るか分からない。
本当ならばラビリスは学校がないときは妹の傍についていてあげたいと思っている事だろう。
妹と友人、どちらの助けに行くべきかと悩む少女に七歌は助け船を出す。

「こっちは探知能力のある風花もいるし。ラビリスはアイギスについて大丈夫だよ？」
「うん。でも、やっぱチドリちゃんの事は心配やし。ウチも参加するわ」
「え、けど、コロマルだけに任せて大丈夫なの？」
「たぶんな。アイギスはその、抜け殻って言うんかな。燃え尽きてしもた感じで、無気力症に近い感じなんよ。まぁ、意思疎通は出来るから無気力症ではないんやけども」
アイギスがどういった状態なのか知らなかったこともあり、二人の会話を聞いていた他の者たちもアイギスの状態を心配する。
そも、ペルソナ使いが無気力症になるのかどうかも不明だが、湊の傍でＥＰ社の影時間に関する研究を見ていたラビリスが言うからには無気力症の心配はないのだろう。
今のアイギスは家にいるときはほとんどベッドで寝ており、時々ラビリスやコロマルが食事をするように言って食事をさせ、夜になってからラビリスがお風呂に入れてやるというのが普段の過ごし方らしい。
以前のように元気に会話したりは出来ないが、ラビリスが話しかければぽつりぽつりと言葉を返しもする。
そういった状態であるため、影時間中ならば基本的に寝ているだけなので、妹はコロマルに任せてラビリスもチドリの捜索に参加するとの事だった。
七歌も出来れば人手があった方が安心だった事もあり、そういう事であればとラビリスの参加を歓迎する。
また、心配なら探索に向かっている間は湊の家で栗原がアイギスを見ていても良いと言っているので、探索に向かう者たちの心配事も解消された。
であれば、夜に向けて装備の準備や隊列などについて話すことがあるため、このまま今日の探索に向けての作戦会議に移行する。
チドリは無事だと、絶対に自分たちで保護するんだという意気込みで、七歌たちはチドリの捜索について話し合うのだった。

第三百三十六話　守護者

影時間――タルタロス・１４５Ｆ

影時間を終わらせる。そのためにはタルタロスを攻略する必要がある。

チドリは湊から詳しい話を聞いたことはなかったが、その点については桐条グループの見解は正しいと彼も肯定していた。

故に、チドリはシャドウを倒しながらタルタロスを上った。

アルカナシャドウが倒されると新しい階層へと向かえる事は、これまでの経験から知っていた。

ベルベットルームの住人から七歌にもそういった連絡が来るし、チドリもアナライズでタルタロスの変化を探れるので経験から知っている。

シャドウを殺し尽くすのであれば一階から上っていくべきかもしれないが、チドリとて自分の体力に限界があると分かっていた。

だから、タルタロスの攻略に直接関係のないモナドは無視し、攻略も一階からではなく転送装置を使って最高到達階層からのスタートにしていた。

シャドウたちを倒しながらここまで進んできたチドリは、腰にガンベルトを巻き、ハンドアックスはアタッチメントで取り付けたまま、刀を左手で持ちながら右手で白い召喚器を抜く。

彼女の視線の先にはこちらに向かってくる赤い戦車が見えていた。

シャドウの名は戦車〝真紅の砲座〟。斬撃を反射、打撃を無効、火炎属性に対して耐性を持っているタフなシャドウだ。

チドリのメーディアは闇魔法を使えるものの、攻撃手段はほとんど火炎魔法に依存している。

その分、並みの使い手よりも炎の扱いには長けているが、耐性を持っている敵が相手となると持久戦を覚悟する必要があり、ここまで連戦してきて消耗しているチドリには厳しいものがある。

だからこそ、彼女は相手をアナライズで読み込み、その弱点が電撃属性であると調べてから自らの新しいペルソナを呼んだ。

「来て、ヘカテー！」
召喚器をこめかみに当てて引き金を引けば、ガラスの割れるような音が響いて水色の欠片が少女の頭上で回転する。
その渦の中心から現われたのは黒いフード付きのマントを羽織り、暗い紫色のドレスを着た白い肌の女性型のペルソナ、月〝ヘカテー〟だった。
チドリのメーディアは羊の頭骨が頭部になった女性型ペルソナだったが、新たなペルソナであるヘカテーはより人間の女性らしくなっている。
手には月を模した魔法陣が象られた大きな杖を持っており、その杖を振るうと雷が迸り真紅の砲座に襲いかかる。
攻撃を受けたシャドウは動きを止めると感電しているのか小刻みに身体を揺らし、身体の節々から黒い煙が漏れ始めると最後には爆発するように消滅していった。
敵が完全に消滅した事を確認したチドリは、ヘカテーに視線を送ると力を切ってペルソナを消す。
神話においてメーディアが厚く信仰していたとされる女神ヘカテーは、月と魔術を司る神の一柱とされている。
その逸話の通りに、火炎しか使えなかったメーディアと異なり、ヘカテーは光を除く全ての属性魔法を扱うことが出来た。
死を経験したからか、それともワイルドの力を持っていた湊の心臓を貰ったからか、チドリのアルカナも死に最も近かった刑死者から、死の先のアルカナである月に変化している。
三枚の黄昏の羽根が結合した〝ペタル・デュ・クール〟を喪失していながら、適性値も死ぬ前と比べて大幅に上昇しており、チドリは死を経験して間違いなく強くなっていた。
（全然、足りない。これじゃあ八雲の代わりなんて務まらない。もっと、もっと強くならなきゃ）
けれど、それでも少女にとって今の自分は脆弱すぎた。
敵側、ストレガと幾月側の者らと比べても今のチドリの適性値は劣っていない。

群を抜いている理と玖美奈に迫り、ストレガで最も高い適性値を持っていて巨大ペルソナであるテュポーンを所持しているスミレよりも、完全に一度死んでしまったチドリの方が高い適性を得ているのだ。

しかし、チドリが目指しているのは湊の領域。

彼がやり残した事を引き継ぐというのであれば、一ヶ月だろうと平気で戦い続けられるようにならなければならない。

もっとも、チドリが定める彼の領域など、普通の人間どころか同じように出来るものなど、この世に一人として存在しない。

人外の強さを持っているベルベットルームの住人ですら、不眠不休で一月戦い続けることなど出来ないのだ。

冷静な状態であればチドリもそれが事実上不可能だとすぐに理解出来たはず。

彼が戦い続けられたのは、先祖が持っていた神の力を使い、力を溜め込む性質を持つよう二千年以上かけて作られた名切りの肉体あってこその奇跡なのだと。

しかし、湊を失ってから彼の意志を引き継ぐことだけを考え、ここまで新しい力を慣らしながら一人で戦い続けてきた彼女に冷静な判断力は残っていなかった。

仮に普段通りの精神状態だったとしても、影時間に精神力を使うペルソナを駆使して三時間も戦っていれば、思考も鈍って注意力が散漫になり考える余裕はないだろう。

だからこそ、彼女は上に続く階段を見つけるとそのままそちらに向かって足を進めた。その先がフロアボスの待っている階層だとも知らずに。

＊＊＊

チドリを探しに来た七歌たちは、影時間になってタルタロスが現われると同時に中に入った。

今もエントランスの隅には台座に刺さった聖剣エクスカリバーが静かに佇んでいるが、正当な所有者と認められた青年も今やいない。

故に、予備の候補者として認められている七歌が少しずつ抜いてい

くしか手に入れる手段は残っていないが、今日の彼女にそんな事をしている余裕はない。
エントランスに着くなり風花がペルソナを呼び出して広域に探知能力を使う。
恐らくチドリは塔を上っていると思われるが、場所によって転送装置でショートカット出来るかが変わってくる。
だからこそ、出来る限り最短最速で辿り着けるよう居場所を探ったのだが、風花は悪い意味で予想が当たったことを他の者に伝える。
「分かりました。チドリちゃんは新階層、満月を終えて新たに解放されたエリアにいます」
「モナドだったか。地下の深層でなかったのは不幸中の幸いと思うべきだろうが、今は一刻を争う。吉野が無事なうちに追いついて保護するぞ」
美鶴たちも自分たちが少しずつだが強くなっている自覚はある。
しかし、まだ地下階層である深層モナドの敵を連続で相手にするほどの実力はない。
チドリと一緒にモナドで鍛練を積んだことがあるコロマルとラビリスならば戦う事自体は出来るのだろうが、タルタロスに籠もっている人間を保護するならばスピードが求められる。
先へ進むことを優先しての戦闘は普段とは勝手が違う。
大きく実力に差があるならばともかく、〝戦える〟というレベルで倒すまえにミスを犯して自滅するのがオチだ。
その点、新たに解放された新階層ならばこれまでの敵よりも一段階強い程度で、強敵が出たとしてもモナドの浅い階層に出てくる敵よりは弱い。
初めて戦う敵もいるので油断は出来ないが、着実に倒していけば一定の速度で追い掛けることが出来るだろう。
美鶴の号令で全員が転送装置へ向かうと、現時点で迎える最高到達階層へと転移した。
＊＊＊
剛毅の仮面をつけた〝本性のマーヤ〟の群れが前方の通路から溢

れ出てくる。
　前衛として大剣を構えた順平は最初に襲いかかってきた敵へと武器を振り下ろすも、敵に触れる直前に透明な壁のようなものに遮られて攻撃が通らない。
「ダメです順平君！　そのシャドウに物理攻撃は効きません！　魔法で応戦してください！」
「クッソ、ザコシャドウのくせに！」
　マーヤは本来シャドウの中では最弱といっていい種族。
　しかし、一四〇階を越えてくるとマーヤと言えど雑魚とは呼べない強さになり、順平は物理全無効などという耐性を持っている相手に生意気なと憤った。
　今は一刻も早く先へ進みたい。こんなところで足止めを喰らっている間にチドリの身に危険が迫っているかもしれないのだ。
　湊に託されただけではない。順平にとっても大切な仲間だと言える少女を心配するあまり、戦闘面では見られていた冷静さが今は欠けていた。
　それにすぐに気付いた真田は召喚器を抜きながら順平に場所を開けるように言う。
「どけ順平！　俺が一掃する！　カエサル、マハジオダイン！」
　呼び出された皇帝が剣を振り払うと、それに合わせて放たれた雷撃がマーヤたちを薙ぎ払ってゆく。
　敵に当たっても勢いは衰えず、その後ろにいた敵を飲み込み、迫っていた一団全てを屠りきった。
　おかげで正面の道から敵がいなくなり通れるようになった。風花の案内によればしばらくは真っ直ぐ進んで良いらしい。
　ならばとすぐに駆け出そうとする順平を七歌が呼び止める。
「順平、先行しないで！　隊列が伸びたら連携が取りづらくなるから！」
「はぁ!?　デカい反応のある階に行くまでに追いつかないとヤバいだろ！」
「それは分かってる。けど、チドリが先に着いてしまった時に一人だ

け助けに行っても意味ないでしょ！」
順平の言っている事は正しい。風花が索敵したところ一四六階に大きな反応が三つあったのだ。
チドリは既にその一つ前の階層に辿り着いており、進行ペースを緩めなければ七歌たちが追いつく前にフロアボスのいる階に着いてしまう。
そうなっては遅いから順平は一人でも先に行こうとしているのだが、七歌は今のペースではギリギリ追いつけないと思っていた。
仮に一人でも先に辿り着くように作戦を練るならば、戦斧の推進器で飛べるラビリスにオルギアモードを使わせて先行させれば良かった。
しかし、それでもギリギリ追い付けるかどうかという距離があるため、下手な賭けに出るよりはと全員で向かう最高速度で進もうと七歌は考えたのだ。
もっとも、順平にはそれがじれったいようで全員で行くなら急いでくれと全員を急かす。
今までの順平からは考えられない焦りように、七歌は彼の中で湊に託された事をそんなにも重く受け止めてしまっているのかと心配するが、確かに順平の言う通り急ぐに超したことはない。
非戦闘員である風花もチドリの許へ急ごうと必死に走って先を目指しているため、七歌も最悪を想定して服の中に入れたペンダントを握り締めると走り出した。
――タルタロス・１４６Ｆ
チドリが階段を上って新たな階層にやって来ると、その階層に辿り着いた瞬間に肌がひりつくようなプレッシャーを感じた。
探知能力を持っているのでいる事は分かっていたが、ここがやはりフロアボスのいる階層かと気を引き締める。
通路の先にある広間にいる敵の気配は三体。どれもモナドのシャドウに匹敵するだけの力を持っている様子だ。
召喚器を右手に持ち、左手で刀を持ったまま進む少女は、通路の角を曲がって広間へと向かってゆく。

そこにいたのは黒い騎馬に跨がる騎士型シャドウ、皇帝〝地獄の騎士〟たちだ。
騎士型のシャドウは物理において攻守とも優れており、さらに魔法も巧みに使ってくる強敵。
一体でも厄介だというのに、三体もいては消耗しているチドリでは厳しい相手と言えるだろう。
けれど、ここで退いてはやって来た意味がない。
湊は全てのシャドウを倒し、影時間を終わらせようとしていた。
彼のようには出来ないと分かっていても、簡単に諦められるほど素直でもない。
何より、ここで自分が負ければ湊の想いまで消えてしまいそうな気がして、チドリは戦って勝つしかないと思った。
敵の耐性は電撃吸収と光と闇が無効。そういう事ならばと相手が動く前にチドリは仕掛けた。
「ヘカテー、アギダインっ!!」
引き金を引いてペルソナを呼び出すと同時に、チドリは一定の距離を取ったまま時計回りに走り出す。
チドリの動きにつられて地獄の騎士たちも動き始めたが、最初にいた地点に召喚されたヘカテーが杖を振るい。敵の横から豪炎を放つ。
シャドウらを飲み込まんと迫る豪炎に、三体の内の一体が足を止めて盾を構えた。
走りながらそれを見ていたチドリは、まさかシャドウがと僅かに驚き、そして、チドリが予想した通りに足を止めていたシャドウが盾で豪炎を防いでいた。
盾で防がれた豪炎は二つに分かれて地面を焼きながら進んでゆく。
けれど、盾で防いでいる一体のおかげで残りのシャドウたちに炎が届くことはなく、ヘカテーの攻撃がやめば三体とも無傷のままその場に残っていた。
(やっぱり騎士型は厄介ね……)
経験則として騎士型シャドウには弱点らしい弱点が見当たらない。
一体でも脅威で、複数体いれば連携まで取ってくる厄介な敵だ。

攻撃を防いだことで三体は再び動き出し、一体が走っているチドリに向けて遠くから槍を突き出した。
嫌な予感がしたチドリがその場から飛び退けば、先ほどまで立っていた場所を衝撃波が通過していった。
それなりの距離を開けていたというのに、物理スキルであるミリオンシュートを狙い通りに飛ばしてくる敵の力を上方修正する。
さらに別の一体が槍に電撃を纏わせた状態で突き出してきたことで、魔法と物理の両方で遠距離攻撃が可能なのかと心の中でチドリは舌打ちをした。
（こっちの魔法を簡単に盾で防いでくるってのに、物理と魔法で遠距離攻撃可能とか面倒過ぎでしょ）
敵の放った電撃を召喚し直したヘカテーの魔法で誘導して逸らす。
続けて少しでも動きを止めようとマハブフダインで氷の津波を作ってみた。
だが、騎士たちは槍に電撃を纏わせた状態で攻撃を放ち、津波の一角を破壊して切り抜けたまま進んでくる。
これが普通の水であれば、攻撃で一角が破壊されようとすぐに残りの水が流れ込んで復活していた。
しかし、氷の津波は津波の形をしているだけで、あくまで大量の氷で飲み込もうとするだけの技。
チドリの攻撃の弱点を即座に見抜く知能と、切り抜けるだけの実力を持った敵は、やはり一筋縄ではいかないと、再び迫るミリオンシュートを躱しながらチドリは勝つ方法を考えた。
迫りながら放たれるミリオンシュートと電撃、走って敵の位置を把握しながらチドリはそれらを避け続ける。
距離が詰められそうになれば氷や炎で壁を作り、敵が対処に追われている間に再度距離を開ける。
チドリもまだ被弾してはいないが、三体の鬼を相手にした命懸けの鬼ごっこなど、戦い続けてここにきたチドリの方が消耗度合いから言っても圧倒的に不利と言える。
加えて、敵は物理でも魔法でもチドリにダメージを与える事が出来

るが、チドリの攻撃は得意な魔法しか通りそうにない。
少女の腕力ではどうしても鎧を突破出来ず、接近を許した時点でチドリの敗北が決まるというのが今の状況だった。
そして、そんな無理を続けていれば疲労の溜まった少女の身体がやがて限界を迎えるのも当然。
攻撃を避けるために走る速度をあげようとした際、ふくらはぎの筋肉が攣って足を縺れさせ、攻撃を避け損なったチドリの身体にミリオンシュートが直撃する。
「うぐっ!?」
脇腹を強く殴られたまま横から強く押されたような衝撃を受け、チドリは持っていた召喚器を取り落としながら地面を転がり倒れる。
固い地面を転がった痛みとミリオンシュートが直撃した痛みのせいで呼吸が整わず、ここまでの疲労が一気に出てしまってまともに立ち上がることも出来ない。
けれど、少女側の事情などフロアボスであるシャドウらには関係ない。
ようやく鬼ごっこが終わったとばかりに三体のシャドウが倒れた少女の許に向かってくる。
チドリが広間に入ってきた通路の方からは複数の足音が聞こえ、槍を構えたシャドウらがチドリに辿り着く前に足音の主たちが広間に到着するが、チドリが倒れているのは広間の奥、順平たちが入ってきた通路とは最も離れている位置だ。
「っ、やめろぉぉぉぉぉっ!!」
広間に入った瞬間、倒れている少女とそれに群がろうとするシャドウを見て少年が叫ぶ。
他の者たちも召喚器の引き金を引こうとするが、彼らのペルソナが現われるよりもシャドウの攻撃がチドリに届く方が速かった。
倒れたまま顔だけ敵の方へ向けていたチドリは、自分の身体を貫こうと迫る黒い槍を見て、少しだけ安心している自分がいることに気付いた。
シャドウの槍で貫かれれば自分は死ぬ。死ねば向こうの世界で湊

に会える。
彼女の事を想っている者たちが聞けば、頬をはたいてでも馬鹿な事を考えるんじゃないと怒るところだろう。
しかし、今この瞬間にそんな事でチドリの頬を叩ける者などいない。
そんな者が現われる前に、数メートルという距離まで迫っている槍が少女の身体を貫くから。
(ごめんね、八雲……)
文字通りに命懸けで救ってくれた青年には申し訳ないと思う。
せっかく助けたというのに、こんな呆気ない最期ですぐに後を追うことになるのだから。
おそらく向こうの世界で会えば彼は少女を怒るだろう。どうして無駄に命を散らせたのだと。
けれど、そんな事でも良いからチドリは湊と会って話がしたかった。
彼の遺志を継ぐつもりではあったが、そんなのは建前で、本心では湊の真似をして〝人々にとって良い事〟をしながら死に場所を探していたのかもしれない。
残り僅かな時間にそんな事を考えていたチドリは、シャドウらを挟んだ向こう側に友人らが必死にシャドウらを止めようとしてくれているのが見えた。
ペルソナを呼び出す者、引き絞った矢を放とうとする者、青い光を纏い推進器を使って飛び出そうとする者、それぞれが自分を助けようとしているのだと分かる。
だが、無駄だ。ただの人間には時を操作する事など出来ない。人も、シャドウも、住む世界は違えど同じ時の流れの中で生きるしかないのだ。
彼らは頑張った。ここに来るまでに相当な無茶をしたのか服や顔が汚れている。ただ、どうやっても間に合わない。
チドリはそれが分かっていたから、他の者よりも素直に自分の最期を受け入れる事が出来た。

先頭にいるシャドウの持つ槍との距離は六メートル。敵の速度を考えれば三秒も掛からずに到達する。
死ぬのはこれで二度目だが、痛いのだけはやはり少し嫌だなとチドリは来るであろう衝撃に備えて目を閉じようとした。
だが、少女が目を閉じきる前、シャドウの槍がチドリの身体を貫こうとした時、チドリの身体から水色の光が立ち上りソレは現われた。
《グルォオオオオオオオオオオオオオオッ!!》
迫る槍を手に持った剣で弾き、何も持たぬ右手の拳を握って騎士の頭部を殴りつける。
続けてやってきた二体のシャドウらの槍をそれぞれ宙に浮いた棺で受け止めれば、現われた死神〝タナトス〟は攻撃を押し返し、体勢を崩したシャドウらを剣で薙ぎ払った。
直前まで自分の命を奪おうとしていた敵が、突如現われた〝彼のペルソナ〟に止められ、逆にダメージを与えられている。
何が起こったのか分からずチドリが困惑していれば、薙ぎ払われて距離が開いたシャドウの許へタナトスが飛んでゆく。
上段から振り下ろされる剣を、騎士は槍で受け止めようとするも、その程度の鈍で防げると思うなとでも言うように槍ごと叩き切って一体を消滅させる。
続けて攻撃を仕掛けようとしていた別のシャドウの槍を掴み、片腕で持ち上げると獣の頭骨を思わせる頭部の口元に赤と黒の光を収束させると、タナトスの放った光線が敵を飲み込んだ。
僅かな時間でフロアボスが二体も倒された。その圧倒的な強さと存在感からは間違いなく彼の気配を感じる。
しかし、どうして彼のペルソナが突然現われたのか。
まさか、彼が生きているとでもいうのか。
困惑している他の者たちを尻目に、タナトスは最初に殴りつけた残り一体のシャドウへと向かってゆく。
騎士もやられまいと電撃を放っているが、タナトスはそれらを全て剣で切り伏せてしまう。
タナトスが戦っている間にラビリスがチドリの許に辿り着き、彼女

を抱き上げて他の者たちの許に戻れば、シャドウとの距離を詰めたタナトスが横薙ぎに払った剣で敵を両断していた。
今の七歌たちが万全な状態でも手こずるであろうフロアボスが、瞬く前に殺されたことで広間には静寂が訪れる。
すると、今までじっとタナトスを見ていた風花が口を開いた。
「……分かりました。あのタナトスは間違いなく有里君のペルソナです。でも、普通のペルソナじゃありません。あれは、あのペルソナは、リミッターを壊し自分が死ぬと分かっていた有里君が余分なエネルギーを使って遺した防衛機構。美紀ちゃんのフェニックスのように、チドリちゃんの身に危険が迫れば込めたエネルギーを使い切るまで守り続ける存在です」
役目を終えたタナトスはチドリを一瞥すると、そのまま淡い光に包まれ消えてゆく。
そして、その存在理由を知った事で、チドリは彼がまだ自分を守ってくれていると知って彼の名を呼んで涙を流す。
「八雲、八雲っ……」
彼がこうなることを予想していたかどうかは分からない。ただ、それでも何かあればもう自分は守ってやれないからと、遺せるだけの力だけは置いて行ったのだろう。
最期まで守り続けるとはなんだったのか。死んでからも守っているではないかと彼の想いの強さに美鶴も圧倒された。
「有里、君は死して尚、吉野を守り続けようというのか」
「なんだよ……それ……。こんなの、どうやっても真似出来るわけねーだろうが……」
あの日、順平は偶然とはいえ託された。
だからこそ、彼のようにとはいかずともチドリを守ってみせようと思っていたというのに、自分がどれだけ甘い考えだったかを思い知らされた。
他の者たちは黙っているが、皆それぞれ湊がどのような覚悟でチドリらを守ると言っていたのかを理解したのだろう。
その目には以前のような力が宿り、どこか吹っ切れたような雰囲気

があった。
「皆、ストレガたちが来ても勝てるように強くなろう。もう誰一人欠ける事なく、全員で影時間のない世界を迎えよう」
大切な人を失ってからこんな当たり前の事を決意する自分の愚かさに嫌になる。
それでも、ここで一歩進んでおかないとこのまま腐ってしまうと七歌は考えた。
彼女の言葉に泣いているチドリ以外の全員が頷き、七歌の築いているコミュニティが特別課外活動部の絆が深まった事をしらせてくる。
決意しただけで強くなる訳ではない事は分かっている。けれど、それでも今ここで決意を固めた者たちは、以前よりストレガにとって厄介な相手になっているはずだった。
そうして、どうにかチドリを保護出来た七歌たちは、転送装置を起動させてエントランスに戻ると、タルタロスを出て栗原と合流したのだった。

――コペルニクス・クレーター
七歌たちがチドリと合流していた時、群青色の衣服を纏った女性は命なき星に独り佇み、青い惑星を見つめていた。

「……なるほど、影法師のようなものですか」
急に懐かしい彼の気配を感じたと思えば、すぐに消えてしまった事で女性は不思議に思った。
だが、青い惑星を見つめ続ける事で何があったのか大凡理解したらしく、小さく口元を歪めると惑星に背を向けて歩き出す。
もうここに用はない。そう言いたげに手に持った魔道書を開くと、彼女はページに指を走らせ地面に魔法陣を起動させる。
そして、月面に突き立てた九尾切り丸に視線を送ると、微笑を浮かべて女性はその場から姿を消した。

第三百三十七話　離れていても

深夜――マンション〝テラ・エメリタ〟
湊がラビリスと共に暮らしていたマンションの部屋。
その寝室に置かれた大きなベッドの上でアイギスは毛布にくるまっていた。
別に体調が悪い訳ではない。そもそも、湊が作った生体ボディは微細な黄昏の羽根を細胞内に取り込んでいるため、生身でありながらその機能や耐久性は常人を遙かに超える。
生殖機能を与えたことで女性特有の理由で体調を崩すことはあっても、風邪などの体調不良を起こす可能性はかなり低い。
では、何故彼女はベッドで毛布にくるまって独り寝ているのか。
それは湊の死に続け、彼の遺体が盗まれた事でアイギスの心が折れてしまったからだった。
何かをしようと思うだけ気力が湧かず、悲しく思いながらも涙が出たりもしない。
心が揺れようとする気配はあるのだが、どうしてもすぐに感情の波が凪いでいくのだ。
アイギスが人ならばそれが心の防衛機能だと分かっただろう。
彼女にとって湊は世界の根幹。シャドウ討伐のために作られた存在にもかかわらず、彼女は湊の無事や平穏を願い。出来れば自分がその隣にいたいと思っていた。
しかし、その願いはもう叶わない。
彼はもういない。
亡骸を弔うことも出来ず、自分たちが彼の死を納得する機会すら奪われた。
対人経験の少ないアイギスはそういった時にどう感情を処理すればいいのか知らない。
誰かに愚痴を吐くでも、感情のままに泣き散らしてもいい。本人がそうやって溜め込んだ感情を処理出来ればどんな方法だって良いのだ。

けれど、アイギスはどうすれば良いか分からなかった事で心の動きを止めた。
それはまるで対シャドウ兵器に戻ったようだが、傍で見守っていた姉は心を止めて尚アイギスが苦しんでいると分かっていた事で、敢えてなにも言わず時間で傷が癒えるよう見守っていた。
（八雲さんがいません。絆が、繋がりが、もう感じられない）
アイギスは毛布にくるまりながら自分の内側に意識を向ける。
以前までそこに感じていた湊との繋がり、エリザベスが契約やコミュニティと称した彼と繋がっている証が今はない。
相手がいないのだから、繋がりが消えたのはある意味で当然だ。
だが、アイギスは七歌たちと話していたように、今回の敵についての情報を最低限持っていた。
あの時、七歌たちへと襲いかかり、狙撃にてチドリの命を一度は奪った敵。
一人は、恐らく偽名だが長谷川沙織という月光館学園に通っていた女子。
もう一人は、事故から十年これまで姿を見せずにいた本物の百鬼八雲。
エルゴ研の研究員によって秘密裏に湊が作られた裏で、さらに本物の八雲は研究員によってどこかへ連れ出されていたのだろう。
今もその研究員と一緒にいるのか、それとも湊のように桐条を恨んで隠れていたのか分からない。
ただ、今のアイギスにとっては本物の八雲だと言われる存在などどうでも良かった。
自分が相手と戦えるか、それを心配していた事もあったが、何もする事がなく途絶えた湊との繋がりを探す内に彼女は気付いたのだ。
そもそも、自分と本物の八雲の間に何の繋がりも感じなかったことに。
アイギスと繋がっていたのは湊だけだった。偽物でも、クローンでも構わない。彼こそがアイギスにとって〝本物の八雲〟だった。
その彼がいない世界でこれ以上生きる意味があるのか。そんな事

をぼんやりと考えながらアイギスは再び夢の世界へと潜ってゆく。在りし日の彼の夢を見られるように。

１０月２０日（火）
午前――月光館学園
チドリの保護が完了し、彼女の中に湊が遺したペルソナがいると分かって一週間経った。
保護したチドリに聞いた話では、彼女自身はタナトスを自由に呼び出す事は出来ず、タナトスのエネルギーを補充することも出来ないらしい。
つまり、タナトスはチドリの中に存在するが、完全に独立した存在としてチドリを守るためだけに現われるのだろう。
あれから二日間は療養していたチドリは、今日も学校には来ていない。
やはりというか、話を聞いてみれば彼女は湊の叶えられなかった願いを叶えようとしているようで、今は一体でも多くシャドウを殺して影時間を終わらせるつもりだという。
桜たちはチドリが今も冷静ではないと分かっているからこそ、しばらくは好きにさせるつもりのようで、隣の市にある自宅よりもタルタロスに通いやすい栗原の家に居候している。
残りのアルカナシャドウは一体。そいつを倒せば影時間も終わる。
だが、もしこれで本当に影時間が消えれば、今は目的のために動けているチドリはどうなってしまうのか。
影時間の記憶を失った美紀、彼との約束ために学校に通い続けているラビリス、そんな二人と同じように学校にきてホームルームを受けていた風花は、チラリと誰も座っていないチドリの席と花などが置かれた湊の席を見てから小さく息を吐く。
教卓の所では湊の死にショックを受けて体調が万全ではない佐久間に代わり、副担任に降格された江古田が色々と話している。
もっとも、大して重要に思えなかったからか、真面目な風花ですら話を聞いていない様子をみせていれば、隣の席に座っている森山が声

をかけてきた。
「どした、冴えない顔して。なんか悩み？」
声をかけられた風花は少し驚いた表情をするも、〝そういった事情〟と関係ない相手だからこそ、どこか安心して話せそうだと思って聞いて貰おうと思えた。
「うん。その、有里君のこと……」
「あぁ……。うん。まぁ、あれは流石にあたしも驚いたよ」
森山も風花が湊と仲が良かった事は知っている。
むしろ、このクラスの中心人物だっただけに、その青年の周りにいる少女の事を知らない者などいないくらいだ。
ただ、だからこそ、森山も不用意に尋ねてしまったことに気まずそうにしている。
風花たちが中等部時代からの仲だというには聞いていて、そんな親しい友人がつい先日亡くなったのだ。
家族だった少女は今も学校を休んでおり、二人を除いたメンバーは揃っているが、顧問の佐久間は勿論、彼との記憶を失っているはずの美紀でさえどこか気落ちしているため、総合芸術部は活動を休止している。
その原因となった彼の死について悩んでいるとすれば、安易なことは口に出来ないと思いつつも、相談に乗る形になった以上はなにか言わねばと思ったのか森山も言葉を続けた。
「最近は学校では見なかったけど、街ではたまに見かけることもあったからさ……もう、いないんだよね。なんか、暴力事件に巻き込まれたっていうのも、あいつがそんな事でやられたりするのかって感じだし」
「うん。ただ、後からどれだけ後悔しても、取り戻せない事ってあるんだよね……。私、今回の事ですごく分かって……」
彼が死んだ時、風花も泣いた。
その時に感じた気持ちを言葉にするのは難しい。
様々な感情がごちゃ混ぜになり、そこにいる遺体を見てただ漠然と〝もういない〟と理解出来てしまって、心に空いた穴を涙で埋めるた

めに泣いたような気がしている。
今も完全に持ち直した訳ではないが、少しは他の事も考えられるだけの余裕が出来たのか、死して尚チドリを守ろうとする湊の想いを見て、風花は自分の家族について考えるようになっていた。
「そんな事考えてたら両親の事とか、考えちゃってて。考えないようにしてきたけど、このままでいいのかなって」
「親、か……ムズいね、親の話はさ。でも、風花ならダイジョブじゃん？」
森山も親と上手く行っているとは言いがたい。
そも、家にいるのが嫌で不良の溜まり場に出入りしていた口である。
自分が上手く行っていないのに偉そうにアドバイスする事など出来ないが、森山は風花ならば大丈夫だろうとどこか信頼に満ちた視線を向けてきた。
どうして彼女がそんな風に考えたのか。その理由を聞き返そうとした時、教卓のところにいた江古田が何度も呼んでも返事をしない森山の事を大声で呼んだ。
「森山、どうした。早く前へ来なさい」
「はいはいはい」
「返事は一度！　最後くらい、しっかりやらんかね」
呼ばれて立ち上がった森山が江古田の所へ向かう。
その背中を見つめていた風花は、直前に江古田が口にした〝最後くらい〟という言葉の意味を理解出来ず首を傾げる。
教卓の横に着いた森山は、そんな風花の表情を見て小さく笑い。教室全体を見渡してからどこかやる気のない軽い調子で口を開いた。
「えー、どうも。長いようで、短い間お世話になりました。転校しても皆さんのことは忘れません。ありがとうございました……って感じ？」
森山のノリの軽い挨拶に江古田は呆れているが、教室の中の反応は様々だ。
だが、友達の唐突な転校報告に、風花は驚きのあまり何も口にする

ことが出来なかった。
昼休み――屋上
朝のホームルームで森山から転校する事を告げられ、風花は詳しく話を聞こうと昼休みに屋上へやって来た。
「あんたもモノ好きだよね。せっかくイヤな女が出てくってのに惜しんだりして」
「そんな……。夏紀ちゃんが転校しちゃうなんて、私、全然知らなかった……」
「言ってどうなるものでもないっしょ。暗い話になんのもヤだしね」
購買部で買ったサンドイッチをパクつきながら、森山は悲しそうな顔をしている風花を見て苦笑している。
思えば二人の関係はおかしなものだった。
風花を苛めていた森山たちのグループは高等部入学組で、そのため風花のバックに湊がいると知らなかった。
中等部からいる者たちは、風花を弄っている森山らを怖々見ていた事だろう。
そのいじりがエスカレートしてイジメに変わった時には、彼女たちは死んだなと確信していたに違いない。
もっとも、そういった制裁は元々風花が苛められている事を隠したがっていたので、湊からは相手への忠告程度しか行なわれなかった訳だが、おかげでその後の風花と森山は友人といっていい仲になることが出来た。
「理由っても単にパパが急に倒れちゃっただけ。でも、難しい病気らしくて、すぐには治んないんだって。ウチあんまお金ないし、なんつーか、ノンビリしてらんなくて」
月光館学園は比較的良心的な価格設定ではあるが、公立に比べれば授業料の高い私立だ。
湊やチドリのように成績優秀な生徒であれば、特待生として学費免除もあるが、生憎と森山は成績も生活態度も優等生とは言い難い。
親の失業などを理由に奨学金を借りることは出来るものの、様々な条件を考えて転校する事がベストだと判断したのだろう。

話をする森山の表情に暗いものはなく、風花とのこれまでを思い出しているのか遠くを見る。
「気付いてみりゃ、あたしの世話焼くようなモノ好きは風花だけだったな。前に言ったよね。あたしとアンタは同じだって。ウチの親……あたしに興味とか全然無くてさ。あんま、家とか居たくなかったんだ」
確信が会った訳ではないが、どこか自分に似ていると感じた森山は、風花が自分の居場所について悩んでいると気付いていた。
それぞれどういった悩みがあるかは異なるだろうが、森山の親は無関心、風花の親は成績ばかりを気にして風花自身を見ていないなど、本人たちにとってはそれなりに家庭で悩む理由がある。
そのため、森山はイジメの件が終わってから風花が寮生活になったとき、自分の居場所を見つめ直すために環境を変えるのも良いだろうと思いつつ、少しばかり風花を羨む気持ちもあった。
「だから、アンタが寮に入った時、あたし、ちょっと羨ましかった。でも、風花さ。家近くて、親も普通なのに、なんで寮に入ったの？」
「え、それは……その……」
居場所について悩んでいることは気付いても、その原因が何であるかは分からない。
故に、森山は純粋にどうして寮に入ろうと思ったのか不思議に思ったのだが、風花は本来の理由も含めてどう説明すべきか考え込む。
一番の理由は成績と進路について厳しく言ってくる親に、どこか心の距離を感じるようになったからだ。
加えて、普通の女子寮ならともかく、巌戸台分寮で暮らしている者たちは、公言する事の出来ない所属理由がある。
そうして嘘は吐きたくないが、相手の安全のためにもある程度の情報は隠す必要があると悩んでいれば、真剣に悩んでいる風花を見て森山が再び苦笑した。
「言いたくなきゃいいよ。でも、話して何とかなりそうってんなら、早めに話しときな。ウチのパパ……今の様子じゃ、当分は話とか出来なさそうだしね」

言ってから森山は、「何言ってんのかね」と自嘲気味に笑う。自分から暗い話は嫌だと言ったというのに、場の空気がしんみりしてしまったからだ。

しかし、だからこそ今なら真面目な話も出来る。そう思った彼女は風花を正面から見つめて話し始めた。

「あたしね。毎日っておんなじユーウツがただ始まって終わるだけって思ってた。でもね、風花。あんただから真顔で言うけどさ。人生に二度巡ってくるモンなんて多分ないよ。今の居場所だけにすがってっと、そこだけんなるよ……今のあたしみたいにさ」

風花が取り戻せない事があると言ったが、それは時間や出会いについても同じだ。

同じように見えて、似ているように見えて、それらは似ているだけで別モノである。

今の居場所が心地よくても、いつかそこにも終わりはやってくる。

友人との関係も、いつまでも同じままではいられない。

別の学校への進学、結婚、就職など、それぞれの人生があるのだから。

自ら変わることは難しいかもしれないが、それを恐れるあまり取り残されては結局一人になる。

幸いな事に風花のまわりにはしっかりと相談出来る仲間もいるのだ。もっと周りを頼れと言って、森山は立ち上がるとフェンス越しに見える街の景色を見つめる。

「この景色も見納めか。じゃあ、あたし家の用事で来週は学校来ないから、これでお別れ」

「そんな！」

「ハハ、見送りとかやめてよ。このままでいいから。てか、そんな顔しない」

「だって……」

転校の手続きや引っ越しなど、森山にはこの後色々とやることがあるのだろう。

だが、友達にしっかりと話をせねばとこの時間まで残っていたらし

い。
　昼を食べてすぐに帰ろうとする相手を風花が泣きそうな顔で見つめていれば、森山は笑って風花の肩をパシンと音が鳴る強さで掴んだ。
「言っとくけど、あたし結構元気よ？　アンタに会えて結構変わったからね。今は、今やれることをやろうと思ってる。だから、アンタもやりたいこと探してみな」
「私のやりたいこと……」
　今の風花は友達との関係や自分の周りが変わることを恐れているだけ。
　けれど、同じ日本に住んでいる以上会えないという事はないし。森山が一人いなくなったくらいでは風花の生活は変わらないだろう。
　湊が死に、チドリが学校に来なくなり、どこか周りも元気がない事で風花の心は弱気になっている。
　それを見抜いた森山は、変わった事で自分はこう思えるようになったとアドバイスをすれば、風花は自分について考えた事など殆ど無かったとキョトンとしている。
「私、今まで人に好かれなきゃ、居場所はないんだって思ってた。だから、嫌われるのが怖くて、いっつも周りに合わせて。私、自分が本当は何をしたいかなんて、考えたことなかった」
「ハハハ、アンタらしいよ。ヤなら、シカトしときゃいいじゃん。……でも、あたし風花の事好きよ。風花自身が、自分のこと嫌いでもね」
「夏紀ちゃん……」
　風花がいくら自分を嫌っていようと、自信がなかろうと、そんな今の風花を好きだと思っている者がいる。
　それだけは覚えておいてと伝えると、今度こそ行くからと森山は呼び止めようとする風花の言葉を無視して校舎へと去って行く。
「風花、じゃあね」
　校舎に入って階段を下りていく森山の背中を見つめた風花は、やはりまだ別れたくないと追い掛けようとする。
　だが、彼女が走り出そうとした時、携帯にメール着信があった。

こんなタイミングで誰だろう。焦りつつも急ぎの用事だったら悪いからと携帯を取りだし、そこに森山夏紀の名前があって少し驚く。
どうして別れたばかりの相手からメールが着たのか。不思議に思ってメールを開けば、そこには風花のことを想った内容が書かれていた。
――〝離れてても、繋がってる〟でしょ？　いつだって話せるよ。今までありがとね。私、ちょっとだけ泣いてるw
「夏紀……ちゃん……」
そこで風花も追うのはやめようと、手に持った携帯を胸に抱き寄せながら立ち止まる。
「〝離れてても、繋がってる〟……分かったよ、夏紀ちゃん。私……この〝力〟に目覚めたのは、自分の性格のせいって思ってた。人の気持ちばっかり気にしてるから、だから〝探す力〟なんだって。でも、私にも願いがある。皆が仲良くしてるだけで、私、すごく嬉しいの。私は……それをずっと見ていたい」
ペルソナは心在り方で力や姿が変わる。
だからこそ、風花は自分のペルソナはその場から動けず、ただ探すための力しかないのだと思っていた。
変わることを恐れ、今の居場所に固執し、人の顔色ばかりを気にしている自分なのだと。
しかし、そうではない。確かにそういった部分もあるのかもしれないが、自分の力は自分の求める願いのための力なのだと風花は思うことが出来た。
「離れてても、繋がる力……私のペルソナは……〝結ぶ者〟。私が願う〝絆〟そのもの」
自分と誰かを、誰かと誰かを結ぶための力。
そのために自分の力はあるのだと、森山の言葉で思うことが出来るようになった。
離れる事、別れる事は確かに悲しい。だが、紡いだ絆が消える訳ではない。ずっと暗く沈んでいた風花は、湊の死についても少しだけ前向ける気がした。

そして、少女の心の変化は、新たな力を呼び醒ます。
風花は自分の内にあった力が変化し、〝ルキア〟から全ての能力が向上した存在、ローマ神話主神がユピテルの妻〝ユノ〟になった事を理解した。
「これが、私の新しい力……え？」
昼休みの屋上であるため姿を確認しようと呼び出したりはしない。
だが、自分の内にあるその存在に意識を向けていると、不思議な気配を感じた気がして風花は空を見上げた。
見上げた先には青空が広がっているだけ。他に何がある訳でもない。
だが、先ほどあり得ないほど遠くに微弱ながら知っている気配を感じた気がしたのだ。
気のせいだったのかと風花は首を傾げ空を見上げるのをやめると、自分も校舎に戻るため荷物をまとめるとその場を後にした。

第三百三十八話　戦う理由について

――都内・某所

十年前の事故で飛び散った十二体のシャドウ。

アルカナシャドウと呼称されるそれらも、残すところあと一体となった。

最後の一体である刑死者のアルカナシャドウを倒せば、岳羽詠一朗の妨害によって飛び散った力も全てデスへと集まり、宣告者たるシャドウの王〝デス〟が降臨する。

幾月が数々の文献を調べたところによれば、デスの降臨には七人の生贄を捧げる必要があった。

今いる桐条側のペルソナ使いは、アイギスたちを除いても高等部の二年組と三年組を合わせるだけで七人に届く。

儀式の際に必要な人数を確保すれば、残りはただ排除するだけでいい。

そう考えると今更ムキになって数を減らしに行く必要性が感じられず、幾月側のペルソナ使いらは集めたデータから敵戦力について話をしていた。

湊亡き今、特記戦力として見るべきはワイルドの力を持つ七歌だろう。

しかし、その力はあくまで幾月側のペルソナ使いらに並ぶ程度。

状況によって上手く立ち回れば一人でも数人を相手に出来るかも知れないが、同じワイルドでも湊ほどの脅威ではなく、玖美奈か理が相手をすれば十分勝てる。

「まぁ、彼女は確かに強い。だけど、強いだけだ。別に脅威とみるレベルには至っていない」

「僕か姉さんなら倒せる。他の人間でも二人なら押されるかもしれないけど、三人いれば余裕で勝てるだろうね」

「七歌ちゃんは他のメンバーより実戦慣れしてるけど、優秀なせいで指揮官もしているものね。ワイルドの能力を他の人間じゃ活かせないからでしょうけど、ジョーカーがあったところで他の手札が弱くて

はポーカーも勝てないわ」
いくら七歌が強くなろうと、他のメンバーがそれについて行けないなら足枷でしかない。
最強のカードである七歌を活かすのであれば、七歌には自由にやらせて、他の者たちは七歌を全力でサポートするように動けばいい。
七歌の次点で指揮官の適性を持つ美鶴が本来ならばそういった形を提案するべきなのだろうが、美鶴は優れた能力を持つ者が上に立つべきという思考なので、自分が七歌に代わって指揮官になろうという発想がなかった。
チームで動くのはいいが、それで個を殺していては意味がない。
同じようにチームで動きつつも、どちらかと言えば個人で好きにしているストレガとは対称的な組織。
故に、ストレガのリーダーを務めているタカヤも敵に対しての意見を口にする。
「一応、あちらもペルソナが変化する形で力は付けているようですがね。メノウ、ここ最近の敵側のデータは？」
ソファーに座り、テーブル越しに幾月らと話していたタカヤは、自分の斜め後方で椅子に座っていた茶髪の少女に声をかける。
ストレガの情報の使い手として探知とアナライズを担当している彼女は、アナライズしか使えないジンよりも敵側の情報を掴んでいる。
勿論、それらは日常の生活から離れられない者たちが相手だからこそ、変装なりで近付いて探れる事が大きいのだが、手段などどうでもいいと考えている者たちには端的に情報を伝えるだけでいい。
それが分かっているメノウは膝の上に置いていたノートパソコンから情報をまとめたデータを開いて読み上げる。
「えっと、真田、天田、荒垣、山岸の四人は多分ペルソナが進化してるね。明らかに適性の数値が上昇してるみたいだし。山岸って子に関しては、隠蔽の道具をつけた状態で観察してたのにバレそうになったから」
新しいペルソナを見せたのは真田と天田だけだが、他に荒垣と風花

も適性値が倍以上に伸びているのでペルソナが進化している可能性が高かった。
ただ、元々戦闘力を持たず強力な情報の使い手としてチームにいた風花は、ペルソナが進化した事で以前よりも感知能力が強くなっており、下手にペルソナの力で情報を探れば逆に居場所を知られてしまう恐れがある。
直接的な戦闘力を持つ者が大きく力を増すのも厄介だが、全体を把握して連携を繋ぐ役割を持つ者は指揮官に準ずる立場であるため、そんな彼女の力が増したというのは相手のチーム全体の能力が底上げされる事と同義であった。
「……へぇ、適性で苦労していた荒垣君もか。因縁のある天田君と話して何か掴んだのかな？　フフ、生徒の成長は喜ばしいことだ」
話を聞きながら幾月は眼鏡を外し、そのレンズを布で拭きながら薄く笑う。
顧問として彼らの活動をサポートしていた身として、事故の加害者と被害者が揃っている事は気にしていたのだ。
天田が復讐しようというのなら止める必要があり、逆に荒垣が自殺を考えるのなら当時は止めるつもりでいた。
今はただデスへの生贄がより力があった方が良いと考えて笑ったのだが、心の中と口から出た言葉が全く一致していない事で、それを見抜いた他の者たちは幾月に呆れた視線を送る。
そんな視線を受けても幾月は気にした様子もなく笑っており、構うだけ無駄だと判断したメノウが先ほどの話を続けた。
「で、残りのメンバーは変化がなさそうだね。ただ、寮にいないメンバーは調べが足りていないから分からないや」
「蘇生されたっちゅうチドリはどうなっとるんや？」
「チドリはタルタロスに通ってるみたいだから調べてみたけど、何か阻害効果を持つ物を装備しているのか読めなかった。流石に探知能力は向こうの方が上だろうし。ボクの力じゃあんまり冒険は出来ないよ」
幾月側のメンバーたちはチドリがタルタロスに通っている事は

知っている。
順平が彼女を心配してシャドウ狩りに付き合っていたり、他のメンバーが一緒にやって来てチドリをフォローしているようだが、チドリは学校を休んで連日タルタロスに通い詰めていた。
そうなれば自分たちの敵の動きを警戒している幾月たちも流石に動きを掴むが、今のチドリは探知能力を使っていない戦闘中であっても能力が見えなかった。
能力で阻害している様子はなく、以前に比べて周囲への警戒が疎かになっている節すらあるのだが、探ろうとすると何かの力に阻まれてしまうのだ。
その存在が現われた場面に出くわした特別課外活動部の者たちならば、今のチドリを能力の眼からも守っているのが誰なのか分かるだろう。
仮にチドリにバレる危険を冒してでもメノウが探っていれば、タナトスは触れた能力の眼を食い散らして監視者にフィードバックダメージを与えていた。
裏で生きてきたメノウらにとって、危ない橋は出来るだけ渡らないという考えが染みついているのは当然であり、今回は本人らの知らぬ所でそれがプラスに働いていたのは幸運と言える。
もっとも、完全に死んだ状態から蘇生されたチドリの適性値がどれだけ上昇したのか。
それを知りたがっていた幾月をはじめとしたメンバーにすれば、恐らく敵側で最も高い適性値に至っているであろう敵の情報が手に入らないのは痛い。
ワイルドの能力を持つ七歌より力の幅は狭いと思われるが、その分、火炎特化ならば敵味方含めた火炎使いの中で最強の攻撃力を得ているかもしれないのだ。
現時点で特別課外活動部と別行動を取っている以上、デス降臨の儀式にチドリが絡んでくる可能性は低い。
だが、自分が殺された事が切っ掛けで湊が代わりに犠牲となった事を考えれば、彼女の中でストレガらに向けた憎しみの刃が研がれてい

るかもしれない。
チドリが危険ではないと判断出来るまでは気を抜けない。その認識を全員で共有した幾月たちは、次のアルカナシャドウ戦とデスの封印が解かれた後について話し合いを続けるのだった。

１０月２４日（土）
放課後――月光館学園
授業が終わり、校内のちょっとした見回りを終えた美鶴は、生徒会の仕事をするべく生徒会室へ向かった。
事故、という事で処理された青年の死から二週間ほどが経ち、生徒たちも落ち着いてきたのか休んでいた生徒の数も減っている。
彼の死について伝えた直後は、女子生徒の五分の一が学校を休んでいたので、付き合いの深さに差はあれど彼が周りから愛されていた事が窺えた。
だが、そんな青年を戦いに巻き込んだという事実は今も美鶴の心に深く刺さっている。
適性があったのは偶然で、八雲がポートアイランドインパクトの日に港区にいたことも偶然。
そして、はぐれたシャドウを追ったアイギスと共に倒してくれたというのも、多くの偶然が重なった上での結果に過ぎない。
（しかし、もしもそれが偶然ではなかったとすれば……）
実験で集められたシャドウは時を操る神器の材料として使われる予定だった。
美鶴の祖父、桐条鴻悦がどういった経緯で時を操ろうと思ったのかは分からない。
鴻悦が使っていた書斎から見つかったという手記には、どこか未来に不安と絶望を抱いている節があったという。
歳を取るにつれ身体の自由が聞かなくなり、未来への希望を抱くことが出来なくなっていたのではないか。
シャドウなど真っ当な精神状態であれば関わろうとは思わない。
それを使った研究をするにしても、未知の存在に対する恐怖や不安

が先行し、それらの力で時を操る神器を作れるとは思わないだろう。
だとすれば、岳羽詠一朗のせいで起きたというポートアイランドインパクトも、実験の内容を誰よりも知っていた鴻悦が予定した通りの結果に終わっている可能性がある。
そう、岳羽が成果を焦った事で起きた実験の失敗などではなく、大勢の人間を巻き込むことを目的に起こされた壮大な鴻悦の自死であった可能性が。
(お祖父様がわざとあの事故を起こしたとして、それに巻き込まれて尚シャドウを討った少年……。有里のペルソナは言っていた。彼が他者を救うのはそういった存在だからと)
もしも、茨木童子たちの話が事実であれば、八雲があの場所にいてシャドウと戦ったのは偶然ではない。
大事故に巻き込まれ、救いを求めた大勢の想いと声が集まり、それらが近くにいた少年へと集まったのではないか。
アルカナシャドウが顕現するために大勢の心を食べるように、大勢の心が八雲に集まってシャドウと戦う事が出来たのだとすれば、ある意味でそれは呪いのようなものだと思えた。
自分の意思ではなく、他人の想いや願いによって存在の根幹すらも捻曲げられ、結果彼は戦い続ける道を歩まされることになるはずだった。
そう、エルゴ研にいた一人の研究員によって、彼が歩むべき道は別の人間に押しつけられる事になったのだ。その少年と同じ遺伝子を持つクローンの少年に。
(八雲も、有里もどちらも被害者だ。私は彼に、彼らに償いたかった。しかし、誰よりも戦い続けてくれた彼は死んでしまった。いや、私は何も出来ず、見殺しにする事しか出来なかった)
一人の人間を生き返らせる代償に一人の人間が命を落とした。
代償として考えるのなら等価である分納得も出来る。
しかし、本当に人の命は等価なのだろうかと美鶴は考える。
湊にとって事故以前の過去の思い出は全て他人のものであり、記憶のようでありながら記録に過ぎない。

記憶、思い出とは自分の生きてきた証だ。
ならば、そう思えるものが全て偽物だと知った時、彼はどれだけ不安に思ったことだろうかと想像するだけで胸を締め付けられる。
過去を持たぬ以上、湊にとってこの世に存在する全ての人間が他人だ。
そんな者たちのために彼が戦う必要などない。
どれだけ努力しようと、どれだけ身を粉にして戦い続けても、その行いは誰にも評価される事はなく、彼にとって得られるものなど何もなかっただろう。
(それでも、彼は吉野のために、アイギスたちのために戦い続けたのか)
チドリとの出会いについては美鶴も聞いている。
成長促進剤で無理矢理にオリジナルと同じ年齢まで成長させられた結果、目覚めた湊は自力では立てないほどの筋力しかなく、しばらく続けたリハビリの成果も少し歩けるようになった程度だった。
そんな状態でタルタロスの探索に駆り出されれば、当然、湊は途中で体力の限界を迎えてしまう。
何も出来ない少年の体力切れと敵の到来のタイミングも重なり、チドリは頑張ってシャドウを倒し、湊が無事に帰れるようにと武器を持った。
ただ、いくら力に目覚めているからといって、普通の子どもが複数のシャドウを相手に戦える訳がない。
案の定、チドリはシャドウの攻撃をくらい。怪我をして意識を失ったという。
湊がチドリのために自分の命を使おうと誓ったのはその時だろう。自分を助けたから、自分が足を引っ張ったから、少女の命が奪われようとしてしまっていると己の弱さを憎んだに違いない。
その想いを燃やし続け、湊は力を貪欲に求めながら少女たちを守り、無関係な者たちが巻き込まれる事のないようシャドウを狩り続けた。
(贖罪のため……そう言いながら、私は自分の都合を優先させてきた。

日常を犠牲にしてでも桐条の罪を償おうという決意が足りなかった）
いくら世間ずれしている美鶴でも、湊が何かしらの理由があって自分を相手しないんだと気付いていた。
桐条の人間だから、そう考えた事もあったが恐らくは違う。
もっと、もっと致命的な何かを間違えてしまったから、もしくは現在進行形で間違ってしまっているから湊は口を聞かないようにしていたと思われる。
今ではその理由を聞くことが出来なくなってしまったが、湊と出会ってから五年、それだけの時間が経ってもしっかりできていないんだなと美鶴は小さく自嘲しながら生徒会室の扉を開けた。
「あ、先輩。すみません。勝手にお邪魔してます」
扉を開けて中にはいると、何故だか生徒会役員ではないゆかりが席に座って一生懸命にノートを書いていた。
みれば学校から配布している全部活共通の活動日誌のようで、ここで書いているという事は提出期限が迫っているのかもしれない。
本来は最上級生の仕事になるのだが、夏の大会が終わると運動部は二年生への引き継ぎを始める。
二年生であるゆかりが書いているのもそういった理由からだろうと察し、時計を見て会議まで時間があると確認した美鶴はもうしばらくは大丈夫だと部屋の利用を許可する。
「部活の日誌か？　二年生の君が書いているという事は、弓道部も引き継ぎが始まっているようだな」
「ええ、まぁ、二年生で当番制って感じで書くようになってます。まだまだ時間があると思ってましたけど、三年の先輩たちも次に向けて準備をしなきゃいけないみたいですし。私たちも来年で終わりだって事を自覚していかないといけないみたいですね」
時は常に進み続ける。望もうと望むまいと時の流れは止まってはくれない。
まだまだ時間があると思っていても、時間などあっという間に過ぎてしまう。
日誌に視線を落としながら話すゆかりの横顔はどこか寂しげで、そ

れを見た美鶴はどうにか前に進もうとしているゆかりの痛々しさに何も言えなくなる。
彼の死という現実に実感が湧いてきた時、美鶴も他の女子ほどではないが涙を流した。
だが、その後でアイギスから聞いた彼の出生の秘密と、彼の生きた意味について考えさせられた時の衝撃の方が強く、美鶴の涙は悲しさよりも申し訳なさが理由だったように思える。
その点、ゆかりたちは純粋に彼の死を悼み、彼との別れを悲しく思って泣いていた。
少女たちは彼の事を友人としてだけでなく、一人の異性としても慕っていたため、最愛の人を亡くした事で空いた心の穴はまだ埋まってはいまい。
それでも今の自分に出来る事を考えて前に進もうとするのも、ある意味で心の強さなのだろうかと美鶴が考えていた時、日誌に視線を落としペンを動かしながらゆかりが話しかけてきた。
「先輩、あの、少し質問してもいいですか？」
「ん？　なんだ。書き方が分からないのか？」
「あ、いえ、こっちは大丈夫です。聞きたいのはこっちの事じゃなくて、その……先輩は何のために戦ってるんですか？」
意外な質問をぶつけられた事で美鶴は少しだけ驚き目を大きく開く。
けれど、すぐにいつもの冷静な状態に戻り、腕を組んだまま黒板の前に立って質問の意図を理解しようと頭を働かせる。
最初に思い浮かんだのは純粋に疑問に思ったからという理由。
これまで何回か戦う理由について話してきた気もするが、しっかりと腰を据えて話していたかどうかはあまり覚えていない。
残るアルカナシャドウは一体。あと一体倒せば終わりだからこそ、改めて聞いておきたかったという事は十分に考えられる。
ただ、質問してきたゆかりの雰囲気は、美鶴の戦う理由を知りたがっているようには見えない。
相手を見て美鶴の頭を過ぎったのは、今のゆかりは自分が戦う理由

を見つめなそうとしているのではないかというものだ。
ゆかりを特別課外活動部へ誘った時、ゆかりは自分が知らなきゃいけないこと、知りたいことに繋がっている気がするから、自分と大切な人のためになら協力しますと答えた。
知らなきゃいけないことは事故が起きた理由。知りたかったのは死んだ父が何を研究していたのか。それらは屋久島で見た映像と桐条武治の話で知る事が出来た。
そして、戦う理由の一端となっていた大切な人である青年はもういない。
今のゆかりには最初に美鶴に伝えた戦う理由はない。
ただ、このまま抜けようと思うほど薄情でもないからこそ、ゆかりは自分が最後まで戦い続けるための理由を求めているようだ。
律儀であると同時に難儀だなとも思って、美鶴は相手の視線がノートに向いているのを見ながら小さく苦笑しつつ質問に答えた。
「私が戦う理由は今も昔も〝贖罪〟だ。君を部に誘った時にも話したが、事故で犠牲になった人々、桐条の研究によって命を落とした子どもたちの死を無駄にしないために私は戦っている」
「私は……戦う理由なくなっちゃいました。お父さんの事も知れたし。彼も、もういないし。でも、お父さんのした事の後始末って事で戦おうとは思ってるんですけど」
言いながら動いていたペンが止まり、ゆかりは窓の外に視線を向ける。
自分なりの戦う理由はあるのだが、今のゆかりの心はそれだけでは自分を納得させられないのだろう。
再びノートに視線を落としつつ、ゆかりは持っているペンを手の中で遊ばせながら続ける。
「本当はもっと最初に考えるべきだったんでしょうね。多分、私が先輩に言ったのは戦う理由じゃなく、この街に居続けようとした理由だったんです。そもそも、化け物と戦うのなんて怖くて嫌でしたし」
「それはそうだ。戦いなんて平和な日本で暮らしていれば一生縁のないものだっただろう。好き好んで戦いたがる者など少数派だ」

彼女たちの近くにも戦いを好む者はいるが、それは敵を倒す事を目的にしているのではなく、自分の力がどこまで通用するか試したいから戦っている。
自分の可能性を知りたい事は悪い事ではない。ゆかりや美鶴も戦いとは別の形でそういった挑戦をいつか出来ればという気持ちはある。
ただ、今必要なのは自分の可能性を知りたがる好奇心ではなく、自分たちの領分を侵そうする敵をどうやって排除するかという獣でも持つ原始的な感情だ。
「なんか敵もあと一体だって思うと色々と考えちゃうんです。これが終われば平和な日常に戻れるはずなのに、あんな事があってストレガたちはまだ存在してて……」
「ふむ、彼の事は不要な犠牲だった、と言いたいのか？」
「お父さんたちの後始末に必要な犠牲なんてありませんよ。あってもそれは労力的なものであって、チドリや有里君が犠牲になって良いはずがなかったんです」
シャドウとの戦いで命を落としたならある意味で納得も出来たかもしれない。
しかし、チドリが殺され、それを救うために命という代償を払った青年の死は、影時間の存続を願う人間の手で引き起こされたものだ。
人々の平和のために戦って来たというのに、最後に敵として立ちはだかるのが対立する主張を持つ人間というは笑えない。
ゆかりの言いたいことは美鶴も十分に理解出来たが、それでも自分はまだ止まる訳にはいかないと決意を込めて答えた。
「……失われたものは戻ってこない。だが、私は彼に救われた者として、彼が願ったように影時間を終わらせたいと思っている。それが私の贖罪であり、私自身が己に課した義務だ」
「そっか。確かにまだ彼にしてあげられる事は残ってるんですね。なら、私もとりあえず頑張ってみようと思います。悩むのは終わってからでも出来るし」
「ああ。その時にはまた相談に乗ろう。遠慮なくきてくれ」

「はい。ありがとうございます」
感謝の言葉を口にしながらゆかりは立ち上がって礼をした。
美鶴に相談したことで、ゆかりも何かしら戦い続ける理由として納得出来るものが見つかったのだろう。
戦いはまだ続く。敵であるストレガたちの問題も解決していない。
それでもゆかりはすぐ傍まで迫っている最後の敵との戦いに集中し、他の敵については後で考えることにするらしい。
どれだけストレガたちが影時間の存続を願ったとしても、最後のアルカナシャドウさえ倒せば影時間が終わる。
故に、敵が妨害してくる事も十分に考えられるため、ゆかりも次の戦いに向けて気を引き締めた。
最初よりも瞳に力が宿ったゆかりの様子に美鶴も笑って返すと、ある程度終わったからとゆかりは荷物を片付けて部屋を出て行く。
部屋を出て行く後輩の後ろ姿を見送った美鶴は、どうにか落ち込む仲間の助けになれたと小さく息を吐いた。

第三百三十九話　決戦準備

１１月３日（火）
午前――厳戸台分寮・七歌私室
ついに満月の日がやって来た。
今日の夜、零時を過ぎれば最後のアルカナシャドウが影時間に現われる。
影時間の存続を望んでいるストレガたちも、恐らくは最後のアルカナシャドウを守ろうとやって来るに違いない。
だが、病院のカメラに映っていた本物の八雲はストレガの仲間なのか。
敵対している可能性は低いが、だからといって完全に仲間であると判断出来るだけの材料は揃っていない。
自室のベッドに腰掛けて考え込んでいる七歌も、八雲と長谷川沙織がストレガのメンバーとして現われれば本当に自分は戦えるのかと悩んでいた。
（沙織はともかく八雲君はどっちなんだろう。今の場所に固執するようになっているのか、それこそが正義だと騙されているのか……）
ただ相手を敵として戦うなら七歌でも出来る。
沙織にも事情はあるのだろうが、問答無用に襲いかかってきた馬鹿が相手なら、七歌は友人だろうと心を痛めず殴れる人間だ。
自分だって相手にはペルソナや影時間について説明していなかったのだから、どうして秘密にしていたんだと責めるつもりは勿論ない。
けれど、その戦いの規模によっては最悪戦って倒すのではなく、全力を振り絞っての殺し合いに発展しかねない。
殺す事に一切の躊躇いを持っていない人間を無力化するのは難しい。
湊のように様々な技術を習得し、それらを十全に使えた上で相手よりも強ければ可能なのだろうが、ペルソナに関しては完全に負けている状況だ。

前回のことで長谷川と八雲に人殺しに対しての抵抗感がないことは理解している。
ストレガもそれは同じで、逆に七歌たちの中に人を殺せるメンバーはいない。
常に最悪を想定して準備しろとは言うものの、過去の大人たちの失態を尻拭いしてやっている子どもに、自分の手を汚す覚悟をしろとまでは流石に言えない。
殺されそうになって逆に相手を殺めてしまった時を想定し、メンバーたちのメンタルケアの準備くらいは出来るだろうが、桐条グループも子どもたちが人と殺し合う事になるなど思ってもみなかっただろう。
(ま、それでも誰かが泥を被るって言うなら、私がやるしかないよね。友達と親族が相手ならさ)
七歌の個人的な感情としては、ストレガたちに関してはお前たちの責任だろうと桐条グループに丸投げしたい。
しかし、桐条グループの大人たちはペルソナを使った影時間の戦いにおいて無力。
過去に湊から聞いた話によれば、エルゴ研の人間たちは逃げ出そうとする被験体たちを黄昏の羽根を搭載した対シャドウ銃で撃ち殺したらしい。
それを使えば適性はあれどペルソナを持たない人間でもペルソナ使いを害する事は出来る。
全ては桐条の罪。そう言うのであれば、自分たちの手を汚してみせろと湊が怒りを見せていたというのも今では納得出来る。
事故を起こしたシャドウの研究、実際にそれに関わっていた人間はもう桐条武治しかいないとは言うが、中心的な研究に関わっていた人間を除けばまだ生きている者はいるのだ。
いっそ、そういった人間に特攻でもさせれば良いのにと、仲間たちが人を殺める事になるかもしれないことを考えた七歌は荒んだ心の内でぼんやりと思った。

影時間――巌戸台分寮・作戦室
時間は夜になり、影時間がやってきた。
作戦室には特別課外活動部のメンバーと栗原、そしてチドリとラビリスの姿がある
ただし、そこにアイギスとコロマルの姿はない。
チドリは湊の願いを叶えようとシャドウ討伐のために再び立ち上がったが、アイギスは最後のアルカナシャドウとの戦いだと聞いても心が揺れなかったらしい。
もし、そのタイミングを狙ってストレガの別働隊がアイギスを襲撃すれば危険だからと、ラビリスは今回もコロマルだけは護衛に残してきた。
本当ならばラビリスも湊の死を悼んでいたいに違いない。
家族として過してきたチドリほどではないにしろ、ラビリスも三年近く一緒に暮らしていたのだ。
他の者たちよりも付き合いの深さでは勝っている分、チドリやアイギスのようになってもおかしくない。
そうならないのは、彼女には自分以上に傷ついている妹がいたこと、そして、彼と交わした学校へ通うという約束が残っていたからであった。
今も彼女は他の者と同じように真剣な表情で座っている。
最後のアルカナシャドウを倒し、影時間の戦いを終わらせることだけを考えているのだろう。
集まった子どもたちの顔を見ていた栗原は、彼女たちが自分以上に覚悟が決まっている事を理解して小さく溜息を吐いた。
「巻き込んでおいて悪いがこれで最後だ。敵の妨害も十分に考えられる。むしろ、ここにきて来ないって事はないだろう」
どのタイミングでストレガたちがやって来るのか分からない。
戦いが完全に始まってから背中を狙ってくるのか、そんな事をせずとも勝てるからと正面からやって来るのか。
ただ、どちらのタイミングで来るかは分からなくとも、来ないという事だけはないだろうと全員が確信を持っていた。

「……場所が分かりました。シャドウはムーンライトブリッジにいます。そして、ストレガたちもいるようです」
進化したユノの力で索敵していた風花の言葉を聞き、何故アルカナシャドウの傍にいてストレガたちは狙われていないのかとメンバーは疑問に思う。
不思議には思いつつも既に現場にいるなら無駄に警戒する必要がない分ありがたい。
既にやる気に満ちた表情をしている真田も、右掌に逆の左拳をぶつけてから口を開いた。
「向こうも来るというのなら全力で叩き潰すまでだ」
「仇討ちなんて柄じゃねぇがこのままで済ます訳にもいかねぇしな」
真田の言葉に荒垣も頷いて静かに答える。
あの日、天田と和解したときに彼のペルソナも新たな姿に変わっていた。
真田のペルソナが進化したのを見て、荒垣自身は自分の犯した罪に対する戒めとして、その事を一生忘れないようにペルソナが変化する事を心の中で拒んでいた。
しかし、一時湊に預けていたためか、カストールは僅かに存在を弄られていて天田との和解を機に変化してしまった。
彼が新たに得たペルソナは法王〝アルケイデス〟。
獣の皮を使った簡素な腰巻きとマント、そして巨大な棍棒を持った筋骨隆々な男性型のペルソナだ。
荒垣が仲間にそれを報告すると、アルケイデスという名に覚えがなかったのかメンバーたちはどこの神だと首を傾げたが、調べてみればそれはギリシア神話最強と呼ばれるヘラクレスの幼名だった。
ヘラクレスは十二の試練を越えることで神の一柱と認められた存在。
荒垣もまた彼にとって大きな試練を乗り越えた事でその力に目覚めたようだ。
おかげで風花も入れればメンバーには進化したペルソナを持つ者が五人になった。

真田、天田、荒垣、風花、チドリ。風花は戦わないにしても、以前よりも速く深く情報を探ることが出来るようになっている。
最初からストレガたちと戦える力を持っている七歌とラビリスも合わせれば、ゆかりと順平と美鶴が援護しか出来なかったとしても十分に戦えるだろう。
ただ、それはあくまで敵がストレガだけだった場合だ。
やる気を出している男子たちとは対称的に、やや不安そうな表情の美鶴が風花に尋ねた。
「山岸、ストレガの人数は分かるか？」
「はい。えっと、三人です。女子がいないみたいですね」
美鶴たちが知るストレガのメンバーは男女三人ずつの計六人。
八雲と玖美奈を入れれば八人となり、特別課外活動部との人数差もほとんど無視出来るレベルにはなる。
ただ、八雲たちに加えて女子の反応もなかったことで、相手側の出方が余計に分からなくなった。
「ふむ、八雲たちに加えて女子もいないのか」
「けど、乱入してきた二人って直前まで反応なかったんですよね？」
ストレガメンバーの内、数人がいないなら分かれて動いていると思える。
しかし、類い希な身体能力を持っているマリアだけでなく女子全員が八雲たちと行動しているのかと美鶴が考えていれば、ゆかりが前回の事を思い出しながら尋ねた。
超遠距離からの狙撃をしてきた八雲はともかく、アイギスに襲いかかった玖美奈は姿が見えるまで一切反応がなかった。
湊のように反応を消していたのかと最初は思われたが、姿が見えれば玖美奈の反応は一定距離まで離れるまでは追うことが出来た。
相手が湊であれば姿が見えていても反応は消せているので、同系統の能力にしても湊よりも弱く、別の能力であれば一度発見してしまえばある程度は追える事になる。
ただ、その見つけるまで敵の奇襲に警戒しなければならないため、どうしたものかと考えていれば、ユノを消して席に戻ってきた風花が

全員に向けて話しかけた。
「もしも、敵がステルス系の能力を持っていても近くにいれば気付けると思います。ユノに進化してから小さな存在の揺らぎとかも分かるようになったので」
「なるほど、頼もしいな。遠距離からの攻撃手は分かるか？」
「距離にもよりますが、ムーンライトブリッジは海風の影響を受けます。地形データをいくら正確に把握していてもキロ単位での狙撃は不可能だと思います」
前回の戦いの場は周囲に高い建物のない街中だった。
それ故に一定の高さがある場所からであれば風も読みやすく、障害物が少ない事から狙い通りに当てることも可能だった。
しかし、ムーンライトブリッジは海の上を通っており、海面からの高さもかなりあるので風が強い上に読みづらい。
近くに高い建物もない訳ではないが、橋の上を狙うには難しい角度という事もあって前回のような狙撃は環境データを正確に入力した機械であっても不可能だ。
それ故、八雲と玖美奈を含めた相手の主戦力が後から合流するにしても、狙撃に関しては警戒する必要がないと風花は力強く告げた。
前回の戦いから最も警戒していた狙撃がないと分かると、他の者たちも僅かに安心した表情になる。
敵の増援は警戒するに越したことはないけれど、そういう事ならば必要以上に警戒する事はない。
風花の索敵と前衛組以外のメンバーのフォローで対応、厳しいようなら隊列を変えて動けば良い。
もっとも、ストレガの相手はあくまでオマケ。妨害されては面倒だから抑えるに過ぎない。
メンバーたちの本当の相手は最後のアルカナシャドウ、刑死者のアルカナを持つ大型シャドウだ。
三人のストレガの相手をしながら、これまでで最強のアルカナシャドウを相手しなければならない。
ここに敵の増援の可能性があるというのだから非常に厄介だ。

既にやる気を見せている真田たちはストレガの相手をしたがっている。
前回は天田と荒垣の因縁を利用し、上手く仲間から分断された二人を亡き者にしようとした。
その前には真田の妹である美紀を狙い。後少しでも湊による治療が遅れていれば彼女は死んでいた。
本人たちにとってそれだけの恨みがある上に、湊の遺体を持ち去った実行犯としてストレガの男たちと八雲がカメラに映っていた。
つまり、ストレガと八雲たちは繋がっており、チドリを一度は殺害し、蘇生の代償として命を落とした湊を間接的に殺してどこかへと遺体を持ち去ったという事になる。
かつては真田も湊に対して一方的に嫉妬からくる恨みを覚えていたりもしたが、美紀を助けてもらった事で彼に多大な恩を感じていた。
いつかは妹を助けてもらった恩を返そうと、何かあれば自分の全てを懸けて恩に報いようと思っていた矢先に湊が死んだ。
チドリを蘇生させた代償だとは聞いているが、そうさせたのは八雲と仲間であるストレガだ。
失ったものは戻らない。ただ、このまま影時間を消して終わりというわけにはいかない。
メンバーの割り振りについて考えている七歌に、本来ならば褒められた事ではないが、真田は自分の素直な気持ち先に伝えておく事にした。
「九頭龍、俺はストレガとやらせてくれ。勿論、アルカナシャドウの弱点によってはそっちを担当するが、最後にあいつらに一発決めなければ気が済まない」
「気持ちは分かりますけど、あんまり感情的になられると困りますよ。先輩たちの様子だと荒垣先輩と天田君もそっち希望でしょ？　ペルソナ進化した三人が固まるのはバランス的もちょっとね」
進化した三人のペルソナはストレガと十分に戦えるどころか、単体の力で見れば上回っているようにすら見える。

そうなると誰かしらはストレガの抑えに回って貰う必要があるものの、全員がそっちに行ってはアルカナシャドウや敵の増援が来た時に困るかも知れない。
ラビリスは進化ペルソナと同等の強さを持っているし、チドリのペルソナが進化している事も聞いている。
ただ、それでもやはり一人はアルカナシャドウの方に欲しいと七歌が伝えれば、普段は全体を見て話をする荒垣が珍しく個人の事情を優先させて欲しいと真田に同調した。
「逆に言えば俺らだけでストレガを抑えてみせるって事だ。俺のアルケイデスはカストールよりも強い。けど、預けてた間にあいつの力を分け与えられてたのか完全に制御出来る。絶対に何があってもあの三人に邪魔はさせねぇ」
「僕もお願いします。あいつらは多分、皆さんの命を狙ってきます。影時間が終わるならって自棄になる可能性もあるかもしれません。そんなやつらを殺さずに倒そうってなったら総力より個人の実力の方が重要だと思うんです」
真剣に話す荒垣と天田の言い分も分かる。
前回も的が厄介だと分かったからこそ、単騎でも相手が出来る湊にアルカナシャドウを一体任せたのだ。
今回も他のメンバー全員で戦えるよう、出来る限り少人数でストレガを抑えてくれた方がありがたいのは確かだ。
となると、やはり天田たちの言い分はあながち無視出来ないのだが、ここで順平が他の者たちの話を黙って聞いているチドリに声をかけた。
「つか、チドリはどうするんだ？　あいつらと戦うのか、当初の予定通りシャドウと戦うのでいいのかさ」
「……シャドウを倒すわ。八雲の偽物が出たら戦うかもしれないけど」
「そっか」
少女の言葉に順平はどこか安心した様子で短く返す。
チドリにとっては湊こそが八雲であった。

アイギスから話を聞いた者はどちらが本物でクローンなのかも聞いているが、彼女にとってはそんな事はどうでもいいらしい。
湊が果たせなかった影時間の解決とシャドウの討伐。今の彼女が活動している理由はそこなので、邪魔をするのであれば戦いもするが、怨敵である敵側の八雲が現われない限りはストレガは後回しにするということだった。
話を聞いていた他の者たちは、〝八雲の偽物〟という単語に少し困った表情になっていたが、メーディアからさらに魔法特化型へと進化したヘカテーの力を借りられるのはありがたい。
七歌は逆に玖美奈のフレイに対抗しようと、近接向けのペルソナを強化してきたのでバランスがいい。
そうして、チドリがシャドウとの戦いを優先してくれると言った事もあり、七歌が真田たちの要望を聞き入れると、それぞれが準備を整え決戦の場所へと出発した。

第三百四十話　最後のアルカナシャドウ

影時間――ムーンライトブリッジ
暗い緑色の夜空に浮かび、自ら光を放つ巨大な満月。
その光に照らされた橋の上を、カットラスを手に持った少年が駆け抜けて正面にいる相手へ斬りかかる。
「ハハッ！　ミナトが抜けたテメェらに何が出来ンだよ?!」
「お前たちを退け、アルカナシャドウを倒し、影時間を終わらせる事が出来るっ」
斜めに振り下ろされた刃を躱し、一歩踏み込みながら真田がナックルをはめた拳で殴りかかる。
敵であるカズキは身体を捻ることで避けたが、そのまま数歩下がって腰の召喚器を抜いた。
「力は使ってこそだろうがっ！　きやがれ、モーモス！」
桐条が行なった違法な人体実験によって無理矢理に力を発現させられた。
今でも劇薬である制御剤を手放すことが出来ず、彼らの命はそう遠くない内に失われる。
だが、だからこそ彼らは今この瞬間を、自分たちが生きているという実感を得るため好きに生きようとする。
復讐代行の依頼で他者の命を奪うことや、シャドウとの戦いはカズキにとって生を感じられる重要なものだ。
仲間であるタカヤたちも似たような理由で生を実感するため、何があってもペルソナ能力を手放すつもりはないと言っていた。
故に、影時間を終わらせはしない。そのために影時間を終わらせようとする真田たちを殺してでも止めようと、呼び出された大鎌を持った男性型のペルソナが真田へと迫る。
「さがれアキ！　こい、アルケイデス！」
敵のペルソナが迫ってくると、近くで様子を見ていた荒垣が前線に出ながらペルソナを呼び出した。
渦巻く水色の欠片の中から飛び出したのは、毛皮を羽織りその手に

無骨な棍棒を持った巌のような巨人。
新たなペルソナ法王〝アルケイデス〟は、現われるなり大地を踏み締め弾丸のように加速すると、モーモスの持っている大鎌にぶつけるため棍棒を横薙ぎに振り抜く。
ガンッ、と鈍い音を立ててぶつかり合う武器。共に損傷はないようだが、腕力で勝るアルケイデスの一撃でモーモスは武器ごと後退させられた。
それを見て忌々しそうにカズキが荒垣を睨めば、カズキの頭上を黒い翼を持つ不気味な人型のペルソナが飛んでゆく。
「ヒュプノス、マハガルダイン！」
制空権を取ったタカヤのヒュプノスは、上空から広範囲に向けて暴風を放つ。
暴れる風に身体をすくい上げられれば、橋から落ちて数十メートル下の海面に叩き付けられかねない。
それは避けねばと荒垣は真田と天田の許まで下がり、自分たちの前にアルケイデスを防御姿勢で立たせる事で風から身を守った。
「縮こまっとって何が出来んねん！　死にさらせや！」
三人がアルケイデスの影で風に耐えていれば、風が弱まりかけたタイミングでジンが手榴弾を投げる。
彼の投げたそれは用途によって使い分けるため、既製品に手を加えたカスタム品だ。
しかし、その形状からどういったタイプの手榴弾なのかは判別することが出来る。
アルケイデスの横を通り過ぎようとしている手榴弾の形状はほぼ球体。通称アップルボムと呼ばれるものだ。
アップルボムの特徴は内蔵された金属片を爆発で飛ばす事。破片を飛ばすだけあって爆発で負傷を狙うよりも高い殺傷力があり、半径五メートルが致死範囲とされている。
そんなものが傍で爆発すれば、学校の制服という戦闘において欠片も防御力を発揮しない装備しか身に着けていない荒垣たちは無事では済まない。

「アルケイデス、そのままヒートウェイブだ！」
だが、荒垣たちもただ風から身を守っていた訳ではない。
このタイミングで別の攻撃をされる可能性など最初から気付いている。
故に、ジンの投げた手榴弾がアルケイデスの横を通り過ぎようとしたタイミングで、アルケイデスは衝撃波を放って手榴弾を遠くへ弾き飛ばした。
飛ばされた手榴弾が遠くで爆発したタイミングで、ペルソナの影にいた天田が飛び出て召喚器の引き金を引く。
「カーラ・ネミ！」
橙色をした金属の身体を持つカーラ・ネミは、呼び出されると両腕を前に突き出し錐状のエネルギーを放つ。
貫通属性のマッドアサルトは手榴弾を投げたばかりのジンへと迫り、思わぬ反撃に敵も苦々しげに回避を取ろうとする。
「カエサル、マハジオンガ！」
だが、その瞬間に真田が発動の速い中級広域魔法を放って敵の回避を妨害した。
電撃を喰らいそうになったジンが僅かに身構えれば、そのほんの少しの遅れが明暗を分け、次の瞬間にはカーラ・ネミの放った攻撃をくらって大きく吹き飛んだ。
「調子に乗ってンじゃねエぞ、三下ァァァっ!!」
仲間であるジンが吹き飛ばされ道路を転がると、カズキが激昂した様子で剣を持ち迫ってきた。
敵方に三体のペルソナが呼び出されている状態で、いくら頭に血が昇っていようが生身で来るなど命知らずとしか言いようがない。
だが、相手は仮にも裏社会で手を汚してきた者たちだ。右手に剣を持ったまま左手で拳銃を抜き、走りながら真田たちに向けて銃弾を放つ。
ペルソナやシャドウという異能を相手に戦う事には慣れてきていたが、拳銃という現実世界での兵器に対する耐性はあまりない。
アイギスや湊が使っていたのを見ていたが、自分に銃を向けられ弾

丸が迫ってくるとなると感覚も違う。
加えて、真田たちは死を意識するために拳銃型の召喚器を使っている。
おかげで彼らにとって拳銃は死を意識しやすいものになっており、銃弾が自分たちに当たるかどうかに関係なく、先ほどのジンのように無意識に身体が反応して動きが鈍った。
「ヒュプノス、マハブフーラ！」
そこへ上空からヒュプノスが氷の槍を大量に降らせる。
「ぐっ」
「クソッ」
飛来した氷の槍は真田たちの身体を切りつけ、傷は浅くとも腕や足から血を流させた。
ダメージから集中が途切れたのか、召喚者たちに迫っていた氷の槍をある程度防いだところでペルソナも消える。
すると、そのタイミングで迫っていたカズキが到着し、走った勢いのままカットラスで天田に斬りかかる。
「おらァ！」
「ぐあっ!?」
咄嗟に槍の柄で攻撃を受けるも、体格差と筋力の差で受けきれず吹き飛ばされる。
背中から倒れるように転がった天田に、カズキは追撃として蹴りを放とうとするも、風切り音がした事で後退すれば先ほどまでいた場所を荒垣の斧が通り過ぎた。
お互いにカバー出来る距離いたことでどうにか助けられたが、やはりというべきか相手の方が人間相手に戦い慣れている。
自分たちは相手を殺せないが、敵は手段を選んでこない。
以前の満月の日に、湊が真田たちを相手に簡単に攻撃をいなしていたが、自分たちが湊と同じ立場に立ってみて初めてその難しさを理解出来た。
横目で天田が立ち上がるのを見た荒垣は、相手側もジンが復活しているのを見て、これはまだまだ長引きそうだと改めて集中し直す。

ただ、相手は裏の人間だ。アルカナシャドウの討伐が止められないと分かれば、最後は道連れに橋を落とそうとしてくるかもしれない。
何としてでもストレガたちを抑えてみせるつもりだが、出来るだけ早く終わらせてくれと荒垣は離れた場所で戦う仲間に対して祈った。
＊＊＊
加速器を展開したラビリスの戦斧が一体の石像を捉える。
「はぁぁぁっ!!」
戦斧に押されて地面をガリガリと削りながら、石像は元いた場所から離される。
ラビリスが敵の一体を分断することに成功すると、残り二体の石像に順平と七歌がそれぞれ向かう。
「ヘルメス!」
呼び出された勢いのまま上空へと向かうと、そこから急降下して足の金属の刃で石像を切りつける。
表面は削ることが出来たが、ステータスの問題かダメージの通りが悪い。
けれど、出来ない事を今更嘆いてもしょうがないと、順平は切り替えるとヘルメスに距離を取らせて上空から炎弾をいくつも放つ。
ヘルメスの魔法は火炎属性。それなら順平はフレンドリーファイアを喰らおうとダメージはない。
それを利用して大剣を持って相手まで近付くと、相手が炎弾で動きを止めている隙を狙い。上段から構えて一気に振り落として深い傷をつける。
「くらいやがれ!」
ヘルメスの最初の一撃に加え、順平の大剣による一撃は相手にそれなりのダメージを与えたのか、石像の傷口からは黒い靄が漏れ出している。
これならあと少しで倒せそうだと思いながら後退し、順平が敵から距離を取ったのを見ていた美鶴がペンテシレアに貫通力に特化させたブフーラを撃たせた。
「これで止めだ!」

ヒュンッ、と空気を切り裂きながら進む氷の槍は寸分違わず敵の傷口へと突き刺さる。
白い石像はまるで生き物のようにもがきながら倒れると、最後には弾けるように黒い靄になって消滅した。
敵として現われた石像は全部で三体。順平と美鶴によって倒された事で、これで残るは七歌とラビリスがそれぞれ相手をしている二体だけだ。
自分たちが相手していた敵が倒れた事で、順平と美鶴はそれぞれ他の者に加勢するか状況を見て考える。
七歌は薙刀を持って敵に接近すると、裏拳の要領で身体を一回転させて遠心力を利用した横薙ぎを放つ。
相手はシャドウの亜種だが石像でもある。その分、身体が硬いのかダメージは軽いものの、バランスを崩して道路に倒れた。
その隙を狙って召喚器を抜いた七歌は、集中してから引き金を引いてペルソナを呼び出す。
「ジークフリード、剛殺斬!」
《ウオオオオオオッ!!》
近接戦闘を強化するべく作った新たなペルソナ、剛毅〝ジークフリード〟。
赤い鎧を身に纏った龍殺しの戦士は、剣を身体の横で寝かせたまま走り、倒れた敵の許まで辿り着くと切り上げの要領で一撃をくわえる。
その時、切りながら引っ張る形になったのか、ジークフリードが剣を振り抜くと倒れていた石像は傷口から黒い靄を漏らしながらズザザと音をさせて道路を滑ってゆく。
そして、滑っていった石像の動きが止まったところへ、真上から風の塊が降ってきて敵を粉々に砕いた。
粉々に砕けて消えていく石像の真上には、様子を見て位置取りを確認していたゆかりのイオがいた。
普段から共に行動する事が多いだけに、息を合わせるのも簡単だったようで見事に連続攻撃を決めることが出来たようだ。

石像へ向かって行った順平と七歌がそれぞれ仲間の手助けを受けながら敵を倒せば、身体から青い光を放っていたラビリスも戦斧で石像を破壊していた。
他の者たちがペルソナを使って仲間と一緒に倒した相手を、最新型の兵器を利用しながらも単独で倒す事が出来る。
これが今の七歌たちとラビリスたちの実力の差だが、三体の石像が倒された今、メンバーたちの表情は先ほどよりも緊張感が漂っていた。
そこへ全員に向かって風花の声が届く。
「敵を支えていた不思議な力の消滅を確認！　アルカナシャドウ、落ちてきます！」
風花がそう言い終わると同時に、メンバーたちが見つめる先に大きなシャドウが一体降ってきた。
砂埃を巻き上げながら降ってきたシャドウは、これまで見てきたどのアルカナシャドウとも違っていてやや不気味だった。
分類するならば人型という事になるのだろう。しかし、その身体は飛ぶためなのかプロペラがついた〝大〟の字型の鉄骨に張り付けにされている。
ただし、ベルトやロープで固定されている訳ではなく、人で言うところの皮膚を杭で縫い付けているのだ。
無論、シャドウなので人間のように血が出ることはなく、それどころか皮膚がゴムのように伸びていて、どことなくサーカスの演目にあるボディ・サスペンションに近い物になっている。
元がそういった形であるため相応のタフさはあるのだろう。
だからこそ、敵が三体の石像を出して結界で守られた時から、一人だけ集中して攻撃の威力を高めている者がいた。
最後列、そこで白い召喚器を喉元に当てていたチドリは、溜めていた力を解放するように引き金を引いた。
「ヘカテー！」
ローブに身に纏ったヘカテーが杖を構えたままチドリの頭上に現われる。

杖の先には橋の上を照らすほどの明るさを持った小さな球体の炎が既に集まっており、攻撃を放つ前だというのに影時間特有のジメッとした空気が一瞬にして消えるほどの熱が辺りを包む。
死を経験したチドリは強くなった。この場にいる誰よりも、この場にいる全員を足しても上回るほどの適性値を得ることが出来た。
しかし、今から放つ魔法はそんなチドリであっても日に二度は撃てぬもの。
それは神話に語られる神々を屠った巨人の一撃。世界を焼き尽くし、神々すらも殺してみせた終末の火。
この一撃で今日まで続いた戦いを終わらせる。その意思を込めて少女は放つ。
「終わらせなさい！　ラグナロク！」
少女の命令を受けたヘカテーは道路に降り立ち、両手で杖を敵に向けるとその力を解放した。
放たれた黄色い炎は一条の光となってアルカナシャドウを飲み込む。
街への被害を考慮し、射線は空へと向くよう少しだけ上に向けておいたが、シャドウを飲み込み遙か遠くに見える雲を貫いた一撃は道路の一部を融解させていた。
かつての青年の力を思わせるその光景を見た者たちは、思わず戦っていた手を止め、少女とその新たなペルソナをただ見つめた。
攻撃が治まり煙が晴れれば、そこには赤く溶けた道路だけが残っており、アルカナシャドウの姿はどこにもなかった。
＊＊＊
アルカナシャドウが消滅し、シャドウと戦っていたメンバーたちが真田たちの周りに集まってくれば、これ以上の戦闘は無意味だと悟ったのか銃をベルトに差し込んでタカヤが口を開いた。
「……ここまでのようですね。ジン、カズキ、撤退します」
チドリの新たなペルソナの力はタカヤたちの想定を超えていた。
死に近付くことで適性値が上昇することは聞いていたが、完全に死んだ状態から蘇生された者などこれまで存在しなかった。

それだけにチドリの能力がどれほど上昇しているか幾月たちも気にしていたのだが、先ほどの攻撃を見れば湊や理に匹敵するレベルになっていることは分かる。
どの程度のチャージが必要なのか、連発は可能なのかという問題は残っているものの、元々タカヤたちと同レベルの力を持っていたと知っているだけに、一度の死で上昇する力の量が桁違いなのが分かったのだろう。
他の二人もタカヤの決定に異論はないのか警戒したまま橋の欄干に近付いて行く。
一体何をするのかと思って見ていれば、三人は走った勢いで欄干に飛び乗るとそこから身を投げた。
「嘘だろっ!?」
何を考えているんだと順平や他の者たちが欄干に近付く。
すると、遙か下の方で彼ら三人を巨大なペルソナが回収して飛び去っていった。
どうして男たちしかいなかったのかと思っていたが、どうやら妨害に失敗した場合の保険として待機していたようだ。
これで彼らが海に落ちていれば、後味が悪い結果に終わっていたところなので、そうならなくて済んだことに安堵の息を吐く。
そして、敵が去って行った方角を見ていた者たちは、敵の姿が見えなくなったところで無事に敵を倒せたことを喜び合った。
「何とか足止めをする事が出来たな。贅沢を言えばあいつらを倒してやりたいところだったが」
「気持ちは分かるが裏の人間を相手にしてたんだ。十分よくやったと言えるだろ」
真田と荒垣、そして天田は身体のいたるところに傷を負っていたが、どれもそれほど深刻な怪我ではないようでゆかりの回復魔法ですぐに塞がっている。
殺す事を厭わない敵を相手にその程度の怪我で済み、最後まで仲間の邪魔をさせなかった事は十分褒められるべき成果だ。
真田に答える荒垣の言葉に美鶴も頷き、作戦室で言っていた通りに

自分の役目を果たした彼らを他の者も賞賛した。
続けて、アルカナシャドウとの戦いに話題が移り、最後の一撃は本当にすごかったとゆかりがチドリに話しかけた。
「チドリ、最後の魔法すごかったね。本当に、これで戦いを終わらせるんだって気持ちが伝わってきたよ」
「……そうね。これで一つ、八雲の願いを叶えられたかしら」
忌まわしい事故から十年。長きに亘る影時間の戦いはついに終わりを迎えた。
実感はない。未だに影時間が消えていないのだから当然かもしれないが、美鶴がラボから聞いた話ではこの影時間が終われば二度と影時間は現われないらしい。
美鶴や七歌、チドリと言ったメンバーにすれば、およそ十年前からある事が当然という感覚だっただけにしばらくは違和感が抜けないかもしれない。
それでも一つのことをやり遂げた事は間違いない。お互いに今日の戦いとこれまでの戦いを労いながら帰路へとつこうとする。
その時、チドリは自分の中から何かが消えるのを感じた。
――――じゃあね。僕は先に彼の所へ行くよ。
頭の中にそんな声が響き、辺りを見渡すが戦闘に参加したメンバー以外の姿はない。
ただ、消えたのが何であるかは分かったので、これでもうシャドウとの接点もなくなるのだろうと思いながら、チドリは他の者たちと一緒に栗原の待つ寮へと向かった。

第三百四十一話　戦いを終えて

――都内・某所

最後のアルカナシャドウである刑死者〝ハングドマン〟が倒された後、撤退したタカヤたちは反応を隠蔽する腕輪をつけて風花の探知から逃れて研究所に戻ってきた。

闇の皇子の降臨に必要な生贄は七人。上手く行けば数人ほど間引いてくる予定だったが、ペルソナが進化した者たちが思っていたよりも強くなっていた事で、予定が狂ってしまい人数を減らすことが出来なかった。

けれど、戻ってきたタカヤたちは悲観的な顔はしていない。

カズキはどことなく消化不良のようで不貞腐れているが、全力を出し切った訳ではないこともあり、一度の撤退くらいで癇癪を起こしたりはしないようだ。

「やあ、お疲れさま。向こうの戦力は測れたかい？」

戻ってきたタカヤたちを労うように笑顔の幾月が理たちと共に出迎える。

今回の出撃はストレガのみで、さらに言えば索敵を主に担当しているメノウとペルソナが巨大なスミレは、探知から逃れるために反応を隠蔽する腕輪をつけて近くに待機していた。

おかげで作戦の失敗を悟ると同時に撤退したタカヤたちも無事に戻って来られた訳だが、相手にアルカナシャドウを倒させまいと妨害するフリをしていた彼らは、敵を間引くこととペルソナが進化した相手の戦力を測ることを目的に動いていた。

まさかチドリまでアルカナシャドウの討伐に参加して来るとは思っていなかったものの、死を経験してどれほど力が増しているのか気になっていただけに、アルカナシャドウとの戦闘が見られたことは収穫だった。

「チドリの成長が恐ろしかったですね。ペルソナも進化していたようですし、ハングドマンを消し去った一撃はミナトのそれに匹敵していたと思います」

顎に右手を当てながら、タカヤは橋の上で見た一撃を思い出して小さく笑みを浮かべる。
チドリの新たなペルソナの総合的な強さは分からない。なにせ相手は一撃しか放っていないのだから。
ただ、その一撃でほとんどダメージを与えていなかったハングドマンを消し去った。
刑死者のシャドウは〝死〟を意味する〝死神〟のアルカナに最も近付いている存在。
それ故に強力であり、総合的な強さでは他のアルカナのシャドウよりも上を行っている。
デス復活の要である最後のアルカナシャドウともなれば、その強さはモナドの最下層やタルタロスの最上層クラスだったはずだ。
他の者たちが時間を稼いで力を溜めたのだとしても、湊のペルソナと同等レベルの一撃を放てるという事実は敵戦力として見過ごせないだろう。
実際に戦場でその力を見たタカヤがそう話せば、幾月も興味を持ったのか、近場に待機して見ていた探知能力持ちのメノウはどのように感じたのか視線で尋ねた。
「正直、ボクからは何とも。向こうの探知型の力が上がってたから、隠蔽の腕輪をつけてても下手に動くとバレるんだよ。一応、撤退時にアナライズしてきたけどやっぱり何かの力に邪魔されてチドリには使えなかったしね」
現在、ストレガたちが外で活動出来ているのは、気配隠蔽の腕輪の恩恵を受けているところが大きい。
黄昏の羽根やシャドウを使った研究の中で幾月が見つけた物で、それを付けているだけでペルソナを使った探知の網をすり抜け、シャドウからも襲われづらくなるという効果がある。
以前までなら付けているだけで十分だったのだが、風花のペルソナが進化してからはほんの僅かな存在の違和感を見抜けるようになったらしく、一定以上の距離を取るかそれほど離れられないのであれば動かない必要がある。

少なくとも一キロ以内なら動かずともバレる。それが分かっている状態で下手に探ることなど出来るはずもなく、メノウに出来たのは撤退時にアナライズを掛けることだけであった。
もっとも、そのアナライズも何かの力に守られているチドリには効かなかった訳だが、一応分かった事もあると彼女は続ける。
「ただ、何となくチドリを守っている力の種類は分かってきたよ」
「ほう。君たちに与えた隠蔽の腕輪のような道具の力ではないのかい？」
「そういうものじゃないね。種類としてはペルソナとかシャドウに近いと思う。その力に覆われてるからチドリ自身の力は見えないみたい」
ストレガや理たちが使っている腕輪も、本人に対して掛けられたアナライズを阻害する力がある。
隠蔽の副次効果でありあまり強い力ではないので、ムーンライトブリッジで戦ったときの距離ならば解析されてしまうが、一定の距離を開ければ今の風花でも解析することは出来ないだろう。
そういった道具を知っていたからこそ、幾月もチドリが近い効果を持った道具を使っているのではと思ったらしい。
だが、実際にアナライズしたメノウにはそれが別の力、もっと言えばペルソナやシャドウの使う異能系だと分かっていた。
今のチドリは彼女自身の力ではなく、別のペルソナやシャドウの力で守られている。そう聞いた幾月は腕を組んで何やら考え始めた。
相手は元々研究者なので考え込むと長いところがある。そのため、今の内に自分も疑問に思ったことを尋ねようと思ったらしい理が口を開いた。
「チドリってやつを守ってる力は隠蔽効果だけなのか？」
「分からない。正確に言うとチドリの力を解析しようとすると壁になって来るだけで、その力があることは分かるからチドリの存在自体を隠蔽してる訳じゃないし」
理たちの考える隠蔽は一種のステルス。その場にいること自体を隠す力の事だ。

しかし、チドリを守っている力はそういった力ではなく、彼女を探るために伸ばされた力に対して壁になって遮るだけのもの。
遮るだけなので存在を隠すことは出来ないし、守る力が強い事もあって探知を広域展開するだけで簡単に居場所を特定出来てしまう。
これで外部からの攻撃も同じように遮断出来るなら、自前で湊クラスの攻撃力を手にした事も併せてチドリは最優先で排除しないといけなくなる。
総エネルギー量であると同時にペルソナ能力で強さの目安となる適性値。それで言えば理と玖美奈は誰よりも高かったが、最大火力の話となると二人は湊に及ばなかった。
何が原因なのか分かっておらず、恐らくはペルソナ自体に発揮出来る能力の上限値があると見られているが、今の二人ではチドリと撃ち合えば単独なら力負けする可能性が出たのだ。
最大の障害を排除したというのに、新たに無視出来ない脅威が現われた事に理は不愉快そうに顔を歪める。
ただ、個人の勝敗を気にしている時間は無い。
結局、幾月は保険として用意しようとしていたデス・アバターを作る事は出来なかった。
終末の鐘を鳴らす者、世界の終わりを告げる宣告者、ニュクス降臨の鍵となる存在はやはり複数存在し得ないらしい。
となれば、アルカナシャドウを倒して現われるデスを儀式に使う必要があり、その降臨が終わるまでは邪魔をさせる訳にはいかない。
「僕と姉さんは幾月さんの護衛に出る。あっちは街中では大規模な破壊は出来ないようだし。ストレガから人数を割いて排除か足止めをしてくれ」
「分かりました。ですが、感動の再会には演出も必要でしょう。私とジンは貴方たちに同行します。チドリの排除は他のメンバーで行ないます」
「ああ。それでいい。流石に向こうもチームをいくつにも分けたりはしないだろう」
特別課外活動部は未だに幾月が言った方法こそ影時間を終わらせ

る唯一の手段だと思っている。
ならば、明日もまた影時間が訪れればどうなるだろうか。
理たちの読みではタルタロスに変化がないか確かめに来るはずだ。
その時、寮暮らしではないチドリだけは別ルートでタルタロスを目指し現地で合流するに違いない。
そこで、タルタロスに先回りして現地で感動の再会する予定の幾月と、ちょっとした演出を考えているタカヤたちはタルタロスに向かい。
残りのストレガメンバーで単独行動を取っているであろうチドリの相手をすればいい。
生贄の人数は特別課外活動部だけで足りているのだ。
残りのメンバーはデスの降臨の邪魔さえしなければいい。
ここで幾月も思考の海から戻ってきたようで、今夜の事を考えて小さく笑うと全員に向けて話す。
「今日で目的の一つが達成される。デスを使ってニュクスを呼ぶには時間が掛かるかもしれないが、今度こそデスを手に入れてみせよう。皆、力を貸してくれ」
実験の失敗から十年。ようやく駒を一つ進める事が出来る。
ここで邪魔などさせる訳にはいかないと、決意を新たに幾月たちは準備を進めた。
１１月４日（水）
放課後――巌戸台分寮
最後のアルカナシャドウを倒した翌日。
七歌たちはいつも通りのように学校へ行き、いつも通りに学校から帰ってきた。
もっとも、チドリとアイギスは休んだままだったが、ようやく影時間を終わらせる事が出来たのだ。
メンバーたちの表情はどこか明るくなっており、順平が〝お疲れさま会〟をしようと言い出した事で男子たちは買い出しに行っていた。
「お父様は夜に顔を出されるそうだ。その時、召喚器の回収も行なうらしい」

「そっか。もう必要ないんですもんね」
「慣れ親しんだ道具だけど、お守りにするには物騒だしね。何かあった時に所持してて疑われても嫌だし。ケジメとして手放した方がいいよね」
男子たちが帰ってくるまで女性陣は紅茶を飲んでゆっくりしていた。
責任者である桐条がここへ来る事に驚きはなかったが、召喚器を回収すると聞いた時はゆかりは少し驚いた様子を見せた。
ただ、すぐにもう必要ないんだと感慨深げな表情になり、七歌も形が拳銃型なだけにここで手放した方が良いだろうと頷く。
そんな二人を見ていた風花はカップに口をつけ、少しだけ飲むと静かにカップをソーサーに置いてから口を開く。
「終わってみると何か不思議な感じです。普通では出来ない体験。怖いし、嫌だったけど、マイナスな事ばかりって訳ではなかったというか」
「そうだな。君たちと仲間として過した時間は大変貴重なものだ。私は家の事情もあって誰かと肩を並べるというのが難しい。それだけに背中を預けられる存在に出会えた事は幸運だった」
日本の労働人口の二パーセントを担う桐条グループ。そのトップのご令嬢ともなれば、大概の人間は父親の不興を買うのを恐れて腰も低くなる。
例え親同士、子ども同士の歳が近かったとしても、ほとんどの者は桐条を格上と見て一歩引いて接するのだ。
中には元になった南条家より長い歴史を持ち、尚且つ間接的にだろうと桐条の影響を持たない地盤を築いている九頭龍家のような存在もあるが、そんな家は稀少であり七歌のように気にせず美鶴と接する者などまずいない。
だからこそ、ご令嬢ではなく美鶴個人として接し、共に仲間として戦って来た特別課外活動部の者たちとの繋がりは美鶴にとってかけがえないものとなった。
美鶴から純粋な信頼を感じ取った他の者たちは、相手を見つめ返し

て自分も同じ気持ちだと笑みを浮かべる。
ただ、そういったものを得られた一方で、無視出来ない犠牲があった事も事実だ。
カップに視線を落とした美鶴は、十年前の事故からさらに罪科を重ねたグループについて考える。
「ただ、それはあくまで私の事情だ。十年前の事故だけじゃない。影時間を終わらせる戦いの中で、理事長や有里、一命を取り留めたが美紀だって犠牲になった。ストレガや八雲についても同様に、未だ桐条の罪は増え続けている」
「……アイギスはずっと変わらない様子みたいですし。チドリも目的を果たした以上、今後どうなるか分からないですもんね」
美鶴の言葉にゆかりもカップに視線を落としながら返す。
今日の食事会にラビリスは来ないと既に連絡を受けている。彼女は妹であるアイギスの面倒をみるのだとか。
そして、昨日の戦いに参加したチドリは学校を休んでおり、今日の食事会に参加するかどうか連絡はまだない。
ただ、彼女は湊が叶えられなかった願いである、〝影時間を終わらせる〟という目的を持って動いていた。
一人でタルタロスへと挑み、湊の掛けたタナトスという保険がなければ死んでいたかもしれない。
そんな危険性を孕んでいる事もあり、目的を達成した後の様子を心配しているが、ゆかりたちの予想では燃え尽きてアイギスのような状態になる可能性の方が高いと思っている。
再び彼女たちが立ち上がるには、彼の死を受け止められるようになるための時間と周りの協力が必要だろう。
もっとも、ここにいる者たちも完全に受け止められているとは言い難い。
二人のようにならなかったのは、単純に彼と過した時間の長さや濃さが二人ほどではなく、さらに葬式をしていないことで現実感がないことが理由だった。
「やく……湊君の身体なんて盗んで何に使うつもりだったのかな？」

「さぁ？　単に私たちへの嫌がらせが理由じゃない？　仮に何かしらの利用法があったとしても真っ当な神経してないと思うけど」
何故ストレガたちは湊の遺体を盗んだのか。その理由は明らかになっていない。
ただ、影時間が終わったなら、ストレガたちと戦う理由もなくなる。
相手にすれば無理矢理に実験体にされ、生き続けるために寿命を縮める劇薬を飲まなければならなくなったという恨みはあるだろう。
そして、その実験で得た力を今度は無理矢理に奪われた形になるため、影時間を消すための実働部隊になっていた七歌たちに憎しみが向いてもおかしくはない。
「彼らについてはお父様も向き合い続けていく必要があると仰られていた。実験が行なわれていた時から数えればおよそ九年。その間、制御剤を飲み続けていたなら寿命は三年と残っていないらしいがな」
どんなに長くとも三年ほどしか生きられない。
自分の身体の事ならば、ストレガたちも当然それに気付いている事だろう。
加害者が今頃になって何かしてやりたいと言ったところで、既に遅すぎると言わざるを得ないがだからといって何もしないのでは桐条鴻悦の時代から何も変わっていない事になる。
自己満足と言われようとも何か出来ることがないかと考える事は間違いではないのだろう。
十年前の事故からどこか死に場所を求めるように生きている父親のそんな小さな覚悟を見た美鶴は、冷たい考えだが一つだけほっとした事があると話す。
「お母様に有里がクローンだったと伝えた。そして、有里を間接的に殺めたのが八雲であることも」
「おば様は何か言ってました？」
「……そう、とだけ。十年前の事故の後よりも落ち着いているが、実際に接していたのは有里の方だからな。本物、偽物で語れることではないのだろう。ただ、私としては有里がお父様を殺める事なく終わったのは少し安心しているんだ。お母様も有里を止める事は出来ないと

言っていたが、常に悩み続けていたようでな」
英恵にしてみれば湊は大切な友人の忘れ形見、実の息子のように思っていた存在だ。
その彼が夫である桐条武治にされた事、それを思えば殺すと断言していた事も納得出来てしまったに違いない。
だが、それはそこに至る理由を理解出来るだけであり、もたらされる結果まで肯定出来る訳ではない。
どちらも大切だからこそ、そうなって欲しくはないと思い続けた英恵の願いが、違った形で叶ったとも言える結末。
桐条武治は殺される事なく、百鬼八雲は生きており、退場したのはクローンの青年唯一人。
けれど、それを喜べるほど簡単には割り切れないからこそ、今も英恵は別邸で静養しているのだろう。
影時間は終わったが、そこに至るまでの中で起きた事の後始末は終わっていない。
その事を理解した七歌たちは、自分たちも出来る事があれば最後まで付き合おうと考え、男子たちが帰ってくると食事会の準備に取りかかった。

第三百四十二話　策略

夜――巌戸台分寮

影時間の戦いがついに終わった。

ポートアイランドインパクトから十年、けして短いとは言えない時間だ。

その間、影時間を消すために奮闘してきた者たち、シャドウの脅威から人々を守るために戦って来た者たち、多くの人間が挑み、その中には犠牲になった者たちもいた。

「今日という日を迎えられた事を嬉しく思う」

そんな者たちをずっと見続けてきた桐条武治は、慰労会として開催された食事会に合流し、席について七歌たちを見ながら話す。

ここに集まった子どもたちは、影時間に何かしらの因縁がある者もいれば、全くの無関係ながら力に目覚めて戦った者もいる。

因縁のある者たちは自分も無関係ではないからと自ら戦う意思を見せていたが、逆に無関係であっても関わった以上は見過ごすことは出来ないと責任感から動く者もいた。

だが、桐条に言わせれば子どもたちは全員が無関係だ。

「君たちの中には自分も影時間とは無関係ではないと思う者もいるだろう。しかし、親の罪は親の罪。そして、影時間さえなければ起こらなかった事もある。故に、それら全ては私たちの責任であり罪だ。迷惑を掛けてすまなかった」

世界的に有名な大企業のトップが子どもたちに頭を下げる。

普通ならあり得ない行動として萎縮してしまうところだが、七歌たちは桐条がどれだけ影時間を消すことに尽力していたか知っている。

だからこそ、これが純粋な一個人としての謝罪であると理解し、ただ黙って見つめていた。

すると、そんな他の者たちの様子を見て美鶴は小さく苦笑し、未だに頭を下げていた父に声を掛ける。

「お父様、いつまでもそうしていられると皆も困ります」

「む、そうか。だが、改めて言わせて欲しい。君たちに心からの感謝

を」
今日の食事会は言ってしまえば学生が手作りで用意した打ち上げのようなものだ。
そんな席でどこまでも固い様子を見せる桐条に七歌たちは苦笑するが、彼がどれだけ感謝しているかは伝わった。
皆が頷いて返せば桐条も少しだけ肩の力が抜け、そのタイミングで順平がジュースの入ったコップを手に持って立ち上がる。
「んじゃあ、皆さんコップを手に持ってー！　戦いの終結を祝ってカンパーイ！」
『カンパーイ!!』
社交界ならばともかく、学生の打ち上げでいつまでも固い雰囲気では肩が凝る。
順平がそんな空気をがらりと変えるべく、普段の軽い調子で乾杯の音頭を取ると皆もそれに乗ってコップを掲げた。
テーブルの上には美鶴が出前を頼んだ高級な寿司と、荒垣や七歌がメインになって作ったパーティー料理が並んでいる。
調理していた時点で良い香りがキッチンの方から漂ってきていた事もあり、空腹だった順平はコップを置くなり「いっただきまーす！」と箸を取って次々に寿司を自分の皿に盛った。
「おい、順平！　寿司ばかり取るな！」
「いやいや、今日は無礼講でしょ？　それにほら荒垣さんや七歌っちが作った料理もたくさんあるんだし。先輩も好きなの取ったら良いじゃないですか」
今日の寿司は桐条家御用達の高級江戸前鮨である。
順平も当然その事を知っていたため、作りたてで温かな料理があるというのに最初に寿司をいくつも確保した。
しかも、ウニやタイにカニなど比較的単価の高いネタが中心となれば、順平が意図的に高級な物を狙って食べていると気付いて当然。
荒垣と七歌の手料理は舌の肥えた美鶴が認めるレベルであり、折角の出来たての料理が並んでいてこの所行となれば、真田でなくとも一言いわずにはいられないだろう。

ただ、真田が順平を注意するのであれば、他の者たちは気にせず食事を続ける事が出来る。
確かに寿司も美味いが他の料理もそれに劣らず美味いのだ。育ち盛りの学生たちは順平の世話を真田に任せると、そのまま自分の食欲を満たすことを優先した。
皿に盛ったグラタンをスプーンで口に運んだゆかりは、濃厚なホワイトソースの中にシャクシャクと変わった食感がある事に気付き、並んで座っている荒垣と七歌に料理について尋ねる。
「あ、このグラタン美味しい。これタケノコ入ってるの？」
「ああ。水煮で丁度値引きされてるのが売っててな。色んな種類の料理作るってんなら良いかと思って買って作ったんだ」
「へぇ、タケノコのグラタンって初めて食べましたけど、食感もしっかり残ってて美味しいですね」
今の季節は秋から冬の始まりに差し掛かった所。タケノコは当然旬の食材ではないが、日本では水煮のタケノコが通年で売っている。
スーパーで値引きされていたそれを見つけた荒垣は、色々と作るからこそ普段あまり使わない食材を使ってみようと考え、値引きされて安くなっていた事もあり買ってきたらしい。
「ピーマンの肉詰めはありますけど、普通のハンバーグはないんですね」
「ああ。天田君がピーマン嫌いだって聞いたからさ。食べさせようと思って」
「どこ情報ですかそれ……」
「荒垣さんだけど？」
パーティーのメニューでハンバーグはある意味で王道だ。
しかし、天田がテーブルを見渡しても、半分に切ったピーマンにハンバーグを詰めて焼いたピーマンの肉詰めはあれど、その中身だけを成形して焼いたハンバーグがない。
何故、そこで敢えてピーマンを足すという一手間増やしたのか。
ハンバーグは大好きだが、ピーマンが嫌いな天田にすれば余計な事をと思わずにはいられない訳で、天田が料理担当者に理由を尋ねれば

まさかの答えに絶句しかける。
ただ、せめて誰がそんな余計な情報を七歌に伝えたのか聞いておかねばと、改めて七歌に聞いてみれば、七歌は素直に情報源が荒垣だと答えた。
途端に天田は荒垣に無言で抗議の視線を送る。
見られている本人も気にした様子もなく無視しているが、そんな光景を見ていた風花が思わず笑ってしまうと、他の者たちもつられるようにして笑った。
＊＊＊
料理もほとんど完食され、皆が飲み物を飲んでゆっくりし始めた頃、突然順平が何やらゴソゴソとテーブルの下から取り出して立ち上がった。
一同が急に何だと彼に注目すれば、順平はその手に持った物を掲げるように見せて口を開く。
「はい、ちゅーもーく！　皆さん、ここで記念に写真を撮りましょう！
いやぁ、実は昨日も持って行ってたんだけどさ。影時間にカメラなんて動く訳ないってのな！」
「お前、そんなものを戦いに持っていったのか？」
「まぁ、勝つって信じてたんで！」
昨日の戦いは敵側に増援があれば自分たちの方が厳しい状況になっていた。
勝てたのはストレガが男たちだけであり、それをペルソナが進化している真田たちで抑えられた事で、七歌たちがアルカナシャドウとの戦いに集中出来たからだ。
一歩間違えれば負けていた。いや、死んでいた可能性すらある。
しかし、だからこそ順平は自分たちが絶対に勝つと信じてカメラを持っていった。
まぁ、そんな験担ぎのような事をしていたとは認識されず、他の者たちからは暢気なやつだと認識されてしまったようだが、順平は桐条についてきたＳＰの一人にカメラを渡すと寮の入口前へ移動する。
他の者たちもしょうがないなと口では言いつつ、どこか楽しそうに

移動すると天田と女子らを前列に、男子と桐条が後列に並んで立つ。
桐条が一緒に写ってくれる事が意外だったのか、美鶴が少しだけ驚いた顔をしていたが、カメラを構えたＳＰが「よろしいですか？」と尋ねると順平がポーズを決めつつ他の者にも笑うように声を掛ける。
「よっしゃあ！　みんな、最高の笑顔でいくぞー！」
「ＯＫ！　順平に被るようにピースしとくね！」
「ちょっ、おい!?　マジで的確に被ってるって!?」
順平が最高の笑顔を見せようとするも、七歌の掲げたピースサインが顔に被って順平の顔が写らなくなる。
どれだけ顔を動かし回避しようとしても、七歌は後ろにも目がついているのかと思えるほど見事に位置を修正する。
彼女は全て音と気配を頼りに行なっているのだが、パッと見ではそれに気付くことは出来ないだろう。
諦めた順平がせめて手だけは写ろうと両手でピースサインをしたところで、ＳＰがスリーカウントでシャッターを切った。
もっとも、シャッターを切る瞬間に最後の抵抗に順平がジャンプしたことで、写ってはいるが順平だけ顔がぶれているという何とも間抜けなオチになったのだが、これも記念という事で一同はその写真のデータを回し見てから席に着いた。
「……もうすぐ零時だな」
席についてからしばらく話をして過すと、時計を見た美鶴がポツリと呟く。
本来なら明日も学校なので風呂に入ったり、既に寝ているべき時間だ。
けれど、心のどこかで本当に影時間が終わったのだろうかという不安があるのか、多忙な桐条すらも日付を跨ぐ時間になっても寮に残っていた。
美鶴の言葉に他の者たちも少し緊張した様子で時計を見つめる。
戦いは終わった。武器も、召喚器も、この後で桐条が乗ってきた車に積み込み回収する予定なのだ。
このまま緊張して損したと笑って終わりたい。

そう願って全員が時計を見つめ、三つの針が頂点を指した時、世界は緑色に塗り潰された。
影時間――巌戸台分寮
世界は緑色に塗り潰され、窓の外には自ら光を放つ巨大な月が浮かんでいる。
桐条が連れていたＳＰたちは棺桶のオブジェに姿を変え、影時間特有のどこかジメッとした空気に包まれると荒垣が苦々しげに口を開いた。
「チッ、終わったと思ってたんだがな」
「けど、あんまり実感もなかったですよね」
荒垣の言葉に天田もどこか淡々とした様子で答える。
全員がこれで影時間が終わったんだと信じようとしていた。
あれだけ特殊なシャドウと戦って来たのだ。そこに意味があると思わない方が無理がある。
だが、一方で本当に影時間が終わったのか信じ切れていない部分もあった。
「桐条先輩、これってどういう事なんですか？」
「分からない……。私も、これで全てが終わると思っていたんだ……」
ゆかりに聞かれた美鶴も混乱しているのか返事は曖昧で言葉に力がない。
メンバーの中で誰よりも影時間を終わらせる事に拘っていたのは彼女だ。
それだけに、どうしてアルカナシャドウを倒しても影時間が消えないのか理解出来ないのだろう。
ただ、こうなる予感はあったと七歌が自分の考えを話す。
「どうしてストレガは三人しか出して来なかったのか。沙織と八雲君が来なかった事も含めて、昨日の戦いには疑問があったんだ。けど、向こうがこうなるって分かってたなら、妨害に全戦力を投入してこなかった事も納得出来る」
「あいつらが見越していたのはアルカナシャドウを倒した後だったって事か？」

「倒した事で何が起こるのか知っていた。それとも、倒した所で何も起こらないと知っていたのか。どっちなのかは分かりませんが、影時間が続くことは知っていたんじゃないですか」
七歌の言葉に真田も顎に手を当てて考え込む。
後者ならば影時間を消す方法を一から探す必要があり、前者ならばこれから起こることに自分たちもすぐ備えなければならない。
出来れば時間的に猶予のある後者であって欲しいところだが、状況を理解出来ていない者たちの耳に鐘の音が聞こえて来た。
「この音は……方角的にタルタロスの方みたいですね」
風花がペルソナを召喚しない状態で出来る範囲で音の発生源を探る。
どうやら方角的にはタルタロス方面のようだが、実際にタルタロスから音が響いているかは分からない。
ただ、これまで影時間に鐘の音など聞いたことがない。
そうなるとアルカナシャドウを倒した事と関係があるのではと、全員が現場を確かめに行くため立ち上がって装備を取りに向かおうとする。
「ちょっと待ってくれ！　つか、って事はチドリももしかしたらタルタロスに向かうかもしれないって事か？」
「その可能性はあると思います。チドリちゃんは有里君の果たせなかった事のために戦うと言っていましたから」
自分たちがタルタロスに向かおうとするように、チドリもまたタルタロスを目指すかもしれない。
彼女の性格と状況から考えてもその可能性が高いと風花が答えれば、どこか血の気が引いた顔で順平が焦ったように叫ぶ。
「敵がこの状況を知ってたんなら、オレたちが動くことも想定済みかもしれないって事だろ。なら、別行動のチドリを待ち伏せして叩く可能性もあるって事じゃねえか！」
影時間が続くと分かって昨日の戦力を温存していたとすれば、順平の言うように七歌たちの行動を読んで待ち伏せしている事は十分にあり得る。

加えて、ストレガたちは特別課外活動部の拠点だけでなく、メンバーたちの家族についてなどもそれなりに情報を持っていた。
そうなればチドリが別行動を取っていて、単独でもタルタロスへ向かう事も予想出来ていると思われる。
実際には前哨戦でしかなかった昨日の戦いでは手を抜き。本命である今日の戦いで待ち伏せなどの策を使いつつ敵戦力を削る事を狙っていた。
もしも、その考えが正しければ一番危険なのはチドリという事になる。
焦った様子から一転、険しい表情になった順平は装備を取りに階段を走って上りながら他のメンバーに向けて大声で話す。
「わりぃけど、オレは栗原さん家の方面に向かう！　途中でチドリと合流出来たらタルタロスに向かうけど、待ち伏せされてたらそっちが済み次第応援にきてくれ！」
「分かった！　順平も気をつけて！」
何が起こっているか分からないからこそ、チドリ一人のためにそう多くの人数を割くことは出来ない。
けれど、完全に無視して行くことも出来ないからこそ、湊に頼むと言われた順平がチドリの許へ向かってくれるならありがたい。
他の者たちもそれぞれ装備を整えると、ＳＰが象徴化してしまっている桐条を一人残す方が危険と判断し全員でタルタロスへ向かう事にした。
――タルタロス
順平が無事にチドリと合流することを信じてタルタロスへやって来たメンバーたち。
巨大な扉の前に人陰がある事に気付いていたが、近付かなければ相手の姿をしっかり見る事が出来ない。
そうして、扉から数メートルの位置までやって来たところで、メンバーたちはそこに予想外の人物がいる事に驚愕した。
「幾月さんだとっ!?」
驚いた真田が目を見開き思わず声をあげる。

他の者たちも彼と同じように驚いており、その視線の先には薄汚れたボロボロの衣服を身に着け、ロープで両腕を拘束された状態で地面に転がる幾月がいた。
幾月の傍には長谷川沙織と八雲、そしてストレガのタカヤが立っている。
「こんばんは、皆さん。どうやら影時間は消せなかったようですね」
薄い笑みを顔に張り付けたままタカヤが両手を広げて話しかけてくる。
その仕草はこの状況を見ろと言っているようであり、実際に影時間が続いていることもあって言い返すことが出来ない。
だが、死んだと思われていた幾月が彼らの前に倒れている理由を知りたい美鶴は会話に応じる事にした。
「まだ諦めた訳じゃない。それよりも、何故理事長が生きている。お前たちが殺したのではなかったのか？」
寮内の監視カメラにはカズキの姿が映っており、作戦室や寮内には幾月の血液が残っていた。
そして、駐車場の焼死体の歯形が幾月と一致していたため、誰もが幾月は殺されたと思っていたのだ。
だというのに、タカヤたちの足下にいる幾月は、ヒゲが伸びて、頬が痩けてはいるがちゃんと呼吸をしている様子。
よく似たそっくりさんを連れてくる理由もないので、恐らくは死んだように偽装したのだろうが、何のためにと考えていたところで八雲が口を開いた。
「この男には利用価値があったから生かしておいた。現に美鶴さんたちもこの状況で下手に手を出せないだろ？」
同じ声だが姿は中学生時代の湊と似ている。
ただ、話し声や雰囲気は湊に比べるとどことなく柔らかい。
兄弟や双子と言われれば信じてしまいそうになるが、アイギスが湊本人から聞いた情報が確かであれば、七歌たちの視線の先にいる少年こそが百鬼八雲であるはず。
チドリを一度は殺し、湊を死へと向かわせた張本人が八雲であるな

どとは信じたくはないが、改めて聞いておかねばならないと七歌が彼に話しかけた。
「八雲君、でいいんだよね？」
「ああ。僕が百鬼八雲だ。七歌や美鶴さんはアレを僕だと思っていたようだけど、ようやく間違いの一つを正すことが出来た」
言いながら彼は自分の背後においていた何を手に取り、それを七歌たちに見せるように掲げた。
それはバスケットボールほどの大きさをした透明な容器。
太陽ほど明るくはないが、ほぼ満月と言える大きさの月が空から地上を照らしている事もあり、七歌たちも中に入っているモノを見る事が出来た。
容器の中に入っていたのは人の生首。ただし、頭髪はなく、頭と目の辺りに縫合した後がはっきりと残っている。
あまりにショッキングな光景に、一瞬それが何であるか理解出来なかった。
けれど、よく見ればそれが彼女たちの知っている青年の顔をしている事に気付き、風花は顔を青ざめさせ、ゆかりはそれが人間のする事かと怒りを露わにした。
「なんて酷いことをっ」
「あんた、有里君の残りの身体はどうしたのよ！」
「……いらないから捨てたよ。研究用に眼球と脳は摘出したし。これももういらないけど、一目くらい会わせてあげようと思って持ってきたんだ」
敵が遺体を盗んで行った事でどうせろくな使い方はされないと分かっていた。
しかし、実際に変わり果てた姿をみせられると、どこまで彼を辱めれば気が済むのかと怒りに全身が震え出す。
八雲という少年と会ったことがなかったゆかりや風花にすれば、湊がどのような出生だろうと関係ない。
死んだ彼こそが自分たちの友人で想い人だったのだ。
そんな湊の遺体を切り刻み、いらないからとゴミのように捨てた八

雲を許すことは出来ない。
残った頭部だけでも取り返してみせると考えて睨んでいれば、タカヤの足下に転がされていた幾月が意識を取り戻したのか弱々しい声で何かを呟いた。
「う、うぅ……み、んな、にげるんだ……」
「ほう、貴方にも他者を慮る心があったのですね。ですが、逃がす訳にはいきません。さぁ、全員武器と召喚器を捨ててください。この男に死んで欲しくはないでしょう？」
言いながら腰のベルトからリボルバーを抜いたタカヤは、その銃口を真っ直ぐ幾月の頭部へと向けている。
七歌たちとタカヤたちの距離は十メートル以上離れていて、この距離では相手に攻撃するよりタカヤが引き金を引いて幾月に銃弾が当たる方が速い。
数人でバラバラに動いて撹乱しようにも、八雲と沙織も警戒しているようなので下手に動いた時点で幾月を殺そうとするはず。
武器と召喚器を手放せばその時点で勝てる見込みもなくなるが、今の状況では幾月が殺される未来しか見えない。
知り合いを見殺しにする事など出来るはずもなく、七歌は他の者たちとアイコンタクトを交わすと諦めて武器と召喚器を手放した。
全員が同じように武装を解除した事を確認したタカヤがどこか嘲るように笑うと、次の瞬間、七歌たちの許に向かってどこからか球体の物が投げ込まれた。
一体何が投げ込まれたのか。それを確認しようとした時、地面に落ちた球体の物から煙が吹き出して七歌たちを覆っていく。
「うっ、なんだ、これは……」
「力が……」
咄嗟に煙を吸わないよう手や袖で口と鼻を塞ぐも既に遅い。
全身の力が抜けて地面に倒れる最中、意識を手放していく七歌たちは、立ち上がって冷笑を浮かべる幾月を見たのだった。

第三百四十三話　自分の心と

夜――マンション〝テラ・エメリタ〟

時は少し遡り、七歌たちが食事会をしている頃。

ラビリスが湊と暮らしていたマンションの部屋では、遅い時間ながらラビリスが夕食を用意してアイギスとコロマルと共に食べていた。

普段はベッドで布団にくるまるように寝ているアイギスも、ラビリスが食事や風呂だと伝えればゆっくりではあるが動いてくれる。

もっとも、今のアイギスは半分無気力症のようなもの。

本来の無気力症ならば抜け出したシャドウやアルカナシャドウを倒せば回復する。

しかし、アイギスの状態は心因性のものであるため、彼女自身が乗り越えるか、時間の経過で心が回復することを祈るしかない。

鶏の鍋を器によそって渡しながらラビリスはアイギスに話しかける。

「ようやく終わりやね。まぁ、ウチは実験を除いたら二年くらいしか戦ってへんけど、それでもこれで終わりって聞くと安心な気もするわ」

ラビリスたち対シャドウ兵装シリーズはシャドウと戦うために作られた。

危険なシャドウの研究をするにあたって、それに対抗する手段を考えるのは当然。

眞宵堂店主の栗原が在籍していた時に、シャドウと同系統の力でありながら、人から生み出される異能としてペルソナの存在が示唆された。

当時はまだシャドウがどういった存在なのか分かっておらず、だからこそ、シャドウとペルソナが表裏一体だとは気付かれることはなかった。

そのため、シャドウの対抗手段として存在するとみられたペルソナを、どうにか兵器にも搭載出来ないかと考え、桐条グループはオーパーツである黄昏の羽根に人格をインストールすることでロボット

に人間性、もっと言えば心を持たせようとした。
「ウチらは戦いが終わったら廃棄処分されることになったんやろか。まぁ、今頃言っても今更な部分もあるんやけど」
対シャドウ兵器に精神を与える事、加えてペルソナを発現させる事、それらの実験は結果から言えば成功した。
五式となる機体のテストベッドたちを戦い合わせて、戦闘経験を積ませると同時にそれぞれの精神面の成長も促したことで、同型モデルの姉妹全員分のメモリーを得たラビリスは感情を獲得した。
もっとも、感情を獲得した事で心を持つ自分や姉妹の扱いに激昂し、施設を破壊して脱走を図ったことで彼女は拘束後に機能停止され、湊が研究所に封印されているのを発見するまで眠ったままだった。
あのまま影時間の戦いが終わっていたどうなっていたのか。
また、封印が解かれて活動していたとしても、彼女たちが作られた理由であるシャドウとの戦い自体が終わってしまえば、人や物を簡単に破壊する事が出来てしまうラビリスたちは社会の脅威でしかない。
いくら心があると言っても人間どころか生き物ですらないのだ。
人を中心とした社会を良くするために作られた法律では、人型兵器を守ってくれることはない。
仮に守られるとしても、それは桐条グループという所有者のいる機械として扱われる場合であり、そこに彼女たちの心に対する配慮は一切ない。
もし、湊とＥＰ社の協力で人間の身体にしてもらえていなければ、自分は人なのか物なのかと深く悩んでいた事だろう。
どうして彼があんなにも研究を急いでいたのか、今になってようやく理解出来たラビリスは、箸で摘まんだ白菜を口に運んで咀嚼してから飲み込み再び話す。
「戦い自体は辛いことやったけど、それを通じて得たものもあったわ。妹と会えて、友達も出来て、人格モデル（お母さん）が願ってくれた学校にも通えるようになったし」
ラビリスの人格モデルとなった少女は、自分が学校に行けなかった

からこそ、自分の人格をコピーして生み出される五式シリーズの娘たちが学校に行くことを願っていた。
別に学校に行けなくても幸せになってくれれば良いとも考えてくれていたが、今のラビリスは学校に通って幸せに過ごせている。
戦いも終わり、これからもその日常が続いていくならば喜ぶべきだ。
しかし、ラビリスの対面に座っていた少女は、姉のように素直にそれを喜ぶ事は出来ないと、久方ぶりに自分の心情を吐露してきた。
「……でも、その平和な世界に八雲さんはいないじゃないですか」
「……アイギス？」
湊の遺体が盗まれて以降、アイギスはずっと無気力に過してきた。
大切な人が死んだのだ。そういう時期があってもしょうがない。
そう考えてラビリスは自分も悲しいと思いながらも、どうにか彼との約束を果たしながら妹の世話を続けてきた。
アイギスがその間に発した言葉など、はい、わかりました、程度で会話らしい会話など皆無だった。
だからこそ、彼女が久しぶりに話していることは喜ばしいのだが、テーブルの上に並んだ食器に視線を落としながらアイギスは言葉を続ける。
「十年です……。十年掛けて、桐条グループも必死に対策を続けて来たのでしょう。でも、結果から見れば桐条グループの為した事は多くありません」
影時間が毎日現われるようになったのは十年前の事故が原因。
その事故で生き残った者や、新たに雇い入れられた者たちは、どうすれば影時間を消せるのだろうかと研究を続けてきた。
自分も研究に関わっていたにしても、桐条武治も先代の暴走に巻き込まれた形で事故に遭って怪我を負った身だ。
片目を失明する大怪我だが、トップとしての役目を果たし心ない報道に晒され続けながらも、影時間を消す方法を探すというのは並み大抵の精神力で出来る事ではない。
ただ、それでもアイギスにとっては、桐条グループが十年の中で為

した事は十分とは思えなかった。
「わたしたちは兵器でした。人間が無事でいられるよう、代わりに戦って、人々を守って平和を維持するのが役目だったはずです」
桐条グループには対シャドウ兵器シリーズを作るだけの技術とノウハウがあった。
デスとの戦いで倒れたアイギスがラストナンバーだと言われているが、敵が不完全な状態にしろシャドウの王と相打ちに持ち込むだけの実力があったのだから、その後も生産を続けていれば戦力に困ることなどなかったはず。
そこにどういった理由があったのか分からない。だが、桐条グループは事実としてそこで対シャドウ兵器シリーズの生産をやめてしまった。
もっとも、彼女たちは知らないがその後に数体だけRシリーズと呼ばれる弟妹機が作られてもいるのだが、それらはアイギスたちのように実戦に配備されることもなければ、表立って運用されてもいないため極限られた関係者しか存在を知らない。
増産された後継機でもそういった有様では、戦力が不足していると常々言っていたのは嘘だったのかと疑いたくなる気持ちも分かる。
何より、その戦力が足りないという状況の打開策が、どうしてよりにもよって無関係の子どもたちに犠牲を強いる事だったのかと、当時動けなかったアイギスは自身と桐条グループに対して憤る。
「でも、肝心な時に動けなくて、代わりに八雲さんや被験体となった子どもたちが犠牲になっていたんです」
「それは機能停止してたからしょうがないやろ？　機械の身体だったときのウチらは自分の意思だけでは動かれへんかったし」
「コアの移植でも、新しく弟妹機を作るでも方法はあったはずです。そのために作られた存在なのですから」
シャドウと戦うことを目的に作られていながら、この十年で対シャドウ兵器が実際に稼働したのはラビリスの封印が解かれてからだ。
それも桐条グループの決定ではなく、ただ偶然彼女を見つけた湊が自由にさせようとした結果でしかない。

これでは何のために対シャドウ兵器シリーズを作ったのか、何のためにラビリスの同型機たちは犠牲になったのか分からない。
彼が死んでからずっと自分の存在意義について考えていたアイギスは、視線を上げてラビリスと目を合わせて話す。
「八雲さんがどんな風に生きていたのか聞きました……。幼い子どもが、力を得るために自ら手を汚し、影時間にはシャドウを狩り続ける毎日。本来与えられて当然の平和な日常を自分から捨てて、これ以上無関係な人たちが犠牲にならないようにと戦っていたんです」
アイギスの目を見て、彼女がどうして急に感情を露わにしたのかラビリスも察する。
これまでアイギスはどこかで自分の存在意義を認識していたのだろう。
対シャドウ兵装シリーズとして作られた存在であるが故に、生体パーツを使って作られた人造人間になってからでも、自分にはシャドウを倒して人々を守る使命があると。
しかし、最後のアルカナシャドウを倒した事で影時間が終わってしまった。
アルカナシャドウとの戦闘に参加し、最後の敵を倒してくれれば無事に役目を終えることが出来たと思えたかもしれない。
役目を果たした事でこれからは自分の人生を歩むことが出来ると。
だが、彼女は大切な人の死によってそうすることが出来なかった。
戦闘に参加しなかったのは自己責任。いつまでも伏せっているのは彼女の心が弱いから。そう考える者もいるかもしれない。
ただ、アイギスと同じように機械の身体から人間の身体になったラビリスだからこそ、どうして彼女がここまで大切な人の死に落ち込んでいるのか分かった。
「そんな人が、どうして、なんで死なないといけないんですかっ!!」
膝の上で拳を握り締め、アイギスが目に涙を溜めて叫ぶ。
彼女の心は弱いのではない。単純にまだ幼いのだ。
人格モデルの人格をそのままコピーしたパーソナルを持っているラビリスは、最初からどことなく人間らしさがあった。

それに対し、ラビリスが実験の最終段階で暴走した件から方法を改めたことで、アイギスは『7式特別兵装開発計画』として複数名の被験者の人格をサンプルとして集めて切り貼りするように再構築して今のパーソナルを作った。
インストールされた知識のおかげで精神年齢は見た目相応ながら、感情面での自我の発達が未熟だったからこそ、アイギスは精神的な支柱になっていた青年と使命を失ったことで、どうしたら良いか分からなくなり溜め込んだ気持ちを吐き出すしかなくなったに違いない。
そんな妹の様子をただ黙ってラビリスが見つめる中、アイギスは水色の瞳からぼろぼろと涙を流して言葉を続ける。
「いくら世界が平和になったって、影時間が終わったって、そこに八雲さんがいないのなら、わたしにとっては意味がないんですっ。わたしは、わたしは八雲さんに死んで欲しくなかった。……いいえ、生きていて欲しかったんです」
大切な人がもういない。それをようやくはっきりと彼女は理解した。
これまで分かっていたつもりだったが、どこかで心が麻痺してはっきりとは認識出来ていなかったのだろう。
一月でそれが分かるようになったのを早いと思うべきか、随分と時間が掛かったと思うべきか。
自分もどこかで湊の死を実感出来ていなかったラビリスは、人の事ばかり言っていられないなと静かに涙を流しながら席を立って妹に近付くと彼女を抱きしめた。
「……そっか。アイギスは、本当に湊君が大好きだったんやね」
こんな悲しい出来事を通じて知りたくはなかったが、妹の成長が嬉しいラビリスはアイギスの頭を胸に抱いて頭と背中を撫でる。
いつか自分も湊にやって貰ったことを思い出しながら、ただ相手を安心させるように優しく続けて語りかけた。
「あんな。ウチも人から聞いたんやけど、好きって気持ちには二種類あるんやって」
「二種類、ですか？」

「英語にするとライクとラブ。好ましいと愛しいがあるらしいわ」
どうしてアイギスがここまで彼に執着するようになったのかは分からない。
それでも、ラビリスはアイギスの中にある湊への想いが、昔と同一ではないと何となく理解できた。
彼女がここまで苦しんでいるのも、ただ好きな相手が死んだからではないのだろうと。
「多分、今までのアイギスはずっとライクやったんちゃうかな。最初に会った時にそう感じたから、途中で変わってもそうやと思い続けてた。でも、本当はとっくに変わってたんちゃう？」
今の彼女に必要なのは自分の心と向き合う事だ。
しっかりと自分の心の向きや状態を自覚し、そこからどうしたいのか、これからどうして行くべきかを考えていく。
少女の中にある青年への想いは、本来ならゆっくりと時間を掛けて自覚していくべきものに違いない。
ただ、彼女が再び立ち上がるには、今を逃せば次はいつ機会がやってくるか分からない。
そうして、ラビリスは恋愛面で妹より数歩先を行く女性としてアドバイスをする。
「アイギスは湊君とどうなりたかったん？　自分が望む未来でどういう形でいたかったん？」
「わたし、は……ただ、一緒にいたかったんです。ずっと、八雲さんの隣で、あの人が笑顔でいてくれれば、わたしはそれだけで自分も幸せでした……」
本当の気持ちと向き合うなら段階を踏んで理解させればいい。
自分で考えて、自分の言葉にさせることで彼女もゆっくりと本心を理解する。
「その時、他の子が隣にいてもええの？　チドリちゃんとかゆかりちゃんとか風花ちゃんが一緒でもかまへんの？」
「それは……八雲さんが望むのであれば、皆さんと一緒でも……」
「でも、個人的には違うんやろ？　自分と一緒にいて欲しい。自分だ

けを見て欲しい。湊君を独占したい。そう思ってる自分はおらん？」
「……いない、訳ではないと思います。でも、もうその八雲さんはいません。どれだけわたしが彼を好きでも、もうこの想いに意味はないんですっ」
こんな事を話したって彼がいない以上はＩＦどころか妄想でしかない。
想いを向ける相手を失った感情など価値はないと、アイギスがそういって自分を抱きしめていたラビリスを押し退ければ、距離を置いて妹を見つめる相手は真剣な表情で言葉を返した。
「あんな。確かに湊君はおらんけど、アイギスの気持ちは今もここに残ってるんやろ？　なら、それを否定したらアカンよ。人の記憶からも消されてもうたら、湊君がこの世界に居た証がなんも残らんくなってしまうから」
彼がしてきた影時間の戦いは表の世界で語られることはない。
日常の中で大勢の人間を助けてきた事は有名ではあるが、彼が影時間の中で行なってきた事に比べればお飯事のようなものだろう。
だからこそ、時間が経てば湊の事は人々の中から消えていってしまう。
まるで最初から存在しなかったかのように、人で溢れるこの世界から〝有里湊〟という人間がこぼれ落ちていくのだ。
なら、どうすれば彼の存在をこの世界に残しておけるのか。
それは彼と関わってきた者たちが、その記憶の中に留めておくしかない。
姉の言葉を聞いたアイギスはどこかハッとした表情を浮かべ、一度視線を落とすとしばらく黙り、時間が経ってから再び口を開いた。
「……ずっと、夢の世界で八雲さんと会おうとしていたんです。繋がりが消えても、夢の中でなら会えるんじゃないかと思って」
「それで、夢で会えたん？」
「……はい。でも、夢の中の八雲さんはずっと同じでした。過去の映像の再現。思い出を繰り返し見ていただけで、繰り返すたびに目が覚めると辛い気持ちが増していきました」

夢で出会っても、目が覚めれば現実が彼女を襲う。
そして、繰り返し見る度に、もうその思い出が増えることがないと徐々に理解していく。
彼女の辛い気持ちが増した理由はそれを無自覚に分かっていたからだろう。
本人がそこまで理解できていたなら、あともう一押しだとラビリスは再び問いかけた。
「なら、もう湊君との記憶はいらん？　意味がないなら、もう思い出を消してもええと思う？」
「……いいえ。意味がなくても、思い出す度に辛く感じても、八雲さんとの思い出を消したくはありません。これは、わたしだけが持つあの人との大切な絆ですから」
ラビリスの言葉にアイギスは静かに首を振って否定する。
彼との思い出を持つ者は他にもいる。ただ、アイギスの持つ思い出は彼女だけが持っている湊がここにいた証だ。
それを消すということは、アイギスの手で彼を殺す事と同義である。
そんな事はしたくない。どんなに苦しくても思い出を持ち続けていたい。
自分の気持ちと向き合えば、どうしてラビリスが最初に好きという言葉の意味を語ったのかもようやく理解できた。
「姉さん、わたしは姉さんの言う通り。多分、八雲さんを好きだったんだと思います。昔は一緒にいられたらいいと思っていました。でも、今はただ一緒にいたいんじゃなかったんです。彼の事をもっと知りたい。わたしの事をもっと知って欲しい。一緒に笑い合っていたい。いつまでも二人で一緒にいたいと思うようになってしまました」
「そっか……。あんな、さっきは好きに二種類あるって言ったけど、好ましいと愛しいの他に恋しいって気持ちもあんねん。まぁ、これは好きって言葉の意味やないけど、アイギスの気持ちはそういう状態やと思うわ」
「……恋しい。言葉の意味は知っていますが、そうですね。この胸の

苦しさはただの喪失感ではないと思います。今の言葉を聞いて納得できました。わたしは八雲さんに恋をして、愛していたんだと思います」
自分の気持ちと向き合ったアイギスの瞳にはしっかりと光が宿っている。
ラビリスがそれを理解して彼女を見つめれば、アイギスも正面から見つめ返して、自分の気持ちをハッキリと言葉にした。
その変化が彼女の心の化身、ペルソナにも変化として現われる。
「ペルソナの姿が……」
「心の成長、アイギスが自分の気持ちに気付いた証やね」
彼女の頭上に現われた青銅色の神像は、光に包まれてその姿を変える。
眩い光の中から現われたのは、宙に浮く巨大な盾を展開し、その手に鋭い槍を持った武装した女性型のペルソナ。
これまでのペルソナが作り物の身体でしかなかったのに対して、新たなペルソナはどうやら生身であるらしい。
それはまるで彼女が機械から人になった事を表わしているようだ。
「ありがとう、アテナ」
影時間が終わった以上、もうこの力は必要ないはずだが、最後にちゃんと自分が人として成長できていた事を知れたのは嬉しい。
そう思ったアイギスは消えていったペルソナの存在を自分の中に感じ、胸に手を当てて新たなペルソナに礼を言った。
「よし。それじゃあ、ご飯たべてしまおか。少しは元気になったんやったら味わって食べてな」
「はい。長い間、すみませんでした」
「ううん。こんな時くらい別にええよ。ウチはお姉ちゃんやからな」
まだ完全に吹っ切れた訳ではないのはお互いに分かっている。
それでも、少しでも前に進む気持ちが出てきたのなら、周りもそれを手助けしやすくなる。
何より、ラビリスは姉として大切な妹の世話をしていただけだ。
妹が落ち込んでいれば、姉として支えて当然。

そこに変な遠慮など無用だと笑って言えば、アイギスも笑って礼を言って再び一緒に食事を始めた。
ずっと傍で成り行きを見守っていたコロマルも、アイギスが少しは立ち直ったとわかって嬉しそうに尻尾を振っていた。
そうして、二人と一匹で食事を摂り。寮にいる七歌たちと同じように、零時の前には静かに影時間の消えた世界が来ると思って待っていれば、時計の針が頂点を指した時、世界が緑色に塗り潰された。

影時間――マンション〝テラ・エメリタ〟
「な、んで……どうして、こんな……」
戦いは終わったのだと、これでもう平和な日常を生きていく事になるのだと信じていた。
しかし、時計の針が頂点を指すと、街から灯りが消え、窓の外には巨大な月と異形の塔が見えていた。
彼の果たせなかった願いを叶えようと戦ったラビリスにすれば、この結果は到底受け入れられるものではない。
最後の戦いに参加しなかったことを悔やむ想いがあったアイギスも、このような形で皆の願いが否定されることは望んでいなかった。
コロマルもどこか不安そうに二人を眺めており、どういう事か思考を巡らせていると外から鐘の音が聞こえて来た。
「この音は？　タルタロスの方から聞こえているんでしょうか？」
急いでバルコニーに続く扉を開けて外に出ると、確かに鐘の音はタルタロスの方から聞こえているようだった。
全てのアルカナシャドウを倒し、これまで一度として鳴ったことのない鐘が鳴った。
これらに何の繋がりもないと考えるのは無理がある。
そう判断した彼女たちは、何かがタルタロスで起ころうとしている事は理解した。
そして、遠くに見えるタルタロスをジッと見ていた時、その傍に動く影がある事にアイギスが気付いた。
「……あれは人ですか？」

「どこにおるん？」
「タルタロスから見てやや右の方です。五人ほどでしょうか？」
かなりの視力を誇る二人は数キロ離れた場所からでも人陰が動いている事が分かった。
しかし、光源が不気味な月明かりしかないこともあって、流石にその距離で相手が誰か判断することまでは出来ない。
そこでアイギスが湊から貰ったリストバンドから狙撃銃用のスコープを二つ取り出し、片方をラビリスに渡して人陰を見た時、二人はその正体に驚愕した。
「あれは、ストレガともう一人の八雲さんたち……」
「それと何で死んだはずの理事長が一緒におるんよっ」
死んだはずの人間が生きていた。それも本人を殺したはずの敵と一緒に行動している。
その情報があれば詳細は分からずとも、おおよそどういった事があったのかは理解できる。
つまり、幾月の死は偽装。彼はストレガたちと手を組んで、アルカナシャドウを全て倒せば影時間が終わるという誤情報を伝えていたという事だろう。
死を偽装していた事は憤りを感じるがまぁいい。敵と手を組んでいた事も、最初から裏切っていたならしょうがないと諦めよう。
しかし、影時間を終わらせる事が出来ると騙していたことは許せない。
「八雲さんの優しさを、願いを、利用したと言うのですかっ!!」
あまりの怒りにアイギスの視界が一瞬真っ白に染まる。
だが、すぐに視界が元に戻ると、あの男だけは許さないという思いが頭を占拠する。
それは隣に立って身体を震わしている姉も同じようで、真紅の瞳に黒い感情が混ざった事を察した。
足下にいるコロマルも二人の会話で全てを理解したようで、部屋に入ると自分の道具箱から影時間用の装備を引っ張り出してアイギスたちの許に戻ってきた。

「ワン！」
「そうですね。向かいましょう。あの場所へ」
「行くなら空から行くで。長距離は無理でもブースター使って高い建物を渡っていった方が速いわ」
幸いな事にアイギスたちはマンションの最上階にいる。
ここからビルの屋上などを渡っていけば、障害物の多い道路を走っていくよりも随分と時間を短縮できるだろう。
話ながら自分たちの準備を進める二人がルートについて確認していれば、ふと敵の人数が少ないことに気付いてアイギスが指摘した。
「しかし、敵の別働隊が気になります。ストレガの他のメンバーはどこに？」
「……可能性として考えるなら、寮におらんチドリちゃんを狙っとるんかもしれん。今、ウチらの中で一番強いんは蘇生経験したチドリちゃんやから」
言われてラビリスも狡猾な敵がただ待ち伏せをするだけとは思えないと考え、すぐにチドリが狙われる可能性に思い至った。
チドリは現在栗原の家におり、影時間が終わっていないと分かれば再びタルタロスを目指すと思われる。
敵もそれに気付いて別働隊が待ち伏せしていると考えられるので、準備を終えて背中に推進器付きの戦斧を装着したラビリスはルートの変更を進言した。
「ここからタルタロスへ向かう途中に、栗原さん家の方へやや進路を取るわ。少しだけ迂回する事になるけど、チドリちゃんを放っておくわけにもいかんから」
「はい。大丈夫です。行きましょう」
「分かった。しっかり掴まっておきや！」
コロマルを抱っこしたアイギスをお姫様抱っこしてラビリスが駆け出す。
推進器を途中で起動し、僅かな跳躍で鉄柵の上に乗ると、それを強く蹴り出して影時間の空へと飛び上がった。
向かうはタルタロス。そして、狙われているかもしれないチドリの

許だ。

第三百四十四話　仲間の許へ

影時間――港区

全てのアルカナシャドウを倒せば影時間が終わる。

湊が目指した影時間のない世界。

そこへ辿り着くという彼の果たせなかった願いを叶えようと戦った少女は、再び影時間になった事に不思議と驚きはなかった。

桐条側から聞いていた条件を疑っていた訳ではない。

単純に、一区切りついた気にはなったが、アルカナシャドウを倒した後も時間が来るまで影時間が続き、タルタロスにも変化がなかった事で〝次がある〟とどこかで思っていただけだ。

だからこそ、再び影時間がやって来て、タルタロスの方から鐘の音が聞こえて来たとき、チドリはこれがそうかと武器を手に栗原の家を出ていた。

栗原の家と巌戸台分寮の位置関係から、タルタロスへは特別課外活動部の方が先に到着する。

早く着けば良いということでもないが、影時間の戦いが次のステージに進んだのであれば、状況を把握するために出来るだけ早く到着したい。

そう思って少しだけ駆け足でタルタロスへ向かっていれば、自分の知っている反応が近くにあったことでチドリは相手の姿が見えたところで足を止めた。

「……そう。最初から仕組んでたわけね」

「理解が速くて助かるぜェ。今頃あっちはタカヤと幾月の野郎が桐条のペルソナ使いらを殺してるところだ」

十数メートル離れた場所に立っているのは、かつて同じ研究所にいたカズキ、メノウ、スミレ。

向こうにタカヤがいるということは、恐らくジンも一緒にいるのだろう。

ただ、湊に懐いていたマリアが、湊と同じ顔を持っている八雲と一緒にいるのだろうかと疑問に思い。その点については尋ねておく事

にした。
「マリアは？　八雲の……湊の偽物と一緒にいるとは思えないんだけど？」
「マリアは殺されたよ。ミナト君にそっくりなあいつは結城理って名前なんだけど、あいつがミナト君を殺したって聞いて、マリアは襲いかかったんだ。カウンターで心臓を貫かれて同じ影時間中に死んだけどね」
　チドリの問いにメノウが静かに答える。
　エルゴ研を離れてからストレガたちと会う機会も減ったが、マリアだけはたまに湊が連れて歩いていたのでチドリも会っていた。
　そんな相手が既に死んでいたと聞いて驚く部分もあったが、同時にマリアが自分と同じ痛みを知らずに逝けたのなら良かったとも思った。
　彼女の精神は年齢よりも幼かった。湊によく懐いており、彼が死んだ世界で生きるとなれば、心を殺す事でしか生きていられなかったに違いない。
　そうなる前に、死んで彼と同じ場所に向かえたなら、あちらで彼と合流できている可能性もあるだろう。
　本当ならば自分もそれで良かったのだが、と未だ彼の願いを叶えるために生き続けようとしている少女は素直に心情を吐露する。
「……そう。少しだけ羨ましいわ。マリアは先に湊に会ってるんでしょうから」
「チドリはそっちで良いの？　ミナト君がした延命措置も完全じゃないし。ボクたちと来る事もできるよ？」
　チドリとマリアは研究所時代に湊から黄昏の羽根を貰った事で、通常のペルソナ使いと同等以上の適性を持ち、身体の状態もある程度は回復している。
　けれど、それでも一般人よりも寿命は短くなっており、終わりの時を考えればメノウたち側に立って計画に協力しても問題はない。
　同じ元被験体という事でメノウがチドリに立場の確認を取れば、チドリは白い召喚器を手に持って不敵に笑い返した。

「一回殺しておいてよく言えたわね。そっちが余計な事をしなければ、そもそも湊だって死ぬことはなかったのよ」
「あいつの力は計画の邪魔になンだよ。直々に殺そうと思ってたところを横取りされたのはムカついてるけどなァ」
ストレガが理たちと別のチームであったなら手を組んで戦う未来もあっただろう。
だが、ストレガは理たちと手を組み、その理たちのせいでチドリは一度殺されて湊も死んだ。
自分を殺されたところでチドリはそこまで怒ることはなかったが、恩人であり何よりも大切な者を殺した事を赦すことは出来ない。
復讐のために生きるつもりはなくとも、その仲間が目の前にやってきて戦うつもりでいる。
ならば、少女も胸の内で燃える黒い感情に抗うつもりはなかった。
『ペルソナっ!!』
向かい合った者たちはそれぞれ召喚器を抜き、そのまま己の心の化身を呼び出す。
一対三、数で負けている上に敵方の戦力の一体は全長三〇メートルの巨大なペルソナだ。
チドリも楽な戦いではないことは分かっている。
状況を考えるのであれば、最初に全力に近い一撃を叩き込み、相手の戦力を一画でも崩してから戦うのが理想。
しかし、相手も対人戦に慣れた裏社会の人間たちだ。
昨日の戦いでチドリが放った攻撃も見ている以上、その攻撃が来ると読んでいて当然。
カズキのモーモス、メノウのデュスノミアは召喚されると同時に左右に散開。
そして、中央を巨大なテュポーンが拳を引き絞りながら迫ってくる。
敵の姿はテュポーンの影になってチドリからは見えない。
裏の仕事をしている関係からカズキは拳銃を所持しており、他の二人も同じように何かしらの飛び道具を持っている可能性が高い。

規格外の巨大ペルソナに、進化ペルソナ相当の強さのペルソナが二体。そこに戦い慣れた者が三人も加わるとなると、いくら蘇生によって適性値が大幅に上昇したチドリでもかなり厳しい。
「ヘカテー、炎で壁を作って！」
ならば、相手を分断することから始めようと、ヘカテーが杖を振るって炎の壁を展開する。
ペルソナならば突破出来るだろうが、生身の人間では厳しく、銃弾は狙い通りに飛ばなくなる。
炎の壁を無視して突っ込んでくるテュポーンを見ながら、チドリは後退しつつ次の指示を飛ばした。
「氷の槍で貫きなさい！　ブフーラ！」
全身が筋肉の鎧に覆われたテュポーンは純粋な力では最強クラスだろう。
ただし、いくら強靭な身体をしていようと、人と同じように目や口があるならそこが弱点となり得るはず。
一発故にかなりの力を籠めた氷の槍を放ち、それがテュポーンの右眼に突き刺さると、テュポーンは右眼を押さえ動きを止め、痛みに悶えるように下半身の蛇ごとその場で暴れる。
第一の脅威を止めることが出来たチドリは、そのまま距離を取りつつ敵の位置を把握、左側からペルソナが高速で接近することを感知し、声に出さずにヘカテーに広範囲の電撃を放たせた。
強襲を仕掛けようとしていたモーモスは、カズキから見えていなかったのか広範囲に放たれた電撃に飛び込む。
これで動きが止まると思っていれば、モーモスは電撃を完全に無視してチドリに迫ってきた。
「くっ……」
エルゴ研脱走後、チドリとストレガたちはほとんど会うことがなかった。
おかげで相手と戦う事がほとんどなく、弱点と耐性の把握がしっかりと出来ていなかったチドリは失敗したと表情を曇らせる。
電撃を突破してきたからには相手の電撃耐性は電撃無効に成長し

ていたに違いない。
そんな相手に電撃を放ったところで召喚者の目を数秒眩ませる程度の効果しかない。
案の定、簡単に電撃を突破してきたモーモスは、その手に持った大鎌をチドリに向かって横薙ぎに振るう。
咄嗟にハンドアックスで受けたチドリは力の差で少し後退させられる。
チドリの動きが止まったその瞬間を狙い。今度は半透明なマネキンのような見た目をしたデュスノミアが鎖に繋がった鉄の処女をハンマーのように振り下ろしてきた。
拷問器具である鉄の処女は金属の塊。そんなもので殴られれば骨折どころか一撃で死にかねない。
拙い。そう思うもモーモスの攻撃を受け止めて咄嗟に身体が動かないチドリは、間に合えとギリギリまで回避しようとした。
「やめろぉぉぉぉっ!!」
だがその時、チドリに向かって振り下ろされた鉄の処女は、横からやってきたヘルメスの蹴りで弾き飛ばされた。
遅れて駆け込んで来た順平は大剣をモーモスに向けて振り下ろし、それを避ける形でモーモスを後退させる事に成功する。
敵のペルソナが下がっても警戒を怠らず、チドリを庇うように立った順平は、必死に走ってきたのか肩で息をしながらも敵を睨み付けて吠えた。
「いい加減しろよ、てめぇら！　簡単に殺そうとしやがって、人の命をなんだと思ってんだ！」
あのままヘルメスが介入しなければチドリは無事では済まなかった。
いくら強い力を手に入れたとしても、それを当たり前のように躊躇いなく人に使える神経が分からない。
かつて自分も人に向けてペルソナを使ったことがある順平は、だからこそ相手の行動が素だと理解できて、よく平然とそんな事が出来るなと憤っていた。

だが、順平からそんな事を言われた相手はというと、敵戦力が増えたというのにまるで気にした様子もなくペルソナを傍まで退かせ、どこか呆れと失望の混ざった視線を向けてきていた。
「チッ、くだらねェ雑魚が送られてきたもンだぜ。テメェ一人来たところで戦力は欠片も変わンねェだろうがよ！」
カズキの指摘通り、順平のペルソナは進化しておらず戦力として数えるには完全に実力不足。
先ほどは勢いをつけた奇襲だったからデュスノミアの攻撃を弾けたに過ぎず、真っ当にやればヘルメスではダメージを与える事は厳しい。
本人も分かっているからこそ、未だに気を抜けず警戒したまま男の意地でチドリを庇っている。
ただ、順平たちは知らないが、ここに向かっていたのは彼だけではない。
「待って、カズキ。何か来る」
今にも順平に向かって行きそうなカズキをメノウが止めれば、彼女は北東の方角から何かが接近してくると視線を向けた。
順平たちも同じように視線を向ければ、影時間の空に光の尾を引きながら高速で接近してくる物体が戦場に降りてくる。
「すみません、遅れました！」
「ワン！」
「順平君が先に来とって良かったわ！」
「オマエら……つか、ようやくアイギスも復活したのか！」
空から降りてきたのはアイギス、コロマル、ラビリスの三名。
チドリと順平を守るようにアイギスらも立ち、その背中を見て順平が嬉しそうに声をあげる。
学校にも来ず、アルカナシャドウとの戦いにも出てこなかった事で、アイギスは大丈夫なのかと順平も心配していた。
いつ復活したのかは分からないが、それでもアイギスがようやく戦えるようになったのなら援軍として非常に心強い。
急に現われた者たちの存在に驚きながらも、味方が増えた事で呼吸

を整えてチドリも敵を見れば、流石に進化ペルソナクラスを四体も相手にするのは難しいかとカズキが舌打ちをした。
「チッ……ゾロゾロと集まってきやがったか。おい、メノウ。アレ使え」
「いいけど、早くないかな？」
「知るか。どうせ人数は足りてンだ。こっちは足止めできりゃそれでいいだろ」
相手が何をする気なのか分からないが、警戒してアイギスが銃を取り出す。
その間もカズキたちは構わず何かを相談し、メノウが納得したように頷くと自分の腰に手を伸ばした。
敵には手榴弾を使う者もいる。なら、メノウも同じように爆発物を投げてくるのではとアイギスが手足を撃とうと銃口を向けた。
「やらせないのです！」
しかし、その瞬間、先ほどのダメージから復活したテュポーンが蛇の尾で出来た足で自分たちを守るように囲った。
これではどんなに頑張っても射線を取れない。
相手に自由にさせるのは怖いが、止められないのなら距離を置くしかないと離れれば、テュポーンの足下から何かが飛び出し、ビルの三階ほどの高さで爆発した。
一体何だと視線を向ければ、爆発したところでは怪しい紫色の光が輝いていた。
「なんなんあれ？」
「紫の光って信号弾かなんかか？」
空に光を打ち上げるなど信号弾くらいしか思い浮かばない。
見ていても身体に影響はないようなので、順平たちが次の敵の動きに集中していれば、突然テュポーンが消えてストレガたちが二体のペルソナに分かれて掴まり空に逃げた。
「おい、ここで逃げんのかよ!?」
「っ……待って、何これ。シャドウたちが騒いでるっ！」
チドリに攻撃しておいて逃げるのか。順平がそういって敵を追い

掛けようとすると、周囲を探っていたチドリが彼を止める。
その様子からただ事ではないと気付き、アイギスたちもチドリの次の言葉を待てば、より集中して索敵を行なったチドリは僅かに青い顔をして空を見上げた。
「どこに隠れてたのか分からないけど、街中からシャドウが集まってくる」
「集まってくるってここにか？」
「ええ。道路だけじゃない。飛べるタイプは空からも向かってきてるわ」
チドリの索敵によれば、集まってくるシャドウの数は百や二百では済まない。
しかも、それは現時点での話であって、反応は次々と増えているらしい。
敵が打ち上げた信号弾と集まってくるシャドウが無関係とは思えない。
となれば、ストレガたちが空に逃げたのは、集まってくるシャドウに襲われないようにという事なのだろう。
「畜生、あいつら自分らだけ逃げやがって！」
「逃げてないわ。三人ともそう離れてないビルの屋上にいる。恐らく戦闘で消耗した私たちを叩くつもりでしょうね」
「用意周到ってわけやね。街に溢れたシャドウを放っておくことも出来んし。逃げようにもストレガたちが狙ってきとる。けど、向こうには裏切った理事長と残りのストレガがおるから向かわん訳にもいかんっていう」
逃げたように見せてそう離れていない場所から様子を見ている。そうチドリから聞いたラビリスは如何ともし難い状況に溜息を吐く。
どうにかチドリが殺される前に合流できたが、遠くの方から地響きのようにシャドウたちが向かってくる音が近付いているのが分かる。
遠くの空ではイナゴの大群がいるように黒い影が蠢いて迫っているのが肉眼で分かった。
タルタロスから溢れた分もあるのかもしれないが、街中にここまで

シャドウが現われるなど初めての事だろう。
敵が一体どんな道具を使ったのかは分からないが、いつかの超大型シャドウが影時間を終えても消えなかった例があるので、集まってくるシャドウをそのままにしておく訳にもいかない。
シャドウの波が押し寄せてくる前にどう動くか決めねばとラビリスたちが考えていれば、先ほどの彼女の言葉に聞き逃せない単語があった事で順平が聞き返した。
「え、理事長ってどういう事だよ？　幾月さんが生きてたのか？」
「はい。八雲さんの家からタルタロスの方を見た時、もう一人の八雲さんやストレガたちと行動していたのが見えました。アルカナシャドウを倒しても消えない影時間。生きていて敵と行動を共にする理事長。これらから推測するに、影時間を消す方法について誤った情報を伝え、死を偽装して裏で活動していたんだと思います」
聞いた瞬間に「なんだよ、それ……」と表情を青くさせる順平。
もしも、アイギスの言葉が真実であれば、エルゴ研時代にエヴィデンスと呼ばれた少年のクローンを作ったのが誰か分かってしまう。
何せ桐条グループ総帥すらクローンが作られていたとは知らず、そんな百鬼八雲のオリジナルと死んだはずの人間が行動しているのだ。当然、何もない訳がない。
人々の平穏を守るために戦った子どもたちの善意を利用し、これまで間接的に散々利用してきた湊を邪魔になるからと計画の最終段階に入る前に排除した。
エルゴ研に在籍していたチドリだからこそ、それがあの男の本性だと瞳に殺意を籠めて嗤った。
「あいつもエルゴ研で被験体を何人も殺しているもの。暗躍していたって聞いた方がしっくりくるわ」
「いや、でも、それって七歌っちたちがまずいって事だろ。事情知らなかったら幾月さんを人質にされるとかあり得るし！」
本気で焦っているようだが、仲間に危機が迫っている状況になると順平は案外頭が回るらしい。
確かに彼の言う通り、事情を知らなければ幾月は人質として価値が

出てくる。
誰かのために戦える者たちだからこそ、そういった狡猾な手段を取られれば動けなくなる。
ラビリスはどうすれば全員が助かるかを瞬時に考え、最も可能性が高いのはアイギスが単独で七歌たちに真実を伝えに行くことだと判断して指示を出した。
「……アイギス、こっちはウチらでやるからE．X．O．で七歌ちゃんたちのとこに向かって」
「でも、それじゃあ姉さんたちが……」
「大丈夫よ。もしもの時は八雲が残してくれた切り札もあるから」
空にもシャドウがいるとなるとラビリスの戦斧に搭載された推進器は十全に使えない。
となれば、湊のマフラーから作られたリストバンドで複数の武装を即時換装出来るアイギスがE．X．O．を起動して走った方が安全で速い。
こちらに残るのはチドリ、順平、コロマル、ラビリスの四名だが、チドリが言う通り、籠められた力が尽きるまで彼女を守るタナトスもいる。
どこまで出来るか分からないが、七歌たちに危機が迫っている以上悩んでいる時間は無い。
彼女たちから仲間の命運を託されたアイギスが分かったと頷き、走り出す準備をすれば、ハンドアックスを握り直したチドリが伝え忘れていた事があったと口を開いた。
「八雲の偽物の名前だけど、結城理っていうらしいわ」
「理さんですね。了解しました。では、戻ってくるまでどうか耐えてください。E．X．O．――――起動っ!!」
走る体勢になったアイギスの全身から水色の光が噴き出す。
ペルソナを生成するエネルギーを不安定なまま過剰供給し、溢れ出たエネルギーで全身に纏う言わばペルソナの鎧。
身体能力に大幅なブーストが掛かり、ペルソナの持つ攻撃力と防御力を自身にある程度転用出来る自己強化技だ。

この状態ならばアイギスは機械の身体であった時と同等以上のパフォーマンスを短期的に発揮出来る。仮に様子を見ているストレガたちが追い掛けてきても追い付くことが出来ないという訳だ。
Ｅ．Ｘ．Ｏ．の完全な起動を確認したアイギスは、こちらに残る仲間たちと視線を交わすとすぐに正面を向いて足に力を籠めて地面を蹴る。
一瞬にしてトップスピードに達したアイギスは一陣の風になり、仲間たちも彼女の姿をすぐに見失った。
「これで何とか状況を伝えられたらいいけどな」
「出来るだけの事はしたって事で、こっちはこっちで頑張ろうや」
七歌たちの事は心配だが、自分たちの身にはっきりと分かる形で脅威が迫っている。
アイギスが無事に合流出来ても、こちらの応援に辿り着けるかは分からない以上、応援が来なくても生き残ることを目指さなければならない。
戦う相手はシャドウだが、そうなるように仕組んだのは自分たちと同じ人間だ。
これでは何が本当の敵か分からなくなる。
そう思いながらも武器を手に持った順平たちは、姿を見せたシャドウたちと終わりの見えない戦いを始めた。

第三百四十五話　狂信者

――月光館学園・天文台

死んだはずの幾月をストレガたちに人質に取られ、武装解除させられた七歌たち。

彼女たちが武器と召喚器を手放した直後、どこからか投げ込まれた催眠ガス手榴弾によって彼女たちは意識を失った。

そして、あれからどれくらいの時間が経ったのか、七歌たちは十字架のようなモニュメントに磔にされている状態で目を覚ました。

誰も来たことがなかった天文台の屋上。ここもタルタロスの影響の受けているのか、外観も含めて変化しているようだが、七歌たちを磔にした十字架はタルタロスから最も離れた縁に立っている。

対して、ストレガたちはタルタロスに最も近い縁の辺りに立っており、その両者の間、屋上の中央の辺りに一切拘束されていない様子の桐条武治が倒れていた。

まさか彼だけ先に殺されたのか。そう思ってジッと見つめてみれば、どうやら目立った怪我はなく呼吸をしているようだ。

七歌たちがそうやって現状を把握しようと観察を続けていれば、先ほどとは違って身綺麗な状態になっている幾月が笑顔で口を開いた。

「やあ、ようやくお目覚めかい？　先ほどは随分と手荒い歓迎になってしまってすまなかったね」

薄汚れた格好をしていたのは仕込みだったのだろう。今の幾月は寮でよく見た格好をしていた。

拘束を解かれてもストレガたちと共におり、ストレガたちも幾月に手を出していない。

つまりはそういう事なのだろう。

圧倒的に不利な状況だと理解している七歌は、とりあえずこの状況を引き起こした相手の持っている情報を入手しようと話しかけた。

「理事長、〝そっち側〟で良いんですね？」

「ああ、彼らは私たちの同志だ。付き合いに関しては君たちより長いくらいだよ」

そう話す幾月の目は正常な動きをしている。洗脳や暗示に掛かっているような不自然さがない。
彼の後ろにいるタカヤとジンも特に否定していない事で、相手の言葉が真実だというのは分かった。
ずっと裏で敵と繋がっていたと知って美鶴はショックを受けているようだが、以前、湊の過去について喫茶店のマスターである五代に聞いた際、彼は幾月修司が自分たちと同じ側の人間だと言っていた。
どんなに世界の事を考えようと、小学生程度の年齢の子どもたちを百人も集めて実験に使っていた。
そんな事が出来る者たちが真っ当な神経を持っている訳がない。
しっかりと相手が敵だと認識した七歌は、ゆっくりと息を吐いて頭を働かせて次の言葉を口にする。
「アルカナシャドウを倒せば影時間が終わる。あれは嘘だったって事でいいですか？」
「いや、嘘ではないよ。ただ、君たちの考える終わりとは違った形だったというだけさ」
七歌たちが求めたのは影時間が存在しない世界。
零時になっても異形の塔であるタルタロスは現われず、シャドウに心を喰われる無気力症が起こることもない平和な世界だ。
だが、幾月が研究の末に判明した影時間の終わりはそういった形ではなかった。
「君たちにも以前話しただろう。アルカナシャドウは十年前の爆発事故で各地に飛び散ったシャドウたちだと。影時間を終わらせるにはその全てを倒し。本来の姿、十三番目のアルカナを持つ究極の存在。滅びを呼ぶ者〝デス〟を降臨させる必要があったんだ」
デスという言葉を聞いても全員が何の話か分からず困惑した表情をしている。
最も研究について詳しいはずの美鶴も知らないのだ。桐条側と湊たちから少し話を聞いていただけの他の者たちが知っているはずがない。
もしかすると、元対シャドウ兵器だったアイギスたちやチドリなら

ば知っているかもしれないが、この場にいない者たちに聞けるはずもなく、七歌たちは黙って相手の話を聞こうと思えば、幾月の瞳にどこか狂気の色が混じった。
「そうして、ようやく絶望に満ちたこの世界に〝全ての終わり〟がやってくる。全ての死……しかし、それは同時に始まりでもある」
「一体何の話をしているんだ？」
突然抽象的な話になったことで真田が怪訝そうに相手を見る。
彼の言葉は他の者たちの心の声を代弁しており、全員が相手の言葉の意味を理解し切れていなかった。
唯一分かったのは相手が正常ではないという事くらいか。
七歌が冷静にそんな事を分析していれば、幾月はどこか高揚した様子で一歩近付いてきて言葉を続ける。
「君たちは影時間やタルタロスが実験の失敗で出来た物だと思っているだろう。だがそれは正しくない。影時間もタルタロスも元から世界の裏側に存在していたんだ。シャドウを集めたのはそれを表の世界、つまり現実世界に具現化させるためだったのさ」
シャドウもペルソナも人をはじめとした生き物の心の世界の姿。
研究によって、集合無意識が存在すると分かっている者にすれば、影時間やタルタロスが実験の失敗などで生まれた物でない事くらいは分かる。
そう、影時間もタルタロスもシャドウたちのいる世界から、人々の暮らす現実世界に引っ張り出されたに過ぎない。
聡い者ならシャドウやペルソナがどういった存在が説明した時点で、心の世界があると理解し、タルタロスの正体にも気付きそうなものだが、話を聞いた七歌たちを見てその考えに至る者はいなかったかと小さく苦笑して幾月は一つ尋ねた。
「君たち目には今の世界はどう映っている？　豊かで満ち足りていると思うかい？　物質的、文化的には確かに発展しただろう。二千年前の人間にすれば、宇宙に辿り着くどころか、空を自由に飛ぶ乗り物が出来ると言ったところで信じはしないだろう」
世界中の神話を見れば分かる通り、過去の人々は自然を崇拝し、そ

ここに神の存在をみていた。
中でもどこまでも広がる空を支配する者、自由に飛ぶ者を神や神の使いとして特別視していた。
そんな者たちに今の世界のことを話せば当然、誰一人としてそんな未来を想像出来ず信じはしないだろう。
科学の発展は神を殺した。過去にはそう言った者もいたようだが、かつては神の御業と言われていた事が解明されてしまうほどに今の世界は文化的に豊かになっていると言える。
「だが、そうして科学が発展し続けた一方で、人間自体は成長したと言えるだろうか？」
幾月も世界が科学の発展で豊かになっていること自体は否定しない。
影時間の存在を発見し、それを利用出来るのも、科学が発展したおかげなのだ。その点について否定出来るはずもない。
ただ、その一方で発展した技術や道具を扱う人自体の成長はどうだろうか。
尋ねた幾月は夜の海のように暗く冷たい瞳で自分の見解を語る。
「答えはノーだ。今なお世界には理不尽が蔓延り、自分を選ばれた者だと勘違いした害虫が善良な者たちから搾取し続けている。幼い子どもから母親を奪った者が、何のお咎めもなくのうのうと生きる事が許される。そんな腐った世界の支配者が今の人間だ。歴史を紐解けば分かる通り、人間の本質は二千年経とうとまるで変わっていない」
科学が発展したのだから、それを当然のように扱えるようになった人間もまた成長したと言える。
そのように考える者もいるかもしれないが、その成長したはず人間に二千年前の文化に触れさせれば、二千年前の人間と違って満足にこなせない事が多々あるだろう。
今も昔も、一部の賢者が技術を発展させ、凡夫にそれが広まって出来る事が増えた分、同じだけ出来なくなっていく事が増えていった。
幾月に言わせればそんな物は成長とは言えない。ただの変化である。

「人は世界を満たし尽くし、真っ平らな虚無の王国にしてしまった。もはや滅びによってしか救われない」
二千年以上あっても人々の本質は何も変わらなかった。
大きな災害があろうと、世界中で戦争が起きようと、変わらぬまま
これだけ豊かになった以上、最早人類に種としての成長は見込めない。
ならば、無理矢理にでも誰かが変えなければならない。
「預言書によれば、滅びは〝闇の皇子〟の手により導かれる。そして、皇子は全てに救いを与えたのち、〝皇〟となって新世界に君臨する」
「それが……貴様の目的かっ……」
デスが降臨すれば自分がその皇子となって世界に救いを与えてみせる。
現代人類の多くを間引くことになるだろうが、いつの時代も変化について来れない種は滅びてきた。
幾月が世界に与える救いは、新たな理を作る事で世界の構造その物を変えるというものだ。
その変化に、種としての成長について来られないのならば、そんなものは自分の世界にいらないと幾月が言えば、目を覚ました桐条武治が立ち上がりながら幾月を睨みつけた。
幾月のすぐ後ろには特別課外活動部よりも高い適性を持つペルソナ使いたちがいる一方、桐条は自由に動けるもののペルソナすら持っていないというのに、この状況でどうしてそこまで強気でいられるのかと少々呆れながら幾月は相手の言葉を肯定した。
「……ええ、そうです。貴方の父上は研究を続けるも核心には至れなかった。だが私は違う。忌まわしい封印から解放されたデスを従え、皇子となってこの世界を救済します」
正気を疑うような言葉だが幾月の瞳には強い信念のようなものが見て取れる。
どうして彼がそんな事を想うに至ったのか、研究所から逃げ出したはずのストレガたちが何故元研究員の幾月と手を組んだのか。
七歌たちはあまりにも知らないことが多過ぎるが、幾月が裏切った

と理解した時点で知りたかった事があったゆかりがしっかりと相手を見つめて質問をぶつけた。
「ねえ、十年前のお父さんが遺した記録……。あれも嘘だったの？」
「いや、あれは本人が遺したもので間違いない本物さ。まぁ、意に沿わない部分には手を加えさせて貰ったけどね」
「岳羽の父上が最後に遺した言葉を、そんな大切なものを改竄したのかっ!?」
以前、屋久島に旅行に行った際に見た岳羽詠一朗の映像。
あれはまさに死ぬ間際に遺した彼の遺言だった。
そんな大切な物を、その娘を騙すために手を加えて利用した。
視界が一瞬白く染まるほど怒りを覚えた美鶴が問い質せば、幾月は平然とした態度で薄い笑みを浮かべたまま言葉を返してくる。
「こちらとしては岳羽君がその事実にいつ気付くかヒヤヒヤしていたんだがね。あの映像のマスターデータは有里湊が所有していたんだ。実の娘に渡さない辺り、彼は僕より余程他人を信用していなかったようだね」
湊がマスターデータを持っている事はゆかりも知っていた。
屋久島で映像を見た後、泣きながら彼に電話した際にそう聞いたのだ。
あれからバタバタとしていて、結局、ゆかりの手元にそれが渡ってくることはなかったが、幾月が言うように湊が他者を信用していないために渡さなかった訳ではない。
父と想い人を愚弄されたゆかりだけではなく、話を聞いていた特別課外活動部の者たち全員が幾月が彼について知った風な口を聞くことに怒りを覚えれば、彼に対して誰よりも負い目を感じていた桐条も幾月の言葉に憤った。
「私も百鬼八雲を利用した人間の一人だ。その咎は受けよう。だが、幾月。貴様のそれは度を超えている。どこまで彼を愚弄し、外道に堕ちれば気が済むのだっ」
ペルソナ使いの研究に行き詰まり、唯一研究として使える自然獲得者を手に入れるため、秘密裏に作られた百鬼八雲の影武者（クローン）。

百鬼家の特異体質によってクローンもオリジナル同様にペルソナを使うことが出来たが、その人生はどこまでも彼に優しくなかった。
桐条グループでも被験体が脱走した後、はぐれシャドウなどが倒されている痕跡は見つけていた。
いつどこの誰がやったのかは分からなかったが、桐条や幾月は薄々湊がやっているのだろうと感づいていた。
彼が作られた経緯を知っている幾月にすれば、デスを確実に手にするため研究に時間が欲しかっただけに、使えなくなった対シャドウ兵器の代替品として重宝した事だろう。
研究のためにだけに作られ、シャドウ討伐のために使い続けたあげく、邪魔になるからと処分した。
どこまでも彼を利用し続けた視線の先にいる男に人の心はないのかと桐条が問えば、一度手を汚した時点でお前も同類だろうにと相手を嘲るように笑って幾月は返した。
「有効活用と言って貰いたいですね。アレはそういう存在です。人々を助け続け、最後には大切に想っていた少女救って死んだんだ。彼も本望でしょう」
「幾月ッ!!」
この男だけは生かしておく訳にはいかない。
そう思った桐条は隠していた拳銃を素早く抜いて相手に向けた。
幾月もそれを見て拳銃を抜いたが、どうやっても桐条が引き金を引く方が速いだろう。
懸念すべきはストレガたちだが、誰一人としてその場から動いておらず、これならばと桐条は引き金を引いた。
遅れて幾月も引き金を引き、二発の銃声が影時間の空に響けば、
「……うぐっ……が……」
驚愕の表情を浮かべたまま、腹部の左下の辺りから血を流した桐条だけがその場に倒れた。
桐条は自分の立場を理解している。そのため有事に備えて拳銃の扱いもそれなりに鍛えていた。
しかし、彼の放った弾丸は幾月に届くことなく、逆に相手の撃った

弾丸は桐条に届いた。
「お父様ぁぁぁぁぁっ!!」
うつ伏せに倒れ、血溜まりに沈んだ父を見て美鶴が絶叫する。
今すぐ駆け寄りたいのだろう。美鶴は腕から血を流しながら拘束具から逃れようとしている。
だが、他の者たちの視線は倒れた桐条ではなく、幾月の正面に浮かぶ存在に釘付けになっていた。
「なん、で……どうして、理事長が、ペルソナを……」
震える声でそう口にしたのは七歌だ。
彼女の視線の先、幾月の正面には確かにペルソナとしか言えない存在がいた。
だが、それはおかしい。桐条グループの研究者たちは適性は獲得出来ても、ペルソナを得ることが出来なかったから外部の子どもたちを被験体にし、最後は七歌たちを頼ったのだ。
だからこそ、幾月がペルソナを持っているのはおかしい。
もしや、後ろにいた誰かが一瞬で召喚したのかとも考えたが、ペルソナが現われたのは確かに幾月からだった。
幾月がペルソナを呼び出し、桐条が銃に撃たれ倒れた事で、特別課外活動部の誰もが動揺から思考がまとまらずいたとき、幾月が再び持っていた拳銃を桐条に向けた。
確かに桐条は倒れて意識を失っているようだが、即死ではなかったようでまだ息があった。
故に、ここで止めを刺すつもりなのだろう。それを理解した美鶴は喉が張り裂けんばかりに叫んだ。
「やめろ、幾月！　やめてくれぇぇぇ！」
「――――さようなら、御当主。新たな世界でまた会おう」
言い終わると同時に再び幾月の持つ銃から弾丸が撃ち出される。
赤い尾を引きながら真っ直ぐ飛んでいくそれは、気を失って動かない桐条の頭部をしっかりと捉える。
その直前で、横から飛んできた弾丸によって大きく弾かれた。
「すみません、皆さん。遅れましたっ!!」

『アイギスッ!!』
そう言いながら白い女神の肩から天文台の屋上へと飛び降りた少女は、手に持ったライフルを幾月に向けながら桐条の許まで駆け寄る。
湊に死に沈んでいたはずの彼女が現われ、桐条の窮地が救われた事に一同は驚きながらも安堵の息を吐く。
突然の乱入に幾月たちも少々驚いたようだが、やって来たのが警戒されていた赤髪の少女でなかったことで様子を見ることにしたらしく、桐条の容態を見ているアイギスの好きにさせた。
「……これは、非常に拙いですね」
言うなりアイギスは右手のライフルを幾月に向けたまま、左手にサブマシンガンを呼び出して、七歌たちを拘束している金具を連続で撃ち抜き破壊して行く。
急に拘束を解かれた者たちは、一瞬の浮遊感に驚くもどうにか着地してアイギスの許に駆け寄ると、すぐに桐条を抱えてアイギスと共に敵から距離を取る。
「出血が酷いです。専門的な知識を持つ人しか処置が出来ませんが、少しでも出血を抑えるために清潔な布で傷口を押さえてください」
「あ、私がやります。皆さんは敵の警戒をお願いします」
アイギスの言葉にサポート専門の風花が声をあげ、彼女から清潔な布を受け取って桐条の傷口に当てて僅かでも出血を抑える。
その間に、他の者たちの装備がないことに気付き、アイギスが湊のマフラーに保管されていた予備の武器と召喚器を出して全員に渡した。
湊が十個以上予備の召喚器を作っていてくれたことに感謝しつつ、これでようやく戦える状況にはなった訳だが、どうして幾月の前に自分の知るペルソナと同型の存在がいるのかとアイギスが質問した。
「理事長、どうしてあなたが八雲さんと同じオルフェウスを持っているんですか?」
そう。幾月の前にいるペルソナは、アイギスが過去に目にした事のあるオルフェウスと同一の見た目をしていた。

違う点があるとすれば、八雲が最初に見せたオルフェウスが白と水色を基調にしていたのに対し、幾月の傍にいるオルフェウスは黒と赤を基調としている。
まるで属性が反転しているとでも言いたげな見た目だが、事実、黒いオルフェウスからは言いようのない禍々しさを感じた。
「フフッ、世界のためにと君と共に戦った少年に目覚めた力がオルフェウスだ。なら、同じく世界のためを思っている私に同じペルソナが目覚めても何も不思議はないだろう？」
ペルソナは心の具現。だが、その時に召喚者の意思やイメージが姿に反映されるというデータがある。
ならば、幾月の言う通り、〝世界のため〟という共通の意識から同じペルソナが呼び出されても不思議ではない。
もっとも、ペルソナ使いではなかった彼がペルソナに目覚めている事にも疑問はあるのだが、その点については幾月が自ら説明してくれた。
「九年前に人工ペルソナ使いを作れたんだ。研究を進めそれを自分に施すくらいは訳ないさ。無論、適性が足りない分は黄昏の羽根の移植で補う必要があったがね。改めて紹介しよう。私が得た力、道化師〝アルケー・オルフェウス〟だ」
九年前の技術では、対象を子どもに絞っても制御剤を飲み続ける人工ペルソナ使いしか作れなかった。
しかし、独自にその後も研究を続けた幾月は、湊が自分やチドリに黄昏の羽根を移植したという研究データを見たことで、何人かの子どもに黄昏の羽根を移植する実験を行ない。どうにか被験体を死なせずに移植する方法を見つけた。
その実験に使った被験体は桐条グループにばれぬよう遠く離れた田舎町の病院に置いているが、おかげで黄昏の羽根を移植して自分の適性を高める事が出来るようになった幾月は、自身も戦う力を手にすべく制御剤を必要としない人工ペルソナ使いになるための処置を施した。
今日までそれが桐条グループにばれなかったのは、死んだと偽装し

てからその処置を行なったからに過ぎない。
おかげで桐条の凶弾から幾月は助かった訳だが、七歌たちにすれば冷静に狂っているという厄介な人間が相手だ。
それが自分たちと同じ力を手にしたことを理解し、冷たい汗が背中を流れるのを感じた。

第三百四十六話　錬金術師の祖

影時間――港区

獅子型のシャドウが飛びかかってくるのに合せ、ラビリスは戦斧を振るって敵を屠る。

続けてマーヤ数体が集まってくると、後退しながらアリアドネの赤い糸で形作った闘牛の突進で蹴散らした。

けれど、息をつく暇もなく上空から数体の鳥型シャドウが襲いかかってきた。

「アオーンッ!!」

ラビリスがそれに狙いをつけて戦斧の銃機構を使おうとすれば、コロマルの呼び出したケルベロスが間に入って炎で敵を飲み込む。

離れていても熱気を感じるほどの高温だ。直撃を受ければ無事に済む訳がない。

ケルベロスが炎を止めるとそこに敵の姿はなく、横から襲いかかってきた騎士型のシャドウの攻撃を躱し、コロマルが敵の身体を足場に接近すると喉元を切り裂いて一撃離脱する。

タフな相手はそれだけでは倒れなかったが、順平が連撃とばかりに大剣で切りつければ黒い靄になって消滅した。

黒い騎士を倒せば今度は巨大なカブトムシが空を飛びながら三体やって来る。

狙いを付けたチドリのヘカテーが風の刃を放ち、敵が落下してきたところにラビリスが戦斧で攻撃を加える。

「くそっ、どんだけいるんだよ!?」

いくら倒しても減らぬシャドウに、首の汗を手で拭った順平が悪態を吐く。

アイギスがこの場を離れてから少しして、シャドウの大軍が押し寄せてきた。

ストレガたちがあげた信号弾のようなものがトリガーで、よくもまぁこんなに集まったものだという数が地上と空の二面からやってきた。

空は既にシャドウで出来た黒い雲に覆われて月も見えず、地上部隊とでも言えばいいのか、どこからか走ってきたシャドウたちで道路は埋め尽くされている。
チドリたちは何とか背中合わせのように戦って自分たちの居場所を確保しているが、全ての敵を倒しきる前に体力と精神力が切れるのは明らか。
新たにやってきたテーブル型のシャドウをヘルメスの炎弾で焼き、道化師型のシャドウたちをヘカテーの氷槍で貫いてゆく。
三人と一匹は近くに固まる事で一度に襲ってくる敵の数をコントロールし、お互いにフォローする事で大きな怪我を負うことなく済んでいる。
しかし、全くダメージを負っていない訳ではなく、それぞれ僅かながら擦り傷や切り傷から出血もしていた。
「アイギスたちからの救援はまだなのか?!」
「タルタロスの方からもシャドウの反応を感じるわ。向こうも同じ状況かも知れないわねっ」
近付いて来たマーヤをハンドアックスで切り飛ばしながらチドリは答える。
別働隊がシャドウを誘導させるものを持っていたのだから、本隊が同一の装備を持っていてもおかしくない。
単純な強さならば一度死んだチドリがトップだが、向こうにはアイギスも含めペルソナが進化した者が四人に加えてワイルドの七歌もいる。
タルタロスからシャドウが溢れてくるとすれば面倒だが、そう簡単に落ちることはないだろう。
ただ、七歌たちもこちらと同じように多数のシャドウに足止めされているとすれば、向こうも撤退すら厳しい状況だと思われる。
そんな状態で応援に駆けつけることなど出来るはずもない。
どうにかこの場から逃げる方法はないかとチドリが敵を倒しながら頭を働かせていれば、高速で接近する強大なシャドウ反応を感知した。

その反応には覚えがある。以前、ゆかりたちが特別課外活動部に前、美鶴たちだけが在籍していたときに真田が重傷を負わされた大型シャドウだ。
「アルカナシャドウ級の強いやつがくる！」
叫ぶように警戒を促しながら、チドリが敵のやってくる方へと視線を向ける。
高層ビルの横を黒い翼を広げて通り過ぎ、真っ直ぐチドリたちの許を目指して接近してくるそれは、片腕が刀のような形状をした異形のシャドウ。
古来より語られる悪魔の姿に酷似したシャドウに、チドリが呼び出したヘカテーは瞬時に繰り出せる最大の威力で熱線を放つ。
間にいた鳥型シャドウたちは溶けるように消滅し、レーザーのように真っ直ぐ進んだ攻撃はしっかりと悪魔型シャドウへ到達する。
刑死者のアルカナシャドウを屠った時ほどの威力はないが、直撃したなら刈り取る者だろうと無事に済むはずがない。
「攻撃を切り裂いてるっ!?」
だが、悪魔型シャドウは刀のような形状をした右手を前に掲げ、ヘカテーの放った熱線を切り裂きながら進んでいた。
火炎無効の耐性を持っているのか、それとも異常なタフネスと切れ味で耐えられているのか。
どちらにせよ明らかに通常のシャドウとは異なる強さを持つ相手が来るのは拙い。
炎でダメなら氷で対処しようと氷刃の弾幕を放とうとすれば、別の方向から巨大なペルソナ反応を感知する。
全長三〇メートル。巨大な蛇の足を持つ赤銅色の肌をした男性型ペルソナ〝テュポーン〟。
厄介な敵がやってくるタイミングに合わせて攻撃を仕掛けて来た事に、敵の性格の悪さを感じる。
「チドリちゃん、ストレガも来おった！」
「分かってる！　けど、悪魔型シャドウももう来るのよ！」
反応の強さで言えば悪魔型シャドウの方が上。

つまり、純粋なレベルで言えばシャドウの方が脅威と言える。
しかし、テュポーンはその大きさ自体が武器であり、生半可な事ではその拳一つであっても止めることが出来ない。
近くのビルの屋上に現われたテュポーンは、悪魔型シャドウとほぼ同時になるように攻撃を仕掛けてくるらしい。
ならばとチドリが氷刃の弾幕の範囲を狭め、悪魔型シャドウの接近を遅らせてタイミングを外そうとする。
だが、悪魔型シャドウが甲高い奇声を上げながら氷刃を無視して突っ込んできた。
「おい、でかいやつもくるぞ！」
悪魔型シャドウが止まらずやってくると分かったのか、テュポーンも拳を引き絞りながら構わずやってくる。
あんなものが来れば道路に拳を叩き込むだけでチドリたちの陣形は崩れる。
シャドウも、敵のペルソナも、どちらも無視出来ないが止める手段が思い浮かばない。
相手との距離は二〇〇メートルも残っていない。どうする。どうすればいい。仲間の危機に対しての焦りが少女の思考を邪魔した。
すると、その時チドリの身体から水色の光が立ち上る。
彼女はヘカテーを召喚していない。一体何がと頭上に視線を送れば、既に力を溜めたタナトスが悪魔型シャドウに向けて紫電を放った。
ヘカテーの放った熱線よりも細いが、籠められたエネルギーが桁違いなのは雰囲気で理解出来た。
敵もそれに気付いたのかすぐに回避行動に移って接近が一時的に止まる。
続けて、タナトスは剣を持って飛び立つとテュポーンの拳にそれをぶつけ、お互いに大きく後方へと吹き飛んでゆく。
五倍以上の体格差があって尚、互角のパワーを持っているのかと純粋にその強さに少女は感心する。
「ありがとう、八雲……」

後退したタナトスは空中でブレーキを掛けるように停止すると、再びテュポーンに向けて飛び出し攻撃を仕掛ける。
弾かれただけのテュポーンも余裕があるらしく、フィジカルと潜在値で互いに規格外なペルソナが戦いを始めた。
優先度の高い脅威をタナトスが抑えてくれているなら、残るもう一体と他のシャドウをチドリたちで相手すればいい。
悪魔型シャドウもタナトスがテュポーンに掛かりきりだと分かると、再度向かってきているのが見える。
「タナトスがテュポーンを抑えてる間にあいつを倒す」
「分かった。けど、あいつ前に湊君がアザゼルで戦ったやつやろ？アルカナシャドウより厄介やな」
ラビリスも相手と同一種のシャドウがいた事を覚えていたらしく、速い上に知能が高いから厄介だと苦い顔をする。
話している間も、テーブル型シャドウやマーヤの群れがやって来ており、そんな者たちの相手をしながらアルカナシャドウ級を倒すなど無謀に近い。
それでもせめて逃げるにしてもこの包囲網を離脱するだけの隙を作る必要がある。
エネルギー残量を気にしながらも、ここで一度周りを一掃しようとヘカテーが周囲に強力な電撃を飛ばす。
電撃を耐えた相手や、効いていない様子の敵を順平とコロマルですぐに攻撃。
二人が遊撃に出れば、ラビリス一人でチドリの背面を守る形になっているため負担は大きいが、悪魔型シャドウを倒すにはチドリが一度フリーになる必要がある。
そうして、仲間のおかげでチドリの手が僅かな時間だけあけば、先ほどよりも力を溜めた一撃を準備してやってくる悪魔型シャドウに狙いを定める。
単発では回避される可能性があるが、弾幕だと攻めきれないかもしれない。
だから、彼女はその間を狙うことにした。

「ヘカテー、撃って！」
大きな紫色の光の玉を作っていたヘカテーが杖を振るった。
すると、紫色の光の玉は六条の光線となって悪魔型シャドウへと向かって行く。
一撃としては先ほどの熱線よりも劣るものの、力を溜めた分だけ差はそれほどない。
それを敵を包囲するため六条放つことで、チドリは外すことと威力不足二つのリスクを回避しようとした。
悪魔型シャドウも切り払うのは難しいと考えたのだろう。咄嗟に避けようとしたが、僅かに広がるように配置した光は敵の身体を掠める。
一撃当たれば体勢も僅かに崩れる。そこへ先ほどと同程度ではあるが追撃を放ち、崩れた体勢では対処出来なかったのか悪魔型シャドウはその速さが徒となって自ら光線へと飛ぶ込む形になった。
「ナイス、チドリちゃんっ」
タナトスがテュポーンを抑えているうちに何とか強敵の排除に成功する。
それを見ていたラビリスは短くチドリを褒めて、正面にいるカブトムシ型のシャドウを切りつけた。
強敵が一体減れば少しは余裕も出る。
チドリはタナトスを援護してテュポーンを倒そうと思った時、
「あぶねぇっ!!」
そう叫んだ順平にチドリは突き飛ばされた。
硬い道路に不完全な受け身で倒れる事を避けるため、咄嗟にだがチドリは受け身を取る体勢で倒れてゆく。
ただ、一体何がと倒れていく間に自分が先ほどまでいた場所を見れば、自分を突き飛ばした順平の腹部から黒い刃が突き出ていた。
見れば、それは今にも消えゆこうとしていた先ほどの悪魔型シャドウの腕だ。
あの攻撃を受けても即座には消滅せず、身体の一部だけでも飛ばして攻撃してきたらしい。

順平の腹部を背中側から貫いた刃はシャドウ本体が消滅した事で消えてゆく。
瞬間、順平の傷口を塞ぐものがなくなり、真っ赤たちが溢れ出した。
「ワンッ!!」
「順平君っ!?」
仲間が倒れたことに気付いてコロマルとラビリスも声をあげる。
だが、シャドウに囲まれている状態で駆け寄る訳にもいかず、二人は心配しながらもシャドウと戦い続ける。
唯一人シャドウと戦っていない状態のチドリが順平の所へ行けば、順平は青い顔で少しだけ笑っていた。
「あー……マジいてぇ。けど、間に合って、よかったわ……」
「なんで、こんな……」
「ほら、まぁ、有里と約束、したからな……」
チドリを頼む。その約束を果たすために順平はチドリをずっと気に掛けていた。
以前、夏頃に彼女に相談し、適当ながらも助言を貰った事に恩を感じていたというのもある。
だが、何よりも彼が恐れたのは、仲間がまた死んでしまう事だった。
チドリが死んだ時、最も傍にいたのは順平だった。
死んでいく彼女に何も出来ず、蘇生はされたが代わりに湊が命を落とした。
もしも、自分が敵の攻撃に気付いてフォロー出来ていれば、チドリは死なず湊が命を捧げる必要もなかった。
その思いがずっと胸の奥にあったからこそ、今度こそ仲間を死なせないと彼は動くことが出来た。
「あなたが、それで死んじゃ意味ないでしょ」
「ほんと、な。けど、すげーねむい、わ……」
血を失って意識が朦朧としているのか、順平は目を閉じて力なく話す。
チドリが手で押さえても血は流れ続け、このままでは順平は間違いなく死ぬ。

だが、治療しようにもこの場に回復魔法を使える者はいない。
全てはチドリの油断が招いた事。腕一本、本体が消滅し、そこまで反応が小さくなると探知するのも難しいのだが、少女がしっかりと敵から目を離さなければ避けられたかもしれない。
無論、一方に集中しすぎれば他の方向からシャドウが襲ってくるため、一方ばかりに気を割いてもいられないのだが、自分を庇って順平が死にそうになっている状況で考えても意味はない。
「チドリちゃん、順平君は?!」
ラビリスも順平が血を流しながら倒れた事は見ていた。
だからこそ、怪我の程度が知りたいのだろうが、知ったところでこの場に治療出来る人間はいない。
聞いた本人もその事は分かっているのだろうが、仲間が無事かどうか気になって戦えないのは困るため、チドリは意識を集中させながら答えた。
「このままだと死ぬ。でも、助けるわ。絶対に……」
回復魔法は使えない。
背中から腹部まで貫通している重傷。
だが、まだ生きている。
それならチドリにも助ける方法はあった。
「……ごめんなさい。色々と付き合わせて。八雲との約束は十分果たしてくれたわ。だから、あなたは生きなさい」
言いながら順平の傷口に当てたチドリの手から蛍火色の光が溢れ出す。
戦いながら彼女たちの方を見ていたラビリスは、それが何を意味しているのかすぐに分かった。
「アカン、チドリちゃん! それじゃあチドリちゃんも!」
その光は湊が為した反魂の術と同一のもの。
つまり、今チドリの手から溢れているのは命の光。
彼女も同じように生命力の放出が出来るとは聞いていたが、その力は湊には及ばない。
しかし、即死だったチドリの時と異なり、順平は血を失っているが

生きていて傷を塞ぐだけで何とか助かるかもしれない。
チドリはその可能性に賭けて、順平の命を繋ぐために自分の命を分け与えた。
光を与えるにつれてチドリの顔から血の気が失せてゆく。体温も低下し、呼吸も弱々しくなっていくが、分け与えられた順平の方は傷が塞がって顔色が良くなっていた。
相手を助けられたことにチドリは安堵する。
もしかすると、湊も自分を助けた時には同じように思ったのだろうか。
そんな事を想いながらチドリは静かに倒れた。
＊＊＊
自分が戦場のど真ん中にいる事を思い出し、順平は意識を取り戻すとすぐに起き上がった。
「敵はっ!?」
見ればまだラビリスとコロマルは戦っており、タナトスも身体から淡い光を漏れ出しながらもシャドウを屠りつつテュポーンの相手をしていた。
仲間が戦っているのに気を失うなんて情けない。そう思って自分もすぐに戦おうとしたとき、足下に少女が倒れているのが見えた。
「は？　……え？」
どうして少女が倒れているのかと順平は考える。
顔の血色が悪く、暗いこともあって死んでいるようにも見えてしまう。
心配しながらも怖々触れてみれば、相手の身体は常人よりも冷たくなっていた。
氷のように冷たい訳ではない。ただ、明らかに体温が低いことだけは断言出来る。
どうして、意識を失った自分の傍でそんな彼女が倒れているのか。
違式を失う直前の事を思い出そうとし、はっとして彼は血で汚れたシャツに触れた。
「傷が、塞がってる……」

この場にいる仲間で回復魔法が使える者はいない。
死んだように倒れているチドリ、塞がった自分の傷。
そして、消耗したはずの力が自分の内から溢れそうなほど回復している。
あの日の夜のこと、進化したチドリの力、それらを見ていた順平は何があったのかを理解してしまった。
「な、んで、なんで弱いやつ助けて倒れてんだよ……。普通、どう考えても、強いお前の方が生き残るべきじゃねーか！」
自分のせいで仲間が倒れた。その事を考えるだけで怖さに震えて動けなくなる。
しかし、そんな意思とは逆に順平は溢れそうな力に全身が熱くなっているのを感じていた。
一人倒れても、まだまだ敵はやってくる。空は覆われ、道路は遙か先まで蠢く敵で地面が見えない。
ただ平和のために化け物と戦っていただけなのに、自分たちと同じ人間がその邪魔をして自分たちを殺そうとしている。
これでは何のために戦っていたのか分からない。
「チクショウ、なんで、なんでだよっ!!」
召喚器を抜いて順平はそれをこめかみに当てる。
全身が燃えるように熱い。怒りだけではない。少女が残した力が順平の中で暴れているのだ。
ならば、共に暴れよう。理不尽に屈するつもりはない。
足掻いて、生き残って、そして、チドリを病院へと連れて行く。
だから力を貸せと新たに目覚めた力を呼んだ。
「来い、トリスメギストス!!」
暴れる炎と共に現われたのは、ヘルメスと酷似した全身を赤と金の鎧で覆った男性型のペルソナ。
鳥を思わせるヘルムの嘴の所には、赤い宝石、賢者の石が咥えられている。
錬金術の祖、偉大なる賢者。そう語られる存在は彼の持つ〝魔術師〟のアルカナに相応しいと言えるだろう。

召喚して尚、奥底から力が溢れてくるのを感じた順平は、まずはお前だと邪魔なテュポーンに狙いを付ける。
「死にてぇなら一人で死ね！　オレたちの邪魔をすんじゃねー!!」
トリスメギストスの咥える賢者の石に光が集まり、その頭上に光球が現われる。
元々、炎の力を持っていた順平に、同じく元は炎の力を持っていたチドリの力が合わさって生まれたのがトリスメギストスだ。
ならば、当然、その力は炎に特化している。
赤を超えて、白に近い輝きを持った高温の炎は、順平が定めた狙い通りに光線となって放たれる。
交戦してたタナトスは咄嗟に避け、巨体が災いして素早く動けないテュポーンは直撃した。
テュポーンは自らも火を吐く嵐の化身とされ、炎にも耐性を持っていたが、タナトスとの戦闘に加え、大幅に強化されたトリスメギストスの炎の威力が耐久力を上回り消滅してゆく。
テュポーンは強力なペルソナ故に、一度の消滅で消耗するエネルギーが激しい。
そう何度も呼び出せる存在ではないため、しばらくは休んでいることだろう。
「まだだ。こんなところで終われねぇ。絶対に生き残ってやるっ」
自分たちが倒れている間も守って戦ってくれていたラビリスとコロマルはかなり消耗している。
タナトスも身体から光が漏れ出していつ完全に消えるか分からない。
順平も傷は塞がったが失った血は戻っていない。
そして、チドリは体温も下がり始め、いつ死んでもおかしくない。
仲間の応援も期待出来ず、状況はまさに絶望的。
しかし、絶対に諦めてだけはやるものかと順平はシャドウたちと戦った。

第三百四十七話　幾月の目的

――月光館学園・天文台

順平たちに送り出されたアイギスが月光館学園に到着した時、七歌たちは既に幾月らに捕らえられていた。

物音から天文台の屋上にいると判断し、銃を構えてアテネで飛び上がれば、アイギスの目に飛び込んできたのは桐条武治が殺されようとしていた瞬間だ。

弾速で勝るライフルの弾を当てて幾月の放った銃弾を弾くことが出来た事で、助けに入った彼女も安堵したものだが、七歌たちの拘束を解いて武器を渡したところでアイギスも冷静に周囲を見渡すことが出来た。

五メートル以上の距離を開けて対峙する敵の人数は五人。幾月、八雲、長谷川沙織、タカヤ、ジン。

七歌の友人だという長谷川がどうしてペルソナ使いとして敵になっているのかは分からない。

けれど、黒いオルフェウス。幾月が言うには〝アルケー・オルフェウス〟という名らしいが、それを手に入れた事で幾月も十分に敵戦力と見なすことが出来る。

湊と戦えるだけの力を持っている理と長谷川、ペルソナが進化した真田たちと同等の力を持っているタカヤたち。

その仲間だというなら幾月もペルソナが進化した者たちと同等か、桐条グループの言葉でいうところの〝特Ａ潜在〟にあたる事も考えられた。

現状、桐条グループからそのランクに分類されていたのは湊だけだったが、美鶴の報告書から八雲と長谷川、そしてペルソナが進化したチドリもそこに含まれる事になっている。

ワイルドの力を持っている七歌も候補の一人ではあるが、七歌の力は湊側の戦力であるラビリスやコロマルなどと同クラス。ペルソナが進化した者たちを僅かに上回る程度だ。

味方の戦力は数の上では勝っているが、瀕死の桐条を守りながら少

数精鋭の者たちと戦うのは辛い物がある。
父親が撃たれた事で動揺している美鶴は使い物にならず、桐条は今すぐに病院へ連れて行かねば拙い状況。
加えて、残してきた順平たちも救援が必要な状態に追い込まれており、もし撤退するなら彼らを回収していく必要がある。
どうすればいいかと頭を働かせながら、アイギスは手に持った銃の引き金をいつでも引けるようにしながら幾月に声を掛けた。
「……理事長、あなたの目的は何ですか？」
「彼らには既に伝えたが、私の目的は世界の救済だよ。既に種としての限界に達してしまった人類を次のステージへと導くんだ」
「世界を終わらせる事が人にとって救いであると？」
「別に地球を砕いて割ってしまおうという話ではないさ。壊すのは今の間違った秩序に満たされた世界だよ」
幼い子どもを諭すように慈愛に満ちた声で語る幾月の姿はまるで教育者のように見える。
特別課外活動部のサポートのためとは言え、幾月も学校では教育者としての顔を見せていた。
学校で見せていたその全てが嘘ではなかったようだが、彼らの目的は本当に世界を終わらせることらしい。
しかし、シャドウを呼び出す事がどうして滅びに繋がるのか知らぬ者たちは、相手の言葉からどういった形で滅びが起こるのかと探ろうとしつつ、アイギスは今度は幾月の後ろにいる少年に声を掛けた。
「ここに来る前にあなたの事を聞きました。結城理さん、ですね。あなたも理事長の願いに賛同したんですか？」
急に声を掛けられると思っていなかったのか、八雲は少しだけ目を大きく開けると、すぐに平静を取り戻して幾月の隣に並ぶ。
その右手には生首の入った透明なケース、左手には中華風の造りの長物を持っている。
ケースの中身を見て、アイギスは思わず声をあげそうになったが、何も持っていない方の手で強く拳を握ることで何とか耐えた。
既に残りのほとんどの部位が破棄されていると知れば、今すぐにで

も飛びかかって行っただろうが、知らない彼女に向かって八雲は静かに言葉を返す。
「その名は僕がこいつを殺すまでの仮初めのものだ。偽物を殺した事で僕は本来の名を取り戻した。呼ぶのなら八雲と呼べ」
「……では、あなたはベルベットルームという場所を知っていますか？」
「話には聞いてる。こいつと七歌にワイルドの情報を与えた組織だろ？　残念ながら幾月さんも、そいつらの居場所や構成員は把握出来ていないけど、この状況で助けに入らないって事は別にそっちの味方って訳でもなさそうだ」
液体で満たされたケースを振って小馬鹿にしたように八雲は答える。
幾月たちが湊や七歌を襲う際に最も警戒したのが、エルゴ研時代に既に湊が口にしていた〝ベルベットルーム〟という組織の存在だった。
湊にペルソナや影時間の知識を与え、様々な面でサポートしていた事で、幾月は湊のバックにそういった組織がついていると思っていた。
だが、七歌が巌戸台にやってきてから再びその名を聞いたことで、ベルベットルームの立ち位置がよく分からなくなった。
湊と七歌、共通しているのは同じワイルドの能力を持っている事。そういった力を持つ者に接触しているのなら、いつか八雲にも接触していくと思っていたのだが、彼が長谷川と共に海外に行っている間も接触はなかった。
他人のペルソナを移した黄昏の羽根を移植している疑似ワイルドの長谷川と違い。八雲はオルフェウスと酒呑童子の二体は自力で手に入れている。
つまり、彼も間違いなく三人目のワイルド能力所持者なのだ。
けれど、その八雲にベルベットルームの人間は接触してこなかった。
居場所や力について把握していないのか。それとももっと別の要

因があったのかは分からない。
ただ、湊は死に、七歌も命の危険にあるというのに、まだ助けに来ないという事は手助けはしても直接助けはしないのだろう。
八雲はそう断ずれば、今度はこちらの番だとアイギスに話しかけた。
「アイギス、君もこっちに来い。君は生贄の数には含まれていない。こちらに付くというのならストレガたちにも手は出させない」
「八雲さんを殺め、その遺体を玩具にしておきながら、どういったつもりですか？」
「十年前、君に助けられた事に対する恩返しみたいなものだ。それに、君が望むなら新たな世界になってから会わせることも出来る」
十年前の戦いにおいて、八雲は一人ではデスに勝つことは出来なかった。
アイギスも一緒にいたからこそ戦えた訳で、それでも勝利には届かず、最後はアイギスが捨て身で封印術を使わなければ八雲はとっくに死んでいた。
本人もそれが分かっているからこそ、あの時の借りを返そうと味方に付けば湊と会わせてやってもいいと提案したのだ。
しかし、既に死んだ人間と会うことなど現実的に考えれば不可能。
それこそ、同じように死んで冥府で会うくらいしか方法はないのではとアイギスも聞き返した。
「この世界から命を消し、死後の世界で会わせるとでも言うのですか？」
「逆だよ。祝福された新たな世界では、生と死の概念が変わる。それによって死んだ者とも再び会うことが出来るようになる」
新たな世界について話す八雲はどこか楽しそうだが、冗談を言っている風には見えない。
けれど、生と死の概念が変わったからといって、どうすれば死んだ者と再び会うことが出来るというのか。
言葉の意味が理解出来ずにいれば、八雲の隣に立っていた幾月も小さく笑って彼の言葉を肯定した。

「彼の言っている事は事実さ。先ほども言ったが滅びとは現在の世界の終わりを意味する。そして、皇となった者によって新たな理を持つ世界が創造される。私が創る新たな世界は生と死という概念がない。愚か者は輪廻から排除し、正しき者たちだけでこの世を満たすんだ」

幾月が調べた古文書に書かれる闇の皇とは、シャドウの持つ時空間に干渉する力を用いて世界を造り替える存在である。

その力を手にした者が一度願えば、海の水を全て枯らすことも出来れば、現世と常世を繋ぐことだって出来る。

また、一定の条件を設けることで、それに合う者や合わない者を弾いて世界から消すことだって簡単だ。

だからこそ、幾月はそんな力を使って生者も死者も関係なく、〝人間〟を選定しようとしている。

本当にシャドウの力を利用してそれらが行えるのかはアイギスたちには分からない。

ただ、人という種の成長限界を感じ取って憂いていたのであれば、そんな事をしても何の解決にもならないはずだと七歌が反論した。

「それは、そんな事をすれば、成長も何も関係なくなってしまう。生命の誕生と終わりがあるからこそ、人はより良いものを選ぼうとするんじゃないの！」

「それは今の世界の価値観だよ九頭龍君。新たな世界では生と死がないからこそ、生と死が等価値となり、無用な争いがない世界になるんだ」

ただ自己研鑽によって上を目指すのであればいい。

それは自分自身との戦い。他の介在などなく、あくまで自己完結した話なのだから。

だが、それが競争となってくると話は簡単では行かなくなる。

自分が上へ行くため、他の者を落とそうとする者がいずれ出てくるのだ。

より良いものを目指すのであれば、そんな事をせず自己研鑽に励めば良いというのに、人は己の限界を感じ始めると今度は他者の足を引っ張り自分の地位を維持しようとする。

幾月はそんな事がないのが自分の世界だと話し、そう言えばと薄く笑って意外な言葉を口にしてきた。
「君たちは有里湊にご執心だったね。それならば、尚のこと私の世界を選ぶべきだ」
幾月の口から湊の名前が出てきたことにメンバーたちは訝しむ。
遺体を盗み解体して捨てたことも含め、幾月らは敵だった湊を邪魔な存在だと思っていたはずだ。
ストレガなど、彼に殺され掛けたこともあり、少なくとも良い印象は持っていないだろう。
どうしてそんな相手が幾月の創ろうとする世界に関係してくるのか。
理由について考えていれば、幾月は自分も彼の事は知っているんだと言葉を紡ぐ。
「エルゴ研時代から知っているが彼の人間性はかなり特殊だ。弱者の救済。救う事を当然と考える精神性一つとっても、現代人の価値観とは大きく異なる。そして、彼はそれらを実際に行えてしまうだけの力も持っていた。だが、気付いていたかな？　救われる側の者たち、何の力も持たない凡俗共は、彼を英雄のように語って、そうするのが当然だと捉えるようになっていた。あくまで彼の慈悲でしかないというのに」
湊に救われた人間は多い。痴漢から助けられた者もいれば、不良に絡まれているところを助けられた者もいる。
普段からそうやって沢山の人を助けて回っていたことで、港区周辺では困っていれば助けてくれる彼の存在は有名だった。
〝皇子〟という愛称で呼ばれるようになってからさらに増え、持て囃していた人間の多くは彼を一種の装置のように考えて便利に使っていたところがある。
そんな話を聞いてしまえば、ただ困っているからと善意で助けてくれていた人間を、よくもまぁ都合良く利用出来るものだと呆れるほかない。
「だが、結局は君たちも同じだろう。彼の持つ力を当てにして戦わせ

続けた。他者のために働き、戦い続け、その結末がこれだ。この世界では彼のような存在が報われる事はない」
あれだけ他者のために働き、戦って来た青年の最後は脳も眼球も抜き出された生首の標本。
死ぬ原因も、遺体をこうしたのも、全ては幾月の差し金ではあるが、あのまま湊が生きていたとしても報われる未来を誰一人想像することが出来ない。
むしろ、学校を卒業すれば、救われない者たちを求めて紛争地域に向かい。そこで人知れず死ぬまで人を救い続けるような一生を過す。
そんな事が容易に想像出来てしまうからこそ、この世界では報われることはないという幾月の言葉を信じそうになる。
「一方的に理不尽を押しつける無自覚な加害者がこの世界には多過ぎる。今回の滅びはそういった不平等を世界から消すためでもあるんだ」
「利用するだけ利用し、不用になれば化け物として扱われる。僕はそんな世界は御免だ」
これまで利用する側だったのだから、彼のような存在が報われる新たな世界の礎になるべきだと幾月が話し、青年と同じ顔と声を持つ八雲が今の世界を否定した。
八雲と湊はクローンが生み出された時点では同じ人格を持っていた。
始まりが同じならば、八雲の言葉は湊のものと思っても良いはず。
これまで相手の言葉を黙って聞いていたアイギスはしっかりと相手を見据えて返した。
「よく分かりました。やはり、あなたは十年前に会った八雲さんではありません」
「……なんだと？」
十年前、アイギスと共に戦った八雲はオリジナル。
その八雲ではないと否定する事は、つまりお前はクローンだと言っているという事だ。
言われた八雲は全身から怒りを迸らせるようにアイギスを睨み、七

歌たちはどういう事だと彼女の言葉を待つ。
すると、アイギスは湊が死んでから休んでいる間ずっと考えていたと話し始めた。
「わたしと八雲さんの間には確かな繋がりがありました。ベルベットルームの住人であるエリザベスさんの話では、それは契約とコミュニティによる絆だそうです。三年前、八雲さんが海外にいたときに目覚める事が出来たのは、その繋がりを通じてあの人の危機を察知したからです」
相手がアイギスが一時的に起動していた事を知っているかは考慮しない。
ただ、事実と自分が持っている情報からの考察を告げる。
「ドイツで合流した時、八雲さんは自分がクローンかもしれないと仰っていました。でも、そこがわたしにとっては不思議だったんです。どうして、クローンの八雲さんとは繋がりがあるのに、オリジナルの理さんとは繋がりが感じられなかったのか」
そう。アイギスも湊がそう言っていたから彼がクローンなのだと思い込んでいた。
しかし、冷静に考えると後から作られたはずのクローンと繋がりがあり、逆にオリジナルと繋がりがないのはおかしい。
「そして、八雲さんが亡くなってから思い出を振り返っていたことで、ある事を思い出したんです。ベルベットルームに入る条件である契約は結んだ者の魂に刻まれると」
契約は交わした者の魂に刻まれる。だからこそ、湊がマーガレットと新たに契約を結ぼうとしたときも〝有里湊〟の名義では契約が出来ず、〝百鬼八雲〟という本当の名で結ばれた。
アイギスと契約を結べたのは十年前に出会っていたオリジナルだけ。
湊の第一の契約者はアイギス。
つまり、とアイギスは自分が辿り着いた答えを理に突きつけた。
「クローンが血を介して得たのは百鬼八雲の人格だけ。その魂はそのままです。あなたがどれだけ尤もらしい理由を用意しようと、魂に刻

まれた契約は騙せません。死んだ八雲さんがオリジナル、クローンなのはあなたですっ！」
湊との間に確かな繋がりを持っていたアイギスは真実を告げた。
オリジナルだから、クローンだから、そんな事で付き合い方を変えるつもりなどない。
けれど、シャドウと戦うために作られ、目的通りにその命を使い切ったと思われたままでなどいられなかった。
彼はちゃんと両親の愛情を与えられていた。望まれてこの世に生を受けたのだと。
そうして、アイギスからクローンだと言われた少年のことを見れば、その顔からは一切の表情が抜け落ちていた。
「……言いたいことはそれだけか。ならもういい。死ね」
言い終わると同時に理は手に持っていたケースをアイギスに向かって放り投げた。
首だけだろうと湊の遺体である事にかわりはない。アイギスがそれを受け止めに行こうとした時、横から強く引っ張られ、見れば七歌たちがペルソナを呼び出して天文台の屋上から飛び降りようとしていた。
急に何を、そう言おうとして理に視線を向けると、彼の背後に赤い髪の鬼が立ってアイギスが元いた場所に掌を向けていた。
光を纏うと同時に放たれる光線。空中にあったケースは中身ごと蒸発して消えてなくなる。
目の前で湊の身体が灼き消された事に強い怒りを感じるも、七歌たちが召喚したペルソナに掴まって月光館学園の敷地に降りたことで何とか全員無事に済んだ。
着地してから再び屋上に視線を向ければ、幾月たちが冷たい視線で見下ろしてきている。
「交渉決裂だね。ならば、大人しくシャドウの餌食になると良い」
生贄の数に含まれていないアイギスだけならば、協力者として招くことも出来た。
しかし、こうなってしまってはもう無理だろう。

そう判断した幾月は上着のポケットから取り出した物を空中へと放り投げた。
「あれは……」
幾月が放り投げたものにアイギスは心当たりがあった。
ここへ来る前に、順平たちがいた場所でストレガの残りのメンバーが空に打ち上げたシャドウの誘導弾だ。
案の定、同じような爆発を見せると、その場でキラキラと不思議な光りが出ていた。
シャドウの巣であるタルタロスの真ん前で、そんなものを投げればどうなるかなど考えるまでもない。
未だ桐条は意識を失ったままで、美鶴と風花がそれに付き添っているので動くのは難しい。
「皆さん、戦う準備してください。先ほどの道具はシャドウをそのポイントへ誘導するものです。姉さんたちも同じ物をストレガのメンバーに使われ交戦中です」
「あいつらが上から見ているとなると撤退しようにも難しいか」
シャドウが来ると言われても、天文台の屋上から幾月たちも見ている。
いつ頭上から攻撃を受けるかも分からぬ状況で戦うのは厳しいだろうが、重傷者がいるとなると撤退するにもそれなりの準備がいる。
湊のマフラーと繋がるリストバンドの中に車椅子があった事で、桐条をそれに乗せる事は出来たが、少しずつ校門の方へ移動しながら撤退するのにも神経を使いそうだ。
タルタロスの内部から不穏なざわめきを感じながら、七歌たちは撤退しながら戦う準備をした。

第三百四十八話　光

――月光館学園

七歌たちが理の攻撃を躱すため天文台から飛び降りると、幾月は黄昏の羽根を材料に作ったシャドウ誘導弾を使った。

その効果は誘導弾が炸裂した地点までシャドウを呼び出すというものだが、正確に言えばその地点に最も近い場所にいるペルソナの反応へと群がるものだ。

ただの適性持ちや影時間に迷いこんだ者も襲われる事はあるが、そちらは攻撃されたから反撃したか、相手の心の中にいるシャドウをエネルギー源として吸収しようとしているに過ぎない。

逆に、シャドウたちがペルソナ使いたちを襲うのは、やつらが自分の天敵を本能の部分で理解しているからなのだ。

ペルソナ反応を隠蔽する腕輪を付けている幾月たちは狙われず、固まって行動している七歌たちは集まっているせいで余計にペルソナ反応が大きく見え、やってくるシャドウたちに狙われやすくなってしまう。

お荷物である桐条武治を捨てて逃げれば、最悪でも駅の辺りまでは逃げられただろう。

無論、捨てていけばそう時間をおかずに死んだだろうが、シャドウ誘導弾の効果から考えれば集まったシャドウは桐条を無視して七歌たちを追った。

その効果に気付く者がいたならば、一人だけ桐条を運ぶという別行動を取り、他の者たちがより強いペルソナ反応で囮になるという作戦をとることも出来たかもしれない。

しかし、そうはならなかった。本来は七歌と二人でブレインとして働く美鶴が重傷の父を前に使い物にならず、他の者たちは頭上からストレガと幾月に狙われ大量のシャドウが来るという状況に浮き足立ってしまった。

結果、彼らは校門から出たところで大量のシャドウの相手をする事になっている。

「フフッ、本当にどうしようもないですね。決して諦めないというのは見方によっては美点なのでしょうが、仮にも世界を救おうという人間の行動としては矛盾が多過ぎる」
「まぁ、しょうがないさ。あくまで彼らは一般の学生。一を捨てててでも十を助けるなんて考えは持てないよ」
天文台の屋上から七歌たちの戦いぶりを眺め、タカヤと幾月はどこか呆れた調子で話す。
空は遙か上空を飛行出来るシャドウらに覆われて月を見ることも出来ず、タルタロスからは津波のように一つの巨大な塊になったシャドウが溢れ出ている。
男子たちが前に立ち、その脇を七歌とアイギスで固め、車椅子の桐条とそれを押す風花を守るようにゆかりと美鶴が遠距離から攻撃を加えている。
湊のマフラーの中にあった装備は、本来彼らが使っていた者よりも上等だったらしく、その点に関して言えば七歌たちの戦力は捕まる前よりも上がっている。
だが、多勢に無勢。ここに来る前にアイギスと別れたというラビリスらの許にも救援に行く必要があるというのに、今の彼女たちの足は完全に止まってしまっている。
これではそう遠くないうちに前衛に綻びが生じ、そこから一気に崩されて全滅するに違いない。
幾月やストレガが同じ立場に置かれれば、最終目的を達成することを優先し、一部の者たちが殿として敵の足止めに徹するべきだと判断した。
より戦力になるラビリスたちの救援を優先し、彼女たちに近い力を持つ七歌とアイギスだけを逃がし、他の者たちは彼女たちに後を託しここで限界まで戦い続ける。
幾月たちの考える正解はそれだ。
無論、仲間が犠牲になるのは辛いだろうが、ここで全員死ねば世界は滅びるのだ。
大局を見て冷静に判断出来たなら、一人でも多く生き残り未来に希

望を託す選択を取れたに違いない。
それが取れなかったのはただの学生として過してきた故の経験不足、自分たちが世界の命運を背負っているという自覚の無さが生んだ甘さが原因だった。
「それで、そちらの彼は大丈夫なのですか？」
ここからタカヤたちが攻撃すれば、七歌たちは対処しきれず簡単に終わるだろう。
けれど、どこまで粘れるか見物だと思っているため、敢えて手を出さずにいるタカヤは玖美奈と共にいる理に視線を送って幾月に尋ねた。
理は先ほどアイギスによって真実を暴かれた。
無論、クローンを作らせた幾月はどちらがオリジナルでクローンなのかは知っていたが、タカヤたちが会ってから理は自分がオリジナルと言い続けていた。
もし、彼が幾月から君がオリジナルだと聞いていたなら、アイギスの指摘で精神的に不安定になっている可能性がある。
理は前に玖美奈が怪我を負った際、精神的に不安定になり攻撃を仕掛けて来たマリアを殺した事があった。
今回も同じような事になるのなら、同盟の維持を考える必要があると暗に伝えれば、幾月はそこは安心して良いと笑顔で答える。
「玖美奈が付いていれば大丈夫さ。元々、彼も玖美奈も真実は知っていたからね」
「ならば、何故自分がオリジナルだと？」
「公的には百鬼八雲は死んでいて、彼らは有里湊と結城理になっていた。つまり、〝百鬼八雲〟は空位だったんだ。なら、生き残ったより強い方がそれを名乗るべきだろう？」
理は本来、どちらがオリジナルでクローンかと争っていた訳ではなく、自分が勝って本物の八雲になることが目的だった。
ただ、ずっと研究所にいたせいか彼の精神の発達具合は未熟で、湊と比べると子どもっぽい部分がある。
自分こそがオリジナルだとも言い始めたのは、恐らくその辺りが関

係しているのだろうと話し、幾月は再び視線を戦っている七歌たちの方へと向けた。
「さて、どこまで持ちこたえられるか見物だね。何せ、シャドウはタルタロスから出てくるだけではないのだから」
高い位置にある天文台の屋上からはその光景がしっかりと見えていた。
高速で飛びながら接近してくる悪魔型シャドウの姿、海に浮かぶ超大型キメラシャドウの姿、そしてムーンライドブリッジを渡って次々とポートアイランドに集まってくるシャドウの大軍が。
タルタロスから溢れ出てくるシャドウの相手に必死で、周囲の様子を気にしていられない彼女たちには見えていないだろう。
だが、幾月が今日のために街中にばらまいておいた研究成果、それらは今七歌たちの命を確実に刈り取ろうと牙を剥いていた。
――港区
道を覆い尽くすほどのシャドウの群れの頭上へ移動したタナトスは、身体からその力の源が抜け出ることにも構わず全力の雷を走らせた。
《グルォオオオオオオオオオオオオオッ!!》
残された力の全てをそこに籠めるように、タナトスから放たれた雷は地上と空、二つの場所にいるシャドウたちを次々と屠ってゆく。
タナトスを中心に放射状に広がる紫電は、順平たちを囲んでいたシャドウたちを排除し、彼らが僅かに移動するだけの時間を作る。
規格外のペルソナであるテュポーンと戦い。続けてチドリらを守るように戦ったことで、タナトスは既に数百体のシャドウを倒していた。
だが、戦い続ければ当然のようにエネルギーを使い続ける事になる。
基が湊の力だけあってその量は他のペルソナ使いよりも多いくらいだったが、それでも死にかけていた湊がせめてもと残していっただけの力に過ぎない。
ダメージが蓄積して存在を維持出来なくなっても終わり、戦い続け

てエネルギーが枯渇しても終わり、最初から戦いの果てに消滅が決まっていた存在だ。
存在を構成する最後の一滴まで力を使い切った死神は、本道よりも細い道の方へと移動した順平たちを見つめながら消えてゆく。
青年が死ぬ前に掛けた保険もこれで終わりだ。
多くのシャドウを道連れに消えていくペルソナを見ながら、順平もまだまだ諦めないとばかりに剣を握り締め、タナトスが作った空白地帯へ再び集ってくるシャドウの相手を始める。
「くそっ、まだだ！　まだ終われないんだよ！」
集まってきたシャドウに大剣を振り下ろしながら順平は叫ぶ。
呼吸が弱り、体温が低下していくチドリを早急に病院へ連れて行かねばならない。
自分の着ていた上着を掛けたがそんなものは応急処置にもなりはしないだろうと理解している。
影時間が明けるまではまだ時間があるので、残り時間を戦って逃げ切るというのも難しく、味方が応援に駆けつけるか隙を見てこの場を脱出するしか助ける道はない。
けれど、切り札であるペルソナは既に使えない。
チドリから力を分け与えられた順平は勿論、ラビリスとコロマルもとっくにエネルギー切れだ。
「きゃうんっ」
「コロマルさん!!」
プロレスラー型のシャドウの拳が身体を掠り、コロマルが地面を転がってぐったりと倒れたまま動かなくなる。
追撃を喰らわせようとするシャドウへラビリスが斬りかかり、何とか相手を消滅させるも、続けて道化師のようなシャドウが現われて氷の飛礫を次々と放って来た。
ペルソナで撃退出来ない以上、回避するか防御するしかないが、ラビリスの後ろには倒れたコロマルがいた。
避ければ彼に当たってしまうために、大きな戦斧を盾代わりにして飛礫を受け止めた。

「ダメだ、ラビリス！　避けろ！」
氷の飛礫は大きな戦斧を盾にする事で受け止められた。
だが、すぐに順平の声が聞こえて、一体何がと盾の向こうへ視線を向ける。
するとそこには、頭に生えた二本角を向けたまま突進してくるミノタウロス型シャドウがいた。
素早い動きで迫る巨躯のシャドウを咄嗟に相手することなど不可能。
何とか盾にした戦斧で受け止められないかと腰を低くし、戦斧を両手で構えたまま受け止める体勢に入る。
次の瞬間、ドゴンと激しい音と衝撃が彼女を襲い。ラビリスの身体は戦斧と共に宙に舞っていた。
空中で回転する視界の中で、ラビリスはミノタウロス型が倒れたコロマルに蹴りを放つのが見えた。
ぐったりしていたコロマルは近くのビルの壁まで吹き飛び、衝突してから地面に落ちると口から血の泡を吹いている。
そこまで確認したところでラビリスの身体も地面にぶつかり、痛みと衝撃に揺れる視界のせいで動くことが出来なくなる。
たった一体。しかし、他のシャドウよりも明らかに強い個体に守りを突破されたせいで、これまで何とか保てていた戦線が崩れた。
「うおぉぉぉぉっ!!」
落ちてきたラビリスに止めを刺そうとするミノタウロス型に順平が斬りかかる。
敵は咄嗟に左腕を盾にして振り下ろされる大剣を防いだ。
衝突する鋼と筋肉。
通常ならば勢いを乗せた斬撃は敵の腕を切り落としていたはずだ。
しかし、敵は恐らく高層フロアのシャドウ。その身体は並みの素材よりも遙かに硬く、加えて順平もここまで武器をかなり酷使してしまっていた。
結果、叩き付けた箇所から大剣は真っ二つに折れてしまった。
ペルソナが使えなくなり、今度は武器まで失った事で順平の顔が絶

望に染まる。
ただ、目の前の脅威を排除せねば、倒れた仲間たちの容態を見る事すら出来ない。
折れた武器を咄嗟に敵に投げつけると、それを敵が腕で打ち払っている間に順平は後退し、落ちていた戦斧を拾い上げる。
これまで使っていた武器よりも遙かに重く、持ち上げるだけでも一苦労。
「おっらぁぁぁぁぁっ!!」
それでもここで今戦える者は順平しか残っていない。
自分が退けば仲間が死ぬ。二度とそんな事になってたまるかと彼は遠心力を使って戦斧を横に薙いだ。
振り抜かれた戦斧は敵の脇腹を深く切り裂き、怯んだ相手が数歩後退した。
反撃を喰らえば拙いと思っていただけに、相手が怯んで距離を取ったことに順平は内心で笑みを浮かべる。
そして、横に薙いだ勢いをそのまま利用し、アッパー気味に振り上げた戦斧を敵に向けて今度は振り下ろす。
勢いの乗った渾身の一撃は敵を袈裟切りに切り裂き、そのまま黒い靄になって消えていった。
何とか目の前の脅威を排除出来たことに安心するが、シャドウたちは次々と彼らのいる路地へと侵入してくる。
ダメージが抜けないのかラビリスは起き上がれず、コロマルも呼吸はしているようだが意識がない。チドリはその呼吸すらも怪しくなっており、仲間の応援が来る気配もない。
ペルソナもなく、武器もラビリスの使っていた重い戦斧が一つ残っているだけ。
敵は際限なく湧いてきていて、自分の体力も限界が来そうな事は少年も察していた。
敵が近付いて来ているのを見ながら、順平は地面についた戦斧を支えに俯き呟く。
「ははっ……なんだよ、これ。オレら頑張ったってのにさ……」

助けたい。仲間を、少女を、何とかして助けたいがその手段がない。
自分だって死にたくはないが、せめて自分を助けてくれた少女だけはと必死に戦った。
しかし、どれだけ戦っても終わりが見えず、一刻も早く治療が必要な少女を病院へ連れて行かねばと思っている間に他の仲間まで倒れてしまった。
僅かでも希望があれば、時間さえ稼げば助かるような道さえ残っていれば、彼の胸の中で燃えていた心の火も消えることはなかっただろう。
滅びを迎えるために戦っていた敵と、世界を守るために戦っていた仲間たち。
どう考えても正しいのは自分たちだったはず。
なのに、結果がこれではあんまりだと順平は空を仰ぎ見て、それに気付いた。
「嘘だろ……」
まるで、世界に終末を告げるような光が降ってくる。
直径にして何百、いや、何千メートルあるか分からないほどの圧倒的な光の柱。
どれだけ全力で逃げても間に合わない。
これがストレガたちの求めた滅びなのか。
日本の首都を壊滅させるであろう徐々に近付いてくるそれが地上を照らした時、
「……こんな最後なんて、ありかよ……」
順平は涙を流し、地上へ突き刺さった光の柱に彼らは呑まれた。

――月光館学園
戦っても、戦っても果てが見えない。
かつて湊は異なる時の流れに乗ったタルタロスで一月以上戦い続けていたが、それでもタルタロスのシャドウたちが枯れることはなかった。
「ぐあぁっ」

「天田っ!!」
黒い騎士型シャドウが振るった槍に払われ、攻撃を受け損なった天田が地面を転がり倒れる。
とっくの昔に彼らの精神力も枯渇し、既にペルソナを呼ぶことは出来なくなっている。
そうなれば体格と体力にハンデのある天田が最初に落ちるのはある意味当然だった。
彼に追撃を仕掛けようとする騎士型シャドウを真田が横から殴りつけて止める。
転がった天田は後列の七歌が回収し、桐条の座っている車椅子に寄りかからせた。
少年の安全が確保されれば、荒垣と真田も再び自分の持ち場を維持しようと懸命に戦うも、いつまで戦えばいいんだと不安が頭を過ぎる。
実際、戦い始めてどれだけのシャドウを倒したかなど覚えていない。
「くんぞ、アキ!」
「分かっている!」
マーヤ型が七体雪崩れ込むように向かってくる。
警戒して荒垣が真田に注意を促しながら斧で斬りかかれば、真田は前に出て三体の敵を連続で殴って動きを止めてゆく。
ペルソナ使いが使えば普通の銃でもシャドウを倒せることもあり、アイギスが絶えずマシンガンでシャドウの群れを牽制してくれている。
そのため、それを突破してきた敵だけを相手するに済んでいるが、既に荒垣と真田も腕や足に限界が来ていた。
天田が抜けた事で攻撃の手が減り、二人だけでは対処しきれなかったマーヤが後ろにいる者たちの許へ向かう。
しまったと真田たちが一瞬視線を送れば、すぐに反応した七歌が薙刀で敵を斬りつけて排除した。
後ろには怪我人もいるため、反応してくれて助かったと荒垣が礼を

言おうとする。
「悪い、通しちまった！　助かった！」
「大丈夫です。通してもここで食い止めるので、前に集中してください！」
だが、まだまだシャドウたちは迫ってきているため、フォローぐらいいくらでもすると七歌は相手の礼を断って自分も少しだけ戦列をあげた。
真田が磔にされたシャドウを倒し、荒垣がカブトムシ型の角を斧で叩き切ってから胴体を蹴りつける。
空からくる鳥型をゆかりが居抜き、少し休んだ天田がアイギスから渡されたサブマシンガンで敵の牽制をし続ける。
終わりが見えない。いつまで戦えば良いのか。
そんな考えが頭に浮かびながらも彼らは戦い続けた。
風花は桐条の傷口に布を当てて、少しでも出血を抑えようとするが効果は薄い。
まだ辛うじて呼吸はしているが、顔色は既に土色のようになっており、いつその命が絶えてもおかしくない。
そんな父が気になるのだろうが、美鶴もここで自分が抜ければ全滅すると分かっているため七歌の近くで最前線を突破してきたシャドウを倒し続けた。
そうして、アイギスたちが終わりの見えない戦いを続けていた時、天文台の屋上にいる幾月が大声で彼女たちに言った。
「いくら戦おうとも無駄な足掻きだよ！　後ろを見たまえ、ムーンライトブリッジを渡ってやってきたシャドウがようやく到着した！」
その言葉に七歌たちは敵の指す方角へ視線を向けた。
「うそ、でしょ……」
「何故、あちらからシャドウがやってくるんだ……」
遠くに蠢くシャドウの群れを見てゆかりと美鶴が思わず言葉を漏らす。
タルタロスから次々と溢れ出てくるシャドウ、街を覆い尽くし空を飛び回るシャドウ、それらの相手だけでも手一杯だったというのに、

唯一の退路だったはずのムーンライトブリッジ方面からタルタロスのシャドウと変わらぬ群れがやって来ている。
空と前方からの敵に何とか耐えていた者たちは、退路が断たれ自分たちが完全に囲まれた事を察して心が折れそうになる。
だが、アイギスがすぐに大量の銃を呼び出すと、桐条の手当をしている風花以外の全員にそれを取るように言った。
「全員で弾幕を張ってください！　美鶴さんとゆかりさんと天田さんは後方を、真田さんと荒垣さんは前方を、わたしと七歌さんは適時対処します！」
最早まともに戦っていられる状況ではない。
何とか敵が来ないようにするしか生き残る道はない。
メンバーたちはすぐに自分たちの武器を手放し、初めて扱う銃を何とか敵へと向けてセミオートで銃弾を乱射する。
「涙ぐましい努力だ！　だが、結果は分かっているだろう。その行動に、最後の足掻きに、何の意味もないという事が！　間もなく滅びの使者が現われる。君たちの戦いはこれで終わりだ！」
空を覆うシャドウたちによって月の明かりもほとんど届かず、すぐ傍にいる者の姿以外は輪郭がぼんやりと見える程度の暗闇の中を赤い銃弾の光が僅かに照らす。
弾が切れれば銃ごと交換してアイギスたちは撃ち続ける。
銃声で五月蝿いはずだというのに幾月の言葉は耳に届いており、状況を考えれば相手の言っている事が正しいことは分かっている。
連射する際の振動で腕も痺れており、どれだけ銃弾を当てても進み続ける敵の姿に、思わず視界が滲み始めるがそれでも彼女たちは生きることを諦めない。
「ハハッ、有里湊には心の底から同情するよ。こんな世界ために、君たちのような者たちを助けるために戦って死んでいったのだから。あれだけの力を持ちながら、何一つ報われる事なく、ただ無意味に死んでいった事は敵ながら残念でならないよ」
敵が止まらない。もうすぐそこまで迫っている。
こんなところで終わるのか。幾月の言う通り、自分たちの戦いに意

味などなかったのか。
悔しさにアイギスの瞳にも涙が滲み、大切な彼の死を無意味だと宣った男にせめて言葉だけでも返す。
「あなたが、あなたのような人間が八雲さんを嗤うなっ!!」
「結果を見たまえ。勝ったのは私たちだ。君たちも、彼も、そして無能な人類も全ては戦いに敗れた敗者に他ならない」
確かにそうだ。彼が死んだ以上、七歌たちは人類最後の希望だった。
その七歌たちは仲間と分断され、どちらも同じ罠に掛かり、その命運は尽きようとしている。
言葉でどれだけ返そうとも、現実は変わらない。
七歌たちは負けたのだ。
そして、幾月たちが七歌たちの終わりを待っていた時、ここから離れた港区に審判の光が降り注いだ。
離れていても伝わる振動と轟音。
これが終末の光景かと、敵味方関係なく大地に突き刺さる光の柱に視線を奪われた。
「こんなところでっ」
「私たちは、何のために……」
真田と美鶴がその光を目にして呟く。
直径数キロに及ぶあんなものにどうやって人が対抗し得るというのか。
光の柱は徐々に近付いて来ており、恐らく最後には奈落の塔〝タルタロス〟と天を繋ぐのだろう。
街も、シャドウも、全てを呑み込みながら向かってくる終わりに自分が包まれる瞬間、
「……ごめんなさい。八雲さんっ」
アイギスは彼の願いを果たせずに終わることを謝罪し、光に呑み込まれた。

＊＊＊

全てが審判の光に呑み込まれ、目も耳も一切の情報を取得出来なくなった後、アイギスたちは光が止んでも自分たちが生きている事に気付いた。

「え、あれ、なんで？」

どうして自分たちは無事なのだろうと七歌が全員の様子を確かめ、あの時、光に呑まれたはずだとタルタロスへと視線を向ける。

そこには奈落の塔も残っており、見れば光が通った街も原型を留めている。

ただ光が降る前と変わっている事があるとすれば、光に呑まれたシャドウたちが消え、自分たちの傷や精神力が回復している事だろうか。

未知の存在、言わば神のような存在からの攻撃だと思っていただけに、どうしてこんな事が起きたのかと一同は互いの無事を喜びつつも困惑した。

だがその時、七歌はアイギスが俯いて泣いている事に気付き、大丈夫かと心配して声を掛けた。

「アイギス、大丈夫？　さっきの光で、何かあった？」

「いえ、大丈夫、です」

もう自分たちは死ぬんだと思い。終わってみれば生きていた事で恐怖が襲ってきたのか。

そう思って彼女の肩に手を置いて七歌が安心させようとすれば、顔をあげたアイギスは泣きながら笑っていた。

確かに生きていた事は嬉しいし、周囲のシャドウが一掃された事は

喜ばしい。
しかし、依然として天文台の屋上には幾月たちがいる。
この状況では安心も油断も出来ぬだろうと思ったのだが、七歌が声を掛けるまえにアイギスが口を開いた。
「皆さん、もう、大丈夫です。わたしたちは助かります」
「確かにシャドウは消えたが、まだストレガたちは残っているぞ？」
「それでもです」
言いながらアイギスは空を見上げた。
上空を覆っていたシャドウたちが一部消し飛び、巨大な月と星空が見えるようになっていた。
そして、彼女につられるように他の者たちも見上げれば、そこにあり得ない存在を見た。
「嘘、なんでっ」
「まさか、さっきの光って……」
ゆかりと天田が空を見上げ、目を見開きながら他の者たちの心情を代表するように言葉を吐く。
遙か上空。本来、一切の命が存在し得ない影時間。
その空を割くように二つの星が落ちてくる。
空気との摩擦か赤い光の尾を引きながら、それらの星は上空で分かれ別々の戦場へ向けて降下を続ける。
港区へと落ちてゆくそれは、黒き死神と共にある黄色いマフラーを巻いた少年。
そして、アイギスたちのいるこの場へと落ちてくるそれは、長尺の銃を手に持つ白銀の天使と共にある黒いマフラーを巻いた青年だった。

第三百四十九話　リヴァイヴ

影時間――月光館学園

光の柱がシャドウごと街を薙ぎ払い。その余波が消えた後、アイギスたちだけでなく幾月らも空を見上げた。

空を覆っていた飛行可能なシャドウたちも光の柱に呑まれて一部が消え、ほぼ真円に近い巨大な月がそこにはあった。

だが、彼らの視線が捉えたのはその月ではなく、空気との摩擦によって赤い光を纏って降りてくる二つの星。

途中で分かれた一つは港区へ、もう一つは軌道を徐々に修正しながらここへと向かっている。

何故。どうして。一体何が起きたのかと一瞬思考が乱れるも、今ならまだ間に合うと幾月はアルケー・オルフェウスを呼び出すと、すぐに空を見上げる七歌たちに向けてメギドラオンを放った。

デスによる滅びの訪れには生贄が必要なのだ。

星見の塔から放たれた極光は真っ直ぐ彼女たちへと伸びていき、光がそのまま彼女らを呑み込もうとする。

けれど、光が七歌たちを呑み込む直前、上空から降りてきた赤い光が極光に合流し、蒼い剣閃が瞬くと極光は弾けるように消滅した。

「……何故だ。どうして、どうして貴様が生きているんだ。有里湊っ!!」

無駄な足掻きだと嗤っていた者たちが生き残った。

最悪のタイミングで、排除したはずの存在が現われた。

受け入れがたい現実を前に、血が出るほど強く拳を握り締めた幾月が叫んだ。

＊＊＊

離れた場所から男の叫びが響いてきたが、白銀の天使を従え、黄昏の羽根と同じ光を纏った大剣を持つ青年は、その足を地面に着けてしっかりと立つと天使を頭上に待機させたまま振り返る。

そこには、今も目の前の現実が信じられないとばかりに呆けた顔が並んでいるが、彼は構わず二人の少女に視線を送って口を開いた。

「岳羽詠一朗、桐条英恵、両名とそれぞれ交わした約束。〝何かあった時、一度だけ娘を助けて欲しい〟、その約束を今こそ果たそう」
彼が口にした約束はそれぞれ何年も前に結ばれたものだ。
既に何度も彼女たちを助けているため、約束自体は既に守られていると言っていい。
しかし、湊はその約束を果たすために戻ってきたとばかりに彼女たちへ言葉を伝えると、再び振り返って塔の上にいる幾月たちに視線を向けた。
「幾月、お前は世界の滅びについて確かに誰よりも真実に近付いた。だが、過去の人間も、お前も、この惑星の事を甘く見たな？　人の願いによってこの世界が滅びる時、確かに宣告者は生まれる。しかし、世界を滅ぼそうとする者がいるのならば、逆の存在が生まれる可能性をどうして考えない？」
それはどうして湊が生きてここに現われたのかという幾月の問いに対する回答。
幾月の研究室には今も彼の脳と眼球が研究材料として残っており、先ほど理が彼の頭部を攻撃で焼き払った事で処分した部位の方が多くなっているにしても、完全に湊の身体が全て消えた訳ではない。
だからこそ、どうして眼球も思考するための脳も持った状態で、彼が七歌たちを助けるように現われたのか幾月は理解出来なかったのだが、湊の言葉を聞いてシャドウの王に対の存在がいるのかと幾月の思考がここにいる湊の正体に辿り着こうとする。
「……違う。そんな、そんな事はあり得ない！　滅びを齎す存在に対する対抗手段（カウンター）として、惑星自身が個に訪れた死の因果を歪めるなどっ」
生命について研究してきた幾月も、惑星を巨大な一つの生命としてみるガイア理論は知っていた。
それが事実としてあって、この惑星に生きる者たちが望んで滅びが訪れるのなら、惑星自身が一つの個としてそれを拒む事は可能性として否定出来ない。
けれど、滅びを齎すデスの対抗手段として、その惑星に生きた者の

死をなかった事にして宛がうなど、そんな馬鹿げた事があって良いはずがないと幾月は声を荒げた。
その言葉を聞いていた青年は、それはそうだと薄い笑みを浮かべ相手の言葉を肯定する。
「ああ。その点に関してはその通りだ。有里湊は既に死んでいる。故に、ここにあるのは惑星の記憶。魂の残滓より再現された。本件ただ一度切りの使い捨ての存在だ」
この身に未来などない。今回の滅びを齎す者に対するカウンターとして作られただけの存在。
自分の事をどこまでも他人事のように語る青年に、他の者たちは言葉を失う。
周りの反応を見た青年は望み通りの様子に楽しげに口元を歪めつつ、剣を持たぬ右手に力を集中させながら言葉を続けた。
「だが、気をつけろよ？　この身は惑星のペルソナ。デスの対抗手段として遣わされた物だが、その力はこの惑星に生きる者たちのイメージの影響を受ける。つまり、お前たちの持つ有里湊への恐怖はそのまま俺の力になるという事だっ!!」
言い終わるかどうか。そのタイミングで具現化した剛毅のカードが砕きながら、彼が下から掬い上げるように腕を振るう。
すると、大型トラック並みの大きさをした銀狼が現われ、出てきた勢いのまま地面に伝わせた氷で天文台を数瞬で氷に閉じ込めた。
「全員、フェンリルに乗れ！　そこの死に損ないごと運んでやる！」
幾月やタカヤらを氷の檻に閉じ込めることには成功したが、発動の速さを優先したことで氷の壁に閉じ込めただけになっている。
少しすれば氷を破壊して出てくると思われるので、今の内にここを離れるぞと湊は言った。
乗れと言いながら湊は影の腕を出してそれぞれを掴むと、そのまま銀狼の背に乗せて共に空へと飛び上がる。
空中を走るようにして移動するフェンリルの横を、白銀の天使と共に青年が飛んでいるのを見ると、先ほどの話を聞いていた者たちも彼が本当に生き返ったように思ってしまう。

ただ、自分たちが乗っている銀狼も彼と共にある天使も、他の者たちは見たことがない。
ペルソナとは心の具現。ペルソナが異なるという事はつまり心も異なるという事。
即ち、自分たちを助けた青年は自分たちの知る彼とは別人だという訳だ。
けれど、それでもやはり尋ねずにはいられなかったのか。時折向かってくる鳥型シャドウを拳銃で撃ち落としている青年にアイギスは訊いた。
「八雲さん、さっきの話は本当ですか？　あなたは、影時間を終わらせるためだけに作られた八雲さんの人格のコピーだと……」
「あんなの嘘に決まってるだろ」
「……え？」
「あっちは俺の情報を持っていない。なら、その状況を少しでも利用しようと考えただけだ。ここにいる俺は正真正銘本物。確かにあの日に死にはしたが、蘇って戻ってきただけだ」
少女が意を決して尋ねたというのに、青年は何を馬鹿な事をと切って捨てる。
死んで遺体をバラバラに処分されたと思っていた相手が、生前と違わぬ姿で現われたのだ。
化けて出たと思ってもおかしくない状況で、それらしい理由を聞いてしまえば誰だって信じてしまう。
相手を騙すための嘘と聞いても完全には信じることが出来ず、ならば、一体どういった理由で生きているのかとアイギスは改めて聞いた。
「なら、一体どうして？　というか、今までどこに？」
「盗人は二組いたってだけだ。そして、さっきまでは月にいた。あそこが一番あちら側に近いからな」
説明になっていない説明を終えると、湊は天使と共に銀狼の後ろに移動して円形の虹の盾を展開する。
展開してすぐに数発の光線が盾に当たり、追っ手が迫っている事に

アイギスらは焦りを覚える。
「そんな、もう追っ手が来たんですか？」
「ああ。……だが、思ったよりも早いな」
「あ、あの、姉さんやチドリさんの方にもストレガたちがっ」
「向こうは綾時が回収に行った。とっくにＥＰ社の方へ向かっているから、お前たちも先に行っておけ」
そう言い残すと湊は反転して元来た方へと戻ってゆく。
反対にフェンリルは風魔法で風防を作ると、一気に加速して追っ手を置き去りにした。
――港区
光の柱に呑まれた順平は、光が消えて視界が戻ってくると自分がまだ生きている事に気付いた。
周囲にいたシャドウたちは全て消えており、逆に自分が負っていた怪我などが綺麗に治っている。
「なんだ、これ？　つか、怪我どころか精神力まで……」
攻撃だと思っていた光の柱は攻撃ではなかった。
簡単に言ってしまえばそういう事なのだが、一体何が起こったのやらと順平が辺りを見渡す。
倒れていたラビリスやコロマルも、どうやら同じように治療されたようで起き上がっている。
となると、もしやと思ってチドリを寝かせておいた方へ視線を向ければ、少女も健康そうな肌の色になってゆっくりと目を覚ました。
「ん……どう、して……私、生きてるの？」
「良かった！　目ぇ覚めたんか！」
シャドウたちがいなくなったとは言え、武器がないと咄嗟に襲われても戦えない。
順平はラビリスから借りていた戦斧を持ってチドリの許へ向かい。ラビリスたちも立ち上がると同じように集まってきた。
お互いかなり消耗していたはずだが、重傷だったコロマルも問題なく歩けるようになっている。
先ほどの光が回復魔法であったなら、その力はかつての青年を彷彿

とさせるのだがとラビリスたちは無事を喜びながらも今の状況を考察した。
「これ、さっきの光のおかげなん？」
「光？　光って何のこと？　それより、私、治療のために生命力を使ったはずなんだけど」
「急に空から光の柱が降ってきて、オレらはそれで回復したんだよ！　つか、マジで回復して良かったぜ！　あのままだとどうしようかと思ってさ」
　こちらにいるメンバーに回復魔法は使えない。
　だからこそ、順平が重傷を負った時にはチドリが生命力を分け与えて回復させたのだ。
　そのチドリが倒れたときには、順平は本気でどうすれば助けられるかを考え、最悪のパターンを想像して絶望しかけたりもした。
　もしも、光の柱が降ってこなければ、チドリだけでなくラビリスとコロマルも同じく助からなかったかもしれない。
　それを思えば本当に奇跡のようだと順平は喜び、説明を受けたチドリはどこからそんな物が降ってきたのかと空を見上げた。
「……ねぇ、あれ」
　空を見上げたチドリがそれに気付いたのはある意味偶然だった。
　彼女の言葉につられて順平たちも空を見上げ、暗い空に浮かぶ赤い光に気付く。
　正確な距離など欠片も測ることの出来ない遙か上空、地上へ向かって降りてくる二つの星に彼女たちは知り合いの面影を見た。
　いや、確かにあれは〝彼〟だったと、上空で分かれてタルタロスの方へ降りて行った星の片割れを見て確信している少女は、自分たちのいる場所へと向かってくるタナトスと共にある少年に視線を向ける。
　空気との摩擦で発生した熱を払うかのように、空中で一回転して落下速度を緩めた黄色いマフラーの少年は、チドリたちの姿を発見すると柔和な笑みで近付き声を掛けてきた。
「やあ、はじめまして。僕は望月綾時。湊の指示で君たちを回収しに来たんだ。君らの仲間たちとも合流出来るから、今はとりあえず指示

に従って欲しい」
「……本当に八雲が戻ってきたのね？」
「ああ。その点については後で詳しく説明するけど、もう一つの戦場に向かったのは彼で間違いないよ」
初対面で急に助けに来たと話す相手など胡散臭くてしょうがない。
だが、チドリたちの視線の先にいる少年は、彼女たちを助けた光の柱が降ってきた方向と同じ方向から現われた。
それも青年が持っていた物と同じ死神のペルソナを従えて。
アナライズで相手の強さを測ろうとするも、気配を隠蔽するだけの実力があるのか上手く読めない。
恐らく本気になればチドリたちだけでなく、近くのビルに隠れているストレガたちを同時に相手しても少年が勝つだろう。
死んだはずが再び現われ、こんな隠し球を友軍として連れてくるとは恐れ入る。
戦っても勝てる可能性は低く、何より相手に一切の敵意がないことから信じる気になったチドリは綾時の言葉に頷きで返した。
「分かったわ。連れて行って」
「了解。じゃあ、少し動かないでじっとしててくれるかい」
そう言うと綾時の背中あたりから半透明な白い腕が現われて、チドリたちを優しく掴むとタナトスの上昇と共に地面を離れる。
彼が使っているのはペルソナとは別の異能。湊が使っていた蛇神の影である黒い腕と同系統の能力と思われた。
不思議な腕に掴まれた状態でぐんぐんと高度を上げていくと、流石に少し怖くなってきたのか順平が綾時に声を掛ける。
「な、なぁ、この腕って大丈夫なんだよな？　急に消えたりとかってしないんだよな？」
「半透明に見えるけど、実際はペルソナやシャドウみたいなものだからね。実体を得ている以上は大丈夫だよ。それより問題はあっちの方だね」
一定の高度になってから移動を始めようとすると、近くのビルの屋上から巨大なペルソナ〝テュポーン〟が蛇を編んで作られた翼を羽

ばたき追って来た。
逃走しようとしていると判断し、他の二人もきっと隙を窺っているはず。
ならば、ここでの正解はチドリたちに負担を掛けない形での撃退。
幸いな事に高度を上げたので、今いる高さでスキルを放っても問題はない。
すっと目を細めてテュポーンを睨んだ綾時は、力を練り込むと敵を見つめたまま口を開いた。
「言っておくけど、僕は湊ほど手加減は上手くない。だから、これで諦めてくれっ!!」
《グルォォォォォォォォォォォォッ!!》
タナトスは力を籠めたまま胸の前で両腕を交差し、魔法を放つタイミングでその両腕を広げて雷を解き放つ。
直後、港区上空に黒い雷が走り、一筋の雷がテュポーンの胸を穿つ。
広がった雷はそれだけでなく、空を飛んでいた多数の飛行型シャドウたちを次々と追尾して喰らいつくように一体、また一体と敵を呑み込んでいった。
あれだけ自分たちが苦戦した相手が、こうも簡単に倒されていくと見ていて何とも言えない気分になる。
しかし、湊に匹敵する力を持つ者が自分たちを守っている。
そう考えると力を持つ者に対する恐怖よりも、これで自分たちは助かるのだという気持ちの方が強く出てくる。
周囲から一切の敵性反応が消えると、タナトスは進路を北に取って移動を始めた。
後方からの追撃が来る様子はなく、進路上にやってくる飛行型シャドウはタナトスが近付くだけで勝手に霧散してゆく。
そうして街の上空を移動すると、彼らはＥＰ社の研究区画側に辿り着いた。
ＥＰ社敷地内に存在する長い道路は、どことなく滑走路を想起させる。
建物からも遠く、道路以外には何もない無駄なスペースに感じ、実

際にどういった理由で使うことがあるのだろうかと順平たちは辺りを見渡す。
「うわぁ、めっちゃ広ぇな。ここ何のためにあるんだ？」
「何かあれば施設を拡張出来るように土地だけ押さえたスペースらしいよ。まぁ、今は空き地扱いだね」
「へぇ、お前も有里の会社に詳しいんだな」
「研究内容とかは全然だよ。知ってるのは施設概要だけさ」
　順平からすれば秘密の多いＥＰ社において、施設について知っているだけでも驚きなので、綾時が一体どういう立場の存在なのか知りたかった身としては、かなり湊に近い立場なのだと改めて認識する。
　また、初めて会った相手の素性を気にするだけの余裕が出ている事にも気付き、自分たちが本当に助かったのだという実感も出てきた。
　これから七歌たちもここに合流しに来るという話で、タルタロスのある方角を見ながら少しばかり待っていると、影時間だというのに施設の方から救急車がやって来て順平たちの傍に止まる。
　もしや、自分たちの怪我を見るために手配してくれたかと考えていれば、救急車からは浅黒い肌のインド系らしき女性とその部下と思われる医療スタッフが数名降りてきた。
「はぁーい。ラビリスちゃん、お疲れさまぁ」
「あ、シャロンさん。どうもです。えっと、ウチらの診察ですか？」
「いいえ。急に死んだはずの坊やから連絡が来て、桐条総帥が死にかけてるから命を繋げって言われたのよぉ。何で遺体バラされて生きてるのかは不思議なんだけど、貴方たち何か知ってる？」
　もう一つの戦場について情報を一切持っていなかったことで、ラビリスたちはそんな事になっていたのかと少々驚く。
　シャロンが乗ってきた救急車は当然のように黄昏の羽根を積んでおり、医療スタッフは適性を獲得した者と簡易補整器の指輪を付けることで、全員が影時間に対応出来るようになっている。
　これも湊が以前から用意していたものらしく、出来るだけ影時間について知る者を少なくしようとしていた桐条グループとは反対に、必要な人材を集めるためなら少しくらい外に影時間の情報が漏れても

構わないという意思が感じられた。
ただ、緊急時に備えてトップ不在でもしっかりと動ける準備がしてあるだけに、ＥＰ社側でも湊が死んでいた事になっていたとすれば、その死んだはずの湊とも現われた綾時がどこに属する存在なのかという疑問が出てきた。
ラビリスたちの視線が綾時に集まれば、シャロンも彼が何かを知っていると察したのか視線を送る。
もう一方の戦場にいた者たちを待つ間、穏やかな笑みを浮かべたまま上空にタナトスを待機させていた少年は、皆の視線が集まっている事に気付いて肩を竦めた。
「僕もあくまで途中で合流した立場なんだ。詳しい話は影時間が明けてからでも本人に聞いてよ。ほら、向こうの人たちも到着したみたいだし」
言いながら綾時が指をさした方向から、巨大な銀狼が空中を駆けてやってくる。
その大きさと獰猛そうな顔つきに順平の腰が引けており、到着する直前には綾時の背に隠れていたが、着地して伏せた銀狼の背中から七歌たちが降りてくると再会を喜ぶように近付いてゆく。
「よぉ、アイギス、七歌っちらも！」
「順平、良かった無事で！」
「すみません、順平さん。応援に行くと言っておきながら、向かう事が出来ず。本当に申し訳ないです」
「いや、そっちも大変だったんだろ。ああいう状況じゃしょうがねぇって」
どうにかお互いに大きな怪我もなく生き残ったなと生存を喜び合う。
一時は本気で死を覚悟したものだが、こうやって仲間と再会出来るとようやく心から安堵することが出来た。
しかし、中には意識不明の重体になっている者もおり、荒垣と真田がゆっくりと相手を銀狼の背から下ろしていれば、シャロンたち医療スタッフがストレッチャーでそちらに向かう。

「はいはーい。とりあえず、患者を運ぶわぁ。道を開けて頂戴」
「どうか、どうか、お父様をお願いします」
「安心してぇ。うちは影時間でも平時と同じだけの治療が出来るようになってるから、最善を尽くして繋いでみせるわ」
心から縋るように話す美鶴の肩に手を置くと、シャロンは優しい笑みで大丈夫だと相手を元気づける。
目の前に失われようとする命があるのなら、何としてでもそれを繋いでみせる。
そのために湊はこの病院を作り、裏の事情も知るスタッフたちを揃えたのだ。
移動しながら処置を進め救急車に患者を乗せると、シャロンたちはすぐに施設に向かって去って行った。
走り去る救急車を見送ったメンバーたちは、タルタロスの周辺で時折起こる爆発をみて、まだ湊がストレガたちと戦っているのだと察する。
同じようにそれを見ていた綾時は、タナトスを背後に呼び戻すと他の者たちの方へ向き直って口を開いた。
「さて、君たちも合流したようだし。そろそろ僕も行くよ」
「え、湊君もこっちに合流するんちゃうの？」
「少しばかり敵が多くてね。厄介なシャドウの改造種もいるようだし。最初から君たちが合流したら二人でやる予定だったのさ」
光の柱で街を薙ぎ払いはしたが、上空にも地上にもまだまだシャドウたちは残っている。
幾月やストレガたちも湊に挑んでいて、海上に放たれた超大型キメラシャドウや複合型の悪魔型シャドウのほとんどは手つかずのままだ。
総合的な戦闘力では刈り取る者に劣るものの、その機動力では圧倒的に上回る悪魔型シャドウの相手は今の七歌たちにはキツい。
超大型キメラシャドウに至っては今回も影時間の外で活動出来るフィールドを持っている。
少なくとも、それらを倒さずに撤退することは出来ないので、自分

も役目を果たしてくるよと綾時は笑った。
「まぁ、待っててよ。僕も、彼も、この戦いを終わらせるために来たんだから」
そして、少年は黒い死神を従え戦場に向けて飛び立つ。
蘇った彼と共にこの戦いを終わらせるために。

第三百五十話　浄化の光

影時間――港区

少年たちのいた星見の塔が氷で覆われてゆく。

全ての空間を氷で埋め尽くすのではなく、ただ、ここに閉じ込めることが目的のように氷壁で覆われただけだが、敵の魔法の発動速度が速いせいで咄嗟の反応が遅れた。

もし、相手が自分たちごと塔を凍りつかせていたなら、そこで勝負は決まっていたかもしれない。

少年の思考はそんな仮定の話に向けられ、どうして相手がこんな足止めにしかならない事をしたのかと考えた時、そもそも敵として認識されていないのではという可能性に思い至った。

適性では勝っていて、あの日確かに殺したはずだったというのに、再び現われた青年によって生贄を捧げるための儀式を全て壊された。

そこに来てこの対応だ。自分こそが本当の百鬼八雲に相応しいと思っていた少年のプライドは大きく傷つけられた。

「――――ふざけるなぁっ!!」

怒りのままに叫んだ理の頭上に水色の欠片が渦巻き、そこから歌舞伎の獅子に似た風貌の鬼が現われる。

赤髪の鬼が腰の太刀を振り抜けば、刃から放たれた斬撃で正面の氷壁が崩れた。

邪魔な壁が壊れた事で、少々離れた空を行く巨大な銀狼と共に北へ向かう天使が見える。

この距離であればまだ追い付ける。そう判断した理は刀を鞘に戻している愚者〝酒呑童子〟との同調率を上げて宙に浮く。

「お父さん、私も理と一緒にあいつを追うわ」

「分かった。惑星のペルソナという話が真実かは分からないが、あの光の柱を含め敵の攻撃には注意するんだ」

黒いドレスを身に纏った灰色の肌の女神〝ノート〟。

その女神を召喚して玖美奈も理の後を追って飛び立つと、すぐに先を行く銀狼と天使を追い掛ける。

敵は大勢を運んでいるからか速度が出ていない。
これならばそう時間も掛からず追い付けるだろう。
港区の街を見下ろしながら全身で風を切る玖美奈が先を急げば、酒呑童子と飛んでいた理が攻撃の準備をしていた。
酒呑童子の黒い角に力が集まり、それが光となって放たれる。
真っ直ぐ銀狼を狙ったその一撃は、空気を切り裂いて伸びて進み、あと僅かで銀狼を貫くタイミングで虹の盾に阻まれた。
理はそれを見ても構わずに撃ち続けているため、速度を上げて隣に並んでから玖美奈が声を掛ける。
「理、あの盾は性質が異なるけど、恐らくノートの〝夜の帳〟に近い魔法よ。魔法攻撃での突破は難しいわ」
「なら、接近戦で叩き落としてやるだけだっ」
憎しみの混じった瞳で睨む理の視線の先には、反転して向かってくる湊がいた。
銀狼は加速して離れていくので、彼一人で殿を務めて他の者たちを逃がすつもりなのだろう。
生贄である七歌たちを殺せないのは厄介だが、状況をひっくり返した湊を二人で相手出来るのは好都合。
四属性の魔法全てが使えるノートは、同時に攻めるために酒呑童子に効かない火炎属性を湊に向けて放つ。
酒呑童子は炎に呑まれながらも接近し、腰の太刀を抜いて天使ごと湊を切り伏せんと上段から振り下ろした。
「はぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
酒呑童子が太刀を振るう時、理は手に持っていた槍を湊に向けて突き出す。
玖美奈の魔法に加えて、ペルソナと理から同時に物理攻撃を放たれれば、湊も何かしらの防御手段を取るしかない。
そうなれば続けて玖美奈が魔法か大剣で攻撃を繰り出すことが出来る。
接近した理と湊が衝突する瞬間に動こうと集中した時、二人の視界から湊の姿が消えた。

瞬きをして一瞬だけ目を閉じたという事もなく、本当に忽然と目の前から湊がいなくなった事で玖美奈は火炎魔法を止めて警戒する。
同じく理もすぐに武器を引いて辺りを見渡していれば、頭上から声が届いた。
「どうした？　随分と余裕がないようだが、何をそんなに焦っている」
二人が見上げれば、湊と共に左右の掌に炎と冷気を纏わせた天使がいた。
まさか、二つの魔法を使った温度差を利用して陽炎でも作りだしていたというのか。
自分たちが攻撃を仕掛けた途端に相手が消えた事もあって、二人は自分の頭を過ぎったその可能性を信じそうになる。
けれど、玖美奈が警戒しながら湊の手札を分析しようとしている間に、理は湊に向かって突撃していた。
「なんで……なんでっ!!　終わらせた。終わらせたはずなんだ！　あの日、あの場所でっ!!」
湊に向けて突撃しながら酒呑童子が太刀を振るって斬撃を飛ばす。
一振りで五つの斬撃を飛ばし、さらに自分も追撃をするべく理らが迫れば、青年は理たちの方を向きながら同じ速度で後退してゆく。
敵がいる状況で簡単に背を見せないのは正しい。
けれど、理たちからすれば、進む方向を見ずに飛びながらでも対処出来ると言われているように感じる。
事実として、湊は迫ってきた斬撃を大剣の一薙ぎで五つとも霧散させて見せた。
並みの武器ならば一つ弾いただけで折れてもおかしくない威力だというのに、目の前を飛ぶ虫を払うかのような軽い仕草。
そんな敵の態度と、まるで全てを見透かすような蒼い瞳を向けられた理は、怒りに顔を歪ませ限界まで加速して追ってゆく。
「待って、理!!」
玖美奈も必死に追うが適性値の差か、理と湊から徐々に離されてゆく。
理の力をさらに籠められ水色の光に包まれながら追う鬼と、六対十

二枚の光翼から時折蛍火色の光の粒を落としながら飛ぶ天使。
徐々に加速してゆくそれらは、次第に空に走る水色と蛍火色の光の軌跡になってゆく。
「死んだくせに、どうしてお前は！　そうやって人を見下して、自分の方が上だって！　そう言いたいのかっ!!」
真っ直ぐ進んでいたかと思えば上昇し、上昇をやめたかと思えば大きく左に迂回するように飛ぶなど、湊は度々進路を変えてまるで理を振り切ろうとする動きを見せる。
そんな先を行く湊に向かって、理は何度も何度もメギドラオンを放つが、ほとんどは避けられてしまい。直撃すると思ったタイミングでも、天使の右腕に虹の小盾を出して弾くように受け流されてしまう。
距離が離される訳じゃない。動きも追えている。相手には攻撃を許さず、防がれてはいるが自分の攻撃は敵を捉えている。
だというのに、理はまるで戦っている実感がなかった。
「蘇ったというなら戦えっ!!　僕と決着をつけろ!!」
酒呑童子の額にある第三の眼から火球が放たれ、湊に迫ると大爆発を引き起こす。
その中を真っ直ぐ進んで理は相手に迫るも、炎を抜けても相手の姿は健在で、虹の小盾を出したまま爆風にわざと乗って距離を取っていた。
今の理は必死に戦っている。かつては相手を完全に見下していたが、実際に戦ってみれば全力を出さねば振り切られかねない状況なのだ。
そんな機動を必要とする場面で攻撃まで仕掛けねばならない以上、理も本気にならざるを得ない。
玖美奈がついて来ていないことは分かっている。しかし、置いてきてでも追わねば完全に逃げられていたかもしれなかった。
何もしていない相手に自分がそこまで追い込まれているのに、どうして何も出来ていない相手には余裕があるのか。
理解出来ない理は残っている力を全て籠め、逃げ場がないほど広範囲にメギドラオンを放とうかと考える。

だが、その時、今まで理を見ていた視線を逸らした湊が小さく呟いた。
「……ようやく着いたか」
風を裂くように飛びながらでも届いた言葉に理は耳を疑った。
ようやく着いた。言葉の意味は分かるが、戦っている今ここには関係のない言葉だ。
なら、その言葉は一体何に向けて使われたものなのか。
考えるまでもない。彼はずっと七歌たちが無事に安全な場所まで待避するのを待っていたのだ。
戦っているつもりになっていたのは理だけ。相手はただ時間を稼ぐために敵を引きつけ飛び回っていたに過ぎない。
その事実を脳が理解した時、一瞬、理の思考に空白が出来てしまった。
「……っ!?」
正気に戻ると同時に感じたのは全身の肌が粟立つほどの悪寒。
その正体を確かめるより先に、本能に従って理は全力でその場から降下して離れる。
すると、先ほどまでいた場所を蛍火色の光が通過してゆく。
放ったのは湊と共にある天使だが、その手には馬鹿げた砲身の長さをした白い銃があった。
理の酒呑童子が太刀を使うように、ペルソナとて武器を使う事はある。
ただ、ペルソナは人々の持つ神や英雄に悪魔と言った存在のイメージによって形作る姿を決める。
そういった者たちは旧い時代の存在であるため、人々の持つイメージも自然と近代的な部分が除かれる傾向が強い。
だからこそ、理は相手のペルソナが天使でありながら銃を持っている事が信じられなかった。
「常識ってものがないのかっ」
集合無意識の中の存在であればあり得ないだけに、天使の持つ銃は湊の持つイメージで作られた物に違いない。

天使に近代兵器を持たせるなどあり得ないと、理が悪態を吐きながら体勢を立て直せば、そこを狙って敵の天使が再び引き金を引いてきた。
射線から逃れるように弧を描いて飛ぶ理は、相手の銃の連射性能に苦い顔をする。
どれだけ飛んでもそこを狙うように次々と攻撃が放たれ続けてくる。
相手はその場から動かず、ただ銃を向けて引き金を引いているだけ。
力を溜める動作もなく、連射しても湊自身に消耗してゆく様子もない。
だというのに、放たれる光線は理たちの放つメギドラオンよりも太いのだ。
見かけだけのハリボテでない事は集中して見れば分かる。そこに籠められたエネルギーは見た目通り並外れたものだった。
「くそっ、予め溜め込んでいたとでも言うのか」
連射速度と相手に消耗している様子がない事から、理はそれがバッテリーのようにエネルギー内蔵型の武器であると判断した。
もしそうであれば、仮にエネルギーを使い切っても今度は湊のエネルギーで再び撃てる可能性がある。
反撃に出ようにも反転して相手に向かえる隙もなく、どうすればいいと頭を働かせる。
すると、その時、理がいる位置から見て湊を挟んだ向かい側から雷が空に走った。
自分が狙われていると判断した湊は上昇するだけで躱したが、続けて広範囲に炎を広げながら玖美奈とノートがやってくる。
遙か後方に置き去りにしてきたつもりだっただけに、理は玖美奈が追い付き湊に隙を作ってくれた事に深く感謝した。
「ありがとう、姉さん。攻撃さえやめばっ!!」
回避行動を取ったことで湊の攻撃は一時的に止んだ。
その隙に理は反転して湊へと向かって攻撃を放ちながら向かう。

湊のような戦闘経験が豊富なタイプは、直線的なメギドラオンよりも、僅かに揺れる雷の方が僅かに当たる可能性が上がる。
玖美奈が範囲攻撃で攻め、理が同時に威力と速度重視の攻撃で攻める。
これならばと二人が敵にダメージが通ることを確信した時、湊が迫る炎に向けて星のカードを砕くのが見えた。
「来い、シャヘル(マリア)!!」
カードが砕け、水色の欠片が渦巻き、その中心に新たなペルソナが姿を現わす。
黒い甲冑に身を包み、頭には二本の角、そして背中に蒼い炎で出来た龍翼を生やした女性型のペルソナの名は星〝シャヘル〟。
シャヘルは現われるとすぐに禍々しい紫色の槍を呼び出し、穂先に蒼い炎を纏わせると横薙ぎに振るって迫る炎に自分の炎をぶつけてせき止めた。
反対側から迫る雷に対しては、湊は黄昏の羽根と同じ光を発する大剣で切り裂き霧散させた。
完璧なタイミングだと思っていた二人は、簡単に攻撃を防がれた事よりも、現われたペルソナの姿をみて動きを止めてしまっていた。
彼らは同盟を結んでいただけにストレガたちのペルソナを知っていた
今も視線の先にいるシャヘルは、その中の一体。理が殺めた少女マリアが持っていた女帝〝ティアマト〟に酷似しているのだ。
違いがあるとすればティアマトの龍翼が実体だったのに対し、シャヘルの龍翼は蒼い炎で出来ており。また目元まで隠れる兜から見えている髪の色も薄緑から明るい金髪になっている。
死んで蘇った青年が、死んだ少女のペルソナと酷似したペルソナを持っている。まさかとその可能性が頭に浮かんだ二人が驚いていた時、遠く離れた海上に轟音と共に黒い光の柱が現われ大気を揺らした。
その方角は理たちが幾月の指示で超大型キメラシャドウを事前に放っていた方向。

視線の先にいるペルソナに対する動揺を引き摺ったまま、湊以外にもあの異常な再生力を持つシャドウを殺せる者がいたのかと考え、二人はすぐに湊が現われた時の状況を思い出した。
そう。光の柱が消えた後に見えた星は二つ。
一つがここにいる湊ならば、もう一つの星は一体何だったのか。
その答えが先ほどの黒い雷の柱を出現させた正体なのだろう。
あと一歩。手を伸ばせば届くところまで計画は進んでいたというのに、どうしてこうもイレギュラーが重なるのか。
計画が崩れようとしている原因は全て視線の先にいる青年だ。
この男さえ、こいつさえ殺す事が出来れば、まだ計画は修正出来る。
同じように考えた二人が再び動き出そうとした時、白銀の天使の気配が膨れあがり、その目元を覆う黒いバイザーに七つの赤い瞳が浮かび上がった。
＊＊＊
七歌たちが合流するまで敵を引きつけていた湊は、綾時が海上の大物を仕留めるまで攻撃を牽制に留めて待っていた。
セイヴァーの放つ攻撃は小物を倒すのには向いているが、大物を倒すには周辺の環境に影響が出かねないものも多い。
だからこそ、綾時がきっちりと倒してくれることを願っていたのだが、離れた街中からでも見える黒い雷と轟音に、それでは自分がやっても変わらないだろうと嘆息した。
だが、自分を追って来た二人の敵は、湊クラスのペルソナ使いがもう一人いると分かってより警戒を強めたようで、勢いづく前に終わらせるかと青年もセイヴァーを殲滅型に切り替える。
瞬間、セイヴァーの纏う空気が一変し、蛇神と同じように周囲に神威たる重力波を発生させる。
それを受けた理と玖美奈が空中で体勢を崩しているのを尻目に、湊とセイヴァーは飛行型のシャドウたちがいる高度まで上昇してゆく。
湊たちがくる場所を作るためにシャヘルが炎を渦巻かせて先行し、彼らが宙からやって来た時同様にシャドウたちの一部に穴が空いた。
その空間に辿り着くと湊は集中するように目を閉じる。

己の触覚を広げていくように、どこにシャドウがいるのかを確かめ行使する力の規模を決定。
「……街中によくもまぁばら撒いたものだ」
索敵して分かったのは、大通りから小さな裏路地まで広範囲の至るところにシャドウがいるということ。
七歌やアイギスたちを消耗させるためか、それとも混乱を大きくさせようとでも思ったのか。
相手を理解するつもりがないので深くは考えないが、これは港区だけでは済みそうにないなと湊は銀色に変化した瞳を開いた。
「さぁ、いくぞ。セイヴァー!!」
その言葉の共に青年の全身をE．X．O．と同じ光が包み、磔にされた聖人のように両腕を広げたセイヴァーの背中から三十六対の巨大な翼が展開する。
ペルソナ本体よりも遙かに巨大な翼からは、あの日、湊が少女を救うために放出した命の光が溢れ出る。
大きな河の流れ、躍動する炎、雲を運ぶ風のように広がり進む光は、周囲のシャドウたちもその流れに呑み込んでしまう。
けれど、その光に触れたシャドウたちは次々と姿を維持出来なくなり消えてゆく。
周囲のシャドウたちを消し、それでも尚勢いを増して光は広がり、街中を蛍火色の光の粒子が覆いだす。
離れた場所から見ている者にすれば、温かさすら感じる不思議な光りが街を覆ってゆく幻想的な光景に見えるだろう。
だが、街中にいて、湊と敵対する立場を取った者にすれば、広がる命の光は力を封じる悪魔の御業に思えるに違いない。
この力は湊の生命力を攻撃に変換出来るセイヴァーの特性を利用したもの。
生命力というのは肉体を動かす上で不可欠な命その物とも言えるものだ。
そんなものを浴びれば人は命を強く意識し、逆に死と向き合う意識が薄れてしまう。

死と向き合う事で顕現する事が可能な以上、シャドウやペルソナはその意識が薄れると存在を維持出来なくなり持ち主の許へと還る。
つまり、湊とセイヴァーが街中に展開しているこの光は、シャドウとペルソナという異能を強制的に浄化する代物だった。
光の放出が始まる前に距離を取った理と玖美奈も、光の波に呑まれないように降下してから低空を高速で飛んで仲間の許に向かっている。
これなら二人が光に呑まれペルソナが消えて落下するという事もあるまい。
相手の動きを見ていた湊は、自分の心臓部に納められた結合した〝七枚〟の黄昏の羽根に生命力を送り、羽根同士でも相互に増幅させあう特性によって籠めた分以上に力を増幅させる。
以前の湊であれば街全域を覆うほどの生命力の放出など、途中で力尽きて死んでしまっていたに違いない。
しかし、際限なく力を増幅させ続ける今の彼にはその心配がない。
増幅した力をさらに広範囲へと送り籠めるように、自分の生命力に意識を向けると、セイヴァーの背中から放出される光が龍のような形を作ってゆく。
一つ、二つと光の龍の首が増え、九つの首が出来たところで龍たちは残っているシャドウを全て喰らうように飛び出した。
街を埋め尽くす蛍火色の光、その中を泳ぎながら残ったシャドウたちを喰らう龍。
空を覆い街中にいたシャドウは光に触れ、龍に喰われると次々とその姿を失う。
そして、命の光が港区全域に広がった時にはその一帯にシャドウ反応は残っていなかった。

第三百五十一話　長い一日の終わり

――港区

街の遙か上空。巨大な光翼を広げ、その翼から蛍火色の光の粒を放出する天使がいた。

放出された光は街へと広がり、その光に触れたシャドウは溶けるようにして消滅してゆく。

ビルや停車している乗用車に触れても、それらには変化がないというのに、モナドクラスだろうが下層フロアクラスだろうがシャドウであれば関係なく消える。

酒呑童子で飛びながら光から離れている理たちは、その光景を見て自分たちが触れた場合はどうなるのだろうかと僅かな恐怖を覚えていた。

「なんなんだ……なんなんだよ、あのペルソナは……！」

「私たちはあんな力は知らない。それに、同一のペルソナが力の解放で姿を変えるなんて……」

放出される光の広がりが速く。玖美奈のノートでは追い付かれるからと、玖美奈は酒呑童子の腕に抱きかかえられていた。

追い付かれた時のことを考え、建物の屋根と変わらぬ高度で飛びながら幾月たちとの合流を目指す。

必死に飛ぶ理とは対照的に玖美奈はジッと敵のペルソナを見ていた。

酒呑童子の肩越しに見える相手の姿は、白銀の甲冑を着た天使でしかなかった状態から変化し、虹の光輪を冠してその全身が白く発光している。

黒いバイザーの奥には三つの右眼と四つの左眼を象った赤い光が灯り。左右の腕の肩と脇のあたりから鎧を纏った腕が生え、端から端まで最長数百メートルに及ぶのではないかという巨大な三十六対の光翼を広げている。

七つの眼、六本の腕、三十六対の翼を持つ異形の天使。

玖美奈は滅びを研究する父の手伝いをする中で、聖書などを読むこ

ともあったが、そこに出てくる数字には意味を与えられているものもあった。
七は完成を表わす数字。
六は神の敵を表わす数字。
三十六という数字についての言及はなかったが、その翼の数は人から天上へと昇り〝神の代理人〟の異名を持ったメタトロンと同一だ。
もし、もしも、考えたそれらの通りの力を有しているが故の姿ならば、と玖美奈は自分が想像してしまった最悪の展開を頭から振り払う。
「あり得ない。神を、ニュクスを殺し得る存在なんて……」
父の求める世界。人々が真の意味で幸せになれる理想郷。
そこに至るために降臨するニュクスの力は必要不可欠。
人の力が及ばぬ絶対的な存在、あらゆるものを超越したものが神だ。
それに人という個の力で届き得るなど絶対にあり得ない。
光の龍が残るシャドウたちを喰らうのを見ながら、理の頑張りによって光の効果範囲から逃げ切った玖美奈は、再び相対した時を思って最後まで敵の姿をその目に焼き付けていた。
＊＊＊
海に浮かんでいた超大型キメラシャドウを雷で消滅させた綾時は、セイヴァーが光の放出を始めるとすぐに移動を開始していた。
セイヴァーの持つ浄化の力は、シャドウやペルソナにとって防ぎようのない必殺の力だ。
人の性質を持っているため綾時が浴びても死にはしないが、光の領域内では発揮出来る能力に制限が掛かる。
そして、今出しているタナトスはその制限に掛かってしまうため、光に呑まれれば移動手段を失う綾時はこれ以上にないほど必死にＥＰ社を目指す。
海上から陸地へと戻り、海岸沿いにＥＰ社の方へと近付いてゆく。
だがセイヴァーの放つ神威がズンと背中にのしかかり、高度と速度を維持しながら飛ぶのが途中で辛くなっていた。

もっとも、諦めれば光に呑まれて力を失い。人間の身体能力で数キロ走ることになるため、封印が解けたばかりだというのに、綾時は超大型キメラシャドウを倒した時以上の力を使って七歌たちのいる場所へと戻った。
凄まじい速度でやってきた綾時に対し、その場に残っていた者らは目を大きく開いて驚いている。
そんな光景がおかしくてタナトスを空中で消して着地した少年は、やぁ、と手を挙げて帰還の挨拶をした。
「やぁ。仕事を終えたから戻ってきたよ」
「あ、うん。お疲れさま。けど、なんでそんなに急いだ感じで戻ってきたの？」
自分たちでは対処出来なかったであろう敵を倒して戻ってきた綾時を七歌が労う。
ただ、あまりに必死な様子だったため、どうしてそんなにも急いでいたのか尋ねた。
訊かれた綾時は、理由はすごく単純だよと笑顔を浮かべたまま答える。
「湊がセイヴァーの力を使い始めたからだよ。あの光に触れるとシャドウやペルソナは存在を維持出来なくなる。つまり、飛んでる途中に喰らうとそのまま墜落させられるんだ」
湊や綾時、敵側では理や玖美奈がペルソナで空を飛んでいたが、ペルソナを移動手段として利用している者にとって、セイヴァーの力はこれ以上ないほどの脅威だ。
けれど、力の真価はそこではない。
触れただけでシャドウもペルソナも殺す。異能を殺す異能。
下界を見下ろす天使の翼より放たれ、街を覆ってゆく温かな蛍火色の光を見ながら綾時が話していれば、あの日の光景を覚えていた風花が心配したように口を開く。
「あの、でも、あの光って。有里君の生命力ですよね？　チドリちゃんを蘇生させるために使った時は、あんな事になったのに。こんなに使ったらまたっ」

彼女たちの見ている目の前で、街が光に覆われてゆく。
幻想的でありながらどこか懐かしく、穏やかな気持ちにさせる温かな光。
しかし、それらは全て青年の命と言えるものだ。
少女を生き返らせる時には自身のリミッターを壊し、天高く立ち上るほどの勢いで放出していたが、今はその時の比ではない勢いで街に広がっている。
これでは再び彼の命は尽きてしまうのではないか。
風花がその事を心配していれば、綾時は安心させるように微笑みながら答える。
「大丈夫だよ。チドリさんを生き返らせた時は、エールクロイツとペタル・デュ・クールを持っているだけだった。でも、今の彼はその二つとマリアさんのクロワフェーダが合わさった黄昏の羽根を持っている。七枚の羽根が結合した〝七熾天（セブンスヘヴン）〟をね」
話している彼らの視線の先で天使の翼から九頭の光龍が生まれていた。
それぞれが七歌の持つ黄龍と同等以上の大きさをしており、光の中を泳ぐ龍たちは生き残ったシャドウを喰らっている。
個々で異なる動きを見せる様はまるでペルソナのようだが、綾時曰くあれは全て湊の遠隔操作によって動かしているという。
放出する光も龍も彼の命の源で出来ているからこそ可能な事らしいが、何故湊が七枚の羽根を持っているのか知らない者たちは彼の言葉に耳を傾ける。
「黄昏の羽根には力を増幅させる効果がある。それは羽根の枚数が増えるほど効果が高まるけど、結合した羽根だとお互いの増幅させる力をも増幅させるんだ。並列と直列の違いと言えば分かるかな？　ただの羽根が二枚だと二枚分プラスアルファ程度だけど、二枚が結合した羽根なら発揮値は乗算されるんだ」
「では、八雲さんの持つ羽根も他の六枚と増幅させ合っているのですか？」
「その通り。共鳴した七枚の羽根が互いに力を増幅させ、本来の七乗、

人並み外れた彼の力なら無尽蔵に近いレベルで増幅させ続ける。召喚者の命を喰らうセイヴァーも彼だからこそ制御下に置けているんだ」
彼自身の適性値を七乗するなど、最早計算するのも馬鹿らしい値なのがはっきりと分かる。
だが、それだけの力を持っていなければ扱えないのが神クラスのペルソナなのだ。
彼が死んでから一月ほどしか経っていないが、少女たちは知らぬ間に彼が随分と遠い存在になってしまったように感じた。
そうして、幾月らの放ったシャドウを全て倒し終えたのか、役目を終えた光の龍たちが天に昇ると弾けるように消えていった。
セイヴァーも光の放出を止めており、翼と腕の数が元に戻っている。
港区全域をこの短時間で全て覆ったとは恐れ入る。
ただ、これで彼がこちらにやって来るという事なので、遙か上空にいる彼が来るのを待っていれば、空に浮かんでいる湊の前方に十二本の剣のような物が現われた。
剣のような物は時計盤のように均等に配置され、そのまま黄昏の羽根と同じ光を放つと、湊とセイヴァーがその中央を潜って消えた。
「やあ、お疲れ」
「……ああ」
直後、湊とセイヴァーは七歌たちの前に一瞬にして現われた。
暢気に挨拶を交わす綾時と湊に対し、一体どんな方法で移動したのかと尋ねたかったが、彼らの背後に街の上空に浮かんでいた剣のような物が浮いている。
黄昏の羽根と同じ光を放っていたそれらから光が失われると、剣のような物はセイヴァーの背中に移動して六対十二枚の翼に変化した。
どうやら特殊な効果を持った翼を利用したワープゲート的な移動法らしい。
よく思い出してみると幾月が攻撃を放った時、湊は遙か上空にいて間に合うタイミングではなかった。

時流操作を使えば可能だとして意識していなかったが、その時もしかしたらワープゲートで移動していたのかもしれないと七歌が考えたところで、ペルソナを消して地面に降り立った彼にチドリが近付いた。
自分を助けるために命を落とした青年が目の前にいる。
霊安室で寝ていた彼には何も感じなかったが、視線の先にいる彼は、確かに生きてそこに存在している。
どうしてあんな馬鹿な事をしたのか。なんで生きているのか。今までどこで何をしていたのか。
少女は彼に対して言いたい事や聞きたい事が沢山あった。
しかし、彼を見ているだけで視界が滲み、声を掛けようにもしゃくり上げて上手く話すことが出来なかった。
すると、チドリのそんな様子に気付いた湊は綾時との会話を切り上げ、彼女の方へ向き直るとその頭に左手を置いて口を開いた。
「……ただいま」
「……ばかっ」
それだけ言うとチドリは湊に抱きつき、彼の胸に顔を埋めて声をあげながら泣き出した。
戦っているのは見ていたし、その気配は彼の物であったが、ようやく触れ合ったことで彼が生き返ったことを実感出来たらしい。
他の者たちもチドリにつられるように再会を喜び、笑顔のまま涙を流す。
ただ、敵である理たちが湊の遺体の頭部を持っていた事もあり、心のどこかで信じ切れていないのか真田が湊に遠慮がちに尋ねた。
「有里、本当にお前は生き返ったという事で良いのか？」
「別にこれまでも生き返っていただろうに。今更何を疑っているんだ」
「いや、しかし、敵の……理だったか？　あいつがお前の遺体の一部を持っていたんだぞ？」
既に撤去されているが、湊の遺体が盗まれた時の寝台には刀傷が付いていたし、寝台と霊安室の床には髪が散らばっていた。

そして、敵として現われた理がホルマリン漬けの頭部を持っていた事で、やはり湊は死んでいて遺体も敵の手にあると思っていたのだ。
これで湊が死んでいないと思う方が無理があると真田は言い。他の者たちも、彼が生き返るに至った経緯が気になるのか彼に視線が集まる。
訊かれた方は非常に面倒臭そうなやる気のない表情をしており、久しぶりにそんな顔を見たことで彼が戻ってきた事を余計に実感する。
もっとも、聞かないという選択肢はないので、彼が答えるのを待っていれば湊は小さく嘆息して答えた。
「敵が持っていったのはＥＰ０４〝プロトフルオーダー〟。アイギスたちの生体ボディを作る研究で試作した俺モデルの生体ボディだ。以前、依頼でそれを渡したエリザベスが俺の身体とそれを入れ替え、遅れてやってきたあいつらは気付かず持っていったという訳だ」
因みに、プロトフルオーダーの着ていた入院着は薄緑色、辰巳記念病院の入院着は水色なので、敵がしっかりと調べていれば遺体のすり替えに気付いた可能性もあった。
だが、結局は今日までバレることなく、こうして蘇った湊によって敵側の企みは阻止された。
遺体が二つあった理由を聞いて真田たちも納得すれば、話はこれで終わりかと湊が早々に話を終わらせようとする。
けれど、まだまだ聞きたい事はあるとラビリスが質問してきた。
「でも、どうやって生き返ったん？　蘇生って湊君だけの力じゃ出来ないって聞いてたんやけど？」
「まぁ、肉体が損傷していたらそうだが、蘇生自体は俺の肉体と魂側が持ってた機能だぞ。生きながら死を内包出来たように、死んでいながら生を内包することも出来る。だから、遺体をしっかりと保存しておけば少しの切っ掛けで生き返ることは可能だった」
湊の持つ性質は矛盾すら内包した陰陽の調和。
死んだ状態で生まれ、そして、生まれてから魂を肉体に戻した事で、湊は生まれた時点で生と死の二つの性質を持っていた。
だからこそ、デスを封印する器にもなれたのだから、別にデスが離

れようとも切っ掛けがあれば蘇生自体は可能だった。
そう。世界で最もあの世に近いからとわざわざ月までやって来たエリザベスが、空間に穴を開けて集合無意識の世界にいる湊に向けて遺体を投げ込んだりすれば、魂だけになっていた湊が肉体に戻ることだって難しくない。
エリザベスはその可能性に気付いたからこそ、肉体が処分される前に動き、見事にすり替えと蘇生への布石を打つことに成功したのだった。
自分たちが湊の死を受け止め切れていない間に、随分と頑張ってくれた様子のエリザベスにアイギスらは心の中で礼を言う。
すると、湊は長い髪を軽く結い上げながら、ＥＰ社の方へと視線を向けて口を開いた。
「さて、どうせ桜さんたちにも挨拶には行くんだ。詳しい話はまた後でしよう。俺はこれから手術を手伝ってくる。お前らは帰るでも、手術が終わるまで待つでも好きにするといい」
今現在、ＥＰ社の方ではシャロンたちが桐条武治の手術を行なっている。
シャロンたちは絶対に助けると言っていたが、桐条は血を流しすぎていたし衰弱も激しかった。優秀な人材を揃えているＥＰ社でも正直に言えば難しい状態だったのだ。
けれど、常に患者の体内を見ながら処置が行える湊が参加すれば、それだけで大幅な速度アップと細心の注意を払い続け、状況の急激な変化にも対応する事が出来る。
ずっと憎んでいたはずの相手を助けようとする青年の様子には少々違和感を覚えるが、そも、シャロンたちの手配をしてくれていたのも湊である。
となれば、ここで桐条を助けようとする発言をしたのも本心からなのだろう。
素人でも手術が時間との勝負だとは知っているため、七歌たちは後でいくらでも話は出来るから頑張ってきてと声を掛けて彼を見送る。
そして、湊はＥＰ社に到着するなりすぐに手術に合流すると、影時

間が明け、さらに一時間ほど経ってからようやく手術を終えて外へと出てきた。
湊が光の柱で街を薙ぎ払った際に桐条にも生命力を分け与えていたのだが、それでも桐条の状態はかなりギリギリで予断を許さぬ状態だった。
けれど、どうにか命を繋ぐことには成功し。とても長く感じた今日の戦いで死者が出なかったことを一同は喜び合ったのだった。

第十二章　―Ｒｅａｓｏｎ―

第三百五十二話　報せ、あの日の事

１１月５日（木）
深夜――桐条別宅
影時間が明けた深夜。
都会から離れた高級別荘地にある桐条別宅で、英恵が部屋の明かりも点けずに月を見ていた。
湊が死んでから、彼女は心をどこかに置いてきたかのように、外の景色を眺めて過す事が増えた。
美鶴から電話を貰ったり、桐条武治が訪ねてくることあったが、応対している時以外は湊の記事が載った雑誌を見たり景色を眺めているだけで、今の彼女からは生きる気力を感じる事が出来ない。
ただでさえ英恵は身体が丈夫ではないのだ。使用人たちも常に気を遣って様子を見ているが、突然の別れに加えて遺体を盗まれ葬儀をあげることも出来ていない。
こんな状態で心の整理を付けろという方が難しいだろう。
そうして、まだ欠け始めたばかりの満月に近い月をジッと見つめていれば、部屋の扉をノックする音が響いた。
「……はい。何かしら？」
《夜分遅くに申し訳ありません。和邇でございます》
「和邇さん？」
扉越しに聞こえて来た声と名前に英恵は首を傾げた。
相手は英恵の御側御用を務めていた女性だが、湊が死んで英恵が今のような暮らしになってからは、しばらく暇を貰いたいと別宅を離れていたのだ。
そんなここにいるはずのない相手が、どうしてこんな時間にやってくるのか。
不思議に思いながらも「どうぞ」と答えれば、相手も「失礼します」と言ってから部屋に入ってくる。

やって来た相手の服装は黒のレディースーツで、ここを離れている間も私服でだらけてなどいなかった事が容易に想像出来る。
どこで何をしていたのか。気にならないと言えば嘘になるが、こんな時間にわざわざ主の部屋を訪ねてきたのだ。
余程の話があるに違いないと、英恵は部屋の中央にあるテーブルに誘って彼女に用件を尋ねる。
「それで、戻ってきた理由は何かしら？」
「お伝えしたいことが二つほどあります。良い報せと悪い報せ、どちらからお聞きになりますか？」
御側御用は側近として主に付き従うが、主の命令を忠実にこなすだけの僕という訳ではない。
場合によっては主の行動を諌めることもあれば、プライベートでは親しい友人のように冗談を言い合うこともある。
彼女も公私をしっかりと分けるタイプではあるのだが、今の英恵は心が欠けているような状態だ。
時系列でも、相手の好みでも何でも良いので、好きな順で話せば良いのにと思いつつ、そのままの順番で良いと返す。
それを聞いた和邇は小さく頷いてから、自分がここに来る前に得た情報を主へと伝える。
「では、良い報せについてですが、先ほどの影時間に坊ちゃまがお嬢様たちの前に現われました」
「っ……どういう事かしら？」
「そのままの意味でございます。蘇生を果たし、無事に帰還致しました」
相手の言葉の意味が一瞬理解出来ず、英恵はそんなはずないと思いながら聞き返した。
彼から以前聞いたのだ。蘇生は頭部が無事でなければ起こらないと。
盗まれた遺体は首を切断されていた形跡があり、その時点で湊が蘇生されることは絶対にない。
だからこそ、どうしてそんな心を揺らす嘘を吐くのかと思ったのだ

が、和邇は冗談でも何でもなく、全て事実だとリモコンで部屋の明かりを点けてから数枚の写真を取りだした。
そこには街の遙か上空で天使と共に力を行使している青年が写っている。
わざわざ影時間の港区で活動していたのかとも思うが、そこには確かに見たことのないペルソナと共に青年の姿があった。
手元にある数枚の写真。これが先ほどの影時間に撮った物であるという証拠はない。
そもそも、影時間に使えるカメラを何故彼女が持っているのかという疑問もある。
だが、そうして英恵が震える手で写真を見つめていれば、正面に立っていた和邇が口を開いた。
「信じ切ることが出来ないお気持ちは分かりますが、私がここにいるのが何よりの答えになるかと」
「……確かにそうね。そう、ちゃんと、また戻ってきて、くれたのね……」
和邇は英恵の御側御用を務めているが、桐条側の人間ではなく湊側から派遣された人間だ。
当然、ここに来る前にしっかりと真の主と会ってきたのだろう。
ならば信じられる。言葉を詰まらせながらも、英恵は写真を抱きしめるように涙を流す。
良かった。本当に良かったと。
戦いだけを押しつけて、彼の幸せのために何もしてやることが出来ぬままに訪れた別れ。
彼を失った哀しみに加え、その事をずっと後悔していただけに、また会って話せる事が何よりも嬉しかった。
そうして、英恵がしばらくの間嬉し涙を流していると、和邇はその間に用意していたのか泣き止んだ英恵にピンクのハーブティーの入ったカップを渡してきた。
「ペールローズのハーブティーでございます。ここへ来る前に坊ちゃまから頂きました。恐らく必要になるからと」

「もう。そんな気を遣うくらいなら、電話の一つでもしてくれれば良かったのに」
英恵のことを考えて和邇にハーブティーを持たせてくれた事はありがたい。
しかし、そんな気の回し方をするくらいなら、戻ってきた時点で電話での生存報告の一つでもしてくれればと英恵が思うのも無理はない。
主にお茶を出した本人も気持ちとしては理解出来ると小さく笑っているが、すぐに表情を引き締めて彼が電話しなかった理由について触れた。
「電話は色々と記録が残ってしまいますから。これはもう一つの話に掛かってくるのですが、坊ちゃまはもうしばらく表舞台から消えておくつもりのようです」
「そうなの？　それで、悪い報せというのは？」
「はい。御当主が敵として現われた幾月に撃たれ倒れられました」
相手の言葉に英恵は驚愕から目を大きく見開く。
それぞれ事情は異なるようだが、湊に続いて幾月までもが生きていて姿を現わしたとなれば、驚くなと言う方が無理がある。
しかも、夫の右腕として活躍していたはずの相手が、まさか敵として現われて夫を撃つとは誰も思うまい。
親友の息子が戻ってきてくれたというのに、どうして神はそれを素直に喜ばせてくれないのか。
心の中で英恵は恨み言を言いながら、詳しい話を和邇から聞く。
「幾月は事前にカルテやレントゲンをすり替え、自身の死を偽装したようです。ストレガたちと共に現われたやつはお嬢様たちを狙い。特別課外活動部の皆さんもあと一歩のところまで追い込まれました」
「では、そのタイミングで八雲君が現われて敵を撃退したのね？」
「はい。狙っていた訳ではなく、本当にタイミング的にギリギリだったそうですが、到着前に撃たれていた御当主は出血が酷く。坊ちゃまとＥＰ社の人間で何とか命を繋ぐことには成功しましたが意識が戻っておりません」

危険な状態にはなったようだが生きてはいる。
まさに不幸中の幸いとしか言えないが、それを為したのが蘇ったばかりの湊と聞いて、英恵は胸の中に温かい物が広がるのを感じた。
「……そう。でも、あの子があの人を助けてくれるなんてね」
「あちらの世界でご両親に会ったそうです。自分はこの世界にいて良いのだと、そう思えるようになったと話しておりました」
死後の世界。そんな物が本当に存在するのかという議論は世界中でなされている。
魂とは何か、生き物の意識や記憶はどこに宿るのか、宗教で語られるように善悪で辿り着く場所は違うのか。
英恵も心からそんな物があるとは信じていなかった。
ただ、死んだ親友とその家族が安らかに眠ってくれればと願いはした。
どうやらその願いは叶ったようで、死んだ湊も一度はそこに辿り着いたらしい。
その世界では争いから離れ、もう二度と戦う必要などなく。静かに休むことが出来ていたのだろう。
けれど、湊は戻ってきて戦う事を選んだ。
恐らくこれまでのような義務感や贖罪のためではなく、ただ自分がそうしたいと思って。
英恵もずっと彼が自分自身の事を赦してやれるように、認めてやる事が出来るようにと、色々と手を尽くしてきたものだが、本当の親の存在はやはり大きかったと思わずにはいられない。
いとも容易く彼の心を縛っていた鎖を断ち切り、子どもが危険な世界に飛び込もうとしているのを信じて送り出した親友に心の中で感謝する。
そうして、数秒間だけ瞳を閉じていた英恵が再び目を開けると、強い意志の宿った瞳でまっすぐ和邇を見つめて立ち上がった。
「分かりました。明日の朝一で本宅に向かいます。準備をお願いしてもいいかしら？」
「かしこまりました」

トップが意識不明で回復がいつになるかも分からないとなれば、桐条グループという巨大な組織を動かし続けるために手を打つ必要が出てくる。
場合によっては用意してある遺書を開けて、桐条武治をいないものとして今後の舵取りをするかもしれない。
湊が表舞台から消えておくと言うことは、恐らくは幾月たち敵側に動きがバレないようにするためではなく、湊の復活を桐条グループに出来るだけ悟らせないためだろう。
であるならば、英恵も総帥夫人と母親のどちらでも動けるようにしておく必要がある。
組織内での地位と実力を考えれば、臨時のトップに就くのは桐条の側近だった高寺一郎になるはず。
自分がいなくなった後の事を夫はどう考えるか。日本の就労人口の二パーセントを担う企業を動かし続けるために高寺はどう動くか。
子どもたちを守る事にも繋がるため、英恵は本宅に向かう支度を始めている和邇にも相談しつつ、桐条グループという組織の持つ弱所について考え続けた。

影時間――辰巳記念病院
時間は湊が死んだ翌日の影時間にまで遡る。
桐条グループ傘下の辰巳記念病院、その霊安室で一人の青年が眠っている傍の空間が突然歪んでいた。
部屋の中には病院関係者もおらず、防犯カメラも設置されていないため誰も異常に気付くこともない。
そうして、突然発生した空間の歪みの中から群青色の衣装を纏った女性が出てくれば、相手は青年のいる寝台の傍に降り立ち、布のかけられた顔を見て僅かに眉根を寄せた。
「……貴方にはまだ契約が残っています。それを果たすまで死なれては困ります」
言いながら女性が脇に抱えていた分厚い本を開き、そのページに指を走らせると本から光が溢れ出す。

眩い光が部屋中を照らし、その光りの中から大きな黒い棺桶が出てくると本から溢れていた光は徐々に治まっていった。
光が完全に消えると女性は棺桶の蓋を開けて、その中に眠っている青年ソックリな男を棺桶から出した。
続けて女性は寝台で眠っている湊の遺体を抱き上げて棺桶の中にしまい。逆に先ほど棺桶から出した男を寝台に寝かせて顔に布をかけた。
これで準備は完了だとばかりに女性は棺桶を本の中に戻し、それから空間を歪めて自身もその場を離れようとする。
だが、空間の歪みに入る直前、部屋の隅に置かれていた黒いマフラーや靴が目に入った。
どうやら遺品を持って帰るのを忘れたようで、それなら一緒に持っていこうと女性はマフラーと靴を手に取ってから空間の歪みへ姿を消す。
そうして、誰もいなくなった部屋へ次の客がやってきたのは、女性が部屋を立ち去ってから五分後の事だった。
――月
霊安室から立ち去った女性が次に向かったのは、水も空気もなく、生命の存在しない星だった。
地球から月へと一瞬のうちに移動したように見えるが、実際には移動距離に応じて時間が掛かっており。影時間内で数時間経っているので現実世界では数日経っていたりする。
無論、それでも十分に早く着いているすごい魔法なのだが、そもそも生身でどうやって宇宙空間で平然としていられるのか。
もし、影時間が明けて国際宇宙ステーションの人間が月を見れば驚くに違いない。
限りなく地球人に近い見た目で、宇宙空間に適応した宇宙人が存在すると言うニュースにもなりそうだ。
もっとも、彼女がここにやって来たのは用があったからであり、それが済めばすぐにでも自分が元いた場所に帰るつもりでいる。
無重力の宙に浮かびながら本を取り出した彼女は自分の周囲を結

界で覆うと、本から棺桶を出してその中に持ってきたマフラーと靴を放り込む。
ただ、少し思うことがあったのか、マフラーの中に手を入れるとそこから一振りの大剣を取りだした。
大剣の名はフェアティルゲン。九尾を斬ったことで付いた異名は九尾切り丸。
名切りの鍛冶師が生涯最高の一振りをと、レアメタルを惜しげもなく使って打った当時にすればオーパーツに分類される逸品。
科学の進歩した現代においても、同じ物を作る事など出来ないほど奇跡的な配合で作られており、純粋な金属としての価値だけでも数億に上る。
そんな貴重な品をどうするのかと思えば、大剣を手にした女性は結界から抜け出して青く発光する月面にそれを突き立てた。
かなりの勢いを籠めたのか、二メートル近い剣の半分ほどが刺さって地面の下に埋まっている。
月面に刺さっている剣を見て満足げな顔をした女性は、その場から跳んで結界内へと戻る。
すると、彼女が結界の中へと戻ったタイミングで、月に刺さっている大剣に変化が起きていた。
先ほどまでは武器特有の不思議な魔力の籠もった銀色の刀身をしていたというのに、青く発光する月面に刺さったそれは、刀身に紋様が浮かんで月と同じ光を纏い始めていた。
刺した本人も予想外の事態なのか、きょとんと目を丸くして剣を見つめると、そういう事かと納得したように笑みを浮かべる。
「なるほど、九尾を屠りその妖力を奪ったように、ニュクスの身体からも力を奪っているのですね」
九尾を殺した九尾切り丸には九尾の力が一部宿っていた。
元々、そういう力を持っていたのか、それとも自分を殺した名切りへの恨みで九尾が取り憑いていたから力を得たのか。
どちらが正解かは本人たちに聞くまで分からないが、九尾が取り憑いていた事で九尾切り丸には魂魄喰いの特性が付与されている。

あくまで機能を持っているだけで、そこに大剣自身の自我などは芽生えていないが、ニュクスの力、黄昏の羽根の大本に触れたことで特性が増幅され自動で力を吸い取っているらしい。
吸い取れる力の上限など謎な部分はまだまだあるが、力を吸うにつれて刀身が黄昏の羽根と同じ光を纏っている。
もしも、剣が上限一杯まで力を吸えば、黄昏の羽根の結晶と呼べるだけの力を得ているかもしれない。
そんな少し先の事を考えて楽しい気持ちになった女性は、視線を棺桶に向けると持っていた本に指を走らせて新たな魔法を行使する。
ここまでやって来た魔法の応用。空間に歪みを生じさせ、とても小さな入口を作り出す。
入口を潜った先はどうなっているのか分からない。
棺桶の中にいる彼の肉体と、あちら側にいる彼の魂が引き合えば上手く行く。
しかし、そうならなければ、ただ湊の遺体を世界の狭間に放り捨てる事になってしまう。
失敗を考えると恐ろしくなる。もしかすると、今ここにある肉体に勝手に戻ってくることだってあり得るのだ。
もし、放り捨てた後にそんな事にでもなれば、大切な客人である彼の事を自らの手で殺めてしまう事になりかねない。
これまでこんな不安を覚えたことのなかった女性は、結界のすぐ傍に出来ている小さな入口を見つめながらしばらく考え込んだ。
「……これが自らの行動に責任を負うという事なのですね」
目に見えない。そもそも、実体など存在しない。そんなものに重さなどないはず。
けれど、自分の意思で選択しようとする彼女は、言いようのない重圧を全身に感じていた。
彼の事を大切に想っていた少女たちは、彼の肉体がすり替えられていること自体知らないのだから、女性がそれを伝えない限りはバレることもないだろう。
ただ、何かあった時。もしも、自分が失敗してしまったと分かった

ならば、その時は正直に話してどんな罰でも受けようと決意した。
自分の意思で賭ける事を選んだ彼女は、結界内で浮かぶ棺桶を掴んで運ぶと、それをそのまま小さな入口へゆっくり押し入れてゆく。
どうか巡り会えますように、再び生きて彼と会えますように。
そう願いながら彼の肉体を集合無意識の世界へ送り出せば、エリザベスは月に刺さった九尾切り丸を一瞥してからベルベットルームに帰っていった。

第三百五十三話　黄泉帰り

――集合無意識の世界

現実世界での死を迎え、湊の魂が辿り着いた集合無意識の世界。

淡い桃色の空が頭上には広がり、暖かい気候の中で色とりどりの花々が咲き誇っている。

そんな場所で両親やイリスと再会した湊は、背中に蓮の花が刺繍された黒いカンフー服を着た巨漢と戦っていた。

互いに無手で挑んでいるが、両者が動く度に大地が割れ、散った花びらが闘気に当てられ裂かれてゆく。

「ハァアアア――――ッ!!」

踏み出した右足で地面が陥没するほどの震脚を繰り出し、槍と化した巨漢の右腕がしなりながら湊の胸へと迫る。

鉄板を穿つほどに功夫を練られた必殺の槍は、心臓を喰らわんとする蛇が如き不規則な軌道を見せる。

「フッ!!」

青年はそれを認識しつつ、右肩から突っ込むように接近。迫る敵の腕を右手で後方へと流しながら、自身の右手と空中で交差するように左手の掌打を放った。

攻撃を受け流しながら左の掌打を顎に当て、さらに右肩で鳩尾を強く押す二点同時攻撃。

人の限界を超えた動き。それを見せる両者が交差したのはまさに一瞬。

周りで見ていた者にすれば、二人の距離が詰まったと思った次の瞬間には巨漢が吹き飛んだように見えただろう。

裏の仕事でそういった荒事に慣れている者でも全ては目で追えなかったのだ。

赤毛の巨漢が地面に倒れたタイミングで戦闘終了と判断し、抉れて血が出た脇腹を押さえて敵を見ている湊にイリスが近付いていく。

「おい。お前らどんだけ本気でやり合ってるんだ。そういうのに慣れてない人間もいるんだぞ？」

「……そういう約束だったからな。死なない以上は本気で殺しにいくさ」
受け流す際に相手の右腕が掠った事で抉れた脇腹は、少し手を当てるだけで元通りに復元していた。
湊の視線の先にいる巨漢、大の字になって倒れている仙道弥勒も、掌打を喰らった顎が完全に砕け、右肩でぶつかりにいった鳩尾あたりは陥没しているが、時間が経てば元通りになって起き上がっている。
既にここは死後の世界。見た目こそ生前と同一だが彼らには肉体がない。
そして、そんな死者たちの身体を形作っているのは魂の残滓に残っている記憶だ。
現世における物質的な肉体がなく、形は全てその記憶に引っ張られるため、ここでならどんな致命傷でも時間をそれほどおかずに回復する。
だからこそ、こちらの世界で再会した湊は仙道との約束を改めて守ろうと戦う事に同意したのだ。
イリスと一緒に周りで二人の戦いを見ていた母の菖蒲は、息子が随分と遠い世界に行ったのだなと呆けていたり。善と一緒に見ていた玲は湊と生身で戦える仙道に驚いていたりする。
やはり裏の世界の住人は違う。そう考えている相手に対し、同じ裏の世界で生きていたイリスが、こいつらを基準にしてはいけないと説明しておいたのだが、他を知らぬ者にはあまり効果はないだろう。
そんな現実離れした戦いを見せた男の片割れである仙道弥勒は、起き上がってくるとどこかすっきりとした表情で笑っていた。
「くはははははっ!! いやぁ、参った参った。必殺の一撃にああも合わされては負けを認めるしかない。ソフィアと同じ怪異の力を持っているからと不安に思ったが、しっかりと体術の鍛錬も怠っていなかったようだな」
「ペルソナは街中で大砲を撃つようなものだからな。必要があれば最大火力を撃つこともあるが、基本的には体術中心で活動してたさ」
トップクラスのペルソナ使いの中でも湊のエネルギー総量は頭一

つ抜けている。
さらに、肉体の耐久力によって一撃に籠めて撃ち出せる最大出力も力の管理者に迫るものがある。
だが、そういった条件を抜きにしてもペルソナの攻撃力は街中では過剰だ。
他の者たちならばまだそれほどの力がないので武器の延長で使えるのだろうが、湊の場合は大幅に制限して使う必要が出てくる。
戦う際にそんな事を気にするくらいなら、銃や剣で戦った方が圧倒的に楽だからと湊は体術の鍛錬を続けていた。
ペルソナの強さについて知らない仙道も、死合いをした事でそれが事実だと分かるのだろう。
戦っている間、常に首筋がヒリつくほど極限の命の奪い合いは楽しかったと満足そうに笑った。
生前の約束を改めて果たした事で、仙道は戦いが終わるとどこかへと去って行く。
ここは死者の魂の欠片が辿り着く場所だ。去って行った彼も本人の残滓であって、最終的にはこの世界に溶けて消えてゆく。
未練がなくなったことでそれが早まったのかもしれないが、ここから先は自分が関わるべき事ではないと湊はただ背中を見送った。
「ミナト、お話しよ！」
「……あぁ」
仙道との戦いが終わったのを確認すると、マリアがやって来て嬉しそうに話しかけてくる。
生前は頻繁に会うことが出来なかっただけに、これから一緒にいられるのが嬉しくてはしゃいでいるのだろう。
この場所に咲いている花の話や、彼女が好きだった動物たちの話。
一緒にいたメノウたちの事などマリアはとても楽しそうに色々な話をしてくる。
花畑に腰を下ろした湊は相槌を打ったり、質問に答えて会話を続けた。
だが、途中でふと桃色の空に視線を向けて湊は何かを探すように

じっと空を見続けた。
「……お前、行きたいのか？」
湊が空を見ていると後ろからイリスが声を掛けてくる。
声を掛けられて湊はイリスを見返すが、その瞳にはどういう意味だと疑問が浮かんでいる。
すると、イリスは、はぁ、と溜息を吐いてから呆れた様子で口を開いた。
「あのな。こっちはお前よりも先にこの世界にいたんだ。ある程度なら現実世界の事も解るって知ってるんだよ」
この世界については湊やマリアよりも他の者たちの方が先輩だ。
集合無意識、心の海、魂のコミューンなど呼び名は色々とあるが、現実世界を離れた魂がやって来るという事は二つの世界は繋がっているということ。
その延長で、完全な形ではないが、関わりの深い者に関してなら現実世界の事が伝わってくるのだ。
時の流れ異なっていて、別に地球上にある訳でもないのに、チドリやアイギスに悪意が迫っているのが解る。
だからこそ、湊が僅かな焦りを覚えている事にイリスや母など他の者も気付いていた。
「八雲、貴方は十分に戦った。大切な人たちのために、無関係な人が巻き込まれないように、文字通りその命が燃え尽きるまで戦ったの。もうこれ以上、そんな事はしなくていいんだよ」
「母さんの言う通りだよ。これ以上は戦わなくていい。それは生きている者たちが自分で何とかすべき問題だ」
出来る事なら今すぐにも飛び出して助けに行きたいのだろう。
両親の言葉を聞いた湊の目には、それでもという反抗心が浮かんでいるように見える。
しかし、すぐにその色を消すと彼は自分に言い聞かせるように言葉を返す。
「……分かってる。大丈夫、どうせ何も出来ないんだから」
わざわざ言われなくとも分かっている。死者では現世に介入出来

ない事くらい彼も知っており、湊はそのまま頭の後ろで腕を組むと花畑に寝転んだ。
現実世界の事が解る程度というのは人によって異なる。魂の結びつきの強さであったり、魂自体の強さによっても異なる。
そういった条件で言えば、契約やコミュニティを結んでいた湊ならば、大切な少女たちの状態など完全に把握出来ている可能性すらある。
しかし、この世界まで来た死者では現世に介入することなど出来ない。
もしも、それが可能であったなら、ニュクスも早々に封印など解いて現世に降臨している事だろう。
どんなに願っても、どれだけ望んでも、自分ではもう彼女たちを救えない。
湊がその事実を受け止めようとしていれば、真剣な表情で近付いて来た善が何かを決意した表情で湊に話しかけてきた。
「……湊、君が本気で願うのなら可能性はある」
「ダメだよ、善っ」
不安を抱いた様子の玲が善の言葉を止めようとするが、善も引かずに湊を見つめている。
本当に、もしも、本当に可能性があるのなら湊はそれに賭けたい。
けれど、それは再び青年が戦いに身を投じるという事。
温かくて優しいこの世界を、ようやく得た安らげる場所を、彼から奪うことになってしまう。
湊が周りを見れば両親たちも玲と同じようにどこか苦悩した表情を浮かべていた。
それは、子どもの願いを叶えてやりたい気持ちと、もうこれ以上彼に戦って欲しくない気持ちで揺れているからか。
身体を起こして湊が善に視線を向ければ、善は続きを話し始める。
「君と私たちは違う。君の肉体は残っていて、それはこの世界に辿り着いているんだ」
「……どういう事だ？」

「時間の流れが異なるからだろう。君の魂が肉体から離れた後、この世界に辿り着く前に、既にこの世界に君の肉体は送られてきていたんだ。ベルベットルームの住人、エリザベスの手によって」
善の言葉に湊は目を見開いて驚く。
湊が死んでからこの世界へはすぐに移動したように思えたが、こちらの時の流れは複雑なようで、彼が来るよりも先に肉体がこの世界に辿り着いていたという。
どういう経緯でエリザベスがそうしたのかは分からない。
ただ、恐らくは彼女も湊が蘇る可能性に賭けたのだろう。
そして、湊の選択によってはその賭けにあと一歩で勝てるところまで来ている。
「私たちがいたあの世界へと辿り着けた君なら、肉体を取り戻せば恐らく戻れる」
「……けど、問題がない訳じゃないんだろ？」
「ああ。恐らくだが、内側へと招き入れた魂があちらに戻ることを拒む者がいるだろう。そいつは間違いなく神クラスだ」
玲の魂を輪廻の環に乗せるためにクロノスが遣わされたように、湊が無事に肉体を取り戻しても現世への帰還を阻む者が現われる可能性が高い。
こちらはシャドウたち異能のホームグラウンドたる心の世界。いくら湊が肉体を取り戻しても、相手に適した環境ではどうあっても不利になる。
加えて、ここは死後の世界。となれば、当然そこを統括している存在も限られるだろう。
再び神を相手にすると聞いて、湊が難しい表情で考え込む。
そこには最早戦いの中に戻る事へと躊躇は一切感じられない。
傍で見ていた母の菖蒲は、子どもが再び辛く厳しい道を征こうとしている事を悲しく思いながらも、やはり子どもには生きて欲しいのかしょうがないと苦笑した。
「八雲、行くのね？」
「……うん。可能性が残っているなら、俺にもまだ役割が残っている

んだと思うから」
一度は肉体も失ってこの世界に来たが、蘇ることが出来るならまだ命の使い道が残っている。
チドリを最期まで守るという契約は果たされても、他の契約や果たしていない約束だってあるのだ。
それを果たして影時間を消すまでは生きようと思う。湊がそんな風に考えていれば、青年がまた同じ勘違いをしていると察して父が声を掛けてきた。
「八雲、お前はどうしたい？　どうすべき、どうしなきゃいけないじゃなく、お前自身はどう生きたいんだ？」
「私も、お父さんも、貴方が生まれてきてくれた事を本当に喜んだの。大丈夫よ。貴方は望まれて生まれてきた。世界に祝福されながらこの世に生を受けたんだから、自分のやりたいようにしていいの」
「俺が……どう生きたいか？」
かつて同じ質問を英恵たちにもされたが、当時の湊はそんな事など考える必要ないと切って捨てていた。
しかし、この世界へと渡ってきた事で、彼の心を縛っていた両親への罪の意識は消えた。
ならば、今一度自分の本当の心と向き合ってみるべきだと両親は言ってくる。それこそが今の青年に最も必要な事だとばかりに。
「小狼、お前の両親もアタシもアンタを恨んじゃいない。むしろ、感謝してるんだ。出会えた事も、共に過した時間も、掛け替えのない宝物だ。お前の中にはそういう物はないか？」
このまま戻っても湊は再び自分の命を簡単に使おうとしてしまうだろう。
そうさせないためには、罪の意識が消えた事で自分の事を見つめ直せるようになった今こそ彼の本心を自覚させるべきだ。
彼の両親だけでなくイリスも同じように言葉を掛ければ、湊は自分の心と向き合うように瞳を閉じてじっとする。
「……ある。どうしようもない俺という存在を、支えて形作ってくれたのは、出会ってきた人間との記憶だ。目的のために邪魔だからと一

度は捨てたのに、それでも消えてはくれなかった」
思えば随分と自分勝手に生きてきたものだ。
目的のために走り続け、周りの忠告などろくに聞かず、それでも彼ら彼女らは青年を見捨てずにしょうがないなと彼の我が儘も受け止めてくれた。
戦い続けなければ、人々を助け続けなければ、自分が殺してきた者たちが浮かばれない。自分を守って死んだ者に申し訳が立たない。
そんな独りよがりな想いで戦い続けた結果が、少女を一人助けて志半ばに倒れるというもの。
「……俺は、俺を支えてくれた者たちに恩を返したい。義務感や強迫観念に突き動かされてじゃなく、皆を守りたい。助けたい。今度こそ、ちゃんと一人の人間として向き合ってみたい」
もし、今一度生きることが赦されるのならば。今度こそ、そういった人たちと向き合っていきたい。
これまでの〝ありがとう〟という言葉とその想いを伝えて、自分が受けてきたものを相手にも返していきたい。
名切りの鬼でも、人類救済のための装置でもなく、百鬼八雲として、有里湊として生きてきた青年が持った人としての願い。
人としての一歩をようやく踏み出した彼の心の変化が、その力に変化を齎す。
「……これは」
現世に残った玉藻の前とネガティブマインドのペルソナを除く、全てのペルソナたちが一斉に彼の周りに現われる。
そして、死神〝タナトス〟と審判〝アベル〟が光ったと思えば融合し、自我持ちと剛毅〝大口真神〟もそれぞれ光に包まれた。
突然の変化に周りにいた者たちが驚いていれば、ちょこんと残っている時計を持った兎に善が声を掛けた。
「時の神クロノスの欠片よ。お前も行け。湊の力になってやれ」
善の言葉を聞いた永劫〝稲羽之素兎〟はしっかりと頷いて返すと、光になってタナトスとクロノスが融合している中へ飛び込んでいった。

湊の本来のペルソナに、神の力の欠片が混ざっても大丈夫なのかという疑問はあるが、飛び込んだ稲羽之素兎は弾かれず一つの光になった。
すると、それを見ていたマリアが湊に近付いてあるものを渡してくる。
「ミナト、これあげる」
「……クロワフェーダ、持ってきてたのか」
「うん！　ミナトにもらったものだから。今度はミナトを守ってくれるように、マリアの気持ちいっぱい込めたの！」
少女が渡してきたのは、かつて彼女に渡した結合した黄昏の羽根だった。
死んで魂が肉体を離れる際に、物質と情報の狭間の性質を持つそれを彼女は持ってきたらしい。
確かにこれがあれば湊の力はかなり増幅する。しかも、羽根自体に剥き出しの彼女の魂から込められた強い想いが宿っている。
受け取った湊が自身の胸に分解したそれを納めれば、彼女の想いとして込められたペルソナが顕現した。
それは黒い甲冑に身を包んだ女龍騎士型のペルソナ、女帝〝ティアマト〟。
想いと一緒に彼女の力も連れて行く事が出来る。贈った本人も満足そうに自分のペルソナを見ていれば、彼を守るという同じ想いから生まれたペルソナが反応を見せた。
「あ、マリアのティアマトと火の鳥が合体した！」
影時間の記憶を失う直前に美紀の想いから生まれたペルソナ。青い炎の身体を持つ星〝フェニックス〟が羽ばたき、そのままティアマトに近付くと二体のペルソナが一つの光になって融合を始める。
一斉に自分のペルソナたちが変化するだけでなく、他者の心から生まれたペルソナまで変化するとは思わなかった湊は、二人の少女の気持ちが同一だったからこその変化かとそれを受け止めた。
そうして、全ての光が弾けるように消えれば、新たな力と姿を得たペルソナたちがそこにいた。

《フフッ、腕も戻り、ようやく生前と同等以上の力を得たか》
《この世界にはわたしたちの魂もありますからね。元の霊格に八雲の力も加わればこうなるのも当然かと》
一人は燃えるような赤髪に金色の着物、一人は深雪のような青さすら感じる白髪に黒い着物を身に纏った二柱の女神が笑顔で語り合う。
かつては太陽〝茨木童子〟と月〝赫夜比売〟という名だったが、湊に切り渡した腕や生前の力を取り戻した彼女たちはペルソナとしての名を変えていた。
「太陽〝大日霎貴神〟と月〝月黄泉命〟か」
《うむ。耳慣れぬ名であれば、別にアマテラスでも構わぬぞ》
《わたしも短くツクヨミでよいですよ》
二人の名は〝オオヒルメノムチノカミ〟と〝ツクヨミノミコト〟が正しい。
けれど、力を取り戻す前の玉藻は死神〝シトゥンペカムイ〟という名前が気に入らないからと、死神〝若藻〟を名乗っていた。
それが通るくらいに自我持ちの命名は緩いらしく、湊も正式名称ではなく二人を耳慣れた別名の方で呼ぶことに決めた。
続けて新しい自分の姿を見て貰おうと、節制〝座敷童子〟、魔術師〝出雲阿国〟、戦車〝アタランテ〟だった者たちもやって来た。
《八雲……また、一緒……》
《巫女服から袴姿になっちゃった！》
《我らは始祖と異なり純粋に八雲の力の恩恵での強化らしいな。全身に力が満ちている》
漆黒のドレスに身を包む少女、節制〝闇御津羽神（クラミツハノカミ）〟。
腰に剣を携えた黄色の着物に深緑の袴姿の女性、魔術師〝火雷大神（ホノイカヅチノオオカミ）〟。
白銀の軽鎧に金色の大弓を持つ女性、戦車〝アルテミス〟。
彼女たちも大幅に力が増したようだが、血の濃さが異なるためか生前よりも遙かに強くなったらしい。
そして、名切りの血を嫌っていた運命〝鈴鹿御前〟、研究員の武多の願いから生まれた人工ペルソナである恋愛〝アリス〟、血の付着し

たナイフに憑いていた亡霊が形を持った隠者〝ジャック・ザ・リッパー〟もそれぞれが変化した自分たちの姿を興味深そうに見ながら湊の許へやってくる。
《どうやら蛇神の欠片は完全に取り込んでしまったらしいな。もっとも、既にそういった括りは必要なさそうだが》
ネガティブマインドとの中継役を担っていた彼女は、蛇神の欠片を取り込んで力が増したらしく、その神格は始祖二人に並ぶほどになっている。
ツクヨミとは違った黒地に金糸の刺繍がされた豪華な着物姿になった彼女の新たな名は、運命〝瀬織津姫（セオリツヒメ）〟。
《ワンピースからドレスとローブになっちゃいました。杖も大きくなって魔法使いみたいです！》
誰もが想像する絵本のアリスの姿だった少女は、ワインレッドのドレスに黒いローブを纏い大きな杖を持った姿になっている。彼女が得た新たな名は、恋愛〝マーリン〟。
《殺人鬼から夢を与える存在になって良いんでしょうか？》
「別に君自身が人を殺していた訳じゃない。気にするな」
これまで赤いフードの下に黒いベルトを束ねて作ったような露出の多い格好をしていたジャックは、一転して赤い色の司祭服のようなものを着た落ち着いた姿になっていた。
けれど、その内側にはナイフが隠され、背中にも大きな十字架型の剣を背負っている。そんな彼女の新たな名前は、隠者〝サンタ・クルス〟。
自我持ちたちは自分の新しい姿と、仲間の変化した姿をお互いに見合っていて楽しそうにしている。
そうして、本人たちから説明を聞きつつ全員の新しい名前を確かめていた湊は、残る三体のペルソナにも視線を向けた。
ある意味で最も変化が激しかったそれは、牛ほどサイズからちょっとした客船並みのサイズになった巨大な銀狼、剛毅〝フェンリル〟。
湊たちの頭上で蒼い炎の龍翼を広げて飛ぶ女龍騎士型のペルソナ、星〝シャヘル〟。

そして、かつて時の狭間で召喚した時とは僅かに変わって鎧に金色の意匠が増えた白銀の天使、世界〝セイヴァー〟。
他のペルソナたちよりも先に進化していた審判〝麒麟〟を足して、神格すら得ている者もいる十二体のペルソナが並ぶ光景は圧巻だ。
彼を守るようにという願いを込めたマリアも、自分のペルソナがさらに力を得たことを喜んでみている。
青年の心の変化一つでこうまで変わるのかという変化だが、これはあくまで蘇るための準備に過ぎない。
全てのペルソナを自分の中に戻し、己の肉体が置かれている場所を索敵した湊は、しっかりと頷くと力の宿った強い瞳で両親や仲間たちを見た。
「……行ってくる」
「行ってらっしゃい。八雲。お母さんたちはこっちの世界で貴方の無事を祈り続けているから、貴方は愛されて生まれてきたんだって事を忘れないでね」
「うん、ありがとう。また会えて嬉しかった」
イリスにマリア、善と玲、そして、気配だけ感じる岳羽詠一朗や飛騨などにも笑顔を向けて、湊は目的の場所へ向けて駆け出した。
どこまでも続く花畑の奥に彼の身体は置かれている。
小高い丘や緩やかに流れる川を抜けて、さらに奥へ奥へと進んでいけば、徐々に周辺の景色が暗いものに変わってきた。
空は分厚い雨雲に覆われ、だというのに大地は干からび荒れ果てて草木一つ生えていない。
まさに死んだ大地。これこそが命なき世界だと思える場所の奥に岩山が不自然に切り開かれた場所があった。
岩山の頂上がすり鉢状になって中央だけ平坦にならされている。
上から見て青年がまるでコロッセオのようだと思った場所の中央に、この世界だと不自然に感じる黒い棺桶は置かれていた。
目的の物を見つけた湊は坂を下ってコロッセオの中央を目指す。
どうやれば肉体に戻れるのかは分からない。
ただ、確保しなければどうしようもないため、平坦にならされた場

所まで降りた湊は、そのまま棺桶に近付くと蓋を開いた。
「自分の身体を見下ろすってのも変な気分だな」
中に入っていたのは水色の入院着を着た青年ソックリの男。
ソックリも何も肉体と魂に分かれただけなのだから、紛うことなく完全に本人なのだが、自分の身体を見た湊は随分と久しぶりという感じがしていた。
その辺りも時間の流れが複雑なことが理由だろうかと考えつつ、湊が自分の身体に触れると途端に引っ張られる感覚を覚えた。
こんな簡単に済むのかとも思ったが、湊がその感覚に逆らわずにいれば、視界が暗転してからすぐに棺桶の中で目を覚ました。
身体を起こし、両手の掌を広げては閉じるという動作を繰り返す。
自分の肉体がどれだけ放置されていたのか分からず、動作をチェックしていたのだが、どうやら問題がないようなので、湊は棺桶に一緒に入っていたマフラーから着替えを出した。
すぐに戦闘になることを想定した服装に着替え、ブーツの紐を結び直すと彼は棺桶から出た。
これで後はこの世界から抜け出すだけだ。空を飛べばいけるだろうかと考えたタイミングで、突然、地面から黒い靄が溢れ出し、靄が変化して出来た黒い触手が青年を捕らえる。
「くっ……ニュクスかっ」
湊はすぐに拘束から逃れようとセイヴァーを呼び出し飛び立つ。
ものの数秒で地上から三百メートル以上離れるも、死の気配を纏う黒い触手は彼の腕や足に巻き付いたまま、さらに後を追って複数の触手が伸びてきていた。
魔眼の力を使って切り飛ばそうかと考えるが、この世界は死後の世界で相手は死その物。
寿命を殺して死を発現させる力が死その物に効く訳もなく、魔眼を使っても死の線を見る事は出来ない。
上空を目指して飛び続けても触手はどこまでも追って来て、さらに何もない空間からも突然現われて湊の行く手を阻む。
あと少し、もう少しでこの世界から抜けられる予感があるのだ。

腕を取られても無理矢理に引っ張り、足を掴まれても進むことを諦めない。
だが、世界の理を捻曲げるような彼の存在を赦すことなど出来ないのか、生命に死という概念を与えた神は元いた地上が見えぬ高度で青年を完全に停止させた。
白銀の天使ごと捕らえられ、さらに続けて何重にも触手が巻き付いて地上に向けて引かれてゆく。
ようやく願いを持ったのに、大切な少女たちに危機が迫っているというのに、こんな所で終わってしまうのか。
幾重にも巻き付いた触手で光が閉ざされてゆく最中、青年の胸の奥に悔しさと怒りが広がる。
「くそっ、あと少し。あと少しなんだっ!!」
本来ならば、ニュクスに触れた時点で魂を取られ死んでもおかしくない。
しかし、死との親和性が高く、特殊な魂を持っているからこそ彼は死なずに済んでいた。
それでも惑星一つ分の生命に力の一部を分け与える事が出来るだけの最上級の神には、いくら強かろうが人間の個では出力の点で勝つことが出来ない。
地面に向かって引かれる妙な浮遊感を感じながら、それでもまだと天に向けて湊は手を伸ばそうと足掻く。
終われない。こんなところではまだ終わってやることなど出来ない。
そして、彼はある存在を招き入れるために心の扉を開いた。
「――――来い、俺はここにいるぞっ!!」
死後の世界。そこへ辿り着いたとき、彼の魂には彼の心しかなかった。
彼の心の中にいたペルソナたちは残っていたが、本来いるべきはずの片割れがいなかったのだ。
なら、その片割れはどこにいるのか。
居場所は分からない。けれど、間違いなくまだ存在する。

そう確信した湊が己の存在を示すように力を増幅させれば、その存在は空間を突き破ってこの世界へと現われた。
何かの力が当たって湊を覆っていた黒い触手たちが次々と剥がれ落ちてゆく。
拘束が解けたことでセイヴァーと共に空中で停止すれば、頭上にあり得ないほど巨大な黒い山が浮いていた。
湊の内に眠っている蛇神よりも遙かに巨大な黒い山には、どうやら牛のような形をしているようで、口と眼孔から炎が噴き出した金色の牛の頭骨が付いていた。
さらに直径五メートルはある氷の茨が黒い泥で出来た胴体を覆って無理矢理に形を成しており、その背中からは槍の穂先にも見えるものが先端に付いた氷の茨が蠢いている。
脚は存在せず胴体を構成する泥がそのまま地面に接する形になるのか、近くで見れば山にしか見えない。
だが、それらの姿はあくまで牛らしきものであって、牛神という訳ではないのだろう。
今もニュクスの力から守ってくれている半身に、湊は感謝の言葉を告げた。
「ありがとう、ベアトリーチェ。さぁ、現世へ戻ろう」
この世界の規格に合わせて無理矢理に実体を持った異界の神は、青年の言葉に応えるように光を纏うと一瞬で彼の中に消えた。
欠けていた魂が戻ってきた事で、本来の力を発揮出来るようになった天使の背中から光の翼が放出される。
蛍火色の光はニュクスの進行を防ぎ、その間にベアトリーチェとの完全な同期を済ませた湊が銀色の瞳で上空を見上げた。
どこまで続く暗雲の先に現世がある。ならば、それを超えていくしか道はない。
自分の心と向き合い。一歩を踏み出したからこそ彼は本来のペルソナを取り戻す事が出来た。
そして、本来のペルソナを取り戻したからこそ、彼はその対となる力も制御出来るようになった。

集中する青年の前に一枚のカードが現われる。旅路の終わり、最後のアルカナたる〝世界〟のカード。
そこに宿るは彼ら鬼の一族の力の結晶。二千年以上の長きに亘り研鑽を続け、呪いという形に姿を変えても受け継ぎ続けた一族の歴史。
だが、本来ならば心を喰われるだけの呪いも、それを受け継ぎ御するだけの心を持った者が主となれば、呪いから絶対の守護者へと姿を変える。
「さぁ、征こう。現われろ、无窮っ!!」
瞬間、黒い炎が波紋のように燃え拡がり、湊と白銀の天使を守るように銀色の双角と瞳を持つ蛇神が現れた。
《グオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――――ッ!!》
大気を震わす咆吼をあげながら現われた蛇神は、現われると同時に上空に向けて赤と黒の光が混ざり合った光線を撃ち放った。
暗雲を散らしながら進んでゆく光を追って、湊も天使と共に上を目指す。
まだ追ってこようとするニュクスの力を蛇神が阻み、その間に距離を稼いた湊は蛇神の攻撃で揺らいだ空間の弱所を抜けて現世へと帰還した。

深夜――桔梗組
幾月たちとの戦いを終えた後、桐条の手術を終えた湊はチドリ、ラビリス、アイギス、コロマルに綾時を加えたメンバーを連れて桔梗組へと来ていた。
七歌たちはひっそりと暗示を掛けてから寮に帰しており、ちゃんと桐条グループに湊の帰還が報告されないように手を回している。
彼女たちが帰ったのを確認してから桔梗組に帰ってきた湊は、号泣した桜に抱きつかれてしばらく動けなかったのだが、相手が落ち着いてくると死んでから自分に何があったのかを語った。
「そうして、月の近くに出た後は、月面に刺さっていた九尾切り丸を回

収して、真っ直ぐ地球を目指して飛んだんだ」
無論、綾時の正体やニュクスの存在については濁して伏せたが、生き返るためにとんでもない敵の相手をする必要があったことだけは理解されたらしい。
湊と綾時から彼らが戦場に辿り着くまでの話を聞いて、また湊はどれだけの無茶をしていたんだと聞いていた者たちは呆れ顔になっている。
再会を喜んで大泣きしていた桜も、今では涙が止まって苦笑を浮かべていた。
「まぁ、セイヴァーの空間跳躍がなかったらかなり厳しかったけどね」
「そこに関してはクロノスの力の欠片を吸収したおかげだな。まさかエールクロイツが七熾天に変化した事で時流操作が消えるとは思わなかった」
湊は肉体に残っていたエールクロイツ、チドリの心臓ごと食べて吸収したペタル・デュ・クール、マリアからもらったクロワフェーダを融合させて、新たな結合型の黄昏の羽根を手に入れた。
枚数が増えた上に結合したことで羽根同士の同調率も上がり、力の増幅器としてはこれ以上ないほどの性能を手にしている。
だが、そちらの機能に特化する形になったのか、増幅器として使っている間は他の機能が使えなくなってしまっていた。
羽根の性質が変わったのか、今現在は時を操る神器としての時流操作機能が完全に使えなくなっており、増幅器として使っていない時に使える機能は機械の遠隔操作と影時間の展開のみになっている。
他の羽根には元々ない力なので無い方が普通なのかもしれないが、調査して機能を再び使えるようになるまでは、クロノスの力の欠片だった稲羽之素兎を吸収したセイヴァーのワープ機能で代用出来る部分はしていくしかなかった。
異能殺しのペルソナであるセイヴァーの運用には、規格外の増幅機能を持つ七熾天が必要不可欠。
ならば、便利な時流操作が当分使えなくなっても、代償として受け入れるしかないのかもしれない。

そんな他の者では一生悩む機会がないであろう贅沢な悩みを聞いて、チドリたちはようやく彼が本当に生き返って来たことを実感するのだった。

第三百五十四話　備えと心の準備

夜――〝蠍の心臓〟・本部

日本から飛行機で数時間掛かる距離にある中東の小国ラナフ。

そこに拠点を構えている民間軍事会社の〝蠍の心臓〟本部のミーティングルームに、組織のトップでありワインレッドのレディースーツに身を包んだナターリア・イリーニチナ・メドヴェージェヴァの姿があった。

火のついた葉巻を咥えテーブルの上座に座った彼女の周りには、〝蠍の心臓〟でトップレベルの実力を持つ彼女の私兵たちが控えている。

そして、テーブルを挟んで彼女の向かい側には、不思議な輝きのある金色の瞳を持つ青年が座っていた。

「……ねぇ、一応聞いておくけど貴方って本物？」

「……三年もあれば老化も進むか。ついに目まで悪くなったようだな」

「あのね。貴方が日本で死んだっていう情報はこっちにも届いていたの。イリスの知人であるミスター五代からも聞いていたし、ＥＰ社のソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインも平時とは違った動きをしていたようだしね」

湊やイリスからはナタリアと呼ばれていた彼女は、急にやってきた青年が本当に有里湊本人なのか疑いを持っていた。

何せ、湊の知り合いだからと五代が気を利かせ、ナタリアや紅花たちに湊が死んだ事を伝えていたのだ。

普段の彼であれば生き返るはずではと思うところだが、およそ一月前の事件では湊は蘇生されず、さらに遺体は分解した状態で持ち去られたという。

かつては〝仮面舞踏会の小狼〟に一千万ドルの懸賞金が掛かっていた事もあったが、今現在は全ての懸賞金が解除されているので遺体を持っていく理由もない。

無論、彼に知人を殺されたなどの恨みを持っていれば、まともな供

養などさせてなるものかと嫌がらせに遺体を盗む可能性はある。
だからこそ、しっかりと五体満足な状態で現われた彼が本物なのか。そこにナタリアたちが疑問を持ってしまうのも無理はなかった。
「……昨日の夜。まぁ、日を跨いだ後だから日付的には今日の深夜だったが、あっちの世界から現世に戻ってきたんだ」
「化けて出てくるのは構わないけど、ウチに来ないでくれないかしら」
「身体はちゃんとある。普段とは違った形で蘇生されたと考えてくれればいい」
「仮死状態とか心停止ならともかく、普通は心臓をぶち抜かれても蘇生出来るなんて事はあり得ないのだけれど？　蘇生出来る事を前提にしないでくださる？」
質問したのはナタリアで、湊も本人基準では真面目に答えてくれている。
しかし、彼は一般人どころか裏の人間の中でもかなり特殊な身体をしている。
彼があまりにも自然に死んでも生き返ると話すので、思わずそういう物かと頷きそうになるが、そんな簡単に死を超越するなど世界広しと言えども彼にしか出来ないだろう。
ただ、受け答えや出したコーヒーを普通に飲んでいる事もあって、どうやら本当にまた生き返って来ただけのようだとナタリアは納得することにした。
「まぁいいわ。それで生き返って来たから挨拶回りしてる訳でも無いのでしょう？　ここへ来た用件を教えて頂戴」
「ああ。けどその前に、蠍の心臓として今何か依頼を受けてるか？」
「いつもの害虫駆除はあるけど、期間はまだまだあるわね。予定を訊いてくるという事は依頼かしら？」
「そうだ。実際に仕事をするのは一日にも満たないだろうが、お前たちに日本への旅行をプレゼントしよう」
言いながら口元に悪どい笑みを浮かべた青年は、マフラーから出したファイルを投げてテーブルの上を滑らせる。
丁度良い場所で止まったそれを手に取ったナタリアは、中の書類に

軽く目を通すと青年と同じような表情になる。
仕事の話でどうしてそこまで二人とも悪人面になれるのか。
二人の顔を見るに恐らくはろくな内容ではないのだろうが、私兵たちが何が書かれているのか気になっていれば、ナタリアは説明もせずにファイルを閉じて立ち上がった。
「皆、ボウヤの奢りで日本へ旅行に行くから今すぐ準備して。チャドとセルゲイは他のチームにも同様の内容を通達して、ただし、制圧戦の準備も並行して進めさせるように。出発は六時間後よ。急だからパスポートがない人間は留守番。その代わり旅行に行く人間と同じだけのボーナスをＥＰ社に出してもらえるから我慢してと伝えて」
『了解！』
ボスの命令は絶対。すぐに返事をして私兵たちは動いてゆく。
一般人は銃の携帯が許されない平和な国である日本。
どうしてそこに旅行に行くのに制圧戦の準備が必要になるのか。
ここは民間とは言え治安の悪い中東で活動する軍事会社だ。
そこらの小国の正規軍よりも装備は揃っており、そんな者たちがしっかりと制圧戦の準備をすればかなりの成果を上げることが出来る。
もしも、そんな人間やって来ると日本の警察や政府にバレれば、テロリストとして対処される可能性すらある。
本当に大丈夫なのだろうかと自分たちのボスを疑いつつも、ＥＰ社が完全にスポンサーになって日本へ旅行が出来るのも事実。
十一月の日本は秋。秋の味覚に、紅葉が綺麗らしいねと、部屋を出て行く私兵たちはどこか浮かれている様子だった。
そんな彼らを見送った二人は、悪どい顔をやめて真面目な表情で会話を続ける。
「それで、本当に向こうの世界から蘇ったとして、何かしら得る物はあったのかしら？」
「両親やイリスに会えた。生まれてきて良かったのだと、生きていても良いのだと教えてもらえた」
「……そう。彼女はいつも自分は地獄に堕ちると言っていたけど、そ

の様子だとまともな場所にいけたようね」
「ああ。とても温かい場所だった。それに、生前の姿を取ることは出来ないが、ちゃんと家族とも再会して共に在れたようだ」
あちらでは魂の強さや意志の強さ、さらに死んでからの年月によって人としての姿を形作れるかが決まる。
その点で言えば、一般人でしかないイリスの家族は形作ることができなかったのだが、見えない状態でちゃんと彼女の魂の欠片と共にあったらしい。
友人が死後に家族と再会出来たと聞いて、ナタリアはどこか羨ましそうにしつつ苦笑している。
彼女も息子を一人失っているので、自分もそうなることが出来るかどうか考えているのだろう。
しばらく黙っていたナタリアは立ち上がると、自分も旅行の準備をするからと部屋を出て行く。
湊はその間に移動の足として飛行機を用意し、六時間後に出発出来るよう準備を進めていった。

11月5日（木）
早朝――巌戸台分寮
死んだはずの幾月修司の登場からの裏切り。
その凶弾で桐条武治が意識不明の重体に陥り、仲間たちもシャドウの群れに襲われて絶体絶命の状況に追い込まれた。
けれど、蘇った有里湊と彼の友人である望月綾時の登場で戦況は一変、彼ら二人で街中のシャドウは駆逐され、負傷者はいるものの全員がなんとか生還することが出来た。
ＥＰ社が請け負った桐条の手術は何とか成功し、意識がいつ戻るか分からないものの、容態は安定したからと全員が寮に帰された。
全員が戦いの疲労でくたくたになっていた事もあり、風呂に入ればすぐに全員が部屋へと戻ったが、あまりにも色々な事があり過ぎてゆかりは寝付けずに夜明けを迎えた。
日の出が近付いているのか窓の外は白みがかって街が照らされ、窓

の外に防護ネットに覆われた工事中のビルが見える。
（いつの間にか向かいのビルも高くなってきたなぁ。ここらの開発って桐条グループだったと思うけど、これで日当たりとか悪くなったら抗議出来るのかな？）
少なくとも卒業まではこの寮で生活する予定なので、新しく出来るビルのせいで日当たりが悪くなれば、先にいた者としては物申したい。
周辺地域の開発が桐条グループの担当ならば、余計に文句を言い易かろうとぼんやり考えていたゆかりは、充電器に繋がった携帯を手に取って時間を確認する。
眠れずベッドの上でゴロゴロとしていたが、見れば四時を過ぎてあと少しで五時になるところ。
先の戦いでの疲労は抜けておらず、こんな状態で学校に行っても大丈夫だろうかと心配になる。
最悪の場合、気分が悪いからと櫛名田のカウンセラー室、通称・第二保健室で仮眠でも取るかと思いつつ、そのまま外の景色をボンヤリと見ていれば、黒塗りの長い車が寮の前にやってきた。
こんな早朝に何だと思ったが、見れば執事とメイドらしき人物が車を降りて寮に入ろうとしていた。
この現代でそのような服装を素でしているものなど稀少。秋葉原に行けば会えるかもしれないが、店の制服ではなく正しい仕事着として身に着ける者など極僅かだ。
そんな者がこの寮にやってくるとすれば、それは当然、上流階級の人間に用事があっての事だろう。
この寮でメイドを雇っている者など一人しかいない訳で、タイミングを考えれば家の者がわざわざやって来たのは桐条が倒れたからに違いない。
どういう話になるのかは分からないが、ゆかりはパーカーをシャツの上に羽織るとすぐに一階へと向かった。
＊＊＊
寮の扉が開き、メイド服に身を包んだ女性が一人入ってくる。

執事風の男性は車の所で待っているようで、エントランスにいた者はやってきたメイドに小さな笑みを浮かべて声を掛けた。
「菊乃、久しいな」
「お久しぶりでございます。この度の事、何と言ったらいいか……」
「まぁ、な。だが、最悪の事態は避けられた。ＥＰ社の方たちには感謝してもしきれない。本来、我々こそがこういった事態に対応出来るよう、あらゆる準備をしておかねばならなかったのだが」
桐条が倒れたと聞いて驚いたのはグループの人間ばかりではない。
桐条家に仕える者たちも同じく驚愕し、そんなまさかと未だに信じ切れずにいるくらいだ。
だが、そういう緊急時にこそ組織としての本当の力が見えてくる。
桐条グループは日本の就労人口の二パーセントを担う大企業。だからこそ、組織の暗部を出来るだけ広めないようにしているため、影時間に対応出来る病院としては辰巳記念病院しかなく、適性を持つ医師も数名しかいない。
今回の件で言えば、もし桐条を辰巳記念病院に連れて行っていれば、外科手術を出来るだけの環境が整っておらず、十分な処置をする事も出来ず死なせていただろう。
一方で、美鶴が褒めたＥＰ社の久遠総合病院では、影時間でも平時と同じだけの治療が出来る環境を用意し、トップである湊が死んでからも継続して事情を知っている医師を待機させていた。
彼らの中に適性を持っている者はいないが、その日の担当者が適性補整器の指輪を付けて対応しているという。
もっとも、その適性補整器の指輪自体は、湊が桐条宗家の近くにある旧エルゴ研の使われていない研究所から盗んできた物を改修し、より黄昏の羽根による補整効果を強くすることで使用者の負担と補整の不安定さをなくしたものだったりする。
裏で色々と暗躍している湊の活動には、密かに桐条グループの研究成果も混ざっているのだが、そんな事は知らない美鶴は自分たちよりも外部の人間の方が有事に備えられている事を苦笑した。
主のそんな姿を見たメイドの斎川菊乃は、相手の状態を察したのか

ここを訪れた用件を口にする。
「早いお呼び立てで恐れ入ります。御当主の回復が不明と言うことで、臨時ながら一族の方やグループ幹部の者たちが集まる事になりました。詳しい内容につきましては本家に戻ってからという事になりますが、かなり先を見据えた上での話し合いになるかと」
「運営に穴は開けられない。企業規模を考えれば、このまま代表を交代する事も視野に入れるべきだろう」
「意識不明とは言え、ご存命の内にそのような事をしても良いのでしょうか？」
「良い悪いではない。そうせざるを得ないんだ」
ＥＰ社の人間は治療に最善を尽くしてくれた。
生きているのも奇跡という状態で、これ以上を望むのは贅沢というものだろう。
だが、いくら生きていると言っても、今の桐条では種類に判を押すことすら出来ない。
日本で最も影響力を持つ大企業だからこそ、そのような状態の人間をトップに置いておくことが出来ないため、本日の話し合いで臨時のトップを立てて動いてゆくつもりに違いない。
ちゃんと状況を理解している美鶴が斎川にそう返せば、後ろから足音が聞こえて来たゆかりが階段を下りてきた。
「桐条先輩！」
「岳羽か。こんな時間にどうした？」
「いや、なんか寝れなくて……っていうか、先輩の方こそどうしたんですか？　実家の方から誰か来たんですか？」
まだ早朝の五時だ。部活の朝練にしても起床には早過ぎる時間帯に、どうして起きているんだと美鶴は問うた。
聞かれたゆかりは素直に答えかけるも、そうじゃないと頭を振って美鶴に誰が来たのかを聞く。
すると、美鶴の正面に立っていた菊乃がスカートの裾を少しだけあげて静かに礼をした。
「お嬢様の御側御用を仰せつかっております、斎川菊乃と申します。

この度は、御当主の身に不幸があったため、グループの今後について話し合いの場が設けられるとお嬢様に伝えるためやってきました」
「え、あ、そうなんですね。数時間前に知ったばかりなのに、随分と動きが速いんですね」
「先ほど菊乃にも話したが、企業規模を考えれば当然のことだ。何万という人間の生活を支えている以上、運営に穴は開けられない。私も本家に戻って話を聞いてくる。今日は向こうに泊まるから、他の者にも伝えておいてくれ」
信頼していたはずの人間の裏切りにあい。自分の父親が意識不明になった。
そんな状況でも美鶴は普段通りに振る舞って、ゆかりに迷惑を掛けると謝ってきた。
それを見たゆかりは美鶴の反応に違和感を覚え、どうしてそんなにも冷静でいられるのか気になった。
本当はずっと父親の傍に付いていたのではないか。グループの今後についての話し合いなど、少しでも自分が得をするように大人の汚い部分を見せられるに違いない。
どこか無理をしているように見えたゆかりは、学生でしかない彼女がそんな物に付き合う必要があるのか疑問に思い。それを指摘しようと口を開きかけたところで階段の方から声が掛かった。
「これでも一応はお前と同じ三年だ。そういう事は俺たちに言ってから行け」
「明彦、荒垣……起きていたのか？」
声がして振り返ればジャージ姿の真田と、ラフな部屋着の荒垣が一緒に階段を下りてきた。
二人ともどこか疲れた様子をしており、ゆかりと同じように眠れぬまま起きてきたに違いない。
ただ、頭はしっかりと覚醒しているようで、美鶴の質問に荒垣たちは答えた。
「昨日は色々ありすぎてな。寝るに寝れねぇだろ」
「俺はもうすぐロードワークだから起きてきただけだ。仮眠自体は

取ったぞ」
優秀な選手は限られた時間の中で少しでも回復させるため、短時間だろうと仮眠を取って疲れを取ろうとする。
真田もしっかりと疲れを取る努力をしたようで、ここにいるメンバーの中では確かに一番元気に見えた。
同級生であり戦友でもある真田のそんな姿に、美鶴は思わず笑ってしまい。先ほどよりもいくらか自然な表情で彼らに声を掛けた。
「そうか。なら、お前たちにも言っておこう。しばらく戻れないが部と後輩たちを頼む。タルタロスの探索については私が戻るまで控えてくれ」
「分かった。お前もそっちで自分の仕事をしてこい」
「フフッ、宗家の人間だが企業運営には関わっていない。私の役目など同席する事くらいだ」
それだけ告げると美鶴は予め用意していた荷物を斎川に預け、行ってくると告げて寮を出て行った。
後に残った者たちは車が出るまで見ていたが、出発してそれが見えなくなると、荒垣は真剣な表情で口を開いた。
「あの様子だと俺たちもどうなるか分からねぇな」
「ああ。美鶴の父親にすれば自分も関わった実験の後始末だが、グループにとっては目の上のたんこぶだ。影時間が消えると言われていたアルカナシャドウももういない。進むべき道が分からないならしばらくは凍結、なんて事にもなりかねん」
先ほどは美鶴の調子を戻すためにあえて軽い感じに話しかけたが、真田も荒垣も自分たちの状況がどれだけ不安定かは理解していた。
これまで娘やその友人のために援助していた桐条が倒れ、しばらくは同じような援助は受けられなくなる。
また、グループの総帥である桐条を撃ったのは、グループでもそれなりの地位にあった特別課外活動部の元顧問である幾月だ。
正しいと信じて行なってきたアルカナシャドウの討伐についての話も嘘だったことで、影時間を消す方法が再び分からなくなってしまっている。

これでは桐条グループとしても特別課外活動部をどう扱って良いかも分からないだろう。
「あ、でも、それなら色々知ってる有里君に聞いてみれば良いんじゃ？」
「お前の方にもアイギスから連絡が来てないか？　有里がまたいなくなったと」
「……あ」
言われてゆかりはそうだったと顔を顰める。
寮に戻ってきてから、ベッドの上でしばらくゴロゴロしていたとき、ゆかりの携帯にアイギスからのメールが届いた。
そこに書かれていたのは、夜明け前に湊が桔梗組からいなくなったという報告と、そちらに行っていないかという確認だった。
無論、彼はこの寮へは訪れていないので、ゆかりもその様に返信し、何か分かれば連絡を取り合うことだけ約束した。
そして、未だにアイギスからの連絡も無いので、湊については依然として行方知れずの状態であった。
これではどうやっても聞きようがないとゆかりがゲンナリしていれば、自分の部屋に戻るのか階段へと向かって行く荒垣が呟く。
「影時間については聞けるかもしれねぇが、特別課外活動部の今後については桐条グループと俺たちの問題だ。今回も助けられてんだ。そうなんでもかんでも頼ってばかりもいられねぇだろ」
自分たちがどうなるかは分からないが、ある種のお家騒動に他人を巻き込むことなど出来るはずがない。
それだけ言って荒垣は自分の部屋へ帰っていき、真田もロードワークの時間だからと寮を出て行った。
去って行く三年生たちを見送ったゆかりも、色々と考える事はあるが、自分も朝練の用意をしなければ気持ちを切り替え部屋へと戻っていった。

第三百五十五話　道中での出来事

朝――中央区

幾月に撃たれ桐条武治が倒れた日の朝。

まだ日が昇ってそう経っていない時間だというのに、中央区にある栗原の自宅に来訪者があった。

こんな早朝から何だと思いながらも、栗原がインターフォン越しに対応すれば、やってきたのは桐条グループの情報部の人間だった。

表向きには警備部門という事になっており、実際に依頼を受けてボディガードとして働くこともあるのだが、元々桐条グループにいた栗原は彼らが別の顔を持っている事も知っている。

昨夜の影時間に、死んだはずの幾月がストレガ及び有里湊殺害の実行犯である長谷川沙織ともう一人の八雲と共に現われ、子どもたちと桐条武治を襲ったという説明を聞き、子どもたちは無事だが桐条が意識不明なままだと状況を理解すれば彼らが来た理由も予想がついた。

早朝からインターフォン越しに話していれば近所迷惑なので、とりあえず彼らを玄関に招き入れると腕を組んで呆れ顔のまま話す。

「朝っぱらから大の男が何人も押しかけてきたら迷惑って分からないかねぇ」

「その点につきましては謝罪させて頂きます。ですが、総帥が倒れられた事でグループ全体が非常に危うい状況なのです」

「倒れたのはあんたらの身内だった人間のせいじゃないか」

「……ええ、確かに。ですが、あなたの元同僚でもあります」

死んだはずの幾月が生きていて裏切ったことが原因だが、彼は表向きは学校の理事長でしかなかったが、桐条グループ内では幹部と言えるだけの役職を持っていた。

それはつまり今ここにいる情報部の人間と同じ〝桐条側の人間〟という事になる。

真面目に働いている者にすれば、世界の滅びを求める異常者と一緒にするなと言いたいだろう。

けれど、事実は事実。否定する事は出来ないため、相手は僅かに苦

い顔をしながら栗原とて似たようなものだと言い返してきた。
栗原は子どもたちを巻き込んだ贖罪のために手伝っているので、今更言われたところでその通りだと簡単に認める事が出来る。
相手はそうではないようなので、事故当時は在籍していなかったか、あまり事情を知らされていない下っ端なのだろう。
余裕のなさから様々な情報を読み取った栗原は、これ以上生産性のない会話を続けても無駄かと本題を尋ねた。
「それで、こんな早くから何の用だい？」
「幾月の裏切りがあった事で、彼の遺品とされていたものや周辺を調査する事になりました。特別課外活動部の寮については、子どもたちが帰ってきてから事情を話して理事長室の物を回収させていただくことになっています」
「回収するから顧問の許可を貰いにきたって感じには見えないけどね」
幾月が裏切ったというのは、影時間明けに特別課外活動部の者たちから聞いたことで発覚した。
桐条が倒れただけでなく、その原因が幹部だった者の裏切りと言うことで組織内でも慌ただしい状況にあるらしい。
相手がどういった思想で動いているのか、今現在はどこに潜伏しているのか、元から裏切る兆候があったのか。
桐条グループは情報部の人間を使ってそういった事を調べていくため、既に巌戸台分寮の理事長室に置かれている物を回収する気でいる。
だが、そのための許可を特別課外活動部の顧問になっている栗原に貰いに来たにしては、どこか押し隠した敵意のようなものを感じる。
許可をもらうつもりなら、もう少し愛想良く対応することが出来ないのか。
栗原が指摘すると情報部の男は真顔のまま言葉を返した。
「あれは幾月の持ち物だったとしても元々こちらの物です。あなたに許可を求める必要はない」
「んじゃ、幾月との繋がりを警戒して拘束しに来たってとこか」

「正確に言えば、あなたが白であると証明するために話を聞きたいのです。着替えなどは向こうで用意させます。滞在日数で休業中の補償はしますので、すぐにご同行願います」
「……ったく、こういう時は女を連れて来て出来るだけ相手を警戒させないようにするもんだよ。部屋着から着替えて戸締まりをしてくるからその間だけ待ちな」
相手は警官でも何でも無く、あくまで民間企業の人間に過ぎない。
しかし、桐条グループという巨大な組織は、綺麗なままでは外敵から自分たちを守れないからと黒い部分を持っている。
やってきた男たちも恐らくはその類いで、言うことを聞かなかったり、怪しい動きをすれば拳銃を使って脅してくるに違いない。
栗原は幾月が死んだ後で桐条から顧問を頼むと直々に依頼された人間だ。
それを、相手が意識不明な状態だからと言って、勝手に拘束しに来る辺りにバックにいる人物の目的が透けて見える。
男たちの上司は、自分たち、いや、桐条グループという巨大な組織を守るためならば、どんな黒いことにも手を染める。
手始めに、先代から続く負の遺産、グループ最大の弱所となり得る影時間関連を処理するために特別課外活動部を封じるつもりなのだろう。
湊というグループにとっては最大の脅威にして、特別課外活動部にすれば最大の守り手であった青年ももういない。
チドリやラビリスなど外部には影時間に関わる者たちもいるが、彼女たちは極道の家やＥＰ社が後ろにいるので簡単には手を出せない。
だからこそ、自分たち手の中にいる子どもを先に対処するため、彼らに味方する可能性を持つ栗原を先に押さえに来た訳だ。
（やれやれ、あの子らでどこまで汚い大人を相手出来ることやら）
人々のために戦ってくれていた子どもたちを、大人の汚い争いに巻き込んでしまう事になったことを栗原は悔やむ。
相手にも言い分はあり、この行動でグループが抱える従業員やその家族の生活が守られるのは確かだが、大半が適性すら得られていない

無能な大人の尻拭いを任せていたというのに、そのお返しがこれでは真っ当な信頼関係は完全に崩壊する事だろう。
この選択がどう転ぶか見物だと栗原は心の中で笑いながら出掛ける準備をした。
午前――桐条本邸
寮を出発して数時間後、美鶴を乗せた車は都会を離れ、美鶴実家である桐条本邸の近くまでやって来ていた。
この周辺は高級住宅が多く、それぞれの土地が広いために隣家とはそれなりに距離がある。
さらに言えば、桐条家は公道から私道に入ってからも、五分ほど走らないと屋敷に辿り着かない。
整備された並木の景色を美鶴が眺めていれば、本日の予定をチェックしていた菊乃が顔をあげて話しかけてきた。
「お嬢様、屋敷に戻られましたらまずは着替えていただき、その後、各位よりご挨拶を受けていただきます」
「その辺りはいつも通りか」
「はい。ですが、御当主の意識回復が不明という事もあり、回復を待つべきだという派閥や新たなトップを置いて人事も刷新すべきと言っている派閥もあるそうです」
桐条家の親族だけでなく、名士会の人間も集まっている。
彼らの中には純粋に倒れた桐条を心配する者もいるのだろうが、そのほとんどは新たなトップの許でどれだけ自分が利益を得られるか気にしている。
他人の不幸で銭勘定など普通の感覚で言えば神経を疑うところだろう。
それでも、彼らも自分の生活を守るため、家族の生活をより豊かにするために策を弄する必要があるのだ。
巻き込まれる方にすれば堪ったものではないが、美鶴もそういった知識はあるので、桐条の娘として当たり障りのない対応をするつもりでいる。
今日は母である英恵も戻っているので、彼女の体調を考慮して人数

が少なければ良いがと考えていた時、運転手が何やら怪訝そうに唸り前を見つめていた。
　相手のそんな様子に気付き、その方向へ視線を向けた菊乃は、正門の前に出来ている人集りが出来ていた事で一体何だと睨む。
「何ですかあの人集りは？」
「はっ、すぐに確認致します」
　答えるなり車を止めた運転手は無線を使って警備に確認を取る。
　どこの誰ともしれぬ者たちが集まり、桐条家の人間に怪我でも負わせたら事だ。
　人集りが車の方へとやって来た時のことを考え、いつでも美鶴を守れるように身構えていれば、運転手の無線に警備から通信が入った。
「確認しました。どうやら奥様が既にお戻りになられているそうです」
「お母様が？　随分と早いですね。病院へはまだ寄っていないのですか？」
「いえ、病院側の配慮で時間外でも病室へ行けたらしく。それからお戻りになられたとか」
　今後のグループの運営について話す大事な会議だ。
　桐条が倒れたとなれば、現在の当主代理は妻である英恵がすることになる。
　だからこそ、見舞いへ行かずにこんなにも早く戻ったのかと考えたが、英恵はしっかりと意識が戻らず眠っている夫に会ってから戻ったという。
　それならば良かったと美鶴がほっと息を吐いていれば、正門前の人集りが滅多に会えぬ英恵の覚えを良くしようという下衆だと分かって菊乃が怒りを見せていた。
　どうして彼女がそんなにも怒るのかは分からないが、桐条の不幸を憂いて集まってくれた者を追い払うことは出来ない。
　しょうがないからここからは歩いて向かおうと、美鶴は聞くのに続いて車を降りた。
「いやぁ、まさか御当主が倒れられるとは」

「意識は戻らぬものの、まさに不幸中の幸いとはこの事ですな」
「私は、恥ずかしながら家内の伝手より耳にしまして、飛び起きてきたところです」
　正門の前ではお互いに持っている情報などを交換して、それぞれどうやって他の者よりも英恵の覚えを良くしようかという水面下の戦いが行なわれている。
　大声でそんな事を話していれば、身内や使用人たちに聞こえるというのに、そういった配慮が出来ないからこそ中へ招かれないのだと言いたげに菊乃は眉を寄せていた。
　だが、メイド服に来た少女と共に気品のある少女が歩いていれば当然目立つ。
　ここにいる人間は美鶴の顔も知っているので、気付いた一人が「もしや美鶴お嬢様では？」と声をあげれば、人集りはすぐに美鶴の方へと群がってきた。
「美鶴お嬢様、この度は御当主に不幸があり大変心配致しました。それで、御当主の具合はいかがですかな？」
「あ、いえ、まだ何とも……」
「お嬢様も奥様はお辛いでしょう。何かあれば是非ともわたくしを頼っていただけましたらと」
「はぁ、あ、ありがとうございます」
　群がってきた者たちは押し合うように美鶴へと話しかけてくる。
　豚のように肥え太った男に、トイレの芳香剤かと言いたくなるほど強烈な化粧品の臭いをさせる女性、ニコニコと笑顔を顔に貼り付け何を考えているのか読めない痩せた老人など、見た目も年齢もバラバラだが、彼らの目的が同じである事だけは分かる。
　昨夜の戦いに加えて父が倒れた事もあり、体調が万全ではない今の美鶴に彼らの相手は厳しいものがある。
　だが、集まってきた中でも小柄で髪の薄い老人が聞き逃せない単語を口にした。
「これは噂で耳にしたのですが、その、影時間でしたかな？　やはり、その影響なのですか？」

「ああ、何でも記憶が変わってしまう事もあるそうで」
「あ、いえ、それは……」
彼らも一応は名士会に名を連ねる者なのだろう。影時間がどういったものなのか、ボンヤリとした知識はあるようで、桐条が倒れたのもそれが原因だと考えたらしい。
実際には彼らの言っている事は間違いであり、桐条が倒れたのも人為的な理由なのだが、上手く受け答えが出来ず、尚且つどこまで話していいか判断がつかない美鶴が困っていると、自分の身体を盾にして美鶴を守っていた菊乃が人集りを押し退けるように進もうとし始めた。
「すみ、ません！　お通しください！」
主を守るために体術の心得はあるものの、単純に押し退けるとなると小柄な女性でしかない菊乃では中々思うように進むことが出来ない。
下衆共が余計な事を口走る前に、一秒でも速く美鶴をこの場から逃がそうと菊乃は焦る。
「わたくしも耳にしましたわ。お嬢様は、お父様のために勇敢にも危険に立ち向かっているとか」
「なんとぉ！　御当主も倒れられ、お嬢様もそういった事を続けるとなれば奥様も心配でしょう。私、是非」
「いや、私が！」
自分が、いや自分こそが、そう言ってここにはいない人物へのアピールを白熱させる下衆たち。
今の彼らは自分の未来について皮算用ばかりしていて、この場にいる人間が見えていない。
大きな身体をした男たちが集まり、さらに自分も存在感を出さねばと女性や小柄な者たちが集まってくる。
正門までの通路を確保するどころか、このままでは人波に飲まれ美鶴の身が危険だと、菊乃が本気で声を張り上げようとしたとき、
――――――パァーンッ!!
高級住宅地にあってはならない乾いた銃声が響いた。

突然の銃声に驚いた者たちは肩をビクリと跳ねさせ、一体何が起こったんだと辺りを見渡す。
すると、僅かに開いた正門の所に、小さな拳銃らしき物を空に向けたレディースーツ姿の女性が立っていた。
相手は場が静かになった上で自分に注目が集まっていると分かると、持っていた拳銃をプラプラと手で遊ばせながら口を開く。
「ご安心を百円ショップで買った玩具の火薬銃です」
火薬銃とは玩具の銃に填めたキャップ火薬に衝撃を加えて破裂させ、音や一瞬の発光を楽しむ爆竹などと同じおもちゃ花火の一種である。
陸上のスターターピストルも似たようなものだが、女性が持っているのは確かに百円ショップらしいチープさが見て取れる。
どうしてそんな物を持った者が桐条本邸の敷地から出てきたのかは不明だが、明らかにまだ年若くスーツ姿から名家の人間とも思えない。
そんな人間が桐条家の名士会に名を連ねる自分たちに狼藉を働いた事が許せず、近くにいた豚のような男が顔を真っ赤にして女性を怒鳴りつけた。
「きゅ、急に何だ貴様は！　どこの家の者だ!!」
「私は当主代理である英恵様の御側御用を務めております和邇八尋と申します。ハウスキーパーではなく側近ですので、従者への言葉は主への言葉になりますのでご注意を」
桐条が倒れた事で妻の英恵が当主代理である事は事実。
そして、その彼女の御側御用を務めているという事は、この場にいる人間の中で美鶴に次いで序列が高いという事になる。
家付きの従者ではなく、個人付きの従者への言葉がその主への言葉になるというのも本当なので、怒りで顔を真っ赤にしていた男も何も言えなくなり黙り込んだ。
もっとも、個人付きの従者がしでかした事は、その主の失態でもあるという逆パターンも存在するのだが、強引な方法で自分に注目を集めた事でこの場は和邇が支配している。

未だに不満そうな顔をしている者たちを無視した彼女は、一歩前に進んで人混みが分かれるようにすると、その先にいた菊乃と美鶴にどうぞと道を譲った。
「さて、斎川さん、お嬢様もお疲れでしょうし中へ。お集まりの皆さんは、お気持ちは受け取りましたので本日はお帰りください」
「い、いや、しかし、是非とも奥様にご挨拶だけでも」
「不要です。この後、あなたの本家当主である平山様が来られます。ご挨拶は連名で受け取りますので問題ありません」
挨拶などいらぬから帰れ、菊乃と美鶴が敷地内へと進んでいる途中に和邇はそう言い放つ。
しかし、滅多に戻ってこない英恵と会える機会などそうない。
簡単には諦めきれぬと中へ入れてもらおうとする男を、お前の一族の長に言いつけるぞと暗に脅して黙らせると、和邇は黒い髪を揺らしながら一礼して自分も敷地に入ってから門を閉めた。
完全に閉ざされた門を見て、集まっていた者たちは和邇への不満を口にしながら帰っていく。
その言葉は全て聞かれていたりするのだが、先に敷地に入っていた美鶴たちに合流すると、菊乃が先ほどの件について和邇に頭を下げた。
「すみません。お嬢様の傍にいた私がしなければならなかったというのに」
「お気になさらず。この後、所用で出掛けるのに、あそこにいられると邪魔だっただけなので」
「奥様から離れても大丈夫なのですか？」
「ええ。長期休暇を取っていて、まだその期間中ですから」
見れば確かに普段の仕事着であるエプロンドレス姿ではないが、長期休暇中だと聞いた菊乃はならどうしているんだと不思議そうに相手を見る。
御側御用と言っても菊乃も普段は桐条本邸で勤務し、主である美鶴は巌戸台分寮で生活しているので常に傍にいる訳ではない。
ただ、長期休暇中でありながら主と共に屋敷に滞在し、その上で自

由に出掛けようとしているとなると、一体どういった勤務形態なのかと気になって当然だ。
菊乃は美鶴の従者だが、彼女は桐条家に仕える人間という事になっている。
対して、英恵が普段は遠く離れた桐条別邸で静養しているため、彼女の従者たちは桐条家ではなく英恵に仕える人間という事になっていた。
ここで重要なのがそれぞれが誰に仕えているかという部分であり、もし何かあったとき桐条家仕えの従者たちは桐条と英恵と美鶴を守るが、英恵仕えの従者たちは桐条と美鶴を見捨ててでも英恵を守る。
そして、命令系統も同じように別になっていて、英恵仕えの従者たちは桐条と美鶴の命令を無視することが出来るのだ。
無論、英恵が本邸に戻っている間、屋敷内で働いている時などに頼まれれば各自で判断して聞いても問題はない。
ただ、桐条家の人間や従者たちは、英恵仕えの従者の制服が異なっている事を把握しているので、菊乃も自分とは異なる命令系統の相手に踏み込んだ話を聞いたりはしなかった。
そうして、英恵がどこにいるか把握している和邇に部屋を聞いた美鶴は、一度自分の部屋に戻って着替えると、母である英恵の待つ部屋と向かった。

第三百五十六話　母との再会

――桐条本邸

屋敷に到着した美鶴は自室に戻って着替えると、菊乃と共に母のいる部屋へと向かった。

部屋の前には菊乃とは少々デザインの異なるエプロンドレスに身を包んだ女性がいる。

彼女も和邇八尋と同じように別邸からやって来た英恵専属の従者なのだろう。

バイトや単なる仕事として従者になった者は別として、仕える事を生き方として選んだ彼女たちの主は英恵であり、いくら桐条家の当主だろうと桐条武治や美鶴の命令を聞くことはない。

とはいえ、主の娘がくればしっかりと頭を下げて一礼し、中に英恵がいる事を教えてくれた。

美鶴と同い年ながら幼い頃から桐条家の従者として働いてきた菊乃は、相手の所作や立ち振る舞いに内心で唸る。

和邇はやや変わった性格をしているようだが、御側御用だけあって様々な技能をかなりの熟練度で習得している事が分かった。

だが、扉の前で待機しているだけの者でさえ、桐条家の従者の中でもトップクラスの技能を持つ者と同等の空気を纏って見えた。

加えて、夜中に起きた事とは言え、桐条が敵の凶弾で倒れた事は聞いているはずなので、今回、こちらの屋敷に連れて来ている者たちは護衛役でもあるはず。

となれば、恭しく一礼して見せた彼女も相当な手練れの可能性がある。

従者としての技能だけでなく、護衛としても一流ならば、何か起きようとも英恵の身は安全だろう。

横を通り過ぎ部屋へ入る際にそんな事を考えていた主従の少女たちは、部屋に入るなり芳醇な紅茶の香りを感じて視線を匂いの元へ向けた。

「今回のはどうかしら？　酸味が強く出るよう意識してみたのだけ

ど」
「失礼いたします。……そうですね。随分と爽やかな印象にはなっていると思います。ですが、味については元の方が好みです」
「やっぱり？」
　美鶴たちが視線を向けた先では、テーブルで紅茶を淹れている英恵の姿があった。
　そして、そのすぐ傍で小さなカップで味見しているメイドがおり、主従という関係ではあるがオリジナルブレンドを味見してもらうくらいにはフランクな関係であるらしい。
　桐条本邸のメイドたちではそういった事はできないので、既に屋敷から出掛けて行った和邇以外の英恵の従者も本邸の者たちとは少々毛色が違うと二人は感じた。
「うーん。ブレンドでも楽しんでみたいのだけど、舌の肥えたあの子が選んだものだけあって、そのままが一番なのかもしれないわね」
「少し調べたのですが、英国王室御用達のお店のようで、このタイプの缶は要望を聞いて作るオリジナルブレンドになるそうです」
「自分で選んだのかしら？　コーヒー党だったと思っていたから意外だわ」
「ソフィア様やヒストリア様の紹介かもしれません。ソフィア様はイギリスの学校に通っておられたようですし、ヒストリア様は貿易王のご息女ですから」
　英恵はテーブルに置かれた茶色い缶を見ながら、いくつかの茶葉が入ったガラスのボトルを手に取って悩む。
　夫が倒れたというのに、思ったほどふさぎ込んでいないのは不思議だが、元気がないよりは良いだろうと近付いて美鶴は声を掛けた。
「お母様、お久しぶりです」
「お帰りなさい、美鶴。菊乃さんもお久しぶり。座ったままでごめんなさいね」
「いえ、恐れ入ります」
　どうぞ座ってと椅子を勧められ、美鶴が座ると英恵は紅茶をカップに注いで差し出した。

先ほどメイドが味見をしていたものらしいが、紅茶が好きで舌が肥えている美鶴が飲んでも美味しいと思える仕上がりになっている。
これで味に不満があると言うことは、今もそばで控えているメイドが余程鋭い舌を持っているか。ブレンド前の状態が最も美味しいタイプの茶葉だったのだろう。
父が倒れ、正門の前でちょっとした騒ぎに巻き込まれた事もあり、しらず疲れを感じていた美鶴は美味しい紅茶を飲んでホッと息を吐いた。
「フフッ、随分と疲れているみたいね」
「その、色々とありましたから。お母様の方こそ、お体は大丈夫ですか？」
「多少の旅疲れはあるけど大丈夫よ。武治さんのことも心配は心配だけど、あの人は助かって生きているんだし。そう暗くなってばかりもいられないわ」
桐条は助かり生きている。そう話す英恵はどこか表情に影があった。
英恵が百鬼家と親しく、その生き残りであった青年の事も気に掛けていたことは本邸の従者らにも有名で、一月前の事件で彼女がずっと伏せっていた事も聞いている。
だからこそ、彼女の表情に浮かぶ影の意味も、恐らくはそういう事なのだと察して菊乃は視線を逸らす。
一方、菊乃と同じ想像に至りながらも、彼が帰ってきた事を知っている美鶴は母にそれを伝えようとする。
「お母様、その、八雲の事なのですが……」
「大丈夫よ。昨日、会いに来てくれたの。さっきも一緒にお茶をしていたのよ」
薄い笑みを浮かべて彼女はそういうものの、テーブルの上には英恵と美鶴のカップしかなく、従者の傍のカートにも従者が味見に使った小さなカップと未使用の物しか載っていない。
彼女が言っている事は本当なのかと従者に視線を向けるも、従者は目を閉じて黙って立っているので何も聞くことが出来ない。

彼ならば実際に敵の本拠地であるここに来ていてもおかしくはないが、行方知れずなせいで母の言葉が事実か妄想か分からず美鶴は何も言えなくなる。
主のそんな態度を見た菊乃が、英恵の言葉がストレスから妄想を現実と認識していると思っても無理はなく。部屋の中に居心地の悪い空気が漂い始めた時、部屋の扉をノックする音が響いた。
顔を上げて扉の方へ視線を向けた英恵がどうぞと言えば、スーツに身を包んだ男性が入ってきた。
「英恵奥様、お嬢様、この度のこと心からお見舞い申し上げます。一日でも早い御当主の回復を祈っております」
「ありがとう。確か、高寺さんだったかしら？　会社の方よね？」
「はい。緊急の取り締まり会で代表に選ばれました高寺一郎です」
やって来た男の名前は高寺一郎。
以前、美鶴たちが桔梗組に襲撃をかけた際、桐条と共に湊への謝罪にきた男だ。
トップが倒れた事で、表の企業で桐条の右腕だった彼が社長代理に選ばれたらしく、彼はその挨拶と今後の予定について伝えに来たと話す。
「今後の予定についてなのですが、本日の夜、皆様の集まっている中で御遺言の開封を行なわせていただきます」
「遺言、ですか？　父は意識が戻らないだけで、久遠総合病院の先生からも峠は越えたと言われていますが」
幾月に撃たれた傷は臓器に達していて、傷口を清潔な布で押さえる処置しか出来ないまま長時間経ち、出血量が多かったこともあって手術は予断を許さぬ状況で行なわれた。
医療シェアで世界トップの企業だけあり、設備は最新鋭、揃っているスタッフも超一流や一流ばかり。
そんな状態であっても湊が生命力を送り、さらにアナライズなどで状況を把握しながら処置しなければ危なかったというのだから、桐条が助かり峠を越えたというは奇跡としか言いようがない。
父の無事を聞いた時に思わず安堵の涙を流した美鶴としては、まだ

生きているのに遺言状を開くなど縁起でも無いと僅かに視線を鋭くして高寺に説明を求めた。
美鶴がどこか怒った様子で何故そうするのかと尋ねれば、高寺もそういった質問は予想していたのか、上着の内ポケットから封筒を取りだし、その中身が美鶴と英恵に見えるよう広げてテーブルに置いた。
「はい。その話は伺っております。ですが、御当主は自分が無気力症になったときの事などを考え、命があろうと動けぬ状態であればそうするように言っておられたのです」
広げた紙には桐条の直筆で高寺の話した通りの事が書いてあり、彼がこういった事まで想定して準備していたと聞いて妻と娘が少々驚く。
湊の方ではシャドウと無気力症の関係をしっかりと理解出来ているが、桐条グループでは幾月が意図的に真実に辿り着かないよう細工していたのか、つい最近まで誤った情報が真実だと思われていた。
それ故、桐条は自分がシャドウに襲われて無気力症になった時を想定し、怪我などで一線から遠ざかる場合も含めて、そういった時のことをしっかりと決めていたらしい。
湊もチドリの中にタナトスを残す保険をかけていたが、自分が倒れたとき、死したとき、そういった事を想定して準備をするというのはどういった気持ちなのだろうかと書類を見ていた美鶴は考える。
自分には到底出来そうにないと心の中で溜息を吐いたところで、美鶴が納得した物と判断した高寺は話を進めてきた。
「急ではございますが、ご親族の胸には御先代様の件があり、あまり時間をおくと周囲にあらぬ憶測が広がる心配もあるかと」
「そう。あの人も苦労していたし、そういう事ならその形で進めてください」
「恐れ入ります」
桐条の代わりとなる人物も決まり、今後の舵取りについても桐条の遺言状をみてからとなった。
そうして、話が一段落すると壁の時計を見た英恵が、挨拶回りの時間だと立ち上がった。

「慌ただしくてごめんなさい。挨拶回りの時間なの」
「いえ、お母様もお気を付けて」
「行ってらっしゃいませ」
部屋の主とその従者が出ていくと、後には美鶴と菊乃、そして高寺が残される。
高寺も桐条の代理として色々と動く必要があるため部屋を出て行こうとすると、先ほどの会話に出てきた事について美鶴が彼に尋ねた。
「あの、高寺さん。先代、お祖父様の相続で何かあったのですか？」
「奥様からは聞いておられないのですか？」
「ええ、何も」
祖父の最期はシャドウ実験に巻き込まれてのものだった。
実験を主導していた者が死に、後に残された者たちがその負債を全て背負うような形になったのは察しているが、その際に何があったのかまでは子供だった美鶴は知らない。
高寺も英恵たちが伝えていないことを話していい物かと悩んだようだが、こういう時だからこそ跡取りである美鶴に伝えておくべきと判断したのか口を開いた。
「実は先代の鴻悦様は御遺言を遺しておられなかったのです。株式を高い割合で保有し、さらには例のシャドウ実験もあり、とても法定配分という訳にもいかず」
ただ死んだのであれば、遺産として親族がその株式を受け取るだけで済んだが、鴻悦は事故を起こした人間として死して尚責任を問われる形になった。
関係者以外にも多数の死傷者を出し、その補償も必要となれば、鴻悦の持っていた株式を売り払ってお金を作るしかない。
しかし、鴻悦が持っていた株式の割合が高く、それを売ると今度は他所の企業に桐条グループを乗っ取られかねない。
遺言状もないとなると、本格的にどうすればいいのかという話になり、企業として危機に陥った桐条は自分より後の世代では二度と使うまいと考えていたコネクションに頼らざるを得なかった。

「濁りを清めるおつもりだった武治氏が、先代以上に裏のコネクションに頼ることになったのは何とも皮肉ですが、その決断によってグループは存続出来ました」
「……お父様が汚職に手を染めていたと？」
「ええ。ですが、状況を見ればあれは正しい判断でした。お嬢様がお心を痛める必要はありません」
誰よりも己に厳しくあった父が汚職に手を染めていたと聞けばショックだろう。
しかし、グループを守る総帥という立場を考えれば、今も日本のトップ企業として桐条グループがある以上は正しい判断だったと言える。
「父を亡くし、ご自分も怪我を負っていたというのに、そういった状況でも正しい判断が出来る。お父君は非常に有能で大人でいらっしゃったと思います。きっと、守るべきものを心に決めておられたのでしょう」
「罪と引き替えてまで……グループの力を守ったと？」
「力？　とんでもない」
美鶴の言葉に高寺は何を言っているのかと不思議そうにする。
父の汚職を知って動揺する美鶴の表情が強張っている事もあり、菊乃が高寺の名を呼んではなしを止めさせようとするも、相手は構わず言葉を続けた。
「御当主が罪と引き替えたのは、お嬢様、あなたですよ。全てはあなたを守るためです」
その言葉を聞いて美鶴は心臓を掴まれたように目を見開いて驚愕した。
大好きな父親が自分のせいで手を汚すことになったと聞けば、当然、美鶴は罪の意識に苛まれるだろう。
一命は取り留めたものの、まだいつ目覚めるとも分からない状況で、さらに美鶴の心労を増やしてどういうつもりだと菊乃が高寺に詰め寄る。
「高寺さん、もうおやめください！　お父君が倒れたばかりのお嬢様

に伝えるべきことですか！」
「今のはお嬢様から訊かれた事だ。それに、十年前とは違う。お嬢様も真実を知って然るべきお年頃だ」
菊乃が怒りを見せたのは美鶴がショックを受けている事だけが理由ではない。
今夜予定されている遺言状の開封を高寺が意識して話していると感じたからだ。
桐条武治が個人や宗家として持っているものならば、いくらでも英恵と美鶴に渡って構わない。
親族たちは文句を言うかもしれないが、元々が分家の者たちのものではないのだから、ハイエナ共が何を言おうと無視するだけで済む。
しかし、その内容が桐条グループの管轄のものにまで及ぶとなれば、美鶴の心に楔を打ち込んで、辞退させる方向に持っていく必要が出てくる可能性もある。
確かに尋ねたのは美鶴からだったが、話をそういった方向に持っていたのは高寺だ。
彼がどこまで計算して話を進めていたのかは分からないが、とんだ狸だと菊乃が警戒していたところに高寺が窘めるように言葉を続けた。
「お嬢様はご自分の意思で大人になろうとしておられる。使用人の君が口を出す事ではない」
「詭弁を、こんな風に汚される事が大人になることですかっ」
「見解の相違だな」
父が汚職に手を染めていたと知らずに育ったにせよ、彼女のこれまでの暮らしはそういったもので守られてきたことになる。
他に手がなかった以上、守る手段としては正しかったかもしれない。
だが、祖父たちの行いからグループの罪を償おうと考えてしまう美鶴の性格を思えば、知らぬ内に自分の手も汚れていたと思ってしまうに違いない。
美鶴に仕える菊乃にとって、真実を知るのはいいが、相手が弱って

いる時に知らぬ罪を突きつけるような真似をするのは許せない。
そうして、高寺から守るように美鶴の前に彼女が立てば、高寺は随分と子供だなと自分の考えを伝えてくる。
「大人になる、というのは何をするときでも一つではなく複数が見えるようになる事だ。自分と他人、意志と責任、忠義と正義、私はそう信じている。その点で言えば、有里湊は我々から見ても実に大人だった。対シャドウ兵装の姉妹と吉野千鳥を除けば、影時間に治療が必要な者など桐条の関係者ばかり。それでも、自分が死んだ後でも機能するよう設備を整えていたんだ。この世を去るタイミングも含めて非常に有能だったよ」
桐条を憎んでいても、湊は目的のために彼らを生かす道を選ぶ事もあった。
自分の心よりも大局的に判断する事を優先出来るというのは、美鶴や湊の年齢では中々に難しい事だ。
ＥＰ社の設備などその最たるもので、自分の関係者よりも桐条の関係者が利用する可能性の方が高いというのに、自分が死んだ後でも機能するようにしておいた湊の功績は計り知れない。
加えて、グループにとっては最も知られてはならない暗部に誰よりも関わっていた人物。
影時間が消えたとしても、それに関わる実験を行なっていた過去が消えない以上、桐条グループは生き証人の彼に警戒し続ける必要があった。
だが、それも過去の話。
彼の遺産が桐条を救い。障害となる青年はこの世を去った。
これ以上無い結果だと高寺が薄く笑えば、菊乃が相手を軽蔑しきった目で見つめて忠告した。
「……最後の言葉は聞かなかった事にしておきます。グループにとってどうであろうと、間違っても奥様の前で彼の死を侮辱する事のないようお願いいたします」
「ああ、勿論。これでも私も彼には感謝をしているからね。では、お嬢様、私も一旦これで」

「ええ、ありがとうございました」
知った事で美鶴は心に傷を負う事になったが、それでも知るべき事であったのは事実。
話してくれた高寺に礼を言うと、美鶴は心を落ち着けるために挨拶回りの時間まで母の部屋で休む事にした。
＊＊＊
部屋を出て廊下を進んでいた高寺は、周囲に人の気配がないことを確かめると、携帯を取りだし。
設定されていた短縮ダイアルであるところに連絡を入れた。
「私だ。準備は整っているか？」
《はい。参考人の確保を終え、既に配置も進めています》
「よろしい。有事のことを考え配置の方は進めてくれ」
電話の相手と高寺の言葉には不穏なものが混じっている。
けれど、決して遊びでやっている訳ではないらしく、話している高寺の表情も真剣なものだ。
「それと、例の場所へ今日にでも向かってくれ。開封の前に結果が知りたい」
《対象らの帰宅時間に合わせて向かいます》
「ああ。よろしく頼む」
短く指示を終えると高寺は通話を切り、薄暗い廊下の先へと消えてゆく。
幾月の裏切り、桐条の不在、それらの影響は桐条グループだけに留まらぬようだった。

第三百五十七話　警備部の訪問

放課後――月光館学園

桐条が倒れた事で美鶴が実家に帰った日の放課後。

グループがわざわざ公表したのか、桐条が急病で倒れ病院へと搬送されたというニュースが朝の時点で流れたことで、学園内はどこか落ち着かない様子を見せていた。

今月の下旬には二年生と三年生の合同修学旅行で京都へ行くことになっている。

しかし、父親が倒れたことで美鶴が実家に戻る必要が出来たため、もしや、彼女は修学旅行に参加出来ないのではと言う噂が出ているのだ。

美鶴は己にも他人にも厳しい女傑として認識されているものの、才において彼女よりも数段化け物と言える存在がいた事や、中等部の頃から湊のストーカー行為に勤しんでいたり、七歌やチドリに適当に相手をされていたこともあって、お嬢様だから世間ずれしている部分があるのだろうと親しみも持たれていた。

だからこそ、彼女と一緒に修学旅行に行けることを楽しみにしていた者が男女問わず多数いたというのに、直前になって身内に不幸が起きてしまった。

実際には不運が重なったのではなく、桐条も子どもらを守るために戦って命を落としかけたのだが、公表されたのは重度の病気ということだけで詳細は不明。

ニュースキャスターやコメンテーターだけでなく、一般人の中でも桐条は既にいつ死んでもおかしくないという風評が広まっていた。

もっとも、七歌たちは倒れた原因及び治療に当たった医者が誰であるかを認識しているため、昨夜の状態から持ち直したなら心配いらないと考えている。

そうして、授業も全て終わり、湊の帰還によって再び学校に来るようになったアイギスを連れて、七歌たちが寮に帰ろうとしていた時。

一階の生徒玄関に面したエントランスで、黄色いマフラーを巻いた

少年に出会った。
「やあ、こんにちは。君たちは今から帰りかい？」
「うん。えっと、八雲君のお友達の……桃尻君だっけ？」
「フフッ、あの時はバタバタしていたからね。改めて挨拶させてもらうよ。僕は望月綾時。今度、この学校に転入することになったから、数日後には同級生って事になるね」
あの日、少年からは自己紹介を受けたのだが、慌ただしかった上に様々な事が起こった。
おかげで名前をあまり正確に覚えておらず、雰囲気がこんな感じだったようなと七歌が呼べば、彼は一切気にした様子もなく改めて名乗ってくれた。
今回は流石に覚える事が出来たので、他の者たちも靴を履き替えて生徒玄関から出て行きつつ会話を続ける。
最初に口を開いたのは湊の行方を知りたいアイギスだった。
「……八雲さんは一緒ではないのですか？」
「君も知っての通り、彼は起きたら既にいなくてね。僕は色々と手続きがあって別行動だし。一応、昼頃に桐条美鶴さんのお母さんに会ってくるってメールがあったけど、僕の方も今日は会っていないんだ」
昨日、桐条武治の手術を終えた後、綾時やアイギスは湊と共に桔梗組で一泊した。
けれど、湊は他の者たちが起きた時点でいなくなっており、綾時もアイギスも置いて行かれたという点で言えば同じ立場だ。
影時間に関して彼には彼の思惑があると分かっているし。そうでなくても、帰還するまで空けていた事でＥＰ社の仕事などが溜まっている事も容易に想像がつく。
英恵への生存報告を済ませたのは確実だが、仕事で抜けているのか、それとも他の理由で抜けているのか分からない。
綾時が柔らかい笑みでそう答えれば、アイギスはどこか綾時に壁を作ったような態度で「そうですか」と返した。
もっとも、他の者にすれば英恵の所へ挨拶に行くという話も聞いていなかったので、連絡を入れる程度には他の者より信用されているの

ではと感じる。
昨日の戦いで蘇った彼と共に現われた事もあり、彼の情報で他者よりも数歩先にいるなら知っているのではとゆかりも綾時に質問をぶつけた。
「友達の望月君が転入してくるなら、彼も復学したりしないの？　何か聞いてない？」
「呼び方は君たちも綾時でいいよ。それと、復学については聞いてないな。落ち着いたら顔出す気ではいるみたいだけど」
世間には公表されていないが、湊が死んだという話は辰巳記念病院経由で聞いた学校が生徒に伝えてしまっている。
実際にあの時は死んでいたし。影時間の補整によって暴力事件で被害者を庇った際に怪我を負った原因で死亡となれば、学校としても実に勇敢な生徒だったと褒めなければならない。
もっとも、死亡したと聞いただけで失神する者が現われ、多数の生徒が過呼吸や号泣して授業にならなかったあの時の状況を考えれば、ようやく落ち着いてきた今になって生存報告に現われるとまた学園が荒れそうではある。
彼の公認ファンクラブである『プリンス・ミナト』もまだ存在し、会長を務める三年の女子が今でも毎日きっちりと彼の机に飾られた花の水を替えたり、机を綺麗にしてくれている。
他の会員たちは以前ほどの情熱はもうないようだが、亡き後もそうやって尽くしてくれる人がいるのは素晴らしい事だろう。
復学するかは不明にしろ。そういう人たちのために生存報告をするのは賛成なので、出来るだけ早く学校へ行くようゆかりは後でメールを送ることに決める。
そうして、会話しながら駅前に来たところで、モノレール移動ではなかった綾時とはここで別れる。
「じゃあね。綾時君。慣れない街だろうし、気をつけて帰ってね」
「うん。君たちも気をつけてね。どうやら寮の方に面倒な人間が来ているみたいだし」
「面倒な人間？」

少年の言葉に七歌たちは首を傾げる。
面倒な人間と聞いて最初に思い浮かぶのは黒いマフラーの青年なのだが、友人の事をそんな風に呼ぶはずがないので、恐らく七歌たちの知り合いという訳ではないのだろう。
ゆかりが今朝の真田たちの会話を思い出し。もしかしてと思い尋ねた。
「それって桐条の人間？」
「多分ね。といっても、桐条家じゃなくてグループ絡みだろうけど」
「何故、それをあなたが把握しているのですか？」
「湊ほどじゃないけど僕も探知能力があるのさ。それに、彼にとっては敵だからね。友達の敵の動きくらい探りもするよ」
ゆかりの問いに続けてアイギスの質問にも答えると、綾時は時間だからと立ち去ってしまった。
後に残った者たちにすれば、自分たちの寮に味方とは言えない桐条グループの者たちが来ているなど聞かされれば心中穏やかではいられない。
少し買い物をしてから帰る予定を変更し、モノレールに乗って移動すると、真っ直ぐ寮へ帰った。
――巌戸台分寮
七歌たちが急いで帰りつつ、途中、コンビニで飲み物などを買ってから寮に戻ると、寮の前には黒いバンが三台停まっていた。
綾時の言葉から数人来ている程度だと思っていただけに、思っていた以上の人数で来ていそうだと七歌たちは嫌な顔をする。
もっとも、相手の話によっては何事もなく終わることも考えられるので、まずは話を聞くのが先だと扉を開けて寮に入った。
すると、そこにはこの寮で暮らす男子四人とスーツ姿の男性二人がいた。
ソファーの所で向かい合う男たちも七歌たちに気付いたのか、順平と天田がおかえりと女子らを迎える。
「あ、お帰りなさい」
「おかえり。つーか、遅いぞ。桐条グループからお客さんだ」

「あ、うん。車が前にあったから知ってる」
七歌たちがキッチン側のテーブルに鞄を置いてソファーの所にやってくると、自分たちの父親より少し年上と思われる男が挨拶をしてくる。
「昨日の事件を受け。桐条の警備部門より参りました本田と申します。グループを代表し、お話をさせていただきたいと思いまして」
美鶴も実家に戻って今後の一族とグループの話をしにいっているので、桐条グループに関わる特別課外活動部にも何らかの指示があっておかしくない。
ただ、相手が警備部と名乗ったことで、こういった聞き取りなどは情報部の仕事ではないのかと綾時の言葉を聞いた女子たちは警戒を強める。
すると、男は子どもたちがちゃんと話を聞くつもりと判断したのか、単刀直入にグループとしての方針を伝えた。
「今回の件は不測の事態でして、易くは言葉が浮かびませんが、皆さんには普通の学生生活に戻っていただくべきだと思っています」
「それって、もう戦うなって事ですか？」
「目的を失った今。身を危険に晒す必要はないでしょう」
普通の学生に戻れというのは、遠回しにもう影時間の戦いに関わるなと言っているようなものだ。
十二体のアルカナシャドウはもうおらず、さらに言えばそれらを倒す事が滅びに繋がっていると幾月に言われたばかりなので、特別課外活動部の活動は活動の指針を失って宙に浮いた状態とも言える。
しかし、目的が定まっていないからとただの学生に戻れば、なし崩し的にこのチームも解散になるのではと風花は危機感を覚えた。
「あの、それって実質、解散しろって事なんじゃ」
「はぁっ!?　まだ影時間もタルタロスもばり健在なんだぜ？」
こんなところで解散など冗談じゃない。
順平がまだ何も解決してないだろと言えば、再び代表として本田が口を開いてきた。
「タルタロスはもう十年も前からあったのです。存在自体が大きな被

害を生む訳ではありません。ですから」
「それ、蜂は危ないけど、蜂の巣は何もしないから放置だって言ってるようなもんって分かってます？　そこに跋扈してる存在が、外にだって出てきてるのは報告に上がってますよね？」
確かにタルタロスが十年前からあったのは事実。
しかし、そのタルタロスには恐ろしい数のシャドウが彷徨っている。
偶発的なイレギュラーシャドウだけでなく、巣を突かれた蜂のようにタルタロスからシャドウが出てきた事だってあるらしいのだ。
美鶴たちはそういった報告をしっかり上げていたので、それを読んだ上で先ほどの発言をしているとすれば、相手は何も理解していない莫迦と言うことになる。
七歌が冷めた目で相手を見つめれば、ゆかりと天田も続けて口を開いた。
「てか、今年は違ったでしょ？　この半年、私たちが必死に戦ってこなかったらどうなってたか」
「それに、こんな中途半端な所で終わりなんてそんなの」
既にここ半年で状況は変化している。
こんな中途半端なところで止めてしまえば、それこそ被害の拡大が甚大なものになるかもしれない。
戦う事を選んだ者たちにとって、相手の言葉は逆効果だったようで、黙って話を聞いている荒垣や真田の瞳にも闘志が宿っている。
それを見た本田はこれまで同様に、平坦な声で淡々と言葉を返す。
「分かりますが、幾月修司の言葉が事実なら、皆さんは逆に未知のリスクを重ねていた事になる。同じ戦いを続けて良いとは言い切れないのでは？」
「いいえ。八雲さんはこの道の先を見ていました。アルカナシャドウの討伐によって滅びの加速があるにせよ。影時間を消す手段もそこにはあるはずです」
「八雲……ああ、有里湊の事か。何を持って彼が正しかったと判断するのか分からないが、その彼だって戦いの中で命を落とした。実力的

に劣る君たちは尚のこと安全を考えるべきだろう」
アイギスからすれば湊の選択は正しいもの。一見遠回りに見えても正解に続く道だと考えている。
しかし、彼を知らない者。彼がどれだけの情報を持っていたか分からない者にすれば、影時間を消す戦いの最中で散った子供の言葉など参考程度にしかならない。
「無論、我々もなかったことにしてしまうつもりはありません。ただ、こんな状況でさらに若い時間を費やせなどとはお願い出来ないという事です」
「……確かにそうだけど」
「どうかお願いを。それと加えてもう一つ用件が。幾月修司の私物を回収させていただきたいのです」
幾月はまだ生きているが、相手の目的や潜伏場所のヒントになるような情報が残っているかもしれない。
だからこそ、残っているその私物を回収したいと本田が言えば、その隣にいた男が無線のようなものに「入ってくれ」と告げた。
途端、入口の扉が開いてスーツ姿の大人たちが畳まれた段ボールを持って入ってくる。
男性だけでなく女性も数人いるが、寮生が許可する前に大勢で入ってくるのはおかしい。
流石に黙っていられなくなった真田が立ち上がり、寮のロビーに入ってきた者たちを怒鳴った。
「おい。勝手に上がり込むな」
「心配いりません。回収の対象は理事長室の中の物だけです」
ここは特別課外活動部の拠点なので、真田たちにすれば自分たちのテリトリーを荒らされるようなものだ。
しかし、相手は必要なものさえ回収すればすぐに立ち去るから安心して欲しいと、メンバーたちの制止の言葉を聞くつもりがないらしい。
「あ、えっと、理事長室ですか？　まだ、中は少し散らかってて」
ただ、幾月が死んだとされた時から時間も経っており、その間も寮

生たちはシャドウと戦うために情報収集などをしていた事もあり、理事長室に入って中の物に触れることもあった。
　私物のパソコンではラボのデータを見る事は出来なくても、理事長室のパソコンならこれまであったシャドウをデータベース化したものを閲覧出来たりもしたため、七歌や風花は何度か立ち入っていたのだが、その話を聞くと本田の視線が僅かに鋭くなり、待機していた大人たちがメンバーを囲むように近付いて来た。
「あなた方は、部屋に立ち入ったと？」
「え？　あ、はい」
「そりゃ、シャドウについて調べる事もありますよ」
　顧問代理として栗原が来てくれることもあったが、彼女はエルゴ研時代もシャドウ研究を専門としていた訳ではない。
　ただ、シャドウのカウンター的存在。つまり、ペルソナが実在するはずと言う研究データを残していただけだ。
　加えて、戦いに関しても素人となれば、サポート役の風花とリーダーの七歌が中心となってデータを探るしかない。
　あくまで戦いに必要な事であり、別にハッキングしてラボのデータを抜き取った訳でも無い。
　だというのに、この対応は何だと思っていれば、本田はそういう事ならばと調べる対象が増えた事を告げてきた。
「では、申し訳ないですが、理事長室の他にあなた方の私室も調べさせていただくことになります」
「ええっ!?」
「はぁっ!?　なに理由付けて、乙女の部屋に入ろうとしてんだ！ぶっ殺すぞテメェ!!」
　七歌は絶対に部屋には入れないぞと激怒し、後ろにいたスキンヘッドの男やキツい目付きの女性を睨み付ける。
　傍から見ているとまるで狂犬のように思えるが、自分たちはただ仕事をこなすのみだと本田は相手の主張を切って捨てる。
「すみません。規則ですので。それと七式アイギス。幾月の私物を回収した後、君は我々と共に来てもらう」

「何故ですか？」
「幾月が提案した屋久島への旅行。ずっと目覚めなかった君がタイミング良く目覚め、同行してこの地に戻ってきた。となれば、何らかの関わりがあると見るのが自然だ」
既にアイギスは汐見アイギスという戸籍を持った一人の人間だ。
しかし、人の身体を得るまでに何かしらの記憶メモリ操作などが行なわれていれば、桐条グループの脅威になる可能性がある。
また幾月の私物回収と同じように、アイギスから幾月についての情報が得られるかもしれない。
加えて、ここにやってきた者たちの裏の目的を考えれば、対シャドウ兵器だった彼女に残られるのは困るのだ。
屈強な男たちがアイギスの背後に立ち、連れて行くために肩に手を置こうとしたとき、寮の扉が勢いよく開いて、次の瞬間、アイギスの背後に立った男たちがきりもみ回転しながら吹き飛んだ。
突然の事にその場の全員が唖然とし、アイギスの後ろで右手をプラプラと振っている女性に視線が集中する。
そこにいたのは艶やかな黒髪のクールビューティーといった雰囲気の女性。
黒のレディーススーツに身を包んだ彼女は、周りにいた者たちを順番に見ていくと、成程と口元を歪めて声を発した。
「成程、子供を相手に随分と卑怯な真似を働こうとしていたようですね」
「何だ、お前は！　突然何を言っている！」
何者だと聞かれた女性は、上着の内ポケットから取りだした扇子を広げ、そこに書かれた〝坊ちゃま!!〟という文字を相手に見せながら自己紹介を口にする。
「私は桐条家当主代行である桐条英恵様の御側御用を務めております和邇八尋と申します。そちらこそ、ここへは一体何の御用向きでしょうか？」
「私は第二警備部の本田だ。今回の事件を受け、幾月修司の私物の回収。それらに触れた子供の私室の調査。七式アイギスの回収の任を

受けている」
　不意打ちとは言え、男二人を簡単に殴り飛ばした相手に警備部の人間たちは警戒している。
　上流階級の人間に付く御側御用ともなれば、例えエプロンドレスだろうとＳＰと同じ働きを期待される。
　当然、武術の心得などあって当たり前なので、目の前にいる異能持ちの子供たちよりも警戒しているようだが、本田たちがここに来た理由を理解した和邇は一つ頷くと扇子を畳んで入口を指した。
「ならば、今すぐにお帰りください。あなた方にそのような権限はありません」
「これはグループ上層部の決定だ。英恵様付きの人間だろうと従者が口を挿むことじゃない」
「私は当主代行である英恵様に、当主権限を一部移譲された上で自分の判断で動くことを許されています。よって、私の言葉は桐条家当主のもの。今すぐに出て行きなさい」
　従者風情と侮っているのだろうが、今の彼女は英恵に許可を得て当主権限の一部を行使出来る。
　つまり、彼女の言葉は当主のものであり、彼女への言葉は当主に対する言葉なのだ。
　それを聞いて相手は僅かに怯んだようだが、自分たちがグループ上層部の命を受けている事で、正義はこちらにあると思っている本田たちが動かずにいれば、和邇は心の底から呆れたように冷たい視線を向けて口を開いた。
「はぁ……そもそも、あなた方は勘違いしています。桐条グループにこの寮と特別課外活動部をどうこうする権利はありません。特別課外活動部は桐条家の下に置かれた組織。つまり、桐条グループの組織図には組み込まれていないのです」
「……なに？」
「また、あなた方はただのサラリーマンです。グループの規則などというハウスルールで、桐条家所有の建物で暮らす個人の私室に立ち入る権利などなければ、既に一人の人間として法的に認められている少

女を連れて行くことも出来ないのです」
本田たちは先ほど規則だからと風花と七歌の私室を調べようとした。
だが、七歌たちは別に桐条グループの人間という訳ではない。
彼女たちがこの組織に所属しているのは事実だが、別に書面に興した契約を交わした訳ではない。
もし、彼女たちをそういった規則で縛りたいのであれば、桐条グループは事前にしっかりと書面に興した契約を結んで規則を説明しておくべきだった。
それらを怠った以上、どんな後付けでも許されてしまう事を避けるため、七歌たちは相手の命令を聞く必要はない。
淡々と理由を告げていった事で、本田とその部下が沈黙すれば、和邇は冷笑を浮かべて言葉を続けた。
「そも、子供の安全を考えていた御当主が、何も考えずに子供を戦わせていたと思っていたのですか？　自分が倒れた後、グループが勝手な事を出来ぬよう子供らを守る仕組みくらい作っているに決まっているでしょう」
特別課外活動部には美鶴もいるのだ。
自分が倒れた後、宗家を取り込むために勝手な真似をする者が現われないとも限らない。
加えて、桐条家とも親交のある旧家の出である七歌や、母の実家が名士会に名を連ねるゆかりもいる。
家同士の繋がりや子供たちの安全を考えれば、当然、グループに好き勝手させないための仕組みくらい用意しておく。
それすら分からず、上の命令だからとやって来た者たちを嘲るように冷たく笑えば、すごすごと帰っていく本田の背中に和邇は言葉を吐いた。
「不法侵入やら誘拐未遂やらどちらが悪だか分かりませんね。ああ、そう言えば、あなたの元上司はエルゴ研で被験体の子供たちに銃を向けた男でしたね。まぁ、自業自得と言うか坊ちゃまに殺された訳ですが、やはりその部下も同類。幾月を悪と罵る自分も同じ穴の狢と知り

なさい」
かつての上司を侮辱された事で本田は鋭い視線を向けてきたが、それ以上は何もせず車に乗って帰っていった。
黒スーツの集団が去ったことで、順平や天田は安心したように力を抜いているが、どうしてこのタイミングで和邇が来たのか分からない七歌が代表して質問をぶつけた。
「あの、もしかして、英恵おばさまは今回の動きを知ってたんですか？」
「不穏な動きがある事は把握していますが、誰がどのような思惑で動いているかは把握しておりません。まぁ、坊ちゃまはそれを知って楽しんでおられるようですが、私が来たのは別件です」
そう言って彼女は内ポケットに手を入れると、そこからケースに入ったCDのようなものを取りだした。
一体何だろうかと見ていれば、和邇はそれをゆかりに向けてどうぞと渡す。
「え、あの、これって何ですか？」
「岳羽詠一朗氏の残した最期の言葉の映像ディスク、そのマスターデータです。皆様がご覧になられたのは幾月に改竄されたものだったようで、渡しそびれていたからゆかり様に渡してくれと坊ちゃまが預けていかれました」
受け取ったゆかりは自分の手の中にあるものが、本当の父の最期の言葉だと聞いて目を見開いている。
マスターデータを湊が持っている事は聞いていたし。屋久島で見たものが改竄されていたものだったというのも昨日の影時間で知った。
ただ、それぞれを知った期間が開いていた事もあって、ゆかりの頭からは本物の映像のことはすっぽり抜け落ちていた。
しかし、ようやくそのデータは持つべき者の許に辿り着いた。
受け取ったゆかりは「ありがとうございます。後で見ます」と答え、ディスクの入ったケースを大切そうに抱えた。
偶然にも警備部を撃退することになった和邇の用件はこれで終

わった。
これから本邸に戻るので何か伝言があるかと聞けば、真田が先ほどの事を美鶴に伝えておいて欲しいとだけ頼んだ。
別に電話やメールでも事情を伝えるくらいは出来そうだが、今は美鶴の周りもバタバタしていつ彼女に情報が伝わるか分からない。
よって、母の英恵の傍にいて美鶴に会う機会の多い彼女に頼んだ方が確実と考えたのだろう。
伝言を快く引き受けた和邇が去って行けば、残った七歌たちは再び桐条グループがやって来て強行手段に出る可能性を考慮し、応戦するときの事を話し合った。

第三百五十八話　計画、警戒

――桐条本邸

美鶴が母の英恵と共に挨拶回りをしている頃、本邸の客間を借り、今後のグループの動きについて情報をまとめていた高寺の携帯に着信があった。

表示された番号は警備部のチームを一つ預かっている代表者のもので、昼に頼んでいた用件がようやく済んだのかと時計を見ながら考える。

幾月修司の私物の回収など、寮生が帰ってくる前に済ませ、後から事情を説明しても良かった。

一応、美鶴が代表者ということにはなっているが、元々、あの寮も特別課外活動部も桐条グループの一部。

となれば、グループの方でそういう話に決まったのだと、事後報告さえしておけば子どもたちは何も言えなくなる。

もっとも、グループ上層部と高寺が下した判断は、裏切り者である幾月の目的を探ることだけでなく、グループを破滅させかねない組織の暗部である特別課外活動部の凍結だった。

そこには対シャドウ兵装シリーズの姉妹の回収も含まれており、今は人間になっていようと当時の実験の情報などが外に漏れぬよう管理下に置く必要があるため、全てを一度に済ませようと警備部も寮生らの帰りを待っていたのだ。

昨夜の戦いでは子どもたちも消耗しており、組織の頭である美鶴がいなければ判断は余計に鈍る。後は規則を持ち出して簡単に丸め込むことが出来るだろうと高寺は考えていた。

アイギスを連行出来れば、次はラビリスの回収が待っている。

彼女の場合は桔梗組との繋がりもあるので、寮生のアイギスよりも連れて行くには手間取る事だろう。

その辺りの計画についても出来れば話したいが、と通話ボタンを押せば、電話からは昼間にも話した警備部の男の声が聞こえて来た。

《こちら第二警備部の本田。任務の報告のため連絡いたしました》

「ご苦労。それで、子どもたちは大人しく納得してくれたか？」
《いえ、それが……任務は全て失敗。幾月の私物の回収、子どもたちの説得、七式アイギスの連行、どれも妨害が入り達成出来ませんでした》
言いづらそうにしながらも話さねばならないと本田が簡潔に結果を伝えれば、それを聞いた高寺は驚きのあまり携帯を取り落としそうになる。
子どもたちも命を懸けて戦ってきたのだ。
大人に言われたからといって、簡単に納得するとは思えない。
桐条や裏切る前の幾月が経緯を説明して説得していたなら、渋々従っていた可能性はあるものの、今日初めて会った人間に言われたところで納得出来ないのは当然。
だからこそ、高寺は警備部の人間に説得が失敗した場合の計画を伝えてあった。
それがまさか幾月の私物の回収すら失敗したとなれば、向かった者たちの身に一体何があって失敗したのか気になってしょうがない。
どこの人間が妨害してきたのか。相手の規模と人数、そして特別課外活動部との関係。全て詳細に報告しろと高寺は言葉を荒げる。
「妨害だと⁉　どこの人間だ。まさか幾月が日暮れ前から襲撃をかけてきたとでも言うのか？」
《違います。身内と言っても良いのか分かりませんが、英恵奥様の御側御用の従者が寮に現われたのです。そして、特別課外活動部とあの寮が桐条グループの管理下にはないと告げてきました》
「馬鹿な。そんなはずがあるか！　子どもたちの活動にはグループからも金が出ている。総帥が直々に手配している事もあったんだぞ！」
英恵の御側御用の従者という単語が出てきて、どうしてこのタイミングでそんな人間が寮に現われたのだと苦い顔になる。
御側御用は主の半身とも言える存在であるため、グループの人間が不当に扱うことが難しい相手だ。
しかし、そんな相手が言った言葉だからといって、素直にそれを信じて戻ってきたのなら警備部は無能の集まりでしかない。
特別課外活動部への援助でグループから金が出ている事を知って

いた高寺が指摘すれば、警備部の本田も確認のために調べた結果を報告した。
《和邇八尋と名乗った女が言うには、特別課外活動部とあの寮はグループではなく桐条家の管理下にあるらしく。我々も戻って調べたところ、確かにグループとは別の組織系統に組み込まれていました。自分にもしもの事があった場合、グループの人間が勝手な事を出来ないよう子どもたちを守る仕組みを総帥が作っていたとか》
「……なんだ、それは」
高寺は表の仕事において桐条の右腕とも言える人物。
影時間関係については幾月がその立場にいたが、そのくらいの地位になると表の仕事の人間であっても桐条の暗部や影時間に関わることも伝えられてきた。
影時間の成り立ちと過去の研究内容。シャドウやペルソナがどういった存在であるか。旧エルゴ研の遺産とも言える研究物の所在と効果。
俄には信じがたい事も多々あったが、それらが事実だと受け止めて、特別課外活動部への少なくない援助も当然と考えていた。
だが、特別課外活動部がグループの組織系統に組み込まれていないなど初めて聞いた。
桐条にもしもの事があれば、高確率で後を継ぐのは高寺だったというのに、そんな自分にも伝えられていなかったことに高寺は愕然とする。
事実として高寺はグループの権限で特別課外活動部を解散させようとしている。
グループに何かあってからでは遅いため、その前に負の面である影時間に関わるものの一つを排除する事で、グループに所属する人間とその家族の生活を守ろうと考えていた。
だというのに、ここで桐条の考えがそれを阻んだ。むしろ、読んでいた通りの結果にグループが進もうとしていたのを狙って阻んだ形になっている。
未だ意識は戻らぬものの生きている桐条と、代表を交代した高寺。

どちらの権限が上かは個人の持つ影響力にもよるが、高寺の考えるリスクの排除をするには自分がトップにいる今しかない。
今ここで止まることなど出来ないとばかりに、高寺は一つ息を吐くと本田に伝えた。
「アクシデントはあったようだが予定に変更はない。決行まで時間もあまりない。準備を進めておいてくれ」
《了解しました。それで、もし再び和邇八尋が現われた場合にはどう対処しますか？》
「可能であれば言葉での解決を、駄目なら実力行使で構わん」
《了解しました》
いくら護衛としての技能を持っていたとしても、相手は七歌たちともそう変わらぬ身長の女性一人。
警備部の中には過去に海外で外国人部隊に所属していた経歴を持つ者もいるため、数と実力と装備の関係からまず間違いなく制圧出来る。
自分の側近を拘束された事に対して英恵が何かを言ってきても、その時には目的を達成しているので、誠心誠意謝るなどして話を終わらせればいい。
警備部の失敗はとんだハプニングだったが、今後の動きを考えれば大した問題ではない。
通話を終えた携帯を上着の内ポケットに仕舞った高寺は、今夜予定されている遺言状の開封に意識を切り替え準備を進めた。
――桐条本邸・美鶴私室
全ての挨拶回りを終え。美鶴が自室に戻れたのは夜が更けてからだった。
外向きの服から私服に着替え、椅子に座ってふっと息を吐く。
御側御用の斎川菊乃は先ほどまで美鶴が着ていた服をクリーニングするために部屋を出て行っている。
今日はずっと周りに人がいたので、こうやって一人になるとやけに孤独感を感じるが、疲れた頭でも仲間のことは気になったのか美鶴は携帯のアドレス帳を開く。

そこから名前を探して目的の人物を呼び出すと、通話を押して携帯を耳に当てた。
《はい。もしもし？》
「こんな時間にすまないな、七歌。私だ」
《あ、美鶴さん。今大丈夫なんですか？　和邇さんから話は聞きました？》
美鶴が電話をかけた相手は特別課外活動部でリーダーを務めている七歌だった。
寮には荒垣と真田という三年生が残っているが、育ちも含めて考えると七歌が一番冷静に大人な対応が出来る。
部長ということになっている美鶴自身、いざという時には自分より七歌の判断の方が的確だと認識しているのだ。
だからこそ、屋敷に戻ってきた和邇から真田たちの伝言を聞いた彼女は、その話をするつもりで七歌に電話をかけた。
「ああ。夕食の前に話は聞いた。その件についてなんだが……君は戦いをやめるつもりはないか？」
以前、幾月の死亡を聞いた時には桐条グループは動きを見せず、代表だった桐条がグループとの調整役として元研究員の栗原を新顧問につけた。
あの時は明確な敵がストレガだけであり、グループの意思決定を下す桐条も無事だったのでそういう措置で済んでいた。
しかし、今回は死んだとされていた身内が裏切り者として現われ、さらにトップの桐条が相手に撃たれて意識不明の重体。
こうなればグループとしても出来る限り敵の情報を探る必要が出てきて、理事長室に残っていた幾月の私物の回収と解析に忙しくなる。
影時間について知っているグループの人間は限られているため、そちらに人員を割けばしばらくは特別課外活動部のバックアップを担当出来ないかもしれない。
美鶴自身、父親が倒れたことで精神的に弱っており、そこにグループが万全な支援を約束出来ないと聞けば、これ以上大切な者らが傷つ

いて欲しくないと考え戦わない道を選ぼうとしても不思議ではない。
　そうして、これ以上戦わない事を選んでも良いんだぞと、いくらか自身の気持ちを乗せて七歌に尋ねれば、返ってきたのは一切の迷いない言葉だった。
《ないですね。他の皆もその点については同意してます》
「だが、目的は既に失われた。理事長時代の幾月の言葉は全て嘘で、今後の活動における見通しも立たない。そんな状態で悪戯に君たちを危険に晒す訳にはいかないだろう」
《それを言うなら最初から桐条グループは大したことしてくれてませんよ。裏で隠蔽とかしてくれてるのかもしれませんけど、基本的には金出して終わりでしかないですよね。現場の人間からすれば、目の前に危険があるなら、とりあえずでも解決すべきなんじゃないですか？》
　何故、相手がそこまではっきりと戦い続ける事を宣言出来るのか美鶴は理解出来ない。
　桐条は一歩間違えれば死んでいた。いや、今回は奇跡的に助かっただけなのだ。
　戦い続ければ、今度は自分や他の仲間が同じ目に遭うかもしれない。
　それが堪らなく恐い美鶴は、冷静に考えるんだと七歌を諭そうとする。
「しかし、君たちの貴重な学生生活を犠牲にし。さらに命を懸けて戦い続けろとは私もグループも言うことは出来ない。昨夜だって一歩間違えれば死んでいた。目的もなく、そんな危険に君たちが関わり続ける必要なんてないだろう」
　影時間を消す方法も分からず。今後いつまで戦い続ければ良いのかも分からない。
　元々、美鶴とアイギス以外の人間は素質があったから頼んで力を貸してもらっていただけだ。
　なら、今後の活動が不明になった今だからこそ、そんな状態で貴重な学生生活の時間を犠牲にし続ける必要などない。

七歌たちはこれまで十分に戦った。今後は元の平穏な生活に戻っていい。
相手を思いやって優しい声色で美鶴が言えば、それを聞いた七歌はしばらく沈黙し、ようやく返ってきた声は恐ろしく冷たい響きを含んでいた。
《……そうやってまた桐条グループは八雲君に押し付けるの？》
「な、何を言っている？」
何故、七歌たちが平穏な生活に戻ることが湊に押しつける事に繋がるのか。
本気で相手の言っている意味が理解出来なかった美鶴は戸惑う。
七歌たちが戦いを止めたなら、彼や彼の家族とも言える少女たちも一緒に平穏な生活に戻っていい。
湊はしばらく学校にも行っていなかったので、これを機に復学するのも良いだろう。
けれど、そんな風に考えていたのは美鶴だけだったようで、七歌はあくまで自分の想像だがと言いつつ確信に満ちた様子で言葉を続ける。
《私たちが戦いを止めたらどうなるか考えましたか？　影時間は存在して、シャドウは増え続けていく。そうなったら間違いなく八雲君は動きます。戦って戦って戦って。一般人に犠牲が出ないように、被害が広まらないように戦い続けて、きっと幾月やストレガとも戦うと思う》
最後のアルカナシャドウを倒した事で、ここ一月ほどで無気力症になった人間は大勢回復した。
ただ、それからまた新たに無気力症になっている者も確認されており、これから一月の間にどのくらいのペースで無気力症患者が増えるかはまだ分かっていない。
もし、仮にこれまで通りになるとすれば、特別課外活動部が活動を休止した時点で桐条グループに被害の拡大を防ぐ方法はなくなる。
となれば、そのしわ寄せを受けるのは間違いなく湊になるだろう。
《もし、相手を殺すような事になっても、八雲君はそれを自分だけで抱

え込んで私たちには話しません。それを分かっていて、桐条グループが出した裏切り者を被害者に処理させる。これが桐条グループの意思で良いんですね？》
「違う。私はただ君たちの安全と今後を考えてっ」
《でも、結果的にはそうなるんでしょう？　まだ足りませんか？　役目を終えてもまた戻ってきてくれたのに、どこまで八雲君に背負わせれば気が済むんですか？》
湊は一度死んだ。チドリを最期まで守るという契約を果たし。魂が肉体から離れ、間違いなくこの世を去ったというのに、自分にもまだ出来る事があるからと再び戦うために戻ってきてくれた。
七歌たちにすれば、自分を、仲間を、大切な人を救ってくれた恩人。自分たちの身内から裏切り者を出しておきながら、恩人である彼にこれ以上の業を背負わせるのが桐条グループの総意なのか。
七歌が責めるように相手の真意を尋ねれば、そんなつもりで七歌たちを戦いから離れさせようとした訳ではない美鶴は上手く言葉を返せない。
《美鶴さん、恐らく桐条グループは数日以内にこの寮へ襲撃をかけてきます。グループの暗部に深く関わっている以上、今後を考えたら排除したいと思うのが当然ですし》
「待て、七歌。滅多なことは考えるな。もし抗戦する事になれば、君たちも危険分子として認識されてしまうぞ」
《なら、戦いにならないようにしてください。桐条グループはアイギスを連行しようとしてました。これ、八雲君にしてみれば宣戦布告受けたようなもんですよね？　なら、私たちが徹底抗戦しようがしまいが関係ないです。今回は和邇さんのおかげで未遂で済みましたが、次に桐条グループが動いた時点で八雲君も動くと思います》
七歌たちも美鶴もグループの人間の発言から、グループでは湊の帰還を把握していないのだと考えている。
もし知っていたならば、少なくともアイギスを拘束しようなどとは思うまい。
ずっと行方を眩ませている彼は英恵たちとは連絡を取っているの

で、御側御用である和邇八尋から厳戸台分寮での出来事を聞いているはず。
　となれば、次に桐条グループが動いたが最後、名切りの力によって組織は壊滅に追い込まれる事だろう。
《美鶴さん、あなたがどの立場にいようと桐条の人間である事は変わりません。止めたいのなら身内を止めてください。今の桐条グループはおじ様とは別の思惑で動き始めています》
「お父様とは別の思惑？」
《自己保身かそれともグループの人間の生活を守るためか。私には分かりませんが、少なくとも世界平和やら人々の平穏を守るためって感じではないと思います》
　言われて美鶴はハッとする。今日、屋敷に来るときに出会った者たちや、挨拶回りで話した者たち。
　彼らは口では桐条やグループの事を心配していたが、その言葉の裏には自分や家族の生活を守ろうとする意思が見えた。
　自分や家族の生活を守ろうとするのは当然。他人のために自分を犠牲に出来る者などそう多くはない。
　しかし、今日会った者たちは、更に良い生活をするためにはどう動けば良いかという思いが混じっていた。
　それは新たな代表となった高寺も同じ。どうすればグループの力を維持出来るかを第一に考えている節があった。
　社員の生活を守る義務があるトップとしては正しい。しかし、確かにそれは父の想いとは異なっている。
　今日の影時間に行なわれるという遺言状の開封の時には、よりそれを理解出来るかもしれない。
　味方だと思っていた存在が急に敵に変わる感覚を美鶴が覚えていると、声から冷たさが抜けた七歌が今なら間に合うと再度忠告してくる。
《今回の敵は桐条グループ。八雲君が動き出せばアイギスやチドリにだって止められません。復讐という大義名分もある以上、おば様も彼に敵対したグループの人間を殺すなとは言えないでしょう》

「本気で言っているのか。グループの人間が君たちの排除に動くと」
《殺されないとは思います。ただ、幽閉に近いことはされるかもしれないと思ってます。グループにとってこれ以上無いほど厄介な存在でしょうし》
屋敷に戻ったことで美鶴はグループ全体の動きが把握出来なくなっている。
実際に警備部と会った七歌がそう感じたのであれば、確かにそういった動きがあるのかもしれない。
ただ、警備部の人間と面識のある美鶴は、誰かを守る事を仕事にしている者たちが、そんな独裁者の手先のような真似をするとは信じられなかった。
故に、その背後にいる人間が全てを操っていると考え、全てが事実であれば、恐らくまだ相手が動くことはないだろうと七歌に伝える。
「……自分が倒れたときの事を考え、お父様は遺言状を残していた。生きていても指揮が執れない場合は開封するようにと言われていたようで、今夜の影時間にお父様の遺言状が開封される」
《じゃあ、それを聞いたグループの動き次第ですね。現状維持を取るなら良いでしょうけど、おじ様が遺言で爆弾を残していれば、不安材料の排除に動くでしょうし》
「ああ。もしもの時は私も全力で彼らを止める。お父様を救ってくれた手を汚させたくはない」
帰ってきた青年は文字通りに父の命の恩人だ。
そんな彼の手を馬鹿げた争いで汚させたくはない。
名切りは名を絶つ一族。敵となった一族や組織を壊滅させることが名の由来となった恐ろしい存在だ。
今のグループにそれに対抗するだけの力がない以上、戦いになった時点で敗北が決まる。
湊のためにも、グループの人間のためにも、両者が争う状況にさせることは出来ない。
美鶴がハッキリとそれを告げれば、七歌もどこか安心したように返事をした。

《お願いします。ま、私たちも出来れば人相手に戦いたくはないんで》
「大丈夫だ。いざとなれば彼が戻ってきた事を伝えるだけで済む。それで敵対しようと思う者などいないはずだ」
《それもそうですね。じゃあ、美鶴さんも用事が終わったらゆっくり休んでください》
「ああ。勿論そうさせてもらう。それじゃあ、もうしばらく寮を頼んだぞ」
最後にはいつも通りの様子で二人は笑って通話を切った。
ペルソナ使いである事が明かされて以降、有里湊の危険性はずっとグループ内で言われ続けていた。
なら、それを伝えるだけでグループが止まると考えるのも無理はない。
だが彼女たちは知らなかった。自分たちが湊の生存をグループに伝えないよう暗示が掛けられていることを。
そうして、美鶴はその時が来ても自分に暗示が掛けられている事に気付かぬまま、影時間に行なわれる遺言状の開封に立ち会うために支度をすると、戻ってきた菊乃と共に部屋を出て行った。

第三百五十九話　遺言状の開封

夜――桐条本邸・離れ

少人数の食事会などに利用する桐条本邸の離れにある食堂。

そこには美鶴や英恵の他に高寺や桐条の分家筋の人間が集まっていた。

分家筋の人間の関心は高寺の前に置かれている封筒に集まっており、そこにいるのは年老いた男ばかりだが、誰も彼もギラギラと欲に塗れた目をしている。

一応、美鶴と英恵にはそれぞれ御側御用を務める斎川菊乃と和邇八尋が付き添っていて、ろくに運動などしていない彼らが乱心した場合には即座に排除されるに違いない。

故に、美鶴も英恵も身の危険については全く心配していないが、高寺が持ってきていた小箱を開けて、中に入っていた王冠を模したような白いガラス製らしき指輪を出したところで表情を引き締めた。

分家筋の者たちもそれがどういった道具か説明を受けていた事もあり、実際に目にしてみると少々怖じ気づいている様子だ。

そんな者たちの反応に構わず、指輪を手に取った高寺は他の者たちに見せるようにしながら口を開く。

「では、今からこの簡易補整器の指輪をお配りします。付けるかどうかの最終的な判断はお任せしますが、受け取った時点で影時間に行なう開封の儀に同意したものと見なします。付けずに影時間を迎えた場合、後から遺言の内容を聞いて物申すのは認められませんのでご注意を」

ここに集まっている者たちは影時間の存在を知っている。

しかし、影時間の記憶補整について正確に把握しているのは美鶴や桐条から直接説明を受けた高寺くらいなもので、他の者たちは色々と勘違いしている部分があるのだ。

確かに影時間に迷いこんだ者や影時間に起こった出来事に対しては、まるで集団催眠にあったかのように記憶の補整が掛かる。

冷静に考えれば不自然であったとしても違和感を覚えず、真実を

知っている者がそれを伝えても記憶の補整が優先されるように認識されてしまうのだ。
無論、普段から疑う癖を持っているような者や、客観的に事実を書き出していくなどすることで、そういった認識阻害を突破する事は可能ではある。
実際、湊もそういった裏技を使って五代やイリスたちに影時間の存在を教えたのだ。
ただ、ここにいる者たちは影時間を使って他者の記憶を改竄出来ると思っている。
情報の隠蔽は影時間の記憶補整を利用して行なっているだけだというのに、詳しく知らないせいで随分と都合の良い力だと考えているようだ。
それを踏まえて、高寺は改竄していない事を証明するため影時間に遺言状を開封すると告げた訳だが、配られる指輪を受け取った者たちは、土壇場になっても覚悟が決まっていないのか不安そうな顔をしている。
中年を過ぎて既に老人と呼んでいい歳の男たちが、何をそこまで怖がっているのかと眺めていた美鶴はぼんやり考える。
そこまで不安になるような事ではないはずだが、簡易補整器の指輪は身体への負担があるため、普段は自然豊かな土地で静養している母の身体を心配して美鶴が声を掛けた。
「お母様、体調はよろしいのですか？」
「あの指輪は相応の負担が掛かります。体調が優れないようでしたら、お嬢様と私で話を聞いて後ほどお伝えしますが？」
「心配してくれてありがとう。でも、大丈夫よ。ちゃんと自分用の物を持っているの。八雲君が作ってくれた特製のもので、黄昏の羽根の欠片の含有量が多いから負担がほとんどないの」
言いながら英恵が取りだした小箱の中には、青白く光るシンプルなデザインの指輪が入っていた。
他の者たちに配られた物は王冠型になっており、実に壊れやすそうな上に光ってもいない。

逆に英恵の持っている指輪はデザインがシンプルなだけに、造り自体はしっかりしていて、召喚器のグリップ部分と同じ色の光を纏っているため、本当に黄昏の羽根の含有量が多い事が分かる。
英恵のことを考えてそんな物を用意していた青年の準備の良さには頭が下がる。
そうして、高寺が英恵たちの許にやって来た時には、自分用の物を持っていた英恵と菊乃が不要だと伝え、最後に残った和邇に高寺が指輪を差し出してきた。
「和邇君、英恵奥様に付いているなら君もこれを」
「いえ、結構です。無くとも問題ありませんので」
丁寧な仕草で一礼しながら指輪を断る和邇。
その言葉の意味を理解した者たちがざわつき、同じく彼女の適性について知らなかった美鶴たちも驚いて彼女を見る。
昔から自分と一緒にいる菊乃ですら指輪を付けて影時間を過しているのだ。
だというのに、ここ数年で英恵の屋敷で働くようになった相手が、まさか影時間に適応できるほどの適性を持っているとは思わなかった。
相手は凛としたクールビューティーといった感じで容姿も整っており、仕事についても有能なのは見ていて分かった。
母は一体どこでこんな人材を見つけてきたんだと考えながら美鶴は和邇に声を掛ける。
「和邇さんは自前で適性を持っているんですか？」
「ええ。嗜みと申しましょうか。むしろ、御当主の後を継ぐつもりでおられる方々が適性も持っていない事に驚いている次第です」
今、食堂にいる者の中で指輪を付けていないのは美鶴と和邇だけ。
つまり、ここにいる者たちは全員適性を持っていないという事だ。
意識が戻らず今も病院で眠っている桐条も、訓練を受けて適性を手にしている。
その桐条の後を継ごうという者たちが、どうして訓練も受けず、適性を持っていない状態でこの場にいるのか不思議でならないと頬に

手を当て和邇が呟けば、先ほどよりも食堂内のざわつきが大きくなる。
いくら英恵の御側御用とはいえ、和邇の立場は従者でしかないのだ。
分家筋だろうと桐条家の人間として様々な場面で特権階級として扱われてきた者たちにすれば、二十代そこそこの小娘に侮辱されて黙っているという選択肢はない。
中でも短気な者が和邇に対して怒鳴りつけようとしたとき、空気の変化に敏感になっていた高寺が進んで彼女を諌めた。
「お言葉だが適性の入手は本人の生まれ持った資質による所が大きい。後天的に適性を得るためには心身にかなりの負担が掛かる以上、一族全ての方にそれを強いるような事は出来ない」
「そうですか。フフッ、まぁ、指輪を使った方が色々と都合もよろしいのでしょうね」
そういう物なのかと納得したように見せて、和邇はどことなく黒い笑みを浮かべて真実を理解したとばかりに頷いている。
後ろ暗いことでもあるのか、彼女の言葉にほんの僅かに反応してそれを隠そうとしている者も中にはいたが、純粋に言葉の意味を知りたいからと英恵は彼女がそう考えるに至った理由を尋ねた。
「確かに簡単に適性を入手出来るけど、八尋さんはどうして都合が良いと思うのかしら？」
「保険として使えるからです。自分の立場が悪くなれば記憶を消して逃げることが出来ますし。逆に人を使う立場なら壊して口封じが出来ますので」
「あら、随分と怖いことを考えているのね。もしかして、八尋さんも誰かの指輪を壊すつもりなのかしら？」
「影時間に入ってから壊しても象徴化は起こりません。荒療治で適性を得ることもあれば、意識が混濁して気絶する事もあるようなので、面倒な手間を掛けるくらいなら実力行使で意識を奪った方が速いかと」
指輪の力を使ってだろうが、影時間に迷いこめばその人物は影時間

が明けるまで象徴化しない。
例外はアベルの持っていた〝楔の剣〟による適性の強奪だったが、現在はそれを使えるペルソナもいない。
そうなると指輪を壊したところで幸運にも適性を得るか、影時間の負荷に耐えきれず気絶するかなので、力尽くで意識を奪えるだけの力を持つ和邇にすれば指輪を破壊する意味がなかった。
「ああ、そうそう。高寺さん、夕方頃にグループの人間が他所様に迷惑を掛けたようです。私の方でも犬に注意はしておきましたが、改めて犬と飼い主に〝余計な事をするな〟と注意しておいてください」
「……ああ、事実確認をして必要があれば注意しておこう」
本当に彼女にそれだけの戦闘力があるかは不明なものの、簡単にはいかない相手なのは確実。
故に、高寺は当たり障りのない返事をして、時計に視線を向けるともうすぐ影時間だと他の者たちに伝える。
「では、間もなく時間です。影時間になれば明かりが消えますが、すぐに専用の電源に切り替わりますので席を離れぬようお願いいたします」
皆の見ている前でゆっくりと時計の秒針が進んで行く。
残る十秒、九秒、八秒……そして、ついに針が頂点にきて時計の針が全て頂点を指した時、世界が緑色に塗り潰されて部屋の明かりが消えた。
「ぬぅ、明かりが本当に消えたぞっ」
「くぅ、妙なだるさを感じる……」
「本当にシャドウとかいう化け物が出たりしないんだろうな?」
指輪を付けて影時間を体験した分家筋の者たちは、これまで影時間に入ったことがないのだろう。
誰も彼もが不安そうに狼狽えており、直前に説明していた高寺もどこか呆れ気味にすぐ専用の電源に切り替わることを再び伝えている。
言っている間に電源が変わり、先ほどよりもいくらか暗いが部屋の中を見渡すことが出来るようになった。
おかげで騒いでいた者たちも静かになったため、高寺は鍵付きの箱

をテーブルに置くと開封の儀を行なうと宣言する。
「では、これより御親族の皆様にお立ち会い戴きまして、御当主桐条武治氏の御遺言状の開封を執り行わせて戴きます」
続けて高寺は上着のポケットから封蝋で閉じられた手紙を取りだし、レターナイフを使って皆の前でそれを開けると中から鍵を出して箱を開けた。
中に入っていたのはこれもまた封蝋で閉じられた封筒だったが、それを開くと中から紙の束が出てくる。
随分と枚数が多いようだが、それだけ細かく書かれているのだろうと分家筋の者たちに緊張が走る。
上手く行けば他の者たちを出し抜いて一族の中で上位に立てるかもしれないのだ。
そのために、これまで宗家に生まれただけの男に下げたくもない頭を下げ、おだてて機嫌を取ってきたのである。
男たちがそんな自分勝手な事を心中で考えている前で、高寺がはっきりと聞こえるように文章を読み上げ始めた。
「遺言状、主文、私の死後遺産の配分の問題が起こらぬよう、これを以下のように決しておくこととする。一つ、目録十項に示す住所の不動産全てと十項の位置に建てられた宗家邸宅の建物全てを妻英恵に遺贈する」
桐条には分家も合わせれば多数の親族がいるが、彼の家族は妻の英恵と娘の美鶴のみ。
ならば、その家族に遺すものを最初に書くのは当然だとして、聞いていた者たちも土地と建物くらいならばくれてやると余裕を見せる。
だが、次は彼の実子である美鶴へ相続するものが書かれているはず。
まさか、成人もしていない小娘にグループの代表を譲り渡しはすまいなと思って聞いていれば、
「一つ、目録二十二項の謄本に記す会社桐条の私が保有する株式はこれらを……ん？」
急に高寺が怪訝そうにしながら黙り込んで文章に目を通し始めた。

その反応は悪い意味で予想外だったといった様子で、見ていた者たちは途端に小さく口元を歪める。
「どうしたのかね？」
「ふぅん。もしかして、お嬢様の分け前が存外少なかったりしましたかな？」
「それは厳しい。まぁ、企業系は難しいですからなぁ」
いくら才女言われようと子どもは子ども。娘には甘いと言われた男も、経営者として最低限の分別はついていたと見える。
素人でしかない娘にグループを預けることは出来ない。そう判断して分け前を少なくしたのだろうと思っていれば、少し先の方まで目を通し終えた高寺が改めて続きを読み上げた。
「……失礼しました。株式はこれらを目録二十三項に記す比率に分割した後、全て売却とする」
「売却っ!?」
「馬鹿げている、持ち分を全て売却だとっ」
「経営権を我々の誰にも相続しないだとっ!!」
株式の保有率の高さで会社の経営権を持つものが決まる。
故に、最も多くの株式を持っていた桐条から、より多くの株式を継いだ者が次期トップになるはずだった。
それが蓋を開けてみればまさかの全て売却。
もし、グループの経営権が欲しいのなら、売りに出された株式を自力で買い集める必要が出たのだ。
勝手に金が転がり込んでくると思っていた者にすれば、下手をすれば他所の人間に経営権を奪われ、今の恵まれた生活すら奪われかねない状況になってしまった。
「そんなっ、本当にそんな風に書いてあるのか？」
「通読いたしました所、どうやらグループの同族経営からの脱却を望む趣旨のようです」
「我ら親族に何も遺さないだと？　なんだこの茶番は！」
相手はまだ生きているが、遺言状を開封したからには生前贈与という形で分配されてゆく。

こんな事ならば書き直せと言いたい者たちも、すぐに手続きが始めるように準備をさせていたせいで、この望まぬ展開を受け入れるしかない。
妻と娘の前で存命の相手を悪し様に話す者たちの心根のなんと醜いことか。
薄く笑って眺めていた英恵は娘に聞こえる程度の声で静かに口を開く。
「改革に遺言を使うだなんて……あの人らしいというか」
「三代も同族経営など、その方が時代錯誤のような。何故問題に？」
「言ってあげたら？　私は疲れるから遠慮するわ。ただ、あの人も今回の裏切り事件までは予想して書かなかったでしょうから、その事だけはちょっと気がかりだけど」
幾月が生きていて、さらに裏切るとまでは考えていなかっただろう。
おかげで遺言状は最新の物を用意している最中だったかもしれない。
これが古い分ならば、また違ったことが書いてありそうだが、まだ娘への配分が説明されていなかったことで、騒ぐ分家の者たちを落ち着かせようとしている高寺に声を掛ける。
「高寺さん、美鶴には何を遺すと書いてあるのかしら？」
「これは失礼しました。お嬢様には……んん、おかしい、どこにも……」
先ほど黙り込んだときは、書かれている文章の意味が理解出来ないといった感じだったが、今度は本当にどこに書いているのか分からないでいるようである。
妻には土地と建物を与えたため、娘にも同じようにすると思っていたのだが、何度もページをめくって目を通している様子から、どうやら美鶴に遺された物は土地や建物ではないらしい。
待つこと数分。ようやく文書全体に目を通したらしい高寺が、最後のページにあったとホッとした顔をする。
「ああ、いえ。最後のページにありました」

言った直後、書類と一緒に挟まっていたのかカードらしき物が落ちた。
「ん？　これは、カード？」
それを拾い上げた美鶴は一体何のカードだと首を傾げる。
カードの表面には数字が書かれており、裏面はカードの取り扱いの注意点など説明書きがなされているのみ。これでは一体何のカードか分からない。
「長女美鶴にはこれを遺す、と。使い道を調べさせましょう」
「あの、これ、私の勘違いでなければ、食材などを保存しておく冷蔵室のカードキーじゃないかと」
「冷蔵室？」
分からないなら調べてから改めて伝えれば良い。
そう考えた高寺がカードを回収しようとすれば、菊乃が恐らくと前置きしつつカードの正体を告げた。
「二十番台だから……えっと、これ、旦那様のワインセラーのカードキーです。何ヶ所かあって、確かこの離れにも。入ったことはありませんが、それぞれヴィンテージロゼとシャンパンが何本か」
「ワイン？」
どうして未成年の美鶴に酒など遺すのか。
意味が分からない美鶴は、それについて父が詳しい説明を書いていないか改めて訊いてみる。
「高寺さん、一緒に何かメッセージなどは？」
「一言だけ端書きがございまして、他の相続者が長女美鶴にこれ以外の私の遺産を温情その他によって分け与える事は私の意志に反する。よって、これを厳に禁ずる、と」
端書きだろうと正式な遺言状に書かれているなら効力を発揮する。
よって、美鶴の配分は父が集めたと思われる高級な酒のみとなった訳だ。
別に土地や経営権が欲しかった訳ではないものの、娘がまだ呑めない酒を遺した父の真意が知りたい。
美鶴が考え込んでいれば、小さく笑った英恵が夫の真意を理解した

とばかりに深く頷いて見せた。
「なるほどね」
「お母様、意味がお分かりになるのですか？」
「意味も何も、書いてある通りよ？」
別に深く考えるまでもない。そう言って英恵は明言を避けた。
分かっているならどうして教えてくれないのか。
自分で気付くことが重要なのかもしれないと、美鶴が再び考え始めている間に思い出したように英恵がある者たちの処遇については書かれていないのかと尋ねる。
「そう言えば、美鶴のお友達の事は何か書いてあるのかしら？」
「お友達、と言いますと特別課外活動部の事でしょうか？　それにつきましては……」
これもまた少し探さないと分からないのか、高寺は何度も書類をめくって繰り返し目を通す。
桐条の暗部に繋がる情報でもあるので、書かれていない可能性もあるのだが、少し待てば何とも微妙な表情で高寺が書かれていたと答えた。
「ありました。ですが、これは……」
「なんと書いてあるの？」
「私の死後、特別課外活動部に関わる全権は相手側の同意があった場合に限り、有里湊に委譲する、と」
その言葉を聞いて考え込んでいた美鶴も流石に顔をあげた。
高寺が微妙な表情をしている理由は、恐らく相手が湊の復活を知らないためだろう。
生きていると知っていれば、桐条の暗部を外部の人間に渡すことになり、渋い顔になっていたに違いない。
ならば、知らぬが仏とばかりに英恵は誤魔化す意味も込めて軽い調子で答えた。
「あら、美鶴たちは八雲君に貰われちゃったのね」
「どうして父は有里に託そうと？」
「本当の意味で見ている物が同じだったからでしょうね。それに、そ

れが一番安全だと思ったからというのもあると思うわ。何だかんだ言いながら、あの人は八雲君の活動から見える行動理念とかを信用していたみたいだし」
湊も桐条も自己犠牲を厭わないという点で共通しており、無関係な人間を、被害者も含めた一般人を、それぞれ巻き込まぬようにと影時間を終わらせるために活動していた。
お互い大切な者たちを守るという目的もあったにせよ。そこに自分の利益を考えるなどという余分な思考は存在せず、誰よりも純粋に影時間に向き合っていたと言える。
だからこそ、桐条は様々な思惑が渦巻いている親族たちではなく、外部の者だろうと信用出来る人間として彼に託したいと思ったに違いない。
ところが、湊の生存を知らない高寺は、これでは遺言の通りにはならないと小さく息を吐いた。
「ですが、流石にこれは無効でしょう。死者に権限を委譲するなど名目上の処理しか出来ません」
「いいえ。坊ちゃまならいます。ここに」
高寺の言葉に被せるように口を挿んだ和邇は、言いながら自分の胸に左手を当てている。
一瞬何を言っているのか理解出来ない一同だったが、それが〝皆の心の中に〟というふざけたメッセージだと認識したところで、和邇の冗談に便乗するように英恵が少し茶目っ気のある笑顔を和邇に向けた。
「あら、そうだったの？　なら、また一緒にお茶をしましょうと伝えておいてもらえるかしら？」
「了解との事です」
「フフッ、随分とお返事が速いのね」
もし本当に尋ねたとしても、そんなに速く返事が返ってくる事などあるまい。
しかし、それでも英恵にすれば楽しいのか、気にした様子もなく笑っている。

テーブルの反対側では未だに分家筋の者たちが騒いでいるというのに、随分と暢気なものだと呆れたように高寺が和邇に声を掛ける。
「はぁ……ならば是非ともこの事も伝えておいてくれ」
「既に伝えてあります。返答は〝貰えるものは貰っておく。俺の管理下に入った以上、勝手に触るなよ〟とのことです。無視した場合は敵対行為と見なすようなのでご注意を」
これもまた本人が言いそうな言葉だから判断に困る。
彼の性格や言動をしっかりと把握しているからこそ、すぐに彼が言いそうな言葉が浮かんだのだろう。
英恵だけでなく和邇も随分と彼に近い立場にいた人間なのは間違いないが、そんな事は桐条の遺産配分には関係ない。
分家筋の者たちはまだしばらく騒いでいそうなので、身体の弱い英恵と、昨夜の戦いもあって疲れている美鶴は、この場を高寺に任せそれぞれの従者と共に部屋を後にした。

第三百六十話　父の想い

――桐条本邸・離れ

桐条家の敷地内にはいくつもの建物がある。

本邸はまさに豪邸と呼ぶに相応しい大きさと豪華な造りをしているが、本邸と距離のある離れも十分に屋敷と呼べるだけの広さがあった。

そして、遺言状の開封が影時間に行なわれた事もあり、菊乃の勧めで時間も遅いからと美鶴たちも離れに泊まる事になった。

昨夜の戦いがあった後、父親の手術が終わるのを待ってから寮に戻った美鶴は、幾月の裏切りをグループに伝えるための報告書を書き、そのまま迎えにきた車で本邸に戻ったため一睡もしていない。

父親が倒れ、グループの今後についての話し合いに同席し、それに関わるという事で遺言状の開封にも立ち会った。

その中でこれまで以上に大人たちの汚い部分を見せられ、さらに父親が裏のコネクションを頼ってグループの力を維持していた事を知らされた。

心身共に疲れているはずで、顔色も青ざめている。

だというのに美鶴はすぐに休もうとしなかった。

理由は簡単だ。先ほどの遺言状の開封で、父がワインセラーのカードキーしか遺そうとしなかったのかを考え、恐らく自分に何も期待していなかったからという結論に達したためである。

皆を半分騙すようにして特別課外活動部に誘い。

その活動が人々を守る事に繋がっているのは事実だが、桐条グループの尻拭いだった事を後で伝えて、途中で仕事を放り出すという断りづらい状況を作って組織に残って貰った。

これでは祖父や父親の事を悪くいう事など出来まい。

善意で集まってくれた者たちを騙し、聞こえの良い言葉で焚き付け、そうして利用してきたあげくに殺し掛けた。

いや、正確に言うならばグループの被害者であるチドリと湊に至っては実際に一度死んでいる。

彼らが助かったのは百鬼家の生まれであった湊の持つ異能のおかげであり、それがなければまた桐条グループが巻き込んで殺した事になっていた。
「……本当に、私は愚かだな」
見かねた菊乃が無理矢理にでも休むようにと、美鶴に睡眠導入剤を飲ませてから着替えを取りに行った後、部屋に一人になった美鶴は窓の外を見ながら小さく呟く。
彼女は自分も罪を背負っている。桐条の暗部に触れて責任があると考えていた。
しかし、彼女は本当の意味で自分やグループの犯した罪について理解出来ていなかった。
口先だけの子ども。何も知らないのに悲劇のヒロインを気取っていた愚か者。
罪を背負うと口にすることで、ちゃんと贖罪しているという形を取り、無意識に自分は綺麗であろうとした。
恐らくは父もそんな自分の意地汚さを見抜いていたために、桐条の物を何一つ渡さずにワインなどと言う消耗品、嗜好品でしかないものを情けで与えたに違いない。
逆に、自分が血に濡れ、泥に塗れようとも、他者を救い大切な人たちを守ろうとする気高さを持った青年には、桐条の弱所でもある特別課外活動部の全権を譲ろうとした。
持っている力の大きさではない。重要なのは何のために、誰のために力を振るうのかだ。
傍から見ていれば、それをしっかりと理解している者かどうかなど簡単に分かったのだろう。
湊の優先順位ははっきりしている。アイギスのために世界を敵に回し。ラビリスたちのために神の領域に踏み込み。チドリのために己の命を使った。
その他の人間などどうでもいい。彼女たちのため、彼女たちの周りの世界のためであれば、彼は一切躊躇う事なく行動に移れた。
ただ、その行動は少女たちだけでなく、その他の者たちの命を救う

ことにも繋がっていた。
大義を掲げながらも何も為せない無能と、個人的な感情で動きながらも数多の命を救う者なら、父が後者を信用して自分の後を任せようと思うのも当然。
「……見限られて当然だな。私はお父様を見殺しにしようとしたのだから」
幾月が人質に取られていた事で動けず捕まってしまったが、そこからアイギスや湊が助けに来るまで美鶴は何一つ役に立っていなかった。
助けたい。どんな代償を支払ってでも父を死なせたくないと思っていたのに、あの時の美鶴はただ動揺してばかりで父に何も出来なかった。
口では大きな事を言っていながら、本当に大切な人が危険に晒されても庇うことも、癒やすことも出来ない。
憎んでいた人間すら救ってみせた彼と比べれば、何もしなかった自分は肉親を見殺しにしたようなものだ。
目を覚ましてから昨夜の事を聞けば、父は二度と自分と会わなくなることもあり得る。
独りになったことで考えすぎてしまい。美鶴が負の感情に支配され様としたとき、扉をノックする音が聞こえて美鶴は振り返った。
着替えを取りに出て行った菊乃ならば、ノックではなく一声掛けて入ってくる。
ならば、一体誰だと思っていると、扉が開いて英恵が入ってきた。
どうして休むために部屋に戻ったはずの母がやって来たのか。美鶴がその事を疑問に思っていると、美鶴の顔を見た英恵は苦笑を浮かべる。
「やっぱり……美鶴、カードキーのワインセラーに行くわよ」
「何故こんな時間に？」
「貴女が武治さんの真意を勘違いしているからよ。さぁ、行きましょう」
身体が弱いはずの英恵は近付いて美鶴の手を取ると、そのまま引っ

張って部屋を出る。
廊下に出れば御側御用の和邇も待っており、途中で着替えを持って戻ってきた菊乃に行き先を伝えると、彼女もすぐに美鶴の部屋に着替えを置いて合流してきた。
そうして、一同は未だに遺産の分配について騒いでいる分家筋たちのいる部屋に近付かぬよう気をつけて、地下にあるワインセラーを目指した。
＊＊＊
どこか古臭い造りながらも、そこを守る扉には最先端のセキュリティーを施したワインセラーの入口に着いた。
扉の横のパネルに美鶴の持っていたカードキーを当て、ガチャン、と音が鳴って鍵が外れると、自動で扉が開いてゆく。
食料を保管するために作られたからか、部屋の中の空気はひんやりとしている。
もっとも、ワイン自体は徹底された温度管理のために種類ごとに別の棚に納めされ、それぞれがガラス扉の中で最適な温度で保管されている。
父のこういったコレクションを見たことがなかった美鶴は、随分と沢山あるなと思いながら周囲を見渡す。
すると、近くの棚に近寄った英恵がボトルに貼られたラベルを見ながら口を開いた。
「あの人、ああ見えて甘口が好みなのよ。イメージもあるから外では店が勧めてきたものを飲んでいるけれど」
「私は、お酒の味の種類は詳しくありません」
「ふふっ、でしょうね」
英恵とて未成年でお酒を飲んだことがない美鶴が酒に詳しいとは思っていない。
ただ、知識としてワインの甘口と辛口の違いについてくらいは知っておいた方がいい。
そんな事を考えつつ、英恵は美鶴の方へ向き直ると改めて何のためにここへ来たのかを告げる。

「あの人を想うのなら、美鶴は自分自身をもっと信じてあげて。でないと、あの人が本当に遺したかったものが見えないわ」
「それは……どういう意味ですか？」
どうして自分なんかを信じることが父を想う事に繋がるのか。
理由が分からず美鶴がどこか不安そうに首を傾げれば、英恵は頭の固い子だと苦笑しつつ美鶴の傍にいた菊乃の声を掛ける。
「ねぇ、菊乃さん。貴女は、あの人が美鶴に本当は何を遺そうとしていたのか分かるんじゃないかしら？」
「私が、ですか？」
「遠慮しないで、思った通りを言ってみて」
美鶴は自分が関わることになると途端に客観的に物事を見られなくなる。
であるならば、幼馴染みで美鶴や桐条のことを見てきた菊乃に答えを聞けば、本人も恐らく納得出来るはずだと英恵は聞く相手を変えた。
御側御用と言えども従者でしかない自分が口にしても良いのだろうかと菊乃はしばし悩む。
けれど、今の美鶴は酷く危険だ。大切な父を守れず、ネガティブな状態になってしまっているのか、その父から自分が欠片も期待されていなかったと思い込んでしまっている。
このままでは、桐条が目を覚ましてから会った時に気まずくなってしまうだろう。
そう考えた菊乃は、数時間前に一度部屋に戻ったときにした会話を思い出して欲しいと美鶴に話しかけた。
「お嬢様、昨日、ご挨拶が終わって部屋に戻ったとき私に仰いましたね。自由になりたくないか、って。恐らく同じだと思います。旦那様がお嬢様に遺したいと思ったのは〝自由〟。何もないという自由」
彼女の言葉を聞いた美鶴はハッとした顔をする。
そう。桐条が美鶴に何も期待していなかったなどという事はない。
むしろ、桐条は愛娘を心配しながらも、自分の娘とその仲間たちならば影時間を本当に終わらせる事が出来るかもしれないと期待すら

寄せていたのだ。
だが、子どもたちには平和な日常を生きて欲しい。大人たちの尻拭いばかりさせることを申し訳なくも思っていた。
故に、桐条はもし自分が死ねば娘と彼らを自由にさせるために保険を掛け、さらに敢えて何も遺さないという選択をしていたのだ。
「旦那様は常々言っておられました。お嬢様が背負うべき罪などないと。だからこそ、何一つ背負わない。背負わせないために、何のお言葉もなかったんだと思います。あの場で奥様がお嬢様を庇われなかったのもそれに気付いておられたからでは？」
「あの場で明かしたら色々台無しだもの。株を売れって言うのも、経営を正す事だけが理由じゃない。実際は美鶴のためってところが大きいと思うわ」
桐条が株を美鶴に譲ろうとすれば、美鶴もまた桐条グループに取り込まれ、さらに大人たちのくだらない争いに巻き込まれていたに違いない。
ならばいっそ、英恵に土地と建物を譲り、間接的に娘が将来お金で困らないだけの資産だけ確保して、経営権に関わってくる株など手放した方がいい。
遺言状の開封時にその意味に気付いていた英恵は、父の想いを知って瞳を揺らしている美鶴を笑って見つめ、近くにいらっしゃいと手招きして呼ぶ。
「美鶴。そこのボトルのラベルを見てみて」
「１９９１年……」
「フフッ、何の年か分かる？」
ワインのボトルに貼られたラベルには産地と種類。そして、どの年代に作られたかが書かれていた。
何の年か尋ねられた美鶴はすぐに答えが分かったのか、大きく瞳を開くと母を見た。
「そう。貴女が生まれた年のワイン。ここのは全部そう。あの人、楽しみにしていたわぁ。二十年物になったら貴女と飲むんだって。きっと美鶴なら味の違いが分かるはずだって、こぉんなに買い揃え

て。親馬鹿でしょ？」
「お父、さま……」
期待していない人間のためにわざわざワインやシャンパンを何百本も買い集めたりはしない。
自分の考えが及ばぬほどに深い愛情を持っていた父の姿を知り、美鶴がその場で泣き崩れれば、英恵は傍に腰を落として娘の肩を抱き寄せる。
「確かにあの人は死に場所を探していたわ。でもね。別にそれは生きることを諦めていた訳ではないの。じゃなきゃ、貴女とお酒を飲むなんて夢を抱くはずがないでしょ？」
「……はい……はいっ……」
罪と向き合い。罰を受け死ぬ覚悟はしていただろう。
しかし、それは志半ばで死のうと後の者に託すため、しっかりと〝今〟を見ていたからだ。
桐条はそのために妻と娘、世界のために戦ってくれている子どもたち、グループの未来を考えて出来る限りの用意はしていた。
分家筋が騒いでいたのはしょうがない。何の研鑽も努力もせず、甘い汁だけ吸って生きていこうという者たちを誰が助けようと思うのか。
夫のそういった思惑も理解していた英恵は、美鶴を立たせると後は任せると菊乃に伝え、そのまま和邇と共にワインセラーから出て行こうとする。
「もう大丈夫そうね。じゃあ、今日は疲れたでしょうから、美鶴も早く休みなさい。菊乃さん、美鶴をお願いね」
「……はいっ、かしこまりました」
自分の主とその父の深い絆を理解したことで、菊乃も感動して涙を流していたのだが、英恵に声を掛けられれば涙を拭いてしっかりと頷いた。
それからしばらく経ってから、美鶴もここへ来たときとは比べ物にならないほど活力に満ちた顔になり、ようやく効いてきた睡眠導入剤のおかげでぐっすり眠れそうだと部屋に戻って休んだ。

深夜――巌戸台分寮・ゆかり私室
特別課外活動部のメンバーたちと桐条グループが攻めてきた時の事を話し合った後、ゆかりは夕食や入浴を済ませて部屋に戻ると、ノートパソコンを膝に乗せてベッドに腰掛けていた。
夕方、和邇八尋が湊からの預かり物だとＤＶＤを渡してきた。
中に入っているデータは十年前、岳羽詠一朗が事故現場で残した最期の映像。
パソコンの中には既にＤＶＤが入っており、後は再生ボタンを押すだけで映像が流れる。
屋久島で見た映像は幾月が改竄したもので、他の者たちに話を信じさせる上で都合の悪い部分が編集されているという。
ただ、そう聞いていても優しかった父が事故の原因に関わっていたのは事実で、そのせいで湊や大勢の人間が被害を被った事実は変わらない。
屋久島の時は罪悪感に押し潰されそうになり、湊に電話を掛けて謝罪したが、本人が気にしていないと言って話が流れてしまった。
けれど、今回見るのはマスターデータ。おそらく、湊はコピーを取っているだろうが、それでもここにあるのは実際にゆかりの父が残した映像になる。
幾月は不都合な部分を改竄したが、マスターデータに改竄された映像以上に問題のある発言がある可能性も否定出来ない。
見るのが怖くてしばらく悩んでいたゆかりは、これ以上は考えても仕方が無いと割り切ったのか、頬を叩いて気合いを入れると再生ボタンを押した。
《この記録が……心ある人の目に触れることを……願います》
爆発音と逃げ惑う研究員らの悲鳴をＢＧＭに、ノイズ混じりの父の声がスピーカーから聞こえてくる。
《御当主は忌まわしい思想に魅入られ、変わってしまった。この実験は……行なわれるべきじゃなかった……》
ここまでは声も映像も幾月の改竄したものと変わらない。

冒頭はあくまで何故このような事態になったのかという話なので、違いがあるとすればこの後になる。
《だから私は、強引に実験を中断した。しかし……そのせいで、飛散したシャドウが後世に悪影響を及ぼすのは間違いないだろう。でも、こうしなければ……世界の全てが、いま破滅したかも知れない……》
そうして、ゆかりが黙って見ていれば、映像の中の岳羽詠一朗は屋久島での映像と異なる言葉を続ける。
《頼む。よく聞いて欲しい……くれぐれも警告しておく、散ったシャドウに触れてはいけない！　この研究……私は止めることが出来なかった……悪魔に魅入られた御当主の耳に、私ごときの言葉は届かなかった……》
父の言葉を聞いてゆかりははっと息を呑む。
前は飛び散った十二体のシャドウを倒せと言っていた。それで影時間が終わるのだと、倒す事が正しいと。
けれど、本当の映像では父はちゃんと滅びの危険を予測し、そうならないようアルカナシャドウに手を出すなと警告していた。
《あれらは互いを食い合い一つになろうとする……そしてそうなれば、もう全てが終わりだ！　もう一度言う……散ったシャドウには触れてはならない！》
幾月が改竄した不都合な部分。それは岳羽詠一朗が死を前にしても、後の世のために残そうとした最も大切な部分だった。
確かに彼は桐条鴻悦の実験に手を貸していた。
だが、その実験をおかしな方向へと歪めたのは鴻悦の独断で、岳羽詠一朗は滅びの訪れをギリギリの所で防いでいたのだ。
さらに後世の人間に警告までしていたというのに、幾月は鴻悦と同じ滅びに魅入られて故人の最期の言葉を悪意で歪めた。
映像の中の父の姿を見ながら、ゆかりが幾月に対して怒りを抱いていると、フッと先ほどの強張った表情を崩して岳羽が口を開いた。
《僕はもう……助からないでしょう。最後に……一つだけ……これを見たどなたかが、娘に……ゆかりに会うことがあったら、伝えて欲しい……帰るって約束したのに、こんな事になって、済まない……。で

も父さんは、おまえと一緒に過ごせて……この世の誰より幸せだった》

先ほどまでの言葉は研究者として、研究に携わっていた人間として責任を果たそうというものだった。

けれど、この最後の言葉はグループの研究員ではなく、岳羽ゆかりの父としての言葉だ。

《……愛してるよ、ゆかり。梨沙子と、母さんとどうか、元気でいて欲しい……》

精一杯の笑顔を浮かべた岳羽は、そのまま爆発にのまれて映像も途絶えた。

思わずゆかりは父のことを呼んだが、これは全て過去の映像。

どうにか出来るはずもなく、しかし、父が自分の信じた優しい父のままだったことを改めて確認出来たことで、ゆかりは大粒の涙を瞳から溢れさす。

「お父……さん……無駄じゃなかった……信じてたこと、無駄じゃなかった……」

パソコンを閉じて脇に置くと、ゆかりは様々な感情によって涙が溢れ出る瞳を手で覆う。

湊が父を信じてくれていた理由をようやく理解出来た。

自分の知っている父と、映像の中の父の姿は一致していた。

研究に手を貸していたことは間違いだったと思う。

それでも、父は最期の瞬間まで誰かを愛し、思い遣れる人であろうとした。

どこが私利私欲のためなのか。成功に目が眩んだ人間など映像のどこにもいなかった。

十年前に好き勝手に騒ぎ立て、バッシングしていたマスコミや世間の人間に大声で〝嘘つき共〟と言ってやりたい。

けれど、今は父の言葉で胸が一杯で、温かい気持ちで心が満たされたゆかりは、涙が止まると天国にいる父に聞こえるように天井を見上げながら口を開いた。

「私は、元気だからさ……随分掛かっちゃったけど……メッセージ、

ちゃんと受け取ったよ。私、なんとかしてみるよ。それでいいよね。父さん」
父の本当の言葉は受け取った。
だから、父のやり残した事は、自分が代わりに何とかしてみせる。
新たな決意を心に秘めたゆかりは、自分の心に宿る力が変化したのを感じた。
彼女の中に目覚めた新しい力の名は、恋愛〝イシス〟。
イシスはイオがギリシャを離れエジプトに辿り着いた姿とも言われ、守護者として強大な力を持っていたとされる。
また〝生命〟司る力を持ち、死んだオシリスを蘇生させたという逸話もあり、チームにおいて回復の要でもあるゆかりに相応しい存在と言える。
メンバーたちが次々と新たな力に目覚めていた事で、自分が出遅れていると感じていたゆかりは、これで自分も皆と並んで歩くことが出来ると喜び、絶対に父の後始末を付けるのだと自分に誓いを立てた。

第三百六十一話　深夜の密会

深夜――桐条本邸・離れ

影時間も終わり、美鶴や英恵も部屋で眠りについた頃、離れのとある一室の扉が開き少女が中へ入ってきた。

その身に纏うは従者の正装たるエプロンドレス。

音を立てぬよう静かに扉を閉めて、部屋のソファーに腰掛けていた男性の許まで歩いて行くと、美鶴の御側御用を務める斎川菊乃は待っていた高寺に一礼した。

「遅くに済まないな」

「いえ、自由に動けるタイミングというものがありますから」

「お嬢様の様子は？」

「先ほどお休みになられました」

さっきは英恵が部屋を訪れた事で美鶴も外に出ていたが、今度は昨日の疲れもあってしっかりと眠りについた。

幾月の裏切りから父が倒れ、さらに親族や大人の汚い部分を見たことで心身共に疲れ果てていたのだろう。

美鶴はベッドに入って目を閉じれば、すぐに寝息を立て始めたので、それを確認すると菊乃はすぐに部屋を出てこうしてやってきたのだ。

彼女から美鶴の様子を聞いた高寺は満足げに頷き、ソファーから立ち上がると菊乃の正面に立つ。

「例の薬はどうした？」

「三十分ほど前に飲まれました。お疲れのようでしたので、明日の午後までは起きることはないかと」

「フッ、お手の物だな」

菊乃の見事な手際を高寺は純粋に褒めつつ、上着から煙草に取り出すと火を点ける。

グループ総帥の桐条が倒れたと聞いてから、高寺も高寺で様々な対応に追われて疲労を感じていた。

トップだった桐条を除けば高寺は最高幹部と呼べるだけの地位に

いた。
しかし、あくまでそれは実力を買われての事であり、年齢的に言えば彼よりも上の人間などいくらでもいる。
桐条が倒れれば高寺が引き継ぐ。それは前から幹部の方では聞かされていた事だったが、実際になってみれば高寺はまだトップには若すぎるのではと言い始める者もいた。
そんな者たちは大概が自分が臨時にトップに立ち、グループが落ち着くまでマスコミなどへの壁になろうと言っていた。
無論、自分が壁役になるなどでまかせで、ただ桐条グループのトップに立ちたいだけなのだが、能力を伴わない者たちを言いくるめてなんとか予定通りにトップに立つも、今度は桐条家の親族の相手が待っていた。
どいつもこいつも二言目には金、金、金。
本当に馬鹿の相手は疲れたと一服する高寺は、明日また遺産の配分について内密に話そうとしてくる者がいるのだろうなと考えながら、思考と切り替えると今日の菊乃の立ち振る舞いを賞賛する。
「まったくすごいよ君は、今日一日見ていて感心した。流石、お嬢様に六年付き添った身だ。実に自然な演技だった」
「自分から言いだした事ですから」
「それでもだ。先が見えていない御親族の方々にも、君の半分でも想像力があれば良かったんだがね」
高寺は幾月の裏切りと桐条が倒れたという報せを受け、すぐに今後のグループについて考えた。
日本の就労人口の二パーセントを担っているのだ。グループと取引のある他企業も含めれば、日本で桐条の影響を一切受けていない仕事などほぼ皆無と言っていい。
となれば、そのトップが倒れたというニュースが広まった時点で、日本全体に何かしらの影響が出るのは当然。
ここでグループを如何に安定させるかでその影響の規模も変わってくるため、高寺は表の部下に指示を出しつつ暗部であるグループの弱所を守る事を第一に考えた。

菊乃はそんなタイミングで得た協力者であり、彼女はグループと特別課外活動部を繋ぐ美鶴の足止めを命じられた。
そも、御側御用である菊乃は桐条家令嬢である美鶴が自ら前線に出ることに反対していた。
そして今回、グループトップの桐条が敵の罠に掛かって倒れた。
幸いな事に一命は取り留めたけれど、次は他のメンバーや美鶴が同じ目に遭って命を落とすかもしれない。
大切な人がそんな目に遭うことを考えれば、相手に恨まれようと危険から遠ざけるために策を弄するのは当然だ。
高寺もそういった彼女の目的を聞いているからこそ、一番の協力者であると認めて今後の動きについても正直に話す。
「さて、夕方に連絡が入ったんだが少々予想外の事態になっている」
「交渉が上手くいかなかったのですか？」
「いや、それならむしろ予想の範囲内だ。彼らは切っ掛けは勧誘だったにせよ。基本的には自分たちの意志で戦っている。大人がやめろと言って聞くとは思えない」
自分の祖父が全ての原因である美鶴や、父の死の真相を知るために戦っていたゆかりを除けば、他の者たちには明確な戦い続ける理由はない。
天田は母を殺した真犯人を見つけているし、アイギスやラビリスは既に人間になっているので自由に生きることを認められている。
戦い始めた理由はあったとしても、戦い続ける理由がなくても戦っているのは彼らの意志だ。
有里湊という青年の力を見ても折れずに戦う事を選んだ。子どもと言えども自ら進む道を選んだ者たちを簡単に説得出来るとは思っていない。
故に、菊乃の言葉の通りであったならどれだけ楽だったかと高寺は溜息を吐き、真剣な顔をすると菊乃に一つ尋ねた。
「桐条家の従者である君に一つ聞きたい。奥様の御側御用を務める和邇八尋とは何者なんだ？」
「和邇さんですか？　彼女……というより、奥様の従者は桐条家では

なく奥様付きで、私共とは別の命令系統に属しています。簡単に言うと私たち桐条家付きは奥様の命令を聞く必要がありますが、奥様付きの従者は御当主やお嬢様の命令を聞く必要がありません。あちらの主は奥様だけなので」

どうして急に和邇の名前が出てくるのか不思議に思いつつも、菊乃はまず自分たち従者たちがどういった風に主に仕えているかを説明する。

外の人間によく誤解されがちなのだが、専属の人間はいくら桐条武治が宗家当主でありグループ総帥だったとしても、主ではないために相手の命令を聞く必要が無い。

勿論、善意で頼みを聞くことなどはあるが、今はこの屋敷にやって来ている英恵付きの従者たちは言ってしまえば別組織の人間。

そのため、古くから知っている相手を除けば、昔から屋敷で働いている菊乃でも英恵の従者に関する情報はあまり持っていなかった。

「そういう事もあって私も奥様付きの従者については詳しい話を知りませんが、彼女を見るようになったのはここ数年です。能力は間違いなく高いのでしょうが、胆力や身のこなしからすると恐らくはＳＰとしての役割を持って奥様についているかと」

「そうか。実は例の部活との交渉の場に現われ、警備部の人間に何もさせずに追い返したらしい」

「何もさせずに、ですか？」

「ああ。例の部活はグループではなく桐条家の管轄になっていたんだ。ラボはグループの組織図に組み込まれているというのに、御当主が自分にもしもの事があればと保険を掛けていたらしい」

言われて菊乃は屋敷に到着した際に和邇が後で出掛けると言っていた事を思い出した。

夜には彼女も屋敷に戻っていたので、そう遠くに行った訳ではないと思っていたのだが、まさか往復数時間かかる巌戸台分寮に行っていたとはと驚く。

「では、和邇さんはそれを指摘されたので？」

「そうだ。遺言開封の儀を行なうときに釘を刺してきた。奥様まで情

報が伝わっているかは不明だが、彼女はこちらの動きに感づいている可能性がある」
高寺や菊乃の計画は桐条のためではあるが、美鶴の友人であり仲間である特別課外活動部の事は考慮していない。
だからこそ、全てが終わるまでは美鶴にバレぬよう注意を払っていたというのに、まさか、思わぬ伏兵の存在で当主代理となり美鶴よりも力を持っている英恵に情報が漏れるとは思わなかった。
英恵は自分も娘がいるため美鶴や湊に限らず子どもに優しい。
特別課外活動部のメンバーの中には昔から知っている七歌などもいる。
となれば、情報を得た時点で高寺たちの計画を潰しに動いても良さそうなものだが、いくらでも伝える時間のあるタイミングでも彼女は動かなかった。
泳がされているのか、和邇が情報を伝えていないのか、それとも英恵もグループを守る事を第一に考えて黙認しているのか。
「もっとも、それで今更躊躇ったりはしないがね。もしもがあれば何十万、何百万という人間の生活に影響が出るんだ。社員たちの暮らしを守るためにもここで止める訳にはいかない」
「お嬢様に恨まれようとですね？」
「ああ。明日……いや、既に今日か。今日の夜には全てが片付く。君もそのつもりでお嬢様を見ていてくれ。これもお嬢様のためなのだから」
「分かっています。では、私はこれで」
何百万という人間の生活と十人程度の子どもたちの未来。どちらを優先するかなど考えるまでもない。
勿論、高寺とて子どもたちを殺すつもりなどない。
ただ、影時間を終わらせる方法に目処が付くか、グループが落ち着くまで隠れていて欲しいだけだ。
日本の警察も馬鹿ではない。公安も含めて桐条家の黒い噂を知って尻尾を掴もうとしている者たちはいくらでもいる。
これまでは〝運良く〟彼らが強制捜査に踏み込もうと準備をして

いるタイミングで、別件で駆り出されて桐条まで捜査の手は及んでいないが、総帥が倒れた事を好機とみて動いてくる可能性もある。
そんな状況で生きた証拠である彼らにまで捜査の手が及べば、彼らもまともな学生生活を送ることが出来なくなるだろう。
だからこそ、高寺は桐条グループだけでなく、七歌たちの事も考えて桐条が籍を用意した学校に転校して貰おうと考えていた。
大人の都合で無理矢理に転校させられると思うかもしれないが、大人になれば今回の命令の意味も理解出来るようになるはず。
既に覚悟を決めている高寺と別れた菊乃が部屋を出て行くと、高寺は警備部の人間に連絡を取った。

――ＥＰ社
高寺たちが今後の計画について話し合っている頃、ＥＰ社の方では地下の研究区画の一室で刀を手にしている青年の姿があった。
長い髪を結い上げ、丁寧に淀みなく刃を研ぐ姿は中々に様になっている。
そうして、しばらく刃を研ぐ音だけが部屋に響いていると、作業を終えたのか青年は研いでいた刀を布で拭った。
汚れを落として刃の仕上がりを確認すると、湊はすぐに持っていた刀を組み上げてゆく。
明かりを受けて反射する刀身はまるで雪のように白く、彼はそんな珍しい刀に純白の柄と鞘を合わせて納める。
そして、それが終わると傍に置いてあった柄も鞘も純黒のもう一振りの刀を手に持ち、コート型に変化させていたマフラーに収納した。
「ダー、お仕事は終わりましたか？」
「……一応な」
立ち上がった湊に後ろから近付いて来たターニャが笑顔で声を掛ける。
昨年、留学生として月光館学園にやってきた彼女は、今年の三月にカナダに帰ったはず。
けれど、ターニャは軍服にも見える黒いワンピース姿でニコニコと

笑って立っていた。
そんな相手に湊は頷いて返すと部屋の入口の方へ向かって歩き出す。
湊たちがいた部屋は研究区画の中でも特殊な部屋で、ほとんど湊のプライベートスペースと呼べる場所だった。
主な利用目的は新しい装備を開発するための作業部屋で、既に時計の針は午前三時を回っているというのに湊は刀を打っていたのだ。
湊の愛用の武器である九尾切り丸はニュクスの身体である月から力を吸収し、波動だけでシャドウやペルソナを抑える一種の神器になってしまっている。
そんな物を普段使いには出来ないので、もう少し取り回しがよく九尾切り丸の特殊な機能をグレードダウンした得物を湊は求め、ないなら名切り一の鍛冶師だった百鬼千香の技能を継承した自分が作ればいいとしばらく部屋に籠もって作業していた。
「ミナト、どうして二つも刀を用意したのデスか？」
「大勢斬るなら両手で振った方が早いだろ」
「確かにデスね。でも、黒い刀と白い刀は初めてみました」
ターニャがこの部屋に入ってきたのは途中からだったが、湊が作業しているのを一時間以上見ていた。
元々、留学してくるくらい日本の文化に興味があったので、湊が新しい武器として刀を打つと聞いて見に来たのだが、ターニャが見たのは刀身まで純黒と純白の変わった刀だった。
彼女の持つ知識では、マンガやアニメで登場するそういった武器は、現実では扱う金属や加工の問題で実戦に耐えられないものとなっている。
湊がそんな物を作る訳がないので、ならば、どうやって純黒と純白の刀身を作り出したのかと少女が尋ねた。
「ミナト、どうしてあんな色の武器になったのデスか？」
「無の武器っていう特殊な素材を溶かして使ったんだ。その影響で、刀身の色はそれぞれ俺の持つ異能に反応してあの色になった」
無の武器はペルソナの力に反応して姿を変える。

そのままでも鈍器としてなら使えるだけの頑丈さを持っていたが、今回、湊は九尾切り丸の量産型のようなものを作ろうとして、いくつかの作業工程を短縮するために特殊な金属である無の武器を溶かして使うことにした。
元々、かなり丈夫だったこともあって、溶かして不純物を取り除く作業にかなり時間を要したが、一度溶ければその後はすんなりと作業することが出来た。
もっとも、作っている途中で无窮とセイヴァーの力に反応し、そのまま刀身の色が変わるとは流石の湊も思っていなかった。
おかげで二振りの刀は既に対シャドウ兵器として使えるようになっているのだが、蠍の心臓に偶然いた事で再び日本に遊びに来られたターニャは、ペルソナやシャドウの話をまだ理解し切れていないのか純粋に武器の見た目について感想を述べる。
「ダー、黒い刀も白い刀も綺麗でした。武器に名前はつけましたカ？」
「名前なんてそのままで良いだろ。黒刀と白刃で十分だ」
「カラブローネとファルファッラもありますし。ミナトは対の武器が似合いマスね」
无窮の力を宿した黒い刀は〝黒刀〟、セイヴァーの力を宿した白い刀は〝白刃〟。
湊のセンスで付けられた名前はあまりにシンプルなのだが、実際に用意された武器は名切りの技術の粋を集めたロストテクノロジーの塊。
作られたばかりではあるものの、表に出せば国立の博物館が研究目的に買い取ろうとしてくるほどの逸品だ。
その試し切りが異形の化け物であるシャドウなどでなく、同じ人間である桐条グループの者たちになる可能性があるのだから恐ろしい。
日本へ来る際にどういった用件で日本へ向かうのか聞いていたターニャは、このまま何事もなく終われればいいと思いつつも、今歩いている廊下の先にいる自分の伯母とその仲間が持ってきていた装備を見て、絶対に戦いは避けられないとも感じていた。
「ミナトがミツルと話さない理由も分かりました。でも、ミツルの家

と戦うのは大変デスね」
「まぁ、あっちも準備はしているんだろうが、あくまで対人戦闘用だろ」
「対人戦闘用で対処出来ない人間の方が珍しいんデスよ？」
桐条グループが装備を用意するとなれば、警察のテロ対策チームと同等かそれ以上の装備と思われる。
ペルソナやペルソナ使いの危険性を性格に把握していれば、そういった装備で固めるのも納得出来るが、その武器が自分の友人たちに向けられるとなるとターニャも複雑だった。
「ミナト、皆の前で相手を殺さない事は出来ますか？」
「……まぁ、別の場所に運んでから仕留めるって方法もあるが」
「なら、出来ればそうしてください。皆には刺激が強いデスから」
桐条グループと戦闘になる可能性を考慮して武器を新調するぐらいだ。湊が敵対してきたグループの人間を始末しないはずがない。
なら、そこを止められないなら、せめて自分によくしてくれた友人たちの心的な負担を減らすようにターニャは湊にお願いをした。
敵を殺すなら皆の見ていない場所でするようにしてやってくれと。
それくらいならば問題ないと考えた湊も頷いて返し、ほんの少しだけ気が軽くなったターニャは廊下を進み続けると、蠍の心臓用に割り振られた区画に戻ってきたことで湊と別れる。
もし、桐条グループが仕掛けてくるとすれば、今夜にでも特別課外活動部のいる寮に襲撃をかけてくるに違いない。
その時にはターニャたちも湊の指示で動く必要があるため、今夜はもう休もうと用意された部屋に入っていく。
そんな少女が部屋に帰っていくのを見送った湊も、そのまま上へ続くエレベーターに乗って研究区画を後にした。

第三百六十二話　作戦第一段階

１１月６日（金）
午前――桐条本邸・離れ
離れの中でも奥まった場所にある一室。
そこでは朝から高寺や警備部の人間たちが持ち込んだ機材の前で忙しそうに動いていた。
ここは桐条宗家の敷地内にあるが、普段この屋敷には誰もおらず、目が覚めれば英恵と美鶴が本邸の私室に移ると分かっているからこそ、彼らはここに対特別課外活動部の本部を設置した。
彼らは桐条グループの人間。故に、美鶴や英恵を守ろうとは思っているが、美鶴も特別課外活動部の一員である事は紛れもない事実。
ならば、出来る限り傍にいて彼女の動向を見張りつつ、もしもの時には干渉して動きを制御するしかない。
もしも、ここで彼女が特別課外活動部側に付いてしまえば、高寺たちもグループを守るために彼女と敵対しなければならなくなる。
未だ目覚めない桐条への恩もあり、出来れば彼女に手荒なことはしたくない。
そう考えているからこそ、出来る限りここで特別課外活動部の力を削ごうと彼らが策を弄していれば、扉がノックされエプロンドレス姿の菊乃が部屋に入ってきた。
「っ……勝手に桐条家の屋敷にこんな場所を作って」
「明日には撤収させる。全てはグループのため、奥様やお嬢様の安全にも繋がる事だ」
使用人として主の屋敷で好き勝手されることは許しがたい行いだ。
けれど、彼女も主を裏切って高寺たちに荷担している者の一人なので、そう強く出る事は出来ない。
明日には解散してここから全て引き上げるという話も恐らくは嘘ではないので、今だけの我慢だと菊乃が高寺たちの許に行けば、彼らは桐条のサーバから厳戸台分寮のセキュリティにアクセスしているところだった。

巌戸台分寮は外観や内装は元ホテルであった事を思わせる建物だが、実際には窓や扉などは通電させることで強度を上げたり、遠隔でロック出来るなど防衛拠点としての機能を有している。
美鶴以外のメンバーがそれらの使い方を知っているかは分からないが、もし、作戦実行時にそれらを使って籠城されると影時間の内に全てを終わらせることが出来ないかもしれない。
だからこそ、高寺たちは上位権限を使って管理サーバから直接そのセキュリティを解除し、もしもの時だろうと寮内からでは保安システムを起動できないように細工を施す。
いくら戦う力を持とうと相手はただの学生たちだ。子ども相手にそこまでするのかと菊乃が冷めた目で彼らを見ていれば、高寺は菊乃の考えを読んだかのように口を開く。
「同族経営の脱却は構わない。お嬢様も言っておられたように、名誉職を除けば創始者一族が関わり続けるなど時代錯誤だからな。だが、今そうなればこれまで隠されてきたグループの暗部が、不用意に世に出るという事だ」
「そのために、これまでグループに代わり戦い続けてきた彼らを討つと？」
「だからこその優先順位だ。別に殺そうという訳じゃない。むしろ、全てが公になれば困るのは彼らだ。化け物と戦えるのは同じ力を持っているからと、彼らが世間から化け物と見られる事を防ぐ事にも繋がる」
高寺とて別に憎くて七歌たちと敵対しようと思っている訳ではない。
グループを守るために仕方なく彼らの自由を奪うだけであり、その行動には彼女たちを守る意味もある。
七歌たちも湊の本気の戦いを見たとき、その人に在らざる姿に恐怖を覚えた。
何万何千の人間の力を集めようと勝てない。到底人の力が及ぶ存在ではない。
それこそ、人類の敵だと国聯が軍を差し向けても手負いの彼を討つ

ことすら出来なかったのだ。
いくら戦う力を持とうと七歌たちの心が自分と彼に対して明確な格付けをしてしまっても無理はない。
そして、それらは七歌と一般人に置き換えても同じ事が起こり得る。
ペルソナ使いたちは影時間に身体能力が上がるが、影時間外でもペルソナを召喚している間は僅かに力が付与されて能力が上がる。
ただでさえ近代兵器に対抗し得るペルソナという異能を持っているというのに、本人たちの力まで人のそれを超えると知れば、確実に人々の悪意が彼女たちに向いてゆくことになるだろう。
何も一生日陰者として生きていけと言う訳ではない。グループが落ち着くか、桐条が目覚めて対策を講じるまで大人しくしていて欲しいだけなのだ。
高寺の説明を聞いて菊乃も現状がどれだけ危ういバランスで成り立っているのかを理解したのか、それ以上は何も言わずに彼らの作業を見守る。
すると、全ての準備が終わったのか警備部の人間が高寺に視線を向けてから頷いた。
「準備、完了しました」
「分かった。すぐに始めてくれ」
「了解。保安システム、切断」
いくつか操作した後、最後にキーを一つ叩くだけで寮の保安システムにロックが掛かった。
もし、今夜にイレギュラーシャドウが現われ、特別課外活動部のいる寮にやってくれば大惨事だ。
彼らはその時に責任を取る覚悟があるのだろうかと考えつつ、菊乃は薬で深い眠りについている美鶴の様子を見に戻るため部屋を後にした。

――ＥＰ社・地下区画

高寺たちが寮の防衛システムを落とし、夜の作戦に向けて準備を進

めている頃、ＥＰ社の方でも民間軍事会社〝蠍の心臓〟の兵士たちが装備の点検を進めていた。
　一体どこの国有軍と一戦交えるつもりなのかという過剰戦力に、部屋の隅でコーヒー片手に眺めていた医者のシャロンが呆れた声を漏らす。
「ねぇ、これ本当に国内でドンパチやらかすのに必要な戦力なの？」
「……多ければ多いほど良いに決まってるだろ」
「アンタって省エネ派じゃなかったっけ？」
　今、湊やシャロンがいる場所はＥＰ社の地下区画の中でも特殊な場所で、地下で製造した大型兵器を昇降機に乗せて地上に出せるようになっている。
　そういった用途があるため、地下だというのに天井まで二十メートル以上あり、広さも下手な野球場より広い空間になっているのだが、シャロンの見間違いじゃなければ部屋の隅に置かれているのはミサイルを積んだアパッチやミニガンを装備したコブラだ。
　どちらも一機あるだけで凶悪な戦闘ヘリなのだが、それぞれ三機ずつ置かれており、他にも機関銃を乗せたジープも何台があるため、あくまで民間人でしかない桐条グループ相手にどれだけ過剰に戦力を用意しているのかとシャロンは青年に冷ややかな視線を向ける。
　かつての湊は周囲への被害を抑えることを第一に考え、久遠の安寧を堕とすまでに自分に攻撃を仕掛けて来た仕事屋たちに反撃しないどころか、自分の身体を盾にして周囲への被害を防いでいた。
　日本など外国以上にそういった周辺への被害に注意すべきだというのに、どうしてここで他国の正規軍と正面から一戦交えられそうな規模の準備をしているのか。
　相手が桐条だから張り切っているのかとシャロンが疑っていれば、湊はそんな事かとつまらなそうに答える。
「……そも、戦力で言えば俺が一人で落とす事だって出来るんだぞ」
「知ってるわよ。でも、今回はそうしないんでしょ？　理由はあるの？」
「相手が戦争を望んでいるんだ。なら、こっちもしっかりお相手しな

いと失礼だろ？」
今回の桐条グループの狙いは特別課外活動部だけじゃない。
最優先に押さえなければならないのが身内である特別課外活動部なだけで、最終的にはラビリスやチドリも押さえるつもりでいるのだ。
無論、なんの準備もなくチドリに手を出せば桔梗組と全面戦争に発展しかねない。
相手もそれを理解しているので、特別課外活動部の次に一人暮らしのラビリスを狙い。チドリの事は入念に準備を進めてから確保に移るに違いない。
だが、湊はこれまで何度も桐条たちに伝えていた。自分の大切な者たちに手を出せば、実行犯や上層部だけでなく従業員やその家族含めて皆殺しにすると。
それでも彼らは今も準備を進めてアイギスを捕らえようとしている。
なら、これはもう戦争しかない。相手も分かっていてやっているはずなのだから、湊もその期待に応えてやる必要があると答えた。
「……楽しそうにしちゃってまぁ。坊やが生き返ってる事を知らずにいる連中には同情するわぁ」
「それは知らない方が悪いだろ。警察や目撃者がいなかろうが、信号無視も速度超過も道路交通法違反に違いは無い」
実際には湊の方で桐条側に湊の復活が伝わらないように手を打ってあるのだが、情報など集められない方が悪いのだ。
敵である相手にわざわざ生き返ったことを報せる義理もなく、湊が死んだからと掌を返して敵対するような卑怯者に情けを掛ける必要もない。
そも、余計な事をしなければここにある戦力は解散し、そのまま日本観光を楽しんで帰国してゆく。どうなるかは全て相手の出方次第という訳だ。
「とある探偵も言っていただろう。〝撃って良いのは、撃たれる覚悟のあるやつだけだ〟と」

「アタシ、大いなる眠りは読んだ事ないのよねぇ」
「そこだけ知っていれば十分だ。さて、ここはあいつらに任せておいて問題ないだろう。敵が動けば迎えに来る。どうせ影時間の前後になるだろうから、それまでは準備を終え次第休んでおくように伝えておけ」
湊はここで動く以外にも色々と準備があった。
慣れない日本での作戦に蠍の心臓たちにトラブルが起きないか心配もしたが、見ている限りは問題もなさそうで、後はシャロンやターニャに任せておいても大丈夫そうだった。
ここは任せると言ってその場で湊が姿を消すと、残されたシャロンは深い溜息を吐いて上司の命令通りに兵士たちに伝言を伝えに向かった。
夜――巌戸台分寮
部活を終えて七歌が学校から帰ってくれば、そこには特別課外活動部のメンバーだけでなく、チドリにラビリス、そしてコロマルの姿があった。
流石に湊や綾時の姿はないかと苦笑した者だが、集まっているメンバーは既に召喚器を身に着けている。
どうやら悪い予感が当たったようで、集まっていた者たちは帰ってきた七歌を迎えつつ、彼女が帰ってくるまでにあった出来事を話す。
「七歌、正直悪い方向にどんどん向かってるっぽい。風花が調べて分かったんだけど、この寮の保安システムが落とされてるみたい」
「うん。ブレーカーとか、そういう電源的なところじゃなくて、根本的に保安システムを管理してるシステムが落とされてるみたいで、今この寮は普通より丈夫な建物ってだけの状態なの」
ゆかりと風花が緊張した面持ちで現状を伝えてくる。
有事の際を考えて風花も準備をしておこうと思ったのだろう。
だがそこで、この寮を守ってくれるはずのシステムが落とされていることに気付いた。
いくらシャドウの攻撃にそれほど耐えられないにしても、保安システムは寮を守る要であり、追い込まれた時には寮生たちを脅威から守

る最後の防波堤となるものだ。
当然、もしもがあってはいけないからと、そのシステムは桐条の管理するサーバからの直通ライン以外に外部とは繋がっていない。
なら、そこに何かがあれば、当然それを為した相手の正体も限定されるという訳だ。
ソファーに座っていた真田は、真剣な表情のまま敵の狙いは恐らく自分たちだけだろうと推測を話す。
「昨日のやつが簡単に引き下がったのも、こういった強行手段に出る準備を進めていたからだろう。自分たちのトップが倒れたときに何をやっているんだと思わなくもないが、当主代理になった美鶴の母親の側近である和邇さんが言っても聞かないんだ。余程俺たちの存在が邪魔らしいな」
「正直、オレっちたちは完全にお家騒動に巻き込まれてるだけッスよね？」
「巻き込まれたのか、それとも幾月派と疑われてるのか。その辺りは分からん。ただ、事態は既に美鶴の手を離れていると見て良いだろうな」
保安システムは寮生たちを守るためのもの。それを切断するなど美鶴が許可するはずがない。
となれば、今回のこの動きは美鶴の知らないところで行なわれている可能性が高い。
警備部を自由に動かし、桐条のサーバを通じて保安システムを落とさせるだけの命令を下せる者。
そんな者が何人もいるとは思えないので、恐らくは桐条グループの新たなトップに立った人間が裏で糸を引いているのだろうと七歌たちは予想する。
ただ、あまりニュースを見ていなかったことで、天田は桐条の後を引き継いだのは誰だったかと他の者に尋ねた。
「新しい代表の人って誰でしたっけ？」
「……高寺ってやつだ。前に吉野の実家に俺らを迎えに来た時にいたやつで間違いない」

夏休みが明けてから復学していた荒垣は、部活をしていない事もあって他の者より早く帰ってきていた。
おかげで夕方のニュースを確認する時間があり、役員会で抜擢された臨時トップが高寺だという情報を得ていた。
湊にやられた翌日に桐条と共に迎えに来た相手は、仕事が出来そうな見た目ながらもどこか優しげな印象を持っていた。
しかし、そういう人間でも組織のトップに立てば非情な判断を下せるようで、今回はグループとして七歌たち特別課外活動部を切る判断に至ったらしい。
人々を守るためにこれまで戦って来たというのに、どうしてこんな対応を取られなければならないのか分からない。
大人の事情というやつなのだろうが、勝手な都合でそんな事をされた方は堪ったものではない。
同じく狙われる可能性があるからと呼ばれたチドリたちも、桐条という大黒柱が折れた途端にぐらつくグループには不快感を覚えた。
「……本質は十年前から何も変わってないのね」
「上の人らが見てるんは数字やからね。自我があっても所詮は機械。戸籍もない孤児なら好きにしてもええ。それが湊君の逆鱗に触れてエルゴ研は壊滅したのに学んでないんやろ」
状況は全く異なるが、グループのために少数を切り捨てようとしている所は共通している。
大きな組織はどこもそうなるようになっているのかも知れないが、同じグループが同じような事を繰り返しているのを見れば、失敗をまるで活かそうとしていないのだと失望すら抱いてしまう。
桐条が目覚めれば違った結果になっていたのか、もしくは美鶴が桐条家の人間としてグループを掌握していればこうはならなかったのか。
そんなもしもの可能性について考えていた七歌は、行方知れずの青年との連絡窓口になりそうな少女に彼の動きを把握しているか尋ねた。
「アイギス、八雲君と綾時君からは何か聞いてる？」

「いいえ。何も聞いていません。ただ、グループはお二人の存在を感知していないと思われます。動くつもりがあるなら、グループが動いてから本陣に奇襲を掛けるのでは？」
昨日の警備部の言葉を信じるのであれば、上層部はともかく実働部隊の警備部は完全に湊は死んだものとして扱われていた。
七歌たちも昨日の影時間に復活を知ったばかりなので、グループ総帥が倒れて混乱しているグループ内で正確に情報のやり取りが出来ていない事は考えられる。
そうなってくると、裏で動くことが得意な湊はグループと特別課外活動部の状況を認識した上で、最も効果的なタイミングで桐条グループに奇襲を掛けることが予想された。
今の彼はセイヴァーの力で空間移動が出来る。七歌たちはその力の詳細を知らないので、建物内部にも移動出来るのか、移動する距離に制限があるのかも分からない。
それでも、あの青年ならばグループがアイギスたちに牙を剥くこの絶好のチャンスを逃すはずがない。
チドリやラビリスまで連れてきたのは、風花やアイギスの判断なのだろうが、彼が大切に想う少女が三人とも揃っているのは非情に拙い。
そのように思った七歌が顎に手を当てながら自分の想像を話す。
「あー……あのさ。アイギスが狙われるだけでも拙いと思うんだけど、チドリとラビリスまでここにいて狙われたら、もう誰も生かして帰さないって状況になりそうじゃない？」
『……』
七歌の言葉を聞いて一同は黙り込む。
湊の愛は人のそれではなく神の視点に近い。言ってしまえば、途轍もなく〝重い〟のだ。
そして、彼の持っている力は一般人からすれば抗うことの出来ない天災のようなもの。
今までは自分に降りかかる火の粉を払うように力を使っていたので、街に被害が出ないレベルで抑えられていたが、憎しみを抱いてい

る桐条グループがその被害者でもある少女たちに再び危害を加えるとなれば、青年はリミッターを外して力を振るうに違いない。
これはもしかすると、世界平和のために自分たちで死ぬ気でアイギスたちを守る事になるのではと、七歌たちは別の意味で胃が痛くなるのを感じるのだった。

第三百六十三話　想定の範囲内

夜――桐条本邸・離れ

窓の外はすっかり暗くなり、時計の針が十時を過ぎた頃、ベッドに眠っていた美鶴の瞼が動きゆっくりと開いた。

「ん……随分と寝た気がするがまだ外は暗いのか」

小さく伸びをしながら身体を起こし、窓の外を見た美鶴は寝たことで疲労が取れたのか微笑を浮かべながらベッドを出る。

すると、部屋の隅に人が立っていることに気付き、ずっと見ていてくれたのかと申し訳なく思いつつ声を掛けた。

「菊乃、ずっと付いていてくれたのか。今は何時だ？」

「現在の時刻は午後十時を過ぎたくらいです」

「午後十時だと？　私は一昼夜の間、ずっと眠り続けていたのか……」

確かに心身共に疲れ切っていたが、まさか十二時間以上も眠り続けていたとは思わず、美鶴はこの大変なときに自分は何てことをしてしまったのかと自分を責める。

もっとも、桐条家とグループの今後については昨夜の内に話がほとんど纏まっており、子どもである美鶴が出るような場面はないと言っていい。

彼女が自分を責めるのは、父が倒れ、身体の弱い母が当主代行として仕事をしている事があるのだろうが、彼女に非がないことを知っている菊乃は起こさなかったのは自身の判断であると説明した。

「申し訳ありません。何度かお食事の時間に声を掛けようと思ったのですが、お嬢様の顔色が優れなかった事もあり、お疲れのようでしたので声を掛けずにおりました」

「いや、そもそも自分で起きるのが当然なんだ。君のせいではない。それで、私が寝ている間に何かあったか？」

「特にはなにも。ああ、御親族の一部の方が昨夜の遺産配分について高寺さんに聞いておりましたが、皆様の前で説明していたこともあり、内密な相談についてはお断りしていましたね」

やはりというか、ああいった場を設けたにもかかわらず、まだ金の

話をする者がいたと思うと美鶴は身内のことだけに情けなくなる。
美鶴も宗家に生まれただけで特別何かをした訳ではないが、今の裕福な生活を送れて当然だとは考えていない。
自分がこれほど裕福な生活を送れているのは、あくまで祖父や父のおかげであり、世間と比べてとても幸運だという自覚もある。
だが、世の中全ての人間が美鶴のように考えられる訳ではない。
中途半端に特権階級に生まれたばかりに贅沢を当然と考え、今の生活レベルを落とす事が出来ず、先代の蓄えを食い潰すことで生きているような者もいる。
そういった者は自分で生み出す努力をしようとせず、常に他人の力を当てにしてばかりいる。
今回、遺産の分配について聞いた者の中にもそれは混じっていたようで、呆れたように小さく息を吐くと美鶴は気持ちを切り替えて今後について菊乃に確認を取る。
「菊乃、今後の日程についてはどうなっている？　予定が空くのであれば一度寮に戻りたい」
「それはいけません！　こんなにも眠るほどお疲れなのです。皆さんもしばらくは休養が必要でしょうし。お嬢様ももうしばらくお屋敷でゆっくりしていかれるべきです」
美鶴が寮にも戻りたいと言った途端、菊乃はどこか慌てたようにそれはダメだと止める。
すぐに自分の主の身体を心配しているように繕ったが、それも本心ではあるので美鶴は菊乃の僅かな違和感に気付かぬまま相手の提案を受け入れると返す。
「分かった。だが、連絡くらいは入れておこう。昨日も七歌に心配されたからな」
起きてから何だかんだ話しているうちに時間もそれなりに過ぎている。
けれど、まだ誰かしら起きているだろうと、美鶴は寮の備え付けの電話に掛けてみる。
普段ならばすぐに呼び出し音が鳴り始めるのだが、待っていても何

故だか呼び出し状態にならない。
何故だと思いつつ、ならばと真田の携帯に掛けてみるも、こちらはすぐに留守番電話サービスに繋がってしまった。
「……おかしい。電話が通じない。明彦の携帯にも繋がらない」
「時間も時間ですし、入浴中か既に就寝済みなのでは？」
「あり得ない。先に掛けたのはグループだけが使える寮への直通ラインだ。そうそう不通にはならない」
もしも誰かが使っているのであれば、話し中ということで専用の音が鳴る。
たまに携帯代や携帯の充電状態によって、寮の固定電話を女子が使うことがあるので、そういう事ならば別に構わないと美鶴も了承している。
だが、今掛けたときにその専用の音は鳴らず、何故だか呼び出し状態にもならなかった。
巌戸台分寮は対シャドウの前線基地のようなものだ。一般の回線からは切り離されており、そう簡単に機械が故障したりという事もない。
そして、そんな異常事態に仲間に電話が繋がらない状況が重なれば、美鶴も不安が胸に広がって昨日の話を思い出す。
「そういえば、昨日、警備の者たちが寮へ訪れたらしい。私は何も聞かされていなかったが、和邇さんから伝言を聞いて七歌にもそれを確かめた。彼らの目的は幾月の研究データだったようだが、どうやらそれだけではなかったらしい……」
「考えすぎでは？」
「菊乃、高寺さんの言葉を思い出してみろ。今一番避けなければならないのは、グループの暗部が世に広まってしまうことだと言っていた。となれば、組織の外部にあり、それその物が暗部が存在する証拠になる特別課外活動部は最も厄介な存在だろう」
考えれば考えるほど特別課外活動部の存在が如何にグループにとって邪魔か分かってしまう。
元々、桐条グループは公安にも目を付けられ狙われており、裏のパ

イプを使ってなんとか捜査の手が入らないようやり過ごしてきた。
しかし、トップの桐条が倒れた事で、もし公安が動こうとしていてもすぐには対処出来なくなってしまっている。
これで特別課外活動部の存在を嗅ぎつけられでもすれば、グループは今度こそ終わるかも知れない。
菊乃は考えすぎだと言っているが、大人の中で過し、戦いにも身を置いていた美鶴は今まさに事態が動いているのが分かった。
「菊乃、これは想像よりも拙いことになっているかもしれない。七歌からも交戦する可能性が高いとは聞いていたんだ。私はそれを止めるために動くと約束したはずだったというのに、これまで忘れてしまっていた」
七歌の電話を貰ってからすぐに遺産分配の話になった。
その時にちゃんと伝えていれば、こんな事態にはならなかったはずだと美鶴は己の失態を悔やむ。
それを見ていた菊乃は美鶴の傍に寄って、そう悪い事にはならないはずだと落ち着かせようとする。
「お嬢様、落ち着いてください。そんな、警備部の者たちとご友人たちが交戦なんて」
「違う。違うんだ。確かに警備部、いや桐条グループが狙っているのは特別課外活動部なのかもしれない。だが、私が心配しているのはそちらだけじゃない」
警備部と聞くと普通ならば建物を巡回する警備員を想像するだろう。
だが、桐条グループの警備部は、どちらかと言えば公安や特殊部隊に近い存在である。
日本では違法である銃火器を使った訓練も積んでおり、有事の際にはそれらを使って秘密裏に動いている事もあるのだ。
確かにグループの中でも特殊な部隊が仲間たちと戦うのは恐ろしい。どちらも無事では済まないだろうと考えるだけで血の気が引きそうになる。
しかし、自分が恐れているのはそんな生易しいものではないと、美

鶴は真剣な目で菊乃に告げる。
「よく聞け、菊乃。もし、警備部の者たちと特別課外活動部が交戦すれば、その時点で警備部だけでなく桐条グループの人間全ての死が確定する」
「そんな事あるわけが、いくらご友人たちがペルソナを持っていたとしても、一般人である彼らが人を殺すなどっ」
グループの人間全員が死ぬと聞いて、そんな事は流石にあり得ないと菊乃は反論する。
ペルソナの力は強大だ。近代兵器に勝るとも劣らないだけの力を個人で扱えるなど恐ろしくもある。
ただ、それを制御するのはまだ学校に通っている子どもだ。
敵であるストレガたちならばまだしも、美鶴の仲間である彼らにそんな事出来る訳がない事くらいは菊乃も知っていた。
それを聞いた美鶴は静かに頷き、その通りだと相手の言葉を肯定しつつ言葉を続ける。
「勿論、七歌たちが相手ならこんな心配はしない。だが、警備部の狙う者の中にはアイギスも含まれている。なら、当然彼が黙っているはずがないだろう」
「い、いえ、それこそあり得ません。遺体は持ち去られましたが、彼は、有里湊は確かに死んだと、グループの人間もそれを確認しています！」
「……そうか。菊乃、君もそちら側だったのか」
相手のあまりの狼狽ぶりに、美鶴は自分がこんなにも眠ってしまった理由を察し、そこから自分の親友が敵側に付いていた事も理解した。
グループ内で影時間に関わることを聞いていれば、有里湊という〝特Ａ潜在〟の力を持つ青年の脅威についても聞かされている。
曰く、一夜で百を超える屍を築く者だと。
曰く、心臓を潰されようと死なぬ鬼の末裔だと。
曰く、敵対すれば名を絶たされると。
どれも信じがたい話だが、総帥自ら絶対に手を出すなと厳命されれ

ば、それらが事実だと信じてしまう者が出ても不思議ではない。
むしろ、この場合は信じた者の方が危機察知能力が優れていると言えるのだが、敵側にいる自分の親友の事を想って美鶴は一昨日の事を伝える。
「君たちにとっては残念な報せかもしれないが、有里湊……いや、本物の百鬼八雲は既に蘇生してこの世に戻ってきている。幾月たちから我々を救い。あちらの八雲である結城理らを撃退してくれたのは彼だ。恐らく、お母様も既にそれを知っておられる」
英恵も知っていると聞いて、菊乃は屋敷に着いたばかりの彼女の部屋での会話を思い出したのか、湊がいたというのは本当の話だったのかと青くなってゆく。
しかし、桐条宗家の娘に仕える者だけあって、足にしっかりと力を入れてまっすぐ立つと、いくら何でも現実的にあり得ないと美鶴の言葉を否定する。
「ですが、いくら彼が強いと言っても、常識で考えてそんな事出来るはずがっ」
「いいや、出来る。流石に一晩でという訳にはいかないだろうが、彼は命を狙われた状態でも久遠の安寧というＥＰ社の裏の顔の人間を一万人以上殺したんだ。当時より成長した今の彼なら一月も掛からず殺し尽くすだろう」
湊の恐ろしいところは強さだけではない。普通の人間など頭を撃たれるだけで死ぬのだ。重要なのはそこではない。
彼の最も恐ろしいところは、世界最高峰の索敵能力にある。
どんな脳の構造をしているのかは分からないが、湊は人の写真を渡すだけで相手の居場所を数分もかからず見つけ出すのだ。
そこに読心能力も加われば、相手の身内や大切な人の存在まで把握され、その者達の居場所もすぐに見つけ出すことだろう。
ペルソナを使えば簡単に他の国に行ける彼が相手では、国外逃げようと必ず追い付かれて殺される。
シャドウやペルソナという異能と戦う力も持たぬ者が敵対していい相手ではない。

美鶴の言葉を聞いて呆然とした表情で座り込んだ菊乃は、自分たちは彼らを害するつもりはなく、あくまで大勢が助かるために計画したんだと話す。
「た、ただ、拘束するだけだと、殺す気はなく、グループが安定するまでしばらく身を隠して貰うだけだと言っていました。恐らくそれらは事実で、ご友人たちが抵抗しなければ、皆さんが転校する程度の事なのですよ？」
「……無駄だ。アイギスを自分たちの都合で従えようとした時点で敵対行動になる。お母様やお母様の従者は皆あちら側だろう。昨日、和邇さんが警備部を撃退したという事は、彼の基準からすると敵対行動を取ったことになっているに違いない。未遂では警告で済ませたが、次に動けば武装の有無にかかわらず彼は自ら排除行動に移るだろう」
理不尽。一人の人間の価値観で善悪が決められるなど許されることではない。
しかし、自分たちも力で従えようとしたのだから、それが返ってきただけと言われれば反論できない。
それでも、菊乃は迫り来る恐怖に震えながらも、自分にも信じた正義や貫きたい信念があるのだと叫ぶ。
「わ、私はっ!!　お嬢様をこれ以上危険な目に遭わせたくなくて、だから、もう誰も戦わずに済むよう高寺さんたちの計画に乗ったんです！　皆さんには怖い思いをさせるかもしれませんが、でも、戦う理由がないならもう止めて良いじゃないですか！　お父君も倒れられ、有里湊も一度は死んだ。なのに、どうしてまだ戦おうとするんですかっ?!」
元々、子どもたちに戦う義務などない。
目標を失い。大切な者が倒れ。自分自身もまた傷ついているのに、これ以上戦う理由がどこにあるというのか。
親友であり、心から尊敬する主を想うからこそ、こんな勝手な真似をした少女は揺れる瞳で問う。
それを受け止めた美鶴は、こんなにも自分を想ってくれる者がいることを嬉しく思いながら、相手の正面に屈んで肩に手を置きながら静

かに答えた。
「……君の気持ちは嬉しい。だが、答えは簡単だ。まだ何も終わっていないからだ」
「お嬢様はいつも勝手です。桐条の罪だからと、自分が償うべき事だからと、当時子どもでしかなかった貴女に背負うべき罪なんて一つもないじゃないですか。お嬢様には分かりますか？　命を失う危険のある場所へ大切な人を送る者の気持ちが、自分に何も出来ない者の悔しさが」
美鶴はずっと前ばかりを見ていた。
明確な目標などなく、ただ父の役に立ちたいという思いだけで、どこまでも進もうとしていくのだ。
周りで見ている者にすれば、危なっかしくてしょうがない。
湊のように全てを捻伏せるだけの力があればまだ良い。
けれど、美鶴はほとんど見切り発車で、周りの者の心配する声など無視して進んで行ってしまう。
「有里湊が死んで、さらに、お父君が倒れたと聞いた時、私は心臓が凍ったんじゃないかと思うほど血の気が引いて寒くなりました。そして、お嬢様の無事を聞いたとき、もうこれ以上、お嬢様をそんな場所にはいさせられない。何としてでも止めようと思いました」
最高の適性値を持つ青年でも敵の罠に掛かって死んでしまった。
それから一月ほどで今度は桐条まで倒れたとなれば、次は美鶴が同じような目に遭うかもしれないと不安に思っても無理はない。
人の話を聞かないのであれば、仲間全員を拘束して活動出来なくすればいい。
仲間が出来た事で一人の力の小ささを知った今ならば、それで止まってくれるはずだった。
どうして今、このタイミングで戻ってきたのか。菊乃は心の中で湊に恨み言を吐く。
すると、黙り込んで俯いた彼女に向けて、美鶴がこんな話を知っているかと話し始めた。
「……知っているか、菊乃。八雲が被験体にされたのは私の身代わり

なんだ。確かに彼は最初に確認された天然のペルソナ獲得者だ。だが、半年以上意識不明でいる間に私もペルソナを得た。ペルソナの研究をするというのなら、意識不明で研究に使えない彼より、力で劣っても研究を手伝える私を選ぶべきだろう?」
「お嬢様は桐条家の跡継ぎです。立場を考えれば、何も持たぬ少年を使って当然かと」
「そこだ。どうして人類の危機に立場を考える必要がある? 使えるものは全て使い。早急に対策に当たるべきだろう。だが、お父様や当時のエルゴ研の人間は間違った選択をしてしまったんだ」
世界の危機に社会的な地位や立場など考慮する必要はない。
出し惜しみをして世界が滅べば地位など無意味になるのだ。
ならば、失敗を考えて戦力的な保険を残しつつ、後は出来る限り最善策を取るのが正解だ。
「お嬢様を大切に想うことが間違っていたと?」
「フッ、人類全体から見れば小さな犠牲だろ? 他人に強制しておきながら、自分が選ばれれば拒否するなど許されると思うか?」
菊乃の言葉は全て彼女に返ってゆく。
今動いているグループの人間は、特別課外活動部という最小の犠牲で、就労人口の二パーセントを担うグループの人間とその家族を守ろうとしている。
現実世界での考え方としては間違っていないが、もし、影時間を知っていてそう動いているのなら、それは影時間について不勉強というほかない。
美鶴は子どもにそれが悪い事だと教えるように、諭すような口調で菊乃に告げた。
「今回の件も一緒だ。君たちは桐条家やグループの人間を守るために動いているんだろう。だが、八雲はアイギスたちを守るという優先順位はあるが、基本的な行動の指針として力を持たぬ人々を守るというものがある。人類の守護者への敵対行為となれば、邪魔な存在は滅ぼされても文句は言えない。何せ、〝人類を守るため〟なのだから」
グループを守るために子どもたちを犠牲にしようとするなら、世界

のためにグループが犠牲になることを容認しなければならない。
湊も七歌たちも、個人単位で優先する人間はいるが、彼らの行動は世界を救うことに向かっている。
それを邪魔するなら世界のために消されても文句は言えないだろう。
美鶴の言葉を聞いて自分も視野が狭くなっていた事に気付いたのか、菊乃はどこか諦めたような乾いた笑い声を漏らした。
そうして、しばらく経って菊乃もようやく立ち上がれるようになった頃、着替えを済ませていた美鶴は菊乃に高寺の居場所を尋ねた。
「菊乃、すぐに高寺さんの所へ案内してくれ。今ならまだ止められるんだろ」
「……ダメです。もう止められません。ご友人方は周囲への被害などを考えてグループが影時間に襲撃を掛けると考えているはず。ですが、影時間はある意味で彼らのホームグラウンド。全力で戦えるようになるのは彼らも同じ。だからこそ、グループの人間はその前に襲撃を掛けることにしたんです」
影時間になれば適性を持たぬ人間は象徴化する。象徴化している間は周囲で何が起ころうと分からない。
そうなれば七歌たちはペルソナを使うはずなので、桐条グループはそうさせないための策を練った。
人間とは慣れる生き物で、もしここ二、三日に何度もヘリが飛ぶところを見ていればどう思うだろう。
恐らく、大半の人間は〝またか〟とヘリの存在を日常の一部と捉え始めるはずだ。
そして、出来る限り人の目を避けるため、工事中のビルを使った目隠しで目撃者を減らすと共に、巌戸台分寮のすぐ傍に自分たちの拠点を作る事に成功した。
「では、警備部の者たちはっ」
「はい。影時間開始三十分前、後二分でヘリも使った突入作戦に入ります」
話を聞いた美鶴は菊乃に高寺の居場所を聞いてすぐに部屋を出て

走り始める。
目指すはこの離れの一階奥にある警備部たちの活動拠点。
どうやら今回の件には経営権を相続できなかった親族も関わっているらしい。
グループだけではなく、分家と言えど桐条家の人間まで関わっているとなれば、復讐という大義名分を持つ彼相手では事態は余計に悪化したと言っていい。
美鶴の後を追って菊乃もついて来ているが、高寺たちのいる活動拠点の部屋は、美鶴がいた部屋を出てから二分以内に着けるような距離ではない。
案の定、フロアを一つ降りたところで、菊乃の持っていた端末に特定パターンの振動という形で作戦開始の報せが届いた。
「お嬢様！」
「諦めるな！　すぐに止めさせればまだ！」
作戦開始と同時に突入している訳ではないだろう。
あくまで動き始めろという合図を送っただけ。
寮に突入する前に作戦を中止させれば、何とか未遂として見逃して貰えるかもしれない。
一階に到着して部屋を目指しながら美鶴がそう言えば、直後、窓の外に強烈な光が現われ屋敷の中も照らされる。
一体何だと慌てて美鶴と菊乃が窓に駆け寄り外を見れば、桐条家の敷地内で何度も蛍火色の光が弾け、その度にヘリやジープが姿を現わしていた。
「何ですか、あれは……」
「恐らく、有里が用意していた戦力だろう。君たちが手を出したから、報復として戦力を転送してきたんだ」
見ている間に戦闘ヘリが飛び上がり、ミサイルや機関銃を屋敷に向けた状態で旋回を始める。
そして、地上では戦闘服を着込んだ者たちがチームを作って散開し、その後ろから悠々とジープが屋敷に向けて近付いて来た。
平和な日本で戦闘ヘリや戦闘部隊がいれば目立つだろうが、ここは

都会から離れた土地であり、桐条の敷地から隣の屋敷までは車で移動する距離だ。
そして、その屋敷に住んでいるのは桐条家の分家の者なので、ここで何かが起きようと影時間に関わることだと認識されてしまうのがオチである。
桐条グループの警備部は入念な準備をして寮へ突撃したようだが、田舎にあるせいで天然で似たような状況にある桐条家の方が攻略され易い。
攻められて始めてそれを理解した美鶴は、大きなライトを積んだジープが屋敷にそれを向けるのを見ながら、相手の次の行動を待った。
すると、戦闘部隊たちは屋敷を包囲した状態で止まり、ヘリとジープも一定の距離を開けて止まったタイミングで拡声器を使った女性の声が届く。
《我々は〝蠍の心臓〟。現在、その屋敷は包囲されており、こちらにはシェルターごと破壊するだけの用意がある。無駄な抵抗はやめ、大人しく出てきてもらおう。こちらの指示に従っている限り、我々は諸君らを害することはない》
これだけの戦力を持ってきている時点で脅しているような物だ。
そんな相手が何を言っても信じられるはずはないのだが、突然の騒ぎに高寺たちも廊下に出てきて、相手の次の言葉を聞いて顔を青くする。
《尚、これらは諸君らが今現在巌戸台で行なっている無法行為に対する報復である。交渉は一切受け付けない。屋敷の広さを考慮し、十分の時間をやる。それまでに使用人を含めた全員が出てくるように。もし、時間を過ぎて屋敷に残っている者がいれば、敵対の意志ありとしてその場で処理する》
これは脅しではないとばかりに歩兵の一人が空に向けて銃を撃った。
湊やアイギスが銃を使うので慣れてきていると思っていたが、戦闘部隊に屋敷を包囲されている状態だとやはり感覚が違うようで、美鶴

だけでなく他の者たちも動揺している。
ただ、この状況でもまだ攻撃してこないということは、相手が言っている事を守る可能性が高いと判断していい。
高寺の傍にいる分家の人間が、警備部に何とかしろと言っていたり、影時間まで時間を稼げば指輪を持っている自分たちは逃げられると言っているのを聞いていれば、先ほどの凜とした女性の声とは別の少女の声が聞こえて来た。
《ミツル、ターニャです。ワタシたちは影時間の対策を施してここに来てマス。アナタがペルソナを出しても、こちらにはペルソナにダメージを与える武器がありマス。勿論、ヘリやジープも影時間に対応しているので、時間稼ぎは無駄デスね。ミナトからミツルのマーチ(お母さん)には絶対手荒な事はするなと言われてマスから、ここは大人しく従ってください》
どうしてここで留学生だったターニャの声がするのかと美鶴は驚く。
けれど、彼女の伯母は湊が中東で世話になった人物だった事を思い出し、外にいる人間が治安の悪い中東で活動している者たちであると察した。
彼女たちは湊から影時間の事を聞いてここにいる。そして、英恵に手荒な事はするなという命令も実に湊らしいと思えるため、彼女たちが湊の指揮下に入っている信憑性が増した。
高寺たちは何故湊の名前が出てくるんだと混乱しているようだが、そう時間は残されていないため、菊乃に頷いて返すと美鶴たちはターニャたちの言葉に従うことにした。

第三百六十四話　状況開始

夜――巌戸台

秋の冷たい風が頬を撫でるのを感じながら、その者達は合図を待ってじっと待機していた。

自分たちは人を守るために警備部に配属された。それが与えられた仕事はこれまで桐条の尻拭いのために戦ってくれていた子どもたちの制圧。

無論、命令の意味は分かっている。トップが倒れた事で揺れているグループに、外部の悪意が近付いて来ているのは感じ取っていた。

これで過去のスキャンダルまで世に広まってしまえば、グループに関わる者たちの生活に大きな影響が出てしまい。彼らの暮らしを守っていけなくなる。

その彼らにはここに集まっている者たちも含まれる。

婚約した者、子どもが生まれた者、子どもが成人を迎える者、孫がいる者だっている。

そんな特別なイベントを迎えた者でなくても、暮らしていくには金がいるのだ。

わざわざ給料を減らして貧しい生活を送りたい者など居はしない。

ならば、グループにとって最も厄介な存在を排除し、外部から迫る悪意の矛先を向ける場所をなくせばいい。

「……時間だ。状況開始」

端末に届いた作戦実行の合図を受け、集まっていた者たちは行動し始める。

いくつかのグループに分かれ、正面玄関と裏口に回り込む。

さらに、空からヘリを使って寮の屋上からも同時に進入を試みる作戦だ。

相手は子ども。ならば、当然グループは周囲から怪しまれない影時間に動くと思っているはず。

そんな予想を裏切るように戦闘服に身を包んだ者たちは巌戸台分寮への進行を始めた。

――巌戸台分寮

桐条グループの警備部が行動を始めた頃、寮の中ではメンバーたちが一階のロビーに集まっていた。

最初は作戦室にいるかという話になったが、広さや見通しを考えるとロビーの方が戦い易い。

また、警備部は幾月の残した研究データの回収に失敗しているので、今回のどさくさに紛れて持っていこうとするチームがあるはずと考え、そういう事なら敵が少しでも人数をそちらに割いている間に残りを叩こうという話でまとまった。

美鶴を除く特別課外活動部のメンバーに加え、今はチドリとラビリスとコロマルもいる。

非戦闘員の風花以外は全員が武器を持っており、戦う準備は万全だ。

ただ、問題があるとすればここにいるメンバーは武器を使った対人戦の経験が浅いことだろう。

湊やストレガのように命を狙ってくるなら必死に抵抗しようと出来る。

けれど、今回の敵は桐条グループ。理由があって攻め込んでくるのだろうが、自分たちを殺すつもりはないのだろう。

それを分かっている状態で必死になれるかどうかは分からない。

七歌がそんな不安を覚えていると、ペルソナで索敵していた風花に真田が尋ねた。

「連中の状況は？」

「正面と裏口に徐々に近付いてきています。完全に包囲されていますね」

「……身内同士でやってる場合じゃないでしょうに」

相手がもうすぐ突入してきそうだと風花が言えば、チドリが何で桐条グループの者同士で争っているんだと呆れ気味に溢す。

チドリやラビリスは狙われるかもしれないからと来ているが、今も立場は外部協力員であってグループの組織図に組み込まれるつもり

はない。
だからこそ、トップが倒れたばかりで、こんな内輪揉めをしている桐条グループは真性の馬鹿だと本気で呆れている。
自分が敵ならこんなチャンスは逃すまいと確実に茶々を入れに行く。
もっとも、幾月たちは桐条グループと違って湊と綾時の存在を知っている。
姿が見えないからといって、どこに潜んでいるかも分からない相手を警戒すれば、こんなチャンスに見えるときこそ罠を疑ってしまうに違いない。
そこを思えばここにいない青年たちにも僅かに感謝しようと思えるが、影時間まであと僅かだと皆の緊張感が高まっているとき、外から変な音が聞こえている事に順平が気付いた。
「なぁ、なんかすっげぇ五月蝿い変な音しねぇ？」
「ヘリコプターですね。朝から沢山飛んでましたよ」
何かのイベントでもやっているのか、朝から何台も飛んでいるのを見たと天田が答える。
こんな時間でもまだ飛んでいるなど、安眠妨害で訴えられそうなものだが、通り過ぎれば小さくなっていくはずのヘリの音が何故だか余計に大きく聞こえ始める。
いくら何でもおかしい。建物の中にいながら騒音で互いの声が聞こえづらくなっているレベルだ。
異常事態にこれは拙いのではと順平も声をあげる。
「ちょ、なんかメッチャ音これ近くねぇかっ!?」
「っ、皆さん大変です！　ヘリが屋上に！」
異変に気付いた風花がすぐにヘリの場所を探ると、なんとヘリは寮の屋上へ着陸しようとしていた。
まだ影時間にもなっていないが、こんな事をしている者など現在寮を取り囲んでいる者たちの仲間しかいない。
となれば、相手は完全に影時間前に始めるつもりなのだと分かり、七歌が即座に指示を飛ばした。

「全員警戒して！　敵は影時間前に始めるつもりだよ！」
七歌が言い終わるかどうかのタイミングで上からガラスの割れる音が響く。
続くように玄関と裏口の扉が音を立てて壊され、続々と戦闘服に身を包み、携行型の機関銃を持った者たちが入ってきた。
丈夫な服だけでなく頭部もヘルメットとバイザーで守っており、装備を考えるとかなり本気で戦闘の意志があると見て取れる。
先手を打たれては拙いからとアイギスはゴム弾を装填した銃を構えて撃った。
「先手必勝であります！」
「うぐっ」
銃弾を腕に喰らった男が呻きながら撃たれた箇所を押さえる。
ゴム弾は殺傷能力その物は通常の弾より弱いが、打ち身や骨折くらいは普通にあり得る威力を持つ。
腕にそれを喰らえばすぐには復帰出来なくなるが、味方がやられたことで本気になったのか警備部の者たちは腰に付けた手榴弾を投げ込んできた。
投げ込まれた手榴弾を七歌やアイギスが返そうとするも、空中で白い煙を発生させ七歌たちはその煙に包まれる。
「っ、皆吸っちゃダメ！」
すぐに服の襟を引っ張って口に当てるが、こんな物でガスを防げるとは思っていない。
それでも、敵が麻酔効果を持つガスを使ってきた以上、対策済みの敵がここで攻めてこない訳がない。
口と鼻を服で塞ぎつつ、片手で薙刀を持ったまま警戒していれば、周囲で動く気配がありやはり来たかと七歌も構える。
白い煙の向こうから飛んできた蹴りを躱し、片手という不安定な状態で薙刀を振るって反撃する。
近くにいた荒垣も対人戦を想定して用意した棍棒で殴り返すも、別の方向から銃で殴りかかってくる者がいた事で、そちらの対応に追われて深追いできなくなる。

「きゃあっ!?」
「ゆかりっ!!」
少し離れたゆかりの声が聞こえてそちらに向かおうとする。
しかし、目の前から腕が迫っていた事で追えず、続けて別の方向から天田の声も聞こえて来た。
「うわぁっ」
「天田！　クソがっ!!」
怒ったように荒垣が敵に向けて棍棒を振るって殴りつけるが、未だに白い煙で視界が悪く状況を把握できない。
誰が無事なのか、やられた者たちはどういう状況なのか。
不安ばかりが募っていくが、その時、煙が晴れ始めたロビーに銃声が響く。
「無駄な抵抗をやめろ！　既に君たちの仲間をこちらで確保している！」
煙が晴れて声のした方を見れば、確かにゆかりと天田が手に拘束具を付けられて屈強な男らに捕らえられていた。
他の者たちも、ユノの中にいる風花やアイギスたち姉妹、そしてチドリと七歌以外は全員が立っているのも辛そうにしている。
どうやらガスの効果で身体に力が入りづらくなっているらしい。
そうして、人質を取られて七歌たちが動けずにいれば、昨日ここを訪れた警備部で隊長を務める男が口を開いた。
「大人しくしたまえ。無駄な抵抗だ。我々は君たちを連行する命令を受けているだけで、余計な危害を加えるつもりはない」
「……こんな事してる人間を信用出来る訳ないでしょ」
「とはいえ仲間がこちらの手にある以上、抵抗する事はできまい」
未だ武器を手放さずにいる七歌に対し、冷たい表情でそう話す警備部の男の言葉は事実だ。
無事なのは元対シャドウ兵装の姉妹、龍の末裔である七歌、鬼の心臓を移植されたチドリのみ。
他の者たちは意識はあるが身体を支えて立っているのがやっとであり、周囲の警備部から銃を向けられている。

人質を取られた上でこの状況だ。ペルソナを召喚したとしてもゆかりと天田を安全に奪い返せるとは思えない。
これが子ども相手にやる事かとも思うが、それだけ相手も自分たちを警戒して万全を期してきたのだと桐条グループの本気を思い知らされる。
「よし。一階制圧、優先目標アルファの総員確認。また優先目標ベータとガンマも揃っている。全員拘束後、影時間の内に撤収する。資料の回収を急げ」
周りを囲んで銃を向けたまま数名の隊員が腕の拘束具を持って近付いてくると、順番にそれを取り付けて回る。
流石にチドリやアイギスも状況が悪すぎると判断したのか。抵抗する事なくそれらを受け入れた。
影時間に入っても上の方では未だに音がしており、どうやら幾月の残した資料を回収しているらしい。
それが終わり次第一緒に運ばれるようだが、武器と召喚器を取り上げられ、ロビーの中央に座らされた七歌は、出来る限りの情報を得ようと敵に話しかけた。
「これ、美鶴さんは知ってるの？」
「お嬢様は関係ない。だが、この作戦はお嬢様を救うためのものでもある」
七歌たちも桐条グループの動機についてはある程度予測している。
トップが倒れた事で桐条は非常に不安定な状態になっている。
それはこれまで通りに経営が進められるかというだけでなく、社会に対する影響力や様々な勢力との繋がりも含めてだ。
十年前のシャドウ研究だけでなく、その後の人口ペルソナ使いを生み出す人体実験も含め、これまで桐条が隠蔽できていたのは組織に力があったからだ。
けれど、全てを取り仕切っていた桐条武治が倒れた事で、グループ内部が揺れているのは美鶴たち桐条家を見ているだけでも分かる。
今回のこれも、そういった外部からの圧力を受ける前に、自分たちの暗部を内々に処理しようという事なのだろう。

ここまでは確かにグループが優勢だ。備えていたというのに七歌たちは何も出来ずに制圧されてしまった。
だが、全てが自分たちの思い通りになると思ったら大間違いである。
影時間に対応したものなのか、時計を見ている隊長の男にチドリが冷め切った表情で告げた。
「……あんたたち、私たち三人に手を出した以上無事では済まないわよ」
「反社会勢力……いや、時代遅れの極道に何が出来ると言うんだ。現に君たちは影時間の中で捕らえられ、桔梗組の者たちは一切対処出来ていない。仮にそれに気付き対処しようにも警察や公安が動けば身動きできなくなるだろう」
男はチドリが負け惜しみを言っていると思ったのか、とても冷たい目で見下ろしながら淡々と話す。
しかし、その言葉を聞いた特別課外活動部やチドリたちは、やはり敵が湊の存在に気付いていないのだと確信する。
それも当然だろう。何せ、彼の復活を知っていればこんな自殺行為に走るはずがないのだから。
相手側が情報を持っていないと分かった者たちは、他力本願だと分かっていてもここは動かない事が正解だと思って回復に努める。
特殊な身体をしている者たちとペルソナの中にいた風花は無事だが、それ以外の者たちは薬の影響が抜けていない。
もし、彼が来たときに逃げろと言われても動けなければ迷惑を掛ける事になる。
だから、今はただじっとチャンスを待つべきだと待っていた時、上の階から激しい物音が聞こえ、隊長の持っていた通信機から悲鳴のような声が届いた。
《敵襲っ、敵襲でっ……うわぁぁぁぁぁっ!?》
「っ、おい！　どうした!?　おい!!」
焦ったように男は通信機に話しかけるが応答はない。
それを聞いて他の隊員たちが警戒を強め、隊長の男も階段の方へと

銃を構えて待機する。
すると、上から物音と共に大勢の悲鳴が聞こえ、一階と二階の間にある階段の踊り場に戦闘服に身を包んだ警備部の人間が落ちてきた。
警備部の人間はただのボディガードではなく、特殊部隊として活動出来るよう訓練を積んでいる。
そんな人間を簡単に昏倒させる事が可能で、尚且つ七歌たちに味方する人間など警備部の者たちは知らない。
一体誰が現われたのか。他の出入り口からの強襲を考え、入口と裏口、そして階段の方へと銃口が向けられると、上の階から黒いビジネススーツに身を包んだ女性が降りてきた。
右肩にギターケースを担ぎつつハンドガンを持ち、左手には峰に血が付いた大きな鉈を持っているその女性は、警備部が昨日会ったばかりの和邇八尋だった。
まさか、ここで英恵の従者である和邇が現われるとは誰も思っておらず、それぞれが驚愕や動揺に包まれていると、階段の踊り場からロビーにいる者たちを見下ろしている和邇が口を開いた。
「忠告の意味が理解できなかったようですね」
「……全てグループのためだ。君も奥様に仕える者なら、何が主のためか、どうするのが正しいか分かるだろう！」
警備部だって本当は子ども相手にこんな事はしたくない。
けれど、そうしなければ守れない者がある。多くの人間が不幸になってしまうのだ。
同じ側に立つべきはずの相手が、どうしてここで邪魔をするのか。和邇の行動が理解できない男が叫べば、ハンドガンをギターケースに仕舞った和邇が、傍に倒れている男を片手で掴んで持ち上げながら答えた。
「最後のチャンスを無駄にしたな」
言い終わると同時に和邇は持ち上げた男を階下の隊員に向けて投げつける。
意識がない状態で勢いよく床にぶつかれば死ぬ危険があるため、軌道上にいた隊員は銃を手放して受け止める体勢に入る。

だが、そうして視線がそちらに集中していれば、階段の上から飛び降りた和邇が隙だらけの隊員の側頭部を鉈の峰で強打した。
いくらヘルメットを被っていようと金属の塊で殴られれば、ヘルメットは砕けて頭部にもダメージを負う。
落ちてきた隊員と共に吹き飛びながら倒れ、他の隊員が唖然としながらも引き金を引こうとすると、ギターケースから大きな銃を取り出し終えていた和邇が先に引き金を引く。
ドンッ、と腹の底に響く音がしたかと思えば、正面にいた女性隊員が身体をくの字に曲げながら他の隊員に向かって吹き飛ぶ。
「ショットガンっ!?」
「室内だぞっ」
あまりの威力に何の銃かとみれば、まさかこんな場所で使う馬鹿がいるとは思わないショットガンだった。
残る隊員たちがこれ以上好きにさせてたまるかと和邇に向けて引き金を引く。
数メートルの距離で、様々な方向から放たれた銃弾の雨だ。
流石に躱す事は出来ないだろうと、引き金を引いたままオートで撃ち続ければ、和邇は鉈を隊員の銃に向けて投げると同時にギターケースを盾のように構えた。
鉈が飛んできた事で軌道上にいた隊員は慌てて回避。
そして、和邇に向けて飛んだ銃弾は全てギターケースに弾かれる。
ならばと高さや方向を変えて撃とうとすれば、今度は和邇の方からマシンガンの弾が放たれ、隊員らの銃を的確に撃ち抜き破壊してゆく。
いくら実戦経験があると言っても華奢な女一人。従者として普段は主の傍にいるだけの相手ならば、日々訓練を積んでる自分たちで簡単に制圧できる。
そう考えていた隊長の男は、敵の武器を破壊した事で自由に動けるようになった和邇が、格闘戦で次々に隊員たちを倒してゆく光景が信じられなかった。
再び拾った鉈の峰で殴られ昏倒する者、肘を鳩尾に喰らって地に伏

せる者、喉を蹴られ血の泡を吐きながら倒れる者。
集団で多方向から攻めているのに攻撃が当たらない。
それ以前に、相手には特別課外活動部のメンバーたちという人質が見えていないのかと思ってしまう。
「く、くるなっ……くるなぁぁぁぁぁっ!?」
「馬鹿、やめろ!!」
「七歌っ!?」
次々と味方が倒されていくのを見て恐怖を覚えた隊員が錯乱し、近くにいた人質の一人である七歌に向けてナイフを振り下ろそうとする。
それを見た隊長の男は制止の声を掛け、ゆかりが腰を浮かせて守りに行こうとする。
もっとも、隊長の男は距離があり、ゆかりもまだガスの影響が抜けておらず助けに入れない。
他の者たちも自由に動かぬ身体を無理矢理に動かしてでも助けようとするも、間に合わずにナイフが七歌の頭部に迫ったとき、急激に場の気温が下がったと思えば錯乱した男がナイフを取り落とし白目を剥いて倒れた。
一体何が、そう思って周囲を見渡せば、隊長を除く全ての隊員たちは意識を失い。倒れる隊員たちの傍に〝蒼い瞳〟をした和邇が立っていた。
「……さて、これで大方片付きましたね。では、私は隊員たちの回収に行ってくるので、残してあげた貴方は皆さんの拘束を解いておいてください。命令に従わないのであれば隊員たちを殺して回ります。一応、まだ全員生きているので判断はご自由にどうぞ」
心底面倒そうに呟く和邇だが、彼女は自分の持っていた武器をギターケースに仕舞い直すと、ポケットから何やら宝石のような物を出して握り砕いた。
握り砕いた宝石から暖かな白い光が放出され、ガスの影響で身体の自由が効かなくなっていた者たちを包んでゆく。
そして、光が治まると先ほどまでのだるさが消えた事で、どうやら

タルタロスなどで拾う事が出来るアイテムを使ったのだとメンバーたちは察した。
治療を終えた彼女はそのまま上で寝ている隊員たち回収しに階段を上がっていき、彼女の姿が見えなくなった事で自由になった隊長の男は、悔しそうにしながら七歌たちの拘束具を解いて回った。
＊＊＊
自由になった七歌たちは意識を失っている者や、怪我で動けなくなっている隊員たちの運搬を手伝った。
和邇は外の道路にコンテナを一つ用意しており、無造作に隊員たちを放り込んでいく。
硬い金属の床に身体をぶつけて痛がる者もいるが、確かに隊員たちは全員生きているようで隊長の男は安堵の息を吐いていた。
だが、ここに来たときにあったはずのヘリや車がなくなっており、代わりに車がなければ運べないようなコンテナがある事を不思議そうに見ている。
七歌たちは先ほど彼女の瞳を見て、大凡の事は察しているが隊員たちを全員運び入れるまでは質問しなかった。
そうして、全員を運び終えると和邇は隊長の男にも中に入るように告げる。
「では、あなた方を桐条家に運びます。中に入りなさい」
「……我々はどうなる？」
コンテナの入口で立ち止まると隊長の男は振り返って和邇に尋ねた。
確かに隊員たちは全員生きている。しかし、手足が折れている者や、頭から血を流している者もいる。
すぐに手当てしなければ拙い者もいる様子なので、もしも可能ならば治療の手配をさせて欲しいと思ったのだろう。
けれど、和邇はその質問には答えず、男の腹部に膝蹴りを放って無理矢理にコンテナの中に放り込むと、扉を閉めてしっかりと外からロックを掛けた。
自分たちが理不尽に襲われた事で怒りを持っていた者たちも、流石

に先ほどの光景は不憫に思えたのか苦笑している。
ただ、どうやらこれから和邇は桐条家にコンテナを運ぶようなので、その前に聞いておきたい事があるとアイギスが声を掛けた。
「あの……八雲さん、なんですよね？」
和邇はその言葉に何も返さず、左手の上にカードを出現させるとそれを握り砕く。
カードが砕けると同時に皆の頭上に白銀の天使が現われ、背中の羽根を蛍火色の光を纏った剣らしき物に変化させるとコンテナと和邇をそれで囲う。
現われた存在を見てやはりと全員が確信を得ていれば、光が一層眩くなって弾け、その場から和邇とコンテナが消えていた。

影時間――桐条本邸

美鶴たちが蠍の心臓の指示通りに外に出ていれば、隊員たちは屋敷に隠れている者がいないか探して回った。
勝手な事をするなと怒った分家の者もいたが、大柄な男に腹を殴られればすぐに大人しくなった。
屋敷には高寺派と思われる警備部の者たちも待機していたようだが、流石に戦闘ヘリや大型のマシンガンを持ってきている本物の軍人相手に対抗出来るはずもなく、今は高寺や分家の者らと一緒に大人しくしている。
そして、ターニャが言っていた通り、ターニャが先導して出てきた英恵とその従者たちも外で待っていれば、時刻が零時を回って影時間が訪れた。
屋敷で働いている使用人たちは、全員が全員影時間について知らされている訳ではない。
故に、ほとんどの者たちは象徴化してしまったが、数名の使用人と昨夜の遺産分配の話し合いに出ていた者と警備部の人間たちは指輪を付けていたのか象徴化を免れていた。
「……お嬢様、やはり相手の言っていた事は事実だったようですね」

「ああ。隊員だけでなく兵器類も健在のようだ」
菊乃と共に相手を観察していた美鶴は、相手側の隊員が全員象徴化していない事に気付いた。
さらに、今も頭上で旋回しているヘリだけでなく、ライトで屋敷を照らしているジープなどもエンジンが動いているようで、影時間に対応しているのは事実らしい。
影時間になればチャンスがあると考えていた高寺たちも、先ほどの蠍の心臓側の言葉がハッタリでなかったと分かると、目に見えて分かるほど冷静さを欠いている。
自分たちがグループのためだと思ってやった事が、こんな形で返ってくるとは思っていなかったのだろう。
完全に蚊帳の外にいたせいで落ち着いて周りを見る事が出来ている美鶴は、離れた場所でターニャが英恵に笑って話しかけているのを見ながら、この後はどうなるのだろうかとぼんやり考える。
相手が湊の用意した戦力であれば、湊も巌戸台分寮を襲った者たちを排除してから合流してくるはずだが、一向にその気配がないことで状況が読めなくなってくる。
傍にいる菊乃は自分が裏切っていたという負い目もあるのか、これで本当に湊が現われて美鶴も含めたグループの関係者全員が殺される事態になる事を想像して顔色が悪くなっていた。
主のためを思っての行動が、逆に主を死へ追い込む事になれば誰だって後悔する。
今はまだ何も動きがないが、次に変化があった時には今後の流れも分かるだろうと思っていたとき、庭園の方で蛍火色の強烈な光が弾けコンテナと共に白銀の天使が現われた。
美鶴はそれを知っていたが、高寺派の者たちはやはり知らなかったようで、強大な力を持つ天使を見て腰を抜かしている。
そんな様子を横目に美鶴が天使の方へ視線を向けた時、その天使の下にいた人間の姿を見て、どうして青年ではない者が彼のペルソナと共にいるんだと疑問に思った。
すると、扉の開いたコンテナを天使に持ち上げさせ、中にいた者た

ちを庭園に転がしながら女性が一歩ずつ美鶴や高寺の方へとやってくる。
ゆっくりと近付いてくるだけだというのに、言い様のない重圧を感じて高寺派の者たちは身体を震わし始める。
相手の事は知っている。確かにどこか近寄りがたい雰囲気はあったが、ボディガードとしての役割も与えられた英恵の従者でしかなかったはず。
だというのに、今の相手は得体の知れない気配を放っている。
目を閉じてその場に蹲りたいというのに目が離せない。本当に人間なのか。ペルソナやシャドウどころではない化け物なのではないか。
そう思って歯をガチガチと鳴らしながら震えていると、近付いてくる女性が言葉を発すると同時に輪郭が徐々にぼやけ始めた。
「さて……余計な事はするなと忠告したはずですが、どうやら聞き届けられなかったようですね」
肩ほどの長さだった髪が伸びていき、服装もレディースーツから男性物のカジュアルな服に変わってゆく。
地面に着きそうなほど長い髪、不思議な光沢を持つ黒いマフラー、そして、腰の左右に下げられた黒と白の日本刀。
ぼやけていた輪郭がハッキリとすれば女性の姿はどこにも無く。
「あの時、ちゃんと言ったはずですよ。有里湊は〝ここにいる〟と」
不敵に嗤う蒼い瞳の青年がそこにいた。

第三百六十五話　制裁

影時間――桐条本邸

民間軍事会社〝蠍の心臓〟の兵たちに屋敷を囲まれ、本邸と離れにいた者たち全員が外に出ていた。

影時間を迎えた事で桐条の裏の顔を知らぬ使用人たちは象徴化してしまったが、昨夜の遺言開封に出ていた者や高寺派として動いていた警備部の者たちは全員が指輪を付けているのか、警戒しながらも影時間を体感している。

そうして、桐条側が勝手な動きをしないよう監視しながらも、蠍の心臓側が特に何も動きを見せず時間が過ぎていけば、広い庭園の方で蛍火色の光が弾けて白銀の天使が現われた。

数十メートルは離れているというのに、実際にペルソナやシャドウを見たことがなかったからか、桐条の分家筋の者たちは取り乱して警備部に自分たちを守れと命令する。

もっとも、その天使が持ち上げたコンテナから実働部隊として厳戸台分寮を襲撃していた警備部の者たちが放り出され、手足がおかしな方向に曲がっていたりヘルメットが砕かれ頭部から血が流れているのを見て彼らも動きを止めた。

だが、何よりもそんな彼らの視線を集めていたのは、天使を背後に控えさせながら悠々と歩いて近付いてくる女性だ。

「さて……余計な事はするなと忠告したはずですが、どうやら聞き届けられなかったようですね」

屋敷の方へと歩いて近付く女性の輪郭がぼやけ、その姿が変化してゆく。

艶やかな黒髪は徐々に青みがかって地面に着きそうなほど長く伸び、黒いレディースーツはカジュアルな男性物に、美鶴よりも低いと思われた背丈はヒールを履いても見上げなければならぬほどの長身になった。

ここにいる者たちは変化したその姿を知っている。当然だ。何よりも敵に回すなとグループ総帥から散々言われていたのだから。

「あの時、ちゃんと言ったはずですよ。有里湊は〝ここにいる〟と」
言葉遣いは和邇八尋のまま、蒼い瞳を輝かせ嗤って立つ青年の姿を目にし、高寺派の者たちは顔色を悪くしながら震えている。
未だ背後に白銀の天使を控えさせているものの、相手はただ立っているだけだ。
だというのに、影時間の適性の差なのか、指輪を付けて影時間を体験している者たちは相手が化け物に見えていた。
威圧も何も放っていない状態でこれでは、彼が僅かにでも力を解放すれば意識を保つことも出来ないだろう。
全員がそれを無意識に理解している中、今回の騒動を主導した高寺は湊が現われたという事実を直視できないでいた。
「ば、馬鹿なっ……何故だ。何故、生きているっ!?」
高寺とて特別課外活動部の抵抗だけでなく、チドリやラビリスが別働隊で動く可能性を警戒していた。
さらに、生きていた幾月がストレガと共に襲撃してくる事だって可能性の一つとして考え、そのパターンでの動きを警備部にも伝えていたのだ。
しかし、しかしだ。完全に死んだはずの人間がこうやって目の前に現われる事など予想出来るはずがない。
どうして生きている。どうやって生き返ったのだ。その答えを求めて高寺が離れた場所に立つ湊に向けて叫べば、湊は心底つまらなそうに返した。
「それは哲学か？　純粋な物理現象の話で言えば、この世に生を受けたからとしか言えないが」
「そんな事を聞いているんじゃない。有里湊、君は確かに死んだはずだ。遺体は盗まれる際にいくつかのパーツに分解されたと調査した者たちからも聞いている。仮に蘇生能力を使おうにも不可能な状態にあったはず」
首を落とされれば湊の蘇生能力は発動しない。チドリやラビリスの発言もあって、それが事実であると桐条グループには伝わっていた。

もし、それが嘘だったなら彼が死んだ後のチドリたちの反応の説明が付かない。
ならば、自分たちと対峙している存在は彼ではない。彼であって良いはずがない。首を落とされようと蘇るなど、古い伝承にも残る化け物でしかないのだから。
彼の姿を騙った事は確かに効果的だが、そろそろ正体を現わしてもいいだろう。そんな願いを込めて睨む高寺に、湊は小さく溜息を吐くとグループの力を盲信しすぎだと返す。
「……だが、現実に俺はここにいる。なら、お前たちの調査結果が間違っていただけの話だろ」
グループの調査が確かなら生きているはずがない。
しかし、その調査のどこかにミスがあったなら、彼が生きている事も可能性としてはあり得る。
湊の言うことはもっともだが、高寺たちは未だに納得できていないようだ。
しかし、そう言えばと先ほど庭園に現われた際の姿の謎が残っていた事もあり、高寺は再び湊に質問をぶつける。
「そ、そうだ。あの女は、本物の和邇八尋はどこにいるっ」
「何故、俺にばかり尋ねるのか。雇っていたおばさんに聞けばいいだろうに」
元を辿ればあの女が散々邪魔してくれたおかげでこんな事態になっている。
御側御用のくせに自由に主から離れていたり、どこまでも見透かしたように上から目線でいたり、同じグループの人間でありながら裏切ったあの女はどこにいるのか。
高寺派の者たちの視線が湊と英恵の間を行き来していれば、お前たちは聞いてばかりだなと湊が答えた。
「だがまぁ、答えるなら最初から和邇八尋という人間は存在しない。和邇八尋はおばさんの護衛に俺と玉藻の前が交代で演じていた架空の人物だ。というよりも勉強不足だぞ。古事記と日本書紀を読めば俺の祖先である豊玉姫が〝八尋和邇〟と記述されている。こんなに

分かり易い偽名もないだろう?」
湊の本来の名が百鬼八雲である事は既にグループ上層部に伝えられている。
その中でも桐条に近かった者たちは、さらに彼の血筋についての説明も受けており、豊玉姫の話は高寺も知っていた。
だが、いくら彼が優秀であろうと、総帥の補佐を務めることもある多忙な毎日を過している中で、古事記や日本書紀に目を通したところで特別興味もない事を詳しく覚えているはずがない。
言われた事でその記述があった事を思い出した高寺は、どうして自分はこんな簡単なことも気付かなかったのかと悔しそうに自分の足に拳をぶつける。
「さて、冥土の土産というやつで種明かしをしてやった訳だが、今回の件についてお前たちはどう落とし前をつけるつもりだ」
相手の質問には十分に答えてやった。今度はこちらの番だと湊は腰の左に差した白い刀を右手で抜きながら相手に問う。
武器を抜いた瞬間に纏う空気が変わり、距離が離れているというのに高寺たちは喉元に刃を突きつけられている錯覚に陥る。
「わ、私たちは、社会への影響を考えて行動したまでだ。日本のトップ企業が揺らげば社会にどれだけの影響が出るか分からない。これまで大勢の人間を救ってきた君なら理解できるだろう!」
湊にとって重要なのは個だ。不特定多数の人間ではなく己が認めた者たちの安寧を第一に考える。
しかし、彼が人という種を、この惑星に生きる命を救おうとしている事もまた事実。
高寺はそこから自分たちの行動に対する理解を求めたが、ここで高寺たちは大きな勘違いをしていた。
「……いいや。欠片も理解できないな。どうやらお前の定義する人とはグループの人間やそれに関わる者のようだが、そんな者たちは世界から見れば大した数じゃない。別に死んだところでそう大きな影響は出ないだろう」
神の視点に近い本質を持つ湊は命を救おうと、守ろうとする。

だが、彼にとって自分の認めていない個の命は無価値だ。
最初から全ての命を救えるなどとは思っていないし。そもそも、救う気だって欠片もない。
だからこそ、命を救うために箱船は用意するが、自分の認めた者たちが全員乗ったなら後は誰が乗ろうと気にしない。
そこからあぶれて奈落へと落ちていく者がいようと、運が悪かったなと考える事すらしないのだ。
だからこそ、湊は桐条グループが解体されようと気にしない。チドリやアイギスたちの生活に影響があったとしても、彼女たちの生活くらいであればＥＰ社の力を使って最小限の被害で済ますことが出来るのだから。
湊の言葉に高寺たちが唖然としていると、湊は彼らに背を向けて庭園に転がる警備部の者たちの許へ向かいながら言葉を続ける。
「お前たちは百を生かすためなら一を切り捨てる事を容認するみたいだが、当然、それは自分が一に振られても同じ意見なんだろうな？」
彼の言葉から熱が消える。
一切の感情がなくなり、言葉だけで寒さを感じるほどだ。
急な彼の変化に驚き、そして、彼が何をするつもりなのか見ていれば、湊は左足がおかしな方向に折れたままうつ伏せに倒れている女性隊員の傍で立ち止まる。
「なるほど、お前は先月婚約して来年に結婚するのか。おめでとう」
ゾッとするほど冷たい言葉を吐いた直後、湊は口元を歪めながら右腕を振るう。
空に浮かぶ月の光を反射させながら白刃が一閃すれば、倒れていた女性隊員の左手が宙を舞った。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
女性隊員が絶叫を上げる傍で、湊は黒刀も抜き放って宙を舞った左手を細切れにしてゆく。
赤い血飛沫が舞う中、二刀で斬られる腕は最早どこが肉で骨なのかも分からぬほど微細になり、それらが地に落ちた時にはただの血溜まりが広がっているようにしか見えない。

「可哀想に……二度と左手の薬指に指輪を付けられなくなったな」
切られた腕の痛みだけでなく、手にした幸せを目の前で壊された事で女性隊員の瞳から光が消えてゆく。
重傷ではあるものの、身体はまだ無事だというのに、急速に心が死んでいくのが周りで見ていても分かった。
自分たちの仲間がそんな目に遭わされた事で、青年に対して強い怒りと殺意を抱いた者もいる。
けれど、彼らは既に一度敗北し、最早満足に戦える状態ではない。
あまりの悔しさに歯を食いしばって奥歯が砕けた者や、地面に叩き付けた拳が砕けた者もいたが、そんな彼らの様子を一切無視して青年は次の獲物に近付いた。
「ふむ、お前は妊娠中の妻がいるのか。元気に子どもが生まれるといいな」
歳は三十を過ぎたくらいだろうか。まだまだ活力に溢れた顔をしている男の傍に立てば、湊は這って逃げようとする男の背を踏みつけてうつ伏せに倒し、抵抗して暴れようとした男の両肩に刀を振り下ろす。
「だが、人の親になろうという者がこんな事をするのは戴けない。その汚れた腕に抱かれては子どもが可哀想だ。こちらで対処しておいてやろう」
両肩から腕を失った男は激痛のあまり声をあげることも出来ずに意識を失う。
心を壊された最初の女性よりもマシと思うべきか、意識を取り戻した後を思えばこちらの方が地獄だと思うべきか。
さらに続けて、幼い頃より柔道に励んできた者の軸足を完全に砕き、ピアノを趣味としていた者の両手の指を切り刻むなど、隊員たちにとって最も失いたくない身体の部位を破壊して回る。
殺してはいない。一人たりとも殺してはいないが、桐条側の人間だけでなく蠍の心臓の者たちまで青年の行いに顔を顰めている。
だが、どれだけ彼が残虐な行為をしようとも誰一人として止めようとしなかった。

今の青年に近付けば自分も敵と認識される。そんな状態で桐条側の足止めに雇われた蠍の心臓が動くはずがない。
そして、桐条側の人間たちは頭では止めねばと思っているのに、本能が邪魔をして一歩も動くことが出来なかった。
他の者たちが見ている前で次々と粛正は続けられ、最後に隊長だった本田という男が残れば、湊はこれまで以上に口元をつり上げて嗤う。
「ははっ、隊長殿は年明けに娘の成人式があるのか！　一生に一度の晴れ舞台だ。さぞかし楽しみにしていた事だろう」
近付いてくる湊に恐怖で震えながらも、腰が抜けて立てない隊長の男は腕の力だけで逃げようとする。
無駄な足掻きでしかないそれを冷たい目で見つめた湊は、黒刀を鞘に戻して空いた左手に黒炎を纏わせながら相手の顔を掴んだ。
「あがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
「だが、残念だ。光を失ったその目では見ることが出来ないな。可哀想に」
万力のような力で顔を掴まれた事で逃げることも出来ず、隊長の男は両眼を灼かれながら絶叫した。
風に乗って漂ってくる肉の焼ける臭いに、荒事に耐性のない桐条の分家筋の者が嘔吐している。
殺すよりも残酷な事をこうも淡々とこなし、時に楽しげに嗤っていた彼の姿はまさしく鬼のようだった。
とんだ化け物を敵に回してしまったと、今更ながらに理解したことで、高寺派についた者たちが助かる方法を考え始めたとき、湊は白刃を持ったまま振り返った。
そして、ゆっくりと歩きながら屋敷の前にいる高寺たちの許へと近付いてくる。
「さて、お前たちの命令を聞いた者たちはちゃんと自分の罪を認め、こうやって罰を受けた訳だが、お前たちも同じように反省するんだろうな？」
近付くにつれ湊の纏う空気が変わってゆく。

先ほどまで纏っていた殺気はただの見せかけだった。
今の湊からは何も感じない。そこにいて、明確な殺意を抱いているはずなのに、相手の感情や思考がまるで伝わってこないのだ。
空間の一部が切り離され、そこに空気だけでなく光すらも通さない黒い穴が存在しているかのような違和感。
自分の命もその穴に呑み込まれるのではないか。そう思った分家筋の者が一人集団から飛び出すと、湊に向けて今回の件について口を開いた。
「わ、私は関係ない！　こいつらが勝手にやったことだ。私は御当主が目を覚ますまで現状維持にてっ……がぼっ……」
話している途中、男は視界の中で何かが光ったと認識すると、直後に喉からナイフを生やして血を吐いて倒れた。
倒れた男は自分の喉に刺さったナイフを抜こうとするも、その前に力尽きたのかナイフを抜くことなく動かなくなった。
「誰が主導したかなんてどうでもいい……。敵になった以上、無事で済むと思うな」
散々敵をいたぶっていた青年が、ここに来て人を殺した事で桐条側の者たちに緊張が走る。
もし、先ほどの行動が意図したものであったなら、湊が警備部を殺さなかった理由に納得できてしまう。
彼は戦いにおいて独自のルールを作ってそれを守る。今回ならば、恐らくは最初から桐条家の人間と今回の騒動の首謀者たちを狙っていたに違いない。
だとすれば、このままでは高寺たちは全員殺される。
白刃を持って駆け出した青年が真っ直ぐ高寺たちの許を目指せば、これ以上彼の手を汚させる訳にはいかないと美鶴が召喚器を抜いた。
「やめろ、八雲!!　これ以上殺すなっ!!」
現われたペンテシレアは進路を塞ぎ、レイピア状の腕を湊に向けて突き出す。
青年は頭を下げるだけでそれを躱し、相手の懐に入り込むと逆手で抜いた黒刀で斬りつけ、体勢を崩したところに白刃の振り下ろしで追

撃を繰り出し消滅させた。
ほとんど一瞬の内に放たれた連撃により、数秒の足止めすらかなわなかった美鶴はダメージのフィートバックに顔を歪める。
だが、先ほどの妨害によってこの場で最も優先的に排除すべきと判断されたのか、湊は進路を変えて美鶴に迫ってきた。
今の美鶴は召喚器は持っているが近接武器を持っていない。
あったところで彼の攻撃を防げるとも思えないが、再びペルソナを呼び出そうにも彼が迫る方が速い。
そして、冷徹な金色の瞳を向けて迫った青年が距離を詰め、美鶴から数メートルのところで刀を振り上げれば、美鶴は横からきた衝撃に突き飛ばされ、彼女を突き飛ばした人間が代わりに白刃に斬りつけられた。
「き、菊乃っ!?」
左肩から右の腰まで袈裟切りに切られた菊乃は、仰向けに倒れながら地面に鮮やかな色の血溜まりを作る。
純白のエプロンは赤く染まり、傷の痛みと急激に血液が失われた事で脂汗を掻いている。
幼馴染みが自分を庇って切られた事に動揺し、起き上がった美鶴は顔を青くしながら彼女を抱き起こす。
美鶴を狙ってきた者が目の前にいるというのに、逃げるのではなく戻ってくるなど愚かな行動だ。
しかし、青年は刀についた血を振り払っただけで行動を止めている。
今ならまだ言葉が届くのではないかと考えた菊乃は、痛みに顔を歪ませながらも主のために青年へ話しかけた。
「お、お嬢様は……今回の件に関与していません……全て……私や、あそこにいる者たちが勝手にした事です……ですから、どうかお嬢様の命は……」
美鶴は先ほど彼の行動を邪魔したが、湊が敵と定めたのはチドリやアイギスに危害を加えようとした者だけのはず。
今回の高寺派の行動は美鶴のためを思っての部分はあったが、あく

までグループを守ろうと考えた者たちの独断専行。
故に、特別課外活動部と同様に巻き込まれた美鶴は無関係だから見逃して欲しい。
今にも死にそうな菊乃が必死に頼み込めば、それを聞いた湊は瞳を蒼くさせながら嗤った。
「お前にとって最も大事な存在が桐条美鶴ならば、考え得る限りの苦痛を与えてお前の後を追わせてやろう。あちらで仲良くやると良い」
「……下衆がっ……」
敵の願いなど聞いてやる義理はない。湊の言っていることは敵対者として真っ当なのだが、人々を救ってきた彼の良心に賭けた菊乃に取っては、どこまでも敵を苦しめる事をしか考えていない彼が悪魔に見えた。
死にかけていながら、それでも憎しみを込めた瞳で睨む菊乃に、湊は心底呆れたように言葉を返す。
「……勘違いしているようだが、この事態はお前たちが招いたんだぞ？　他者から自由という尊厳を奪っておきながら、自分たちは安寧を得ようだなんて虫のいい話が通ると思ったのか？」
確かに美鶴を殺そうとしているのは湊だが、彼にその行動を取らせた原因は菊乃たちにある。
彼女が他者を犠牲にしてでも美鶴を守ろうとしたように、湊にだって命に代えても守るべき人がいるのだ。
人数の問題ではないが、よりにもよって高寺派の人間は彼が守るべき相手を三人とも捕らえようとした。
湊が守っている少女たちについて桐条側は情報を持っていたはずなので、それで狙ってきたなら最早戦う以外の選択肢は残っていない。
「未遂かどうかは関係ない。お前が何もしなければこんな事にはならなかったんだ。あそこに倒れている者たちがこんな目に遭ったのも、これから桐条美鶴が殺されるのも、全てお前たちのせいだ」
桐条武治が倒れた事で桐条グループが弱体化したのは事実だが、その後、どうなるかなど分からなかった。

もしもの事を考えて備えるのは当然であり、そこに関しては湊も間違っていないと認めている。
けれど、高寺も菊乃も影時間に関わる事柄についての理解が不足していた。
世界で最も真理に近付いている青年ですら手に余り、彼を除けば最も深く理解している幾月は新たな理を築くことでしか扱えないと理解している。
そんなものの情報が特別課外活動部のメンバーたちを捕らえたくらいで秘匿できるはずがない。
既に公安なども非科学的な力の存在に気付いている。それでも彼らが踏み込んでこないのは、その力の存在を証明出来ないからだ。
桐条はそういった事を理解した上で、相手がより踏み込んでこられないように手を回していたというのに、高寺たちは妨害などによる外部への働き掛けではなく、身内の口を封じるという情報の拡散を防ぐ事を優先してしまった。
これでは今もグループを狙っている者たちに準備する時間を与えているようなものだ。
「なぁ、自分のせいで大切な者が殺されるのはどんな気持ちだ？　はした金で親に売られ、ペルソナの研究のために身体を弄られても適性を得る事しか出来ず。それでも、自分を引き取り良くしてくれた恩人たちのためを思って行動すれば、失敗するだけでなく恩人まで殺す事になった」
やる事なす事全てが空回りで、むしろ、動く前より自分たちや守るべき者の立場をより危険にしている。
一体何がしたかったか本気で分からないと、美鶴に支えられたまま倒れている菊乃に湊は冷め切った視線で問う。
「――――お前、何のために生まれてきたんだ？」
その言葉を聞いた菊乃は心の中で何かが壊れる音が聞こえた。
幼少期に散々な目に遭わされながら、しかし、桐条家に引き取られて今日まで生かされてきた。
何を犠牲にしてでも、どれだけ自分が泥を被ろうとも、何としてで

も美鶴とその家族だけは守りたかった。
だが、全ては無駄だった。自分のせいで大勢が犠牲になった。これから守りたかった大切な人たちまで殺されてしまう。
こんな事にならないために動いたというのに、それらが全て真逆に作用し、名切りの鬼を呼び寄せてしまった。
自分のせいで大切な人が不幸な目に遭う。自分のせいで大勢の人が死んでしまう。自分なんかいなければ良かった。両親に売られ、人工ペルソナ使いの研究を受けた時に死んでいればよかった。
恩を感じていたからこそ、美鶴たちに対して愛情を持っていたからこそ、菊乃は行動の責任を感じ、自分自身の存在を赦せなくなる。
「あ、あああ……ああ……あああああああああああっ!?」
湊に切られた傷でまともに動けないはずだというのに、菊乃は正気を失って自分の頭を掻き毟って暴れ出す。
美鶴が相手の腕を掴んで覆い被さるようにして止めさせようとするが、彼女は奇声を上げたまま暴れて残り少ない自分の命を消費していく。
そうして、一人の人間の心を完全に壊し終えた青年は、小さく口元を歪めるとその場を離れて高寺たちの方へと向かった。
「待たせて悪かったな。お前たちはそこの莫迦ほど優しく済ましたりはしないぞ」
相手を精神的に追い詰め、唯一の心の支えすらもへし折って壊しておきながら、どこが優しいのかと高寺たちは心の中で吐き捨てる。
自分もあんな風に心を壊されるのか、それとも警備部の実働部隊のように絶望を抱いたまま生かされるのか。
そんな恐怖に震える者たちは、自分の上着の内ポケットに入っている銃を抜くべきか考える。
高寺たちと共に屋敷にいた警備部も武装はしている。蠍の心臓の兵士たちは、外に出て大人しくしていろとは言ったが装備は取り上げなかった。
湊とは二十メートルほどしか離れていないので、ここで数の力で攻めれば相手もただでは済まないはず。

しかし、そう考えた者たちは自分たちの方が有利なはずだというのに、欠片もその奇襲が成功する未来が想像できなかった。
僅かでも銃に手を伸ばせば、先ほど投げナイフで喉を貫かれた男のように殺される。
そうなる確信があった事で、奇襲を諦めた者の内の一人が一歩前に出て湊に話しかけた。
「き、君は大勢の人々を助け、救ってきた人間だろ?! 世間だけじゃない。私も君は優しい正義の味方だと思っている。だからこの通りだ。金ならいくらでも払う。見逃してくれ!!」
この期に及んでまだ金でどうにか出来ると思っている者がいた事に、高寺や警備部の者たちは唖然として言葉を失う。
そも、湊の後ろにはＥＰ社がいるのだ。今後、桐条武治の持っていた株を全て売りに出したとき、最もそれを買う可能性が高いのがＥＰ社である。
ここにいる分家の人間の中に同じ事が出来る者はおらず、だからこそ、高寺に個人的に相談してきた者もいたというのに、自分より金を持っている人間を金で動かそうとは馬鹿なのかと本気で言いたくなる。
先ほどの男と違って即座に殺されてはいないが、巻き込まれて死ぬのは御免だと高寺たちが距離を取ろうとしたとき、右手に刀を持ったまま左手を顎に当てて考える様子をみせ、少ししてから考えがまとまったのか口を開いた。
「なら、お前たちから全てを奪おう……ここから南東の方角には何があると思う?」
そう言って湊が具現化した〝世界〟のカードを握り砕くと、突如発生した重圧に彼以外の人間は立っていられなくなり地に伏せる。
何が起きたのかと空を見上げれば、そこには全長が分からぬほど巨大な黒い蛇神がいた。
どうしてここで蛇神を出したのか。重圧に苦しみながら高寺はこの後の相手の行動を推測する。
蛇神が戦うための力と仮定し、それをどうやって使うかのヒントは

既に出ているはず。
湊の言葉を思い出せと重圧に耐えながら記憶を辿り、この桐条本邸から南東の方角に何があるかを考える。
「っ、ダメだ!!　やめろぉ!!」
その答えに辿り着いた高寺は、這うようにしながら湊に手を伸ばして止めようとする。
ここから南東の方角にあるのは都心だ。それだけなら湊が首都に向けて攻撃を放つようにしか思えないが、地図上で桐条本邸から南東に向けて線を引くと、丁度その方角に桐条グループの本社ビルが存在するのだ。
都心まではかなり距離がある。これまで聞いてきたペルソナのデータを考えれば、攻撃を放ったところで射程は一キロにも満たない。
けれど、それはあくまで七歌たちが扱っている普通のペルソナの話だ。
今、高寺たちの上空にいるのはペルソナの枠に収まるような存在ではない。
桐条や美鶴が報告書で蛇神と呼称したことも納得できる。本能でそれを理解した高寺は、服が汚れることも構わず届かない手を伸ばし続けた。
「消せ、无窮」
《グオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――ッ!!》
蛇神の咆吼と共に放たれた赤と黒の光が混じり合った禍々しい光線が影時間の空を灼く。
攻撃の余波だけで雲が霧散し、蛇神の放つ重圧とは別の圧力が地上にも届く。
この地から本社までどれだけ離れていると思っているのか。間に小さな山や他企業の高層ビルだってある。
常識で考えればあり得ない。不可能だと鼻で笑って流すような話だ。

しかし、地に伏しながら蛇神を見た者たちは、この存在にとってその程度の事など造作も無いのだと分かってしまった。
一分以上放たれ続けていた光線が消え、攻撃をやめた蛇神が上空で蠢きながら待機していると、高寺たちの方へ振り返った湊の耳に男たちの呟くような声が聞こえてくる。
「馬鹿な。ふざけている。なんだこれは、こんな、こんな事などあってたまるか。日本の就労人口の二パーセントだぞ。日本だけじゃない。世界の経済にも大きな影響を及ぼす事になる。それを、たかが子ども数人を拘束しようとしただけで全て消すなど……」
蛇神が破壊したのはあくまで建造物なので人材は残っている。
だが、グループの心臓とも言える場所を消されては外敵に備えるなど言っている場合ではない。
どこで間違えたのか。どうすれば良かったのか。情報の処理が追い付かない高寺と、最早経営権がどうのという状況ではなくなった事を理解し呆然としている桐条分家の者たち。
青年はそんな相手の無様な姿を見ながら愉しげに嗤うと、何も持っていない左手を高く上げ指を鳴らした。
タンッ、という甲高い音が聞こえると、これまで呆然としていた者たちは意識が急にクリアになっていく感覚を覚えた。
先ほどまで感じていた重圧もいつの間にか消えており、何が起こったのかと顔を上げて辺りを見渡す。
「っ、どういう事だ……？」
顔を上げて周りの様子を見た高寺たちは、実働隊の警備部が転がっていた庭園を見て驚愕する。
先ほどまで血の海になっていたはずだというのに、そこには整えられた植物たちと共に五体満足な状態で座ったまま高寺たち同様辺りを見渡している隊員の姿があった。
心を壊されたはずの菊乃も一切の傷が消え、美鶴と共に訳が分からないと言った顔で座り込んでおり、未だに蠍の心臓の兵たちに囲まれてはいるが、自分たちの身に何があったのかと不思議そうにしている。

そうして、全員が今の状況を理解できずにいると、少し離れた場所に置かれたテーブルセットに、先ほどまで自分たちの傍にいたはずの青年がいつの間に座っており、対面で苦笑している英恵と共にこちらを見て口を開いた。
「余興は愉しんで貰えたか？　なら、戦後処理の話に移ろうか。得意なんだろ。グループの人間を守るといった話が」
訳が分からないが全ては彼が見せた幻のようなものだったらしい。
その事だけは理解できた高寺は、桐条が何故彼に手を出すなと言ってきたのかを改めて実感した。
対応を間違えれば先ほどの光景は現実となるはずだ。これは確かにただの殺戮者などより質が悪いと苦笑いせずにはいられない。
しかし、借りを作ったことは事実だが、人的被害がなかったのならまだ挽回も可能。
故に、高寺は今の自分はグループの代表なんだと立ち上がり、襟元を正してから真剣な表情で湊に言葉を返した。
「改めまして桐条グループの新代表に就いた高寺一郎と申します。今回の騒動は全て私の責任で行なわれたものです。誠に申し訳ありませんでした」
緊急で就いたにせよ大企業の代表が簡単に頭を下げるものではない。
だが、以前桐条は桔梗組を訪れた際に頭を下げて誠意を見せていた。
これが正しい。罪を犯した身ではあるが、こうすることがグループの者たちを守る事に繋がるのだと高寺は心からの謝意を込めて頭を下げ続けた。

第三百六十六話　賠償

１１月７日（土）
深夜――桐条本邸
高寺が湊に誠心誠意の謝罪を見せると、ご婦人方もいるのだから早々に話し合いに移ろうと青年は告げた。
それを聞いた高寺は英恵に許可を取って本邸の一室を借り、そこで今回の騒動に対する賠償などを話し合いたいと提案。
湊もそれで良いと答え、高寺側の準備もあるだろうからと、その間に蠍の心臓の隊員らをＥＰ社に帰すと言ってセイヴァーの力で転移していった。
桐条グループでもＥＰ社の日本における拠点は把握しているので、数秒でそこまで移動して戻ってくることが可能なペルソナの能力には驚いた。
だが、いつまでも呆けては相手にも失礼だと、高寺は影時間が明けるなりすぐに行動を開始した。
まず、警備部に連絡して車を手配し、隊長格の人間以外は帰らせる事にした。
彼らも身体は無事で精神的なショックも抜けていたのだが、どこかまだ本調子ではないようなので、今後の事も考えて休ませる必要があった。
そも、突然連れて来られただけなので、ここにいてもする事がない上に、人数もいるので桐条家にも迷惑が掛かる。
だからこそ、まず最初に彼らが帰るための手配をしたのだが、その間に桐条分家の者たちが徒歩でも良いからと近所にある自分の屋敷に帰ろうとしていた。
今回の件では、確かに高寺が焚き付けた部分はあるものの、本家を今の地位から落として自分こそが新たな本家になろうと彼らは参加してきた。
参加はするが全ての手配は高寺任せ。そんな人間がトップになど立てるはずがないのだが、全て高寺がやったのだから責任も高寺が取

るべきだというのが彼らの言い分だった。
無論、そんな言い分が通るはずもなく、高寺が止める間もなく逃げようとした彼らは、何もない空間から現われた湊に黒い影の腕で捕らえられた。
逃げだそうとした時点で問題なのだが、逃げられて敷地から出ていれば桐条側の監督責任も問われていたかもしれない。
謝罪すべき相手の手を煩わせた事を申し訳なく思いつつも、逃げ出す前に捕まって良かったと高寺は内心で安堵の息を吐く。
そうして、呆れた様子で捕まえた老人らを見ている青年と、その横にいた銀髪の少女の許までゆくと高寺は謝罪と挨拶をした。
「有里様、身内の者が大変失礼いたしました。そして、初めましてヴォルケンシュタイン代表。私は桐条グループの新たな代表になりました高寺一郎と申します」
「ご丁寧にどうも。ソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインです。では、早速ご案内いただけますか？」
こんなところで無駄な時間を過す暇などない。
以前なら湊が時を圧縮してくれたのだが、黄昏の羽根の形状が変化した影響で一時的にその力は失われている。
なら、お互いに暇という訳でもないので、すぐに案内してくれと伝えると高寺は分家筋の人間を捕獲したままの湊たちを案内した。
＊＊＊
とても長いアンティークな机が置かれた食堂。
そこに案内された湊たちは席に着き。対面側に桐条グループの人間たちが座る。
今回の件では無関係な英恵と美鶴はある意味立会人のようなものなのだが、一応は桐条側の席に座っていた。
トップ同士の話し合いという事ならば、これでメンバーは揃っていると言っていい。
しかし、騒動の当事者という事となると人数が足りない。その足りない者たちこと使用人の菊乃と警備部の隊長の男は立場の違いから桐条側の者らの後ろに立っており、表面上は平静を装いつつもどこか

怯えているようだった。
彼女たちは直接自分が彼に攻撃される幻覚を見せられている。
幻の中で殺された者もずっと俯いて震えているので、いくら幻と分かっていても心へのダメージがなかったことにはならないようだ。
そうして、使用人に用意させたお茶がそれぞれの前に置かれると、本題に入ろうかと湊が口を開く。
「……さて、そちらはどれだけの誠意を見せてくれるのかな？」
順序立てて話をするかと思いきや、いきなり核心を突いてきた事に高寺たちは困惑する。
本来、相手側に何かしらの損害を与えたならば、その損害の大きさを基準に賠償額というものを決めていく。
だが、今回の件は湊が裏で手を回していたことで相手側に損害はほぼ出ていない。
というよりも被害者は特別課外活動部であって湊やＥＰ社ではないのだ。
そんな状態でふんわりとした質問をされても簡単には答えられない。
当然、その事は相手も分かっているのだろう。だからこそ、自分たちで決めてみろと意地の悪い質問をしているのだ。
背中を嫌な汗が伝うのを感じながら、高寺は着地点を探すために会話を挿もうと口を開く。
「はい。そのためにいくつかお聞かせ願いたいのですが、有里様が撃退した警備部の実働部隊が怪我一つなかったのは理由があるのでしょうか？　彼らは確かに防具ごと肉体を破壊された感覚があったと言っていたのです」
巌戸台分寮へ行った警備部の人間たちは、確かに自分が和邇八尋と交戦して負傷したという記憶がある。
仲間たちが次々と沈められ、頭部や身体の様々な部位から血を流していた。
それを見て特別課外活動部の者たちも顔を顰めていたのを隊長の男は確認している。

だというのに、庭園で湊が指を鳴らすと、実働部隊の人間は身体も装備も全て無事な状態に戻っていた。
コンテナに仲間を入れる際、隊長の男は仲間の折れた腕や足にも触って、これでは現場復帰は絶望的だろうと思った者も何人かいる。
一般人にペルソナの魔法の効果が薄いことは知られているため、それら全てがなかったことになるなどあり得ない。
相手の能力の詳細が知りたいという事もあり、高寺が状況把握の体で質問すれば、傍に控えていた使用人を呼んで口を開く。
「……コーヒーも持ってきてくれ」
「はい。かしこまりました」
真面目に話しているつもりだというのに、湊は紅茶よりコーヒーが良いと暢気に注文している。
隣に座っているソフィアは議事録を作る気なのか、高寺の質問だけでなく、湊のコーヒーの注文まで書き込んでいる。
その部分はいらないのではとも思うが、彼女が残したいというなら止める理由もない。
よって、湊の頼んだコーヒーがくるのを待っていれば、途中で湊がやる気のない様子で話し始めた。
「現実の情報なんて受け取る側の認識次第だ。例えば、ここにある紅茶だが、お前らの目には黒く見えるようにすれば、コーヒーだと認識し始める。そして、紅茶の香りとコーヒーの香りの認識を入れ替えれば、紅茶の香りを嗅いでいるのに主観的にはコーヒーの香りだと思う事になる」
彼の話を聞いている間に紅茶は黒い液体に変わり、その香りもコーヒーとしか感じられなくなっていた。
だが、実際に口をつけると味自体は紅茶のように思えるのだ。
あくまで〝紅茶のよう〟なのは、味覚と嗅覚は同時に働いて味を認識しているからだろう。
風邪で鼻が詰まっていると味が分かりにくくなるようなもので、実に不思議な感覚だが、途中で色も匂いも元に戻ってちゃんと紅茶の味だと認識出来るようになった。

それらの変化が起こっている間、湊の瞳は普段通りの金色をしていたし、何より彼と目を合せていない者まで同じ体験をしていた。
魔眼とやらの力で幻術を掛けているのだと思っていた高寺たちは、自分たちが体験したからこそ余計に彼の力がどういったものなのか分からなくなる。
「怪我を負ったという認識を与え、正常な状態と怪我をしている状態の認識を入れ替えた。そのせいで彼らは自分たちが大怪我を負っていると勘違いした訳ですか？」
「……いいや。幻術で現実を書き換えた部分もあるぞ」
言いながら湊がテーブルを指でトンと軽く突けば、直後、テーブルが真ん中からV字に割れた。
上に置いていたカップが跳ね上がり、溢れた中身を浴びた者たちが熱さに騒ぎ出す。
控えていた使用人たちはすぐにタオルと冷やすものを持ってきたが、分家の人間がタオルを持つとそれらは何故か板コンニャクになってしまう。
ひんやりとはしているが冷やせるほどではない。驚いて取り落としたものを使用人が拾ってもタオルには戻らず、彼と隣にいるソフィア以外の全員が混乱している。
すると、冷めた視線でそれらを見ていた湊が指を鳴らしただけで、映像を逆再生するようにテーブルやカップが元の状態に戻り始めた。
人間は動いた場所にいるままだというのに、テーブルもカップとその中身も完全に元通り。濡れていたはずの服も無事で、火傷したはずの腕などからも痛みが消えている。
何が起きたのか。何をしたのか。目の前で見ていてもまるで分からない。
本当に自分は現実世界にいるのか。幻術に掛けられたままではないのか。そも、肉体は五体満足で残っているのか。
信じられない事が目の前で次々と起きたせいで、自己認識が曖昧になってきた者たちの心がゆっくりと壊れ始めた時、湊が再び指を鳴らすと彼らの意識がクリアになって再び彼を見ることが出来るように

なっていた。
「……簡単に壊れてくれるなよ。言っておくが俺の力にも制限はあるんだ。そんなに怖いなら全てが終わってから赤道を越えた先の国にでも移住すればいい。流石に日本からじゃ届かないからな」
分家の人間たちも世間から見れば十分に富裕層に入る。
さらに、彼らの持っている桐条グループの株を売れば、残りの人生を海外で悠々自適に暮らすくらいは可能だろう。
今夜の出来事のせいで一刻も早く湊から離れたいと思っている者にとって、彼の能力の効果範囲を知る事が出来たのは朗報だ。
そうして、表情には出来るだけ出さずに彼らがホッとしていると、議事録に湊の言葉を書き足していたソフィアがぽつりと呟いた。
「湊様の眼なら時限式で術を仕込めるのでは？」
「……まぁ、向こうについた瞬間に服を脱ぎ捨てて駆け出すようにする事も出来るな」
誰か目の前にいる悪魔たちを殺してくれ。
二人の会話を聞いた者たちは心の中でそう思う。
助かる可能性を示しておきながら、自分たちを安心させておきながら、その直後に地獄へ叩き落とすような罠を仕込んでいた。
自然な流れで会話しているように見えるが、恐らく二人は分かっていてやっている。
自分たちが圧倒的に優位で、桐条側にはどうあっても対抗する手段がないと分かっているからこそ、人の心を暇潰し程度の感覚で弄んでいるに違いない。
分家の者たちも個人の能力は別にしろ様々な人間と付き合ってきた。
桐条武治ほどの胆力を持っているとは言わないし、化け物相手に駆け引きが出来るなんて口が裂けても言えない。
しかし、それでも一般人に比べれば人付き合いの中で心も鍛えられていたはずだ。
若い頃には自分が低い立場になって陰で泣くような事もあったが、今では自分も多くの人間から恐れられる側になっていた。

だがそれは、あくまで人間同士のやり取りに限った話だったと痛感する。
あれほど金に執着していた者たちが、この場から離れられるなら自分の全財産を渡しても良いと思うほどに追い詰められていた。
「おいおい。今回はただの賠償の話だろう？　お互いに納得できる結果を模索するだけだ。別に金を寄越せと言っている訳じゃない。誠意を見せて頭を丸めるとかでも良いんだからな」
湊はとても愉しそうに口元を歪めて例を挙げるが、そんな悪戯した小学生の反省の仕方みたいな事で彼が納得するとは到底思えない。
出来れば金銭だけで終わらせたい。これは高寺たちの共通認識なのだが、桐条グループよりも金を持っているＥＰ社がバックに付いている彼が相手では効果は薄い。
相手が本当に望んでいる物は何か、チドリやアイギスのためになる物なら良いのだろうか。
かつてないほどの難問を出された高寺が嫌な汗をかいて考えていれば、これまで黙っていた英恵が紅茶に口をつけてから話に加わった。
「八雲君は何か欲しいものはないの？　あの人の遺産分配の話も終わっているから、タイミング的には個人の所有物でも渡しやすい状態なのだけれど」
「別にないな。……ああ、いや、桐条の未公開株はあるだけあればいい」
生前贈与という形で桐条の遺産を動かすため、今ならついでという形で手続きする事が出来る。
そのため、欲しいものがあるなら今なら簡単に所有権を移すことが出来るのだが、湊は意外な事に一族が保有する未公開株を求めてきた。
確かに桐条の保有していた株は売却する予定になっていたので、彼が買った形にして渡すことは出来る。
ただ、どうして彼が桐条の株など求めるのか分からず、英恵たちが不思議そうにしていれば、湊はマフラーからファイルを取りだして高

寺の前まで滑らせる。
「俺が死んでからソフィアたちが集めていたんだ。既に子会社の四割は吸収できる状態にしてある」
言われてファイルを開くと、中には桐条傘下の子会社や下請け会社の株の動きが書いていた。
これは玉藻の前がソフィアたちに伝えていた『作戦コード・悪食』の成果だ。
上に情報が来ないようまだ動かしていないようだが、そこに書かれている事が実際に起きれば桐条傘下の小さな会社がいくつも乗っ取られる事になる。
中には精密機械の重要なパーツを作っている会社も含まれており、今これを行なわれたらグループは対処しきれない。
影時間でも平時と変わらぬ治療が行える事からも分かっていたが、自分が死んだ後の事を考えた彼の備えには舌を巻くしかない。
傘下の会社には桐条グループの社内株も配られており、会社を乗っ取られればその社内株は全て湊たちに移る。
さらに、桐条武治の所有していた株と、ここにいる者たちの持っている株を渡せば、桐条グループは完全に彼の物になるだろう。
グループを守るために行動していたはずが、最も桐条を恨んでいる人間にグループを渡すことになるなど誰が予想出来たか。
それだけはダメだと思いながらも、自分たちに拒否権がないと分かっている高寺が額に脂汗を滲ませながら尋ねる。
「……グループを手に入れ何をなさるおつもりですか？」
「別になにも。強いて言えば、あいつが大切にしていた物を一つずつ奪う事に意味がある」
目が覚めたら自分の会社が乗っ取られていた。
そんな状況に置かれれば夢か現実か疑うに違いない。
しかし、金色の瞳の奥に暗い炎を燃やす青年は本気でそれをやるつもりだ。
十年前の事故の被害者や被験体たちなど、桐条グループに大切な物を奪われた者たちは多数いる。

だからこそ、彼はお前も同じように奪われる苦しみを味わえと、個人に対する悪意のみで社会すらも巻き込もうとしていた。
「湊様、今桐条に送れる人材は三名くらいしかおりませんが？」
「フランスにいるやつでいい。日本酒好きだったはずだ」
「その男は脂肪肝で医者に禁酒を言い渡されていたはずです」
「……なら、ドイツの方でいい。新トップが女なら馬鹿が釣れるだろう」
ＥＰ社は久遠の安寧側にも籍を置いていた幹部を処分したので、他所に送れるほど豊富な人材がいる訳ではない。
けれど、それでも全くいない訳ではない事もあり、ソフィアも既に桐条グループを手に入れる方向で人事を考えている。
経営者として優秀なソフィアが推薦するくらいだ。今のグループにとっても迎えて損はないに違いない。
ただ、父が倒れ、グループまで桐条家の手から離れていくのを見ているしかない美鶴は、一体今どのような気持ちなのだろうかと高寺や菊乃は心配していた。
彼女は父から自由を与えられる事になっていたが、時間は掛かろうとも、やはり大好きな父の後を継ごうと思っていたに違いない。
影時間を終わらせ、進学しながら会社の経営を学び、最終的には自分が再びグループのトップに立つ。
そんな夢を目の前で奪われるのだ。彼女が湊に憎しみを覚えても不思議ではない。
高寺たちが心配して美鶴を横目で見れば、意外な事に彼女は落ち着いた様子で湊を見ていた。
どうして彼女は落ち着いていられるのか。不思議に思った英恵が尋ねる。
「美鶴、貴女はグループに未練はないの？」
「ないと言えば嘘になりますが、今、グループは外部からの悪意に弱い状態なのでしょう？　ならば、ＥＰ社の庇護下に入るのは悪くないのでは？」
高寺たちが警備部を動かしてまで特別課外活動部の捕らえようと

したのだ。冷静に考えれば今のグループがどれだけ危うい状態なのか察することは出来る。
ならば、湊の脅しから始まったにせよ、今回のＥＰ社側からの申し出は悪くないはずだ。
再び自分たちの手にグループを取り戻すのは難しいかもしれないが、ソフィアたちも遊びで企業経営している訳ではない。
いくら何でもグループを完全に解体するような勿体ない事はしないだろう。
そんな事を美鶴が言えば、大人たちは確かにそうなのだがと冷静すぎる美鶴の様子に逆に違和感を覚えた。
すると、美鶴たちの話を聞いていたソフィアから、桐条グループを手にした後の動きについて説明があった。
「別にわたくし個人としては桐条グループを獲得する事に拘りはありません。湊様の目的は嫌がらせのようですし。そちら側が十分な能力を持った人間を立てるのであれば、時期を見てトップを代えても良いでしょう」
「それは……グループとしては非常にありがたい話ですが、あまりにＥＰ社に旨みがないのでは？」
巨大企業を傘下に収めたなら、出来る限り技術と人材を吸い取って捨ててもおかしくはない。
実際にそういった目に遭った企業も国内には存在しており、いくらソフィアが桐条グループに興味がないと言っても、桐条側に会社を返すことも検討するなど話が旨すぎると警戒してしまう。
しかし、高寺にそう言われたソフィアは紅茶に手を伸ばしつつ何も不思議ではないと返す。
「湊様が有事の際に備え、桐条の乗っ取りを計画した主な理由は、社会の混乱を出来る限り抑える事にあります。また、そちらが危惧していたように、外部の人間が影時間に関わる情報を得ようとしてくる事も考えられたので、傘下に収めることで余計な茶々を防ぐ事が出来ます」
説明を受けた一同の視線がコーヒーを飲んでいる湊に集まる。

もしも、もしもソフィアの言った言葉が事実ならば、湊は最初から今回のような状況が生まれると警戒していた事になる。
そして、グループ内部の人間よりも大局を見て、冷静に準備を進めていたと言えるだろう。
高寺たちの行動はあくまで弱点を隠すだけで被害の軽減以上の効果はなかった。グループ全体の混乱が落ち着くまで状況の改善も出来ず、そんな状態で外部からの悪意に対処しなければならない。
対して、湊たちの行動は現状維持した上で周囲に睨みを利かせ、ＥＰ社の力で早期に状況を改善できる見込みがある。
桐条個人への嫌がらせと共に、無関係な者たち守る事も出来ている。本当に才能の無駄遣いとしか言いようがない青年の力の使い方に英恵などは苦笑している。
「もう、八雲君は本当に素直じゃないわね」
「……まぁ、本当にそれだけなら桐条グループには得しかないだろうな」
「あら、まだ何かあるの？」
確かにこれだけなら桐条グループは得しかない。
しかし、湊という男は天邪鬼なのだ。気まぐれに施しを与える事もあるが、同時に子どものような悪意を撒き散らすこともある。
「とりあえず、高寺側についた人間は全員頭を丸めろ。嫌なら手の指を左右一本ずつ詰めるでもいい」
最初に言っていた事は冗談だと思っていただけに、不意打ちのような彼の言葉に全員が目を丸くする。
全員という事はこの場にいる当事者は英恵と美鶴以外は丸める必要があり、帰らせた警備部も男女問わず全員がその対象という事だ。
中には結婚を来年に控えている者もいるというのに、それはあまりにも可哀想なのではと思わず英恵から恩赦はないかと声が掛かる。
「あの、八雲君。結婚式を控えている人もいるから、その辺りは配慮してあげられないかしら？」
「そんなのは俺が考える事じゃない。ああ、斎川菊乃だったか。お前は頭はそのままで良いから処女を差し出せ。未公開株、実行犯の反省

した姿、斎川菊乃の処女、それらが俺が桐条グループに求める賠償だ」
実をいえば、湊は賠償を受け取ることにやや飽きていた。
状況を支配していると勘違いしていた高寺たちを、さらに上から力で捻伏せた時点で彼のやりたい事はほぼ終わっていた。
後は未公開株を手に入れることが出来れば目的は達成できるため、その他の部分は単に嫌がらせ目的でしかない。
ただ、その中に娘の幼馴染みでもある乙女の純潔が混じっていたことで、流石にそんな事は冗談でも言ってはいけないと英恵が憤慨する。
「八雲君っ!! 貴方は女性をなんだと思っているの!!」
「……今の俺は被害を被ったEP社側の人間としてここにいる。桐条家当主代行なら公私は分けて頂けますか?」
「なっ!?」
英恵はあくまで巻き込まれた立場だが、それでも桐条側の人間である事は間違いない。
ならば、立ち会う以上はその発言は桐条側のものとして扱われるため、これ以上余計な事を言えばさらにふっかけるぞと湊は暗に告げた。
まさか、実の息子同然に可愛がっていた青年からそんな冷たい言葉をぶつけられるとは思っておらず、英恵はショックで何も言えなくなる。
だが、二人がそんな風にやり取りをしていれば、話題にあがった少女本人が困った表情をして小さく手を挙げて発言してきた。
「あ、あの……大変申し上げづらいのですが、私は以前屋敷に忍び込んだ賊に襲われた事がありまして……」
「いや、あの時はただ用を足していたように偽装しただけだ。下着は下げたがそれ以上はしてない」
「……は?」
菊乃が既に賊に襲われて純潔を散らしていると告げれば、何故だか青年がそんな事はしていないぞと答えた。
これには聞いていた者たちも二重で驚き、なんで湊が彼女が襲われ

た時の話を知っているのだと疑問に思って彼を見る。
　すると、湊はあの時の行動はちゃんと意味があったんだぞと説明を始めた。
「二年くらい前の話だろ。あれはお前が騒ごうとしたから黙らせただけだ。そして、当時はまだ暗示などが使えなかったから偽装工作でトイレに放り込んでおいたんだ」
「待ってください。以前から屋敷に忍び込んでいたのですか？」
「ちゃんとおばさんに許可は取ってあった。人を物盗りみたいに言うな」
「いや、あの……その日、一晩で数億分の美術品などが盗まれているのですが……」
　物盗りのように言うなと湊は小さく不満を見せるも、菊乃はその日一晩で桐条家から数々の美術品が盗まれた事を覚えている。
　欲しいものがあれば持っていって良いと英恵も言っていたが、あまりの被害総額に英恵ももう少しセーブして欲しいと注意したくらいだ。
　こんなタイミングで事件の真相を知ることになるとは思っておらず、菊乃が何とも言えない表情をしていれば、青年がそんな事はどうでもいいと脱線した話を戻す。
「こちらの要求はそれだけだ。全て一週間以内に準備しておけ」
　これで話は終わりだとばかりに湊は席を立つ。ソフィアも議事録が完成したのか遅れてから立ち上がると部屋から出て行こうとする。
　高寺たちはまだ何も答えていないし。菊乃に至ってはそんな簡単に渡せるようなものではない。
　だが、部屋を出て行った彼らを追いかければ、他の者たちの目の前で二人は蛍火色の光に包まれ転移してしまったのだった。

第三百六十七話　美鶴の帰還

夜――巌戸台分寮

桐条グループの警備部から襲撃を受けた日の夜。

学校から帰ってきた七歌たちは、昨夜のメンバーを集めて寮で待機していた。

襲撃時に破壊された窓などは学校に行っていた間に修復されており、窓ガラスの破片などもハウスクリーニングで綺麗になっている。

また、カーペットなどに付着していたはずの警備部の血も、和邇八尋が転移してから寮に戻ると消えていた事もあり、そんな事件が起きていたなど言われても信じられないほどだ。

だが、事実として襲撃事件はあった。

今日、七歌たちがメンバーを集めて待っているのは、その顛末を戻ってくる美鶴が話すと連絡があったためだ。

一同は今朝の新聞で、〝桐条グループの社員らが謎の大量死〟という見出しが出るのではないかと心配していた。

けれど、夕方のニュースも含めてそんな情報は出ておらず、途中で電話があった美鶴の声も疲れた様子ではあったが落ち着いていた。

そこから考えるに湊は大量虐殺を行なわなかったのだろう。

アイギスたち三人を狙われ、実際に拘束されもしたというのに、どうして彼が踏み留まったのかは分からない。

それでも、最悪の事態だけは避けられた事は確かであり、美鶴も数日ぶりに戻ってくるということでメンバーたちの雰囲気は比較的穏やかだった。

「あ、帰ってきたみたい」

寮の前に車が停車するのが見え、ゆかりが小さく呟く。

少し経つと扉が開いて美鶴が姿を現わし、メンバーたちに怪我がないことが分かるとホッとした顔をしている。

「すまない。遅くなった」

「いえいえ、お帰りなさい。美鶴さん」

「ああ、ただいま」

七歌がおかえりと彼女を迎えれば、美鶴は実家で母に同じ事を言われた事を思い出してクスリと笑う。
美鶴の実家が桐条家の本邸である事は間違いないが、今の彼女にとってはここが自分の生活拠点であり、実家以上に馴染んでいることを自覚している。
それだけに、七歌の一言でようやく帰ってきたという実感を得た美鶴は、ソファーの空いている場所に座ると姿勢を正して全員の顔を見回してから口を開いた。
「今回の件、すまなかった。私は結局グループを止める事が出来なかった。そのせいで君たちの身を危険に晒した」
美鶴は今回の件に責任を感じていた。
動いていたのは高寺側についた者たちで、彼女はむしろ七歌たちと同じ巻き込まれた側なのだが、創始者の一族として最低限の手綱は握っているべきだったと思っているらしい。
しかし、美鶴とて別に遊んでいた訳ではない。父親が倒れて今も意識不明なのだ。
学生でしかない彼女に出来る事などたかが知れているので、別に謝ってもらう必要はないと真田が返す。
「別にお前のせいじゃないだろう。警備部の人間も言っていたが、お前は報されていなかったようだしな」
「情報なんて自分でいくらでも調べられる。事実として、有里はグループの動きを読み切って、警備部がこちらに突入した直後に本邸を抑えてきた」
民間とはいえ本職の軍人が数百名に、戦闘ヘリが三機、さらに大型機関銃を積んだジープなどまで用意されれば、予備戦力として警備部を残していた高寺も投降するしかなかった。
仮に、厳戸台分寮を完璧に制圧し、メンバーたちを確保していればお互いに人質がいて交渉の余地もあったかもしれない。
だが、高寺たちのそんな思いも空しく、本邸が制圧されてから数分後に実働部隊の者たちが怪我を負った状態で運ばれてきた。
近代兵器に加えてペルソナまで出されており、戦える者を少数しか

用意していなかった高寺たちは敗北と作戦の失敗を認めるしかなかった。
自分にもそれだけの情報収集能力があれば今回のような事態にはならなかったと、美鶴が心の中で反省していれば、キッチン側のテーブルで頬杖を突いてつまらなそうな顔をしていたチドリが口を開いた。
「前置きとかは良いから結果から話してよ。こっちも暇じゃないの」
チドリやラビリスは話を聞くためにここにいるが、終わればそれぞれの家に帰る必要がある。
もしかすると、湊が桔梗組かマンションに帰っている可能性もあるので、話を聞き終わればすぐに帰るつもりだ。
故に、報告は簡潔にと告げれば美鶴も分かったと結果を最初に伝えた。
「そうだな。結果から言えばグループも人的被害はなかった」
「あ、そうなんだ。和邇さんと交戦して怪我してた人もいっぱいいたから安心しました」
「だが、完全に無事だった訳じゃない。身体の部位欠損や一度殺された者もいる」
『……え？』
風花がホッとした表情をした直後、美鶴が真剣な顔で吐いた言葉に全員が驚いた顔をする。
一般的な意味で考えるなら、人的被害がなかったというのは、全員が本当に無事か怪我をしてても軽傷な状態である事をいう。
けれど、もし美鶴の言った言葉が事実であれば、明らかに重傷であったり、死者まで出てしまっている事になる。
その者達がグループにとっては何の価値もない人間で、いなくなっても仕事に影響がないからと人的被害無しと言っているのであれば、流石にそれは酷いのではと思わなくもない。
ただ、美鶴はそういった意味で言った訳ではないようで、難しい表情で言葉を続けた。
「現われた有里は実働部隊に対し、結婚を控えた者の左手首より先を

刻んだり、子どもが生まれる者の両腕を肩から切断したり、来年成人式の娘がいる者の目を灼いたりしたんだ。その後、自分は関係ないと言った分家をナイフの投擲で殺害。止めに入った私を庇って菊乃が斬りつけられ、さらに存在価値を否定して心を破壊された。最早誰も抵抗出来る状態ではなかったが、最後に全てを奪うと言って蛇神の一撃で遠く離れた本社ビルを破壊した」
「それ全然無事じゃないッスよ」
「むしろ、どんだけ被害デカいんだよ」
どこを聞いても無事な部分が見当たらない。
声に出した順平と荒垣以外のメンバーも、実際に殺されたのは少数かもしれないが、それ以上に今後生きていくのが難しくなった者がいることに複雑な表情を浮かべている。
ただ、美鶴が欠片も心配した顔をしていないことだけが気になる。
もしや、他に何かあるのか。彼女の言葉を待っていれば、一呼吸置いてからしっかりと顔を上げた美鶴が続けた。
「そう。確かにそうなったはずだったんだ。だが、彼が指を鳴らすと全てがなかったことになっていた。本人は離れた場所でお母様とお茶を飲んでいた」
「この寮も掃除しよ思たら割れた窓くらいしか被害なかったんよ。湊君というか和邇さんが何人も攻撃してそこら中に血が飛んでたはずやのに、おかしいなって話してて」
「ああ。本人も言っていたが幻術を使ったらしい。認識の書き換えと幻で現実を侵食すると言っていたが、正直、我々の理解を超えていた。こちらにはそれが事実か確かめようもないしな」
ラビリスが言った通り彼女たちは警備部がいなくなってから掃除をしようとした。
カーペットや壁紙に血が飛び、酷いところでは床や壁が破壊されていた。
夜が明ければ学校があるというのに、これは非常に大変だと思って戻れば、何故か寮内は窓が割れていた以外の被害が全て消えていた。
七歌たちが捕まっていたのは確かで、警備部の人間もそれぞれ自由

に動いていた。
　それを制圧する際に和邇はかなり荒っぽい戦いを見せていたのに、全てが幻術だったとすればどの段階からそうだったのかと全員が首を傾げる。
「八雲君の幻術って魔眼だけじゃないの？」
「幻術系のペルソナも持っとるよ」
「じゃあ、その二つを組み合わせて何でもありっぽくみせてるのか」
　湊とてその能力は万能ではない。周りからはそう見えていたとしても、それらは湊が意識してそう見えるように振る舞っているに過ぎない。
　幻術に関しても同様で、確かに魔眼単体でも十分すぎる力を有しているが、そこに実体を持った幻を作り出すミックスレイドを組み合わせて使用している。
　ただ、ラビリスたちは幻術系の力を持つ玉藻の前を知っているが、ミックスレイドの方は彼女たちの前で使っているところを見せていないので、それが玉藻の前だけの力だと認識している部分がある。
　湊はそうやって情報の一部を与えておきながら大部分の詳細は伏せているため、ラビリスやチドリなら湊の力を知っているという先入観を利用し、桐条側には不完全であったり誤った情報が伝わるようにもしていた。
　これに関しては特別課外活動部を味方として認識し、勝手に湊の能力を話す彼女たちも悪いのだが、彼は昔からチドリたちに限らず他者を信頼していないため、最初から情報が漏れることを前提としている裏話があったりする。
　ここにいる者たちはそんな彼側の事情を知らないため、ただでさえ強力な幻術系能力を複数持っている彼の力にただ感心していれば、脱線していた話を戻すようにアイギスが会話に参加してくる。
「それで、八雲さんは桐条グループに対して何と？」
「あぁ。だが、その前にお父様が倒れた際に遺言状の開封がなされるようになっていた話をしよう。お父様は自分が道半ばで倒れる可能性を考え、死亡した時やグループの指揮を執れなくなった際に遺言状

を開封する事を事前に決めていたんだ」
湊の要求について話すには、まず彼の正当性を説明しておかなければならない。
単に大切な人が狙われたからという理由だけでなく、彼は高寺たちに何度も釘を刺して、忠告もしていたのだ。
「新代表の高寺さん以外は私とお母様、そして分家筋の人間が立ち会った。お母様や分家筋の者への分配は特に問題はなかった。だが、お父様は同族経営からの脱却に自分の死を利用しようとした。つまり、自分の持っていた株を全て売却するよう指示が書かれていたんだ」
「えっと、先輩のお父さんが持ってる株を売ったら何か問題あるんスか？」
美鶴の話を聞いていた順平が首を傾げながら聞き返す。
同じように話の意味を理解していない様子なのは、犬であるコロマルと、小学生の天田くらいなものだが、どうして高校生であるお前が分からないんだと七歌が呆れ気味に説明した。
「はぁ……あのね。株式会社ってのは、簡単に言えば株を一番多く持ってる人が一番力を持ってるの。創業者一族とか社員が持ってる株は一般公開してない部分で、だからこそ、他の人たちでは数を制限した公開株しか買えないんだよ。でも、ここでおじ様の持ってる未公開株を売れば、外部の人間が一番多く持てるようになるかもしれないって訳」
「え、それってつまり、桐条グループが乗っ取られるって事か？」
「あくまで可能性の話だけど、簡単に言えばね」
未公開株が世に出れば株の保有率が変わるかもしれない。
そうなれば、別の人間がトップに立ってしまい。今のように特別課外活動部の活動をグループから補助して貰えないかもしれない。
高寺たちが今回の騒動を起こした理由の一部を理解したところで、美鶴は補足するように説明を入れる。
「まぁ、七歌の説明の通りだ。今回、敵対した者に分家筋の者たちも味方した訳だが、その理由は親族である自分たちの誰にも経営権を譲渡

しない事への不満からだった。そして、高寺さんも外部の者に今グループが渡れば大変な事になるからと動いたらしい」
「影時間の事もまだ終わっていないんだ。高寺さんの懸念は正しいだろう」
真田も以前会った高寺の事は覚えていたのか、相手がグループの事を考えて今回の騒動を起こしたこと自体は理解できると答えた。
美鶴もその部分に関しては理解できるし、グループの人間の生活を守ろうとした彼自身にも好感を覚える。
だが、話が厄介な方向に進んだのは、父の遺言状に続きがあったからなのだと話す。
「まぁな。しかし、お父様の遺言状には続きがあって、有里が同意した場合に限り、特別課外活動部の全権を彼に委譲すると書かれていたんだ」
「もしかして、その場に和邇さんっていました？」
「ああ。高寺さんが死者に委譲する事は出来ないから無効だろうと言った際、ご丁寧に〝いいえ、坊ちゃまならここにいます〟と自分の胸に手を置いて答えた。まぁ、事実本人だった訳で、彼は貰えるものは貰っておき、権利が移ったからには勝手に触るなと答えていた」
あの場で和邇の正体に気付けたのは英恵くらいなものだろう。
それでも湊に執着していた英恵がいた手前、高寺も内心では呆れつつも湊に委譲する事を認める形を取ったに違いない。
しかし、その対応をしてしまったからこそ、高寺たちは自分たちを追い詰めることになった。
「でだ。その話もあったからこそ、高寺さんたちはかなり立場的に弱くなってしまっていた。お父様から絶対に手を出すなと言われていたアイギスたちを狙った事に加えて、彼の管理下に移ったものを奪おうとしたのだから」
そう。遺言状の開封をする際、その内容が法的に認められる範囲内であれば後から物申す事を認めないと事前に取り決めていた。
個人間で何かしらの取引を行なうのは自由だが、遺言状に書かれていた事はあの時点で承認されていた。

だというのに、高寺たちはそれを破って特別課外活動部に手を出し、さらには湊が大切に想う少女たちまで捕らえようとしてしまった。
湊にすれば散々釘を刺していたのに無視され、さらに約束まで反故にされた形である。これではもう実力行使で鎮圧するしかないだろう。
知らなかったことは事実だろうが、知らなかったでは済まないことが世の中には多々ある。
話を聞いた者たちはどことなく高寺たちに同情し、チドリがその後は話し合いで解決したのかと尋ねた。
「それで、八雲は何を要求したの？」
「その場にいる者たちの持つ未公開株と、売却するよう指示があった未公開株の譲渡。まぁ、書類上はちゃんと個人間で売買があった形にするようだがな。それと反省の意味も込めて高寺さんについた人間は全員頭を丸めるよう指示もあった」
「頭を丸めるって……子どもの悪戯じゃあるまいし」
一応、その対象には女性も含まれるのだが、それでも以前の彼からは考えられないような軽い罰則だ。
未公開株のほとんどを抑えたのは、グループその物を手中に収めるためだと予想されるが、ＥＰ社の経営もしている湊が相手ならグループの存続は問題ないだろう。
ＥＰ社がバックに付けばいくら不安定な状態でも桐条グループに手を出す馬鹿は出ないはず。
全体的に見ればグループにとってもプラスに終わっており、蛇神を完全に制御下においた彼を相手にこの結末ならば喜んでいいくらいだった。
だが、自分たちのオイタで罰を受ける者はいたが、不幸になった者はいないと思える結末だというのに、何故だか美鶴の表情は優れない。
それに気付いた七歌はどうしたのかと声を掛けた。
「美鶴さん、どうしたんですか？　もしかして、まだ何か要求があった

とか？」
「ん……まぁな。実は今回の件に菊乃も絡んでいたんだ。彼女は有里の死やお父様が倒れた事を受け、私が危険な戦場に出ないで済むように特別課外活動部を実質解体に追い込むつもりだったらしい。それは有里に潰された訳だが、彼女も高寺さんについた事実は変わらない」
自分の大切な人が危険な場所に行こうとするなら、止めようと思うのは至って正常な感覚だろう。
その際、他の人間を犠牲にする形になったのは良くないが、優先順位を考えれば他人を犠牲にしてでも目的を達成しようとする気持ちは理解できる。
ただ、他人を犠牲にしようとしたからには、自分も同じように切り捨てられる覚悟はしておかなければならない。
美鶴の表情から彼女が他の者とは違う要求を受けた事を察し、アイギスが静かな声のトーンで尋ねた。
「八雲さんは彼女に何を要求したのですか？」
「……純潔だ」
『……は？』
聞いた全員が美鶴の言葉を一瞬理解できずポカンと口を開けた。
だが、言った本人も頬を僅かに染めて微妙な表情をしているため、上流階級的な高度なジョークという訳でもないらしい。
ある意味でとんでもない要求ではあるのだが、彼女を作ろうと奮闘するも未だ交際経験すらない順平は、あれだけモテていてまだ女性の純潔を要求するとか正気かと驚きつつ美鶴に確認する。
「え、いや、それ先輩も有里もマジで言ってるんスか？」
「冗談で言う訳ないだろう。お母様もその場にいたが、加害者である桐条グループ側という事もあって、有里に文句を言える立場ではなく公私は分けろと一蹴された。おかげでお母様は今も有里に対して大層ご立腹な訳だが、問題は菊乃の方だ」
よく母親の一人でもある英恵がいる場で言えたものだとメンバーらはある意味感心する。

別に褒められた行為ではないし、どちらかと言えば馬鹿として突き抜けていると言えるくらいだ。
ただ、既に菊乃に何かしらの影響が出ているなら、もしや要求してすぐにお持ち帰りしたのかとゆかりが前のめり気味に訊く。
「え、もしかして、すぐに連れて行かれたんですか？」
「いや、未公開株なども含め一週間の期限は伝えられたが、いつどこへ来いとも言われていない。ただ、その話し合いの場には複数の使用人たちがいたんだ。結婚適齢期の者もいた事もあってその部分だけメイドたちに話が広まり、菊乃は仕事仲間たちから自分と変われと募られ吊るし上げ状態らしい」
未だ彼の毒牙に掛かってはいないらしい。
馬鹿な要求をしたようだが、言っただけなら後から冗談だったと言って済ませる事も出来る。
ただ、話を聞く限りでは湊の本当の狙いは組織の内部分裂にあるように思えてならない。
主を守るために主を裏切って、結果的に彼女は湊の敵になった。
ならば、その裏切り者に相応しい末路として、これまで仲間だと思っていた者たちから裏切り者と責めされれば良いと彼なら考えそうなものだ。
この場にいる者たちは彼のそういった部分も知っているため、菊乃の純潔を要求したと聞いてやや目が吊り上がっていたラビリスが、普段通りの目に戻りつつ溜息を漏らす。
「はぁ……湊君、絶対にそれわざとやわ。別に貰えるなら貰うんかもしれんけど、八割方仲間割れするよう嫌がらせで言ったと思うわ」
「滑稽よね。裏切ったから裏切り者で正しいのに、本人は何で自分がって思っているんでしょうから」
ラビリスは生き返っても湊は湊だったと呆れているようだが、チドリは自分も巻き込まれた事もあって裏切り者に相応しい罰だと小さく口元を歪めている。
美鶴は相手が幼馴染みな事もあって複雑なようだが、彼をよく知る者たちも同じように菊乃を今の状況に追い込むことが目的だったと

分かってどこか安心した顔をする。
これで本当に菊乃の純潔を奪う事が目的であれば、責任を取って身請くらいはして欲しいところだ。
住み込みで働く使用人というのは仕える屋敷から出る事がほとんどなく、出掛けたとしても買い出しに行くくらいな事もあって、出会いというものがほとんどない。
パーティーの招待客といい仲になって退職する者も中にはいるが、菊乃は美鶴と同い年の未成年。
世間から見れば幼いと言える歳なので、そんな娘を相手にしようとする者などほとんどおらず、いたとしても欲に染まった顔の中年や老人ばかり。
菊乃本人がそういう年上趣味なら認めるが、そういう訳ではないと知っている美鶴にすれば、湊が菊乃を身請するといえば反対する気はなかった。
「まぁ、有里にそういうつもりがないなら良かった。お母様にも説明しておこう」
「可能性はゼロじゃないですけどね。菊乃さんも罪滅ぼしにって本気にしてるかもしれませんし」
「……本当に厄介な事だ」
可能性はゼロではないと言ってしまえば、確かにそうなのだが、美鶴としてはこの件を〝嫌がらせが目的だった〟で終わらせたかった。
恐らく英恵はママ友である桜に湊が菊乃に要求したものを伝えているだろうし、今も本気でどうすれば湊を更正させられるか考えているに違いない。
しかし、美鶴が他の者も同じ考えだと告げれば、きっと▪彼女は安心して再び湊に優しい母親として接することが出来るはず。
湊が生き返ったと言っても、それが分かるまでずっと塞ぎ込んでいて、さらに夫が倒れた事で英恵も心身共に疲れている。
美鶴もそれが分かっているので、少しでも英恵が安心できるよう話が終わってチドリたちが帰ると、三階の自室に戻ってから母へと電話を掛けるのだった。

第三百六十八話　三人目の転校生

１１月９日（月）
朝――月光館学園
桐条グループとの争いも終わり、日曜日はゆっくりと休めたことで、七歌は清々しい気持ちで登校することが出来ていた。
桐条武治は未だに目覚めず、幾月たちの動きも不明だが、桐条グループが敵ではなくなったことは大きい。
グループに参考人として連れて行かれていた栗原も土曜日の内に解放され、今日から骨董品屋の仕事を再開すると聞いている。
全てが元通りという訳ではないが、それでも湊が死んでからバラバラになっていた物が以前のような形に戻りつつある。
メンバーたちのペルソナもほとんどが進化しており、未だ終わりは見えぬものの、新たな階層が開いたタルタロスでの戦いもどうにかこなしていけることだろう。
美鶴も帰ってきた事で、今後はどういったスケジュールでタルタロスへ行こうか七歌が考えていれば、校門の近くまで来ていた七歌の耳に近くにいた女子たちの話している声が聞こえて来た。
「ねぇねぇ！　ビッグニュース！」
「朝からテンション高すぎ。んで、ニュースって？」
「今日、転校生が来るらしいんだけど、すっごいイケメンなんだって！」
女子たちは七歌と同じ高等部の制服を着ている。
高等部ならばイケメンなど湊でも見飽きているだろうに、どうしてそこまでテンションが高いのか理解できない。
ただ、その転校してくるイケメンについては七歌も心当たりがあった。
先週の終わり頃、蘇った湊と共に戦場に現われた少年〝望月綾時〟。彼が転入のための手続きに学校に来ていた事は知っている。
こんなタイミングで何人も転校してくるとは思えないので、女子の言うイケメンは間違いなく綾時の事だろう。

七歌から見た綾時は顔立ちは確かに整っているし、女性への気遣いも随所に感じられたので話しやすい。
ただ、湊とは違った意味で人間性がどこか希薄に思えるため、付き合う相手として見れば今のところは守備範囲外と言えた。
しかし、一般的な女子たちにとっては新たなイケメンの登場は十分なニュースらしく、話しかけられた女子の方も意外とノリ良く会話を続けている。
「あぁ、皇子が抜けてウチの学校のイケメン比率下がってたもんね」
「そうそう！　やっぱ現実見なきゃって思うじゃん？　皇子いないならプリミナ入っててもしょうがないし。私、次はその人を追おうと思う！」
「現実見るなら追わずに声かけなよ」
湊の死が生徒たちに告げられたのは約一ヶ月前。
直後はまさに阿鼻叫喚と言った感じで、錯乱する者やショックのあまり気を失う者などが多数出てしばらくまともに授業することも出来なかった。
ただ、人間とは慣れる生き物だ。どんなに辛いことでも時間が経てば強い感情を維持し続けることは難しい。
彼の公認ファンクラブであった〝プリンス・ミナト〟の会員たちもそれは同じで、狂信者とも言えるような者たちを除けば、ほとんどはただ彼をアイドルとして好いていただけだ。
死んだ直後は悲しくとも時間が経てばそれも薄れ、今では勿体なかったと彼の死について軽口で話せてしまえるようになっている。
青年のように話題になった人間でもそうなのであれば、個人の命はやはり社会にとってはとても軽いのだろう。
最近、死を身近に感じることがあった七歌は、世の中のままならぬ部分について考えながら校舎に入っていった。
＊＊＊
湊の帰還を機にアイギスも復学した事で、特別課外活動部のメンバーたちは全員が学校に来ている。
おかげでクラスの雰囲気も一月前よりも良くなり、事前に学校中で

転校生の噂が広まっていた事もあってか女子たちがどこかソワソワしている。
男子たちは女子ほどのあれこれは無いようだが、それでも新しいメンバーがクラスに加わるイベントなどそうあるものではない。
故に、どこか期待に満ちた表情で待っていれば、チャイムが鳴ってから教室にやってきた担任の鳥海の後ろにいる少年にクラス中の視線が集まった。
「はーい。皆、静かに。今日からまたウチのクラスに新しい仲間が加わります。四月から数えると三人目よ？　人数調整するならお隣のクラスに入れるべきだと思うのよねぇ」
やって来た少年は案の定、先日会ったばかりの綾時だった。
この学校の制服を着るつもりはないのか、彼の服装は初めてあった日と同じだ。
柔和な笑みを浮かべた彼は首には黄色いマフラーを巻き、背中側でクロスしたサスペンダーがどことなくオシャレに見える。
新たな仲間がクラスメイトたちに微笑んでいるので皆そちらに気を取られているが、先ほどの鳥海の言葉はやや配慮に欠けていた。
大人でもそうなのかと七歌が小さくうんざりしていれば、自己紹介をするように言われた彼が口を開く。
「えっと、はじめまして。望月綾時っていいます。分からない事、優しく教えてくれると嬉しいな」
湊が強大な軍事力を持つ帝国の皇子だとすれば、綾時は平和を愛する王国の王子と言ったタイプだ。
女子の一部はその優しげな笑みに心を射貫かれたようで、私が教えてあげると手を振っている者もいる。
七歌の記憶が正しければ、彼女は湊のファンクラブの高等部二年の中でそれなりに高い地位にいたはず。
各学年に代表がおり、それを補佐するメンバーを含めて幹部と呼んでいた。
だが、事実上休止状態だと幹部もただの女子高生になってしまうようで、綾時に手を振っている彼女の頭からは湊の存在は完全に抜け落

ちているに違いない。
七歌がクラスメイトをそんな風に観察していると、生徒名簿を見ていた鳥海が補足するように言葉を続けた。
「彼はご両親のお仕事の事情で海外生活が長かったの。日本の習慣に慣れてないところもあるみたいだから、皆で色々と親切に教えてあげてね。じゃあ、席は……そこ丁度空いてるから座って」
言いながら鳥海は窓側から二列目の先頭の席を指す。
綾時は言われた席に大人しく座ったが、それを見ていた他の生徒たちはどこか微妙な表情を浮かべている。
なにせ、鳥海のクラスは人数の関係で窓側と廊下側の最後尾が一つ分少ないため、クラスに新たなメンバーが加わればどちらかに新しい机を置くことになるのだ。
だというのに、綾時が座ったのは列の先頭。そんな場所が普段から空いているはずがなく、空いていたとすればその席には本来の持ち主がいるという事になる。
アイギスが転校してきた時も似たような事があったので、心のどこかで無駄だと分かっていても、本来の持ち主の事を考えてゆかりが一応指摘した。
「先生、そこ今日は休んでるだけだと思います」
「席を決める日に望月君はいて、本来の持ち主はいなかった。なら、そこはもう望月君の席です。世の中は常に椅子取りゲームなのよ。欲しいのなら自分で勝ち取りなさい」
休んでいる理由が病気なのかサボりなのかは分からない。
ただ、別に目が悪くて前の席に座っていたタイプではなかったので、休み明けに自分の席が転校生に奪われていたというショックはあるかもしれないが、結果的に教師から遠い最後尾に移動出来て喜ぶ可能性の方が高い。
ある意味、不幸になる者がいなかったので良いのかもしれないが、他のクラスメイトにすれば自分も何かあった時に簡単に切り捨てられるのではという小さな不安を覚えた。
鳥海の過去に何があってそこまでシビアな価値観を持っているの

かは不明だが、彼女もアラサーなので色々と考える事も多くなっているのだろう。
簡単な質問タイムを挿むとすぐに一限目の授業が始まり、担当だった鳥海が私語が五月蝿いと叱った事で、綾時への本格的な質問タイムは昼休みまで持ち越される事になった。

昼休み――月光館学園
籠球皇子ブームで全国に広まり、高等部に進んでからはテニスでも活躍した事で、万能皇子として湊の知名度は有名アイドル事務所のアイドルにも負けない規模になった。
おかげでファンクラブのメンバーも大幅に増え、その中から各分野のスキルを持った者たちの力を借り、学校のサークル活動でしかなかった〝プリンス・ミナト〟も今では小さいながらも一つの企業として動いていた。
主な活動内容は湊の芸能活動の補助であり、そういった意味では湊の所属する芸能事務所とも言えるかもしれない。
ライセンスの取り扱いに、グッズ販売、売り上げの一部を福祉団体に寄付したりなど、大きく動くような事は稀だがそれなりに仕事はあった。
サークル時代から会長として活動していた高等部三年の雪広繭子は、湊が死んでからもしっかりと仕事を続けていたのだが、彼の死を伝えられた日から世界が色褪せて見えていた。
「あの、雪広先輩。すみません。私、プリミナそろそろ抜けさせてもらいます」
「……そう。寂しくなりますね」
「本当にすみません。でも、やっぱり私も前に進まないとって思うんで」
購買部に行くため一階に降りてきた雪広の許に一年生の女子がやって来ると、相手はファンクラブから脱退したいと伝えてきた。
口では寂しくなると言ったが、彼女は本心ではそんな事は思っていない。

後輩の女子がやって来た時点で相手が何を言ってくるかなど察していたからだ。
脱退を告げた相手は一礼してから去って行くと、すぐに表情を一変させて購買部の人集りの方へと進んだ。
そこには今日転校してきたばかりの少年と、彼を囲む女子の集団がいた。
にこやかに笑って買い物の仕方を聞いている少年に、同じクラスの女子だけでなく他の学年の女子たちも姦しく何かを伝えている。
確かに顔立ちは整っており、物腰も含めて王子様タイプと言えるだろう。
雪広から見てもそう思えるのだから、ミーハーな女子にすれば〝新しい恋〟の相手にうってつけに違いない。
先ほどの後輩女子は前に進むと言っておきながら、すぐに別のイケメンに鞍替えしただけで、彼女自身の成長や変化というものは感じられない。
だが、転校生を囲んでいる女子の中には、後輩女子よりも先にプリミナを脱退した女子たちが多数混じっている。
(貴女たちにとって彼はアイドルの一人だったようですね。流行り廃りがあるように、いなくなれば代わりを探すだけ)
その集団に近付く気になれず、雪広は靴箱の近くに立ち止まって冷めた目でそれを見ていた。
一ヶ月前に彼は死んだ。もう二度と会う事はない。
いくら活動を続けようと、それは過去の記録を繰り返し見ているだけでしかなく。時間が経つにつれてこの活動に意味はあるのかと疑問を抱く者が増えた。
雪広は湊の指示で売り上げの一部を寄付しなければならないので、事務所の代表としての仕事を続けているが、サークル時代の幹部も全員がその企業に所属している訳ではない。
だからこそ、彼に近い場所にいたファンクラブのメンバーほど早期に見切りを付けて脱退する傾向があった。
脱退していった本人たちは、いつまでも自分がこうでは皇子に心配

を掛けるだけだから、と健気なヒロイン気取りのようだが、外野からすればただ傷が癒えて興味を失ったようにしか見えない。
死んだと聞いた時には大泣きしていたようだが、数日も経てばケロリとしていたので、熱しやすく冷めやすいファンの典型のような者たちだったのだろう。
(ですが、本来ならそういった方が健全なのでしょう。わたくしのように彼の死を聞いても涙を流せないような人間よりは)
すぐに新しいイケメンに乗り換えている女子を冷めた目で見ていた雪広だが、彼女は大切な人の死を聞いても泣けなかった自分の方が異常だと思っていた。
死んだと聞いた時は驚いたし、二度と会えないと分かった時には胸が苦しくなった。
けれど、今もそうだが実感が追い付いて来ないのだ。
学校で行なわれた告別式では大勢が泣いていたし、彼と親しかったチドリやアイギスがしばらく学校に来なくなっていたのも知っている。
湊とは色々と因縁のあった真田ですら、彼の死を侮辱するような言葉を吐いていた相手を怒鳴りつけて侮辱するのは許さないと言っていたのだ。
どう考えても彼が死んだのは事実であり、それを未だに認められない少女は鈍感なだけなのだろう。
一月の間に何度も同じ事を考え、そういった自覚のある彼女は、けれどと胸の前で重ねた手を握り締めながら一人思う。
(でも、それでも、……わたくしには貴方を『思い出』にする事が出来ないのです)
彼の事を思い出に出来たらどんなに楽だろう。
思い出に、過去のことに出来たなら、雪広も今頃視線の先にいる女子たちのように新しい恋に生きていたかもしれない。
簡単に心変わりした彼女たちのことをどこか見下していたが、それと同時に雪広は自分には出来ない事を簡単に出来る器用さを羨ましくも思っていた。

（今も好きで、大好きで、貴方に会いたい。声を聞きたい。出来る事なら初めて会った日のように、優しく微笑んで貰いたい。この気持ちに嘘は吐けない。だから、わたくしは貴方のことを過去にする事なんて出来ないんですっ）

胸の前で重ねた手が白くなるほど強く握り締めながら、雪広は胸の奥に広がる痛みや辛さに耐える。

本当は彼女だって分かっているのだ。こんなのはやせ我慢でしかなく、自分も他の者たちのように一度泣いてしまえば楽になれるのだと。

しかし、他の者たちが泣いていたからこそ、自分まで同じように泣いてしまえば彼の死が現実として降りかかってくる。

だからこそ、自分はその現実を否定し続けなければならない。

奇跡を信じて、彼の事をいつまでも〝現在〟に置いておくために。

そうして、一人の少女が彼の死を知った日から一歩も進めなくなり、時が流れてゆく世界から取り残されていることに耐え続けていると、突然、後ろから左肩に手を置かれ少女は右に向かって抱き寄せられた。

「――――ありがとうございます。俺の事を過去にせず想い続けてくれて」

「……え？」

急に抱き寄せられた事に驚く間もなく、雪広は耳に届いた声に驚愕して声のした方を見上げた。

そこには最後に会った日と変わらない。いや、右眼につけていた眼帯がなくなってはいるが、記憶の中にあった姿のままの青年がいた。

驚いているのは雪広だけでなく、靴箱前のエントランスにいた生徒たちが彼に気付き、ここにいるはずのない青年を見て言葉を失っている。

今の彼は制服のジャケットの代わりにオリーブドラフ色の上着を着て、首にはトレードマークの黒いマフラーを巻いているが、それ以外は基本的に学校指定の制服を着ている。

ずっと学校に来てなかったので、その姿すらも逆に新鮮に見える

が、その場にいる者たちが言葉を失っているのはそれが理由ではない。
単純に、死んだはずの人間が目の前に現われた事で、驚愕のあまり何も言えなくなっているのだ。
ただ、他の者と違って彼の事を過去にする事が出来ていなかった雪広だけは、ずっと願っていた奇跡が目の前に起こった事で目に涙を溜めつつも口を開く事が出来た。
「本、当に……皇子、なのですか？」
「本当かどうかは分かりませんが、二年の有里湊本人ですよ」
「これは、夢ではないのですよね？　貴方を想うあまり、幻を見ているとかではないんですよね？」
「先輩に触れている感覚はありますし。エントランスにいる全員が同じ俺の幻を見ているとは考えづらい。なら、逆説的に現実と言えるのでは？」
その言葉を聞き終わると同時に、雪広は我慢できなくなり大声を上げて泣きながら青年に抱きついた。
少女が泣き始めた事が切っ掛けとなって周りも動き出し、死んだはずの青年が現われたという情報は瞬く間に拡散してゆく。
情報が広まるにつれて、真偽を確かめようとした生徒たちがエントランスに集まり徐々に空間のキャパシティーを超えようとする。
その騒ぎで教師たちも何か起きていることに気付いたようで、何人もの教師が職員室から出てきたが、すし詰め状態のエントランスには入れない。
しかし、集まってきた生徒に潰されないよう、雪広をお姫様抱っこした状態で靴箱の上に待避していた湊の姿が見えたことで、教師たちも生徒と同じように彼の姿を見ようと騒ぎ始めてしまった。
どうして大人まで子どもと一緒になって野次馬と化しているのかと思わず呆れそうになるが、このままでは押し合いになって怪我をする者が出てくる。
なら、ここらで止めておこうと青年が良く通る低い声で告げた。
「――――全員その場で止まれ」

瞬間、騒いでいた者たちがピタリと止まってエントランスは静かになった。
どうして自分はその言葉に従ったのかと混乱している者も中にはいたが、それでも全員が止まったことで危険が去ったのは事実。
大人しく彼の言葉を聞くだけの余裕が出来たので、その場にいる者たちは顔と目だけ動かして彼に注目した。
「まぁ、再会を喜ぶ気持ちは分からなくもないが、このままでは怪我人が出る。俺はちゃんと生きているし、こうやって足もある通り幽霊ではない。どうして死んだはずなのに生きているのかなど聞きたい事はあるだろうが、生きているのならこれから話す時間はあるんだ。今は大人しく昼休みを過してくれ」
そういって彼が手を叩くと言われた通りに生徒たちは自分の教室へと戻ってゆく。
本当はこの場に残って話を聞きたいのだが、何故だか彼の指示に従おうという気になって留まることが出来なかった。
少しすれば生徒たちはいなくなり、ようやく降りる余裕が出来た湊は下に降りてから雪広を解放する。
「先輩、騒ぎに巻き込んですみませんでした」
「い、いえ、それより、その、わたくしが抱きついて泣いたせいでシャツが……」
言いづらそうにしながらも雪広が告げた通り、湊の着ているワイシャツの胸辺りが濡れてしまっていた。
乙女の意地によってその水分は涙１００パーセントではあるのだが、人の服を濡らしてしまった事に変わりはない。
再会した直後に失礼な事をしてしまい。雪広が申し訳なさそうにしていれば、少し考える素振りを見せてから湊は上着を雪広に預けてワイシャツを脱ぎ、脱ぎ終わると再び上着を着て上だけ完全に私服のような状態になった。
「じゃあ、これは先輩にあげます。返す必要はないのでいらなければ処分しておいてください」
「えっ……あの、えっと……はい。適切に処理させていただきます。

では、また。失礼します」
湊のワイシャツを受け取った雪広は、頬を染めながらどこか嬉しそうに教室へと去って行った。
それを見送った湊は、職員室前の廊下に集まり何か言いたげな教師たちの方へ視線を向けると、小さく口元を歪めてから口を開く。
「俺も来週の修学旅行には参加するのでよろしく。ああ、宿は自分で予約したので心配は無用です。それでは」
言うだけ言って湊は教室棟の方へと歩き出す。
教師たちは聞きたいのはそこじゃないという顔をしているが、上手くはぐらかされる気しかしていないのか引き止めようとする者もいない。
ならば、自分はこのまま教室に向かわせて貰おうと階段の方へ進めば、一階と二階の間の階段の踊り場に以前副担任から昇格してE組の担任になった佐久間が立っていた。
相手は俯いているので前髪に隠れて表情は見えないが、小さく肩が揺れているので泣いているのだろう。
それを見た湊は面倒なものには関わらない方が良いと足音と気配を殺して横を通り過ぎようとする。
しかし、横を通り過ぎようとした瞬間に横から腕が伸びてきて、無理矢理に青年を振り向かせると、そのまま佐久間は湊の唇に自分の唇を押し当ててきた。
時間にすれば十秒にも満たない短い時間だが、ここは学校で二人は教師と生徒だ。
こんな場面を見られればお互いにただでは済まないぞと、身体を離した湊が視線で相手を責めれば、笑顔で涙を流していた佐久間が嬉しそうに話しかけてきた。
「えへへ……おかえり、有里君」
「……教師なら公私くらい分けろ。まぁ、ただいまだ」
年齢的には一回り近く佐久間が上なのだが、外見的には二人は湊の方が年上に見える。
そのせいか、どことなく年上に甘えるような態度を取ってきた佐久

間に毒気を抜かれ、湊は呆れつつも相手の頭に手を置いてポンポンと撫でてから小さく嘆息した。
相手もそれなりに自分に依存していたことは知っていたので、今回のように意外とあっさりした反応は正直予想外だった。
湊の予想ではもう二度と離れないし、絶対に離さないと自分を物理的に拘束してくると思っていた。
青年の周りの女性陣は、そういった闇が深いタイプの女性が大勢いるため、彼も過剰に警戒していた部分はある。
ただ、実際に大切な人が死んで、改めて相手が自分にとってどのような存在だったかを確かめた者にすれば、彼が無事に帰ってきてくれた嬉しさで他の事はどうでもよく思えるのだ。
生徒に対して湊が言っていたように、生きているのだから再び話すことが出来る。
故に、佐久間も湊が戻ってきた事が実感できれば、今はそれだけで十分だと笑顔のまま涙を拭って去って行った。
思ったよりもあっさりとした再会を意外に思いつつ、湊が階段を上っていくと二年生のフロアに到着する。
一学期の時点で修学旅行の計画は進んでいるが、午後から来週の修学旅行のより細かい話をするはずなので、湊は個人的には良いタイミングで戻ってきたと思っている。
そうして、E組の扉に手を掛けて開き、教室の中へ入ると生徒たちの視線が一斉に青年に集中した。
どうして生きているのか聞きたいのだろうが困惑して話しかけることが出来ず、中には彼の姿を見ただけで泣いている者もおり、彼が教室に来ただけだというのに中々の混沌具合だ。
だが、そういった視線を受け止めつつも無視して彼が自分の席に向かえば、彼はわざとらしく悲しい表情を作ってから呟いた。
「……都内でも有数の進学校だというのに、こんな子ども染みたイジメをする人間がいるとは嘆かわしいな」
呟いた青年の視線の先には、彼の遺影と手入れの行き届いた花が生けられた花瓶が置かれた机があった。

確かにイジメの一種として死んだ人間扱いするというものがある。
相手の机の上に花瓶や線香立てを置いて、本人のことは死んで幽霊になっているからと完全に無視するのだ。
本人が生きた状態で登校してきたため、状況的にはそのイジメと同じなのだが、周りの人間は彼が本当に死んだと思っていたのでプリミナの会員が毎日手入れしている花をそのままにしていた。
だが、それを見た本人がショックを受けた様子を見せれば、このクラスにいるプリミナの会員が頭を抱えて「やっちまった」という顔をする。
クラスメイトたちが両者の間で視線を行き来させ、どうするんだこの空気と困惑していれば、美紀や風花と一緒にお弁当を食べていたチドリが彼に話しかけた。
「……ずっと休んでるからそうなるのよ」
「チドリの席は無事みたいだが？」
「五月蝿い。てか、死体が喋らないでよ」
「死体だって文句があれば喋るくらいするだろ」
彼の言葉に教室中の人間が「ねーよ」と心の中で思う。
死体は死んでいるから死体なのだ。死んでいる以上は話すことなど出来るはずがない。
何を思って彼は死体が話せると考えたのかは分からないが、チドリの様子から彼が生きている事を彼女は知っていたらしいと察する。
本当に驚いた顔をしている美紀以外、一緒にお弁当を食べていたラビリスと風花も苦笑しているので、彼が生きている事を知っている者は何人かいたようだ。
ならば、もう我慢しておく必要もないだろうと、笑顔のまま泣いていたバスケ部の渡邊や中等部の生徒会で一緒だった西園寺が湊に向かって駆け出す。
「かいちょー!!　おかえりなさいッス!!」
「ミッチー、おかえりー!!」
二人が駆け出すと他の者たちも湊の許に集まって彼の帰還を喜んだ。

なんで生きているのかは分からないが、生きている事自体が嬉しいのでは今は細かいことはどうでもいい。
そうして、彼との再会で教室中が大騒ぎになり、その騒ぎに乗じて遺影と花瓶を回収するプリミナの会員の姿があったりなどしたが、彼の復帰はクラスメイトたちに暖かく受け入れられた。

第三百六十九話　クラスメイトとの再会

昼休み――月光館学園

死んだはずの青年が現われた事で、校舎はパニックに陥った生徒たちの声に包まれた。

けれど、怪我人が出る前に青年がそれを止め、さらに大人しく自分の教室に帰るように告げたことで既に騒ぎは一定の治まりをみせている。

だというのに、二年E組では今も生徒たちが騒いでおり、自分の席の机に腰掛けた青年は呆れたように騒いでいるクラスメイトたちを見ている。

「……お前たち、既に次の進路について考え動き始めなければならない時期だろうに、修学旅行に浮かれて大騒ぎして自覚が足りないんじゃないか？」

湊の周りでは今も大声で騒いでいる生徒たちがいるが、笑っていたり泣いていたりと中々に混沌としていた。

彼はそれを修学旅行が目前だから浮かれていると判断し、かなり見当違いな事を言っているのだが、青年の言葉を聞いた中等部生徒会時代の同僚である西園寺と渡邊は、真っ赤になった瞳から更に涙を流してこれが湊だと嬉しそうにする。

「うわぁぁぁぁん!!　やっぱり、本物のミッチーだよぉ！」

「あぁ、間違いねぇ！　自分が原因なのにこんな上から目線で見当違いな事言えるのなんて会長しかいねぇよ！」

「……お前らぶっ飛ばすぞ」

周りの者たちはこれこそ湊だと、泣きながら大喜びという器用なリアクションを見せる。

しかし、その納得の仕方は喧嘩を売っているのかと湊が呆れ気味に睨むも、他の者たちが再び「本物だ！」と騒いだ事で青年もこれはどうしようもないと相手することを止めた。

彼が反応しなければ周りも大きなリアクションは取れない。

そう思っていたのに周りはお祭り騒ぎを止めず、一度は自分たちの

教室に帰ったはずの生徒たちがE組の出入り口から教室内を覗きに来たことで、騒ぎは更に大きくなっていく。
　チドリたちはそんな周りの様子を少し離れた場所で眺めていたが、メンバーの中で一人だけ彼の帰還を知らなかった美紀が困惑気味にチドリらに尋ねた。
「あ、あの、チドリさんたちは有里君が生きてるって知っていたんですか？」
「私たちもずっと知らなかったわよ。四日前の深夜に急に帰ってきたんだから」
「流石にウチらも死んだと思ってたから驚いたのは一緒やで」
　今の美紀は影時間の記憶を失ったことで湊との思い出を失っている。
　他のメンバーたちと美術工芸部と総合芸術部で過した事は覚えているのに、その中に彼の存在だけが綺麗に抜け落ちているのだ。
　ただ、風花をいじめていた森山が彼女を気に掛けるようになったように、影時間に関わる記憶を失っても感情が焼き付くことはある。
　おかげで美紀はこれまであまり親しくなかったはずの湊の帰還を、自分でも不思議に思うくらい心から喜んでいるのだが、彼女の持つ常識が邪魔をして他の者たちと同じように振る舞う事は出来なかった。
　チドリやラビリスも彼が死んだと思っていたなら、彼の死は現実として起こったはず。
　ならば、どうして死んだはずの青年が生きているのか。
　美紀だけでなく他の者たちも同じ疑問を持っていたため、代表して湊の傍にいた渡邊が直接彼に訊いた。
「あ、そこっす。会長マジでどうなってるんスか？　死んだのは嘘だったとか？」
「そんな無駄な嘘吐く訳無いだろ。ちゃんと死んださ」
　彼が死んだと聞いた時には渡邊も現実を受け止められず、一人になってから泣いたりもした。
　あの時の涙を返せとは言わないが、仮に嘘を吐いていたら質が悪すぎると言わざるを得ない。

同じように思っていたクラスメイトたちも真剣な顔で湊を見れば、そも別に自分で自身の死を周りに広めた訳ではないと答えつつ、湊は死が現実に起こった事実だと告げた。
それを聞いたクラスメイトの何人かは青い顔をして距離を取り、西園寺もどこか不気味そうに湊を見つつ確認を取る。
「じゃ、じゃあ、ここにいるミッチーは幽霊ってこと？」
「ちゃんと肉体があるだろ」
「なら、ゾンビ的な？」
「そんな不思議生物と一緒にするな」
幽霊ではないことは確実だが、それでゾンビ扱いされては堪らないと湊は嫌そうな顔をする。
ただ、ゾンビが生物の枠に含まれるかは議論の余地があるだろう。
周りのほとんどの者たちは生物ではないだろうと思っているが、敢えてそれを指摘せずにいれば、湊が小さく溜息を吐いてから口を開いた。
「お前たちだって寝ても時間が経てば起きるだろ」
「まぁ、二度寝する時もありますけど、寝飽きたら起きますよ」
「それと一緒だ。永眠だって眠りだ。ならそれから起きただけのこと」
『えー……』
永眠とは死を別の言葉に呼び変えただけであり、睡眠の一種という訳ではない。
そんな事は小学生でも知っているし、いくら彼が真面目に言おうとも納得できる者などこの場にはいない。
だが、彼がどこか他の者と違っているという認識は全員が持っているため、どんなに非科学的な事であっても〝彼ならもしかして〟と思えてしまう部分がある。
真実を明かす気が無くて適当なことを言っているのか、それとも彼の言っている事は事実なのか。
クラスメイトたちの意見が分かれていると、教室の入口の方が騒がしくなり、中を覗いていた野次馬の人垣が分かれて誰かが勢いよく教

室に入ってきた。
入ってきた相手は湊を見るなり大粒の涙を流しながら駆け寄り、最後にはその勢いのまま彼に向かって飛び込む。
子どもならばともかく、成人と変わらぬ体格の人間砲弾など、まともに受け止めれば一般人なら簡単に吹き飛ぶだろう。
けれど、湊は相手の力の向きを読みきり、力だけを受け流すように殺して、自分に向かって飛び込んできた後輩を抱きとめた。
「……羽入、危ないから飛び込んでくるな」
「……うんっ……うんっ……」
湊のファンクラブである〝プリンス・ミナト〟の会長に続き、自分の胸で泣くのは本日二人目だ。
相手が年下なので黙って受け入れてあやしているが、久しぶりに学校に来たくらいで何故こんなに泣くやつが多いのかと湊は少々うんざりしていた。
「羽入さんっ!!」
湊が自分に向かって飛び込んできた一年の羽入かすみをあやしていれば、再び教室の入口の人垣が割れて一人の少女が入ってきた。
相手は湊が中等部で生徒会をしている時に部下として所属していた一年の宇津木。
彼女は羽入の友人もあるため、恐らくは教室を飛び出した少女を心配して追って来たのだろう。
だが、そんな彼女も羽入をあやしている青年を見るなり、表情をくしゃくしゃに歪ませて泣き出してしまう。
「……かい、ちょう……ううっ、ぐすっ……あぁぁぁぁぁぁっ」
「はぁ……人が一人死んだくらいで大袈裟な」
湊の正面は羽入で埋まっているからか、宇津木は泣きながら近付いてくると、そのまま湊の右腕辺りに抱きついて号泣し始める。
どうして自分が後輩たちの面倒を見る必要があるのかと、湊は相手の泣いている理由も含めて理解できないと嘆息する。
しかし、相手が泣くに至った原因は彼との死別だ。事故など突然の別れで親しい者を失えば、ぽっかりと心に穴が空いたような喪失感を

覚え、突然すぎて理解が追い付かない事もあって哀しみを引き摺る事が多い。
彼女たちは特にそういった部分が強かったのか。まだ完全に彼の死を受け止める事すら出来ていなかった。
悲しくて、辛くて、どうしようもなかった時に湊が戻ってきた。
これで泣くなという方が無理がある。
湊にとっては〝一人死んだ〟程度のことであっても、他の者からすれば掛け替えのない存在の喪失だったのだ。
もっとも、他の者たちは心の中で人が死んだら十分に大事件だよとツッコミを入れるが、場の空気を優先してそれを口に出す者はいなかった。
そうして、二人の少女もしばらくして泣き止むと、クラスメイトたちと同じように彼が生きて現われた理由を尋ねてくる。
「あのね。湊君が死んじゃったって聞いた時はとっても悲しかったの。もう会えないんだって思ったら涙がたくさん出て、香奈ちゃんと一緒に泣いたりもしたの」
「あの、またお会いできて嬉しいです。ただ、どうして会長がここにいるんですか？　その……亡くなったというのは誤った情報だったのですか？」
「いや、間違いなく死んだぞ。戻ってきてから手続きしてないから、もしかすると、公的には死亡したままかもしれないな」
湊が死んだ時に辰巳記念病院で死亡診断書を作り、鵜飼が湊が死んだという届けを公的機関に提出している。
湊が戻ってからまだ四日しか経っておらず、戻ってきた日の夜以外は外で活動していたので、湊の死亡届は撤回されていない。
本人がいない場で訂正など出来るはずもないのだから、間違いなく彼は公式記録では死んだままだ。
本来それはとても大変な状況なはずなのだが、本人は何でもないことのように言ってのける。
おかげで周りの者はそこまで問題がある訳ではないのかなと勘違いしたりもしたが、後輩二人は湊が生きてここにいる事が重要なよう

で、その部分についてはスルーして話を続ける。
「えっと、湊君はおばけさんなの？」
「……そのくだりはもうやったな。ちゃんと生き返ってるから安心しろ」
「生き返るってどうすれば出来るんですか？　いえ、その、私は会長と再び会えて勿論嬉しいのですが」
　こんな聞き方をすると、まるで生き返って迷惑だと伝わると思ったのか慌てて宇津木が本心を伝える。
　別にそんな事を言わなくても問題はないのだが、湊は後輩相手だと甘くなるのかクラスメイトに訊かれた時よりもいくらか真面目に答えた。
「こっちで俺の死体が盗まれたと話題になったそうだが半分正解だ。俺の死体は完全に体組織が死ぬ前に運び出されて保管された。で、後は蘇生させるだけの準備が整ってから解凍し、蘇生処置を施して復活という訳だ」
「解凍って……コールドスリープという事ですか？」
「まぁ、それに近い。日本ではまず認められない方法でな。国外に運び出す必要があった訳だ」
「そうだったんですか。すごいですね」
　そんな技術があったのかという驚きと、それを可能とする技術を持った人間との繋がりを彼が持っている事への驚きに周りはしばし呆ける。
　彼の話を聞いた限りでは事前にもしもの時の対応を話し合っていたようだが、遺体の運び出しも含めて蘇生方法には非合法な部分が多そうに思える。
　これ以上はやぶ蛇を突く事になりそうなので、湊がどうやって戻ってきたのか理解できた宇津木は、それ以上の言及を避けて湊の帰還を素直に喜んだ。
「またお会いできると思っていなかったので、本当に嬉しいです。会長、おかえりなさい」
「えへへ。湊君、また一緒にあそぼうね」

「……ま、時間があったらな」
湊が帰ってきた事をしっかりと確認出来たことで満足したのか、彼の返事を聞くと後輩たちは昼休みが終わる前に自分たちの教室に戻っていった。
ようやく解放されたと小さく溜息を吐いた湊は、ワイシャツに続けてTシャツまで人の涙で濡れた事を地味に憂鬱に思う。
羽入も雪広と同じように涙で濡らしただけで、別に汚いとは湊も思っていない。
ただ、それでも濡れている服を着ているのは不快なので、湊はマフラーを解きつつ中から新しいシャツを取り出すと、上着をラビリスに投げ渡してからその場でTシャツを脱いだ。
急にイケメンが目の前で脱ぎだし、その鍛え上げられた肉体を見せられた女子たちから黄色い歓声があがる。
中には鼻血を噴いて倒れた者もいるようだが、青年はそれらを一切無視して新しいシャツに着替えると、急に上着を投げ渡されて不機嫌になっているラビリスから受け取って着直した。
「着替えるんやったらトイレとか更衣室いきーや」
「……移動が面倒だろ」
「食事中に脱がれたら皆も驚くわ」
「まぁ、次回から善処しよう」
その言い回しは絶対に何もしない人間が使うものだ。
これまでの経験から、絶対に彼は同じような状況になれば繰り返すだろうと分かっているラビリスは、呆れた目で彼を見ると何か言う気も失せたのか机に置いていた紙パックのジュースに口をつける。
そこで彼との話を再開出来ると思ったのか、後輩が来ている間は黙っていた渡邊が何やら冊子を片手に声を掛けてきた。
「あ、会長。このタイミングで帰ってきたなら、会長も修学旅行行けるんスよね？」
「まぁな。学園側に手続きさせるのもあれなので、宿自体は同じ宿の部屋を個人で取ったから部屋自体は別になるが」
実際には学校に手続きさせるのを躊躇ったのではなく、単に他の者

たちと同じ部屋を嫌がった事が理由だったりする。
彼のとった部屋はその宿で最も高級な部屋で、ただ広いだけでなく部屋から出たところに専用の露天風呂があるのだ。
そのため他の客に気遣うことなく二十四時間入り放題なので、風呂好きの湊としては帰還が旅行ギリギリになったのはむしろ良かったと思っていたりする。
それを聞いた渡邊は、中等部時代のように夜中に話したり出来ないのは残念だが一緒に行けるなら良かったと、湊の金持ちっぷりに口笛を吹いてリアクションを返す。
「ヒュー！　会長ブルジョアっすね。けど、一緒にいけるならマジ楽しみだわ。京都ですよ京都！」
「別に神社仏閣以外にこれといって見る物もないだろ」
「いや、それメインなんで。てか、舞妓さんとかに会えるかもしれないじゃないですか」
「会える訳ないだろ。夜に仕事がある分、日中に稽古やら準備があるんだぞ。昼間の明るい内からあんな化粧して出歩いてるのはただのコスプレだけだ。そもそも、舞妓の人数なんてパンダの生息数以下だぞ。探しても会えるものじゃないし。写真ＮＧなんてざらだ」
そも、ほとんどの者が想像する舞妓の姿は仕事中のものである。
本番形式で稽古をするでもなければ、普段からあんな濃い化粧をして出歩いている訳がない。
一応、舞妓体験として観光客が舞妓風の化粧と衣装などで着飾って京都の町を歩いている事はあるが、あくまでそれはコスプレでしかないので、渡邊の期待するものはないぞと湊は断じる。
「マジかよ……。うわぁ、舞妓さんと写真とかメッチャ期待したのにさぁ。あ、でも、京都って全国で一番巨乳が多いってテレビでやってたんスよ。なら、スタイル良い子と出会うチャンスはあるって事ですよね？」
「そのデータはどうせ自己申告制だろ。事実としてそんな事はない。むしろ、近隣の大阪や兵庫の方が平均で上だ。京都は見栄張りが多いからな。実際より上に答えているか、風俗が多いからそういった人間

にアンケートを採ったのかもしれない。何より、そのデータにルックスは含まれてないしな」
「やめろー！　少年の夢を壊すなー！」
京都の人間は性格が悪い。見栄張りが多い。テレビやネットでそう言われる事が多いが、偏見でも何でもなくその傾向が強いのは事実である。
湊は仕事で京都に行ったこともあり、他の関西圏の都府県と比べて間違いなくその通りだというのを体験していたので、実物に遭遇してからショックを受ける事がないように現実を渡邊に突きつける。
それに対し、渡邊は聞きたくないと耳を塞いで抵抗するが、そんなに京都の人間が良いなら近くにいるぞと教えてやる。
「一応言っておくがラビリスの親の実家は京都だぞ。だから、ラビリスの言葉も崩れているが京訛りだ」
「へぇ、そうなんスか。でも、そこは京言葉じゃないんスか？」
「どう言い繕っても方言は地方訛りでしかないだろ。親しみを持つのは分かるが、そこに誇りを持つ感性は俺にはない」
部活で稲羽市に行った時の佐久間やチドリほどではないが、地方に対してかなりボロクソに評する青年に周囲は大丈夫かと不安を覚える。
ここで言っているだけならばいいが、現地についてからもこれでは現地の人間と喧嘩になるのではないか。
そう思った渡邊は周囲の者と意見を共有しておこうと声を掛けた。
「なぁ、俺さぁ。修学旅行に会長連れて行くのめっちゃ怖いんだけど」
「大丈夫だよ。ミッチーも流石に現地民と喧嘩したりしないって」
「ああ。他人なんて路傍の石と変わらないからな。そもそも相手しないさ」
確かに湊は現地でわざわざ問題になるような事を言ったりはしない。
完全にゼロとは言わないが、自分の顔が売れていると分かっているので、余計なトラブルに巻き込まれないように出来るだけ会話を減らすようにしている。

しかし、それ以前の問題として湊は現地の人間になど興味がなかった。

どこにでもある道路標識の方が情報を伝えるという意味でまだ興味が湧くくらいだ。

そんな存在と喧嘩などするはずがない。湊がそう断言すれば、周りは小さく溜息を吐いて昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴ったことで自分たちの席に戻っていった。

第三百七十話　待ち伏せ

放課後――月光館学園

綾時の転入と湊の復学。二つの話題によって月光館学園は一日騒がしかった。

教師たちも授業中まで浮き足立っている生徒をどうにか集中させようとしたが、死んだはずの青年が蘇って現われて騒ぐなと言う方が無理がある。

そうして、午後は半分ほど授業にならないまま放課後がやってきた。

上着のポケットに手を入れたまま廊下を歩く青年を見て、周りの生徒たちがざわつきながら道を開ける。

彼が再び現われた事は昼休みの内に学校中に広まっていたはずだが、実際に見るまでは半信半疑という者がほとんどだったに違いない。

だが、ただ歩いているだけで周囲一帯の空気を変える高校生など他にいるはずがない。

目には見えないが確かな圧を感じて皆が道を開け、その真ん中を青年が悠然と歩いてゆく。

周りでその光景を見ていた者がいれば、まるで自分こそが王であると言わんばかりの態度であったと答えることだろう。

しかし、それが許されるだけの気品と雰囲気があるだけに、彼の態度を咎める者は一人もいなかった。

「皇子、昼休みは失礼いたしました」

廊下を降りて一階のエントランスに辿り着けば、そこには各学年の代表と数名の幹部を伴ったファンクラブ会長の雪広が待っていた。

彼女たちの後ろには野良のファンクラブ会員たちもいるようだが、やってきた湊を見るなり涙を流している者たちがいる。

中には泣き崩れて傍にいた者に支えられている者までいるが、そういった者の世話は会員同士でやるはずなので、湊は自分と相対している雪広に向かって話しかけた。

「……体調はもう良いんですか？」
「は、はい。皇子と会えただけで身体の疲れなど吹き飛ぶというものです」
「そうですか。でも、身体には気をつけてくださいね。折角の美貌が損なわれるのは勿体ないですから」
言いながら湊は一歩距離を詰めると、左手で相手の頬に触れて微笑を浮かべる。
瞬間、雪広は耳まで真っ赤に染めて頭から湯気を出し、そのまま固まって後ろに倒れていく。
周りで見ていた者たちは湊が見せた突然の皇子様ムーブに黄色い悲鳴をあげつつも、しっかりと雪広を受け止めて湊から離れた壁際に立てかける。
別に私怨など一切ない。自分たちが皇子と崇める存在から身体を気遣われ、尚且つ容姿を褒められた事に嫉妬などしていない。
壁に立てかけるか、それとも床に倒して放置しておくか悩んだのだって数瞬の事だ。
自分たちは冷静であり、至ってまともな判断力を持っている。
会長の雪広を移動させて戻ってきた会員たちは、誰が彼女の後を引き継いで湊と会話するかを視線だけで話し合うと、序列から副会長を務めている女子で行くことに決まったらしい。
その間も待たされている湊が黙って立っていれば、武道でも嗜んでいるのか凛々しい少女が湊の前に立って口を開いた。
「失礼いたしました。皇子、無事のご帰還おめでとうございます。我々、プリンス・ミナトは皇子のご帰還をいつも祈っていました。再び皇子と出会えたこの奇跡を与えてくださった神に感謝せずにはいられません」
死者の国に渡った最愛の人が生きて戻ってきた。
そんな奇跡を起こせる者がいるとすれば、それはこの世の理の向こう側にいる存在、即ち神の御力に他ならない。
盆を過し、ハロウィンを遊んで、クリスマスを祝い。初詣にお参りをして、バレンタインを楽しむ。

信仰心はあるのだろうが雑な宗教観を持っている日本人ばかりのこの現代社会で、本物の奇跡としか思えないものを見たプリンス・ミナトの会員たちは、これからはしっかりと神に祈りを捧げることにしますと言ってくる。

彼女たちの瞳は真剣その物で、それだけ彼女たちは今回の奇跡ともいえる体験を感謝しているのだろう。

人の手ではどうやっても再現できない。しかし、明らかに何者かの手が加わっている痕跡だけは残っている。そんなものがいくつもこの世にはある。

ならば、その痕跡を残した者を、人を超えた力を持った者を自分たちとは別の存在、神と呼んでしまう者がいても無理はない。

だが、彼女たちの前にいる青年は残念ながら神を己の敵であると定めている。

彼女たちが神と呼ぶ存在と、湊が知っている現実に存在する神は別物だろうが、そんな事は関係ない。

既にこの世は神や妖しが跋扈していた時代ではないのだから、そんなものに祈るのは時間の無駄だと切り捨てる。

「残念ながら俺の帰還は人類の叡智によるものだ。最悪を想定し、出来得る限りを備え、そうして起こした事象に過ぎない。神になんて祈ったところで何もしてはくれないぞ。人類の進歩は神の存在をこの世から一つずつ殺すことだ」

かつては火も雷も神の力とされていたが、科学が進歩していく中でそれらの正体は解明され、人類は自分たちで制御し利用するようになった。

湊の復活にはエリザベスという超常側の存在の協力と、神を祖先に持つというオカルト側の事情が絡んでいる。

けれど、それでも湊は自分の復活を神の奇跡と呼ぶつもりはなかった。それは僅かな可能性に賭けて動いてくれたエリザベスの頑張りを否定する事になる。

目の前で一心不乱に湊の言葉をメモしている少女たちは彼の事情を知らないだろうが、湊が言うからには神なんぞに頼った訳ではない

のだろうと納得した様子だ。
「なるほど、まさにその通りです。怠惰である事なかれ。常に研鑽に励む事によって奇跡は必然になり得るのですね」
「まぁ、個人の力で為せない事もあるが、それなら誰かに協力を仰げば良いだけだ。祈るなんて思考停止に陥る暇があるなら現実的な打開策を考えるべきだと俺は思う」
湊の身体は過去の名切りたちの努力によって現代人類の限界を容易く超えることが出来る。
しかし、それはあくまでそれだけの性能を発揮し得るスペックがあるだけであり、十全なパフォーマンスを見せるには泥臭い努力が必要だ。
何度も死を経験し、それでも尚歩むことを止めずにいた結果が今の彼である。
研鑽に励み続けて文武ともに結果を残してきた彼だからこそ、その言葉には不思議な力があった。
彼の言葉を聞いたファンクラブの会員たちは、彼の言葉をメモした手帳を胸に抱いたまま感動したように涙を流す。
帰還を祝う言葉を贈るためだけに待っていたようなので、用事が済んだなら帰らせて貰うと湊は靴を履き替えて校舎を出る。
冬の訪れをしらせるような冷たい風が吹き、目にかかる前髪が揺れた事で拓けた視界にどこか呆れた顔をしている特別課外活動部のメンバーとチドリたちの姿を捉えた。
だが、別に湊は彼女たちに用事がある訳ではない。今日はバイクではないので駐車場に行く必要もなく、その横をシレッと通過して校門を目指そうとすれば、待っていた集団からメイド服を身に纏った少女が一人抜けて青年の進路を塞いできた。
「……邪魔だ。ブス」
進路を塞いできたのは桐条家のメイドで美鶴の御側御用を務めている斎川菊乃だった。
だが、自分の進路に割り込んで来た者を、裏拳を使って押し退けながら湊は進む。

割とストレートに暴言を吐くことが多い青年ではあるが、出会い頭に容姿を貶されると思っていなかった相手は大きく目を見開いて唖然としている。
周りで一緒にいた者たちも、予想を超えた対応にしばし呆けるが、いくら何でもそれは酷すぎないかと彼を追いかけて呼び止めた。
「ちょ、八雲君待って！　いくら好みじゃなくても女の子にそれはダメだって！」
「ていうか、湊君との約束のことで来てくれはってんで？」
湊の好みなど知らないが、彼がどブスとブスを使い分けていることは知っている。
それに照らし合わせると〝ブス〟は容姿が優れていない者に対して使う言葉だ。
他の者からすれば菊乃は十分美人系と言えるのだが、彼の好みでないというならしょうがない。
そこはしょうがないとして納得は出来ても、やはり言い方に問題があると思うし。相手も別に暇だからと学校に寄った訳ではない。
ラビリスがその事を伝えれば、湊は非常に面倒くさそうにしながらも立ち止まって菊乃に向かって口を開いた。
「桐条に仕える人間はアポイントを取るくらいの常識もないのか」
「申し訳ありません。ですが、ＥＰ社に連絡をしても取り次ぐことが出来ないと言われたものですから」
菊乃も最初はアポイントを取って湊と会おうとしていた。
しかし、いくらＥＰ社に電話を掛けても有里湊は内の社員にいないと言われ、いない人物に取り次ぐことは出来ないと拒否されてしまったのだ。
それもある意味当然で、湊は確かにジャパンＥＰ社の代表をしているが、表向きには別の人間を代表として立てており彼は籍すらないまま仕事をしている。
仮に彼を表向きの代表としてしまえば、学校に通うどころか会社の仕事すらもまともに出来なくなる可能性が高い。
そんな事にならないよう色々と工夫して湊の存在を隠しているた

め、彼の個人的な連絡先を知らない菊乃がアポ無しだろうと学校に現われたと聞けば来るのはある意味しょうがないと言えた。
「それで、何の用だ？」
「先日交わした約束を果たすためにやって来ました」
「なんだ。指でも詰めるのか？」
「それは困りますので、その、わ、私の純潔を……」
湊が校舎から出た時に他の者たちが呆れ顔だった理由は、冗談か本気か湊が高寺派に賠償請求する中で、菊乃には純潔を差し出すように言っていた事を聞いていた事が原因だ。
他の者たちは、彼女が仕事仲間から嫉まれるよう湊が仕組んだと思っていたのに、どういう訳か本人は割と真剣に約束を果たそうとしている。
これは本当に湊が純潔を奪う事になるのではと思っていたところで、彼は菊乃の顔を見るなりブスと罵倒して去ろうとした。
罵倒する言葉で咄嗟に思い付いたのがそれだったのか、それとも本心でそう思っているのか。
この選択で湊の行動も大きく変わるぞと周りが動向を見守っていれば、湊は冷たい瞳のまま心底興味がなさそうに菊乃と話す。
「何だ。俺に抱かれたくてわざわざ田舎から出てきたのか」
「……はい」
二人の会話を聞いている者たちは心の中で言い方を考えろとツッコミをいれる。
菊乃が湊のファンだったなら抱かれたいと素直に思うかもしれないが、彼女は自分がした事の責任を取るために約束を果たすことが目的で、湊の事を異性として好いている訳ではない。
しかし、それでも目的は湊に抱かれることなので、彼からの質問に頷いて返せば、湊はつまらなそうな表情のまま顎に手を当てて少女に質問をぶつける。
「で、お前は何でそんな格好をしているんだ？」
「これは勤務時間中の正装ですので」
「なら、お前は仕事でここに来たのか。なるほど、桐条家は賠償のため

に売春婦の斡旋を始めたんだな」
今の菊乃の服装は仕事着であるヴィクトリアンメイド服。
エプロンドレスは彼女たちにとっては正装なので、桐条家の使用人が着ているのはおかしくないのだが、一般人とっては日常とはかけ離れたものである。
また、メイド服が正装で通じるのは仕事中や、屋敷内での話だけだ。
今の彼女は湊への賠償のためにここを訪れている。それは彼女が犯した罪の責任を取るというものであり、正装で来るのならば仕事着のメイド服ではなくスーツを選ぶべきだった。
アポイントはなく服装もＴＰＯを弁えていない。よくこんな非常識な使用人を外に出せたものだと湊は桐条家を遠回しに批難しつつ淡々と告げた。
「俺には不要だから帰れ。ああ、代金を受け取らないと帰れないか？
ほら、これだけ払えば十分だろう。それを持ってさっさと失せろ。二度とその醜悪な面を見せるな売女」
言いながら湊はマフラーから帯付きの札束を一つ取り出し、それを菊乃のエプロンについたポケットに押し込む。
初物としての価値はあっても、男を悦ばす術も知らぬ生娘が相手では愉しめる可能性は限りなくゼロに近い。
そんな娘が一晩で稼げる額などたかが知れているので、湊が渡した金で代金は十分に足りているだろう。
ただし、それは相手が本物の売春婦であったならの話だ。
斎川菊乃は美鶴と同い年ではあるが、桐条家のメイドとしてのプライドを持って仕事をしている。
桐条家のため、美鶴のために命を懸けて仕えるだけの覚悟を持っているのだ。
湊の言葉はその誇りを踏みにじる行為その物であり、さらにここまで容姿を貶された事など生まれて初めての経験だった。
相手の容姿は男とは思えぬほど妖しい色香を放つ美麗さであり、そんな者と比べれば大概の者は凡俗以下と評されるに違いない。
そんな事は頭では理解できているのだが、怒りに哀しみ、悔しさや

惨めさから、菊乃は顔を真っ赤にしながら涙を瞳に溜めて身体を震わす。
ここで口を開いて罵れば相手の思う壺だと自分に言い聞かせ、自分から動いてはいけないと相手の反応を待っていれば、湊はまるでゴミを見るような目で彼女を見ながら言葉を続けた。
「なんだ。自分の容姿に自信でもあったのか？　俺が純潔を差し出せと言ったとき、自分が容姿で選らばれたとでも思ったのか？　勘違いもそこまでいくと哀れだな。そんなに純潔を捧げたいなら今度豚でも用意しておこう。少しはマシな容姿の子どもが出来るかもしれない」
湊は過去にもソフィアやクマなど人を見下す時に豚に例える事が多かった。
本人の持つ見た目が悪いイメージの象徴が豚なのかもしれないが、言うだけ言って湊は本当に去って行ってしまった。
後に残された菊乃は視線だけで相手を殺せそうな目付きで湊の背中を見ており、彼の家族でもあるチドリやラビリスも菊乃に同情的な視線を送っている事から、ここまで湊が他人を見下して貶すという事は珍しい事なのかもしれない。
幼馴染みでもある美鶴が肩を抱いて宥めているが、どれくらい効果があるのかは分からない。
もし自分が湊にあそこまで貶されれば、一週間は寝込むだろうと女子たちが考えていると、湊の姿が完全に見えなくなるまでその場にいた七歌たちに後ろから声が掛かった。
「やあ。君たちもこれから帰りかい？」
「あ、綾時君。そうだけど、綾時君は何してたの？」
「学校の中を見て回ってたら、少し遅くなってしまってね。良かったら僕も一緒に帰っていいかな？」
転校生である綾時はまだ学校内の地図が頭に入っていない。
一応、何階に何があるのかという知識はあるみたいだが、月光館学園は校舎がいくつもあり、さらに教室も上から学年順という訳ではないので、実際に行ってみないと分かりづらい部分もある。

昼休みに案内されていても足りず、放課後にも見回ってようやく大凡の配置が理解できたらしい彼は、折角出会えたのだから一緒に帰らないかと七歌たちに提案した。
それを聞いた七歌たちは先ほど見た湊の態度もあって、寮に帰って菊乃の事も話し合うつもりだったので、途中まで一緒に帰ることを了承すると歩き出して学校を出た。
夜――巌戸台分寮
寮での話し合いにはチドリとラビリスも参加するという事で、途中で綾時だけが別れる予定だったのだが、どういう訳だか彼は七歌たちと同じ駅で電車を降りて付いてきた。
家はどこだと聞けば学生寮に入ることになったと答え、まさかと思っていれば、案の定、寮に入ってすぐのところに段ボール箱がいくつも積まれて置いてあった。
美鶴が学校に確認を取ると、確かに綾時も巌戸台分寮の寮生として登録されていて、彼もこれからここで生活するという事で間違いないようだ。
このタイミングで新しい生徒が入寮してくるとは思わなかったので、皆小さな驚きはあったようだが、二階の向かって右の一番奥の部屋が空いていた事で彼の部屋はそこになった。
「いやぁ、綾時が来るって分かってれば歓迎会の準備もしたんだけどなぁ」
「急にごめんね。僕も住所しか聞いてなかったから、荷物を送る手配だけしていきなりって事になっていたんだ」
ソファーに並んで座る順平が綾時の前に缶ジュースを置いて、とりあえずはこれでと自分も缶ジュースを掲げてみせる。
それを笑って受け取った綾時もプルタブを開けると、二人は缶をぶつけてからジュースを飲む。
湊の友達と聞いていただけに、どれだけ変わり者かと思っていれば、性格は対極と言って良いほど違い。彼は誰に対しても柔らかな物腰でフレンドリーだった。
あの日の夜。湊と共に現われた綾時に助けられた事もあって、非常

に友好的な順平は彼を完全に受け入れるムードで親しげに話しかける。
「けど、おたくってば有里陣営じゃねーの？　まぁ、あいつに仲間が必要かって疑問はあるけど」
「陣営かぁ。うーん。友達ではあるけど、別に背中を任せ合うとか馴れ合いの関係ではないからね。君たちさえ良ければ僕も一緒にタルタロスの探索に参加するけど」
影時間の戦いにおいてペルソナ使いを擁する陣営は三つある。
一つが、桐条グループがバックについた七歌たち特別課外活動部。
続いて、ストレガと手を組んだ裏切り者幾月のチーム。
最後に、最強のペルソナ使いである湊の陣営だ。
人数で言えば、特別課外活動部が十人。幾月たちが八人。湊たちが綾時を入れて五人と一匹。
そう。人数だけで言えば特別課外活動部が最も勝っているのだが、戦力の話となると一番劣っているのが特別課外活動部なのだ。
今は湊陣営のはずのチドリとラビリスとコロマルが参加してくれているので、それでどうにかストレガたちに対抗出来る程度にはなっている。
ただ、二人と一匹がこちらに来てしまうと、湊の陣営は戦場に出てこないソフィアがいるので、湊と綾時だけになってしまう。
ここからさらに綾時を引き抜くのは申し訳ないと思うのだが、順平が言う通り湊には仲間などいらないだろうというのが全員の見解だ。
助っ人として参加しているチドリたちもそれは痛感しているらしく、アイギスもいるならいっそ外部メンバーとして移籍することもありだとは思っていた。
「いつまでも守られてばかりもいられないとは思うけど、前回みたいな事がないとも言い切れない。私たち三人が固まって行動して守り合っていれば、八雲もその分だけ自由に動けると思うのよね」
「戦力の分散は確かに避けるべきやね。ウチらは湊君の戦いについていけへんけど、あっちも疑似ワイルド能力者以外は普通のペルソナ使いの範疇やし。綾時君が七歌ちゃんらと行動するんは賛成やわ」

ペルソナを使った飛行能力を持っているのは、湊、綾時、理、玖美奈の四人だけ。
他の者たちはペルソナに乗って移動する事は出来るが、高同調状態で自在に移動出来る訳ではない。
ただ、それは敵側にも言えることで、もし幾月たちが襲ってきても理と玖美奈の相手を綾時がして時間を稼げれば、他のメンバーに関しては七歌たちで十分に対処可能なのだ。
そして、最大火力に関して言えば、死を経験したチドリが新たに得た月〝ヘカテー〟なら理たちとも十分に渡り合える。
自分たちだけでは真っ向から戦えないとしても、それは勝つことを諦める理由にはならない。
出来る事を模索し、湊に頼るだけの現状をどう打破していくのか。
チドリたちが完全に移籍し、綾時が新戦力として加わった場合の立ち回りについて話していれば、少し疲れた様子の美鶴が階段を下りてきた。
「あ、美鶴さん。菊乃さんどうなりました？」
「今は私の部屋でシャワーを浴びている。ただ、正直かなり参っているみたいだ」
「やっぱり同僚たちからのプレッシャーと今回の件でですか？」
本来は寮生どころか月光館学園の生徒ですらない者を寮に泊めることは出来ない。
しかし、菊乃は桐条家の使用人という事もあって、特例として認められることになった。
何より、何もそこまで言わなくてもというレベルで湊に貶された事で、今の彼女は精神的にボロボロになっている。
そんな少女を電車で一人帰らせる訳にもいかないので、父が倒れてまだ本調子ではない美鶴の身の回りの世話を頼むという名目で彼女に泊っていって貰うことになった。
そうして、彼女がどうしてそこまで精神的に参っているのか七歌が理由を尋ねれば、美鶴は想像の通りだと頷いて返しながら椅子に座る。

「別に他の使用人が菊乃を苛めている訳ではないらしい。ただ、本人は罰として純潔を求められた事を怖ろしく思っているのに、周りから羨まれるというギャップに悩んでいたみたいだ」
「あー……それでも容姿で選ばれたとかなら救いがあったんでしょうけど、勇気を振り絞って会いに来たら売女呼ばわりですもんね。」
何がそこまで気にくわなかったのか分からないが、湊があそこまで女性をボロクソに言うなど誰も見たことがなかったので、彼が貶した理由が分からないこともあって対応に困る。
一応、七歌とチドリが彼の保護者二人にこんな事があったと伝えておいたものの、賠償に純潔を要求したこと自体が普通の感覚では意味不明なのだ。
いくら彼の事をよく知っていたとしても、この件に関しては分かる事は少ないのではというのが正直な感想だ。
七歌たちがそんな風に悩んでいれば、順平と話していた綾時が何の話かと興味を持って会話に混じってきた。
「そんなに悩んでどうしたんだい？」
「あぁ、八雲君の事でね。今日、帰るとき綾時君が来る前に菊乃さんをケチョンケチョンに言ってさぁ」
綾時はペルソナや桐条家の事を知っているので、事の経緯を伝えても問題はない。
どうして彼女が今日学校に来たのかも含めて伝え、友達視点なら彼が菊乃を貶した理由に心当たりがないか聞いてみる。
「って訳なんだけど、どうして八雲君が菊乃さんにあんなキツく当たったか分かる？」
「うーん。その賠償の話って全員が知ってたんだよね？」
「そうだね。それで心配だったから八雲君が来るまで菊乃さんと一緒にいたんだよ」
学校に来る際に美鶴の携帯に連絡があったことで、放課後になってメンバーたちは校舎の外で待っていた菊乃の許に集まった。
先日寮を訪れた彼女と会ったゆかりたちは、久しぶりに会って随分と疲れた顔をしていると思ったものだが、彼女は湊が来るとそのまま

話しかけに行っていた。
純潔を好きでもない男に捧げなければならないというのに、随分と肝が据わっていると思ったものだが、実際には年頃の女の子としてしっかりと悩んでいたらしい。
それでも覚悟を決めてやってきた彼女に対し、湊の見せた対応は同性としてだけでなく、人としても非常に強い不快感を覚えるものだった。
この場にいる男子は綾時以外芋臭いやつらとお子様だけなので、湊と同じモテ男オーラを持っている彼ならば湊の考えも分かるかも知れない。
顎に手を当てて考え込む綾時を見て、女性陣がちょっとしたヒントでも分かればと期待を寄せていれば、考えが纏まったのか一つ頷いて彼が顔を上げた。
「あくまで僕の想像だけど良いかな？」
「うん。ちょっとしたヒントでも欲しいくらいだしＯＫだよ」
「それじゃあ、湊の行動の意味というか理由についてだけど。多分、チドリさんたちがいたからじゃないかな？」
綾時が自分の予想を話せば、他の者たちは意味が分からず首を傾げる。
確かにあの場にチドリを含めた女性陣が揃っていたが、菊乃の賠償にチドリたちは一切関係ない。
だというのに、どこが彼にとって問題だったのかと視線で聞き返せば、綾時はすごく単純な話なんだけどと前置きしてから言葉を続ける。
「彼が大切に想っている女性三人もその場にいたんだよね？　そんな人たちの前でそういう話をされたくなかったから、場所を考えろって怒ったんじゃないかな？」
「あー！　それでか！」
「フム、確かにその点で言えば菊乃の配慮が欠けていたと言わざるを得ないな」
「いや、すっごい普通って言うか。有里君にしてはあり得ないくらい

人間らしい理由だね」
確かに湊が菊乃に対して吐いた暴言はあまりに酷い。
しかし、綾時の言った事を考えると、湊があそこまで言った理由もある程度理解できる。
折角久しぶりに学校へ行って知り合いにも顔を見せられたというのに、その帰りにくだらない話で気分を台無しにされるどころか、大切な少女たちにまで余計な事を聞かれてしまった。
謝るつもりがあるのならば、最低限の常識として湊の生活に影響を及ぼさぬよう配慮すべきだ。
だというのに、菊乃は大切な少女たち三人全員に話が伝わる状況で彼に会いに来てしまった。
これで怒るなという方が無理な話で、確かに今回は菊乃が悪いかなと七歌も美鶴もゆかりも湊に少しばかり同情してしまった。
事情が理解できれば菊乃への説明なども簡単に済む。シャワーを浴び終えた彼女に自分が伝えておくと言って美鶴が部屋に戻れば、他の者たちも湊の見せた態度の理由が分かりスッキリした顔で改めて綾時の仲間入りを歓迎したのだった。

第三百七十一話　死後の世界とは

１１月１５日（日）
昼――ＥＰ社
放課後の月光館学園で湊に罵倒されてから数日後、桐条美鶴の御側御用を務める斎川菊乃はＥＰ社の社長室を訪れていた。
あの日、湊がどうしてあんなにも敵意剥き出しだったのか分からず。彼女はシャワーを浴びながらさらに涙を流したのだが、身体を拭いて外に出ると、そこで待っていた美鶴から綾時の推測を聞くことが出来た。
そして、その推測を聞いた彼女は如何に自分が冷静でなかったかを理解し、桐条家に仕える人間にあるまじき失態を犯したことを悟った。
桐条家は、ビジネス分野だけでなく政治方面でも力を持っていると見せるため、各界の重鎮らと直接会って話をする事もある。
彼らとは互いの得意分野で助け合う良好な関係を築いているが、腹の底では如何に力を削いで自分たちの利益を増やそうかと考えている。
となれば、ただ会って話をするにしても、その会場や食事、また使用人たちの動きなど、あらゆる項目を評価される事になる。
そして、今回の菊乃の動きはアポイントについて目を瞑ったとしても、場に相応しくない装いに加え、結んだ契約内容を無関係な人間にベラベラと話す始末。
ただ無礼なだけでなく、相手に恥までかかせるような行いだったと考えれば、お前は本気で謝るつもりがあるのかと怒り罵倒されて当然だった。
だからこそ、彼女が改めて謝罪するためにアポイントを取ろうとした際、会うための日時と場所を教えてもらえた事を本当に驚いた。
そこにはいつまでも付き纏われては迷惑だからという理由もあるのだろうが、再びチャンスを与えられた以上は菊乃も出来得る限りの準備をしてから当日を迎えた。

湊に言われた通り、仕事外で着るメイド服は正装では無いからと黒いスーツを着てきた。
彼女は年齢的に高校三年生なので、周りからすると就活生に見えたかもしれないが、会社に着いてからインフォメーションで取り次いで貰った。
流石は世界的に有名な大企業だけあって、インフォメーションにいた四人の女性は人種はバラバラでも全員が非常に整った容姿をしていた。
そして、しばらく待ってから案内を任されたらしい若い女性がやってきて、その人に着いていけば案内されたのはまさかの社長室。
確かに湊が裏で牛耳っているとは聞いていたが、それならばモロに社長室と分かる部屋にいるのは拙いのではという考えが頭を過ぎった。
無論、菊乃が考えた事は湊も気付いており、そのために社内向けと外来向けに二つの社長室を用意していた。
ただ、そんな事をわざわざ彼女に伝える必要はないので、案内役も彼女を部屋の前まで連れて行くなり帰っていった。
ここからは自分一人で行けという事のだろう。そう考えた菊乃がノックして待っていれば、中から聞こえて来たのは入室を許可する女性の声。
その事について訝しむも、自分からノックして許可を貰った以上は部屋に入るしかない。
そうして、覚悟を決めた菊乃が部屋に入れば、そこに湊の姿はなく、代わりに三人の女性と赤ん坊が一人いた。
「はーい、お嬢さん。私は坊やの主治医で研究所の主任も務めてるシャロン・J・オブライエンよ」
「わたくしについては不要でしょうがソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインです」
「私は〝私〟の女性人格。まぁ、便宜上はベアトリーチェと呼ばれている。そして、この幼子が貴様の会いたがっていた〝私〟だ」
インド系の血が入っているのか、オリエンタルな雰囲気の美女が挨

挨拶してくれれば、銀髪赤眼の少女と透き通るような薄い色の金髪に銀眼の少女も続けて挨拶してくる。
シャロンとソフィアは社長机の前に並んで立っているが、ベアトリーチェと名乗った少女は机の上に赤ん坊を座らせて大きな椅子に腰掛けていた。
赤ん坊は不思議そうに菊乃の事を見ており、キョトンとした顔が実に愛らしく見える。
しかし、ここには謝罪すべき相手である湊の姿はなく、ベアトリーチェの言葉の意味も理解できなかったので、菊乃は状況を理解しようと頭を働かせて再度聞き返す。
「も、申し訳ありません。もう一度ご説明いただけないでしょうか？」
「簡単に言うと坊やはそこにいる赤ん坊になってるの。ああ、勿論、その赤ん坊に坊やの記憶はないわよぉ」
「……はい？」
菊乃の目には赤ん坊の性別は女子に見えていたが、医者が言うには男子らしい。
その部分はまだ受け入れられると思っていた菊乃も、流石に赤ん坊が湊本人と言われると理解が追い付かなくなる。
謝罪するための機会を与えられたと思っていただけに、こんなドッキリとしか思えない状況に遭遇するのは予想外だ。
しかし、本当にこれがドッキリならば、自分の行動は湊に見られているに違いない。
そう考えた菊乃は赤ん坊を湊ととして扱うことを求められていると考え、その上で自分が何をすればいいかを尋ねた。
「すみません。私は有里さんに謝罪するために訪れたつもりだったのですが、こちらで何をすればいいのでしょう？」
「簡単に言えばベビーシッターです。わたくしたちが話をしている間、湊様を遊ばせておいてください」
「ちょっと坊やが死んでた間の事をこっちの神様に聞きたくてねぇ。死後の世界が現実に存在するっていうなら、それを解明したくなるのは科学者としての性って言うかねぇ」

湊が死んでいた間の話を聞くと言って、シャロンはベアトリーチェを見ながら神と呼んだ。
菊乃は湊が幻術などを利用して姿を変えているところを見ていたため、そこでベアトリーチェが湊の変化した姿なのだと察する。
もっとも、そうなると湊と同じ金色の瞳をした赤ん坊はどこの子なのだという話になるのだが、桐条グループの報告書によれば湊は親しい女性が複数名おり、海外の知り合いも多数いるようなので隠し子がいても不思議ではない。
そこから想像するに、母親は何かしらの事情があって離れており、その間、父親である湊が赤ん坊の世話をする必要があるのだが、彼は多忙な上に日本では有名なので本来の姿で世話をする事も出来ない。
よって、変化で姿を変えて赤ん坊の傍にはいるが、ＥＰ社や影時間に関わる仕事をする必要もあるため、別途世話係を必要していた事で負い目のある菊乃を招集したと言ったところだろう。
これで赤ん坊の新しい母親になれと言われれば困るが、純潔を奪われずに済み、さらに可愛い赤ん坊を見ているだけで良いなら楽な仕事だ。
そういう事であればメイド服の方が良かったかなと思いつつ、菊乃は赤ん坊はともかく人の世話をするのは慣れているから任せて欲しいと自信を持って答える。
「分かりました。それで、その子の名前は？」
「八雲ちゃんよ。ほら、八雲ちゃん。あのお姉ちゃんが遊んでくれるって」
「あい！」
シャロンが抱き上げて菊乃の許に連れていけば、八雲は嬉しそうに笑ってはしゃいでいる。
赤ん坊はコウテイペンギンを模した着ぐるみパジャマを着ており、袖がダブついて手が出ていない。
ペンギンごっこをするならそれで良いのかもしれないが、遊ぶときには危なそうだと気をつけるポイントを確認しながら、シャロンから八雲を受け取った菊乃は部屋の隅にある子どもを遊ばせるためのフ

リースペースらしき場所へ移動する。
どうしてそんな物があるのかは分からないが、フリースペースは柔らかい素材のマットが敷かれ、そのマットと同じ質感のブロックソファーで囲いを作ってある。
中には柔らかいボールや積み木が置かれているので、一緒に遊びましょうと靴を脱いで中に入ると、八雲を積み木の傍に下ろしてやった。
「さぁ、八雲君。一緒にこれで遊びましょう。たくさんあるので大きいお城を作りましょうね」
「うー！」
ちょっと目を離した隙に走り出すような悪ガキならともかく、素直で愛嬌もあり人懐っこい八雲の相手は育児素人にも優しいレベル。
カラフルな積み木を一つ積む度、八雲はフンスと得意気な笑顔を見せてくる。
これが本当にあのいけ好かない男の息子なのかと信じられないくらいに良い子だ。
そうして、菊乃はお上手ですねと八雲を褒めながら見守っていれば、湊の人格を八雲として分離する事で人格を表に出しているベアトリーチェにシャロンが尋ねる。
「んじゃ、改めてあっちの世界の話を聞かせてくれる？　あんたは自由に行き来できたみたいだけど、それはやっぱり神としての力がある前提？」
「小さき者らも私を神と呼ぶが、貴様ら虫の称するところの神とやらの定義がそもそも不明だ。虫共の観点ではこちらとあちらは別の世界という扱いになるのだろうが、正しく世界を見ている者であれば壁を一つ越える程度の事でしかない」
ベアトリーチェは湊と共にいる事で現代の知識を得ているが、彼女の感覚からすると有象無象の人間は虫扱いとなっている。
死後の世界で顕現した際に山よりも大きな身体をしていた事を思えば、そういった感覚になってもしょうがないのかもしれないが、虫と呼ばれたシャロンたちは、相手が人間をどう呼称するか知っていた

ため特に反応せず会話を続ける。
「なるほどなるほど。となると、現世での死は終わりではなく別のステージへの移動って解釈な訳ねぇ」
「ですが、それはあくまでベアトリーチェたち神の視点の話では？他の人間では生前の自我の確立も難しいと思われます」
「まぁ、脳に記憶が保存されてるとして、その肉体を置いて行ってる訳だし。データの破損的なのはしょうがないんじゃない？」
今回、シャロンとソフィアがベアトリーチェに聞きたいのは、死後の世界が現世から見てどういった関係にあるのかという事だ。
湊の死は彼女たちにとっても予想外の出来事で、さらに死後の世界から自力で戻ってくるとも思っていなかった。
エリザベスが彼の肉体をあちらに送らなければ不可能だったにしても、死後の世界が存在すると言う事が分かった事自体が世紀の大発見である。
無論、それを公表したところで証明が難しいため、手にした情報はあくまで自分たちの研究にのみ使う予定だ。
そこで彼女たちが最初に研究テーマに定めたのが、死後の世界からの帰還方法である。
確かに湊はこちらに帰ってきたが、それは肉体があったから出来た事なのか、それとも不完全な状態であっても魂だけで戻ってくる事も可能なのか。
前者なら死後の世界に肉体を送る方法を探ることから始めなければならないが、後者ならばアイギスたちの肉体を作った応用で戻ってくる肉体さえ作っていれば簡単に蘇生出来ることになる。
勿論、未だに安定して作れるほど技術が確立した訳ではないので、一人作るにもかなりのコストが掛かってしまうが、それでも異能含め替えの利かない湊が肉体の死すらも克服できるとなれば保険としてやるだけの価値はある。
また遺伝子を弄って作られたソフィアは、鍛えれば発揮出来る能力の上限が高い代わりに、不完全な技術のせいで肉体の寿命が短い。
それを死後の世界から魂を引っ張り戻せるという事になれば、今よ

りも性能の良い身体を用意してやる事が出来るので、ＥＰ社にとって神の領域を侵すと分かっていても研究せずにはいられなかった。
だが、社長の机で頬杖を突いて話を聞いていたベアトリーチェは、そう上手く行くものかと彼女らの妄想を切り捨てる。
「戻って来れたのは〝私〟だからこそだ。常人ならば魂のコミューンに一欠片の記憶を残すのが限度だろう。魂その物を保持するなど不可能だ」
「やっぱりぃ？　ていうか、死の先がある事自体がよく分からないのよね。だって、死は無に還るって事じゃない？」
湊が死を概念として理解しているように、神であるベアトリーチェも死を概念として理解している。
だからこそ、彼女たちは普通の人間の持つ死の漠然としたイメージが分からないのだが、シャロンは自分の感覚だと前置きしつつ死は存在の消滅に当たるのではないかと尋ねる。
何せ普通の人間にとって死は終着点。先には何もなく、ただ生という旅路の終わりでしかないイメージなのだ。
それがさらに先もあると言われれば困惑するしかなく、どうして肉体を失った魂が消滅しないかが分からない。
「ふむ、貴様らはまずそこの認識が間違っているのか。そうだな……言ってしまえば死は状態を指す言葉の一つだ。身体が疲労を感じれば睡眠を取るだろう。それと同じで肉体の耐久力を超えるか、もしくは魂にダメージが蓄積して起こるのが〝死〟という現象に過ぎん」
「それは、どういう意味ですか？」
「そのままの意味だ。貴様らの感覚では死はプラスからゼロへの変化だろう？　だが、死はゼロではなくマイナスへの変化だ。そして、死後の世界で世界に記憶や力を失っていく事で、マイナスはゼロに近付き無へと還ることが出来るようになる」
シャロンだけでなくソフィアもベアトリーチェの説明がいまいち理解出来ないのか聞き返す。
相手の言葉をそのまま受け取るのであれば、死は疲労や風邪で起こる体調の変化の仲間であり、肉体の状態を表わす言葉の一つでしかな

いという。
けれど、もしそれが本当ならば外部からの干渉で新たな変化を起こせなければおかしい。
肉体だけにしろ、魂だけにしろ、何も変化しかないからこその終わりである死ではないのか。
そう思ったシャロンがベアトリーチェの説明を言い換えるとこうなるがと質問する。
「それって、生きている状態を百とするなら、死ぬことで十に減って、あっちで残りを捨てるって感じの二段階のプラスからゼロへの変化ではないの？」
「捉え方は自由だ。ただ、世界が変われば理も変わる。あちらではこちらのプラスがマイナスになるというだけの事だ。余計な重りを捨てることで正しい流れに乗って無に還る事が出来るようになる」
「んー……分かるようで分からないわねぇ」
ニュアンスとしては何となく分かってきたのだが、細かな部分でやはり相手の言っていることが自分の感覚とずれているのが分かってしまう。
ただ、その感覚のずれは現物を知らないと埋まらない物なのだという事も理解している。
千年前の人間にパソコンや携帯電話の有用性を説明しても、基礎となる知識や常識がないせいで理解しきれないのと同じだ。
悔しいがここは諦めるしかないかとシャロンもソファーも溜息を吐く。
しかし、そんな二人の反応を見ていたベアトリーチェは、人間の蘇生の問題はそこではないと説明を付け加えた。
「言っておくが世界の行き来には超えねばならぬ障害がある。貴様らの言葉で呼ぶなら〝死を司る神〟という事になるか。己の領域から逃げようとする者を捕らえてくるのだが、アレは言ってしまえばシャドウの親玉。触れた途端に精神からシャドウを抜き取られるぞ」
「坊やはそれに捕まらなかったの？」
「〝私〟は私がいるからな。〝私〟のシャドウは私の欠片に置き換

わっている。一切の影響がないとは言わないが影人間になったりはしない」
ベアトリーチェが死を司る神と呼ぶ存在は湊や綾時がニュクスと呼んでいるものだ。
ニュクスは地球の生命に己の欠片であるシャドウを与え、その精神と肉体の爆発的な進化を促した。
そして、数億年前に与えたシャドウは今も全ての生物の精神に宿っており、ニュクスがその精神に触れれば宿っていたシャドウは彼女に回収され戻らなくなる。
湊は別の神であるベアトリーチェと魂を融合させてシャドウをベアトリーチェに置き換えているが、それでも完全にニュクスの影響下から抜けられた訳ではない。
彼でも完全に防ぐ事が出来ないなら、シャドウを奪われれば影人間になってしまう一般人だと抵抗すら出来ずに終わるだろう。
良い研究テーマだと思っていたシャロンたちは、やはり神の領域を侵すことなど簡単には出来ないかと残念そうに肩を落とす。
そして、長い間話し込んでいる間に八雲はどうなったかと視線を向ければ、そこにはどんなバランスで立っているのかと聞きたくなるほど奇妙な積み方で立てられた塔が出来ていた。
既に八雲の身長では背伸びしても届かない高さになっており、今は菊乃に抱き上げて貰って上に積んでいる。
抱き上げている菊乃も怖々とした様子で積むのを見ているようで、どうして三角の頂点に横長のブロックを置き、さらに上に円柱を倒してまた十字になるように円柱を置いても大丈夫なのか理解できないようだ。
土台の部分からそんな状態の積み木も既に一メートル二十センチに届こうとしている。
本人は嬉しそうに新しいのを拾っては軽い調子で置いているが、もし製作過程をビデオに収めていれば多くの人間はこの赤ん坊は何者だと驚くに違いない。
「や、八雲君。そーっとですよ。そーっと」

「あい！」
「ああっ、そんなとこで元気に返事しないで！」
塔の近くで八雲が元気に返事をすれば空気の振動で塔が崩れるかもしれない。
崩れるときにはすぐに庇うつもりではいるが、神経を張っている彼女にとっては崩壊が始まった時点で心臓にかなりの負担が掛かるのは間違いない。
だからどうか大人しくしておいて欲しいと思って見ていれば、八雲が新たに積んだのはなんと積み木ではなくゴムボールだった。
積んだ場所でピタッと止まっているものの、暖房の風で転がってしまう可能性がある。
どうしてよりにもよってここでボールなのだと菊乃が数歩後退れば、八雲は下に下ろして欲しいとボディランゲージで伝えてきた。
もしかすると、これで完成だから最後にボールを置いたのかもしれない。そう思う事にして八雲をマットに下ろせば、途端に八雲は笑顔で駆け出し積み木に向かって前回りで突っ込んだ。
「きゃいやー！」
「あぁぁぁぁぁぁっ!?」
八雲が体当たりを掛けると、ボウリングのピンが弾き飛ばされるように積み木たちが吹き飛んでいく。
いくつかはフリースペースのマットから飛び出しており、そんな勢いで赤ん坊がぶつかって大丈夫なのかと菊乃が慌てて駆け寄り八雲を抱き起こした。
「け、怪我はしてない？　大丈夫？　痛いところない？」
「うぱー！」
全然大丈夫と言うように笑っているが、菊乃は彼の無事を聞いて逆にドッと疲れを感じてしまう。
本当に素直で良い子なのだ。無邪気さも愛らしいと思えるし、クソ野郎が実の父親だとしてもこの子に罪はないと愛情を持って接する事が出来る。
しかし、赤ん坊は赤ん坊。どこからそんな体力が湧いてくるのかと

いう無尽蔵のエネルギーで動き、理性が飛んでいるのか予想外な行動も多い。
おかげで傍で見ていただけなのに菊乃は気疲れしてしまい。どんなに素直でも赤ん坊の世話は大変なのだなと世のお母様方の苦労を身をもって理解した。
「八雲ちゃーん。お話終わったから戻っても大丈夫よー」
「ま？　ねーね、ばいば！」
一気に老け込んだ様子で菊乃が座り込んでいれば、シャロンが話は終わったと八雲に伝える。
すると、八雲は菊乃に笑顔で手を振って背を向けると、フリースペースを囲んでいたブロックソファーをよじ登って超えていき、椅子から立ち上がって近付いて来ていたベアトリーチェに飛び込むように抱きついた。
八雲がベアトリーチェに抱きつくと二人の身体が光り出し、何事かと驚いている菊乃の目の前で一つになった光が徐々に大きくなってゆく。
そして、その光が一定の大きさで止まると、徐々に光が治まり、そこには菊乃が誰よりもいけ好かないと思っている男が立っていた。
「……え？　は？」
訳が分からず上手く言葉が出てこない菊乃。
ベアトリーチェを湊の変化した姿だと認識していたので、彼女の姿が湊になるのはある意味予想通りだが、どうして赤ん坊の八雲が消えてしまったのかが分からない。
まさか、赤ん坊の八雲は彼が出した幻術で、自分は傍から見れば何もない空間に話しかけていたり、腰が引けて怯えていたとでもいうのか。
説明を求めて彼女が湊を見れば、彼ではなく隣にいたソフィアが彼女の疑問に答えた。
「ですから最初に説明したでしょう。ベアトリーチェと八雲様は湊様が分かれた姿です。湊様に宿った別人格に肉体の主導権を与える際、湊様の人格を余った肉体のリソースに割り振る事で過去の姿である

八雲様になるのです」
「……はい？　隠し子ではないのですか？」
「違います。同じ魂を持っていますが、記憶は当時の分しか持っていない過去の姿。つまり、赤ん坊時代の湊様本人です」
あんな可愛らしい赤ん坊がこのクズ野郎に成長するのか。
そんな驚愕の目を向けてくる菊乃に、湊は無礼なやつめと心の中で嘆息する。
シャロンとソフィアがベアトリーチェに用事があるからと分離して人格を入れ替えたというのに、戻った途端に不満を言われるとだろうが予想出来ようか。
だが、話を聞いても納得できないのか、菊乃は成長した姿である湊を見てポツリと溢す。
「……詐欺じゃないですか」
「ですから、湊様が歪んだのは桐条グループのせいだと言っているではないですか。十年前の事故がなければそのまま純粋に成長していましたよ」
「……お前らもう少し言葉を選べよ」
女性陣が赤ん坊の自分を可愛がっている事は聞いているが、それでも自分を育成失敗した未来のように言われるのは心外だ。
別に怒って怒鳴りつけるつもりはないものの、あんまり五月蝿いと部屋から叩き出すぞと言ってから湊は社長机に座ってパソコンで作業を始める。
明後日から修学旅行で仕事をしている暇がなくなる。故に、ここで出来る限りの仕事を済ませて置かねばならない。
自分は忙しいと全身でアピールを彼を見て、自分はどうすればと菊乃が他の二人を見れば、今日はもう帰ってはどうかと言われた。
まだ賠償の話は済んでおらず、これではタダでベビーシッターを押し付けられただけになってしまう。しかし、ここで文句を言えばまた湊は無神経な言葉を返して来る事だろう。
「……分かりました。今日は失礼します」
ならば、ここは自分のためにも撤退が最善の選択のはず。湊が修学

旅行に行くことは彼女も知っているので、週末までは呼び出される事もないはず。

彼がいない間に少しでも心身の疲労を和らげようと、菊乃は帰りにアロマや入浴剤を買って帰っていった。

第三百七十二話　京都に行こう

１１月１７日（火）
昼――新幹線
月光館学園は修学旅行の準備に掛ける時間と労力を減らすため、隔年開催で二年と三年が合同で行くことになっている。
旅行を目前に控えたタイミングで美鶴の父が倒れ、彼女が修学旅行に来ないのではという話もあったが、今朝学校で行なわれた結団式でも生徒会長として挨拶し、心配していた生徒たちを安心させた。
だが、それ以上に生徒たちを喜ばせたのは死んだはずの青年の帰還だろう。
彼の帰還は公認ファンクラブであるプリンス・ミナトが発行する新聞で大々的に発表され、どうして生き返ったのかも具体的な部分は濁しつつしっかり説明されていた。
おかげで彼の死を切っ掛けにファンクラブを抜けた者たちも、死すらも克服した超越者として真なる信仰心を抱いて再び入会するほどだ。
彼のアイドル性に惹かれて入っていたのか死んですぐに退会した者たちに対し、残っていた者の中には虫が良いと怒りを表わしていたが、会長である雪広たちは皇子の再誕の前には些事だと気にしないように伝えていた。
何せ本人は神を否定しながらも本当の奇跡を起こして見せたのだ。
であるならば、自分たちがすべきは心の弱い者を責めるのではなく、彼により一層の心を捧げる事だろう。
信仰とは他者と比べるものではなく、己に何が出来るかという探求の道である。
それを伝えれば相手もハッとした顔になり、以前よりも引き締まった表情で帰っていった。
彼女が一体何を考えたのかは分からない。ただ、東京駅を出発した新幹線の中では、湊の席の周りはプリンス・ミナトの三年生女子たちで埋まっていた。

「皇子、何か食べますか？　わたくし、さきいかなど持っているのですが？」
「繭子の馬鹿！　そんなの皇子が食べる訳ないでしょ！　それに車内が臭くなるじゃない！」
「てか、あんた会長だからって皇子の横キープしてんじゃないわよ！　時間交代って最初に言ったでしょ！」
周りで三年生の女子たちが騒いでる中、湊はイヤフォンを付けて音楽を聴きながら〝レ・ミゼラブル〟を読んでいた。
別にこの作品が好きという訳ではないが、移動中の暇潰しになる物がないか探していたとき、イリスの故郷にある教会から連れてきたシスター・アンナが長さもあって良いのでは薦めてきたのだ。
別に湊は古い物をありがたがる訳ではないが、価値を考えて原書を手に入れようとするも流石に一日二日で手に入るはずがない。
なので、言い回しを現代の文法に変更して読みやすくしただけの原語版を買ってきた。
そうして、彼はやり手のビジネスマンかインテリヤクザという雰囲気で静かに移動時間を過していた訳だが、本来席を取った車輌自体が異なる二年生の湊が三年生の車輌にいるのには理由があった。
それは、元々参加するはずのなかった湊の席を学校が取り忘れていたというものだ。
湊は復帰してすぐに学校に修学旅行に参加する事を伝えた。
ただ、宿は自分で同じ宿の別の部屋を予約すると言った事で、学校側は特別何かの手配をする必要はないと思ってしまったのだ。
そして、当日になって新幹線で湊が座る席を取っていなかった事が発覚。
三年生の中に体調不良で休んだ者がいたことで、湊がキャンセル扱いになったその席を取って何とか無事に乗ることが出来たが、湊と一緒に移動時間を楽しもうと思っていた二年生の女子生徒らから大きなブーイングがあった事は言うまでもない。
逆に、同じ班員の男子が休んだことで隣の席に座ることが出来た雪広たちは学校のミスを褒めていたのだが、突如降って湧いた幸運に対

して三年生の方でも皇子の独占だと騒ぐ者たちがいた。
月光館学園は指定席の車輌に乗っているので、そもそも知り合い同士でも席の交換などは褒められた行為ではない。
しかし、プリンス・ミナトには皇子の独占禁止という掟がある。
誕生日やクリスマスのプレゼントはプリミナが企画したイベント内で渡し、話すときは二人以上で、簡単に言えば「テメェら、ゼッテー抜け駆けすんなよ！」という事なのだが、彼の隣の席に座っている雪広は会長にもかかわらず他の会員たちから責められていた。
本人は湊の隣に座れた事で嬉しすぎて気にしていないようだが、彼女たちが醜い争いを続けていると、通路側に座っていた湊の顔の前に何かが突き出された。
本を読んでいる状態で顔の前に何を出すなど邪魔でしかない。比較的良識的な者が揃った三年生にそんな事をする者がいたこと自体が驚きだが、面倒臭そうに顔を上げたそこにいたのは何と三年生ではなかった。
「有里君、さっきの名古屋駅で手羽先売ってたから一緒に食べよ！」
「……よくあの停車時間で買えたな」
汚れてはかなわないからと本を閉じ、湊は担任である佐久間が顔の前に出してきた手羽先にかぶりつく。
一応、紙ナプキンはあるようだが、それを使っても油で手が汚れるのは避けられない。
それを嫌がった湊がそのまま彼女の持ったままの物に口をつければ、女子たちの悲鳴が辺りから上がる。
湊の家族に分類されるチドリ、ラビリス、アイギスの三名に加えて、同じ部活に所属しているメンバーらはどうしても湊と接する機会が多くなる。
そこでプリミナでは彼女たちは皇子の独占禁止の対象外に設定しているのだが、担任である佐久間だけは元からスキンシップが多いからと要注意人物としてマークしていた。
案の定、旅行でも手を出してきたかと会員らは交戦モードに思考を切り替える。

しかし、敵の排除行動に移ろうと思ったここで予想外の問題が発生する。なんと自分たちが崇拝する皇子が食事をしているのだ。
佐久間をここで排除すれば彼女の持っている手羽先も消えるため、油で唇に艶が出て普段より艶めかしさの上がっている湊の食事も中断される。
敵は排除したい。だが、湊の食事は見ていたいし、邪魔もしてあげたくない。つか、メッチャ手羽先の良い匂いしてるんですけど。
そんな様々な葛藤の末にプリミナ会員たちが選んだ行動は、
「いやぁ、やっぱ旅の思い出を写真に残しておかなきゃね！」
「まったくその通りですわね！　出発してから帰るまでが旅ですもの！　行きの新幹線も思い出に残しませんと！」
湊の食事シーンをプライベートな記録に残す事だった。
ファンクラブの広報向けに写真をサイトにアップするとは告げていたが、それは結団式と解団式を除けば京都に着いてからのこと。
ここはまだ京都行きの新幹線の車内。ここで撮影されたものは共有する必要はないのだ。
故にこれは何のルールにも抵触しない正当な行為。自分たちの旅の思い出でしかないのだと彼女たちは新幹線の中だけで百枚以上の写真を撮りまくったのだった。
午後――京都駅
数時間ほど新幹線に揺られ、一同はようやく京都に着いた。
初日は新幹線の移動に時間をほとんど取られるからと、到着後も基本的には集団行動で観光巡りに勤しむ。
ただ、ずっと椅子に座りっぱなしだったこともあり、駅構内の端で整列した生徒はほとんどが背伸びなどして身体を解していた。
「いやぁ、ようやく着きましたな！　飛行機だったら半分以下で済んでたと思うけど！」
他の者と同じように身体を解していた七歌は、やっぱり飛行機の方が良かったんじゃないかと妙なところでケチる学校に向けて地味に毒を吐く。
周りで聞いていた者たちも同じように思わなくもないが、新幹線の

中でお菓子を交換したり、周りの者たちとトランプしたりするのも楽しかった。
なので、新幹線での移動にも良い部分はあるんだぞと順平が指摘する。
「いやいや、飛行機だとマジで移動だけになるっしょ。周りのやつらと遊んだりできねーじゃん？」
「フフッ、新幹線なら椅子を回転させて向かい合ったりも出来るからね。僕も貴重な体験が出来たから新幹線で良かったと思ってるよ」
「だべ？　ほら、七歌っち。日本の生活に慣れてない綾時もこう言ってるぜ？」
転校生である綾時はずっと海外にいたので日本の文化に疎い。
あくまでそういう設定であって、彼はファルロスとしての記憶を持っているのだが、その話を信じている順平は綾時が楽しめたなら良かったじゃないかと本人も嬉しそうに話す。
湊の友人と聞いていたため最初はどことなく壁を感じていたが、綾時の性格が湊と対称的にフレンドリーで、さらに特別課外活動部で初めて同学年の同性という事もあり順平は急激に仲良くなっていた。
新入りが浮いたりせず上手くクラスの輪に加われた事は素晴らしいと七歌も思う。
ただ、その一方で可哀想な目に遭っていた者もいるんだぞと低い声で返した。
「……トイレに行ったときに見たんだけどさ。八雲君は三年生の女子に囲まれて、一人で暇そうにずっと本読んでたよ？」
「あー……いや、それはオレっち関係ないしな。学校側のミスだろ？」
七歌たち二年生と三年生は乗っている車輌自体が違っていた。
けれど、トイレの場所が三年生の車輌を抜けた先だったこともあって、七歌も途中で湊の様子を見る機会があった。
その時の彼はイヤホンを耳に付けて、分厚い洋書に視線を落として暇そうにしていたのだ。
周りの女子たちは湊の写真を撮ったり、たまに話しかけたりしていたが、やはり尊き血筋の人間と下々の者たちとでは話が合わないのか

まるで相手をしていなかった。
自分が彼の傍の席であれば、大事な家族に一時たりとも寂しい思いをさせなかったのにとミスした学校に怒りを抱き、ミスを犯したのが副担任に降格させられた江古田だと知った時には大声で「テメェ、ヅラ野郎!!」と遠くから叫んでしまったほどである。
だというのに、彼に命を救われたはずの順平は自分さえ楽しければそれで良いと、湊の事など知った事じゃないと宣った。
七歌は血が冷えていくのを感じながら順平を昏い瞳で睨む。
「そこじゃないでしょ。八雲君が可哀想な目に遭ってたのに、順平は何とも思わないの？　血も涙も髪の毛もない畜生なの？」
「全部あるわ！　これ短く刈ってるだけだからな?!」
「ハゲは皆そういうんだよ」
所詮は芋臭いＤＴブサメンのハゲだったか。七歌はこれ以上彼と話すことはないと踵を返すと隣のクラスの列にいる湊を探す。
出席番号で言えば彼が先頭にいるはずなのだが、今回は班単位で行動するため、班長が点呼を取る関係もあって先頭付近にはいない。
ただ、纏う高貴なオーラと長身もあって彼は遠くからでも非常に目立っている。
すぐに見つけて近付いていくと、彼はチドリやラビリスと一緒にいるようだが何故だかその左腕には七歌の知らない女子が抱きついていた。
「ねぇ、ミッチー。まだ十一月だけど京都駅に大きなクリスマスツリーが飾ってあるんだって！　とってもキレーらしいから一緒に見にいこ！」
ゆるふわウェーブが掛けられた黒髪の女子は、猫なで声で湊に甘えながら二人で別行動しちゃおうよと湊を悪の道に走らせようとしている。
有里湊としての戸籍では四月生まれだが、七歌は湊が十月生まれだと知っている。
七歌自身の誕生日は夏なので、秋生まれの彼は弟という事になるのだ。

そんな可愛い弟を守るのは姉として当然。悪の道に誘う悪女は今すぐに排除しなければならない。
ポケットから髪留めのダッカールを取り出し、ナイフのように構えれば、七歌は気配を殺しながら悪女に近付いていく。
残り四メートルになれば一足飛びでその首筋に刺してやれる。
瞳孔の開いた瞳で近付く七歌が小さく口元をつり上げれば、その時、愛しの青年の声が耳に届いた。
「……あぁ、あれか。一緒に見たカップルは別れるってジンクスがあるやつだな」
「ええっ!? 何それ! まどか、そんなの聞いてないよ?」
「本当か嘘は知らないがこっちじゃ有名らしいぞ。あとは大阪の水族館にある観覧車に乗ったカップルも別れるってジンクスがあるらしい」
湊の口から恋愛系のジンクスを聞くとは思わず、意外すぎると七歌は小さく驚いた。
ただ、湊が話した内容は島根にいた七歌も聞いたことがあったので、幼少期から東京在住のくせに妙な情報を知っているなと少し感心する。
ただ、七歌がそうやって考え事をしている間も、悪女は湊の腕をギュッと抱きしめて、女子から嫌われる男に媚びる女子その物の態度で湊に話しかけていた。
「あ、そっちは聞いたことある! でも、それじゃあ一緒にツリー見れないね……。しょうがないから、十二月になってから六本木のやつ見に行こうね!」
「……お前、大学生の彼氏はどうした?」
「イケメンは心の栄養だもん。彼氏もまどかの事は理解してくれてるから大丈夫だよ?」
「……そうか。まぁ、俺に一切メリットがない以上、付き合う事はないがな」
悪女はかなり計算高いのか普通の男であればコロッと傾きそうなくらいに全てが上手い。

しかし、同年代の女子など子どもにしか思えないくらいに青年は女性慣れしていた。
逆に自分が女性を掌で転がす技術を習得している彼にすれば、恋と愛をしっかりと区別しているであろう悪女の愛を彼氏から奪う事も可能に違いない。
どうしてチドリたちが傍にいながら悪女に好きにさせているのかと不思議に思っていたが、きっとチドリたちも悪女では湊をどうすることも出来ない確信があったのだろう。
ならば、自分が手を下すまでもないとダッカールをポケットに仕舞えば、七歌はあくまで知り合いに挨拶にきた体で湊に声を掛けた。
「八っ雲くーん！　新幹線で寂しい思いをした貴方にお姉ちゃんが会いに来てあげましたよぉ！」
今日一番の笑顔で話しかけた少女に対し、振り返った青年はまた五月蝿いのが増えたと心からうんざりした顔を向ける。
ここは姉弟が感動の再会を果たす場面のはず、なのにどうして悪女に向けるべき表情を自分に向けるのか。
不思議に思いつつも七歌は空いている彼の右腕を取ると、詐胸である悪女と違って本物である胸の膨らみで彼の腕を包みつつ彼の班の予定を尋ねた。
＊＊＊
七歌が湊の許に向かったとき、新幹線を降りたゆかりは周りを見渡して美鶴の姿を探していた。
父親が死んだはずの部下の裏切りにあって倒れ、さらに桐条グループの内部分裂騒動などもあったことで美鶴は非常に疲れている様子だった。
最初は修学旅行に参加しない可能性もあると言っていただけに、とりあえず参加してくれた事には安堵した。
けれど、生徒会長として挨拶しているときも、どこか無理して普段通りに振る舞っているように見えた。
（桐条先輩、やっぱりいつもと違ってたよね……）
大好きな父が信頼していた人間の手で殺され掛けたのだ。

いくら一命を取り留めようともたった一週間程度で心の傷が埋まるとは思えない。
ゆかりは自分が似たような状況になったことがあるため、その辛さだけは少しは理解できる。
ただ、彼女はその生まれもあって、人前では本心を隠してどうしても仮面を被ってしまうところがある。
今回は〝周りの楽しんでいる者たちの邪魔をしないように〟といったところだろうか。
確かに高校の思い出として重要な修学旅行で、自分と一切関係ない話で暗い顔をされては気分が盛り下がるかもしれない。
それを思えば美鶴の気遣いは正しいのだろうが、今の彼女は精神的に脆く非情に不安定な状態にあるとゆかりは考えていた。
(どこかでガス抜きしないとヤバいかも……)
遠くに美鶴の姿を発見したゆかりは、ふと見せた彼女の表情をみてそんな風に考える。
高校生活最大の思い出作り。それを楽しい思い出にするためゆかりも小さな決意を固めるのだった。

第三百七十三話　京都の温泉旅館

夜――旅館〝東山三条・後醍醐〟

到着したのが昼を過ぎたやや遅めの時間だった事もあり、ガイドの案内で京都市内を数ヶ所だけ観光してきた生徒たちは、冬時間になって外が暗くなってから旅館に到着した。

有名進学私立だけあり、外観からして老舗の趣を感じさせる高級旅館に生徒たちは感嘆の声を漏らす。

京都らしさを意識してか、一階のロビーには待合のソファーの他に野点傘と床几台が置かれている。

大きなボストンバッグを持って旅館の中に入った順平は、それらを見て〝ＴＨＥ・京都〟な造りで良いじゃないかと旅館を選んだ学校の仕事を褒める。

「うわっ、マジですげー高級旅館って感じじゃん。ここもあれだろ？　創業何百年とかって歴史ある感じだろ？」

「順平君、ここに旅館の歴史が書いてるよ。創業二百十年だって」

「二百年以上前ってマジかよ!?　つか、えっと一八〇〇年頃って何時代になるんだ？」

ロビーの置物や高い天井を見て感心していた順平に、こっちに旅館の歴史が書いてあるよと壁際にいた綾時が声を掛ける。

そこには創業当時から今日までの旅館の主人と女将の名前に加え、この旅館が乗り越えてきた数々の困難についても詳しく書かれていた。

順平にとっては百年前でも大昔の感覚だというのに、その倍となると最早歴史的文化財なのではと思ってしまう。

そんな場所に一般人が泊っても良いのかとオドオドしつつ、歴史に詳しい訳でもないので元号含めどんな時代だったのかと周りの者に尋ねた。

すると、後ろからやってきていた隣のクラスの者たちにも話が聞こえていたのか。相変わらず旅行でも手ぶらな青年が静かに口を開いた。

「……その頃だと寛政だな。まぁ、寛政自体は十年ほどしか続いていないが」
「へー、そうなんか。つか、そんな昔からあるなんて京都の旅館はすげーな」
近年は国内は勿論のこと、外国との関係も落ち着いているので昔のように数年ほどで元号が変わるという事はなくなっている。
なので、日本史を覚えるなら西暦で覚えた方が分かり易いのだが、順平にとってはその辺りはどうでもいいようで、素直に二百年の歴史に何やら感動したように腕を組んで頷いている。
その横では日本の文化にあまり詳しくない綾時もおり、彼は彼で日本の古い文化に触れる経験を新鮮に思っているようだが、足を止めていた湊は旅館の歴史を見て納得したように小馬鹿にした薄い笑みを浮かべる。
「……創業は天明の大火の後だろ。この辺りも含めて京都の中心ほぼ全てが火事で何にもなくなったんだ。全財産を失った人間もいたから先祖代々の土地なんて言ってられなくてな。小金と引き替えに土地を去った者も多い。それ以降の創業なんてほぼ余所者だ」
順平や他の者たちが素直に歴史ある旅館だと感心していた中、湊は歴史を見たことで逆に浅いと貶した。
彼の唯我独尊な振る舞いはこれまでも見てきたが、これから数日世話になる旅館の玄関に入ってすぐロビーで言うなど正気の沙汰ではない。
何せ京都の人間は歴史やら伝統を重要視する。市内のどこに住んでいるか。何代住み続けているか。それだけでカーストが存在し、店をやっているならいつ創業したか、店主は何代目かも重要になってくる。
そこで考えるとここはかなりカースト上位なのではと他所の人間は思う訳だが、複数のカーストなりを知っている湊にすれば〝浅い〟らしい。
ただ、どんな理由があろうと湊の言動が非常識なのは変わらない。
慌てて彼のクラスメイトで元部下の渡邊が止めに入った。

「ちょ、会長、聞こえたらヤバいですって！　つか、マジで京都に何の恨みがあるんスか！」
「……恨みはない。ただ、事実を言っているだけだ」
何を言っても無駄なようで湊は旅館の歴史が書かれた壁の前を離れると、そのままフロントに行って二、三言葉を交わし、すぐに売店の方へ行ってしまう。
フロントの女性が丁寧な対応をしていた事から、どうやら旅館の人間に聞こえていなかったようだが、今後もこの感じだと周りの人間の精神が保たない。
何がどうしてあそこまで京都を蔑むのか。皆が不思議に思っていると、七歌が思い当たるならここかなと自分たちの家と京都の関係を話す。
「私と八雲君の一族ってそれぞれしっかりと直系で二千年以上続いてるの。それでまぁ、八雲君の一族は最強っていうか敵無しでね。時の権力者に頼まれてその内の五百年くらいはこの旅館の数倍の大きさで京都に屋敷持ってたんだよね」
九頭龍家と百鬼家は今も本家屋敷がある島根が発祥の地である。
ただ、その力は旧い時代から既に全国に知られており、当然、日本の政治の中心であった京都でもその力を是非手に入れたいと様々な謀があった。
百鬼家はそういった権力に一切の興味がなかったものの、九頭龍家は鬼を従えていることで敵などいないと分かっていたため、自分たちの家を大きくするためにも申し出を受けて京都に屋敷を構えていた事があった。
たった十数名で一国を落とすほどの戦力。その鬼と鬼を使役する一族がいれば、京都も安泰だと権力者は自分の屋敷の傍に彼らを住まわせたのだ。
結果から言えばその策は見事に上手くいった。謀反を企て、権力者を殺そうにも、屋敷に侵入しようとしている間に龍の命を受けた鬼が現われて下手人を殺すのだ。
龍を守る鬼の事は知られていたが、その二家を味方につけた権力者

は龍と鬼に守られていると噂になり、以降は一度も暗殺されそうになることがなかったほど。
感謝した権力者は代が変わっても彼らを御所近くに住まわせ、九尾討伐を依頼したように何かあれば彼らに頼り続けた。
「ただ、京都って気候的に住みづらい土地でしょ？　散々お願いも聞いてあげたし義理は果たしたって事で、この旅館くらいの屋敷一つ残して引き上げたんだよね。そしたら、裏切りだなんだってもう追っ手がすごかったらしいの。京都が政の中心だったから当時で言えば正に国が相手っていうレベル」
そう。権力者は千年先も彼らは自分たちと共にあると信じていた。
しかし、両家は別に権力者に仕えているつもりはなかったし。国のトップだからとある程度は恩も売っておいたが五百年もやれば十分だと考えた。
そうして、十分に義理を果たしたと彼らが住みづらい土地に屋敷一つ残して島根に引き上げようとした際、彼らが自分を守るのは当然だと思っていた権力者とその一族は大いに慌てた。
何せ情報技術の全く発達していなかった時代であっても、国内どころか海外にまでその存在を知られていた一族たちだ。
最強の盾であり矛でもあった存在が離れれば、それを好機と捉えて命を狙う者もいる。
また純粋にそれだけの力を持つ者たちに見捨てられた男に、国の将来を左右する政を任せて良いものかという風潮も出るだろう。
何としてでもそれは避けねばならないと考えた権力者が取った行動は、これまで守って貰ってきた恩を忘れ、彼らを力尽くで従えさせようというものだった。
話を聞いていたゆかりは先は見えるがと結果を尋ねる。
「それで七歌たちのご先祖はどうなったの？」
「言ったでしょ。八雲君の一族は最強だって。圧勝だよ。水鉄砲持った子ども相手に戦車で応戦するようなもんだもん。追っ手を全滅させた上で権力者の屋敷に忍び込んで、これ以上邪魔をするなって脅したらしいよ。で、直筆の謝罪の文と餞別を貰って島根に帰ったんだ」

国のトップを守る軍隊が弱いはずがない。
しかし、それを相手にしても名切りの鬼は完勝できた。敵を全滅させ、隠し部屋に逃げていた権力者の喉元に刃を突きつけ、諦めて退くように告げたのである。
ここでようやく自分がどんな存在を駒として使っていたのか権力者も理解したらしく、以後は大人しく彼らが島根に帰ることを認めて、さらに裏切り者と呼んだことを謝罪して餞別まで渡したほどだった。
当時から国を相手に喧嘩を売っていたとは驚きだが、そんな扱いを先祖が受けていたなら京都を嫌うのも少し分かるかと、売店で何やらお菓子を買って出てきた湊を見ながら複雑な表情で渡邊も頷く。
「あー、先祖のされた事への恨みで京都嫌ってたんスね」
「いや、屋敷残してたって言ったでしょ？　その後も色々と仕事はしてあげてたし。疫病と飢饉で都が全滅しかけた時は助けて回ったし。大火事になった時も支援物資とか贈ってたんだよ？　てか、私の一族には権力者の娘も何人か嫁いできてるし。別に関係が悪くなった訳じゃないって」
権力者の娘が七歌の一族に嫁いでいたと聞いて全員が目を丸くする。
何せ権力者の血筋は日本ではいと尊き物として考えられているのだ。その血を彼女も引いているとなれば、二千年以上続く血筋がさらに高貴な物に感じられる。
もっとも、実際は権力者は娘を百鬼に嫁がせようとしたのだが、神の器を目指していた百鬼がそんな凡俗な血はいらないと拒否した事で九頭龍に回されたという裏話もあったりする。
結局、二つの一族は一つに戻って湊にも権力者の血が流れているのだが、そこまで深い関わりがあったなら湊が京都を嫌う理由が分からない。
ここはやはり素直に聞いておくべきかと、戻ってきた彼に対し一同を代表してチドリが声を掛けた。
「じゃあ、なんで貴方は京都を嫌ってるの？」

「……別に嫌ってないぞ。ただ、下々の者らのくだらない見栄の張り合いを滑稽に思っていただけだ」
聞いて一同は何を言ってるんだこいつはという顔になる。
確かに、京都のカーストは他所の人間からすればくだらないし意味が分からないものだろう。
ただ、それで当人たちのコミュニケーション等が上手くいっているなら気にする必要はないはず。
それをこの男は〝俺からすれば全員等しく浅いが？〟と全力で上から目線に馬鹿にしているのだ。
彼の家系を見れば確かにその通りなのだが、真面目に何か理由があると思っていた者たちにすれば、こいつはやっぱり馬鹿だわと呆れるほかない。
長い付き合いで彼のそう言った部分を知っていたゆかりは、時間を無駄にしたとムスッとしながら手を叩いて全員に移動を促した。
「よし、撤収！　馬鹿は放っておいて部屋に行くよ！」
『うーすっ！』
他の者たちもゆかり同様に彼のこういった側面は理解している。
馬鹿の相手をするだけ無駄。自分たちはこれから楽しい修学旅行の夜を過すのだと、部屋の場所の関係で男女で別々の階段を目指して歩き出す。
それを見ていた湊はならば自分も移動しようと付いていく訳だが、何故だか彼は男子たちではなく女子らの後に付いてきた。
すぐに気付いたゆかりは再び呆れたような顔になって湊を注意する。
「君はあっちでしょ！　ベタなことすんなっつの！」
別に女子たちの向かう先の階段を通ってでも男子たちの部屋があるエリアには向かえる。
一階で別れて移動すると言っても、泊るのは別館という訳ではないので、遠回りになるだけでフロア自体は同じなのだ。
しかし、異性の部屋のあるエリアには立ち寄らないよう言われているため、いきなり破るやつがあるかとゆかりは注意したのだ。

女子に叱れている湊を見て、同じ事をしようと思っていた男子たちもしなくて良かったと小さく安堵する。
だが、叱られた青年は相手の理不尽な言葉に溜息を吐きつつ、近くにあったフロア案内の看板を指でさして説明した。
「俺の部屋はここだ」
「そう言えば、有里君は個人で部屋を取ってたんでしたね」
「後ほどわたしも遊びに行かせていただきます」
美紀とアイギスが話す中、彼が指したのは女子たちの泊るエリアの最上階の部屋。
この旅館の建物は台形ではなく凹型になっており、最上階は二つのスイートルームしか存在せず、それぞれ最寄りの階段とエレベーターからしか移動が出来ない。
つまり、男子たち側の階段からでは行くことが出来ないので、そこを否定されても困ると湊は言いたい訳だった。
どうやら先ほどフロントに寄っていたのはチェックインだったらしく、彼の手にはしっかりとスイートルームの番号を表わす数字が書かれた鍵がある。
注意したゆかりも彼が個人で部屋を取っていることを忘れていたので、その点については謝罪するが、案内板の近くに置かれていた旅館のパンフレットを見ていた男子たちが、湊の泊る部屋の設備を見て驚愕の声をあげた。
「はぁ!? マジかよ!? 有里の部屋、最上階のくせに庭園と露天風呂付きって書いてんじゃねーか!」
「僕らの部屋にもシャワールームに小さな湯船はあるみたいだよ?」
「いやいやいや、完全に別物だって!」
この旅館にある露天風呂は時間で男湯と女湯が切り替わるものを除けば、スイートルームにそれぞれ設置された物しかない。
つまり、一般の部屋に泊っている順平たちは、入る時間を間違えればただの大浴場に行くしかないのである。
どうして最上階のくせに日本庭園と露天風呂があるのかは、部屋数を二つに絞ることでそれぞれに広いバルコニーを造り、そこに庭園と

露天を設置しているからだったりする。
　女子たちも男子たちが見ているものと同じパンフレットで湊の部屋を見ていれば、圧倒的格差に震えていた順平が綾時に自分たちと湊が置かれている状況についても説明を始めた。
「考えれば分かるだろ。有里はファミリーで泊るようなスイートに一人だぞ？　点呼が終わってから部屋に女子連れ込んで、星空眺めながら露天でゆったりも可能だ」
「そういや、会長は中学時代にも前科あるかんな。会長のくせに修学旅行カップル第一号になった前科が」
「なら、僕たちも部屋に女性たちを呼んで楽しくお話したら良いんじゃない？」
「それが出来るのはお前や有里クラスのイケメン限定だっつの！」
　順平や渡邊が警戒しているのは中等部時代の修学旅行の再来だ。
　旅行マジックを言えば良いのか、修学旅行中に新しいカップルが誕生することはよくある。
　ただ、前回は生徒会長である湊がその第一号となって、非公式ながら学内の女子人気ランキングでトップクラスの順位にいたゆかりを見事に射止めていた。
　今回、点呼や教師の見回りもある他の生徒と異なり、湊はとんでもなく豪華な部屋に一人で泊っているため、女子を連れ込んでも誰も注意することが出来ない。
　彼の周りには今も大勢の見目麗しい女子がいるので、また今回も同じような事になるのではと男子たちが険しい目付きで青年を見つめていると、彼はその嫉妬から来る視線を全て無視して階段へと向かってゆく。
　男子たちはそんな余裕すらも嫌味ったらしいと文句を言って去っていったが、昔から彼の事を知っているチドリはまるで分かっていないと呆れた顔をして彼の傍に行く。
　影時間の記憶と共に湊と過した時間を忘れている美紀はともかく、どうやらラビリスなども彼の様子を分かっているようで苦笑を浮かべている。

そんな二人の様子を不思議に思ったアイギスが首を傾げれば、彼女の疑問に答えるようにチドリが湊に声を掛けた。
「……八雲、温泉は楽しみ？」
「……少しだけな。そのために専用がある部屋を取った」
「そう。好きな質のお湯だと良いわね」
そう。湊は別に男子たちに劣等感を与えるために無視した訳じゃない。
ただ単に温泉好きで早く部屋に行ってお風呂に行きたいから相手にしなかっただけなのだ。
部活で旅行に行ったときも彼は部屋に着くなり温泉に行こうとしたほどだ。
今回は部屋からすぐに温泉に行けるという事もあって、食事の時間を除けば好きなだけ温泉に入っていることだろう。
先ほどまであんなに京都を貶していたというのに、温泉があればそれだけで子供っぽさを見せるのだから何ともアンバランスに思う。
しかし、生き返ってからしばらくゆっくり出来ていなかったこともあり、先を行く彼の背中を見ていた少女たちは、どうか彼がゆっくり過ごせますように心の中で祈った。

第三百七十四話　男たちの戦い

夜――旅館

旅館に着いた月光館学園の生徒と教師たちは、着いてすぐに宴会場で夕食をとった。

今日は移動がメインだった事であまり観光する事が出来なかったが、その分、普段とは違ったシチュエーションを楽しもうと生徒たちも盛り上がっていた。

教師陣は引率としてそんな生徒たちを抑えねばならない立場だからか、それほど羽目を外せていなかったが、途中で頼んでもいないお酒が運ばれてきた。

何でも個人で部屋を取っていた湊からの差し入れだそうで、彼は自分の部屋で食事を取る事になっておりその場にいなかったが、教師には酒を、生徒たちにはソフトドリンクを飲み放題で頼んだらしい。

食事のあとも翌日の打ち合わせなども残っていたので、酒を飲んで酔っ払う訳にもいかない。

しかし、湊が差し入れた酒のメニューは高級な地酒などもあり、佐久間と櫛名田が人の厚意を無駄には出来ないとボトルで頼んだことで他の教師たちも次第に飲むようになっていった。

おかげで食事が終わる頃には教師たちも上機嫌に部屋に戻っていった訳だが、食事を終えて一時間ほど経った頃、とある部屋に集まる男たちの姿があった。

部屋の明かりは消され、今その部屋を照らしているのは窓から射し込む月明かりとテーブルの上に置かれたキャンプ用のＬＥＤランタンだけだ。

停電になっている訳ではない。蛍光灯が切れているという訳でもない。

だというのに、その部屋にいる四人の男たちはテーブルを囲ったまま目を閉じて、静かに座って待っていた。

他の部屋では今頃持ち込んだ玩具で遊んでいたり、関東とは放送日の異なるテレビ番組などを見ながら盛り上がっている事だろう。

それでも男たちはそれらは別世界の事だとばかりに耳が痛くなるほどの静寂に包まれ、その時がくるのを待っていた。
そして、ついにその時が訪れる。
廊下と繋がる扉が静かに開くと、数人分の静かな足音がして、それらが和室と玄関を隔てる戸の前まで来て止まる。
これまで目を閉じていた男たちはお互いに視線を交わすと、最も戸に近い場所に座っていた顎ヒゲのある男が頷いて立ち上がり、戸を隔てた向こう側にいる者たちに向けて口を開いた。
「〝山の〟」
《〝頂き〟》
男の言葉にすぐに返事が返ってくると、男は戸を開いて向こう側にいた者たちを迎え入れる。
戸の向こう側にいたのは隣のクラスの男子三人。
彼らが部屋に入ってくると、先に部屋にいた者たちも手を挙げて静かに挨拶をしてから場所を移動し、新たにやって来た者たちと一緒になってテーブルを囲む。
先にポットで湧かしたお湯を使って緑茶を用意し、集まった七人の前にそれらが配られると、一同を代表して顎ヒゲのある男が口を開いた。
「まず初めに諸君らには感謝を。ここにいる七人は同じ志の許に集った勇士である。一人では不可能であっても、この七人がいれば、必ずや〝遙か遠き理想郷(女風呂)〟に辿り着ける事だろう」
顎ヒゲの男がそう言えば聞いていた男たちは同じ気持ちだとばかりに頷いて返す。
彼らのそんな様子に満足そうな笑みを浮かべた顎ヒゲの男は、では早速作戦について話し合おうとテーブルの上に置かれた旅館の案内図を見た。
「じゃあ、T(友近)から説明を始めてくれ」
「了解。さっき男湯の時間に実際に入ってきた。建物の位置関係は案内図とほぼ同じ。ただ、実際には案内図のような綺麗な正方形じゃなくて、もう少し奥行きがあると思ってくれ」

夕食はそれなりの量があって、差し入れのソフトドリンクもおかわりしまくった事で彼らの腹は膨れていた。
ただ、作戦の前に下見をするには自由時間になると同時に風呂に行くしかなかった。
満腹状態ですぐに風呂に入るのはかなりきつい。おかげで部屋にいた四人は隣のクラスの者たちがやって来るまでろくに言葉を交わすことも出来なかったのだが、少し休んで落ち着いた事で実際に見た露天風呂の構造を説明することが出来た。
おかげで、自分たちの目では露天風呂を見ていなかった隣のクラスの者たちは、Tの詳しい説明を聞きながら成程と頷いている。
「身体を洗う場所はオーソドックスに入口を入ってすぐの壁側。温泉自体は奥に向かって長い途中でくびれのある楕円形で、中央にお湯の掛け口も兼ねた大岩がある。大岩は奥に向かって口の開いたUの字型。そのUの字型の部分は四、五人は入れるくらいに広くて、入口側からだと見えない」
LEDランタンの明かりに照らされ、真面目な表情でメモ用紙に図を描きながら話すTのあまりの詳しい説明に、実際の光景が鮮明に頭に浮かんだ隣のクラスの者たちは戦慄する。
彼らは同じ目的のために集まった同志たちだ。
女湯を覗きたい。そんなたった一つの浪漫のために彼らは集まった。
一人は皆のために、皆は一人のために、例え志半ばで己が倒れようとも、同志がその夢を掴むための礎になる。
裏切り者A（有里湊）が部屋に仲の良い女子を連れ込むのが悔しくてやる訳じゃない。
純情故に男の度胸試しと騙されて参加させられている訳ではない。
同じバスケ部のやつらに来いと誘われていつの間にか覗きの片棒を担がされている訳じゃない。
彼らはただ京都の美しい夜景を見たいがために行動するのだ。
そうして、露天風呂の構造をTが説明し終わると、隣のクラスのリーダー格であるW（渡邊）が口元を歪めて顎ヒゲの男を見た。

「流石はJ(順平)の仲間だな」
「オレは関係ねぇよ。ただ、ここに集まったのは浪漫を追い求める最高の馬鹿たちだ。参謀のT、高い身体能力を持つM(宮本)、期待のルーキーR(綾時)。そして、新たにWたちが加わるんだ。失敗する気がしねぇぜ」
このメンバーで失敗する方が難しい。そういって笑うJにWも頷いて返す。
今回、隣のE組からは湊の元部下でバスケ部のWの他、中等部時代にバスケ部キャプテンをしていたY(山井)とラフプレーで選手を潰しに来る敵として試合で戦ったことのあるO(忍足)が助っ人で参加する。
Wの友人であるYは割りとノリノリで参加したのだが、Oは同じバスケ部でも彼らとなれ合っている訳ではない。
ただ、同級生のバスケ部員が三人も集まることもあって、何かしらバスケ部メンバーでやるのだろうかと思って参加してみればこれだ。
話を聞いて状況を完全に把握できたことで、自分はこんな物に参加する気はないぞとOが立ち上がる。
「ふざけんな。誰がそんなもんに参加するかよ」
「お前、逃げんのか?」
「そういう問題じゃねぇだろうが! 高いリスクに、一切メリットがねぇ時点で参加する訳ねぇだろ」
去ろうとするOをWが呼び止めるが、彼はそんな事に参加してバレたらどれだけの不利益が発生するか考えなくとも分かるだろうと吐き捨てる。
さらに言えば、そこに同じ学校の女子がいたとしても、いくら都会の学校と言えど女子のレベルはピンキリだ。
七歌やゆかりなどトップクラスがいるならば挑む価値もあるかもしれない。
だが、これで自分よりも体格の良い重量級の柔道部女子しかいないとなれば、あまりに勝手な言い分だが見ても損にしかならないとOは断言する。
女子が聞けば、ただの覗き魔が何をほざいているのかと憤慨するに違いない。

ただ、ここで自分たちの計画を知った人間が抜けるのは非常に拙い。
そう考えてWとYはアイコンタクトを取ると、相手を煽って話に乗せる作戦に出た。
「……お前の幼馴染みでマネージャーの櫻井もいるかもしれないぞ？
何なら、Mの幼馴染みの西脇もいるかもしれん。いや、もっと言えば会長の周りにいるうちの学校のトップ陣もいるかもな」
「そっちに有里の知り合いがいるなら、部屋風呂がある有里は見れないって事だ。もし、それで俺たちが見る事が出来たら男として一歩リードしたと言えるだろうな」
「……なんだと？」
二人が腕を組んでニヤリと笑って言えば、Oは足を止めて何やら考え込む様子を見せる。
相手は中学時代に湊に負けた事を未だに根に持っている。チャンスがあればどんな事でも良いから彼に勝ちたいという思いを持っているのだ。
さらに、どんなにスカして斜に構えていようと相手も思春期の男子高校生。
行動を正当化できるだけの材料があれば、女子の裸を見たいがために話に乗るに決まっている。
案の定、相手はテーブルまで戻ってくると湊に勝てるなら悪くないと言い訳を口にしてきた。
それを見ていた他の者たちはこいつムッツリだなと心の中で思いつつ、下見したことでどこが覗きポイントに適しているかをRが中心となって話し合う。
「僕の見立てによれば、この向かって右手奥にある松の木辺りが狙い目だと思う。左側はどうしても旅館自体が光源になって照らされてしまうからね。旅館と反対側になってる方が暗くて隠れやすいはずさ」
「俺も参謀としちゃRの意見に賛成だ。つか、左側からだと下手すると移動含めてロビーから見えるかもしれん」

入浴中の人間に見つかるのは論外だが、覗きポイントに行くまでを他の人間に見られる訳にも行かない。
温泉左側の塀はロビーからも見えているので、そこを通過しているところを旅館の従業員に見られればすぐに追っ手が放たれる事だろう。
もし教師にバレれば今夜は反省房こと教師の部屋送りにされるはず。
何が悲しくて修学旅行の夜を教師と同じ部屋で過さなければいけないのか。
絶対にそんな初歩的なミスは出来ないと意識を共有させたところで、バスケ部たちは動き易いジャージ姿で、JとTとRは風景に溶け込みやすさを優先して浴衣姿で部屋を出る事にした。
＊＊＊
部屋を出た男たちはあくまでちょっと散歩に行くんですよという雰囲気で旅館を出た。
旅館の浴衣を着て外に出ることを注意されるかもと警戒したが、男性客には多いようでフロントにいた従業員も一礼するだけで特に反応してこなかった。
「よっし、第一段階はクリアだ。このまま外から回り込んでいくぞ」
『了解』
覗き一つに何をそんなに本気になっているのか。真剣に頷き合っている彼らの目的を聞けば、誰もが馬鹿だと呆れるに違いない。
しかし、いくら他人が何と言おうとも彼らは本気だった。
他人に言われたくらいで諦められるなら、部屋にいた時点で馬鹿話としてその話題自体を終了している。
彼らはその遙か遠き理想郷の光景に憧れ、恋い焦がれるからこそ、胸の奥に燃える衝動に突き動かされ目指すのだ。
「いくぞっ」
Jのかけ声と共に出来るだけ足音を消しながら動き出すと、部活で広い視野を持つことに慣れているバスケ部が先導して進んで行く。
見つかった時の事を考えれば不安と怖さで足が止まりそうになる。

だが、自分たちには仲間がいる。信じられる仲間がいるからこそ震えそうになる足を踏み出し進めるのだ。
旅館の建物沿いに走っていれば、彼らの耳に水音が届く。
「……近いぞ」
先頭を走っていたWが言えば、他の者たちも分かっていると頷き返し、より一層周囲への警戒を強めて目的地を目指す。
あと少し、もう少しで自分たちの夢は叶う。徐々に大きくなる水音、そして楽しそうな女子たちの話し声が聞こえてきて、少しずつ男たちの鼻息が荒くなってきたその時、
「――――お前らそんなとこで何やってんだ！」
目標まで残り二十メートルほどのところで後ろから大人の男性の声が響く。
声の方向からするとまず間違いなく男性はJたちに向かって声を掛けていた。
何故このタイミングで、どうしてあともう少し待ってくれなかったのか。
彼らは後ろから聞こえた声に聞き覚えがあった。その声の主は自分たちの学校の体育教師のもの。女子たちからはセクハラ教師ブルマンと影で呼ばれている青山という教師だ。
一時期、店の看板が落ちてきて怪我で入院していたが、退院が間に合って彼も旅行に着いてきた。
それを知っているJたちは、どうしてもっと入院していなかったんだと、ポイントにすら辿り着けなかった悔しさと邪魔してきた相手への怒りで拳を震わせる。
だが、既に見つかってしまった以上、この作戦は失敗だ。どうやっても全員が無事に逃げ延びる事など出来るはずがない。
どうすればいい。どうやれば助かる。
無駄な足掻きと知りながらも、焦りながら全員が助かる方法を考えていた時、後ろを走っていたJとTがどこか悟ったような表情で視線を交わし頷いた。
「……W、お前らは逃げろ。オレたちは浴衣にサンダルだ。どうやっ

ても逃げ切れねぇ」
「けど、お前らはジャージと靴でしっかり走れる。お前に運動部だ。俺たちが少し時間を稼げば一周して旅館に戻れるだろ？」
「な、何言ってんだ！　そんな事したらJたちはっ」
自分たちは仲間だ。仲間を見捨てて自分たちだけ助かることなど出来ない。
団体競技の部活で仲間の大切さを知っているからこそ、彼らはJたちが犠牲になることを容認出来なかった。
けれど、追っ手も体育教師だけあって徐々に距離を詰めてきている。
サンダルで走りづらいJたちに合わせていれば、全員捕まるのは時間の問題だろう。
故に、覚悟を決めた瞳で微笑みRが言った。
「僕たちは仲間だ。だから、どうか僕たちの思いを無駄にしないで欲しい」
『……っ』
足手纏いになっている三人が犠牲になるだけで仲間が四人も助かる。
悩むまでもないことだとRたちは笑っていた。
自分たちだけ助かっても意味はない。しかし、彼らの思いを無駄にする事も出来ない。
そうして、前を走っていたWたちが選んだ答えは、
「……すまんっ」
「気にすんな。お前らは生き延びろよ」
Jの言葉を背に受けて四人は速度をあげて走り去って行く。
速度をあげる直前、彼らの瞳の端には光る小さな粒が見えた。仲間を犠牲にして自分たちだけが生き残ることにどれだけの葛藤があったのだろう。
足を止め遠くなっていく背中を見送った三人は、後ろから迫ってくる足音を聞きながら彼らには悪い事をしたと心の中で謝った。
そして、追って来た教師がすぐ後ろにやってくると、三人は振り

返ってＪとＴが口を開く。
「すみません、先生！　あいつらに逃げられました！」
「なんか急にバスケ部のやつらが度胸試しだって覗きに行って、オレら止めようとしたんですけど、向こうはジャージに運動靴ってマジ装備で……」
まさに外道。順平と友近は本気で悔しそうに、申し訳なさそうにする演技を見せ、即座に仲間を売った。
あの僅かな時間で自分たちが捕まることははっきりと理解できた。そして、バスケ部たちは逃げ切れる可能性があることも分かっていた。
だからこそ、二人は全部あいつらに罪を被せれば助かる可能性があると判断し、そこに全てを賭けた。
動きづらい格好で走ったことで三人とも肩で息をしている状態。そして、一切誤魔化そうとする気配がないことで教師の青山も二人の言葉を疑いつつも信じてしまう、
「ホントか？　というか、そういう問題が起きた時は先に先生らに連絡しろって言ってただろ」
「すんません！　けど、準備してすぐに出てったから追いかけるしかなかったんス！」
「ったく、旅行だからって浮かれおって。それで、逃げてったのは何人だ？　メンバーは分かるか？」
「二年Ｅ組の忍足と山井と渡邊、それとＦ組の宮本っていうバスケ部四人ッス」
逃げていったのが全員バスケ部二年だったことも、順平たちの言葉に信憑性を持たせることに一役買う。
教師たちも運動部の男子が何人かで覗きをしようとするのではと警戒していたのだ。
順平たちも逃げていった彼らと同じ学年で知り合いでもある。
ただ、学校という環境もあって、二クラスの混合チームであっても、先入観からクラス単位で固まって動くと無意識に考えてしまい易い。
ここで言えば宮本が一緒に残っていれば順平たちも覗き魔の仲間

と見なすことが出来た
けれど、順平たちと同じクラスであるはずの宮本は隣のクラスの者たちと一緒に逃げ、その四人にはバスケ部という共通点があった。
おかげで青山は、順平たちが同じクラスの宮本がバスケ部のやつらと覗きを計画していると知り、それを止めるために追いかけていたのだと信じ切ってしまう。
「まぁ、分かった。どうせ部屋に戻ってるだろうから他の先生と行って捕まえておく。お前らは部屋に戻ってろ」
『はい！』
部屋に戻っていろと言われた三人は良い返事で答え、この場を乗り切ったことを心の中で喜びながら部屋に帰る。
その後、青山の言った通りに男子教師たちは旅館に戻っていた宮本たち四人を捕まえ、反省させるため自分たちの部屋へと連行していった。
どうしてあの暗さで自分たちだとバレたのか。何故、先に捕まったはずの順平たちがいないのか。
連行された四人はその疑問が頭を過ぎった瞬間、すぐに順平たちが裏切って自分たちに全ての罪を擦り付けたのだと悟り。卑怯な裏切り者たちへの怒りに震えた。
＊＊＊
宮本たちが教師に連行されていった後、部屋に戻ってきた順平たちは尊い四人の犠牲に黙祷をささげてすぐに思考を切り替えた。
再びテーブルに集まって緑茶を飲みながら次の作戦について話し合う。
「んで、次はどうする？　宮本らが捕まったせいで露天に近付くのは難しいぞ」
そも捕まったのは順平たちだったのだが、こうやって彼らは無事に部屋に戻り、逆に逃げ延びた宮本たちが連行されていったので、結果だけ見れば宮本たちが捕まったという表現は正しいのかもしれない。
しかし、仲間を売っておきながらシレッと迷惑がるあたり、ここにいる者たちのクズさが窺える。

宮本たちが聞けば殴り合いの喧嘩になるであろう発言を順平がすれば、緑茶を飲んでホッと一息吐いた友近が物は考えようだと口を開く。
「まぁ、今日は諦めて明日にするってのも一つの手だけどな。あいつらの監視に先生が何人かついてるなら、こっちの警戒すべき相手が減ってるとも取れる」
「友近君は何か策があるのかい？」
「あぁ。今だからぶっちゃけるけど、そもそも、近づける可能性の方が低いと思ってたんだ。だって老舗旅館だぜ？　普通に考えて正面突破とかは無理だろ」
最初の作戦は成功するとは思えなかった。実際に失敗して仲間を失っているくせに彼は軽い調子で話す。
捕まって今も男性教師たちの部屋で正座させられているメンバーが聞けば、なら最初から言えよとこれもまた殴り合いの喧嘩に発展しそうな話だ。
だが、その彼らは今ここにいない。教師たちの目も順平たちからは逸れている。
だからこそ、自分の用意していた策の成功率が上がるのだと友近は部屋の奥に行って、何やら大きな荷物を持ってテーブルに戻ってきた。
「じゃーん！　どうよこれ？」
そう言って彼がテーブルに置いたのは、平らな箱の上に四つのプロペラがついたラジコンヘリのような物体だった。
ラジコンヘリにしてはプロペラが多いし、何やら大きな箱っぽい部分も気になる。
友近がラジコンのコントローラーを持っているので、ラジコンなのは間違いないのだろうが、それに加えてノートパソコンまで用意している理由が分からない。
ここで降参だと両手を挙げた順平が素直に尋ねる。
「ともちー、それなんなん？　ラジコンヘリっぽいけどさ」
「カメラ付きのドローンとか言うやつだってさ。有里君に部屋から京

都の町並みを自由に見て回れるラジコンヘリとかないか聞いたら貸してくれた」
どうして彼がそんな物を旅行に持ってきているのかは問わない。
実際はただマフラーに入れてあっただけなのだが、借りにいった友近にすれば何かそういうの持ってそうとダメ元で聞いたら貸して貰えたので、やっぱり持つべき物はハイスペックな同級生だなで話は済んでいる。
湊から簡単な説明書も受け取っており、それによればドローンはラジコンヘリよりも操作が簡単で音も静かだとか。
カメラの映像はノートパソコンにリアルタイムで送られて来るため、全員で思い出を共有できるぞと言った瞬間に順平は友近と握手した。
「流石だぜ参謀。結局、有里の力を借りてるけどオレは評価するぜ！」
「褒めんなって。体力自慢の運動部とは頭の出来が違うだけだ」
「フフッ、なんかスパイミッションみたいでワクワクするね」
ドローンとパソコンの電源を入れ、カメラをオンにしたところでちゃんと同期できているかを確認する。
飛行中はどうしても映像がぶれやすいらしいが、デジカメやハンディビデオカメラのように手ぶれ補正機能である程度は軽減されるという。
試しに手に持った状態でドローンを振ってみると、パソコンの画面にはぶれつつも人の顔などは認識出来るくらいの映像が送られてきていた。
無理矢理に振ってもこれだけ見えるなら、四つのプロペラで安定飛行させれば問題なく見られるに違いない。
部屋の中で簡単に飛ばして操作の練習をすると、順平たちは窓を開けてドローンが飛び立つ準備をする。
操縦士は友近が担当だ。緊張した面持ちでコントローラーを握った彼は、意を決したように声をあげる。
「よし、いくぞ！」
女湯の時間、そしてドローンを飛ばせる時間を考えるとチャンスは

今から数分しかない。
湊から借りた際、暗闇で長時間飛ばしていると安全装置でライトが点滅すると言われたのだ。
もし、露天風呂の傍でそんな事になればすぐに見つかって洗面器で撃墜されるに違いない。
バレて捕まるのは勿論、借りた物を壊すのも避けたい。
集中しながらドローンを外に出した友近は、一度上昇させて旅館とは逆方向から近づける進路を取る。
「ともちー、上空を飛ぶときにカメラ下に向けてくれ！」
「お、おう。てか、あんま注文してくんな。そっちの映像は暗視モードかもしれないけど、こっちは暗い中で見失わないよう目視でやってんだぞ」
最初はカメラの映像だけで飛ばせそうだと思っていたのだが、カメラは向きを動かすにしても一つの方向しか見る事が出来ない。
これでは周囲への警戒が難しいと、友近は旅館の近くでは目視で飛ばすことに決めて今も窓から少し身を乗り出して操縦している。
少し気を抜けばドローンを見失いかねないため、カメラを真下に向けつつ温泉上空を通過させた友近は細かい注文は無理だからなと釘を刺した。
すると、パソコンの画面を見ていた二人が遠目に見た感じで人がいたぞと報告してきた。
「お、温泉に何人か入ってるっぽいのが見えたぞ！」
「流石にこの距離じゃ詳細は分からないけど、人がいたことは確かだね」
「マジか！　よっしゃ。じゃあ、逆サイドに着いたからゆっくり近づけていくぞ！」
人がいると聞いてやる気を出した友近は徐々にドローンを温泉に近づけていく。
入っているのが月光館学園の生徒なのか、それとも無関係な一般客なのかは分からない。ただ、今はまだ女湯の時間なのは確認している。

贅沢を言えば湊の周りにいる学園トップ陣の女子たちがいい。そうでないとしても、教師なら佐久間や鳥海など比較的若めの女性だと嬉しい。
遠目に肌色の点が見えているため、後はそこに近付いていくだけ。
そうして、友近が集中力を上げ、順平と綾時もパソコンの画面に釘付けになっていると、突然外から七色の光と軽快な音楽、さらに聞き覚えのある人の声が届いた。
《友近健二でござーい!!　友近健二でござーい!!》
「は!?　え、え!?」
突然ドローンが派手な七色の光を放ち、吹奏楽部の演奏で聞いたこともあるエレクトリカルパレードを大音量で流し始めたかと思えば、続けて友近の声で音楽以上の音量で名前を連呼し始めた。
あまりに突然の事に友近は状況が理解できず混乱する。
ただ、旅館にいる友近たちにも光と音は届いているのだ。距離の近い露天風呂の人間が気付かない訳がない。
明らかに作戦は失敗だと判断した順平は綾時と視線を交差させると、〝一、二の、散!〟の合図で部屋の押し入れに飛び込んだ。
友近だけはどうやって止めるんだと涙目になって焦っており、二人が押し入れに隠れたことに気付いていない。
そして、音と光のイリュージョンが始まって三十秒ほど経ったとき、鍵が開いていた扉が大きな音を立てて開いた。
「友近っ!!　お前、何やってるんだ!　さっさとあの音楽と明かりを止めろ!!」
「ちょ、ちがっ、俺にも分からないんですって!!」
扉が開いたと思えば、先ほど宮本たちを捕まえに行った青山が顔を真っ赤にして怒りながら現われた。
どうやら旅館中に音が聞こえていたらしく、旅行のしおりを見て友近の部屋を調べ、すぐに止めさせるべくやってきたらしい。
だが、いくらコントローラーを操作しても、音楽も光も止まらず、ドローン自体も一定の範囲を円を描いて飛ぶだけで戻ってこない。
本当にどうすればいいんだと友近が泣きながら操作していれば、い

い加減にしろと青山がコントローラーを奪った。
すると、その瞬間に音楽と光が止まり、操作してもいないのにドローンが部屋まで戻ってくる。
さっきはどれだけやっても何も出来なかったのに、一体何が起きたんだと不思議に思いつつ安堵していれば、友近は後ろから強い力で浴衣の襟を引っ張られ無理矢理に立たされる。
「うえっ!?」
「この馬鹿野郎！　まわりの迷惑になるって分からないのか！　説教してやるから来い！」
来いも何も引っ張られて従うしかないのだが、激怒している青山に連行され、友近も宮本たちと同じ教師らのいる反省部屋送りになってしまった。
周りへの迷惑を思えば、覗き未遂の宮本たちよりも罪は重いかもしれない。
明日までに無事に戻ってこられるかは不明だが、友近と教師が去って部屋に静寂が戻ると、押し入れの戸が開いて順平たちが出てきた。
「ふいー、危なかったぁ」
「多分、湊が仕掛けたトラップだろうね。悪い事は出来ないもんだ」
最初の作戦と違って友近の計画は湊に嘘を吐いて道具を借りていた。
もし、本当に京都の夜景を見ることに使っていれば、旅の思い出作りなら少しくらい協力しても良いだろうと思っていたに違いない。
湊はあれで面倒見が良いので、恐らく既に何人かの生徒に物を貸していると思われる。
だが、友近はその善意を利用して卑劣な行為に走ろうとした。
彼はそういった舐めた真似を嫌うので、徹底的に友近を絶望へ突き落とす策に出たらしい。
早めに逃げたことで命拾いした二人は、随分と寂しくなった部屋を見渡してからテーブルに戻ってお茶を飲む。
「んー、今日はもう無理だな。つか、外から見るのは多分不可能だ」
「だろうね。これだけやってしまうと旅館側も警戒してくるはずさ」

覗き未遂だけならば教師たちだけで何とか処理することも出来たが、友近は旅館全体に音と光が届いていた。
修学旅行生という事である程度は大目に見てもらえるにしても、流石に旅の雰囲気をぶち壊す友近の行動は旅館側も看過できない。
今頃、教師の部屋で友近は説教され、他の教師たちが旅館側に謝罪に行っているに違いない。
こんな状況でこれ以上行動する事はまず無理なので、二人は歯ブラシを持って洗面所に向かいつつ会話を続ける。
「じゃあ、今日は寝て。明日の夜に本命のやり過ごし作戦しかねぇな」
「ま、事故ならしょうがないもんね」
「あぁ。事故ならしょうがない。つーか、ついでに真田さんたちも誘うか」
一日目は失敗に終わったが、旅行の夜はもう一日ある。
犠牲になった仲間たちはもう参加するとは思えないため、なら同じ寮生の先輩を仲間という名の道連れにする事に決める。
巻き込まれた方にすれば堪った物ではないが、本人たちがその事を聞くのは翌日の夜のことだ。
そして、新たな被害者を作ろうとする男二人は、英気を養うために寝るぞとすぐに布団に入ると眠りについたのだった。

第三百七十五話　慰安旅行

――旅館

どこかで莫迦たちが教師に怒られている頃、湊は旅館の最上階にあるスイートルームで露天風呂に入っていた。

他の部屋の倍以上に広いスイートルームは、その半分は露天風呂が併設された屋上庭園となっている。

閂の掛けられた戸を開ければ露天風呂から庭園に出る事も可能になっており、塀の向こう側からは精神年齢の若い自我持ちのペルソナたちの声も聞こえている。

湊の借りた部屋は他の部屋と桁が一つ違っており、その分、料金は人数分ではなく部屋代として独立している。

無論、食事などは別途人数分の料金が必要であるが、そういう仕組みなら自我持ちたちにも休暇を与えてやれるなと湊は全員呼び出して好きに過させていたのだ。

部屋に食事を運びにきた仲居たちは、頼んでいた料理の量で湊が一人で泊っている訳ではないと分かっていたはず。

それでも、湊と変わらぬ美貌を備えた女性や美少女が九人もいるとは思わなかったに違いない。

世話係となった仲居らの年齢はバラバラであったが、その誰もが落ち着かない様子で中々目を合せられずにいたようであった。

（……なるほど、お前はやはり道を違えるのか）

そんな仲居たちにとっては落ち着かない食事の時間も終わり、ならば自分は風呂を満喫させて貰おうと湊は一人で温泉にずっと浸かっていた。

アマテラス、玉藻の前、瀬織津姫、火雷大神ら大人組は旅館から借りた麻雀をしていたり、闇御津羽神、サンタ・クルス、マーリンら子ども組と一緒に庭園をみているアルテミスや、一人でのんびりとテレビを見ながら旅行ガイドを読んでいるツクヨミのような者もいたが、全員が傍から見れば人間と変わらぬ様子で過している。

自分の眷属らのそんな様子を感じつつ、お湯に浸かりながらボンヤ

リと京都の夜景を眺めていた湊は、自分から借りていった物を犯罪に使おうとしている気配を感じ、ある程度泳がしたタイミングで機械の支配能力でコントロールを奪ってやった。
友近の声は玉藻の前の変化で用意した物だが、彼が道具の使い方を誤らなければ使うつもりなどなかった。
しかし、借りた物を覗きに使うとなれば話は別だ。これで道具を貸した自分まで責められれば堪った物じゃない。
（まったく、なんで旅行に来てまで仕事をしなくちゃいけないんだ）
作業自体は温泉に入ったままでも可能な大した事ではない。
ただ、馬鹿が余計な事をしなければ余分に力を使う必要もなかった事は確かだ。
これで今日の残りと明日の夜は静かにしているだろうかと考えつつ、湊は自分の中にいるもう一人の事を思い出した。
現世に戻ってくるときには彼女にも随分助けられてしまった。
あのままではニュクスの拘束を解くために最終手段の直死の魔眼を使う必要があったかもしれない。
相手は死を司る神だがこの世に存在する以上は殺せないという事はない。
ただ、地球の生命の死を司っている神を、一部分であろうと殺した場合に何か不都合が起きないかが心配だった。
それをせずに無事に戻ってこられたのは、世界の壁を越えて助けに来てくれた彼女のおかげである。
温泉から出て身体を拭いてから浴衣を身に着けた湊は、部屋の方に戻ると旅行ガイドから顔をあげたツクヨミに声を掛けた。
「ツクヨミ、ベアトリーチェにも温泉を楽しむように言っておいてくれ」
《それは構いませんが、八雲はどうするのですか？》
「俺は十分に入ったから、明日の朝風呂までに身体を返して貰えれば問題ない」
《そうですか。ならば、その様に伝えましょう》
湊とベアトリーチェは入れ替わらなくとも情報をやり取りできる。

しかし、ベアトリーチェは人間としての生活に馴染んでいる訳ではないので、その手伝いを他の者に頼んでおく必要があった。
テレビ前のソファーに座っていた彼女ならば手伝いも安心して任せられる。
庭園に繋がる出入り口の前で、どこかピリピリとした様子で雀卓を囲んでいる者たちだけなら不安もあっただろうが、後はツクヨミがどうにかしてくれる事を期待して湊の身体が光に包まれた。
光に包まれた湊の身体は徐々に輪郭が縮んでいき、七歌たちとそれほど変わらぬ背丈で変化が止まる。
そうして、変化が止まって光が弾けるように消えれば、そこにはブカブカなサイズの浴衣を身に着けた少女とそれに抱かれる赤ん坊がいた。
《まぁ、八雲も出てきたのですね。ふふっ、ならば貴方も着替えましょう》
「私は〝私〟の着替えが分からない。全て貴様に任せよう。〝私〟もそれでよいか？」
「あい！」
出てきた赤ん坊は湊の黒いマフラーを首から垂らしただけで、衣服を一切身に纏っていなかった。
これまではオムツやパジャマを着ていたはずだったが、どうやら今回はベアトリーチェが八雲も自由にさせようと分離したらしい。
人間の文化に対する知識は湊から得ているものの、経験不足で八雲の服装を準備出来なかったようなので、立ち上がったツクヨミはベアトリーチェに新しい浴衣を渡してから八雲を受け取り、彼女に温泉の楽しみ方を説明してゆく。
《手桶で湯をすくい。身体を洗ってから湯に浸かればよいだけです。ここは我らだけの部屋。故に、好きな時間に好きなだけ楽しむとよいでしょう。あがった後は身体を拭いてから呼びなさい。浴衣の着方や髪の乾かし方を伝えます》
「ふむ。〝私〟は共に来ないのか？」
《八雲は先ほどまで入っていましたからね。この小さな身では長く入

ることも出来ないでしょう》
説明を聞きながらブカブカな浴衣を脱いでカゴに入れていたベアトリーチェは、そういう物なのかと少し残念そうにしながらも八雲の頭を撫でると露天風呂の方へと出て行った。
彼女を見送ったツクヨミは露天風呂と脱衣所を仕切る扉を閉め、脱衣所からも出てくれれば、部屋の方で湊のマフラーから八雲の服を出してゆく。
以前、桜や英恵が大量に買っていた事もあって、旅館でも過しやすそうな物がたくさん入っていた。
髪の毛も床に届くほど長いので、どんな風に結ってやろうか考えて髪に触れる。
すると、湊の髪の状態はベアトリーチェではなく八雲に引き継がれていたようで、未だに湿っていることに気付いた。
《八雲、おしめを穿いたら先に髪を乾かしましょう》
「みー?」
首から垂らしていたマフラーを外せば、八雲は生まれたままの姿だ。
赤ん坊なので恥ずかしさなどないのだろうが、いくら暖房を入れていようと十一月に全裸の赤ん坊を彷徨かせる事は出来ない。
そうして、オムツを穿かせてから脱衣所に戻ってドライヤーで髪を乾かせば、八雲は風で暴れる髪が面白いのかとても楽しそうな声をあげる。
「うきゃー!」
《ふふっ、八雲は本当によい子ですね。さぁ、どのように結いましょうか。わたしのように纏めるだけでもよいですよ?》
「むー……あい!」
どんな髪型が良いだろうか。本人に希望を聞けば、八雲は黒いマフラーから玩具の刀と背中に〝誠〟の文字が書かれた浅葱色の羽織を出した。
何故、赤ん坊の八雲がそれを知っているのかは分からないが、京都という事で新撰組の服にする事に決めたらしい。

本人がそれを着たいのであれば、髪型もそれに合わせて髷のように結ってやらねばなるまい。
《ならば、先に着付けをしましょう。その方が綺麗に結えますから》
羽織はしっかりと赤ん坊用のサイズなので、それに合わせた着物と袴があるに違いない。
そう思ってツクヨミがマフラーの中を探せば、思った通りの物が出てきたので八雲に着せてゆく。
身体が小さく、手足も短いので、何ともちんまりとした見栄えだが、本人はキリッとした表情を作っているので美少女剣士風にはなっている。
ただ、あまりにも女の子にしか見えない事もあって、ツクヨミはちょっとした悪戯心から赤い飾り紐を使って総髪を結い上げた。
鏡でチェックした八雲もご満悦の出来。服を着替えて髪を結い終われば、後は刀を装備するだけ。
しかし、今の八雲の背丈では腰に差せば地面についてしまう。
どうしたものかとツクヨミが悩めば、八雲は分かったとばかりに斜めがけに刀を背負った。
《まぁ。とても立派な姿ですね》
「むふー！」
刀を背負った八雲は最後に短く子どもサイズにした黒いマフラーを巻いて背中側に垂らす。
彼が走れば黒いマフラーがはためき、侍というよりも正体を隠そうとする人斬りっぽくなってしまっているのだが、本人は素早く刀を抜いて振ってみたりと気に入っている様子。
そうして、刀を振り終わった八雲は背中の鞘に刀を戻すが、実は今の八雲が背負っている刀はＥＰ社の食堂で貰った玩具とは別の刀だ。
それはそれで玩具にしてはクオリティが高かったものの、妙なところで凝り性な湊が赤ん坊状態だろうと下手な武器は持ちたくないと言い始めた。
けれど、いくら湊だろうと赤ん坊の状態では危険な刃物を持たせる訳にはいかない。

そこで考えられたのがカーボン製の模造刀だった。
軽くて丈夫。刃を研ぎ出したりはしないものの、見た目も本物ソックリに仕上げれば玩具であっても合格点を付けることが出来る。
造形はフィギュアの自作もしている武多が手伝って湊と一緒に造り、赤ん坊サイズに変化した玉藻に実際に振って貰って長さも整えた。
仮に本物の刀で斬りつけられようと、刀身でも鞘でも何度か受け止められる丈夫さがあれば、子どもが遊んで壊れることもないだろう。
そんなハイスペックな赤ん坊用〝和泉守兼定〟を背負った八雲は腕を組んで最高のドヤ顔で笑う。
何よりも大切な愛子のそんな姿をツクヨミも拍手で讃え、着替え終わった事で一緒に部屋に戻ると、庭園から戻ってきていた闇御津羽神たちにも披露して賞賛の声を受けたのだった。
――旅館・ロビー
友近が青山に連行されていってからしばらく時間が経った頃、旅館のロビーにコンビニの袋を持った佐久間と櫛名田の姿があった。
どうやら地域限定のビールを求めにコンビニに行っていたようで、旅館に戻ってきた二人は部屋で酒盛りでもするかと階段の方へ歩いて行く。
外に出ていた彼女たちにも風呂を覗こうとした男子たちの情報は伝わっていたが、全て男子だったので対応するのは同性の教師になる。
無論、朝一の打ち合わせで経過と処分については聞くことになるが、それまでは最終点呼を終えた彼女たちも自由の身だ。
馬鹿なやつらがいたものだと話しつつ、売店で生八つ橋を買って今度こそ部屋へ行こうとしたとき、自分たちの向かう階段の方から何かが飛び出してきた。
「きゃっふー！」
上機嫌な声をあげて飛び出してきたのは一人の赤ん坊だった。
見た目からすると少女のようだが、彼女の足下には玩具の刀があり、どうやらその鞘に乗ってスノボーよろしく階段を下りてきたらし

い。
　大したバランス感覚だと思うと同時に、そんな危険な事をさせて親は何をしているんだという怒りが湧き上がってくる。
　一階に到着した事で赤ん坊は刀を背負い直しているが、その親は待っていても下りてこない。
　それどころか赤ん坊本人がどこへ行こうかと考える素振りを見せ、今にも走りだそうとしていた事で佐久間たちが声を掛けた。
「わぁ、小さいお侍さんだ！　ねぇねぇ、何してるの？　迷子かな？」
「武士の魂を移動手段に使う侍などいるか。それより、親はどうした？　まぁ、祖父母や親戚でもいいが知り合いは来ていないのか？」
「う？」
　知らない者に話しかけられても赤ん坊は不思議そうな顔をするだけで逃げる様子はない。
　階段の方を見ていても追ってくる者はいないので、どうやら勝手に脱走してきた迷子のようだと櫛名田たちも当たりを付ける。
「ねぇ、その服可愛いね。お母さんが着せてくれたの？」
「いー。ばーば！」
「ばーばね。おばあちゃん良いセンスしてるね！」
　京都で孫に新撰組の服を着せるというシャレの分かる御仁ならば、本人もそれなりに若いのだろうと予想する。
　近年では十代で作った子が、同じく十代で子を産むことも珍しくなくなっている。
　赤ん坊は見た目からすると一歳程度だと思われるので、祖母が三十代というのも十分にあり得るのだ。
　自分たちもアラサーなので、それでこんな赤ん坊の孫が出来るのかと想像できない世界の事に佐久間たちも小さくカルチャーショックを受ける。
　ただ、大人としてこんな小さな赤ん坊を放置して去ることは出来ないので、泣き出さないよう注意しながら情報を集める。
「で、お前はどこから下りてきたんだ？　上がれないなら連れて行くぞ」

「やーの！」
「んー、ならどこか行きたいとこでもあるの？」
「あい！　うーな、うにゅー！」
　櫛名田が上に連れて行こうかと言えば、赤ん坊は首を振って嫌がった。
　対して、佐久間が何か用事があるのかと聞けば、八雲は手で何かを持っている風に見せて口元で伸ばすようなジェスチャーをした。
　雰囲気からするとお餅や大福のようだが、赤ん坊がそんな物を求めて一階に来るのだろうかと首を傾げずにはいられない。
　とりあえず、一階の売店にそれらは売っているので、逃げないよう佐久間が抱き上げて商品を見せてみることにする。
「うんしょ。わー、軽いね。でも、あったかい！」
「みー？」
「えへへ、お名前何て言うのかな？　ていうか、珍しいね。有里君と同じ色の瞳してるんだ」
　急に抱き上げられても嫌そうな顔もせず、赤ん坊はじっと佐久間を見返している。
　いくら人間的に欠陥のある佐久間でも赤ん坊は可愛いと思うようで、小さく頭を撫でながら自分の想い人である青年と同じ色の瞳を眺めた。
　黄土色や明るい茶色というのはいるが、輝くような黄金色の瞳というのは海外でも珍しい瞳の色である。
　髪色や常人離れした顔立ちの良さを含め、随分と湊に似ているなと言う感想を二人は抱く。
「ふむ、有里の親戚か何かか？」
「一人っ子って言ってたから、考えられるとすればそうですね。まぁ、そもそも無関係かもしれませんけど」
　青年にも最低限の常識はあるので、その信頼から湊の子どもという可能性は除外できる。
　となると、個人で部屋を借りていることで、彼の親族なども一緒に来ているのかもしれない。

赤ん坊の用事が済めば、旅館の人間に湊の部屋に他に人がいるかを聞いて、人がいるなら湊に赤ん坊の親戚がいるか尋ねれば良い。
無論、それまでに保護者が気付いて探しに来てくれるのがベストなのだが、とりあえず佐久間は赤ん坊にお土産コーナーの大福を見せてみる。
「ねー、これかな？　大福が欲しいの？」
「いー。うにゅー！」
「どうやら別物らしいな」
赤ん坊なので何を言っているのかは分からない。
ただ、相手は佐久間たちの言葉をある程度分かっているようで、これじゃないよと首を振って見せた。
大福じゃないなら次はお餅だ。ただ、売店で伸びるようなお餅など売っているのだろうかと佐久間たちが探していれば、赤ん坊が急に激しく動いて何かに手を伸ばそうとする。
「うにゅー！　うにゅー！」
「ちょちょっ、え、どれ？」
「……生八つ橋か」
赤ん坊が反応しているのは、試食で置かれている生八つ橋に対してであった。
相手の年齢が分からないので、食べて大丈夫なのだろうかという不安がある。
一応、口を開けて櫛名田に確認して貰えば歯は生え揃っているらしい。
「歯の様子から計算した目安だが、年齢的には固形物も食べられるんだろう。ただ、赤ん坊だからな。アレルギーが分からないと食べさせることはできない」
「んー、ならやっぱり保護者に確認とらないとですね」
「やーの！　うにゅー！　うにゅー！」
目的の生八つ橋が手に入らないと分かったのか、赤ん坊は佐久間の腕の中で暴れて駄々を捏ねる。
いくら暴れようとも佐久間たちにはどうしようもないのだが、保護

者が来ないとどうにもならないと売店から出たところで、少し離れたところから声がした。
「……え？　なんでクマモンが八雲といるの？」
声のした方をみれば、チドリたち二年女子の一団がそこにいた。
どうやら温泉の帰りらしく、全員が浴衣姿で巾着とタオルを持っている。
彼女たちの視線は赤ん坊と佐久間たちの間を行き来しており、近付いてくると暴れている赤ん坊を佐久間から受け取った。
「八雲、どうしたの？　クマモンに何かされた？」
「みー。うにゅー」
「あ、その赤ちゃん生八つ橋が欲しいんだって」
そういう事かとチドリは八雲と一緒に売店に入っていくと、そのままお土産の箱を持ってレジに向かった。
チドリと八雲が生八つ橋を買っている間、佐久間は残っていたラビリスたちに質問した。
「あの子知り合い？　有里君の親戚かな？」
「そんな感じです。湊君から何も聞いてへんかったからビックリしたけど」
「そうなのか。あの赤ん坊は背中の刀の鞘を使って一人で階段を滑り下りてきたんだ」
「あー、八雲君やったら出来そうですね」
彼は小さくなってもシャドウを殺せるほどの身体能力を持っている。
ならば、それくらいは出来てもおかしくないだろうとラビリスは苦笑した。
ただ、話を聞いていた佐久間は、そこに聞き逃せないフレーズがあった事で再びラビリスらに尋ねた。
「え、八雲君って、あの子女の子じゃないの？」
「八雲さんは立派な日本男児であります」
「でも、飾り紐で髪の毛結ってあるけど？」
「多分、お婆様の誰かが似合うからと使用したのかと」

ラビリスの代わりにアイギスが質問に答えたが、彼女の予想はまさに当たっていた。
周囲からすれば可愛い赤ん坊の性別などあってないようなもので、極端にどちらかの格好をさせる意味もない。
そんな事を気にするくらいならば、最も似合う物で着飾らせた方が良いに決まっている。
桜と英恵がそうだったので、自我持ちたちも同じようにしたのだろうと考えていれば、買ったばかりのお土産の箱から生八つ橋を取りだし、それを美味しそうに食べている八雲がチドリと共に戻ってきた。
一応、医者の資格も持っている櫛名田は、チドリが勝手に与えた訳ではないだろうなと心配して声を掛ける。
「食べさせて大丈夫なのか？」
「大丈夫よ。タコ焼きでも何でも好きに食べてたから」
チドリたちはヤソガミコウコウの中で起こった事件について忘れている。
それでも、数日間だけ一緒に過した時の事は覚えているので、彼に好き嫌いやアレルギーがないことは分かっていた。
モチモチとした生八つ橋を食べている姿は実に満足そうで、見ている方も思わずほっこりした気分になってくる。
ただ、このまま赤ん坊を放置しておくことは出来ないので、湊の部屋へ連れて行こうかと思えば、旅館の浴衣を着た綺麗な白髪の女性が階段を下りてやってきた。
《ああ、チドリたちが八雲を見つけてくれたのですね。感謝します。八雲、勝手に部屋を出てはいけないと言ったでしょう？》
「うー、めんめ。うにゅー！」
やってきた女性はチドリから八雲を受け取るとやんわりと叱った。
けれど、謝ってすぐに八雲が嬉しそうに生八つ橋を見せてきたことで、そんなに部屋に置いてあった生八つ橋が気に入ったのかと苦笑する。
《気に入ったのならいくつか買っていきましょう。あぁ、チドリ。後で御代は返します》

「……別にいいわよ。それより、どうして八雲がいるの？」
《本人の意志でベアトリーチェと別行動しているだけです。問題は起きていないので大丈夫です》
ヤソガミコウコウでの記憶がないと言うことは、彼女たちは湊がベアトリーチェと赤ん坊の八雲に分裂出来ることを知らないという事だ。
無関係な人間がいる場で話せる事ではないので、問題が起きている訳ではないことだけ伝えて安心させれば、突然綺麗な女性が現われた事で驚いていた佐久間が再起動を果たしてツクヨミに話しかけた。
「あー、えっと、八雲ちゃんのお母さんですか？」
《いえ、祖母です。あなたは湊の担任でしたね。いつも湊がお世話になっております》
「い、いえいえ、こちらこそ。あれ？　えっと、有里君とのご関係は？」
《ふふっ、そちらも祖母ですよ。年齢で言えばあなたと倍は違いましょう》
その言葉に今度は櫛名田も一緒になって驚く。
どこをどう見ても自分たちと同年代かむしろ若く見えるのだ。
これで親世代以上に年が離れていると言われて信じられる訳がない。
誰か本当のことを言ってとばかりに佐久間が女子たちを見れば、視線があったアイギスが口を開いた。
「その方は七歌さんのお婆様でもありますが、八雲さんの血筋の皆さんも相当にお若く見えるので、元からそういった一族なのだと思われます」
「えー……ていうか、九頭龍さんだっけ？　九頭龍さんって本当に有里君の親戚だったの？」
「まぁ、うちの父親の弟が八雲君のお父さんですね。あ、でも、ユーリお婆様は祖母っていっても両親の親じゃなくてもう何世代か離れてますよ」
「んん？　曾おばあちゃんとかそんな感じってこと？」
説明されればされるほど訳が分からなくなってくる。

とりあえず、女性が見た目通りの年齢でないことは分かったが、訳ありな湊の情報を漁ると何が飛び出してくるか分からないので佐久間もそこで詮索を打ち切った。
「ま、いっか。とりあえず、八雲ちゃんの保護者の人が来たなら良かったよ。じゃあ、先生たちは部屋に戻るから皆も早く寝なよ」
《八雲がお世話を掛けました》
「いえ、全然。では、失礼します」
生徒しかいない場ではふざけた態度が多いが、ＴＰＯを弁えた行動をしっかりと取れるのは佐久間たちの数少ない美点だ。
そうして、彼女たちが会談を上って部屋へ戻っていくと、追加で買った生八つ橋を持ってツクヨミも八雲と一緒に部屋に戻ろうとする。
チドリたちはその後を追って湊の部屋を訪れるが、そこで八雲と別行動するベアトリーチェを見て当然のように驚くのだった。

第三百七十六話　忘れた記憶

夜――旅館

部屋に置かれていた生八つ橋を気に入り、それを求めて外に出て行った八雲はツクヨミに抱かれて戻ってきた。

その後ろには七歌たち二年生女子が何人もついてきていたが、部屋とバルコニーを合わせれば五部屋分以上の広さがあるスイートルームは、彼女たちのことも問題なく受け入れる事が出来た。

もっとも、部屋に来た七歌たちは部屋の広さよりも、ただの旅行客だとばかりに自由に振る舞っている自我持ちのペルソナたちに驚いている。

部屋に入って右手側、テレビの傍では七歌たちにとって馴染み深い座敷童子が進化した闇御津羽神がサンタ・クルスと共にお茶を飲んでいる。

そのすぐ傍に置かれたソファーでは、マーリンとアルテミスがツクヨミの置いて行った旅行ガイドを眺めている。

そして、部屋に入って左側の庭園と部屋を仕切る窓の近くでは、アマテラスや玉藻の前ら気の強いメンバーが真剣な顔で麻雀していて、湊の女性体であるはずのベアトリーチェが近くに椅子を持っていって座りながら眺めていた。

「な、なんでベアトリーチェがいるの？」

部屋の入口に立った七歌は驚いた様子で目を見開き、知っているなら教えて欲しいとツクヨミに視線を向ける。

湊とベアトリーチェは魂が融合した事で、一つの身体を二つの人格で共有している。

その主人格たる八雲はツクヨミと共に部屋に帰還したことで、手に持った生八つ橋を嬉しそうに闇御津羽神たちに見せるためトテトテと走っていった。

八雲たちが帰ってきた時にはベアトリーチェも視線を上げていたため、そちらが肉体だけのハリボテ状態でない事は確実だ。

ならば、八雲とベアトリーチェは各々の人格を持ったまま別の肉体

として活動している事になる。
一つになったはずの魂を分離するだけでなく、肉体までも分離することがだったのかと七歌たちが疑問をぶつければ、ツクヨミは八雲の後を追って移動しながら答えた。
《八雲が幼い姿になるとき、本来の肉体はエネルギーとして保持されます。それはベアトリーチェに肉体を与えた時も同じ事。故に、二人の肉体の差分で幼き八雲の身体を作る程度の量は十分に賄えるのです》
現世と常世の狭間にあったヤソガミコウコウで一度は説明された事だが、あちら側での記憶はベルベットルームの住人ですら忘れてしまっている。
湊の中にいた綾時でも覚えていないのだから、七歌たちに覚えておけというのも酷な話だろう。
本来、元の世界と異なる理の世界へ行けば、そこに存在するために人も性質を変質させなければならない。
その変化は本人が意識して行なうものではなく、世界に敷かれたルールに人間が縛られるだけの話だ。
ヤソガミコウコウは現世と常世の狭間にあり、さらに二つの世界、または二つの時間軸と結び付いて出来ていた。
生きた人間があの世の情報を持ち帰る事は出来ないし、世界が繋がっていたことで、七歌たちからすれば現代と未来、鳴上たちからすれば現代と過去に完全同一個体が同時に存在することになる。
その矛盾を解決するため世界が取った方法が、ヤソガミコウコウでの出来事を〝なかった事〟にするという力業だったのだ。
やはり七歌たちは誰もあの世界のことを覚えていないようで、説明を聞けばなるほどと納得した表情で部屋の中へ進んだ。
《……おかえり、八雲……気に入ったの、あった……？》
「あい！　うにゅー！」
《それを探しに出掛けていたのですね。命じてくだされば買いに出ましたのに》
闇御津羽神もサンタ・クルスも八雲が楽しそうに生八つ橋を食べて

いる姿は見ていた。
そのもっちりとした食感が気に入ったのか。部屋に置かれていた生八つ橋は全て一人で食べていたようだが、食べ足りないと思って探しに出て行ったという。
小さな赤ん坊がそこまで行動力を発揮する味なのかと興味を持ったサンタ・クルスが見ていれば、八雲は箱から生八つ橋を取りだして二人に手渡す。
「まーも！」
《……そう、ありがとう……》
《ありがとうございます》
赤ん坊なら自分の好きな食べ物を独占しそうなものだが、八雲は自我持ちたちを大切な家族のように認識しているらしく、美味しいよと言ってお裾分けしている。
続けて他の者たちの許を回っていけば、真剣に麻雀をしていた者たちも、感謝の言葉を告げて八雲の頭を撫でている。
今にも殴り合いの喧嘩が始まるのではないかと思えるほどピリピリとした空気の中、気にせずにお菓子を渡しに行ける八雲の胆力には恐れ入る。
八雲が差し入れを渡した事で麻雀に興じていた者らも休憩する事にしたようで、雀卓はそのままにテレビの前に置かれたテーブルまでやってきた。
そして、皆に差し入れして回っていた本人はというと、手に生八つ橋の箱を持ったままベアトリーチェに後ろから抱き上げられていた。
「〝私〟と食事を共にするのは久方ぶりだな」
「あいあい！」
活発な性格だが別に自分で歩かないと気が済まないという訳ではないのだろう。
運ばれるままに移動し、ソファーに腰掛けたベアトリーチェの膝の上に座らされても本人は楽しそうにしている。
他の者たちはお茶の準備をしているので、部屋に入ってきた七歌たちも自由に座っていけば、これまで黙っていた美紀が口を開いた。

「あの……有里君はどちらに？」
『え？』
湊なら縮んだ状態ではあるが目の前にいる。
まぁ、本人の人格が残っている訳ではないので、正確に言えば八雲とベアトリーチェに分裂しているのだが、他の者たちが振り返れば美紀はキョロキョロと湊の姿を本当に探している様子だ。
そこで全員が彼女に湊と過した記憶がないことを思い出す。
チドリやアイギスは湊が死んでからしばらく学校にも行っておらず、他人の事を気にしていられる余裕もなかったので無理もないだろう。
ただ、修学旅行中は一緒に行動して流れでついてきた美紀にすれば、この場にいる自我持ちたちは湊の親戚なのかというぐらいに知識もない状態だ。
先ほどは知っている前提で話をしていたので、ここからどうやって説明や誤魔化していくべきか考える。
自我持ちらは気にせずお茶の準備をしており、七歌やゆかりはお前らも手伝えと言いたいがそんな事をしている余裕はない。
記憶を失った彼女に影時間のことを話したところで信じて貰える訳がない。
ならば、ここは適当に誤魔化そうと七歌たちがアイコンタクトで意思疎通を図ったとき、ベアトリーチェの膝から下りた八雲がトテトテと美紀の許まで進んで彼女を見上げた。
「みー？」
「あ、えっと、はじめまして。八雲君ですよね。湊お兄ちゃんはどこに行ったか分かりますか？」
「うーな」
小さな赤ん坊が寄ってきたことで、美紀は相手の手を握って倒れないように気を遣う。
今更バランスを崩して転倒する事などないが、美紀にすれば相手は初対面の活発な赤ん坊だ。
畳の上で転けて擦り傷が出来たら一大事だろうと考え、安全面を配

慮しつつ優しいお姉さんとして交流を持つのは流石と言える。
ただ、湊が退行した八雲は初めて退行してから今日まで出てきた際の記憶が連続していた。
つまり、彼にしてみれば美紀は初めて会った訳ではないのだ。
前にも会ってしっかり挨拶したというのに、はじめましてと挨拶されて八雲は少しだけ不満気に頬を膨らます。
「ねーね、あーう!」
「えっとぉ、すみません。何と言ってるのでしょう?」
「八雲さんははじめましてじゃないと仰っています。お姉ちゃん忘れちゃったのとも」
記憶を失ったことで八雲を覚えていない美紀と、美紀が記憶を失っていることを知らない八雲。
アイギスが通訳してくれた事で八雲が不満そうな顔をしている理由は分かったが、美紀は本当に覚えがないので申し訳なさそうにしつつも対応に困っている。
一方、八雲は正座で座っている相手の膝の上によじ登り、本当に覚えていないのかとジッと見つめていた。
影時間の記憶補整は強制催眠と呼べるほどの強さだ。適性を失うと同時に記憶補整で強制的に湊との思い出を忘れた美紀では対応出来ず、このままでは自分が忘れられていることを知った八雲が泣き出しかねない。
見かねたアイギスが八雲を引き取ろうとしたとき、八雲が怒ったように美紀の瞳を見た。
「むきゃーー!」
瞬間、八雲の両眼が紫水晶色に変化する。
傍で様子を窺っていた者たちは、それが湊の持つ暗示の魔眼だと理解してすぐに八雲を止めようとした。
そもそも、七歌やアイギスたちは八雲の状態でどれだけの異能が引き継がれているか知らない。
身体の大きさからすればベアトリーチェが本体で、八雲は湊の意識を表出させるためのユニットという認識であるため、ほとんどの力は

使えないだろうと考えていた。
だからこそ、八雲が魔眼を使おうとした時に対処が遅れてしまった訳だが、八雲の紫水晶色の瞳を見た美紀は身体をビクンと震わせると、そのまま身体の力が抜けたように八雲を巻き込んだまま前方に倒れてゆく。
「美紀!?」
「八雲さんっ」
正座している状態から前のめりに倒れていく美紀をゆかりが支え、巻き込まれるように倒れそうになる八雲をアイギスが片手で抱き寄せる。
どちらも倒れきる前に受け止めた事で怪我もなかったが、美紀は未だに目の焦点が合わなくなって身体の力も抜けている。
先ほど八雲は怒りながら暗示の魔眼を出していたため、一体何をしたのかとチドリたちが八雲を問い質した。
「八雲、さっき何したの？　答えて？」
「お願いします。八雲さん。美紀さんに何かあっては遅いんです。正直に話してください」
もしもの時はベアトリーチェと八雲を再び一つにして湊に戻って貰い。そのまま彼の力で八雲が掛けた暗示を解いて貰うしかない。
それも時間経過で状況が悪化するなら急ぐ必要があるので、急にアイギスたちに強く訊かれて怖がっている八雲を気遣っていられる余裕はない。
ゆかりに支えられていた美紀は畳の上に寝かせられると、徐々に顔色が悪くなって脂汗を掻いている。
もしや、幼いが故に自分の能力の強さを把握しないまま、直情的に死に至る精神攻撃をしてしまったのではないか。
「アカンっ！　ベアトリーチェ、すぐに湊君にっ」
ゆかり同様美紀の傍についていたラビリスは、このままでは美紀が保たないと考え、ベアトリーチェに湊に戻れと言おうとした。
しかし、言い切る前に腕を掴まれ、誰だと思って振り返れば、それは目の焦点が戻り始めていた美紀本人だった。

「だ、大丈夫です。少し、ショックを受けただけですから……」
「ホンマに大丈夫なん？　顔色メッチャ悪いし布団借りよか？」
ラビリスたちがいるのは玄関を抜けてすぐのリビングに相当する場所だ。
ここだけでも十分に広いが、さらに襖を開ければ奥の部屋に既に布団が並んだ畳のスペースと、二つのベッドが置かれた洋室風のスペースがある。
アマテラスたちはお茶を飲み終えたらしばらく麻雀を続けるようなので、体調が戻るまで美紀を寝かせて休ませておくことは出来る。
麻雀に参加していない者の中には、比較的話の分かるツクヨミもいるため、彼女に頼めばすぐにでも案内してくれるだろう。
そう思ってラビリスが休むことを提案すれば、ゆかりに支えられながら身体を起こした美紀は疲れて弱々しくなりながらも微笑を浮かべた。
「……本当に、大丈夫です。八雲君は、私に影時間の記憶を返してくれただけなんです」
美紀の口から影時間という単語が出た事に全員が息をのむ。
何せ彼女はストレガのカズキによって殺され掛けた際、高度な治療を施す準備を整える時間を稼ぐため、延命目的のためにアベルの楔の剣で適性を奪われたのだ。
適性を失えば影時間に関わる記憶も失う。誰よりも影時間について知っていた湊がそう告げた以上、その点はどうやっても覆しようがない事実のはず。
もしや蘇った事で湊の力も変化したのかと思いつつ、一番状況が分かっているであろう美紀にゆかりが尋ねた。
「そんな、どうやって？　だって、有里君は奪った適性は返せないって……」
「……はい。恐らく、適性は戻っていないでしょう。でも、影時間に関わる記憶は、記憶の補整によって忘れるだけです。八雲君はそこを突いて強制的に思い出させてくれたんだと思います」
言いながら美紀は先ほど強く問い詰められて怯えている八雲を呼

んで、安心して良いよと頭を撫でて落ち着かせる。
顔色はまだ戻っていないが、その優しい眼差しはかつて自分に向けられていたものと同じだと分かったのか、八雲は喜んだ様子で美紀に抱きついた。
「まいま！」
「はい。思い出すのが遅れてゴメンなさい。そして、大切な思い出を取り戻させてくれてありがとうございます」
影時間の記憶を取り戻した美紀は、八雲が退行した湊である事も思い出せている。
以前と違って話せる言葉が増えているようだが、それは単なる成長だろうと気にせず、美紀は記憶を取り戻してくれた小さな赤ん坊を強く抱きしめた。
どうやら体調も戻りつつあるようで、その様子に安心した七歌は、八雲が起こした奇跡のような事柄について他の者らと話し合う。
「でも、小さな八雲君に出来るなら成長した八雲君にも可能なはずだよね？　どうして美紀の記憶を戻さなかったのかな？」
「……多分、危険から遠ざけたかったんでしょ。適性も、記憶も、どっちも失ったままなら、二度と影時間に関わらなくて良いんですもの」
「なら、八雲君は有里君の考えを無視してしまった形になるんじゃ？」
チドリの言葉に風花は眉尻を下げながら八雲に視線を向ける。
湊は元々自分の傍にいる人間の適性が強まり易い事を知っていた。
黄昏の羽根に増幅器としての機能があるように、強い適性を持つ者は他者の適性に影響を及ぼしやすいのだ。
中等部で湊と付き合いがあった人間を見れば分かるように、少しでも適性があればペルソナや影時間に象徴化を免れるレベルの適性まで成長する。
ペルソナに目覚めた者らは全員が桐条グループの組織に所属し、自分で戦う事を選んだようだが、兄と違ってペルソナを得るほどの適性を持っていなかった美紀は、ただ影時間に象徴化しないだけの中途半端な力を持ってしまった。
そのせいで影時間に混乱して外に出てしまい。シャドウに殺され

かけた事もあったが、最後にはストレガに狙われて危うく命を落としかける事態にもなった。
自分の持つ力が影響して美紀がそんな目に遭ったとなれば、湊は責任を感じて二度と彼女が巻き込まれないようにと考える。
つまり、チドリの予想は正にその通りに違いないのだが、いくら湊であっても退行した自分によって計画を潰されるとは思わなかったに違いない。
美紀にあやされて上機嫌になっている赤ん坊を見ていると女性陣は和んでしまうも、元の姿に戻ったときの湊の心情を考えると同情してしまう。
「ま、まぁ、美紀が有里君の事を思い出せたのは良かったと思おうよ。やっぱり、傍から見てると遠慮というか壁があるみたいで複雑だったし」
「そうだね。折角美紀ちゃんが助かったのに、その思い出から有里君だけが消えてしまったのは悲しかったから、私もこの方が嬉しいな」
ゆかりと風花だけでなく、他の者たちも美紀の記憶が戻った事は喜ぶべき事だという認識らしい。
記憶が戻った本人も喜んでいるので、元の姿に戻った湊が少し複雑な気分になることを除けば丸く収まったと考えて良いだろう。
そうして、美紀の顔色も戻ってきて、お茶を楽しむだけの余裕が出てくれば、七歌たちも八雲から生八つ橋を貰ってからツクヨミらが淹れてくれたお茶を飲む。
彼女たちも自分たちの部屋で一息吐いた際にお茶を飲んでいたのだが、部屋のグレードの違いかスイートルームに置かれていたのは小さな容器に入って一万以上する高級茶葉だった。
八雲は冷まして貰ったそのお茶を美味しそうに飲んでおり、赤ん坊のくせに舌が肥えているのだなと全員が思わず感心する。
食べているのが旅館の売店で売っているお土産物の生八つ橋なので、お茶に比べると数段劣ってしまうが、八雲はもちっとした食感を気に入って食べているため気にならないのだろう。
その後、お茶を飲み終えれば八雲にとっては遊ぶ時間だとばかりに

美紀たちの手を引っ張り、彼女たちをバルコニーに作られた屋上庭園や露天風呂に案内した。

有名な神社仏閣にあるような日本庭園とは比べることは出来ないが、旅館の屋上に作られたとは思えない見事な庭園には女子たちも感嘆の声をあげる。

京都の夜景と相まって中々の風情を感じさせる屋上庭園に女子たちが満足すれば、記憶を取り戻した時に汗を掻いただろうとツクヨミの勧めで美紀が露天風呂に入ることになり、他の者たちも折角だからと一緒に露天風呂を堪能してから部屋に戻った。

教師らの部屋で悲しい一夜を過す者、仲間を裏切りながら暢気に明日の計画を語り合う者、再び縁を紡ぐことが出来た喜びを噛み締めながら穏やかに眠りにつく者など、修学旅行の初日は様々な形で更けていった。

第三百七十七話　清水寺

１１月１８日（水）
午前――京都市内
女子たちが帰った後、ベアトリーチェは八雲と再び一つになって湊に身体を返した。
そして、身体を取り戻した事で八雲がしでかした事を理解した湊は、深い溜息を吐いて自分と八雲で分裂することは出来ないかと考えた。
どうやら同時に別々の身体を手に入れることで、幼い八雲をぶん殴りたかったらしい。
他の者からすればそれも君だぞといった感じなのだが、湊と八雲はやはり考え方が異なっているので本人にとっては完全に同一人物と見なすことは出来ないのだろう。
美紀が影時間に関する記憶を取り戻す事に反対しているのは湊くらいなものなので、他の者に頼んで殴っておいてくれという訳にもいかない。
仮にそれを頼めば自我持ちのペルソナを含めた女性陣が全力で阻止に動くはず。
湊もそんな事は簡単に予想出来ており。ならば、上にタライを放り投げてから八雲になって、出てきた八雲の頭にタライをくらわせればどうだろうかとシミュレーションしてみたが、そちらもベアトリーチェか自我持ちに阻止される未来しか見えなかった。
最終的に八雲を罰することは出来ないと判断した湊は、明け方に露天風呂に入って気持ちを切り替え、部屋に運ばれてきた朝食をとってから月光館学園の生徒らと合流した。
本日は昨日の延長で観光バスを使って名所巡りをする事になっている。
新幹線の席と異なりバスは貸し切りなので湊だけが別のクラスに行くこともない。
そうして、乗り込んだバスが出発すれば、最後尾の真ん中で足を組

んでふてぶてしく座っている湊に声を掛けてくる者がいた。
「会長、清水寺ってどんなとこっすか？」
通路に身体を乗り出しながら振り返って声を掛けてきたのは、バスケ部の渡邊だった。
彼は遅くまで男性教師の部屋で反省させられていたはずだが、自分たちを罠にハメた隣のクラスの人間がいないからか今は精神的に落ち着いているらしい。
ただし、一緒に反省部屋送りになった他のバスケ部二人は、どことなく寝不足なようで静かに欠伸を噛み殺している。
一人だけ元気だなと思いつつ、これから行く清水寺について他の者も知りたがっているようなので、情報をいくつかピックアップして伝えることにした。
「……まず、覗きスポットはない」
「しってるよっ?!」
急に何を言い出すんだと慌てたように渡邊が立ち上がれば、先ほどまで眠そうにしていた他のバスケ部二人も驚愕に目を見開いて意識を覚醒させていた。
この場にいる生徒で彼らの覗き未遂という罪状を知っている者はいない。
先頭の席にいる佐久間と櫛名田は教師の連絡網で情報が回っていたので知っているが、それを生徒に教えようという気もなかったために、彼らはあたかも何の罪も持たぬ一般生徒のように振る舞えていたのだ。
湊がその話を知っているとは思っていなかったのか、渡邊が慌てた様子を見せると湊の左隣に座っていたラビリスが何の話だと尋ねてきた。
「覗きスポットって何の話なん？」
「……旅館に露天風呂があるだろ。月光館学園の生徒が何人か覗けないかって話をしていたらしい」
「いや、犯罪やん。てか、そんなん見つかったら旅行中は旅館で謹慎やろ。誰も実行に移さんで良かったわ」

「あぁ、本当にな」
言いながら湊が全てを見透かすような金色の瞳を向ければ、渡邊は冷や汗を掻いて何も言えなくなる。
昨夜の覗き未遂については、教師たちも生徒の不安を煽ることになるからと黙っておくことに決めた。
大音量で自分の名前を流した友近についても、罰ゲームの悪ふざけという設定で事実は隠されており、おかげでF組の方でも誰一人欠けることなく観光地に向かっている。
湊もここで事を荒立てるつもりはないので、牽制はこれぐらいにして質問に答えてやるかと口を開いた。
「まぁ、かなり広い寺だな。文化遺産、世界遺産の両方に登録されている事もあって、敷地内でも見るものは多くある。まず目につくのは朱色で彩られた仁王門だろう。通称は目隠しの門というらしいが、その理由が分かるやつはいるか？」
急に始まった湊の観光地ガイダンスにクラスメイトたちは耳を傾ける。
湊は日本中だけでなく海外にも度々行っているため、各地の観光情報を多数持っている。
さらに、歴史にも詳しいので、そういった観点からも面白い話が聞けるのではと全員が注目しているようだ。
どうやらバスガイドの女性も話を聞いているようで、社会科教師で答えを知っている佐久間がニコニコと楽しそうに笑っていれば、湊のクイズの答えを考えていた者の中から風花が控えめに手を挙げた。
「えっと、お寺も境内で良かったっけ？　その、境内が外から見えないようにしてるからとか？」
「境内は神社だけの呼び方じゃないので呼び方は合っているが、その答えは不正解だ。そも、清水寺は坂の上にある。そこそこの勾配があって門がなくても見えるように出来てない」
清水寺があるのは言ってしまえば小さな山の頂上だ。平坦な場所ならばともかく、そんな場所にあればわざわざ見えないようにする必要はないだろう。

不正解だったことに風花が残念そうにすれば、今度はチドリを間に挟んでさらに右隣の美紀が挙手して答える。
「では、修行僧が修行に没頭するというか、外界に意識を向けないようにとかですか？」
「それもはずれだ。確かに入口近くにある門だが、別に敷地を囲うように塀がある訳じゃないからな。門の横を簡単に通って出入りできる」
確かに修行は大事だろうが、見えないように壁を作ってしまうと余計に意識が向くことになる。
その時点で逆効果になっている訳だが、そもそもの話として門の横は普通に遮蔽物もなく空いているので、門の部分だけ目隠しする意味はないだろう。
目的地に向かってバスは進み続ける中、誰も正解を出せずにいれば、時間だと湊が答えを告げた。
「門は清水の舞台からの景色を意識して作られている。かつて、京都御所には尊い血筋の者が住んでいたんだが、山の上にある清水の舞台からだと市内が一望できる。その中には権力者の屋敷も含まれていて、高い位置から覗き見るのは無礼だろうと言うことで間に門を作って見えないようにしたんだ」
説明しながら湊はペットボトルを取り出し、それを自分の顔と直線になる位置で手に持った。
そこからクラスメイトたちとも一直線になるように手を動かしていき、間に物があれば顔が見えないだろうと実践してみる。
話を聞いた者たちは、本当に門で見えなくなるのか清水の舞台に到着したら試してみようと話し合っており、最初の紹介はしっかりと受け入れて貰えたようだ。
ならば続けてどこを紹介するかと考えていれば、斜め左の席から通路に身体を乗りだして振り返った西園寺が観光ガイドの本を見せつつ話しかけてくる。
「ミッチー、ここは？　中にある〝地主神社〟ってとこ。恋愛成就って書いてるけどどう？」

「中じゃなくて隣接な上、よく読み間違えられているが正しくは〝ジシュ神社〟だ。別にどうもない。歴史はあるが見所は少ない。修学旅行生なら恋占いの石で遊んでお守りを買えば終わりだろう」
「そうなんだぁ。あ、ミッチー一緒にやろうよ。手を繋いでやれば揃って達成だよ?」
「別に達成したところで得る物はない。というか、別に京都駅前から目隠ししてようが辿り着けるぞ」
湊は元々目隠しした状態で生活していた事もある。
なので、ツクヨミの探査能力を使わずとも気配だけで周囲の状況を把握する事が可能なのだ。
そんな彼からすれば、既に京都の地図は頭に入っているので辿り着くことは容易。さらに言えば東京駅からでも問題ないぞと言った感じであった。
話を聞いていた西園寺は流石に嘘だろうと思っているようだが、湊が恋愛系のジンクスに興味がないことは理解したらしい。
それ以上は深く誘ってきたりもせず、個人で観光ガイドを読む作業に戻ると、湊は他の名所の話に戻る。
「基本的に道なりに進んでいけば最低限の名所は回れるだろう。ただ、注意があるとすれば音羽の滝くらいか」
「あ、ウチそれ聞いたことあるわ。三つの滝があってそれぞれ願い事が違うんやろ?」
「ああ、順路は決まっているが、手前から順に〝延命長寿〟〝恋愛成就〟〝学問成就〟だ。置かれている柄杓を使って滝の水を汲み、それを飲むと願いが叶うと言われている」
修学旅行の行き先が京都に決まっていたのは随分と前の話だ。
湊が死んでいた時も旅行については話を進めていたので、他の者たちもある程度は現地のことを調べていることだろう。
ならば、音羽の滝がどんなものか見た目だけは知っている前提で湊が話せば、数名の男子が真ん中なら間違えないなと笑っているのが聞こえた。
思春期という事もあって恋愛に感心があるのは女子だけではない

らしい。
ただ、種類が三つであれば案内板もあって間違える事はないだろう。それで何を注意するのかとチドリが尋ねてくる。
「……三種類なら別に注意なんてないんじゃないの？　もしかして、お腹下すとか？」
「……いや、そういう人間もいるかもしれないがそうじゃない。注意すべきは飲むときの作法だ」
飲む量は少ないと言ってもしっかりと殺菌処理がされている訳ではないため、中には腹を下す者もいるかもしれない。
雨が降ればさらに衛生面は怪しくなってくるだろうが、湊が言っているのはそういう話ではなかった。
「まず、飲む種類は一つだけだ。三種類全てを飲もうとするのは欲深いからアウトらしい。そも、三つに分かれているが元は一つだからな。人為的に流れを三つに分けただけに過ぎないから、ある意味どれを飲んでも同じだ」
お調子者の男子が「コンプリートすれば最強じゃね？」などと言っていたが、そう考える時点で欲深くてアウトだろう。
湊の説明を聞いて「まだ飲んでないからセーフだしっ」と必死に言っているが周りは目を逸らしている。
どうやら自分はこんな欲深い人間とは関わりありませんと神にアピールしているらしい。
そんな馬鹿なやり取りを横目に見つつ湊は話を続けた。
「でだ。さっきも言ったが欲深いのは全面的にアウトのようで、飲む量も一口で飲みきれる量が原則だ」
「飲むだけ効果が高まるとして、自分の一口の最大キャパシティを見極める必要があるのね」
「……別にそこまでの事じゃないぞ」
柄杓に口をつけるまでに量を調整すればいいので、チドリが言ったほど大仰な事ではない。
また、飲み込むというアクションを取るまで時間を掛けようと一口とカウントされるはず。

なので、こういった裏技もあると、湊は先ほど取りだしたペットボトルのキャップを外し、そのまま口をつけるとペットボトルを持ったまま上を向いた。
ほとんど上下逆さまな状態になったペットボトルは、重力に従って中身のお茶が湊の口の中に流れ込んでいく。
容量は五〇〇ミリリットルなので、多めに見積もっても半分ほどしか減らないだろう。
だが、全員がそう思っている間にペットボトルの中身はどんどん減っていく。
湊は一度も喉を鳴らしておらず、むしろ頬すら膨らんでいない。
となると、中身のお茶はすべて喉を素通りしてそのまま胃に流れ込んでいる事になる。
剣を飲み込むマジックと似たようなテクニックを使っているのだろうが、見ている者たちが唖然としている間にペットボトルの中身は空になり、飲み終えた湊がキャップを閉めれば眼鏡を掛けた女子が一人やってきて手を差し出した。
「皇子、ゴミはこちらに」
「……ああ、ありがとう」
「いえ、失礼します」
バスの中ではゴミを捨てる場所がない。なので、集めておいて後で捨てますよと善意で告げてきた女子に湊がゴミを渡せば、相手は背中を向けた瞬間に恍惚な笑みを浮かべてゴミを懐にしまう。
誰もが湊の見せた芸に驚いている中、ファンクラブの会員は誰よりも冷静に行動していた。
なにせ、皇子が目の前でペットボトルを空にしようとしているのだ。彼にとってそれはゴミでも、ファンクラブ会員にすれば最上級のお宝に変わる。
故に、女子が誰よりも速くその宝を手にして、尚且つ湊に気が利いていることをアピールすれば、湊から見えていない場所で女子たちの醜い争いが密かに勃発していた。
眼鏡の女子が帰っていった座席の辺りで何やら小声で言い争いが

始まるも、それを流して湊は先ほどのテクニックについて他の者に説明する。
「今見せたように喉の奥を開いておけば、胃の容量と息が続く範囲に限り大量に飲める。どうしても叶えたい願いと、自信があるならやってみればいい」
『無茶言うな』
そこまで願掛けに全力出せるかとクラスメイトたちの声が重なる。
湊もあくまでそういった方法もあると提示しただけで勧めている訳ではないので、クラスメイトたちのツッコミも肩を竦めて返すのみだ。
夢を壊すようなので彼は言わなかったが、音羽の滝の水は敷地内の売店で売っている。
買ってでも欲しがる者が欲深いのか、ただの水に価値を謳って売る者が欲深いのか。
そんな事をぼんやりと考えている間にバスは駐車場に到着し、一同はそこから徒歩で清水寺に向かって進み出した。
――清水寺
国内、海外問わず多くの観光客が訪れる清水寺。
その中でもさらに有名な清水の舞台に立って湊は町を見下ろしていた。
バスの中で彼が説明していたように、仁王門によって御所は見えないようになっている。
だが、どうにかして見えないかと身体を乗り出して頑張っている莫迦たちを眺めつつ、一人でぼんやりとしていると隣に人がやって来た。
「よう。旅行中に一人とは珍しいな」
そういって声を掛けてきたのは真田だった。
綾時が現われるまで学内ツートップのイケメンと呼ばれていた者が並んで景色を眺めている事で、彼らの背後では何やら黄色い悲鳴が上がっているが、それに気付いていない二人は洛中の方を見ながら会話を続ける。

「……真田の件ですか？」
「まぁな。俺も今朝本人から聞いて驚いた」
美紀を助けるとき、湊は奪った適性は返せないと言っていた。
適性を返す事が出来ない以上、それで失った記憶が戻ることはないと誰もが思っていた。
だからこそ、影時間の記憶と共に美紀の中から湊との思い出が消えたことを、他の者たちはずっと気にしていたのだ。
手すりに左腕を乗せながら遠くを眺めたまま真田は口を開く。
「美紀は喜んでいたし。他のやつらもお前だけが割を食ったことを気にしていたのか、それが解決して喜んでいた。ただ……俺個人としては複雑な気持ちだ」
真田は美紀を守るために戦う事を選んだ。彼女を再び失いそうになったときから、より一層その思いを強くして戦いに臨んでいる。
だからこそ、適性を失っている彼女が、再び影時間に関わることになって心配している。
記憶が戻った事でまた適性を得るのではないか。影時間の存在を知っている事でまた狙われることになるのではないか。
全ては想像上のことだが、真田は妹を守る兄として警戒せずにはいられない。
「けど、全てに反対って訳じゃない。お前に縋って、なのに代償を払わせて、負い目を感じていたのは俺も同じだ」
八雲のしたことは完全に湊の想定外で、湊本人は失敗したと思っている。
だが、そのおかげで他の者たちは彼の美紀への想いが理解できた。
暗示の魔眼を使えば記憶を戻せたというのに、どうして湊がこれまで美紀の記憶を放置していたのか。全ては彼女を危険から遠ざけるためだ。
美紀に記憶が戻った事を複雑だと言った真田も、それを知って湊の無関係の人間を巻き込まない覚悟を改めて理解した。
「だから、改めて言わせてくれ。美紀を助けてくれてありがとう。美紀を守り続けてくれてありがとう。俺は本当の意味でお前の想いを

理解できていなかった」
身体を湊の方へ向けて、真田は真っ直ぐ相手を見つめて感謝を告げる。
九年前の火事で美紀を助けて貰って以降、真田はあの日の少女が持つ強さに憧れた。
それが湊だったと知ったのは最近のことだが、改めて戦う覚悟を決めた今だからこそ、それが如何に遠いかが分かった。
身体の強さは問題じゃない。真田が思い知ったのは湊の守る意志の強さだ。
「正直、負い目がなくなった事は嬉しい。これで純粋に恩を返せる。だから、俺は今回の事は喜ぶ事に決めた。お前の望んでいない結果だろうが何も気にしなくて良い」
「……別に先輩がどう思おうがどうでもいい。考えているのは真田が次に適性を得た場合の対処だ。まぁ、桔梗組への襲撃を警戒するなら、ＥＰ社で匿うしかない訳だが」
「そうか。可能ならば俺もそうして貰いたい。図々しいと分かっているが、もしもの時は頼む」
敵に幾月がいる以上、それぞれの実家や桐条関係の場所は危険だ。
その点、ＥＰ社は桐条グループがどれだけ必死に探っても表層の情報しか掴ませなかった組織。
もしもを考えればこれ以上に安全な場所など存在しないだろう。
恩を返す前に再び頼るのは情けないが、美紀を守って貰えるなら何でもするという気持ちが真田の態度から溢れていた。
それを見た湊は、美紀を匿うのはあくまで自分の失敗の尻拭いだと真田の頼みを切り捨てる。
結果はどちらも一緒なのだが、変なところで拘る彼にとっては重要な部分なのだろう。
話はそれで終わりかと最後に尋ね、それだけだと真田が答えれば湊は景色を眺めるのをやめて去って行った。
彼の背中を見送った真田は再び景色を眺め、土産を買っている荒垣が来るのを待ちながら小さく呟く。

「……残る問題はあのお嬢様の方か」
全てが少しずつ良い方向に進んでいる。
しかし、ただ一人だけ幾月たちとの戦いの日から進めていない者がいる。
どうしたものかと考えながら、真田は京都の町を眺め続けた。

第三百七十八話　美鶴が戦う理由

夕方――鴨川

本日の歴史的建造物巡りの観光を終えた月光館学園の生徒たちは、旅館近くの鴨川付近で解散となり旅館に帰っていった。

しかし、そんな中で一人だけ旅館に戻らず、鴨川の川べりに立って風景を眺めている者がいた。

日中は日当たりが良すぎるせいで誰もいない場所だが、暗くなってくれば途端に人が増えることで有名な場所だ。

集まってくる者の中には酒を飲んで酔っている者もいる。

観光地で有名とは言え、京都はそれほど治安が良い訳ではない事もあり、その人物の姿が旅館になかった事で探しに来たゆかりは、一体何十分ここにいたんだと呆れつつ声を掛けた。

「もう戻らないと、夜の点呼に間に合いませんよ」

後ろからゆかりに声を掛けられた美鶴は、一瞥するだけですぐに視線を川に戻す

夕日が反射して優しくキラキラと光っている川は、周囲の風景と調和して実に心を落ち着かせる。

住むには適さない土地と言われようとも、そこに惹きつけられる何かがあるのは確かで、美鶴がここにいるのは安息を求めてなのだろうかと考えつつゆかりは再び話しかける。

「そろそろ、この辺から四条くらいまでは、カップルと酔っ払いで混み出しますよ」

「どうしてそこまで私に構う？　七歌やアイギスもいるんだ。君は友人たちと旅行を楽しめば良いだろう」

「先輩だって仲間の一人じゃないですか」

「私と君は戦いによって引き合わされた。特別課外活動部の前から付き合いはあっても、君が月光館学園に来たのは父親の死の真相を知るためだ。なら、私たちの出会いは影時間に起因するもので、そして、その戦いも今は……」

自分と七歌たちとではゆかりとの関係も異なると美鶴は目を伏せ

る。
ゆかりに限らず美鶴の周りにいる人間は影時間に起因する出会いばかりだ。
古くからの付き合いがある七歌も順番が前後しただけで、結局は戦いに関わってしまっている。
こうやって戦いから離れ、学校行事という完全な日常側に立ったことで、美鶴は改めて自分がいかに中身のない人間かを思い知らされていた。
桐条という仮面を外せば己に大した価値はなく、忌むべき影時間がなければまともに知人や友人もいない。
これでどうやって父の役に立てるというのか。使えても政略結婚が精々だろう。
考えれば考えるほど空虚で嗤えてくると、自嘲気味な笑みを顔に貼り付けた美鶴が改めてゆかりに告げる。
「目的も、倒すべき敵も、全てが消えた。私に執着する理由などもうないだろ」
「……そういう言い方はないと思いますけど」
「答えは出たんだ。これ以上、何のために戦えばいい？　信じていたものは全て〝嘘〟で、そして……」
影時間を消すために戦っていたが、その方法とされていたのは裏切り者である幾月が告げた偽りのものであった。
ずっと責任者としてグループ内で指揮を執っていた桐条も、その裏切り者のせいで今もまだ昏睡状態が続いている。
大切な人を殺されそうになったことで、怒りも、憎しみも、美鶴の胸中では渦巻いている。
だが、それはあくまで美鶴側の事情であって、シャドウの脅威から人々を守り、影時間を消すことを最終的な目的に結成された特別課外活動部には関係のないこと。
シャドウたちがいるから特別課外活動部は解散もせず、時には討伐のために出ているが、先の見えない活動にはいつか限界が来る。
人々を守るためと言ってメンバーたちが犠牲になる必要はない。

一時はチドリが、湊が、そして桐条が倒れた以上、新たな犠牲者が出る前に、最早無意味に思えてしまう戦いから降りるべきではないか。
美鶴がそう考えて、あの日の事で今も深く心に突き刺さっている事実を思わず口にしそうになって踏み留まれば、その先の言葉に予想がついたゆかりが引き継ぐように口にした。
「そして、なんですか？　自分じゃ守りたい人も守れなかった……とか、言いたい訳ですか？」
瞬間、美鶴は驚きに目を見開いてゆかりの方へ振り返る。
あの時、美鶴は勿論の事、桐条本人すらも幾月が裏切り生きている事に気付いていなかった。
特別課外活動部のメンバーたちは湊の過去を知るために裏の住人である五代に話を聞きに行き、そこで幾月も子どもで人体実験をしていた下衆だと聞いていたのに、既に死んだ存在だと疑うことを放棄してしまっていたのだ。
ならば、その罠に掛かろうともそれは美鶴個人の罪ではない。
むしろ、ストレガの持っていたペルソナを強制的に暴走させる弾丸や、玖美奈と理の襲撃から生きている可能性に気付いていた湊の方が異常なのだ。
あの夜の件は敵が狡猾だっただけの事で、今もそれが原因で自分を責め続けている相手にゆかりがその隠している本心を指摘する。
「守れなかったから何ですか。そりゃ、誰だって大切な人を守りたいって思いますよ。でも、しょうがないじゃないですか。守れるほど強くなかったんだから。ていうか、グループの罪滅ぼしのために戦ってるなんて、そんなの嘘。どうせ初めから、〝お父様を守るため〟だけだったんでしょ？」
彼女の本心は間違いなくこれだとゆかりは確信を持っていた。
人々のために戦うと口にしながら、本当は身内のたった一人のために戦っていたなど、その理由は真逆と言っていい。
別に他の者たちだって高尚な理由で戦う事を選んだ訳ではない。
真実を知りたくて、強くなりたくて、大切な人たちを守りたくて、それぞれがそれぞれの理由で戦っている。

だというのに、彼女はその理由を偽っていた。
力を貸して欲しいと誘うならば、高尚な理由を語っていた方が持たれる印象も良くなるだろう。
しかし、命を落とす危険のある戦いで、最初から嘘を吐いていたなど信頼を裏切る行為そのものである。
自分も裏切っておきながら、どうして幾月を責められるのか。恐らく美鶴が溜め込んでいるのはそういった部分もあるのだろう。
だが、ゆかり以外に仲間の姿がなく、その状況で事実を言い当てられた事で、限界まで溜め込んでいた美鶴も逆上したように言葉を吐き出した。
「ああ、そうさ！　だが見たろ、とんだ茶番だ！　幾月の一番近くにいたというのに、丸め込まれて何も出来なかった、気付けなかった！　全てが詰んだ状態で初めて相手の本性を知ったんだ！」
自分たちの命があるのは、幾月との繋がりが薄かったアイギスや湊のおかげだ。
アイギスの場合は湊に執着しているが故の偶然だが、それでも一緒に特別課外活動部として戦っていた中でも彼女だけは一定の距離をあけて幾月とも接していたように思える。
影時間について誰よりも真実を知っている青年の近くにいたからか、それとも彼を戦いに巻き込んだグループの人間だからと警戒していたのか。
けれど、理由はどうあれ美鶴たちは幾月を信じていた結果敗北し、アイギスたちは幾月を信じていなかったことで裏を掛けた。
仲間を信じて戦っていたはずの者たちが、その信頼を利用されて敗北するなど皮肉な話だ。
そしてそれは、十年以上の付き合いがあって、裏切り者を右腕としてきた桐条にも当てはまる。
「お父様は桐条の責任の全てを、たった一人で抱えていたんだ……。あの事故以来、お父様はまるで死に場所を探しているような顔をしていた。生きる資格がないとでも言いたげな、あの顔を二度とさせないための戦いだった！」

後輩のゆかりでも美鶴の本心に気付けたのだ。
幼い頃から美鶴を見ていた幾月ならば、その想いもきっと分かっていたに違いない。
己とは対極の目的のために動いている美鶴たち親子を、幾月は一体どのような感情を持ってみていたのか。
本来は敵対関係にあるはずのストレガと手を組み、死を偽装してまであの状況を作り出したのなら、きっと心の中では馬鹿な親子だと嗤っていたに違いない。
そんな相手を信じていた悔しさと空しさに、美鶴は色が変わるほど拳を握り締め、今にも泣きそうな顔で叫ぶ。
「遺言状でもお父様は有里に後を任せたいと書いていた。こんな愚か者ではなく、力と実績を持った彼に託したいと！　全てが無駄だった。口先だけで何も為せない、私のような無能などいなくても良かった。十年前のあの日、彼を養子に迎えていればこんな事にはならなったんだ！　そうだろ!?」
自分には価値がない。だから、父は彼に後を頼み。母は高寺派が動いた時も彼の動向を素直に見守っていた。
両親との絆を失うのが怖くて、自分にも価値があるのだと思いたくて、美鶴は湊を一族に迎え入れる事こそが桐条を守る最良の方法だと認めたくなかった。
しかし、結果を見れば一目瞭然だ。
桐条が倒れた事でガタガタになりかけたグループも、事前に湊がＥＰ社の部下たちに命じていた策のおかげで従業員を削減せずに済んだ。
また、世界トップ企業が経営に関わることでグループは安泰だと株価も持ち直した。
口では桐条が大切に思っている物を奪うなどと言っていたが、結果的には全てをほぼ完全な状態で守った形になっている。
これでまだ自分の方が父にとって必要な存在だと言い張れるほど、美鶴は子どもではないつもりだった。
だが、それを口にした途端、ゆかりは真剣な表情で美鶴に近付き彼

女の頬を張った。
「……っ」
「ごめんなさい。でも、無駄かどうかはこれからでしょ？」
顔をぶたれた経験などほとんど無い美鶴は驚いた表情のまま固まる。
ただ、今自分はゆかりに叱られている事だけは理解して、黙って彼女の言葉に耳を傾ける。
「私、前にこの辺に住んでた事あるんです。父さんが死んでから、母さん……いつも知らない男と一緒にいたんです。それが嫌で、いっつもこの辺の川べりに一人で来てました。引っ越しばっかりで友達はいない。周囲にも馴染めない。だから私、せめて父さんを信じてないと、普通でいられなかったんです」
「……君の父は、唆されただけだ」
十年前の事故の後、桐条グループは岳羽詠一朗とその家族を守らなかった。
それは、先代のことでグループ自体が揺れていた事もあり、そこまで手が回らなかったことが原因である。
湊はその件について桐条を罵倒した事もあるが、美鶴も岳羽詠一朗はあくまで被害者であると思っていたため、彼自身には罪はないと答えた。
こんな状況でもそんな風に気を遣う美鶴を見て、ゆかりはふっと優しい表情になると遺された本物の映像を思い出して語る。
「……お父さん、危ない研究に加わってたけど、最後は食い止めようってしてくれていたんです。シャドウを放っておくと危ないぞって、身体を張って、食い止めようって。だから、私、戦う事にしたんです。私……影時間を無くすために戦いたい。お父さんの遺志を……その想いを継ぎたいから」
「想いを……継ぐ……」
きっと父は娘が戦う事に反対するだろう。危ない事はしないでいい。自分の事は忘れてくれて構わないと。
父が大好きだったゆかりもそれは分かっているが、それでも自分は

決めたんだと笑って美鶴を見た。
「それが私たちに出来る事でしょ……美鶴先輩」
「岳羽……」
ゆかりの父は死んで、美鶴の父は一命と取り留めた。
その違いはあれど、二人の少女は自分の父親のために戦っているという共通点がある。
だからこそ、彼女は自分の心情を理解して発破を掛けにきたのかと理解し、美鶴もふっと柔らかい表情で笑い返した。
「そうだったな……。まだ何も終わってないな。シャドウを倒し、影時間を終わらせる。そして、幾月を捕らえてみせる。それを全て見届けて貰おうじゃないか。病院でまだ休んでいるお父様と、そして君にもだ」
「先輩……」
影時間の戦いも、幾月との宿命も終わらせてみせる。
裏切り者としての恨みはあるが憎しみに囚われてはいけない。
だから美鶴は人として幾月の野望を打ち砕き、相手の身柄を拘束してみせると決意した。
「ゆかり、来てくれるか……一緒に」
美鶴の言葉にしっかりと頷いたゆかりは、川べりの坂をあがってから振り返って口を開く。
「じゃ、帰って露天風呂って事で」
「……風呂？」
「まだ見てないんですか？　あそこの露天風呂すごいんですよ。これからは、裸の付き合いということで、何でも相談してくださいね！」
ずっと思い悩んだ表情をしていた美鶴は、折角の温泉旅館だというのに一日目は部屋のシャワーで済ませてしまった。
それを聞いたゆかりは勿体ないと驚いた顔をしつつ、今日は他のメンバーも誘って全員で露天風呂に行こうと誘う。
ただ、大勢で風呂に入るといった経験の少ない美鶴は、改めてそういう事をするのは恥ずかしいと頬を赤らめた。
「……裸？　……どうも恥ずかしいな」

「ちょ、赤くなんないでください！　こっちだって恥ずかしいんだから！　もう行きますよ、門限過ぎてるし！」
真面目な雰囲気になったのをわざと軽いノリで終わらせたというのに、天然なところのあるお嬢様が真面目に返すせいで変な空気になってしまった。
このままでは自分まで恥ずかしくなってしまうので、ゆかりは先に戻って他の者たちを誘ってくると告げるなり旅館へ走って行った。
そんな少女の背中を見送った美鶴は、ずっと感じていた胸のわだかまりが消え、周りを見るだけの余裕が出たのか京都の夕焼け空を美しいと感じながら小さく呟く。
「お父様、心配には及びません。私は、独りではない事を忘れていました。もう、罪ばかりを、過去ばかりを振り返る事もしません」
過去は変えられない。だが、未来ならばいくらでも可能性が残っている。
再び戦うための決意の心が、美鶴に新たな力を呼び醒ました。
自分の中で力が変化するのを感じた美鶴は、新たな力・女帝〝アルテミシア〟に共に戦おうと心の中で呼びかける。
そして、今も病院で眠り続けている父が一刻も早く目覚める事を祈りながら旅館へと戻った。

夜――旅館〝東山三条・後醍醐〟
夕食を終えた後、部屋に遊びに来たアイギスと共に湊は一階の売店を訪れていた。
特にこれといって変わった物もなく、あくまで普通の売店でしかないが、旅行の時は気分も高揚しているのか普段はいらないものでも買ってしまう事がある。
そのため、〝人気第一位〟などといったポップが付けられた商品は、本当にこんなのが欲しいのかと思えるものが多かった。
今もアイギスは真剣な表情で和菓子を見ているが、街中に散策で出た方が良い物が帰るだろうにと湊は内心で思っている。
そして、真剣に見ているのを後ろから眺めていれば、一つ頷いたア

イギスが屈んだまま振り返った。
「八雲さんは羊羹は好きですか？」
「……普通」
「細かく言えば？」
「……獅子亭の羊羹はよく貰うから食べてたな」
「なるほど。こだわりがあると」
獅子亭とは和菓子の老舗で、そこの羊羹は高級なだけあって味も確かな品として有名だった。
桔梗組でも、ＥＰ社でも、和菓子の贈り物が来るとそこの羊羹であることが多かったので、そういうものに馴染んでいると言えば、アイギスはこだわりと判断したのか羊羹を選択肢から除外していた。
風花や八十神高校の女子たちの作った料理も食べていた湊にすれば、安物を食べても不味いと感じるだけで問題はない。
ただ、わざわざ相手が不味いと感じるものを選ぶ必要もないので、アイギスが最終的に無難な煎餅を買って店を出たところで階段の方からゆかりたちがやって来た。
「あれ、アイギスお土産買ってたの？」
「はい。後で八雲さんのお部屋で食べようかと思ったので」
昨日は八雲が買ってもらった生八つ橋を食べたが、今日は別の物をお茶請けにしようと思ったとアイギスは買ったばかりの煎餅を袋から出して見せる。
醤油を塗って海苔を巻いただけのシンプルではあるものの、そういった物の方が美味しかったりするので、ゆかりたちはまた後で遊びに行こうと密かに決める。
ただ、彼女たちも今は予定があるので、小さな巾着を持った美鶴が通路の奥を指しながら君たちはどうすると尋ねた。
「今から私たちは露天風呂に行くんだが、君たちはどうする？　あぁ、男女別で今の露天は女湯だけなので、男性は大浴場になってしまうが」
「……俺は部屋にあるんでいいです」
「わたしも後で八雲さんのお部屋の方を利用しようかと」

「そうか。では、また後でな」
スイートルームには専用の露天風呂がある事は聞いている。
なら、他の利用客もいる大衆用の露天風呂よりゆっくり出来るのだろうと、美鶴も強くは誘わなかった。
会話を終えた双方はそれぞれ目的の場所に向けて歩き出す。
だが、少し進んだところでゆかりが待ったを掛けて振り返った。
「え、いや、待って！　普通にスルーしかけたけど、今、有里君普通に美鶴先輩と会話しなかった!?」
「あ、そういえば！」
言われて気付いたと風花も驚いた顔をする。
会話していた美鶴も、言われるまで気付いていなかったようで驚いた顔で立ち止まった湊を見つめる。
すると、隣にいたアイギスからジッと見られていた湊は、どこか呆れた様子でゆかりに言葉を返した。
「……質問されたから答えただけだろ」
「君、少なくとも四年は会話してなかったんだけど？」
「話す価値がなかったからな。別に美鶴さん個人を嫌っていた訳じゃない」
ゆかりが見ていた限りだが、湊は中等部にいたころからずっと口を聞いていなかったはずだ。
まぁ、見ていない部分で言えば、ムーンライトブリッジで蛇神を顕現させ掛かった際に、「俺に触れるな」と拒絶の言葉を吐いた事もあるのだが、美鶴本人もその事は気付いていなかったので、美鶴にとっても月光館学園で再会してから初めての会話と言えた。
どうして急に彼が口を聞いたのか他の者は分かっていないようだが、原因があるとすれば自分の変化した部分に関係するはずだと当たりを付けて美鶴は尋ねる。
「君が私を拒んでいたのは戦う理由が原因か？」
「他人を巻き込む際に虚言を吐いていた事が理由ですね」
「なるほど。それは確かにしょうがないな」
今の湊はしっかりと美鶴の目を見て言葉を返してくれている。

その喜びを感じつつ、確かにそんな人間を信用する者はいないなと納得した美鶴は、今まですまなかったと彼に謝罪した。
「私が非常識だった。本当にすまない」
「お嬢育ちの人間に常識なんて期待した事ないので大丈夫です」
「そ、そうか……」
金持ちのお嬢様といった人間を多数知っている湊にすれば、そのタイプに常識を期待するだけ無駄だと分かっている。
だからこそ、非常識であったことを謝罪されても、それがお前らのデフォルトだろとしか思っていなかった。
言われた本人は小さくショックを受けているようだが、十年以上前に湊と美鶴が会話していた事を知っていた七歌は、思春期になって話せなくなったのかなと思っていたと正直に告げた。
「正直、八雲君が美鶴さんを無視するのって好きな子いじめるアレだと思ってたよ」
「……見た目だけ良くてもな」
「あぁ、見た目はありなんだ。ゆかりの容姿はダメだしてた気がするけど」
「俺にも親しみや好ましいといった感情はあるからな」
昔から湊はゆかりの容姿は別に好みじゃないと言っていた。
七歌もそういった話をどこかで聞いていたらしく、美鶴はありでゆかりは無しなのかと心のメモに書いていれば、近くにいたゆかりが七歌の肩を強い力で掴んだ。
「ねぇ、なんで今私の名前出したの？　素直に美鶴先輩が褒められて良かったね、で終われたよね？　好みじゃないって言われて無駄にダメージ負った私の心はどうしてくれるの？」
「いや、ほら、美鶴さんの容姿はおば様補整だし」
「けど、私のマイナス値は変わらないよ？」
美鶴もゆかりも容姿は優れているし、スタイルもかなり良い方だ。
これでどうして美鶴はありで、ゆかりだけ好みじゃないと言われるのか他の者が考えていれば、恐らくは気品などが理由ではないかという予想に落ち着いた。

彼とよく一緒にいるアイギスも人形のように綺麗な顔をしており、そこには確かな気品を感じる事が出来る。
聞いても彼が明言するとは思えないので、あえて踏み込んで聞いたりはしなかったが、好きな人に直接好みじゃないと言われたゆかりのダメージは計り知れない。
その後、他の者たちが引っ張っていかなければ、いつまでもその場で七歌を問い質していそうなゆかりも女子らと共に去って行き、それを見届けた湊はアイギスと共に自分の部屋へ戻っていくのだった。

第三百七十九話　爽やかな朝食

１１月１９日（木）
朝――旅館・食堂
月光館学園の生徒たちが宿泊している旅館では、朝は広い食堂で各自好きに料理を皿に取り分けて食べるビュッフェスタイルをとっている。
そこにはパンやベーコンエッグなど洋食も並んでいるが、しっかりと地元の野菜を使った和食も並んでおり、女性陣や年配の客からはそちらの方が人気のようだった。
そして、時計の針が七時半を指した頃に七歌たちも食堂にやってきた。
月光館学園の生徒たちの朝食は部屋単位の行動になっている。朝の七時から八時半までに朝食を済ませておくことになっており、集合時間までは朝風呂に入ろうが二度寝しようが自由である。
七歌たちは六時頃に起きてから温泉に入り、しっかりと天然温泉を満喫してから朝食にやって来ている。
湊が温泉好きなように、七歌も他の者よりも温泉好きなようで、他のメンバーたちはそれに付き合う形で何だかんだと旅行を楽しんでいるのだ。
他の者たちも普段の戦いの疲れを温泉で癒やせることもあって、誘われれば気軽にＯＫを出すくらいには温泉を気に入っている。
何より、朝の肌寒さと熱めの温泉は目を覚ますのに非常に効果的なのだ。
おかげでいつもよりスッキリと疲れの取れた顔で食堂にやってきた七歌たちだが、席を選んで料理を取りに行こうと空いている席を探そうとしたとき、前日よりも食堂内が騒がしい事に気付いた。
「あれ、なんかざわついてる？」
「……ああ、理由分かった。あっちに有里君たちがいるからよ」
七歌の問いにゆかりが呆れた様子で答え、窓際の席の方を指さした。

そこには前日は部屋で朝食を食べていたはずの湊たちが、ベアトリーチェと八雲を除き勢揃いしていた。
湊本人がいるのでベアトリーチェたちがいないのはしょうがないが、その二人がいてもいなくても湊たちが周囲から浮いている事に変わりはない。
この食堂は他の宿泊客も同時に利用する場所なのだが、どういう訳か湊たちの周りの席は誰も座っていない。
何せそこの席だけ後光が差しているほど眩く見えるのだ。
窓際にはいくつも席が用意されているというのに、何故だか湊たちの席だけ朝日が差し込んでスポットライトで照らされたようになっている。
そこに座っている者たちは箸を持つ者もいれば、ナイフとフォークを使っている者もいる。
何人かは顔の造形に類似点が見られるが、雰囲気だけでなく髪や肌の色だってバラバラだというのに、顔や身体の造形が人並み外れて整っている事だけは共通していた。
老舗旅館に泊るだけの財を持っている富裕層のはずの一般客が、従業員にあの一団は何かの撮影のために泊った芸能人なのかと尋ねているのが聞こえる。
無論、そんな事はないので従業員は否定しているが、皆が遠慮し合って、遠目から見目麗しい一団を視界に納めている様子だ。
湊一人だけでも恐れ多いと近付きすぎないようにしている生徒たちもいるので、気品によるオーラのようなものを幻視する一団を前にすれば、流石のファンクラブたちも写真を撮ろうなどとは考えない。
そして、ここは自分たちも空気を読んで離れた場所に座るべきか。
七歌たちが視線で相談し合っていると、彼女たちのいた集団から一人抜け出して彼らのいる席へと進んで行く。
思わずゆかりが腕を掴んで止めようとするも、その腕が空を切って止められずにいれば、気品オーラの結界内部へ足を進めたアイギスが湊に声を掛けた。
「八雲さん、皆さん、おはようございます」

「……ああ、おはよう」
穏やかな朝食時に合わせるように、アイギスはとても穏やかで母性すら感じる微笑みを浮かべ湊に挨拶する。
瞬間、本来異物であるはずの彼女もその一団のオーラに適応し、アイギスはめでたくあちら側の住人と認識された。
「くっ、アイギスも有里君と遜色ないレベルに容姿が整ってるんだったっ」
「あれ？　なら、これ私もいけるっぽくない？」
アイギスもフランス人形かと思うほど容姿が整っている美少女だ。
綺麗な金髪碧眼もあって、湊たちの一団に合流しても違和感なく受け入れられるだけのスペックを持っている。
だが、そういう事ならば親族である自分もいけるのではと七歌は考え、普段は封じている上流階級の気品を放出し身に纏う。
横にいた人間が急にお嬢様の顔を見せた事にゆかりは驚いて飛び退くが、それに構わず七歌は自然な所作でテーブルの間をすり抜けて湊たちの席へと辿り着いた。
「おはよう、八雲君。ユーリお婆様たちもおはようございます」
《ええ、おはようございます。七歌》
辿り着いた七歌はアイギス同様に見事そのオーラに適応して見せる。
ツクヨミは湊の中にいたが、アマテラスと同じように七歌たち龍の一族をずっと見守ってきた存在だ。
故に、湊と同じように七歌のことも自分の孫のように受け入れ、丁寧な仕草で優しい言葉を返した。
瞬間、湊が受け入れたアイギス以上に七歌はそのオーラの内側の存在になる。
元から彼女は湊の親戚だと公言していた。そして、彼の親戚と思われる女性にしっかりと笑顔で挨拶された事で、それが事実だったことを周りも認識したのである。
湊たちは四人掛けのテーブルを三つくっつけた席に使っていて、奥から座っていた事で一番通路に近い場所が二つ空いていた。

そこは丁度湊とツクヨミの隣だったので、挨拶に行った二人がツクヨミの勧めでそこへ座ると、友人が歩き出すのを止められなかったゆかりは裏切り者がと憤慨する。
「なんで部屋単位の行動なのに別行動とってるのよ！」
「……諦めなさい。貴女じゃ無理よ」
「い、いけるし！　私だってお母さんの実家が桐条の名士会に名を連ねてる家の出身だから！」
「晩餐ならともかく爽やかな朝食に道化は不要よ」
「誰が道化か！」
母方の実家を考えるとゆかりも一応はあちら側に属している事になる。
ただ、ゆかりは父が生きていた頃にパーティーに出ていたくらいで、十年前の事故があってからはほとんど出席していない。
十年のブランクはどうやっても簡単に埋められる訳もなく、それで言えば元からお淑やかな美紀や風花の方がまだ乙女らしく認識される事だろう。
また、生まれはともかく富裕層として過してきたチドリや、アイギスの姉であるラビリスでもあの一団に馴染むのは難しいレベルを、庶民生活の長いゆかりがどうこう出来るとは思えない。
いくらゆかりが騒ごうが現実は変わらないため、しょうがなく湊たちの隣の席に座ることにするが、オーラの境界面にいると不可視の圧力を感じるのかゆかりは眉を寄せた。
「通路を挟んでるのに圧力感じるんだけど……」
「それが貴女の限界よ」
「ぐっ……」
絶対に認めたくはないが、ゆかりはチドリの言葉に反論することが出来なかった。
周囲からの評価を考えれば、七歌もゆかりも同じくらいに男子から人気がある。
ルックスはほぼ同等、性格の面で言えば毒があるもののフレンドリーな七歌に人気があり、スタイルの面で言えば湊と色々と経験して

いるゆかりの方が女性らしく評価が高い。
だというのに、自分とその友人の間には超えられない壁がある。簡単には埋めがたい溝があると突きつけられた。
隣を見れば完全に馴染んでいる友人の姿があり、頭の中でそこに自分を足してみると異物感がすごい。
なんとも負けた気分になったゆかりは、気分を変えるため料理を取ってくると告げて席を離れて行った。
他の者たちもそれに続いて自分の食事を取りに行き、湊たちの席にいたアイギスと七歌も遅れてついていく。
今日はほとんど自由時間なので、班単位ではあるが京都を自由に散策してお昼も好きな店へ行ける。
七歌たちは事前に調べて割とがっつり食べられるところへ行く予定を立てているため、朝は軽めにあっさりとしたものを食べることにした。
「朝から湯豆腐ってのもありだよねぇ」
「……この裏切り者め」
「え、ごめん。庶民の言葉は分からないの」
「夜は枕で決闘だから」
彼にべったりなアイギスはともかく、一人だけ湊たちの席へ行った七歌へゆかりが恨み言を溢す。
しかし、それを聞いた七歌は気にした様子もなく湯豆腐を器に盛り、薬味を入れながら悔しいならくればと煽ってきた。
友達同士だが、だからこそマウントを取ってやりたい時がある。
湊たちのテーブルに見事に適応して見せた七歌にすれば、これが実力だよねと煽るのは当然のことだった。
一方、どう足掻いても自分では湊たちのテーブルに馴染むことが出来ないゆかりは、庶民を舐めたことを後悔させてやると枕投げによる復讐を誓った。
他の友人たちは、爽やかな朝にそんなくだらない決闘の約束を交わしている二人を、呆れた目や苦笑してみている。
まぁ、それも食事が始まれば平和な状態に戻ったが、青年が新しい

料理を取りに行ったときにそれは起こった。
「あ、美鶴さんや」
ラビリスの言葉でゆかりたちは入口の方へ視線向ける。
朝食は部屋単位で行動するため、七歌たちと完全に別行動だった美鶴がプリミナの会長らと共に食堂に入ってきた。
比較的入口付近に座った事でテーブル左側から取りに行った美鶴は、先に飲み物を取る事にしたのか湊のいた右側へと進んで行った。
湊と美鶴の間に何かあるというのは有名な話で、美鶴がどれだけ話しかけようと湊が一切相手しないことで知られている。
そんな二人が朝から出会えばどうなってしまうのか想像がつかない。
美鶴は父親が病気で倒れたこともあって旅行には来ているものの、ずっと何やら思い悩んだ表情をしていた。
他の者からすれば怒っているのではと思えるほどピリピリしていたのだ。
そんな状態の美鶴が湊の進路を塞ぐように立ったことで両者が対峙し、周囲がこれは拙いのではと怯え出す。
湊は親切で意外と面倒見が良いのだが、それらはあくまで弱者や子ども相手の話。
美鶴は年上なだけでなく、間違いなく個人としても社会的にも強者に分類される。
それらは湊にとって価値のない存在だ。他者を救うことで贖罪を、他者を鏡とすることでしか自分の幸福を得る事が出来ない者にとって、己の力でどうとでも出来る者はいてもいなくてもいいのである。
自分にとってどうでもいい存在が道を阻んできたとき、多くの者はそれを邪魔だと感じて避けようとするだろう。しかし、彼は敵対行動と判断し排除行動に移る。
このままでは美鶴の身が危ない。そう思って何人かが立ち上がろうとしたとき、真っ直ぐ湊の瞳を見つめていた美鶴が微笑み口を開いた。
「おはよう、有里」

「……おはようございます」
瞬間、食堂中で生徒らがどよめいた。
あの女帝があんなにも柔らかく笑った顔など初めて見た。
前日まで暗く張り詰めた表情をしていたのに何があったのか。
青年がしっかりと美鶴と言葉を交わすなど如何なる心変わりなのか。
そんな疑問が次々と浮かんで、生徒たちは周りの者に何か知っているかと尋ねている。
聞いたところで分かるはずもない。夕方にゆかりが彼女の悩みを聞き出し、それから湊と話すようになっただけの話なのだが、当事者と近しい関係にある者たちしか見ていないのだから。
だが、分からないからこそ生徒たちはこうなのではと様々な予想を立てていく。
中には美鶴が湊の弱みを握ったのではという物騒なものもあったが、ほとんどは明らかにないだろうという妄想レベルのものばかりだ。
だが、彼らはまだ高校生。思春期ということもあって、その想像は下世話な方面へと加速していく。
「もしかして、付き合い始めたとか？」
「ないだろ。だって、有里って桐条さんのこと無視してたんだろ？」
「馬鹿。そういう駆け引きだったかもしれないだろ。んで、桐条さんが精神的に弱ったタイミングで、声を掛けて優しくしたら……分かるな？」
一部の三年男子がそんな話をすれば、瞬く間に二人が付き合いだしたのではという話が広まっていく。
何せ湊には前科があるのだ。中等部の修学旅行で旅行カップル第一号になった前科が。
高校から入ってきた者は知らないだろうが、中等部からいた二年生の中では有名な話なので、彼らがその話の根拠として中等部の修学旅行のことを告げれば、最早二人が付き合い始めた事は事実であるように語られ始める。

料理の前で挨拶した二人も、流石に食堂中が騒がしくなれば、何かが起きていることには気付く。
揃ってテーブル側の方へ振り返れば、動きが揃っていた事で余計に騒がしくなった。
「い、一体どうしたと言うんだ？」
「……さぁ？　馬鹿が多い事は確かだと思いますが――――鎮まれ」
湊の声が響くと途端に食堂から音が消えた。
先ほどまで五月蝿いぐらいに騒いでいたというのに、全員が何やら怯えた様子でパクパクと口を開きながらも言葉を発することが出来なくなっている。
そうして、耳が痛いくらいの静寂が場を包めば、青年は呆れたように指を一度鳴らして全員の緊張を解いた。
湊の声を聞いた途端に金縛りに遭い。指を鳴らすとそれが解除される。
どういった原理なのかは分からないが、怖ろしい体験をした者たちは乱れた呼吸を整えるように水やジュースなどを飲んでいた。
生徒が騒ぐことで他の客や旅館側に迷惑が掛かると思っていた美鶴は、どうにか事態が治まったことに安堵の息を吐き。騒動を鎮圧した青年に礼を言う。
「すまない。手間を掛けさせた」
「……まぁ、俺たちが話しているのをみて、付き合いだしたのかって妄想した人間が出たのが原因ですからね。最低限の責任は果たしますよ」
「そ、そういう事だったのか」
周囲が見せた反応の理由を理解して美鶴は頬を赤らめ、無意識の癖で胸の下で腕組みをする。
美鶴も年頃の少女だ。美しいと評する意外に言葉が浮かばぬ青年と恋仲だと勘違いされれば、困惑や相手への申し訳なさと同時に少々の嬉しさを感じない訳でもない。
一応、婚約者がいる事になっていたが、桐条グループを乗っ取るために行なわれた作戦コード〝悪食〟によって、その婚約者の会社もE

P社の傘下に入っているため、グループ同士の縁をより深く結ぶという目的が果たせなくなっている。
無論、父とそう年齢の変わらぬ相手の男は見目麗しい少女を自分の物に出来ればと思っているのだろうが、そのような下衆に英恵が大切に思っている娘を渡す訳がないと青年が手を打っていた。
故に、今の美鶴は自由恋愛が可能な状況ではあるのだが、同年代の人間との親しいコミュニケーションの取り方すら知らぬ少女に恋愛はまだ早い。
腕組みをした事でただでさえ主張の激しい胸部が余計に強調されるようになったのを視界に捉えつつ、湊は支えが必要なくらい重いのだろうかと余計な事を考えながら食事の話に話題を移す。
「それより、美鶴さんは何か飲みますか？」
「ん？　あぁ、何かフルーツジュースがあればそれを」
湊が美鶴の胸を見て考えた事は、アリが身体の何倍も大きい葉っぱを運んでいるのを見て重くないのだろうか、と考えるレベルの純粋な疑問だ。
そこに一切の劣情はないため、美鶴も湊が胸を見ていたことに気付かずに質問に答えた。
その分、周りで見ていた男子からすれば、目の前にある物に無反応な青年の紳士レベルの高さに驚愕し、逆に女子からは自分もあんな女性慣れしている人にエスコートされてみたいという思いを抱かせる。
周りがそんな風に自分たちのやり取りを注意深く観察している事を無視しつつ、湊はいくつも並んでいるジュースのボトルを一つ手に取る。
「……個人的な好みだと、この梅のやつが飲みやすかったですね。少し酸味が強めですが、氷をいれる前提のようで、氷で薄まれば丁度良かったので」
「そうか。なら、それをいただこう」
美鶴が嬉しそうに言えば、湊はグラスを用意し、冷凍ボックスから氷を三つほど取りだしてグラスに入れる。
最後にジュースのボトルを何度か振って、空気を含ませるように高

い位置からグラスへ注いだ。
勿論、紅茶やフレッシュジュースではないため空気を含ませる意味はない。見られている事を意識しての演出の一つだ。
何ならただのグラス二つを使ってシェイカーのように使うことも出来る。
氷同士をぶつけて細かく砕き、そこへジュースと少量の塩を入れてシャーベットだって作れた。
もしも、この場でそういった技を披露すれば、仕事屋として習得した技能は日常の様々な場面で使うことが出来ることを改めてチドリらに理解されるに違いない。
ただ、面倒臭がりの青年が自分からする事だけはないので、そう思われることはこれから先もほとんどないことだけが惜しまれるが、この場では湊の熟れた動きを見ていた美鶴が小さく感動を覚えただけで十分だろう。
受け取ったグラスを受け取った美鶴は、母親である英恵を彷彿とさせる優しい表情で微笑む。
「ありがとう、八雲」
恐らくは無意識の一言。言った本人は自分が口にした言葉に気付かぬままテーブルへと戻っていく。
けれど、二人の会話に注意していた一部の女子や、近くにいた生徒たちは確かにその言葉を聞いていた。
「え、桐条さん今有里君のこと違う名前で呼ばなかった？」
「あたしも聞こえた。でも、あれって二年生の子が何人か使ってるあだ名じゃなかった？」
「何それすごい気になる！　てか、あのあだ名って何なの？　何人かしか使ってないけど、逆に特別っぽくて私も仲間に入れて欲しいんだけど！」
美鶴の使った呼び名について近くで聞いていた女子たちが話し合う。
現在、学園内でその呼び方をしているのは七歌とアイギスの二人だけ。チドリは時々使っているが、他の生徒たちは何故八雲と呼ばれて

いるのか理由を知らない。
けれど、先ほどの美鶴の雰囲気は明らかに意味を知って使っていた様子だった。
七歌たちと同じ寮で暮らしているので、その関係で意味を知っていたのかもと女子たちは予想するが、自分からそれを尋ねに行く勇気がある者はいない。
「あー……俺、修学旅行が終わったら桐条先輩に告白するわ。あんな優しい笑顔マジ反則だろ」
「気付いてないなら言っておくけど、あれ有里にしか向けられてねーから。そも、お前の存在とか認識されてないと思うぞ」
「うるせーばか！　それ言ったらお前なんてアイギスさんに挨拶して、どいてくださいって返されてたじゃねぇか」
「ちがいますー！　あれは俺の向こう側に有里がいてタイミング悪かっただけですー！」
一方、幸運にも美鶴の微笑みを見る事が出来た二年の男子が戯言を抜かせば、同じテーブルにいた男子が現実を教えてやった。
夢の中で生きていたい少年にとって現実とは心を引き裂く残酷な刃。
友人からそんな物を受けてしまった少年は、ならばお前も同じように痛みを覚えろと昨夜の話を持ち出してくる。
そうなれば当然言われた方は多大なダメージを負う訳だが、男子らがそんな不毛な争いを始めたのを横目に、湊は自分の皿に料理を盛るとテーブルへとすぐに帰っていく。
おかげで湊と美鶴のやり取りは後から食堂へ来た者たちにも伝わり、瞬く間に月光館学園の関係者らに知られるところとなった。

第三百八十話　温泉ばったり作戦

夜――旅館

本日も京都の観光地を巡ってから旅館に戻ってきた湊は、泊っている部屋に併設された屋上庭園で夜景を眺めて一人休んでいた。

自我持ちたちは部屋で休んでいる者もいれば、露天風呂に入っている者もいる。

これまで戦いばかりでまともに休めることなど少なかっただけに、こうやって死に戻ってからでも時間を取れて良かったと感じている。

無論、東京に戻ってからは再び忙しい日々が始まるのだろうが、ストレガや幾月の行動はそれほど警戒する必要はないだろうと思っていた。

あちらで脅威となり得るのはワイルド能力者の理と人工ワイルド能力者の玖美奈で、強いて言えば全長三十メートルの巨大ペルソナ〝テュポーン〟を持つスミレも含むくらいだろう。

何せ、ストレガたちは幼少期に研究所で誰よりも死を身近に感じてペルソナを得ているのだ。

薬の副作用で生きられて残り数年。故に未来を見ず、〝今〟というその瞬間を生きることを彼らは決めている。

同じ適性値であれば揺れないからこそ強いが、その分、彼らには変化し得る〝可能性〟が欠けている。

それはつまり、実力で劣っているとなれば、彼らにそれを覆すことはほぼ不可能である事を意味していた。

（……あいつらの中で、変化する可能性を持っていたのはマリアだけだった。死を待つ者と未来を生きられる者の差があいつらからそれを奪った）

マリアはチドリと同じように結合した黄昏の羽根を移植した結果、その適性が強化されて制御剤が不要になった。

また黄昏の羽根の力を増幅する効果により、時間経過によって制御剤の副作用に蝕まれていた臓器の状態も回復し、平均にある程度近いくらいには生きられるはずだった。

けれど、本人曰く湊の仇討ちに失敗し、玖美奈がやられたことで激昂していた理の返り討ちに遭って死んだとか。
生きられたはずの者が死に、死ぬはずの者たちが今も生き続けている。
己の命に何の価値も感じていない青年がそう思ってしまうのが最大の皮肉だろうが、何とも儘ならぬものだと思いながら彼は空に浮かぶ月を見つめた。
(タカヤたちの対処は他のやつらでも出来る。けど、擬似的だろうとワイルド能力者の相手は荷が重いか)
戦闘慣れしている事を除いても、ストレガたちに実力で大きく離されていたのは過去の話。
今の特別課外活動部の者たちならストレガたちと戦えるだけでなく、しっかりと対処すれば簡単ではないにしろ勝つことも出来るだろう。
ここ二ヶ月ほどの間に彼らも変わった。口先だけでなく、心の在り方自体が変わったのがペルソナにも顕われている。
過去の経験やその死生観によって変わらぬラビリスやコロマルのような存在もいるが、彼女たちは最初から他者の進化後のペルソナ並みのポテンシャルを持っている。
その点で言えばチドリも同じはずだったが、彼女は湊の心臓を移植された事で力が混ざって強化されたのだろう。
特異点である湊やシャドウの王である綾時を除けば、完全な死から復活し湊の力を一部得たチドリの適性値は理をも凌駕している。
無論、適性値は保持しているエネルギー量の目安であるため、それ即ち強さという訳ではないが、適性値が高い者ほど強い傾向にあるというのが今までのデータから分かっている。
高同調状態になって空を飛ぶなどの技は使えないが、溜めて放った一撃で最後のアルカナシャドウを倒した話を聞いた限りでは、今のチドリも最大火力で理や玖美奈を上回るだけの力はあった。
(ただ、機動力の方は少し心配か)
いくらチドリが火力で勝ろうとも、空を自由に飛べるアドバンテー

ジは大きい。
遙か上空から遠距離で攻撃されれば、まともに対処することも難しくなる。
固定砲台と化した状態で強力な攻撃を放つことが出来ても当たらなければ意味がない。それならば、自在に動ける中火力戦力の方が有用なくらいだ。
メンバーの中で自在に飛べる者は高同調状態になれる湊と綾時だけ。次点で、物理攻撃と防御に優れているアテナに乗ったアイギスが来るだろうか。
別にペルソナに乗るだけならば、七歌の持つコウリュウやコロマルのケルベロスも乗りやすい形と言えるだろう。
だが、アテナ以外では空中で攻撃を受ければ耐えられない可能性が高く、そんな状態で空中戦に挑むのは難しい。
そうでなければ順平のトリスメギストスなどは単独でさえあれば空中戦も可能なポテンシャルはあるのだが、探知能力がなくペルソナを操る際に目視確認が必要な以上、どうやっても遮蔽物の多い街中では戦い方に限界があった。
（……まぁ、戦うとなれば俺か綾時で抑えられる。問題は綾時の正体の方か）
様々な理由によって、理と玖美奈の相手は自分か綾時がする事になる可能性が高いと湊は結論付ける。
別にそれは前から分かっていた事なので、今更大して残念に思ったりもしないが、青年は徐々に明かりが減っていく夜景を見ながら今後問題になりそうな事柄について考える。
綾時の正体がシャドウの王たるデスだと知っているのは彼だけだ。
当然、ベルベットルームの住人などは気付いているだろうが、チドリたちは勿論、ＥＰ社の人間にだって事実は伝えていない。
シャドウは人類の敵だと、排除すべき脅威だと思っている者らが知れば、その事は間違いなく問題になるだろう。
中でもどういう訳か最初から綾時を警戒しているアイギスは、正体を知れば自分が警戒していた理由を理解し、彼を排除しようと動き出

すに違いない。
綾時自身も今の平穏な生活は一時の夢だと分かっている。
彼は終わりを告げる者、どうあっても七歌たちとは別れる運命にある存在だ。
ただ、そうだと分かっていても、湊は出来る限りの時間を平穏に過して欲しいと考えていた。
その存在は人ではなく、生まれた時点で世界の終焉を決定付けるものだと分かっているが、それでも彼には人間としての心があった。
相手が友好的で敵対の意思もないのであれば、湊個人は〝その時〟が来るまで動くつもりはない。
出来る事ならば、決戦が始まるまで彼が平和に過ごせますようにと祈り、湊は振り返ると部屋に戻った。

――露天風呂

湊がそんな風に友人ために祈っている頃、綾時は順平と一緒に真田と荒垣を誘って一階の露天風呂に入っていた。
夕食後の点呼を終えれば後は自由時間。先輩たちを誘うときには、今日は雲が無いから街が暗くなってくれば星がよく見えるらしいと言って誘った。
勿論、そんなのは適当に考えた口実であって、二人には別の目的があったのだが、偶然にも今夜は寒さはきついが空気が澄んでいるのか星がよく見えた。
時間が遅いこともあって、高級老舗旅館の露天風呂も今は自分たちだけの貸し切り状態。
東京とはどことなく違って感じる綺麗な星空を眺めながら、何という贅沢な時間なのだろうかと真田と荒垣がゆっくり温泉を楽しんでいれば、頭にタオルを乗せた綾時が暢気な声で他の者らに話しかけた。
「そう言えば、知ってる？　この露天風呂って男湯と女湯が時間交代制なんだよ？」
各部屋に置かれていた施設案内にも書かれていたし、脱衣所の入口

のところにもそれは書かれていた。
出来る限りゆったりと温泉を楽しんでもらいたいが、大勢の人に利用してもらうためにと一時間半で男女が切り替わるようになっている。
中の大浴場だけでなく、露天風呂の方にも目立たないデザインの時計が置かれ、利用客にも時間を意識してもらうようにしているようだが、だからこそそれを悪用する者もいた。
綾時に話題を振られた事で彼の方を向いた順平は、わざとらしい惚けた口調で返す。
「なんだとー。もし、途中で変わってしまったら大変だぁ。でも、もしそうなっても、それは事故だよなぁ」
「それはそうでしょ。先に入ってたのは僕らだし。脱衣所のカゴに着替えもあるんだから、人が入ってると分かって来たなら僕らに責任はないよね」
最近では鍵付きロッカーを設置しているところもあるが、この旅館では風情がないからと木棚にカゴを置いてあり、利用客はそこに着替えを置いて温泉に入る事になっている。
ロッカーならば扉が閉まって鍵が無い場所があれば目立つのに対し、カゴに着替えを置いていくタイプでは場所を選んで、出来るだけ着替えを平坦にすれば目立たない。
綾時と順平は昨日の内に客がどの位置のカゴを使い易い傾向にあるかを調べ、そことは離れたカゴを本日は利用していた。
一緒に温泉に来たときには全員近い位置のカゴを使用するので、真田と荒垣も知らず知らず彼らの狙ったポジションのカゴを使い。
さらに、他の者が服を脱ぎ始めたタイミングで順平がトイレに行ってくると告げ、綾時を含む三人が身体を洗い始めたのを確認してから出てきた順平が、真田と荒垣の着替えをしっかりと平坦にしておく気合いの入れよう。
あくまで事故だと保険を掛けつつも、初日に仲間を失った男たちは最終日のこの時間に全てを懸けていた。
急に妙な調子で話し始めた二人を怪訝に思った荒垣は、時計の方を

見つつ問いかけた。
「んで、その交代する時間ってぇのはいつなんだ？」
「ええと、いつだったかなぁ。知ってるかい綾時君？」
「うーん、僕も覚えてないなぁ。でももしかすると、結構ギリギリかもねぇ」
まだ惚けた演技を続ける二人を見て、流石に真田と荒垣も二人の狙いに気付く。
ここは月光館学園の関係者だけで無く一般客も利用しているのだ。
一歩間違えれば大変な事になるんだぞとくだらない事を考えた二人を揃って諌める。
「お前ら馬鹿だろ。暗い方が星が見える、なんてもっともらしい理由で誘ったと思えばくだらない」
「つか、一般客なら一発でアウトだぞ。勿論、女教師や女子でもアウトだが」
月光館学園の関係者であれば、来年以降にこの旅館を利用する事を考えて大きな問題にしない可能性はある。
だが、反省文程度で済むとは思えない。停学か、それとも退学か。少なくとも覗き野郎のレッテルを貼られて今後は過すことになるだろう。
そんな危険を冒してまで、何がお前らを駆り立てるのだと視線で問えば、真面目に考えすぎている先輩二人に順平が笑って返した。
「ははっ、冗談ッスよ。確かにギリギリで来たっスけど。別にマジで覗くつもりはなくて、なんつーか度胸試しっぽい思い出作りにやってみただけッスから」
「度胸試しという響きには惹かれなくもないが、ならもっとマシな方法でやれ。京都なら怪談のモデルになった場所くらいいくらでもあるだろ」
「まぁ、女子と一緒に肝試しなら喜んでやりますけどね。野郎だけでそういうのは勘弁ッス」
真田も荒垣も何となく男臭い響きに惹かれなくも無い年頃だ。
橋の上から川に飛び込むような面倒な度胸試しは嫌だが、怪談のモ

デルになった場所に行ってくるというイベントであればやってみてもいいと感じる。
どうしてそういう方向性にしなかったのかと聞かれれば、順平は女子が絡まないイベントでは色気が無いからだと真面目に答えた。
聞いた二人は度胸試しを口実に女子と近付きたいだけかと察し、くだらない事に付き合ってられるかと腰を上げようとする。
だが、そうはさせないと綾時が話題を振った。
「先輩たちは女性と浮いた話はないんですか？　ほら、寮には素敵な女性が揃ってるじゃないですか」
「ある訳ねーだろ。つか、寮の奴らをそういう目で見たことはねぇ」
「俺もないな。ファンクラブというやつがあるのは知ってるが、そもそも恋愛に興味は無い」
シャドウとの戦いは半端な覚悟では出来ない。恋愛に現を抜かしている暇など無いと真田たちは言う。
しかし、順平は知っていた。この二人がとある寮生を初対面だった時にナンパしていた事を。
「うっわ。前に海でナンパしてた人間とは思えねぇ発言だぜ。綾時、この人らアイギスをナンパしたことあるんだぜ？」
「へぇ。あ、でも、そういう事か。アイギスさんは湊にゾッコンだからね。今は傷心中って事かな」
『ちがうわ!!』
確かに屋久島でアイギスをナンパした事はあるが、あれは未遂だった上に恋愛感情が絡んでいた訳ではない。
だというのに、振られて恋愛休止中と思われては堪らないと二人は揃って否定した。
このままでは自分たちだけが恥をかくことになると思った真田は、得意な話題ではないがこちらから攻めさせて貰うと順平に話しかけた。
「そういうお前はどうなんだ？　いつもフラフラとしているが、誰か一人くらい本気になった相手はいないのか？」
「え、オレっち？　いやぁ、べ、別にそういうのはいないっつーか。恋

愛初心者のオレにはまだ早いっつーか」
「……怪しいな。そう言えば、九頭龍や岳羽がお前がいやらしい視線で見てくることがあると言っていたぞ」
「いや、それはマジで違っすよ!?」
順平は隠してはいるが一応気になる相手くらいはいた。
だが、その相手と結ばれる可能性は限りなくゼロに近いと分かっているので、そういう事は考えないようにしていたのだ。
それを真田に怪しまれた事で、別にそういう相手はいないと誤魔化そうとしたのだが、完全な濡れ衣を着せられそうになったことで本気でそこは否定する。
仮に七歌やゆかりにいやらしい視線を向けていたとしても、それはミニスカから太股が見えているだとか、襟の広いシャツを着ていて鎖骨が見えているだとかで、そこに視線が行くのはあくまで思春期男子として当然の反応の範疇であった。
何より、七歌は冗談っぽく言っていて分からないが、ゆかりをはじめとした数人は一人の青年に想いを寄せている事が分かっている。それで夢を見ろという方が難しいだろう。
「真田さんらも分かってるでしょうけど、ゆかりっちとか何人かはマジで希望ないッスから」
「そういや、美紀の記憶戻ったんだってな。どうすんだアキ?」
「……誠実な付き合いを心掛けるなら条件付きで許……さ、ないこともない」
美紀はずっと想いを隠していたが、ストレガに襲われた日に思い出を失うと分かって想いを彼に伝えていた。
記憶を失っていた間は湊との思い出も消えていたので、美紀が抱いていた恋愛感情は消えていたのだが、記憶が戻ったとなれば、再びその想いが湧き上がってきているはずだ。
兄として半端な人間は妹の彼氏として認めないと公言している真田も、妹の命を何度も救ってくれている青年を認めないなどという事は出来ない。
ただ、それは責任を持って節度ある付き合い方をするならばの話

だ。
苦虫を噛み潰したような表情ながらもそれを口にすれば、他の者たちは意外だと驚いてみせる。
「へー、真田さんが認めるなんてあり得るんスね」
「まぁ、流石に何度も妹を救われてりゃ認めるしかねぇよな」
「うるさい！　条件付きだと言っただろ。未成年の内は六時が門限で、接触は手を繋ぐまでだ！」
真田が口にした条件は小学生の子どもに課すようなもので、それを聞いた他の者たちはやっぱり成長してないなと呆れた目をする。
妹の恋人になってもいいと認めたのなら、高校生らしい恋愛の範囲でならば自由にさせれば良いのにというのが順平たちの気持ちだ。
まぁ、一人っ子の彼らと妹のいる真田では価値観が異なるのはしょうがないのかもしれないが、そんな風に彼らが話していると、入口の方から引き戸の開く音がした。
「え、マジかよ。誰か来たぞ!?」
「……どうすんだ。お前ら」
「待て、シンジ。男子の可能性も残っている」
まさかこの時間に人がくると思っていなかったため、順平たちは温泉中央にある岩の影に隠れた。
そこに隠れていれば入ってきたばかりの人間には見えないので、どうか男子であってくれと祈りつつ様子を窺う。
すると、外に出てきた者たちの話し声が聞こえてきた。
「あ、ちょっと寒いですね」
「でも、その分星も綺麗に見えとるで」
「……いいから、早く身体洗って浸かりましょう」
聞こえて来た声は彼らも聞き覚えのあるものだった。
一般客よりはマシだが、身内がいると分かった事で真田が人を殺せそうな鋭い視線で他の者らを睨む。
「……絶対に見るなよ」
恋人になってもいいと認めた青年ですら妹の裸を見る事を許すつもりは無いのだ。

いくら幼馴染みや仲間だろうと見れば殺すと本気の声色で呟けば、順平たちも真剣な顔で頷いて返す。
だが、その点については理解したにしても、彼らが今現在窮地に立たされているため、どうにか現状を打開する必要があるのは確かだ。
身体を洗っている内に植え込みに隠れるか、反対側の壁際を通って出て行くか。
四人が考えていると、再び引き戸が開く音がする。
「わぁ、さむーい！　すぐシャワー浴びて温泉つかろ！」
「七歌、今日は水かけたら本気で怒るからね」
「いやぁ、最初に水が出たら私のせいじゃないし」
「床向ければいいでしょうが！」
七歌とゆかりの話し声に加えて、さらに数人分の足音も聞こえてくる。
湊では無いので正確な人数など聞き分けられないが、まず間違いなく特別課外活動部の女子たちは勢揃いしている事だろう。
となれば、最初に順平と綾時が言っていた事故や間違えたなどの言い訳は効かない。美鶴がそれを許すなどあり得ないから。
「おい。美鶴もいるなら間違えたじゃ済まんぞ！　言い訳するまでも無く処刑される！」
「な、なら、どうするんスか？　逃げるなら身体洗ってる今が一番のチャンスですけど」
「無茶言うな。あいつらが気付かない訳がねぇ。それなら、茂みに隠れた方がまだ助かるチャンスがある」
入ってきた女子の中で警戒すべきは汐見姉妹と七歌だ。
彼女たちは小さな音でも異変に気付く可能性が高い。
さらに、アナライズ能力を持っている風花やチドリも気配に敏感だと思われるので、下手な行動は自分たちの寿命を縮めるだけと言えた。
だが、まだ女子たちにいることがバレていないのか、普段ならまず聞くことが出来ないような話題の会話まで聞こえてくる。
「やはり、姉妹だな。君もラビリスも羨ましいくらい綺麗な肌だ」

「わたしたちの身体は八雲さんが作ってくれたものですので自慢の逸品であります。ですが、美鶴さんも平均値を大きく上回るサイズの胸をしていますので、一般的な女子からは羨ましがられるのでは？」
「君に言われてもな。別に自慢するようなものでもない。むしろ、戦う事を考えれば邪魔なくらいだろう。重いせいで肩も凝るしな」
美鶴もアイギスも平均的な女子より非常にグラマラスな体型をしている。それでいて腰はしっかりとくびれているのだから、同性から羨ましがられ、異性を魅了して当然。
自分たちの隠れている岩の向こうにそれが晒されていると思うと、男子たちは股間を隠しながら自然と腰を下ろしてしまう。
ここに来て女性経験の少なさが仇となり、岩の向こうにどのような光景が広がっているのか。逃げるための思考がピンク色の妄想に削がれてゆく。
だが、比較的余裕のあった綾時がここで起死回生の一手を思い付いたと提案した。
「……よし。湊に助けを求めよう」
「出来るのか？」
「僕も一応探知能力があるんで、やってみます」
自分たちだけでは助かる可能性は低い。だが、湊なら何かしら脱出出来る策を授けてくれるに違いない。
荒垣だけでなく、他の者たちからも期待の籠もった視線で見つめられながら、綾時はスイートルームにいる湊へ通信を繋いだ。
「湊、湊。助けて欲しいんだけど」
《……なんだ？》
「女性陣が後から入って来ちゃって、バレずに脱出したいんだ。何か方法はないかな？」
すぐに通信が繋がれば向こうからは気怠げな声が返ってくる。
湊の面倒臭そうな雰囲気はいつもの事なので、それに構わず返事を待っていると、綾時の期待したものとは異なる答えが返ってきた。
《そのまま声をかけて、先に出てもらえばいいだろ》
「ちがう。バレれば終わりなんだよ」

《……お前一人だけでいいのか？》
「無理なら僕一人だけでもＯＫさ」
全員助けることが出来ないなら、最悪、自分だけでも助けて欲しい。
湊の声は他の者に聞こえていないが、綾時は自分の言葉を口に出して会話していれば、他の者たちもどういった会話があったのか予想出来たらしく順平と真田が綾時の腕を掴んだ。
「おい。まさか、一人だけ裏切ったりしねぇよな？」
「というか、あいつの声を俺たちにも聞こえるようにしろ。出来るだろ」
「え、えーと。湊、皆にも声を聞こえるように出来るかな？」
《……注文が多いな》
自分だけでも助けて貰うつもりだったが、それを阻止された事で綾時はしょうがなく他の者にも通信を繋いでやってくれると頼む。
対象を多く選ぶだけなので、別に大した手間でもないのだが、とりあえず覗き魔たちの対応は面倒らしく湊の声にやる気は無い。
《それで、お前らが逃走するためのルートを確保したらいいのか？》
「ああ。美鶴や美紀にバレないように頼む。処刑だけでも遠慮したいが、兄としての尊厳が掛かっているんだ。頼む」
《……なら、お前らから見て右側だけ時の流れを操作する。そのまま壁際まで進んで、壁の方を向いたまま女子たちの方を一切見ないまま脱衣所へ戻れ》
言われて真田たちは右側の方を見る。そちらには茂みなどが一切無いため、隠れることは出来ないが走って通るには好都合だ。
既に時流操作を発動したのか、女子たちの話し声も聞こえなくなっており、これなら行けそうだと湊に心の中で感謝しながら全員で壁際へと急ぐ。
湊の時流操作がいつまで持つか分からないため、出来る限り急げと壁際に到着すれば、後は壁の方を見ながら壁に沿って走れば入口までいける。
そうして、男子たちは壁の方を見ながら走ろうとするも、前方確認は必要だよなと心の中で言い訳して全員がチラリと女子たちの方へ

視線だけ向けてしまう。
女子たちがいるのは前方では無く左側だ。そちらを見るには最低でも顔を正面に向けて、そこから目だけ左へ向ける必要がある。
つまり、周りからみれば彼らが湊の言いつけを守らなかったことは明白なのだ。
それに気付かずにどさくさに紛れて女子たちへ視線を向けた男たちは、バスローブを着ている美鶴と目が合った。
瞬間、どうして目が合うんだという驚きで彼らの走りが鈍る。
すると、時流操作で異なる時の流れにいるはずの美鶴の声が耳に届いた。
「お前たち、右側の壁を見たまま入口へ向かうように言われたのが聞こえなかったのか？」
「なっ!?　い、いや、これは前方を確認しようとしていただけで」
「ならば、左側にいる私と視線が合うのはおかしいだろう」
動揺しつつも答えながら彼女たちを見れば、美鶴の周りにいる女子たちも全員がバスローブを着て身体を隠していた。
一体どうしてと疑問と、何故湊の時流操作が効いていないんだという驚愕で彼らは足を止める。
女性陣の瞳は氷のように冷え切っていて、普段は優しい風花ですらまるでゴミを見るような目をしている。
性格のキツい者から睨まれるよりも、優しい女子から軽蔑される方が心にくる。そんなどうでもいい情報を記憶しながら、どうやって言い逃れをしようか考えていれば、湊から通信が入った。
《ああ。そういえば、エールクロイツが七熾天に変化してからは時流操作が出来なくなっていたんだった。すまない。忘れていた》
「おい！　これマジでシャレにならないパターンのミスだろ！　つか、絶対に分かっててやっただろ！」
湊の内蔵している黄昏の羽根は、枚数が増えた事で使える能力が変化している。
時間をかけて解析すればまた時流操作も出来るようになるかもしれないが、今はまだ使える状態では無かったらしく、出来るような気

がしたんだがと悪びれた様子もなく謝ってくれれば、どれだけ鈍い者でも彼がわざとミスしたことは理解できた。
　その事を順平が指摘すれば、湊の通信は綾時の言った通り〝皆〟に聞こえるようになっていた事で、彼を責めるのは間違っているだろうと美鶴が順平を睨んだ。
「有里のせいじゃないだろう。我々が後から入った事は認めるし。お前たちが有里の言いつけを守っていれば不問にするつもりだった。だが、お前たち四人は言いつけを守らず、姑息にも女子の裸を見ようとした以上、処刑は免れない」
　どうやら本当に全ての経緯を分かっているようで、これは言い逃れしても無駄だろうと男子たちの心が萎れていく。
　しかし、あわよくばと期待して女子の方を向けば、全員がしっかりと膝下まで丈のあるバスローブを着ていた事にガッカリした順平が、最後に教えて欲しいと質問を口にする。
「て、てか、なんでバスローブなんて着てるんだ？」
「八雲さんからの通信で皆さんが出られず困っていると教えて貰いました。なので、保険としてバスローブを着ておき、避難誘導に従えば見逃してやって欲しいと頼まれたんです」
「ウチらもそういう事ならしゃあないなと思ったけど、先輩らも揃ってこっち見とるんやもん。言い逃れ不可能やろ」
　因みにバスローブはアイギスが付けているリストバンドから取り出した物だ。
　湊は最初にアイギスに通信を繋ぎ、全員にそのまま会話しながら通信を聞いて欲しいと伝えることを指示。全員が湊の指示通りに普通の雑談をしているように見せながら事情を説明し、バスローブを着たのを確認してから男子らの逃走を手助けした。
　つまり、湊はちゃんと男子たちを助けるための手も打っていたのだ。
　その言いつけを守らず、卑怯にも女子たちの裸を見ようとした者たちにかける慈悲など無い。
　アイギスがリストバンドから召喚器を取り出し、それを美鶴に渡せ

ば彼女はしっかりと頷いてからそれをこめかみに当てた。
「……これが新しく得たペルソナの初陣かと思うと情けなくなるな。処刑しろ、アルテミシアッ!!」
美鶴の頭上に水色の欠片が渦巻き、その中から青いドレスに身を包んだ女性型ペルソナが現われる。
金属製の多節鞭をその手に持った赤い仮面の女王の名は〝アルテミシア〟。
ペルシア戦争に参加し、女性でありながら軍で指揮を執り、その知略と勇猛さ数々の戦果を上げた英傑である。
美鶴の新たなペルソナを初めて見た男子たちはそのオーラに圧倒され、ペルソナの鞭が美鶴の女帝のイメージにピッタリだと余計な事を考えている内に視界が氷に閉ざされ意識が途絶えた。
その後、氷に閉じ込められた彼らは湊が遣わせたセイヴァーのゲートで男湯の大浴場に転送され、気付けば熱い湯に四人で浸かっている状態で意識を取り戻す。
もっとも、彼らの着替えは転送されていなかったので、腰にタオル巻いただけの姿で部屋に戻るはめになったが、タイミング良く影時間になったことで何とか他の客に見られずに済んだのだった。

第三百八十一話　覗きから一夜明けて

１１月２０日（金）
朝――旅館
ついに今日で修学旅行も最終日。朝食を食べてから旅館を出れば、観光バスに大きな荷物を置いて、その後は夕方まで自由行動だ。
まだまだ神社巡りをしたいと言うなら電車やバスに乗って回るもよし。
自分は舞妓さんを探すんだと浪漫を追い求めるなら、恐らく無駄だろうが京都の町を駆け回るのも良いだろう。
今日日、高校の修学旅行で国内かよと文句を言っていた生徒たちも、今では時間が足りないぞと事前に組んでいた予定の再調整に忙しそうに騒いでいる。
海外は海外で良いところも沢山あるのだろうが、行ってみれば近所の山だって意外と楽しめるようなもので、多くの生徒がそれなりに京都への修学旅行を楽しんでいたらしい。
だが、皆がどうやって残る旅行の時間を楽しもうかと話している中、四人の男子が何故か旅館ロビーの長椅子に座って項垂れていた。
「先輩……昨日の事で女子たちが目を合せてくれないっす……」
「……耐えろ。俺なんて身内がいたんだぞ」
長椅子で項垂れていたのは特別課外活動部の男子メンバーたちだった。
ほとんど自滅と言っていいのだが、昨日の不幸な事故によって彼らは特別課外活動部の女子やチドリに美紀というメンバーたちに無視されていた。
気付けば男湯の熱い湯の中にいたので夢だったのではと考えたが、影時間の内にタオル一枚で部屋に戻ることになり、着替えてから改めて露天に荷物を取りに行った以上は全て現実にあった事なのだろう。
それを理解したために朝に食堂で会った際、揃って謝罪しようとしたのだが彼女たちは欠片も順平たちに視線を向けなかった。
最初は冗談だと思ったのだが、風花や美紀といった人の悪口を言わ

ないような心優しい者でさえも完全無視を決め込む始末。
唯一あった反応と言えば、思わず真田が「これではまるで以前の美鶴扱いじゃないか」と美鶴が湊に無視されていた時のようだと呟き、彼らの方を一切見ないまま目の前を通り過ぎた美鶴がヒールで彼らのつま先を踏みつけた事くらいだ。
そんな事でも反応には違いないので、とりあえず声は聞こえているらしいと痛がりつつ四人が安堵していれば、ビッフェスタイルで料理を取りに来た湊が彼らに背中を向けたまま、
「踏まれて喜ぶなよ。気持ち悪い」
と言ってきた事で温厚な綾時も揃って相手に掴みかかろうとする一幕もあった。
残念ながら彼に触れる前にプリンス・ミナトの精鋭たちが四人を拘束し、湊が料理を取って席に戻るまで解放されなかったせいで、彼らは余計に疲労を感じることになった訳だが、帰るまでこのままでは流石に精神的にキツいものがある。
中でも実の妹に覗き魔と認識され、アルテミシアに氷漬けにされる直前まで軽蔑の眼差しを向けられていた真田は未だに夢であって欲しいと願っているくらいだ。
どうして自分たちだけがこんな目に、そう考えて落ち込んでいると目の前の通路をゆかりたちが通り過ぎていく。
「うーん、お土産買うなら祇園商店街の方が良いかなぁ。買い忘れても最悪京都タワーにも色々あるけどさ」
「祇園商店街？　あ、舞妓さんに会えるかもって書いてますね」
「……ああ、湊が色々言ってた舞妓ね」
今日はクラス単位でいる必要がないので、ゆかりは風花とチドリと共に観光ガイドの本を見ている。
三人が一緒にいくなら美紀たちも行動を共にしそうなものだが、謝るためについて行くのも危険な気がする。
そう思っていると珍しい事に七歌と美鶴が湊を連れて歩いていた。
「で、そこの二階で舞妓風の着付けと化粧もして貰えるみたいなんですよね」

「流石に時間が掛かりすぎるんじゃないか？　観光した後、化粧を落として着替え直す必要もあるんだろう？」
「だから、着物は買い取って、化粧不要の八雲君の髪型だけやって貰えばいいかと」
「……前提がおかしいだろ」
七歌たちは実際に舞妓のコスプレをする話をしているようだが、どういう訳か湊が生贄に捧げられそうになっている。
彼の美貌は仕草と表情だけで男女問わず溜息を漏らす色気があるので、ちゃんと着付ければ化粧がなくとも問題はなさそうだ。
ただ、七歌の言葉通りにするとなれば、湊は一人だけ舞妓風の格好で新幹線に乗ることになってしまう。
自分たちは面倒を嫌ってコスプレを回避し、男である湊だけに着替えをさせるのはどうなのか。
そんな事を考えていれば、椅子に座っている四人を発見した七歌が手を挙げて話しかけてきた。
「よう、覗き四兄弟！　まーた現役ＪＫの生足みて鼻息荒くしてんのか？」
「してねーわ！　つか、そもそも生足自体みてねーよ！」
「きゃー、三男ケベ郎が怒ったー。こわーい、たすけて八雲くーん」
覗きの話が広まると自分たちの立場が危うくなるので、慌てて順平が否定すると七歌はわざとらしい口調で湊の影に隠れる。
その際、しっかりと彼に抱きついて身体を密着させるのを忘れないところに強かさを感じるが、彼女は周囲のファンクラブ会員らの怨嗟の視線を無視して真田、荒垣、順平、綾時の順に指さしていく。
「長男チラ見のケベ介、次男ムッツリのケベ太、三男足フェチのケベ郎、四男ソフトタッチのケベ定。四人揃って覗き四兄弟！」
「待て、七歌。四男だけ実際に触っているぞ」
「あぁ、じゃあ軽犯罪四人衆で」
「……痴漢は軽犯罪法じゃなくて迷惑防止条例だ。まぁ、昨夜の事ならその呼び名でもいいが」
美鶴も湊も意外と天然なので、ツッコミの入れ方も独特だ。

他の者ならもっとキレのあるツッコミを入れるのだろうが、二人が冷静に指摘した事で周りは犯罪の区分にも色々とあるのかと少しだけ賢くなった。

勿論、細かな区分は地方ごとに変わったりもするのだが、ここで重要なのは湊が〝昨夜の事〟という非常に気になる単語を口にした事だ。

周囲の注目を集めつつ七歌が口にしていた話題と合わせれば、まるで四人が昨日の夜に覗き行為に走ったようにも受け取れてしまう。

まぁ、実際にそれに近いことをしでかしたのだから言い訳も出来ないが、周りにいた男子は美鶴もいるのにある意味すごいぞと尊敬の眼差しを送り、逆に女子たちは〝折角イケメンだったのに〟と残念そうにヒソヒソ小声で話している。

このままでは学校中に自分たちの痴態を知られる事になる。そう判断した荒垣が話題を変えるように話しかけた。

「九頭龍、お前から話しかけてきたって事は、俺たちの話を聞いてくれるって期待してもいいのか？」

「え、なんで？　折角、両手に花で旅行楽しんでるのに相手する訳ないじゃん」

話しかけてもらえた事で希望が湧いたと思えば、単に煽るために声をかけただけだった。

七歌本人は湊と美鶴の関係が改善されたことで、二人をセットで楽しめると喜んでいただけなので、勝手に期待されても困るんだよねとその視線は冷たいままだ。

確かに勝手に期待したのは荒垣たちであるが、そういう事ならむしろ声をかけてこなくて良かったのにと内心で毒づきたくなる。

しかし、そういう事を口にしてしまえば、また今朝の食堂での事のように美鶴にヒールで足を踏まれるかもしれない。

あの時は話が聞こえていると分かって安堵したが、実際はかなり痛くて靴下の下で内出血していた。

なので、触らぬ神に祟りなし。寮に帰るまで大人しくしていようと四人は場を離れようとした。

「あ、真田先輩。真田から伝言です」
しかし、席を立って離れて行こうとする真田に湊が声をかけた。
彼から伝言を聞くとは思っていなかったので、意外だと思いつつも真田は足を止める。
視界にすら入れて貰えない状況なので、妹の言葉が人伝いだろうと聞けるのは嬉しい。
けれど、状況を考えると決別の言葉である可能性も十分に考えられるので、辛い内容ならば聞きたくないなと微妙な表情で返事を返した。
「……なんだ？　きつい内容なら御免だぞ」
「……どのレベルからきついと感じるのか分かりませんが、両親へのお土産は自分が買うので家に届けに来なくていいとのことです」
「ぐっ……」
精神的に弱っている状態で、更なるダメージを嫌がった真田が保険をかければ、思いの外地味にダメージを負う内容が返ってきた。
湊も自分で言っていたがどの程度ならきついと思うかなど個人差がある。仮に湊が自分の主観でレベルを設定すれば、他人ならその場で命を絶つようなレベルからが〝きつい〟のスタートになってしまう。
勿論、今回はそのようなレベルに達していない内容でしかなかったのだが、妹に理由を付けて家に来ようとするなと遠回しに拒否されれば、真田はその場で地面に膝をつきそうによろめいた。
すかさず順平と綾時が両脇から支えてやり、どうにか転倒を防ぐと綾時が湊に真剣な表情で話しかけた。
「湊、君なら逆転の一手を打てるんじゃないの？」
「……かもしれないが、俺にはお前らを助ける理由がない」
「僕たちはどうすればいいか分からないくらい困っているんだ。どうか助けて欲しい」
本当にどうすれば良いか分からない。不安そうな表情で綾時は友達に助けを求めた。
他の者たちは女性経験の不足、というより経験がゼロだからこその

思考停止だが、綾時は女性だけでなくこの世界での対人コミュニケーションの経験不足が原因だ。
仮に高校一年の頃から過していれば、湊を基にした基礎スペックの高さで何かしらの解決手段を思い付いた事だろう。
しかし、今の彼にそんな事は出来ない。生の人との触れ合いや繋がりを感じたくて人としての姿を得た綾時は、こんな事で彼女たちとの繋がりが断たれるのは避けたいと湊がくれるであろう逆転の一手に懸けた。
それが愚かな人間を散々見逃してくれていた鬼を起こすことになるとも知らずに。
「……あの場にはチドリもアイギスもいた訳だ。それでも俺はお前らに助かる道を作った。胸の内から溢れ出しそうになる感情を飲み込み。罰を受けた全員を五体満足で安全な場所にも移動させた。これ以上を望むのであれば、俺は強欲な獣を狩らなくちゃならない」
そう話す青年の瞳は金色から蒼色に変化し、その場一帯の空気が張り詰め気温が急激に奪われていく。
昨夜から湊に助けを求めていた者たちも、突然の湊の変化によって自分たちがどれほど馬鹿げた頼み事をしていたか理解したらしい。
彼が激怒するのもある意味当然だ。何せ、自分の大切な少女の裸を見ようと画策した者らを何のメリットもなく助けさせられたのだから。
最初に頼みを聞いたのは綾時が彼の唯一認める友人だったからだろう。
弱者救済の装置ではなく、彼はただ友達が困っているから助けたのだ。
けれど、そうしながらも湊はチドリやアイギスの裸を見ようとした者たちへの怒りを当たり前のように抱いており、美鶴に氷漬けにされた事で罰は受けたんだと己を納得させていた。
そんな彼の想いを、厚意を無碍にするような恥知らずな頼みを再びされたとなれば、湊もただ感情のままに敵を排除しようと思ってしまう。

湊の上半身が左右に揺れるようにブレたと思えば、綾時と順平は視界が閉ざされ足が地面を離れる。
二人は正面から顔を掴まれ、それぞれ片手で持ち上げられていた。
「……目があるから見たいと思ってしまうのか、生殖能力があるから不埒な考えを抱くのか。お前らはどちらだと思う？」
「ご、ごめん。本当に申し訳なかった！　二度と、二度と彼女たちにそんな前はしないと約束するからっ」
「オレたちが悪かった！　土下座でも何でもするから、もう一度だけ、もう一度だけ挽回するチャンスをくれぇ!!」
顔を掴んでいる湊の手を、両手を使って剥がそうとしながら足をばたつかせて逃れようとする二人。
だが、湊の手は錆び付いて固まった機械のように欠片も動く気配がなく、締め付けられている訳でもないのに抵抗している二人は徐々に元気を失ってゆく。
仲間二人が墜とされれば次は自分たちに違いない。そう考えて腰が引けている真田たちに視線を向けて湊が口を開く。
「お前らには何も期待していない。なら、挽回する必要もないと思わないか？　真田だって高校生にもなって妹の裸を見ようとする下衆など身内に必要ないと思っているぞ？」
「ち、違う！　誤解だ！　俺とシンジはこの二人に星がよく見えるからと誘われただけで！」
「本人たちに聞いてみろ！　深夜の方が町の明かりも減ってるつって誘ってきたんだ！」
全くの偶然ではあったが順平たちが言っていたように、あの時間は町の明かりも暗くなってきていたため冬の星空が見えていた。
熱い温泉に浸かりながらも、顔は冬の張り詰めた冷たい空気に触れていたことで逆上せる心配がなく、つい長湯しようと思ってしまった事で逃げるタイミングを失ったのだ。
自分たちが迂闊だった事は認めるが、少なくとも最初からそんなつもりだった訳ではない。
妹の裸見たさに覗きに走ったと思われては堪らないので、そんな風

に真田が弁明すれば、湊は掴んでいた手を離して綾時と順平をその場に捨てる。
「いだっ」
「ぐぇっ」
足から着地できずに尻餅をついてしまうも、二人は何とか首の皮一枚で繋がったと助かった事実を喜び、慈悲をくれた青年を感謝の気持ちから拝み倒す。
傍から見ていれば、覗き魔が見逃して貰えた事に喜んでいるだけの間抜けな絵面なので、こんなやつらが同じ学校の生徒だと思うと情けなくなってくる。
少し離れた場所では耳まで真っ赤になった美紀が両手で顔を覆って小さくなっており、それを傍にいるゆかりやチドリが宥めているので、真田が再び美紀と話せる日は遠のいたかもしれない。
ただ、いくら人助けばかりしている青年でも、その裏で自分の感情を殺してでも助けていたというのは七歌たちにしてみれば意外な事実だった。
例え犯人がどんなクソ野郎でも日本の警官がちゃんと殺さず身柄を確保するように、彼も誰に命令された訳でもないのに感情を無視してでも目的を優先していたらしい。
仕事屋時代の彼を見ていれば、そういった面もすんなりと納得できたのだろうが、住む世界が違うからとチドリたちにも見せていなかったのだから、七歌たちが知る機会などあるはずがないのだが、知ったからには日常ではもう少し力を抜いても大丈夫だと言ってやりたい。
莫迦たちに背中を向け、瞳の色が金色に戻ったタイミングで七歌は話しかける。
「八雲君、りらーっくす！　もっと力抜いて生きないと疲れちゃうよ？」
「……全てが終わればそうしよう」
「せっかくの旅行だよ？」
「綾時と伊織は一日目の夜に他の男子らと共に覗きに挑み。他の者たちが捕まった事で、二日目は大人しくしていたんだ。まぁ、覗きに

行ったのは他にも何人かいたがな。とりあえず、信用出来ない人間ばかりの状況で気を抜いてはいられない。主に他所様への迷惑を防ぐために」

『……お疲れさまです』

まさか自分たちの知らないところで青年が覗き魔の制圧に奔走していたとは知らず、その場にいた大勢の女子たちが彼に頭を下げた。

仮にその事実を二日目の朝に知っていれば、二日目の夜以降は露天で羽を伸ばすことは出来なかっただろう。

自分たちの心と体の平穏が、同じ生徒である一人の青年と教員らの努力によって守られていた。

その事実を理解した女子たちは、彼や先生たちをもっと敬って接する事にしようと心に決めるのだった。

そうして、男子たちにとっては何とも居心地の悪い空気を残しつつも、月光館学園の生徒たちは修学旅行最終日を満喫するため町へと繰り出して行った。

第三百八十二話　さらば京都

午後――甘味処

十時には旅館を出ていた湊たちは、観光で色々と回りつつ昼ご飯を食べ終わると〝京都に来たからには抹茶スイーツを食べねば〟という七歌とゆかりの言葉に従って甘味処を訪れていた。

大きな通りから外れた細い路地にあるそこは、昔ながらの長屋を改装した趣のある造りをしている。

風花や美紀は京都らしくて雰囲気の良い店だと賞賛していたが、約一名は味が同じなら清潔感のある近代建築の方が良いだろうと風情の欠片も無い事を抜かしており、他の者たちも彼のそう言った部分には慣れたのかアイギスですら聞き流して店に入っていった。

ちなみに、この集団はペルソナ使いの女子に美紀と湊を足したメンバーで構成されており、旅館のロビーで土下座していた男たちはそちらでグループを作って回っているらしい。

天田のお土産を探すと言っていたので、恐らくそちらも暗いまま旅行最終日を過しているという事はないだろう。

まぁ、女子たちに彼らの様子を気にしている者は一人もいないので、湊も店内に入ると二つの席に分かれて座っている女子たちの許へ近付いていく。

一つのテーブルは六人掛け。片方には七歌、ゆかり、風花、美鶴という特別課外活動部が固まり、もう一つの席にアイギス、ラビリス、チドリ、美紀が座っていた。

どちらの席にも空きはあるので、どちらに座ってもいい状況ではある。

ただ、湊は読心能力を発動していないのに、メニューを見ている女子たちの背中から〝こっちに来い〟というオーラが出ている事に気付いた。

店員の女性はニコニコと笑っているだけで席に案内しようとしない。

恐らく、湊が店の外観を眺めている間に、先に店に入った七歌たち

がどっちに湊が来るか勝負しようと話していたのを聞いていたに違いない。
男女比が一対八のグループだ。一人しかいない男が女子たちの玩具にされるなど当然のこと。
ニコニコと楽しそうな笑顔の裏で、そんなろくでもないことを考えている店員に呆れつつ、湊はこれが自分の選択だとばかりに離れたカウンター席に座った。
瞬間、どちらに来るか勝負をしていた女子たちは驚愕し、青年の選択によって起こる女子たちの微笑ましい争いを想像していた店員も動揺している。
この程度で心を揺らすなど三流だぞ、と心の中で呟いた青年は席に座ってメニューに目を通すと、さらに追加だとばかりに即決で注文する。
「フォンダンショコラと温かいほうじ茶で」
「え、あ、はい。かしこまりました」
抹茶スイーツを食べるために七歌たちが調べた店である以上、この店は飲み物もスイーツも抹茶を推している。
七歌たちも最初から抹茶スイーツのページを見ていたので、店員はこの一団もやはり抹茶目当ての観光客かと思っていたに違いない。
だからこそ、湊は自分が一人だけカウンター席に座って動揺した相手へ、さらに抹茶など一切興味ないなと言わんばかりの品を注文した。
注文を受けた店員は用意しに奥へと向かったが、テーブル席の女子たちの方からは天邪鬼過ぎるだろうと呆れた視線が飛んでくる。
「有里君さぁ。ここ抹茶が売りの店なんだけど？」
「名産品を使って不味いものを作る方が難しいだろ。というか、抹茶なんてそのまま飲むのが一番良いに決まってる」
「いや、だからそれを使った美味しいスイーツを作るのが腕の見せ所な訳で」
湊は家柄や鵜飼桜の趣味もあって茶道を嗜んでいる。
本人はコーヒー派であり、普段は炭酸飲料をよく飲んでいるが、百

鬼家由来の技術習得の速さと舌が肥えている事もあって美味しいお茶を点てる事くらい出来る。
だからこそ、彼は自分が出来るんだから他の者が出来ていなければ、それは個人の才能の問題か企業努力が足りないのだと判断する。
他の者にすればそれはお前の能力が飛び抜けているんだぞと言いたくなるだろう。
ただ、湊にすればそれが仕事だろうといった感じで、金を取るならプロとして振る舞えという事らしい。
他の者も彼のそういった性格は分かっているため、色々と引っかかる部分はあっても注文を決めて頼んでいく。
それぞれ抹茶を使ったドリンクと抹茶スイーツを頼んでおり、ストレートの抹茶を頼んだ者はいない。
最初から抹茶なんてと拘っていなかった湊はともかく、他の者たちは抹茶を楽しみにしていたのではと思わなくもない。
注文を取った店員が奥へと注文を通しに行ったのを見送った湊は、身体を捻ってテーブルに座っている女子らに声をかける。
「……お前ら抹茶頼めよ」
「別に抹茶飲むて言うてないやん。抹茶使ったスイーツ食べようって来たんやで？」
「じゃがいもの産地でいきなりフライドポテトを頼む並みに素材への冒涜だぞ」
「美味しいやん、ポテト」
女子たちはあくまでスイーツを食べるのがメインの目的であり、抹茶自体はそこまで気にしていない。
ここに来るまでに女子たちの話をしっかりと聞いていればそれが分かったのだろうが、湊は人の話を聞いているようで聞いていない事があった。
ほとんどは彼にとってどうでも良いことなので、特別なにかの問題が起きることは無いのだが、こういうときには小さな情報の齟齬で認識に大きな違いを作るらしい。
そして、気にするだけ無駄と考える事にしたらしく、湊が料理を

待っていると注文をとった女性店員が大きなお盆を持って女子たちのテーブルへと向かう。
順番的に逆ではと思わなくもないが、抹茶スイーツを売りにしている事もあって、そういった料理はすぐに出るようになっており、逆にそれ以外の料理は準備に少し時間が掛かるのかもしれない。
七歌のテーブルの品を置いた女性店員は一度奥に戻り、今度はチドリらのテーブルの注文分を持って出てくる。
これで湊が最後だと確定した訳だが、女性店員がテーブルに料理を並べていると、厨房と繋がっていたのかカウンターの奥から小さなお盆を持った男性が現われた。
「フォンダンショコラとほうじ茶、お待ちどうさまです」
「……ありがとうございます」
湊に料理を持ってきた男性は何故かニコニコと本当に嬉しそうな顔をしている。
食事の場でそんなに見られていると気が散るのだが、こういった輩は無視することにしている湊はカップに入ったほうじ茶を一口飲んでからフォンダンショコラにフォークを入れる。
生地を切れば中から温かいチョコレートが流れ出し、湊はそれをディップしてから口へ入れる。
チョコレートを大量に使っているのか馬鹿みたいに甘いが、根底にカカオの苦みを感じるので喉が痛くなるほどではない。
癖のないほうじ茶と一緒に味わえばバランスも取れているし。甘い抹茶ドリンクに甘い抹茶スイーツを合わせるような偏食に比べれば良い注文の仕方だろう。
背中の方からは携帯で写真を撮る音などが聞こえており、心の中でさっさと食えと湊が思っていれば、まだこちらを見ていた男性店員が話しかけてきた。
「お味はどうですか？」
「……普通に美味しいですね」
「それは良かった。お茶はおかわりもありますよ」
「じゃあ、おかわりを」

多少熱くても気にせずグイッと飲み干すと、すぐに男性にカップを渡しておかわりを用意してもらう。
新たに注がれたお茶もどこかホッとさせる柔らかな香りを感じさせ、湊は再び馬鹿みたいに甘いフォンダンショコラと一緒に味わっていく。
その姿をいつまでも見ている男性店員に女子たちも気付いたようで、抹茶のロールケーキを食べていたチドリが男性店員に声をかけた。
「……なんで湊に構ってるの？」
「すみません。つい嬉しくなってしまいまして」
『嬉しく？』
男性店員の言葉を不思議に思って女子たちが同時に首を傾げる。
どうやら相手は別に湊のファンという訳でも無いようで、サインなどを目的に付き纏っている雰囲気は感じられない。
今の相手は積み木で遊んでいる孫を眺めるような穏やかな様子で、食事中の湊を見てどうしてそんな表情になるのかが分からない。
まぁ、湊の周りには彼が無表情で沢山のご飯を食べている姿を、慈愛に満ちた表情で眺め続ける女性が何人もいるが、男性店員の場合はそれとは全く別の理由だろう。
どうして湊を見て嬉しくなっているのか答えを待っていれば、男性店員は湊のお茶のおかわりをガラスポットに用意してから答えた。
「京都という事もあってお客さんのほとんどは抹茶を求めてくるんです。なので、うちでも抹茶のデザートを出していますが、元々は実家で取り扱ってるお茶とそれに合うデザートを出そうと思って開いた店なんですよ」
男性店員は五十歳くらいに見えるが、その実家はそこそこ続いているお茶屋らしい。
ここで出しているのはその実家から取り寄せている茶葉を使っているので、抹茶だろうがほうじ茶だろうがいくらでも用意は出来るという。
だからこそ、目的を抹茶だけに絞ってくるお客を見ると勿体ないと

感じると彼は話す。
「良いお茶はやっぱり飲むのが一番美味しいです。なので、私としてはお茶と普通のデザートを頼むこちらのお客さんのような注文の方が作り甲斐があります」
「そこらの女子高生は抹茶スイーツを食べたがるくせに抹茶の苦みを嫌う傾向にあるだろ。それを消すために砂糖で味を誤魔化すなんて素材の無駄遣いにしか思えないな」
「いやぁ、耳に痛いです。ですが、そうですね。ただ混ぜたのでは苦いし、色も中途半端になってしまう。私個人としてはほうじ茶の方がお菓子にしても本来の風味を残せるので、抹茶よりオススメなんですが」
　これはあくまでイメージの話だが、抹茶スイーツを求めてくる者たちは新緑のような明るい真緑のスイーツが出てくると思っている。
　そこでくすんだ本来の抹茶色を出してしまうと、ちょっとイメージと違うと勝手に落胆するのだ。
　食べれば普通に美味しいというのに、見た目のインパクトがそこまで重要なのかと作り手泣かせな顧客ニーズに悩む者も多く、美味しい抹茶を知っているここの男性店員はとくに勿体ないと思ってしまうらしい。
　客の求める色を出すには抹茶を大量に入れる必要があり、大量に入れると苦くなるので、その分多くの砂糖を入れて味を調えるしかない。
　これではまともに抹茶の香りや味など感じられる訳が無く、湊の一見邪道な注文の方がむしろ作り手も自信を持って料理とお茶を出せるのだとか。
　二人の会話を聞いていた女子たちは、思いっきり店が困る観光客丸出しな注文だったことでやや身体を小さくする。
　逆に湊は女子たちを見下したような表情で口元を歪め、追加で注文する。
「抹茶ソフト一つ」
「はい。すぐにお持ちします」

フォンダンショコラは十分に楽しんだので、今度は抹茶のソフトクリームを頂こうと湊は注文した。
女子たちはケーキやプリンを頼んでいたので、ソフトクリームは湊が初めて食べることになる訳だが、散々見下していた青年が抹茶のスイーツを注文したことにゆかりが文句を付けてくる。
「あー、それも邪道なやつでしょ！　なに自分は分かってる通ですみたいな顔してんのよ！」
お茶はほうじ茶のおわかりが残っているが、先ほどの話では彼は抹茶スイーツ全般を不出来なものと断じていた。
作り手の男性も素材本来の味を楽しむ点では一理あると言っていたので、湊にいちいち理屈臭いんだよ馬鹿と言うことも出来なかった。
なのに、ここに来て自分でもその不出来なものを頼むとなれば、色々言ってたくせに食べるのかと言いたくなってしまう気持ちも分かる。
フロアにいた女性店員もゆかりの言葉に笑っており、言われた湊がどう返すかと思っていれば、ガラスの器にソフトクリームを持った男性店員が戻ってきて、それを湊に渡しながらゆかりの言葉に訂正を入れた。
「お茶屋のソフトクリームには多いのですが、お茶の粉末もかけているんですよ。なので、こちらは抹茶本来の味もしっかりお楽しみ頂けます」
「ですよね。これだから物を知らない貧乏舌どもは困る。作られた流行に一生踊らされていろ」
生地やクリームに混ぜると砂糖と合せることになるが、ソフトクリームは抹茶を混ぜたソフトクリームにさらに抹茶粉末を後がけする。
おかげで甘いだけのソフトクリームに抹茶の深い苦みが加わり、しっかりと風味を活かしたスイーツとして成立するのだ。
大量に物を食べられるからこそ、様々な料理を実際に食べながら調べてきた経験を持つ湊は、情報にすぐ踊らされる阿呆の典型だなとゆ

かりを蔑みつつソフトクリームを食べる。
男性店員の言っていた通り、甘いソフトクリームと抹茶の苦みが合わさって調和が取れている。
かける抹茶の質と量をケチればこうはならないので、実家がお茶屋の強みがここに出ているなと湊も納得できる仕上がりだ。
小さく口元を歪めて頷いた湊の様子に満足したのか、男性店員も嬉しそうに笑っている。
約一名は貶された腹いせなのか大量に追加でスイーツを頼み、二つのテーブルの会計も湊に回すように女性店員に指示している。
言われなくても最初から払うつもりだったので、そんな事をされても湊にはノーダメージなのだが、やけ食いくらいで機嫌が直るなら安いものだ。
湊が何も言わなかった事で他の者たちも追加注文がありだと分かったらしく、その後、それぞれ四品以上のスイーツを注文して気が済むまで抹茶スイーツを堪能するのだった。

夜――巌戸台分寮
女子たちとは別行動しつつ何とか無事に旅行から帰ってきた男子たち。
エントランスに入るとそこでテレビを見ていた天田の姿を発見し、少年も他の者たちが帰ってきた事で出迎えた。
「あ、おかえりなさい。旅行、どうでしたか？」
「おう。まぁ、色々あったけど楽しかったぜ？　あ、これお前にお土産な。ご当地フェザーマンストラップ」
「ありがとうございます！　京都はやっぱり新撰組なんですね」
順平からビニール袋を受け取ると、天田はやけに大きいなと思いながら中身を取り出す。
そこには初期メンバー五人のストラップが一セットになった物が入っていた。
ストラップになったフェザーマンたちは新撰組の羽織と鉢巻きをしており、非常にご当地感に溢れている。

これで訳の分からない金色の剣のキーホルダーを渡されていたら微妙な顔をしていたところであるが、順平も天田の好みをしっかりと把握していたようで相手を満足させられた事にホッとした表情をみせた。
「僕からはこれ、石筒屋のおたべ」
「あ、すごい！　プレーンに抹茶に、さらに中身がチョコなんてやつもあるんですね」
「味見できたからチョコも食べてみたけど、ニッキのスッとした味とよく合ってたよ」
「そうなんですね。後でいただきます」
食べ物のお土産はハズレも多いが、大きな観光地だと味見を置いている場所もある。
綾時は経験がないからこそ、そういった物をしっかりと活用してお土産の品を選んだため、天田もそれなら間違いなく当たりだろうと嬉しそうに笑った。
女性陣と違ってこの寮で暮らす男性陣のセンスには不安がある。そのため、ちゃんとした物を買ってきてくれるか心配していた天田だったが、二年生二人は天田の好みと定番を押さえたチョイスで非常に満足だった。
だが、問題は残る三年生二人だ。この二人は戦いでは頼りになるが、日常的な部分では心配になるところもある。
なので、彼らはどんな物を買ってきてくれたのかと構えれば、荒垣が清水寺と書かれた小さな紙袋を差し出してきた。
「俺からはこれだ。地味で悪いな」
「いえ、有名な清水寺のお守りなら御利益もありそうです。ありがとうございます」
「俺からはこれをやろう」
「……提灯ですか？　あ、ありがとうございます」
どちらも和風で揃えたのか。荒垣は清水寺の無病息災のお守りを、真田は彼なりに真面目に選んだ結果〝火の用心〟と書かれた赤い提灯をお土産として渡した。

提灯の方は別に京都でなくても買うことが出来ると思われるが、自分で買うことはまずないので、天田も一応は喜んでみせる大人の対応を取った。
勿論、その表情は口元が引き攣っていたりするのだが、渡した本人は無事に受け取ったなと満足げにしているため、他の者たちも野暮なことは言わないでいた。
こうして無事にお土産を渡す作業も終わり、四人は荷物を部屋に置きに行こうと階段へと歩き出す。
だが、そこで女子たちが一人も帰ってこない事に気付いた天田が四人に尋ねた。
「あれ？　七歌さんたちは一緒じゃないんですか？」
「七歌さんたちは湊と一緒にご飯を食べてから帰ってくるよ。途中から別行動だったんだ」
「あ、そうなんですか。てっきり、お風呂を覗こうとして怒らせたのが原因かと思っちゃいました」
一瞬肩を揺らしつつ、綾時が女子たちがご飯を食べてから帰ってくると答えれば、天田はシレッととんでもない爆弾を投下してきた。
四人の覗き事件は一部の者しか知らず、当事者以外に知っている者がいるとしてもそれは修学旅行の参加者だけのはず。
となると、天田がそれを知っているのはおかしい。一体どこから情報が漏れたんだと真田が真剣な表情で詰め寄った。
「天田、お前その情報をどこで？」
「えっと、七歌さんからメールで。先輩たちに〝だからお前らはモテないチェリーなんだよ〟って伝えてくれって言われました。でも、チェリーってサクランボですよね？　なんで急にサクランボが話に出てくるんですか？」
せめて後輩の前では格好良い先輩のままでいたい。そんな少年たち四人の想いは七歌に先手を打たれていた事で脆くも崩れ去った。
オマケに中々に心を抉る伝言もあった事で、今日はもう寝ようと四人は荷物を持ってトボトボと階段を上がっていく。
残された天田は不思議そうにその背中を見送るが、きっと疲れたの

だろうと考え付いていったりはしなかった。
こうして、四人の少年に心の傷を作りつつも、月光館学園高等部の修学旅行はそれぞれに様々な変化を与えつつ無事平穏に終わりを迎えたのであった。

第十三章　―Ｄｅａｔｈ―
第三百八十三話　軍曹殿

１１月２４日（火）
朝――ＥＰ社

修学旅行も終わり、京都から戻ってきた七歌たちは休み明けの火曜日に朝からＥＰ社へやって来ていた。

別に学校をサボってきた訳では無く、単純に今日から体験学習として数日間事前に申請した企業で仕事体験を行なう事になっているためである。

これは二年生の行事なので、美鶴たち三年生は普通に学校に行っているが、冬の朝っぱらからＥＰ社敷地内の何もない広い場所へ集合させられた七歌は、一体どうなっているんだと集合時間になっても現われない企業側の担当者への不満を漏らす。

「ふざけんなよ。社会人だろ。時間守れよ。てか、勤労感謝の日の翌日に体験学習って普通は逆のタイミングでやるだろ。感謝してから仕事させずに、仕事させてから改めて勤労に感謝させるべきだろ常識的に考えてさぁ！」

「まぁまぁ、確かに僕たちの集合時間は八時半だけど、仕事の開始は普通は九時だからね。きっと僕たちが遅刻しないよう早めに設定されていたんだよ」

七歌たちは行き帰りは制服で、作業中は動きやすい服でと言われているので学校のジャージを持ってきている。

ただ、今はまだ始業時間前なので行き帰りと同じ制服姿であり、海に近く遮蔽物のないこの場所は冷たい風が吹いていているため寒い。

企業側の人間が七歌の暴言を聞いていると拙いと思った綾時がフォローを入れるも、なら、お前らも女子と同じスカートを穿いて耐えてみろと反論される。

「うるせぇタコ！　覗き四兄弟の末っ子が話しかけてきてんじゃねぇ！　てか、スカートの寒さ舐めんな！　行けると思うならズボン脱い

で下着姿になってみろ！　それがスカート装備の防御力じゃ！」
「ご、ごめん。ていうか、それなら湊に電話してみたら？　担当者がこないって言えば誰かしら送ってくれると思うけど」
「早く言えよタコ！　手がかじかんでボタン押しづらいっつーの！」
体験学習は毎年の行事だが、その年々によって参加企業は異なっている。
ジュネスや大手コンビニなどはほとんど毎年のようにあるが、およそ三百人の生徒を参加させる必要があるので当然誰も知らない小さな店もあったりする。
無論、それらは都内に所在地があるところ限定なのだが、自分たちの知る企業や店はやはり人気のようで倍率が高かった。
中でも今回初めて受け入れを表明してくれたＥＰ社は研究中の最新技術を一部見せて貰える事もあって、工学系に進むつもりの生徒だけでなく、メカ好きの男子たちも多数応募する事態になり、最終的に八十人近い生徒の中から抽選という形になっていた。
そうして、今回見事その抽選に勝ち残ったメンバー二十人の内Ｅ組からはチドリ、ラビリス、風花、美紀、渡邊、西園寺、Ｆ組からは七歌、ゆかり、アイギス、順平、綾時、友近となっている。
最初は十名程度という事だったが応募人数が凄まじい事になっていると聞き、ＥＰ者側が配慮して募集人数を拡大してくれたのである。
おかげで集まった者たちは最初は機嫌が良かったのだが、今は七歌をはじめとした数人が非常に不機嫌になっており、知り合いとは言えいきなり企業のトップを電話で呼び出す事態に発展していた。
勿論、湊は企業のトップなので子どもの相手をしている暇などないのだが、まだ会社が稼働する前なので七歌の電話も受けてもらえたらしく電話が繋がるなり七歌は相手を怒鳴りつけた。
「おい！　クソ寒い中、三十分も待たせるってこの会社どうなってんだ！　お仕事手伝ってくださりありがとうございますって頭下げにくんのが礼儀だろうが！」
《……では、そのままお帰りください。学校へは生徒らは真面目に働

いていたと定型文で報告しておきますので四日の休暇をお楽しみください》
「ゴメンなさい嘘です。でも、本当に寒いのに誰もいないし来ないんだけど八雲君助けて」
《……担当は武多のはずだがな。とりあえず、お前たちから見て右側にあるかまぼこ型の建物に移動しろ。三つある内の屋根が黄色い建物だ》
最初は強気に言ってみるも、帰れと言われると流石に困るのか七歌はすぐに謝って助けを求めた。
そして、今回自分たちの案内をするはずだった人間が武多だと判明すると、相手の姿を知っている何名かが「あのクソブタ」と瞳の奥に黒い炎を燃やす。
彼は見た目や言動に問題はあるものの、幹部であるシャロンの助手としてＥＰ社に合流したため、各分野の精鋭が集まっているＥＰ社内でもトップクラスの技術を持っている。
幹部になると自由に好きな事が出来ないため、今でも役職持ちにはなっていないが、そんな人間が学生の案内係になるなど普通はあり得ない。
そうなると、彼が来ないのも何かしらの情報伝達にミスがあったのだろうかと考えるところだが、湊の指示に従って七歌たちがかまぼこ型の建物に移動すると、中で待っていた茶髪の白人女性職員が温かいお茶を一人一人に配ってくれた。
「寒い中お待たせして申し訳ありません。担当者が来るまでこちらでお待ちください」
「あ、いえいえ、全然そんな。お姉さんが悪い訳じゃないんで大丈夫っす」
使い捨てカップのお茶を受け取った順平は、スーツを着こなす綺麗な白人女性に日本語で話しかけられドキドキしながら答える。
他の者たちもお茶のサービスと温かい建物に入ったことで安心したのか気持ちが和らいでおり、先ほどの剣呑な雰囲気も霧散して建物の中を見渡している。

彼女たちがいるのはただのロビーだが、その奥には腰までの高さの壁の上に大きな一枚ガラスがはめ込まれた仕切りがあった。
機密に当たるのであれば近付いてはいけないと注意されるはずだが、風紀委員で真面目な小田桐が職員の女性に聞けば、ガラスを叩かなければ近寄って構わないと言われた。
許可を貰えれば全員が寒い入口付近からロビーの奥へ移動し、ガラスの向こうに何があるのかを見に行く。
「な……これは、すごいな。パワーアシストスーツと呼ばれるものか」
ガラスの向こう側の光景を見て小田桐は驚きのあまり目を見開いた。
向こう側はロビーよりもワンフロア低くなっており、小田桐たちは上からそのフロアを見下ろす形になっているが、そこではロボットのアーマーのような物を装備した男性が束ねられた鉄筋を持ち上げて運んでいた。
ガラスの前までやってきた女性職員が言うには一本五十キロの鉄筋を十本束ねているらしい。
パワーアシストスーツを着ただけで一人で五百キロを運べるとは恐れ入る。
こんな物が既に実用化されているとは聞いたことがないので、まだ公にはしていない試作品なのかもしれないが、小田桐たちから見れば既に完成しているように思えた。
「あの機械は既に実用化されているんですか？」
「我が社の施設内に限っての話ですが、あれの二つ前のもう少し小型の物が運用されています。あれは積載重量を増やすために大型化したもので、稼働時間やバランスなどまだまだ正式運用には課題の多い試作品です」
「なるほど。でも、どうして施設内でしか運用されていないのですか？」
「パワーアシストスーツの運用には法整備がなされていません。今後、馬力等で規制などもされるでしょうから、それらに対応出来るよう現時点では自社内のみの運用となっています」

ＥＰ社製のパワーアシストスーツのように安定した性能が発揮出来るのであれば、軍事用に転用することも出来れば、犯罪に使うことも出来てしまう。
そして、それらを制限するための法律がまだ出来ていないので、社会への影響を考慮してＥＰ社では規制のない自社内のみで運用していた。
話を聞いた小田桐や何人かの男子生徒はなるほどとメモを取って、注意深くガラス越しにパワーアシストスーツの作業を見学した。
ゆかりやチドリのように機械に興味の無い生徒も、流石にこういった近未来の技術は素直に感心するのかジッと見ている。
一先ず学生らがパワーアシストスーツの作業に興味を持ってくれた事に安堵した女性職員は、携帯を取り出すと内線であるところへ連絡を入れる。
すると、鉄筋をフロアの端へ移動させたパワーアシストスーツの男性がフロアの真ん中へ移動し、七歌たちのいる壁の方を向いて何やら構えている。
一体何が始まるんだと思っていれば、何と七歌たちの立っている下のフロアから軽自動車が走ってきて男性へ衝突する。
風花と美紀が思わず悲鳴をあげかけ、男子たちも流石にヤバいのではとガラスに顔が付きそうになるほど接近して凝視した。
「す、すげー！　車を受け止めて無事だぞ！」
「かっけー！　マジでアメコミのヒーローみたいじゃん！」
友近と渡邊がその光景を目にして興奮気味に声を漏らす。
なんと、車に衝突された男性は僅かに後退しながら車を受け止め、最後には掴んだ車を相撲のつり上げのように持ち上げて見せたのだ。
スーツを装備した際の身長はおよそ三メートルほどなので、二周りか三周りほど大きくなる程度ならロボットでは無く人型ヒーロー扱いに出来る。
幼い頃に夢見たヒーロー。それが実現する日もそう遠くないと思わせるに十分な光景は、主に男子たちの心をガッチリと掴んだようだ。

「デモンストレーションはお楽しみ頂けましたか？　皆さんには後ほど実用化されている小型のパワーアシストスーツでの作業を体験して頂けます。残念ながら車を受け止める事は出来ませんが、脱輪した車を一人で持ち上げるくらいは出来ますよ」
「それも人助けの定番じゃないっすか！　オープニングで颯爽と現われて小さな問題をいくつも解決するシーンにあるやつっしょ！」
アメコミの実写映画でよくあるシーンに、次々と人助けをして街の人に感謝されるというものがある。
渡邊の感覚だと脱輪した車を一人で持ち上げるのは、その中の一コマによくある定番物らしい。
すぐにそれを体験できる訳ではないが、期間中に体験可能と言うことなら多少つまらない作業が続いても頑張れそうだと何人かの生徒が気合いを入れた。
女性職員はそんな姿を微笑ましそうに眺め、そろそろ時間かなと腕時計で時間を確認したタイミングで入口の扉が開き、中に入って遊べるバルーンアトラクションのような不思議体型の男が現われた。
「うむ。全員揃っていますな。では、すぐに移動してそちらで着替えてもらいますぞ。一人に一つ鍵付きロッカーを貸すので、貴重品や携帯電話も置いてくるように。アクセサリーは認めますが衣服以外の所持品は全てロッカーに置いて集合ですぞ」
急に現われたかと思えば武多はすぐに移動だと建物を出て行こうとする。
学生たちがここへ来たのは一時的に寒さをしのぐためで、実際の作業場所がここで無い事は彼らも理解していた。
けれど、美人で優しいお姉さんの案内ならばともかく、急に現われた不思議体型のデブに上から指図されるのは勘に障る。
主に気の強い女性陣が武多の事を冷めた視線で睨めば、それに気付いた女性職員が建物から出て行こうとする武多に声をかけた。
「武多さん。社長から伝言で〝学生より後に来るとは良い身分だな〟だそうです」
「おっふ……え、いやいや、そんな事はないですぞ。僕はちゃんと体験

学習用のスケジュール通りに動いていますので」
「昨今はコンプライアンスに厳しいので気をつけてください。では、私はこれで」
武多側にどういった思惑があったのかは分からない。
しかし、学生を預かっている以上は企業として最低限守らなければならない事があるだろう。
湊からの伝言を聞いた武多もそれを思い出したはずなので、女性職員が去って行けばどこか項垂れた武多が学生たちを先導して別の建物へ向かった。
＊＊＊
移動した先の建物でジャージに着替えて集合した学生たちは、何故だか迷彩服を着た武多の指示で施設内にある二百メートルトラックに集められた。
どうやらここはＥＰ社が経営するスポーツ関連の施設のようで、ここへ来るまでにテニスやフットサルの室内コートもあった。
だが、どうして仕事体験で自分たちが運動場のような場所に集められたのかが分からず、学生たちが困惑していると全員の前に立った武多が竹刀で地面を叩いてから口を開いた。
「貴様らの教官を務める武多軍曹である！　話しかけられた時以外は口を開くな！　口でクソたれる前と後に〝サー〟と言え！　分かったかウジ虫ども！」
突然の豹変に学生たちは困惑した。こいつ映画の見過ぎだろとあまりに有名すぎる軍曹の真似をするデブに白い目が向けられる。
ただ、それでも武多は鬼軍曹スタイルを止める気はないのか、再び竹刀で地面を叩くと唾を飛ばしながら命令する。
「私がやめと言うまで走り続けろ。無駄口を叩く必要はない。貴様らウジ虫でもそれくらいは出来るだろう。ただ黙って走れ！」
「サー、意味分かんないです、サー」
「黙れ雌豚！　どグサレに色目を使うことしか能の無い雌豚でも走るくらいは出来るだろう。さっさと始めるか。どグサレのマラをしゃぶりに帰るか選べ！」

最新技術を取り扱っている企業でまさかの前時代的な軍隊トレーニングを模したしごきを体験するとは思わず、西園寺が軽いノリでちゃんと説明してと求めれば、武多は一発でセクハラ判定を受けるであろう言葉で返した。
あまりに下品な言葉に女性陣が眉を顰めるも、武多は学生らに走れ以外の指示をするつもりがないのか走り始めない学生らに向かって小さく呟いた。
「ウジ虫ども、成績が欲しくないのか？　言われた作業を一切こなさないとなれば、当然、その評価はゼロだ。ここは楽しいテーマパークじゃない。仕事に理屈を求めるな。理不尽を飲み込み歯車になれ。命令に従わない者は必要ない。今すぐ走り出すか、帰るか選べウジ虫ども！」
このままでは一切成績が貰えない。そう言われて男子の何人かが動揺する。
校外学習は明確な採点基準はないものの内申点に大きく響く。
もし、ここで武多の命令に従わずにいれば、本当に成績が貰えず内申点が貰えなくなるかもしれない。
大学進学を考えている者にとってそれはかなりの痛手だ。せっかく有名進学私立に入ったのにそのアドバンテージが失われる事になる。
武多の言葉を理不尽と感じて怒りを覚える者もいるのだろうが、成績のためには言うことを聞かなければならないと思うことにしたのか数名の男子が走り始める。
一部が走り始めると他の者もつられて動き出すのか、最終的に全員が走り始めたが、言う通りに走っている学生らに武多がヤジを飛ばす。
「しっかり走らんかウジ虫が！　カタツムリの方がいくらか俊敏だぞ！」
言われた者たちはお前よりは速く走ってるわと心の中で怒りを募らせる。
いくら運動部じゃない学生でも、明らかに動けないデブの武多より

は速く走れている確信があった。
けれど、そんな相手でも今は自分たちの案内役だ。五周を超えてもまだ走れと言ってくる相手に殺意すら覚え始めた学生らは、終われば見てろよと拳を強く握り締めて黙って走り続ける。
十周を超えた辺りで普段は運動していない風花や一部の男子のペースが落ち始める。
それに気付いて他の女子がペースを合わせようとするが、全体のペースが落ちてきたことに気付いて武多が罵声を浴びせた。
「何をサボっている！　どグサレの上で腰を振り過ぎて足でも震えているのか？　いつも通りどグサレどもの前で尻を振ってみせろ！」
「いや、全員走るのをやめろ。しばらく休憩しててい」
「何を勝手な事を言っているウジ虫！　……あっ」
武多の発言を否定し、学生らにもう走らなくていいという言葉が後ろから掛かる。
すると、武多は勝手な事を言っているのは誰だと怒りながら振り返った。
そこには蒼い瞳をしている湊とソフィアが立っており、会社のトップ二人を罵倒した武多は途端に顔を青くしている。
走るのを止めた学生たちは湊と美少女の登場に驚いているが、彼らの上下関係を知っている者たちは〝サヨナラ、クソブタ〟と心の中で吐き捨て笑みを浮かべた。
走り終えた学生たちにはシャロンと彼女が連れて来たスタッフたちからスポーツドリンクとタオルが手渡される。
そして、学生とスタッフが遠目から見守っている状態で湊が口を開いた。
「どうも、雌豚に腰を振らせているどグサレのウジ虫です」
「では、わたくしはその上で腰を振っている雌豚ですわね」
「あ、いや、それは社会人としてのメンタルを鍛えるトレーニングで使った設定と言いますか……」
湊とソフィアは肉体関係を持っているので、武多軍曹の言葉を借りるならどグサレとその上で腰を振る雌豚になる。

ただ、会社のトップ二人をそんな風に呼べる訳がないので、あくまでトレーニング中の設定ですよと武多は言い訳した。
無論、全てを分かっている人間にそんな言い訳が通じるはずもないのだが、湊はまだこの茶番を続けるようで武多に話しかける。
「軍曹殿、命令違反は銃殺刑と記憶しているが如何か？」
「い、いえ、閣下それはその……」
「そもそも、軍曹なんてただの下士官だろ。兵以外に威張れない立場でよくもそこまで増長できるな」
武多が言い訳も出来なくなると、湊は茶番を終えて設定がそもそも間違っているだろうと呆れた顔をする。
軍曹と聞くとそれなりに偉そうに感じる者もいるかもしれないが、階級を考えると下から数えた方が早いくらいの存在だ。
確かに上下関係に厳しいので階級が下の者をいびることは出来るものの、それより上の階級の者が沢山いる場所でやれば自殺行為。
学校の部活で例えるなら軍曹など一年生のリーダーポジション程度で、上に尉官や佐官に将官といった二、三年生と教師がいる訳だ。
見つかればこんな風に怒られるのは当然で、湊は武多の手から竹刀を奪うと冷たい瞳で相手を見つめながら言った。
「走れ豚。走らせた合計距離の三倍走りきるまで休むな。走るのを止めれば腰に紐を巻いてバイクで引いて走るぞ」
「そ、それは流石に死んでしまうのでは？」
「死んで何か問題が？」
蒼い瞳のまま話す湊から本気を感じ取った武多は、これ走らなくても死ぬやつだと理解し、湊に竹刀で叩かれる前に走り始める。
すると、走らされていた学生たちの方から、
「しっかり走らんかクソブタ！」
「ナメクジにも劣るぞ、クソブタ！」
と言った罵声が飛ぶ。
まぁ、気持ちは分からなくはないので湊も止めないが、走っているデブを見ていても何も楽しくないので、湊は走っている武多の尻に向かって竹刀を投げて尾てい骨にクリティカルヒットさせると学生た

ちの許へ移動する。
「こちらの人選に不手際があったようですまない。あれには人格矯正プログラムを受けさせるので、残る作業はこちらから正式に指示を出そう。と言っても、今日は休憩が終わったら一通り施設内を見て回るくらいだが」
「湊様、それでは先に皆さんにシャワーと着替えのご案内をされては？」
「そうだな。じゃあ、シャワー室に案内するからついてきてくれ」
　事情を知らない者たちは何故湊がＥＰ社の代表と共にいるのか不思議に思っているようだが、汗を流せるなら何でもいいやという気持ちが勝ったのか誰も質問してこない。
　そうして、武多の監視を他の者に任せると、湊は学生たちを男女別のシャワー室へ案内するべく運動場を後にした。

第三百八十四話　作業ロボット

午前――ＥＰ社

全員が案内されたシャワー室で汗を流し終えると、それぞれの名前の書かれた袋に着替えが入っていたことで新しくそれに着替えた。

月光館学園のジャージは公立高校に多い芋臭い体操服タイプではなく、大学などでよくあるスポーツウェアタイプなので、汚れる事を考えると作業着に向いているとは言いづらい。

そこで湊が用意したのは丈夫な最新素材で作られた自社製品のツナギだ。

男子は渋い暗めのグレー。女子は可愛く見える蛍光オレンジ。

さらにインナーや厚手のグローブとタオルも渡してあるので、欲しいなら期間終了後にそのまま持って帰っていいと言われて喜んでいる者もいる。

もっとも、一部の女子は用意されていた替えの下着がサイズピッタリな事にやや疑問を抱いていたようだが、全員が着替え終わってシャワー前に着ていた物をロッカーに置いて再集合すれば、ソフィアと共に一同の前に立った湊が口を開いた。

「さて、まずは先ほどの非礼を詫びさせてもらう。今回の案内役は総合的な広い自社知識を持っている者の中から選ばれたのだが、先ほどの武多が自分から案内役を買って出た事でそのまま決定したんだ。だが、あいつは映画の見過ぎでな。自分たちの事を思って厳しくしてくれた教官を慕う生徒たちとの関係に憧れた事で、鬼軍曹として理不尽なしごきからスタートしたらしい」

武多の予定では最初は厳しいしごきを理不尽だと感じても、途中でこれは俺たちが本当の社会に出てから折れないようにするための訓練だったんだと気付き、最後には「お前たちはもう立派なソルジャーだ」「軍曹どのぉ!!」と感動的な終わりを迎えるはずだったらしい。

けれど、たった四日程度でそこまでの信頼関係が築ける訳が無く、学生たちは勘違いした豚野郎としか思っていなかった。

企業としては初めて受け入れた体験学習の生徒らに悪感情を持た

れるなど大失態と言える。
今回、このような武多の身勝手な行動を許す事になった原因は、トップである湊の死と彼の遺した言葉で『作戦コード：悪食』に優秀なスタッフが駆り出されていた事にある。
国内トップ企業である桐条グループは侮れるような相手ではない。それに気付かれないように末端の子会社から秘密裏に乗っ取りに動いていたのだ。当然、交渉するのはＥＰ社内でも精鋭を集める必要があった。
おかげで普段よりも社内のチェックは甘くなり、他の者たちも案内場所のチェックなどはしつつも、基本的な進行を案内役の武多に任せていたせいで、余計な〝基礎トレーニング〟なる項目が入っている事に気付くのが遅れた。
細かい部分については話せないが、湊が死んでいた事は学校でも話題になっていたので、その関係でＥＰ社でもゴタゴタがあったために今回のミス発覚が遅れた事を説明すれば、生徒たちも大きな企業でもそういった事は起こり得るのだなと納得はしてくれた。
ただし、どうして湊がそっち側に立っているかの説明がされていなかったことで、事情を知らない生徒を代表して西園寺から質問が飛ぶ。
「ねぇねぇ、ミッチーが死んじゃってたからＥＰ社でゴタゴタがあったのは分かったけど、どうしてそもそもミッチーがＥＰ社と関係あるの？」
「湊様は我が社のオブザーバーに就いております。皆さんにも分かりやすく言えば、社長と同等の発言力を持つアドバイザーと思って頂ければ良いかと」
『ほえー……』
湊に代わってソフィアが彼の役職について説明すると、事情を知らなかった者たちは何やら呆けている。
中には過去に彼が見せた最高グレードの黒いカードを思いだしている者もいるのだろうが、どちらにせよ〝社長と同等〟という部分が衝撃的だったらしく、彼らの目が遠い存在を見る物に変わっていく。

そして、少しでも自分の株を上げるために友近が一歩前に出た。
「社長、肩お揉みしましょうか？」
「あ、ずりぃ！　会長、オレ椅子になりますよ？」
「……お前ら、プライドはないのか」
友近と渡邊がへこへこと頭を下げて近付いてくれば、湊は心底呆れた顔になって下がれと手を振って追い払う。
こんな学生二人を下僕として扱わずとも、指を鳴らせばソフィアが肩もみや椅子役にくらいなってくれる。
無論、今の二人の関係を思えばそんな事をさせる訳がないのだが、とりあえずここにいても意味はないので、武多の件の説明と謝罪が済めば一同は移動する。
わざわざ大企業のトップ二人が学生らの案内を務めることなどまずないが、この後の案内を終えれば昼食の時間だ。
ならば、その間くらいは仕事をストップさせても問題ないという判断で、二人は長い廊下を学生らと共に歩く。
壁の案内板によればこの先は工業系の区画であり、先ほど見たパワーアシストスーツを体験できるのだろうかと小田桐や数名の男子の瞳に期待の色が宿る。
それに気付いたソフィアは僅かに振り返りながらこの後の予定を説明し始めた。
「皆さんは別館にてパワーアシストスーツの見学を行なったと聞いています。ですが、あれは中々にコツがいるので、お昼までは作業ロボットの操縦を体験して頂きます」
「作業ロボットと言うと工場のラインで動いているロボットアームタイプですか？」
「あれはプログラム式なので人の手は必要ありません。体験して頂くのは小型の人型ロボットです」
機密が多いからか窓もない廊下を進んでいけば、ガラス張りの自動ドアに辿り着いた。
ソフィアがドアの前に手をかざすと、ガラスが緑色に光ってから開き、学生たちは近未来的だと僅かに感動を覚えている。

この辺りの仕様は社員たちの要望を聞いて、わざと無駄に近未来っぽく基地風にしているという頭の悪い裏話があるのだが、外から来た学生たちが喜んでいるなら予算をかけた意味もあったと言える。
順平も七歌たちと共に初めて入るＥＰ社の内部に瞳を輝かせている。
「うおー、かっけぇ。マジで秘密の基地っぽい」
「お金のかけ方が違うよね。そして、悪の幹部に案内される私たちよ」
「いや、七歌。流石に案内してもらってるのに、悪の幹部呼ばわりは止めときなさいよ。確かに二人とも悪っぽいけど」
七歌が湊とソフィアを悪の幹部と呼べば、確かにそれっぽいけど止めとけとゆかりが諌める。
見た目とこれまでの行いを見れば悪だと断言出来るが、少なくとも今は善意から案内役を務めてくれているのだ。
文句があるなら今も走っているはずの武多の許に戻れと言われる前に口を閉じると、少し先に開けた場所があるのが見え、一同はそこまで移動してから左側にある一面ガラス張りの向こう側に視線を向ける。
そこには瓦礫の上を歩いて黄色いゴムボールを拾って歩く一メートルほどのロボットがいて、しっかりと膝を曲げて腰を落としながら拾う姿に風花と美紀が笑みを溢す。
「わぁ、なんか可愛いですね」
「でも、すごい技術ですよね。本当に人に近い動きをしています」
彼女たちはロボット甲子園やロボットの世界大会などを見ていないので、あくまで自分の知る範囲ではあるが、これまでのロボットであれば膝をほとんど曲げず、上体だけ倒して手で取りに行くイメージがあった。
勿論、そこには過去のアイギスやラビリスの存在は含まれず、あくまで一般的なロボットの話になるのだが、二人の話が聞こえていたようで小田桐がやや興奮した様子で会話に入ってくる。
「すごいなんて物じゃないぞ。あれは確かに小型で重心は取りやすくなっているようだが、操縦しているのは人間だ。カメラで確保される

視界はあっても、あくまで主観に近いだけで実際にはテレビ画面越しで見えていない部分も多い。だが、その状態でも転倒させること無く腰を屈めて足下のボールを取ることが可能という事は、卓越した操縦技術を持った操縦者が高性能な機体を扱っているという事だ」
見た目は可愛らしくとも、そこは人間と同じだけの動きが出来るようにと金がかけられており、下手をすれば高級車が買えるだけの値段をするかもしれないと小田桐は説明する。
一メートルほどのロボットでそんな馬鹿なと笑っている者もいるが、試しに西園寺が値段を聞けば、ロボット単体で七百万円くらいだとソフィアが教えてくれた。
実際にはそれを操縦するための機械であったり、ロボットの視界を映すモニターだったりが必要になるので、一式集めれば簡単に一千万円を超すだろう。
自分たちにそんな高級機の操縦は無理だと生徒たちが青い顔をしていれば、熱心にロボットを見ている小田桐に七歌が話しかけた。
「小田桐君って機械とか好きなんだね」
「ま、まぁ、得意という訳ではないが幼い頃から相応の憧れくらいはあるさ」
「へぇ。じゃあ、壊すから操縦しないの？」
「したいからと言って出来るものではないし。仮に壊しても問題ないと言われようと、物が物だけに躊躇いもするだろう」
小田桐とは生徒会を通じて知り合ったが、七歌は野郎に興味は無いとこれまで深く関わってこなかった。
別に仲が悪い訳ではないので普通に会話はするものの、相手の意外な姿に感心していれば、機械好きを子どもっぽいと思っているのか小田桐は耳を赤くして顔を逸らした。
これまた意外な反応だと思ったが、そのタイミングで湊が手を叩いて注目を集めてから口を開き説明を始めた。
「今見て貰ったのは生身では作業が困難な場所への投入を想定したロボットだ。見た目は小さいが耐熱、耐寒、他にも水や雪の深い場所での作業も行えるようになっている。もう少し大型化出来れば危険な

災害現場などで安全に作業できるようになり、様々な場での活躍が期待出来る」
「ですが、その分、遠隔操作可能な兵器として転用出来る恐れがあります。毒ガスをばら撒きながら機銃掃射するという対人を想定したテロなどいくらでも活用の場はありますから、我々は高度なプロテクトを施した操縦プログラムを組んで悪用を防ぐようにしています」
元々ＥＰ社は軍事関連の商品で世界シェア一位を誇っていた企業だ。
今も海外の工場ではミサイルや戦車なども作っているが、日本の工場でそんな物を作れるはずがないので、ここでは軍事利用することも可能な研究を主に行なっていた。
中にはアイギスたち対シャドウ兵器に使われていた技術もあるため、湊はそのデータが外部に漏れないよう細心の注意を払っている。
ただ、学生の中にはより高度な知識を得たいと詳しく尋ねる者もいた。
「高度なプロテクトって実際どんな感じなんですか？　車の盗難防止みたいにブザー鳴るとかですか？」
「良い質問ですね。では、実際にどういった場所で操縦しているかを見て貰いましょう」
男子生徒が質問すればソフィアがこちらへと先導して歩いて行く。
そこはロボットが作業している隣の部屋で、扉の横にある機械にソフィアが取りだしたカードを通すと自動で開いて中に入れるようになる。
ゾロゾロと子どもが入っても大丈夫なのかと心配しつつ進めば、中は学校の教室の二倍くらい広くなっており、先ほどいた場所と同じようにガラス越しにロボットの作業が見えるようになったそこには、軽自動車ほどもある巨大な機械の箱と白衣を着た多数のスタッフが集まっていた。
一体ここでどうやってロボットを操縦しているのかと思って七歌たちが見渡していれば、機械の箱の横に立ったソフィアが箱を指さして笑った。

「こちらがロボットの操縦席になります。ビアンカ、一度出てきなさい」
《了解です》
スピーカー越しに女性の声が聞こえれば、ロボットが平坦な場所に移動して直立状態になったところで箱の後面が上に開き、中から大きな機械のゴーグルを付けた女性が座っている椅子ごと後退して出てくる。
女性は生徒たちとは色違いのツナギを着ているが、服装はともかく箱の内部や着けている機械のゴーグルなど男心をくすぐる部分が多数あった事で、男子たちが純真な瞳を向けて周りに集まってきた。
女子たちは男子ほどは感動はしていないようだが、女性が出てきた箱の正体が想像できたようで、ゴーグルを外した女性が話し始めるのを待つ。
そうして、ゆっくりとゴーグルを外し、それを椅子に置いてから皆の前に立ったビアンカという黒人の女性は流暢な日本語で全員に挨拶した。
「ハーイ、学生の皆さん。ワタシは難所作業ロボットの操縦士をしているビアンカです。多分、皆さんも想像が付いていると思うけど、あの小さなロボットはこの大きなコックピットから操縦しないと動きません。パイロット認証が必要で、認証失敗すると後部ハッチにロックが掛かるので、盗もうとした犯人はその場から逃げられなくなるってわけ」
「あ、それって高級車にも同じようなセキュリティが装備されてたりしますよね？」
「その通り！　でも、それだけじゃなくて、仮にパイロット認証を突破しても普通の人では動かせないようにもなっているの。そっちについては申し訳ないけど教えられないから、他の質問だったら受け付けるわ」
明るい口調で説明するビアンカは、本当にＳＦのロボット操縦席みたいでしょと箱の中身を見せてくれる。
学生たちは全員携帯やカメラをロッカーに置いてきているので、撮

影することは出来ないのだが、その悔しさよりも目の前にある浪漫の固まりの方が重要なようで、別の男子がビアンカに質問した。
「あの、さっき付けてたゴーグルってもしかしてロボットの視界を共有するモニターですか？」
「正解！　通信距離の課題があってまだまだ小型化は難しいけど、ようやくこのサイズに出来てね。モニター越しから主観的な視界になったことで、格段に操縦性が良くなったのよ」
小田桐はモニター越しだと思っていたようだが、ＥＰ社ではＶＲゴーグルのようにロボットのアイカメラと連動した映像を見ることが可能なゴーグルを採用していた。
そのおかげでより自分の身体の感覚に近い形で操縦できるようになっており、高度な作業を正確に行えるようになったという。
そして、中に入ったり椅子に座ったりは出来ないが、箱の中身を近くで見せてもらえば様々なスイッチやレバーが配置されている。
これらを完璧に使いこなして小さなロボットに人間のような動きをさせていると分かって、男子たちは途中から「すごいな」としか言えなくなっていた。
自分たちが思っていた以上に技術は進歩し、アニメやゲームの世界のロボットが誕生する日も遠くないと思わせる光景に男子たちは興奮を抑えきれないのか、後ろで見守っていた湊を拝むようにして頼み込む。
「会長、一生のお願いです。古いタイプでも良いんで操縦席に座らせてください！」
「オレっちも！　頼む、有里。体術訓練の次は実機訓練ってのが新米パイロットの定番だろ？」
「皆がやるなら僕もやりたいな」
渡邊、順平、綾時が集まってくると、他の男子たちも一緒になって頼み込んでくる。
それを後ろから眺めている女子たちは何を無茶なお願いをしているんだと呆れているが、逆に正規操縦士のビアンカや周りのスタッフは微笑ましそうに笑って見ている。

恐らく、ここに集まっているスタッフの多くが彼らと同じ浪漫を抱いてこの仕事をしているからだろう。
一方で、五月蝿い男子たちに拝まれている青年は、黒いマフラーから取りだした煙管を咥えて深く吸い込むと、ゆっくりと吐き出してからソフィアに声をかけた。
「……ここの説明は以上でいいか？」
「ええ、イメージも湧いたようですし。これくらいで十分かと」
「そうか。なら、次はシミュレーターに案内してやろう」
その言葉に男子たちは顔をあげて、信じられないもの見るような目で湊を見つめる。
操縦席を見て、次にシミュレーターとくれば、当然、そこには本物とほぼ変わらぬ操縦席があるはずだ。
何せビアンカが乗っていたのは密閉空間となった操縦席。ただモニターの前に椅子を置いただけでは、あの装置の中の感覚は分からない。
スタッフたちに騒がしくした事を詫びながら湊が部屋を出れば、一同は長い廊下を歩いて奥へと進んでゆく。
途中、いくつかの階段を下って地下へと進んだりもして、ここがどれだけ広い場所なんだと不安に思っていれば、最初の部屋を出てから五分以上歩いてようやく突き当たりに到り、何やら重厚そうな扉の前で湊は振り返った。
「……この中にあるのは先ほどの難所作業ロボットよりも、高度に軍事利用が可能なロボットのシミュレーターだ。外で話してもいいし、学校への提出物に書いても良いが、遊び気分で乗ることは止めてもらおう。冗談では無く大怪我する事になる」
シミュレーターはあくまで練習するための機械のはず。それで怪我をするとはどういう事なのか。
彼の雰囲気に一同が思わず唾を飲み込めば、湊はカードでロックを解除してからゆっくりと扉を開けて中へと案内する。
この先に一体何が待ち受けているのか。怖々中に入っていけば、そこには学校の体育館よりも広い空間に先ほどの箱形の機械よりもや

や大型の機械が幾つも並ぶ壮観な光景が広がっていた。
今までＥＰ社に出入りしていても、ここへは初めて訪れたラビリスがなんだこれはと驚きの声をあげる。
「なんなんここ……。こんなんがあるやなんて知らんかったわ……」
「姉さんでも聞いたことがないんですか？」
「うん。ウチらが出入りしてたんは別の区画やから、こっちは完全に初めて見るんばっかりやで」
ここで一時は生活していたラビリスでも見たことがないとなると、どういった施設なのか想像も出来ない。
そこは四角い形をしているものの小型のドームを思わせるほど高さと広さがあり、壁際に互い違いに五機ずつ二列に並べた計十機ずつの大型機械が左右に置かれていた。
右を見ても十機、左を見ても十機置かれているので、それだけでも壮観なのだが、さらにそれぞれの置かれている側の壁と入口から見た正面の壁いっぱいに何やら市街地らしき映像が映っている。
そこでは本当にＳＦ作品やアニメなどに出てくるようなロボットが戦闘しており、湊の説明となんか違っているんですけどと思わなくもない。
ただ、ここにいてもどういった施設なのかは分からないので、階段を下りていくつもの機械が置かれているフロアまで移動すると、三方向の壁に映った映像を眺められるよう縦五列、横十列、縦五列に置かれた長椅子まで向かい学生らが座ってから皆の前に立った湊とソフィアが説明を始めた。
「ここは言ってしまえば本格的なロボット対戦ゲームが出来る部屋だ」
『えぇ……』
さっきあれほど真面目な雰囲気で注意していたというのに、まさかのゲーム部屋発言に一同困惑する。
素人判断だが見た目からして数十億は掛かっていそうなのだ。
そんな金の掛かったゲーム部屋とは一体何なのだと思っても無理はない。

ただ、ゲーム部屋ではあるが、ゲームを通じて操作を学ばせるためのシミュレーターではあるらしく、実際に先ほどあったビアンカなどもここでしっかり操縦の基礎を学んだという。
「注意点だが安全ベルトはしっかりと締めろ。ここの機械はロボットの姿勢に合わせて操縦席が動く。つまり、宙返りすれば一回転する訳だ」
「うげ、何そのハード仕様。なしてゲームをわざわざその仕様にしたん？」
説明を受けた一同の頭を過ぎるのは海外の宇宙飛行士の訓練装置だ。
実際にそれに近い動きも出来るとあって、それじゃあゲームを楽しむ前に酔うだろうと順平がツッコミを入れる。
すると、そもそもゲームはオマケだとソフィアが詳しい説明を加えた。
「先ほどビアンカが付けていたゴーグルを思い出して頂ければ分かるように、操縦するロボットの動きに視界は連動します。人間の脳は不思議なもので、倒れていく視界を見ていると普通に椅子に座っているのに、錯覚から勝手に前に倒れてしまうのです。それを防ぐためにロボットの視界と操縦士の姿勢を連動させるため、シミュレーターは回転できるようになっているのです」
普通に立っている者に主観で倒れていく映像を見せれば、思わず足を出してしまうように人は思っている以上に視覚に依存している。
それを避けるために用意されたのが姿勢との連動機能で、シミュレーターを使う者たちもその機能がある事でゲームだからと無茶な動きをしなくなったという。
その分、かなりの巨費を投じて作るハメになったが、しっかりと効果が出ているので問題はない。
学生の人数と同じ二十機のシミュレーターがあるので、一度に対戦も出来るぞと説明しつつ、湊はパイロットシートに補足を入れた。
「ああ、パイロットシートは二種類ある。座席タイプとバイクみたいな前傾乗りタイプだ。座席の方が疲れづらいし、安定した操作が可能

だが、前傾タイプの方が操作が簡略化されている部分がある。最初に練習時間を設けるから好きな方を選んで乗れ」

地上に出ているのは二十機だが、実はそれとは別の座席タイプが地下にあるらしく、地上と地下に合わせて四十機のシミュレーターがあるのだとか。

スイッチ一つで地下に引っ込んで、別の座席タイプが出てくるため、中身を入れ替える必要もなく時短になるのだと湊は何でもないように説明した。

本当に金持ちの道楽のようだと心の中で思いつつも、一同はクジでチーム分けをして左右の壁際に散っていく。

それぞれスタッフから防具とシートの安全ベルトの付け方を聞き、機体の種類を選ぶと各々で練習を始めた。

第三百八十五話　力こそ全て

――ＥＰ社

湊の厚意でシミュレーターに乗せて貰えた一同だったが、歩くだけで微妙に揺れることもあって全員が満足に操縦できるとはいかなかった。

またそもそもが争い事に向かない性格だという者もおり、実際の対戦モードに参加出来る者は体験学習参加者の半数である十名となった。

そのため、改めてチーム分けをくじで行い。他の者たちはそれぞれのチームにサポートとして参加するため、チームごとに用意されたブリッジルームへ向かうことに。

ブリッジルームはその名の通り、それぞれのチームの母艦のブリッジをイメージした部屋であり、マップを見ながら索敵や誘導などでチームの者に通信を送ったり、さらには母艦からの砲撃で援護したりも出来る。

対戦前の休憩時間にパイロットたちも見学に来たが、艦長の席やオペレーターの席を見て何やら感動している者もいた。

今回はサポートも五人という事で、ブリッジチームは『操舵担当・マップ兼オペレーター担当二人・砲撃担当・艦長』という設定で行くことになった。

その説明を聞いた際に、順平から操舵なんて何をやるのかとの質問が挙がったが、ソフィアが言うのには母艦も対戦中は移動可能なのだとか。

ロボットの揺れがダメでそちらに配属された者もいるので、母艦が攻撃を受けても部屋が揺れたりはしないが、母艦のダメージが増えていくと『艦の移動速度低下・通信にノイズが混じる・モニターの映像が欠けたり乱れたりする・臨場感を出すため温風で室内温度が上がる』などのペナルティがある。

また敗北条件が『機体の全滅・母艦の撃沈』になっているため、ロボット同士が戦っている市街地中心へ不用意に近付くことも出来な

い事もあって、どのように母艦を運用するかはチーム内でよく話し合う必要があった。
対戦には時間制限もあり、時間内に勝負が着かなければ機体残数で判断。そこも同数なら母艦のＨＰ残量で、そこもさらに同じなら機体たちの総ＨＰ残量で判断するというルールだ。
因みに、クジで決められた二つのチームメンバーは、
Ａチーム操縦士、七歌・ゆかり・綾時・ラビリス・西園寺
Ａチームブリッジ、風花・他四名
Ｂチーム操縦士、順平・チドリ・アイギス・渡邊・美紀
Ｂチームブリッジ、小田桐・友近・他三名
といった具合になっている。
全高約六メートルのロボットは機体名〝ウォーカー〟と呼ばれ、近接タイプ〝シュナイダー〟、遊撃タイプ〝イエーガー〟、射撃タイプ〝パンツァー〟と装備が三種類用意されている。
それぞれバランス、高速紙装甲、鈍足重装甲という特徴もあって、相手チームからは誰がどの機体を選ぶかは分かっていない。
そうして、全ての準備が整って全員が配置に着くと、カウントダウンが始まりゼロになった途端、コックピットとブリッジのモニターに外の映像が映った。
近接タイプのシュナイダーに乗ってブレードを構えて細い路地を進みつつ、七歌は本当に自分がロボットに操縦しているみたいだと感動しながらプライベート通信のスイッチを入れる。
「やっぱ、すっごいなぁ。八雲君、これ本当に一般向けに公開しないの？　これ一回五百円とか千円でも余裕でハマる人いると思うよ？」
《乗り物だけあって適性がない人間もいるからな。それにハマりすぎると現実で生きている実感が薄れる可能性がある。何より、メンテナンスが大変なんだ》
スタッフたちはロビーで待機しながら観戦するようだが、コックピットとブリッジからロビーへ通信を送ることは出来ない。
なので、責任者である湊とソフィアは両陣営と通信が取れる部屋で待機してくれているのだが、七歌がそれを使って湊にプライベート通

信を送ると、彼の返事に続けてソフィアから警告が返ってきた。
《機能上こちらへプライベート通信を送れますが、わたくしたちは友軍ではありません。対戦中はそのスイッチを入れないように。もしも、会話したければオープンチャンネルを使ってください》
「はーい。それじゃあ、集中して行きますか」
座席タイプを選んだ七歌はブリッジとの通信に設定すると、前進のレバーを強く前に倒して速度を上げる。
母艦の物より索敵範囲の狭いマップに注意しながら進み、ふと嫌な予感がしたことで彼女は曲がり角を曲がって建物の影に隠れた。
直後、七歌の機体が先ほどまでいた場所に銃弾が当たり綺麗な路面に穴が空いた。
「狙撃っ。ブリッジ、十一時の方向から狙撃が来た。索敵とチームへの通達をお願い！　それとゆかりに狙えるかも聞いて！」
《了解。二号機の射線を作るため母艦を西へ移動させます》
七歌たちのチームは七歌とラビリスがシュナイダーを選び、綾時と西園寺がイエーガーを選択。残るゆかりはというと射撃適性が高かったためパンツァーを選んで母艦の上に残っていた。
シュナイダーは大きなブレードとナイフとハンドガンを装備しており、イエーガーはナイフとマシンガンと手榴弾を持っている。
そして、パンツァーは狙撃ライフルとミサイルポッドとナイフを持っているため、それならば母艦に残って艦を守りつつ上から撃てば良いのではと、敢えてゆかりの機体は母艦の甲板に乗せて母艦ごと移動する作戦で行くことにした。
何せ、相手のメンバーからすると順平と渡邊がシュナイダー、チドリと美紀がイエーガー、アイギスがパンツァーを選んでいる可能性が高い。
順平たちに射撃を避けるセンスはなく、チドリたちは紙装甲であるため母艦とパンツァーの掃射で近づけなくなるはず。
故に、自分たちは他の四機で艦を落とす事に集中すれば良いと、七歌は狙撃を警戒しながら敵の母艦があるであろう方角を目指す。
《七歌さん、市街地北東で敵シュナイダー二機と会敵。ラビリスさん

が向かってくれてるけど、保たないかもしれない》
「ちょっ、何そのバランス悪い組み合わせ。一機で足止めしてもう一機を母艦に向かわせるつもり？」
だが、そこで逆方向から進んでいる綾時から敵と遭遇したと通信が入った。
まさか、近接タイプが組んで移動しているとは思わず、この変な博打っぽさは小田桐の作戦かと七歌は相手チームの動きを予想する。
動きが遅いパンツァーを無視すれば、残る機体はイエーガーが二機のはず。
一機で足止めしてでももう一機を前進するため近接タイプを一緒に行動させていたなら、逆にイエーガーは二機の速さで翻弄して確実に敵を屠るつもりではないか。
そうなってくるとシュナイダーと遭遇するより拙いかもしれないと考えたところで、ラビリスから通信が入った。
《ゴメン、一機は墜としたけど綾時君がやられてしもた！　今、通したもう一機を追ってるから、合流に時間掛かると思う！》
「了解。西園寺さん、どっちのカバーに回れる？」
《距離的には九頭龍さんだけどシュナイダーとイエーガーが近くにいるんだよねぇ。近接三機、遊撃一機、砲撃一機とは思わなかったなぁ》
「おっと、私よりも先行してるんかい。戦闘避けられそうなら後退して合流しようか。ダメそうなら全力逃走しつつ追ってくるイエーガーに狭い路地でポイポイボムで」
《りょうかーい》
七歌の機体よりも速度のある機体に乗った西園寺の方が先へ進んでいたようだが、敵を見つけながらもまだ戦闘は始まっていない様子。
そういう事ならこっちも合流しようぜと七歌は提案するも、恐らく敵は西園寺の機体の逃走ルートからその味方の居場所を予想し、逃げる西園寺を速度で追えないシュナイダーをこちらへ送ってくるはず。
ならば、自分もそろそろ本格的に戦おうかと移動ルートを予想して機体を進めた。

「やっぱりいるよね、そこにいっ!!」
相手が七歌の居場所を予想したように、七歌も西園寺がいた場所から予想して敵を見つけた。
逃げている西園寺よりも敵との合流の方が速いのは残念だが、待ちに待った本格的な戦闘だ。
思わず口元をつり上げて、七歌は下段に構えた相手のブレードに上段から振り下ろしたブレードをぶつけた。
互いのブレードが衝突すると、武器がぶつかった衝撃でコックピットが激しく揺れる。
ヘルメットが壁にぶつかり思わず顔を顰めるも、七歌はその場でブレードを左手持ちに切り替えつつ左足を引きながら右足で踏み込み右肘鉄を喰らわせる動作を入力する。
「長い得物で近接とか馬鹿じゃないの!」
ほとんどゼロ距離なら満足にブレードは振れない。だからこそ、七歌は武器なんて使わなくても戦えるんだよと相手のアームに何も持っていない右肘を当てて敵を押し出す。
想定外の反応速度だったのか敵は七歌の追撃を喰らって蹌踉けるが、ただやられてたまるかと不安定な状態でブレードを横薙ぎに振った。
左側から迫ってくるブレードを見た七歌は、機体の身体を左に捻りつつ持っていたブレードを手放すと、左肘と残っていた右足の膝で敵のブレードを挟み込む。
完全に勢いを殺せなかった事でダメージはあるが、直撃よりも遙かに軽微で無視しても良いレベルだ。
これには敵も恐らく動揺しているはずだと読んだ七歌が、相手のブレードの勢いを完全に殺したタイミングで武器を離し、数歩だけ後退してから踏み込んで腰のナイフを右手に持って仕掛けた。
「距離感がなってないよ!　本職は中距離型と見た!」
近すぎてブレードがろくに振るえない距離で、七歌はナイフを持って接敵すると、反応が遅れた敵の喉元にナイフを突き入れる。
ウォーカーと呼ばれるこのロボットたちは、人間と同じ位置に弱点

が存在し、そこを破壊すると部位の機能停止か機体自体の機能停止へ追い込む事が出来る。
　そして、七歌がナイフを突き入れた喉元は機体の機能停止部位であり、火花を散らせながらナイフを深く刺された敵機は、そのままアイカメラの光が消え機能を停止した。
「ふぅー！　一機撃破したよ。ブリッジ、味方の状態教えて」
《三号機がこちらに近付いていたシュナイダーと交戦中。先ほどまで逃走していた五号機が追っ手のイエーガーにある程度のダメージを与えるも、敵パンツァーのものと思われる攻撃で沈みました》
「なるほど……じゃ、ほぼ差が無いけど、イエーガーが手負いな分だけこっちが有利か」
　全員まだ操縦に慣れていない事もあって、戦いが始まれば片方が流れを掴んだ時点で挽回は厳しく早く決着がついてしまう。
　つまり、操縦にかなりの適性を見せる七歌が手負いのイエーガーを狙って進めば、敵パンツァーと母艦からの攻撃を受けない限りはほぼ確実に討てるはず。
　最初に七歌を狙撃してきたパンツァーの存在は怖いが、その機動力はシュナイダーの六割程度。
　ウォーカーは名前の通り二本足で人間のように歩いたり走ったりする事しか出来ず、練習時間に試して動きながらでは照準がずれてまともに狙えないと判断した七歌にすれば、固定砲台の攻撃など見て反応出来る自信があった。
　故に、母艦から送られて来た西園寺の撃墜されたポイントへと向かいながら、七歌はブレードを背中のアタッチメントに取り付けて武器をナイフとハンドガンに切り替える。
　背の高いビルに囲まれたエリアを走り、西園寺が逃走時にばら撒いた爆弾で焦げたオフィス街を抜け、手負いの敵が次にどのような行動を取るかを予想して七歌は追跡した。
　オフィス街を抜けると様々なファッション関連の店が並ぶエリアに出る。
　ほとんどの建物が二階建て程度なので、高さのほとんど変わらぬ

ウォーカーからすると随分と見晴らしが良いなと思える。
（母艦に戻ってもダメージは回復しない。なら、相手は私を落とす事を第一の目標に、自分を餌にしてでもパンツァーが狙えるポイントを作るはず）
西園寺は追跡者にダメージを与えるために爆弾を使い。その爆発によって位置を特定され撃たれたと思われる。
なら、敵のパンツァーは姿が見えれば動いている対象でも撃ち抜けるだけの実力を持っている。
機体ダメージの大きいイエーガーはマシンガンを持っているので、それで七歌の接近を阻みつつ、回避のため速度を落としたところをパンツァーが狙撃してくると言う訳だ。
そういう事ならば七歌が取る作戦は決まっている。多少の被弾を覚悟しながら最高速を維持。
何せ、シュナイダーの装甲ならばマシンガンを数発受けても小破で済むのだから、パンツァーの即死攻撃だけを警戒すればイエーガーを落とせる。
集中した七歌は揺れが激しくなる事も構わず前進のレバーを強く倒して、出来る限り迅速に敵を墜とすべく街の中を駆けた。
「イエーガー発見！」
マップ上にも敵の機体を表わすコードが出現、見るからにダメージを負っている相手は大きな交差点で足を止めて待っていた。
しかし、その手には既にマシンガンが構えられ、七歌の接近に気付けば相手も引き金を引いて弾幕を張ってきた。
それに対する七歌の答えは、身体をぶらすように細かく左右に機体を揺らしながらアクセル全開での接近に加え、唯一の遠距離武器であるハンドガンでの顔面狙い。
当たればラッキー、当たらなくても動揺を誘えるはず。
「くひっ、囮役が動いちゃダメでしょ！」
際どい位置に弾が飛んだのか敵のイエーガーは僅かに後退した。
だが、七歌のいる路地の幅をほぼ制圧出来るだけ弾幕を張れていたのに、引いてしまっては意味がない。

撃っているのは素人だ。いくら機械の補整があろうと距離が遠くなった分だけ余計な幅まで弾丸が飛んでしまい。結果的に七歌を襲う弾幕が薄くなる。
それでは相手の攻撃の手が緩んだのと変わらない。七歌は一気に勝負をつけるためスピードのロスとなる機体を左右に揺らすアクションをやめ、ハンドガンで撃ちつつほぼ一直線に敵へと迫った。
慣れていない人間が後ろ向きに機体を動かせるはずもなく、相手が逃げるために反転しかけたところでハンドガンを捨てて七歌は背中のブレードを抜き放ちながら振り下ろした。
「切り捨て御免！」
背中を強く切られたイエーガーはうつ伏せに倒れたまま動かなくなる。
マップ上の敵コードも消えたので、どうやら無事に倒せたらしい。
確認した七歌は捨てたハンドガンを腰に付け、ブレードを持ったまま敵の母艦を目指して走る。
途中でパンツァーの攻撃が来る可能性もあるが、見晴らしが良ければ七歌もそれだけ対処しやすいので問題ない。
そう考えていると友軍機から通信が入った。
《七歌、こっちに向かってたシュナイダーは倒したよ。私と母艦の攻撃で近付かせないようにして、ラビリスが後ろから攻撃したから結構楽に行けた。ただ、負けを覚悟したのか、最後にナイフで反撃してラビリスの機体に良いのが入っちゃったから結果的には相討ちになった感じ》
「じゃあ、こっちは私とゆかり、敵はパンツァーが一機って事ね」
《うん。てか、それ多分アイギスだよね》
「たぶんねぇ。戦い慣れてるって意味じゃ断トツだろうし」
ここまで簡単に決着がついたのはほぼ全員が操縦に慣れていなかったからだ。
七歌はその中でも見事に順応した方だが、他の者たちは特別課外活動部の者でも案外あっさりやれてしまっている。
やはり、実戦で得た経験から戦闘での駆け引きはある程度出来て

も、戦うための身体を十全に動かせないとそれらは役に立たないのだろう。
けれど、その点からすると残っている敵の機体に乗っている操縦士は全メンバーで最強の兵士と言えるかもしれない。
火器統制システムを積んでいなかったラビリスとは異なり、アイギスは最初から銃火器を使った戦い方を知っている。
これまでも特性の異なる様々な銃火器を利用し、時には近接武器で戦っていたこともあるので、兵器を使った戦いでは誰より豊富な知識と経験を持っていると言えるのだ。
また、彼女は車や飛行機を操縦するための知識を有している。ウォーカーの操縦にそれらがどれほど活かせるかは分からないが、少なくとも他の者たちよりも操縦のなんたるかは理解しているのは間違いない。
マップを確認しながら敵母艦のある方向を目指していた七歌は、厄介な敵が残ったと小さく嘆息し、直後、再び悪寒が走ってブレードを正面に構えた。
「あっぶなっ!? ブレードの先端に当たって弾丸切れたよ!?」
危険だと思って武器を構えたら、ブレードの先端に何かが当たって七歌の乗っているウォーカーの肩を掠めるように通過していった。
もし、ブレードの中程で受けていれば、広がるための距離が足らず両肩なりを被弾していたかもしれない。
ただ、その弾丸の入射角が地面とほぼ平行だったことを疑問に思った七歌は、遠く離れた道の先へと機体のカメラを向けた。
「へぇ……まぁ、こっちには遠距離はハンドガンしかないからね。装甲の厚いパンツァーなら殴り合いでもワンチャンあるか」
見ればそこには隠れもせず狙撃ライフルで七歌の機体を狙うパンツァーの姿があった。
相手は足が遅いもののその分装甲が厚い。となれば、近接型のシュナイダー相手に拳やナイフを使って格闘戦をしても、硬さで耐えて勝てる可能性がある。
機体特性からその思い切った作戦をとる勇気は評価するが、七歌は

敵が知識ばかりで経験が不足しているとそこで理解した。
「甘いなぁ。確かに機体は耐えられるかもだけど、レバーブローなら仕留められるんだぜ？」
狙いは悪くないが自分にとって経験不足な敵の土俵で戦うのは間違っている。
それを教えてやるとばかりに七歌は相手の狙撃を回避しながら接近し、敵の望んだ格闘戦に突入してやる。
七歌が一定の距離まで迫った時点で敵はナイフと拳を構えた状態になっており、いつでもシュナイダーと近接で戦えるぞとアピールしていた。
一方の七歌は大きなブレードは邪魔だからと背負い。敵と同じくナイフと拳で戦う準備をする。
もう少しでお互いの攻撃が届く。その距離まで近付いたところで七歌は膝蹴りを相手の胸部叩き付けた。
「おらよぉ!!」
手で武器を構えているからといってそれを使うかどうかは自由だ。
そも、七歌の狙いは機体では無く、中にいる操縦士への間接ダメージ。
機体が揺れればコックピットにも衝撃が伝わる。その状態でまともに操縦できるかなと少女は悪どい笑みを浮かべてショルダータックルを喰らわせる。
「おかわり追加！」
再び中にいる人間にダメージが通るように攻撃を仕掛ければ、案の定、相手は七歌への反撃に移るのが遅れていた。
敵が逆手持ちのナイフを振り下ろそうとする瞬間、七歌は背中から機体を倒し、空振った相手のナイフに蹴りを入れる。
無茶な動きをする度、七歌側のコックピットもそれなりにシェイクされているのだが、絶叫系に強い彼女にとってこの程度の揺れは問題ない。
ナイフを蹴ったことでそれを持っていた相手の片腕が跳ね上がると、七歌は腹筋の要領で自分の機体を起こしてそのままヘッドバット

を敵胸部に叩き付ける。
もしかすると、これで頭部が潰れてアイカメラも死ぬかもしれないと思ったが、機体のダメージレベルは中破で済んでいる。
なら、再び胸部に衝撃を受けたたらを踏んでいる敵に向け、七歌はこれで止めだとハンドガンを抜いて首の接合部に向けて引き金を何度も引いた。
その結果、
「よっしゃ、勝利！」
小田桐勢力の敵機を全て撃破した事で、七歌たちのチームの勝利だと画面に表示される。
いくら装甲が厚くても動きを阻害させないよう薄くなっている部分はあり、そこを突いて銃火器の扱いに特化した敵を銃で仕留めてやったぜと七歌は得意気に勝ち誇る。
だが、その戦い方はその辺のチンピラがやっている喧嘩殺法であり、見ている側にすれば高度な操縦技術なのは認めるが、浪漫溢れるロボットの戦い方としてどうなのかと思わずにはいられない。
もっとも、外野がどう言おうとも七歌たちの勝利は既に決定しているため、残っている味方機であるゆかりと母艦に通信を繋いだ。
「いえーい。最後の敵も倒したよー」
《おつかれー。てか、ほとんど七歌が倒したね。私は母艦の上で撃ってるだけだったし》
《お疲れさま、七歌ちゃん。単機突入で制圧って感じで大活躍だったね》
「へへっ、私と相棒のシュナイダーにかかればどんな敵も楽勝よ」
他の者たちが慣れてくれれば違った結果になるだろうが、現時点では七歌の操縦技術と操作適性がトップなのは間違いない。
このまま何戦かしても恐らく七歌がいるチームの方が有利になるだろうと、話を聞いている味方も笑っていれば、話をしていた者たちのモニターに有視界通信が割り込んできた。
《ほう。大した自信だな。だが、いくらエース機だろうと味方が消えればどうする事も出来まい》

モニターの一部に割り込んで表示された映像には、七歌たちのいるコックピットの倍の広さはあるだろう操縦席が映っていた。
しかし、そこはただ広い訳ではなく、下段に操縦桿を握った銀髪の少女が、上段にふてぶてしく座った暗い青髪の青年がいる。
既にリタイアしてロビーで映像を見ている者たちも、その光景を見て大いに心を揺さぶられているに違いない。
何せ、銀髪の少女と青髪の青年がいるそれは一部の者が強い憧れを抱く複座式の操縦席なのだから。
「うぇっ、何それカッコイイ！　けど、八雲君ってそれいる意味あんの？　下の席にいるソフィアさんが操縦だよね？　ただの指揮官なら母艦にいた方がよくない？」
《勿論、あるさ。こうやって俺側で操作すれば》
映像の中の青年が横からキーボードのような物を引っ張り出し、それをいくつか操作すると空が光った。
一体何がと慌てて七歌が外の様子を確認すれば、上空にいる謎の機体が七歌側の母艦のいる方角に向けてビームのような物を撃っていた。
《きゃぁぁぁぁぁぁっ》
《きゃあっ》
そして、その結果を示すようにゆかりと風花の叫びが聞こえると、マップにあった友軍を示すコードが全て消滅していた。
代わりに七歌の機体ダメージが全回復しているが、空を飛んでいる相手にどうしろと言うのだと理不尽さを覚える。
相手の機体はウォーカーより二回りほど大きく、背中に蜘蛛足を広げたような変わった飛行ユニットが光っている。
自分たちのウォーカーはどの装備でも地味な茶色なのに、どうして湊とソフィアの機体は格好良い白なのか。
訓練目的の物であって遊びじゃないと言いつつ、自分たちだけチート機体に乗りやがってと思っていると、何やらモニターに〝装備変更可能〟の文字が現われていた。
何だろうと思って選ぶと、どうやらタイプを無視した装備変更をこ

の場でする事が出来るらしい。
　さらにセイフティーモードとして歩行時の揺れのカット、追加パッケージとして立体移動用のワイヤーアンカー、道路滑走用のサブホイールが解禁らしい。
　このモードが出来るなら歩行時の揺れで適性無しになった人間も遊べたのではと思わなくもなかったが、七歌は浪漫溢れる機体にしようと高速移動のイエーガーにパンツァーのミサイルポッドを装備する事にした。
　敵だけ飛行ユニットとビーム兵器を持っている事を不公平に感じたが、どうせ短期決戦でしか勝負出来そうにない。
　そう考えて全てを選んで装備が換装されると、七歌は最初からサブホイールで全力疾走する構えを取った。
　モニターにゲーム開始のカウントダウンが表示され、それがゼロになった瞬間に敵のいる方へ進みながらミサイルを一斉に撃ち放つ。
「墜ちろカトンボ!!」
　このミサイル群で死ぬが良い。そんな思いで七歌の機体から次々にミサイルが放たれれば、
《その程度では墜ちませんわ》
　モニター越しに薄い笑みを浮かべたソフィアが言葉を返し、僅かに移動すると後ろの青年がキーボードを叩いて謎の機体の持つ銃から放たれたビームでミサイルが薙ぎ払われる。
「ちくしょおおおおっ!!」
　そして、その薙ぎ払いに巻き込まれる形で七歌の機体も直撃を受けて爆散し、まさかの企業トップの横槍による体験学習参加生徒の全滅でゲームは終了したのだった。

第三百八十六話　ＥＰ社での昼休み

昼――ＥＰ社・食堂

シミュレーターでの操縦体験を終えた一同は、いい時間だからと湊とソフィアに案内されて地上フロアまで戻ってきた。

そこには武多に会う前にお茶を用意してくれた女性が待っており、全員に短期用のＩＤが登録された名札も兼ねたカードを配って、ここで働いている間はパスケースに入れて上着の左胸ポケットに付けておくよう説明があった。

別に無くしたところで罰などはないものの、昼休みや休憩時間に専用の機械にＩＤカードを通すとそのまま食事や飲み物を買う事ができるらしく、無くした場合は全て自腹で買うことになるのだとか。

ＥＰ社の食堂はレストランとして一般開放もされており、かけうどんから高級なコースメニューまで幅広く揃えている。

無論、ファミレスのようなエリアと高級なコースメニューを提供するエリアは建物ごとしっかりと分かれており、建物の外に出ない限りは利用客同士が出会う事はないので、折角の記念日の食事を騒がしい子ども連れや学生たちの話し声で台無しにされるような事はおきない。

社員食堂を兼ねた部分はその中のファミレスエリアになるので、流石にコースメニューなどは出てこないが、それでも昼間からボリュームたっぷりのステーキを食べる事などが可能だ。

学生たちの食事代は湊のポケットマネーから払われる事になっているため、タダ飯やジュースを自由に飲みたいなら無くすなと伝えれば、全員が大きく縦に首を振っていたので無くされる事は無いだろう。

そうして、ＩＤカードを受け取ってから大勢の客で賑わっている食堂へやってくると、一同は事前に用意してあった席へ案内される。

「うっは、俺ここくんの初めてなんスよね。かーちゃんに言ったら晩飯抜かれっかも」

「……ただのファミレスだろ」

人数が人数だけに事前に用意しておかなければ近い席を確保出来ないため、今日は八人席、六人席、八人席と通路を挟んで三つ横並びになるよう準備したが、明日以降はいくつかの班に分かれて作業することもあって、席は他の客と同じように案内される事になっている。

そういった説明を受けつつ席に座った渡邊が、母親に羨ましがられて晩ご飯が抜きになるかもと言えば、湊がただのファミレス程度で大袈裟なと呆れた顔をする。

近い場所にいたため二人の会話が聞こえていた生徒たちは、これだけ内装や料理のグレードが高いファミレスなんてそう無いぞという目で彼を見た。

だが、見られた本人は六人席の方で隣に座ったソフィアと二人で一つのメニューを見ており、すぐにその視線は今すぐ爆散しろクソイケメンといった種類に変わった。

ちなみに、湊たちの席は美紀、湊、ソフィア、その対面にチドリ、西園寺、渡邊と変則的な形になっている。

他のメンバーは男子が主に左側の八人席へ、女子は右側の八人席に座っているが、湊たちの席は希望者の中からクジ引きで決まったのでアイギスや七歌があぶれたのは運でしかない。

ただし、同じ企業トップの立場だからとクジ引きを免除されたソフィアに思うところがある女子の方からは、職権乱用すんな今すぐ離れろというヤジが飛んだ。

「ちょーっと家の八雲君と近くないですかぁ？　てか、さっさと離れろや愉快な髪色した売女が」

「売っ……この色は生まれつきの地毛です。それに、この場には似たような髪色の人間が他に二人もいるでしょう」

ナイフとフォークを持った手でテーブルをドンドンと叩いている七歌に対し、ソフィアがその発言はお前の友人にも刺さっているぞと返す。

何せ、真田と同じく髪の色素が薄い美紀は日本人には珍しいグレーっぽい髪色であるし、ラビリスにいたっては微妙に濃さが違うだけで銀髪赤眼と基本的に色が被っている。

もっと言えばチドリなんて非常に珍しい赤髪なので、ソフィア以上に愉快な髪色と言えなくもなかった。
体験学習で受け入れてくれた企業のトップを売女呼ばわりした事も問題だが、友人を巻き添えにする罵倒など大丈夫なのかとソフィアが見返せば、ナイフとフォークを持ったまま腕組みをした七歌がふんぞり返って言った。
「私には当てはまらないので問題ありません！」
「なんと身勝手で傲慢な……」
「こっちにゃ、チート機体でやられた恨みがあるんだよ！　ふざけた真似しやがって。私にも飛行ユニット装備のウォーカーを操縦させろ！」
折角の勝利をエクストラステージらしきもので台無しにされた七歌は怒っていた。
対等な戦いや多少の苦戦を覚悟するような相手ならばまだしも、完全に制空権を奪われた上で自機では扱えない装備で蹂躙されたとなれば、その理不尽に対して怒りを抱くのは理解できる。
けれど、たかがゲームではあるのだ。それで受け入れ先のトップを罵倒するのは拙いと判断した渡邊が話題をシフトさせる方向で会話に加わった。
「あ、そうそう。それ聞きかったんすよ。会長らが乗ってた浪漫溢れる複座式のロボットってなんなんすか？」
「あれはウォーカーの次世代試作機で機体名〝リヒター〟だ。飛行ユニットと荷電粒子砲の実戦データを得るために開発されたが、それに見合ったエネルギーを搭載する必要があるという事で機体自体が大きくなったという設定がある」
「ちなみに、わたくしが機体制御を担当し、湊様が火器系統を担当しておりました」
ゲーム内に出てくる機体や装備は設定からグラフィックまで全てＥＰ社の社員たちが作ったものだ。
最初に湊とソフィアの方から作業ロボットの用のシミュレーターを作るという話が挙がった際に、是非とも設定から何から作らせて欲

しいと何人もの社員がやる気を出し、サークル活動として製作に当たったという。
進捗状況を確認していた湊も流石に凝りすぎだとは思ったが、社員たちはサークル活動だからと金銭を受け取らなかったため、作業場所の提供と必要な機材の貸し出しだけしてやり後は任せる事にした。
その結果、人型搭乗兵器の台頭によって戦争の方式が変わった世界が舞台だとか、共和国の主戦力である第四世代ロボット〝ウォーカー〟に、帝国がついに実戦に投入可能な機体として開発した試作機〝リヒター〟などといった存在の設定がポンポン出てきているらしい。
ＥＰ社は人種や国籍にこだわらないグローバル企業なので、日本のアニメや外国のＳＦなどに詳しい者が多い事もあってそのサークルは人気らしい。
湊とソフィアがそういった説明をしていれば、湊たちの後ろのテーブルに座った者たちから声が掛かった。
「ハーイ、さっきぶりね学生さんたち。アナタ達も代表たちのリヒターにやられたの？」
声をかけてきたのは難所作業ロボットの操縦をしていた黒人女性のビアンカだった。
ちなみに、ビアンカを含めた社員たちは湊を代表と呼び、ソフィアを社長と呼んで呼び分けている。
そんな彼女と同じ席に座っているのは他の操縦士や機械技師らしいが、全員が先ほどの話にあったサークルに所属しているメンバーのようで、金髪を短く刈上げた壮年の男性も日本語で学生らに話しかける。
「リヒターは強かっただろう？　僕たちも悪ノリしてビーム兵器を積んでしまったが、その分、射撃時のデータ入力をマニュアルで設定する必要があるようにしたんだ。おかげで機体を動かしながらではビームは撃てないって事でお蔵入りするはずだったんだけど、ビアンカが複座式なら行けるんじゃって言ってね」
「だって、せっかくプログラムを組んだんだもの。使ってあげたいじゃない。それにジーモたちだって複座式最高って」

「しょうがないだろ。美男美女の精鋭パイロットが操る最強の機体。これは万国共通の浪漫だよ。君たちだってそう思うだろ？」
話を振られた学生たちの中で、ほとんどの男子が腕組みしたまま首を縦に振って分かるよとアピールする。
それを見ている女性陣の視線はやや白けているが、男子が共感してくれた事でジーモと呼ばれた男性は「だろう！」と嬉しそうな顔になった。
「やっぱり、分かってくれるか。いやぁ、日本の子どもたちは理解が深い子が多くて嬉しいよ。でね。代表たちに複座式のコックピットを作って貰えないか聞いたんだけど、サークルで作った物が他の技術に応用できる物もあったからって特別ボーナスで一機だけ作って貰えたんだ」
「そうして、完成してから操縦士と火器管制で適性の高い者をって事でオーディションをしたんだけど……ここでビーム兵器の設定が足を引っ張ったのよ」
料理を注文して待っている間に話をするビアンカは、そこまで話すと急に遠い目になってしまう。
どこからどう見てもかなりの苦労があったんだと察した小田桐が、学生たちを代表して問い返した。
「もしかして、誰も使えなかったんですか？」
「その通り。地上で数百メートル先の的に当てるって訓練をしたんだけど、地上での減衰率だとか重力を考慮した狙いの補整だとかを考える必要があってね。ゲームだからこそリアルな部分も必要だってプログラムを組んだ人らと扱えなかった操縦士らで乱闘騒ぎよ」
「そんな、ウォーカーで十分訓練が可能なら、リヒターはあくまでオマケで用意した趣味の産物なんでしょう？」
「そうなんだけどね。割とどっぷりその世界観に浸かってた事もあって、パイロットとエンジニアの本気のぶつかり合いみたいになっちゃって」
こんな機体で戦える訳がないだろうと声を荒げるパイロットに、自分の腕のヘボさを棚にあげるなと言い返すエンジニアたち。

ロボット物の作品なら裏話で実際にあってもおかしくないようなシーンだが、小田桐が言ったようにリヒターの存在はあくまでサークルメンバーの悪ノリから製作が決まった趣味の範疇だ。
それで社員たちが殴り合いの喧嘩になるなど馬鹿らしいので、その場にいた冷静な社員が湊たちを呼んで騒ぎを収めた。
当時、声を荒げたパイロット側だったジーモは、やってきた天ぷらうどんを食べながらあの時は本当に怖かったなぁとしみじみ語る。
「本当にあの時は死を覚悟したよ。遊びで流血沙汰になるくらいならあの部屋の全てを壊すぞって冷たい声で言われてね。騒いでいた僕たちは皆そろって〝ＤＯＧＥＺＡ〟で謝ったさ」
「代表のおかげで頭が冷えた訳だけど、結局のところ問題は解決していなかったのよ。で、喧嘩の原因を聞いた代表と社長が操縦士の腕の問題か、プログラムの設定ミスかを検証してくれる事になったんだけど……二人とも普通にビーム撃てたのよねぇ」
自分も難所作業ロボットの操縦士に選ばれるだけの実力があるだけに、ビアンカがそれはそれはショックだったとカツ丼をかき込みながら語る。
何せビーム兵器だ。ＳＦ好きなら一度は夢に見る浪漫溢れる武器をかなりのリアリティで再現できたというのに、それが自分の実力の問題で扱えないとなればダメージは大きいだろう。
けれど、ビアンカはあれだけスムーズに難所作業ロボットを操縦していたのだ。
そんな彼女でも扱えないなどという事があり得るとは思えなかった順平が、本当にパイロット側の問題だったのかと尋ねてしまうのも無理はない。
「え、じゃあ、エンジニアの言う通りパイロットの腕の問題だったんスか？」
「本当に残念な事にね」
「ああ、結果から言うとそうなってしまうね。一人だけならプログラムが厳し過ぎるって修正を求められたけど、二人とも出来た訳だしね。一定以上の演算能力があれば出来ると証明されてしまったら何

も言えないよ」
この会社で働いている者たちは湊とソフィアが桁外れの頭脳を持っていると知っている。
専門ではない分野の話にもある程度参加出来る知識量に、コンピューターに引けを取らないレベルの演算能力も合わされば、ビーム兵器の軌道計算などそれほど難しくないのだろう
ただ、ビーム兵器は二人にしか扱えなくても、複座式なら機体制御を担当する者が必要なはず。
どうしてそっちもソフィアが担当しているんだと思った渡邊が質問をぶつけた。
「あれ？　でも、それなら操縦士側は誰でも良かったんじゃないんすか？」
『見た目のつり合いがね……』
渡邊の質問に対し、ビアンカと同じテーブルの社員らも同時に溜息混じりに答える。
確かに渡邊の言う通り、飛行ユニットの操縦にコツは必要だがそれだけなら適性を持つ操縦士はそれなりにいた。
だが、サークルメンバーには色々な派閥があるため、誰でも良いなら美男美女の代表と社長が正規パイロットで良いだろうとの意見が出てしまい。立候補する予定だった者たちも最強の機体には最高のパイロットこそ相応しいと思わず認めてしまったのだ。
ここにいるビアンカとジーモも立候補する予定だった内の一人な訳だが、そんな彼女たちも今ではその選択が間違っていなかったと思えると笑って話す。
「まぁ、おかげで同人誌組には好評だったよ。二人をモデルにしたアーヴィルとゼスティナっていう美男美女の帝国最強パイロットってね」
「ほら、これがその画像よ」
食事が終わったビアンカが隣にいた女性からタブレット端末を借りると、そこに湊たちをモデルにしたキャラのデザイン画を表示して学生たちに見せてくる。

男であるアーヴィルはただの魔王だろという上質な黒い服を着ているだけだが、女性のゼスティナはパイロットスーツというより競泳水着の上から丈の短いジャケットを着ているような不思議な服装をしていた。
しかし、確かにロボット物の女性用パイロットスーツにはよくある謎のエロデザインだと、食い入るように見ていた順平が頷きながら感想を述べる。
「おおぅ……帝国のパイロットスーツ、これめっちゃセクシーじゃないッスか。んで、男の方は支配者感すごいッスね」
「あ、それは専用衣装っていうか軍の物とは違う設定なの。レイヤーの子が実際に作ってもくれたんだけど社長たちは着てくれなくてね。本当に残念で残念で」
ビアンカが端末を操作すると今度はレイヤーの人が作ったという衣装を着たマネキンの画像が表示される。
野郎である湊の方はどうでもいいが、美人でスタイルの良いソフィアがパイロットスーツを着ている姿は見てみたい。
画像を見せてもらっていた男子たちの心は一つとなり、湊の友人である綾時が先陣を切って会話を誘導していく。
「湊、社員の人たちが頑張ってるんだから労いも兼ねてサービスしてあげなよ」
「そうだぜ、有里。フェザーマンもやったんだから今更恥ずかしがることもないだろ」
「……いや、頼まれて一回だけは着たぞ?」
くどいようだが湊のコスプレなど男子たちにすればどうでもいい。けれど、彼が着ればソフィアも一緒に着替えてくれるはず。
そう思って順平が綾時の援護に回れば、食後に緑茶を飲んでいた湊がちゃんと一回は着たぞと返してきた。
これには話を聞いていた社員たちも思わず立ち上がって驚き、一体いつそんな面白いことをと詰め寄るように尋ねた。
「え、代表、それワタシ聞いてないですよっ!?」
「僕も聞いてません！　ていうか、いつそんな事を?」

「写真は!?　写真はないんですか!?」
　同人誌組かレイヤー組であろう女性社員が血走った目で迫れば、湊は相手の額に手を置いて遠ざけつつ静かに答える。
　それは衣装の他に同人誌やステッカーなど、サークルメンバーが自費で作った数々の品を渡された数日後の事だった。
「確か……無理矢理に一式渡されてから三日後くらいか。同人誌を読み終わったソフィアが、アーヴィルの格好を見てみたいと社長室で言ってきてな。本人もゼスティナの格好をしてみるから一緒に着て欲しいと」
「え、二人でコスプレしたの？　しかも、社長室で？」
「その時は別に仕事してた訳じゃないしな。普段、色々と無茶を言っている自覚もあるし。その程度の頼みをたまに聞くくらいはする」
　社長室で若い男女が二人きりでコスプレ大会をしたと聞いて女性陣の視線がやや冷たくなる。
　ただ、二人がその時いたのは社長室という名前で呼ばれている湊のＥＰ社内での私室だ。
　本当の社長室はしっかりと存在し、そちらは重要な来客などがあった際に使う特別な部屋なので普段はほとんど使っていない。
　そして、お風呂やキッチンにベッドもあるような彼の私室でコスプレを楽しんだと聞いて、思わず下衆な勘ぐりをした渡邊がにやけながら湊に声をかけた。
「会長、コスプレしてそれで終わりっすか？　普段と違った衣装見て満足したんですか？」
「……お前らは下世話な話が好きだな本当に。邪推も甚だしいぞ」
「いや、だって若い男女が二人きりだったんでしょ？　普通に考えたらその後は……ねぇ？」
　もし自分がソフィアのコスプレ姿を見れば、その場で服を全パージしながらのダイブで襲いかかる自信がある。
　渡邊以外も数人似たような感想を抱いているようなので、本当に馬鹿しかいないなと湊が忠告しようと思えば、話を聞いていたソフィアが心の底から呆れた表情で口を開いた。

「衣装を着ている姿を見たいのに、脱がすような事をしては意味がないではないですか」
「え、でも、着ながらでも出来るって聞いたことありますけど……」
「服の材質によりますし、社員が是非受け取ってと贈ってくれた物をそのような形で汚しては失礼でしょう」
「はい。仰る通りです。すんません……」
渡邊が言ったように普段と違った姿を見ることで燃え上がることもあるかもしれない。
ただ、ソフィアは美しい物は美しいままに楽しむタイプであり、そこに色事を絡めるような頭の中お花畑ではなかった。
昔の彼女を知っていれば、本当に丸くなったものだと感動すら覚えるところだが、当時の彼女を知っている青年は黙ってお茶を飲んでいる。
この二人がかつては殺し合っていたと聞いても誰も信じないだろう。その変化をおかしく思いながら眺めていた綾時が、今の両者の関係性をもっと詳しく知りたいと思ってコスプレの話題に乗っかる形で話しかけた。
「湊は衣装とかで好きな物はないのかい？　これを着ているソフィアさんが好きとかっていうのは」
「……特に考えた事は無いな。こいつの私服は基本的にドレスだけだし。逆に言えば何を着ても割と新鮮で、大概の物は似合ってる」
「まぁ、湊様には様々な制服姿を見ていただいているので、創作パイロットスーツも趣が違う程度のものでしたね」
私服が基本的にドレスというのもツッコミどころだが、本物のお嬢様といった雰囲気で穏やかに笑うソフィアの言葉に引っかかる部分を覚えて、女性陣を中心に場の空気が張り詰めてゆく。
そんな中でも青年はお茶を飲みながらどこからか取りだしたチョコレートをかじっているが、隣のテーブルにいた真顔のアイギスから説明を求める声が届く。
「……八雲さん？　ご説明をお願いします」
「そのままの意味でしかないが？」

説明も何も聞いた通りでしかない。
ソフィアが様々な衣装を着て、湊はそれらを見てきただけの事だ。
けれど、アイギスたちが求めている答えはそうではないと理解しているので、湊は指を鳴らすだけでお茶のお代わりを持ってこさせつつ言葉を続ける。
「私服がドレスばかりだった反動なのか。新鮮な気分になれるからとソフィアは割とコスプレ好きなんだ。俺は海外の色んな地域にいたし、ＥＰ社の中に企業向けの制服を作っている部門もある。だから、こいつは二人の時に何度か民族衣装や制服姿を見せてくる事がある」
「個人的なファッションショーのようなものです。基本的には見ていただきたいだけなので、あなた方が邪推しているような事はありません。まぁ、それとは別に夜になれば寵愛を頂くことは勿論ありますが」
コスプレは単なる気分転換のファッションショーである。そう断言しておきながら、ソフィアはどこか挑発的に女性陣に薄い笑みを向ける。
この場には湊と肉体関係を持っている者が数名いるが、夏以降は湊との間に溝が出来たためにそういった行為を行なっていなかった。
しかし、常に湊側に立って彼のために動いているソフィアは、共に行動している事も多いため、それなりの頻度で肌を重ねていた。
影時間を終わらせるための計画や、最終的に倒すべき敵の存在など、ソフィアは他の者が聞かされていない事を多く知っている。
だからこそ、彼女は自分こそが最も彼に近い場所にいるのだとアピールした訳だが、楽しい昼食の時間が修羅場に変わる前に、湊はマフラーから取りだした記録媒体のディスクが入ったケースを後ろの席に放り投げた。
「……ジーモ、これをやる」
「おっと。……あの、これは？」
急に投げられた事で驚きながら無事に受け取ったジーモは、ケースとディスクを様々な角度から見てみるも、その内容を表わすものはどこにも書いていない。

中身を見ようとパソコンに入れたらパソコンの中身が初期化された、などという悪戯は御免被るため、その中身を教えて欲しいと青年の答えを待つ。
ジーモと同じテーブルにいた社員たちの視線も集まり、学生たちも何となく湊に視線を向ければ、そのタイミングで湊は口を開いた。
「リヒターの実戦データを基に作った荷電粒子砲の補助プログラムだ。リヒターのような威力の調整は出来なくなる代わりに、照準に合わせてプログラムが機体と兵器の位置を微調整してくれる」
「つ、つまり、ビーム兵器を一般配備可能にするんですか？」
「ＭＡＰ兵器から通常兵器になってしまうが、そういった認識で構わない。戦争はそろそろ次のステージに向かうべきだろう？」
湊の説明を聞いたことでディスクを持っているジーモの手は震えていた。
リヒターは火器管制の人間が環境データなどを入力することで、機体の持つエネルギーを上限に威力を上げることが出来る。
だが、そういった細かな調整が出来なくなる代わりに、湊の作った補助プログラムを入れた機体はこれまでの銃火器のようにビーム兵器を使えるようになる。
それは青年の言葉通り、戦争を次のステージへ強制的に進めるだけの力を持った代物。
リヒターに搭載したビーム兵器のプログラムを組んだ者たちですら、まだそういった汎用兵器へ落とし込むことが出来ていなかっただけに、青年が組んだプログラムが正常に稼働するならサークルメンバーたちの考えたゲームの世界に衝撃が走る世紀の大発明になる。
ジーモたちのテーブルにいた同人誌組の女性は、先ほどの湊の言葉を聞いてインスピレーションが湧いたのかメモ帳を取りだして何やら呟きながら書き込んでいる。
「そう。そうだったのね。アーヴィル様の目的は帝国による世界の支配ではなく、戦争の先にある人類の破滅を見ること。だから、彼は新たに帝国で開発されたビーム兵器のデータを共和国へ流し、戦争のさらなる激化を目論んだ。超越者であるが故にこの世に一切の希望を

持っていない。だから、自分の手で世界を破滅へと誘導する。そんな彼の孤独を知っているゼスティア様は、己の無力を嘆きながら……」

どうやら次々と新しいアイデアが浮かんでいるようで、同じテーブルにいる社員たちもサークルメンバーに連絡を取って、今日の仕事が終わってからにでもすぐ実験に移そうと話を進めている。

十歳以上年が離れた大人たちのそんな姿に学生たちは唖然としているが、食事を終えたことで移動することにした湊が立ち上がりながら声をかけた。

「うちの会社はこんな風に社員たちがのびのび働けるようになっているんだ。夢を仕事にって訳じゃないが、好きな事で稼げるっていうのは心身の健康にも影響がある。お前たちも興味があってここへ来たなら、好きな事を仕事に出来ている大人の姿をよく見ておくといい。じゃあ、昼休みは残り三十分ある。時間になったらＩＤを受け取った場所に集合しておいてくれ。俺とソフィアはその間に午後の仕事の指示をしてくる」

それだけ話すと湊はソフィアと共に食堂から去って行ってしまった。

ジーモたちもサークルメンバーたちと話すことがあるからと去って行き、残された学生たちは湊の言っていた〝好きな事を仕事に出来る〟という言葉について考えながら、午後は一体何を見せて貰えるのだろうかと期待に胸を躍らせながら昼休みを過した。

第三百八十七話　仕事の理想と現実

夜――関東・某所

十年前、滅びに魅入られた桐条鴻悦が目指した世界の終焉。

幾月たちはそれを引き継ぎ、新たな理の敷かれた世界を生み出そうとした。

特記戦力である湊の死亡という追い風もあり、敵の分断に成功し、さらに幾月が人質に取られている状態を装った事で七歌たちを簡単に無力化出来た時点で勝利は決まったものと思われた。

だが、死んだはずの湊がニュクスへの対抗手段（カウンター）として惑星に遣わされ、その介入によって幾月たちは撤退を余儀なくされた。

受けた傷の回復と体勢を立て直すため、関東地方の田舎に作っていた予備の拠点に潜伏している間、幾月は理たちが戦った湊のデータとストレガの別働隊が戦ったタナトスを従えた少年のデータを詳しく解析していた。

「ふむ……あの異常な力はやはり黄昏の羽根によるブーストか。しかし、有里湊に匹敵するもう一人の少年が持つ力は一体何だ？」

エルゴ研から救い出されたストレガたちにすれば、タナトスは湊の力の象徴とも言える特別なペルソナだ。

力を解き放ちシャドウの姿になれば、死を恐れぬタカヤですら寒気を感じて思わず呑まれそうになってしまう。

そんなタナトスを他の者が従えていると聞いた時には、耳を疑ってつい聞き返してしまったりもしたが、別働隊側にアナライズが使えるメノウがいたことでデータも残っていたため、タナトスを持つ湊クラスの力を持った少年の存在が改めて確認されることとなった。

神や悪魔などと同じ名を持つペルソナの姿は、人々の持つその存在に対するイメージと召喚者の心の状態が作用して決まる。

だからこそ、召喚者本人が特別強いイメージを持っていなければ、集合無意識の中にあるイメージの姿で現われる。

それを思えば謎の少年の持つタナトスと湊の持つタナトスが全く同じ姿であっても不思議ではない。

現に湊が過去に召喚したオルフェウス、理の持つオルフェウス改、幾月の持つアルケー・オルフェウスは細部に微妙な違いはあれど、基本的にはただ色が違うようにしか見えないのだ。
幾月も同じペルソナを持つ部分については、そんな偶然もあり得るだろうと思う事も出来ていたが、黄昏の羽根の力を一切使っていないにもかかわらず、羽根を身体に内蔵した湊や理たちと同等の力を持っている少年が気に掛かった。
「……あれだけの力を持っている者を有里湊は隠していたのか？　普通に考えればあり得ない。あれはアイギスや吉野千鳥の安全を第一に考える。切り札を温存するよりも、本人たちを危険な戦いにつれていかない事を優先するはず」
何かが引っかかる。幾月は思考の隅に刺さった小さなトゲの正体を探るべく、メノウのアナライズで得たデータを過去の研究データと比較しながら見てゆく。
もしかすると、被験体の生き残りかと疑ってみたが、残念ながら波長が類似しているのは湊しかおらず、謎の少年が被験体の生き残りの線は消えた。
無論、完全な他人であるはずの湊と類似した波長を持っている事も十分に異常なのだが、湊には他人のペルソナ能力を奪って自分の物にする能力があった。
それを使えば湊は他人の力を我が物と出来るので、少年の力が湊に似ているのではなく、湊が少年の力を奪って使っていた可能性がある。
何かもっとその力の根源を知るための手掛かりはないか。幾月が複数のペルソナの波長を合わせて比べてみたりと、様々な方法でデータを比較し続けていた時、九十八パーセント適合するデータを見つけた。
「これは……」
驚きに目を見開いた幾月の視線が画面に釘付けになる。
湊と謎の少年の類似率は九〇パーセント程度。これでも十分に驚異的な一致率だが、九十八パーセントとなると時間経過による自然な

誤差と見なされ同一人物と判断できる。
まさか桐条グループから持ってきたデータの中に謎の少年の情報が入っているとは思わなかったが、幾月はその画面に表示された存在を見て、何故これまで湊の友軍として参戦してこなかったのかを理解した。
「そうか……そうか、そうだったのか!! 儀式は成功していた。宣告者であるデスはちゃんと降臨していたんだ!!」
謎の少年の持つ波長と適合していたのは十年前にアイギスと湊が戦った大型シャドウ〝デス〟のもの。
つまり、どれだけ人にしか見えない姿をしていても、あの謎の少年は完全な状態でこの世に降り立ったデスだという事だ。
そういう事であればこれまで参戦してこなかった理由も納得がいく。
参戦しなかったのではなく、封印があったために参戦できなかったのだ。
惑星に生きる命を存続させるため遣わされた湊、全ての滅びの宣告者として遣わされたデス。
互いの存在理由は対極なものだが、だからこそ彼らは〝その時〟までは共存できるのだろう。
幾月たちはあの日、全てを終わらせて新たなる理の敷かれた世界を迎えるつもりだった。
しかし、世界はまだその段階に到っていない。滅びを齎す者をこの世に降臨させるには人々の死を求める心が足りないらしい。
「ふふっ、そういう事なら準備を進めよう。天秤は既に傾き始めている。デスが復活した時点で滅びは確約されたようなものだ。君が本当に惑星のペルソナであったとしても、人類の総意を覆すことは出来ない」
人は流されやすい生き物だ。不安な状況が続けばネガティブな感情は伝播する。
幾月たちはただそれを少しばかり突いて、滅びこそが真の救済であると嘯けば、心の弱い者たちがニュクスによる滅びを受け入れようと

するはずだ。
湊がどれだけの力を持っていたとしても、その規格はあくまで人のそれ、神クラスのペルソナを持っていても真なる神には敵わない。
どれだけ足掻こうと滅びは避けられない。故に、存分に抵抗してみせるがいいと幾月は笑った。
１１月２６日（木）
午前――ＥＰ社
職業体験学習も本日で三日目。初日は施設案内やＥＰ社がどういった分野の製品を扱っているかの説明をして回っただけだったが、二日目からは二十人の学生たちをいくつかの班に分けて作業させていた。
近未来的な施設に加えて、少年たちの心を大きく揺さぶったロボットの操縦体験があっただけに、学生たちはどれだけすごい事をさせて貰えるのだろうかと期待に胸を膨らませた。
しかし、実際に作業を分担された二日目、彼らに与えられた仕事は通販の配送センターに近い物だった。
一部の者はパワーアシストスーツを装備して、大きな荷物を運ばせてもらったりもしていたが、それはあくまでサービスで試させて貰えただけだ。
基本的には次々と送られて来る注文に合わせて荷詰めし、注文が落ち着いてきたタイミングで別の作業をさせて貰える形になっている。
綾時たちのいる班は今日も段ボールを組み立てて、リストに書かれた製品を緩衝材と共に入れるとガムテープでしっかりと箱を閉じてベルトコンベアで流してゆく。
商品の製造ラインでベルトコンベアを流れる商品を見つめ続ける作業よりも楽だが、近未来な雰囲気に憧れを抱いていただけに、実際の作業との落差で学生たちのやる気は削がれていた。
ガムテープで蓋を閉じた箱をベルトコンベアの方へ送った綾時は、ふうと溜息を吐いてから腰を叩く。
「ふう……単純な作業だけど、続けていくと腰も痛くなってくるね」
「逆に単純過ぎて精神的に疲れてくるけどな。有里ももっと良い仕事

させてくれりゃ良いのによ」
最初はここへ来て良かったと喜んでいた順平も、これならコンビニバイトの方がまだ代わり映えがあるぜと愚痴を吐く。
冬の寒空の下で窓ふきをさせるような企業よりはマシだが、こんな配送センターのような仕事ならばＥＰ社でなくとも体験できる。
パワーアシストスーツを試させて貰えたときはかなり感動したものの、長時間は慣れていないと関節を痛めるからとすぐに他の者と交代させられてしまった。
これでは桐条グループ以上の大企業だからと期待してＥＰ社を選んだ意味がない。
順平がそんな風に文句を言いながら作業をしていれば、苦笑していた綾時が新しい段ボールを組み立てながら口を開いた。
「けど、こういう仕事も大切だよ。電話一つやパソコンや携帯でボタンを押すだけで注文が出来る時代だからね。近所で買えるような電池だったりマンガだったり、そんなのを一個だけ頼むような人も増えてる。実際、順平君もたまに通販を利用してるだろう？　その裏には働いている人のこういう地道な頑張りがあったりするのさ」
便利な時代になったからこそ買い物の仕方も徐々に変化してきている。
これまでは商品代金に送料が上乗せされるタイプが主流だったが、大手通販会社が台頭してきたことで送料無料の特典だったりが当たり前になりつつある。
全ての企業がそれに合せて値段を下げたり、送料の負担を始めたりしているが、商品を発送するための作業は変わらない。誰かが注文書を見て箱や封筒に入れて送ってくれているのだ。
実際に自分たちも似たような事をしてみて、これは中々に大変な作業だと理解する事が出来た。
今後、もし自分が通販やネットショッピングをする事になったとしても、出来る範囲で商品をまとめて注文しようと思えるくらいに綾時もこの仕事の大変さを知る事が出来たのだ。
ファルロスとして湊の中から見ていた時とは違う。実際に一つの

個として世界と繋がる事で得た実感に綾時は満足そうに笑う。
その笑顔を見た順平は、愚痴ばかり言っている自分がちっぽけに思えたことで頭を掻く。
「ま、それもそうだな。オレらがこうやって頑張ったことで、世の中の誰かが助かってるっつーならやり甲斐もあるか」
「そうそう。すごいことをする人だけが偉い訳じゃないからね。小さな事の積み重ねで成り立ってるのが現代社会さ」
「別に荷物の箱詰めでそこまで大きな視点で考えたりしないっつの」
綾時は確かに立派なことを言っていたりもするのだが、ただの学生がそんな大きな視点で物事を見ながら生きたりはしない。
順平に言わせれば、自分たちの仕事で喜んでくれる者がいるくらいの話で十分だった。
彼と接していると時々感じる事だが、綾時は何かと物事を大袈裟に感じている節がある。
本人の反応を見ていると本気でそう思っていそうなので、彼にすれば大袈裟ではないのだろうが、一般人である順平にすれば近所の商店街の話がどうやれば日本中に影響するような話になるのか分からない。
別にその価値観を否定する気はないし、綾時の思考の癖のようなものなので特別気にする気もない。
ただ、湊が唯一友人と認めている相手がそういった思考なのは本当に不思議だった。
「なんつーか。綾時ってホントに有里と対極な感じだよな」
「そうかな？　自分じゃ分からないけど、どうしてそう思ったんだい？」
「色々と見ててなんとなくな」
綾時は誰に対しても温厚で親しげに接するが、湊は他者の存在を歯牙にもかけていないように冷たい雰囲気を纏っている。
さらに、湊にとっての世界はチドリやアイギスなど特定の個人が基準になっているのに対し、綾時は世界を全てが繋がった一つの塊として認識している。

性格も価値観も対極なはずなのに、どうしてだか相性は悪くないように思える。
やはり自分たちと出会う前から付き合いがあった事が関係しているのか。順平がそのように考えていれば現場を監督していた社員が大きな声で学生たちに話しかけた。
「よーし、作業はここまでにしよう！　今、詰めている箱を流し終えたら集まってくれ！」
作業場に置かれている時計を見れば十二時を少し過ぎている。
という事はこれで午前中の作業は終わり、今からお昼休みになるのだろう。
配送センターのような仕事は単調でつまらないが、タダで食べられる昼食や休憩時間に飲めるジュースはとても好評だ。
本人たちは知らないが実はＩＤカードに性別や年齢が登録されており、その購入データが集計されて世代や性別ごとに好まれる物が調査されていたりもするのだが、何も知らない綾時たちは最後の段ボールをベルトコンベアに流すと社員の前に集まった。
「よーし、これで今回の作業は終わりにする。お昼を食べたら一階のロビーに集合しておいてくれ。そこでまた仕事の割り振りがあるから。じゃあ、おつかれさん」
『お疲れさまでした！』
ここにいた八人の学生たちは社員に挨拶すると、肩を揉んだり腕を回して身体を解しながら作業場を出て行く。
出荷の関係もあってここは地上に近い地下一階にあるので、階段を上ればすぐにロビーへ戻ることが出来る。
作業のつまらなさともかく、移動が少ないのは数少ないメリットと言えるだろう。
ツナギを着たままロビーに戻ってきた彼らはそのまま建物を出て、食堂のある建物を目指してゆく。
「昨日はカツカレーだったから、今日は天丼にでもすっかなぁ」
「ふふっ、なんか発言だけ聞いてるとおじさんみたいだよ？」
体力はあるが精神的な疲労でお疲れモードになっている順平は、ヒ

ゲ面とツナギ姿という事もあって非常にオヤジ臭い。
　これで言葉までオヤジ臭いとなってくると、現役男子高校生としての小さなプライドが傷ついてしまうので、順平はしっかりと背筋を伸ばしながら快活に笑った。
「よーし、ナウなヤングなオレっちは昼間からポンドステーキでも食べちゃおっかな！」
「食べ過ぎて動けなくなったら怒られるから量は普通にしなよ。もし、ロボットの操縦体験とかだったら後悔するよ？」
「……だな。やっぱ、天丼にするか」
　お腹いっぱいで苦しくて操縦できなければ絶対に後悔する。
　綾時に言われた順平が考え直して食堂に入れば、そこはお昼時という事もあって非常に混んでいる。
　湊やソフィアは好きな物を頼んで個室に届けさせているので、今の順平らのような苦労などほとんど感じた事はないに違いない。
　そういうとこも格差だよなと理不尽さを感じつつ、空いている席を探していると奥に別の班の者たちの姿を発見した。
　男子の小田桐や渡邊に、女子は七歌や風花にラビリスなどが揃っている。
　テーブルの者たちも順平たちに気付いたようで、軽く手を振られると近くのテーブルに腰を下ろして声をかけた。
「お疲れぇ。そっちはどうだった？」
「おつかれ。特に何にもだなぁ。昨日の作業と被ってるからコツは掴んできたけどね」
　七歌たちの方は会議で使うパンフレットのホッチキス留めや、使わなくなった書類のシュレッダーなど事務関係を担当していた。
　ＥＰ社の規模になると準備する書類も多いので、やってもやっても終わらないほど新しい仕事が増えてゆく。
　七歌たちにやり方を教えてくれる社員は、教えながらでも学生たちの二倍の速度で動いていた。
　事務も極めると達人のような動きになっていくのだな思ったりもしたものだが、七歌はそこまで極めるつもりはないため、あくまで社

員の動きを参考にする程度で頑張っていると話す。
「教えてくれる社員さんは事務の鬼って感じで、本当に動きがキレッキレだったよ。流石にあのレベルは無理だから、私は自分の出来る範囲で効率アップ狙いだぜ」
「あー、こっちもそういう人いるわ。マジで真似出来ないレベルの人いるよな」
作業を覚えて一日や二日の新入りなど二、三人でようやく社員一人分の戦力といったところだ。
そんな者にはけっして真似出来ないレベルの技術や速さを習得している社員もいるため、七歌の話を聞いてその姿を思い出していた順平や綾時もしみじみと頷く。
ああいった仕事の鬼とも呼べる人間は案外どの部門にもいたりする。
だからこそ、色々な仕事場を回っていた学生たちは、ＥＰ社社員たちの層の厚さを思い知らされていた。
「本当にここ人材の宝庫って感じに優秀な人いるよね」
「まぁ、パートさんも結構いるみたいだけどな」
七歌たちがみた仕事の鬼は全員が社員という訳ではなく、中にはパートとして勤務している者もいた。
そんな人でもしっかりと活躍できるくらいに、作業手順が書かれたマニュアルなどがしっかりしており、会社全体の作業効率を高めている。
大きな企業だと末端ほど管理が甘くなりそうなものだが、そこを特に気をつけている辺りに会社を管理している湊の性格が出ていた。
これもある意味で社風と言えるのかなと考えていた七歌は、そういえばと順平たちが来る前に会ったジーモたちからの伝言を皆に伝えた。
「あ、そういえば、ジーモさんとかビアンカさんがデータの改修終わったってさ。希望者がいれば仕事が終わった後、三時から六時までなら初日のゲーム部屋で遊べるって」
七歌の言葉に数名の男子たちが目の色を変える。

実は初日に遊んだゲーム部屋は湊が渡したビーム兵器のデータを反映させるため、あの後から立ち入り禁止になっていた。
それが今日になってようやく終わったようで、仕事が終わってから遊べると聞いて男子らは思わずガッツポーズを取っている。
何せあのゲームにはセーフティーモードがあって、乗り物に弱い人間でも遊ぶことが出来ると判明しているのだ。
今回のデータ改修でビーム兵器も実装されているはずなので、男子たちは仕事が終わったら絶対にゲーム部屋にいくぜと戦士の表情になっていた。
無論、シミュレーターを利用したゲームを作った者たちからＯＫが出ていても、湊がダメだと言えば部屋に入ることも出来ないのだが、七歌は敢えてそこに触れずにペスカトーレを食べる作業に戻るのだった。

第三百八十八話　将来の仕事について

１１月２７日（金）
午後――ＥＰ社
職業体験学習も本日で最終日。
訪ねた企業によっては、たった四日で何が分かるのかという物もあるだろうが、少なくともＥＰ社に来た学生たちはそれなりに満足そうにしていた。
現在のＥＰ社はソフィアの父親が代表を務めていた時以上に何でも取り扱っている。
それは何が役に立つか分からないからと、久遠の安寧幹部らの私財を全て没収した湊が投資して事業を拡大させたためだ。
大きな企業だけあってあらゆる分野に対するパイプを持っていた事もあり、そこに貿易王と呼ばれるベレスフォード家の力を借りた事でＥＰ社は新たに進出した分野でも一定の成果を収めている。
無論、元からその分野で覇権を握っていた企業からは、節操無しに食い散らかすイナゴの群れと悪態を吐かれたが、湊に言わせればイナゴは食い散らかさずに食い尽くすものだ。
ただ、そう呼ばれたからにはイナゴの群れの力を思い知らさねばならない。
桐条グループを乗っ取るための〝作戦コード：悪食〟では、高寺派のような存在に動きを察知されぬよう秘密裏に動く必要があったが、あれは余計な妨害でチドリらに被害が及ぶのを防ぐためだった。
その点、ただ市場を荒らして他者のシェアを奪うだけなら資金力で圧倒的優位なＥＰ社は力押しでいける。
開発に必要な素材を押さえ、研究者たちに十分な給料と研究費を渡し、大々的に広告を打って、他社と同等かそれ以上の性能の物を僅かに安く売り出すだけでいい。
そも、ＥＰ社が他社から買っていたものを自社内で賄うだけで、今まで大口取引で儲けていた企業は大打撃なのだ。
さらに家庭向けにまで進出されれば、どうにか自分たちの利益を確

保しようと無茶な動きも出てくる。
湊たちはそこでさらに期間限定で大幅値引きを実施した。
実施期間は二週間ほどだが、覇権を握っていた企業が広告等でアピールしようとしているタイミングで、より強く客の印象に残るように動いたのだ。
覇権を握っていた企業だけで無く、その分野で開発を続けていた中小企業からも市場破壊だと文句を言われたが、湊にすれば技術力と企業の体力を考えれば最初から結果は決まっていただろうにといった感じである。
一部の国では独占禁止法がどうだのと動きがあるようだが、ＥＰ社の製品は儲けを削って覇権企業の製品より少し安い程度にしているし。市場破壊も期間限定のセールでしかなかったので、国の上層部や検査機関の者たちと会食するだけで〝問題なし〟という評価を頂くことが出来た。
消費者からすれば市民の味方にしか見えない大企業であるＥＰ社。そんな企業のトップにいる湊は体験学習を終えて集まっている学生たちの前に立ち。並んでいる彼らに声をかけた。
「……四日間の雑用お疲れさま。子どもが学校に行っている時間だけ働いているパートの方が初動からして数倍の働きをしていたが、お前たちが無能なりに仕事に取り組んでいた事実は変わらない。ご苦労だった」
四日間お疲れさまと労われて、最後に何かの記念品でも貰えるのだと思っていた学生たちは、淡々と毒を吐く湊の言葉に思わず顔を顰める。
彼らにすれば難所作業ロボットの操縦のような近未来的な仕事を体験できると思っていたのだ。
それがまさかの配送センターもどきや会議で使う書類の準備となれば、自分たちの期待を裏切ったなと言う思いの方が強い。
しかし、それを言うなら学生たちの待遇がかなり恵まれていた点を考慮すべきだろう。
職業体験学習は学校行事の一環だ。月光館学園では初等部以外、全

て昼食は各自で用意することになっている。
となれば、ここでも七歌たちは自分で昼食を用意するか、自腹で食堂を利用する必要があった。
湊はそういった面倒を省くために二十人の昼食代を四日間全て負担していたのだ。
飲食店へ職業体験に行った者ならともかく、一般企業で毎日高級なファミレスで奢って貰えるなど好待遇と言えるだろう。
さらに、仕事は三時の定時上がりで、仕事が終わってから夜六時まではゲーム部屋でロボットの操縦シミュレーターを使った本格的なロボット対戦ゲームを遊べるオマケまで付いている。
シミュレーターもタダで動いている訳じゃない。サーバーの維持費とシミュレーターの点検で安くない金額が飛んでいる。
難所作業ロボットの操縦士たちはサークル活動に使わせてもらうからと一部費用を負担し、メンテナンスも自分たちが率先して行なっているが、学生たちは安全ベルトなど利用上の注意は守っているが無料で好きに遊んでいる。
それらの後始末は湊がスタッフに特別手当を払ってやってもらっていたため、二十人の学生たちのこの四日間の働きよりも、湊が一人で負担した金額の方が圧倒的に多いというのが現実だった。
元々、子どもの面倒を任せるはずだった武多は徹夜しつつも走りきった事で入院しており、初日だけで無く四日間全ての予定を組み直すはめになったため、湊が普段以上に疲れている事を知っているソフィアは、不満そうな学生たちを冷めた目で見ながら彼らの仕事ぶりを監督官として評価していく。
「全体的な評価をしますと総じて集中力が足りませんね。単純作業なのですから、心を無にして自分をその作業をするためだけの装置と思い込めばよろしかったのに、文句は多いし仕事もあまり丁寧とは言えませんでした」
「いや、あの、四日じゃ流石に慣れるのも難しいっす」
「その割りにウォーカーの操縦は皆さん上達していた様子ですが？」
「軍人として市民の安全を守るのは当然のことッスからね。日々鍛錬

を疎かには出来ないんす」
四日で完璧に仕事をこなせるようになる訳がない。順平がそう返せば、ソフィアはゲームの方はメキメキと上達していたではないかと指摘した。
二日目は湊が組んだビーム兵器を実装するためのシステム更新に時間が掛かって遊べなかったが、昨日は新しいビーム兵器の使用感やグラフィックに問題が無いかのチェックで相当遊んでいた。
メンテナンスが楽だからとセーフティーモードに設定し、小田桐や友近など通常モードでは適性がなかった人間も遊んでいた訳だが、遊んでいる時の彼らは自然とロールプレイの形になって共和国軍の新兵として振る舞っていた。
若いだけあって反射神経や反応速度が速く、サークルメンバーより乗りこなして上達も速かった訳だが、ソフィアにすればその頑張りを仕事に活かせと言いたかった。
そんな順平が軍人としてウォーカーを乗りこなせるよう訓練するのは当然だといえば、他の男子たちも何やら得意気な顔をしていることもあり、ロールプレイは健在で馬鹿は一人ではなかったかと呆れるのも無理はない。
救いがあるとすれば女子たちはロールプレイするほどはハマっていなかった事だろうか。
むしろ、シミュレーターの技術がどんな物に利用されているか。今後、どういった物に利用できるかを社員たちに聞いて、学校に提出するレポートのネタにしていたので、仕事を任せるならば絶対に女子たちの方が役に立つというのがソフィアの評価だ。
「まぁ、そこは良いでしょう。では次に現場で監督役を務めていた者たちからの評価ですが、そちらはこれといって悪くありませんね。言われた事はやっていたし。分からない部分は質問してきたので、特に大きな問題はなかったとのことです」
「……その分、いくらでも替えが利くとも取れるがな。無役の駒は数以外では脅威にならない。お前たちが将来仕事で不満を覚えることがあれば、転職するか企業内での自分の価値を上げることを奨める。

自分の力を人質に企業を脅せる状況が理想だ」
ソフィアから現場監督の評価は悪くなかったと聞いて一安心するも、続けて湊が不穏な事を言えば全員が首を傾げる。
何せ彼は人を使う側の人間だ。そんな彼らからすれば従業員に脅されるような事態など起こらない方が良いに決まっている。
けれど、湊は学生たちが職場体験に来たのだから彼らの将来のために一つの考えを教えておく。
「人間好きな事をして生きられるのがベストだ。ただ、全ての人間がそうやって生きていく事など出来ない。つまらない言い方になるが人の才能は決まっているからな。本人の望む仕事よりも才能を発揮出来る仕事の方が上手く行くことが多いだろう」
誰もが望む仕事で心身共に充実して働くことなど出来るはずがない。
サッカーが好きでもサッカーの才能はゼロで、逆に野球のバッターとしての才能を持っているなんて人間もいるだろう。
多くの場合は自分の趣味よりも才能で仕事を選んだ方が成功する可能性は高い。
ただ、才能に縛られて自由に何も選べないというのは、それはそれでつまらない。
湊自身も才能とやらで周囲にバスケを続ける事を熱望されたが、本人は自由に過して別にバスケの才能だけが自分の持つ価値では無いと世間にも知らしめた一人だ。
出来る事ならばここにいる人間にも自分の才能に囚われず、出来る範囲で好きに生きてもらいたいと思う。
そのために必要なのが自分の力を人質に企業を脅すという事だ。
「企業は一人の力で回っている訳じゃない。向き不向き関係なく、様々な人間が一緒になって仕事に取り組んでいる。待遇や環境に不満がないなら大勢の中の一人として埋もれてもいいだろう。しかし、もしもの可能性を考慮するならお前たちはチームにおける自分の価値を認識しておかなければならない」
湊もＥＰ社の代表についてから時間が経っているが、その間にＥＰ

社を離れた者は多数いる。
仕事内容が自分に合わないからと辞めた者もいれば、もっと自分を評価してくれる企業があったからと辞める者もいた。
パートも含めれば三桁に届く人数で、それらを使っている内に湊もどういった点を押さえておけば離職率を下げられるか分かるようになっている。
それでもまだ企業を離れようとする者たちの中には、自分が仕事の中でどういった役割を担っていたかを説明し、自分が離れた場合のデメリットを伝えて企業内での自分の価値を正当に評価させようとしてきた。
ほとんどは過大評価というか単なる自意識過剰で、企業側が評価した点を細かく伝えれば納得したり顔を俯かせて黙っていた。
だが、逆に過小評価されてしまっているケースもあり、目に見える仕事の成果以外の部分を社員たちから聞き取りをする事で待遇が上がった者もいるのだ。
学生たちが将来勤める企業にそういった制度があるかは分からない。
それでも理不尽を素直に受け入れ続ける必要などない。それは自ら己の価値を安売りしている事になる。
「いいか。容姿、家柄、学歴等のステータス。これらは企業がお前たちを判断する一つの基準でしかない。就活中は足切りにそういった点で評価され易いが、就職出来たならその時点でお前たちの評価は一律でただの〝新人〟に変わる。そこからお前たちが本当に自分を売り込みたいなら仕事の実力だけでなく、コミュニケーション能力や人間関係で生まれるパイプなど、企業がパッと見では評価しづらい価値も生み出し続けるべきだ」
やればやるだけ評価されるほど社会は甘くない。それでも、自分を評価されたいなら仕事の成果だけを追い求めるのではなく、組織内で自分の確固たる地位や立場を築くべきだ。
任される仕事が増えれば、どうせ個人の能力だけではこなしきれない問題も出てくる。

上司を頼るか、部下を頼るか、それとも社外の人間に知恵や力を借りるか。
社外秘の情報では他社の人間を頼る事は出来ないだろうが、自分だけで抱え込んでも解決しない問題ならば悩むだけ無駄だ。
「助けてくれる人間、頼れる人間を作っておくと将来役に立つ。それは自分だけの話ではなく、お前たちを頼ってきた者や会社をその相手と繋ぐことで恩を売る事にも使える。あいつはＡ社とのパイプを持っている。ならこのプロジェクトに参加させようってな具合で仕事を任されるかもしれない」
「わたくしや湊様もやっている事は基本的に同じです。大きい会社を動かしてはいますが、大きい会社だからこそバランスを保つために小さな味方をいくつも作るように日々動いているのです」
ＥＰ社は世界中で知られている大企業だが、それは大きな一つの柱で出来ている訳じゃない。
貪欲に様々な分野に手を伸ばす中で、力はあるのに資金がないからと研究を諦めている者たちを傘下におさめたり、将来性を見込んで小さな会社に声をかけて投資したり、段々とその分野での発言力を増やしていっているのだ。
遠目から見れば大きな一つの柱でも、実際は小さなブロックを組んで大きな一つの柱に見せている。
そうやってＥＰ社はここまでの力を得るに到ったのだと語れば、学生たちもいつの間にか真剣な表情で二人の言葉に耳を傾けている。
「……まぁ、将来の事なんてまだまだ分からない。医者を目指していた人間が大きな出会いがあって警官に方向転換なんて事もあり得るんだ。お前たちも今の内に好きに悩めばいい」
「一つアドバイスをするなら知識や技術は得られる内に得ておくべきかと。もし、今日文明が滅んだとして、最後まで生き残れるのはサバイバル技術を持った人間です。それと同じように地位やお金を失ってもあなたの持つ知識や技術は残ります。役に立つかどうかは関係ありません。自分の価値を高めるため、保険のためにも、知識と技術は貪欲に求めなさい。それがあなたを助けます」

今回の経験では大してＥＰ社の事は理解出来なかっただろう。
彼らの想像するＥＰ社の仕事というのは、研究所のような場所で頭の良さそうな者らが真剣に機械と向き合っているようなもののはずだが、子どもに任せられるようなものではないので、それについては理解して貰うしかない。
ただ、ＥＰ社であっても地味な仕事は沢山あって、それが最終的に会社を支える大きな助けになっていることは分かって貰えたはず。
もしも、本当にＥＰ社で働きたいと思ったならば、高校生でも出来るバイトもあるので、そういう形で関わって自分がＥＰ社の中でどんな仕事をやりたいのかを固めていけばいい。
その間にソフィアが言ったように自分のために技術と知識を得ていけば選択肢も広がる。
話を聞いていた学生たちは二人のアドバイスが自分の将来の役に立つと分かったように頷き、これで職場体験学習は終わりだというタイミングで初日に温かいお茶をくれた女性がカートワゴンを押して現われた。
カートワゴンには小さなカゴと何かしらの冊子のような物が乗っている。
一体何を持ってきたのかと学生らが気にしていれば、湊が冊子の一つ手に取って皆に見えるようにしながら説明した。
「……さて、長々と話したが今日でここを去るお前たちに餞別をやろう。臨時ＩＤカードと交換で受け取っていけ」
「八雲君、それなぁに？」
「うちの製品ばかりが載ってるカタログギフトだ。半年くらいで期限が来るから早めに出すといい」
カタログギフトとは冊子に同封されているハガキに欲しい製品と必要事項を書いて送ると、その製品を届けて貰える素敵なカタログ本の事だ。
ＥＰ社は様々な分野の物を作っているので、冊子自体がとても分厚いのだが、タダで好きな物が貰えるなら何でもいいやと男子たちは単純に喜んでいる。

一方、現実思考な女子たちはいくら程度のカタログなのかを気にしており、これで五千円程度ならケチ臭いぞと図々しい事を考えている者までいた。
けれど、とりあえずは受け取ってみないと価格帯を判断することも出来ないので、それぞれパスケースごとＩＤカードを外すと順番に並んで女性社員にＩＤカードを渡し、続けて女子は湊から、男子はソフィアからカタログを受け取っていく。
受け取ってすぐにカタログを見るのは少し下品に思えるが、男子たちは価格帯など気にしていないのか、純粋にどんな製品が載っているのか確認し始めたので女子たちもその場でカタログに目を通す。
価格を判断する上で分かり易いのは電化製品系だ。ＥＰ社はパソコンや掃除機も作っているので、載っている製品の売価でカタログの値段も分かる。
一部の女子たちが視線だけでそんな事を相談して該当ページを開けば、何と写真と共に書かれた製品名のところにメーカー希望小売価格が載っていた。
「え、八雲君、これメーカー希望小売価格まで書いてて良いの？」
「ギフトで貰えるのは一つだからな。後で買うときに価格があった方が参考になるだろうって事で載せる事にした」
「あ、いや、そういう事ならいいけど。てか、普通に三十万するテレビとかパソコンまであるってすごいなぁ……」
ケチ臭いどころか大盤振る舞いで女子たちは思わず噴き出しそうになった。
ちなみに、一番高いのは五十万の腕時計らしいが、湊とソフィアが言うには時計でその値段は中途半端だからオススメはしないらしい。
確かに高い時計だと百万以上なんてざらにあるので、二人が言うからには実際にそうなのだろう。
ただ、男子たちは思っていた以上に価値のあるカタログだと認識した事で、母に献上すべきか自分で好きに使うべきか大いに悩んでいる様子だった。
女子たちも思っていた以上という点については同じで、これはしっ

かりと考えて頼んだ方が良いと考え、カタログを専用の箱に入れてから鞄に仕舞い込んだ。
ＩＤカードを受け取っていた女性社員はそんな子どもたちの様子を微笑ましそうに眺め、湊とソフィアはこれで子守は終わりだと声をかけるとそのまま去って行った。
始まりは武多の暴走で散々だったが、学生たちはここでの経験と得た物に概ね満足だったようで、女性社員に挨拶すると笑顔で自分たちの家に帰っていった。

第三百八十九話　違和感の正体

１１月２９日（日）
昼――巌戸台分寮
無事に職場体験学習も終わり、二年生のアイギスたちにも普段通りの生活が戻ってきた。
幾月の敵対に始まり、湊の復活、桐条グループの襲撃、修学旅行に職場体験学習と本当に目が回るような忙しさだった。
無論、自分たちよりも蘇った青年の方が忙しい日々を過しているのは分かっている。
彼は自分がいなかったおよそ一月の間に滞っていた仕事を進め、通う必要の無い学業と両立しながら企業全体に色々と指示を飛ばしているのだ。
以前の彼であれば時間を圧縮していくらでも時間に融通を付けることも出来ただろうが、エールクロイツが変化した湊に時流操作は使えない。
仕事上のパートナーであるソフィアも日本に滞在し、しばらくは手伝っていく予定のようで、彼が倒れるような事は無いだろう。
しかし、彼は一月も死んだままでいたのだ。
まだ全快ではないのではと思えてしまい。このまま忙しい時間が続けば過労で倒れてしまうのではと心配になっても無理はない。
まぁ、もし倒れても彼は病院が併設されたＥＰ社にいるのだから、すぐに医者が派遣されて適切な処理がされるとは思う。
あとは自分がそこに見舞いに行けば完璧だろうと考えたアイギスは、学校に提出する職場体験学習のレポートをファイルに閉じると部屋を出て一階へと降りていく。
今日は休みなので寮生たちは寮でのんびりするか遊びに出掛けているはずだが、今は誰かいるだろうかと一階に着けば七歌とゆかりがソファーのところで筆記用具を広げていた。
二人もやってきたアイギスにすぐ気付いたようで、テーブルの方から顔を上げると七歌が振り返って声をかけてくる。

「お、アイギスだ。おはようで合ってるのか分からないけどおはよう！」
「はい、おはようございます。今日はお二人は寮で過されるのですか？」
「まぁ、レポートもあるしね。夕方にコンビニに少し出掛けるかもだけど、基本はゆったりな予定」
どうやら七歌たちも学校に提出するレポートを仕上げていたらしく、二人の許へ行くとそれぞれ自分なりの特徴を持たせたレポートが作られていた。
七歌はその破天荒な性格とは対照的な非常に硬い印象を持つ形式でまとめており、色も黒と赤と緑くらいしか使っていない。
一方のゆかりはサバサバした性格の割りには、年頃の女子らしくポップな字体で全体的にカラフルに見える。
アイギスは報告書という認識でいたので、どちらかと言えば七歌に近い形にまとめている。
むしろ、ここ寮生では報告書のような硬い文章を選ばない者の方が少なく、若者らしい楽しげな雰囲気のレポートを作るのはゆかりと順平だけだと思われた。
「わたしも先ほど完成したばかりで、お昼を食べようかと降りて来ました」
「そうなんだ。今、寮にいるのは私たちだけだよ。美鶴さんはお見舞い、真田先輩は荒垣先輩と出かけて、風花は実家、天田君は買い物、順平と綾時君はクラスの男子らと遊ぶってさ」
寮生たちは影時間にタルタロスへ行くという予定を組んだ時以外は基本的に自由行動だ。
桐条グループ系の組織としてカウントされているが、美鶴の父である桐条武治がかけておいた保険によって桐条グループの組織図には組み込まれておらず、元々は桐条家の管轄として扱われていたので行動の制限等は緩い。
また桐条が幾月の凶弾に倒れ、桐条グループの新代表として高寺一郎が選ばれてからは、有事の際に効力を発揮する桐条の遺言状によっ

て全権が湊に移されている。
本人も貰えるものは貰っておくと了承したことで、今の特別課外活動部は名実ともに湊の傘下組織という扱いだった。
とはいえ、特別課外活動部が湊の物になったからと言って、彼から何かしらの指示を受けたりはしていない。
強いて言えば転校してきた綾時の受け入れくらいで、監督役として雇われた眞宵堂店主の栗原も続投となっている。
以前と変わらぬ状態で活動を続けられるだけでなく、青年に匹敵する戦力が追加された事は喜ばしい事だろう。
だが、影時間の戦いは終わっておらず、世界の破滅を願う人間の敵であるストレガや幾月らも残っている。
だというのに、湊から特に指示が無い事は不思議でならないが、アイギスはその新たに仲間に加わった少年のことが気になるようでやや呆れ気味に呟く。
「綾時さんは随分と人と打ち解けるのがはやいのですね」
「まぁ、一緒に馬鹿やったのもあるんじゃない？　有里君が言うには先輩たちだけじゃなくて、二年の男子とも覗きに行ってたっぽいし」
男というのは共に死線を潜り抜けた者は戦友として認識する。
例え仲間を裏切って自分だけ助かろうとしていたとしても、最終的に全員が断罪されたなら臭い飯を食った者同士で仲間意識が生まれるのだ。
女子たちはそれを馬鹿だなと冷たい眼で見ているのだが、普通にしていてもモテそうな綾時がモテない芋野郎たちと一緒に行動するのは確かに不思議な感じがすると七歌も話す。
「綾時君って転校してすぐに八雲君の後釜に納まるモテ男子って評判だったのに、どうしてモテない順平たちと一緒に行動してるのかとは思うよね。本人は女の子と仲良くしたいって言ってたし。それなら泥船に乗ってるのはおかしくないかって思うじゃん」
「あー、確かにね。まぁ、有里君が唯一の友達って認めてるのに放置してるのが原因かもだけど」
随分と酷い言い様だが七歌とゆかりの意見は他の女子の共通認識

でもある。
湊が親しい者だろうと友達と認めていない事は有名だ。
本人がそう言っていた上に、確かに彼の友人と呼べるような対等な人物が誰も思い浮かばなかったので、その言葉は事実なのだろうと皆に認識されていた。
だが、そんな彼がただ一人友達だと認めていると公言している事で、綾時の存在は本人たちが思っている以上に話題になっている。
見た目はどことなく似ている部分もあるが、性格や纏う雰囲気は対極と言っていい。
そんな二人だからこそ並び立てるのだろうかというのがファンクラブの会員らの見解だが、ゆかりは順平から綾時についてある事を聞いていたため七歌とアイギスにその事を伝えた。
「そういえば、順平が言ってたんだけどさ。綾時君って話してみると有里君と価値観って言えばいいのか中身が似てるらしいよ」
「それはあり得ないであります。八雲さんと綾時さんが似ているなど大変な侮辱です！」
自分の大切な人が綾時と似ていると言われ、アイギスは絶対にそれだけは何があってもあり得ないと言葉を荒げる。
突然の大声に七歌とゆかりはビクリと肩を揺らすが、そこまで出会ったばかりの相手を否定するような事を言わなくてもと七歌は苦笑した。
「いや、そりゃ覗き魔と取り締まる側で真逆だったけど、何もそこまで言わなくても」
「そこだけではありません。綾時さんはダメであります」
「具体的にどこが？」
「全部です。何故、八雲さんが綾時さんをご友人だと言っているのかも理解できません」
アイギスも流石に湊の人間関係を全て管理したいとは思っていない。
強いて言えば女性関係は完全にゼロにして自分だけを見て欲しいと思っているが、綾時が男である以上ここでは関係がない。

だというのに、アイギスは湊が綾時を友達だと言っている事も理解に苦しむと真面目な様子で口にした。
これには話を聞いていたゆかりらも、仲間として背中を預け合っているのにそれはないだろうと苦言を呈する。
「いくら何でも会ったばっかりなのに嫌い過ぎだよ？　そりゃ、修学旅行でも色々とダメな行動はあったけどさ」
「そんな小さなことを言っているんじゃありません。皆さんはあの人に何も感じないのですか？」
修学旅行での覗き行為は確かに問題だ。いくら未成年でも十分に公的な処分を受ける犯罪である。
けれど、アイギスが彼を否定するのはそんな事が理由ではない。
アイギス自身も具体的に何が悪いのかは分からないが、彼を信用してはいけないと、味方ではなく敵として認識すべきだと忠告する声が胸の奥から聞こえるのだ。
ただ気に食わないというレベルではなく、本能が彼の存在を受け入れる事を拒んでいる。
だからこそ、彼女は他の者たちが何も違和感を覚えず、普通に接している事を不思議に思っていた。
今もアイギスの言葉に二人は首を傾げており、やはり他の者たちは何を感じていないのかという小さな苛立ちを覚える。
ただ、七歌たちもアイギスがただ生理的に受け付けないからと拒絶している訳ではないと思ったのか、少し考える様子を見せてから口を開いた。
「んー、別に敵意とかそういうのは感じていないかな。順平らと馬鹿やってる限りじゃ、本当に仲良くしたいって雰囲気だし」
「私も特におかしいとは感じてないけど、アイギスはどこがそこまで気になってるの？」
七歌もゆかりも綾時に対して悪感情は抱いていない。
ここの寮生である男子の中では荒垣と同じくらい紳士的で、海外生活が長かったからか日本の文化に疎い部分はあるが、きわめて良好な関係を築いていると言ってもいい。

それなのにアイギスがここまで警戒するからには、明確な理由なりがあるのだろう。
ゆかりがそれを尋ねれば、アイギスは僅かに表情を歪めて何とか自分が抱いている違和感を言葉にしようとする。
「……明確に、どこがどうという訳ではありません。ですが、胸の奥から彼を信用してはいけないと誰かが忠告してくる声が聞こえるんです」
「八雲君のペルソナみたいな感じで別人の声？」
「いえ、恐らくわたしの声です」
湊には血に宿った過去の名切りが憑いているので、ペルソナとして存在が確立していなくともその声が聞こえることもある。
また、自分と同型のメモリーデータを全て得たラビリスも、死んでいった姉妹機たちの記憶のようなものを垣間見る事や、負の側面が分かれたシャビリスという人格を持っていたりもする。
それに近い物をアイギスも持っているのだろうかと七歌たちは思ったのだが、アイギスは自信なさげにしながらも自分自身の声だと言った。
これではアイギスが無意識に彼を拒絶しているのか、それとも元対シャドウ兵器の勘から来るものなのかが判断できない。
レポートを書く手を止めていた七歌たちがどうしたものかと考えていると、胸の奥から聞こえる忠告以外にも彼を警戒する要素はあるとアイギスは続けた。
「皆さんは不思議に思わないんですか？　どうしてこのタイミングで八雲さんと同等の力を持つペルソナ使いが現われたのか」
「え？　いや、連れてきたのは有里君でしょ？　本人から何も聞いてないの？」
「八雲さんは現世に戻ってきて月に刺さった九尾切り丸を回収すると、真っ直ぐ地球を目指したと言っていました。どこで彼と合流したのかは誰にも話していないはずです」
幾月らに追い詰められたあの戦いで分断されていた七歌たちは、同時に湊と綾時が助けに向かわなければ死んでいた可能性が高い。

蘇った湊が自分の友人だからと連れてきて、そのまま仲間の命を救ってくれた事もあって受け入れていたが、言われてみれば綾時の過去は謎に包まれている。
一応、本人の話では海外での生活が長くて日本には今回初めてきたとの事だが、家族の話やどこで元々は暮らしていたのかなどの話は聞いていない。
またどうして海外にいてあそこまでの適性値を得られたのかも謎ではあった。
腕を組んで考えていた七歌は、よく一緒にいる順平ならばもう少し彼の事を知っているのだろうかと思いつつ、アイギスが言った通り自分たちが彼について詳しくないことを認める。
「うーん。言われてみればまだ何も知らないね」
「でも、有里君は昔から知り合いだったんでしょ？　中等部の時に友達は一人だけって既に言ってたはずだし」
突然現われたような印象を持っているが、ゆかりは過去に湊がその存在を匂わせる発言をしていた事を知っている。
であるならば、湊が警戒していない彼を、一緒に戦ってくれているというのに信用しないのは失礼に当たる。
アイギスが警戒するのは自由だが、他の者まで不安にさせるような発言は控えるべきだとゆかりは釘を刺した。
「アイギス、急に現われたような彼を簡単に信用出来ないのは分かるけど、それを他の人にまで押し付けるのはダメだよ。あなたのお姉さんやチドリだって彼がいたから助かったんだから」
「それは……でも……」
遙か上空からの砲撃で地上のシャドウを薙ぎ払った湊だが、時流操作が使えなくなったせいで二箇所同時に助けに向かう事は出来なかった。
順平たちがいたあの場にはストレガの別働隊が残っていたので、綾時が助けに向かわなければやられていた可能性が高い。
それを言われればアイギスも強くは否定出来ないようだが、未だ納得していない様子なのは見れば分かるため、七歌は警戒は続けてもい

いから大人の対応をしてくれと頼んだ。
「別に親の仇って訳じゃないんだからさ。無理に仲良くしろとは言わないけど、常に喧嘩腰で接するとかだけは注意してよ。アイギスも寮内の空気を悪くしたい訳じゃないでしょ？」
「……はい。分かりました」
アイギスとて明確に実害が出ていないことは分かっているのだ。
そんな状態でいくら言おうと信じて貰える訳もなく、否定する材料を持たない以上は他人の付き合いをどうこう言える立場ではない事も分かっている。
なので、ゆかりからだけでなく、特別課外活動部のリーダーである七歌からもチーム全体の事を考えて対応は気をつけるように言われれば素直に従うしかない。
どことなく落ち込んだ様子で二人から離れ、昼食の準備のためキッチンへと向かうアイギス。
だが、そこでアイギスは先ほどの七歌の言葉に僅かな引っかかりを覚え、冷蔵庫の扉に手をかけながら自分が何に引っかかったのかを考える。
先ほどの言葉に感じた僅かな引っかかりは、恐らく自分が綾時を警戒している理由に繋がっている。
しかし、何が引っかかったのか。七歌の言葉を頭の中でゆっくりと思い出す。
（……親の……仇？）
アイギスはエルゴ研の研究室で作られた人型兵器。設計者やボディを組み立てた者などはいるが、それらを親と思うような感情は一切持っていない。
強いて言えば自分の人格プログラムを構築する際のマザーデータを提供した者が一番近いのだろうが、ラビリスと違ってアイギスの人格ベース提供者は存命である。
となれば、それは自分の事ではない。
では、一体誰の話だと深く考え込もうとしたところで、アイギスは再び胸の奥から忠告の言葉が聞こえる感覚を味わい。同時にとある

映像が一瞬脳裏を過ぎった。
横転し炎上する車、憎悪に燃える瞳を持つ少年、そして――――黒い死神。
（っ……そういう事ですか）
アイギスはずっと不思議に思っていた。どうして綾時が彼と同じペルソナを持っているのかと。
そして、そのペルソナが生者が持ち得ないアルカナであることにも僅かな違和感を覚えていた。
けれど、もしアイギスの想像が正しければ、全てに説明がつく。
どうやって湊と意思疎通を取っていたのかは分からないが、強大な力を持つ彼の存在であれば封印されながらでもパスの繋がった青年とは会話出来てもおかしくない。
（……だから、全てのアルカナシャドウが倒されてから現われたのですね）
湊がチドリを蘇生させたあの日、彼は自分の力と共にタナトスをチドリに渡していた。
その後、ラビリスからチドリを守るためにペルソナを譲渡していたらしいと聞いたが、もし、渡したタナトスと守るためのタナトスが別物であったとすればどうだろう。
彼がチドリを守るためにかけた保険はあくまで生命力と共に術式を組んでおり、逆に一瞬の顕現だけですぐにチドリに吸収されたタナトスはその力をチドリの蘇生に使うことが可能で、さらに死にゆく自分以外の人間に封印する必要があったのではないか。
（そう……十年前、わたしが衰弱した八雲さんにしたように……）
十年前の戦いで傷ついたアイギスのメモリはデータが一部破損していた。
けれど、その破損データ自体は消去される事なくアイギスの中に残って、人間の身体になるときにも移植されていた。
おかげでアイギスは十年前の戦いの結末を思い出すことが出来、どうして綾時の存在をこうまで敵視してしまうのかも納得がいった。
（……八雲さんが神やシャドウの力を宿したように、綾時さんも八雲

さんを通じて人の力を得たのですね）
湊の先祖が自我を持ったペルソナになれたのだから、シャドウが自我を持っても不思議ではない。
今の彼からは確かに敵意は感じないが、それは湊から得た人の力によって理性が働いているためだろう。
幾月の求める滅びに到る計画には宣告者であるシャドウの王の力が必要だと言っていた。
ならば、その存在を事前に排除すれば滅びを迎えることは不可能になる。
ポケットから携帯を取りだしたアイギスは日付を確認し、次の満月の日を計算した。
（もし、あなたが本性を現わすなら次の満月のはず。つまりは三日後ですか）
今は人間の姿をしているが、アルカナシャドウと同じように満月にその姿を現わす可能性がある。
十年前の後始末に、影時間の戦い、それら全てに決着を付けるのは三日後の影時間になるらしい。
日付を確認したアイギスは、冷たい瞳でメール画面を開くと綾時に一通のメールを送った。

第三百九十話　少年の苦悩

１２月２日（水）
放課後――月光館学園
今日の授業が終わり、生徒たちがそれぞれの放課後を過すために教室を出て行く。
ある者は部活が面倒くさいと言いながらもどこか楽しそうに体育館を目指し、ある者たちは週末の合コンのために歌の練習をしようとカラオケへと向かった。
そんなクラスメイトらの姿を見ながら綾時は楽しそうに笑みを浮かべる。
「じゃあね。望月君、また今度遊ぼうね」
「せっかく誘ってくれたのにゴメン。ぜひ、楽しんできてね」
新しくオープンしたカフェがあるからと放課後に誘ってくれた女子がいた。
普段の綾時ならば、むしろ自分から女性を誘ってお茶をしに行くのだが、今日の彼はそういった誘いを全て断っていた。
けれど、相手は断られても嫌な顔もせず、ただ残念そうに次は一緒に行こうねと笑顔を向けてくれた。
そんな相手の優しさに胸の奥が温かくなるのを感じながら、綾時は荷物を持つと他の者らと同じように教室を出て行く。
お茶の誘いを断った彼が目指すのは校舎の屋上。この街を見渡すことが出来る場所だった。
階段を上っていく途中にすれ違う部活道具を持った生徒を見て、綾時は自分が転校してきたばかりのことを思い出す。
先月この学校に来たばかりの頃、綾時は転校生だからと部活に誘われて様々な部活の体験入部を受けた。
彼はその特殊な生まれの影響か、ある青年と同じように、やれば大抵のことはそれなりに上手く出来た。
無論、学習能力の高さと器用さだけでは確かな技術を持った経験者に勝つことは出来ない。

それでも、誘ってくれた者たちからは、センスが良いから絶対に上手くなると褒めてもらえた。
新参の自分がそこまですんなりと受け入れてもらえるとは思っていなかっただけに、出会ったばかりの者たちからの素直な賞賛がとても嬉しかった。
（本当にこの学校は素敵な人が多い場所だったな。湊がいた影響もあるんだろうけど、異端なはずのものを受け入れるだけの柔軟さが大勢に備わっていた）
ここ月光館学園は有里湊という異質な存在を何年も受け入れていた。
別に突然奇行に走るだとか、人と見た目が大きく違うという訳ではないが、平凡な日本人学生の中にいれば悪目立ちするくらいには場に溶け込めていなかった。
協調性がないと言えば確かにそうなのだが、別に人の話を聞かない訳ではないし、ノリが悪いのは面倒臭がりとして理解出来る。
では、何故彼が悪目立ちするのかと言うと、他の学生たちにもそれは説明出来なかった。
容姿が整いすぎているだとか、テストで満点しか取らないほど勉強が出来るだとか、周囲から浮く理由は挙げられるのだが、それでは〝異質〟として捉えられている現状の説明には弱い。
彼の公認ファンクラブの会員たちは、彼を天が遣わせたいと尊き存在と謳っているが、他の生徒たちの曖昧な言葉に比べれば彼女たちの考え方の方が正解に近いと思えるほどだ。
そう。湊が周囲から浮いているのは彼が他者と比べて異質だからではない。
そもそも人間とは別の存在、二千年以上の時を経て現代人類から一歩進化した新人類、この惑星に生きる人類とよく似た容姿を持った異なる種である事が原因であった。
それに気付いているのは彼の出自や、彼の一族の目指した物を知っている者たちだけ。
だからこそ、学校にいる者たちは湊を異質と認識しながらも、これ

といった拒否反応や排除行動を取るということはなかった。
そして、人というのはそれが未知の存在であっても、時間さえあればいつの間にやら自然と慣れている生き物である。
全員が全員、彼を肯定的に受け入れた訳ではないが、〝有里湊という変わった存在がいる〟という状況を当たり前のものとして認識できるようになっていたのだ。
おかげでラビリスやアイギスという人の社会で生きてきた経験の少ない者であっても、〝少し変わっている〟程度の認識でごく自然な形に受け入れられていた。
綾時はアイギスたち姉妹と比べれば湊と共にいた時間が長い事もあり、対人コミュニケーションは自然に取れた。
雰囲気や彼の持つ価値観はどこかズレている部分もあったが、そんなものは個性と認識出来る範囲である。
おかげで湊以上に人の環から外れた存在であるはずなのに、綾時の存在は日本に不慣れな帰国子女として受け入れて貰えた。
(湊のおかげで僕はとても楽しい時間が過ごせた)
一ヶ月。たったそれだけの期間だったが、その間に経験した様々な事を思い出しながら、綾時は最上階までのぼったところで扉を開いて屋上へと出る。
人工島から見える自分が過した街の景色や、太陽の光が反射して煌めいている海を見て、綾時は小さく笑みを浮かべて転落防止用のフェンスへと近付いた。
(……きっと、彼女は自分だけで始末を付けるつもりだろう。そういうところは湊と本当に似ている)
数日前、綾時の携帯に届いたアイギスからのメールには『次の満月の影時間に十年前の場所で待っている』といった意味の内容が書かれていた。
順平たちと遊んでいた時にメールを確認し、突然心臓を掴まれたような感覚を覚えたが、最初は惚けようかとも思った。
湊と共にあった時から憧れていた夢のような時間だ。失うのも、終わらせるのも非常に惜しいと思ってしまった。

けれど、アイギスはきっとそれを許さない。
今の彼女は人間だ。機械から生き物の身体になったことで精神性も変化している。
だからこそ、機械の時に与えられていた使命を即座に実行に移そうとはせず、彼女なりの誠実さで残り僅かな日常を過すことを許してくれたのだろう。
そんな相手に対して我が身可愛さから誤魔化しを述べることを綾時は由としなかった。
(けど、どうあっても彼女では僕に勝てない。他の皆が援護したとしても、ダメージが通るのはチドリさんの力を溜めた最大火力くらいだろう)
アイギスが十年前の戦いの決着を望んでいることは分かる。
今、影時間の戦いで正確に未来を見ているのは全てを知っている湊と、その彼から話を聞いているソフィアだけだ。
他の者たちは幾月たちが何か仕掛けてくるとは思っているが、どうやれば影時間を終わらせる事が出来るかはまるで分かっていない。
そんな中、十年前の戦いを経験しているアイギスが、全ての元凶と思われるシャドウの王を倒せば影時間が終わると考えても不思議ではない。
彼女は今も湊を戦いに巻き込んだ事を後悔し負い目を感じている。
別にアイギス個人の責任ではないのだが、彼から両親を奪い、シャドウと戦う道へ引きずり込んだ事は事実。
流石にエルゴ研で被験体として扱われ、さらに血に塗れた道を歩むことになるとは思っていなかっただろうが、その情報は彼女により強い罪悪感を与えるだけでしかない。
湊はアイギスに気にしていないと伝えていたし、彼女との出会いを尊い思い出と考えている事も分かる。
しかし、湊と特別課外活動部の者たちがぶつかった後、タルタロス深層モナドで彼の心に刻みつけられた深い傷を垣間見た事で誰もが彼の弱さを理解した。
アレは既に目的のために動き続ける事でしか生きていけない壊れ

た存在なのだと。
故に、アイギスは彼やその周りの人間をこれ以上巻き込まず自分だけで決着を付けようとするのだろう。
ただ、そうなった場合、どうやってもアイギスだけでは綾時に勝つことは出来ない。
ストレガの別働隊を撃退しただけでなく、共にタルタロスの攻略をしたことで彼の力を見た者らも同じように認識しているが綾時の力は湊に匹敵する。
数多の力を持つ彼と比べれば手札の数はそれほどでもないが、単純な火力の話をするならチドリの新たなペルソナであるヘカテーの最大火力と同等以上のものを連発できる。
そして、防御力や耐久力と呼ばれるものの話をすれば、綾時は存在の性質によって資格を持たぬ者の攻撃は一定以上の火力でないと欠片も通らなくなっている。
十年前にアイギスたちが戦えたのは、その存在が不完全なものであったからなのだ。
(話し合いで解決出来る問題じゃない。けど、無駄だと分かっても彼女はきっと諦めないだろう)
現状、綾時を倒す以外に影時間を終わらせる可能性を持つものがない。
そんなアイギスにすれば、勝てる可能性がゼロに等しくとも命を懸けて綾時を殺そうとしてくるはずだ。
彼女は最初から綾時を警戒し、共に探索に出ている時も一線を引いて接していたが、そういった相手であっても親しみを覚えていた綾時からすれば命を狙われることに寂しさを覚える。
(……湊はこれを受け止めていたのか)
ずっと一緒にいたことで彼の事を深く理解していたつもりだったが、自分が同じ経験を得たことで改めて彼の心の強さを理解する。
確かに彼の心は脆い。傷つきやすいという点で言えば誰よりも弱いとすら言える。
しかし、他の者たちが膝を突いて動けなくなるほど弱ったとして

も、湊は同じ傷を負いながら進み続けることが出来る。
一度死んで両親と再会した事で価値観に変化があったようだが、それでも湊の心の在り方が歪んでいる事は変わらない。
彼は自分の命に価値を見出さず、未来を見つめることで命の使い方を既に決めているのだ。
(そこまで追い込んだ責任の一端は僕にもある。だから、僕も君の思いに応えよう)
生まれ持った性質も関係していようと、十年前の戦いを切っ掛けに湊の歪みは加速した。
アイギスがその責任を取るために戦おうというのなら、加害者の一人である自分もそれに応えなければならない。
その戦いの結末がどのようなものになるかは分からないが、これまでの関係が崩れることは確実だろう。
それを理解している綾時は、この景色を心に焼き付けておくため一人放課後の屋上で街を眺め続けた。
夜――巌戸台分寮
クラブで飲んだくれの坊主と話してきた七歌が寮に帰ってくると、何故だかコロマルを連れたラビリスとチドリの姿があった。
他の者たちもどうやら既に帰ってきていたようだが、特にタルタロスの探索について話していなかったのに、どうして二人と一匹がいるのかと尋ねた。
「あれ、今日は別に探索するって言ってなかったよね?」
「うん。けど、満月やから一応は集まっとこかってチドリちゃんと話しててん」
先月の満月でアルカナシャドウは全て倒した。
しかし、全てのアルカナシャドウを倒せば影時間が終わるという話は、滅びを求める幾月がついた嘘で今も零時を過ぎれば影時間は現われている。
元々はこの世界に存在しなかったものなのだから、どうにか再び以前の状態に戻す方法もありそうなものだが、今現在で有力な手掛かりなどは見つかっていない。

となると、これまでと同じようにシャドウの被害を食い止めるため、タルタロスに迷いこんだ人間の保護とシャドウの討伐を続けるしかない。
ラビリスたちもそれを手伝ってくれているので、満月を警戒してやって来てくれたのなら有事への備えとしてありがたい。
そう思った七歌が礼を言おうとすれば、ソファーに座っていたチドリが一階にいる者たちを見渡しながら口を開いた。
「……私たちは別にいいけど、そっちは二人いないわね」
「あ、ホントだ。綾時君とアイギスは？」
七歌は今帰ってきたばかりなので、流石にここにいないメンバーがどこにいるのか把握できていない。
風花ならば知っているだろうかと聞いてみれば、紅茶のカップを小皿の上に置いてから答えた。
「アイギスは夕方くらいに出掛けてくるって出て行ったよ。綾時君は今日はまだ帰ってないみたい」
「へぇ……隠れて逢い引きとかかな？」
「うーん。アイギスは綾時君を警戒してたから、そういう可能性はないんじゃないかな？」
アイギスは湊に関わることなら判断がかなり甘くなる。
しかし、その彼がただ一人友人と認めた綾時に対しては、どうしてかきつく当たって常に警戒している様子だった。
何がそこまで気に入らないのかは分からないが、あれだけ警戒していたのに恋慕の情を抱くことはないと思われる。
それなら綾時が湊と会っていて、アイギスがそれを遠目から監視している方がまだあり得るだろう。
風花がそのように返せば、七歌も納得したのか確かにと頷く。
「ま、そりゃそうか。でも、今日はどうするの？　影時間に調べて何もなかったら、一応、集まったって事でタルタロスでも行く？」
寮生はともかく隣の市に住んでいるチドリや、マンション暮らしのラビリスは合流に時間が掛かる。
そのため普段は連絡を取って探索日を合わせているのだが、今日は

様子見で来てくれたにしても集まった以上はシャドウ狩りをしておきたい。
ただし、チドリたちが帰るのなら無理には引き止めないと告げれば、二人は別に大した手間ではないと探索を了承した。
「チドリちゃんはウチん家に泊るから、別に探索にいくんは大丈夫やで」
「……そうね。準備はしてあるし。改めて出てくるのも面倒だし、別にいいわよ」
何かあれば戦えるように準備してあるので、影時間になってからタルタロスへ行くのは問題ない。
二人がそう答えればコロマルも了承するように一鳴きする。
彼女たちがいれば探索の効率が上がるので、参加すると決まれば自分たちも準備するかと男子たちは部屋に戻っていった。
それを見送った七歌はここにいない二人と一応湊にも探索へ行くことをメールで伝えると、自分も準備をしておくため部屋へと向かった。
＊＊＊
影時間になって七歌たちは四階の作戦室に集まっていた。
しかし、そこにアイギスと綾時の姿はない。
湊に関しては来るとは思っていなかったので構わないが、どうして二人はまだ帰ってこないのだろうと風花や美鶴が心配している。
「二人から連絡はなかったのか？」
「はい。メールで探索に行くことは伝えたんですけど、それに対する返信もなかったし。電話にも出なかったんで行方不明状態です」
帰りが遅いくらいならまだしも、満月の日に二人と連絡がつかないとなると様々な事を想像してしまう。
湊が蘇った事で撤退していった幾月らの行方は桐条グループも追っている。
だが、あちらにはペルソナの反応を誤魔化す装備があるようで、グループの持つペルソナ反応を計測する機械やアナライズを使っても湊と同じように居場所を発見することが出来ない。

それはつまり、仮にいま寮の屋上にいたとしても襲われるまで分からないのだ。
アナライズに近い能力を持っている綾時や戦闘に慣れているアイギスが相手であっても、平日の街中で襲われればペルソナを使う訳にはいかず上手く応戦できないかもしれない。
前回はこちらのメンバーの命を狙ってきていた。
復讐代行と言いながら殺し屋としても活動するストレガに加え、理らも湊の遺体を解体して運ぶような連中である。
今更街中で狙ってくるに躊躇などない可能性の方が高いだろう。
風花とチドリがアナライズで大型シャドウの反応と共に二人の事も探してくれている。
その結果によってはすぐに移動を開始せねばと思って待っていれば、何かを見つけたようで風花に反応があった。
「……これは……ムーンライトブリッジにペルソナ反応です」
「ペルソナだと？　誰か戦っているのか？」
ペルソナの反応があるとなれば恐らくそこで戦闘をしているはず。
真田が風花に反応の主は誰かを尋ねれば、同じようにムーンライトブリッジを調べたチドリの方から答えが返ってきた。
「これは……アイギスね。近くにシャドウ反応があるけど、何これ？
こんな強い反応なんて今まで……」
「……え？　でも、このシャドウ反応は、何で？」
ムーンライトブリッジで戦っているのがアイギスだと突き止めた二人は、何かに驚いて言葉に詰まっている。
だが、仲間がシャドウと戦っているのなら、すぐに自分たちも向かわなければならない。
そのために今は情報をしっかりと伝えてくれと美鶴が二人に促した。
「山岸、吉野、どちらでもいい。状況を正確に伝えてくれ」
「……アイギスは間違いなくシャドウと戦ってます。でも、戦ってるシャドウ反応から綾時君の反応も感じるんです」
「暴走とかそういう気配じゃない。信じられないけど、多分、望月綾時

は人型シャドウだったのよ」
風花とチドリの口から驚くべき言葉が飛び出すと、それを聞いていた者たちは目を見開いて言葉を失う。
自分たちを助けてくれた少年が、共にシャドウとも戦ってくれていた少年が、これまで倒してきた異形の化け物と同類などと誰が思うだろうか。
質の悪い冗談にしか思えない二人の言葉に、綾時と仲の良かった順平が反論する。
「そんな訳ねーだろ！　確かにあいつは馬鹿みたいに強かったけど、有里だって同じようなもんじゃねーか。いくら何でもシャドウだなんておかしいって！」
強さと正体がシャドウである事は関係ない。
ただ、あまり状況が分かっていない状態で、アナライズ能力を持つ二人から同じ事を伝えられると、上手い反論が思い付かなかったのか順平はとりあえず同等の強さを持つ人間がいる事で彼も人間のはずだと証明しようとした。
すると、静かに話を聞いていた天田が、何やら考える素振りを見せてからシャドウが人型になる可能性について意見を口にした。
「有里先輩のペルソナだって自我はありますよね。なら、シャドウが人の心を食べ続けて自我を得る事だってあり得るんじゃ」
「この際、人型シャドウがどうのって話はいいだろ。戦ってるやつらを止めるにせよ、どっちかに加勢するにせよ。ここにいちゃどうしようもねぇ」
天田の言葉に全員が人型シャドウが存在し得ると考えるも、これまでの綾時の功績を思えばすぐに敵だと断ずることも出来ない。
であれば、どういった行動を取るにしてまずは現場に行くべきじゃないのかと荒垣が伝え、全員がそれに応えるように部屋を出て行く。
影時間で機械が止まっているため、ここからムーンライトブリッジまでは走っていくしかない。
両者が戦っている理由は分からないが、自分たちが到着するまでどうか無事でいてくれと願い一同は急いだ。

第三百九十一話　因縁

影時間――ムーンライトブリッジ
世界が緑色に塗り潰され、空に巨大な満月が輝く影時間。
一切の生命の気配が消えたこの特別な時間に、ゆっくりと、けれど確かな足取りでムーンライトブリッジを訪れる少年がいた。
冬だと言うのにどこか生温い風に黄色いマフラーを揺らし、今日は珍しく車が少ないなと暢気な事を考えながら車道を歩く。
そうして彼が橋の中頃までやって来ると、そこで待っていた月光館学園の制服に身を包んだ少女に声をかけた。
「やぁ、約束通り一人できたよ」
「……そのようですね。あなたなら他の誰かに相談するかもしれないと思っていました」
二十メートルほどの距離をあけて対峙する少女、元対シャドウ特別制圧兵装であるアイギスは冷たい瞳を綾時に向けながら話す。
それはこれまで一緒に戦って来た仲間に向ける視線ではなかったが、ここへやって来た以上、綾時も相手が自分の正体を理解していると分かっている。
けれど、いきなり攻撃されると思っていただけに、言葉を交わしてくれる事は素直に嬉しかった。
綾時は小さく口元を歪めながら素直は心情を話す。
「それも考えたよ。しらばっくれて無視しようかとも思った。でも、君は僕に時間をくれたからね。誠実さには誠実さで応えようと思ったんだ」
彼女からメールが着たのは十一月の末だ。
それからも寮で会ったり、同じ教室で授業を受けたり、シャドウの討伐でタルタロスへも行った。
てっきり避けされると思っていただけに、彼女が今まで通りに接してくれていたのは意外で、だからこそ綾時は相手が今日まで待ってくれたのだと思った。
人として最後を過す時間をくれた相手に対し、自分なりの誠実さで

応えようと思ったのだと綾時が返せば、アイギスは綾時から視線を逸らさず淡々と答える。
「今のあなたは純粋なシャドウじゃない。八雲さんと一緒にいた影響なのか、恐らく人としての性質を手に入れている。違いますか？」
「その通りだ。彼が僕の力を吸収したように、僕も彼の力の一部を手に入れた」
「ええ。だから、あなたは風花さんたちの索敵でも存在がバレず、八雲さんのセイヴァーが放つ命の光を浴びても消滅しなかった」
「それはお互い様だろう？　人の性質を得た僕がダメなら、黄昏の羽根を媒介に魂を定着させた君たちも浄化されていたはずだ」
　湊や以前のチドリのように黄昏の羽根を内蔵しているだけならば、それはただの増幅器としての力しか発揮されず、セイヴァーの浄化の光を浴びても回復するだけだ。
　けれど、ラビリスとアイギスは生体ボディに自分たちの自我が宿った状態の羽根を内蔵している。
　セイヴァーの光はシャドウやペルソナだけでなく、悪霊なども祓えてしまうため、もしも人の性質を得た綾時にまで効果があればアイギスたちの自我も浄化されて消えていたかもしれない。
　シャドウとしての本性を人の性質で覆うことで逃れた者と、シャドウらの母たるニュクスの身体に人としての心を宿す者。
　その肉体がどうであったとしても、どちらも人に近いようで人ではないのだ。
　綾時の指摘にアイギスが眉を顰めれば、綾時は別にそういった言い合いをするために来た訳ではないんだと謝罪しながら月を見上げる。
「ゴメンゴメン。でも、お互いに不思議な縁でここまで来たものだね。十年前は人間として対峙するなんて思いもしなかっただろう？」
「わたしはあの時全てを終わらせたつもりでした。……いいえ。終わらせるつもりで、でも、出来なかった」
　二人は十年前に敵として出会った。
　その時は、こんな風にお互い〝人間〟になって再会するとは思っていなかった。

綾時にそのつもりはなくとも、アイギスはそのために作られた存在で、綾時を殺して全てを終わらせるつもりだったのだから。
その戦いが原因でアイギスの記憶データは一部破損し、あの戦いは強大な敵を倒して終わったと思っていた。
けれど、綾時を敵として認識してしまう理由を考えていく中で、その記憶は間違いだったと気付いた。
「あれは君の責任じゃない。考えてもみなよ。僕は個であって個じゃない。無理矢理だろうと数多のシャドウを集めて融合させた存在だ。シャドウは一人の心に一体。つまり、君は一人でシャドウの大軍を相手させられていたようなものだ」
「そうだろうと、それを倒すのがわたしに与えられた使命でした。人々を守り、シャドウを倒す。そのための存在だったのに……わたしは守れなかったっ!!」
あの戦いの真実を忘れて過していた自分の愚かさと、自分があの時の少年にした残酷な処置への後悔からアイギスは泣きそうな表情で叫びながら武器を取る。
青年にもらったリストバンドからサブマシンガンを取り出し、引き金を引きながら反時計回りに走り銃弾をばら撒いた。
「目の前で両親を奪い。脅迫紛いに戦う事を強要し。そして、十年続く地獄へと突き落としてしまった!!」
自分が戦いへ巻き込まなければ、せめてあの場で共に戦っていなければ、エルゴ研は少年を被験体として回収しようとは思わなかっただろう。
そうすれば、彼は知り合いである桐条家か親戚である九頭龍家に預けられたに違いない。
両親を失った哀しみを時間の流れで癒やし、他の子どもたちと同じように日常の中で成長していくことができたはずだ。
そうなれば、チドリたち人工ペルソナ使いはもっと死んでいたかもしれないし、実験中に暴走したラビリスも凍結されていたままだったかもしれない。
でも、それでも、百鬼八雲という少年は平和な時を過ごせたはずな

のだ。
銃弾をばら撒きながら走るアイギスは、左手に手榴弾を呼び出すとピンを外して投げつけてから距離を取り、直後、爆発音と共に赤い炎が広がって辺りを照らす。
武器を構えたままアイギスがそちらを見ていれば、爆発の余波で広がった黒煙の向こうから少年の声が響いた。
「責められるべきはグループとエルゴ研の人間たちだ。既にあれだけの財を持っていながら欲を掻き、終末思想に取り憑かれた老人の言葉に従った。老人は独りで死ぬのが怖かったんだろう。だから、僕を生み出し世界を滅ぼそうとした」
少年の前には白い光で紋様が描かれた魔法陣が展開し、先ほど放った銃弾は魔法陣に触れたまま停止していた。
物体だけでなく爆発の炎まで防げるのかとアイギスは苦い顔をする。
シャドウとしての力を使った相手の力は未知数。湊と同等であるとすれば、十年前よりも強くなった彼女でも勝つことは出来ない。
だが、魔法陣を使った未知のスキルで攻撃を防がれようと、耐久力や展開時間など全てを試して突破してみせるとアイギスは武装をロケットランチャーに切り替える。
本来は両手を使って構えて撃つ物だが、片手持ちで二丁構えるとほとんど同時に放つ。
光の尾を引きながら真っ直ぐ綾時へと飛んでいったそれは、少年がどこからか長剣を取りだしすれ違い様に切り裂かれ彼の後方で爆発する。
「……その剣はあのシャドウの」
迫るロケット弾を躱しながら斬りつける少年の反応速度に、切り裂いてから時間差で爆発を起こすほど鋭利が切れ味を持つ剣にアイギスは冷や汗を掻く。
綾時が持っているのはあの日に戦ったシャドウが持っていた物を小さくしたままの見た目だった。
やはり、人の姿を保っていても本来の力を使うことが出来るのかと

戦力を分析する。
接近戦よりも遠距離からの射撃の方が得意なアイギスは、距離を取りながらスナイパーライフルを出して頭部を狙って引き金を引く。
「八雲さんに自我を与えられながら、どうしてあなたは人の敵になろうとするんですか！」
ばら撒いた銃弾は防がれた。しかし、ロケット弾は防がずに切り裂いて破壊した。
そこから魔法陣には耐えられる限界があると予想し、アイギスは再び展開された魔法陣の同じ場所を狙ってライフル弾を撃ち込む。
けれど、同じ場所に撃ち込まれたライフル弾は一つ目が魔法陣に阻まれ、後続も先に着弾したものに衝突する形で止められてしまう。
これではまだ足りないかとアイギスが武器を換装しながら距離を取ろうとする間に、西洋剣を持ったまま立っている綾時が言葉を返してくる。
「それは違うよアイギス。僕は人々が滅びを求めるから生まれるんだ。そして、僕の存在は滅びの確約を伝える宣告者であって、滅ぼす者ではない」
「あなたを殺せば、その滅びは回避されるはずっ」
「いいや。顕現した時点で終わりさ。決まった事を伝えるだけだからね。僕がそれを伝えようと伝えまいと決定した事実は覆らない」
アイギスは綾時を殺そうと必死になっているが、それは根本的に勘違いしていると指摘する。
綾時に与えられた役目は滅びの訪れを伝えることであり、滅びを齎す者は別にいてそれは綾時よりも遙かに上位の存在なのだ。
故に、仮にここでアイギスが綾時を殺したとしても、それは伝令を殺しただけであり、実働隊は後からやってくる。
もし、アイギスが滅びを回避したかったのであれば、そもそも綾時が現われる事を阻止しなければならなかったのだ。
それを聞いたアイギスは愕然としながら足を止め、声が震えそうになるのを必死に堪えながら敵へ問いかけた。
「それでは十年前の戦いはっ、八雲さんに背負わせてしまった代償は

無駄だったと言うんですかっ」
綾時がこの世に最初に現われたのは十年前だ。
もしも、綾時が言った通りに顕現した時点で滅びが決まっていたのならば、あの時既に未来は決まっていたことになる。
必死に戦って、必死に力を求めて、大切な物を守るために自分を犠牲にし続けた青年の頑張りは無駄だったとでも言うのか。
アイギスがそれを問えば、綾時はとても悲しそうな笑みを浮かべて返した。
「……そうだね。あれはあくまで延命措置でしかなかったよ」
相手の言葉を耳にした途端、アイギスは全身の血が沸騰するような感覚を覚えた。
目の前が一瞬真っ白になり、すぐに視界は元通りになったが全身が熱い。
理由など分かっている。大切な少年の、一番大好きな青年の過した十年を無駄な物だったと言われたからだ。
自分の事ならばどれだけ言われてもいい。強くなったと思っていたのに、まだ一撃すら入れられていないのだ。
無駄な努力だったと、その程度で勝てるはずがないだろうと笑われたって、それはあくまでアイギス自身の問題なので悔しくても受け入れる事も出来た。
ただ、湊の事だけは否定させない。
本来、彼も守られるべき存在だった。
その未来を歪め、誰よりも苦しい道を歩ませる事になったのは全てアイギスの責任だ。
戦うために作られたアイギスから見ても、どうしてそこまで頑張るのだと思ってしまうほど湊はひたすらに未来を求めていた。
その理由が今になって少しだけ理解できた。彼は誰よりも冷静に世界の置かれた状況を理解していたのだろう。
「あなたを倒す!! 今、ここでっ!!」
綾時が嘘を吐く理由がない以上、彼を倒しても問題の解決にならない可能性は高い。

しかし、アイギスにはそれ以外の手段が思い付かない。
少女の全身から蒼い光が放出され、人間の限界を超えた速度で走り出す。
「諦めるんだ。アイギス。十年前の不完全な状態ですらろくにダメージを与えられなかった君じゃ勝てない。力も、資格も、君は持っていない」
人の胴体よりも太い金属のワイヤーを駆け上がり、アイギスは上空から爆弾や銃弾の雨を降らす。
ただ、そんなものを使っても綾時にダメージを与えられないのは先ほどの攻撃で分かっているはずだ。
案の定、彼に着弾すると思われた攻撃は全て魔法陣に阻まれ、未だに無傷で立っている。
それを見ながら次々と武器を換装して攻撃を仕掛けていたアイギスは、E．X．O．で増幅させたエネルギーを限界まで溜め、そこでようやく切り札であるペルソナを呼び出した。
黄金の兜と槍を持ち、巨大な盾を構えた女神の名は〝アテナ〟。
「アテナ――――ゴッドハンド!!」
一定の距離を開けながらも制空権を握った状態を維持するようポジションを取ったアイギス。
彼女の頭上に現われたアテナは、凝縮されたエネルギーを全てスキルに変換し、橋の道幅とほぼ同等の巨大な金色の拳を顕現させた。
死を経験し、湊の心臓を与えられた事で圧倒的な魔法スキルを持ったチドリに対し、今のアイギスは物理スキルでそれに匹敵するだけの力を見せている。
けれど、チドリは完全な死を経験した事で適性値が爆発的に増加し、さらに隔絶した力を持っていた湊の心臓という補助装置を持っているからこそ、それだけの力をエネルギー消費の負担だけで扱えているのだ。
アイギスもパピヨンハートだけでなく細胞レベルの微細な黄昏の羽根を全身に内蔵した生体ボディを持っているが、それで増幅される力には限界があり、加えてE．X．O．を使った無茶な力のチャージ

で身体に多大な負担が掛かっている。
いくら湊のためだろうとこのままでは拙いと思った綾時は、その姿を本来の物に戻して頭上に赤と黒の光が複雑に混ざったエネルギー体を出現させる。
見上げた先から迫り来る金色の拳、それを打ち砕くためそのシャドウはスキルを放った。
「――――〝ＤＥＡＴＨ〟」
球体として集められたエネルギーに変化が見られ、そこから赤と黒の奔流が大気を震わし放たれる。
己の限界を超えた力を籠めて放たれた女神による断罪の一撃。
それを完全体となった宣告者〝デス〟の放った虚無属性の光が迎え撃てば、衝突の余波だけでムーンライトブリッジが崩壊しかねない。
けれど、己が巻き込んでしまった青年のために少女は退かず、少年もまた誠実に向き合うと決めた以上は退くつもりがない。
ならば、敵として出会った両者が戦う事は必然だった。
攻撃を放った衝撃だけで轟音が響き、大気が震え、橋は揺れて、海が荒れた。
周囲にそれだけの影響を及ぼす二つの強大な力が迫り今まさに衝突しようとする。
「――――随分と懐かしい顔が揃っているな」
だが、衝突しようとしたところで、二つの力の間で蛍火色の光が弾けた。
弾けた光の中から突然現われた黒いマフラーを巻いた青年は、腰に差していた二刀を左右の手に持ち、迫る二つの力に向けて振り下ろす。
直後、刀を振り下ろされた二つのスキルは霧散するよう消滅し、何事もなかったかのように場に静寂が充ちてゆく。
戦っていた両者は、綾時は勿論、空中にいたアイギスも着地した状態で動きを止め、突然の乱入者へと驚愕の視線を向ける。
何せどのような結末だろうとここでの戦いは二人だけで決着を付

けるつもりだったのだ。
確かに彼にも関係する事ではあるが、〝巻き込まれた被害者〟であるからこそ彼を関わらせないようにしていた。
ただ、彼の力を持ってすればアイギスと綾時がムーンライトブリッジで相対した時点で気付いても不思議ではない。
彼がこの場に現われた事、戦いを邪魔された事、その他にも様々な感情が胸中で渦巻いているアイギスは苦い表情をしつつも、すぐにそれを引っ込めて真剣な瞳を彼とその向こうにいるシャドウに向けた。
アイギスとデスは大きく距離を開けて向き合い。その中間の位置で青年が両者に刀の切っ先を向けて立っている。
両者から見ても、湊はとても自然体な立ち姿だが、だからこそ二人は相手の出方が分からず動くことが出来ない。
湊は素手でも斬撃を飛ばせる。それが刀を持てば斬撃の射程は拳銃と変わらないレベルになるのだ。
生身であるアイギスは勿論、近い性質を得た事で彼の攻撃であればデスにも通ってしまう。
だからこそ、相手の次の動きが読めず両者が身動きを取れずにいれば、アイギスの背後から知り合いの声が聞こえて来た。
「アイギス、綾時君!!」
七歌の声が聞こえてアイギスが振り返れば、そこには息を切らせた仲間たちの姿があった。
やってきた者たちはアテナを呼び出しているアイギス、刀を持った湊、そして黒いボロ布を纏った異形のシャドウを見て動きを止める。
傍から見ればアイギスと湊がシャドウ相手に共闘しているように見えるだろう。
しかし、彼女たちはここに来るまでにアイギスが誰と戦っていたのか知っているのだ。
そのため異形のシャドウの正体を確かめるため声をかけたいのだが、彼女たちが躊躇っている内に湊が口を開いた。
「綾時、とりあえず人の姿に戻れ」
「……そうだね」

湊が声をかけるとシャドウが光に包まれ、それが弾けると綾時の姿に戻っていた。
分かっていた事ではあるが、実際にその眼で見ると化け物が人の姿になる光景は中々に衝撃が強く上手く言葉が出てこない。
それは後からやってきた者たち共通の感想のようだが、綾時が人の姿に戻った事で湊も刀をしまったのでタイミングを見て美鶴が三人に話しかけた。
「君たちは戦っていたのか？」
「わたしと綾時さんは戦っていましたが、八雲さんはそれを止めに来られただけです」
「何故戦っていたんだ？」
「彼が敵だからです」
美鶴の質問にアイギスが答えるが、その瞳は今も敵意を込めて綾時を見つめている。
それだけでアイギスが綾時を殺すつもりで戦っていたのだと伝わってくるが、美鶴たちは綾時の本当の正体や彼らの関係をまだ把握できていない。
湊がいればアイギスを抑えておけるはずなので、一度寮へ移動することを提案した。
「私たちは状況を理解できていない。望月の先ほどの姿やアイギスが彼と戦った理由など、私たちにも分かるようしっかりと説明してくれ」
美鶴のその言葉にアイギスはアテナを消す形で答え、綾時と湊もゆっくりと彼女たちの許へやってきた。
アイギスは湊と綾時が並んで立っている事を不快に思っているようだが、湊が綾時と一緒にいるのは彼をアイギスから守るためだと思われる。
それが分かっているためラビリスがアイギスと手を繋いで歩き出し、他の者たちもそれを追うように寮へと戻ることにした。

第三百九十二話　十年前の真実

１２月３日（木）
深夜――厳戸台分寮
湊の乱入によってアイギスと綾時が戦闘を中断し、他の仲間たちもそこへ合流した事で一同は話を聞くために寮に戻ってきた。
アイギスたちの許へと急いだ七歌たちは、向かっている途中でもムーンライトブリッジで二つの巨大な力が発生した事に気付いていたし。到着した時点では綾時がシャドウとしての姿を取っていた事で、風花とチドリの索敵結果が間違っていなかったと理解している。
けれど、いくら綾時がシャドウと言われても、これまで友人や仲間として過していただけに、本当に敵なのかと困惑している事も事実。
アイギスは元対シャドウ兵器として正体がシャドウである彼を敵視していたが、アイギスが戦いを挑まなければそもそも戦闘は発生していないのだ。
であるならば、同じ人間でも幾月やストレガのように敵対する者がいるように、敵と考えられていたシャドウから人類に味方する存在が出てきてもおかしくはない。
四階の作戦室に集まった全員が席に着き、湊が上座に、綾時が下座にそれぞれ座ったところで七歌が口を開いた。
「色々と聞きたいけど、まず綾時君はシャドウって事で良いのかな？」
「まぁ、そうだね。厳密に言えば違うけど大枠で見ればシャドウと思ってもらって構わないよ」
「似て非なる者ってこと？」
ここにいる者たちはペルソナやシャドウについてある程度知っているが、エルゴ研やラボの研究データを見てきた美鶴でさえも、実際には影時間に関わる物にそれほど詳しくはない。
例えば七歌の持つワイルドは、ラボのデータでは〝通常よりも高い適性を持った事で複数のペルソナを扱える能力者〟程度の情報しかない。
影時間の発生が日本の午前零時基準で世界規模に展開される等は

流石に知っているが、海外で偶発的にシャドウが発生しても気付いていないし、適性持ちやペルソナ使いがいても分からない。
彼らが知っているのはあくまで日本国内の事がメインで、何かしらの事件が発生した際に影時間との因果関係を研究する事は出来ても、シャドウの正体やタルタロスの持つ意味などは十年経っても詳しく分っていないのだ。
故に、自分たちがアルカナごとに分けつつも〝シャドウ〟と一括りにしている存在が、実際は全て異なる遺伝子情報を持った全く別の種族だと言われても不思議ではない訳で、綾時が正確にはシャドウではないと口にした事で七歌が聞き返せば、その質問には上座にいた湊が答えた。
「……通常、シャドウは共食いしたところで力が増すだけだ。アルカナシャドウのように食い溜めて力が増すことはあっても、ペルソナを掛け合わすように別の存在が生まれる訳じゃない。だが、滅びを求める人々の声が集まり、彼らのシャドウが合わさることで生まれる特別な存在がいる。それがシャドウの王、十三番目のアルカナを持つ宣告者〝デス〟だ」
一同は綾時本人から説明があると思っていただけに、湊からシャドウの詳しい説明がなされたことで目を大きく開いて驚いている。
影時間に関わる事柄に対しては、元から桐条グループよりも遙かに詳しかったので、彼が知っていたところで不思議ではないのだが、綾時と戦った少女だけはやはり湊は全てを知っていたんだと分かって複雑な表情を浮かべる。
「八雲さんはやっぱり知っていたんですね。十年前の戦いの真相も、綾時さんの事も」
「……まぁ、エルゴ研で調べる時間はあったからな」
「なら、どうして言ってくれなかったんですか!!　知っていれば、思い出していればわたしはっ」
席から立ち上がってアイギスは何も話していなかった湊を責める。
忘れていたのは自分のせいだ。あの戦いでメモリーが破損していたことで、記憶の回復が遅れていたが、それは彼女が弱かったことが

全ての原因である。
それを棚に上げて、何も話していなかっただけの湊を責めるのは流石におかしい。
アイギス自身もそれを分かっているが、自身にとって因縁の敵であり、また青年にとっても親の仇の片割れであるシャドウを庇う理由が分からない事で強い口調で言ってしまう。
ただ、他の者たちは湊とアイギスが関係している過去の事件など一つしかないと察しつつも、どういった経緯でそれらの事件が起きたのかは詳しく知らない
綾時からも話を聞き始めたばかりなので、分かっているなら君から話してくれと美鶴がアイギスに声をかけた。
「落ち着けアイギス。望月の正体が特別なシャドウだと言うことは分かったが、私たちは君たちの関係について何も分かっていないんだ。大凡の予想は付くがちゃんと説明してくれ」
言われてアイギスは不満そうにしながらも席に着く。
別に納得がいっていないのはアイギスだけではない。チドリやラビリスだって湊が重大な秘密を持っていた事に不満を持っている。
けれど、彼の行動は全て少女たちが平和で温かな光の当たる世界で生きていくためのものだと知っている。
綾時の事を黙っていたのも、きっとそこに繋がる事情があったのだろうと考えた。
そういった部分ではアイギスはまだまだ未熟で、湊の事を大切に想い過ぎている弊害で視野が狭くなってしまっているとも言える。
彼は人の話は聞くが言うことは聞かないし、自分だけ分かっていれば良いからと重要な事もほとんど話さない。
しっかりとそこを理解して多少のことは目を瞑るようにしないと疲れてしまうので、アイギスの隣に座っていたラビリスが落ち着かせるように背中をさすってやれば、アイギスは深呼吸してから自分たち三人の出会った経緯を語り出した。
「……先代の桐条家当主だった鴻悦氏が、月光館学園の敷地内でシャドウを集めた実験をしていた事は皆さんも知っていると思います。

元々は時を操る神器を目指していたのでしょう。でも、その目的は鴻悦氏が滅びに魅入られてから変わっていきました。どうしてそうなったのかは分かりません。老いていく中でふとした時に死を意識して孤独を感じる事はあると聞きますし。シャドウの研究を通して自然と終末思想に染まった可能性もあります。ただ、理由はどうあれ鴻悦氏は研究の中でデスの存在に気付き、その誕生を神器の降臨と騙って研究を進めたんです」

時を操る神器など誰も見たことがないので、その研究の終着点が正しいものであるかなど分からない。

しかし、シャドウの研究を進める中で影時間を発見し、短時間の展開に成功する中で研究者たちは時空間に干渉する手応えを感じるようになっていた。

人間長く生きれば変えたい過去の一つや二つは出てくる。

桐条鴻悦はグループの繁栄を絶対的な物にするだけでなく、功労者にはしっかりと報いると言って、研究者たちのそういった部分を刺激して研究を進めさせた。

「よくも悪くも鴻悦氏には人を率いる才能がありました。おかげで不穏なものを感じる者がいながらも研究は最終段階まで進み。あの事件が起きました」

「……ポートアイランドインパクトか」

「はい。鴻悦氏の目的通りに研究は進み。あの日、集められたシャドウを融合する事でデスが作られました。でも、当時の研究主任であった岳羽詠一朗氏は鴻悦氏の狙いに気付いていました。その時に行なっていた研究の危険性に気付いて実験の中止も進言していたようです。でも、鴻悦氏は止まらなかった。だからこそ、研究の最終段階で彼は装置を強制的に止めて鴻悦氏の目論見を阻止したんです」

美鶴の言葉に頷いて返しながらアイギスは話を続ける。

特別課外活動部の者たちは屋久島で一度近い話を桐条から聞いていたが、桐条の話は一部幾月によって改竄された内容が元になっており、さらに彼は爆発に巻き込まれ怪我を負って結末を自分の目で見ていない。

その点、アイギスは岳羽詠一朗が起こした行動の結果を見ていて、その後の後始末にも駆り出されている。
彼女の語る言葉以上に当時の真実を知る術はない。そう理解している者たちは彼女の言葉を静かに聞く。
「その結果、集められていたシャドウたちは十三体に分かれて港区に飛び散りました」
「待て。飛び散ったのは十二体じゃなかったのか？　そこに関しては幾月も嘘を吐いていないはずだが」
「飛び散ったのはデスの力の欠片であるアルカナシャドウ十二体です。最後の一体は不完全な状態のデスでしたが、残っていたデスも研究所から飛び立って行こうとしたので、わたしが追跡しムーンライトブリッジで戦ったんです」
幾月が言っていたのは最初に飛び散ったシャドウの数の事だろう。
しかし、実際には研究所にもう一体残っていて、そのシャドウも最後には研究所を飛び立って行こうとした。
アイギスが十三体と言ったのはそのためであり、数が違っていた意味に納得がいった美鶴が頷いて返せば、アイギスは僅かに表情を苦しげな物にしながら十三体目のシャドウを追った先での出来事を話す。
「そして、そこでわたしは八雲さんと出会いました。炎上する車の傍にいたので保護しましたが、質問する中でご両親も影時間への自然適合者と分かり、高い適性を持っている八雲さんであればペルソナに目覚める可能性もあるのではと協力を要請したんです」
そこで話を聞いていた全員の視線が湊に集まった。
彼の両親が死んだ事故がムーンライトブリッジで起きた事は皆が知っていて、そこで彼らが出会ったことも話としては聞いていた。
ただ、彼の両親も適性を持っていたとは初耳で、さらに言えば文字通りの意味で両親を失った直後に戦っていたとも思っていなかった。
状況がそれ以外の選択肢を許さなかったのかもしれないが、どうしてアイギスが度々湊に対して罪悪感を抱いている様子を見せていたのか改めて理解する。
「結果から言えば正解でした。八雲さんは両親を亡くされた直後だと

いうのに、なんの補助もなくペルソナの召喚に成功し、わたしと共にデスと戦ってくれたんです。敵の前で動けなくなったわたしを守るように一時は一人でデスを抑えてくださって、あの時点でわたしよりも強かったくらいです」
「対シャドウ戦闘を想定して作られた君の目から見ても当時の有里は特殊だったのか？」
「言い方は悪いですがあり得ない存在だと映りましたね。でも、いくら不完全と言っても敵はシャドウの王。わたしたちは上手く戦う事は出来ても、有効なダメージを与える事ができませんでした。結果、敵が広範囲に放ったスキル一つでわたしは大破寸前、八雲さんも重傷を負って意識を失いました。そのままでは八雲さんが死んでしまう。そう考えたわたしは怖くなり、必死に彼を助ける方法を考えた末に思い付いてしまったんです」
両親を失った直後、異形の化け物との対峙、初めてのペルソナ召喚。
少年がまともに動けない理由はいくつも考えられたが、湊はシャドウとの戦闘に慣れているアイギス以上の動きを見せ、機転を利かせて彼女の窮地すらも救ってみせた。
しかし、いくら上手に戦えたとしても地力に差があり過ぎた。
湊とアイギスの連携は一時デスを抑え込む事が出来たが、敵の放ったスキル一つで簡単にひっくり返され瀕死に追い込まれてしまう。
幼い子どもであった湊は一撃もらうだけで死んでもおかしくなかった。
自分が大破寸前だったアイギスも最悪を想像し、けれど、不幸中の幸いか湊が重傷を負いながらも生きていると分かった。
だからこそ、自分で彼を治療することが出来ないアイギスは、あらゆる手段をシミュレートしてその最悪の外法を思い付いてしまった。
「――――そう。目の前にいる〝死〟を司る存在を彼に封印すれば八雲さんは助かるのではと」
作戦室に何人かの息を飲む音が響く。
シャドウは彼らにとって人類に害を為す敵であり、数多の種類があれどどれも等しく異形の化け物だ。

いくらその存在が〝死〟を司っていたとしても、それを瀕死の子どもに封印して助かるとは思えない。
ただ、当時のアイギスにはそれが最も可能性の高い手段に思えたし、何より封印自体は目標を倒せない場合の予備プランとして最初から考えていたものであった。
「元々、デスの封印は討伐が不可能な場合の最終手段として考えてはいました。ですが、そのプランはわたしのパピヨンハートか可能性の申し子である八雲さんのどちらかが器に使えるという検討程度。八雲さんの命を繋ぐために死を司るシャドウを封印するのは一種の賭けでした」
人類の滅亡が目前に迫った状態での大博打は、結果から言えば見事賭けに勝ったと言える。
瀕死状態だった少年は封印されたデスの力を利用して回復し、さらにデスを封じた事で滅びの訪れは回避された。
もっとも、滅びの訪れに関して言えば実際はただの延命措置でしかなかったのだが、その時間稼ぎのおかげでこうやって話をする事が出来ている。
アイギスの取った行動がこの惑星の未来を繋いだと本当の意味で理解しているのは湊と綾時だけだが、彼女の話を聞いた事で幼い頃からずっと不思議に思っていた存在の謎が解けたとチドリが綾時に声をかけた。
「じゃあ、八雲の中にいたファルロスがそうだったのね」
「あぁ、その通りだ。僕自身も休眠状態で彼の中にいたけど、エルゴ研で彼は黄昏の羽根を内蔵してしまった。黄昏の羽根は元々こっち側の物だからね。彼に封印された事で人としての性質を得た僕はそこで自分がどういった存在なのかを思い出し、彼の中で話をするようになった」
先ほどの影時間にアイギスと対峙していたシャドウの姿にチドリは見覚えがあった。
それは初めて桔梗組を訪れた日の事、渡瀬に殺された湊を蘇生させていたファルロスが、湊のペルソナ召喚能力を使って自身の分体を呼

び出したのだ。
ボロボロの外套に大きな西洋剣、首にかけられた鎖付きの分銅、そして獣の頭蓋を思わせる不思議な頭部。
あそこまで姿が一致していれば、誰だろうと正解に辿り着けるというものだ。
チドリに言われて自身がファルロスだったと綾時が認めれば、ここで聞くとは思っていなかった名前が出てきたため七歌も会話に参加する。
「どうして八雲君の中に封印されていたのに私に会いに来れたの？」
「湊の力が強くて僕もそれなりに回復していたし、出会う少し前に時任亜夜さんという女性から僕の力の欠片を得ていた事で少し自由度が上がっていたのさ」
アイギスも命懸けで封印したというのに、勝手に外に出られれば封印の意味がない。
そう思って七歌は尋ねた訳だが、そも仮に途中で封印が解けようとデスが宣告者としての役目を迎えるのは飛び散った力が戻ってからになる。
力が戻っていない状態であれば本体は湊に封印されたまま、湊にエネルギーを借りて端末として顕現した分体で少し外に出ても問題はなかった。
ただ、湊の身体を借りることなく分体を呼び出せるようになったのは、湊の二つ上の先輩である時任亜夜から力の欠片を回収してからなので、七歌と出会うほんの一月前ほどから出来るようになったばかりだ。
それを聞くと本当に十年経ってようやく事態が動き始めていたと思えるが、知り合いの名前が出てきた真田はそちらの方が気になったらしく綾時を問い質す。
「待て、どうしてそこで時任先輩が出てくる。お前の力の欠片とは一体何だ？」
「アイギスは僕以外に飛び散ったのは十二体のシャドウだと言ったけど、実際はシャドウに満たない小さな存在もいたのさ。落としたお皿

が割れる時、大きな破片の他に小さな欠片も出来るだろう？　大きな破片がアルカナシャドウ、小さな欠片が時任亜夜さんに宿った僕の力だ」
「……俺には他人から適性を奪う力があった。だから、時任先輩の中で大きくなり始めていた欠片を抜き取ったんだ」
あのまま放置していれば相手にも何かしらの影響が出ていたと思われるが、そうなる前に湊がアベルの持っていた〝楔の剣〟で力を抜き取って対処した。
力を抜かれた本人は何も知らず、今も元気に大学に通っているはずなので、影響がないと分かった真田が安堵の息を吐けば、それを見て綾時が小さく笑みを漏らし話題を七歌に出会った時のことへ戻す。
「小さくても僕の力ではあったからね。それを得た事で単独で外界に干渉できるようになり、湊の指示で戦う力が必要になるだろう七歌さんとベルベットルームへ入るための契約を結んだのさ」
「私がシャドウと戦うって分かってたの？」
「七歌さん個人というより戦力の不足する特別課外活動部へのテコ入れだね。ワイルドが目覚めれば切っ掛け次第でペルソナを得る事もあるけど、住人たちの手助けがあった方がやりやすいだろうから」
七歌が巌戸台を訪れた事が特別課外活動部の活動が本格化した切っ掛けでもある。
彼女が参加し、順平が加入し、さらに風花や天田がやってきて、アイギスも十年ぶりにこの地へ戻り、離れていた荒垣も復帰した。
それまでの活動を考えると今年だけで随分と色々な事があったように思える。
けれど、そうなる事が分かっていたとばかりに、湊は七歌が力を得るためのお膳立てをして、タルタロスに自分のペルソナを変化させた〝ヒーホー君〟を配置し、アルカナシャドウが現われた時にはメンバーたちの窮地を救ってくれていた。
わざわざ荒垣のフリをしてまで助けるくらいなら、全部を自分でやるか正体を明かした方が動きやすかったに違いない。
だと言うのに、敢えて面倒な方法を選んでいたところに青年らしさ

を感じるが、自分たちのサポートに回っていたとき、綾時も湊を手伝っていたとするとやはり彼はシャドウであっても味方だと思えてしまう。
十年前の戦いの真相、その後の湊と綾時がしてくれていた影ながらの手助け、二つの事柄について難しい表情で考えていた美鶴は顔を上げ、やはり本人に確認を取る以外にないかと口を開いた。
「アイギスたちの出会いと望月の正体は分かった。有里と二人で色々と我々の手助けをしてくれていたこともな。だが、だからこそ聞いておきたい。望月は我々と敵対する意思はあるのか？」
真っ直ぐ綾時へと視線を向ける美鶴の言葉を聞いてメンバーの間に緊張が走った。
この質問に対する答えは自分たちの今後の関係を決定付けるものになる。
綾時からは一切の敵意を感じていないが、世の中には感情を一切ぶらすことなく作業のように人を殺せる者だっているので、敵意を感じない事を安全の根拠にするのは危険だろう。
加えてシャドウに人間としての価値観を期待して良いのかという疑問もある。
シャドウにとっては人を襲うのが当たり前で、人を襲わない綾時の方が異常だというのなら、今後もこれまでと同じように仲間として力を貸してもらいたい。
そうして、綾時の返答を待っている間、メンバーたちは時の流れが嫌に遅く感じた。

第三百九十三話　選べる選択肢

深夜――巌戸台分寮

「だが、だからこそ聞いておきたい。望月は我々と敵対する意思はあるのか？」

真剣な表情で真っ直ぐ綾時を見つめ美鶴が尋ねる。

この質問の返答次第では、美鶴たちも先ほどのアイギス同様、彼を敵として認識して対処せねばならない。

その際、湊がどう動くのかが分からないという不安はあるが、綾時の力が湊とほぼ同等であれば全員が死に物狂いで戦う必要があるだろう。

故に、他の者たちが緊張した面持ちで言葉を待っていれば、綾時は儚げに笑って口を開いた。

「……僕個人は敵対したくはない。でも、僕に与えられた役目がそれを許さない」

「シャドウだから人類に害を為すと？」

「いいや。そもそも、本来シャドウは人を害する存在じゃないんだ」

美鶴たちはシャドウと戦ってきたことで、シャドウが人間を襲う化け物だと思い込んでいる。

けれど、それらを詳しく知っている綾時や湊からすれば、それは彼女たちが相手の縄張りを侵しているから襲われているに過ぎない。

「湊から聞いているかもしれないけど、シャドウもペルソナも根幹は同じ物だ。人から抜け出たものがシャドウ。己の内から顕現させたものがペルソナ。どちらも人の心から生じたものである事は共通している。桐条グループでは影人間はシャドウに心を食われた状態と見ていたけど、実際はただシャドウが抜け出ただけでね。別にシャドウに襲われて心を失っている訳じゃないんだ」

シャドウとペルソナの違いなど実際はほとんどない。

あるとすれば持ち主の自覚によって、存在が輪郭を得ているかどうかくらいだろう。

湊の内に宿る名切りの業から発生する影の人形や獣はシャドウ、自

我を得て確固たる存在を得ているアマテラスたちはペルソナ。
それと同じように一般人たちから抜け出たシャドウは、持ち主が持っていた心の性質である程度共通の姿をとっているだけで、もしも持ち主が己のシャドウを自覚すれば固有の姿を持ってペルソナに変化する。
なので、美鶴たちが思っているようなシャドウの被害者というのは実はほとんどが勘違いだった。
綾時が話した事は過去に湊も似たような事を言っていたので、彼の話が改めて事実だったと確認された形だが、それでは説明が付かない部分もあるのではとゆかりが尋ねた。
「でも、アルカナシャドウが出た時は明らかに無気力症が拡がってたけど？」
「ああ、そこだけは例外かな。アルカナシャドウは僕の復活のために力を集めようとしていた。だから、心が弱っている者からシャドウが抜け出しやすいよう干渉して、抜け出たシャドウを吸収していたんだ」
本来のシャドウには共通の目的などないが、アルカナシャドウは自分たちの本体であるデスの復活を目指して動いていた。
シャドウを吸収する事で力を取り戻し、消えていくときに自分が取り戻していた力の分だけデスが強化される形だ。
別にアルカナシャドウが人の心を食べて回っていた訳ではないが、シャドウが抜け出しやすくなるよう干渉はしていたので、他のシャドウと違って人を害していたと言えなくもない。
「でも、それは無理矢理という訳ではないよ？　ぐらついている歯を指で動かす感じで、あくまで予定を早めただけだからね。そも、心が弱い人間にしか効果はなかったんだ」
「……無気力症はシャドウが抜け出た事で起きる症状だが、分類するなら精神疾患だ。個々で抱える問題などはあるんだろうが、現実から目を背け逃げだした者しか掛からない。まぁ、心の一部が抜け出すなんて物理現象を起こせる状況を作ったのは桐条グループだけどな」
アルカナシャドウは確かに干渉していたが、あくまでそれは不安を

持っている人間の不安を煽っていたに過ぎない。
湊もそれを肯定するように頷き、原因はあくまで心の弱い本人か、そういった不可思議な現象が起こる現状を作った桐条グループにあると告げた。
それを言われてしまえば十年前の実験含めて全て桐条グループの責任なのだが、別に責任所在を求めている訳ではない七歌が単刀直入に切り込んだ。
「ねぇ、綾時君は何が目的なの？　貴方に与えられた役割って何？」
「そうだね。そこも話しておこうか。まず、シャドウたちの目的は〝母なるものの存在〟の復活だ。彼女の名前は〝ニュクス〟。太古の地球にやってきて、そこに存在した全ての命に〝死〟という概念を与えた存在。言ってしまえば全てのシャドウの生みの親だ」
桐条が倒れたあの日、数多の古文書を読み解いた幾月からある程度は聞いているようだが、デスが降臨する意味やその先の出来事については聞いていない。
そう思った綾時があくまで自身の降臨は計画が最終フェイズに移った事を示すだけだと伝え、幾月が語らなかった〝滅びの訪れ〟の詳細を告げる。
「もし、ニュクスが復活すれば、この惑星は純粋なる死に満たされる。簡単に言えば全ての命が消滅するんだ」
「消滅って、死ぬという事か？」
「全ての命が……待て、まさか、人類全てが影人間になってしまうとでも言うのか!?」
真田に続けて美鶴が聞き返せば、綾時は曖昧な表情で見つめ返す。
もしも、美鶴の想像した通りになれば世界は終わりだ。
現時点でも影人間たちは家族や病院の補助を受けて生活しており、一人で家事や買い物など出来る者はほとんどいない。
当然ながら家畜や畑の世話は出来ないし、船で漁に出るなんて事も出来ないだろう。
全ての人間が影人間になってしまえば、その時点で人類の滅亡は確定する。

全員がその未来を想像して顔を青くしていれば、つまらなそうに話を聞いていた湊が口を挟む。
「……ニュクスの力はそんなものじゃない。やつの放つ死の波動を喰らえば、やつの影響下にある全ての生物がその形を保てなくなる。この星であいつの影響下にない生物が存在しない以上、全ての動植物が液体化するだろう」
綾時が曖昧な表情を浮かべていたのは、他の者たちの想像を超えた最悪の結末を知っていたからだ。
メンバーたちにすれば人類の影人間化でも絶対に防がねばならない事態。
けれど、ニュクスの力が及ぶのは人間だけでなく、他の動物は勿論、高度な思考力を持たない虫や植物も含まれている。
どうして湊がそれを知っていて平然と口に出来るのか疑問は残るが、そんな未来が訪れるというのなら絶対に阻止しなければとゆかりが解決策を聞いた。
「ねぇ、そのニュクスってどうやれば倒せるの？　シャドウの親玉なら、倒せばそんな未来を回避できるんだよね？」
「……申し訳ないけど、それは無理なんだ」
ゆかりの言葉に綾時は心の底から申し訳なさそうに首を横に振る。
綾時も出来る事ならばアドバイスをしてやりたかったが、彼にも出来る事と出来ない事が存在する。
そして、今回の事は彼の一存ではどうしようもない事態であり、その解決策を彼自身も知らない。
綾時のその様子に焦ったように立ち上がったゆかりは、本気で言っているのかと強い口調で聞き返す。
「ちょ、無理ってどういう事？　なんでよ。絶対に倒せない存在とでもいう訳!?」
自分たちはこれまでも強敵を倒してきた。ならば、最後の敵も同じように乗り越えてみせる。
そう思っていたのに、最初からその選択肢を選ぶことが出来ないと聞けば誰だって納得がいかないだろう。

それを理解している綾時は暗い表情のまま〝デス〟の降臨が持つ意味を語る。
「僕は宣告者〝デス〟だと言っただろう。つまり、僕が現われた時点で終わりなのさ。僕が宣告するのは滅びの確約。滅びを回避したいなら十年前の僕の降臨を防がなければならなかったんだ」
「そんな、十年前にだなんて出来る訳……」
「その通り。君たちに一切の責任はない。岳羽詠一朗とアイギスによって滅びの訪れを遅らせる事は出来たけど、それはあくまで延命措置だからね。もう一度僕を封印しようともう期限は延びない。おそらく……年を越そうとこの世界に次の春は来ない」
綾時の感覚で行けば滅びはそう遠くないらしい。
今は十二月だが、このまま年を越せても、滅び自体は冬の間にやって来てしまうという。
いつがどの季節だという定義は分野によって変わるものの、おおよそ三月からは春にカウントされるようになる。
つまり、ニュクスの降臨は一月か二月の間という訳だ。
人類の滅亡まで下手をすれば一月を切っている。突然そんな事実を突きつけられたメンバーたちは思わず言葉を失った。
痛いほどの沈黙が場に降り、誰もが暗い表情で俯いている。
だが、綾時の他に、この場でただ一人普段と変わらぬ様子をした青年を見て、七歌が彼に縋るように声をかけた。
「八雲君。八雲君なら知ってるんじゃないの？　どうやればニュクスを倒せるか。滅びを回避できるのかを」
「……倒すだけなら手段がない訳じゃないが、根本的な解決にはならない」
青年が手段がないわけじゃないと言った途端、全員の瞳に僅かな希望の火が灯る。
ただ、もし本当に解決出来るのなら湊はその前に自分から解決策を告げていた。
つまり、彼も言った通り、その方法には穴があって根本的な解決にはならないのだ。

その方法に心当たりがあったようで、綾時は少し顔を上げると苦笑気味に湊に確認した。
「湊が言っているのはニュクスを〝殺す〟という方法だろう？　確かに、君の特別な眼を使えば殺せるだろう。その可能性はある。けど、ニュクスが死ねば世の中のシャドウが消滅する。そうすれば心が欠けて人類は全員影人間になってしまうだろうね」
「ああ。だから、根本的な解決にはならないと言ったんだ。そもそも、神であるニュクスと人間じゃ規格が違う。あれは戦ってどうにかなるものじゃない」
いくら期待されても湊にだって出来ない事はある。
湊の眼は存在の寿命を捉え、それを切ることで強制的に死を発現させる事が可能だ。
相手は死を司る存在で、他の者よりも圧倒的に光の傷が視えにくいだろうが、存在する以上は神だって殺す事が出来る。
しかし、ニュクスが死ねばそれぞれの精神に宿っているシャドウも消滅するため、この惑星に生きる命を今の状態で存続させることは不可能と言えた。
期待から一転、彼本人から戦うという前提が間違っていると指摘され、余計にメンバーたちの表情が暗くなっていく。
それを見ていた青年は、以前伝えたはずなんだがなとゆかりと七歌に声をかけた。
「岳羽と七歌は覚えていないか？　最初のアルカナシャドウが寮に現われた数日後、昼休みに生徒玄関で七歌がペルソナについて俺に話した時、俺が冗談の体でなんて言っていたか」
あの時、七歌が関係者の疑いのある湊に機密情報を話していると思ってゆかりは慌てていた。
実際に彼は誰よりも深く影時間に関わっていた訳だが、そうなってくると軽いノリで口にしていた事にも意味があったのだと思えてくる。
他の者たちが二人に視線を向け、当人たちが必死に記憶を辿れば先に思い出した七歌が湊が言っていた言葉を皆に聞かせた。

「えっと……確か、月にニュクスっていう……シャドウの親玉が、いて……」
「待って、あれが本当のことだったとでも言うの？」
「だから、分かっていると言ったんだぞ」
「ふざけないでよ!!　そんなの分かる訳ないじゃない!!」
湊は四月の中旬頃にはその話をしていた。
だが、マジシャンのアルカナシャドウを突然変異体だと思っていた時期に、そんな事を言われても信じられるわけがない。
ゆかりが怒って湊を怒鳴りつけるが、そうしたところで現状が変わるわけじゃない
ニュクスは倒せない。倒しても滅びは回避できない。その事実がただ重くのしかかってくる。
すると、そんな友人たちの姿を見ていた綾時が、出来ることがない訳じゃないと口を開いた。
「確かに滅びは避けられない。でも、その時まで苦しまずに過すことは出来る。僕は湊の中にいた事で彼の持つ人の性質を得た。おかげで本来なら完全体となった時点でニュクス同様倒せない僕を彼なら殺す事が出来る」
デスはあくまでニュクスから分かれた端末のようなものだ。
それ故に、彼と近い性質を持っている人間か、神に届き得る力を持つ者でないとダメージを与える事が出来ない。
チドリを助けるために湊が死んだときは焦ったが、彼が戻ってきたなら全て彼に任せれば安心して最後の時を過ごせるはず。
事情を分かっていないメンバーたちに、綾時は自分が殺された時に起こる現象について伝える。
「宣告者であるデスが倒されれば、ペルソナを持つ君たちであっても影時間に関わる記憶を失う。そうすれば、君たちはこの救いのない現実を忘れたまま最後の時を過ごせるようになるんだ。滅びの訪れは一瞬の事だからね。君たちは苦しまずに最後を迎えられる」
「待てよ、綾時。そんな、忘れて過すとか、そんなのってさ！」
「順平君。僕は君たちの事を大切に思ってる。僅かな時間だけど、仲

間に入れて貰えて本当に嬉しかった。だから、君たちが滅びに怯えて日々を過す姿なんて見たくないんだ」
綾時はこの一月の間の出来事を大切な思い出として胸に刻んでいる。
ペルソナ使いとシャドウ、本来は相容れない存在だろう。
しかし、皆と笑って、助け合って、仲間として本当に楽しく過すことが出来た。
だからこそ、そんな彼らが辛い思いをして最後の時を迎えるなど受け入れられない。
忘れて過せば苦痛もなく終わることが出来るのだから、どうかそれを選んで欲しい。
綾時がそれを頼めば、黙って話を聞いていたチドリが一つ聞かせて欲しいと質問をした。
「……ねぇ、その時八雲はどうなるの？　真田美紀が適性を失ったとき、八雲との思い出も失ってた。なら、私たちの時も同じ事が起きる可能性があるんじゃないの？」
「ああ、その通りだ。彼は半分こっち側の存在になっている唯一の例外。僕を倒せば彼との思い出も消える。そして、ニュクスと同格の神を宿す湊はニュクスの波動も相殺できる。だから、彼だけは記憶を失わないまま、滅びを超えて地球最後の生命として生き残る」
チドリの質問から発覚した情報に、思わずメンバーたちの視線が青年に集まる。
一度は完全に死んでおきながら蘇った存在だ。であれば、滅びを超える可能性もあると薄々気付いていたが、まさかニュクス側である綾時からそれを肯定されるとは思っていなかった。
いくら自分たちが怯えずに最後の時間を過ごせるからと言って、大切な彼との思い出を失う事など出来るはずがない。
眼に強い怒りを込めて、アイギスはそんな馬鹿な真似が出来るかと声を荒げた。
「八雲さんとの思い出を失って、自分だけ何も知らずに平和な時間を生きるなんて出来るはずがありません！」

「君にとってはそうかもしれない。でも、他の人にまで死の恐怖に耐えて過す事を強制するのかい？」
「それは……でも、そんなのはただの現実逃避です。楽な方へ逃げているだけではないですかっ」
「逃げることは悪い事じゃない。実際、君も湊が死んだときはしばらくその現実から目を背けていたんだろう？」
「確かにそうですが、でもっ」
アイギスにとっては死への恐怖よりも湊との思い出を失う方が辛いのだろう。
しかし、他の者にとっては湊との思い出よりも、己の心の平穏の方が大事かもしれない。
彼の事でつい感情的になってしまうアイギスの気持ちも分かるが、自分たちの最後だからこそちゃんと冷静に考える時間を作った方がいいと言って綾時は立ち上がる。
「まだ滅びまでは時間がある。だから、しっかりと考えてから答えを出すといい。十二月三十一日、その日にもう一度答えを聞きに来よう。それを過ぎると僕は向こう側に還ってしまって、湊であっても触れられない状態になるからね」
それだけ言い残すと綾時は皆に背を向けて入口へと歩いて行く。
シャドウでありながら最後まで仲間たちの事を心配してくれていた少年は、扉を出た途端に気配が消えてその場からいなくなった。
部屋に残された者たちの間に再び沈黙が戻ってくるが、話し合いが終わったと判断した湊が立ち上がった事で他の者たちの視線が彼に向く。
「八雲さん、どこへ行かれるのですか？」
「……どこって会社に戻るだけだが？　別にお前たちがどっちを選んでも構わないからな。話し合うなら好きにやってくれ」
湊もそれだけ言うと部屋を出て行ってしまう。
綾時を殺せるのは彼だけで、それをすれば彼の存在は他の者たちの思い出から消える。
さらに、彼だけは記憶を失わずに滅びの日を迎えることになるとい

うのに、どうして平然としていられるのか他の者たちは理解できなかった。
だが、この場に残ったところで自分の気持ちがしっかりと決まるわけじゃない。
今日は解散し、また数日後に集まるように決めると、メンバーたちはそれぞれ暗い表情で部屋を出て行った。

第三百九十四話　選ぶことの意味

１２月５日（土）
放課後――ポートアイランド駅前広場
アイギスと綾時が戦い、綾時が自身の正体と世界の滅びについて語ってから二日が経った。
あれから綾時は学校には来ておらず、携帯に連絡を入れても繋がらない。
学校には家庭の事情でしばらく休むと連絡があったそうだが、それは湊が裏で手を回しただけらしい。
綾時自身は大晦日に特別課外活動部のメンバーたちに会って、その後は彼らの選択によって死ぬか、あちら側に還って己という偶然生まれた自我は消えると考えているのだろう。
どちらを選んでも結果は同じだ。望月綾時という〝人間〟は消えてなくなる。
であるならば、少しでも自分たちが苦しまずに済む方を選ぶのが正しい選択と言える。
あの場で綾時の話を聞いた誰もがこの世界の迎える結末に絶望を覚えた。
訪れる滅び、どう足掻こうとも倒せない敵、避けられない自分たちの死。
そんなものを聞かされて冷静でいられる方がおかしい。
自分たちにとって絶対的な力の象徴である湊から、ニュクスは戦ってどうにかなる相手ではないと断言された事も大きいだろう。
少なくとも七歌にとって彼は神にすら届き得る力を持った存在だったのだ。
そんな彼の口から諦めとも取れる言葉が出たことで、少女もどうすれば良いのか分からなくなって街中でボンヤリとしながら空を眺めていた。
（綾時君を殺せば私たちは苦しまずに死ねる……か）
駅前の花壇のところにあるベンチに座って七歌は空を見上げて考

える。
空は生憎の曇天、いつ雪が降ってもおかしくない寒さで、これなら考えすぎて頭が茹で上がりそうにならずに済むとここで悩むことに決めた。
まず、自身の置かれた立場を考えて選ぶのなら、七歌は迷わずに綾時を殺す方を選ぶ。
彼女はチームの指揮官だ。仲間たちの事を誰よりも考えて動く必要がある責任ある立場にいる。
だからこそ、どうやっても避けられない死がやってくると分かっていれば、残された時間を精一杯幸せに生きて欲しいと考えてしまう。
メンバーたちはただの学生なのだ。ラビリスとアイギスは元対シャドウ兵器という特殊な生まれだが、その心は七歌たちと何ら変わらない普通の少女である。
今では人としての肉体を手に入れ、死を身近な物として理解できるようになったからこそ、ある意味彼女たちは七歌たち以上に死を恐れる可能性だってある。
一方で、彼女たちにとっては対シャドウ兵器だった自分たちがシャドウと戦うことは当然かもしれない。
自分たちは元々そのために作られた。影時間を終わらせる事は使命であると考え、最後まで諦めずに戦う事を望む事だって十分にあり得る。
しかし、そうであるならば、七歌は尚更彼女たちを戦わせるわけにはいかない。
今必要なのは義務感ではなく、自分の心に素直に向き合う事なのだ。
(義務感で戦おうとすれば、きっと私たちは何も出来ずに死んでいく事になる。八雲君が戦ってどうにかなる相手じゃないって言った以上、恐らくその点について嘘はない。どうにもならない現実を前に、皆が絶望したまま死ぬなんて絶対にダメ)
別に多数決で少数の意見を封殺しようと思っている訳ではない。
勝算あるのなら、一パーセントでも可能性があるのなら、七歌たち

だって滅びに立ち向かおうと思っている。
ただ、綾時たちが言っていたように、もう何も出来ることはなく、選べるのが残された時間の過ごし方だけなのであれば、少しでも皆が幸せな選択肢を選ぶのが指揮官としての務めだと思っている。
受け入れがたい現実だとしても、七歌がリーダーとしての判断だと皆に伝えれば、一部の者たちや湊本人はその考えを支持すると思われる。
しかし、そこで問題になるのが綾時を殺すための手段と殺した事で払う代償だ。
（殺せるのは八雲君だけ。彼に友達を殺させて、皆が辛い現実を忘れて最後の時を楽しく過ごせたとしても、八雲君だけは皆の記憶から消えてその輪の中に入れず。独りで世界の滅びを見届ける事になる）
湊は昔から自分の友達は一人だけだと周りに言っていたらしい。
綾時が転校してきたことで、その唯一の友達が綾時なのだと周りの人間にも伝わったが、学校ではあまり一緒に行動していないにも関わらず二人には不思議な信頼関係があるのは見ていれば分かった。
当たり前だ。最悪と言ってもいい出会い方をした二人だが、意思疎通が可能になってから和解し、およそ十年も一緒にいてその間に彼は何度も綾時の力を借りて危機を乗り越えてきたのだ。
事故の責任は桐条グループにあって、呼び出されたデスの暴走は岳羽詠一朗の実験中断が原因と分かっている。
交通事故に遭えば車ではなく運転手を憎むように、湊がデスを憎み続ける理由はなかったのだ。
だからこそ、二人はお互いを信じて強い絆を結ぶことが出来た。
湊は綾時をただ一人の友人と認め、綾時は湊を誰よりも大切な友達と認めた。
アイギスは湊に綾時とあまり付き合わないように言っていたが、湊は大切な少女に言われても綾時と話すことを避けたりはしなかった。
そこまでの絆で繋がっている二人をただ引き裂くだけでなく、自分たちの勝手な都合でその手で殺させようとするなど、大した外道だなと七歌は自分の浅ましさに思わず自嘲的に笑った。

（本当に、本当に何一つ八雲君にはメリットがない。強いて言えば、八雲君が大切に想ってるアイギスたちが穏やかな最後を迎えられるくらい。でも、そんな彼女たちから八雲君は忘れられてしまう。多分、指輪を使って影時間を体験したおば様や桜さんの記憶からも消えてしまう）

ペルソナを持っている七歌たちの記憶からも消えてしまうとなれば、桐条グループが作った簡易補整器の指輪などを使って影時間を体験した者たちの記憶も消えるだろう。

だが、最悪を想定するならば、鵜飼や五代のように知識として影時間を知っている者にも記憶の改竄が起こる可能性がある。

その場合、影時間の適性を失った美紀のように思い出だけが消えるのではなく、人物は勿論のこと〝有里湊〟という名前すら聞き覚えがないという風になるかもしれないという事だ。

大切な少女たちが温かな光の当たる世界で生きられるようにと必死に力を求め、一般人の被害を出来る限り抑えるため彼は戦い続けてきた。

その果てに辿り着いたのが、新たに得られた家族や信頼できる者たちの中から、己が存在した痕跡の一切の消滅など冗談にしても笑えない。

（……なんで……なんで、全部八雲君なのかなぁ。確かに彼の手は血で汚れてるのかもしれないけど、彼がいたから世界は続いてるっていうのにさぁ）

選べない。本当はリーダーである自分が率先してメンバーたちの事を考えた選択を口にするべきなのだろうが、どれだけ非情になりきろうとしても七歌は湊だけに背負わせる選択を選ぶ事が出来なかった。

これで湊も七歌たちと同じように影時間の事を忘れ、ただの友人として一緒に残りの時間を過ごせるという話なら簡単に選ぶことも出来た。

しかし、結果はそうではない。自分たちが現実から目を背けている間、彼だけが独り現実と向き合って世界から取り残されることにな

る。
他に選択肢がないことは分かっているのだ。
ただ、あの事故の日から今日まで彼がどのように生きてきたかを知り、そして、その心が自分たちと何一つ変わらず弱さを持っていると気付いてしまった以上、七歌はどれほど自分の面の皮が厚くてもそれだけは選べないと思った。
そうして、七歌は仲間たちと彼のどちらを犠牲にするか寒空の下で悩み続けた。

――ボクシング部・部室
期末試験が迫り、テスト期間で休みになっているはずのボクシング部の中からサンドバッグを揺らす音が響く。
そこにいたのは今年受験生ですぐ寮に帰って勉強をしていなければならない真田だった。
普段から勉強しているからこそ、少し息抜きで叩いているだけと言い訳する事も出来るが、実際は数日前聞いた話のせいで集中できないから普段通りの行動を取っているだけだ。
絶対にやってくる滅び。そして、自分たちよりも遙かに強大な力を持つ青年ですら、戦ってどうにかなる相手ではないと断言するほどの力を持った神が敵だという。
湊の話によれば敵は月にいるという事なので、どうにか月を破壊出来ないかと考えてみたが、そんな事をすれば地球にも多大な影響を及ぼす事になるだろう。
最悪、砕けた月の破片が地球に降り注いで、それが原因で地球上の生命が死に絶えるかもしれない。
そうなっては意味がないので、もっとマシな作戦を考えようと思ったがろくなアイデアが思い浮かばなかった。
(戦えない相手に勝つにはどうすればいい。本当に、そんな最後を受け入れるしかないのかっ)
左右の拳を素早く交互に繰り出し、段々と息が上がってくることにも構わず激しく殴り続ける。

自分やその仲間の力が綾時と湊に遠く及ばない事は分かっている。
けれど、そんな自分たちでもアルカナシャドウたちを倒してここまで来る事が出来たのだ。
格上だったはずのストレガとも戦えるまでに成長し、シャドウなどの余計な邪魔が入らなければ玖美奈や理とだって戦えるかもしれない。
滅びを求める人類の敵とは戦えるというのに、その滅びを齎す存在とは戦えないなど誰が想像できるだろうか。
綾時という新たな仲間を得て、蘇った湊も同盟のような立場に着いた事で、このままストレガと幾月たちと決着を付けるだけだと思っていたのに、その敵がただの通過点に過ぎないと知った時の衝撃は凄まじかった。
(望月を殺せば俺たちは穏やかな最後を過ごせる。影時間の記憶を全員が失って、そして、何の苦しみもなく一生を終えることが出来る。だが、またあいつから人との繋がりを奪うのかっ)
全身の捻りも加えて撃ち込んだ左ストレートでサンドバッグが大きく揺れる。
肩を大きく上下に揺らしながら手を止めた真田は、傍に置いてあった水を飲みながら窓の外の暗い空を見上げた。
大切な妹を助けるためとはいえ、真田は湊の人との繋がりを一つ奪った事をずっと後悔していた。
何年も一緒にいた相手に他人のように接されるというのはどんな気持ちなのだろう。
もし、美紀や荒垣に忘れられてしまえば、きっと自分はその現実に耐えられないという確信が真田にはある。
自分がどれだけ相手のことを大切に想っていても、相手にすれば知らない人間だ。
そんな人間が馴れ馴れしくしてくれれば鬱陶しいし、酷ければ恐怖を覚えるかもしれない。
妹の命の恩人にそれだけの代償を払わせておきながら、一度は何も出来ないまま彼を死なせてしまった。

（何も出来ままま、一つもあいつに返せないまま死なせてしまったのに。再び救われておきながら、どの面下げてあいつから繋がりを奪えると言うんだ）

湊が蘇ったのは彼自身の力と、可能性に賭けたエリザベスの行動が起こした奇跡。

真田は何一つ彼のために出来ておらず、いくら妹や荒垣のためだろうと、そんな状態でまた彼から人との繋がり奪おうなどとは考えられない。

しかし、現状で打てる手がないのも事実。

美鶴も桐条グループの方で色々と調べて何か出来ることはないかと探っているようだが、綾時と湊が言ったからには自分たちに出来る事など本当にないのかもしれない。

（……俺も、美紀も、シンジや他のやつらも死ぬのか。何も出来ないまま、訳の分からない滅びなどによって）

真田が視線を向けていた空を覆う灰色の雲から小さな白い粒が降り始める。

雪を見るのはいつぶりだろうかなどと暢気に考える余裕などなく、白い帳が街を覆い隠していくような光景は、自分や大切な者たちの死について考え始めた真田の心に余計な孤独感を与えた。

二度も妹を失いかけ、自分も仲間と共に斃れそうになったからこそ、真田は失う怖さも死が迫る恐怖も理解出来る。

一度味わうだけでも十分で、再びそれと向き合う事になった時には悪い夢だと現実から目を背けたくなった。

（ふざけるなと大声で叫びたい。全部夢で、本当はただ俺の頭がおかしくなって浮かんできた妄想なのだと思いたくなってくる）

ゆかりやアイギスが綾時から話を聞いて強気な態度を見せていたが、真田は彼女たちのように嘘で自分を鼓舞することなど出来なかった。

もし、そんな事をすれば僅かにでも気が緩んだ瞬間、弱い自分の本心が言葉として出てきてしまう。

自分たちはここまで十分にやった。世界が滅ぶのは自分たちのせ

いじゃない。だから、今まで頑張ってきたご褒美に最後くらいは自由に過して良いんじゃないか。
そういった自分たちにだけ甘い言葉がずっと頭の片隅にあるのだ。
綾時を殺せるのは湊だけで、敵のことをよく知っているのも彼だけ。
自分たちに出来る事は一つもないのだから、後は全て彼に任せてしまっても良いはずと、自分に都合の良い心の声が聞こえた真田は愚かな考えを振り払うように自分で自分の頬を殴りつけた。
「くそっ!!」
ここまで世話になっておきながら、返しきれない恩を受けておきながら、まだ湊に甘えようとするのは自分の心と身体が弱いからだと己を叱責する。
ペットボトルを床に置くと、再びサンドバッグの前に立って、余計な事を考えないよう拳を繰り出す。
いくら心が恐怖に押し潰されそうになろうと、用意された恐怖から逃れる手段に誘惑されようと、それだけは絶対に選んではいけないのだと、真田は迷いを断ち切るためサンドバッグを打つ作業に没頭し続けた。

夜――ＥＰ社
それぞれが用意された選択肢を前に悩み続けている頃、湊はＥＰ社の奥に用意された自分専用の区画で椅子に座って液体の中で培養されている細胞を見つめていた。
アイギスとラビリスを人間にした以上、もう生体ボディは必要ないはずだが、何があるか分からないからと彼は今も生体ボディの研究を進めていた。
そして、青年が研究に精を出していると、二つのコーヒーカップを持った少女がやってきて、手に持っていたカップの一つを青年に手渡した。
「……湊様は彼らがどちらを選ぶと思っているのですか？」
長い銀髪を揺らしながら彼の座る椅子の肘掛けに腰を下ろし、視線

を培養液の方へと向けながらソフィアが尋ねる。
本来、この区画にはソフィアですら普段は立ち入らないようにしているのだが、今の湊や特別課外活動部の置かれた状況を考えると湊を独りにするのは拙いと考え、彼女は邪魔でなければと共にいる許可を得たのだ。
湊とソフィアはかつて敵としてお互いを憎み殺し合った。
けれど、お互いに少し特殊な生まれだった事でどこか通じあう部分もあり、〝協力者〟という最も事務的でありながら唯一隣に立てるパートナーになる事が出来た。
青年は大切な少女たちには綾時やニュクスの事を伝えていなかったが、ソフィアは仕事上の付き合いでしかないパートナーだからと事前に伝えていた。
だからこそ、他の者たちが知る時が来たタイミングで、しっかりと湊の心を守るためのフォローに動くことが出来たのだ。
今の彼は普段通りの平然とした様子だが、心の奥底では友達である綾時を手にかける事への葛藤や、何もせずにチドリたちが絶望に飲まれていく事を想像して不安に思っているかもしれない。
そんな風に悩むのであれば、最初から特別課外活動部の人間たちに選ばせなければ良いのではとも思えるが、彼女たちに考えさせる事に意味があるのかもしれないとソフィアは考えた。
故に、彼女は少しでも湊の気を紛らわせる事が自分の役目と判断し、ちょっとした雑談で彼の張り詰めた気を緩めようと思ったのだ。
彼女の手からコーヒーカップを受け取った湊は、視線は培養液の方へ向けたままコーヒーを一口飲みつつ答える。
「……別にどっちとも思ってない。あいつらがどちらを選ぼうと気にしない」
「結果によって湊様の背負う苦労が大きく変わるのですよ?」
「別にあいつらに背負わされる訳じゃないからな。選びたいなら好きな方を勝手に選べといった感じだ」
話題自体に興味を示していない湊にとって、ここもあくまで通過点に過ぎないのだろう。

最初からニュクスとの戦いを想定して力を付けてきたのだから、綾時を殺してニュクスの力が僅かに削がれようが削がれまいが気にしない。
既に引き返せないところまで来てしまったのだ。どれだけの代償を払うことになろうとも彼は自分の望んだ未来を手に入れるつもりでいる。
他の者たちは二つの選択肢の間で悩んでいて余裕を失っているようだが、今の湊を見たソフィアからすれば湊と彼らでは置かれている立場は逆に思えた。
何せ彼らは二つの選択肢で悩める〝余裕〟があるのだ。
一方の湊には悩むだけの余裕がないせいで心が一切ブレなくなっている。
追い込まれてこうなっているのか、自ら自分を追い込んでいるのかは分からないが、どう考えても七歌たちよりも湊の方が精神的に拙い状態にあると思っていい。
何か切っ掛けがあれば湊は自分の心を殺し、望んだ未来を手に入れるためだけに動く機械のように再びなってしまう。
そうはさせないと彼の顔に手を添え、自分を見上げた相手と視線を合わせたソフィアは口を開く。
「湊様、敵はシャドウたちを生み出した存在。つまりは途轍もない精神エネルギーを持った外宇宙から来訪した異なる理に守られた神です」
「……そうだな」
「はい。だからこそ、貴方はその心を失ってはいけません。対抗出来るのは同じ心の力だけです。理が違うのはお互い様です。貴方にはベアトリーチェがいる。彼女と共にあれば力は届きます。故に、最後に勝負を分けるのは心の強さです」
己の全てを犠牲にしてでも望む結果を得ようとする湊の心は強い。
そうあらねば壊れてしまう脆さを持っていたからこそ得た歪な強さだが、滅びを求める人々の呼びかけに応えて降臨するだけの神にはない強さだ。

持っている力の総量は敵が上でも、湊はそれに対抗出来るだけの質を持っている。
だから、絶対にその心は無くしてくれるなと真剣な瞳を向けて言えば、湊は小さく溜息を吐いて立ち上がった。
「……状態も安定したようだし。しばらく放置しても大丈夫だろう。少し休むために上にいくぞ」
「フフッ、では、お背中をお流ししましょう」
「勘違いするな。普通に休むだけだ」
「気分転換も大切なことです」
飲み終わったコーヒーのカップをソフィアに押し付けて部屋を出て行こうとすると、片手に自分と湊の空になったカップを持ったソフィアが反対の腕を湊の腕と絡めてくる。
青年と過ごせる時間は残り少ない。それが分かっているからこそ、彼女は敢えて明るく振る舞って彼とスキンシップを取るようにする。
他人の心が読める湊であれば、そういった彼女の考えも分かっているかもしれないが、結局そのまま腕は振りほどかず、居住区についた二人はソフィアの望むまま長い時間と共に過した。

第三百九十五話　〝特別〟

１２月１０日（木）
放課後――久遠総合病院
あれから一週間が経った。それぞれがどちらを選ぶのか真剣に考えているようで、皆どこか暗い雰囲気を纏っていた。
美鶴も上級生として他の者たちを気遣ってやりたかったが、残念な事に彼女も他のメンバー同様他人を気にしていられる余裕がない。
頭ではどのような結果になろうと最後まで諦めるべきでは無いと分かっている。
しかし、美鶴はメンバーの中で誰よりも長くシャドウと関わってきた。
ペルソナに目覚めて少し経った頃、相手がエルゴ研で調整済みの個体だと分かっていても、こんな敵に立ち向かっていくのかと恐ろしく思った事を覚えている。
自分たちの力が及ばぬ超常の存在。同じ超常の存在であるペルソナを獲得してようやく戦うスタートラインに立てる人類の敵。
けれど、そういった認識がそもそも間違っていたと言われれば、他の者たちと共に美鶴も驚愕せずにはいられなかった。
放課後に父のいる病院を訪れた美鶴は、未だ意識を取り戻さず人工呼吸器を繋げられた父を見つめながら呟く。
「お父様、影時間について進展がありました。シャドウの親玉、ニュクスという存在について情報を得たのです」
美鶴が話しかけたところで桐条からの返事はない。幾月に撃たれたあの日から彼は眠り続けたままなのだ。
相手が相手だけに桐条の世話や診察するスタッフは限られているが、中でも優れた能力を持つ湊や医者のシャロンの話によれば、そもそも意識が戻らない理由が分からないらしい。
無論、どうしてこういった状況になっているのかは分かっている。
腹部を撃ち抜かれた事で大量に出血し、酸素を運ぶ血が不足したことで、脳に酸素が回らなくなり機能障害を起こしてしまっただけだ。

それが分かっていたからこそ、湊たちは傷口を塞いで輸血を施し、血栓などが出来ていないかを確認しながらしっかりと酸素を供給し続けたのである。
おかげで桐条の怪我はほぼ完治して僅かに傷跡が残った程度まで回復し、今はいつ目覚めても良いように日に何度かマッサージしてやることで筋肉が固まってしまうのを防いでいる。
ただ、それらの効果か本当にただ眠っているだけのようにしか見えない父を見つめ、美鶴はこのまま目覚めなければ何の恐怖も感じずに滅びの時を迎えられるのではと後ろ向きな考えを持ってしまう。
今までずっと頑張っていたのだから、最後くらいは心穏やかなままこの世を去ることが出来た方が良いのではないか。
そう思ってしまった美鶴はハッとして頭を振ると、綾時から提示された選択肢について父に聞かせた。
「望月の話ではニュクスには誰も勝てないそうです。八雲もそも戦えるような相手ではないと言っていました。滅びは十年前に決まっていた。だから、これから私たちに出来るのは怯えて死を待つか、全てを忘れて最後の日まで日常を過すかだけとの事です」
湊と綾時を見ていれば嘘を吐いていないと分かる。
元々があちら側の存在であると伝えられた綾時の事は僅かに疑おうともしたが、綾時が知らない事まで何故か知っている湊が正しい情報だと認めたのだ。
それでさらに疑おうという気が起きるはずも無く、全てを知っていた湊を除く全員が用意された選択肢に絶句するしかなかった。
最初に感じたのは戸惑い。そして、次に感じたのは理不尽に対する憤り。
相手が神だと言うのなら、確かに人間なんかではまともに相対する事も不可能だろう。
けれど、ここまでやってきて、多くの犠牲を払いながら必死に戦って来たというのに、その結末が滅びを受け入れるか現実から目を背けるかの二択であれば誰だってふざけるなと叫びたくなる。
美鶴も他の者たちと同じように心の中ではそう思っていたが、こう

やって今も意識が戻らない父を見ていると最後くらいは穏やかに過しても良いのではないかという気持ちが湧いてきていた。
何度振り払っても同じ考えが湧き上がってくるという事は、美鶴自身の理性がこれ以上自分たちに出来る事はないと認め始めている証拠だ。
自分たちでは湊と綾時の領域にはどうやっても届かない。ニュクスがそのさらに上となれば諦めるしかないだろう。
ただ、そうなると美鶴たちはよりマシな最後を迎えるため綾時を殺す方を選ぶことになる可能性が高い。
どうせ相手が消えるのなら殺す必要はないが、諦めて最後の時間を過すならば少しでも幸せな最後を選んだ方が良いというだけの話になる。
「ですが、諦めるにしてもそれだけは認めないという者もいるでしょう。望月を殺せば影時間に関する記憶を失う。それは同時に八雲との繋がりを絶つことにもなるのですから」
最後まで足掻くことを望む者がいたとしても、仲間たちが死への恐怖で正気を保てなくなれば最後には折れてくれるだろう。
だが、そこに湊に関する記憶や思い出も消えるという条件が増えれば、反対する者と敵対してでも綾時を殺させないと宣言する者もいるはずだ。
彼の家族であるチドリは勿論、誰よりも彼の事を大切に想っているアイギス、一緒に暮らしてきたラビリス、彼の事を愛しているゆかり、血の繋がりを持っている七歌などほとんどの女子メンバーは阻止側に立つと思われる。
美鶴も彼から再び繋がりを奪う事など出来ないとは思っており、心情的にはチドリたちと同じ側に立ちたい。
影時間の記憶が消えるのはペルソナ使いだけではないはずなので、英恵や桜たちにも事情を話せば味方してくれるに違いない。
だが、それは彼女たちの我が儘でもあった。
「本当に死を恐れる者からすれば、望月の殺害を阻止しようとする我々は悪魔に見える事でしょう。八雲は助けて、自分の事は見捨てる

のかと。感情のぶつかり合いなので、どちらが正しいという事もない。本当にただ自分がどうしたいかの話でしかありません」
チドリたちの意見も分かる。そして、死を恐れる者の意見も分かる。
少女たちは湊との絆を失う事を恐れ、死を恐れる者は自分の命が失われる事を恐れている。
それが大切であればあるほど失う事を恐れる気持ちは大きくなるものだ。
前者は知性と感情を持つ人間として当然の思いで、後者は生物が生まれ持った根源的な本能。
どちらの考えが正しいかなどと比べられるわけも無く、対立した時にはどうあっても話し合いでは解決しないだろう。
美鶴自身は前者寄りの考えではあるが、同じくらい後者の気持ちも分かる。
そして、きっとそれは他の者たちも同じなのだ。
チドリやアイギスだって死ぬのは怖いだろう。美紀が殺されかけ、チドリも一度殺され、湊が一時的に完全に死んでしまっていた事で、彼女たちも死が身近なものだと分かっている。
「……シャドウと戦ってきた私たちだからこそ、平和な日常を過している者たちよりも死が身近に感じられます。ペルソナを呼び出すには死と向き合う必要もあり、ある意味自分の命と向き合う機会も多い。だからこそ、全てを忘れるという僅かな救いに縋りたくなる」
逃げたってニュクスの齎す滅びからは逃れられない。
綾時を殺す方を選ぶ者たちは死の恐怖から逃れたくてそちらを選ぶはずだが、死についてしっかりと考えて強い恐怖を覚えているからこそ、忘れたって意味がないことは理解しているはずだ。
忘れたところで滅びは確実にやってくる。けれど、そのままでは心が耐えられなくなるから記憶を消してやり過ごす。
考えてみれば、忘れるという選択肢を選ぶ者の方が辛い選択に思えた。
綾時を殺さなければ記憶は残る。そうすれば、大切な者との思い出

を失いたくない者の願いは叶う。
しかし、死を恐れる者からすれば、記憶を失ったところで死ぬという現実は変わらない。それを恐れているから逃れたいのに、どうやってもその者の願いは叶わない。
忘れることで死の恐怖から一時的に逃れる事は出来るが、本当にそれは僅かな救いでしかない。
これまで共に戦ってくれてきた者たちに報いたい気持ちがある美鶴は、こういった大切な場面こそ恩を返すチャンスだろうにと何も出来ない自分を嘲るように苦笑した。
「彼らに何もしてやれないのが悔しいですが、私自身、どちらを選ぶか迷っているので、逆に相談に乗って欲しいと思うほどです。でも、もう一週間が経ちました。なので、今夜にでも一度集まって話を聞いてみたいと思います。話が拗れて仲間同士で戦うなんて事にならないよう祈っています」
最後は冗談めかして口にしたが、紛れもなく美鶴の本心だ。
もしも戦いで決着を付けるとなれば、記憶保持派に強さ上位の仲間が集まってしまう。
誰も悪くないというのに、死に怯える仲間相手に暴力で意見を押し通すというのはどうにも認めづらいものがある。
そんな事態を避けるためにも、今日の話し合いは重要なものになるだろうと考え美鶴は立ち上がった。
「では、お父様。また来ます。今日の話し合いが平穏に終わるようお父様も祈っていてください」
どちらの選択肢を選ぶのかが最も重要な問題ではあるが、美鶴たちには他にも抱える問題がいくつもあった。
だからこそ、その重要な選択を出来る限り全員が納得した形で終わりたい。
父に別れを告げた美鶴は一礼してから病室を出ると、今夜、寮に集まるようそれぞれに
連絡し、自身も出来る限り考えをまとめようと時間まで悩み続けた。

夜――巌戸台分寮・エントランス
美鶴に呼ばれた事で会社から出てきた湊が寮に着いたときには、既にメンバーたち全員は揃っていた。
今日は顧問を任されている栗原も話を聞くようで、彼女は第三者として聞き役に徹するのかキッチンに近いテーブルの椅子に座っている。
他の者たちは入口側のソファーに集まっており、全員座るだけの席が無い事もあって、湊は玄関扉の横の壁に背を預けて話を聞くことにした。
集まっている者たちの表情はどことなく暗い。顔に覇気が感じられず、ここ数日悩み続けているのが見ただけで分かる。
チドリやアイギスなどは最初からどちらを選ぶのか決まっていたようだが、それでも精神的な負担は掛かっている様子で、見ていた湊は万全な調子とは言いづらそうだなと心の中で思った。
すると、メンバーが全員集まったことで話し合うタイミングだと判断したのか、ソファーに座っている全員の顔を見渡しながら美鶴が口を開いた。
「さて、今日で一週間だ。それぞれ皆、自分なりに考えてきたと思う。まだ時間はあるが少しは冷静になったここらで一度意見を交換しておきたい。皆、何かあるか？」
綾時がやってくるのは年末なので、ここで完全に決めてしまうつもりはない。
まだまだ選べていない者もいるだろうし、仮に選んだとしても時間が経てば意見が変わることだってある。
それでも、他の者たちの考えを聞いて、参考にしたり全体的な方針をある程度定めることが出来るかも知れない。
美鶴がそういった様々な考えから意見を募れば、最初からほとんど意見を決めていたアイギスが口を開いた。
「わたしは感情的に言えばデスを排除したい。でも、八雲さんの記憶を失うのであれば、その選択肢は選べません」

「なるほど。だが、それは君自身が最後まで死の恐怖を味わうという事になるぞ？」
「それだけに潰される気はありません。勝てないとしても、最後まで諦めたくないんです」
何もしなくても消えることが確定しているデスを今更殺したところで何の意味もない。
勿論、影時間に関する記憶を失うためであれば分かるが、アイギスの目的は十年前の戦いに決着をつけることだ。
あの時のデスに人間と敵対するような意思はなく、ただの動物的な本能で敵を排除しただけだとしても、大切な人の家族が死んだ原因の一つではある。
故に、アイギスはデスの討伐を今も諦めてはいないし、ニュクスの齎す滅びに素直に従うつもりもなかった。
仲間の中にこうもはっきり諦めないと口にする者がいたのは非常に頼もしく思える。
そこに青年との繋がりも関係しているとしても、大切な物のために戦うのは人として普通の事だ。
ここでアイギスの戦う理由について文句を付けてくる者はいないだろう。
だが、いくら仲間がそういった頼りになる姿を見せても、遠くない未来に死が待っているとなれば尻込みしてしまう者がいても当然だ。
美鶴とアイギスの会話が一段落したと判断したのか、どこか不安そうな表情をした天田が真田と荒垣に話しかけた。
「先輩たちはどうですか？　もう決めましたか？」
「簡単には決めらんねぇよ。けど、勝てないって情報だけで納得出来るほど利口じゃねぇ」
「確かにな。こっちは敵の事なんて何も知らないんだ。ただ黙って殺される気はない。美紀も巻き込まれるなら尚更だ」
荒垣も真田もまだ完全に決めたという訳ではないようだが、それでも諦めたくは無いと口にした。
理不尽であろうと不運が重なって起きた事故などならまだ死に納

得がいくかもしれないが、化け物の親玉がやってきて地球が滅びるなどと言われても想像が付かない。
何より、真田は妹を守るために力を求め続けてきたのだ。
自分にどれだけの事が出来るのか、やったところで意味があるのかは不明にせよ。妹まで死ぬとなれば抵抗してみせるしかない。
これまで同様、そこだけは絶対に変えないと真田が告げれば、聞いた天田は少しだけ安心した様子を見せた。
この中で最も幼いだけに不安もあったのだろう。しかし、他の者たちに相談出来る状態でもなかった事で今日まで自分の中に不安を抱え込んでいたが、真田の言葉の中にいつも通りな部分を見て少しだけ不安が薄れたようだ。
ここまで意見を口にした三人ともが戦う事を諦めないという意見。
今まで自分たちの力で何とか生き残ってきただけに、簡単に命を諦めることの方が難しいのだろう。
しかし、このままでは場の雰囲気で戦う事に決まりかねない。
そう思った七歌が敢えて別の選択肢を選ぶこともダメでは無いと意見を述べる。
「って言っても、別にもう一つの選択が悪いわけではないけどね。そりゃ、死ぬのは嫌だろうけど、それでも辛い思いはしないで済むわけだし」
「七歌ちゃんはそれでええのん？　勝てへんならしゃあないけど、それも決まってる訳やないやろ？」
「うん。ただ、私が言いたいのは真剣に選んだならどっちを選んでも間違いじゃないって事なんだよ。最終的にはどっちかになるとしてもね」
綾時も言っていたが嫌な事や怖いことから逃げるのは悪い事ではない。
自分ではどうしようもない事、どう足掻こうとどうにもならない事が世の中にはある。
いざ自分がそういった状況に置かれて、冷静に何でも対処出来る者は極僅かだ。

であるならば、その現実を否定したいがために逃げ出すというのは、自身の心を守る上ではマシな選択と言えるだろう。
七歌の言葉に再び全員が沈黙すれば、普段はお調子者である順平が一言も話していない事にゆかりが気付いた。
普段はうざいくらいに五月蝿い事もあるというのに、この真面目な雰囲気に当てられてしまったのだろうか。
そう思ったゆかりは相手が少しでも何か話せるよう、わざと普段通りの軽い調子で声をかけた。
「順平、あんたは決めた？」
「ん……いや」
首を横に振って答える順平にはいつもの覇気が無い。
下手をすると気の弱い風花以上に精神的に参っているのではと思える。
順平は風花と同じようにペルソナの才能があったから参加しただけの一般人だ。
力を求めて入った真田や、母親が殺された真相を突き止めるために入った天田とは事情が違う。
その分、仲間のことを除き、自分一人だとしてもこの場にいる理由が必要になってくるのだが、ここまでそれを強く意識してきたことも無かったのだろう。
ヒーロー願望や仲間のためだけに戦って来た少年が、一人で深く悩み混んでいるのを見て、いつもの調子はどうしたと発破をかける。
「なーに真面目ぶってんのよ。悩んだって結局二択じゃない。あ、もしかして怖い？」
「……何だよ、そのノリ。自分も、仲間も、全員死ぬって話だぞっ。怖いに決まってるだろ!!」
突然の大声にゆかりは肩を跳ねさせるが、声を荒げて立ち上がった順平の目が不安に揺れながらも怒りに染まっているのを見て思わず閉口する。
順平には自分だけの戦う理由がない。しかし、いい加減な気持ちでここにいる訳ではないのだ。

仲間を見捨てたくない。それでも、自分が死ぬ事を想像して怖くて震えてくる。
そうして悩んでいたところに、どうにも上辺だけにしか聞こえない仲間たちの意見が次々と出てきて、最後には意図は分からないが少しふざけた様子を見せられれば誰だって限界が来る。
順平は驚いた様子のメンバーたちに視線を向け、どうしてそこまで落ち着いているんだと指摘した。
「他の奴らもなにご立派なこと言って冷静ぶってんだよ！　終わるんだぞ、全部!!　絶対死ぬって意味、本気でちゃんと考えたんかよっ!?」
本気の感情を込めた言葉をぶつけられ他の者たちは視線を落とす。
全員考えていない訳ではない。ただ、自分に訪れる死よりも他の理由で戦う事を決めようとしていたのは事実だ。
死が怖いと思うのは生き物として当然のこと。真剣に考えれば考えるほど足が震えて立っていられなくなる感覚に襲われる。
だからこそ、他の者たちは別の理由で戦おうとして、無意識に〝絶対死ぬ〟という事について考えるのを避けてきた。
その点、順平にはその他の理由という物が少なかった。少なかったからこそ、〝絶対死ぬ〟という事について誰よりも真剣に考えてきたのだ。
彼の言葉が深く胸に刺さった美鶴は、しかし、ならどうするんだと僅かに感情的になって返す。
「なら、お前はどうしたい。望月を殺して、それで終わらせるのか？」
「……最初っからオレに出来る事なんてないッスよ。殺せるのは、ずっと抱えてたこいつだけなんだし。大体、お前のせいじゃんか。十年前から気付いてて、全部知ってて抱えて過してきてさぁ」
言いながら順平の視線が黒い光を宿し、壁に背を預けて立っていた湊に向けられる。
今自分たちが悩んでいる事を、彼だけは知っていた。デスがどういった存在かも含めて分かっていたはずなのに、彼はデスの成長を放置し何もしなかった。
幾月に騙されて自分たちが戦ったにせよ、最初のアルカナシャドウ

が倒されなければ別の道があったかもしれない。
それをせずにこんな状況でも第三者として話の輪にも加わらない青年に向かって、順平は怒りで強く床を踏み締めながら近付いてゆく。
「お前が育てちまったんだろ、お前のせいみたいなもんじゃねぇか!!
自分だけは死なないからって、何があっても生き残れるからって、ビビってるオレらみて内心で笑ってんだろっ!!」
どれだけ順平が感情的になろうとも、湊は感情の読めない瞳でただ見つめ返してくるのみ。
それが余計に勘に障った順平はそのまま乱暴に相手の胸ぐらを掴み、強く壁に押し付けるようにしながら不安に押し潰されそうな心の叫びを吐き出した。
「何とかしろよ!! お前、〝特別〟なんだろっ!?」
相手を責める順平は今にも泣き出しそうな顔で湊を見ていた。
そうだ。この男は特別なのだ。自分じゃ逆立ちしたって勝てない。真性の〝化け物〟。
十年前から滅びを知っていながら、デスを育てたのは全て彼の責任だ。
ならば、その責任を取るのは当然の事。化け物同士で潰し合って、自分たち人間を巻き込むなと順平は相手に告げる。
その言葉を受けた青年はジッと静かな瞳で順平を見返すと、
「……分かってるさ」
胸ぐらを掴んでいた相手の腕を払い。小さく一言だけ呟いて寮を出て行った。
その背中を見て、彼が遠くに行ってしまう気がしたアイギスは、すぐに彼を追いかけようと立ち上がる。
だが、湊が去って行ったことで呆然として順平の前に立ち止まり、どうしてあんな事を言ったのかと問い質すように責めた。
「なんで、なんで八雲さんに言うんですか!? 全部悪いのはわたしだって、八雲さんは被害者だって言ったのに!!」
「ち、ちがっ、オレは……っ」

順平の返事を聞かずに出て行ったアイギスの姿が見えなくなり、場に気まずい沈黙が降りてくる。
一週間もあれば少しは落ち着いているかと思えば、どうやらまだ誰も冷静に考える余裕がなかったようだ。
完全に第三者の立場で話を聞いていた栗原がソファーの方へやってくると、どことなく苦笑した様子で全員に声をかける。
「はぁ……もう少し個人でしっかり考えてから集まるべきだったね。全員まだ混乱してるからどうしても感情的になっちまうのさ。ただ、正直、湊のことはあんまり触れてやらないで欲しかったね。あんたらの気持ちは分かる。手足縛られて目の前にナイフを出されたようなもんだ。怖いに決まってる」
ここにいるのは子どもだ。命懸けで戦って来たとしてもそこは変わらない。
彼らが情報をまるで出さない湊に思うところがあるのは分かる。
もっと早くに教えてくれていれば、自分たちも何かしらの準備が出来ていたかもしれないのだ。
そういった不満と今回の事で膨れあがった不安が悪い方に作用し、順平も思わず彼に八つ当たりしてしまったのだろう。
それが分かっているからこそ栗原は順平を特に責めたりはせず、今の七歌たちと湊の視点の違いについて諭すように伝える。
「けど、あいつは十年前から知ってた。逃げ場のない部屋に徐々に水が満ちていくのを想像してみれば良い。最初は気にならないだろう。でも、膝まできて、腰まで浸かって、今じゃ天井あたりに少し空気が残ってる程度だろうさ。十年かけてそれだ。私なら途中で発狂してるね」
動けない状態で目の前にナイフを出されるのも怖しいが、徐々に水かさが増して逃げ場がなくなっていく方が押し寄せる恐怖は強い。
十年かけて部屋が満杯になるとすれば、水かさが増す速度は非常に緩やかな事だろう。
ただ、それも一年経てば増えている事に気付き、五年で部屋の半分が埋まれば残り時間が気になり出す。

「そして、あいつは自分の命には執着しない。代わりにチドリやアイギスなどごく一部の者に異常に執着する。今回の滅びはチドリたちに影響するが自分には関係ない。となると、あいつからすればチドリたちのいる部屋に水が満ちていくのを外から見せられているようなものなのさ。当然、何もしない訳がないが、流石にあいつでもどうにもならなかったんだろうね」

チドリたちを大切に想っている彼が滅びの回避を目指さない訳がない。

それでもこうやってデスの復活が起きて、ニュクスが降臨するという事は、神を宿す事に成功した湊であっても止める方法が見つからなかったという事だ。

だからこそ、湊は次善の策として無気力症患者を受け入れるための病院を作ったり、影時間中でも高度な治療が出来るだけの設備を整えた。

湊なりに出来る事はやっていて、今も滅びを回避する方法を恐らくは探している。

その事を伝えたところで髪や肩を雪で濡らしたアイギスが戻ってきた。

どうやら寮を出てすぐにセイヴァーで転移していなくなってしまったらしい。

彼もいなくなった以上、ここで話の続きをするのは難しいだろう。

そう判断した栗原は、自分も帰る用意をしながら子どもたちに告げた。

「次に集まるときは自分なりに答えを決めてからの方がいい。それと湊の参加はあまり期待しない方がいい。今はあっちの病院も忙しいみたいだ」

無気力症の拡大もあって大きな病院はどこも患者の受け入れに手を焼かれている。

どちらを選ぶのかはメンバーたちの判断に委ねられているので、湊にはメールなりで伝えれば十分だろう。

それまでは十分に時間を使って考えなと言い残し、栗原は雪の降る

外へと出て行き、他の者たちも自然と解散の流れになった。

第三百九十六話　少年の意地

１２月１９日（土）
影時間――タルタロス・２３０Ｆ
黒いコートの裾をはためかせながら両手に二振りの刀を持った青年が走る。
野生の狼に匹敵する速度を出していながら、ブーツで地面を蹴る音が一切しない異様な光景。
そんな彼の走る通路の先には、宙に浮いたサイコロ型のシャドウ・運命〝シルバーダイス〟が三体待ち構えている。
敵は全ての物理攻撃に対して無効耐性を持っており、他の魔法属性も光と闇以外は特に弱点も持っていない。
タルタロスの高層エリアにいるだけあって、この辺りにいるシャドウはどれも似たような強さを持っているが、相手のステータスをアナライズで既に調べてある青年は敵の耐性を理解していながら構わず進む。
すると、シャドウたちも接近してくる湊の存在に気付いたようで、半球状の頭部を向けて視界に捉えると、三体同時に力を溜めて通路の隙間を埋め合うようにギガントフィストを放って来た。
以前見たアテナのゴッドハンドであれば一発で通路を埋め尽くしていたが、それの下位スキルであるギガントフィストは二回りほど小さいのでどうしても隙間が出来る。
それをほとんど三体同時に放つ事で逃げ場がないよう工夫したらしい。
エリアボスですらないただのシャドウが高度な知能を有している事は非常に驚くべき事だ。
最上級スキルではないため発動も速く、同じ速度で発動しようと敵の攻撃は三発あるのでステータスに相当な開きがないと相殺しきれない。
逃げ場のない通路で出会えば実に厄介な相手だと思うところだが、湊は瞳を蒼くすると迫る鈍色の拳に向けて連続で刀を振り下ろす。

視界に映る赤白い光の疵に向け振り下ろした右手の刀で一つ目を霧散させ、左手の刀で二発目の側面にある疵を撫でるようにして掻き消す。そして、最後の三つ目に向けて振り下ろしていた右手の刀でそのまま突きを放ち。三発のスキルは全て消え去った。

走る速度をほとんど緩めず、常人では視認不可能な速度で攻撃を放ったため、敵からすれば攻撃が相手と接触する直前にかき消えたように見えた事だろう。

予想外、理解出来ない現象を前にしてシャドウの反応が遅れれば、湊がその間に距離を詰めて強く握り込んだ事で青白い光を纏った刀を振り下ろす。

存在の寿命を殺すソレは一撃一撃が必殺。敵の無効耐性を完全に無視して瞬く間に三体のシャドウを屠った。

敵がいた場所にはドロップしたパールだけが残っている。

外に持ち出せばそれなりの価値を持つ宝石だが、青年にとっては大した価値を持たない石ころと変わらぬものだ。

故に、湊はそれらを一瞥もせず新たな敵の許へと足を進める。

（……徐々に増えているな。タカヤたちもおかしな事を始めたようだし、世の中の人間は随分と手軽な救いを求めているらしい）

次々と現われるシャドウたちを狩りながら湊は原因を思って内心で溜息を吐く。

前回の話し合いから約一週間経っているが特別課外活動部やチドリたちは未だ悩んでいるのかタルタロスを訪れない。

高等部では今日まで期末試験があるのも関係しているのかもしれないが、それはむしろ彼女たちに戦いから離れるための理由を与えているだけだ。

全員が今のままではダメだと分かっている。

これ以上は戦えないと穏やかな最後を求めるか、自分が死ぬという結末を聞かされて尚戦う意思を持てるか。

彼女たちが考えるべきはそれだけだ。

戦う理由に湊の事を考えるのはいいが、逃げない理由に彼の事を考えるべきではない。

湊はそれが必要な事であれば親しい人間や友人であっても殺せる。
心の内で何を思うかは別にして、英恵とチドリを人質に取られ『片方を殺せば、もう片方を生かす』と言われれば躊躇わずに銃口を向けて引き金を引けるのだ。
だから、湊に友達を殺させたくないと考えるのはいい。しかし、綾時を殺させたくないから戦う事を選ぶというのは誰のためにもならない選択の放棄と言えた。
（……今日で期末考査も終わる。あいつらもそろそろ考える事に飽きた頃だろう。まぁ、どちらを選ぼうがどうでもいいが）
感情の籠もらない冷たい瞳で牛人型のシャドウを見つめ、大振りな敵の腕を躱しながら背後に回り込み、湊は飛び上がって敵の頭を切り落とす。
頭を失ったシャドウは黒い靄となって霧散して行くが、着地した湊は柱同士の間に壁がなく外を眺められるタルタロスの通路で欠けた月を見つめ立ち止まった。
湊はあの日好きに選べばいいと言い残して立ち去った。
その言葉があったからこそ、他の者たちは余計に悩む事になったのだろうが、どっちを選んでも構わないという湊の言葉は本心だった。
何せ、彼女たちがどう思おうと湊自身はニュクスを倒すつもりでいるのだから。
確かにニュクスは殺せない。普通にやればそもそも戦いのステージに立つ事すら出来ない。
その点、湊はベアトリーチェの力を借りれば敵と対峙する事が可能だ。
どうやれば勝てるのかなどの方法はまだ思い付いていないが、戦えるのなら可能性だけは残っている。
他の者たちはそこについて来られない。まともに立っている事も出来ない人間など付いてきたところで邪魔でしかない。
であれば、湊にすれば他の者たちがどちらを選ぼうが関係なかった。
ニュクスが降臨する日まで記憶があろうが、全てを忘れてニュクス

降臨の時期が延びようが、敵と対峙するのは自分だけなのだから。
そうして、月を眺めていた湊は持っていた刀を腰の鞘に納めると、今日はこれくらいで良いだろうとタルタロスの縁に立って床を蹴って飛び出すとセイヴァーを呼び出した。
彼の背後に現われた天使は、そのまま彼を支えると空中に開いたゲートを潜って転移する。
蛍火色の火の粉が舞って消えれば、その場に青年がいた痕跡は残っていなかった。

放課後――月光館学園
午前中の内に最後のテストが終わると、ホームルームで担任教師の鳥海が二、三連絡事項を述べて昼に解散となった。
世間では無気力症が増えている。この学園の生徒も何人かそれで休んでおり、中等部では教師まで学校に来れなくなったのだとか。
そんな話を聞いてもどこか上の空だった順平は、帰るために荷物をまとめているとふと視線を前の方の席に向ける。
綾時が来なくなってから誰も座る事のない席はどこか寂しい印象を受ける。
彼は親の仕事の都合で実家のある海外に一時的に戻っている事になっているが、それはあくまで湊がその様に手配したに過ぎない。
自身の正体を明かした綾時は大晦日に答えを聞きにやって来ると言っていた。そして、その日の二十四時を迎えれば影時間に還りあちら側の存在に戻るのだとも。
その期間は既に冬休みに入っている。部室はともかく各クラスの教室は施錠されているので、彼の席は冬休み明けには撤去される事だろう。
確かにいたはずなのに、状況の変化でまるで最初からいなかったかのようになってしまうのはとても寂しく思えた。
自分が忘れる側であれば何も気にする事はないだろう。無責任に思えるが忘れた以上はどうしようもない。
しかし、自分がその忘れられる側であればどうだろうか。

順平は無意識に〝選択〟の事を考えそうになって頭を振ると、荷物を詰め終わったリュックを背負って立ち上がる。
すると、同じタイミングで立ち上がった友近が順平の方へ視線を向け、どこか開放感に溢れた笑顔を見せて声をかけてきた。
「おう、伊織。帰りにラーメン食っていかね？　テストお疲れさま的な感じでさ」
「あー……そう、だな。帰ってもカップ麺だしどうせなら食ってくか」
こんな時にまともに飯なんて食えるかと内心では思っている。
ただ、人間は結構図太いようで二週間もあると気分は落ち込んだままでも食事は普通に食べられるようになっていた。
友近に話した通り帰ってもどうせカップラーメンを食べるだけ。それならば、友達と一緒にラーメンを食べに行った方が気分も紛れる事だろう。
了承した順平は友近と一緒に教室を出て階段を下りて生徒玄関を目指す。
他のやつも誘うかと聞かれたが、よくつるんでいる宮本は部活解禁だからとすぐに部室へ行ったようなので、今日はこの二人だけで良いだろうという事になった。
「んで、伊織は今回どうだったよ？」
「ん？　なにが？」
「テストに決まってるだろ。ちゃんと勉強したか？」
「……いや、今回はなんか集中出来なくてな。赤点回避がギリギリかもしれん」
中等部や高等部一年の時は湊に勉強を教わって、何とか全体の真ん中辺りの順位になる事が出来ていた。
そのおかげで彼に教わって以降はいくらかマシな成績をキープ出来ていたのだが、今回は湊に教わる事など出来ず、さらにまるで集中出来ていなかった事もあって提出課題をこなすのが精一杯だった。
もっとも、昔の順平の事を知っていれば、提出課題を自主的に完成させるだけでもかなりの進歩と言える。
転校してきたばかりの順平を知っている友近は、付き合いの長さも

あって遠慮のない辛辣な言葉でツッコミを入れてきた。
「お前それ中間テストの時も似たような事言ってただろ。あんときは有里君のゴタゴタもあったから分かるけど、今回は何もなかったのに何してるんだよ？」
「うっせ。こっちも色々と考えるお年頃なんだよ」
「ばーか。十日もすれば年明けて、そしたら俺らも受験生だぞ？　伊織が進学か就職かは知らないけど、高卒にしたって桐条グループ傘下の進学校出身ならそこそこ良いとこもいけるんだ。ここで手を抜いたらしんどいのは自分だぞ」
最近では大学進学も当たり前になってきており、大手や有名企業では四年制大学卒か短大卒を応募条件にしている場合もある。
その点で言えば高卒就職はスタートからかなり不利なのだが、幸いな事に月光館学園は全国でも有数の有名進学私立として認識されていた。
順平は中等部から所属していた事でエスカレーター式に進学出来ただけで、もし、高等部から入学しようとすれば十三倍を超える倍率の高難度入試を突破しなければならなかった。
無論、毎年そんな馬鹿みたいな高倍率になっている訳ではない。
順平たちが高等部に上がるときには世の中が〝籠球皇子ブーム〟で、湊が新入生代表として高等部に進学するという情報が流出していたため、ミーハーなファンや彼の宣伝効果を計算に入れて学歴狙いに入学しようとした者が押し寄せてしまっただけだ。
実際、湊たちの一つ後輩に当たるその次の年は倍率八倍程度に落ち着いたため、今後も徐々に減少していくと思われる。
だが、順平たちの学年は世の中に有里世代と認識されるのだから、就職するなら話題としてそれを活かし、進学するなら当然ながら自分で勉強を頑張っていくしかない。
ふざけているようでキッチリと公私を分けるタイプの友近が言えば、順平はそんな未来の事なんて今考えてられないんだよなと心の中で苦笑し、階段を下りて一階に到着した。
生徒玄関はこれから帰る生徒たちで溢れかえっており、自分たちの

靴箱に辿り着くのも一苦労だ。
けれど、ある程度は慣れているためか流れに逆らわずに進んでいけば、二年生の靴箱の置かれているエリアに近付いたところで目立つ青年の後ろ姿を発見する。
あれから彼とは一度も言葉を交わしておらず、八つ当たりしてしまった事を謝らなければと思っていた順平はドクンと心臓が強く跳ねた錯覚を覚える。
今、彼の周りには彼を慕う少女たちの姿はない。実に珍しい状況で話しかけるなら絶好のタイミングだ。
順平も死への恐怖から余裕がなくなった事で八つ当たりしてしまっただけで、本気で彼に全ての責任を取れなどと思っていた訳ではない。
アイギス本人も言っていたが、あくまで彼は被害者なのだ。
全ての責任は桐条グループにあって、アイギスが彼を封印の器に使ったのは他に方法がなくての緊急措置。
デスやニュクスの存在を知っていた事に関しては思うところもあるものの、デスである綾時が言っていた事が真実ならば、十年前の実験が行なわれた時点で滅びの訪れは決まっていた事になる。
湊のせいじゃない。彼に責任はない。だから、謝らなければと震える足を無理矢理に動かし、傍にいるはずの友近の声が遠くなっていき、近付いていった順平は靴を履き替えている湊に声をかけた。
「あ、有里！」
声が震えて上ずってしまうも、何とかちゃんと名前を呼べた事に順平はまず安堵する。
それなりの音量で声をかけたので聞こえているはずだが、湊は靴をしっかりと履き替えてからゆっくりと振り返った。
相手の顔を見て順平はまたあの瞳だという考えが頭を過ぎる。
日本人だけでなく世界でも珍しいであろう不思議な輝きを持つ金色の瞳。
どこか吸い込まれそうになる感覚を覚えるそれからは、やはり何の感情も読み取る事が出来ない。

何も映していない訳ではないのだろう。けれど、順平はそこに感情に由来する熱が一切感じられなかった。
今の湊が向けてくる瞳に比べれば、機械であるカメラの方が〝人に作られた〟という事でまだ熱を感じる。
そう。彼の瞳は冷たいのだ。自分に対して欠片の関心もなく、そこにいて何をしようが気にしていない。
存在を知覚していながら認知していないかのような違和感。彼の瞳を見ていると不安になってくるのは、きっと自分の存在を否定されている気分になるからだろう。
心の奥深くで濁った感情が湧き上がりそうになるのを押さえつけながら、順平はこちらを見ている青年に改めて声をかけた。
「えっと、その、この前の事なんだけど……や、八つ当たりして悪かった。別に、本当はお前を責めるつもりじゃなかったんだ。ただ、余裕がなくて、そんでお前に当たっちまった。本当に悪かった」
「……そうか」
伝えたい事はしっかり伝えて順平は深く頭を下げる。
周りには大勢の生徒たちがいて、ただでさえ目立つ湊に頭を下げているせいで余計に目立っているだろうが順平は気にしない。
いや、そんな周りの目など気にしていられる余裕がないと言った方が正しいのだが、頭を下げたままの順平から謝罪の言葉を受けた青年は、短い言葉を残してその場から立ち去ってしまった。
雰囲気からすれば謝罪を受け入れてくれたようだが、実際に彼と相対していた順平が感じた印象は全く異なっている。
そうして、去って行った彼の背中を見つめていれば、突然の行動に驚いていた友近がやってきて順平の肩を掴んだ。
「お前、また何かしたのか？　有里君に迷惑かけるのもいい加減にしとけよ。終いには殴られるぞ」
「……正直、その方がいいぜ。あいつ、欠片もこっち見てなかっただろ」
「はぁ？　お前が謝って、なんか分からないけど許してくれてたっぽかっただろ？」

友近からすれば湊は普段通りに寛容な態度で許してくれていたように思えた。
だが、実際に彼と話した順平からすれば、そもそも彼は何の感情も自分に向けていなかったように思えた。
自分の知り合いは勿論の事、赤の他人とだっていざこざがあれば僅かながらでも感情に波が起きるはず。
順平などこの一週間は湊への罪悪感、言ってしまった自分への自己嫌悪、そして滅びに対する恐怖でずっと頭を悩ませていた。
湊も湊できっと自分に言われた事を気にして、押し付けられた責任を果たそうとしているに違いないと思っていたのに、先ほどの会話だけでそうではなかったと察した。
「……〝どうでもいい〟か」
度々彼が口にしていた言葉を思い出す。
彼の心の内を表わす言葉として最も適しているのは恐らくこれだ。
最初から湊は誰の事も見ていない。あの日の話し合いでも話の輪に加わらないでいる事が気になったが、今ならそれも当然のように思えてしまう。
立場が異なるからそうなったのか、それとも役割に徹して目的を果たす機械であろうとしているのか。
もしも後者であれば、死に怯える形だろうと〝自由〟のある自分の方がずっとマシだと順平は考える。
彼の今までを見てきた大人たちは、湊はずっとチドリやアイギスのために生きていると言っていた。
他人のために自分の命を躊躇わず使うような人間だ。蘇り戻ってきた今もきっとそこは変わっていない。
何とかしろと順平が言ったとき、彼は分かっていると答えた。
つまりはそういう事なのだろう。
「……オレたちがどっちを選ぼうと関係ないってか」
湊は少女たちに願われようと目的のためには止まらない。
どんな手段を使っても、何を犠牲にしてでも、彼は滅びを回避して少女たちの命を存続させるつもりだ。

そこまで他人のために頑張れる事を順平は素直にすごいと思う。ただ、彼以外には絶対に出来ないとも確信出来る。
何せ湊のそれは人としての生き方ではない。そも、自分の生に一切の執着を持っていない。
死んで目的が達成出来るなら躊躇いなく死に、生き続ける事で目的が叶うなら禁忌に手を染めてでも生き続けるだろう。
人の環から外れた存在だからこそ、彼は他人に忘れられようとも目的のため動き続ける気でいる。
デスを殺しても影時間に関する記憶が世界中の人間から消えるだけで、ニュクスの降臨自体は後に起きる。
記憶を失わない湊はそうなった時、きっと一人でも戦うつもりだ。
他の者が一緒だろうと、自分一人だろうと彼の選択は変わらない。
だから、湊はどっちを選ぼうと構わないと言ったのだと順平は理解した。
「……一人でかっこつけてんじゃねぇよ、クソッ」
思わず靴箱に拳をぶつけて順平は言葉を吐き捨てる。
ああも覚悟の決まった姿を見てしまうと、いつまでも悩んでいる自分が酷く惨めに思えてくるのだ。
死にたくないなら抗うしかない。最初からそんな事は分かっていた。
仲間たちだってそれはきっと同じだが、自分が死ぬと言われてそう簡単に吹っ切れる者などほぼいないだろう。
おかしいのはあちらで、悩んでいる自分たちの方が正常なのは間違いない。
ただ、どれだけ悩んだって根底にあるのは〝死にたくない〟〝仲間や友達を死なせたくない〟という思いなのは変わらない。
このままでは綾時の言った通りの結末にしかならないと分かっている以上、無駄であろうと結末を変えるため足掻いてやる覚悟を順平も決める。
残る時間は限られているため、こうしてはいられないと靴を履き替えた順平は後ろにいる友近に向かって大きな声で呼びかけた。

「いくぞ、ともちー！　今日は景気付けに大食いチャレンジだっ!!」
「いや、はがくれ行こうぜ。大食いってあれ一歩間違えたら豚の餌だろ」
「ちょっ、オレの決意をいきなり挫こうとすんなよ!?」
急にハイテンションで大食いチャレンジの店に行こうと言われても、友近はラーメン好きでそれなりの拘りを持っている。
そんな彼からすれば大食いチャレンジは邪道。あれはラーメンの味を楽しむための物ではなく、腹に入ればいいと思っているか、チャレンジする自分が大好きな人間が楽しむだけのものだ。
故に、そんなものには参加しない。今日ははがくれと決めているんだと友近は順平の言葉を無視して駅へ向かって行く。
その後を追っていく順平は必死に友近を説得しようとして撃沈するも、その表情には先ほどまでの暗さは一切残っていなかった。

第三百九十七話　路地裏の誓い

１２月２０日（日）
昼――ポートアイランド駅・路地裏
他の者たちが悩んでいる頃、天田もまた同じようにどちらを選ぶべきか悩んでいた。
天田からすれば綾時は一月ほどだが一緒に戦った仲間だ。
湊と共に現われて、自分やその仲間を救ってくれた存在である。
湊がただ一人の友人だと認めるだけあって彼に並ぶ実力を持ち、それでいて順平と一緒に馬鹿をするほどに仲が良く、湊と綾時を見て随分と対極な友達同士だと思った事を覚えている。
そんな仲間だと思っていた相手がこれまで自分たちが戦って来たシャドウたちの王と聞かされた時には、まさかそんなと驚きを隠せなかったが、アイギスと対峙していた不気味な骸骨のシャドウの姿を見ていたためにそれが真実だと信じるしかなかった。
仲間だと思っていた。実際に彼は自分たちを助け、彼にとっては同類であるはずのシャドウを何体も倒していたのだ。
もし、彼が本当に人類に害為す存在であれば、人類に味方をして同類を狩ったりなどしなかったはず。
それを思えば彼が美鶴に言っていた、彼個人に敵対の意思はないが彼に与えられた役目がそれを許さないという言葉は信じて良いのだろう。
（……有里先輩でも勝てない存在に、僕たちがどう足掻いたところで意味なんて）
駅前の花屋で仏花を買ってきた天田は、以前母と一緒に住んでいた場所を目指してポートアイランド駅の路地裏を進んで行く。
普段ならば小学生一人で歩くには物騒な場所であったが、今は日本全国だけでなく海外でも無気力症の人間たちが増えている。
路地裏でたむろしていた若者たちの中にも、恐らく無気力症となってしまった者がいたのだろう。ここ最近はこの辺りでたむろする若者の姿を見かけなくなった。

誰も立ち寄らなくなった事で以前にも増して寂しく見え、どこか世界から切り離されてしまった印象まで受ける路地裏。
そんな場所を今にも雪が降りそうな曇天の下、首に巻いたマフラーを口元まで引っ張り上げて白い息を吐きながら天田は進む。
勝てるのなら、戦う事が出来るのであれば、天田だって諦めずに立ち向かうと決意する事が出来た。
しかし、綾時と湊は言った。ニュクスは戦ってどうにか出来る相手ではないと。
あの二人が揃って嘘を吐くはずがない。人類の未来について嘘を吐く理由もない。
であれば、彼らの言葉に嘘はなく、ニュクスという神にはどうあっても勝てないのだろう。
(死んだらどうなるのかな。有里先輩の話だと、死後の世界が実在するらしいけど)
目的の場所に着いた天田は買ってきた花をそこへ置き、地面に膝をついて亡き母に向け手を合せた。
母親の死が居眠り運転のトラックによる事故だとされたとき、天田は絶対に真実を突き止めると心に決めた。
おかげで親戚からの支援もあって巌戸台に残る事が出来、数年越しに真相に辿り着く事が出来た。
敵から事件の真相、そして真犯人の情報を聞くとは思っていなかったが、天田は憎しみだけに囚われる事なく少しだけ前に進む事が出来た。
それは、同じく天田の母親の命を奪った事で罪の意識に囚われていた荒垣を救う事にも繋がった。
天田にとって荒垣は親の仇でもあったが、同時に自分を助け導いてくれる存在でもあった。
先に母親を殺した犯人だと知っていれば憎しみだけで動いていたと思うけれど、そうはならずに彼への恩を感じている状態で真犯人だった事を聞き、他の仲間たちの事も考えて条件付きで〝赦す〟事を選べた。

もっとも、それらは全て有里湊が敵の罠にはまって死んだ事で、何とも後味の悪い形に終わってしまうのだが、自分も死ぬのだと言われた事で天田は改めて死んだ母や死後の世界について考えるようになっていた。
死は怖い。大切な母を失って絶望していた時以外では死にたいと思った事などない。
そこまで分かっているのなら、後はもう戦うしかないはずだ。それは少年も分かっている。
ただ、絶対に勝てない存在という言葉が重くのしかかって来て、少年は立ち上がり進む事が出来ずにいた。
「天田か？」
「……荒垣さん？」
自分の名を呼ぶ声が聞こえて振り向けば、そこには少し驚いた顔をした荒垣が立っていた。
特別課外活動部に復帰してから彼はもうここへは出入りしていないはず。
ここへ来ていたのは天田の母を殺めた事に対する罪悪感から、どうしても逃れられる事も目を背ける事も出来なかったからだ。
天田と関わって行く事、向き合っていく事を決めた荒垣が今更ここに何の用があると言うのか。
振り返った状態から立ち上がった天田は、どうしてここへ来たのかと相手に尋ねた。
「こんなところへどうしたんですか？」
「……多分、お前と似たような理由だ。分からなくなって、だから確かめたくなった」
自分と似たような理由だと言われて天田は心臓が跳ねたような感覚を覚える。
天田がここへ来たのはどちらを選ぶべきか迷ったからではあるが、死ねば母に会えるのではと母の存在を求めて彼女が死んだ場所に足が向いてしまった形だ。
もし、本当に悩んで母に相談したかったなら墓参りしていたはずな

ので、無意識に死ぬ事を肯定している後ろ向きな考えを読まれてしまっているのではと不安に思い。天田は今の正直な気持ちを荒垣に伝えた。
「正直に言うと僕は怖いんです。すごい敵ってだけならこうは思わなかったと思います。でも、有里先輩と綾時さんが揃って勝てないと言った相手です。そして、世界中の命と一緒に自分も死ぬって言われて、どうしたら良いか分からなくなりました」
「死ぬのが怖いなんて当たり前だ。俺たちは実際に死ぬような目にも遭ってる。他のやつよりその分リアルに想像出来ちまう。そう思っても何もおかしかねえ」
死を恐れるのは当然の事だ。そも、死と向き合う事でペルソナを呼び出しているペルソナ使いは、他の者たちよりも死を身近に感じやすいだけあって自身の死も想像しやすい。
天田は自分の母親が殺される場面を見ていた事もあり、さらに死をイメージし易い状態にあったのだろう。不安で考えが纏まらなくなっても何も不思議ではない。
そう伝えた荒垣は上着のポケットをあさると錠剤の入った小さな小瓶を取りだした。
見た感じでは薬のようだが、天田は相手が何かの持病を持っているとは聞いておらず、それが一体何の薬であるか予想もつかない。
ただ、この場面で見せてきたからには何か重要なものなのだろう。考えても分からない天田は素直にそれを尋ねた。
「それは何ですか？」
「ペルソナの制御剤だ。適性が足りていない、精神的に不安定、そういった理由でペルソナを上手く制御出来ないやつが服用する事でペルソナの暴走を防ぐ事が出来るようになる」
自分の母親の死の原因を知る際、ペルソナが暴走する理由やそれを防ぐ手段があるという話は聞いていた。
実物を目にするのは初めてだったが、一度暴走事故を起こした荒垣が保険として制御剤を持っていてもおかしくはない。
けれど、ここでそんな物を見せた理由が分からず、天田が黙って話

を聞いていれば荒垣が続けて語る。
「けど、ペルソナなんて人間からすりゃ過ぎた力だ。それを力のないやつが薬に頼って制御しようとするなら当然無理をする必要がある。一回や二回なら分からねぇが、これが必要なやつは定期的に飲むだろう。そうすりゃ、身体の内側から壊れていって十年も持たず死ぬらしい」
「まさか、それを飲んでいたんですかっ!?」
ペルソナの暴走を防ぐことと引き替えに、自身の身体を蝕み寿命を減らす劇薬。
そんなものを荒垣が飲んでいたと聞いて天田は驚きに目を見開き、どうしてそんな事をしてしまったのかと思わず問う。
「どうしてそんな事をっ」
「安心しろ。これは偽物だった。有里が死んだ後にラビリスから聞いたんだが、俺が罪の意識から自分の命を絶たないよう有里が罰として用意したものらしい。中身はただのサプリメントで、それに少量の血圧上昇の薬や血糖値が下がる薬を混ぜたものって話だ」
荒垣が寿命を削る薬を飲んでいたと思って驚いた天田だったが、それが偽物であったと説明され、思わず胸に手を当て安堵の息を吐く。
少年を驚かせてしまった本人は相手の素直な反応に小さく笑うも、これは自分にとってあるものの象徴なのだと語った。
「……お前からすればただの逃げだって思えるだろう。実際、俺は緩やかな死を選ぶ事で罰を受けている気になってた。混ぜられた少量の薬で出る体調の変化で副作用を実感して、これでいつか自分も死ぬんだってそれに救いを感じていた」
そう。これは荒垣にとって罪から逃げた証。
一人の人間の命を奪った罪の重さに耐えかね、裁かれる事を望んだ結果に辿り着いた一種の免罪符。
「あん時は誰も俺を責めなかった。まぁ、あれは気を遣ってくれてたんだろうが、自分の意思じゃなかろうと人殺めておいて、ただの事故だなんて思い込めるほど俺は図太くなかった。だからこそ、ストレガや有里が真っ当に罪人として見てくれて、こういう形で罰を与えてく

れた事で俺は正気でいられたんだ」
仲間たちは事故だと、荒垣のせいではないと言ってくれた。
それは荒垣自身が罪の重さに潰れてしまわぬよう気を遣ってくれていたのかもしれないが、荒垣自身はそれが重い罪だと分かっていただけに、誰も責めない事が逆に苦しくてしょうがなかった。
その点だけで言えば、言葉は厳しくともただの人殺しだと言ってくれた湊やストレガの存在の方がありがたかったほどである。
あの時の荒垣は自分の存在を肯定されたかった訳じゃない。
罪は罪だと正しく認められ、罰を受ける事で罪を清算した事になり、そうして自身のした事を許されたかったのだ。
だからこそ、自分を正しく罰してくれる〝制御剤〟は荒垣にとって何よりの救いだった。
ペルソナが暴走する危険を抑えるだけでなく、寿命を減らしてまでそうしているという形を取る事で、自分が贖罪しているという実感を持てた。
だが、満月の日に天田と交わした会話によって考えを変える事が出来た荒垣にとって、もしこれが本物であったとしても今更飲むつもりはないのだと告げる。
「俺は臆病な卑怯者だ。ずっと逃げ続けて、隠れ続けて、自分の罪から逃れられなくなってようやくお前の前に出てくるようなクズだ。でも、だからこそ、ここでお前とした約束は守りたい」
「怖くないんですか？　勝てないって分かってるのに、どうやっても死ぬ事が決まってるっていうのに」
「怖いさ。けど、寿命がある以上そもそも死なない人間なんていないって開き直ってみた。なら、何もせずに最後を迎えるのとやってみたけどダメだったで、どっちの方が後悔が少ないかで選ぼうと思えたんだ」
荒垣だって死ぬのは怖い。制御剤を飲むのも躊躇って、罪を犯してから緩やかな自殺としてようやく飲めるようになったくらいに死を恐れている。
だが、それは生物として正しいものであり、それを踏まえた上で自

分がどうしたいかが重要なのだと考えるようになった。
　そうして、開き直りの末に戦う方を選べた事を天田に話せば、天田は一瞬きょとんとした顔してすぐに笑い始める。
「あははっ、あはははっ！　すごく意外です。でも、良いですね。なんかそれ真田先輩っぽい考え方です」
「やめろ。あんな脳筋と一緒にすんな」
「でも、後輩たちには人気ありますよ？　強くて格好良いって。あ、美紀さんの事を除いてですけど」
「ありゃ一種の病気だから気にすんな。一応、有里の事があって昔より軟化はしてる」
　開き直るという考え方もあるのだと知った天田は、ここへ来た当初とまるで違った明るい顔をしていた。
　それを見た荒垣はもう大丈夫だと安心したように小さく口元を歪める。
「荒垣さん、僕も決めました。だから、一緒に頑張りましょう」
「ああ、よろしくな」
　二人には果たすべき約束がある。それを終えるまではどうあっても死ねない。
　だからこそ、自分たちは戦って生き残るのだと決意をあらたにその場を立ち去り、帰りに昼ご飯でも食べていくかと揃って商店街の方へ向かったのだった。

　夜――ＥＰ社
　影時間も終わり、街の明かりも徐々に減りつつある頃。湊は自分用に作った作業部屋で武器の様子を見ていた。
　以前作った二振りの刀、黒刀と白刃は彼が名切りの技術を使って作った試作品だった。
　あれはあれで十分な性能を持っており、既に失われている技術も多数使われているため武器としては最上級のものと言える。
　しかし、一度武器を作った事で打ち方を覚えた湊にすれば、しっかりと素材の選定からすればさらに高品質な武器を作れるという確信

があった。
黒刀と白刃は九尾切り丸の持つ機能の一部を備え、巨大な超重量剣よりも取り回しが良いものをというコンセプトで作られたものである。
その備えた機能というのは、使い手や切った対象の力を一部吸収するという妖刀めいたものであるが、その力を持っているからこそ九尾切り丸は敵を倒すほど成長し、今ではその波動だけでシャドウらを屠れる神器に到っている。
流石にダウングレードした機能を備えた黒刀と白刃ではそこまでの力は持てないが、湊のように高い適性を持った者が使えば対シャドウ特化の近接武器として絶大な力を発揮する事が可能だ。
だが、いくら取り回しが良くなり、現時点で十分な力を持っていたとしても、さらに上を目指せると分かっていて放っておくほど青年も適当な性格ではない。
刀やナイフを集める事を趣味にしている湊にすれば、どうすれば九尾切り丸の力に追い付けるか研究して当然だった。
「湊様、それで新しい武器は完成ですか？」
「……そうだな。現時点じゃこれ以上は難しいだろう」
ソフィアに話しかけられた湊は頷いて鞘に納めた刀を台の上に置く。
二人の前にある作業台の上には既に組まれた状態の二振りの刀が置かれている。
どちらも以前打った黒刀と白刃に似ているが、刀身が僅かに伸びて分類が打刀から太刀に変わり。刀幅も五ミリ増やして、厚みも一ミリほど厚くしてある。
それだけ変わると武器の取り回しは完全に別物と言っていいのだが、様々な武器を使ってきた湊にすれば全ては慣れなので問題ないらしい。
刀身の色は以前と同じく黒と白。鞘や柄糸も刀身に合わせた色で統一されているが、鍔だけはどちらも植物をモチーフにした金色の物に変わっている。

その事に気付いたソフィアは触れる許可をもらってから手に取って実際に見てみる。
「今回は色を統一されていないのですね。以前は武器としての機能にばかり目を向けていた感じでしたが、このようにワンポイントあるだけで芸術性も増したように思えます」
「まぁ、武器作りは一区切りって意味で付けただけだがな。現時点での最終形、完成品って事で差別化しただけだ」
今回も素材には無の武器を溶かした金属を使っている。
しかし、それだけでは理想の切れ味に届かないと判断して、湊はベレスフォード家の力を借りて様々な種類の金属を取り寄せた。
九尾切り丸に使っていたようなレアメタルは勿論、一般的に流通している金属を使うにしても地球産の物ではなく隕石に含まれている物を使うなど、素材の時点からかなり拘った事もあって一振り作るだけで馬鹿げたコストが掛かっている。
だが、そうやって拘り続けた甲斐もあって、出来た刀は湊が納得出来るだけの切れ味と強度に加え、九尾切り丸と同じ機能を再現する事が出来た。
「妖刀と化した九尾切り丸と同じエナジードレインが可能との事でしたが、こうして見ている限りでは発動しないのですね」
九尾切り丸の最大の特徴は対象の力を吸収して武器自体が成長するエナジードレイン機能。
以前作った黒刀と白刃も限定的にその力を再現して付けていたが、武器自体の性能が上がるほどではなかった。
その点、今回はそこにも拘って武器を作ったので、本当であれば同じようにエナジードレインが使えるはず。
見ていた武器を作業台の上に置いたソフィアがそれを尋ねれば、ベルトに付けたアタッチメントに鞘を固定して装備した湊が刀を抜きながら答えた。
「その機能は正しい使い手が持たないと発動しない」
そう言って湊が左右の手に黒刀と白刃を持って構えると、黒刀は赤い光を纏い、白刃も青い光を纏いだす。

どうやらエナジードレインを使って湊の力を吸収しているようで、光を纏った刀身の輝きも増しているように見える。
以前の武器では黄昏の羽根と同じ光を淡く纏っていただけなので、光の色と強さが変わった今回の方がより強力になったと言えるのだろう。
作業台から離れた場所で赤と青の光を纏った武器を軽く振って調子を確かめた湊は、武器の振り心地に満足したように刀を鞘に戻す。
戻ってきた湊はいつもの無表情ながら、雰囲気だけ嬉しそうに見えた事でソフィアも嬉しくなって彼を労った。
「満足のいく出来だったようでおめでとうございます。光の色と強さを見るに以前とは完全に別物のようですね」
「あっちも普通の武器としては破格の出来だがな。まぁ、成長する武器と比べる方が間違いだ」
九尾切り丸と今回の武器は敵の力だけでなく湊の力も吸収して成長出来る。
正しい使い手が湊しかいないので、自動的に彼の力を吸い続ける事になり、使えば使うほど妖しや化生に対しての干渉力が増していく。
いずれは九尾切り丸のように振るって波動を放つだけでシャドウを殺せるようになるだろう。
その時が来るのは随分と先になると思われるが、こうして満足のいく武器が出来たのなら名前もしっかりと決まっているのだろうかとソフィアは質問する。
「今回の武器はどのような名前をつけるのですか？」
「あくまで改良版だから、以前と同じ黒刀と白刃でも良いんだがな」
「それは少々味気ない気もします」
「そうか？　なら、纏う光の色に合わせて、黒刀真打ち〝前鬼〟、白刃真打ち〝後鬼〟で良いだろう。先祖みたいに花の名前にする気にはならないしな」
説明しながら鞘に入ったままの刀に赤い光と青い光を再度纏わせて見せる湊。
赤鬼である前鬼と青鬼である後鬼は、鬼の名としては酒呑童子や茨

木童子に並ぶほど有名なものだ。
刀の纏う光と色が一致しており、腰の左右にそれぞれ刀を装備するという変わったスタイルの青年にすれば、左に前鬼で右に後鬼という風に立ち位置も決まっているのも覚えやすい。
シャドウのような化け物を相手にする時にしか武器は使わないので、それくらい安直な名前で良いだろうと湊が言えば、どこからか出した手帳にメモしながらソフィアも頷いて返す。
「とても良い名だと思います。来たる決戦の前に完成して良かったですね」
「まぁ、研究自体はしてたからな。先祖の時代にはなかった金属もあって、それを含めた種類と配合比率さえ決まれば作業自体は難しくなかった」
アタッチメントから外した刀をマフラーに仕舞いこみ、メモを終えて立ち上がったソフィアを連れて部屋を出て行く湊の表情は随分と晴れやかだった。
何があろうとニュクスと戦う気でいる青年にとって、他の者たちがどちらを選ぼうとやる事は変わらない。
そのための準備を着実に進め、今日もまた一つの成果を出した青年は残る時間も有意義に使うべく気を引きしめると、他の準備の進捗状況を聞くため研究区画に向かって部屋を後にした。

第三百九十八話　信じる事

１２月２１日（月）
深夜――都内・教会
特別課外活動部の者たちがそれぞれ決意を固めている頃、彼らのいる港区から離れた場所にある寂れた教会に集まる者たちがいた。
どこか無気力症患者にも似た濁った瞳で次々と教会へ入っていく人々。
年齢も性別も人種だってバラバラで、彼らには共通点などないように見える。
だが、彼らはそれぞれ手に一枚の紙を持って、どこか必死さを感じる様子で何かを求めるように扉を潜っていた。
古く寂れた教会は今はもう使われていなかったようで、建物の形は保っているがその内装は酷くボロボロだ。
ひび割れた床に、湿気でカビたのかほとんど剥がれ落ちてしまっている壁紙。元はそれなりに見栄えがしたであろう天使の彫刻は首と片翼が崩れてしまっている。
ただ、ここへ集まった者たちは全員靴を履いているので、床が割れていようが中に置かれた長椅子が崩れていようが気にせず奥まで進み、蝋燭の炎で明るく照らされた礼拝堂である人物の登場を待っていた。
そして、時計の針が約束の時間を指した時、奥の部屋へと繋がっている扉が開き三人の男が姿を現わした。
衣服を身に着けていない上半身に大きな刺青を施した男・タカヤ。
従者のようにその後ろへと続くジンとカズキ。
今まで裏の人間として依頼人やターゲットの前にしか姿を現わさなかったストレガたちが、男性陣だけとは言えこうやって一般人の前に出てくるのは非常に珍しい。
だが、彼らも別に気まぐれで人前に姿を現わした訳ではない。今回のこの集会は来たるべき滅びの日に向けた準備であった。
燭台の上で揺れる炎に照らされながら人々の前に立ったタカヤは、

集まった者たちをゆっくりと見回し、その瞳の奥に宿っているモノを感じ取って口元を歪める。
「――――この世界は平等ではない。生まれ、容姿、才能、自分の力ではどうにもならぬ事で人々に差を付け。それを理由に只人であるはずの者たちが自分たちは選ばれた存在であるとばかりに他者を虐げる」
壇上でタカヤが語り出せば集まった者たちの視線が彼へと集中する。
タカヤはこれまで依頼のターゲットがどのような感情を見せるか観察してきたため、相手の眼を見てどういった感情を抱えているか察する力が鍛えられていた。
多くの者は銃という命を簡単に散らす武器を見て恐怖に染まり、または理不尽に訪れようとする終わりに対して怒りを見せた。
理性ある生物として死を恐れるのは正しい事なのだろう。
自分を害する存在に怒りを持って排除しようとするのも同じく正しい反応だ。
だが、何年も仕事を続けていると、そういった者ばかりになって飽きが出てくる。
依頼とは別件だが特別課外活動部の者たちだって過去に会ってきたターゲットたちと変わらず、やはり普通の人間、平和な日常を生きてきた者の感性しか持っていないとすぐに理解出来た。
その点、この場に集まっている者たちはターゲットや七歌たちとは違っている。
彼らの瞳は暗く濁り、何かに絶望しながらもまだ諦めきれず救いを求めているのが伝わってくる。
「ここへ集まった貴方たちもそうやって理不尽を強いられ生きてきたのでしょう。自分たちが必死な想いで積み上げてきた物、育んできた物、それらを悪戯に奪われる怒りと哀しみは私も知ってします」
タカヤも大人たちから理不尽な目に遭わされてきた存在だ。
本人の特殊な感性もあってペルソナを目覚めさせられたこと自体は恨みもせず、むしろ感謝しているくらいだが、実験に巻き込まれな

ければ別の未来があった事を否定するつもりはない
自分の仲間であるジンたちは桐条グループを恨んで、憎んでいるのだ。
だからこそ、タカヤも彼らを通して正しい感情を認識し、同じ境遇であれば辿る道も同じだろうと共に進む事が出来る。
とある青年と同じように他人と同じ視点に立てぬくせに、奪われた人間として当たり前の感情を〝自分〟も知っているのだと、影時間の存在も知らぬ同胞たちに向けてタカヤは語りかけた。
「失ったものは帰ってこない。プラスからマイナスに振り切れてしまった以上、例え奪った者へ復讐しようとゼロに近付く事はあれどプラスになる事はありません」
かつて同じ言葉を桐条武治に向けて吐いた青年がいる。
奪われた者は、失った者は皆それを理解している。どれだけ復讐心に駆られようとも、同じ幸せが戻ってこない事など百も承知なのだ。
故に、この場に集まっている者たちにはタカヤの言葉が届く。彼は自分たちを真に理解してくれる存在であると。
「ですが、我々の抱いた想いは無駄ではない。絶望し、死を求めて尚踏み留まった貴方たちの想いが、大いなる存在をこの惑星へと呼び寄せたのです。大いなる存在の名は〝ニュクス〟。我々とは異なる次元、異なる理を生きる存在を〝神〟と呼ぶ者もいた」
言いながら壇上で両腕を大きく広げ、天井のその先にある虚空を見上げるように視線を送るタカヤ。
彼の頭上に不可思議な力が揺らめき、それが何であるかを理解出来ない者も彼がその〝神〟と繋がる何かを持っているのだと理解する。
人間というものは意外に単純だ。分からない事、理解出来ない事が目の前で起こると、他人が吐いた口から出任せであってもそれを信じて自分を納得させようとする。
タカヤの後ろに控えている二人からすれば、彼の頭上で揺らめいたのがペルソナ召喚を途中でキャンセルした事で、不完全な形の力が漏れ出しただけだと分かっていた。
種が分かっている者からすれば子ども騙しだが、分かっていない者

にとっては神の存在を証明する紛れもない証拠。
そうして、集まった者たちのタカヤを見つめる視線にこれまでと異なる色が混じれば、タカヤは仕上げだとばかりに優しく語りかけるような口調で言葉を続ける。
「――――この世界は平等ではない。ですが、この世界で唯一平等と呼べるものが〝死〟です。世に生まれ出る事が叶わなかった命も、この世のあらゆる物を手に入れた者も、過程は違えど辿り着くものが存在の終わりである死です」
この世に物質として存在する以上、どのような過程を経ても最後に辿り着くのが死であるという事実は変わらない。
中にはその枠から外れた存在もいるようだが、それは自分たちの常識の枠から外れているだけであって、神と呼ばれるニュクスのようにそもそも別の理で生きているだけなのだと考える事も出来る。
であれば、タカヤにとっても神の降臨は目指すだけの価値がある事柄だ。
妄想と願いに取り憑かれている幾月ではないが、つまらないこの世界にちょっとした刺激を与えるに十分な衝撃を持っているはず。
目標を定めれば後はそのために動くのみ。タカヤからすれば下らぬ執着で身を滅ぼそうとする愚者たちだが、如何に矮小であっても数が集まればそれなりの力になる事だろう。
「我々はずっと奪われ続けてきた。だが、ようやくその想いが報われるときがやってきました。死を思い、死を求めなさい。その果てに、大いなる存在〝ニュクス〟が齎すこの惑星の滅びがあるのです。我々が今の世界に幕を下ろす事で、理不尽を強いてきた者たちは全てを失う事になる。貴方たちの求める新たなる世界はその先にあるのです！」
彼の言い放ったその言葉に集まっていた者たちは熱狂した。
奪われてきた自分たちが、何も出来なかった自分たちが世界に幕を下ろす事で、支配者を気取っていた者たちから全てを奪う事が出来る。
他人の地位も名誉は勿論、人の命だってどうとでも出来ると驕って

いた者たちが、何もかもを奪われて無力な存在に成り下がる。
この場に集まった彼らが憎む者たちにとっては何より残酷で苦痛に思える復讐だろう。
ニュクスが何であるかは知らない。タカヤにどれだけの事が出来るかも分からない。
それでも、彼らと共に行けば何かが変わる予感がする。集まった者たちが動く理由としてはそれで十分だった。
自分たちの事で手一杯な特別課外活動部や増え続ける無気力症患者の対処に追われる桐条グループが情報を掴めていない裏で、タカヤを教祖とし滅びを求める『ニュクス教』はこうして誕生したのだった。
放課後――久遠総合病院
仲間たちがそれぞれ滅びに抗う事を決意している頃、美鶴は再び父が眠っている病室を訪れていた。
綾時から選択肢を提示された時と比べて、今の寮の雰囲気は格段に良くなっている。
誰よりも死を恐れていたはずの順平が真っ先に立ち直り、続けて天田や荒垣といった者たちもどうするか選んだようだった。
最初は揺れていた様子の七歌は、本人の心の問題というよりもリーダーとして仲間の事を考え悩んでいたらしく、次々と立ち直って決意の光を瞳に宿した者たちを見れば本人も迷う事を止めたようだ。
また、父の遺志を継ぐと言っていたゆかり、何があろうと湊に関する記憶を失う訳にはいかないと思っているチドリ、アイギス、ラビリスたちは最初から抗うと決めていた。
一時期は悩んでいた様子の真田に関しても、絶対に妹を死なせはしないと既に戦いへの準備を始めている。
非戦闘員である風花は意外にも落ち着いていて、理由を聞けば自分には戦う力はないが皆を助けたい、誰かの力になりたいと戦う者をサポートすることを早くから決めていたという。
以前の彼女は誰かに必要とされたい。必要とされる事で自分にも居場所があるのだと安心するような心の弱い部分があった。
だが、これまでの経験や〝離れていても繋がっている〟事を教えて

くれた友人の存在によって、彼女もいつの間にやら一回りも二回りも成長していたらしい。
そうして気付けば美鶴を除く全員が綾時の勧めを断り、彼を殺さずニュクスと戦う道を選ぼうとしていた。
大変な目に遭って、何度も死にかけたと言うのに、本当に頼もしい事だと美鶴は彼らの存在を誇らしく思う。
ベッドの横に置かれた椅子に座り、人工呼吸器に繋がった父の姿を見ながら昨夜見た仲間たちの姿を思い出しながら父に話しかける。
「彼らはどうやら戦うつもりのようです。死ぬような目に遭いながらも、普通の学生であればとっくに心が折れていてもおかしくないほどの体験をしていても、彼らは〝生きる〟ことを諦めないと既に決めているようでした」
これまで数々の敵と戦ってきた特別課外活動部の最後の相手は、あの湊と綾時に戦ってどうにかなる存在ではないと言わしめた神。
どうして戦う事が出来ないのか。本当に戦っても滅びは回避出来ないのか。
そういった不安は今もあるが、仲間たちはその不安を抱えたまま前に進もうとしている。
美鶴はそんな強い心を持った仲間を応援したい。自分もその支えとなりたいと思っていた。
そう、思ってはいたのだ。
こんな姿になるまで自分たちの犯した罪を償うために働き続けた父に話すのは心苦しいが、他の者たちと違ってあと一歩が踏み出せなくなっていた美鶴は自分の本心を語る。
「仲間たちはこれまで本当によくやってくれました。誰に褒められる訳でもない。報酬が出ると言っても命と比べられる訳もない。それなのに彼らは自分の大切な者たちだけでなく、見知らぬ誰かのためにも戦い続けてくれたのです」
それはかつてメンバーたちを仲間に誘うときにも使った言葉だが、美鶴たちの戦いは命懸けにもかかわらず誰にも認められず、褒められることもない孤独な戦いと呼べる物だった。

順平などはむしろそれこそヒーローらしいと喜んでいたが、実際に彼らが経験した戦いの日々はテレビで見るヒーローの戦いよりも過酷なものだったと言えるだろう。

何せ、実際に目の前で親しい者が死んでいるのだ。

それが異形の化け物によって引き起こされた事態であれば、命懸けで戦って来た者としてまだ理解出来たかも知れない。

だが、それは異形の化け物の手ではなく、自分たちと同じ人間の悪意によって仕組まれた出来事だった。

最初に命を奪われたチドリは青年の起こした奇跡によって蘇った。

その奇跡の代償として助けた青年自身がこの世を去る事になったが、彼はエリザベスの助力を得ながらほとんど自力で復活を果たした。

もっとも、彼が戻ってきた日に、入れ違いのような形で父が倒れた事は酷くショックだったが、その父も湊やその部下たちの助けで一命を取り留める事が出来た。

そうやってこれまでを思い返せば返すほどに、大切な者たちが今も生きているのは、己のあらゆる物を犠牲にしながら人事を尽くしてくれていた青年のおかげだと断言出来る。

「また、戦う理由を偽っていた私を許し、改めて受け入れてもくれました。勇気を出して打ち明けてみれば、そんな事はとっくに知っていたと苦笑してみせたくらいです。本当に、私なんかには勿体ないくらい掛け替えのない仲間たちです」

本心を偽っていた事もあってか、昔は共に戦いながらもどこか壁のようなものを感じていた。

だが、同じ敵に立ち向かい、危機を乗り越え、心の奥に隠していた本心を明かした事で、美鶴は彼らと本当の意味で仲間になれたと思っている。

約一名ほど気難しい存在もいるにはいるが、今では彼とも言葉を交わす事が出来るようになったので、少女にとっては父は勿論仲間たちの命の恩人でもある彼もまた掛け替えのない仲間の一人として見るようになっていた。

「ですが、だからこそ私は怖いのです。幾月の嘘を見抜けず、お父様や仲間たちを危険に晒したあの日の事を思い出してしまう。また、今回も選択を誤って取り返しのつかない事をしてしまうのではないかと、どうしても最後の一歩を踏み出す事が出来ないのです」

美鶴が他の者たちと違って最後の一歩を踏み出せない理由。

それは、これこそが唯一の正しい選択だと思っていたものが、裏切り者の仕組んだ罠であり、それが原因で仲間たちが死にかけた悔やみきれぬ記憶が今も忘れられないためだ。

あの時は助かった。敵にしても予想外な存在の介入によって、自分たちを破滅へと追い込むシナリオごと敵を全て屠ってくれたおかげで自分たちは生きている。

けれど、次はそうはいかない。

何せ前回イレギュラーとして現われた青年も今度は自分たちと同じく、一つの駒として盤面にいるのだ。

もしかすれば、青年が用意した何かしらの奥の手が盤外に存在する可能性もあるが、地球に滅びを齎す神に対抗出来る者など同じ神以外に存在しないだろう。

「ですが、同じ神をぶつけるとなれば、それはまた全てを八雲に押し付けるという事です。私の選択によって再び仲間を窮地に追いやり、その尻拭いに八雲を利用するなど……」

「――――みつ、る」

美鶴が内から溢れてくる不安に押し潰されそうになった時、聞こえるはずのない声が聞こえ思わず顔を上げてベッドの上にいる人物へ視線を向ける。

「お父様っ、意識が戻られたのですか!?」

すると、先ほどの声は聞き間違いではなかったようで、ずっと意識が戻っていなかった桐条が僅かに目を開け、途切れ途切れになりながらも何かを口にしていた。

「……美鶴……仲間を、彼らを信じなさい……彼らも、また、後悔のないよう選ぶのだから……」

意識が戻らない間も外の音は聞こえていたのか、桐条は前に進めな

くなった娘の背中を押すための言葉を贈った。
不安なのは分かる。自分のせいで大勢の人間の命が失われるとなれば、まともな精神をしている者なら二の足を踏んでおかしくない。
けれど、美鶴は独りではない。彼女も言ったように大切な仲間たちがいるのだ。
調和する二つは完全なる一つに優る。その言葉を聞いて育った美鶴ならば、父が言った仲間を信じろという言葉の意味もしっかりと理解する事が出来た。
偶然か、それとも親としての意地だったのか、それだけ呟くと桐条は再び意識を失ったが、父の言葉を確かに聞いた美鶴は涙を流しながら笑みを浮かべしっかりと言葉を返す。
「ありがとうございます。お父様。私も、彼らと共に進みます」
父に背中を押されてまだ迷い続けるなどというみっともない事は出来ない。
以前、信じられる仲間がいると言ったのは自分だ。
ならば、今度の困難もまた信じる仲間たちと越えてみせると彼女も進む事を決意する。
そうして、病室を訪れた時とは全く違った決意に溢れた表情をした美鶴はナースコールのボタンを押し、父が一時的に目を醒ました事を伝えた。
やってきた医者が診察すると、どうやら呼吸が自然になっているようで、今回の事を切っ掛けに意識が回復する可能性があると言われた。
その事を母にも電話で伝えてから寮へと帰れば、夜に父が再び意識を取り戻して英恵と少しだけ言葉を交わしたとの報告を受け、その日から桐条は徐々に回復を見せるようになり。
美鶴からその事を聞いた仲間たちも美鶴を祝い。桐条の回復を共に喜んだ。

第三百九十九話　冬休み前の女子会

１２月２２日（火）
放課後――巌戸台分寮
昨夜、桐条武治が本格的に目覚めたという報告があり、それを美鶴から聞いたメンバーたちは全員が安堵の息を吐いてから美鶴に祝いの言葉を贈った。
今日も学校帰りに病院によってきた美鶴の話では、体力が落ちている事に加えて、足に痺れのようなものを感じているらしい。
だが、自分が倒れる事になった原因については覚えており、目覚めたばかりで途切れ途切れの返答にはなるが受け答えもしっかり出来ているという。
意識を失っている間の事は不完全ながらも聞こえていたようで、影時間の真の終わりを前に美鶴たちが途轍もない困難に直面している事は分かってくれていた。
話が聞こえていたからこそ、彼は必死に意識を覚醒させて娘の背中を押すための言葉をかけたのだから、その想いの強さは大した物だとメンバーたちも認めざるを得なかった。
そうして、これまでずっと悩んで塞ぎ込みがちだった美鶴もどうするかを選び、ようやく全員がどちらの選択を取るか答えが出た事で、今までの暗さがまるで嘘だったかのように寮内では穏やかな雰囲気が流れていた。
期末試験も終わり、今日は冬休み直前という事でチドリたちや美紀も遊びに来ている。
男子たちはキッチン側のテーブルに集まっているが、入口に近いソファーの方を占領している女子たちは、お菓子を持ち寄って直近に控えたイベントについて話をしていた。
「世間はもうクリスマスムード一色だけど、皆はなんか予定とかあんの？」
言いながら皿の上のクッキーを一枚手に取り、全員を見渡しながら頬張る七歌。

今日は二十二日。明後日にはイヴが、明明後日にはクリスマスが控えている。
日本では当日よりもイヴに日本式のクリスマスを楽しむ傾向が強く、当日になるとクリスマスの飾りは片付けられ、大急ぎで年末年始に向けた準備を行なっている店が多い。
海外だとクリスマス以降は皆ゆっくり家族と過したりするので、どうして日本がそんなにも忙しなく年越しムードに模様替えしているのか不思議に思われているくらいだ。
もっとも、ここにいる者たちは特別どれかの宗教を信仰している訳でもないので、日本独自の少し変わったクリスマスを過す事になるのだが、去年までならともかく今年はイベントを計画するような余裕などなかった。
詳しい話を聞いていなかった美紀を除き、青年との思い出のため最初から抗う以外の選択肢がなかった者たちですら悩んではいたのだ。
それを考えれば分かるだろうと一口サイズのプチケーキを摘まんだゆかりが返す。
「いや、七歌。私らにそんな事考えてる余裕あったと思う？　自分たちが死ぬかもしれない、世界が滅びるかもしれない、って状況で遊ぶ事ばっか考えるのなんて順平でも無理でしょ」
「そりゃ、そうだけどさ。ゆかりたちは早々に戦う方選んでたじゃん。なら、遊ぶ予定立てたり彼氏とデート企画したりも出来たんじゃないの？」
「はぁ……言っとくけどここお独り様しかいないから」
七歌の言う事は分からなくもないが、そもそもの前提としてここには誰とも付き合っていないフリーな人間しかいない。
というよりも、ゆかりやチドリたちは中学時代の美術工芸部を経て総合芸術部になった訳だが、その中で男子と付き合った経験があるのはゆかりだけだ。
他の者たちは美紀と留学生のターニャを除いて、全員が湊と肉体関係を持っているものの交際はしていない。
最初に引っかかった男が湊というスペックだけは高いド屑だった

事もあり、他の男がなかなか目につかなくなった弊害もあるのだろうが、それはそれで勿体ないなと七歌は紅茶に口をつけた。
「ほーん。皆、見た目は良いんだから男くらい簡単に引っかけられそうなもんだけどね」
「……そういう自分はどうなの？　八雲に纏わり付いてるけど、別に恋愛感情じゃないんでしょ？」
人にばかり言ってくるが七歌だってこの場のメンバーに引けを取らないどころか、アイギスやラビリスという自然発生し得ない美貌を持った少女らと同等のルックスをしているのだ。
性格は色々と残念な部分もあるので、そこが難点と言えば難点なのだろうが、それでも明るく付き合いやすい雰囲気もあって男子からの人気は高い。
順平たち一部の有志が行なった今現在の月光館学園女子人気ランキングによれば、ほとんどの票がこの場にいる女子たちに入っている。
付き合いたい女子、結婚したい女子、甘えたい女子などランキングは複数あるが、意外な事に七歌はそれらの総合トップになっている。
単純なルックスで言えばアイギスやラビリスの方が美人かもしれないが、二人は西洋人風の顔の造りなので男子高校生からすると気後れしてしまうらしい。
また、ラビリスはよく湊とバイクに二人乗りしている姿を見られていたし、アイギスに到っては転校してすぐに湊が一番大切な相手だと宣言していた。
そうなると、男子たちは欠片も希望がない相手よりはチャンスがあるかもしれないと、一応フリーである事が分かっている他の女子に票を入れたようだ。
ここにいる者たちはそんな下衆な人気投票が存在する事は知っているが、結果までは知らないので自分がどの程度男子たちに人気があるかは分かっていない。
ただ、それでも普段校内を歩いているときに視線を感じる事は多々あるため、そこそこ人気があるのだろうと仮定し、自分は男子から何

の誘いも受けていないのかとチドリが七歌に尋ねた。
　すると、チドリの方からそういった野暮な話が振られると思っていなかったのか、七歌は紅茶のカップをソーサーの上に置きつつ答えた。
「まぁ、この私ですから？　そりゃ、クリスマスのデートのお誘いなどは何人からも受けましたけどぉ。しょーじき、釣り合いが取れてないよねーって事でバッサリお断りしておきましたよ！」
「七歌ちゃんやとホンマにバッサリ断ってそうやね」
「まぁな！　ディナーはフレンチレストラン〝ブランシュ〟レベルじゃないと無理って言っておいてやったぜ！」
　自信満々に七歌が告げたレストランは、世界のフレンチレストランを紹介するガイドブックで最高の三つ星評価を受けた有名店だ。
　一般的なフレンチは見た目や技術は確かにすごいが、味付けが日本人好みではなかったりする。
　だが、ブランシュの店主は本場の有名店で活躍し、それから自分の故郷の食材を使ったフレンチを作りたいと日本で店をオープンした事もあって、日本人の好みに合うフレンチを提供していた。
　おかげで各界の著名人や海外の美食家たちも足を運び、予約は常に数ヶ月待ちの状態になるほど。
　ただの男子高校生にそのレベルのレストランへ連れて行けと言っても無理な話で、というよりもそのブランシュという店自体を知らない芋野郎がほとんどだったのだが、勇気を振り絞ってデートに誘ってすぐにほぼ金の話をされたら誰だってゲンナリするだろう。
　断られた男子たちに僅かに同情して場に苦笑が広がれば、それを見た七歌は自分が悪いわけではないのだと続ける。
「いや、これ私が悪いわけじゃないからね？　クリスマスデートって世間的には特別な恋人デートな訳じゃん。なら、そこは男の甲斐性として奮発するでしょ。仮にここでディナーにラーメンチェーン店へ連れて行かれたら、相手にとって私はその程度の相手なんだなって思うし」
　七歌だって別に本気で高級フレンチにつれて行けと言っていた訳

ではない。
単に相手がどれほど真剣に考えているかを測るために、自分のために頑張ってくれるのかと試してみただけで、実際に行くとなれば高校生のバイト代でも手が出るくらいの店でもダメではなかった。
しかし、七歌をデートに誘った者たちはそこまでの覚悟はなかったようで、携帯でブランシュを調べてそのディナーの料金を見ると肩を落として去って行ってしまう。
これで彼らの想いは本気だったなどとは当然思えるはずもなく、所謂〝シングル・ベル〟こと独りでクリスマスを過したくなくて慌ててデート相手を探していただけだったようだ。
七歌の話を聞いた者たちも同じように考えたらしく、それならばまだ納得は出来ると頷いた。
「まぁ、七歌の断り方は別にしても、本気で誘いを掛けた訳でもないなら問題ないだろう。高校生活の思い出にという事ならクリスマスパーティーなどでも良いだろうしな」
「あ、クリパ良いですね。忘年会も兼ねてこのメンバーでやっても良いですけど……誰か実は予定があるじゃーっていう裏切り者とかいる？」
美鶴が口にしたクリスマスパーティーという単語に食いついた七歌は、女子会からの流れでクリスマスパーティーも楽しそうだと乗り気になる。
もし開催するとすれば実際に集まるのはクリスマス・イヴの夜で、会場は押さえる必要がないこの寮になるだろう。
実家暮らし組みもここならば送迎含めて問題ないので保護者の許可も簡単に出る。
けれど、七歌は途中で真面目な顔になって、普段よりもいくらか低い声でまさかそんな人間はいないよなと瞳孔の開いた病んだ瞳を全員に向けていく。
感情の昂ぶりで瞳孔が開く者はそれほど珍しくないが、彼女のように病んで見せるためだけにコントロール出来る者は少ないだろう。
いくら美少女と言えども、瞳孔を開いた目で薄い笑みを顔に貼り付

けていれば不気味に見える。
キッチン側のテーブルで女子たちの話を盗み聞きしていた男子たちなどは、七歌のその顔を見てしまってビクリと肩を跳ねさせ、その際にテーブルの裏に足をぶつけたのか痛がっていた。
まぁ、そんな目で見られたところで本当に予定がないので問題はないと思われたが、ここで七歌の瞳に一切怯んでいないアイギスが小さく手を挙げて口を開く。
「あ、わたしは明日八雲さんに会いに行こうと思っています。その結果によっては明後日参加出来ないかもしれません」
「は？　女の友情よりも性欲で男を取ると？」
「性欲に関してはよく分かりませんが、八雲さんの存在は何よりも優先されますので」
男に会うというだけで性欲と結び付けるのは早計だろう。
アイギスは自身の恋心についてはようやく自覚出来るようになったが、その気持ちの変化を当人には伝えていないし、別に伝える必要もないと思っている。
彼女が湊に会いに行くのは純粋に彼を慕っているからで、仮に会えても中学三年時のゆかりや高校一年時のチドリのように純潔を散らす予定はない。
というよりアイギスにはそちらの方面の知識があまりないのだ。
だからこそ、そういった心配はするだけ無駄なのだが、前回全員で集まった話し合い以降に彼とまともに会えていなかったゆかりがどこで約束を取り付けたのかを尋ねた。
「アイギス、有里君と話せたの？」
「いえ、話せていません。テスト期間中は登校していたようですが、今は学校にも来ていないので音信不通です」
ゆかりに聞かれてアイギスは首を横に振って答える。
彼はテストだけ受けに学校へ来ていたが、それ以降はずっと休んでおり、電話もメールも繋がらなくなっている。
一応、時間を選ばないメールは届いているはずだが、その返信がないこともあってアイギスも心配していた。

明日会いに行くのはそういった現状確認もあり。イヴの予定については会ってからじゃないと分からないというのが正直なところだ。

それを聞いた他の者たちはアイギスでも彼と連絡が取れていないのかと少し暗い雰囲気になる。

前回の話し合いで起きた事については美紀にも伝わっており、テスト期間最終日に順平が謝罪した件まで把握している。

ただ、こうやってまた誰とも会わずに何かやっているとなると、彼の事だから無茶しているのではという不安があった。

「あの、有里君はどういう状況なんでしょうか？　皆さんが悩んでいる間、どうやって過していたとかは聞いていますか？」

「わたしは聞いていませんが、栗原さん経由で無気力症の増加が少しだけ減速したことを桐条グループが確認していると言っておられました」

冬になって夜が長くなっているからか、人々の気分は落ち着いていたり暗くなり易くなっている。

その影響かは分からないが無気力症患者は以前の数倍の速度で増加しており、その範囲も首都圏周辺を超えて海外にまで及ぶようになっていた。

無気力症は精神病に分類されており、医療の専門家たちはどうしてこんなにも同時多発的に広がっているのか首を傾げている。

一時期は違法薬物の副作用によって心神喪失状態になっているのではとも見られたが、患者の検査をすればそんな痕跡がないことはすぐに分かる。

よって、今も世界各国で対策について話されているが、自然に回復したと思われている患者に発症時の精神状態などを聞いても何も分かっていないため、具体的な対策も取れぬまま影時間解決まで無気力症は増加すると思われた。

ただ、アルカナシャドウもいない状態で急にその増加ペースが落ちれば、無気力症の真の発症原因を知っている者たちは、誰がシャドウを倒しているかと真っ先に考える。

増加ペースが減少した期間に特別課外活動部はずっと寮にいてタ

ルタロスへは行っておらず、タカヤたちストレガと幾月たちもわざわざシャドウ狩りをするとは思えない。
もしかすると、ほんの気まぐれにベルベットルームの住人たちが出てきた可能性は否定出来ないが、普通に考えれば湊が他の者たちが戦っていない間も被害拡大を抑えるために戦っていたと見るべきだろう。
今の湊は時流操作を使えない。であるならば、夏のような度を超えた無茶はしていないはずだが、それでも一人でずっと戦っているとすれば心配だと美紀は小さく溜息を溢す。
「いくら強いと言ってもやっぱり心配ですし。出来れば一緒にクリスマスを過ごせればと思いますけど、連絡が取れないとなると難しいですね」
「美紀、お前まさかっ!!」
「兄さんは黙っていてください。パーティーで一緒にという話です」
こっそり話を聞いていた真田が思わず立ち上がって声をあげれば、美紀は冷めた目で女子の話に入ってくるなと拒絶し、そもそも二人きりという意味ではないと答える。
確かに美紀は湊に対して淡い恋心のような憧れの気持ちは抱いているが、それは友人たちのように彼を独占したいと思えるほど強い感情ではない。
なので、ここにいる友人らと争ってまで彼とのデートを勝ち取る気はなく、単純に最近会えていないから友人らと共に過したいというのが先ほどの発言の真意だった。
男子らが女子たちの話を聞いていると分かった事で、美鶴やチドリの冷たい視線がテーブル席の方へと向けられれば、真田以外の男子は白々しく本を読んでいるフリや携帯を弄っているフリをする。
それで本当に誤魔化せると思っているなら随分とおめでたい頭だろうが、今はクリスマスパーティーと湊の話なので、脱線し掛かっている話を戻すように七歌が口を開く。
「まぁ、そこら辺は決まってから連絡してくれたらいいや。とりあえず、準備する物とかあるし。アイギスもこっちに参加する体で意見出

して」
「了解です」
恐らくは男子たちも参加したがるはずなので、食べ物などは多めに準備することになるだろう。
そこからアイギスの分を抜くとしても、それは翌日に食べれば良いので問題はない。
明日は祝日なのでアイギスが上手くコンタクトを取れるかという問題は置いておき、ここでパーティーについて決められるだけ決めて、明日の午後にでもいるものを買いに行くため女子たちは計画を詰めていく。
彼女たちは未来を生きることを諦めないと決めた。だからこそ、パーティーについて話し合う少女たちの表情に暗いものはなかった。

第四百話　雪空の下で

１２月２３日（水）
午後――ＥＰ社
十二月も残り一週間。世間は祝日で休みを謳歌しているのだろうが、テスト期間が終わってからは学校に行っていない湊は今日も研究室で作業をしていた。
湊は過去に自分の細胞を基に作ったプロト・フルオーダーを経て、ラビリスとアイギスの生体ボディを作り、さらに自分の腕の予備として生体パーツの義手を製作した。
今もその研究データは残っている訳だが、人工骨格の研究を進めるうちにより優れた素材も手に入っていた。
もっとも、だからと言ってラビリスとアイギスをさらに新しい身体にしようなどとは思わない。
湊の腕は勿論、彼女たちの身体も金属探知機に引っかからない合金製で、本物の骨と同じように多少変形しつつも元の形に戻る形状記憶の特性も持っている。
それでいて強度は人間の骨の数十倍だというのだから、四肢が千切れ飛ぶなどの問題が起きない限りは弄る必要もないだろう。
では、どうして湊が今も生体ボディの研究を続けているかと言えば、単純に自分の生体義手をより高性能に出来ないか考えているかであった。
確かに湊の右腕は生身の腕として使えて、昔付けていた〝三連装アルビオレ・改〟より遙かに高性能だ。
神経は繋がっているし、血も通っている事で脈拍も測れる。湊の本気に近い打撃を繰り出したところで、骨にダメージがいっても強すぎる反動で自壊したりもしない。
ただ、それだけの性能を持っていてもまだまだ生身の左腕に性能で負けているのだ。
とはいえ、ＥＰ社を除いた世界の義肢研究の状況をからすれば、以前作った人間用に改修した三連装アルビオレの時点で数世代先を

行っている技術だ。
　対シャドウ兵装用にパーツを作った桐条グループであっても、人間の義手として転用出来るとは考えておらず、仮に取り付けたとしても神経接続で動くようには出来ないだろう。
（やはり、現状ではこの辺りが限界か。人の身体としては十分なんだろうし、相性に不安が残る以上は新しい素材を試す時間もないしな。残る時間で研究しつつこれで妥協しておくか）
　この会社に入る条件として義肢の研究と開発への援助を求めたシャロンは、転職前に自分が作った世界最高峰の義肢とされていた物がただのマネキンの腕に思えると発言しており、ここでの研究データを応用して作った義肢は三連装アルビオレのさらに数世代進んだ品になっている。
　下手をすれば十世代は先を行っている生身以上の性能を持つ義手。その性能を生身で超えているというのだから、名切りの身体は実に研究し甲斐があるとはシャロンの言だ。
　いっそ通常のクローニングで新しい身体をつくり、その右腕を移植してから活性化した名切りの細胞と血で移植した腕を造り替えた方が手っ取り早いらしいが、自分の腕のために臓器提供用の人間を作る事など出来る訳がない。
　考えるまでもないと却下すれば、シャロンや他の研究員たちも安堵してから嬉しそうに笑っていたので、どうやら目的のために手段を選ばない部分と人命優先のどちらが勝つか僅かに不安を覚えていたらしい。
　別に自分が信用されているとは思っていなかったが、ラビリスの身体を作るときなどにクローンが出来たら、それをしっかりと一人の人間として育てるという話をしていたはず。
　他の者たちもそれは覚えているだろうに、結果をいくら積み重ねても信用しきれない部分があるとは、如何に自分が人間社会に馴染めていないかが分かると内心で溜息を吐く。
（さて、こっちは良いとして〝月の欠片〟の使い道も考える必要があるか）

そうして、中身の成長が終わった培養器を生命維持モードに切り替え席を立つと、湊は作業台の上に置かれていた青く発光する岩石の前に移動する。
岩石の大きさは大人の頭と同程度。これの他に似たような大きさの物が数十個と、軽自動車ほどの大きな塊がいくつかマフラーの中に入っている。
これは復活して現世に戻ってきた際に、エリザベスの力で月面に突き刺した九尾切り丸を回収しようとして剥がれたニュクスの身体の一部だ。
地球に落着していた黄昏の羽根はほぼ回収して十分なストックもあったが、月の表面が薄く剥がれただけの羽根よりも、小指の先程度だろうと結晶状態の方が効果が高いのは誰でも予想がつく。
であれば、折角手に入るのなら持ち帰っておこうと回収しておいた物が、目の前に置かれている青く発光する岩石だった。
(俺の中にある結合した七枚の羽根〝七熾天〟とは違ったアプローチになるが、使える用途は多いはずだ。見た目こそ岩石というか鉱物なものの、黄昏の羽根と同じように情報と物質の両性質を持っている事は分かっている)
湊の中にある結合した黄昏の羽根〝七熾天〟は、羽根の持つ力を増幅する性質をお互いに掛け合うことで、増幅させた力をさらに増幅させるという上限の無い増幅機関になっている。
仮に一枚の羽根が十グラム、七熾天が七十グラムの羽根だったとして、湊の目の前にある岩石が百倍以上ある十キロの塊だとしても、恐らく増幅機能に限って言えば七熾天の方が上だ。
七熾天は湊を想う少女たちが持っていた結合した羽根と、彼自身の持つ羽根が融合して生まれた特殊なもの。
元の羽根とは性質が微妙に変化しており、さらに彼専用に自然と調整されたからこそ最上級の増幅機関になったのだ。
いくら湊でもそれと同じ物は勿論、近い性能の物ですら作る事は出来ないと分かっている。
ただ、それでも〝月の欠片〟と仮に名付けた岩石に使い道があるの

は確実だ。
第一候補としては湊の新しい人工骨格として利用すること。
湊は死を認識出来る。そのためかニュクスとの相性は非常に良く、それを使った物との親和性が高い。
他の者に使うとなると力の制御が利かなくなるなど不安が残るが、青年に限っていえば恐らくそういった事態は起こり得ない。
だからこそ、湊は構造的に弱所となり易い上腕部の神経接続用アタッチメントを排除し、肩まで残っている右腕の骨を外して、肩の関節から先の骨を〝月の欠片〟製に取り替えた新しい腕を付けようかと考えていた。
(関節から入れ替えれば構造的な弱所はなくなる。また、骨が繋がっている事で全てが〝俺の身体〟として認識されるはず。そうすれば、右腕も左腕と同様の性能になってくれるはずだ)
今の右腕でも普通に使う分には問題ないが、それでも出来る限りのことはして戦いに備えたい。
幸いな事に湊の右腕全体の骨格模型は以前作られており、青年の持っている力を使えば岩石状態から骨の状態に加工することは簡単だ。
残っている元々の骨を切除し、新しい骨に交換する作業はシャロンに頼むことになるだろう。
下手をすると骨を交換した時点で湊の肉体と認識され、再生能力を使えば新しい骨に肉付けがされる可能性もある。
だが、しっかりと保険をかけて右腕として培養し、元の腕が残っていて不要な上腕部分は後で切り捨てて繋げる方が確実だと思える。
無論、本来の肉体の一部を捨てる事にシャロンが難色を示す事も考えられるが、その方が湊の元々の身体に近い性能になるといえば恐らく渋々ながら認めてくれるだろう。
そう考えた湊は手に淡い光を纏わせて〝月の欠片〟に手をかざし、干渉を仕掛けると光の粒状態に変化させて自分の右腕骨として再構成してゆく。
合金製の人工骨格を散々作ってきた事もあって、詳細なイメージさ

えあれば道具が一切いらないこの方法で加工出来る分、〝月の欠片〟は素材として優秀に思える。
ただ、それは湊だから出来るのであって、シャロンたち一般の医者や技術者からすれば、データの取りづらい〝月の欠片〟は未知の研究素材以上の価値は今のところないだろう。
（よし。後は培養器に放り込んでおけば勝手に出来るだろう。細かな調整がいらないのは名切りの良いところだな）
名切りの細胞は人間どころかタコやヒトデよりも優れた治癒能力を持っている。
おかげで多少雑な調整をしたとしても、湊の細胞からであれば培養は楽に進むのだ。
よって、慣れた湊は作ったばかりの人工骨格を新しい培養器に放り込み、自分の細胞が定着するよう最低限の調整だけ施すと自動設定にして作業を終えた。
以前よりも早く培養出来るようになっているので、湊の細胞から作れば一週間もあれば右腕は完成するだろう。
仮に全身を作るとなれば臓器の調整もあって一月以上の時間がかかるが、腕は構造もシンプルなので短時間で出来るのだ。
ほとんど思い付きのままに新しい腕を作るのは如何なものかと思うところだが、湊にすればこれまで何度も作ってきた右腕の予備に過ぎない。
作業が終わればここにいる意味はもうないため、湊はロックを解除して部屋を出る。
彼の私的な研究室は幹部であっても立ち入り禁止。たまに湊が一緒にいれば招くこともあるが、それは見られても問題ない研究室であって、先ほどまでいた最上級のセキュリティランクの研究室ではない。
他の者たちもそれらの研究室が存在することは知っているが、所属する際に勝手に立ち入ろうとする者は許さないと忠告済みだ。
おかげで湊の研究室しかないこのエリアには誰も近付かないのだが、研究中は邪魔されたくないからと電源を切っていた携帯を見れ

ば、アイギスから会社まで会いに来るという連絡が入っていた。
以前はゲストＩＤで入ってこられたアイギスたちも、今はそれらが凍結されて自由に出入り出来なくなっている。
となると、会社や研究室には立ち入ることも出来ないので、同じ敷地内にある広場や食堂で待つことになるだろう。
培養器の観察や新しい人工骨格を作っている内に時間も過ぎ、既に夕方を越えて夜と言っていい時間だ。
今日は雪が降るという予報だったので、電車が動いている内に帰すにはすぐ用件を聞くしかない。
こんな時期に一体何の用だと思いつつ、小さく溜息を吐いた湊は地上へ向かうためのエレベーターに乗った。
夜――港区・新興開発地区
チラチラと雪が降り始めるのを見ながら、アイギスは公園のベンチで彼が来るのを待っていた。
白いダッフルコートに深緑のチェック柄マフラーを巻いているが、海に近く雪も降る気温となれば吹いてくる風も冷たい。
だが、生身で感じる初めての冬という事もあり、以前湊を探しに向かったドイツの雪原を思い出しつつ、もう少しだけ待ってみようと彼女は街灯に照らされる雪を眺めている事にした。
音もなく降りてくる雪を見ながらアイギスは彼の事を考える。
最近、彼とは会っていない。電話もメールも通じず、何をしているのかも分かっていない。
期末テストだけは受けに来ていたが、それを最後に学校に来なくなったので、また何か無茶をしているのではと心配になってくる。
もしかすると、自分がいれば他の者たちを惑わせるからと気を遣い。全員がどういった答えを選ぶのか待っている可能性もある。
それならば、既に全員が選んだことを彼に伝えたい。貴方との絆を犠牲にしたりはしないと、自分たちも一緒に最後まで抗い続ける覚悟だと。
もっとも、それも彼が来なければ伝える以前の問題だ。
これまで何をして過していたのか、クリスマスには用事があるの

か、色々と話したい事がある。
だから、どうか来て欲しい。そう思っていれば、石畳に靴底をぶつけて歩く音が聞こえてきた。
普段の彼ならば癖で足音を消していただろうが、今はその必要はないからと編み上げブーツでコツコツと小さな足音を立てている。
オリーブドラフ色のコートに黒いマフラーを巻いて現われた青年は、少女の嬉しそうな笑顔を見て小さく嘆息する。
「……こんな時間まで何してるんだ。風邪を引く前に帰れ」
「八雲さんを待っていました。もう少し待って来なければ帰ろうと思っていましたが、来てくださって嬉しいです」
言いながらアイギスはベンチから立ち上がって湊の前まで歩いて行く。
彼女も別に一日中ここにいたわけではない。湊の都合もあるだろうからと三時くらいにやってきて、それから約四時間ほどここで待っていただけだ。
無論、人によっては十分待ち過ぎだと思えるような時間をここで過していたのだが、結果から言えば彼に会えた以上待っていた甲斐があったと言える。
久しぶりに会った湊の様子は普段通りだ。順平に八つ当たりされて傷ついているだろうと心配していたが、テスト期間最終日に順平から謝罪されたとは聞いているので、どうやら彼自身もその事は引き摺っていないようだ。
「八雲さん、学校をお休みされている間は何をしていたんですか？」
「……別に。会社の仕事と多少タルタロスに潜ってたくらいだ」
「そうですか。あの、今日は八雲さんの予定を聞きたくてきたんです」
湊の言葉を聞いてやはり彼は一人でタルタロスに行っていたのかと納得する。
無気力症患者の増加が僅かに緩やかになったのだ。今の状況で自然に勢いが弱まるとは考えづらい。
となれば、一般人への被害を出来るだけ食い止めようとする青年が動いていると見て間違いないと少女も思っていた。

ただし、今回会いに来た用件とはあまり関係ないので、あまり遅くなるのもどうだろうかと早速アイギスは本題を切り出した。
もしこれを聞き忘れて明日のパーティーに参加すれば七歌たちに怒られるに違いない。
メールでは詳しい用件は書いていなかったので、ここで初めて湊もその話を聞くことになった訳だが、読心能力を切っている状態では流石に詳細まで理解出来ないのか湊は聞き返してくる。
「予定っていつのだ？」
「クリスマス・イヴです。七歌さんたちが寮でクリスマスパーティーをするのでご一緒にどうですか？　大勢が嫌なら一緒にどこかへお出かけするという事も出来ますが」
皆と一緒に初めてのクリスマスを楽しむのはきっと楽しいだろう。けれど、自分の愛する人と二人きりで過すクリスマスが特別な物だという知識も彼女は持っている。
ゆかりがよく読んでいるファッション雑誌には、クリスマスデート特集という記事もあったので、自分と湊ならば何の問題もないだろうと僅かな期待を込めて彼の答えを待つ。
すると、コートのポケットに手を入れたまま立っていた湊は、普段通りの平坦な声で返してきた。
「……俺はいい。君たちだけで楽しんできてくれ」
「何かご予定が？」
「特別何かがあるわけじゃないが、仕事は常にあるからな。小さい病院から無気力症患者の受け入れに関する話も進める必要がある」
「それでは、夜に食事だけ参加するというのはどうですか？　皆さんも八雲さんに会いたがっていました」
湊がＥＰ社を手に入れてまず病院を作ろうとしたのはこういった状況を予想していたからだ。
桐条グループ傘下の病院だけではベッドが足りず、仮に足りたとしても他の病気や怪我で入院の必要がある患者を受け入れる余裕がなくなってしまう。
それを避けるには大勢の患者を受け入れるだけの規模を持った病

院を用意するしかない。
計画するだけなら簡単だろうが、土地の確保や人員を用意するなど莫大な資金が必要になる。
〝久遠の安寧〟を傘下に治めた事でそういった問題を解決し、実際に今も増え続ける無気力症患者を受け入れて社会に貢献しているのを見れば、彼が誰よりも真剣に影時間と向き合ってきたことが分かった。
ただ、それでもいつも無茶をしている彼ばかりに負担が行くのはダメだと、アイギスは短時間でも気分転換するべきだと提案する。
「八雲さんは皆さんが選ぶまで待っていてくださるのかもしれませんが、既にどちらを選ぶか全員が決めています。だから、少しだけその事は忘れて一緒に食事をしませんか？」
湊の雰囲気は普段通りだが、その眼は蘇ったばかりの時より僅かに暗くなっているように見える。
疲れているのか、何か問題を抱えているのか、アイギスには詳しい事は分からないが、それでも仕事ばかりしている彼に心の休息が必要な事は何となく理解出来た。
だからこそ、アイギスが食い下がってジッと彼の事を見つめていれば、相手がいかに頑固でしつこいかを知っている青年は、溜息を吐いてから諦めたように口を開いた。
「はぁ……時間は？」
「六時頃からです。途中レクリエーションを挟みますが、食事をしながらという形ですので、食事をされるならその時間から来ていただければ良いかと。無論、その前にわたしと二人で出掛ける事も可能です」
「……一時間くらいなら買い物に付き合える。クリスマスプレゼントが欲しければ移動時間を考慮しつつ、時間を逆算してここに来い」
「では、三時頃に来ます。着いたら連絡するので、八雲さんはそれから出てきて貰えれば大丈夫です」
湊がこの後も仕事に戻ると分かっているのか、アイギスはＥＰ社からここに来れば良いと明日の待ち合わせについて話す。

もっとも、一時間買い物してから寮に移動するのであれば、待ち合わせは四時ぐらいが適正だ。
それを三時と早めの時間で伝える辺り、アイギスも七歌たちの影響を受けて中々に強かに成長しているらしい。
都内の地図が頭に入っている湊はそういったアイギスの狙いに気付いているが、ここでは何も言うつもりがないのかアイギスを駅まで送るために歩き出す。
「詳しい話は後でメールしてくれればいい。とりあえず、今日は駅まで送る」
「ありがとうございます。では、巌戸台駅までお願いします」
「……寮まで転送してやろうか？」
湊は現在地から最寄り駅まで送るつもりでいたというのに、アイギスは湊の発言を逆手にとって寮の最寄り駅まで送ってもらおうとしてきた。
一体誰の影響だろうかと湊は少し頭が痛くなったが、候補者が多過ぎて特定出来そうにないため思考を放棄する。
一応正解を言っておけば、最初から彼女は一番大切な人に関する事だけは強かだったので、誰の影響というわけで無く完全に地の性格である。
七歌、チドリ、ゆかり、ラビリスなど影響を与えていそうな候補が多い事で気付かなかったが、アイギスが割と本気で言っていると分かっていた湊は、彼女の要望通り……という事は無くＥＰ社の最寄り駅まで送って会社へと戻るのだった。

第四百一話　プレゼント選び

１２月２４日（木）
午後――ショッピングモール〝ミルキーウェイ〟
七歌やアイギスたちとのクリスマスパーティーなどより、仕事やニュクスの分析に時間を使いたかった湊だったが、前日に言っていたように三時前に待ち合わせ場所へ向かった。
理由を付けてドタキャンする手もあったが、もしも、それを実行に移せばアイギスが会社までやって来たことは容易に想像出来る。
アイギスやラビリス用に発行していたＩＤはゲスト用だったため、今はもう使うことは出来ない。
そんな状態でアイギスが湊への面会を求めて突撃してくれれば警備の人間も仕事をしない訳にはいかないので、いくら知り合いだろうと退かないと判断した時点で拘束しに動いていたはずだ。
元対シャドウ兵器の少女が格闘技を修めている程度の人間に負けるとは思えない。
仮に数の力で何とか取り押さえられても、やはりどうするかの判断は湊に求められたはずで、どちらにしても仕事が一時的に中断するなら、この一回で満足させれば良いだろうと最終的に付き合う事にしたのが湊の参加を決めた理由だったりする。
十分前に待ち合わせ場所に着くように移動したが、湊が着いた時には暗いグレーのコートを着たアイギスが待っていたので、青年は冬休み前で暇だったのかと失礼な事を考えたりもした。
勿論、それを本人に告げたりはしていないので、湊が約束通りに来てくれた事を相手は喜び、クリスマスプレゼントを買うためにと近場にあるショッピングモールへと移動してきた。
「随分と賑わっているようですね」
「色々あって便利だからな。適当に見て回れるって事で買い物する場所に選んでるやつが大勢いるんだろう」
二人が来たショッピングモールはＥＰ社が出資して作った施設で、ＥＰ社傘下のブランドや日本でここにしか出店していない海外ブラ

ンドのショップもある。
特定の店を見にいくために予定を立てているでもなければ、適当に見て回るのに打って付けな場所なのは間違いなく、湊の予想はほぼ正解と言って良かった。
アイギスもショッピングモールがどういう場所かは知っており、普段、七歌たち寮生らと一緒に出掛けるのはポロニアンモールである事が多いため、いつもとは違った物と出会えるかもしれないと少々の期待に胸を躍らせる。
今日のパーティーではそれぞれプレゼントを用意し、全員で交換するというイベントを組んでいる。
だが、全員で行なうプレゼント交換とは別に、個人でプレゼントを贈り合ってはいけないというルールは存在しないため、アイギスはパーティー用のプレゼントを探す前に湊への個人的なプレゼントを探そうと彼に欲しいものを尋ねる事にした。
「本日のパーティーでは皆さんでプレゼントを持ち寄って交換するそうです。ですが、個人で贈る事は禁止されていないので、今日は八雲さんへ何かプレゼントしようと思います。八雲さんは何か欲しいものはありますか？」
「……休み、かな」
「……企業の代表であれば、自分の裁量である程度自由に取られればいいのでは？」
戸籍上は高校二年生である青年に何か欲しい物はないかと尋ねて、まさか家事や育児に疲れた主婦のような答えが返ってくるとは思わなかったアイギスは、思わず真顔になって自由に取れば良いのではと言葉を返してしまう。
確かに湊は大企業のトップだ。やる事は多いだろうし、病院の経営もしているとなれば無気力症患者の受け入れに奔走する必要もあるに違いない。
ただ、どれだけ企業が大きくても、代表一人に仕事が集中するのはあり得ない。
企業が大きいからこそ、仮に代表に何かあっても会社が回るように

出来ているはずなのだ。
会社を人の身体で例える事はあるが、代表は脳の中の一部分であって脳全体ではない。
眠っている時に脳の一部は休んでいるが、それで死ぬ者などいないように、湊が休んだって会社も病院もちゃんと回るだろう。
アイギスがその事を指摘しつつ尋ねれば、隣を歩く黒マフラーの青年は以前エリザベスにもらった魔眼封じの眼鏡をかけながら答えた。
「……俺がやった方が早いだろ」
「それはダメな発想です。以前テレビで見ましたが、中間管理職の方やプロジェクトリーダーの方で、下の人間に仕事を振るより自分でやった方が早いと頑張りすぎた方が心の病を患っていました」
「安心していい。仕事中は心を無にしてる」
「むしろ、ダメですが？」
心を無にしても仕事を続けられるなど、それは頭か心が既に麻痺している証拠だ。
湊が心の病になるとは思えないが、だからといって今の状態を続けることは推奨出来ない。
彼が仕事をし過ぎてしまう人間だということは周りも分かっているはず、ＥＰ社で彼のストッパーになれそうなシャロンやソフィアもそれとなく休むように言っていると思うものの、それで止まるようなら彼は世界を敵に回してはいない。
やはり自分が傍にいて今日のように無理にでも休ませなければならない。少女がそのように決意を固めていると、湊は女性ものの服を置いている店の前で立ち止まった。
何か見たいものがあるのだろうかとアイギスも立ち止まれば、湊は彼女の方へ視線を向けて口を開く。
「何か見たりするのか？」
「いえ、特に何かをと決めてはいません。パーティー用のプレゼントはどなたに当たっても良いように性別を選ばない物にしますし。八雲さんへのプレゼントは男性向けの物にする予定ですので」
「……そうか。なら、小物中心に見て回るとするか」

先ほど欲しいものを聞いたときの反応から察するに、湊にあげるプレゼントは選ぶのに時間がかかりそうなので、アイギスはパーティー用の物を先に選んでしまうことにする。
湊自身もその方向で良いと思っているのか、プレゼント向きの小物を扱っている店の方へ歩いて行く。
女性の扱いに慣れているのか、湊はちゃんとアイギスの歩くペースに合わせて進んで行くが、今日はクリスマス・イヴという事もあって混雑していた。
もし、ここではぐれたとしても彼はきっとすぐに見つけてくれるだろう。
風花やチドリなど探知型の能力を持ったペルソナ使いに共通している事だが、彼女たちはペルソナを召喚せずともある程度はその力を使うことが出来る。
特定の施設内で知っている気配を探るだけなら、一分もかからず見つける事が出来るに違いない。
だが、アイギスにとって彼と二人で過すこの時間は何よりも大切だ。余計な事に彼との大切な時間を使うのは非常に惜しい。
だからこそ、はぐれてしまわないようしっかり確保しておくべきだと、アイギスはコートのポケットに手を入れている彼の左腕に自分の右腕を絡ませ、周りにいるカップルのように腕を組んで歩く事にした。
「これではぐれる心配はありません」
「……そうか。歩きづらいだけだと思うが」
「二人の時よりも体積が増したためか、他の方々が避けてくれるようになったので大丈夫かと」
一人でいた時よりも、二人で腕を組んだ状態の方が塊としての体積は当然増えている。
周りからすれば縦にも横にも大きい巨漢が歩いているようなもので、その分、威圧感もあって周りの人も避けてくれているのだろうとアイギスは予想した。
しかし、実際は馬鹿みたいにルックスの整った男女のカップルがい

る事に気付き、思わず視線を奪われていた者たちが慌てて邪魔をしないよう道を開けているだけだ。
二人を見ている者の中には、眼鏡をかけているがあれは〝皇子〟だと気付いている者もいる。
以前、トップアイドルの少女と噂になって以来ゴシップらしい物がなかっただけに、クリスマス・イヴに女性と歩いていれば当然目立つ。
ただ、それに気付いたとしても隣にいる美少女を見れば、やはり彼クラスになるとトップアイドル並みに見目麗しい少女といるのが自然だと思えて、プライベートならそっとしておこうと見て見ぬ振りをしてくれた。
まぁ、仮に二人の写真をマスコミに送った者がいたとしても、不思議な勢力がその会社に圧力をかけてゴシップ記事が世に出ることはないだろう。
頭は良いくせに常識がない事でそういった心配をしていない幸せな発想の二人は、腕を組んだまま進んで目についた雑貨屋のところで立ち止まる。
「八雲さん、パーティー用のプレゼントを探すためにここへ寄っていきましょう」
「……好きにするといい。けど、何を選ぶか方向性は決めてるのか？」
「誰に当たるか分からないので、無難な物に落ち着く予定です」
二人が入った店はタオルやブラシのような実用性のある小物から、スチームパンク風な写真立てなど色々な物が揃っている。
見ているだけでも楽しめるので、アイギスはどれが良いだろうかと手に取って確認しつつ選んでいく。
「じゃあ、ダース売りの鉛筆とかでいいだろ。非常に実用的だ」
「天田さん以外はシャーペンを使っているので、鉛筆はあまり喜ばれないと思います。絵を描かれるチドリさんなら使うかもしれませんが、その場合は画材屋でそれ用の物を選んだ方が良いと思います」
頭用のマッサージ機だというタコを模した商品を見ていれば、湊が遊びのないつまらない物を候補に挙げてきたため、高校生がほとんどなので鉛筆は止めた方がいいとアイギスはやんわり止める。

彼は女性だけでなく子どもたちにもプレゼントを配ったりした経験があるので、真面目に選べば予算内でしっかりと良い物を選べるはずなのだ。
ゆかりと付き合っていた頃にファッションの勉強もしており、今もソフィアの勧めで海外のセレブ向け高級ブランドの流行を把握して服を選んでいる。
本人の感性をメインに選んでも奇抜に見えていない以上、流行を取り入れつつ上品に見せるだけのセンスを持っているのは間違いない。
そんな彼が一ダースの鉛筆をプレゼントに選ぼうとしたのは、間違いなくやる気が無いからだ。
まぁ、仕事をしたがっていた彼を無理矢理に誘い出した事は確かなので、原因となった少女も強くは言えないのだが、それでも貰った人間が彼のセンスを疑うような事態は避けたい。
全力で選べとは言わないが、少なくとも無難な物を選ぶ程度にやる気を出すにはどういった言葉をかければいいか。
棚に置かれている商品を見ながらアイギスが考えていれば、湊は近場にあった物を適当に取りましたといった雰囲気で尋ねてきた。
「じゃあ、これでいいな」
「バスボムの詰め合わせですか。女性も多いですし、実用的でもあるので非常に良いかと」
湊が手に取ったのは五色のボール状入浴剤が入ったギフトセットだった。
それぞれ香りが異なっているようで、気分によって選べる部分も含めて悪くないチョイスに思える。
成分表を見て問題が無いことを確認したアイギスは、最初からこれを選んでくれれば小さく悩まずに済んだのにと思わなくもない。
けれど、これなら男女どちらに当たっても使えるのでプレゼントとして適切だと彼に返した。
「皆さん身体を動かすので、こういった疲労回復アイテムは良いと思います」
「……今月に入ってまともに戦ってないだろうに」

「逆に八雲さんが戦いすぎなんです。確かにわたしたちは悩んでいて、それでシャドウを放置してしまっていましたが、今日のパーティーで皆さんの選んだ答えをお伝え出来るはずです」
湊が選んだプレゼントは後で買う事にして、アイギスも引き続きプレゼントに良さそうな物を探しながら会話する。
パーティーは六時頃から始める予定で、食事やプレゼント交換などを含めれば終わるのは九時頃になるだろう。
そのタイミングで皆がどちらを選んだのか伝えるため、湊には最後まで付き合って貰う事になるが、明日からは七歌たちもタルタロスへ向かう予定だ。
流石に彼のようにほぼ毎日戦うという事は出来ないが、それでもニュクスとの戦いに加えて、幾月やストレガたちとの決着も控えている。
同等の力を持つ敵が殺すつもりで来る以上、こちらも手加減は出来ないがそれでも命を奪うつもりはない。
相手は人間。シャドウのような化け物ではなく、敵には敵の戦う理由が存在する。
それでも、七歌たちも自分たちの求める未来のために戦うと決めたのだ。
「……戦いはきっと厳しい物になると思います。全員無事が望ましいけど、それが難しい事も分かっています」
「なら、戦わなければいい。君たちが何もしなければ、俺が〝終わらせる〟」
棚を見ているアイギスの後ろから淡々とした声で青年が答える。
彼が戻ってきた日の戦いで証明されているが、敵の最大戦力と思われる理と玖美奈を相手にしても湊は一人で勝てる。
そこに幾月やストレガが加わったところで、湊が苦戦するとは思えない以上、彼にとって本当の意味で敵となり得るのはシャドウの王であるデスと母なる存在ニュクスのみなのだろう。
綾時に戦う意思はない事は確認しており、湊もそれが分かっているからアイギスと彼の戦いは止めるに留めた。

けれど、三十一日を過ぎて彼が向こう側に還れば、次に会ったときは綾時の存在は薄れデスになっているに違いない。
決戦となれば特別課外活動部のメンバーも全員参戦しているだろうが、ストレガたちとも戦うとなれば戦力は分散される。
ストレガだけなら巨大ペルソナであるテュポーン以外は一対一で押さえられる。
幾月の力は未知数だが、実際に戦っていたのが理と玖美奈である事を考えれば、幾月がそれ以上の力を持っているとは考えづらい。
であれば、相手と同じワイルドの力を持つ七歌、死亡前の湊とほぼ同等の最大出力を放てるチドリが理たちと戦えば湊とデスの戦いを邪魔する者はいなくなる。
しかし、もし七歌たちが参戦しなければ、湊は制限を取っ払ってストレガたちを全員殺して回り、一人でデスとニュクスを相手する事だろう。
今の湊の力は風花やチドリでも測定しきれない。七熾天のブーストによって文字通り上限無く力を増すのだ。種としての限界を持つ人間など相手になる訳がない。
ただ、相手は神だ。人を超えただけの存在が勝てるかどうか分からない。
そもそも、綾時も湊も戦ってどうにかなる相手ではないと言っていたのだから、勝つための方法があるのかも不明だ。
アロマオイルの瓶を棚に戻したアイギスは、彼の方へ振り返って口を開く。
「わたしたちは、貴方だけに押し付けるつもりはありません。皆、それぞれ悩んだ末に選んだんです。だから、その答えを聞いてください。今夜には話しますから」
「……ああ。分かった」
湊がしっかりと頷いて返せば、アイギスも満足したように笑顔になってプレゼント選びを再開する。
一緒にプレゼントを買いに出掛けている以上、同じような物を選ぶのは避けるべきだろう。

参加者はコロマルを除いて学生ばかり。そして、天田以外は受験生と来年受験生になる者たちなので、ここは勉強の疲れを癒やせるグッズにしようと疲労回復グッズのコーナーへ移動する。
「これなんてどうでしょう？　電子レンジで温めれば繰り返し使えるアイマスクです」
「……まぁ、使える物だとは思う」
「もし、八雲さんが当たれば使ってくれますか？」
「肉体的な疲労はツクヨミやマーリンがいるから回復スキルでどうとでもなる」
言われてみれば確かにそうなのだが、そういう反則での解決法を想定していなかったアイギスは、やや責めるように目を細める。
「そういった力を抜きで考えてください」
「ある物を使わない方が不自然だ。目が良いやつに老眼鏡を渡したりはしないだろう？」
「もういいです。八雲さんに当たらないことを祈ってこれにします。仮に当たったとしても、八雲さん個人へのプレゼントも用意するので大丈夫です」
使えないなら誰かに譲っても構わないので、アイギスはこれにしようと決めてレジへと向かう。
バスボムのギフトセットを持っている湊も後ろからついてきて、プレゼント用の袋に入れて貰ってそれぞれで会計をする。
買い終えた二人は店を出て、手に持っていると邪魔になるからとアイギスはリストバンドの中に、湊はマフラーの中に仕舞い込んでおく。
どちらも行き先は湊のマフラーの中にある異空間なのだが、アイギスが仕舞い込んだ物を湊は取ったりしないので問題はない。
最初の目的を達成した二人は、残り時間を確認しながらさらに移動する。
「では、次はメインイベントであるお互いへのプレゼント選びです」
「……ギフト券でいいぞ。前にそれで随分と喜ばれた事がある」
「今日の八雲さんは小粋なジョークが多いですね。本気であれば勿

論、却下ですが」
施設案内の看板を見ながら金券ショップを指さす青年に、アイギスは間髪入れず答える。
大切な人へのクリスマスプレゼントに金券を渡す人間がどこにいるというのか。
綺麗な微笑みを浮かべるアイギスも、次は怒りますよと視線だけで湊に忠告し、湊に何を選ぶべきかと考える。
無難なところで言えば服やファッション小物になるのだが、ソフィアが色々と口を出して集めさせているのか湊はファッションに関するアイテムは多数持っていた。
黒いマフラーと無の鎧を変化させている靴以外、毎日別の物を身に付けても数年大丈夫なくらいに蓄えがある。
そんな彼に改めてそういった品を贈っても意味がないように思えるので、アイギスは非常に難しい問題だと悩んだ。
「八雲さんは服を沢山持っていらっしゃるので、そういった物は避けるべきですね。面白い雑貨や家電などが狙い目でしょうか」
「まぁ、何でもいいが。アイギスはバッグと財布と靴ならどれがいい？」
「特に拘りはありませんが、強いて言えばバッグでしょうか。あと、これは独り言ですがわたしの左手薬指のリングサイズは六号です」
「……知ってるよ」
鞄や財布など定番のプレゼントを贈ろうと思っていた湊に対し、アイギスはシレッと素敵なリングが欲しいと伝える。
彼女の生体ボディを作ったのは湊なので、人工骨格から計算した指の太さも分かっている。
人間と違って骨がほとんど変形しない以上、作ったばかりの頃の指の太さから変わっていないとすれば、少女のリングサイズは青年もしっかりと把握出来ていた。
年配の方だけでなく、同世代の女子たちからも羨ましがられる細くて長い指。
そこにシンプルながらも拘りを感じる上品なデザインの素敵な指

輪が光っていれば、個人的には大満足なのだがとアイギスはチラチラと彼に視線を送った。
そんな視線の意味を理解しつつ受け止めていた青年は、小さく溜息を吐くと移動するぞと少女に声をかける。
「……女性物のバッグを扱っている店はあっちだ」
「そうですか。ジュエリーショップは少し外れた場所のようですね」
「流行色も良いが、やはり個人の好みもあるからな。容量やデザインで気に入った物があれば言ってくれ」
「青い石が好きです。八雲さんの魔眼の色が密かに綺麗だと思っていまして」
会話をしているようで噛み合っていない二人はお互いに頑固で中々譲らない性格だ。
基本的には大人の中で過してきた湊が問答する時間が無駄だと折れる事もあるが、プレゼント選びに折れる必要はないため彼も譲らないだろう。
そういった時には原始的な解決法を取る事もあるのだが、ここは大勢の人間が集まっているショッピングモール。
武力を持って相手を屈服させるにはギャラリーが多過ぎる事は二人も分かっている。
故に、別の比較的平和な手段でお互いに解決を目指すだろう。
ここを出るまでまだ一時間以上の猶予がある。二人は移動しながらどういった手段で自分の意見を通すか考え続けた。
そして、とある解決策によって勝敗が決すると、二人はお互いへのプレゼントをしっかりと買ってから他の者たちの待つ巌戸台分寮へ向かった。

第四百二話　彼女たちの選択、彼の選択

夜――巌戸台分寮

世のカップルたちがデートに勤しんでいる頃、巌戸台分寮では女子が中心となってクリスマスパーティーの最終確認を行なっていた。

急遽決めた割りには全員が乗り気で準備も滞りなく進み、寮の入口横にあるカウンターの前にはそれなりに立派なクリスマスツリーが置かれている。

「もうすぐアイギスたち着くってさ！　料理の盛り付け始めちゃって！」

「了解！　さぁ、男子どもチャキチャキ働くのだ！」

携帯に届いたメールを確認したゆかりがキッチンに向けて声をかけると、七歌が返事をして大皿に盛り付けた料理を男子らに渡してゆく。

料理を作ったのは七歌・美紀・ラビリス・荒垣がメインで、他の女子たちも手伝ったりはしたが、男子たちは基本的に部屋の飾り付け担当になっていた。

どちらが大変かは個人の能力によるだろうが、料理を作って貰ったなら運ぶのは自分たちの仕事という認識があるのか男子たちは文句も言わず大皿をテーブルへと運ぶ。

用意した料理は洋風、和風、中華にエスニックと多国籍だ。

クリスマスの本来の意味を考えると、最早何のために祝おうとしているのかも分からないが、日本において宗教行事というのは企業が儲けるための口実であり、また市民らが日常を忘れ騒ぐための理由付けである。

何せ自国の宗教である神道のトップが生まれた日には何もしないのに、その翌日にある海外発の宗教の前夜祭は祝うのだ。信心などある訳がない。

ここに集まっている者たちもそれは同じで、全員が揃うまでに準備を終えるぞと忙しなく動き、物置から出してきたテーブルも繋げて用意した長いテーブルに次々と皿が置かれていった。

そうして、後は二人の到着を待つばかりとなったところで、入口の扉が開くとつまらなそうな顔の青年と腕を組んだ笑顔の少女がエントランスに入って来た。
「すみません、遅くなりました」
「謝る気があるなら八雲君と腕組んで入ってくるんじゃねーよ、タコ助!!」
青年に体重を預けるように身を寄せ、普段より美少女度が数割増しになって微笑んでいるアイギスに向けて、ぶっ殺すぞテメェと七歌はトナカイカチューシャを投げつける。
今日はみんなでクリスマスパーティーを楽しむために集まっているが、今回の催しは一昨日決まった突発的なイベントである。
それに寮生やその関係者たち全員が参加しているという事は、逆を言えば誰一人として予定がなかったという事だ。
世間では、カップルや意識し合っている男女などが共にすごし、心の距離を縮めていたりするというのに、年頃の少年少女が十数人もいて一人もそういった話がないとは何とも色気のない集団である。
ただ、全員が同じ条件であれば、傷の舐め合いかもしれないが、仲間意識が芽生えて心地よい一体感すら覚えるようになる。
自分たちは最高の仲間。その仲間と一緒にすごすパーティーなら世の中のカップルのクリスマスデートにだって勝るとも劣らない。
そう信じていたのに裏切り者が出れば誰だって怒って当然だと、七歌が投げたトナカイカチューシャがアイギスに向かって飛べば、アイギスは湊の左腕と組んでいる右腕はそのままに自身の左手だけで器用にそれをキャッチした。
上手くキャッチされた七歌は悔しげに舌打ちをする。
だが、その一連の流れを見ていた女子たちは、トナカイカチューシャをキャッチしたアイギスの左手に見慣れぬ物が輝いている事に気付く。
最初に反応したのは今も腕を組んでいる二人に対し胸中穏やかでないゆかりだ。
「アイギス、左手の指に嵌まってるそれって……」

「これですか？　八雲さんにプレゼントで戴きました」
尋ねられた少女は満ち足りた表情で左手薬指に嵌まった指輪を皆に見えるようにかざす。
上品なプラチナのリングに、深い蒼色の小さなブルーサファイアが埋め込まれており、それを見た女子たちは青年の持つ魔眼の色を咄嗟に思い出す。
恐らくアイギスもそういった事を考えてその色の宝石を選んだのだと思うが、どう見ても非常に高価な指輪をクリスマスプレゼントとして贈られ、それが左手薬指用だとなればその意味も想像がつく。
けれど、確認するまではあくまで疑惑。彼に限ってそんなはずはないと緋色の髪をした少女が裏切り者の可能性がある少女に低い声で尋ねた。
「ねぇ、それ付ける指間違ってるわよ。もしくは、左手じゃなくて右手でしょ？」
「いいえ、ここで合っています」
「……どういう事？」
「ご想像の通り、〝そういう事〟です」
皆で楽しくクリスマスを過そうという話だったが、集まっている女子のほとんどが想いを寄せている青年を掻っ攫っていった裏切り者の登場によって場に緊張が走る。
天田はともかく、真田や順平など男連中は湊に視線を向け、タイミング考えろよと責めるように見ていた。
アイギスは勿論、湊もアイギスをあれだけ大切に想っていたのだから、二人がそういった関係に落ち着くことは十分にあり得た。
けれど、今日はこれまでの慰労と最後の戦いに向けた決起集会としての意味合いもある集まりだった。
だというのに、人間関係で一番ややこしくなり易い男女関係で問題を起こすとは、これではパーティーを楽しむどころではなく、新たな争いが勃発しかねない。
女性陣で最も中立な立場をとれる美鶴が怒気を発する女子たちを宥めようと口を開きかけては、恋愛経験ゼロが足を引っ張ってか何を

言えばいいのか分からず口を閉じる事を繰り返す。
　また、妹が幸せなら譲ってもシェアでも良いと言っていたラビリスも、アイギスと湊の交互に見てから何か言おうとするが、第三者が言うよりも当事者が話した方が早いと思ったのか湊が口を開いた。
「……この指輪はアイギスが強請ったから買っただけだ。アクセサリーならともかく指輪を買うつもりなんてなかったのに、以前した言うことを一つきく約束を使って左手薬指用の指輪を要求してきた。まぁ、気に入っているなら別に良いが、それ自体に親愛以上の深い意味はない」
「あ、どうして言ってしまうんですか！」
「料理が冷めるからだ」
　アイギスはライバルたちを牽制するためにわざと意味ありげに言ったが、実際はドイツでの一騎打ちで保留になっていた約束を理由に買わせただけだった。
　もし、それが無ければアクセサリーならピアスかネックレス辺りを買っていたし、アクセサリーを離れて服や鞄に家電用品を買っていた可能性だってある。
　既にテーブルに料理が並んでいる事から事態の収拾を優先した湊がそれを告げれば、他の者たちも料理のことを思い出したのか動き出す。
「あ、そうだった！　八雲君はともかくアイギスは荷物置いたり着替えたりがあるんだから早く行ってきて！　で、八雲君は手土産って話だけど料理かデザートで出して貰うタイミング変わるんだけど？」
「一応、どっちもある。料理は寿司だが、被らない物ならもう何品か出せる」
「ほーん。手作り？　それとも虎膳？」
「……面倒だから自分で握ったやつだ」
　虎膳とは以前アイギスがお土産に持って帰ってきた江戸前鮨の有名店の名前だ。
　ただ、一見さんお断りなだけでなく、そもそもお持ち帰りはやっていないので、湊のように昔からの知り合いで余程気に入られていない

限りは二度と来るなと言われて終わりである。
　そんな店の寿司を持ち帰り出来る希有な存在である青年ではあるが、流石にこの人数で食べる量を握って貰うのは無理だと思っていたので、今回持ってきたのは彼が事前にストックしていた自作の寿司だった。
　着替えるためにアイギスが去って行くと、湊はマフラーからそこそこの大きさの寿司桶を三つ出し、それらを七歌に渡して自分は脱いだコートをマフラーに仕舞って過しやすい格好になる。
「おぉ、見事なネタの光り具合。改めて無駄に高いスペックですなぁ」
　七歌も育ちが良いこともあって寿司の善し悪しは見ただけで分かる。
　他人が食べる物を料理するときには基本的に手を抜かない青年が握っただけに、手土産の寿司はネタの状態は最高といって良く光って見える。
　鮮度が命のネタは新鮮なまま活かし、旨みを求めるネタはしっかりと熟成させてから使っている。
　これは食べるのが楽しみだとテーブルへと移動させ、風花や美紀に醤油の皿とワサビの準備を頼む。
　その間に湊は手を洗って戻ってきて、着替えたアイギスも戻ってきた事で全員の準備が整った。
　席順は特に決めていないが湊の隣を狙う者がいることは容易に想像出来るので、彼を入口に近い下座に座らせ他の者たちは適当に席についてゆく。
　それぞれの手に持ったコップにジュースが注がれている事を確認し、準備は良いなと一同を見回した七歌が立ち上がって音頭を取る。
「よーし。それじゃあ、パーリィーの時間だぁ!!　メリークリスマースッ!!」
『メリークリスマース!』
　本来はマナー違反な行為に当たるが、学生のホームパーティーならば関係ないとコップをぶつけて乾杯する。
　そして、ジュースを少しばかり飲めば、ここからは楽しい戦いの時

間だとばかりに七歌は皿を持って料理を取りに手を伸ばした。
「しゃあっ、エビフライもらったぁ!!」
「オレっちは大トロとウニをゲットだぜ!!」
「ちょっ、こら、意地汚いことやめなさいよ!」
七歌に続いて順平まで他の者に先んじて狙った料理を素早く確保した事で、流石に行儀が悪いとゆかりが注意する。
料理は十分に用意されており、足りなくなる事は恐らくない。
まぁ、ほぼ際限なく食べる事が可能な湊の事は考慮していないが、この場にいる人数より五人前以上多く用意している事を考えれば十分と言えるだろう。
仮に足りなくなっても湊が後から追加で出せるとも言っているので、小学生の天田がいる前で大人が意地汚い事をするなと叱りつけるのはある意味当然だ。
美鶴は苦笑し、真田や荒垣は呆れたような顔をしているが、彼らと近い位置に座っている順平がさらに高級な寿司ネタのものを取ろうとすると慌てて動いた。
「順平、寿司ばかり食うな!」
「つか、テメェ狙って高いやつばっか食おうとしてるだろ!」
「誤解っすよ。ほら、寿司は乾いたらマズくなるから先に食べようとしてるだけっす!」
それを言うのなら他の料理も冷めれば不味くなるだろう。
すぐに順平の嘘を見破った二人はアイコンタクトで連携して妨害し、順平には寿司が回らないように動く。
離れた位置にいる湊の周辺に座っている女子たちは馬鹿かと呆れ、自分たちは関係ないとばかりに彼らの存在をスルーして食事を楽しんだ。
＊＊＊
主な食事やミニゲームなどの催しも終わり、残るはデザートであるケーキを食べれば終わりという段階になった。
既に全員がゆったりと雑談をする空気になっており、手分けして用意した紅茶やコーヒーが各自の前に置かれてゆく。

ほとんどの者は紅茶で、コーヒーは湊くらいのものだったが、七歌たちが買ってきたケーキに加えて湊の持ってきたケーキもあったため、大きめの皿に各一切れずつ載せられて配られる。
七歌たちが用意したのは定番のイチゴのショートケーキ。上には砂糖細工のサンタなどが乗っている。
対して、湊が持ってきたのはチョコベースのブッシュドノエル。こちらもクリスマスには定番のものと言えた。
まぁ、湊の場合は様々なケーキを収納しているので、被らないように選んで出したのだが、女性陣が主に喜んでいるのでそれで正解だったのだろう。
全員に飲み物とケーキが配られ、冬休みの予定などを話すかと思いきや、メンバーたちはケーキに手を付けずに湊に視線を集める。
他の者たちに見られている青年は構わずコーヒーを飲んでケーキを食べ始めるが、何か話があるというのは分かるので視線だけは他の者たちにも向けていた。
すると、一同を代表してかチームの指揮官である七歌が湊に声をかけた。
「八雲君、綾時君との約束の日までまだあるけど、全員が答えを選んだからそれを聞いて欲しいの」
「……そうか」
言ってみろとコーヒーに口をつけつつ先を促す湊。
実際のところ、湊は彼女たちの選択に興味は無い。
他の者は選択によっては記憶を失うが、どちらを選んでも彼が戦う事だけは確定しているのだ。
ここで全員が戦いを降りると告げたとしても、悩んだ末に選んだ答えならばこれまでの戦いを労って別れることが出来る。
もっとも、そういった答えには到らなかったようで、集まっている者たちの瞳には先日まではなかった決意の光が宿っていた。
これならば聞くまでもないと思いつつも、湊が答えを待っていれば七歌がしっかりとした口調で話す。
「私たちは、綾時君を殺さない」

「……その先に待っているのが絶望だとしてもか？」
「うん。私たちはニュクスと戦う。生きることを諦めたくないから」
自分たちは勿論、大切な人たちが死ぬのなんて絶対に嫌だ。
それを阻止する可能性が僅かにでもあるのなら、自分たちは最後の最後まで諦めたりはしないと七歌は言った。
集まっている者たちもそれに頷いているので、どうやら全員の覚悟は既に固まっているらしかった。
あの日、ニュクスは戦ってどうにかなる存在じゃないと伝えたというのに、こうまで諦めが悪い者ばかりだと逆に感心してしまう。
本当に最後の瞬間までその気持ちを維持出来るかは分からないが、選んだ答えがそれで良いなら分かったと湊もケーキを食べながら頷いて返す。
「そうか……まぁ、どうでもいいが」
「ちょっ、それ、言い方っ」
自分たちが数週間悩み抜いて選んだ答えを、本気で興味がないように言われてゆかりが思わず突っかかる。
他の者たちも彼のリアクションに微妙な顔をしているが、話は済んだという事でケーキを食べつつ、湊がいなかったことで詳しく聞けなかった今後の話などをするため美鶴が尋ねた。
「有里、改めて確認しておきたいんだが、君はニュクスがどういった相手か知っているのか？」
「ええ。死後の世界で実際に相対した事もありますし。死の概念を理解している関係で俺の精神の一部は常にニュクスに触れている形になるので、相手がいつ目覚めるかも感覚で分かります」
「触れている？　それは、大丈夫なのか？　その、精神の浸食などはないのかという意味だが」
「問題ないです。触れているとは言いましたが、イメージは観測者に近いので」
湊の魂は基本的には肉体と同じ世界に存在する。
チドリの蘇生で命を燃やし尽くした時には肉体を離れてしまい。そのまま、〝あの世〟と呼べる世界に移動してしまったが、肉体が現

世にあったとしても時間経過で復活した可能性はあった。
そんな現世と常世を行き来可能な魂を持つ青年ではあるが、死を理解したことで綾時を介さずにニュクスと〝縁〟を結んでしまっている。
あちらから湊に干渉してくる事はないものの、湊自身も相手の存在を感じる以上の事は何も出来ない。
ニュクス復活までの時間をほぼ正確に把握出来る事が利点と言えば利点だろうか。
また、観測者として魂がニュクスの存在を感じ続ける事で、死に近付く事により上昇する適性値が今尚増え続けている事もその恩恵の一つと言える。
デメリットらしいデメリットはなく、強いて言えば死を理解する事で精神に異常をきたすくらいだが、湊にはほぼ関係が無い話なので彼にすればニュクスとの繋がりは得しかない。
それよりも、ニュクスと戦うと決めたのならば、問題となるのはニュクスを討たせまいと立ち塞がる存在だと湊は続ける。
「……ニュクスの先兵と言えるデスだが、完全体となったそれは俺とほぼ同等の攻撃力を持つ。十二体のアルカナシャドウの力と経験も吸収しているので、お前たちの力は把握されていると思っていい」
「マジかよ……。けど、同等なのが攻撃力だけって、耐久力だとか他の能力はシャドウであるあっちが上ってことか？」
「逆だ。俺には盾を含めた防御技があるけど、デスは壊すことしか出来ない。だから、ペルソナを使って戦えばまず間違いなく俺が勝つ」
アイギスが彼と戦った日に見たデスの姿を思い出し、順平は確かにとんでもなく強そうだったなと勝手に一人で納得しかける。
綾時と一緒にタルタロスへ行っていた順平は相手の強さを十分知っている。
使っていたペルソナはタナトスだけながら、その強さはワイルドの力を持つ七歌以上であったことは間違いない。
そのため完全体となったデスの方が湊よりも強いと予想した訳だったが、デスはニュクスの力を誰よりも濃く受け継いでいるため、

力の性質が破壊に寄っていてセイヴァーの盾のような防御に特化した技を持っていない。
もっとも、通常のシャドウがニュクスの力の数十億分の一以下の力しかない欠片であるのに対し、デスはニュクスから直接分かれ権能を一部受け継いでいる神に最も近い存在である。
元から有している力の規模が違うために、並みの攻撃では直撃してもダメージを与えられないだけの耐久力を持っており、防御に特化した技などそもそも必要ないという事情もある。
その事を伝えれば、湊の方が強いと聞いて安心していた者たちも顔を顰め、デスに加えてストレガたちの相手もするとなれば誰が誰の相手をすべきか非常に難しいと七歌らも悩み始めた。
「うーむ。幾月の力はよく分かってないけど、少なくとも沙織と理っていう航空戦力が二人はいるんだよね。そこを八雲君に抑えて貰うとすれば、デスとストレガたちは完全に私たちで当たる訳かぁ」
「あのデカいペルソナの相手すんなら、俺やアキみたいな物理向きのやつが行く必要があるだろ」
「シンジの言うことも分かるが、俺はカズキとかいうパーカーの男と決着を付けたい。勿論、殺すつもりはないが、落とし前を付けさせないと気が済まない」
巨大なペルソナであるテュポーンは通常攻撃だけで物理スキル並みの威力を出してくる。
魔法スキル主体のペルソナではスキルを放つ前に攻撃され、恐らくまともに戦う事も難しくなると予想される。
それを考えて荒垣は自分たちが相手をした方がいいと提案したが、真田が別の人間と戦いたいと返した。
影時間の戦いは遊びではない。誰とやりたいなどと自由にさせる訳にはいかず、普通であれば美鶴や七歌も真田の意見を却下するところであったが、彼が口にした落とし前という言葉でどうしてカズキと戦う事を希望したか理解出来たため、確認の意味も込めて美鶴が尋ねた。
「明彦、お前がカズキと戦いたいのは美紀の件が理由か？」

「そうだ。確かに美紀は助かった。危険な影時間に関わる原因となった適性は失ったまま、有里との思い出を含めた影時間の記憶も戻ってきた。状況的に言えば以前より今の方が安心出来るが、有里に頼めば危険もなく適性を捨てる事は出来ただろう」
「ふむ。復讐ではなく、あくまで落とし前を付けさせるだけだな？」
「ああ。ただ、骨の一、二本は覚悟して貰うぞ」
「こちらを殺しにくる相手にその程度は十分許容範囲だ」
　相手は裏稼業で人を殺してきた人間だ。こちらを殺す気で襲ってくる敵を相手に、怪我をさせないようにと気を遣ってはいられない。
　真田の様子から復讐の黒い感情は見られないと判断した美鶴が頷いて返し、出来る限り少年の希望に沿うように作戦を立てる事を約束する。
　となれば、荒垣の他に誰がテュポーンを抑えに回るかが問題だが、そういった話を進めようとしたタイミングで、何やら微妙な表情を浮かべたゆかりがストップをかけた。
「ってか、今日はクリスマスパーティーですし。そういう話は明日以降にしません？」
「まぁ、確かに今話しても一緒やしな。ウチもゆかりちゃんに賛成やわ」
「八雲さんが用意してくださったケーキがとても美味しいです。戦い事ばかり考えて上の空で食べるには勿体ない味かと」
　ゆかりやラビリスたちに指摘されたメンバーたちは、確かに戦いのことばかり考えてケーキを味わえてなかったと反省する。
　しっかりと目の前のケーキに集中して味わってみれば、成程確かに極上の味だと思わず頬が緩んだ。
　これを前に物騒な話をしていたとは、気付かぬうちに最後の戦いを意識して余裕を失い始めていたのかもしれないと美鶴も苦笑いを浮かべる。
「ああ、確かにこれは考え事をしながら食べて良い物ではないな。すまない、八雲。せっかく用意してくれたのに失礼な事をした」
「羽入がよくねだってくるから作って置いたストックの一つですし、

別に気にしてません」
七歌たちが用意したケーキは美鶴がスポンサーになっている。なので、それが近所の商店街にあるケーキ屋で買ってきたものだと知っていた。
一方、湊が用意したのは全て彼が金銭の負担しているため、こんなにも上等なケーキを用意してくれたのに申し訳ないと謝った訳だが、無意識に湊を名前で呼んだ美鶴は聞き逃せない単語が混じっていた事で驚きながら、先ほどの言葉が聞き間違いでないか改めて確認を取る。
「こ、これは君が作ったのか？」
「あぁ、そういえば前に私の誕生日にケーキ作ってきた事あったね」
「湊君、基本器用やからね。かすみちゃんとかに頼まれてケーキ作ってたから慣れてるんよ」
本人は何も答えなかったが、代わりにゆかりとラビリスが答えた事で、皆の前にあるブッシュドノエルが湊の作った物であると確定する。
舌の肥えた美鶴も満足出来る味に、見た目も売り物としか思えないほど美しかった。
一つ下の後輩に頼まれてケーキを作るのも珍しいが、そのクオリティがプロ並みである事には驚きを超えて、むしろツッコミ所かと思ってしまう。
美鶴以外にも男子連中などが信じられないという顔で湊を見ているので、美鶴だけがこの特技を知らなかった訳ではないようだ。
料理と製菓は共通する部分もあるが、やはり異なる技能が求められる。
子どもに頼まれるくらいでプロ並みのケーキを作れるようになるのは才能の無駄遣いに思えるが、実際にこうやって食べてみるとその道で生きていけばいいのではと思ってしまう。
普段は背伸びして大人ぶっている天田も、美味しい物の前では笑顔を隠せないのかケーキを頬張りながら呟いた。
「これだけ作れるなら将来ケーキ屋とかになれそうですよね」

「……仕事で使えるから習得した技術だ。本職でやる気は無い」
どれだけ他人から羨まれるような才能であっても、湊にとっては裏の仕事で使えるかもと習得した技術の一つでしかない。
毒殺は依頼人からの指定が無い限りは使ってこなかったので、料理に毒を盛ることはなかったが、彼の料理はそういった使い方も考慮されて用意していたものである。
本職の人間が聞けば激怒しそうな内容だけに、湊本人もその道に進む気はなく、それを聞いた他の者たちは少々勿体なさそうな表情を浮かべる。
ただ、こうやって自然に将来の事を話せるのはいい時間だと、他の者たちも高校卒業後の進路やどういった仕事に就きたいかを話し始めた。
ニュクスに勝てば未来は続く。だからこそ、自分たちは将来の事もしっかり考えていくんだと、メンバーたちは笑顔でお互いの夢や希望を語り合うのだった。

１２月３０日（水）
影時間――ムーンライトブリッジ
七歌たち特別課外活動部とその仲間であるチドリらが共にクリスマス・イヴを過してから約一週間。
首に黒いマフラーを巻き、ベルトで身体の左右に太刀を吊した青年が一人静かに歩いていた。
緑色に塗り潰された不気味な空の下、かつん、かつんと静かにブーツの底を鳴らし彼は進む。
海の方から流れてくる風で揺れる長い髪を、青年はマフラーから取りだした紐でまとめて結い上げていく。

器用に頭の後ろで髪を結い。その間も橋の上を歩きながら、彼は橋の中央を目指した。
進むにつれて心が冷えていく。感情が削ぎ落とされていき、小狼として仕事をしていた時と同じ雰囲気を纏う。
自分は定めた目的を達成するための機械であると。思考と感情を切り離して、目的を遂行するために最善の状態に到るように自己暗示を掛ける。
そうして、静かに歩き続け、橋の中央辺りまでやって来れば、青年の視線の先に一人佇む少年の姿が映った。
相手もやってきた湊に気付いたようで、黄色いマフラーを揺らしながら微笑みかけてくる。
「やぁ、久しぶり」
およそ一ヶ月ぶりの再会。友人である湊の顔を見た綾時は、嬉しそうに笑って挨拶をしてきた。
だが、ただ一人の友人からの挨拶に湊は何も返さず、一定の距離を開けたところで立ち止まると、静かに息を吐いて〝蒼い瞳〟を相手に向けた。
「……デス、お前を闇の皇にはさせない」
〝闇の皇〟、それは以前幾月が七歌たちに語った預言書に書かれていた内容だ。
滅びを導いた〝闇の皇子〟は人々に救いを与えた後、〝皇〟となって新世界に君臨する。
幾月はそれがデス自身の事を指しているとは気付かなかったようだが、湊はニュクスが現われるまでの流れからその預言がデスの事を伝えているんだと気付いた。
だからこそ、湊はそれを止めると純粋な殺意の籠もった瞳を向けて綾時に言い放った。
友人から向けられた瞳と言葉の意味を理解するのにそう時間はかからず、こうなる事は分かっていたのか悲しげに笑ってから表情を引き締め、湊と同じように冷たい瞳になって言葉を返す。
「なるほど。なら、僕も役割に沿った対応をしよう。……百鬼八雲、君

の存在は危険だ。君のその瞳は、力は、我らが母なる存在を殺し得る。ニュクスの子として、君を生かしておくことは出来ない」
言い終わると同時に綾時は何もない空間から長大な西洋剣を呼び出し構える。
それに呼応するように湊も左右の腰に下げた太刀を抜き、両手に持って構えて告げた。
「十年前の戦いに決着を付けよう――――デス、お前を殺す」
言い終わるかどうかのタイミングで湊は地面を蹴って駆け出し、それを見ていた綾時も駆け出し相手に接近すると両手で持った剣を振り下ろす。
人型の状態のまま発揮される綾時の持つシャドウとしての力、その渾身の一撃を交差させた二刀で湊が受け止めると、甲高い音を立ててぶつかり合った武器からは激しい火花が飛んだ。

第四百三話　二人だけの戦い

影時間――ムーンライトブリッジ

火花を散らしながら武器が衝突した直後、両者は弾かれるように後退する。

青年は後ろに飛んだ勢いが止まる前に右手の太刀を素早く鞘に戻し、止まったときには既にマフラーから白銀の大型拳銃を抜いて撃てる状態になっていた。

一方の少年も人型であってもスキルは放てる。同じように後ろに飛ばされた時点で左手の中に力を集め、路面を滑っていた足が止まった時には直径三十センチほどの黒い球体がその手にあった。

青年が引き金を引けば辺りを照らすほどの光を発しながら弾丸が飛び出す。

少年はそれとほぼ同時に黒い球体から人の腕ほどの太さを持つ熱線を放つ。

右手と左手、鏡合わせのように放たれた攻撃は、互いの中間地点で交差した。

本来、シャドウやペルソナの放つスキルは超常の力を宿すため、継戦能力や再現性を除き、通常兵器よりも強く圧倒する事が出来る。

けれど、ペルソナ使いには自身の適性の高さにより、扱う武器に対超常の力を付与する特性があった。

湊の持つ適性は既に人の域を超えている。その身にニュクスの欠片である結合した黄昏の羽根を宿し、さらにはニュクスと同格の神と魂の融合を果たしている。

ニュクスの子であるデスも力を取り戻した以上、ニュクスに次ぐ神格を得るだけの適性値を持っているが、力を際限なく増幅可能な湊には及ばない。

故に、現代科学で作られただけの合金製の弾丸であっても、その力はシャドウらの放つスキルと同じだけの力を宿し、黒き熱線の一部を貫通して綾時へと迫った。

もっとも、いくら威力があろうと点での攻撃でしかない弾丸と違

い。綾時の放った熱線は一部を貫通されようが込めた力の分だけ放たれ続けて湊へと迫る。
お互いに相手の攻撃は見えている。そして、こうした結果になるとも分っていたのか、両者は片手に持った武器を横薙ぎに振り抜いた。
魔眼の力によって存在を殺され霧散する熱線。
シャドウの剛力によって強引に弾かれる弾丸。
それぞれの攻撃が防がれ場に静けさが戻れば、両者は再び武器を持って敵を屠らんと向かっていった。

――タルタロス
今年も残るところあと一日。
この影時間が終われば、綾時が来る当日という事で、七歌たち特別課外活動部はチドリたちと共に『戦い納め』として今年最後のタルタロス探索へやってきていた。
クリスマスパーティー以降、七歌たちは積極的に探索に出ているが、敵として立ちはだかるであろう幾月たちの姿は見ていない。
それが逆に不気味に思えてならないものの、何かあれば桐条グループの方からも連絡が来ることになっている。
であれば、自分たちは影時間の中で敵が襲ってこないかを警戒し、それ以外は自分たちの力を鍛えていればいいと大晦日直前まで戦いに来たのだ。
一階のエントランスにやってきた一同は、最初に風花が上層の様子を探るため、その間に装備と陣形を確認しておく。
また、時々七歌がベルベッドルームへ行ったり、湊が台座に差し込み直してしまったエクスカリバーを抜こうと試みたりする事もあるが、風花の索敵自体はそれほど時間が掛かる物ではない。
故に、全員がいつでもいけるようすぐ準備を整えようとした時、ユノの中で索敵していた風花が焦った表情でペルソナを消して全員に声をかけた。
「皆さん、大変です！」
元々色白の風花だが、その分、顔色が変わればはっきりと変化が分

かるようになっている。
今の彼女は顔が青くなっていると言えばいいのか、血の気が引いて病的な白さになってしまっている。
ただ事ではないと判断した美鶴がすぐに駆け寄り、一体何があったと話を聞く。
「どうした山岸。何があった？」
「いま、上層を見ようと思って力を使ったら、近くに大きな力の反応があったんです」
「イレギュラーシャドウか？」
「違います。大きな力は二つ。ムーンライトブリッジで、有里君と綾時君が戦っているんですっ!!」
叫ぶように伝えた風花の言葉に全員が唖然とする。
綾時が来るのは明日のはず、なのにどうしてそれが湊と戦っているか。
彼は湊の眼ならニュクスを殺し得ると言っていた。それを危惧して襲ったのかと考えるが、彼自身は何もせずに死を選ぶことを勧めていた。
そんな彼が今更湊一人をどうこうするとは思えないし、したところで意味がない。
湊自身もニュクスを殺しても問題の解決にならないと言っていたし、綾時が七歌たちに勧めた選択肢は彼を殺せる湊がいて初めて選べるものである。
両者が争うだけの理由が思い付かず、しかし、このまま放っておくわけにも行かないと判断した七歌たちは今日の探索を中止してムーンライトブリッジへと急いだ。

――ムーンライトブリッジ
綾時は空中に作った五つの黒い球体から連続で熱線を放って湊を牽制しながら考えていた。
どうして彼は未だにペルソナを使ってこないのか、と。
相手が使っている武器は腰の左右に下げた二振りと太刀がメイン。

背中側には予備として短刀も差してあるようだが、それ以外はマフラーから取りだした物を使っている。
五つの熱線の内、三つは彼を狙って、残り二人は彼の傍の路面を狙う。
二つは避けて、一つは太刀で切り払われる。けれど、熱線が当たった路面が砕かれ、その破片が彼にぶつかることで小さな傷とダメージを蓄積させる。
ファルロスが抜けた湊に自動回復は使えない。それと同じ効果を得るにはベアトリーチェを起こすか、ペルソナを召喚しないまま回復スキルを使わせるしかない。
小さな傷から血を流したまま迫る青年は、どういうつもりかは分からないがペルソナを温存しているため、そのまま勝てるつもりなら驕りが過ぎるぞと綾時も熱線を放ちながら敵への接近を試みする。
黒い熱線での牽制を行ないながら綾時が迫れば、湊はマフラーから複数の手榴弾を投げて爆炎で視界を遮る。
だが、そんな物は熱線を使えばすぐに払う事が出来てしまい、湊の行動の意図が読めない。
そう思っていれば、綾時は首の右側がヒリつくような気配を感じ、直感に従って大剣を右側へと振り抜く。
直後、爆炎を突き抜けて現われた青年の太刀と衝突し、突進の勢いが乗った分相手が勝ったのか僅かに後退させられる。
「くっ!?」
この距離は拙い。咄嗟にそう判断した綾時は空へと逃げようとするが、湊も相手が人間形態で飛べることを知っていたため、飛び上がり始めの速度が出ないタイミングを狙って右手の太刀を投げた。
奇襲を受けた直後に時速百キロを超えた速度で飛来する太刀を簡単に捌ける訳も無く、綾時は左脇腹を切り裂かれ、苦々しい表情を浮かべながら上空から相手に向けて黒い雷を放つ。
全てが一つのスキルであれば魔眼の力で一払いされてしまう。
であれば、先ほどの熱線と同じように複数同時発動し、それらで面の攻撃を放てばいい。

湊の魔眼は確かに強力ではあるが、その力の性質から群体等のどうやっても苦手な攻撃が存在する。
彼の中にいた事もあって、綾時は湊の戦い方については他の誰よりも詳しいという自負があった。
しかし、いくら知識があろうとそれを実戦に活かせるかどうかは別だ。
迫り来る雷撃に向けて地上にいた湊は抜刀術を放つ。
太刀を振り抜いた勢いで幅数メートルの斬撃が飛び、湊に当たるはずであった雷の軌道を全て逸らされてしまう。
加えて、シャドウのスキルと衝突しても飛ぶ斬撃はほとんど勢いを殺されず、そのまま天に昇って綾時へと迫る。
斬撃の進行方向から逃れるように移動し、綾時は再び複数の黒い球体から熱線を放って湊を狙う。
今の攻撃で綾時も分かったが、湊を相手に数を撃てば当たるという発想の攻撃は悪手だ。
確かに彼の持つ魔眼はそういった攻撃の処理に向いていないものの、湊は自身の苦手な物を潰していくように戦闘技能と装備を増やしていった。
そのため、特定の攻撃のみを対象に絞って攻略を目指しても、すぐに別の手に切り替えられて対処されてしまう。
「本当にやりにくい相手だ……」
デスの力は搦め手が苦手だ。強すぎる力は攻撃に寄っているので、攻撃のバリエーションといった意味での工夫の余地が少ない。
一方の湊は技術も武器も豊富にあるので、単純に組み合わせるだけでも膨大なパターンが作れる。
どちらも一長一短ではあるが、湊が綾時を削り続けて勝つことを考えているとすれば、この戦いの中で綾時がそれら全てを攻略することはほぼ不可能。
やはり、どこかで自分の得意な力押しに頼った形で攻めるしかない。そう判断した綾時は十個の球体から熱線を放ちつつ、大剣に光を纏わせた状態で急降下し、いくらかの攻撃を受けることを覚悟して強

力な一撃を決めに行く。
「はぁぁぁぁっ!!」
光を纏わせた剣に込められたスキルは斬撃系最強のブレイブザッパー。
スキルとして放てば湊はそれを殺してくる。そういった事態を避けるために武器に纏わせ、攻撃力を高めるための補助技として活用する。
湊も見ただけで綾時の狙いを察したのか、そのまま太刀を鞘に納めつつ僅かに後退して熱線を避け、途中で足を止めてマフラーから取り出した九尾切り丸で迎撃態勢に入る。
綾時はそれを視界に捉えながら降下時の加速を利用して一気に迫り、湊に向かって身体ごとぶつかるようにして剣を叩き付ける。
いくら湊の力が強かろうが、その体重によって受け止められる運動エネルギーの限界値は決まっている。
少しは九尾切り丸の重量で受け止められる限界値を上げるも、湊は綾時の攻撃を受けたまま路面を削りながら勢いよく後退する。
吹き飛ばれるはずの攻撃を受けて倒れないのは驚嘆に値すべき事だが、綾時もそうなる可能性は読んでいた。
だからこそ、このまま押し切るために込めていたスキルを追撃として解放する。
「ブレイブザッパァァァァァッ!!」
剣が纏っていた光が膨張し、そのまま光の奔流となって剣を受けていた湊を飲み込んでゆく。
相手が光に飲まれた事で綾時は地に足を着けられるようになり、その場で踏み込んでさらにスキルに力を込めて剣を振り抜く。
橋の路面を覆っていたアスファルトは砕けながら蒸発し、直撃を受けた周囲まで熱が伝わって真っ赤に融解してゆく。
生身の人間がこれを受けて無事でいられるとは思えないが、綾時はまだ相手が死んでいないと確信している。
剣に込めていたスキルが治まると同時に、背後に百を超える氷の槍を作り出して正面に向けて放つ。

攻撃の熱によって溶けた路面から蒸気が発生し視界が悪い。それを払うと同時に相手が苦手とする手数を優先した攻撃でダメージを稼ぐ。
現状、押している自信はあるがまだ油断は出来ない。
いくら蘇生の核となっていた自身が抜けたと言っても、あれは元々彼の身体に備わっていた機能だと綾時は知っているのだ。
いざとなればベアトリーチェがファルロスの代わりを務め、湊を瞬時に回復させて蘇らせるはず。
本気で相手を殺すのであれば、一撃で蒸発させるくらいの事を考えなければならないだろう。
そう思って更なる追撃のために彼の姿を探せば、綾時は背中から腹部に向かって何かで貫かれる鋭い痛みを感じた。
「なっ……!?」
一体何が起きたのか。痛みを感じて視線を腹部に向ければ、そこには先ほど湊が投げて自身に傷を負わせた太刀が生えていた。
どうしてこれが後ろから飛んできたのか。細いワイヤーでも結んであったのかと考えるも、綾時はその太刀に触れている部分から力が吸われる気配を感じ、すぐに危険と判断して背中側で掴んで引き抜いた。
「ぐっ、持っているだけでも吸われるのかっ」
刃だけではない。柄を持っていても力が吸われていくため、綾時は太刀を橋の下に向けて放り投げる。
投げた感覚ではワイヤーなどは付いていなかったようだが、背後には人間は勿論ペルソナの気配だって感じられない。
であれば、移動した湊や彼のペルソナが投げた訳ではないだろうと分析しつつ、綾時は黒い靄が漏れ出ていこうとする腹部に手を当てて傷を塞ぐ。
外見状は元通りだが、人間に変化する応用で他の部位を伸ばして絆創膏代わりにしているようなものだ。
その部位に負ったダメージは回復しておらず、あくまで力の消耗をこれ以上しないための応急処置である。

通常のシャドウにはないデスの持つ自然治癒力を使えば時間経過で回復はしていくだろうが、距離が開いたことで湊が次にどんな手を打ってくるか油断出来ない。
額から流れた汗が顔を伝っていくのを感じながら、綾時は再び黒い球体から熱線を放つ事に決める。
先ほどまでは人の腕ほどの太さだったが、今度は人間の胴ほどの太さに威力を上げておく。
下手に狙いは付けない。この戦いの影響で橋が落ちることになったとしても、自分は母たる神を殺し得る〝人間〟を殺さねばならないのだ。
相手の弱点に、自分の得意をぶつけて何としてでもダメージを稼ぐ。
そうして、綾時の操る黒い球体から放たれる黒い熱線が暴れ回り、どこかにいるであろう青年を射殺そうとすれば、綾時はその視界の端で橋の下から何かが飛び上がるのを捉えた。
それは先ほど綾時が投げ捨てたはずの相手の太刀。
九尾切り丸と同じような魂喰いの力を宿している以外に特別な部分などないと思っていたが、どうやらそれは綾時の勘違いで、先ほど喰らった背後からの奇襲のように太刀自体に飛行可能な異能が宿っていたようだ。
青い光を纏って飛ぶ白い太刀は、黒い熱線の嵐に巻き込まれる事なく突き進んでゆく。
成程、と綾時は一人で納得する。その太刀の進む先、綾時から四十メートルは離れた場所に、地面に突き刺した九尾切り丸の後ろで赤い光を纏った黒い太刀を持っている青年の姿が見えたのだ。
恐らく、あの太刀は夫婦剣のようになっており、正しく使えば引き寄せ合うことが出来るのだろう。
二つの太刀が彼の手に戻ったのを確認した綾時は、黒い熱線を維持したまま、先ほど使った百を超える氷の槍も展開する。
相手は着ている服はボロボロになり、頭や手足から血を流しているものの、恐らくそれはブレイブザッパーを受けた時のダメージでしか

ない。
その後の一度目に放った氷の槍は九尾切り丸を盾として利用して防いだようだが、一撃が軽い氷の槍と違って、強化した熱線の方は力尽くで九尾切り丸を押し退ける事が出来る。
このままであれば、湊は何も出来ずにデスの得意とする力押しの戦いを強いられる事になる。
あの青年がそんな状況を看過するとは思えない。攻撃の準備を進めながら綾時が観察していれば、自分の許に戻ってきた太刀を手にした湊が動いた。
手に持った二つの太刀を鞘に戻し、続けて地面に刺していた九尾切り丸もマフラーに収納する。
全ての武器を失って何をするつもりなのか。そう思っていると、九尾切り丸をマフラーに収納していた腕が引き抜かれた時、新たな武器がその手にはあった。
彼の手にあるのはマシンガンと呼ばれるタイプの銃。手数には手数で対抗する気なのか。
そう思っていたとき、綾時は反射的に攻撃を防ぐための魔法陣を展開していた。
綾時が展開した魔法陣は特別な物ではない。込めた力の分だけ物理的な障壁として攻撃を防いでくれるだけの魔力製の盾である。
セイヴァーの持つ〝アイアスの盾〟と違って形状の変化や、守りに特化した性能を持っている訳ではない。
ただ、デスの使える力の中でほぼ唯一防御にも使えるからと展開してみれば、視認出来ないほどの速度で飛来する銃弾の雨が魔法陣を削りに掛かってきた。
「通常兵器が……なんて連射速度だ……っ」
魔法陣に掛かる負荷に耐えるため、綾時は顔を苦しげに歪ませながら両手で構えて魔力を供給する。
湊がその手に持っている武器の通称は〝ミニガン〟。
六本の銃身から秒間百発、毎分二千発以上もの銃弾を放ち、弾帯を含めれば百キロを超すため通常は固定された状態で扱うマシンガン

の一種である。
湊の中にいた時に様々な武器を目にする機会があったものの、綾時はそういった方面に強いわけではなく、兵器に関する知識はそれほどでもない。
おかげで物としては知っている場合でも、実際に使われるまで威力が把握出来ていない物も多々ある。
マーガレットのヨシツネでも防ぎきれず、致命傷を避けてはいたものかなり被弾していたので、速度で劣る綾時が防御に徹したのは対応として正解と言える。
しかし、本来得意ではない防御に一度回ってしまえば、それは湊に攻めるための好機を与える事と同義だ。
絶え間なく続く攻撃への防御に手一杯になり耐えている間に、相手が僅かに軌道をブレさせて用意していた黒い球体と氷の槍を破壊される。
飛んで逃げれば防御が追い付かずに削られ、反撃しようにも魔法陣が邪魔で相手を効果範囲に捉えた攻撃は発動しづらい。
相手の弾薬が切れたところで反撃に移れる可能性もあるので、綾時も状況を好転させる反撃の手は何かと思考を巡らせる。
しかし、そうして綾時が考えていれば、突然、まだ弾帯が残っているはずだというのに銃弾の雨が止んだ。
もしや弾詰まりなどのトラブルでも起きたのか。あまりに突然すぎて綾時も思考がまとまりきらず反撃や後退など自分がどう動くべきか判断が遅れる。
けれど、判断が遅れたために魔法陣が残っていた事は綾時にとってプラスに働いた。
何せ、突然攻撃が止めた青年がマフラーから巨大なミサイルランチャーを取り出し、その照準を既に綾時に合せていたのだから。
「個人の持つ火力じゃないっ」
吐き捨てるように呟いている間に、轟音と共に炎と煙をあげながら迫る四発のミサイル。
直撃は拙いと発動速度のみを考えて広範囲に雷を放って誘爆を狙

うが、距離が近すぎてどうあっても爆発には巻き込まれてしまうだろう。

先頭のミサイルに雷が当たり、破裂した鉄の筒が炎を吐き出す光景がゆっくり流れていくのを目にしながら、綾時は魔法陣ごと爆発に呑まれていった。

第四百四話　二人の戦い

影時間――ムーンライトブリッジ

風花が衝突する二つの巨大な気配を感じ取り、それが湊と綾時だと分かるなり七歌たちは走っていた。

確かに綾時は湊が自分を殺してくれることを望んでいた。

親しくなった者たちが苦しむ姿を見たくない。残された時間を心穏やかに過して欲しい。

神であるニュクスには勝てないと分かっているからこそ、綾時は仲間に事情を話す際に自分を殺せる青年にその思いを伝えていた。

十年前、ポートアイランドインパクトと呼ばれる爆発事故の裏側で起きていた世界の存続をかけた戦いで出会ってから、二人はずっと一緒にいて互いを友達と認め合うようになっていたという。

ニュクスに挑むかどうかを考えるよりも先に、青年に友達を殺させる訳にはいかないという想いがあった。

我が身可愛さから友達を殺せと命じるなど、そんな恥知らずな真似をするほど少女たちの性根は腐っていなかった。

自分たちの力を足してもその背中すら見えない青年たちが、戦ってどうにかなる相手じゃないと断言した神が敵だ。

当然、怖い。何をどうすれば良いのかも未だに分かっていない。

それでも、戦うと、抗うと決めたからこそ、彼女たちは残された時間で少しでも強くなろうと思っていた。

先日のクリスマスパーティーでその事を湊に伝え、彼も分かったと言ってくれていた。

だというのに、どうして返事をする期限直前にあの二人が戦っているのか。

風花が言うには以前アイギスと綾時が戦っていた時に感じた力の規模を遙かに超えており、今回は綾時も湊に向けて力を振るっているらしい。

湊が七歌たちの選んだ答えを無視して、独断で彼を殺そうとするのはまだ分かる。

しかし、自分を殺して欲しいと望んでいた綾時がそれに抵抗しているのだとすれば、どうしてそのような心変わりが起こったのかが分からない。
「ちくしょうっ、地味に遠いなムーンライトブリッジまで!!」
海沿いの道を走りながら順平が突然大声を出す。
焦った表情をしながらも順平は少しでも普段通りに振る舞って、自分同様混乱している他の者たちを冷静にさせようとしているのだ。
月光館学園の建っている人工島には月光館学園以外に高さのある建物は存在しない。
故に、少し離れた場所にあるムーンライトブリッジも既に見えているのだが、そこでは両者が激しく戦っているようで雷が迸り、炎が上がっているのが遠目からでも分かった。
見慣れない黒い光のような物もあるが、チドリが言うには湊の持つ蛇神の力に近い性質を感じるので、恐らくは綾時がデスとしての力を使っているのだろうと説明してくれた。
また、黒い雷や炎もその黒い光と同じ波長を感じるため、どうやら先ほどから見えている魔法スキルは全て綾時側の攻撃らしい。
そんなものを相手に湊は何故ペルソナを使わないのか。他の者たちも疑問に思ったようだが、あと少しで到着するという時に無数の小さな赤い光が高速で飛ぶのが見えた。
一つの方向に向けて火花が散っているようにも見えるそれが何であるか、一般人である七歌たちは分からなかった。
けれど、彼女たちの中に近代兵器の知識を有する少女がいた事で、それがマシンガンの掃射である事を教えてくれる。
「あの赤い光は全てマシンガンの弾丸です。速度、量、それらから予想するにミニガンと呼ばれる兵器かと」
「……じゃあ、あれは八雲の攻撃って事ね」
「デス……いえ、綾時さんは防御に徹して動いていないようです。適性が高ければ近代兵器でもシャドウを殺せますが、構造が複雑になるほど能力者の適性は浸透しづらくなります。それでああまで威力が出せると言うことは、八雲さんが使えばどのような兵器でもシャドウ

の王を殺し得るのでしょう」
銃弾の光は少し離れた位置で何かに弾かれるように軌道を変えている。
その軌道が変わる地点が動いていないことから、彼と戦闘経験のあるアイギスは魔法陣による防御をしていながら反撃出来ていないと読んだ。
他の者たちにすれば銃火器などの近代兵器を使う際に、構造が複雑になるほど能力者の適性が浸透しづらくなるという話も初耳だ。
適性が浸透しづらいという事は、その分だけシャドウに干渉する力が落ちるという事であり、簡単に言えば当たってもダメージが通らないという事になる。
それが分かっているならアイギスは使う銃を選んでいたのだろうが、複雑な構造のマシンガンを使っていながらシャドウの王の自由を奪っている青年は、きっとその適性の高さによるゴリ押しで攻めているのだろう。
随分と無茶な戦い方だと思わずにはいられないが、見ている限りでは攻撃の起点も動いていない様子。
であれば、攻撃している湊も動けず、防御している綾時も動けてはいないが防ぎ切れている事になるんじゃと真田が尋ねた。
「だが、防がれているという事は有里の攻撃も望月に届いていないって事だろ？」
「破壊に特化している存在に、不慣れな防御態勢を強いている以上、状況は八雲さんに圧倒的に有利です」
実際にデスと戦ったことがない者では想像出来ないだろうが、デスに反撃を許していないどころか、破壊特化の存在が完全に守りに徹しているだけでも十分に驚くべき事なのだ。
それが湊側の動きによって引き起こされているなら、次のアクションを起こす点でも彼にアドバンテージがあると言うこと。
アイギスがそのように説明していれば、突然、橋の上で炎が上がり、驚いた次の瞬間大きな爆発によって影時間の大気が揺れた。
『うおっ!?』

『きゃあっ!?』
既に橋は見えていたが、それでもまだ数百メートルは離れている。
にもかかわらず、橋の上で起きた爆発の衝撃が七歌たちの許まで届き、少女たちは思わず地面に倒れそうになった。
普段あまり運動をしない風花や体重の軽い天田はそのまま転倒しかけたため、傍にいたラビリスと荒垣がそれぞれ支えて転倒は免れたが、やはり目指していた場所で途轍もない爆発が起きたため動揺している様子だ。
実際、先ほどの爆発によって橋の一部が壊れて、遙か下にある海にアスファルトの大きな破片がいくつも落下していくのが見える。
あれで決着がついていればこれ以上の被害は出ないが、綾時の話によれば彼が死んだ時点で湊以外は影時間の記憶を失うはず。
七歌たちはまだ影時間の中に存在するし、これまでの戦いを一連の流れとして認識出来ている。
それらの事を走りながら考えられている以上、綾時はまだ生きているのだろう。
相手が生きていれば湊も止まらず相手を殺すまで戦い続ける。
戦いの規模を考えればどちらも本気で相手を殺そうとしているのが理解出来てしまったが、それでもまだどちらも死んでいない。
まだ最悪の結果になっていないのであれば、自分たちが辿り着けば止められる可能性は残っている。
そう信じて七歌たちは二人のいる場所を目指し、ようやく着いたと思えば、橋の上は彼女たちの知るものとはかけ離れた荒れた状態になっていた。
「なによ、これ……」
車の走る幅の広い道路は表面が削れてボロボロになっている箇所もあれば、大きな刀傷のような溝が出来ている箇所もあった。
その回りには一度溶けてから固まったのか、波打つように歪な形で固まっているところもある。
十二番目のアルカナシャドウと戦った時も、こんな風にはならなかったので、どうして二人だけで戦ってここまでの被害が周囲に出て

いるんだと思ってしまう。
だが、そんな風に現実から目を逸らそうにも、橋の中央当たりで一人の青年と一体のシャドウが刀と剣で切り結んでいる光景がどうしても目につく。
ぼろ切れのような黒いマントを纏った髑髏のシャドウが振るった剣を青年が屈んで躱せば、空を切った剣がぶつかった地面が爆ぜて細かな破片が青年を襲う。
けれど、青年は細かな破片が当たって頬から血が流れるのも無視して、屈んだまま身体を回転させて裏拳のように刀で横からシャドウを斬りつける。
寸前で敵が後退したため青年の攻撃も不発に終わるが、後退したままシャドウが口元から黒い熱線を放ったことで、青年は刀を使って熱線を切る形で防御させられていた。
素早い身のこなしをしていた相手の足が止まれば、それは攻撃のチャンスになる。
熱線を放ちながら頭上に力を集めたシャドウは、刀で熱線を切り裂いていた青年へ頭上から雷撃を落とした。
黒い雷は正面からの攻撃を防いでいた青年に直撃する。
風に乗って肉の焦げる匂いが少女らの許にも届き、このままでは青年が危ないとゆかりや七歌が回復スキルを持つペルソナを呼び出そうとする。
しかし、二人がペルソナを呼び出す前に、雷撃が直撃したはずの湊が身体から蒸気を出しながら飛び出し、後退しながら攻撃を放っていたシャドウに接近すると、相手の目の前で地面を踏みならし、右肘で敵の鳩尾を突くように殴りつけた。
相手の懐に飛び込まない限り、八極拳の頂肘など絶対に届きようがない。
魔法とは言え雷の直撃を喰らった直後に、殺そうとした相手に向かっていくなどまともな神経をしていればしない。
人としての自我を持っているデスも同じように思っていたのか、相手の想定を上回る速度で接近され、それに反応しきれず攻撃を受けて

身体をくの字に曲げて後ろに吹き飛ぶ。
それを湊はさらに追いかけ、相手が体勢を立て直す前に回し蹴りで相手の右肋骨辺りに踵を決めた。
ほとんど真横に吹き飛ぶシャドウを見れば、人間であれば骨折どころか内蔵が破裂して死に到っていた事が分かる。
通常のペルソナよりも一回り大きなシャドウに、通常の体術でダメージを与えられている光景はある意味異常だ。
しかし、シャドウの身体の構造は人間とは異なる。人間であれば骨折していたとしても、シャドウの状態であれば折れる骨がそもそもない。
攻撃を喰らって吹き飛び、肩から地面に落ちようとするデスはそのまま氷結魔法を放って、扇状に拡がるように一帯を凍りつかせた。
当然その範囲内にいた湊も氷に閉じ込められる。
空間ごと一瞬で熱を奪われていれば絶命しただろうが、氷の津波に呑まれたような状態であれば即死には到らない。
もっとも、全身を氷で固められて動けない上に、急激に体温を奪われてはまともに身体を動かすことも出来ないだろう。
この最大の好機を逃すつもりはないと、倒れていた身体を起こしたデスは何も持っていない左手の拳を握り、そこへ力を集める。
見ていた分にはただ左手の拳を握り込んだだけだ。だというのに、それだけで空間が震えるのを離れた場所で見ていた七歌たちも感じた。
そして、数秒で準備は整ったのかデスは金色に輝く拳を突き出し、轟ッ、と空気を押し退ける音をさせながら巨大な金色の拳〝ゴッドハンド〟が飛び出した。
放たれたゴッドハンドは氷を砕いて直進して行き、そのまま青年ごと橋の一画を破壊して崩落させる。
打撃系最強スキルの直撃を受け、さらに瓦礫と共に海に向かって落下しては青年も助からない。
今すぐに助けねばとアイギスが動こうとすれば、橋の下からワイヤーの繋がったフックが投げ込まれ、欄干に食い込んだ直後に全身を

血で汚した湊が下から飛び上がって橋の上に着地した。
「おい、流石に動いていい怪我じゃねぇだろ……」
着地した湊に向けてデスが複数の黒い球体から熱線を放つ。
それを躱しながら刀を持って駆けてゆく湊を見て、荒垣が思わず声を漏らせば、他の者たちもより一層止めなければという想いを抱いたのか召喚器を抜いた。
下手なタイミングで介入すれば二人に大怪我を負わせる事になるかもしれない。
しかし、そんな事を考えている間に決着がついてしまう可能性もある。
全員がそれを分かっていたのか、一斉にペルソナを呼び出すと二人を引き離そうと二手に分かれてそれぞれを拘束しようとした。
だが、剣で切り結び、スキルや銃弾の応酬を繰り返していながらも、湊たちは向かってくる者たちの存在に気付いていたのか、刀と剣を振るい複数の斬撃を飛ばしてそれぞれを一撃で消滅させる。
『――――邪魔をするなっ!!』
余人が介入する余地などない。これは自分たちの戦いだと、余計な真似をしようとした者たちに向けて両者は叫ぶ。
邪魔な存在を排除した両者はすぐに相手に向かって攻撃を再開し、一撃一撃が必殺の威力を持った攻撃を繰り出してゆく。
振るっては躱し、躱しては斬りつけ、斬りつけられては弾いて防ぐ。
湊が刀を振るえばデスの身体から黒い靄が漏れ出し、デスが剣を振り下ろせば躱したはずの湊の腕から血が流れ落ちる。
重傷なのは湊の方だが、デスも決して余裕があるわけではない。刻々と戦いの終わりが近付いているのが見ている者にも伝わってくる。
傍目からは青年が強大なシャドウを相手に奮戦しているようにしか見えないが、そのシャドウが人としての姿を取っていた事実を知っている者たちにすれば、どうして友人同士と認め合っていた者たちが明確な殺意を持って戦っているのか理解出来ない。
戦うだけの理由がある。そうでなければ説明が付かない。なのに、

七歌たちにはその理由に心当たりがない。
この二人の戦いに介入するためには、恐らくその理由を正しく理解した上で〝当事者〟である必要があるのだろう。
「どうして二人は戦ってるの、そんな必要ないはずなのに……」
戦いを止めたい。だから、誰かこの状況を説明してくれ。
そんな思いのまま七歌は思わず呟いた。
まだ諦めてはいない。もう一度ペルソナで止める事を試みる事も、自分が薙刀で割り込むことも手段の一つとしては考えている。
ただ、次に邪魔をすれば戦いが終わるまで寝ておけと意識を落とされる可能性もあるので、七歌と仲間たちは下手に動けないでいた。
そうして、両者の戦いを見ているしかない状況が続こうとした時、
《皆さん、もう少し離れた方が良いですよぉ。最悪この橋が落ちることも考えられますから》
「というよりも、湊様たちの邪魔になっているので立ち去れと言った方が正しいですわね」
二人の女性の声が聞こえて七歌たちはその方向へ振り返った。
すると、そこには湊のペルソナであるはずの玉藻の前とＥＰ社の表の代表を務めているソフィアが立っていた。

第四百五話　その戦う理由

影時間――ムーンライトブリッジ

七歌たちが振り返れば、そこには冬らしく分厚いコートを着込んだ玉藻の前とソフィアが立っていた。

彼女たちは七歌たちの後ろにいる。という事は、最初から人工島側にいたということになる。

湊と綾時の戦いを避けて橋を渡れるはずがないので、彼女たちは二人が戦う事が分かっていて待機していたと見て良いだろう。

このまま二人の戦いを近くで見ていても意味はない。何か戦いを止めるヒントがあるとすれば、事情を知っているこの二人からしか得られない。

そう考えた七歌たちは二人の言葉に従って後退し、彼女たちの許までやって来ると話しかけた。

「ねえ、どうして二人はここにいるの？」

《保険ですよ。保険。人とシャドウの違いはあれど、あの二人は強さにおいてその種で最も優れた存在ですからねぇ。ぶつかり合えば予想外の被害が出ることも当然考えられるので、私たちはそれを防ぐためご主人様から待機しておくよう命じられていたのです》

軽い調子で答える玉藻だが、それを聞いている七歌たちは相手が何を言っているのか理解出来ず困惑する。

言葉の意味は分かる。戦う前に湊が被害を抑えるための手を打っていただけの話だ。

しかし、戦う事を報されていたのなら、あの二人が殺し合うと知ったのなら、その時点で何故止めなかったのだと美鶴が二人に詰め寄った。

「どうしてあの二人が戦うと知っていて止めなかったっ!!　二人は友人同士、有里にとって望月はただ一人の友達なんだぞ?!」

「と言われましても、この戦いは最初から決まっていた事ですもの」

《はい。皆さん、色々言いたい事があるのは分かりますけど、これに関しては他人が何を言おうと止められるものじゃないんですよ。だっ

て、そういう〝呪い〟なんですから》
影時間の戦いに関して、湊は誰にも不満や文句を漏らさずに一人で処理し続けているイメージがある。
そのイメージはほとんどが正しく、だからこそ、その裏で彼が何を想っているのかを考えるとこれ以上の無茶を止めたくなる。
美鶴もそう考えているためにソフィアたちに詰め寄り、どうしてその時点で止めなかったのか問い質した。
だが、玉藻から予想外の答えが返ってきた事で全員の意識がそちらに向き、同じ疑問を持っている中でチドリが代表してその意味を尋ねる。
「……呪いって何？　どういう意味？」
《そのままの意味ですよ。この戦い。綾時さんにとっては自分たちの母たる神を殺し得る危険な存在を排除する事が目的です。そこにあるのは宣告者としての義務感やら、シャドウとしての本能やら、自分を殺して欲しいという自殺願望やらでしょうが、基本的に彼は彼の意思でご主人様と戦っています》
今も戦い続けている両者には、それぞれの立場というものがある。
望月綾時としては友人に殺される事で、他の仲間たちが残る時間を平穏に生きて欲しいと想っているだろう。
だが、デスとしての彼にとっては、人類の存亡を無視すればニュクスを殺し得る湊の存在は看過出来ない。
《一方、ご主人様にはそういった小難しい理由はありません。まぁ、雑魚メンタルなので心の奥では泣いている可能性もありますが、戦う理由はそうするように命じられたからです》
対する湊にはデスと戦う意味や意義はない。単純にそう命じられたから戦っているだけだと、腕を組みつつ右手の人差し指を頬に当てて小首を傾げて玉藻は楽しげに話す。
あれだけ必死に、全身を血に濡らすようにしながら戦っているというのに、そこに特別な理由がないなどと言われて誰が信じられるだろう。
湊がその変化の力を求めて配下にしたものの、元から湊の破滅する

時を見たいがために共にいるような女だ。
今も自我持ちの中で一人だけ外に出ているが、その裏に何かしらの不穏な匂いを感じ、完全に信用出来ないと思いつつゆかりがその命令とやらについて質問した。
「誰が有里君にそんな事を命じたの？　っていうか、そんな命令聞く必要あるわけ？」
《ですから、〝呪い〟だと言ったじゃないですか。必要かどうかではなく、そうするように魂を言の葉の鎖で縛り付けられ強制されているんです。魂に干渉したものですからね。義務感というより〝そうしなければならない〟という強迫観念に突き動かされているような状態といった方が正しいかもです》
単なる言葉による命令であれば湊を動かすことはほぼ不可能。
内容が影時間に関する事であれば、湊以上に詳しい者もいないので、知った気になって首を突っ込むなと逆に釘を刺される可能性の方が高い。
しかし、それが特殊な方法を使った魂魄縛りの呪法による精神への干渉であれば、湊であっても抗うことは難しくなる。
そう簡単に魂に干渉されるような呪いを受けることはないのだが、彼の精神と繋がっている玉藻が言うのだから現実に〝呪い〟は存在するのだろう。
だが、一体誰があの青年にそんな高度な呪いを掛けられたのかと皆が考えていれば、強張った表情で唇を震わせながらアイギスが玉藻に問うた。
「その呪いの正体は……わたしが結んだ契約ですか？」
彼女の言葉に全員の視線が二人に集まる。
玉藻も元々呪いなどに精通した存在だ。呪いに感づいていれば、それが誰に掛けられたものかも分かっているだろう。
そんな相手に自分との契約が呪いの正体かと尋ねたのなら、アイギス自身もきっと身に覚えがあるに違いない。
そうして、二人の会話に注目していれば、問われた玉藻が拍手と共に嬉しそうな笑顔を浮かべ頷いた。

《ピンポーン！　大正解です。あの時、アイギスさんにとってデスを倒す事は使命であり自分の存在理由の全てでした。であれば、当然、結ばれる契約も同等の重さになります。何も知らない子どもに契約を持ちかけて、ご自身にも出来ない事を自分の全てを懸けてでもやれと命令するだなんて、いやーなんとも酷い人ですねぇ》

あの時のアイギスに契約を持ちかけたつもりなど一切無かった。

ただ、自分が死んででも果たさなければならない使命だと思っていたために、湊に持ちかけた契約も同じだけの重さで契約されてしまっていた。

さらなる誤算があったとすれば、不完全な契約であったからこそ、正しい契約として結ばれる際に湊の認識で改竄され、アイギスが求めた〝デスを倒す事に協力する〟から〝デスを倒す〟という内容に変わってしまったことだろうか。

様々な偶然と不運が重なったために起きた契約の変質。玉藻の言う通りそれは青年を戦いへと駆り立てる呪いと言い換えていいものであった。

あの時、他に取れる手段がなかったとは言え、二人の戦いの原因を作ってしまった事をアイギスは激しく後悔する。

ただ、アイギスを責めて楽しんでいる玉藻に、話の中で引っかかる部分があった荒垣が待ったをかけた。

「おい、ちょっと待て。そりゃ、おかしくねぇか？　もし、本当に有里がその契約とやらに縛られて自分の全てを懸けてたなら、吉野を助けるために命を使ったり出来なかったはずだろ？」

もし、本当に湊が契約の呪いによってデスを倒す事に全てを懸けていたならば、それを果たせなくなるような真似をした説明が付かない。

湊が復活したのはエリザベスが可能性に賭けて動いた偶然の結果だ。

エリザベスの働きがなければストレガたちに遺体を分解され、戻ってくるための肉体を失ってそのまま死後の世界から事の成り行きを見守るしかなかったはず。

やはり玉藻の話には矛盾がある。アイギスを精神的に追い詰めるためだけに嘘を吐いたのだろうと指摘すれば、ここで玉藻ではなくソフィアの方から荒垣の疑問に対する説明が入った。
「湊様は魂の容量が常人とは違います。そのため四名と四つの契約を結んでおり、チドリさんの件で言えばチドリさん自身と結んだ〝最期まで守り続ける〟という契約を果たすためにご自身の命を一度は使い切ったのです」
《まぁ、その契約は既に果たされたので、その分アイギスさんの契約にリソースが割かれる事になった訳です》
そう言って玉藻が視線を向けた先では、湊が相手の大剣を蹴り上げて弾き、着地してすぐに完全にガードが外れた相手に向かって跳んで左手で頭部を掴んでいた。
パワーではシャドウである敵の方が上だが、反応速度と身体操作では湊の方が勝っている。
であれば、ここは手数でダメージを稼ぐべきだと感じた七歌たちの前で、湊は片手で掴んだまま相手を引き倒し、その頭部を地面に叩き付けてめり込ませていた。
先ほどまで僅かに劣勢だったはずだというのに、怪我が増えて来てからの方が動きのキレが増しているように見える。
無論、叩き付けられたデスの方もやられてばかりではない。狙いを定めず雷撃を放ち、湊を力技で離れさせてから氷結スキルの範囲攻撃で相手を追い詰めようとしていた。
こんな戦いがいつまでも続くわけがない。取り返しが付かなくなる前に止めなければと再確認したアイギスが、事情を知っているであろう玉藻たちに原因を取り除けば良いのかと尋ねる。
「なら、わたしが契約はもういいと言えば戦いは終わるんですよね？
このままでは二人とも無事ではっ」
「他人の魂を変質させるものを言葉だけで破棄出来るはずがないでしょう。あの方が契約を果たすためにかけた時間は十年。最終目標が影時間を消す事であったとしても、血反吐を吐いて死ぬような想いをしながら力をつけてきたと聞いています」

始まりはアイギスが持ちかけた物であったとしても、契約が結ばれた以上は一方的に破棄出来る訳がない。
何せ湊はその契約を果たすために十年戦って力を付けてきたのだ。
今更その契約をなかった事にしてくれと、もういいだなどと勝手な要求が通るわけがない。
ソフィアはこれまで七歌たちに見せていた外向けの仮面を外し、彼女本来の冷たい表情と声で他の者たちを諭す。
「この戦いを止めたい。そう思うのは結構。ですが、その行為は湊様の、百鬼八雲という人間の生きてきた十年間を否定する行為です。貴方たちにその資格はありますか？　理由はどうあれこれは湊様自身が望んだ状況です。何の権利があってあの方の覚悟を踏みにじろうと言うのですか？」
「だってこの戦いに意味なんてないじゃない!?　私たちは八雲君に一緒にニュクスと戦うって伝えてっ」
《どっちにしろこの戦いが終わらないとニュクスとは戦えませんよ。だって、ご主人様ったらデスを倒さない限り解けない暗示でペルソナ能力を封じてしまってますから》
七歌たちにすれば二人が戦う理由など存在しない。むしろ、クリスマスパーティーで自分たちの選択を伝えていた事もあって、逆に裏切られたような気持ちですらある。
しかし、ここで玉藻が特大の爆弾を落とした事で、どうしてそんな事になっているんだと順平が思わず叫んだ。
「なんでわざわざ自分が不利になるような事してんだよっ!?」
《えー？　だってぇ、敵の力を使って相手に勝っても自分の勝ちだって言えないじゃないですかぁ。因みに、暗示の魔眼も同じ条件で封印しちゃっているので、暗示の重ね掛けで封印を解くことは出来ませーん》
クスクスと薄い笑みを浮かべながら、玉藻は他の者を煽るようにわざとぶりっ子口調で説明する。
湊が暗示の魔眼を持っている事は他の者たちも知っている。その能力が〝暗示〟というレベルを超えており、認識や記憶の改竄に及ぶ

事も分かっている。
だからこそ、その力を使って封印を施したならば、条件を達成するか同じ力でしか封印を解くことは出来ないだろう。
もしも魔眼が使えればチドリやアイギスがそれで力を取り戻すように言っていた。
湊もそれを予測していた可能性もあるが、能力を永劫失うリスクを負ってでも〝自分の力〟で勝つ事に執着して戦いに臨んだらしい。
ずっと体術と武器のみで戦っていた事を不思議に思っていた事もあり、彼がペルソナの力を使わない理由を理解した者たちは全員が複雑な表情を浮かべていた。
他の者が同じ事をすれば自殺行為だと思うところだが、湊であればシャドウと体術や武器だけで戦えてしまう。
完全な死から蘇った湊は適性値も跳ね上がった事で、シャドウたちに干渉する力が上がっている。
七歌たちもここに来るまでにデスを通常兵器で押さえ込めていた場面を見ており。推測するに湊はかなり前からニュクス由来の力を使わずにデスを倒すと決めて、それに合せた鍛錬を積んでいたのだろう。
現実として彼は自身の体術と兵器だけでデスと渡り合っていた。
これが先ほど言った彼が十年かけて手にした力であると、何も分かっていなかった者たちにソフィアが告げる。
「過去に貴方たちは湊様から戦いより手を引くように言われたと聞いています。湊様がいればアルカナシャドウは問題なく討伐でき、平時のシャドウ狩りもあの方だけで十分にこなせていた。ですが、貴方たちは〝世界〟より〝自分たちの使命〟とやらを優先して拒否したらしいですね。その時よりも成長したというのなら邪魔だけはしないでください。湊様にとっても、世界にとっても、この戦いは重要な事なのですから」
七歌たちは既に一度世界の平穏より自分たちのエゴを優先して動いた事がある。
本当に世界の平穏を願うのであれば、湊の要求を聞いて戦いから身

を退いておくべき状況で、ここまで来て他人に任せられるかと反発した。
そういった過去がある以上、彼女たちの戦いに対する想いに個人のエゴが含まれている事は否定出来ない。
そんな人間がいくら誰かのためだという言葉を口にしても完全に信用出来るはずもなく、最初から七歌たちの監視も目的に含めていた玉藻が追い打ちをかけるように言った。
《心配しているというのは本当なのでしょうが、本人たちに大きなお世話だと言われた以上は邪魔しないでくださいね。まぁ、能力封印の話を聞いたら邪魔出来ないでしょうし。そもそも、まともに介入出来るほど強くないでしょうけど》
七歌たちの認識としてはあくまで戦いを止めるという物だったが、戦っている本人たちにすれば因縁に決着を付ける重要な戦いへの横槍でしかない。
湊がデスを倒さない限り力を取り戻せないと知った事で、七歌たちも下手に動けなくなった訳だが、玉藻は人を莫迦にするのが愉しいのか一言二言多かった。
もっとも、それが事実で反論出来ないのが余計に悔しくさせるのだが、七歌たちがそんな風に話していると突然辺りが明るくなった。
一体何だと視線を光源に向ければ、そこには極光を頭上に集めるデスの姿があった。
極光を操るスキルなど万能属性しかない。だが、それらはどれも途轍もない威力を持っている。
そんなただでさえ強力なスキルを収束させ、さらに力を込めたデスは、上空から叩き付けるようにしてスキルを放った。
「だめっ!!」
思わずアイギスが叫ぶも言葉だけでは放たれた攻撃は止まらない。
極光が空から降り注ぐ時、七歌たちは橋の上に青年が倒れているのを目撃した。
何かを言おうとするも間に合わない。そして、光が橋を直撃したとき離れた場所にいた七歌たちの視界は白く染まった。

第四百六話　前へ進むために

影時間――ムーンライトブリッジ

湊にとってこの戦いは必要な事だった。

十年前に不完全な形で結んだ契約を、勝手な解釈で歪めてただ一人で果たそうとする。

他の者たちが知れば止めるだろう。アイギス本人に至っては湊だけに戦わせようなどと思っていなかったと言うに違いない。

だが、シャドウを倒すために作られた対シャドウ兵器の姉妹も、今はもうその使命から解放された人間だ。

戦うために、シャドウから人々を守るために作られたからといって、一つの命として生まれ変わった以上はその使命に縛られる必要はない。

何より、彼女たちはクリスマス・イヴに言っていた。自分たちは綾時を殺さず、ニュクスに抗う道を選ぶと。

悩み抜いた末に選んだ答えを容易く変えてはならない。

戦うと決めていた彼にとって彼女たちの選択自体に興味はなかったが、この戦いに余計な第三者が介入してこないと分かった時、湊は心の中で一人ほくそ笑んだ。

《はぁぁぁぁぁっ!!》

「はあっ!!」

中空から大剣に黒い光を纏わせて袈裟切りに振り下ろすデスの攻撃を、刀を仕舞った湊は蹴りで迎撃する。

半歩ほど後退し、その場で回転して勢いを乗せた蹴りを刀身に当て軌道を逸らす。

ここからの反撃を先ほど喰らったデスは警戒したのか、軌道を逸らされて大剣が地面にぶつかった瞬間に纏っていた黒い光を解放して爆発を起こす。

爆発の規模自体は極小であったが、すぐ傍にいた湊に僅かにだが衝撃が伝わってダメージが通る。

もっとも、多少のダメージを受けた程度で怯んでいるようでは、彼

は既に地に伏して立っていないだろう。
右側で爆発が起きると分かった時点で右腕でガードし、腰溜めにした左手の拳を握り締めていた。
衝撃で僅かに流れかける重心をコントロールし、右足で踏み込むと同時に大剣を持った相手の腕を殴りつける。
人でありながら大型シャドウ以上の力を持つ青年の渾身の一撃だ。
喰らったデスは武器を手放しはしなかったが、殴られた箇所が拉げて黒い靄を大量に噴き出しながら吹き飛んでいく。
湊は瞳孔の開いた金色の瞳でそれを睨んだまま駆け出し、吹き飛んだ相手を追い越すと背後に回り込んで背骨に蹴りを入れる。
《ぐぅっ》
背後からの強襲を受けたデスは身体を海老反りにしながら前方に倒れ、うつ伏せになった相手の頭部に向けて青年は踵落としを見舞う。
けれど、デスも相手の攻撃パターンを読んでいたのか、半透明な白い手を背中から数本出現させると青年の攻撃を受け止め、さらに青年を拘束したまま掴んだ白い腕ごと橋の鉄柱へと叩き付けた。
「――――――かはっ」
かなりのダメージを受けた状態で硬い金属へと叩き付けられ一瞬意識が飛びそうになる。
叩き付けられた衝撃で飛び散った血で鉄柱に赤い花が咲き、流石の湊でもその出血量が危険域に入る。
腕を畳んだ状態で拘束されたため、相手の出した複数の白い腕へ即座に対処出来ない湊へ、デスはそのままさらに複数の雷撃を落とす。
一撃ごとに肉の焼ける臭いが立ち、途中から焦げた臭いに変わったかと思えば、拘束していた白い腕が雷撃で全て消えて地面に投げ出された湊は全く動けなくなっていた。
相手はニュクスの子。死の属性を持っているため、直死の魔眼で視えるはずの存在の寿命を表わす線が視えづらい。
そこへさらにペルソナ能力を封じれば、苦戦することなど青年も分かっていたはずだ。

だというのに、彼はこの戦いだけはと敵由来の力を使うことを拒否した。
どうしてこれほどの目に遭っても彼は自分の力だけで戦おうとしたのか、玉藻は少女らに向けてこれは〝呪い〟のよるものだと説明したが実際は違う。
確かに彼女との契約を果たそうという気持ちはある。その点から言えば影時間に解けて消える前に挑んだこの戦いは契約を果たす最後の機会だろう。
しかし、アイギスの求めに応じるだとか、彼女の使命を代わりに果たすだとか、そういった想いで湊は戦っている訳じゃない。
彼が戦う理由は誰かのためなどと高尚なものではなく、もっと幼稚で、独善的で、むしろ単なる自己満足と言い換える事も出来る極めて個人的なもの。
そう。百鬼八雲という青年はただ〝デス〟に勝ちたかったのだ。
十年前、あの戦いで湊は全てを失った。両親を巻き込んで、少女に請われて約束をしておきながら、湊は何も果たすことが出来ずにデスに負けた。
そこからずっと目的のために走り続けてきたが、力を着実に得ながらも彼の人としての時間はあの時から止まっていた。
「だめっ!!」
身体が動かず倒れたままの湊の耳に、遠くでアイギスが叫ぶ声が聞こえた。
直後、上空に集められた力の塊が青年目掛けて降り注ぎ、光と轟音に呑まれて湊は自分がどうなったのか分からなくなった。
痛みなど疾うの昔に麻痺している。デスと戦えていたのは脳内麻薬で肉体の限界を無視していただけだ。
あの日と同じ攻撃で止めを刺される。何とも皮肉な物だと嗤う力も残っていない。
破壊の光の中にいながら湊は一瞬の浮遊感を覚え、その後に下に向かって引っ張られ自分が落ちているのをぼんやりと認識しながら、あちらの世界で両親と再会したときの事を思い出していた。

確かに湊の〝人間〟としての時間はあの戦いから止まっていた。
身体は十二分に成長し、知識は勿論精神的にも大人になっていながらも、それは目的を果たすために性能を上げていた感覚に近い。
人間としての脆さを抱えているというのに、生き方自体は命令通りにしか動けない機械のようだった。
それは、人としての肉体を得る前のアイギスやラビリスも認めるところで、心を持つロボットだった彼女たちの方がむしろ人間らしかったほどである。
しかし、そんな青年が両親と再会したことで〝人間〟として再び生きる切っ掛けを得た。
どうすべき、どうしなきゃいけない。そんな風に心を縛られて生きてきた彼が、両親らの言葉でどう生きたいかを考える事が出来たのだ。
目的のために走り続け、自分を想ってくれた周りの忠告も無視したのに、それでも彼の周りにいた者たちは青年を見捨てずしょうがないなと彼の我が儘も受け止めてくれた。
そんな者たちに対して、湊はこれまでの恩を返したいと思った。
義務感や強迫観念に突き動かされではなく、皆を守りたい、助けたい。今度こそ一人の人間として向き合ってみたいと思った。
だから、湊はこの場所から始めようと思ったのだ。
蘇ってきてから時間が経っているのは分かっているが、この戦いを、十年前の決着を付けずに前に進むことなど出来ない。
(……心のどこかでずっと追い続けていた。最初の敗北からずっと、俺にとって力の象徴はお前だった)
爆風に揉まれ落下する最中、食い千切られたように一部が崩落した橋のところで中空に留まっているデスを湊は見上げた。
その強さはやはり本物だった。人間とシャドウという種としての違いだけじゃない。
同じシャドウと比較してもデスの力は並ぶ者などいないほどに隔絶していた。
挑むことが間違いなのだと、人如きが敵う相手ではないのだと、そ

んな事は最初から解っていたはずだった。
遙かな高みから見下ろされ、自分はどんどん落ちてゆく。幾度も攻撃が通った事で届くと勘違いしたが、これが互いの間にある埋めがたい差なのだと世界にまで告げられているようだ。
だが、敵を見る青年の目はまだ死んでいなかった。
(敵わないからどうした。だから、勝ちたいんじゃないか。一度負けてるんだ。自分の方が弱いなんて事は分かってる。それでも、俺はお前を超えていく。お前を倒し、あの敗北から自分の足で立ち上がってこそ、初めて俺は再び歩き始める事が出来るんだっ!!)
まだ終わりじゃない。こんなところで終われない。その想いが再び青年に動く力を与える。
今の自分は飛べない。なら、自分と同じ場所まで相手を引きずり下ろせば良いと、湊はマフラーから取り出した特殊合金製の鎖を幾つも投げて相手に絡みつかせる。
爆風が完全に晴れていなかった事で、不意を突かれたデスの身体に幾つもの鎖が絡み、それに引かれるようにデスも落下を始める。
鎖の先にいたのが湊だけであればデスが力負けして引っ張られる事などなかっただろう。
引っ張られ爆風を抜けた先を見たデスの目に飛び込んできたのは、自分に絡みついた鎖に繋がった超重量ハンマー〝デュナミス〟だった。
デュナミスは湊がソフィアたちと共に開発した対シャドウ兵器で、超大型の敵に物理で挑むために開発したため持ち手はついているが総重量五千キロを優に超す鉄の塊だ。
いくらデスであっても負傷した状態で落下の勢いが付いたそんな物を持ち上げることは難しい。
当の本人は落下していくデスを足場に駆け上がって、ワイヤーを投げて橋の上に復帰しようとしている。
このままでは拙いと一時的に綾時の姿に戻り、鎖が解けたところで再びデスの姿に戻って湊を追う。
既に失血死していてもおかしくない重傷でありながら、さらにジオ

ダイン数発や力を溜めた状態のメギドラオンを喰らってまだ動けるなど、相手をする方からすれば脅威を超えて悪夢のようだろう。
もっとも、湊自身も自分の限界が近いことは分かっている。
ここで立ち止まればそこでもう終わりだと分かっているからこそ、この後の事は考えず自分が勝つための手を打ってゆく。
ワイヤーを手繰り寄せるようして橋の上に戻ってきた湊は、デスが完全に追い付いて来る前に橋を支えている人間の胴体よりも太いワイヤーを刀で切り裂く。
デスの放ったメギドラオンで一部が崩落しているため、ギリギリのところで支えているワイヤーを切れば、この後どうなるかなど分かりきっている。
自分の両親が死んだ場所だ。毎年花を手向けていただけあって思い入れはある。
だが、青年は次々にワイヤーを切断してまわり、デスが戻ってきた時には張られていたワイヤーが音を立てながら高速で振り乱れる状況が出来ていた。
《くっ、これはっ》
ワイヤーが正面から迫ってきた事で躱すも、すぐに後ろからも別のワイヤーが飛んできて姿勢が定まらない。
一度振られた程度では勢いが治まらず、振り子のように何度も来ては別のワイヤーとぶつかって軌道が変わる。
それらはさながらうねる大蛇のように複雑な動きで、これでは体積の大きいシャドウの身体の方が不利だと、デスから綾時の姿に戻って後退する。
すると、姿が見えなく鳴っていた湊がワイヤーの一つに掴まり九尾切り丸を持って飛来し、綾時は咄嗟に剣で受けて相手を弾き返すも吹き飛ばされた。
弾き飛ばされた湊は別のワイヤーに着地し、綾時の方へと振られるワイヤーに飛び移ると、その勢いを利用して再び突撃をかけてくる。
自由に飛べるはずの綾時が動きを封じられ、逆に飛べなくなっている湊が自在に空中を移動する。

ワイヤーを切ったのはこのためかと、再び突撃してきた湊の攻撃を弾きながら綾時はワイヤーの範囲外の道路へ降りる事を目指す。
正面から来たかと思えば、弾かれた次の瞬間には左下から迫ってくる。それを防いでも今度は右上から飛んできたりと綾時は完全に防御に回ってしまっていた。
自分で動くことが出来ないからこそ、他の物の力を借りて足りない速度と力を補う。
その戦い方は、泥臭い努力でそれぞれの技能の弱点を他の技能で補ってきた湊らしい物だ。
押されている綾時は、これだから彼は怖いんだと必死に耐え続けるも、体勢が整わないせいで非常に拙い状況にあることを冷静に分析する。
湊自身もその経験で今が攻め時だと分かっているのだろう。ほとんど相手の頭上と言っていい場所から、右手に持った剣を振り下ろしながらこれまで以上の速度で迫った。
「はぁぁぁぁっ!!」
「舐めるなっ」
だが、綾時もこれで終わるつもりなど無い。耐え続けたおかげで地面に足が着き、後退しながらという不安定な状態ながらも、相手の攻撃を躱して切り上げをカウンターで叩き込むチャンスを掴む。
綾時が放った切り上げは、九尾切り丸を持っていた湊の右腕を上腕のところで切断した。
ほとんど目の前、ここまでの接近を許すことになったが、それでもこの状況で武器と腕を失って勝てるわけがない。
理性でそう判断した綾時であったが、腕を切られても動じていない青年の蒼い瞳を見て、背筋に寒いものを感じてすぐに後方に飛ぼうとした。
そして、思った通り湊は策を残していた。残った左手を腰の後ろに回すと、かつてエリザベスに貰った黒漆仕立ての短刀を抜き放ち、逃げようとする綾時に向かって飛び込んでくる。
力を求め、足掻き続けた青年の奥の手。それ自体も必殺になり得る

直前の攻撃を綾時が防ぐと信じて、彼はこの最後の一撃に懸けたのだろう。
前へ、ただ前へ、相手の反撃など考えず、ただ勝つために自分に向かって迫る青年の攻撃は届くだろうと不思議な確信が綾時にはあった。
青年の持つ短刀の刃が自分の胸に迫る時、綾時は時の流れが緩やかになるような感覚を覚えた。
僅かに視線を逸らせば、視界の端でこちらに向かって手を伸ばし泣きそうな顔で駆け出してくる仲間たちの姿が見える。
彼らにすれば湊の行動は裏切りだろう。けれど、どうか彼を恨まないでやって欲しいと思いながら綾時は自分の胸にその刃が突き刺さる瞬間を迎えた。
――――――トンッ、と小さな音だけが耳に届く。思っていたような痛みはない。ただ、急激に力を失っていく感覚と、自分が目の前の青年に敗北したという実感だけがそこにはあった。
十年前の少年が自分を上回ったという誇らしさと、常に対等でありたいと思っていた友人に負けた悔しさが遅れてやってくるも、綾時は微笑を浮かべて彼の勝利を讃えた。
「おめでとう、湊。君の勝ちだ」
「あぁ。さよならだ、デス」
小さく答えた湊は綾時の胸に突き立てた短刀を抜くと、腰の鞘に戻してすぐ仰向けに倒れてゆく。
同じく綾時も仰向けに倒れ、仲間たちが彼らの許に辿り着いた時、湊が残った左手を天に向けて突き出したながら一人の少女に向けて言葉を放った。
「……アイギス、俺の勝ちだ」
その言葉を聞いた少女は彼の傍らで膝をつくと、涙を流しながら彼の突き出した左手を両手で包み込んだ。
自分の言葉が彼を戦いに駆り立てた。無事な箇所など一つも無いくらいにボロボロで、そうまでして果たすような約束ではなかったはずなのに、自分が彼をここまで追い込んでしまった。

そう思っている少女は、彼に対する謝罪の言葉を繰り返しながら涙を流し続ける。
そして、その場に倒れたもう一人の少年の許に集まった仲間たちは、彼の胸から抜け出ていく黒い靄を何とか止めようと回復スキルを使い続けていた。
湊は直死の魔眼を使って最後の一撃を放っていた。であれば、当然回復スキルを使ったところでどうしようもない。
涙を流しながら怒ったような必死の表情で自分を助けようとしている仲間たちへ、綾時は穏やかな声で話しかけた。
「無駄だよ。湊の魔眼を使って付けた傷は回復スキルじゃ治せない」
「五月蝿い黙って!! ゆかり、もう一回一緒に!!」
「分かった!!」
七歌とゆかりが同時に回復スキルを使うも、黒い靄は止まらず綾時の力は失われていく。
風花やチドリのようなアナライズ能力を持っている者は、綾時の持つ力の規模自体が徐々に小さくなっている事に気付いているだろう。
他の傷は癒やせても、胸の傷だけは癒やせない。ほとんど枯渇しけるまで力を使ったところで、ようやく七歌たちはその事実を受け止めた。
漏れ出ている黒い靄の勢いが弱くなってきた事で、残る時間がほとんどない事を察した仲間たちは、別れの言葉を言おうとするもどうしてもこの終わりに納得が出来ず、なんでこんな戦いをしたんだと問い質してしまう。
「綾時……なんで、なんで、こんな終わり方にしたんだよ! そりゃ、有里の方は仕方ねぇ事情があったのかもしれないけど。お前が応えなきゃこんな事にはならなかっただろ!?」
「……そうかもしれないね。でも、彼だけじゃなくやっぱり僕にとっても必要な事だったんだと思う。戦って、決着を付けて、ようやく僕も未練を断てたんだ」
綾時だって出来る事なら仲間たちと一緒にいたかった。
だが、宣告者である彼にその未来は訪れない。

ニュクスの許に戻って敵として彼らを阻むか、その前に人の心を持ったまま殺されて消えるか。
どちらを選んでも〝望月綾時〟という人格が消える未来しかないのなら、湊と全力で戦って敗北することで後を託したいと思ってしまった。
他の仲間たちには申し訳ないが、自分にとってはこの状況こそ望んでいたものなんだと小さく笑った。
その穏やかな表情を見て、他の者が何も言えなくなると、少しして綾時の胸から漏れ出ていた黒い靄が止まった。
ついに時間が来たのか。順平だけじゃなくゆかりや風花も涙を流し、他の者たちも短い時間を共に過した彼との別れを惜しむ。
彼が消えれば自分たちの記憶が消えるという事も、この一時は忘れ、こんな結末しか許されない彼の運命を用意した神を恨んだ。
そして、彼を見送ろうとその顔を見れば、どういう訳か彼は困惑した表情で泣いていた。
「そんな……でも、これは……ああっ、本当に、こんな事が起きるだなんてっ」
「綾時君？　どうしたの？」
「湊、ありがとう。本当に、ありがとうっ」
消えると思っていた綾時はいつまでも消えずその場にいる。
そんな彼が泣きながら湊に礼を言ったことから、青年がただ相手を殺す事を目的に戦っていた訳ではなかった事は理解出来た。
けれど、湊の攻撃は確かに綾時の胸を貫き、そこから綾時の力が抜け出ていた事を全員が確認している。
綾時の身に何があったのか、湊はあの戦いで何をしたのか。
それらの説明を求めて湊の方へと視線を向ければ、力を取り戻したのかツクヨミの回復スキルで失った右腕以外の治療を済ませた青年は、アイギスに支えられながら立ち上がり口を開いた。
「……俺が殺したのはデスの力と望月綾時の〝繋がり〟だ。繋がりを失った以上、デスの力はその器から抜け出ていく。だが、デスの力が抜け出ても最後には〝望月綾時〟という人格と魂だけは残るって訳

だ」
「それって、どういう事？」
「そこにいるのはもうデスじゃない。〝望月綾時〟としての心を持ったただのシャドウだ」
言いながら湊はマフラーに手を入れ、そこから青く光る六角水晶のような物を取り出し、仰向けに倒れたままだった綾時に向けて放り投げる。
少年の胸の上に落ちた事で気付いたのか、涙を流していた綾時も渡された物に視線を向け、手に取りながら身体を起こすと少し驚いた表情で湊を見た。
「……湊、これは月の欠片かい？」
「今のボロボロのお前には丁度良いだろう？」
「そうだね。なら、よろしく頼むよ」
綾時がそういって笑うと彼の身体が光の粒になって消えてゆく。
何が起きたのかと他の者たちが慌てる中、綾時だった光の粒は彼が〝月の欠片〟と呼んだ結晶へと吸い込まれていく。
彼だった光が全て結晶へと吸い込まれると、結晶は独りでに湊の手に収まった。
まさか、力を失い自分の身体を保てなくなった事で、再び湊の中に戻るつもりなのか。
そう思っていると、先ほどまで一緒にいたソフィアと玉藻がキャスター付きの酸素カプセルのような機械を押しながらやってきた。
「湊様、持って参りました」
「ああ。すぐに終わらせる」
酸素カプセルのような機械の上半分は透明な素材で覆われており、そこには綾時ソックリの人間が眠っているのが見える。
アイギスとラビリスが「まさか……」と驚いているため、彼女たちは湊が何をしようとしているのか分かったのかもしれない。
他の者たちへの説明がないまま湊は機械へと向き直り、手に淡い光を纏わせると先ほどの結晶が黄昏の羽根と同じ光を纏ったまま機械の中で眠っている少年へと吸い込まれ始めた。

とても不思議な光景で誰も口を挟めずにいれば、一分ほどで全ての光が少年の中へ消える。
「ほら、起きろ」
光が消えた余韻に浸る間もなく、作業を終えるなり湊は機械を蹴りつけて寝ている少年に起きろと言った。
そんな事をして大丈夫かと不安に思う者たちが見守る中、湊の呼びかけが聞こえたのか機械の中の少年がゆっくりと目を開いた。
「……ごめん、開け方が分からないや」
「ソフィア、スイッチを押してやれ」
「分かりました」
機械の上半分を覆う透明な素材に触れるも、少年はどうやれば開くか分からなかったようで申し訳なさそうに苦笑する。
湊に言われたソフィアが外部から開けるためのスイッチを押し、機械の蓋が開くと消える前の綾時と服装までそっくりな少年が笑顔で身体を起こして出てきた。
雰囲気から何から全てがそっくりなのだが、本物の綾時が結晶に吸い込まれて消えた場面を見ているだけに、自分たちの前に立った少年を綾時と認識良いか判断に迷う。
相手もそんな七歌たちの内心を察したのか、彼女たちにとっては見慣れた柔らかい笑みを浮かべて話しかけてくる。
「大丈夫、心配しないで。今の僕はアイギスやラビリスのような存在になったんだ」
「つってーと、なんだ？　今の綾時は人間の身体になったって事か？」
「そういう事。二人はコアだった黄昏の羽根を使ったけど、僕はデスの力を失ってしまったからね。それを補うためにより力の強い月の欠片をコアとして湊は使ってくれたんだ」
順平の言葉に頷いて返すと、綾時の頭上に水色の欠片が集まってタナトスが現われる。
だが、現われたタナトスは突如光に包まれると、包んでいた光が弾けた後には全く姿の異なる白いペルソナが存在していた。
「これが僕の人間としてのペルソナ。審判〝メサイア〟だ」

どこか幾月の持っていたアルケー・オルフェウスに似たシルエットのそれは、剣のような翼を背負い、その手には鎖に繋がれた棺が連なっている。
シャドウの王としての力を失って人間になったと言っていたが、今も彼の頭上にいるペルソナが桁違いの力を持っている事は分かる。
本来の力を失って尚七歌たちと同等以上の力を持っているとは、彼の傍に立っている青年はよくペルソナを使わずに勝てたなと思わずにはいられない。
「綾時君はこれからどうするの？」
「湊のおかげで僕は人として生きる道を選ぶことが出来る。だから、皆さえ良ければまた仲間に入れて欲しい」
「ニュクスとも戦うってこと？」
「うん。遅れてきた反抗期ってやつかな」
綾時が人間として生まれ変わったとなれば、彼はこのまま消えずに自分たちと共にいられるという事。
このペルソナが味方になってくれるのなら心強いと先ほどまでの暗い雰囲気は吹き飛び、全員が彼の復帰を笑顔で受け入れる。
だが、綾時の件は円満に終わったと言えるものの、もう一人の青年は右腕を失って全身血濡れのままだ。
回復スキルで怪我は治療出来ても失った血は回復出来ないし。体力も消耗しているだろう。
さらに言えば、二人の戦いでムーンライトブリッジは中央付近から崩落して、完全に分断されてしまっている。
彼自身の身体も含めて一体どうするんだという目で一同が青年の事を見れば、アイギスに支えられていた青年が指を鳴らし、次の瞬間、少し離れた位置に自分たちが立っているムーンライトブリッジにそっくりの橋が現われた。
「……あっちが本物だ。ここは少しずれた場所に作った虚像。術を解けば綺麗に消える」
「えぇー……八雲君の幻術系スキルってどうなってるの？　実体を持つ橋一つ作って、本物の方は索敵スキル持ちにもばれずに隠してるっ

て、最早何でもありじゃない？」
「通常スキルじゃなくてミックスレイドだからな。単体じゃここまで大規模な事は難しい」
以前は玉藻の前と鈴鹿御前のミックスレイドで発動していたが、鈴鹿御前が進化して瀬織津姫になった事でスキルの強度も上がっている。
本物にある小さな傷まで完全に再現された実体を持つ虚像を作り出し、索敵では湊に次ぐ力を持っている風花の力までかいくぐって本物のムーンライトブリッジを隠し通した。
そこまで出来ればもう出来ない事などないのではないかと思ってしまうが、本人たちが言うにはここまでの規模となると色々準備も必要で言うほど万能という訳ではないらしい。
だとしても十分に破格の能力だと思えるが、七歌たちがさらに何かを言おうとしたタイミングでソフィアが話に割り込んできた。
「湊様、そろそろ影時間も明けますし移動しましょう。連絡を入れておいたので研究所の方でシャロンが腕の用意をして待っています」
「八雲さんの腕は治るのですか？」
「治るという言い方は正しくありません。湊様が事前に用意されていた新しい腕を骨ごと移植するのです。これまでは神経接続ユニットの関係で左腕ほどの性能を出せませんでしたが、今回は肩の関節部から骨ごと取り替えるので、本来の腕と同じ性能を発揮出来る予定です」
新しい腕は月の欠片を加工して作った骨を利用した新しいアプローチの生体パーツだ。
用意したのも作ったのも全て湊なのだが、優秀な秘書として影時間が明ける前に移植手術の用意をするよう連絡を入れておいた事で、ソフィアはどこか自慢げに説明してきた。
あまりのドヤ顔に他の者たちが僅かに引いていれば、湊がセイヴァーを呼び出して移動の準備を始めた。
セイヴァーの空間転移は範囲内の存在を全て移動させてしまうため、支えてくれていたアイギスから離れると湊はソフィアと玉藻を連

れて離れた場所に駐まっていた車まで移動し、蛍火色の光に包まれ消える。

綾時も再び仲間になり、湊の腕が元通りになるのなら良かったが、どこか湊の掌の上だった感じがして全員何とも言えない不満を胸に残る結末となった。

ただ、それでもやはり綾時とこれからも一緒にいられることはめでたいので、一度人工島側に戻り虚像の橋が消えていくのを見守った一同は、帰りにラーメン屋で小さく仲間の復帰を祝ったのだった。

第十四章　―Ｄｅｐａｒｔｕｒｅ―

第四百七話　決戦までの予定

１２月３１日（木）
早朝――ＥＰ社・研究区画

綾時との戦闘を終えて移動した湊は、研究所に帰ると待機していたシャロンに右腕の手術を依頼した。

決着がついた時点でソフィアが連絡を入れ、手術の用意をさせていたので待ち時間はほとんど無い。

ただ、パッと見では一切の怪我がないというのに、服は破れて血に染まり、場所によっては焦げた痕まである事から、彼が相当な無茶をしたことを察したシャロンから手術後に小言があった。

「アンタさぁ。そろそろ自分の身を労る事も覚えなよぉ？　私らじゃこういうサポートとか無気力症患者の保護くらいしか出来ないのは分かってるけど、別にアンタの事を心配してない訳じゃないんだからさぁ」

手袋外してゴミ箱に捨て、手術着を脱ぎながらシャロンは手術台から身体を起こす青年に声をかける。

今回は肩関節から先の右腕の骨を外して、右腕一本丸ごと交換する大手術だった。

ＥＰ社製の簡易補整器の指輪を付け、影時間であろうと対応可能なスタッフを用意していたので、湊の担当医であり幹部でもあるシャロンがいれば突然腕の移植手術をすると言われようと人員的には何の問題もない。

しかし、月の欠片という未知の素材を骨格として利用した新しい腕を作った事を聞いてはいたが、一流の医者を集めても中々に難しい移植手術を研究所に戻る直前に言われてはスタッフも困惑する。

湊であればある程度は自前の免疫機能と肉体修復機能で問題ないとは言え、手術に参加するスタッフたちは自分たちの組織のトップに万が一の事態が起これば大変だと重責を感じる。

加えて、普通の人間であれば何度も死んでいるであろうダメージを負い。大量の血を失った話を聞いてしまえば、いくら相手が湊でも時間を置いてから手術すべきだとスタッフらが思っても無理はない。
まぁ、そんな彼らの思いを無視して湊はすぐに始めるように指示を出し、毒や薬が効かない体質なせいで麻酔無しで手術を決行した訳だが、三時間ほどで無事に移植を終えた湊はツクヨミの回復スキルで手術跡を消して腕の動きを確かめながら言葉を返した。
「まぁ、そういう事も考えておこう」
「素直な返事はいいけど、ちゃんと行動も伴ってくれないとねぇ。歳取ったら分かるけど、二十歳を過ぎたら五歳単位で衰えを自覚し始めるわよ？」
シャロン自身もまだ三十歳ほどで十分に若いのだが、医者だからこそ二十歳頃との違いを明確に理解出来ているのだろう。
昔は数日徹夜するぐらい問題なかったのに、今では気持ちは保っても身体が付いていかなくなる事をシャロンは丁寧に説明した。
周りにいるスタッフたちも彼女の言葉に同意するように頷いている事から、大人たちにとっては非常に共感出来ることで彼らも実際に経験しているようだ。
もっとも、湊は久遠の安寧との戦いで肉体的を二十歳頃まで強制的に成長させている。
それから何度も時流操作で他の者より圧縮した時間を過してきたので、五年くらいは経っているはずなのだが、彼女たちのいう衰えは一切感じていない。
むしろ、肉体の全盛期を常に更新し続けているくらいなので、受け取ったタオルで身体を拭きながら湊は自分には共感出来そうにない話だと返す。
「……不老の俺には関係の無い話だな。それに影時間の決着まであと一月だ。それが済めば時間も取れるようになる。身体を労るのはそれからでいい」
「ホントに狡い身体よねぇ。お伽噺とかだと太陽がダメだとか水がダメって弱点があるはずなのに、そういうのも無いんでしょ？」

「不老の話なのに吸血鬼のイメージに引っ張られすぎだ。というか、吸血鬼も鬼の字が入っているが百鬼家は日本の鬼で、鬼の一族というのもあくまで他の奴らが呼び始めた名前だからな。伝承の中で真実から遠ざかった存在と実在した神の子孫を同列に語られても困る」

シャロンの不老のイメージは吸血鬼などの所謂妖怪と呼ばれる者たちのようで、物語に出てくるそういった存在は強大な力を持つ反面倒すための弱点が付きものだ。

湊にはそれらの持つ弱点が存在しないと聞いてはいるものの、鬼の一族と呼ばれている事から何かしらの弱点が実はあるんじゃないかと思ったらしい。

実際のところ百鬼家にも弱点は存在した。それは九頭龍家に危害を加えられない事、九頭龍家の命に従う事、九頭龍家の人間を守る事。

あくまで鬼側が一方的に立てた誓約なので、九頭龍家に力があるわけではないのだが、それらがあった事で鬼たちの行動が縛られていた事は事実。

けれど、湊は混血で生まれた事で血の呪縛から解放され、九頭龍家という唯一の弱点も克服した。

混血になった時点で始祖と同じ力を取り戻しているので、正確には鬼でも龍でもなく現人神に分類すべきだが、そういった細かな話はどうでもいいと湊は部屋を出て着替えを用意していたソフィアと合流しつつシャロンとの話を続ける。

「俺の事はいいが現在の病床数はどうなっている？」

「まだ半分以上余裕はあるけど、今のペースで無気力症患者が増えたら一月が限度ってところかしら。まぁ、その頃には終わってるみたいだし？　最悪、研究所の宿泊所を臨時に使えばもう半月は持つかもってところねぇ」

無気力症患者は今も増え続けている。そのペースは無気力症が流行り始めたとされている四月頃の十倍以上で、範囲も都内から全国に拡がり、さらには海外でも確認されているという。

影時間は日本時間の午前零時を基準に

分類上は精神病のはずなのだが、海外のニュースでは脳機能の一部

が麻痺するような感染症ではないかとも言われ始めていた。
そういった誤解については医療シェア世界トップのＥＰ社と、その傘下に一時的に収まっている桐条グループがこれまでの研究データを公開する事で、肉体的には何の異常も無い事を伝えている。
どこよりも無気力症について研究していると思いながらも、桐条グループはこれまで自分たちの暗部に繋がる情報を広めないために、幹部を除けば情報部やエルゴ研の流れを汲むラボの人間などにしか影時間の存在を伝えていなかった。
しかし、今はＥＰ社の傘下になった事で外部の協力者を得て、ＥＰ社経由でも対処出来るようになっている。
情報さえ公開出来ればグループ傘下の病院以外でも適切な処置が可能になり、病床の圧迫という問題を除けば混乱は比較的抑える事が出来た。
もっとも、いくら対処が可能になっても患者が増え続ければいずれ限界も来る。
湊は桐条グループの病院だけではキャパシティが足りないと判断し、久遠の安寧の幹部たちから奪った私財を投入して馬鹿げた大きさの病院を作ったつもりだった。
それだというのに、今のペースで患者が増えれば決着の付く一月後まで保つのがやっとらしい。
別にシャドウの影響を甘く見ていた訳ではない。ただ、どうして流されやすい人間というものはいるようで、世間が暗い雰囲気になっているせいでつられてしまった者が多数いたようだ。
「……人の弱さを甘く見ていたかな。面倒な事だ」
「強くても迷惑を掛ける人間もいるし。どっちもどっちだと思うわぁ」
「確かにな。力を持ったせいで桐条グループは馬鹿な行為に走ったし。人自体がろくなものじゃないと思うべきだな」
「訂正するのも面倒だからそれでいいわぁ。んじゃ、私は疲れたから休むわね。アンタも休みなさいよぉ」
シャロンはお前の事だと言いたかったが、夜中からずっと難しい手

術をして疲れたのか欠伸を漏らす。
本日の彼女は遅番なので午後まで寝られる事もあり、一足先に休むからと通路を曲がって研究所内の私室の方へ去って行った。
湊とソフィアはそれを見送ってから再び通路を直進し、今後の予定について話し合う。
「湊様、契約はどうなりましたか？」
「ああ。ちゃんと達成になっていた。これで残るは第二と第四の契約だけだ」
「では、実質一つですね。命の答えを見つける、何とも哲学的な問題です」
湊が四人の女性と結んだ契約も、残るは二つとなっていた。
チドリとの契約は玖美奈と理が襲撃してきた日に自分の命をチドリに与えて蘇生させた事で達成となり、アイギスとの契約も昨夜の戦いでデスを上回った事で達成扱いとなった。
残っている契約はエリザベスとマーガレットとそれぞれ結んだ物であるが、エリザベスの契約は契約を果たすまで死なないという物なので、マーガレットと結んだ命の答えを見つけるという契約さえ果たせば自動で達成になる。
デスが封印されていた事でここまでずれ込んでしまったが、どうにか影時間の問題を片付けるまでに全ての契約を果たせそうな事に湊は安堵する。
全ての契約を果たせばもうベルベットルームへ行けなくなるのか。それとも、鍵は自分の物だからと遊びに行くことも可能なのか。
今度ベルベットルームに行った時にでも聞いているかと考えながら、湊も一眠りするためソフィアと共に自分たちの私室へと戻るのだった。

昼――巌戸台分寮
湊と綾時の戦いから一夜が明け、皆も精神的に疲れた事もあって話し合いは昼からとなった。
友達同士であった二人が命を奪い合うような戦いをしている姿を

見た時には、死力を尽くしてでも止めなければと思ったものだが、邪魔するなと追い払われた時にどうあっても止める事など出来ないと再び己の無力を嘆く結果に終わってしまった。
それも当然で、湊と綾時は十年前の決着を付けるために本気で戦っていた。
友達同士が殺し合うなんて間違っているなどと、そんな普通の感情で止めようとしていた七歌たちとは戦いに対する決意の度合いが違ったのだ。
「改めて、昨日はごめんね。あの戦いは僕にとっても湊にとっても必要なものだったんだ。だから、間違っていたとは思わない。だけど、心配させた事は確かだからもう一度しっかりと謝罪させて欲しい」
「話は有里のペルソナとソフィアから聞いた。二人は十年共にいたんだ。私たちには分からない君たちなりに納得した上での戦いだったのだと思う。ただ、流石にもう一度というのは勘弁して欲しい。次に何かあれば相談してくれ」
ソファーに座った綾時が皆に頭を下げれば、苦笑しながら美鶴がそこまでの謝罪はもういいと頭を上げさせる。
昨日の夜、今もここにいない湊だけは右腕の移植手術があるからと帰ってしまったが、他の者たちはアイギスらと同じ形で人間になった綾時の復帰祝いにラーメンを食べに行った。
その道中で綾時は全員に深く頭を下げて謝罪し、自分も一緒にニュクスと戦わせて欲しいと伝えた。
他の者たちからすれば復帰した時点でそういうものだと認識していたのだが、綾時は変なところで真面目らしく、改めて宣言して皆に受け入れてもらってから復帰するものだと思っていたらしい。
昨日既に謝っているというのに、再び謝ってきた少年に全員が苦笑すると、戦った理由などはいいからこれからの事について話そうと七歌が先を促す。
「それよりも、ニュクスとの戦いについて話そうよ。綾時君と八雲君が勝てる相手じゃないって言ったきりだから、いつ来るのかとか、どこにいけば戦えるのかとか、そういう情報が一つもないんだ。まぁ、

相手が月だって事だけはあの日に聞いたから知ってるけど。まさか、ロケットで戦いに行けとは言わないでしょ？」
七歌たちもニュクスが月だという事だけは聞いている。
というのも、綾時が自分の正体を明かした日に、湊が昔ゆかりと七歌にニュクスの事を話しただろうと伝えてきて、あの日の冗談がまさかの真実だったと知ったのだ。
勿論、なんでそんな大事な事を冗談の体で話すのかとゆかりは激昂した。
本当なんだと言われてもきっと信じなかったと思うが、それでもあんな言い方をしておいて、前にちゃんと言っただろうと言われてもふざけるなとしか返せない。
綾時もあの日の事を思い出したのか小さく笑い。そうだねと少し考えてから口を開いた。
「えっと、これから話すのは皆がデスを殺さない事を選んだ場合はこうだったと思って聞いて欲しい。というのも、湊は僕からデスとしての力を切り離したけど、デスというのは僕を含めて一つの存在だったんだ。そこから僕が離れた事で影響が出ないとは言い切れない」
「まぁ、オレたちからすれば何の予定も知らなかった訳だし。多少ズレても問題ないだろ」
「順平はそれで良いかもしれないけど、私たちは戦いに出る準備とかあるんだよ？　準備が出来てなくて戦えませんでしたは困るから、出来れば最短の方を教えて欲しいかな」
綾時は自分とデスを一つの存在として認識していたが、湊は力と人格は別物として認識出来ていたようで、人格と力の繋がりを断ってデスの宣告者としての力だけを影時間へと還した。
だが、綾時の人格の分だけデスから力が減っていると捉えることも出来るので、その影響から数日から下手をすれば数週間の誤差が出る事も考えられる。
順平は綾時に気を遣って大丈夫だと言ったが、作戦を考える七歌はいつまでには準備を終えておく必要があるかを重視して教えて欲しいと頼んだ。

少女と視線を合わせた綾時は勿論と深く頷き、真剣な表情になると作戦室の壁にあったカレンダーを持って来て全員に見せながら話す。
「最初に言っておくと僕の分だけ力が減っているとすれば、伸びる事はあっても短くなる事は無い。殺していれば数ヶ月延びただろうけど、デスの中から一人分のシャドウが離れた程度なら誤差は数日くらいだと思う」
「綾時さんのペルソナは強力なものだと思いましたが、それでもシャドウ一体分の力の減りなのですか？」
「実際のところ、シャドウの王であるデスからすれば一体も五体も誤差なんだ。確かにメサイアは強いとは思うけど、それでも湊のセイヴァーや无窮のような神クラスじゃない。単体でデスに勝てないペルソナの分くらいは数日もかからず回復出来るよ」
人間になった綾時はペルソナが死神〝タナトス〟から審判〝メサイア〟に変化した。
正体を明かす前ほどの圧倒的な強さは感じないが、それでも七歌たちより強いだろうと思えるだけの存在感を放っていた。
その分だけの力を失っていてもデスにはほとんど影響がないとなると、ニュクスの前哨戦であるはずのデスの相手も厳しいのではと思ってしまう。
綾時がアイギスの質問に答えた事で一同がやや引き攣った表情をすれば、そのタイミングで部屋の扉が開いて両腕が健在の湊が現われた。
「……一応言っておくと綾時の力は月の欠片でブーストされた上で変化したものだ。仮に通常の黄昏の羽根をコアにして生体ボディに入れていれば、五月頃のお前たち程度の力しかなかっただろう」
「あ、月の欠片っていうのは僕が貰ったあの結晶の事ね。月の表面が薄く剥がれた物が黄昏の羽根で、月を砕いて採取した岩や石が月の欠片なんだ。羽根みたいに力を増幅させ合ったりは出来ないけど、単体で出せる力の補整と増幅機能は桁外れだからね」
湊の持つ結合した羽根のような共鳴する事で増幅させ合うという特殊な力はないが、月の欠片は大量のニュクスの力を宿した単体で桁

違いの高出力が出る増幅器である。
デスの力を失ってボロボロになった綾時を戦えるようにするには、それほど貴重な物が必要だった訳だが、湊は月から帰還する際にちゃっかり塊で数百キロ分持って帰っている。
自分の新しい腕の骨格に利用するくらいなので、掌に収まる程度の小さな石を一つ使うくらいはどうって事なかった。
黄昏の羽根と月の欠片の説明を聞いた者たちも理解したようで頷けば、話を戻すよと綾時が決戦の日を告げる。
「さて、話を戻すけどニュクスが地球に降臨するのは恐らく一月の末日だと思う。思ったより無気力症の拡がりが早いんだ。だから、その分、人々に呼ばれて現われるニュクスの降臨も早くなると思う」
「なるほど、一月あればコンディションを整えるには十分だな」
「バカヤロウ。それまでに今より力を付ける必要があんだぞ。お前は美紀を切ったやつと戦いたいんだろうが、思惑通りにいくとは思えねぇ。下手すると向こうのワイルド使いとタイマンの可能性もあるんだぞ」
七歌たちも色々と作戦を考えているが、自分たちの望むとおりの組み合わせで戦えるとは思えない。
ストレガたちはニュクスの降臨を望んでいるので、それを阻もうとする七歌たちを何としてでも排除する気でいるはず。
となると、一番怖いのは分断されたところで相手の最大戦力である二人のワイルド使いをぶつけられる事になる。
七歌や綾時、一撃の出力だけで言えばチドリも何とか渡り合えるが、他の者たちはペルソナが進化して尚二人がかりでもやや厳しいくらいだ。
真田が暢気な事を言っていたので、荒垣がそれを指摘すれば、個人ではまだ相手出来ない自覚のある者たちの視線が俯く。
けれど、そうやって全体の雰囲気が暗くなりそうなところで、綾時の隣に立ったままの湊が口を挟んだ。
「……いや、あいつらは俺が押さえる。恐らくあいつは今も俺を殺したいはずだ。なら、望み通り相手をして終わらせてくる」

断言した湊の瞳は非常に落ち着いた色をしている。
既に一度二人を相手取って勝っているため、湊ならばもう一度やっても何とかなりそうではある。
ただ、長谷川沙織という偽名を使っていた幾月玖美奈と仲の良かった七歌が、両者に戦って欲しくないという思いも僅かに滲ませて〝終わらせてくる〟という言葉の意味を問うた。
「八雲君は、沙織たちを殺すつもりなの？」
「……どうかな。相手次第ってところだ」
「そっか。じゃあ、八雲君も納得出来る方を選んでね」
質問に答えた湊の言葉にはこれまでにない穏やかさを感じた。
十年前の戦いに決着を付けた影響なのか、ここ最近の湊と今の湊は明らかに雰囲気が違っている。
他の者たちもそれを感じたのか、今の湊ならば殺さずとも何らかの形で決着を付けられるだろうと不思議な安心感を覚えた。
湊と理の関係が非常に複雑な物であることは知っている。
本気で殺し合いを演じた湊と綾時の関係に匹敵するほど難しい問題だ。
その分、他の者がどうこうして解決出来るものでもないため、彼らの決着は彼ら自身の手でつけて貰う事に決めて、話の続きを促すように皆の視線が再び綾時に集まった。
「期限はさっき言った通り。そして、ニュクスに会う方法だけど、相手は当日にタルタロスの頂上へ降りてくる。だから、君たちはその日にストレガや完全体になったデスを倒してニュクスに会わなければならない」
タルタロスの頂上など空を飛べる湊以外のメンバーは見たことがない。
そもそも、雲より高い奈落の塔に本当に頂上など存在するのかと思っていたくらいだ。
けれど、デスだった綾時がそう言うからには、間違いなくニュクスは塔の頂上に降りてくるのだろう。
数日の誤差がある可能性もあるが、期日と場所を聞いたからには全

員がそれに向けて動き始めるしかない。
まだまだ不安はあるが全員で頑張って行こうと七歌が声をかけ、ノリの悪い湊を除く他メンバーたちはしっかりと返事をして気合いをいれあった。

第四百八話　大晦日の過ごし方

夜――巌戸台分寮

十年前の決着をつける湊との戦いによって、綾時は敗北してデスの力を失いながらも、アイギスら姉妹と同じく生体ボディを手に入れて人間として生まれ変わることが出来た。

彼本来の力であるデスとしての権能のほとんどを失い。戦闘の負傷もあって、ただのシャドウへと変じた彼の状態は非常に不安定だったが、湊が宇宙で手に入れた月の欠片によって存在を補強することで七歌たちと同等以上の力を残す事に成功した。

そうして、一夜明けて全員でニュクスに挑むにあたり、決戦がいつになるかを綾時が皆に説明して今後の大まかな予定が決まった。

ニュクスとの決戦はおよそ一ヶ月後。多少の伸びはあるかもしれないが、最短で一月の末日になるだろうと見られている。

宣告者としての役割を持っていた綾時の言葉だからこそ、ニュクス降臨の予測は正しいのだろう。

同じくニュクスの存在を知っていた湊も否定しなかったので、他の者たちもそれまでにどれだけ力を付けられるかとやる気に駆られていた。

ただし、いくら残り一ヶ月しかないと言っても、大晦日や正月三が日くらいはゆっくり過しても罰は当たるまい。

皆もその期間は休養に充てるという案に賛成し、話し合いを終えると解散の流れになった。

ここで暮らしていないのはコロマルを含めれば、外部協力員であるラビリスとチドリ、桐条の遺言で特別課外活動部の責任者になっていながらまともに活動を見ていない湊だけ。

ただ、ラビリスはアイギスの部屋に泊る事になっており、コロマルもその関係で今日は寮に残る。

チドリは実家で家族と過すという事で帰ったが、湊は夕方から人と会う約束があるからと来てすぐに帰ってしまった。

勘の良い者たちはその相手が女性だと察して彼に冷たい視線を向

けていたが、七歌たちが悩んで戦いから離れている間もシャドウを狩り続け、十年前から影時間を終わらせるために力を求め続けていた青年が、このタイミングで色恋沙汰のために人に会うとは考えづらい。
だとすれば、その約束はＥＰ社関連のものか、ニュクスとの決戦に何かしら関係しているものだと思われる。
仕事関係ならば詳しく聞くことは出来ないし、仮に個人的なものであったとしても、彼には彼のプライベートが存在する。
故に、彼に冷たい視線を向けていた者たちも少しすれば機嫌を直し、食料の買い出しに出掛けると夕方には帰ってきて年越しの準備をしていた。
今日はやはり大晦日だからと全員で年越しそばを食べる事になっている。
他の者たちが買い出しに出ている間に荒垣が蕎麦のつゆを作り、ネギやかまぼこ等の具材も切っておいたので、時間になって蕎麦を茹でさえすれば直ぐに食べる事が可能だ。
もっとも、育ち盛りの学生たちが蕎麦一杯で夕食を済ますことなど出来る訳がない。
他にも料理が出来るメンバーが色々と作り、美鶴も寿司の出前を頼んでいたので、今日は年越し蕎麦を食べつつ他の物も摘まむ形で夕食を取る事になった。
「いやぁ、それにしてもニュクスの戦いが一ヶ月後に控えてるってのに、こうやって紅白見てると今年もようやく終わりかってしんみりするよなぁ」
「フフッ、僕は実際に視るのは初めてだけどね。湊の中にいた時から知識としては知っていたよ」
年末番組を見たいからとテレビを移動させた順平は、キッチン前のテーブルで綾時と並んで蕎麦を啜りながらしみじみ呟く。
テレビでは男が白、女が紅のチームに分かれて競い合う歌番組がやっている。
綾時も湊の中にいた頃から外界の情報を得ていたので、こういった番組がある事は知っていたが、自分の目で実際に視るのは初めてなん

だと楽しそうにしている。
順平はこういった伝統的な番組よりも、裏でやっているバラエティの方が好きそうなイメージだが、意外と伝統を気にするようで知らない演歌の時にチャンネルを変えることはあっても、基本的にはこの歌番組を点けておくらしい。
他のメンバーたちも視るとすればこの番組らしいので、こんなところでくだらないチャンネル争いをする必要がなかったのは幸運だろう。
そして、綾時と同じように初めての年の瀬を過すアイギスは、ラビリスの隣でお寿司を食べつつ、興味深そうにテレビを視ている。
「チームに分かれて競い合うという事でしたが、出演者の歌唱力には大きなバラつきがあるように感じます。また、歌唱力は高くとも世間の流行から外れていると言いますか、一般的な認知度が低い方もおられます。これでは明確な勝敗をつけるのは難しいのでは？」
「まぁ、言うてもお祭りみたいなもんやから。ゲスト審査員の票と会場の観覧者の票に加えて、ネット経由での一般投票も合せた合計数で勝負するんよ」
「人によっては自分の好きな歌手のいる方に入れたり、視ていて番組を盛り上げたと思う方に入れるから、コンクールみたいに純粋な歌唱力の勝負じゃないの」
ラビリスと風花があくまで年越し前のお祭りなんだと説明すれば、成程と頷いてアイギスは興味深そうに視線を再びテレビに向ける。
今は白組で六人組の男性アイドルグループが歌っているが、どうやらゆかりが割りと好きなグループらしく、「新曲より定番で来たかぁ」と苦笑していた。
ゆかり的には今年の夏に出した新曲を歌って欲しかったようで、去年ヒットしたドラマの主題歌を今年も歌われてもマンネリ感が強いらしい。
とはいえ、ドラマと共にヒットした歌ではあるので、歌い終わると会場中で拍手が起こり盛り上がっていた。
大きなヒット曲がない年だと番組の盛り上がりもイマイチなので、

定番曲を歌うグループがいようと今年は出演者の選定もバランスがよくちゃんと盛り上がっているように思える。
　それから交互に歌って数組が歌い終えると、天田が少しソワソワし出したので、急にどうしたと荒垣が声をかけた。
「おい。落ち着かないでどうした？」
「え、いや、その……。今回の白組の応援ゲストでフェザーマンが出るらしいって話があって」
「他局なのに出て良いのか？」
「えっと、夏の劇場版が異例の大ヒットで、邦画の歴代興行収入のトップテン入りしたので、子どもやファミリー層への話題性もあって呼んだみたいです」
　天田が説明した映画はここにいる全員が知っている。
　湊がゲストキャラクターとして出演していた事もあって、若い女性を中心に話題になったが、アクション映画の有名監督がメガホンを取ったストーリーもどちらかというと大人向けで、今年の映画は幅広い年齢層にウケて大ヒットに繋がった。
　この歌番組のテレビ局もそうした話題があれば他局の特撮番組でも呼ぶのに問題ないと判断したのか、天田が言った通りに変身前のフェザーマンたち七人が舞台に現われた。
　続けて怪人も現われてゲスト審査員を人質に取ると、スモークで舞台の上が真っ白になり、その中から変身したフェザーマンたちが現われてヒーローショーが始まる。
　男子たちはまさかこの番組でフェザーマンが見られるとは思っていなかったと楽しんでいたが、そば湯を飲んでいた美鶴が先ほどの天田の言葉を思い出して素朴な疑問を口にした。
「ん？　劇場版のヒットが切っ掛けなのに、八雲と柴田さやかは出ないのか？」
「八雲君たちは映画の宣伝で番組出演はしてましたけど、これはその範囲に含まれないから契約外でオファー出来なかったんじゃないですかね」
「なるほど、そういう物なのか」

確かにフェザーマンは劇場版のヒットから歌番組への出演が決まったが、劇場版のゲストキャラクターとして出演した湊とアイドルの柴田さやかは劇場版関連の宣伝以外は出演する義務がない。
それを越えてさらに出演して貰おうとすると、二人とも話題の人物と言うこともあって依頼料がかなりかさむ。
七歌の予想ではフェザーマンたちの出演料を合せた額よりも、湊か柴田を一人呼ぶ方が多く掛かる。
番組全体での予算もあるはずなので、メインキャラたちと怪人を呼んでのヒーローショーでも十分に頑張ったと方だ。
テレビ越しの視聴者を楽しませ、会場も盛り上がっているので、白組の応援ゲストに彼らを呼んだのは英断だったと言えるだろう。
綾時は封印の関係もあって映画を観ていないが、他の男子たちは全員が観たこともあって、会場の盛り上がりを考えると今年は白組の勝ちだなと話している。
しかし、まだ番組は中盤に差し掛かったところだ。紅組には今年大ヒットを飛ばした歌手やグループも残っている。
いくら何でも勝ちを確信するのは早いのではと七歌は反論した。
「確かにフェザーマンは盛り上がったけど、あくまで歌合戦だからね。ゲストのヒーローショーで勝ちを確信するのは流石に早計でしょ」
「つっても、七歌っちは紅組にこれ以上の応援ゲストいると思うか？
フェザーマンの興行収入は今年じゃなくて歴代トップテンなんだぜ？　今年一番の話題の人って考えたらやっぱ勝ちは固いって」
順平がそんな風に言えば、他の男子たちも妙に勝ち誇った顔でテレビを視ている。
別にお前たちは何もしていないだろうと言いたいが、彼らにすれば自分たちの性別と同じ男チームである白組が勝つと嬉しいらしい。
七歌たち女性陣は彼らのその感覚はよく分からないものの、男子たちが妙に勝ち誇っている顔が男の方が上だと言っているようで勘に障った。
この後の出演者を見るために風花が席を立って新聞を取ってくれば、女性陣は今の白組優勢な空気を変えられそうな者はいないかと探

す。
後半にはベテラン勢や歌姫と呼ばれる者もいるが、順平の言ったように今年の話題性で言うと少し弱い気がした。
ここにいる七歌たちに出来る事はないというのに、ゆかりはどうすると真剣な顔で他の者に相談する。
「マジで今の流れだと白優勢なんだけど、これひっくり返すの難しいと思う？」
「ドラマとか映画の主題歌組もいるし。Ｙｕｒｉとかアジガルも残ってはいるけどね。インパクトで言うと確かにもう一声って感じかな」
「そうなると、紅組の応援ゲストと出演者のミニコーナーが鍵になるね」
ゆかりと七歌と風花が一緒になって話し合うと、白組の残りのメンバーは紅組の出演者とそう変わらないレベルだと判断された。
そうなってくるとやはりステージセット変更中の時間繋ぎに行なわれるミニコーナーなどが鍵になってくる。
天田はフェザーマンが白組の応援ゲストに出ると知っていたが、紅組の応援ゲストも全員が公表されている訳ではないので、とんでもないサプライズゲストが残っている可能性がある。
男がどうだの女がどうだのはどうでも良いが、順平たちの顔がムカつくから紅組に勝って欲しい。
女性陣がそう願って食後のお茶を飲みながら番組を見ていれば、紅組司会者が応援ゲストの登場だと言って舞台がスモークに包まれた。
フェザーマンの変身シーンばりの演出に、もしや本当にとんでもないサプライズゲストが登場するのかと期待が高まる。
そして、スモークの中に人影が見えたと思えば、次の瞬間にスモークが弾けるように一瞬で霧散し、中から中世ヨーロッパの貴族のような豪華な衣装を身に纏った湊と柴田さやかが現われた。
湊は蒼銀の糸で刺繍が施された黒のジャケットの胸に真紅の薔薇という出で立ちで、対する柴田は黄金の糸で刺繍が施された真紅のドレスを見事に着こなしている。
少し前に白組の応援ゲストでフェザーマンが登場した事もあって、

そちらを知っている者たちは二人の衣装が劇場版フェザーマンで自分が演じたキャラのイメージカラーを取り入れている事にすぐに気がついた。
だが、二人はあくまで有里湊と柴田さやかとして登場しており、フェザーマンとは無関係ですよと言った雰囲気を出している。
アイドルである柴田は歌番組に出てもおかしくないが、スポーツと美術工芸分野で有名になった青年が歌番組で何をしようと言うのかと注目が集まる。
すると、青年は気品に溢れた仕草でヴァイオリンを構え、柴田も姿勢を正すと目を閉じて厳かな雰囲気を纏い。ヴァイオリン演奏でアメイジング・グレイスを歌い出した。
フェザーマンの登場からどこか浮ついていた空気は鎮まり、柴田の透き通るような歌声がヴァイオリンの旋律に乗って人々へと届けられてゆく。
七歌たちもテレビ越しではあるが自然と歌と音楽に集中し、二人の演奏に聴き惚れる。
二人の演奏に特別な演出はない。暗い舞台の上で、音を奏でる二人がライトに照らされているだけだ。
だというのに、テレビ越しに見ている七歌たちも、何故か二人の周りに不思議な光の玉が踊る様を幻視し、ライトとは別の温かく神聖な光が彼らを照らしているように見える。
時間にすれば四分ほどの事だが、その僅かな時間だけ番組を見ていた日本中の人々がただ静かにその演奏に耳を傾けた。
音楽分野で何の功績も持たない素人の青年と、〝アイドル〟という色眼鏡で見られやすい肩書きで歌を歌っている少女の全力の演奏は、聴いていた人々の記憶と心に深く刻み込まれる。
画面の向こうでは審査員と観客だけでなく、他の出演者たちも惜しみない拍手で二人を讃えている。中には感動のあまり涙を流している者もいた。
まさかの人物の登場に驚いていた七歌たちも、応援ゲストにこんな最終兵器を投入してくるとは思わなかったと苦笑する。

「いやぁ、完全に出演者を喰っちゃうゲストは問題あるとおもうなぁ。テレビ番組の演奏で鳥肌立つとか初めてだよ」
「八雲さんの隠された特技も驚きましたが、柴田さんの心に届く歌唱力も凄まじいものでした」
「うーん。ウチも流石に予想外やったわ。っていうか、この二人って未だに連絡取り合っててんな」
　世間の注目を集めるための仕込みで熱愛報道を流した二人は、イベントを終えた後も連絡を取り合っていたようで、司会者たちにどうして今回のコラボレーションが実現したのか訊かれて答えている。
　元々は、柴田のアイドルという枠に収まらない圧倒的な歌唱力を使い、聴いている者たちの注目を一気に掻っ攫う予定だったらしい。
　けれど、自分の持ち歌や名曲を豪華なバンドメンバーと演奏しても、番組を盛り上げる一要因になるだけで人々の記憶に深く刻み込まれる事は無いと彼女は思った。
　そこで考えたのが伴奏一人と自分の歌だけという誤魔化しの利かない演奏形態での全力勝負。
　失敗すれば自惚れアイドルという烙印を押されるため、事務所だけでなくオファーを出した番組側からも止めた方が良いのではと言われたという。
　しかし、柴田はそれでもやりたいと、どこまで出来るか挑戦したいと企画を押し通した。
《でも、本当に大変だったのはそこからでしたね。年末ってコンサートが多くて、共演オファーを出してもスケジュールが厳しいからと全然通らなかったんです。準備期間も短いのに伴奏が一人っていうのも問題だったみたいで本当に焦りました》
《ええっ!?　そんな状態だと周りから企画を変えるように言われたりしたんじゃないですか?》
《事務所の社長からも言われましたね。でも、やっぱり歌で勝負したいと思ったので、最後にダメ元で有里君に伝手がないか聞いてみたんです。そしたら、楽器は一通り出来るって返してきて。そういえば、前に野外フェスでもピンチヒッターで普通にギター演奏してたなっ

て思い出して》
　ＥＰ社の伝手を使えないか尋ねたというのに、まさかの本人が楽器は一通り出来ると返してきた事で、柴田は実力を確認して行けそうなら共演もありだと思ったらしい。
　事務所と番組プロデューサーもそれは面白そうだと食いついたそうだが、やはり実際に実力を確かめなければ許可は出せない。
　曲は柴田が事前に『アメイジング・グレイス』に決めたので、音響スタッフや知り合いのプロの演奏家の見ている前で彼に演奏させてみたところ、本人の言った通りピアノやヴァイオリンにフルートなどの楽器をやらせても問題ないとすぐに許可が出たという。
《私、他人の才能に嫉妬とかって基本的にはしないんですけど、レッスンしてくれる先生が有里君の事ばっかりべた褒めした時は、この才能マンめってホントにムカついたんです》
《……別に楽譜通りに引いてただけですけどね》
《ほら、こういう事を平気で言ってくるんですよ？　だから、途中から私と有里君が音で殴り合う感じにレッスンが進んだんです。おかげで天井知らずに上達して思っていた以上の仕上がりになりました》
《やめてください。せっかくの感動にそういう裏話は聞きたくないです》
　湊も柴田もやや腹黒な部分がある事をカメラの前でも隠していないので、司会者が感動が薄れるからそういう話はしなくていいと慌てて止めている。
　彼らのやり取りに会場は笑いに包まれたが、二人の演奏は柴田の思惑通りに人々の記憶に深く刻み込まれたのは間違いない。
　二人の出演はここまでのようで、湊が柴田の腰に手を回してエスコートしながら舞台から去って行くが、彼らが舞台から完全に見えなくなっても拍手が続いていた。
　先ほどまで白組優勢だった空気が一気に紅組優勢に変化し、勝ち誇っていた男子たちの表情もやや曇っている。
　それを見た七歌たちは思わずハイタッチし合って喜んだ。
「イエーイ、八雲君の一手で逆転ですよ。これはもう紅組の勝ちで決

まりかなぁ？　さっきまでは白組優勢だったのに、応援ゲストの登場で逆転しちゃってホントに申し訳ないなぁ!!」
「ねぇ、本当にねぇ！　でもぉ、歌番組なのにヒーローショーで勝つのもおかしな話だし。本格的な歌と演奏に負けるのはある意味当然よねー！」
　先ほどまでは白組が優勢だったので文句を言いづらかったが、逆転すればこっちのものだと七歌とゆかりは男子たちを全力で煽る。
　二人は男子たちの方を見ずに言っているものの、言葉の端々から〝ねぇ、今どんな気持ち？〟と嘲笑が感じられる。
　そんな彼女たちの反応に順平は歯ぎしりして悔しがり、荒垣も苛ついているのか貧乏揺すりをしている。
　さらに真田も不機嫌な様子を隠さず、一気にお茶を飲み干すとコップを勢いよくテーブルに置いた。
「クソッ、あの裏切り者め。男なら白組で登場するべきだろうがっ」
「大人は汚いですよ。あの衣装シグルムとガルダのイメージカラーに合わせて、ばっちりフェザーマンの人気も意識してるじゃないですか」
「僕は正直勝ち負けはどうでも良いんだけど、ドレス姿のアイドルの腰に手を回していたのは羨ましいな」
　珍しく天田もこんなのずるいとストレートに感情を表に出し、綾時だけは他の者と違った視点ではあるが湊に文句を言っている。
　女子たちはそんな彼らの様子に非常に満足しているようで、マナー違反ではあるがお茶のカップで乾杯して祝杯をあげる。
　忙しそうにしていた青年が年末の国民的音楽番組に登場するなど、まさかのサプライズだったが視聴者だけでなく仲間たちも大いに盛り上がることが出来た。
　男子たちにとっては最悪な締めくくりになったかもしれないが、女子たちは来年も良いことがありそうだと小さな期待を胸に大晦日を過す事が出来たのだった。

第四百九話　年の初めに

２０１０年１月１日（金）
早朝――ＥＰ社
世界の滅びが預言されるも、年は明けて世界の終末まで残り一ヶ月となった。
無気力症の拡大によって人々の意識は気付かぬうちに陰気に染まりつつ、けれど、年の初めは特別なのか今日は空気の淀みが僅かに晴れて明るい気配が街を包んでいる。
もっとも、朝日が昇るよりも前にベッドの中で意識を覚醒させた青年は、ベッドサイドチェストの上に置いていた携帯を手に取って時刻を確認し、もう少し寝るかと再び意識を落とそうとする。
世間では前日から山に登ったり、暗い内から車を海岸まで走らせてまで初日の出を拝もうとする者もいるが、随分と暇を持て余した物好きもいるものだと他人の趣味を馬鹿にするのがこの青年だ。
二度寝する前に来ているメールに目を通していれば、新年の挨拶メールの中に『今、御来光を見に富士山にきてます！』とタイムリーな内容のものを送ってきている者もいた。
相手はバスケ部の渡邊でどうやら他にも数名のバスケ部仲間が一緒に行っているらしい。
中等部時代に生徒会長として数々の尻拭いをさせられてきた身として、冬の富士登山にバスケットボールを持っていって、山頂でパスをして日本最高到達点のパスなどとくだらないことをしてはいないだろうなと不安になる。
パスキャッチに失敗して薄暗闇をボールが転がり落ちていきでもすれば、無関係の人が巻き込まれて大惨事になる可能性もある。
まぁ、そんな事があったところで湊には関係のない話なのだが、新年早々同じ学校に通っている人間が他人に迷惑を掛けない事を祈りつつ、湊はさらにメール画面をスクロールしてチドリたちからの初詣の誘いを見つけた。
どうやら特別課外活動部と総合芸術部のメンバーで揃って初詣に

行く予定らしい。
総合芸術部は中等部の美術工芸部のメンバーにラビリスを足しただけの部活なので、幽霊部員状態であっても湊も含まれる事になる。
揃って初詣に行く予定と言われても湊にすれば初耳なので、予定を組む段階で相談してくるべきではと思ってしまう。
連絡自体はチドリだけでなく参加する女性メンバー全員と綾時から集合時間と場所の詳細が来ており、綾時以外の男性メンバーからはやや定型文な新年の挨拶メールが来ているのみだ。
特別親しくもない人間からの定型文のメールなどスパムメールと大差ない。順平、真田、荒垣、天田のメールを選択し、キャリアの迷惑メールサポートデスクのアドレスを選ぶと選択したメールの転送処理をする。
これでもし迷惑メール認定されれば、湊の使っている携帯キャリアでは彼らのアドレスから送られたメールは自動で弾かれて届かなくなる。
まぁ、明らかに通常利用されているアドレスなので、数回転送した程度で迷惑メール認定される事などあり得ないのだが、万が一の事態が起きないとは言い切れない。
四人は桐条グループ系の携帯キャリアで、湊はそことは別の会社の携帯を使っているため、その時には四人は美鶴経由で桐条グループの携帯キャリアに連絡を入れ、湊の使っている携帯キャリアに設定の解除を要請して貰う事になるだろう。
チドリたちが聞けば元旦から何をしているんだと呆れるだろうが、この場に彼女たちはおらず青年に対するツッコミはない。
と思いきや、ベッドに横向きに寝転んだまま携帯を操作している彼の背後で毛布が蠢き、中から白い腕が伸びると肩越しに抱きつくように青年の首へと回される。
そして、毛布の中から続けて頭が出てきたかと思えば、その持ち主は湊の耳元へ口を近づけて小さな声で囁いた。
「女の子を放っておいて何してるのかなぁ？」
「……知り合いからのメール確認ですよ」

「隣に裸のトップアイドルがいるのに、他の子とメールしたりしちゃうんだね。有里君は薄情者だなぁ」
湊は先ほどまで寝ていたが、年が明けてからまだ数時間しか経っていない。
部屋のカーテンを開けても外は真っ暗で、この時間から活動している者など初日の出を見に行っている者か、徹夜している人間くらいなものだろう。
だというのに、彼の寝ているベッドにはトップアイドルの柴田さやかが一糸纏わぬ姿でいた。
彼女は自分がこんなあられもない姿で傍にいるのに携帯を弄っているなんてと少し頬を膨らませると、彼の手から携帯を奪って枕の下に隠してしまう。
そして、これで邪魔な存在はなくなったと満足げな表情を浮かべれば、横向きになっていた湊を仰向けにさせて、そのまま自分は湊に覆い被さるように上になる。
互いの胸を密着させて心臓の鼓動を感じ、相手の存在を強く意識しながら少女が湊の首筋に小さな唇を押し当ててくれれば、湊は相手の肩が外気に触れないように毛布を手繰り寄せつつ言葉を返す。
「夜の内に十分楽しませたつもりですけどね」
「酷いなぁ。こういう関係になる予定はなかったのに、有里君に誑かされちゃった」
「……共演が決まってからのレッスン時点で、強く異性として意識されている様子でしたが？」
元々、湊も柴田も役として恋人を演じることはあっても、あくまで仕事上のパートナーという関係でそれを崩すことはなかった。
柴田は自分のアイドルという仕事に誇りを持っていたし、湊は相手と親しくなろうと人間的に好ましいかどうかの判断でしか見ていない。
周りの人間がどのように自分たちを見ているかは理解していたが、それでも男女の関係になる事はないだろうと思っていたのに、年が明けてみれば二人は湊が自分用に確保しているＥＰ社の私室で肌を重

ねていた。
どうしてこうなったのかを思い返せば、発端は柴田が色々言いつつも湊を異性として意識していた事になるだろう。
湊は相手を嫌っていないし、そのプロ意識には好ましさを覚える。容姿は整っているとは思いながらも、まぁ、周囲の女子と比べれば〝普通〟という評価になるが、それは彼の周りにいる女子たちのルックスが整いすぎているだけだ。
逆に、柴田からすれば湊の容姿は業界内でもトップレベルで、ミステリアスな部分は多いが接してみると妙に一般常識からズレていて中々に面白いという評価。
そんな相手をレッスンのためとは言えしばらく独占していれば、年頃の少女としてどうしても意識してしまうのも無理はない。
故に、青年の首筋から唇を離した少女は、自分はアイドルであると同時に一人の人間なのだとムスッと目を細めて反論する。
「そりゃ、アイドルとは言っても花の女子高生ですし？　年下と言っても一つ違いなら全然許容範囲な訳で、君みたいな綺麗な顔の男の子の真剣な様子を間近で見続けたら意識しないなんて無理だよ」
「プロ意識の塊だと思っていたので、こういう曖昧な関係で身体を許してきたのは意外でした」
「うぅ……そこは雰囲気に流されたとしか言えませぬ。というか、二人だけの打ち上げから言葉巧みにここへ連れて来たのは有里君でしょ。自分の方が最初からそういうつもりだったくせに、私としてはちゃんと責任とって貰いたいんですけどね？」
生放送の年越し歌番組に登場した二人は、観客と視聴者たちを音楽の力で圧倒してみせた。
インターネットでもすぐに話題になったようで、柴田は挑戦して良かったと上機嫌なまま打ち上げを提案したが、年越し直前に未成年が飛び込みで入れるような店などほぼない。
彼らの知名度を考えれば一時間程度の食事でも騒がれる事は間違いないので、ではどうすれば打ち上げに行けるかと悩んだ柴田へ、湊は会社の施設なら自由に使えると私室へ案内した。

扉を入ってすぐのスペースだけならば、リビングとダイニングに簡易キッチンが併設されている形で、ドラマの中で見るホームパーティーをするような家のイメージに近い。
冷蔵庫の中には食材もあったので、自分たちで作った料理で今日の大成功を祝おうと彼女もノリ気になったところまでは良かった。
だが、仕事が終わってから移動したので、料理を作って、それらを食べてとしている間に時間も遅くなり、気付いた時には今から帰れば車の中で新年を迎えることになるという状況になっていた。
せっかく楽しい気分でいたというのに、そんな新年の迎え方は御免被りたい。
何より、もう少しこの楽しい時間を過していたいと思っていた少女に、全てを見透かすような瞳を向けていた青年がこのまま泊っていくように言った。
そして、気付けば距離が近くなっていて、動揺して冷静さを欠いていた少女は言葉巧みに言いくるめられ悪い狼に食べられてしまったのだ。
愛の言葉など一言も聞いていないし、付き合って欲しいと告白を受けた訳でもない。
なので、二人は恋人関係になどなってはいないのだが、少女が何かを期待している事に気付いた嗅覚と、そこから獲物を捕らえるまでの仕事運びがやけに手慣れていた事に柴田は今更になって気付いた。
「有里君って結構遊んでるでしょ？　誰とも付き合わないでこういう事ばっかりしてるんじゃない？」
「……まぁ、否定はしませんよ。相手には申し訳ありませんが、特定の誰かと付き合う気はないんです。他の人間と肌を重ねるなっていうなら、まぁ、関係の継続を条件に呑むことも出来ますが」
「何よそれぇ。言っておくけど、私の方が年上で芸歴も長いんだからね？　都合の良い女扱いしてると怒るよ？」
独占という形で事実上の恋人関係にはなっても、正式に付き合う気はないと断言する青年を少女が睨む。
確かに一般人であるはずの湊の人気は、同年代の若手人気俳優たち

を大きく突き放して独走状態と言って良い。
けれど、柴田も競争激しい世界でトップアイドルと呼ばれ続けるだけの人気と実力を誇っている。
そんな両者は対等な関係か、芸歴を考えれば柴田の方が上位だと言っても良いはず。
だというのに、湊の言葉はどことなく上から目線なので、生意気な事ばかり言っていると怒るよと年下の青年を窘めた。
「確かに私の方がこういった経験が浅かったことは認めます」
「……浅いどころか未経験だったかと」
「むしろ、普通です。アイドルはおトイレも恋愛もしませんので」
アイドルとして活動してきたこともあって、柴田は湊に喰われるまで純潔を守っていた。
二人の寝ているベッドのシーツにもその証が残っているので、経験値で負けている事は彼女も認める。
ただ、だからといって先輩後輩の立場が変わることはないのだと改めて湊に言い聞かせた。
「業界において芸歴は人気よりも重い。分かったら生意気な発言は禁止。あと、本当に責任は取って欲しい」
「恋愛は御法度とされるアイドルの頂点に立ちながら、世間から徐々に俺とセットで見られるようになった貴女にすれば、ただの柴田さやかとして接する事の出来る同年代の異性は非常に都合がいい存在ですよね」
「……むぅ、有里君のそういう人の内面を全部見透かしてるようなところ嫌い」
少女がどれだけ真剣に責任を取って欲しいと願っても湊はそれを聞き流す。
言った本人もそう答えることは分かっていたので、ここでヒステリックに叫んだりはしないが、やはり面白くはないので肩と首の境界辺りに口を近づけると、歯を立てるようにして噛み付いて傷を付けた。
動物に比べて顎の力が弱いと言われる人間でも、力を入れて噛み付

けば皮膚を突き破って血を流させる事は出来る。
　そうして、じんわりと滲んだ血を吸い出すようにして喉の奥へと流し込めば、柴田はビクリと身体を震わして急に熱の籠もった視線で湊を見つめ、荒い息づかいのままに貪るような口づけをしてくる。
「ん、はぁ、はぁっ……ねぇ、有里君、身体、熱いんだけど、何かした？」
「……俺の血を飲むからですよ。薄めても気付けに使えるのに、原液を摂取したら身体が活性化し過ぎて辛くなるはずです」
「ど、どうすればいいの？　お水、飲んだら、治る？」
　スッポンやウナギで元気が出るように、覚醒した名切りの血も滋養強壮薬として使えるくらいに栄養がある。
　ただ、健康な人間が原液で飲むと身体が活性化して気が狂いそうになるくらいに危険でもあった。
　飲んだ後に水を摂取しても、身体に入った血液の量が減るわけではないため、そんな事をしても意味がないと説明しつつ湊は解決策を教えた。
「水は意味ないですが、言って身体が昂ぶってるだけです。そういう運動をして発散すれば治りますよ」
「……変態」
　恨みがましい視線を向けてくるも、彼女自身もそういう発散の仕方があると分かっていたのか、毛布の中で身体を押し付けてきていた。
　湊にすれば軽率に所有権を主張するために傷を残そうとしてきた罰が当たったとしか言えないが、柴田から求められれば応じる気はあったので、湊は身体の位置を入れ替えるように相手を組み伏せる。
　そして、柴田が飲んでしまった血の効果が抜けきるまで獣のように何度も交わり、最後は柴田が意識を失う形でようやく事態は落ち着いたのであった。
　湊は勿論、アイドル業から女優業に転向しつつある柴田もしばらくは正月休みで仕事はない。
　よって、気を失った相手の身体を濡れたタオルで拭いて最低限綺麗にしてから着替えさせると、湊は出掛けてくるという置き手紙を残し

て部屋を出た。

第四百十話　神頼みと運試し

午前――長鳴神社

滅びの訪れまで一ヶ月。

とはいえ、ニュクスに抗うと決めた特別課外活動部と助っ人を務めるメンバーたちの中に、そのプレッシャーに負けて引き籠もるような者はいない。

影時間の適性を失いながらも、幼い八雲のかけた暗示によって記憶を取り戻した美紀でさえ、彼らから事情を聞いてから自分も手伝える事があれば何でもすると共に戦う覚悟を決めていた。

子どもでありながら数々の修羅場を潜ってきた彼らの決意には頼もしさを感じる。

だが、そんな彼らも新年を迎えたばかりの今日くらいは新たな年の幕開けを祝いたい。

また、今後の戦いは自分たちの力だけではどうにもならない部分も出てくるかもしれないので、普段は存在するかも不明な神には祈らない真田ですら、あやかる事が出来るのなら神頼みで運を味方に付けられたらと考えていた。

そうして、着付けがあるからと女子たちはラビリスのマンションに集合し、男子たちだけが先に神社の鳥居の前で待っていれば、元旦にしては人通りのほとんどない住宅街を通って華やかな集団が現われた。

「おっすおっす、お待たせっ!!」

「うーっす。ってか、すげぇ集団だなー。お世辞抜きに光ってるエフェクトが見えるわ」

「本当だね。新年早々、こんな素敵な光景が見られるだなんて幸先がいいや」

橙色の着物姿で登場した七歌の後ろには、黒い着物姿の美鶴、赤い着物姿のゆかり、薄水色の着物姿の風花が立っている。

さらにその後ろには桜色の着物姿のアイギス、黄色い着物姿のチドリ、紫色の着物姿のラビリス、青い着物姿の美紀、しめ縄を巻いたコ

ロマルが並んでいた。
色とりどりの着物に身を包んだ十人近い集団だけでも目立つというのに、ここに来たメンバーは誰も彼もが非常に見目が整っている。
オマケに土佐闘犬のようにしめ縄を巻いたアルビノの柴犬まで一緒にいれば、目を奪われない方が難しいというものだ。
普段は快活なオーラ全開の七歌も、発した台詞は別にしてその姿は大和撫子然とした艶やかさがある。
順平は顎に手を当ててじっくりと眺め、綾時は写真を撮っても良いかなとカメラを手に持つ。
そんな二人の後ろでは真田と荒垣が妙にソワソワしながら女子たちを見つめ、天田も少しだけ頬を染めて年上の女性たちに見とれていた。
オヤジ臭い順平の反応や、コミュニケーション能力が高く純粋さの見える綾時はともかく、先輩であるはずの三年生二人の方が女子慣れしていない反応なのは如何なものか。
そういった部分に敏感な女子たちは三年生二人の残念さに感づきながら、新年早々にそういった事を指摘するのも野暮かと大人な対応で流した。
ただ、よく見れば集まる予定のメンバーが揃っていないことに気付き、あと一人はどうしたんだとアイギスが尋ねた。
「皆さん、八雲さんはまだ来られていないのですか？」
「あぁ。というか、あいつも来るのか？　誘ったとは聞いたが、俺たちが送った新年の挨拶メールにもまだ返信がないぞ？」
アイギスの質問に真田が答えて返信がない証拠として携帯のメール画面を見せる。
確かにそこに湊からの返信メールは存在しておらず、彼の周りにいた男子たちも同じように頷いている。
けれど、それに対して女子たちは不思議そうに首を傾げると、持っていた巾着袋から携帯を取り出して一通の返信メールを開いて見せた。
「集合時間と場所を伝えるメールを送っておきましたが、三十分ほど

前に〝わかった〟とだけですが返事がありました」
「私たちも同じように連絡をしていたが、同じタイミングで返事が来ている。まぁ、一斉送信機能で返事をしたようだが、とりあえず来る気ではいるらしい」
女性陣と綾時からほとんど同じ内容で連絡を受けた湊は、返事を返すつもりにはなっても面倒に思ったようで、ただ一言だけの返事を一斉送信で返していた。
どうしてそこで綾時を対象から外したのかは不明だが、とりあえず来る気でいることが分かったなら待っていようという事になる。
湊は年越し前の歌番組に出て仕事をしていたので、疲れて眠っている可能性もあると思っていた。
しかし、集合時間の三十分前に連絡が来たのなら、起きてから準備をしてこちらに向かっているのだろう。
急に集まる連絡を入れたので多少遅れてもしょうがないと、集まった者たちで新年の挨拶を済ませて雑談していれば、集合時間から十分ほど遅れて法定速度を完全に無視した一台のバイクがやってきた。
住宅街で何という速度を出しているんだと唖然としている間に到着するバイク。
そこから降りてヘルメットを脱いだ青年は、首に巻いていたマフラーを解いて中にヘルメットを放り込むと、続けて巨大化させたマフラーでバイクを覆って収納してしまう。
もし、彼を追いかけてパトカーがやって来たとしても、ナンバーを控えられるというヘマをするとは思えないため、証拠になるバイクが存在しない事から逃げ切り勝利になりそうだ。
元旦の内から何を馬鹿な事をしているんだと呆れつつ、両手に持ったマフラーを元のサイズに戻している青年に全員で近付く。
そして、自分が最初に彼に挨拶するんだとアイギスと七歌が他者より一歩先へ踏み出した時、普段はマフラーで隠れている彼の首筋に小さな内出血の後がある事に気付いた。
よく見ればその近くには別の小さな傷もあって、後からやってきた者たちもそれに気付いたのか男子たちは呆れ顔、女性陣は白い目を彼

に向けた。
だが、当の本人はそんな他の者たちの反応に気付いていないのか、バイクの収納を終えると元のサイズに戻ったマフラーを巻き直し、満足のいく仕上がりになるとポケットに手を入れてやる気の無い目を正面に向けた。
そこでぶつかる視線と視線。一方は集団でもう一方は個人だが、個人の方は特に何も考えていないのか集団の視線に込められたものを受け流す。
男子たちはよくそれを受け流せるなと感心するも、受け流された女子たちにしてみれば眼中にないと言われているようで気分は良くない。
もっとも、女子たちに五月蝿く言われると分かっていれば、湊はその対処に多少の労力を割くくらいはしてくる。
今回の場合は小さな怪我が目に付く限り二箇所なので、ツクヨミを召喚して回復スキルを使うまでもなく肉体を活性化させて自動治癒の力を使えば消すことが出来ただろう。
それをして来なかったという事は、恐らくだが湊は自分の首筋に情事の証拠となる痕が残っていると気付いていない。
となれば指摘しない限り彼は女子たちの視線の意味を理解しないはずなので、一同を代表してチドリが自分の首に触れるジェスチャー付きで彼に声をかけた。
「……はぁ。八雲、首筋に不快な痣が残ってるわよ。そんな痕をつけて重役出勤なんて偉くなったものね」
「……痣？」
言われて何の話だと不思議そうにする湊。
やはり、彼はそんなものがあるとすら認識していなかったようだが、巻いたばかりのマフラーを解き、そこから鏡を取り出すと言われた場所を映して見ている。
鏡を使えば簡単に分かるくらいに一部だけ色が変わっているので、湊もそれが何であるかはすぐに分かったようだが、鏡をマフラーに収納しながら眉を顰めた彼は僅かに不機嫌そうに舌打ちをすると小さ

く呟いた。
「……チッ、あの女」
「こっちにしてみれば目の前の屑の方が不快なのだけど？　新年早々にそんな事していながら、待ち合わせに遅れるってどういう了見よ」
「お前たちからのメールよりこっちが先だ。来て欲しいならもっと早く伝えてこい」
湊は言葉を返しながら自動治癒を使ったのか傷と痣はすぐに消えた。
それを目の前で見ていた方にすれば便利な身体だと思ってしまうが、彼の言葉が随分と偉そうだったので、彼に強く出られるメンバーが目を細めて反論する。
「そもそも、湊君がテレビ出るって聞いてへんかったからな。歌番組一つなんか深夜帯とか朝からの番組にも出るんか分からんくて、連絡が遅れてしもうたんよ」
「とりあえず送っておけば時間が出来たタイミングで見るし、ダメならダメだと返事もする。あと、サプライズゲストは知人にも基本的に出演を教えられない決まりがある。まぁ、桜さんとおばさんには出ると伝えていたがな」
出演することが分かってしまえばサプライズ感が薄れてしまうため、湊と柴田の出演は番組製作側を除けば極限られたメンバーにしか伝えられていなかった。
ただ、桜と英恵は湊の出演する番組は全て録画するタイプなので、録り逃せば文句を言われるだろうとこっそり伝えておいたが、どうやら二人は湊との約束を守って他の者には話さなかったらしい。
昨夜は桜と一緒に実家にいたチドリ、英恵からしっかり録画したというメールを貰っていた美鶴の両名は、どうして母親たちがバッチリ録画出来ていたのか理解し、途端に表情が何とも言えないものに変化する。
他の者にしても番組側との契約で伝えられず、それでも保護者にはちゃんと伝えていたこともあって、これ以上それを責めるのはお門違いかと悟る。

とはいえ、世界の滅びまで残り一ヶ月を切った。これから気を引き締めていかねばならないという状況である事は間違いない。
そんな時にお前は何をしているのかと。年明け早々にどこの誰と何をしているんだと、たるんでいるメンバーに注意することは間違っていないだろう。
腕を組んで真剣な表情をしていた七歌は、そういった思考で自身の正当性を確立して湊に声をかけた。
「八雲君、これから一ヶ月後には戦いがあって、私たちはそこに向けて意識を高めていかなきゃいけないと思うの。そりゃ、常に気を張っていろとは言えないし、未来に目を向けるなら恋愛もありだとは思うけど、しばらくはそういう不純異性交遊は自粛して欲しいかな。ってことで、ソフィアさんにも伝えておいてくれる？」
「……何でソフィアが話題に出てきたのか分からないが、まぁ、伝えておこう」
年が明けてからはまだソフィアに会っていないが、ラビリスと暮らしていたマンションにはしばらく帰っていない湊にとって現在の住居はＥＰ社という事になる。
ニュクスとの戦いについて伝えている事もあって、ソフィアもしばらくは日本に滞在して青年のサポートをするつもりだ。
よって、初詣が終わってからＥＰ社に戻れば顔を合せることになるだろうと、湊は七歌からの言葉を伝えると了承した。
しかし、そんな彼の返事を聞いて今度は他の者たちが首を傾げた。
湊とソフィアが公私で一緒にいる事が多いと知っていたため、彼の姫始の相手もどうせソフィアだろうと思っていた。
だというのに、今回のキスマークの話の流れから七歌がソフィアの名前を出せば、湊はどうして唐突にソフィアの名前が出たんだと不思議そうにしている。
そうなってくると話がややこしい方向に行くぞと察した男子が僅かに距離を取り、直後にアイギスがストレートにキスマークを付けた相手について尋ねた。
「ソフィアさんではないのですか？」

「立場を弁えてるあいつがわざわざ痕なんて残すはずないだろ」
「じゃあ、一体どなたが？」
「柴田さやかだ。恋愛未経験の処女はこういうところで面倒くさい。すぐに彼女面して人を束縛したがる。今朝も責任取れと五月蝿かったからな。仕事では尊敬も出来るが、プライベートでは欠片も尊敬出来ないタイプだ」
突然出てきたビッグネームに全員が目を見開いて驚く。
加えて、簡単に名前を出したが世間に知られれば新年早々とんだスキャンダルだ。
彼の口ぶりでは関係を持ったのは今回が初めてのようだが、どちらにせよ世界の滅びまで一ヶ月を切ったタイミングでよく相手を増やせるなと、距離を取っていた荒垣たちから呆れ気味に声が上がる。
「お前、その発言も大概屑だぞ。つーか、アイドルのスキャンダル簡単に話してんじゃねぇよ」
「マジかぁ。うわ、なんかマジで何だこれ。言いようのない喪失感と有里への殺意が湧き上がってくるんだけど？　つか、確かに二人の共演多かったけど、サーヤとマジでそういう関係になるとか無しだろぉ」
「小学生の天田やこいつらと違って穢れていない美紀もいるんだぞ。少しは気を遣おうとは思わんのか」
真田の口にしたこいつらとは美紀を除いた女性陣の事だが、正確に言えば美紀を含めた四人が未だ純潔を守り、残りの四人が彼女たちの前に立っている下衆に純潔を散らされている。
なので、美紀以外の全員を穢れているというのは言い過ぎであり、言った直後に美鶴から絶対零度の視線を向けられ、瞳孔の開いた七歌に胸ぐらを掴まれて真田は怯えていた。
妹の美紀は失言をかました兄の方には一切視線を向けず、トップアイドルと肉体関係を結んだ青年の方を見ている。
他の女性陣もほとんどはそちらを見ており、いくら下衆と言えども彼に想いを寄せてしまっている少女としては今後が気になるのか、再びアイギスが代表して柴田との関係について質問する。

「八雲さんは柴田さんとお付き合いされるのですか？」
「その気はない。昨日は相手が期待していたから抱いただけだ。身体の関係は続けてもいいが、他のやつとも付き合う気はないから安心していい」
「個人としては喜ばしい事ですが、同性目線ですとそれもどうかと思うであります。無責任はよくないであります」
「最初から付き合うつもりはないと言ってるから大丈夫だ。愛する事もないとも伝えてる。抜かりはない」
「恋愛方面の知識に疎いわたしでも、その理論は穴だらけだと分かりますが？」
　最初からお前とは遊びだと告げていると堂々と説明されても、同性である少女たちにしてみれば相手の女性への同情心しか湧かない。
　アイギスだけは困った人だと苦笑で済んでいるが、他の女性陣が軒並み白い目で青年を見ていれば、ここで無駄話を続けてもしょうがないと切り替えたゆかりが手を叩いて全員の注目を集めた。
「さて、女の敵も合流した事だしお参りしちゃおうか。あ、人間の屑って神聖な境内に入れるのかな？」
「アイギス、見てみろ。屑に初めてを捧げた馬鹿が四人もいるぞ」
「狭い範囲のコミュニティーでヤンチャし過ぎではと思わなくもありません。あと、その言い方ですとわたしも馬鹿の妹になるのですが？」
「ダメな姉を持つと苦労するな」
　自分より下の存在に煽られれば即座に切り返してみせる。今年も湊の煽りスキルは中々にキレていた。
　けれど、突然流れ弾を喰らった者にすれば、やはりこの男はここで始末した方が世の女性のためではという思いが胸の奥から湧き上がってくる。
　普段は温厚な風花でさえ瞳の奥に危険な光が宿り、危険を感じた男子たちはまだ胸ぐらを掴まれている真田を除いて全員が境内の方へと移動した。
　一部のメンバーが移動すれば、他の者たちも集団行動として移動を

始める。
その際、女子たちは湊に命拾いしたなと侮蔑の視線を送ったが本人は気にせず受け流していた。
移動したメンバーたちはそれほど長く石段を登り、鳥居を潜る際に一礼してから境内へと足を踏み入れる。
参拝客を狙った出店もいくつか出ているが、正月の午前中にもかかわらず参拝客は少なく、これも無気力症拡大の影響かと思ってしまう。
だが、自分たちが戦う事で今の状況を解決することが出来る。ここでくよくよしていてもしょうがないと切り替え、全員で賽銭箱の方へと移動すると財布から小銭を取り出して投げた。
その際、湊が指で弾いた五百円玉が弾丸のように飛び、あまりの威力に賽銭箱に突き刺さるというアクシデントもあったが、賽銭箱の修理代としてマフラーから百万円の札束を四つほど取り出して放り込んでおいたので問題はないだろう。
自分の実家が儲かった事にコロマルも喜んでおり、コロマルが良いなら良いのだろうと全員が流すことに決めて祈る。
そして、全員が顔をあげたことを確認した順平は、じゃあメインイベントに行くかと神社の右奥へと歩き出した。
「よーし！　んじゃあ、新年最初の運試しといきますか！　皆さん、百円玉を用意して続けていくぞぉ！」
「フフッ、おみくじは京都以来だけど、初詣のおみくじは初めてだからワクワクするよ」
「ここはやっぱり良い結果を出して戦いへの弾みにしたいですね」
今年一年の運勢を占うおみくじを楽しみにしている綾時に、今後の戦いに向けて気合いが入っている天田が良い結果を目指しましょうと話しかける。
この神社ではおみくじの機械に百円硬貨を入れてレバーを下ろすと、おみくじが一つ出てくるというタイプになっている。
おみくじ自体は外側が分厚くなっているので、拡げてみないと中に書かれている内容や色も分からない。

故に、ここで一つ勝負だと男子たちが密かに盛り上がっている中、ラビリスが代わりに引いたコロマルの分を含めて全員がおみくじを手にすると、全員で一斉に拡げて今年の運勢を占った。
そして、結果はと言うと七歌、順平、綾時、天田、美鶴、コロマルが誇らしげに自分のおみくじを他の者に見せた。
「いえーい、大吉やっふー!!」
「オレっちも大吉だぜ!」
「僕も大吉だったよ。恋愛運が良いって書いてあるね」
「良かったですね。僕も願い叶うって良いことばっかり書いてました」
最初に誇らしげに見せたメンバーたちは全員が大吉だった。
この人数で六人も大吉が出るなど非常に珍しいと言えるだろう。
だが、大吉でなかったからと言って悪い事が書いてあるばかりではない。
惜しくも大吉は逃したが中吉を当てて、それなりに良いことが書いてあったと残るメンバーたちも結果を報告した。
「なんだ。お前たちも中吉だったのか。俺は学問が良い結果に結び付くらしい。受験を控えている身としてはありがたいと言っておくべきか」
「今年は引き分けだな。まぁ、全体的に悪くねぇ内容だし。神頼みは成功ってとこか」
普段は神に祈らない真田も大吉は逃したが悪くないと笑っている。
幼馴染みと同じ結果で引き分けだったことを小さく残念に思っている荒垣も同じように笑っており、二人は書かれている内容も含めて特に不満はないようだ。
だが、彼らを同じ中吉を引いたアイギスはおみくじのシステムをまだよく分かっていないようで、姉であるラビリスや美紀たちにどれくらいの順位なのかと訊いている。
「中吉は良い結果なのですか?」
「せやで。一番上が大吉で、中吉は二番目やねん。書かれてる内容も重要やから、良いこと書いてたら喜んでええんよ」

「去年と違って今年は健康運が良いみたいで安心です」
「フフッ、去年の結果が当たったなら、今年も同じように当たりそうだね。無病息災で過ごせるなら安心だね」
去年、美紀は健康運が悪いというおみくじを引いていた。それが原因ではないだろうが、ストレガに狙われて死にかけたので、占いの結果は当たっていたと言える。
だが、今年は健康運がとても良いと書いているため、じゃあ、今年は無病息災でいられそうだねと風花と一緒に笑い合った。
チドリとゆかりも他の者たちと同じように全体的に悪くない内容で、部分的には大吉並みに良いことが書いてあったので、これだけ全員が良い内容なのは偶然ではないだろうと顔には笑みが浮かんでいた。
そうやって全員が幸先が良いと喜んでいるところへ、湊に近寄っていったアイギスと彼の会話が耳に届く。
「八雲さんはどうでしたか？」
「……君と同じだった」
「八雲さんも中吉でしたか。お揃いですね！」
見るならどうぞと受け取ったアイギスは、自分と同じ中吉と書かれたおみくじを手にして嬉しそうに笑う。
書かれている内容は微妙に違っているが、湊のおみくじもそれほど悪い事は書いていない。
最後の一人まで良い結果だったことに安心した一同は、このまま出店を冷やかして寮に戻ろうと移動を始める。
湊もアイギスからおみくじを返して貰ってから一行の後についていく。
他の者たちが何を食べるかと話して前を向いている中、一人最後尾を歩いていた湊は小さく嘆息してから力を抜いた。
すると、彼の持っていたおみくじの文字の色が朱色から黒色に変化し、書かれていた内容も丸っきり別物になっていた。
おみくじの一番上に書かれている文字は〝大凶〟。去年と同じ結果だ。

だが、〝命危うし注意されたし〟と書かれ去年最低だった健康運のところには、〝悔い無き時を過すべし〟と去年にも増して死を連想させる内容が書かれていた。
何の力が働いているのかは分からないが、この神社のおみくじはかなり当たるらしい。
未来からやってきた者たちの齎した情報で自身の死を知っている青年は思わず苦笑し、おみくじのアドバイス通りに残る時間は悔いの無いように意識して過す事に決める。
もっとも、ニュクスとの戦いで果たすべき自分の役割を青年はまだ分かっていない。
未来の自分は何か行動を起こしてニュクスを撃退した。そこは分かっているが方法は完全に謎なのだ。
その事については七歌たちは勿論の事、デスとして湊の中にいた綾時も知らないため、湊はタイムリミットまで一人で考え続けなければならない。
他の者たちはその間も自由に過して貰い。一ヶ月後に彼らにとっての戦いに決着をつければいい。
そう考えた湊は、彼らが余計な心配をしそうなおみくじにかけた幻術での偽装を解除すると、誰にも見られることがないようおみくじをマフラーに収納してから出店の前で止まった彼らに合流するのだった。

第四百十一話　新年の挨拶

1月2日（土）
深夜――都内某所
世間が新しい一年の始まりに浮かれている頃、東京の外れにある寂れた教会にとある集団が集まっていた。
集まっている人間たちは性別も年齢もバラバラで、何度か顔合せていてもお互いに名前だって知らない。
けれど、誰も彼もが生気の薄い濁った瞳をしており、一目見ただけで真っ当な精神状態でない事が分かる。
戦場にいた事のある湊が見れば、生きることを諦めている負け犬の目だと断じただろう。
ただの負け犬ではない。自分が死ぬのだから、他の奴らも同じように死ななければ不公平だと、自分勝手な論理で他者の足を引っ張るろくでなしの負け犬だ。
湊からすれば無関係の者を巻き込む害悪。青年が最も嫌悪する存在と言える。
だが、そんな者たちの前に立った男、ストレガのタカヤがそれを聞けば笑いながらこう返すに違いない。
それも力無き者の生き方の一つだと。
青年は確かに他人の心を読める。本人すら忘れている記憶を当時の感覚を伴って追体験出来るため、本人以上に相手の感情や思考を理解出来るくらいだ。
ただ、いくら相手の事を理解しても湊はその相手になる事は出来ないし、その人生を歩むことも出来ない。
そこに至る過程も分かる。どういったロジックでそうしようと思ったのかも分かる。
けれど、どうあっても湊は強者の思考で物事を考えてしまうために、この場に集まっている者たちとは意見が合わない。
いくら青年にカリスマや王の資質があろうと、タカヤたちのように力を持っていても未来がないような存在でなければ、この場にいる彼

らを導くことは出来ないのだ。
壇上に立ったタカヤは薄い笑みを浮かべて礼拝堂にいる者たちの顔を見渡す。
誰も彼も湊が言うところの負け犬の瞳をしている。ただ、今はそこに狂気の混じった僅かな熱が宿っていた。
蒔いた種は育ち始めている。その事に満足げに頷くとタカヤは静かに口を開く。
「皆さん、約束の日まで一月を切りました。力を持たぬ弱者だと我々を切り捨てた傲慢な者たちに、大いなる神ニュクスより裁きが下るのです」
ニュクスと繋がっていた綾時と湊が敵の降臨を予想したように、タカヤたちの方でもニュクスの研究をしていた幾月がその降臨を予測していた。
それをタカヤはニュクス教の信者たちに伝えており、彼らもその約束の日の訪れを待ちわびている。
死を望むだけで、滅びを求めるだけで、その声を聞き届けた神が降臨し世界が終わる。
この世界に見切りを付けた自分たちの生だけでなく、自分たちをゴミのように見下していた存在や、不幸があったばかりの自分たちに順風満帆な姿を見せつけてきた者たちの生まで終わらせる事が出来るのだ。
さも自分は選ばれた存在であるかのように振る舞っていながら、本物の神の前では何も出来ずに無様に死んでいくなど滑稽でしょうがない。
これでは神を呼んだ自分たちこそが真の御使いではないかと、彼らは約束の日まで生きる理由を見出していた。
そうなるように仕組んだタカヤたちにすれば、目の前にいる信者たちと何も知らずに死ぬ人間たちに大きな違いは無い。
どちらも真実を知らず観客のまま死んでいくのだ。道化以上の価値など感じられる訳も無い。
ただ、せっかく無知なまま集まってくれたのなら、自分たちの駒と

して働いてもらおうとタカヤたちは彼らにいくつかの役目を与えた。
無気力症は世界規模にまで拡がっており、既に特別課外活動部や湊がどうこうしても治まらないレベルになっている。
人々の不安というのは簡単に伝染していくもので、テレビで報道するだけで次々と無気力症患者が増えるくらいだ。
ニュクスの降臨に必要なのは人々の死を求める声の高まりで、それはマーカーとなるデスが降臨した時点で達成出来ていると言って良い。
けれど、どうせなら特等席でニュクスの降臨を見たいと思っているタカヤたちにすれば、確実に邪魔をしてくるであろう湊たちを万全な状態のまま舞台に上がらせるつもりはなかった。
「ですが、まだ足りない。仲間を、同志を集めなさい。一人一人の声は小さくとも、我々はここにいるという声を同志と共に上げ続け、天上に御座す神へと届けるのです」
特別課外活動部のバックに付いている桐条グループは、トップである桐条武治が倒れた後に組織内のゴタゴタで一時的に力が弱まっていた。
そこからさらに日本中で無気力症が多発し、国外にまで拡がっていった事で、無気力症患者の受け入れや保護に力を割く必要が出てきて対応が間に合っていない。
恐らく今も幾月とストレガたちの居場所を探しているのだろうが、対応の緊急度で言えば無気力症患者の受け入れと保護の方が上。
十全に力を発揮出来なければいくら大企業の力と言えど怖くはない。
何より、グループの暗部とも言える影時間関連の動きは、その方面で桐条の右腕として働いていた幾月が動きのパターンを把握しているのだ。
外部に情報を漏らせない以上あらゆる行動に慎重を期す必要があり、幾月が死を偽装してから桐条が倒れるまでの短い期間にパターンを変更できるわけもない。
であれば、ストレガ側にもいる探知能力持ちのペルソナで十分先回

りして対処することが出来た。
もしも桐条グループがその上をいきたいのであれば、グループの全力で首都圏全域を警戒しつつ、風花とチドリに首都圏の端から順番に索敵して貰うローラー作戦を展開するしかない。
今の彼女たちの能力であればメノウの気配隠蔽を突破する事も可能で、幾月が研究の中で見つけた気配隠蔽効果のある素材を使った建物や装備を使っていても、風景の中に感じる僅かな違和感で気付いてみせるだろう。
その方法を取られればストレガたちも敵の目となっている風花とチドリの排除に動くか、グループの目の届かない首都圏外に逃げるかを迫られる事になる。
何せ、首都圏内を逃げ回ろうと先々にグループの人間がいるのだ。そいつらを排除すればどの方角に逃げたかがバレてしまう。
そうなれば再び風花とチドリをそちらに派遣して追ってくるに違いない。
いくら少数精鋭と言えどもストレガたちも人間だ。そういった人海戦術を組み合わせた手段で来られれば先に体力が尽きる。
だからこそ、ストレガたちはこうして使い勝手のいい駒を用意することに決めたのだ。
「確かに我々は弱い。間違ったルールに縛られた社会で理不尽にも弱者のレッテルを貼り付けられた。だが、我々を弱者と決めつけた者たちは真に強者であったと言えるだろうか？　私は断じて否だと答えたい。自身が強者であるとばかりに振る舞った彼らが示したのは数の力でしかない」
人間一人の力などたかが知れている。この場に集まっている者たちは全員がその事を理解している。
いくら自分が正しい声をあげても、数の暴力によって封殺されて来たのだ。
それが社会だと、コミュニティの中では多数派こそが正義なのだと言われればそれまでだが、何かを求めてここへとやってきた者たちは簡単に諦めることが出来なかった。

だからタカヤたちはその部分を刺激して望む方向へと誘導する。
「ならば、我々も示そうではありませんか。彼らが弱者と軽んじた我々の力を、同じく数の力を持って正義はこちらにあるのだと教えてやりましょう。仲間を、同志を集め、その声を持ってニュクスを降臨させるのです」
目には目を、歯には歯を、自分たちがやられたことをやり返す。
自分たちを被害者だと思っている人間には、これが最も耳触りが良く分かり易い行動指針になる。
先に相手がやってきたのだから自分たちは悪くない。
見下していた人間に同じ方法でやり返されてどんな気持ちか。
自分たちは一人じゃない。
何があっても〝主導者〟が守ってくれる。
細かな部分で違いはあれど、大凡はそういった気持ちによってここにいる者たちは簡単に思考を捨てて駒に成り下がる。
壇上から彼らを見ていれば、瞳の奥にある理性の光が濁って、狂気の光が強くなっていくのが分かった。
人助けを生き甲斐にしている湊でもここにいる人間は救えない。
彼は真なる強者側の人間だ。その身は巨大な炎のようなものであり、ここにいる光を憎みながらも憧憬の念を捨てきれない虫たちの身を簡単に焼き尽くしてしまう。
だからこそ、弱者側に立ち続けるタカヤは彼に救えない人間を救おうと思った。
タカヤにすれば駒が手に入り、彼らはその心が救われる。お互いに利がある素晴らしい関係だ。
残り一ヶ月。それまでにどれだけの成果が上げられるか愉しみにしながら、熱狂に包まれる信者たちの前でタカヤは薄い笑みを浮かべた。

昼――桐条本邸

新年になって二日目。元日は仲間たちと過した美鶴も、両親や親戚に挨拶に行かねばならないとその日は迎えの車に乗って実家に戻っ

ていた。
クリスマス頃に目覚めた父・桐条武治もリハビリを始めて少しずつ動けるようになっている。
だが、大量出血で瀕死の重傷を負ったこともあってか、足には痺れが残ってしばらくは車椅子生活になりそうだと医者からも言われている。
それでも意識が無事に戻り、筋力は衰えながらも自分で手を動かす事が出来るのだから、日常生活にそれほどの不便はないだろう。
会社の方も代表はＥＰ社の人間になったが、社長は桐条の後を継いだ高寺が就いて以前とほぼ変わりなく回せている。
一ヶ月後に最後の戦いがあると分かっていても、最悪の事態を回避して揃って新年を迎えられた事はめでたい。
「お嬢様、こちらでございまっ」
「……有里？」
そうして、美鶴は久しぶりに顔を合せる両親との再会を楽しみにしていたのだが、用意された昼食の席では何故だか母の正面に湊が座っていた。
親族との挨拶や夕食会で行なうため、昼食は家族だけとの事だったが、場所は普段から使っている食堂の長テーブルだ。
横の席との間隔はそれなりだが、正面の相手とは少し距離が開く。
そして、今日は桐条が上座に座っておらず英恵の隣にいるので、参加者が美鶴だけならバランスが悪くなっていたと思われるが、それでも湊がこの場にいるのは違和感が強い。
美鶴をこの場に案内した菊乃も彼を見るなり表情を引き攣らせ、普段は厳粛な雰囲気の桐条もどこか落ち着かない様子、英恵だけニコニコと楽しそうに笑っているので恐らくは彼女が彼をここに呼んだのだろう。
彼の後ろには変化した玉藻の前だという和邇八尋と英恵付きのメイドが控えている。
桐条家付きのメイドは彼の世話を出来ないようになっているらしく、桐条の後ろや部屋の隅に控えているメイドたちは少しだけ羨まし

そうにしていた。
そんな彼女たちの前を通って美鶴はテーブルに近付いていき、桐条の正面であり湊の隣の席に着く。
美鶴が座れば英恵がメイドたちに指示を出して料理が運ばれてきた。
正月だからおせち料理でも出てくるかと思えば、予想は外れても普通のイタリアンが出てくる。
桐条も英恵も特別イタリアンが大好きという訳ではない。美鶴もそれは同じで普通に食べる程度のものなのだが、家族の好みを把握している料理長がこのタイミングで作ったという事は恐らく湊の好みに合わせたのだろうと考えた。
「有里、君はイタリアンが好きなのか？」
「……別に食べられたら何でもいいですよ」
「だが、君自身かなりの料理の腕前を持っているだろう。あれだけの料理が作れるなら味にも敏感なのでは？」
「入力と出力は可能。だけど、そこに俺個人の好みは関係ありません。ただの作業なので」
湊のオーダーかと思えばそうではなかったようで、食べられるなら何でも良いという料理人泣かせの言葉が返ってきた。
彼の手料理を食べたことで味覚の鋭さと料理センスの高さを美鶴は知っていたが、どうやら湊にとっては淡々と進める作業扱いらしく、味覚など無くても同じ味の料理を作ることが可能らしい。
美鶴は自分で料理を作ることがないので不慣れな素人レベルの腕前だ。
そんな彼女からすれば少し勿体ないと思えるものの、量があればそれでいいという食事スタンスの相手にわざわざ言うことでもない。
料理が並べ終わると美鶴は両親への視線を送り、相手が頷いたことで挨拶を交わしてから食事を始める。
「美鶴、寮の彼らの様子はどうだ？」
食事が始まると桐条が美鶴に話しかけてきた。
ナイフとフォークを扱う手の動きに違和感はなく、足の痺れと体力

に筋力を除けば問題なく日常生活を送れているようだ。
　そんな父の元気な姿を嬉しく思った美鶴は、普段よりも明るい声色で言葉を返す。
「皆、変わりありません。いえ、むしろやる気に溢れているくらいです。やはり、仲間を失わずに済んだ事が大きいのでしょう。決戦を控えているとは思えぬほどに落ち着いています」
「そうか。報告は聞いていたが、またお前たちに決断を強いるような事になって申し訳ない限りだ」
「私たちは何もしていません。八雲が一人で全て終わらせてくれただけなので」
　綾時の正体と湊と彼の戦いについての報告は桐条にも届いている。
　二人の戦いでムーンライトブリッジが通行不可能なレベルに崩壊したと書かれているのを見て、流石の桐条も目を見開いて驚いたが、続きを読めば湊が事前に用意した実体を持った幻術による複製品だと分かって思わず安堵した。
　ただ、デスから宣告者としての力を奪ってただのシャドウに落とし、その魂を黄昏の羽根の類似品である月の欠片に宿してから人間にしたと聞いた時は首を傾げるほかなかった。
　前例があることは分かっている。ラビリスとアイギスも、魂とも呼べる人格の宿った黄昏の羽根を使って、人工的に作った肉体に魂と記憶の移植を行なって人間になっている。
　きっとそれと同じ事をしたのだろうという事は分かっているのだが、桐条グループの持つ技術では生体ボディの製作すら出来ないので、それがどれだけ凄いことなのかを正確に把握しきれないのだ。
「うむ。彼も人としての肉体を得たとあったな。その後はどうだ？問題なく過ごせている様子か？」
「はい。アイギスたちと同じ方式のようで、問題なく過ごせているように見えました。自身の正体という負い目も消えた事で、年相応に人としての生を楽しんでいるようです」
　以前の綾時はどことなくミステリアスで時々陰がある表情をしている事もあった。

今にして思えば自分の正体を隠していることに負い目があったと分かるのだが、それら全てがなくなった今の彼は等身大の高校生として順平たちと一緒に騒いでいる。
確かにデスとして力のほとんどを失いはしたが、月の欠片でブーストされて七歌たちと同程度の力は残っている。
であれば、ストレガ側にいる厄介な理や玖美奈の相手だけは湊に任せ、他の相手を仲間と一緒に担当すれば綾時の戦力ダウンの影響はほとんど出ない。
むしろ彼を犠牲にしていた方が全員のやる気に影響が出ていたはずなので、一致団結している今の方が状況的には良いと考えられた。
そうして父娘が近況報告で話し合っていれば、その隣で英恵と湊も言葉を交わす。
「ねえ、八雲君。テレビのお仕事はもうしないの？」
「……大晦日のあれは知り合いが依頼してきたから受けただけだ。局からオファーはあっても無視してる」
「そうなの……。桜さんも楽しみにしていたから、もう少しだけ出たりしてみない？」
「別に金に困ってないからな。むしろ、スポンサーとして動く側だ」
先日のテレビ出演は英恵的にとても良かったらしく、またテレビに出たりはしないのかと湊に尋ねる。
聞かれた青年と言えば、他の者たちよりも大盛りな料理を素早く食べつつ、知り合いから頼まれたから出ただけで芸能活動には一切の興味が無いと答えた。
ＥＰ社から出る役員報酬だけで一生遊んで暮らせる額なのだ。これ以上、金を稼ごうなどとは思うまい。
もっと言えば、ＥＰ社はスポンサーとして金を出す側なので、自分は出ずに番組内容に口を出せる立場だ。
暇潰しに何かしたければ自分で動く事が可能な以上、テレビ局から出演を求められても彼は断るつもりでいた。
青年のそんな態度を見た英恵も相手の決意の固さを見て小さく嘆息すると、残念そうな顔をしながらメイドの一人にお茶の用意を頼ん

だ。
　そこで会話に一段落ついたと判断したのか、食べる手を止めた湊は美鶴の後方に控えていた菊乃に視線を送って声をかける。
「そこのお前」
「……なんでしょうか？」
「今月の休日の日程を後で送ってこい。別に許可が出るなら仕事日でも良いが、そろそろ賠償の支払いを済ませろ」
　湊が菊乃の名前を知っているかは不明だが、話しかけられた菊乃は出来る限り無表情で対応した。
　グループの内乱騒動については自分が悪かったことは認めるが、それでも彼から出された条件やその後のいざこざも考えると愛想良く接しようなどとは思えない。
　なので、とても事務的な対応になったのだが、湊は気にせず用事を伝えると再び食事に戻ってしまった。
　言われた菊乃からすれば近いうちに純潔を捧げにこいという意味なので、ちょっとした用事を頼む感覚で言われても困る。
　しかし、自分が仕える主人たちの食事の場でそういった話をする事など出来ない。
　今のが冗談にしろ本気にしろ何も言われない限りは、菊乃は相手の要望を叶える必要があるため休みの日を教えなければならない。
　また使用人仲間から色々と言われながら、嫌いな相手に抱かれる覚悟を決めなければならないと考えると今から胃が痛くなってくる。
　この場に彼を呼んだのは英恵だが、こんな事になるなら給仕は他の者に任せて別の仕事をしていれば良かったと内心で溜息を吐いた。
　そうして、何故だか先ほどの青年と菊乃の会話を桐条家の人間は気付かぬまま食事は終わり、美鶴たちは本邸の自室へ、湊は予定があるからと昼食後は別れて菊乃から手紙を受け取って帰っていった。

第四百十二話　メイドとの逢瀬

1月5日（火）
午後――都内
美鶴が新年の挨拶に実家に帰った数日後、湊は駅前の喫茶店で本を読みながら時間を潰していた。
頼んだブレンドコーヒーを飲みながら、周りから見れば何語で書かれているんだというような海外で手に入れた古書を読みふける。
美の世界で生きる女性以上の妖艶さを纏う青年が一人でそんな事をしていれば、あまりに画になりすぎて周囲から浮く。
客だけでなく店員からも視線を集め、中には湊が誰か気付いて声をかけても良いのかと悩む者もいる。
彼は確かにテレビにも出ていたが、あくまで一般人を自称しており事実として事務所には入っていない。
なので、恐らくプライベートで静かに過しているのを邪魔しても良いのかと悩み、モラルと善良さから誰も話しかけずにいれば、新たに喫茶店に入ってきた一人の少女が彼に近付き声をかけた。
「お待たせしたようで申し訳ありません」
「……別にいい。時間には間に合っているからな」
黒のニットにチェック柄のプリーツスカート、そしてベージュのロングコートを身に纏った斎川菊乃が声をかければ、湊は読んでいた本を閉じて立ち上がる。
普段はメイドとしてエプロンドレスを着ているが、そうでない時もレディースーツを着て美鶴の傍にいる事が多いだけに、若者らしい私服姿でいるのは非常に珍しい。
まぁ、それも湊からの指示で、街中を歩くのに適した私服で来るようにと伝えていたからだ。
もし、彼がそのような指示を出していなければ、菊乃は前と同じようにスーツスタイルで彼に会いに来ていたことだろう。
美鶴よりはマシだが菊乃も桐条の使用人として生きてきた事で一般常識からズレた部分がある。

そういった部分に関しては、ＥＰ社で仕事をするために市場調査や過去のデータを見て勉強した湊の方が強い。
昔は常識がないだとか、世間ずれしていると言われていたのに、今では他の者に常識を説けるようになったのだから大した進歩と言えるだろう。
だからといって、その常識に合わせて行動するかどうかは別なのだが、席を立った湊は着いたばかりの菊乃を連れて店を出る。
隣を歩く菊乃は仕事と割り切っていながらもややツンケンとした態度で、その辺りはまだまだ子どもかと湊は内心で評価を下す。
常に完璧たれとは思わない。相手は学校が違うものの美鶴と同い年の高校生、世の中から見れば十分に子どもだ。
それに対して湊は戸籍上は一つ下でも、真っ当な世界で生きてきた訳ではない。
人の命がはした金よりも上の価値を持つようなくだらない世界。欲に塗れた社会のゴミたちが跋扈する裏の世界でずっと活躍し続けていたのだ。
そんな場所で生きていれば同年代の者たちよりも早く精神的に成熟する。
いや、感覚が徐々に麻痺して感情が部分的に死んでいくというべきか。
相手も親に売られてエルゴ研で被験体として扱われていた過去を持っているが、幸か不幸かペルソナを手に入れられるほどの適性は得られなかった。
影時間に活動出来る程度の適性など持っていても意味がない。被験体としては失敗作の扱いだ。
だが、そういった存在にも一応の使い道はある。影時間に動けるのならば、同じく影時間の適性を持っているご令嬢の世話係になればいい。
それからは随分と良くして貰った事で、こうも普通の少女としての心を残して成長出来たのだろう。
これがチドリや死んだマリアの別の可能性かと思うと心が僅かに

ざわつくが、そんな事を考えるためにこの少女を呼び出した訳ではない。
すれ違う人々からの視線を感じつつ、服屋の並ぶ通りを並んで歩いていれば、大人っぽく見えるよう薄らと化粧をしている菊乃が話しかけてきた。
「それで、その……今日の予定は？」
「……適当に買い物をしてまわる予定だが、昼は食べてきたのか？」
「微妙な時間だったので食べていません。ですが、昼くらい食べなくても問題ないので、貴方の予定を優先してください」
菊乃は美鶴の御側御用としての役割を持っているが、寮生活をしている美鶴が屋敷にいることなど稀だ。
戻ってくれば当然そのためのシフトを組まれて動くものの、そうでない時は古参として後輩たちに指示を出しつつ精力的に働いているため、食事の時間などは不規則になり易い。
だからこそ、買い物の用事があるのならもてなすために湊に合せると口にしたのだが、それを聞いた湊は鼻で笑うように小さく嘆息した。
「そうやって不規則な食生活をしているからお前は貧相なんだ。金なら出してやるから食事くらいしっかり取れ」
「なっ、別に平均です！　何を持って貧相などと謂れ無き中傷をっ」
「……は？　お前、自分のスタイルも把握していないのか。例えば特別課外活動部の女子たちだが、お前よりも年下ばかりな訳だ。だが、お前より全員スタイルは上だ。特に胸が足りない。お前の身体は薄いんだよ」
昼から少し過ぎた時間帯なのだが、三が日が終わったばかりなので世間では冬休み真っ最中。
そのタイミングの都心部だと店はまだ混雑していると思われるので、湊は携帯を取り出すと近場の店を調べながら菊乃を適当に相手する。
しかし、自身では身体を絞れているという認識を持っていただけに、菊乃は自分の身体が薄いと言われて憤慨した。

「ちが、違います！　そも、あの人たちがおかしいんですよ。私は平均的です」
「……お前の私見なんてどうでもいい。現状に満足するな、常に上を目指せ。そういった考えだからお前たちは俺に負けたんだ」
菊乃は以前、現在の桐条グループ社長の高寺側について湊と敵対したことがある。
当時は湊が蘇っていると知らず、おかげで全ての企みを完全に潰された上に会社まで乗っ取られる事になったが、会社も敵対した者たちも賠償は支払う事になったが残っている。
高寺たちは現状維持を目的に動きながらも、桐条が倒れた事で出た損害は大きく補填作業に手を焼き、グループの力を更に削ごうとする外部勢力へ対処し続ける体力も持っていなかった。
一方、湊はＥＰ社という外部勢力で介入する事で、残っている桐条グループをその他の木っ端勢力から守りながら助力する手段を取った。
持っている手札が違うからこそ、お互いが出来る範囲で最良の手段と取ろうとしたため、高寺たちが間違っていたとは言わない。
しかし、桐条グループの社員とその家族の生活を守るために、今までグループの尻拭いで命懸けで戦っていた学生たちの自由を犠牲にしようとするのは道理が通らない。
大勢を守るためにはしょうがない。そうやって言い訳をして別の策を考えることを放棄したから、高寺たちは鬼を怒らせて破滅しかけた。
あの時から何も成長していないのかと湊が相手を見れば、菊乃は気まずそうに視線を僅かに落としてぽつりと言葉を返す。
「あの時の事は確かに我々に非があります。お嬢様を守るためとは言え、お仲間の皆さんを犠牲にしようとしました。ですが、貴方というイレギュラーがなければ成功していました」
「それで？　無気力症患者が増えて、シャドウへの対処が必要になって、自分たちの都合で監禁した相手に手伝ってくださいとでも言ったのか？」

湊の存在がなければ高寺たちの作戦は成功していた可能性が高い。
その点については湊も認めるが、桐条グループに影時間やシャドウへの対抗手段がない以上、再び特別課外活動部の者たちの力を借りることになるのは明白だ。
ただ、菊乃は湊の発言に対し、無気力症患者やシャドウの増加の推移を知った今だから言えるだけで、あの当時はこうなることなど予測出来なかったはずと言いたそうな顔をする。
実際のところはそんな事はなく、湊はアルカナシャドウを全て倒しても影時間が終わらないと分かっていたため、ＥＰ社の経営する病院で無気力症患者の受け入れ体勢を整えていた。
なので、相手の推測は完全に間違っているのだが、訂正するのも面倒なので店の場所を調べ終わった湊は携帯をポケットに仕舞って歩き出す。
「流石、研究から外され真っ当な人生を歩み直せた方は違うな。先代と同じ思想、エルゴ研の研究員たちと同じ価値観になる辺り、桐条は随分といい教育を施してくれたんだろうな」
「違います！　これは、あくまで私の考え。桐条家の方々は関係ありません！」
「違わないさ。桐条も、美鶴さんも、同じようにしていたじゃないか。目的のために手段を選ばない。犠牲にするのは自分でも身内でもなく他人からだ」
急に大きな声を出す菊乃をすれ違う人たちが見ていくが、湊は歩みを止めずそんな相手に淡々とした調子で言葉を返す。
菊乃は美鶴と一緒に育ったため、その環境からかどことなく思考が似ていた。
勿論、美鶴は桐条家の人間としての教育を受けていたり、逆に菊乃は使用人としての心得などを学んでいたが、幼馴染みとして共に過してきた事で共通の価値観を持っている部分があるらしい。
それが自分と身内への甘さだ。場合によっては問題にならないが、人命に関わってくる影時間関連でそれが出てくるのは頂けない。
桐条家の者たちの家族への情を素晴らしい物と思っていた菊乃に

とって、湊のその発言は到底許せる物ではなく、どれだけ二人が自分を犠牲にしてきたかを伝えようとするも、それよりも先に再び湊が口を開いた。
「……ああ、どうせ二人はそんな事なかったって言うんだろ。時間や精神やらを犠牲にしていたって。だが、既に力を持っていた娘を犠牲にする事を拒んで百人近い子どもを殺した男。親の罪を隠したまま事情を偽って学生たちを仲間に引き入れた女。これはどうあっても否定出来ない事実だ」
「家族を大切に思うことの何が悪いのですか。貴方だって大切に思う少女たちのために他人を犠牲にしてきたのでしょうに」
「……はぁ、そうだな。なら、それでいい」
確かに湊も桐条と同じようにその手を血で汚してきた。その点については言い訳するつもりはない。
しかし、湊の罪と桐条の罪の違いが分からないのであれば、きっとこの少女は同じミスを犯すだろうと湊は思った。
呆れたように話を切った湊を菊乃は不満そうに睨んでいるが、目的の店が入っているビルに到着した事で相手を無視して湊は先へと進む。
それほど大きくない雑居ビルの通路を進み、奥にある小さなエレベーターに揃って乗る。
嫌いな相手と狭い密室に二人きりという事で菊乃が警戒しているが、年中発情している訳でもあるまいしここで何かをする気など欠片もない。
いちいち突っかかってこられても面倒なので、相手の記憶を読んで食べ物の好みなどを把握してから店を探した結果ここに来ただけで、そういう事をするために移動するなら最初からホテルに連れ込んでいた。
以前から感じていたが、思い込みが激しい上に自意識過剰なやつだなと思いながら湊はエレベーターを降りると再び狭い通路を歩いていく。
そして、そのまま奥へと進むと随分とレトロな雰囲気の洋食屋が

あった。
中高生などの若者が来ることはまずなさそうな、所謂常連客の存在によって経営を続けられていそうな小さな洋食屋。
青年は一体どこでこの場所を知ったのか。菊乃が不思議に思っていると、湊は躊躇いなく扉を開けて店の中へと入っていく。
「いらっしゃいませ。二名様でよろしいですか？」
「……ええ。テーブル席でお願いします」
「かしこまりました。奥の席へどうぞ」
店の中へ入れば菊乃が思っていた通り、昭和の雰囲気が漂うレトロな空間がそこにはあった。
カウンター席の他に三つのテーブル席があるだけのこぢんまりとした内装に、壁には古い映画の映画看板のレプリカらしきものが飾られている。
客は一人もおらず、店員も湊たちを案内してくれた一人だけ。
菊乃の想像では優しそうな老紳士か老夫婦が経営していると思っていたが、そこだけは予想が外れて四十代の厳つい顔をしたガタイの良い男性が店員だった。
相手に案内されるまま二人用の席に着くと、湊がどうぞと菊乃にメニューを渡す。
こういった部分は育ちの良さが窺えるほど非常に紳士的なのだが、やはり中身が鬼畜生なので騙されてはいけないと菊乃は短く礼を言うだけで相手と視線を合わせずメニューに目を落とす。
そこに書かれている料理は五つだけで、店が小さいからメニューを絞って個々のクオリティで勝負しているのだろうかと見る。
「デミグラスソースのオムライス、タンシチュー、ハンバーグ、ナポリタン、カレーですか。お店の雰囲気通りの料理ですね」
「……まぁ、客がそういうのを求めているからな。他の物が食べたければ言えば割りと対応してくれるぞ。おでんやお好み焼きやチーズリゾットは過去に見たな」
「えぇ……？　どういうお店なんですかここ？」
メニューに書かれているのはあくまで基本のメニューに過ぎず、食

べたい物が他にあって店主が作れる物であれば割りと何でも注文を受けてくれる。
昭和レトロな雰囲気を大事にしている店だと思っていただけに、どうしてそんな方向に突き進んだのかと菊乃は首を傾げた。
チーズリゾットはギリギリ許されるとしても、おでんもお好み焼きも洋食屋のイメージとかけ離れている。
店の内装からこだわりが強い事は分かるので、何故料理に関してはそんなにも来る者拒まずなスタンスなのか菊乃は考える。
一方、既に注文を決めた湊は店主が持って来た水を飲み、菊乃が注文を決めるのを待ちながら相手の疑問に軽く答えていく。
「ここはうちの組員が足を洗って社会復帰してから趣味で始めた洋食屋だ。元々、組員には料理に凝ってるやつが多くてな。ここの店主は特にその傾向が強く、メニュー外の料理を注文された方がむしろ喜ぶ」
「それはそれでどうなんでしょう……」
桔梗組の組員たちは出店の料理を本気で研究して作っていたりと、料理を作ることに妥協しない者が大きくいる。
この店の店主もその流れから料理人に転職したようだが、趣味で始めたという事から、あまり売り上げにはこだわっていないらしく。料理が作れたら何でもいいようだと湊が話す。
それを聞いた菊乃は料理もこだわりを見せたら良いのにと呆れたように呟き、注文を決めたようで湊にそれを伝えてきた。
彼女は割りと子どもっぽい味覚をしているようで、ほとんど悩まずにオムライスに決めていた。
湊は単品では足りないからとオムライスとシチューとハンバーグを注文する。
二人の注文を聞いた店主は沢山作れるのが嬉しいそうで、カウンターの中へと戻っていくと早速料理を作り始めた。
それを見ていた菊乃は本当に料理することが好きなんだなと、相手が元極道と聞いても信じられない気持ちが強かった。
だが、湊がそういった点で嘘を吐くことはまずないので、世の中に

は色々な極道の人間がいるんだと納得することにした。
　そうして、二人は料理が出来るのを待つ間に本日の細かな予定を話し、料理がやってくれば満面の笑みでオムライスを頬張る少女を湊が観察しながら昼食を済ませるのだった。

第四百十三話　先の事を見据えて

午後――都内・高級ホテル

昼食を食べ終わった湊たちは予定通りに街中を散策した。

何か欲しいものがある訳でもなく、ただ暇を潰すことを目的に服屋や雑貨屋に入っていく。

しかし、湊は国内では有名な高校生だ。そんな彼が女子と歩いていれば当然周りも騒ぎ出す。

それを嫌ったのか途中から湊は眼鏡を掛けていたが、それ以降は周りの者たちは何も気にしなくなっていたため、眼鏡自体に何かしらの細工がある事は菊乃も気付いたらしい。

おかげで周囲の目を気にせず買い物出来た事は嬉しいが、他者の認識に干渉するアイテムなど要人に仕える身としては非常に恐ろしく不安にもなる。

ペルソナ能力の応用なのか、純粋に科学技術の延長にある物なのか。

聞きたい衝動に駆られるも、今日の彼女は迷惑を掛けた賠償として純潔を捧げるために来ている。

故に、菊乃は我慢して湊との買い物デートをこなした。

複数の女性と親しいだけあって、やる気が感じられなくても彼のエスコートは素晴らしかった。

湊自身に目的はなくても菊乃がどういった物を見たいか伝えればすぐに店へ案内し、歩き疲れてくるタイミングで喫茶店などに入っての休憩を挿むなど、ちゃんと女性に合わせて行動してくれる。

相手を嫌っている菊乃でも彼のエスコートを評価出来ると思ってしまったのだから、外面良く相手された一般人たちが熱を上げるのも納得だ。

けれど、夕食を食べ終えて都内でも有数の高級ホテルへ案内されれば、決めていたつもりの覚悟も揺らいで菊乃は口数がはっきりと減った。

対する青年は菊乃の心情も知らずにフロントで鍵を受け取り、黙っ

ている菊乃の肩を掴むとそのままエレベーターに乗って最上階へと移動した。
最上階にあるのはフロアを丸ごと使ったスイートルームのみ。
よくこの時期に部屋が空いていたなと思うところだが、最上階に到着すると湊は普段通りの様子で進んでカードキーを使って扉を開く。
この扉を潜ればもう後戻りは出来ない。逃げるなら今しかないと菊乃の冷静な部分が心に囁きかけてくる。
だが、そんな事をしてどうなる。湊が菊乃たち敵対者を見逃したのは賠償を払う事を約束したからだ。
ここでそれをなかった事にしようとすれば殺される。自分一人の命で済めば良いが、下手をするとあの日の敵対者全員に連帯責任が発生するかもしれない。
抱かれても死ぬ訳じゃ無し。我が身可愛さから反故にして、己や他の者たちの命まで失うことになっては意味がない。
僅かに身体を震わせながらも足を前へと動かし部屋に入ると、背後で扉が閉まって自動で鍵が掛かる。
退路は既に断たれた。覚悟を決めると自分に言い聞かし、菊乃はプレッシャーから青い顔をしながらも脱いだコートをラックに掛けている青年に話しかけた。
「あ、あのっ！　わ、私には経験がありません。知識も、その辺で聞いた程度の物しかなく、貴方を満足させる事は出来ないと思います。ですが、精一杯しますので、どうかお願いします。先にシャワーを浴びる事をお許しくださいっ」
湊が菊乃の純潔を捧げる事を条件にしたように、当然ながら菊乃にそういった行為の経験はない。
美鶴に仕える事とその家族への恩返しを目的に生きてきたので、親しい同年代の異性というのもいなかった。
性教育で習う程度の知識なら備えているが、経験豊富な彼を満足させる事など出来ないと分かっている。
なので、菊乃はそれを正直に伝えながら、最後に覚悟を決める猶予としてシャワーを浴びる許可を彼に求めた。

職場の先輩方の話によれば、男性の中には敢えて汗を掻いている状態などを好む者もいるらしいが、一日一緒にいて感じた彼の印象からするとその可能性は低い。
むしろ、相手の女性が落ち着けるように色々と気を遣ってくれそうな印象すらある。
本音を言えば、気を遣うくらいならそもそもこんな要求をしてくるなと言いたいが、彼の要求を飲むと言ったのは自分である。
自分の行動と吐いた言葉への責任は負う。それくらいはしなければならない。
そうして、菊乃が身体を小さく震わせながらも湊をじっと見つめていれば、コートを掛け終えた湊は窓際の方へとゆっくり進みながら言葉を返してきた。
「……とりあえず、落ち着け。荷物を置いて俺の分のコーヒーと自分用の飲み物を淹れて持って来い」
ホテルにくればすぐに発情するとでも思っているのか、と言わんばかりの呆れた表情で湊はコーヒーを催促した。
菊乃は使用人であるため、屋敷で料理はしないがお茶やコーヒーの用意はする。
置いてある道具は屋敷と異なるが、慣れた作業であるため初めての道具を使ってもそれなりの物は淹れることが可能だ。
予想外の事を言われて一瞬戸惑うも、まだそういった事をしなくていいと分かった菊乃はホッと息を吐き、着ていたコートと荷物を片付けると手を洗ってから彼の言う通りに動いた。
彼はブラックで飲んでいたので少し濃いめに淹れる以外に気をつける点はほぼない。
自分の分の紅茶も知っている茶葉の銘柄だったので、お湯の温度も含めて感覚で分かる。
お茶菓子までいるのだろうかと少し考えて、必要なければ下げれば良いかと部屋に用意されていたクッキーを皿に載せて盆で一緒に運ぶ。
「お待たせしました。クッキーがあったので良ければこちらもどう

ぞ」
「……ああ。とりあえず、お前も座れ」
窓際のテーブルから外を眺めていた青年は、菊乃がコーヒーを持ってくると彼女も座るように言ってくる。
雰囲気から察するにどうやら話をするつもりのようで、一体何を話すつもりなのだろうかと考えながら菊乃も正面の席に着く。
相手がコーヒーに口をつけるのを確認してから、自分の淹れた紅茶を一口飲んで菊乃も話を聞く体勢を作る。
彼は善人ではない。場合によっては躊躇いなく自分たちを殺せるであろう、一般人とは異なる精神構造を持った危険人物だ。
だが、悪人なのかと聞かれれば、単なる悪人とも言いづらい部分があった。
彼が仕事屋として名乗っていた〝小狼〟という名前から経歴を調べて見れば、エルゴ研を離れてから九年の間に二万人以上殺している。
ほとんどは彼の命を狙っていた裏界最大組織だった〝久遠の安寧〟の構成員で、彼と正面から戦争をしていたのならしょうがないと思える。
だが、その他の者たちについても調べて見れば、彼が殺していたのは法の裁きを受けていない悪党ばかりである事が分かった。
世の中には本人やバックに付いている人間が特権階級であるために、罪を犯しても正しく裁かれない者が大勢いる。
下された判決が明らかにおかしくても、最高裁で決まってしまえば被害者はそれ以上言うことが出来ない。
そんな泣き寝入りするしかない者たちが、自分が地獄に堕ちてでも相手の罪に報いを受けさせたいと最後に頼った相手が青年だったのだ。
昼間は桐条家の人間を侮辱されたとして怒ってしまったが、調べた今では菊乃も彼がどうして桐条家をあぁも蔑むのか理解出来る。
桐条家とグループは彼が殺してきた人間たちと同じ存在。如何に理由があろうとも、自分たちの都合で弱者を食い物にする悪だと彼は

知っているのだ。
彼自身の都合があったとしても、その始まりは誰かのためだった。
他人のために手を汚す事が出来る。泥を被ることを厭わない。
見方によって善悪の評価が変わってしまうからこそ、相手の内面を読もうとしても難しく、今湊が何を考えているか分からない菊乃は相手が口を開くまで黙って待ち続けた。
そうして、二人が飲み物に口をつけてから数分経った頃、窓の外の景色から菊乃に視線を移した青年が静かに言葉を吐く。
「……お前は影時間についてある程度の知識があると聞いている。だからこそ問うが、影時間が消えた後の事は考えているか？」
「影時間が消えた後ですか？　特に意識はしておりませんが、恐らく変わらずお嬢様に仕えていると思います」
急にどうしたのかと不思議に思いつつも、菊乃は自分の仕事は変わらないだろうと自信を持って答えた。
何せ、仕える主が危険に身を晒している今の状態がおかしいのだ。
シャドウもタルタロスも消えて、戦っている彼女たちにも平和な日常が戻ってくる。
そうなれば、菊乃は本来の業務に戻って、美鶴の傍で世話を焼くことが出来るようになると思っていた。
進学する美鶴に合わせて同じ大学を受験することは出来る。桐条家のメイドとして恥ずかしくないよう勉強の手は抜いていないため、学部が違っても同じ大学に合格して学校でも傍にいることは可能だろう。
送迎と屋敷だけで世話をするか、大学でも傍で世話を続けるか。影時間が消えた後の事で悩むとすればそれくらいだった。
「……そこは好きにすればいい。俺が言っているのは影時間に関わる記憶が消える点についての話だ。桐条グループやお前個人は準備しているのか？」
「記憶が消える？」
菊乃が美鶴に仕え続けようが、身受けされて寿退社しようがそれは自由だ。何を選ぼうと湊にすれば彼女個人の今後については興味が

無い。
彼が今尋ねているのはそういった事ではなく、影時間を終えた事後処理の話だ。
影時間が消えました。これで問題解決です。などとすぐに研究機関を解体する事は出来ないし、桐条鴻悦のした事とポートアイランドインパクト後の桐条武治の行動について公安も目を付けてきている。
特に問題になりそうなのが公安の動きで、幾月に撃たれて桐条が倒れた時にはグループ内部が混乱している今がチャンスとばかりに動こうとしていた。
後任となった高寺もそういった動きが見られることは掴んでいただろうが、あの時は他の企業からグループを守る事を第一に動いていたため、外部の力を使って公安に圧力を掛けることが出来なくなっていた。
それを見抜いていた湊は高寺派への対処と同時進行で、ＥＰ社の力を使い密かに公安に圧力を掛けておいた。
相手も仕事でやっているのだろうが、影時間に公安の人間に出来る事などない。
影時間について理解した後だとて、捕らえた桐条の人間を監視下において今と同じ事をさせる事しか出来ないだろう。
正義感という外皮で分厚くプライドを覆っている人間は厄介だ。
シャドウの討伐は言うなれば害虫駆除に近い。自分たちの安全を確保しつつ、ただ効率的に目の前の敵を倒していけばいい。
しかし、化け物の相手などした事が無い公安の人間にはそれが分からない。分からないせいで余計な真似や的外れな指示を出そうとする。
それでは敵は倒せないし、戦う現場の人間に被害が出る。
だから湊は余計な事をするなと公安に圧力を掛けて、特に強い執着で桐条を追っていた人間をしばらく戻って来れない案件に担当替えさせた。
そうして、表の世界で時間稼ぎをしておいた湊だが、菊乃の様子からすると記憶が消える事は知らなかったらしい。

ならば丁度良いからと説明しておく事にした。
「ニュクスと戦って勝てば影時間は消える。ただ、影時間が消えるとなると影時間の中で起きた事は〝なかった事〟になって、一部の記憶を忘れて細々した部分には補整が入る。それはペルソナ使いと適性持ちも例外じゃない。何せ影時間の消去は一種の理の書き換え、反動で世界規模の記憶操作が起きても当然の事態だ」
「じゃ、じゃあ、お嬢様たちは仲間として戦った記憶を失うのですか？」
「あぁ。個人的には戦いの記憶なんて無い方が良いとは思う。しかし、全員が記憶を失えば事後処理が上手く回らない可能性がある。適性がない人間は記憶も残りそうだが、実体験していない人間が中心となって動くのは無理があるだろう」
適性はなくとも影時間について話を聞いている者はいる。
そういった人間であれば現実の記憶として忘れない可能性もあるが、あくまで話には聞いている程度の知識しか持たないレベルなので、中心になって事後処理を行なうには無理があるだろう。
記憶を失うと聞いて衝撃を受けている菊乃に対し、だからこそ準備は今からやっておくべきだと湊は続ける。
「記憶操作の規模は不明だ。だが、何もしないで忘れない可能性に賭けるには分が悪い」
「何か記憶を失わずに済む方法があるのですか？」
「世界規模の威力だからな。効果があるかは自信がないが、簡易補整器の指輪を使えば避けられるのではと思っている」
湊が口にした簡易補整器とは、微細な黄昏の羽根を材料に混ぜて作った一時的に適性を得られる指輪の事だ。
桐条グループは王冠のような形をした白いガラス製に見える指輪で、菊乃もそれと同じ物を今も身に付けている。
自分の持っているこれにそんな力があるのかと菊乃が指輪に視線を送れば、湊はどうしてそれが可能性に繋がるのかを詳しく説明する。
「指輪は記憶のバックアップ装置だ。うちで行なった実験で適性を得

た者に一度指輪を付けさせてから、外した後にアベルの楔の剣で適性を奪った事がある。適性を失えば影時間に関する記憶を失うが、その時の実験では指輪を付け直せば影時間の記憶を取り戻した」
「それは付けたまま適性だけ奪う形では駄目だったのですか？」
「その場合、指輪の効力まで奪ってしまうんだ。恐らく混ぜた羽根の力まで吸い取っている。なので、そのパターンだと記憶は戻らないし、指輪の再利用も出来なくなった」
今は出来なくなったが、アベルの楔の剣を使えば切った対象からペルソナや適性を奪える。
しかし、もし適性持ちが簡易補整器の指輪を付けていれば、本人の適性と指輪に宿った羽根の力まで楔の剣に奪われてしまった。
力を失った指輪を他の者が付けても効果は出ず、完全にただのアクセサリーに成り下がってしまったようであった。
「ですが、それが分かっているなら、皆さんに指輪を一度付けさせて終わってから再び付けて頂けばいいのでは？」
「ペルソナ使いはただの適性持ちより記憶を取り戻す可能性が高い。指輪が壊れた時にどうなるか不明なら、いらぬリスクは避けるべきだ」
通常、適性を持たない人間が指輪を付ければ外した後も影時間の記憶を残しておける。
けれど、何かのアクシデントで指輪が壊れれば、それを付けた事がある人間は気を失って倒れ、そこで影時間に関する記憶を失う。
適性を持っている者がフェイクで指輪を付け、それを破壊した場合は倒れる事も記憶を失う事もないが、最後の戦いが終わった後はペルソナ使いたちも一度記憶を失うのだ。
一度でも記憶を取り戻せば大丈夫なのか、それとも指輪が壊れれば再び記憶を失ってしまうのか。それが分からない限りは試すべきではないと青年は告げた。
話を聞いて菊乃も納得したように頷いて返す。ただ、そこまで把握しているならば、湊の方で何かの対策をしていないのかと疑問に思って問い返した。

「貴方自身は何か対策を？」
「俺は元々記憶を失わない。既に存在があちら側だからな。自身の記憶を保持出来る代わりに、他の者たちは影時間の記憶と一緒に俺と過した思い出も忘れるようになっている。何より、影時間が消えた世界に俺はいない」
「どういう事ですか？　それは、皆さんの前から姿を消すと？」
「……いいや。文字通りの意味だ。理由はまだ分からないが最後の戦いで俺は死ぬ。未来から来た美鶴さんたちに確認を取ったからほぼ確定事項だと思ってくれていい」
　他の者たちの記憶から彼との思い出も消える。その一言だけでも十分に衝撃だったが、続けて語られた話は菊乃の理解を超えており、動揺しながらも情報を得なければと再び彼女は問い返した。
「お嬢様たちが未来から来たってどういう事ですか？　それに、どうして自分が死ぬだなんて聞いて平然としているんですか？」
「春頃にタルタロス消滅の揺り戻しで少し事件が起きる。美鶴さんたちが原因なので避けるのは不可能。ただ、願望器としての力を限定的に持った道具によって過去と空間が繋がって補給にきた彼女たちと会った」
「異なる時間の世界へと渡るなんて可能なんですか？」
「未来へは簡単だ。過去へはオカルト的な力がないと無理だな。それに自分がいた世界の過去か、よく似た平行世界なのかは判断が付かないだろう」
　視線をぶつけた状態で話を聞けば、彼が嘘や冗談を言っている訳ではない事は理解できる。
　けれど、恐らくこの話は美鶴たちには伝わっていない事も察する事が出来た。
　どうしてそれを自分に伝えてきたのかという疑問はある。
　今の内から準備しておくべきだとアドバイスしてくれた側面もあるとは思うが、どちらかと言えば彼が菊乃に求めているのは自分がいなくなった後のフォローのように思えた。
　何せ、話を聞いた英恵や美鶴が彼を行かせまいとするのが容易に想

像出来、主たちに話すべき内容だと理解しつつも連絡を躊躇わせるのだ。
自分がいなくなると分かっているなら、ＥＰ社の方で様々なフォローを行えるようにしてあるに違いない。
それでも湊が英恵たちのために自分にも役目を与えようとしている事を察して、ここまで冷静に自分の死後のことを考えて動けるのはすごいと純粋に感心した。
「その世界のお嬢様たちはニュクスを討伐出来たのですね？」
「実際は最後に俺が一人で行って倒したらしい。それでそのまま帰ってこなかったと」
「そうですか。では、貴方はそのまま過して役目を全うしてください。奥様など後の事はこちらで引き受けます」
「まぁ、方法が思い付いたら別れの挨拶くらいには行く予定だ。その後の事はそちらでやってくれ」
最後の戦いだけに目を向けている美鶴たちと、その後の事まで見ている青年。両者の違いはこれまでの経験の差によるものだろう。
自分が死ぬと分かっていても戦いへ向かう決意に揺らぎは見られない。
こんな男を相手にただの人間が勝とうとするなど無謀でしかなかったと、菊乃は改めて過去の自分たちに対して自嘲してみせた。
そうして、話が一区切りして菊乃は紅茶に口をつけると、わざわざ頼み事をするためにこんな回りくどい事をする青年に対して心の中で小さく溜息を吐く。
前にＥＰ社に呼ばれた時もベビーシッターとして呼ばれただけで、結局は何もせずに帰らされた。
今回もそのパターンだったようだが、ホテルの部屋をとっているので回りくどい上にお金の無駄だと思ってしまう。
まぁ、そういった部分も含めて不器用な人間なのだろうと思って、菊乃が自分の中の彼のイメージを修正していれば、皿に載せたクッキーに手を伸ばした湊が口を開いた。
「……風呂にお湯を溜めなくていいのか？」

「本当に泊るつもりなのですか？　話も終わりましたし、忙しい身なら帰っても良いと思いますが」
「今日会った最大の目的が果たされてないだろう。こちらは別にシャワーを浴びずに事に及んでもいいが、そちらには準備があるんじゃなかったのか？」
　呆れた顔で見てくる青年は冗談を言っている雰囲気ではない。
　てっきり自分がいなくなった後のフォローを頼むためだけに場を設けたと思っていた菊乃は、本当に今夜純潔が奪われると聞いて急激に口の中が乾いてゆく感覚を覚える。
　逃げ場無い。逃げても追い付かれるし、その場合は今よりも酷い状況になる事は確実。
　ただ、一度安心してしまったせいで、先ほどよりも考える余裕がある分無駄に不安に思ってしまう。
　幸いな事にシャワーだけでなく湯船に浸かる許可も得る事が出来た。
　ならば、その間に何とか自分を納得させようと、菊乃は正面に座る悪魔に視線を向けてから立ち上がる。
「……お湯を溜めてから入ってきます」
「ああ、ちゃんと全身を清めてこい」
　席を立った菊乃は広いバスルームで入浴の準備を進め、お湯が溜まってからは一時間掛けて身体を清めた。
　入浴後はどういった服装で彼の前に出るべきか悩んだ結果、バスローブのみを身に着けて部屋へ戻れば、湊は窓際のソファーで綺麗な寝顔を見せて眠っていた。
　このまま起こさなければ自分は助かる。そう思った菊乃は静かに移動してベッドに入ると、部屋の電気を消して寝る体勢に入った。
　だが、常に周囲の気配を探っている青年にそれが効く訳もなく、菊乃が電気を消した一分後に起きだしてきた彼はバスルームへと向かって行った。
　十五分ほど経ってラフなシャツとズボン姿で出てきた彼は、そのままベッドへ向かうと起きていた菊乃に声を掛け、長い時間を一緒に過

すのだった。

第四百十四話　将来について悩む

1月7日（木）
午後――巌戸台分寮
年も明けて一週間。長かったようで、学生たち本人にしてみれば短く感じる冬休みも最終日。
今月末には最後の決戦に挑むという事もあって、七歌たちは三が日が明けてから既にタルタロスの探索を再開している。
湊との戦いでデスとしての力を失いながらも、人として生きる事になった綾時が新たに得た審判〝メサイア〟の力も確認した事で改めて当日のチーム分けなどについても話し合うようになった。
相手側の戦力は隠し球がいない限りは八人。幾月と玖美奈と理、それにストレガたち五人を合せた計八人。
その内、高同調状態で自由に空を往ける者は理と玖美奈のみで、規格外のサイズとパワーを持つテュポーンを除けば二人のペルソナ能力は湊に迫るだけのものがある。
一撃の威力だけで言えば湊の心臓を貫ったチドリのヘカテーでも勝つ事は出来るだろう。
しかし、相手は制空権を取った状態で死神〝刈り取る者〟クラスのペルソナを使って戦い続けられるのだ。
ペルソナにフィールドは関係ない。元々宙に浮いた状態で顕現するため、ラジコンのように遠隔操作で戦わせる事は出来る。
それでも、遠距離や死角に入られればペルソナを操るのも難しくなる以上、制空権という圧倒的なアドバンテージを崩さない限り戦うのは難しい。
七歌たち側で敵と同じ高同調状態で飛べるのは湊と綾時だけだ。
ただ、相手は湊を狙っている。オリジナルの記憶を持つクローンである理は、オリジナルの湊を殺す事で自分こそが唯一の百鬼八雲であると証明したがっている。
前回の戦いで湊と理の格付けは終わっているので、もし再び狙ってくる事があれば理のサポートで玖美奈が出てくるに違いない。

空を往く事が出来るというのは確かにアドバンテージになり得るが、それは同時に飛べない味方からも援護が来ないという事。
湊の〝セイヴァー〟による生命力の広域展開はニュクスとの戦いを控えている状態では消耗を抑えて使わないそうだが、敵はその事を知らないし、それを使わずとも同様の効果を持つ収束砲だけでも十分に脅威だ。
メギドラオンすら受け止める盾、回復魔法の延長にあるが故に防御出来ない矛、それら最強のスキルを持つ敵に理が一人で勝つのは非常に難しい。
となれば当然相手もそれに勝つための戦力を割いてくる。残る七歌たちだけならば他のメンバーだけでも相手する事が可能だからと読んで。
「だから、私たちは徹底的に幾月とストレガの対策を取ればいいと思う」
夕方頃に一階のラウンジにいたメンバーと雑談がてら話す七歌は、無気力症の拡大が止まらないというニュースに視線を向けつつ紅茶を一口飲む。
周りにいる二年生組のメンバーらも好き好きにお茶やジュースを飲んで話を聞いているが、あくまで雑談であって作戦会議という訳ではないので雰囲気は軽い。
何せ寮で暮らす二年生組は集まっていても、湊やラビリスにチドリなどの外部協力者はいないのだ。
明日から学校が再開するという事で、準備もあるだろうと今日の探索は休みになっている。
そういった状況だからこそ、ゆったりと冬休み最後の午後を過しているのだが、やはり残り三週間ともなると気になるのか話題は影時間の事になりやすい。
七歌の言葉に他の者たちが頷いて返せば。誰が持って来たのかテーブルの上にあったかりんとうを一つ食べながら綾時も意見を口にする。
「ストレガのペルソナの特徴は分かっているけど、幾月たち三人のペ

ルソナの詳細が分かっていないのは厄介だね。湊なら正面突破も可能だろうけど、今の僕じゃ一人を押さえ込むくらいしか無理だから」
「まぁ、人相手に戦い慣れてる相手を一人完全に押さえてくれるだけで十分にありがたいけどね」
「そうですよ。向こうの探知型はチドリちゃんたちみたいに戦えるみたいだから、当日は私が一番役に立てないだろうし。相手にほとんど知られていない綾時君は切り札になり得ます」
ゆかりは未だに人間相手に力を使う事に躊躇いがある。
何とか戦えているのは攻撃対象がペルソナである事が多いからだ。
刑死者のアルカナシャドウと戦う際に邪魔をしにきたストレガの相手は、因縁があると言って真田たちが担当してくれたため、ゆかり個人の対人戦の経験はほぼない。
他の者たちも湊と敵対した時を除けばストレガ以外にはまともに戦った事などないが、弓と違って威力のコントロールがし易い分、戦えている部分もあるだろう。
対人戦ではお荷物になり易いと分かっているゆかりと、そもそも戦闘力が無い風花が小さく落ち込めば、気にする事はないだろうと綾時が二人を励ます。
「二人は回復と情報で援護してくれているし。戦闘でも一線級の活躍をしろだなんて誰も言えないさ」
「そうだぜお二人さん。最後の戦いじゃ総力戦だからな。バックアップと回復が期待出来るだけで十分過ぎるって。人数的に不利なあっちにゃ出来ないだろうしな」
綾時と順平が言うようにゆかりは弓での遠距離攻撃の他に回復役も担っている。
七歌なども回復魔法を使えるペルソナを持っているが、高い戦闘力と指揮能力を持った彼女に回復役まで任せるのは難しい。
咄嗟の判断で使用する以外は役割を分担しておくべきで、ゆかりは負傷したメンバーの回復とフォローを担っている以上、戦闘での活躍まで望むのは贅沢と言えた。
そもそも、七歌たちと幾月たちでは人数が違う。普段は探知能力を

使っているメノウも、最終決戦では戦力として戦いに出なければいけない。
チドリたちの情報によればジンもアナライズだけなら可能らしいが、メインの探知を担っていたメノウが戦うのなら全体のフォローは出来ない。
フォローに回す戦力などないので、戦闘が終われば仲間の許に向かう以外に手はなく、最初からフォローなど考えていない可能性もあるものの、人数で勝る上に回復と情報の補助が入る自分たちの有意は間違いなく戦局に大きく関わってくるだろう。
男子たちから励まされた二人も素直に言葉を受け取って笑みを返し、それぞれがお菓子を摘まみながら飲み物に口をつける。
そこで影時間の話が一区切りついたと判断したのか、カップから口を離した七歌が全員に向かって話は変わるがと話題を振った。
「そういえばさ。下旬頃に進路相談あるって話だけど、皆は色々と決めてるの？　大学、短大、専門学校、就職と選択肢は色々とあるけど」
月末には決戦があるものの七歌たちは未来を諦めていない。
自分たちが勝って未来を手に入れると信じているからこそ、学校の進路相談ではちゃんと決めて三年生のコースを選ばなければならない。
言い出しっぺの七歌はここにいない湊に次ぐ成績優秀者なので、推薦も含めてかなりの選択肢がある。
だが、経歴を偽造した綾時やアイギス、あくまで平均的な成績の域を出ないゆかりや順平は進路に向けた準備が必要になるだろう。
普段はふざけている事が多い七歌からそのような真面目な質問が出た事が不思議だったのか、他の者たちは少しだけ驚いた顔してから悩みによる苦笑を浮かべて言葉を返した。
「うーん。オレっちはまだ決められてないなぁ。大学行ってもしたい事も特にねーし」
「僕は進学した方が良いかなって考えてるよ。湊からその方が世界を楽しむ選択肢が増えるってアドバイスも受けているからね」
「お、有里とそういう話したりすんだな。学校きてねぇし意外だった

わ」
「湊も別に遊んでいる訳ではないからね。僕の人生が続くと分かった時点で色々と調べたり用意してくれていたみたいなんだ」
湊は一時的に学校に復帰したものの、再び学校に来なくなって冬休み明けも来るかどうかは分かっていない。
どうやら無気力患者の受け入れと決戦に向けた準備で忙しいようだ。
ただ、それでも全く連絡が取れない訳ではなくて、人間として生きるようになった綾時に進路のアドバイスと資料を届けてくれていた。
今はまだゴタゴタしていて一部しか目を通せていないが、進路相談までにはある程度自分のやりたい事や興味のある事で選択肢を絞れるはず。
そんな友人の姿を見た順平は、未来を生きる事を目指していても、その〝未来〟への想像力が欠けている事に気付いて少し落ち込んだ様子をみせる。
「つか、マジでオレって何も考えられてないんだよなぁ。そりゃ、未来は勝ち取るけど、じゃあそこで何をしたいって部分が無くてな。正直、滅びなんて納得出来ないし、死にたくないから戦うって決めただけだしよ」
「ふふっ、私も順平君とあんまり変わらないよ。医者の家系だからか両親は医者になって欲しいみたいだけど、趣味の延長で私の興味は工学系に向いてるから両親とも話さないといけないし」
「あれ、風花の親って医者だったんか？」
「ううん。お父さんが医者の家系だけど建築士でね。それがコンプレックスみたいで私にはそうなって欲しいみたい」
話して苦笑する風花だが親の話をする時に以前のような不安そうな顔は見せない。
彼女もこの一年で成長しているようで、他の者たちがその変化を感じ取っていれば、七歌が山岸家の事情を考えれば簡単な解決策もあるよと提案する。
「ほーん。なら、風花が八雲君と結婚すれば両親的には万々歳じゃな

い？」
「う、うーん。どうだろう？　確かに有里君は大病院の経営者だし、知識と技術もあるんだろうけど、今は闇医者状態だから何とも言えないかな」
今の湊はあくまで闇医者。異能も駆使した医療行為で数々の難病を治してきたが、それでも無資格で医療行為を行なう犯罪者だ。
けれど、既に十分な知識と技術を持っているため、進学すれば資格取得は間違いなく可能。
勤務地も自分の病院を持っているため、婚約に成功すれば完全に勝ち馬に乗ったと言える状態になる。
なので、風花の両親が執着しているのが〝子どもが医者〟である事ならば、このまま進学した湊が医者になって風花と結婚すれば、義理の息子が医者という事で満足するに違いない。
もし湊が医者を選ばなかったとしても、義理の息子の肩書きで〝医者〟と〝大病院の経営者〟で後者を選ばない者の方が少ないだろう。
何せ風花の親戚にＥＰ社の経営する病院ほど大きな病院に勤める者などいないのだから。
風花はそこまでの事は考えていないが、七歌が湊との結婚について尋ねても特に嫌がりも慌てたりもしなかった事で、その程度には風花も湊に情を抱いているのかと察する。
「なるほろぉ。風花も八雲君との結婚を意識したりはしてるんだね」
「さ、流石にそれはないかな。年齢的にも無理だし。何というか有里君ってそういうのが想像出来ないタイプだし」
湊に恋愛感情を抱いているかと聞かれれば、風花はそれらしい感情はあるが純粋な恋愛感情かは分からないと答える。
何せ二人は恋人にならずに肉体関係を重ねてきたのだ。
当時の風花は両親との関係やイジメに悩んでいた事もあり、湊と身体を重ねる事で精神の安定を図っていた部分がある。
なので、風花にとって湊は絶対的な味方でいてくれる存在としての意識が強く、男性として見てはいるが恋愛感情は後付けなのではないかといった印象だった。

「そうかな？　なんか子沢山な家庭を築くイメージあるけど」
「多分、相手が多いからそういうイメージなんだと思うよ？」
そのため、彼との結婚生活は中々イメージが難しいと伝えたのだが、七歌は子沢山な家庭のパパさんになってそうなイメージがあると返した。
言われて風花も想像してみるが、何故だか彼の周りにいる子どもたちは髪や瞳の色がバラバラで、中には顔が似ている子もいるものの、どうしても母親が異なっている印象が付き纏う。
そのイメージの原因は彼が肉体関係を持っている者が多数いるせいだろう。
言われて七歌も納得したのか、正妻戦争が勃発しそうだと小さく呟きこの話題はここまでにしておく事にした。
この場にはアイギスとゆかりもいるのだ。恋愛感情を彼に抱いて特別な関係になりたがっている〝ガチ勢〟の前でこの話題を続けるのが危険だと気付かぬほど馬鹿では無い。
ゆかりもこの場限りの軽口として流したようで、話題を順平の進路に戻すよと声を掛ける。
「んで、順平の話に戻るけどさ。あんたって何か好きな物とかないの？」
「仕事に出来そうな物でって意味だとねぇかなぁ。ただ進学するってパターンもあるらしいけど、それも金を無駄にするようで何ともなぁ」
「あ、みちゆるが言ってたけど、進学したいなら桐条家がお金出してくれるってさ。流石にグループでもこんな世界の危機は想定してなかったみたいだからね。特別ボーナス的な物を出さないとって事になったみたい」
高校就職組もそれなりにいるが、月光館学園では圧倒的に進学する者が多い。
この寮にいる三年生たちも美鶴と真田が四年制大学へ、荒垣が調理の専門学校へ進学する予定でいる。
なので、順平がただ四年制大学卒の資格を求めて進学するとして

も、経済的な負担は気にしなくて良いという事だ。
突然お金の問題が無くなった事で順平は驚いた顔をする。
大学に行けば四年で数百万掛かるのだ。そんな大金を払って貰っていいのかと庶民派の順平としては信じ切れないらしい。
「美鶴さんが言ってたのは本当。けど、別に桐条家が払わなくても、ニュクスを倒せばお祝いとして八雲君がポケットマネーで出してくれるみたいだけどね」
「なんだよそりゃ。世の中の金持ちは考える事も一緒かよ」
「そんだけ未来の事も気にしてくれてるって事でしょ」
この場にいる者だけじゃ無く、影時間に関わりシャドウと戦って来た者たちは、学生として過す大切な時間を犠牲にして世界のために尽くしてきた。
だからこそ、将来に関わる部分について手助け出来る事があればと桐条家も湊も考えたのだろう。
加害者である桐条家がそういった事を言い出すのは分かる。だが、被害者であるはずの青年まで同じ事を言ってきたは正直謎だ。
もっとも、彼は影時間の被害者を減らそうと戦い続けてきた。
今回の事もその延長で〝被害者〟の特別課外活動部のメンバーたちを救うために言ってきたのだろう。
彼がそんな事をする必要などないのだが、湊までもがそこまで考えてくれているなら、一度自分も真剣に考えてみるかと順平も学校に貰った資料を見に部屋へと戻っていった。
順平が部屋に戻った事で他の者たちも解散する流れになり、他の者たちも彼と同じように今一度進路について考えるためそれぞれの部屋へ向かう。
直ぐ先の進路を選ぶだけじゃ無い。その後に何をしたいか。どうなりたいかを考えながら、それぞれ進路の希望用紙に自分の望む進路を書き込んだ。

第四百十五話　相談を受ける

1月8日（金）
放課後――月光館学園
冬休みも終わり、学校が再開して三学期に突入した。
三年生の生徒にしてみれば自由登校が始まる前の今月が学校に通う最後の期間と言える。
進学にしろ、就職にしろ、高校を卒業すれば同級生だった者たちと再び会う事はほとんどなくなるだろう。
だからこそ、残る学園生活を悔いの無いものにするために、プリンス・ミナトの会長を務める雪広繭子は久しぶりに登校してきた湊に会っていた。
冬休み明けの放課後という事もあって校舎に残っている生徒は少ない。
職員室の入っている実習棟を歩いていても生徒とは全くすれ違わず、静かな廊下では湊と雪広の歩く音だけが響く。
青年の方は元からそれほど話すタイプでないが、雪広は組織を率いる立場もあってよく話す方だった。
けれど、今は少しだけ顔を俯かせており、普段と違ってどこか儚げな印象すら感じる様子を見せている。
どうして彼女がこのような状態になっているかと言えば、プリンス・ミナトの会則である〝抜け駆け禁止〟を犯しているからという訳ではない。
今回は単純に真面目なトーンで相談があると彼に持ちかけ、相手も真剣な様子で相談を受けてくれたために少々緊張しているのだ。
少女が憧れていた青年は中等部で成長期を迎えてから、他の生徒よりも遙かに大人びた姿になっていた。
新任の教師よりも年上に見えるくらいで、しかし、老けているかと聞かれれば若いのは間違いないと自信を持って言える。
何せ髪や肌が綺麗なのだ。女生徒は勿論、女性教師たちも普段はどのような手入れをしているのか真剣な様子で尋ねるくらいに一目見

て分かる上質な髪と肌をしている。
そんな見ているだけで照れから顔が熱くなるような相手と二人きりの状態。
心の中では喜びのあまり奇声を上げながら草原を走り回っているのだが、現実には走り回るような草原などないし、並んで歩いていた相手がそんな事を始めれば、真面目に相談に乗るつもりだった湊は呆れて立ち去るに違いない。
故に、雪広は淑女の仮面を被って青年にどこまで移動するのかを尋ねた。
「お、皇子、あの……どちらまで行かれるのですか？」
「……静かな場所の方がいいとの事だったので、屋上にでも行こうかと」
冬真っ只中の屋上であれば、まともな神経をしていれば近寄る事はないだろう。
何せここは人口島の上にあり、海風が吹く事もあって寒いのだ。
ここ最近は何度も雪が降っているため、下手をすると屋上にもまだ雪が残っている可能性すらある。
そんな場所に受験前の三年生の女生徒を連れて行くなど非常識でしかない。
しかし、雪広はその部分には何も突っ込まず、行き先を知ってからは黙って歩き続ければ、階段を上って屋上前の扉で青年が立ち止まった。
「……先輩の体調を考えると外に出るのは拙いので、ここで話しましょうか。とりあえず、温かい物でも飲みながら」
言いながら湊は雪広に缶のホットココアを渡す。
本人は〝ただの白湯！〟とパッケージに書かれたペットボトルを取りだし、それに口をつけたので雪広も貰ったココアに口をつけ、ホッと一息吐いてから改めて彼に話しかけた。
「それで、あの、相談というのは進路についてなのです。私の受験する大学には、短大卒認定制度がありまして、二年で卒業する事も可能なのです」

雪広が改まって湊に相談しに来たのは、今後のプリンス・ミナトの活動を踏まえてアドバイスが欲しかったからだ。
彼女は大学に進学すると決めている。そこは既に決まっているし、どの大学を受験するかもちゃんと考えて選び終わっている。
ただ、代表になっている自分が学生生活をしている間、プリンス・ミナトの動きは非常に鈍ってしまう。
以前のプリンス・ミナトは湊を崇め奉る単なるファンクラブでしかなかったが、湊の知名度が爆発的に上がって全国規模の人気を見せると、様々なスキルを持った大人たちも所属するようになり、プリンス・ミナトは本人の許可を得て彼のライセンス品の権利を扱う会社として成長する事が出来た。
活動理念は変わっていない。しかし、そこに子どもの小遣いでは済まない額の金銭の動きがついてくると、真面目な彼女は私事よりそちらを優先すべきではないかと考えてしまった。
「会社はちゃんと回っています。皆さんの給料と活動資金を確保した上で、余剰分は毎月寄付していけるようになってます。ですが、お金を無駄にする訳にはいかず、寄付する先の選定も時間が掛かります」
プリンス・ミナトにとって湊は神にも等しき存在だ。
そんな彼がプリンス・ミナトに権利の扱いを任せる際、余った金は救いを求める者たちへ寄付するようにと告げてきた。
色付きの羽根の募金を除けば、コンビニの盲導犬を増やすための募金くらいにしかお金を出した事の無かった雪広にすれば、救いを求める者たちへの寄付などやり方すら分からなかった。
他の者と一緒に調べてみれば、事故で親を失った子どもの生活支援であったり、砂漠化が進んでろくに食べ物を食べられず多くの住人が餓死しかけている地域の復興など、お金を必要としながらもお金だけでは解決出来ない事柄が多くあると知った。
それでも、自分は傍にいけない。自分一人では世界中の人間を救う事は出来ないからと、湊はせめてお金を出す事で一人でも多く救われるように動いた。
雪広たちも彼の意思を理解し、寄付金で私腹を肥やすような詐欺師

にお金が渡る事などないよう細心の注意を払い。自分たちの寄付したお金が適切な使い方のされる場所へと寄付し続けてきた。
　それは湊が死んでいた間もしっかりと継続していて、この数年の活動で寄付した団体や地方自治体に国などからも感謝状が届くようになった程である。
「私は皇子の言葉に従って活動を続けてきました。ですが、今は自分でもそういった事に興味を持って、より専門的に学びたいと考えるようになったのです」
「では、進学先はボランティア関係の事を学べる大学なんですか？」
「ボランティアに限定している訳ではありませんが、福祉や開発や復興活動などについて学べる学校ですね。自分が現地に行くのか、経済的な支援や人材を派遣するのか、選ぶ手段で手続き含め色々とやる事は変わってきますから、基礎を身に付けた時点で動くべきなのではと考えたりしています」
　今この瞬間にも救いを必要としている人間がいるのならば、最低限の基礎を身に付けた時点で動き始め、残りの部分は動きながら実践で学べばいいのではと考えてしまう。
　真面目だからこそ何も出来ない事、何もしていない状況が歯がゆく感じてしまうのだろう。
　少女が自分の悩みを口にした事で、その内にあるものを読み込んだ青年は、少し考える素振りを見せてからペットボトルの白湯を一口飲んだ。
「……経験から言えば、どちらも間違ってはいません。早く始めればその分救える人間は増えるかもしれない。いや、確実に増えはするでしょう」
「何か問題もあるのですか？」
「ええ。一つは先輩自身の未熟さ。もう一つはコネクション、パイプ作りです」
　どちらを選んでも間違いでは無いと言いつつも、湊は短大卒認定を受ける事にあまり賛成ではない様子を見せる。
　アドバイスを受けに来たためそんな態度に腹を立てたりはしない

が、どうしてそう思うのか疑問に思って雪広が尋ね返せば、指を一つ二つと立てながら湊は静かに続ける。
「基礎を知っているくらいでは対応出来ない事などいくらでもあります。会社として動くと簡単には止まれない。なのに、事態はその場で先輩に決断を迫ってきます。大勢を巻き込むなら〝出来ません〟と簡単に投げ出す事は許されない」
「そう、ですね。今も大勢の方に力を借りて会社を回している状態です。皆さん、皇子の指示だからと嬉しそうに楽しそうに仕事をしていますが、皆さんにも生活があります。余計な負債を抱える事は出来ません」
　自分から協力すると言っておきながら、その時になって自分たちの力じゃ出来ませんなどと口にすれば、途端に信用を失ってしまう。
　プリンス・ミナトは湊のライセンスを扱う事で儲けているだけであり、グッズの開発を除けば本当に自分たちの力のみでお金を稼いでいるとは言えない。
　そこでさらに信用まで失ってしまえば、本来の目的である湊のライセンス管理も難しくなってくるだろう。
　社員たちの生活、会社、湊の皇子としてのブランド、それらを守るためには絶対に力が必要だ。
「そこで効いてくるのがパイプです。先輩たちの本業は福祉活動ではない。本来はグッズ開発も行なう俺の個人事務所的な形だったはずです」
「はい。今、務めている方の中には大手芸能事務所におられた方もいますし、出版社の広報担当だった方もおられます。グッズはデザインから製作まで本業の方がいますので、皇子のライセンス管理に抜かりはありません」
「なら、福祉活動も同じようにすればいいんです。専門家を引っ張ってくるか、どこかと提携して新しい部署を立ち上げるか。方法は任せますが、代表を務める先輩が実働隊として動く必要はありません」
　雪広の志は素晴らしいものだと思うが、ＥＰ社を動かすようになって人を使う事を覚えた湊にすれば、どうして人材を集める力があるの

に本人が動いているのか疑問に思ってしまう。
自分が福祉活動に力を注ぎたいのであれば代表を他の者に任せるべきだし、そうでなく結果が出ればいいのであれば信頼出来るパートナー企業を作って金だけ出せばいい。
大学に四年も通えばその業界の知り合いも増えるだろう。業界大手の裏話なども聞けるかもしれない。
今の雪広は結果を求めて焦っているように見える。
急がば回れではないが、本当に力を入れて取り組みたいのであれば、四年という時間を掛けて取り込める物は全て取り込み、質と量を備えたパイプ作りを行なった方が結果的に多くの人間を救えるはず。
湊がその事を静かに説明すれば、どこか肩の力が抜けた様子の雪広が笑みを浮かべていた。
「そうですね。私は少し焦っていたのかもしれません。この学園を卒業すれば皇子との接点も減ります。であれば、会社の運営も皇子の手を離れ、私たちが中心になってくると思います。皇子は私たちに任せてくれていますが、だからこそ結果を出す必要があると思っていたんです」
湊はプリンス・ミナトの運営には関わっていない。
アドバイスや許可を求めて連絡を取る事はあるが、あくまで協力者であって実際に会社を動かしているのはプリンス・ミナトの会員たちだ。
だが、だからこそ代表の雪広と湊の接点が減れば、企業の運営方針は雪広たちに任されるようになる。
丸投げされている状態なのに好きには動けず、されど結果は求められ、湊の皇子としてブランドを汚すような真似も出来ない。
大人の部下を多数抱える十八歳の少女がそんな状況で不安を持って、焦りを覚えるのも無理はないだろう。
湊からの指摘で自分が焦っていた事を自覚した雪広は、相談に来た時と違って晴れ晴れとした表情で湊に話し続ける。
「自分の手で全てをやりきる必要ない。これまでも多くの人の手を借りてきました。なら、今度もそうやって行けば良いんですよね」

「ええ。会社としてやりたい事があるなら、ＥＰ社の相談担当デスクに電話してください。会社名と俺からの紹介だと言えば通じるようにしておきますから、その分野に強いアドバイザーが相談に乗ってくれます」
ＥＰ社は多数の傘下企業を持っているため、やりたい事を伝えれば出来る限り相談に乗って、さらに協力してくれる傘下企業の紹介まで可能だ。
勿論、協力して何かをするには報酬を払って契約を結ぶ必要もあるが、何の知識もない状態で見切り発車するよりは良いだろう。
取り出したメモに番号を書いた湊は、それを雪広に渡して大抵の事は相談出来ると伝えた。
受け取った雪広は嬉しそうにそれを胸に抱くと、無くさないように手帳に書き写してから挿み込む。
「何から何までありがとうございます。私は皇子と同じ事をしないといけないと思っていました。私欲を捨て、皇子のように大勢の人の助けになって、皇子のように救いを求める声を聞いて、そうやって皇子のしてきた事を真似る事でしか結果を残せないと思い込んでいました」
「買いかぶりですよ。俺は私欲なんて捨ててない。人を助けていたのだって、目の前で嘆く顔が、救いを求める声が鬱陶しいと感じたから問題を排除して黙らせただけです」
湊は大勢の人間を助けている内に、周囲から聖人のように思われ、誰であろうと救いの手を差し伸べる存在のように扱われる事が増えた。
けれど、本人にそういった意識は一切ない。
人を助けてきたのは、両親や被験体など自分が巻き込んで殺した者たちへの贖罪でしかない。
誰かを救えば殺した罪が薄れるのではないかと、優しかった彼らが救うはずだったものの一部でも肩代わり出来るのではないかと、そんな独善的な意識で救ってきたに過ぎない。
「……最初から他人に興味なんてないんです。相手側の理由なんて知

らない。俺は自分の意見を押し付けて助けた気になっていただけです」
「皇子がそう思っていたとしても、実際に救われた者もおります。中等部の頃、電車で痴漢に遭った事があります。怖いのに声をあげる事が出来なくて、誰も助けてくれなくて、恐怖と不安で倒れそうになっていた時、貴方は私を助けてくれました」
雪広が湊を慕うようになったのは、その見た目に惹かれた事だけが理由ではない。
彼女が中等部に通っていた時、電車で痴漢に遭った際に同じ電車に乗っていた湊が「その汚い手を離せ、屑」と相手の手を捻りあげ助けてくれたのだ。
聞けば彼女以外にも痴漢から助けられた者が大勢いて、中にはバスケ部の渡邊のように不良たちから暴力を受けている場面に現われて大人数人をぶちのめして助けられた者もいる。
湊がどのような考えで助けたのかは分からない。けれど、それでも確かに救われた者はいるのだと、雪広はどこか自分を責めているように見える青年の頬に手を添えて感謝を伝えた。
「助けてくれてありがとう。貴方のおかげで私は今も笑っていられます」
雪広は湊が今何かについて悩んでいる事は察していた。
ずっと彼を見続けていたのだ。無表情に見えても、どこか張り詰めた様子があればすぐに気付く。
彼と親しい者たち、七歌やチドリやアイギスも一時は何かを悩んでいたようだが、二学期の終わり頃には吹っ切れた顔をしていた。
だというのに、青年の表情だけは曇っている。他の者たちと対照的なせいで余計に目立つ状態だ。
恐らくそれは自分では何も力になれない事なのだろう。
他の者たちは気付いているのか、それとも気付いていないのかは分からないが、周りにいる人間にもどうしようもないのなら、自分に出来るのは少しでも彼の心の重石を取り除いてあげる事だけだ。
頬に触れられて優しい笑顔を向けられた青年は、少しの間相手を見

つめ返す。
不思議な色をしている彼の瞳の奥には何も見えず、彼が何を考えているのかも分からない。
だが、少し経ってから湊はポツリと「そうですか」と呟いて雪広から離れた。
相談が終われば用事もない。湊は途中まで送っていくと言って雪広と共に生徒玄関まで移動し、靴を履き替えると相手を駅まで送って相手と別れた。

第四百十六話　小さな影響

1月9日（土）
午後――月光館学園
無気力症の拡大に伴って世間ではカルト宗教の話題も広まっている。
街中の至るところに宣伝も兼ねた終末を預言するビラが貼られ、〝ＮＹＸ教〟なる者たちが朝から晩まで同志を募っているのをよく目撃する。
電柱や信号機だけでなく駅の壁やホームの床、さらにはビルの壁や道路にまでビラを貼っているため、警察も見つけたら注意しているようだが信者も増えて手が回りきっていないらしい。
コロマルの実家である長鳴神社の境内や遊具にも貼ろうとしている馬鹿を見つけた時には、湊は思わず紫水晶色に変化した瞳で見つめて寒中水泳を楽しんで来るといいと言ってしまった。
湊の言葉を聞いた者たちは全速力でその場を立ち去り、言われた通りに寒中水泳をしたようで、後で高熱で意識が朦朧とした状態でＥＰ社の病院に運ばれてきた。
彼らは今も大人しく入院しているため、事態が治まるまで世間様に迷惑を掛けるような馬鹿な真似はしないだろう。
だが、数人を間接的に更正させたところで、無気力症の拡大が止まらない以上は信者の拡大も止まる事はない。
世界規模で広まる未知の病気に、これまで遭遇した事のない未知の状況。
街中だけではなく、国中で皆が言いようのない不安を感じている。
ＮＹＸ教はその不安をさらに煽りつつも、どうしてこのような状況になっているかの説明を行い。さらに状況が進めばどうなるか、そして最終的に世界が行き着く結末の話もしているらしい。
世間で騒がれている不安な状態から解放されたがっている者、〝現在〟に絶望しながらも心のどこかで未来を求めている者、ただ仲間を欲している者からすれば、ＮＹＸ教の活動は自分たちの願いを叶えて

くれるものと言える。
また、中には自分よりも大切な人たちの事を思って、分からないなりに行動を起こそうとした結果、話題になりつつあるＮＹＸ教に辿り着いて一縷の望みに賭けようとする者もいる。
そういった者たちをターゲットにして、ニュクスを呼ぶ声を増やそうとしているタカヤたちは、実によく人間の弱い部分を知っているなと湊すら感心させられるほどであった。
「あの、有里先輩。お時間少しよろしいですか？」
そして、そんなＮＹＸ教の手は学校まで伸びてきており、単なる義務感から学校へ来ていた湊の許へ後輩の女生徒が近付いて来た。
授業は既に終わっており、後はもう帰るだけという状態だ。
土曜日は午前中授業なので途中でお昼ご飯を食べてから帰る者もいるようだが、湊はそのままＥＰ社の方へ戻るので学校に残っておく理由はない。
手に持っているチラシから相手が何を言いたいのかも分かっているので、興味はないとそのまま帰っても良いのだが、相手のために出来る事を考えすぎた結果宗教に取り憑かれた人間は非常に厄介だ。
ここで湊が相手との会話を拒否すれば、物陰から見ているプリンス・ミナトの会員たちが抜け駆けしたように見える女生徒と〝お話〟しようとするに違いない。
結成当初は単なるファンクラブでしかなく、規模も真田のファンクラブである『真田王国』に負けているレベルでしかなかったが、プリンス・ミナトも今や全国に会員を持つ大所帯。
湊が成長して今の姿になってからは、ごく一部の人間が湊を神のように崇めるようになり、ファンクラブであると同時に一種の宗教のようなものと言える。
そんな会員たちにとっては信仰対象である神を、最近になって名前を聞くようになったカルト宗教という邪教へ入信させようとするなど、湊信者たちからすれば開戦待ったなしの挑発と受け取るだろう。
しかし、青年の目の前にいる女生徒からは悪意を感じない。
相手は世界の終わりを本気で信じていて、だからこそ湊に生きてい

て貰おうとＮＹＸ教への入信を勧めるつもりのようだ。
　であるならば、湊は相手が他の者たちから責められる事がないよう、上手く躱して話を終わらせる事を目指して言葉を交わす。
「……なんだ。宗教なら間に合ってるぞ」
「やっぱり有里先輩の耳にも入っていたんですね。なら、尚更話を聞いて欲しいんです。今の世界の状況を考えると、このまま行けば今月末にも世界は終わってしまいます。正確に言えばこの状況を作った方たちがいるんですけど、事態が動き出した以上はもう止められません。でも、世界はただ滅びる訳じゃなくて、今の状態から大きく様相を変化させると言った方が正しいみたいなんです」
　どういった形でタカヤたちが世界の終わりを伝えているのかと思えば、意外な事に世界を滅びに導いたのは自分たちであると宣言しているらしい。
　けれど、彼らはただ意味もなく世界を終わらせようとしている訳ではなく、社会を支配している力を持った悪とそれに従い他者を貶め自分が得する事しか考えていない害虫がのさばる現状をリセットし、正しき者たちが正当に評価され正当な報酬を受けられる世界に造り替えようとしているのだとか。
　およそ十年の付き合いがある湊としては、教祖であるタカヤたちが本気でそんな事を考えているとは思わない。
　彼らは制御剤の副作用で純粋に残り寿命が少ない。
　だからこそ、今この瞬間を生きていて、ニュクスの降臨は人生の締めとして自分と世界を同時に終わらせようとしているだけだ。
　もし本当に力を持った悪とそれに従う害虫たちを駆除する気があるのならば、彼らは裏の顔を持っている湊を殺しに来るはずだ。
　湊は悪を狩るために裏の世界に入ったが、その悪の基準は自分で決めたものでしかなかった。
　自分のエゴで悪を狩り続け、力を持ってからはその悪たちと同じように組織を使って自分たちの目的を進めてきた。
　知り合いだからと情が移るタイプでもなし。タカヤたちは自身の生を実感するため、力を持った湊と戦ってその命を奪いたがっていた

のに未だ殺しに来てはいない。
　であれば、やはり女生徒が話した内容はあくまで信者向けに考えた耳触りの良い方便だろう。
　部分的には真実である事もあって、嘘の中に真実を混ぜる詐欺の手口の基本は出来ている。
　ただ、他人を騙す事に関しては湊もそれなりに経験があり、一対一の状態ならどれだけ人間不信な相手だろうと自分に心酔させる事だって出来た。
　本気で自分の事を考えてくれているならば、自分の言葉はしっかりと相手の耳に届く。頭で理解されなくても音として聞こえているなら十分だと湊は洗脳の解除を開始した。
「なるほど、だが分からないな。それなら世界が変わればお前の勧めようとしている宗教の信者も終わるはずだ」
「いいえ。この世界の滅びはＮＹＸ教の人たちが始めたものなんです。世界を滅ぼすような存在と繋がりがある人たちが、その影響から外れる手段を持っていてもおかしくはありません」
「自然災害は人工的に引き起こす事が出来る。夏から秋にかけて猛威を奮う台風も小さな切っ掛けさえ作れば、後は自然に大きくなって街や国を襲わせる事が可能だ。だが、それらは街に到達する頃には制御出来なくなる。その滅びを齎す存在も呼ぶ事は出来ても規模は制御出来ないんじゃないか？」
　世界全体を滅ぼす存在と一部の地域に被害を齎す自然災害を同列に考える事は難しい。
　しかし、人間では抗う事が難しい相手という点では共通しており、さらに湊が言ったようにそういった物を人の手で作り出す事は可能なのだ。
　女生徒は台風を人工的に生み出す事が出来ると知らなかったのか、少しだけ驚いた顔をすると顎に手を当てて考え込む。
　恐らく彼女は日本人ならよく知っている暴風雨の光景を思い出し、あれを作り出してコントロールするなど出来るはずないと考えているはずだ。

限られた範囲にのみ被害を出す災害もコントロール出来ないというのに、世界中を巻き込む滅びをどうやってコントロールするというのか。
相手の中に僅かでも疑念が浮かべば後は簡単に落とせると湊は言葉を続けた。
「それでＮＹＸ教はどうやって自分たちは助かると言っていたんだ？
滅びまで残り三週間。そこから社会構造が変わるのであれば、それぞれに準備が必要なのは間違いない。もし幹部たちが変わった世界を支配するんじゃなければ、お前たちにも必要な準備について伝えているはずだが？」
「そ、それはまだ……聞いていません。でも、滅びは間違いなく迫っていて、普通の人ではそれに抗う事なんて！」
「……どうでもいい」
一般人の話などされたところで意味がないし興味もない。
湊の言葉で女生徒は再び驚いた顔になり、しかし、相手を見れば確かな存在を持って立っていて、そこに普通の人では持てない確固たる自信を見たことで、本当に彼には関係のない話なのではと心の揺らぎが大きくなる。
「先輩は、怖くないんですか？　だって、滅びが迫っているんですよ？
学校の皆も、家族や友達も、皆いなくなるかもしれないんですよ？」
「……そうはならない。これまで俺は大勢の人間を救ってきた。なら、今回も求める者がいるなら救ってみせよう。だから、お前は何も心配しなくて良い。ただ俺を信じていろ」
言いながら湊は女生徒の頭に手を置いて安心させるようにポンポンと叩く。
途端に女生徒は目に涙を溜めて顔を歪ませ、そのまま湊の胸に飛び込むように抱きついて泣き始めた。
ずっと怖かったのだろう。世間はこんな状態で、カルト宗教の話が広まり出して、不安に押し潰されそうになりながらも、どうにか大切な人たちを守りたかったに違いない。
彼女は今回騙されてしまったが、その優しさは本物で、自分がどう

にかしようと思って行動した勇気も間違いなく本物だ。
なら、湊がすべきは彼女の意志を引き継ぎ、その恐怖を少しでも解消してやる事だ。
もう大丈夫。何も心配はいらない。これまで大勢の人間を救ってきた湊だからこそ、その言葉には確かな信頼を寄せる事が出来た。
しばらく湊の胸で泣いていた女生徒は、顔を離すと陰が薄れどこかスッキリとした顔つきになっていた。
助けようとした相手に逆に助けられた事が恥ずかしいのか顔は赤いが、最初に話しかけてきた時の切羽詰まった感じはもうないので、これなら大丈夫だろうと湊はその場で左手を挙げて指を鳴らした。
「――――親衛隊、ここに」
「彼女の世話を頼む。泣いた後だから顔を洗いに行かせてやってくれ」
「かしこまりました」
湊が指を鳴らすだけで周囲に隠れていたプリンス・ミナトの会員たち六名が現われる。
話していた女生徒は会員たちが隠れていると知らなかったようでビクリと肩を揺らす。
だが、三人は窓際で雑談をしながら湊たちの様子を確認していたし、一人は柱の影に隠れて待機していた。残る二人は湊の指を鳴らす音が聞こえて走ってきただけだが、それでも完全に気配を絶っていた者は一人もいないので、それに気付かなかったのは単純に女生徒の視野が狭くなっていた事が原因だろう。
視野が狭くなっているからカルト宗教に騙されるのか、カルト宗教に騙されてから視野が狭くなっていたのか。
どちらでも結果は一緒なので深く考えたりはしないが、今回の事で女生徒はＮＹＸ教を辞めて日常に戻る事にするはず。
彼女の他に湊へ入信を勧める剛の者は現われておらず、そういった意味ではプリンス・ミナトのおかげで学内におけるＮＹＸ教の広まりは防げていると言えるだろう。
プリンス・ミナトの会員たちは宗教やらを勧められても、学校に行

けば神に会えるから必要ないと返すらしい。
実際、一度死んだはずなのに蘇生して戻ってきているのだ。どこぞの救世主の伝承にあるように『復活』を現実に成し遂げた以上、いるかも不明な神などより余程神と見なす事が出来るのも事実。
湊自身は神として振る舞う事はないものの、プリンス・ミナトの会員たちに神として扱うなとは言えない。
女生徒の話に出てきたように世間はかなり不安に包まれ、どことなく暗い雰囲気になってしまっている。
そんな状態でもプリンス・ミナト会員たちが元気に活動しているのは、湊が世間の状態を欠片も気にしないでいるからだ。
曰く、湊が大丈夫と言えば大丈夫らしい。
確かに湊はその滅びを回避するために動いているし、そういった未来があると知っている以上は諦めるつもりもない。
けれど、ニュクスとの戦いに向けて力を磨き続けている七歌たちと違って、独りになった青年は自分がどう動くべきか分からないでいた。
（……あと三週間か）
正解はあると分かっている。それだけは救いだが湊にはその答えが分からない。
当日に全てが解決するのならそこまで焦る必要はないが、もしも一週間は準備に時間が掛かるという事ならかなりギリギリになってくる。
まだ時間はあるが、それほど残っているとは言えない。
並行してＥＰ社の準備や無気力症患者の対処、さらにタカヤたちカルト宗教の信者らの処理もある。
深く溜息を吐いた湊はその場を後にすると、出来る事から始めるべくＥＰ社関連の施設からＮＹＸ教信者の排除とビラの撤去を指示するのだった。

第四百十七話　カルト宗教の正体

1月12日（火）
夜――はがくれ

三学期が始まってすぐに三連休になり、いまいち学校が再開した気がしないまま三学期が始まって二日目の学校が終わった。

前日が成人の日だった事もあって、授業の度に教科担当の教師らが自分の成人した時の話をしたり、遠い目をして月日の流れの速さに憂いていた。

七歌たちにしてみれば何の話だという感じで、教師たちの青春時代のエピソードには興味などない。

まぁ、順平のように無駄話で授業が潰れる事を喜んでいる者もいたが、もしも偏差値の高い大学を目指すのであれば、学校の授業もしっかりと受けられた方が良いと考えるだろう。

自分でも当然勉強はするものの、学校の授業内容が充実していれば効率が良くなる。

例えカリキュラム通りでしかなかったとしても、初めて知る内容を自力で調べながら勉強するよりはマシだ。

なので、普段はふざけている七歌も実は授業はちゃんとして欲しいタイプだったが、成人の日の翌日くらいはしょうがないかと諦め、今日は休養日として教師らの話を聞き流しつつ授業時間を過した。

ろくに頭を使わなかった事でカロリー消費も少なかったのか、今日は放課後になってもほとんど疲れを感じていない。

その分、今日のタルタロス探索は捗りそうだが、残念な事に影時間までは学校が終わってから六時間以上ある。

テニス部も今日は休みで、探索前にハードなトレーニングをする訳にもいかないとなれば、体力があり余っている七歌がジャガイモたちへ無茶ぶりするのもある意味当然と言えた。

具体的に言えば、順平や綾時になんか面白い事やるか晩飯奢れよと唐突に振ったのだ。

その時二人は綾時が学校から貰ってきた進学者向けのパンフレッ

トを見ており、順平も進路相談の時の参考にしようと思って真面目に見ていたので、七歌からの無茶ぶりに上手く対応出来なかった。
面白い事をやるか晩飯を奢るかしろと言われ、何も面白い事が出来なければ晩飯を奢らされるなど理不尽でしかない。
ただ、そんなピンチにこそ活路を見出すのが順平という男だ。
彼は自分の懐を痛めずに七歌に奢る方法はないかと必死に考え、南の島でのとあるイベントの事を思い出した。
そう。真田と荒垣と行なったナンパ対決だ。
負けた人間がラーメンを奢るという約束をしたというのに、アイギスが加入する時のいざこざで勝敗が曖昧なまま罰ゲームも行なわれずに今日まで来た。
あの時の勝敗はと言えば全員ただの一人もナンパ出来ないままに終わった。
その事実だけを見れば全員同点の引き分けに見える。
しかし、あの時ナンパに興味のない二人を煽る際に順平は言っていたのだ。
お互いに女性経験はゼロだが、一年長く生きている二人と順平が同じ条件になるには一年の猶予があると。
それはつまり、同じ敗北に見えても一年遅れのハンデを背負っていた順平が一番不利な状況で、真田と荒垣はハンデも貰っても勝てなかったという事だ。
勿論、それはただの詭弁なのだが、勢いで押せばいけると判断した順平は寮にいた二人にその事を話した。
半年前の事を今更言ってきた順平に二人は呆れていたが、決戦までそう時間がある訳でもない。
なら、仲間との絆を深める意味も込めて、約束通りラーメンを奢ってやる事にして寮を出た。
「確かにラーメンを奢ってやるとは言った。だが、こんな人数になるなんて聞いてないぞっ!!」
店の前で突然大声を出す真田。だが、彼の言う事ももっともで、行きつけの店である『はがくれ』に到着してみれば、そこには美鶴と風

花を除く寮生が全員揃っていた。
美鶴は桐条家の用事があり、風花は進路相談の話をしに実家に戻っている。
ある意味タイミングが悪かったと思わなくもないが、二人で順平一人に奢るつもりでいた真田と荒垣にとっては奢る相手が僅かでも減ったのは幸運と言えるだろう。
何せ小学生の天田を除けば食べ盛りの男子高校生が四人いて、残る女子三人も普段から運動している事もあって並みの女子よりも沢山食べるのだ。
いくら真田と荒垣の折半だとしても、ただのラーメン屋に食べに来て数千円の出費は痛い。
恨みがましく真田が順平を睨めば、頭の後ろで腕を組んだ順平はヘラヘラと笑いながら口を開いた。
「いやぁ、七歌っちたちが飯食いに行こうぜって言ってきたんで、自分たちが食いに行くのに断れないじゃないッスか」
「同行するのは構わん。だが、何故全員分を奢らねばならんのだ！」
子どもである天田の分くらいは奢ってもいい。真田が順平に奢り、荒垣が天田の分を払う。これくらいは年長者として許容出来る。
しかし、一般庶民である自分たちよりも金を持っているはずの女子たちは、どうして自分たちも奢って貰えると欠片も疑っていないのか理解出来ない。
七歌は歴史ある旧家の出身、ゆかりは母親の実家が桐条の名士会に名を連ねており、アイギスは湊からお小遣いで毎月百万以上貰っているはず。
そんな相手に自分たちが奢る理由があるのだろうかと疑問に思っていれば、店の前に置かれたお品書きを見ていたアイギスがシレッと呟いた。
「傷心中のわたしをナンパしてきた謝罪を受けておりません」
「酷いよねぇ。泣いてる女の子を三人で囲って逃げられないようにしてさぁ」
「あー、なんか急に八雲君に電話したくなってきたなぁ。屋久島の思

い出を語りたい気分になってきたなぁ」
『本気でやめろ』
どこかわざとらしい口調で話す少女ら三人に真田と荒垣は口を揃えて待ったをかける。
アイギスの事を大切に思っている湊に屋久島での件がばれれば、彼女をナンパした男子三人の命が危うい。
気にしていないと思っていたアイギスですら、真田たちから謝罪の言葉を受けていないとしっかり覚えているのだ。
この事が湊の耳に入れば、間違いなく彼は下衆を粛正するために現われるはず。
もうすぐ決戦だという時にそんなのは御免だ。
諦めたように溜息を吐いた真田たちは、店の扉を開けると女子三人はテーブル席へ、男子五人はカウンター席に並んで座った。
「七歌、ここのオススメってある？」
「うーん。何かグルメキングが裏の裏メニューがあるって言ってたけど、激辛系だからオススメしづらいかも。それなら常連向けのはがくれ丼にしたら？」
「裏の裏ってむしろ表じゃない？　あー、はがくれ丼は気になるけど、今日はラーメンの気分なんだよね」
「では、わたしはそのはがくれ丼というものにしてみます」
女子たちはメニューを見ながら色々と相談しているが、最終的にアイギスがはがくれ丼で七歌とゆかりは特製ラーメンを選んだ。
真田たちの方は特製ラーメンと餃子やライスのセットを頼み、料理が出てくるまで会話や高い位置に置かれたテレビを見て過す。
だがその時、カウンター席で一番端に座っていた荒垣がカウンターの上に放置されていた週刊誌を見つけ、その表紙に載った見出しと小さな画像に気付いて声をあげた。
「おい、アキ。他のやつらも、これ見てみろ」
「なんだそれは？　所謂ゴシップ誌というやつか？」
誰もいないカウンターの上に置かれているなら、それを勝手に見たところで店員は何も言わない。

そのため荒垣は雑誌は引き寄せると、他の者たちにも見えるように見出しとその下の小さな画像を指さして見せた。
「え、その写真ってもしかして……」
「なんスかそれ。異形のカリスマ現るってどうみてもストレガのあいつじゃないッスか」
見出しには話題の宗教、突如現われた異形のカリスマとのコンタクトに成功したと書いて、ストレガのタカヤの写真が小さく載っていた。
裏社会の人間であるはずの男がどうして怪しいゴシップ誌の取材を受けているのか。
話を聞いて気になった女子たちもやってきて、中身を見てみる事にすれば、最近話題のカルト宗教とその教祖とされるリーダーの男への取材に成功したと数ページの特集が組まれている。
表紙では写真も小さかったが、特集ページではしっかりと顔が分かるくらいに大きな写真が掲載されており、その写真の男こそがリーダーだと明言されている。
今世間を騒がせているカルト宗教など、真田たちは胡散臭い集団としか認識していなかったが、敵であるストレガが関わっているとなれば話も変わってくる。
ストレガとは色々と因縁もある荒垣と真田は、写真の中で胡散臭い笑みを浮かべるタカヤを見て不機嫌そうに言葉を吐き捨てる。
「カルト宗教の話題をやけに聞くようになって、どうも妙な具合に広まってると思ってたが、そういう事かよ」
「ああ。全部こいつらの仕業だったって事か。これから飯だってのに台無しな気分だ」
写真にはタカヤだけが写っているが、どうせ彼の傍にはジンを初めとした他のメンバーもいるに違いない。
タカヤ自身はこういった広報活動に興味などなさそうなので、恐らくは今後の活動を見据えて幾月が指示したか、機械に強そうなジンが情報を拡散する事で自分たちに辿り着けないようにしたのかもしれない。

真相は不明だが相手に関する情報がここにあるのも事実。全員で一度に見る事は出来ないので、代表してアイギスが〝異形のカリスマの言葉〟なる記事を朗読する。
「人間は今、憎悪の連鎖と将来不安とが循環する目に見えない牢獄の囚われとなっている。だが今、世界には、我々を新たなステージへと引き上げる〝力〟が降臨しようとしている。私はそれを〝ニュクス〟と呼ぶ。私はその真実に触れ、一足先に力を得た。そして確信した……ニュクスさえ訪れれば、全ての人間は必ずや苦しみから解放されると」
途中まで読んだところで早速荒垣と真田は呆れ顔になった。
特別課外活動部側のメンバーたちは湊と綾時から敵の存在について聞いたが、幾月とストレガたちはニュクスの事は知らないはずだ。
ただ、デスの復活方法を調べ上げていた事もあって、その線からニュクスの存在に辿り着いた可能性もある。
「なんであいつらがニュクスの事を知ってるかはこの際置いておくとして、随分とまた好き勝手言ってやがるな」
「本気で言ってるのかも疑わしい。あいつらの事だ。遊び半分、単なる暇潰しでやっている可能性もある」
「というか、実際は逆ですよね。影時間とペルソナに出会ったからニュクスの存在を知った訳ですし」
荒垣たちに続いて天田も意見を言うが、確かに彼の言う通り、記事に書かれている事と現実に起こった事の順序が逆になっている。
真実に触れたというのは影時間に出会った事を指しているとして、その後にペルソナを得た事は確かなのでそこに間違いはない。
ただ、タカヤたちがニュクスの存在を知ったのはペルソナを得てからで間違いない。
さもニュクスの存在を知った事で力を得られたかのように書いているが、カリスマの癖に随分とせこい印象操作をするものだと、真田たちが小馬鹿にしたように鼻で笑ったところでアイギスは続けた。
「だが社会には、ニュクスの真実に触れながら、救いを理解出来ない哀れな者達がいる。彼らは私に近い力を得ながら、その力を個人の目的

の為に悪用している。昨今、巷を騒がせている説明のつかない怪事件……真相は、彼らの手によるものだ」
続きを聞いて先ほどまで敵を小馬鹿にしていた者たちの表情が険しくなる。
なんと、相手は自分たちの悪事を七歌たちに擦り付けてきたのだ。
確かに自分たちの活動が原因で街中の物を壊してしまった事などはあるが、それ以外に何かしたりはしていないし、無気力症の拡大に関しても自分たちのせいではない。
それを三流ゴシップ誌とはいえ全国で売られるような雑誌で発言するとは、随分と舐められたものだと順平が憤慨する。
「なんだそれ、人にせいにしてんじゃねーよ。テメェらがやった事だろうが！」
「うーん。影時間の悪用となると、桐条グループ、湊、ストレガと幾月の三組織って感じかな」
「綾時君、裏切り者はギルティだよ？」
「いやぁ、過去は変えられないからさ」
順平が憤慨する横で綾時が事実はこうだと訂正すれば、ここは全部ストレガたちに押し付ける場面だぞと七歌が釘を刺す。
けれど、桐条グループも湊たちも、自分が罪を犯した事を否定していない。
無論、グループの方は社会への影響を考えて隠してはいるが、実際に影時間に関わった七歌たちには真実を話してくれている。
それを考えれば、自分たちの犯した罪を他人に押し付けてくるストレガたちは救いようのない悪で、自分たちの罪を認めている桐条グループと湊は罪を背負う意識があるだけマシというものだ。
「私はこれより、ニュクスの来訪をより確かにするため〝約束の場所〟へと赴く。彼らを恐れる事はない……ニュクスが訪れれば、全ての者が等しく救済され、皆、安息出来る。今は、希望にのみ思いを馳せ、来るべき刻を待つだけでいい。何も心配する必要はない。待つ事だけが、唯一の正しい選択肢だ。同志諸君!! これは静かなる〝革命〟である！」

祈るだけ、願うだけで手に入るとは何ともお手軽な救いがあったものだ。
精神的に不安定になっていれば、こんな物でも信じてしまいたくなるのかと、七歌たちは何とも言えない気分になる。
「先行きの見えない未来を変えられるのは、〝異形のカリスマ〟だけなのかもしれない……以上で記事は終わっていますね。このコメントを最後に彼らは再び行方が掴めなくなっているようです」
「行方が掴めないってどうせタルタロスでしょ。約束の日に塔の頂上に行けば嫌でも顔を合せる事になるって」
この記事を書いた記者が本気でタカヤたちを追っているのかは分からないが、仮に本当に行方知れずになっていたとしても、相手の目的を考えればタルタロスを訪れない訳がない。
ニュクスの降臨はタルタロスの頂上で行なわれるのだ。
神の到来を待っているストレガたちにすれば、神との直接の対面を逃すとは思えない。
相手も七歌たちも頂上でニュクスに会おうとしている以上、求める未来の違いからそこが自然と決着の地になる。
どうせ嫌でも会えるのであれば、探す必要はないとゆかりが面倒そうに言えば、そのタイミングで完成した料理が運ばれてきた。
雑誌を元の場所に戻した一同は、それぞれの席に戻って料理を受け取る。
確かに広まっているカルト宗教の連中は鬱陶しいが、その裏にタカヤたちがいると分かれば仕組まれたものとして考えられるため、これまで感じていた不気味さは薄れた。
こんな雑誌に記事が載るくらいなので、無気力症の対処に動いている湊や桐条グループにも情報は伝わっている事だろう。
ならば、自分たちは自分たちに出来る事をやるだけだ。
運ばれてきた料理に箸を伸ばし、七歌たちは勢いよく、されど女子として最低限の上品さを持って料理を口へと運ぶ。
「おじさん、唐揚げとライス追加で！」
夜中の探索に向けて活力を得るため、七歌はラーメンを食べつつ追

加の注文を送る。
それを聞いた真田たちはギョッとしていたが、今回はもう諦めたのか何も言わなかった。
そうして、全員がお腹いっぱい食べて店を出ると、後輩たちから礼を言われた真田と荒垣は何でもない事のように返事を返した後、他の者たちが見ていないところで深く溜息を吐いた。

第四百十八話　失踪者の保護

1月15日（金）

影時間――タルタロス・憂鬱の庭アダマ

腰の両側に刀を下げた青年が広い通路を飛ぶように疾走する。

いや、事実として彼は一歩地面に足を着く度、その桁違いの脚力を活かして地面を蹴って跳んでいた。

本来、直線的な動きは戦闘に向かない。いくら速くても真っ直ぐだと分かっていれば、ある程度は山を張りまぐれ当たりを狙って対処する事も出来る。

人のような高度な知能を持たぬ通常のシャドウも、獣の持つ野生の勘に近い物は持っているようで、単調な攻撃を繰り出そうとすればそこを狙ってくる。

戦い慣れている青年がその事を知らぬ訳はないのだが、彼は気にせず数メートルの跳躍を繰り返して進む。

そうしてフロアを高速で移動していれば、正面に槍のような腕を持つシャドウ、戦車〝スロータードライブ〟が三体いるのが見えた。

相手までの距離はおよそ三十メートル。その距離を詰めるのに青年の進むペースなら三秒もかからない。

相手も既に敵が近付いている事に気付いているようで、迎え撃つための物理スキルを用意し始めていた。

通路の幅は五メートル以上あるものの、三体がそれぞれスキルを放ってくれれば完全に避けきるのは難しいかもしれない。

であれば、ここでの対処法は発動前に潰すか、後退して相手の射程圏外まで距離を取るかになる。

そして、青年が選んだのは後の先、敵の二十メートル手前で足を着くとさらに強く踏み込み、敵の視界から消えるほどの超加速で壁に向かって跳んだ。

そこからさらに壁を足場に天井に向かって跳躍、空中にいる間に身体を反転させ天井に足を着くと再び壁に向かって跳び、まるで弾かれたピンボールように立体的な軌道で敵の許まで移動する。

相手の動きを捉えきれていなかった敵はスキルを放つ間もなく、先頭の敵の仮面をすれ違い様に逆手に持った右手の刀で斬りつけられ、残る二体は間をすり抜ける間に両手に持った太刀で同時に一太刀ずつ浴びてそれが致命傷となり黒い靄になって消えた。
敵を倒した事でようやく足を止めた青年は、刀を鞘に戻すとゆっくり歩いて通路の奥にある開けた部屋に向かう。
そうして彼が進んだ先の部屋には、壁際で力無く座り込んだ女性がいた。
「……面倒を掛けるな」
言いながら湊は女性の頭に手を伸ばすと、淡い光を放ち相手の意識を飛ばす。
無気力症になっているため変に暴れる事はないと思うが、意識があると急に動く心配がある。
敵がいる場所でそんな事をされては面倒なので、湊は意識を失った相手を雑に肩に担ぐと元来た道を戻って外へ出られる場所を探す。
今回のようにタルタロスへ迷いこんだ人間を見つけたのは一度や二度ではない。
ほぼ毎月のようにそういった者は現われ、世間では失踪者として捜索願も出されているという。
捜索願を出す関係者たちは警察へ相談する際、失踪者がいなくなる前どこか注意力が散漫で応対の反応が鈍かったと伝えている。
おかげで警察は無気力症になってから行方不明になっていると考え、他の事件事故に巻き込まれる前に発見しなければと忙しいこの時期でも捜査員を導入しなければならず、対応に手を焼いているらしい。
それが仕事だと言ってしまえばそれまでだが、その場合、身内のお前がそもそも目を離したから大事になっているんだろと突っ込まれる事を覚悟しなければならない。
まぁ、どちらにしても湊はその双方と一切関係がないのだが、彼の立場としてこういった事態に対応しない訳にはいかず、わざわざ時間を割いて迷いこんだ馬鹿を回収しに来たという訳だ。

（〝寺戸史香〟か……捜索願も出てるし、病院経由でいいな）
肩に担いだ相手の服を弄って身分証を探し、事前に情報を入れていたEデヴァイスにデータ照会を掛ければ、ちゃんと相手の捜索願が出ていたため、湊は警察より病院に届けた方が面倒が少ないと判断する。
前はタルタロスで見つけても路上に倒れていたと通報して警察に身柄を渡した事などもあったが、変に疑い深い者がやってくると湊が相手を襲った可能性があるとして遠回しにネチネチと探ってくるのだ。
疑い深い上に気の短いやつとなると、難癖を付けて警察署まで連れて行こうとしてくる事もある。
そういった場合でも、大体は湊の事を知っている別の警官が駆けつけて、湊がそんな事をするなんてあり得ないと説明して解放される。
伊達に中学時代から人助けを続けて毎年感謝状を受け取り続けている訳ではない。
だが、面倒を嫌うのであれば最初から病院へ送り、病院から警察に連絡を入れた方が湊の存在がバレずに済むためスムーズに事を終わらせる事が出来る。
無気力症発症後に失踪した人間の捜索など、本来の管轄としては、これらの大本の原因を作った桐条グループが果たすべき責任の一つであり、湊がこうやって出張る必要など一切ない。
しかし、街中の捜索であれば桐条側にも人員を用意出来るが、失踪者がタルタロスへ迷いこんでいると途端に難易度が跳ね上がる。
何せ桐条側がタルタロスでの捜索活動に派遣出来る人員など、ペルソナ使いである特別課外活動部しかいないのだから。
（時期が時期だけにあいつらに余計な仕事を回すべきじゃない。まぁ、それを言えば多忙な俺に回されても困るんだが）
タカヤたちの頑張りのおかげなのか、世間にも徐々にカルトが浸透してただ滅びを受け入れようとする者たちが増えて来た。
そんな事をすれば精神のバランスは崩れていき、それほど時間を置かずに無気力症を発症する。

ただでさえ増加傾向にあったというのに、さらに加速させてきたせいで一部の地域では病床不足に陥っているところもあるという。
幸いな事にＥＰ社傘下の久遠総合病院は湊が無気力症患者の受け入れを目的に作った事もあって、急増する患者たちを何とか全員受け入れられている。
このまま増えても普段は職員や検査入院患者用の宿泊施設に利用している棟を開放すれば当分は保つ。
無論、今のペースからさらに加速すれば分からないが、それでも一月末までは何とか耐えられるだけの備えはあった。
もしも、他の地域に限界がくればＥＰ社を頼るように伝えてあるので、医療現場はしばらく戦場のような忙しさを迎えつつも、患者たちを放置して死なせるような事は起こらないと思いたい。
あと二週間なのだ。それさえ乗り切れば無気力症も治り、患者たちの身体と脳も徐々に元の機能を取り戻して補助が必要なくなる。
（あいつらの狙いはニュクスを呼ぶ声を増やすだけじゃなく、こちらの手を無気力症患者の保護に割かせる事だろう。お優しいヒーローなら見捨てないでしょうと言わんばかりの上手い搦め手だ）
肩に担いだ女性を運びつつ、相手の弱い部分を突くのが本当に上手い奴らだと内心で吐き捨てる湊。
本当なら湊にこんな事をしている暇はない。出来る事なら担いでいる女性を放り投げて帰りたい。
何せ彼には時間がない。あと二週間でニュクスを倒してこの惑星で生きる生命を存続させる手段を考えなくてはならないのだ。
湊のように敵の放つ波動を受けても相殺出来るようにすれば良いのか、それともニュクス自体を撃退して力を使わせないようにすれば良いのか。
未来の七歌たちと出会い。さらに他の世界かも知れないが数年先の未来に生きる鳴上たちと出会った事で、ニュクスを倒して世界を無事に存続させる手段がある事だけは分かっている。
しかし、その正解に辿り着こうにも、ヒントは勿論取っ掛かりになりそうな情報もない。

勝てる可能性、湊を除く他のメンバーたちが四肢の欠損などもなく無事に生存する未来があると分かっているだけマシだが、それだけに湊は自分の選択に全てが掛かっている事を重荷に感じていた。
（ストレガと幾月たちを処理して、到来したニュクスに向けてアイアスの盾を展開して弾き飛ばすか……。無理だな。異能による攻撃は防げても地表に向けて落下する月の質量を受け止めきれる訳がない）
湊のセイヴァーは湊の生命力を喰らって浄化の力に変換する。
そのため幾つもの固有スキルを持っているが、確認されているスキルの中で最高の防御性能を持つ虹の盾〝アイアスの盾〟は防御系のスキルの中でも異端の性能を持つ。
通常、防御系スキルは攻撃の種類に個別で対応するように出来ている。
物理を防ぐスキル、魔法の中でも特定の属性のみを防ぐスキルなど、しっかりと効果を発揮する分その用途が限られていた。
一方、湊のセイヴァーは召喚者の生命力を喰らっているが、それに加えて他のペルソナのようにＳＰなども消費してスキルを発動している。
おかげで敵の攻撃をエネルギー状の障壁で物理的に防ぎつつ、生命力を変換した浄化の力で異能の力自体を発動前の無害なエネルギーに戻して、対異能の切り札になり得る防御性能を誇っているのだ。
以前、時の狭間でその力を見た他の者たちは、神の力すらも防いでみせる盾を無敵と認識したようだが、使用者である湊は当然その力の弱点も理解していた。
他の防御スキルが物理か属性魔法に特化しているとすれば、セイヴァーの防御スキルは対異能に特化している特殊タイプ。
もしニュクスがスキル等を使ってきても防ぐ事は出来るものの、相手の肉体である月ごと地球に向けて落下してくれれば、エネルギー状の物理障壁で受け止めるしかなく、その質量を長時間支えられるほどの力は無い。
仮に湊がニュクスの到来を防ごうとするのなら、自分から宇宙空間まで出向いていき。そこで盾を展開して地球に向かってくるニュク

スを加速前に止めるくらいが限界だろう。
（未来の岳羽たちの言葉を信じるなら、俺はニュクスと一人で戦いに行って帰ってこなかったらしい。だが、ニュクスを討伐か再封印しない限り、恐らく影時間とタルタロスは消えない。タルタロスはあくまでニュクスが降臨するためのマーカーだからな）
桐条グループは長年タルタロスが現われた理由とその正体を分かっていなかったが、それ自体には大した意味などはない。
タルタロスはあくまでニュクスが降臨する際の目印になる、地球上に付けられたマーカーだ。
ニュクスが現われるまではシャドウたちが集まる場所、滅びを迎えるために用意された祭壇程度のものだ。
だからこそ、それが消えて現われなくなればニュクスが降臨しなくなった証明となる。
そういった説明を聞いた者の中には、なら先に潰しておけばニュクスは降りて来られないのではと考える者もいるかもしれない。
当然、湊もそういった可能性については考えたが、結果から言えばそんな事をしてもタルタロスは時間経過で復活する事が分かっている。
何せタルタロスは実際に一度完全に消滅しているのだ。
夏休みの中頃、丁度お盆の辺りに精神が不安定になった湊が幼少期の姿に変化し、完全な形で蛇神〝无窮〟を呼び出した事がある。
その時の湊は門としての機能を持った无窮を利用し、十年前の儀式の続きを行なうために空を目指した。
けれど、湊は深層モナドの最下層にいたため、すぐに儀式を行なうには蓋となっている塔が邪魔だとスキル〝ＤＥＡＴＨ〟の一撃で消し去った。
ペルソナという括りに入っているがその力は神クラス、流石というべきなのかその一撃により文字通りに影も形もないほど完璧にタルタロスは消滅した。
退行したまま姿が戻らない湊の問題もあったが、眠った彼を栗原たちが連れて帰った後には、タルタロスの消滅という事態に七歌たちも

不安を覚えたものだ。
もっとも、その不安も翌日の影時間には解消した。そう。なんと次の影時間には完全な形でタルタロスが復活していたのだ。
これが仮に全体の消滅ではなく半壊程度の状態で、尚且つタルタロス内に人がいたままならどうなるかという疑問もあった。
湊が数日タルタロスにいたように、内部にいれば現実の時間に弾き出される事なく、連続したまま影時間の中にいることが可能なのだ。
人の目から消えている間に復活しているのなら、中にいて影時間を連続した時間として体感している人がいれば条件から外れてしまう。
影時間もタルタロスもまだまだ全貌が解明されていない事もあって、研究者や影時間に関わる者がそういった疑問を持つのはある意味当然。
もっとも、結果から言えば中に人がいようとタルタロスは日付を跨いだ時点で復活する。
確かにタルタロスは天まで伸びる塔ではあるのだが、その役割はあくまで降臨の地としてのマーカー。
塔がある場所が最重要なのであり、上の塔は祭壇としての機能を持ったオブジェクトに過ぎない。
故に、日付を跨がないと復活しないなら当日破壊すればいいと考えたところで、降臨の場所が雲の上から地上に変わるだけでニュクスが月光館学園の敷地に向かって降りてくる事に変更はないのだ。
(降臨してから行動を起こしたのか、初動を制して畳み掛けたのか。それだけでも分かれば違ってくると言うのに……)
段々と残り時間が少なくなっているというのに、少しも解決策が思い付かない。
それだけでなく、肩に担いでいる女性のように余計な手間を掛けさせてくる者まで増えてくる始末。
ニュクス降臨の切っ掛けは桐条鴻悦の主導した実験だが、原因を辿ればこの女性たちのように精神の弱い者や、興味本位で死に触れたがった大衆の声がニュクスに届いた事にある。
尻拭いをさせられている者にすれば、悪意も自覚もないだけに質が

悪いとしか言い様がない。
　そして、ニュクスと対峙出来る者が湊しかいない以上、約束の日の戦いについて他の者たちに相談したところでどうなるものでもないため、独りで抱えるしかない湊は余計に心を荒れさせながら保護した女性を連れてＥＰ社へと帰っていった。

第四百十九話　未来の約束

1月19日（火）
夜――巌戸台分寮・作戦室
一月も下旬にさし掛かり、約束の日まで残るは十日ほど。
ニュクスが降臨するのはタルタロスの頂上という事で、七歌たちは実戦で鍛えながら探索階層を上げていくことを繰り返すようになっていた。
泣いても笑っても一月末には全ての決着がついてしまうのだ。
やり直しが利かない以上、その時になってもっと鍛えておけば良かったなどと後悔したくはない。
全員が同じ想いを持っているからこそ、本来は外部協力員だったチドリたちも頻繁に巌戸台分寮を訪れるようになり、今日も探索に向けての作戦会議に参加していた。
とはいえ、日夜シャドウという異形の化け物と戦っていようと、彼女たちは湊のような戦闘のプロではなく学生だ。
夕食も食べ終わって特にやる事もなかったから作戦室に集合したが、影時間前に学校へ到着するためのモノレールの時間までは時間がある。
本格的なブリーフィングはもう少し後で行なうので、作戦室に集まっても終始真面目に陣形やら敵の考察を続けている訳ではなかった。
そして今日もいくつかのグループに分かれて会話をしつつ、それでも仲間たちで同じ時間を過していれば、ニュクスに勝利した後の未来に目を向けるという話題で七歌が何やら思い付いたように声をあげた。
「あ、そういえば勝った後の話だけどさ。打ち上げとかってどうする？」
「いや、打ち上げって……いくら何でも気緩みすぎじゃない？」
確かに七歌はゆかりたちとニュクスを倒した後の未来の話をしていた。

何をしたい、かにをしたい。屋久島と京都を除けばろくに遠出も出来なかったので旅行も良いかもしれないなどと、取り戻した日常の過ごし方について語っていた。
未来の楽しいことについて話していれば、それは戦いに勝つためのモチベーションアップに繋がる。
しかし、それも度が過ぎると浮ついているように感じられてしまうため、ゆかりがそういうのは勝ってから話した方が良いのではと引き締めようとした。
言われた七歌は少しだけ不思議そうな顔をして、紅茶のカップに手を伸ばすといやいやと首を振ってゆかりの言葉に反論する。
「別にそこまで詳しく予定組もうって話じゃないんだよ。そりゃ、勝ったら翌日に打ち上げするからプレゼント交換の準備しとけよって話なら浮かれ過ぎだと思うけどね」
「あぁ、単純にするかしないかってだけなのね。なら、私は個人的に賛成。当日は多分くたくたで何も出来ないと思うし。全部これで終わりですって区切りを付けるのも重要だよね」
「ふむ、そういう事なら私も賛成だ。前回は色々と台無しになってしまったからな。今度こそちゃんと節目としたい」
七歌とゆかりの会話に美鶴も参加して打ち上げを行なう事に賛成票を入れる。
十二体のアルカナシャドウを倒した翌日に行なった慰労会はそれなりに楽しかったが、その後に立て続けに起こったトラブルのせいで余計に疲れてしまった。
影時間が消えていない上に、幾月の裏切り発覚とストレガからの襲撃が行なわれ、七歌たちは死にかけて桐条武治は凶弾に倒れてしばらく意識が戻らなかった。
そんな風に、慰労会を行なう前より疲れてしまったせいで、今回もまた同じようなパターンになるのではという思いもなくはない。
だが、ニュクスについて詳しい湊と綾時だけでなく、敵側も同じ日を約束の日としているので一月末日が最終決戦なのはほぼ間違いなかった。

「前回、わたしたちは参加していなかったので、今度はしっかりと参加したいと思います」
「せやな。ここでやるんならコロマルさんも参加出来るし。自分たちで作ったり、何か買ってきたりしてホームパーティー形式でやる感じがええかな」
「ふふっ、今度こそ全員で祝って締めたいね」
前回参加出来なかったアイギスたち二人は、背中を預けて戦った仲間たちと共に打ち上げパーティーをするなら是非参加したいと告げる。
ラビリスはテニス部や総合芸術部の方で何度かそういった催しにも参加しており、仲間とのそういった時間を過す事の楽しさと大切さを知っている。
別にこのメンバーで二度と集まらない訳ではないが、美鶴と真田と荒垣が卒業すれば会う機会は減り、さらに翌年には天田以外の全員が月光館学園を去ってしまう。
そうなるとそれぞれの進学先や就職先の兼ね合いもあって、夏や冬の長期休暇に一度食事をしに集まるくらいしか出来なくなると思われた。
勿論、それはそれぞれが自分の将来に向けてしっかりと歩み出した証拠でもある。
全員が卒業していくタイミングで中等部に上がる天田だけは、自分だけ取り残されていく疎外感を感じるかもしれないが、本人も仲間たちの新天地での活躍は応援すべき事だと認識出来ている。
何より、命を懸けて共に戦った仲間との縁などそう簡単に切れる物ではない。
偶然の再会であったり、共に大きなトラブルに巻き込まれたり、何かしらの形で再び出会えるという不思議な予感があるのだ。
それについては話していた女子たち全員が感じているため、単なる気のせいという形で終わってしまうことはないはず。
ただ、それはそれとして、これまでの影時間の戦いを労う形で一区切りつけるのは大賛成。

女子たちが内容はともかく開催日くらいは決めようかと話していたとき、綾時と天田と一緒に話をしていた順平が楽しそうな話題なら混ぜてくれと声を掛けた。
「お、なになに？　皆で〝ニュクス討伐成功、大勝利！〜特別課外活動部よ永遠なれ〜〟的なお疲れさま打ち上げの話してんの？」
「男子の会費は一人一万円でーす」
「おっと、学生の打ち上げにも婚活パーティー並みの女尊男卑の波がきてるなぁ。言っとくけどオレら君たちとお財布事情変わらないからね？　有里ならポンと百万くらい出すだろうけど、オレたちがそのノリで出せんのは三千円くらいが限界だから」
楽しい打ち上げの話になると思えば、現実の厳しさを突きつけるようにお金の話を振られて順平は何とも言えぬ表情を浮かべる。
この寮で打ち上げをするのならば会場代は掛からないが、料理やちょっとしたレクリエーションの小道具を用意するにはどうしてもお金がかかる。
そんな事は順平も勿論理解しているので、全員一律で参加費を集めると言われれば素直に払う気はあった。
しかし、会費がかかると告げた七歌の雰囲気からすると、女子たちは払わずに済ますのだろう。
最後の戦いに向けてタルタロスの探索に出ているため、最近は普通のバイトを行えていない年頃の高校生に女子たちの分まで費用負担するのは厳しい。
故に順平はこの場にいない彼がスポンサーになってくれるはずだと話題を逸らす作戦に出た。
「てか、有里に言えばまたお土産やら何やらで準備してくれると思うぞ？　会場の飾り付けとかは勿論やるけど、どうせなら有里が集めた美味いもんの方が良いだろ？」
「むー、確かに八雲君の手料理やオススメの逸品は心惹かれるものがある」
「有里君、仕事の関係で色んなお店とパイプ作ってるからねぇ。どの国の料理でも準備出来そうだよね」

順平の言葉に本気で悩む七歌に、ゆかりも一理あると頷く。
打ち上げは単にこれまでの戦いを労うことだけが目的ではない。
無論、戦いを終えてお互いの健闘を称え合うのも理由の一つだが、これまでの戦いやそれに割いていた時間に溜めた鬱憤を晴らすため、全力で楽しんでストレスを解消するという意味もある。
そこで重要になってくるのがパーティーで並ぶ料理であり、七歌たちの中で豪華で美味しいパーティー料理を準備出来る人間は非常に限られていた。
まず、パーティーに相応しい料理を作れる人間で言えば、該当するのは湊と荒垣しかいない。
ラビリスや七歌もそれなりの料理の腕を持っているものの、彼女たちのレパートリーを家庭料理に偏っている。
その点、プロから料理を学んだ湊たちは、パーティー料理の作り方も分かっているのだ。
次に、自分で作れないなら注文すれば良いということになるが、宅配ピザならともかく命懸けの戦いの戦勝記念パーティーに相応しいオードブルなどを手配出来るのは湊と美鶴しかいない。
七歌たちが話していた打ち上げはただの打ち上げではない。十年前の悲劇から今日まで犠牲になった者たち全てに捧げる勝利の宴になるのだ。
そんな宴に出てくる料理が近所のスーパーのお総菜コーナーで注文した料理では、流石にメンバーたちのテンションも下がってしまうだろう。
それこそ、この寮にシェフを呼んで目の前で作って貰っても良いくらいなのだ。
そんなレベルの料理を準備させるコネクションを持っているのは、桐条家ご令嬢の美鶴とＥＰ社の代表をやっている湊しかいない。
寮で作るのか、それとも注文して用意して貰うのか。
どちらを選んでも自分に負担が掛かることはないと思っている順平だったが、そこで楽しい打ち上げの予定決めに綾時が待ったをかけた。

「あ、言い忘れていたけど、多分勝っても打ち上げは出来ないよ。皆、影時間の記憶を忘れてしまうからね」
『……え？』
　せっかく勝った後の話をして盛り上がっていたのに、綾時がさらっとその予定は多分無理だと告げたことで今まで雑談していた他の者も一斉に綾時に視線を向けた。
　急に全員の視線が向けられて綾時も驚いた様子を見せる。
　しかし、すぐに元の笑顔を見せると、話がよく分かっていない様子の他の者たちに事情を伝えた。
「以前、僕とアイギスが戦った日に語った事を覚えているかな。宣告者であるデスを倒せば、ペルソナ使いである君たちでも影時間の記憶を失うって話なんだけど」
「それについては覚えている。だが、ニュクスを倒した時も同じようにお互いの事を忘れてしまうのか？」
　改めて以前話した事を覚えているかと綾時が聞けば、美鶴がそれは覚えていると返しつつ、補足説明を求めて質問し返した。
　綾時が以前この作戦室で皆に話したのは、デスを殺せばペルソナ使いたちでさえ影時間の記憶を失ってしまうという話だった。
　起きてしまった事はなかったことに出来ないが、影時間という〝現象〟がこの世から消えれば、存在しない〝現象〟の記憶があるのはおかしいと記憶に補整が入る。
　結果、この世界に生きる者たちの記憶から影時間の知識と思い出が全て忘れ去られるのだ。
　影時間に戦って来た七歌たちからすれば理不尽な事だが、これは〝世界の理〟なので綾時にもどうすることも出来ない。
　ただ、瞳の奥に不安そうな光を宿している美鶴に視線を向け、綾時はちゃんと説明するよと微笑んでニュクスとの戦いの後に起こるであろう事について話す。
「結論から言えば、ニュクスを倒せば君たちの記憶からも影時間に関わるものが消える。全員その事を忘れて日常に戻されるんだ」
「……それはどのタイミングで起きるの？」

「影時間が消えてすぐに効果が現れ始める。恐らく僕も例外じゃない。一日と持たずに全員影時間の事を忘れて〝ただの学生〟になるだろうね」
強張った表情で尋ねるチドリに綾時は静かに答える。
自分の記憶が勝手に弄られるのだ。誰だって不快に感じ、不安を覚えることだろう。
ただ、彼女が気にするのはそこではない。失う記憶が影時間の記憶ではなく、影時間に関わる記憶である事が問題なのだ。
チドリと同じ事を考えていたのだろう。綾時から記憶の改竄のタイミングを聞いてアイギスも質問をぶつけてくる。
「八雲さんに関する記憶はどうなるんですか？」
「残念ながら忘れてしまうと思う。勿論、彼自身の事は覚えておける。彼を見れば名前だって思い出せるだろう。けど、アイギスたちが気にしている思い出に関しては諦めて貰うしかない」
ストレガの襲撃を受けた後の美紀の様子を思い出せば綾時の言っていることも理解出来る。
確かに美紀は湊の事をクラスメイトとして認識していたし、学校で何回かは話した事があるという認識を持っていた。
それならば完全に相手のことを忘れてしまう事態は避けられるかもしれない。
ただ、アイギスたちが気にしているのはそこではない。
いくら相手の事を知識として覚えていようと、思い出を失った事で美紀は湊と疎遠になっていた。
その事が頭にある彼女たちが最も危惧しているのは、自分から、そして彼から再び家族を奪う事になってしまうのではないかという問題だ。
この世界でただ一人記憶の改竄を受けない彼と九年間一緒にいた少女は、理不尽を受け入れろと宣う少年に食ってかかった。
「そんな、そんな簡単に諦められる訳ないでしょ！　家族との記憶なのよ!?」
「……分かってるさ。でも、どうしようもない。僕たちに出来るのは

どうにかして思い出す可能性に賭ける事くらいなんだ」
声を荒げるチドリの気持ちは綾時にも分かる。何せ、二人はほぼ同時期に彼と交流を持つようになり、それから一緒に過すようになったのだから。
少女は現実世界で、少年は精神世界で、思い出を重ねてきた場所に違いはあれど積み重ねてきた時間に差はない。
けれど、いくら憤ったところで結果は同じだ。この世界で生きている以上、世界の理からは逃れられない。
泣きそうな顔で神頼みしかないと告げた綾時を見て、チドリも相手の心情を察したのかそれ以上は何も言わず俯いてしまう。
決戦まで残り二週間ほどのこのタイミングで、考えもしなかった勝利のデメリットを知り一同を暗い沈黙が包む。
湊本人にこの事を伝えれば、彼はきっと知っていたと答えるに違いない。
常人であれば、世界を救おうと、この惑星の命が存続しようと、これまで生きてきた社会とコミュニティーから自分が弾き出されるのなら意味がないと戦いを放棄する。
だが、湊は自分のような存在が、チドリやアイギスの生きる温かな世界にいるのは間違っていると考えている。
そのため、起きてしまえば誰も傷つくことなく終わる記憶の改竄を、彼だけは実に都合が良いと受け入れる気でいたのだった。
少女たちも馬鹿ではないので、湊がそんな風に考えて生きている事くらいは薄々察している。
それでも受け入れられないから打開策を探している訳で、そうして誰も何も言えないまま数分が経った時、深く溜息を吐いて真田が全員に向かって口を開いた。
「可能性がゼロじゃないならそれに賭ければいい。行なわれるのは記憶の抹消じゃない。上書きする形で正しい記憶を忘れてしまうだけだ。なら、美紀のように再び思い出すことだってきっと出来る」
腕を組んで真剣に話す真田の言葉に、それを聞いていた者たちはハッとした表情を浮かべ顔を上げた。

そう。記憶補整の力は完璧ではない。八雲の魔眼というイレギュラーな手段を使ったが、美紀が適性を取り戻さないまま影時間に関する記憶を取り戻した事をこの場にいる者たちは知っていた。
記憶を取り戻すまで期間が開いているが、美紀の様子を見ると特に問題なく思い出せていると思われる。
しっかりと成功例が存在するなら可能性に賭ける価値はあるだろう。
真田の言葉で再び動き出した仲間たちは、瞳の奥にやる気の炎を見せながらその時に向けての話し合いを始めた。
「なら、期限でも決めておくか。その日までに思い出して、当日どっかに集合すりゃ打ち上げも出来るだろ」
「あ、どうせなら分かり易いタイミングが良いですよね」
「それなら先輩たちの卒業式なんてどうよ？　そしたら、打ち上げと先輩たちの送別会をまとめて出来るだろ」
荒垣の意見に賛同するように天田と順平が意見を出す。
どうして打ち上げと送別会をまとめるのかは分からないが、戦いが終わってすぐに記憶が改竄される以上、何もしなければ打ち上げはなかった事になる。
それを避けるために敢えて順平は同じ日に設定したのだろう。
他の者たちから反対意見が出ぬまま、今度はゆかりらが中心になってどこに集まるかという話題に移る。
「この寮に集まるとかじゃ思い出してなくても偶然集まっちゃうとかありそうだよね」
「私たちが思い出してなくて、チドリたちだけ思い出してたら、すんごい気まずい事になりそうだしね」
「フム、そういう事ならもっと別な場所にするとしよう。個人的には自分たちが守った街を見渡せるような場所が良いが」
どうせなら自分たちがこの世界を守ったんだと実感出来るような場所がいい。
美鶴がそう言えば、他の者たちも該当する場所について考え、卒業式当日の状況を踏まえてここなら良さそうだとラビリスが提案した。

「それなら、やっぱ学校の屋上がええんちゃうかな？」
「そうですね。では、卒業式が終わってから屋上に集合しましょう」
「……八雲にもそうメールしとくわ。電話しても出られるか分からないし」
記憶を失う事になっても、それは一時的なものであり絶対に思い出してみせる。
この約束はその決意を青年に伝える意味もあった。
綾時が記憶の件を告げた時には全員が暗い表情をしていたが、今の彼らにそんな影は見られない。
絶対に勝って、再び仲間と集まってみせる。もしも忘れたままでも、他の仲間が思い出させてくれる。
そんな風に確認し合うと、今回決まった約束の内容をチドリがメールで湊に送り、それが済んでから今日の探索に向けたブリーフィングを始めるのだった。

第四百二十話　もしもの時の覚悟

夜――ＥＰ社

七歌たちが本日のタルタロス探索について話している頃、ＥＰ社の特別区画に存在する湊の私室にソフィア・ミカエラ・ヴォルケンシュタインの姿があった。

夕食後に湊と二人でちょっとした運動を行なったため、シャワーを浴びて髪を乾かして戻ってきたところだが、リビングに戻ってくればソファーに座って携帯電話を見つめる青年がいた。

彼は仕事用と一応のプライベート用で携帯電話を使い分けている。

それはソフィアも同じで、湊とはお互いにどちらの連絡先を知っているが、普段の彼を見ていればプライベート用の携帯電話を使っている事はほぼない。

何せプライベートで籍を置いている学校にろくに通っていないのだ。

他者に興味を持ってもいないので、相手側から一方的に知られている事を除けば交流もない。

そうなってくれば、普段の活動の場であるＥＰ社に関係する携帯の方がメインになるのはある意味自然な事だろう。

ただ、そうとは言ってもプライベート用の携帯に連絡が来ることも一応はある。

極希に学校の関係者だったりもするが、基本的にはその相手は特別課外活動部のメンバーやチドリたちだ。

彼女たちは湊の仕事用の連絡先を知らない。栗原などは仕事屋時代の連絡先を知ってはいるが、それはあくまで仕事用の連絡先の一つでしかないため、ＥＰ社関連の仕事用で使っているものとは異なっている。

まぁ、仮に仕事用の連絡先を知っていたとしても、プライベート用のもので連絡が取れている内はそちらしか使わないだろう。

なので、プライベート用の携帯電話を見つめている湊の姿を見た時、ソフィアはまたアイギスか七歌が何かしらの雑談でメールでも

送ってきたのだろうと思っていた。
いくら湊に特別な感情を寄せているソフィアでも、別に湊と彼女たちが雑談していたとしても気にしない。
決戦まで二週間を切っているといっても、その事だけを考えて常在戦場の心構えたれなどと言うつもりもない。
七歌たちは自分たちの世界を守るため、日常を取り戻し未来を掴むための戦いに挑む気でいるのだ。
であれば、決戦が近付いて来ても普段通りでいるのがある意味正しい姿だと言える。
本来多忙である湊がそれに付き合うかは別だが、彼は何だかんだ言いながら面倒見が良いので今回もダラダラとくだらない雑談に付き合うのかも知れない。
雑談を続けるなら自分も仕事のメールチェックでもしようと思いつつ、ソフィアが湊に話しかけようと近付いていけば、青年はソファーの上に携帯を放り出して立ち上がり、
「……少し風に当たってくる」
そう言って輝きの濁った瞳でソフィアを見つめ、感情の抜け落ちたような表情ですぐに部屋を出て行った。
突然の事に驚いて声を掛ける間もなく、扉が閉まってから再起動を果たしたソフィアは一体何があったのかとソファーの上に残っていた携帯を手に取る。
どう考えても先ほどの様子となった原因は放置されていったこの携帯だ。
幸いな事に画面は明るいままでロック画面にはなっておらず、面倒なパスワードを打ち込む必要もない。
今すぐにでも彼の後を追いたい気持ちを抑えながら、原因を探るためにソフィアが現在開いている画面に視線を向ける。
そこにあったのは大方の予想通り七歌から送られて来ていたメール。
普段なら彼のプライベートに踏み込まぬよう勝手にメールを見たりはしないが、緊急事態だと自分に言い訳をして内容に目を通してみ

れば、なるほどと先ほどの青年の様子に納得がいった。
メールに書かれていたのは、本日のブリーフィングで決まったという〝再会の約束〟だ。
彼女たちも湊が影時間の記憶を失わない事は知っているようで、他の人たちが思い出すまで助言は禁止だと注意書きまである。
集合場所にこれなかった者には思い出させてから罰ゲームをするらしく、文面からは戦いへの不安よりも未来への希望を強く感じることが出来た。
「……本当に、その心の強さは大したものです」
彼女たちの真っ直ぐ未来を見続ける姿勢に感心して、ソフィアは思わず口元を歪める。
やはり、光の当たる場所で生きてきた彼女たちは自分や湊とは異なる種類の人間らしい。
七歌たちも人の死を身近に感じる経験や、所謂社会の闇に触れる機会もあった事だろう。
対シャドウ兵器だった姉妹は勿論、桐条グループの研究所で人体実験の被験体になっていたチドリにいたっては、そういった闇の被害者なので普通の人間より余程詳しい。
しかし、その思考の軸となるのはあくまで表の世界の常識で、彼女たちの心は善性に傾いている。
自分たちの目的のために他者を害し、そうして作り上げてきた敵をさらに殺して、今もまだ我を押し通し続けているソフィアや湊では持ち得ない視点だ。
彼女たちの能力が常人よりも高いのは知っていたが、その強さの理由が改めて理解出来た事でソフィアも未来のためにもう一頑張りするかと部屋を出る準備をする。
メールの画面を閉じると湊の携帯をテーブルの上に置き、深く息を吐いて気持ちを切り変えてそのまま部屋を出て行く。
風に当たってくると言った青年の姿はとっくに見えないが、恐らくは他の者の立ち入りが禁止されている屋上にいるはずだ。
もっとも、居場所の見当がついていようと別に湊を追いかけるつも

りはない。
どうせ自分が行ったところで何も出来ないことが最初から分かりきっているためだ。
長い廊下を進み続け、特別区画を出てから様々な実験を行なっている研究区画へと足を踏み入れる。
あと一時間もせずに日付が変わるという時間だけに、歩き続けても誰ともすれ違いもしないが、ソフィアが向かっている場所は研究内容が特殊なだけに誰かしら控えている事は分かっている。
カードキーを通してセキュリティを解除して入室する。
中で作業をしていた者たちも扉が開いて来客に気付いたらしく、だらけた姿勢で椅子に座っていた褐色の肌をした女性が手を挙げて声を掛けてきた。
「はぁーい。こんな時間に珍しいわね。何か用事でもあったぁ？」
「まぁ、野暮用というやつです。それと湊様について二、三伝えたいことが」
「坊やについて伝えたい事？」
ソフィアに挨拶をしてきた女性シャロン・J・オブライエンは、湊について伝えたい事があると聞いて不思議そうに首を傾げた。
言ったソフィアもこれではまるで内容の予想がつかないだろうと思いつつ、傍にあった椅子を少し移動させてシャロンの傍で腰を下ろした。
「ええ、貴女も湊様の最近の様子には気付いていたと思います」
「まぁ、一応はあの子の主治医だからねぇ。何より、女の子連れ込みまくってるから、そうじゃなくても目立つっていうかさ」
「基本的にはわたくしが対応していますが、会社関連でどうしても外せない用事が入る事もありますから、彼女たちのような都合の良い存在がいた事はとても助かっています」
二人が話しているのはここ最近の湊の性生活の事だ。
基本的には両性である湊に性欲は存在しない。彼の中でスイッチを切り替えない限りは、そういった欲求が一切湧いてこないのだ。
けれど、そんな湊が望んで女性を抱こうとする時がある。

それは精神的に強いストレスを受けている時だ。
シャロンは過去にラビリスから相談を受けて知っており、ソフィアは求められるタイミングと彼の抱えている悩みの大きさなどでそれに気付いた。
元々は食欲を満たすことで間接的に解消していたが、より強く不安を解消ないし一時でも忘れられる行為を知った事で、彼は性依存症だとシャロンから診断を受けた。
そう診断したシャロン自身は、湊の抱える悩みの大きさをそれなりには理解しているし、潰れて廃人になるくらいなら同意の上での行為ではあるので性行為に励んでいる方がマシだと思っている。
ただ、ここ最近はソフィアを連れて部屋に籠もる機会が増えているだけでなく、アイドルの柴田さやかや桐条家の使用人である斎川菊乃を連れ込んでいる事もある。
前者はお互いに納得した上での密会のようだが、後者は賠償として純潔を捧げるという一夜限りの話ではなかったかと首を傾げたくなる。
けれど、それは置いておいても最近の湊を見ていると、体調は大丈夫なのかと聞きたくなるような頻度で女性を部屋に連れ込んでいた。
最も彼の相手をしているであろうソフィアがこうやって元気な姿を見せているため、化け物染みた体力を持つ青年の心配は無用だと思われる。
昔聞いた話では一夜で三人の女子を相手した事もあったようなので、湊の体力は本当に無尽蔵だと考えも良いのかもしれない。
しかし、医者として見れば湊の現状はかなり危険な状態と言わざるを得ないとシャロンが口を挿む。
「まぁ、坊やの性格を考えると抱え込むなって方が無理なんだと思うけどさぁ。正直持たないと思うのよ。見てるなら分かるでしょ？あれ、とっくの昔に限界超えてるわよねぇ？」
そう尋ねるシャロンが言っているのは湊の精神の話だ。
確かに彼は強い。純粋な身体能力だけでなく、先祖たちが鍛えてきた技術も取り込み、さらには神クラスのペルソナという異能まで持っ

ている。
あれと一対一で戦える存在など、それこそ人の理から外れた存在くらいなものだろう。
ただ、それだけの力を持っているというのに、その精神は酷く臆病で触れれば簡単に壊れそうな脆さを持っていた。
彼の事を知っている者たちから話を聞いた限りでは、彼の精神の弱さは昔からだという。
誰よりも傷つきやすく、悩みを抱え込みやすい。
だが、そうやって自分が塞ぎ込んでいれば大切な物を失うからと、彼は心が摩耗していくことを無視して歩き続けることを選んだ。
「どういう精神構造しているのか知らないけどさぁ。なんであれで動けてるのか不思議でたまらないのよねぇ」
「マグロやサメみたいなものでしょう。止まれば死んでしまうから動き続けているだけかと」
「その動き続けるための腕やら足やらが既に崩れ落ちてるようなもんでしょ」
シャロンからすれば、湊は固い地面の上で身体を引き摺りながら進んでいるようなものだ。
進むにつれて徐々に身体は削られていくため、今の湊はとっくに動けなくなっていてもおかしくない状況。
だというのに湊はそれでも止まらず、手足がないなら這っていけばとばかりに進むのを止めず、どうしてそこまで出来るのかと周りが不気味に思うところ超えて、理解出来ない化け物だと思うところまで来ていた。
ソフィアもシャロンの言っている事は理解出来ており、湊と肌を重ねて彼の精神の負担を僅かでも軽減させる役割を持っていなければ同じように感じでいたと断言出来る。
そうならないのは行為を通じて彼の怯えを強く意識出来ている事が大きいと思われた。
「……そういった表現で言うならば、湊様は手足どころかとっくに目も耳も利かないような状況になっています。それでも、止まってしま

うことの方があの方にとっては恐ろしいのです」
「まぁ、この惑星の命全部の命運を託すって言われりゃ誰だって冷静ではいられないでしょうね」
「未来が続く可能性が存在することは分かっています。ですが、未だその方法が分からないようでかなり思い詰めていられるようです」
ソフィアは湊から滅びを免れた世界の話を聞いていた。
自分たちがいるこの世界の未来なのか、それとも分岐した並行世界なのか。実際に彼女らと対面した湊にもそれは分からない。
ただ、この世界と同じようにニュクスと戦って生き残った彼女たちが存在する以上、この世界が同じ未来に辿り着く可能性はある。
その可能性を知らなければ湊も今ほど悩んではいなかっただろう。逆に知ってしまったからこそ、あるかも分からない正解に辿り着こうと悩んでいる。
ソフィアの話を聞いて改めて不器用な生き方だなとシャロンは小さく溜息を吐いた。
「はぁ……正直それって悩んで意味あるの？　だって、もしかしたら決戦の日に偶然奇跡が起きて助かったって可能性もあるんでしょ？」
「分かっているのは湊様が単身ニュクスに挑みに行って帰ってこなかったという事だけです」
「坊やの行動がトリガーって事以外何も分かっていない事は理解出来たわ」
ニュクスに勝つには湊が単独で敵の許へ行く必要がある。
しかし、そこで湊が何かをして勝つのか、それとも足止めしている間に他の者たちが何かをして勝てたのか、得られた情報からは重要なその部分がまるで分からなかった。
よくもそんな状態で悩み続けられるなとシャロンは思わず呆れたが、傍にいる少女がここを訪れた理由がまだ残っていたため、横道に逸れていた話題を戻すべく用件を尋ねた。
「んで？　坊やについて伝えたい事って？」
「先ほどの話にも関係することですが、先ほどあちらのメンバーの一人から湊様に一通のメールが届きました。その内容は影時間が消え

て記憶を失った後に再び記憶を取り戻して再会しようという〝約束〟です」
姿勢を正して話し始める相手を見て、シャロンはメール一通に何をそこまで真剣な様子を見せるんだと思いかける。
だが、その内容を聞いた途端に全て理解したと脱力して、主治医として働く必要もあると考え彼の居場所について質問した。
「なーるほど、それで坊やは？　止めを刺したと言ってもおかしくない内容だと思うんだけど」
「無表情で風に当たってくると出て行かれました。ただ、わたくしには今にも泣きそうな表情に見えましたね」
二人がここまでメールに書かれた〝約束〟について気にするのは、その内容が最も湊の精神にプレッシャーをかけるものだと思えたからだ。
七歌たちにとってはより強く未来を意識させ、約束を果たすために負けられないと心を支えてくれる魔法の呪文と言える。
けれど、湊からすれば、自分が失敗すれば約束も含めた彼女たちの未来が閉ざされる事を強く意識させる見えない鎖だ。
何より、いくら約束を結ぼうにも、彼女たちの進む未来に彼の姿はない。
「悪気はないんでしょうけどねぇ。自分がいない未来に向けた約束なんて、追い詰められてる状態で言われても困るでしょうに」
「これ以上溜め込むくらいなら、あの場でわたくしに八つ当たりでもして発散してくだされば良かったと思わずにはいられません」
「出来る訳ないじゃない。方法はともかく坊やとって貴重な精神安定剤代わりなのよ？　そんな相手に八つ当たりしたなら、そのまま罪悪感からの精神崩壊で廃人コースしかないわぁ」
ピンポイントで湊にダメージを与える内容の〝約束〟であった事は偶然だと思われる。
湊はあちらのメンバーたちには未来の情報を伝えていないので、本当にそれはただの偶然に過ぎなかったのだが、タイミングと伝える相手が悪過ぎた。

この場にいる二人は湊から情報を貰っているため、七歌たちの約束を聞いた時には〝味方を追い詰めてどうする〟とツッコミを入れたくなった。
風に当たってくると言って少しでも冷静になろうとしているのだろうが、今の青年の精神状態はそれくらいでどうにかなるようなレベルではない。
もし、湊が言っていた未来の七歌たちが並行世界の存在ならば、自分たちのいるこの世界は決戦を前に最大戦力を失い敗北が決まっている世界の可能性もある。
とっくに限界を超えているせいで、湊がどこまで持つかの予想がつかない。
ただ、そういった〝もしも〟の事態について考えておくべきだとソフィアは告げ、シャロンもその時は潔く諦めるしかないと苦笑した。
報告を終えて部屋を出て行く少女と研究室に残る女性。いま二人が願うのは青年の心に平穏が訪れる事のみだった。

第四百二十一話　独り

夜――ＥＰ社・屋上

七歌から送られて来たメールを見たとき、湊は頭を金槌で殴られたかのような衝撃を受けた。

影時間の戦いが終われば、影時間に関する記憶を全員が失う。

そこに適性の強さなどは関係なく、一切の敵性を持たずに影時間の事を知っている者は勿論のこと、七歌たちのように高い適性値を持ってペルソナ能力を覚醒させている者であっても影時間に関する記憶を別の記憶に置き換えられ忘れてしまうのだ。

本来交わることのなかった世界が再び背中合わせ、コインの裏と表のように出会うことがない状態に戻る。

それはこの世の在り方の変容、新たな理による世界の再構築にも等しい変化だ。

人間としての身体を手に入れ一つの個になった以上、元はあちら側の存在だった望月綾時も例外ではない。

この世界に生きる者たちは、自分たちのいる世界の変化という大き過ぎる変化に気付けない。

世界によって影時間が〝なかった事〟にされてしまえば、その世界の住人は自分たちの記憶が蓋をされていく事にも、その蓋の上に別の記憶を上塗りされた事にも違和感を覚えず最初からそうであったかのように受け入れる。

だからこそ、七歌たちの結んだ約束は本来あり得ない、果たし得るなど出来ない事なのだ。

誰もいない廊下を早歩きで進み、エレベーターを待つ時間も惜しいと階段を駆け上がった湊は、屋上へ続く扉の鍵を解除すると勢いよく扉を開いて屋上へと出た。

旧工業地帯だった一帯を買い上げ、計画的に建物を建てていった事で周囲に高い建物はほとんどなく、屋上からは離れた場所にあるムーンライトブリッジや月光館学園を見る事が出来た。

地上からの高さで言えば学校の屋上よりもこの場所の方が高い。

人口島という立地で海を間に挟んでいる事や角度の違いはあれど、〝自分たちの守った街〟を眺めるという事ならここからの景色もそう変わらないだろう。
転落防止用の柵のところまで進んだ湊は、夜の暗闇の中に浮かぶ明かりで照らされた街を憎々しげに見ながら柵を殴りつけた。
（ふざけるなよっ。なんで、そんな約束が平気で出来るんだっ）
七歌からのメールを見た湊は、言葉の意味は理解しながらも、そんな約束を結んだ者たちの心がまるで理解出来なかった。
ニュクス相手に勝てるかどうかも分からないどころか、下手をすればニュクスに辿り着く前に、ストレガたちとの戦いで犠牲になる者だっているかもしれない。
最上階層のシャドウの強さはモナドと大差なく、世界中にネガティブな空気が広まっている影響で無気力症も拡大しタルタロスにいるシャドウも増えている。
当日はシャドウたちの活動も活発になり、普段より凶暴性が増しているため多数のシャドウの相手も骨が折れるだろう。
状況から考えれば圧倒的に不利であり、最も倒さなければいけないニュクスに勝つ方法がそもそも分かっていない。
誰よりもニュクスについて知っている綾時ならば、当然、それを分かっているはずなのだ。
ニュクスは倒せない、ニュクスには勝てない、それが現実なのだと。
（記憶を失っても思い出す、絶対にまた会いに行く……ああ、それが出来るならやってみてくれよっ!!　お前たちの目指す未来に俺はいないんだよっ）
何を頼まれたところで、彼女たちの目指す未来に自分はいない。
その約束が彼女たちにとって何よりも動力源となるのなら、それは勝手にすればいいと湊も思う。
ただ、その約束を自分にまで押し付けられては困ると、荒れた心で再びフェンスを殴りつける。
力任せに硬い金属にぶつけられた拳は、皮膚が破れて血が出ている。

それでも構わず湊は他に感情のぶつけ先が無いことで、何度も何度も拳をぶつけ続けた。
（分かるだろ！　相手は外宇宙からきた神なんだ。人間がどう足掻いたところで普通は勝てない存在。殺すだけなら手段はある。けど、殺さずに勝つ方法なんてある訳がないっ）
湊の魔眼の一つである〝直死の魔眼〟を使えば、死を司る神を殺す事も出来るかもしれない。
それについては湊もずっと考えていた事だが、結果から言えば殺す事自体は可能だと綾時も認めていた。
いくら神だろうと存在する以上は無に還す事も出来る。
死を司る存在なので、その存在の寿命を表わす線は非常に視えづらいだろうが、デスと違って人の性質を有していない完全な神でもその存在を理解出来る湊なら殺す事が可能だった。
しかし、ニュクスは地球上の全ての命にシャドウを与えていた。
高度な知性を持つ生き物だけでなく、単細胞生物や植物にもシャドウは宿っている。
おかげで地球上の生き物たちは爆発的な進化を遂げ、ここまで発展することが出来た。
死の概念を持つことで種を残し次へと繋ぐ事を覚え、心や自我の獲得によって更なる発展を目指すようになったのだ。
だが、ニュクスが与えたシャドウは未だにニュクスと繋がっていた。
シャドウは言ってしまえばニュクスが用意した小型の端末。端末が得た情報を収集出来るようニュクスが全ての生き物にばら撒いておいたものだ。
情報収集のための端末であれば、それを捨てればニュクスに自身の情報が伝わらないだけで済む。
単純に考えればそれだけの話だったが、その端末は宿った対象を正常に動かす上で不可欠なパーツになっていた。
大本であるニュクスが殺されれば連動して端末も機能を停止する。
この惑星に生きる命を守るために神殺しを為しても、それでその命

たちが生ける屍のようになっては意味がない。
少女たちを守るために戦う力を求め続けた青年は、そんな力があったところでどうしようもない事態に怒りと焦りを感じていた。
殴りつけて拉げたフェンスを血濡れの手で掴みながら、俯いたままの湊は心の中で呟く。
(……この事態を招いたのは人間だと綾時は言った。意識的、無意識に関係なく、死を求めた。死にたいと思った者、誰かとの別れによって死後の世界に思いを寄せた者、自分のエゴで他者の死を願った者、そういった死への想いが積み重なってニュクスはその願いを叶えるために降臨する。人は人自身の願いによって滅びるのだと)
今回の滅びは人類の選んだ事。死そのものを願った者、ただ死後の世界について考えた者、死に関わる事柄全てを無差別に〝死を求める願い〟だとニュクスは受け取ったのだ。
相手は異なる宇宙からやってきた存在だ。人間と同じ感性や感覚を持っている訳じゃない。
ニュクスが受け取ったのはあくまでイメージだが、共通した原語や意思疎通の手段を持っていないため、受け取ったイメージの解釈は受け取った側に委ねられる。
それを踏まえて考えるのであれば、相手は死を求めているとニュクスが認識するに至った切っ掛けを作ったのは確かに人間だと言えるだろう。
滅びは人間が招いた事態だという綾時の言葉はその点においては正しい。
(だが、それは真実じゃないっ。元を正せばこの事態を招く切っ掛けを作ったのはニュクスだ。本来、空間の歪みで偶発的かつ局所的に交わるだけだったこちらの世界に、自身の身体の一部である黄昏の羽根を落とした事が十年前の実験が行なわれる切っ掛けだった。自分から干渉しておいて、見守るだけの神の役割を超える真似をしておいて、全ての原因を人間に押し付けるなっ)
綾時の言葉は事実であって真実ではない。
掴んだフェンスをぐしゃりと変形させながら、湊は無意識に感情の

一部を力に変換してニュクスに届くように心の中で言葉を続ける。
（……百年でいい。神であり、星でもあるお前にとって百年なんて瞬きの間のようなものだろ。死を求める声を聞くのなら、それを拒む声を聞いてくれてもいいはずだ。だからどうか、その滅びにもうしばらくの猶予をくれっ）
湊が求めるのはアイギスやチドリたちの安寧だ。
彼女や彼女たちの属する世界の住人たちが無事に生きられればそれでいい。
求められれば助力もするだろうが、彼女たちの子孫は本人たちほど優先順位は高くない。
故に、湊は願った。彼女たちが死ぬまで世界の滅びを待って欲しい。数十億年も生きてきた存在にとって人の一生程度の遅れなど誤差のはずだから。
そも記録の上では、桐条鴻悦が黄昏の羽根を偶然入手し、シャドウや影時間の存在を仮説として挙げて研究が始まり、今回の滅びに繋がった事になっている。
しかし、最も重要な部分。こちらに存在するはずがない〝黄昏の羽根〟がこの世界にあった理由については、一連の事態の原因を考察する上で無視する事は出来ない。
ニュクスがこちら側の世界に黄昏の羽根を送り込んで来なければ、桐条鴻悦はシャドウや影時間の存在に気付くことなどなかったのだ。
観測者であるはずの存在が起こしたほんの小さな予定外の行動がなければこの結果はなかった。
滅びの原因を作ったのはニュクス、それを加速させたのが人間。
これこそが真実だと相手に突きつけながら、湊は空を見上げ、何も返さず滅びに向けて準備を進めている神に語りかける。
「なぁ、お前が育てた命だろ……。死を司るお前が、こんなにも多くの命をこの惑星に芽吹かせたんだ。だから、少しくらい、猶予をくれてたっていいじゃないか……わざわざ自分の手で殺す必要なんて……」
ニュクスの介入がなければこの惑星の生命はここまで進化しなかった。

意志も自我も持たぬような、単細胞生物のようなものでしかなかった命が、数十億年という途方もない時間をかけて神の分け身であるシャドウと戦うだけの力を得るほどに成長した。
死を司り、その強大な力によって滅びを齎すはずの存在が、その性質の真逆の結果を齎したのだ。
シャドウを通じて人々の心の声を聞いているのなら、相手も悪戯にこの惑星の命を消すつもりなどないはず。
進んで殺すつもりもなく、殺すだけの動機もないくせに、一部の人間たちの心から死(じぶん)が求められていると勘違いしている。
等しい神格を持って語りかける自分の声に何の反応を返さぬ事から、湊は現状をそう理解して怒りのまま神威を放ち空間を歪めて叫んだ。
「……だったら、なんで俺たちに心なんて与えたんだっ!! 死を定義し、心を与えれば、その心が死を理解しようとするなんて分かっていただろ!! 人間が求める、考える死は、自身の終わりや定命の存在の終わりだ!! それを拡大解釈し、死と自身を同義であると定義し、自身の降臨が求められているとこじつけて勝手に出しゃばってくるなっ」
空間の歪みは湊の頭上に直径三メートルの範囲で発生する。
水の中から空を見ているような、そんな不安定な形で像が歪むと湊は瞳を銀色に変化させ、空間の歪みに向けて黒い腕をさし込み黒い炎を全力で放った。
空間の歪みの先に広がっているのは心の海や集合無意識と呼ばれる空間だ。
ニュクスの本体、魂とも呼べるものが封印されているのは、その心の海の深層となっている。
以前、湊が死後の世界でいたのは心の海の浅い階層だったが、それでも封印されたままニュクスは干渉してきた。
ならば、そちらにさえ繋いでしまえば階層に関係なくニュクスへと攻撃を送ることも出来る。
そうして湊が腕をあちら側に入れたまま黒い炎を送り続ければ、死

後の世界に生者の反応を見つけて力の一部を顕現させてきたニュクスにその炎が衝突した。
もっとも、湊の黒い炎はニュクスと近い性質を持つ破壊の力。
物理的に圧力を掛けることは出来てもダメージを与える事はほとんど出来ない。
それが分かっている湊は単なる嫌がらせでしかなかった攻撃を途中でやめ、腕を引き抜いて空間の歪みを閉じた。
腕の炎を消し、瞳を元の金色に戻した湊は力無く膝を地面に付けると、縋るようにフェンスを掴みながら俯いて呟いた。
「……答えが、分からない……誰か、俺を助けてくれ……」
今の湊はかつてない恐怖を感じていた。
以前、即死したチドリを助けられないかもしれないと思った時に味わった恐怖と絶望を超えるそれは、何があっても進む事を止めなかった青年の歩みを初めて止めようとしていた。
彼にとって死は怖くない。元々、生と死両方の概念を持って生まれるようアマテラスたちが細工していた事に加え、自身が死に瀕し、さらにニュクスと同じ性質を持つデスを身に宿した事で、彼は〝死〟という概念を完全に理解した。
だから、彼にとって自分の死は恐れる事ではない。
今の彼が感じている恐怖は、全て他者の死の訪れを予感してのもの。
ニュクスに対抗出来るのはデスを内包して相手の性質を一部得た自分しかいない。
他の者たちはニュクスの本体と対峙した時点でシャドウを失って動けなくなる。
逆に綾時はニュクスと同じ性質を持っているものの、その性質が近すぎるため対峙すれば吸収されてしまう。
よって、勝つためには湊が動くしかないのだが、湊にはその答えが全く分からなかった。
その行動の結果でこの惑星の命の未来が決まる。悲観的に言えば、湊が行動を誤れば大切な少女たちを含む全ての命を殺す事になるの

だ。
これまで殺してきた者、巻き込んで死なせた者たちの事を考えるだけでも、彼は罪悪感で押し潰されてしまいそうになっている。
その上さらにこの惑星全ての命の未来まで背負えと言われても、たった独りで背負いきれるはずがない。
大切な者たちの未来を奪う、自分の手で彼女たちを殺してしまう事になる。そんな恐怖に押し潰されそうになりながら、それでも湊はギリギリのところで踏み留まっていた。
一緒にいる自我持ちのペルソナたちも彼が悩んでいる事は知っている。
彼が何を選んでも肯定し、出来る事なら手助けもしようと思っている。
けれど、この選択だけは、何を選ぶのかだけはこの時代に生きる彼自身に選ばせるしかない。
そうして、しばらく時間が経っても俯いたままの湊は考え続けていた。
敵を倒すために力をつけてきた、彼が鍛えてきた力はあくまで邪魔な存在を殺す破壊の力だ。
その力がニュクスには効かない。敵に会うためには力がいるからとこの時のために準備していたものが、最後の最後で役に立たないと言っても諦める訳にはいかない。
誰も今の自分を救えない、誰も助けてはくれない。
けれど、それは湊が他の者たちを救わない理由にはならない。
何故なら、これまで我が儘続けてきた自分は散々救われてきた。助けられてきたのだから。
（……助ける……俺が……守る……守る？）
折れないために自分がすべき事を心の中で繰り返していたとき、湊は自分の呟いた言葉に引っかかるものを感じた。
何故だかは分からない。ただ、〝守る〟という言葉に違和感を覚え、本能の部分がその引っかかりが答えに繋がるヒントになると告げていた。

（守る……俺が、チドリやアイギスたちを守る……ニュクスに奪わせないために……俺が自分の手で……）
自分が何に引っかかっているのかを確かめるため、湊はゆっくりと自分がすべき事を確認してゆく。
具体的な内容は後でいい。何のためにそれをするのか、それをするために何が障害となるのか、それらを一つ一つ確かめるように自分の中で形にし続ける。
どうしてニュクスは奪う？
人に望まれたから。
なぜ望まれたと思った？
人の心を読み取ったから。
本当にニュクスは人の心を読み取ったのか？
シャドウはニュクスの端末、それを介せば可能。
その端末を持つ者の中に拒む者もいるが？
認識の齟齬、解釈の違いが一部認められる。
何故心を読み取って齟齬が生まれるのか？
「……それは、人と共通する言語や認識を持っていないから」
疑問の答えを口に出した湊は、自分の勘違いに気付いてハッとしたように顔を上げる。
自分は大きな勘違いをしていた。倒す事ばかりを考えていたが、戦う方法、その前提が間違っていたと気付いて、自分の中で徐々に求めていた答えが組み上がっていくのを感じる。
（そうだ。必要なのは戦う事じゃない。ニュクスは倒さなくていい。倒すべきはニュクスじゃなく、安易に死を求める人間たちの意志だ。ああ、そうだ。最初から俺の敵は人間たちだった）
それが正解であるかどうかは分からない。
それでも、湊はニュクスに勝つ手段として自分が思う答えを導き出した。
金色に輝く瞳に力が戻っていく、徐々に明るさを取り戻した彼の目には確かな力が籠もっていた。
「ニュクス、お前が観測者であるのなら見ておけ。俺という個の意志

が勝つか、人類の意志が勝つか。その戦いで全てに決着がつく」
この場にいない相手に戦う事を宣言すると、湊は傷ついた拳を握り締めて治癒する。
目標は定まった。あとはそこに向けて進むだけ。それを確かめた青年は確かな足取りで踏み出しその場を後にする。
決戦までは残り僅か。その時間を無駄にしないため湊は動き始めた。

第四百二十二話　言葉で伝える

1月22日（金）
午後――桐条本邸

一月も下旬に入り、世界の終わりまで十日を切った。

テレビや新聞では増え続ける無気力症患者と、世界の滅びを預言するカルト宗教の話題が連日報道されており、社会全体がどこか暗い雰囲気を纏っている。

そんな物に負けないと仕事や部活に打ち込む者もいるが、ある日突然仲間や知人が無気力症になって倒れると流石に意識してしまうのか、そこから不安を覚えて無気力症になるケースも増えているという。

政府も専門家を招いて対策会議を続けているものの、言ってしまえば不安から来るただの精神病でしかないものに明確な対策など取れるはずがない。

地方自治体に専用の相談窓口を用意させ、街中で無気力症患者を見つけた際に迅速な保護が出来るよう救急と警察で連携が取れるようマニュアルを作り、受け入れ先の病院に病床を出来る限り増やして対応するよう要望を出し、そしてこのような時だからこそカルト宗教などに頼ったりしないで欲しいと注意を呼びかける。

今現在、具体的に取れている対応はこれくらいだ。

大きな病院を持っているＥＰ社と桐条グループは、無気力症についての研究を行なっている事に加え、最も無気力症の発生が多い都内にある事で他の病院よりも対応を求められる件数が多い。

ＥＰ社全体の指揮を執っている湊は勿論、意識不明で入院している間に会長職に退いていた桐条武治も高寺を会社の方に専念させて、自身は病院や無気力症の研究の調整を受け持ち自宅から指示を飛ばしていた。

だが、本来は学校で授業を受けているであろう午後の早い時間に、湊と桐条は桐条本邸の応接室で会っていた。

無論、過去に湊が桐条の命を救ったことがあるにせよ、様々な因縁

のある両者が二人だけで会っている訳ではない。
今この部屋には、車椅子に座る桐条の隣には英恵が、その正面に座る湊の横にはソフィアと桜が、湊から見て右側のソファーには鵜飼と渡瀬が、左側のソファーには五代とロゼッタと栗原が座っている。
普通であれば裏の情報屋や仲介屋など屋敷には入れないが、今回の面子を集めたのは湊だ。
まだ足に麻痺が残っている桐条の事を考え、場所を桐条家の屋敷に指定した事は桐条本人も分かっている。
そのため、最低限の自己紹介をした後はそれぞれの素性などは深く探らず、斎川菊乃を初めとした影時間について知っている使用人たちが飲み物を用意して退室するまで待ち、部屋に関係者のみがいる状態になってようやく英恵が口を開いた。
「それで八雲君。今日は影時間に関わることで話があると聞いているけど、一体何かしら？」
「……正確に言えば影時間が終わった後の話についてだ。今月の終わりにニュクスと戦い。それに勝てば影時間は消える。けど、実際にはそこで終わりじゃない」
本日の訪問理由について、英恵たちは最低限の情報は持っていたが詳しい内容までは聞いていなかった。
内容が影時間に関わるものとなると、公安や桐条グループを陥れようと考える者の耳がどこにあるか分からない。
そのため、影時間という単語も実際には使わずに、分かる者にはそうと分かる形で湊は自身の訪問理由を事前に告げていたのだ。
桐条家との情報のやり取りを実際に行なったのは菊乃であり、彼女は今月に入ってから休みの度に湊に会いに行っているため、桐条が自宅療養しながら自宅で仕事をしている今の状況であれば簡単に予定を合わせる事が出来た。
湊が自分から二人に話があると伝えてきただけに、二人も重要な話だと言うことは事前に理解している。
しかし、最後の戦いがこれからという状況で、それを終えても終わりではないと聞かされれば困惑して当然だ。

被害者と加害者という立場から、出来るだけ自分は話を聞く側に徹し、直接言葉を交わすのは英恵に任せようと思っていた桐条も、ここは事情を詳しく知っている自分が聞くべきだと判断して尋ね返した。
「そこで終わりではないというのはどういった意味なのか聞かせて欲しい。無論、無気力症患者の社会復帰や、シャドウの被害などの後処理が必要になることは分かっている。しかし、君が言っているのはそういう事ではあるまい」
「ああ。後処理の一部とも言えるんだろうが、特別課外活動部が対処すべき別の事件が発生するという話だ」
七歌たちが対処すべき事件が起こると聞いた途端、桐条と英恵だけでなく臨時顧問になっている栗原も僅かに険しい表情になる。
子どもたちは影時間を消すために、最後の戦いとしてニュクスに挑む。
だというのに、ニュクスを倒してもまだ終わりではないとなると、子どもたちに戦いを任せてしまっている大人として、いつになれば彼女たちは戦いから解放されるんだと世の理不尽さに怒りを覚えずにはいられない。
ここで湊から情報を貰えているため、何も分かっていない状態よりはマシなのだろう。
それでもやはり、最後の戦いに向けて闘志を高めている彼女たちに、ニュクスに勝利しても再び戦う時が来ると伝えるのは気が引ける。
一度あったなら二度、三度と続くかもしれない。そう考えてニュクス戦の前に心が折れる可能性もあるのだ。
実際、彼女たちにとっては幾月の言葉を信じて既に一度裏切られている状態である。
アルカナシャドウを全て倒せば戦いが終わると思っていたのに、影時間は消えずシャドウを生み出した神と戦うはめになっている。
ここでまた戦いがあると伝えれば、流石に彼女たちもストライキで訴えてくるかもしれない。
桐条家の持つ戦力で対処出来るならばいいが、どうしても彼女たち

の力が必要になるとすれば、伝えるにしても十分な配慮が必要だろう。
彼女たちに実際に伝える役目を負う可能性が高い栗原は、その事件の規模や対処法など分かる事があれば教えて欲しいと尋ねた。
「湊、その事件ってのはどこでどの程度の規模で起こるんだい？　時期によっては三年生はすぐに来れない可能性もある。分かっている事があるなら教えて欲しい」
「……最初に断っておくが、その件について特別課外活動部の人間に伝える必要はない。チドリやラビリスも同様だ。事件が起きる理由はあいつら自身にある。そして、事件の解決もあいつらだけで出来るから解決するまでは何もしなくていい」
「伝えなくていいって、ペルソナを使って戦ったりもするんだろう？」
「まぁな。けど、そこに関してはしょうがない。タルタロスが消滅した事で、それを構成していたエネルギーが現実世界に留まり、何もなければ時間経過で消えていくところを、あいつらの未練がトリガーになって不完全な願望器として機能してしまうんだ。自分らで解決するしかない」
タルタロスは影時間側のものではあるが、それ自体は人がニュクスを求めた結果生まれた降臨するためのマーキングである。
つまり、建造物という形ではあるものの、人々の死を求める心が形となったエレボスなどに近い存在ということだ。
影時間の消滅によって高まった人々の願いが形を失い。何の方向性も持たない高エネルギー状態で消えるのを待っているとき、常人よりも心の力が強いペルソナ使いたちが一つの場所に集まって似た願いを持っていた。
その願いにタルタロス消滅で残った高エネルギーが反応するも、完全な形で叶えるには至らずに起こるのが〝終わらない三月〟の事件である。
特別課外活動部の者たちも巻き込まれたようなものだが、自分たちの願いが原因である以上は自分たちで解決して貰いたい。
湊がその事を伝えれば、話を聞いていた五代がまるで見てきたかの

ように話す姿に違和感を覚えて口を挿んだ。
「どうして君は影時間消滅後の事を理解しているように話すんだい？」
「実際に知っているからな。終わらない三月、三月の最終日にあいつらは異界化して時の空回りを起こした寮に閉じ込められる。だが、補給の心配をした事で扉の一つが過去に通じてそこで俺に出会うんだ」
「なるほど、君は既に未来の彼女たちに会っているのか」
説明を受けて納得した顔で頷く五代。
未来の本人たちから彼女たちの置かれた状況について説明を受けたなら、ここまで確信に満ちた様子で話すのも理解出来る。
最初から最後まで任せるというのも、彼女たちが自分たちの力でそれを解決出来ると分かっているからなのだろう。
ただ、情報源を知った事で納得出来る部分もあるが、そことは別で気になる点もいくつかある。今の湊なら素直に答えてくれると期待して五代は質問を続けた。
「しかし、それでも気になることがいくつかある。君は先ほどから彼女たちが解決するしかないと言っている。だが、彼女たちが事件に巻き込まれているなら、事情を理解している小狼君自身が合流して助けた方が速い。そこについて話さないという事は、未来の君はその事件に巻き込まれていないのかい？」
「……ああ。俺はその場にいない」
五代の質問は他の者たちも疑問に思っていた部分で、どうして事件が起きると知っているなら湊自身が解決しないのだろうかと不思議に思っていた。
勿論、彼にも色々と事情があって手を貸せない時もあるだろう。
事件のトリガーとなる未練とやらを湊は一切抱いておらず、そのせいで事件が起きた寮から弾かれている可能性だってある。
なので、事情があれば湊が合流しない事も十分あり得ると思っていたのだが、五代の問いに自分がその場にいないと返した彼の様子を見て、全てを悟った鵜飼が頭の後ろを掻きながら溜息を吐いた。
「はぁ……今日会って眼を見たときから気になってたが、そういう事

かい。坊主、今度の戦いでお前死ぬ気だな？」
鵜飼の言葉にソフィアを除く全員の視線が湊に集まる。
先ほど鵜飼が湊の眼について話していたが、他の者たちも今日の湊は普段よりもどこか存在感が強いと感じていた。
一番印象的なのがその瞳で、輝くような金色の瞳の奥に確かな決意の光とでも言えばいいのか、強い自信のようなものが見て取れたのだ。
他の者たちは他の子どもたちのように、ニュクスとの戦いに向けて気合いが入っていると思っていたのだが、決意の光の中に一種の悟りのようなものが混じっていた事で鵜飼や渡瀬は死ぬ覚悟を決めているのだと察していた。
ここでそういった指摘を受けることも想定していたのか、指摘された湊は気にした様子もなく鵜飼に視線を向けると、多少の語弊はあるが概ねそうだと肯定で返す。
「死ぬ気というと語弊があるが、まぁ、そうですね。俺はニュクスに勝つ方法をずっと考えていました。未来の彼女たちはどうやってニュクスを倒したか知らなかったけど、その未来がある以上は勝つ方法があるんだと思ってずっと考え続けていたんです」
いくらニュクスに勝った未来からきた人間だったとしても、当人たちが実際にニュクスと対峙したのでもなければ詳細など語りようがない。
けれど、その未来があるという事実は湊に希望を与え、そして同時に先の見えぬ思考の迷宮へと彼を閉じ込めた。
「ニュクスを殺せばこの世界の命は全て心が欠けて無気力症になり滅びてしまう。なのに、彼女たちは勝った。そこで、俺はありもしない倒す方法を考えて悩み続けました。でも、それが不可能だと悟った時に、ニュクスを倒す以外の方法なら勝てると気付いたんです」
先日、悩み続けた末に折れかけた青年は、そこでニュクスを倒す事は直接の勝敗に関係ないと気付いた。
確かに人類を滅ぼすのはニュクスだ。そこだけを切り取って考えればニュクスこそが倒すべき敵だと思ってもおかしくない。

しかし、湊はその認識が間違っていると気付いた事で、ニュクスを倒さずに勝つ方法を思い付いた。
気付いてしまえば、どうしてあんなに悩んでいたんだと思うくらいに簡単な事だった。
最初からニュクスは戦いの舞台に立っていない。ニュクスはあくまで時間制限で発動する舞台ギミックのようなものでしかなかったのだ。
そう。いつも青年を苦しめてくるのは異形ではなく、本来彼と同じ側の存在であるはずの人間たちだったのだ。
その事実に気付いた青年はどこか諦念の籠もった苦笑を浮かべ告げる。
「……結局、俺の敵は人類だって事に気付きました。全ての人間を殺し尽くせば願いは叶う。けど、人を救うために人を殺すなんて出来る訳がない。幾月たちは死を救いだと思っているのかもしれないけど、我が儘な俺はそれとは別の道を選ぶ」
最期の戦いで敵として立ちはだかってくる幾月たちは、死そのものか死の先に救いを見出している。
実際に幾月たちの目的を聞いた七歌たちの理解がどの程度かは不明だが、心を読まずとも湊はその事に気付いている。
死後の世界で両親たちに会った湊だからこそ、彼らの考え方もある意味では正解なのだろうと共感出来る。
しかし、湊はその道を選ばない。それしか手段がないのであれば最後は敵を殺してでも我を通すつもりだった。
「ニュクスの降臨は人に望まれたからだ。だから、俺という個の意志で、人類の意志に挑んでその願いを否定する。死を求める人間たちに生きろと命じる。それが人に願われ続けた俺が最期に果たす復讐です」
人々にそうあれと、他者を助け救済する存在として願われ続けた湊だからこそ、人々の願いを真っ向から否定し真逆のことを強いる事が最大の復讐となり得る。
けれど、そう話す青年の表情は言葉の物騒さとは裏腹に、悪戯が成

功した事を喜ぶような年相応の柔らかい笑みを浮かべている。
話を聞いていた大人たちは、そこで湊が自身の選択に一切の悔いを抱いていないと悟った。
ただ、それでも彼が犠牲になる事を全面的には肯定出来ない桐条が、どうしてもそれを選ぶ必要があるのかと確認する。
「……それは君の命を使わないと出来ない事なのだな？」
「ああ。人は増えすぎた。一度その願いを否定したところで、高まった願いによって再びニュクスが呼ばれる可能性がある。なら、対処出来るうちにその可能性を潰しておかなければならない。俺は人と神を隔てるための封印になる」
自分の命を使ってでもそれを為すのではなく、それを為すために命を使う必要がある。
湊の言葉はどこまでも自信に満ちており、彼が単なる自己犠牲で特攻をかまそうとしている訳ではないと理解出来た。
ここまで覚悟を決めているとなると他人が何を言っても彼は止めないだろう。
恐らく彼はこの事を特別課外活動部の者たちには話していない。何も伝えぬまま封印となるつもりだ。
もしも、ここにいる者の誰かがそれを伝えようとすれば、湊は魔眼を使ってそれを阻止してくるに違いない。
ただ、自分がいなくなった後の事を一切心配していない訳ではない。
そのために大人たちを集めて後の事を託すために自分の計画と未来の事を話したのだ。
「向こうの世界で両親に会ったとき、二人から俺がどうしたいか、どう生きたいか聞かれた。以前の俺はどうすべき、どうしなきゃいけないと義務感か強迫観念に突き動かされて生きていた。でも、自分が望まれて生まれた存在なんだと知った事で、そういった鎖から解き放たれて自分の意思で考える自由を得た」
覚悟を決めた青年の計画を聞いて誰も何も言えなくなっていれば、湊はとても穏やかな表情で自分が死んでいた時の事を話し始めた。

あちらの世界で両親に会ったこと、イリスと話したこと、そして自分の心がその時点で救われていた事を。
他の者たちも彼の心が何かに縛られている事は知っていた。
自分が幸せになる事を悪い事だと考えている節があり、誰かを救い続けなければならないと強迫観念に囚われ、裏の仕事をしている者にすら生き急いでいるように思えていた。
そんな青年が自然と満ち足りた表情を浮かべ、この場にいる者たちに視線を送ると感謝の言葉と共に頭を下げた。
「忠告もろくに聞かない馬鹿を見捨てないでくれてありがとう。子どもの我が儘を受け止めてくれてありがとう。家族になってくれてありがとう。貴方たちに支え続けて貰ったおかげで俺はここまで来られた。両親と別れてから十年間、楽しいことばかりじゃなかったけど、それでも俺は――――誰よりも幸せでした」
大切な者たちの未来を守るため、後悔なくこの選択を出来る事が自身の幸福の証明である。
その意志を彼の笑顔から悟った大人たちは、ある者は子どもにそんな選択を取らせるしかないやるせなさに俯き、ある者はこの別れが今度こそ本当の別れになる事を察して涙を流し彼を強く抱きしめ続けた。

第四百二十三話　少女の進路面談

1月25日（月）
放課後――月光館学園
三学期が始まり一月が経とうとしている。
この時期、月光館学園では一年生と二年生を対象に進路希望調査と進路面談を行なっていた。
高校卒業後の進路は将来を考える上で非常に重要だ。卒業後すぐに働き始めるのか、目的の有無を別にして進学するかは各々の自由。
進学するにしても、大学、短大、専門学校と分野によって選ぶ物も違ってくるだろう。
自分が何をしたいか未だに決まっていない者もいれば、とりあえず大学進学だけはしたいと具体的ではないが方向性だけは決まっている者もいる。
学校もそういった生徒側の事情をある程度は察しているので、とりあえずは進学か就職かを聞いてさらに成績などから文系コースか理系コースかを選ばせるパターンが多い。
どうせ基本的な必修科目は共通しているのだ。後は選択授業で何を選ぶかの違いでしかない。
教師たちとしては出来る限り本人の希望通りの進路に進んで貰いたいが、本人の能力と希望する進路が一致している者ばかりではないので、今回はそういった理想と現実のすり合わせも兼ねた話し合いが目的だ。
そうして、自分の順番になった事で職員室の端にある面談スペースへ呼ばれたアイギスは、厚めのファイルを持った担任の鳥海と机を挟んで向かい合って座る。
「はい。では、今から進路面談を始めます。まぁ、面談と言ってもそう堅苦しいものじゃないの。アイギスさんがどういった進路を選びたいのか。その進路へ進むにはどういった準備が必要なのか。それを三年生になる前に知ったり調べたりしましょうって話なの」
これまでの統計で見れば月光館学園の生徒は圧倒的に進学が多い。

中学時代に湊が目立った事で余計に倍率が高まってしまったが、そも、この学校は都内でも有数の進学校。
なので、元々成績が悪かった順平でも同じ学力のまま他の高校でテストを受ければ、その学校の平均並みの成績は取れたりするのだ。
そんな順平も湊に勉強を教わって基礎がある程度出来るようになったので、今では校内の定期考査で平均より少し上の成績を取っている。
他の特別課外活動部メンバーたちはさらに成績が良い事もあって、日本最高学府を目指すでもなければある程度は自由が利く状態だ。
鳥海もそれが分かっているので、相手がどんな進路を希望しても大丈夫だろうと安心して尋ねることが出来た。
「それじゃあ、最初に聞いておくけど、アイギスさんは就職と進学どちらが希望かしら？」
「わたしは進学しようと思っています。まだ具体的には決めていませんが四年制大学に行こうかと」
「そうね。具体的になりたい職業が決まっている人や、経済的な事情でもなければ、今はそういった傾向が強いから別にそれでいいと思うわ」
話を聞きながら鳥海は面談用紙に四年制大学希望と書き込む。
社会に出た者たちからは大学は人生のモラトリアムなどと呼ばれる事もあるものの、そこで過す時間を遊び呆ける事に使うか、自身のスキルアップに使うかは本人の努力次第だ。
幼少期に泥臭い方法で様々な技術を習得した青年曰く、どこで学ぶかはそれほど重要ではなく、そこで何を学ぶかが重要なのだという。
例えば翌日に料理で対決させるとして、一人は材料だけは揃ったキッチンに、一人はレシピだけは揃った図書室に連れて行って一日自由にさせる。
前者はレシピが分からない分、実際に作って味を確かめつつ試行錯誤して手際をよくする練習などをするだろう。
後者は実際に食材に触れられない分、正確な文量などを頭に叩き込んで失敗しないように努めるだろう。

どちらが美味しく出来るかは実際にやってみなければ分からないが、キッチンでも図書室でも工夫すれば料理を勉強することは出来るのだ。

大学などもそれと同じで、有名な大学は確かに設備や指導者の面で優れている事が多いだろう。

けれど、そうでない場所でも全く学べないという事はない。学びたい内容とあまりにかけ離れた場所をわざわざ選ぶでもなければ、どこを選んでもそれなりに学ぶことが出来る。

なので、鳥海も今の学生にはそういう傾向が多い分、企業側もそれを前提にした募集要項を挙げている会社が増えていると説明する。

「アイギスさんが医者や薬剤師を目指すでもなければ、学部も含めてある程度は自由が利きます。就活サイトとかに載せてる会社は四年制大学卒を応募条件にしているところもあるし、職種によっては必要な資格があって大学在学中に取得する必要もあるけど、全ての大学でそれが取得出来るとは限りません。事前にしっかり調べて進学先を考えるようにしてね」

在学中に取れる資格の中には、決まった講義の単位をいくつか取る必要があるものもある。

しかし、大学によっては全ての講義は開講しておらず、一部講義は姉妹校提携している他の大学や遠隔講義で受ける必要があるなど、しっかり調べておかないと後々面倒な事になる罠もあった。

そういった具体的な話は志望校を決める段階で詰めていく事になるので、また少しずつ調べておいて欲しいと伝えると鳥海は少し話題を変えた。

「あとは、えっと……あ、そうだ。出席についてね。アイギスさん、一時期休んでいたでしょう？　まぁ、親しい人が亡くなって落ち込んでいたって事情は分かるけど、進学や就職だと病気で入院してるとかハッキリした理由がないとあんまり考慮されないの。全体の何割出席している事って感じで条件がついてる場合もあるから注意してね」

「はい。あの時は、自分たちも辛かったはずの姉さんだけでなく、他の方たちにも心配と迷惑をお掛けしました。結果的に八雲さんは戻っ

てこられましたが、ああいった事がないよう強くいたいと思います」
「うん。まぁ、悲しむなって事ではないし。親しい人が亡くなって悲しいのは当たり前の事だから、強くいる事ばかりを気にして無理しないようにね」
あまり気にし過ぎても潰れてしまう恐れがあるので、強くなる事を心掛けるのは良いが、無理をして強くあろうとする必要はないと鳥海が釘を刺す。
湊が死んだと報された後、アイギス以外にも学校を休んだ者は大勢いた。
ほとんどはプリンス・ミナトの会員たちで、そうでない者も湊に助けられた事があって恩と淡い想いを胸に秘めていた者たちばかりだった。
教師の中にも強く動揺していた者もおり、佐久間など学校に来て授業などはしていたが、湊が死んでからは笑わなくなっていた。
あれだけ他の人間に影響を与えていた青年を傍で見ていたなら、アイギスたちの感じた喪失感は想像がつかないほどの物だったに違いない。
アイギスが彼に抱く感情が恋なのか愛なのかは分からないが、そこまで想い想われる関係は素直に羨ましいと鳥海は苦笑する。
「ふふ、けど、有里君ね。私はあんまり話した事はないけど不思議な子よね。特待生で自由登校が認められているから、ここ最近はまた学校で見なくなったけど」
「はい。色々と他にやる事があるようで忙しくしていらっしゃるそうです」
「あー、一般人を自称しながら芸能活動もしてたわね。才能って言葉で片付けちゃいけないんでしょうけど多才で羨ましい限りね」
学校が湊を自由にさせているのは、彼の行動が基本的に全て学校の評判を上げることに繋がっているからだ。
普段の人助けは勿論、部活動でのコンクール応募や受けた全国模試で一位以外取った事がないなど、学生として評価される活動だけでなく、今では芸能活動も時々行なっているようで、彼を自由にさせてい

るだけで月光館学園が勝手に有名になっていく。
出資者の娘である桐条美鶴も全国模試や部活動で優秀な成績を収めているものの、やはり彼女の場合は〝桐条グループのご令嬢〟という肩書きが邪魔をするようで、出自が〝一般人〟という枠になっている青年の活躍の方が大衆受けも良いらしい。
学校の人気が高まったせいで余計なトラブルも稀に起こるが、その対応へのお詫びも兼ねて教師たちの給料は湊の入学前より大幅に増えている。
彼が卒業した後にどうなるかは不明なものの、仮に不満があって異動するとなっても、〝あの月光館学園〟から異動して来たとなれば相応の扱いは期待出来る。
よって、教師たちにしても湊の存在はむしろありがたいくらいなのだが、学校としては彼の進路について色々と悩んでいるようで、それとなく鳥海も探りを入れてくる。
「アイギスさんは有里君の進路について何か聞いてる？　進学か、それとも就職かっていう簡単な事でも良いんだけど」
「いえ、特には聞いていません。ですが、わたしと同じ寮で暮らす方々の相談に乗れるよう、色々と資料を揃えていらっしゃった事は知ってます」
「え、どういう事？　有里君、自分も生徒なのに他の子の進路相談に乗ってあげてるの？」
「直接相談を受けている訳ではありませんが、大学や短大のデータベース化を行なって、簡単に検索出来るソフトを配っていました。順平さんなどは最初は就職向きで考えていたそうですが、綾時さんと色々と話して金銭的に問題がないなら大学進学も検討したいと」
順平はそれほど進路について真面目に考えていた訳ではなかった。ボンヤリと就職かなと思っていたくらいで、自分の将来について明確なイメージなど持ち合わせていなかったのだ。
けれど、寮で他の者たちと進路面談の話をしていた時に、桐条グループと湊がそれぞれ独自にメンバーらの進学資金を負担する事を考えていたと告げられた。

桐条グループは世界の存亡をかけた戦いという想定外の事態への詫びで、仮に就職を選ぶにしても桐条グループ傘下で条件に合う会社へコネ入社させてくれるという。
一方の湊は同じ被害者側だというのに、巻き込まれた第三者である七歌たちが本来の生活を取り戻す助けとして、進学支援金を桐条グループと一切の相談もなく用意していたらしい。
流石の順平もそこまで用意されれば真面目に考える気になったようで、綾時と相談しながら自分なりに進みたい方向性は決めたという。
順平はアイギスよりも先に進路面談を終えていたため、彼の進路希望などを既に聞いていた鳥海は、あのおちゃらけた生徒がどうして真剣に進路の話をしていたのかようやく理解したようで、とても納得がいったと頷いている。
「あー、あれはそういう事だったのね。普段の様子からは考えられないくらい真面目に考えてたから、先生もすごく意外に思ってたのよ。けど、切っ掛けはどうあれ真剣に考えて出した答えならいいと思うわ」
「そうですね。わたしはまだ具体的には考えられていないので、正直、少し出遅れているようで焦ってしまいます」
「んー、別にそれほど焦る必要はまだないけどね。勿論、進学先によってはすぐ準備を始めないといけないでしょうけど、うちは結構指定校推薦も持ってるからハードルは他より下がるし」
アイギスの学業成績は現代文や古文など、所謂国語系の教科が少し弱いくらいで、英語や歴史はむしろそこそこ点数が取れている。
理系科目も別に悪くはないので、どちらかと言えば文系かなというタイプな印象だ。
対して、姉のラビリスは湊がずっと勉強を教えていた事もあり、どの教科も優秀な成績を収めているものの、彼女自身は人格モデルになった少女の願いもあって〝教師〟という仕事に興味を持っている。
どの教科の教師になるかまでは考えておらず、とりあえずは教育大学を中心に進学先を絞っていこうという段階だ。

同じ対シャドウ兵器だった姉妹でも、人の中で生きた期間の違いからこのように差が出ており、周りの人間は本当に二人が普通の人間として生きられるようになったんだなと感慨深く思っていたりする。
ただ、姉よりも自我の形成が遅れていたアイギスは、人間だけでなく同じ元対シャドウ兵器だった姉よりも考えがまとまっていない事が焦りに繋がるようで、生徒の不安を感じ取った鳥海は優しく微笑んでこんな選び方もあるとアドバイスする。
「まぁ、何がしたいか思い浮かばなかった時は、最終的に偏差値高い学校でも選んでおけば良いと思うわ。出身校を聞いてビビっちゃうような小さな会社とかでもなきゃ高学歴が不利なることはあまりないから」
「ですが、その場合には就職面接で志望動機が弱いと感じられたりするのでは？」
「まぁ、仕事によってはどうして専門的な分野を学べる学校に行かなかったか聞かれるかもね。でも、その段階になればアイギスさんも希望職種は決まっていると思うの。希望職種が決まれば考え方や答え方のパターンも思い浮かぶでしょうから、そこまで辿り着いていない現状でそれを気にする必要はないわね」
将来の事を考えるなら、当然それぞれの道において専門的な分野の事を学べていた方が良い。
料理人になりたいなら専門学校へ行くのもありで、四年制大学への進学は逆に足を引っ張ることになる場合もある。
けれど、アイギスはそんな将来の仕事について考える前の段階。
将来に向けて準備するのはいいが、その時のことを考えすぎて何もかもが中途半端になっては意味がない。
今のアイギスは焦りで気持ちが空回りしているようなもの。
だから、とりあえずは落ち着いてと鳥海は微笑みかけた。
「別に進路相談は今回で終わりじゃないの。学校でも有里君がくれた大学情報でも良いから、とりあえず興味がある分野とそれに関わりのある学校を見つけてきて。それがある程度固まったら私や進路指導の先生がまた相談に乗るから」

「はい、分かりました」
別に今日を逃せばもう相談出来ない訳ではない。
学校側はいつだって相談に乗るし、それに答えるだけの資料も揃っている。
なので、後はアイギスのやる気と方向性のイメージがあれば大丈夫だと落ち着かせ、鳥海はアイギスの進路面談を終えて立ち上がる。
クラスには学校で目立っている生徒や、普段の様子から進路について真面目に考えていない可能性のある生徒がいたが、蓋を開けてみれば意外と充実した話が出来ていた。
その裏に一人の青年の存在があった事は予想外だった物の、教師としてしっかり生徒の相談に乗れた充足感を覚えていた鳥海は、礼をして去って行くアイギスを見送ると、お茶の準備をしてから自分の机に戻って今日の面談内容をまとめる作業を開始するのだった。

第四百二十四話　青年の進路面談

放課後――月光館学園

本日は高等部二年の進路面談日。どのクラスも担任が別々の場所で自分のクラスの生徒と面談を行なっていた。

七歌たちのクラスは鳥海が移動を面倒くさがった事で、職員室の応対スペースで行なっていた。

だが、他の担任教師たちはほとんどが自分の受け持つ教室を利用している。

もっとも、高等部の教師の中では新人に入る佐久間文子は、不慣れ故に資料が必要だと言って進路指導室を事前に確保してそこで面談を行なっていた。

進路指導室を確保した本当の理由は、単純に教室よりも狭いのに高性能なエアコン設備があるため、雪が降るほど寒くても寒さの影響を受けないからだったりする。

一部の者はそんな彼女の思考を読んで呆れたりもしているが、彼女は途中で担任を降ろされた江古田に代わってしっかりと担任としての勤めを果たしていた。

生徒たちの成績と教科ごとの得手不得手を事前に把握し、さらにアンケートで本人の進路希望を聞いて、自宅から通うパターンと遠方で下宿して通うパターンで経済負担の少なく済む進学先をいくつか事前にピックアップしてから面談を行なうようにしている。

生徒たちも大まかにどういった分野に進むかは決めていたりするが、それを学ぶためにはどの学科のどのコースを選べば良いかまでは分かっていない事が多い。

パンフレットや資料は学校もある程度揃えているものの、具体的にこの職業についてこんな事をしたいと思っている者の中には、学科の名称やら資格について勘違いしている者もいる。

オープンキャンパスや学校見学に行けばそういった疑問が解消したりもするだろうが、今日、ここで面談を受けた生徒たちはまだ数名しかそういったイベントに参加していなかった。

参加していない生徒にすれば佐久間の選んでくれた資料はとても参考になったようで、チドリやラビリスも彼女に礼を言って資料を持ち帰って面談を終えていった。
「んー……はぁ」
佐久間のクラスは学年全体で見れば最も総合成績が優れており、その分、優秀な生徒の進学先には気を遣う。
チドリやラビリスのように何やら訳ありな生徒だろうと、佐久間は本人たちの学業成績と本人の希望進路からオススメ出来るものを選んだつもりだった。
結果、本人たちにも今回の進路面談は有意義なものだと思って貰えたようで、少しは頑張った甲斐があったと佐久間も身体を伸ばして充足感を得る。
チドリは美大希望、ラビリスは教育大希望、風花は悩みながらも理系大学、美紀はぼんやりと文系大学希望、このように彼女が受け持った中で特に関係の深かったメンバーは希望がばらけている。
一応、ラビリスは教育大でも文系寄りの内容を学んでいくつもりのようなので、学部などを除けば美紀と被っている部分もあるだろう。
しかし、改めてこうやって生徒と進路について話をすると、あと一年ほどで彼女たちともお別れかと佐久間も少々寂しさを覚えた。
中等部で部活の顧問になってから色々なイベントを経て、彼女たちとの仲も深まったと思っている。
それが正しい教師と生徒の距離感かという問題を別にすれば、学生時代は常に仮面を被って人と接してきた彼女にとって、教師として働き始めて深く関わった者たちは素の自分で接して初めて得た友人なのだ。
完全に関係が切れる訳ではないと言っても、これから徐々に社会に出て行く彼女たちにすれば、中学・高校時代の教師は同窓会で数年に一度会う程度の関係に落ち着くだろう。
大人になった彼女たちとお酒を飲むというシチュエーションに憧れたりもするが、それでも相手に忘れられていくようで少し寂しい。
最後の一人との面談の前に佐久間がそうやって落ち込んでいれば、

扉の方からノックの音が聞こえて沈んでいた気持ちが浮かび上がってきた。
「はーい、どうぞー！」
気持ちが浮かび上がってきた佐久間は笑顔で元気よく入室の許可を出す。
本来は名簿順に行なうはずだった面談の順番をわざわざいじり、最後にしたのは少しでも彼としっかり話をするためだ。
突然の別れを知った時には涙を流し、彼の死に対する哀しみ以外の感情を失い。
機械のように事務的に教師としての仕事を行なっていた時期もあったが、どういう訳か彼は生き返って再びこの地に戻ってきてくれた。
あれから何度も言葉を交わしたりもしたが、こうやって二人きりで話すのは本当に久しぶりである。
最近は彼の方も何かと忙しそうにしていたので、一体何をしているのだろうかと気になったりもしたが、ここ数日で雰囲気が柔らかくなっていたため、どうやら抱えていた問題の方は解決したらしい。
扉が開いて入って来た青年、有里湊はそのまま佐久間の正面にやってくると、佐久間が声をかける前に勝手に席についた。
これが面接なら減点だぞと苦笑しつつ佐久間はやってきた湊に声をかける。
「遅くなってゴメンね。他の人の方が色々と話が立て込むと思ったから有里君を最後に回しちゃったんだ」
「……立て込むと分かっているなら、早く終わる方を優先したら良いだろうに」
「んー、それも思ったんだけどね。でも、今日がメインの面談日だから、ずれ込んだ時を考えると短く済みそうな人たちを残した方が予定組みやすかったんだ」
こんな時間まで待たされた湊は不満そうにしているが、別に怒っている訳ではないので謝罪する佐久間の表情も笑っている。
他のクラスだと面談は数日に分ける前提で組んでるようで、湊のい

う事も分かるのだが、佐久間は事前に準備をしっかりしておいた事で全員分を初日で消化できる予定だった。
なので、仮に後日になるとしても、昼休みなど短時間で終わる者の後回ししておいた方が楽なこともあり、一番難しいようで短時間で済みそうな湊が最後に回されるのはある意味当然の結果と言えた。
佐久間がそういった理由を説明すれば湊も一応の納得を見せ、早速ここへ来た用事を済ませようとばかりに足を組んで座り直す。
教師を前にして、しかも進路について話をするというのにその態度はない。
けれど、別に面接や説教のために彼を呼んだ訳ではない佐久間は、相手の態度を一切気にせずファイルからプリントを取り出すと相手に見えるように机の上に置いた。
それは事前にクラスの生徒に書かせていた進路希望のアンケートだ。
進学、就職、その他の中から一つを選び、さらに希望の進学先や就きたい職業などを書くようになっている。
その他に関しては、進学と就職で悩んでいる場合に丸をするように書いておいたので、生徒の何名かがそれを選んでも不思議ではなかった。
ただ、他の生徒たちはその他に丸をした上で、進学ならばどういった学校に、就職するとすれば経済的な理由が大きいなど、悩んでいる理由をしっかりと書いてくれていた。
だというのに、目の前にいる青年の提出したアンケートは、その他に丸をしただけで悩んでいる理由が書かれていない。
代わりに書かれていたのが〝今年で学校を辞めて旅に出る〟という言葉で、これを職員室で読んだ佐久間は思わず飲んでいたジュースを噴き出しそうになった。
いつから君はスナフキンになったのか。そう思った佐久間は少しばかりプレッシャーをかけて、目だけ笑っていない笑顔で相手に声をかける。
「で、有里君。これはどこまでが本気なのかな？」

「……全部だ。元々、夏前に学校は辞めたつもりだったんだが、桜さんがそれを止めたから少し復帰しただけだ」
「別に学校辞める必要なくない？　そりゃ、今すぐに旅に出たいんだって言うなら多少理解出来るけど、そういう訳じゃないみたいだしさぁ」
湊が本気で旅に出たいのなら、彼は〝ちょっと世界を旅してくる〟とメモを残して勝手に旅に出るタイプだ。
仮に準備があるのだとしても、数ヶ月も日本で過しているなら急いでる感じはしないので、衝動的に旅に出ようとしている線は消える。
では、彼はどんな目的を持って旅に出ようとしていると言うのか。
目的を探るように佐久間が相手を見つめていれば、湊は指を鳴らして自分の前にコーラを、佐久間の前にホットのココアが入ったペットボトルを出現させてみせた。
手品なのか知らないがモテそうな特技を持っているなと思いつつ、佐久間は貰ったココアの蓋を開けて一口飲んでから再び彼に話しかける。
「ふぅ……で、さっきも言ったけど旅が目的なら学校辞める必要はないと思うの。中等部時代に留学したように、それを学業の一環として認める形で旅をする方法もあるし。海外の大学を受験して色々と見て回る方法もある。この学校が嫌だっていうなら、それは残念だけどしょうがないから籍を他校に移して留学する方法もあるよ？」
湊の目的が旅をすることなのか、目的を達成する手段が旅なのか、ただ学校にいたくないだけなのか、佐久間は質問を続ける事でそれを判断しようとする。
佐久間も昔大勢の人間に囲まれたせいで人との関わり自体に疲れてしまった経験がある。
湊も他人との関わりに積極的なタイプではないため、自分を取り巻く環境をリセットしたくて旅に出ようとする可能性はある。
青年と出会ったことで〝一般人〟の枠に戻された佐久間と違い。湊は今もまだ一般人の枠から外れ、人に囲まれながら〝孤独〟に過している。

彼はそれを当たり前のものとして既に諦めていたはずだが、何かちょっとした切っ掛けで今の状況を煩わしく思ってもおかしくはない。
なので、彼の真意はどこにあるのか。佐久間がそれを見抜こうとしていれば、コーラに口をつけた湊が静かに答えた。
「別に何かに困ったりしている訳じゃない。自分を取り巻くこの環境も今では悪くないと思えるようになった」
「じゃあ、どうして急に旅に出るだなんて言い始めたの？」
「……必要な事だからだ。お前は、俺やチドリたちが何かしらの問題を抱えていることに気付いているだろう？」
急に問いかけられた佐久間は少し驚くも、すぐに冷静さを取り戻して相手に頷いて返す。
彼らがどういった問題を抱えているのかは知らないが、湊とチドリだけじゃなくラビリスや七歌たちも恐らく同じ問題に相対していると見ている。
学校やその経営母体である桐条グループも、七歌たちには何かしらの便宜を図っている痕跡があるため、佐久間は真実に近づけないなりに何かが存在することを確信していた。
湊にそれがバレている事には驚いたが、彼は何やら桐条グループをよく思っていないようなので、佐久間が気付いている事を報告したりはしないだろう。
ただ、ここでそれを話題に出してきたのなら、何かしらの説明はあるのだろうと思って姿勢を正して聞く体勢に入る。
すると、湊は首を横に振って別に詳しく説明する気はないと示してから、触り程度の説明だけをしてきた。
「真っ当な人生を生きたいなら知る必要はない。けどまぁ、今カルト宗教が騒いでいるだろ。あれが実は事実で、俺が旅をするのはそれ関連が理由だ。チドリたちが今後も平穏に生きていけるように、俺は少し旅先で仕事をしてくる」
「その仕事っていつ終わるの？　皆と一緒に卒業出来ないくらい時間がかかるの？」

「……まぁな」
静かに答えた湊の言葉に、佐久間は彼がどこか遠くへ行って二度と戻ってこない予感を覚える。
とても曖昧な感覚で、どうしてそう思ったのかも分からないのだが、湊は距離がどうこうという問題ではない場所へ行くのではないか。
そう思ってしまったことで、彼女は慌てて彼の腕を掴んで彼がまだここにいる実感を得ようとする。
「有里君、どこに行くの？　それって私でも行ける場所？　仕事って何か手伝える事はないの？」
「ないな。行く場所も一般人じゃ辿り着けない場所だ」
「……また、死ぬ気じゃないよね？」
湊の言う一般人じゃ辿り着けない場所。そこはもしかしてあの世ではないのか。
そんな風に思ってしまった佐久間が不安げに瞳を揺らして尋ねれば、湊は穏やかな表情で笑っていた。
「……ちゃんと考えて決めたんだ。ずっと、悩んで悩み続けて、それでも答えが分からなくて、諦めようとした時にようやく答えに辿り着いた。だから、これは義務感や自己犠牲なんかじゃない。俺がそうしたくてする我が儘だ」
「でも、有里君が死ぬ必要なんてっ」
佐久間もニュースでやっていたのでカルト宗教がどんな事を言っていたかは知っている。
曰く、ニュクスという存在が降臨し、世界はもうすぐ滅びるのだとか。
湊がここで冗談を言うとは思えないので、それらの真相がどういった形なのかは不明だが、世界に何かしらの危機が迫っているのは確かなのだろう。
ただの学生ではないと思っていたが、目の前にいる青年はそれを止める手段を持っているという。
ただし、その結果彼自身が死んでしまうのでは、世界の危機を止め

ても彼には何の得もない。
佐久間はそんな風に考えるも、彼にとっては全く違うようで、冷静さを失っている佐久間を落ち着かせるように静かに言葉を続けた。
「俺一人が生き残るか、俺だけ死ぬかの二択なんだ。幸いな事に選択権は俺にある。おかげで俺は納得して選ぶことが出来る。チドリたちだけじゃないんだ。俺はお前や櫛名田、羽入や宇津木や渡邊たちだって死なせたくない。全員が俺を人でいさせてくれた大切な者たちなんだ」
「そんなのって……」
チドリたちだけじゃなく、自分たちのためでもあると言われ、彼に何もしてやれていないと思っていたのに、彼は傍にいてくれた事がありがたかったと感謝すらしていた。
既に心を決めている彼に、これでは何を言っても意味がないと悟った佐久間は俯いてしばし黙る。
世界に何が起きているか分かれば違うのだろうが、湊が決意を固めているとなると今更慌ててももう遅いのだろう。
では、それとは別に自分が彼にしてやれることはないのか。
佐久間がしばらく黙って考え込むと、彼女は突然顔を上げて目の据わった状態で相手に話しかけた。
「ねぇ、有里君。貴方がいた証はちゃんと残したの？」
「俺がいた痕跡は出来るだけ消して旅立つ予定だ。だから、子どもは作らないぞ」
「……ケチ。じゃあ、その前段階だけしてよ。お別れの前に、思い出くらい作らせて」
「ただの疵にしかならないだろうに物好きだな」
佐久間は湊が生きていた証として、子どもを作ろうと考えたようだが、湊は出来る限り自分がいた痕跡を消してから旅立つつもりだったので、ソフィアたちからの頼みも断って避妊していた。
しかし、そこさえしっかりしていれば構わないと考えを改めたのか、佐久間の頼みを彼は断らなかった。
誘った佐久間自身断られなかった事を意外に思いつつも、そういう

事なら今日の仕事をすぐに終わらせてくると言って荷物をまとめると部屋を出て行って職員室に向かって走り去っていった。
普段から仕事を残していない彼女は、細々とした用事を済ませればほとんど定時上がりでいけるようで、少しすると戻ってきて一緒に帰ろうと彼を誘って学校を出た。
教師と生徒がそういった関係になれば大問題だが、ＥＰ社の敷地内で起きた事など外の人間に分かるはずもない。
そうして、自分の仕事場へと佐久間を連れて行った湊は、そこで食事や入浴を済ましつつ、夜から明け方にかけて長い時間を共に過した。

第四百二十五話　住人らへの報告

1月28日（木）
午前――ベルベットルーム
決戦まで残り数日。湊は影時間消滅の記憶補整で自分に関する記憶が消える事を考え、出来る限り自身がいたという痕跡を消しながら、それでもアイギスたちに何かあった時の備えをしながら過していた。
桜や英恵には自分が死んだ後の事を頼んではいるが、影時間の適性を持たないからと言って記憶補整の影響がないとは断言出来ない。
未来の七歌たちから桜たちの話は出ておらず、彼女たちの記憶が残っているかは不明なままだ。
加えて、未来からやってきた七歌たちが、本当にこの世界の延長にある未来から来たかも分からない。
順平からの呼び方が変わっていたり、修学旅行で美鶴と話すようになっていたり、未来と同じ変化はこの世界でも起こっている。
天田に殺されて死ぬ可能性のあった荒垣も生き残り、あの時の眞宵堂にやってきたメンバーは全員生存しているのだ。
唯一の違いはあの時に眞宵堂に来なかった綾時がいる事だが、実を言えば湊はアザゼルを送った際にあちら側に綾時がいる事に気付いていた。
アザゼルの視界越しに綾時の姿を見ていた事に加えて、その後、鍵が出現したという話をする時にメティスが「姉さんたち一人につき一本で合計十三本」と言っていた。
人数を数えれば簡単に分かるが、特別課外活動部とチドリたちの人数を数えると一人足りない。
メティスを含めれば合うものの、そうであれば〝姉さんたち一人につき〟と他人事のようには言わないだろう。
七歌たちの未練が原因で時の空回りが起こった訳だが、あちらはニュクスの封印が成功した世界。宣告者である綾時がいても問題はない。

一方で湊がいるこちら側は、六月の時点では宣告者であるデスは封印状態にあった。
そこに人間になったとは言え、宣告者だった綾時が現われればニュクス側にどんな変化が起こるか分からない。
下手をすれば綾時がやってきた時点で時は満ちたと判断され、七月か八月にニュクスが降臨していた可能性もあるのだ。
そういった事態を避けるべく、未来の綾時は情報収集を他の者たちに任せて自分は寮に残ったに違いない。
よって、このまま行けば死ぬ予定の湊も含めて、味方側のペルソナ使いらの人数や構成は一致するのだ。
そこから恐らくは地続きの未来と考えられるため、出来る限りの準備は進めているものの、どこまでやれば十分なのかが湊には分からない。
強い装備が欲しいのであれば、湊の死後でもアイギスに渡したリストバンド経由でマフラーの中身は取り出せる。
追加で送る戦力はないが、湊のマフラーに入っている武器の一部はセイヴァーの力で対シャドウ兵器化しており、引き金さえ引ければ誰でも敵を屠る事が可能だ。
とはいえ、自分たちの窮地でも補給経路を求めて過去に扉を繋いだ事から、アイギスが兵器を除くマフラーの中身を使う気がない事は察せるので、回復アイテムに関しては湊も別枠で用意して密かに寮内に置いておくつもりでいた。
その中にメティスをよろしくと書いた手紙を入れておけば、未来の真田と天田が言っていた手紙の件もクリア出来る。
回復アイテムや時限式で開く箱は既に用意しており、後は寮生らに気付かれずに元理事長室に設置すれば条件達成となる。
そこに関してはマフラーの中にある〝ハデスの隠れ兜〟を使えばすぐにでも可能なので、いつでも出来る事は後回しにして、湊は学校を休み久しぶりにベルベットルームを訪れていた。
扉を潜って現われた湊は椅子に座ると正面にいる長鼻の老人を見る。

いつみても不気味な姿をしているが、それはとても精巧な人形の身体をしている事も理由の一つだろう。
人形の身体に魂が宿った異形側の存在。それはある意味でアイギスらの先輩のようなものだが、相手にはまだこの部屋を出て行くつもりはないようなので、湊はそちらの問題には関わろうとせず話を始める。
「……まぁ、色々と話もあるかも知れないが、とりあえず最初に伝えておく。約束の日、ニュクスとの戦いで俺は死ぬ。これまで色々と世話になった」
「ホッホッホ、現実世界の時間にしておよそ十年。これほど長くこの部屋を利用されたお客人は貴方が初めてだ。制約も多く万全な仕事が果たせたとは言いませんが、この部屋の住人たちの仕事ぶりはどうでしたかな？」
楽しそうに笑う老人は、あの日やって来た幼い少年の成長を感慨深く思っているのか、これまでよりも僅かに親しみの籠もった声色で問いかけてきた。
途中参加したマーガレットを除けば、他の三人とは十年の付き合いになる。
家族となったチドリたちより付き合いは長く、彼女たちの助けがなければ今の湊は存在しない。
普段通りの様子でいる姉二人と親しくなった者との別れに表情を曇らせている弟を見ながら、湊は顎に手を当て少しだけ考えると、僅かに口元を歪めて返事をする。
「……そうだな。訓練だというのに何度も殺されて、たまに私怨も混じった八つ当たりで殺されて、客人のはずなのに使いっ走りのように無茶な依頼をさせられて、それらの不満点について語れと言われれば数時間は話し続けられるくらいには不満を持っている」
いくら人体改造を受けて筋力や反応速度を上げたと言えど、小学校低学年でしかなかった湊をエリザベスは本気で殴ったり蹴り飛ばしたりしてきた。
無論、全力でやればミンチを超えて肉片の混じった血の染みになっ

ていたので、内臓破裂程度で済むよう手加減はしていたのだろう。
けれど、ファルロスによる蘇生があると言えど、幼い子どもによくもそんな事が出来るなと言うレベルの事を彼女たちは何度もしてきた。
成長してからはさらにエスカレートしていき、対応を誤り直撃すれば肉体が蒸発するであろうメギドラオンを、一対三で戦っている状態で別々の方向から放ってくる事もあった。
蘇生が可能と言っても限界は存在するし、現実世界でそこまでの状態になる事などないだろうというレベルの戦いを繰り返し、湊として不満が全くなかった訳ではない。
中には相手の不満やらストレスの解消という名の八つ当たりが混じっていた事もあり、本気で客人への対応を見つめ直した方が良いのではと呆れ混じりの視線を送る。
そんな視線を向けられても姉二人は微笑を浮かべている辺り、やはりいい性格をしていると湊は小さく溜息を吐く。
小さく溜息を吐いてから顔を上げた湊は、話を聞いて同じく従者らに呆れた様子を見せていた部屋の主に偽りない自分の本音を伝えた。
「それでも、俺の願い通りに何の力も持っていなかった子どもを本気で鍛えてくれた事は嬉しかった。俺が現実世界で死なないように、必死に掴んでいた大切な物を手放さずに済むよう、お前たちが全力で依頼に取り組んでくれたおかげで俺は最後の仕事をこなすことが出来る」
他人が聞けば本気で恨んでもおかしくないエリザベスたちの所行も、湊にとっては何の力も持たぬ子どもの到底果たせそうにない願いを本気で叶えさせようとしてくれた結果だ。
故に、青年の中にある不満など親しい者への冗談交じりの愚痴でしかない。
それを聞いて安心したのかイゴールも少しだけ笑い。指を鳴らすと現われた四枚の紙をテーブルの上に置いて湊に見せてくる。
「この場所を訪れたお客人は、どなたもそれなりに困難な道を進んでおられました。貴方はその中でも長い時間をここで過された。歩ん

できた道はその分困難も多かったと思います。ですが、貴方はその旅路を歩き抜こうとしている」
ベルベットルームはいくつもの世界が交わる空間にある。
どこにでもあるし、どこにも存在しないとも言える。
そのため、湊のいる世界とは全く異なる歴史の流れを辿った客人を迎えた事もあった。
エリザベスたちは住人としては新人になるので、イゴールほどここを訪れた客人らを知らないが、多くの客人らを迎えてきたイゴールから見ても湊の人生は中々に波瀾万丈だった。
それは契約を結べた数からも分かる事で、魂の強度による結べる契約の上限を無視すれば、一つの契約で十分なはずのものを湊は四つも結んでベルベットルームとの繋がりを強化していた。
繋がりを強化することで、マーガレットもサポートに加えられるようになり、二人の姉の命令でテオドアも鍛錬に力を貸していた事から、実質姉弟三人とも湊のサポートに駆り出していた事になる。
ベルベットルーム内で相談したり、ちょっとした商売のような形で関わるのでなく、しっかりと外の世界でも力を貸した者など湊が初めてと言っていい。
だからこそ、イゴールは困難に満ちた旅路を彼がどうしてここまで歩き続けられたのかを聞きたかった。
テーブルの上に載った紙には彼の結んだ契約が書かれている。そして、内二枚が既に役目を終えて灰色になっていた。
残るはエリザベスと結んだ〝契約を果たすまで死なない〟という契約と、マーガレットと結んだ〝命のこたえを見つける〟という契約のみ。
一度は完全に死んで契約自体が凍結されていたのだが、彼が生き返った事で契約書も再び色を取り戻した。
エリザベスと結んだ契約は他の契約を全て果たした時点で達成となるため、実質、残るはマーガレットとの契約だけという事になる。
湊であれば既にそちらも達成出来る状態にありそうで、彼が〝命のこたえ〟を見つけるに至った道程を知る切っ掛けになればと思って

イゴールは彼がここまで歩き続けた理由を尋ねた。
「貴方の願いは最初から他者の幸福に偏っていた。人は誰かのために剣を取る事もある。それは私も理解しておりますが、その果てに貴方は何を得るのでしょう？　一切の見返りを求めず、ただ誰かのために在りたいと願っていた訳ではありますまい」
「……そうだな。幼い頃から俺には力があったから、力を持たない者に救いの手を差し伸べる事を当然だと思っていた部分はある。けど、この十年を過ごす中で根底にあったのは贖罪だと思う」
イゴールからこういった質問が来ることを予想外に思いながら、湊は少しだけ考える素振りを見せてすぐに答えた。
自分が何のために戦っているのか、何を求めて戦っているのか、死後の世界で両親に会ってから湊は何度もそれを考える機会があった。
ニュクスとの戦いに勝つ方法を考える中でも、それらの答えが大きなヒントになったと言える。
「俺を守るために死んだ者、俺が生きるために殺した者、他人の命を喰らって生きている俺はその分誰かを救う義務があると思っていた。けど、別に俺はアイギスやチドリを両親らの代わりだなんて思ってはいなかった。確かに二人は俺を助けてくれた。けど、それ以上に二人を助けた時点で恩返しは終わっても良かった」
命を助けられた恩を返すために、湊は二人を守ろうと戦っているつもりだった。
しかし、湊は恩を十分に返したと思えるだけの事をしても、二人を大切に思って自分の命を懸けてでも助けようとし続けた。
贖罪と恩返し。本当にそれだけで戦っていたなら、自分はもっと前に戦い止めていたと湊も気付いている。
彼の精神の在り方は確かに人として異常だが、湊は自分が常人とは異なる考え方をしている事はちゃんと分かっている。
異物を排除したがる人間社会で生きていく以上、湊は周囲をしっかりと観察して自分の中の常識と社会の常識をすり合わせて紛れ込む努力をしてきた。
その過程で自分がどれだけおかしいかも再確認しており、能力的な

可能不可能を除いて一般人ならどこまで出来るかというラインを完全に超えている事も分かっている。
　では、どうしてそこまで自分はしようと思えたのかを考え続け、湊は自分なりに納得出来るシンプルな答えに辿り着いた。
「考えても難しい答えは思い付かなかった。けど、その分納得も出来た。恩返しとかそういうのは出会った経緯や関わるようになった切っ掛けでしかない。俺がここまで歩き続けたのは彼女たちが既に俺の世界の一部だからだ。自分の世界は平穏であって欲しい。そう思うからこそ、それを怖そうとする脅威は何があっても排除しようと思えるんだ」
「ですが、貴方はその世界を守るために命を捨てようとしていらっしゃる。貴方が死ねばその世界も終わることになるのでは？」
「俺の目では見れなくなるだけで、世界を構成していた物が消える訳じゃない」
　答える湊の口調は穏やかで、以前のような切羽詰まった雰囲気が完全に抜けている。
　彼は彼なりの決意を持ってニュクスとの戦いに挑むはずだが、決戦に向けてペルソナの強化に訪れる七歌のような決意に燃える様子もなく、以前よりむしろ覇気がないように思える。
　ただ、だからといって不抜けているかと言えばそうではなく、エリザベスたちも今の湊がどういった精神状態でいるのか掴みかねていた。
　彼の様子からすると〝命のこたえ〟は既に見つけている。
　しかし、そこへ辿り着くまでの道程を知る切っ掛けを得ようと思って質問をしていたはずなのに、ここに来て彼の精神の変化が余計に分からなくなってしまった。
　イゴールの周りにいる姉弟たちも同じように思っている様子だ。
　エリザベスたちもただ自分の役割だからと客人を迎えている訳ではなく、自分が何者であるかという答えを求めてこの部屋にいる。
　そのため、客人が道半ばで倒れようと、見事その旅路を終えようと、仕事を終えた後には僅かながらでも答えに近付くヒントを得られて

満足していた。
だというのに、その旅路を終えようとしている湊は、この部屋の住人たちに混乱と更なる疑問を残そうとしている。
彼が死んでしまえば残った疑問は永劫解けることなく終わるかも知れない。
その疑問が小さなトゲのように突き刺さったまま、エリザベスたちがこの部屋に縛られてしまう事態は避けたい。
テーブルに肘をついたまま組んだ手の上に顎を置いて考え込むイゴール。
すると、これまで黙っていた従者の一人が一歩前に出て、イゴールの様子を眺めていた湊に声をかけた。
「八雲様、本日この後に時間はおありでしょうか？」
「……まぁ、特別用事は入れてないな」
「では、街の案内の依頼を受けて頂けないでしょうか。場所は港区とその周辺で八雲様と縁深き場所という事で」
湊に声をかけてきたエリザベスは、ジッと湊を見つめて依頼を受けて欲しそうにする。
以前にも彼女を外の街に連れて行って案内した事はあるが、今回は湊と縁が深い場所という条件がついている。
そんな場所などあるだろうかと考えつつ、エリザベスの依頼を受けるのもこれで最後だろうと思った湊は結局依頼を受けることにした。
「……別にいいぞ。なら、部屋に戻って私服に着替えてこい。流石にベルベットルームの制服は目立つ」
「かしこまりました。では、しばらくお待ちください」
湊が依頼を受けると返せば、エリザベスは街へ繰り出すためすぐに私室へ着替えに向かった。
その背中を見送った他の者たちも今回のエリザベスの行動を珍しいと思っているのか、このタイミングで行動を起こした意図を読もうとしながら、何か言いたそうにしつつも口を開かずにいる。
そこには、もしかするとエリザベスの行動によって、湊が辿り着いた答えや辿り着くまでの道程を知るヒントがあるかも知れないとい

う思いもある。
待っている間にそう考えたイゴールは、湊にエリザベスの相手を頼む以上の事は言わず、現実世界へ向かう湊たちを黙って見送った。

第四百二十六話　移動中の雑談

午後――港区

七歌たちが全員で無事に生きて勝つと宣言しているニュクスとの決戦において、湊が最初から自身の生存を考慮していない事に気付いていたであろうベルベットルームの住人たち。

彼らにとって重要なのは契約者が無事に契約を果たすことであり、その果てに破滅しようが元の暮らしに戻れなくなろうが、究極的にはどうでも良かったりする。

勿論、彼らも人と同じように心を持っているので、ゲストとホストではなく親しい友人となれば相手のその後の人生に幸多からん事をと祈りもするだろう。

歴代の契約者の中でも最長に近い期間関わった青年は、彼らにとってそう思えるだけの相手になったのか。

部屋の主であるイゴールは直接それを口にしたりはしないだろう。

だが、最後の依頼として現実世界の案内を頼んだエリザベスは、普段着ている制服とは真逆の赤いダッフルコートに身を包み、チラチラと雪の降るオフィス街で湊の隣を歩きながら彼とのこれまでの思い出を振り返っていた。

「あんなにも小さくひ弱だった少年が、神に挑み得るまでの強さを手に入れた事を思うと、何やら感慨深いものがあります」

「別に直接殴り合う訳じゃない。俺の自我を消した完全体の阿眞根になれば知らないが、そうでないなら挑んだところで勝負にならないだろう」

お昼時を少し過ぎた時間であるためか、湊とエリザベス以外にこのオフィス街を歩いている者はほとんどいない。

もっとも、世間では今も無気力症の拡大が進んでおり、無気力症になることを恐れてか外出を控える人間が増えた。

例年であれば多少雪がちらついていようと、ここまで人がいないという事はなかったに違いない。

遅めの昼食に繰り出すサラリーマンであったり、朝から出ていた

パートタイマーの終業時間に被っていたり、本来ならもっと人がいたはずなのだ。
この光景も影時間を終わらせれば元通りになるのだろうかと、元通りになった光景を見ることが敵わない青年がぼんやりと考えながらエリザベスに言葉を返せば、身長差の関係でやや下から見上げる形になっていたエリザベスが無言で湊を見つめていた。
雪のように白い肌に、薄暗い空の下でも輝いて見える銀髪、そして精巧な人形かと思ってしまうほど現実離れして造形の整っている顔。
そんな相手が黙って見つめてくれれば、一般人なら見惚れるよりも先に不気味に思って引いてしまうに違いない。
けれど、湊は良くも悪くも作ったように顔の整った美人という存在に慣れており、どうして相手が黙って見てきているのかという方に関心を持った。
エリザベスは湊を見つめながらもちゃんと並んで歩いてくれている。
そのため、怒って不機嫌になっているという可能性は低そうだが、元から何を考えているのか分かりづらい相手であるため、ここで唐突にお腹が空いたと言ってきてもおかしくはない。
「……急に黙ってどうした？」
「いえ、勝負ならないという認識でおられる事を少々意外に思ったものですから」
「相手は地球上の生物全てに自身の力を分け与えた神だぞ。人が拳を突き出す程度の事でも、相手の規格で同じ事をすれば地球上で国一つが消し飛ぶことだってあり得る。俺は相性の関係でニュクスを殺し得るだけで正面から戦って勝てるとは思っていない」
エリザベスが自分をどんな人間だと思っているのか、今更になって湊は色々と気になってくる。
彼女が出した依頼は湊と縁の深い場所への案内という事で、湊は適当に仕事場や学校などへ連れて行こうと思っていた。
ただし、何故だかその移動は徒歩か公共の交通機関（タクシーを除く）という縛りが付けられているので、湊としては面倒に思いつつも

こうしてＥＰ社の方から月光館学園を目指して歩いているのだ。
今の湊にとって活動拠点はＥＰ社で、自分にとって一番縁のある場所も自然とそこになる。
しかし、エリザベスの感覚でいくとＥＰ社は縁の深い場所から外れるらしく、学校ならば問題ないという事なので学校に行って適当に時間を潰して依頼完了にならないかなと僅かに期待していたりする。
そも、車でも二十分か三十分かかるような距離でも、二人が本気で走れば五分と掛からず着くに違いない。
それをしないのはエリザベスが移動中の会話も案内に含まれると告げてきたからだ。
湊にすれば今歩いている場所には何の思い入れもなく、単にＥＰ社と学校を直線で結んだ距離に一番近くなるルートとして選んだだけだ。
そんな場所を歩いているだけで何が案内になるのかは分からず、元から饒舌に話をするタイプでもないため会話も多くはない。
こんな事で本当に依頼条件を満たせているのかと疑問に思った青年は、学校へと向かう足は止めずに相手へ率直に尋ねた。
「……エリザベス、ただ歩いて学校に向かっているだけだが、これで外の世界を案内している事になるのか？」
「そうですね。ツアーガイドとしての能力を評価するならば落第点でしょう。周辺で営業する商店の情報やこの地域に関する蘊蓄など、事前に知識を仕入れていれば話す話題には事欠かないはずです。ですが、八雲様は会話に関して基本的に受け身。依頼をサボタージュされるおつもりですか？」
「そもそも、依頼を受けると思っていなかったし、おかげで知識なんぞ仕入れていないからな。サボるつもりはないが案内人としての高い能力を求められても困る」
湊は一緒に歩いているだけで案内らしい事はしていない。
現実世界に不慣れなエリザベスでも、海の方へと進んで行けば月光館学園が見えてくるので、湊の案内がなくとも月光館学園に向かうことは出来る。

となると、湊はちゃんと依頼をこなしているとは言えないのだが、ツアーガイドとしては落第点と評したエリザベスはとくに不満そうにはしていない。
むしろ、この何でもないただの移動時間に交わす何気ない会話が楽しいのだと微笑を浮かべてきた。
「私はこの世界の人間ではありません。知識としてはそれなりに知っていますが、圧倒的に経験というものが不足しています。そんな私にとっては八雲様が〝何でもない〟と感じるような時間も、新鮮な発見と驚きに満ちた素晴らしい体験なのです」
湊にすれば何もしていないと思えるような時間でも、エリザベスにとっては知らない土地でのちょっとした旅行のようなもの。
確かに、湊が全力でもてなしてスカイダイビングやらスキーやらに連れて行ってくれるのも楽しそうだが、エリザベスからすれば何気ない日常の方がこの世界に関する新しい発見が多い。
だからこそ、今の自分にとってはこの何でもない時間が貴重な体験なのだと彼女は笑った。
「本来の状態を考えれば、今のこの状態は〝日常〟には含まれないのでしょう。ですが、これもまた世界の見せる一面だと思えば、影時間が終わった後の世界と見比べる楽しみがあります。出来ればその時の案内も八雲様に依頼したいのですが」
「……影時間が消える頃には契約は全て終わってるはずだ。契約を果たし終えた後もベルベットルームには立ち寄れるのか？」
「契約は私共のサポートを受けるために必要なだけですので、辿り着けるのであれば立ち寄るのは問題ありません。勿論、その時には契約を通じた関係ではないため、個人的なやり取りという事になります」
そう話すエリザベスはどこか妖艶な空気を纏って薄く口元を歪めつつ、瞳だけは一切笑わず湊をジッと見つめてくる。
彼女は時々意味ありげな表情を湊に向けてくるが、それが〝そういう意図〟を持ったアピールなのか、それとも単に青年をからかっているだけなのか分かりづらい部分がある。
これまでの付き合いと普段の態度から考えれば、恐らくは嫌われて

いないだろうと思えるものの、それが契約者に接する仕事用の態度である可能性も否定出来ない。
湊としてはそれなりに親しみを持っており、契約を果たし終えてもプライベートでの付き合いを続けていきたいと思う程度には慕ってもいる。
相手も同じように考えているのなら、それは素直に嬉しいのだが、彼らにとって都合のいいそんな未来は訪れない。
一切目の笑っていない微笑を向けてくるエリザベスの方を向いた湊は、抱いた淡い妄想を頭の中から消して淡々と告げる。
「……最後の戦いで俺は死ぬ。悪いが案内してやる事は出来ない」
「ですが、再び戻ってくる可能性がない訳ではないと仰っていたはずです」
「ああ、可能性だけはある。しかし、それはゼロじゃないだけだ。現実的な確率を考えればゼロと変わらない」
玲たちのいた時の狭間で出会った未来のメティスの話を信じるのなら、あちらの世界では記憶を失って大幅に能力に制限がかかった状態の湊がいるらしい。
単なる記憶障害で一時的に記憶を失っているのか、別の力によって記憶そのものが消去されているのか。
後者であればその人物は湊本人ではなく、結城理のような湊の姿をした別人という可能性もある。
使っているペルソナがタナトスで、メティス曰くワイルドの能力は使えないのではなく使わないだけらしいが、負担の少ないタナトスすらも基本的には使わないほどの弱体化が起こった原因が気になる。
ここにいる湊も一時的にペルソナ能力を失っていた事はあるが、それは自分の中にいる蛇神の力も利用するようになった事で、力の引き出し方が変化したためだった。
力の持つ正負の性質よって引き出せる時期に制限が付いても、湊が余計に力を消費すれば時期から外れた性質のペルソナも呼び出せはした。
その余計に力を消費するというのも、あくまで力の消費が増える程

度のものであり、湊が衰弱するなど身体に大きな負担が来るような事はない。
だというのに、ペルソナを使うだけでそんな事が起きるというのであれば、恐らくそれはペルソナ及びワイルドの能力そのものが身体に馴染んでいないという事だと思われた。
湊の持つ力は他のペルソナ使いらと異なり、本来はニュクスの力だった部分をベアトリーチェに置き換えている。
他の者たちの力に不具合が起きていないのに、未来の湊だけ能力に不具合が起きているというのは、そういった部分の違いが影響している可能性もあった。
「……やはり現実的じゃないな。考えるだけ無駄だろう」
エリザベスの言葉で自分が再びこの世界に戻ってくる場合の想像をしてみたが、そんな事が起きる可能性はほぼゼロで、オマケに今持っている情報からでは分からない事も多い。
そんな事を真面目に考えるくらいなら、学校に着く前にどこかで昼ご飯を食べるか考えた方が建設的に思える。
隣を歩いている女性は、考えるだけ無駄という湊の言葉に少しムスッとしてしまったが、こことあちらでは影時間の有無以上に環境が異なり、いくら考えても答えの分からない事もあるだろう。
話を逸らすようで少し気が引けるものの、無駄な話を続けている内に店などが何もないエリアに行ってしまっては、健啖家である彼女を満足させるような昼食はとれなくなる、
そうして、いくつかの思惑を乗せて湊は隣にいる女性に声をかけた。
「さて、もう少しすると飲食店なども減ってくる。昼を食べてから学校に行くなら、そろそろどの店に入るか気にした方がいい」
「そういう事でしたら、どこかオススメのお店はありますか？」
案内を依頼したエリザベスはその理由についてまだ話そうとせず、青年の振ってきた話題に素直に返事をしてオススメの店などについて尋ねる。
学校に着いてしまえば依頼した理由を話さない訳にはいかず、さら

に命のこたえに辿り着いているであろう湊の内面についても踏み込んで尋ねる必要が出てくる。
それが分かっているからこそ、エリザベスはもう少しだけ猶予を求めて湊に案内されるまま目的の飲食店に向かって移動するのだった。

第四百二十七話　命のこたえ

放課後――月光館学園

少し遅めの昼食を食べてからやって来てみれば、既に午後の授業は終わり放課後の時間帯になっていた。

普段であれば雪のちらつく真冬の放課後であっても、校舎の周りやグラウンドで走っている運動部の声が聞こえてくるのだが、最近はそういった日常だった風景も見なくなった。

ウイルス感染するタイプの病気ではないのだが、無気力症の流行もあって一部の部活はメンバーが足りず、現在休部状態になっているところもあるのだ。

湊の知り合いたちが所属している男子バスケ部や女子テニス部も、普段通りの練習が出来ない状態だが、練習メニューを少人数でも出来るものに絞ることで一応の活動を続けられているという。

影時間が消えて無気力症が治ってもすぐには元通りにならないが、それでも二月中には以前の生活に戻れるだろう。

明後日には、学校だけでなくこの世界全体に広がってしまった無気力症の元を断てる。

その後の経過を見ることが出来ない部分に若干の不安を覚えるも、時の空回りによって起こる終わらない三月事件までは何の問題もなく過す事が可能な未来が存在することを湊は知っている。

この世界がその世界線なのかどうかは分からないものの、その可能性があるのならそれほど心配しなくても済む。

何せ影時間を消せば現実世界でのシャドウの行動は制限されるのだ。

偶発的な事態を含めれば完全に無くすことは出来ないけれど、ニュクスの再封印によってニュクスの影響も弱まりシャドウたちの弱体化は起こる。

後の事はこの世界に残る者たちに何とか解決してもらえばいい。

そんな事を考えながらエリザベスと並んで歩きながら月光館学園高等部の敷地に入った湊は、興味深そうに校舎を見上げているエリザ

ベスに声をかけた。
「……どうした？　そんなに興味を惹くものでもあったか？」
「そうですね。タルタロスの昼の姿である月光館学園をこうして眺めるのは初めての事でしたので、そういった意味では非常に新鮮な感動を覚えています。ですが、今最も強く抱いた想いを挙げるとすれば、羨望と嫉妬でしょうか」
　現実世界の情報を何かしらの手段で手に入れているエリザベスは、現代日本の高校についてもある程度の情報を持っている。
　湊もその事は理解しているが、相手がどういったものに関心を寄せるか把握しきれていない部分もあった。
　故に、直接何を見ていたのか尋ねてみたところ、これまでの彼女の印象からは想像出来ない言葉が返ってきた。
「それは何に対する感情なんだ？」
　エリザベスらベルベットルームの住人にすれば、客人ではない人間というのは本来接する機会もない相手だ。
　そういった人間を目にする機会もほとんどなく、ただ歩いている姿だけでもある意味で新鮮に映ってもおかしくない。
　だが、エリザベスはそんな本来出会うことのない人間を羨ましいと思ったと言う。
　人間のようであって、やはり精神構造からしてどこか異なる彼女が、どうしてそんな風に感じたのか。
　本気で分からなかった湊が聞き返せば、エリザベスはその瞳を湊に向け直して苦笑気味に答える。
「どちらもこの学園に通う生徒に向けたものです。一応説明しておきますと、私たちにも昔の八雲様のような幼少期というものは存在します。ですが、そこは特殊な環境であり部屋の住人を除けば契約を果たしたお客人しか訪れぬ場所。よって、同年代の者らと切磋琢磨する事もなければ、学び舎に通うという事もありませんでした」
　歩きながら話す彼女の表情には、幼い頃を思い出し懐かしむ微笑が浮かんでいる。
　そこから察するに彼女が抱いた羨望と嫉妬とやらも、別に暗い感情

によるものではないのだろう。
彼女が一般人に危害を加えるとは思っていないが、それでも外の案内を頼まれていながら気分を害していたなら案内としては失敗と言える。
今回はなんとかそれを回避出来たようで湊が内心安堵していれば、どうして一般人でしかない学生を羨ましく思ったのかを教えてくれる。
「姉弟妹と過す日々も皆様が学園で過される日々に劣らぬ素敵な思い出です。ですが、八雲様が様々な出会いを経験したこの場所で、自分も共に過す未来を想像してみた時、私は素直にそんな時間を過してみたかったと思ってしまったのです」
以前の彼女ならば外の世界に興味を持っても、自分の居場所はベルベットルームだという認識を強く持っていたため、外の世界で生きている自分を想像することなどなかった。
現実世界にとってはエリザベスもシャドウらと変わらぬ異なる理の中で生きる世界の異物。
そんな存在が何の力も持たぬ者が大勢生きるこの世界で生きていけるとは思えない。
何がそこまで彼女に変化をもたらし、またそこまでの執着を持たせるようになったのか。
ストレートに尋ねたい衝動に駆られながらも、湊は生徒玄関から校舎に入ってマフラーからスリッパを取り出してエリザベスに渡しつつ、先ほどの話で引っかかった部分について触れる。
「……妹なんていたのか。出会って十年目にして出てきた新情報だな」
「ええ。未だお客人をお迎えする立場にない未熟な妹ですが、歳が離れている分過保護になっている部分は自覚しております」
「なるほど、間に挟まれたテオドアが苦労していそうな事は理解した」
「ラヴェンツァは大人しい子ですので、住人として共に仕事をしている姉上や私ほどテオに構うことはありませんよ。まぁ、子どもらしいヤンチャな部分はありますが」

今まで三人姉弟だと思っていたが、ベルベットルームに顔を出していない妹がまだ存在したらしく、湊は十年目にして知った新情報に驚きを隠せない。

話したエリザベス本人も少しだけ悪戯が成功した事を喜んでいるようなので、どうやら話す機会がなかった事もあるが、途中からある程度は意識して伝えないようにしていた部分もあるらしい。

何でも分かっているようなすれた眼を青年の相手をしていれば、どうにかして一本取ってやろうと悪戯心が湧く気持ちも分かる。

実際、エリザベスのお茶目な企みは成功した訳で、少々得意気な表情になったエリザベスは受け取ったスリッパを履きながら話を続ける。

「八雲様が会うことはほぼないでしょうが、ベルベットルームの住人は主と私共姉弟以外にも多数おります。絵描きや歌手や占い師など役割もいる理由も異なっておりますが、本質的には皆同じ願いを持っています。〝自分が何者であるか〟の答えを探しているのです」

「……閉じ籠もっていて見つかるなら苦労しないだろ。外との繋がりが限定的な上に、部屋にやってくるのは問題を抱えた人間ばかりだ」

別に湊もベルベットルームの在り方に文句をつけるつもりはないが、あの部屋に閉じ籠もったまま自分が何者かを探すのは酷く遠回りな道のりに思えた。

本当に自分が何者か知りたいのであれば、進んで外に出て異なる価値観を持つ人間と接した方がマシだろう。

ベルベットルームの客人はそれぞれ問題を抱えており、本人たちは契約を結んでも自分の抱える問題への対処に忙しい。

そんな状態の客人を通して外界に触れる住人たちに大きな変化が訪れるとは思えない。

その点、エリザベスは何度か湊に依頼を出して外の世界に触れているため、姉弟妹も含め彼女が一番速くに〝自分が何者であるか〟の答えを得て部屋を出て行くのではと思えた。

湊の言葉を聞いた彼女自身も、自分たちの現状が抱いている疑問の答えを得るに相応しい環境だとは思っていないのだろう。

少しだけ自嘲的に口元を歪めると、それから表情を戻して微笑を浮かべたまま湊を見上げてくる。
「では、この施設の案内をお願いします」
「……別に案内するほどの場所でもないがな」
湊にとっては慣れ親しんだ場所なので、相手がどんな場所に興味を持つかなど分からない。
とりあえず、目の前にある購買部にでも行くかと視線で方向を指示して並んで歩き出す。
まだ学校に残っていた生徒やこれから帰ろうとしていた生徒たちが、私服の湊と並んで歩く謎の美女に目を大きく見開いて驚いているが、二人は周りのそんな視線を無視して購買部のカウンター前まで進む。
「ここは購買部と言って、まぁ、軽食とか文房具を売ってる場所だ。一応、ここでしか買えないパンもある」
「なるほど。では、店主。オススメのパンを一つください」
真っ赤なダッフルコートに身を包んだ白人の美女に声をかけられ、購買部の店員である女性は少し戸惑っていた様子だったが、隣にいるのが湊だと気付けば何かを納得した顔でパンの在庫を出してくる。
店員が出してきたのはコロッケパンで、それを見た湊はよく総菜パンが放課後まで残っていたなと思いながら代金を払って受け取るエリザベスを見つめる。
「これは……なるほど、クロケットをパンで挟んだサンドウィッチの一種のようですね。常温でありながらも芳醇なソースの香りが何とも食欲をそそります。では、失礼して早速頂きたく思います」
「……正直、クロケットと日本のコロッケは別料理だがな」
エリザベスが口に出したクロケットとはコロッケの原型になったフランスの食べ物だ。
そのまま日本のコロッケのようなものもあれば、もっとシンプルなものもあって、今では世界中に類似品や派生品がある。
外国ではコース料理でもなければそれ単体で食べるファーストフードの扱いなので、日本のように主食の炭水化物のおかずとして食

べるパターンは珍しい。
しかし、コロッケサンドを口にしたエリザベスには、炭水化物に炭水化物を合せた日本式の食べ方がヒットしたようで美味しそうにがっついている。
ただ、こういった味の濃いパンを食べると高確率で喉が渇く。湊はそれを先読みしてペットボトルのホットの紅茶を買ってエリザベスにした。
「ん……どうもありがとうございます。商品名コロッケサンド、初めて食べましたが非常に美味でした。食べやすく、ボリュームがあり、濃いめの味付けもあって以前食べたハンバーガーに並ぶ優秀なファーストフードだと見受けます」
「まぁ、バーガータイプのコロッケサンドもあるからな。広義では類似品って事で良いだろう」
「やはり、そうでしたか。学生の一部は放課後に運動で汗水を流すと聞き及んでいます。コロッケサンドはそんな学生たちの栄養補給源として不動の人気を誇っているのではないでしょうか」
「人気は人気だが大概は昼休みに売り切れる。放課後に売っていたのは運が良かったな」
購買部を冷やかすと移動するぞと教室棟の一階を抜けて中庭へと出て行く。
少しは暖房の効いていた校舎から出ると、雪のちらつく外気に触れて二人の吐く息が白く染まる。
それを気にせず進む湊は中庭に植えられた樹木について説明をしながら歩き続ける。
「ここらに植えられているのは卒業生たちが記念に植えたものだ。一部は教師なんかも植えているらしいが、七歌がコミュニティを築いた老夫婦の死んだ息子が卒業生たちと記念に植えた柿の木なんかもある」
「卒業生、つまりこの学び舎から巣立っていった方たちの事ですね。顔も名前も知らぬ先達との繋がり、過去と現在を繋ぐ貴重な場所なのでしょう」

「……ま、学園にしてみれば歴史を感じられる場所の一つかもな」
卒業生たちの植えた木の生えた中庭にそんな感想など抱いたことはなかった。
けれど、自分も旅立つ身になったことで、意図せずとも過去と現在が繋がってしまう事もあるのかもしれないと湊は不思議な気持ちになった。
湊はこの庭には何も残さないし、出来る限り自分がこの世界にいた痕跡も消そうとしている。
その行動にどこまで意味があるかは分からないが、もし時の空回りが起こらない別の未来に辿り着くのであれば、その時は自分が残した物も気付かれぬまま破棄されるよう記憶を失わない者に頼んでおくことにした。
＊＊＊
学園の敷地内と校舎の中を案内し終えた湊は、誰もいない屋上にエリザベスと二人で立っていた。
少し雪が降っているため遠くまで見渡す事は出来ないものの、自分の過してきた街を見渡す事は出来る。
この景色ももう見納めかと思えば、何気ない日常の風景も特別な物に思えてくる。
すると、湊の隣に立って同じ景色を眺めていたエリザベスが街を見つめながら話しかけてきた。
「八雲様は本当に良いのですか？　ご自身が守った世界のその後を、彼女たちの未来を見守ることが出来なくなっても」
「……また、その話か。重要なのは結果だ。俺と彼女たちの道が交わるのはここまでだった。それだけの話だろ」
「私には分かりません。こうして、再び貴方と街を巡り、貴方と縁の深い場所を案内して貰った事で、やはり貴方は絆を育んだこの世界にいるべきだと感じました」
エリザベスが突然街の案内を依頼したのは、湊がどのように考えているのか、どういった経緯で自身の死を受け入れることが出来たのかを探るためだった。

そこに一切の私情がなかったとは言わない。しかし、面倒臭そうにしながらも、街を案内する湊の雰囲気は穏やかで言葉の端々に親しみと愛おしく思う気持ちが感じられた。
そこまでこの世界を、自分が過してきた場所や出会った人々を思っているなら、どうしてそれを簡単に手放せるのかエリザベスには分からない。
他の姉弟たちもそれは同じで、湊の行動は矛盾を孕んでいて不可解に映る。
彼の真意はどこにあるのか、何を思って心とは真逆の選択をしようとしているのか。
そこを知る事こそが彼が辿り着いたであろう命の答えを知る事にも繋がる。
エリザベスがこれまで見せていなかった真剣な表情で湊を見つめれば、相手がどうしてこの場でこんな話を振ってきたのかを理解し、再び視線を街へと向けながら静かに答えた。
「エリザベスの目からでもそう見えたなら、俺は自分の選択が間違えていないと自信が持てる」
「……それは何故ですか？　死を覚悟した時、貴方はそれでも力を残して彼女たちを守ろうとしていたはずです。なら、残して行くことに未練があるのでは？」
「ああ。だから、俺はこの答えを選ぶことが出来る」
彼が何を言っているのかまるで分からない。
相手は自分の考えが正しいと、残して行くことに未練があるとはっきりエリザベスに告げた。
であるならば、彼のように自分の死を受け入れ、後の世界に大切な者たちを残すような選択を取れるとは思えない。
そんなエリザベスの困惑を感じ取った湊は、かつて見せることのなかった穏やかな表情で彼女を見つめて話す。
「そもそも逆なんだ。君の言う通りに未練はある。出来る事ならずっと一緒にいたい。彼女たちを守り続けられたらと思う。でも、だからこそ俺は、例え自分が死ぬことになろうと彼女たちと彼女たちの暮ら

すこの世界を守るための手段があるなら、それを迷いなく選ぶことが出来るんだ」
湊は彼女が自分の行動を理解出来ない理由を察していた。
エリザベスにも執着するものはあるのだろう。けれど、彼女にとっての世界はまだまだ狭い。
犠牲を払ってでも、例え自分がどうなろうとも、それを守りたいという想いを彼女はまだ知らないのだろう。
もし、エリザベスがベルベットルームを出る時がくるのなら、それはきっと彼女が今の湊が手にした想いを僅かでも理解した時に違いない。
アイギスたちも人の心を手に入れ、湊と同じような気持ちを理解出来るようになった。
なら、エリザベスもいつかはそれを理解出来るようになるはず。
そんな彼女に湊が今教えてやれるのはこれだけ、自分が辿り着いた命の答えだけだ。
「〝未練はある。だから、後悔はない〟。それが俺が辿り着いた命の答えだ」
湊が辿り着いた命の答えを聞いたエリザベスは、目を見開くようにして驚愕する。
たったそれだけ、本当にそれが辿り着いた命の答えなのかと彼女は疑って納得出来ていない節がある。
しかし、それが真実であると証明するように、エリザベスのコートの内側からカードが飛び出し、カードはすぐにペルソナ全書に姿を変えて契約の書かれたページを開いて宙に浮いた。
そこに書かれた契約は四つ、内アイギスと結んだ第一の契約、チドリと結んだ第三の契約は既に果たし終えて文字が灰色になっている。
そして、今二人の目の前でマーガレットと結んだ第四の契約〝命のこたえに辿り着く〟という文字が灰色になり、そして、エリザベスと結んだ第二の契約〝全ての契約を果たすまで死なない〟という契約の文字も灰色になって消えた。
契約を果たし終えてもベルベットルームへ出入り出来なくなる訳

ではない。
ただ、全ての契約が灰色になったページを見つめたエリザベスは、湊との繋がりがこれで終わりだと言われているような気になり、瞳を揺らすと本を消して湊に強く抱きついた。

第四百二十八話　寮でのひととき

1月29日（金）
夜――巌戸台分寮
今日もあと数時間で終わる。最後の戦いまで実質残り一日となった。
明日はそれぞれしたい事があるだろうと、影時間の探索も含めて休みになっている。
故に、決戦前に全員が揃って活動するなら今日が最後。
仕上げとして探索に出るのか、作戦を詰めるのか、全員のコンディションを見て決めようと集まれば、湊を除くメンバー全員が七時前には寮に集合していた。
本当なら湊にもミーティングに参加して貰い。彼の経験を基にしたチーム編成のアドバイスを貰いたい。
けれど、彼は彼で無関係の人間たちを出来るだけ巻き込まずに済むよう、無気力症になった者たちの保護や馬鹿な行動を取ろうとするニュクス教の信者らの制圧に動いている。
他の者たちが人間を放り投げたら通報されそうなものだが、湊はこれまでの功績による信頼のおかげで警察からもある程度の自由が許されている。
簡単に言えば、湊が相手を放り投げたのであれば、そうしなければならない理由があったに違いないと勝手に納得してくれるのだ。
もっとも、平等に接するべき警察が何も言わないのは、湊の被害者となった犯人がこんなやつに関わりたくないと訴えたりしない事も理由だったりする。
八十キロ以上ある成人男性を片手で掴んで持ち上げ、そのまま腕力で数メートル投げ飛ばすなどフィクションの世界が現実を侵食しているとしか思えない。
実際にそんな真似をした男を見た狩られる側の者は、刑務所にぶち込まれても良いから化け物から逃がしてくれと懇願するに違いない。
そういった感じで湊が今日も面倒を起こす質の悪い一般市民を

狩っている頃、寮に集まった者たちはバラバラに食事を取ったり、グローブの手入れをしたり、ファッション誌を見たりしながら雑談混じりにミーティングらしきものをしていた。
「んー、調整自体は出来てるし、今更怪我をしてもあれなんだよね。誰か何かアイテムが欲しいとかこいつ倒しておきたいって敵がいたりする人いる？」
「オレっちは特にないぜー。強いて言うなら今みたいにノンビリしてたいかなぁ」
「まぁ、そうですね。最近は結構詰めてたんで、僕も皆で話してゆっくりする感じで良いと思います」
　他の女子たちと一緒にソファー側の席で雑誌を見ていた七歌が声をかければ、キッチン前のテーブル席側でカップ麺を食べていた順平とココアを飲んでいた天田が自分の意見を言う。
　もしここで何か大怪我をするような事があれば、湊に連絡して回復スキルを使った智用を施して貰う事になるだろう。
　ただ、回復スキルは便利な魔法ではあるものの、いくらツクヨミの回復スキルが強力だと言っても、怪我で失った血液を完全に元通りするような効果はない。
　七歌本人もせっかく今まで頑張ってきたのにここで怪我するのも馬鹿らしいと思っていたため、順平と天田がノンビリと仲間との時間を過したいと言えば、それも良いかなと肯定的な立場で聞きつつ他の意見はないかとゆかりや美鶴に視線を向けていく。
「私も別にこのまま雑談で良いと思うよ。下手に動き回ってストレガと遭遇ってなっても嫌だし」
「そうだな。ストレガとの決着はつけるつもりだが、我々の最終目標はニュクスだ。今日や明日にストレガたちと戦って拘束出来ても、負傷してニュクスと戦えないという事態は避けたい。当日ならストレガたちもある程度はニュクスの降臨に意識を割いてしまうはず。そこを突いてこちらは足止め斑とニュクス討伐斑に分かれて挑むとしよう」
　本来ならば全員でニュクスに挑みたいところだが、ストレガたちが

いる以上何の妨害もなく辿り着くことは出来ないだろう。
七歌たちも事前に現タルタロスの頂上には到達しており、そこまでのルートと出てくるシャドウの研究は出来ている。
綾時からの情報によれば当日はさらに階層が増えるとの事で、ストレガたちが待ち構えているとすれば、恐らくはその追加された階層になると思われる。
敵側に予備戦力はなく、あっても幾月が研究で作っていたキメラシャドウくらい。
キメラシャドウも戦力としては非常に強力だが、今の七歌たちであれば倒せない程ではない。
敵側の最大戦力だと思われる理と玖美奈も、単独では湊に勝てないと分かっているはずなので、湊自身もあの二人をタルタロスから引き剥がすと言っていた以上、七歌たちが戦う可能性はかなり低いのだろう。
よって、七歌たちが相手をするのはストレガに幾月を加えた計六人と、準備していれば出てくるであろうキメラシャドウのみとなる。
新造フロアがどれほどの広さかは不明で、それによってはスミレのテュポーンを相手するのに苦戦しそうなものだが、何も分かっていない状態で不意打ちを喰らうよりはマシだ。
狭いフロアをテュポーンで塞いでくるならば、そこは全員のスキルを放つゴリ押しでいけばいい。
それ以外ならそれぞれが決着を望む相手に当たるよう配慮しつつも、ニュクスへの挑戦を優先してチームを分けていく。
その事は全員に話してあるので、この場にいる者たちは改めて自分が誰々を押さえるなどと言ったりはせず、雑談がてら決戦への意気込みなどを語る。
「長かった戦いもこれで終わりと思うと、僅かながら惜しさがあるな」
「なんだ、アキ。まだ昔みてぇに強さを求めてんのか？」
「そりゃ、強いに超したことはない。だが、そうだな。昔と今じゃ求めている強さの質は違うように思う」
順平らと一緒にキッチン前のテーブル席にいた真田と荒垣が言葉

を交わせば、他の者たちも二人に視線を向けて会話に耳を傾ける。
真田が強さを求めるようになったのは、九年前に起きた孤児院の火事で妹である美紀を失いかけた事が原因だ。
危険だからと周りの大人たちに止められ、自分を掴む大人たちの手を振り払うことも出来ず、燃え朽ちていく建物を泣きながら見ている事しか出来なかった。
結果的に妹は助かったが、あの時に味わった無力感と悔しさは少年の中に傷として残り、妹の恩人に誓った通り強さを求め鍛え続けた。
いくら恩人だと言っても顔も曖昧で名前だって知らない相手だ。そんな者に対して小学生が自分で勝手に誓った事を守り続けるのは難しい。
だが、真田はその誓いを破らぬよう己を鍛え続けて、中学生の時点で学生ボクシングのチャンピオンになった。
「美鶴に誘われた時点で全国大会で優勝するだけの力はあった。けど、俺が求めている強さはそうじゃなかった。妹を助けてくれた相手はもっと超常的な、己の力で何もかもを捻伏せるような不思議な存在感があったんだ」
「実際、あんの時の有里は魔眼の力を使ってたんだろ。腕を数回振って炎が消し飛んでたからな」
「だろうな。でも、力があるだけで出来る事じゃない。俺は強さを求めた結果、簡単に手に入る身体的な強さに固執してしまった。けど、本当に手に入れるべきは精神的な強さだったんだ。それが分かったおかげで俺は本当の強さを求められるようになれたと思ってる」
大切な者を守るために身体的な強さは当然必要だ。ただ、そればかりを求めても真田が本当に欲しかった強さは手に入らなかった。
ペルソナという心の力を手にした事で、如何に精神的な強さが重要なものだったか今なら分かる。
それはペルソナ自体の強さに影響するだけでなく、仮に身体的な強さで劣っていようと状況を覆すための切り札になり得るものだ。
ニュクスとの戦いで勝つ可能性は絶望的だと綾時と湊から言われている。

それでも、全員が諦めずにこうやって戦おうとしているのは、真田が求めた精神的な強さを皆がこれまでの戦いと経験を通じて得ているからだろう。
真田はまだまだ自身の強さに満足していないが、それでも自分が手に入れるべき強さの種類を今後間違えるつもりはない。
楽しいことばかりではなかったが、大切な事を教えてくれた影時間にある意味感謝している真田は、自分がこんな風に感傷的になる一面を持っていた事に苦笑しつつ話題を変える。
「さて、俺の事ばかり話してもあれだからな。少し話題を変えよう。ニュクスを倒して影時間が消えれば一時的に記憶を失うようだが、お前たちは卒業する俺たちにどんな卒業祝いをくれるつもりなんだ？」
少しだけしんみりしてしまった雰囲気を変えるように、真田はどこか不敵な笑みを浮かべて後輩たちを見る。
影時間に関する記憶を失っている間、影時間に絆を育んできた三年生たちとの距離も変わる可能性が高い。
となると、記憶を失っている間は単に同じ寮で過していた先輩後輩という薄い関係性での別れしか考えないと思われる。
思い出せば当然派手に送りだそうとするだろうが、記憶を取り戻す時期によっては、送別会の準備期間が足りないという事態も起こり得る。
送り出される三年生は基本的に卒業式の日の約束だけを考えておけばいいため、お前たちは大変だなと真田が後輩たちを煽れば、数瞬だけ気まずそうな顔をした二年生たちはアイコンタクトを交わし、七歌と順平が中心になって正規ルートのプランＡからプランＢに変更する作戦に出た。
「卒業ですからね。やっぱ、最後に先輩たちの格好良い姿を見てお別れって感じが良いよね」
「だな。まぁ、人数が多い上に有里っていう馬鹿みたいに食うやつもいるけど、食べ放題の店なら大丈夫だろ」
「そうだね。送る側なのにご馳走になるのは少し心苦しいけど、人間社会では先達が下の者たちに粋な姿を見せるのが通例らしいからね。

僕も楽しみだよ」
七歌が流れを作れば、すぐに順平と綾時が既にプランは決まっているとばかりに話を進め、送別会では三年生が後輩たちにご馳走する食事会をする予定だとカウンターを決める。
今まで楽しそうに話をしていた三年生たちは、三人の会話に初めて聞いたぞと目を大きく開いて驚いた顔になる。
幼馴染みが煽ったせいで流れ弾を喰らう事になった荒垣は、三人で割り勘しても結構な額になるぞと内心で冷や汗を掻きながら後輩たちを問い詰めた。
「ちょっと待て。どうして、俺らがお前らに奢る話になってんだ」
「え、卒業していく先輩から後輩たちへの餞別ですよね？」
「ですよねじゃねぇ。そんな話欠片も聞いてねえぞ。つか、明らかに先輩と後輩で人数違い過ぎるだろ。そういうのは卒業生各々で後輩一人分を負担する程度の規模でやるもんだ」
三年生が三人なのに対し、後輩たちは三倍以上いる。
選ぶ食べ放題の種類にもよるが、高校生なら料金は一人二千円から五千円の間になるだろう。
新生活に向けて出費が多くなる時期に、最低一万円弱、下手をすると二万円かかるなど冗談ではない。
最初に煽った真田も焦った顔をしており、後輩たちが冗談で言っているのか本気で言っているのか判断に困っているらしい。
もっとも、経済的に余裕のある美鶴は最初は困惑していたものの、七歌たちの言葉を聞いて確かに先輩から後輩への最後の贈り物という事なら頑張る必要があるなと密かにやる気を見せていた。
美鶴の変化に周りにいた女子たちは気付いているが、誤解は後でも解けるのでここは煽ってきた男たちをさらに焦らせる事を優先しようと話を続ける。
「アイギスとラビリスはどんなもの食べたい？」
「んー、ウチは強いているならサッパリしてる方がええかな。別に焼き肉とかでも気にせんけど」
「わたしはイタリアンでしょうか。美味しいピッツァがあると嬉しい

です」
元対シャドウ兵器の姉妹は同じＥＰ社の技術を使って人間になったが、遺伝子ベースとなる人間が異なっているため、味の好みなども当然のように異なっている。
ただ、繊細な味覚を理解出来る舌を持っているので、自分の希望と違ったものになっても美味しければ問題ないと考えていた。
湊が世話をしたアイドルなどはストレスが原因なのか、異常に辛いものを平然と食べたりと軽度の味覚障害を起こしていたが、そうでないなら店を選ぶ側のハードルもある程度下がる。
バラバラのジャンルを挙げた姉妹の話を隣で聞いていたチドリは、それなら最初から何でもある店にした方が楽だろうと提案する。
「……なら、何でもあるホテルのビュッフェとかが良いかしらね」
「あ、ホテルではないけど有里君の会社傘下のレストランで評判良いところあるよ。店の中に店があるっていうかフードコートに近いシステムなんだけどさ。素材をテーブルに持って帰って焼き肉したりお鍋したりする以外に、シェフとか板前さんにステーキとかお寿司を目の前で作って貰えるの」
「そこ聞いたことあります。有名ホテルで働いてたパティシエの方が作ったデザートも食べ放題だとか」
ゆかりや風花は年頃の女子らしくファッション誌や情報雑誌を読むことがある。
そこで特集されていた店の中で、特に評価が高かった事で記憶に残っていたレストランがあったのだが、調べて見るとＥＰ社傘下のお店だった。
知り合いが代表を務める企業の傘下であれば、その内、優待券を貰って行ってみたいなと考えていただけに、行く機会が出来たなら丁度良いとゆかりと風花が目を輝かせる。
どちらかと言えば常識人で皆を止める側だと思っていた風花まで敵に回り、自分たちと同じ立場である美鶴が真面目に店の名前をメモし始めた事で、真田と荒垣が本気でこれはヤバいと冷や汗をかき始める。

すると、今までラビリスたちの足下で伏せて寝ていたコロマルが起き上がって一鳴きした。
「ワン！」
「ん、そうやね。皆、コロマルさんが長鳴神社までお散歩行きたい言うてるけど、皆も一緒に神社までお散歩くる？」
急に起きたコロマルが実家である神社まで仲間と散歩に行きたいと言ったのは偶然ではない。
真田と荒垣の汗の匂いから二人が困っていることを察し、助け船を出しつつ決戦前に仲間たちと神社に行きたいという自身の望みもあってラビリスに頼んだのだ。
そんなコロマルの男気に溢れた行動に欠片も気付いていない真田たちは、しょうがないなと苦笑する演技をしつつコロマルの提案に飛びつく。
「ふむ、いつもコロマルも頑張ってくれているからな。それくらいの願いは仲間として叶えてやろう」
「全員で神社に行くなんて夏祭りと初詣くらいだからな。散歩ついでに必勝祈願にお参りもしとくか」
「あ、じゃあ僕上着取ってきます。流石にこれだと寒いと思うんで」
真田と荒垣が動き始めれば、天田も少しわくわくした表情で上着を取りに部屋に向かった。
他の者たちもなら全員で行こうと使っていた食器や雑誌を片付けるために動き、真冬の夜に相応しい温かい服装に着替えるためそれぞれ部屋に向かう。
元から温かい上着を持って来ていたチドリとラビリスはコロマルと一緒に集まるのを待ち。全員の準備が整えばしっかりと扉を施錠してから長鳴神社を目指して歩き出した。

第四百二十九話　仲間たちとの散歩

夜――巌戸台分寮

七歌たちが全員揃ってコロマルの散歩で寮を空けた頃、四階の作戦室に機械仕掛けの小箱を手に持った湊が立っていた。

寮の扉は全て施錠されており、建物自体を守るための警備システムもあるので、機械操作の力を使ったところで何かしらの力が使われた形跡は残ってしまう。

けれど、今の湊は姿だけでなく自身の放つ音や匂いまで消す〝ハデスの隠れ兜〟を装備しており、さらにこの場所へはセイヴァーの転移を使ってきたので、侵入したことを桐条グループに感知されていなかった。

作戦室の中を見渡した湊は小箱を持ったまま周りを見渡し、特に気になるものもなかったことで部屋の奥へと進み始める。

彼の持っている携帯電話にはアイギスから、コロマルの散歩で寮を空ける。用事があれば長鳴神社に行くのでそちらで合流してください、という連絡が来ていたが今はそれを無視する。

湊なら他の者たちが寝静まっている間や学校に行っている間に寮に来ることも出来たが、時の空回り事件への備えを終えたのが昨日の事なので、直近のタイミングでチャンスが出来たならそこで訪れるのは何もおかしくはない。

後々の事を考えて痕跡を残さぬよう腕に熱を持たぬ実体の黒い炎を纏い。扉のハンドルを掴んで下ろしながら、元々は理事長の書斎という扱いだった部屋へと入ってゆく。

幾月が死を偽装して離脱した後、この部屋は臨時顧問になった栗原や七歌に美鶴に風花など、チームのブレインを担う者たちがシャドウの情報や過去の研究データを参照するための資料室として使われている。

未来の真田たちの言葉を信じるのであれば、彼らの世界ではこの部屋に湊が遺した回復アイテムと手紙が入った箱が置かれていたという。

一応、言われた通りに設定した時間に開くようにしておいたものの、影時間が消えて失った七歌たちの記憶が戻らず、彼らが日常に戻った事で時の空回り事件が起きなければ、この行動は単にハイテクな機能を備えたゴミ箱を寮に放置していくことになる。

何もなければそのまま回収しておくよう栗原に伝え、彼女も記憶を失ったままになる可能性を考慮し、影時間の適性を持っていないＥＰ社の社員数名にも同様の指示を出した。

地震などが来ても動かぬよう最低限の配慮をした設置作業を済ましし、顔を上げると資料室の壁に飾られたクリスマスの集合写真に目を向ける。

（……他の奴らは飾っていないようだな）

瞬間的に個人の私室に探知をかけて、同じような写真が置かれていないか探る。

アルバムに収納しているのであれば、普段から見るものでもないからとある程度はスルー出来るものの、机や壁に自分が映っている写真があれば、湊はそれを回収ないし破棄する予定でいた。

幸いな事にそういった物を置いている者はいなかったので、湊は壁に飾られた写真をマフラーに入れて回収しておく。

認識にフィルターが掛かってくれれば、写真を見たところで湊が映っていても意識する事はないだろう。

けれど、そういった永続的な効果があるものではなく、一度切っ掛けを得れば完全に記憶を取り戻してしまうとなれば、今回収した写真のような記憶を取り戻す切っ掛けになり得る物は残しておく訳にはいかない。

七歌たちは影時間に関わることで得たものを経験や思い出として取り込み、辛いこともあったが最後にはハッピーエンドと言えるものになったと納得する事だろう。

しかし、湊は一般人として生きる上で、そういった思い出自体が不要だと考えていた。

影時間などなかった。ポートアイランド・インパクトはあくまで実験に失敗によって起こった事故に過ぎない。

ラビリスとアイギスは桐条グループ系の施設出身の姉妹で、チドリは同じく桐条グループ系の別施設から鵜飼桜たちに引き取られた子どもでしかない。
真田兄妹や荒垣と同じで、偶然にも施設出身者が集まっただけなのだと、そう思ってくれれば湊にとっては最善の結果だった。
写真を回収した湊は他に自分に関するものが無いかを軽く調べ、何もないことが分かるとセイヴァーを呼び出して転移する。
寮からは少し離れ、街灯があるというのに人気もなく薄暗い路地には、街中の案内をしていた時と同じコートに身を包みながらも、中に別の服を着ているエリザベスが静かに佇んでいた。
転移で発生する蛍火色の光でほんの一瞬だけ暗い路地が照らされれば、湊が戻ってきた事に気付いたエリザベスが柔らかな笑みで彼を迎える。
「用事は無事済ますことが出来ましたか？」
「……あぁ、これで三月に事件が起きても回復手段に困ることはほぼないだろう」
「少々、過保護のようにも思えますが」
「記憶が連続しているなら良いけどな。そうでないならブランクもあるし、戦力面の強化は出来なくても治療面の援助ぐらいはしてもいいだろう」
自分が死んだ後も困らないようにと、他の者たちに迷惑を掛けないために終活をする人間はいる。
そこにある程度の思いやりを持って、少しでも生活の足しになればと財産なりを残し援助しようとする者もいる。
だが、湊がしている事、彼女たちのために遺そうとしている物はあまりに過剰だ。
終わらない三月、時の空回り事件は湊の死を切っ掛けとして起きるが、それはあくまで切っ掛けでしかなく、原因は全て湊の死後も現代を生き続ける者たちにある。
彼女たちが事件に巻き込まれると知った以上、何もせずにいるという訳にもいかないのだろうが、いくら二ヶ月ほどのブランクが出来る

にしても彼女たちも命懸けで戦って来た経験を持つ。
　そんな相手に貴重な回復アイテムを大量に残すのは、エリザベスから見れば過保護以外のなにものでもなかった。
「恐らく、その試練は彼女たち自身が八雲様との決別を受け入れる事で為されるのでしょう。旧き時代に神と袂を分ち、人の世が始まったように、彼女たちも神の残滓たる貴方との別れを受け入れる必要がある。そこに貴方の遺した物があれば決意を鈍らせるのでは？」
「……かもしれないな。けど、逆にそれしか遺ってないことで、もういないんだと実感を持ってくれる可能性もある。大量に用意したが使えば減る。残る数を数えていれば終わりも意識するだろうさ」
　箱いっぱいに用意しておいたが、その箱だって天田や風花でも両手を使えば抱えられるようなサイズでしかない。
　宝玉輪時代は掌に乗るサイズではあるが、かさばることもあって百個も用意出来ていない。
　渡そうと思えばそれくらいは持っているものの、怪我をしてもどう治せるからと捨て身戦法を取られても困る。
　なので、大量にはあるものの計画的に使う必要がある量を、湊はしっかりと見極めて箱のサイズを決めて置いてきたのであった。
　湊の死を受け入れることが未来での事件解決の手段だと思っていたエリザベスは、そんな遠回しに自覚させる方法もあるのかと感心したように頷いている。
　まぁ、湊のそれも思った通りの効果を発揮するかは不明なのだが、無制限に手助けする事が目的ではないと分かって貰えたなら十分だ。
　いつまでも寒い冬空の下にいる必要はないので、そろそろエリザベスを送って行こうとポロニアンモールに向かって歩き出す。
　本来ならば湊の持っている鍵でどこにでも扉を開くことが可能なのだが、依頼人であるエリザベスが帰りは設置されている扉のみ使用を許可すると告げてきたので、わざわざ歩いて商業施設を目指す必要があった。
　昨日は学校を案内した後、エリザベスが湊の部屋を見たいと言い出し、到着後にお手引きを頂きたいと頼まれた事で無断外泊をさせるは

めになった。
日を跨いでからも何やかんやと現実世界の案内の続きを頼まれ、エリザベスはほぼ丸二日もベルベットルームを空けていた事になる。
彼女の姉であるマーガレット辺りが色々と五月蝿く言ってきそうだと、少しばかり憂鬱な気持ちになりながら、湊はベルベットルームへ向かうべくエリザベスを連れて夜の街を歩いた。
――長鳴神社
コロマルの散歩として全員でのんびり歩きながら神社を訪れたメンバーたちは、誰もいない境内を軽く散策し、貸し切り状態の公園部分で各々好きな遊具を使って童心に帰っていた。
順平は綾時と一緒にブランコでどちらが遠くへ飛べるかと、遊具の管理会社が聞けば危ないから止めろと言いたくなる遊びを天田の前で披露する。
「ほーら、こうやって全力で立ち漕ぎしてー！　とうっ!!」
子どもの頃にやっていた立ち漕ぎよりも、体重と筋力が増した今の方が何倍も勢いがつく。
それが楽しくて初期位置から八〇度くらいの角度まで漕いで勢いをつけた順平は、タイミングを計って全力で飛び立って行く。
幅跳びのようなポーズで空中に飛び出した順平は、本人が思っていたよりも遙かに遠くへと飛んでいき、そして、そのまま五メートル以上離れた場所にあった砂場へと勢いよく着地した。
ドゴンッ、と重い音を響かせながら砂を巻き上げ両足で着地した順平。他の者たちも大きな音がしたことでそちらに視線を向ければ、着地した中腰のまま止まっていた順平が両手を挙げて身体を起こす。
僅かに足が震えているように見えなくもないが、完璧な着地を決めた順平に天田が素直に賞賛の拍手を送る。
「すごいです！　ブランコでここまで飛んだ人なんて初めて見ました！」
「へへっ、これぞ大人の力ってやつよ！　あ、でも、マジで危ないからな。天田の筋力だと砂場まで届かないから止めた方がいいぞ」
天田の事を心配して真似するのはやめておけと告げた順平だが、先

ほどの大ジャンプが思っていた以上の距離と勢いを見せた事で、砂場があってそこに着地出来て良かったと心の底から安堵している。
もし、そこに砂場がなければ着地に失敗して地面を転がっていた確信がある。
だからこそ、砂場まで届かないなら勢いは抑えておいた方が良いと天田にアドバイスしていた。
天田本人も順平ほど遠くへ飛べるとは思っていないようで、順平が飛んだ事で空いたブランコに乗り、自分ならどこまでなら安全かを見極めながら勢いをつけていく。
そんな男子たちのやり取りをジャングルジムの上に座りながら見ていた七歌は、真冬の乾燥した空気にもかかわらず星が見えない東京の空に僅かな寂しさを覚えつつ近くにいたアイギスに声をかけた。
「アイギス、八雲君に連絡ついた？」
「お仕事中との事です」
「そっか。決戦前に皆でゆっくり出来る時間だったから、出来れば一緒に過したかったんだけど。そういう事ならしょうがないね」
湊の言った仕事というのはエリザベスの依頼を指しているのだが、他の者たちはそれに気付くことなくここへ向かう途中に買ったホットの飲み物を飲みながらのんびり過す。
七歌が買ったのはハチミツとしょうが入りのホットレモン。身体の芯から温かくなるような、優しい甘さが寒さで強張った身体を解してくれる。
「ふぅー……寒い中で温かい飲み物飲むのってなんか贅沢だよね」
「あ、分かる。コタツで食べるアイス的な感じでしょ？」
「私、寒がりだから貼るカイロも貼ってそうしちゃう事あります。なんか普通に食べるより濃厚な気がするんですよね」
七歌と同じように温かい飲み物を飲むゆかりと風花が、よく分かると頷きながら笑う。
シチュエーション補整や身体が求めているから美味しく感じるという説が有力だが、彼女のたちにとって細かい事はどうでもよく、そういった体験は普段以上に食べ物を美味しく感じる幸せな時間だと

共感し合う。
　同じように空を眺めていた美鶴は、コタツに入った経験がほとんどない事で共感しづらいようだが、百円ちょっとのペットボトルの紅茶を美味しく感じたことで、仲間と同じ体験を共有出来ている事を知って笑みを溢す。
「私はあまりコロマルの散歩に付き合ってやれなかったが、夜の散歩は親しい友人たちと過す非日常のようで不思議な楽しさがあるな」
「ははっ、非日常って言うたら影時間もそうやけどね。美鶴さんが言いたい意味は何となく分かるわ」
「……そうね。戦いが終われば、こういった事を非日常って言えるようになる訳だし」
　自分たちは学生どころか大人たちだって経験しないような非日常を経験している。
　けれど、美鶴が言っている非日常とは、文字通りに日常的な体験ではないものを指しているのであって、超常の存在との邂逅を指している訳ではない。
　ブランコで遊んでいる順平たちや、コロマルとボールを使って遊んでいる真田と荒垣たちの方を見ながら、今のこの時間が日常の延長線上にある非日常なのだと確認する。
　影時間が消えれば美鶴たちは卒業と次の進路に向けての準備に動き出し、七歌たちは七歌たちで自分たちの目指す将来に向けて受験勉強を始める。
　四月以降はこんな穏やかな非日常は中々過ごせなくなる事もあって、戦いの前だと言うのに全員が楽しさと一緒に言い様のない寂しさを感じていた。
　その気持ちを感じているのは自分だけじゃない。不思議とその確信を持って、女性陣が何となく空を眺めていれば、神社の上空で突然蛍火色の光が弾けて一人の青年が現われた。
　一時間ほど前に仕事中だとメールがあったので、合流する事は出来ないのだろうと思っていただけに、仕事の方は大丈夫なのだろうかと気になってしまう。

ジャングルジムに登っていた女性陣たちは地上に降りて、十メートル以上の高さから平然と着地した青年に声をかける。
「八雲さん、お仕事の方は大丈夫なのですか？」
「……ああ、さっきまで受けていた物は終わらせてきたからな」
ＥＰ社は湊とソフィアが二人で代表を務めながら、さらに幹部たちにも仕事の指示をさせているはずなのだが、こんな時間まで仕事をする必要があるほど忙しいのかと集まった者たちは心配する。
彼に聞けば必要な事だからなと何でもないよういい答えるに違いないが、自分たちがのんびりと夜の散歩をして遊んでいた事もあり、頑張って仕事をしていた彼に対して後ろめたさのようなものを感じてしまう。
しかし、それを口に出せばくだらないと言われることも分かっているので、お疲れさまと労いつつ近付いた七歌は、彼の服から彼とは異なる匂いが香った事に首を傾げた。
「あれ？　ねえ、八雲君。仕事って一人でしてた？」
「……いや、事務仕事でも一人でする事は珍しいが、今日は相手のいる仕事だったぞ」
「あ、そうなんだ。なんか八雲君のコートから女性物の香水か化粧品っぽい匂いがしたからさ」
七歌がその事を指摘した途端に、女性陣が湊に近付いてコートの周りで鼻を利かせて匂いを嗅ぐ。
いくら見目麗しい女子たちが揃っていると言っても、数人が一斉に集まって匂いを嗅いでくれれば遠慮願いたくなる。
スンスンと匂いを嗅いでいる女子たちを呆れたように見ていれば、何だかんだと彼の学外の知り合いと面識のあるラビリスが、彼と最も関わりのある相手の物ではないと否定した。
「ソフィアさんとかシャロン先生の使ってるのとは違った匂いやわ」
「ですが、不思議と知っている香りな気がします。八雲さん、仕事のお相手はわたしたちの知り合いの方ですか？」
ラビリスの証言で第一候補たちの可能性は消えたが、それほど知り合いのいないアイギスも何故か知っている香りだという気がした事

で、湊に自分も知っている相手かと素直に聞いてみた。
聞かれた湊にすれば、どうして仕事の事をお前たちに教えなければいけないんだという気持ちだが、別に知られたところで問題もないことで正直に答えた。
「……まぁ、エリザベスだが」
「え、仕事って言って二人で遊んでたの？」
「そういえば、今日学校で、昨日の放課後にすごい美人がうちの学生と一緒に校内を回ってたって聞いたんだけど」
仕事で会っていたのがまさかの相手だったことで、七歌とゆかりが驚きながらもどういう事だと視線で追及してくる。
別に話す義理も必要もないのだが、ここで黙っていれば機嫌を損ねて面倒臭くなるだろう。
そう思った湊はベルベットルームの住人たちにも色々あるのだと伝える。
「……ベルベットルームからの正式な依頼だ。最後に街の案内を頼みたい、と。あいつらも迷っている。迷っているからこそ、契約者との関わりを通じて自分が何者であるかという疑問の答えを探しているんだ」
「エリザベスさん、その依頼で答えを見つけられたのですか？」
「いいや。ただ、見識は広がったと満足してくれていた」
昨日、学校の屋上でエリザベスは湊の辿り着いた〝命のこたえ〟を理解出来ないと言っていた。
その後にＥＰ社の私室に移動し、肌を重ねた後にベッドの中で真面目な話もしたが、大切な物を失う恐怖の先にそういった感情もあるのは何となく分かった気がすると彼女は話していた。
あれだけの強さを持っていても、彼女の持つ心は人間のそれとほとんど変わりがない。
価値観や感じ方の違いはあれど、喜怒哀楽に執着心などもしっかりと持っている。
であれば、エリザベスが湊と同じような〝想い〟を持つ未来もあるかもしれない。

湊がその命のこたえに辿り着いたのは偶然で、恐らくは一人一人その答えは違っているように思う。
だからこそ、もしエリザベスが真の意味で湊の出したこたえを理解出来なかったとしても、それは考え方が違っているだけなので別におかしい事ではない。
湊の辿り着いた命のこたえを理解出来ないことで、エリザベスは僅かに落ち込んでいる様子だったが、しっかりと個々の違いを説明すれば相手も納得した様子で見識が広がった事を喜んでいた。
女性陣にそうやって話していれば、影時間が終われば湊と七歌はベルベットルームの住人たちとも会うことがなくなるのだろうと、他の者たちよりも別れが多い事を察し少しだけ申し訳なさそうな表情になる。
彼女たちの表情の意味を湊も七歌も理解したが、最初から一年と言われていたのだと七歌は笑って答えた。
「最初から期限は聞いてたから大丈夫だよ。ベルベットルームは一年の旅路に付き合ってくれるだけって話だったから。てか、それを言うなら私よりも長く関わってた八雲君の方が別れ辛いと思うし」
「……別に契約者は契約終了後もベルベットルームに入れるぞ？」
「え、そうなの？」
「ああ。担当から外れて個人的な付き合いになるから、親しくなっていなければ二度と会うこともないかもしれないが」
直通の扉の鍵を持っている湊は勿論、七歌だって扉さえ見つければ持っている鍵で開く事が出来る。
なので、扉を見つけるという条件を満たしさえすれば、元契約者は鍵を使って部屋に辿り着けるのだが、そこから先は客人と担当というビジネスの付き合いではなくプライベートな物になる。
湊のように契約を果たし終えたその日に男女の関係になるくらい親しければ、もしかすると相手を現実世界に呼んで、色々と裏の技術を使い戸籍を作って籍を入れるという事も出来るかもしれない。
まぁ、七歌とテオドアは常連と店のバイト君くらいの距離感のようなので、湊とエリザベスのようなドツボに嵌まりそうな関係にはなり

得ないだろうが、契約後も話し相手になるくらいの信頼は築けている。
　他の者たちは色々と気を遣って心配してくれたようだが、その心配が杞憂だったと分かって皆安堵の表情を浮かべた。
「やれやれ、杞憂で済んだなら何よりだ。出会った切っ掛けが影時間だろうと、親しくなったなら関係ない。別れずに済むならその方が良いに決まっている」
「有里君は十年近い付き合いがあるって言ってたもんね。流石に簡単には割り切れないだろうから、大丈夫って事なら本当に良かったね」
　別に会えなくても困ることはないだろうが、会えない訳じゃないという事が分かっているだけで気が楽なのは確かだ。
　美鶴とゆかりが笑顔で良かったと安心する様子を見ながら、ボール遊びを楽しんだコロマルと真田たちが戻ってくれば、時計で時間を確認したラビリスが他の者たちに声をかけた。
「さーて、ほんならコロマルさんも十分遊んだみたいやし。そろそろ寮に戻ろか」
「……用事が済んだなら俺は会社に戻ろう。別に送って行かなくても大丈夫なんだろ？」
「んー、時間も遅いし。あの瞬間移動で運べるんやったらそれでもええかな」
　七歌たちは寮に帰るだけだが、ラビリスとチドリとコロマルは電車で移動する距離くらいには離れたラビリスのマンションに帰る必要がある。
　普段は美鶴が呼んでくれた桐条グループの人間に車で送って貰っているが、影時間の探索がある日ならともかく、ただ遊んできただけで桐条グループの人に送って貰うのは申し訳ない。
　故に、運んで貰えるならお願いしたいと伝えれば、湊の頭上に現われたセイヴァーが光の短剣のような物を翼から飛ばし、集まった全員をそれで囲うとすぐに光に包まれその場から転移した。
　一度目の転移では全員で寮の屋上へと移動し、ラビリスたちが寮生らに別れを告げると今度はマンションのバルコニーに転移する。

ラビリスたちが自分たちの現在地をしっかりと理解した段階で、湊は会社に戻ると告げて二人と一匹の前から転移で消える。
途中から参加して貰った相手に、最後は運び屋のような事を頼んだのは少し申し訳なく思うが、戦いの前に全員で集まって穏やかな時間を過ごせたのは嬉しかった。
沢山遊べて満足げなコロマルの足をラビリスとチドリで洗ってから拭いてやり、自身らもお風呂に入るためお湯を溜めて入浴の準備をしてから明日の学校の用意を済ませる。
泣いても笑っても残り一日。明後日にはこの世界の運命が決まる。
それをしっかりと分かっている少女たちは、疲れを残さぬよう温かいお風呂に入ると、寝る準備を整えてすぐにベッドで休むのだった。

第四百三十話　『行ってきます』

1月31日（日）
朝――ＥＰ社
今夜、ついにニュクスが降臨する。
テレビではカルト宗教であるニュクス教の人間たちが〝Ｘデー〟と示し、今も街の至る所で今夜世界は滅びると一種のトリップ状態で騒いでいる様子が映されている。
湊や七歌たちがニュクスに勝てなければ、世界は幾月たちの望み通りに滅びてしまう。
しかし、その滅びの形は幾月やニュクス教の人間たちが望んでいる形とは異なっている。
彼らは知らないのだ。神はある意味で平等である事を、人が気付かぬうちに足下の虫を踏み潰してしまうように、人間の個に興味を持っていない神は殺すとなれば全てを滅ぼす。
滅びを望んだ本人たちの願いの本質を見る事なく、区別なく全ての人間たちを滅ぼす以上、新たな世界で生きていく事など出来るはずがない。
どうしてそんな簡単な事にも気付かないのか。湊にすれば不思議でしょうがないが、ＥＰ社の社員たちに聞けば人とは本来そういったものらしい。
決戦の日ではあるが普段通りに仕事をしつつ、朝食を摂るために湊がソフィアと共に食堂へ向かえば、そこで同じように朝食を食べていたシャロンらと言葉を交わす。
「まぁ、坊やにすれば不思議でしょうけどねぇ。アンタみたいに目的のために逸れずにいるって中々にレアケースなのよ。普通の人間は目的のために突っ走ってもどこかで転んだりして、そこで悩んだりして、どうしようもなくなったら都合の良い想像で自分の心を守ろうとするの」
「そっすねー。そりゃ、それだけに集中出来たら効率の面では最高ッス。でも、一度躓いたら保険を掛けようとするのが人間な訳で、身体

削りながらでも止まらず進み続けられる方が珍しいっすよ」
サラダボウルにこんもりと盛られた根菜のサラダを一人で食べているシャロンに、隣でホットドッグを食べていたエマが同意だと頷いて続ける。
一般人は現在と未来をちゃんと繋がりとして考える。だからこそ、現在で無理をしたり失敗すれば、まだ見ぬ未来にも影響すると思ってしっかり保険を掛けようとするのだ。
それに対して、未来に求める結果を設定すれば、どのような過程だろうとほとんど拘りのない湊は転んでも何をしても自分の状態になど興味がないとばかりに進み続ける。
ある意味で刹那的であり、その根幹部分はストレガのタカヤたちに似ているとすら言えるだろう。
幼く何の力も持っていない状態で、そう遠くない未来に起こる世界の滅びなど知ってしまったが故に、なりふり構っていられなかったという事情は分かる。
両親がいる頃から自分よりも他人を優先する特異な人間性で、そんな彼が自分の命を救われたなら恩を返すために相手の生存を第一に行動する事も分かる。
ただ、そのせいで一般の感覚が理解出来ないというのは、価値観の違いよりももっと別な何かを感じずにはいられない。
片目を抉られ、腹に穴を開けて、腕を千切られ、それでも止まらずに自分の大切な人間の命を奪った相手を殺そうとする執念。
一般人であるエマからすれば、そこまで出来る青年の方がズレていて理解しがたい存在だった。
ただ、だからといってこの場にいる者の中に湊の存在を受け入れられない者などいない。
アイギスの人格モデルの一人だった水智恵は、カップスープを飲みながら湊の方を見て微笑む。
「でも、実際のところ大勢がそうやって流されやすいからこそ、湊さんみたいな人も必要なんだと思います。滅びを求める人たちも別に死にたい訳じゃないっていうか。何かに、誰かに憧れていて、自分もそ

うなりたいけど変われない。だから、世界が変わればもしかしてって考えているんだと思うんです」
全員が全員湊のようになれる訳がない。けれど、そういった一般から外れた存在が不要かというとそうではない。
人は今自分が持っているものだけで満足出来る者ばかりではなく、多くの者たちはより幸福になる事を望んでいる。
幸福の定義などは人それぞれだろうが、自分には出来ない事や鮮烈な印象を与えてきた存在に憧れを抱き、自分もそうなりたいと思う者は多い。
自分が持っていない側の人間だからこそ、水智は湊のような存在は人が上を目指し夢を見続けるために必要なんだと思うと笑顔で話した。
湊自身は好き勝手に生きて周りに迷惑を掛けてきたと思っており、こんなくだらない人間に憧れるなんて物好きなやつもいたもんだと呆れたようにコーヒーを飲む。
すると、そろそろ雑談も一区切りついただろうと、隣に座ってスコーンを食べていたソフィアが真剣な様子で湊に話しかけた。
「湊様、我々は敷地内の公園や未開発区画に市民の受け入れを行ないます。シャドウが出るようでしたら、わたくしも戦いに出ます」
「……あぁ、それでいい。ま、そこまでの影響はないはずだ。シャドウたちも自分たちの神が来るって分かっているだろうからな。ほとんどのシャドウはタルタロスを目指すはずだ」
今夜の戦いでこの世界の未来が決まるのは確かだ。
けれど、その戦いは湊たちだけに関係する訳ではない。
恐らくだが本来の身体を取り戻したニュクスの降臨によって、世界中に黄昏の羽根のブースト効果が働いて象徴化が解けると思われる。
月の表面が薄く剥がれた黄昏の羽根でも、持っているだけで影時間の適性を擬似的に得られるのだ。
月その物が齎す効果など想像もつかないが、それでも世界中に影響が出て一般人も巻き込まれるのは確実。
だからこそ、湊はＥＰ社の者たちにも説明して、避難しようとする

市民たちを広い公園内に受け入れて一時的に保護するつもりでいた。
この事は桐条側にも伝えてあり、可能な限り病院の敷地などで受け入れるとの返事を貰っているが、本来は災害時の避難場所に使える学校が騒動の中心になっているため、桐条側がどれだけ市民の避難に協力出来るか分からない。
ただ、今日に限っては所謂はぐれシャドウと呼ばれる存在も影時間に迷いこんだ人間を襲う事より、母なる存在ニュクスの降臨する地を目指すため、自分から攻撃をしない限り被害は出ないと思われる。
勿論、シャドウたちの行動は確実だとは言い切れないし、ニュクス教の人間たちが馬鹿な真似を始めたり、影時間やニュクスを見て恐慌状態になった人間が暴れる可能性だってある。
湊たちは出来る限りそういった騒動を鎮圧出来るように備えているが、シャドウとの戦いばかりは一般人には荷が重い。
ソフィアもペルソナを持っていて、その強さは蘇生後のチドリに匹敵するほどだ。
ただ、彼女はＥＰ社の本拠地であるここに待機して、この周辺に敵が現われた場合にのみ排除する。
その他の地域でシャドウが出てもソフィアが急行する事はなく、また対シャドウ兵器は用意してあるが基本的には銃火器になっているので周りへの被害を考えると多用は出来ない。
人間たちはニュクスの力によるブーストで影時間の適性を得るが、シャドウたちは通常の満月の時以上に凶暴化して力も増す。
そんな状態のシャドウに襲われれば一般人など無事で済むはずもなく、ソフィアやＥＰ社の実働部隊の者たちもあまり表立って動けないとなれば、やはり相応の被害が出ることは覚悟しないといけないのかもしれない。
医者であるシャロンや部下の武多も怪我人の対処について考えたのか、少しばかり表情が険しくなれば、それに気付いた湊がそこまで気にしなくても良いと声を掛けた。
「……街中の方は気にしなくて良い。基本的にタルタロスに近いほどシャドウは活発になるし。離れていれば影響はほとんど出ない。そ

れに街中には自我持ちのペルソナたちを待機させる。あいつらがいればシャドウもそっちに寄っていくはずだ」
「それは大丈夫なのですか？　負担が掛かるのは勿論ですが、街の防衛に戦力を割いてしまうと本来の目的達成に影響があると思うのですが……」
ソフィアたちは七歌たちがどういった作戦で戦うのか詳しい説明を受けていないが、それでも湊が最も厳しいところの対処に当たるのだろうと予想している。
敵側には湊のクローンである結城理と、長谷川沙織の偽名を使っていた幾月玖美奈というワイルド能力者もいる。
あの二人は敵側の戦力の中でも別格で、一対一でまともに戦えるのは湊とデスの力を失う前の綾時くらいなものだった。
単純な火力で言えば力を溜めたチドリも並べるが、相手は高同調状態になって空を飛ぶことが出来る。
いくら火力が強くても当てられないのでは意味がない。
そして、力を失ってしまった綾時では戦いについていけない以上、空を飛べる二人は湊が一人で押さえる必要がある。
相手は勿論湊を殺すつもりでいるだろうし、最後の戦いと言うことで全てを使って勝とうとしてくるに違いない。
湊はそんな敵を相手に殺す以外の方法で解決出来ないかと考えていた。
確かに殺せば確実だろう。情けを掛けて自分たちの不利になるような真似をされれば、世界を救えなかった時に悔やんでも悔やみきれない。
湊もそうなるくらいなら、息の根を止める確実な対処方法を取るつもりでいる。
しかし、もしもそれ以外の方法があるのならば、血の呪いによって他人の記憶と自我を与えられ自分が何者であるかを悩んでいる相手を救う方法があるのならば、湊は自分が両親に救われたように名切りの血の呪いから解放してやりたいと考えていた。
「俺は結城理と幾月玖美奈の相手をする事になると思う。狭い場所で

戦えば圧倒的に俺に有利だからな。敵側も俺を外で足止め出来るならそっちを選んでくるだろう」
「では、他の者たちでストレガや幾月と対峙するのですね？」
「ああ。加えて綾時の抜け殻である不完全なデスとも戦う事になるだろうな」
「人の心という余分なものを切り離したはずなのに、それでも一部は一部だったという事ですわね。湊様と綾時さん以外の人間でも戦えるというのは朗報でしょう」
デスはニュクスから切り離された彼女の一部。その性質はニュクスと一緒で、本来なら誰も戦う事なんて出来ない。
しかし、デスを内に宿した湊のような存在であったり、ニュクスの力を強く宿した武器などであれば戦う事も出来る。
故に、本来であれば理たちを下した湊が、そのままデスと戦う予定だったのだが、封印が解かれ完全体となったはずのデスにとある誤算が生じた。
それは湊と綾時が十年前の戦いに決着をつけた時、湊の機転によってデスから〝望月綾時〟という人としての心を分離したことで、完全なシャドウ体でありながらデスとしては僅かに存在が欠けた状態になった事だ。
デスはシャドウの王であり、その存在は神の写し身たるシャドウその物。湊に宿った事で得た人としての性質こそが余分なものであったのに、デスとしてはその余分なものも欠けてはならなかったらしい。
おかげでデスは完全にニュクスと同じ性質になる事はかなわず、相応の力があれば他のペルソナ使いたちでも戦う事が可能だと分かった。
であれば、湊はそちらを他の者たちに任せて自分は理たちの対処に専念出来る。
街の上空で戦う事になるはずなので、状況によっては地上で人々を守る自我持ちたちの援護も可能かもしれない。
七歌たちは七歌たちで自分のすべき事に全力で挑み、湊もまた自分

がすべき〝名切りの血の因縁〟と決着をつける事に集中する。
「化け物たちの相手はこっちでする。だから、お前たちは人間の相手を任せた。無理はしなくていい。ただ、出来るだけ多くの人たちを助けてやってくれ」
「りょうかーい。医者として拾える命は拾ってあげる主義なの。だから、坊やは自分の事だけ考えてたらいいわ。こっちはわたしらで何とかしておくからさぁ」
「ええ。わたくしもここは気に入っています。何年、何十年掛かるとしても待っています。だから、湊様もどうかお元気で」
「……ああ、ありがとう」
他の事は頼んだぞと湊が部下たちに頼めば、ソフィアやシャロンをはじめとした部下たちは安心して戦って来てくれと笑顔で返した。
この戦いが無事に終わっても湊は帰ってこない。その必要があるのだと、ただ命を捨てに行く訳ではない事はしっかりと説明した。
全員がそれを聞いて素直に納得した訳ではなく、今も食堂にいる者の中に涙が溢れそうになるのを必死に耐えて無理矢理に笑顔を作っている者もいる。
それでも、彼らは湊を信頼して後の事は任せろと、いつ帰ってきても良いように会社を守っていくと約束してくれた。
元々、上司と部下という関係でしかなかったはずなのに、新たに得た家族以外にも、こうやって自分の帰りを待ってくれる者たちがいる。
それに喜びを感じた湊は、エリザベスに伝えた〝命のこたえ〟がやはり間違いではないと確信が持てた。

夜――巌戸台分寮
時刻は既に九時を回っている。
寮のロビーには戦いの準備を終えた七歌たちに加えて、直接合流する事になっていた湊の姿もあった。
七歌たちはタルタロスに向かうが、湊は厄介な敵を引きつけるため力を一切隠さず挑発しながら街中にいる予定だ。

理と玖美奈は七歌たちにとって非常に面倒な相手だが、相手からすれば湊がそこに合流して一緒に来る方が面倒に違いない。
仮に欲を掻いて七歌たちの方へ向かえば、その瞬間、フリーになった湊によってタルタロス内に残っているストレガと幾月を襲撃される。
そんな事態を避けるのであれば、湊が別行動していても、理たちは先に七歌たちを潰すという動きは取れず、素直に湊の方へ向かうしかない。
味方としては非常に心強い存在だが、敵だとすれば何と厄介な存在だろうか。
そんな事を考えながら小さく笑った七歌は、メンバー以外でこの場所に集まった者たちに視線を向ける。
娘と会話する美鶴の両親にメイドの斎川菊乃、汐見姉妹と話している栗原、兄たちの心配をしながらゆかりと風花と会話する美紀、戦いに向かうチドリと湊を心配そうに気遣う桜とそんな彼女たちの様子を静かに眺めている鵜飼と渡瀬。
彼らは全員ここに残る事になっている。栗原と美紀を除けば全員が少し距離のある場所で暮らしているというのに、今日ばかりはと子どもたちの戦いの結末を見るために集まったらしい。
普段は年長者として皆を引っ張っていく立場の美鶴も、どこか薄い反応しか見せないチドリも、親と言葉を交わすことで自分を落ち着かせ、逆に相手には安心感を与えるように話をしている。
真田と荒垣は勿論、ゆかりと風花もこれ以上ないほど落ち着いていて、逆に戦いに出ない美紀の方が落ち着きがなくなっている。
下手をすればこれが最後の会話になるかもしれない。そう思えば確かに七歌の中にも不安や恐れという物は存在している。
いくら湊という戦力があろうと敵はそれ以上の力を持つ神だ。
その前には自分たちを殺す事に一切の躊躇いを持たない敵もいる。
全員が無事に辿り着ける保証はなく、想定外の事態が起ることだって十分に考えられる。
ただ、七歌たちはそれでも勝つために準備をしてきた。不測の事態

が起きても力で捻伏せる。
　これだけの仲間がいれば全員で勝って明日を迎える事も絶対に不可能じゃない。
　強い意志の宿った瞳を輝かせながら、七歌は全員の注目を集めるように声を掛けた。
「よーし。それじゃあ、そろそろ出発するよ。心配なのは分かるけど大丈夫！　どうせ帰ってくればまた話せるから！　あんまり恥ずかしい事ばっかり言ってると、無事に帰ってきた後にネタにされちゃうから気をつけてね！」
「んだな。全国五千万人の女性たちがオレっちの帰りを待ってるんだ。しっかり凱旋して安心させてやらないとな！」
「皆、聞いたね？　順平には五千万人の女性たちが待ってるらしいからね。戻ってきたら全員の名前を聞いてあげようね」
　皆の緊張を解しつつ、帰りを待つ者たちの不安を少しでも和らげるために順平が冗談を言えば、七歌もそれに乗ってすぐにネタにしてやる。
　すぐにネタにされた順平は七歌の考えを理解しながら、「行く前にネタにすんのやめろ！」と抗議して他の者たちの笑いを誘った。
　これから最後の戦いに赴くというのに、これ以上無いほど全員が心身共にベストなコンディションだと言うことが分かる。
　一頻り笑い終えれば、全員がやる気に満ちた表情になり、それぞれの装備が入った荷物を持つと入口前の扉の前に並んだ。
　戦いに向かう者とここで待つ者に分かれて向き合う。
　だが、そこで湊が待つ者側に残っていた事で、戦いに向かうメンバーたちが微妙な表情になり、七歌もここはキチッと締めたかったなと思いながら青年に声を掛ける。
「あー……八雲君もこっち側じゃないの？」
「俺は別行動だって言っただろ。影時間になる直前に転移するから、ここでは見送ってやる」
「まぁ、そういう事なら良いかな。じゃあ、お互いに無事合流出来る事を祈りつつ暫しのお別れを」

湊がどこで理たちを待つのかは聞いていない。
どうせ戦いが始まる頃には馬鹿でかい気配を一切抑えずに解放するのだ。
感知能力持ちでなくとも、方向くらいは分かるに違いない。
なので、転移を使えば一瞬で移動できる彼も見送ってくれるというのなら、今回は素直に見送って貰いましょうと気を取り直して全員で声を揃える。
『行ってきます』
暫しの別れを告げると後は振り返らずに順番に外へと出て行く。
数日前まで雪が降って寒さは厳しいが、今日は空に雲一つなく東京の頭上にも星と月が輝いているのが見えた。
澄んだ青色のように見える美しい月が、これから自分たちが戦う敵だと思うと不思議な気分だ。
そんな事を考えながら七歌たちは駅を目指して歩き出し、親や友人に見送られながら戦いの待つ場所へと向かっていった。
そして、先に寮を出た彼女たちが、湊が寮を離れる際の言葉が「さようなら」だった事を知るのは、これから数ヶ月後の事になる。

第四百三十一話　子は何を思う

夜――月光館学園前

影時間になる前に学園前の駅に到着した七歌たちは、警戒した状態で影時間になるのを待っていた。

もし、タルタロスになる前に学校前にいて、敵がエントランスで待ち構えていれば、咄嗟の攻撃に反応しきれない恐れがある。

それならば、少しの時間をロスするだけで奇襲を回避出来る方が良いに決まっている。

幸いな事に人もいないので武器を用意しつつ、その時を待っていれば、静かに世界が緑色に塗り潰されてゆく。

音を立てて出現する奈落の塔。これまで以上に巨大で明るく見える天上の月。

タルタロスが現われても敵が出てこないのなら、僅かに離れて待っている意味もない。

そう思って視線を交わした七歌たちが走り始めれば、ドンッ、と腹の底に響くような激しい音が鳴ったと錯覚するほど強烈な気配を遠くに感じた。

全員が一様に驚いた表情をして、仲間たちと視線を交わした後に気配の主であろう青年の事を考えて苦笑する。

「フフッ、いや、敵を釣るとは聞いてたけど八雲君ってば流石にやり過ぎじゃないかな？」

「あー、これ探知能力持ってないオレっちでも分かるぞ。あいつ、今ムーンライトブリッジにいるだろ？」

七歌と順平が言葉を交わしている間も、馬鹿みたいに巨大な気配はムーンライトブリッジの方から放たれている。

探知能力を持っている風花もチドリも、湊がまだペルソナを召喚していない事は分かっている。

しかし、これまでの経験から仮に他の者たちがペルソナを召喚しても、これほど大きな反応は出せないことも分かっていた。

なので、今自分たちが感じているのは、彼が普段を抑えている力を

ただ解放しただけ。
死に近付けば、死を体験すれば、ペルソナ使いたちはその能力が跳ね上がる。
湊はこれまで何度も死んでファルロスの力を使って蘇生されてきたが、そのファルロスをチドリに移して自身が一度完全に死んだ事により、鬼の一族が真に目指していた〝完全なるモノ〟に到ったのだろう。
死んだという事実を覆し、ニュクスという死の力を受け付けず、死を超越した存在として彼はその本当の力を今解放した。
敵もあれをそのままにはしておけないと判断したのだろう。事前に話していた予想通りに、タルタロスの上層から二つの気配がムーンライトブリッジに向かって離れて行く。
「よし。有里は上手く敵を引きつけてくれたようだ。空の心配はいらない。我々は我々の役目を果たすぞ！」
『了解っ！』
美鶴の言葉に全員で応じながら、駅前の階段を駆け下りて校門に向かって走る。
飛行能力を持った理と玖美奈を湊が押さえてくれれば、七歌たちはストレガや幾月の相手に集中出来る。
ただでさえ幾月とストレガは七歌たちを殺そうとしてくると言うのに、上層に向かう道中にはアルカナシャドウ級の力を持つシャドウもいるのだ。
そんな状態でさらに地理的なアドバンテージを持った者の相手までしていられない。
一人で二人の敵を押さえるのは大変だろうが、自分たちも自分たちのすべき事を果たして見せる。
校門を潜ってエントランスに向かって走り、敵の気配がないと風花とチドリが断言した事で他の者たちは速度を落とさずに進む。
塔の中に入れば湊の戦いの様子はほとんど分からなくなってしまうため、どうか無事でと祈りながら七歌たちは転送装置で上層に転移した。

――ムーンライトブリッジ
七歌たちを寮で見送った湊は、少ししてからセイヴァーの空間転移でムーンライトブリッジに来ていた。
橋を支える柱の一つの上に乗って、ただ静かに風を感じながら街を眺める。
海の上にあるこの場所は静かだが、街の方ではどうにもざわつきを感じる。
ほとんどはタカヤたちに唆されたニュクス教の者たちだと思われるが、他にもテレビ局などマスコミの人間やニュクス教の言葉に不安を覚えて起きている者もいるのだろう。
ニュクスが降臨すれば彼らも影時間を体験することになるので、出来れば家に引き籠もっていろと思わなくもない。
ただ、言ったところで話を聞くようなら、そこまで簡単にニュクス教の話を信じたりはしないだろう。
どうせ一般人の許へシャドウが行くことはほとんどない。もし、襲われそうになれば、その時は街中に待機している自我持ちのペルソナたちが敵の排除に向かう。
一般人の事は自我持ちたちとＥＰ社に任せ、自分は自分のすべき仕事をちゃんと済ませようと湊は静かに集中する。
影時間への高い適性を持っている湊はそれがいつ来るのかが分かる。
もし、敵が七歌たちへ何かを仕掛けるとすれば影時間になった瞬間だ。
今日で全てが最後だとしても、自身の死を偽装してまで七歌たちを排除するチャンスを作った男が敵にいる。
であれば、今日のために黄昏の羽根を積んで、遠隔操作を受け付けるようにした兵器などで罠を用意しているかもしれない。
「……だから、俺がお前の計画を破壊しよう」
体内にある七枚の黄昏の羽根が結合した〝七熾天〟に力を送り、湊は零時になる前に影時間を展開して敵のタイミングを外してやる。
そのままタルタロス内を索敵、いくつかの設置型の爆弾を見つけた

ので、シャドウと同じ機械の操作能力を使って次々に破壊してゆく。
先にタルタロスの中で準備していた相手からしてみれば、不意打ちを仕掛ける直前にカウンターで不意打ちを喰らったようなものだ。
罠の爆弾を破壊したところで離れた場所にいる敵に、それらのダメージが行くことがないのは分かっている。
けれど、自分たちが用意していた罠が効かないと知った以上、相手も無傷な七歌らを戦闘で排除しなければならない苦く思っているはず。
相手は特殊な状態である程度気配を誤魔化したりも出来るようだが、他の探知型と違って湊の能力は細かな設定が面倒な分それらを無視できる。
故に、外の時間が影時間になったことを確認して自分が展開していた影時間を解除すると、湊は抑えていた気配を解放しながら幾月を意識して敵全員に声を送りつける。
「……タルタロスを消す攻撃を撃たずにいてやる意味を理解しろ。散々逃げ隠れして来たんだ。最後くらい向き合え」
湊の破壊の力を司る蛇神〝无窮〟の攻撃を使えば、タルタロスを物理的に消滅させる事が可能なのは分かっている。
一晩あれば復活してしまうものの、今日それをすれば幾月たちは世界の行く末を知る事なく人生を終えることになるのだ。
ニュクスの降臨はタルタロスの座標を基準にして起こるため、タルタロスを消したくらいではニュクスとの対決を避ける事は出来ないが、七歌たちの安全を確保出来るのであれば十分だと言える。
しかし、湊はそれをせず言ってしまえば敵を野放しにしている訳だ。
以前、美紀を殺されかけた時にストレガ相手にペルソナを使わなかった時とは違い。今回は相手への精神的ダメージや何かのデータ集めをする必要がある訳ではない。
であれば、どうして湊は味方を危険に晒すと分かって打てる手を打たないのか。
それは、七歌たちにもそれぞれ自分の手で晴らしたい因縁があると

知っているからだった。
湊が発する気配を感知し、尚且つ先ほどの煽る言葉に反応して、タルタロス上層から二つの反応が飛び出してくる。
一つは歌舞伎の獅子のような見た目をした鬼を連れる結城理、もう一つは黒いドレスを着た灰色の肌をした女性型ペルソナを連れた幾月玖美奈だ。
思考を読んでいる訳ではないが、敵である二人からは怒りと憎しみ、そして、何故だか自分に対する妬みの感情を感じる事が出来る。
どうして自分を憎んでいる相手が羨むような感情を抱いているのかは分からない。
けれど、相手が自分を敵として認識し、殺す気でいる以上は戦う以外に道はないのだろう。
静かにセイヴァーを呼び出すと、湊は足場にしていた柱からゆっくりと飛び上がって空中で止まる。
戦うつもりではいるようだが、これまでのようにいきなり攻撃してくるつもりはないのか、理と玖美奈は警戒しながらも橋と長さと同じだけの距離を開けて空中で停止した。
湊も殺さずに済むのならその方が良いと考えていたため、短い時間だろうと言葉を交わす意志を相手が見せた事に内心で喜ぶ。
今も射殺さんとばかりの視線を向けてくる理たちを見つめ、湊が黙って待っていれば苦々しげな表情を浮かべた玖美奈の方から話しかけてきた。
「どういうつもり？　敵ならば殺す。貴方はそういった人間のはずでしょう？」
「……お前らの敵意が俺に向いているのであれば、対処はしても問答無用に殺したりはしない。昔からそういったスタンスでやってきた」
「散々私たちの邪魔をしておいて、何を訳の分からない事を言ってるのよ！」
玖美奈たちからすれば、父親の研究を邪魔した上に、同じ学校に通うという小さな願いまで潰された形だ。
湊が月光館学園に戻ってこなければ、桐条グループの暗部を知る少

女を連れていなければ、自分たちは目の前の存在が人の理から外れた存在になる前に処分出来た。
そんな散々邪魔してきた人間が、別にお前らの事など大して気にしていないという態度を見せれば、誰だってふざけるなと怒鳴りたくなるだろう。
まだ相手は攻撃を開始するつもりはないようだが、力はあっても精神的に未熟な理を制御するはずの玖美奈が先に手を出してきそうな状態は拙い。
今すぐに戦闘が開始しても対処は可能だが、ゆっくりと言葉が交わせる最後のチャンスならばと湊は理に伝えたかった事を伝えておく事にした。
「……結城理、百鬼八雲の名前が欲しいならそれはお前が名乗れば良い。お前の持つ百鬼八雲としての記憶が自身の存在証明に必要なのであれば、お前が持っている物なのだから自分の物だと思ってくれて構わない。そも、最初から俺の許可なんて必要ない。俺たちは異なる十年を生きた別の人間なんだからな」
「何だよ、それ。自分には必要ないとでも、その名前に拘っている僕をくだらないとでも言うつもりかっ」
自分が拘っていた物を簡単に手放そうとする湊に、理は馬鹿にしているのかと食ってかかる。
玖美奈と同じように今すぐにでも攻撃を仕掛けてきそうな様子だが、相手も湊が何を考えているのか理解出来ず困惑しているのだろう。
まだ話が出来るのならと湊は相手の誤解を解けるかは分からないが、とりあえず自分の考えだけは伝えておくため口を開いた。
「……何を大切に思うかは人それぞれだ。百鬼八雲として生きた時間があるからこそ俺はここにいる。それは否定しないし無かった事にするつもりもない。だが、過去は過去だ。俺は過去のために未来を犠牲にしようとは思わない」
湊は過去を引き摺ってここまで進んで来た。だが、あくまで見ているのは未来だ。

アイギスが、チドリが、他の者たちが光の当たる温かな世界で生きていけるように、湊は自分が出来ることは何でもやるつもりでいる。
本当なら敵味方関係なく誰も傷ついて欲しくない。どうにか衝突せずにお互いの願いを叶える方法はないのか。
そうやって別の解決策を模索する時間があれば、湊だってそのために力を貸すだろう。
しかし、理と玖美奈は幾月の願いのために、過去のために未来を犠牲しようと既に心を決めてしまっている。
玖美奈は先ほど湊に訳が分からないと言ってきたが、そう言いたいのは湊も同じだ。
己と大事している二人は、大切な者のために力を貸す以上の戦う理由を持っているのか。それがその大切な者の未来を閉ざすことだと本当に分かっているのか。
相手が何かを言う前に湊はその真意を探るべく問いをぶつけた。
「お前たちは何のために戦うんだ？　ニュクスが降臨しようと幾月の願いは叶わない。あれは命を喰らうだけだ。世界の理は変わらない。死者の声を聞きたいのなら自分も同じ世界に行くしかないんだ」
「貴方がそれを言うの？　死の理から外れた存在が偉そうに。貴方が蘇ったように、母さんをこの世界に蘇らす事だって可能なはずなのよ。ニュクスが、死を司る神が降臨すれば死の定義は変わるのだからっ！」
玖美奈たちからすれば、死んでも、殺しても、こうやって元通りに蘇って現われる湊がいるのだから、ニュクスによって死の定義が理ごと書き換えられれば母である幾月茜の復活は可能だと考えている。
以前、湊は自分が滅びの対抗手段として惑星に呼び出された存在だと語っていたが、それが真実ならば惑星など大いなる存在の力を使えば個人の死を書き換える事は可能となる。
仮に嘘だったとしても、完全に死後の世界へと旅立っても戻って来られたならば、幾月茜の魂だってこちらに呼び戻せるに違いない。
故に、いくら湊が何を言おうと、幾月たちの願いは湊自身の存在によって可能性を否定されないはずだった。

だが、そこで玖美奈の言葉を受けた湊が少しばかり怪訝な表情を浮かべ、すぐに何かに思い至ったのか頷いてから口を開く。
「……あぁ、そうか。何故ニュクスの持つ権能の性質が分からないのか疑問に思っていたが、お前たちはそもそも〝死〟について誤った解釈を持っていたのか。そうだな。普通の人間は死という現象を理解していないんだ。そこで勘違いを起こしても無理はないか」
「また、さも自分は全て分かっていますと言わんばかりの上から目線の発言ね。なら、私たちが何を勘違いしてるのか言ってみなさいよ」
「そうだな。分かり易く言うとすれば、そも死は存在の終わりじゃない。現実世界で言えば肉体が活動を停止した事を指すんだろうが、魂は情報を持ったままあちら側の世界に行き。そこで一部を記憶の海に落として、残りは分解されて世界に解けて消えていくんだ。魂のコミューンに辿り着ければ、記憶の海に残ったお前の母親だった魂に触れる事は出来る。だが、それはあくまで世界の記憶だ。そこからお前の母親を一つの個として蘇らせる事は出来ない」
湊はどうして幾月たちがニュクスの降臨に拘るのか不思議に思っていた。
あれが地球に来たところで惑星から命が消えるだけで、その先には何もないし、当然彼らの思っていたような結果を見る前に本人たちの命が消えてしまう。
分かっていても諦めきれないのであれば、それはそれでしょうがないと納得する事も出来たけれど、相手の口調や様子から本気で自分たちが間違っていないと考えている様子だった。
何か自分が知らない情報を相手が持っていて、それを使えばニュクスの力を望んだ形で使う事が出来るのかとも考えた。
古来より、人々の願いの結晶として万能の願望器〝聖杯〟の存在が信じられてきた。
もしかすれば、ニュクスを願い人々の心を使って〝聖杯〟のような願望器を作る気でいるのかとも考えていたのだが、玖美奈の言葉でようやく湊も相手が根本的な勘違いを犯している事に気付く。
幾月や玖美奈に限らず、この世界で生きている者のほとんどは死ね

ば魂があの世に行くと思っている。この世での存在が終わってしまい。あちらで魂のまま存在し続けると。
だから、誰かの復活を願う者は、その魂をこちらに呼び戻そうと考える。
しかし、死を概念として理解し、尚且つ実際にあちら側の世界に行ってきた湊だからこそ、死んだ後も魂やその存在の状態変化は続くことを知っていた。
あの世に渡った魂は、一部の情報を記憶の海やアカシックレコードと呼ばれる場所に保管され、後はただ霧散して世界の一部になって消えて行くのを待つだけだ。
湊のようにあの世に行って、完全に消える前の魂と会うことは出来るし。記憶の海に保管した情報から一時的に存在を再現する事も出来るだろう。
どちらのパターンになるかは魂の大きさや意志の強さによって異なるものの、仮にどちらであったとしても、それが叶うのは死後の世界に行けばの話である。
いくら世界の理を書き換えようとしても、既に別の物に変化してしまった魂から故人を蘇らせる事は出来ない。
湊がその事実を突きつければ、玖美奈はこれまで以上に目を見開いて驚愕した様子を見せた。
「なっ、そんな事、貴方のいう事が事実である証拠なんてどこにもないっ。現に貴方は蘇ってきたじゃないっ！」
「俺の魂はニュクスの因子が別の神と入れ替わり融合してしまっている。ニュクスが回収出来るのは自分の一部を分け与えた生物だけだ。何より、あっちは時間の概念が曖昧だと言っても、こちらの世界でも一月そこらしか経ってないんだ。十年以上前に死んだ相手とは条件が違う」
玖美奈たちも命を懸けて願いを叶えようとしている以上、敵に何を言われようと簡単には信じないというのは分かる。
幾月はこのために十年以上彼なりの戦いを続けてきたのだ。その子どもである彼女たちが湊の言葉を受け入れる事は、そんな父親の戦

いを否定する事になる。
　自分は絶対に惑わされないと頭を振った玖美奈は、これ以上の問答は不要だとばかりに鋭い視線を湊へ向けると、一瞬だけ理と視線を交わしてから攻撃スキルを放って来た。
「ノート、ガルダインッ!!」
「酒呑童子、アギダイン!!」
　それぞれの放ったスキルは途中で合わさり、巨大な炎の津波になって湊に迫る。
　死の線を切って霧散させることは可能だが、今いる場所はまだ街にもタルタロスにも近すぎる。
　そう考えた湊は月の輝く上空へと視線を向けて飛び立ち、湊の移動に気付いた理と玖美奈も彼を追って空を駆けた。

第四百三十二話　交戦開始

影時間――タルタロス

影時間になってすぐにタルタロスへと駆け込んだ七歌たちは、転送装置を使って出来る限り頂上に近い階層に転移すると、そのまま足を止めずに先を急ぐ。

七歌たちも一度はタルタロスの頂上に行ったことはあるのだが、ニュクスが降臨する今日という日のためにタルタロスはさらに階層が増えているらしい。

以前頂上だった場所も上層フロアと同じ造りになって、初めて来た人間であれば頂上だった事など分からないようになっている。

もっとも、いくら階層が増えていると言えども、流石に百層以上増えたなどという事はないので、風花とチドリが探知して上への階段を見つければニュクス降臨までに十分間に合うはずだ。

既に七歌たちがタルタロス内に来ている事は敵も分かっているのだろう。

相手はステルス機能を持った道具を利用した気配隠蔽を解除しており、風花たちの探知によって少し上のフロアにいることが分かっている。

なので、今はまだシャドウの相手のみをしていれば良いわけだが、大理石とも陶器ともつかない不思議な質感の通路を走り、時々落ちている壊れた機械のようなパーツに視線を向けながら七歌が僅かに首を傾げる。

「さっきから壊れた何かが落ちてるんだけど、あれって何だろう。ストレガが関係してるのかな？」

「わたしの持つ兵器関連の情報と照合するに遠隔操作タイプの爆弾のようですね。恐らく、わたしたちを攻撃するために設置していたのでしょう」

急いで先を目指しながらも最低限の警戒をしている中、同じく壊れた何かに視線を向けていたアイギスが七歌の質問に答える。

爆弾はその構造にもよるが爆発で壊れる事に加えて、熱で燃えて溶

けたりもするので元のタイプを特定するには専門の知識と場合によっては残骸に残った成分の調査なども必要になる。
しかし、それが爆弾だったと判断するだけであれば、多少かじった程度の知識でも何とかなる。
とくにアイギスは銃火器の使用を想定して作られた機体であったため、残骸を見ただけでそれが爆弾と遠隔操作の受信機だと気付くのは容易だった。
彼女の話を聞いた他の者たちは一様に驚いたようだが、考えてみればストレガのジンは手榴弾をよく使っていたし、アイギスたち対シャドウ兵器の開発にも関わっていたであろう幾月なら遠隔操作の仕組みくらい知っていても不思議ではない。
自分たちの安全を確保しながら確実に相手にダメージを与えるのであれば、敵がそういったタイプの罠を作ってもおかしくなかったわけだが、七歌たちは最終決戦だからこそ敵が正面から来るか、しても奇襲くらいなものだと考えていた。
知らずに突っ切ろうとして罠に掛かっていたことを考えると背筋が寒くなる。
爆弾が壊れているという事は、シャドウに反応してしまったか、もしくはタルタロスの出現時に異物として排除される過程で壊れたのかもしれない。
何にせよ運が良かったと喜びつつ、ここから先はそういった罠の存在をしっかり想定して動こうと心に決める。
だが、他の者たちが警戒している中、アイギスは他の者たちの変化を不思議にそうにしながら口を開く。
「皆さん、どうされたんですか？」
「いや、アイちゃんが爆弾があるって教えてくれたんだろ。だから、オレっちらも警戒しようとしてる訳でさ」
「いえ、恐らく爆弾は全て八雲さんによって破壊されています。あの方はアクセス権限を無視して機械を遠隔で操作できますから」
湊の内蔵する黄昏の羽根は、枚数と形状が変わった事で能力と出力が変化した。

けれど、機械の遠隔操作は言ってしまえばシャドウの能力。人の域を超えた影時間への高い適性と親和性を持っている者なら、コツを掴めば羽根がなくとも使える可能性があるものだ。
そのため、アイギスも本人に確認した訳ではないが、今も恐らくその力は健在で敵の行動を先読みして破壊してくれていたのだろうと予想した。
チドリとラビリスは彼のそういった能力にも詳しいので、アイギスの予想は恐らく当たっているはずだと苦笑気味に頷く。
彼女たちの反応を見た美鶴は、どこか申し訳なさそうにしつつも小さく笑って彼への感謝を口にした。
「つまり、彼は我々が入る前に全ての罠を解除してくれた訳か。敵戦力の中でも特に厄介な二人の相手を頼んでしまっていると言うのに、経路の安全確保までさせてしまって申し訳ないな。だが、これで私たちはシャドウとストレガたちに集中出来る訳だ。彼の気遣いに感謝して先を急ごう」
美鶴の声に頷いて返しつつ、前方にいるシャドウの許へコロマルと天田が先行してペルソナを呼び出し排除する。
戻ってきた彼らを隊列の真ん中に置き、代わりに真田と美鶴が前衛に上がってメンバーの疲労が偏らないよう注意しながら進む。
走りながら再び爆弾の残骸らしきものを見つけ、真田はほんの少しだけ残念そうに愚痴をこぼす。
「確かにありがたい事ではあるが、あいつにも少しは俺たちを信用して欲しいものだ。爆弾があったところで、引っかかるのなんて順平くらいなものだぞ？」
「いや、真田さん。オレがくらってる時点で戦力に影響出てるじゃないッスか」
「それはくらうお前が悪い。火炎無効耐性が付いているのに、スキル以外の炎は無効化出来ないとは軟弱なやつめ」
「ちょ、それパワハラっすよ？　てか、それなら帰ってから先輩は電気のツボ押し体験してくださいね。ペンタイプになってて、カチって押すと静電気みたいの出るんで、それで声を出したら〝ビッグマウスな

軟弱ヘタレ野郎〟って称号贈りますよ」
スキルの炎とライターなどで出せる火は性質が違う。
それはペルソナとシャドウを研究していた桐条グループでも昔から言われていた事で、どうして違うのかという話は分かっていないがペルソナ使いたちは全員が話として理解している。
火炎無効耐性を持っている順平、コロマル、チドリは火炎放射器で攻撃されれば燃え死ぬし、電撃無効耐性を持っている真田も落雷を喰らえば死ぬ。
そも、もしスキル以外の同属性を無効化してしまえるとなれば、疾風無効のゆかりは一生風を感じなくなるし、氷結無効の美鶴などであれば冷たい温度を感じなくなるかもしれない。
日常生活に支障をきたすようなそれらの効果がない事は、日常を生きる少年少女らにとってはプラスの事だろう。
ただ、決戦という状況を考えると、そういった効果もあれば爆弾の爆風部分は無視出来たと思われる。
その事で真田が小さく毒を吐けば、順平はそんな事を言った以上自分は電気に耐えられるはずだよなと挑発し返す。
こんな時に何をしているんだと他の者たちは呆れているが、こんな状況でも軽口を叩く余裕があると思えば頼もしいと考える事も出来る。
よって、美鶴と七歌は敢えて二人を放置して先を目指し、馬鹿な事を言いながらもしっかりと道中の敵を倒しながら次のフロアへの階段まで急いだ。

＊＊＊

いくつかのフロアを走り抜けていくと、突然これまでと雰囲気の違うフロアに到着した。
七歌たちの経験から言えば、切りの良い階層にいるフロアボスがいた場所に似ているが、そこで待っているのはシャドウではなく人間だ。

通路を抜けて大広間に出れば、風花とチドリが事前に察知していた通りに三人の人影があった。
ダブついたパーカーを着てギラついた目をした男、両端に穂先がついた槍を持ち冷たい瞳でジッとこちらを見る女、召喚器のみ持って眼鏡越しに無感情な瞳を見せる少女。
かつて湊がタカヤたちと一緒に逃がした被験体の生き残り、ストレガのカズキ、メノウ、スミレだ。
美紀を殺そうとしたカズキがいた事で立ち止まった真田の拳に自然と力が入る。
スミレのペルソナであるテュポーンに苦しめられた経験のある荒垣と天田は強く警戒を見せる。
そして、ストレガにおいて索敵と気配隠蔽を担当していた事で、これまで前線に出てこず情報がないメノウに対して他の者たちは身構えた。
そんな七歌たちの様子を見ていた敵の三人は、僅かに横に移動して階段までの道を開けた。
世界を滅亡させようとしている敵が見せた、予想外過ぎる突然の行動に七歌たちは驚く。
まさか、この三人は世界の滅びに賛成しておらず、しかし、タカヤや幾月に強く反対出来ずにここまで来てしまっただけだと言うのか。
だが、もしそう思わせるために仕組んだ罠で、通ろうとしたところを襲ってくる可能性を考えると素直に信じ切る事は出来ない。
そうして、七歌たちが警戒を強めていれば、時間を使いたくないチドリが状況を動かすために敵へ話しかけた。
「……メノウ、どういうつもり？」
「見た通りだよ。そっちも急いでるんでしょ？　ボクたちも三人でそっちの全員を相手しきれるとは思ってない。だから、半分くらいならそのまま通ってもいいよって感じ」
メノウの言う通り七歌たちは急いでいる。
この場に留まった分だけニュクスの降臨に間に合う可能性が下がっていく。

だからこそ、七歌たちもいくつかのグループに分かれて敵と戦う事を想定して作戦を組んできた。
それはストレガたちも同じようで、フロアの広さから全面対決など出来ない以上、自分たちが勝つために敵を分断する事が最善だと判断したようだ。
であれば、事前に話していた通りにこの場に残るメンバーをすぐに決めて残るメンバーで上を目指すだけだ。
運が良い事に真田が落とし前を付けさせると言っていたカズキと、タフなペルソナの方が相性が良いと言っていた巨大ペルソナ〝テュポーン〟を持つスミレが同じフロアにいる。
戦うとなれば真田はまずカズキを狙っていくと思われるが、それでもテュポーンを完全に無視したりはしないだろう。
真田と荒垣、そして天田が残って戦おうとすれば、人選を見ていたメノウが冷たい目をしたまま口を挿んできた。
「ああ。でも、一人指名させて貰おうかな。チドリ、君はここに残ってね」
「貴女の実力で私と戦うつもり？」
「そうだよ？　君は知らなかったと思うけど、ボクは昔から君の事が嫌いだったんだ。少し早く出会っただけのくせに、大した力もなくて彼の枷にしかなってなかったくせに、ずっとずっと傍にいて彼の特別であり続け、一人恵まれた環境で生きることを許された君の事が大嫌いだったんだ」
被験体という同じ境遇にあった相手からの言葉に、チドリは僅かに目を細めて見つめ返す。
チドリだって別に楽な人生を生きてきた訳ではない。
湊の枷にならぬよう必死に力を磨いていたし、自分のために命を削って力を求め続ける彼を何度も止めようとしてきた。
恵まれた環境に置かれたからこそ、何も出来ない自分という存在が嫌になって、重荷になり続けるならいっそ命を絶った方が良いのではと考えた事だってある。
けれど、そんな事をすれば彼は壊れてしまう。

彼を自分から解放しようにも出来ないジレンマ。
外から見ればとても恵まれていて羨ましく見えただろうが、その環境に置かれた本人は途轍もない重圧の中で生き続ける事を強制されるのだ。
無論、それに見合うだけの幸福は得た。自分がとても恵まれていたという自覚もある。
ただ、何も知らない相手にゴチャゴチャ言われる事だけは気に食わない。
鎖付きのハンドアックスを持ったチドリは、相手の指名通りに残る事に決めて他の者たちを先へと進ませる。
「……ここは私たちで受け持つわ。貴女たちは先へ行って頂戴」
「ま、こいつらを倒して、俺たちもすぐに追い付くさ」
「七歌さんたちもどうか無事で」
既に戦闘に向けて集中している真田は黙っているが、荒垣と天田はそれぞれ不敵に笑って他の者たちに行くように言う。
メノウはメンバーの半数をここで相手すると言っていたのに、彼女の敵意はチドリに向いてしまっているようで、残るメンバーが全体の四分の一でも何も言ってこなかった。
時間が押しているためここでこれ以上の問答はしない。七歌たちは残るメンバーと視線を交わすと敵の横を通り抜けて上へ向かった。

＊＊＊

真田たち四人と分かれてさらに階層を登っていくと、再び大広間になったフロアに着いた。
チドリが残った事で探知能力持ちは風花のみになったが、彼女も今日まで仲間と共に自分なりの戦いを経験してきた。
今の彼女に昔のような気弱な雰囲気はなく、自分の役目を果たそうと瞳に強い光を宿してここにも二人の人間の反応があると告げた。
玖美奈と理が湊の相手として出ている以上、残る敵で二人組となればストレガのタカヤたちしかない。

そう思って七歌たちが大広間に入って行けば、予想通りに階段の前には楽しげに笑うタカヤと不機嫌そうに睨んでくるジンがいた。
「おやおや、思っていたよりも随分と人数が多いですね。カズキたちには半分ほど削って欲しいとお願いしていたのですが、面倒なチドリを削ってくれただけでも良いとしましょうか」
タカヤたちもチドリの放つ最大威力の攻撃は知っている。
時間をかけて溜めることで威力を上げていたのは分かっているが、大型シャドウと違って人やペルソナ相手なら攻撃範囲を絞る事も出来る。
その場合、下手をすると半分以下の溜めで同等の威力を発揮するかもしれない。
完全な死を一度経験しているだけあって、チドリは適性値も他のメンバーたちを遙かに凌駕しており、昔からの知り合い故に自分たちのペルソナに詳しい彼女の相手はタカヤたちも避けたかった。
どういった理由で彼女がカズキたちの許に残ったのかは知らないが、チドリがいないのであれば運が良いと笑っている相手に、静かな闘志の籠もった視線を向けた美鶴が話しかける。
「それで、お前たちも我々の中から数人足止めするつもりなのか？」
「フフッ、足止めですか。戦う前から勝利を確信しているような口振りですね」
美鶴の言い方では、タカヤたちがここに残るメンバーを一時的に押さえる事しか出来ないように聞こえる。
まさか、殺しを厭わない自分たち相手に、そこまでの余裕を見せてくるとはとタカヤは薄い笑みを深めた。
実際のところ美鶴にそういった挑発の意志はなく、むしろタカヤたちの相手は非常に骨が折れると考えていた。
事前に湊やチドリから得た情報によれば、タカヤは魔法に偏っているが全属性を使えるオールラウンダータイプ。
一方のジンは火炎がメインではあるが、アナライズで分析しつつ防御系のスキルも持っていて他にも電撃なども使ってくる。
そんな二人が銃や爆弾を使ってくるのだ。どう考えても余裕を見

せて戦う事など出来ない。
　相手は人殺しも平然と行える精神性の持ち主たちで、世界を滅ぼせるなら自分たちはどうなってもいいと捨て身で来る事も十分に考えられた。
　そうして、誰が相手をすべきかと美鶴が考えていれば、大剣を肩に担いだ順平が一歩前に出た。
「先輩、時間の無駄っすから行ってください」
「しかし、伊織の属性では……」
「順平君のサポートにはウチとコロマルさんが残るわ」
　順平の火炎属性はジンには効かない。その事は事前の説明で本人も分かっているはずだ。
　しかし、もしや忘れているのではと美鶴が声をかければ、ラビリスが自分とコロマルもここで足止めに残ると宣言した。
　ラビリスは物理型で、コロマルは闇も使えるがメインは順平と同じ火炎型。
　ここで美鶴は彼らがジンのメインである火炎を実質無効化する布陣で挑むつもりなのだと理解する。
　敵は物理スキルをほとんど持っておらず、逆に順平たちは全員が物理スキルも得意としている。
　魔法攻撃特化と物理攻撃特化。お互いの距離でハッキリと有利不利が出る戦いとなるだろう。
　だが、湊の仲間として戦って来たラビリスたちに、チームワークを意識して戦って来た順平なら絶対にやり遂げてくれるはず。
「順平、二人の足引っ張んないでよ！」
「いいから先行けっつの」
「姉さん、コロマルさん、また後で会いましょう」
「うん。絶対追い付くからそっちも頑張ってな」
　彼らが勝つことを信じて先へ進むことにした七歌たちは、それぞれ仲間にエールを送って階段を登ってゆく。
　ジンが通り過ぎようとする七歌たちに余計な真似をしようとした途端にラビリスが攻撃を仕掛け、コロマルと順平がタカヤの攻撃から

ラビリスを守って戦闘が開始した。
背後の戦闘音を聞きながらも、振り返る事なく走る七歌たちは仲間の無事を祈りながら先へと進んだ。

第四百三十三話　邂逅

影時間――タルタロス

仲間たちがストレガのメンバーを足止めしている間に、七歌たちは綾時という人格面が抜けたデスとの邂逅を果たすべく塔を上っていた。

途中の通路で出てきたシャドウを剣で切り裂き、移動を再開するため他の者たちの方を僅かに振り返った綾時は先頭を走りながら仲間に声をかける。

「戦いに入る前に行っておくけど、僕という人格を失ったデスはシャドウとしての本能と宣告者としての使命に忠実に動く機械のような性質を持った敵だ。アルカナシャドウの時に得た戦闘データも持っているから、相手があまり情報を持っていない僕や湊にチドリさんたちの方が相性は良かった」

これまでずっとアルカナシャドウとの戦いに参加してきた七歌たちは、その分、多くのデータを取られていると言える。

アルカナシャドウと戦っていた当時と今では能力も異なっているが、意図的にパターンを変えて読ませないようにしない限り、陣形や攻撃手順など戦闘の癖などはどうしても出てしまう。

敵はシャドウの王。これまでのどの敵よりも強いのだ。

そんな者を相手にするのであれば、僅かでも勝率を上げるために相手がデータを持っていない者、つまりは湊側に属していたペルソナ使いであるチドリたちをぶつけるのが最適だった。

けれど、彼女たち二人と一匹は既に別の戦いを始めてしまっている。

どんな敵にも対応出来る戦闘パターンを持っている青年も、現在二人の敵を一人で押さえているため手を離せない状況だ。

となると、この場にいるメンバーという括りにおいて、デスの相手をする人間も自然と限られてくる。

指揮官ではないため綾時はその人選を直接口にしなかったが、指揮官の少女が口を開く前に組織の責任者である美鶴が苦笑を浮かべつ

つ答えた。
「幾月の相手は私とゆかりでしよう。七歌たちはデスの相手を頼む。山岸も七歌たちの方へ向かってくれ」
「え、でも、理事長の能力がまだ分かってません。それなのに二人だけに任せてしまっていいんですか？」
「君ほどではないが私も少しくらいは分かる。なら、デスという未知の存在に能力の高い者を向かわせるのは当然だ」
綾時によれば、デスは分かれていた力の欠片であるアルカナシャドウが倒された際、集められた力と共にそのシャドウが手に入れた能力も取り込んだらしい。
マジシャンの持つ数多の腕、プリーステスの身体の一部を刃にする力、エンプレスとエンペラーの弱点と耐性を変化させる力など、能力の切り替えなどは必要なようだがこれまでに会った事がないほど多くの能力を持った敵だ。
その分、敵の解析と状況変化には素早い対応が求められる。
恐らく、戦いながら調べるような余裕を持てる相手でもないため、情報戦の専門家ながらトップクラスの防御力を持つペルソナに守られている事で護衛を必要としない風花はデス戦のサポートとして適任だった。
一方で、能力が未知数の幾月だが所詮は人間である。
風花やチドリの事前の索敵でも幾月の適性値は理や玖美奈より下だと判明している。
無論、相手は目的のために非合法な手段に散々手を染めてきた狂人なので、美鶴もたかが人間と侮ったりはしない。
それでも、二対一で数の利は美鶴たちにあるし、何より彼女たちには幾月との戦いを望む理由があった。
「やつが危険な事は私も理解している。ストレガの仕業かもしれないが、既に爆弾で殺そうとしてきた事は判明しているからな」
「でも、私たちも負けられない理由がある。皆を騙していた事、お父さんの最期の言葉を都合良く改竄した事、私たちと先輩のお父さんを殺そうとしてきた事、そういった全部をひっくるめてぶっ飛ばしてやら

ないと気が済まない」
心配そうに見てくる風花を気遣ってあえて乱暴な言葉で濁したが、美鶴もゆかりも幾月の事は心の底から怒っていて骨の数本は覚悟しろと思っていた。
ゆかりは自身の父が残した最期の言葉を改竄し、それを利用して自分たちを騙した上に殺されかけた事を今も恨んでいる。
美鶴も大切な仲間の親族が最期に残した言葉を利用した事は勿論、自分の父親を嘲笑って殺されかけた怨みは一日たりとも忘れたことはない。
相手と同じところに堕ちるつもりなど毛頭ないが、それでもただ無力化して拘束する程度では腹の虫が治まらないと断言出来る。
故に、戦力的に七歌たちの方が厳しい事に加えて、あくまでこれは自分たちの自己満足的なものだからと美鶴とゆかりは風花に七歌たちの方へ向かうように告げた。
「私たちは私たちの因縁に決着をつける。なに、すぐに追い付いてみせるさ」
「そうそう。だから、風花は七歌たちの方をしっかりサポートしてあげて」
「先輩、ゆかりちゃん……。分かった。理事長に出会った時にアナライズを掛けて情報を渡すから、そこから先は頑張ってね。また後で合流しましょう」
仲間を信じて戦いを任せる。以前の風花ならばネガティブな思考に囚われてそんな事は出来なかった。
けれど、ここまで一緒に戦って来たからこそ、彼女たちの強さは風花が一番よく分かっている。
楽な戦いという訳にはいかないだろうが、それでも彼女たちなら幾月に勝利して自分たちに合流してくれると信じられる。
七歌や綾時はそんな彼女たちのやり取りを聞いて小さく笑い。アイギスはデスとの戦いは任せろとばかりに強い瞳で頷いている。
下の階に留まった者たちも、幾月と遭遇すれば別れる美鶴たちも、恐らくはデスとの戦いには間に合わない。

仮に間に合ったとしても、彼らも自分を本気で殺す気で掛かってくる者たちを相手にしてくるのだ。
当然無事にと言う訳にはいかず、合流しても戦線に立てるかどうかは微妙なところだろう。
しかし、それでも彼らは絶対にやってくる。このまま時間が過ぎればニュクスが現われるのだ。彼らがその戦いに参加しないはずがない。
そうして、再び仲間と合流することを信じて上を目指し進み続けていれば、再びフロア全体が大広間になっている階層に辿り着いた。
まだここは最上階ではない。ただ、風花の話によれば後は階段ばかりで頂上を除けば実質ここが最後のフロアらしい。
もしかすると、相手は頂上で待っていて共通の敵を持つ者としてデスと協力するのではと思っていた。
綾時という人格が抜け出たデスに、人間の個体を区別するだけの判断力があるのかは分からないが、幾月とて一人で特別課外活動部のメンバーを何人も相手出来るとは思っていないはずだ。
相手はシャドウの研究をしていて、桐条グループの方でも分かっていない研究成果をいくつも持っている。
それを使えば人工的に強化したシャドウを操れる事も判明しているので、デスと幾月を同時に相手する覚悟を持っていたのだが、どうやら相手はデスをコントロール出来ないと判断したようで広いフロアに一人で待っていた。
このフロアは壁の一部が開いていて塔の外の様子が見えた。塔の外では時折炎や雷が弾け、カウンターの如く蛍火色の閃光が空を照らしている。
そんな、湊と玖美奈たちの戦いの光を見ていた幾月は、七歌たちがやって来たことに気付いて視線を向けた。
「やぁ、君たちか。随分と人数が少ないけど、ここにいない者たちを捨て駒の足止め要員として置いてきたのかな？」
「なら、理事長の傍に沙織たちがいないのは、勝てもしない八雲君相手に少しでも時間を稼ごうと特攻を命じたからですかね？」

七歌たちはあの場を仲間に任せてここまで進んで来た。
それを足止めの捨て駒だと言うのであれば、特別課外活動部のメンバーとストレガたち以上に戦力差のある敵に挑んでいる玖美奈と理は、足止め以下の単なる時間稼ぎの特攻でしかない。
挑発に皮肉で返せばレンズ越しに見える幾月の目が細められ、後ろ手を組みながら幾月は静かに怨嗟の声を漏らす。
「八雲ね。ああ、本当に忌々しい存在だ。そのまま死んでいれば良いものを、そこにいるデスの残り滓も含めてどこまでもこちらの邪魔をしてくれる」
幾月たちの策は上手くいっていた。幾月自身の死を完全に偽装出来た上で、ストレガと玖美奈たちが裏で動いてくれる事で、幾月自身の暗躍を完全に隠せていたのだ。
再び彼女たちの前に姿を現わした時には、アイギスの介入で捕らえたメンバーたちを解放されてしまったが、重傷の怪我人を抱えた彼女たちは人海戦術によって疲弊させて始末出来るはずだった。
だが、それも蘇った湊と封印から解放された綾時によって、あと一歩というところで阻止された。
二人が来るのが三十秒遅れていれば勝っていたのは確実に自分たちだったと断言出来る。
だからこそ、今また自分の願いを阻もうとしている人の姿をした化け物に幾月が黒く澱んだ瞳を向ければ、真っ直ぐその視線を受け止めた綾時は不敵に笑って返す。
「僕の正体に気付いていたとは驚いた。けど、その反応からすると上にいるデスは僕が抜けたせいで融通の利かない機械のような状態らしいね」
「やはり、綾時さんという人格のコアを失った影響は大きかったようですね」
「まぁ、僕はデスの存在を司っていたからね。あっちは湊が切り離した力だけだ。アルカナシャドウをさらに小賢しくした敵と思ってくれればいい」
頂上にかなり近付いて来たこともあってか、上からデスの放つ強い

気配を感じる。
ただ、幾月が綾時をデスの残り滓と言っていたように、頂上にいるデスは限りなく完全体に近いもののやはり不完全体でしかない。
幾月がデスを味方に出来なかったのもその辺りが理由だと察して、綾時は付け入る隙十分だと戦いに向かうべく七歌とアイギスに移動を勧める。
視線を交わすだけで意図を察した二人は、幾月を警戒しながらも頂上に続く階段に向けて走り出す。
幾月たちが会話している間にアナライズをしていた風花も、美鶴とゆかりに敵の情報を簡潔に伝えると他の者たちの後を追う。
「理事長のペルソナは一体。打撃以外の物理に耐性、電撃を吸収、火炎と光と闇を反射してきます」
「了解。後は任せてくれ」
「風花たちも頑張ってね」
「はい。二人もどうか無事で」
幾月の横を走り抜けて頂上に向かう階段を目指す七歌たちを幾月は見逃す。
下の階にいたストレガたちと同じように、数の不利を理解してわざと見逃すようだ。
心の中では鬱陶しい子どもたちをその手で潰したいと思っているに違いない。
しかし、それは不可能。幾月のペルソナに明確な弱点は存在しないが、アイギスの持つアテナの防御を容易く突破するほどの攻撃力はなく、逆に七歌と綾時は耐性を無視出来る万能属性の力を持つペルソナを宿している。
尚且つ、頂上を目指す者たちは特別課外活動部の中でも特に強い力を持っているメンバーだ。
それ故に幾月は彼女たちをこの場に留まらせるリスクを冒せない。自身と相性の悪い力を持っている上に戦力としても厄介なのであれば、デスと戦って勝手に潰れてくれた方がいい。
美鶴とゆかりは相性の有利不利はなく、遠距離攻撃を持っていると

言っても幾月を殺すつもりはないと分かっていれば色々とやりようがある。
階段を上っていく足音が遠ざかるのを聞きながら、幾月は黒い召喚器を自分のこめかみに当てて笑った。
＊＊＊
塔の外周部に沿って造られた頂上まで続く螺旋階段。
階段自体にも五メートル以上の幅があり、外側には腰の辺りまで伸びた柵もあるが、上層フロアのシャドウの巨大さを考えると安心は出来ない。
足場は悪いし範囲攻撃をされれば逃げるほどの広さもない。
頂上まであと少しなのだから、どうか出てくれるなよと思いながら七歌たちが階段を駆け上っていれば、再び遠く離れた空で炎や雷が弾ける様子が見えた。
「八雲君の戦いの光だね」
「攻撃パターンが多過ぎるっていうのに、セイヴァー一体の攻略も難しいからね。相手も必死みたいだ」
弾ける炎と雷の中をセイヴァーらしき蛍火色の残光が走り抜けてゆく。
離れた場所から見ていても炎と雷それぞれのスキルの威力が馬鹿げている事を感じる事が出来るというのに、速度を落とさずその中を突き抜ける事が可能となると戦っている方からすれば悪夢だろう。
有里湊、いや、百鬼八雲という青年は仲間である七歌たちにとっても未知の存在だ。
彼の精神は善性に偏っているが、悪意の有無を問わず他者を害そうとする存在を赦さず、それを排除しようとする時には躊躇いなく手を汚す。
誰かは彼を抑止力や必要悪と呼んだが、彼をよく知っている者からすれば行き過ぎた自己犠牲であり、単なる痩せ我慢でしかないと思っている。
他人を助けるために自分の心を殺し続ける。そんな生き方の何が楽しいのか七歌たちには分からない。

両親や被験体の子どもたちが死ぬ様を見てきた彼にとっては、他者の行動によって理不尽な目に遭う存在を見殺しにする方が自分が傷つくよりも辛いのかもしれない。

けれど、彼の事を大切に想っている者からすれば、自分の知らぬ間に彼がどこか遠くへ行ってしまうのではないかという不安が常に付き纏ってしまうのだ。

実際に、数ヶ月前の満月の日に彼はその生を一度終えた。

最強のペルソナ使い。心臓を破壊しても、腹をぶち抜いても蘇生し、正攻法で勝てる者など存在しない。

そんな自分たちとは違う。ある意味では化け物のような存在だと思っていたのに、彼がチドリを蘇生させて死んでしまうと、それを知った者たちは心のどこかで〝あぁ、やっぱり〟と彼の結末に納得した。

あんな事を続けていて長生き出来るはずがない。ある日突然別れが来ると誰もが無意識に思っていたのだ。

そこで人々はようやく彼も人間だったと思えるようになった。

そう。なったはずなのだが、彼はそんな者たちの想像を容易く飛び越え、完全なる死すらも覆して蘇った。

仲間である七歌たちですら未だに何があったのかよく分かっていないのに、最大の障害を排除したと思って安堵していた理たちからすれば、寝ている時に頭をハンマーで殴られた以上の衝撃を受けた事だろう。

七歌も一度桔梗組で敵対した事があるからこそ、あの青年を敵に回すのは精神衛生上良くないんだと実感が籠もった苦笑を漏らす。

「本当に八雲君と戦うのは疲れるんだよね。こっちが絶対的に有利な状況のはずが、針の先程度の本当に小さな綻びを見抜いて徐々に浸食してくるんだもん」

「そりゃ、そうだ。小学生の頃から裏の人間と戦って来たんだよ？圧倒的不利な状況なんて経験しすぎて慣れてるよ」

「子どもでそれに慣れる方がおかしいんだけどね。普通はその前に死んじゃう訳だし」

「そこは僕の力と彼の性質のおかげってとこかな」
幼い頃の湊は夢の中ではベルベットルームの住人たちと実戦形式の鍛錬を重ね、現実世界ではイリスや五代と一緒に裏の仕事をして経験を積んでいた。
ベルベットルームの住人たちという超越者を間近で見てきたからこそ、彼はどれだけ強くなっても先を目指し続ける事が出来た。
十年後の戦いを見据えて貪欲に強さを求めた彼の経験値はまさに桁外れ、同年代で彼を超える経験値を持つ者などいないだろう。
そんな人間が無限収納内にあらゆる武器を持ち、固有ペルソナは武器を取り込み強化して造り替える能力を有しているのだ。
敵対している側からすれば数では勝っているのに、相手の攻撃バリエーションが多過ぎて対応しきれないという、数の利を一切活かせない状況は悪夢以外の何ものでもないはず。
七歌たちも絶対に負けられない状況ではあるが、相手にとってもそれは同じはずで、よりにもよって一度殺した相手が最大の障害として立ち塞がるなどどんな気持ちだろうか。
七歌と綾時が敵に軽い同情を覚えていると、最後尾を走っていた風花がとある条件によってそこまで悪い状況には陥っていないのではと疑問をぶつける。
「でも、有里君は相手を殺さないと言っていましたよね？」
「八雲さんからすれば理さんも被害者なのでしょう。桐条の研究がなければ、自分という被験体がいなければ理事長が彼を生み出す事もなかった」
「それだけじゃない。ただのクローンなら別の生き方も選べただろうに、相手は湊の血を投与されて人格を上書きされてしまった。そのせいで彼は自分が何者なのか分からず悩んでいるんだ」
玖美奈が戦うのは父親の願いを叶えるためだと想像出来る。
だが、湊と同じ幼少期の記憶を持つ理は、幾月たちの行いを悪など認識しているはずで、どうして彼らに協力して世界を滅ぼそうとしているのかが分からない。
恩人だと思って協力しているのか、他に頼れる者がいないから付き

従っているのか、いくつかそれらしい候補を考える事は出来るがはっきりとこれだろうと思えるものはない。
　しかし、人としての心を持ちながらも人間ではない己に悩んだ経験を持つ綾時とアイギスは、自分が何者か分からず悩んでいる理の気持ちを少しだけ理解する事が出来た。
「自分を定義する上で最も重要な自我が他人のものとなると、彼の悩みは簡単には解決しないと思います」
「だろうね。僕やアイギスたちは人ではない生き方を選ぶ事も出来た。でも、彼は同じ人間だ。彼が僕たちのように別の生き方をしようとすると、自分を他人として定義して生きていく事になる。そんな訳が分からない事を出来る訳がない」
　人と機械、人とシャドウ、その二つの間で揺れていた綾時たちは、片方を諦めてももう片方として生きるという選択肢があった。
　しかし、結城理は百鬼八雲の自我と記憶を持っていながら、自分は百鬼八雲かそうでないかという問いの間で揺れていた。
　仮に百鬼八雲を選べば、クローンという事実がのしかかってくる。
　逆に百鬼八雲ではない事を選べば、彼の持つ百鬼八雲の記憶と自我が邪魔をする。
　どちらを選んでも矛盾が発生するため、似た悩みを持っていた二人は結城理がその問いに答えを出せるとは思えなかった。
　その話を聞いて少し考えこんだ七歌は、そもそも問い自体が間違っているのではと眉根を寄せつつ綾時らに尋ねる。
「でも、それって悩む部分間違ってない？　いや、意味としては分かるんだけど。欲しいのは自分は自分だっていう証だよね？」
「恐らくはそうです。ですが、七歌さんはその証を見つける事が出来るのですか？」
「まぁ、逆説的な感じで良ければっとぉっ!?」
　七歌たちが話しながら進んでいれば、突然階段の一部が爆発してそこから死神〝刈り取る者〟が現れた。
　幸いな事に下のフロアの天井をぶち抜く形で出てきた相手に巻き込まれた者はいない。

しかし、戦いづらいこの場で厄介な敵に遭遇してしまった事に七歌たちは表情を歪める。
相手は速度も力もずば抜けており、敵対者の状況などから判断して狙いを決める事も出来るため、ハッキリ言ってアルカナシャドウたちよりも強い。
デスと戦う前にこれの相手をするのかと七歌たちが武器を構えた時、
「外から高エネルギー反応っ、来ますっ!!」
風花の叫ぶような声が聞こえ一同は視線を塔の外に向けて硬直した。
直後、七歌たちは視界一杯に広がる蛍火色の光に飲み込まれる。
温かい霧や雲の中に入ったかのような不思議な違和感に包まれ、その光量に目を開けていられず全員が黙って瞳を閉じる。
これで刈り取る者に攻撃されれば一巻の終わりだなと七歌が無駄な事を考えていれば、自分を包んでいた違和感が消え、瞼の外に感じていた明るさも収まった事でゆっくりと目を開けた。
すると、周囲には目を閉じる前とほぼ同じ光景が残っていた。
ただし、たった一つだけ明確な違いもあって、それは彼女たちの前にいた刈り取る者の姿が消えている事だった。
突然外からの攻撃を喰らった時には七歌たちも驚いたが、その結果を見ると攻撃を放って来た犯人に対しての呆れが湧いてくる。
何とも言えない表情を浮かべたアイギスは、短い溜息を吐きながら遠く離れた空を飛んでいる光を見つめて小さく溢す。
「敵の最大戦力二人を押さえながら、こちらの状況まで把握して援護してくるとは正直思っていませんでした」
「まぁ、地球に戻ってきた時にも大気圏外から地表を薙ぎ払ってたからね。異形の存在のみを祓う浄化の力だから出来る事だ」
先ほどの光は刈り取る者の出現を感知した湊による援護射撃だった。
必死になって湊と戦っている二人は、その攻撃を受けるとペルソナが消えて飛べなくなるため回避に専念するしかない。

よって、二人を押さえる事に注力しながらも、浄化の光による攻撃を構えるだけで相手が勝手に離れてくれるため、雑な遠距離射撃程度であれば湊も他の者たちをサポートする事が出来た。
ただし、湊の援護射撃にはいくつかの条件をクリアする必要があると、移動を再開した七歌が他の者たちに伝える。
「八雲君の援護射撃だけど、多分、窓のない部屋とかだと壁に遮られて攻撃その物が届かないね。加えて、街の上空で戦ってるから、仮に窓があっても海側の部屋には射線的に届かない」
「さらに補足させて貰うと味方のペルソナも問答無用に消しちゃうから乱戦だと撃てないし。頂上にいるデスとの戦いに横槍を入れると、デスは湊を狙って街の方へ行ってしまうだろうから、僕たちの戦いを援護する事は出来ないね」
「ですが、おかげで厄介なシャドウは排除されました。今はこの一帯に浄化の力が残っていて敵も出てきません。急いで頂上まで行ってしまいましょう」
浄化の力は生命力を素にした攻撃的な回復スキルのようなものだ。
死と向き合う事で顕現させるペルソナも、死を求める事で抜け出てしまうシャドウも、命の光をぶつけられれば死のイメージが揺らいで存在を保てなくなる。
それは最凶のシャドウである刈り取る者も例外ではなかったようで、戦うつもりでいた七歌たちにすれば彼の援護はありがたかった。
だが、この後の戦いでは彼に頼ることは出来ない。デスが街の上空で戦い始めれば、その攻撃はどうあっても地上を焼くだろう。
理と玖美奈を押さえながら、さらにデスまで乱戦に加わってしまえば湊も街を守るため二人を殺さぬよう気を遣っていられなくなる。
アイギスを狙われた事や、チドリを一度殺された事に対して怒りを抱いた彼が、殺さずに済む方法があればそれを選びたいと願って戦いに参加したのだ。
であれば、七歌たちも彼がその結末に辿り着けるよう出来るだけ協力してやりたいと思う。
浄化の力が一帯に残っている間はシャドウが現れないため、その効

果が切れる前に頂上を目指し走った七歌たちは、長い階段を上り続けること数分、ようやく階段の終わりを見えた。
敵の気配は離れていて、待機状態のエネルギー反応なども特にはない。
これで待ち伏せや奇襲の可能性は消えたと、速度を緩めずに階段を上りきったメンバーたちは、開けた視界の中で頭上に輝く巨大な満月を見つめ、それから視線を正面にいる巨大なシャドウに向ける。
長大な剣を持ち佇む姿はある意味で異形の騎士と呼べなくもない。
スカートのように広がった下半身の黒い翼を除けば、人型の範疇に収まる姿をしていると言えるが、湊と戦っていた時の骸骨と比べて全く異なる姿と大きさをしている。
あれはシャドウとしての姿であり、力を取り戻した今の姿こそが本来の宣告者としての姿だというのなら、感じるプレッシャーも含めて納得がいく。
それに綾時も言っていた。一度あちら側に戻ったデスは本来持っているニュクスと同じ性質を取り戻すと。
つまり、七歌たちが対峙しているその存在は既にデスではない。それは女神ニュクスの分身、〝ニュクス・アバター〟である。

第四百三十四話　アルカナシフト

影時間――タルタロス頂上

雲に届きそうなほどの高さを持った奈落の塔。

その頂上に立った七歌たちは、頭上に輝く巨大な月に視線を向けてから七歌たちが上ってきた階段と真逆の位置に佇む存在に目を向ける。

少女らもストレガの一人が持っている巨大ペルソナを過去に見ていたが、宣告者としての姿を取り戻したデスもそれに匹敵する巨躯だ。

何もせずただ黙ってそこに存在している姿は、電源の入っていない機械を思わせる。

実際、相手からは生物のような気配も、シャドウたちのような異形の持つ存在感も感じる事が出来ない。

それでも相手からは周囲へ放つプレッシャーのようなものを感じ、七歌は随分と不思議な気配をした存在だと警戒しながら呟く。

「綾時君が抜けた影響か本当にただの機械みたいな雰囲気があるね。その分、なんでこんな重圧放ってるのか謎だけど」

「人間もただ立っているだけで何かしらの気配を出しているだろう？小動物からすればそれでも恐ろしいもので、敏感に感じ取って距離を取るわけさ。デス……いや、既にニュクス・アバターか。あれの放つこれも同じで、存在の位階が違っているせいで敏感に感じ取ってしまうんだよ」

デスからニュクス・アバターに変化した敵は、既にただのシャドウではない。

相手がシャドウであれば、同じくシャドウを宿している人間もそれを制御してペルソナに変化させることで対抗出来る。

対抗出来るという事はある程度は同格の存在と見なせるこという事であり、それであれば気配を感じる事はあっても重圧として感じる程ではない。

しかし、敵は既にシャドウから一つ上の存在に、神であるニュクス

に近い存在になってしまった。
綾時は元々自分が辿る変化だっただけあってニュクス・アバターの事を知っていた。
故に、自分たちが今感じている重圧はそういった存在の格が異なっているからだと説明すれば、敵のことを出来るだけ正確に把握しようとアイギスが続けて綾時に尋ねる。
「その存在の位階というのは人と神の違いと思っても？」
「そうだね。ニュクス・アバターは純粋な神ではないけど、強大な神であるニュクスの眷属だ。その辺の土地神なんかよりも神格は高い。でもまぁ、君たちも影時間直後に湊が放った気配を感じただろう？あれに比べれば全然大した事ないよ」
確かに敵は神クラス。しかし、神クラスと一括りにしてはいるが、保持するエネルギーも能力も当然違いがあって、司る力や持っている能力によってはただのペルソナ使い一人でも十分対抗出来る場合もある。
何より、シャドウから神の眷属としての姿に戻ったデスよりも、ニュクスと同等の神格を持った存在を受け入れ共存する事に成功した味方の青年の方が力は上である。
佇んでいるだけで七歌たちに重圧を感じさせる相手が神に分類される存在であろうと、力を抑える事をやめただけで数キロ離れた位置にいる者たちが居場所を把握出来る存在の方が危険だろう。
味方にそれだけの存在がいるのだから必要以上に恐れる事はない。綾時がそう言って笑えば他の者たちも笑って頷いた。
「よし。じゃあ、風花はこの階段付近で待機。場合によっては階段の下に戻る事も頭に入れててね」
「了解です。他の皆が近付いてくれれば伝えるから、皆もあんまり無茶しないでね」
よく小規模のチームを作るには四人一組が良いと言われる。
お互いのフォローや分断されても単独になりづらいなど理由はいくつもあるが、七歌たちも数の利を活かす時でもなければ四人一組を基本にしていた。

そして、これから挑む相手は本来ならその四人一組以上の仲間で挑むような存在なのだと分かる。
基本の四人一組に一人足りない三人で挑むなど無謀だ。たった一人削られただけで負傷者のフォローも何も出来なくなる。
いくら個々の能力が高く、ワイルドという敵の能力変化に対抗し得る能力を持っていようと、自分たちは分の悪い賭けをしようとしているんだと七歌たちは戦う前に理解出来ていた。
だが、必死なのは自分たちだけじゃない。仲間たちも戦っている。
自分を殺そうとしてくると言えど、同じ人間を相手に武器を振るうのだって辛いし恐いはず。
それに比べれば遠慮のいらない化け物が相手な分、自分たちの方が仲間よりもずっとマシだ。
「よし、いくよ！」
「ああ！」
「はい！」
消耗してやってくる仲間が到着する前にこの敵を片付ける。七歌が気合いと共に薙刀を持って駆け出せば、綾時とアイギスも左右に散開しながら追って駆け出す。
互いに一直線にならぬよう気をつけつつも真っ直ぐ敵へ迫る七歌と綾時に対し、大きく円を描くように移動しながら湊に貰ったリストバンドから銃を出して連射する。
二人と別の行動を取ったアイギスの狙いは牽制と情報収集。
七歌たちがメインとなって戦うには、敵に対する情報が不足している。
綾時は本来の自分自身の事として情報を持っていたが、あの形態で戦闘した事などなかった。
そのため、剣の切れ味も本体の耐久力も比較対象すらなく、実際にどの程度の能力を持っているか分かっていなかった。
不利な状態で敵本体の情報が少ないのはまずい。そこで七歌たちは遠距離攻撃が可能なアイギスに耐久力や反応速度を調べて貰う事にしていた。

今回の戦いに向けて湊はいくつかの銃に黄昏の羽根を含ませ、対シャドウ弾には劣るが対シャドウ銃という形で威力を上げている。
元々、ペルソナ使いたちが使えば本人の適性に応じた威力があったが、それを強化して武器自体に適性を持たせているのだ。
七歌たちが敵に辿り着く前にアイギスの放った銃弾が敵に当たって、金属にぶつかったような音が鳴る。
敵に近付きながらそれを確認した七歌たちは、怪しげな模様が発光している翼以外は全身が鎧のようなものだと判断。
元よりペルソナ中心で戦うつもりではあったが、さらに武器による攻撃は難しくなったと考え、七歌はその場で召喚器を構える。
「エウリュディケー！」
風を纏って現れたエウリュディケーが風の刃を複数生み出し、ニュクス・アバターの翼の片方にそれを殺到させる。
ペルソナと違ってシャドウは飛べない。飛べるタイプもいるが翼を持っていたりペルソナと同じように浮遊能力を有しているから飛べるだけだ。
であるならば、翼を持っているニュクス・アバターもそのタイプである可能性があると見て、七歌は鎧のような本体よりも耐久力が弱そうな翼を狙った。
「メサイア、メギドラ！」
それと同時に左側から回り込んでいた綾時もメサイアを呼び出し、剣を持っている手に向けて万能属性の魔法を撃ち込む。
ニュクス・アバターはどちらかと言えば魔法寄りの性能だが、物理攻撃が弱いわけではない。
近付けば間違いなく剣で薙ぎ払おうとしてくる。五メートルを超える大剣をシャドウの力で振るえばそれだけで人間は全力で避けるしかなくなる。
もしも回避が間に合わず咄嗟に武器でガードなどすれば、武器を破壊されてそのまま致命傷を受けるか、吹き飛んだ勢いでこの頂上から落下するだろう。
七歌と綾時がそれぞれ敵の機動力と武器を奪おうとすれば、今まで

黙って佇んでいたニュクス・アバターが七歌たちの方へ顔を向けながら感情の籠もらない声で何やら唱え始める。
《知恵の実を食べた人間は、その瞬間より旅人となった……カードが示す旅路を辿り、未来に淡い期待を託して。そう……とあるアルカナがこう示した……強い意志と努力こそが、唯一夢を掴む可能性であると……》
そう唱えたニュクス・アバターは自分を狙って放たれたメギドラを剣で払い霧散させ、その背中から剣を持った多数の腕を生やす。
七歌と綾時はその腕が何かを知っている。それは七歌が巌戸台に来たばかりの頃、最初の満月の日に現れたアルカナシャドウ〝マジシャン〟の能力。
階段付近で敵をアナライズしていた風花も敵の変化に気付いたようで、力の質自体の変化に僅かに驚きながら報告する。
「ニュクス・アバターの司るアルカナが魔術師に変化しました！　アルカナシャドウ〝マジシャン〟の能力が来ます！」
ニュクス・アバターの背中から生えてきた腕は、関節など存在しないのか一斉に伸びて七歌たちに迫る。
アイギスは距離を取りながらショットガンで迎撃、七歌と綾時はペルソナに対処させながら自分でも薙刀と剣で攻撃をいなして反撃の隙を探る。
今の敵は綾時という人格の核が存在しないため、攻撃は単に敵と認識した対象を排除するという機械的なものだろう。
複雑な思考が出来ないのであれば、誰かが囮になってフェイントを入れればそれに釣られて隙が出来る。
視線を交わして七歌たちは意思疎通を図り、次の瞬間に綾時が走り出してメサイアと共に敵の背後を目指す。
その場に留まる七歌と遠いアイギスよりも、マジシャンの腕を迎撃しながら自分に向かってくる存在の方が危険と判断したのか彼に向かう腕の数が増す。
次々と迫る剣と腕、メサイアは腰を覆っていた鎧を展開しブレイドウイングに変化させて舞うようにそれらを斬りつける。

メサイアを避けるようにして綾時に向かってきたものは、本人が危険だと判断したもののみ剣で攻撃を逸らしながら回避して前に進む。
綾時たちがニュクス・アバターに近付くほどに攻撃の勢いと数が増す。
そうして、最初の距離から半分ほどまで詰めたタイミングで、七歌はエウリュディケーを消して新たなペルソナを呼んだ。
「お願い、ジークフリード！」
剣を携え赤い鎧に身を包んだ戦士は、現れると同時に敵まで疾走し迫る。
七歌が新たなペルソナを呼び出した事には敵も気付いたようだが、マジシャンの腕は全てマニュアル操縦だと綾時から聞いていた。
多数の腕を綾時たちの対処に使っていた以上、突然迫る新たな脅威への対処はどうしてもタイミングが遅れる。
迫る敵を自身で排除すべく敵がその手に持つ剣を振り上げれば、そこでアイギスが構えていたライフルが火を噴いた。
飛び出した弾丸はジークフリードが迫るよりも速く飛び、ニュクス・アバターの仮面を僅かに掠って外れる。
大きな的だからと当たると思っていたアイギスは、咄嗟に相手が身体を引いて躱したのを確認し、心がなく機械的な割りに問題の把握と対処行動に移るまでが速いと内心で舌打ちする。
けれど、仲間二人の攻撃を囮にした奇襲を失敗しても、敵がしようとしていたジークフリードへの対処をほんの数秒だけ遅らせる事には成功した。
その間に距離を詰め切ったジークフリードは両手で持った剣で、下から振り上げるようにしてニュクス・アバターを斬りつけ後退させた。
「っ、駄目！　浅かった！　思ったよりも反応速度が速いみたい！」
ペルソナを通じて攻撃を当てた感触を知った七歌が咄嗟に叫ぶ。
ジークフリードの斬撃は確かに相手に当たり、目に見える傷を相手に付ける事には成功した。
しかし、それは人間で言うところの血である黒い靄が敵の身体から

漏れ出すほどの深さではなかった。
その程度のダメージであれば敵はすぐに反撃や別の行動に移れるだろう。
七歌がそれを警戒して味方に伝えれば、七歌が想像していたように敵は空へと飛び上がりながらマジシャンの腕を背中に戻して再び言葉を紡ぎ出した。
《そのアルカナは示した……心の奥から響く声なき声……それに耳を傾ける意義を……》
ニュクス・アバターの背中に戻っていくマジシャンの腕が光に包まれる。
そして、その光が弾けるように消えると、先ほどまで剣を持った腕だったものが側面が刃のようになった白い帯になっていた。
二体目のアルカナシャドウと戦った七歌と力の持ち主だった綾時は、それが何かすぐに理解し距離を取る。
だが、新たに現れた白い帯はマジシャンの腕よりも速く、七歌たちは対処のために足を止められてしまう。
「くっ、触れれば切れて、それ自体で縛り上げる事も可能なんて厄介なっ」
「アイギス、プリーステスの髪をマシンガンで殲滅させて！」
女教皇の持っていた聖典で出来た髪の毛は、攻撃その物の重さはマジシャンに劣るが帯のような形状のせいで七歌たちの攻撃が当たりづらい。
さらに攻撃を仕掛ければ巻き付き縛り上げて圧殺しようとしてくるため、近接攻撃はどうにも相性が悪い。
そこで距離を取っていて無事なアイギスに対処を頼めば、彼女は両手持ちの巨大な白い銃を取り出し返事と共に引き金を引いた。
「了解です！」
引き金を引いた途端にけたたましい音が響き、青白い光を纏った弾丸が赤い火の尾を引いて飛ぶ。
弾丸が纏っている光は明らかに黄昏の羽根と同質の光だ。
まさか、湊が用意した虎の子の対シャドウ弾を装填した銃を使って

しまったのか。
　攻撃を受けた白い帯が細切れになっていくのを見ながら後退した七歌たちが、敵への警戒を緩めずに離れた位置で銃を構えているアイギスに声をかける。
「アイギス、それ対シャドウ弾装填してある切り札じゃないの？」
「違います。これは八雲さんのセイヴァーによって造り替えられた対シャドウ銃です。弾丸を除く全てのパーツに黄昏の羽根と同じ力が宿っているため、これで撃った弾丸は全て対シャドウ弾とほぼ変わらぬ威力を発揮します」
「なるほど、でも、多用出来ない理由もあるの？」
「はい。僅かにですが使用時に力を吸われます。その分、一般人が使うよりも威力は上がるのでしょうが、継戦能力を考えると切り札としての使用に限定すべきかと」
　湊のセイヴァーには武器を取り込んで対シャドウ兵器に造り替える能力がある。
　それはセイヴァーの手を離れても残り、解除するには再びセイヴァーが触れて再び作り直す必要がある。
　一般人が使っても効果があるため、湊はそれらを大量に造ってＥＰ社と桐条グループに配っておいたが、湊のマフラーと繋がっているアイギスのリストバンドには一般人には使わせられない威力の兵器が入っていた。
　今、プリーステスの髪を薙ぎ払ったマシンガンもその一つ。重量を無視すれば一般人でも使えるが、ペルソナ使いが使えば僅かにエネルギーを消費するだけで、状況によってはペルソナ以上の効果を発揮する掃射が可能となる。
　おかげで助かった七歌と綾時はアイギスに感謝しつつ、上空で再び力を変化させようとしているニュクス・アバターを見つめる。
《そのアルカナは示した……生が持つ輝き……その素晴らしさと尊さを……》
　状況に応じて使い分ける可能性がニュクス・アバターのアルカナシフトは、ここまではアルカナ順になっている。

敵は人間が死に到るまでの旅路について語っているため、最後までアルカナ順である可能性が高い。
となれば、当然次は七歌にとって初めて仲間を失う事になった苦い思い出の敵、厄介は弱点変更能力を持つ女帝〝エンプレス〟の力が来るだろう。
ニュクス・アバターの背中から出ていたプリーステスの髪が光に包まれ消える。
そして、敵と七歌たちを隔てるように鉄の扉が空中に現れた。
一瞬何が出てくるのか分からなかったが、敵の能力解析に集中していた風花から仲間に向けて声が飛ぶ。
「その能力は弱点変更の攻撃版、魔法攻撃の属性変化です！」
「なるほど、それなら対処はそう難しくないね！　来て、メルキセデク！　アカシャアーツ！」
敵が魔法属性を変化させて攻撃してくるのなら、それらの弱点を持たぬペルソナを出せばいい。
七歌が金属の翼を持つペルソナ、正義〝メルキセデク〟を呼び出し。空に浮かぶ鉄の扉に向けて光を纏った拳から拳撃のラッシュを放つ。
勢いよく開いた鉄の扉からは炎が噴き出してくるも、それらを押し退けるようにして拳撃は進み開いた金属の扉に次々と着弾した。
「メサイア、メギドラで完全に破壊しろ！」
メルキセデクの攻撃で範囲攻撃が出来ていない鉄の扉に対し、綾時は開いた扉の奥に向けてメギドラを撃ち込む。
メギドラの侵入を許してしまった扉は、内部から破壊されるようにして爆発して消えていく。
弱点変更能力であれば面倒だったかもしれないが、ただ攻撃属性が変化するなら短期決戦で終わらせれば何の対処も必要ない。
消えていく扉を見て七歌が僅かに口元を歪めれば、ニュクス・アバターの持っている剣が光に包まれる。
どうやらエンペラーの能力再現はエンペラーの持っていた大剣らしい。

そも、弱点を持たぬニュクス・アバターにとって、エンプレスとエンペラーの弱点変更能力は必要のないものだ。
二体のアルカナシャドウの持っていた能力が、本来弱点を持っていないニュクス・アバターの力の劣化再現だったことで、このような逆輸入の意味のない再現になったに違いない。
そんな風に考察した七歌はここまでは順調だと呼吸を整え、新たなペルソナに切り替える用意をして敵の行動に備えた。

第四百三十五話　ストレガたちとの戦い

影時間――タルタロス

大きく横薙ぎに振るわれる巨人の腕を回避しながら天田は敵の隙を探す。

この広間に残ったのは敵からの指名を受けたチドリ、美紀を殺そうとした犯人との決着を望んだ真田、そして巨大ペルソナ〝テュポーン〟の相手が出来るタフネスを持った荒垣と足での攪乱も狙える天田の四人。

チドリと真田は様子を見ながら敵と一対一で交戦中、よって天田は荒垣と共にテュポーンの相手をしているのだが、やはり通常のペルソナと比べ三倍以上の体躯を持つというのはそれだけで厄介だった。

想定よりも大きく距離を取って回避したが、それでも風圧が届いて体勢を崩しそうになる。

「出やがれ、アルケイデス！」

そんな天田の無事を確認しながら荒垣はカストールから進化したアルケイデスを呼び出し、腕を振るってがら空きになった敵の脇腹に打撃スキルを叩き込んだ。

けれど、相手は僅かに身体が揺れた程度でダメージが通った様子がない。

思わず天田も苦虫を噛み潰したような表情になるが、タフネスのゴリ押しというのは攻略する上で非常に厄介だ。

攻撃をしても効かないのだから、極端な言い方をすれば敵以上の個の力で捻伏せるか、圧倒的な数の暴力で封じ込めるしかない。

だが、天田と荒垣にはどちらも不可能で、唯一の弱点とも言える召喚者はペルソナの後方にいるため狙えない。

チドリのヘカテーによるチャージ攻撃ならば突破出来るかもしれないが、彼女は今昔からの知人であるストレガの女性と戦っている。

「天田、お前は召喚者を狙い続けろ！　デカブツはこっちで引き付ける！」

「分かりました！」

言葉を交わして天田はテュポーンを迂回するように駆け出し、後方にいる召喚者の少女を目指す。
これまで彼女は一度も自分では戦おうとしてこなかった。それはペルソナだけでも十分相手出来たという理由もあるのだろうが、天田たちはそもそも少女には戦闘能力がないのではと考えた。
天田も貧弱な小学生なので単純な筋力勝負なら相手の少女に負けるだろう。
だが、天田にはこれまでの戦闘経験に加えて長槍という武器がある。
穂先で攻撃してしまえば殺す可能性もあるが、攻撃する場所を選んで柄で殴ればその可能性は限りなく低い。
相手は人殺しを平然と行なう敵だ。天田も最終決戦という状況で人間相手に戦う事を恐れたりはしなかった。
そうして、天田がテュポーンを無視して敵を目指せば、自分が狙われていると分かった少女がテュポーンを操って天田を排除しようとしてくる。
二匹の大蛇が絡まってそれぞれの足を形作っていたが、敵はそれを解除して四匹の大蛇にして天田を喰らわんと迫る。
「させるわけねぇだろ！」
天田へと殺到する大蛇の一匹に向けてアルケイデスが拳を放ち横っ面を殴る。
殴られた事で一匹が怯んで動きを止めれば、敵を殴ったアルケイデスの背中を駆け上がって跳躍した荒垣が別の大蛇の脳天に戦斧を叩き付けた。
ダメージは薄い。それでも攻撃を喰らった事で攻撃者の排除か天田の排除で悩んだのか動きが鈍る。
「アルケイデス、真ん中にぶちかませ！　デスバウンド！」
荒垣は大蛇の動きが鈍った間に飛び降りながら命令する。
命令を聞いたアルケイデスは上空に跳び上がり、落下する勢いを乗せながら地面にダブルスレッジハンマーを叩き込む。
地面に叩き付けられたスキルは衝撃波を生み出し、その衝撃波は四

匹の大蛇を襲った。
下から殴られたような衝撃によって大蛇たちの身体が浮き、それが足になっていた本体も無理矢理に両足を挙げられた形で体勢を崩す。
巨体の体勢を崩せた今が好機。天田が敵に向かって走り続けているのを確認して、荒垣は追加でペルソナに命じた。
「顎を狙え、ギガントフィスト!」
両手を地面に叩き付けていたアルケイデスは、素早く起き上がるとクラウチングスタートの体勢を取り、そこから勢いをつけて砲弾の如く飛び出す。
敵に向かって飛びだしたアルケイデスの浅黒い肌をした右腕が灼熱に染まり、その腕が赤を超えて黄色い光に包まれてゆく。
地面から敵の頭部まで一直線の光が伸びれば、自身とほぼ同等のサイズをした敵の頭部の顎に向けて渾身の一撃が放たれた。
崩れかけた体勢にダメ押しの一撃を受け、テュポーンの巨体が傾いていく。
これで天田が敵まで辿り着ける。そう思っていれば、敵の少女の声が耳に届く。
「テュポーン、アローシャワー!」
これまで体躯を活かした純粋な体術のみで戦っていたせいで、荒垣も天田も敵をそういった特性のペルソナだと思っていた。
けれど、ここに来て敵がスキルを使ってきた。
倒れゆくペルソナの足だった四匹の大蛇の口から上空に向けて光の矢が放たれ、それらが重力に従う形で上空から降り注ぐ。
元々、アローシャワーは貫通属性の広範囲攻撃。それをそれぞれの口から放たれているせいで、通常の倍の範囲に倍以上の密度で光の矢が降り注ぐ。
拙い。一瞬で考えをまとめた荒垣は自身も天田の方へ向かいながら、アルケイデスを先行させて天田に覆い被させる。
自分がそこまで向かうのに間に合わないと判断し、途中で戦斧を傘代わりに頭上に掲げれば、光の矢が豪雨の如くアルケイデスと荒垣を襲った。

頭上に掲げた戦斧を光の矢が絶え間なく叩き続ける。
中途半端に持っていれば勢いに負けて戦斧を手離してしまうだろう。
故に、戦斧をしっかりと掴むしかないのだが、その掴んでいる手にも光の矢は振ってくる。
指は無事、手の感覚も死んでない。それでも少なくないダメージに掴む力が弱まりそうになり、歯を食いしばって耐え続けた。
そうして荒垣の手が血に染まっていけば、ようやく光の矢が収まった。

＊＊＊

同じ空間で天田と荒垣が光の矢に襲われている時、真田は美紀を殺そうとした犯人であるカズキと戦っていた。
歯を見せながら笑う相手の振るったカットラスに右のジャブを当てて弾きながら距離を詰める。
ここは自分の距離。それを示すように低い位置に構えていた左でボディを殴りつける。
だが、相手も攻撃を弾かれた時点で後退しようとしていたらしく、後ろに逃げる相手に当たった攻撃の手応えは軽かった。
「ヒャハハハッ！　ンだ、その甘っちょろい攻撃はよォ！　身内殺られかけた報復にしては随分とお優しいこったなァ！」
後ろに飛び退くようにして攻撃を受け流したカズキは、着地と同時に再び踏み込んで真田に斬りかかる。
振り下ろした攻撃が躱されれば、返す刀でさらに迫り、それすらも躱されれば回し蹴りで追撃する。
特定の型を持たない喧嘩殺法だが、右手に持っている剣と適性によって強化された身体能力から繰り出される蹴りは侮れない。
強引に距離を詰められた真田は相手の蹴りを両腕でガードしながらわざと吹き飛び、距離を開けて着地して体勢を立て直す。
「お前ら程じゃないさ。毎回こちらを殺すような様子を見せておい

て、結局一人も殺さずにいてくれたからな」
　これまでカズキたちは本気で特別課外活動部のメンバーたちを殺そうとしていた。
　だというのに、成功したのは玖美奈と理による遠距離狙撃でチドリを即死させた一度のみ。
　それだって湊が死を覆し、蘇生した代償に自身が死を迎えるも、エリザベスの協力を得て青年も蘇ってきた。
　これまで仕事で散々人を殺してきたというのに、自分たちの計画の障害となる者たちは誰も殺せていない。
　真田がそれを皮肉って挑発すれば、カズキはさらに口の端をつり上げて獰猛な笑みを見せる。
「言うじゃねェか！　なら、ペルソナ勝負と洒落込もうぜェ！　殺れ、モーモス！」
「カエサル！」
　カズキの頭上に、全身を薄汚れた包帯で覆い、死神を思わせる鎌を持ったペルソナが現れる。
　それに応じるように真田の頭上には、地球を模した球体と剣を持ったペルソナが現れる。
　二体は召喚者の意志に応えて距離を詰め、その手に持った武器を振るって衝突した。
　剣と鎌がぶつかり火花が散る。お互いに押し合いになって退がるも、再び前と踏み出して武器をぶつけ合う。
　ペルソナ同士をその様に戦わせながら、召喚者たちもそれだけに任せておけるかと自分たちも前に出て再び攻撃を繰り出した。
　真田の身に付けた金属製のナックルとカズキのカットラスがぶつかる。
　僅かにでも受け方を間違えれば拳に刃が当たるというのに、真田は構わず剣と拳で渡りあう。
　時に受け止め、時に弾き、それが難しければ躱して距離を詰めていく。
　真田は本来パワー型ではない。左利きである事とスタミナとフッ

トワークを活かしたアウトボクサースタイル。それが中学時代から学生チャンプであり続けた彼の戦い方。
けれど、湊の戦いを見て、彼の体運びを見て、対シャドウという実戦を重ねる事による異種格闘技戦でのインファイトを学んだ。
武器を持とうと身体能力が強化されていようと、対峙している相手は自分と同じ人間。
であれば、恐れる事など何もない。真田は戦いを加速するにつれて周囲がはっきりと見えるようになっていく。
「……遅いな」
小さく呟いた真田は、横に体重移動しながら身体を沈みこませ、服の袖をほんの僅かに切られながらも攻撃を完全に見切り拳の距離まで詰める。
昔、湊との再戦を望んだ際にチドリから教わった攻撃の予測線。それを視覚と感覚の両方で捉えられるように鍛え続けてきた。
周りの景色がはっきりと見え、自分の身体をミリ単位で正確に動かせる今の状態であれば、相手の動きに合わせてそれを放つ事が出来ると感覚で分かる。
真田はこれまでジャブばかり放っていた右腕に力を入れ、相手の顎に視線を向けながら肩ごと右腕を僅かに下げた。
それを攻撃の予兆と判断したカズキは顎を引きながら再び後ろに飛び退こうとする。
だが、それは真田が放った幻の拳。視線による殺意の籠もったフェイントだ。
「そう何度も同じ手が使えると思うなっ!!」
「ぐがっ!?」
攻撃を避けつつ飛び退くために重心が不安定になっている。その一瞬を狙っていた真田はさらに相手までの距離を詰めて本命の左ストレートで相手の左肩を殴りつけた。
体重移動の途中で左肩を殴られたカズキは、中途半端な体勢で飛んだせいで空中でバランスを崩し、着地に失敗して背中を打ち付けて顔を顰める。

仰向けに倒れたその状態からすぐにブレイクダンスのような動きで起き上がった反応は凄まじいが、お互いにギリギリの距離で激しく攻守を入れ替えていたのだ。
均衡を保っていた戦況は真田の優性に僅かに傾き、それがジワジワと精神を蝕んでゆく事は避けられない。
加えて、カズキは背中を打ち付けた際に息を詰まらせ、それが原因で起き上がった今も呼吸が乱れている。
人は酸素を取り込み続けないと動けない。その酸素の供給が乱れたという事は、激しく動き回る戦いにおいて致命的なディスアドバンテージになり得る。
相手もそれを理解している以上、これまでより強引な方法で有利を奪い取ろうとしてくるはず。
ならば、自分はそれらを捻伏せ完全な形で勝利して見せようと、真田は斬りかかってきた相手に向かって距離を詰めた。
＊＊＊
チドリとメノウ。それぞれが召喚したペルソナの放った炎と氷が激突して水蒸気を撒き散らす。
湊の心臓を移植されて蘇ったチドリの力は、湊の影響を受けて全ての魔法属性を扱えるように進化した。
また、死を経験した事でアルカナ自体も変化しており、今の彼女のペルソナは死の先のアルカナを司る月〝ヘカテー〟となっている。
大きな杖を持ち、紫の色のローブを纏ったヘカテーは、相手の弱点を火炎だと見抜いて攻撃を繰り出していた。
「……同じアナライズの力を持っているなら、貴女だって自分の不利を理解しているでしょうに」
敵であるメノウのペルソナはニュクスの子であり『不法』を司るとされる正義〝デュスノミア〟。
長い銀髪を持つ女性型のペルソナだが、体表から数センチが水色のガラスのような物で出来ている姿はどこかマネキンのようであり、その右手には鎖に繋がった拷問器具〝鉄の処女〟を持っている。
デュスノミアは言ってしまえばチドリの持っていたメーディアの

氷結属性版の性能だ。
索敵とアナライズ能力を持ち、氷結属性と状態異常魔法を使うことが出来る。
ただ、特定の弱点を持たなかったメーディアに対し、デュスノミアには火炎の弱点がある。
ペルソナは精神の具現。メノウ自身に何かしら火を苦手とする気持ちがあるからこそ、それが弱点として現れたのだろう。
アナライズで個々の能力を把握してきたチドリも、これまでその理由を考えた事などなかった。
エルゴ研を離れた後は、湊と違ってストレガたちに会うことはほとんどなかったし、それぞれの持つペルソナの能力を把握する事はあってもそれを本人のパーソナリティと結び付けるという発想がなかった。
けれど、エルゴ研を離れて九年。最後の戦いの日にようやくその理由を理解出来た。
水蒸気で視界が塞がるも索敵で状況を把握していたチドリが移動すれば、先ほどまで自分がいた場所を鎖に繋がった鉄の処女が襲う。
金属の塊である拷問器具が飛んできた方向に視線を向ければ、殺意と憎しみの籠もった瞳をチドリに向けるメノウがペルソナと共に立っていた。
「不利だからなんだって言うのさ。ボクたちの相手がせいぜいのくせに神に挑もうとしてる人間の言葉とは思えないね」
「……そうね。不利だと把握していても、納得出来ない以上は諦める理由にならないわね」
メノウのデュスノミアの持つ火炎属性の弱点は、想い人である湊の傍に居続けるチドリへの感情が原因だろう。
何故チドリなのか、どうして自分では駄目なのか、そういった想いが膨れあがってチドリの象徴であった火炎への弱点を持ってしまった。
湊という憧れに手を伸ばす道もあっただろうに、メノウはその憧れの存在の〝特別〟になったチドリへの負の感情に囚われた。

今も制御剤を飲み続け身体を蝕まれ続けている彼女にとって、早期に制御剤が不要になりその痛みと苦しみから解放され、湊のおかげで普通の生活を手に入れた少女の存在はどのように映っているのか。
チドリが何ともやりきれない気持ちになっていれば、デュスノミアが何かのスキルを発動させてその身が赤い光の膜に包まれる。
「ボクだって彼に助けられた時のままじゃない。いつかチドリに勝つために、戦う時が来た時のために新たな力を手に入れていたんだ！」
敵が赤い光の膜に包まれると、先ほどまであったはずの火炎属性の弱点が消えていた。
今も明かり光の膜があると言うことは、恐らく永続的なものではなく、スキルで一時的に耐性を得ているのだろう。
アナライズの適性を持っていたメノウとジンは、研究所時代に湊と研究者たちが耐性付与スキルの話をしているのを聞いていた。
ペルソナを鍛えても成長によって弱点が消えなかったメノウは、きっと途中で方向性を変えて一時的に耐性を付与するスキルの獲得を目指したのだろう。
今のメノウはチドリを殺す気でいる。自分にとって越えるべき存在を相手に、一歩も引かずに渡り合えている。
自分は相手に負けていない。自身と敵は対等であるという意識が、弱点を一時的に消すスキル〝赤の壁〟を手に入れるに到らせた。
氷結魔法を放ちながら迫る敵のペルソナを見て、チドリはヘカテーに電撃魔法で応戦させる。
力を吸収される氷結と耐性を付与した火炎でなければダメージは通る。
最も得意な火炎を封じられたのは確かに厄介だが、全ての魔法属性を持ったヘカテーであれば、完全にスキルを封じられる事はない。
であるならば、どうすれば勝てるだろうかとチドリは考え始める。
魔法属性はチドリの方が多彩。
適性値も完全な死を経験し湊の心臓と細胞というブーストアイテムで強化されたチドリの方が圧倒的に多い。
最大火力もチドリの方が上だが、それは力を溜める必要があるので

通常の戦闘で言えば威力にそう差はないだろう。
チドリに相手を殺す気がないのに対し、メノウはチドリを殺す気でいるため、その意識の差が攻撃の威力や勢いに影響する可能性がある。
そうして、自分と相手の能力の差を一つ一つ明確していきながら、思考を切り替えたチドリは魔法で応戦しつつ勝つための方法を模索し始めた。

第四百三十六話　タカヤの主張

影時間――タルタロス

チドリたちがそれぞれの相手と戦っている頃、順平たちは連携してタカヤとジンの相手をしていた。

自分にも叶えたい願いがあるが、それは相手も同じ事。

これまでずっとお互いの邪魔をし合ってきた関係も今日で終わりだ。

だからこそ、さっさと倒れろと順平はペルソナを召喚して敵に向けて広範囲に炎を放つ。

「こい、トリスメギストス！　マハラギダイン！」

賢者の石を持つ魔術師は飛び上がって炎の津波を引き起こす。

耐性を持たぬラビリスは、攻撃に巻き込まれぬようコロマルのケルベロスの背に乗って待避する。

けれど、ただ逃げるだけでなく、いつでも攻撃に参加出来るように多数のギミックを持つ戦斧の銃口を敵に向けておく。

相手もラビリスの戦斧が普通の武器ではないことには気付いている。

よって、当然のように警戒はしているだろうが、馬鹿正直に正面に立って攻撃するわけではない。

彼女の狙いは敵がトリスメギストスの攻撃に対処したタイミングだ。

階段の近くに陣取っているストレガたちは、迫る炎の津波を見て召喚器を手にしたジンが前に出た。

「んなもん効くかい！　モロス、返したれ！」

重ねたコマのような金属の身体をしたモロスが現れる。

ストレガたちの前に立ったモロスは、炎の津波に対して受け止めるように手をかざすとそれが触れた途端に逆に押し返して見せた。

モロスの持つ耐性には火炎反射がある。

無効ではなく反射。つまり、効かないどころか攻撃を敵に返す事が可能なのだ。

敵を飲み込まんと進んでいた炎の津波が返ってくる。
逃げ場のない壁のように自分へと戻ってくる炎を前に、順平は静かに大剣を構えたまま動かない。
生き物は本能的に炎を恐れる。
火に慣れている人間は、その恐ろしさを知っているからこそ強く恐れるし、動物たちは本能でそれが危険だと感じて逃げる。
しかし、順平は迫る炎が自分を傷つけないと知っていた。
「うぉぉぉぉぉぉっ!!」
迫る炎に向かって吠えながら駆ける。
その距離は徐々に縮まり、五メートル、三メートル、一メートルときてついに零になった。
炎に触れた順平だが、その炎は彼と彼が身に付けた物を一切焼くことなく進む。
そして、炎の中を突き進んだ順平は、抜けた先で待ち構えていたモロスに向けて横薙ぎの一閃を喰らわせた。
「おらぁっ!!」
順平の持つ大剣とモロスの金属の身体が接触する。
ガキン、と金属同士がぶつかり合う甲高い音がフロアに響き、モロスの身体に横一線の傷が入る。
ペルソナの受けたダメージがフィードバックされたジンは忌々しそうに表情を歪め、腰につけた手榴弾を投げつけようとする。
だが、そうはさせないとケルベロスの背中で隙を窺っていたラビリスが弾丸を撃ち込む。
近接攻撃が主体の彼女が撃った弾丸の狙いは甘い。そのまま受けても恐らくは致命傷にはなり得ない。
元々、ラビリスには銃火器の制御機能は搭載されていなかった。対シャドウ兵器の火器制御系はアイギスのように正式採用機になってようやく搭載されたのだ。
ＥＰ社製のボディに切り替える際、湊が七式アイギスの設計図とデータを持っていたため、他の者たちと協力してそれらの機能も搭載しておいた。

搭載しておいたのだが、元々の戦闘スタイルに合わないという事で彼女はそれを然程練習せず、そこから人間の身体になった事で精密射撃には慣れていなかった。
しかし、今ここでは敵に向けて銃を撃つというのが重要なのであって、仮にジンから数十センチ離れた位置を通過しようと問題ない。
モロスに攻撃した順平を攻撃しようとしていたジンは、自分が銃で狙われたと判断して手榴弾を投げるまでに数瞬遅れた。
一撃離脱を考えていた順平はその隙に後退し、ジンが手榴弾を投げてきても対応出来る体勢を作る。
それを見たジンは苛ついた様子で手榴弾を投げ、空中で爆発したそこから飛んできた破片を順平は剣で防いだ。
だが、順平とジンの戦闘にラビリスが介入出来たということは、それは敵側の人間も介入出来るだけの隙があるということ。
ジンの背後から出てきたタカヤの銃が、大剣で視界の塞がる順平に向けられる。
彼の持つ銃は熊すらも一撃で屠り得るという、二〇一〇年現在世界最高の威力を持つと言われるリボルバー。
ペルソナ使いとそれが直接身に付ける装備は適性の恩恵で強度が上がるものの、逆に敵のペルソナ使いの装備も強化されてしまうのだ。
そのため、直接触れる近接武器に比べて強化が薄れる銃弾だとしても、元々の威力が馬鹿げている以上喰らえばただでは済まない。
気付いたラビリスが助けに入ろうとする前にタカヤの銃が火を噴く。
放たれた弾丸は手榴弾の破片を防ぎきって防御を解き始めていた順平に真っ直ぐ向かう。
本人も突然聞こえた銃声とジンの傍で嗤うタカヤを視界に捉えて気付いたのだろう。
咄嗟にもう一度大剣で防御しようとするが、高速で飛ぶ小さな弾丸を見切るのは難しい。
不完全な形でしか大剣を構えられず、銃弾が順平の脇腹を抉ろうと

したとき、白い影が順平を庇うように飛び出してきた。
「アオーン！」
飛び出してきた白い影、その正体であるコロマルは順平と銃弾の間に身体を割り込ませる。
自分を庇って飛び出してきたコロマルに気付き、順平が思わず武器から片手を離して伸ばすも間に合わない。
無防備に晒されたその身体に銃弾が触れようとした時、光の壁が発生してその銃弾を明後日の方向へと弾き飛ばした。
味方がやられると思っていた順平とラビリス、敵戦力を削れると思って嗤っていたタカヤとジン。
その双方が何が起こったのかと目を見開いて驚愕する。
けれど、仲間を助け、自身も無傷で着地したコロマルはラビリスが背中から降りて自由になっていたケルベロスを敵へと差し向けた。
「ワンッ！」
「ちぃっ、どないなっとんねん。あの犬！」
尾の部分から炎を噴き出して加速しながら迫るケルベロスに、ジンは訳が分からないままモロスで応戦する。
人間よりも遙かに冷静に戦況を見極め、戦場を駆ける一匹の犬。
元々、人間よりも小柄で足が速く戦闘をかき乱してくるというのに、人よりも死を本能的に理解している事で適性まで高いと来ている。
湊が拾って仲間にしたと聞いているが、彼にかかればペットまで普通ではないのかと駆け回る犬を見てストレガの二人は対処法を考える。
一方、コロマルに庇われて無事だった順平は、コロマルが敵の注意を引いてくれている間に後退してラビリスと合流した。
先ほどの光の壁は何だったのか。順平がそれを尋ねようと思って口を開きかければ、相手の質問が分かっていたようにラビリスが先に答える。
「あれはハイパーカウンターっていう確率で発生する物理反射スキルやねん。自動防御やから本人が意識せんでもええみたいやけど、湊君

とかコロマルさんみたいに勘が鋭いタイプやといけるタイミングが何となく分かるらしいわ」
「すげぇな。けど、失敗したら無防備に攻撃喰らってた訳だろ？　助けて貰えてありがてぇけど、無茶しすぎだっつの」
順平たちの視線の先では衝突した状態で拮抗し、そして共に消えていくペルソナの姿があった。
ペルソナが消えた事でコロマルも順平たちの許に戻り、お互いの無事を喜ぶように一鳴きすると、再び敵の方へと視線を向ける。
順平たちは小さなダメージは負ったものの、体力も精神力もまだまだ残っている。
しかし、それは数で上回っている順平たちを相手にしていた敵も同じ。
敵は順平たちを殺す気で来ているが、順平たちは殺さずに倒そうとしている。
手足や肋骨などをへし折るくらいなら順平たちも許容する。むしろ、散々こちらを殺そうとしてきたのだから、それくらいの制裁ならしても良いだろうという考えだ。
どうしても駄目なら敵を殺そうと割り切れている者など、仲間側には湊しかおらず、それだって彼の力があってそれを選ぶ必要がある状況ならしょうがないと思えるくらいには順平らも現実的な考えを持てている。
この戦いに敗れれば世界は終わるのだ。そんな状況で敵でも殺すなどと言える訳がない。
しかし、順平たちは湊ほど割り切れない。そのせいで攻めきれず仕切り直しになってしまったが、敵が銃や爆弾を使ってくるせいで順平も本人が思っているよりも緊張していたらしい。
僅かな時間でも休めるなら、今の内に呼吸を整えようと静かに息を吸う。
すると、それを黙って見ていたタカヤたちは、倒せずとも足止め出来ているなら問題ないと割り切っているのか薄い笑みを浮かべ声をかけてきた。

「貴方たちはやはり傲慢だ。大切な物を守るために、自分たちの世界を守るために戦う。成程、実に真っ当で素晴らしい理由です。ですが、それも結局は自分のため。恵まれた環境で生きてきたからこそ、その地位や財を失う事に耐えられない。自分たちの今の生活環境を守るためならば、他者の願いを踏みにじる事に一切の躊躇いを持たない」

順平たちは自分たちの大切な物とこの世界を守るために戦うと言っている。

けれど、それは恵まれた今の環境を失う事を恐れ、世界の変革を望む者たちの願いを否定する行為だ。

自分たちが良ければそれでいい。どれだけもっともらしい言葉で装飾しようと、彼らの戦う理由は結局そういった事でしかない。

それでよくもそこまで正義ぶれるものだとタカヤが嗤えば、勝手な事を言うんじゃねえと順平が反論する。

「ふざけんな。今あるモンをぶっ壊そうとしてるテメェらを止めようとしてるだけだろうが！」

タカヤたちの言葉は敵対する者の戦う理由を悪意を持った捉え方をしているだけだ。

どこまで捻くれればそんな捉え方になるんだと順平が返せば、彼の言葉を聞いたジンが鼻で笑う。

「アホ抜かせ。馬が車に、ソロバンが電卓に、それと何が違うか言うてみい。古いモンは淘汰されて、新しいモンが時代を切り開く。それがわしら人間の辿ってきた歴史やろが」

「それは単なる技術の進化だろうが！　文明リセットと同列に語るんじゃねえよ」

「順平君の言う通りや。それが人類の発展のためなら同じやろうけど、あんたらのそれはちゃう。ニュクスの滅びは歴史の終焉。今の文明を終わらせた先があるんなら主張の衝突で納得も出来るけど、今の世の中を壊して終わらせたいなんて、愉快犯の戯言に付き合う気はないわ」

ジンは世界の変化をこれまでの人類が辿ってきた歴史と同じもの

だと語る。
しかし、ニュクスの齎す滅びは世界の終焉。動物も植物も形を失い。死の惑星となった地球に残るのは人の枠から外れた存在となった青年ただ一人。
以前、幾月は今の世界を真っ平らな虚無の王国だと言っていたが、ニュクスの滅びを迎えた先の未来こそその呼び名に相応しい世界と言えるだろう。
ジンたちの話は時間稼ぎの言葉遊びでしかない。そう判断した順平たちはペルソナを呼び出し、敵もそれに応戦するようにペルソナを呼び出してスキルを放ちながら言葉を続ける。
「ですから、それは恵まれた環境にいるからこそ出てくる言葉なのです。貴方たちはただ普通に生きてきたつもりでしょうが、世の中には我々と同じように〝持つこと〟を許されなかった者たちが存在する」
タカヤのヒュプノスが舞い上がりながら突風を起こす。
疾風属性の弱点を持つ順平はペルソナと共に下がり、代わりにラビリスとアリアドネーが赤い糸で出来た盾を展開して魔法を受け止めた。
攻撃を防がれた事を確認したタカヤは、銃でアリアドネーに攻撃を加えて足止めすると、その隙にジンの呼び出したモロスが茶色い煙を噴射して視界を奪う。
「貴方たちは全てを失う事をゼロだと考えるのでしょう。ですが、我々はその先であるマイナスがある事を知っている。生きるという事が辛く苦しい。それらから解放されただけのゼロの状態を幸せだと考える者の気持ちなど分からないでしょう」
茶色い煙に視界が奪われると、音で敵の位置を判断したコロマルがケルベロスで音の方向に炎を放った。
けれど、その先にいたのは火炎反射の能力を持つモロスで、モロスが炎を跳ね返すのに合わせて上で滞空していたヒュプノスがいくつもの氷の槍を降らせた。
狙われたコロマルはそれらを次々と躱し、味方が狙われている事で逆にフリーになったラビリスが赤い糸で作った多数の剣を浮かべた

アリアドネーと共にタカヤたちへと迫る。
もっとも、タカヤたちも簡単には距離を詰めさせる気はないようで、ジンが複数の手榴弾をラビリスの進行方向にばら撒く。
爆弾が飛んできたのを察知したラビリスは接近を諦め、先行させたアリアドネーの糸で作った剣でばら撒かれた爆弾を空中で落としていった。
足を止めたラビリスと、その後方で攻撃のチャンスを狙っている順平を視界に納めながら、ジンに攻撃を仕掛けるコロマルに牽制の銃弾を飛ばしつつタカヤは続ける。
「確かにニュクスの滅びは現代社会の終焉かもしれない。ですが、その先がないと何故言い切れるのですか？　ニュクスを求めた者たちは不平等な社会の滅びを願っただけです。文明が滅び太古の地球と同じ世界で生きていく事までは諦めていません」
「そんな世界はやってこねーよ！　ニュクスが来たらそれで終わりだ。オレもお前もそいつらも、文明と一緒に全員まとめて人生リセットするっつーの！」
コロマルを狙って攻撃するタカヤに向けて、トリスメギストスが炎の弾丸を連射する。
自分が狙われた事でタカヤが回避行動を取ったため、攻撃が止んでコロマルが再び自由になる。
そのチャンスを無駄にしないよう小刀を咥えたコロマルは駆け出し、ラビリスのアリアドネーとタイミングを合わせてジンに攻勢をかける。
同時に攻撃が迫った事で、ジンはモロスをアリアドネーの対処に向かわせる方に意識が向いてしまい。コロマルへの対処が間に合わず僅かに左腕に怪我を負う。
ジンは痛みに顔を顰めながら、それでもこのままで済ますかとこれまでとは違った形の手榴弾を咄嗟に放り投げた。
手傷を負わせてすぐに撤退しようと考えていたコロマルも、流石に間に合わなかったようで、身体を捻って敵の行動を見ようとした時、強烈な閃光に目を焼かれた。

ジンが咄嗟に投げたのは一般的にスタングレネードと呼ばれる閃光弾だ。
強烈な光により一瞬にして視界が白く染まり、それを見てしまった者はしばらくの間目が見えなくなる。
だが、閃光弾には敵の視覚を奪う効果以外に、一瞬にして視界がホワイトアウトする事で何が起こったのかと敵の脳を一時的に混乱させる効果がある。
戦い慣れている者であれば、スタングレネードを喰らったのだとすぐに気付くだろうが、一般人や犬でしかないコロマルにはそこまでの判断がつかない。
コロマルも視覚が奪われた直後に状況を把握しようと動きを止めてしまった。
戦闘中に棒立ちになるなど自殺行為以外の何ものでもない。
動きが止まったコロマルを見たジンの口元が凶悪に歪む。
時間をかければ他の者たちの邪魔が入る。故に、ジンは速さを優先して、これまで使っていた物と同じ手榴弾をコロマルに向けてすぐに投げつけた。
いくら火炎無効だろうが手榴弾の爆発と破片は防げない。
人間よりも身体が小さく耐久力のない犬であれば十分に致命傷を与えられる。
そうして、ジンの投げた手榴弾がコロマルの傍で爆発しようとしたとき、コロマルの足下から炎が噴き出し渦を巻いた。
「アオーンッ!!」
渦を巻く炎と共に現れるケルベロス。
ケルベロスが発生させた炎の渦は手榴弾の爆発を遮り、渦を抜けるまでに威力の減衰した破片のみがコロマルに到達する。
その威力は多少の擦り傷が出来る程度にまで落ちていて、反射的にとった行動はコロマル自身を確実に救っていた。
一方、思考停止していたはずの犬に自分の必殺の攻撃を防がれたジンは、渦巻く炎の細めた目で睨み、あの犬は何をしたんだと混乱を見せていた。

「なんやねん、あの犬っころ。普通の畜生がそない簡単に動けるはずないやろっ」
普通の動物であれば何が起きたか分からなくなれば、その場で停止して時間経過で落ち着くまで動けなかった。
だが、コロマルは犬でありながらその常識を覆し、敵の攻撃が来ると予想したのかペルソナを呼び出し攻防一体の炎の渦を発生させた。
ペルソナを使える時点で普通の犬ではないと思っていたが、ここまで戦い慣れていると本当に普通の犬なのかという疑問がジンの中に浮かぶ。
もっとも、敵の中に浮かんだ疑問に答えるとすれば、コロマルの戦闘技能はほぼすべて湊との模擬戦で身に付いたものだ。
湊は様々な武器を持っていて、それらを使いこなすことが出来ている。
そして、コロマルは確かに非常に賢い犬ではあるが、元々縄張り争いくらいでしか戦ってこなかった素人。
そんなコロマルがラビリスたちと一緒にシャドウと戦おうとすれば、人間の持つ兵器やペルソナの使う魔法に慣れておくしかない。
湊はそのために非殺傷型ではあるがコロマルの視覚や聴覚を封じる兵器を使った模擬戦などもしていた。
コロマルはその時の経験によって、一時的にでも自分の視覚や聴覚が奪われた時はすぐ自分の身を守るべしという癖を付けていた。
おかげで白い閃光で視覚を奪われても、その時に身に付けた癖によりコロマルは身を守る事が出来た。
自分の炎の渦に包まれているとき、コロマルの思考と視覚も徐々に回復を果たしてくる。
そうして、無事に回復したコロマルが戦闘に復帰すれば、順平らと戦っていたタカヤとジンもそれに応戦し、二つの陣営の戦いはさらに激しさを増していった。

第四百三十七話　厄介な敵

影時間――タルタロス

黒い召喚器を頭に当てて引き金を引いた幾月は、黒いオルフェウスを呼び出す。

かつて湊が呼び出したペルソナと同じ外見、されどまるで属性が反転したかのようにその姿は禍々しい赤と黒の配色。

そんな呼び出されたペルソナ〝アルケー・オルフェウス〟は、竪琴を弾き鳴らし広範囲に電撃を放った。

「既に君たちも知っているのだろう？　無気力症がシャドウに心を食われた状態ではない事を」

黒い笑みを浮かべて幾月は美鶴とゆかりに問いかける。

幾月が桐条グループにいた時には、無気力症はシャドウに心を食われた状態だとされていた。

無気力症の回復には心を食べたシャドウを倒し、奪われた心を取り戻す必要がある。

そのために特別課外活動部の者たちは研鑽を積み、タルタロスや街中に現れたシャドウを積極的に倒していたのだ。

しかし、無気力症になる本当の原因は心の一部であるシャドウが抜け出てしまう事。

人が死と向き合う事を放棄し、生に対して無頓着になったときに内から聞こえるシャドウの声に身を委ねる事で、シャドウはコントロールを外れて抜け出す。

湊はそれに対し、生きることから逃げ出した臆病者の末路と評したが、彼や彼と共にいたチドリやラビリスと行動を共にするようになって桐条側にも無気力症の真の原因は伝えられた。

幾月は湊が桐条側の人間と行動を共にしている事で、きっとそういった話も伝わっているのだろうと予測して問いかけた訳だが、アルテミシアの放った吹雪で電撃を防ぐ美鶴は鋭い視線で敵を睨みながら言葉を返す。

「知っていればどうした。原因が本人の心の弱さにあるとしても、元

を辿ればグループが影時間を生み出した事に起因する事象である事に変わりはない」
電撃を防がれても幾月は薄い笑みを浮かべたまま、アルケー・オルフェウスに命令して今度は巨大な炎弾を放ちながら続ける。
「ふふっ、助けたければ助ければいいさ。全てを知っていて九年間ボランティアに明け暮れていた有里湊という存在もいるんだ。グループから金銭を受け取って小遣い稼ぎにもなる君たちなら旨みもあるだろう」
「原因を作った一人でもあるアンタが偉そうに語るな！」
火炎属性とは相性の悪いアルテミシアを退げ、ゆかりのイシスが前に出て風をぶつけて炎弾を散らす。
幾月の言葉から、湊が無駄な事に時間を割いていたという蔑みが感じられ、さらにお金のために戦っていたのだろうとゆかりたちを俗物的だと嘲笑する意図も感じられた。
アルカナシャドウが出現した当初、夏頃までは自分たちが小遣い稼ぎで戦っていた部分もあるので完全には否定しない。
しかし、湊の事は別だ。自分たちは親が事件に関わっていたため、そういった意味では巻き込まれてもしょうがないと思える。
だが、彼は適性という才能を持っていたにせよ、本当にただ巻き込まれただけなのだ。
それによって人生を狂わされたにもかかわらず、彼はこれ以上の悲劇が生まれないようにと戦い続けた。
その崇高な想いを、誰にも認められず褒められることのない功績を侮辱するなど、二人の少女には到底容認出来る事ではなかった。
瞳の奥に戦意を燃やす二人は視線を交差させ、すぐに互いの意図を察してタイミングを合わせる。
『ペルソナ!!』
再び呼び出したペルソナが同時にスキルを発動し、自分たちを中心に渦巻く風に数多の氷槍が飲み込まれて加速してゆく。
敵に向けて放った魔法を合わせても、その攻撃は敵へ向けている時点で狙いが読まれてしまう。

幾月はペルソナやシャドウの研究をする中でそのスキルについても詳しく調べてある。
いくら美鶴とゆかりのペルソナが進化したと言っても、固有スキルを持っているでもなければ、幾月は使えるスキルに当たりをつけて対処法を把握しているに違いない。
実際、火炎と電撃を使えるアルケー・オルフェウスは、それらの弱点を持つ美鶴とゆかりに合わせて攻撃を切り替え、二人が攻めきれない状況を作っている。
特別課外活動部として戦い続けてきた美鶴たちに対し、幾月は本職が研究者であるため戦闘経験は少ないはず。
二対一という有利な状況、さらに戦闘経験でも勝っているのに、持っている情報量の差だけでここまで戦いをコントロールされてしまっている。
であれば、それらを崩すには相手の持っていない情報。スキルを放つ自分たちにすら結果の分からない方法で攻撃するしかない。
「オルフェウス、アギダインだ！」
幾月も渦巻く風の中で加速を続ける氷槍の危険性に気付いたらしく、威力の減衰を狙った迎撃すべく美鶴たちに向かって炎を放つ。
だが、その炎が届く前に少女たちを中心に渦巻いていた風が消え、風のレーンに乗って加速を続けていた氷槍は、二人の周囲に向けて無秩序に飛び出してゆく。
一部はアギダインに焼かれて溶けるものもあったが、逃げ場などないとばかりにばら撒かれた氷槍は、慌ててオルフェウスの後ろに避難した幾月の許にも届き、スーツの肩やズボンが一部破けてそこから血を流していた。
「ぐっ、おのれ……」
対して、アギダインで狙われた美鶴たちは、分厚い氷の壁で炎を防いで無事な姿を敵に晒す。
二人は同時にスキルを使って合わせていたが、最後まで氷槍の加速とコントロールを受け持っていたイシスに対し、アルテミシアは一定量の氷槍を追加した後は自由になっていた。

自分たちを中心に風の渦を作っている以上、敵から攻撃を受けても移動して逃げる事は出来ない。
ただ、敵が一人であれば、攻撃はその方向からしかこない訳で、自由になっていたアルテミシアは風の渦の内側に氷壁を作ってしっかりと攻撃に備えていた。
「戦闘経験の差が出たな。私たちも有里のペルソナたちから発想を得て、スキルの可能性くらい模索している」
「ていうか、こっちが敵を殺さないからって油断してたでしょ。そのリスクを捨てきれなくても、ある程度そのリスクを管理して攻撃する事だって出来るっつの」
相手がスキルやペルソナのタイプから攻撃を読んでくるなら、そのデータにないスキルの使い方をするまで。
また、確かにゆかりたちは致命傷になるような攻撃は避けているが、相手を殺してしまうリスクのある攻撃を出来る限り安全に使う技量はある。
敵味方が入り乱れる乱戦ならともかく、敵が一人であればそのコントロールもそれほど難しくはない。
あまり自分たちを舐めるな。瞳にそんな意志を込めて敵を睨めば、肩の傷を押さえながら忌々しそうに二人を見ていた幾月が不意に嗤った。
「ふふふ、あはははは！　いやぁ、すごいすごい。確かにそういったスキルの使い方のデータは無かったよ。玖美奈たちは個人で敵を屠れていたし、ストレガはそれほど戦っていなかったからね。戦闘データは君たちほど集まらなかったんだ」
言いながら幾月は上着の内ポケットに手を伸ばし、そこから小さな瓶を取り出すと中に入っていた煌めく粉を傷口に振りかけてゆく。
すると、出来たばかりの傷口に触れた粉が輝きだし、その光が消えると傷口が完全に塞がっていた。
まるでペルソナの回復魔法のような効果。仮に先ほどの粉が薬であったとしても普通の薬ではないだろう。
ただ、タルタロスの探索を一年してきた美鶴たちも、幾月が使った

粉の正体に心当たりがあった。
「なるほど、メディカルパウダーか。そちらのメンバーには回復役がいないと思っていたが、しっかりと備えはしてあったという訳だな」
「勿論さ。玖美奈と結城君なら回復魔法も使えるが、他の者にそういった力はない。けど、そちらに回復する力があると分かっている以上、こちらも治療の用意くらいしておくとも。幸いな事にタルタロスではこういった魔法のアイテムが手に入るからね。しっかりと量も準備させてもらった」
幾月が使用したのはタルタロスで手に入るメディカルパウダーという名の回復アイテムだ。
一般人に使っても効果はないが、ペルソナ使いであれば患部にかけても服用しても効果がある。
恐らくはペルソナやシャドウの力が結晶化した物の粉末なのだろう。
そういった物は湊が詳しく研究しているので、詳細を知りたければＥＰ社の研究員に尋ねれば教えてもらえるはず。
もっとも、今はそんな事を気にしている余裕はない。
事前にチドリからストレガメンバーのペルソナ能力の情報を得て、敵側に回復役はいないと思って短期決戦を予想していた。
他の者たちもそれは同様で、最初から玖美奈と理を押さえる役割で確定していた湊を除き、全員が誰と戦う事になっても短期決戦で勝負を決めて仲間と合流するつもりでいた。
だが、考えてみれば当然だが敵もしっかりと回復手段を用意して戦いに臨んでいた。
量は揃えてあると言っていたが、それはどれほどなのか。
ゆかりや七歌の使う回復魔法は戦闘に使うスキルと同じようにエネルギーを消費する。
幾月が使ったメディカルパウダーなどより効果は高いものの、それは治療を受けた者が戦線に復帰する代わりに、治療した側の継戦能力が落ちていくということ。
その点で言えば、量に限度はあれどアイテム消費だけで済む敵側の

方が気軽に治療出来るだろう。
無論、美鶴たちも少しはそういったアイテムを個々で持っているが、自分たちを倒せばそれで十分な敵と違って美鶴たちはニュクスとの戦いも控えている。
ここで全てを使い切る事は出来ないという考えがどうしても頭を過ぎり、それが枷となって無意識に戦い方が消極的になっていく。
そんな美鶴たちの変化を見た幾月は、少女たちの葛藤がどういったものであるかを自然に理解し、相手に見えない角度で小さく口元を歪めた。
＊＊＊
結城理と幾月玖美奈は共に自身が持つ最強のペルソナを使って湊と対峙していた。
愚者〝酒呑童子〟、刑死者〝ノート〟。
以前、湊に敗れた時にも使っていたペルソナだったが、理の背後にいる酒呑童子は肩の辺りに以前は無かった車輪のような物が浮いていた。
そして、玖美奈の背後にいるノートも、以前には無かった黒い翼を羽ばたかせてセイヴァーを追いかける。
「逃げるな、僕と戦えっ!!」
背を向けて飛んでいるセイヴァーと湊に向けて、酒呑童子が炎を纏った刀を振るって炎の斬撃を飛ばす。
玖美奈はそれに合わせて翼から黒い影で出来た羽根を、土砂降りの雨の如く逃げ場無く降らせて湊を追い込もうとする。
けれど、攻撃が迫った瞬間に湊たちは反転し、極光の盾を展開して防ぎながら移動を続ける。
何度も攻撃していた理と玖美奈は、またあの虹の盾に防がれたと苦い表情をする。
ペルソナやシャドウの持つスキルの中にも防御スキルはいくつかあるが、基本的にそれは展開したスキル自体に反射耐性があって、特定の攻撃をそのまま返すといった効果だ。
だというのに、セイヴァーの展開する盾は攻撃を反射する力はない

ものの、物理と魔法どちらもスキルもまとめて防ぐ事が出来ている。
あんなスキルは知らない。エルゴ研時代に数多のペルソナとそのスキルを研究していた幾月ですら知らない力だ。
であれば、あれは再現性のない固有スキルなのだろう。
固有スキルはペルソナのモデルになった神話や伝承の存在に関する力であったり、召喚者の精神に強く影響を受けた力である事が多い。
前者であればその力のモデルになった伝承などから対策することも出来る。
後者であれば持ち主の精神状態の影響を受けて弱体化を狙えば良い。
しかし、固有スキルの対処法を知っている理と玖美奈は、そういった本来であれば取れる対策を一切取ることが出来ていない。
理由は簡単だ。セイヴァーのスキルがどれも固有スキルだったためである。
固有スキルが一つであればそれを警戒し、他の通常スキルは教科書通りの対処法でやり過ごせばいい。
二つであれば使用頻度や使用するタイミングを記憶して、出してくるスキルを誘導して上手く対処すればどうにかなるだろう。
だが、セイヴァーの固有スキルはこれまで見ただけでも四つ以上あるのだ。
全ての攻撃を防ぐ虹の盾、武器や兵器を取り込み造り替える力、翼を構成するパーツを小刀のような状態で遠隔武器として飛ばす力、その遠隔武器を使ったゲートでの空間転移能力。
それに加えて造り替えた武器から放たれる属性不明の蛍火色の光。
生身で喰らってもダメージはないが、ペルソナやシャドウに当たれば掠っただけでも存在が大きく揺らいでしまうのだ。
自分たちの攻撃は盾に防がれ、逆に敵からの攻撃は防ぐ事が出来ない。
そんな状況がいつまでも続くせいで理も玖美奈も内心では大きく苛立っていた。

「なんなんだ、お前は！　戦うつもりがないなら僕たちの邪魔をするな！」
「なんでお前たちの事情にこっちが合せる必要があるんだ？　やりたい事があるなら好きに動けば良い。こちらに不都合が出るのであれば邪魔はさせて貰うがな」
炎を纏っていた刀に光が集まると、それを振った途端に光刃が出てセイヴァーの虹の盾に向けて振り下ろされる。
斬撃系最強スキルのブレイブザッパーを受け止めた盾は、バチバチと激しくエネルギーを弾けさせて拮抗する。
ただ、酒呑童子はメイン武装である刀でスキルを放っている関係上動けないが、片手の甲から虹の盾を展開しているだけのセイヴァーは、もう片方の手や翼を変化させた遠隔武器でも攻撃する事が出来る。
敵もそれを理解して玖美奈がカバー出来る位置に待機しているが、湊はそれを見て小さく笑ってマフラーを変化させたコートからセイヴァーが以前使っていた白銀の銃を取り出し構えた。
攻撃してくるのはペルソナ。そういった先入観からセイヴァーの動きに注意していた理と玖美奈の反応が一瞬遅れる。
そして、銃を構えた湊が引き金を引けば、そこからはセイヴァーの力と同じ蛍火色の光が放たれた。
「くそっ」
その光に触れるのは危険。そう判断して理は攻撃を中断して、すぐにその場から飛び退いた。
確かにペルソナの使うスキルは持ち主の心の力。
ただ、それはエネルギーとして使っているだけであって、それを炎や氷にする変換器はペルソナ側が持っているもののはず。
それを、湊は自分の力をペルソナと同じように一人で変換して撃ち返してきた。
もしや、ペルソナが造り替えた武器はそういった変換器としての力を備えるのか。
敵の攻撃に対して考えをまとめようとするも、湊が再び引き金を引

いて蛍火色の光で理と玖美奈を落そうとしてくる。
防御すら許されない未知の属性スキル。それに対処出来ない限り自分たちに勝利はない。
不利な立場を自覚しながら、理と玖美奈はどうにか突破口がないかと思考を続け、港区の上空で自分たちの計画を単独で破壊し得る存在と戦い続けた。

第四百三十八話　空での戦い

影時間――港区上空

敵である結城理と幾月玖美奈を相手に防御に徹していた湊は、セイヴァーと共に港区上空を飛びながら敵を観察していた。

死後の世界から帰還して七歌たちを助けたあの日、湊は理と玖美奈を相手に戦ったがあの日は片手間に相手をしても十分に対応出来た。

だが、今日の二人は違う。たった二月ほどの間に随分と適性が強くなっている。

タルタロスで鍛錬を積んでいた七歌たちと違い。二人やストレガのメンバーは潜伏していてシャドウとの戦闘は出来なかったはず。

シャドウとの戦闘はろくにしていないにも関わらず、それでも彼らは強くなっている。

その理由は何か。七歌たちであれば疑問を持ってからしばらく悩んだかもしれない。

その点、湊は相手を見て肉体の状態なども把握することが出来るため、この二ヶ月の間に相手が何をして力を得たのか大凡の予想がついた。

（……なるほど、身体に埋め込んだ黄昏の羽根が増えている。一定以上の力を持ったペルソナ使いであれば、身体に埋め込んだところで拒絶反応は出ないからな。回復スキルを持っていれば傷もすぐに癒えるため、短期で強くなる事が可能というわけだ）

湊が二人を見たところ身体から感じる黄昏の羽根の反応が増えていた。

元々、人工ワイルド能力者になるため被験体のペルソナを羽根に移し、それを移植することで二人はペルソナと力を得ていたのだろう。

節制と運命のアルカナシャドウと戦った日に、玖美奈たちからそれぞれ四枚ずつ羽根の反応を感じていた。

しかし、今日の二人からはさらに三枚。計七枚ずつの反応を感じる。

最初の四枚の羽根も、全てが被験体のペルソナを移植するための物

ではなく、それ以外はあくまで適性を強化するための補助装置。
理の所持ペルソナは五体、玖美奈の所持ペルソナは四体、羽根の枚数が増えてもそこは変わっていない。
であれば、追加した分は全て強化用に移植したものと考えるべき。
そう考えたところで、敵に背を向けたまま飛んでいる湊とセイヴァーに向けて、炎の斬撃と影で出来た黒い羽根が雨のように降り注ぐ。
攻撃が放たれる前に力の流れで変化を感じ取っていた湊は、身体を反転させてセイヴァーにアイアスの盾を展開させて攻撃を防いだ。
(適性の増加と蘇った俺に対する意識によってペルソナの力が増している。ただ、あくまで強化されただけだな)
敵の攻撃を防いだ湊はマフラーから白銀の銃を取り出し構える。
それを見た敵は驚愕の表情を浮かべすぐに散開しようとし、湊はわざと当たらないものの避けないわけにはいけない微妙な位置に向けて蛍火色の光線を撃ち込んでいく。
湊が持っている銃はセイヴァーの力で造り替えた対ペルソナ・対シャドウ兵器だ。
セイヴァーの武器を造り替える力は、大きく訳で二種類のものをつくることが出来る。
一つは黄昏の羽根を積んだ武器と同じように、武器自体にペルソナやシャドウに干渉する力を付与することで、一般人が使ってもダメージを与えられるよう造り替えた汎用品。
もう一つはペルソナ使いたちの持つエネルギーを消費することで、擬似的に攻撃スキルを放つ事が出来る特殊兵装。
中でも湊が今使っているのは特別製で、銃自体に使用者の生命力を吸収して貯蔵するバッテリーを搭載し、攻撃時にはセイヴァーの固有スキルのように貯蔵していた生命力を光線にして放つという機能がある。
元が生命力なので光線といっても破壊力は無い。触れても温かいと感じるだけで火傷すらしない。
だが、ニュクスの欠片であるペルソナは死と向き合うことで顕現さ

せることが出来る。
死と向き合うというのは簡単な事ではなく、最上級の回復魔法のようなものを喰らって生を意識するだけで簡単に輪郭を保てなくなる。
（とりあえず、これで仕切り直しに持って行けるか。時間はまだあるがそこまで余裕があるわけじゃない。あいつらもまだ一組も決着がついてないようだし、下手をするとギリギリ間に合わない可能性もあるか）
理と玖美奈が離れたタイミングで銃をコートに仕舞い直し、セイヴァーと共に飛翔して高度を上げていく。
制空権を取られることを嫌って相手も追いかけてくるが、残念ながら湊と追っ手の二人では肉体のスペックが違う。
息を吸うだけで肺が凍りつきそうになるような高度でも湊は耐えられる。
しかし、ただの人間の肉体しか持たない敵は追っては来られない。
無論、湊もそこまでの高度に行くつもりはないので、途中で止まると身体を反転させて上空でセイヴァーの状態を変化させる。
セイヴァーの頭上に虹色の光輪が現れる。目元を覆っている黒いバイザーの奥に七つの赤い瞳が浮かび、左右の腕が二本ずつ増え六腕という異形の姿になる。
そして、機械のような金属の質感を持っていた六対十二枚の翼が短剣のような状態で射出され、鎧が白く発光するセイヴァーの背中には三六対の光の翼が現れた。
目の前で姿が変わっていくセイヴァーを見て、追って来ていた理と玖美奈の表情が険しく歪む。
単体でも厄介な相手だというのに、射出された翼が変化した十二本の短剣はタナトスの棺桶と同じくビット兵器としての機能も持っているのだ。
前回の戦いでそれを知っていた理たちは、短剣が放たれるのを見たと同時に動いていた。
「ビット兵器を使えるのが自分だけだと思うな！」
理がそう叫ぶなり酒呑童子の肩付近に浮いていた車輪が飛び出し

てゆく。
大きく迂回して左右から迫るように飛んできた車輪は、片方からは熱線が、もう片方からは氷の飛礫が放たれ湊へと迫る。
そして、酒呑童子自身も手にした刀から斬撃を飛ばし、玖美奈のノートは黒い翼を広げて疾風の範囲攻撃スキルを繰り出してきた。
理は湊の力を参考にして自分も同じ土俵へ上がることを目指し、玖美奈は空間を制圧することでビット兵器の動きを制限することを目指したのだろう。
人数で勝っていて、個々の力も恐ろしく強大なのだ。彼らの選択は正しい。
「だが、そもそも忘れていないか？　お前たちはセイヴァーの盾を一度として突破出来ていないことを」
言うなりセイヴァーの光の翼が湊たちを包み込み、湊は半透明な虹の膜で覆われた球体の中に閉じ籠もる。
酒呑童子とノートが放った攻撃は全て虹の膜に阻まれ、攻撃が止んだ時には攻撃を受ける前と変わらぬ姿の湊とセイヴァーがその場にいた。
そして、敵の攻撃が止んだタイミングで虹の膜の外に待機していた短剣が動き出す。
正面から四本の剣が酒呑童子とノートそれぞれを狙って飛んでゆく。
短剣の剣先は光を纏っており、既に何かしらの物理スキルが発動しているのが分かる。
威力はペルソナのスキルと同等だというのに、大きさは人間の扱う両手剣ほどとペルソナより圧倒的に小さい。
おかげで攻撃するにも狙う必要があり、空中という全方位から攻撃を受ける可能性がある場所で、残り八本の短剣を警戒しながら対処するのは難しい。
二人はすぐに迎撃を諦めると酒呑童子が火炎を放ってすぐに回避行動に移る。
避けた先には既に別の短剣が二本回り込み、風の刃を飛ばして来た

ため、ノートが黒い羽根を飛ばして迎撃しながら左右に分かれる。
けれど、それを読んでいたように二人の背中に向けて万能属性の光線がそれぞれ飛び、迎撃が難しいと判断した両者が一気に高度を落せば、下から急上昇してくる短剣を見つけて身体を捻るようにして緊急回避する。
僅かにペルソナに攻撃が掠り、フィードバックダメージに顔を顰めながら理が毒吐く。
「十二個の端末だぞ!? 戦況をどこまで読んでるんだっ、こちらの動きを先読みして配置するにしても限度があるだろ!」
理は自分がビット兵器としての機能を持つ車輪を手に入れたことで、その操作が全て思考制御だということを知っている。
空中という自由度が高いからこそ、状況変化を読みづらいはずなのに、湊はバラバラに動いている理と玖美奈をそれぞれ追い込むように短剣を操ってスキルを繰り出している。
当然、理たちも神経を研ぎ澄まし迎撃や回避を行なっているため、短剣から放たれるスキルのほとんどは何もない空に消えてはいた。
だが、常人ならエネルギーが枯渇してもおかしくないほどスキルを短時間に連発しようと、虹の膜を解除して悠然と高みから見下ろしている青年の力には限界が見られない。
以前は街一つを覆い尽くしてシャドウを殺し尽くして見せたのだ。
持久戦やエネルギーの枯渇を狙ったところで先に潰れるのは理たちの方だろう。
このままでは徐々に対応が追い付かなくなり、最後は詰め将棋のように一切の逃げ場を失って敗北しかねない。
動くなら今しかない。そう判断した理は瞬間的に溜められる限界まで力を溜め、それを炎の津波へと変えて一気に解放する。
この攻撃で短剣を消し炭に出来るとは思っていない。けれど、僅かな時間でも自分の攻撃が相手を上回れば次の行動までに余裕が生まれる。
その考えが正しかった事を証明するように炎の津波に呑まれた短剣からの攻撃が不発に終わり、短剣からの連携攻撃に空白が生まれ

た。
その隙に理は玖美奈の許まで移動し、相手を抱きとめてその空域から離脱した。
相手が自分から距離を取っていくのを見ていた湊は、セイヴァーの手に先が二叉に分かれた金色の槍を呼び出した。
「敵から逃げてどうするんだ。仮にタルタロスの連中が全滅しようと、俺を殺さない限り、お前たちの願いは叶わないんだぞ――――――〝ロンギヌス〟」
幾月たちは滅びを求めるくせに自分たちの死を怖れている。
それは、自分たちがニュクスの齎す滅びの目撃者になる必要があると認識しているためだろう。
ニュクスの力によって滅びた後の世界に新たな理を築くことで、死の定義が変わり選ばれた者のみが存在するユートピアが生まれる。
そのためには新たな理を世界に築く者が必要だ。
故に、彼らは全滅を怖れ、湊の足止めとして理と玖美奈を寄越した。
作戦としては理解出来る。最後の戦いなのだ。負けないように、障害となる者を遠ざけるのは間違っていない。
しかし、いくら湊を遠ざけて、その間にタルタロスへ向かった者たちを全員討ち取ったとしても、その遠ざけた湊がいれば幾月たちの願いは叶わない。
何せ彼の力は街一つを覆えるのだ。大切な少女たちの死を認識した時点で街ごと敵を殺すくらいはやってのける。
それを理解していれば逃げるなんて手は選ばないだろうと、湊は口元をつり上げて嗤い、セイヴァーの手から神殺しの槍が放たれた。
セイヴァーの手を離れた槍は、金色の尾を引きながら空を駆ける。
背を向けて逃げる酒呑童子に向けて真っ直ぐ飛び、その肩を貫くと思った瞬間に黒い翼を広げたノートが現れて酒呑童子を庇った。
「フッ、直撃は拙いだろう。神を殺し得る槍だぞ？」
投げた槍は酒呑童子を庇うように現れたノートの胸に突き刺さった。
通常、ペルソナはダメージを負い過ぎると召喚者にフィードバック

ダメージが返りながら消えてゆく。
だが、セイヴァーの投げた神殺しの槍は、かつて世界の狭間で時の神を殺してみせた力を持っている。
ペルソナ以上の存在の格を持った神を殺す力が、通常のペルソナに振るわれれば、当然そのダメージは通常のフィードバックを超えて召喚者に返る。
その結果、ノートを通じて神殺しの槍のダメージを受けた玖美奈は理の腕の中で意識を失った。
「姉さん!?」
抱き上げていた玖美奈の身体から突然力が抜け、さらに呼吸が弱々しくなれば理も動揺を隠せない。
しかし、逃走しようとしていた酒呑童子の動きが鈍れば、彼らを追っていた短剣にとって絶好の攻撃チャンス。
玖美奈の様子を確認しようとする理と酒呑童子に向けて雷が飛ぶ。
回避を許さぬように四方向から放たれた雷は、直前で気付いて理が避けようとするもそれを許さず直撃する。
酒呑童子の背中に雷を受けた理は表情を歪め、攻撃を回避し始めると怒りに染まった瞳で湊を睨んだ。
「有里、湊ぉぉぉぉっ!!」
ビット兵器として使える車輪を肩付近に戻し、そこから炎を吐き出して加速しながら酒呑童子が雷の包囲網から飛び出してゆく。
敵が同じようなビット兵器としての力を手に入れたと思っていたが、成程、短剣のような形をしているセイヴァーのビット兵器ではそういった使い方は出来ないなと考えつつ湊は言葉を返す。
「会話を拒んだのはお前たちだろう?」
湊は最初に会話を求めた。相手の求めるもの、そこに到るまでに必要なこと、ニュクスや死に対する勘違いの訂正など、戦わなくても済む道を模索するためお互いを知るべきだと湊は敵にも手を差し伸べたのだ。
だが、理と玖美奈はそれを拒んだ。お互いに敵として怒りや憎しみを抱いていたことで、差し伸べた手を素直に信じられなかった気持ち

は分かる。
湊もこれまで散々好きなように生きて、自分の目的のために他人を巻き込んできた側の人間だ。
敵の言うことを素直に信じないのはお互い様でしかない。
けれど、玖美奈は友人として出会った七歌を切り捨てて、自分の父親の願いを叶えるために殺そうともした。
そんな人間に手を差し伸べるのは一度で十分。チャンスを捨てたお前たちが悪いんだと、ビット兵器の包囲網から抜け出そうとする理たちに向けてセイヴァーが光を纏った拳から拳撃を撃ち出す。
現れた巨大な金色の拳は〝ゴッドハンド〟、空気を押し退けて進むそれは、逃げ場を塞ぐように立ち替わりながら攻撃する短剣に足止めされていた酒呑童子を横から殴りつけた。
「ぐぅぅぅぅっ!?」
ゴッドハンドに横から殴りつけられた酒呑童子と理たちは、進み続けるゴッドハンドに身体を押し付けられながら運ばれてゆく。
逃げようにも空気の壁とゴッドハンドに挟まれ、スキルの勢いが消えて消滅するまでに大きく移動させられていた。
先ほどまでは街の夜景が見えていたというのに、理たちの眼下には暗い海が広がっている。
そして、それを認識した理は背筋に寒いものを感じ、直後に頭上で光が弾けて湊が現れていた。
「……ま、とりあえず落ちろ」
天高く手をかざす白銀の天使、その主の声に呼応するように上空で黒い雲が渦を巻く。
攻撃が来る。それを悟った理は玖美奈を抱きよせ、酒呑童子に覆い被さるように自分たちを守れと命じる。
直後、上空より落ちてきた極光の柱に飲み込まれ、理たちは光と共に海へと落ちていった。

第四百三十九話　共鳴

――港区

天上より下された裁きの光に呑まれ、全身を焼かれたような痛みを感じながら暗い海に向けて落ちてゆく。

自分たちを守るため覆い被さっていたペルソナも消え、飛ぶ力を失った以上重力に引かれて墜落は免れない。

だが、腕の中で未だ意識を失ったままの少女だけでもどうにか助けたい。

痛みと衝撃で意識に靄が掛かったような状態でも、それだけはしっかりと心にあった少年はこんな時にもかかわらず昔のことを思い出していた。

百鬼八雲の記憶を持った少年の意識が覚醒した時、目の前には白衣を着た眼鏡の男性と自分より少しだけ年上に見える少女がベッドの傍にいた。

声をかけられ、名前を名乗り、アイギスと共にデスと戦ったことを話した時、白衣を着た眼鏡の男性こと幾月修司は酷く驚いていた。

(ああ……助かる方法を考えなきゃいけないのに、昔のことを思い出すなんて。これが走馬燈ってやつなのかな……)

自分はただ記憶にある事を話しただけだというのに、どうして幾月が驚いたのか少年には分からなかった。

しかし、その後に幾月と一緒にいた少女である幾月玖美奈から、自分が本物の百鬼八雲の細胞を使って作られたクローンだと伝えられた事で、幾月が驚いた理由にも納得がいった。

当時の八雲は小学生でしかなかったものの、羊のクローンがニュースで話題になった事もあったのでクローンがどういう存在かは知っていた。

詳しい作り方を知らなくても、クローンが一種のコピー人間であり、オリジナルの記憶をコピーは持っていないと知っていれば自分の存在が如何におかしいかは理解出来る。

ただ、少年はオリジナルの記憶を持っているからこそ、自分こそが

オリジナルでもう一人がクローンなのに勘違いしているのではという疑問を抱いた。
自分の正体を説明してくれた玖美奈も、少年から疑問をぶつけられた父の答えを待つように黙っていた。
だが、幾月は首を横に振って少年がクローンで間違いないと返した。
何でも、オリジナルはエルゴ研の中で保護されていて、少年はクローンの作成を依頼した企業の人間から身柄を受け取って直接隠れ家に連れてきたため間違えようがなかったのだとか。
(まぁ、ショックは大きかったな。記憶と自我が自分を百鬼八雲だと伝えているのに、自分の正体が何故かオリジナルの記憶を持ったクローンである事が確定しているんだ。本当に、あの時は頭がおかしくなりそうだった……)
臓器や細胞にも記憶が宿るという説がある。
医学的には解明されておらず、あくまで臓器移植を受けた患者に臓器提供者の記憶や味の好みなどの影響があった例が確認されているという一種の都市伝説に過ぎない。
けれど、名切りの一族が持つ特異体質を知らなかった少年は、幾月が話したそういった内容を自分に当てはめて、奇跡的にオリジナルの記憶と人格を手にした存在だと信じるしかなかった。
そして、そんな話をしてくれた者たちが、国際的に禁止されている人間のクローン製造という禁忌を犯した者だと理解しても、幼い子どもでしかなかった少年は生きていくために彼らと共にいるしかなかった。
(最初はどうして自分なんかを作ったのかって恨んでた部分もあった。……でも、姉さんは僕を弟として扱ってくれた。幾月さんも最初から自分の目的を教えてくれて、だから、僕はそれがある意味では悪い事だと理解しながらも恩人の願いを叶える手伝いが出来ればと思ったんだ)
二人の目的は世界の理の改変。
今ある世界を壊し、命と死の概念を書き換えて、事故などというく

だらない理由で殺された幾月茜と再び会おうとしていた。
死んでしまった大切な人と再び会いたい。その気持ちは百鬼八雲の記憶と自我を持つ少年も理解出来た。
彼にとってムーンライトブリッジで死んだ二人は両親ではない。
クローンである以上、父親は遺伝子を提供した百鬼八雲本人で、母親はその受精卵をお腹の中で育てて産んだ顔も知らない女性になる。
しかし、少年にとってはムーンライトブリッジで死んだ二人こそが記憶の中にある両親なのだ。
知らない場所で目覚めてから、少年はその記憶の中にある両親に会いたがった。
言葉には出さず、あくまで心の中でそんな風に思っていたに過ぎないが、幾月はそんな内心を理解していたのか、世界の理が変われば少年もその両親に会えると伝えてきた。
(世界にとっては幾月さんの願いは邪魔なんだろう。今の世の中を壊す以上、当然、大勢の犠牲者が出る。そんな事は僕も分かってるさ。でも、彼らには他に選べる道なんかなかったんだ)
死んだ人間は蘇らない。
死は永遠の別れだ。
そんな事は誰だって知っている。
幾月も、玖美奈も、少年だってそんな事は昔から分かっていた。
ただ、理性でそれを理解していようと、感情までそれに従って認められる訳ではない。
(タイミング悪くオリジナルが意識を取り戻したせいで入れ替わる事も出来ず。かといって、脱走したやつらの動きが読めなくて僕は表舞台に立つことも出来なかった。そんな何の役にも立てない僕に二人は優しくしてくれた)
いつまでも目覚めないオリジナルに代わり、ペルソナに関わる研究に携わって協力して行く事が最初に少年に与えられるはずの仕事だった。
何せ、少年は目覚めてすぐにペルソナを召喚して見せたのだ。
ペルソナは心の鎧であり、オリジナルの記憶と自我を持っているの

であれば、心の在り方も同じだとして同じ力を持っていても不思議ではない。
そして、その仮説通りに少年は百鬼八雲と同じオルフェウスを召喚して見せた。
これで、後はオリジナルと入れ替わるだけだと、彼を預かっていた飛騨の目を盗んで少年がエルゴ研に向かうタイミングを計っている内にオリジナルが目覚めてしまった。
少年が入れ替わっていれば、エルゴ研の設備を利用して色々と研究する事が出来たというのに、ここでもまた計画に狂いが生じてしまう。
これで少しは恩が返せると思っていた少年にとって、ただでさえ疎ましく思っていたオリジナルに自分の計画を邪魔された形だ。
百鬼八雲本人にそんな自覚はないだろうが、思えばあの時から自分は邪魔され続けてきたんだと少年の心に再び怒りの火が灯る。
(百鬼八雲、お前にも救いたい世界が、守りたい人たちがいるんだろう。だが、それはこちらも同じ事。世界を滅ぼそうとする僕たちは確かに悪なんだろう。それでも、それでも僕は、この人たちのために戦うと決めたんだっ)
感情が昂ぶるとそれに呼応するように全身の感覚が戻ってくる。
冷たい空気に晒され身体は冷えているが、それに反比例して心の炎は激しさを増していた。
勝てる勝てないじゃない。この腕の中にいる大切な人のために自分は戦う。
自分が何のために戦うのか。それを再認識した少年は、オリジナルに対する劣等感から抱いていた怨みで戦っていた時よりも力が溢れ出てくるような気がしていた。
「ゴメン、姉さん。頑張って勝つから、絶対に姉さんたちの願いを叶えて見せるから」
「……ええ。だから、一緒に戦いましょう?」
「……うん」
少年が腕の中にいる玖美奈に決意を告げれば、目を覚ました少女か

ら言葉が返ってきた。
彼女が無事であった事が嬉しい。そして、何度も迷惑をかけたというのに、まだ自分と共に戦ってくれる嬉しさと申し訳なさから涙が出そうになった。
だが、今は泣いている場合じゃない。段々と近付いてくる海面を見ながら少年は少女と共に呟いた。
『ペルソナ』
心を通わせ共にあろうとする二人の想いに力が応える。
顕現する力は二人を包み込み、天を突くほどの巨大な闇色のペルソナがその姿を現わした。
頭部には反り返る二本角、背には身の丈以上の幅を持つ翼、そして闇色の身体の表面で燃え続ける青い炎。
突如海上に現れたそれは、古い書物に書かれる悪魔の姿を持つ怪物だった。
＊＊＊
海に向かって落ちてゆく結城理と玖美奈の力が共鳴したかと思えば、次の瞬間に馬鹿げた力の発露を感じてその場に巨大な悪魔が顕現していた。
空からそれを見ていた湊は、相手の力を解析しながら自分と真逆の召喚法だと少々感心していた。
（……成程、力の譲渡ではなく〝共鳴〟なのか。二人で一体のペルソナを生み出す。変わった召喚方法だ）
外から見た限りでは二人の姿は一切見えない。
アナライズ等で解析して初めて心臓辺りに二人の気配を僅かに感じる事が出来る。
通常、人間の気配が僅かにしか感じられない理由として挙げられるのは、一つはそもそも生命力が極端に弱まっている状態にある。端的に言えば死にかけている状態である場合。
もう一つは、何かしらの力で気配を隠蔽して隠れている場合だ。
しかし、二人はそんな事はしていない。何せ一緒に超大型ペルソナに包まれるように姿を消したのだ。

湊のセイヴァーのような転移系の能力を持っているペルソナでもなければ、居場所が分かっている状態で気配を隠蔽する意味などない。
ペルソナを呼び出せるだけの力が残っていて、さらに気配隠蔽も使っていないとなれば、二人の気配が僅かしか感じられない理由で湊に心当たりがあるのは一つしかなかった。
(……あいつらも同調率を上げる事が出来た。となれば、二人の気配が僅かしか感じられないのもそれが理由だろう。完全に同調した訳ではないが、ほとんどペルソナ化している訳だ)
二人も湊と同じように同調率を上げてペルソナで飛行出来ていただけあって、ペルソナとの同調率を上げる方法やそれの行き着く先も理解していたのだろう。
玖美奈と理は同調率を限界まで上げて、ほぼペルソナその物になっていた。
完全に同調した訳ではないと言っても、九割以上ペルソナになっているので、自分の身体とペルソナの肉体を動かす感覚にほとんど齟齬など感じないに違いない。
湊自身もペルソナと完全同調した事はあり、意識は自分のままだったので再び自分に戻る事が出来たが、同調している間は違和感が全くない事に逆に違和感を覚える不思議な状態だった。
ただ、その時の湊と理たちではやっている事は同じであっても状況がまるで違う。
何せ二人は共鳴した状態でそれをしてしまっているのだ。
共鳴はただ力の波長を合せれば出来るというものではない。
心と意識と呼吸を合わせて、どこまでも自分たちが一つの存在であるかのように存在の境界を曖昧にする事で初めて成し遂げることが出来る境地。
それ自体が一種の極みであるというのに、理たちはその状態のままに同調率を上げてペルソナ化してしまった。
共鳴している二人は自己と相手との境界が曖昧だ。下手をすれば同調を解除した際に存在が混ざる危険がある。

（追い込まれてそうなったのか。何も考えずにそうなってしまったのか。ま、恐らくは後者だろうな）

海底を踏み締め、足首が海に浸かっている炎纏う悪魔は、両腕と翼を大きく広げて空を見上げると咆吼をあげる。

《オォォォォォォォォォォォォォォォォ――――――――――ッ!!》

悪魔の咆吼に大気が震え、敵の周囲の海面も荒々しく波が立っている。

相手は全長百メートルを超える馬鹿げた大きさだが、湊はそんな相手の頭がある位置よりも遙かに高い場所で滞空していた。

背中からは虹の光を放出して作られた翼が広がっているため、暗い影時間の空では非常に目立っている。

空を見上げた事で悪魔も湊の事を見つけたのだろう。その咆吼には明確な敵意が籠もっていた。

敵である以上は戦わねばならない。それは湊も分かっている。

けれど、湊はこの巨大な敵と戦えば街に被害が出るなと、先に街を守るための手を打っておく事にした。

上空で湊が腕を振れば、街の海岸線に半透明な蛇神の骨が展開する。

全体をカバーする事は出来なくとも、蛇神は街を覆い尽くすほどの全長を持つペルソナだ。

身体を伸ばせば余裕で数キロに達するので、津波などが発生した時にはその身体を緩衝材にすればある程度の被害は防げるだろう。

そうして、蛇神の骨の展開が終わったタイミングで、悪魔が右腕を大きく引き絞ってから空にいる湊に向けて突き出してきた。

拳を突き出した勢いのままに烈風と青い炎が天に向かって噴き上がる。

あまりの熱量に炎の周囲の像が歪んで見え、青いのが魔法的な視覚効果によるものではない事が窺える。

無論、湊もそれをまともに受けるつもりはなく、セイヴァーの翼を軽く羽ばたかせてその場から移動して攻撃を回避する。

（問題は今のあいつらの意識がどの程度あるかだな）

攻撃を躱してから湊は展開していた短剣型のビット兵器を回収し、セイヴァーを通常モードに戻す。
セイヴァーの神格化は戦士でありながら将としての能力も持つ湊の能力を全開で使うためのハイコストモードだ。
戦場の支配。個で群として動いて敵を追い詰める。そんな矛盾した戦い方を実現可能にするだけあって、消耗も激しい。
七熾天の効果で増幅させた力は実質無尽蔵であっても、湊個人の脳や肉体への負担までは無くすことは出来ない。
そのため、敵がデカい的になった今の状態で神格化を維持する必要性を感じず、湊は通常モードに戻してから対シャドウ兵器化したライフル銃を敵に向けて引き金を引いた。
銃口から放たれるは蛍火色の閃光。上空から一直線に伸びていく浄化の光が悪魔の左肩に直撃する。
その光は命の光。死への想いを基点に召喚されたペルソナであれば、光を受けた時点で死への想いにノイズが走って存在を維持出来なくなる。
これで共鳴も中断して悪魔の召喚前まで状態が戻れば良いが、と湊が様子を探っていれば、攻撃を受けた悪魔が僅かに怯んですぐに右手を大きく横薙ぎに振るってきた。
悪魔の右手の爪から斬撃が飛び、五発の斬撃を湊はその場で旋回して全て躱し続ける。
敵の攻撃を躱し続ける間も、何故浄化の力が効かなかったのか湊は考える。
(ダメージは通っていた。攻撃が直撃した部分は輪郭がぼやけた状態になっていた。だが、それだけだ。傷口は既に再生していて行動に支障もない。まぁ、実際破壊の力ではないからな。何かしらの耐性を持っている場合は効かない事もあり得るのか)
広げた悪魔の黒い翼から無数の炎の飛礫が飛んでくる。
それらをセイヴァーが手にした先が二叉の分かれた金色の槍で弾きながら、時折拳撃を撃ち出して反応を見る。
セイヴァーの放つ浄化の力は回復魔法を攻撃に転用しているよう

なもので、無理矢理に破壊の力に変換して攻撃に使っているものの、相性で異形を殺しているに過ぎない。
眼下にいる悪魔にも効かない訳ではなく、やはり異形に対しては絶対的に優位な力である事は間違いない。
ただ、あの悪魔には浄化の力の効きが悪いようで、一度に全身を攻撃するでもしない限りは無事な他の部位で存在を補完して再生してしまうらしい。
効かない訳ではないため、一時的に行動を阻害する牽制として使える。
だが、戦闘には通常のスキルなど破壊を目的とした力を使う必要がある。
そう判断した湊が攻撃を当てて反応を探っていれば、敵が腰を落して足に力を溜めながら黒い翼を羽ばたかせているのを見て、その巨体で飛んでくるのかと僅かに驚いた。
元々、ペルソナはシャドウと違って宙に浮くことは出来る。
その特性などで空中の機動に差はあれど、百メートル級の超巨大ペルソナが飛べても不思議ではないのだが、五十倍近い体格差の敵と空中戦など面倒でしかない。
(なら、こっちも相手と同じ土俵で戦うとするか。その方が有効な攻撃手段も多いだろう)
作戦を決めるや否やセイヴァーが消えて湊の周りで赤と黒の光の奔流が生まれる。
その間に飛び上がってきた悪魔が一気に距離を詰め、青い炎を纏った腕で彼がいた場所を殴りつけようとした。
だが、悪魔の拳が彼のいた場所に振り抜かれようとした時、湊を包んだ赤と黒の光の奔流の中から悪魔の物と同等のサイズの黒い腕が伸びてきた。
光の中から現れた黒い肌を群青色の外殻で所々覆った腕は、今まさに襲いかかろうとしていた悪魔の拳を掴んで受け止める。
そして、光の中から鮫を思わせる鋭い牙と黄色の瞳を持つ頭部が現れれば、空へと上がった悪魔の前には同等の体躯を持った龍人の姿が

そこにはあった。
《グオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――ッ!!》
光の奔流の中から現れた龍人、永劫〝セルピヌス〟は、敵の拳を掴んでいた手に力を込めると相手を逃がさぬように固定する。
拳を掴まれた悪魔は身体を覆っている青い炎を使ってセルピヌスへの攻撃を試みるも、龍翼を羽ばたかせて勢いをつけたセルピヌスが敵ごと落下を開始し、遙か上空から真っ直ぐ敵を海へと叩き付けた。
大質量が落下してきた事で落下地点を中心に津波が発生し広がっていく。
悪魔の纏っている炎が海面に触れた途端、視界が数秒塞がれる程の蒸気も発生した。
大津波と白い蒸気が同時に周囲へ広がろうとすれば、先に展開していた蛇神の骨が衝撃波を起こして津波を起こして発生したばかりの大津波にぶつける。
同等の威力を持った攻撃をぶつけることで相殺を狙えば、狙い通りに悪魔とセルピヌスの落下で発生した大津波の勢いがほぼ削がれた。
蛇神の骨による街の防衛も無事に機能している事を確認し、敵の拳を掴んでいたセルピヌスはそれを離して大きく後ろに飛んで着地した。
拳を解放された事で自由になった悪魔も身体を起こして立ち上がれば、百メートル級の巨躯を持つ二体のペルソナが対峙する。
一瞬の静寂が流れ、次の瞬間、二体のペルソナが飛ぶように距離を詰め、両者の拳が空中で衝突した。

第四百四十話　最初の決着

影時間――タルタロス

チドリたちがストレガのメノウらと戦っている時、海が広がるはずの方角に巨大な気配を感じた。

探知型の能力を持っていなくても分かるほど巨大な気配が現れた事で、力を持つチドリとメノウだけじゃなく真田や敵のカズキなど他の者たちも僅かに驚いている。

だが、続けて同規模の巨大な気配が現れた反応があった事で、それが湊と理がそれぞれ規格外のペルソナを召喚したのだと理解出来た。

湊のセイヴァーがいれば戦闘は一方的なものになると思っていた。

しかし、敵も湊と同じ人格と遺伝子を持つだけあって、その力は他のペルソナ使いを圧倒しているようだ。

心の中でそんな風に敵方の評価を改めつつ、二つの巨大な気配がぶつかった事であちらの戦いも佳境に入ったことを理解したチドリが同じフロアにいる真田たちに声をかけた。

「八雲と結城理が馬鹿げた規模の力を使ったわ！　あの規模の戦いがそう長く続くとは思えない。あっちが終わる前に私たちも合流するわよ！」

他の者に声をかけながら、チドリはヘカテーを操ってメノウのデュスノミアに雷を落とす。

敵はそれを鎖に繋がった鉄の処女で受け止め、お返しとばかりに巨大な氷塊を飛ばしてくる。

お互いに術者タイプのペルソナだけあって戦闘は魔法の撃ち合いになった。

威力と使える属性の多さでチドリが押しているが、メノウは研究所時代から強い嫉妬を覚えていた因縁の相手との戦闘とあって色々と対策を練っていた。

自分の弱点を潰すための補助魔法に始まり、持っているという一つの情報だけで牽制になる拳銃。

また、敵は自分たちを殺しても問題のない事に加えて、時間を稼い

でニュクス降臨まで逃げ切り勝利という手段も取れる。
それが分かっているため、チドリや他の者たちも命に別状がない範囲での無力化は躊躇っていない。
相手は人間だ。一般の学生であるチドリたちも、化け物ではなく人間を相手に戦う事に対して気にしてはいる。
しかし、躊躇ってはいられない。手を抜いて勝てる相手ではないし、自分たちが手を抜けば仲間に被害が出る恐れがある。
何より、それで油断して自分たちの身に危険が迫れば、湊がその手を血で汚そうとするかもしれない。
そんな事はさせられない。自分たちも戦うと決めた以上、この戦いは自分の手で終わらせて見せる。
強い決意と共に敵を見たチドリは、自分と敵の中間地点に向けて僅かに力をチャージした炎の一撃を落とす。
「ヘカテー、アギダイン！」
杖を構えたヘカテーが頭上に高熱で黄色く輝く小さな太陽を形成する。
途端、敵は防御のために耐性付与魔法の赤の壁をかけ直した。
急いで勝負を終わらせると発言した後に、これまで以上の力を込めた一撃を用意すれば誰だって警戒するだろう。
チドリ自身もこれは相手に直接ぶつけた方が勝率を上げることは分かっている。
けれど、チドリはそれを選ばない。
いくら耐性を付与しようと完璧ではないと知っているから。
もし、それで誤ってメノウの命を奪ってしまうことになれば、命懸けで自分を光の当たる温かな世界にいさせてくれた青年のこれまでを無駄にしてしまう。
それだけは死んでも嫌だと、小さな太陽が地面に衝突して辺りが閃光に包まれる瞬間、目を閉じていたチドリはハンドアックスを持ってメノウへと駆け出していた。
炸裂したアギダインに熱せられた空気が髪と服を揺らす。
それをしっかりと感じながら、無効耐性によってダメージを受けな

いと分かっているチドリは炎の中を突っ切って敵まで一直線に駆け抜ける。
ペルソナの攻撃を防御するために自分の前にペルソナを配置し、さらに攻撃とその余波で起こった閃光でメノウはチドリの動きを捉えられていなかった。
だからこそ、チドリは炎の中から抜け出すと閉じていた瞼を開け、完全に虚を突かれて思考に一瞬の空白を作ってしまった少女に向けて身体を一回転させ遠心力を加えた鎖付きの斧を投げた。
「うぐっ!?」
チドリが投げつけた斧は遠心力によって真横から迫って相手の右腕に衝突した。
肩の下辺りにぶつかり、相手は痛みに呻き声を上げる。
重心と鎖が刃ではなく峰側にあるため攻撃としては峰打ちになったが、勢いのついた金属の塊が丁度筋肉で覆われていない部位に直撃したのだ。
相手は持っていた槍を取り落として、左手で怪我を負った部位を押さえている。
鎖を使って斧を手元に引き寄せながら駆けるチドリは、このチャンスに勝負を決めるためヘカテーに奥の手のスキルを使わせた。
「ミリオンシュート!」
これまで魔法しか使ってこなかったヘカテーの杖から、無数の魔法の弾丸が撃ち出される。
それらは近付いてくるチドリを迎撃しようとメノウが動かしたデュスノミアを直撃し、全身に弾丸を浴びた事で耐久限界を超えたペルソナは消えてゆく。
最後の足掻きか、苦痛に顔を歪ませながら慣れぬ左手で銃を抜いたメノウまで距離を詰めると、チドリは右手の斧で銃を切り上げ、逆手に持った左手の斧を敵の脇腹へと叩き込んだ。
攻撃を受けたメノウはそのまま地面を転がり、切り上げられてガラクタになった銃の破片が散らばる。
倒れた相手を見ながら肩で息をするチドリは、口から血を吐いて涙

を流す少女に声を掛けた。
「はぁ、はぁ……湊と一緒にいられたのは偶然。出会った順番が違えば、そこには貴女がいた可能性があることも認める。でも、湊はずっと貴女たちも救おうとしていた。制御剤の改良や副作用の緩和、適性の安定化も含めて研究していたの」
相手の怒りや憎しみが自分に向くのは当然だ。
何せ、チドリが彼の傍にいられたのは、単なる偶然でしかないのだから。
チドリ自身はそれを分かっているし、同じような立場にあっても共にはいられなかったマリアや、再会してからも別行動だったストレガたちからすれば、自分たちに何もしてくれない彼の事を冷たいと思うのも理解出来る。
ただ、チドリは彼が被験体たちの事を忘れておらず、今もＥＰ社で研究を続けている事を知っていた。
被験体の死や彼らを蝕む制御剤の副作用は桐条の罪だ。彼に一切の非はなく、責任を感じる必要すらない。
それでも、彼は制御剤を研究して、少しでもストレガたちが長生き出来る方法を探っていた。
そんな姿を知っているからこそ、チドリはどうか彼の事は恨まないで欲しいと思っていれば、倒れたままのメノウが無事な腕で目元を覆いながら途切れ途切れに言葉を返してきた。
「……しって、るよ。ボクたちが今使ってるのだって……ミナト君が、用意してくれた新薬だもん。それ、を……データごとくれた時……ミナト君は申し訳なさそうに謝ってきたんだ……。こんな物しか用意出来なくてすまないって」
湊がＥＰ社で研究していた新薬はしっかりとストレガたちにも届いていた。
自分がいない時の事も考えて、薬のデータも渡して彼らの馴染みの薬屋で用意出来るようにもしていた。
おかげで副作用で機能が低下した臓器は回復していないものの、見えない糸に縛られているかのような全身に感じていただるさは消え

去った。
　このまま身体が動かなくなって死んでいくと思っていた少女にとって、再び自由に動けるようになっただけでも感謝しきれない程だと言うのに、あの青年は本当に申し訳なさそうな下手をすれば泣いているようにも見える表情で謝ってきたのだ。
　それを知っていて何故彼を責められるのか。そんな事出来るはずがないと倒れたままの少女は続ける。
「……ミナト君は、ずっと優しかったよ。敵になったのは、ボクたちの方で、恩を仇で返すような真似をしてるって事も分かってる」
「なら、どうして滅びを求めたの？」
「……ボクたちの死は避けられない。多分、本当にこれが最後なんだ。だから、別の明日が欲しかった」
　今のままの世界では、死を切っ掛けに自分たちは離れ離れになってしまう。
　何も持たぬ少女は死を怖れた。死を迎えても何も変わらず続いていく世界を怖れた。
　だから、世界を変えようと思った。僅かにでも可能性があるのなら、彼と共にいさせて欲しいという願いのために。
　少女が抱いたそんな小さな願いを聞いたチドリは、相手にかける言葉を持っていなかった。
　彼と共に過し、滅びを免れた世界でも彼と共にいることの出来る者が、遠くない日に訪れる死を待つ者に何を言えると言うのか。
　敗北に涙を流す少女の傍らに立つチドリは、他の者たちの戦いが終わるまで黙ってその場に居続けた。
＊＊＊
　敵の攻撃から身を守るため両手にダメージを負った荒垣は、持って来ていた薬で何とか治療すると再び巨大ペルソナとの戦闘を続けていた。
　咄嗟にペルソナに守らせた事で天田は大きなダメージを負うこともなく、ひたすら足でかき回して敵の隙を探っている。
　テュポーンの相手をしている間は召喚者のスミレが無防備になり、

それを守るためにテュポーンが動いた時にはテュポーンへの攻撃チャンスになる。
そうして、攻守を入れ替えながらも状況が膠着してくれれば、何か状況を変えられるものはないかと荒垣たちも焦りを覚え始めていた。
治療したと言っても流した血の分だけ荒垣は消耗している。
加えて、敵の撹乱で足を使っている天田は子どもだけあって、スタミナには最初から難があった。
元々、巨大ペルソナであるテュポーンは三人で相手をするような敵だと想定していたため、二人でも戦えているだけでも十分ではある。
その事は荒垣自身も分かっているのだが、仲間たちがそれぞれの役目を果たしているというのに、自分だけ戦いに貢献出来ていないという焦燥感をどうしても覚えてしまう。
そして、このまま戦って状況を変えられなければ、先に潰れるのは敵ではなく自分だという確信がある。
離れている場所でスミレへの攻撃を狙っている天田も同じ事を考えているだろう。
だからこそ、何かないかと必死に考えていた時、感知型の能力を持たぬ身だというのに、荒垣たちはタルタロスの外で途轍もなく大きな気配が突然二つも出現したのを感じ取った。
外で何が起きているのかは分からない。ただ、湊が目の前のペルソナ以上にデカい敵と戦いっている事は分かる。
「天田ッ!!」
「分かってます!!」
二つの巨大なペルソナ反応。蛇神の重圧を感じないという事は、いつかの夏祭りの後で見た百メートル越えの巨人かもしれない。
自分たちがクジラ程度の敵に苦戦しているというのに、湊と結城理は随分とふざけた戦いをしているものだと思わず苦笑が滲み出る。
ただ、それなら自分はここで足踏みしている訳にはいかない。声を掛ければ天田も同じだったようで瞳に強い力を宿して応えてきた。
「アルケイデス、敵を掴め!!」
細かい作戦を考えたところで敵の巨体には通じない。

であれば、地味な嫌がらせのような真似になるが、強引にチャンスを作るしかない。
アルケイデス自身よりも太い腕の横薙ぎを躱し、即座に切り返してその腕を掴むと重心を崩すようにして引っ張り込む。
そして、荒垣は周囲の状況を把握しながら、バランスを崩しかけているテュポーンをつれて真田とカズキの戦っているエリアへともつれ込む。
「くそっ、なんだ一体っ!?」
二人の戦いは真田の方が押していたようだが、そうであれば自分たちを手伝えと言いたい。
不機嫌そうに後退する真田と視線を交わし、血で汚れた袖を見せて押されていた事を伝える。
それだけで真田も状況を把握したのか、不満そうにカエサルを呼び出すと雷撃を放った。
「マハジオダインっ!!」
天井付近から落ちてくる無数の雷がテュポーンに降り注ぎダメージを与えてゆく。
今まで戦っていたカズキのモーモスには効かなかったが、テュポーンには有効なのか攻撃を受けたテュポーンがのたうち回るように激しく暴れる。
近くにいればそれに巻き込まれるため、近接主体のアルケイデスには出来ない攻撃方法だ。
だが、仲間を巻き込んでまで作った大きなチャンスに、荒垣は自身のペルソナをテュポーンの召喚者であるスミレへと向かわせた。
「させるわけねェだろ!!」
しかし、敵へと向かう途中で横から大鎌を持ったペルソナが切りかかってくる。
咄嗟にアルケイデスに棍棒で受け止めさせたが、攻撃を止められたと判断した途端に敵は距離を取った。
速度重視の敵だとすれば厄介で、自分より天田の方が対応に向いているとも思っている。

「けど、それじゃあ、俺がいる意味がねぇんだよ！」
パワーとタフネスが売りだと言うのに、上位互換のテュポーンに敗北して幼馴染みを巻き込んだのだ。
続けて、それほど相性が良くないからとそちらの戦いを後輩の天田に任せてしまえば、戦うと心に決めてこの場にやってきた意味がない。
逃げられるならしつこく追うまで、アルケイデスを先行させて荒垣自身も戦斧を持ってカズキへと迫る。
「あァ？　人殺して逃げ出してピーピー泣いてたクソ雑魚が、どうしてオレに勝てると思っちまってンだァ！」
モーモスを追って飛ぶアルケイデスに斬撃スキルが放たれる。
腕や足、次々と狙っていくつも飛んでいくそれらを、アルケイデスは棍棒や腕でガードしながら最短を進み続ける。
その後ろを追って駆ける荒垣は、挑発してくるカズキに向けて戦斧を振り下ろす。
敵はそれを躱し、カットラスで腕をねらってくるも、荒垣が腕を捻りながら戦斧の腹で強引に殴りつけようとした事で後退して避けた。
機敏な動きで攻守を入れ替える敵を視線で追う荒垣は、他の仲間と違いどこか餓えた獣を思わせる瞳で敵を見ながら言葉を返す。
「俺個人の勝利に執着はねぇよ。けどな、なんの仕事も果たさず負けを認めて諦めるほど腐ってもいねぇ」
後退した敵を追いかけて戦斧を大きく横薙ぎに振るう。
当たれば一撃で敵を屠る威力があったとしても、掠りもしないようでは意味がない。
テュポーンに手酷くやられ、せめてコイツだけでもとヤケクソになっただけかと捉えたカズキは荒垣の言葉に嘲笑を浮かべた。
「諦めが悪かろうが、結果が出せなきゃ意味ねェだろうが！　天然のくせにペルソナもろくに制御出来ず、かと言って死に近付いたオレらほどペルソナが強化されてる訳でもねェ！　肉壁要員ならさっさとくたばれや!!」
荒垣の攻撃を避け続け、攻撃を躱しながら銃を抜いたカズキはその

銃口を荒垣に向ける。
本来制御が容易であるはずの天然型のペルソナ使いでありながら、荒垣は適性が足りず不安定な力を押さえ込めずに暴走事件を起こした。
そこまでであれば、ストレガたち元被験体も似たような体験をしているのだが、制御剤の服用によって死に近付き適性が上がっている彼と違い。荒垣の適性値は特別高い訳ではない。
原因は湊が荒垣に渡した制御剤が偽物で、彼の寿命が一切減っていないためだ。
けれど、戦っているカズキはそれを知らないし、他のストレガたちもまさか荒垣が偽物の制御剤を使っていたなどと知るわけがない。
それ故、カズキが死に近付いても雑魚のままだと嗤って引き金を引こうとすれば、
「飛び道具に頼ったなっ！」
先ほどまでカエサルと共にテュポーンと戦っていた真田が横から接近し、カズキは攻撃の中断を余儀なくされた。
荒垣に代わって再び真田がカズキへと迫ると、これまでしつこくカズキを追っていた荒垣が方向転換して起き上がろうとしているテュポーンへと向かって行く。
先ほど真田と視線を交わした時、荒垣はお前がテュポーンと戦えと伝えた訳ではない。
あの時は、状況を変えたいから一度相手を代わって欲しいと伝えただけだ。
確かにカエサルにはテュポーンの弱点である電撃がある。
けれど、テュポーンは高い魔法耐性を持っているのか、弱点属性であってもかなりの回数や威力を叩き込む必要があった。
魔法だけで決着をつけようとすれば、相手が根を上げる前に真田のエネルギーが枯渇する可能性がある。
だからこそ、荒垣は状況を変えるため〝一時的に〟戦う相手を交換したのだ。
「叩き込め、アルケイデス！」

飛び上がって棍棒を振り上げたアルケイデスは、落下の勢いも乗せた棍棒をテュポーンの肩に叩き込む。
如何に肥大化した筋肉に覆われた肉体でも、直前に体表を電撃で焼かれた状態であれば万全でないためにダメージが通る。
肩を強く殴られてバランスを崩したタイミングで、荒垣自身も接近して斧で撫で切るようにして走り抜ける。
近くをちょこまかと走る荒垣を鬱陶しいと感じたのか、身体を起こしかけていたテュポーンが四つん這いの状態で手を使い荒垣を捕まえようとする。
しかし、それこそ狙っていた状況だと荒垣が内心で笑えば、天上付近からテュポーンの背に向けてアルケイデスが落ちてきた。
「くらえ、ギガントフィストォォォッ!!」
赤く灼熱に染まった拳がさらに光を纏い、黄色に輝く流星の如く敵の背へ真っ直ぐ落ちてゆく。
流星と化したアルケイデスの拳が、テュポーンの持つ赤銅色の筋肉の鎧へと突き刺さり、嵐の化身が地に伏せる。
クジラほどもある巨体が地に伏せれば、フロア全体に衝撃が伝わり揺れと共に轟音が響いた。
地に伏した嵐の化身の姿が徐々に消えてゆき、召喚者はどうなったと視線を向ければ、天田に槍を向けられて相手は頭の後ろで腕を組んで座り込んでいた。
事前に召喚者自身に戦闘能力はないと聞いていたため、ペルソナが倒されれば無抵抗で降参するのも理解出来る。
そして、残る一人はと真田たちの方を見れば、引き金の引かれたカズキの銃から銃弾が飛び出し、それを紙一重で躱した真田が相手の顔面に左ストレートを叩き込む光景が目に飛び込んできた。
殴られたカズキは大きく吹き飛び、背中からまともに地面に倒れ込むと少し転がり、止まった時には鼻血を出して白目を剥いている。
これでこのフロアでの戦い全てに決着がついたが、テュポーン相手に苦戦した荒垣と天田はそれなりにボロボロで、メノウと戦っていたチドリは服や顔などが多少汚れて少し疲れた程度、真田は先ほどの銃

弾が掠ったのか右肩から血が出ているが最も身体のダメージは少ない様子だ。
「シンジも天田も随分とやられたようだな」
「元々、三人で相手する予定を二人で対処する必要があったからな」
「ああ、おかげで基本的にはあいつと一対一で戦う事が出来た。感謝している」
集まってきた仲間を見て真田が呟けば、疲れた表情の荒垣が愚痴をこぼす。
本来なら荒垣たちは四対三のチーム戦をすべきだった。
そうすれば、お互いにフォローし合って有利に戦いを進められたはずなのだ。
しかし、チドリはメノウからの指名で、真田は自身が指名する形でカズキとの戦いを望んだ。
最後の戦いだからこそ、それぞれの因縁に決着をつける必要もあるだろうと、荒垣と天田は二人でテュポーンの相手をして仲間が自分の戦いに集中出来るよう配慮した。
ただ、予想よりも時間が掛かっていたせいで荒垣たちは不利な状況に置かれ、これ以上は難しいと判断した段階で真田を巻き込んだ。
真田自身も荒垣たちが配慮してくれていた事は分かっており、その事で礼を言っていれば、ペルソナで他の戦いの状況を探っていたチドリがペルソナを消して声を掛けてきた。
「……良いから治療したらすぐ上に向かうわよ。スミレ、倒れてる二人は任せるわ。治療薬は持ってるでしょ？」
既に天田も集まっている事でスミレは手足なども縛られず自由にしている状態だ。
だが、負傷しているストレガメンバーの面倒を見る人間も必要なので、スミレというペルソナを倒されて消耗しているだけの人間に彼女自身の仲間の世話を任せる事にした。
チドリに声を掛けられたスミレは頷いてから用意していた治療薬を見せてきており、意識を失っているカズキはともかく、意識はあるメノウと一緒であれば無事に治療も施せるだろう。

本気で戦いあった相手とは言え、その後にシャドウに襲われ命を落として知らん顔出来るほど非情ではない。

スミレに後を任せる事で心配の種がなくなった一同は、その場で自分たちに治療を施すと、チドリの案内に従って仲間の許を目指し移動を開始した。

第四百四十一話　罪だとしても

影時間――タルタロス

チドリたちがタルタロスの外に巨大な気配の出現を感じ取った時、タカヤたちと戦っていたラビリスも同じようにそれを感じ取っていた。

気配を感じるのは海の広がる方角だ。そんな場所で戦っている仲間など一人しかいない。

であれば、その気配は間違いなく、敵の最大戦力二人を押さえてくれている青年なのだろう。

ただ、ラビリスが感じる気配は二つあった。巨大な気配が出現した直後に、同規模の気配が現れたのだ。

一つは間違いなく湊だろうが、だとするともう一つの気配の召喚者は誰か。

普通に考えれば彼と戦っている理か玖美奈のどちらかだろう。

相手は二人とも湊や七歌のようにワイルドの能力を持っており、その適性値はタルタロスの探索を繰り返してきたラビリスたちよりは遙かに上だ。

そんな彼らであれば、探知型の能力を持っていない人間でも分かるような規模の力を持つペルソナを召喚出来ても不思議ではない。

しかし、感じた気配の数は二つ。一つはほぼ間違いなく湊だと思われるため、人数が余る敵二人の内のどちらかは既に戦線離脱しているのだろうか。

ラビリスが戦斧を持って油断なく敵を見ながら考えていれば、コロマルのケルベロスが放った炎をヒュプノスの風で迎撃していたタカヤが笑みを浮かべながら口を開いた。

「凄まじい気配ですね。一つはミナトでしょうが、もう一つは彼のクローンである結城理の物でしょうか？　フフッ、前回の敗走を見た時には、以前のあれは姑息な手段で勝ちを拾っただけだと思っていましたが、どうやら本当に彼に匹敵するだけの力を持っていたようですね」

言いながらタカヤは銃を順平に向けて引き金を引こうとする。
気付いたラビリスは戦斧の推進器を使って高速で移動し、射線に割り込んで飛んできた銃弾を弾いて見せる。
タカヤの攻撃が防がれた事で、ジンがペルソナを呼び出しすぐに追撃を決めようとするも、ラビリスに庇われた順平がトリスメギストスを呼び出していた事で、両者のペルソナが正面からぶつかり合う。
殺傷能力の高い銃火器を持つストレガに対し、ラビリスたちは数の有利と連携で対抗する。
おかげで戦況は五分五分と言ったところだが、お互いに無傷ではないため、決着はそう遠くないだろう。
僅かなミスで戦局が大きく変わる可能性をあるため、ラビリスもペルソナを呼び出し、アリアドネーにストリングアーツで剣を作らせ攻撃を仕掛けながら言葉を返す。
「片方が湊君なんは同意やけど、もう一つの気配が結城理やっていう根拠でもあるん？」
「逆に問いますが、あれと同等の力を持つ者がそう何人もいると思いますか？　どういう訳かあの二人は同じ幼少期の記憶を持っていると聞いています。同一の人格であれば、心の力であるペルソナも同一のものになる可能性がある。そこから推測したに過ぎません」
アリアドネーの繰り出す剣を雷で牽制し、拳銃で狙う隙を探りながらタカヤが答える。
湊や名切りの体質について、ラビリスたちは七歌とアイギスから聞いていたため、どうしてオリジナルとクローンで同じ記憶と人格を持っているのか知っている。
しかし、湊も自分の生まれについて元々知らなかったように、理も自分の実家について知らなかったことで、名切りの一族やその能力についてストレガたちは情報を持っていないらしい。
この状況で知ったところで勝負の決着は変わらないと思われるため、ラビリスたちはそれを説明する気は欠片もない。
ただ、相手は詳細が分からずとも気にしていないのか、外の戦いに興味がある様子で饒舌に話し続ける。

「世界を怨みながらも存続を願うオリジナルに、そのオリジナルへの憎しみを持って世界の破滅を願うクローン。物語としてはありきたりですが、それが現実に起こってみると人間の業の深さを感じますね」
目的を持って人間に作られたはずの存在が、その人間を世界ごと滅ぼそうとしている。
何を間違えればそんな真逆の結果になるのかと、この状況を面白がって笑うタカヤ。
それを見ていた順平が大剣を持って駆け出し、モロスに斬りかかって大声を出す。
「なにが人間の業だ。全部幾月のした事だろ！　最初から滅びを望んで、そのための力が必要だから有里のクローンを作って利用してるんだろうが！」
「アホ抜かせ。ワシらを作ったんはお前ら側におる桐条総帥やろが」
順平の言う通り、理については幾月が世界に滅びをもたらすために行なった事かもしれない。
けれど、幾月と同じように世界の滅びを願っているタカヤやジンは、世界のためを思って行動した桐条武治によって力を与えられている。
大のために小を犠牲にする。種の存続を考えれば、その考えは正しい。
タカヤたちもその点は理解出来るものの、現状を見れば、あの男の行動は全て裏目に出ていると嘲笑する。
「人々を守るためにとあの男が取った行動の結果がこれです。身内に裏切り者がいる事にも気付かず、実験動物たちにはこうして手を噛まれる始末。やる事全てが裏目に出ていて、あの男こそ本当は滅びを願っているのではないかと思ってしまうほどですよ」
「滅びを求めた先代の息子や。裏でなにを思てても不思議やないわな！」
自分の右腕としていた男が裏で進めていた計画にも気付かず、世界を守るため生贄にしようとした被験体たちには逃げられた上、こうし

て大事な場面で妨害までされてしまっている。
本気で世界を守ろうとしていたとすればとんだ道化で、むしろ本心では滅びを求めていたためにこうなるように動いていたと考えていた方がしっくりとくる。
ストレガの二人がそういって桐条のことを笑っていれば、モロスを切りつけていた順平が歯を食いしばって力を込めると、敵を押し退け無理矢理に道をこじ開けてジンへと迫る。
「ゴチャゴチャとうるせぇんだよ！　幾月に使われて、有里からも逃げ出した腰抜けどもが偉そうな事いってんじゃねえ！」
敵に向かって走る順平を離れた場所にいたタカヤが撃とうとする。
けれど、そうはさせないとアリアドネーのストリングアーツをただ伸ばして動きを妨害した。
ラビリスの妨害によってタカヤの動きが封じられ、順平はジンを真っ直ぐ見つめて駆けてゆく。
ジンも拳銃は持っているが、今は手榴弾と召喚器で両手が埋まっている。
召喚器を持っている方の腕は怪我を負っており、手榴弾は乱暴に扱えない代物。
よって、咄嗟の持ち替えは出来ない以上、相手に出来るのは手榴弾での迎撃のみ。
迫る順平を睨みながら効果範囲を目測で測りジンが手榴弾を投げれば、
「アオーンッ！」
爆発する前にコロマルが召喚したケルベロスが炎を吐き出し、横合いから迫ったそれが爆発前の手榴弾を飲み込んだ。
炎に押し流された手榴弾は途中で爆発するも効果を発揮せず、味方の援護にニヤリと笑った順平が炎の中を突っ切りジンの目の前まで躍り出る。
「しゃらくさいわ！」
手榴弾を無効化された事に表情を歪めたジンも、敵が迫っていたため空いた手を拳銃に伸ばしていた。

狙いをつける余裕はないが、それでもこの距離なら外さない。
そうして、ジンが拳銃の引き金を引こうとした時、順平は両手で持った大剣を振り上げながら身体を横に向けて急ブレーキをかけ、銃声が聞こえたと同時に野球のスイングで発射された銃弾を弾いた。
「なんやとっ!?」
相手が湊や元対シャドウ兵器の姉妹であれば銃弾を躱したり、武器を使って弾かれるという事も分かる。
だが、順平はただの学生だ。銃の扱いは勿論、銃を持った人間を相手に戦った経験だってほとんどないはず。
そんな一般人でしかない人間が、冷静に攻撃のタイミングを見極めて近距離で弾いて見せた。
どうしてお前にそんな事が出来たのだとジンが驚愕している間に、再度駆け出して距離を詰めた順平が拳を握って相手の顔面を殴り飛ばす。
「ガキだからって舐めてんじゃねーぞ!」
内心では上手くいって良かったと心臓をバクバクいわせている順平は、これで大人しく眠っていろと渾身の拳で打ち抜いた。
動揺していた事で咄嗟に衝撃を逃がすといった対処も取れなかったジンは、頬を殴られて口の中に鉄の味が広がるのを感じながら一瞬の浮遊感を味わう。
そして、すぐに背中と後頭部に強い衝撃と痛みを感じると、ここまで連れてきてくれたタカヤへの申し訳なさを感じながら意識を手放した。
「ジン!」
これまで余裕を見せていたタカヤも、流石に仲間がやられれば冷静ではいられないのか大きな隙を見せる。
このチャンスを無駄にはしないとラビリスはE．X．O．を発動し、身体から青白い光を放出すると人間の限界を超えた速度で相手へと迫る。
けれど、タカヤも裏の世界で命のやり取りをしてきた人間だ。
動揺しても敵から完全に意識を外すという事はしていなかったの

か、視界の端でラビリスに動きがあった時点でペルソナを呼びだしていた。
「ヒュプノス！　全てを薙ぎ払いなさい！」
何かをしようというのなら、相手が動く前に潰すか近づけなければいい。
タカヤの頭上に現れたヒュプノスは黒い翼を羽ばたかせて暴風を巻き起こす。
ジンを殴り飛ばした直後で体勢が整っていなかった順平と、先ほど順平を守るために動いて離れた場所にいたコロマルは、タカヤを中心として放たれた暴風に煽られて地面を転がる。
「そんなんで止まるわけないやろ！」
だが、勢いをつけて相手に向かっていたラビリスは正面から風を受けようとも止まらず、戦斧の推進器も起動してタカヤへと肉薄する。
タカヤとジンは他のストレガのメンバーと異なって近接武器を持っていない。
ペルソナのスキルもほとんどが魔法スキルに偏っている事から、本人のセンスか制御剤の副作用に蝕まれた身体の問題か、そもそも格闘戦を得意としていないのだろう。
その分、銃や爆弾でペルソナ以外の戦い方を補っていたようだが、火器非搭載モデル故に数多の格闘戦のデータを収集していた格闘戦のエキスパートに接近を許してしまった時点でそれらは意味を成さない。
とはいえ、何もせずにただ負けを認める訳もなく、青白い光を纏ったラビリスがすぐ目の前までやってくれば、タカヤも手に持っていた大型リボルバーの頑丈なグリップの底をハンマー代わりにして殴ろうとする。
「何故人々の願いを、持たざる者たちの希望を奪おうとするのです！」
ラビリスたちにとっては世界の滅びなど質の悪い夢、馬鹿な話でしかないのかもしれない。
しかし、それでも、他の者たちにはくだらない事だったとしても、それを望み、それだけを唯一の希望として縋った者たちもいるのだ。

一体何の権利があってお前たちはそれを否定し、他者の願いを踏み躙ろうというのか。
桐条によって未来を奪われ、結果的にとは言え持たぬ者たちの声を聞いてきたタカヤが怒りの感情のままに武器を振り下ろせば、戦斧を手放しガントレットを装備した手で攻撃を受け止めたラビリスが真っ直ぐ相手と視線を合わせ口を開く。
「それが本当の希望やないって知ってるからや。死は終わり、その先にはなんもない。地獄を味わって楽になりたいんならそれも分かる。けど、その人たちは救われたいんやろ？　なら、目指すゴールはそこやないって誰かが否定したらなアカンやろ」
もし、これ以上この地獄を生きていたくないと滅びを求める者がいれば、ラビリスは自分の願いを叶えるために貴方の願いを否定してゴメンと謝るだろう。
生き続ける方が辛い。死ぬ事で今感じている苦しみから解放されたい。そんな考えを持っている者からすれば、世界の滅びは間違いなく救いとなる。
であれば、ラビリスも自分の願いのために相手の願いを否定する事を認め、他者の希望を踏み躙った事実を罪として背負い生きていくつもりである。
しかし、タカヤたちが言っている持たざる者のほとんどがそうではない。
自身か社会の現状に絶望しているとしても、彼らが求めているのは〝救い〟であって〝滅び〟ではないのだ。
ラビリスは掴んでいた相手の銃から手を離すと、間髪入れずに空いた手でタカヤの腹部を殴りつける。
「ウチも多分、そのままやったらアンタらみたいになってたんやと思う。でも、湊君と会って違う生き方を知って、家族にも会わせてもろたからもうその道は選べへん。だから……ゴメンな」
金属製のガントレットに覆われた拳を腹部に喰らいタカヤの身体がくの字に折れ曲がる。
そして、頭が下がってきたところで逆の拳を握り締め、下から掬い

上げるようにして顎を打ち抜いた。
アッパーで殴られたタカヤは武器を手放し、仰向けのまま大の字になって地面に倒れ込む。
意識は失っていないようだが、脳が揺れて立ち上がる事も出来ないのか、焦点の合わなくなった瞳でただ虚空を見つめていた。
相手を戦闘不能状態に追い込んだ事を改めて確認し、ラビリスはホッと息を吐いてＥ．Ｘ．Ｏ．を解除する。
数で勝っていたとは言え無傷という訳にはいかず、相手が強力な銃火器を持っているという重圧に加え、戦闘でペルソナを使っていた事もあり心身共に消耗している。
ただ、まだ他の仲間が戦っているのが分かっているだけに、ここで腰を下ろして休んでいるという訳にもいかない。
武器を拾ったラビリスの許へ順平とコロマルも集まり、その顔に疲労の色を見せながらも笑って話しかけてくる。
「なんとか大怪我もせずに勝てたな。二人ともおつかれ！」
「うん。順平君もコロマルさんもお疲れさま」
「わん！」
因縁の相手に勝った事を喜びつつ、お互いに無事で済んだ事を確認して安堵の息を漏らす。
銃や爆弾を相手にするのは精神的に疲れるが、自分よりも仲間が無事でいられるかという心配の方が強く感じてしまい。
こうやって戦闘が終わって無事を確認するまで、それぞれ気が気でなかったらしい。
けれど、それほど大きな怪我をしていないのであれば、すぐに次の行動について決めるべきかと順平がラビリスに尋ねた。
「んで、この後はどうすんだ？　ぶっ続けて行くのか、流石に少しは休んでから行くのか。逆に下の真田さんらと合流してから上に行くってのもありだと思うけどさ」
「とりあえず、息が整うくらいの休憩は入れた方がええんちゃうかな。後の事を考えるんなら、擦り傷でも怪我は治療しといた方がいいと思うし」

「分かった。なら、その間に真田さんたちが合流してくる事に期待でもしとくかな」
方針を決めると順平は上層への階段に腰を下ろし、携帯パックから飲み物を取り出して水分補給を始める。
それを見たラビリスもタカヤとジンの武器を回収してから休息を取り、合流した後に少しでも仲間を助けられるよう身体を休める。
タルタロスの外ではまだ二つの巨大な気配が戦っているのが分かり、それとは別の禍々しい気配を上の階層から感じていた。
神であるニュクスが降臨すれば気配はこんなものでは済まないはずで、となれば禍々しい気配の正体は頂上で七歌たちが戦っている〝宣告者〟だろう。
何人で戦っているのか。仲間たちは無事なのか。考えるほど不吉な結果を想像してしまい、このままでは駄目だと頭を振って妄想を吹き飛ばす。
仲間は全員無事。ニュクスの降臨にもまだまだ間に合う。
だから大丈夫だと自分に言い聞かせ、ラビリスは短い休憩で体力の回復につとめるのだった。

第四百四十二話　異変

影時間――巌戸台

世界の滅びが預言された日。少年と少女たちは奈落の塔で戦っていた。

宙より来たる女神の権能によって、世界は死に包まれ滅びを迎える。

全ては人々がそれを求めたから、滅びという結末を望まなくとも、〝死〟について考えてしまった事で、女神は呼び声に応える形でこの惑星へと降臨する事になった。

けれど、戦っている彼らはその結末を変えようと思った。

確かに人は死について考える。定命を持って生まれたのだ。その生の終わりについて考えても不思議ではない。

だが、降臨しようとしている女神は自身と〝死〟が同一のものであると考え、そのため自分が呼ばれていると思い地球へと向かってきている。

誰が悪いわけでもない。単に価値観の相違からくる勘違いが起こした不幸な事故。

その結果が地球という惑星に生きる生命らの終焉というのは悪夢としか言い様がないが、巌戸台分寮の屋上で子どもたちの戦いの結末を見届けようと巨大な月の浮かぶ空を見上げていた桐条はポツリと呟いた。

「……何に代えても守りたかった娘とその友人らに頼るしかない。肝心な時に役立たずな己の情けなさに消えてしまいたくなるな」

「まぁ、先代が始めた事とは言え、おめぇさんも手を貸していたんだ。確かにこりゃあ本来なら桐条だけで始末つけるのが筋だろう」

簡易補整器の指輪を付ける事で影時間に適応し、桐条らと共に屋上からタルタロスを見つめていた鵜飼が桐条に視線を向ける。

湊とチドリの保護者として色々と関わってきたが、鵜飼自身は桐条グループに怨みなどない。

湊の遺体が病院から盗まれた時には怒りもしたが、自身も真っ当な

人生を歩んできたとは口が裂けても言えない身として、大企業の総帥として組織を引っ張ってきた男が清廉潔白でなくとも当然だと思っている。
無論、世界の滅びの原因を作った事に関しては、どうして自分たちで始末をつけれないような事態を引き起こしたと文句を言いたくはあるが、貧乏くじを引いているのは戦っている子どもたちだ。
戦いに行く前に子どもたちの顔を見て、彼らがしっかりと自分の意思で戦う覚悟を決めているのはすぐ分かった。
本人たちが納得している以上、保護者だからとネチネチ文句をつければ彼らの決意を貶す事になってしまう。
故に、鵜飼は桐条の罪を認めつつも、自分たちの想像を超えて成長した子どもの喜ぶべきだと相手を励ました。
「けど、坊主らはしっかり覚悟を決めて戦いに出た。世界のためなんかじゃねぇ。自分らの一番守りてぇもんを守るために戦いに行ったんだ。おめぇはあれが死にに行くやつの面に見えたか？」
「いえ。最後まで諦めるつもりはないと、そんな決意を感じるいい表情でした」
「だろ？　なら、最後まで信じてやんな。あいつらなら大丈夫だってな」
戦いに向かった時の七歌たちの表情は、晴れやかでいて強い意志を感じる笑顔だった。
絶対に勝つ。未来を奪わせはしない。大切なものを守り抜く。そんな彼女たちの決意がしっかりと伝わってくる表情だ。
世界の滅びを知らされた十二月は、誰も彼もが思い詰めた表情をしていた。
その時期の事を知っているからこそ、保護者たちは戦いへ赴く子どもの姿に大きな成長を感じる事が出来たのだ。
彼らならきっと大丈夫。確かな根拠などないが、自分の子どもだから信じられる。そう思った。
桐条と鵜飼の会話を傍で聞いていた桜と英恵も、時折街の上空で弾ける戦いの光を見つめながら言葉を交わす。

「……どうして人は滅びを求めてしまったのでしょうか。わたし自身、母を亡くした時やみー君が死んでしまった時には悲しみのあまり死んでしまいたいという気持ちを感じてしまいました。でも、それは……世界の滅びを求めた訳じゃない。ただ、叶うならばもう一度死んだ者に会いたかっただけなんです」
「分かります。私も同じ痛みを知り、そしてそのせいで娘を蔑ろにしてしまった過去がありますから。もう一度会いたい。本当に、ただそれだけだった。でも、神という存在は人間のそういった感情を理解してはくれなかったのでしょう」
薄らと空に浮かんでいる雲と同じ高さで赤い炎が弾ける。
そして、薙ぎ払うように蛍火色の光が放たれたかと思えば、広範囲に向けて雷が迸っていた。
今、あそこで湊が戦っている。事前に作戦は聞いているので、変更がなければ相手は彼のクローンである結城理と幾月の娘である幾月玖美奈だろう。
全てのアルカナシャドウを倒した翌日、彼らと会った七歌たちがその目的を聞いていた。
敵の目的は、今ある世界を壊して新たな理を持つ世界を造る事だという。
しかし、桐条が目覚めてから裏切った幾月について調べを進め、彼の妻が交通事故で亡くなっている事を突き止めた。
それにより、相手の目的が死んだ者と再び一緒に暮らせる世界を造ることだと分かった。
同じ痛みを知るが故に、幾月が世界の滅びを求めてしまった気持ちを理解出来る英恵は、結局のところは人にそんな夢を見させてしまう神の存在が悪いのだと苦笑する。
「私たちの人間の尺度でいえば願うことは罪じゃないと思います。でも、神という超常の存在が、現実にそう出来る可能性を見せてしまった。実際に出来るかどうかは分かりませんが、人々はその先に何かがあると思ってしまった。それが全ての原因でしょうね」
「それは……ある意味人間の欲深さが招いた事態という事になるん

じゃ？」
「そうとも言えますが、そうした心を持つに到ったのもニュクスが力を与えたからでしょう？」
人間に限らず、地球の生物がここまで多様性を持って進化したのは、ニュクスが自身の欠片であるシャドウを地球の原生生物たちに与えたからだ。
おかげで人類が生まれるに至ったし、個々で異なる複雑な心を得るほどに成長することも出来た。
ただ、人がこんな風に複雑な心を得るよう進化した大本の原因でもあるため、今回の滅びは人をそんな風に作ったニュクスの自作自演のようにも思えてしまう。
湊も同じような事を考えていたため、英恵の話を聞いた桜は本当に悪いのはどちらなのかと心の中で考えながら遠く離れた空の戦いを見続けた。
すると、海のある方角で一際強い極光が空を照らしたかと思えば、次の瞬間、ペルソナどころか適性すら持たぬ桜たちでも感じ取れる巨大な気配の出現を感知した。
特別課外活動部の臨時顧問になっている栗原が、気配の現れた方向を見つめて目を細める。
他の建物などもあってよくは見えないが、どうやら海上で巨大なペルソナが戦っているらしい。
「湊だけじゃなく敵もこうまで強大な力を持っていたとはね。確かに、あれは他の子じゃ相手しきれない」
「有里君は勝てますか？」
エルゴ研時代、シャドウの対となるペルソナの存在を予想していた栗原は、湊と再会してから密かに研究を続けていた事で、この場にいる誰よりもペルソナに関する知識を持っている。
そんな彼女でもここまで離れていてもはっきり感じ取れる気配を持つ敵の力には驚かされた。
ストレガには全長三十メートルの巨大ペルソナを持つ少女がいると聞いていたが、海の方から感じる気配はそれより遙かに大きい。

戦いの中で時々飛び跳ねているのか、建物の影から青い炎を纏った頭部や羽根がチラチラと見える。
それと戦う龍を人型にしたようなペルソナの姿も時々確認出来るため、どうやら揃って馬鹿げたサイズのペルソナを召喚しているらしい。
蛇神という規格外の力を持つ青年の事をよく知っていたため、敵まで同等の力を持っている事には流石に驚いた。
ただ、他の者よりペルソナに関する知識を持っている栗原が驚いたからこそ、美紀が不安そうに湊が勝てるかを尋ねれば、英恵のサポートとして来ていた斎川菊乃が代わりに答えた。
「理論上、あの方を超える力を持つペルソナ使いはいません。というのもあの方の持つ黄昏の羽根は非常に特殊で、使用したエネルギーを使用した量以上に増幅させることで力の上限が実質存在しないのです」
「でも、相手も有里君と同等のペルソナを使ってきているんですよね？」
「いや、湊は街中に自我持ちらを展開して、さらに戦いの余波が街に行かないように蛇神の骨も出しているみたいだ。ペルソナは同時に呼び出してるとエネルギー消費が増える。それでも維持出来てるならとりあえず心配はいらないよ」
菊乃に続けて栗原が湊が有利なのは変わらないと断言する。
相手が強いことは認めよう。他の者たちならこの馬鹿げた気配のペルソナを出された時点で詰んでいたに違いない。
それでも、今戦っているのは湊だ。相手も規格外なようだが、湊はそれ以上の化け物である。
仮に不利になろうと湊は街中に展開している自我持ちらを消し、その分浮いたリソースを目の前の敵に割けばいい。
そうせずとも戦えている以上、湊にはまだまだ余裕がある。
栗原が笑顔でそれを伝えれば、美紀はホッと息を吐いて安堵の表情を浮かべた。
ここにいる者たちは誰も戦っていないが、その分、戦いがどうなっ

ているのか気になるし、子どもや友人の無事を信じていても不安になるのも分かる。
そのため、栗原も努めて美紀を安心させるように話したが、正直にいえば栗原も時間に関しては不安に思っていた。
ニュクスの降臨は影時間に起こる。これは確定事項。
であれば、当然戦いは全て影時間内に終わらせなければならないはず。
影時間で機械が止まっているため、正確な時刻は把握出来ていないが、栗原としては想定よりも時間が掛かっているように感じていた。
もし、決着がつかずに時間が来れば、七歌たちはろくに対応出来ぬままニュクスの降臨を許すことになるだろう。
そんな事になれば、その時点で世界の滅びは確定する。
湊は戦力に余裕があるので、あえてまだ決着をつけていないだけかもしれないが、もしかするとタルタロスにいる者たちの戦いが長引いているのかもしれない。
自我持ちらが街中にいるため戦力の追加投入は可能だが、時間だけはどうあっても伸ばせない。
栗原が残り時間に焦りつつ心の中で必死に七歌たちを応援していれば、そのタイミングで予想外の事が起きた。
最初にその異変に気付いたのは周囲の警戒をしていた渡瀬だった。
「ん？　何故か街中に人の姿があります。数は多くありませんが、どうやら象徴化が解けて混乱しているようです」
「なんだって!?」
渡瀬の言葉を聞いて他の者たちも屋上の縁に近付き、下の様子を見てみる。
すると、彼が言った通りにどう見ても一般人でしかない者たちの姿がいくつも見えた。
「え、なんだよこれ？　電気消えてるし、何がどうなって？」
「なんだあれ!?　なんかデカい塔があるぞ!?」
時刻は深夜零時。そんな時間に出歩いているため、子どもではないようだがせいぜい二十歳を超えた程度の年齢に見える若者が遠くに

見えるタルタロスを見て動揺している。
他にも街中の明かりが消えている事や携帯の電源が入らず、状況も飲み込めないままどこに助けを求めてれば良いかパニックになる者も出ている。
ペルソナ使いでも初めて影時間を体験した時は混乱してしまう。なんの力も持たない一般人なら余計に不安を感じてしまうだろう。
混乱する市民らの姿を見て表情を険しくしていた桐条は対応について悩む。
「どうやらニュクスの影響が強まっているらしい。姿も見せていないというのに、一般人の適性を影時間適応レベルまで強化したようだ」
「我々は動くべきですか？」
指示があれば鎮圧するがと渡瀬が確認を取る。
相手は一般人だけに、混乱していると何をし始めるか分からない。
その場で蹲って現実逃避を始めるくらいなら構わないが、下手に走り回って活性化した野良シャドウに遭遇しても困る。
そうなるくらいなら、意識を奪って安全な場所に寝かせておいた方がむしろ良い。
この場にいてそれが出来るのは鵜飼と渡瀬、それと主を守るため護衛術を修めている菊乃だけ。
三人でどれだけの人数を保護出来るか分からないが、動くなら少しでも速い方がいい。
そうして、皆の視線が桐条に集まれば、彼は悩んだ末に首を横に振った。
「いや、何もしないでいい。むしろ、動くべきじゃない。この状況は彼も読んでいた。であれば、彼が街中に配置した自我持ちのペルソナたちが最悪の事態は避けてくれる」
「けど、街中がこの様なら手が回り切らんだろう？」
「それでもです。我々が事態沈静に動けばストレガが焚き付けたニュクス教と衝突する事になる。この状況で人同士の争いが起きる方が危険です」
ニュクス教の者たちにすれば、初めて見る影時間の景色は求めてい

た滅びがついに始まったのだと理解するに十分な説得力がある。
彼らは今回の滅びは自分たちが望んだ事で起きたと思っているに違いない。
そんな彼らからすれば、騒いでいる者たちを鎮圧する人間は敵に見えるだろう。
実際、桐条や鵜飼から見れば悪戯に人々の不安を煽り続けたニュクス教は邪魔な存在だ。
全員をどこかの倉庫に閉じ込めて、時間が来るまで大人しくしておいて欲しいとすら思っている。
だからこそ、反対に桐条は自分たちは動くべきではないと宣言した。
今も理と戦い続けている湊もこの状況は読んでおり、その時に備えて自我持ちのペルソナを配置する以外にも手は打っているという。
であれば、自分たちは彼の邪魔をしないよう、動くにしても慎重であらねばならない。
ここで人同士の争いに発展すれば湊のも策も通じなくなる。
彼ばかりに頼るのは申し訳ないが、誰よりもニュクスを理解しているのが湊だ。
桐条たちに出来るのは湊の邪魔をしないこと、そして、湊がどう動くかを把握してからそれに追従する事である。
困っている人間、助けを求める人間を見ていながら、それを見て見ぬフリをするのは辛い。
それでも桐条は待機を選んだ。人々を助け続けた青年であれば、そういった者たちもしっかりと助けるはずだと信じて。
そうして、徐々に混乱が広がり、道路にいた者たちだけでなく、民家やマンションから出てきた者たちも何が起きているんだと混乱を見せていた時、
《こちら、有里湊。繰り返す。こちら、有里湊。状況が把握出来ず混乱している者たちに告げる。この声が聞こえているなら今は黙って俺の話を聞け》
寮の屋上にいる桐条たちだけじゃない。街中の人間の頭の中に未

だ戦闘中であるはずの青年の声が響いた。

第四百四十三話　伝播する想い

影時間――港区

不気味な緑色の空に巨大な月が浮かぶ影時間。

機械は動かず、壁や道路に血のような染みが付着し、遠くには雲に届く異形の塔が見えている。

一体何が起きているのか。直前の記憶を呼び起こしても状況が理解出来ない。

そんな、象徴化が解けて影時間に放り出された一般人たちは激しい混乱を見せ、この状況を理解している者はいないのかと不安を解消してくれる存在を求めて叫んだ。

夜の繁華街を歩いていた者たちも、家のベッドで就寝していたにもかかわらず目が覚めてしまった者たちも、皆何が起きているのか分かっていない。

けれど、知り合いや警察に連絡を取ろうにも電話は使えず、車に乗っていた者にいたってはエンジンが点かさないので移動も出来ない。

事前に影時間についての知識を持っていた者たちを除き、一般人で比較的混乱を見せなかったのはタカヤたちが広めたニュクス教の信者たちだった。

「おおっ、滅びの時は来たれり！　教祖タカヤ様の仰っていた通りだ！　天を突く奈落の塔、大いなるニュクスの降臨は近い！」

ニュクス教の信者は異界と化した街を見て、世界が滅びに近付いている事を実感した。

時が満ちればタルタロスにニュクスが降臨して世界は滅びに包まれる。

あと少し、ほんの僅かな時間を待てば、今いる旧世界は滅びを迎えて自分たちは新世界へと旅立つことが出来るだろう。

狂気を含んだ瞳でタルタロスを見つめながら服が汚れる事も構わず地面に膝をつき、信者の男は顔の前で合掌した両手を擦り合わせながら祈りを捧げる。

「大いなるニュクスよ！　滅びを与え給え、我らを救い給え！」
突然街中で祈りを捧げ始めた男を見て、周りにいた者たちは気味が悪そうに距離を取る。
けれど、信者の男が吐いた言葉には、現状を理解している節があるものも含まれていた。
直前まで酒を飲んでいたのか赤い顔をした別の男が信者の男に近付き、祈りを捧げている男の肩を掴むと無理矢理に自分の方へと向かせて声を掛ける。
「おい。お前、ニュクス教とかいうカルト宗教の人間だろ！　何か知っているなら教えろ。これはどうなってるんだ?!」
「見ての通りだ。大いなる神ニュクスの降臨によって世界は滅びる」
「何が神だ！　ふざけてるのか！」
不敵に笑って神の降臨によって世界が滅びると信者が言えば、ふざけるなと激昂した赤い顔をした男が相手の胸ぐらを掴んで身体を揺さぶる。
こんな異常事態に巻き込まれても、科学の発展した現代社会を生きる者としては流石に非現実的な神の存在を信じることなど出来ない。
故に、赤い顔をした男の反応もある意味では当然。
人が真面目に質問しているのに、馬鹿にしているのかと怒っても無理はない。
だが、信者とて嘘や冗談でそれを口にした訳ではなかった。
信者は赤い顔の男の腕を払い除けると、立ち上がるなり両手を広げて周りの者たちに聞かせるように話し始める。
「何故、疑う？　何故、信じようとしない？　見ろ。これがお前たちの知る世界か。科学によって生み出された物は力を失い、空は闇に覆われ、大地は血に染まっている。天を突く奈落の塔、あの異形を見てもこれが自分たちの生きてきた世界と同じ物だと言えるのか?」
携帯電話が使えないだけでなく、街中の街灯が消えており、道路に止まっている車はエンジンが掛からないのか運転手らが降りてきている。
不気味な緑色の空と血のような染みが広がっている道路、遠く離れ

た人工島から空へと伸びている異形の塔、それらを見てもまだ超常の存在を認めないのか。
確かに信者の男は一般人の感覚で言えばまともではないが、このような状況になってしまえば、今までの日常の感覚だけで物事を判断しようとする方が間違っている。
ようやくそれを理解した周りの者たちは、信者の言葉に不安を煽られ顔色を悪くした。
目の前の赤い顔の男だけでなく、周りの人間までもが自分の言葉を聞いていると理解した信者の男は、そのまま口の端をつり上げるほどの笑みを浮かべ告げた。
「我々の怒りを思いしれ。虐げられてきた者たちの怨嗟の声を聞き届け、大いなる神は降臨する。旧き理の世でしか生きられぬ愚かな者たちよ、ニュクスの滅びを受け入れよ。世界の滅びを受け入れよ!!」
唾を飛ばしながら叫ぶ信者の鬼気迫る様子に周りの者たちは思わず後退る。
ニュクスとはなんなのか、自分たちが何をしたというのか。周りの者たちにすれば分からない事だらけだ。
信者の男の言う通りにおかしな風景が広がる異常事態は起こっており、遠く離れた場所からは爆発音のようなものまで聞こえて来ている。
強くはないものの地面を揺れているように感じ、もしかすると本当に世界はもう駄目なのかもしれないという絶望感が人々の心に根付き始めようとしていた。
だが、その時、人々の頭の中に直接響くような声が届く。
《こちら、有里湊。繰り返す。こちら、有里湊。状況が把握出来ず混乱している者たちに告げる。この声が聞こえているなら今は黙って俺の話を聞け》
急に落ち着いた青年の声が聞こえた事で、人々は辺りを見渡して声の主の姿を探す。
自分以外の者たちもキョロキョロと何かを探す様子を見せたことで、聞こえた声が幻聴などではない事は分かった。

けれど、いくら探そうとも声の主の姿は見当たらない。
何か分かっているのなら教えて欲しい。自分たちの知る〝有名人〟の言葉によって人々の不安が僅かに薄れたタイミングで再び声が聞こえて来た。
《一から十まで説明している時間はないため、最低限の情報だけをこれから伝える。まず、お前たちが体験しているこれは地球規模の現象だ。この現象が起きている間は特殊な装置を組み込んでいない機械は動かない。よって、皆がしたように電話や無線で連絡を取る事は出来ない》
何が起きているのか分からず、誰かと情報を共有したいと思って知り合いに連絡を取ろうとした者は大勢いた。
今も泣きそうになりながらどうして電源が点かないのだと携帯を弄っていた者もいるだろう。
そんな者たちにとって、湊の言葉はほんの少し冷静さを取り戻させるだけの効果があった。
滅びの到来を目前に控えて狂喜している一部の者を除き、冷静さを取り戻した者たちは続く青年の言葉に耳を傾ける。
《だが、不安に思う必要はない。この現象は不気味な光景が広がり、機械が動かなくなるだけ。それだって時間経過でじきに戻るからな。家にいる者はそのまま家にいればいい。不安な者は貴重品と多少の衣服と保存食でも持って、災害時の避難場所に指定されている場所へ避難してもいいだろう》
こんな光景がいつまでも続けば不安に心が潰れてしまうかもしれない。
しかし、そうなる前に事態は解決する。家にいれば安全、不安でも焦らずに災害時と同じように避難場所へ向かえばいい。
どうすればいいか分からず焦っていた者たちは、とりあえずの方針を得た事で自分がどうするかを考え始める。
そんな人々の変化を把握しているのか、落ち着いた声で話す事で湊は人々の混乱を徐々に沈静化させてゆく。
《さて、自分たちがどういった状況に置かれているかを把握出来たな

ら、次はどうしてこんな事が起きているのかという疑問を持っただろう。簡単に言えば最近有名になったニュクス教の人間が言っていた通りだ。世界は滅ぶ。間もなく降臨する神ニュクスの力によってな》

人々が落ち着いて話を聞くだけの余裕が出来たタイミングで爆弾が投下される。

直前に大丈夫だと言っておきながら、世界が滅びるなどと聞いて誰が冷静でいられるだろうか。

落ち着かせたいのか、それとも人々の反応を見て楽しんでいるのか。

彼の言葉を聞いている者たちの間に困惑が広がると、青年は静かな口調で一部の者だけが知っていた事実を述べ続ける。

《信じるかどうかは自由だ。だが、この事態はお前たち人類が招いたものだ。死を意識し、死を求め、死を知りたいという無自覚な心が集まり、死を司る存在をこの惑星に呼び寄せたんだからな。誰が悪いという訳でもない。お前たち全員の責任だ》

人々はこんな事態に巻き込まれて被害者という意識が強かった。

中にはニュクス教の信者のように自分たちが当事者だと、この滅びを招き寄せたのは自分たちの祈りなのだと考えている者もいた。

けれど、後者の認識の問題はともかく、この事態に無関係な被害者などというものは存在しない。

ニュクスの降臨は自覚、無自覚問わず人々の死に向けられた意志によって引き起こされたのだ。

《東京近郊にいる者たちには見えているだろう。港区の方向にある巨大な塔が。そこが目印だ。ニュクスはそこに降りてくる。これはどう足掻こうと避けようのない事実だ》

どう足掻こうともニュクスの降臨は避けられない。

湊が告げた巨大な塔が見えている者たちは、滅びを怖れてそこから少しでも離れようと動き始める。

どうして自分が巻き込まれなければならないのか。

なんで、よりにもよってそんな近場に現れるのか。

今すぐに逃げようとする者たちから、説明を続ける青年へ八つ当た

りでしかない悪意が向けられる。
《だが、俺をはじめとした一部の人間がこの事態に対処すべく既に動いている。お前らの自殺に付き合ってやるつもりはないからな》
しかし、その場から駆け出そうとした者たちは、青年の言葉を聞いて足を止めた。
こんな異常事態にあっても冷静に広域通信を続けている事から、彼が何かしらの役割を持った人物だとは分かっていた。
状況を把握していて、原因も理解していて、世界を滅ぼそうとする存在が現れる場所を知っているなら、当然彼は事態の対処に動く側の人間だと思っていた。
そんな人々の考えを肯定するように自分の立場を明かした青年は、続けて一般市民ではなく国家に属する立場の者たちに向けての言葉を吐く。
《ああ、個人的な話をさせて貰えば、公安のとあるチームが追っていたある企業の闇の真相はこれだ。お前たちは正義感に駆られて追っていたんだろうが、彼らは独自にこの現象の存在を知って対処すべく動いていた。まず国に報告すべきだなんて言ってくれるなよ？　国も、お前たちも、こうなるまで気付かなかったんだからな。舞台に上がれもしない人間が出しゃばっても邪魔なだけだ》
それは先代桐条が引き起こしたポートアイランドインパクトからグループを追っていた公安のチームに向けた言葉だった。
無論、公安だけでなく警官や自衛隊、政府や議員といった立場の人間にも向けて話しているが、湊は影時間に辿り着けもしなかった者たちに呆れている。
桐条グループを探っていれば、オカルトめいた何かの存在があるという情報くらいは入手出来るはずなのだ。
才能があればそこから適性を得て、その人物を中心に徐々に適性を持つ者が増えていき、最終的に桐条グループが隠し続けてきた影時間の存在に辿り着く事も出来ただろう。
しかし、現実はそうはならなかった。公安は桐条グループが大きな秘密を持っている事は分かっても、その情報がどういったものかまで

は辿り着けなかったらしい。
その程度の能力しかないのならハッキリ言って邪魔だ。
国に言えば危険な力を持つ者たちを管理するという名目で特別課外活動部のメンバーを自分たちの下に置こうとするだろう。
ろくに戦った経験もなく、影時間やシャドウがどういった存在かも分かっていない人間が上についてしまえば、その時点で七歌たちの活動は制限を受ける。
人々の安全のために戦おうというのに、制限を受けてしまえば十全に果たすことが出来なくなる。
もっと言えば、戦闘時に的外れな命令によって七歌たちの身に危険が及ぶかもしれない。
だから、そうはならなくて良かったという意味も込めて国家に属する立場の者たちに釘を刺しておけば、湊は話を戻して一般人にいくつか注意事項を伝えてゆく。
《加えて、東京の港区周辺にいる者たちに告げる。まず、塔のある人工島には危険だから近付くな。そして、ニュクス降臨の余波でその周辺地域に異形の化け物が出没する可能性がある。もし、見つけても近付くな。気付かれないようにその場を去って、もしも見つかった時には必死に逃げろ。それらを排除するための者たちを既に街中に配置してあるから、そいつらが仕事を終えるまで生き延びる事だけ考えておけ》
化け物が出没するかもしれない。そんな今度の説明には人々も首を傾げる。
影時間について知っている者ならば、シャドウがいかに脅威か知っているが、一般人は化け物の見た目も強さも分かっていない。
そんな状況で化け物に襲われる危険があると言われても、一般人では何にどの程度気をつければ良いのかも分からなかった。
とはいえ、湊はそんな化け物に対処するための人員を配置していることを伝えた。
一般人たちは大勢の軍人が街を警備しているような光景を想像しただろうが、実際には両手の指の数で足りる程度の自我持ちのペルソ

ナたちを配置しただけ。
事実を知れば不安になるというなら、それを伝えなければ嘘を吐いた事にはならない。
ある意味で詐欺のようなものだが、誰も声の主がどこから話しているのか分かっていないため、仮に事実に気付いたところでクレームを入れることなど不可能だった。
《ついでに、もしそいつらが化け物を倒す場面に遭遇しても話しかけるな。仕事の邪魔だ。もし、自分たちを守るためにこの場に残れなんて恥知らずな事を口にする者がいれば、周りの人間でそいつをボコボコにして黙らせておいてくれ。犠牲者を出さないために動いている人間に何を言っているんだとな》
もしも、自我持ちのペルソナに助けられた者がいれば、恐らくその容姿からなんで若い女性や子どもが戦っているんだと疑問に思うだろう。
服装も軍服などのような戦いを想定したものではなく、刀や槍のような分かり易い武器を持っている者の方が少ない。
けれど、彼女たちにはシャドウと戦う力がある。戦えば勝つだけの能力をしっかり持っているのだ。
難点を挙げるとすれば、人員が極めて少ない事だろう。
およそ十人で港区を中心とした都心をカバーしなければならないのだ。
無駄な事に時間を割いている余裕はなく、ニュクスの降臨が近付くにつれて活発化していくシャドウを素早く狩り続けるしかない。
そのためにはツクヨミが索敵した情報をリアルタイムで入手し、指示に従って移動ルートを決めて効率的に狩っていく必要がある。
応援くらいならば構わないが、足を止めて言葉を交わすのも難しい。
故に、もしも、そんな彼女たちにふざけた要求をする者がいれば、同じ市民の力でそれを排除してくれと青年は言った。
そうして、一通りの説明が終わり。話に一区切りついたと判断して人々が動き出そうとした時、これまでと違って感情の籠もった湊の言

葉が届いた。
《……俺たちは滅びを回避するために動いている。全員が命懸けで、奇跡を手繰り寄せようと必死に戦っている。だから、頼む。信じて待っていてくれ。それぞれに出来るやり方でいい。周りに助けを必要としている者がいれば手を貸してやって欲しい。未来を望んだ者たちが、全員で明日を迎えるために》
彼も滅びを求める者たちまで救えるとは思っていない。
それは、自分と相手の望む未来が異なるからだ。
全員が望んだ明日を迎えられたら最善だが、出来ないのであれば彼は自分が求める未来を目指す。
そして、同じ未来を目指してくれるのであれば、どうか自分の手の届かないところを補って欲しいと彼は人々に願った。
彼をよく知る者であれば、それが如何にあり得ない事か分かるだろう。
出来る限り自分だけで全てをこなそうとする彼が、人々の善意を信じて代わりを任せたのだ。
こんな状況でなければもっと素直に喜べたが、彼に恩を感じていた者たちは〝頼られた〟という事実があればそれでいいと細かい事を考えるのはやめた。
「我々はプリンス・ミナト！　避難しようと思っている者がいればこちらへ！　広域避難場所となっている公園へ案内します！」
「走る必要はありません。ゆっくり前の人について移動してください」
「男性で手を貸してくださる方はいませんか！　身体が不自由な方の移動の補助をお願いします！」
青年の声が聞こえなくなり、人々が動き始めようとしたところでとあるカードを胸元につけた者たちが動き出す。
それは湊のファンクラブであるプリンス・ミナトに所属しているメンバーたちだった。
彼のファンクラブの会員は学外にもおり、会長である雪広繭子を中心に幹部は一つの企業として組織を動かしていた。

タカヤたちの煽動によって終末思想に取り憑かれた者たちはニュクス教に縋った。
だが、狂信者を抱えているのは敵だけではない。一般人にも広く浸透するような形でプリンス・ミナトもその勢力を広げていたのだ。
湊の声が聞こえ始めた時点で身だしなみを整え、学校の制服に着替えて外へ出てきた雪広繭子は近所のプリミナ会員たちと共に声をあげる。
「絶望を感じ俯く必要はありません！　我々のために、力を尽くしてくれている方たちがいるのです！　ニュクス教などという邪教の願いで滅びが起きるというのであれば、我らの皇子への信仰によって正しい未来を引き寄せます！　さぁ、顔を上げなさい。我らの未来は皇子と共に！」
『我らの未来は皇子と共に!!』
信仰には信仰を、どこまでも純粋な想いを叫ぶ少女たちの熱は静かに人々へと広がり始めた。

第四百四十四話　それぞれに出来る事

影時間――ＥＰ社

湊が世界に向けて放った広域通信が終わると、人々の動きは大きく二つに分かれた。

一つは彼の言葉を信じて自宅に残るという選択。もう一つは不安を少しでも軽減したいからと避難所で他の者たちと共に事態の解決を待つという選択だ。

とくに港区周辺は異形の化け物が現れると注意された事もあり、他の地区よりも避難所に集まる人数が多い。

異形の化け物の正体はシャドウで、シャドウは人の心から抜け出ることで現実世界に顕現する。

それを思えば人が集まるというのは、ある意味でシャドウが現れる確率を上げているようなものなのだが、影時間について知らないプリンス・ミナトの会員たちは自分たちに出来る事をすべく避難誘導や不安がっている人を励まして回っていた。

「こっちにＥＰ社の人たちが用意してくれた毛布があります！　家族の人数分まで配布できるので必要な方は取りに来てください！」

「トイレは病院側に仮設の物がいくつも用意されています！　近くに案内の人間もいますから心配しないでください！」

ＥＰ社の敷地内にある大きな公園には大勢の人間が集まっていた。

人が集まればトラブルが起きやすくなるが、プリンス・ミナトの会員たちがＥＰ社の人間を補助する形で動くことで大きな混乱は抑えられている。

もっとも、それは人が大勢いる場所に辿り着けた安堵から一時的に落ち着いているだけであり、この状況が長く続けばそれぞれの不安が再発するのは間違いない。

それがいつまで保つか、もう一度落ち着かせる事は可能か。

誘導や指示を行なっている者たちは、そういった別の不安を抱えながら必死に動き回っている。

何より、ここにいる者たちは湊が言っていた異形の化け物らしき存

在を見ており、それが実在する事を既に知ってしまっていた。
ＥＰ社は海沿いの敷地に建っており、公園の奥へと向かえば海を見渡す事が出来る。
それ故、沖合で戦っている二体の巨人らの戦闘音や地面の揺れが街中よりも強く感じるのだ。
中学時代、湊の生徒会で副会長を務めていた渡邊は、避難先の公園でバスケ部や元生徒会役員ら知り合いを見つけ、彼らと共に先ほどの湊の言っていた事について話す。
「会長が言ってた事、マジっぽいな。奥にある教会の方に行けば海で巨人が戦ってるのが見えたわ」
「その巨人って味方ですか？　それとも敵ですか？」
実際に海の方へ見に行ってきた渡邊が話せば、後輩である木戸がどんな戦いだったのかを詳しく尋ねる。
巨人が味方であれば海側から侵攻してくる敵を防いでくれている事になるが、敵だとすれば足止めしている味方がやられればここに来るかも知れない。
ここには避難民だけでなく、入院していて動けない者たちも大勢いる。
少しでも分かる事があれば、情報を整理してＥＰ社の人間に伝えるべきだろう。
そうして、他の者たちも渡邊の言葉を待てば、彼は情報が正しく伝わっていないことを察して補足を入れた。
「悪い。戦ってるのは二体の巨人だ。なんか、炎を纏ってる悪魔みたいなやつと、人型のみたいなのが戦ってる。んで、その余波で発生した津波とかを防ぐように、蛇か龍かの骨みたいな半透明の何かが陸地を守ってる」
「という事は、そのドラゴンの方が一応は味方になるのかしらね。陸地を守っているのが龍の骨だとすればだけど」
「たぶんな。まぁ、離れてるから見ても大丈夫だとは思う。気になるなら実際に見てみて、気付いた事をＥＰ社の人に伝えた方がいいかもな」

七歌とラビリスと共に女子テニス部に所属している高千穂は、渡邊の説明から陸地を守っている骨と共通点のあるドラゴン型の巨人が味方と予想した。
説明した渡邊も恐らくはそうだと予想しているが、あまりに非現実的な光景であったため確信は持てていない。
二体の巨人が戦っているのは陸地から少し離れている。
ＥＰ社の敷地自体は埋め立てて高台に作っており、浜辺の方へと降りていかない限りは津波等の心配も少ない。
であれば、少しでもＥＰ社の人間に協力出来るよう情報を入手すべく、彼らはそれぞれの親に少し離れると告げてから海が見える場所へと移動した。
公園の中を奥へ奥へと進み、教会の傍を通って整備された林の中を抜けてゆく。
そうして、その先にあった展望台まで辿り着けば、陸地から離れた海上で戦う巨人の姿が見えた。
炎を纏った悪魔の両手には炎で出来た剣がそれぞれ握られており、横薙ぎに振るわれた片方をドラゴン型巨人がバク転で回避する。
その着地の瞬間を狙った悪魔がもう一振りで突きを放てば、横からドラゴンの尻尾が伸びてきて悪魔を殴りつけた。
殴られた悪魔がバランスを崩して転がれば、身に纏った炎に触れた海水が蒸発したのか一面が白い靄に包まれる。
けれど、次の瞬間、ドラゴンの口から放たれた赤い光線によって靄は消し飛び、悪魔は咄嗟に光線の直撃を回避すべく両腕で身体を守りながら光線の勢いに押されて後退していた。
押しているのは間違いなくドラゴンの方だろう。けれど、光線が納まってみれば、両腕で防御していた悪魔も健在だ。
敵の攻撃に耐えきったからか、悪魔は炎で出来た羽根を大きく広げると、羽ばたいた勢いで飛び出してドラゴンへと迫る。
両手に持っていた炎の剣が突撃槍に形状変化し、対するドラゴンは淡い光を纏った両手を使ってその攻撃を正面から受け止める。
突進の勢いで僅かに後退するも、途中で踏ん張ってその場に留まる

と、両者の力は拮抗しているのか動かなくなる。
けれど、その足下の海面は激しく荒ぶっていて、発生した波を龍の骨が受け止める事で陸地への被害を食い止めているようだった。
あまりに現実感のない光景にしばらく一同は呆ける。
しかし、離れていても空気や地面の震動を感じ、戦闘の激しい音によってそれが現実である事が分かる。
戦隊ヒーローのフェザーマンなどで巨大化した怪人とロボットが戦うシーンを見たことがあるが、そこで逃げ惑う市民たちはこのような気分だったのかと思ったところで、展望台から少し離れて改めて話し合う。
「有里君の言っていた通りね。正直、実際に目にしても現実だとは受け入れがたい光景だわ」
「でも、間違いなく現実の光景ですよ。まぁ、痛みを感じる夢でなければですけど」
もしかすると夢かもしれない。そんな僅かな可能性に賭けて自分の頬を抓ってみたことで、彼らは痛みを感じる現実だと認識している。
普段見ている夢以上に現実感のない現実というのは、彼らにとっては悪夢でしかないだろう。
ただ、現実であるならば、しっかりと自分たちに出来る事をすべきだと思考を切り替え、彼らは戦っている巨人らを観察する。
陸地に近い場所には確かに龍か何かの骨らしき半透明のものが存在しており、それが巨人たちの戦いの余波で起きた波を防いでくれている事は分かる。
仮にそれが龍の骨ならば、見た目が確かに人型のドラゴンのような巨人とは一応の繋がりがありそうだ。
その予想が当たっていればドラゴンが人類の味方、悪魔が人類の敵であるニュクス側の存在と言える。
戦況的に有利なのはドラゴンに見えるため、このままいけば問題なさそうだがと観察していた高千穂が呟く。
「素人目線だけど有利なのはドラゴン側よね？」

「はい。僕にもそう見えます」
「一応、言っておくとどっちも味方じゃない説もあるからな。会長が配置したっていう対処部隊の人も見えないし」
高千穂と木戸がドラゴン有利のまま決着がつけば良いがと思っていれば、渡邊が化け物同士がただ戦ってる可能性もあると指摘する。
他に巨人らしき存在は見ていないので、もしかすると、あの巨人たちはお互いに化け物の中のボスクラスで、どちらが他の化け物を従えるか争って決めようとしている可能性もあるのだ。
もしも、渡邊のそんな予想が当たっていれば、勝負が着いた時点で勝った巨人が人類に牙を剥いてくる事も考えられる。
湊が言っていた対処部隊がここへ来ても、巨人たちはお互いに全長百メートルクラスなので、戦車やミサイルなどの兵器が使えなければ戦えないだろう。
この謎の現象が起きてからは機械が使用不能で、戦車やミサイルなど使えるはずもない。
敵への対抗手段を人類が持っていない以上、仮に勝者の巨人が疲弊していたとしても倒す事は出来ない。
まだ死にたくない渡邊たちが、どうかその予想よ外れてくれと祈っていれば、友人である宇津木と共にじっと巨人の方を見ていた羽入が口を開いた。
「んー……あっちのドラゴンの巨人さんは大丈夫だと思う。たぶん、湊君だから」
「え、羽入さん？　どういう意味？」
「えっとね。あのドラゴンの巨人さんは湊君みたいだから、心配しなくていいよって」
友人として普段から一緒にいる宇津木から見ても羽入は不思議な少女だ。
どことなく感性がズレていて、その心は純粋だが、けっして馬鹿という訳ではない。
以前、湊のペットだという柴犬とも会話のような事をしていたが、その時は犬の言葉を理解していたようで赤ん坊の保護者を呼び出し

て感謝されていた。
　そんな不思議な少女だからこそ、何か他の者には分からない物が見えているのかと思っていれば、その場にいた者たちの頭に青年の声が届く。
《羽入の言う通りだ。お前らがドラゴンの巨人と呼んでいる存在と俺は一緒にいる。まぁ、悪魔の方も人間が操っているけどな。さっき言っていた化け物とは別の存在。その化け物への対抗手段の一つなんだが、ニュクス教側にそれを悪用するやつらがいて対処中という訳だ》
　急に湊の声が聞こえて来て驚くも、彼が共にいるというドラゴンの巨人は今も悪魔と戦っている。
　相手の放った火球を拳で破壊しながら接近し、切りつけてきた炎の剣を片腕で防ぎ、逆の手で相手の腹を殴りつけた。
　戦闘の真っ最中に話しているとすれば、どれだけ余裕があるんだと思うところだが、状況が飲み込めていない渡邊はあたふたとしながら湊の言葉に返事をする。
「え、マジで？　つか、会長これどうやって話してるんすか？」
《指定した対象に声を届ける能力だ。というか、お前らは公園の方に戻っておけ。海側から別の化け物が出た時に対処部隊が守れないぞ》
「有里君、私たちはその化け物が出たと思って情報を集めにきたの。海で戦っている巨人がそうだとすれば、この場所も安全ではないからと」
　ドラゴンは上手く悪魔の攻撃を躱したり防いだりしているが、よく見れば敵の攻撃を防いだ部位が焼けていたりする。
　状況はドラゴンに有利であっても、決して油断出来る訳ではないのだろう。
　離れていると言っても目視出来る距離にいるため、巨人たちの感覚ならば一分とかからず距離を詰められるに違いない。
　そんな場所に何の力も持たない子どもがいれば危険だ。
　湊が他の者たちのいる公園へと戻れと言ってくるのも理解は出来る。

それでも、高千穂は彼に尋ねた。
ここにいても何も出来ないというのは理解しても、知り合いが命懸けで何かをしているのに隠れているだけなど出来ないから。
高千穂の言葉を聞いた湊はしばらく黙っている。
命懸けで戦っている者にすれば、そんな自己満足な正義感など捨ててしまえと思って当然。
けれど、湊はそんな正論をぶつけない。彼は将だ。新たに得た駒を適所に配置する位は出来る。
ペルソナ使いたちの戦いにとっては不要だが、避難している者たちを守る戦力として利用出来ないこともない。
そう結論づけて、湊はその場にいる高千穂たちだけでなく、他の場所にいる人間にも同時に通信を繋げた。
《なら、お前たちは避難民の防衛戦力にあてる。ソフィア、こいつらに武器を渡せ》
《よろしいのですか？　正直、まともな戦力としてカウント出来るとは思えませんが》
《弾幕を張っていれば誰かしらが到達するまでの時間稼ぎになる。ビアンカを回して指示をさせろ》
湊の言葉の中に以前職業体験で知り合った者の名前が混じる。
ソフィアに到っては同じように通信で言葉を交わしており、渡邊たちは湊がいくつかの場所に通信を送っているのだろうと推測した。
探知型のペルソナ能力について知っている者ならば、戦いながらそれらをこなす難しさを理解して驚愕するところだ。
一般人でしかない少年たちは当然気付かず、通信で聞こえてくる彼の言葉に素直に従う。
《渡邊、ＥＰ社側に武器を用意させる。人間には効かない特殊な武器だ。ビアンカの指示に従って警戒任務に就け》
「了解っす。その……会長も頑張ってください！　オレらじゃ何にも手伝えねぇけど、ここに来た人たちはなんとか守って見せますから！」
《……ああ、任せた。他のやつらも無理だけはするなよ》

湊からの通信が切れると、ドラゴンが悪魔を両腕の防御の上から殴りつけて大きく後退させた。
敵がさらに大きく陸地から離れたタイミングで、渡邊たちも一斉に走ってその場を後にする。
公園の方へ戻れば病院に近い場所でビアンカが待っており、そこで渡邊たちは武器を受け取って公園に逃げてきた者たちの護衛に移る。
親たちはきっと危ない事は止めろと言ってくるに違いない。
渡邊たちだって化け物と戦うのは恐いし、出来る事なら自宅のベッドで寝ていたかった。
だが、湊が戦っていると知ってしまった以上、彼にだけ任している訳にはいかない。
「オレたちにも出来る事はある。会長のファンクラブが避難誘導してくれてるから、オレたちはビアンカさんの指示に従って化け物が出たら対処していくぞ」
教会近くの林を走り抜けて一同は病院の方へ急ぐ。
近付くにつれてプリミナ会員たちが頑張って避難誘導しているのが分かった。
そして、そんな彼女たちが化け物に襲われぬよう、湊の部下であるビアンカの指示で警戒任務に就くのが自分たちの役目だと覚悟を決める。
一体どんな武器で戦う事になるのか。いくつもの不安を押さえつけて病院近くにやってくれば、以前、作業ロボットの操縦について教えてくれたビアンカが待っていた。
「ハァーイ！　こんな状況でなければ再会を喜べたんだけど、今は時間がないからすぐに説明を始めるわ。全員、銃とマガジンを取って。これは対化け物用の光線銃で実弾は出ません。光線自体も非破壊系のものだから外しても実害はないわ」
湊がＥＰ社に用意させたのはペルソナ〝セイヴァー〟を手に入れてから、時間が空く度に密かに作り続けていた対シャドウ銃だ。
セイヴァーの力で武器自体を対シャドウ兵器に変え、そこにセイヴァーの力を込めたマガジンを組み合わせる。

セイヴァーの浄化の光は回復魔法の延長であり、これを使えば一般人でも周りの被害を考えずに防衛に専念出来る。
説明しながらビアンカは一人一人に銃を渡し、何度かマガジンの交換作業を練習させた。
「皆、無理はしないでいいからね。あくまで時間稼ぎって事を忘れないで」
戦うのは専門の対処部隊の仕事であり、渡邊たちが任されたのはこの場所の防衛だ。
深追いして殺そうとする必要などない。他の人を守るように、自分たちの身の安全もしっかりと確保して任務にあたってくれとビアンカは言う。
武器を受け取った渡邊らもそれに頷いて返し、ビアンカが移動を始めるとその後を付いていって避難所の防衛任務にあたるのだった。

第四百四十五話　父娘の因縁

影時間――タルタロス

スーツの袖や脇腹の部分が血に汚れながら破れた幾月は、召喚器の引き金を引いて呼び出した黒いオルフェウスに竪琴を奏でさせ、放射状に電撃が迸り美鶴とゆかりの視界を焼こうとする。

数の有利で上手く立ち回っていたはずの二人も、幾月ほどではないにしろ服や肌が汚れ、一部は血の染みが広がっていた。

二人は敵を殺せない。殺したいくらいの怒りや憎しみは持っているが、相手と同じところまで落ちるつもりはない。

だが、戦いが長引くほど、相手に負わせた手傷が積み重なって命の危険が出てくる。

タルタロスで見つかる即効性のある回復薬を使おうとも、流れた血までは回復出来ない。

腕や足、そして脇腹から血を流していた事もあって、幾月の顔色は徐々に青白くなってきており。攻撃を仕掛けたタイミングで限界を迎えて大怪我を負わせる可能性も出始めていた。

当たり所が悪ければ死ぬ。常にそんな事を頭の片隅に置きながら咄嗟に腕で目を守り、敵の攻撃が治まると同時にゆかりは矢を撃ち放った。

ヒュンッ、と空気を切り裂き飛んでゆく矢は、真っ直ぐに幾月へと迫る。

けれど、攻撃直後の反撃を予想していた幾月は、危なげなく躱すと口元を歪めて言葉を発した。

「フハハハハッ、涙ぐましい努力じゃないか。君たちにも聞こえたのだろう？　有里湊の広域通信が」

嘲るように嗤う幾月は、先ほど聞こえて来た湊の通信について話す。

敵の最大戦力である玖美奈と理を押さえるために先に出ていた湊は、まだタルタロスに姿を現わしておらず、現在もその二人と戦闘中のはずだった。

だが、時間が進むにつれて外の状況が変化した。
まだ降臨していないにもかかわらず、ニュクスの影響が現われて一般人の象徴化が解け始めているらしい。
黄昏の羽根を材料に作った簡易補整器の指輪でも一時的に適性を得られるのだ。
大本であるニュクスが地球に近付いてくれれば、黄昏の羽根以上の適性増幅効果で全ての一般人が影時間に活動出来てもおかしくない。
ニュクス降臨が近付くにつれてそういった影響が出る可能性については事前に聞いていた。
特別課外活動部のメンバーだけでなく、桐条グループとＥＰ社の対策チームにもその事は伝わっており、シャドウの出現が確認されている港区周辺だけでも一般人の避難誘導を行えるように準備を進めていた。
しかし、影時間は機械が使えない。黄昏の羽根を組み込んでいたり、湊の持つセイヴァーの力で造り替えた物を除けば、懐中電灯のような単純な機械でも使えなくなってしまうのだ。
携帯電話を持つのが当たり前になった現代社会で、知り合いに連絡も取れず、情報収集の要であるテレビやラジオも使えない。
さらに、避難しようにも懐中電灯が使えないので、不気味に輝く月明かりのみを頼りに夜の街を歩く必要があるとなれば、人々の中に混乱が広がる事は避けられない。
また、街の中には今夜世界が滅びると知っていたニュクス教の人間も大勢いた。
彼らはどういった現象が起きるのかは知らなかったが、あり得ない事態に直面した時点でこれが滅びの始まりだとすぐに感づいた。
そんなニュクス教の者たちは状況が把握出来ていない一般人に滅びの始まりを告げた。
世界は滅びる。滅びは避けられない。弱者を虐げ続けたお前たちの罪が今日裁かれると。
それを聞いた一般人の中にはニュクス教の人間たちに謝罪して助けを請う者もいた。

訳が分からず恐怖に震えることしか出来ない者もいた。
そんな時、港区周辺や東京都内だけではない。日本全国に、世界中の人々に向けて、一人の青年が声を届けたのだ。
まさか戦っている自分たちのところに彼の声が聞こえてくると思っていなかった幾月は、彼が一般人に向けて声を届けた事実とその内容に対して苦笑を浮かべる。
「一体どこまで声を届けたのやら。探知型の通信は情報解析ほど消耗しないとは言っても、対象を補足した上で情報を飛ばすため相応のコストがかかる。だというのに、彼は不特定多数。都内は勿論、下手をすれば東京周辺にまで声を届けていたんじゃないかな」
探知型の能力を持っていても、その効果範囲や効果対象はそれぞれ違う。
美鶴のような探知能力に応用出来る程度の力であれば、補助機材を使っても港区全域に声を届ける事すら難しい。
逆に、探知能力に特化した風花のようなタイプであれば、県を跨いでも声を届けられる可能性はあるが、対象人数が増えるにつれて術者の負担が大きくなるため、効果範囲を広げれば対象人数が限られるという欠点がある。
しかし、あの青年は通常考えられるそれらの問題点を全てクリアしたらしい。
湊の適性値を考えればそれが出来たとしても不思議ではない。
一般人が混乱して不安を煽るニュクス教の人間と衝突を始めれば、彼が望んだ出来る限り無関係の人々に被害を出さないという目標を達成出来なくなる。
だから、多少の無理をしてでも彼は人々に声を届けたのだろうと幾月は予想した。
「フフッ、この状況でまだ他者の心配を出来るなんて筋金入りのお人好しだ。どれだけ救っても、どれだけ守っても、愚かな人々は彼に何も返してはくれないだろうに！」
美鶴が氷結魔法で氷を飛ばそうとすれば、黒いオルフェウスが竪琴を激しく鳴らして複数の炎弾をばら撒いた。

狙いをつけず、されど個々の威力は無視出来ない程度に強い。
攻撃を仕掛けようとしていた美鶴は後退し、アルテミシアに氷壁を展開させて攻撃も防ぎながら言葉を返す。
「貴様には理解出来ないだろう。彼がどうして人々を助けるか。なんの利益も求めず、他者を救おうとするのかを！」
湊の事を嗤う幾月に美鶴は強い怒りを感じる。
どうして彼を嗤えるのか。何故、彼の行動を理解出来ないのか。
それらの理由が分からない理由が逆に分からないと、氷壁の後ろから美鶴は広範囲に吹雪を巻き起こしながら告げる。
「彼が人々を助けようとするのは、失う痛みを知っているからだ！大切な物を奪われ、理不尽に晒されても、彼は責任を感じて自分を責めるばかりで、自身の抱いた正当な怒りを加害者にぶつけようとはしなかった」
「それが愚かだと言うんだ。加害者に対する、怒りと憎悪は正当な権利だ。法が、社会がそれを認めず、軽い罰だけ与えられた加害者がのうのうと生き続ける。こんな事が許される世界など認められてなるものか！」
有里湊の在り方を尊いと感じた美鶴に対し、幾月はそんな泣き寝入りのような真似などするものかとオルフェウスの放つ紅蓮の炎を吹雪にぶつけて吼える。
衝突した炎と吹雪が蒸気に変わり、フロア全体に広がって視界が徐々に埋まってゆく。
けれど、魔法の発動を止めない両者は相手がどこにいるかはっきりと分かっていた。
視界が白い蒸気で埋まりつつあろうと構わず魔法を放ちながら、美鶴は僅かに視線を地面に伏せてすぐに顔を上げて幾月に問いかけた。
「やはり、これは復讐なのか。お前の妻であり、長谷川沙織の母親である幾月茜を事故で奪われた事に対する」
湊が蘇ったあの日から、美鶴は何故幾月が裏切ったのか真相を突き止めようと調べた。
相手が結婚していた事や、子どもが一人いて、妻が事故で死んでい

る事、調べるにつれて美鶴がこれまで知らなかった事実が幾つも出てくる。
そして、そういった情報を繋げて行けば、どうして幾月が今ある世界を滅ぼそうとしているのかも見えてきた。
白い蒸気の向こう側にある相手の表情は分からない。しかし、美鶴の問いかけに幾月は静かに答えた。
「復讐か……。そういった側面があった事も否定はしない。しかし、私が求めたのはその先だ。生と死の定義を塗り替え、選ばれた魂を持つ者だけが暮らす事を許される世界の創造。ニュクスの滅びを越えた先にそれは成る」
加害者を救済し、被害者に理不尽を押し付けるのが幾月の見てきた世の中だ。
そんな間違った世界を破壊し、真の平和と喜びに溢れる世界を幾月は作り上げようとしている。
もし、幾月の望む理が敷かれた世界が創造されれば、湊のような貧乏くじを引き続けるような存在は出ないし、玖美奈のように母を奪われる悲しみを味わう子どももいなくなるだろう。
本当にそんな世界が出来るのなら、美鶴だって一方的に相手の主張を否定したりはしない。
ただ、美鶴はとある青年から、滅びの先に未来がないことを聞いていた。
「そんな事は不可能だ。ニュクスの滅びは平等、貴様と娘の魂もニュクスによって破壊される」
「有里湊という実例が存在する。惑星のペルソナだか知らないが、死んだはずの魂を再利用する事で蘇ったというじゃないか。死後の世界は存在し、そこに魂が保管されているという何よりの証拠だ」
吹雪を止めていくつもの氷槍を放ちながら、美鶴は徐々に横へと移動して場所を掴ませないようにする。
美鶴の攻撃が吹雪から切り替われば、幾月も攻撃方法を変えたのか美鶴が元々いた場所の近くに炎弾がいくつも着弾した。
「ニュクスを降臨させれば闇の皇になれる。新たな世界で生きる魂の

選定。それが皇になった者に与えられる権能だよ。滅びは止められない。無駄な事は止めるんだ。そうすれば、アルカナシャドウを倒す事でニュクス降臨の手伝いをしたと見なし、君たちやその家族に新たな世界で生きる権利を与えようじゃないか」

ニュクスの降臨には封印されていたデスの復活が必要だった。

最初のアルカナシャドウが現われた時点で幾月はストレガたちと手を組んでいたが、デス復活には生贄が必要という情報があり、幾月は生贄要員として特別課外活動部のメンバーを増やすため桐条や美鶴に働き掛けた。

おかげで人数は徐々に増えていき、さらに美鶴たちは幾月の思考誘導に引っかかり騙され、デスの欠片であるアルカナシャドウを倒し続けてデス復活の手伝いをしてくれた。

そんな彼女たちの功績を讃えて、幾月は新たな世界に彼女たちとその家族が存在することを許してもいいと宣言した。

闇の皇となれば魂の選定を行えるのだ。幾月茜と同じように、既に故人になっている岳羽詠一朗などもその世界でなら蘇ることが出来る。

父親のために戦い続けてきたゆかりならば、当然この報酬に釣られてくるだろうと幾月は思っていた。

だが、そうして相手の返事を待っていた時、視界を覆っていた白い蒸気が吹き飛び、クリアになった視界の先に弓を構えたゆかりの姿があった。

「そんな世界お断りよ！　私はこの世界で生きると決めたの。お父さんが命懸けで繋いだ。この世界で！」

言い放つと同時にゆかりは矢を射った。

突然開けた視界に混乱している状態で、自分に向けて真っ直ぐ矢が飛んでくれば誰だって驚く。

咄嗟に動けず、無意識に顔を腕で守ろうとするも、僅かに狙いが逸れた矢は幾月の右肩に突き刺さった。

「うがぁっ!?」

焼けるような痛みに幾月は思わず声をあげ、矢が刺さった右肩を左

手で押さえる。
致命傷ではない。片腕は使えなくなるが、それでも戦闘を続ける事は可能である。
だが、ゆかりが作ったこのチャンスを逃しはしないと、美鶴も呼び出したペルソナに氷の飛礫を作らせて幾月に向けて撃ちだした。
「チィッ」
肩に刺さった矢を引き抜いて、飛んできた氷の飛礫を幾月は飛び込むようにして躱す。
先ほどまでと打って変わって幾月の顔からは余裕が消えていた。
攻撃を飛び込んで回避した幾月は、すぐに起き上がると腰につけたポーチから回復薬を取り出して肩の傷を塞ごうとする。
そんな相手の姿を目にした美鶴はレイピアを抜いて駆け出しながら声をかけた。
「幾月、お前は勘違いしている。確かに我々は家族や仲間と共にある事が出来ればと考えている。だが、それはあくまでこの世界での話だ。理不尽に溢れていようと、どれだけ厳しい出来事が待っていようと、我々が生まれ育った世界はここだ。それを見捨てて楽な方へ逃げる事など出来る訳がない」
幾月の言葉がどれだけ魅力的に感じられようと、美鶴の心は最初から決まっていた。
自分が生まれ育った世界で、そこでベストを尽くして駄目であればその結果を受け入れる事も出来るかもしれない。
しかし、可能性が残っているにもかかわらず、恐怖に駆られて逃げ出してしまえば、どれだけ幸福な世界に逃れられようと心にしこりが残る。
新たな世界が満ち足りていればいるほど、残ったしこりが逃げ出した事実を突きつける。
そんな状態で生き続ける方が辛いに違いない。そう話しながら迫ってきた美鶴に幾月は拳銃を向ける。
「だから、愚かだと言うのだ！　何故気付かない、何故分からない!?
武器を向ける事が、力を振りかざす事だけが戦いだとでも思っている

のか!?」
右肩の痛みで狙いが定まらないまま幾月は引き金を連続で引く。
拳銃が火を噴く直前、美鶴は飛び込むように射線から逃れ、放たれた弾丸は誰もいない地面や壁を抉る。
「恵まれた環境で生きてきた者には分らないだろう。どれだけ願っても、どれだけ望んでも、一切戦う力を持たない人間だっている。弱者として虐げられるしかない彼らは、それでも希望に縋って新たな世界の創造を願ったんだ！」
飛び込むような緊急回避では躱し続ける事などで出来ないだろうと、幾月は美鶴に狙いを絞って銃を撃ち続ける。
最初の一撃を躱した美鶴は受け身を取って、すぐにペルソナの力で氷壁を作り、その後ろで攻撃に耐える。
「力を持たない彼らの祈りがニュクスを呼んだ！　祈りこそ彼らの戦いだったんだ！　それをお前たちのようなやつらに否定される筋合いはないっ!!」
ここに到るまでに幾月も何度も無力感を味わってきた。
どれだけ願っても、必死に求めても、理不尽な存在や不運によって積み重ねてきた物を奪われる事もあった。
しかし、ようやくここまで来たのだ。自分と同じように力を持たない者たち、祈ることしか出来ない者たちの願いは神に聞き届けられた。
ようやく、彼らも報われる時が来たのだ。
それを邪魔するというなら殺すしかない。血走った目で氷壁を睨んだ幾月が執拗に引き金を引き続ければ、
「――――悪いけど、こっちも譲れないから」
横から迫った風の砲弾が直撃し、幾月の身体は宙を舞った。
何が起きたのかと唯一動いた瞳を衝撃がやってきた方へ向ければ、離れた位置に召喚器を持ったゆかりが立っていた。
ゆかりの存在を認識した幾月は、喉の奥から鉄臭い液体が迫り上がってくるも、まだだ、まだやれると左手に握られたままの拳銃を敵へ向けようとした。

だが、宙に舞っていた身体が地面へと落下し、勢いのままフロアの地面を転がると、既に限界が近かった幾月はあっさりと意識を手放し動かなくなった。

気絶したフリをして騙し討ちを仕掛けてくる可能性も考慮し、美鶴とゆかりは氷壁の後ろに隠れてしばらく様子を見る。

一分が経ち、二分を過ぎると、本当に気絶したのだと分かった少女たちは、父親の無念を晴らす事が出来たとこの場の勝利を喜びあった。

第四百四十六話　合流

影時間――タルタロス

幾月を倒したゆかりと美鶴は、相手が完全に気を失っていることを確認した後、治療が必要かどうかだけ確認してから休んでいた。

死んだ幾月茜について言及してから、幾月は冷静さを失っていたように思える。

妻を助けられなかった自分の無力を嘆くような、母を失った娘の代わりに憤っているような、どこか歪な感情がそこにはあったように思う。

そして、ただ利用していると思っていたニュクス教の者たちに対しても、幾月は駒ではなく本当の意味で自分と同じ痛みを知る同志として見ていたように今なら思える。

自分と同じように今ある世界に見切りをつけた者たち、新たな世界に救いを感じている者たちに同情か共感を抱いていた事は間違いない。

幾月の持っていた拳銃を氷漬けにしてから階段近くに座って休んでいた美鶴は、一体どちらが本当の姿だったのかと考え込む。

すると、同じように休んで水分補給をしていたゆかりが、何やら難しい表情を浮かべている美鶴に気付いて声をかけてきた。

「美鶴先輩、何をそんなに考え込んでるんですか？」

「いや……幾月の本性について少しな」

「敵にもそうする理由があった、って部分に同情でもしましたか？」

ゆかりは美鶴が何に悩んでいるか大体察していた。

十二体目のアルカナシャドウを倒した翌日、幾月が生きていて裏切っていた事を知り、その時の様子から馬鹿な妄想に取り憑かれた狂人だと思っていた。

しかし、敵について調べる中で、幾月には妻と娘がいることが新たに分かった。

娘は美鶴の一つ上、妻は十二年前に飲酒運転のトラックに轢かれて亡くなっていた。

事故は完全に相手の過失。幾月茜はただ近くにいて運悪く巻き込まれただけだ。幼い子どもを残してこの世を去ることになった点も含めて、犯人にはとても重い罰が下ると思われた。

だが、そうはならなかった。相手の親族や知り合いに強い権力を持っている者でもいたのか、相手はたった二年で刑務所を出てきた。

初犯ならそれが普通だと、感情論で罪の重さを決める事は出来ないのだと言われても、幾月は亡くした母を想って悲しみ続ける娘を見て、そんな結果に納得する事など出来るわけがない。

美鶴もそう感じたからこそ、もっと他の道はなかったのだろうかと悩んでしまう。

「……幾月はどこか八雲に似ていたんだと思う。何を犠牲にしてでもという部分は違っているが、誰かのために何かをしようとする想いが人よりも強かった」

「その想いだけで桐条の研究に辿り着いてここまで来たのはすごいと思います。娘のためだっていう部分も納得は出来ます。でも、幾月は他者を犠牲にすることを厭わなかった。そこが彼との大きな違いです」

美鶴は湊と自分に似ている部分があると以前考えた事があった。

その時、湊がどういった人物であるか、どういった行動をこれまで取ってきたかを調べたからこそ、彼がどんな人間か第三者の視点で考えた分析データを持っている。

そして、最後の決戦の前に幾月の過去を調べる過程で彼が歪んだ原因と、それ以降の暗躍についてもある程度分析出来ていた。

戦いの中で交わした言葉もそこに含めれば、湊と桐条と同じように、湊と幾月の共通点や類似点を見つける事も出来た。

二人は似ている。大切な者の死を切っ掛けにして、誰かのために自分の残りの人生全てを捧げるように生き急ぐようになった。

「私もお父様のためにと戦い始めた口だ。二人の主義主張を否定する事は出来ない。大切な者のために何かをしようとする。それ自体は尊いものだ。だが、八雲は奪われる痛みを自分だけのものとし。幾月は同じ痛みを他人も味わえばいいと開き直った。やはり、守る物があ

るというのは重荷に感じてしまうものだったのだろうか？」
「……有里君が前に言ってましたけど、自分だって泣きたいのに、頼られて守らないといけないから弱音も吐けないってのは地獄らしいですよ。いっそ全部放り出せたらどんなに楽なことかって」
幾月は自分も妻を失った悲しみを感じていながら、母を失った幼い娘を守っていかなければならなかった。
守る物があるせいで、その優しさを守る物以外に向けられなくなり幾月はここまで来てしまった。
だが、そんな男の計画を阻む最大の障害となった〝有里湊〟という存在が生まれる切っ掛けとなったのは、幾月が関わっていた研究が失敗に終わり、百鬼家の三人が爆発事故に巻き込まれたからだ。
中等部の修学旅行で湊と交わした言葉を思い出しながら、ゆかりは携帯食のブロッククッキーを口に放り込みながら続ける。
「実験を失敗に持ち込んだのはお父さんですけど、幾月が関わっていたその実験がなければ有里君が戦いに巻き込まれる事もなかった。自分で計画の最大の障害を生み出したんですから皮肉ですよね」
最初の研究は岳羽詠一朗に邪魔され、その時の事故が原因でエルゴ研に送られた少年が最後の最後で敵として計画を阻みにきた。
娘のために新たな理を敷いた世界の創造を目論む幾月からすれば、どうしてこうまで思い通りにならないのかと悪夢のような状況だろう。
そして、そんな幾月は彼が見下していた桐条武治と岳羽詠一朗の娘たちによって倒された。
彼が自分の娘を愛していたように、美鶴とゆかりも自分の父親のために戦うほど彼らの事を想っていた。
親と子の立場は逆だが、抱く想いは負けていない。
子のために戦った父親が、父親のために戦った子どもに負けるのもまた皮肉な結末と言えた。
「美鶴、岳羽っ!!」
そうして、二人が休んでいると階段を駆け上がってくる足音と共に、下のフロアでストレガたちと戦っていたメンバーが姿を現わす。

現われたメンバーに無傷の者はいない。皆、どこかしらに怪我を負っており、しかし、それでも勝利してここまで走って追い付いて来た。
誰一人欠けずにここまで来てくれた事に安堵しながら、立ち上がった二人はやってきたメンバーを迎える。
「明彦、お前たちも全員無事だったか！」
「フッ、ちゃんと後で追い付くと言っていただろ。それより、お前たちも勝ったんだな」
言いながら真田の視線は壁際で気を失い倒れている幾月に向けられる。
真田からすれば中等部時代からの付き合いがあり、彼がストレガに殺されたと知った時には弔い合戦だとストレガとの決着を誓ったほどだ。
裏切られていたと知り、自分たちが殺されかけた時には色々と言ってやりたい事があった。
それは他のメンバーたちも同じようで、研究所時代から相手を知っているチドリやエルゴ研の実験に複雑な思いを持っているラビリスもじっと相手を見つめている。
実際に彼が行なっていた実験の被害者としては思う事があるのだろう。
他の者たちがそれを黙って見ていれば、幾月から視線を外したチドリが口を開いた。
「……体力に問題がないなら上へ行きましょう。上ではまだ戦いが続いてる。八雲が色々と手を回しておいたようだけど、外では象徴化も解け始めている以上時間がないわ」
「せやね。皆も気付いたと思うけど、海の方に今も大きな気配が二つあるわ。湊君もまだ戦っとるみたいやし。先に頂上の敵を倒さんと」
正直に言えば、敵がここまでの力を持っているとは誰も思っていなかった。
湊の持つセイヴァーの力はニュクスに由来する超常の存在に対する切り札。

それさえあれば敵のペルソナは完全に封殺出来ると思っていただけに、湊が龍人型ペルソナであるセルピヌスを出して応戦することになるなど完全に想定外の事態だった。
けれど、彼が負けるとは思っていない。
湊はただ殺すのであれば負けることはないと言っていたのだ。
まだ戦い続けているという事は、彼もまだ相手を殺さずに済むよう諦めていないという事。
残る時間は少ないだろうが、完全体となりデスの写し身となったニュクス・アバターの相手はタルタロスへやってきた特別課外活動部の役目。
湊にはあちらに集中して貰うため、自分たちは七歌たちに合流して急いでニュクス・アバターを倒そうと彼女たちは走り出した。

――海上

悪魔型ペルソナ〝シャイターン〟は、炎の翼で風を捉えて加速しながら炎の剣で斬りかかる。
炎の熱によって像が歪み、本来とは異なる軌道を相手に認識させながらその身体を切り裂かんと迫る。
対する龍人型ペルソナ〝セルピヌス〟は大きく一歩踏み出し、波飛沫を上げながら敵へと迫ると腰溜めに構えた豪腕を突き出し敵の腹部を捉える。
上段から切りつけようとしていた悪魔は腹部に重い一撃を喰らい。身体をくの字に曲げながら吹き飛ぶ直前、せめて一撃と炎の剣で龍人の肩口を切りながら吹き飛ばされた。
水切りのように海面をバウンドする度、身体に纏った炎で海水が蒸発して白い蒸気が辺りに広がる。
龍人はその蒸気を散らしながら突っ切り、相手の勢いが弱まり沈み始める瞬間を狙って天高く振り上げた足で踵落としを繰り出した。
攻撃を喰らう寸前で腕を使って直撃を防いだようだが、龍の力を持つ巨人の一撃だ。
攻撃の威力を物語る水柱と共に海中へと沈んでゆく。

《それでやれると思うなっ!!》
しかし、相手も龍人と同様に規格外のサイズを持つペルソナ。
並みのペルソナであれば一撃で消し飛ぶような攻撃に耐え、海中から渦巻く熱線が噴き上がる。
迫る熱線に龍人は一歩大きく後退する事で直撃を回避し、射線上から逃れたタイミングで身体を一回転させた勢いを乗せた尻尾で立ち上がった敵を横から殴りつけた。
悪魔もこのタイミングでの攻撃を読んでいたのだろう。攻撃を喰らいながらも横に飛んでダメージを逃がす。
そして、着地と同時に両手に炎の剣を再度呼び出すと、龍人の目の前の海面に向けてそれらを叩き付けた。
《僕は幾月さんの、姉さんたちの願いを叶える！　お前を向こうには行かせない！》
最初は邪魔な存在である湊を殺そうとしていた。
だが、結城理も湊に勝てないと悟ったのだろう。個人の勝利よりも、目的達成のために動こうと方針を変えていた。
湊さえこの場に足止めしていれば勝てる。他の者ではニュクスを倒せない。
それが分かっているからこそ、理はどれだけ無様だろうと湊に喰らいついていく。
《お前は大勢の人間を救ってきたんだろ！　なら、今救いを求める人間も救ってみせろ！　新しい世界、新たな理に希望を見出した人々の願いをお前は知ってるんだろ?!》
自分には出来ない。湊の、百鬼八雲の劣化複製品でしかない自分では、救いを求める人々を助けるだけの力がない。
けれど、自分だけでなく、他者の死の運命すらも捻曲げてみせた男であれば、自分に救えない人々も救ってみせる事が出来るはず。
理とて百鬼八雲と同じ人格を持っている。今ある世界を壊そうとしている自分たちが悪だなんて最初から分かっている。
それでも自分にとっての恩人である幾月や玖美奈を見捨てる事は出来ない。

だから、人を超え神に届き得る力を持つ湊に、お前なら救えるんじゃないのかと呼びかける。
《……不可能だ。ニュクス教の人間は救われることを望んでいない》
《嘘だ!!　新しい世界での幸せを望んでいると彼らは言っていた！》
再び炎の翼を羽ばたかせて距離を詰める。
炎の剣を槍に変えて、悪魔は龍人の腹を貫こうとする。
龍人は黒い炎を纏った裏拳で槍を弾き、逆の腕の肘を相手の腹にめり込ませて吹き飛ばす。
《死、その物が救いだと考えている。新たな世界は来世を指している。そんな人間に出来る事などない》
理の言いたい事は分かる。だが、お前の希望には添えないと湊は冷たく言い放つ。
それを聞いても諦められない理は、空中で体勢を立て直すと、海底に足を着けて再び湊へと挑みかかっていった。

第四百四十七話　祈りと願い

影時間――海上

一時的に理と玖美奈の反応が混ざって感じられていた敵のペルソナは、理本人の意識が覚醒したため戦いが進む間に彼が主体となっていた。

無論、二人の力で召喚したので、悪魔型ペルソナの中には玖美奈の存在も感じる。

ただ、ペルソナの力を使って思念の形でぶつけてくる言葉に玖美奈の物はない。

必死に喰らいつくことで湊をこの場に足止めし、ニュクスとの戦いに参戦させぬ事で実質的な勝利を得るという狙いは分かる。

湊やデスの力を持っていた綾時でも戦って勝てる相手ではないと分かっていたのだ。

いくらペルソナ使いが力を付けようと、その力の根源は敵として対峙するニュクス由来の物である以上、他のペルソナ使いたちでは抗うことすら出来ない。

《それだけの力があって、なんで！　どうして彼らを救おうとしないっ!!》

近距離での攻撃では捌かれると判断したのか、悪魔は炎の翼で後方に飛び上がりながら、その手に持っていた炎の剣を龍人に向けて投げつける。

飛んでくる剣を龍人は黒い炎を纏った裏拳で叩き潰し、龍翼を羽ばたかせて加速して敵の正面に迫ると、相手が攻撃してくる前に蹴りつけて海へと落とした。

《……どうして俺が助ける必要があるんだ？》

《相手が助けを、救いを求めているからだ！　僕もお前と同じ、百鬼八雲だ。だから、分かる。お前も彼らを救ってやりたいと思っていると！》

海に沈む直前に翼の炎を激しく噴かせ、悪魔は海面ギリギリをホバリングするようにして落着を防ぐ。

それを空で見ていた龍人は鮫を思わせる凶暴さを感じる口元にエネルギーを集め、不気味な赤と黒の光が混ざり合う光線を連続で放った。
一撃目は悪魔の足から十メートルほど離れた海面に落ち、二撃目は身体を捻った悪魔の翼から僅かに外れた海面を叩く。三撃目で両腕を使ったガードを直撃し、それで体勢を崩した敵に四撃目が着弾して海へと沈める。
百メートル級の巨体が沈んだ事で海は大きく荒れ、離れた陸地に津波になって押し寄せようとする。
けれど、それらは全て蛇神の骨を使った防壁に阻まれ、彼らの戦いの余波による被害は海中のみに抑えられていた。
下手をすればしばらくこの近海で漁が出来ない可能性もある。
ただ、いくら自分に優位な状況だと分かっていても、下手に手加減出来ないだけの力を理たちは持っていた。
故に、湊はニュクス降臨までまだもう少しの猶予があるからと、敵である理の言葉に耳を傾けていた。
《……救えるなら救う。だが、俺の求める結果と彼らの求める結果は対極のものだ。彼らに譲る気はない》
理はこのままでは自分たちが負けて、本当にニュクスが倒されてしまう危険性があると感じていた。
オリジナルとクローン。同じ人格まで有しているのに、どうしてここまで力に差が付いたのか。
湊に言わせれば、異なる十年を生きた結果でしかない。
しかし、クローンという本来存在しないはずの人間という劣等感から、理はオリジナルに負けないよう命懸けの実験を受けて力をつけてきた。
湊にはデスの性質と本人の持つ力を利用した蘇生があったが、理にはそんな力は無く死ねばそれまでだった。
相手に蘇生能力があったことなど最近までは知らなかったものの、危険な実験を乗り越えて力が増す度に自分こそが〝百鬼八雲〟に相応しいという自信をつけていった。

それなのに、完全に死んで肉体まで破壊されたはずの相手が蘇ってきた。
自分だけじゃなく、玖美奈や幾月まで知らない力を手にして戻ってきたのだ。
湊が表舞台に戻ってきたせいで学校にも通えなくなった理は、どうしていつも邪魔をするんだと怒りを燃やした。
怒りを燃やして、今日こそ決着をつけるはずだったのに、蘇って力が増していた湊には届かなかった。
未来を約束した玖美奈と共に挑んで負けた事で、自分だけでは勝てない。相手の方が強いとようやく認める事が出来た。
ただ、だからこそ、名切りとして全ての力を使える相手が、自分と同じように他者を救ってやりたいという想いを持っているはずの相手が、簡単に救う事を諦めようとする事に納得がいっていなかった。
悪魔が沈んでいった地点の海面が爆発し、螺旋を描く炎の柱と化した炎の剣を持って海中から飛び上がった悪魔が龍人と同じ高さで滞空して向き合う。
《それでも、それでもお前なら、彼らの願いを叶える方法を見つけられるんだろ。僕が殺した赤髪の女の子を生き返らせたように、他者にだって奇跡を行使出来るなら可能なはずだ》
湊はどうして相手がここまで自分を評価しているのか不思議に思っていた。
力では勝っている。使えるペルソナの種類や、死という概念の理解度など他の者では手にし得ないものを持っている事によるアドバンテージ。
おかげで自分を除けば最強と呼べる敵をこうしてあしらえている。
相手も自分が他者と隔絶した力を持っているという自負があって、それでも勝てない湊に何かしらの幻想を抱いているのかと思っていた。
だが、今の言葉でようやく理解した。何故湊なら万人を救えると思っていたのかを。
《……そうか。お前はずっと奇跡に縋ろうとしていたのか》

《ニュクス降臨による新世界の創造。そんな奇跡を阻むのであれば、お前の持つ力による奇跡で全員を救ってみせろ。そうじゃなきゃ、認められない。奇跡に縋るしかなかった彼らのために、負けるわけにはいかないんだっ!!》

両手で持った天を突く炎の柱が如き剣を龍人へと向けて悪魔が迫る。

自分には出来なくとも、既に一度奇跡を起こしている湊であれば、自分には救えなかった者たちを救済することも出来るはず。

そう信じているからこそ、理は相手がそれを約束するまでは彼らのために諦めることが出来ないと戦い続けていた。

幾月や玖美奈には恩義がある。対して、ニュクス教の信者たちには思い入れなどないだろう。

けれど、〝百鬼八雲〟は元々そういう少年だった。自分の利益になるかどうかは関係ない。

救いを求める者がいて、自分にそれを解決する力があれば無条件で力を貸す。

理屈ではなく、本能的にそんな行動を取ろうとする少年に、両親やまわりの大人たちも身を案じて悩んでいた。

結城理はその百鬼八雲の記憶を継承している。本来得るはずだった結城理の人格を上書きする形で、趣味嗜好から思想に到るまで全てが本来の百鬼八雲と同一になっている。

だから、湊には彼が本気で全員を救ってみせろと言っているのだと分かった。

迫る螺旋の炎を上空に回避し、躱した自分の下を通過しようとする敵の翼に向けて爪による斬撃を飛ばす。

《そんな都合の良い奇跡などない。奇跡に縋る心をへし折るか、記憶の改竄でニュクスに関わる記憶を封印するのがせいぜいだ》

救いを求めてきたニュクス教の者たちを救うだけなら、幾月と玖美奈の願いを叶える方法を取るだけで済む。

その代わりに、現行世界の存続を望む者の願いを切り捨てるしかない。

彼には矛盾する願いを叶えるだけの力がなかったから、どちらかを選ぶしかなかった。
迫る斬撃を身体を反転させて躱し、悪魔は炎の剣に集めた力を解放して上空にいる龍人に向けて炎の嵐を放つ。
《嘘を吐くなっ!!　なら、彼らはどうなる。それしかないんだぞ。今のこの世界じゃ救われないから、望む幸せを得られないから、新しい世界を求めたんだ！　それなのにお前は彼らの希望を打ち砕こうと言うのか！》
《……なら、一人一人殺して回ろう。現世に希望がないなら来世に期待すればいい。お前たちがやろうとしている事はそれと同じ事だからな。生き続けたいやつと死にたがり、どちらも救うにはそういった方法しかない》
ニュクス降臨の齎す結果を知っている湊にすれば、彼らを殺して回ればニュクス教の者たちの求める結果と同じ結果が得られる。
奇跡など必要ない。神の視点でものを見ている湊からすればこれが正解だ。
炎の嵐を龍翼の羽ばたきで巻き起こした風で散らしながら答えれば、その答えに納得がいかない理が悪魔の両腕を伸ばすようにして迫ってきた。
《違うっ!!　彼らは新たな世界を求めているだけだ。死にたい訳じゃない！》
ただ殺したのでは彼らが救われない。それでは希望を砕き絶望を叩き付けるのと変わらない。
そう抗議するように掴みかかってきた悪魔の手が龍人の首へと迫れば、琥珀色をしていた龍人の瞳が赤い光を宿し、全身から蒸気のように赤いエネルギーを立ち上らせながらカウンターの拳で顔面を捉えて敵を海へ叩き落とす。
真っ直ぐ海へと落ちていき激しい水飛沫を飛ばしながら海中に沈んで行く敵を追って、湊の龍人も海へと落ちながら声を荒げて返す。
《これはお前たちが始めた事だろうが！　ニュクスの降臨で新たな世界が創造されると伝え、やつらに希望を抱かせたのはお前たちの責任

だ。自分たちのとった行動の責任くらい自分たちで取れ！　俺や他のやつらが妨害せずとも失敗していた可能性だってあっただろ。その時、やつらにどんな言い訳をするつもりだったんだ!!》

出来るのならば湊だってニュクス教の人間を出来る範囲で救っていた。

しかし、そもそも今の世の中に絶望していた彼らに希望を抱かせたのはストレガや幾月たちだ。

この世界が滅びて新たな世界が創造される。そこには選ばれた者たちのみが導かれ、他者を虐げてきた傲慢な者たちは滅びによって駆逐される。

そんな平時であれば到底信じられない甘言に惑わされ、彼らは〝滅び〟などというものに魅せられてしまった。

ストレガたちは死を求める心に反応するというニュクスの降臨のために彼らを煽動しただけだろう。

幾月はどうか知らないが、自分と同じようにこの世に絶望している者たちに同情した部分もあったかもしれない。

ただ、理が何を言おうと彼らに希望を与えたのは理たち自身の責任だ。

勝手に責任を押し付けて救ってみせろと言われても、自分たちでやった事の責任は自分たちで取れというのが湊の本心だった。

共に海に沈んで行きながら龍人が悪魔の首を掴んで海底に押し付ける。影時間に輝く月の明かりも海底には届かず、龍人に掴まされた悪魔の首が真っ暗な闇の中でミシミシと音を立て始めた時、これまで黙っていた少女の声が聞こえて来た。

《……だったら……だったら、私たちは……どうすれば良かったの……》

何かに縋るような弱々しい玖美奈の声が届く。

理と共に悪魔型のペルソナを召喚した時点で彼女の意識も覚醒していたのだろう。

高同調状態で二人が同時に意識を表出すれば意識が混ざってしまう危険性があったため、これまで理の意識がメインとして出ていただ

けで、湊と理の会話は彼女も聞いていたらしい。
二人で一体のペルソナになっていることで、理と玖美奈はお互いがどんなことを考えているかも共有しているに違いない。
おかげで理が本当は他者を犠牲にすることを嫌がっていた事を玖美奈も理解し、逆に玖美奈が父である幾月をここまで追い詰めた事に罪悪感を抱いている事を理は知った。
もっと前にお互いの本心を曝け出して相談していれば、世界はこんな事にはならなかったかもしれない。
それが分かったからこそ、玖美奈は湊に答えを求めた。自分は本当はどうするべきだったのか教えて欲しいと。
相手から戦意が完全に消えた事を感じ取った湊は、悪魔の首を掴んでいた手の力を緩め、抵抗しない相手を掴んだまま浮上を開始する。
《……こうなる前に、止めてやれば良かったんだ。過去に縛られて生きるんじゃなく、過去を抱えて未来へ生きていこうと言ってやれば良かったんだ》
《私のためにお母さんを生き返らせようとしてくれていたのよ。そのために、多くの人たちを犠牲にした。貴方や理、ストレガや吉野さんと同じ被験体たち、他にも大勢の人間を犠牲にしてその人生を歪めてまで研究を進めてしまったのに、途中でそんな事出来る訳ないじゃない……》
玖美奈もこんな事になるとは思っていなかったのだろう。
幼い頃は再び母に会える可能性があると喜んでいただけだったのに、成長するにつれて父が何をしているのか徐々に理解出来るようになってしまった。
百鬼八雲のクローンとして生み出された新しい家族が来たことには素直に喜べても、自分がクローンである事に悩む彼の姿を見て、自分が我が儘を言ったせいで彼を苦しめているという罪悪感を覚えた。
過去の研究データを調べる中で、自分とそう歳の変わらぬ子どもたちが辛い実験の中で何人も死んでいたと知った。
子どもだけじゃない。大人の中にも死者が出て、それらは父の企みで犠牲になったのだと察した。

再び母に会いたい。自分がそんな事を願わなければ父はこんな事をしでかさなかった。
それが理解出来る歳になっていた玖美奈は、犠牲者が増えるにつれて余計に父を止められなくなっていった。
もしここで止めてしまえば、娘のためにと手を汚してきた事が無駄になる。これまでの事が無駄になってしまえば、幾月の心は罪の意識で潰れてしまう。
だから、自分には父を止める事など出来なかった。
玖美奈がそう湊に告げれば、海上まで浮上して移動してきた龍人が悪魔を誰もいない浜辺に寝かせ、その身体を光の粒にして消えてゆく。
光の粒が消えて浜辺に降り立った湊は、同じように光になって輪郭が消えてゆく悪魔に言葉を返す。
「……それでもお前たちはあいつを止めてやるべきだったんだ。こうやって力尽くで止められる前に、〝もういいよ〟と家族が言っていればあいつも心の整理がつけられたかもしれない」
浜辺に横たわっていた悪魔が消えると、後には座り込んで涙を流す少年と少女がいた。
何がいけなかったのか、どうすれば良かったのか、湊の言葉を聞いても簡単には納得出来ないし、それが最善かどうかも分からないだろう。
それでも、二人も誰かに止めて貰いたかったのかもしれない。
自分たちでは幾月を止める事が出来ないから、どうか彼を止めてその心を救ってあげて欲しいと心の奥底で願っていた。
二人は湊に負けた事でようやくその想いを自覚し、そんな簡単な事で今よりも幸福な未来を生きられた可能性に気付いて、ただどうしようもなく涙が溢れて止まらなかった。
時間にすれば五分ほどだろうか。滅びが目前に迫った状況ではけっして無駄に出来る時間ではなかった。
それでも、湊は二人が落ち着くまでただ黙って待っていた。
ようやく涙が止まった二人はお互いを支えるようにして立ち上が

り、不思議な光を宿した金色の瞳でタルタロスを見つめる青年に声をかける。
「貴方はこの後どうするの？　ニュクスの降臨は止められない。人間では神に勝てない。この世界はこのまま滅びるわ」
「……何もしなければな。ニュクスには勝てなくても、この戦いに勝つ方法はある。だから安心しろ。お前らは続く世界でやり直せばいい」
玖美奈の質問に短く返すと湊はどこまでも澄んだ穏やかな笑みを浮かべる。
とても優しい笑みだというのに、それを見た二人は心の奥がざわつく感覚を覚えた。
だが、さらに声をかける前に青年は白銀の天使を召喚して共に飛び去ってしまう。
蛍火色の燐光を残して飛んでいく天使を目で追っていた理は、彼の言葉の裏に隠された意味と先ほどの笑みから一つの可能性に行き着く。
「あいつ、もしかして……」
「……やっぱり、私は有里湊が嫌いだわ。彼はこの十年で歪んだまま成長した。多分、元の百鬼八雲の人格に近いのは貴方のほう」
玖美奈が急に湊が嫌いだと言いだした事で理は少し面食らう。
元から敵として嫌っていたのは知っていたが、どうしてこのタイミングで再度告げてきたのか分からない。
けれど、恐らくは自分が気付いた事と関係しているのだろうと理は聞き返した。
「でも、それと何の関係が？」
「有里湊は研究に取り憑かれた後のお父さんに似ているの。桐条総帥もそう。誰かのために、何かのために、目的を達成することだけを考えてる。あれだけ偉そうに説教しておきながら、彼の視ている未来に彼自身はいない」
「……もし、生贄が必要だっていうなら」
「無駄よ。恐らく、必要なのは誰かじゃない。彼自身なの」

理は自分が本来存在しなかったはずの人間だと分かっている。
だから、何かの代償として命が必要なのであれば、クローンである自分の命を使えばいいと考えた。
憎んでいた相手が勝手に死んでくれるというのに、最後になって代わりに自分が死ぬと言える理の優しさに玖美奈は苦笑を漏らす。
けれど、恐らくその決意は無駄になる。彼は敵である自分たちに生きろと言った。
であれば、彼が為そうとしている事に必要なのは彼自身。他の者では代わりなれない。
自分の死を受け入れ静かな決意に満ちた彼の笑みが未だ脳裏に焼き付いている。
どうすれば誰かのためにあそこまで強くなれるのか。自分に出来ない事を平然とやってのける相手に軽い嫉妬を覚えながら、玖美奈は理と共にこの場所で世界の行く末を見守ることにしたのだった。

第四百四十八話　戦う姿

影時間――港区

理と玖美奈を下した湊は、セイヴァーと共に飛び立つとすぐに索敵を開始した。

魔眼の覚醒によって死の概念を理解していた湊は、魂の一部が常にニュクスに触れていたようなものであり、その縁もあってニュクスの気配は敏感に感じ取る事が出来る。

降臨までもう少しだけ猶予がある。感覚としてそれをはっきり理解しているものの、ニュクスの力は思っていた以上に地上の生物に影響を及ぼし易いらしい。

戦闘中に一般人の象徴化が解け始めたことには少し驚いたが、事前に配置していた自我持ちのペルソナたちやＥＰ社の人間達の協力によって何とか混乱は抑えられている。

しかし、訳の分からない状況ということもあって、どうしても不安に押し潰されてしまう者たちも出ていた。

避難所へ向かう途中や避難所でシャドウが抜け出てしまい。それが原因で混乱や怪我人が出ている場所がいくつかある。

彼らには何の罪もない。あくまで巻き込まれただけの被害者だと言いたいが、シャドウが抜け出るのは本人の心の弱さが原因だ。

飛行型のシャドウの相手は空に残したセイヴァーに任せ、湊は高同調状態を切って地上に向かって落ちてゆく。

ＥＰ社の敷地内にある公園で突如牛と人間の特徴を持った巨大な化け物が出現した。

これまで化け物たちは道路の方からやってきて人々の集まる公園を目指していたので、ＥＰ社のスタッフやそれに協力していた者たちはそちらばかりに集中してしまっていたらしい。

だが、人が集まっていた公園の方から悲鳴があがり、そちらに視線を向けると〝ミノタウロス種〟のシャドウが空に向かって吼えていた。

周りにいた者たちは叫びながら逃げるが、中には腰が抜けて逃げ遅

れてしまった者もいる。
スタッフらはすぐに光線銃を向けて引き金を引こうとするも、逃げる人たちが邪魔になって射線を維持出来ない。
そうして対処が遅れている間に、腕を振り上げたミノタウロスが逃げ遅れた人に襲いかかろうとする。
逃げ遅れた者を何とか助けようとした者もいたが、相手の許に辿り着くのが限界で逃げるだけの時間は無い。
せめて庇おうと覆い被さるようにして抱きしめ、迫り来る攻撃の衝撃に備えれば、空から青い光を纏って現われた青年が一刀の下に切り伏せ敵を消滅させた。
「……思っていたよりも多いな」
ミノタウロスの出現によって他の者たちも影響を受けたのか、公園内で何体かのシャドウ発生を湊は感知する。
恐らくギリギリ耐えていたところで、化け物に襲われそうになって限界を超えてしまったのだろう。
種類はバラバラだが同時に数ヶ所でシャドウが現われて再び人々が混乱を見せようとする。
けれど、他の者たちが動くよりも速く駆け出した湊は、青い光の尾を引きながら人々の間を走り抜けて全てのシャドウを一撃で倒した。
逃げ出そうとしたのに、逃げる前に全ての脅威が排除されてしまった事でその場にいた人々は思わず呆けてしまう。
もっとも、湊にすればこの場はスタッフに任せていたつもりだったので、こうやって自ら対処に回る必要が出たのは想定外だ。
任されていたスタッフも申し訳なく思っているのか、指揮を執っていたビアンカが駆け寄ってくるなり湊に謝罪してきた。
「すみません、代表」
「……謝罪はいい。これから俺は掃討に移る。あと少しだ。保たせてくれ」
「はい。必ず」
突然現われた化け物を簡単に屠って見せた青年。
それが自分たちに避難を呼びかけた有里湊だと分かり、この場にい

る者たちは青年にずっとこの場にいて欲しいと思っている。
だが、先に伝えていたようにこの現象は世界中で起こっており、化け物の出現は都内のいたるところで起きている。
他の場所では逃げるしかないが、ここはＥＰ社の用意した光線銃で化け物を撃退する事が出来るだけマシであり、それを思えば他者を救いに行こうとする彼を引き止める事は出来なかった。
上空のシャドウを倒していたセイヴァーが彼の許に戻ってくる。
先ほど現われた化け物と同じ超常側の存在。けれど、その姿は天使であり、見る者を圧倒する神々しさがあった。
それを従えた青年が天使と共に去ろうした時、彼にこの場を任された学生たちが彼に向かって大きな声で呼びかけた。
「湊君、がんばってねー！」
「会長！　俺、信じてますから！　絶対大丈夫だって、信じてますから！」
「今度こそここは守ってみせるから、他の人たちを助けてあげて！」
天使と共に空へと上がっていく湊に向かって声援が飛ぶ。
今戦っているのは彼のようなすごい人たちなのだと、公園に避難していた者たちに伝わったのだろう。
大声を出すことで自分に言い聞かせながら不安を吹き飛ばそうとしているのもあるだろうが、大声を出して手を振っている者たちの瞳には確かな希望が宿っていた。
それに気付いた青年は小さく口元を歪め、一定の高さまで来るとすぐにその場から飛び去った。
＊＊＊
湊が世界に向けて声を送った時、佐久間文子は彼と行なった進路相談の内容を思い出していた。
ああ、そうか。彼はこの事態を解決するために命を使おうとしているのか、と。
気付いた佐久間はすぐに外に出る準備を済ませて、家の近所にある広域避難場所の運動公園へ向かった。
何かあったとき用に動ける格好を選び、軍手なども用意していた

が、次々増えていく避難者たちの多くが不安そうな顔をしていた。
それはそうだ。こんな訳が分からない事態に直面して普通でいられる方がおかしい。
湊に指示を聞いただけでやる気に燃えているプリンス・ミナトのメンバーらの方がこの場合はおかしいのだ。
けれど、佐久間もこれで一応は教師である。合流してきた櫛名田姫子と共にプリンス・ミナトのメンバーをまとめて避難誘導を行なっていた。
今のところは大きな混乱はない。何が起きているのか分からず、何にどう備えればいいのか分かっていないも静かになっている原因だろう。
状況が分からない事で逆に静かになっているのはありがたいが、湊が言っていた化け物とやらが出てきたときが恐いなと佐久間は櫛名田に声をかけた。
「これ、間に合いますかね？」
「有里が言っていた化け物の登場までにか？」
「はい。その化け物に何が出来るのか分からないし、どういった姿かも分かってないでしょ？　だから、もしかしたら大パニックになるんじゃないかなって」
話ながら佐久間は今も続々と人が入って来ている敷地入口の方へと視線を向ける。
化け物が現われると分かっているなら、近くにあるベンチなどでバリケードを用意しておくべきか。
相手が見上げるほど巨大なら意味はないが、人間に近い大きさならある程度は侵攻を遅らせる事が出来るはず。
時間を稼げばここに避難してきた者たちを逃がすか、湊が配置したという化け物対処要員らが来るまで粘れるかもしれない。
携帯や無線機が使えればもっと情報を共有して上手く避難誘導する事も出来るのだが、こういった状況である以上は自分たちに出来る事をするしかない。
これで本当に湊の役に立っているのだろうかと小さく溜息を吐き

かけたとき、敷地入口の方が騒がしくなり、怯えて顔色が悪くなった者たちが駆け込んで来た。
「化け物が出たぞー!!」
「何体も追って来てる。急いで逃げろ!!」
入口付近にいた者たちが傍にあった石を拾って外に向かって投げている。
どうやら避難者を追いかけて化け物が接近しているらしい。
佐久間達も敷地入口の方へと向かえば、必死な表情で走って逃げてくる夫婦の後ろに水色の仮面をつけた黒い粘体性の身体を持った化け物が追いかけてきていた。
気付いた他の者たちが石をぶつけるも効果はなく、作業着姿の男性が金属バットを持って助けに向かおうとする。
けれど、湊は言っていたはずだ。化け物を見つけても必死に逃げるか隠れるかしておけと。
そう。一般人ではシャドウに勝てない。攻撃してもダメージなど与えられないのだ。
「くらいやがれ!」
飛び出した作業着姿の男性は思い切りバットを振り下ろして仮面を殴りつける。
会心の一撃を繰り出せた。そう思って敵の反応を見ようとしたとき、化け物の腕が伸びて男性を殴り飛ばした。
予想外の反撃を喰らった男性はバットを手放して地面を転がる。
呻きながらも立ち上がろうとしているため、命に別状はないようだが敵はまだすぐ傍にいる。
「すぐに立て!　急いで戻ってこい!」
化け物はまだ男性を狙っているようで、追いかけていた夫婦ではなく倒れた男性に向かってゆく。
先ほど男性が殴って与えたはずのダメージは一切見られず、鍛えた成人男性の一撃でも化け物には効果がないと理解する。
櫛名田の声で自分の置かれた状況を把握した男性は慌てて立ち上がって戻ってきた。

どうやればこんな相手を排除出来るのか、戻ってくる男性と、それを追いかけて敷地に入ってこようとする化け物を見ながら佐久間は焦りを覚えた。
そして、男性が敷地内に戻ってきて、続けて化け物も敷地に入ろうとしたとき、空から氷の槍が降ってきた。
ガガガガガッ、と連続で振ってきた氷の槍が化け物を貫いてゆく。
それらによって地面に縫い付けられた敵は、耐久限界を超えたのか黒い靄になって霧散した。
何が起きたのか分からない。ただ、誰かが助けてくれたのだと氷の槍が振ってきた方へ視線を向ければ、漆黒のドレスを身に纏い空に浮かんでいる少女がいた。
「っ、座敷童子ちゃん！」
佐久間にはその相手に覚えがあった。その時の相手は霊体状態で今とは服装も違っているが、湊に似た髪色をしている少女は間違いなく以前見た〝座敷童子〟であると確信が持てた。
呼ばれた少女はチラリと佐久間に視線を向けると、自分が呼ばれた理由を察したのか無言で静かに一度頷いた。
それから再び視線を街中の方へと向け、少女が手をかざすとその手から氷の槍がいくつも生み出される。
逃げてきた夫婦を追っていた者以外にも敵が何体かいたのだろう。
しばらく撃ち続けると排除が完了したらしく、少女はその場から飛び去っていった。
後に残された者たちは、大人でも倒せない化け物とそれを簡単に倒して見せた魔法使いの少女の存在に困惑し、しばらくの間は何も言えなくなる。
だが、少ししてようやく立ち直ると、何やら少女について知っている様子だった佐久間に櫛名田が質問をぶつけた。
「佐久間先生、さっきの子どもは知り合いなのか？」
「はい。有里君の守護霊をやってた座敷童子ちゃんです」
「守護霊？　明らかに実体だったと思うんだが……」
守護霊が現実に存在するかは疑問だが、佐久間が守護霊だと言った

相手は確実に実体を持っていた。
少女が放った氷の槍は今も地面に刺さっていて、先ほどの光景が夢でない事は間違いない。
空を飛んでいた事、一瞬にして氷の槍を生成して放った事、それらを考えると守護霊というより魔法使いだと思えるのだが、相手の正体は何にせよこの場の被害は避けられた。
「何にせよ、大きな被害が出なくて助かったな」
「そうですね。あ、さっき化け物に攻撃された人は、奥で診察を受けてください。学生たちが案内しているので、場所が分からなかったら聞いてくださいね」
攻撃を喰らった後でもすぐに起き上がって走れていたため、男性は打ち身程度の軽傷で済んでいると思われる。
それでも、機械や病院の機能が止まっているこの状況で何かあれば大変なので、言われた方も理解しているのか素直に指示に従い去って行く。
敵も排除され、避難している者たちの被害も軽微、敵を排除して回ってくれている存在も把握出来た事で、僅かに心に余裕が戻ってきた佐久間は外への警戒を続けながら話しかけた。
「姫子先生。私、さっきの座敷童子ちゃんを見て大丈夫だと確信が持てました。有里君たちは諦めてない。大勢の人間を助けるために全力で戦ってくれていると分かりましたから」
「そうだな。しかし、魔法使いが実在したとは驚いた。子どもの頃にそれが分かっていれば、医学の道には進まなかったかもしれん」
櫛名田もいい歳だが幼い頃には魔法に憧れていた時もあった。
空を自由に飛んで、得意の魔法で人々を助けて、自分の正体は明かさない。
まぁ、この場には相手の素性を少し知っている佐久間もいたが、人を助けた少女は何も言わずに去って行ったため、自分では正体を明かしていないとカウント出来る。
そんな幼い頃に憧れを抱いた存在との遭遇は、夢を諦めて社会と折り合いをつけながら成長してしまった櫛名田の心をそれなりに揺さ

ぶった。
「しかし、魔法使いの少女と知り合いとは有里もその類いか？」
「さぁ？　でも、有里君の目ってたまに金色から蒼になってた事があるので、何かしら特殊な力は持ってるんじゃないんですかね」
湊本人もそれほど隠していなかったこともあり、彼の瞳の色が変わっているのを見たことがある人間はそれなりにいた。
佐久間も実際に目の変化を見たことがある一人だったことで、魔法はともかく変わった体質をしているのは確実だと断言する。
愉快な事態に巻き込まれやすいタイプだと睨んでいた櫛名田にしても、ここまで驚きの秘密を持っているとは流石に思っていなかった。
全てが終わって無事に平和な日常へ戻れた時には、先ほどの化け物や魔法について聞くことが出来るだろうかと考えた時、蛍火色の光が空を横切った。
「え、すごーい。有里君、天使と一緒に空飛んでる！」
「……魔法使いとは別の力か？」
天使が上空を高速で飛び去っていったが、佐久間も櫛名田もそれと共に湊がいるのを見逃さなかった。
時折、上空を蛍火色の光線が走っているので、恐らくは先ほどの少女と同じように敵を排除しているのだろう。
どこまでも想像を超えてゆく光景だが、それが自分たちを守ってくれているとなれば心強い。
呆けてしまっている一般人と違い。青年のことをよく知っている者は、感心する佐久間、呆れる櫛名田、集団で祈りを捧げ崇めるプリンス・ミナト会員たちのように勇気づけられていた。
何がどうなっているのか分からず不安を感じても無理はない。
ただ、滅びの時が近付こうともまだ諦めずに戦っている者たちがいる。
彼らが実際に戦う姿を目にした者を中心に、その事実は確かな情報として広まってゆく。
絶望に押し潰されそうな状況に置かれても、抗う者の姿を見た人々

の心はまだ完全には死んでいなかった。

第四百四十九話　ニュクス・アバター

影時間――タルタロス・頂上

上空より奇襲を仕掛けたメサイアの一撃により、ニュクス・アバターの背に生えた巨大な真空管が割れる。

それによって隠者のアルカナシャドウの力が消滅し、広範囲に放たれていた電撃も止まる。

だが、倒したアルカナシャドウの力はまだ九個。まだ三つのアルカナとそれ越えた先にあるデスとしての力が残っている。

肩で息をしながらも持っている薙刀を杖代わりに体重を預けるような事はせず、敵を見つめる七歌たちの視線の先で再びニュクス・アバターが姿を変える。

《そのアルカナは示した……永劫、時と共に回り続ける残酷な運命の存在を……》

黒い翼を広げて空に浮かぶニュクス・アバターの頭上に光が集まり、光が円盤を形作ると徐々にそれが輪郭を帯びてゆく。

現われるは運命を司る円盤。円盤が回転を始め、針が止まった位置に描かれた力を具現化させようとする。

アルカナシャドウとして姿を現わした時には湊が一人で押さえ込んでいたものの、今はその運命を決めていた本体であるスフィンクスを模した金属のシャドウはいない。

であるならば、回転する〝運命の輪〟を止めるには円盤その物を破壊するしかないだろう。

駆け出したアイギスが他の者たちの動線を妨げない位置で停止し、湊のマフラーと繋がっているリストバンドから携行型対空ミサイルランチャーを取り出してすぐに引き金を引く。

当然一発では止まらない。必要なのは数。次々と使い捨てるように引き金を引いては銃ごと換装し、空に浮かぶ円盤に向けて炎の尾が伸びてゆく。

「綾時さん！」

「分かってる！　メサイア、メギドラオンで破壊するんだ！」

ニュクス・アバターと対峙していた七歌たちと違い。先ほど上空から奇襲を仕掛けて敵の背中に攻撃したメサイアは、旋回を続けて相手の背後側に待機していた。
敵に対して表と裏、両面からの同時攻撃でそれを破壊してみせる。
アイギスの声に答えた綾時はこれまで温存していた力を一部解放し、自身に放てる最強の一撃を準備する。
高度を下げてニュクス・アバターを見上げる位置に移動し、他の者を巻き込まぬよう斜め下から空に向けて射線を取る。
この一撃で砕く。回転する円盤の背面を睨み、敵に向けたメサイアの両掌から極光が放たれると、それはニュクス・アバターの頭上に浮かんでいた円盤を完全に呑み込んだ。
芽生えた心のままに人として在る事を選び母たる存在を裏切った少年。
彼は女神の玉体である月の欠片をその身に宿し、増幅させた力でもって〝使命と共に在るもう一人の自分〟ごと影時間の空を灼く。
「っ……駄目だ！　間に合わない！」
両面からの同時攻撃。それを受けても回転を続けていた円盤は、今にも止まりそうになっている。
これでは破壊する前に針が指し示した効果が発動する。
そう判断した綾時が叫んで伝えれば、対空ミサイルがあげる爆炎の向こう側でカタンと円盤が止まる音が聞こえた。
他の者たちは恐らく見えていない。探知能力で視ていた風花が三人に向けて告げる。
「膨大な力の収束を確認、爆発に備えてください！」
風花の言葉通りに他の者たちも力の収束を感じ取った。
円盤が光り始めるとそれぞれペルソナを呼び出し、自分の前で防御姿勢を取らせて盾にしようとする。
味方からの指示で防御が間に合うと、その直後、円盤に集まっていた光が解き放たれてニュクス・アバターの周囲に向けて爆発が広がった。
吹き荒れる爆風に耐え、ペルソナの受けたダメージのフィードバッ

クに歯を食いしばる。
直撃よりも受けるダメージは遙かに軽減しているというのに、ここまでの疲労と合わさって戦っていた三人は膝を突きそうになる。
これでまだ完全体ではない。その事を考えただけで乾いた笑いが口から漏れる。
《そのアルカナは示した……どんな苦難に苛まれようと、それに耐え忍ぶ力が必要な事を……》
だが、そこに彼らの意識を現実に戻す敵の声が届く。
運命のアルカナを終えて敵の頭上から円盤が消え、新たなに変化した剛毅のアルカナでニュクス・アバターの周囲に鉄の檻が展開する。
アルカナシャドウの〝ストレングス〟は、その檻を自由に伸縮させて鉄の槍のように使っていた。
であれば、ニュクス・アバターも同じ使い方をしてくるに違いない。
視界は悪いが動かなければ的になる。足に力を込めて立ち上がった七歌たちは、武器を手に取って上空から伸びてきた鉄の槍を弾きながら攻撃を躱す。
「来て、シヴァ!!」
敵の攻撃は鉄の柵の先端が伸びて繰り出されている。
緩やかに曲がることは直角に曲がって伸びる事はなく、七歌は攻撃を躱す際にそれらを注意して弾く方向にも気をつけていた。
柵の一定範囲が全て七歌への攻撃に使われ、それらは全て床に突き刺さっている。
他の範囲の柵を七歌に向けて伸ばすまでには僅かな隙が生じ、その隙を狙っていた七歌は新たなペルソナを呼び出した。
三つ叉の矛を手に携え青き肌を持つインドの神。
その手に握られた三つ叉の矛が輝き始めると、ペルソナごと七歌を貫こうと伸びてくる鉄の槍を薙ぎ払って無効化する。
「シヴァ、プララヤ!」
鉄の槍を薙ぎ払い。敵からの攻撃の勢いが弱まれば、今度はこちらから行かせてもらうと七歌も攻勢に出る。
シヴァの持つ三つ叉の矛が放つ輝きが強まり、敵を見据えると同時

にそれを投擲する。
一条の光となって飛ぶ矛は、敵が防御のために重ねて密度を上げた鉄の柵を容易く貫く。
防御を突破し進み続けた光はニュクス・アバターの胴体へと直撃した。
宙に浮いていた敵は、プララヤの直撃を受けて身体の表面にひびが入る。
これまでの中で最も明確に与えられたダメージ。
しかし、敵の余力はまだ十分なようで、鉄の柵を消して新たなアルカナへの移行を進める。
《そのアルカナは示した……避けようの無い窮状においてこそ、新たな道を探るチャンスがある事を》
ニュクス・アバターの頭上に翼のついた二重のリングが現われる。
現われたリングの中央には既に力が集まっており、自身にダメージを与えた七歌に向けて〝ゴッドハンド〟が放たれた。
上空から七歌に向けて落とされる巨大な金色の拳。
だが、七歌がニュクス・アバターに攻撃を仕掛けている時、仲間たちもただそれを見ているだけではなかった。
追撃とフォローに入れるよう、それぞれ視線で確認を取っていた綾時とアイギスも敵の変化と同時に動いている。
「させません!!」
アイギスのアテナが横から割り込むように同じ〝ゴッドハンド〟を撃ち込む。
正面から打ち合えば負ける可能性があったが、誰もいない場所に落ちる軌道へ逸らすだけなら真横から叩くだけで十分可能。
七歌の安全が確保され、それを信じて動いていた綾時のメサイアがメギドラを撃つ。
ニュクス・アバターの頭上で回転していたリングはすぐにひびが入り、そのまま砕け散ると光の粒になって消滅していった。
これで全てのアルカナシャドウの力は使われた。
ここまでで敵を倒せていれば良かったのだが、アルカナシフトを残

した不完全体はその分のエネルギーを保持している状態と言える。
完全体となれば戦闘能力自体は上がるものの、アルカナシフトで保持していたエネルギーを吐き出し、デスとしての力を取り戻した状態の方がエネルギーは減っている。
ニュクス・アバターの胸元にはプララヤでつけたひびがまだ残っているため、こうなれば完全体となったニュクス・アバターを倒して見せると全員が武器を構え直せば、空中で停止していたニュクス・アバターの周囲で黒い羽根が渦巻き始めた。
《知恵の実を食べた人間は、その瞬間より旅人となった……アルカナの示す旅路を辿り、未来に淡い希望を抱く……しかし、アルカナは示すんだ……その旅路の先に待つものが、〝絶対の終わり〟だという事を。いかなる者の行き着く先も……絶対の〝死〟だという事を！》
渦巻く黒い羽根を見た時、七歌は言いようのない悪寒を覚えた。
綾時の方へ視線を向ければ、彼も焦った様子でペルソナを呼び出している。
アルカナシフトの完了後の戦闘も想定したはずだが、何があったのかと尋ねる前に〝死神〟のアルカナを取り戻したニュクス・アバターが黒い羽根と共に黒い波動を拡散させた。
「〝夜の女王〟の羽根には触れちゃ駄目だ！」
ペルソナを呼び出していた綾時はそれに反応するように横からメギドラを撃って、七歌とアイギスに届く軌道の攻撃を遮る。
本来ならメギドラオンで防ぎたかったが、今の身体では咄嗟に撃てるのはメギドラが限界だった。
それでもニュクスの力の一部が宿り、あらゆる状態異常を引き越しかねない〝夜の女王〟を無防備に受けさせる訳にはいかなかった。
七歌とアイギスも綾時の言葉でそれがただの攻撃ではなく、受けた場合に何かしらの問題が発生する効果を持っていると分かったのだろう。
メサイアのメギドラで稼いでくれた時間で二人もペルソナを再び呼び出し、自分たちに向かってくる攻撃にスキルを当てて迎撃していた。

仲間たちの攻防を階段の傍で見ていた風花は、敵の攻撃を解析することでどうして綾時が焦っていたのかを察して他の者に伝える。
「皆さん、その黒い羽根は攻撃に使用とすると状態異常を引き起こす効果があります。また防御に使用されている間は攻撃を反射する盾としての効果を持つようなので気をつけてください！」
「随分と厄介な性能してるね！」
黒い羽根はニュクスの力の欠片だろうか。攻撃に使えば〝夜の女王〟に、防御に使えば〝闇夜のドレス〟に変化する。
幸いな事に攻撃に使用している間は反射機能が消えているようで、七歌たちのスキルで撃ち落とすことが出来ていた。
数を減らしても時間経過で再び出してくるのだろう。
だが、一度数を減らせば再び発動出来るまで時間が掛かる。
相手の攻勢が途絶えたタイミングでこちらも動き出し。綾時のメサイアが敵の持っている剣に剣としての機能も持つ翼で特攻を掛け、七歌たちも反対側へと回り込んで一気に攻める。
「エウリュディケー、ガルダイン！」
「アテナ、アカシャアーツで敵の翼を撃ちなさい！」
ニュクス・アバターは攻撃を仕掛けていたメサイアを剣で受け止めてから押し返し、後退した相手に向かって突進しながら斬りかかる。
しかし、好きにはさせないと横から渦巻く風のハンマーが殴りつけ、体勢を崩したところへ光を纏ったアテナが迫り黒い翼にダメージを与える。
一撃では装甲の一部でさえも壊すことは出来ない。それでも連携することで何度も攻撃を当て続ければ確実にダメージは蓄積するだろう。
アテナの一撃を受けてさらに体勢を崩しながらも前進したニュクス・アバターが剣を振るう。
それを翼の剣で受け流そうとしたメサイアが力を受け流し切れず、姿勢の制御を失い回転しながら七歌たちの立つ塔の頂上へ叩き落とされた。
「ぐあっ」

「綾時君！」
頂上の床を破壊しながら衝突したメサイアが光になって消えてゆく。
床に衝突した際のダメージが想像よりも重かったのか、綾時は顔を歪めて肩を押さえていた。
もし、今ニュクス・アバターが彼の許へ向かえば対処出来ない。
そう考えた七歌はペルソナを変えてニュクス・アバターの正面へと回り込ませる。
「ジークフリード、空間殺法！」
相手の意識を自分に向けるために威力と手数を両立したスキルを放つ。
無数に放たれた斬撃は、剣を使った敵の防御を潜り抜けていくつかが相手を切りつけた。
胸のひびに直撃した斬撃もあり、その部位に当たったもののダメージが重かったのか、ニュクス・アバターはジークフリードに向けて横薙ぎに剣を振るい斬撃を飛ばす。
線の攻撃でしかない斬撃など容易く躱し、後退しながらジークフリードは再び空間殺法で斬撃の雨を敵に浴びせる。
まだ黒い羽根は溜まっていない。攻撃するなら今の内に一気に畳み掛けるしかない。
「アイギス、翼を狙い続けて！」
「了解です。アテナ！」
逃げながら攻撃し、時折反転して接近しながらすれ違い様に切りつける。
そんな事を繰り返して、七歌たちは回復薬を使っている綾時が立て直す時間を稼ぐ。
目の前をうろちょろしているジークフリードがあまりに鬱陶しく、背後を飛び回ってチマチマと翼に攻撃しているアテナに意識が向いていないのだろう。
今の状況は七歌たちにとっては非常に理想的な展開だ。
しかし、元々三人で攻撃と援護を担当して戦っていたため、フォ

ローする人間が欠けている状況が長引けば当然無理も来る。
ジークフリードを狙って振り回している剣が光り出し、相手が何かを狙っていると分かっても七歌たちは対応する術がない事に焦る。
変化に気付いてすぐにアイギスがフォローに回ろうかと考えるも、下手に今の状況を崩して七歌とアイギスが同時に倒れれば終わりだと思い至って踏み留まる。
綾時も自分が何とかしなければと剣を杖代わりに立ち上がっているが、恐らく彼がペルソナを呼び出すよりも敵が攻撃を放つ方が速い。
「七歌ちゃん！」
狙われているのはジークフリード。相手の攻撃は恐らく最上級の斬撃系スキルで、それを喰らえば七歌に戻ってくるダメージで彼女が一発で気絶しかねない。
綾時もアイギスも強くなったが、ニュクス・アバターとの戦いではワイルドの力で状況変化に対応している七歌が作戦の柱になっている。
それが欠けた時点で戦いの敗北が決まるだろう。
アテナが果敢に攻め続けて翼の破壊で敵の攻撃を中断させようとする。
しかし、翼の一つを破壊したところでタイムリミットが来てしまった。
《おぉぉぉぉぉぉぉ――――――っ!!》
ニュクス・アバターの持つ巨大な剣から光が放たれる。
もはや光の波としか形容する事が出来ない斬撃を超えたそれは、後退していたジークフリードまでの距離をすぐに埋めて相手を呑み込まんとする。
「――――七歌っ」
下の敵を全員倒してきたのだろう。誰一人欠けることなく到着したゆかりたちが、光に呑まれようとするペルソナを見て七歌の名を呼ぶ。
咄嗟にでも召喚器を手に出来た彼女たちは凄い。

呼び出したところで間に合わず、七歌が倒れた後に時間を稼ごうにも彼女たちもボロボロだ。
塔から見える街の方では蛍火色の光が時折弾けているため、外のことは任せろと言っていた彼も街中の人たちを守る事で手いっぱいらしい。
もう何も手はない。ジークフリードが光に呑まれる時、七歌は晴れやかな笑みを浮かべた。
「――――効かないんだなそれがぁっ!!」
瞬間、晴れやかな笑みを凶悪な物に変えて七歌が高らかに声をあげる。
彼女の言葉通り、ジークフリードに触れた光の波はその場で反転してニュクス・アバターに襲いかかった。
ジークフリードはずっと敵の攻撃を避け続けていた。剣自体も、放った斬撃も、全て当たれば終わりだと言わんばかりに回避し続けた。
だからこそ、ニュクス・アバターも避けきれない攻撃を用意し、それが決まる状況になってから放ってきた。
それが七歌の仕掛けた罠だとも気付かずに。
「ジークフリードは斬撃無効、そして物理反射のハイパーカウンター持ちだっ!!　自分の攻撃で沈みやがれっ!!」
決めるつもりで攻撃を放ったニュクス・アバターは咄嗟の反応が遅れ、反射された自分の攻撃に対し防御姿勢を取ることすら出来ない。
アイギスによって一部の翼が破壊され、さらにいくつかの翼にもダメージが蓄積していた事で空中での踏ん張りが利かず、相手は斬撃に呑まれた勢いのまま頂上へと落下する。
自分たちの攻撃では多少のダメージしか与えられないのなら、敵自身の最大級の攻撃を当てればいい。
戦闘前からそういった状況もあり得ると考えていた七歌の作戦は見事に嵌まり、プララヤで与えた胸部の装甲が完全に砕け散った敵は、これまで感じていた重圧を消してついに沈黙したのだった。

第四百五十話　宙にて開く瞳

影時間――タルタロス・頂上

自分たちの戦いを終えてから頂上まで走ってきたゆかりたちの目の前で、空に浮いていたニュクス・アバターが落ちてくる。

かつて七歌たちが桔梗組に襲撃をかけた際、湊が振るった金色の剣から放たれた炎に匹敵する威力の斬撃が、攻撃を放った直後の無防備な状態で全て自分に返ってきたのだ。

流石のニュクス・アバターも耐えきれなかったようで、タルタロス頂上の誰もいない場所に墜落した敵からは何の気配も感じられない。

「何とかやり遂げてくれたようだな……」

これまで倒してきたアルカナシャドウ全ての能力を持つシャドウの王。

そこに綾時の心が残っていれば、もし危機的状況になっても一瞬躊躇ってくれる可能性が残っていた。

だが、湊がデスから望月綾時の心を切り離した事で、デスは人の心を持たぬ宣告者のままニュクス・アバターへと変じてしまった。

綾時の心もデスの一部だったため、心の一部が欠けたニュクス・アバターは完全体とならず倒す事は出来たが、たった三人で倒すには荷が重い相手だった事は間違いない。

それを一人も欠ける事なく成し遂げてくれた七歌たちを見て美鶴は思わず安堵の息を吐いた。

敵を倒し終えた七歌たちも、仲間が全員無事に辿り着いてくれた事を喜び合流する。

「おっす。皆も無事なようで何よりだよ。そっちは色々と清算出来たかな？」

「……どうかな。ただ、相手にも背負うものがあったのだろうが、我々も譲れないものがあって既に選んだ以上他の道はなかったと思うしかない」

七歌に問われて美鶴は少し考えて苦笑しつつも、選択自体に後悔はないとやり遂げた表情を浮かべる。

美鶴やゆかりにしてみれば幾月との因縁は親の代から続くものだ。
相手にも譲れないものがあったと分かっていても、簡単には許せないし、望む未来が対極にある以上は相手の願いを踏み躙ってでも自分たちの望みを叶えさせて貰う。
ここに来るまでに散々悩んだのだ。直接言葉を交わしたところで定めた目標は揺らがない。
他の者たちの顔を見渡しても同じで、簡単には受け止められずとも心に折り合いを付けながら彼らなりに決着を付けてきたようだ。
「そっか。ま、皆が無事で良かったよ。それで綾時君。この後はどうなるの？」
七歌が振り返れば後ろに立っていた綾時が沈黙したニュクス・アバターに視線を向ける。
メサイアがニュクス・アバターの一撃を受けた際のフィードバックダメージで動けなかった綾時も、回復薬を飲んでどうにか動けるようになっていた。
であれば、敵の様子からこれからどうなるか考える余裕も出来ているはずだと、七歌が相手の言葉を待っていれば綾時は静かに武器を持つ手に力を込めた。
「……皆も戦闘の準備を。まもなく、ニュクスの封印が完全に解けてここへ降りてくる。そうなれば、街中のシャドウがタルタロスに集まり、奈落の塔を上ってきたシャドウは降臨したニュクスと一つになるべくここへ集まってくる」
「ニュクス降臨までの猶予は？」
「マーカーとしての役目を果たしたニュクス・アバターがあちら側に還るだろう。そうなればすぐだ」
シャドウは通常力を使い果たせば黒い靄になって消滅する。それはアルカナシャドウも一緒だった。
だが、何の気配も感じなくなったニュクス・アバターは、今もこの頂上で倒れたまま沈黙している。
そう。本来なら黒い靄になって消滅していなければならないはずなのに。

他の者たちも綾時の言葉でこれからが本番だと理解し、すぐに武器を構えて周囲に警戒する。
すると、これまで一切動いていなかったニュクス・アバターが突然宙に浮き始め、上から糸で吊られているかのように空に浮かぶ月に背中を向けた。
何をしようというのか。黙って見ているしかない七歌たちが警戒を強めると、ニュクス・アバターの背中から赤い光が放たれ、影時間の空に煌々と輝く月に向けて真っ直ぐ伸びてゆく。
雲に届く塔の頂上だ。宇宙までなんて大した距離ではない。
頭の片隅でそんな事を考えている間に、真っ直ぐ伸びていった赤い光が月へと辿り着けば、月の表面がひび割れてソレが姿を現わした。
「おい、本気で言ってんのかそれ……」
「確かに話では聞いてたけど、こんなのどうやって相手すればいいんだよ……」
まだ相手は宇宙にいる。そんな事は分かっているのに、荒垣と天田は想像を遙かに超えた存在を目にしたことで自然と身体が震えそうになる。
湊と綾時は月その物がニュクスの身体だと言っていた。その言葉の意味は理解出来ても、どういう事なのかは想像出来ていなかった。
巨大な眼だ。視界いっぱいに広がるほど巨大な赤い瞳が、遠い宇宙から自分たちを見つめている。
雲に届く塔にいる事で、宇宙が近いと思っていた。
ニュクスを迎え入れる祭壇であるこの頂上を含めた最上層が新たに出来る前、その時点では頂上だった場所に辿り着いた時には、まるで星に手が届きそうなどと思ったりもした。
しかし、それはあくまでそんな気がしていただけだ。宇宙どころかオゾン層までだって数十キロの距離がある。
今自分たちを見つめている赤い瞳までは、数十キロどころか百キロ以上離れているに違いない。
それなのに、単眼の赤い瞳は自分たちの視界いっぱいに広がって見えている。

桁が違うなどという話ではない。自分と相手のスケールを比較することなど出来ない。互いの存在するステージがまるで違うのだ。
この場所を目指して徐々に近付いてくる巨大な赤い瞳を見て、順平やゆかりが思わず武器を取り落としかける。
相手は本当にただ近付いて来ているだけなのに、自分たちのいるこの惑星全体が揺れているような錯覚を覚える。
封印が解かれた事によって砕けた月の表面が、アメリカの原子力空母ですら比較にならないほど巨大な塊のまま地球に落ちてこようとしているにもかかわらず、彼らは唖然としながらニュクスの姿を見つめることしか出来なかった。
＊＊＊
幾月が意識を取り戻すと、周りの景色が変わっている事に気付いた。
真冬にもかかわらず生温い影時間特有の風が潮の香りと波の音を運んでくる。
自分はタルタロスで戦っていたはずなのに、どうしてそんな物が聞こえるのか。
そう思って痛みを我慢して身体を起こせば、傍にいた玖美奈が声をかけてきた。
「お父さん、気がついた？」
「玖美奈……それに、他の皆も……」
いつの間に移動したのか海の傍にいた幾月は、自分の周りに玖美奈やストレガたちが座っている事に気付く。
気を失う直前に美鶴とゆかりに負けた事は覚えていたので、もしや、ここは死後の世界なのだろうかと考える。
だが、道路に直接腰を下ろして座っているストレガたちが、静かに一つの方向を見ていた事で、つられて幾月もそちらに視線を移してここが死後の世界ではないと確信する。
都心に存在するはずのない、不気味な緑色に光る異形の塔。
そして、その上空に現われた巨大な赤い瞳。
気を失って目覚めたばかりだが、幾月はあれが自分の求めたニュク

スだとすぐに分かった。
「神だ……ニュクスが現われた！　そうだ。神が人如きに敗れるはずがない！　我々の夢はまだ終わっていない！」
自分たちは特別課外活動部のメンバーに敗北した。全員がボロボロの格好でここにいる以上、それは事実なのだろう。
けれど、個人の勝敗などどうでもいい。ニュクスの降臨と世界の改変。それさえ為されれば自分たちの勝利なのだから。
目覚めてすぐに興奮した様子を見せるそんな幾月に視線を向けたタカヤは小さく口元を歪めると、再びニュクスに視線を向けながらこの場にいるとある人物に声をかける。
「それで、貴方はアレに勝てるのですか？」
「……勝てないと思っているのか？」
「どうでしょうか……。先の無い私たちは自分の死に方を選んだ。貴方のお仲間に負けた事は悔しいですが、〝滅び〟が起これば確かに私たちの勝ちです。この終末の光景を目に焼き付けながら逝けるのであれば後悔はありません」
この場に存在するはずのない声が聞こえ、幾月は驚きと共に視線を声がした方に向ける。
そこには上着のポケットに手を入れたまま、静かにニュクスを見つめる湊が立っていた。
どうして敵である湊がここにいるのか。玖美奈と理は黙って湊を見つめてタカヤと彼の会話に耳を傾けている。
あれほどこの男を憎んでいたはずなのにその瞳には敵意を感じず、この影時間の間に何があったというのか。
状況が分からず幾月が一人で驚いていると、何やら少し考え込み間を置いてからタカヤが再び言葉を続ける。
「……ただ、被験体達にとって貴方は特別な存在でした。自分たちに出来ない事を為し、逃れようのない運命すらも変えてしまう。そんな憧れであり、希望でもあったのです」
「俺はお前らの望みを潰した側だぞ」
「フフッ、確かにそうですね。ですが、ストレガの一員ではなく、元被

験体の一人として言わせて貰えば。貴方には勝って欲しい。我々が憧れたミナトという少年は、相手が神だろうと負けないのだと証明して欲しい」
タカヤたちにとって湊の存在は常に特別だった。
今回の戦いでも倒すべき敵であると同時に、自分たちに負けて欲しくないという想いが心の隅にあった。
実際に刃を交えることはなかったが、自分たちよりも強い玖美奈と理が同時に挑んで負けたと聞いても、やはり勝てなかったという感想が最初に浮かんだほどだ。
恐らくこの想いは同じ被験体だった者たちにしか分からないだろう。
エルゴ研において単なる実験動物でしかなかった被験体達に人間としての立場を取り返し、絶対的な強者だった研究員らを力で従え、未来の存在しない監獄から被験体たちを逃がしてくれたのだ。
どれだけ人として道を外れようと、その精神が歪もうと、幼い頃の彼らにとってミナトという少年は自ら運命を切り開く英雄だった。
故に、タカヤたちは相手を敵として倒そうと思いながらも、湊個人には誰にも負けないで欲しいという矛盾した想いを持っていた。
これまで同盟を組んで動いていた幾月は、そんな話は初めて聞いたと驚愕のあまり何も言えないでいる。
すると、状況が分からず混乱しているのだろうと考えた玖美奈が、どうしてタルタロスにいた者たちがここにいるのかを説明した。
「お父さん。有里君がお父さん達をここに運んでくれたのよ。私と理がいたこの場所までペルソナの力で送ってくれたの」
「何故だ。どうして、敵であるこの男がそんな事をする!?」
湊に敗北した玖美奈と理は浜辺から僅かに移動し、道路に座ってタルタロスを見つめて戦いの結末を見届けようと思っていた。
タルタロスの頂上で激しい爆発の光が見えたりもしたが、それが治ると街の上空を飛んでいたセイヴァーがタルタロス内部に突入し、しばらくしてからストレガと幾月をつれてこの場に転移してきた。
どうして湊がそんな事をしたかは分からないが、本人が教えてくれ

るのではないかと玖美奈が見つめれば、ニュクスから視線を外して幾月を見ながら湊が答えた。
「邪魔だから送り届けただけだ。ニュクス・アバターが倒された時点でシャドウたちの動きも変わるからな。一般人を守る必要はもうない。だから、タルタロスで寝ていたお前達をこいつらのところにつれてきた」
「私たちがどうなろうとお前には関係ないはず。一体何が目的なんだっ」
「……お前、娘のために妻を取り戻そうと戦っていたくせに、その娘を置いて死ぬつもりだったのか？」
湊からぶつけられた言葉に幾月はハッとして何も言えなくなる。
幾月は事故で殺された妻の茜を取り戻し、再び彼女と生きられる世界を創ろうとした。
だというのに、戦いに負けたくらいで自暴自棄になって、大切な娘を残して死んでも良いと考えたなら呆れて何も言えないぞと湊が冷たい視線を向ける。
敵であるはずの相手から最も大切な事を指摘された事がショックだったのか、幾月が呆然としながら項垂れると、玖美奈の隣で座っていた理が湊に声をかけた。
「それであっちに行かなくていいのか？　七歌たちじゃ、アレには勝てないんだろ？」
「いや、そろそろ行く。まぁ、その前に寄るところがあるけどな。お前たちはここでゆっくりと影時間の結末を見ているといい」
幾月とストレガを届けた事で、後で玖美奈と理から文句を言われる事もなくなった。
仮に死んでいたところで湊がやったとは思わないため、彼女たちが彼に文句を言うことはなかっただろうが、無駄に命を散らす必要はないと思っていたのは事実。
ある種の寄り道を終えた湊がこれでやる事は終わったとタルタロスへ向かう準備を始めれば、セイヴァーを呼び出したところで何かを思いだしたようにストレガたちの方を向く。

「ああ、そうだった。お前らにこれをやる」
いいながら湊はマフラーを変化させた黒い上着から、掌に収まる程度の青く光る六角水晶をいくつか取り出して見せてきた。
呼ばれた事でストレガの五人が集まってくれれば、湊の掌に乗っていた六角水晶が青白い光の粒になってそれぞれの胸の中へと吸収されてゆく。
突然の事態に当人たちは驚き動揺するが、六角水晶が変化した青白い光の粒が身体に入ってくるほど身体が心地よい温かさに包まれるのを感じる。
そう言えば、かつてマリアは湊から結合した黄昏の羽根を貰ったと言っていた。もしかすると、これもそういった何かなのかもしれない。
そう思いながら、それぞれの胸に全ての光の粒が吸収されるのを待つと、作業を終えた湊が何を渡したのかを説明した。
「今、渡したのは月の欠片と言って黄昏の羽根の結晶みたいなものだ。これでお前らは制御剤を飲む必要がなくなる。生命力も増幅してくれるから、もう少しだけ生きられるはずだ。……悪いな。結局、お前達の寿命を取り戻す事は出来なかった」
湊が彼らに渡したのは綾時のコアに利用した物と同一の品であり、現在、彼の右腕の骨としても利用されている黄昏の羽根の上位種だ。
ストレガたちにすれば、そんな物をどこで手に入れたんだという疑問が湧くが、説明してから青年は申し訳なさそうに謝罪した。
本当はもっと早く渡すつもりだった。この世に戻ってきてすぐに渡していたとしても、恐らくほとんど違いは出なかっただろうが、それでも今渡すよりは少しでも長く生きられるはずだった。
制御剤の長期間の服用により内臓がボロボロになっているにもかかわらず、それらをある程度回復させて数年程度寿命を延ばすだけでも奇跡には違いない。
ストレガの中で本当に自分の死を受け入れているのは召喚器を必要としないタカヤだけだ。あとの者たちは死を恐れ、だからこそ〝滅び〟という救いを得るために戦っていた。

そも、制御剤はペルソナを制御するための薬だが、暴走したペルソナに殺されないための物という部分が大きい。命を削ると分かっていながら、自分の力に殺されないための薬を飲む理由など〝死にたくないから〟以外にない。
そんな思いを持ちながら、この戦いが終われば一月と保たずに寿命を迎えるはずだった者たちにすれば、たった数年だろうとまだ生きられるというのは確かな希望だった。
静かに涙を流している仲間たちを見ながら、どこか吹っ切れた表情を浮かべたタカヤはセイヴァーと共に飛び立とうとしている湊に返事を返す。
「いえ、十分です。世界が滅びるなら我々の望み通りですし。続くというのなら与えられた寿命が尽きるまでもう少しだけ世界を見て回るとしましょう。貴方がいなくなった後の世界をね」
言われて湊も苦笑を浮かべる。どうやら分かる者には青年の狙いが分かってしまうものらしい。
湊もタカヤも目的のためなら自分の命を平気でベット出来る人種だ。
タカヤは湊がどうやってニュクスと戦おうとしているのかは分かっていないが、自分の命と引き替えに何かをしようとしているのは察することが出来たのだろう。
そうして、湊がストレガたちと最期の別れを告げて去ろうした時、泣いていたメノウが立ち上がって彼に声をかけた。
「ミナト君！　その……ありがとう。ボクは、これでも幸せだったよ」
「……そうか。ありがとう、メノウ。じゃあな」
被験体だった少女から贈られた感謝の言葉に、青年も感謝の言葉で返して飛び去って行った。
少女と彼の道は時折交わることはあっても一つに重なる事はなかった。
けれど、それでも彼の心に自分の姿はしっかりと残り、最後までこうして考え続けてくれていたことが嬉しかった。
チドリを羨み嫉んで戦いを挑んだが、彼女とは違う形で彼の心に残

れた事を支えに少女は残りの人生を生きていこうと決意する。
降臨した神を相手にどう抗うのか。少女とその仲間たちは遠く離れてゆく彼の姿を見つめながら、世界の行く末を決める最後の戦いを見守ることにした。

第四百五十一話　神の力

影時間――巌戸台

街を覆い尽くすほど巨大な赤い瞳が自分たちを見下ろしている。

人工島に聳える奈落の塔を目指して、遙かなる宙より神が降りてくるその光景は、首都圏周辺だけでなく他の地方からでも見えていた。

無論、タルタロス自体は見えている訳ではない。彼らに見えているのは赤い瞳が降りてくる光景だけだ。

青年が世界に向けて発した言葉を聞いても、彼らは青年たちが戦う姿を見ていなかった事で、何らかの異常事態に巻き込まれていることは分かっても他人事だと考えていた。

しかし、宙より神が降りてくる光景を見たことで、実際に世界が滅びを迎えようとしている事を理解させられた。

戦っている者がいると言っても、あんなものに勝てるはずがない。そんな絶望が伝播していく。

だが、実際に戦っている姿を目にした者や、戦っている彼らの事を知っている者たちはこの状況でも絶望しきってはいなかった。

七歌たちの暮らしている巌戸台分寮。その屋上からニュクスの姿を見ていた桜たちは、人々を守護する神が存在するならどうか彼らを守って欲しいと祈っていた。

「どうかお願いします。あの子たちを、この世界を守ろうと必死になって戦ってくれている子どもたちを守ってください……」

「お願い。皆、無事に帰ってきて……」

タルタロスから数キロ離れたこの距離からでも、あれが人間が戦って敵うような相手ではない事ははっきりと感じ取れる。

桜や英恵と違って命のやり取りを経験している鵜飼や渡瀬が青い顔をしているのだ。戦って来た者ほどそれを強く感じ取れるのだろう。

どうやってあんなものに勝つのかなど想像も出来ない。

故に、彼女たちは親として子どもたちが無事に帰ってきてくれることのみを願う。

彼らはまだ諦めていない。死後の世界で実際にニュクスと相対した湊が勝てると言っていたのだ。
危険な場所で子どもたちが諦めずに戦っている以上、安全な場所にいる自分たちが先に諦める事だけは出来ない。
母親たちがそんな想いで祈り続けていると、青ざめた表情で地面に膝を突きながらもニュクスを見つめる五代が、声を震わせながらポツリと呟いた。
「……あんな……あんな化け物と彼らは戦うのか。この距離で見ているだけでも気が狂いそうになるっていうのに……」
「……あれって〝死〟そのものよね？　小狼君も大概だと思ってたけど、あれを知っていたなら殺気だけで敵に死のイメージを叩き付けられても不思議じゃないわね」
情報屋として働く傍ら、自身でも依頼を受けて人の命を奪っていた五代は、ニュクスを見た時点で身体の震えが止まらなくなっていた。
あれは間違いなく〝死〟そのものだ。死という生物が最も忌避する概念が物質的な肉体を得て顕現したのがニュクスの正体である。
裏稼業という仕事柄、人の死に立ち会ってきたからこそ、五代やロゼッタはニュクスを見ているだけで自分の死をイメージさせられてしまう。
五代たちと出会ったばかりの抜き身の刀のような危うさを持っていた湊は、瞳を蒼くして殺気を飛ばすだけで相手に死のイメージさせた事があった。
それを思い出したロゼッタは、あんな化け物を知っていれば他者に死をイメージさせる事など容易だったに違いないと思わず納得しまう。
「兄さんたちは無事なんでしょうか？」
「さぁね。けど、湊たちがあれをどうにか出来なきゃ私らも終わりさ。信じるしかないよ」
ニュクスが現われたのであれば、恐らくその前段階であるデスが変じたニュクス・アバターとの戦いは終わっているはず。
何人が無事にその戦いに辿り着いたのかは分からない。戦いに参

加出来てもニュクス・アバターを倒すまでに力尽きた者がいてもおかしくない。
それでも、それでも自分たちはただ信じて待つことしか出来ない。
不安に思っている美紀を安心させてやりたかったが、栗原にも余裕はなくそう答える事しか出来なかった。
――タルタロス
自分たちを見つめる巨大な瞳。その全体像を把握するまでもなく、存在するステージが違うと一瞬で理解出来るほど圧倒的な存在感を前に七歌たちは呆然としていた。
勝ち負けの問題ではない。アリがゾウに挑むようなもので、そもそもどうやって挑めばいいのかも分からない。
だが、どう挑めばいいのか分からなくとも、自分たちはこれに勝たなくてはならないのだ。
誰よりも早く正気を取り戻した七歌は、思考がまとまらないままにでも動かねばと仲間に声をかける。
「全員正気にもどれ!! 私たちはあれに勝ちに来たんだろ!!」
七歌が仲間に声をかけている間にも状況は変化している。
糸で吊るされたように宙に浮いていたニュクス・アバターが光の粒になって消えてゆき、それらが全てニュクスの赤い瞳へと吸い込まれていったのだ。
綾時の言葉が正しければ、これよりニュクス降臨は最終フェイズに入り、母なる存在を求めてシャドウたちもこの場所へ集まってくる。
いつまでも呆けていればニュクスと戦う前に集まってきたシャドウに襲われて死んでしまう。
だから早く正気に戻るように声をあげれば、頼もしいリーダーの発破で仲間たちの目にも再び力が宿る。
「九頭龍の言う通りだ。ようやくここまで来たんだ。戦う前から心で負けていては勝てる勝負も勝てなくなる」
「そっすね。神だかなんだか知らねーけど、オレたち人間の底力をナメてもらっちゃ困るっつの!」
真田と順平が七歌の言葉に触発されて武器を構えれば、他の者たち

も頼もしい仲間の姿に勇気づけられて武器や召喚器を構えた。
徐々にここへと近付いてくるのなら、一定の高度まで降りてきたタイミングで攻撃を仕掛けるのがベストだろう。
無論、それは自分たちが自由に動ける場合の話で、実際は集まってきたシャドウへの対処をしながらという事になる。
全員がこれまでの戦いで既にボロボロだ。誰がシャドウを抑えて、誰がニュクスに攻撃を仕掛けるかなんて決めるほどの余裕はない。
その状況で出来る者がやる。七歌たちに残された作戦はそれだけだ。
だが、七歌たちが降りてくるニュクスとやってくるシャドウを警戒していると、降下中のニュクスに不自然なエネルギーの収束反応を感じて風花が皆に呼びかけた。
「膨大なエネルギーの収束を確認、何かしてきます！」
風花が言い終わるかどうかのタイミングで、ニュクスの瞳の前に黒い光が集まり、波動のように拡散しながら放たれる。
天から目に見えない力が轟音と共に降り注ぐと、七歌たちは身体が急に重くなり真っ直ぐ立っていられなくなる。
まるで、神の御前にて頭を垂れぬ不遜な者どもに頭を垂れよと命じるかのように、見えない神の手によって上から押さえつけられ徐々に身体が地面へと近付く。
手を膝について耐えようにも絶え間なく力は降り注ぎ、不可視の力によって七歌たちは地に膝をついて、頭を垂れたまま額も床につけられそうになる。
「なん、だ……これは……っ」
「これは……強、力な……重力波ですっ」
戦闘の影響によって荒れていた頂上の床が、ビキビキと音を立ててひび割れ崩れ始めた。
このままでは自分たちのいるこの場所も崩落するのではと不安を感じながら、美鶴が尋ねれば風花がニュクスが放つこの攻撃の正体を皆に伝える。
思えば湊の蛇神が街の上空に顕現した時にも直下の街は重力が増

していた。
恐らく、この重力波という攻撃は神にとっては当たり前のように備えている機能なのだろう。
攻撃の正体を聞いた真田は、重力波ならば取れる手はあると歯を食いしばりながら地面に拳をつき、ググググと非常にゆっくりながらもこの程度では負けないとばかりに上半身を起こしてゆく。
「重力ならっ……力で上回れば、いいだけの事だっ……！」
「んな……脳筋なっ……解決策があるかよ……！」
重力が増して身体が重く感じるのなら、いつも以上に力を入れて身体を支えればいい。
そんな馬鹿みたいに単純な方法で真田は現状を打破しようとする。
けれど、他に打てる手もなく、真田と同じように荒垣も全身に力を入れて身体を起こそうとした。
顔を上げて、腕立て伏せのように身体を起こし、何とか立ち上がろうとしたその時、自分たちのいるこの頂上の床の縁を掴む黒い腕が見えた。
「何か上がってくるぞっ!!」
黒い腕を見た瞬間にそれが異形の物、つまりはシャドウだと気付き荒垣は仲間たちに報せた。
その声に反応して他の者たちも周囲を警戒して、何とか上半身を起こしながら武器と召喚器を手元に引き寄せる。
全員の準備が何とか間に合った次の瞬間、タルタロスの外壁を上ってここまでやって来たであろうシャドウが姿を現わす。
「何なの……このシャドウ……」
その姿を見たゆかりは思わず呟き、訝しげな視線を敵に向ける。
現われたのは間違いなくシャドウだ。だが、その姿が彼女たちの知っているものとは違い過ぎた。
全身が黒い靄で覆われた四足獣のような、輪郭のはっきりしないシャドウのなり損ないのような姿。
湊のミックスレイドから出てきた過去の名切りの亡霊が似たような姿だったが、現われた新種のシャドウはどこか存在も希薄で、本当

にこれがシャドウなのかと不安にすら感じる。
しかし、そんな他の者たちの迷いを振り払うように、敵にアナライズを掛けたチドリが断言した。
「相手は間違いなくシャドウよ。ただ、ニュクスの影響を受けて不完全なまま実体を持って出てきたみたい」
「なら、力も中途半端ってことやなっ」
チドリの言葉を聞いてラビリスはすぐにペルソナを呼び出し、ストリングアーツで造った槍でシャドウを貫く。
実体化が不完全だった事もあり、攻撃はすんなりと通ってシャドウはその身を散らす。
強力な重力下でもこの程度の相手なら問題ないと強がって仲間に笑いかけ、そしてすぐにその笑いは引き攣ったものに変わる。
そう。すぐに同じような姿をしたシャドウが現われたからだ。
このままではマズい。美鶴はすぐに号令をかけた。
「全員戦闘準備っ、まずは生き延びるぞ！」
『了解っ！』
動けない者たちはその場でペルソナを呼び出して応戦する。
ラビリスとアイギスはＥ．Ｘ．Ｏ．を起動して、他の者たちの死角をカバーするように動きながら戦う。
だが、黒いシャドウは群れとなって次々と押し寄せてくる。死を求めて、母なるシャドウを求めて街中から集まってくる。
ペルソナの攻撃を潜り抜けたシャドウが接近し、順平は片膝をつきながらも腕の力で剣を振るってシャドウを屠った。
続けてやってきたシャドウも、無理矢理に身体を捻って剣を振るって倒してみせた。
けれど、さらに続けてやってくると攻撃が間に合わず、のしかかられて倒れ伏す。
「順平っ!?」
七歌がすぐに助けに向かおうとするも、矢を射る暇がなく弓で直接敵を殴っていたゆかりが、同じようにシャドウに襲われているのを見て、どちらを先に助けるべきか悩み反応が遅れてしまう。

続けて戦う力を持たない風花がペルソナごと複数のシャドウに覆われ、最も非力な天田が抵抗空しくシャドウの群れに呑まれてゆく。
黒い津波のように押し寄せるシャドウらに薙刀を振るいながら、七歌は思う。
なんだこれは、と。
これではあの時と同じだ。
幾月の罠にかかり、街中のシャドウとタルタロスから溢れてきたシャドウに襲われた時と同じ状況。
あの時よりも自分たちは強くなった。仲間だって増えた。
それなのに、あと少しなのに力が足りない。どれだけ強い想いを持っていようと、力が無ければそれも届かない。
仲間たちが次々とシャドウの群れに呑まれ、相手をする数が増えた他の者たちも手が回らなくなり同じように呑まれた。
一人、また一人と倒れてゆき、誰よりも頑張ってくれていたラビリスとアイギスも物量で押し切られて見えなくなった。
全員が万全の状態であればもっと違った結果もあったかもしれない。
ニュクスの重力波さえなければ、シャドウの群れとも戦い抜けたかもしれない。
それでも結果はこの通り。必死になって辿り着いても、自分たちはただの一太刀すらもニュクスに浴びせることが出来なかった。
全方位から押し寄せるシャドウの群れに呑み込まれながら、七歌は宙に浮かぶ赤い瞳を最後まで見つめ続けて意識を手放した。

――ベルベットルーム
気付けば七歌はベルベットルームの入口に立っていた。
どうして自分はここにいるんだと辺りを見渡せば、テーブルをはさんだ向かい側には部屋の主であるイゴールと従者である三姉妹弟がいる。

夢を通じてこの部屋を訪れる事もあったので、意識を手放した事でやって来たのかも知れないと考えたが、もしかしたら現実世界で死んだからやって来たのかも知れないという不安も襲ってくる。
だが、普段は自分が座っている椅子に湊が腰掛けていた事で、七歌は歩いてそちらに近付いて彼に声をかけた。
「……八雲君、戦いはどうなったの？」
「まだ現実世界では続いてる。ニュクスが現われて、街中の人間からシャドウが抜け出て塔を登っていくのが見えた。ニュクス教のやつらも存外捨てたものじゃないな。ニュクスの影響を受けているとは言え、あんな不完全な状態でも死を求めてシャドウが実体化するとは思っていなかった」
青年も途中まで外で状況を見ていたのだろう。
七歌たちがシャドウの群れに襲われ始めた頃までは状況を把握しているようだった。
不完全な状態で実体化したシャドウに襲われた七歌にすれば、そんなものを生み出した者たちを褒めるなと言いたい。
けれど、タルタロスの方は任せろと彼に言っておきながら、こんな事になってしまった事を七歌は申し訳なく思い。湊に頭を下げて謝罪していた。
「ゴメン、八雲君。約束も、皆も、守れなかった……」
「……約束？」
「こっちは任せてって言ったのに。ニュクスと戦う前に、負けちゃったっ」
湊は敵の最大戦力二人を単独で押さえながら、一般人の混乱を抑えて守ってくれていた。
事前に、ニュクスの影響を受けて予定よりも早く象徴化が解ける可能性があることも聞いていたが、七歌たちは自分たちの戦いに精一杯で、一般人の混乱など考えている余裕すらなかったのだ。
彼は強敵と戦いながら、そんな自分たちの手が届かない部分をフォローしてくれていたというのに、七歌は自分でした約束すらも守れなかった。

どの面下げて会いに来たんだと罵られてもしょうがない。
彼女たちは、最も負けてはいけない戦いに挑むことすら出来ずに終わったのだ。
どれだけ詫びても足りないほどだが、今の七歌はこうやって頭を下げることしか出来ないため謝罪を口にして頭を下げていれば、説明を受けてなるほどと頷いた湊が口を開いた。
「……お前たちの仕事はニュクス・アバターと戦うまでだろ？」
「……え？」
「だから、お前たちの仕事はニュクス・アバターを倒して、ニュクス本体を引っ張り出すところまでだったはずだ。最初からニュクスの相手が出来るなんて思ってないぞ」
どういう事だと驚いて七歌が顔を上げると、湊はいたって真面目な様子で七歌の事を見ていた。
七歌たちはニュクスとの決戦も含めて自分たちの仕事だと考え、湊もそこに合流して神に挑むのだと思っていた。
だからこそ、挑む前にシャドウの群れに敗北してしまった事を申し訳なく思い。こうやって謝罪をしていたというのに、青年は彼女たち全員を戦力として数えていなかったと告げた。
実際に戦力になる前に終わったため強くは言い返せないが、全員がニュクスに本気で勝つつもりで必死になって戦ったんだぞと言ってやりたい。
それを全力で飲み込んで、静かに息を吐くと七歌はどういう意味だと改めて問い直した。
「どういう事？　八雲君は最初から一人でニュクスと戦うつもりだったの？」
「……まぁ、そうだな。デスの力を持っている綾時なら可能性もあったが、他の者たちでは無理だと最初から分かってた。なにせペルソナじゃニュクスを傷つける事は出来ないんだから」
湊が告げた残酷な言葉に七歌は心臓を掴まれたかのような強い衝撃を受ける。
もし、彼の言葉が事実だとすれば、ペルソナを封じられた七歌たち

に残った攻撃手段など武器に頼った近接格闘しかない。
相手は一つの星。七歌が暮らす東京どころか日本よりも遙かに巨大な存在。
そんな物を相手にしようというのに、人が手に持てるサイズの武器を振るったところでまともな勝負になるはずがない。
「お前だって薄々気付いてはいたんだろ？　ペルソナとシャドウは同じ物。シャドウがニュクスの力の欠片なら、それと同じペルソナでは大元であるニュクスを倒す事は出来ないと」
「そ、それは……でも、それでも、人の心がニュクスの予想を上回ればっ」
「力の規模が違う。突然変異種の凶暴なアリが生まれたとして、だからってゾウに勝てると思うか？　噛み付いて皮膚の表面を傷つけられてもそこが限界だ。致命の一撃なんて与えられるはずがない」
湊はニュクス本体を実際に目にした七歌の心情を見抜き、相手が考えたアリとゾウを例えとして利用した。
彼だって別に七歌たちが憎くてこんな事を言っているわけではない。
決戦に挑む前、その時点で湊も七歌も綾時だってこうなることは最初から分かっていたのだ。
本気でニュクスに勝とうと思っていた仲間たちを騙していたようで申し訳ないが、その三人はペルソナでニュクスに挑もうとどうやっても勝てないと思っていた。
湊と綾時はニュクスの力を正確に理解し、味方の戦闘がペルソナ頼みだと分かっていたため、どうやってもニュクス・アバターとの戦いまでしか戦力にならないと判断。
七歌はそこまで正確に分かっていた訳ではないが、アルカナシャドウが人々から抜け出たシャドウを吸収して力を蓄えていた事を思い出し。シャドウを生み出した存在なら、直接人からシャドウを抜き出す事が出来てしまうのではと考えていた。
そんな相手にペルソナで挑んだところで、近付いていったペルソナを喰われて終わりだ。

戦闘中にペルソナを喰われて影人間化した仲間を庇いながら戦うなど不可能。
仮に、シャドウを制御下に置いたペルソナを相手が吸収出来なかったとして、ペルソナを使って戦う事が可能だったとしても、今度はその力の規模の差が問題になる。
湊が持つ蛇神は神クラスの力を持つペルソナではあるが、その力はニュクスより遙かに規模で劣る。
しかし、そんな蛇神にすら七歌たちでは勝てない。子どもだってゾウはゾウだ。成体のゾウよりサイズや力で劣っても、アリ如きに負けることなどない。
七月の満月の日に現われた蛇神を観察し、変則的な顕現を果たしていた阿眞根と相対したからこそ、七歌は神と呼ばれる存在たちと自分たちの力の差を正しく理解していた。
だが、頭でそうやって理解出来ていても、感情はすんなりと納得してはくれない。
このまま負けるなんて嫌だ。滅びを受け入れる事なんて出来ない。そうして、七歌はこの惑星に唯一残された可能性に縋った。
「……なら、八雲君なら戦って勝てるの？」
「さぁな。だが、そのために必要な最後の一ピースを受け取るためにここへ来たんだ」
問われた青年は絶対に勝てるだなどとは断言しなかった。
そんなもの、本人にだって分からないのだ。聞かれたところで無責任に答えられる訳がない。
ただ、彼だって最初から負けるつもりで挑む気などない。やるからには勝つつもりでいる。
ここへ来たのだって勝利の鍵となる最後の一ピースを手に入れるためだ。
七歌に向けていた視線を彼が正面に戻し、七歌もつられてそちらを見ると、先ほどまでそこにはなかった虹色の光の珠がテーブルの上に現われていた。

第四百五十二話　絆の力

――ベルベットルーム

湊の言葉で七歌が視線を机へ向けると、そこには虹色に輝く光の珠が浮いていた。

輪郭がぼやけているため、それは実体を持った何かではない事は分かる。

不思議な光だ。小さく淡い七色の光は、どこか頼りなくて手で触れれば簡単に散ってしまいそうですらある。

だが、そうはならないのだろうなと感覚で分かる。七歌の視線の先で浮かんでいる光の珠は、見た目ほど弱いものではない。

七歌がそんな風に考えていれば、楽しげに口元を歪めたイゴールが声をかけてきた。

「フフフ、こうも自然に人々の心が集まるとは不思議ですな。さて、ワイルドの力に目覚めたお客人たちは、ご存じの通り築いたコミュニティによってその力が変化します。自分の内側にこれまで知らなかった領域がある事に気付くこともあれば、他者との触れ合いによって影響を受ける事もある」

ここには二人のワイルド能力者がいる。だが、湊と七歌では力の手に入れ方が異なる。

七歌は他者と触れ合い。絆を深めて、お互いに影響を与えあってコミュニティを築いてきた。

その力は心の成長によって可能性を広げ続け、新たに呼ぶ事が出来るペルソナの種類を増やしていった。

コミュニティの成長によって呼ぶ事が出来るペルソナの種類と数は増えても、それはキャパシティの増加であって七歌自身の力が増強された訳ではない。

故に、彼女は自分の持っているペルソナを掛け合わせて新たな力を手にしていた。

一方の青年は自分が人の環から外れた存在であることを理解していた。

人に限りなく近い別の種族。故に、普通の人ではそれが人に似た別の存在であることすら理解出来ない。
だから、真の意味で分かり合うことも出来ないのだと可能性を切り捨てながら、それでも相手のことは理解しようとしていた。
その結果得られたのは、自分の内に持っていた力の解放である。
変化ではなく気付き。最初から自分の中にその欠片があったのに、湊は持っている物に気付いてすらいなかった。
だが、他者を理解しようとする中で、相手に近しい似て非なる性質を自分も持っている事に気付くなどして湊は自分の心の欠片を覚醒させていった。
最初から持っていたから、湊は自分の持つ力を自覚しただけですぐに使えるようになる。
イゴールたちが行なうように自分の力を掛け合わせることもできるが、数多の力を宿している湊は本来そういったものを必要としない。
七歌のように困難に向けて準備などせずとも、彼の中にはあらゆる困難に対応出来るだけの数多の仮面が初めからあるのだから。
そんな別の性質を持った同じ力を持つ二人をずっと見ていたイゴールは、こんな彼らが同じ時期にやって来たからこそ、人の心が勝手に集まってきているのだろうと考える。
「お客人が感じられているように、この光はコミュニティを築いてきた人々の心。一つ一つはごく小さな力。しかし、こうして集まり確かに貴方へと向けられているのです。届いておりますかな。彼らの声は？」
ここに集まっているのは大勢の心の欠片。一人一人が七歌や湊に声を届けようとしている。
七歌たちのいるこの場所は上昇するエレベーターの音と振動しか聞こえないが、現実世界に戻れば奈落の塔を目指して街中からシャドウが集まり、宙よりやってきた神が今にも地上へと降りてこようとしている。
あれだけ世界の滅びについて聞いていたのだ。そんな状態になれ

ば諦めてもしょうがない。
なのに、ここへ集まってきた人々の心はまだ戦っていた。今にも恐怖に押し潰され、心が折れそうになっているのに、それでも彼らは諦めずに信じてくれている。
敵がどんな存在か分かっている自分たちですら折れそうなのに、どうしてただ見ている事しか出来ない一般人が心を強く持ち続けられるのか。
七歌はこんなにも諦めない者たちがいることが不思議でしょうがなかった。
「……どうして皆、こんなに諦めずにいられるんだろう？」
「さぁな。簡単に諦めるよりは、多少生き汚い方が生物としては正しいのかもしれない」
「生物としてなら、あんな恐ろしいものを見たらすぐに諦めると思うけどね」
湊がこれまで出会ってきた者たちも、七歌がこの街に来てから出会った者たちも、まだこの瞬間も諦めずに心を強く持とうとしていた。
それは単なる意地なのかもしれないし。湊たちが勝つことを心から信じているからかもしれない。
湊は生物の生存本能ではと冗談めかして言ったが、彼もそんな物ではないと分かっているようで、少し呆れたように口元を歪めていた。
「目を閉じ、耳をお澄ましなさい……微かですが、感じるでしょう？」
イゴールの言葉に従うように七歌は目を閉じて耳を澄ませてみる。
すると、目を閉じているのに知り合った者たちの姿が頭に浮かぶ。
彼らだって恐いだろうに、七歌がどこかで頑張っているはずだからと、彼女が諦めるまで自分たちが諦める訳にはいかないと必死に恐怖と戦っている。
そうだ。自分はこんな彼らだから守りたいと思ったのだと七歌の心に再び熱が戻ってくる。
そして、七歌が瞳を開くと湊はじっと光を見つめていた。
湊は十年前からベルベットルームを訪れコミュニティを築いてい

たのだ。
たった一年しか絆を紡いで来なかった七歌と違い。量も質もかなりのものになっているに違いない。
聞けばベルベットルームの住人たちも湊とコミュニティを築いているという。
誰かのために戦って来た湊だからこそ、届く声も多くそれがまた彼の力になっている事だろう。
「皆、すごいね。やっぱり、抗うことを選んだのは間違いじゃなかった」
「フッフッフ、これらは全て絆を胸にお二人の力にならんとする願いの声。それぞれは微かな力でも、その集まりが大きな変化をもたらすのです」
イゴールの言葉に反応するように、光の珠が徐々に明滅を繰り返し始めた。
消滅するのかと一瞬考えるも、力はまだそこにあって何か別の物になろうとしているのだと気付く。
彼らの声が、人々の想いが、湊や七歌に向かうという指向性を持った事で束ねられ新たな形を取ろうとする。
「さあ、今こそ、〝絆の力〟の真価をお目にかける時です!!」
組んでいた手を大きく広げ、イゴールが高らかに唱える。
束ね、重なり、収束する。想いよ集え、その願いの真なる姿を見せよ。
激しい輝きを放った光の珠は、七歌たちの目を焼くように一際眩く光を発すると、最後には弾けるようにして消える。
だが、集まった光が弾けると、光を纏い輝く一枚のカードがテーブルの上へ降りてきた。
そのカードを見たマーガレットたちは瞳を大きく開いて驚愕し、イゴールもまた驚きながらもどこか感動しているように見える。
「よもや、このカードをこの目で見る日が来ようとは……これは本当に……驚くべき事です」
現われテーブルの上に浮かぶカードには、中央に描かれた人を囲む

ように天使、鷲、牛、ライオンが描かれている。
七歌も隣にいる青年がその力を使っていた事で、二十一番目のアルカナの存在は知っていた。
だが、彼が使ってきたカードと同じ絵柄であっても、視線の先に浮かんでいるカードから感じる力は全くの別物。
湊の持つ神クラスのペルソナのカードから感じる気配が〝強大さ〟であるとすれば、浮かぶカードから感じるのは〝無〟。
なにか途轍もない力を持っていることは分かるのに、七歌はそのカードのある空間だけが位相がズレているかのように何も感じる事が出来ない。
たかがカード一枚。だが、見ているだけで冷や汗が頬を伝う。
「なに、これ？　普通じゃない。八雲君が言っていたのってこれのこと？」
「……あぁ。狙い通りだ」
言いながら椅子から立ち上がった湊はカードに手を伸ばす。
カードから〝無〟の気配を感じていた七歌は、もしかしたら伸ばした腕が消えるかもしれないと不安を覚えた。
しかし、彼女のそんな予想を裏切って湊はしっかりとカードを手に取ると、それを自分の胸元へと近づけてカードを自分の中へと吸収してしまった。
あんな異質な力を自分の物に出来るなんてすごいと素直に感心すると同時に、七歌はあれが一体どういう力なのか気になる。
湊がその力を得た瞬間から嫌な予感がするのだ。何かは分からないが途轍もなく嫌な予感が。
望んでいたカードを手に入れた湊がその力を確かめるように自分の手を見つめていると、イゴールがその視線を彼に向けて語りかける。
「これは私にとっても、貴方にとっても、最後の力。全ての始まりの力であり、そして、全てを終える力でもあります。貴方が手にしたのは〝ユニバース〟の力。文字通りの〝宇宙〟……もはや何事の実現も、貴方にとっては奇跡ではない」

七歌が知っていた二十一番目のアルカナは〝世界〟だった。
解釈によって言葉が変わる事はあるが、湊もこれまで神クラスのペルソナは世界のアルカナだと言っていた。
それなのに、イゴールは先ほどのカードを〝世界〟〝ワールド〟ではなく〝宇宙〟〝ユニバース〟と呼んだ。
わざわざ異なる呼び方をしたのであれば、占いなどにおける解釈の違いではなく、恐らく全く別の力なのだろう。
宇宙から来た神が相手だからこそ、宇宙のアルカナを持つ力で対抗する。きっと湊はそう考えていたに違いない。
だが、カードの名前は分かったが、その後に続いたイゴールの言葉には不穏な響きの物が混じっていた。
先ほどから感じている嫌な予感もあって七歌はすぐに問い直してしまう。
「待って、最後の力ってどういう事？　八雲君、その力でニュクスを倒せるんだよね？」
「……ああ、これで勝てる」
そう答えた青年はどこか楽しそうな様子で笑っていた。
勝つための力が手に入って喜んでいるのかと一瞬考えるも、この笑顔はそうではないと自分の考えを即座に否定する。
分かる。分かってしまう。彼から感じる嫌な予感の正体が何なのか。
「間もなく、最上階でございます」
焦った七歌が湊に声をかける前にエリザベスの声が耳に届く。
確かにこの部屋は上昇するエレベーターだったが、そういう物だとばかり認識していたため、最上階と言われても「どこの？」という疑問が頭に浮かぶ。
しかし、最上階に到着すると告げたエリザベスの表情は暗かった。
嫌な予感が確信に変わる。このエレベーターは湊の旅路に連動していたのだとも同時に理解する。
彼が目的地へと辿り着こうとしているから、このエレベーターも徐々に減速し間もなく最上階へ辿り着こうとしている。

行かせては駄目だ。自分たちではニュクスに勝てなかったが、だからと彼の選択を受け入れる事など出来ない。
七歌が彼を止めようとするも、そちらが出入り口なのか、湊がテーブルを迂回してイゴールたちの背後へと移動していく。
「〝デス〟を宿したのが運命なら、〝ワイルド〟の力を得たのもまた運命……貴方は自身の運命を受け入れなくてはなりません」
「受け入れられないから足掻き続けたんだ。そして、その甲斐はあった」
「フフフッ、それは良かった」
湊とイゴールが言葉を交わし終えると、減速していたエレベーターが静かに停止した。
格子状になった見上げるほど巨大な扉の向こうに、徐々に地上へと降下してきているニュクスの姿とタルタロスの頂上に群がるシャドウたちが見える。
一階のエントランスに扉があったので、そう考えれば最上階がタルタロスの頂上なのもおかしくはない。
しかし、このまま湊を行かせては駄目だ。そう思って手を伸ばそうとするも、七歌は急な眠気に襲われて湊が直前まで座っていた椅子に座り込んでしまう。
これは自分が現実で目を覚ます時の兆候だ。だとすれば、シャドウの群れに呑まれた七歌の肉体が意識を取り戻そうとしているのかも知れない。
目覚めたらすぐに湊を止める。絶対に行かせては駄目だと強く念じながら、七歌は徐々に降りてくる瞼を出来る限り開けて彼の背中を見続ける。
そして、扉が完全に開いた事で湊が外へ出ようとすると、その背中に向けてイゴールが言葉を贈る。
「私の役目はこれで終わりです……貴方は、最高の客人だった」
部屋の主から贈られた最大の賛辞に、青年も口元を楽しげに歪めながら足を踏み出す。
契約は果たした。もうここへ戻ってくる事はない。

思えば随分と長い付き合いになったが、ここでの出会いも悪くはなかった。
何度も助けられたし、逆に彼らにも何かしらの良い影響を与えられたのだと信じたい。
だから、彼も別れの言葉は告げる気はなかった。縁があればまた会える。
旅路の終わりに向かいながらも再会を信じて彼はこう返す。
「ありがとう――――またな」
ベルベットルームの住人たちにそう告げて、静かな足音を残して青年は去って行く。
その背を見つめ一人の女性は静かに涙を流し、振り返る事もなく去って行った青年はそんな彼女の涙に気付くこともなかった。

第四百五十三話　予言の日

影時間――タルタロス頂上

ベルベットルームからタルタロスの頂上へと出た湊は、視界を埋め尽くす不出来なシャドウを見て口元を歪める。

視界いっぱいに身体が黒い靄で出来た輪郭のぼやけた四足歩行の獣らしきシャドウが溢れていた。

そんなにも死を求めたいのか。ニュクスの重圧を受けながらも、シャドウたちは奈落の塔を登りここを目指し続けている。

おかげで頂上はシャドウたちで埋め尽くされており、場所によってはシャドウが積み重なっていたり、他の個体に押されて塔から落ちていくものもいる。

しかし、そんなシャドウたちも触れれば死ぬと分かっているのか、頂上の縁に立つ青年のことは綺麗に避けていた。

あれに触れたところで救いなどない。新しい世界になど行くことは出来ない。

この星で生きる者たちがニュクスに触れれば、恐らくはほとんどの者たちがそのまま意識ごと消え去ってしまうだろう。

一部の者だけは魂の欠片が心の海へと辿り着いて、過去にこの世界にあった魂の記録として残る。

だが、それは滅びを求めた者たちが本当に望んでいた結末とは違うものだ。

なのに、この世界では幸せになれないと感じた彼らは、タカヤたちの言葉によって夢を見た。希望をそこに見出してしまった。

今までは半信半疑だったのかもしれないが、ニュクスの降臨する姿をみれば、今の世界が滅ぶのだと確信してしまっても無理はない。

物事の本質も、相手の性質もまるで見抜けぬまま、起きた事象の結末を都合良く捉える能力だけは一級品だ。

そんな妄想だけでこんな不安定なシャドウを具現化させたのだから、湊もその点だけはニュクス教の者たちを認めようと思った。

「……だが、あいつらは返して貰うぞ」

言いながら青年は〝世界〟のカードを具現化し、掌の上に現われたそれを握り砕く。
直後、蛍火色の温かな光が彼を中心に渦巻き頭上で収束する。
その中から白銀の天使が現われ翼を広げれば蛍火色の波動が全方位に向けて拡散し、頂上を埋め尽くしていたシャドウだけでなく、この場所を目指していた周辺のシャドウたちまで消滅した。
シャドウたちが消滅した事で、敵の群れに呑まれていた七歌たちも自由を取り戻す。
頂上の床に倒れていた彼女たちは敵が突然消えたことに驚きつつも、湊の姿を見つけると納得したように身体を起こそうとする。
だが、ニュクスの放つ重力波は健在だ。湊は平気な顔をして立っているが、これまでの戦闘で消耗していた彼女たちがこれに抵抗するのは難しい。
何とか起き上がって床に腰を下ろした状態になっているものの、立ち上がって歩くことなどは出来ないようだ。
そんな他の者たちの動きを見ていた湊は、もう一枚の〝世界〟のカードを具現化すると、地上を見下ろす赤い瞳を睨みながらカードを握り砕き神鏡を出現させる。
タルタロスの頂上よりもさらに上空、宙と空の境界に街を覆うほどに巨大なレンズのような物が現われた。
それは神クラスのペルソナである无窮が変じた神鏡。
神門であれば現世と常世を繋いでしまうが、神鏡であれば具現化させただけでは盾のようなものだ。
もっとも、街一つを覆うほどに巨大な盾など過去にも未来にも存在しないだろうが、おかげでニュクスの放つ重力波は遮断された。
ようやく身体の自由を取り戻し立ち上がった者たちに向けて、湊はマフラーを変化させたコートから回復アイテムの宝玉輪を取り出して使用する。
宝玉輪から弾けた白い光はメンバーたちに飛んでいき。これまでの戦闘で負った傷を治療し、体力も僅かにだが回復させた。
疲労困憊状態から回復出来た者たちは、シャドウの群れに呑まれて

何も出来なかった負い目があるからか、申し訳なさそうな表情で湊の許に集まってくる。
「すまない、八雲。我々ではあれに挑むことすら出来なかった……」
集まってくると最初に美鶴が謝罪してきた。
彼女たちもニュクスに挑もうとはしたのだろう。何とかペルソナを使って戦って、ニュクスを倒して平和を取り戻そうと思った。
だが、現実はそうならなかった。ニュクスに挑む前に重力波に沈み、集まってきたシャドウの群れに呑まれてどうすることも出来なかった。
シャドウたちを消し飛ばし、ニュクスの放つ重力波を完全に遮断して貰えたから立てているが、もし湊が来なければ今もシャドウの群れに呑まれたまま滅びの時を迎えていたかもしれない。
自分たちも一緒に戦うと言っておきながら、結局はこうやって彼に助けて貰ってしまった。
その悔しさと申し訳なさから美鶴が表情を歪めれば、湊は気にした様子もなく薄い笑みを浮かべた。
「気にしなくて良い。あれは最初から俺しか相手が出来ないと分かっていた。ペルソナの大元だからな。ニュクス由来のペルソナじゃ勝てない」
「なら、有里君の力ならあれとも戦えるって事？」
「……まぁな」
ゆかりの質問に頷いて返すと、他の者たちは自分たちでは彼の助けになれないと分かって表情を曇らせた。
ニュクスと戦えないのは別に他の者たちの責任ではない。単純に相性の問題だ。
ニュクスがバケツに入った水で、他の者たちのペルソナもそこから溢れた水の粒だと考えれば分かり易い。
ペルソナという水の粒をバケツの水にぶつけても、多少水面を揺らして取り込まれてしまうだけ。最初から勝負出来る土俵に上がれていないのだ。
一方、湊は異界の神であるベアトリーチェと魂ごと融合しているた

め、その力はベアトリーチェ由来の物に置き換わっている。
ニュクスのバケツの水にベアトリーチェの土をぶつける。これならばお互いに影響を受けずにはいられない。
だから、最初からこれは自分の役目だったのだと湊がそういって説明すれば、他の者たちも悔しそうにしながらも納得してくれた。
「さて……じゃあ、そろそろあれと戦いに行くとするか」
敵の力を遮断するために展開した神鏡越しに見える赤い瞳。湊はそれを見ながら時間だと言って敵の許へ向かおうとする。
頂上にいたシャドウたちを排除後、ずっと頭上で待機していたセイヴァーは呼び出してから力を溜めていた。
真の姿を解放していないにもかかわらず、セイヴァーの翼からは蛍火色の燐光が溢れている。
ただ宙に浮かんでいるだけだというのに、思わず気圧されそうになるその姿が他の者らの瞳には頼もしく映った。
「湊……きみは……」
「……だめ」
だが、頂上の縁に近い場所にいた湊が中央へと歩き出したタイミングで、これまで俯いていた綾時が涙を流しながら青年の名を呼び。ほぼ同時に七歌も湊を呼び止める。
一体どうしたというのか。ニュクスと戦えるのは湊だけだ。
あとは彼に託すしかないというのに、どうして彼を止めようとするのか。
他の者たちは困惑し、様子がおかしい二人を心配して風花が声をかける。
「綾時君？　七歌ちゃん？」
「ダメ、八雲君!!　絶対に行っちゃダメ!!」
風花に呼ばれても七歌は何も返さず、頂上の中央に辿り着いた湊に向かって駆け出す。
「……悪いがそれは聞けない」
けれど、七歌が辿り着く前に湊は薄い笑みを浮かべて、セイヴァーと共にゆっくりと空へと昇ってゆく。

白銀の天使と共に、死を司る神の許へと向かう。
今の彼の状態を表わした言葉を意識した時、他の者たちも言いようのない悪寒を覚えた。
そして、七歌が何故彼を止めようとしたのか。その意味を無意識のうちに察した。
「待て、八雲！　君は何をするつもりだ!?」
「有里君、ちゃんと説明してよ！」
「お願いします。戻ってきてください！」
美鶴、ゆかり、風花が湊に呼びかけるが彼は止まらない。
しっかりとニュクスを見つめたまま空へと上がり続ける。
言葉だけではどうしようもない。そう思って真田が召喚器の引き金を引くも、気力が僅かに回復したというのにペルソナが呼び出せない。
「クソっ、おい待て。有里!!」
「有里っ、テメェまたこいつらを残して行くつもりか!?」
真田と同じようにペルソナを呼び出そうとした荒垣だったが、彼もまたペルソナを呼び出すことが出来なかった。
彼らは気付いていないが、湊はシャドウに呑まれた仲間たちを助ける際に命の波動を拡散させていた。
さらに、彼らが湊と話している間もセイヴァーは命の光を僅かに放出しながら待機していたのだ。
攻撃として放出した光線を数瞬浴びただけならともかく、原液とでも言える状態の光や波動を至近距離で浴びてしまえば、しばらくは死を意識出来なくなっても無理はない。
「アカン、湊君っ!!」
「ワンワン！」
ラビリスが何とか戦斧の推進器を使えないかと確かめながら彼を呼び、コロマルも声の限りに呼びかける。
彼女たちは湊と一緒に暮らしていた家族だ。他の者たちよりも彼に対する想いは強い。
ただ、だからこそ、彼女たちは湊がこんな事では考えを変えないと

も分かっていた。
「待てって言ってんだろ！　行くならオレも連れてけ！」
「有里先輩、待ってくださいっ」
共に暮らして家族でダメならどうすればいいのか。順平は戦力として自分も連れて行くように叫んだ。
別に深く考えて言ったわけではない。こんな状況で頭を使えるほど彼は器用じゃない。
この一年で色々とあったが、順平は湊の事も大切な仲間だと思っているのだ。
だからこそ、仲間がたった独りで敵の許へと向かおうとすれば、盾としてでも良いから自分も連れて行けと口から出ていた。
その隣で湊を呼び止める天田は、十月の満月の影時間が明けた後の光景を思い出してしまっていた。
尊敬する先輩が、大切な仲間たちが、湊の死に涙を流していたあの光景を。
もう二度とあんな光景は見たくない。自分だって彼に死んで欲しくない。
だから、天田は必死に声を出して、小さくなってゆく彼の背に向かって呼びかけ続けた。
「八雲！　貴方もこの世界に居て良いの！　お願い、戻ってきて!!」
「八雲さん、待って！　お願いします！　戻ってきてください！」
そして、彼にとって最も大切な少女たちも湊を何とか呼び止めようとした。
分かっていた。他に手段が無ければ彼はこういう事を平気でする人間だと。
だが、もしかすれば、自分たちが呼びかければ一時的にでも止まってくれるのはないかと期待した。
結果から言えばその期待は裏切られた。振り返る事なくニュクスへと向かって行く湊は、タルタロスの頂上よりも遙か上空に展開した神鏡に辿り着こうとしている。
この距離ではもう声も届かない。それでも、彼女たちは涙を流しな

がら空に手を伸ばし続けた。
＊＊＊
タルタロスの頂上とニュクスの中間地点に展開した神鏡に辿り着いた湊は、自分を止めようと仲間たちが必死に呼びかけてきた事に苦笑していた。
「……本当に、馬鹿なやつらだな。どうせ俺の事なんて忘れるってのに」
影時間の戦いが終わればペルソナ使いだろうと影時間に関する記憶を忘れてしまう。
影時間側の存在であるシャドウよりも適性が高い湊も、当然のようにそちら側の存在に含まれ皆の記憶から忘れ去られてしまうのだ。
どうせ忘れるというのに、そんな存在のために彼女たちは必死になってくれた。
湊一人が犠牲になれば世界は救われる。彼女たちが求めた平和な日常へと戻れる。
それを分かっていながら彼女たちは本気で湊を止めようとしていた。止めたところでその先には滅びしか待っていないというのに。
神鏡に辿り着いた湊は浮かべていた笑みを消し、徐々にセイヴァーの力を解放しながら呟く。
「だが、だからこそ俺は自分の選択が間違っていないと確信が持てる」
死後の世界で両親やイリスと会って、贖罪のためではなく自分が何のために何をして生きたいのかを考える機会を得た。
そして、他の者たちがニュクスと戦うと決めた年末から、湊は一人でずっとニュクスに勝つ方法を考えた。
どうしてニュクスに勝ちたいと思ったのか。そんな物は簡単だ。
死なせたくない。生きていて欲しい者がこの世界には大勢いるから。
ニュクスに勝つ方法を考えている途中でそれに気付き、そこからニュクスを倒さずに勝つ方法を思い付けば、マーガレットとの契約にあった〝命のこたえ〟に辿り着くのも速かった。
〝未練はある。だから、後悔はない〟

ただそれだけ。たったそれだけの事だが、湊のこれまで生きた証であり命を懸けるに十分な理由だ。
セイヴァーの力の解放に合わせて青年の持つ金色の瞳に変化が起きて虹の輝きが宿る。金色の上に極彩色に変化する光が乗ったかのような不思議な瞳。
魔眼でもなく、ベアトリーチェの力の発現で目覚める銀眼でも無い、彼自身の新たな輝きを宿す金色の瞳。
その瞳で未だ宙にいるニュクスを見ながら、湊は覚醒したセイヴァーの翼を広げてペルソナに持たせた銃の狙いを定める。
敵はこの星の命全てに力を分け与えた神だ。いくら〝七熾天〟を持った湊にエネルギー切れが存在しないと言っても、その身体は人と星で規格からして異なり、一度に出せる火力差で押し切られては勝ち目が無い。
そのため、湊はまず火力勝負で負けないように神クラスのペルソナ二体を使った戦闘の準備を進めていた。
相手はまだ自分の力を知らない。死後の世界での一戦はただ現世に復帰しようとする湊を相手が妨害しようとし、それを力尽くで振り払っただけの事なので戦いですら無い。
故に、いくら湊が敵の攻撃を防いでいようが、目覚めたニュクスにとって彼はまだ敵ですら無い存在だ。
存在の格が異なるからこその油断。その隙を突かせて貰うぞと青年は嗤いながら世界に呼びかけた。
《この滅びは人類の総意だとある者は言った。死を意識し、死を求め、死を知りたいという無自覚な心が集まり、その呼び声を聞き届けた神ニュクスによって世界は滅びようとしている。おめでとう。君たちの願い通りに世界は滅びに向かっている》
湊はペルソナの通信機能を使って、この現状はお前たち人類が招いた事だと改めて認識させる。
別に誰が悪いわけでもなく、人々が当たり前の日常を送っていて辿り着いてしまった事態。
それを責めるのはおかしいと言われようとも、死を理解していた湊

はニュクスを呼んだ人類の中には含まれていない。
だから、皮肉を込めてこれがお前たちの望み通りの結末だと彼は言った。
すると、自分たちを救ってくれるはずの存在の言葉に、世界中から動揺する気配が返ってくる。
ニュクス教やそれに感化された者たちは、湊も諦めたと思ったのか喜んでいるようだが、本題はここからだと青年は言葉を続けた。
《……俺はお前たち人類が嫌いだ。求めるばかり、頼るばかりで、どこまでも強欲に都合良く人を利用しようとしてくる。そんなお前たちの事がずっと嫌いだった。だから、これは復讐だ。俺を都合良く利用してきたお前たちへ贈る復讐。死を求めるお前たちに、俺は〝生きろ〟と命じよう》
言って青年が不敵に笑えば、セイヴァーの構えた銃口に光が集まり始める。
黒いバイザーの奥に輝く七つの瞳、街を覆うほど巨大な神鏡とそう変わらぬ三十六対の巨大な光翼、頭上に輝く虹色の光輪、セイヴァーは既に覚醒を済ませている。
白銀の鎧を着た天使を見ていた者たちは、変化した天使の姿を見て何が始まるのかという不安が広がっていた。
オープンチャンネル状態で通信を繋いでいるため、相手からの声は届かないが感情だけは伝わってくる。
このような状況で少しそれを面白く感じた青年も、準備を終えると表情から笑みを消して真っ直ぐニュクスを見つめた。
《たかだか数十億、有象無象が集まった程度で粋がるな。人類が滅びを求めるというのなら、俺という個の意志でそれを阻もう。数多の予言にて記された人類史の敗北、その光景を記憶せよ!!》
直後、セイヴァーの持つ銃からタルタロスよりも巨大な光の柱が顕現し、神鏡に触れたそれがさらにワイドレンジに拡散されながらニュクスへと迫る。
敵の重力波を押し退けながら進む蛍火色の光は、空の境界を越えて宙に到達し、ついにニュクスへと直撃した。

神鏡によって拡散した光は、地上からはまるで空に咲いた巨大な花のように見える。

空に咲く巨大な花と宙に浮かぶ巨大な瞳、その衝突はどのような結果を生むのか。人々は祈るようにしてその結末を見守った。

第四百五十四話　大いなる封印

影時間――港区上空

仲間たちの制止の声を振り切ってタルタロス上空まで移動した湊。

頭上にはニュクスの重力波を遮断するため展開した神鏡が存在し、透明なレンズの向こう側には今も重力波を放ち続けるニュクスの赤い瞳が見える。

黒き蛇神〝无窮〟が変じた神鏡は街一つを覆うほどに巨大だ。

そんな神鏡でも赤い瞳の瞳孔より小さく、これを一人で相手するなど正気では無いなと湊は心の中で笑った。

だが、それでも自分は勝たねばならない。勝ってみせると誓ったから。

青年の背後で長大な銃を構えた天使は覚醒し六本に増えた腕で銃を持ち、結合した七枚の黄昏の羽根〝七熾天〟のよって増幅されたエネルギーを溜め続ける。

相手は死の権能を司る神だ。生命エネルギーを当てたところでシャドウのように実体を維持出来なくなったりはしない。

それでも効果はある。対極の性質を持つエネルギーだからこそ、純粋な力としてぶつける事が出来る。

《数多の予言にて記された人類史の敗北、その光景を記憶せよ!!》

人類への宣戦布告は終えた。これを為せば自分の人類への復讐は終わる。

時間ギリギリまでチャージした生命エネルギーが銃口から放出される。

以前、月から帰還した際に地上を薙ぎ払った光の柱。それと同じタルタロスを遙かに超えた太さを持つ巨大な蛍火色の光線は、展開していた神鏡で拡散され開花した花のような形でニュクスに襲い掛かった。

重力波など神が持つ最も基本的な力の一部でしかない。そのような力など容易く蹴散らし、空に咲いた巨大な花は宙に浮かぶ瞳を直撃する。

瞬間、大地まで届くほどの衝撃が発生し世界を揺らした。
相手は巨大な質量の実体を持つ神。それを迎え撃つ形で放たれた光線が拡散した状態でありながら敵の降下を止めようとする。
完全には止まっていない。けれど、ニュクスの降下する勢いは確かに減衰し始めている。
衝突時に発生した衝撃で倒れた者たちも、そのあり得ざる光景に僅かな希望を抱く。
だが、神も攻撃を受けてただ黙っている訳ではない。降下を妨げられ己の目的を阻む存在を初めて認識した神は、異なる神の系譜に連なるその矮小な存在を〝敵〟と定めた。
己が司る権能である〝死〟を叩き付けるべく、赤い瞳の正面に力場が発生すると、そこから赤と黒の光が混じり合う奔流が放たれ蛍火色の光を押し返し始める。
流石は外宇宙より飛来し地上に命を満たした神か。人から昇華して神格を得ただけの存在との格の違いを見せつけるように死の奔流が押してゆく。
既に上限いっぱいまで力を使っている青年は、自身の放つ命の光が死の奔流に押し返される様を見て、汗を滲ませ歯を食い縛りながらも嗤った。
「……動きを……止めたなっ!!」
セイヴァーが放つ光線は七熾天の力で生成出来るエネルギーをフルに使って放ち続けている。
それでも押し返されている以上、それは湊とニュクスの格の違いその物であり、このままではどうあっても勝ち目が無い事を表わしている。
だが、彼はこの不利な状況の中であっても瞳に強い光を宿したまま嗤った。
ニュクスはどういう訳か地球の引力を受けていない。超常の存在だからか、神の権能の一部に重力を操る物があるからか、理由は分からないがニュクスの降下は自力によって起きている。
敵の状態を探知能力で視続けていた湊はそれを理解していた。

部分的に崩壊していようとほぼ原型を保っている月が落ちてくれば、相手が神で無くとも地球は滅びる。
しかし、引力の影響を受けずに自分で飛びながら地上を目指すのであれば、敵を迎え撃つ上でいくらでもそれを防ぐ方法はあった。
手段によっては犠牲を払うことになるが、最初から自分一人で戦うつもりだった湊にすれば、正面から攻撃を仕掛けるだけで十分目的を達成出来ると分かっていた。
何せ、正面から来る自分を止めかけるほどの攻撃に対抗するなら、それ以上の力でその方向へ向けて攻撃を放つ必要があるのだ。
特別な推進器でもあるならともかく、宙という踏ん張りの利かない空間で進行方向に攻撃を放てば、少なくともそちらには進む事が出来ない。
相手が動きを止め地上到達までの猶予が出来たなら、次はこの押し合いに勝つだけでいい。
神の討伐よりも難度は低いが、それでも本来なら人間には不可能なほど困難な戦いだ。
だが、可能性の申し子たる彼にとってはどれだけ困難であっても不可能では無い。
その背の後ろには、地上には、命を賭して守りたい物があるのだ。
彼自身のペルソナであるセイヴァーとはそのための力あり、彼と一つとなった神も青年自身を〝願いを叶える存在〟へと変じさせるものである。
これまで自我を残すため部分的に力を引き出すか、力の使い方を知っているベアトリーチェの人格で顕現することはあれど、湊の自我を完全に残したまま〝阿眞根産巣日神〟になった事はなかった。
今までの戦いではそれで足りた。狭間の世界で出会ったクロノスも神ではあったが、特定の役割を与えられただけの機能神で、阿眞根の力を引き出して神殺しの力を使えば勝つことが出来た。
しかし、今回はそれでは足りない。相手を殺せないため、純粋な出力で上回る必要がある。
「さぁ、いくぞベアトリーチェ……!!」

故に、青年は内なる神に呼びかけ他次元神の力を真の意味で取り込み、その肉体の輪郭が一瞬ぶれると淡い光を纏った状態で再び輪郭を取り戻して、過去の名切りたちが目指し続けた神へと至った。
人から神へ変じた事で出力が上がり、押し返されていた力が拮抗し始める。
人としての心から生まれる力をエネルギーに変換し、それを七熾天で増幅させることで更なるエネルギーを生み出す。
自分の自我がハッキリと残っているというのに、自分の心がエネルギーを生み出す生成炉になっているというのは不思議な気分だ。
だが、これでもまだ足りない。力の生成速度が上がっただけでは、最初から膨大なエネルギーを持っていた相手に追い付けない。
生成速度では劣っていない以上、ここから勝つには攻撃の発射台の性能を上げるしかないだろう。
「……正も負も、どちらも俺の心だ。矛盾すら内包した陰陽の調和、両儀こそが俺の本質ならば、その力をここに顕現させよう」
チャンスは一度、タイミングを間違えればニュクスの攻撃で押し切られる。
それを肝に銘じながら湊はセイヴァーと无窮をカードに戻した。
二体をカードに戻せば当然、これまでセイヴァーの攻撃で対抗していたニュクスの放つ〝ＤＥＡＴＨ〟が真っ直ぐに向かってくる。
街一つを簡単に飲み込むほど巨大な死の奔流を前に、湊は〝世界〟を司る二つの力を束ねながらコートから九尾切り丸を抜いた。
月面に深く刺していた事で黄昏の羽根を喰らった九尾切り丸は、それ単体で死を与えることが可能な魔剣と化している。
そして、その魔剣に認められた青年も死を与える魔眼を持っていた。
迫るのは死を司る神が放った死の概念。けれど、この世に現われた以上は〝殺せる〟という確信があった。
数秒後には直撃するタイミングで剣を構えた湊は、荒れ狂う死の奔流に向けて真っ直ぐに剣を振り下ろし、ただの一撃でその攻撃を殺し尽くした。

自分が力を注ぎ続けて放っていた攻撃が根元まで全て消失し、完全な形で消し去られたニュクスは何を思っただろう。
その心境は湊には分からないが、生まれたその僅かな時間で二つの力は一つの〝世界〟として生まれ変わった。
正と負、善と悪、生と死、あらゆる対極な性質を調和した状態で持って生まれた青年は、これまではその力を別々のものとして使ってきた。
それぞれを五十パーセントの出力で二体を出してもニュクスには勝てないと分かった。
だからこそ、湊は二つの力を一つにして百パーセントの出力でそれを呼び出す。あらゆる対極の概念を内包した存在、混沌の神を。
「来い、カオスっ!!」
《グオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――――ッ!!》
弾ける白雷と迸る黒炎の中から現われたのは、黒銀の外殻を持ち金色の瞳と蛍火色の翼膜を広げた巨大なドラゴンだった。
街一つを覆う无窮が変化した神鏡よりも尚巨大な竜の体躯を持つ混沌神。
その背に乗った湊はカオスの口元に蛍火色のエネルギーを集め、再びニュクスに向けて攻撃を放った。
セイヴァーが神鏡で拡散した光と同じだけの太さを持つ光線は、湊によって〝ＤＥＡＴＨ〟を消し去られた状態で止まっていたニュクスに直撃する。
拡散して何とか受け止めていたセイヴァーの攻撃とは密度が違う。
カオスが放った攻撃は湊の生命力由来のため物理的な破壊力は見せぬものの、相手が異形の存在ならば純粋な力として効果を発揮しニュクスを押しやり僅かにだが後退を始めさせた。
けれど、そうなれば当然ニュクスも再び敵を滅するため反撃してくる。
ニュクスの放つ赤と黒の奔流、カオスの放つ蛍火色の奔流、二つの力が宙でぶつかり合い。

地上には黄昏の羽根と同じ青白い淡い光の雪が降り始めた。
＊＊＊
黄昏の羽根と同じ光を放つ雪が降り始める中、タルタロスの頂上から湊とニュクスの戦いを見ていた者たちは、ここで何も出来ない自分に強い怒りを覚えていた。
何故、どうして、この大事な場面で彼の力になれないのかと。
彼はこの戦いは人類に対する復讐だと言っていたが、そんなものは他の者に責任を感じさせないための詭弁だと分かっている。
彼は一人で片を付けようと挑み、ニュクスとカオスの力は拮抗しているが、このままの状況が続けば恐らく湊が先に限界を迎えるだろう。
今の自分たちでは何も出来ない。肩を振るわし血が出るほど拳を握り込んだ真田は、せめて想いよ届けと叫ぶ。
「有里、お前一人に背負わせはしないっ!! 俺の想いも持っていけっ!!」
「そうです。有里先輩が世界のために戦うと言うのなら、僕たちだって先輩の力になりますっ!!」
「テメェがどんだけ俺たちを突き放そうが、ここまで来た以上はこっちも勝手に支えさせてもらうぞ!!」
真田、天田、荒垣の三人がペルソナを呼び出すように強い意志を込めて叫ぶと、黄昏の羽根と同じ光を放つ雪がその感情の発露に反応し、湊の許へと温かな白い光を運んでゆく。
宙で死と命の力がぶつかり光の雪が降るという不思議な光景と、その雪が変化した温かな白い光が湊の許へ向かうという未知の現象。
どうしてそんな事が起きたのか彼らには分からない。ただ、彼の許へ向かってゆく光が自分の心の力である事だけはすぐに理解出来た。
仲間たちもそれに気付いて視線を交わし力強く頷くと、残った全ての力を彼に送ろうと大きな声で呼びかける。
「例えこれで力を失おうとも構わない。だから、どうか頼む。私の全ての力を八雲へ届けてくれ！」
「有里君、こんなお別れなんて絶対に認めないから！ 絶対に無事に

戻ってきて！」
美鶴とゆかりの心に反応した雪が白い光になって空へと昇ってゆく。
神同士の戦いに人間の力がどれだけ影響を与えるかなど分からない。
それでも、何もせずにはいられない。竜の背に乗り空で戦う湊に向けて順平は拳を突き出して叫んだ。
「一人でかっこつけてんじゃねぇよ!!　お前だけに戦わせたりなんかしねぇ、オレの力も使え!!」
「どうかお願い。皆の想いを届けて有里君を助けてっ!!」
「ワンワンッ!!」
順平に続けて祈るように風花とコロマルも湊を助けようと力を送る。
だがその時、空が急に明るくなり顔上げれば、ニュクスの放つ攻撃がより巨大になってカオスを押し始めた。
かなりの距離があるというのに湊が全力を振り絞って攻撃を放ち続けているのが伝わってくるだけに、この状況がどれだけ拙いかというのも分かる。
まだ足りないのか。自分たちは本当に彼の力にはなれないのか。
そんな湧き上がる不安を無理矢理に押さえ込んで、綾時は友のため声を張り上げる。
「湊、君がいたから僕はこうやって人として生きる道を選べるようになった！　だから、君も皆と共に生きることを諦めちゃいけない！」
「ウチらシャドウ兵器に助けられたっていうんやったら、ちゃんと戻ってきて一緒におってよ！　戻ってこんかったら許さへんから！」
彼は世界の存続においてずっと自分が助かる事を計算に入れていなかった。
自分の命を使ってそれが可能なら簡単に切り捨て使い潰そうとしていた。
けれど、自分たちには彼が必要だ。いくら世界が存続しようと彼を犠牲の上に成り立つのでは意味がない。

想いの強さが影響するのであれば、これ以上の気持ちなどない。
二人の言葉に反応するように強い輝きを持った光が空へと昇る。
「八雲っ、貴方が守ろうとしてくれた私の世界には貴方が必要なの！
桜も、皆も待ってるから、絶対に勝って帰ってきて!!」
「八雲さん、前に戦った時に交わした約束覚えてますよね。わたしを貴方の傍にいさせて欲しいと。約束はちゃんと守ってください。もし、破ったら一生許しませんから!!」
湊が最も大切に想っていた少女たちが彼の無事を願い祈る。
世界が無事なだけじゃ自分たちは救われない。そこに彼がいるからこそ、自分たちは幸福に生きられる。
本当に自分たちを光の当たる温かな優しい世界で生きさせたいなら、最後まで諦めず絶対に勝って戻ってくるように二人は祈った。
そんな仲間たちの想いや祈りが光となって彼の許に向かうのを見ていた七歌は、その場から駆け出して頂上の縁まで向かうと、ペルソナを召喚する時のように力を振り絞って眼下の街に向けて大声で叫んだ。
「お前ら、私ら人類が起こした事の後始末を八雲君一人に押し付けてんじゃねぇっ!! 生きたいと願うなら八雲君に力を貸せっ!!」
ニュクスの降臨は人類が引き起こした事態だ。幾月やニュクス教の人間たちのように、自覚を持って関わった者は少ないだろうが、それでも原因は自分たち人類にある。
なのに、死を理解しているが故にニュクス降臨に無関係でいられた青年が、たった一人でその始末をつけるのはおかしい。
彼が言っていたように、ある意味でこれは彼一人と全人類の戦いだ。
だが、少しでもそれに責任を感じるのなら、生きたいという想いがあるのなら、代わりに戦ってくれている彼に力を送れと七歌は命じた。
もっとも、遠く離れた塔の上から叫んだところでその声は届かない。
七歌のペルソナに通信機能を持っている者などいないため、いくら

彼女が叫んだところで意味はない。
しかし、ペルソナを召喚する時のように七歌は心の力を振り絞って叫んだ。
彼女の声と共に放たれた心の力は光の雪に干渉し、干渉を受けた雪の近くの雪にも影響が伝播してその想いの込められた声が次々と広がってゆく。
そして、その雪を通じて彼女の声は街中の人々にも届いた。
＊＊＊
既に出来るだけの手を打っていた湊は、突如ニュクスが放つ攻撃の威力が上がった事で劣勢に立たされていた。
完全な形で神としての力を解放して阿眞根に到り、神クラスのペルソナ二体を束ねて一つの力にした。
それによってニュクスと単体で拮抗出来る状態に持ち込んだというのに、やはり真性の神は格が違ったようで更に攻撃の出力を上げてきた。
まだ完全には押し切られていないが、徐々に死の奔流が迫ってきている事が分かる。
もう切れる手札などない。手に入れたユニバースは戦うための力ではなく、それを使うには力で押し勝って相手の許まで向かう必要があるのだ。
なのに、それが途轍もなく難しくて遠い。
敵は人類全てだと言ったが、実際にはこの惑星で生きる全ての生命と同等以上である。
いくら神の位階に到ろうとも、名切りたちが積み重ねてきたのは人の生であるため、人類全てには対抗出来ても全ての生命が相手では荷が重かったらしい。
また魔眼で敵の攻撃を消し去って、その間に進んでという事でも繰り返してみようか。
攻撃の手を休めずにそんな風に湊が考えていると、ふと何かがカオスの翼に触れるのを感じた。
（……あぁ、そうか）

それが何であるかを理解して湊は思わず苦笑を浮かべる。
触れたのはとても小さな心の欠片。ニュクスの重力波やカオスの羽ばたきで容易く消し飛ばされてしまいそうなほど、それは本当にちっぽけな心の欠片だった。
だが、カオスに触れたその心の欠片を通じて湊に想いと力が流れ込んでくる。
届いたのはタルタロスの頂上に置いてきた仲間たちの想いと祈り。
恐らくは衝突したニュクスと湊の力に当てられて、地球全体に適性の増幅効果が掛かっているのだろう。
それが雪のような形で世界へと広がり、彼らはそれを使って託すしかないと諦めるのではなく、まだ自分にも出来る事があるはずだと心の欠片を届けてきた。
ジャック・ザ・リッパーやアリスを己のペルソナとしたように、アベルが持っていた楔の剣で他人の力を奪ったように、湊は他者の力を受け入れて自分の物にすることが出来る。
おかげで届いた心の欠片は彼らの望み通りに湊の力になっていた。
しかし、いくらペルソナを得るほどに適性が高くとも、激しい戦いを終えて残った分では大した量にはならない。
気持ちはありがたいがやはりこれではどうにもならない。
そう思って湊がタルタロスの頂上へと視線を向けた時、仲間たちだけでなく街中から温かな光が昇ってくるのが見えた。
（……何が起きているんだ？）
一瞬、何が起きているのか分からなかった。
いくら力が増幅しても街中にいるのは一般人だ。仲間たちと同じ方法で心の欠片を届けるにしても、こんな状況でその方法に思い至ることなど出来ないはず。
だが、現に今も街中から、いや街の外からも温かな白い光が空へと昇ってカオスに届けられていた。
一つ一つは極小さな力。しかし、こうして集まり確かに湊へ向けられている。
ベルベットルームでは〝ユニバース〟を手に入れる事だけを考え

ていて、その力の奥にある相手の心を深く見ようとはしていなかった。
こうやって実際にその力を感じる事で、湊もその力の奥にある人々の持つ強さを改めて理解する。
（……なるほど、強いな人は）
彼らはまだ諦めていない。死の恐怖に負けそうになりながらも、必死に心を奮い立たせて湊が勝つことを信じてくれている。
一人で決着をつけようと思っていた湊にすれば、あれだけ無礼な事を言われても信じてくれている人の優しさに申し訳なく思ってしまう。
（まぁ、それは結果で返せば良いか）
人々の想いを受け取ったカオスの全身に光の紋様が浮かび、蛍火色の翼膜から虹色の光が激しく噴き出す。
受け入れた他者の心の力で湊自身の力の上限が上がる。その増した心の力を七熾天で増幅させ、さらに続けて集まってくる心の力で再び上限が上がり、それを七熾天でさらに増幅させるという工程が何度も何度も繰り返される。
すると、カオスの放つ攻撃は力の増したニュクスの攻撃に徐々に対抗し始めた。
押される勢いが少しずつ弱まり、まだいけるばかりに威力が増し続けるカオスの力とニュクスの力が拮抗し、今度は逆に相手を押し始めた。
ニュクスは確かに強大な力を持つ神だ。ただ、それは規格外の力と規格外の容量のエネルギータンクを持っているだけで、湊のようにエネルギーを循環させて増幅させるという馬鹿げた機能を持っている訳ではない。
増幅させた力をさらに増幅させるなどという事を繰り返せば、本来はその力を扱い切れずに暴走させて消滅してしまう。
しかし、心から生み出される無限の力を扱うことを前提に造られた阿眞根は、その上限が最初から存在していない。
〝そういう神〟として求められ生み出されたが故に、純粋な力押し

という形のこの勝負では湊にも勝機があった。
押し始めたカオスは翼を羽ばたかせて虹の光を放出しながら宙を目指す。
ニュクスが攻撃中に動けない事を理解していたため、湊は攻撃をしながらでも動けるようにカオスを創造したのだ。
命の光を纏う竜が宙に浮かぶ死の神に向かって行く姿は、地上からも見えている事だろう。
強く羽ばたいた竜は雲を抜けて大気の層を越え、ついにニュクスの待つ宙へと辿り着く。
敵との距離は数キロ程度、街を覆うほど巨大な神たちにとって、すぐに詰められるその距離で攻撃を撃ち続けても意味はない。
ほぼ同時に攻撃を放つのをやめると、竜が鋭い爪を持った巨大な腕を使ってニュクスに組み付いた。
組み付いたまま翼から虹の光を噴き出して相手を地球から遠ざけてゆく。
当然地上を目指すニュクスも押し返してこようとするが、推進力はカオスが勝っていて地球との距離が少しずつ開いてゆく。
星の海を進み、生まれ故郷、青き星が徐々に小さくなってゆく様を、竜の背に乗っていた湊は一度だけ振り返って見つめた。
そして、小さく笑ってから視線をニュクスへと戻し、地球と十分な距離が開いたところで人差し指を伸ばした左手を頭上へ掲げると、湊は穏やかなやりきった笑顔のまま呟いた。
「さぁ、眠ろうニュクス。俺もちゃんと付き合うから」
言い終わると同時に湊を中心に光が広がり、カオスを呑み込みニュクスに触れる。
すると、光が触れたニュクスの身体が崩壊を始め、赤い瞳に十字の亀裂が走った直後に大爆発を起こした。
崩壊を始めたニュクスの身体は爆発の光に呑まれて次々と消滅してゆき。
地上からも見えていたその爆発の光と衝撃は、遠く離れた地球にも届いて全てを覆い尽くし、そうして世界は真っ白な光に包まれた。

第十五章　―Ａｉｍ―

第四百五十五話　三年生に向けて

２月１０日（水）
放課後――月光館学園

本日最後の授業が終わると、生徒たちは一息吐いて帰る準備を始める。

この後は担任の鳥海がやってきて連絡事項をいくつか伝えてくるのみだ。

それが終われば部活動に向かう者やバイト先へ向かう者、ただ友達遊びに街へ繰り出す者もいるが、各々の目的のために教室を出て行くことは変わらない。

故に、少しでも素早く出て行けるようにと全員が帰る準備をしていれば、一冊のファイルを手に持った鳥海が教室に入ってきた。

「はーい。じゃあ、帰る前にちゃちゃっと連絡事項伝えていくわよー。皆も知っている通り、三年生は今週いっぱいで自由登校になります。つまり、実質来週からは皆が最高学年になるんだからね。そういった意識をしっかりと持って今月末の学年末テストにも取り組むように。以上、号令！」

鳥海の言葉に合わせてクラス委員が起立と号令を掛ける。全員が立ち上がって礼をすると、鳥海が最初に教室を出て行って生徒たちも解散となる。

既に帰る準備を済ませていた七歌が立ち上がると、ほとんど同じタイミングで立ち上がった順平が声を掛けてきた。

「あ、七歌っち。そういえば、うちの寮って三年生の先輩に送別会とかってすんの？」

「んー？　まぁ、別にしてもいいけど。私たちも本寮に引っ越す準備があるから、あんまり凝った感じのは出来ないかなぁ」

七歌たちが今現在暮らしている巌戸台分寮は、卒業する三年生も含めて寮生の減少に伴って閉鎖が決まっている。

別に建物を壊したりはしないようだが、継続して寮生活をする分寮の生徒が引っ越しても本寮には十分部屋の空きがある。
であれば、分寮は改装して別の用途に使えるようにしようというのが学校側の意見らしい。
本日は部活が休みの七歌が鞄を持って移動を始めると、同じ寮で暮らしているゆかりも会話に参加してついてくる。
「七歌って桐条先輩と仲良かったよね？　真田先輩と荒垣先輩には私から連絡しておくから、ダメな日があれば聞いておいて」
「了解。けど、引っ越し面倒くさいなぁ。オマケに本寮だと相部屋でしょ？　ゆかりのイビキと歯軋りで寝不足になったらどうしよう」
「耳栓でもつけて寝れば？」
二年生の時にこちらへ転校してきた七歌は、同じ分寮生でクラスメイトのゆかりと仲良くなった事もあり、本寮に引っ越した時は相部屋になろうと約束している。
分寮で暮らしていた二年生の女子は四人いたが、継続して寮生活を続けるのは七歌とゆかりだけ。
そういった事もあり、二人が相部屋になる事は学校側も了承して正式に決定しているのだが、七歌がそれを踏まえた無礼な物言いをすれば、既に慣れているゆかりは冷たくそれを聞き流した。
一緒に歩いていた順平は、そんなゆかりの順応性を強いなと密かに感じつつ、脱線しかけた話を戻すため会話に復帰する。
「あーっとそうだ。送別会の参加メンバーどうする？　真田先輩って妹さんいたよな？　それ経由でゆかりっちの入ってる文化部のメンバーとも顔見知りらしいし。なんなら呼んでも良いと思うんだけど？」
「あー、確かにね。部活の皆も先輩たちの送別会って言えば来ると思うから、後で声かけて参加出来るか確認しとく」
「ゆかりの部活って風花とアイギスのお姉さんのラビリスさんもいるんだっけ？」
「そうそう。もう一人E組の吉野チドリって子を加えた五人の部活」
七歌に訊かれてゆかりは頷いて返す。

ゆかりが三年生である真田と荒垣に連絡しておくと言ったのは、彼女が所属する総合芸術部に真田の妹である美紀が所属する関係で知り合いになっていたからだ。
ゆかりを除く四人のメンバーは全員隣のE組で、部活担任までE組と知った時にはゆかりも切れかけたが、その怒りも既に遠い過去のものだ。
途中で入寮してきた風花とは中等部からの知り合いで、途中で転校してきたアイギスは高校からの付き合いのラビリスと異母姉妹という事ですぐに打ち解ける事が出来た。
そんな二人も来年度からは実家通いと姉と同居になるらしいので、寮生でなくなる彼女たちの送別会も兼ねると思えば、総合芸術部のメンバーたちを呼ぶのもありだと思える。
チドリだけは実家の場所もあって来るのが少し大変かもしれないが、彼女はラビリスや美紀の家に泊る事もあるので、もしも面倒ならそういった対策を取るに違いない。
仮に順平が邪な想いを持って女子を参加させるように言っていたとしても、送別会には妹の守護者として中等部からその階級で君臨し続けた高校ボクシングチャンプがいる。
彼と常識人な荒垣が揃っていれば、無礼講だと順平がハッチャケても止めてくれるに違いない。
また、送別会で食べる料理の準備を考えると、中々の料理の腕を持っている部活メンバーの参加はありがたい。
ゆかりも人並みの実力はあり、七歌は一風変わった料理の仕方だが実力は高いものの、二人だけで料理の準備をしては恐らく手が足りない。
どこかでパーティー用オードブルを注文するにしても、全てをそれで済ませるわけにはいかないため、やはり調理係としての人手は欲しいのだ。
それを踏まえると開催時期にも気を遣う必要があるだろうと、ゆかりはいつ頃開催するか二人に意見を聞く。
「送別会っていつ頃にやるのが一番良いかな？　あんまり急だと皆の

予定もあると思うんだけど」
「私的にはテスト明けが良いかなぁ。美鶴さんたちの意見もあるから、もしかすると卒業式が終わってからになる可能性もあるけど」
もしも二月中に行なうとすれば、今から準備を始めてテスト前というタイミングになる。
流石にテスト勉強の時間を削って準備をするのは避けたいので、七歌はテスト明けや卒業式が終わって落ち着いてからが良いのではと意見を出した。
ゆかりもそれもそうかと頷き、とりあえずは三月に入ってからという方向で意見がまとまると、生徒玄関に到着して上靴から私靴に履き替えながら順平が呟く。
「しっかし、それが終わったらマジで二年生も終わりって感じだよな。一年生の時は高校生活に慣れるのもあって色々記憶に残ってるけど、二年生はあっという間って感じでなんも覚えてないわ」
「それは流石に言い過ぎでしょ。七歌が転校してきたり、アイギスが転校してきたり、綾時君が転校してきたり色々あったじゃない」
「逆に言うとそれくらいしかないだろ？　職業体験学習とか修学旅行とかもあったけど、マジでとくに印象に残ってないんだよなぁ」
転校生が三人も来るのはある意味で貴重なイベントだ。
その三人ともが同じ分寮生で仲良くなれたことは勿論良かったと断言出来る。
けれど、順平はそういった友人が増えた事を除くと、二年生になってからの一年はあっという間過ぎてほとんど記憶に残っていないように感じていた。
修学旅行では京都の観光名所を友人らと回ったし、職業体験学習では競争率の高いＥＰ社に当選して超有名企業の地味な裏側や最新設備を見せて貰う事が出来た。
来年の三月に貰えるであろう自分たちの卒業アルバムには、二年生の思い出としてそれらの写真が載るのは間違いないと思う。
だが、頭では理解していても順平はどこか気が抜けた様子で続ける。

「二年生がこんなあっという間だと、来年の進路決めもホントにすぐに来そうだよな」
「私とゆかりは大学進学だけど、順平ってどうするか決めてるの？」
「オレっち？　んー、正直に言うと悩んでるんだよな。別に何かしたい事があるわけでもねーし」
七歌とゆかりは志望校は別々だが大学進学希望である事は決まっている。
学年トップの成績である七歌は、美鶴の進学先である帝都大学に行くかもっとレベルの高い海外へ留学するか選ぶ事が出来る。
ゆかりはそこまで選択肢が多いわけではないものの、特別成績が悪いわけでもない事から、都内の大学の中からいくつか候補を絞り始めていた。
そんな二人と比べると順平は進学か就職か悩んでいる段階なので、意見を求められても七歌たちも相談に乗りづらく、まずはそこをハッキリさせるべきだと七歌が告げる。
「とりあえず、どっちにしたいか決めなよ。何となくでも大学に行きたいとか、やる事がないならお金を稼いでた方がマシだって就職にするとかさ」
「一応な。どっちかっつーと進学もいいかなって思ってんだよ。なんか知らねえけど、うちの寮生って進学費用補助が出るって話だろ？」
順平もどうしてそんな制度があるのかは知らないが、今現在巌戸台分寮を利用している生徒は進学費の補助が出ることになっている。
それが大学だろうが専門学校だろうが関係なく、入学金とその後の授業料も含めて全額負担してくれるというのだから、やりたい事が決まっていない順平でもどうせなら大学に進んでおくかという気にはなる。
もっとも、就職を選べば桐条グループの持つコネクションの範囲内という条件はあるものの、ある程度は希望の職種に就ける支援もあるという。
つまり、進学と就職のどちらを選ぶ事になったとしても、巌戸台分寮の寮生たちはかなり有利な状況と言える。

多くの生徒たちがいる本寮の方ではそういった支援はないそうなので、もしかすると人数に少ない分寮で不便な想いをしているだろうという配慮で特典があるのかもしれない。
「自分らでメシの用意するのは面倒だったけどさ。一年我慢するだけですげー得した感あるよな」
元々は本寮にいた順平にすれば、本寮と分寮の違いなど自分で食事の準備をする事くらいだ。
それだって休日の日や食堂の利用時間を過ぎれば自分で用意していたので、本格的に料理を作っていた訳ではない順平にすれば大した変化ではなかった。
本当にたったそれだけで数百万も補助して貰ってもいいのかと不安になるくらいで、同じように感じているらしいゆかりも苦笑気味に同意だと頷く。
「まぁ、一人暮らしの練習だと思えば苦でもなかったしね。それだけで私らだけ補助が出るのは本寮生にちょっと申し訳ないかな」
「そう思うならゆかりたちも大学で成績優秀者でも狙えば良いんじゃない？　どこの学校でも成績優秀者は学費免除があるから補助も少なく済むよ」
申し訳ないと思うなら出して貰う額が少なく済むようにすればいい。
七歌の言葉はある意味で正しいのだが、簡単に目指せるなら苦労しないとゆかりたちは溜息を吐く。
進学すると決めているゆかりも、出来ればしようかと考えている順平も、勉強が得意という訳ではないのだ。
中学時代に比べれば順平の成績は伸びているが、それは一種の高校デビューとしてテスト勉強してみたら何故だか上手くいったからだ。
以降も同じようなスタイルでテスト勉強だけはしており、今も学年で真ん中くらいの成績をキープ出来ている。
周りからは何か特別な勉強方法でもしたんじゃないかと驚かれたほどの成績アップは、本人にしてみれば今の状態をキープする事は出来てもそれ以上は難しいと分かっている。

故に、七歌の言うような大学での成績優秀者を目指したりはしないが、それでも順平なりに真剣に考えて補助制度を利用するなら出来るだけ真剣に進学先を選ぶつもりだと二人に話す。
「でもま……いつもなら素直にラッキーで済ませられたはずなんだけど。なんか、この進学費の補助とかに関しては真面目に考えなきゃなって思うんだよな。何がしたいか全然分かってねぇけど、学年末テストの結果で選べそうな大学について先生にでも聞いてみっかな」
「私もそろそろ予備校とか通い始めるから、順平も自主勉だけじゃ厳しいって思うなら予備校のパンフとか集めといた方がいいよ」
高校生活に慣れた事であっという間に過ぎた二年生としての一年。
それがもうすぐ終わるため、順平もゆかりも高校を卒業した後の事を考えて少しずつ動き始めた。
三年生になってからでは遅い。進学先によっては秋頃には試験があるのだ。
三年生の間ずっとピリピリとした雰囲気で過すつもりはないが、三年生の送別会を終えたら七かたちも本格的に受験生として過すようになる。
それをはっきりとは言葉に出さないものの、その事を理解している三人はせめて二年生最後の思い出は精一杯楽しみたいと願い。協力してくれる友人らにも連絡を入れて寮へと帰っていった。

夜――ポロニアンモール
古美術眞宵堂の閉店時間はモール内の他の店に比べて早い。
扱っている商品が若者ウケするものでなく、古美術品や骨董品を眺めるのが趣味だと言う者がいてもそれなりに高額な事もあって、一日の来店客数を考えれば他の店と同じ時間まで店を開けておくメリットが薄いのだ。
もっとも、一時間程度早めに閉めるだけなので、他の店より早めに閉めることに対してクレームが来たことはない。
レジや顧客情報の載った書類を入れた引き出しにしっかり鍵を掛けると、店主の栗原は学生アルバイトであるチドリと共に店を出る。

二人で店から出ると店の扉にもしっかりと施錠し、扉が開かないことを確認して二人は歩き始める。
「そういえば、あんたの学校はそろそろ定期テストの時期だろう？その間はバイトに入らなくて良いからちゃんと勉強するんだよ。バイトにかまけて成績が下がったなんて事になったら、こっちが桜さんに怒られちまうからね」
「……最初からテスト期間は入るつもりないから」
どことなく怠惰でやる気がないように見えるチドリだが、彼女は後で楽をするため手を抜くべきではないところではきっちりするタイプだ。
栗原も長い付き合いでそういった事は分かっているものの、バイトの雇い主としては一応は言っておかねばならない。
本人は面倒臭そうに分かっていると返してきたので、この様子なら本当に心配する必要はないだろうと安心して頷いた。
会話が一区切りつくとチドリは携帯を操作しながら黙って栗原の隣を歩き続ける。
彼女が携帯を見ていても隣にいる栗原がちゃんと見ているため人にぶつかったりはしない。
ただ、普段よりも画面に集中している様子なので、何か連絡でも来たのだろうかと思っていれば、携帯から視線を上げたチドリが口を開いた。
「……なんかテスト明けくらいに三年生の送別会するんだって」
「三年生って……ああ、部活仲間のお兄さんとかのかい？」
「そう。ゆかりとかラビリスの妹とかが暮らしてる寮が三月で閉鎖するから、美紀の兄たち三年生の送別会も兼ねて寮の打ち上げするみたい」
チドリが所属している総合芸術部は全員が二年生なので、来年になってもメンバーは変わらないまま活動出来る。
だが、部長を務める美紀の兄である真田やその友人の荒垣が卒業してしまうため、巌戸台分寮の閉鎖前に打ち上げも兼ねた送別会を開催するらしい。

参加するのは分寮生とチドリたち部活メンバーだけで、学生が身内で行なう程度の規模のパーティーをする予定だという。
開催時期がテスト明けならばチドリも今のところ参加出来そうだが、テスト期間中にバイトに出ないこともあって、チドリは栗原にそちらに参加する日は出られないと報告した。
栗原としては別にバイトを雇わずとも店はやっていけるため、そこまで気にしなくて良いと笑って返す。
「三月は別に忙しくないから気にしなくて良いよ。しかし、もうそういう時期なんだね。三年生が卒業したら、あんたも本格的に受験勉強始めないといけないね」
「学力は足りてる。一応、小さなコンクールで賞も取ったから、推薦の要項は満たしてるってクマモンが言ってた」
チドリは元々絵を描くのが趣味だったため、大学もそういった芸術方面に進もうと思っている。
彼女が志望する大学の推薦にはコンクールでの受賞実績が必要だが、中等部でも高等部でも部活で出したコンクールで賞を取っているため、成績優秀者が優先して得られる学内の推薦枠をチドリは貰える予定だ。
無論、推薦者に向けて大学から出される課題によっては安心出来ないが、推薦入試に落ちてもチドリの学力なら合格圏内に入っている。
このまま成績を維持していればほとんど問題ないこともあり、栗原の心配は杞憂だとチドリはやる気のない表情で答えた。
「そいつは良かった。けど、本当に店の方はどうにでもなるからね。ちゃんと自分の勉強を優先させるんだよ」
「……分かってる。じゃあ、電車の時間があるから」
「ああ。気をつけて帰りな。お疲れ様」
チドリの暮らす家は田舎にあるため、都心から外れる電車を一本逃すとだいぶ待つことになってしまう。
それを嫌ったチドリは時計を確認すると、栗原に別れを告げて駅に向かって小走りで駆けていった。
離れて行く少女の後ろ姿を優しい表情で見送った栗原は、相手の姿

が見えなくなると静かに歩き出す。
少女もあと一年で高校を卒業すると思うと感慨深いものがある。
彼女がバイトしているのはあくまで社会勉強のためであり、保護者の桜からは少女が組員たちからお年玉や誕生日のお祝いで新社会人の年収以上に貰っている事も聞いている。
面倒臭がりなはずなのに、わざわざ社会勉強のためにバイトするところは変わっていると感じるが、長い付き合いもあって彼女なりに意味があるのだろうと栗原も理解していた。
もし芸術大学に進学すれば、課題製作などで時間を取られて彼女もバイトに来られなくなるだろう。
なら、その前にバイトの方でも卒業のお祝いでもして、何か大学生活で使えるものでも贈ろうかと栗原は計画を練り始める。
実際に贈るのは少女が卒業するようなタイミングなので、あと一年もの猶予があるのだが、それでも栗原は楽しそうに贈るものをあーでもないこーでもないと考え続けた。
イベントやサプライズは計画段階が一番楽しいとよく言われるが、今の栗原の様子はそれが事実だと証明するに十分な説得力があった。
硬いアスファルトの歩き、カツカツとヒールの音をさせながらポロニアンモールから離れる。
明るい街灯に照らされた道を進み、同じように帰路についた人々と時折すれ違いながら、ふと空を見上げた女性は足を止めて月を見た。
「……あんたもそこから見てるのかい？」
何気なく呟いた栗原の声は吹いた風にのって消えてゆく。
呟いた本人もそれ以上は何も言わず、再び歩き出すと真っ直ぐ自宅を目指して帰って行った。

第四百五十六話　取り残されたもの

２月１３日（土）
放課後――ポロニアンモール
この一年の集大成ともいえる学年末テストを月末に控えた放課後。学校を出た美紀は制服姿のまま一人ポロニアンモールを訪れていた。
明日は二月の十四日、恋人や想いを寄せる相手に愛を伝えるバレンタインデー。
ポロニアンモールにある店も、バレンタインデーに向けた商品を揃えて客を呼び込んでいる。
コートを着込み、マフラーを巻いて歩きながらそれらを眺めるカップルの見つけると、美紀は思わずここにいない青年の姿を重ねて目で追ってしまう。
（……もう、いないと分かっているのに。やっぱり簡単には気持ちの整理がつきませんね）
コートの色は茶色で、マフラーは赤や緑のカラフルなチェック柄、どうみても彼が身に付けていた黒一色とは異なっている。
それなのにコートやマフラーを巻いている男性を見ると無意識に視線がそちらに向く。
頭では分かっているはずなのに、心がまだ追い付いていない事に美紀は苦笑した。
あの日、最後の戦いで湊の呼び出したドラゴンはニュクスを連れて地球を離れていった。
地上に残っていた者たちはその光景を見て、口々に奇跡が起きたと滅びは免れたんだと驚きながらも喜んだ。
眞宵堂店主の栗原や桐条たちと共に巌戸台分寮の屋上でその光景を見ていた美紀も、ニュクスという〝死〟の到来を目の当たりにした時点で、本当に彼が神を退けられるとは思っていなかった。
だが、彼は約束を果たした。この惑星に生きる者たちの意思に呼ばれた神を、たった一人で退けて人類の意思を拒絶してみせた。
死の神の到来が人類の総意であるというのなら、確かにたった一人

の力によってそれが拒絶された以上は人類史の敗北だろう。
七歌が世界に向けて放った言葉により、人々の想いが彼に届いて力になったとしても、神と直接対峙して打ち勝ったのが彼一人だった事実は変わらない。
過去に存在した数多の予言通りに、人々が積み重ねてきた歴史と想いはあの日確かに一人の青年の願いに敗北したのだ。
(ですが、その結果敗北したはずの人類は生き残り。勝者である有里君だけがこの世界から消えてしまった)
ニュクスを連れてドラゴンが地球を離れた後、宙で大きな爆発が起こり世界は白い光に包まれた。
何の光だったのかは分からないが、その光に包まれると徐々に意識が遠のいて、自分の記憶に靄が掛かっていくように感じた。
あれが影時間の記憶補整の兆候だったのだろう。何の対策もしていなければ、美紀も他の者と同じように再び影時間に関する記憶を失っていたに違いない。
ペルソナ使いとして誰よりも高い適性を持つ七歌たちも記憶を失った。
戦いから帰ってきた時はどことなく気怠そうにしていて、ほんの少しだけ言葉は交わしたものの、部屋に戻るなりすぐに全員が寝てしまった。
全員が必死に戦ったのだ。精根尽き果てても当然である。
だが、美紀たちは帰ってきた七歌たちは既に記憶補整が始まっていたのだろうと推測した。
(誰も有里君が戻ってこなかった事を気にしていなかった。恐らく、兄さんたちは世界が光に呑まれた時点で有里君の事が意識から消えていたんでしょう)
最後の決戦に向かう皆を見送った者たちの中で、美紀だけが何の説明を受けていなかった。
ニュクスとの戦いで湊が死ぬだなどと、それを大人たちは事前に知っていたなどと言われても、全てが終わってしまった後に聞かされて何を納得しろと言うのか。

彼はチドリを助けるために一度死んだ。なのに、その死を乗り越えて蘇り、今度は世界を存続させるために犠牲になった。
知っていたならどうして止めなかったのかと大人たちを責めたくなった。
また彼らは全て湊に押し付けたのかと、自分たちの尻拭いを湊に押し付けて殺したのかと糾弾したかった。
けれど、そうは出来なかった。帰ってきた七歌たちが眠った後、桜や英恵だけじゃなく、他の大人たちも全員が己の無力を悔やんでいると表情から察してしまったから。
（……有里君、私は貴方を恨みます。生涯赦すことはないでしょう。こんな、こんな自己満足な結果を押し付けられて、どうやって平然と笑って生きろというんですか）
美紀は彼の事を覚えている。燃える建物の中から助けてくれた横顔も、中等部で出会ってから共に過した日々も、一度は失った記憶を取り戻した事で彼女の中で今も鮮明に思い出の光景が残っていた。
彼女以外に記憶を保持する事に成功したのはあの場にいた大人たちと、湊の指示で簡易補整器の指輪を付けて記憶のバックアップを取っていたＥＰ社の人間だけだ。
桐条武治と栗原は自力で適性を入手していたようだが、湊に言われて指輪を付けて記憶のバックアップを取っておいたという。
同じくＥＰ社側でもソフィアやシャロンは適性を得ていたようだが、同じく指輪を使って記憶を残す事に成功した。
世界中に記憶の補整が掛かる際に指輪を付けていなくても、一度でも付けた事があれば記憶を失ってからでもその指輪を付ければ記憶は戻るのだという。
そこまで分かっていたならどうして湊はそれを仲間たちには伝えなかったのか。
ソフィアの話ではあくまで可能性であって、それらは賭けでしかなったという話だが、だとしても仲間にも同じ事をしていても良かったはずだ。
しかし、湊は自分が死ぬことも伝えず、記憶を失わずに済む可能性

があることも仲間には話さないまま逝ってしまった。
（自分がいなくなれば平和になると思ったのでしょう。誰も記憶を取り戻さなければ、最初からいなかったのと同じだと。わざと貴方はチドリさんたちに記憶を残させなかった）
あの最後の戦いを終えてから最初の学校の日、美紀は教室に行って何度も驚いた。
湊に関する情報が影時間に関する記憶に含まれる事は知っていたが、影時間に関わっていないはずの一般人も湊の事を覚えていなかったからだ。
いや、正確に言えば他の者たちも湊の名前は知っていたのだ。
なのに、彼との思い出や姿についてはほとんど誰も覚えていなかった。
その症状は影時間の記憶補整そのもので、どうして影時間に関わっていない者まで影響が出ているのか不思議だった。
美紀がほぼ唯一相談出来る栗原の許を訪ね、学生や教師らの様子を伝えると、深く考え込んだ末に栗原は一つの推論を告げた。
（あの日、貴方は世界に呼びかけて影時間について説明した。それにより世界中の人間が影時間に関する記憶を得た。そんな方法を使ってまで自分の痕跡を消そうとするなんてやり過ぎですよ）
影時間の記憶補整は、影時間に迷いこんだだけならその間の記憶を失ったり夢だと思い込む形でなされる。
ペルソナ使いたちや桐条グループ、ＥＰ社の人間たちのように、しっかりと影時間について知識を持っていた場合は、以前の美紀のように影時間に関する記憶を失った上で、その間の思い出を偽物の思い出で上書きして違和感を抱かないようにさせる。
どちらの方が影響が強いかと言えば圧倒的に後者で、影時間の知識を得てからの期間が長い者ほどしっかりと影時間のない生活の記憶で本来の記憶を上書きされるのだ。
誰よりも影時間に詳しかった湊は、どの程度の知識を得れば自分の事を忘れるのかもＥＰ社で実験していたらしい。
簡易補整器の指輪を壊すとそれを付けていた者は影時間に関する

記憶を失う。適性を失った美紀と同じ状況を簡単に再現出来るのだ。湊なら実験して当然だろう。
そして、その実験によって得た情報を利用し、湊は象徴化が解けた世界中の人間の混乱を治めつつ、影時間が消えた後の記憶補整が働くよう全員に影時間の知識を与えた。
まさか、あの行動にそんな意図が含まれていたなんて気付かなかった。
彼が説明したおかげで混乱は抑えられ、人々の避難もスムーズに行なわれて被害も最小限で済んだ。
なのに、それが人々の記憶から自分を消すための布石だなんて、実際に世界が変わるまで美紀だけでなく栗原たちだって気付けなかった。
彼のあの行動の裏にそんな意図があったと知った桜たちは、あまりにも徹底した彼の行動に呆れていた。
望まれて生まれてきたのだと知り、この世界で生きて良いのだと自分を許せるようになったはずの青年が、そこまで自分の痕跡を世界から消そうとした理由は分かる。
だが、彼の記憶を保持したままでいる者たちにすれば、そんな事に全力で取り組むくらいなら彼の死を知っても少女たちが傷つかない方に努力して欲しかった。
故に、美紀は彼の事を恨み続けて赦さないと決めた。
美紀自身が彼に抱いていた想いは恋にすら到っていない淡い物だ。
それでも、五年間傍で過した友人として、記憶を保持している他の者たちと同じように彼の死を悲しんでいる。
自分の兄や友人たちに真実を告げられない事も苦しく、こんな想いを自分にさせた湊を絶対に生涯忘れず恨み続けると彼女は決めた。
美紀から相談を受けた栗原たちにすれば、それは恨みではなく彼を想っての誓いでしかない。
共に戦った仲間ではなく、学校の友人として過した少女がただ一人彼の事を覚え続けてくれる。
それはそれでとても幸せな事だろうと、桜や英恵は母親として美紀

に深く感謝した。
そして、そんな密かな誓いを立てた少女がショッピングモールの中を進み、栗原の営む古美術眞宵堂の傍までやってくると、噴水の近くに置かれたベンチに知り合いの姿を見つけた。
「アイギスさん？」
美紀が視線を向けた先には制服の上にコートを着たアイギスが、とくに何をするでもなくボンヤリとした表情で座っているのが見えた。
今日はチドリのバイトは入っておらず、総合芸術部の活動も休みなので、アイギスの友人たちもテスト勉強をしないのであれば暇なはずだ。
だというのに、アイギスは一人でベンチに座ったまま、ボンヤリと人混みの方へと視線を向けている。
そちらに何かあるのだろうかと視線を追ってみれば、妻や子どもと一緒に歩く暗い色のマフラーを巻いた背の高い男性がいた。
先ほど自分も同じようにマフラーを巻いた男性を目で追ったり、コートを着た男性をつい見てしまったりしていたので、もしやアイギスも記憶が残っているのだろうかと考えてしまう。
しかし、美紀は思い付いた考えをすぐに否定する。記憶が残っていればアイギスが平静でいられる訳がないからだ。
そう。アイギスは何も覚えていない。なのに、無意識の行動か彼のトレードマークだった物と似た物を身に付けた男性を目で追ってしまっている。
忘れていても残っている物がある。そう理解した美紀はアイギスの許まで近付くと声を掛けた。
「アイギスさん、こんにちは」
「……あなたは、真田美紀さん」
「はい。Ｅ組の真田美紀です」
記憶を失う前と違ってアイギスと美紀の繋がりは薄くなっている。
相手からすれば姉と同じ部活に所属する同級生くらいの認識だろう。
それでも名前を覚えていてくれた事に安堵し、相手の視線が自分に

向けられると美紀はここで何をしているのか尋ねた。
「今日はラビリスさんは一緒じゃないんですか？」
「はい。姉さんはテスト勉強を始めるそうで、わたしは少し考え事をしたかったので一人で散歩していました」
「考え事ですか？」
「はい。といっても、何を考えようとしているのか自分でも分かっていないのですが」
　美紀に話しかけられて意識が覚醒した様子のアイギスは、そう答えてから苦笑して視線を地面に落とす。
　アイギス自身もどうして自分がこんな場所に来たのかよく分かっていないのだろう。
　だからこそ、美紀からの質問の答えにちゃんとなっているのか不安に思っている様子だ。
　美紀は相手が何について悩んでいるのか察しており、けれど、湊が何のために痕跡を消し続けたのか分かっているから答えを教える事が出来ない。
　ただ、それ以外の部分なら助言も出来ると美紀は口を開いた。
「……アイギスさん、その悩みは忘れないでください。ちゃんと、考え続けてしっかりと思い出してください」
「思い出す？　美紀さんはわたしが何について悩んでいるのか分かるんですか？」
「正確には分かりません。でも、貴女の本当の心は全てを忘れた訳じゃない。それだけは断言出来ます」
　助言しているつもりだったが、美紀はこれでは何の助けにもならないだろうと思っていた。
　それでも、少しでも彼女が記憶を取り戻す切っ掛けになればと言葉を続ける。
「分からなければラビリスさんや寮の皆さんに相談するといいでしょう。いえ、すべきです」
「あなたは一体何を知っているんですか？」
「……お願いします。絶対に、絶対に思い出してください。そうじゃ

なきゃ、あまりにも報われない」
美紀はアイギスの問いに答えることが出来ない。
言ってしまえば、きっと彼女はすぐに答えに辿り着いてしまう。
ここから自分で思い出すのなら構わないが、そうでなければ美紀は湊の望みを尊重する気でいる。
こんな中途半端で支離滅裂な事を言われてもアイギスだって困るだろう。
言った本人もそれは分かっているが、これが彼女が相手に教えられる精一杯だ。
「ゴメンなさい。でも、これ以上は教えられないんです。ただ、アイギスさんの悩みは気のせいではありません。それは断言出来ます」
「よく分かりませんが、何かしらの事情があるのは理解しました。美紀さんに言われた通り、これが気のせいでないのなら、姉さんや皆さんと話して悩みの正体を見つけてみせます」
「……ありがとうございます。よろしくお願いします」
それだけ言うと美紀はアイギスと別れて元来た道を戻ってゆく。
本当は栗原に相談しに行くつもりだったのだが、アイギスと接触して事態を進めてしまった。
これ以上美紀にどうする事も出来ない以上、後はどうなるか見守るしかない。
どうか思い出してくれるように祈り、美紀はそのまま自宅へと帰っていった。

第四百五十七話　思考の人影

２月１８日（木）
放課後――月光館学園
先週末にポロニアンモールで美紀と出会ったアイギスは、彼女が何を伝えたかったのか考えていた。
自分でも何かが気に掛かっているような感覚はずっと覚えている。その自覚はある。
ただ、それがどういった事柄に関するものなのかが分からず、他の者に相談すると言ったもののテスト前という事もあって未だ相談出来ずにいた。
そんなアイギスは放課後になってテスト勉強のため図書室へやって来ていた。
別に寮の私室で勉強しても良いのだが、ここならば授業で使う資料なども置いてあるため、分からない部分について調べやすいという利点がある。
何より、テスト前という事もあって図書室には他の生徒も勉強しに来ていた。
プライベートスペースで一人だと気が散りやすい者にとって、勉強以外に出来る事がなく周りにライバルがいる状況というのは勉強に集中しやすい。
本格的には勉強していなくとも、テストの時に提出する課題に取り組むだけでも集中によって大きく理解度の差が出る。
特別勉強が得意という訳でもないアイギスには、勉強の質や密度を上げるこういった方法の方が合っていた。
歴史科目のプリントで穴埋め問題の答えを探すため、アイギスは資料集のページを捲りながら考える。
（わたしが何かを忘れている……美紀さんはそれが何かを分かっている。でも、わたしと彼女にはそれほどの付き合いはありません）
見つけた答えの載っているページに目を通して、その出来事の起こった経緯について把握しながら彼女はプリントにペンを走らせる。

授業の板書を写したノートに書かれていないため、これが実際にテストに問題として出るかは微妙なところだ。
ただ、テスト範囲の歴史の流れについて考える上で、それなりに重要ではあるため配点を少なくして選択問題としてなら出るかもしれない。
筆箱の中から蛍光色の付箋を取り出すと、アイギスは一枚剥がして資料集のページにそれを貼り付けた。
目は資料を追って、手はしっかりと勉強をするため動いている。
けれど、アイギスの心は先日の美紀との会話について考え続けている。
そもそもの前提として美紀はアイギスの友達ではない。彼女は姉であるラビリスの友人で、その伝手で知り合った同級生というのが彼女の中での認識だ。
学校で会えば挨拶をするし、先日のように街中で偶然会ったときも言葉を交わしたりはする。
もっとも、本当にそれくらいの付き合いでしかなく、買い物に一緒に行った事はあるが姉や寮の友人らも一緒にいたので、美紀個人とそれほど深く会話はしていなかった。
どうしてそんな美紀があの時はアイギスに話しかけ、あんなにも何かを訴えかけるような様子だったのか。
本当に何かを言いたいのであれば、姉であるラビリスをはじめとした部活メンバーたちに伝えればいい。
彼女たちは中等部時代からの付き合いで、部活の合宿で一緒に泊まりの旅行へ行ったりをしている。
普段から仲も良さそうなので、深い悩みであっても全員で真剣に考えてくれるに違いない。
美紀の言葉を信じるのであれば、アイギスがここ最近引っかかっているこの感覚は、彼女だけでなくラビリスやチドリに寮生らも無関係ではないらしいのだ。
だからこそ、どうして現時点で彼女は付き合いの薄いアイギスにしかそれを伝えていないのか疑問が残る。

（美紀さんがわたしに話しかけたのは偶然？　本当は誰にも伝える気はなかった？）
もしかすると、本当は誰にも伝えるつもりがなかったのかもしれない。
アイギスに話したのは、偶然出会った際、彼女が話さずにいる事柄について少しでも違和感を抱いていたからなのだろうか。
といっても、アイギス自身、自分が何について引っかかっているのか分かっていないのだ。
彼女は思い出せと言っていた。であれば、アイギスは当然として美紀が相談すべきと言っていた者たちにも共通した事柄の記憶に違いない。
もっとも、寮生だけでも、二年生だけでも、姉の所属する総合芸術部だけでもない共通の思い出などアイギスには心当たりがない。
寮生の話をするなら、同級生はそれなりに話をしたりもするが、三年生たちとは付き合いが薄い。
ゆかりなどは美紀経由で知り合った真田と荒垣とも話をしているし、以前から知り合いだったという七歌と美鶴も話しているのを見かける。
アイギスも会えば挨拶をするので、仲が悪いという訳ではないのだが、それほど親しくはない。
寮生でもない総合芸術部の者と桐条美鶴などほとんど接点がないと言っても良いだろう。
そんな者たちが全員関わっている事とは一体何なのか。どうして美紀はそれを自分たちに話せないのか。
悩んだアイギスはペンを置くとふうと静かに溜息を吐いた。
（分からない……。美紀さんの目的も、何をどうしたいのでしょうか。思い出すだけで良いのか。それとも、その先に何かがあるのか……）
彼女の言葉で最も印象に残っているのは、自分たちが思い出さないと〝報われない〟存在がいるという事だ。
言い方からすればそれは人物だと思われる。
その人物が何かをしてくれて、それなのにアイギスたちは忘れてし

まっている。
だから美紀はその人物の事を思ってあんなにも泣きそうな顔で思い出すよう頼んできた。
相手はアイギスたちに思い出して貰おうとは思っておらず、恩に着せようなどとは考えてすらいないのかもしれない。
しかし、事情を知っている美紀にはそれが耐えられなかった。相手を哀れに思ったのか、それともアイギスたちの不義理に憤ったのか。
恐らくは前者だと思うが、十人以上いる自分たち全員がそこまで恩義を感じるべき事を忘れている事に新たな疑問が湧いた。
（わたしたちは何を忘れているの？）
アイギスが何か違和感や引っかかるものを感じるようになったのはここ最近だ。
だとすれば、思い出すべき記憶はそれと近い時期にあったことだと思われる。
目を瞑り、何かあっただろうかと記憶を遡る。
そんな大勢で参加した出来事など学校行事くらいしか思い出せないが、学校行事だとまとまって参加というより個別に参加している感が強い。
直近では大きなイベントだった修学旅行はもっと前で、その行事に初等部の天田は参加していないので対象外。
では他に何かあるかと考えてみるが、本当に何も思い付かずアイギスは勉強の手を止めた。
（美紀さんの言う通り相談するしかないんでしょうか。分からない。思い出せない。一体誰なの？　貴方はわたしたちに何をしてくれたの？）
いくら考えても心当たりがない。自分一人ではどれだけ悩んでも無理なのだろうかと再び溜息が溢れる。
自分の知らない誰か。恩人と思われる誰かのことを思い出せないのはとても悔しい。
心の中でぼんやりとした人影を想像し、姿の見えない相手に手を伸ばす自分を想像して、イメージから記憶を手繰り寄せようとしてみ

た。
　こんな事をしても意味はない。そんな簡単に思い出せれば苦労はない。
　あまり集中出来ていないため、諦めて今日の勉強を終えようかとアイギスが閉じていた瞳を開けようとした時、思考にノイズが走ってぼんやりとした人影に一瞬だけ色がついた。
（っ……今のは？）
　本当に一瞬の事だったのでそれが誰なのかは分からなかった。
　ただ、髪の長い人物が黒いマフラーを巻いていたのだけは見えた。
　これが美紀の言っていた相手なのか。記憶が新鮮なうちにもう一度先ほどの光景を思い出そうとするが、思考が定まらずどうしてか上手く思い出すことが出来ない。
　むしろ、ほぼ唯一と言える見えた物の記憶すらも急速に忘れそうになる。
　ダメだ。このままでは記憶が消える。アイギスは咄嗟にペンを取って〝長い髪〟〝黒いマフラー〟とメモを残して〝忘れるな〟との注意書きも書いた。
　それをギリギリ終えると、もう既に先ほど見えたはずの光景は全く思い出せなくなった。
　こんな事はあり得ない。夢だって起きてから少しは覚えていられるというのに、ここまで急速に自分の記憶から消えるのは不自然に感じる。
（……これがわたしたちが忘れてしまった事なの？　どうしてこんなに覚えていられないの？）
　人影が見えた事だけは覚えていられたが、性別や髪型、服装すらどんな姿だったのか思い出せない。
　まるで本能がそれを拒んでいるかのように、思い出そうとすると、それついて考えようとすると思考が鈍ってゆく。
　このままでは忘れた記憶の中にいる人影が見えた事すらも思い出せなくなるかもしれない。
　アイギスは荷物をまとめるとすぐに図書室を出て、先ほどの取った

メモを携帯で撮影すると待ち受け画面に設定した。
こうしておけばメモの存在を忘れても大丈夫。自分がこれを意識出来なくなったとしても、待ち受け画面を見た者が反応して、それを切っ掛けに自分も思い出せるかもしれない。
今の自分の身に起きている不思議な現象によって、美紀の言葉が真実である可能性が高まったと思ったアイギスは、他の者たちに相談する前にまずは美紀に連絡を取る事にした。
姉経由で出会った時に連絡先は交換している。図書室を出て生徒玄関へ向かう途中に電話を掛けると、コール音が数回鳴ってから相手が電話に出た。
《はい、もしもし？》
「美紀さん、少しお尋ねしたい事があります。先日話してくださったわたしたちが忘れた記憶に関する事です」
単刀直入に話題を切り出せば、電話の向こうから聞こえる相手の息遣いが少し固くなった。
相手もどこか必死だった様子から、彼女自身にとってもかなりデリケートな問題なのだろう。
ならば、自分たちが思い出す事にもある程度なら協力してくれるはずだと、アイギスは既に思い出せなくなった記憶の中の人影について美紀に質問した。
「図書室で勉強しながら考えていたとき、思考に一瞬ノイズが走ったんです。その時、見えた人影について確認したい事があります」
《……私に答えられる事でしたら》
「正直に言えば、一瞬だけ輪郭がハッキリしたようなもので、既に見えたはずの光景は思い出せなくなっています。あまりにも急激な事で、それについて考えようとすると思考がぼやけるので、心理的なものかは不明ですが、その記憶について思い出さないように反応している節があります」
この思い出せなくなっている状態が本能や忘れた記憶の中にある何かの働き掛けであれば、それはアイギスの脳自体が思い出すべきではないと無意識に制限しているのだと思われる。

目の前で凄惨な事故を見てしまったり、身内の不幸によって心の平穏が崩れたときには、心を守るためにそういった事が起きるという。
もしも、これがそれと同じ物ならアイギスは記憶を取り戻すべきではないのかもしれない。
思い出しても不幸にしかならないとすれば、忘れていた方が幸せでいられるはずだ。
美紀に説明しながらアイギス自身もそういった可能性についてしっかりと考えたが、彼女は結局前に進む道を選ぶ事にした。
「それでも、わたしは忘れた記憶があるなら出来れば思い出したいと思いました。ですから教えてください。一瞬だけ見えた光景に関するメモで、〝長い髪〟〝黒いマフラー〟、これらはわたしが忘れた記憶に関係していますか？」
これで関係ないと言われれば話は振り出しに戻る。
そんな状況で他の者に相談しても意味はないので、美紀からの返答によっては姉や寮生らへの相談も中止しようと思った。
そして、アイギスが尋ねてから少し間が空き、一体どちらだとアイギスが焦れ始めた時に答えが返ってきた。
《……関係しています》
「間違いないですか？」
《はい。特に黒いマフラーはあの人のトレードマークでした》
「分かりました。ありがとうございます」
ヒントは得た。アイギスはすぐに先ほどのメモを取り出して、黒いマフラーの方に相手のトレードマークという情報を書き込む。
それを再び写真に撮って待ち受けに設定すると、アイギスは他の者たちに相談するため、忘れた記憶を思い出そうとしながら寮へと帰っていく。
大したヒントではないが切っ掛けにはなる。これを足掛かりにどうにか思い出してみせる。
気合い十分に帰っていくアイギスは、モノレールに乗ってからもずっと記憶を思い出そうと考え続けた。
だがしかし、その途中、アイギスが記憶を思い出そうとするほど思

考に再びもやが掛かり、巌戸台の駅に着いた頃には〝寮生らに相談する〟ということ自体を忘れてしまっていたのだった。

第四百五十八話　続けられる研究

２月２１日（日）
午後――ＥＰ社
あの戦いから三週間が経った。影時間はなくなり、無気力症患者たちも徐々に回復して社会復帰を果たしている。
無気力症になっていた期間が数ヶ月に及んでいた者たちも、懸念されていた後遺症などは見られず、単純な筋力の衰えによるリハビリ治療程度で済んでいる。
社長室で病院からの報告書に目を通したソフィアは、これであの戦いも本当の意味で終わったと言えるのだろうと小さく笑みを溢す。
（……これで湊様の願いは叶ったと言えるでしょう。貴方の戦いは無駄ではなかった）
書類を確認済みのカゴに移すと、ソフィアは置かれていたカップに手を伸ばして紅茶に口をつける。
自分で淹れたものだが、味も香りも及第点、昔と比べて随分と上達したものだと自身の成長をこんなところで自覚する。
思えば昔の自分は才能があるせいで何でもそれなりにこなせてしまい。努力することや上達を目指すということがほとんどなかった。
湊の下についてからは彼の機嫌を伺うように進んで雑務を請け負い。それらを繰り返す内に自然と色々な事が出来るようになっていた。
紅茶の淹れ方もその一つで、湊はどちらかといえばコーヒー党だったが、仕事で使うスキルの一つだからと随分と淹れるのが上手だった。
部下としてお茶の用意もしていたソフィアにとって、主人よりも淹れるのが下手という状況は看過出来るものではなく、自分で淹れた方がマシだと言われるまでに改善せねばと必死になった。
（出来ればずっと隣でその役目を続けていたかったものですが、そう上手くはいかないものですね）
彼の隣で仕事を続ける内に、ソフィアも人並みの幸せというものが

どういったものか理解出来るようになった。
以前は悪趣味な余興を楽しんで、それでも世界はつまらないと思っていたというのに、心をへし折られて彼の代わりにＥＰ社の顔役として働くようになったらこれである。
ＥＰ社の仕事と並行して影時間や生体義肢の研究を行なってはいたものの、それ以外では会社の代表と湊の秘書として忙しく働いていただけ。
自分へのご褒美として湊と個人的な時間を過すこともあったが、出会いなどを別にすれば湊とソフィアはそれほど特別な事はせずに日々を過していたように思える。
それこそ以前のソフィアが平凡でつまらないと見下していた物であり、自分には一生縁がないものだと思い込んでいたものだっただけに、昔の自分は随分と狭い価値観で生きていたと自嘲せずにはいられない。
影時間がなければ恐らく彼には出会えず、今も自分こそが世界の中心かのように振る舞い続けていただろう。
けれど、自分と彼を出会わせてくれたその影時間が、今度は自分から彼を奪っていった。
これでは感謝などしてやれない。上げて落とすくらいなら以前のままで良かったとすら思ってしまう。
文句を言う相手がいないので愚痴はあくまで心の中で呟く程度だが、三週間経ってもその愚痴は減ってくれないため、これでは営業妨害だぞと会社の代表という立場で新たな愚痴をこぼす。
（あの方がこの場にいれば、恐らく真面目に仕事しろと仰るのでしょうね。でも、いないのだからこの愚痴もしょうがないのです。ええ、本当に）
紅茶を飲み終えたソフィアは、腕を上に上げながら背中を反らせて身体を伸ばす。
元からそれなりにサイズのあった胸は湊のおかげでさらに成長した。
そのため、男性がこの場にいれば目の毒だと気まずそうに視線を逸

らすのだろうが、ソフィアがこんな風に無防備な姿を晒すのは一人の時か彼の前だけと決めている。
彼の学友である女子たちがその話を聞けば、あざといと批難してくる事は間違いないが、その時は自分と彼はお互いの初体験の相手なのでとジョーカーを切って挑発してみせるつもりだ。
もっとも、彼女たちの記憶が戻らない限りはそういった話をする機会はなく、彼がいないのであればライバルたちを牽制する意味もない。
そろそろ真面目に仕事をするかと席を立つと、ソフィアは社長室を出てＥＰ社地下の研究区画へと向かう。
かつては影時間に関する研究を行なっていたが、影時間が消えた事で今はそのほとんどの研究を凍結している。
例外的に続けている研究は湊が残した生体義肢に関する研究で、黄昏の羽根というオーパーツを利用している事もあり、まだまだ表に出すことは出来ない。
だが、研究主任であるシャロンが引き続きそれらの研究は進めており、そう遠くない未来に本人の細胞から造った生体義肢の移植手術なども出来るようになっていくのではと期待が持たれている。
長い廊下を進んでさらにセキュリティの掛かったエレベーターで地下へと向かい。さらに幾つものセキュリティの掛かった扉を潜ってようやく研究区画に到着したソフィア。
部屋の中に入ると、今も白衣を着た研究員たちが真剣な表情で機械や書類に向き合っている。
この場では挨拶は不要だと事前に言っているため、ソフィアは目的の人物を見つけると彼女の許まで進んで声を掛けた。
「ごきげんよう」
「ハーイ、どうしたの急に？　何か連絡でもあったぁ？」
だらっとした姿勢でパソコンの前に座っていたシャロンに声を掛けると、シャロンはすぐにパソコンの画面から顔を上げて挨拶を返す。
彼女の研究は簡単には進まないものばかりなので、普段はそこまで

気を張っていない事もあって声を掛けても大体は返事を返してくれる。
傍の空いていた椅子をソフィアに勧めつつ、彼女が席に腰を下ろして先ほどの問いに答えるのを待つ間もシャロンは笑顔を浮かべている。
この様子からすると研究の方で何か良いことでもあったのだろう。
そう思いながらソフィアは別に仕事で用事があった訳ではないと首を振る。
「別に仕事の用事ではありません。それぞれの部門の代表者に任せていますから、わたくしから直接個別の部門に話を通すことはほぼなくなりました」
「でもぉ、ここでやってるのは表に出せない研究でしょう？　だから、そういうお話じゃないのかしらって思ったのよぉ」
世間向けの仕事もこの研究区画で密かにやっている仕事も、ＥＰ社の大事な仕事である事には違いない。
表のＥＰ社で働いている社員たちは、久遠の安寧という裏組織の事は知らないし、湊をトップとして数世代先の医療研究を行なっている事なども知らない。
だが、その裏側の仕事をしている者たちは、湊の過去や影時間などについても知っているので、突然やって来た会社の代表がそれ関連で話をしに来たのではないかと予測することが出来た。
言われたソフィアはそんなに自分は分かり易いだろうかと顔を触り、特別表情には出ていないことを確認すると、改めてシャロンの指摘した裏の仕事に関わる話で合っていると頷く。
「そういう事でしたら仕事の話で合っています。特別課外活動部やあちらの記憶持ちの方の経過調査書はこちらに届くようになっていたはずですが、その後、何か変化はありましたか？」
「うーん。真田美紀って記憶持ちの子がアイギスちゃんに接触したみたい。でも、直接影時間について教えた訳じゃなくて、無くした記憶を思い出して欲しいって濁す形で頼んだみたいねぇ」
「それは……どういう意図ですか？」

ソフィアたちも美紀の事は知っているし、彼女が記憶を保持したままだという事も把握している。
まだ桐条グループはＥＰ社の傘下に入っているため、桐条武治から桐条側で記憶の保持に成功した者たちの名簿を受け取っており、ＥＰ社はその者らが特別課外活動部のメンバーに接触しないか監視しているのだ。
ＥＰ社やソフィアたちにとって何よりも優先すべきは湊の意思であり、彼が自分の事を思い出さないように願っていた以上、それを阻もうとする者はソフィアたちの敵である。
勿論、彼女たちの保護者であったり美紀のような近い立場にいる者を四六時中監視する事は難しく、彼女たちの周りの大人たちは基本的に湊の望みを優先している様子のため、警戒しているのは美紀や桐条グループの人間に限られる。
しかし、つい先日の美紀とアイギスの偶然の邂逅のように、どうして妨害が難しいタイミングというものもある。
あれでハッキリと湊や影時間の事を告げようとすれば、強引な手段を取ってでも意識を逸らして話を中断させようと思ったが、美紀自身も湊の想いを優先するべきか、大切だからこそ彼の事を思い出させるべきか悩んでいる様子だった。
それが分かったから監視任務に就いていた者も敢えて妨害せず、今の美紀の様子を報告してきたらしい。
残念な事にソフィアには美紀の複雑な心境が理解出来なかったようで、シャロンに解説を求めれば、相手は少し笑ってから簡単な事だと説明した。
「別に難しく考えなくてもいいわよぉ。美紀ちゃんも悩んでるってだけの話だから。坊やの望み通りアイギスちゃんたちが影時間の記憶を取り戻さず平和に暮らし続けて欲しい。でも、あの子たちのために戦ったのにこれでは坊やが可哀想。そんな感情の板挟みにあったからヒントだけ出したってところでしょうね」
「……別に同情される覚えはないでしょう。あの方は自ら最善だと思う選択をして行動したのです。それをそんな風に同情するなど侮辱

に他なりません」
　不快そうに表情を歪めたソフィアが吐き捨てるように言う。
　それを見たシャロンはコーヒーカップに手を伸ばし、冷めきった中身を一口飲んでから苦笑気味に返す。
「これが本当にハッピーエンドだと思ってるのぉ？　選べる選択肢の中では最善だったかもしれないけど、〝一人殺して助かるか、十人殺して助かるか、百人殺して助かるか〟みたいな選択肢しかなかったとすれば、最善だろうとビターエンドが関の山じゃないかしら？」
　全員が無事で影時間の戦いが終わっていたなら、それは誰もが認めるハッピーエンドで最高の結果だったと言えるだろう。
　だが、湊が選んだこの結末は最高ではなく最善。選択肢の中で最も犠牲が少なく、自身を犠牲だと思っていない青年が選んだ事で結果的に〝犠牲者無し〟になっただけの結末だ。
　彼にとってはそうであっても、他の者から見ればしっかりと犠牲者が出ている。
　実際にソフィア自身も納得しきれていない事から、いくら最善の結果でもこれを手放しで喜んで良いとは言えないだろう。
　シャロンのその指摘に少女は少しだけ考える素振りを見せると、小さく溜息を吐いて今後の方針を指示する。
「今後、真田美紀が同じような行動を取ろうとした場合には妨害するよう徹底してください」
「りょうかーい。ま、貴女が直接言えば聞いてくれると思うけどねぇ。同じ痛みを抱える者同士で気も合うだろうしぃ」
　同じ年頃で彼がいなくなった事に悲しみを覚えている。それならば友人にもなれるのではとシャロンは笑う。
　しかし、言われた少女は、彼の裏の顔を本当の意味で理解出来ていない者とは分かり合えないと思っている。
　故に、これ以上美紀の話題を続けるつもりはないようで、相手の話を無視すると別の話題を出した。
「話は変わりますが月の方はどうなっていますか？」
「んー、特に何も変化はないわね。今もリアルタイムで監視してるけ

ど、時々小さな星が落ちて新しいクレーターを作ってるくらいかしら？」
ＥＰ社の人間は月がニュクスの本体だった事を知っている。
湊はそのニュクスと決着をつけるために身体を取り戻したニュクスに挑み、地球を飛び出して宇宙で消息を絶った。
今も世界が続いている事からニュクスとの戦いは無事に終わり、ニュクスの魂は消滅したか封印されたのだろうと考えられている。
であるならば、残った神の身体である月は中身の無い抜け殻。あれを監視したところで意味があるかどうかは怪しいところだ。
けれど、チドリを蘇生させて死んだ湊は、蘇ってくる時に月から出てきたと話していた。
死後の世界の出口がその場所になるのなら、再び彼がこの世に戻ってくる可能性はある。
そう思ってソフィアはＥＰ社の監視衛星を使って月をリアルタイムで監視していたが、そちらの報告を聞いていたシャロンが変化はないと答えた。
これまでも同じ回答を聞いていたため、ソフィアはシャロンのその言葉に特に落胆は見せない。
あくまで湊が帰還する可能性があるとすれば月からと予想しているだけなのだから、彼女自身もそれほど期待してはいないのだろう。
だが、そんな少女の様子を見ていたシャロンは、少しだけ悪戯っぽい表情を浮かべると言葉を続けた。
「坊やが消えた日から小さな星の衝突以外に変化はなし。でも、それは表側の話」
「表側の……というと？」
ここはそもそもが表に出せない研究を行なっている機関だ。
そんな研究所の調査資料に表向きのものなど存在しない。
シャロンが何の話をしているのか分からずソフィアが続きを促せば、シャロンは机の上に詰まれた書類の中から一冊のファイルを取りだして、何も言わずにそれを少女に渡した。
受け取ったソフィアはまずは中身を見ろという事だと判断し、ファ

イルを開くと中には数枚の書類と共に何かの扉らしき物が写った写真が入っていた。
「これは扉でしょうか？」
「うちの研究員たちもそう認識してる。で、それがどこの写真か分かる？」
「話の流れからして月にあるのですか？」
この流れで見せてきたという事は、写真に写っている扉は月にあるのだろう。
しかし、これまでソフィアが見た月の映像にこんな物は一度も映っていなかった。
仮にそれが見えていたなら、世界中に無数にある観測所や研究所で話題になっているはずだ。
けれど、世界ではそんな事は欠片も話題になっておらず、シャロンの話からすると扉の存在に気付いているのはＥＰ社だけのようだ。
「さっき表側の話って言ったでしょう？　つまり、それは裏側で観測されたものなの」
「影時間に観測されたという事ですか？」
「そういう事。傘下に入れた後に桐条側から提供された過去の研究試作品とかあったじゃない。その中に一定範囲に影時間を展開出来る装置があったのよ。まぁ、発動やら出力が不安定だったんだけど、こっちは坊やのおかげでそういう改良のノウハウがあったからねぇ」
桐条が倒れた事で一時的に不安定になりかけたグループをＥＰ社は傘下に収めた。
現在はＥＰ社側が用意した人間がトップになっているが、桐条の後任として高寺をトップにした新体制への移行が進みつつあるため、数年後には正式に高寺を代表にＥＰ社傘下から抜けて独力でやっていく計画になっている。
だが、傘下に入った以上は一方的な援助を受けるだけとはいかない。
そこで桐条側から提出されたのが、過去の影時間の研究データと関連の試作品の現物や設計図である。

ほとんどはラビリスが保管されていた元研究所に残っていた物で、そんな物で良いのならと桐条側も素直にそれらを渡してきた。
今回の扉の撮影で使われたのはその中の一つで、起動すると一定の範囲に影時間が展開するという黄昏の羽根を搭載した装置だ。
設計図や装置の稼働データのコピーなどもあったため、シャロンたちはそれらを改良して安定した状態で影時間を展開出来る装置を月に向けて発射した。
「装置の大きさと搭載した黄昏の羽根を使い捨てる関係で、直径五十メートルに三十秒の展開しか出来ないんだけどねぇ」
「兵器としてはそれで十分でしょうに。ですが、月の近くで展開した結果、この扉の存在が明らかになったのですね？」
「そういうこと。多分、こっちが影時間対応型の衛星だったから撮れたけど、普通の衛星や望遠鏡じゃ見えないと思うわぁ」
影時間が消えたはずの世界で影時間を展開出来れば、色々と犯罪に使う事は出来る。
しかし、今はそれよりも写真の扉の方が重要だと、ソフィアは鎖が巻き付いた金色の扉の写真を注意深く見つめる。
少女が写真に注目しているのを眺めているシャロンは、一緒に入っていた書類に書かれている内容を簡単に説明する。
「それが現われたのは間違いなく影時間消滅後。ニュクスの監視中には存在しなかった。正確な発生タイミングは分からないけど、何度か影時間展開装置を撃ち込んで今も存在している事が確認出来ているわ」
「これは封印の扉なのでしょうか？」
「外に出さない物か、それとも内に入れないための物か。そこら辺は現状では分からないわねぇ。けど、その扉の発見によって一つ分かった事があるわ」
扉が何かを防ぐ結界のようなものだと推測出来るが、それが外と内のどちらに向けられたものかは分からない。
ただ、その扉が存在し続けている事から、湊がまだ生きて何かをしている事だけはソフィアにも分かった。

「……湊様の戦いはまだ終わっていない、という事ですわね」
「だいせーかい！」
シャロンたちも同じ結論に到ったらしく楽しそうに正解だと告げる。
現実世界は平和になろうと、彼が影時間に残って戦っていると分かった事実は大きい。
ならば、今後はその救出や援護のために準備を進めるべきだと、やる気に満ちたソフィアは頭脳を回転させる。
ここへ来た時よりも随分と良い表情になり、それを見たシャロンが笑みを深めれば、彼女も自分の仕事をするべく席を立って職員らに指示を飛ばした。

第四百五十九話　送別会の打ち合わせ

２月２７日（土）
放課後――月光館学園
その学年の授業で学んだ内容全てが範囲になる学年末テスト。
一週間にも及ぶテスト期間の最終日、終了のチャイムが鳴り、テストの答案が全て回収されると、監督官だった教師が教室を出て行った瞬間に七歌は椅子の上に立って叫んだ。
「シャーッ!!　テスト終了、皆さんお疲れ様でした!!」
『お疲れ様でした!』
七歌が急に叫んでもクラスメイトたちは耐性がついていたのか、素直にお疲れ様でしたとノリ良く挨拶を返す。
しっかりと挨拶が返ってきた事に気分を良くした七歌は、そのままウンウンと頷いて満足げに着席した。
彼女の先ほどのテンションとノリならば、そのまま放課後は慰労を兼ねた打ち上げでも企画し、クラスメイトたちを誘っても不思議では無い。
だというのに、七歌は普通に席に座って近くの席にいた綾時やアイギスに話しかけており、内面はともかく見た目は美少女な彼女と少しでもお近づきなれるのではと淡い希望を抱いた男子たちが小さく溜息を吐く。
周りのそんな様子に密かに気付いていた順平は、担任が来るまでの間に武士の情けで聞いておいてやるよと七歌に声を掛けた。
「おーい、七歌っち。テストお疲れ様の打ち上げとかってやらねーの？」
「なんで？　自分の実力試すだけの物に打ち上げとかいる？」
「え、いやぁ……お疲れ様を共有する感じでさ」
「さっきしたから十分だよ」
定期テストというのは自分の実力を試すためのものだ。
学校の勉強など社会に出ても使わない。使わないものをわざわざ勉強しても意味がない。

そんな事をいう者もいるが、社会に出れば不意のタイミングで実力を試される機会がいくらでもある。
学校の定期テストはその練習であり、将来に繋がるキャリアの積み立てでもある。
故に、七歌は基本的には自分のためのものでしかない物に打ち上げは不要という考え方だった。
バッサリと切ってきたなと思いつつ、心の中で他の男子たちにこれは無理だと謝りながら、順平はそういう事ならと話題をすぐに切り替える。
「ま、それなら良いけどさ。テストも終わったし、そろそろ先輩たちの送別会について集まって話した方がよくね？」
「今その話してたとこ。アイギスにお姉さんとその部活仲間呼んで貰って、寮でお昼食べながらでも話そうかって綾時君らと話してたんだ」
二月も今日を入れてあと二日で終わる。
三年生を送り出す卒業式は三月五日なので、当日か数日後に送別会をするなら準備を始めなければ間に合わないタイミングだ。
参加者は巌戸台分寮で暮らす者たちに、ゆかりや風花の所属する総合芸術部のメンバーを足した十三人。
それと、送別会の間ずっとマンションに置いておくのはあれだからと、ゲストとしてラビリスの飼い犬であるコロマルも参加の予定である。
中々の人数だが会場は寮なので準備は飾り付けや料理にプレゼントくらいなものだ。
それでも先輩たちをしっかりと労うためにいくつかのレクリエーションは行なうつもりなので、テストが終わったこのタイミングで一度全員で集まろうと考えた。
総合芸術部のメンバーはゆかり以外E組に固まっており、アイギスに姉経由で誘って貰えば簡単に済む。
お昼ご飯に何か買っていけば寮で食べながら話し合いも出来るため、何が良いかと話そうとしたタイミングで丁度来たのが順平だった

のだ。
　そういう事ならと状況を把握した順平は、皆でワイワイと意見を出し合うなら良いのがあるぜと提案する。
「皆で話ながら食べるならやっぱジャンクフードっしょ。オレっち的には持ち帰りで安くなるピザとか良いと思いまーす」
「おっ、ジャンクな脳みそしてる割りには良いアイデア出すね。アイギスと綾時君はそれでも大丈夫？」
「わたしは大丈夫です。人数もいますしピザ組と飲み物組で分かれたら良さそうですね」
「うん。僕は荷物が重そうな飲み物の方に回るから、欲しいのがあれば先に教えてくれるかい？」
　順平の提案によってピザを何枚か持ち帰りで注文する事で方針が決まる。
　海外と違って日本のピザはデリバリーだと高いが、持ち帰りで注文すると何枚でいくらとかなり割引が効くのだ。
　割り勘すれば一人千円くらいで済む事もあり、七歌以外のメンバーも順平の案に賛同すれば、ピザ屋に行く者とスーパーに行く者の組み分けに七歌が意見を出す。
「なるほろなるほろ。んじゃ、ゆかりは体重的にピザ組けってーい」
「何が体重的にか。アンタと大して変わらないっつの」
　七歌たちが寮での送別会について話していると気付いてゆかりがやってくれば、やってきて早々に七歌から謂れのない誹謗を受ける。
　しかし、この一年で七歌から何度も同じような扱いを受けていた事で、ゆかりの対処スキルも向上している。
　七歌が体重的にと言った事で、恐らくネットスラングで肥満を表わすピザと掛けていると気付き、ゆかりはお互い大して変わらない体重だとピシャリと返した。
「私はそこまでお尻大きくありませーん」
「胸も削げてるしね」
「削げてねーし！　ちゃんとあるから見ろや！　座って背伸びしたら男子が見てくるくらい普通にあるわ！」

七歌とゆかりでは確かにゆかりの方がお尻は大きい。けれど、それと同じように胸もゆかりの方が大きかった。
別に七歌の胸が小さいという事はないのだが、普通に谷間が出来るゆかりと比べると小さく見える。
それを理解しているゆかりが戦力差で勝ち誇れば、七歌はデカけりゃ良いってもんじゃねぇと周りに男子がいる事も気にせず大声で反論する。
「言っておくけど、今そのサイズなら将来ぜってー垂れるからな！美鶴さんもアイギスもゆかりも将来垂れるの確定だからな！」
「やかましいわ！　つか、教室で何を口走っとるか！」
とんでもない事を口走りビシッと指さしてきた七歌の頭をひっぱたいて止めるゆかり。
七歌の言葉が聞こえてしまった男子らは気まずそうに視線を逸らしており、彼らに非はないというのに女子たちから白い目で見られてしまっている。
さらに、約二名ほど流れ弾を喰らっているが、名前を出されたアイギスは七歌の言葉の意味をあまり理解していないのか首を傾げていた。
一週間にも及ぶテストから解放されたテンションが作用しているのか、クラスメイトらのぐだぐだ感に順平は苦笑すると、丁度担任の鳥海がやって来たため全員が席に着く。
これで二年生の大きなイベントは終わった事もあり、来週に卒業式がある事を除けばいくつかの連絡事項を聞いてすぐに解散となった。
その間に先ほどの七歌の問題発言も流れたようで、クラスメイトたちが教室を出て行くと、七歌たちもE組のメンバーと合流してから学校を出る事にした。

――巌戸台分寮

七歌たちがピザを買って寮に帰ると、綾時と順平を中心とした飲み物組は既に到着して天田と共に待っていた。
初等部も昼までだったようで、ピザを食べながら打ち合わせをする

と聞いて人数分の取り皿やコップを用意して待っていてくれたらしい。
買ってきたピザをテーブルに置き、荷物を部屋に置いて部屋着に着替えてきた七歌たちは、席についてとりあえず食べ始める事にした。
「んじゃ、とりあえず食べながら話を進めていきまーす。残ったら晩ご飯に食べるかもなので無理して詰め込まなくてＯＫでーす」
七歌が全員に声を掛けると、それぞれ好きにピザを取って食べ始める。
一枚で複数の味が楽しめるパーティー向けのミックスタイプではなく、それぞれの味の物を何種類も買ってきた。
やはりここは定番のマルゲリータからだろうと七歌も一枚皿に載せ、タバスコをしっかりかけてから頬張ると、向かい側の席に座っていたラビリスが声をかけてきた。
「先輩らの送別会って話やけど、料理以外に何か用意するものあるん？」
「強いて言うならレクリエーションの案出しとプログラム決めかな。ご飯食べてプレゼント渡してだと一時間くらいで終わると思うし」
全員が全員親しい訳ではないのである程度の配慮は必要とするも、三年生たちだけでなくこの寮で過すのも最後という事で、それなりに無礼講な振る舞いでも許されるはず。
ただ、やはり三年生を送り出す事がメインではあるため、彼らに楽しんで貰えるようなレクリエーションの案があれば提案して欲しいと七歌は頼む。
予算の都合もあるのでお金がかかるようなものは避け、出来る限り身一つで参加出来るような物が望ましい。
他の者たちもそれは分かっているのか食べながら考え込み、サラミがたっぷり載ったピザを食べていた天田が思い付いたようで声をあげる。
「あ、学校に関するクイズとかどうですか？　先輩たちに競って貰って、一位の人に何か景品をあげるとか」
「卒業生向けで良いですね。兄さんもシンジさんも負けず嫌いですか

ら、競い合うのは楽しんで貰えると思います」
「んじゃ、問題の内容は後で詰めていくとして、一つは美鶴さんたち三人のクイズバトルで良いと思う人は挙手！」
自身の兄とその幼馴染みの事をよく知っている美紀が賛成だと言えば、七歌が多数決を取って天田の出した〝学校クイズ〟は見事採用される。
美鶴は初等部から通っており、真田と荒垣は中等部から通っている。
加えて、美鶴は中等部でも高等部でも生徒会に所属していたため、施設に関する事ならかなり詳しいに違いない。
そんな彼女に他の二人が対抗出来るような問題を考える必要があるため、クイズの内容は後ほど詳しく話す事になった。
話し合いが始まってすぐに一つ決まったのは幸先が良い。この調子でドンドン決めていこうと七歌はさらに案を求める。
「ほらぁ、皆も天田君に続いて意見だしてね。意見採用されなかった人らで昼食代割り勘だからね」
「はぁっ!?　いや、オレっちそれ聞いてないんだけど!?」
「順平が知らないところでも新しい法律が決まったり、改正されたりしてるんだよ?　情報に対するアンテナはもっとビッシリ張っておかないとね」
初耳だぞと驚く順平に七歌は情報収集力が甘いと溜息を吐く。
知らないも何も今初めて言っただけなのだが、元からそういうルールだったと信じてしまった順平は途端に真剣に考え始めた。
他の者たちは騙す方も騙す方だが、騙される方も騙される方だと苦笑いを浮かべる。
そうして、その後もいくつかの案が出されては、いくつかの問題点によって却下されたり、こうした方が良いのではと部分的に修正して採用されたりしながら食事と話し合いは進んで行った。
ほとんどのピザを食べ終えてお腹も膨らみ、それぞれがジュースを飲みながら話を続けていると、入口の扉が開いて真田たちが入ってくる。

彼らは久しぶりに制服を着ており、どうやら卒業式の練習で登校していたらしく、大勢が集まっているのを見て少し驚いた表情を浮かべた。
「なんだお前ら、こんなに集まって」
「先輩たちの送別会に向けて話し合い中っす」
「それは本人たちに伝えても良い事なのか？」
「七歌っちから桐条先輩に場所を借りるって伝えてるんで大丈夫ですよ」
こういったイベントの企画は打ち合わせも含めて極秘に進められるものだと思っていた。
だが、三年生を送り出すためのイベントの打ち合わせをしていると、順平がはっきり本人たちに伝えてきた事で、口を滑らせたんじゃないだろうなと真田は心配する。
もっとも、寮生以外の人間をロビーに入れる事もあって、ここで打ち合わせをする事は七歌が美鶴に伝えてあった。
美鶴から自由に使って良いとの返事も受け取っているため、詳しい内容さえバレなければ真田たちに打ち合わせをしている事は話しても問題がなかった。
それを聞いた真田と荒垣は安堵し、誰も使っていないテレビ側のソファーに荷物を置くと、手を洗ってきてそこで買ってきた昼食を食べ始める。
「悪いが俺たちも昼飯がまだでな。食べたら部屋に戻るから、しばらくここにいさせて貰うぞ」
「そういや、日程についてはメールに書いてあったやつでいいぞ。俺もアキも卒業式当日でもなけりゃ別に何も用事ねぇからな」
二人とも昼は持ち帰りの丼を買ってきたようで、真田が牛丼を、荒垣が親子丼をそれぞれ食べながら話す。
流石にこの人数の予定を合わせるのは簡単では無く、自分たちも寮を移る事もあって予定を合わせるのが一番の問題点だった。
事前に最も多忙そうな美鶴から大丈夫な日を聞き、その中から候補を出していた事もあって、二人からも許可を貰えた事に七歌たちも

ホッと息を吐く。
「いやぁ、これでダメだったらどうしようかと思ったよ」
「僕たちも引っ越しがあるからね。卒業式に近い日程しかタイミング的に難しかったから、すぐに決まって良かったよ」
七歌と綾時の言葉に皆も頷き、三年生がいる事でただの雑談をしながらゆったりとした時間を過す。
卒業生代表の美鶴は打ち合わせでまだ学校だが、こうやって大勢で集まる光景も送別会が最後だ。
送別会について話しているとどうしてもそれを意識してしまい。実家通いに戻る風花は寂しそうな表情を浮かべながらしんみりと呟く。
「けど、こうやって大勢で集まる機会ももう無くなると思うと少し寂しいですね」
「……三人卒業するけど、残りは半分が寮暮らしで、半分が通いになるものね。場所の関係もあってもう集まる事はないと思うわ」
寮生では風花が実家通いになって、アイギスがラビリスの家に同居して通うようになる。
元から実家通いだったチドリ、美紀、ラビリスを含めれば、半数が実家通いになって、半数が継続して寮暮らしとなる訳だ。
月光館学園の生徒であれば寮に遊びに行く事も可能だが、異性は基本的に入れないし、この人数で集まって遊べるような部屋もない。
何より、天田以外は受験生。進学に向けて動き始める事もあって、本当にこれが最後の集まる機会という訳だ。
場の空気がしんみりし始めた事もあり、ゆかりも周りの人間を見ながら惜しい気持ちはあるねと苦笑しながら告げる。
「ってか、なんか不思議とこうやって集まると懐かしい感じするよね。そんな集まった機会とか無いんだけどさ。もう集まれないって思うと残念かも」
「あー、なんとなくゆかりちゃんの言う事も分かるわ。何回かここで場所借りてテスト勉強したときに顔合せたくらいやけど、皆で集まって色々したような感じあったもんな」

「美鶴さんとコロマルさんが集まれば全員集合ですね」
コロマルも何度かこの寮にはお邪魔しており、全員と知り合っている。
テスト勉強で長時間家を空ける際に、許可を貰ってここへ連れてきていたのだが、おかげでまだ帰ってきてない美鶴とコロマルを合せれば全員集合といった感じだ。
今度の送別会ではちゃんと集まれるはずなので、全員が集まれる日が楽しみだとアイギスが言えば、彼女の言葉に僅かに俯いた美紀が否定の言葉を入れた。
「……違います。私はその中に含まれていません」
「え、美紀ちゃんどうしたん？」
「その場にいたのは、私じゃありません」
重ねるように〝全員〟の中に自分は含まれていないと告げる美紀。
先ほどまで楽しそうに食事をしながら話していたというのに、急にどうしたのだろうかと周りも心配し始める。
もしや、寮生でない事を気にしているのだろうかと、一緒に遊んだ事があるのに何を言ってるんだとゆかりが聞き返した。
「いや、美紀もいたじゃん。私ら十三人とコロマルで集まった事あるでしょ？」
「皆さんが私だったと思い込んでいるだけで、本当に私じゃないんです」
本人は頑なに否定するが、ゆかりたちの記憶では間違いなく美紀もいた事になっている。
途中で転校してきたアイギスと綾時も美紀が寮に来ていた事は知っているため、どうして彼女はそれを否定するのか分からない。
こうやって集まって送別会の打ち合わせをしている事から、別に集まり自体が嫌という事はないだろう。
だとすると、余計に美紀が自分じゃ無いと否定する理由が分からないのだが、他の者が困惑していると、美紀は真剣な様子で懇願するように続ける。
「お願いします。ちゃんと思い出してください。多分、もう時間が無

いんです。それを過ぎればちゃんと思い出せなくなる」
全員彼女が何のことを言っているのかが理解出来ない。
彼女はふざけておらず、本気で何かを思いだして欲しいと自分たちに願っている事は分かる。
けれど、どうして彼女だけが過去に集まっていたメンバーに自分が含まれていないと思っているのか。また、代わりに別の人間がいたかのように言っているのかが分からない。
その雰囲気から彼女の言葉を信じてやりたいとは思うも、兄である真田ですらあの場にいたのは美紀だと認識しているのだ。
「美紀、調子が悪いなら帰って休んだ方がいい。テスト勉強の疲れが出たんだろう。家まで送っていく」
明らかに様子がおかしいと感じた真田がやってきて、美紀に今日はもう帰って休んだ方がいいと声をかける。
兄に声をかけられた事で、美紀も自分の言葉に周りが困惑していると気付いたのか、真田の言葉に素直に従って今日はこれで帰る事にしたようだ。
送別会の打ち合わせはほぼ終わっていたので、後はここにいるメンバーでもう少し内容を詰めるだけでも問題はない。
ただ、どうしても先ほどの言葉が気になってしまい。アイギスが自分の携帯を取り出して、その待ち受け画面を他の者に見せた。
「あの、皆さん。この写真を見てもらえますか？」
言われて全員の視線がアイギスの携帯画面に集まる。
真田と美紀はいないが、荒垣にも見て欲しいと言った事で、この場にいる全員が画面に映る不思議なメモを見た。
そこに書かれているのは、〝長い髪〟〝黒いマフラー〟という単語。そして、マフラーの方には相手のトレードマークとも書かれている。
これだけでは意味が分からず、画面から顔を上げた者たちがアイギスを見れば、彼女は対先日の事を思い出して話し始める。
「これは一月ほど前にわたしが残したメモです。でも、今日までずっと忘れていました。美紀さんが言っていた〝存在していたはずの人

物〟に関するメモです」
「存在していたはず？　ゴメン、どういう事？」
「詳しくは分かりません。でも、わたしはこれを皆さんに相談するつもりだったのに、すぐにメモの存在も含めて忘れてしまっていたんです。まるで、何かの力がこれを思い出させないよう働き掛けてきたかのように」
　何かが自分の記憶に働き掛けてくるなどオカルトの分野だ。
　普段であればそういった物が苦手なゆかりが、変な冗談はやめろと話を切っていただろう。
　けれど、どうしてだがこれを冗談と切り捨てる事が出来ない。
　それは他の者も同じようで、言い様の無い感覚を覚えながら荒垣が率直な質問をぶつける。
「じゃあ、なにか。お前は美紀からそいつの話を前にも聞いてたのか？」
「はい。美紀さんの話ではわたしたちはこの人物を知っているそうです。でも、忘れてしまっているのだと」
　過去に会った人物全員を覚えている訳ではないので、ここにいるメンバーが全員会っていながら忘れてしまっている相手がいてもおかしくはない。
　ただ、その候補が欠片も思い出せず、これだけでは正解に辿り着くのは難しいだろうと七歌も唸る。
「って言っても、ね。ヒントがこれだけだと流石に難しいと思うんだけど？　性別も名前も聞いてないんでしょ？」
「はい。これはわたしたちが自分で思い出す必要があるらしいんです。でも、美紀さんの様子からすると多分、相手は男性です」
「長い髪なのに？」
「説明は難しいのですが、美紀さんの言葉の端々から感じる相手への印象が、同性に対するものではないように思えたので」
　アイギスのヒントは非常に重要だと思われるが、だからこそ他の者たちは首を傾げずにはいられない。
　美紀がそんなに真剣になる異性など、中等部からの付き合いで非常

に親しい総合芸術部のメンバーですら知らないのだ。
真田がずっと守ってきた事は確かで、そんな美紀に男が近付けば学園内でニュースになる。
それを嫌って美紀が隠し通してきたとも思えず、一向にメモのヒントからは何も思い出せない。
悩んでいる間に美紀を送ってきた真田が戻り、卒業式の打ち合わせを終えた美鶴も帰ってきた。
だが、結局誰も美紀の話の人物について思い出す事が出来ず、一同は何かモヤモヤとしたものを感じながらその日は解散した。

第四百六十話　卒業式

3月5日（金）
午前――巌戸台分寮
三月の上旬。冬の寒さも薄れ、春の訪れを感じられるようになってきた。
本日は月光館学園高等部の卒業式があるという事で、寮生は天田を除き全員が学校へ行っている。
だが、今日は自分たちが学校に行っている間、コロマルを預かっていて欲しいとラビリスに頼まれた事で、珍しく天田とコロマルが揃って留守番をしていた。
朝食を食べ終えた天田は、ソファーの近くで寝転がっているコロマルを視界に入れつつ、特にやる事もないためテレビをぼんやりと眺めている。
朝でも昼でもない中途半端な時間という事もあり、ニュースというよりはゴシップ色の強いワイドショーしかやっていない。
世の母親たちは子どもたちを学校へと送り出した後、少し遅めの朝食を食べながらこういったものを見るのだろうか。
そんな事を考えながら天田が見ている番組では、昨年大ヒットした特撮映画にもゲスト出演していたアイドルの少女が、ハリウッド映画に出演する事が決まったという内容が流れている。
好きな特撮シリーズだった事で天田もその映画は劇場でしっかりと見たが、確かに彼女の女優としての演技は素晴らしかった事を覚えている。
日本の特撮は海外でもコアなファンが多く、今回の出演オファーを出した監督もわざわざ日本でその特撮映画を見て、彼女を次の映画で使いたいと思ったそうだ。
「特撮映画のゲスト出演からハリウッドかぁ。すごいよなぁ、コロマル」
「ワン！」
本気で感動して言っている訳ではなく、何となくすごいなと思った

ため、天田は脱力したままコロマルに話しかけた。
寝転がっていたコロマルは返事をするため顔を上げると、テレビの方を見ながら一鳴きし、ちゃんと返事をしてくれた事に小さく笑って天田はコロマルの頭を優しく撫でる。
番組の方では特集を組んでいるようで、特撮映画の中から彼女の演技が光るシーンが流される。
主人公たちを未来に送り返すための術を使用する超常的な迫力を見せるシーンや、もう一人のゲスト枠のキャストとのコミカルな会話シーンなど、本当に同一人物かと疑ってしまうほど雰囲気が異なっている。
それを見ながら映画の内容を思い出し、ＤＶＤの発売はいつだったかなと携帯で調べようとしたとき、天田は何故かテレビ画面から視線を外せなくなった。
アイドルの少女と若手俳優の青年が、作中の人物を演じて会話をしているだけのシーン。
別に重要なシーンという訳ではなく、本人たちの掛け合いを見せて両者の関係性を観客に理解させるための説明パートのようなものだ。
だが、どうしてだが天田はテレビ画面から視線が外せず、少女と会話している金色の瞳の青年を見つめてしまう。
この俳優の名前は何だったかと、携帯電話で映画のキャスト一覧を検索し、画面をスクロールして目的の人物を探す。
そして、見つけた。
「有里、湊……？」
口に出して見るもほとんど聞いた事がない名前で、特撮映画しか俳優として出演した作品は無いと書いてある。
けれど、天田はどうしてだか、その若手俳優に見覚えがあるような気がしてしまう。
知らないはずなのに知っているような、何とも説明しづらい感覚に天田が難しい表情をしていれば、
「ワン！」
突然コロマルが一鳴きして、見ればいつの間にか寮の入口前に移動

していた。
「コロマル、どうかしたのか？」
「ワンワン！」
「もしかして、外に出たいの？」
「ワン！」
ずっと寝ていて暇になったのか、コロマルは入口の扉前で天田を呼んでくる。
その様子から外に行きたいのかと尋ねれば、天田の言葉を理解しているかのようにはっきりと返事をしてみせた。
別に真冬のような凍える寒さという事も無く、反対の真夏のような暑さという訳でもないため、散歩に行きたいならついて行ってもいい。
ただ、それには着替えなどの準備が必要なので、天田は少し待ってて と声をかけると、出掛ける準備してからコロマルと共に寮を出た。

――月光館学園
天田たちが寮から出掛けた頃、七歌も参加している卒業式は終盤に差し掛かっていた。
学外の偉い人たちからのありがたいお言葉で始まり、先生たちから生徒への激励のお言葉、一人一人名前を読み上げて校長先生から手渡しされる卒業証書授与に、在校生から歌とスピーチの贈り物など、都内でも有名な進学校にしては普通な内容だった。
しかし、それに参加して在校生の席で静かに座っていた七歌は、式が始まる前から何とも落ち着かない気分を味わっていた。
卒業式が終わったら三年生の知り合いたちと少し話して、それから寮に帰るだけの予定である。
それ以外には何も予定は入っておらず、どうしてこうも落ち着かない気分になるのか本人も理由が分からない。
（まぁ、卒業式自体は後は美鶴さんの卒業生答辞くらいで終わりだから、多分、気のせいだったで済むと思うけどさ）
最初は七歌が在校生代表としてスピーチをしないかと誘われてい

たのだが、寮の引っ越しやら何やらがあるからと断っていた。
知り合いの卒業生たちとは個別に挨拶をすれば良いので、わざわざ在校生代表になって苦労する必要はない。
何より、先ほどまで若干涙声になって読んでいた在校生代表のスピーチはとても良い物だった。
こちらへ来てまだ一年しか経っていない七歌よりも、一年生の頃から通っている生徒の方が先輩との思い出も多いだろう。
その思い出一つ一つが宝物だという言葉には、しっかりと心が籠もっていたと七歌も認めるほど素晴らしいスピーチだった。
この変に落ち着かない気分がなければ感動して泣いていた事だろう。そう思ってしまうくらいに、七歌は他の者たちと感動を共有出来ないこの状況に苛立ちを覚えていた。
(本当に何なんだろ。なんか、ずっと心がざわついてるって言うか。……そういえば、講堂に移動してくる時に、美紀さんがなんか言いたそうな顔でこっち見てたけど。この前の話と関係してるのかな?)
特に根拠はないものの、七歌のこの落ち着かない感覚と、美紀の視線の意味は繋がっているように思える。
美紀は前に話した時に時間がないと言っていた。期限までに何かを思い出さなければならないと。
もし彼女の言葉が正しいのであれば、この心のざわつきは忘れてしまっている記憶が今の自分に何かを警告している証なのか。
七歌が難しい表情で顎に手を当てて考え込めば、プログラムが卒業生答辞に移って美鶴が壇上へと移動していた。
大勢の前で話す事に慣れているはずの美鶴も、学園生活での締めくくりという事もあって普段より力が入っているように見える。
講堂中に視線を送ってからしっかりと前を見つめて、堂々とした姿を皆に見せながら彼女は口を開く。
《学園で過した最後の年は、私にとって大役を拝命しての一年となりました。生徒会長の任を果たすにあたり、私は考え、一年前のこの壇上で皆さんに言いました。未来の時間には限りがあるという事から、目を逸らしてはいけないと》

それは七歌がこの学校へ来たばかりの頃、本年度の生徒会役員挨拶で行なった所信表明演説の事を言っているのだろう。
当たり前に思って過しているこの平和な日常が、実はとても貴重な時間だということ。
人生におけるモラトリアムを今しかないからと全力で楽しんで過すのか、それとも望む未来を手に入れるための準備期間として有効に使うのか。
別にどちらが正しいという訳ではなく、本人がしっかり考えた結果であればどちらも間違っていないとも言える。
この場合ダメなのは、休日を無駄に寝て過すような、何も考えず無意味に貴重な日々を過してしまうことだろう。
ただの高校生が言えるような内容ではないなと心の中で苦笑しつつ、しかし、美鶴の話を聞くにつれて七歌の中にある違和感が増してゆく。
《思えばこれを考える機会を与えられたのは運命だったのかも知れません。ご存知の方もあると思いますが、私は昨年、父が病で倒れるという、試練に……》
そう。美鶴の父親は去年の秋に病気で倒れて、しばらくはとても危険な状態にあったらしい。
七歌も知り合いだったため美鶴と一緒にお見舞いにも行ったが、今は順調に回復して杖などの補助を使えば自分の足で歩けるほどになっていた。
受験を控えた状態であんな事があれば誰だって動揺するだろう。
けれど、美鶴は動揺しつつも自分のやるべき事を考え、なんとか立ち直って試験にも臨んでいた。
あの経験があったからこそ、彼女はそれを乗り越えて一回りも二回りも成長出来たと話そうとする。
だが、七歌はそこでこれまでで最も強い違和感を覚え、桐条が倒れた原因は病気なんかじゃなかったという確信を持っていた。
どうしてそう感じたのか。理由は分からないのに絶対に違うという確信がある。

頭に手を当てて七歌は真実はどうだったかを思い出そうとする。
それと同時に話していた美鶴も、何やら困惑した表情を浮かべて言葉に詰まっていた。
《病に……倒れた……？》
七歌と同じように、話していた本人も突然自分の言葉に違和感を持ったらしい。
会場にいる者たちは美鶴がスピーチで詰まるなんて珍しいとしか思っていないようだが、彼らはこういった場だから色々と当時のことを思い出してしまったのだろうと勝手に納得している。
けれど、そうではない。今の美鶴は自分と同じように何かに気付きかけているのだと七歌には分かっていた。
周りを見てみれば、先日寮に集まった他の者たちも何やら動揺をみせている。
彼らもまた何かに違和感を覚えて、自分たちが忘れてしまった何かに辿り着こうとしていた。
《そ、それまで当たり前だと思っていた日常が突然崩れ。不安や、絶望に押し潰されそうになったとき……私は大勢の人たちに支えられ、助けられ、一人で抱え込む必要はないのだと教えられました。そして、失って初めて当たり前だと思っていた日常の尊さに気付き……》
なんとか続けようとしていた美鶴の言葉がそこで止まる。
違うのだ。支えたのも、助けたのも、順序が違う。
美鶴の父親を助けてくれたのは大勢の人間なんかじゃなかったはず。
焦燥感に駆られながら必死に〝何か〟の記憶を七歌は取り戻そうとして、どこかにヒントはないかと周りに視線を向ける。
美鶴が急に黙り込んだ事でざわついている生徒や教師たちに視線を走らせ、答えに繋がるものを求めて七歌の視線が講堂の側面にある窓ガラスに向いた時、外で風に巻き上げられた桜吹雪が舞い散った。
「……あ」
ざわついているはずの講堂の中で、不思議と七歌の声はよく響いた。

その声の主に気付き、彼女の視線の先を追った他の者たちも、太陽の光を浴びてキラキラと輝く桜吹雪を見た。
そして、思い出す。自分は、自分たちは、冬の間に光る雪を見ていたと。
死が降りかかり、絶望に飲まれそうになりながらも、命の光に守られながら滅びに抗った事を。
「あ、ああっ……」
あの日の事を思い出した途端、失っていた記憶が次々と蘇ってくる。
寮に集まったのは単なる友人や知り合いなんかじゃない。命を預けるに値する掛け替えのない大切な仲間だった。
未来に辿り着き、取り戻した日常の世界でまた会おうと約束を交わした。
絶対に、誰一人欠けることなく、約束を果たそうと誓ったはずなのに、自分たちはこの場にいない彼のことを存在ごと忘れてしまっていた。
記憶を取り戻した瞬間から涙が溢れて止まらなくなる。
「なん、で……っ」
自分たちが望んだのはこんな未来じゃなかった。
せっかく辿り着いたというのに、滅びに抗うことが出来たというのに、奇跡を手繰り寄せ明日に繋いでくれた本人がいない。
前回命を使い果たした時とは違う。上手く説明出来ないが、彼が帰ってこなかった事で七歌は不思議ともう彼はこの世界にいないのだと解ってしまった。
壇上にいる美鶴も記憶を取り戻し、全てを理解したことで涙を流している。
だが、この学園における自分の役割を果たすため、何度も詰まりながらも用意していた原稿を彼女は何とか読み切ってみせた。
他の生徒や保護者たちには別れを惜しむ涙だと思われているのだろう。彼女の涙につられて他の生徒たちも感動し涙を流している。
しかし、俯き肩を震わせながら泣いている七歌たちは、美鶴の流す

涙の意味をちゃんと理解していた。
種類は違えど、講堂内は多くの涙に溢れながら式が進み、そうして、その日三年生たちは無事に学園を卒業したのだった。

第四百六十一話　約束の場所で

午後――月光館学園・屋上

少し早い桜の開花によって、新たな門出を祝福されているかのように無事卒業式は終わった。

友人や恩師、先輩後輩との別れに涙を流しつつも、最後は晴れやかな表情で生徒たちは学校を去って行った。

解散した後に校内や校門前で写真を撮っていた生徒や保護者も既に帰り、そうして、校内もようやく静かになった頃、屋上には数名の少年少女が集まっていた。

卒業式に参加していたメンバーだけでなく、コロマルに案内されるままに学校へ来た天田も記憶を取り戻しこの場にいる。

帰路についた生徒たちとは対照的な、怒りや悲しみ、悔しさを滲ませた表情を浮かべ、街を一望出来る位置まで進んだ真田が感情のままに目の前のフェンスを殴りつける。

「クソッ!!」

殴りつけたフェンスが激しく揺れ、拳をぶつけた箇所がその威力に負けて僅かに拉げる。

ボクサーの命とも言える拳を痛めようと気にしない。そんな事を気にしていられない。

普段、学校行事などそれほど思い入れはないと考えていた真田も、高校生活の最後を飾る今日という日は楽しみにしていた。

中等部から数えれば六年も通っていたのだ。母校としての愛着もあり、思い出が多く残った学び舎を胸を張って出ていこうと朝までは考えていた。

しかし、彼やその仲間たちは全てを思い出した。美紀が言っていた自分たちが忘れてしまっていた記憶を、あの最後の戦いのことを。

「確かに世界は平和になった。俺たちは明日に辿り着くことが出来た。こうやって再びこの場所に集まるという約束だって果たすことが出来た。だが、こんな結末は望んじゃいなかった!!　仲間を犠牲にして得た結果になんの意味があるっ?!」

戦いに臨むとき、全員で未来に辿り着ける可能性は低いと思っていた。
幾月やストレガたちだって必死だった。本気で自分たちを殺そうとして、彼らも彼らの望む滅びへ辿り着こうとしていたのだ。
数で勝っていようとも殺しを躊躇わない者たちを相手に、何人が無事でいられるかなど分かるはずもない。
それでも、あの日の戦いで七歌たちは全員が勝利を拾ってニュクスと対峙する事が叶った。
もっとも、七歌たちに出来たのはそこまで。敵の力の一部を使って戦っていた七歌たちでは、最初からニュクスと戦う事など出来なかった。
「……そういえば、飾ってあった写真。いつの間にかなくなってたわ。多分、湊君が回収か処分したんやろうね」
「なら、有里の野郎は最初から自分が帰って来れないって知ってたって事かよっ」
影時間に関する記憶を失っている間の自宅の光景を思い出してラビリスが溢す。
彼女が湊と暮らしていたマンションの部屋は、いつの間にか一部屋空いていて、そして自室に飾っていたはずの写真などがいくつかなくなっていた。
記憶を失っていたラビリスは、巌戸台分寮を出たアイギスが引っ越してくるから空けていたと認識していたが、どうやら戦いに出る前に湊が密かに自分の痕跡を処分していたらしい。
影時間の記憶を失うだけであれば、湊が自分の痕跡を消さずとも勝手に記憶の補整が掛かって誰も何も気にしないまま日々を過していたはず。
それなのに、彼は私物だけでなく自分が写っている写真まで処分していた事から、戦う前からこうなると分かっていたに違いない。
ラビリスの言葉からそれを察した順平がなんでだよとやりきれない気持ちのまま叫ぶ。
すると、泣いて目を赤く腫らした七歌がベンチに座ったまま、他の

者に聞こえるようにあの戦いの途中で立ち寄ったベルベットルームでの事を話し始めた。
「タルタロスの頂上でシャドウの群れに呑まれた時、意識だけがベルベットルームに行ったの。そしたら、そこに八雲君がいてさ。契約を果たして、最後の鍵を取りに来たって言ってた」
「八雲さんの契約には死にまつわるものがありました。そして、最後の契約は〝命のこたえを見つける〟だったはずです。それらを果たし終えたという事は、やはり最初からニュクスとの戦いで自分の命を使うつもりだったのでしょう……」
あの時、湊と共にベルベットルームにいた七歌は、彼が全ての契約を果たし終えていた事を知っている。
今のあの部屋の主であるイゴールが言っていたのだから間違いはないだろう。
そして、彼の契約内容を知っていたアイギスは、それらの契約が果たされる意味を理解し、彼だけはあの戦いの先を見ていなかった事を知った。
どうして、と問いたい気持ちが心の中で渦巻き続ける。
今更悔やんだって意味はない。あの時、彼以外にニュクスと戦える者はいなかったのだ。
本人だって生き残る方法があればそうしたに違いない。
であれば、彼に心の力を送るくらいしか出来なかった者たちが何を言おうと、彼のとった行動と選択こそが最も犠牲が少ない解決法だったという事だ。
無論、頭ではそう理解しても素直に納得出来る訳ではない。一歩離れた場所で腕を組んで黙っていた荒垣が口を開く。
「……美紀、お前は何も聞いてなかったのか？」
「……はい。ですが、他の皆さんは聞いていたそうです。ニュクスとの戦いで勝つために命を使うと」
この場には美紀も来ていた。他の者たちが記憶を失っている間、記憶を保持していた大人たちと影時間に関するやり取りをしていたのは彼女だけ。

記憶を取り戻したばかりの者らには、色々と説明が必要だろうとこの場に同席していた訳だが、湊が死ぬことを知っていたのかと聞かれた彼女は首を振って知らなかったと返す。
もっとも、特別課外活動部の者たちが記憶を失っている間、美紀は栗原たちから少しだけ湊の話を聞いていた。
曰く、保護者たちは湊が死ぬつもりだと聞かされていたという。
地球の生命と繋がっているニュクスは倒せないが、他の方法ならば滅びを回避して勝つことは出来る。そのためには命を使う必要があると本人が語ったらしい。
美紀自身もその話を聞いた時は声を荒げて栗原を問い質したが、やはり他の者も同じように感じたのだろう。俯いていたチドリが立ち上がって美紀に向かって叫ぶ。
「なんで、なんで聞いてたなら止めなかったのよ！　八雲にばっかり背負わせたくないって言ってたくせに、どうして最後まで八雲にそんな事っ!?」
「止めたに決まってるじゃないですかっ!!　誰が好き好んで息子同然の子どもを死に向かわせるって言うんですか!!」
湊を止めなかった桜たちを責めるチドリの言葉に、美紀も珍しく声を荒げて言い返す。
桜や英恵は勿論、他の大人たちだって止めたに決まっているだろうと。
「私だって栗原さんたちに言いましたよ。なんで知ってて見送ったのかと。でも、それしか方法がなかったんです。ただ一人挑むことを許された有里君でもそれが限界だった。ニュクスを殺して彼だけ生き残るか。彼の命を使ってニュクスに勝利し他の生命を生かすか。他の選択肢はなかったんです！」
ニュクスを殺せば地球最後の生命として湊だけは生き残る事が出来た。
だが、湊の命を使ってニュクスに勝てば、一人の犠牲で地球の生命を救う事が出来る。
チドリやアイギスが平和な世界で生きられるようにと戦っていた

青年にすれば、戦いを終えて自分が生きていようとも他の者たちが死んでは意味がない。
となれば、最初から選択肢などあって無いようなものだ。
他の者たちがどれだけ止めようとも、こんな物で良いのならと湊は自分の命を使うことを欠片も躊躇わなかった。
彼の事を知っていれば、当然そんな風に行動してもおかしくないこともすぐに理解出来る。
影時間が消えて平和な世界になったとしても、湊はどうせチドリやアイギスの前から消えるつもりだった。
彼女たちのいる温かな光の当たる世界と、手を汚し続けてきた自分がいるべき世界は対極な場所にあると考えていた。
世界が平和になったのなら戦いの象徴である自分は消えるべき。そう考えて彼は最初から姿を消すつもりだったと、彼の性格を把握していたチドリたちも気付いていた。
ただ、この結末は違う。美紀に八つ当たりしても意味はないと分かっていながら、それでも誰かに感情をぶつけずにはいられなかったチドリがベンチに再び腰を下ろして呟く。
「……別に、八雲がどこかに行っても良かった。一人で色々と決めつけて、戦いが終わったら自分は去るべきだって、そう考えて海外に行くだろうとは思ってたから。でも、これはそうじゃない。生きているのか死んでいるのかも分からない。何があったのかも分からない。こんなの納得出来る訳ない」
様々な感情が胸中で渦巻いているせいで、その感情をどこに向けて良いのか分からないチドリが呟けば、他の者たちも同じ気持ちなのか視線を俯かせる。
彼女の言う通り、ここに彼の遺体でもあればニュクスとの戦いで力を使い果たしてしまったのだろうと納得も出来た。
しかし、あの戦いの最後で湊がどうなったのか誰も分かっておらず、生きているのか死んでいるのかも判断がつかない。
これでは〝もしかしたら〟という可能性に縋ってしまい。戦いが終わったと割り切れそうになかった。

考えても答えなど出そうにないが、それぞれが複雑な胸中から黙っていると、ニュクス側の存在としての考察として綾時が口を開く。
「……正直、僕もニュクスの端末でしかなかったから、神であるニュクスを倒す方法が存在することすら分かっていなかった。平和になった今の世界を見ても、湊がどうやって神に勝てたのか分かっていない。だから、これはあくまで僕個人の推測だ。いくつか存在する可能性の中で、比較的可能性が高そうというくらいのものだと思って聞いて欲しい」
全員湊が何をしたのか分かっていないのだ。綾時の予想でしかなかったとしても、影時間側の存在だった彼の方がニュクスについて詳しい。
そんな彼の予想であれば聞く価値は十分にあると、全員の視線が向けられてから綾時は話し始める。
「湊はニュクスを殺せないと言っていた。物理的には殺せるけど、そうなると僕たちも死ぬから出来ないと言っていた。だから、殺していないとすれば、彼に出来たのはニュクスの再封印だと思う」
「封印にはなんか必要なん？」
「強いて言えばあれを抑えるだけの力があれば十分さ。というか、目覚めたニュクスを再び封印するなら心の海に沈めるくらいしか方法がない。あちらに繋ぐ門を用意出来る湊なら十分に可能ではあるけどね」
ニュクスを倒していないとすれば、湊に出来たのは敵の再封印である可能性が高い。
原始の地球に生命が生まれ始めた頃に封印されてから、ニュクスはずっと心の海に居続けた。
再封印を果たすことが出来れば、チドリたちが生きている間はニュクスの脅威に怯える必要はない。
湊がそんな風に考えて最後の戦いに臨んでいた可能性は十分にあり得るだろう。
「あちらの世界に落ちれば肉体も魂も情報を失い続けいずれ消える。もし、今も湊がニュクスを抑えているのなら、そのままあちらの世界

で消える事になると思う」
極僅かな時間であれば肉体を持ったまま死後の世界にいても問題はない。
しかし、あちらは魂だろうが肉体だろうが、持っている情報が徐々に世界に溶けていく性質がある。
そんな場所でニュクスを抑え続けるのだから、最後は朽ちて世界に溶けて消えるだろうと綾時は言った。
人々が死後の世界と呼んだりもする場所が、そんな世界だとは知らなかったアイギスがタイムリミットまでに救う方法はないのかと尋ねる。
「八雲さんが消える前に救う方法はないんですか？」
「……ないよ。同等の神の力を持っているから抑えられるんだ。その湊が離れればニュクスは再び降臨するかもしれない。なら、湊は絶対にその場を離れない。あんな奇跡をもう一度起こすなんて不可能だろうしね」
最後の戦いで起きた不思議な現象。人々の心が湊に集まり、それによって強化されたドラゴン型のペルソナがニュクスを宙へと押し戻した。
影時間に関わる記憶を失ったことで、この世界の人々は湊の事を忘れてしまっている。
なら、再びニュクスとの戦いが起こったとしても、人々は誰とも知らない者を信じて命運を託したりはしないだろう。
それが分かっている湊も当然ニュクスの封印から離れたりはしない。
無論、彼がニュクスを封印しているというのは綾時の予想に過ぎないのだが、どちらにせよ生きていようがいまいが彼を救う方法がない事だけは理解出来た。
「つまり、俺たちはあいつの犠牲を受け入れて生きていくしかないって事か……」
小さく呟いた真田の言葉が全員の心に突き刺さる。
世界は平和になった。自分たちは未来を掴んだ。だが、それは決し

て心から喜べるようなものではなかった。

第四百六十二話　桐条からの報告

３月１３日（土）
午後――ＥＰ社
ＥＰ社の社長室でソフィアが書類に目を通していると、ノックの音と共にシャロンから声が掛かり、書類から顔を上げた彼女は入室を許可した。
現在の会社のトップはソフィアだが、彼女自身が判断を下す必要がある事柄は限られている。
湊がいた時も同じような形で進めており、ＥＰ社では基本的に事業ごとに責任者を置いて、彼らの判断だけでそれらの事業は回せるのだ。
それ以外の会社の福利厚生であったり、新しく事業を立ち上げる時にはトップの人間が動きもするが、現在の会社規模だと新しい事業を立ち上げることはほぼない。
だとすると、シャロンの来訪は個人的な理由か、もしくは影時間に関連する事柄だと思われた。
「はーい。お仕事頑張ってるぅ？」
「別に頑張るほどの内容ではありません。それで、今回やって来た理由は？」
白衣をポケットに手を入れたまま入って来たシャロンは、軽い調子で挨拶をしながらソフィアの座る机の前までやってくる。
会社のトップを相手にしているとは思えない態度ではあるが、元々シャロンは湊が雇う形でＥＰ社にやってきた人材だ。
そして、湊がいなくなった現在では、お互いの仕事のために必要な存在だと認めているため、両者は同盟相手という認識で協力し合っている。
外向きや社内での立場はソフィアが上だが、現場での判断等ではシャロンが上。
だからこそ、ソフィアも相手の態度を特に咎めたりはせず、今回はどういった理由でこちらを訪れたのかと尋ねれば、シャロンはポケッ

トから小さく折り畳まれた書類を取り出した。
「そっちにも報告は上がってると思うけど、アイギスちゃんたちの記憶が戻ったらしいわよ。で、ニュクスをよく知る望月綾時の推測だと、坊やはあっちの世界でニュクスを抑えて封印の役割をしてる可能性が高いんだって」
「……なるほど。ですが、あの扉の存在には気付いていないのでしょう？」
「まぁね。月の近くで影時間を展開しなきゃ見えないわけだし、偶然にも一時的に影時間がこっちで開いたとして、それを観測出来るような機器を持ってる組織がどれだけあるのかって話だもの」
ソフィアたちＥＰ社の一部の人間は湊が起こした奇跡の痕跡を知っている。
ニュクスと共に消えた青年は、ニュクスを再び封印してあちら側の世界に残ったのだろう。
それを示すように影時間側の月の近くに金色の扉が現われ、金色の扉は今も何かから月を守るように存在し続けている。
特別課外活動部の者たちが記憶を取り戻したと言っても、既に影時間その物がこちらの世界から消えているため、扉の存在には気付いていないはず。
けれど、ニュクスの子である綾時は、ニュクスそのものについて詳しい知識を持っている事で、湊があの戦いの最後にどうやってニュクスに勝利したのか予想出来たらしい。
加えて、消えた湊がどういった状況かまで推測出来たのなら、恐らくはその通りの状況下にあるのだろう。
ソフィアやシャロンも影時間に関わる事柄への知識はかなりのものだが、あくまで人間としてはという括りの話になる。
最初からあちら側だった綾時が特殊な存在であることは分かっていても、やはり彼に関わる事となると自分以上に理解している者の存在は複雑なのか、シャロンの報告に僅かに表情を歪ませたソフィアが口を開く。
「それで？　あちら側から何か協力要請でも来たのですか？」

「あくまで桐条側からの報告だから、別に何かしてくれって要請はないわねぇ。っていうか、現時点でこっちが協力出来る事なんて別にないし」
桐条グループは現在ＥＰ社の傘下なので、影時間に関する情報は特別課外活動部に所属するメンバーのその後の様子も含めて報告させている。
しかし、ＥＰ社は桐条グループを自分たちの味方だとは思っていないため、影時間の月付近に出現した金色の扉について報告していない。
特別課外活動部のメンバーだけでなく、桜や英恵も湊に関係しそうな情報ならば何でも欲しがりそうなものだが、湊がニュクスと共にいるとすれば情報を伝える事に躊躇してしまう。
なにせ、今回の滅びは人類が死を意識し、死を求めた結果起きた事なのだ。
人類史が始まってからの蓄積だとすれば、個人が考えたところで影響は皆無かもしれないが、影時間が出現してからの期間で滅びが起きたとすれば、個人の意思がどれだけの影響を及ぼすか分からない。
湊があちら側の世界にいると知れば、死後の世界を意識する者が大勢現われる可能性がある。
多数の犠牲を出し、大勢が苦労してようやく取り戻した平和を、そんな形で再び失う事になればあちらに留まった青年に申し訳が立たない。
「……桐条グループは定期報告で十分でしょう。引き続き子どもたちの監視を続けて、問題があれば接触して諦めさせなさい」
「まぁ、どっちにしろ事件に巻き込まれるみたいだしねぇ。それで坊やの未帰還について納得してくれれば良いけど」
時の空回り、終わらない三月の事件が起きる事について報告は既に受けている。
湊が未来人と接触していた事は流石に驚いたし、時の流れが一方通行ではないという情報は受け入れるのに時間が掛かった。
あくまでペルソナ等超常の力を借りての限定的な時間移動であり、

実際には時間軸を無視して過去と未来にそれぞれの出入り口を作って繋いだ形だ。
影時間で現実の時間が止まり、湊のセイヴァーが空間転移をしていた事を考えれば、時間と空間に干渉してもおかしくはない。
そう考える事で理屈としては納得したものの、ソフィアはそんな事が起きる原因となる少女らについて愚痴をこぼす。
「タルタロスや影時間の消滅で残ったエネルギーが原因でしたか？まぁ、どちらにしても迷惑な話にしか思えませんが」
「別にこっちには影響ないし。子どもらがそれで納得出来るなら良いと思うけどねぇ」
「未練は分かります。ですが、湊様がどうして一人で戦いを終わらせたのか。それを考えれば再び滅びに繋がりかねない事は慎むべきでしょう」
元々は湊の敵だったソフィアだが、今ではある意味最も彼の事を理解した存在になっている。
彼が何を求め、何のために戦ったのかを傍で見続けてきた。
アイギスたちには見せなかった苦悩する様子も知っているだけに、全てを台無しにしようとする特別課外活動部の者たちの事が許せないらしい。
感情的になって机にドスンと拳を下ろしながらそう話すソフィアに、シャロンは同じ条件なら納得出来たかもしれないねと苦笑する。
「フフッ、あなたが怒るのは分かるけどさぁ。あの子たちとこっちじゃ持ってる情報量が違う訳じゃない。坊やはあの子たちを遠ざけ続けた。わたしらは共犯者としてその後の話まで伝えられていた。その差を無視して納得しろってのはフェアじゃないでしょう？」
「それは……」
湊は最初から自分だけでニュクスと戦い影時間を終わらせるつもりでいた。
実際にはそんな事は不可能で、大勢の力を借りて戦いに臨んで滅びを回避した訳だが、アイギスたちを戦いから遠ざけようとするスタンスは最後まで変わらなかった。

復活してすぐに起きた桐条グループとの戦い。年末に行なわれたデスとの戦闘。
そちらについても詳しい話を誰にも漏らさず、ＥＰ社の者たちには色々と説明して準備を進めていた。
人生を歪められて戦いの中で育ったからこそ、湊は他の者たちは平和な日常の中で暮らしておくべきだと考えて何も伝えなかった。
そして、最後の戦いで自分が死ぬことだって大人やＥＰ社の人間には伝えておきながら、一緒に戦った仲間たちには結局何も話さないまま消えた。
アイギスたちは守護対象で、ソフィアたちは共犯者。
立場の違いから共犯者となったソフィアは全てを伝えられ、彼に別れを告げるだけの時間もあった。
だが、何も知らされていなかったアイギスたちは、詳しい事情を伏せられたまま彼と突然別れる事になり、影時間に関する記憶を取り戻すのにも時間が掛かった。
彼との別れを前提に動くのは辛かったが、ろくに言葉も交わせずに唐突な別れを経験した者たちに比べれば恵まれていたと言える。
その事を指摘されたソフィアは言葉に詰まったが、すぐに余計な考えを振り払うとそれでも許せないものはあると言い返す。
「それでもです。あの方がどれだけ悩んでいたのか彼女たちは知らない。あちらの世界でご両親と話した事で人間性を取り戻した。ですが、そのせいで湊様は自分の選択と行動に世界の命運が掛かっているという重圧を背負うことになりました」
「それを知らずに坊やの事を想っているフリをするなって？　むしろ、逆でしょ。あんな状態になっても隠し通した坊やが異常なのよ。そんで、そのまま世界を救ってみせた事を褒めるべきね」
ソフィアは湊の理解者として何も知らないアイギスたちの態度に苛立ちを覚えているようだが、シャロンはそれは気持ちの押し付けに過ぎないと諭す。
湊はそれでいいと考え、どれだけ自分が苦しんでもそれをアイギスたちには漏らさなかった。

その青年の行動が特別おかしいのであって、そんな状態でも少女らに隠し通した湊の覚悟を褒めるなら分かるが、それで何も知らないくせに少女らを責めるのは八つ当たりでしかない。
医者という職業柄多くの別れを経験してきたシャロンは、相手を諭しつつ目の前の少女も彼との別れにまだ納得出来ていないのだろうと察する。
青年が特別課外活動部の者たちに頼らず遠ざけていたからこそ、彼らを使えばもっと別の結末もあったのではと思ってしまうのだろうと。
指摘を受けたソフィアは図星を突かれたからか鋭い瞳でシャロンを睨む。
だが、普段通りの微笑を浮かべた余裕を見せている相手に突っかかっても意味がないと気付いたのか、深い溜息を漏らすと幾分か冷静さを取り戻した。
「……この話はまぁ良いでしょう。時の空回りはあの方たちだけで解決すべき問題ですから」
「そうねぇ。ま、あの子らも停滞するつもりはないみたいで、分からないなりに動こうとはしてるみたいだけどね」
「よく聞く〝前に進む〟というやつですか？」
「そうそう。痛々しいから大人としては見てられないんだけどね。悩むのも経験だから存分に悩んだら良いと思うけどさぁ」
桐条グループからの報告によれば、特別課外活動部の二年生組は進学先のパンフレットを集めたり、予備校への入所を考えたりしているらしい。
助けられるのなら湊を助けに行きたいのだろうが、その方法が分からず手段もない。
だからこそ、彼が守ったこの世界で生きていこうと、頭を切り換えたつもりになっているようだ。
シャロンからすればちゃんと悩んだり悲しんだりした方が良いだろうにと思うのだが、そうやって無駄な寄り道をするのも若者らしい生き方の一つ。

アイギスやラビリスとはそれなりに付き合いはあっても、他の者とはあまり付き合いもないため、シャロンは報告を聞いて若者の悩み藻掻く様を楽しむつもりだった。
医者のくせに悪趣味な事だと呆れながらも、ソフィア自身それを止めたりはしない。
そういった経験から湊の数百分の一でも苦しみを味わうべきだと考えているためだ。
そうして、特別課外活動部のメンバーの近況について話した二人は、監視を継続して干渉は避けるという方針を決め、桐条グループにも同じ方針で進めるよう連絡を入れると、彼が消えた世界で生きていくべくそれぞれの業務へと戻っていった。

第四百六十三話　夢に見る

――???

どこまでも闇が広がる空間。

太陽は勿論、月や星、人工の光も存在しない空間にアイギスは立っていた。

ここはどこだろうか。そう思って周りを見渡すも、そこには闇しか広がっていない。

だが、どういう訳だが自分の姿は見える。

月光館学園の制服姿でどうしてこんな場所にいるのか。

不思議に思いながらも、何も見えないためじっとその場に佇んでいれば、遠く離れた場所に光が差しているのが見えた。

「あれは……」

ここにいても意味はない。故に、現われた変化に近付いてみようと歩き出す。

遠く離れてはいるが数百メートル程度の距離だ。歩いて近付いても十分とかからない。

差している光が消えそうになれば走りもするが、アイギスが近付いても光はスポットライトのように一つの場所を照らしている。

光の差す場所を目指すアイギスだが、思えば歩いている地面も不思議だった。

立って歩けているため地面はあるのだろうが、地面を踏んでいるという実感が薄く、靴で歩いていても靴底が地面に当たる音が一切しないのだ。

素材が硬い物ではなく、ゴムやシリコンのような衝撃を吸収するようなものであったとしても、地面と靴の擦れる摩擦音はなるはず。

それすらもないため、本当にここはどこなのだろうかと考えながら歩いていると、ようやく光の差す場所が近付いてきた。

暗闇の中にいると自覚しながらも目が眩むほど明るい訳ではなく、客席から舞台を見ている時のような自然と視線が向くような丁度良い明るさ。

だからこそ、その光の中心に人影がある事にもすぐに気付き、それを見た瞬間にアイギスは背中を向ける人影に向かって駆け出していた。
「八雲さんっ!!」
月光館学園の制服を身に付け、首に黒いマフラーを巻いた長身の青年。
背中を向けていてもアイギスにはそれが誰かすぐに分かった。
最後の戦いで空へと向かう背中に手を伸ばす事しか出来ず、訳も分からぬまま消息を絶った青年がどうしてこんな場所にいるのか。
理由は分からないがアイギスはただひたすらに青年に向かって走った。
少女が駆け出すと同時に彼もゆっくりと歩き始めて離れて行ってしまう。
自分の声が聞こえていないのだろうか。そんな考えが頭を一瞬過ぎるも、だとしても走っている自分の方が圧倒的に速い。
彼が十メートルも移動しないうちに追い付ける。
そう考えていたのに、どれだけ走っても何故か距離が縮まらない。
「なんでっ!? お願いですっ、待ってください八雲さんっ!!」
アイギスの方が速く走っているのに、ただゆっくりと歩いているだけの青年に追い付けない。
むしろ、両者の距離は徐々に開いており、必死に走るアイギスは少しずつ小さくなってゆく背中に焦りを覚える。
嫌だ。何故追い付けない。彼に会って話したい事が沢山あるというのに、どうして離れて行ってしまうのか。
胸の中で渦巻く様々な感情が涙となって瞳から溢れるも、状況は変わらず追いかけている背中は遠くなるばかり。
「いやっ、お願いだからっ、もう一度八雲さんとっ!!」
息が切れて全身が酸素を求めだし、動かし続けている足の筋肉が悲鳴をあげそうになるも、アイギスはそれを無視して走り続ける。
また彼が遠くへ行ってしまう。手の届かない場所、声の届かない場所へと辿り着いてしまう。

そんなのは嫌だとどれだけ走っても距離は縮まらず、ついに彼の姿が闇の向こうへと消えてしまった。
彼の姿が光と共に消える瞬間、アイギスは最後の戦いでの光景がフラッシュバックし、無気力になってその場に座り込む。
どれだけ走っても追い付けず、まるで自分がこの場所から一歩も進んでいないかのような錯覚すら覚えた。
「どうして……なんで……折角、八雲さんとまた会えたのに……」
あの後ろ姿は間違いなく彼のものだった。自分が彼の姿を見間違える訳がないという自負がある。
だからこそ、あれは間違いなく彼だったというのに、アイギスはついに追い付くことが出来ず彼を行かせてしまった。
最後の戦いの時と同じように、また自分は彼を引き止める事が出来なかった。
彼が蘇ってくれたとき、もう二度と彼を遠くへ行かせないと誓ったはずなのに、どうして何の役に立つことも出来ずに彼を一人行かせてしまったのかと自分への怒りが湧く。
そうして、暗闇の中で俯いたまま動かなくなったアイギスは、急な浮遊感を覚えてその世界での意識が途絶えた。

3月21日（日）
深夜――巌戸台分寮
朝日も昇らぬ深夜、アイギスは寮の自室に置かれたベッドの上で目を覚ました。
酷い動悸と全身にビッショリと汗を掻き、浅い呼吸を繰り返して先ほどの光景が全て夢だったことを徐々に認識していく。
過去には夢の中でこれは夢だと何度も認識出来ていたのだが、影時間という異常事態に慣れていたせいか、実戦感覚が鈍ってきた今では逆に目を覚ますまで夢だったことに気付けなかった。
しかし、夢ならせめて自分の望みに沿った楽しい内容であってくれたらと愚痴を言いたくなる。
一定の呼吸を繰り返して心臓を落ち着かせ、大量の汗を掻いた事で

乾いた身体に水分を補給するべく部屋に備え付けられた小さな冷蔵庫から水のペットボトルを取り出す。
春も近づき最近は暖かくなってきたところだが、深夜で朝日もないとなるとまだまだ気温は低い。
しかし、悪夢でうなされていた身体には冷たい水の方が心地よく、ペットボトルの中身を半分ほど飲んで一息吐くと、ようやく少しは落ち着くことが出来たと冷静さを取り戻した。
(前に八雲さんが亡くなられた時にも同じように夢に見ましたが、今回は去って行ってしまうのですね。わたしが彼を拒んでいるのか、それとも役立たずの自分を責めているのか……)
チドリの蘇生のために命を使い果たして死んだ時には、ラビリスの世話になりながら一日中夢の中に逃げてそこでだけ会える彼と一緒にいた。
全ては妄想の産物でしかなく、自分にとって都合の良い彼を作り出していたに過ぎないが、それでもあの時はそうやって心の平穏を保つ事した出来なかった。
今回はあの時のように夢に逃げたりせず、心にぽっかりと穴が空いたような気持ちを抱えたまま日々を過している。
前回との違いはアイギス自身の心の成長によるものだと言いたいが、本当の理由は恐らく彼の死に対する認識によるものだと思われる。
前ははっきりと彼の死を感じられた。冷たくなった身体を前に、既にここに彼はいないのだと認識せざるを得なかった。
けれど、今回はそうではない。ニュクスと共に宙へと向かったまま彼は帰ってこなかったのだ。
(綾時さんの言葉の通りであれば、貴方は死んだ事になるのでしょう。あちら側の世界、この世を離れた魂の行き着く世界に貴方はいるのだから)
湊がどういった状況にいるのかは不明だが、綾時の話によれば恐らく死後の世界に相当する場所にいるという。
ニュクスを封印する場合、生命の存在する世界に置いておくことは

出来ない。
死を司る存在、具現化した死その物。その近くにいれば命を吸われて生物は死んでしまう。
であれば、封印するには生命の存在しない魂のコミューン、心の海とも呼ばれるあの世につれて行くしかない。
湊も一度はそちらに堕ちた事で、ニュクスを封印するにはそこへ連れて行く必要があると認識していたはずだ。
彼は誰よりもニュクスの力を把握していた。神の眷属であった綾時よりも詳しかったのではないかと思えるほどに。
(ちゃんと生きなきゃいけないのに……ダメですね。本当に、わたしは……)
彼が救った世界。彼に救われた命。
自分もそこで生きる存在として、その事実を認識して生きていかなければならない。
共に戦った仲間たちや、彼の事を覚えている者たちは、以前ほど明るくはないが既に前を向いて動き始めている。
この世界でしっかりと生きていくため、より上の志望校を目指そうと予備校に通い始めたゆかり。
親に医学部へ進むように望まれながらも、自分が本当にやりたい事や好きな事と向き合って、どちらでも選べるよう親とも話し合っている風花。
進学には興味がなかったはずなのに、せっかく湊が選択肢を残してくれたのだからと、進学を考え進路指導に相談している順平。
彼らだけじゃない。七歌や姉のラビリスだって、湊の死を悲しむだけじゃなく前を向こうと動き始めている。
それなのに、アイギスは自分のやるべき事を見つけられず、その場から一歩も踏み出せずにいた。
記憶を取り戻してからも授業はしっかりと受けているし、今の自分の学力で行ける大学の資料なども貰っている。
アイギスは英語も話せるため、それに関連する資格やテストを受けて実績を作っておけば、推薦の要項を満たして受験する事も可能だろ

う。
勿論、それには三年生の授業もしっかりと受ける必要があるのだが、今の状態を維持するだけで進学先には困らない。
志望校やより良い環境を求めて受験勉強に精を出している者からすれば、随分と舐めた態度や考え方と思われるに違いない。
望みもなく、情熱も持っておらず、出来るからこなすだけ。
そんな風にただ日々を過して進学したとしても、前を向いて進んでいるとは決して言えないだろう。
持っていたペットボトルをベッドチェストに置き、ベッドに腰掛けながら今の自分の状態にアイギスは呆れたように苦笑する。
（せっかく八雲さんが未来を作ってくれたのに、それを無駄にするなんて最低ですね。あの人が残した物の研究でも引き継げれば良かったのですが、ＥＰ社の方もそれは望まないでしょうし。出来る事はなさそうです）
湊は影時間の戦いを終わらせるために、ただ戦うのではなく様々な研究にも取り組んでいた
その中でも大きな功績は医療関係で、公表出来ないものなら薬や特別な手術を必要とせずに腫瘍や癌細胞の除去に何度も成功した事が挙げられ。シャロンと共に進めた研究では、一般人でも使える機械義肢の試験も近いうちに行なわれるらしい。
遠い未来のＳＦのような技術だと思われていたものが、もう少しで現実のものとなるところまで来ているのだ。
自分の未来を諦めていながら、いなくなった後も人類の発展に貢献している。
そんな彼に対して今の自分はどうだろうか。
情けなくてこんな姿は彼に見せられそうにない。
それが分かっているのに、やはり心は奮えてくれそうになく、アイギスは自己嫌悪に陥りながらベッドから腰を上げると着替えを取りに移動する。
悪夢にうなされて掻いた汗でパジャマが濡れており、このままでは気持ちが悪いので新しいパジャマと下着を取り出した。

既に大浴場のお湯は抜けているだろうが、それでもシャワーを浴びる事は出来る。
それぞれの部屋で寝ている他の者たちを起こさぬよう静かに部屋を出ると、着替えを持ったアイギスは陰のある表情のまま大浴場へと向かうのだった。

第四百六十四話　情報交換

３月３０日（火）
午後――港区

子どもたちが未来を掴むために挑んだ戦いからおよそ二ヶ月。
影時間が世界の裏側に消えて、シャドウも現われなくなった事で、入院していた無気力症患者たちは無事に回復していった。
一ヶ月ほぼ寝たきりだった患者などはリハビリに励んでいるものの、そういった者ですら入院ではなく通院という形に移っている。
全ては元通り。街に溢れ出たシャドウとの戦いの影響もほとんど無かった事で、こうして人々の平穏な日常が続けば、本当に影時間の戦いは終わったのだと栗原もようやく実感を得られるようになった。
春の陽気の中ＥＰ社近くの公園を通って研究所の方へ向かうと、車椅子に乗る年配の男性とその車椅子を押している女性が楽しそうに話す姿を見える。
彼らにはどう見ても戦う力などなく、実際にシャドウに襲われれば抵抗どころか逃げる事すら出来ずに殺されていたに違いない。
ああいった者が被害を受けぬようにと、湊は最後の戦いまでに対シャドウ兵器を大量に用意しておいたらしい。
地域の広域避難所として利用され、人に惹かれた大量のシャドウがやって来たという公園は、どこを見ても戦いの痕跡を見つける事が出来ない。
以前の栗原であればどうやってシャドウから守ったのだろうかと疑問に思っただろうが、セイヴァーというペルソナの力を知っていれば、戦場になったはずの場所に戦いの傷跡がなくとも不思議には思わない。
桐条グループがエルゴ研で作っていたシャドウにも効く武器ではなく、シャドウのみを殺すための武器として開発した銃を使ったからこそ、こうして被害らしい被害もなく済んだのだろう。
自分だって余裕なんてなかっただろうに、よくもまぁ他人のためにそこまで出来たもんだと苦笑しながら栗原は歩を進める。

桜の花が咲く公園を通り過ぎて、空港のように舗装されただけのだだっ広いエリアを進み、そして、カマボコに似た外観をした建物を見つけて中に入る。
栗原が建物の中に入れば、スーツを着た白人の女性が気付いて笑顔で近付いて来た。
「栗原様でよろしいですか？」
「ああ。ここへ来るように言われたんだ」
「連絡は受けております。では、代表たちのいる部屋へご案内いたします」
事前に話は通っていたようで、女性はこちらですと先導して施設の中を進んでゆく。
エルゴ研で働いていた経験を持つ栗原でも、ＥＰ社の施設がとても進んだ技術で作られている事が一目で分かる。
桐条グループの研究施設もかなり進んだ技術で作られ、グループの金を大分かけていたようだが、こちらは掛けた金額の桁がいくつか違っているに違いない。
中学時代の湊と裏界最大組織の〝久遠の安寧〟が戦い。ソフィアを下した湊が組織をそのまま自分の傘下に置いた際、当時の組織幹部をほぼ皆殺しにして財産全てを奪ったと聞いている。
ＥＰ社の日本支社を作る時の金は全てそこから出したとも聞いているので、日本の国家予算並みの金を湊は手にしていたのではないだろうか。
無論、その手に入れた金は私利私欲のために使われていた訳ではなく、ニュクスとの戦いに向けた設備投資にほとんどが回され、それ以外は裏の事情を何も知らぬ社員たちの福利厚生を充実させるために使っていたと思われる。
ＥＰ社の日本支社が出来てから五年も経っていないが、マスコミが行なった社会人の幸福度アンケートでＥＰ社はかなり上位に入っていた。
そこからも分かる通り、湊は随分と従業員を大事にしていて、彼らに快適で充実した日々を過ごせる職場を用意するため色々と頑張っ

ていたようだ。
　先導されながら長い廊下を進んでいる途中、廊下に面した窓から研究員らの表情が生き生きとしているのを見て、栗原は小さく口元を歪めると先導する女性に話しかける。
「ここの職員たちは皆いい顔で働いてるんだね。人種も国籍もバラバラだろうによく纏まったもんだ」
「人材を集めた方がある意味一番強烈な個性を持っている方でしたからね。最低限の礼儀とＴＰＯさえ弁えていれば、人格その他諸々は気にしないと言ってくれていましたし」
　返ってきた女性の言葉に栗原は少しばかり驚く。
　この会社のトップは湊とソフィアで、それぞれの持つコネクションを使って有能な人材を集めたに違いない。
　そして、先ほど女性は〝持っている方でしたからね〟と過去形で話しており、そこから察するにただの事務方だと思われたこの女性も湊の事を覚えているのだろう。
　桐条側の人間はラボの者ですら湊の事を忘れている者がいるというのに、ＥＰ社側では思っていたよりも大勢が影時間について知っていて、しっかりと湊の事も記憶したまま日常を過しているのは少々意外だった。
　そんな考えが顔に出てしまっていたのか、女性は栗原を見ると小さく微笑んで話しかけてくる。
「有里さんの事を忘れていると思っていましたか？」
「ん……まぁ、そうだね。ここじゃどこからどこまでが影時間について知ってるのか知らないけど、どう見ても研究員じゃない人間まで知っているとは思わなかった」
「この施設にいる人間は全員知っていますよ。居場所を与えられたり、自身の命や大切な人を救われたり、夢を応援してもらったり。皆、あの方に恩を感じているんです」
　そう話す彼女も湊に大きな恩があるようで、ここに彼がいない事にどこか寂しそうな表情を見せる。
　栗原は臨時顧問となって特別課外活動部の子どもたちを見ていた

ため、別行動が多かった湊の事はあまり見てやれていなかった。
だが、昔はあれだけ他者を警戒していた子どもが、こうやっていなくなった後も誰かに想って貰えている事を知って、栗原の胸の奥にも温かなものが感じられた。
「……そうか。ここはちゃんとあいつの居場所だったんだね」
「勿論です。大勢に慕われて、今も慕われ続けていて、だから皆諦めようとしないんです」
彼は帰ってこなかった。しかし、死んだとは思っていないと女性は言う。
一度は死を覆してみせた事もあり、湊の生存を信じる彼女の気持ちも分かる。
他にも大勢が彼女と同じ気持ちなのであれば、ある意味では特別課外活動部の子どもたちにとって何よりの味方と言える。
もっとも、ＥＰ社の人間が特別課外活動部の子どものために動くことはないだろうが、皆の記憶から彼の存在が消えた世界において、同じように彼の事を今も想ってくれている同志がいるのは心強いはず。
ここでの用事が終わってから、ＥＰ社の一部の者たちが今も湊の事を覚えている事を伝えてやろうかと考えていれば、先導してくれていた女性がある部屋の前で止まった。
「失礼します。栗原様をお連れしました」
《どうぞ入っていただいて》
部屋の中から少女の声が聞こえると、女性は扉を開けて栗原を中へと誘う。
そこはある種の会議室のような場所らしく、簡素な椅子と長机がいくつも並んでいる。
先ほど部屋の中から答えた声の主であるソフィアの他に、研究主任であるシャロンと助手の武多とエマが部屋の中にいた。
今回、ソフィアたちにアポイントを求めたのは栗原だが、あちらも栗原に話したいことがあると聞いている。
この面子から考えると消滅した影時間に関する事か、最後の戦いから行方不明なままの青年に関する話だろう。

色々と考えながら部屋の中に入った栗原は、案内の女性が扉を閉めて出ていくと、多忙であるはずのソフィアが時間を作ってくれた事にまず感謝しなければと口を開いた。
「今回は突然連絡したにもかかわらず面会を承諾してくれた事に感謝する」
「別に構いません。そちらのペルソナ使いたちの記憶が戻ったと聞いていますし。影時間に関わる何かの話なのでしょう？」
三月の上旬頃に七歌たちは記憶を取り戻し、そして、彼女たちの力が失われていない事が分かった。
既に影時間は存在せず、敵であるシャドウもこの世界には現われていない。
そんな状況で、近代兵器とも戦えるだけの力が残ってどうするのだと思わなくもないが、僅かな緊張を含んだ栗原の表情から、子どもたちの今後の身の振り方などについて相談しに来たのではない事は分かる。
一人の青年が犠牲となって戦いが終わったはずなのに、再び戦いが起ころうとしているのか。
人の世はいつも戦ってばかりだなとソフィアが呆れていれば、椅子を勧められた栗原がソフィアたちの正面の席に座って本日面会を求めた理由を話す。
「そっちの予想している通り事件が起きる。けど、巻き込まれるのは特別課外活動部の子どもたちだけだ。そして、その事は湊も知っていた」
「……時の空回りについては聞いています。そうですか。やはり起きる気配があるのですね」
栗原はソフィアたちが情報を持っていないと思い報告しに来たようだが、守る対象だったアイギスやチドリたちと違って、〝共犯者〟や〝同盟〟としての立場を持っていたソフィアはほぼ全ての情報を湊より教えられていた。
湊から未来の出来事について説明を受け、彼自身、あくまで未来に起こり得る可能性があるだけだと言っていただけだが、それでも湊は

それが起きた時の事を考えて準備していた。
　となれば当然ソフィアたちもそれに合わせて動く。未来の出来事については不確定な情報でしかなく、真実を知っているのは一部の職員に限られるが、その兆候があればすぐに報せるよう監視任務に就いた職員らにも通達していた。
　もっとも、事件の中心人物となる特別課外活動部と接する機会の多い栗原の方が、彼女たちの変化にも気付きやすかったようで、今の子どもたちの間に少々不穏な空気が流れていると説明する。
「影時間のそれとは違っているような、なんか曖昧な気配みたいなのを感じたよ。あそこで生活してる本人たちは緩やか変化に慣れてしまっているのか気付いてなかったけどね」
「それって外から見てる分には分からない感じなのぉ？」
「見た目には変化なんてないよ。違ってるのは空気みたいなもので、多分、適性を持ってないと分からないんじゃないかね」
　特別課外活動部のメンバーらが記憶を取り戻してから栗原も寮には足を運んでいる。
　記憶を取り戻したばかりの頃は特に何も感じなかったが、つい先日行ってみれば明らかに空気がおかしくなり始めていた。
　一般人は影時間の存在を感知出来ないので気付かないだろうが、栗原以外にも桐条武治など自前で影時間の適性を持っている者は違和感に気付いているはずだ。
　ＥＰ社から出している監視任務の職員たちは、自前の適性ではなく指輪型の簡易補整器で適性を補っている。
　そのため見た目の変化がなにもなく、寮の傍に行っても何も感じられないからと、〝異常なし〟という報告を送ってきていたようだ。
　かなりギリギリのタイミングではあるが、栗原の考察から兆候が感じられなかった理由が分かり、そういう事だったのかとソフィアが溜息を漏らす。
「はぁ……やはり、もう少し無茶をしてでも適性持ちを増やす努力をすべきでしたね」
「それは坊やが許さないでしょ。最悪のパターンを考えてわざわざ破

損すれば記憶を失うリスクのある簡易補整器を量産したんだし」
ＥＰ者側にも何人かは自前で適性を持っている職員はいる。
ただ、そういった職員は研究者に多く、今回の監視任務には配属していなかった。
適性を得られれば同じだからと、簡易補整器の指輪にばかり頼っていた結果、危うく事件発生を見逃すところだったのだ。
適性を得るためのトレーニング等を湊と共に考案していたＥＰ社の代表であるソフィアにすれば、楽な方にばかり流されて大きなミスを犯すところだったと自己嫌悪に陥るのも無理はない。
ただ、こういった事態が再び起きた時の事を考えるにしても、精神の変調をきたす可能性がある適性持ちの量産化は難しい。
職員らの安全を考えていたからこそ、湊は簡易補整器の指輪で擬似的に適性を持たせる方法を優先させていたのだ。
彼の性格を知っていれば、その選択の裏側に隠された想いだって分かるだろう。
シャロンに諌められたソフィアは頭を振って思考をリセットさせると、栗原の瞳を見つめて報告は予兆についてだけかと聞く。
「予兆があったことは分かりました。本人たちの問題となれば、こちらに取れる対策はありませんが、事件解決後にこちらに連れてきてメディカルチェックを受けさせる事は可能です」
「あ、いや、話はもう一つあるんだ。時の空回りが解決した後、あの子たちに渡してくれって湊から預かっているものがある」
栗原はソフィアたちにそれが一枚のディスクだと説明した。
家電量販店でも売っていそうな、透明なプラスチックケースに入っただけのディスク一枚。
規格からするとＤＶＤと同じ映像記録媒体だと思われるが、事件を解決した七歌たちに宛てたものだと聞いているため、その中身が気になっても栗原は見ていなかった。
「で、もう一つの相談はそのディスクについてなんだ。そっちは湊から何か預かってるかい？」
「時の空回りに関係するものは受け取ってないわよ。今後の研究に必

要になるだろうデータとかはもらってるけどねぇ」
「やっぱりそうか。なら、あんたたちも見に来るかい？」
用意されたディスクは一枚。本当にただそれだけだったので、湊は外部の人間には事件が起きる事しか伝えていないと思っていた。
その予想は正しく、ソフィアたちは時の空回りに警戒しつつも、特別な準備などは何もしていなかった。
元から特別課外活動部のメンバーだけで解決出来るという話なので、ＥＰ社側の対応も不思議ではない。
だが、彼と親しかった人間として、彼が預けていったディスクに興味があるのではないかと栗原は考えた。
ディスクは個人に向けたものではなく、大勢で確認して良いとも言われているのだ。
事件が解決して四月一日になったばかりのタイミングで寮を訪れ、そこで一緒に中身を確認した方がソフィアたちも変に気を揉まずに済むだろう。
本来は部外者でしかない彼女たちを寮に入れる許可は桐条から貰っている。
共に滅びに立ち向かった仲間として、彼の事を今も想い続ける仲間として、一緒にどうだと栗原が尋ねればソフィアはしばらく難しい表情をしてから肩の力を抜いた。
「ふぅ……良いでしょう。では、その時間に寮へと伺います。誘ってくださり感謝します」
「いや、散々世話になっているからね。気にしないどくれ」
これまでＥＰ社や湊には散々世話になってきたのだ。これくらいでそこまで感謝される必要はないと栗原も苦笑で返す。
だが、ソフィアも会社の代表として受け取るばかりではいられないと、お返しとしてある情報を栗原に伝えてきた。
「お誘いのお礼としてこちらからも情報を出しましょう。特別課外活動部の人間に伝える必要はありません。恐らく、彼女たちは事件解決に向かう中で知る事になるでしょうから」
そうして、ソフィアが見せてきたのは月の前に浮かぶ金色の扉の写

真。
ニュクスとの戦いを終えるまで月の傍に扉などなく、突如現われたそれは現在も影時間側の世界に存在しているという。
ソフィアやシャロンから説明と考察を聞いた栗原も、湊がまだあちら側で生きていると思えたようで、特別課外活動部のメンバーに伝えない事を条件に扉の存在とそれに関する考察を桜や英恵に話す許可を貰った。
どうせ二、三日も経たずに子どもたちも知る事になるのだ。それを青年の関係者に伝えるくらいは問題ない。
その後、当日の合流方法などを話し合い。実際にＥＰ者側から何人参加するかを決めると、用事が済んだ栗原は帰る事にした。
来た時には随分と思い詰めていた様子だったが、打ち合わせを終えて帰る頃になると栗原の表情は随分と生き生きしている。
余程湊に関する新たな情報が得られた事が嬉しかったのだろう。ソフィアたちに見送られながらＥＰ社を出た栗原は、手に入れたばかりの情報をすぐに保護者たちへと伝えるのだった。

第四百六十五話　巌戸台分寮の閉館日

３月３１日（水）
午後――巌戸台分寮
明日から新年度が始まる三月の末日。
既に新生活や新学年の生活の準備を終えた寮生たち数名が、これまで何度も集まってきた寮の四階にある作戦室で話をしていた。
卒業した三年生たちは進学先の近くに部屋を借りたり、入学前の事前ガイダンスを受けるという多忙な日々を過し。
今後も月光館学園に通う在校生たちも、実家や本寮への引っ越し作業があったため、こうやって集まるのは本当に久しぶりだ。
新生活の方が大事なのは分かっている。けれど、せめて今日だけはと予定を合わせたつもりだったが、かつての仲間が揃わなかった事に順平は溜息を吐く。
「はぁ……しっかし、今日でこの寮も閉鎖だって言うのに、他のやつらも冷てぇよなぁ。そりゃ、オレっちも含めて皆もう本寮とか実家に引っ越し終えてそっちで寝泊まりしてるけどさ。なんつーか、節目ってのは大事だろ」
対シャドウの作戦室として使っていたため、この部屋には外部メンバーだったチドリたちが集まっても問題ないだけの椅子があった。
だが、その数ある椅子も埋まっているのはたったの五つだけ。
そう。今日、ここにいるのは順平を含めて五人だけなのだ。
先輩組からは美鶴と荒垣、後輩組からは順平と風花と天田。
シャドウの脅威と新たな無気力症患者の発生がなくなったことで、特別課外活動部も解散が決まり、それと同時にこの寮の閉鎖が決まった。
三月末での閉鎖が決まっていた事で、寮生たちは既に引っ越しを終えており、愚痴を漏らす順平だって何日か前に月光館学園男子寮での生活をスタートしている。
ただ、最後のこの一日くらいは、仲間で集まって共にこの寮との別れを惜しみつつ過したいと思っていた。

この寮には沢山の思い出がある。帰ってこなかった彼との思い出だってあるのだ。
それを一緒に思い返しながら、寮への感謝と別れを告げようと思っていたのに、他の者は思い出より新生活の方が大事らしい。
そのように順平が憤慨すれば、苦笑を浮かべた天田がそれぞれ事情があるはずだと宥める。
「確かに寂しいですけど、皆さんも忙しいんですよ。というか、順平さんは予備校とか通わなくていいんですか？」
「そりゃ、その内行くかもしれねーけど、オレっちは進路を決める方が先なんだよ。目指す学校によって必要な勉強も変わるからな」
「なんだ、順平。お前、まだ進路も決まってねぇのか？」
日付が変わり明日になれば、順平たちも新三年生として扱われるようになる。
だというのに、まだ進路や志望校が決まっていないと口にした事で、調理師学校への進学が決まっている荒垣は驚いた顔で聞き返した。
ここ最近は荒垣自身も引っ越しや進学先の入学準備があって仲間たちとは話をしておらず、後輩たちの進路に関する情報は持っていない。
だが、新三年生は順平以外は全員がいくつか志望校を決めて、四年制大学に進学すると聞いていた。
ゆかりなどはそれに合わせて予備校にも通い始め、今日は春休みの集中講習があるからと欠席の連絡を入れてきている。
他の仲間がそんな風に受験に向けて動き始めているというのに、正面のソファーにドカッと座っている坊主頭は進路すら定まっていないという。
本当にそれで大丈夫なのだろうか、という考えが視線に混じって届いたようで、察した順平は心配は全くいらないとビシッと右手を突き出して宣言する。
「ノープロブレムっす。ちゃんと色々先生らに聞いてやってますから」

「なら、どういう学部に行くつもりか言ってみろ」
普段の順平の適当さを知っていた荒垣は、本当にちゃんと考えているのかと疑った。
進路決定が早ければ、その分、それに合せた対策等の準備に時間をかける事が出来る。
月光館学園は都会の有名進学私立に分類されるため、そこで中の下程度の成績を維持している順平ならば、大卒という肩書きが欲しいだけならそのままの学力で入れる学校もあるだろう。
しかし、将来就きたい職業ややりたい事が決まっているのなら、お世辞にも優秀とは言い難い順平は他の者より努力が必要になると思われる。
そのため、くだらない誤魔化しはいらないぞと視線で脅せば、それを真っ直ぐ受け止めた順平はさらっと答えた。
「大まかに言うとスポーツ系ッスね。ただ、教育学部のスポーツ学科とか、体育学部のビジネス学科とか。学校によって括りが違ってるみたいなんで、オレの成績でも行けそうな範囲で選んで学校見学とか行こうかなって考えてますよ」
順平の答えが思っていた以上にしっかりとしていた事に美鶴や荒垣は驚く。
特別課外活動部での経験を通じて、彼もただのお調子者から頼りがいのある男に成長した事は知っている。
けれど、進路というのは誰のためでもなく自分のためのもので、将来という不確定で想像も難しいもののために頑張る必要がある。
責任感に溢れ誰かに頼られれば頑張れる者でも、自分の事となると抜けている者もいるのだ。
その点、順平はスタートは他の者に遅れたようだが、教師にも頼ってしっかりと未来に向けて歩み始めている。
後輩の成長をより強く実感した美鶴は小さく笑みを浮かべながら、スポーツ系の進路に進みたいと告げた順平に具体的な夢があるのかと尋ねた。
「スポーツ系というと随分と範囲が広くなるが、伊織は既になりたい

ものを決めているのか？」
「うーん。ザックリとだけですけど、スポーツインストラクターとかそういう感じのに興味があるなって段階っす。将来の仕事より、大学の部活でまた野球やってみたいってのもありますけどね」
順平は小学生の頃に地元の少年野球をしていたそうだが、父親が事業に失敗してから色々とあって地元を離れ寮暮らしになった。
新しい環境に慣れる必要があったことや、田舎と違って自分を誘惑するものの多い都会に来て、順平は部活よりも遊ぶことを選んでしまう。
ただ、それでも野球が嫌いになった訳ではなく、どうせ進学するなら部活で野球をやりたいと笑った。
ニュクスとの戦いに勝っていなければ、こうやって未来について笑って話す事もなかったのだと思うと、美鶴としても命を懸けて挑んだ甲斐があったと思える。
無論、手に入れた結果全てに納得がいっている訳ではないが、この寮で過ごす最後の日だからと美鶴は今日を楽しい思い出で締めようと考え、順平が将来の事を真面目に考えていて安心したと話す。
「フフッ、伊織もしっかりと将来を考えていると知れて良かった」
「ああ、今日一番の収穫だな」
「ちょっ、なんでっすか!?　オレっちいつも真面目にしてますよ！」
先輩二人からのまさかの言葉に順平は驚きながら抗議の声をあげる。
天田と風花はそんな順平の様子に声をあげて笑う。
全員で集まることは出来なかったが、こうやって一つの節目をこの場所で過ごせて良かったと、集まった者たちが心の中で同じ事を思っていた時、入口の扉がノックされる音が響いた。
美鶴が鍵は開いていると答え、扉がゆっくり開くとそこにはアイギスが立っていた。
「すみません、遅くなりました」
「アイギス、久しぶりだな。気にしなくていい。最初から全員集まれない事は分かっていた」

「はい。聞いています。なので、七歌さんやゆかりさんの召喚器を預かってきました」
言いながら皆のいるテーブルまで近付いたアイギスは、持って来ていた鞄の中から二つの召喚器を取り出して静かにテーブルの上に置く。
今日は寮で過ごせる最後の時間だからと皆に声をかけていたが、それに加えて必要のなくなった召喚器の回収という用件も伝えられていた。
影時間が消えてもペルソナが召喚出来る事は確認されている。
その力を使えば普通では解決出来ない事件や事故で活躍出来ることも分かっている。
だが、今後の子どもたちの生活を考えていらぬ疑惑をかけられる可能性は排除した方が良いと、桐条武治や桐条グループは召喚器の回収を提案した。
銃身の中身は詰めてあるが召喚器自体は本物の拳銃を使っており、それを持っているだけでも何かあった時に疑われかねないのだ。
中学時代の湊が海外へ留学していた時も、裏界最大組織だった〝久遠の安寧〟の姫君として扱われていたソフィアが超常の力を持っているという情報が流れていた。
つまり、各国の上層部は人智の及ばぬ超常の力が実在していると知っており、国によってはその力を持つ者を自国の戦力として確保しようと動いている。
ここ日本ではそんな動きは今のところないようだが、海外の勢力から狙われる危険だってある。
だからこそ、湊の呼びかけによって世界が影時間について忘れているこのタイミングで、物的証拠となる召喚器などを回収してしまおうと桐条は動いた。
強制ではないとも言われていたし、個別の対応でも構わないと言われてもいた。
しかし、特別課外活動部の子どもたちは区切りをつけるため提案に乗った。

真田の分は荒垣が、七歌とゆかりの分はアイギスが預かって、こうして全ての召喚器が揃った。
受け取った召喚器を美鶴は専用の鞄に納め、しっかりと施錠すると小さく息を吐く。
「……これで本当に終わりだな。まぁ、吉野やコロマルが持つＥＰ社側で用意した召喚器はそのままだが、特別課外活動部としての活動は召喚器の返還を持って終了だ」
「お守りみたいなものでしたから、本当に手放すとなると少し落ち着きませんね」
「フフッ、私なんて小学生の頃から持っていたんだぞ？　この違和感にも慣れていくしかない」
風花にとってペルソナは皆と自分を繋いでくれた絆だ。
それを呼び出すための召喚器はお守りで、とても大切な物だっただけに落ち着かないものがある。
美鶴も同じような事を考えていたため、これまでの人生の約半分を共に過していただけあって、この違和感に慣れるのは苦労しそうだと苦笑を浮かべた。
影時間の発生から十年。最初の数年はペルソナについて手探りで研究していたが、一人の被験体によって研究は飛躍的に進み、その流れで美鶴も召喚器を手に入れた。
本当に長い時間を一緒に過したんだなと感傷に浸りかけるも、すぐに思考を戻した美鶴は明るい話題を探して今夜について他の者たちに説明する。
「さて、一つの節目という事でいっかのように今夜も寿司を頼んでいる。可能なら参加していってくれ」
「寿司っ!?　特上、特上っすか!?」
「ん？　まぁ、そうだ。せっかくの祝い事だから奮発させてもらった」
「よっしゃー！　オレっち今日はこっちで寝るって言ってあるんで大丈夫でーす！」
桐条家が贔屓にしている店の特上寿司と聞いて順平が立ち上がってガッツポーズを決める。

既にこの寮で生活している者はいないが、各部屋の机や本棚にベッドなどは備え付けのものなので残っている。
ベッドのマットレスや毛布も残っているため、着替えさえ持って来ていれば最後に寮で過すことは可能だった。
順平以外のメンバーも同じように考えていたようで、アイギスはラビリスに、風花は両親にそれぞれ寮に泊ると伝えてきている。
どうせなら他の者たちも後から合流してきてくれればと思うが、それぞれ用事があるというなら強くは言えない。
それでも、こうやって何人かは集まることが出来たのだ。
夜に行なわれる〝お疲れ様会〟までの間、集まったメンバーたちは思い出話をしたり、進路や新生活について話したり、改めて寮の中を見てまわったりと楽しい時間を過した。

第四百六十六話　三月三一日

夜――巌戸台分寮

この寮に集まって過すのも今日で最後。

それぞれの生活もあって全員で集まることは出来なかったが、集まれた六人で特上寿司や荒垣の手料理を食べて楽しく談笑する事が出来た。

記憶を取り戻してからおよそ一ヶ月しか経っていないものの、卒業した三年生たちは勿論、月光館学園に残って進級する者たちにも新しい生活の準備がある。

新三年生になる順平たちは受験生として、今後の人生に大きく影響する選択をする必要があるため、そのために動き始めている者たちを無理矢理に誘うことは出来なかった。

だが、それでも集まった者たちは思い出話に花を咲かせ、今後の予定や将来に向けて話し合って、仲間としての絆を再確認する時間を過ごせたことに満足していた。

食事がほとんど終わってからもメンバーたちはエントランスに残り、ちょっとした雑談を交わしたり、お茶を飲んだりと穏やかな時を過す。

こんな時間を過すのは本当に久しぶりで、それを口にする者はいないがまるで戦っていた頃のようだと懐かしさすら感じている。

《先月から、原因不明のまま患者数が激減し、ひとまず収束に向かっている〝無気力症〟。ですが、社会清潔に過度のストレスを感じている人の数は、減っていないようです。厚生労働省の調べによりますと……》

そうして、ゆったりとした時間を過していると、夜も更けてテレビで流れていたニュースもまとめトピックに入っている。

今読まれたニュースによると、原因となる影時間とシャドウが消えた事で、東京周辺の患者だけでなく海外の患者たちも回復に向かっているという。

真実を知らない者たちは無気力症は精神病の一種で、全国に拡大が

進んだのはある種の集団催眠のような事が起きたのだと推測している。
その推測はある意味で正しい。無気力症の直接の原因はシャドウが抜け出る事だが、そうなる前の精神のバランスが崩れる原因の一つに、〝そういう空気〟にあてられてというのがあった。
無意識であったり無自覚であったり、本気で滅びについて理解してなくとも、暗い雰囲気が蔓延しているのは多くの人が感じ取っていた。
社会全体に広まったそんな曖昧なものによって世界が滅びかけたのだから、人の心が引き起こす現象というのは馬鹿に出来ない。
あの戦いにおいて、人の心が起こす奇跡の正と負の両方を見た者たちは、もうあんなことが起きる事はないのだろうと密かに思う。
ニュースの話題が変わったタイミングで思考から意識を浮上させた順平は、時間が気になり携帯を取りだすと時計機能で時刻を確認する。
「うげ、もうこんな時間かよ。マジであっという間だな」
食べた後ものんびりしていたが思っていた以上に時間が経っていた事に驚く順平。
その言葉で美鶴もエントランスの時計に視線を向けると、後もう少しで日付が変わる時間になっていた。
これまでの習慣からどうしても日を跨ぐ時間というのは気になってしまう。
無論、あの戦いから一度たりとも異変は起きておらず、桐条グループの方でもシャドウ反応は感知していない。
徐々にこういった感覚を抜いて、平和な日常に慣れていかなければと心の中で考えつつも、まだまだ慣れないと苦笑しながら口を開く。
「もうすぐ零時か……。こういった催しも久しぶりで、ついつい、何もせず過してしまったな。こうして集まっていると、どうしても以前を思い出す。そのせいかも知れない」
美鶴は国内で最も偏差値の高い大学へと進学が決まっているが、それと並行して桐条グループを継ぐための準備を進めるつもりでいる。

帝王学などは昔からやっているが、やはり経営者としてやっていくには経済について学ぶだけでなく、実地や生きた数字を見ての判断力なども求められる。
おかげで大学入学前の時点でかなり先までスケジュールは埋まっており、こうやって心を許せる仲間と集まる機会も当分ない。
今回の集まりは節目だからと時間を作ったが、素の自分でいられる仲間との時間はやはり掛け替えのないものだと再認識していれば、風花と天田もその気持ちは理解出来ると返す。
「それ、ちょっと分かります。ここは本当に思い出がいっぱいで、実家に戻る準備をしなきゃいけないのに私もよく長居しちゃってました」
「なんだかんだ言っても戦ってた頃は楽しかったですよね。その……楽しい事ばっかりじゃなかったし。最後の戦いの事は今でも納得しきれてないんですけど。それでも、貴重な時間を過ごせたっていうか」
戦っていたのはここ一ヶ月前までの事なのに、随分と昔の事のように思えてしまう。
本当の命懸けで戦う事なんて今後はもうないだろう。
それを思えば人生で最も濃密で鮮烈な時間を過したと言える。
ただ、なんだかんだと楽しかった仲間と過す戦いの日々の中で、その結末だけは後悔が残ると天田は言った。
話を聞いていた者たちも彼と同じように感じているのだろう。
仲間と過した日々の尊さと、望んだものとは異なる結末への未練、どちらも同意だと荒垣が小さく笑う。
「……ま、あいつの事で納得出来てるやつなんていねぇよ。有里自身、別に理解して貰うつもりもなかったみたいだしな」
「でも、話して貰えてたら僕たちにも何か出来ることがあったかもしれないじゃないですか」
「でもじゃねえ。あの戦いじゃ全員が出来る事をやった。誰一人として手なんか抜いてねぇ。だが、最高の結末なんざなくて、それでもとあいつは選べる最善を選んだ。……そう思うしかねぇだろ」
納得出来ない気持ちは一緒だが、あの時こうしていればという後悔

の気持ちに囚われてはいけない。
彼の考えている事などほとんど理解出来ないが、湊だって別に死にたいとは思っていなかった事は荒垣にも分かる。
自分の手は血で汚れているからと、いつか皆の前から姿を消すつもりではいたのかもしれないが、影時間が消えようと日常にも危険は潜んでいる。
であるならば、湊は影からチドリやアイギスを守り続けようと思っていたはずだ。
その彼が帰ってこなかった以上、選べる中ではそれが最善の結果だったのだと、考えすぎて自分を責めようとする天田を荒垣は止めた。
二人の会話が終わると、直前の内容もあって場の空気がしんみりとしてしまう。
元々、今日は順平を除いて落ち着いた静かなメンバーが揃っていたため、こうなると空気を変えるのは難しいのだが、そういう事ならと順平が最近感じていた不満について漏らす。
「確かに戦ってた時は楽しかったけどさ。それよりなんつか、世間の〝今〟が納得いかない感じしねぇ？　こっちは将来について真面目に考え始めたってのに、街中とか歩いてっと今さえ楽しきゃいいっつーノリのやつばっか見るんだよ。ストレガの広めたニュクス教とか、まだ地味に流行ってんだぜ？　まぁ、〝滅びサイコー〟とか言ってる訳じゃねーけど、こっちは死ぬ思いしたってのに守ったのがアレじゃやるせねーよ」
ぐったりと疲れたように肩を落とす順平の姿に、美鶴は思わず笑ってしまうが気持ちは理解出来た。
あの戦いで湊が討ち倒したのは人に呼ばれて降臨したニュクスだけであり、人々の心にまでは干渉出来ていない。
湊の力を使えば他人の心や記憶を操作する事も出来ただろうが、そんな世界を彼は望まず人々の心は自由なままだ。
だからこそ、ストレガと幾月が広めたニュクス教の思想に感化された者がいてもおかしくはない。

なにせ、それはたった二ヶ月前まで世界中に広まっていた思想なのだから。
「仕方ないさ。私たちは〝滅び〟を防いだだけで、世直しをした訳じゃないからな。大元が消えた以上はじきに収束する。それまでは我慢するしかない」
「ですかね。はぁあ、やれやれ……」
ストレガと幾月はあの戦いで姿を消した。死んだとは思えないが、影時間が消えた以上、彼らが再起を図ることはないだろう。
教祖であるタカヤたちがおらず、無気力症も全員が快方に向かっている。
ならば、ニュクス教もしばらくすれば自然消滅するはずだ。
それまでしばらく我慢するかと順平が自分を納得させれば、話している間に時間が過ぎて丁度日付を跨ぐ直前になっていた。
《……以上、気象情報をお伝えしました。間もなく、午前零時です》
ニュースキャスターが原稿を読み終わり、午前零時を報せる時報がなる。
ピ、ピ、ピ、ポーンと静かになったエントランスで全員がその音を聞いていれば、零時になったまさにその瞬間、〝ガチャンッ〟と不可思議な音が全員の頭の中に響いた。
不意の出来事だがこれまでの経験により、全員が驚きながらも表情を引き締めて立ち上がる。
「今の……!!」
「零時ちょうどって……まさか、影時間!?」
天田と風花の声に反応し、すぐにアイギスたちは周囲を警戒し、順平が状況を確認するべく急いで寮の外へと飛び出す。
影時間特有の空気は感じず、寮の電気も生きている。けれど、先ほど何かの音を聞いたのは確かだ。
寮内に残った者たちが警戒を続けていると、外から戻ってきた順平が車も人も動いていると報告する。
「外は何もなってなかった。オレらみたいに、不思議そうにしてるやつもいなかった」

「んじゃ、さっきのは何だ。お前らも変な音は聞いたんだろ？」
荒垣の質問に全員が頷いて返す。一人か二人ならば偶然で済むが、全員となると何かがあったと警戒しない訳にはいかない。
無論、それが寮内の設備等に何かがあったという物理的な問題であればいいのだが、影時間の存在を知る者にとって零時丁度に起きた何かというのはどうしても警戒してしまう。
周囲を見渡しても不自然な部分はなく、本当に気のせいだったのかという空気がメンバーたちの間に流れ始めた頃、テレビに視線を向けたアイギスがある事に気付く。
「あれ、このニュース……」
言われて他の者たちがテレビに視線を向けると、女性キャスターが日替わり卓上カレンダーを捲りながらニュース開始の挨拶を始める姿が映っている。
《こんばんは、日付が変わりまして、三月三一日のニュースをお伝えします……》
画面に映る卓上カレンダーの日付と、キャスターの言葉にアイギスは首を傾げる。
なにせ自分たちは今月で寮が最後だからと三月の末日に集まったのだ。日付が変われば次は当然四月のはず。
月が変わるという分かり易いタイミングで日付を間違えるとは思えないが、自分が勘違いしている可能性も疑ってアイギスは他の者に尋ねた。
「今日って、もう三一日じゃないですよね？　キャスターの人、間違えてるんでしょうか？」
「まぁ、たまにはこういうミスもあんだろ。深夜だしテレビ局の人らも頭働いてねーのかもな」
順平も既に三月ではない事は分かっていたので、アイギスの勘違いではなくテレビのミスだと頷いた。
日付の間違いというのは珍しいミスではあるが、テロップで表示された人名や地名が間違えていて、後で訂正とお詫びをするという場面はたまに見る。

故に、今回もそういうものだろうと思考を先ほどの異変について戻せば、警戒していた荒垣が僅かに警戒を緩めながら口を開く。
「特に何も起きてねぇみたいだな」
「あぁ、見たところ、そのようだな」
確かに何かしらのおかしな反応は感じたのに、今のところは何の異変も起きていない。
探知型である風花も異変を感知出来ていないのか首を傾げており、先ほどの音は何かの偶然で聞こえたもののようだと言うことで話がまとまってゆく。
「はぁ、タイミング良くデカいトラックでも通ったんですかね？　ま、時間も時間だし、今夜はこの辺でお開きって感じスかね……。なーんか、寮の最後の一日だってのに微妙なシメになっちまったな。ったく」
重い荷物を運ぶトラックの荷台がガシャンと音をさせているのを聞いたことがある。
もしかすると、零時を迎えるタイミングと、寮の前を通ったトラックのその音が重なり、影時間の件で零時というタイミングに敏感になっていた全員が勘違いしたのではと順平は告げた。
それを聞いた他の者たちも、もしかしたらそうかもしれないと一応の納得を見せる。
まだ完全にそうだと決まった訳ではないが、何も起きていたのは確かなのだ。
全員で食事の後片付けを済まし食事会が終わると、アイギスが引っ越しの準備もあるので先に部屋に戻らせてもらうと皆に話す。
「では、私は先に上がらせてもらいます。明日の移動の準備もあるので」
「あ、うん。おやすみなさい、アイギス」
「んじゃな」
階段を上っていくアイギスを他のメンバーで見送り、他の者たちもそれぞれ細々とした用事を済ませて解散の流れとなる。
ただ、やはり先ほどの事が偶然だと思えなかった美鶴は、用心のた

めここにいないメンバーたちにも異変はなかったかとメールで連絡を送っておくのだった。

第四百六十七話　襲撃者

記憶を取り戻したあの日からアイギスは何度も同じ夢を見た。
何もない暗闇だけが広がる空間、遠くに見える彼の後ろ姿、どれだけ走っても追い付くことが出来ない自分。
その夢を見る度にアイギスは己の無力を嘆いた。
何度も同じ夢を見ることで、アイギスは自分の心理的なものが関係しているのだろうと調べた。
その夢の分析が本当に正しいのかどうかは分からない。
けれど、それを信じるとすれば、最後の戦いで彼を一人行かせてしまった事への後悔が関係しているらしい。
指摘されずともそんな事は分かっている。自分だけじゃない。彼の事を覚えている全員が同じ気持ちのはずだから。
（……本当は分かっていました。わたしたちではニュクスに勝てないと）
ニュクスが現われ、集まってきた不完全なシャドウの群れに呑まれた時点で、アイギスは最後の戦いにおける自分の役割の終了を悟っていた。
アレには勝てない。あんな存在に人が勝てる訳がない。
なにせ、力の規模が把握しきれず、どう戦えば良いのかまるで分からないのだから。
湊が現われて全てのシャドウもどきを祓った時も、自分はこれ以上何の役にも立てないという気持ちが真っ先にあった。
絶対に勝たなくてはいけない戦いで、勝利の可能性を持つ青年への協力ではなく、自身の戦いの終わりを悟るなどどうかしている。
普通の人間ならもっと最後まで足掻こうとしたのだろうか。
自分と同じように人ならざる存在から人間になった姉や綾時は最後まで足掻こうとしていたのか。
もしも、ラビリスや綾時が諦めずに足掻こうとしていたのなら、諦めたのはアイギス個人の心の弱さが原因という事になる。

逆に、ラビリスたちが同じように諦めていたなら、人として生きた経験の少なさが諦めの速さの原因だと思われる。
（……でも、こうやって後になって後悔するなら最後まで足掻こうとすれば良かった）
どうしてあの時、自分は少しでも諦めてしまったのか。
もっと力があればと悔しがるならまだしも、湊という最後の希望が残っている状態で諦めてしまった心の弱さに嫌気がさす。
深い眠りでは彼との別れを延々と見せられ、浅い眠りではこうして今でも彼の事を考えてしまう。
それでも、翌日には普通に動けているため、一応は脳や身体は休めているのだろうが、このままでは心が先に死ぬだろう。
ただ、今のアイギスにそういった正常な判断は出来ない。
新生活に向けての準備を進めていることで、自分が動けていると思っているアイギスには、客観的に自分を見るだけの余裕がなかった。
だからこそ、その事件は起きたのかもしれない。
未来の情報を知った湊が〝時の空回り〟と呼んだ終わらない三月、その始まりを彼女たちが本当の意味で理解することになった事態は寮全体に響く突然の衝撃という形で起きた。

深夜――巌戸台分寮
浅い眠りについていたアイギスは、突然感じた衝撃に意識を覚醒させた。
以前、この寮が桐条グループの情報部に襲われた事もあって、どこかの組織が機密情報やペルソナ使いを確保するために襲撃してくる可能性はある。
しかし、アイギスが考えたのは人間ではなく、シャドウなど異形の存在が出現した可能性だ。
日付を跨いだ時に感じた違和感が、気のせいではなく現実だった。
アイギスが部屋に戻ってから一時間経っているため、どうしてこれだけの時間差で事態が動いたのかは分からない。

けれど、相手の強さと数によっては対応しきれない可能性があるため、アイギスはすぐにベッドから起きると部屋を飛び出して一階のエントランスを目指す。
私室のある三階から階段を駆け下りると、途中で青ざめた顔をした風花と出会った。
非戦闘員である彼女がその場にいても戦力にならない。敵に狙われた時にはむしろ足を引っ張る事になるため、自らの判断か他の仲間からか逃げるように指示されたかして逃げてきたに違いない。
アイギスの姿を見た風花は一瞬だけ安堵の表情を見せるも、すぐに今できる最善を尽くすそうと表情を引き締めて叫ぶように情報を伝えてきた。
「アイギス、エントランスの床が突然開いて敵が！　人型の敵が一体、皆が戦ってるけど武器と召喚器がなくて！」
「分かりました。風花さんは作戦室へ向かってください」
寮全体に響いた衝撃は床が開いた事によるものらしい。
機密の多い施設の用途から脱出用の地下通路などは存在しないが、カーペットの下に避難場所か床下収納のハッチがあったのかもしれない。
そんな場所から現われた敵となると、シャドウの生き残りか、もしくは、姉であるラビリスと同じように封印処置を施された対シャドウ兵器という線が濃厚。
敵の正体について考察しながら階段を駆け下り、食器や家具が壊れるような激しい音が鳴る一階へ到着すると、血を流して倒れる仲間たちに囲まれ佇む敵を発見した。
蝶を模したピンク色のバイザーで顔を隠しているが、輪郭や体形からすると少女型に見える。
ただ、細いステッキ型のハンマーを持つ手の関節などが、人間ではなく機械のそれだ。
自身の予想がほぼ当たっていた事で、アイギスはそれほどの驚きを見せずにリストバンドから銃を抜くことが出来た。
倒れている天田の胸ぐらを掴み、片手で持ち上げて首を絞めている

敵に向かってアイギスは引き金を引く。
自分に向いた銃口が火を吹いた事で、敵はすぐに天田を投げ捨てて回避行動を取った。
投げ捨てられた天田は、危険な角度で床にぶつかる前に駆け込んだ荒垣が受け止めた。
見れば荒垣も口の端が切れて血を流している。周りで身体の一部を庇うようにしながらも敵を油断なく睨んでいる順平や美鶴も服が汚れていた。
対シャドウ兵器を相手に武器やペルソナもなく挑み、全員がなんとか大怪我もせずに済んでいたのは不幸中の幸いか。
細身のハンマーを両手で構えたままアイギスの方を向いた敵に、アイギスは銃口を向けたまま声をかける。
「……あなたは対シャドウ兵器ですね？　何のために皆さんを襲撃したのですか？」
尋ねたところで答えてくれるとは思わない。思考にエラーが発生し、仲間たちの放つペルソナ反応をシャドウ反応と誤認して襲った可能性もあるのだ。
もしも、そういった事で襲ったのであれば、力尽くで止めてからメンテナンスを行なってエラーの修復を行なうしかない。
だが、正常な判断がつく状態で、何かの誤解があっての行動であれば言葉での説得も可能かもしれない。
そう思ってアイギスが相手の言葉を待っていれば、黒髪に黒いボディをした対シャドウ兵器の少女が口を開いた。
「私はメティス。あなたを守るために来ました」
「わたしを守る？　一体何から？」
「……この人たちは危険です。あなたに害を及ぼす存在。よって、排除行動に移ります」
言い終わると同時にメティスはアイギスに背を向け、順平たちへ向かって行こうとする。
何が起きていて、何を持って仲間たちを危険だと言ったのかは分からない。

それでも、自分を守るために仲間を排除するなど到底受け入れられる事ではない。
相手が行動を開始する前に、アイギスは敵の足や腕を狙って銃弾を放つ。
メティスは素早くそれに反応すると跳躍して出入り口の前に着地、アイギスはそちらに向かって駆け出すと、その隙に距離が開いた事で仲間たちは痛みを我慢しながらも階段の方へ移動した。
守るべき対象であるアイギスが自分に向かってきたことで、相手も言葉では解決しないと判断したのか改めて武器を構える。
「理解して貰えないのならしょうがありません。あなたを無力化してから敵の排除に移ります」
「そんな事はさせません！」
敵の武器はハンマー。それに銃で対応するのは難しい。
アイギスは戦闘用のナックルに武器を換装すると、インファイトでの制圧に移る。
ナックルを付けた拳でアイギスが殴ろうとすれば、メティスはそれをハンマーの軸で受けて押し返す。
逆に相手が攻めてくれれば、振りかぶられたハンマーをバックステップで躱し、直後の隙を狙って左手で殴りつける。
殴られた敵は数歩後退するも、すぐに横薙ぎにハンマーを振るって追撃を阻んできた。
追撃を諦めたアイギスは一定の距離を保ちながら警戒する。
ほんの僅かな交差で得られた情報から、スペック自体は人間になる前の自分と然程変わらないと判断。
だが、関節部などが目立たないようになっている事から、メティスが自分よりも後期型の機体だと予想した。
姉であるラビリスたち五式からペルソナの搭載が試みられ、七式アイギスからは正式に実装された。
その後期型ならば当然ペルソナを持っているだろう。
自身も崩落に巻き込まれる危険性を考えれば、室内でペルソナを使うなど常識では考えられないが、対シャドウ兵器であれば敵の排除に

手段を選ばない。
今の自分の装備では勝てないと判断したのか、メティスは早々に切り札を切ってきた。
「来て、プシュケイ！」
水色の欠片が彼女の頭上で渦巻いてゆく。
渦巻く欠片の中から姿を現わしたのは、巨大な赤い蝶の羽根で出来た仮面に、花嫁衣装のようにも見える白いドレスの女性型ペルソナ。
ペルソナの能力はその見た目から多少は推測出来るのだが、メティスのプシュケイは戦闘用には見えない見た目をしている。
となると、魔法タイプだろうかと予想しながら、相手が動く前にアイギスもペルソナを呼び出して対抗しようとした。
「ペルソナ、セットアップ！」
自身の核であるパピヨンハートに力を集め、集中した力を解き放つようにしてアテナを呼び出す。
メティスと同じように渦巻く水色の欠片の中からペルソナが姿を現わすが、その時、アイギスはアテナとの繋がりに違和感を覚えた。
確かにアテナとの繋がりは存在するものの、意思や力の供給にノイズが走る。
十の力を送ろうとも、二割しか送れていないかのような、不完全な形での繋がりに召喚が失敗したのかと考える。
だが、召喚の失敗など相手にすれば知った事ではない。
アイギスが自身の不調に戸惑っている間に、メティスはプシュケイに行動の指示を送った。
「プシュケイ、デッドエンド！」
「っ、アテナ、電光石火！」
プシュケイの前に斬撃のエネルギーが集中すると、対抗するためアテナにもスキルの発動を指示する。
見た目に反して物理スキルを持っていた事に驚くが、放たれた両者の間で攻撃がぶつかり合うと、アテナの電光石火が切られて霧散し、そのまま進んだデッドエンドの斬撃がアテナを襲う。
ニュクスとの戦いに向けて鍛え、あれだけの死闘を経験しているア

イギスが力負けした。
まさかの結果に本人だけでなく、仲間たちも驚愕する。
その隙を突いてメティスは動き出し、プシュケイをアテナにぶつけ、自身は桜色の光を放出しながら高速で動きアイギスの腹部を殴りつけた。
「アイギスッ!?」
殴られたアイギスは吹き飛びキッチンの前まで転がる。
仲間が心配して声をかけてくるが、止まったアイギスは身体を起こしつつ痛みで定まらない思考で敵を分析していた。
先ほどとは比べ物にならぬほどの高速移動。身体から立ち上る桜色の光は初めて見るが、その正体は自分たちにも搭載されているオルギアモードだと察した。
アイギスよりも後に作られた機体である以上、ペルソナと同様に、そちらも搭載されていて当然だった。
ペルソナの不調というアクシデントに見舞われたが、オルギアモードについて警戒していなかったのはアイギスの落ち度。
ブーストの掛かった機械の身体に殴られた事で、すぐには起き上がれそうにもないが、アイギスが倒れたままでいる事を確認したメティスが仲間の方へと歩き出した。
怪我を負っていて武器もペルソナもない彼らに勝ち目はない。
リストバンドの中にあるコピー品の召喚器や武器を渡そうにも、オルギアモードを使った相手が割り込んで邪魔されるだろう。
痛みで霞む視界の中で、冷たい空気を纏ったまま仲間たちへ近付くメティスの姿が映る。
せっかく、滅びを乗り越えたのに、ようやく、平和な世界で生きられるようになったのに、こんなところで終わってしまうのか。
怒りや悲しみよりも、強い悔しさが胸の内から湧き起こる。
彼が命懸けで守ったものが失われる。理由も分からないまま、理不尽な存在によって奪われてしまう。
「そんな事――――認められませんっ!!」
彼が守ったものを、彼が生きた証を絶対に奪わせてなるものか。

決意と共に湧き上がる感情の奔流を力に変えて、アイギスは先ほどの不調を無視して無理矢理にペルソナを呼び出した。
倒れていたアイギスが再びペルソナを召喚した事に、まだ動けたのかとメティスが警戒を見せる。
だが、現われたアテナにノイズが走り、その姿が〝吟遊詩人〟に変わった事で警戒が驚愕に変わった。
現われた吟遊詩人・愚者〝オルフェウス〟は、スピーカー状になった腹部から増幅させた音波を放出し、メティスに防御不可能な攻撃を繰り出す。
実体のない音を利用した衝撃波に襲われたメティスは吹き飛び、壁にぶつかった後もまるで重力に押し潰されるかのように床へと押え付けられる。
オルギアモードを使って脱出を試みるも、抵抗空しく制限時間を超えたのか桜色の光は消滅し、最後は身体を投げ出した格好のまま機能停止した。
それを見届けたアイギスは仲間を守れた事に安堵すると、自身を呼ぶ仲間の声を聞きながら意識を手放した。

第四百六十八話　新たな契約者

――ベルベットルーム

寮全体に響くほどの音と衝撃に飛び起き、異変を察知して寮の一階へ向かうとそこには傷ついた仲間と黒い装備に身を包んだ少女がいた。

突然開いた地下への扉から現われたという、メティスと名乗った対シャドウ兵器の少女との戦闘で意識を失ったアイギスは、暗闇の中で不思議な浮遊感に包まれていた。

風を感じている訳でもないのに、自分がどこかへと移動しているのが分かる。

何が出来る訳でもないため、その感覚に身を委ねていると目的地が近いことが分かった。

暗闇の中でぼんやりと光る青い扉。

アイギスがそれに近付くと勝手に扉は開き、扉を潜るとアイギスの意識も浮上してそこで目を覚ました。

「ん……ここは……？」

目を覚ますとアイギスは自分が見知らぬ場所にいる事に気付く。

竪琴のようなデザインの椅子に座る自分、群青色のクロスが掛けられた大きなラウンドテーブル、テーブルを挟んだ向かい側のソファーに腰掛ける鼻の長い不気味な老人、その傍に控えている三人の美男美女。

最後の美男美女とは少しだけ面識があったため、今居る下へ下へと降っているこのエレベーターが何と呼ばれる場所なのか少女は理解する。

大きな本を脇に抱えるように持った女性が小さく笑いかけてきているため、相手もしっかりとアイギスの事を認識しているようだ。

「ここはベルベットルームですか？」

「フッフッフ、その通り。ここは精神と物質、夢と現実の狭間に存在するベルベットルーム。ようこそお越しくださいました。私はこの部屋の主であるイゴール。歓迎しますぞ、新たなお客人」

先ほどの不思議な夢と違って今度は物に触れている感覚がある。
だというのに、不気味な老人はここが夢と現実の狭間だと言った。
アイギスたちが活動していた影時間も、ある意味では似たような性質を持った世界だったように思う。
ただ、影時間が現実世界をベースに異界の理を限定展開した物なのに対し、このベルベットルームは夢の世界で現実世界を模倣しただけの物のように思える。
湊は肉体ごとベルベットルームに入れていたが、七歌は意識だけ移動して肉体は現実世界に残っていた。
アイギスも現実世界で意識を失ってからここを訪れたので、やはりここは夢を通じて訪れる事が出来る世界なのだろう。
その予想が当たっているかの確認のため、自分を歓迎すると言った老人イゴールにアイギスは話しかける。
「八雲さんは自由に出入りしていたようですが、他の人間は七歌さんのように意識だけがここを訪れるという認識で合っていますか？」
「基本的にはその通りです。ですが、条件次第では他のお客様でも肉体を持って訪れる事は可能でございます」
「その条件というのは？」
聞き返しながらも、肉体を持ってここを訪れることのメリットは特に思い浮かばない。
意識だけが訪れているはずのアイギス自身は、しっかりと椅子に座っている感触を感じているし、相手との会話が成立している事も理解している。
意識だけ、つまり魂だけが訪れているのだとすれば、魂の得た経験が肉体に反映される事は本来あり得ない。
しかし、七歌はベルベットルーム内での活動をしっかりと記憶したまま、意識を肉体に戻した後もちゃんと記憶が連続しているようだった。
これで魔法的な不思議な力で記憶を保持出来ると言われたら首を傾げるが、湊のように限られた者しか肉体を持って訪れる事が出来ないのなら、肉体を持って訪れる事のメリットがあるはず。

どういう訳か彼と同じようにこの部屋に辿り着いたのだから、今更かもしれないが少しでも彼に近づけるよう色々と情報を持って帰ろうとアイギスが言葉を待てば、イゴールはどこか楽しそうな様子で答えた。
「最も簡単なところで言えば素質です。影時間の適性のように、この部屋のような〝異界〟への高い親和性を持っていると部屋の住人になる事すら可能となります。事実、彼は一時期ここに住んでいました」
「八雲さんがこの場所に？」
椅子とテーブルしかないこの部屋は、どう考えても人が生活するには適していない。
だが、周りを見渡してみると、壁際にそれぞれデザインの異なるいくつもの扉が並んでいる事に気付いた。
背後にある扉は意識が覚醒する前に潜った扉と同じデザインなので、背後の扉はアイギスたちの暮らす現実世界からここへ来るための扉で、他の扉はそれぞれ別の場所に通じるゲートの役割を持っているのかもしれない。
もしも、そうであれば、イゴールの言った通り湊が暮らせるような居住区が存在する可能性もある。
アイギスがそんな風に周りの扉を眺めていれば、これまで笑みを浮かべたまま黙っていたエリザベスが会話に参加してくる。
「十年前、デスと戦い意識を失った八雲様の精神はここへ辿り着きました。その時は精神のみで訪れましたが、だとしても異界に馴染めなければ暮らす事は出来ません。数日こちらに滞在し、その間にペルソナやシャドウに関する知識を私共で授けたのです」
「……エルゴ研で目覚めた時点でペルソナについて知っていたという記録が残っていましたが、そういう理由だったのですね」
「ええ、八雲様は最初から我々の存在を桐条側に匂わせる事で牽制していたようです」
当時のエルゴ研は手段を選んでいられない状況にあった。
湊が天然のペルソナ覚醒者である事は分かっていても、人工ペルソ

ナ使いらの性能を上げるために、最悪彼の脳を解剖する事も検討されていたほどだ。
その実験はあくまで会議の中で一つの案として挙げられただけで、総帥に就いたばかりの桐条武治が彼に対する実験のほとんどを禁じていた事で流れるも、各研究室の室長たちはそれを無視して貴重なサンプルを使った実験を画策していた。
悪意や敵意に敏感だった湊本人も、自分が狙われている事には気付いていたのだろう。
そこで彼は、自分の背後に影時間やペルソナについて知る別の組織がある事を匂わせる策を取った。
エルゴ研の者たちが非道な人体実験を繰り返していたのは、〝影時間を知る自分たちしか出来ない〟という前提条件で、〝人類のため〟という大義名分を持っていたからこそ出来た事だ。
しかし、湊はその前提条件をぶち壊した。エルゴ研の者たちよりも影時間やペルソナについて詳しい者たちがいるという爆弾まで投げつけて。
人類のためだからと心を凍らせて実験に取り組んでいた研究員にすれば、自分たちよりも詳しい者たちがいるのならこれまでの研究は無駄だったのではないかと思っても無理はない。
実際、湊の助言によってエルゴ研の研究は進んだが、その裏で心を壊して職場を去った者たちもいた。
湊は無事に生き残り、研究の被害者も減ったことから湊の狙いは成功したと言える。
エリザベスらも湊のした事を責めるつもりはないようなので、この話はここまでにして本題に移ろうとアイギスは切り出した。
「それで、どうしてわたしはここに呼ばれたのですか？」
「フフッ、ここは契約を結んで訪れたお客人を手助けする場所。ここに呼ばれる者は皆何かしらの形で契約を果たしています」
「契約ですか？」
言われたところでアイギス自身に契約を結んだ覚えなどない。
いつ、どこで、誰とどんな内容で結んだのか。アイギスは何とか思

い出そうと考え込むが、やはり何も思い浮かばない。
　これではその契約とやらも果たせそうにないため、正面に座る老人に知っているなら教えて欲しいと素直に頼んだ。
「すみません、わたしが結んだ契約の内容は分かりますか？」
「おや、身に覚えがありませんかな？」
「はい。申し訳ない事に本当に分からないんです」
「そうですか。では、こちらで確認したお客人の契約は彼の青年への〝誓い〟ですな」
　言いながらイゴールが右手を水平に振るえば、テーブルの上に光が集まり一枚の紙が現われる。
　湊の結んだ契約も契約書の形で外部出力される事があったので、現われた紙も契約内容を確認するための物だろう。
　手を伸ばして紙を受け取ったアイギスが内容に目を通していると、イゴールはその契約が結ばれるに至った経緯も含めて本人に説明する。
「彼が命懸けで守った物、生きた証を、守りたい、奪わせない。その誓いによって契約は結ばれております。そして、気付いておりますかな？　ご自身の力が変化している事に」
　ベルベットルームはただ契約を結んだだけでは辿り着くことは出来ない。
　ここは契約を結んだ者が訪れる場所ではあるが、契約者として訪れる場合にはこの部屋にいる者の手助けが必要な状況にあるという別の条件もある。
　それこそがイゴールたちの役目であり、未だ自分に目覚めた新たな力への理解が追い付いていない少女にイゴールは静かに語りかける。
「貴女が新たに手に入れたのはワイルドの力。貴女のよく知る彼の青年と未だ契約の半ばにある少女が持つ力と同じ物です」
「八雲さんと七歌さんと同じ力がわたしに目覚めたんですか？」
「ええ。今はまだオルフェウスしか持っておられませんが、戦いの中で新たな可能性の芽を手に入れる事でしょう。その時にはここを訪れなさい。手に入れた可能性の芽同士を掛け合わせて新たな力を生

み出す等の手助けをいたします」
七歌に聞いた話では、シャドウを倒すとペルソナを手に入れる事があるらしい。
そして、ここベルベットルームでは、複数のペルソナを合体させる事で新たなペルソナを生み出す事が出来るという。
メティスという謎の対シャドウ兵器が現われ、アイギスは既に自分たちが何かの事件に巻き込まれている自覚がある。
となれば、湊のマフラーに通じているリストバンドの中身だけでは対応しきれない可能性もあるため、未だ使い方を把握しきれていないワイルドを使いこなすためのサポートが受けられるのは、アイギスとしても非常にありがたかった。
「アイギス様の担当はこの私エリザベスが務めさせて頂きます」
「エリザベスさんは八雲さんの担当だったのでは？」
「ええ、確かにその通り。ですが、八雲様は全ての契約を果たされたため、私と姉は現在担当がおりません。つまり、アイギス様の担当になる事に問題はないのです」
これまで湊はエリザベスとマーガレットの二人を担当にして活動していた。
契約を増やし担当者を二人にしなければならないほど、力もサポートも必要だったための処置だったが、その契約者だった青年は無事に全ての契約を果たして旅立って行った。
契約を終えて担当から外れた直後であればリフレッシュ期間も設けるが、エリザベスもマーガレットも十分に休んで新たな担当を持てる状態になっている。
そのため、今回は自分が貴女の担当になるとエリザベスが手を挙げたのだが、エリザベスが担当になることを受け入れたアイギスは、もし知っているのなら教えて欲しいと契約外の事を尋ねた。
「すみません、エリザベスさんは八雲さんが現在どのような状態か分かりますか？」
「……申し訳ありませんが、お答えする事は出来ません」
「知ってはいるのですね？」

今度の質問にエリザベスは感情の籠もらない笑みを顔に貼り付けたまま答えない。
ただ、その表情や雰囲気からすると、知っているけど理由があって話せないという事らしい。
自分たちもニュクスの子である綾時の予想を元に様々な可能性について考えたが、ベルベットルームの住人が知っているなら、やはり湊はまだニュクス側の世界に存在するのではと思ってしまう。
相手が質問に答えられない以上、ここで真実を知る事は出来ないものの、〝死んだ〟という明確な答えが返ってこなかったのは希望が持てる。
そうして、アイギスが気持ちを切り替えたところで〝ガチャンッ〟と頭の中に響く不穏な音が聞こえた。
それは昨夜のニュースを見ていた時の感覚と同じ物のようで、また、世界が影時間に切り替わる時の感覚にも似ている。
どうしてこちらの世界でそれが聞こえたのかは分からないが、アイギスが驚いているとイゴールが再び手を水平に振ってある物を渡してきた。
「そろそろ時間のようですな。こちらをお持ちなさい。青い扉にその鍵を使えば今度はご自分の意思でここを訪れる事が出来ます」
「あの、さっきの音は一体なんなのですか？」
「それはご自分の目でお確かめください。一つ助言をするとすれば、〝心の力が一つに集うとき、いかなる扉も開かれる〟この言葉をよく覚えておくと良いでしょう」
アイギスの手に小さな金色の鍵が収まると、徐々に瞼が降りてきて意識を保てなくなる。
イゴールの助言の意味は分からないが、自分たちが巻き込まれた事件に関わる事なのだと不思議と理解出来た。
「では、またのご来訪をお待ちしております。それでは、ごきげんよう……」
挨拶を返したいが既に身体の自由が効かない。
突然の異変に少しだけ驚いたが、何となく現実世界の目覚めが近付

いているのが分かった。
契約者の鍵は手に入れた。なら、またここを訪れた時に話を聞けばいい。
そんな事を考えながら、アイギスは椅子に座ったまま意識を手放し現実世界へ帰っていった。

第四百六十九話　再集結

――巌戸台分寮

突然現われた対シャドウ兵器である少女との戦闘でダメージを負ったアイギスは、敵の無力化に成功した直後に意識を失った。

普通の人間よりも頑丈で、怪我自体もしにくくなってはいるが、オルギアモードを使ったロボットの一撃は生身には重かった。

影時間が消えて以降、戦闘だけでなく訓練自体もしていなかったため、痛みに弱くなっていたのもあるとは思う。

もっとも、世界は平和になったのだから、彼女の今の状態を弛んでいると言う者はいないだろう。

そうして、意識を失った後、アイギスは不思議な夢のような物を見た。

どこまでも降下し続ける巨大なエレベーター、そこにいる人の形をした人外の住人たち。

一般人であればその見目麗しい外見に騙された事だろうが、少しでも戦いに身を置いた事があれば彼女たちの底知れぬ力に気付くだろう。

ただ、湊や七歌からその存在について聞いており、自身も相手と言葉を交わした経験のあるアイギスは自分が招かれた〝ベルベットルーム〟をすぐに受け入れる事が出来た。

ただし、湊の担当を務めていたはずのエリザベスが自分の担当になり、彼が全ての契約を果たし終えて旅立った事を認識させられる事になるのは予想外だった。

頭では分かっているつもりだったが、彼がいなくなった後に変化したものを見ると嫌でも理解させられる。

イゴールたちから新たな試練の始まりについて聞いていなければ、またもや帰ってこなかった湊の事ばかり考えて塞ぎ込んでいたに違いない。

新たに変化した力、新たに始まる試練、それらについて考えながらベルベットルームで意識を手放したアイギスは、自室のベッドで目を

覚まし自分が現実世界に戻ってきた事を理解した。
「ん……わたし、あの後……？」
一階のエントランスで意識を失ったはずだが、誰かが手当てしてくれたようで身体に不調はない。
起き上がってベッドから出ると、アイギスは身体の調子を確かめつつ、他の者たちを探して部屋を出る。
メティスと名乗った少女は一度行動不能にしたので、襲われた仲間たちも全員無事なはず。
となれば、相手を拘束してから、開いた地下への扉を調査しているのではないだろうか。
一応、警戒してすぐに武器を取り出せるようにだけ意識しながら、階段を下りていくと一階の方から話し声が聞こえてくる。
用事があって今日の催しに来られなかったメンバーの声を聞こえ、どうやら異常事態が起きたと呼び出されたようだと察する。
アイギスが階段を下りていくと、一階にいた者たちも気付いたようで、私服姿の七歌が手を挙げて声をかけてきた。
「おっすおっす！　なんか大変だったみたいだね。こっちも色々と話したい事あるんだけど、とりあえず怪我は大丈夫？」
「はい。治療していただいたようで、特に不調などもありません。皆さん、全員集まられたんですか？」
増えていたのは七歌だけじゃない。ゆかりに真田、姉であるラビリスとコロマル、そして、港区から離れた田舎に住んでいるチドリまでやって来ていた。
キッチンの傍で椅子に座ったまま鎖で拘束され、ラビリスに監視されているメティスの存在が気になるものの、俯いたまま身動き一つしていない事からどうやら座ったまま寝ているらしい。
寝ているなら安全だと判断して彼女の存在を思考の端へと追いやり、こんな事がなければ集まることはなかったはずだが、それでも仲間たちとの再会は嬉しいものだと素直に笑みを浮かべる。
後は綾時がいれば全員集合となる訳だが、アイギスが尋ねたタイミングで上の階から見慣れぬ箱を抱えた綾時と順平が降りてくる。

相手もアイギスに気付くと優しい笑みを浮かべて体調について尋ねてくる。
「やあ、アイギス。起きて大丈夫なのかい？」
「はい。今のところ問題はありません。それより、その箱は？」
「これは作戦室の奥の資料室に隠されていた湊からの贈り物だよ」
綾時の言葉を聞いた他の者たちの視線が彼の持つ箱に集まる。
湊はこの寮で生活しておらず、来たことだって数えるほどしかない。
だというのに、普段は施錠されている四階作戦室、そのさらに奥にある資料室に何を隠していたというのか。
一同が集まっていたテレビに近いテーブルの上に箱を置くと、綾時は蓋を開けて中身を手に取りながら説明した。
「この箱はどうやら時限式で開くようになっていたらしい。設定されていた時間は三月三十一日の二十三時五十分、つまり、日付が変わる少し前って事さ」
「それで中身は？」
「箱いっぱいの宝玉輪と二枚の便箋だよ。箱自体がＥＰ社製だった事と、便箋に書かれた文字が彼の物だったから湊からの贈り物と判断したんだ」
言いながら綾時は箱からキラキラと光る宝石のような物を取り出してみせる。
宝玉輪はタルタロスで稀に手に入った貴重な回復アイテムだ。
湊のペルソナが使う回復スキルには劣るが、瀕死の重傷であっても痕も残らず治療出来るだけの効果がある。
影時間解決のために戦っていた当時は、仲間にもしもの事があった時のため極僅かに手に入った物を用意してはいたが、その貴重さと効果があまりに高い事もあって出来る限り温存しようとしてしまい。ほとんど使われた事はない。
だが、影時間の記憶を失っていた間は勿論、その後も影時間が消えた事でペルソナを呼び出す機会もなく、メンバーらのペルソナ能力は決戦時と比べて酷く鈍っている。

それは戦闘力だけでなく回復スキルなどの力も同じで、仮に剣が腹を貫通するような事態が起きれば今のアイギスたちに仲間の命を繋ぐ手段はない。
突然現われたメティスに襲われた事で、メンバーたちは自分たちが何かの事件に巻き込まれ、再び戦う必要があるだろうという事も察している。
そんな事が起きる直前のタイミングで開くように設定されていた箱に、貴重な回復アイテムが山ほど入っていたとなれば、どれだけ鈍い頭の持ち主だろうと無関係とは思えないだろう。
となれば、一緒に入っていたという二枚の便箋にはかなり重要な事が書いてあるはず。
その場にいた者たちが視線で綾時に読み上げるよう指示すれば、便箋を手に取った綾時がそれぞれに目を通してから静かに読み上げた。
「まず一枚目の便箋には、〝俺を頼れ〟とだけ書かれているね」
「これを用意したのが有里君なら、俺って有里君の事だよね？」
綾時が読み上げた一枚目の便箋の内容にゆかりが首を傾げる。
いくら頼ろうにも本人は最後の戦いから未帰還のままだ。これでは頼りようがない。
もしかすると、自分が遺した回復アイテムを遠慮なく使えという意味で書いたのかもしれないが、内容がシンプル過ぎるが故にそれが何を意味するのかが分からない。
「ふむ……考えるのは後にしよう。望月、もう一枚の便箋も読んでくれ」
悩んでも簡単には分からないようなので、一枚目の便箋が指す内容については一旦置いておき、もう一枚の便箋を読み上げるように美鶴が促す。
続くもう一枚はもっと分かり易い内容か、何を見越して大量の回復アイテムを用意していたのかの説明であって欲しい。
他の者たちがそんな風に考えながら綾時が読み上げるのを待っていれば、二枚目の便箋に目を通した綾時が眉を寄せて難しい表情を浮かべた。

一枚目が簡潔すぎる内容だっただけに、綾時が難しい表情を浮かべてしまう二枚目の内容が余計に気になる。
もしかすると、湊が最後の戦いで帰ってこなかった事とも関係するような、とても重要な事が書かれている可能性もある。
読んだ本人が内容をかみ砕いて理解する時間も必要だろう。
そう考えて皆が黙って待っていれば、表情を何とも言えぬ微妙に困惑したものに変えて、便箋から顔を上げた綾時が口を開いた。
「二枚目も内容自体はシンプルなんだけど、これは……」
「綾時、分かんねぇならオレらも考えるから、とりあえず読んでくれ」
「……分かった。こっちの内容は〝妹を、メティスをよろしく〟だ」
聞かされた二枚目の便箋に書かれた内容に一同は言葉を失う。
綾時が言い淀んで難しい表情をしていたが、内容がこれでは無理もないだろう。
アイギスもラビリスも相手の事は知らなかったが、メティスは間違いなく対シャドウ兵器である。
オルギアモードを使い、ペルソナを呼び出していた事から、恐らくはアイギスよりももっと後に作られた桐条製だと思われる。
湊は桐条グループの暗部についても調べていたため、当人たちすら知らない兄弟姉妹の存在を知っていても不思議ではない。
だが、誰も知らなかった寮の地下から現われ、自分たちの敵として対峙したメティスをどうして妹と呼ぶのかが分からない。
驚いていた真田はすぐに気を取り直すと、座ったまま寝ているメティスを見てから、心当たりはないのかとアイギスとラビリスに尋ねた。
「二人はそいつの存在は知っていたのか？」
「ウチは知らんかったよ。湊君からは何も聞いてへんし」
「わたしも同じです。わたしよりも後に作られた機体があるだろうとは思っていましたが、それらのデータは持っていませんし、八雲さんからも何も聞いてません」
真田に聞かれた二人は素直にメティスという機体は知らないと答える。

視線が合った美鶴も首を横に振ったことで、この場にいる者の中で知っている可能性があった全員が知らなかった事が判明した。
となると本当にどうして彼がメティスを妹と呼んでいるのか謎が残る。
これまで存在が知られていなかった寮の地下にいたのなら、湊自身も会ったことはないはずなのだ。
もしや、緊急時の脱出通路になっていて、そこを通って侵入してきたのだろうかと考えたアイギスは、自分が寝ている間に地下について分かった事はあるかを尋ねる。
「どなたか地下室は調べましたか？　緊急時の脱出通路になっていてそこから侵入してきたなら、どこかで八雲さんと会っていても不思議ではないのですが」
「あー、ちょっと今は調べられる状態じゃないんだよね。一言では説明しづらいんだけど、地下にタルタロスみたいな不思議空間が広がってさ」
苦笑いを浮かべながら七歌が伝えてきた情報にアイギスは首を傾げる。
地下にタルタロスのような空間が広がっていると言われても、タルタロスは雲に届くほど巨大な塔だった。
そんな物が地下にあるとすれば、自分たちが今いるこの寮は宙に近い場所に存在する事になる。
息苦しさなど感じず空気は普通に吸えているし、窓の外に見える景色は普段通りの街中だ。
けれど、七歌の言葉を誰も否定しないことから、別に彼女が冗談を言った訳ではない事は分かる。
頑張って理解しようとはするものの、結局分からずアイギスが困惑していれば、事情を察したのか美鶴が声をかけた。
「先ほど七歌が言っていた色々と話したい事の一つだ。君も気付いているだろうが、我々は既に何らかの事件に巻き込まれている」
「はい。それは分かります」
メティスが現われた事だけでなく、ベルベットルームでも不思議な

音を聞いて、試練がやってくると言われたのだ。
アイギスも何が起きているのかは把握出来ていないが、何かが起きている事だけは理解出来ていた。
「まず、状況から言うと今現在この寮は孤立している。窓から外は見えていても、不思議な力が働いて寮から出られなくなっているんだ。それぞれの部屋は勿論、屋上への扉も何故か開かない。君が倒れた後は七歌たちに連絡を送れたのに、最後に吉野がやって来て寮に入った瞬間に音がして孤立状態になってしまったんだ」
美鶴の言葉を証明するように天田が玄関の扉を開けようとするが、ドアノブすら動かず諦めて戻ってくる。
続けて扉のガラス部分に向かって順平が宝玉輪を投げつけるも、何かバリアのような物が発生してそれに触れた宝玉輪は勢いを失いポトリと床に落ちた。
直後、湊が遺してくれた大切な回復アイテムを投げた順平は、七歌に尻を蹴られて四つん這いに倒れ、さらに同じ箇所にチドリも蹴りを入れた事で「う゛っ」と呻いて五体投地のような体勢で床に転がった。
傍にいて一連の流れも見えていただろう美鶴は、何事もなかったかのようにそれらを流し、アイギスに自分たちが置かれた状況について説明を続ける。
「幸いな事に電気とガスと水は使える。恐らく空気も問題ないだろう。だが、この状態が続くとなると食糧の問題が出てくる。明日の朝には全員がここを去る予定だったからな。今日の夕食の残りと使わなかった食材が少しあるだけだ」
「だから、聞きてぇんだがお前のリストバンドから食糧を出すことは可能か？」
アイギスの身に付けているリストバンドは湊から貰ったものだ。
彼が巻いていたマフラーの一部を千切って作られており、彼のマフラーと同じように物を出し入れする事が出来る。
そして、その中身は湊のマフラーと共有しているため、中に食糧が入っている事は全員が分かっていた。
それでも、アイギスに食糧を出せるかと尋ねたのは、純粋にアイギ

スを気遣ってのこと。
彼のマフラーの中には本当に色々な物が入っていて、その中身をただ消費していくだけで一生物に困らないほどなのだが、アイギスは武器などは借りても他の物には手を付けようとしていなかった。
マフラーの中身はあくまで彼の所持品である。そういう認識から来る誠実さなのだろう。
聞かれたアイギスは少しだけ考え込むと、顔を上げて申し訳なさそうにしながら答えを返す。
「……わたしが許可されたのは武器の使用と自分たちが手に入れた物の出し入れだけです」
「違うだろうアイギス。湊は好きに使っていいと言っていたはずだ。勿論、彼が恩人たちから受け取った大事な品も入っているが、何かが起きた時のために食糧や衣服、日用消耗品なども数年分入れてあるはずだよ」
アイギスが答えるとすぐに綾時がそれは正しくないと訂正する。
綾時は彼がチドリを蘇生させて死ぬまで彼の中にいたため、他の者とどのような会話をしていたか知っているものもあった。
彼がアイギスにリストバンドを与えて使い方を教える際、中身はどれでも好きに使えと言っていた事も記憶しており、先ほどアイギスが返した答えが単なる彼女の気持ちでしかない事はすぐに分かった。
彼の事を知る他の者たちも、武器しか貸さないとなどと本当に彼が言うだろうかと疑問を持っていたため、綾時の話を聞いてやはりアイギス自身の気持ちの問題だったかと察する。
ニュクスとの戦いで帰ってこなかった青年の持ち物だ。ある意味では形見と言える。
それが分かっているからこそ美鶴も無理を言うつもりはないが、最後には生きている者たちを優先して欲しいと頼む。
「……アイギス、君なりに譲れない部分があるのは分かる。だが、どうしても必要な状況になれば、物資を提供して欲しい。彼がどれだけの決意を持って君や吉野を守ったか分からない訳じゃないだろう？」
「……分かりました。ですが、どうかギリギリまでは別の手段を探し

てください」
「勿論、約束しよう。先ほど少し話に出たが地下に不思議な空間が広がっていてな。見た目は全く異なるがタルタロスに近い空気を感じるんだ。そこで何かしら見つかる事に期待しよう」
どうやら先に少し調べた美鶴たちは既に長期戦を覚悟しているらしい。
確かにタルタロスの攻略に近い物だとすれば時間はかかりそうだが、それでも自分たちにはこれまでの経験がある。
湊が遺した回復アイテムに加えてメンバーも全員集まっているため、ブランクがある事を考慮してもそう簡単にやられたりはしないはずだ。
だが、地下に広がる謎の空間について調査する前に、今もキッチンの傍でラビリスに監視されたまま眠っているメティスの事や、キッチンの奥にある勝手口にいつの間にか現われていた青い扉について話す必要があるだろう。
メティスとの戦いを見ていた者たちは、アイギスのペルソナが変化したのも見ている。
ペルソナの変化は新たな力の目覚めの切っ掛けに過ぎないが、力が変化したとなればチームの中での役割も変わってくる。
メティスの事、扉の事、変化した力の事、どれについてまず話すべきかアイギスは考えこんだ。

第四百七十話　変化の謎

――巌戸台分寮

今後の事を話し合う上で、アイギスは自分の能力が変化した事をまず皆に話す事にした。

これまでの事を考えれば指揮官は引き続き七歌が務めるだろうが、状況によってはチームが分かれることもあり得る。

七歌の戦い方を見てきて、湊の複数のペルソナを使った戦況の支配を見てきたアイギスにすれば、ワイルドの戦い方は十分に頭に入っている。

自分が彼らほど力を使いこなせるとは思えないし、現在宿している力もオルフェウスのみなので、サブチームのリーダーを務められるようになるのはもう少し先だ。

けれど、自分も湊のようになれればという気持ちは、アイギスを前に向かせるだけの力があった。

しばらくはワイルドの力に慣れるところからだろうが、アテナの防御力が必要な場面で七歌から指示を受けても、今は呼び出せないと土壇場になって伝えれば混乱の元になる。

故に、地下の謎の空間を探索する話になる前に、アイギスの方から仲間たちに切り出した。

「あの、わたしの方からも皆さんにお話したい事があります。今日、寮にいてメティスとの戦いを見ていた皆さんは既に知ってると思いますが、わたしのペルソナが変化しました」

「あ、聞いてるよ。なんか幾月のペルソナに似たペルソナになったんだってね」

「えっと、そうですね。皆さんからするとその方が分かり易いでしょうか」

アイギスが自分のペルソナが戦闘中に変化した事を告げると、ティーバッグの紅茶を持って来た七歌が一応は聞いていると答えた。

ただ、順平たちは幾月のペルソナだった道化師〝アルケー・オルフェウス〟に似た見た目のペルソナだと説明していたらしい。

アルカナは異なっているがアイギスのペルソナもオルフェウスなので、全員が見た目を知っている事もあり説明する上ではそれが最も分かり易かったのだろう。
しかし、アイギスとしては自分のペルソナは湊と同じ物だと思っている。
この場にいる中で自分以外に唯一それを知っている少年に視線を向け、どうして時間があったならそこを話しておかないのか少し責めるように少女は問い質す。
「綾時さん、他の方にオルフェウスについて説明されなかったんですか？」
「んー、一応伝えようかとも思ったんだけどね。実際に見てみないと同じか分からなかったから、幾月修司のペルソナに似た見た目っていう美鶴さんの説明を特に否定しなかったんだよ」
綾時の言う通り、同じような見た目でも配色や細部に違いがある可能性はある。
実際、オルフェウスは湊と理と幾月の三人が持っていたが、湊と理は単なる色違いなのに対し、幾月は色が異なるだけでなく部分的に禍々しいデザインとなっていた。
美鶴の説明では色が異なっている事は分かったが、突然の変化だった事もあり残念ながら細部の違いなど覚えている者はいない。
それ故、綾時は微妙に違っている可能性を考慮し、わざわざそれが湊の持っていた力と同じだとは説明しなかった。
二人の話を聞いていた他の者たちは、アイギスの新しい力に何かあるのだろうかと不思議そうにしている。
ならば、ここは実際に見せて説明した方が早いと呼び出す事にした。
「ペルソナ、レイズアップ！」
力を解放したアイギスの頭上に水色の欠片が集まり形を成す。
輪郭が形成され始めた時点で、それがアテナではない事はすぐに分かった。
背中に背負った大きな竪琴、真っ白い髪と対比するような鮮やか赤

いスカーフを首に巻き、薄水色の胴体に白い手足を持った機械のようにも見える男性型ペルソナ。
話だけ聞いていた者だけでなく、突然の事でよく見る暇がなかった美鶴たちも改めてアイギスのペルソナを観察する。
中でも熱心に見ていたのは綾時で、細かな部分もチェックし終わると一つ頷き、アイギスが休んでいる間に説明していなかった事もあって他の者たちへ説明し始めた。
「チドリさんたちも彼から聞いていないようだから説明しておくと、このオルフェウスは十年前の戦いで湊が最初に目覚めさせたペルソナと全く同一のものだ。結城理と幾月修司もオルフェウスを持っていたようだけど、あっちは色や細部のデザインが違っていた」
「そう言うって事はアイギスのオルフェウスは有里君のペルソナと見た目も同じってこと？」
「そうなるね。というより、湊の力を一部受け継いだといった方が正しいかな」
ゆかりの質問に綾時が全く同一の見た目をしていると答える。
別に湊のオルフェウスに特別な特徴がある訳ではないが、幾月のような禍々しいデザインでないからこそ分かり易いというのがある。
もっと言えば、恐らくアイギスが新たに得たのは湊の力の模倣であり、だからこそ最初に目覚めた〝愚者〟の力が彼と同じものだと分かる。
何の因果か彼女は湊の力を一部受け継いで、既にそれが彼女自身の力と結び付いて定着していた。
本人もどうして自分が彼の力を使えるか分かっていないだろう。
だが、彼の力を受け継いだと聞いては黙っていられないのか、チドリが僅かに視線を鋭くしながら理由を尋ねた。
「……どういう意味？」
「力の入手と変化の順序は分かりませんが、ワイルドの能力に目覚めました。そして、意識を失っている間、夢を通じてベルベットルームに招かれたんです。七歌さんもキッチンの奥に青い扉が見えていませんか？」

契約者の鍵を手に入れたアイギスの目には、キッチンの奥にある勝手口に青色の扉が見えている。
それを見るのは初めてだったが、契約したからかベルベットルームに通じていることが感覚的に理解出来た。
仲間から新たにワイルドに目覚めた者が出たことに驚きを見せていた七歌も、アイギスに問われて視線をキッチンの奥へ向けると小さく息を吐いて頷く。
「うん。見えるよ。タルタロスの一階にもあったベルベットルームの扉があるね。……そっか、アイギスも目覚めたんだ」
この寮が謎の力によって外界から切り離された後、七歌もその扉がキッチンの奥に現われている事には気付いていた。
あれは契約者の手助けをするための場所。それを知っているからこそ、再び自分たちが何かの事件に巻き込まれるのは分かっていた。
ただ、アイギスも自分と同じようにワイルドに目覚め、契約者となっている事は予想外だった。
七歌もまだ鍵は持っているし、ポロニアンモールの裏路地に扉がある事も知っている。
それでも記憶が戻ってからあの場所を訪れてはいない。どうしても湊がユニバースの力を手に入れた時の事を思い出してしまうから。
最後にベルベットルームを訪れた時の事を思い出し、七歌が僅かに暗い表情を見せていると、チドリが再びアイギスに質問をぶつける。
「質問の答えになってない。私は八雲の力を一部受け継いだって意味を聞いたの。ワイルドに目覚めた事を言ってるなら、ここにもう一人いるし。結城理や擬似的になら幾月の娘もそうだったでしょ」
「そうですね。でも、何となく分かるんです。これはわたし本来の力じゃなく、八雲さんの力が私の力に混ざって変化したものだって」
「なんで貴女だけに八雲の力が現われるのよ。条件に心当たりはないの？」
自分の方が彼と共にいた時間は長かった。過した時間だけでなく、肉体的な繋がりだって持っていたのに、どうしてアイギスにだけ彼の力が受け継がれたのかとチドリは不満を持つ。

命を預けて共に戦って来た仲間だからこそ〝不満〟で済んでいるが、実際にはその奥には黒い泥のような感情が抑え込まれている。
それだけに、チドリも本気で彼の力が一部だろうと受け継がれた条件を知りたがっていた。
アイギスとて力が目覚めたばかりで何も分かっていない状態なため、チドリの質問に真剣に答えようとするも答えられずにいれば、綾時がフォローにまわって代わりに答えた。
「恐らくだけど複合的な理由だと思う。一つは彼女の心であるパラディオンを湊は数年間持っていて、その間に力に干渉して調整と強化を施している内に彼の力が混ざった事。もう一つは僕たちの身体はそれぞれの人格モデルの細胞を培養して作られたんだけど、細胞核は湊の細胞に移植した黄昏の羽根の欠片がベースになっているんだ」
ラビリス、アイギス、綾時はＥＰ社の技術を使って作られた人造人間と呼ばれる存在だ。
心はそれぞれのものだが、肉体は人工骨格に培養した細胞を纏わせるような形で作っており、普通の生物のように細胞分裂で順番に臓器などが作られていった訳ではない。
ただ、湊たちは血の繋がりも大切だと思っていたため、ラビリスには間宮聖という少女の細胞を、アイギスには水智恵という少女の細胞を、綾時は湊の細胞といった風に人格モデルになった者の細胞を使って、それぞれの肉体情報を記憶させた黄昏の羽根と細胞核を入れ替える形で身体を作った。
しかし、それらのベースとなった黄昏の羽根の欠片は、元々湊が生命力を使って無理矢理に〝命〟を学習させた物を使っている。
そうしなければ、生体パーツの培養が上手くいかなかったこそ、後の研究でも最初に作られた命を学習した黄昏の羽根から新たに情報を写した物を使い続けた。
「つまり、アイギスは心と肉体の両方に彼の情報が混ざっているんだ。まぁ、それを言えば僕の方が混ざっている量は多いけど、僕自身は契約を果たす側になる切っ掛けがなかった。アイギスは戦いの中でその切っ掛けを得た。違いはそこだろうね」

チドリはアイギスが湊の力の一部を受け継いだと聞いたとき、もしかすると、彼女の中に彼の遺伝子情報を持った存在が宿っているのではと疑った。
彼はお試しからの延長で一時期ゆかりと付き合っていただけで、以降は誰とも付き合わず恋人は不要だと割り切っていた。
けれど、精神安定剤として様々な女性と肉体関係を結んでおり、チドリは自分が把握していない相手も当然いると考えつつ、決戦前に子どもを遺している可能性を僅かに疑っていた。
仲間たちの中にその兆候があるものはいないため、ある意味で油断しているところに先ほどの話だ。
アイギスは湊とクリスマスにデートをしていた。夜には集まってのパーティーがあったが、逆を言えばその時間までは二人で自由に過ごせていた訳だ。
丁度三ヶ月ほど経っているため、宿った命を感じられるようになるタイミングとしては合っている。
綾時もあくまで状況から条件を推測しただけのようなので、今後のためにも不安材料を減らしておこうとチドリがアイギスに尋ねた。
「……アイギス、貴女もしかして八雲の子どもを身籠もったりしてない？」
「……なるほど、それを疑っておられたんですか。先に結論を述べると答えはノーです。八雲さんは色々と気遣ってくださっていたので、生命維持など必要に迫れた状況で唇を重ねる事はありましたが、それ以外ではキスもしていませんから」
アイギス本人の口から語られた事実はメンバーたちに強い衝撃を与えた。
事情を知らない者から見れば女遊びにしか見えない彼のヤンチャぶりは全員が知っており、だからこそ、アイギスも当然彼と深い関係になっているものだと無意識に思っていた。
だというのに、二人はずっと清い関係でいたと聞かされれば驚くなと言う方が難しい。
この場にいる女子の半数と関係を持っていた湊の不思議な線引き

と、彼に対して押せ押せな雰囲気だったアイギス本人がよく自制していたなと思った七歌は素直な感想を口にする。
「意外な事実だわ。てっきり、八雲君と裏で色々やってると思ってた」
「そうかな？　なんか、有里君ってアイギスの事を凄く大切にしてたから、自分から遠ざけようとしてる節があったと思うんだけど」
「あー、本当に大事な物には触れない的な？」
「う、うーん。それはそれで個人的に複雑な気持ちになるから同意は出来ないけど」
　七歌の言った事が事実であれば、この場にいる四人の少女の乙女心が傷つくことになる。
　自身もその中に入っている風花は苦笑いで返し、けれど、アイギスに関しては恐らくそんな感じなのだろうと理解して小さく落ち込む。
　同時に同じ立場だった少女らも小さくダメージを負っていれば、話題的に入りづらくて黙っていた順平が空気を読んで別の話題を放った。
「て、てかさ。アイギスがワイルドの力に目覚めたのは分かったけど、そもそもワイルドってそう簡単に手に入るもんなのか？」
　順平は話題を逸らすためにワイルドについて尋ねたが、これまで自分たちと同じ固有ペルソナを使っていた仲間の力が変化した事に驚いたのは事実だ。
　もし、何かの条件を満たせばワイルドの力が目覚めるというのであれば、今後再び何かに巻き込まれた時の事を考えて備えても良いように思う。
　美鶴や真田も同じように考えていたのか、順平に同意するように頷けば、申し訳なさそうな表情で綾時が口を挿んだ。
「ペルソナ能力を得た以上、可能性で言えばゼロじゃない。だけど、なんというか心の有り様の問題とでも言えばいいのかな。とりあえず、狙って手に入れられる能力ではないんだ。彼の力を最も身近で感じていた僕が持っていない事からも察して欲しい」
「やっぱそうなんか。でも、このタイミングでアイギスが手に入れたってなると、なんかそれ自体に意味があるようにも感じちまうよ

な」
「うん。そういう側面はあると思う。運命や必然って言葉はあまり使いたくないけどね」
新たな事件に巻き込まれたタイミングでアイギスはワイルドに目覚めた。
ベルベットルームに招かれたのは、あくまでワイルドに目覚めた事が切っ掛けだと思われるが、どちらにせよ一連の流れは偶然とは思えない。
誰もその本当の理由は分かっていないが、アイギスの力が変化したという情報は共有出来た。
そこで一つ背伸びをして身体を解した順平は、残る話題はあいつについてだと視線をキッチンの方へ向ける。
「さて、アイギスの新しい力についても分かったし。後はあいつだな」
「有里の手紙によればあいつの妹らしいがな。どうせなら、もっとマシな情報を残しておけばいいものを」
湊は人間でメティスは機械。どう考えても血縁関係はない。
だが、だからこそ湊が敵として現われた彼女を妹と呼んでいる謎が残る。
本人からも情報を得る必要があるため、一同はラビリスが監視しているメティスを起こすことにした。

第四百七十一話　メティス

――巌戸台分寮

アイギスが自分の能力の変化について話し終わると、一同の視線がキッチンの傍で椅子に拘束されたまま寝ているメティスに移る。

少女には味方もおらず、全員がペルソナを召喚可能になっている状況で、スヤスヤと眠っていられる図太さは大したものだと思う。

突如開いた床下から見つかった鎖を使い。両腕を広げられないよう身体に巻き付けて拘束し、さらに元対シャドウ兵器であるラビリスが傍で監視している。

相手もアイギスとの戦闘で負傷していたため、さらにここまで自由を奪われたらどうしようもないと諦めての行動だろうか。

アイギスは自分とも姉とも違った性格をしている後継機の少女の許へ近付くと、怪我を負わされた順平がトゲのある言葉を放つ。

「こいつ、途中からずっと寝てるんだぜ？　無抵抗でいるためのパフォーマンスか、ガチで抵抗出来ない状態なのか知らねぇけど。ずいぶんと余裕なこった」

「多分、抵抗しても無駄って分かってるんじゃないんですか。さっきと違って僕たちも召喚器を持ってますし。戦えば勝てないって分かってるんでしょ」

順平と同じようにメティスから被害を受けた天田も静かな怒りの籠もった言葉で淡々と話す。

少女への怒りは実際に被害を受けた者にしか分からないが、仲間を襲われたという時点で他の者たちも警戒はしていた。

長期間待機モードになっていた事で、偶然目覚めて記憶の混乱が起きていたなら桐条グループに送り返すで済む。

しかし、相手はアイギスをしっかりと認識した上で、それ以外のメンバーを排除対象として見ていた。

個人を認識し、アイギスだから守ろうとしたのか、それとも対シャドウ兵器であれば誰でも良かったのか。

警戒した状態で相手の周りに集まると、アイギスが主導して少女か

ら話を聞くことに決まり、寝ている相手を起こすことにした。
「起きてください。あなたに色々と聞きたい事があります」
「……んん……」
アイギスが声をかけるとメティスはゆっくりと頭を上げて周囲を見る。
起きた時点で自分がどういう状況に置かれているのか確認したのだろう。
周りを囲まれている事を理解したメティスは、そのまま正面にいるアイギスに視線を合わせると蝶型のバイザー越しでも分かるほど安堵した様子で口を開いた。
「……よかった。目が覚めたんですね」
「戦闘での負傷には少し慣れていますから。それより、あなたに色々と聞きたい事があります」
メティスは起きてすぐにアイギスの姿を確認すると、目覚めた事に本気で安堵したようにホッとしている。
戦う前にもアイギスを守るためにやって来たと口にしていた。
仲間たちが傷つけられていた事もあり、あの時は言葉の意味が理解出来なかったが、こうやって落ち着いた状況でも彼女の言葉は変わっていない。
だとすれば、相手は自分たちが知らない何かを知っていて、アイギスにとっての仲間たちがメティスには敵に見えていたのかもしれない。
今のメティスには敵意もないようなので、その辺りも詳しく聞こうと質問をぶつけた。
「あなたの名前と目的は？　どうしてわたしの仲間を傷つけたんですか？」
「名前はメティス、目的はあなたを守ること。……傷つけたのは、あなたの仲間が全ての原因だから」
「全ての原因？　何の話をしているの？」
やはりメティスは自分たちの知らない情報を知っている。アイギスだけじゃなく傍で話を聞いていた者たちもそれを確信する。

ただ、どこか親に叱られる子どものような態度で答えるメティスに、彼女がどこまで正しい認識で情報を持っているのか不安が残る。
それでも話を聞かない訳にはいかないため、アイギスの質問に対する答えが返ってくるのを待つ。
「……自分たちが置かれた状況についてどこまで分かっていますか？」
「わたしたちがこの寮に閉じ込められて、地下にタルタロスのような不思議な空間が広がっているという話は聞きました」
「最低限の説明は済んでいるんですね。では、先ほどの質問に答えると、それらの原因がこの場に集まった人たちです」
バイザー越しに視線を向けてメティスは周りにいる者たちを順番に見てゆく。
この寮が謎の力によって孤立状態にあるのも、寮の地下に本来存在するはずのない空間が広がっているのも、全ては仲間たちの力が原因だと彼女は言った。
けれど、自分たちにそんな力はない。せいぜいペルソナが使えるくらいで、それ以外の異能など持っていないのだ。
とある青年が生きていれば空間を切り離す結界のような物を作れたかもしれないが、半分は同じ血統を持つ七歌にもそういった力はない。
故に、最初から敵意を持って相手を見ていた順平が適当な事を言うなと怒った。
「オレらはなんもしてねーっつの。今夜でこの寮で過すのも最後、明日の朝でさようならって話だったんだ。なんもする訳ねーだろ」
「じゃあ、無意識に行なったんですね。この寮が今の状態になったのはあなたたちの持つ力が原因です。だから、わたしはアイギスを守るため巻き込まれる前に原因を排除しようとしました。……まぁ、この段階まで進んでしまったのなら意味はありませんが」
告げたメティスはどこか諦めを含んだ苦笑を浮かべる。
アイギスも自分たちが何かしらの事件に巻き込まれているのか理解しているが、そこまで危険な状態なのだろうかという疑問が湧く。

それを相手に尋ねる前に、メティスのバイザーが開いて彼女の赤い瞳が向けられる。
「あなたはまだ理解していないかもしれませんが、今日は三月三十一日です。そして、このままでは明日も、明後日も変わらず三一日のままです。どこかで感じませんでしたか、時が空回りする瞬間を」
「……日付が変わった瞬間のアレですか？」
「はい。それは、地下の時の狭間が消えない限りずっと続きます」
仲間たちが寮に集まった瞬間に、この寮だけが外界と切り離された。
地下に広がった空間がそれを引き起こしており、そんな空間が広がったのは仲間たちのせいだとメティスは話す。
正直に言えば彼女が真実を話しているという証拠はない。
お互いを信じるには信頼関係も結べていない状況だ。無条件に信じる事など出来はしない。
ただ、このまま話していても事態解決には進まないので、アイギスはラビリスと視線を交わすと頷いた。
それに合わせてラビリスは拘束していた鎖を解き、メティスを自由にすると椅子から立たせて警告する。
「アイギスを守るって言葉に嘘がないんは認めるわ。だから、一時的に拘束は解いておくけど、何かあればウチとアイギスで無力化する。こっちはオルギア搭載型が二人やからね。対処出来るとは思わん方がええよ」
「……分かってます。わたしの目的はアイギスを守る事。であれば、この事態を解決するために動きます」
直接の被害は受けていないが、仲間や妹が怪我を負わされた事でラビリスも普段より威圧するように話しかける。
後継機という意味ではメティスも妹になるものの、敵対してきたならば最後には戦うしかない。
メティス自身もアイギスを守る事を目的にしているようだが、同じ姉であるラビリスのことはあまり気にした様子がないことから、アイギスと同じ研究所で作られ彼女だけを姉と認識した機体なのかもし

れない。
ここに彼がいれば詳しい話を聞けるのだが、いないものはしょうがないし今回の事件に彼は関係ない。
ならば、現場にいる自分たちでどうにか解決するため、相手を警戒したままの美鶴が尋ねた。
「それで、事態の解決と言っていたが何をするつもりなんだ？」
「地下の調査です。あの空間が原因なので、あれを消す手段さえ見つかれば事態は解決します。さぁ、行きますよ」
言い終わるなりメティスは他の者たちの意見も聞かずに地下への階段を下りていってしまう。
確かにラビリスに言われた通り敵対行動は取っていないが、仲間でもない者に仕切られても納得出来ないし、信用してついていくのも躊躇われる。
だが、アイギスのように地下を見ていない者もいるので、全員が召喚器や武器を確認してから下りていくことにした。

――時の狭間

どこまでも続くような階段を下りていくと、その先には遙かかなたまで続く砂の平野が広がっていた。
地下なのに空のようなものがあり、太陽はないのに空は光って明るく地上を照らしている。
生き物は勿論、石ころ一つ落ちてない砂の平野には階段の傍にだけ、不思議な扉がポツポツといくつか離れて存在していた。
階段を下りた先、正面にポツンと存在する謎の扉の前に立ったメティスは、下りてきて周りを見渡しているアイギスに話しかける。
「ここが時の狭間。本来、時の狭間は限定範囲にだけ存在する空間でした。ですが、ある時を境にどんどんと広がりを見せて、こんな途轍もない空間に変貌したんです」
「タルタロス同様、ここも何かを切っ掛けに〝発生した〟と考えるのが正しいのだろうな」
美鶴が話しているのを傍で聞きながら、アイギスは砂に触れてこの

空間に関する情報を集める。
足が取られるほどではないが、砂浜の砂に近い踏み心地でサラサラとしている。
敵の姿は確認出来ていないものの、これくらいであれば戦闘もそれほど影響しないだろう。
あとは明らかに意味ありげに立っている扉を調べれば、とりあえずの簡易調査は終わりと言える。
他の者がそれを指摘しないのであれば、自分から話題を切り出そうと思ったタイミングで綾時が納得したように深く頷いた。
「確かにここは時の流れがおかしくなっているね。なるほど、寮が孤立したのはここが原因と見て間違いなさそうだ」
「あなたはそういうのが分かるんですね」
「持っている魂の規格が人とは違うからね。人の感覚だと理解するのは難しいと思うよ」
綾時は元々ニュクス直轄の端末とも言える〝宣告者〟という特殊な存在だった。
その後、時の流れを理解出来る湊に封印されていた事もあり、この場の異常性にも気付けたらしい。
メティスはそんな綾時の特殊な性質に僅かに感心した様子だが、二人の会話を聞いていた七歌は目を閉じて難しい表情をしている。
そのまま少しして、自分たちではやはり分からないなと、二人の会話から何かを掴もうとしていた七歌は首を振ると、気を取り直してメティスに話しかける。
「それで、消すって言ってもどうやって消せばいいの？」
「一番可能性の高い方法は既に試しました。原因の排除、つまりあなた達を排除すれば解決する可能性が高いと思いました。ですが、人数が増えた事でステージが進んでしまったようなので、その方法は恐らくもう試せません」
ここになってようやくメティスが順平たちを襲った理由が判明する。
彼女がどういう訳かこの空間がアイギスの仲間たちが原因で発生

したと考え、生み出した原因を消すことで空間も消えると思い行動したらしい。
　そんな曖昧な理由で襲われたと知って、襲われたメンバーたちは複雑そうな表情を浮かべるが、代表して荒垣が相手に物申した。
「今日まで、こんな場所が存在する事も知らなかったんだぞ。俺らが原因な訳ねえだろ」
「では、ニュクスの存在を自覚していた方はいますか？　滅びが明言されるまでに理解して行動していた方は？」
「っ、それは……」
　メティスの口からニュクスという単語が出てきた事にまず驚き、続けてそれを出されると途端に荒垣が返した自分たちが原因ではないという根拠が揺らぎ何も言い返せなくなる。
　ニュクスという存在に辿り着いていた人間は極めて少ない。
　その滅びを防ごうと動いていた者など、アイギスたちが知る限り一人しかない。
　ニュクスの事を知っていることといい、やはり彼女は湊の関係者なのだろうか。その疑問を解消するためアイギスは尋ねた。
「メティス、あなたは八雲さんの知り合いなの？」
「八雲さん？　その名前に覚えはありません」
「では、有里湊という名前は？」
「そちらも知りませんが、この空間について知っている人ですか？」
　湊は本名と現在の戸籍名以外にも複数の名前を持っている。
　その全てを把握している者はこの場にいないため、メインで使っていた二つの名前を知らないと言われアイギスたちも困ってしまう。
　湊の遺した手紙にメティスの名が書いていた以上、彼は色々と知っているはずなのだ。
　その彼からメティスにニュクス等の情報も渡ったと考えるのが最も自然なので、色々と教えれば彼について話すだろうかとチドリが質問に答える。
「……今回の事件が起きる事も含めて、恐らく知っていた人間よ。大量の回復アイテムが入った電子制御の箱を、わざわざ日付が変わる十

分前に開くよう設定していたんだもの」
「でも、その人はこの場にいないんですよね？　であれば、知っていただけの第三者だと思います。このメンバーが揃って事態が進んだ以上、原因はここにいる人たちだと思うので」
この事態が起きると読んでいた人物がいたと聞いてメティスは素直に感心したようだが、それ以上の反応は特に見せずに話が途切れる。
もし、別の名前を名乗っていた湊の事を知っているなら、同じように時の狭間を知っている人間がいたのかと興味を持ったはずだ。
だが、今のメティスはこの事態を起こした原因であるアイギスの仲間たちの事だけを見ている。
本当に彼女は湊と何の繋がりもないのだろうか。仲間たちがその様に疑っていると、メティスはそれぞれ離れた位置で佇んでいるいくつかの扉を見て口を開く。
「それで話を戻しますけど、他の方法となるともう中に入ってみるしかありません。扉の中がどうなってるのか分かりませんが、それを調査しない限り事態は変わらないと思います」
「ちょっと待ってよ。また、あの時みたいに戦えってこと？」
「あの時が何を指すのかは分かりませんが、このまま何もしないままでは事態は変化しません。完全に外界から孤立した状態で補給の見込みもない。時間が経てば状況が悪化する可能性だってあります」
ゆかりにとって戦いは過去の物だ。一人の青年が犠牲となって滅びを回避し、その世界で生きていこうと既に前を向いて進み始めていた。
だというのに、再び戦えと言われれば、自分の決意を踏み躙られたような気持ちになる。
このままでは何も好転しない。補給も受けられず、最悪餓死する事になる事も考えられる。
それは分かっているが、最後の戦いでの事を思い出してしまい。どうしても決断出来ずにいれば、天田が冷静ながらも敵意の宿った瞳でメティスを見つめて呟く。

「敵として現われたヤツの言葉なんてそう簡単に信じられないだろ」
「じゃあ、どうするんですか？　他に方法があるんなら最初から言ってます。けど、全員が助かるにはそれしか方法がないから言ってるんです」
天田とてメティスの言い分は理解出来る。現時点で他に手段が無いことも分かる。
ただ、自分たちを殺そうと襲い掛かってきた相手の言葉を素直に信じる事が出来ない。
仮にそれらを信じるにしたって、これまで共に探索してきた仲間がいるのだから別にメティスは必要ない。
けれど、そこで問題になるのが湊が遺した〝妹を、メティスをよろしく〟という手紙の存在だ。
彼女はアイギスの妹だと言っていたが、桐条グループに残っている情報ではアイギスがラストナンバー。同型機だけでなく後継機だって作られた記録はない。
また、アイギスの妹だという情報が真実だとして、ならば何故同じく姉にあたるラビリスには執着を見せないのかも謎だ。
彼女の話から推測すると、彼女は時の狭間が寮と繋がる前から観測していて、寮と繋がったタイミングでアイギスを助けるため原因である順平たちを襲撃した事になる。
存在しないはずの後継機、アイギスにだけ見せる執着、それらはまだ考えられる理由があるものの、時の狭間にいた事だけは本人から聞かない限り理由が思い付かない。
相手の僅かな反応を見逃さぬようしっかりと視線を向け、七歌が疑問を解決するため少女に尋ねる。
「メティス、貴女はここがこうなる前から時の狭間を観測していたんだよね？　どうしてここにいたの？」
「……何がですか？」
「貴女はここがこうなる前を知っていた。で、空間が変化して寮と繋がってから出てきたんだよね？　なら、時の狭間や今回の事件に関して知っている事がもっとあるんじゃないの？」

七歌に尋ねられたメティスの表情に警戒の色が滲む。
お互いに信頼関係など築いていないのだ。それも当然だろうが、隠している事があるんじゃないかと指摘すれば、途端に相手は動揺しながら反論してきた。
「し、知ってる事なんて特にありませんよ。なんでいたのかなんて自分でも分からないし。そんなの作った人に聞いてください」
「こちらとしては君が本当にアイギスの妹、つまり桐条製の対シャドウ兵器なのかという点も疑っている。何せアイギスはラストナンバーで、その後に同型機や後継機が作られた記録はないからな」
七歌に続けて美鶴もメティスの素性で疑わしい点を指摘する。
相手は思った以上に反応に出易い。最も執着しているアイギスとの関係についての根拠を崩そうとすれば、より大きな反応を見せるだろうと考えての行動だ。
すると、案の定メティスは感情的になって返してきた。
「わたしがアイギスの妹なのは事実です！　記録なんてわたしに言われたって知りません。貴女に閲覧権限がなかっただけじゃないんですか？」
「本当に知らないだけかもしれないし、何かの規則によって話せないようになっているのかもしれない。だけど、こっちとしては不安材料は出来るだけ排除したいの。命の危険がある探索なら特にね」
「なっ、そんな!?　ここはあなた達の知らない場所、一番詳しいのはわたしなんですよ!?」
「元々、俺たちはこのメンバーでやって来たんだ。信用出来ないやつを連れて行く必要もないだろう。お前だってこっちを信頼してないんだ。どれだけ強かろうが探索には連れていかない。一人で寮で大人しくしていろ」
メティスは自分が主導する形で探索に参加出来ると思っていたのだろう。七歌に続いて、真田が突き放すように連れて行かないと言えば、ショックを受けて固まっている。
彼女がアイギスを助けようとしているのは本当だろう。妹だというのも信じて良いのかもしれない。

それでも、やはり今の状態で連れて行くのは難しい。
探索は文字通り命懸けだ。敵意を持った人間に命を預ける事など出来る訳がない。
その事実を突きつけ、仲間たちと探索の計画について話し合おうとすれば、固まっていたメティスがどこか懇願するような様子で探索に連れて行って欲しいと頼んできた。
「ご、ごめんなさいっ。ちゃんと言うこと聞くから、命令に従うから、お願いだから連れて行って！　わたしをおいていかないで！」
「……と、言われてもな」
メティスはアイギスの妹を自称しているように、アイギスよりも年下の見た目をしている。
そんな少女が縋るように頼んでくるため、妹を持つ人間として真田はどうも居心地が悪くなる。
どうしてそこまで必死になるのか。アイギスの安全だけを考えるなら、彼女を連れて行かずとも安全さえ確保出来ていればいいはずだ。
だが、先ほどのメティスの言葉を聞くと、どうも置いて行かれる事にトラウマを抱えているような気配がある。
今後は七歌の指揮下に入り、素直に命令にも従ってくれるのなら連れて行ってもいい。
ただ、あと一歩が踏み出せず。皆がどうするべきか考えていると、綾時が普段と変わらぬ落ち着いた笑みを浮かべて口を開いた。
「湊の言葉を信じるなら〝信じてもいい〟って事になる。あとは、皆の判断次第だ」
「綾時君は本当に大丈夫だと思うの？」
「まぁね。アイギスを守ろうとする存在を、あの湊が認めてよろしくって言ってるんだ。その部分に関しては確実に信用していいと思うよ」
綾時の言葉を聞いた全員が見事にあっさりと納得する。
自分の命を使ってでもアイギスたちを守ろうとしていた青年が、アイギスを守ろうとする少女の存在を認めたのだ。

メティスの素性や過去については不明な部分が多いけれど、湊の厳しい審査を突破した〝アイギスを守る〟という目的だけは信用出来る。
そこだけは全員が納得したため、どこか毒気を抜かれた事もあり、しょうがないなと幼い子どもを相手にするようにアイギスの方から許可を出す。
「あなたの同行を認める上で条件があります。わたしだけでなく他の皆さんも仲間として守ること、敵対して傷つけないこと。それらを約束出来ないなら連れて行く事は出来ません」
「約束する！　ちゃんと約束するから！」
「分かりました。なら、会話をするときもちゃんと仲間に対する態度で接してくださいね」
アイギスが探索への同行を認めると、最初の態度が嘘のような素直さでメティスは頷いて嬉しそうにしている。
これでは本当に子どもだ。アイギスとラビリスを見てきただけに、メティスの精神的な幼さがどうしても際立ってしまう。
まぁ、それを理解した上で対応すればいいだけなので、今後はそれを頭に入れた上で相手をする事に決めた美鶴が全員に声をかけた。
「……では、探索の予定を上で話し合おう。その後は一旦全員休むとしよう。流石に徹夜で行くのは危険だからな」
「了解っす。オレっちもう眠くて眠くて」
上のラウンジで話し合うため、仲間たちが順番に階段を上ってゆく。
アイギスがそれを眺めていると、どこか遠慮がちな様子で近付いて来たメティスがおずおずと話しかけてきた。
「あ、あの、お願いがあって……姉さんって呼んでもいいですか？」
緊張した様子で声をかけてきたメティスからの意外な申し出にアイギスは一瞬キョトンとする。
確かにこれまでメティスは自分を名前で呼んでいたが、姉妹ならば姉を姉さんと呼んでもおかしくはない。
実際、ファーストコンタクトで姉に最悪な印象を持っていたアイギ

スも、後に関係を改善して以降ラビリスを姉さんと呼んでいる。
自分に弟妹がいて、姉と呼ばれる事になるとは思っていなかったが、湊が手紙で妹と書いていた事もありアイギスは相手のお願いを聞くことにした。
「どうぞ。でも、ラビリス姉さんの事は姉さんと呼ばなくて良いんですか？」
「あ、そうですね。じゃあ、そっちも許可を貰ってきます！」
言うなりメティスは先に上に行ったラビリスの許へと走っていった。
それを笑顔で見送ったアイギスも、どこか温かな気持ちを抱いて階段を上りラウンジへと戻るのだった。

第四百七十二話　契約の継続

――巌戸台分寮

今後の方針について話し合いが終わり、仲間たちはそれぞれの部屋へ戻って休む事になった。

寮生たちはそれぞれの私室があるものの、外部生であるチドリとラビリスと新たに仲間に加わったメティスには部屋がない。

そこで姉妹であるアイギスの部屋でラビリスが休み、ついでにメティスも監視を兼ねて同じ部屋で休むことが決まった。

同じようにチドリも誰かの部屋で休むことになったが、以前にも泊った事があるという事で風花の部屋を利用する事になり、ついでにコロマルもそちらで寝る事になった。

コロマル本人は別に一階のラウンジで構わないと答えたそうだが、地下の時の狭間から新たに何かが現われないとも限らない。

また、戦闘能力を持たない風花を守る者も必要だと言うことで、不審な物音が聞こえればすぐに気付くコロマルが番犬として選ばれた。

零時を過ぎてから急に呼び出されたメンバーは勿論のこと、寮にいてメティスに襲われたメンバーたちも色々と疲れている。

明日から再び戦闘の可能性がある探索が始まるため、一同は部屋に戻るとすぐに眠りについた。

だが、それぞれが部屋に戻って少しすると三階奥にある部屋の扉が開き、部屋着姿の七歌が音を立てないようにして部屋から出てきた。

既に他の者たちは就寝しているのか、寮内は耳鳴りがしそうなほど鎮まり返っている。

（……まぁ、コロマルとかロボットのメティスは気付いてるかもだけど）

番犬として風花たちを守っているコロマルは当然として、睡眠機能らしきものを搭載している様子があったメティスも不審な音が聞こえれば気付いて目を覚ましているかもしれない。

ただ、二部屋分の広さを持っている美鶴の私室と違い。他の者たちの私室には風呂もトイレもない。

夜中にトイレに起きる事は普通にあり得ることで、足音がトイレのある一階へと向かえば気付いた者たちも勝手に納得するはずだ。
そう考えながら階段を静かに下りていくと、七歌はトイレへは向かわずキッチンの方へと進んでゆく。
別に小腹が空いた訳じゃない。アイギスの持つリストバンドによって最悪の事態は避けられるが、現状では今残っている食糧を分け合って食い繋ぐ必要がある。
実力とこれまでの信頼によって再びリーダーを任された七歌にとって、如何に餓えようとも仲間の命まで危険に晒す勝手な行動を取ることは出来ない。
何より、彼女の目的はそこではないため、カウンターの前を通り過ぎると目的地である群青色の扉で七歌は立ち止まった。
七歌の中には今も複数の力がある。個々の力は弱体化していても、感を取り戻せば最強の布陣だと思えるだけの力が揃っている。
しかし、少女は数ヶ月ぶりに相対した扉を潜って中に入るだけの理由があった。
力を集めて契約者の顕現させると、扉の鍵穴にそれをさして解錠する。
カチャン、と静かな音を立てて鍵が開くと七歌は扉を潜ってあの部屋へ向かった。

――ベルベットルーム

扉を潜って不思議な回廊を抜けると、七歌は椅子に座った状態で目を覚ます。
テーブルを挟んだ向かい側にいる面子も変わっておらず、たった数ヶ月ぶりだというのに妙に懐かしさを覚えた。
だが、全てが同じという訳ではなく、数ヶ月前は上昇していたはずの部屋が今は下降していた。
決戦時に最上階に到着したのだから、それが終わって下りて行くというのはある意味正しいのかもしれない。
だが、あれほどタイミング良く最上階に到着し、全ての契約を果た

し終えた青年を見送るなどという偶然があり得るだろうか。
決戦を終えて尚契約を果たし終えていない少女は、部屋の上昇と下降には契約者の存在が関係しているような気がした。
「……久しぶり、でいいのかな？」
「フフッ、ええ、お久しぶりでございます。ようこそ我がベルベットルームへ」
卒業式で記憶が戻ってから、契約が残っていると分かっていながらも七歌はここへ来ないようにしていた。
イゴールたちに罪はない。それは頭で分かっているのに、どうしても〝ユニバース〟を手にして去って行く湊の後ろ姿を思い出してしまい。ここへと来る事を感情が拒んだ。
けれど、再び戦いに呼ばれてしまった以上、仲間たちを守るためにも力は必要だ。
途中で投げ出してしまった事を謝る良い機会でもあったため、七歌はもう一度この場所を訪れようと思った。
幸いな事にイゴールたちは歓迎してくれている。担当者であるテオドアは七歌が再び来てくれた事に安堵した様子だが、姉たちも別に怒っているようには見えない。
その事に七歌自身もホッとしながら謝罪の言葉を口にした。
「……契約が残っていたのに来る事を避けてゴメンなさい。正直、今回の事がなかったら一方的に契約を破棄していたと思う。あれだけお世話になったのに、恩知らずでゴメンなさい」
「フフッ、その謝罪を受け入れましょう。ですが、ここを訪れた方は全員が全員契約を果たした訳ではございません。契約を果たすも果たさぬもお客人次第でございます」
イゴールたちにすれば契約の不履行など過去にもあったこと、初めての担当者が契約不履行に終わればテオドアはショックを受けるだろうが、ベルベットルームとしては客が一人減ったとしか思わない。
だが、七歌はこれを一つの区切りとしたいのだろうと考え、イゴールは素直にその謝罪を受け入れた。
相手に気を遣わせてしまった事にさらに申し訳なさを感じるも、七

歌としては過去の契約者は全員契約を果たしていると思っていたため、自分以外にも無責任な者がいたのかと気になる。
　すると、七歌の表情から何を考えているのか察したテオドアが説明してくれた。
「怪我や病気、私生活に忙殺されるなど、それぞれ理由は異なっていますが、ここを訪れなくなった方は過去にもおられました。実を言うと姉上たちが担当していた八雲様も一度は契約を破棄しかけたのですよ」
「そうなの？　八雲君、そういうのしっかり守るタイプだと思ってたんだけど」
　七歌の知る彼はそういった契約や約束をしっかりと守るイメージが強い。
　無関係な人間や弱者を助け続け、自分の命を使ってでもチドリやアイギスを守り抜こうとした姿は今も強烈なほど記憶に焼き付いている。
　そんな彼がどうして契約を破棄しようとしたのか。理由が想像出来ずにいれば、テオドアの説明には語弊があるとマーガレットが補足した。
「八雲様の場合は事情が異なります。契約を破棄したのではなく、契約者死亡により果たせなくなり未達成のまま契約が凍結したのです。蘇生後には凍結は自動で解除され、四つもの契約を全て達成して旅立って行かれました」
「あ、チドリを助けた時の事なのね。うん。まぁ、あれはしょうがないと思う。チドリを助ける事も契約にあったみたいだし」
「よくご存知ですね。最初からあの子の契約は矛盾を孕んでいたんです。契約を果たすまで死ねないというのに、死ぬ時までチドリという子を守り続けなければならない。そこへさらに〝命のこたえ〟を見つけるというものもあったのですから、よく全てを果たすことが出来たなと感心したほどです」
　湊の事を話すマーガレットの言葉には親しみが感じられた。
　ムーンライトブリッジでの事故があってすぐにこちらに来たそう

なので、現実世界でおよそ十年の付き合いがあったと聞いている。
実の妹弟がいるマーガレットにすれば、妹弟よりも幼い子どもの姿から知っている湊は親戚の子どもや手間の掛かる弟のように見えていたのかもしれない。
もっとも、それでも表面上は悲しさを感じさせないのは、相手が大人だからなのだろうかと七歌は少し羨ましく思えた。
けれど、羨んでばかりもいられない。未だに彼の事を引き摺ってしまっている身として、ここへ来た理由の一つでもある質問をぶつけた。
「……八雲君がどうなったのか。皆は知ってるの？」
「厳密に言えば観測は出来ていません。ですが、おおよその状態は把握しております」
「やっぱり、あっちに一人で残っているの？」
仲間たちと話し合った時の予想では、彼は生身のまま死後の世界へと移動し、そこでニュクスが再び現実世界へ行かないよう監視していると見ていた。
エリザベスは湊が一度完全に死んだ時には蘇生の手伝いとして密かに動いていたと聞いている。
ならば、今の湊がどういった状態にあるのかも把握している可能性があると踏んだのだが、毅然とした態度のマーガレットから返ってきたのは無慈悲な言葉だった。
「申し訳ありませんが、お答え出来ません」
「どうして？　何かの契約に抵触しているとか？」
ベルベットルームの住人が契約者側の事情にあまり干渉出来ない事は知っている。
湊と契約していたエリザベスたちはたまに案内を受けて外に出ていたらしいが、好き勝手に現実世界で遊び回るような事は出来ないという。
湊の現状について何かしら知っていながら、それを自分に話せないというのも、そういった契約に縛られての事なのだろうか。
七歌が率直に尋ねれば、マーガレットは頷きつつ小さな笑みを浮か

べた。
「その通り。ですが、それはあの子側の問題ではありません。七歌様とアイギス様の契約による縛りでございます」
「私たちの？」
現在、巌戸台分寮に閉じ込められているメンバーの中に契約者は二人いる。
以前からの契約が未だ続いている七歌と、新たに今回の件で契約者となったアイギス。
どうして戦いを終えたのに自分の契約は残っているのか。どうしてこのタイミングでアイギスまで契約者となったのか。
記憶が戻ってから考えていた事と、今回の事件を聞いてから疑問に思っていた事。
マーガレットの言葉を聞いてその二つの疑問がどうやら繋がっているらしいと七歌は気付く
「どうして影時間の戦いが終わったのに契約が残ってるのか不思議に思ってた。けど、八雲君が今回の件を知っていた事から薄々気付いていたんだ。そっか。これは八雲君が起こした奇跡の真実を知るための戦いなんだね」
「それについてもお答えする事は出来ませんが、事件を解決する事で得られるものもあるとだけお伝えしておきます」
どうやら七歌の予想は当たっているらしく、マーガレットは意味ありげに優しい笑顔を見せてくれている。
湊が守ってくれた仲間たちを何としても無事に現実世界へ還さなければと気負っていた少女は、そういう事ならこれは〝全員で挑む事〟が重要なのだと考えを改めた。
七歌の契約は如何なる結末も見届けるというもの。それが彼の事を指しているのなら、確かに七歌の契約はまだ終わっていない。
事件の真相が彼の最後の真相にも繋がっている可能性がある。それが分かった事で気持ちが軽くなった七歌は、そういえばと他にもあった疑問をエリザベスに聞いてみることにした。
「あ、そういえば、どうしてエリザベスさんがアイギスの担当になった

の？　八雲君の担当を終えてマーガレットさんも暇になったんだよね？」
「率直に申し上げれば敵情視察のためでございます。同じ殿方に想いを寄せる一人の女として、アイギス様の人柄に興味を持っておりましたので」
「あー……そういうの良いの？　ベルベットルームって従業員と客の恋愛はＯＫなの？」
　素直に疑問に思っていた事を尋ねただけだった七歌は、返ってきた予想外の答えに質問するんじゃなかったと後悔する。
　ただでさえ彼の周りは女性関係が混沌としているのだ。
　そこに異能側の存在である女性も加わるとなれば、どうやって収拾をつければいいのか分からなくなる。
　加えて、担当がテオドアだったこともあり、七歌自身はエリザベスがどういった人物なのかよく分かっていなかった。
　湊との事も意外ではあるが、こんなにもオープンに独占欲やらを見せてくるようなタイプだったのか。
　思わず七歌が困惑していれば、姉が呆れ、弟が戸惑っている横で、堂々と湊への想いを口にした本人が続けて答えてきた。
「ここにいる理由がなければどこへ行こうと自由です。ですが、今の私には外へ出る理由もございません。故に、アイギス様にお力添えをしようと思った次第でございます」
「へぇ、そうなんだ。テオとマーガレットさんは出られるの？」
「いえ、エリザベス姉上のみです。八雲様絡みで自己を定義したため、姉上はここに留まる理由がなくなりました」
「ああ、押しかけ女房スタイルなんだ。ベルベットルームって意外と緩いなぁ……」
　ベルベットルームを訪れるのは理由を持った者だけだという。
　契約者たちはここの住人の協力が必要だから招かれ、住人たちはそれぞれ異なる理由で流れ着いて住人となっているらしい。
　ならば、エリザベスのように途中でその理由を失う者がいてもおかしくない。

よく見れば出会った頃よりも目が生き生きしているため、本当に湊との愛に生きるため外の世界へ出る決心をしたらしい。
自分たちでは決して届かないほどの力を持った存在が、意外なほどに俗っぽい事に七歌は小さなショックを受ける。
彼女が愛に一直線な恋愛脳過ぎたのか、彼がそこまで人を惹きつける魔性の存在だったのか、或いはそのどちらでもあるのか。
悩んでも答えは出そうにないため、七歌は頭を切り換えると視線を正面に座った老人に向ける。
「えっと、とりあえず、言いたい事と聞きたい事は話せたから今回は帰ります。どれくらいの期間になるか分からないけど、またよろしくお願いします」
「ええ、またのおこしをお待ちしております。それではご機嫌よう」
老人に頭を下げると七歌は椅子から立ち上がって背後にあった扉から外へと出て行く。
胸の奥に引っかかっていたトゲはこれで抜けた。先への希望も見えた。
これでようやく探索に集中が出来る。
以前より遙かにペルソナの能力が弱体化しているメンバーを連れての探索は不安だが、仲間と一緒ならば何とかなるだろうと明るい気持ちが湧いてくる。
物資の補給など解決しなければならない問題や、突然現われた時の狭間やメティスの謎などもあるが、七歌は一つずつ確実に解決して行こうと前向きに考える。
部屋を訪れた時にはかなり追い詰められた顔をしていた少女のそんな変化に、部屋の住人たちも思わず笑みを浮かべると去って行く彼女を見送った。

第四百七十三話　最初の扉

――巌戸台分寮

一晩休んでから全員が起きてくると、昨夜の残り物で全員が食事を取った。

量は少ないが今の状況で文句は言っていられない。

アイギスの持っているリストバンドは湊のマフラーと繋がっており、中に保管されている物も共有されている。

この世界から彼が消えた事で中身がどうなっているか不安だったが、メティスとの戦闘で問題なく武器が取り出せた。

もしも取り出せなかったらアイギスはメティスに負けていて、順平や美鶴たちも無事では済まなかっただろう。

彼が消えた事を気にするばかりで、何か起きた時のための備えを怠っていた事をアイギスは強く反省した。

また、戦闘後に倒れてから意識を取り戻し、仲間たちの無事な姿を確認して助けられて良かったと思うと同時、武器が取り出せたことで湊のマフラーが現存している事は分かった。

アイギスのリストバンドはあくまで子機のようなものであり、本体は湊の持っているマフラーの方になる。

マフラーが消滅していれば中の物も消滅し、きっとこのリストバンドもただのアクセサリーになるはず。

そう考えて未だ彼が無事である事を祈るアイギスは、左手のリストバンドを逆の手で掴んで胸元に引き寄せる。

少しの間だけ目を閉じ祈りを捧げ、それが終わるとアイギスは武器を手に持って仲間たちを見渡す。

「じゃあ、これから地下の扉を調べるよ。基本的には私が指示を出すけど、ワイルドの力に慣れるためにアイギスには私の補助にまわって貰う。後衛の統括と全体を見ながらサポートをお願い」

「了解です。今のわたしはオルフェウスしか持っていないので、ペルソナが増えた時にはまた報告します」

これから地下空間に現われた謎の扉を潜り、この事態の原因を探っ

て解決に動き出す。
リーダーはこれまで通り七歌が務め、新たにワイルドの力を手に入れたアイギスがその力の使い方を学ぶためにバックアップに入る。
これまでは主に美鶴がその役目を負っていたが、アイギスの役目は銃火器を使った後衛だ。
近・中距離型で七歌とポジションが被っている美鶴がやるよりも、アイギスが後衛たちをまとめつつ七歌を補助した方が前後衛のやり取りがスムーズになる。
他の者たちも異論はないようで七歌とアイギスのやり取りを黙って見守った。
指揮を執る二人がお互いの役割を確認し終えると、今度は探索に参加する仲間たちに七歌が声をかけていく。
「今回は前衛組を多めに連れて行く陣形で行くけど、皆も戦う時は以前の感覚に引っ張られないように注意してね。ロードワークを日課にしてる真田先輩はともかく、他の人は体力や身体の動かし方を忘れてると思うし。全員ペルソナ能力がかなり弱体化してるのは風花からも聞いたでしょ？」
七歌の言葉に全員が何とも言えない表情を見せる。
最後の戦いを終えてから今日まで戦闘行為は勿論、ペルソナなど実験も含めて使う機会がなかった。
時間にすればたった二ヶ月だが、トレーニングが日課の真田を除けば、他の者たちは授業や部活で身体を動かすくらいだった。
そのため、風花が仲間たちの現状を調べてみると、決戦時と比べてペルソナ能力の指標とも言える適性値は半分ほどまで衰え、身体も思ったようには動かずキレを失っていた。
日常に戻る事が出来ていると思えば、それはある意味でここにいない青年の望み通りになっていると言える。
ただ、彼はこの事態を予想していたようで、たっぷりと貴重な回復アイテムを用意していた。
腰のポーチからそれを取り出した七歌は、それを全員に見せながら言葉を続ける。

「これを使えば即死じゃないかぎりは重傷でも治る。多分、私たちが弱体化してる事も予想してたんだろうね。幸いな事に数は山ほどあるから、ヤバいと思ったら躊躇わずに使って」
回復役はこれまで七歌とゆかりが担ってきた。
一応、真田と天田も回復スキルを持っているものの、本人の性質もあってか効果は高くない。
それに対し、弱体化した七歌たちの回復スキルは今でも使える性能ではある。
ただ、今はチーム全体が弱体化している事もあって、敵の強さによっては今の力では回復が間に合わない可能性があった。
何より、全盛期の力であったとしても、腹を剣で貫かれるような重傷を治すだけの力は無い。
それが可能だった青年はおらず、しかし、彼が遺してくれたアイテムはそれに匹敵するだけの効果がある。
大事なのは全員で生きてこの事件を乗り越えること。貴重だからとアイテムの使用を渋って手遅れになっては意味がない。
全員がポーチに数個入れてある事を再度確認し、危険な時は躊躇わずに使うよう七歌は念押しした。
すると、そんな七歌たちの会話を聞いていたメティスが何やら首を傾げて不思議そうな表情を見せ、傍にいたアイギスの方を向くと質問してきた。
「……姉さん、あの回復アイテムを用意したというのは？」
「昨日の夜に地下で話したでしょう。今回の事件を予想していた人がいるって。その人がわたしたちのために貴重な回復アイテムを用意してくれていたの」
「戦力の弱体化と姉さんたちが置かれる状況を予想してアイテムを用意していたんですか？　そんな事が可能なら戦力の弱体化を防ぐように行動したら良いのに、随分と回りくどい行動をする人なんですね」
メティスはここへ来てすぐに仲間たちを襲った事もあり、まだ完全には信用されていない。

地下での態度からアイギスやラビリスが監視した状態での同行は許可されたが、やはり他の者たちも警戒していた事で彼女の言葉は他の者も聞いていた。
最後の戦いを知らないメティスにすれば、回復アイテムを用意していたのは活動の協力者のような存在だと思っていた。
それだけに、彼女にとって何よりも大切な姉を守る手段として、その協力者の働きは中途半端だと相手を軽んじているのが態度に出ていた。
何も知らないメティスに罪はない。ちゃんと事情を知っていれば、メティスだってもっと言葉を選んだだろう。
だが、そういった話をする前に運悪く彼を侮辱するような言葉を吐いてしまった。
途端、少女に敵意を持っていた者たちが、再び彼女に鋭い視線を向け始める。
本人は配給されたアイテムを手に取って見ており、周りの状況が変化した事に気付いていない。
このままでは拙い。そう思ってアイギスが場を取りなそうとすれば、小さく嘆息したチドリが意外にもメティスに同意するように頷いた。
「……ええ、本当にね。こんな物を用意するくらいなら、もっと他の方法をとって欲しかったわ。いつから知ってたのか聞いてないけど、これだけの量を集めてたって事は時間はそれなりにあったみたいだし」
「せやな。こういった手段しか取れなかったんかもしれへんけど、手紙に関してはもっと書けたと思うんよ。幼稚園児でももう少し伝わる内容で書くやろうに」
チドリがメティスに同意しながら彼に対する愚痴を溢せば、ラビリスも一緒になって不満を漏らす。
二人が指摘した事は他の者たちも同じように感じていた事だ。
メティスも恐らくはそういった事を指摘していただけだが、やはり彼の家族だった少女らが言うと印象が違うのか、場の空気は和らいで他の者まで彼への不満を口にし始める。

腕を組んで呆れ顔になっている真田は、ラビリスが話題に出したお粗末な内容の手紙について語る。
「確かに、報告は出来るだけ簡潔にというのが基本だが、いくら何でもあれではただの伝言メモでしかない。いつどこで誰が何をという部分が欠片も書いていなかった」
「まぁ、あいつにすれば本当にメモのつもりだった可能性もあるだろ。回復アイテムは好きに使えって意味で〝俺を頼れ〟って書いてたのかもしれねぇしな」
二つの手紙のうち〝妹を、メティスをよろしく〟と書かれていた方がまだ分かる。
敵として遭遇してしまったが、ラビリスとアイギスの妹であれば、本来なら味方として迎えても問題ない。
だが、もう一つの手紙である〝俺を頼れ〟に関しては謎だ。ハッキリ言えば本人が消息不明な状態でどうしろと言うのが全員の意見である。
荒垣が言ったように、遠慮せず好きに回復アイテムを使えという意味ならば理解出来るが、あの手紙からそれを察しろという事であれば無理があるだろう。
ただ、メティスを除く他のメンバーは、もしかするとこの事件を調べていけば帰ってこなかった彼に会えるのではという淡い希望を抱いていた。
そんなはずはないと理性で否定しようとするが、ここまで事態を読んでいた湊ならばもしかしてと思えてくる。
もっとも、誰もそれを口に出したりはしない。もしも、自分がそれを言葉にすれば、期待が裏切られた時に仲間がショックを受けると思っているからだ。
本当の意味ではそうあって欲しいという願望。全員が同じそれを抱きながらも本音は隠して、彼への愚痴を溢しあって雰囲気は明るい物へと変わった。
剣呑な状態にならずにすんでアイギスがホッと一息吐くと、話に一区切りついたと判断した七歌が全員の注目を集める。

「よーし。それじゃあ、行く前にもう一回装備をチェックしてから移動しようか。綾時君は風花の護衛よろしくね」
「うん、任せてよ。一応、脱出出来そうな場所がないかも調べておくから、皆は安心して探索して来て欲しい。気をつけてね」
時の狭間にある扉の向こう側を探索する事にした七歌たちだが、寮からバックアップを担当する風花を一人で残す事は出来ないため、綾時が風花の護衛として残りつつ寮の中を調べる事になっていた。
綾時が残るのは弱体化したメンバーの中で彼が一番軽度だったためである。
綾時はニュクスの端末でありシャドウの王とも言える特殊な存在だった。
それを湊が月の欠片をコアとして利用し、アイギスたちと同じように人間にしたのだが、コアとして使われた月の欠片は黄昏の羽根と同じ性質を持った結晶。
当然、それには羽根と同じ増幅器としての力も備わっている。
おかげで綾時は多少鈍っているものの、一人でアルカナシャドウと戦えるくらいには力が残っていた。
本当ならそんな戦力は前線に回したいが、風花の護衛に人数を割くのも難しいため、強力な戦力一人を護衛として残す事に決まったのだ。
そんな彼が七歌たち前線組を心配すれば、七歌は傍にいたコロマルを抱き上げて笑顔で答えた。
「こっちも大丈夫。なんたって秘密兵器のコロマルがいるからね！」
「ワン！」
抱き上げられたコロマルが元気に鳴けば、頼もしい返事を聞いていた順平が苦笑気味に呟く。
「しっかし、コロマルだけペルソナが弱体化してねぇとはな。お前だけ有里の事を忘れず覚えてたんだもんな。本当にすごいやつだよ」
順平の言葉に他の者も頷いてコロマルを見つめる。
風花が全員の戦力を調べて発覚したのだが、なんとコロマルのペルソナ能力は決戦時と変わっていなかった。

武器を使っての戦闘は流石にブランクがあるようだが、切り札であるペルソナが弱体化していないというのは、戦力が非常に厳しい現状では何よりも求められている条件だ。
どうしてコロマルだけペルソナが弱体化していないのか。その謎を探るべくラビリスとアイギスがコロマルと話をしたところ、コロマルは他の者が影時間の記憶を失っている間も覚えていたと答えた。
二人の通訳によってそれを知った時は全員が驚いていたが、何故コロマルだけが記憶の抹消を免れたのか、思い当たる理由についてコロマルに聞いたところで全員が納得する答えが返ってきた。
その理由は、湊が開発した首輪型召喚器を付けている事で、美紀や桐条武治たちが簡易補整器の指輪で記憶を持ち越したのと同じ事が起きたためであった。
恐らく、これについては湊も予想していなかった結果だろう。
コロマルも別に何か特別な役目を任された訳ではないと言っており。チドリやラビリスなど彼の家族を守る役目はあるが、それは自ら恩人である湊に誓った事だという。
無論、その話を聞いた時にはどこまで忠義に厚い犬なのだとメンバーたちは胸を打たれたが、それ以上に決戦時と変わらぬ力を持っていてくれた事に全員が感謝した。
抱き上げていたコロマルを七歌が床に下ろし、全員が言われた通りに装備の確認を済ませていく。
一つ目の扉で原因を突き止めて解決出来ればいいが、そうでなければ複数あった扉を順番に調べて行くことになる。
先が長くなると考えれば油断は出来ない。出来る事なら最初から全戦力を投入したいくらいだ。
しかし、風花が仲間たちを十全にバックアップするなら、それを守る戦力を残す必要もある。
だから、七歌たちは出来る限り備えた状態で、可能な戦力を全て投入する事にした。
準備を終えた七歌が他の者たちに視線を送れば、自分たちも準備完了だと頷いて返してくる。

「じゃあ、行ってくるね」
「皆、気をつけてね」
ここに残る風花と綾時に見送られながら、陣形を組んだ状態で地下への階段を下りてゆく。
昨夜見た時点では一面砂の大地が広がっているだけだったが、一夜経ってシャドウが出てきている可能性だってあるのだ。
全員が警戒しながら時の狭間まで下りてゆき、ポツポツと存在する扉を遠目から確認出来る距離まで近付いたところで〝ソレ〟に気付いた。
腰の左右に差された二振りの刀、
首に巻かれた黒いマフラー、
結い上げられた青い髪、
そんな特徴を持つ後ろ姿をした人型の何かが扉の前まで進み、その正面の扉が突然眩く光ると、光が治った時には人型の何かは消えていた。
「ねぇ、今のって……」
大きく目を見開いて驚いていたゆかりが誰にでもなく話しかける。
恐らく他の者も同じように考えていたのだろう。あの見覚えのある後ろ姿を見て、そういう事なのかと誰にも話していなかった勝手な希望が頭をもたげる。
しかし、誰よりも冷静でいるべき立場にある七歌がいち早く立ち直って否定の言葉を吐く。
「……違うよ。さっきのは八雲君の姿をしてはいたけど、少なくとも魂のある存在じゃなかった」
「じゃあ、なんで有里君の姿をしてたのよ？」
「分からない。けど、無関係ではないのかも。調べてみないと分からないけどね」
先ほどの人型の何かは確かに青年の姿をしていたが、七歌はそれが魂を持った存在ではないと看破していた。
七歌が冷静に否定したことで、他の者たちもいくらか落ち着いたのか、湊の姿をした何かを見たのは確かだという情報を共有する。

それの正体が何であるかまでは不明だが、帰ってこなかった彼に繋がる情報がここにはあるのかもしれない。
どの扉を潜るかは決めていなかった事もあり、折角だからと人型の何かが消えていった扉の先へ向かうことに決める。
「先に言っておくけど、さっきの人型を見つけても追ったりしないでね。もし、あれが敵で、その力が八雲君と同等なら戦闘は避けるべきだからさ。状況が悪ければ深追いせずに撤退するって覚えておいて」
彼に繋がるヒントであれば何としてでも手に入れたいという気持ちは分かる。
七歌の言葉を聞いて冷静であろうとしてくれてはいるが、胸中では未だ混乱している者が数名いるのも分かっている。
ただ、七歌の使命は全員を連れて無事に調査を終えて戻る事だ。
手を伸ばせば届くところに情報があったとしても、命の危険があるなら七歌は相手を殴りつけてでも止めて連れ帰るつもりでいる。
比較的冷静さを失っていない者は、七歌がここで釘を刺した意味を理解してくれているだろう。
もしもの時は自分たちが彼女たちを止めなければならない。その認識を共有し合ったところで一同は最初の扉を潜り中へと消えていった。

第四百七十四話　古の路マレボルゼ

――古の路マレボルゼ

彼と同じ姿をした何かの後を追うように七歌たちは扉を潜った。

黒い靄のようなものを纏っていたが、姿形は間違いなく彼だった事は全員が確認している。

突然の事でメティスを除く全員が動揺を見せるも、七歌は湊と同じように霊視の力を持っていた。

おかげであれが魂を持たない存在であり、湊の姿をしていても全く別の何かだという事はすぐに気付くことが出来た。

だが、七歌がそれを伝えて全員が一応の納得を見せたものの、完全に冷静さを取り戻しているとは言い難い。

扉の向こうは寮内で話している時に予想されていたように、タルタロスのようなダンジョン構造になっていた。

タルタロスと違って下へ下へと下りて行く程度の差はあっても、シャドウが出る事も含めてある意味で彼女たちには馴染みの場所と言える。

しかし、ブランクがある事を考慮しても、指揮を飛ばす七歌は仲間たちの動きに妙なズレがあるのを感じていた。

弱体化を免れたコロマルと姉を守ろうとやる気に燃えるメティスが武器を持って駆けていく。

タルタロス中層クラスの強さを持つシャドウを時間差で攻撃して上手く沈める。

止めとばかりに七歌もペルソナを召喚して一撃を入れるが、周囲のシャドウ反応がなくなったところで小さく溜息を吐いて仲間たちに声をかけた。

「はぁ……皆、気持ちは分かるけどもう少し集中して。コロマルとメティスがいるから大きく崩れずに済んでるけど、そうじゃなかったら回復アイテムのお世話になってるところだよ？」

話を聞く限りメティスはまだ稼働時間はそれほどでもないらしい。

けれど、そんな状態でもアイギスを含めた仲間を劣勢に追いやるだ

けの戦闘力はある。
そして、戦いが始まると徐々に感を取り戻して動きが良くなっているコロマルの存在によって、現在の七歌たちの戦闘は支えられていた。
リーダーである七歌から注意を受けた仲間たちは、戦闘に集中出来ていないと自分でも分かっているのか申し訳なさそうに視線を俯かせたり、謝罪の言葉を口にしてくる。
「わりぃ……なんつーかさ。あの人影を見たらもしかしてって思っちまったんだよな」
「もしかしてって言うのは？」
順平は本当に申し訳なさそうにしているが、本人も自分がここまで動揺している事に戸惑っている節がある。
そういった意識のずれは誰かと会話することで修正出来る事もあるので、七歌は相手の言葉の意味を理解しながら尋ね返す。
他の者たちも周囲の警戒をしながら順平に視線を向ければ、順平は僅かに言いづらそうにしながら再び答える。
「あー、その、あれだ。もしかしたら、この奥に有里がいるんじゃねぇかって思った」
「じゃあ、あの人影は何だと思ったの？」
「あいつなりのメッセージとか？　いや、分かんねえけどさ。オレはこっちにいるぞーって」
「八雲君のキャラ的にそれはなくない？」
湊がそうやって自分の居場所をアピールする姿が想像出来ず、七歌が苦笑しながらツッコミを入れると、順平も「言ってから思った」と笑って返す。
二人の会話につられるように他の者たちも笑い始めると、それで緊張が解けたのか全員の表情が自然なものになる。
すると、ここに来るまでの戦いぶりを思い返して、七歌が何を狙って順平と会話したのか察した美鶴も、仲間の精神状態を一度リセットさせるため自分の気持ちを言葉にする。
「正直に言えば私も伊織と同じように思っていた。あれは八雲からの

メッセージで、この奥に本人がいるのではないかとな。まぁ、七歌も言った通り彼の性格とは合わない行動だが、可能性はゼロではないだろう？」
「まぁ、可能性だけで言えばそうですけどね。専門家的にはどう思う？」
　美鶴の言う通り可能性はゼロではない。ゼロではないがまずないだろうと思いつつ、七歌は彼の内面について誰よりも詳しいと思っているであろう少女らに意見を求める。
「……ないわね」
「ないかと」
「ないわなぁ」
　チドリ、アイギス、ラビリスが続けてコメントする形で美鶴や順平の意見は否定される。
　そんな形でアピール出来るほどの素直さがあれば、周りの人間はああも振り回されたり苦労することはなかった。
　大切な少女を機械のまま人間として認めさせようと世界に喧嘩を売ったり、母親を殺された復讐で万を超える敵を殺したり、大切に思っている少女を守るために傷つけてまで遠ざけようとしたり、本当に彼は〝素直じゃない〟ではすまないほどこじらせた性格をしているのだ。
　ベアトリーチェの力を使って退行した八雲はあんなにも素直で可愛らしいというのに、どうしてあれがこんな成長を遂げたのかと本気で疑問に思うくらいには捻くれている。
　家族である少女たちがそうだと断言するのだから、やはり順平や美鶴が言ったあの人影が湊からのメッセージという線は薄いだろう。
　そうなると、じゃあ、あれは何なのだという話に戻るのだが、人影の元になる青年について知らないメティスが首を傾げているため、仲間たちの様子をずっと見ていた風花が通信越しにメティスに事情を説明した。
《メティス、さっきの人影について情報共有しておくと、あれは私たちの知り合いを模した姿をしていたの》

「会話に出てきた名前からすると、少し前に話していた回復アイテムを用意してくれていた人ですか？」
《そう。今はどこにいるか分からなくて、だからもしかしたらって皆も話しているの》
「流石にこんな場所にはいないと思いますよ？」
いくら何でもこんな異界ともいえる場所にいるはずがない。どこか呆れた様子でメティスが冷静に答える。
他の者たちも事情を知らなければ普通はそう思うだろうと苦笑する。
正直に言えば、七歌たちもどっちか判断がつかない状態だ。
この場所がアチラ側の場所であれば、ニュクスと共に消えた湊がいる可能性はあると言える。
しかし、ニュクスが存在する場所とも異なる位相にある空間ならば、彼がここに辿り着いているはずがない。
では、どうしてあの人影は湊の姿をしていたんだという話になってくるのだが、今の状況ではそれを判断するだけの材料がないため、七歌はそれについて語るのは後にしようと保留する。
七歌が狙っていたものとは違うが、ちょっとした休憩がてらの雑談でメンバーらの動揺はほぼ抜けたようだ。
あのまま進んでいればコロマルとメティスの負担が大きくなっていたので、早めに切り替えられて良かったと七歌は内心でホッと息を吐く。
極度の疲労を感じている仲間がいないことを確認し、これなら再出発出来そうだと声をかける。
「さて、じゃあ、隊列組んで進んで行くよ。さっきまでサボってた男子が前ね。コロマルとメティスは真ん中らへんで休んでて」
「わん！」
「私はまだ全然いけますけど？」
「負担が集中しないように考えての事だから今は休んで。また後で交代して前に出てもらうから」
コロマルは素直に鳴いて七歌のいる隊列の真ん中に移動する。

メティスは姉の前で張り切っているのか全然余裕だとアピールしてくるが、七歌はこれはチームでの行動だからとメティスを下がらせる。
他が元気な状態で一人だけ疲労状態になると、元気なメンバーが一人を庇うように動かなければならなくなるのだ。
戦闘などによる怪我ならばともかく、一人が疲労しただけでチーム全員の足が鈍くなるなど大きなマイナスだ。
そんな状態にはしたくないので、動きが鈍くてあまり戦っていない前衛組を先に行かせると、七歌は残りの者たちも連れて出発する。
出てくるシャドウとの戦いぶりをみるに、しっかりと気持ちは切り替えられたのが分かる。
真田が足でかき乱して牽制し、順平が前に出て攻撃を仕掛け、荒垣が敵の反撃を防ぐよう盾になる。
敵が複数出てきた時には天田とラビリスが援護して上手く敵の連携を断っている。
孤立した敵には後衛にいる者たちから攻撃が飛び、ブランクはやはり感じるものの何とか大きく苦戦する事なく探索を進める事が出来た。
＊＊＊
七歌たちはここがタルタロスと似ていると感じていたが、どうやら構造も似ているようで、いくつか階を下りて行くとフロアボスのいる階層に着いた。
これまではほとんど通路ばかりで、たまに小部屋があるような構造になっていたが、これまでよりも強力な反応を持つシャドウがいる場所は広い大部屋になっていた。
まだ本調子とは言えない七歌たちにとって、狭い通路で強い敵と戦うのは自殺行為。
その点、大部屋ならば数の利を活かして、回復アイテムによるゴリ押し戦法で囲んで叩く事なども出来る。
まだ一つ目の扉という点を考えると、そういった戦法を採るには早いのではとも思うが、先が長い可能性があるからこそアイテムを惜し

まず使って体力の温存に努めるのも一つの手だろう。
通路から大部屋に向かう途中に七歌がいくつかの作戦を考えていると、大部屋に入る直前に風花から通信が入る。
《強力なシャドウ反応がある大部屋に別の反応が出現！　でも、これって上で感じた人影の反応じゃ……》
七歌たちのいる通路から大部屋までは一直線の道しかない。
通信を送ってきた風花自身もどこか困惑している様子なので、実際に行けば状況が分かるはずだと全員警戒しながら大部屋へと向かう。
入っていきなり敵が攻撃してくる事もあるため、すぐに回避か防御出来るよう備えて全員が大部屋に入る。
すると、確かに部屋の中にはフロアボスであろう巨体を持つレスラー型シャドウと数体の配下のシャドウが確認出来た。
ただ、その正面には上で見た彼と同じ姿をした謎の存在が立っている。
敵の正面に立ち、七歌たちに背を向ける姿は、今まさに戦いを始めようとしているように見える。
あれが何なのかは分からないが、もしも、シャドウやこの空間が生み出したギミックであれば、同じ陣営であるダンジョン内にいるシャドウと戦うはずがない。
となると、急にこちらを向いてフロアボスたちと共に七歌らと戦うつもりなのか。
戦闘が始まることに備えて横に広がる陣形を取っていると、対峙していたフロアボスと謎の人影に動きがあった。
なんと、拳を振り上げながらレスラー型シャドウが人影に殴りかかったのだ。
「シャドウが襲い掛かっただと!?」
「……なんなのあれ？　シャドウとは別物なの？」
シャドウの同類だと思われた人影に、フロアボスが攻撃を仕掛けた事で美鶴が驚きの声をあげる。
現地でアナライズを試しているチドリも、上手く情報が読めないのか人影の正体を掴めずにいる。

声はあげていないが、他の者たちも美鶴と同じように衝撃を受けており、拳での攻撃を繰り返すフロアボスとそれを躱している人影の戦闘をジッと見つめる。
巨体のリーチを活かした攻撃を何度も繰り返すも、フロアボスの攻撃は全て躱されて人影にダメージを与える事が出来ない。
すると、今度はフロアボスの周りにいた配下のシャドウたちまで人影に襲い掛かった。
火炎魔法を放つ者もいれば、近付いて足止めしようとする者もいる。
それに対して人影がどういった反応を見せるのか観察していると、人影は腰に差した二振りの刀を抜いて飛んできた魔法を切り裂き、もう一方の刀で足止めに近付いて来たシャドウを突き殺して見せた。
仲間が一撃で殺された事に恐怖したのか、魔法を放ったシャドウが僅かに後退する。
それを隙と捉えたのか人影は跳躍して一気に距離を縮めると、上段から振り下ろした刀で敵を両断した。
「つえー……」
「戦い方は有里先輩に似てますよね」
使っている武器が業物なのは間違いないが、同じ物を使って同等の結果を出せるかと言われれば難しいと答えるしかない。
そんな湊の戦い方と人影の戦い方はよく似ていて、順平と天田はここまで来ると無関係ではないだろうと思って見ていた。
フロアボスの攻撃を躱しながら配下のシャドウたちを屠っていき。最後の一体を倒すと人影はフロアボスから大きく距離を取る。
だが、両手に持った刀を構えたままな事から、人影はフロアボスも仕留めるつもりでいるようだ。
対して、配下を全て殺されたフロアボスは激昂したのか黒い身体が熱を帯びて赤く染まる。
赤く染まった身体は僅かに発光し、高温である事を示すように蒸気が立ち上っている。
見た目が変化したフロアボスが人影に向かって駆け出すと、先ほど

とは比べ物にならぬ加速で一気に距離を詰めて拳を突き出した。
敵の接近を察知して回避行動に移っていた人影も、敵の変化が想像以上だったのか行動に移りきる前に捉えられてしまう。
回避は間に合わず、咄嗟に刀を交差させての防御体勢を取るが、体格差もあって人影はガードごと吹き飛ばされて地面を転がる。
もっとも、転がった勢いを利用して離れた場所で立ち上がったため、一撃で戦闘不能に追い込まれる事態は避けたようだ。
「シャドウの方が速いみたいですね。姉さん、今の内に両方とも攻撃しておいた方が良いんじゃないですか？　そうすれば、こちらの被害を抑えて勝てますよ」
「シャドウは良いけどあっちの人影に攻撃するのはちょっと……」
勝手に敵がやり合っている内に後ろから撃ち抜けとメティスが発言すれば、人影の姿が彼とそっくりな事もあってアイギスは拒否反応を示す。
それは他の者たちも同じ意見なようで、人影の援護ならば構わないが、まとめて排除する事に賛成する者はいなかった。
ただ、フロアボスはレスラー型シャドウなので基本的に近接格闘で戦っている。
となれば、当然傍には人影もいるので、援護するにもシビアなタイミングで攻撃を通すだけの技量がいる。
ブランクのある彼女たちにそれだけの攻撃を通す自信はなく、アイギスたちが何も行動を起こせずにいれば、再びフロアボスが人影に向けて駆け出し距離を詰めた。
肩から相手に向かってタックルの体勢で迫り、両者の距離がゼロになるタイミングで人影が独楽のように回った。
その動きの意味をアイギスたちが理解したのは、フロアボスが人影の身体をすり抜けるように通過してからだった。
敵の攻撃が当たる直前に独楽のように回転した人影は、相手の身体を攻撃の勢いごと完璧に受け流したらしい。
一歩間違えれば正面から敵の攻撃を喰らっているところだ。対処法として思い付いても普通は実行しようなどとは思わない。

それをあの人影は実践して見事にやりきってみせた。
攻撃を受け流されたフロアボスは勢いのまま通り過ぎ、無防備な背中を人影に晒している。
あの超絶技巧を持つ人影がそれを見逃すはずもなく、左の刀を逆手に持ち変えて接近すると、全ての攻撃が次へと繋がり続ける連撃を繰り出す。
筋力では確かにフロアボスが勝っていたのだろう。しかし、一度足を止めてしまえば、筋力から生み出されるその速さも活かせない。
フロアボスの背中に次々と刀傷が増えていき、その傷からは黒い靄が勢いよく漏れ出してゆく。
ダメージの蓄積によって強化も解けたのか、フロアボスの身体が元の黒色に戻ると、与えられるダメージも増えて人影の攻撃の勢いも増す。
途切れぬ攻撃は最早刀による結界のようで、その結界が徐々にフロアボスの身体を侵食していくと最後には耐えられなくなり靄が弾けて消滅した。
いつかのアルカナシャドウとの戦いでは、彼も大剣を使って似たような事をしていたことを覚えている。
やはり、あの人影は彼と関係があるのだろうかとアイギスが見つめていれば、フロアボスを倒し終えた人影は武器を納めて通路の奥へとそのまま消えてしまった。
「姉さん、あれを追わなくて良いんですか？」
「あ、えっと、七歌さん。どうしましょう？」
戦いに魅入っていた事で誰も咄嗟に追う事が出来ず、メティスに声をかけられてから正気に戻る。
先ほどの戦いは色々と衝撃的な事が起こりすぎた。アイギスに意見を求められた七歌も、正直に言えば一度休んで考えを整理したい。
であれば、ここで追うのは避けるべきだろうと、人影が消えた通路とは別の通路を調べる事にする。
「あれは今は追わなくていいや。もう一つ通路があるからそっちを調べよう」

調べようと口にしたが、正面に伸びるその通路の先は大部屋からも見えている。
通路の先に見えているのはどことなく柱時計に似た形のモニュメント。
これもタルタロスと同じならば、そのモニュメントはどこかへ通じる転送装置のはずだ。
フロアボスのいる階層にある事から、恐らくは入口付近に出るはずだとモニュメントへと近付いていき、七歌たちが触れるとそれは起動した。
風花とチドリがそれぞれ調べ、時の狭間の扉があった場所に同じモニュメントが出現している事も分かり、七歌たちは一度寮へ戻ることにするとモニュメントを利用して帰還するのだった。

第四百七十五話　過去への扉

――古の路マレボルゼ

今回の事件に巻き込まれたアイギスたちは、自分たちが何と向き合うべきなのか本当の意味で理解出来ていなかった。

影時間の戦いは終わった。この世界から影時間は消滅し、シャドウも現われなくなった事で無気力症患者たちも徐々に回復して元の生活へと戻っていった。

月光館学園を卒業した者たちは新たな環境へ移る準備を進め、新学年に上がる者たちも先を見据えて動き始めていた。

戦いの記憶を取り戻しておよそ一ヶ月、確かに彼の事は今も忘れられずにいる。

しかし、感知型の少女たちでも見つける事が出来ず、生きているのかどうかも分からない。

そんな状況では自分たちにはどうにも出来ない事も分かっている。

だから、彼女たちはそれぞれの道を歩み出すため、徐々にだが仲間たちとは疎遠になりつつあったのだ。

先の事を見続ければ、そのために動き続ければ、自分が前に進んでいる実感が得られる。

そうすることによって、自分たちと彼で繋いだ明日を生きている事を証明出来る、と彼女たちは無意識に信じたため過去を象徴する〝仲間〟と距離を取ろうとしたのだろう。

その行動の結果がこんな事態になるとは欠片も思わずに。

《次のフロアで行き止まりのようです。シャドウの反応はありませんが注意して下りてください》

転送装置で一度寮に戻って休憩を取ったアイギスたちは、再びダンジョンに戻ってようやく最後のフロアへ着こうとしていた。

ここへ来るまでにも何度か彼の姿をした人影を見ることがあったが、フロアボスとの戦い以外でシャドウと戦っている場面には遭遇する事はなかった。

あれだけが特別だったのか、それとも自分たちが苦戦する相手だけ

を倒してくれたのか。
アナライズをした風花とチドリによればシャドウではないとの事だが、その正体は不明のまま彼女たちは最下層に辿り着いた。
自分たちよりも先に進んでいたなら最下層にいると思っていたため、人影がいない事を警戒しながらアイギスたちは階段を下りてゆく。
これまでよりも長く続く階段を警戒して進み、少しすると出口と思われる場所から漏れる明かりが見えてきた。
これまで探索してきたフロアはタルタロスと同じように薄暗い通路が続いていたため、最下層に到着する前から雰囲気が異なることは理解出来た。
敵の反応はない。けれど、何もないとも思えない。
何があっても反応出来るよう警戒し、前衛たちが先に階段を下りきれば、そこには地下とは思えない光景が広がっていた。
「何だここは？　本当に地下なのか？　上も下も果てが見えないぞ」
「気ぃ付けて進めよ。この橋から落ちたらどうなるか分かんねぇぞ」
階段から続く通路を進みながら真田が呟き、荒垣が後ろをついて行く者たちに注意を促す。
彼らが進んでいる通路はタルタロスのエントランスのように手すりのない橋のような構造になっており、その下は霞がかっていて底が見えなかった。
そんな危険な通路を慎重に進みながら、一同は不思議な構造をした最下層の景色を見渡す。
階段から伸びる通路は途中で広さに変化があるものの、最後に待ち構える巨大な扉まで一本道になっている。
しかし、その周辺、どことも繋がっていない空中に建物や通路などの床がポツリポツリと浮いているのだ。
それらは静止しているためその場所に固定されているようだが、天地が逆さまであったり、アイギスたちから見ると垂直に建っていたりする。
タルタロスという異常な建造物を知っている彼女たちでも驚く、ま

さに異界としか言えない光景だ。
荒垣が言う通りここで通路から落ちればどうなるか分からない。
全員が慎重に進み、これまでの通路より広い床が広がる場所に辿り着くと一息吐く。
「ここにも転送装置があるな。山岸と望月もどうせなら合流して直接調べるか？」
さらに奥にある扉を見つめながら美鶴が通信越しに尋ねる。
ここへ下りてくる前に風花も言っていたが、確かに最下層には敵の姿がなかった。
ならば、丁度良く存在する転送装置を使って扉の間へと繋ぎ、寮からこちらを探っている風花を連れてくれれば、より詳しくこのフロアを調べられるのではと思ったのだ。
同じ感知型の力を持つチドリよりも、情報を深く読み取る事に関しては風花の方が優れている。
ゴシック建築を思わせる荘厳な造りをした建物や、中世の宮殿のような装飾が施された床や扉など、どうしてそういった造りなのか探ることでこの場所について分かる事もあるかもしれない。
戦闘能力を持たない彼女を連れてくる事の危険性は勿論分かっている。
だが、しっかりと調べずに通路の先にある扉を開くのは恐ろしい。
そうして、美鶴が相手の答えを待っていれば、少し考える間を置いてから返事が返ってくる。
《そうですね。皆さんの周囲には何の反応もありませんし。そちらに行って調べてみようと思います》
《申し訳ないけど、僕は寮に残らせて貰おうかな。何が起きるか分からない状況で寮を無人にするのは少し恐いからね》
風花は現地に向かうことを了承するも、綾時は万が一の場合に備えて留守番する事を告げてきた。
確かに、時の狭間にある扉からシャドウが出てきて、無人になった寮へと上がってくる可能性がないとは言い切れない。
そういう事なら戦闘力のある綾時が残ってくれるのはありがたい

ため、美鶴は転送装置を使って扉の間とここを繋ぐと風花だけを連れて戻ってきた。
最下層にやってきた風花は早速ペルソナを呼び出すとフロア内を調べてゆく。
その間、他の者たちは休憩しながら警戒に当たるが、調査の結果どうやら本当にここには敵も罠も存在しないという事が判明した。
「ここには私たちのいる通路や周りに浮かぶ建物しかないみたいです。天井も底も無限に広がっているように見えますが、空間自体は途中で途切れているみたいでその先は分かりません」
「じゃあ、ここの建造物とかについては何か分かった？」
「ごめんなさい。〝そういう物〟としか情報が読み取れなかったの。ただ、奥にある扉だけは何か強い力が宿っているのが分かりました」
七歌の質問に申し訳なさそうに風花が答えるが、質問した七歌自身もその答えは予想していたようで気にしないで返す。
タルタロスもそうだったが、一定範囲ごとに内装の変化はあれど意味などは特になかった。
もしかすると、特定の分野の学者であればそれらの意味を理解出来たのかもしれないが、チドリやラビリスも湊からそういった話を聞いていないそうなので、由来があったとしてもギミックとしての意味はないらしい。
そのため、ここも同じだろうと思った七歌は奥の扉を見つめると、他の者たちと一緒に通路を進んでその近くへと移動した。
「てか、途中で転送装置を使えたにしても結構な深さだったよね。これを扉の枚数分繰り返すとかだったら笑えないんだけど」
「マジでそれな。つか、なんでここシャドウがいんだよ。無気力症とかキレイさっぱりなくなったって話だっただろ」
転送装置を使って寮で休憩を取ったにしても、ここまでくるのに丸一日ほどの時間が掛かっていた。
その間に何体もシャドウを倒しており、無気力症患者がいなくなったのにどうしてシャドウがいるんだよと順平が愚痴を溢す。
彼らの認識ではシャドウは無気力症患者から抜け出た心の一部と

いう認識だ。
影時間の消滅によって無気力症がなくなったなら、当然シャドウたちもこの世界から消えているはず。
しかし、時の狭間にある扉の奥にはシャドウたちが存在していた。
他の者たちも同じ疑問を持っていたようで、この世界について他の者よりも詳しいメティスにその視線が集中する。
「私も詳しい事は分かりません。でも、恐らくここは心の世界側なんだと思います」
「心の世界側っていうのは？」
「ペルソナを使っているのに知らないんですか？　元々、世界は人々が暮らす現実世界とシャドウたちの存在する心の世界で成り立っているんです」
以前、綾時や湊からも似たような話を聞いていたが、はっきりとは理解出来ていなかったため七歌がメティスに聞き返す。
彼女は七歌たちがそれを知らない事を不思議に思ったようだが、知らないのであればと素直に質問に答えてくれる。
「それらはコインの裏と表。背中合わせだけど混じり合わない形で存在していました。ですが、とある実験によって世界のバランスが崩れ、限定的に心の世界が現実世界を侵食していたのが影時間です」
「という事はシャドウは今も世界の裏側に存在するの？」
「それはそうでしょう。実際、皆さんもペルソナは失っていないじゃないですか。ペルソナはシャドウの変異体。世界から生命が消えない限りシャドウが消える事なんてあり得ませんよ」
説明を受けた七歌たちは愕然としながらも、どこか納得がいったためそれぞれ複雑な表情を浮かべる。
湊からシャドウと無気力症の関係を聞いた際、ペルソナは制御されたシャドウだとも聞いていた。
影時間が消滅してからも自分たちがペルソナを使える以上、確かにシャドウは存在し続けている事になる。
ただ、自分たちが影時間の適性を持っているようなもので、ペルソナも現実世界の適性を持っているから力が残っているのだとばかり

思っていた。
　メティスの説明によってそれは否定された訳だが、そうなると今回のような事態が起きれば再び自分たちが戦いに駆り出される事も可能性としてあり得る事が分かってしまった。
「なんでよ。私たち、平和な世界を取り戻したくて。元の日常に戻りたくて必死に戦って来たんじゃないっ。なのに、またこうやって戦う事になって、これからも何かあれば戦わなきゃ行けないかもしれないってどういう事なのよっ」
　その事実を知ったゆかりが取り乱し、どうして自分たちばかりが貧乏くじを引かされるのだと叫ぶ。
「折角、前を見て生きていこうとしてたっていうのに。いつまで戦えばいいかも分からなかった昔に逆戻りって事でしょ。そんなの……影時間の時と一緒じゃない……」
　言い終わると同時にゆかりが俯いて座り込み、慌てて美鶴が駆け寄っていく。
　元々、ゆかりはシャドウとの戦いだけでなく、ペルソナを呼び出す〝自殺〟を模した行為も恐れて踏み出せずにいた。
　そんな少女が恐怖を押さえ込み、必死に歯を食い縛って戦い抜いてようやく得た平和が、一時のものになる可能性があると言われれば虚無感を覚えてしまうのも無理はない。
　ゆかりほどではないが、最年少としてチームの足を引っ張らぬよう頑張ってきた天田も、先が見えない戦いはつらいと愚痴を漏らす。
「確かにそうですよね。僕が入った時はアルカナシャドウを倒せばいいって方針がありましたけど。理事長が裏切った後は、いつまで戦えばいいのか分からなくてすごい不安でした。本当に、昔に戻ったみたいです」
　別に誰が悪い訳でもないのだろう。だからこそ、彼らは自分たちの不満をどこにぶつけていいか分からずモヤモヤとした気分になる。
　同じ境遇にある仲間たちが何も言えずにいると、そんな彼らをジッと見つめていたメティスが扉に近付きながら話す。
「ここは時の流れがおかしな場所。皆さんが過去を強く意識してしま

うのも無理はありません。そういう物に触れる切っ掛けなんて、ここにはいくつもあるんですから」
それを聞いた仲間たちが意味を問う前にメティスが扉に触れる。
すると、開いた扉の隙間から光が溢れ、全員がその光に飲まれると一瞬の浮遊感に包まれた。
???――ポロニアンモール
強い光が扉から溢れ出し、一瞬の浮遊感に包まれたアイギスが目を開けると、そこはダンジョン最下層ではなく彼女もよく知るショッピングモールになっていた。
「ここは、ポロニアンモール……？」
桐条グループが出資して作られた大型商業施設〝ポロニアンモール〟。
先ほどまでダンジョン内にいたはずなのに、どうしてこんな場所に転移しているのかとメティスを除く全員が目を丸くしている。
細い路地の奥、本来は壁があるはずの背後にはダンジョン奥にあった大きな扉があり、どうやら扉を通じてこちらにやって来たことが分かる。
自分たちが寮に閉じ込められたのは深夜だったが、どうやら今は営業中のようで広場の噴水の水音や人々の話し声が聞こえてくる。
感知能力を持っているためか、人より先にそれに気付いた風花が嬉しそうに笑顔を浮かべた。
「皆さん、人がいます！　ちゃんとお店もやってて、外に出られたみたい！」
「よっしゃー！　とりあえずは寮からの脱出成功って訳だな！」
風花の言葉によって状況を把握した順平も大きくガッツポーズをして、早速行こうぜと他の者たちを誘う。
先ほどまで沈んでいたゆかりと天田も少し元気を取り戻し、そこに七歌も加わって後輩組が路地から広場へ向かおうとする。
だが、今のままでは拙いと気付いた荒垣が駆け出そうとする者たちを止めた。

「おい、待て！　お前ら武器持ってんだぞ！　アイギスのリストバンドに預かって貰ってからにしろ！」
「そういえば、そうだな。ナックルの俺や手ぶらの山岸以外はアウトだろう」
　先輩二人から言われて一同はアイギスに武器を預けてしまって貰う。
　そして、今度こそとばかりに駆け足で広場へと出て行き、他の者たちは苦笑しながらそれを追う。
　風花が先ほど言っていた通り、広場に出れば自分たち以外にも買い物に訪れた客たちの姿が見えた。
　どうしてここに繋がったのかは不明で、謎の扉は残っているが外に出られた事は間違いないらしい。
　その事を喜んでいると巡回から戻ってきた様子の黒沢を発見し、真田は自分から挨拶に向かう。
「黒沢さん、こんにちは」
「ん？　お前たちか。平日の昼間から集まって学校はどうした？」
「大学の入学式はもう少し先なんです。こいつらは春休みで」
「春休み？　何の話をしているんだ。今は六月だろうが」
　真田が入学式や春休みという単語を出すと、途端に黒沢は訝しんだ顔になって今は六月だぞと交番の掲示物のカレンダーを指した。
　言われて視線を向けると、そこには確かにカレンダーも掲示物も現在が〝二〇〇九年六月〟である事を示している。
　黒沢の反応は勿論、それらの掲示物も偽物だとは思えない。
　だが、もしもこれが現実であるならば、自分たちは過去の世界に居る事になる。
　どうしてそんな事になっているのか分からず、真田たちが困惑して黙っていると、黒沢が少しだけ呆れた様子で声をかけてくる。
「お前たちにも色々と事情があるのは分かる。それはお前たちにしか出来ない事だろう。だが、だからと言ってお前たちの学生という立場がなくなる訳じゃない。今もただ遊んでいる訳ではないようだし見逃すが、もしもそれらを何かの口実に使うようなら補導するからな。

忘れるなよ」
事情を知ってくれている黒沢は釘を刺すだけで済まし、話を終えると交番へと帰っていった。
見逃して貰えた事で真田は何とか「ありがとうございます」とだけ返せたが、今も頭の中は何が起きているのかと混乱している真っ最中だ。
「おい、美鶴。今は本当に六月なのか？」
「……どうやらそうらしい。周りの人間の服装を見て見ろ。春先にしては薄着だろう。それに黒沢さんもそんな事で冗談を言うタイプじゃないのはお前も知っているはずだ」
真田は特別課外活動部に入る前から黒沢に世話になっていた事もあり、他の者たちよりも相手の性格もよく知っている。
その性格は雰囲気通りに固いようで、親しい者しかいない場では意外と冗談を言ってくるタイプでもある。
ただ、先ほど真剣に釘を刺してきた事から、六月という発言は冗談ではないようだ。
となると、いよいよ過去にやって来たという話が真実味を帯びてくる訳だが、事情を知っていそうなメティスは仲間から離れて一人で噴水をジッと見ている。
何がそれほど彼女の興味を惹いたのか分からないが、説明を求めてアイギスが声をかけた。
「メティス、ここが過去というのは本当なの？」
「え？　えっと、状況的にそうだと思います。皆さん、補給について考えていたし。それに応えて補給出来る場所に空間が繋がったんだと思いますよ」
言われてみれば確かにここでなら物資の補給は可能だ。
外に出られた事に喜んでいたが、完全に事態を解決した訳ではない以上、物資を補給してから再び探索に向かう必要がある。
また、ここが過去だとすれば、外に出られたという部分も正確ではない。元の世界にある寮に戻ればあちらはまだ時の空回りが続いているはずだから。

色々と飲み込めていない事はあるが、とりあえず物資を補給する目処は立った。
当初の懸念事項が解決した事を今は喜ぼうと頭を切り換えた七歌が場を仕切る。
「よし。じゃあ、一旦解散して好きに見てまわろうか。落ち着いたら集合して補給について話し合うって事でいこ」
「そうだな。事件に巻き込まれた事で、自分たちが思っている以上にストレスを感じていたはずだ。そう長くは時間を取れないが、考えをまとめたり気持ちのリフレッシュくらいは出来るだろう」
七歌と美鶴の言葉に他の者も頷くと、二、三人単位で分かれてモール内の散策に出る。
知っている場所ではあるが、寮に閉じ込められていた事もあってモール内の景色も新鮮に映る。
アイギスもどこかのお店に入ろうかと移動しようとすれば、周りをキョロキョロと見渡しながら一人で移動するメティスの姿が見えた。
自分も最初は見る者全てが新鮮で珍しく見えたものだが、彼女の同じなのだろうかと少しだけ懐かしく思う。
ただ、人間社会での活動経験がほとんどない彼女を一人で行かせるのは危険だ。
今もここは何だろうかと首を傾げながらお店に入ろうとしている。そこは知り合いの女性が営む店だが、影時間の活動における協力者の店だけに迷惑もかけられない。
アイギスはすぐに駆け出すと中に入ろうとするメティスを追いかけた。
「ごめんくださーい。って、ここ何屋さんなんでしょう？　雑貨屋？」
入る際に挨拶をしているメティスに、随分と丁寧な事だと考える。
ただ、やはり知識はあっても経験がないらしく、看板などもちゃんと見ていない事で何の店なのか分かっていないらしい。
そういう部分は学ばせていかなければと、追い付いたアイギスは勝手に彷徨く相手を注意しながら続いて店内に入る。
「メティス、勝手に色々な場所に行ってはダメでしょう！　それにこ

こは雑貨屋じゃ、なくて……」
皿や壺だけでなくタペストリーや民芸品など、普通の店では扱っていない様々な品物が並ぶ骨董品屋。
店内に入ったアイギスはメティスが商品を雑に触っては危険だからと止めようとしたが、店主の女性がいる店内奥のカウンターに視線を向けた時、そこにいる人物の姿をみて思わず言葉を止めてしまった。
あり得ない。そう、本来ならば彼がここにいるはずがない。
黒沢も言っていた。今は六月で、学校のある平日の昼間だと。
しかし、視線の先にはここにいるはずのない彼の姿が確かにあった。
パソコンで何やら作業していた青年は画面から顔をあげ、視線を真っ直ぐこちらに向けてくると二度と聞くことはないと思っていたその声で話しかけてくる。
「……ようこそ、古美術眞宵堂へ」
懐かしいその声を聞いた途端、アイギスは我慢出来なくなり大粒の涙を流しながら彼に駆け寄っていた。
「八雲さんっ」
カウンターに座る彼の許まで駆け寄り、アイギスは縋り付くように抱きしめると声をあげて泣く。
抱きしめた彼の感触は本物で、先ほど聞いた声も、いま鼻腔に届く懐かしい香りも彼がこの場に存在している事を証明してくれている。
姉の突然の反応に困惑している妹を放置し、相手の迷惑を考える余裕もないままアイギスが抱きついて泣いていれば、小さく嘆息したその青年、有里湊は彼女が泣き止むまでその頭を優しく撫で続けていた。

第四百七十六話　過去との出会い

――古美術〝眞宵堂〟

時の狭間にあった扉、その奥に広がるダンジョンの最奥で見つけた巨大な扉にメティスが触れると、一同は二〇〇九年六月のポロニアンモールへとタイムスリップしていた。

メティスによれば仲間たちが補給について気にしていた事で、時の狭間に満ちている力が反応して補給出来る場所に繋がったのだろうとの事だが、どうしてそれで過去へ飛ぶことが出来るのかが分からない。

ここには七歌たち以外の人間も存在し、彼らは記憶の世界の住人ではなく当時の時間軸で生きる本物らしい。

七歌たちにすれば過去だが、過去に来た七歌たちの行動によって強い影響を与えると未来が変わる可能性もある。

過去改変が可能と聞いた時には、これが美鶴の祖父である桐条鴻悦の目指した力なのかとも思ったが、過去だろうと補給が出来るのは事実だしありがたい事だ。

突然こんな事態に巻き込まれたメンバーの精神的な負担を考え、七歌は一定時間好きに回ってリフレッシュしてくるよう全員に伝えた。

「え、あの……姉さんはどうして急に泣いているの？」

そうして、その場で解散したメンバーたちはそれぞれ好きにモール内の店を見てまわっていたのだが、メティスとアイギスが栗原の店に入ると思い掛けない人物との再会を果たし、アイギスがその人物に抱きついて泣き始めた事でメティスは困惑していた。

相手はただの店員。そのはずなのにアイギスは強く抱きついて声をあげて泣いている。

姉を泣かした存在など普通ならば許せないが、メティスも姉が突然相手に抱きついて泣き始めたのを見ている。

今も相手の青年は困ったような顔でアイギスの頭を撫でてあやしており、これで相手に文句など言えるはずがない。

対人コミュニケーションの経験が少ないせいでメティスが何も出

来ずにいれば、アイギスが入店した時から扉が開いたままになっていた事で、何かあったのかと様子を見に七歌たちが現われた。
「栗原さーん、扉開いたままだけ、ど……」
「な、なぜ君がここに……」
七歌と美鶴は声をあげて泣いているアイギスと、その彼女が抱きついている相手を見て言葉を失う。
彼女たちの世界では既にこの世にいない青年、普段ならば店主である栗原がいるレジカウンターにこの世界の有里湊がいた。
ここは過去だ。であれば過去の彼と出会う可能性もあり得ると彼女たちは予想しておくべきだった。
ただ、他の者たちが学校に行っている平日の昼間に、眞宵堂のバイトを辞めていたはずの彼がいるなど誰が予想出来るだろうか。
七歌と共にやってきたゆかりがアイギスと同じように彼に駆け寄って涙を流し、七歌も同じように泣き始めれば、仲間たちがいることを知って残りの者たちまで集まってしまう。
「な、嘘だろっ……」
「……湊君」
順平やラビリスもそこに湊を見て驚き、真田や荒垣は目を見開いて何も言えずにいる。
こうまで同じような態度を取られると流石に慣れるのか、溜息を吐いた青年は動揺しているチドリに声をかけた。
「チドリ、準備中の札を出して扉を閉めてくれ」
「……え、あ、うん。分かった」
改装して広くなったと言っても、流石に十数人がやって来てさらに他の客まで入れられるような広さはない。
アイギスたちの突然の来訪も含め、何かしらの事情があるのだろうと察したらしい青年は、ここにはいない店主の許可も得ずに店を閉める決断を下す。
指示を受けたチドリはバイトの閉店作業と同じように、準備中の札を出して扉を閉めると、外から見えないように入口の薄いカーテンをしめて戻ってきた。

チドリがそういった作業をしている間に、湊もマフラーから椅子を取り出して配り、人数分の飲み物やお茶菓子をカウンターに置いてゆく。
作業している彼の姿を見ているうちに泣いていた者も落ち着いたのか、湊がモール内のトイレで顔を洗ってくるように言えば、彼女たちもそれに従い一度店を出て行く。
後には湊の他に卒業した三年生組とコロマルだけが残される。
すると、泣いていた者たちが帰ってくるまでに少しでも情報を手に入れようと思ったのか、真田が椅子の一つに座ると湊に話しかけた。
「お前、平日の昼間になんでここにいるんだ？」
「俺は元々自由登校を許可されていますから。ちなみに、今日は満月の二日後です」
「急に何を……もしかして、分かるのか？」
急にどうして日付について伝えてきたのか。理由を尋ねようとして、まさか自分たちがどういった存在か分かるのかとの真田の問いに湊は意味ありげに薄い笑みを浮かべるだけで答えない。
昔から相手は不思議な存在だったが、自分たちの置かれた状況まで理解出来ているなら不思議を通り越して異常だろう。
自分たちよりも過去の存在であるはずの彼について、真田たちが底の知れ無さに薄ら寒さを感じていれば、顔を洗いに出ていた者たちが戻ってきた。
湊は紅茶とコーヒーを選ばせると、それぞれのカップに注いでから話をする体勢になる。
すると、最初に彼に抱きついて泣いてしまったアイギスが気まずそうに彼に謝罪した。
「すみません、突然……」
「いや、大丈夫だ」
湊も急に泣かれて困った様子を見せていたが、子どもの相手をする事もあった彼にすればあの程度慣れたものだ。
そのため、本当に気にしていないようで、大丈夫だと言ってからのんきにコーヒーに口をつけている。

アイギスたちからすれば彼は過去の存在なのだが、目の前にいる彼は内に秘めた力の強さが影響しているのかやはり存在感が強く、どうしても自分たちが接してきた当人のように思えてしまう。
けれど、ここで彼に色々と話してしまうと、それが影響して未来が変わってしまうかもしれない。
未来が変わった場合、今の自分たちはどうなってしまうのか。
もしも、過去改変によって存在が上書きされるなら、今の自分たちは消えてしまう事になる。
そんな不安を持っているため、アイギスたちが話を切り出せずにいれば、カップをカウンターの上に置いた湊が口を開いた。
「それにしても、未来人の客を相手にするのは初めてだな」
「未来人って、八雲君どこで気付いてたの？」
「お前たちが来た時点で気配には気付いていた。そして、お前たちが本物であることも分かったから、力の大きさでもっと未来から来た本人なのだろうと推測したんだ」
「感知型の能力を持っているにしてもすごい読みですね。姉さん、この人は一体誰ですか？　あの寮にはいなかったみたいですけど」
普通ならば未来人など物語の中にしか存在しないとして、その存在を信じる以前の問題として扱われる。
それを青年は自ら話題として出し、七歌たちがそういった物だと正確に把握していた。
未来人である事がバレていた事には七歌だけでなく他の者も同様に驚いたが、メティスだけは素直に感心したのかアイギスに湊の事を尋ねる。
これまでも彼女の前で彼の事を話題にしていたが、写真等を見せてはいなかったため、彼が寮にある回復アイテムを用意してくれた人物だと教える。
「この方は百鬼八雲さん。最強のペルソナ使いでわたしたちの大事な仲間。そして、わたしの一番大切な人」
「最強のペルソナ使い？　なら、なんで私たちのいた世界のこの人は姉さんのピンチに駆けつけてくれないんですか？　正直に言って

鈍っている他の人よりずっと頼りになると思うんですけど」
「それは……」
元の時代での事情を知らないメティスの指摘にアイギスは何も言えなくなる。
自分たちよりも彼の方が頼りになるなど、そんな事は他の者たちも分かっている。
だが、それは出来ない。何せあちらの彼はニュクスと共に世界から消えたのだから。
過去の当人がいる前でそんな事を言える訳もなく、聞かれたアイギスが言葉に詰まっていれば、事情を察したらしい湊が小さく笑って彼女に理由を語ってくれる。
「メティス、だったか？　未来の俺が協力しない理由は簡単だ。そっちの俺は既に死んでいる。だから手助けしようにも出来ないんだ」
「……え？　な、なんで？　だって、え、でも、最強のペルソナ使いって姉さんが言ったのに、そんな人がどうして？」
シレッと未来の自分の死を語る青年に、どうしてその内容をそんな軽い調子で口に出来るのかとメティスが動揺する。
湊にとっては本当に大した事ではないらしく、動揺するメティスに気にしなくていいと伝えるくらいだ。
だが、未来の彼に取り残された側である者たちは、未来を予見している青年の態度が納得出来ないようで、メンバーを代表してチドリが少し怒ったように彼に問いかけた。
「貴方、この時から既に自分が死ぬことを知ってたの？」
「まぁ確証はないが予感としてな。ああ、先に言っておくがニュクスとの戦い以降の話はしてもいいが、それより前のことは話すな。こことそちらが完全な地続きかどうか分からない以上、下手に未来の情報を俺に与えて分岐させる必要はない」
自分たちよりも過去の人間であるはずの湊が、どういう訳か自分たち以上に時の流れやアイギス側の事情を理解している。
実際に彼の方が詳しいのは確かだが、何とも不思議な感覚だと思いながら美鶴は率直な疑問を口にした。

「自分が近い未来に死ぬことを予見しておきながら、君は随分と冷静にこちら側の状況も考えてくれるんだな」
「完全な地続きか分からないと言ったでしょう。もし、俺がここで首を刎ねて死ねば、ここはそちらから見て別の過去ということになる。時間というのはそれくらいあやふやなものなんですよ」
湊の説明を聞いても時の流れを概念的に理解していない美鶴では彼の視点に立てない。
しかし、過去を改変することによって未来が変わり、自分たちの存在が上書きされて消えてしまう可能性がないことは分かった。
美鶴がその事に安堵し、淹れて貰った紅茶のカップに手を伸ばすと、隣にいたゆかりが修学旅行前の湊が美鶴と会話した事に驚いて湊に会話していいのかと質問する。
「てか、有里君いま普通に美鶴さんと会話したよね？　え、いいの？」
「それはお前たちが勝手に勘違いしてるだけだ。俺は何も分かっていない状態の馬鹿と話す気がないだけで、自分が戦う理由を理解している状態になっていれば美鶴さんとも普通に会話する」
「フフッ、確かに以前の私は自分から見ても酷い状態だった。あんな状態の私に付き纏われていた君にはさぞ不快な思いをさせたことだろう。過去の私に代わって謝罪させてくれ」
元の世界の湊も戦う理由を偽らなくなったタイミングで美鶴を受け入れていた。
彼は美鶴とゆかりが河川敷で話した事は知らなかったはずなので、こちらの湊も戦う理由を偽っていないと何かしらの理由で察したに違いない。
そういう事ならば普通に会話出来てもおかしくないのかとゆかりが納得したところで、真田が脱線していた話題を戻すぞと口を挿む。
「話を戻そう。有里、俺たちの世界のお前は時限式で開く箱に手紙を入れていたんだ。その内容はただ二つ。一つは〝俺を頼れ〟、そしてもう一つが〝妹を、メティスをよろしく〟だ。これらに心当たりは？」
「ないですね。ただ、そっちの俺も今の俺と同じように未来から来た

先輩たちに会ったんでしょう。だからこそ、過去の俺を頼るように伝え、さらにここで出会ったメティスを信用して良いと判断したってところですか」
箱から出てきた手紙について尋ねると、六月の時点では湊もメティスの存在を知らないと答えた。
彼はアイギスの姉妹機について誰よりも詳しいため、そんな彼が知らないとなると、メティスは今後作られる機体か桐条グループ製ではない可能性が出てきた。
ただ、今後それらを用意する湊がメティスを信用するならば、当面の間は本当に敵対の意思はないと思ってもいいのかもしれない。
他の者たちがそんな事を考えていれば、話題に出されたメティスはどうして自分が湊の妹扱いなのかと首を傾げる。
「私が妹？　あ、でも、姉さんの大切な人ってことは、私にとっては兄さんなのかな。兄さん、兄さん、兄さん……うん、素敵な響き。あの、貴方のことを兄さんって呼ばせてもらってもいいですか？」
「……どうぞ」
年下に慕われる事の多い湊はツッコミをいれず、呼び方などどうでもいいとメティスの要望を受け入れる。
彼を兄と呼ぶ許可を得たメティスは子どもらしい様子で喜んでおり、今までそんな態度一度も見せていなかっただろと相手の反応に順平がツッコミを入れた。
「えー、妹ちゃんってばここ来るまで一緒に戦ったオレたちより、会ったばっかの有里に懐くとか薄情じゃね？」
「まぁ、僕たちもまだ仲間として信用してませんからお互い様でしょう。有里さんの手紙がなきゃ同行も遠慮して貰いたかったですし」
「……なるほど、そちらの伊織は俺を呼び捨てなのか。となれば余計に別の過去という見方が強くなるな」
「ああ、六月ならまだオレっちも有里君呼びだったぜ。ちょっとした理由があって途中から呼び方変えただけでさ」
順平が湊を呼び捨てするようになったのは、湊目線で次の七夕に桔梗組で戦って以降だ。

この程度の情報ならば過去を変える事にはならないはずなので、順平も途中で呼び方を変えただけだと答える。
そんな風に話していれば、荒垣が話が脱線して進まないと告げながらメティスを指して残る謎について挙げる。
「また話が脱線してるぞ。コイツが言ってた過去と繋がった理由とか色々と話すことがあんだろ」
「……それ自体は簡単に予想出来ますよ。時の狭間は集合無意識の空間でしょう。つまり、シャドウやペルソナの持つ時空間に干渉する力を空間自体が持っている。なら、閉じ込められ孤立無援状態になり補給が見込めなくなったことで、全員が食料や治療薬などライフラインの確保を求めたため、その想いが場の力に方向性を持たせて色々と調達出来るここに繋がったんでしょう」
「え、なんで願っただけで繋がるの？　てか、どういう理論で組み立てた予想よそれ」
自分たちを未来人と理解していた時も思ったが、この青年の頭の中はどうなっているんだとゆかりが本気で分からないと目を細める。
対して、兄と呼ぶようになった相手が自分と同じ推測に至ったことに嬉しそうにしながら、メティスは自信満々に改めて世界が繋がった理由と時の狭間について語る。
「ほら、私がした説明と一緒じゃないですか。兄さんの言ってることは多分合ってますよ。あそこは心の世界みたいなものだから、全員が願ったことで想いが大きくなり願いにも反応したんだと思います」
「へー、てか湊君よぉそんなん分かるな。当事者のウチらもよく分かっとらんのに」
「俺は元々時を概念的に理解しているからな。お前たちとは感じ方が違うんだ」
もしも彼のように時を概念的に理解していれば、もっと簡単に今回の事態を解決出来るのだろうか。
そんな事を考えても今から同じような感覚を手に入れる事は出来ないため、彼を羨む気持ちを頭の隅へと追いやりながら、アイギスは今回の騒動について早速彼に助言を求める事にした。

「あの、八雲さんはどうして時の空回りが起きたんだと思いますか？」
「……そうだな。タルタロス消滅の揺り返しで時の狭間が出現した事が切っ掛けではあるだろうが、寮だけが切り離されたってことは原因が寮内に存在すると思った方が良い」
少しだけ考えて話し始める湊だが、やはりここまではメティスの予想と共通している。
タルタロス消滅の揺り返しで時の狭間が出来たのは偶然だったとしても、それがペルソナ使いたちの集まる寮に繋がったのはそうなる原因があったから。
そして、空間的に繋がっただけでなく、そこが外部から切り離されてしまったのは、恐らくその場所にいる人間に理由があるはずだと彼は続ける。
「まぁ、簡単に言えばお前たちが原因ってことだ。時の狭間は近くにいる者の精神の影響を受けるようだし、お前たちが先へ進むことを恐れているか、もしくは過去に囚われているんだろう」
「そんな、だって私はちゃんと前を見てるよ。君がいなくなって哀しかったけど、でも、守ってくれた世界だからそこで強く生きていくんだってっ」
「……それは前しか見てないんだ。起こった事実を受け入れたんじゃない。見るのが嫌で、だから前しか見ないことで目を逸らしている。ほら、お前も過去に囚われているじゃないか」
自分たちが過去に囚われている事が原因だと言われた途端、ゆかりはそんな事はないとどこか必死さを感じさせる瞳を湊に向けながら反論する。
しかし、ちゃんと前を向いて未来を生きようとしていると語った言葉は、逆に全て湊の説明を肯定する事になってしまっていた。
指摘されるまでゆかりは本当に気付いていなかったのだろう。彼の容赦のない言葉に強いショックを受け、しかし、お前がそれを言うのかと我慢していたものが溢れ出し声を荒げてしまう。
「い、一体誰のせいだと思ってるのよ！　あなたが、あなたが何も告げないで一人でニュクスと戦いに行って、それでそのまま……帰ってこ

なかったんじゃない……」
目の前にいる青年は自分たちから見て過去にいる。そんな彼に未来での出来事について文句を言ったところで意味はない。
けれど、湊はそれを受けるのが当然とばかりにゆかりの言葉を黙って聞いてくれていた。
どう考えても理不尽な事を言っていたのはゆかりだというのに、それでも相談に乗ってくれる彼には本当に頭が上がらない。
我慢出来なくなって再びゆかりが俯いて涙を流し始めれば、美鶴がゆかりを介抱している間に、自分が話を進めねばと七歌が騒動を解決する方法を彼に質問した。
「八雲君、原因が私たちにあるならどうすればいいの？　そう簡単に過去への未練をなかったことには出来ないと思うんだけど」
「別に未練自体は大した問題じゃない。というか、俺が語ったのは今回の件が起きた原因であって解決策じゃないからな」
彼の言葉に今度は他の者たちも一緒になって首を傾げる。
普通は原因を探り、それを排除する事で事態を解決するはずだ。
だが、湊にとっては事件の原因を定めることは解決策を考える事と別の問題だという。
彼に言わせれば、仕事をしている途中にパソコンが壊れた場合、原因となったデータやパーツを突き止めて復旧や交換をして解決する事も出来るが、別のパソコンを使うという手段を選んでも仕事を進めるという目的は達成出来るという事らしい。
「メティス、時の狭間にはあとどれだけ扉がある？」
「えっと、沢山です。兄さん」
「そうか。まぁ、それを全部攻略してくるといい。そうすれば、お前たちの未練が形になって現われる。寮を三月三十一日に繋ぎ止めている楔がな」
全てが繋がっているようにしか思えない今回の事件。だが、過去の人間であるはずの湊には別の絵が見えているらしい。
未だそれらを理解出来ない七歌たちは、今は彼に示された解決への道を進むしかないと受け入れ、眞宵堂を後にすると補給物資を買って

から綾時が待っている寮へ帰還するのだった。

第四百七十七話　意外な出口

――巌戸台分寮

ダンジョン最奥にあった扉を通じて二〇〇九年六月のポロニアンモールに移動したメンバーたちは、そこで出会った当時の湊から受け取った助言により、今後の方針を時の狭間に存在する全ての扉を攻略する事に決めた。

七歌たちから見て過去にいる存在であるはずの彼は、持っている力の性質によるものか七歌たちよりも遙かに状況を把握出来ていた。

当事者である未来人よりも未来の事が分かるなど、どこまでインチキな存在なのだと思わなくもないが、彼は助言だけでなく物資の補給についても協力してくれた。

過去にタイムスリップした七歌たちは、ポロニアンモール内であれば好きに移動して買い物やレクリエーションなども楽しむ事が出来る。

だが、建物を出ようとすると途中で見えない壁が存在してそれ以上進む事が出来なかった。

アイギスが湊にその事を報告し、実際に彼にも立ち会って見て貰ったが、現地人である湊や他の客には何の影響がない場所に未来人を通さない壁がある事が確認出来た。

実験として湊に手を引かれても通ることは出来ず、見えない壁を調べている七歌の頭を後ろから掴んで湊が力任せに押しても、本物の壁に押し付けられているかのように七歌が痛みに叫んだだけで通ることは出来なかった。

それにより、あくまで七歌たちは元の時間軸の存在であり、繋がった扉が目的の範囲内でのみ存在を許している不安定な状態にあるのだと結論づけられた。

とある物品の補給が必要だがポロニアンモールでは手に入らない。全員でそんな風に強く願えば再び時の狭間の力が作用して移動出来る範囲が増える可能性はある。

しかし、七歌たちはどんな物でも手に入れられそうな現地協力者と

出会ってしまったため、今後も活動出来るのはポロニアンモール内のみになりそうだ。
また、今後攻略する扉のダンジョン奥にも同じ物があれば、それを使って別の場所や別の時間軸の世界に行けるかもしれないので、その時は報告に来るよう湊にも言われている。
今回の事を考えると別の場所や時間軸に繋がろうと、そちらにも現地協力者としてその世界の彼がいそうな気がするが、七歌たちは報告の約束をして補給物資を買い集めると過去に来た時に潜った扉を使って元の世界に戻ってきた。
「やあ、おかえり。急に扉が現われたから驚いたよ」
扉を潜って元の世界に戻ると同時に綾時の声が聞こえ、七歌が不思議に思ってそちらに視線を向ける。
すると、そこにはキッチンの傍でヤカンからカップにお湯を注いでいる綾時の姿があった。
「え、あれ？　なんで寮に出たの？」
綾時がいる事に驚きつつ周りを見渡せば、扉を潜った先が寮の一階である事に気付く。
入口のすぐ傍にある受け付けカウンターの内側、普段は誰も利用していないそこに扉が出現していた。
どういう事か分からないまま七歌が綾時の方へと向かえば、後からやって来た仲間たちも扉の出口が寮に繋がっている事に驚いていた。
ダンジョンの奥にあったはずの扉がどうして寮のラウンジに繋がっているのか。その事を考えていれば、ただの白湯を美味しそうに飲んでいる綾時が彼からの視点で何があったのかを説明してくる。
「皆がダンジョンの奥に行った後、突然反応が消えた時は驚いたよ。まぁ、忽然と消えた感じだったから、どこかへ移動したんだろうなと思ったけど。落ち着くためにお湯を沸かして白湯でも飲もうと思ったら、光と共に突然扉が現われて皆が帰ってきて余計に驚かされるとは思わなかったな」
「そうなんだ。何分くらい消えてたか分かる？」
「こっちだと二十分も経ってないと思うよ。多分、君たちが移動した

先とでは時間の流れが違うんじゃないかな？」
にっこりと穏やかな笑みを浮かべ、綾時は会話が終わるとただの白湯を再び飲んでいる。
仲間が突然消えてもパニックにならず、落ち着くために温かい飲み物を用意する綾時の冷静さに他の者たちは感心する。
もしも、自分が一人だけ寮に残った状態で仲間が消えれば、他の者たちだけ元の世界に戻ってしまったのではと不安に押し潰されるに違いない。
デスとしての力をほとんど失っても、彼もある意味では湊側だった存在だ。
こういった状況ではその精神の在り方も含めて誰よりも頼りになる事を再確認させられ、自分たちもしっかりしないといけないと気合いを入れ直す。
そうして、全員が扉の前から綾時のいるキッチンの方へと移動すると、待たせてしまった謝罪も込めてお土産をテーブルの上に並べる。
「綾時君、これお土産。なんと我々は補給経路を見つけたのです！」
「聞いたら驚くぜ？　これ、どこで手に入れてきたと思う？」
七歌はインスタントの紅茶とコーヒーを綾時に渡し、さらにお茶菓子になる物もいくつも並べてゆく。
それを見せながら順平が悪戯小僧の顔でクイズを出し、絶対に当てられないはずだと心の中で悪い笑みを浮かべる。
問題を出された綾時は白湯を飲み干したカップに貰ったばかりのティーバッグを入れ、それにヤカンのお湯を注ぎながら考えると、お湯を注ぎ終わったところで回答を口にした。
「過去の世界のポロニアンモールかな」
「はぁっ!?　え、なんでわかるんだよ!?」
まさか一発で正解を答えるとは思っていなかった順平は目を見開いて驚き、他の者たちも順平ほどオーバーなリアクションは見せないが同じように驚く。
もしや、お土産にヒントになる情報でもあったのかとゆかりや風花が手に取って見てみるが、並べたお茶菓子はどれもまだ賞味期限内

だ。
それらを元々入れていたドラッグストアのレジ袋は大きなヒントかもしれないが、だからといって過去の世界などという発想は普通出てこないだろう。
ならば、本当に偶然当たったという可能性を除き、彼が正解を当てられた理由として考えられるのは一つしかない。
カップからティーバッグを取り出し、安物のインスタントでしかない紅茶を優雅に飲む綾時にアイギスが問いかける。
「綾時さん、あなたはわたしたちが過去に行くと知っていたんですか？」
「うん。確信はなかったけど、僕たちの知っている湊が同じような事を経験していた事は知っていたよ。六月の時点では僕はまだ彼の中にいたからね」
綾時の正体が湊に封印されていたデスだった事は新加入したメティスを除き全員が知っている。
彼が湊に封印されたのは十年前、多数の死傷者を出したポートアイランドインパクトでの事。
それから時が経ち、アルカナシャドウたちが復活して、全てのアルカナシャドウが倒されて力を取り戻すまで綾時は湊の中にいた。
だからこそ、彼の中にいた当時の事は覚えていたし、こうやって実際に仲間たちが過去と行き来した事であの時の未来人が自分たちだという事も確信が持てた。
ずっと何も知らないように振る舞っていたのは。過去の湊が言っていたように両者の世界が地続きかどうか分からなかったためだ。
もし、綾時が昔湊にこんな事があったんだと未来人との邂逅エピソードを伝えていれば、他の者たちは補給経路の確保より過去の湊との再会を望んでしまっていたかもしれない。
そうなると、過去と繋がる扉はポロニアンモールに出現せず、桔梗組に引き取られたばかりの湊のいる時代に繋がる可能性もあり得た。
未来の事を少しだけ知っているからこそ、そこに辿り着くため話せる事や行動に色々と制限があった。綾時からそう聞かされれば一応

の納得は見せつつも、繋がった今ならば話せる事も増えただろうと今後のために美鶴が質問する。
「では、望月は我々があちらで湊とどういった話をしていたのかも覚えているのか？」
「いいや。細かな部分は知らないんだ。彼は内側にいる者たちに外の情報を与えないようロックをかける事が出来たからね」
湊はファルロスだけでなく、複数の自我持ちのペルソナをその身に宿していた。
力を取り戻してきたファルロスや他の自我持ちたちは、ペルソナだというのに湊が召喚せずとも勝手に外に出ることが可能だった。
そこで湊が開発したのが名切りの持つ封印術を利用したロック機構。
勝手に外に出てくる事を防ぐだけでなく、本来なら湊の五感を通じて得る事が出来る外の情報を一切遮断して、ファルロスとペルソナたちを湊という器に本当の意味で閉じ込めておく事が出来た。
詳しく知らない者たちに、少しだけ本人から話を聞いていたチドリが説明すれば、どうして当時の湊がロック機構を使って未来人とのやり取りを隠したのか綾時なりの推測を話す。
「湊は僕が人として生きられる準備をしてくれていた。つまり、未来の君たちと僕が一緒にいる可能性も考えていたんだと思う。そこで僕が不必要な分まで未来の情報を持たないよう未来の君たちとのやり取りは基本的に見せて貰えなかったんだ」
もし、綾時が未来人とのやり取りを全て知っていれば、湊の死や時の空回りについて聞いていた大人たちのように寮に閉じ込められず、七歌たちが事件を解決して無事に戻ってくる事を祈る立場になっていたかもしれない。
ブランクが軽微な綾時はコロマルに次ぐ戦力。それが失われるとなると相当に厳しい戦闘を強いられる事になっていたはずだ。
先の事を考えてくれていた湊の行動に感謝しつつ、覚えている範囲でこんな事はなかったのかと七歌が当時の事について尋ねた。
「じゃあ、当時の綾時君と未来の綾時君がばったりするイベントとか

はなかったの？」
「なかったよ。というより、そもそも僕は過去には行けないんだ」
未来の自分と過去の自分がばったり出くわすというのは、タイムスリップが登場する物語では定番のイベントだったりする。
当時の七歌たちは普通に学校にいる時間だったので、残念な事に七歌たちが過去の自分と出会う事はない。
だが、湊の中にいながらファルロスとして外に出られた綾時ならば、見た目は違っていてもばったり出会う事が出来たはずだ。
実際に未来と過去の自分が出会ったらどんな反応になるのか、ちょっとした好奇心で七歌が尋ねるも、綾時はここにいる自分は過去に行けないんだと少しだけ残念そうな表情で話す。
すると、七歌と綾時の話を傍で聞いていた真田が、入口の傍にある過去への扉が残っている事を確認し、あれを通れば誰でも過去のポロニアンモールに行けるんじゃないのかと尋ねた。
「どういう意味だ？　俺たちが行き来した扉を使えば、お前もあちら側の世界に行けるんじゃないのか？」
「可能不可能の話で言えば可能だと思う。けど、思い出して欲しい。僕は力を失ったと言っても宣告者であるデスなんだ。ニュクスは宣告者の出現によって降臨する。なら、不完全体だろうと僕があちらに行けばどうなるか分からない。だから、僕は影時間の存在する過去に行くことは出来ないんだ」
人の肉体を得ても、人の心を持っていても、綾時がニュクスの子でありシャドウの王たる宣告者デスという事実は変わらない。
もしも、不完全体だろうとデスが封印から解かれた状態で存在するとニュクスが感知すれば、七歌たちが経験した決戦が前倒しで起こるかもしれない。
あの決戦はそこに全てを懸けた湊が根回しをしていた事で被害が抑えられていたのだ。
あちら側の七歌らを含め誰も準備が出来ていない状態でニュクスが降臨すれば、湊がどれだけ足掻こうと世界の滅びは防げない。
誰かが別の選択肢を選ぶ事で世界が分岐するのなら、既に滅びを回

避した自分たちはこのまま生きていけるのだろう。
だが、過去に行ってみたいからと軽率な行動を取ったことで滅びてしまう世界線を生み出せば、元の世界に戻ってもその罪悪感によって今まで通りに笑うことなど出来なくなる。
自分のためにも、あちら側の世界のためにも、滅びの訪れを早めてしまう可能性があるなら行くことは出来ない。
「そっか。んじゃ、必要なもんがあれば代わりに買ってくっからよ。遠慮なく言えよな！」
「場所はポロニアンモールだけど、あっちの有里君が物資の調達を手伝ってくれるから、モール内で手に入らない物でも言ってみてね」
「うん、ありがとう。その時は遠慮なく頼らせてもらうよ」
順平と風花の申し出に綾時も嬉しそうに笑って礼を言う。
普段は見せない真剣な様子で話していた綾時に、寮から出られないのは辛いだろうからと他の者たちも可能な限りサポートする事を約束した。
そうして、過去と行き来可能になった事で補給の心配が消え、過去に繋がった扉やあちらの湊から受けたアドバイスについて一度話し合うため、一同は荷物を部屋に置いてくると休憩がてら軽食を採る事にする。
あまり時間をかけられないからと用意したのはサンドウィッチだけだが、戦闘で疲れていた事もあって探索に出ていた者たちの食事のペースは中々速い。
だが、満腹になって寝られても困るため、ある程度お腹が膨れたところで食事をしながら聞いてくれと美鶴が主導してここまでに分かった情報を共有する。
「さて、事態が進展したと言っても現状分かった事はそう多くない。あちらの湊によれば我々がここから脱出するには時の狭間にある全ての扉を攻略する必要があるそうだ」
「有里君の話的に、全ての扉を攻略しても即解決って訳じゃないみたいですよね」
「ああ。攻略すれば我々をここに縛り付けている楔が顕現するといっ

たような事を言っていたな」
少々うんざりした表情で呟くゆかりに美鶴も頷いて返す。
時の狭間にある扉のダンジョンを攻略する必要があるが、それはタルタロスの頂上を目指す必要があったのと同じで、あくまで目的達成のためにこなす必要がある前提条件。
本当に重要なのはその先、全てのダンジョンを攻略した時に現われるという〝楔〟とやらへの対処だ。
七歌たちではそれがどんな物か分からないが、湊と同じように時の狭間の性質についても分かっていたメティスなら知っている事があるかもしれない。
そう考えたアイギスは、未だ完全には信頼関係を築けていない他の者に気を遣って、姉という立場から彼女に問いかけた。
「メティス、八雲さんが言っていた楔がどんな物か分かりますか？」
「それ自体は時の狭間に満ちる力の結晶だと思います。皆さんの思いがプラスに働いて補給のため過去への道が繋がったとすれば、楔の性質は皆さんを過去に繋ぎ止めようとするマイナス。実際、ここまでの事が起きている事からかなり厄介な存在だと思います」
湊も明言していなかったように、メティスもそれがどんな姿形をしたものかは分かっていない。
メティスは後から合流した立場であり、彼女の意思は時の空回りが起きる際には使われていない。
ただ、人の想いが空間に満ちるエネルギーに作用する状況にあって、それ自体は時の狭間に満ちているエネルギーから生み出された存在なのは分かっていた。
この場にいる全員が持つ共通の想いから生まれたのが楔だとすれば、想いが強い分かなり厄介な物だと思われる。
ダンジョンを攻略した先にそんな物が待っているなど考えるだけで憂鬱になりそうだが、食事を続けている途中でラビリスがそういえばとある疑問を口にした。
「そういや、なんでダンジョンにあった扉が寮に繋がったん？」
「皆さんの願望が理由だと思います。扉がラウンジに通じていれば楽

なのにといった感じの思いが反映されたんじゃないかと」
もう一人の姉の疑問にメティスがすぐに答える。
補給のために過去へと扉が繋がったように、どうせなら寮内に過去への扉があれば楽だという皆の心の奥底にある想いが反映され扉が移動した。
確かに食糧やら日常消耗品を買いに行くためだけにダンジョンに入り、そこから転送装置を使って最奥に行くなど手間でしかない。
そう考えるとメティスの説明はあり得そうなのだが、そんな簡単に行くのかと半信半疑な荒垣は首を傾げる。
「んな簡単に行き先が変更出来るのかよ？」
「今のここは異界化しています。地下に広がっている時の狭間ですが、厳密に言えば上に建っている寮も時の狭間に含まれています。そのため、過去と行き来するゲートの設置座標の更新も、皆さんの意思を反映する形でなら可能だったんだと思われます」
荒垣の考えている通り、普通ならばそんな事は起こらない。
だが、今は自分たちがいる寮全体が時の狭間の一部として組み込まれてしまっている。
そんな状態だからこそ、扉の創造ではなく移動程度の事ならば、全員の意思が反映される形で可能になっていた。
それほど柔軟な思考という訳じゃない荒垣にすれば理解しづらいことだが、異界化した寮内でならそういう事も起こり得る。そう自分を納得させる事で、そういう物なのだと彼もとりあえずは呑み込むことが出来た。
「話を戻すが今後の予定についてだ。やる事は決まった。だが、それは二、三日でこなせるような事でもない。過去への扉を使って物資を補給しながら、それなりの日数をかけてやる必要があるだろう」
「ま、これを食べたらとりあえず今日は解散かな。明日も探索には出るけど、新しい扉に挑むかブランクの解消に攻略済みのダンジョンで慣らすかは明日の体調次第で判断。お風呂は沸かしておくけど、まぁ入るタイミングとかはご自由にって事で」
食べている途中だが子どもで体力の少ない天田などは既に眠そう

にしている。
　他の者たちもそれぞれ疲労が顔に出ている事もあり、難しい話をしてもちゃんと覚えていられるか分からない。
　そう判断した七歌は美鶴に早めに解散すべきだと視線で伝え、明日も探索に出るつもりでいるようにとだけ全員に連絡した。
　疲れている者たちもその部分はちゃんと聞こえていたようで、七歌が解散だと告げると使った食器を食洗機に片付けると自室へと戻ってゆく。
　それをお疲れ様と見送った七歌と美鶴は、自分たちも会議に参加すると残ってくれたメンバーと意見を交え、大まかなスケジュールを組むと会議を早めに切り上げる。
　そのまま風呂へと直行する者、仮眠を取ってから風呂に入るという者、起きてからシャワーで済ますという者など色々いるが、探索に出ていない綾時を除き、やはり全員がかなり疲れていたようでその日は皆早めに就寝するのだった。

第四百七十八話　罪の路コキュトス

――島根県・某市

喪服に身を包んだ大人たちが椅子に座る七歌たちに一礼して焼香をあげてゆく。

彼らの前には三つの棺が横たわり、その正面には色とりどりの花に囲まれた三人の親子の写真が飾られている。

穏やかな笑みを浮かべる百鬼雅、慈愛に満ちた笑みを浮かべる百鬼菖蒲、そんな両親と共に天真爛漫な笑顔を見せる百鬼八雲。

本来結ばれるはずのなかった鬼と龍の一族が再び一つになり、古の盟約から外れた愛子が生まれながらも、彼らは一族の憎しみに囚われる事なく故郷から遠く離れた地で幸せに暮らしているはずだった。

そんな家族の幸せな時間が奪われたのは突然の事だった。

桐条グループの行なった実験により起きた爆発事故。彼らはそれに巻き込まれ、横転した車の中で焼け死んだ。

幼い七歌は両親に聞いてもそれがどういう事だか分からなかった。

ただ、もう彼らには会えない。遠い天国という場所に行ってしまったのだと言われ、大好きだった百鬼家の者たちにもう会えない事を悲しく思った。

「ごめんなさいっ、ごめんなさいっ、菖蒲さん、八雲君、雅さんっ」

今回の集まりは天国に行った彼らに皆でお別れを言うためのものだと祖父に聞いた。

けれど、お別れを言いに来た大人たちの殆どがどこか安心した様子で棺を見つめ、帰っていく時には清々しさすら感じるような表情を見せていた事が七歌は気になった。

もう八雲たちには会えないのに、どうしてそんな嬉しそうな顔が出来るのかと、大人たち一人一人に聞いて回りたいほど強く疑問に思った。

だが、ようやく自分と同じように彼らとのお別れを悲しんでくれる人がやってきた。

相手は桐条英恵、七歌の知り合いである桐条美鶴の母親だ。

彼女は三人の棺に向かって涙を流しながら謝っている。
どうしてあの人が謝る必要があるのだろうかと気になり、七歌は小さな声で隣に座る母親に尋ねた。
「おかあさん、どうしておばさんがあやまってるの？」
「事故の責任を感じてしまっているのよ。英恵さんが事故を起こした訳ではないのだけど。知り合いのした事だからどうしてもね」
棺に向かって泣いて謝っている英恵を、顔に包帯を巻いた桐条武治が支えて離れてゆく。
本来ならば桐条はこの葬式に参加している暇はない立場らしいが、今の英恵を一人には出来ないからと付き添いとして同行したのだという。
幼い七歌にはよく分からないが、今は東京の方で大変な事があって怪我をしているのに桐条はその対処をしなければならないらしい。
「八雲くんたちはやさしいから、いそがしいならおしごとがんばってっていうよ？」
「そうね。でも、あんなに悲しんでいる英恵さんを一人には出来ないでしょ？　自分の奥さんだから桐条さんも一緒にいてあげたいのよ」
八雲たちなら自分たちの事はいいからと遠慮するに違いない。
母も確かに彼ならそう言うだろうと同じように思っているようだが、八雲たちのためではなく英恵のために一緒にいると説明してくれた。
何度も何度も謝って、本当に申し訳なさそうに頭を下げていた姿がとても印象に残っている。
七歌はまだまだ子どもだが、龍の一族に生まれた影響か人を観察する力に長けていた。
そんな彼女の目から見て、今日来た大人たちの中で本当に八雲たちの事を思って涙を流してくれていたのは、英恵しかいなかったのではないだろうかと思う。
自分や母である九頭龍和奏は百鬼一家の死を悲しんでいるし、今も彼らとの思い出が蘇ってきて寂しさを感じている。
けれど、父親である九頭龍恭介と祖父である九頭龍太蔵は、八雲た

ちの死に悲しみだけでなく安堵している気配があった。
どうして自分の息子や弟一家の死に対してそんな感情を抱くのか。
九頭龍家に嫁いできた母は自分と同じように悲しんでいるのに、血の繋がっている父たちが彼らとの別れを歓迎している態度に七歌は怒りよりも嫌悪感を覚えた。
九頭龍家と百鬼家は元々屋敷が隣り合っているため、七歌は従弟である八雲に会いに遊びに行くことがあった。
その際、八雲を誘って家の前の道路で遊んだりもしていたのだが、偶然出会った祖父の八雲を見る瞳はいつも冷たかった。
対して、父の八雲を見る目には冷たさではなく、怯えや恐怖の感情が込められていたと記憶している。
八雲の両親に対してはそんな目を向けていなかったのに、大の男が二人揃って幼い八雲を警戒していたのは間違いない。
彼は龍と鬼の混血。七歌と同じ龍の一族の人間と、彼の生まれである鬼の一族両方の血が流れている。
どうしてそれを父や祖父が恐れているのかは分からなかったが、もう二度と八雲たちに会えないというのに、それを喜ぶような態度を見せるのは間違っていると七歌は感じた。
「おとうさんたち、どうしてうれしそうにしてるの？」
「急にどうしたんだい？　お父さんもお爺ちゃんも七歌と一緒で悲しいんだよ。誰も嬉しそうにしている人なんていないよ？」
「うそだよ。七歌しってるもん。おとうさんもおじいちゃんも八雲くんをきらってた。おじいちゃん、七歌とはお話しても八雲くんのことなんてずっと見てなかったもん」
何故お別れの会で嬉しそうにしているのかと七歌は父と祖父を責める。
二人だけじゃない。ここに集まっている古い家柄の人間たちの中には、父らと同じように八雲たちの死を喜んでいる者たちが大勢いる。
そんな事が許されるものか。あんなに優しかった人たちの死を喜ぶなど、二度と会えない事に安心するなど絶対に認められない。

幼いながらも七歌が真剣に相手に怒りをぶつければ、大人たちはそんな事はないよと取り繕った表情で否定してきた。
それをさらに七歌が嘘だと糾弾しようとすれば、隣にいた母にやめなさいと止められる。
自分は間違った事は言っていない。間違っているのは他の大人たちだ。
だが、子どもである七歌では大人たちに強く止められればそれ以上は何も言うことが出来ない。
自分と同じように悲しんでいたはずの母も間違った者たちの味方をするのかと、七歌が不満を募らせていれば式は進み棺の移動の時間となった。
皆で棺を表に停まっている霊柩車へと運び入れるため、男性たちが中心となって参列者たちで棺を運ぶ。
父、母、子どもの順に棺が運ばれるため、最初に大人たちは八雲の父が眠っている棺へと集まった。
小さな七歌はそこに参加出来ないため、皆がそちらに集まっている間に改めて八雲に挨拶しようと彼の眠る棺へと近付く。
棺の上部には顔を見るための小さな窓があり、七歌は閉じていたその戸を開いて窓越しに彼の顔を見ようとする。
「……あれ？　八雲くんいないよ？」
しかし、そこで七歌は初めてその棺が空である事に気付く。
彼の両親の棺は遺体の損傷が激しいからと、顔を見ることが出来なくなっていた。
八雲も同じ事故で亡くなったため、同じように窓がないタイプの棺になるはずだったが、彼の棺は窓があって棺の中を見ることが出来た。
そして、七歌が見た棺の中は完全に空。焼けて遺体が小さくなったというレベルではなく、本当に何も入っていないただの空箱なのだ。
他の者たちも同じ者を見ていたはずなのに、どうしてだか八雲がいない事に気付いていない。
七歌は母の許へと駆け寄ると棺の中に誰もいないことを伝える。

「おかあさん、八雲くんいないよ？」
「ええ。天国に行ったからね。もう会えないのよ」
「ちがうよ。あのハコの中に八雲くんがいないの」
「八雲君たちはね。事故で身体が燃えちゃったの。だから、とても小さくなっているのよ」
焼死体など幼い子どもが見ていいものではないが、母は怒らず七歌を諭すように八雲たちがどんな状態かを説明する。
しかし、七歌にすればそれは的外れな話であり、相手は自分の言っている事を理解していない事が分かった。
その後、火葬場で遺骨を骨壺に移す時にもやはり八雲の物だけは空で、他の者たちは一切それを気にせずにいた。
どう見ても異常な光景だが、だからこそ、七歌は自分以外は八雲がいない事に気付けていないのだと理解する。
死んだはずの八雲の遺体はなく、遺体がないことを誰も不思議に思わない。
そんな異常事態を目の当たりにした事で、七歌は八雲の生存を確信する。
あの八雲がそんな簡単に死ぬはずがない。やっぱり彼はすごいのだと、彼の生存を感覚的に察した七歌はこの日から彼との再会を楽しみに過し、程なくして毎夜零時に現われる不思議な時間の存在に気付くことになる。

――罪の路コキュトス
最初のダンジョン最奥で見つけた扉を通じて過去のポロニアンモールと繋がり、そちらで出会った湊のアドバイスを受けた七歌たちは二つ目のダンジョン攻略に乗り出した。
ダンジョンの内装や出てくるシャドウに違いはあれど、二つ目のダンジョンも地下へと進んでゆくという構造は同じで、最奥にはまた巨大な扉が存在した。
一つ目のダンジョンでは補給経路を求めていた事で過去のポロニアンモールに繋がったが、今の七歌たちは早くこの事件を解決したい

としか思っていない。
もしかすると、心の奥底では何か共通した願いや想いがあるかもしれないものの、一つ目のダンジョンの時ほど心は一致していないはずだ。
故に、今度はどこに繋がるか不明だった訳だが、メティスが扉に触れて光に包まれると見えた過去の映像だった。
一つ目のダンジョンでは過去のポロニアンモールに繋がっていたというのに、どうして今回は過去の映像が見えただけだったのか。
何より、どうして見えたのが七歌の過去だったのかが分からない。
映像が終わり視界が元に戻ると、先ほどまであった巨大な扉が消えていた事に気付いてメティスが声をあげた。
「あ、扉が消えています。どうやら過去に通じた時と違って、過去の映像が見えただけの時は扉は役目を終えて消えてしまうようですね」
「メティス、なんで今度は映像が見えただけなんか知っとる？」
「いえ、私もこの世界の事を全て知っている訳ではないので、どうして今回は映像だけだったのかは分からないです。でも、これも皆さんの心の影響を受けたものだと思います」
どうして一つ目の扉と違って今回は映像が見えただけだったのか。ラビリスがメティスに聞いてみるも、彼女もこの世界の不思議な現象については分からないらしい。
ただ、一つ目の扉が過去に繋がったのが七歌たちの心の影響ならば、今回映像しか見えなかったのも同じように個人か全体の心の影響を受けているはず。
メティスがそれを伝えると一同は心当たりはないかと互いに見合った。
もっとも、そんな物があれば扉の性質を逆手に取って扉の構造を変化させ、自分の好きな時間や場所に移動してみせるだろう。
それほど器用な事が出来る人間など今の仲間の中にはいない。
となると、先ほどの映像に出てきた少女が今回扉に影響を与えた存在なのではと睨み。先ほどの映像は本物なのかと荒垣が現代の本人に尋ねた。

「さっきのは本当に九頭龍の過去なのか？」
「そうですね。実際にあった出来事っていうか、十年前の事故で八雲君のご両親が亡くなった数日後の話です」
十年前の事故、通称〝ポートアイランドインパクト〟に巻き込まれて死んだ百鬼家の葬式。
当時の映像としては本物だと七歌が認めれば、話を聞いていたチドリが呆れた様子で葬式の参列者たちについて苦言を呈する。
「……八雲の一族が恐れられていたとは聞いていたけど、あれだけいた葬式の参列者の殆どが喜んでいるなんて異常な光景ね」
「いやぁ、面目ない。喪主であるお父さんとお爺ちゃんがその筆頭だからね。あれを見るとこの世界に救う価値なんてないと思っちゃうよね」
百鬼家は湊とその家族しかおらず、血縁関係のあった七歌の父が喪主を務めた。
葬式の参列者はほとんどが九頭龍家と繋がりのある旧家や名家の人間ばかりで、彼らは当然のように名切りについても知っていた。
戦後になって戦う機会がなくなり、鬼は人になったと言われていても、時の権力者すら手を出せなかったと言われる人殺しの一族だ。
歴史ある家に生まれたからこそジンクスや言い伝えなどを重んじる旧家や名家の人間にすれば、そんな人間兵器のような者たちなど消えてくれた方が良かったのだろう。
その筆頭が血の繋がりのあった父と祖父だった七歌にすれば、守って貰った恩を忘れた恥知らずな自分の一族こそ滅べばいいのにと毒を吐かずにはいられない。
ただ、参列者たちの非常識な振る舞いは別として、今回見えた過去の映像がどうして七歌の記憶だったのかという疑問がある。
扉に触れたのは今回もメティスで、七歌の立っている場所は別に扉に近い訳でもない。
順平や真田など男子の方が扉に近い場所に立っているので、扉との距離はあまり関係ないのだろう。
素直な疑問としてゆかりがそれを口にする。

「でも、なんで七歌の過去が見えたんだろ。別に扉に触れた訳でもないしさ」
「私に聞かれても分からないけど、この世界自体が過去に関係してるっぽいしね。今回が私の記憶だったのは偶然で、次のダンジョンではまた他の人の過去が見えるかもしれないよ」
今回は七歌の過去が見えたが、次のダンジョンでは別の人間の過去が見えるかもしれない。
そう考えれば、重要なのは〝誰の過去か〟ではなく〝何故過去なのか〟という部分になる。
アドバイスをくれた過去の湊によれば、七歌たちは寮ごと過去に囚われているらしい。
その想いが時の狭間に満ちている力に作用し、過去に繋がったり過去の映像が見えたりしているとすれば、湊が言っていた事は本当だったと信じるところだ。
もっとも、過去に繋がる扉も、過去の映像が見えた扉も、今のところはまだ一つずつしか見つけていない。
今後さらにダンジョンをクリアしていけば、七歌の予想が合っているかの答え合わせも出来るようになる。
美鶴は七歌の意見に同意して今後確かめる事にしながら、映像の内容が湊たちの葬式だったことには意味があるのだろうかと首を傾げた。
「確かにそうだな。だが、どうして見えたのが八雲のご両親の葬式だったのか。そちらも謎だ」
「うーん。個人的な予想で言えば適性の目覚めたのがあの時期だったと思います。八雲君が生きてるって確信して、皆の認識に作用する何かの存在を感じ取って、そこから夜中に偶然起きたタイミングで影時間を認識したって感じです」
「なるほど……なら、次に誰かの過去が見えたときにそちらも答え合わせをするとしよう」
何故見えたのが湊たちの葬式だったのか。それに対する七歌の推測は非常にあり得そうなものだった。

今はそれが正しいかどうか判断出来る材料がないため、次のダンジョンで答え合わせをするぞと声をかけて美鶴は転送装置に向かって歩き出す。
途中で休憩を挿んでいてもここまで戦闘を続けてきたため、七歌たちは全員がそこそこに疲れていた。
見えた過去の映像やら次のダンジョンについてやら、話し合うことはあるが寮に戻って休んでからでも遅くはない。
ダンジョンをまた一つ攻略した丁度良いタイミングという事もあり、美鶴と共に転送装置に向かった仲間たちは寮へ帰還するのだった。

第四百七十九話　過去に繋がる条件

――力の路カイーナ

幼児用の入院着のような物を身に付けた幼い湊が、同じように幼い姿のチドリを抱きしめる。

優しい表情で抱きしめながら彼が耳元で呟けば、頬を染めつつも満更でもない表情をしていたチドリがペルソナを呼び出した。

現われたのは羊の頭骨を被った女性型ペルソナのメーディア。

湊に抱擁されたままのチドリは、頭上に現われてゆっくりと近付いてきたメーディアに微笑みかける。

そこで映像が途切れて眩い光に包まれると、一同の意識は元の世界に戻り目の前にあった扉はまたしても消えていた。

二つ目のダンジョンを攻略してから休日を挿み、数日かけて三つ目のダンジョン最奥にやってきた一同は、二つ目のダンジョンに続いてメンバーの過去が見えた事について語り合う。

「前回は七歌、今回は吉野の過去か。八雲と君の服装。そして、傍にストレガのメンバーだった少女らしき子どもがいた事から推測するに、あれはエルゴ研で被験体になっていた時の事で間違いないか？」

メンバーの中でお互いの過去の姿を知っているのは美鶴と七歌、真田と荒垣くらいなものだ。

故に、組織のリーダーとして美鶴が代表して本人に確認を取るが、そこには自分の祖父や父が進めた非道な研究に触れる内容だからという責任感もある。

ここにいるメンバーはメティスを除き、全員が桐条の暗部について少しは知っている。

具体的にどんな事が行なわれていたかは知らないが、百人近い子どもを集めて無理矢理にペルソナに覚醒させて研究し、そのほとんどが実験の途中で死んだと聞いている。

映像の中にいたチドリやマリアは湊と一緒にいて楽しそうにしていた。

だが、その傍にいた他の子どもたちは訓練用の武器を持ち、痣が残

るような怪我をしている者もいた。
確かにチドリや湊だけに注目すれば幼い頃の楽しい思い出に見えるかもしれない。
けれど、周りにいた同じ年頃の子どもたちの姿を見て、あれが真っ当な環境だと思う者など仲間の中にはいない。
当事者にとっては思い出したくもない心の傷になっていてもおかしくないため、恨まれるなら同じ桐条である自分がと考えて美鶴は尋ねた。
そんな彼女の気遣いと覚悟などお見通しだったのか、普段と変わらぬやる気の感じられない表情にやや呆れの色を含ませてチドリが口を開いた。
「……エルゴ研時代の映像であってる。さっきのは再会した八雲が有里湊と名乗り始めた数日後くらいの時期よ。私たちの前に再び姿を現わした八雲が研究員を脅したから、それから脱走する日までは被験体の扱いも人並みになったの。私は脱走する日も八雲に守られていたから、他の被験体と違って当時にトラウマは持ってないわ」
被験体だった時の事はチドリにとっても別に楽しい思い出という訳ではない。
ただ、八雲と出会って、有里湊として再会して、それから現在に至るまでは大切な思い出として心に残っている。
研究の途中で命を落とした者たちのように、脱走してから再会出来なかった者たちのように、そしてストレガたちのようにチドリ自身がなっている未来もあっただろう。
チドリだって分かっている。最後の決戦で戦ったストレガのメンバーだったメノウにも伝えたように、湊と最初に出会った被験体が自分だったのは単なる偶然だと。
「……始まりの少年、エヴィデンス。八雲は最初そう呼ばれていたって聞いてる。ムーンライトブリッジで回収されて、それから半年も目を覚まさないから、途中で私たちみたいな素養がある同年代の子どもが集められて代替品として研究が進められたの」
チドリたち被験体が集められたのは、湊が桐条グループの観測史上

初の自然ペルソナ獲得者だったからだ。
影時間の適性は彼以外にも自然に得る者がいたのだが、ペルソナに関してはアイギスたち対シャドウ兵器が人工的に与えられて発現させただけ。
無論、そちらも成果としては十分にすごいのだ。
ラビリスと同型の五式シリーズで対シャドウ兵器のペルソナ発現のメカニズムを研究し、それを活かして起動してすぐのアイギスがペルソナを得ているため、桐条グループは人格モデルを用いたタイプならば対シャドウ兵器にペルソナを発現させるノウハウを確立していると言える。
ただ、湊を回収して研究所送りにしておきながら、桐条が彼の血筋や過去について伏せていた事でエルゴ研は誤った方向に研究の舵を切ってしまう。
影時間の適性を持つ同年代の子どもならば、事故から目覚めぬ彼と同じようにペルソナを手に入れて操れるはず、そんな間違った推測の許に子どもたちは集められ研究は進んだのだ。
被験体だったチドリ本人から彼女達が集められた理由を聞き、あまり詳しくは知らなかった順平は当時の事情を理解していく内にある事実に気付いてしまう。
「あれ？　なあ。んじゃ、もし有里がすぐに目覚めてたら、チドリやストレガたちもいなかったって事なのか？」
「……たられば に意味はないけど、可能性の話で言えばそうでしょうね」
順平の言う通り、もしも湊がエルゴ研に回収されてすぐに目を覚ましていれば、研究員たちに事情を説明されて湊は大人しく研究を手伝っていただろう。
そうなれば制御剤を必要とする人工ペルソナ使いなどという中途半端な存在を用いる事なく、適性の高まりによって自らペルソナに覚醒する特別課外活動部のメンバーのような者たちが集められていたはずだ。
集められた子どもたちという百人近い犠牲者は生まれず、そして、

ストレガたちの手に掛かる者たちも生まれなかった未来もあった。
それを思えば確かにどうして湊は半年も目を覚まさなかったのか、とそんな風に考えてしまうのも分かる。
けれど、そんな可能性の話をするのは無意味だ。回収された経緯も含めて彼に落ち度はなかったと美鶴も説明する。
「伊織、彼女の話に限定すれば君の言う可能性もあったかもしれない。だが、そもそもの話として父が八雲の死を偽装して研究に利用しようとしなければ、彼だってただの被害者でいられたんだ」
「あんだけ鬼を怖れてるうちの実家が引き取る事はなかっただろうから、英恵おば様が引き取ってそっちで平和に暮らしてただろうね」
「その場合は私の弟になっていたはず。フフッ、本当にお父様は余計な事をしてくれたものだ」
幼い頃はずっと弟妹が欲しいと思っていた美鶴は小さく笑い。なんと余計な事をしてくれたんだと父のことを責める。
当時の桐条武治の選択によって人生を歪められ、不幸になった者は大勢いる。
ただ、その選択の先にある未来が今ならば、影時間を終わらせて平和な世界を取り戻している事もあって間違っていたとは言い切れない。
もしもの話を始めた順平もそれは分かっており、仲間たちも理解しているからこそ、美鶴の台詞を聞いてつられて笑いを漏らした。
「フッ、お前の口から父親への悪口が出るとはな」
「お父様の事は尊敬しているが、別に全てを肯定してきた訳じゃない。それに口汚く罵った訳ではないんだ。これぐらいは私だって言うこともあるさ」
真田が先ほどの台詞について茶化せば、場の空気も緩んで寮に戻ろうかという話になった。
ダンジョンの探索中は綾時も参加していたのだが、過去に繋がる可能性がある最奥の扉に触れる時には彼だけ寮に戻っていた。
今回も過去には繋がらず、メンバーの過去の映像が見えただけだったので、結果の報告と二つ目のダンジョンに続けてメンバーの過去が

見えた事に対する考察などもする必要がある。
今いるここは扉が消えた以外に変化はない。その事を改めて確認すると一同は転送装置を使って扉の間へと移動して寮に戻った。

――巌戸台分寮

寮に戻った七歌たちは、自分たちを出迎えてくれた綾時にまず結果を報告した。
三つ目のダンジョン最奥の扉は過去には繋がらず、二つ目のダンジョンの時のようにチドリの過去を映した。
湊がエルゴ研で目覚めた時には既にファルロスも自我を獲得していたため、見えた映像について詳しく話すと覚えているよと答えた。
当時は存在を知らなかった相手が自分の過去を知っている。チドリにすればストーカーや盗撮されていたような感覚らしく、冷たい瞳を向けてそれを伝えれば、あまりの直球な物言いに珍しく綾時もダメージを受けた様子だった。
とはいえ、当時の事を綾時も知っているなら説明する手間も省けるため、ダンジョンから戻ってきたばかりのメンバーが一度休息を取ってから改めて集まる事になった。
シャワーを浴びたり軽食を食べたり、各々で好きに休息を取ってから再び寮のラウンジに集合する。
ただの話し合いでは味気ないため、インスタントのコーヒーや紅茶を用意してから全員が席に着く。
メティスは昔のアイギスやラビリスと同じ機械の身体だが、栄養にならないだけで飲食自体は可能らしい。
よって、彼女の前にも紅茶の入ったカップが置かれている訳だが、紅茶の上で揺れている湯気を見ていたメティスが視線を上げると彼女が最初に口を開いた。
「二つ続けて仲間の皆さんの過去が見えた訳ですが、個人的に残りのダンジョンの扉も同じような形になると思います。理由はとても単純で、過去の世界に繋がるだけの理由がないからです」
あくまで自分の予想だと言って話し始めたメティスの言葉に、他の

者たちも同意を示す形で静かに頷く。
今現在過去と繋がっている扉は一つだけだが、最初のダンジョン最奥の扉が特別だった訳ではない。
これもあくまで状況などから立てた推測だが、内装などは違っても同時に出現した扉のダンジョンは全て同格だ。
仮に最初に入ったのが二番目に攻略したダンジョンだったなら、その最奥の扉が過去に繋がる扉に変化していたと思われる。
それと同じで、最初に攻略したダンジョンを三番目に攻略していれば、その最奥の扉は仲間の過去を映して消えていたはずだ。
この場にいるメンバー全員がそれは予想していたため、メティスも自分の考えが他の者たちと同じだった事に安堵すると、彼女の言葉を引き継いでアイギスが話し始める。
「機能だけで言えば、残るダンジョンの扉で別の過去に行くことは可能でしょう。ですが、今のわたしたちには補給先以外の過去に向かう理由がない」
「メティスがダンジョンの扉は私たちの心の影響を受けるって言ってたもんね。いついつのここに行けたら便利って思うくらいはするけど、行く必要を感じている訳じゃないってのがポイントかな」
何故過去の映像が見えるだけなのか。最初のダンジョンと他のダンジョンは何が違うのか。
それについては七歌も自分の過去が見えた時から考えており、結論としてはメンバーのほとんどが必要に迫られるくらいの想いの強さが条件だと見ていた。
「最初に繋がった場所が、助言もサポートも可能な八雲君のいるポロニアンモールだったからね。こっちの状況を私たち以上に把握して助言をくれるんだもん。事件解決に向けて動くなら、もう別の場所に行く必要性とか感じられないんだよね」
今回の事件解決のために動いている以上、助言で最短ルートを示されたならそれを進むだけだ。
過去の世界で行ってみたい場所などはあるものの、最短ルートから逸れる物は全て贅沢でしかない。

これは別に常に事件解決の事だけを考え続けろという話ではなく、実際、ダンジョン攻略後に休日を設定した時にはあちらのポロニアンモールで買い物やカラオケなどで息抜きもした。
そういった心も含めた休養については七歌も積極的に取るべきだと考えている。
そうではなく、ここで言う贅沢とは〝事件解決〟という目的に関係がないものや関係が薄いものが当てはまる。
「過去に行けるからって江戸時代の本物のお城を見に行ったりしたら、あっちの有里君から〝随分と余裕があるようで結構な事だ〟とかって嫌味言われそうだもんね」
砂糖とミルクを入れた紅茶をスプーンで混ぜていたゆかりが言えば、他の者たちも容易に想像が出来たようで苦笑しながら頷く。
もしもゆかりたちが本当の意味でのタイムトラベルを楽しめば、湊は怒ったりはせずハッキリと呆れた顔を見せてくるに違いない。
湊からの助言や助力は得られても、事件解決については戦力の補充は望めず、この場にいるメンバーでやるしかないのだ。
だというのに、事件解決と全く関係のない趣味や遊びに振り切った行動を取っていれば、こいつらは自分たちの置かれた状況を本当に理解出来ているのだろうかと疑問に思うだろう。
もっとも、最初の補給経路の確保以外に過去と繋がった扉が現われていないため、湊に本気で頭の中身を心配されるような者はメンバーの中にはいないようだ。
その点については良かったと笑顔を見せた順平は、少しだけ意地の悪い顔をして天田に声をかける。
「扉はいくつか残ってるからな。別に天田がどうしても本物の恐竜がみたいんですぅって駄々を捏ねてもオレらは怒ったりはしねーぞ」
「僕は歴史関係はロマン派なんで化石とかでＯＫです。いくら科学が進んだからってティラノサウルスは痛風だったとかって夢もロマンもない情報はいらないんですよ」
子ども扱いしながら話題を振ってきた順平に、天田はとても大人な対応でスマートに返す。

本物の恐竜を見られる貴重なチャンスかもしれないが、化石などから太古に想いを馳せるのも楽しみ方の一つだ。
学者たちは調査によって事実を明らかにしていくのが仕事なのだろう。
けれど、ロマンやワクワクする気持ちを大切にしたい天田は、ファンタジーだと言われようがティラノサウルスには恐竜世界で孤高の王者として君臨していて欲しい。
だから、自らそういった夢を手放すような事をするつもりはないと返せば、話を聞いていたメティスが扉の機能について冷静にツッコミを入れた。
「断言は出来ませんが、恐らくあの扉で恐竜たちのいた時代に行くことは出来ませんよ」
「え、そうなん？　オレたちの想い次第でどこでもドアじゃなかったのかよ？」
恐竜の話題を出した順平は、てっきり祈れば叶うものだとばかり思っていた。
それについては他の者も同じだったようで、実際に恐竜の生きていた時代や江戸時代に行くつもりはなくとも、メンバーが本気で想えば可能ではあるのだろうと考えていた。
しかし、メティスがそれを否定した事で、どうしてその時代には行く事が出来ないのか美鶴が尋ねた。
「メティス、扉の機能については私も伊織と同じ認識だったのだが、君はどうして恐竜のいた時代には行けないと言ったんだ？」
「理由はいくつかありますけど、大きな問題点は二つです。一つは扉の出力。異なる時間軸を繋げるのって本来は途轍もない力が必要なんです。それは時間軸がズレるほど必要な力も増えます。あの扉で繋げるのは皆さんの過去の映像で見えるくらいが限度かと」
異なる二つの時間軸の世界を繋げる場合、行き来する通路以外は世界自体には影響が出ないようにバランスを保つ必要がある。
もしも、このバランスが崩れれば、最悪の場合二つの世界が衝突して消え去ってしまう。

故に、七歌たちのいるこちらの世界と繋げられるのは、バランスを保った状態で二つの世界が通じていられる範囲に限られるのだ。
恐竜の生きている時代は流石にその範囲外なため、もっと扉に力がないと繋ぐ事自体が難しい。
「で、もう一つの問題点ですが、行き先の座標検索って皆さんの意識が影響しているので、目印でもなければ基本的に実物を知らない世界とは繋げないと思います」
メティスが挙げた二つ目の理由は、知らない場所や時代は繋ぐ側のイメージが反映されないため、座標を固定することが出来ず結果繋がらないという事だ。
何か自分たちが知る目印になるものがあれば、それを基点にして目的の条件に合致する時間軸と繋ぐ事は可能になる。
だが、恐竜の生きていた時代に繋ぐのであれば、目印になるのはその当時の生きた恐竜や植物などに限られ、化石や琥珀はそれらが発掘された時代にしか繋がらないのだとか。
事件に巻き込まれた事を抜きにすれば、ある意味でタイムトラベルを可能にする夢のアイテムだと思っていただけに、色々と制約があることを知った七歌ははっきりと溜息を吐く。
「はぁー……超常側の力なのに変なところで現実的なのが残念すぎる。あ、綾時君はニュクスのところにいた時代の記憶使って地球誕生まで飛んだり出来ないの？」
「自我を得たのが湊に封印されてからだからね。僕の記憶で遡れるのは湊とアイギスと戦ったムーンライトブリッジが限度だよ。あ、でも、湊は一族の記憶を読み取れるから、始祖の二人の親である龍神の記憶まで引き出せるなら人類誕生以前まで行けちゃうかもね」
「神々が自然に宿っていた時代ってやつだね。夢があるなぁ」
扉の出力を無視出来るのなら、湊の受け継いでいる魂の記憶で数千年前まで遡ることが出来る。
自然に神々が宿っていたとされる時代があった事は始祖の二人から聞いているため、その末裔として七歌も一目でいいから見てみたいものだと思いを馳せる。

他の者たちはその言葉の響きから連想し、どこか神聖な空気が流れる豊かな自然の風景を想像するが、実際の風景など誰も知らないのであくまで各々の想像するそれらしい風景でしかない。
もし、彼らにヤソガミコウコウで過した時の記憶があれば、湊の心象風景で書き換えられた世界の景色という限りなく本物に近い物が見られたのだが、残念な事にあちら側の記憶を残している者はいなかった。
そうして、二つ続けて扉が過去と繋がらなかった理由について話し合った事で、残る扉も同様の結果になるだろうと事が分かると、次のダンジョン最奥の扉に触れる時には綾時も同席する事が決まった。
これまではデスが存在する過去に繋がる危険があって同席出来なかったが、仲間たちの過去の映像には興味があって同席したいと思っていたらしい。
次のダンジョンでは誰の過去を見ることになるかは不明だが、何日か休みを挿んでから次のダンジョンへ向かう事に決めると、細かな連絡事項だけ伝えて一同は解散するのだった。

第四百八十話　裏での情報収集

――喫茶店〝シャガール〟

三つ目のダンジョンでチドリの過去を見た後、七歌たちは話し合って数日の休みを取る事に決めた。

外と空間的に切り離されている寮がいつまで持つのかは分からないが、シャドウの出るダンジョン探索でメンバーたちも疲れている。

時の狭間や自分たちの置かれている状況など、それらに最も詳しいと思われるメティスに尋ねても、まだしばらくは大丈夫だとお墨付きを得ている。

戦いを重ねるにつれて戦闘の感は取り戻しつつあるが、落ちてしまった筋力や体力はすぐには戻らない。

だからこそ、自分たちの世界の湊が残してくれた回復アイテムという保険があっても、七歌たちは出来る限り疲れを蓄積しないよう気をつけて探索スケジュールを組んでいた。

そうして、探索の疲れもあるだろうからと全員が早めに部屋に戻り、寮内を静けさが包むと七歌は一人部屋を抜け出して過去の世界へとやって来ていた。

仲間たちには出来る限り過去の湊と接触しないようにと伝えている。

ポロニアンモール内では手に入らない物資を補給するためならば目を瞑るが、そうでないなら出来るだけ彼とは会わない方がいい。

何せ事件を解決して元の世界に戻れば彼はいないのだ。

自分たちよりも過去の存在だというのに、彼は仲間たち以上に七歌たちの置かれた状況を理解しているため、自分たちの世界の湊と同一視してしまっている自覚は七歌もある。

だが、やはり彼は過去の世界の存在であり、自分たちの世界の湊はこの世から去っているのが現実だ。

過去の湊と関われば関わるほど、元の世界に戻った時に味わう悲しみは大きくなる。

だから、七歌や美鶴は仲間たちに彼との接触は必要最低限に留め、

出来る限り自分たちの力で事件を解決しようと話していた。
「んでさ。八雲君の推測を聞きたいんだけど、どうして二つ目と三つ目の扉が私とチドリの過去を見せたのか分かる？」
仲間たちには必要最低限しか会わないようにと言っておきながら、夜中にこっそりと抜け出してきた七歌は過去の世界の湊を誘って喫茶店へやってきていた。
補給経路として世界が繋がったからか、あちらでは夜中でもこちらはまだ明るい時間で、店内にはコーヒーを楽しみにやってきた客が大勢いる。
そんな中、比較的周りから見えない奥の席へ着いた七歌は手早く注文を決めると、青年も同じように何点か注文したところで質問をぶつけた。
明日になれば経過報告として誰かが三つ目のダンジョンでの出来事を彼に伝えに来るに違いない。
ダンジョン攻略後に休みを数日設けるのは心身の休息を第一の目的にしているが、その他の目的として彼に会いたがっている者が〝報告〟を理由に会いに行けるようにという配慮がある。
卒業式の日に記憶を取り戻して以降、やはり皆どこか落ち込んでいる雰囲気があった。
ゆかりや真田のように目の前の事に集中することで、自分が何とか立ち直ったと思い込もうとしている者もおり、正直に言えば痛々しくて見ていられなかった。
だが、こうやって世界が繋がり、過去の湊との交流という形で心が癒やされたのかそんな者たちも以前の状態に戻りつつある。
その分、元の世界に戻った時の反動が恐いのだが、ダンジョン探索という危険を伴う作戦行動を進めて行くには余計な悩みなどは無い方がいい。
七歌もそれを分かっているため、明らかな雑談なども混じって彼への報告が長時間に及ぼうとも仲間のそれらの行為を見逃していた。
強面の店主が運んできたコーヒーのカップを受け取り、七歌はミルクと砂糖を入れながら正面に座る青年に視線を向ける。

七歌と同じようにコーヒーのブレンドを受け取った彼は、何も入れずにストレートのまま一口飲み、それから七歌の問いに答えを返してくる。
「……お前が知りたい情報について確認しておこう。その質問は何故選ばれたのがお前たちだったのか、何故扉はわざわざ仲間の過去を見せてくるのか。一体どっちだ？」
自分たちの世界の湊は仲間と一緒に行動する事がほとんどなく、さらに言えばニュクスとの決着も一人で着けようと思っていたのか、影時間やニュクスについてあまり話してくれる事はなかった。
実際は、もしかすると、教えて欲しいと頼めば教えてくれたのかもしれない。
家族であるチドリやラビリスが呆れるくらいに彼は面倒臭がりなので、かなり重要な事であっても聞かれないから伝えなかったと素で言ってくるような場面も多々あった。
けれど、ここにいる湊は少しばかり事情が違う。
未来の自分が遺したと思われる〝俺を頼れ〟という言葉を真剣に受け取り、彼にとっては何の得もないというのに時間を作って話を聞き、また可能な限り質問に答えようとしてくれる。
無論、事情があって答えを知っていても教えられない事柄もあるようだが、今回の七歌の質問は答えられる範囲の話らしく、どちらについての情報が必要なのかと問い返してきた。
チーズケーキを一口分フォークで切り取り、それを口に運んでゆっくりと咀嚼した七歌は、口の中が空になると自分が聞きたいのは後者だと伝える。
「知りたいのは過去を見せてくる理由についてだよ。前者は本当に偶然だと思ってる。見せてくる過去は多分適性やペルソナの目覚めに関係しているんじゃないかって予想してるけどさ」
「まぁ、別に向こうに意思がある訳じゃないからな。順番はランダムか力の大きさなり性質で選ばれているだけで意味はないだろう」
言いながら湊は五段重ねのパンケーキをナイフで切り分け、重なったままフォークで突き刺したものを一口で頬張る。

コーヒーはブラックのまま飲むくせに、甘いものでも気にせず食べている姿を見て、七歌は好き嫌いがないのは良いことだと微笑む。
彼の話はしっかりと聞いているが、こうやって二人で穏やかな時間を過すことは最後までなかった。
お互いの立場であったり、運命の巡り合わせの悪さでそんな事になってしまったのだろうが、事件に巻き込まれなければこんな時間を過す事はなかった訳だ。
彼と向き合って言葉を交わす機会を与えられたと思えば、事件に巻き込まれた事にも感謝したくなる。
無論、他の者にはそんな事は言えないし、助言を貰うためとは言え夜中にこっそりと会いに来ている事も話せない。
故に、七歌は表情を引き締めると自分が聞きたい事を詳しく伝える。
「メティスの話によるとあそこって〝過去〟に繋がり易い場所なんだよね？」
「今回はお前たちの性質に引っ張られて力の向きが過去に限定されているだけだ。本来は別に未来にだって行ける。実際、お前たちはここから未来に辿りついているだろ？」
「それは元の世界とここととで二点にアンカーが刺さってるだけじゃないの？」
「ああ。だが、どちらも時間は進んでるだろ。もし、お前の言う通り二点にアンカーが刺さって座標が固定されているなら、時間経過が起こるのはおかしいと思わないか」
言われてみれば確かにと七歌は考え込む。
七歌の考えでは時空間に存在する座標にアンカーが打ち込まれ、その二点間を行き来しているようなイメージだった。
しかし、双方で時間経過が発生しているとすれば、時空間上に存在するその座標に固定されているはずのアンカーが動いてしまっている事になる。
今は僅かな時間経過という形でズレている程度で済んでいるが、もしそのアンカーが完全に外れて別の座標に引っかかれば、七歌たちは

いつかも分からぬ時代の全く見知らぬ土地に出てしまう可能性もあった。
　けれど、そんな危険性があれば湊が真っ先に教えてくれているはずなので、寮とここを繋いでいる扉にそういった危険性はないのだろう。
「あの扉って使い続けて危険とかないの？」
「寮内の様子に変化がなければ大丈夫だろう。だが、そちらに変化が起き始めたならタイムリミットが近い。もしかすると、空間が不安定になっているかもしれないから使用は控えた方がいい」
「もし使ったタイミングで空間が不安定になったら？」
「……楽しい楽しい時間旅行の始まりだ」
　言葉の響きは楽しそうだが、二度と元の世界には帰れない片道切符はゴメンだと七歌が顔を顰めてケーキを食べる。
　寮の状態については毎日風花やチドリがチェックしており、今のところは空間が不安定になっている兆候もない。
　攻略したダンジョンはまだ三つだけ。これは時の狭間に存在する扉の半数にも満たない数だ。
　今は安定していてもいつ空間が不安定になるかも分からない。
　全員の安全のために休日などを多めに作っているが、今後はもう少し攻略のペースをあげるべきだろうか。
　七歌がそんな風に悩んでいると、パンケーキに続けて分厚い小倉トーストを食べていた湊が金色の瞳を七歌に向けて話しかけてくる。
「別に攻略ペースをあげる必要はない。タルタロス消滅の揺り戻しだって言っただろ。ダンジョンを攻略して扉が減っていくならともかく、怠惰に過すなら数ヶ月はそのまま暮らせるはずだ」
　今のところは安全に行き来出来ているものの、それがいつまで続くか分からない。
　だからこそ、不安に思った七歌はダンジョンの攻略ペースをあげるべきか考えたのだが、楔の役目を果たす扉が減っていかない限りは大丈夫だと湊が伝えてきた。
　最初にこちらの世界に来た時にも彼は言っていたが、やはり自分た

ちを三月三十一日に縛り付けている存在は全ての扉を攻略しない限りは現われないらしい。
逆を言えば、ダンジョンを攻略して扉が消えていかない限りはその存在に近付く事もない訳で、寮を概念的に外界と切り離している存在に近付かなければ寮もそのままという訳だ。
いつまでもこんな生活が続くのは御免被るが、それでも時間的に余裕があるのなら七歌も焦らずにいられる。
コーヒーを一口飲んで心を落ち着かせると、七歌は脱線していた話を戻すよと本題に戻る。
「で、ダンジョン攻略の話に戻すけどさ。どうしてあの扉は過去を見せてくるんだと思う？」
「……切っ掛けを思い出させるためじゃないか？　今のところは適性に目覚める切っ掛けと、ペルソナを本格的に呼び出せるようになった切っ掛けが見えたんだろ？」
「うん。私は八雲君が棺の中にいないって知ってから影時間の存在に気付いて、チドリはあの訓練以降からペルソナを完全な姿で呼び出せるようになったんだって」
七歌は影時間の適性に、チドリはペルソナ能力に本格的に目覚める切っ掛けとなったのが、ダンジョン最奥の扉で見えた過去の映像の出来事になる。
どちらも影時間に関わる能力の目覚めであり、本人たちが明確にそれを切っ掛けと認識していた事が共通点と言える。
ここに来る前の寮でのミーティングで、もう残りの扉が過去と世界と繋がる可能性は低いとメティスも言っており。となると、残る扉も最奥では仲間が力に目覚めた切っ掛けが見られるはず。
だが、そこで疑問なのはどうしてダンジョン最奥の扉はそんな過去の映像を見せてくるのかという事だ。
時間が経っている事もあって、映像を見た本人は少しだけ懐かしい気持ちになったものの、仲間に過去を見られて少し恥ずかしい気はするがそれ以上の感想はない。
というより、今更そんな過去を見せて何がしたいのかという気持ち

の方が強い。
七歌がその事を素直に伝えると、湊もまぁそうだろうなと共感しながら少し考え、あくまで自分の推測だがと考えられる可能性について話す。
「恐らくは過去の映像を見ていく形で、今回の事件が起こるに至った原因を見られるようになるんじゃないか。お前だって偶然ペルソナ使いたちが巻き込まれたとは思ってないはずだ。全員が過去を見つめ直して行き、その集大成として今回の件の原因と対面するって流れは十分にあり得るだろう」
「あー、なんかすごくありそう。けど、それ私たちが過去の事を想ってるほど力が増すタイプじゃない？」
もしも、その原因とやらがシャドウのように実体を持って現われれば、七歌たちの想いの影響を受けて力が強化される可能性がある。
未練を断ち切るという儀式だと思えば、相手が強ければ強いほどそれを打ち破る事に意味を感じられるが、ダンジョンを攻略していく中でブランクのある自分たちがどこまで力を取り戻せるかによっては非常に厳しい戦いになるだろう。
まだ扉は半分以上残っているというのに、先の事を考えると頭が痛くなる。
それを紛らわすように七歌が大きく切ったケーキを口に運べば、それを見ていた湊はコーヒーに口をつけて薄く笑った。
「……フッ、どうせ最後は面倒な相手との戦いになるはずだ。一つアドバイスをするなら、例え相手がどんな姿をしていても躊躇わずに息の根を止めろ」
「うわぁー……今のところダンジョン内で時々見かける八雲君の姿をした何かがその第一候補なんですけど？」
「別にそいつは俺じゃないからな。同じ姿をしてようがシャドウモドキなら遠慮する必要もないだろ」
自分の姿をした敵を気にせず殺せと言ってくる青年に、そういえば自分たちの世界の湊は結城理との戦いでそれに近い事をしていたなと七歌は思い出す。

そも、湊は自分が原因で世界が滅びるなら一切躊躇わずに自決するような男だ。
そんな彼からすれば、いくら仲間の姿をしていようと明確に敵だと分かっているのに躊躇う理由が分からないらしい。
だが、七歌にすればそれが未練の象徴なら躊躇って当然だと思ってしまう。
「いやぁ、未練の形が八雲君の姿だったら、少なくとも女性陣は攻撃を躊躇すると思うよ」
「散々その内刺されると言ってたくせに意気地のない」
「痴情の縺れと一緒にしちゃダメだよって言おうと思ったけど、ある意味で痴情の縺れが根本的な原因だと思えてきたよ。八雲君、狭い範囲内で手を出しすぎ」
「まわりが勝手に寄ってくるんだ。基本的にこちらに非はない」
メンバーたちの未練が独りでこの世を去った湊に関わる事なのは間違いない。
だが、その中で女性陣の持つ未練のいくらかは恋愛的なものだろうと七歌は見ていた。
もしも最後の敵が湊のシャドウモドキなら彼女達は戦闘の役に立たない。愛した相手の姿をした敵を殺す事など出来ないはずだから。
けれど、その原因となっている目の前の青年は、合法的に刺すチャンスなのになと軽口を叩いてくる。
ただのモテ男ならそんな未来のあるのだろうが、残念ながら彼の周りにいる女性陣は彼の過去や人格の歪みを知ってしまっている。
おかげで女性陣は彼のそういった部分を〝しょうがない事〟と受け入れてしまっていた。
七歌は相手を弟として見ており男女の仲になるつもりはないため、自分たちの世界の未来に繋がるまでに彼の女性関係が何かしら好転しないかと思って忠告する。
「八雲君、本当に好きな人と一緒になりたいならちゃんと選んだ方がいいよ」
「そんな未来は来ないから大丈夫だ」

「はぁー……それ絶対にそっちの皆には言っちゃダメだよ。勿論、こっちの皆にもだけど」
自分たちの世界の青年が帰ってこなかった事を思えば、過去の湊が既に自分の死を受け入れていてもおかしくはない。
ただ、それをこうもハッキリ言われてしまうと、最後の戦いで彼を一人行かせてしまった時の無力感や後悔が蘇ってくる。
これは何も出来なかった自分への罰だと七歌は甘んじて受け止めるが、流石に仲間たちにこれを味わわせるつもりはない。
深い溜息を吐いて七歌が口止めをすれば湊も分かっていると答えたため、コーヒーとデザートを食べ終えていた事もあり二人は店を出ることにする。
今回の話し合いで過去の映像の意味や、最後に姿を現わす未練とやらの姿にも予想がついた。
七歌はこれを使って上手く仲間たちを導いて、再び湊と別れる事になっても出来る限り心に傷を負わずに済む方法を考えて行くことに決める。
過去の湊の存在は甘い毒のようなものだ。無事に今回の事件を解決するためにも七歌はリーダーとして仲間がそれに溺れないよう注意していく必要がある。
自分も他の者たちのように再会をただ喜べたら良かったのにと、心の中で愚痴を漏らしながら湊と別れた七歌は寮へと帰っていった。

第四百八十一話　歪さの正体

――巌戸台分寮

三つ目のダンジョンを攻略した翌日、次の扉を選びつつ今日は心身を休めるための休日となっていた。

順平などは遅くまで惰眠を貪って午後からポロニアンモールに息抜きに行く予定らしいが、殆どの者は朝食をとってからポロニアンモールで時間を潰している。

しかし、調べたい事があるからと珍しくアイギスと別行動をとったメティスは、寮の四階にある作戦室で特別課外活動部の過去の活動報告を読んでいた。

彼女の行動は一貫して姉であるの安全確保を目的としている。

本当なら彼女には寮で待機して貰い。他のメンバーとメティスだけでダンジョンの攻略が出来ればベストだと思っている。

けれど、アイギスは契約を結んでベルベットルームに辿り着き、この事件の通じて何かを得ようとしている。

それには彼女も当事者でい続ける事が重要で、心の中では反対しながらもメティスは自分も探索に参加したがる姉の意思を尊重していた。

今回、メティスが一人で寮に残って調べ物をしようと思ったのは、アイギスが何を得ようとしているのか理解しようと思った事と、もっと特別課外活動部について把握しておこうと考えたためだ。

率直に言えば、彼女から見た特別課外活動部はとても歪だった。

単純な戦闘力で言えばブランクがあるという話の通り、戦闘自体には慣れているのに身体がついていかないなど、持っている能力を十全に活かせていない印象が強い。

人数はいるし徐々に感を取り戻しているようなので、その点はあまり気にならなくなってきたが、そうなると今度は個人に目が行く。

最初に敵対した事もあってまだ完全に気を許してくれてはいないものの、それでもメンバーたちはメティスをアイギスの妹と認識し、湊の手紙の効果もあってか仲間として扱ってくれている。

敵ですらも理由があれば受け入れる彼女達の善性は貴重なものだ。
その裏には、何かあっても自分たちなら対処出来るという想いがあるのかもしれないが、距離や壁のようなものは感じても敵意や悪意は向けられていない。
ならば、やはり彼女達は既にメティスを味方だと思って接してくれているのだろう。
どういった経歴を持てばメンバー全員がそんな風になるのか。それが気になったメティスは美鶴から許可を貰って一人活動報告を読み込む。
「……なるほど、兄さんの存在はやっぱり秘匿されていたんですね」
特別課外活動部の活動報告で有里湊の名前が出てくるのは、八月の満月にストレガと初遭遇した後に桔梗組で交戦したという記述からだ。
しかし、桐条グループは中等部入学時点で美鶴よりも高い適性値を持つ有里湊の存在を以前から把握していた。
彼の適性値は影時間の適性を持っているだけのレベルを超えている。
既にペルソナ能力に目覚めている美鶴の数倍に達している以上、ペルソナに目覚めていて能力を隠していると判断するのが普通だろう。
実際、美鶴が勧誘に向かっても会話すらして貰えなかった時点で、桐条グループからは彼への勧誘や積極的な接触を避けるように指示が出ている。
それらの指示の意味が正しく証明されたのが八月の満月での交戦だとすれば、桐条グループ側には相手の戦力だけでなく人格面も含めて把握していた者がいると思われる。
接触禁止の指示を出していた者にとって、特別課外活動部の者たちが彼と交戦したという報告が来た時の衝撃は如何ほどの物だっただろうか。
文字通り殺されかけたにもかかわらず、合流して仲間になっているのは不思議だが、さらに報告書を読み進めたメティスは十月の満月戦について書かれた文章を読んで手が止まった。

「え、これ……どういう事？　兄さんが十月の満月の戦いでチドリさんを蘇生させて死亡って」
　メティスも彼がこちらの世界で死んでいると聞いて、報告書のどこかで彼の死について書かれるのは覚悟していた。
　アナライズ能力を持っていないメティスでも、店でただデスクワークをしていただけの彼が仲間の誰よりも強いのははっきりと理解出来た。
　仲間内で最も強いコロマルや綾時ですら欠片も相手にならない。それこそ腕の一振りで仲間全員を薙ぎ払えてしまうのではないかと思うほどに差がある。
　どうしてそんな彼が戦いの中で命を落としたのかと疑問に思っていたが、まさか死んだ人間を蘇生させた代償で命を落としていたなど想像もしていなかった。
　メティスにはどのような手段を使えば胸に大穴が開いて即死した人間を蘇生出来るのか分からない。
　けれど、彼はそんな奇跡を起こした代償として死んだらしい。
「あれ？　でも、兄さんはニュクスとの戦いに参加してたって」
「もう少し読み進めると分かるけど、彼自身も蘇って戦いに復帰したんだよ」
「あ、綾時さん」
　どうして最後の戦いに参加していたはずの湊の死亡報告が途中で出てくるのか。
　メティスが不思議に思って首を傾げていれば、彼女と同じように寮に残っていた綾時が作戦室に入ってきて理由を伝えた。
　彼は他の者たちと違って過去のポロニアンモールには行けないため、寮に残って調べ物をするというメティスの様子を見に来たらしい。
　やはり、他のメンバーにしてもメティスが何かをやらかさないか心配だったのかもしれない。
　そんな事は欠片も気付いていないメティスは、テーブルを挟んで正面のソファーに座った綾時を見つめる。

メティスから見た特別課外活動部はどこか歪だが、綾時はその枠から外れているように思える。
こうやって二人しかいない状況というのも珍しいので、このタイミングで少しだけ話を聞いておこうとメティスが口を開く。
「綾時さん、貴方は途中から特別課外活動部に合流したとの事ですが、貴方の目から見てこの組織はどうですか？」
「うーん。質問内容が随分とザックリしているけど、それはどういった部分についての質問なのかな？」
「組織としてのまとまりなどについてでしょうか。こう、具体的には説明しづらいのですが、お互いの信頼関係であったり、戦闘中の連携などはちゃんと出来ていると思うんです。でも、何というかどこかズレているような気がしてしまって……」
今のままでも扉の奥に広がるダンジョンの攻略には問題がない。
仲間たちは感を取り戻しつつあるし、アイギスも徐々にワイルドの戦い方に慣れつつある。
メティス自身も他の者との連携が取れるようになってきており、これまでの出てきた敵の強さがダンジョンごとに大差ないこともあって、フロアボスや最奥のボスを除けば大きな問題は出ないだろう。
ただ、そうは言ってもあれだけ強い信頼関係で結ばれている者たちの姿に妙な違和感を覚えれば、大事な場面で何か取り返しのつかない事が起きるのではと不安を感じても無理はない。
新参のメティスが気付くくらいなのだから、本人たちも自分たちの状態に気付いていると思ったが、ここまで見てきたところ気付いている様子はない。
そのため、比較的自分に近い立場にいると思われる綾時に聞いて見れば、彼は彼女の質問の意図が分かったと笑みを浮かべた。
「まぁ、言いたい事は分かったよ。それについてはやっぱり湊が死んだ影響だろうね。全員そんなに簡単には割り切れていないのさ」
「兄さんなら過去の世界で会えますよ？」
「まぁね。けど、それで余計に皆も分からなくなってしまったんだと思う。ここにいればずっと湊と別れずにいられるからね」

今いる正しい時間軸の世界では湊は死んでいる。
正確な意味で死んでいるのかは分からないが、少なくとも現世には潜在せず帰還の手段もないはずなのだ。
魂だけがあちらに囚われて肉体が残っていれば、葬儀の場で別れの一つも言えただろう。
しかし、湊はニュクスを封じるため肉体ごと死後の世界に渡って、残された者たちは彼に別れの言葉を伝える機会すらなく二度と会えなくなった。
彼がそうした以上は他に方法はなかったと分かっているが、共に戦ったからこそあの決戦の結末には強い後悔が残っている。
そして、後悔を抱えながらも彼が未来を繋いでくれたからと前を向いて動き出せば、そのタイミングで今回の事件と過去の湊との遭遇だ。
綾時はニュクス側の存在だった事もあって、決戦で見せた湊の選択にもある程度予想がついていて理解があったし、事情が事情だけに過去へは行けず湊とも出会っていない。
だからこそ、他の者より冷静でいられているが、雑談や作戦について言葉を交わしている際に仲間たちがどれだけ悩んでいるのかは察していた。
「湊にすればさっさと事件を解決して元の世界に戻れと思ってるだろうね。そこら辺はかなりドライだから」
「私としてもそうすべきだと思います。勿論、探索での負担を考えて今日のように休日を設定するのは良いと思いますが、皆さん何となく過去に行くことをご褒美のように考えているようで……」
「ま、ここは息が詰まるからね。湊の事を抜きにすればご褒美感覚でも良いと思うよ。モチベーションの維持は大切な事だ」
休日を設定し、過去のポロニアンモールで息抜きをするのは、娯楽が殆ど無い今の寮内で暮らす者にとって格別のご褒美だ。
せっかく戦いが終わって平和な世の中になったはずなのに、再び事件に巻き込まれて戦わされている以上、メンタルのケアはとても重要になる。

美鶴と七歌はその辺りを特に気にして探索スケジュールを組んでおり、もしも、しばらくはペースをあげて探索に集中するから休みは無しだと言えば、メンバーたちから不満の声が上がることだろう。
過去に出掛けられるにしろ今の寮は空間的に外界と断絶した閉鎖空間。そんな場所ではちょっとのいざこざが仲間内に致命的な亀裂を生みかねない。
そのため、美鶴と七歌だけでなく綾時やメティスも、一部の者が報告や相談の名目で湊に会いに行っている事を気にしているが、一時的にでも心の平穏に役立つのならと現状は見逃している。
もっとも、メティスは自分が新参だからと強く意見していないだけで、自分の姉も含めて過去の存在に依存しつつある状況を危惧しているのか苦言を呈する。
「でも、このままだと皆さん何か大きな失敗を犯してしまうんじゃないですか？」
「かもしれない。けど、感情を持つ人間だからね。口で言っても心がついてくるかは分からないのさ。君だってもし仮に正当な理由があってアイギスや湊への接触を禁止されたところで素直に聞けないだろう？」
メティスが二人に接触することで起きる問題など想像も出来ないが、それによって二人の命に深刻な問題が発生するでもなければメティスは聞かないだろう。
綾時は他の者たちの行動を自分に置き換える形でその胸中を伝えようとする。
彼女はアイギスよりも後に作られた機体だからか精神は人間に近いが、稼働時間が短いのか精神的に幼い印象を受けた。
そのため、これで理解出来るかなと少しだけ心配したがメティスも僅かに不満そうに眉を寄せつつ頷いた。
「……確かにそれなら簡単には納得出来ませんね。でも、兄さんは姉さんの一番大切な人なのに、どうして他の人たちまで兄さんに色目使ってるんですか？　姉さんが優しくて何も言わないからって流石に遠慮ってものがあると思うんですけど」

「……その辺りは色々と複雑な事情があってね。僕の口からは詳しくは話せないけど、彼は大勢から愛される素晴らしい存在なんだよ。だから、独占するような事はやめた方がいい。仲間同士で争う事になるからね」
メティスの目から見ると湊は仲間からの信頼も厚く、優しくてとても頼りになる存在なのだろう。
だが、綾時は知っている。少女が兄と慕っている相手は、人として、男としてはかなりどクズなタイプだと。
彼女が警戒している少女らは基本的に彼に純潔を散らされているのだ。少女らにすれば責任を取れと思っても無理はない。
逆に何故アイギスには手を出さないままこの世を去ったのか。綾時としてはそこが気になるが、こちらの本人に聞くことも出来ないので考えるだけ無駄だろう。
相手に心の内を悟られないよう気をつけながら笑みを浮かべ綾時は立ち上がり、もう少し調べ物をするというメティスに今後に向けて一つ忠告しておく。
「そうそう。恐らくだけど扉を全て攻略した時、最後に現われる未練の形はきっと彼の姿をしていると思う」
「こちらの世界の兄さんが敵になるって事ですか？」
「いや、彼の姿をしたシャドウモドキさ。でも、皆の未練の形だからね。僕たちのイメージが反映されているなら勝つのは中々に難しい。彼の姿をしていれば、どうしても手を出しづらいだろうしね」
彼と一度本気で戦った綾時だからこそ、皆のイメージが反映された湊との戦いは非常に厳しい物になるのが分かる。
最初から殺すつもりで攻撃を仕掛けられると言っても、他の仲間の中で彼が絶対無敵の存在だと認識されていれば攻撃はまともに通らず、刀の一薙ぎで振り払われるかもしれない。
だが、どれだけ厳しい戦いだろうと自分たちはそれを討たなければならない。いつまでもこんな世界に閉じ籠もっている訳にはいかないのだから。
「本当に敵が彼の姿なら味方は当てにならない。だから、その時は僕

や君の手で彼の姿をした皆の未練を断ち切るんだ。君だって、姉がこんな場所に留まっていて良いとは思っていないだろ？」
「当たり前です。分かりました。心の準備をして、その時になれば私が姉さんたちを未練から解放して見せます」
「ああ、よろしく頼むよ。じゃあ、調べ物頑張ってね」
それだけ言うと綾時は活動報告の続きを読むメティスを残して部屋を出て行く。
七歌だけじゃない。綾時だって最後に現われる未練の形は察しているのだ。
思いがけず過去の湊と再会出来た事に喜んでいる仲間たちは恐らく戦えない。
そのために綾時は最初から戦うつもりでいる自分や、敵は敵だと割り切れるメティスを戦力として組み込んで戦う準備を進める。
扉の数はまだまだ残っていようと、全てのダンジョンを攻略する日は遠くない。
それが分かっている者たちは、他の者たちが一時の安らぎを得ている裏で着実に準備を進めるのだった。

第四百八十二話　夜の路アンテノラ

――巌戸台・長鳴神社

影時間の中、長鳴神社に続く石段の前で一匹の犬と巨大なシャドウ〝鋼鉄のギガス〟が対峙している。

鋼鉄のギガスが距離を詰めて巨大な腕を振り下ろせば、犬は素早い身のこなしで回避し、背後に回って敵の足を爪で引っ掻いた。

しかし、敵はシャドウだ。ただの爪程度では大した傷は付けられない。

攻撃を受けたギガスは鬱陶しいとばかりに振り返りながら足を振って、犬は攻撃範囲から逃げるように距離を取る。

逃げた犬を追ってギガスは駆け出し、今度は蹴りで倒そうとするが犬は身体を捻りながら跳んで躱し、相手の軸足に数秒噛み付くと再び距離を取った。

戦っている犬にとってここは自分の家であり、飼い主との思い出が詰まった大切な場所だ。

自分と同じようにこの不可思議な時間に迷いこみ、今戦っている敵の仲間らしき化け物に襲われて飼い主は死んだ。

あの時は自分が盾になってでも飼い主を守ろうと思ったが、逆に飼い主に庇われて守る事が出来なかった。

だからこそ、今度こそ化け物たちから大切な場所を守ってみせる。

そうして、犬は速さを活かして避けながら攻撃を仕掛け、ギガスも犬からの攻撃をほとんど無視して攻め手を緩めない。

両者の戦いは犬が紙一重で敵の攻撃を躱して反撃する形で続いてゆく。

だが、両者には明確な体格差があり、小柄な犬の方が当然のように先に体力の限界を迎える。

「きゃうんっ」

足に限界が来ていたのか、これまでならば躱せていた敵の拳が犬の胴体に掠り、犬は固い路面を転がると泡が混じった涎を垂らしたまま起き上がれない。

ようやく犬の足が止まった事でギガスはゆっくりと近付くと、これまで以上に力を込めた大振りの拳を振り下ろす。
倒れたままの犬が巨大な拳に潰されようとした時、両者の間に影が割り込み振り下ろされた巨大な拳を受け止めた。
「こんな時間に随分と変わった縄張り争いだな」
「くぅーん」
攻撃を受け止めた青年は敵の方を見ずに顔をしっかりと犬の方に向けて話しかけていた。
助けて貰った犬は相手が自分に首輪をくれた人間だと認識し、敵が受け止められたのとは逆の手を振りかぶっていたのが見えて危険だと知らせる。
どういう訳か彼ともう一人の少女は自分の言葉をしっかりと理解してくれていた。
故に、弱々しい声でも気付いて貰えるはずだと考えていれば、相手は掴んでいた敵の拳を弾くように離すと回し蹴りで腹を蹴って大きく敵を後退させた。
犬に比べれば青年の方が敵との体格差は少ないが、それでも敵の方が倍近く巨大だ。
それを身体を捻る勢いを利用した蹴りだけで大きく後退させた事に犬は驚かされる。
もっとも、敵は大きく後退したもののダメージは軽微なようで、現われた青年を警戒しながらも攻撃のチャンスを狙っていた。
犬からすれば恐ろしい敵だ。それがまだ近くにいるというのに青年は犬の傍でしゃがむと話しかけてきた。
「なるほど、お前は適性者じゃなく覚醒者か。少し手を貸してやろうか？」
「……わんっ」
この青年の手に掛かれば犬にとっては脅威だった敵も簡単に屠れるに違いない。
しかし、彼は犬の瞳がまだ諦めてないのを見て、自分の力で敵を倒すかとわざわざ尋ねてきた。

今回の敵は飼い主の仇ではないが、可能ならば自分の力でこの場所を守りたいと思っていた犬にすれば、彼の申し出は何よりもありがたいものだ。
怪我の痛みを我慢しながらはっきりと頷けば、青年は小さく笑いながら拳銃のような物を取り出す。
人間ならばそれの形を認識した時点で逃げるだろうが、犬にはそれがどういった道具なのか分からない。
青年の握っている部分の青い光を見ると本能的な恐ろしさは感じるが、それでもそれは自分を害するためのものではない事は分かる。
「動物であるお前なら当たり前のように死を受け入れられるだろう。受け入れて尚生き続ける強さを見せろ。さぁ、行くぞ」
だから、犬は青年の言葉に従って敵を睨み付けると、自分の内に眠る敵を屠るための力を解放した。
「ペルソナ」
「アオーンッ!!」
青年が持っていた拳銃の引き金を引くと、犬の頭の中でパリンとガラスが割れるような音が響いた。
直後、頭上に水色に光るガラスの破片のような物が回転し、その中央に三頭を持つ獣の輪郭が浮かび上がり纏っていた光が弾けると実体化した。
呼び出された三頭の獣は炎を吐いて敵を牽制し、相手の足が止まったところを妖しく光る魔法陣を出現させて呪殺した。
しっかりと敵を倒した事を確認した犬は嬉しそうにしながら青年を見つめ、青年もそれに頷いて返すと戦闘音に誘われて現われた無粋な化生共へと振り返る。
青年は首に巻いていたマフラーからカードホルダーを取り出すと、それに嵌まっていたカードを握り砕いた。
すると、先ほど現われた三頭の獣と同じように、青年の前に黒衣を纏った女性が顕現し、女性はその手に魔槍を呼び出すと地を蹴って敵の集団へと飛び込んでゆく。
魔槍が振るわれる度に敵が吹き飛び消えてゆく、ものの数秒で地上

の敵が掃討されれば女性は槍を手に構えたまま背の反らし、上空の敵へと狙いを定めると槍を投擲した。
手を離れ一瞬にして赤い軌跡となった魔槍は上空の敵を貫き、一帯から敵が全て消え去ったところで女性の手に戻ってくる。
敵を全て倒し終えると女性は青年の方へ向き直り、まるで歯ごたえのない戦闘に少しばかり不満そうな顔を見せると消えていった。
「犬、怪我の治療をしてやろうか」
「わふっ」
「よし。じゃあ行こう」
全ての戦闘が終わると青年はマフラーから取り出したカゴに犬を入れて運んでゆく。
そうして、一人と一匹がその場を立ち去ると、神社の前には普段と変わらぬ静けさが戻っていた。

――夜の路アンテノラ
連休を終えてから四つ目の扉の探索を開始し、数日で最奥まで辿り着いた七歌たち。
これまでは別の過去に行く可能性があるからと綾時だけ戻っていたが、恐らくもう別の過去と繋がる事はないはずという事で今回は彼も一緒にいた。
一つ目の扉は過去と繋がり、二つ目と三つ目の扉はメンバーの過去の映像を見せてきた。
ならば今回も誰かの過去だろうと思われていたが、コロマルがペルソナに覚醒した過去を見たことでメンバーたちは何故コロマルがあれほど湊に忠義を尽しているのか理解した。
自分の過去を他の者に見られた事で、どことなく恥ずかしそうにしているコロマルの背を撫でながら七歌が口を開く。
「コロマル、影時間に八雲君に助けて貰ってたんだね。どういう経緯で飼われるようになったのか知らなかったから、さっきの見たらその忠義っぷりに納得しちゃった」
「そういや、コロマルって元は神社の飼い犬だったんだっけ？　だか

ら、一人でああやって影時間でも大切な場所を守ってたのか。無茶にもほどがあっけど有里ってそういう真っ直ぐなやつは好意的に見てたとこあるよな」
シャドウと戦って来た順平から見れば、ただの犬が牙と爪だけでシャドウと戦って勝てる訳がないと断言出来る。
だが、同じように自分の大切な物を守るために拳一つでシャドウに挑めるかと聞かれれば、自分では絶対に真似出来ないのも分かっている。
無謀な自殺行為ではあるものの、命懸けで大切な物を守ろうとしていた姿を笑うことなど出来ない。
湊もコロマルのそういった姿を知っていたからこそ、メンバーの中で唯一仲間として連れて行ってもいいと認めていたに違いない。
研究所で再会した時に研究所にやってきた経緯を本人から聞いていたラビリスも、実際に映像として見ると違った印象を受けたのかコロマルの許にやってきて話しかける。
「湊君がコロマルさんの事を認めてたんはあの戦いを見てたからなんやね」
「……そういう意味では八雲と似てる部分があったんでしょうね。勝ち目がなくても、例え差し違えてでも守ろうとするなんて普通出来ないわよ」
湊もコロマルも大切な物を守るためなら文字通りに命懸けで挑むようなタイプだ。
七歌たちは最後の決戦に向けて、そういった覚悟を決めるのに一ヶ月以上の時間を必要とした。
恐らくは死生観の違い。いつかは死ぬものと死を身近な存在として認識しているからこそ、二人はスイッチを切り替える事なく大切な物を守るためなら当たり前のように命懸けで挑めるのだろう。
もっとも、それが良い事なのか悪い事なのかは分からない。
平和な日常を送っている現代人なら、七歌たちのようなタイプの方が圧倒的に多数派なのは間違いない。
ただ、お互いに似たような部分があり、それが切っ掛けとなって強

者である湊がコロマルを認め、一方のコロマルも恩義に報いるため忠義を尽そうとするのを見ると、同じような関係性を築けなかった者たちは羨ましく思ってしまった。
　過去に妹を助けてくれた存在を目標に守るための力をつけてきた真田も、目標としていた人物の求める水準の高さに思わず苦笑を浮かべる。
「美紀を助けてくれたのが有里だと知るまでは、鍛えながらも目標としていた人物に近づけているのだろうかと不安を感じる事もあった。だが、コロマルの戦いを見て分かった。あれは日常に身を置いたままでは手に入らない類いのものだ」
「なんだ。それじゃあ、美紀を守るのはもうやめにするのか？」
「馬鹿を言うな。あいつが嫁に行こうがそれは生涯やめるつもりはない」
「いや、嫁に行ったら旦那に任せろよ。流石に結婚後も嫁の兄がしゃしゃり出てくる家庭なんて嫌だろ」
　美紀を守るのはやめるのかという荒垣のツッコミに、真田は呆れた顔で冗談でもあり得ないと否定で返す。
　まわりで聞いている者にすれば、なんでズレているお前が呆れた顔をしているだと言いたいところだが、ここで口を挿むと厄介な絡まれ方をするので黙っていた。
　そして、ではコロマルの戦いを見て彼が何を考えたのか答えを待っていれば、どこか肉食獣のような獰猛さを感じさせる挑戦的な笑みを浮かべ彼は言った。
「決めたぞシンジ。俺は大学に進学後、ある程度学びながら準備をすれば、武者修行の旅に出る」
「あー……つまり、有里みたいな海外留学をするって事か？」
「そうだ。俺は平和な日本の事しか知らん。だから、海外で武者修行し野生と呼ばれるものを身に付けようと思う。といっても勿論、殺しは無しだがな」
　急にこいつは何を言い出すんだと思った荒垣だが、今の真田の表情はボクシングに出会って貪欲に強さを求めていた最初の頃の雰囲気

にそっくりだった。
元々強さを求める事に対してストイックなタイプなので、真田は目標を定めるとしっかりと計画を組んだ上で実行に移そうとする。
勉強も出来ることから分かる通り地頭は良いのだ。
そんな彼がしっかりと計画を立てて挑戦するというのなら、本気でそれを成し遂げるだけのヴィジョンも見えている事だろう。
相手がどれだけ本気で言っているのか探るように見つめる荒垣に対し、真田は視線を逸らすことなく正面から向き合って続ける。
「結局のところ死生観が違いすぎるのが問題なんだ。なら、荒療治かもしれんが自分の中の常識を一度壊して再構築するしか近付く方法はない。そうすれば、ペルソナだって召喚器無しで召喚出来るようになるはずだ」
「……勢いだけって訳じゃねぇみてぇだな。お前なりに考えての事なら俺に止める権利はない。ただ、海外での活動資金も含めて準備だけはしっかりして行けよ」
「分かってるさ。それに、別に半年とかで旅立つ訳じゃないからな。美紀の卒業を見届けてから、大学二年で行くってのもあり得るんだ。そこまで心配するな」
召喚器は死を意識するための補助装置であり、理屈の上では召喚器無しのペルソナ召喚は誰だって出来るとされている。
実際に巌戸台に来るまでは七歌も召喚器無しで呼び出していたし、ストレガのリーダーであるタカヤも召喚器無しでペルソナを使っていた。
それが出来ないのは自分の覚悟が弱いからだと真田は認識しており、海外に渡って心身共に鍛えてくれば自分も召喚器無しでペルソナを召喚出来ると思っている。
本当にそんな風に成長出来るかは分からないが、真田が本気で目標を定めた事を理解した皿書きは準備だけはしっかりするよう忠告するだけで止めたりはしなかった。
卒業式の日に記憶を取り戻してから以降、真田は前に進んでいると自分に言い聞かせようとしながら、まるで何かを振り払おうとするよ

うにトレーニングと新生活の準備にばかり集中していた。
今回もまた力を求め、その準備を始めるという宣言ではあるが、これまでと違って新たな目標を設定した彼の瞳の奥にはやる気の炎のようなものが見えた。
それはこれまでとは違う健全な形での変化であり、真の意味で新たな一歩を踏み出そうとしているのがハッキリと理解出来るものだ。
無論、その内容が海外への武者修行であることはツッコミ所しかないが、目標としていた人物に近付くため、同じように力を求めて海外へ行くというのはあながち間違いではない。
思い切りが良すぎる仲間に美鶴は苦笑しながら、必要な物があれば言ってこいと彼女のなりのエールを送る。
「明彦、海外へ行くなら英語は必須だぞ。大学の講義とは別に実践的な英会話を習った方が良い。あてがないならグループの者を紹介しよう」
「ああ、その時は頼む。まぁ、その前に有里の行きつけの喫茶店で修業先でオススメがないか情報を集める予定だがな」
いきなり紛争地域に行くつもりはないが、平和な観光都市ばかりを巡るだけでは求めるものは手に入らない。
ならば、そういった目的に合った場所を知っていそうな者から情報を集める必要がある。
湊が通っていた喫茶店〝フェルメール〟のマスターや常連客は、そんな真田の求める地域の情報を集める上では最良の場所だ。
真田が既に色々と考えて計画を練り始めていると分かり美鶴も頷いて返し、他の者たちもこの場所での用事はこれ以上ないと答えると、コロマルの過去や真田の武者修行計画について話ながら寮へと戻ることにする。
仲間と共に現在に囚われ、ダンジョンの奥では過去ばかりを見ていたはずだが、それによって未来に目を向ける者が現れ始めた。
この変化は一部の者にとっては望んでいたものであり、また一部の者にとっては自分を否定されているように錯覚してしまう望んでいなかったものだ。

だが、両者が何を思っていようと既に変化は始まった。今はまだ気持ちの変化でしかないが、その変化は傍にいる仲間たちにも影響を与えるだろう。

期待や不安、それぞれを胸中に抱えながらメンバーたちは寮へと帰っていった。

第四百八十三話　過去との向き合い方

――ポロニアンモール

四つ目の扉ダンジョンを攻略した事でメンバーたちに数日の休みが与えられた。

今の状況になってもうすぐで一ヶ月が経つ。それだけ戦っていると戦闘の感覚もかなり戻っており、最終決戦の時と同等とは言わないがそれに近いレベルで戦えている。

扉ごとに出てくるシャドウの強さにそれほど差はなく、おかげで感覚を取り戻した今ではダンジョンの探索はそれほど苦労しなくなった。

全ての扉を攻略する必要があると言われ、最初はどれだけの時間がかかるのだろうかと心配もしていたが、およそ一ヶ月で残る扉の数も半分を切った。

扉のダンジョンを攻略し始めた当初は全員にブランクがあったためペースも遅かったが、全員が戦える状態になった事で残る扉の攻略はもっと早いペースで行えるだろう。

そうなれば、ようやくこの事件から解放されて元の世界に戻れる。

三年生はそれぞれの進学先へと入学し、他の者たちは新学年へと進級して、皆が望んでいた平和な日常の未来へ歩み出す事が出来るはずだった。

そう。最初はそれを望んでいたはずだったのに、ゆかりは自分が今のこの状況が終わることを怖れている事に気付いた。

（残る扉はあと三つか……。それを攻略したら事件は解決。時の流れも元通りになって、私たちは本当の意味で影時間やそれに関連する事件から解放される。ようやく望んでいた平和な世界を取り戻す事が出来る）

エントランスにある扉を潜って過去のポロニアンモールにやってきたゆかりは、二階通路の手すりにもたれてぼんやりと考え事をしながら広場の噴水を眺める。

最初はこれまで通りに骨董品屋で店番している彼の許へ向かい。

そこで四つ目のダンジョンでどういった事があったか報告がてら雑談するつもりでいた。
彼自身はそうだと認めていないが、他の者たちの話によればここは自分たちの世界に繋がり過去の世界の可能性が高いという。
それだけに、過去の世界の住人であるはずの彼との会話は、自分の知っている彼と話しているような感覚で、久しぶりに彼との会話を楽しめたゆかりは休日になるたび自然と彼の許へ報告に来ていた。
(でも、そんな時間ももうすぐで終わる。ここまで来るのに一ヶ月かかった。十分過ぎるくらい時間はかかってるけど、私たちも感覚を取り戻して攻略がスムーズになってる。なら、急に強い敵が出てくる扉が現われるでもなきゃ一ヶ月かからずに事件は解決する)
考えてゆかりは深い溜息を吐く。誰よりも事件解決を望んでいたはずなのに、今になってこの時間が続けば良いと思っている自分に自己嫌悪する。
本当は心の奥底では分かっていたはずなのに、終わりが近付いてきた事でようやく自分の気持ちと向き合えるようになったと言うべきか、状況に慣れて考えるだけの余裕が出てきたと言うべきか。
(事件が解決すればまた有里君はいなくなっちゃう……)
ゆかりは〝彼がいる〟状態を維持出来る方法はないかとつい考えてしまう。
頭では分かっているのだ。自分たちと同じ世界で生きていた彼は死んでいる。こちらの世界で会えている彼はどれだけ自分の知っている彼に近かろうが、所詮は自分たちの過去に極めて近い世界の彼でしかないと。
だが、それでもゆかりは彼に会えることが嬉しかった。
別れを言うことも出来ず、何が何だか分からないまま戦いが終わって記憶を失い、記憶を取り戻した時にはどうする事も出来ない状態になっていたのだ。
心の整理がついていなかったこともあって、こちらの世界で出会えた事はゆかりにとっては、相手が別人だろうと決戦で別れてから続きなのである。

（今の世界は過去に干渉出来る。こうやって実際に過去にも来れてるし、ここで私がニュクスに関する情報を彼に伝えれば、彼が犠牲にならずにニュクスを倒す方法が見つかって未来が変わる可能性だってある）

メティスの言葉を信じるのであれば今の自分たちは扉を通じて過去に干渉出来る。

歴史改変レベルの事が出来るのか、それともここと同じように限定的にしか干渉出来ないのか、検証するだけの時間がないこともあって詳細は不明だ。

ただ、扉の攻略が進んで来た事でタイムリミットを意識してしまい。徐々に余裕を失いつつあるゆかりはそれが当初の目的と正反対である事にも気付くことなく、本気で現状維持や過去を変えることで歴史改変が出来ないか考え始めていた。

つい先日まではもっと思考にも余裕があったはずだが、とある切っ掛けによってゆかりは自分が本来いるべき元の世界の事を思い出してしまった。

（どうして真田先輩はあんなに楽しそうに未来の事を話せるんだろう。仲間がいないのに、彼だけがその世界にいないのに……）

手すりに置いていた手の上に顔を伏せるゆかりの脳裏に、四つ目のダンジョン最奥での真田の姿が浮かび上がる。

ダンジョン最奥でコロマルと湊の過去を見た真田は、これまで感じていた自分と彼らとの差の正体にようやく気付いた様子だった。

死生観の違いから来る覚悟の重さ。言ってしまえばそれだけの物だが、だからこそ真田はその領域に近付く事で自分と彼らとの間にある壁を一つ越えようとしていた。

それは当然この世界では出来ない。事件を解決した後、準備を整えて武者修行のため海を渡るつもりらしい。

真田も湊の件を引き摺っているはずだった。さも自分は進み始めているといった様子で、悩みを吹っ切るためにトレーニングに逃げていたはずだったのだ。

なのに、彼はこの世界に来て本当の意味で前を向き始めていた。ま

だはっきりとした輪郭は帯びていないが、進むべき方向だけは定まったようだった。
本来ならば仲間が大切な一歩を踏み出した事を祝福すべきなのだろうが、過去に囚われているゆかりは真田の行動が彼への裏切りに見えていた。
彼だけがいない世界なんておかしい。そんな不公平な事などあって良いはずがない。
暗い感情が心の中で渦巻いているゆかりは、再び彼がいる世界で生きていくため、他の者たちに気付かれないよう注意しながらその方法を探し始めた。

――古美術〝眞宵堂〟
ゆかりが一人悩んでいた頃、湊が店番している眞宵堂の店内にはチドリとラビリスの姿があった。
店番をしていると言っても扉には準備中の看板が下げられ、店内が外から見えないよう入口のカーテンも閉めてしまっている。
未来の七歌たちが来てからはずっとこの状態になっているので、テナントの一つがずっと休んでいる事にモール側が違和感を覚えても不思議ではない。
だが、湊は祓魔師や退魔師と呼ばれる異能持ちの血筋であるため、この店に結界を施して他の客の意識を逸らすようにしていた。
おかげで結界が張られている間は誰もこの店を気にしなくなり、客もモールも店が閉まっている事に気付いてすらいない。
まぁ、普通に考えれば一日に同じ集団が何度も店に出入りしていればかなり目立つ。
七歌たちからすれば数日開けて来ているのだろうが、店に来ている間は湊が時流操作で店内の時間の流れを操作し、数時間話していても外界では五分も経っていない状態にしている。
そして、そんな彼女達が帰ってから数時間と経たずに戻ってくるのだ。
どうやら過去へと繋がる扉が自動で湊がいる時間に繋いでいるら

しく、数日ぶりに会って久しぶりと挨拶されても湊にすれば数時間ぶりでしかなかったりする。
今回やってきたチドリたちも湊にすれば数時間前に三つ目の扉をクリアしたばかりだった。
なのに、こちらの時間で数時間経っただけで、彼女達は四つ目の扉をクリアしてきたと報告してきた。
普通ならそんなに速くクリア出来るものかと疑うところだろう。
しかし、湊は時の流れがズレていることにも気付いており、パソコンで仕事をしながら適当に相槌を打ってチドリらの報告を聞いている。
「んでな。四つ目の扉で見えたんはコロマルさんの過去やったんよ。湊君と一緒に神社の前でシャドウ倒した時の映像やってんけど、湊君はそれ覚えとる？」
「……犬が初めてペルソナを召喚した時のだろ」
「そうそう、それそれ。七歌ちゃんとチドリちゃんも適性とか本格的にペルソナに目覚めたタイミングやったし。コロマルさんの過去で扉が見せてくる映像の共通点もほぼ確定したんよ」
元からそういった可能性については七歌たちも触れていたが、コロマルの過去が初めてペルソナを召喚した時のものだと分かり、扉が見せてくるのはメンバーたちが力に目覚めた切っ掛けだと判明した。
残る扉はメンバーの人数よりも少ないが、それらも恐らくはメンバーの誰かの過去を見せてくるに違いない。
どうして力に目覚めた切っ掛けの映像を見せてくるのか。その部分についてはまだ分かっていないものの、共通点があると言うことは何かしらの意味があるはずだ。
今頃、まだ寮の方に残っている七歌や美鶴が風花と一緒に考察し、今後のダンジョン攻略も含めて作戦を練っているに違いない。
ただダンジョンを攻略するだけで事件が解決するならいいが、恐らくはそう簡単には解決しない。
これまでの経験でそれが分かっているからこそ七歌たちは〝ダンジョン攻略後〟に起きる事を考えている。

ならば、自分も仲間の一人として情報でも集めるかとチドリも口を開き質問する。
「……それで、貴方の見解は？　今後誰の過去が見えるはずだとか、そんな物を見せてくる意図だとか何か分かることはある？」
「ダンジョンの奥に行けば答えが分かるのにここで聞く意味があるのか？」
「場合によっては意味があるかもしれないでしょ」
ＥＰ社の仕事を進めている湊は会話が面倒らしく、ここで聞かなくてもどうせダンジョンの奥に行けば答えが分かるんだぞと諦めさせようとする。
しかし、チドリたちは時の狭間の事も含めて今回の事件で分かっている事が少ない。
今のところは問題なく攻略を進められているが、もしかすると次に選んだ扉のダンジョンに恐ろしく強い敵がいる可能性だってある。
そのため、どんな些細な情報だろうと持ち帰れば事件解決の役に立つかもしれない。
チドリ自身はそこまで深く考えるつもりはないものの、メンバーの中にはそういった情報の断片から正解に辿り着ける者もいる。
今回はそんな仲間のために情報を求めた訳だが、小さく溜息を吐いた湊はパソコンの画面から顔をあげずに淡々と答えた。
「候補としては美鶴さん、ラビリス、アイギスの三人だ。理由は他のメンバーが力の覚醒に立ち会っていないから」
彼が答えるとやはり自分たちでは見えていなかった物が見えていたかと、優秀なくせに面倒臭がりな青年に対しチドリは呆れる。
ここまで過去が見えたのは七歌とチドリとコロマルだけだ。まだ選ばれていないメンバーの方が多いというのに、そこから三人をキッチリ選ぶあたり彼はかなりの確度を持って告げているに違いない。
紅茶を飲みながら彼が三人の名を挙げた根拠を聞いたラビリスは、隠れた共通点があったことに驚いて聞き返す。
「え、そういう部分も関係あるん？」
「絶対じゃないが今のところはそこも共通してるだろ。先輩たちは勧

誘後にラボや寮で召喚しているし、二年生組や天田は他のメンバーの前でペルソナ召喚を済ませていたはずだ」

言われてみれば確かにそうだと、ラビリスとチドリが頷きながらテーブルの上のクッキーに手を伸ばす。

小さな口に運んでサクッと音をさせながらかじれば、バターの香りと優しい甘さが口の中に広がる。

一見どこにでも売っていそうなシンプルな見た目のクッキーだが、少女らのお茶菓子にと彼が出してきた事もあって恐らく高級品だ。

シンプルなバタークッキーは子どもでも簡単に作れるお菓子だけあって安物でもそこそこ美味しかったりする。

だが、シンプルなお菓子だからこそ味や香りなど他との違いがあればそれがハッキリと分かる。

残り半分も口に放り込み、彼が淹れてくれた紅茶と共に味わってほっこりとしたラビリスは、いや少し待てと先ほどの彼の言葉にツッコミを入れた。

「いや、こっちの世界じゃ天田君まだペルソナ目覚めてへんやろ。なんで知っとるん？」

そう。湊はメンバー全員のペルソナ覚醒時期について言及していたが、天田がペルソナに目覚めたのはアイギス加入より後の七月二五日。

湊のいるこちらはまだ六月中なので、一ヶ月以上先に起きる事をここにいる湊が知っているのはおかしいのだ。

湊は血筋の関係か未来視に近いレベルで結果を当てる占いが得意ではある。

それはベルベットルームの住人であるマーガレットが認めるほどで、誰かに頼まれた時に気まぐれで占うだけで基本的には何も占おうとしないが、それを使えば彼なら特別課外活動部の新メンバーの加入時期などを当てられても不思議ではない。

だが、彼はそんなオカルトに頼るタイプではないため、ではどうやって知ったのかと少女らは視線で話すように促せば、パソコンから顔をあげた湊は薄い笑みを浮かべるだけで答えなかった。

小さくイラッとしたチドリはこの反応はやはり占いではないと判断し、ならばと次に可能性の高い他人の心と記憶を読む力を自分たちに使ったのかと彼に尋ねた。
「私たちの記憶を覗いたの？」
「いや、普通にアイギスが教えてきた。ニュクスとの戦いより前の情報は話すなと言っていたんだが、加入時期くらいなら問題ないと思ったらしいな」
「なら普通に答えなさいよ。意味深に笑って馬鹿じゃないの」
彼だけが持つ特殊な力を使ったのかと思えば、真相は自分たちの仲間が彼に情報をリークしていただけだった。
湊にとっては未来の出来事を話しすぎるとそれに合せようとして湊の行動が変化し、この世界の未来がチドリたちのいる世界と繋がらない可能性がある。
チドリたちが辿り着いた未来は僅かな犠牲を払ったものの、湊が望んだ結末に極めて近い平和な世界だ。
そのため、湊はニュクスに勝ったその世界線へ繋がるようにと、最初に会った時点で出来る限り未来の情報を拒否していた。
どうしてそんな相手にアイギスが未来の情報を伝えたかと言えば、湊とは離れた場所の出来事であり、知っていても影響がないだろうと思って伝えただけに過ぎない。
それを聞いた少女らは何をしているんだとアイギスのある意味危険な行動に呆れつつ、脱線していた話を戻す。
「それで、どうして扉が過去を見せてくるのかは分かる？」
「さてな……」
興味なさそうに肩を竦めて再びパソコンに視線を戻した青年に、チドリは近くに置いてあった木彫りの猫を投げつけようとする。
だが、それはちゃんとした売り物であり、栗原に迷惑がかかるからやめておけとラビリスが腕を掴んで止める。
変なところで人をからかってくる相手だけあって、理由に気付いてしらばっくれているのか本当に分からないのか判断がつかない。
もっとも、理由がどちらであっても彼の態度が舐めくさっているの

で、質問した側にすれば煽られているようにしか感じないのが厄介なところだ。
昔からの付き合いだけあって、彼に対してはすぐ感情的になる少女をなんとか宥めて木彫りの猫が元の位置に納まると、選手交代だとばかりにラビリスが質問をぶつける。
「ほんなら、事件解決に過去の映像を見ることが関係してるかは教えてや」
「……解決には関係ないんじゃないか？　過去の映像が見えるのは、時の狭間の持つ力に事件を起こしたお前たちの力が干渉したからだと思うぞ」
「じゃあ、私たちを事件に巻き込んだ黒幕はいないってこと？」
「巻き込まれた立場ではあるが、お前たちが力を持っていた事が原因で起きた事故だからな。そういう陰謀的な物はないと見て良いだろう」
黒幕が何かをするために過去を見せて誘導している可能性を疑っていたが、湊はチドリらの巻き込まれた事件はどちらかと言えばただの事故だと告げる。
ダンジョン最奥の扉が見せてくる映像に共通点があった事で深読みしたのだろう。
それを察して湊はただの思い出巡りと割り切っても良いと思うぞとアドバイスする。
「……見せてくる映像に意味がないとは言わない。ただ、それらは通過点だ。最後の扉を攻略した時に現われる未練に打ち勝てば事件は解決出来る。お前たちはその戦いに備えて力を取り戻せばいい」
「そんな簡単な事やないと思うけどな」
「そうね。原因が偶発的な物でないとすれば、下手をすればまた同じような事件に巻き込まれる可能性もある訳だし」
真面目に考えている二人に湊は「それも考えすぎだ」と小さく笑って仕事を再開する。
今回の件は影時間消滅がトリガーになっており、その時に残った力が自然消滅する前に一箇所に集まっていたペルソナ使いたちの力に

反応しただけだ。
そんな規模の力などそう簡単に発生する訳もなく、そこにペルソナ使いたちが偶然居合わせる可能性も低い。
何者かの意思によって彼女達が集められたり、引き寄せられて事件に巻き込まれる可能性はあるが、最初からそれなりに強い力を持っている彼女達であれば相手の干渉を拒めるはず。
故に、あくまでこれは影時間に関わる〝最後〟の事件。未来にそれが起こると分かった青年はどこか嬉しそうな様子でパソコンに向き合っていた。
それを見ていた少女らはこれ以上彼から情報は貰えそうにないと諦め、お菓子と紅茶を楽しむとしばらくして寮へと帰っていった。

第四百八十四話　哀の路トロメイア

――タルタロス・エントランス

深夜零時、世界が緑色に塗り潰されて現われた奈落の塔。

その入口から真っ直ぐ伸びた通路を通って黒服の男たちがエントランスにやってくる。

扉や階段のある中央のエリアのまわりには闇の広がる穴が開いており、中央のエリアと入口から伸びる通路を除いて床は存在しない。

左右に闇の広がる通路に手すりなどはなく、足を踏み外して落ちてしまえばどうなるか分からない。

故に、黒服の男たちは慎重に通路を進み、そんな黒服たちに囲まれて歩く眼帯を付けた男性と頭の左右に縦ロールの髪を垂らした幼い少女もゆっくり確実に歩を進めた。

「ここがタルタロス……」

エントランス中央の広いエリアの到着した黒服の一人が周囲を警戒しながら呟く。

金色の巨大な懐中時計のようなゲートに繋がる上階の階段に、何のためにあるのか分からない柱時計のような物や巨大な扉など、やってきた者たちは場の空気も含めて不思議なこの場所を観察する。

先に調査のためここへ訪れた仲間の話によれば、エントランスは不思議なオブジェなどが並んでいるものの、この不可思議な時間帯にのみ現われる敵性存在などは確認されなかったという。

だが、階段の先にある巨大なゲートを潜るとその先には化け物たちが跋扈しているため、護衛を務めるなら先の階層へは進むなとの事だった。

黒服たちに守られながら中央のエリアに足を踏み入れた眼帯を付けた男性〝桐条武治〟と赤みを帯びた縦ロールの髪型をした少女〝桐条美鶴〟は、ここが先日の事故から発生するようになった影時間に現われる異形の塔の内部かと興味深そうに眺めている。

報告にもあった通りオブジェや階段の後ろなどを見ても何もいない。

黒服たちは桐条たちを守ってこのまま警戒を続けるようだが、一応の安全が確保された事で彼らについて一緒にやって来ていた白衣を着た研究員の男が口を開いた。
「ヒヒヒ……オブジェや内装の造形は理解出来るが、おそらくそれらを構成する材料は我々の知る物ではないのだろうなぁ」
白髪混じりの長い髪を雑にヘアゴムでまとめた研究員は、白衣のポケットから工具のノミと小さな金槌を出し、二つを使って床の一部を壊そうとする。
だが、金槌を振るってもノミは床に刺さらず、その表面を滑るだけでサンプルの回収は難しそうだった。
頑張って床に対して垂直に立てて、しっかりと狙いを付けた上で何度か試すもノミは弾かれるか滑るだけで床に傷を付けることすら出来ていない。
見た目はそこまで硬度のある石材には見えないのだが、そもそもここは普通の建材を使って建てられた学校が影時間になると同時に姿を変えた建物だ。
自分たちの世界には本来存在しない謎の物質で出来ていても不思議ではない。
しばらく頑張ってもどうにもならないと分かったのか、研究員は持って来た工具をポケットに仕舞い込み、新たに取り出した掌に収まるサイズの拡大鏡を使ってオブジェを見てまわり始める。
自分たちの所属する組織の総裁とその令嬢がいるというのに、ここまで勝手な行動を取る研究員に黒服たちが眉を顰める。
「おい、あまり動き回るな。お前の勝手な行動が引き金となって、御当主とお嬢様にもしもの事があったらどうするんだ」
「その時はお前たちが身体を張って守ればいい。そのための護衛だろう？　ククク、どうせならシャドウの実物も確認しておきたいんだがなぁ。通常兵器が効かない以上無理は出来ないか」
柱時計型のオブジェを見ていた研究員は、動き回るなと言ってきた黒服につまらないことを言うなとばかりに小馬鹿にした口調で返す。
黒服たちは研究員に言われずとも有事の際は命に代えても二人を

守るつもりだ。
しかし、敵は通常兵器が効かないのは勿論、特殊な力に目覚めた者の攻撃しかダメージを負わないという。
黒服たちは自分勝手な行動を取っている研究員の所属するエルゴ研の研究成果によって、今いるこの影時間で活動出来るだけの適性は得ている。
だが、研究員が先ほど口にした〝シャドウ〟という異形の化け物への対抗手段である〝ペルソナ〟には目覚めていない。
それ自体の存在は確認されており、先の事故より前にはペルソナを人工的に獲得させた兵器を実戦にも投入している。
けれど、ペルソナが確認されたのはそれだけだ。影時間の適性を得た者はいてもペルソナにまで目覚めた者はいない。
ただし、実戦に投入した兵器に記録されていた映像が確かであるならば、影時間に一切関わりを持たなかった一人の少年が、影時間という環境に適応して力の覚醒にまで至っているとの報告が上がっている。
グループに回収されたその子どもが使えたなら研究はもっと楽に進むのだが、残念な事に対象の意識が回復していない。
そんな事情もあって、今日は適性の自然獲得者であり事情を知っている美鶴をこうやって現場に連れて来て反応を見ていた。
力に目覚めれば最高だが、そうでなくても何かしらの影響があれば後の覚醒に繋がるかもしれない。
研究員はそう考えて出来るだけこの場にいる時間を引き延ばそうと、勝手な行動を取るフリをして美鶴の様子を観察していた。
対する美鶴は父の傍で大人しくしながらも不思議そうに周囲を見渡している。
どこまで続いているのか分からない穴や、明らかに人の手では作れないようなオブジェなど興味を惹く物は多数ある。
まわりで警護している黒服たちは落ち着かないのかソワソワしているが、美鶴は不安そうにしながらもどこか好奇心を刺激されている様子だ。

今回は何もなさそうだが、精神的な影響なり適性への刺激はあったはず。ならば、今後の経過を見ることにして今回は諦めるかと研究員が思った時、黒服の内の一人が何やら胸を押さえて苦しみ始めた。
「おい、どうした？」
最も近くにした別の黒服が警戒しながら声をかけるも、苦しむ黒服は何も答えず地面に膝を着く、すぐに異変を察知して桐条と美鶴を守るように他の黒服たちは前に出て構えた。
「う……うぅ……が、がぁぁぁぁぁぁっ!!」
そして、苦しんでいた黒服が突然頭を押さえて叫ぶと黒い靄が身体を覆い尽くし、全身が靄に覆われるとそこには水色の仮面を付けた黒い粘性の身体を持った不気味な化け物がいた。
黒服も桐条たちもグループの研究所でそれを見ていたから知っている。
現われたのはシャドウ、影時間の中で生きる異形の化け物だ。
「くっ、総員構え！　御当主とご令嬢を死守せよ！」
どうして黒服の一人からシャドウが現われたのかは分からないが、黒服の中で最も経験の長い者が指揮をとって二人を守ろうとする。
苦しんでいた黒服は現われたシャドウの背後で気を失って倒れており、シャドウは人数の多いこちらを狙っているためしばらくは無事だと思われる。
ならば、自分たちは何としてでも二人を守らねばと黒服たちは拳銃を抜いた。
エントランスに何度も響く銃声、放たれた弾丸は確実にシャドウに当たっており、仮面に当たった時には衝撃音まで鳴っている。
しかし、敵は怯まない。当たっているのにダメージが通らず、ゆっくりではあるが近付いて来ている。
「そんな玩具がシャドウに通じるものか！　通常兵器は効かないと言っただろう！」
「五月蝿い黙っていろ！　動けるならお前は御当主とご令嬢をすぐに連れて逃げていろ！」
離れたところから研究員がヤジを飛ばしてくるが、シャドウに武器

が通じないことなど既に気付いている。
だが、黒服たちは他に武器を持っていないのだ。
徒手格闘が効くのであれば今すぐにでも拳銃を投げ捨てて喜んで身体を張ろう。そう思うくらいには既にいっぱいいっぱいな状況になっている。
最悪な事にシャドウは入口に通じている通路側に現われてしまった。
このままでは桐条と美鶴を逃がすことが出来ないので、出来る限り自分たちがシャドウを奥へと引き寄せて、その隙に二人には回り込んで逃げて貰うしかない。
ハンドシグナルでその作戦を伝え、黒服たちが集まりつつ、桐条たちに逆方向へと移動して貰おうとしたとき、これまでゆっくりと近付いてきていただけのシャドウが勢いよく飛びかかって黒服の一人を殴り飛ばした。
「ぐあっ」
シャドウは飛びかかって殴っただけだ。それなのに殴られた黒服は数メートル吹き飛んで地面に転がる。
生きてはいるようだが、殴られた腕がおかしな方向に曲がっている。
ただ殴られただけで骨折するほどの威力。そんな力を持つ者に攻撃手段もない状態でどうやって対処すればいいと言うのか。
一同の心に絶望が広がりかけると、シャドウは次の狙いを桐条に定めたのかゆっくりと近付いてくる。
自分が狙われていると気付き、桐条はすぐに自分を囮にして傍にいた美鶴を逃がそうとする。
だが、父が娘を想うように、娘も父のことを想ってその身をシャドウの前へと動かしていた。
「危ない、お父さまっ!!」
両手を広げて父の前に立った美鶴の全身から光が立ち上る、半透明な水色の欠片が渦巻き少女の頭上に人型の何かが現われると、その腕を一閃させて敵であるシャドウを消し去った。

目の前で起きた出来事に他の者が呆然としていると、光が消えた途端に少女が倒れ込んだ事で慌てて桐条がその身体を受け止める。
脅威は去った。だが、先ほどの美鶴が発動した力はその脅威と戦えてしまう力だ。
適性を得た時点でその可能性にも気付いていたが、実際にそれが起きた事で桐条が険しい表情をしていると、酷く興奮した様子の研究員が声をかけてくる。
「やりましたな、御当主！　やはり、鍵はこの年代の子どもたちが握っている。適性を得た子どもならばペルソナに覚醒するという推論は正しかった！」
回収された少年〝エヴィデンス〟、そして今回の美鶴。サンプルは二人だけだが、影時間に適応した子どもならばペルソナに覚醒し得るという推論の根拠を補強する結果なのは間違いない。
シャドウに対抗出来るのはペルソナだけだ。なら、今後は適性を持った子どもや、適性を与えた子どもを研究すればペルソナ獲得のメカニズムも判明するはず。
興奮してまわりが見えていない研究員がそんな事を口にしながら美鶴を讃えていれば、美鶴を抱き抱えていた桐条は鋭い眼光で研究員を睨み叱責した。
「何を喜ぶかっ!!　全ては我々大人の罪だ。その贖罪を何の罪もない子どもらにさせようと言うのだぞ！」
確かに今回の発見はシャドウとの戦いに有利に働く。対シャドウ兵器を除き対抗手段を持っていなかった人類にとっては何よりの朗報だ。
しかし、それは自分の娘も含めた子どもたちを人類存続のため犠牲にするというもの。
悔しそうに拳を握る桐条が娘を心配して見つめていれば、先ほどよりも呼吸が安定した様子の美鶴が目を開けて小さく笑って呟いた。
「……心配なさらないで、お父さま。全て分かっていて決めたことですから」
「美鶴……」

それだけを呟くと美鶴は気を失ったのか身体から力が抜けた。
桐条は気を失った美鶴を抱き上げると、今日は引き上げると言ってタルタロスを後にする。
怪我をした黒服たちも仲間に支えられながらエントランスを出ていき、そうして誰もいなくなったところで映像が終わった。

――哀の路トロメイア

視界が戻ってくると全員がお互いを見合わせて無事を確認する。
ただ過去の映像を見せられているだけだが、本当にそれだけで済むかは分かっていないのだ。
とりあえず、全員の無事が確認出来たところで、先ほどの見た美鶴の過去についてゆかりが尋ねた。
「今のって美鶴先輩が初めて力に目覚めた時のですか？」
「ああ、そうなるな。私は影時間の適性は自然に持っていたんだ。そちらはいつからなど明確に手に入れた時期は分かっていないが、ペルソナについては先ほどの映像の通りだ」
メンバーの中で人工的に適性の強化やペルソナの覚醒処置をされたのはチドリだけだ。
他の者たちは時期は違っても自然に適性を獲得し、そのままペルソナにも目覚めている。
しかし、当時は自然に適性を獲得する者も珍しく、グループの報告書によれば美鶴で二例目だった。
空気が読めていなかった研究員だが、そういった当時の事情を考えればあの喜びようも理解出来る。
改めて当時の光景を見た美鶴はどこか懐かしむように笑って、戦いの決意もこの時だったと続けた。
「思えばあれがお父様のために戦いたいと決意した瞬間だったのかもしれない。自分にはお父様を守る力がある。他の事は出来なくても戦う事だけは出来る。事故の後、辛そうにしているお父様の力になれないことを悔いていた時期だった事もあって余計にそう思ったんだ」
「この時点では公式には美鶴さんしかペルソナ能力者はいなかったん

だよね？」
「そうだ。八雲の存在は隠されていたし、アイギスたち対シャドウ兵器も稼働しているものはなかったと聞いている」
七歌の質問に美鶴は頷く。対シャドウ兵器の存在を知ったのはアイギスと出会って以降だが、それから調べたところアイギスの再起動を除き、ポートアイランドインパクト以降に稼働していた機体はなかった。
回収されていた百鬼八雲という少年は存在ごと隠され、虎の子の対シャドウ兵器もなかった時期に美鶴が覚醒したことで研究は次の段階に進んだ。
そう。大勢の子どもたちが犠牲になった人工ペルソナ使いの研究が行なわれたのはこの後だ。
湊と美鶴、二人の存在によって近い年代の子どもたちが集められ、大人よりも簡単に適性を得る事が出来たために、その中から特に適性の高いおよそ百人にペルソナ覚醒を促す処置が施されたのである。
エルゴ研で湊と出会うよりも前の記憶をほとんど覚えていないチドリにすれば、映像内の美鶴の見た目から逆算してそういえばそれくらいの時期だったかも程度の感想だ。
だが、やはり美鶴は自分たちのせいでという意識が強いらしく、自分が実験の切っ掛けを作ってしまった事をチドリに謝罪した。
「すまない、吉野。実験の切っ掛けを作ってしまったのは私だ。せめて、八雲が目覚めて話を出来る状態になっていれば被害者はもっと少なかったかもしれない」
「……そうなれば、おそらく八雲が酷使されてたわ。君にしか出来ない、君だけが人々を守れる。そんな風に言って八雲が死ぬまで一人で戦わされていたでしょうね」
「ま、八雲君にはそれが出来ちゃう能力もあっただろうしね。難しい問題だなぁ」
百人近い子どもの犠牲を生む未来か、一人の少年を使い潰す未来か。どちらもまともな未来とは思えない。
ただ、そのどちらかを選べと言われれば、自分も被験体になってい

たチドリは前者を選ぶと断言出来た。
「あの実験がなければ八雲に会えなかった。だから、私はこれでいい」
「君たちも、八雲も救われる世界があったとすれば?」
「……今を選ぶわ。だって、それはここにいる私の人生じゃないもの」
子どもたちも湊も犠牲にならないルートの世界があったとしても、チドリは苦しんで辿り着いたこの世界を選びたいと思った。
湊にとってはどちらが幸福なのか分からないが、ここにいるチドリにとっては八雲と出会えた奇跡とそれから得られた幸福は何事にも代え難い尊いものなのだ。
故に、そんな世界があったとしても自分は今いるこの世界を生きたい。少女はハッキリと断言した。
その答えを聞いた美鶴は少しだけ驚いた表情をすると、すぐに楽しげに笑って確かにと頷く。
「そうだな。苦しく辛い事だけではなかった。掛け替えのない出会いという幸福を手放すのは私も惜しい」
マイナスばかりに目を向けても意味はない。それを無かった事に出来るとしても、その選択は被害者の救済より自分が罪から赦されたいという想いが勝っているように感じる。
美鶴はそれではダメだと思い直し。罪を背負い、得られた幸福に感謝しながら、罪を償っていくべきだと考えた。
自分の原点を振り返った美鶴の瞳に強い光が宿る。記憶を取り戻して以降、久しく見ていなかった〝女帝〟の姿に他の者も思わず笑みを浮かべる。
残り扉は後二枚。ここまで順調だったからと油断せず、気を引き締めていこうと声をかけて一同は寮へ戻っていった。

第四百八十五話　真田たちの懸念

――巌戸台分寮

探索明けの休日。昼前に日課の筋力トレーニングを終えて一階へと下りてきた真田は、そこにいたメンバーを見て珍しく二人しかいないのかという感想を抱く。

キッチンに面したカウンターテーブルで昼食を食べている荒垣、奥のソファーに座って紅茶を飲みながら本を読んでいる美鶴。

過去の世界に行くことが出来ない綾時は自室にいるのかもしれないが、昼時と言うこともあって何人かが昼食を摂っていると思っていただけに、今日は随分と寂しい様子だなと軽口を叩く。

「なんだ。お前たちだけか。あいつらは全員向こうに行っているのか？」

荒垣の後ろを通ってキッチンに入った真田は、持って来たボトルにプロテインの粉と水を入れて蓋をすると慣れた手つきでシェイクする。

彼が今作っているのは中学の卒業祝いに湊から貰った〝ディーププロテイン・サード〟の進化形、世界中のトップアスリートに多くのファンを抱える〝オーバープロテイン・セブンス〟だ。

少し時間を置いてから昼食も食べるので、その間を持たせる意味も込めてボリューム感を感じる〝リッチショコラ味〟を選んだが、パッと見ではアイスココアにしか見えない飲み物を大きなボトル満タンに入れて持って来た真田に荒垣は本当にアスリート用の飲み物かと疑いつつ他の者たちの居場所を答えた。

「何人かはお決まりの〝報告会〟に行ってる。九頭龍と順平は望月の分も含めた買い出しだ」

「……そうか。残る扉も二つだが、あいつらは大丈夫なのか？」

お決まりの報告会だと聞いて、真田はプロテインを飲みながら僅かに視線を俯かせる。

彼はコロマルの過去の映像をみた事で足りない物を自覚し、より高みを目指して目標である湊に近付くためにも事件を解決しようと決

意した。
だが、そうやって前を向く事が出来たのは、幼少期に妹を助けてくれた恩人の背中を追い続け、その行為自体が真田という人間を構成する支柱になっているからだ。
一時は彼を疎ましく思い、憎しみにも似た感情を抱いていた事もあったが、全て自分の幼稚さが原因だと気付いて反省してからは大切な仲間の一人だと思っている。
しかし、大切な仲間の一人ではあるのだが、他のメンバーが共に戦い助け合う存在であるのに対し、彼の事はその在り方を含めて敬意を抱きながらも、いつかは追い付き超えるべき目標として捉えていた。
おかげで真田は今も彼に会いに行っている者たちのように、どうにかして彼が犠牲になる運命を変えられないかと考える事が出来ない。
一人で犠牲になったと知った卒業式の日には悔しさと怒りを覚えたが、それはあくまで戦う仲間に何も言わなかったという行動に対しての不満であって、一人の犠牲で世界が救われたという結果に対する不満ではないからだ。
今も彼の事を想っている者たちにすれば、真田の考えはとても薄情に見える事だろう。
本人もこれは自分が湊の在り方に憧れがあるせいだと自覚しているため、それをわざわざ口に出したりはしない。
ただ、残る扉が二枚になった事で、そろそろ現実と向き合わせる必要があるのではないかと真田は考えていた。
そのため、今後について危惧しているのは自分だけじゃないよなと確認の意味も込めて尋ねれば、離れた場所に座っていた美鶴にもその声は聞こえていたらしく、読んでいた本を閉じて彼女も口を開いた。
「その点については私と七歌もずっと考えていた。おそらく望月も気付いて心配しているところだろう」
「ま、あんだけ分かり易い態度見てたら誰だって気付くだろうぜ」
真田が危惧していた事については他の者たちもしっかりと気付いていた。
最初に過去の湊との接触は出来る限り最低限にしようと決めてい

たのに、いつの間にかダンジョン攻略の報告と称して休みの度に会いに行くのが当たり前になっているのだ。
これで気付かないのは報告に行っている当人たちだけだろう。
物資の補給もあるので会うのがダメという訳ではないが、会いに行くこと自体が目的となっているのなら止めなければならない。
なにせ彼は自分たちから見て過去の世界の存在。今回の事件が解決すれば会うことは出来なくなるのだから。
あまり大声で話す内容でもないため、美鶴が紅茶のカップと本を持ってキッチン側のテーブルへと移動してくる。
キッチンに面したカウンターで食事をしていた荒垣はそのまま、近くのテーブルに座っていた真田の正面に美鶴が座ったところで改めて真田が尋ねる。
「それで、危険なのは何人だ」
「報告会の参加者全員と言えば全員だが、ゆかりとアイギスと吉野が要警戒対象といったところか」
「山岸とラビリスは違うのか？」
「ああ、他の三人ほどじゃない。山岸は友人や仲間への感情、ラビリスは色々と読みづらいが自分以上に彼に執着している妹がいるからな。一歩下がって見るだけの余裕があるといった感じだ」
こういったものは同性の方が敏感に察知出来る。そう思って真田が尋ねれば、真田が思っていた以上に美鶴はしっかりと仲間たちの事を見ていた。
十月の満月戦で湊が死んだ時に数日休んでいたアイギスとチドリが要警戒対象なのは分かる。
彼が二人を大切に思っているように、彼女達にとっても湊は特別な存在であり、その絆は契約として認められるほどだ。
だが、その二人に加えてゆかりも要警戒対象だと聞いた真田は、彼女が既に前を向いて動き始めていると思っていただけに、どうして彼女も含まれているのかと聞き返した。
「岳羽は次の進路について考えたりと動き始めているんじゃなかったのか？」

「そこについては有里も指摘していただろう。今のゆかりは無理に前を向いて心を誤魔化していると。私も進学の準備や引っ越しの用意があってあまり会えていなかったが、無理をしているのがすぐに分かったから見かけた時には声をかけるようにしていたんだ」

最近のゆかりは進路指導室で進学先の大学を調べたり、学校がない時には出来るだけ予備校の講義や自習室での勉強に打ち込んでいた。

春休みが明けたら三年生となり、推薦入試を受けるならその準備と対策を、一般で受けるならセンター試験に向けた勉強をしなければならない。

事前に湊が〝迷惑料〟として桐条グループにお金を預けており、予備校の授業料や進学後の学費などはそこから出して貰えるため、ゆかりは出来るだけ志望校への合格実績がある場所を選んでほぼ毎日予備校に通っていた。

三年生になるからと受験モードに頭が切り替わったのならいいが、あまりの変化と最近の彼女の雰囲気から無理しているのは一目で分かった。

そのため、美鶴はゆかりに会えた時には声をかけて、最初から無理に詰め込むと長続きしないぞと休みを挿むようにも言っていたのだ。

だが、そんな彼女のアドバイスは受け入れられなかったらしく、ゆかりはこの巌戸台分寮や仲間たちと距離を置くように予備校に通い詰め、それを邪魔するように事件に巻き込まれた当初はここ最近の中でも特にピリピリとしていた。

あそこまでピリピリとした態度をとられると、流石に周囲も気を遣って雰囲気が悪くなる。

他の者たちはそこでゆかりの変化にも気付いていたというのに、どうして一人だけ気付いていないんだと荒垣が呆れた顔をする。

「なんであんな分かり易い態度に気付いてねぇんだよ。他の奴らが普段通りだったとは言わねえが、岳羽の雰囲気の変わり様は他の比じゃなかっただろうが」

「俺はそもそも会ってないんだ。気付きようがないだろ」

そんな風に責められたところで真田としても会っていなければ気

付けないと反論する。
真田とて後輩たちの事を気にしていない訳ではないのだが、自分の進学準備を進めつつ、以前とは異なる生活スタイルになっている後輩らと話す時間を確保するのは難しかった。
この寮は三月末を持って閉鎖される事になっており、卒業をもって出ていくことが決まっている三年生たちだけでなく、他の者たちも一般寮の方へと引っ越す予定だ。
荷物を整理して捨てていたり、忙しそうに段ボールに詰めているのを見て長々と雑談しようとは思えない。
そうして、こんな事件が起きてしまった事で、真田はゆかりの変化に気付かすに来てしまった訳だ。
それを聞いた美鶴と荒垣は気付いていても何も動けなかった自分たちも同罪と考え、今後について建設的な事を話そうと提案する。
「まぁ、誰一人として悩みを聞いてやれていなかったんだ。気付いていようと動けなかった以上は同罪だ。だから、今は今後の対策について話し合おう」
「あり得るのは事件を解決しないってとこか？　地下にシャドウのいるダンジョンはあるが、あいつらは別に扉を潜って出てきたりはしない。補給も可能になったことでただ暮らしていくなら不便はないからな」
今後、要警戒対象の少女たちが起こしそうな事について荒垣が予想をつける。
寮とポロニアンモールを行き来する事しか出来ないものの、普通に生活していく上でこれといった不便は感じていない。
食べ物などに飽きれば湊に頼めばポロニアンモールでは手に入らない食材等を入手してくれるため、変わらない景色に目を瞑れば食生活もしっかりと変化に富んでいた。
そう。最初はこんな生活がいつまで続くんだと不安にもなったものだが、一月ほど今の生活を続けた事で慣れてきており、今の状況に大きな不安や不満を持っている者はいなくなっていた。
荒垣の言葉に同意する形で頷いた美鶴は、彼に会いに行っている少

女らの願いもそれで叶うだろうと考えを言葉にする。
「有里は明言を避けているが、恐らくあちらは私たちの世界に繋がる過去だ。お互いの過去の話に共通点があり過ぎる。おかげで彼女達も自分の知っている有里と思って接している」
「今後向こうが別の未来に分岐したところで今のところは同じだからな。自分たちの知っている有里というのも間違いではないだろ」
「ああ。だが、今回はそこが問題なんだ。自分たちの知っている有里と同一存在の可能性が高いからこそ、彼女達は心の奥底で過去の有里でも構わないと思ってしまっている。彼女達の目的は有里と共にいることだからな」
見た目が同じだろうと完全に別人だと分かるような相手ならば問題はなかった。
例えば結城理だ。幾月たちと共にいた結城理は遺伝子レベルで湊と同一人物であり、血に宿った記憶がクローンの人格を上書きした事で同じ過去の記憶を持つ存在になっていたが、デスとの戦い以降の生き方が全く違った事で完全に別人としての自我を確立していた。
そのため、彼と言葉を交わした者たちは湊に似た部分もあるが明らかに別人だと分かって接していた。
今回も、そんな風に別世界の湊が相手ならゆかりらも事件を解決する事に悩むことなどなかっただろう。
だが、自分たちの知る彼と同一存在と出会ってしまったために、彼女達は彼が死んだ元の時代に戻るくらいなら、過去の存在だろうと彼に会える現状の方が良いと思い始めている。
いつまで寮が無事かも分からない状況だというのに、流石にそれは受け入れられないと真田は告げる。
「今はまだ状況が安定しているが、ここがいつまでも無事と決まった訳じゃないんだろう？　下手をすれば過去への扉が消えて、どうしようもなくなる事だって考えられる。安定した状態にある内に事件を解決するべきじゃないのか」
「私と七歌の意見はそれで一致している。というより、七歌が相談を持ちかけた有里も早々に事件を解決すべきだと言っている。下手を

すれば繋がっている事で二つの世界が共倒れになる危険があるらしい」
過去の湊がいうには、限定的ではあるものの二つの世界が繋がっている今の状況はかなり危険らしい。
時の狭間の力が七歌たちの願いを叶えるために現代の寮と過去のポロニアンモールを扉で繋ぎ、結界内部だけで活動を許可する形で過去に来られているが、時の狭間の力で作られたその結界がいつ崩れるか分からない。
もし、七歌たちが過去の世界にいる状態で結界が崩れとき、過去の世界にいる七歌たちは元の世界に強制的に帰還させられるのか、それとも過去の世界に残ったままになるのか、はたまた時空の彼方に消え去ってしまうのか一切が不明なのだ。
最悪のパターンは二つの世界が繋がっているせいで衝突し合い。どちらの世界も滅びてしまう事。
湊はもうしばらくは大丈夫だと見ているが、それでもいつまでも自分のいる世界を滅ぼしかねない存在がいるのは厄介だと感じている。
そのため、湊は報告会でやって来る者たちのメンタルケアをしつつも、出来るだけ早く未来との繋がりが消えて欲しいと思っているそうだ。
美鶴からそれを聞いた真田と荒垣は、彼がこちら側の意見で良かったと一先ず安堵する。
「そうか。あいつが別にいつまでいても構わないと言い出さなくて良かった」
「有里が許可すればあいつらも気兼ねなく現状維持を選べちまうからな。出来る事ならあいつの方からさっさと解決して元の世界に帰れって現実を突きつけて貰いてぇもんだ」
「……はぁ、それは我々が果たすべき役目だ。嫌な役目だが何でもかんでも彼に頼ろうとするな」
相手は自分たちよりも年下だ。過去の存在という事もあって下手をすれば自分たちの方が二歳年上になる。
だというのに、嫌な役目を後輩に押し付けようとする男たちに美鶴

は深い溜息を吐き、少しは年上として先輩らしい態度を見せるべきだと二人を諌めた。
美鶴から注意された二人は僅かに気まずそうな顔をするが、とりあえずの方針として両世界の存続のため事件の早期解決が望ましく、湊もその意見に賛成しているのだけは分かった。
いきなり要警戒対象の少女たちに現実を突きつけるのは難しいので、まずは報告会に参加しつつも事件を解決すべきだと思っているであろう風花やラビリスに相談するところから始める事にする。
残る扉は二つ。それらを攻略するまでに全員が納得して寮を元通りにするべく三人も決意を固めた。

第四百八十六話　珍しい組み合わせ

――古美術〝眞宵堂〟

残る扉も二つだとダンジョンを攻略したゆかりたちが恒例の報告にやってきた。

店番がてら仕事をしていた湊にすれば、数時間前にも似たような話を聞いたばかりという感想なのだが、あちらの人間にすれば数日ぶりの報告とのこと。

一応、向こうのメンバーたちも別れる事を考えているのか、出来るだけ湊との接触を控えようと自重しているらしい。

だが、彼女たちはダンジョンを攻略した時だけじゃなく、物資の補給名目で来る事もあれば、攻略しているダンジョンの進捗状況を伝えに来る事もある。

別にこちらの世界に来た時には挨拶しなければならないという事もないのだが、時の空回りから抜け出すという本来の目的を見失いつつある者にすれば、会いに行くための理由さえ用意できれば会いに行っても良いと思っているようだ。

そうして、今回もまた話を聞いてやる事で彼女たちのメンタルケアを果たせば、少し時間を置いて今度は別の人物がやってきた。

「おーっす、やってるかい？　……なんちゃって」

言いながら笑顔で入って来たのは天田を連れた順平だった。

全員でやって来た時以外には見ない珍しい組み合わせだなと考えつつ、湊はパソコンの画面から顔をあげると順平の方を向いて口を開く。

「……生憎とたった今閉店したんだ」

「いやいや、閉店の札ならオレらが過去に来た時からずっと出しっぱなしだろ。女子たちはよく来てんのにオレたちはダメとか男女差別はよくないぜ？」

「店側にも客を選ぶ権利はあってな。いくら客が差別だと騒いだところで、店側が出ていけと言って出ていかなければ不退去罪で警察の厄介になることになるんだ」

表向きの話をするならば順平たちは閉店の札を出した営業時間外に入って来ている事になる。
そんな状態で店の人間が帰れというなら客は指示に従わなければならない。仮に店側に非があってトラブルになっていたとしてもだ。
実際は順平のノリが面倒だったから帰らせようとしているだけだが、あちらの世界の湊も同じような態度を取っていたのか順平たちは構わずカウンターの方までやってきて出したままの椅子に腰掛ける。
そして真っ直ぐ湊の方を向いた順平は僅かに苦笑を浮かべると、帽子を脱いで頭を掻きつつ静かな口調で話し始めた。
「あー、まぁ、今回は割りと真面目な話なんだ。相談に乗ってくれ」
「さっきの順平さんのノリは真面目な話をする前の照れ隠しなんですよ。まぁ、逆に空気読めてない感じになりましたけど」
「うっせぇ！　小学生には分かんねぇだろうけど高校なら爆笑の渦に包まれてたからな！」
かなり滑っていたと天田に冷静にツッコまれた順平は、お子様な小学生には理解出来ない高尚な笑いだったと自分の来店時の台詞について語る。
だが、滑った事を必死に否定する順平を天田は疑いの目で見ており、どうやら精神年齢の高い天田少年には嘘がバレているらしい。
二人の会話をほとんど聞き流していた湊だが、高校なら爆笑の渦だったという言葉を聞いた時には心の中で俺の世界とは笑いのセンスが違うらしいと感じていたので、天田の疑いの眼差しによって湊も別世界線だと勘違いせずに済んだ。
高校生が小学生に対してくだらない見栄を張り続けている光景を眺めていた湊は、まだ地続きの世界線だと認識した上で相談内容を予想して釘を刺す。
「……先に言っておくとお前からの恋愛相談は受けない。見込みがないからな」
「ちげーよ!!　つか、見込みあるわ！　天田も笑ってんじゃねえ！」
誰も恋愛相談などしようと思っていない上に、勝手に見込みがないと言われ順平は立ち上がって猛抗議する。

順平だって年頃の少年だ。異性とのキャッキャウフフな関係には興味があるし、ヘコんでいた時に立ち直る切っ掛けをくれた少女には望みはないと分かっていても少しだけ淡い想いを抱いたりもした。
湊から勉強法を教えて貰った事で成績がマシになったり、影時間の戦いを経て雰囲気が変わった事で前より良い感じだと特別課外活動部以外の女子からの評価も上がってきている。
そう。確実に流れは来ているのだ。結果がまだ出ていないだけで。
自分でも少し気にしているその部分について、見るからに女には困った事がありませんという面をした青年に見込みがないなどと言われれば順平も声を荒げずにはいられない。
将来間違いなく湊や真田と同じモテ組になるであろう天田に対しても、お前はどっちの味方なんだと順平は噛み付いてゆく。
そんな怒っている順平の横で口に手を当てて笑いを堪えていた天田は、思わず笑ってしまった事に流石に失礼だったかとすぐに謝罪した。
「ふふっ、すみません。有里さんの方から場を和ませる冗談を言ってくれるとは思ってなかったのでつい」
「言われたオレにしたら冗談じゃすまねーけどな！」
「元はと言えば順平さんがふざけたのが原因じゃないですか。それより本題に入りましょうよ。他の方が来たら話しづらい内容ですし」
未だ純潔を守っている順平にすれば多数の美少女と関係を持っているイケメンは敵である。
そんな相手から遠回しにお前は一生モテないと言われれば戦争しかない。
だが、天田の言う通り今回は自分たちから相談を持ちかけた形なので、ここは自分が大人になって引いてやると偉そうな事を心の中で考えつつ冷静さを取り戻す。
ふうっと深く息を吐いて心を落ち着かせ、今度こそ本来の相談内容を伝えようとしたタイミングで再び湊が先に口を開いてきた。
「一番簡単な解決法を先に提示するなら、俺の魔眼で俺への未練を一時的に封じる事が出来る。完全な記憶の書き換えはリスクがあるか

らな。短期的、寮の出入り口から外に一歩でも出たら解けるという条件付けならノーリスクで暗示を掛けられるだろう」
仕事の手を止めた湊はコーヒーカップに手を伸ばし、一口だけ飲むとカップを置いて二人の反応を見る。
まだ内容を告げていなかったというのに、見事に的中している助言を聞いた二人は、何でも分かるんだなと青年の優秀さに苦笑を漏らす。
「はぁ……やっぱ気付くよな。ま、悩んでる内容はお察しの通りだ。ゆかりっちたちの雰囲気がおかしいっつーか。何人かが〝このままでも良い〟と思い始めてんだよ」
「幸いな事に七歌さんや真田先輩たちは事件解決派なので、恐らくは次の扉のダンジョンを攻略する時も問題なく活動出来ると思います。ただ、問題は扉が最後の一枚になった時です」
順平と天田の予想では次の扉のダンジョンを攻略するまでは問題ないと思っている。
しかし、最後の扉のダンジョンを攻略するタイミングでゆかりたちが事件の解決に反対し、戦力的にそれほど余裕がある訳でもない探索その物に参加しない恐れがあった。
一ヶ月以上戦って来た事でブランクは大分解消されたが、それでもニュクスとの決戦時ほど力が戻っている訳ではない。
これまでのダンジョンで出てきたシャドウの強さを考えれば、ゆかり一人が抜けただけならまだ何とかなるかもしれない。
だが、同じように事件解決によって湊と再び別れる事を恐れた者が賛同し、二人、三人と抜けられたら間違いなく探索はままならなくなる。
順平たちはそれをどうやってか避けようと相談に来た訳だが、湊が挙げた一番簡単な解決法について聞いた順平は少し考えて申し訳なさそうにその案を却下した。
「悪ぃけど別の方法はねぇかな。その、なんだ……記憶をいじる系は無しで頼みたいんだ。オレら一回経験してるからさ。忘れたのが大切な物の記憶であればあるほど記憶取り戻した時キツいんだ。あん

だけ言っといてなんで忘れてたんだって自分を許せなくなるっつーか」
　ニュクスとの戦いの後、順平たちはこれまでの戦いの記憶だけじゃなく〝有里湊〟という青年の存在自体を一ヶ月ほど忘れていた。
　卒業式の日に思い出した時には一人で決着をつけにいった青年への怒りと同時に、どうして大切な仲間の事を忘れていたんだと己の不甲斐なさに気が狂いそうになった。
　その時の事を思い出し陰のある表情で話す順平の様子に、成程と全てを察した湊は静かに頷く。
「……そうか。やはり俺の存在はあちら側に含まれている訳か」
「よく今の会話だけで気付けますね。心を読んだりしてないですよね？」
「興味も無いのにお前らの頭の中なんぞ覗く訳ないだろ」
　湊の読心能力について彼らがどこまで知っているのかこちらの湊は知らない。
　知っていたところで防げるような物でもないのだが、能力のオンオフが可能になった時点でつまらない人間の頭の中身など見ないようにしているため、今のは複数の会話のピースから予想して答えに辿り着いただけの事だと伝えた。
「……最初から可能性としては考えられていたんだ。で、お前たちはニュクスとの戦いの後に影時間の記憶を失ったんだろ？　それで俺の事も忘れていたなら予想通り俺の存在も影時間側として認識されたと思っただけだ」
「改めてお前がどこまでも先の事を考えてんのが分かって恐くなったわ。普通、自分の事を忘れられるってなったら防ごうとするもんじゃねーの？」
「チドリやアイギスが平和な世界を生きるのなら、殺人鬼が身内にいるなんて記憶は失った方がいいだろ」
　世間にそれがバレているならしょうがないが、自分たちしか知らないのであれば人殺しの身内の存在など忘れてしまった方が良いに決まっている。

湊を影時間の戦いに巻き込んでしまったと思っているアイギスは勿論、エルゴ研から自分たちを助けるため彼に手を汚させてしまったと後悔しているチドリも、彼の事を忘れない限りその心の傷が消える事はない。
ならば、自分の存在など忘れて幸せに生きてくれた方がいいと、本心からそう思っているのだとハッキリ分かる瞳を二人に向けて彼は答えた。
もっとも、少女たちにとってそれはただの傷でないのだが、順平と天田はそれはこちらの世界の彼女たちが彼に告げる事だと敢えて何も言わなかった。
「んで、話を戻すけどさ。オレ的にはゆかりっちが一番危険な状態だと思うんだよ」
湊がマフラーから出したクッキーに手を伸ばしつつ、順平は一番精神的に追い込まれているのはゆかりだと思うと答える。
他にも警戒すべき対象は何人かいるのだが、そういった少女らと違ってゆかりは感性が一般人寄りといえば良いのか普通過ぎた。
「チドリんとかアイちゃんもまぁ現状維持が可能ならそれを望むと思うけど。ゆかりっちは何か追い詰められてる感があるんだよ」
「その……話せない範囲の話なんですけど、ある事があった時にチドリさんとアイギスさんはしばらく落ち込んでたんです。でも、ゆかりさんは落ち込みつつも学校とかは休んでなくて、その時の経験もあってお二人は何とか今回の事も乗り越えられても、ゆかりさんは長く引き摺るんじゃないかって思ってて」
湊からニュクスとの戦いより前の事は話すなと言われているため、天田は言葉を濁しながらなんとか事情を説明しようとする。
湊がチドリを蘇生して死んだ時、チドリとアイギスは何日も学校を休むほど落ち込んでいたが、ゆかりは落ち込みながらも日常を過していた。
おかげで立ち直ったチドリとアイギスは精神的に一回りも二回りも成長出来たのに対し、ゆかりは二人ほど彼の死と向き合う事が出来なかった。

別にゆかりが薄情だという訳ではない。これは彼女の過去に原因があり、父親の死のショックで塞ぎ込んでいる時期に世間からのバッシングを受けた事で、大切な人の死を悲しみながらも自分の心を守ろうと脳が感情に制限をかけるようになってしまっていただけなのだ。

だが、父が遺していた本当の言葉を知り、彼の意志を継ぐと決めた事で幼少期の枷から解放され彼女の心は自由になった。

その結果、ニュクスとの戦いではそれがプラスに働いてペルソナの力が増していた。

しかし、戦いから離れた場合はそれがマイナスに働く事もあり、今回のように予想外の方向へ暴走してしまう事もある。

完全には無理でも彼女の気持ちを理解しようとした順平は、別に彼女の想いその物を否定する気はないんだと話す。

「結局のところは死んだ有里への気持ちが理由なんだよ。大切な人と二度と会えないと思ってたのに会えちまったからゆかりっちも混乱してるだけでさ」

「僕らも先輩たちも問答無用で有里さんの死を受け入れろって言いたい訳じゃないんです。ただ、今のこの状況に甘えるのは間違ってるって。有里さんが繋いでくれた明日を生きるべきなんじゃないかって思っているだけで」

今回の事件は特別課外活動部のメンバーらの心が過去に囚われているから起きたものだ。

それについては個々で思い当たる節があったようで、最初はそんな事はないと否定していた者らも確かにそう思っている部分はあったと今では受け入れている。

けれど、過去に囚われていた自分を自覚したのであれば、尚のことしっかりと未来に目を向けなければならないのではないか。

一人の青年が命と引き替えに繋いでくれた明日なのだ。生き残った自分たちにはその世界で生きていく義務があるはずだと順平も天田も思っていた。

彼らのそういった心の内を聞いていた湊は、お茶請けのクッキーを食べながらどう答えたものかと少し考える。

色々と言いたい事はあるが彼なりに言葉を選んだ上で、まずは方針を決めるべきだと提案する事にした。
「……お前たちの言い分は分かった。ただ、それが岳羽に通じるかは分からない。チドリやアイギスまで向こうにつく可能性もあるなら、お前たちがまずすべきは方針の決定だ」
「方針ですか？　って言っても、僕らは事件を解決すべきって方針で一致してますよ」
「そこじゃない。もっと前の段階だ。お前たちはどういう話の持っていき方で岳羽たちを説得したいんだ？」
天田たちが事件を解決すべきと思っているのは分かっている。
湊が聞きたいのはそこではなく、ゆかりたちを説得するだけの言葉をお前たちは持っているのかという話だ。
「お前たちの言い分は生かされた自分たちは、そちらの俺が命懸けで救った世界を生きるべきって話だろ。だが、ここで岳羽の話を聞いている限りだとあいつは過去改変の手段を探っている感じだったぞ」
「……は？　いや、つか、そんなの出来んのか？」
「その時点で分岐した世界になると思うが、一年くらい遡っての過去改変ならエネルギーの問題をクリアしたら可能性はある」
順平たちはゆかりが現状維持を目標としていると思っていたのか、過去改変という新たなワードが出てきて頭を抱えている。
「いやいやいや、それってアレだろ。桐条先輩のじぃさんがやろうとしていた事と同じ事だろ」
「ていうか、過去を改変したところでニュクスに対抗出来る切り札がなきゃ、結局は有里さんが命懸けでニュクスに挑む事になると思うんですけど」
「……俺に言われても知らないさ。まぁ、岳羽が本気で過去を変えてやると言い始めれば、それを言いくるめるくらいは出来るけどな」
順平の言う通り、ゆかりの計画は桐条鴻悦が目指した〝時を操る神器〟の発想に近い。
周りの者が心配になるほど様子がおかしいというのなら、魔眼でも使わない限りゆかりの心を変えることは難しいが、ゆかりが執着して

いる〝有里湊〟だからこそその言葉で相手の心を揺らがせる事くらいは出来る。
どうしてもダメならそういった形で協力する事を湊が提案すれば、順平たちは申し訳なさそうに礼を言って席を立つ。
「ゆかりっちの計画が予想外だったんで、こっちも少し先輩や七歌っちらと話してくるわ」
「すみません、僕らの方から相談に乗って欲しいと言っていたのに」
「まぁ、あくまで話を聞いている限りの予想だ。あいつが実際にそう言った訳じゃないってのは頭に入れておいてくれ」
「おう、了解。んじゃ、また色々と決まったら伝えにくるわ。今日はありがとな」
「じゃあ、今日は失礼します」
今日は湊に助言を貰うつもりでやって来たが、前提条件が間違っている可能性が出たことで順平らは一度情報を持ち帰って仲間と話し合ってくると言った。
自分たちから相談に乗って欲しいと言っていたのに、こんな中途半端な事に愚痴を聞かせただけになった事を天田は謝罪し、順平もそれについて謝罪すると二人揃って店を出て行った。
二人が帰ったことで時流操作を解除した湊は、これでようやく仕事の続きが出来ると小さく嘆息してパソコンに視線を落とす。
「……はぁ、未来の俺は何で〝俺を頼れ〟なんて伝言を残したんだか」
未来の自分か別の世界線の自分かは分からないが、あちらの湊が残した伝言が原因で自分の仕事が増えているのは間違いない。
ポロニアンモールでは手に入らない物資の補給が目的なら別に構わない。
しかし、そういった形の協力がメインだと言っていたのに、実際は相談事や愚痴を聞かされてばかりでメンタルケアのカウンセラーとしての役割が強くなっている。
仮にも世界を救った人間ならもっと心を強く持てよと心の中で愚痴を溢しつつ、湊は再び彼らが来るまでの間に出来る限り仕事を進めようと気持ちを切り替えるのだった。

第四百八十七話　業の路ジュデッカ

封印処置から解放された少女が目を覚まし、目の前にいる新型機の青年から現在地が東京だと聞いて戦闘に突入した。

少女が以前いた場所は孤島だった。どうあっても脱出不可能な場所にいたことで、最後に海が見られただけでも良かったと封印を受け入れた。

しかし、都心に近い都内であればいくらでも逃げる事が出来る。

同型の姉妹機から聞いた、自分の人格の基になった少女に会いに行くことも出来るのだ。

それさえ済めば後はどうなっても構わない。最後にその願いだけを叶えさせて欲しい。

そう願ったが脱走を阻んだ新型機の青年は強かった。搭載された武装だけではない。あらゆるスペックで負けていて、この青年がいる限り自分の願いが叶うことはないとハッキリ理解出来た。

だが、その青年は少女が口にした願いを聞いた途端、推進器付きの戦斧による一撃を無抵抗で受け入れた。

表面の装甲だけでなく、内部の骨格パーツすらも容易く両断出来る攻撃だ。

四肢の一部を切り飛ばす程度の損傷で行動不能にしようと思っていた少女は、このままでは拙いと思ったが振り下ろした攻撃は止められない。

そうして戦斧が青年の装甲に衝突すると思った直後、戦斧は柔らかな肉を切り裂き骨を断ち切った。

噴き出す鮮血、赤い血溜まりの上に青年が倒れ込む。

全身に温かな鮮血を浴びた少女は、一体何が起きたのかと混乱する。

すると、戦っていたケージ内に白衣を着た女性や大勢のスタッフが入って来て、青年の容態を確認すると同時に手術室の手配をするよう命令している。

未だ状況が飲み込めていない少女が立ち尽くしていると、白衣の女

性は倒れている青年が生身の人間で、桐条グループとは敵対関係にある少女らの味方だと教えてくれた。
その事実を知った少女の胸は恐怖と罪悪感で埋め尽くされ、運ばれていく青年の無事をただただ祈り続けた。
＊＊＊
倒れた青年がなんとか一命を取り留めてから丸一日が経った。
どうか彼の病室にいさせて欲しいと少女が願えば、その願いはすんなりと受け入れられて何かあれば呼んでくれと告げられ、病室内に彼と二人きりになってしまう。
相手を殺しかけた人間をこんな風に放置していて良いのか。少女の中にそんな疑問が浮かんだが、肩から脇腹にかけて斜めにつけられた痛々しい刀傷を見れば、どうやって謝ろうかという事ばかり考えてしまい。自分の置かれた状況に対する思考はすぐに消えていった。
そうして、少女が黙って眠り続ける彼を見ていれば、さらに数時間が経ってから彼が静かに目を覚ました。
まわりを見た彼はすぐに状況を把握したようで、丸一日以上意識を失っていたと伝えても驚いた様子は見せない。
相手がどんな人物なのか、どうして最後になって自分の攻撃を無抵抗で受け入れたのか。気になった情報については、彼の手術が終わるまでに医者の女性や施設の職員らしき少女に聞いている。
彼は少女の姉妹機に恩があって、その関係で桐条グループの施設で封印処置を受けていた少女を盗み出して起動させたのだという。
無論、ただ助ける事が目的だった訳ではなく、研究への協力を頼みたいという思惑もあるそうだが、どちらにせよ責任者である青年を殺しかけたのだ。廃棄処分は免れまい。
それが分かっている少女は自分の勘違いと危害を加えた事を謝罪した。
あの時は精神的な余裕がなかった事で敵対を選んでしまったが、そもそも青年に戦闘の意思がなかったのは明確だった。
だというのに、少女は敵だと判断して攻撃を仕掛け、本来守るべき存在である〝人間〟の青年を殺めかけた。

ずっとその事を謝りたくて傍にいさせて貰ったのだと説明し、謝罪を終えた少女はこれで思い残すことはないからスクラップにして構わないと告げる。
すると、青年は急に鋭い視線になって誰かがそう言ったのかと少女を問い詰め、少女が自分自身の判断だと返せば、少女の腕を引っ張りベッドで組み敷して怒気を孕んだ言葉で本気で言っているのかと尋ねた。
どうして彼がこんなに怒っているのか少女は分からない。自分が口にしていた夢は諦めたのかとまで聞いてくる始末だ。
諦めたのかと聞かれれば少女だって諦めたくはない。自分の人格の基になった母親のような存在である少女に会って感謝の言葉を伝えたい。
けれど、人間を守るために作られたロボットが、守るべき人間に危害を加えてしまった以上廃棄されなければならない。
その事を説明すれば何を思ったのか青年は自身の胸に勢いよく腕を突き刺し、傷口から鮮血を噴き出しながら心臓を引き抜いた。
混乱しながらも少女は彼を助けなければと手で傷口を押さえて出血を少しでも防ごうとする。
こんな事をしたところで心臓を破壊した以上彼に助かる道はない。
ただ、それでもどうにかしなければと思っていれば、少女の目の前で彼の胸の傷が勝手に塞がっていくのが見えた。
まるで映像の逆再生のように徐々に傷が塞がり、全ての傷が消えたところで青年が少女の頭部を自分の胸に当てて、失ったはずの心臓の音を聞かせてくる。
彼の話によれば普通の人間と違って傷が自然治癒し、臓器を失っても他の細胞から造り出せる体質なので、戦斧で斬られたくらいでは死なないことを説明したかったらしい。
実際に目の前で見せられた以上は信じるしかないが、どうしてそこまで自分の事を想ってくれるのかが分からない。
それも自分の姉妹機に助けられた事が関係しているのかと考えていれば、青年が少女の口から直接過去の実験内容について聞きたいと

言ってきた。
実験その物は楽しい思い出ではないし、思い出せば胸が締め付けられるくらい悲しい別れもあった。
だが、彼は単なる好奇心で聞いている訳ではない。それが分かったため自我を確立してから封印されるまでの流れを全て説明した。
自分のことを話すのは照れくさかったが、実験の犠牲になった姉妹機たちの事を自分以外の誰かにも覚えていて貰えるのは嬉しかった。
そうして、全てを話し終えると少女は青年に抱きしめられ、桐条グループの人間が行なった非道な行為について謝罪し、自分を助けた少女の姉妹機はそれらの犠牲のおかげで生み出されたのだと感謝してきた。
あの実験は単なるデータ収集ではなく、繋がる形で人々の助けになっていた。決して無駄は犠牲ではなく、姉妹機全ての命に意味があったことを知って少女は喜びの涙を流す。
その時、少女は自分の中で何かが変化した事を自覚し、少女の頭上にそれが姿を現わす。
現われたのは銀色の鎧を纏った女性型ペルソナである、運命〝アリアドネ〟。
自分が手に入れた力を見つめた少女は、胸の奥から感じる熱い想いによりこれは犠牲になった姉妹たちから青年に向けた感謝の気持ちなのだと理解する。
ならば、自分を、姉妹たちを救ってくれた青年のためにこの力を使おうと少女は密かに決意するのだった。

――業の路ジュデッカ
過去の映像と光が消えて視界が元に戻ると、先ほど見た光景のインパクトによって誰も口を開けずにいる。
今回はＥＰ社の研究所でラビリスが封印から解放され、そして、湊との戦闘後にペルソナを得るまでの一連の映像が見えた。
これまでと違って最初の戦闘とその後のペルソナ獲得の場面の間に丸一日以上の時間が開いている。

確かにペルソナ覚醒の場面だけを見ても流れが分からなかっただろうが、見ている側に配慮するような事まで出来たのかという驚きと戸惑いがあった。
だが、メンバーたちが口を開けずにいるのは、桐条グループがラビリスたち五式のテストベッドの少女らに行なった実験の内容を知ったからだ。
心を持った姉妹同士を殺し合わせ、その戦闘データを集めているだけだと思っていた。
しかし、実態は戦闘に負けて破棄される姉妹機の記憶を残った機体に引き継がせ、姉妹機の記憶という刺激を受けて情緒面の成長を促しながらペルソナ獲得のアプローチを探るという物だった。
戦闘データを集めつつ、人工的にペルソナを獲得する手段を模索していたからこそ、同時に済ませられる方法を取ったのだろう。
自我を持つラビリスたちの気持ちなど一切無視して、ただ効率的だったからというだけの理由で。
美鶴は過去の研究内容に目を通し、ラビリスからも話を聞いて知っているつもりになっていた事を強く恥じて、改めてラビリスに向き合うと深く頭を下げて謝罪した。
「ラビリス、本当に済まなかった。今更謝ったところでどうにもならない事は分かっている。だが、そこまで非道な実験を君たちに行なっていたなど……本当に申し訳ない。私には謝ることしか出来ない」
「あー……まぁ、美鶴さんが聞いたらそう思ってまうんやろなってのは分かってたわ。だから前に聞かれた時とかは話を濁してたんよ」
これまでの付き合いの中でラビリスも美鶴がどういった性格なのかは把握している。
おそらく他の者たちも気付いている事ではあるが、美鶴は湊に似て自分の責任ではない事にまで強く責任を感じてしまうタイプだ。
当時小学生でしかなかった美鶴はエルゴ研の研究には一切関わっていない。
彼女が口を出したところでそれが通ることはなく、従って仮にラビリスたち五式の実験を知ったところで彼女に出来る事はなかった。

けれど、自分たちの一族が主導していた実験によって、多くの犠牲を生み出し、深く傷ついた者がいると知ってはなにかせずにはいられないのだろう。
ラビリスとしてはペルソナを獲得する際に交わした湊との会話で全てが報われている。
確かに今思い出しても辛い気持ちはあるのだが、自分に宿っている姉妹機たちの記憶が強く影響したシャドウラビリスの人格が湊に強い信頼を寄せている以上、姉妹機たちも湊の存在に救われている事は間違いない。
なので、自分の中にいる姉妹機たちも既に彼に救われているのだと素直に伝える事にした。
「謝ってくれるのは嬉しいけど、実験についてはウチも他の姉妹機らも既に湊君の言葉に救われとるんよ。ウチの中にいる皆が湊君の手助けするために力を使いたいって思ってたから、ニュクスを倒した事でそっちの願いも叶ってるし。ホンマに気にせんでええよ」
「しかし……いや、君がそう言うのならそうなのだろうな」
自分たちは既に救われており、彼のために力を使うという誓いもなんとか果たすことが出来た。
彼も共に生きるという最善の結果は得られなかったものの、それならそれで彼の望んだ通り自分は彼が繋いでくれた未来を生きる事が何よりも恩返しになるとラビリスも気付く。
救う手段があるのなら、過去を変える手段があるのなら悩みもするが、そのための行動は彼自身の想いや誓いを裏切る行為になるかもしれない。
ならば、自分がこれからすべきは彼が望んだ平和な世界で幸せになる事だろうと考える。
「改めて湊君の無茶苦茶な行動見て思ったけど、変なところで不器用にウチらの幸せを全力で叶えようとしてくれてたんやな」
「……八雲は最初からあんな感じよ。八雲が一緒にいてくれたらそれで十分幸せだったのにね。本人は自分を平和な世界にとって異物と見てたから、そこの認識のズレが正されない限り共に生きる未来はな

かったのかもしれないわ」
「フフッ、ウチら自身の考える幸せと湊君の考えるウチらの幸せのズレの大きさに驚くわ」
今の世界は彼の考えるラビリスたちの幸せの世界に近いのだろう。
善意の押しつけのような形なので、少女らにすれば素直に納得は出来ないが、先ほどの過去の映像を見ていたことで彼の不器用さに苦笑してしまう。
彼だって少女らと一緒にいるのは嫌じゃなかったはずだ。それでも彼女たちの幸せに自分は不要だと最初から離れるつもりでいた。
一緒にいたところで誰も彼を責めたりはしないというのに、どうして彼はそこまで自分に罰を与えようとしていたのか本当に謎である。
今更それについて考えても無駄なのかもしれないが、もしも、彼と再会することが叶うのならラビリスは自分の思う幸せの形を彼に伝えようと思った。
少女がそんな風に密かな決意を固めていると、話が一段落着いたと判断した七歌が扉が消えた場所に視線を向けて口を開く。
「さてと、これで時の狭間に残る扉は一つだね。今まで通りに行けるのか、それとも最後に何か罠が仕掛けられているのか。こればっかりは入ってみないと分からないよね」
「注意すべきは兄さんが言ってた寮を三月三十一日に繋ぎ止めている楔の存在ですね。タルタロス消滅のエネルギーが膨大だったのかもしれませんが、限定的にでも範囲内の時間の流れを操作し続けられる訳ですし。しっかりと準備しておいた方がいいと思います」
最後の扉でどんな存在が待ち受けているのか、七歌も一部のメンバーと意見を交換して予測している。
恐らくはこれまでの探索でも度々見ていた湊の姿をした影が待っていると思われる。
だが、姿が彼の物だからと言って、その能力までもが彼のコピーだとは限らない。
むしろ、彼の完全なコピーだった場合の方が、戦闘で勝利出来るか怪しくなってくるのだ。

そういった最悪の事態を考えるのならどれだけ備えても足りないくらいなので、メンバーたちは今回は少し長めに休みをとって最後の扉の攻略に行くことに決める。

ダンジョンの中に限らず、何が起きても良いようにしっかり準備をするため、七歌たちは転送装置まで移動すると全員で揃って寮へと戻っていった。

第四百八十八話　順平からの報告

――巌戸台分寮

また一つの扉を攻略した事で、時の狭間に残っている扉も最後の一つとなった。

七歌や三年生たちは自分たちが過去に囚われていた事を自覚し、自分を見つめ直してここから出た後の事を考えるようになった。

別にそれが正しいことだとは思っていないし、仲間の中に彼の事を諦めきれないと考える者がいても当然だと思っている。

可能であれば相談に乗って少しでも気持ちを前に向けられたらとも思うが、湊との関わり方が異なっていた以上、他人がゴチャゴチャと口を出して良いものかとも思ってしまう。

このままではいけない。過去に囚われて今に取り残されていては、命懸けで未来を守った彼に申し訳が立たない。

それはあくまで自分たちの意見であり、ゆかりを始めとした数人にとっては彼一人を犠牲にして手に入れた平和に何の意味があるんだという感じなのだろう。

「それで順平。八雲君はなんて言ってたの？」

四階の作戦室に一部のメンバーを集めた七歌は紅茶に手を伸ばしながら順平に声をかける。

今日は探索を終えた翌日で全員に休みを言い渡しており、新三年生の女子は七歌以外全員が過去の世界に出掛けている。

出来る事なら七歌も探索に出ていた翌日は身体を休めてのんびりと過したかったが、残る扉は一枚という状況もあって他のメンバーにも無理を言って集まって貰った。

順平などはゴネるかもしれないと思っていたものの、彼ものんびりしていられる状況ではないと分かっているのか素直に集まってくれた。

そして、先日湊と話した事について聞かせて欲しいと七歌は声をかけた訳だが、正面のソファーに座っていた順平はテーブルの上に置かれたチョコを一つ取って、それを口に放り込みつつ話し始めた。

「んー、なんかオレらの思ってた展開とは違う展開になりそうって話だったな。てか、あいつもゆかりっちやチドリンの事に気付いてたらしくて、対処法がないなら記憶いじって寮を出るまで自分の存在を忘れさせてもいいって言ってきたんだよ」
「……そうか。彼には魔眼があったな。その力に頼れば穏便に事を進められるだろう」
普通ならどうやって他者の記憶をいじるんだと考えるところだが、ここにいるメンバーは湊の持つ魔眼の中に暗示系の能力を持つ物があると知っていた。
修学旅行の時には幼児化した八雲がその力を使って、真田の妹である美紀が忘れていた影時間に関する記憶を取り戻していた。
湊の魔眼でどれだけの事が出来るかは分からないが、少なくとも世界が干渉して封じた記憶の蓋を開けられるほどの力はある。
その力を使えばゆかりたちも一時的に湊への未練を忘れ、七歌たちと協力して事件解決に取り組んでくれるに違いない。
順平の言葉で湊の魔眼について思い出していた美鶴は、それも選択肢の一つとしてはありなのだろうと認めつつ、しかし、それを選ぶ事は出来ないとすぐに反対意見を述べる。
「だが、記憶の改竄は無しだ。卒業式の時のような気持ちなど二度と味わいたくない」
テーブルの上に置かれた紅茶のカップに視線を落としながら美鶴はハッキリと答える。
美鶴たちは卒業式の途中で世界のかけた暗示に打ち勝ち、影時間に関する記憶と彼の事を思い出す事が出来た。
しかし、誰一人として記憶を取り戻した事を素直に喜びはしなかった。
大切な仲間の事を忘れてしまっていた罪悪感、最後の最後で彼一人に任せる結果になってしまった事への後悔、手助けする事も止める事も出来なかった己の無力に対する憤り、あそこまで複雑な感情で心が埋め尽くされた事はなかった。
その日一日では感情を処理することが出来ず、数日かかってようや

くまともな受け答えが出来るようになったが、あくまで感情の波が落ち着いただけで心に折り合いがつけられた訳ではない。
自分の原点を思い出して前を向く切っ掛けを得た美鶴でも、記憶を取り戻したときの事を思い出すと心が不安定になりそうになるのだ。
いくら事件解決を望んでいるからと言って、あれをもう一度味わえなどと仲間に言える訳がない。
そうして美鶴がハッキリとその案は無しだと反対すれば、順平の隣に座っていた天田が笑顔で心配しなくて良いと告げた。
「安心してください。それに関しては順平さんもその場で却下してしますから」
「おう。オレっちもあれはキツかったからな。ただでさえメンタルぐちゃぐちゃになってるゆかりっち達にもう一回なんてさせられる訳がねぇよ」
特別課外活動部は因縁や使命感を持って所属しているメンバーが多い中で、順平は偶然にも適性を手に入れたから参加しただけの一般人枠だ。
だからこそ、彼の感性はある意味でメンバー内でも極めて常識的だと言える。
辛い事は辛いと、怖い事は怖いと、心を誤魔化さず当たり前に考える事が出来る。
そのおかげもあって彼は自分でも辛かったのだから、自分以上に悩んでいるゆかりたちにもう一度あれを経験させれば今度こそ心が持たないだろうと冷静に判断出来ていた。
自分が助かりたいだけなら湊の申し出を受け入れていただろうが、少年は仲間の事を思ってしっかりと彼の提案を断っていた。それを聞いた美鶴や七歌は嬉しそうに笑う。
他の者たちも彼の選択に賛同し、勝手に断ってしまっていた本人も安心したようにほっと胸をなで下ろす。
「だが、そうなるとどうするんだ？　岳羽はともかくアイギスたちまで現状維持を望んで敵に回れば厄介だぞ」
事件解決を優先するのではなく、全員が仲間の事をしっかりと考え

ながら行動するつもりだという意志を改めて確認する事が出来た。
ただ、彼女たちの事を思いやるばかりで身動きが取れなくなっては意味がない。
最終目標が事件の解決である事を忘れてはならず、それら二つを両立させるとなると何が出来るんだと真田が他の者に意見を求める。
湊の魔眼で問題を先送りする形で事件解決を優先する案は却下されたが、そうなるとゆかりたちをどうやって説得するのかという問題を避ける事は出来ない。
相手がゆかり一人ならばともかく、適性値基準だとメンバー内でも上位の強さを持つ者たちが現状維持を望みそうな状況だ。
今はこちらに参加してくれているコロマルも、チドリやラビリスが頼めば義理を果たすため向こうにつくに違いない。
事が事だけに組織が二つに割れる可能性もあり得るので、真田としてもここは慎重に行動しなければならないと思っているが、現状維持と事件解決は真っ向から対立する意見だ。
意見を求められた他の者たちも難しい表情で考え込み、彼女たちを説得出来そうな材料はないかと記憶を探る。
だが、皆が代案はないかと考え始めたタイミングで順平が手を挙げて伝え忘れていた事を告げた。
「あー、ちょっと待ってくれ。さっきの提案の他にもう一つ有里から聞いた事があるんだ。つか、オレ的にはこっちの方が重要で皆の意見を聞きたい」
「そうなの？　八雲君が何を言ってたか教えて」
本当ならば天田と共に湊から話を聞いてすぐに仲間たちに相談するつもりだった。
しかし、過去に通じる扉が現われてすぐのタイミングで、別れが辛くなるからと用事がなければ彼と接触するのは控えようと決めた事もあり、ゆかりたちも報告会や物資の補給以外では彼に会いに行くのを我慢している。
順平と天田が相談のため湊の許を訪れたのは、ゆかりやチドリにアイギスといった要警戒対象の少女たちが恒例の報告会を終えてから

の事だったので、彼女たちがいないタイミングを狙っているうちにここまで報告が遅れてしまったのだ。
湊本人はあくまで自分の推測でしかないと言っていたが、彼女たちの思考については恐らく彼の方がよく理解している。
そのため、順平はかなり高い確率でその推測は当たっていると思っていた。
「オレらはゆかりっちが現状維持を望んでると思ってたけど、有里の予想じゃ違うらしい。話を聞いてる感じだと、ゆかりっちは過去改変の手段がないか探ってるみたいなんだよ」
「過去改変？　過去をやり直して八雲君が死なない世界を目指そうとしてるってこと？」
「ああ。桐条先輩のじいさんがやろうとした事と同じか聞いたら頷いてた。んで、あいつが言うには過去一年くらいなら過去へ跳ぶエネルギーの問題をクリアすれば可能性はあるらしい」
突然齎された驚きの情報に他の者たちは何も言えなくなる。
ゆかりが過去改変を目指しているらしいと聞いた時には何を馬鹿なと思ったが、湊が可能性があると認めたなら実際にそれは可能なのだろう。
何せ今の自分たちも時の狭間の力を使って過去に干渉しているのだ。出来ないと否定する方が難しい。
顎に手を当てて考えていた荒垣は視線を上げて順平の方を向くと、その過去改変に何かデメリットはあるのかと尋ねた。
「伊織、あいつは過去改変の危険性やデメリットは話してたか？」
「いえ、そんな詳しく話した訳じゃないんで。オレらの考えてた前提が崩れたなら、仲間と相談して基本方針を練り直さないと相談も難しいって話を切り上げたんスよ」
あの時は、どうにか穏便にゆかりたちが現状維持を諦めるように出来ないかを相談しているつもりだった。
本人たちだって今の状況がいつまでも続くとは思っていない。自分たちが会っているのは〝過去〟の世界の人間だという自覚はあるはず。

律儀に報告会や物資の補給のタイミングで会いに行っている事もあり、丁寧に説明すれば彼女たちを説得出来るのではないかとも思っていた。
だが、自分たちの予想がはずれて前提が間違っていたとなれば、順平らも何を相談すれば良いか分からなくなった。
いくら相談中は時流操作で時間を作ってくれていると言っても、本来多忙なはずの彼がわざわざ相談に乗るため仕事を中断してくれたりもしていたのだ。
自分たちの意見をまとまっていない状態で相談することなど出来る訳がない。
順平からその時の流れを聞いた他の者たちも、確かにそれならば話を切り上げるのもしょうがないと納得する。
けれど、過去改変について彼から一切何も聞かなかった訳ではない。補足するように天田が唯一聞いた情報を荒垣に伝える。
「でも、有里さんが言うにはその時点で世界は分岐するそうです」
「その時点っつーと過去改変のために俺らが過去の世界に行った時点でって事か？」
「そうだと思います。僕たちの世界の有里さんは六月に未来から来た僕たちに会ってますが、それ以外には未来人に会っていない。となると、それ以外のタイミングで未来人に会ったら僕たちのいるこの世界には辿り着かないって事じゃないかと」
自分たちの身に起きている事も理解出来ていないので、あくまで予想ですがと天田は湊から聞いた話から想像した事を説明する。
過去の世界の湊が世界は簡単に分岐すると言っていた事もあり、話を聞いていた者たちも過去改変で起きる世界の分岐については天田の予想が正しいように思えた。
ただ、一応の確認も兼ねてメンバー内で最も湊に近い視点を持つ綾時に七歌が質問をぶつける。
「綾時君、過去改変は文字通り別の未来に行くって認識で良いの？」
「まぁ、そうなるね。ゲーム的に言えばセーブポイントからのやり直しって感じだよ」

ゲームに詳しくない美鶴だけは少し難しい表情をしているが、他の者たちはその説明で理解出来たのか成程と頷く。
セーブポイントから進めた記録と、セーブポイントからやり直した記録。仮にジャンルがＲＰＧならば遭遇した敵の数や種類は勿論マップでの移動経路も違っている事だろう。
ストーリーの存在もあって大筋では似たような結末に向かっていたとしても、細かな部分がまるで違えばそれは同じ物だとは言えない。
それぞれが別のセーブデータであるように、それでは過去をやり直した事にはならないため、今いるこの世界で湊の死という結末を変えたいと思っている者たちの表情が暗くなった。
質問された事に答えただけで仲間の表情が暗くなった事を不思議に思った綾時は、その原因は何かと考えて彼らの辿った思考を理解して苦笑を浮かべる。
「なるほど、君たちが何に悩んでいるのか分かったよ。過去を変えてもこの世界の結末が変わる訳じゃないって気にしているんだね」
「もしかして、そうではないのか？」
「今みたいに現在と過去を行き来出来るなら気にするのも無理はないと思う。過去を変えたのに戻ってきても何も変わっていなかったって嘆く事になるからね。でも、過去改変は片道切符で、過去に移動したらそこから先はそちらの世界で生きていく事になるんだよ。つまり、元いたこの世界も主観で言えば過去になるのさ」
七歌たちが話している過去改変とは、今いるこの世界から過去に跳ぶだけのものだ。
戻ってくる事など出来ないし、跳んだ後はそちらの世界の住人として生きていくしかない。
ならば、もう戻れない過去を気にするのではなく、跳んだ先の未来をどう生きるかと気にするべきだと綾時は話す。
「過去は変えられない。変えられるのは未来だけって言うだろう。もし、過去改変を目指すなら今いる世界は諦めるしかない」
「じゃあ、岳羽たちの望みは叶わないのか？」

「そうなるね。まぁ、意識だけなのか、肉体ごとなのか、どういう形で過去に跳ぶのかも分からないし。そもそも、湊が言った過去改変を僕たちで実行可能なのかも不明なんだ。心構えだけして後はゆかりさんたちの説得に力を注いだ方が良いと思うよ」

湊には可能だったとしても他の者が同じようにそれを実行可能かは不明だ。

まだまだ分からない事が多い状況なので、それに振り回されるくらいなら素直にゆかりたちの行動を警戒し、その状態で事件解決を目指した方が建設的だと彼は言う。

確かに今は分からない事の方が多い。最後の扉の奥で待ち受けている〝未練〟とやらの存在も気になるし、要警戒対象の少女らがどこまで本気で過去改変を目指しているのかも分かっていない。

ゆかりだけが頑張ってそれを目指している可能性もあれば、普段は妹らのストッパー役になっているラビリスが妹たち以上にやる気を見せている事だって考えられる。

順平と天田がくれた情報のおかげで、現状維持を望む者がいなさそうだという事が分かったのは朗報だが、それ以上に話が難しくなったと七歌や美鶴は感じていた。

彼に頼るのは良くないが出来ればもう少し判断材料が欲しい。そのため、七歌と美鶴がゆかりたちとは時間をズラして彼に相談に行ってくると他の者たちに伝えた。

相談したところで解決策が浮かぶとは思わないが、ゆかりがどこまで過去改変について情報を得ているかも分かるかもしれない。

他の者たちも二人に情報収集を頼むと今日は解散という流れになり、報告会に行っている者たちが帰ってくる前に一同は作戦室を出て行くのだった。

第四百八十九話　認識の違い

――古美術〝眞宵堂〟

順平と天田から報告を受けた後、七歌と美鶴は帰ってきたゆかりらに最後のダンジョンについて助言を貰ってくると告げて湊の許を訪れていた。

帰ってきた彼女たちは湊と言葉を交わしたからか普段通りの落ち着いた雰囲気になっていた。

あれだけをみれば彼女が過去改変を望んでいるようには見えない。

最初に気付いたのは湊のようだが、やはり彼には色々と話していてそこから少女が何を目指しているのか察したのだろうか。

過去のポロニアンモールについた七歌たちは喫茶店シャガールでチーズケーキをテイクアウトし、それを手土産に眞宵堂を訪れる。

彼はいつも通り奥のレジカウンターでノートパソコンを広げ、いくつかの書類を眺めながらキーボードを叩いていた。

「八雲君、こんにちは。オヤツもって遊びにきたよ」

「……ああ。また面倒な相談に来たのか」

「へへっ、まぁね。ゴメンね、厄介なネタばっかりで」

シャガールでテイクアウトした箱を見せながら挨拶するも、湊はまた面倒な相談事を持って来たのかと呆れた表情を浮かべる。

実際に彼にすれば言った通りだと思うので、七歌も申し訳ないと謝罪しながら彼の許へ向かう。

七歌と美鶴が席に座り、広いカウンターの上に置いたケーキの箱を広げ始めれば、湊も無言でマフラーから食器とカップと紅茶のポットを出してきた。

紅茶のポットは既に中身が完成している状態で、受け取った美鶴がそれぞれのカップに紅茶を注いで置いてゆく。

その間に七歌も湊が出した皿にケーキを載せてフォークを添えてから並べ、全ての準備が整った所で満足げに頷いた。

「よしっと。で、今回は前に八雲君が順平たちに話した過去改変について聞きに来たの」

「一応、こちらでも最低限の知識は得ている。過去改変は我々のいる未来を変化させる訳ではなく、別の選択肢を採ることで別の未来に分岐させる……という認識で良いんだな？」
こちらの世界に綾時が来られない事もあって、現時点ではこの世界にいないはずの綾時の事は話せない。
なので、どういった筋からその情報を得たのかは伏せたまま、美鶴は自分たちの持っている過去改変の認識に誤りがないか確認した。
ここで湊の口から過去改変で変化するのは元いた世界だと聞く事が出来たなら、恐らく七歌たちも含めて積極的にその案に乗れないか検討する事だろう。
しかし、綾時が言っていたようにあくまで別世界への分岐でしかないとなれば、元いた世界に残される存在のことを思って選べない者も出てくる。
どちらの考えも分かるし、それぞれにメリットデメリットが存在するからこそ、七歌たちも簡単には否定も肯定も出来ない。
今日の相談はそういった諸々を考えるための叩き台や判断材料を求めての事だ。
あくまで彼ならば自分たちよりも情報を持っているだろうと思っての事であり、彼が過去改変に関して情報を持っていない可能性も十分に考えられる。
自分たち以上に時の概念について知識を持ち、神に挑むため力を付けている彼が過去改変に手を出していないのだ。
彼ほどの力があっても出来ないのか、それとも出来たとしてもやる意味がないと思っているのか。
何でも良いから情報が欲しい。そう思って七歌と美鶴が彼の事を見つめていれば、湊は自分の前に置かれたケーキをフォークで一口分に切りながら口を開く。
「……過去改変に関する認識はそれで間違っていないはずだ。俺も自分で過去改変をしてみた訳じゃないからな。あくまでそうなる可能性が高いという認識でいて欲しい」
切り取ったケーキを口に運ぶ湊の話によれば、過去改変については

綾時が説明していた通りの認識で良いらしい。
どちらもニュクスと同じ神側の存在だけあって、やはり人間達には理解出来ない概念に関する知識を持ち合わせているようだ。
綾時に聞いていた事に加えて湊から説明を受けたことで、過去改変が別の未来への分岐でしかないのは理解したが、ではゆかりたちが求めている自分たちの世界の結末を変える方法はないのだろうか。
その事を疑問に思った七歌は、ゆかりたちが本当に望んでいるのは別物だと思っていたため、別のアプローチなどで今いる世界に既に起こった結末を変えられないのかと尋ねる。
「うん。でも、それじゃあ私たちの世界の結末を変える方法とかはないの？　ゆかりたちが過去を変えようとしてるのって八雲君が死なずに済む未来を望んでの事だからさ」
「ある訳ないだろ。結果が出た以上それは確定した過去だ。科学の実験だって何だっていくら条件を揃えて同じ結果が出ようと実験結果は毎回別の物として記録するだろ。それと一緒で結果が出たならその時点で世界の記録として保管される。そこに手を加える事は出来ない」
湊と他の者では時に対する認識が違っているためしょうがないことだが、青年はケーキを食べながら呆れたように無茶を言うなと溜す。
彼も七歌の話で出てきたゆかりたちの願いについては理解出来ている。ニュクスには勝利したものの、仲間の一人を犠牲にして手に入れた未来に納得がいっていないのだろうというのは分かる。
ただ、ゆかりたちが何を思っていようと、彼はそれが未来の自分の事だからこそ〝納得した上での選択〟だと理解している。
誰一人欠けることなく新しい未来に辿り着く事を望んでいたとすれば、それは確かに望んでいた未来ではないかもしれない。
しかし、未来の自分は最後まで最善の結果に辿り着く事を諦めてはいなかったはずだ。
それでもダメだった。どんなに考えても最善に辿り着く道はなく、だから未来の自分は求め得る中での最良の結果を選んだはずだと青

年は話す。
「……未来の俺の選択はお前たちにとっては認められないもの、納得しきれないものなんだろう。だが、敵は真性の神だ。矮小な人間たちが命を懸けたって普通なら勝てるような相手じゃない。それは分かっているんだろ？」
彼の問いに七歌と美鶴は僅かに目を伏せながらも頷いて返す。
心では納得出来なくても、頭ではしっかりと分かっているのだろう。
二人はこちらの湊と違って封印が解かれこの世に顕現したニュクスを実際に見ている。
タルタロスの頂上で宙に浮かぶ巨大な赤い瞳を見た時、どう抗っても人間が勝てるような存在ではないと本能で理解してしまったのだ。
ゆかりたちが彼も共に生きられる未来を望んで動くのは分かるが、惑星を滅ぼせる力を持った神を相手にたった一人の犠牲で済んだと考えれば、それ以上の結果を望むのはあまりに強欲と言うものだろう。
過去とはいえ本人から諌められれば七歌たちも冷静になって考える事が出来る。
七歌は紅茶で喉を潤すと改めて自分がすべき事を見つめ直す。
「じゃあ、やっぱり私たちはゆかりたちに過去改変を諦めさせる必要があるみたいだね」
「伝え方も含めてある程度の配慮は必要だろうが、私たちの世界は私たちのために八雲が繋いでくれたものだ。そこで生きることに意味があると私は思う」
過去改変に希望を持っているゆかりたちには残酷な事だが、仮に過去を改変しても彼女たちが望んでいる結果にはならない。
無論、別の未来を目指すことで彼も生き残る事が出来るのならば、過去改変の真実を理解した上でそちらを選ぶ可能性もある。
ただ、彼から話を聞いた二人はそれに同意することはない。自分たちが生きる世界は湊が自分たちのために命を懸けて繋いだ未来だと知っているから。

そうして、七歌と美鶴も改めてゆかりたちを説得する方向で行くことに決めケーキを食べていれば、紅茶を飲み終えて一人だけコーヒーを飲んでいた湊が直前の美鶴の言葉を聞いて訂正を入れてきた。
「……別にお前たちのためって訳でもないだろうけどな。俺は我欲で動いている。極論を言えばチドリとアイギスとラビリスが安全に暮らせていれば良いんだ。その周りの世界も守る範囲には含まれているが二、三個の取り溢しがあっても別に気にしない」
「え、私は？　お姉ちゃんだよ？」
「従姉は他人だろ。結婚だって出来るんだぞ。国も他人だと認めている証だ」
チドリたちは悲しんだり心に傷を残すかもしれないが、湊からすれば三人の安全などがしっかりと確保されていれば仲間が数人欠けたところで気にしない。
彼目線で言えば同じワイルドの力を持っていてアルカナシャドウを倒してくれてもいるが、裏で色々と実験や準備を進めるために任せているだけで、アルカナシャドウなど自我持ちを一体送れば勝手に倒せる。
なので、別に途中で退場しても構わない。その気持ちもあって彼女たちが桔梗組にやって来た時は最後に殺そうとしていたのだ。
六月の時点では湊も彼女たちを殺そうとは考えておらず、邪魔なら別に切り捨てても問題ないくらいの認識だろう。
そんな風に冷たく突き放すような言葉を吐かれた七歌だったが、彼女は都合良く従姉なら結婚も出来るという部分のみを拾い上げて笑顔を浮かべた。
「ヒヒッ、美鶴さん聞いたかい？　八雲君から遠回しに結婚しようって言われちゃったぜ」
「君にとっては残念な事にそういった内容の言葉は聞いていないな。八雲は無慈悲に従姉など赤の他人だと告げただけだ」
「……は？　血の繋がった家族である私が他人なら、美鶴さんなんて視界の端に映ってるだけの石ころみたいなもんですよ？」
「存在が認識されている以上、そこまで酷くはないだろう……」

美鶴が七歌に厳しい現実を突きつければ、言われた七歌は理不尽な言葉のカウンターパンチで美鶴を打つ。
湊と言葉を交わすようになったのは修学旅行からなので、大して話した事もないクラスメイト以下の扱いでもおかしくはない。
けれど、彼女の母親は湊も懐いている桐条英恵だ。その娘として存在も認識されているため、いくらなんでも路傍の石よりはマシなはず。
理由があろうと何年も口を聞いて貰えなかった事もあり、自信なさげに美鶴がそれだけ呟けば、目の前にいて二人の話が聞こえていた湊が口を挿む。
「……まぁ、認識はしてますよ。おばさんとの約束もありますしね」
「あぁ、こちらの君もそんな事を話していたな。私はその約束がいつ交わされたものか知らなかったが」
「何年か前のおばさんの誕生日です。誕生日プレゼントを用意する時間がなかったので、代わりにいつか美鶴さんを一度助けるって約束しました」
「君は影ながら何度も助けてくれているだろうに、それで約束を果たした事にはしないのか？」
荒垣が離脱していた時期に悪魔型シャドウから助けてくれたように、直接的に助けてくれることもあれば、裏で色々と動いて手助けしてくれた事もあった。
英恵との約束は一度だけという事だったので、それで行けば湊はとっくに約束を果たしている事になる。
だが、この六月時点でも湊は約束を果たしたと思っていないらしく、美鶴はどうして果たした事にしないのかと理由を尋ねる。
聞かれた青年は作業を再開してパソコンを見ながらも、話は聞いているのか素直に答えた。
「……別に片手間で出来る事しかしてませんから。落とした消しゴムを拾ったくらいで恩着せがましく礼を強請ったりしないでしょう？」
「君にすればその程度の労力かもしれないが、こっちは命を落としかけている状態だったこともあるからな。素直には納得しづらいとこ

ろだ」
美鶴にそう返されても湊は肩を竦めるだけで、そのまま何も返さずにキーボードを叩き続ける。
どうやら本気で大した事はしていないと思っているらしく、本人がそう思っているならいくら言おうと無駄だと分かっている美鶴も苦笑を浮かべるだけでそれ以上は何も言わなかった。
そうして、聞きたかった事は聞けたことで話に一区切りが着くと、その後はお茶をしながらしばらく雑談を続けた。
彼とこうやって会える機会も残り僅かだ。それが分かっている二人は事件解決までという期限を理解しつつも、その限られた時間を大切にすごそうと湊との会話を楽しむのだった。

第四百九十話　ラビリスに問う

――巌戸台分寮

湊から過去改変について詳しく聞いてきた七歌は、このままでは彼女たちの願いは叶わないと理解し、過去改変や現状維持を望むであろう者たちを順番に呼び出す事にした。

最後の扉の攻略が始まることもあって、説得に割く時間はあまりない。

それでも一度に全員を呼び出せば結託して現状維持を望む可能性があるため、七歌は出来る限り一人ずつ説得してゆく事にした。

最初に呼び出す事に決めたのはラビリス。彼女は湊と深い関係にあったと聞いているが、本人がどういう訳か彼の隣には妹であるアイギスが納まればいいと言っているらしい。

情報元は美鶴なのでそれについては彼女から直接聞いたと信じて良いと思っている。

しかし、姉だから妹の幸せを願っているのか、それとも最初から共に生きるほどの執着は持っていなかったのか。そこが七歌には分からない。

彼女は湊が一度死んだ時もアイギスの世話をしつつ学校には通い続けていた。

同じように学校に通い続けていたゆかりは、過去改変や現状維持を望む筆頭になっている。

そのため、前回は大丈夫だったからと精神的に他の者よりも強いと信じきってしまうのは危険だろう。

七歌が話しかければ傍にアイギスがいたら一緒に来てしまうかもしれないため、呼び出すのは美鶴に頼み、七歌は飲み物とお茶請けを用意して四階の作戦室で待つ。

相手が寮に残っている事は確認しているので、少し待っていればくるだろう。

そう思っていれば、丁度扉がノックされた事で七歌は入室を許可する。

「どうぞー」
「七歌ちゃん、美鶴さんから呼んでるって聞いてきたんやけど？」
「うん。ちょっと、今後の探索に向けていくつか相談があって。お茶とかも用意したから、座って座って」
やって来たラビリスは普段通りの様子で精神的に追い詰められている様子はない。
ゆかりやアイギスは最後の扉の攻略に向けてどこか不安そうな顔をしていたので、それと比べるとラビリスは七歌たちに近い状態と言えるだろう。
過去の映像を見た時に聞いた話では彼女は元々湊の傍にいるために戦う事を選んだという。
では、彼がいなくなった世界についてはどう考えているのか。七歌はまずはそこから聞くことに決めていた。
七歌に勧められるままソファーに座り、紅茶の入ったカップを受け取ると彼女は一口飲んで七歌を正面から見つめる。
旧家の生まれである七歌は社交界にも出て色んな人間を見てきた。相手が自分に対してどういった感情を向けているのか、どういった思惑を持って近付いて来ているのか、他者を蹴落とし利用しようとする社交界ではそれらを見抜く必要があったのだ。
おかげで七歌は相手の目や細かな仕草を見ることで、その内面の表層的な部分であれば多少は理解する事が出来る。
その観察力を使ってラビリスの精神状態を見抜こうとすれば、分かったのは彼女の精神が酷く安定しているという事だった。
彼女も湊の許へ報告会として出向いていたため、ゆかりやアイギス側の考えを持っている可能性を疑っていたが、直接向き合っても安定しているように見えるとなると彼女は付き添っていただけなのかもしれない。
こうなるとやはり本人に直接尋ねない限り分からないので、七歌も自分の紅茶に口をつけて喉を湿らせると話を切り出した。
「探索について相談する前にいくつか聞きたいんだけど、ラビリスは八雲君がいない世界についてどう思ってる？」

「え？　エラい唐突な質問やね。うーん、質問の意味にあってるか分からんけど、感情の面で言えば湊君にも生きてて欲しかった。他に選択肢がなかったとしても一言相談して欲しかった。で、理性の部分では救われたこの命の限り責任を持ってこの世界で生きていかんとって思っとる感じかな」

突然の質問にラビリスは虚を突かれた表情をするも、すぐにどこか苦笑した様子で自分なりの答えを返してきた。

やはり、彼女も湊が一人犠牲になって世界を救ったことに納得していない。そこに関しては割り切れていないらしい。

ただ、他の選択肢がなかったことも理解していて、何故彼がそうまでして未来へと繋いだのかを知っているからこそ、彼が守った世界で生きていかなければならないとハッキリ答えた。

彼女の親しみ易い雰囲気と関西弁という方言もあって口調は柔らかく聞こえる。

けれど、目の奥には決意の光がしっかりと宿っており、彼女は既に自分の足で立って未来へと歩み出そうとしているのが伝わってきた。

彼も助かる選択肢があれば選ぶかもしれないが、そうでなければ彼女は過去改変も現状維持も選ばない。

最初の質問でそれが分かった七歌は安堵の息を吐いて、自分で用意したカステラにフォークを刺して口へ運ぶ。

「ふぃー、ラビリスが前向きな思考で良かったよ」

「前向きって言うほど前向きなつもりはないけど、さっきの質問ってどういう意味やったん？」

「んー、端的に言えば現実と向き合ってくれるかどうかの確認だったの」

突然された質問に答えただけで七歌が見るからに安心した様子を見せたことで、ラビリスも質問には重要な意味があったと思ったようだが、その意味について説明した七歌の言葉では理解出来なかったようで首を傾げている。

答えた本人も流石に今のでは分からないよねと反省し、自身した説明に自嘲的な笑みを浮かべつつ改めて説明する。

「私も含めたメンバーのほとんどは事件解決を目指してるの。八雲君が救ってくれた元の世界に戻ってそこで生きていこうって考えてる。でも、ゆかりやアイギスは過去の八雲君と会った事で現状維持や過去改変の可能性を探ってるんじゃないかな」
一緒にいる時にそういった事を考えていそうな素振りはなかったか。
七歌に問われたラビリスは顎に手を当てて考えている。
自分たちにはそう見えていたし、相談に乗っていた湊もゆかりたちがそんな事を考えていると見ていたが、共に行動している彼女には何か話しているかもしれない。
もしも知っていれば教えて欲しい。そんな期待を込めてジッと見つめていれば、考えがまとまったのかラビリスは視線を上げて七歌の方を見ながら口を開く。
「ゆかりちゃんはなんか色々考えてる風やったわ。アイギスは……多分、悩んでるんやと思う。湊君に会える今の状況を喜んでるけど、その過去の湊君に事件を解決するように言われとるから、このままじゃダメやって分かってはいるみたい」
「うん。そうだよね。もう会えないって思ってたから、余計に惜しくなっちゃうのは私たちも分かるつもり」
ゆかりのように可能性を模索するのも、アイギスのように揺れてしまうのもどちらも理解出来る。
出来る事なら七歌たちもゆかりと同じように彼が生き残る世界を目指したかった。
けれど、自分たちの世界では既に結果が出ている。最後の決戦で湊は自分の命を使ってニュクスをあちらの世界に送り返した。
その結果が出てしまった以上、いくら過去を変えようとも自分たちの世界の湊は救えない。
結末を変えるため過去に跳んでしまえば、彼は何よりも大切にしていた少女らが消えた世界に残る事になってしまう。
綾時や過去の世界の湊から聞いた過去改変の真実を七歌はラビリスにも伝える。

「今、私たちは過去と行き来出来てるけど、それは時の狭間に残ってるエネルギーと扉を使ってるから出来てるらしいの。ゆかりの目指している過去改変はその方法じゃ無理で、時の狭間に残ってるエネルギーを使って片道切符で過去に跳ぶしかないんだって」
「過去に跳んだらどうなるん？」
「そこから新しい未来を生きられるようになるよ。ただし、私たちが今いる世界には繋がらない別の世界に分岐した未来だけどね」
七歌たちが最初に過去の世界へ行った際、世界というものは簡単に分岐すると湊から説明されている。
一緒に説明を聞いていたラビリスも、どの程度の選択で世界が分岐するかは分かっていないが、一人の人間の死で別の世界に分岐する可能性がある事は理解している。
ただ、自分たちがこうやって実際に過去と行き来出来ているからこそ、どうして分岐した別の世界にしか行くことが出来ないのかが分からない。
過去への移動が片道切符だったとしても、辿り着くのが今いる世界に繋がる過去になる可能性もあるのではないか。
そこに疑問を持ちつつ、ラビリスはより重要度の高い部分について先に尋ねる。
「過去を変えてもウチらの世界の湊君は助けられへんってこと？」
「うん。結果が観測された時点でその結果はもう変えられないんだって。過去改変って名前だけど、観測者である私たちからすれば記憶は続いてる訳で、〝未来の私たちが来る〟っていう世界に移動してその世界で生きていくだけらしいよ」
「あ、そっか。ウチらの世界は六月に未来のウチらが来て湊君に会った世界やから、そこ以外に未来のウチらが来たらそれは別の世界って事になるんやね」
未来人が来てもあまり驚いていなかった湊のせいで意識していなかったが、普通に考えれば未来人が来るなど簡単に起きるイベントではない。
それだけに、もしも別のタイミングに未来人がやって来ていれば、

そこは自分たちのいるこの世界とよく似た別の世界線という事になる。
分岐した世界でどれだけ湊を助けようとも、元いた世界とは繋がっていないのでそちらの世界の湊には何の影響もない。
自分たちの世界の湊を助けるために過去へ跳ぶというのに、過去へ跳んだ時点で永遠にそれが叶わなくなるとは酷い罠だ。
理屈としては理解出来るものの、素直に納得は出来ない。そんな胸の内が分かるような難しい表情を浮かべるラビリスに七歌は苦笑して声をかける。
「私たちも説明を聞いた時にそこで悩んだんだよ。ある意味、私たちじゃ八雲君をどうやっても助けられないって断言された訳だし」
「せやね。ほんなら事件解決したらもう湊君には会えへんって事やね」
残る扉はあと一つ。それを攻略してしまえば事件は解決という事で、恐らく過去に繋がっている扉も消えてしまうはずだ。
そうなると、湊の救出方が存在しない以上もう二度と生きている湊には会えなくなる。
その事に気付いたラビリスが視線を僅かに落として暗い表情になれば、七歌はそこで悲観する必要はないと告げる。
「そうでもないよ。未来には可能性が残ってるからね。事件解決後に八雲君を助けに行く手段が見つかるかもしれないじゃん？」
「フフッ、確かにそうかもしれへんね。でも、事件解決に納得してるウチはええけど、ゆかりちゃんらがそれで納得するか分からへんよ？」
「うん、説得が難しいのは分かってる。だから、今回みたいに一人ずつ意見を聞いて行こうと思った訳だし」
報告会に行っている全員がゆかりのように考えているとは思っていない。
だからこそ、一人ずつ順番に話をして過去改変の真実を知って貰う事で、改めて事件解決の必要性を知ってもらおうとしているのだ。
ラビリスは一番冷静に見えた事もあって最初の一人に選んだが、残るメンバーはラビリスほど簡単にはいきそうにない。

相手によって七歌が話をするか、美鶴から話をしてもらうか決めるつもりだが、いくら組織のブレインだからといって心に問題を抱えていそうな仲間の説得を二人だけに任せるのは負担が大きいだろう。
そこでラビリスは一緒に報告会に参加していた側の人間として手伝いを申し出た。
「ほんなら、その時はウチも一緒に参加するわ。多分、近い立場の人間として話を聞いて貰いやすくするくらいは出来ると思うから」
「本当に？　それはすごく助かるよ。ぶっちゃけ、恋愛感情で八雲君に執着してる人の気持ちは理解出来てないからさ。あんたには分からないでしょって言われたら反論出来ないんだよね」
七歌が湊に抱いているのは家族としての愛情がほとんどの割合を占めている。
異性として意識していない訳ではないが、家族として、姉としての立場で接していた事もあって、ゆかりやアイギスのような恋愛感情で執着している者の気持ちはいまいち共感出来ないのだ。
その点、ラビリスは彼女たちと同じ異性としての付き合いを続けていた存在なので、自分よりも遙かに彼女たちの心に寄り添えるはず。
心強い助っ人を手に入れた事に七歌が喜んでいると、ラビリスは気まずそうに頬を掻いて口を開いた。
「あー、そこはウチも自信ないかも。男女の関係ではあったけど、どちらかというと独りにしたらアカンっていう母性で接してた部分もあるから」
「……母性で接してたのに男女の関係になったの？　倒錯的過ぎない？」
「いや、全部がそうではないからな。ほら、あれよ。ダメな子を放っておけない的な感じやってん。ウチが傍についておいてあげんとっていう」
「うーん、なんか闇が深い感じがする」
「そりゃ、湊君の心が歪やったからな。周りもそうなるもんやって」
言われてみれば確かにそうかもしれないが、歪な心を持つ青年に惹かれる方まで同じように特殊な思考で接する必要はないはず。

だが、ここでそこを深く掘り下げると、余計に深い闇を見つけてしまいそうだったので七歌も言及を避けた。
同じ目的を持った心強い助っ人を手に入れた。今はその事だけを喜ぶ事にして、七歌は用意したお茶とお菓子を食べ終わると、使った食器を持って下へと下りて行く。
食器を洗うためキッチンに行く際、一階で本を読んで待っていた美鶴に上手く行った事を視線で伝え、相手も笑顔を見せると今回の面談が成功した事を心の中で喜び合う。
残るメンバーの事を考えるとまだ安心は出来ないが、とりあえずの成功を喜ぶくらいは良いだろう。
そうして、七歌は洗い物をしながら次は誰と話をするべきかと考え、洗い物を終えてから改めて美鶴とも意見を交えるのだった。

第四百九十一話　王居エンピレオ

――王居エンピレオ

最後の扉の攻略を始めた七歌たちは探索を進めて階層を下りてゆく。

出てくる敵はこれまでのダンジョンより強いが、七歌たちも時の空回りに巻き込まれて一月以上戦い続けている。

ニュクスとの決戦時ほどではないものの、それでも十分な力は取り戻すことが出来ていた。

《物理攻撃と火炎に耐性のある敵、氷結魔法が弱点です！》

金属で出来たオブジェに巻き付いた蛇が宙に浮いたまま迫ってくる。

風花のアナライズ結果を聞いた一同は、氷結魔法が使える美鶴と七歌とチドリを中心とした隊列へ組み直し、中心となる三人も敵を包囲出来るように美鶴とチドリが左右へと広がる。

敵の接近に合わせて隊列を組み直すタイミングを狙って敵は炎を吐くが、前衛にいた順平とコロマルがペルソナを呼び出して炎を受け止めた。

「へへっ、効くかよそんなの！」

「ワン！」

二人が攻撃を防いでいる間に七歌たちも移動を完了し、すぐに召喚器を構えて攻撃に移る。

まずは足止めだと美鶴は広範囲に無数の小さな氷の刃を飛ばし、面での攻撃を受けたシャドウは全てを避けることは出来ず小さなダメージを負ってゆく。

いくら一つ一つの威力が弱くても数が集まればそれは十分な脅威。堪らず敵が距離を取ろうとすれば、鋭い氷の槍を生成していた七歌が高速で射出してその進路を阻む。

恐ろしい速度で目の前を通過していった氷槍を見て敵が足を止めれば、その瞬間を待っていたとばかりにチドリのヘカテーが杖を振り下ろし敵のいる空間を凍りつかせた。

地面から生えてきた氷に呑み込まれ、氷のオブジェと化した敵はしばらくは形を保っていたものの、かなりのダメージを受けたのか氷の中で黒い靄になって消え失せる。
七歌たちが戦っている間、周囲の警戒をしていた真田たちは敵が消滅した事を確認すると集まり、戦闘終了後も警戒を続けたまま風花からの報告を聞く。
《周囲に敵の反応ありません。戦闘お疲れ様でした》
「おつかれー、それじゃあ皆少し休憩しようか。風花も少しの間はゆっくりしててね」
《うん、ありがとう。近くに敵が出現したら伝えるから、七歌ちゃんたちもしっかり休憩を取ってね》
それなりに広い部屋で戦っていたため、周辺にも敵がいないと分かると七歌は休憩を提案した。
特別疲れている訳ではないものの、フロアボスとの戦闘が待っている事を考えると休憩は小まめに取った方がいい。
また、七歌たちは戦闘中しかペルソナの力を使っていないが、ナビゲーターである風花は皆の移動中もペルソナを呼び出し続けている。
魔法を放ったりしている訳ではないので、激しく消耗する事はほぼ無いと思われるが、周辺の敵に警戒したままだと集中力が続かない。
七歌たちが安全に探索を進めるには彼女のサポートは必須であり、そのためには風花の体調も万全にしておく必要がある。
故に、ここらで風花も一度しっかりと休憩を取るように七歌は言った。
風花の能力はペルソナを呼び出さなくても使える部分もあるため、これまでの探索で自分がどの程度消耗しているかは把握し、七歌に言われた通りにペルソナを消してお茶でも飲んでいる事だろう。
そうして、七歌たちも周囲を警戒しつつ腰を下ろし、携行パックから飲み物や軽食を取り出して体力回復に努める。
持って来ている携帯食料などはそれぞれの好みで選ばれており、ただのパックゼリーを飲んでいる者もいれば、オニギリを食べている者もいたりする。

アイギスの傍に座ってチョコ味のブロッククッキーを食べていたメティスは、そんな風に好きな食事をしている他の者たちをどこか観察するように見ながら、今後の予定について話すため口を開いた。
「最後の扉というのもあってか今回のダンジョンは敵も強く、一つのフロアが広く感じます。幸い、今の皆さんなら大きく苦戦する事はないでしょうが、それでも探索のペースは落とさざるを得ません」
「確かにな。シャドウたちの強さは明確に上がっている。タルタロスの上層並の強さはあるだろう」
先ほどの戦闘ではほとんど一方的に倒したが、出てきた敵の強さは決して油断出来るような物ではない。
メティスの言葉に同意するように真田も頷き、同じように感じていた七歌と美鶴も探索スケジュールを直す必要があるかもしれないと答える。
「安全を第一に考えるなら少し小刻みに探索を進めた方が良いかもね」
「ああ。敵が毎回二、三体しか出ないという事もないだろう。ここの強さで五体以上出てくれれば倒すのも流石に骨だ。最初からペースが落ちる可能性を考慮しておくべきだな」
いつまで寮が今の状態を保ってくれるのかは分からないが、すぐにどうこうなるようにも見えない。
ならば、出来るだけメンバーの安全を第一に考え、少しくらい探索のペースを落としても良いだろう。
七歌と美鶴の会話に他の者たちも頷いているので、全員がちゃんと危険に対する意識を持ってくれていた事に二人も喜ぶ。
ここで一人でも速度を優先するべきだと言ってくれれば、閉鎖空間内で生活している事もあって最低限の配慮をしなければならなかったところだ。
休憩を始めてすぐに今後の探索ペースが落ちる事を共有すると、後の時間は体力回復やちょっとした雑談をして過す。
スポーツドリンクを飲んでいたゆかりも、そういえば、とここのダンジョンについてある事を思い出して他の者たちも気付いていたか

尋ねた。
「そういえばさ。ここの敵って今までより強くなっていたのに、たまに見る有里君の影は敵に苦戦せずに進んでるぽかったよね」
「あの影もシャドウを倒して力を付けているのかもしれないね。というか、事実として最初の頃より強くなっているように見えるよ」
ここに来るまでの間にしっかりとしていたのか、ゆかりの問いに答える形で綾時が頷いて返す。
最初の扉で見た湊の姿をした影は、ダンジョンの途中の階層に現われるフロアボスと戦って少し苦戦している様子だった。
動きは湊の物に酷似しているし、同じ人間として見れば彼の姿をした影はかなり強い。
しかし、今のところあの影は湊と違ってペルソナを呼ぶ事が出来ていない。あれ自体もシャドウやペルソナに近い存在だからか、肉体と同じ影から生み出された武器は使っているもののペルソナを呼ぼうとせずフロアボスたちと戦っていた。
そんな湊の影は今回のダンジョンにも来ており、未だフロアボスとの戦いは始まっていないが、これまでの道中で何度かシャドウと戦っている姿を目にした。
ゆかりたちにすれば一つ前のダンジョンより明らかに強いシャドウが相手だったが、青年の影はそれらを複数体相手取ってしっかりと勝利を収めている。
最初のダンジョンで苦戦していた事を思えば強くなっているのは間違いないだろう。
だが、シャドウのようでシャドウではない存在。そんな物がどうして戦いを通じて成長出来るのか。
素朴な疑問を持った順平は綾時に質問をぶつける。
「なぁ、綾時。どうしてあの有里の影っぽいのは成長出来るんだ？普通のシャドウって別に強くなったりしねぇだろ？」
「普通はシャドウ同士で戦ったりしないからね。あれは言ってしまえば共食いみたいなもので、戦って勝てば相手のエネルギーを食べて成長することは可能なんだよ。ほら、アルカナシャドウだって大勢の人

の心を食べて成長しただろう。人からじゃなく同じシャドウからエネルギーを摂取しているのがあの影なのさ」
シャドウを倒してペルソナが成長するように、シャドウが他のシャドウを倒しても成長することは出来る。
しかし、それは同じ神を母に持つシャドウ同士では通常起きない事だ。
綾時のように人間の性質が混ざっているならまだしも、普通のシャドウが自己進化のためだけに共食いを始める事はまず無い。
なら、まさにその共食いによって成長している青年の影は一体何者なのか。
順平は続けて綾時に尋ねた。
「なら、あの有里の影ってなんなんだよ？　共食いするって事はシャドウじゃないのか？」
「うーん。ハッキリとは分からないけど、シャドウにしても僕みたいに役割を持ったタイプと見るべきかな。特殊な個体だと目的達成を優先して通常とは違うことをしたりもするから」
アルカナシャドウはニュクスと一つになる時の事を考えてひたすらに力を集めていた。
今回の青年の影も何かしらの目的を持っており、そのためにシャドウを狩って力を集めている可能性が考えられる。
性質はシャドウなのでシャドウである事はほぼ間違いないと思うのだが、場所が場所だけに綾時もハッキリと断言する事は出来ない。
順平と綾時がそんな風に湊の影について話をしていれば、傍で話を聞いていた荒垣が会話に混ざってくる。
「しかし、あの影が最終的に敵に回るとしたら厄介そうだよな。話を聞いてる感じじゃ今も成長し続けてるって事だろ」
「フロアボスなんて同じシャドウにすれば最高のご馳走だからね。それを倒して回ってるのが敵になったら確かに厄介だと思うよ」
荒垣が心配している事は実際に起きる可能性が十分に考えられる事だ。
湊の影は本当に驚くような速さで成長を続けている。

あれの正体が寮や七歌たち三月三一日に繋ぎ止めている楔ならば、荒垣の言う通り最終的には敵として戦わなければならない。
勿論、七歌たちの考えすぎ、杞憂であれば心配性だなと笑い話で済む。
だが、そうじゃなければ、あれが本当に楔だったとすれば非常に厄介な敵と言える。
そのため、もう少し進めばフロアボスのいる階層に到着するので、そこで今の敵の強さを見られたらしっかり見ておこうと七歌も仲間たちに声をかける。
他の者たちもしっかりと返事を返してきたため、そこで休憩を終えて探索再開の準備を始めた。
探索のペースを落とすと話したので探索を再開しても深くまで潜るつもりはないが、全員の頭に湊の影が敵になる可能性があるという事が残った事もあり、再開した後の戦闘にはどこか気合いのようなものが感じられたのだった。

第四百九十二話　少女なりの矜持

――巌戸台分寮

これまでより強い敵が出現すると分かった最後のダンジョン。

一つの階層の広さもこれまでより広く、その分だけ慎重に攻略を進める必要がある。

おかげで一度の探索で進むペースはかなり落ちてしまったが、七歌は探索に出ない日に一部のメンバーの説得を行なう必要があるため、探索に余計時間が取られるのは逆にありがたかった。

一番最初に説得したラビリスも一緒に話をしてくれるとはいえ、仲間の抱く淡い希望を潰すような説得は七歌のメンタルにも負担をかける。

最後の敵として現われるであろう湊の影についても色々と考える必要があるため、七歌としては出来る限り早くこういった事は終わらせたかった。

「……それで？　揃って話ってなに？」

七歌の対面の席に座っているチドリが紅茶のカップに手を伸ばしながら尋ねる。

今回、七歌はラビリスのアドバイスに従ってチドリと話をすることに決めていた。

先に七歌とラビリスが部屋で待っておき、美鶴に伝言を頼んでチドリに来てもらった。

呼ばれた少女が部屋にやってくれれば、七歌とラビリスが並んで座っており、その正面にお茶のカップが用意されていたのだ。

わざわざ普段は使っていない作戦室に呼ばれた事もあり、真面目な話があるのだろうと言うことはすぐに分かった。

しかし、七歌とラビリスという組み合わせは中々に珍しい。

おかげでチドリも何について話があるのか予想がつかず、席に着くなり率直に尋ねてみれば、顎に手を当てて少し考える素振りを見せた七歌が答えた。

「んー……質問に質問で返す事になるけど、チドリって今回の事件を

どう解決しようと思ってる？」
「どう解決って扉を攻略するしかないんでしょ」
「うん。ただ、そうすると過去の八雲君にはもう会えなくなる」
「……何が言いたいの？」
どうにも回りくどい話の持っていき方にチドリは目を細めて七歌を見つめる。
過去の湊と会えているのは時の空回りが起きて現われた扉が過去と繋がっているからであり、大元の事件を解決してしまえば恐らく扉は消えてしまう。
七歌は相手が本当にその事を理解しているのか確かめるため、わざわざ回りくどい聞き方をしているのだが、聞かれた方にすればあまり意識しないようにしている事を指摘された形だ。
喧嘩を売っているのか、と視線に剣呑なものが混じったのを理解したラビリスがすぐにフォローに入る。
「七歌ちゃんはチドリちゃんが納得してるんか気にしとるんよ。過去の世界の湊君やって分かってても、やっぱり会えるのは嬉しいもんやからね」
下手をすれば内部分裂を引き起こしかねない話題だけに、七歌も言葉を選びすぎて変に遠慮した聞き方をしてしまった。
ラビリスも何故七歌がそんな聞き方をしたのか理解出来るので、煽るような意図はなく単純にチドリの気持ちを知りたいのだと説明する。
今のメンバーに湊の死に納得している者は一人もいない。
あれはしょうがなかったのだと、必要な犠牲だったのだと納得しようにも、簡単に割り切れるものではない。
だからこそ、偶然にも手に入れた彼と会う手段を手放すことをどう思っているのか。七歌とラビリスはそれを知りたがった。
「……私個人の感情に意味なんてないでしょ。事件は解決しなくちゃならない。過去の八雲ともそれでお別れよ」
質問の意図を理解したチドリはどこかふて腐れたように答える。
彼女の個人としては現状維持が望ましいが、頭では事件を解決しな

ければならないと理解しているようだ。
紅茶を一口飲んだチドリは静かにカップを置きながら、さらに続けて二人へ話す。
「こっちの……といっても本来の世界の話だけど、寮の外に出てからもう一度八雲に会う方法は分かってないでしょ。だから、今のまま過去の存在だろうと本人に会える現状を維持したい気持ちはあるのよ」
「なら、チドリとしては事件解決に反対なんじゃないの？」
「それは単なる我が儘だもの。過去の八雲に甘えてばかりもいられないし、私たちには八雲が繋いでくれた自分たちの世界がある」
休日になる度に過去の世界へと出かけ、そちらの湊に会いに行っている少女も、当然ながら自分が相手に甘えている自覚はあった。
あちらの世界ではまだニュクスが存在しており、湊はそのニュクスに勝つためにＥＰ社での研究を進めたり、敵の能力や力の規模を解析しようとしている。
だが、今の湊は未来からチドリたちがやって来るせいで自由に時間を使えずにいる。
眞宵堂の中で雑談している時には時流操作で時を圧縮して、出来る限り自分の時間のロスを減らしているようだが、時流操作とて消耗もなく無制限に使える能力ではないだろう。
それでも湊は未来の自分が言ったことだからと律儀にチドリらの相手をしてくれ、雑談などを通じてメンバーのメンタルケアまで行なってくれている。
彼のそういった優しさを理解しておきながら、いつまでもそれに甘えきってはいられない。対面に座る二人を見ながらチドリをそう言い切った。
一方、チドリの話を聞いた七歌とラビリスは、少女が思っていた以上に冷静に事態を見つめている事を理解する。
現状維持したい気持ちもあると言った少女のどこか寂しげな表情は本物だった。
だからこそ、それを惜しみながらも本来の世界で生きていくべきだという彼女の言葉も信じられる。

七歌とラビリスは視線を一瞬交差させて、恐らくチドリは大丈夫だろうという認識を共有する。
そして、少しだけ部屋の空気が穏やかになると、テーブルの上に置かれたカップへと手を伸ばしながら、ラビリスは七歌が尋ねづらいだろうと思われる事をチドリに聞く事にした。
「なぁ、チドリちゃん。アイギスとゆかりちゃんが事件についてどんな事考えてるかとかって分かる？」
「……細かい部分は分からないけど、ゆかりは事件を解決しようと思っていないんじゃないの？　アイギスは揺れているって感じかしらね」
「ちなみに風花は？」
「私たちと一緒に八雲に会いに行ったりもしてるけど、最初から事件の解決方法について考えているみたいよ。サポートっていう裏方だから他のメンバーの安全を第一にって感じかしら」
最初に話を聞いたラビリスと同じように、チドリもまた自分たちの世界で生きようと考えていた。
それが分かった事で一緒に湊に会いに行く中で、他の者たちの様子におかしな所はなかったか尋ねると、チドリも他の者の事を見ていたようでそれぞれの様子について語る。
中でも意外だったのは風花についての情報だ。彼女はどちらかと言うと最後まで仲間が助かる道を探そうとすると思ったのだが、ここでは今いる仲間の安全を優先して考えてくれていたらしい。
七歌は美鶴と一緒に風花も交えてダンジョンの探索計画を立てたりしていたのだが、探索についての話し合いだからメンバーの安全を最優先に考えた発言しているのだと思っていた。
だが、チドリの言葉を信じるのなら、風花は七歌たちと同じように事件を解決して元の世界に戻ることを目標として定めているらしい。
それは何よりの朗報だと七歌は喜ぼうとするも、チドリたちが過去へ跳べるかもしれないという話を知らないのではないかと考え、ここはちゃんと確かめておかねばと話を切り出した。
「ちょっと確認したいんだけどさ。チドリたちって過去に跳べる話は

聞いてる？」
「……エントランスの扉とは別にって事？」
「うん。元の世界に戻るか、過去へ跳んでやり直すか。どっちか選べるかもしれないんだって」
七歌が確認も兼ねて尋ねるとチドリは少しだけ考える様子を見せる。
この反応からすると知らなかったのか思ったが、すぐに顔をあげたチドリは前に雑談の中で湊が話していた事があると答えた。
「一応、八雲から可能性の話としては聞いてるわよ。ゆかりが他の過去に繋がる可能性について尋ねて、そこで事件解決時に残ったエネルギーで一回だけ跳べるだろうって」
「え……八雲君が普通に話しちゃってたの？」
「なんで貴女たちに話して私たちに話さないと思うのよ。逆はあっても、私たちに秘密にするなんてある訳ないでしょ」
湊からの信用を考えるとチドリやアイギスの方が七歌たちより圧倒的に上だ。
過去に跳べる話をして誰かが傷つく訳でもないのだから、先に心の準備をさせる意味も込めて話す事だってあり得るだろう。
ただ、前に湊と話した時はゆかりが現状維持ではなく過去改変の方法を探っているみたいだという報告があっただけで、湊からゆかりらに何かを話したという報告はなかった。
その時の発言に嘘がなかったとすれば、湊がチドリらに話したのはもっと後、七歌たちに過去改変がどういったものか説明していた時期に話したんだと思われる。
出来ればゆかりたちには過去改変の話を秘密にしておいて欲しかったが、既に伝わってしまっているなら湊にも何かしらの狙いがあっての事だろうと信じる事にした。
「で、その話を聞いたゆかりはどんな反応してた？」
「……別に、なるほどって何か納得した感じだったと思うけど」
「過去改変が別世界線への分岐だって説明も受けてる？」
「……そこまで詳しくは聞いてない。あくまで別の過去に繋がる事が

あるかって話の中で出てきただけだから」
七歌が確認を取ってみれば湊は随分と中途半端に過去改変について伝えていたらしい。
そこでしっかりと事実を伝えていれば、もしかするとゆかりは現状維持を目指していたかもしれない。
湊ならそこまで考えてわざと中途半端に伝え、現状維持を選べない状況まで進ませようとしていそうだ。
「八雲君、わざと希望を持たせる感じに過去改変の情報渡してそうだね」
「性格悪いもの。なんで知っていたのに説明しなかったか問い詰めれば、そこまで聞かれてないからなってシレッと返してくるわよ」
普段の他人を下に見ている彼なら平然とそういう事を言ってくる。
彼の台詞を簡単に脳内再生出来るくらいには全員が同じイメージを持っていた。
現状維持を選べない状況まで進んだ時になって真実を知れば、ゆかりはどうして騙したんだと荒れるに違いない。
その時まで過去への扉が通じていれば本人に文句を言えるが、過去にも行けなくなっていれば荒れているゆかりの対応は全て七歌たちが被る事になる。
彼を助けようと思っていただけなのに、その彼と同一存在に裏切られた時の荒れ具合など想像したくもない。
もっとも、自分たちの仲間なのだから自分たちで対応するのが当然であり、過去の湊に対応を任せる方がおかしいという常識は七歌たちも持ち合わせている。
なので、その時になれば全力で彼女を宥めるつもりではあるが、出来る限り平和的な落とし所に納まってくれればと期待する。
その時の事を考えて今から少しだけ憂鬱な気分になった七歌たちは、温かい紅茶を飲んで心を落ち着けようとする。
ついでにお茶請けの甘いお菓子も食べてストレスを軽減させつつ、七歌がそういえばと別の話題について二人に意見を求めた。
「あ、そういえばさ。八雲君の影いるじゃん。あれ、綾時君が共食いで

成長してるって話してたの覚えてる？」
「あー、なんかシャドウは他のシャドウの力は吸収せんってやつやんな」
「そうそう」
　それは数日前の探索中に綾時が話していたシャドウの生態についての話だ。
　アルカナシャドウのように周囲の人間の心を吸収して力を付けるものは存在するが、周りにいる他のシャドウを食べて成長しようとするシャドウは存在しない。
　だが、湊の影と呼ばれるシャドウモドキはダンジョン内のシャドウを倒し、一種の共食いによってエネルギーを吸収して成長している。
　普通のシャドウならばそんな事はしないのだが、宣告者であったデスのように役割を持った特殊個体ならば、与えられた役割を全うするため通常のシャドウでは考えられない行動を取ることもあるらしい。
　ラビリスとチドリもその話は覚えており、それがどうかしたのかと七歌に聞き返せば、彼女なりに湊の影について考察したようで仮説を聞いてくれと話し始める。
「八雲君の影が成長する理由について二通りの仮説を考えたんだけど。一つはあれが時の狭間や用意したシャドウモドキで、私たちの記憶の中から八雲君の姿が反映された結果シャドウを倒して成長出来るってやつ」
「えっとぉ、湊君やウチらがシャドウ倒したら成長するから、偶然採用された湊君の姿をしたあれも同じようにシャドウ倒せば成長する機能があるってこと？」
「うん。時の狭間ってイメージを反映するからあり得ると思って」
　今回の事件は特別課外活動部のメンバーの心の力などが影響しているのは間違いない。
　なら、七歌の言った通りに自分たちの記憶を参考にしてシャドウモドキの姿を生成した可能性はある。
　しかし、偶然で湊が選ばれるとは思えなかったの、チドリはもう一つあるという仮説について先を促した。

「……もう一つの仮説は？」
「二つ目は最初のやつに似てるけど、〝百鬼八雲〟のイメージが反映されてその能力が再現されてるパターン。ほら、他人のペルソナとか適性を奪って自分の物に出来る能力」
「なんで八雲のイメージが反映されるのかっていう理由付けは？」
「それが私たちの心残りだからだよ」
自分たちが今回の事件に巻き込まれたのは、全員が少なからず湊の死を引き摺っているからだ。
なら、その後悔の原因となった青年の姿がギミックに採用される可能性は十分にある。
そして、シャドウモドキは彼の姿をしている事で、人間なら誰でも持っているシャドウを倒して成長する性質か、彼自身の能力である他者の力を己の物にする能力を再現して持っているのではないか。
普通ならそんなはずはないだろうと否定するところだが、何かの影響を受けてシャドウモドキが湊の姿になったとしたなら、七歌の挙げた二つの仮説についてもあり得ないとは言い切れなくなる。
無論、ここでそれらを検証する事は出来ないし、敵が強くなっているダンジョン内では検証している余裕もない。
ただ、七歌は二つの仮説の内もしも後者のパターンだったら厄介だと続ける。
「あれが八雲君の再現だったら、その能力がどこまで使えるのかって問題があってね。特殊技能やペルソナまで再現出来るとなったら私たち全員が本気で戦っても勝てるか分かんない」
「……貴女の予想だと最後のダンジョンにおける最下層のボスはあれになると思っているのね」
「私たちの未練の形をしてる訳だしね。八雲君が言ってた寮を三月三十一日に繋ぎ止めてる楔の可能性は高いんじゃないかな」
チドリやラビリスも薄々は察していたようで、七歌があれが最後のダンジョン最下層で戦う相手だと言っても驚いた様子は見せない。
けれど、姿だけでなく能力まで彼のものを再現している可能性があるとは思っていなかったのか、自分たちが戦うところを想像して難し

い表情をしている。
あれが湊の全盛期と同じ力を持っているとは思えない。そうであれば勝負になる訳がない。
その点で言えば、風花やチドリでアナライズ出来る範囲の力でしかない訳だが、様々な戦闘技術を習得している以上、特殊能力を持っていない場合であっても安心は出来ないだろう。
最下層まではまだまだフロアが残っている。それの攻略を進めながら、仲間全体で湊の影と戦う時の事を考えて作戦を組むしかない。
これについてはまた全員で集まった時に情報を共有することに決め、それまでに彼の持つ戦闘技能や特殊能力についてまとめておくべく七歌はラビリスとチドリの協力のもと湊の情報を書き出していくのであった。

第四百九十三話　戦力強化

――ベルベットルーム

最後のダンジョンで中層のフロアボスを倒した翌日、アイギスはペルソナを強化するためベルベットルームを訪れていた。

今のアイギスは彼女自身のペルソナであるアテナを失っている。

けれど、代わりに湊と同じワイルドの力とオルフェウスを得た。

ワイルドの力を使った戦い方は七歌や湊の戦闘を見ていた事もあって頭に入っていた。

当然ながら、このようにすべきという正解が分かっていても簡単にはいかなかったが、事件に巻き込まれて既に一月以上が経っている。

それだけの期間に実戦で力を使い続ければ、傍で戦い方を見ていた事もあってコツも覚えて立ち回る事が出来るようになっていた。

「ようこそベルベットルームへ。本日は主が所用で出ているため私共で御用件を承らせていただきます」

契約者の鍵を使って開けた扉を潜ると、アイギスは椅子に座った状態で目を覚ます。

テーブルを挟んだ向かい側にはエリザベスたち力の三姉弟が立っており、普段は正面に座っていたイゴールだけがいなかった。

アイギスたちがいる巌戸台分寮は今も外に出られないのだが、どうやら扉で繋がっていてもベルベットルームにまでは影響がないらしく、部屋の主であるイゴールは出掛けているらしい。

今日は所持しているペルソナを複数体掛け合わせ、新たなペルソナを生み出そうと思っていた。

しかし、その作業はイゴール以外の住人でも出来ると知っていたため、アイギスは部屋の主が席を外していても気にしないと答えた。

「今日はペルソナ合体のために来ました。イゴールさんでなくとも出来る作業だと聞いているので、わたしとしては問題ありません」

「ええ、確かに。では、本日はどのペルソナをご所望ですか？」

アイギスの担当はエリザベスだ。普段はイゴールが座っている椅子に彼女は腰掛け、手に持っていた分厚い本のページを開いてテーブ

ルの上に置く。
彼女が開いて見せてきたページには現在アイギスが所持しているペルソナたちが書かれており、一体目のペルソナを選ぶと組み合わせる事が可能な候補が出てくる仕様になっている。
どう見ても古いインクで書かれた文字にしか見えないというのに、どういう訳か書かれている文字は目の前で変化している。
年季の入った本の形をしているだけで、まるでタブレット端末のようなハイテクさだ。
無論、ベルベットルームの道具は最先端の科学技術とは対極の力、現実世界で言えばオカルトに分類される技術である事は分かっている。
しかし、科学だろうがオカルトだろうが究めていけば一般人の理解を外れ、結局は〝理解出来ないもの〟として似たような扱いに行き着く。
〝北と南、真逆に進もうが辿り着くのは同じ極寒の世界〟というのは、科学もオカルトも研究していた湊の言葉だ。
開かれたページに触れて操作しながらそんな事を考えていたアイギスは、今所持しているペルソナの能力を見比べつつ、今後の戦いに向けてどういった力が必要かを考える。
同じ力を持つ先輩の七歌は特化型のペルソナを揃えて、魔法が必要なら魔法型のペルソナを、物理のペルソナが必要なら物理型を出すようにして戦っている。
なら、自分はその逆であるバランス型のペルソナを使おうかとアイギスは考えた。
どちらもある程度使えるペルソナを持っておけば、相手の能力によって戦うメンバーを入れ替えるまでの時間稼ぎに出られる。
メインアタッカーは得意な者に任せ、自分は戦いながら戦闘の流れを作るサブアタッカーになる。
これは中々良いのではないだろうかと思ったところで、正面に座っていたエリザベスがどこか人間味の薄い微笑を浮かべて話しかけてきた。

「探索は順調に進んでおりますか？」
「ここまでは順調だと思います。皆さんも昔の感を取り戻していますし。わたしもワイルドでの戦い方に慣れましたから」
ベルベットルームの住人たちはアイギスたちの状況を把握しているはずだ。
普段はどういった活動をしていて、メンバーたちの現在の強さはどれほどか、仲間たちの寮内での雰囲気など、逆に知らない事があるのかと思えるほどである。
それでも何気ない雑談のように探索の進捗を聞いて来たなら、何かしらの意味があるに違いない。
アイギスは合体させるペルソナを選びつつ、エリザベスの様子にも意識を割きながら会話を続ける。
「ですが、最後のダンジョンという事もあって敵が強く、フロアの広さも増している事から今はこれまでの探索よりペースを落としています」
「命の危険がある以上、それも仕方の無いことかと」
最後のダンジョンに挑み始めた段階で、敵の強さとフロアの広さを考えて探索ペースは落としている。
歯が立たない訳でないため、ゆっくり慎重にでも探索していればこのまま最下層にも到達出来るはずだ。
ただ、アイギスはその最奥で待つ存在に不安を覚えている。
他の仲間たちとも話しているが、これまでのダンジョンと同じように最後のダンジョン最奥にも扉を守る存在がいるとすれば、きっとそれはこれまで何度か姿を目にしてきた湊の影に違いない。
最初の扉のダンジョンでは中層のフロアボスを相手にステータスで負けている分、唯一勝っていた速度と技術を駆使して倒していた。
あの時点であればブランクがあって弱体化していたアイギスたちでも数の暴力で苦労せずに勝てただろう。
しかし、アイギスたちは彼の姿をしている影を倒す事が出来なかった。
自分たちよりも先にダンジョンへと潜り、道中やフロアボスのシャ

ドウを倒して回っていた湊の影は、いつの間にか成長して明確な脅威として認識出来るレベルに達している。
まだ確定ではない。もしかすると、あれは湊が残した力の欠片で自分たちを手伝ってくれているだけの可能性もある。
自分にそう言い聞かせようとするも、アイギスもこれまでの経験で何となく分かっている。アレが最後に立ちはだかる自分たちの敵だと。
「エリザベスさんは、このダンジョンの奥で何が待っているか知っていますか？」
「……そうですね。ある意味では全ての原因、今回の事件が起こるに至った理由の答えが待っていると言えるかもしれません」
「それは八雲さんの姿をしていますか？」
「残念ながらその問いにはお答え出来ません。あの方の姿をしているかどうか、それはお客様自身の目でお確かめください」
知らないではなく答えられない。そう返してきたエリザベスに、アイギスはどうやら予想通りの存在が待っているようだと確信する。
相手はあくまで彼の姿をしただけの紛い物。そこに魂はなく、アイギスたちの未練が形を持つ時にそのイメージから彼の姿を取っただけだ。
未練を断つ。そのために彼の姿をした敵を倒して別れを告げる。実にシンプルで分かりやすい。
だが、そんな風に簡単に割り切れるなら未練など最初から抱いていない。
そう遠くない未来に待っている戦いの事を考え、ペルソナを選ぶアイギスの手が止まっていればそれに気付いたエリザベスが声をかけてくる。
「随分と悩んでおられるようですね。現在の手持ちから可能な組み合わせの中でいくつか助言いたしましょうか？」
「……エリザベスさんは今のわたしたちで八雲さんに勝てると思いますか？」
「本人が相手であれば不可能でしょう。ですが、影が相手であれば十

分に可能性はあるかと」
七歌たちも話し合っていたが、湊の影はどこまで彼の能力を再現しているのか分かっていない。
チドリや風花が相手をアナライズしても力が読めないらしく、分かっているのはあれがシャドウに近い何かという事だけだ。
正確に言えばシャドウに近い性質を持った別の存在。そんな得体の知れないものが彼の姿をしているのだ。
そのせいで、もしかすると本当に彼と何かしらの関係があるのではないかという思いが湧いてしまい。頭の冷静な部分では違うと分かっていながらどうしても踏ん切りがつかない。
「正直に言って分からないんです。自分が八雲さんの姿をした敵と戦えるのか。自分の力がどこまで八雲さんに通じるのか。ダンジョンの奥に進むほど不安が強くなるばかりで……」
「ならば、あの方の力を模倣されますか？　姿も力も異なりますが、同名のペルソナを生み出す事が可能な状態です」
迫る戦いへの不安から弱音を吐くアイギスに、自分に自信が持てないなら信じる存在の真似をすればいいとエリザベスが告げる。
彼女はページの文字に触れていくつか操作していくと、アイギスの持っているペルソナの名前が動いて四体のペルソナが四方に位置取る魔法陣が現われた。
これまでは二体か三体のペルソナを合体させていたので、さらに上の四体合体させる召喚があるとは思っていなかったアイギスが驚いていれば、魔法陣の中心に合体の予測結果が表示される。
「これは……死神〝アリス〟ですか？　確かに八雲さんはアリスというペルソナを持っていましたが、アルカナが異なっていませんか？」
「ええ、仰る通りでございます。八雲様のペルソナが〝恋愛〟だったのに対し、こちらのアルカナは〝死神〟となっております」
予測結果として出てきた名前に触れると、白黒で描かれたペルソナの絵が現われる。
そこには小学生ほどの幼い見た目をした少女が描かれており、どうやらこの絵の少女が死神〝アリス〟の姿のようだ。

湊の持っていた恋愛〝アリス〟は湊やアイギスと同じ年頃の少女の姿をしていたため、どうしてこんなにも見た目の年齢に差があるのかが気になる。
そんな風に首を傾げているアイギスを見て理由を察したのか、相手から質問を受ける前にエリザベスが相手が誤解している部分を説明した。
「先に申しておきますと本来のアリスはこちらであり、八雲様のペルソナが特殊なのです。あちらのアリスは部下の方が念を込めて作ったものを、八雲様の桁外れの適性で存在を補強して一つの個として具現化させた形ですので、同じ存在を呼び出しようがないのです」
エリザベスの説明を聞いてアイギスは以前人工ペルソナの話を聞いた事があったなと思い出す。
世界で唯一の成功例。狙って生み出そうとしても生み出せない奇跡の存在。それがＥＰ社所属の研究員である武多の執念から誕生した人工ペルソナ・恋愛〝アリス〟だ。
そんな特殊な存在など簡単に生み出せる訳がないので、アイギスが呼び出すとしたら本来のアルカナと姿を持つ同名のペルソナになる。
一見、名前以外に共通点はなさそうだが、習得するスキルなどはほとんど変わらないようなので、湊の強さに近付くために同名のペルソナを入手するのは良いかもしれないと考える。
「見た目からすると魔法特化型でしょうか？」
「はい。物理系の攻撃スキルは覚えませんが、その分強力な闇魔法の固有スキルを持っております」
アリスの持つ固有スキル〝死んでくれる？〟は最上位の呪殺系闇魔法だ。
強力な分エネルギーの消耗も激しいが、複数の敵を相手にする時には非常に有効な攻撃スキルで、戦況を変化させるだけの力がある。
不安に駆られて色々と悩んでしまうのであれば、色んな場面で使える中途半端なペルソナを選ぶよりも、こういった尖った性能を持ったペルソナを一体手に入れた方がいい。
自分よりも圧倒的に戦いに慣れたエリザベスのまともな助言に、ア

イギスは素直に従う事に決めてペルソナの四身合体を選んだ。
アイギスの決定を聞いたエリザベスは魔法陣を展開し、具現化した四枚のカードを四方に配置してゆく。
魔法陣が光り始めるとカードが水色の欠片に分解され、続けて魔法陣の上で水色の欠片が渦巻きだす。渦巻いた欠片は一つに集まり、一際強く輝くと光が治まったときには一枚のカードに変化していた。
ゆっくり回転しながら下りてきたカードを手にしたアイギスは、無事にペルソナ合体が成功して新たに自分の中に死神〝アリス〟が宿った事を理解する。
エリザベスがオススメしてくるだけあってステータスも高く、残るダンジョン攻略でも活躍してくれるに違いない。
自分一人では見つける事は出来なかったはずなので、アイギスは助言をくれた事に感謝して礼を言った。
「エリザベスさん、アドバイスありがとうございました」
「お客様のサポートが仕事ですので、悩まれた時には是非ご相談ください。可能な限り御力になりましょう」
今回の戦力強化はこれで十分。そう思ったアイギスは席を立って寮へ帰ろうとする。
扉を潜る前にエリザベスたちに改めて挨拶し、そうして外へと出ようとしたタイミングでエリザベスが静かに告げてきた。
「アイギス様、貴女の契約は彼への〝誓い〟です。それをどうかお忘れなきよう」
何故、突然それを告げてきたのか。それが何に対する忠告なのかも分からないまま部屋から一歩外へ出たアイギスは、意識が急激に遠のいていく感覚に引っ張られながら元いた場所へと帰って行く。
それでも何とか忠告の意味を理解しようと瞼が下りてくるのを我慢しながら振り返れば、エリザベスは微笑を浮かべているだけで真意はまるで読み取れない。
けれど、恐らくそれは事件解決において重要な事だ。次に聞いても答えはぐらかされると考えたアイギスは、寮に帰ったら落ち着いて考えようと思いながらベルベットルームから去ってゆくのだった。

第四百九十四話　湊の影

――王居エンピレオ

元の世界へ戻るために仲間たちの意志をまとめようと動いていた七歌たち。

最初に行なったラビリスへの聞き取りが無事に完了し、続けてラビリスの協力を得てチドリとの話し合いを行なってそちらも無事に終えることが出来た。

彼女たちは湊を救う手段があるのならそれを目指すが、過去改変が別の世界線への移動だと知ると、自分たちの世界の湊を見捨てて別の世界線へ移動する事は出来ないとはっきり断言した。

彼女たちに中途半端な形で過去改変の情報を伝えたのは過去の世界にいる湊だ。

彼は全てを知っている。未来人である自分たちよりも七歌たちの状況を正確に把握し、事件解決には元の世界への帰還と過去へ移動し別の選択肢を選んだ世界線を生きる二つのルートがある事も分かっている。

だというのに、どうして彼はゆかりたちが勘違いしそうな形で過去改変の情報を与えたのか。

それについて考えたところ、恐らく最後の扉のダンジョン最奥にいる敵を倒させるためだろうと思われた。

元の世界への帰還も、過去に移動してそこからやり直す過去改変も、どちらも全てのダンジョンを攻略しない限り選ぶ事が出来ない。

ならば、帰還を望む者も過去改変を望む者も、自身の望みを叶えるための前提条件としてダンジョン最奥の敵を倒すところまでは協力する事が出来る。

後で過去改変の真実を知れば恐らく激怒するだろうが、全てのダンジョンを攻略すれば現状維持も出来なくなるので、過去の世界の湊は選択肢を奪うためわざと不完全な情報をゆかりたちに伝えたに違いない。

彼女たちが過去改変を求める理由を分かっていながら、その気持ち

を利用して騙す湊の悪辣さには流石の七歌たちも内心で引いた。
チドリやアイギスたちが元の世界に帰れるように、ついでに七歌たちも一緒に帰られるようにと気を遣ってこんな手段を取ったに違いない。
しかし、いくら本人たちのためとは言っても、想いを寄せる相手に騙され夢見た希望を粉々に砕かれるゆかりたちの気持ちも少しは考えてあげて欲しい。
全てが終わって元の世界に帰れたとしても、今回の一件で疑心暗鬼になって精神を病んでしまう可能性だってあるのだ。
加えて、中途半端に情報を与えてしまったせいで、全員を順番に呼び出して説得しようと考えていた七歌たちの計画も中断せざるを得なくなった。
もし途中で過去改変の真実を伝えれば、彼に会える事を重視するゆかりたちはダンジョンの攻略をやめて現状維持を望むはず。
元の世界に帰る事を目標にしている七歌たちもそれは受け入れられない。
それ故、七歌は本来するはずだったアイギスとゆかりへの説得を諦め、目的達成のために攻略を進める事を選んでしまった。
《次の階層でラストです。大きな反応が一つだけあって、それが扉の番人だと思われます》
探索を進めて下への階段を見つけたところで風花からの通信が入る。
このダンジョンも次の階層で最後、最奥の扉を守っている番人を倒せば時の狭間の扉全てを攻略した事になる。
だが、この先に待っている番人は恐らくこれまで何度も見てきた湊の影だ。
風花とチドリのアナライズによれば、それは人の姿をしていながら刈り取る者以上の力を内包しているという。
彼の姿をした成長するシャドウという特異個体。間違いなく強敵であろう存在との戦いを前に、周囲に敵の姿はない今の状況を利用し、美鶴は階段を下りれば戦闘になるだろうと仲間たちに注意を促

す。
「次のフロアに行けばあの影との戦いになるだろう。全員しっかりと準備をしておいてくれ」
「近接戦闘は八雲君と同等だけど、特殊能力系は一切不明で力の大きさしか分からないからね。相手が何かする前に数の暴力で押し切るような作戦で行くよ」
これまでの戦闘を見ると相手は間違いなく湊の戦闘技術をコピーしている。
それはつまり接近を許せば一対一ではどうあっても勝てないという事だ。
メンバーの中で最も近接戦闘に慣れている真田は勿論、オルギアモードや鬼血丸を使ったラビリスと七歌でも手を抜いた状態の湊にあしらわれてしまうレベル。
相手に人間としての意識があれば手加減をしてくれるが、今度の敵は湊の力を持ったシャドウモドキだ。
扉の番人としての役割を与えられている事もあって、どうやってもこちらを殺そうとしてくる未来しか見えない。
故に、七歌も美鶴たちと話し合った結果、接近させずに攻撃を撃ち続けゴリ押しで勝つのが最も勝率が高いと考えた。
他の者たちも彼と近接で戦った時の事を覚えているのか作戦に同意して頷く。
そして、ゴリ押しで相手の動きを封じきれなかった時の事も考え、前衛として立つ真田が他の者を安心させるように付け加える。
「近付いてくれば俺やシンジで足止めしてみせる。お前らはペルソナを使って攻撃し続けてくれ」
「普通の二刀流なら力で勝てるんだがな。片手でこっちの両手の攻撃より腕力で勝るってんだから厄介な野郎だぜ」
「今回は倒しても問題ないとは言っても、やつの能力をコピーしているなら正面から戦えば勝てないのはお前も分かっているだろう。俺たちの役目はあくまで足止めだ」
「分かってるよ。お前の方こそ突っ込んで行くんじゃねぇぞ」

適性の差なのか、それとも肉体その物が人と違っているのか、湊は人間のサイズをしていながら生身で車を持ち上げられるほどの筋力を有していた。
番人として現われる湊の影も戦闘技術だけでなく身体能力までコピーしている可能性が高い。
そんな物を正面から相手にすれば先に潰れるのは間違いなくこちらだ。
真田も荒垣もそれは理解しているので、お互いに注意しあうことで足止めが役割だと心に刻む。
「ま、お二人が突破されてもオレっちとコロマルで時間は稼ぎますよ」
「ワンワン!」
二人と同じように順平とコロマルも前に出て戦う役目を負っているが、彼らは時間稼ぎよりも盾と牽制が仕事だ。
真田たちが突破された時にはじめて仕事が出来るので、先輩二人が役目を果たせなかったら自分が挽回してみせると僅かに煽る。
普段はお調子者の順平に煽られた二人は、途端に鋭い視線を向けるとお前の出番は絶対に来ないと宣言する。
「フン、残念ながら順平の出番はない。ああ、他のやつらの射線に入って邪魔だけはするなよ」
「お前、中学時代は有里にビビってたらしいな。なんなら一人でこのフロアに残ってた方がマシかもしれねぇな」
「いや、そりゃ中学の時の話っしょ!? つか、留学前の写真見せられて、帰ってきたファーストコンタクトがあのガタイになってりゃ誰だってビビりますよ!」
順平が転校してきたばかりの頃、同級生たちが見せてきた湊の写真は着物で女装した姿だった。
身長一七〇センチ未満のそのイメージが強く残っていたせいで、留学を終えて身長一八〇センチオーバーの姿になった本人を見た時に驚きや戸惑いを隠せなくとも無理はない。
今は一切そんな事はないので昔の事を持ってくるのは卑怯だぞと順平が言い返し、その後も男三人が騒いでいると、他のメンバーたち

は苦笑しながら彼らが落ち着くのを待つ。
仲間たちも分かっているのだ。これが彼らなりのリラックス法だと。
他の者だって敵が湊のコピーだと分かって緊張している。なら、誰よりも前線に立つ彼らが今の内に緊張を解そうとするのを止める訳にはいかない。
そうして、しばらく騒いでいるのを見守り、どうにか彼らが落ち着くと最後に装備の点検をしてから進む事にする。
「じゃ、そろそろ行こうか。全員、敵がシャドウモドキだってことを忘れないでね」
どれだけ湊の姿に似せていようと敵はシャドウモドキであって彼ではない。
それをどうか忘れずに惑わされないで挑もうと七歌が忠告して出発した。
暗い階段を警戒しながら静かにおりてゆく。実際の彼の強さを知っている者たちも、記録でしか彼の強さを知らないメティスも、油断せずに最後のフロアへと足を踏み入れる。
これまでと同じように謎の空間に浮いた足場、その奥に存在する巨大な金色の扉。
どこにも敵の姿はなく、動いているのは扉の傍にあるトーチ台で炎が揺れているだけだ。
だが、フロアに足を踏み入れた者たちは重苦しい空気から敵が間違いなくいることを察していた。
警戒を緩めず、隊列を維持したまま進み扉へと近付いてゆく。入口から奥の扉までの中間地点にある広場のような円形の足場まで辿り着き、残り半分だと思ったところで変化が起きる。
最奥の扉の前、そこに黒い光が渦巻いて力が収束を始めた。激しい風が吹き荒れ、トーチの炎が暴れるように揺れている。
それを確認した途端、七歌は仲間たちに指示を出した。
「敵が完全に顕現する前に攻撃を始めて！　ペルソナ！」
『ペルソナ!!』

黒い光が徐々に人間の輪郭を取り始めている。今なら躊躇わずに攻撃する事が出来るだろうと、全員がペルソナを召喚して黒い光に向けて攻撃を放つ。
炎と雷が絡み合うようにして襲い掛かり、風の斬撃が切り裂くように放たれ、氷の槍が次々と撃ち込まれる。足下から闇で出来た凶器が剣山のように貫き、空からは天の裁きが如く極光が降り注いだ。
それぞれの攻撃は間違いなく収束を始めていた黒い光を貫いていた。
攻撃を喰らった時には光もぶれて、部分的には霧散していたように見える。
けれど、それでもまだ光の収束は止まらず、集中砲火を浴びて尚黒い光は人の輪郭を作りそのまま実体を得てゆく。
完全にその姿を取らせてはいけない。それを理解している七歌と綾時とメティスは攻撃を続けるが、どれだけ攻撃を喰らわせようと実体化が止まらない。
そして、完全な形で顕現した敵の姿を見て全員が思わず言葉を失った。
最初に見た時からこれまで彼の姿をした影はずっと薄らと黒い靄を纏っていたのだ。
だが、番人として現われた敵は全員の記憶にある彼その物の姿をしていた。
血の通った肌、生気の宿る金色の瞳、どうして最後の最後になってこうも心をかき乱してくるのか。七歌は内心で愚痴を吐きたくなる。
けれど、そんな七歌たちの気持ちを無視して状況はさらに変化してゆく。左手の掌を上に向けた彼が構えると、その手の上に一枚のカードが現われた。
まさかペルソナを使うのか。すぐに全員が臨戦態勢になると敵がカードを握り潰しながら呟いた。
《来い――――アテナ》
瞬間、渦巻く水色の光と共に彼の頭上に現われたのは、アイギスが失ったものと全く同一の見た目をした女神型ペルソナである戦車〃

アテナ〟。
何故そのペルソナを彼が持っているのか。シャドウモドキであるはずの彼が言葉を発したことも含め理解が追い付かない。
だが、相手が冷たい敵意を向けてきている事もあって、全員の思考は戦闘状態に切り替わったままだ。
真田と荒垣が前に出て、他の者たちも武器を構えつつペルソナでの攻撃を再開しようとする。
惑わされるな。目の前にいるのか彼じゃない。自分にそう言い聞かせて、今まさに攻撃を仕掛けようとしたタイミングで再び敵が口を開いた。
《再び人類は俺の敵となるのか。だが、そちらにどんな理由があろうと先へは行かせない》
敵の言葉に七歌たちは最後の戦いで聞いた彼の言葉を思い出す。
あれは人類と彼との戦いだと、人類の総意を個の意志で否定すると彼は言っていたのだ。
「なん、で……でも、あれは、本人じゃないって……」
「風花、アナライズの結果はっ!?」
ゆかりだけじゃない。全員の動揺が伝わってくる。
このままでは拙い。そう判断した七歌は敵が湊本人ではない証を求めて風花に尋ねる。
すると、ずっと敵の反応を探っていたのか風花からすぐに反応が返ってきた。
《敵の反応、有里君に酷似しています。ゴメンなさい、元々有里君の反応は一定じゃなかったからそれ以上は分からないのっ》
湊は探知型のペルソナを持っていた事で存在の隠蔽や誤認させる力を持っていた。
そのため、否定する証拠が欲しかったというのに、逆に本人である可能性を補強するような答えが返ってきてしまう。
彼の事を傍で見ていたチドリやラビリスも判断に困っており、ここで七歌や綾時が動けば妨害してくる恐れがある。
だが、七歌たちが戸惑っていようと敵は配慮してはくれないよう

で、右手に刀を持つとアテナと共に襲い掛かってきた。

第四百九十五話　青年との戦い

――王居エンピレオ・最深部

刀を持った湊がアテナと共に迫ってくる。

まるで一人だけ早送りで再生されているかのように、構えていた者たちも姿がブレて見える相手の接近に動揺する。

だが、満月の日に戦った時と違い、時流操作で異なる時の流れに乗って消えた訳ではない。

すぐに前衛の真田と荒垣が湊に対応すべく前に出て、アテナにはペルソナを呼び出し反応出来た綾時とメティスのメサイアとプシュケーが相手をする。

動線上に割り込まれた湊は迎撃してくる荒垣を見ると、左に躱すと見せかけ反対方向にカットを切って刀を横薙ぎに振ってくる。

時の空回りに巻き込まれてからブランクを解消し、常人のフェイントならば反応出来るだけの自信があった荒垣も、湊の素早さでそれをやられては反応しきれず防御態勢が中途半端になる。

戦斧を盾にして受け止める事は出来たが身体が泳いで体勢が完全に崩れた。

その隙を突くように右手でもう一つの刀を抜き荒垣の脇腹を切りつけようとするも、そう思い通りにはさせないと真田が横から殴りかかった。

「そう簡単にやらせはしない！」

攻撃を仕掛けようとしたタイミングでの横槍。拳の距離に詰められれば刀では防御出来ない。

けれど、湊は攻撃途中に軸足のみで勢いをつけて横宙返りして回避と共に距離を取ってしまう。

距離が開けば刀の方が有利だ。援護しようとしていた後ろの者たちは自分たちも割って入るかと一瞬考える。

だが、攻撃を避けられたはずの真田はそのまま敵へと向かい。ナックルで強引に刀を弾きながら距離を詰める。

「お前なら避けると分かっていた！」

他の者にとっては予想を超えた動きだったかもしれないが、強さに憧れ彼の背中を追っていた真田にすれば想定内の事だった。
また、他の者と違って真田の武器は拳、つまりは打撃だ。
刃のある武器と違い余程当たり所が悪くない限りは致命傷を与えづらい。
その分、彼は攻撃に躊躇いがなく、一見無謀にも見える形で攻め続ける事で足止めとしての役割を果たしていた。
幼馴染みのそんな戦う姿を見て、初撃で翻弄されてしまった荒垣も迷いを振り払って攻勢に出る。
彼の戦斧はラビリスの物と違って片刃だ。峰で殴れば問題ないと開き直って大きく振りかぶって叩き付ける。
攻撃自体は相手がクロスした刀で受けつつ後方に飛んだことで無効化されてしまった。
しかし、相手が防御したならフリーになった真田が距離を詰められる。
言葉は交わしていないがお互いの狙いをしっかりと理解し、真田と荒垣を攻めながら自分たちの役割を果たそうとした。
一方で、真田と荒垣が湊本人の足止めをしている間も、彼が呼び出したアテナは勝手に動いて攻撃を仕掛けて来ていた。
メサイアとプシュケーが空中で挟撃しながら落とそうとするも、アテナはその盾を使って攻撃を防ぎながら地上にいる七歌たちを狙って巨大な金色の拳を飛ばしてくる。
それほど広くないこの場所でその攻撃を躱すのは難しい。七歌は迎撃すべく心の中のカードを切り替えてペルソナを呼び出した。
「お願い、アティス！」
全身に帯状の布を巻いたペルソナ・刑死者〝アティス〟が空中に現われ、掌を迫る金色の拳に向けると極光を放った。
だが、今のアテナは湊の呼び出したペルソナだ。極光は勢いに負けて弾かれてしまい。威力の減衰程度しか出来ない。
並のシャドウの一撃ならば止められていただろうに、召喚者の能力がここまで影響するとはと七歌は苦い表情を浮かべる。

その間も金色の拳は迫るが、天田のカーラ・ネミの雷撃と美鶴のアルテミシアの氷撃を続けて行なう事で相殺する事に成功する。
とりえずの窮地は脱したが湊とアテナを見る七歌の表情は険しいままだ。
彼女の想定では最初から長期戦は不利だと思っていた。これは単純な理由で敵が湊のコピーなら体力でも精神力の総量でも負けているという事実が存在するためであった。
しかし、湊本人の可能性がある存在が敵として出てきた事で、味方の動揺が想像以上に強かった事もあって短時間での消耗が激しい。
アテナを抑えようとしてくれている綾時を見れば、プシュケーと二体がかりでも抑えきれない事に焦っている様子だ。
ゆかり、アイギス、チドリがまともに動ければ違うのだが、意外な事にラビリスも含めて全員が強い動揺状態にあってペルソナの相手すらも難しい状況にある。
戦えないならば下がって欲しいと思うも、目の前に彼がいては難しいだろう。
なら、どうするか、順平とコロマルは真田たちのフォローに動けるよう備えていて戦力として割けない。
こちらは七歌と美鶴と天田で動けない者たちを守らなければならず、それが分かっているからかアテナは二体のペルソナを相手取りながら動けない者を狙って攻撃してくる。
隙を作るため全員で召喚者である彼を攻撃するか。
いや、それをしようとすればチドリたちが敵対してくるかもしれない。
そんな風に状況の変化を望みつつも味方がネックとなって出来ないでいれば、真田と荒垣を相手にしながら七歌たちの戦いを見ていた湊が口を開いてきた。
《……アティスか。自らが犠牲になる事で人々を救済したとして信仰される存在。知ってか知らずか、それを使役する辺りにお前たちの本性が窺えるな》
湊の放った言葉は七歌たちの耳にも届き、それは見えないナイフと

なって彼女の心に深く突き刺さる。
確かに彼女たちは一人の青年を犠牲にして得た未来を生きている。
願いを阻まれたストレガたちですら一人も犠牲にならず、敗北を受け入れて彼に与えられた残りの時間を懸命に生きようとしている。
しかし、彼だけがその未来にいない。あの決戦で自らを人類の敵だと言った青年は、人類の総意に打ち勝って世界を存続させた。
あの戦いにおける勝者は彼だ。本人たちの自覚無自覚は別にしても人類は彼一人に負けたと言える。
ただ、その結果恩恵を受けたのは敗北したはずの人類だ。彼一人の犠牲で元通りの日常を手に入れたのだから、費用対効果で言えばこれ以上のものはないだろう。
先ほどの湊の言葉はそういった部分を皮肉ってのもので、そういった意図を持たずにアティスを使っていた七歌は声を張って否定した。
「違う！　私は誰かを犠牲して未来を得ようとは思ってなかった！」
《そうか。意図せず最小のコストで手に入れられた未来はどうだ？　滅びを迎える前と後で人々は何か変わったか？》
真田と荒垣の攻撃を受けても涼しい表情でそれらを捌きながら湊は言葉を続けてくる。
それに対して七歌たちは何も答えない。答えられない。
なにせ人々はあの夜のことを覚えておらず、人類は何一つ変わらぬ生活を続けているのだ。
自分たちが原因で世界を滅ぼしかけておきながら、変わろうとせず、何も改めようとしない害悪が人類の本質だと言われれば何も言い返せない。
相手からの反論がなかった事で薄い笑みを浮かべた湊は、自分たちでも分かっているじゃないかと指摘を続ける。
《それが答えだろう。何の不都合もなく世界は存続した。だから、自分には関係ないし、今まで通りに生きていく。ハハッ、あれだけの事があっても変わらずにいられる頑固さだけは褒めてやるべきか。人類とはつくづく救えないやつらだな》
あの日、世界が滅びる直前まで事態は進んでいた。人々もそれを目

にしていたというのに、何の変化もなく日常に戻ってきたと聞けば彼が呆れるのも無理はない。
影時間の記憶補整は万能ではなく、強い意志があれば覚えておらずとも引き継げる想いはあるのだ。
だというのに、何の変化もないのであれば、あの事件を受けても人々は強く変わろうとは思えなかったという事になる。
人々が変わらなければニュクスの滅びは再び訪れる。その時には現代の人間は全員死んでいるだろうが、だからといって負の遺産を後世に残して良い訳ではないだろう。
自分が犠牲となってまで繋いだ世界がそんな物だったと知って、彼が人類を救えない存在だと嗤うのは理解出来る。
けれど、今の彼はこうやって自分たちと同じ世界に蘇っている。
なら、彼も再びこの世で生きていけばいい。自分たちと戦う理由など存在しないのではないか。
そう考えたアイギスが彼に向かって呼びかけた。
「八雲さん、何故わたしたちと戦おうとするんですか？　再びこの世界に蘇ることが出来たなら、あなたも共に未来を生きていく事が出来るはずです」
《ああ、それは不可能だ。時の狭間にあるのは過去のみ、お前たちが捨てた、忘れていた過去のみが存在出来るのがこの空間なんだ。お前たち〝現在〟の存在と違って〝過去〟である俺に生きられる未来はない》
真田と荒垣の消耗が激しくなった事で順平とコロマルが入れ替わるように湊を抑えにゆく。
しかし、順平たちを相手にしても彼は余裕を持った状態で戦いながら言葉を続けてくる。
言葉を交わすほど彼が本人だという気持ちが強くなっていくが、中でも衝撃だったのは彼が自分を過去の存在だと言った事だ。
それは記憶の再現としての意味なのか、あちらの世界に渡って未来を生きることが出来なくなったという意味なのか、真実を知りたいチドリも声を張って彼に話しかけた。

「八雲、貴方は今どういった状態なの？　実体を得て戻ってきた訳ではないの？」
《その質問に意味はあるのか？　俺はあくまで番人として呼び出されただけだ。本人だろうと、再現された存在だろうと、存在出来るのは時の狭間がある間だけ。ここが消えれば俺もアテナもあちら側に戻って消えるしかない》
戦いながらチドリと湊の会話を聞いていた者たちは、瞬間的に状況が悪い方向に変化すると理解した。
今戦っているのが本人かどうかは分からない。情報面でサポートしてくれている風花だけでなく、この場にいるチドリでもあれが本人かどうか判断出来ないのだ。
なら、彼が本物である事を前提に、時の狭間がある状態でしか存在出来ないと分かった者たちは動き出そうとするはず。
心情としては分かる。彼が本当に本物の彼ならば七歌たちだって共に生きられる道を探したい。
けれど、彼が先ほど言っていたように、今の彼は正規の方法で蘇った訳ではなくこの場に呼び出されただけの不安定な存在だ。
役目を与えられた事で自分たちと戦う事を強いられ、その間だけしか存在出来ないというのなら共に生きる道はないと断言出来る。
そも、彼が平時の状態であれば呼び出された時点で役目を無視して自害しているはず。いくら敵としての役目を与えられようと、チドリやアイギスを生かすため自らが障害になるはずがない。
ならば、どうあってもここにいる湊と共に生きることは不可能。彼女たちにもそれに気付いて欲しいが、分かっていても割り切れないものがある。
今すぐに動き出さなければダメだ。彼女たちが動き出す前に敵を仕留めようと綾時たちもすぐに行動に移す。
メティスがオルギアモードを発動しプシュケーの速度と攻撃力が上がり、綾時も継戦能力を無視して技の威力を上げてアテナを追い詰めてゆく。
さらに七歌のエウリュディケーもそこへ参戦し、風の刃で敵の逃げ

道を塞いだ。
逃げ道を塞いだ状態でプシュケーが炎の竜巻で敵を閉じ込め、続けてメサイアが放ったメギドラオンが完全に動きの止まった敵を呑み込んで消滅させる。
一方の湊は、順平たちが四人がかりで何とか抑えているものの、アテナが倒されても表情を変えずに軽くあしらっている。
なら、相手が本気になってしまう前に、このままペルソナで襲い掛かって彼も消滅させよう。
既に出していた七歌たち三人のペルソナが同時に湊へと殺到し、その間に順平たちは距離を取って自分たちも追撃するため召喚器を構えた。
それを見て、七歌たちがすぐに湊を消滅させるつもりだと理解したのか、ゆかりが振り向いて七歌たちに制止の声をかけてくる。
「待って七歌！」
「待たない！　今すぐ倒さないと八雲君が八雲君じゃなくなる！」
彼が本物だったとして役割に沿った行動しか取れない現状では倒すしかない。
チドリやアイギスを手にかけてしまう前に、本当に彼の事を思うなら利用されてしまっている状態から解放してやるべきだ。
剣のような翼を広げたメサイアが湊に接近し、それに向けて湊が片方の刀を投げれば、躱しきれなかったメサイアは喉に刀が突き刺さって消滅する。
しかし、片方の武器がなくなったなら攻撃を捌けないはずだと、プシュケーとエウリュディケーが揃って風の刃を遠距離から連続で放ち続けようとした。
《ハハッ、この刀の特性を忘れていたのか！》
二体のペルソナが風の刃を飛ばそうとした直前、メサイアを貫いて落下していったはずの刀が宙に浮いて背後からエウリュディケーを貫き、貫通した刀はそのまま湊の手に戻る。
さらに続けて持っていた刀を投げてプシュケーも迎撃すれば、その刀ももう一振りの刀に引き寄せられるように彼の手元に戻った。

湊が持っている刀は同じタイミングで作った夫婦剣になっており、湊の力の影響かお互いが引き合う性質を持っている。
彼と直接戦った事のある綾時は、彼の持っている刀の性質を知っていたのに、この時まで忘れてしまった事を激しく後悔する。
彼の武器について一切の情報を持っていなかったメティスはともかく、七歌たちは彼の武器について一応は知っていたのに絶好のチャンスをふいにしてしまった。
七歌たちの攻撃が防がれた事でチドリたちもゆかりと同じように動き出している。
もし、七歌たちが再び彼を攻撃しようとすれば時間を稼ぐため妨害してくるだろう。
あの湊は躊躇いなくその背後を突いてくる。確実に仕留めるために首を刎ねてくるかもしれない。
たった一度の攻撃を防がれただけだ。それだけで形成が一気に不利な方へと傾いた。
どうやれば挽回出来る。どうすればアレを倒せる。七歌が魔眼を使って未来を視ようとしたながら次の一手を考えようとしたとき、寮に残っていた風花から焦ったような通信が届く。
《強大な反応が接近しています！　皆さん、気をつけてください！》
この状況で一体何がやって来るというのか。前方には湊がいるというのに、後方から風花が警戒を呼びかけるような存在がくれば陣形を維持出来なくなる。
そう考えている間も反応は近付いて来ているようで、七歌たちがより一層の警戒を強めた時、この階層の入口から仮面を付けた逞しい巨躯の青い天使が現われた。
青い天使の出現には湊も驚いており、すぐにペルソナを呼び出そうとカードを具現化している。
だが、吼えながら力を収束させた天使の放った極光が湊を呑み込む方が速く、突然の乱入者の攻撃によって発生した煙が晴れた時には湊の反応は消滅していた。
煙が晴れて敵の姿がなかったことを確認したからか、突然やって来

た青い天使はそのまま消えてゆく。
　それを見ていたメティスは状況が分からず混乱した様子で周りの者に尋ねた。
「さっきのあれはペルソナですか？　でも、一体どこから……」
「あれは……過去の世界の八雲さんが送ってきたペルソナです。多分、わたしたちでは番人を倒せないと思って無理をして時空の壁を越えさせたんでしょう」
《はい。えっと、そうみたいです。その……エントランスにある過去への扉の前に血がいっぱい落ちてて、オマケに焦げ臭い匂いが残ってます。あっちの有里君が無理矢理にこっちの世界に来て呼び出したみたいですね》
　作戦室から移動して過去への扉を確認した風花から、アイギスの推測を肯定する言葉が返ってくる。
　過去の世界の存在とはいえあちらの湊も本物であり、その彼が自分で未来の自分を殺したとあっては何も言えないらしくゆかりたちも落ち着いている。
　色々と複雑なものはあるが助かったことは確かなので、七歌も心の中で彼に一先ず礼を言うと転送装置を使って風花にこちらへ来るよう伝える。
　番人が消えても最後の扉が残っている。恐らく本当の意味で今回の事件が起きた切っ掛けとなるものが見えるはずだ。
　戦いの時は風花に寮で待機してもらっていたが、既に彼の反応は消滅しているため合流しても問題ない。
　そうして、短い時間だったが先ほどの戦闘での疲れを回復すべく、一同は休憩を取りながら風花の到着を待つことにした。

第四百九十六話　時の鍵

――王居エンピレオ・最深部

番人として現われた湊。彼が本物なのか偽物なのかは分からないが、それでも言葉を交わすことが出来て記憶を持っているなら殺す事は出来ないと一部の仲間は考えた。

だからこそ、七歌たちは彼女たちが妨害してくる前に彼を倒そうと思った。

恨まれてもいい。憎まれたってしょうがない。それだけの覚悟を持って一気に畳み掛けて彼を殺すつもりでいたのだ。

しかし、そうして彼を討伐しようとしていた者たちは彼個人の強さを見誤っていた。

ペルソナを倒してからすぐに仕掛けたというのに、彼はかなりの余裕を持って七歌たちのペルソナを次々に屠ってゆく。

思えば彼はペルソナを使わずに全力のデスに勝っていた。さらに、自我持ちのペルソナを自力で倒せるからこそ主なのだとも言っていた。

そんな人間を相手に普通の連携程度で勝てる訳がなかったのだ。

ペルソナを全て倒され、彼を殺そうとする限りゆかりたちも今度こそ妨害を仕掛けてくる。

どうやっても彼に勝てない。そんな絶望的な状況に陥ったタイミングでそれは突如現われた。

ここにいるはずがない。存在するはずがない。目の前に敵としている彼が過去に使役していた青い天使。

その天使の姿を見た瞬間、今まで余裕の表情をしていた湊が驚愕しながらもすぐにペルソナを呼び出そうとしていた。

けれど、青い天使は敵のそんな行動を許したりはせず、極光の一撃で呑み込み完全に消滅させてしまった。

彼を殺させまいとしていた少女たちも、流石に過去から送られて来た彼のペルソナがした事には何も言えないのか微妙な表情を浮かべつつも取り乱したりはしない。

というよりも、本来なら自分たちで解決しなければならなかったことを、過去の本人に尻拭いさせてしまったことを申し訳なく思ってしまったのだろう。
寮にいた風花の話では過去へと繋がる扉の前は大量の血で汚れている上に、寮の一階エントランス全体に肉を焦がしたような臭いが漂っているらしい。
「こっちを優先した方が良いと思ってお掃除はしてきてないの」
「うん。後で寮に戻ったら全員で片付けようか」
転送装置を使ってやってきた風花は一階の様子を説明するなり謝罪してくる。
だが、彼女一人にそんな血濡れの床を掃除させようとは誰も思っていない。
風花も仲間たちが怪我をするところは見ているし、過去にはチドリや桐条武治が血濡れで倒れている姿を目にしている。
おかげで一般人よりは大量の血を見ることに耐性はついているが、そうはいっても見ていて気持ちの良いものではないし、独特な鉄臭さは長時間嗅いでいると体調にも影響してくる。
なので七歌もそっちは全員で一気に掃除してしまおうと伝えれば、他の者たちも分かっていると頷いて返してきた。
きっと過去の湊は無茶した事を怒っても自分は何もしていないと誤魔化してくるに違いない。
だが、流石の彼も反動でダメージを負っている状態では掃除など出来なかったようで、こちら側の世界には彼が世界の壁を越えてきた証拠が残っている。
その事実を突きつけてしっかりと説教をしようと心に決めつつ、全員が揃ったことで七歌たちは最後の扉の前に立った。
この扉に触れれば事件の切っ掛けが分かる。自分たちの持つ過去への未練が原因だとは分かっているが、何が引き金となって今回の事件が起きたのかは知っておきたい。
全員の顔を見渡して準備を出来ている事を確認すれば、メンバーを代表して七歌がその扉に触れた。

扉に触れた途端に何かの力が広がって全員を包んでゆく。
そして、脳裏に自分の知らない光景が浮かんでくる。
暗い闇の中、機械の身体をしたアイギスが一人座っている。
周りは真っ暗だというのにどうしてだか彼女の姿だけはハッキリと見えていて、おかげでそれがどういう状況なのか余計に分からなくなる。
そんな状態がしばらく続いていると、今度は少し離れた場所に光が集まって輪郭を浮かんできた。
一体何なのか。そう思っていると光は徐々に人間の形になり、最後にはここにはいない彼の姿を取った。
ずっと座っていたアイギスはそれに気付くと立ち上がって彼の許へ向かおうとする。
だが、どれだけ走っても彼との距離は縮まらず。どれだけ呼びかけようとも一瞥することなく去って行く。
遠く離れてゆく背中を見送るしかなかったアイギスは途中で立ち止まり、疲れ切った表情でその場に蹲るとそこで映像は終わってしまった。
「なに今の？」
「あれが、あんなのが今回の事件の切っ掛けだと言うのか？」
ゆかりと美鶴がどういう事なんだと困惑した表情を浮かべて、先ほどの映像に出てきた少女を見つめる。
これまでの扉はそれぞれの過去を見せていたのだが、今回はどう考えても現実に起きた事には見えなかった。
となれば、先ほどの映像に一切心当たりがない者たちは、唯一何か知っていそうな本人に尋ねるしかない。
全員の視線がアイギスに集まれば、どこか気の抜けた様子のアイギスが口を開いた。
「先ほどの映像は過去にわたしが夢です。卒業式に記憶を取り戻してから、何度かあんな風に八雲さんが離れて行く夢を見ていたんです。でも、一回だけという訳ではないので、どうしてあれが事件の切っ掛けになったのかと聞かれてもわたしも分からなくて……」

彼女の話を聞いて他の者たちも確かにそうだろうなと一応の納得を見せる。
大切な人がいなくなったのだ。寂しさや後悔などが夢に影響し、あんな風にある種の悪夢を見たところでおかしくはない。
ただ、だからこそ何故あれが事件の切っ掛けになったのかという謎が残る。
アイギスの夢の映像を見た事で最後の扉も消えてしまった。これで本当に事件は解決なのか。
そんな風に思っていると全員の手元で何かの力が収束し、光り輝く鍵のような物が現われた。
「なんだこれはっ」
「別に危険な物じゃないと思いますよ。まぁ、言ってしまえば寮から出るための通行証のような物じゃないですかね」
急に現われた鍵に驚きながらも警戒する真田に、メティスが他の者たちの手にある鍵を見ながら警戒しなくても大丈夫なはずだと声を掛ける。
先ほどの戦闘で〝湊〟という自分たちを現在に縛り付けていた楔は倒した。
ならば、アイギスたちはこの世界から自由に移動する事が出来る訳で、現われた鍵を使って扉を開けて外に出れば元の世界に帰れるはずだった。
ようやく事件が解決すると分かってメンバーたちの顔にも安堵の色が浮かぶ。
一ヶ月以上も以前のような戦いに身を投じる生活をしていたのだ。それが終わると思えば彼女たちの気が抜けるのも当然と言える。
しかし、これでようやく外に出られると思ったところで、順平はどうして外に出るための鍵がこんなにもあるのかと首を傾げた。
「あれ？　けど、これって誰の鍵を使えばいいんだ？」
「確かに人数分……ってメティスは持ってないの？」
「私は今回の事件に関係ありませんからね。あくまで事件の原因となった方たちが原因を取り除いた証みたいなものです」

この場にいるメンバーで鍵を持っていないのはメティスだけだ。
犬であるコロマルですら持っているのに、人型のロボットであるメティスが持っていないのはとても不思議だが、確かに事件の原因となったメンバーのみ入手出来るとなれば彼女は無関係なので対象外で当然と言えるだろう。
もっとも、彼女一人が持っていなかったところで、他のメンバーだけで十本以上の鍵があるのだ。
これのどれを使えば正解なのか、どれを使っても良いのか。七歌たちが考え始めたところでメティスが再び話し始める。
「どれが正解というより一つに集めないと使えないと思います。全員が原因だった訳ですから、それの対処も全員分の力でって感じですね」
「ほーん。そういうシステムなのね。けどまぁ、全員揃ってる訳だし大丈夫だろ。んで、これで玄関の扉を開ければいい訳か？」
「はい。もしくは屋上への扉でもいいですけど」
現われた〝時の鍵〟を使って鍵の掛かった扉を開いて外に出れば、晴れて七歌たちは時の空回りから脱出出来る。
最後の番人との戦いは精神的にも辛い物があったが、ようやく終わりだと言われれば頑張った甲斐があったという達成感が湧いてくる。
中には少しばかり心残りを感じているメンバーもいるようだが、彼女たちも全員が無事だった事には喜んでいるに違いない。
そうしてメンバーたちの中に明るい空気が漂い始めれば、一応聞いておくかと先ほどの開ける扉の違いについて荒垣が質問した。
「そういや、屋上への扉でも効果は一緒なのか？」
「いえ、そっちはエントランスにある扉に近い性質なので過去に出ます」
「……は？」
メティスから返ってきた言葉に荒垣は呆けたように聞き返す。
確かに過去改変についての話は前にしていたが、まさか選ぶ扉の違い程度で起こせるとは思っていなかった。
最後の敵を倒せば元の世界に戻るだけ。そう思っていたからこそ

荒垣も気が抜けてしまっていた。
まさかここでその話が出てくるとは思うまい。
当然、今の話は他の者たちも聞いており、案の定、過去改変を望んでいたゆかりが会話に参加してきた。
「過去にって……本気で言ってるの？」
「ええ、そこに関しては兄さんも言っていたはずです。まぁ、楔が消えた以上は寮も現状を維持出来なくなっていきますし、物資補給の扉と違って一方通行なので行けば戻って来られませんけどね」
先ほどアザゼルによって倒された扉の番人が寮を現在に繋ぎ止めている楔だった。
それが倒された以上は寮を包んでいる力も徐々に消滅していき、現世から隔離されている寮は力が消えると同時に放り出される事になる。
上手く元の世界に繋がれば問題ないが、どちらの世界かを選ばない限りは安全な状態で現世に復帰させることは難しいだろう。
そう。自分たちが無事に生き残る事だけを考えるなら、現在と過去のどちらを選んでも問題はない。
恐らくそれは他の者も気付いており、だからこそ美鶴は先に扉の選択で重要な部分について確認を取ることにした。
「もし……もしもの話だが、過去に行くとしたらそちらも鍵は全員分必要なのか？」
「はい。というか、皆さんの鍵は元は一つなんです。その力が人数で割られている状態なので、大前提として完成品しか使えないと思ってください」
「なるほど、選べるのはどちらか一つというわけだな」
希望者だけが過去改変に旅立つ。そんな事が可能であればゆかりたちは間違いなく希望者だけで屋上の扉を潜っていた。
だが、彼女たちの持っている鍵は他の者たちの分も合せないと使えない。
現状ではどうやれば一つの鍵に出来るのか分からないが、彼への強い執着を見せているゆかりが暴走しないとも限らない。

折角ここまで無事に来られたというのに、最後の最後で仲間割れなど御免被りたい。
ならばと七歌はアザゼルの助力への礼を含め、彼女たちのガス抜きと自分たちの今後の行動に対するアドバイスをもらうため彼に会いに行こうかと提案する。
「んー、メティスに聞きたいんだけど、まだ一応の時間はあるんだよね？」
「そうですね。二、三日でどうこうなったりはしないと思いますし、探索の疲れを取るために休んだりは十分出来ると思いますよ」
「そっか。んじゃ、寮に戻ってエントランスの掃除してから一回休もうか。それで起きたら全員で現状報告も兼ねて八雲君に会いに行こう」
ここまでの探索と番人との戦闘で皆も疲れている。そんな状態で話し合っても良い結果にはならない。
また、湊はあえてゆかりたちに過去改変の可能性を伝えていたようなので、こうなってからも何か話すことを用意している可能性がある。
出来ればゆかりたちも納得した上で元の世界に戻れると良いのだが、その辺りは湊が何を語るかによって変わってくるだろう。
彼は時たま変に煽ったりもするので安心出来ないが、少なくとも自分たちだけで話し合うよりは良い結果が生まれるはずだと信じたい。
そんな淡い希望を抱きながら寮に戻った七歌は、他の者たちと協力して過去への扉前に広がる血溜まりを掃除してから部屋に戻って休むのだった。

第四百九十七話　最後の助言

――巌戸台分寮

最後の扉を守る番人を倒した事で〝時の鍵〟を手に入れた七歌たち。

メティスの話によれば、寮の玄関でその鍵を使えば元の世界に、寮の屋上への扉に使えば過去に戻る事が出来る。

ただし、過去へ行けば戻ってくる事は出来ず、メティス以外のメンバー全員が手にした鍵を一つにしなければ使う事も出来ない。

どちらを選ぶべきかという話になれば、残念ながらメンバーの意志は統一されていない。

最後の戦いで唯一人犠牲になった青年を助けたい。彼が犠牲にならないようやり直したい。メンバーの中に強くそう思っている者がいるのだ。

七歌たちは過去の本人に過去改変の真実を聞いているためその選択肢は選べない。

だが、ゆかりは彼から部分的にしか過去改変の話を聞いておらず、だからこそ仲間と争う事になろうとも絶対に譲れないと思っている。

彼女の表情や雰囲気からそれを察した七歌は、事態が致命的な事になる前に彼に相談しようと提案した。

湊は七歌たちが出来る限り穏便に事態を進めようとしていた事を知っている。

なのに、計画を練っていた七歌たちが話をする前にゆかりらに限定的に過去改変の情報を伝えていた以上、彼は何かしらの狙いがあってわざと限定的にしか情報を渡さなかったに違いない。

ゆかりやアイギスも彼に話を聞きに行くことには賛成し、他の者たちも特に異論は出なかったため、彼女たちは転移装置を使って扉の間へ移動して階段を上って寮へと戻ってきた。

真田たちにとっては二年以上、七歌たちにとってはおよそ一年間暮らしてきた自分たちの家だ。

戦いの場から戻ってきてエントランスの景色を見れば、ようやく

帰ってきたと安心感を覚えるのが普通である。
しかし、ようやく戻ってきたなと順平が背伸びをしようと思ったところで、彼らの日常には本来存在していない焦げ臭さを感じて顔を顰める。
「あー……なんかメッチャ焦げ臭くね？」
「あ、うん。さっきも通信で話したけど過去の世界の有里君が無茶したみたいなの。過去への扉の方を見てもらったら分かり易いと思う」
風花に言われて全員が入口横にあるフロントのカウンターへ移動し、今もそこに存在している過去への扉の方を見る。
近付いている時点で焦げ臭さの中に鉄臭さが混じっていたので分かっていたが、実際に扉の周辺を見た途端に順平だけでなく他のメンバーも微妙な表情になる。
そこにあったのは血溜まりだ。一体どれだけの血を流したのか。常人なら意識を失っていてもおかしくないレベルの大きな血溜まりが出来ている。
諸事情により血に耐性のある女性陣は呆れ顔で済んでいるが、日常で血を見ることがほとんどない男子たちは完全に引いている。
「これ、有里さんは無事なんですかね？」
「無事じゃなかったら俺たちの世界のあいつも死んでるはずだ。ならまぁ、一応は大丈夫だったんだろう」
天田の言葉にどこか自信なさげに答える真田だが、彼らは自分ならきっと失血死しているに違いないと考えている。
これほどの血溜まりなど美紀が刺された時や、チドリが狙撃された時にしか見たことがない。
もっとも、ただの学生がそんな場面を二度も見ているだけでも異常なのだが、シャドウとの戦いで少しは血を流すこともあった事で本人たちの感覚も麻痺しているようだ。
後ろでそんな事を男子たちが話しているのを聞きながら、美鶴はとりあえず先にこちらを片付けようと仲間たちに指示を出す。
「まずは血の汚れを拭き取ろう。大部分はトイレットペーパーにでも吸わせて、それから雑巾で細かい部分を拭いていく。明彦たちは見て

いられないなら消臭剤のスプレーでも撒いておけ」
指示を受けると女性陣はテキパキと動き始めて血溜まりを処理していく。
逆に男子たちは大量の血液を明るい場所で見るのは苦手らしく、美鶴の指示を受けて全員が消臭スプレーを取りに駆け出した。
私物を持ってくる者、掃除用具のところから持ってくる者、見つからなかったのでただの水が入った霧吹きをとりあえず持ってくる者などもいたが、全員が焦げ臭いエントランスの臭いをどうにかしようとスプレーの消臭剤を撒き始める。
得手不得手はあるだろうが、普段は自信に満ちあふれた顔をしているというのに、いざとなったときに腰が引けるのは少々格好が悪い。
だが、現実世界から切り離されてほとんど換気が出来ない状況にある今、焦げ臭さと鉄臭さをどうにかしてくれれば女子たちも文句はない。
結局一時間以上かけて掃除したことで何とか最低限普段通りに利用出来る状態にすると、七歌たちは一度休んでから再び集まって、過去に行けない綾時に見送られながら過去の世界の湊に会いに行った。
――古美術〝眞宵堂〟
七歌たちが過去への扉を潜って眞宵堂を訪れると、そこにはレジカウンターでいつも通りに仕事をしている青年がいた。
あれだけの出血をしていながら、どうしてそこまで普段通りでいられるのか不思議でならない。
しかし、彼との付き合いが長い者は彼の態度が、〝何も無理していませんよ〟と白を切っているだけだろうと見抜いて店に入るなり彼を叱りつけた。
「八雲、どうして無茶をしてまであんな事をしたのよ」
「無茶なんて別にしていない。ペルソナを送るくらいなら大丈夫だと思ったからやってみただけだ。実際、何の問題もなかった」
『ダウト!』
どうしてそんな言葉で騙せると思うのか。彼の言葉が嘘だと分かっている女子たちの声が重なる。

言われた本人は女子たちが何を言っているのか分からないという顔をしているが、ジッと見つめられていると観念したのか小さく嘆息し、それからどうして嘘がバレたのか聞いてくる。
「……なんで怪我したと分かったんだ？　奥の通路はちゃんと掃除しておいたのに」
「はい、確かに通路には血の跡もなく綺麗でした。ですが、わたしたちの寮のラウンジと繋がる扉のところに大量の血液が残っていたんです。こっちの世界の方は上手く誤魔化せても、流石にわたしたちの世界の方までは出来なかったようですね」
話を聞いた湊はそこは盲点だったと納得した顔を見せる。
確かに七歌たちがこちらへ来たときには、こちらの世界の扉の周辺は綺麗なままだった。
彼の目の力を使えば存在を殺せるので、通路の血溜まりは存在を殺して完璧に証拠隠滅出来たのだろう。
けれど、いくら一度見た空間の歪みを再び見抜いて強引に干渉出来る力があっても、大怪我を負っている状態では向こう側の細かな部分の処理まで気を回す余裕はなかったらしい。
そこまで確かな証拠があれば湊もこれ以上は誤魔化す気はないため、別の話題に持っていくことで説教を回避しようと試みる。
だが、彼の性格を理解しているアイギスが正面から彼を見つめ、しっかりと目を合せたままさらに言葉を続けた。
「八雲さん、あなたはもっと自分を大切にするべきです。敵の姿と強さに驚き劣勢だったことは認めますが、それでも自分たちだけでも勝つことは可能でした」
それを伝えながらもアイギスは戦いの状況を思い出して実際はかなり危うかったと考える。
あの番人の湊が本物だったのか偽物だったのかは分からない。解析の専門家である風花とチドリでも分からなかったのだ。他の者に判断がつくわけがない。
おかげで本人の可能性があるからとゆかりやアイギスは戦いに参加出来ず、一気に攻めた綾時らのペルソナが撃破された時には時間を

稼ぐためにチドリも含めて妨害に動こうとしていた。
番人の湊が本人だったなら確かにそれを倒すのは間違っている。言葉が通じるなら説得を試みようと考えるのも分かる。
彼女たちのそういった考えもある意味では正しいのだが、そんな彼女たちの思惑も、敵として倒そうと思っていた者たちの思惑も、ここにいる湊の一手で粉々に打ち砕かれた。
終わった今だからこそ冷静に考える余裕もあり、あれは原因を作った者たちが自分の手でどうにかすべき問題であり、過去の湊に手を下させて良いことではなかったとアイギスも考えている。
しかし、アイギスたちのそんな想いを知ってか知らずか、湊は普段通りの淡々とした口調で返してきた。
「……さっさと終わらせたかったんだろ。それに時の空回りの原因が俺なら自分の事は自分でやるさ」
湊の言葉を聞いて、ゆかりは過去の自身の発言が今回の行動を起こさせたと理解する。
彼の性格を思えば十分に予想出来ることだった。
大前提として時の空回りに湊は一切関係ない。影時間の消滅と一緒に消えたタルタロスの残留エネルギーに七歌たちの未練が反応して起きた事故のようなものだ。
彼女たちの未練は彼に関係しているものだが、あくまで残された者たちの心がトリガーなので、湊側にはどうしようもないものなのである。
過去の世界にきたばかりのゆかりは感情的になって、未練の原因は未来の湊が一人で犠牲になったことだと責めた。
それを聞けばここにいる湊が無茶をしてでも責任を取ろうとする事など簡単に予想がついたというのに。
自分のせいで彼に関係のない責任を取らせてしまったゆかりは、彼に償う方法がまるで思い付かず深くを頭を下げてただただ謝罪する事しか出来ない。
「ごめん、私が言ったせいだね。本当にゴメンなさい」
「……別に岳羽の言葉は関係ない。俺は〝俺を頼れ〟という言葉に

従っただけだ。どっちにしろこれで終わりだしな」
頭を下げ続けるゆかりに対し、湊は未来の自分の言葉の責任を全うしただけだと答える。
七歌たちにすれば十分に頼らせてもらっており、物資の補給だけでも十二分に助かっていた。
それだけでなく個々のメンタルケアまで影で行なってくれていたというのに、無理をしてまで戦力を送ってくるなど明らかに〝頼る〟の域を超えている。
もっとも、湊の先ほどの言葉はあくまで自分の意思でやったことだと告げる事で、ゆかりが責任を感じないよう気を遣っただけだろう。
彼は変なところで強情なので、彼の行動と無関係なゆかりが何を言ったところで謝罪を受け入れたりはしない。
ゆかりもそれは分かっていたため謝罪をやめ、小さくありがとうとだけ返しておいた。
感謝の言葉を贈られた青年は何の話だという表情をしているが、彼がそういった反応をしてくるのは分かっているため他の者は何も言わない。
両者が納得しているならその話はここで終わりだ。
ただ、湊がもう事件は解決したなといった雰囲気を見せてきた事で、実はまだ続きがあるんですとメティスがここへ来た本題を切り出した。
「あの、兄さん。実は兄さんの贋物を倒したら鍵が現われたんです。数は姉さんたち一人につき一本で合計十三本。どうやらそれを一つにまとめて寮の入り口を開けば時の空回りを終えられるはずなんです」
メティスにとっては番人の湊は贋物だったらしく、贋物と断言した状態で話を進める。
目の前にいる青年が未来に向けて送ったアザゼルの一撃で消滅した以上、あれを本物か贋物か議論するだけ無駄なのは分かっている。
そのため、メティスがアイギスから鍵を借りて見せながら説明している時も誰も口を挿まない。

ただ、その鍵を見て彼がやや不思議そうにしているところは気になり、話をしていたメティスが彼に尋ねる。
「兄さん、何か気になることがありましたか？」
「いや、鍵の形状が寮の鍵と違っているからな。これで本当に開くのか気になっただけだ」
「多分、結界に穴を開けるための道具的な扱いなんだと思います。それらしき鍵穴もありませんし」
寮で暮らしている者たちは、何故寮生ではない湊が本物の鍵の形状を知っているのか気になった。
けれど、そこに突っ込むと話が脱線してややこしくなるため、咳払いした美鶴がメティスの説明しなかった方の使い方を彼に伝える。
「だが、その鍵には別の使い方もある。寮の屋上へ続く扉に使えば今のように限定的にではなく本当に過去に戻れるらしい」
もう一つの使い方を説明すると七歌や美鶴は彼の様子を観察する。
元々、過去改変について情報を告げてきたのは彼だ。現われた鍵の使い方も予想出来ていたはず。
となれば、それを伝えた時点で彼がゆかりたちに不完全な形で過去改変の情報を渡していた意味も分かるだろう。
そんな風に考えて彼の言葉を待っていれば、湊は迷う余地はないなと簡潔に答えた。
「……なら入り口に使えばいい。過去に戻る意味はない」
「なんで？　過去に戻れば色々とやり直せるんだよ？」
彼ならば入り口に使って元の世界に帰れと答えるのは分かっていた。
しかし、どうして過去に戻る意味がないとまで言い切るのか。
過去改変に一縷の望みをかけていたゆかりが看過出来ず問い返せば、彼女の話を聞いていた真田が口を挟んだ。
「岳羽、お前は前を向くんじゃなかったのか？　過去をやり直すなど対極なことだぞ」
「分かってます。でも、それでもやっぱり自分に嘘は付けないから。私は過去に戻って有里君が死なないようやり直したいんです」

ゆかりだって最初からそんな風に考えていた訳ではない。
彼が守ってくれた世界だから、彼が繋いでくれた明日だから、そう自分に言い聞かせて生きていこうとしてきたのだ。
だが、目の前にいる青年と出会ったときにそんな自分の生き方は過去に囚われたものだと言われ、本当に自分は間違っていたのかと悩んでいるところに、あの戦いの結末を変えられるかもしれないチャンスが転がり込んできた。
こんな奇跡は二度と起きない。ならば、ゆかりは自分の正直な気持ちに従って過去をやり直したいとはっきり告げた。
他の者だって彼女の言い分は理解出来る。誰だって仲間の死を簡単には受け入れられないし、そんな形で救われた事に思うところがない訳でもない。
ただ、いくら納得出来ないからといって、彼の命懸けの選択をなかった事していい訳がないと荒垣も口を挿む。
「俺だって自分を犠牲にした有里の選択には納得し切れてねぇ。だがな、それでもあいつは命使ってでもお前らを守ったんだ。その覚悟も、想いもお前はなかったことにするのか？」
「……分かるから辛いのよ。苦しいことから逃げてるだけかもしれないけど、それでも私も湊には生きていて欲しい」
荒垣の言葉に、ゆかりに代わってチドリがただ静かに答える。
家族としてずっと過ごしてきたからこそ彼女の切実な願いが重く響く。
真田や荒垣のように彼の想いを汲んで今の世界を生きていこうとする事も、ゆかりやチドリのように転がり込んできたチャンスに賭けようとするのも、どちらも決して間違いではない。
それは彼との関係性の違いであったり、何に重きを置いているかの違いでしかないのだ。
だからこそ、いくら話し合ったところで答えが纏まることはない。
鍵は本人が譲渡しようとしない限り奪ったところで融合しないため、このまま話が平行線を辿るなら鍵を賭けて戦うしかないだろう。
だが、誰かがそれを切り出す前に、今まで黙って彼女たちの話し合

いを聞いていた湊が口を開いた。
「……岳羽、チドリ、悪いがお前たちは前提からして間違えてる。過去に戻っても歴史をやり直す事は出来ない」
『……え？』
名前を呼ばれた二人だけでなく、詳しい話を聞いていなかったアイギスも揃ってどういう意味かと彼を見つめる。
過去改変について聞いていた七歌たちも、このタイミングで切り出してくるのかと思いつつ話の続きを聞く。
「お前たちは扉を潜ってこちらに来たな？　なら、何故そちらでも同じ事が起きると思わない？」
「つまり、過去をやり直せるのではなく、その世界の自分が存在する過去に私たちが行くということか？」
「ええ、確証はありませんが可能性は高いかと」
彼の言葉を理解しようと頭を働かせている少女らに代わって美鶴が詳しく聞けば、湊はその通りだと頷いて返す。
ゆかりたちは所謂タイムリープ、過去の自分に未来の記憶を持った今の自分の意識が宿る事を想像していたに違いない。
けれど、時の鍵を使おうが過去への扉を潜るという形を取るならば、今の七歌たちのように過去の世界に未来の自分たちが移動するだけだと考える方が自然だ。
その世界にはその世界で生きている本人たちがいるため、いくらそちらの湊が生き残る未来に辿り着こうが、異物である二人目のゆかりたちでは望んだような結果にはなり得ない。
「仮にお前たちの意識だけが過去に跳んだとしよう。だが、そうなればお前たちはその世界の自分の人格を上書きして殺すことになる」
「でも、同一人物なんだから結果的に未来の記憶を得るだけでしょ？」
「いや、違うな。言い訳しようが一人の人間を殺すことにかわりはない。そして、その世界の俺はすぐに変化に気付き、お前たちを自分の知る者たちを殺した〝お客さん〟として扱うだろう」
さらに湊はゆかりたちが考えていたであろう状況の方でも、お前たちが望んだ結果にはならないと残酷に告げる。

湊は未来人の七歌たちが来たときにすぐ気付いていた。それは気配であったり、適性の強さであったり、様々な要素で未来人だと判断した訳だが、もしタイムリープが起きればその変化にそちらの湊も気付くだろう。
変化に気付いた湊は自分の知る彼女たちの意識を上書きした存在を赦さない。
よって、彼女たちの望んだ形で過去に戻れたとしても、望んだ結果が得られない未来は訪れないという事になる。
時間を概念的に理解していて、状況を誰よりも把握している彼からそんな事を言われてしまえばゆかりたちも納得するしかなく、希望を断たれた彼女たちはどうあっても彼を救えないことに悲しみの涙を流す。
「な、なんでよ。何で死んだのかも分からないままで、せっかく、やり直せるチャンスが手に入ったと思ったのに。……こんな、こんなぬか喜びさせるだけの結果になるなら……」
「……はぁ、じゃあ過去をちゃんと見てくれればいいだろ」
目の前で泣き始めたゆかりたちに呆れた様子で湊が呟く。
これには他の者たちもどういう事だと言葉の意味を理解出来ず、それを見た湊は何でこんな簡単な事も分からないんだと深く溜息を吐く。
今回、彼女たちは未練が原因で時の空回りに巻き込まれた訳だが、何故そこまでの強い未練を抱いたのか。
その根本的な原因をしっかりと理解していれば、自分たちの置かれている状況からそれを解決するための方法も思い付くはずだと説明する。
「お前たちは未来の俺が何をしたか分からないから不完全燃焼なんだろ。なら、ここへ来たときのように、ニュクスとの戦いの日の俺の許へ行ってくればいい」
「せやけど、過去に繋がる扉なんてもう残ってへんよ?」
「あるじゃないか。今も過去と繋がってる扉が」
全てのダンジョンを攻略した事で時の狭間にあった扉は全て消え

ている。
　そのためラビリスは過去へ繋がる扉はもう存在しないと言ったのだが、湊の言葉に全員がハッとした顔になった。
　確かにダンジョンの最深部にあった〝過去へ繋がる扉〟は全て消えてしまったが、今も〝過去に繋がっている扉〟は残っている。
　この世界に繋がったのが彼女たちの意思の反映ならば、再び願えば別の場所に繋がる事もあるだろう。
「真実を知って、それから先に進めばいい。どうせ俺の事だ。多分、何かしらのメッセージは残してるはずだしな」
　過去の世界の存在と言えど彼は自分たちの知る湊の過去だ。ならば、本人が言った通り時の空回りを解決すれば何かしらの手段で彼のメッセージが届くようになっているのだろう。
　自分の死を知っていた彼がどんな言葉を残していたのか。それが気にならないと言えば嘘だが、あの日の真実を見に行けば恐らくここには戻ってこられない。
　既にメンバーたちの気持ちはあの日の真実を見に行くことに固まっているが、それでもアイギスはここにいる湊との語らいが名残惜しくて意味のない事を尋ねてしまう。
「もし、あの日の真実を見に行ったら、その後はどうなりますか？」
「……元の世界に帰って終わりだ。もうここに戻ってくる事はない」
「そう、ですよね……」
　真実を知ってなお過去改変を選ぶにしろ、元の世界に帰るにしろ、ここに再びやってくる事はもうないだろう。
　自分でも分かっていたのに、改めて彼の口からその事実を聞いてしまうと気分が沈んでしまう。
　時間はあるのだからもう少しくらいは良いのではないか。しっかり休養をとって、それからあの日の真実を見に行っても問題はないはず。
　そんな後ろ向きな考えが頭を過ぎるが、俯いていたアイギスは頭に温かな手が置かれる感触を感じ、視線を上げればそこには優しい笑みを浮かべる彼の顔があった。

「……またな」
「……はい。八雲さんもお元気で、本当にありがとうございました」
それは再会を願う別れの言葉。彼の小さな気遣いに勇気づけられたアイギスはしっかりと笑顔を浮かべてこれまでの感謝を告げた。
「八雲君、今までありがとう。また会おうね」
「もう過去には来るな。それと……向こうに残ってるもう一人にもよろしく言っておけ」
店を出て行く前に今までの礼を言った七歌に、湊はこちらに来ていないもう一人の仲間への伝言を頼んだ。
どこでその存在に気付いたのか。七歌たちは驚きに目を見開くが、メティスが鍵は十三本と言っておきながらメティス本人が持っていない事でもう一人存在する事に気付いたらしい。
それが誰であるかも察してはいるようだが、未来の情報はあまり聞くべきではないからと名前は言うなと彼は言った。
最後の最後でそんなサプライズもあったが、他の者たちも席を立つと彼にこれまでの礼を言って店を出て行く。
七歌たちはあの日の真実を知るため、過去の湊に別れを告げて寮へと帰っていった。

第四百九十八話　再びあの日へ

――巌戸台分寮

過去の湊と別れを告げた七歌たちは、留守番してくれていた綾時と合流した。

彼は自分が湊の中にいた時の事を覚えており、その関係で特別課外活動部のメンバーが過去へ行くことも知っていた。

しかし、彼が知っていたのはあくまでメンバーが過去へ行ったばかりの事だけで、それ以降にどういった交流があったかは見ていないという。

曰く、湊は自分の中に自我持ちのペルソナたちがいることで、プライベート全てを覗き見されぬようロック機構をつけていたらしい。

彼の中にいた綾時にもその力は作用し、過去の湊は綾時に外のことを見せないようにしていた。

こんな事が起きると分かっていれば、どうしても行動に何かしらの影響が出るのは分かる。

別れ際にもう一人の仲間によろしくという伝言を頼んできたこともあり、どうやら自分の友人が最後の戦い以降も現世に残っている展開を当時から既に予想していたらしい。

あちらで湊と話した事を全て伝え、自分たちが物資補給に使っていた過去への扉を使い。その力であの日の真実を確かめに行くことを綾時に話した七歌は、湊との約束を守るため綾時に彼からの言葉を伝える。

「綾時君、あっちの八雲君が綾時君によろしくだってさ。こっちに一人で残ってる事に気付いていたみたい」

「フフッ、湊らしいね。気付ける要素なんてほとんどなかったと思うんだけど」

「まぁ、そこら辺は八雲君だしね。確信を得たのは鍵を持っていないメティスが鍵の本数を伝えた事だったらしいけどさ」

物資の補給はモール内のドラッグストアを除けばほとんどを湊に頼っていた。

外に出られれば違ったのだろうが、ショッピングモールに入っているテナントでは生鮮食品が手に入らなかったこともあって、彼は七歌たちがどれだけの食材を消費しているか把握出来ていたのだろう。
最初は小さな違和感でも積み重なれば大きなズレとなる。
そこからメンバーの人数をおよそ予想し、男が一人か女子が二人残っていると考え、女性物ではなく男性物の衣類などを多く買っていた事で男が一人、恐らくは過去に来た場合の影響が強い未来のファルロスだと察していたに違いない。
言葉を交わすことは出来なかったが、それでも気付いて気に掛けて貰えたのは嬉しかったようで、綾時は少しだけ遠い目をしつつも穏やかな笑みを浮かべた。
そうして、一頻り今後の予定について話すと、どのタイミングでそれを行なうかという話題になり、美鶴が全員に問いかけた。
「それで、あの日の真実を確かめに行くわけだが、いつ行くか今の内に決めておこう」
「タイミング的には準備を終え次第すぐ行くか、一日休んでから行くかの二択だね。僕はこっちに残って休んでたからどっちでも構わないよ」
こちらに残っている間、綾時も別に遊んで時間を潰していた訳ではない。
何かのトラブルが起きれば自分が対応するしかないため、探索の疲れを少しでも回復するためラウンジのソファーで休んでいたという。
他の者たちもある程度は過去に行く前に休んで回復しているので、そこまでしっかりと休憩を取るつもりはない。
ただ、彼女たちが行くのはニュクスと彼が戦っている過去だ。
何が起きるか分からない以上、出来る限りの準備はしておいた方がいい。
「ただ、休むとしても寮内限定なのは覚えておいて。八雲君としっかりお別れをして、私たちがあの日の真実を確かめるって意識になってるから、既にそこの扉は過去のポロニアンモールに繋がってないはずだから」

どちらを選んでも構わないと思っている七歌は、皆が答える前に一応の注意をしておく。
あと一日休んでからならば、もう一度過去の彼に会いに行く時間はある。
だが、彼と別れて寮に戻ってきた時点でその願いは叶わなくなっているのだ。
なので、過去の世界の湊の事は考えず、今の自分の体調から素直に判断して欲しい。そう告げると各々で考えて全員がすぐに行くと決断した。
「分かった。だが、有里とニュクスが戦っている可能性が高い。行く前に我々も戦闘の用意はしておこう」
「あれ？　でも、有里って宇宙にいったんスよね？　もしかすっと、オレらも宇宙に放り出される可能性ありませんか？　」
あの日の真実を確かめると言っても、それがどのタイミングのどの場所なのかは指定が出来ない。
少なくとも彼とニュクスが衝突した後のはずだが、彼はニュクスを連れて宙へと向かった。
もしかすると、自分たちもその宇宙に出てしまう可能性がある。順平がその事を指摘すると美鶴や七歌も確かにと難しい顔になる。
「あー、そこは盲点だったね。宇宙服とかどうしようか」
「アイギス、因みにだが有里の所持品に宇宙服はあるか？」
「えっと……あ、はい。複数ありそうです。ですが、これを着た状態で動くのは難しいのでは？」
今から宇宙服を用意することは難しいと思ったが、湊のマフラーと繋がっているアイギスのリストバンド内に複数保管されている事が分かった。
試しに一つ出して見ると、どうやらＥＰ社製のオリジナルらしく想像よりもスリムでスタイリッシュなデザインだった。
皆のイメージではマシュマロマンのような着膨れしたデザインだったので、それよりは動きやすそうだが、あくまでスーツ単体での話である。

それぞれの通信機材や酸素の供給など、素人である彼女たちではセッティング方法が分からない。
ロボットであるメティスなら何もつけずに行けるだろうが、他の者たちは不備があればそこから空気が抜けて窒息しながら干からびる。
いくら宇宙服があってもこれでは挑戦出来そうにないと片付ければ、傍で見ていたメティスが不思議そうにしつつも口を開いてきた。
「あの、何を心配しているのか分かりませんが、行き先が宇宙でも呼吸出来ますから大丈夫ですよ？」
「え、なんで？　だって、宇宙で空気ないんでしょ？」
メティスの言葉にゆかりが思わず聞き返す。
宇宙には空気がない事など日本の学校に通う子どもなら小学生でも知っている事だ。
それが各国のトップが一般企業の宇宙進出を阻むために広めたデマなら驚きだが、富士山に登れば空気が薄くなる事を知っているゆかりは恐らく真実だと信じている。
故に、どうして宇宙なのに呼吸出来ると言ったのか。そこについて尋ねればメティスは素直に答えた。
「私たちがいくのが過去の世界だからです。扉を通じて限定的に許可を得ているので過去には干渉出来ますが、皆さんはあくまでこちらの存在ですから死ぬような場面では存在がこちらに引き戻されます。なので、宇宙に行くなら向こうで滞在出来る状態でという形になるはずなんです」
あの扉はあくまで限定範囲で過去へ干渉出来る物であり、時の鍵を使った場合と違って七歌たちの存在は元の世界側として認識される。
だからこそ、そちらでの干渉を許可されたならば、扉を通った時点でそちらで活動出来る状態になっているらしい。
説明を聞いてもどういう事か分かっていない順平に、分かりづらければそういった〝加護〟を付与されていると思えばいいと伝え、メティスはさらに補足で説明を入れる。
「あっちには既にニュクスがいるので綾時さんも問題なく移動出来ます。ニュクスと戦う事になるかは兄さんの行動によりますが、私の予

想ではその可能性は限りなく低いかと」
「……貴女は八雲が何をしたか知っているの？」
「いえ、知りません。でも、兄さんは多分ニュクスが二度と世界に現われないよう手を打っていると思うんです。だから、多分こうなんじゃないかって予想はあります」
チドリに聞かれたメティスは自分も真実は知らないと首を振って答える。
けれど、彼女も過去の湊と接している内に彼がどういった想いで動くのかは理解出来ていた。
ニュクスの齎す滅びを否定し、そうして地球上の生命全てに明日という未来を与えた青年の選択。
それがニュクスを元いた場所へ再封印を施す事だとは考えづらい。
他の者たちはその意味を理解出来ていないようだが、綾時だけは何となく分かっているようでメティスの方を見ながら微笑んできた。
「多分、メティスの言う通り向こうでは空気の心配はいらないよ。僕たち全員が自分と仲間の死を願っていない限り、行ってすぐ死ぬような場面なら僕たちを移動させられないだろうしね」
あの扉は仲間たちの想いや願いに反応して過去へと繋がってくれていた。
それを考えればその願いを叶えられずに死んでしまうような状況に繋がる事はまずない。
綾時もそう説明した事で納得したのか、生身で宇宙に放り出されるような事態にはならないと他のメンバーも理解した。
ならば、後は全員がもしもに備えて戦う準備を整えればすぐに過去へ行けることになる。
今回は綾時や風花も同行するので、戦いに参加出来ない風花は湊が用意した宝玉輪などを多めに持っていく形でサポートも行なう事に決まった。
そうして、それぞれが部屋に戻って装備を整えて再びラウンジに集合する。あちらで何が起きるか分からない事もあって、全員の表情にはどこか緊張感が漂っていた。

「よし。じゃあ、皆あの日の八雲君に会いたいって願って。ニュクスと共に地球を離れて彼が何をしたのか。それを知りたいって強く意識して」
必要なのはただ願うこと。あの日の真実を、彼が何を為したのかを、それを確かめたいと心から思うことだ。
全員瞳を閉じて今一度それを強く願う。
それだけをしっかりと強く願って、再び目を開けると視線で確認し合って頷いた。
「行こう。皆であの日の真実を確かめに」
七歌の号令を受けて全員で扉の中に飛び込んでゆく。
どうかあの日に繋がるように、彼の許に自分たちを導いて欲しい。
その願いに呼応するよう強く扉が光ると、七歌たちは別の過去へと移動していた。

1月31日（日）
影時間――宇宙
扉を潜って強い光に飲み込まれると、次に目を開けた時には移動を終えていた。
周りを見れば遠くに輝く星々が見えており、振り返れば青い地球が見える。
問題なく呼吸出来ている事よりも、本当に宇宙に来られた事への感動が勝ってしまい。
天田はここが決戦の日である事も忘れて呆けた様子で声をあげた。
「すごい……地球ってこんなに綺麗だったんだ……」
「まぁ、こんな光景なんて一生に一度でも見られるヤツの方が少ないだろうな」
星の海に立っているという不思議な感覚と、自分たちの故郷である地球を外から眺めるという貴重な体験。
この感動は生涯忘れることはないだろうと荒垣も感慨深げに呟く。
だが、その感動はそう長くは続かなかった。周りを見ていたゆかり

が巨大なドラゴンと共にニュクスを宙へと押し返す彼を見つけたからだ。
「あれ！　あのドラゴンって確かあの時の！」
「はい。八雲さんが呼び出した最後のペルソナです」
月という肉体を取り戻したニュクスを押し返し、命の光を纏ったドラゴンが地球から離れてゆく。
タルタロスの頂上から見ていたときよりもしっかりとその姿が見られた事で、あんな敵に一人で立ち向かったのかと胸が苦しくなる。
だが、本当に見るべきはここからだ。あの日、彼が宙に行ってから宇宙で何かが爆発すると、地上を白い光が包み込んで気付けば戦いは終わっていた。
自分たちがどうやって寮に帰ったのかもろくに覚えておらず、だからこそ、今日はその真実を確かめるんだと全員の視線が彼へと向けられる。
ニュクスを押し返したまま宙へとやってきたドラゴンは、そのまま地球からある程度の距離を取った所で停止する。
そして、ドラゴンの頭上に立っていた青年が人差し指を伸ばした左手を頭上に掲げると、
「さぁ、眠ろうニュクス。俺もちゃんと付き合うから」
そう呟いて彼を中心に光が広がって、ドラゴンとニュクスを呑み込みさらに広がり続ける。
光を受けたニュクスは爆発し、ドラゴンもその役目を終えたように金色の光の粒になって消滅して、最後に残った青年の身体が一際強く輝くと輪郭がぼやけて別の姿へと変わり始めた。
輪郭がぼやけた身体は一度球体になると、そこから広がって壁のような四角い物を形成してゆく。
一体何が起きているのか。そう思って見守っていると、彼女たちの目の前には見上げるほど巨大な金色の扉が現われていた。
金色の扉には中央に巨大な〝太陰太極図〟が描かれ、まるでその扉を封印するように途轍もなく太い黒い茨が巻き付いている。
一体これは何なんだと思っていれば、メンバーの中でも最も事情を

知っていそうな二人が大きく動揺を見せていた。
「なんだ、これは……。こんな封印、僕は知らない……」
「どうして兄さんがいないの？　これじゃあ、封印としての意味が……」
綾時とメティスはきっと湊がどういった封印を施していたのか予想出来ていたのだろう。
だが、実際に現われた封印の扉を見て、自分たちの予想とは違った物が出てきた事に驚いたに違いない。
七歌たちにすれば最初の予想の方から気になるのだが、今聞いても大丈夫なのかと思ったところでお互いで意見を交わし始めた。
「綾時さん、あの封印は遮断結界じゃないんですか？」
「ああ、僕もそう考えていた。人類の意思を、死を求める心を遮断する事でニュクスが二度と現われないようにするのだと思っていたんだ」
「でも、その要石がありません。私は兄さんがその役目を果たすのだと思っていたのに、あんなベアトリーチェの力から派生した茨だけじゃ封印としての役目なんて」
二人から見ると扉の封印は最も重要なパーツが欠けた不完全な物らしい。
そも、他の者たちはあの扉が何に対して作用する物なのかも分かっていないのだが、二人が話している途中で周囲を警戒していた風花が巨大な気配の接近を感知する。
「なにか、なにか巨大な気配が近付いて来ますっ」
風花の声を聞いて全員が武器を構えれば、突如発生した金色の雲の中からビルのように大きな黒い腕が現われた。
ストレガの一人が使っていたペルソナよりも遙かに巨大で、湊や理が海上で戦わせていた規格外のペルソナに匹敵するレベルの大きさ。
そんな巨大な存在がどうして突然ここに現われたのか。
その理由について考えている間に、腕だけでなくその全身が姿を現わし、七歌たちはその異形に思わず顔を顰める。
まるで二人の人間の上半身を繋ぎ合わせたかのような、歪な形で前後に顔のある双頭の黒い化け物。

身体のパーツの形は人間のそれだが、顔は口の骨だけが剥き出しにあって、その上に赤く光る球体で出来た目が存在している。
二つの頭部の違いを挙げるとすれば、扉に向けて手を伸ばす方の頭には反り返った長い角があり、逆の頭には逆向きに反った長い角があるくらいだろうか。
そんな風に現われた存在の姿を観察していると、アナライズを掛けていた風花があれの正体を突き止め、顔色を青くしながら震えた声で伝えてくる。
「あれは、シャドウじゃありません……。人々の負の感情、死を求める心が集まった存在。有里君が言っていたニュクスを地球に呼んだ滅びの意思の正体ですっ」
言われて事情を知らなかった全員が目を見開く。
あんな醜い化け物が自分たち人間から生まれた物だとは到底信じられなかったからだ。
あれほど巨大な化け物を人類が生み出し、それが封印されていたニュクスに触れる事で神は地球に降臨した。
滅びの意思の正体を知ったことで、七歌たちもその意味がようやく理解出来た。
だが、ニュクスが再封印された後もその滅びの意思が残っており、今まさに新たな封印に触れようとしている。
このままでは拙いのではないか。綾時とメティスによればあの封印は不完全だという話だ。
もし、あの封印が破壊されれば湊の犠牲は無駄になり、再びニュクスが地球に降臨する事になってしまう。
「ダメだ。今すぐにあいつを止めないとっ」
金色の扉に向かって伸びてゆく黒い腕を見ながら綾時が叫ぶ。
全員がすぐにペルソナを呼び出して攻撃を仕掛けることで何とかそれを阻止しようと考えた。
だが、七歌たちが攻撃を仕掛けようとした時、封印の扉に変化が起きた。
蛍火色の光が扉の前で渦巻き、その中央に光と共に力が収束してゆ

く。
そうして、一際強く輝いた光が治まると、そこから剣閃が飛んで伸ばされていた黒い腕が強く弾かれ化け物が大きく後退した。
封印の変化を見ていた者たちはそこに現われた存在を見て思わず息を呑む。
黒いマフラーを首に巻き、左手に青白い光の紋様が浮かび上がった大剣を持つ青年。
見間違えるはずがない。そこにいたのは彼女たちのよく知る人物、封印となって消えたはずの有里湊だった。

第四百九十九話　エレボス

影時間――宇宙

封印の扉へと手を伸ばす滅びの意思より生まれた化け物。

これまで出会ってきたシャドウは勿論、七歌たちが戦ったニュクス・アバターよりも遙かに巨大な双頭を持つ異形。

あれこそが心の海に封印されていたニュクスを現世へ呼び出した元凶だ。

人々の負の感情、死を知りたがり、死を求める心が集まって、世界の滅びを求める存在としてこの世に生まれたアレが干渉した事で呼び声に応えてニュクスは降臨した。

人間に近い骨格の上半身二つを繋いだ不気味な見た目は、本当に人々の心から生まれた物なのかと疑わずにはいられない。

だが、それは現実として存在し、今尚滅びを求めているのか新たな封印へと手を伸ばしている。

このままでは拙い。そう叫ぶ綾時の声に反応して全員が化け物を止めようとペルソナを呼び出そうとした。

けれど、敵の黒い巨腕が扉に触れる前に、蛍火色の光の中から現われた青年の放つ剣閃によりその腕は弾かれた。

黒いマフラーを首に巻き、青白い光の紋様が浮かび上がった大剣を左手に持つ姿は、どうあっても見間違えようがない。

現実世界の裏側に存在する影時間、そのさらに奥に存在する心の海。隠世とも同一視される場所へニュクスと共に旅立ったはずの青年〝有里湊〟がそこにいた。

扉を背に守るように立っていた青年は、何もない空中を蹴って飛び出すと大剣を両手持ちにして敵へと斬りかかる。

先の剣閃を受けた敵はその武器が己に届き得る物だと理解したのか、巨体を活かして大きく後退することで青年の攻撃を回避すると、攻撃が不発に終わった青年に向けて力任せに右腕を振るう。

両者の体格差は数百倍、それだけの差があれば獣のような本能頼りの攻撃でも肉体の基本性能だけで相手を圧倒出来た。

攻撃を避けようと青年は超人的な反応を見せるが、ビルのように巨大な腕が自分目掛けて伸びてくれれば完全に避けきることは出来ず、咄嗟に構えた大剣に敵の腕が掠って大きく弾き飛ばされる。
弾き飛ばされた青年は見えない地面を数十メートル転がりつつ、その勢いを利用しながら立ち上がると、再び敵へ挑むべく駆け出して相手の腕を狙って斬りかかっていった。
＊＊＊
離れた場所からそんな戦いを見ていた七歌たちは、事態の変化に思考が追いつかず必死に目の前の事を理解しようとする。
数時間前にダンジョン最奥で出会った番人の彼と違い。今自分たちの視線の先で戦っている彼には確かな個と命を感じる。
具体的な根拠などはなく上手く説明する事も出来ないが、彼は間違いなく有里湊本人だと感覚的に全員が理解出来ていた。
だが、だからこそ今の彼の状態は分かる者には分かるらしく、綾時は苦痛に耐えるように顔を歪ませ、メティスは頭を抱えてその事実を受け入れられないとばかりに取り乱す。
「待ってください、そんな、だって普通そんな事なんてっ」
事情をある程度予想していたはずの二人がどうしてそこまで動揺しているのか。
他の者たちは彼の出現も含めて事態が飲み込めておらず、どう行動するべきかも悩んでいる状況だ。
自分たちは過去に来ている訳だが、あの戦いに参加しても良いのか。参加してしまえば歴史が変わってしまうのではないか。
けれど、如何に彼が規格外の強さを持っていようが、大剣一本で巨大な化け物に勝てるわけがない。
何故彼がペルソナを使わないかなどの疑問は置いておき、状況を少しでも変えるため美鶴は声を張り上げて綾時たちに正気に戻るよう呼びかけた。
「望月、メティス、我々にも状況を説明してくれっ」
大声で呼びかけ、さらに他の仲間たちも二人に視線を送った事で、綾時たちも少しだけ冷静になったのか深く息を吐いて呼吸を整える。

視線の先では今も彼が戦っており、旗色が悪いのも見ていて分かる。
だからこそ、今はしっかりと情報の共有をして次の行動に備えるべきだと、綾時も自分に分かる範囲で皆に話し始めた。
「……僕たちは湊がニュクスを封印したと説明していたけど、それは正確な表現ではないんだ。そもそもニュクスに封印は必要ない」
「はぁ!? 何言ってんだ。実際にオレたちの世界はニュクスに滅ぼされかけたじゃねえか！」
「ああ、結果だけで言えばそうなる。でも、あれは滅びの意思であるエレボスが干渉し、それに答えた結果世界が滅びようとしただけで、ニュクス自身にはこの世界への害意は存在しないんだ」
あそこで彼と戦っている異形の名はエレボス。
人類の負の感情や死を知りたがる心が集まり、滅びを求めて死の神であるニュクスを呼び出す存在として生まれた物だ。
あれだけの化け物が人類の意思だと干渉してくれれば、ニュクスがそれに応えようとしても無理はないと全員が一応の納得を見せる。
しかし、世界を滅ぼそうとしたニュクスが真の意味では敵でなかったとするならば、それを封印するために命を使った彼に何の意味があったのか。
まさか彼の行動が無駄な犠牲だったとでも言うつもりかとゆかりが綾時らに食ってかかる。
「じゃあ、有里君の犠牲は無駄だったって事？ あの封印の扉も無意味で、有里君は何の意味もなくその命を使ったとでも言うわけ?!」
「違います。兄さんは滅びの原因をちゃんと分かっていたんです。ニュクスのせいじゃない。今あそこにいるエレボスが原因だって。だから、兄さんは世界を守るために、エレボスからニュクスを守るための封印を作ったんです」
彼の行動にはちゃんと意味があった。怒りで興奮するゆかりにメティスはしっかりと伝える。
ニュクスが地球に対する害意を持っておらず、エレボスの干渉が原因で滅びを齎そうとしていた。

死を視る事が出来るほど理解していたが故に、誰よりもニュクスの事を知っていた青年も当然その事には気付いていた。
だが、エレボスは人々の心の暗部が自然と集まり形を持ったものだ。自らの意思でそれらを思う者もいれば、無意識のうちに心の中に溜め込んでしまう者もいる。
人がこの世界で生きている以上、そういった想いは死を超越しない限りなくなりはしないだろう。
そして、人間の魂一つで施せる封印などたかが知れており、強大な力を持つニュクスの封印をしてもそう遠くないうちに封印は壊れる。
なら、ニュクスよりも遙かに力の弱いエレボスの干渉を遮断する結界ならばどうか。
湊の魂の強度は常人よりも遙かに強い。それこそ、人類の総意を個の意志ではね除けてしまうほどに。
彼が創り出した封印の扉はニュクスを封じる物ではなく、エレボスの干渉からニュクスを守り、そうして人類を滅びから守る物。綾時とメティスはここへ来るまでそんな風に考えていた。
「けど、僕もメティスも読み違えていたんだ。僕らはニュクスに触れさせないための封印だと、遮断結界としての封印が施されていると思っていた。だから、封印の力を高める核となるものが扉にない事に困惑した」
「でも、ようやく分かりました。あの封印は遮断結界じゃない。あれは、脅威が迫る度に自分自身を守護者として呼び出す事で脅威を排除する攻性防壁だったんです」
そう、綾時もメティスも彼の性格を読み間違えていた。
大切な者のために人類と敵対する事を厭わない青年が、ただ耐え続けるだけの壁になどなるわけがなかった。
遮断結界としての要石がなくて当然、その要石になるはずの魂は封印に干渉しようとする脅威を排除するための守護者として現われる仕様になっていたのだから。
それを聞いて思わず息を飲んだアイギスだったが、聞き流せない単語は混じっていた事ですぐに確認のため聞き返した。

「待ってください。今、脅威が迫る度と言いましたか？　二人がエレボスと呼ぶあの敵は一体ではないのですか？」
「残念ながら違います。別個体という事にはなるでしょうが、あれは人類が負の感情を持つ限り永遠に生まれ続けるものです。またエレボス以外にも封印に干渉しようとする者がいないとは限りません。ストレガみたいに自分たちで滅びを起こそうとする異能者もいますから」
何が原因で再び滅びの脅威が迫るか分からない。
それ故の攻性防壁。彼は滅びを齎すニュクスを傍で監視し、それに近付こうとする存在を自ら排除する事で世界を守る事を選んだ。
不老である彼ならば仲間たちとその子や孫が生きている間は十分に役目を果たす事だろう。
さらに未来となると分からないが、彼が守りたいと願った〝世界〟は守られる。
だが、それを聞いた真田はそんな理不尽な事があって堪るかと叫んだ。
「なら、あいつはこれから一生ここで敵と戦い続けるというのか。ふざけるな！　あいつのおかげでニュクスを退け、世界の平和を取り戻せたんだぞ！　なのに、どうしてあいつだけ戦い続けなきゃならないんだ！」
本人は全てを分かった上で選んだのだろうが、世界が平和になった裏で仲間が今も独りで戦い続けていると知って冷静でいられる訳がない。
他の者たちも何か救う手段はないのかと視線で伝えてくるが、残念ながらそんな手段はないんだと綾時が答える。
「……残念だけど、あの封印はユニバースの力を使ってのものだ。滅び行く世界に文字通りに〝奇跡〟を起こした力だ。ニュクスであっても何十年、何百年とかかってようやく破壊出来る可能性があるような封印なんだよ」
「なら、私たちに出来る事は何もないって事？」
ゆかりの問いに綾時はゆっくりと頷いて返す。

彼だって出来る事なら封印を破って湊を助けたいのだろう。
あれは人類を守る封印であると同時に、彼を人類存続のためだけに永劫縛り続ける呪いだ。
自分たちに未来をくれた恩人をそんな地獄に縛り付けておくなど出来るはずがない。
けれど、ニュクスであっても破壊に時間のかかる封印など、ペルソナというニュクスの欠片から生まれた異能しか持たない彼らでは破るのは不可能。
あの戦いの結末がどのような形で果たされたのか。その真実を知る事は出来たが仲間たちの表情は暗い。
目的を果たした以上、後は寮に戻るだけ。
動かない仲間たちに綾時が何と声を掛ければいいか悩んでいると、キッと顔を上げた七歌が強く握り締めた薙刀を掲げて声を張り上げた。
「全員、戦闘準備！　今すぐ私たちは加勢するから武器を構えて！」
七歌の声を聞いて他の者たちもハッとして顔を上げる。
そうだ。自分たちにはまだ出来ることがある。視線の先で今も戦ってくれている彼の援護なら自分たちにも出来るはずだと瞳に力が宿る。
風花がその場でユノを召喚し、敵を解析しながらこの場にいる全員に通信を繋ぐ。
《エレボスは全ての魔法属性に耐性を持っています。光と闇は効かないから注意してください》
「なら、八雲君みたいに物理メインでいくのが正解って事か。私たちは逆側の顔を狙っていくよ。アイギスとメティスは八雲君側のカバーに回って！」
七歌の指示に従ってそれぞれが動き出す。本当なら自分も彼の方へと行きたいのだろうが、戦力の偏りを防ぐため、七歌はアイギスとメティスだけを彼の方へ送り出した。
指示を聞いたアイギスは心の中で七歌に感謝し、呼び出した鳥型ペルソナである太陽〝スパルナ〟に二人で掴まって高速で接近すると、

途中で手を離しつつスパルナを敵の頭部へ突撃させる。
今まさに湊に向けて拳を降ろそうとしていた敵は、突然の横槍にバランスを僅かに崩す。
もっとも、相手は恐ろしく巨大なため勢いをつけた突進であっても転倒させるには至らない。
それでも僅かにバランスを崩して攻撃のタイミングがズレた事で、湊の回避が十分に間に合って敵は何もない空間に拳を振り下ろすに終わった。
「姉さん、こっちで仕掛けます！」
「了解。スパルナ、ディアラハン！」
振り下ろされた腕にメティスが接近してハンマーを叩き付ける。
その間にアイギスはダメージを負っている湊に回復スキルをかけて治療した。
近くで見れば彼があの日と全く同じ姿をしている事が分かる。
戦いが終わって二月経った自分たちと違って、彼はあの日封印となってすぐにエレボスとの戦闘に呼び出されたのだ。変わっていなくて当然だ。
しかし、だからこそここにいる彼が正真正銘の本物なのだと理解出来た。
過去の世界で出会った彼ではなく、自分たちと共に影時間を戦い抜いた仲間との再会に思わず視界が滲んでくる。
何か言わねば。そう思うのに言葉が出てこない。せめて、自分たちも加勢する旨を伝えたい。
そう思っていれば、武器を片手持ちに切り替えて大きく後方に飛び退いた湊の背中から伸びた半透明の黒い腕が、突っ立っていたアイギスを掴んで彼の許へと引き寄せた。
突然の事態に混乱するも、黒い腕を消して右腕でアイギスを抱きとめた湊が口を開く。
「……戦闘中に別の事に意識を取られるな」
「え、あの……八雲さんからもこちらに干渉出来るんですか？」
「何を言いたいのか分からないが、六月の時と同じだ。扉を潜ってき

た過去ならある程度は干渉出来る」
目の前に自分の知る彼本人がいると感じていたのに、過去側の存在である湊に対して既に起きた過去の映像のようなイメージを持っていた。
そのため、回復スキルで相手の治療が出来たというのに、アイギスは向こうからは自分たちに干渉出来ないと思い込んでいた。
けれど、過去のポロニアンモールで彼と会話出来たように、文字通り過去に移動した事でこちらでも意思疎通だけでなく触れ合うことも可能だ。
彼に抱きとめられて言葉を交わした事でアイギスもようやくそれに気付く。
着地した湊はアイギスを解放すると持っている九尾切り丸に光を纏わせながら駆けだし、アイギスから十分に離れた位置でそれを振り抜いて光刃を飛ばした。
九尾切り丸から放たれた光刃はエレボスの片腕に深い傷をつける。
これまでダメージらしいダメージを与えていなかったが、初めて出来たその傷からは黒い靄が噴き出していた。
シャドウにダメージを与えた時も傷口から同じような靄が出ていた事を覚えていたアイギスは、そこが弱所かとリストバンドから機関銃を取り出して弧を描くように駆けながら撃ち続ける。
湊がつけた傷口にアイギスの攻撃が次々と着弾し、傷口から漏れ出す靄の量が少しずつ増えていく。
そんな傷口を狙って攻撃してくる存在が鬱陶しいのかエレボスはアイギスに向けて殴りかかろうとするが、反対側で炎と雷の大きな爆発が起こり、こちら側の半身の攻撃までが中断される。
「メティス、気を引いて！」
「氷を落とします！」
七歌たちが作ってくれた隙をついてメティスがプシュケイに巨大な氷塊を作らせる。
エレボスの体格にすれば恐らくダメージ量はそれほどではないが、頭部に落とされれば面倒だと本能的に考えたのだろう。こちら側の

半身は氷塊の落下地点から逃れるように身体を引いた。
すると、向こうで戦っている半身が前進する事になり、予期せぬタイミングで大きく動いた事でバランスを崩す。
気を引くどころか大きな隙を生み出した妹に内心で礼を言いつつアイギスはペルソナを呼び出した。
「ユルング、ガルダイン！」
アイギスが呼び出した虹の蛇が放った風がプシュケイの氷塊に当たり軌道をずらす。
軌道がずれた氷塊は転倒していたエレボスの頭部に落下し、起き上がろうとしていた敵を再び転倒させることに成功した。
起き上がりかけたところを再び倒された事が予想外だったのか、エレボスは先ほどよりも起き上がるのに手間取っている。
それだけの隙を見逃すはずもなく、光刃を放ってから気配を消していた湊が横から飛び出し、相手の頭上まで跳躍すると両手で大剣を振り下ろした。
振り下ろされた大剣はエレボスの角と衝突し、数瞬火花を散らしてから角を叩き折る事に成功する。
《■■■

物体が高速で飛ぶものだと感心するが、その飛んでいった角が転げ回るエレボスの左眼に突き刺さった時には驚愕を超えて戦慄した。
相手には確かに目のような巨大な赤い球体がある。前後の頭部それぞれに二個ずつあって、湊たちの動きを追うときには顔を向けてきていた事から、それを使ってどちらの頭部も視界を確保して湊たちの対処をしていたに違いない。
だが、口元の骨の上にそんな物が浮いていれば誰だって狙い目の弱点だと思うことだろう。
一人でエレボスの相手をしているときは隙を作るのも難しかったようだが、他の者たちの助力もあって余裕が生まれれば彼は当初の予定通りにそれを実践して見せた。
効果は抜群。目を潰された側の半身は両手で潰された目を覆って動けずにいる。
本来なら足として使える半身の両手がそんな風に封じられれば、逆側の半身は満足に移動する事も出来なくなる。
彼女たちがそんなチャンスを逃すはずもなく、一斉にペルソナが呼び出されると七歌の号令で同時攻撃が放たれたのが分かった。
敵に魔法耐性があろうと関係ない。炎、氷、風、雷、極光がエレボスへと襲い掛かり、同時攻撃の威力に怯んで七歌たち側のエレボスが顔を逸らすように倒れ込む。
すると、こちらのエレボスも引っ張られる形で体勢を変えることになり、横向きになったことでアイギスたちの正面にエレボスの脇腹が曝け出された。
絶好のチャンス。ここで一気に決めてしまおう。
アイギスとメティスはペルソナを呼び出して最大火力の攻撃を見舞った。
確実に効いている。湊の投げた角で片目を失った事は勿論、あちら側でも敵が怯むだけの威力を叩き込んでいるのだ。これでダメージが無い方がおかしい。
だが、このまま攻めきれると思ったのも束の間、風花から焦った様子の通信が入る。

《敵の体内で強力なエネルギー反応！　何か仕掛けてくるつもりです！》

見ればガクガクと口元を震わせながら、エレボスは全身に黒い靄を纏い始めてた。

体内にそれほどエネルギー反応があるのなら、恐らくは纏っている黒い靄を全方位に解放する事で攻撃してくるに違いない。

遮蔽物のない状況で敵からの無差別攻撃は非常に危険だ。

どうすべきか意見を求めるように湊の方を見れば、湊は敵の腕に光刃を飛ばした時と同じように九尾切り丸に光を集めていた。

だが、先ほどとは規模が違う。光を纏う刀身の周囲が歪んで見えるほどに、湊は莫大な力を九尾切り丸に注ぎ込んでいる。

彼もこの一撃で仕留めようとしているのだろう。

だが、エレボスも力を溜め込んで全身が震え始めており、攻撃するなら急がなければならない。

「八雲さん！」

急かすようにアイギスが呼びかければ、

「はあぁぁぁぁぁぁっ!!」

直後、湊が逆袈裟に振り抜いた九尾切り丸から、赤と黒という二色の光が複雑に混ざり合った刀身が伸びた。

それはかつて湊が虚無属性と名付けたニュクスが司る死の力の性質を持つもの。

死の力を宿した刀身はエレボスに匹敵する巨大な光の剣となり、青年が振り抜いた勢いのままエレボスを切りつける。

力を溜め込んでいたエレボスに触れる直前、バチリッ、と何かが弾ける音が聞こえるも剣はそのままエレボスの身体に食い込んで容赦なく切り裂いてゆく。

その内包していた力ごと殺し尽くすと言わんばかりに、巨大な光剣がエレボスの身体を切り進むほど敵の存在の力が弱まっていくのを感じる。

人々の負の心が集まり神格を持って生まれた化け物と言えども、上位神たるニュクスと渡り合った青年の放つ全力の一撃には耐えられ

なかった。
そうして、光剣によりその身体が完全に分断されると、エレボスはどこか恨みの籠もった呻き声を上げながら静かに消滅していった。
「はぁ、何とか勝てましたね」
目の前にいた脅威が排除され、アイギスもようやく一息つけると安堵の息を漏らす。
反対側にいた七歌たちもどこかやりきった表情で駆けよってきて、全員が合流したところで湊に声を掛けようとした。
けれど、アイギスたちが彼に声を掛けようと振り返ると、先ほどまで沈黙していた封印の扉が僅かに開き、そこから伸びてきた無数の黒い腕が彼の手足を掴んだ。
「八雲君っ!?」
「何だって言うのよっ」
声をあげた七歌とチドリだけでなく、他の者たちも驚きながらも彼を掴む黒い腕に攻撃を仕掛けようとする。
折角会えたのだ。共に戦った自分たちの仲間である彼本人と。
記憶のダンジョンを攻略し、エレボスという強敵を倒して、そうしてようやく会うことが出来たというのに邪魔される訳にはいかない。
それぞれが呼び出したペルソナが封印の扉から伸びている腕にスキルを放つ。
次々と着弾し、確実に破壊したという手応えも感じた。
だが、攻撃の余波で発生した煙が晴れると黒い腕は健在で、それだけでなく攻撃を受けたためかさらに扉の隙間から多数の腕が伸びてきて湊の全身を掴んだ。
一体それは何なのか。本能で危険な物だと理解しつつも、彼を掴んでいる腕の正体にまるで想像がつかない。
掴まれている本人はどこか諦観した表情をしており、九尾切り丸をマフラーに仕舞いこむと顔を上げて口を開いた。
「お前たちは未来へ行け」
そう告げた直後に黒い腕が彼を引き寄せ封印の扉へと戻ろうとする。

やめろ、彼を連れて行くな、アイギスたちは手を伸ばすも間に合わない。
「有里君っ!!」
「八雲さんっ!!」
名前を呼んで、必死に手を伸ばして追いかけようとするが、追い付く前に黒い腕は彼を封印の扉の向こう側へと連れて行ってしまう。
どんどんと距離が離れて行き、そして僅かに開いた扉の隙間へと引きずり込まれる直前、しっかりとアイギスたちの事を見ながら小さく笑って彼は言った。
「……希望は残してある。後はお前たち次第だ」
それだけ言い残して彼は扉の向こうへと消えていき、僅かに開いていた封印の扉も完全に閉じてしまう。
彼が消え、封印の扉も閉じた事であたりを静寂が包み込む。
まともに言葉を交わすことも出来ず、彼が再び封印に取り込まれるのを見ている事しか出来なかった事への無力感に苛まれ、あまりの悔しさに爪が食い込むほど握り締めた拳から血を流す者もいた。
他の者より一歩引いた位置で見ていようと思っていた者ですら、あの日の真実を知った今ではこんな結末など認められるかと思ってしまうほどだ。
彼に対して強い想いを抱いている者ほど、その胸中では複雑な感情が渦巻いている事だろう。
だが、彼女たちは当初の目的通りにあの日の真実を知る事が出来た。
扉は目的を果たすと役目を終えてしまうため、その場に立ち尽くしていたアイギスたちを白い光が包み、元いた場所へ送り返そうとし始める。
まだ調べる事がある。このまま帰るなんて嫌だ。そんな彼女たちの想いは届かず、彼女たちを包み込んだ光が弾けるように消えると後には誰も残っていなかった。

第五百話　決断

――巌戸台分寮

気がつけば七歌たちは寮のエントランスに戻っていた。

彼があの日に何をしたのか、彼が今どういった状態にあるのか、それを知る事が出来たために目的を果たしたとして扉は消えたのだろう。

入口から入ってすぐのフロントのカウンター内にあった扉も消えてしまっていた。

これでもう過去を見に行くことは出来ず、彼女たちは〝時の鍵〟をどちらの扉に使うかを選択しなければならない訳だ。

けれど、どうするか決めようにも戻ってきたメンバーたちの表情は暗い。

その瞳から涙が溢れるのは悔しさか悲しみか。涙を流してその場に座り込む者もいる。

彼の起こした奇跡は、人類の不始末を彼を人柱にして解決する事で世界を存続させるものだったのだ。

どうして彼だけがそんな目に遭わなければならないのか。どうして彼はそれを淡々と受け入れたのか。

あの戦いを終わらせるためには必要な事だったのだろう。けれど、七歌たちはそれらを素直に受け止める事が出来ない。

そして、誰も何も言えずにいると、涙を流していたゆかりが階段を睨むように見て突然歩き始めた。

彼女の瞳は今も涙を流しているが、そこには危険な決意の色が宿っているのが見える。

このまま行かせるのは拙い。そう考えた七歌は後ろから肩を掴んで止めた。

「待ってゆかり！　どこへ行くの？」

「離してっ、今すぐに屋上に行って鍵を使うんだから！」

肩を掴まれたゆかりはその手を乱暴に振り払って先へ進もうとする。

今のゆかりは鍵を手に入れた時よりも確かな決意を持って過去へ行こうとしているのが伝わってきた。
彼女の気持ちも分かる。自分を含めた人類が原因で彼をあんな状況に追い込んでしまったのだ。その結末をどうにか変えたいと思っても不思議ではない。
しかし、彼女も過去の世界で湊から聞いたはずだ。どれだけ願っても彼女たちの望みは叶わないと。
あの日の真実を知って冷静さを失っている彼女に七歌はそれを伝える。
「過去の世界で八雲君に聞いたでしょ。過去に行ってもゆかりたちの望みは叶わないって」
「もう、私の望みなんて叶わなくてもいい！　一生隠れて暮らす事になったとしても、有里君だけは助けたいの！」
だが、七歌がその事実を伝えてもゆかりは構わないと返してきた。
自分たちが過去へ行ったとしても、そちらの世界の自分たちがいる。彼と一緒にいられるのはその世界の自分たちだ。
いくら世界を救えたとしてもその世界の自分たちがいる以上、過去へ行った自分たちは姿を消さなければならない。
同じ世界に二人の自分が存在するとバレる訳にはいかないからだ。
ニュクスを封印して無事に戻ってきた青年に会うこともなく、日本から遠く離れた地で残りの人生数十年を生きるだけの覚悟は疾うに決めている。
あんな地獄に彼を縛り付けたままでいる方が耐えられないと彼女は言った。
そこまでの決意を聞いた七歌は素直に尊敬の念を抱く。彼に対する想いの強さを理解したからだ。
けれど、それでも彼女の願いは叶わない。七歌は静かにその事実を伝え続ける。
「そんな事したって八雲君は助けられないよ。ニュクスの降臨は十年前に決まってて、それを解決する手段がないんだから」
「なら、それを邪魔すればいい。桐条の実験を邪魔して、研究なんか出

来なくすれば事故も起きないし、有里君は家族と一緒にいられるんでしょ」
「それも出来ないって。過去へ行くにも力が足りない。せいぜいが数年前に飛ぶのが限界なんだよ」
「だからって諦めろって言うの?!」
時の鍵を使っても恐らくは十年前までは跳べない。
メティスや過去の湊に聞いた訳ではないが、影時間が毎夜零時に発生すると決まったあの事故より後にしか跳べないというのが感覚で分かる。
ゆかりは全ての原因となったポートアイランドインパクトに繋がる研究を妨害し、あの事故その物を無くしてニュクス降臨を防ごうと考えたのだろうがそれも無理なのだ。
そんな風に過去へ跳んでも彼女の望む結果が得られないことを説明していれば、振り返ったゆかりは七歌に対して敵意を向け、今も冷静でいられる七歌には自分の気持ちなど分からないだろうと責めてきた。
「七歌には分からないでしょ、本気で誰かを想った事なんてないから！　自分はどうなったっていいって、それでも彼には生きていて欲しいって、この感情は本気で誰かを想った人にしか理解出来ないもの！」
頭では無駄だと分かっていても感情が納得を許さない事もある。
理屈ではないのだ。どれだけ無駄だと言われようと、実際に行動に移さなければ気が済まない。
この感情を知らない者には決して理解出来るはずがなく、何も知らない者が邪魔をするなとゆかりは叫ぶように言った。
だが、そんな事を言われれば七歌も黙ってはいられない。
感情の昂ぶりで赤くなった瞳でゆかりを睨んで掴みかかり、相手を床に押し倒して馬乗りになって言い返す。
「たかだか四、五年の付き合いで偉そうな事を言うな！　こっちはおじ様とおば様が亡くなった十年前から八雲君の生存に希望を持つしかなかったんだぞ！　周りからどれだけ否定されようが、可能性があ

るなら諦められなくて、八雲君はまだ生きてるって自分に言い聞かせて信じ続けていたんだ！」
大好きだった叔父と叔母を亡くし、その息子である八雲だけは生存の可能性があると気付いたが、本当に無事でいる保証などどこにもなかった。
普通に考えれば小学一、二年生の子どもが一人で生きていけるはずがないと分かる。
それでも七歌は彼の生存を信じた。周りに何を言われても、自分だけは信じ続けるようにした。
そうしなければ、彼の存在がこの世から消えてしまうと思ったからだ。
「八雲君がどれだけ拒んだって私にとっては血の繋がった家族だ！家族を救えるなら私だってその手段を選ぶし、代償が必要でも自分に払える物なら迷うことなく差し出すだけの覚悟がある！」
ゆかりの告げた覚悟などとっくの昔に七歌だって持っていた。
あの日、ベルベットルームで彼を止められず、現実世界では空へと昇っていく彼を見送るしかなかった七歌がどれだけ己の無力を後悔したかゆかりは知らない。
周りにいらぬ気を遣わせないようリーダーとしてその胸の内を隠してきた。そんな七歌の本心にゆかりは驚いたような顔をしているが、七歌は続けて変える事の出来ない事実を突きつけた。
「でも、それでも、駄目なんだよ!!　過去に戻ったところで八雲君は救えない。私たちの世界を救ったこの世界の八雲君を助ける事は出来ないんだ!!」
過去を変えても封印となった彼は救えない。涙を流しながらその事実を告げた七歌は言い終わるとゆかりから離れ、手で顔を覆ったまま肩を震わせ座り込む。
事前にその話を聞いていたラビリスが七歌の許へ行き、そして、床に倒れたまま呆然としているゆかりの許へ美鶴がやってくる。
「……ゆかり、七歌の言ったことは事実なんだ。過去に戻って未来をやり直しても、救えるのはそちらの世界の彼だけ。私たちの世界の彼

とは別の世界線の存在なんだ」
「……どういう……ことですか？」
過去をやり直せば湊は封印にならない。それで彼だけは平和に暮らしていけるはずだった。
しかし、七歌だけでなく美鶴からもそうはならないと告げられた事で、ゆかりも自分が知らない事実があることに気付いたらしく説明を求めてきた。
ならば一番詳しく事情を知っている自分が話すべきだろうとメティスがやってくると、他の者たちにも改めて理解してもらうべく説明を始める。
「兄さんは未来人が来たのは私たちが最初だと言っていました。恐らく、六月以降に別の未来人との接触はなく、そのままニュクスとの戦いに臨んだんだと思います。つまり、この世界は他の未来人が来ていない世界線なんです」
実際に湊本人から聞いた訳ではないが、それ以外の未来人に会ったという説明はなかった。
なら、そこから考えるに七歌たちのいるこの世界は、〝昨年六月にだけ未来人が来た世界〟というものになる。
それは既に決まった事象であり、その事実が異なればその世界は分岐した別の世界という事になるのだ。
「もし、皆さんが過去に行って影ながらに助けたとしても、別の未来人が来たという結果は変わりません。その時点で世界は分岐している事になるので、そちらの兄さんを助けたところで元の世界の兄さんは封印になったままなんです」
「じゃあ、過去へ跳んで何をしようが無駄だって事？」
「……別の世界の兄さんが封印になるのを防げるだけですね」
ゆかりから聞かれた質問にメティスは頷いて返す。
そちらの世界の彼を救えるという点では無駄とは言えない。大いに意味のある行為だ。
けれど、ゆかりたちが望んでいるのは自分たちの知る青年が救われる事であり、それに関してはいくら過去を変えても意味がないという

事になる。
「〝過去は変えられない〟は大原則なんです。どれだけ力を持っていようと、神なる視点から観測していようと、その結果が出た事実は変えられません。これに関しては兄さんも認めています」
「だから、本当に湊を救いたいのなら、僕たちは元の世界に戻らなくちゃいけない。そっちには彼が言った〝希望〟が残っているらしいからね」
メティスが既に観測された事象は〝過去〟として存在するため変えようがない事を伝える。
それだけなら彼女に絶望を叩き付けるだけだが、フォローするように綾時がやって来て元の世界に帰る意味を教えた。
現段階ではそれが何なのかは誰も分からない。彼の行なっていた研究について知っている綾時だけでなく、アイギスやチドリも何も知らされていないのだ。
しかし、彼はそういった事で嘘を吐いたりはしないはずだという信頼がある。
美鶴に支えられてゆかりは立ち上がり、既に涙が止まっていた七歌もラビリスに支えられて立ち上がった。
「……ゴメン、七歌」
「うっせぇ、タコ。謝るくらいなら最初からすんな」
傷ついているのは、後悔しているのは自分だけでなかったと気付いたゆかりが先ほどの発言を謝罪すれば、七歌は口汚く返しながらもそれほど気にした様子はなく立っている。
こういった切り替えの速さは精神的な強さによるものであり、それを思うと本心を隠していた事も含めて、彼女が皆のリーダーであり続けようとしてくれていたことがよく分かる。
友人の優しさに感謝して小さく笑ったゆかりは、皆の方へ向いて先ほどの事について謝罪した。
「皆もゴメンなさい。私、全然余裕無くて周りが見えてなかった」
「んまぁ、ゆかりっちの気持ちも分からねぇでもないからな。あいつがあんな状態って知ってオレも正直どうしたらいいか分からなかっ

たし」
「だが、あいつが希望は残してあると言ったんだ。諦めるにはまだ早い」
順平と真田もゆかりの謝罪を受けて、別に気にしてないと答える。
実は先ほどのゆかりと七歌のやり取りの後半を見て、男子たちは全員がコメント出来ない立場として気配を消していたのだ。
女同士の争いに男は関わるべきではない。それ以上に怒りをぶつけ合う女子たちが恐い。それが彼らの正直な気持ちだ。
だからこそ、落ち着いた状態に戻ったなら彼らは何も気にしていないし、純粋に安堵すらしている訳だ。
そんな彼ら側の事情を知らないゆかりは気を遣ってくれたと思って心の中で感謝し、他の女子たちもまともに話せる状態になったことを喜んでいる。
ただ、このまま雑談している余裕はないこともあって、メティスが全員に時間が無いことを伝えた。
「皆さん、時の狭間の全ての扉が消えた事でこの空間もそう長くは持ちません。決断するなら急いでください」
言われた者たちは視線を交わして意見をまとめる。
ゆかりの暴走時に七歌が告げた事で、全員が過去へ跳んでも意味がないことを理解した。
なら、あとは元の世界へと戻り、彼が言っていた〝希望〟とやらに賭けるしかない。
既に皆も同じ気持ちになっているらしく、玄関の扉の前に集まるとまずは鍵を一つにしようとなった。
過去の映像によると今回の事件はアイギスの何かが切っ掛けだという話だ。
であれば、彼女の鍵に他の鍵を融合させてゆくべきだと、皆が自分の持つ鍵をアイギスの鍵に重ねて融合させる。
全十三本の鍵が一つになるとアイギスの持っている鍵が光を纏い出す。恐らくはこれで完成という合図なのだろう。
「それじゃあ、鍵を使いますね」

急に鍵を使えば驚かせてしまうため声をかけると、振り返ったアイギスに仲間たちが頷いて返す。
それを見たアイギスは玄関の扉へ向き直り、時の鍵を扉にさし込み回した。
途端、扉は強い光を放ち、その光が全員を飲み込むと、遠くで何かが割れるような音が聞こえてきたのだった。

第五百一話　達成報告

――ベルベットルーム

元の世界に戻って彼の残した〝希望〟を賭ける。

全員がそれを選んで時の鍵を寮の入口で使えば、何かが壊れるような音が聞こえて全員が光に飲まれた。

自分たちをあの場所に閉じ込めていた物が壊れ、これで元の世界に帰れるのだと誰もが思った。

けれど、彼女たちのそんな想いは裏切られ、光に飲まれる際に閉じた瞳を開けるとそこは下降する巨大エレベーターの中だった。

学校の教室並の大きさにも驚くが、それ以上に驚いたのがテーブルを挟んだ向かい側にいる不気味な老人と従者の三人の存在。

何故かメティスも従者の青年の横に立っているが、周りを見渡してここはどこだと順平が声をあげる。

「うおっ!?　なんだここ?　オレら外に出られるんじゃなかったのかよ!」

外に出られると思っていたら自分の知らない不思議な空間にいたとなれば誰だって驚く。

そんな風に驚く順平や他の者たちの様子を見て、向かい側にいる者たちはどこか微笑ましそうに微笑を浮かべている。

だが、ここがどこだか知っている七歌とアイギスは自分たち以外のメンバーがここにいる事へ疑問を持った。

「どうして皆さんまでここに?」

「これってそっちの干渉で起きた事なの?」

元々この部屋へ来るには住人から鍵をもらう必要がある。

最初に訪れるときには契約を結び、この部屋の手助けが必要なら導かれるようになっているそうだが、時の空回りに巻き込まれたタイミングならともかく戦いを終えた仲間たちが招かれるのはおかしい。

であれば、ベルベットルームが何かしたのは、寮を包んでいた力が破られ存在が元の世界に復帰するタイミングだろう。

異空間から現実世界へ復帰する瞬間、ほんの僅かな時間だけ寮はど

ちらにも存在する事になる。
現実世界であって現実世界でない狭間にいる特別課外活動部のメンバーは、現実時間で一秒にも満たない間だけ存在が曖昧になっていた。
夢と現実、精神と物質の狭間に存在するベルベットルームなら、そんなこちら側に近い状態のメンバーたちに干渉出来てもおかしくない。
七歌がそう推測して尋ねれば、何とも興味深いと楽しげな顔をしてイゴールが口を開いた。
「ええ。ですが、驚いたのは私もでございます。別れの挨拶にと呼んだつもりでしたが、よもやお仲間の皆様まで一同にいらっしゃるとは……フム、二人のワイルドの影響か……いえ、正確に言えば同じ時代に現われた三人のワイルドと共にいた影響を受けたといった方が正しいでしょうか」
七歌とアイギスと共にやってきた仲間は誰も契約を結んでいない。
契約者たちと絆を結んではいるが、この部屋の果たす役割から外れた非正規の客人と言える。
だからこそ、本来なら来る事が出来なかった場所を訪れる事が出来たチドリは、ここが彼がかつて利用していた場所なのかと感慨深そうに部屋を見渡した。
「……ここが八雲の通ってたベルベットルームなのね」
「そうです。ここは力に目覚めようとしている者、力に目覚めた者を手助けする場所。今は姉さんと七歌さんしかいませんが決戦の日までは兄さんもいたそうです」
今回の事はワイルドに目覚めた者らと長く共にいた事で起きたイレギュラーだ。
勿論、生きている限り再び訪れる可能性はゼロではないが、契約を結んでここに来るという事は最低でも今回のこと以上の事件に巻き込まれた時だ。
そんな目には遭いたくない事もあって、今回限りと割り切ってチドリは景色を目に焼き付けていたのだが、何故か住人たちの傍に立って

いたメティスが訳知り顔で説明をしてきた。
最初は立つ場所を間違えているだけだと思っていたメンバーも、どうやら意味があるようだと認識したことで荒垣が代表してその理由を尋ねる。
「つか、なんでお前はそっちにいるんだ？」
「私は元々こっち側に近い存在なんです。と言ってもベルベットルームの住人ではないし、人々の営みの中では異物ですから、そう言う意味では兄さんと同じカテゴリーになるのかな」
懐いている青年と同じ〝異分子〟カテゴリーの存在だと嬉しそうに語るメティスは、そのまま仲間たちの方へと歩いてきてアイギスの傍で止まる。
これまで何度か彼女自身に素性を尋ねた事はあったが、記憶の混乱か何らかの意図があってか答えははぐらかされていた。
けれど、今は明確に自分がベルベットルームの住人に近い存在であると告げてきた。
事件を解決したからかどこか浮かれているようにも見える彼女は、アイギスの傍で立ち止まって笑顔を向けて話を続ける。
「寮を包んでいた結界を壊した事で時の狭間はもう消えます。これまで通り正しい時間の流れる日常に帰れるでしょう。おめでとう、姉さん。皆さんも本当にお疲れ様でした」
「メティス、君は一体何者なんだ？　今回の事件もこれで終わりだ。そろそろ本当の事を教えて欲しい」
今なら答えてくれるのではないか。そんな想いで美鶴がメティスに正体を尋ねると、彼女は小さく笑ってからアイギスに当ててみて欲しそうに問いかける。
「姉さんは私がなんだか分かりますか？」
「……最後のダンジョンで見た夢の記憶。あれであなたの正体に気付けました。多分、あなたはもう一人のわたし。対シャドウ兵器としてのわたしの心が抜け出た存在」
「ええ、その通りです」
問われたアイギスは笑顔を向けてくるメティスの瞳をジッと見つ

めたまま答えた。
アイギスだってメティスが何者なのか考えていなかった訳ではない。
湊が彼女を妹だと呼んで信用していたにしても、突然地下から現われた存在が何者なのか探るのは必要な事だ。
だが、時の狭間のダンジョンを巡る中で最後に見た夢での光景。それを見た事でアイギスは彼女が自分の心から抜け出た自我持ちのシャドウのようなものだと予想していたのだった。
「わたしは八雲さんに人としての命を貰いました。対シャドウ兵器としての力を一部持ったまま、それでも人としての一生が歩めるよう人としての身体を貰ったんです。でも、あの日の戦いで八雲さんを失って、こんなに苦しいなら人になるんじゃなかったと思ってしまった」
考えてみるとその切っ掛けは自分の弱さが原因だった。
幸いな事にペルソナ使いとして心の一部が欠けてもペルソナの能力の一時的な喪失程度の問題しかなく、パピヨンハートの補助もあってワイルドに目覚めてからは元のペルソナであるアテナ以外のペルソナが使えるようになった。
おかげで自分の症状にも気付くのが遅れてしまったが、夢の中で自分の心の一部が抜け出たのを見れば流石に思い出す。
「だから、あなたはわたしの前に現われた。機械としてのわたしの心を司る事で、人だろうと機械だろうと、その心に大きな違いは存在しないのだと教えるために」
彼女は抜け出た心の一部が何かの力を借りて現われた自分の鏡。
いくら機械に戻ろうとしても意味がない。心を得た時点でそこに違いは無いのだと教えてくれる存在だった。
気付くことも含めて随分と待たせてしまったが、今ならば人としての自分も機械としての自分も両方を受け入れる事が出来る。
「待っていてくれてありがとう」
「ううん。ただいま、姉さん」
「おかえりなさい、メティス」
互いに笑顔で手を繋ぐとメティスの身体が温かな光に包まれた。

そして、彼女の全身を包んだ光が弾けると、弾けた光は全てアイギスの中に吸収されてゆく。
全ての光が彼女の中に収まったとき、アイギスは自分の中にペルソナ〝アテナ〟が戻ってきたのを感じた。
彼女本来のペルソナが戻ってきた事で、後から手に入れた力が消えるかと思えばそんな事はなく、今もワイルドで得たペルソナたちは存在する。
思い返すと湊も彼本来のペルソナであるセイヴァーと共に多数のペルソナを所持していた。
なら、ワイルドは能力の拡張であって、本来のペルソナ以外にも所持し続けられて当然なのかもしれない。
そんな事を考えながらアイギスが本来の力を取り戻せば、これまで待ってくれていたイゴールが七歌とアイギスに視線を向けながら口を開いた。
「さて、では本来の目的である契約の話に移りましょう。まずは七歌様、〝我、進みし道の先にある、いかなる結末も受け止めん〟の履行を確認いたしました。この一年の旅路の結末は如何でしたか？」
ニュクスと戦ったあの日に終わると思っていた彼女が結んだ契約。今となれば戦いを終えても尚契約が続いていたのか七歌にも分かる。
彼女の契約ははじめからここまでを含めて考えられていた。自分だけではなく、彼も含めた皆の戦いの結末を見る必要があったのだと。
何故ニュクスは降臨したのか。どうやって彼は神を封じたのか。全てを知った上で七歌は率直な気持ちで答える。
「うーん。正直、分かんない。でも、八雲君とこの世界の事情は分かった。だから、私も足を止めない事にした。契約の先も旅路は続くって感じで進み続けようと思う」
「この先に何があるか分からなくてもですかな？」
「うん。八雲君だって未来の全てが分かっていた訳じゃないしね」
自分の知る限り湊に未来予知の能力は無い。
彼は自分の知り得た情報の中から未来を予測し、可能な限り備えて

いただけだ。
それでも彼の予測は七歌たちにすれば未来予知にしか見えないレベルで、呆れるほどあらゆる事に対応可能になっていた。
そんな彼が希望を残しているというのなら、七歌もそれを信じて進み続けるしかない。
未来など分からなくて当然。だから、彼女はただ信じて進んだと笑顔で答える。
それを見たイゴールは納得したように頷き、続けてアイギスの方を向いて尋ねる。
「続いてアイギス様、貴女の契約は不完全だった。明確な文章はなく、その内容も曖昧でした。故に、完全な心の形を取り戻した今だからこそ問います。貴女が彼に立てた誓いをお教え願えますか？」
ここへ辿り着いた以上はアイギスも契約を結んでいる事になる。
だが、その内容は極めて曖昧で契約としては不完全としか言い様が無い。
それでも欠けていた心を取り戻したならば、彼女が彼に誓った内容もハッキリとしているはず。
イゴールが彼女を見つめ続ければ、アイギスは答える前に少しだけ聞いて欲しいと話し始める。
「……その前に少しだけ自分の話をさせてください。わたしは元々が機械だった事で、心のどこかで自分は人ではないという想いがありました。メティスの言っていたように、人々が形成する社会の中に紛れ込んだ異物だと思う自分がいたんです」
湊によって人間の身体を与えられたアイギスは、機械としての心で自分を客観的に見て人間社会に紛れた異物だと認識していた。
もっとも、当初からその考えはあっても悲観したりはしていなかった。
彼と共に生きられる。彼が望むならその子どもを宿すことも出来る。
機械の身体では出来ない様々な事が人間の身体なら可能だと、メリットデメリットで物事を判断していたからだ。

「でも、それは同時に彼との繋がりでもありました。あの人は人として生まれながら人の環から外れた存在。それは精神性だけの問題ではなく、純粋に人から一歩進んだ別種の生き物という意味でもあります。そういった意味では、わたしには同じ立場の姉がいましたが、八雲さんはこの世で独りぼっちでした。だから、わたしはその心を中途半端でいさせることで彼と同じ独りぼっちの存在でいようとしていたんです」

人間から突然変異で生まれた新人類。基本的なデータでは人間と計測されるが、決定的に違う部分がいくつもあってそれが彼を現行人類とは別種の生物だと証明していた。

その点で言えばアイギスには同じ人造人間の姉がいたため、同じ種族のいない彼とは違っていた。

しかし、社会に溶けこみ人として生きている時間の長かった姉に比べ、アイギスは再び目覚めてから突然人の身体になったため機械の心と人間の身体を持つ中途半端な存在になっていた。

自分を血の繋がった妹として想ってくれていた姉には悪かったが、アイギスはそんな中途半端な存在は自分しかいないと分かっていたため、独りぼっちでいるためわざとその状態を維持しようとした。

そういった努力の甲斐もあってか彼はよりアイギスを受け入れ、このまま絆を育めば共に生きて家庭を築いたりも出来るだろうと思ってた。

「でも、その彼がいなくなってしまった。おかげでわたしの世界は壊れました。八雲さんのせいではないんですけど、わたしにとってはあの人が全てだったので」

しかし、彼女のそんな夢は儚く崩れ去った。

世界を救う奇跡の代償として、彼はその全てを捧げる事になったのだ。

彼にしてみれば、全てが終われば消える予定だった自分の命一つで大切な物を守れるなど、躊躇う理由が欠片もなかった選択だったのだろう。

後からそれを知った者の気持ちも少しは考えて欲しかったが、完全

な死から一度は蘇った彼と再び別れる事になったアイギスは色々と考えさせられる事になった。
「だからでしょうか。今回の事件に巻き込まれて、八雲さんが守りたかったものが壊されそうになって、そんな事はさせないって怒りにも似た感情が自分の中から湧き上がってきたんです。彼が守ろうとしたものを守ってみせるって」
全てが終わったはずなのに、どうしてまた事件に巻き込まれるのか。彼が命を懸けてまで守った仲間たちを傷つける事は許さないという敵への怒り。
あの時のアイギスは彼の守ろうとしたものを守る事だけを考えて、自分の不調など知った事かと感情の全てを込めて力を解放した。
結果、アイギスは生体ボディのベースになった細胞や長年彼の中にいたペルソナなど、彼女の中に眠っていたいくつもの湊の残滓を依り代にワイルドの力を覚醒させる事が出来た。
「……けど、今回の事件に向き合っていくうちに、本当にそれが彼に誓う事なのかと疑問を持ちました。わたしは一人では戦えません。皆さんの力を借りて、なんなら今も世界は八雲さんに守って貰っています。そんな状態で守ってみせるなんて言えるわけがありませんでした」
あの時の彼女は彼の代わりに守ってみせると誓ったつもりでいた。
けれど、ここに辿り着くまでに様々な事を知っていく中で、自分一人ではそんな事は出来ないと理解し、そもそも彼がそれを望んでいないことにも気付いた。
彼が本当に守りたかったのは、命を懸けてまで取り戻そうとしたのは、アイギスたちが何でもない平和な日常で過す事だったのだ。
「だから、わたしが誓うべきはそんな事じゃないんだと気付けました。わたしが本当に誓うべきは〝生きる〟、ただそれだけの事でした」
故に、アイギスは自分が彼のために誓うべきは彼の守った世界で〝生きる〟事だと理解した。
何をしても、何になろうとしてもそれはアイギスの自由。
彼が守った未来を生きる事こそが彼への最大の恩返しになる。

誓いの内容を教えて欲しいという問いへの返答を聞き、それが存外シンプルな内容だったことが面白かったのか聞いていたイゴールは目を細めて笑って頷く。
「ホホホッ、なるほど〝生きる〟ですか。一見簡単なようで、何とも難しい道を選ばれるようですな」
「はい。でも、人の身になって一年にも満たない若輩者ですから、出来る限り多くの事を経験していきたいんです」
「フフッ、困難な旅路を選ぶお客人に私からも幸あれと祈らせて頂きましょう。真なる誓いを立てた事で貴女の契約もこれにて完了とさせていただきます」
七歌とアイギスの契約が果たされたとイゴールが認めれば、テオドアとエリザベスの持っていた本のページが勝手に開き、イゴールが指を鳴らすとそこに書かれた文章の上に赤い判を押したような紋様が現われる。
アイギスにとっては事件に巻き込まれてからの数ヶ月の出来事だが、七歌にとっては一年以上かけた契約の完了だ。
鍵を持っている限り、再び扉を見つければ会いに来られるというが、契約を果たした後もポロニアンモールの扉が残っているとは限らない。
下手をすればここを離れてそれっきりと言うこともあり得るだろう。
なので、七歌は最後かもしれないからと別れの挨拶をしておく。
「最後かもしれないから言っておくね。力を貸してくれてありがとう。貴方たちのおかげで真実を知る事が出来た」
「こちらこそ、これまでお付き合い頂きありがとうございました。至らぬ点も多々あったかと思いますが、最後まで七歌様の旅路の手助けを続ける事が出来たのは私の誇りです」
「ううん。本当に助けて貰ってばっかりだったから、不満なんてなかったよ。テオもこれから頑張ってね。エリザベスさん、マーガレットさん、イゴールさんもありがとうございました」
七歌がこれまでのお礼を言えば、イゴールたちは笑みを浮かべなが

ら一礼して返してくる。
湊と色々あって既に部屋にいる意味がないエリザベスだけは、もしかしたら一緒に現実世界に出てくるかもしれないと思ったが、どうやらまだ部屋にいるつもりらしく付いてくる様子はなかった。
ならば、最後の別れも済ませた事でこの部屋ともお別れだ。今度こそ現実世界に帰ろうと七歌とアイギスも椅子から立ち上がって仲間と並ぶ。
「では、わたしたちは現実に帰ろうと思います。お世話になりました」
「ええ。またの機会があるその時まで、ご機嫌よう」
イゴールの言葉を聞き終わると同時に瞼が重くなって徐々に意識が閉じてゆく。
意外な形でベルベットルームを訪れた仲間たちもそれに逆らったりせず、完全に意識が途切れると彼女たちはその場から消えて現実へと帰っていった。
誰もいなくなった椅子を見つめていたエリザベスも、しばらくすると先ほど契約完了のため開いていた本を閉じてそれを抱え直して口を開く。
「ようやく終わりましたね。次なるお客人が来るまでしばらく休暇でしょうか」
「休暇って……どうせ貴女は仕事を受ける気はないのでしょう？」
客人がいなくなった途端に姉弟たちと接するオフモードになった妹に、マーガレットはもう少ししゃんとしろと思いつつ尋ねる。
今回、彼女は気まぐれと彼女なりの打算を持ってアイギスの担当を申し出たが、湊との関わりによって自己を定義した彼女は既にこの部屋に残る意味がなく、それ故に担当を持って仕事をする義務もない。
なら、休暇なぞ取らずに好きに外へ行けば良いのだが、担当を持つ気もないのにどうして出ていかないのかと尋ねれば、エリザベスは本に挟んでいた栞を引き抜いて魔法陣を展開しながら答える。
「確かに私は今後もうお客人を担当するつもりはありません。ですが、縁が残っています」
そういって彼女は展開した魔法陣に手を入れると、そこからどこか

古臭いデザインの鍵を取り出して見せた。
彼女が持っている鍵は魔法的な加工は一切無く、現実世界に普通に存在する一般的な金属で出来ているように見える。
ただ、現実世界との関わりが薄いエリザベスが何故そんな物を持っているのかが分からない。
そのため、それが何の鍵なのかも含めてマーガレットは見せてきた意味を尋ねた。
「それは一体何なの？　休暇とやらに何か関係があるわけ？」
「こちらは八雲様に頂いたお家の合鍵です」
「……へぇ、そう。ならゆっくりと休んで、気が済むまで休暇を楽しんでくると良いわ」
思わず色惚けがと言いたくなったが、マーガレットは何とか耐えて好きに休暇を楽しんでくればいいと妹を送り出そうとする。
死んだ男に貰った家の合鍵を見せびらかしてくる妹も妹だが、あの客人も自分が死ぬと分かっていて何故こんなにも多くの女性に手を出しているのかと呆れてしまう。
けれど、最初に彼が死んだ時には深く傷ついていたのを見ていた事もあって、妹が元気にしているなら好きにすればいいと思ってしまうくらいには彼女も甘い。
次の客人が迷いこんでくるのはいつか分からないが、自分かテオドアがいれば十分に対応も出来るだろう。
よって、彼の遺した家で過したいなら止めはしないと言えば、エリザベスは不思議そうに僅かに首を傾げて再び口を開いた。
「こちらは八雲様が皆様に内緒でご購入した隠れ家の鍵です。何でも現実世界の時間にして二年後にニッポンのとある地方で事件が起きるそうで、新たな客人の暮らす町に拠点があれば便利だろうと売りに出されていた広い日本家屋を買っておいたそうです」
「……どうしてあの子は自然に未来の情報を手に入れているのよ」
エリザベス曰く、彼女の持っている合鍵は地方の町に用意した彼の秘密の拠点のものらしい。
どうやって彼がそんな未来の情報を得たのかは分からないが、拠点

まで用意しているからには事件が起きることはほぼ間違いないのだろう。
ベルベットルームの住人ですら手に入れていない未来の情報を、現実世界で暮らしていた人間が入手した手段は非常に気になるが、新たな客人が来るというのなら準備を進める必要もある。
ベルベットルームの住人は扉を通じて居住区などに移動も出来るが、新たな事件が起きる舞台を直に知っておくのも良いかもしれない。
現実世界の時間でもまだまだ先の事だが、ここはエリザベスの誘いに乗ってあげるとマーガレットは答えた。
「分かったわ。それで、それはどこの町にあるの？」
「はい。なんでも〝稲羽市〟という町だそうです」

用意した拠点とやらは掃除するなら好きに使って良いそうだが、自分が死ぬと分かっていた彼が用意したなら使わなくても劣化しないよう結界などが張られていても不思議ではない。
ならば、町の中心に通常の扉を用意して、彼の拠点へは歩いて移動した方が良いはず。
場所を聞いたマーガレットはテオドアに指示して座標を調べさせると、死んだ後も話題に事欠かない青年に小さく苦笑を浮かべてエリザベスの休暇のために準備を進めた。

第五百二話　現実世界への帰還

４月１日（木）
夜――巌戸台分寮

《以上、明日の気象情報でした。それでは、まもなく深夜零時をお知らせします》

遠くでそんな声が聞こえ、続けて時報の音が鳴る。

一体何だと思った七歌が目を開くと、自分も含め特別課外活動部のメンバーたちがラウンジのソファーやキッチン前の椅子に座っている姿が映った。

「えっと、私たちベルベットルームに……」

時の鍵を使って元の世界に戻ろうとしたところ、自分たちは別れの挨拶にと呼ばれたベルベットルームにいたはずだ。

そこで別れたメティスだけはいないが、他のメンバーは無事に揃っている。

ならば、自分たちはちゃんと元の世界に帰ってこられたのか。

いまいち不安を拭いきれずに点いていたテレビに視線を向けると、そこには四月一日と〝０：０３〟の表示があった。

瞬間、七歌は座っていたソファーから勢いよく立ち上がり、徐々に目覚めて動き出す仲間を置いて入口へと走り出す。

ずっと不思議な力で出来た透明な壁に阻まれて扉に触れる事が出来なかった。

けれど、無事に三月を越えたのならいけるはず。そう思って伸ばした手は扉の取っ手を掴むことが出来た。

勢いよく押して開き、さらにもう一つある扉の取っ手も掴んで押し開ける。

すると、これまで感じる事が出来なかった春先の冷たい空気が七歌の頬を撫でた。

空に視線を向けると明るい東京の夜でも見ることが出来る星と月が確認出来る。

そこまでしてようやく元の世界に戻ってきた事を実感した七歌は、

両手を突き上げるように挙げて夜中である事を無視して叫んだ。
「やったー！　戻ってこられたぞー！」
七歌の叫びが聞こえたからか寮の中からも足音が聞こえて仲間が次々と出てくる。
いくらダンジョンや過去の世界に行っていたとは言え、思えば一月以上も寮に閉じ込められていたのだ。
久しぶりに見る事が出来た寮の外の景色に意味もなく感動してしまう。
「おっし、今度こそ帰ってきたぜ！」
「フフッ、ただの街の景色に感動する日が来るだなんて思わなかったよ」
順平と綾時も七歌と同じように日常でさんざん見てきた風景に感動し、その足下ではコロマルが尻尾を振りながら飛び跳ねている。
寮かダンジョンにしか行けなかった綾時は勿論、散歩を日課にしているコロマルにとっても寮での生活は辛かったようだ。
そんな風にはしゃいでいるコロマルを見て、風花やラビリスは良かったねと笑顔で撫でてやっている。
一方、喜び合う後輩たちを眺めている先輩組のリアクションはどことなく控えめだ。
何だかんだと上級生として後輩たちに気を遣っていたらしく、誰も欠けることなく元の世界に帰ってこられた安堵の気持ちの方が強いらしい。
もっとも、喜んでいない訳ではないようで、天田が無事に戻ってこられましたねと話しかければ、真田も荒垣も笑って頷いている。
帰還の喜びを全身で表現していた七歌も、仲間たちの喜ぶ姿を眺めて改めて本当に良かったと何度も頷いた。
そうして、全員が戻ってきた事を一頻り喜び終え、そろそろ寮の中へと戻ろうとしたとき、足音と共に人影が近付いてくるのに気付く。
誰だろうかと他のメンバーもそちらに視線を向ければ、人影の正体は特別課外活動部の顧問だった栗原とＥＰ社の人間であるソフィアと医者のシャロンだった。

「どうやら無事に三月を抜けられたみたいだね。帰還おめでとうと言っておこうか」
「え、栗原さんも事件の事を知ってたんですか？」
「まぁ、湊から話は聞いていたからね。大人たちは全員知ってたよ」
時の空回りについては大人たちが集まった時に彼から聞いていた。
それなりに大変な事件に巻き込まれるとの事だったが、彼女たちが自分で解決する必要があると聞いていたため何も手助けする事が出来なかった。
ただ、当人たちにすれば心身共に負担の大きな事件だっただけに、顧問として知っていたなら密かにヒントなり忠告なりを出してくれても良かったのではと美鶴が冷ややかな視線を向ける。
「知っていたなら少しくらい教えてくれていても良かったのでは？」
「湊から口止めされていてね。必要な事だったらしいが、あんたらの様子を見る限りじゃやり遂げられたみたいだね」
事件と無関係な大人たちの情報源が湊なら、それを口止めしてきたのもまた湊だった。
本人はご丁寧に回復アイテムやちょっとした伝言程度の手紙を残していたので、彼なりに自分たちでしっかりと始末をつけてこいと考えていたのだろう。
湊が口止めしていたなら話せなくともしょうがないと美鶴も一応の納得を見せ、続けて栗原の後ろにいる二人に視線を向けると今度はゆかりが口を開いた。
「それで、どうしてＥＰ社の人たちも一緒にいるんですか？」
「わたくし達は仕事の報酬代わりに同席を求めただけです」
「……同席？」
ソフィアの話に出た同席とは一体何のことだろうか。心当たりのないゆかりが首を傾げると、栗原がハンドバッグに手を入れてある物を皆に見せてくる。
それは透明なケースに入った一枚のディスク。ディスクの表面には変わった紋様が描かれているが、そこを除けばこれといって特別な部分は見られない。

ただ、先ほどの話はこれに関係している事だけは分かるため、ゆかりは改めて栗原に尋ねた。
「栗原さん、それって何のディスクですか？」
「内容は分からない。でも、無事に戻ってきたあんたらに見せろと湊が遺した物だ」
預かっていた本人もその中身は確かめていないようで、これは無事に戻ってきた七歌たちに見せるためのものだと説明する。
もしや、栗原の持って来たディスクが彼の言っていた〝希望〟とやらなのだろうか。
事件に巻き込まれる七歌たちのため、貴重な回復アイテムを大量に用意していた彼の事だ。
自分が戦いの後に封印となる事が分かっていたなら、後々にその状況を解決する方法を残していてもおかしくはない。
チドリを助けて死んだ時はエリザベスの助力があって復活出来たと聞いている。
今回の封印についても外部からの協力が必要ならば、ここにいるメンバーは全員が力を貸すに違いない。
他の者たちもそう考えて作戦室で内容を確かめる事を提案しようとすれば、その前にと栗原がＥＰ社の二人が同席する事は事前に許可を得ていると説明してきた。
「ああ、先に言っておくと人数が増えても問題ないと言われてる。だから、この二人の同席は認めて貰うよ。ＥＰ社側で把握している月の門の情報っていう手土産もあるらしいからね」
「月の門？」
月の門という単語を聞いても七歌たちには覚えがない。
だが、それが彼の施した封印の扉の事であれば、一体どこでその存在を知ったのかという疑問が出てくる。
確認の意味も込めて聞き返した七歌の言葉に、栗原に代わってソフィアが触りの情報だけですがと説明してきた。
「貴女たちが確認しているかは不明ですが、影時間側の月の近くに金色の扉が発見されました。決戦前にはなかった物なので、恐らくは湊

様の力によって出現したものだと思われます」
「因みに、うちで月の門と呼んでる扉は現実世界には影も形も存在しないから、影時間に入れないと費用的にも観測に必要な材料的にも継続しての観測は難しい状態よぉ」
地球上では消えたはずの影時間を観測可能な設備とはどういった物なのか。
七歌たちには方法も含めてまるで予想がつかない技術なのは間違いないだろう。
ただ、説明を聞いた限りではやはり月の門は湊の封印の事を言っている事が分かった。
あの日の真実を知るために過去へ行った時には、エレボスとの戦闘もあった事で封印がどんな物かどんな状態であるか詳しく調べる余裕がなかった。
封印の詳細についてはデスだった綾時にすら分からないため、そこに関してはＥＰ社でも分かっていないはずだが、観測した範囲のデータであっても情報を貰えるのはありがたい。
七歌たちはすぐに栗原たちを寮へ招き入れると、そのまま四階の作戦室へと案内した。
＊＊＊
何もない状態で話すというのもあれなので、七歌たちは栗原たちを作戦室へ通すとお茶の準備をした。
過去の世界の湊から貰ったクッキーやチョコレートもテーブルに並べ、全員に温かいお茶が配られるとどういった順番で話すかという事になった。
アイギスやチドリは先に栗原の持っているディスクの中身を確認したいに違いない。
けれど、そちらを先にしてしまうと内容によっては視聴後にまともに話せなくなる可能性がある。
そのため、ここは先にソフィアたちが持って来たという封印についての情報を聞くことにした。
「えーと、栗原さんの持ってるディスクについても気になるけど、その

前にＥＰ社の方で把握している情報を教えてください。ああ、金色の扉については私たちも知ってるし、あれが八雲君が施した封印というのも分かってます」
　出された紅茶のカップに口をつけていたソフィアに視線を向けると、相手はカップを静かにソーサーの上に置いて姿勢を正して全員の顔を見渡す。
　その間にシャロンが持っていた鞄からファイルを取りだし、プリントアウトされた写真をテーブルに並べながら説明し始めた。
「我々が月の門と呼んでいる扉は、先ほども申しました通り裏の世界である影時間に存在します。ＥＰ社では湊様の指示もあって決戦前からニュクス本体である月の監視を行なっていましたが、決戦当日まで扉が確認された事など一度もありませんでした」
　シャロンが並べた写真は少し粗い画質だったが、月を背にした状態で佇んでいる金色の扉が写されていた。
　その外観は彼女たちが過去の世界で見た物に酷似しており、いくら画像が粗くても見間違えようがないので同一の物だろうというのが分かる。
　この扉は湊がニュクスを心の海へと送り返した時に出来たため、決戦の前日まで確認出来ていなかったという説明から考えてもまず間違いない。
　その確認も含めてアイギスがこれは自分たちの知る封印で間違いないと伝える。
「この写真に写っている扉は、わたしたちが確認した八雲さんの封印で間違いありません」
「そうですか。この写真は桐条グループから提供された限定的に影時間を発生させる装置を元に作ったミサイルを使って撮影したものです」
「というと、月に向けて影時間発生装置を撃ち出したのですか？」
「ええ。事前にどの程度の範囲まで展開出来るか地上で試しているので、再び世界中に影時間が現われるようになるという心配はありません」

桐条グループの発明品が元になったと話題に出たとき、何人かの視線が美鶴に向けられる。
その装置については美鶴も把握していたらしく、知っていると頷いて返せば再び皆の視線はテーブルの写真に向けられる。
だが、元の装置を知っている美鶴だからこそ、桐条グループで保管されている装置には致命的な欠陥があった事を覚えている。
もし、元の装置の欠陥が残ったまま運用されていれば大変危険なため、美鶴は写真から視線をあげてソフィアとシャロンに話しかけた。
「あの装置については私も知っています。ですが、あれは出力のコントロールが安定しておらず、場合によっては想定を超える範囲と時間に展開してしまう事もあったはずです」
「そこら辺は把握してるから心配ないわぁ。基礎設計を坊やがやり直して、電力の供給量で範囲指定出来るように改良してあるの。ていうか、大元の神様を坊やが抑えている以上、坊やが消滅しない限りは大丈夫だって言ってたわよ」
美鶴が心配していた問題点など設計図を見た時点でＥＰ社側でも気付いていた。
アイギスたち対シャドウ兵器を作る技術があれば、その程度の改良くらいは出来たはずだが、エルゴ研の主だった研究員らが死亡し、影時間が永続的に発生するようになった事で改良品は作られずに終わったらしい。
それを知ったシャロンは勿体ないと思ったそうだが、既に使っていないなら好きにいじって良いのだろうと湊と一緒に改良型を作るだけでなく、それをミサイルに搭載して月の封印を発見するまでに至った。
ＥＰ社の方ではそんなシャロンの功績を皆で賞賛していたようだが、ここで話を聞いていた男子たちはぶっ飛んだ才能を持つ者はやはり変わり者が多いと引き気味だ。
とはいえ、懸念していた問題点が取り除かれているなら安心だと、美鶴も写真を見ながら再び会話に参加する。
「それで、これは今も月の近くに存在しているんですか？」

「そうよぉ。今日の報告のために三月三十日にも撮影したから特に変化もなく健在みたいね」
宇宙空間に装置を持っていくのも大変だが、装置は基本的に使い捨てになるので得られる結果に対して黄昏の羽根の消費が激しいという問題点がある。
それを今日の話し合いに参加するからと追加で観測してくれたＥＰ者側には感謝しかない。
どうやらまだ新たなエレボスが現われた様子もないようなので、七歌や美鶴はこのまま彼を休ませてあげて欲しいと思わず祈ってしまう。
だが、時の狭間のようなオカルトな手段を使わずに封印まで行けると聞いて、急に瞳を輝かせたゆかりが顔をあげるととんでもない事を言い始める。
「ってことは、影時間を発生させる装置と一緒に月まで行けば私たちもまた封印まで行けるって事だよね？」
「あー、諸々の問題点を無視して結果だけで言えばね。ただ、前回は過去への扉経由だったから生身で行けたけど、次は現実世界経由で宇宙服が必要だから多分八雲君が出てきても会話出来ないよ？」
「加えて、我が社はそんな馬鹿げた事に協力しませんので、桐条グループの旧式の装置を使っての無謀な挑戦という事になります」
ゆかりの言う通り封印の許に行くだけなら辿り着ける可能性は十分にある。
しかし、行ったところでどうしようと言うのか。今の世界では封印を解けばエレボスの呼びかけによって再びニュクスが現われる恐れがある。
その問題を解決する手段を七歌たちは持っておらず、さらに言えばＥＰ社は別に七歌たちの味方ではないので協力する義理がない。
故に、意味のない挑戦をしたいのなら桐条グループの力を借りて勝手にやってくれと、ソフィアはカップに手を伸ばしつつ冷めた視線を向けながら告げた。
身内だけでなく情報提供者からも冷たい態度を取られたゆかりは

肩を落として落ち込む様子を見せる。
　まぁ、ある意味ではそれもいつもの事なので、他の者たちが触れずに流していると、これまで会話にあまり参加していなかったチドリがソフィア達に質問をぶつけた。
「……それで手土産ってこの写真だけなの？」
「ええ、メインはその写真になります。湊様の痕跡が影時間側に発見されたというのは大きな情報ですから」
　手土産というから期待していたが、自分たちが既に知っていた封印の扉の写真だけでは大した収穫はない。
　それが分かったチドリが目に見えて会話に興味を失った反応をすれば、ソフィアは薄い笑みを浮かべて小さなネタならまだあると続けた。
「それと、これはあの日以降に無気力症から回復した患者たちへの聞き取りで判明した事なのですが、無気力症から回復する際に自分の中に何かが戻ってくるような感覚を覚えたそうです」
「……自分のシャドウが戻ってきたのを覚えているって事？」
「そうです。さらに興味深いのが〝若い男性のような何か〟が自分を送り返してくれたような気がすると言っていた者が多数確認されています。あの日以降、世界中の人間が湊様の存在を忘れているにもかかわらずです」
　ソフィアが語った無気力症患者たちの情報は桐条グループでも一切把握していないものだった。
　どうして彼らしき存在が無気力症患者のシャドウを送り返したのか、どうして全て忘れているはずの彼の存在をぼんやりとでも覚えているのか。
　話を聞いただけでは分からない事は多いが、彼の事を覚えている者たちがいるならそれが切っ掛けで記憶を取り戻す者が現われてもおかしくないのではとアイギスが質問した。
「それは世界中の人々が八雲さんの事を思い出す可能性があるという事ですか？」
「どちらかと言えば、皆さんが潜在的に覚えている可能性が高いとい

う話ですね。思い出すかどうかは未知数です」
奇跡を起こして世界を救った代償に彼は世界中の人々から存在を忘れられた。
けれど、皆の中に彼の記憶が欠片でも残っているのなら、自分たちのように彼の事を思い出してくれる者が現われるかもしれない。
蜘蛛の糸のようにか細いものだが世界と彼の繋がりは断たれていなかったという事実は、彼が世界に切り捨てられたと思っていたアイギスたちにとっては何よりの朗報だった。
そんな風に喜んでいるアイギスたちをしばらく眺め、彼女たちが落ち着いたタイミングでソフィアはこちらの情報は以上だと伝えた。
「こちらから提供出来る情報は以上です。では、今度はそちらの情報をいただきましょうか」
「えっと、じゃあディスクを見る前に簡単にだけど時の空回りで起きた事を説明しますね」
栗原の持って来たディスクを見るにも、時の空回りについての知識が必要かもしれない。
そう思った七歌はそもそも発端から事件解決までの出来事を知って貰うため、紅茶のお代わりを用意しながらソフィア達に語って聞かせた。

第五百三話　時を超える言葉

４月１日（木）
深夜――厳戸台分寮・作戦室
ＥＰ社が掴んでいる情報と交換で七歌たちは時の空回り事件について語った。
影時間とタルタロスが消滅した揺り戻し、その力がペルソナを持つ七歌たちに引き寄せられ、彼女たちの未練が今いるここを異界化させた。
話を聞いていたソフィアは原因を聞いた時点で呆れ顔だったが、番人であり寮を〝現在〟に繋ぎ止める楔であった湊を過去の湊本人に処理させたと聞いて時、彼女は呆れを通り越して怒りを見せた。
「あれだけ湊様に頼っておきながら、最後の後始末までご本人にさせるとは何事ですか！　恥を知りなさい！」
「いやぁ、本当に面目ないっす」
怒られた七歌としては本当にその通りだと認めるほか無く、彼女としてもあれは自分たちで乗り越えなければならなかったという自覚がある。
だが、自分の分身か贋物が悪さをしているなら、それは自分の手で始末をつけるべき事柄だと湊が一人で動いてしまえば七歌たちに止める術はなかったことも考慮して貰いたい思いがある。
「というか、八雲君が次元を超えてあそこまで未来に干渉出来ると思ってなかったんだよね。アザゼルが出てきた時には番人の方もすごく驚いてたし」
「坊やって時流操作とか時間に干渉出来る能力があったんじゃないのぉ？」
「私たちはそれがどの程度の規模で出来るか分かってないんですよ。時の加減速くらいしか出来ないイメージでしたし」
時流操作が出来ることは聞いていたが、時の加減速以上の事を出来るかどうかは知らなかった。
チドリやラビリスに聞いても分からないそうなので、わざわざ自分

の手札を他人に教えていなかった可能性が高い。
それを言われればソフィアも強くは言えないのか口を噤む。
そして、番人を倒してからあの日へ向かい。そこで滅びの原因と封印の秘密を知った事を伝えれば、詳細までは知らなかったソフィア達も難しい表情で黙り込んだ。
なにせ最後の決戦が全人類と彼個人の戦いだという発言がある意味では真実だったのだ。
エレボスが人々の無自覚は想いも含む存在であれば、彼のためにと裏で動いていた彼女たちも例外ではない。
それでは時の空回りを起こした七歌たちを責められる訳も無く、話が一区切りついたところでソフィアやシャロンも難しい顔になり場に沈黙が降りる。
そうして、しばらく誰も言葉を発さずにいると、場の空気を変えようと思ったのか栗原が荷物からディスクを取り出して皆に見せた。
「まぁ、それぞれ考える事はあるだろうが、先にこいつを見ようじゃないか。私も湊から内容は聞いてない。ただ、特別課外活動部のメンバーが無事に戻ってきたら全員で見ろってだけ言われてる」
「不思議な模様がありますね。どこのメーカー品でしょうか？」
栗原の持っているディスクには表面に薄ら青く光る不思議な紋様が輝いており、こんなディスクは初めて見たと他の者たちも興味深そうに眺めている。
ケースを見てもどこにもメーカー名は書かれていないので、恐らくは湊がＥＰ社の設備を使って自分で作ったのだろうと思われた
もっとも、いくら外見を眺めたところで内容は分からないため、美鶴がディスクを受け取ってモニター前にある機械にセットし、彼女が着席してからリモコンで再生ボタンを押した。
わざわざ彼が決戦前に栗原に預けていたものだけあって、皆もどこか緊張した様子で画面を見ている。
そして、しばらく黒い画面が続いていると突然モニターに黒い波紋が浮かび始めた。
モニターの中で黒い波紋が何度も浮かび、それに続けて無線の周波

数を合せるような甲高い不快な音が鳴り始める。
コロマルや他にも何人かが耳を押さえて顔を顰めていると、ブツンッ、という音がしてモニターが急に明るくなった。
明るくなったそこに映っていたのは、なんと無重力空間らしき場所で足を組んでフワフワと浮いている湊だった。
《……なんだ、随分と時間がかかったな。栗原さんにはすぐに見るように言っておいたんだが、まぁいいだろう。お前たちはさっきぶり、ソフィアたちは久しぶりだな。自己紹介は不要だろうが有里湊だ》
一体この映像は何なのか。そう思っていると、画面の向こうの湊はまるでこちらが見えているかのように話しかけてきた。
栗原は湊から誰が同席しても構わないと許可を貰っていたが、ディスクを受け取った時点ではソフィアたちを誘おうとは考えていなかったらしい。
だというのに、画面の向こうにいる湊がソフィアたちの存在を言い当てた事で、ゆかりはこれは本当に録画された映像なのかと疑いを持つ。
「は？　え？　これ、何なの？　録画の映像じゃないの？」
《……リアルタイムの通信だぞ。俺の通信能力は力を込めればどこまでも範囲を広げる事が出来る。まぁ、流石に今いる裏側から何の用意もなく表の世界に繋ぐのは難しいが、今回はマーカーとして俺の力を宿したディスクを用意していたからな。そっちでマーカーを起動させればこの通りだ》
栗原が持って来たディスクは不思議な紋様が描かれ黄昏の羽根のような青い光を発していた。
湊が言っている通り、それ自体が彼の能力を受信するためのマーカーだとすれば、わざわざ黄昏の羽根を材料として使っている事にも納得が出来る。
しかし、いくら彼の探知能力が並外れた出力を持っているとしても、世界の裏側に存在する影時間側からでも通信出来ると誰が思うだろうか。
これにはソフィアやシャロンも驚いた表情をしており、彼から色々

と任されていた彼女たちですら今回の仕掛けは聞いていなかったようだ。
封印を施した後でもこんな事が可能だったなら、別れる前に教えて欲しかったという気持ちはある。
けれど、そんな個人的な感情を今は抑えて、アイギスはこれまで気になっていた事をここで尋ねる事にした。
「八雲さん、貴方は今どういった状態なんですか？　あの封印によって月に縛り付けられているんじゃないんですか？」
「それもやけどニュクスと一緒にいて大丈夫なん？　綾時君の話やと湊君の力がどんどん消耗されるって話みたいやけど」
アイギスに続いてラビリスも彼の今の状態を気にして質問する。
綾時やメティスの話が真実であれば、湊はユニバースの力で奇跡を起こしニュクスを封じることが出来たが、その封印を維持し続けるために力を消耗し続けているという。
いくらペアトリーチェという他次元神と融合していようと、彼の魂は人間の規格がベースになっている。
封印となってニュクスを監視し続け、人々の負の感情が高まりエレボスが生まれればそれを排除するため戦いに駆り出される。
あんな事を続けていれば遠くない未来に彼の魂は摩耗して消滅してしまうだろう。
それを心配して彼女たちが尋ねると、湊は顎に手を当てて少し考えてから口を開いた。
《……まぁ、色々と聞きたい事があるのは分かるが、とりあえず俺の方から順番に話をしていこう。まず、滅びの原因だ。お前たちも既に知っているだろうが、滅びはニュクスによって起こされるがその原因はお前たちから生まれた負の概念〝エレボス〟だ》
好き勝手に質問されてそれに答えていては無駄に時間がかかってしまう。
それを嫌がった湊は、質問は後にしてニュクスが引き起こす滅びの原因から順番に説明していこうと話を続ける。
一応、ここにいる者たちは湊から事前に聞いていたり、時の空回り

の中で綾時などから説明を受けていたため基本的な部分は知っている。
ただ、封印となって実際にニュクスを間近で観察し続け、今も時々原因であるエレボスを倒している彼からの情報はとても貴重だ。
テーブルに置かれたカップに口をつけて喉を潤し、皆が真剣な表情のまま彼が語る言葉に耳を傾ける。
《俺の封印はそのエレボスを消すためのものだ。封印があればエレボスはニュクスに触れられず、エレボスが触れなければニュクスは自分を呼ぶ声の存在に気付かない。ただの遮断結界でも別に良かったが、小まめに殺した方が楽だからな。敵の出現に反応して俺自身を召喚する攻性防壁という形を取った》
あの封印はニュクスを封じるためではなく、ニュクスを守るためでもなく、原因となるエレボスを拒絶し殺すための攻性防壁だと彼は語る。
その封印の機能と性質はやはり綾時たちが言っていた通りのものだった。
いつか人類がニュクスを必要としない日まで耐え続ける事など御免だと、人類の意思を個の力で捻伏せ続ける道を彼は選んだのだ。
ただ耐え続けるよりは良いのかもしれない。他人に任せずに自分の力で選び続ける姿は実に彼らしいと思える。
「理屈は分かるがお前はそれで良いのか？　エレボスは俺たち人類がいれば無限に湧いてくる存在だ。それではお前はいつまでも戦い続ける事になる」
だが、人類はそう簡単に変わりはしない。ニュクスを求めなくなる事など永劫来ない可能性だっってある。
それでもその選択に後悔はないのか。心のどこかで彼に全てを押し付けてしまったと負い目を感じていた真田が聞けば、湊は溜息を吐いて呆れたような顔をしながら答える。
《……俺の事を本気で心配するならエレボスを生み出さない努力をしろとしか言えない。あれが出てこなければ俺はこんな風に悠々自適に過ごせる訳だからな》

言いながら湊は組んでいた足を下ろすと、床を蹴ってそのまま空中を移動していく。
どういった方法で映像を繋いでいるのか分からないが、カメラの役割を果たす物が彼の後を追っていくと湊は巨大なガラス張りの一画で浮いたまま止まった。
そして、浮いたままの湊は左手の親指でガラスの向こうを指し示し、カメラがそちらを映せばガラスの向こうには宇宙の闇の中で煌めく星々と太陽の光に照らされ青く光る地球があった。
過去への扉で決戦の日に向かった七歌たちは、扉を通じて宇宙に行ったことで既に一度見ていたが、桐条製の高性能モニターで見た宇宙から眺める地球の姿もこれまた格別だと順平や天田がモニターへ近付いてゆく。
「え、後ろにあんのってマジの地球か?!」
「決戦の日に行った時も思いましたけど、宇宙から見る地球ってやっぱりすごいですよね。ていうか、有里さんがいるのって一種の宇宙船なんですか?」
カメラの映像を見る限りではガラス張りになっているのは地球に面した部分だけで、後は天井も床も淡く発光する白い不思議な材質で出来ている。
どうみても地球の科学で作った物だとは思えず、天田は彼だけが持つ謎の技術で作った宇宙船なのだろうかと考えた。
そも、ガラスの向こうに地球が見えるまで、彼が今いるのは封印の内側だという認識を全員が持っていた。
それが蓋を開ければ無重力空間で優雅に泳いだりしつつ、どこかスカした態度で母なる惑星を見下ろしていたのだから、彼が実際にはどういった場所にいるのか不思議に思っても無理はない。
《……ここは封印の内部とも言えるし、ニュクスの眠るあちら側の世界とも言える場所だ。そこに俺とベアトリーチェの力で専用の神域を造り、こうやって地球を眺めながらエレボスの襲来を待っている》
「我々と共にエレボスを倒していたが、二ヶ月ほど経った今は大丈夫なのか?」

《エレボスの襲来に周期などはない。だが、一度倒せばしばらくは力を溜める必要があるのか出てこなくなる》
偉く自由度が高く見える空間は、そうは見えないものの現世の裏側にある常世側だった。
しかし、完全な心の海という訳ではなく、何もなかったエリアにべアトリーチェの力を借りて自分たち専用の神域を展開した事で、その範囲に限り今のように環境を自分好みにいじることが出来るらしい。
思っていたよりも余裕がある様子だと知れたのは良かったが、自分たちで神域を維持しているならその分消耗も激しいのではと気になる。
本来休めるはずの空間の維持に力を消耗しながら、敵が現われればそれと戦わなければならない。
今はまだ余裕があるように見えるものの、今後の事を考えると心配だと風花とチドリが湊に話しかける。
「でも、有里君も戦いで傷ついてましたし、今はそこを維持出来ていてもいつまでも続けるのは難しいんじゃないんですか？」
「……というか魔眼の力を使って殺せばあれも簡単に狩れるんじゃないの？」
九頭龍家の血も流れている湊の瞳には魔眼の能力が備わっている。
その内の一つに存在の死を捉える魔眼があり、それで見抜いた存在の綻びを切って死を発現させればエレボスも簡単に狩れるのではとチドリは考えた。
綾時の正体を皆に話した時には彼の魔眼を使えばニュクスすら殺せると言っていたので、その欠片を持った人間たちの意思の集合体であるエレボスにも当然効くはず。
どうして先の戦いで魔眼を使っていなかったのかと疑問を持ってチドリが質問すれば、湊は二人の質問にまとめて答えるように口を開いた。
《……今の俺は魂のような状態だ。一応肉体はあるがデス状態だった綾時に近い。怪我や消耗があっても生身のように直ちに命に影響する訳じゃなく、こちらに戻って休めば本来の魂の形に合わせて肉体の

欠損も修復される。まぁ、そのせいでペルソナも含めて使える力に制限はかかっているがな》
神域の維持に力を消耗するかどうかは分からなかったが、どうやら神域に戻りさえすればエレボスとの戦いで負った怪我などは回復するらしい。
もっとも、彼が封印の核として機能している限り、肉体と魂の境界が曖昧になるせいで使える異能にも色々と制限が出てしまっているようだ。
彼が強い事は知っているし、過去への扉を使って向かった先で共闘したので、現在使用可能な力だけでもエレボスに通用する事は分かっている。
それでもやはり心配せずにはいられないのか、美鶴は異能の殆どを封じられてしまっているんじゃないかと尋ねた。
「ペルソナを使えない以上、今の君は生身で戦うしかないという事か？」
《……別に力を武器に纏わせて斬撃を飛ばしたりは出来る。一応、マフラーの機能も生きているし。近代兵器を使う事も可能だ》
アイギスのリストバンドとも繋がっている湊のマフラーは、通常兵器である銃火器だけでなく、個人での使用を想定していないミサイルランチャーや戦闘機、さらには巨大な戦艦なども入っていたりする。
宇宙空間でそれらがどこまで通用するかは分からないが、湊の適性の高さであれば影響を受けた兵器の力は一般的なペルソナの力を上回る。
力を纏わせた大剣だけでもエレボスには通用していたので、そういった兵器も組み合わせれば確かに戦力に不足はなさそうだと美鶴も納得した。
《まぁ、封印やエレボス関連はこれくらいで良いだろう。お前たちが気になっているのは、どうすれば俺が封印を解いて現世に復帰出来るかという話だろ？》
「え、封印ってそんな簡単に解いたり出来るの？」
滅びを呼んだ敵の正体や湊の現状は理解出来た。

だが、彼女たちが本当に知りたいのはそこではない。
湊もそれは理解しているようで、足を組んで宙に浮きながら現状では不可能と語りつつ自身の復活について触れた。
《封印の解除自体は俺の意思で出来る。まぁ、解いてしまえばもう一度同じ封印を作るのは不可能で、今の世界の状態ではそれが出来ないってのは分かるはずだ》
「なら、どうすれば有里君は戻ってこられるの？」
自分が一番知りたかったのはそこだとゆかりが食いつく。
現状、エレボスがニュクスへの干渉を止めようとしない限り湊の封印を解くことは出来ない。
一度は地球へ降臨した事で、再封印されたニュクスも再び目覚めやすくなってしまっている。
そんな状態で封印を解いてしまえば世界は今度こそ滅びを迎える事になる。
だが、それを分かっている湊が自身の復活について触れたのだから、何かしらの方法があるのだろう。
ゆかりが問い返したままモニターを見つめていれば、湊は少し考えてから静かに答えた。
《……一番簡単なのは封印を解いて現世に復帰後、世界中の人間に死について考えるなと暗示を掛ければいい。ペルソナ使いが相手でも問題なく使える力だからな。強制的にエレボスが生まれる原因を無くすことは可能だ》
エレボスは人々の死を求める心の集合体。死を求め、死を意識し、死に触れたいと思った人間の心が集まって生まれた怪物だ。
なら、湊の暗示の魔眼を使えば強制的に人々からそういった思考を消すことが出来る。
どれだけの時間がかかるか分からないものの、ペルソナ使いですらその力に抗えない以上、無差別に力を使い続ければいつかはエレボスが生まれるのに必要な力を下回るに違いない。
《だが、お前たちも分かっている通りこれは現実的じゃない。死について考えるなと暗示を掛ければ、死と向き合う事もなくなって何かの

切っ掛けでシャドウが抜け出る可能性もあるし。世界中でそんな面倒な事をするくらいならエレボスを殺し続ける方が楽なくらいだ》
特別課外活動部のメンバーたちが今もペルソナ使いでいるように、何が切っ掛けで再びシャドウが抜け出て無気力症になる者が現われるか分からない。
エレボスを消そうとして無気力症を広める事になれば本末転倒なので、世界中を回るのが面倒である事も含めて実際はこんな方法は取れないと湊は苦笑した。
自分で提案しておきながらなんだそれはと思うものの、彼にはまだ他にも案がありそうだと見てソフィアが他の案はないのかと聞いた。
「では、他に何か方法があるのですか？」
《……他に方法はなくはない。だが、そっちも時間が必要で簡単ではないぞ。なにせ、現世にいるお前たちが世の中を変えていくって方法だからな》
「皆がハッピーになればエレボスなんて生まれないってこと？」
《……そもそも、エレボスはお前たちが勝手に生み出しているだけだからな。そんな物を願わずに生きていけっていう単純な話だ》
世界中の人間に暗示を掛けるという力業の次は、まさかの地道な草の根運動だったことで、真面目に話を聞いていたメンバーたちは思わず脱力する。
確かに彼の言う通りなのだ。七歌たちも含めた人類全てがエレボスを生み出す元凶であるならば、湊の魔眼を使って暗示を掛けなくとも、その元凶たちの意識を変えていけばいつかはエレボスも生まれなくなるに違いない。
ただ、それは湊本人も言っているように時間が必要で、さらに言えば確実性がある訳でもないため、七歌たちが生きている間に終わる可能性の方が低いくらいだ。
そんな微妙な案を伝えてきた相手に文句を言いたくなるが、彼が言う通りエレボスが生まれるのは人類のせいなので、その後始末を請け負ってくれている青年に文句を言うのは筋違いだろう。
それが分かっているアイギスたちが少し黙っていれば、そういえば

まだ聞きたい事があったとある事を思い出す。
「あ、そういえば、八雲さんが戦いの後に言っていた〝希望〟というのは何の事なんですか？」
「それそれ！　もしかして、このディスクを使えばいつでも通信越しに会えるとかって意味なの？」
アイギスとゆかりの言葉を聞いて他の皆もそんな話もあったなと姿勢を正す。
ゆかりの言う通りこのディスクを使えばいつでも彼と会話出来るというのであれば、モニター越しではあるものの近況報告なども出来るため、彼女らにとって非常に有用で〝希望〟と言えなくもない。
けれど、これはあくまで通信用に用意していただけで、あの時に語った〝希望〟は別の物だというのならそれを教えて欲しい。
どこか期待の籠もった視線がモニターへと集まれば、皆にジッと見つめられていた湊は顎に手を当てて少し考え込んでから一度頷いた。
《……まぁ、頃合いか。話を続ける前に一つ質問だ。七歌、今日は何月何日だ？》
「え？　今日はもう日付を跨いだから……うん、四月一日だよ」
《ああ。つまり、そういう事だ》
聞かれたので素直に答えたが、質問された七歌は急に何の話だろうかと首を傾げる。
他の者たちも七歌と同じように何が〝そういう事〟なのかと話について行けていない様子だ。
だが、それぞれ顔を見合わせて彼の言葉の意味について考えていれば、何かを思い付いたらしい綾時が自信なさげに思い付いた答えを口にした。
「もしかして、エイプリルフールかな？」
綾時の言葉に他の者たちはそういえばそうだと、確かに今日は四月一日なのでエイプリルフールだった事を思い出す。
けれど、それが一体何なのか。エイプリルフールなど嘘吐いたりフェイクニュースで楽しんだりするくらいの行事という認識しかない。

ただ綾時以外からは何の回答も出てこなかった事で、〝エイプリルフール〟という答えに対する湊の判定はどうだと再びモニターに視線が集まれば、画面の向こうにいる青年は愉しそうに頷いた。
《……正解。これがリアルタイム通信っていうのは嘘で、ただお前たちの反応を予想して一人で話し続けていた録画なんだ。嘘だと思うなら、誰か試しに何か言ってみろ》
「ええっと、バーカ」
今までリアルタイム通信だと信じていた映像は本当は全てが録画だった。
急にそんな風に言われて混乱しているところに、さらに何でも良いから何かを言ってみろと言われ、咄嗟には思い付かなかったのか順平が苦し紛れに悪口を言う。
突然の事で良い言葉が思い付かなかったのは分かるが、いくら何でもそれはないだろうと他の者が呆れていれば、モニターに映る青年は不思議そうに首を傾げた。
《……ん？　急に自己紹介なんてしてどうしたんだ？》
「自己紹介じゃねーよ！　つか、ちゃんと返事してんじゃねーか！」
先ほどこれはただの録画映像だと言っておきながら、湊と順平の会話はちゃんと成立していた。
煽られた事も含めて、どこか録画だ嘘を吐くなと順平は憤慨する。
しかし、それに対して湊は改めてこれは録画で間違いないと、会話が成立して見えるネタばらしをしてきた。
《いや、これは確かに録画だぞ。今のは何か言えと言ったらＩＱの低い誰かが幼稚な暴言を吐いてくると予想して答えただけだ。だから、馬鹿と言ったのか阿呆と言ったのかまでは分かっていないからな》
「それにしたっていくら何でも会話が成立しすぎだろ。タイミングまで合っていたのはどう説明すんだ？」
《さっきまでの会話は基本的に俺がリードして会話を進めていた。最初にリアルタイムと信じた時点で何人かが様々な質問をしてくるのは容易に想像出来る。なら、それらを聞いている体で順番に説明させてくれと言えば質問してきた者もこちらの話を聞くだろう？　そこ

からリードすれば後の展開もある程度はコントロール出来るという訳だ》

説明されてみれば理屈としては理解出来た。

確かに様々な質問が飛んできても、まずは自分の話を聞いてくれと会話をリードしていたのは彼だった。

人の心を読めるだけでなく、他者の記憶を追体験して人格をトレース出来る彼であれば、そこからメンバーらがどういった反応をするかも予想出来ていた可能性は高い。

しかし、今もまたしっかりと会話が成立していたせいで信じ切れずにいれば、何故だか騙していた本人がご丁寧に嘘に気付くためのポイントを解説してきた。

《俺が順番に説明すると言ってから、自分がした質問に俺がなんと答えたか思い出してみろ。ちゃんと質問に答えているようで、それなりにどうとでも受け取れる返答しかしてないはずだぞ》

「いや、思い返せばそうなんだけどさぁ……」

普段は湊を信じようとしているだけに、嘘でしたと言われても釈然としない様子の七歌。

まぁ、釈然としない様子なのは彼女だけではないが、悪ノリして煽ってくる時の湊であればこういった事もやりかねないと納得するつもりらしい。

大人である栗原やシャロンは呆れつつも彼らしくはあるかと楽しんでいるようなので、恐らく彼に近い立場にいる子どもたちの方が納得しきれていないようだ。

そうして、他の者たちが彼に振り回されて消耗したメンタルを回復させようとしていれば、画面に映っている湊はネタばらししたので話しやすくなったなと言葉を続けてくる。

《さて、これが録画だと信じて貰えたところで話を続けよう。今の俺は決戦の日に戻ったお前たちと封印になった自分が何を話したのかは知らない。だが、お前たちの未練を切るため〝希望は残してある〟といった内容の言葉は伝えるつもりだ。そして、その希望の詳細についてなんだが――》

メンタルを回復させようと気を抜いていたゆかりたちは、突然自分たちが知りたかった〝希望〟の内容が出てきて慌てて姿勢を正す。
決戦よりも前に録画した映像で内容を語るのであれば、恐らく彼もそれなりに周到に準備をしてから決戦に臨んだに違いない。
彼が残した希望の内容によっては封印の解除も具体性を帯びてくるため、無意識に前のめり気味に話を聞こうとすれば、仲間たちの想いを嘲笑うかのように映像の中の湊がとんでもない言葉を返してきた。
《――――これは録画だからな。未来の自分が言った事までは責任を持てないんだ。悪いな》
聞いた直後、部屋の中の空気が完全に凍る。
誰もが映像の中の青年が口にした言葉を理解したくない衝動に駆られ、けれど、煽るためか不敵に嗤っている彼の表情を見てゆかりが真っ先に再起動を果たす。
「はぁ?! え、嘘吐いたってこと!?」
《まぁ、エイプリルフールだからな。許せ》
「あっちは一月だったでしょうが!!」
この映像を録画している時期だけでなく、希望は残してあると彼女たちに告げた湊がいたのも四月一日ではなく、一月三十一日か日付を跨いだ二月一日のはずだ。
時の概念が曖昧だったとしても過去への扉を通じて移動したのだから、少なくとも三月三十一日よりは前なのは確実である。
ネタばらしをしたのがエイプリルフールだから、それ以前に吐いた嘘もＯＫとはならない。
何より、ここにいる者たちは彼が告げた〝希望〟に一縷の望みを賭けて元の世界に戻ることに決めた部分もあるのだ。
どちらにせよ元の世界に戻る必要があったとしても、彼女たちを先へ進ませるために期待を持たせる嘘を吐いたと言われては冷静ではいられない。
チドリは画面の向こうでどこか人を見下した薄い笑みを浮かべる青年を見つめ、いくら非常識だとしても一般的な善悪の判断や限度が

あることくらい分かるだろうと吐き捨てる。
「……流石に冗談じゃ済まないでしょ。いくら何でも吐いて良い嘘と悪い嘘があるって事くらい分かるでしょ」
《……録画時点の俺はその嘘を吐いてないからな。俺に当たるのは御門違いだ》
「同一人物でしょうが！　というか、何でさっきから会話が噛み合ってんのよ！」
《そっちの声は聞こえていないが上手く返せているならお前たちの思考が読み易いだけだ。どうせ俺に対する不平不満をぐちぐちと言ってるだけだろ？　人を嘘吐き呼ばわりする前に嘘と真実を見抜く能力を鍛えた方がいいぞ》
録画映像のくせに的確に見ている者たちの反応を当ててみせ、その上でどこかずれたアドバイスをしてくる彼の煽りスキルは今日も凄まじい切れ味だ。
だが、彼の言葉と〝希望〟の存在を信じていた者たちにすれば、裏切られただけでなくこの上なく馬鹿にもされている訳で、普段の彼の煽りには怒ったりしない美鶴や風花ですら何か言いたそうな顔をしている。
希望が嘘だったと聞いて素直に悲しんでいるのはコロマルくらいなもので、第三者の立場であるソフィアは綺麗な笑みを顔に貼り付けているため、湊を崇拝する立場の彼女でもこれはないと内心では考えているようだ。
とんでもなくくだらない最低なサプライズによって場の空気は冷え切っている。
普段は空気を読んで自分が笑われる立場になる事も厭わない順平ですら、今の場の空気を復活させるのは無理だと諦めるほどだ。
そうして、主に女性陣の怒りが凄まじい事で、男子たちがこれをどうするんだと画面に映る青年に視線を送れば、指を鳴らして宇宙空間に偽装していた幻術を解いて部屋をＥＰ社の私室に戻した湊が口を開く。
《さて、話は変わるが〝希望〟に相当するものは用意していない。だ

が、そう遠くない未来に俺は自分が現世に戻ると知っている。その時の封印の状態は勿論、どうやって現世に戻ったのかも分からない。ただ、お前たちとは別の未来人からその話を聞いたから可能性は高いと見て良いだろう》

「え、私たち以外の未来人ってどういう事？　いつ会ったの？」

七歌たちの認識では湊が未来人に会ったのは六月の一件だけのはずだった。

決戦の日に共闘した事も入れれば二件になるが、それ以外に未来人に会うことなどなかったはず。

しかし、湊は彼女たちとは別の未来人と遭遇し、さらにその未来人から自身が現世に帰ってきている事を聞いていたという。

リアルタイム通信だと信じていた先ほどまでの感覚で思わず聞き返すが、録画された映像がそれに答えてくれる訳も無く、パソコンの前にある椅子にゆっくり腰掛けた青年はどこか悪戯に成功した事を喜ぶような笑みで続けた。

《ま、俺が用意出来る〝希望〟なんてこれくらいだ。信じるかどうかは任せる。今日はエイプリルフールだからな》

「……もう、八雲さんは本当にわたしたちの心を弄ぶのが好きなんですね。こんな風に言われてはもう一度信じるしかないじゃないですか」

先ほどは裏切られたと憤慨したが、今度のこれは信じて良いような気持ちにさせられる。

これもまた期待を持たせるだけの嘘かも知れない。ただ、その時は今回以上の怒りで彼に文句を言ってやれば良いだけだ。

アイギスの言葉に他の者たちも苦笑しながら頷き、まだ映像が続いている事で皆の視線が画面に集まる。

《……未来を生きるお前たちにこれだけは言っておく。俺は自分の選択に後悔なんてしていない。同情される覚えもないし、救われたいとも思っていない。自惚れるな。お前たちはあの戦いで最善を尽した。人の身で神に挑んで何の代償もなく未来を勝ち取るなんて虫のいい話があるわけがない。今回はたまたま俺だっただけだ。そして、俺

だったからこそ〝希望〟が残ったんだ》
彼が語った通り、犠牲となったはずの青年は〝希望〟が残っている。
映像を見ている者たちは詳しい事情を知らないし、それがいつの事だかもまるで分かっていない。
それでも、他の者では不可能だったとしても、彼であればまたこの世界に戻ってきてくれるのではないかという期待がある。
わざわざ彼女たちの罪悪感を取り除くような事まで言って、さらに不確かな〝希望〟を持たせて背中を押された以上、これを見ている者たちは再会の時まで前を向いて歩き続けるしかない。
優しいのかスパルタなのか見ている者たちが苦笑していれば、椅子に座った彼が別れの挨拶をしてくる。
《……そういう訳で今回はここまでだ。いつかまた未来で会おう。俺は今の姿のまま歳を取らないが、お前たちはいくらか老けた姿で再会するんだろうな。ああ、それはそれで楽しみだ。結婚して子どもがいる可能性もあるし、下手をすれば孫がいる者だっているかもしれない。男連中は……天田と綾時くらいしか期待出来ないが、まぁ、金があれば何とかなる。諦めずに頑張れ。それじゃあな》
言うだけ言ってそこで映像が終わり、暗転した画面には『最初から再生しますか？』という表示が出てくる。
別れの挨拶が暗くならないよう気を遣ったのかもしれないが、あんな締めの言葉で本当に良かったのかよと順平や真田は呆れ顔で愚痴を溢した。
「最後に盛大にディスられたオレっちらの立場よ」
「お前と同列に扱われた俺の立場を考えてみろ。やつが死人じゃなければ顔を殴っているところだ」
場の空気は元に戻って穏やかになったというのに、最後の挨拶でお前たちは未来でも恋人一人作れずにいるんだろうなと同情された事で順平たちの心にはしこりが残った。
加えて言えば、先輩組はお互いに順平よりはマシだろうと思っていた部分もあるので、自分たちより明らかにモテていた青年から同列扱

いを受けた事で新たな争いの火種が生まれた形だ。
ただし、そういった不毛な争いをここで始めるわけにはいかないため、荒垣は湊から太鼓判を押された二人を褒める方向にシフトする。
「天田と望月は良かったな。あいつから見てお前らは望みがあるらしい」
「まぁ、僕は肉体のベースが湊だからね。見目は整っている自覚があるよ」
「えっと、僕は先輩たちもカッコイイと思ってますよ。世間的な人気じゃ有里さんに敵わなくても、真田さんなんてファンクラブもありましたし」
「ああ。だが、高校を卒業したら解散だからな。ファンクラブの存在は高校時代を讃えるトロフィーの一つみたいなものでしかない」
いくらファンクラブがあったとしても、それは月光館学園内の物で大学まで続くものではない。
湊のファンクラブのように全国展開していれば違ったかもしれないが、卒業して出ていく彼にとってファンクラブの存在はあくまで思い出の一つに過ぎなかった。
そうして、男子たちがお互いに慰め合ったり、時にマウントを取り合ったりしていると、ここへ来た目的は達成したとソフィアたちが椅子から立ち上がった。
「さて、では映像も見終わりましたし。わたくしたちはこれで失礼いたします」
「んじゃ、私もこれで帰るとするかね。あんたらは今日はここに泊まっていきな。桐条グループからそういう許可も出てるから。それとディスクの複製は別に禁止されてないからコピーなら渡せるよ。ま、あんなドッキリは初回限定だから次は一人で話し続ける湊が見られるだけだけどね」
ソフィアたちに続いて栗原もデッキから取り出したディスクを回収して帰ろうとする。
不思議な紋様などはそれらしく見せるただのデザインだった事も判明したので、彼が残したものとしてコピーを作っても問題はない。

その場で希望者を確認してメモすると、出来たら連絡するとだけ告げて栗原も帰ってしまった。
後には特別課外活動部のメンバーたちが残るが、彼女たちも最後の扉の番人やエレボスと戦ってそのまま元の世界に帰ってきたため非常に疲れている。
色々と話したい気持ちがあってもまともに頭が働くとは思えないため、今日はこのまま解散して部屋で休むことになった。
そして翌日、本来は組織の解散と共に回収する予定だった召喚器は、再び事件に巻き込まれた時の保険として各自で所持し続けることがその場で決まった。
何せ湊が自分たちとは別件で未来人に会っているのだ。何の事件も起きていないと言うには無理がある。
その対処に自分たちが駆り出されるかは分からないものの、巻き込まれたときの事を考えればこの選択は間違いではない。
加えて、湊の馬鹿なサプライズのせいで半信半疑だった彼女たちは、結局、湊の言っていた〝希望〟を信じて未来に歩き出す事に決めた。
いつ再会するのか、どうやって戻ってくるのか、分からない事だらけだが仕事を終えて戻ってくる彼と会うのにだらしない姿は見せられない。
どうせなら一回りも二回りも成長して見返してやろうと全員が同意して笑っていた。
そうして、二〇一〇年四月一日に特別課外活動部は正式に解散し、巌戸台分寮は静かに閉鎖される事となった。

第五百四話　キミの記憶―Ｂｒａｎｄ　Ｎｅｗ　Ｄａｙｓ―（終）

２０１１年３月４日（金）
午後――月光館学園

終わらない三月の事件を乗り越え、季節は巡り新たな春が訪れた。
記念品や卒業アルバムの入った鞄と卒業証書の入った賞状筒を手に持って、アイギスは階段を上ってくると屋上への扉を開く。
暦の上での季節は春だが海から吹いてくる風はまだ少し冷たく、風に揺れて乱れた髪を押さえながら少女はフェンスへと近付いてゆく。
頭上にある太陽に照らされた海面はキラキラと輝き、自分たちが守った街と海が一望出来るこの素敵な光景も今日で見納めかと思うと途端に名残惜しさが湧いてきた。
最初に起動してからおよそ十年間眠っていた彼女にすれば、再び目覚めてからの人生の方が長く、巌戸台にやって来てからすぐに学校へ通い始めた事でそのほとんどが学校と関わっていたと言える。
それを思えば人生の大半を過してきた場所を離れる事もあって、寂しさを感じるのも無理はないのかも知れないと一人で納得し苦笑した。
そうして、遠くを見つめながらフェンスの方までやってくると、賞状筒が転がっていかぬよう気を付け持っていた荷物を傍のベンチに置き、アイギスはフェンスの金網に触れながらジッと街の方を眺める。
出来ることなら彼と共にこの景色を見たかったが、去年と違って今年はまだ桜も咲いていない。
というよりも、本来三月の上旬に東京でソメイヨシノが満開に咲き誇る事などない。冷静に考えれば桜が咲いていた去年の方が異常だったのだ。
卒業生にとっては嬉しいサプライズになっただろうが、学者たちはどうしてそんな事が起きたのか騒いでいなければおかしい。

だが、その異常を日本中が受け入れていた。これといってニュースに取り上げられる事もなく、思い出に残る卒業式になったと報じていた程度だった。
「……今になって考えるとあれは八雲さんからの餞別だったのかもしれませんね。出来れば今年も同じような景色であれば良かったのですが、残っていた力もあの事件で使い切ってしまったのでしょう」
去年のあの光景は湊が残していった力で起きた奇跡か、それともこの街に残っていたタルタロス消滅時のエネルギーにアイギスらの意思が反映されて起きた現象なのか。
きっと誰に尋ねてもその答えは分からないが、アイギスは自分の思ったままを正解にしておこうと笑顔を浮かべて空を見上げる。
今は明るくて見えないがこの空の向こうにある月には今も彼がいる。
ディスクの映像で言っていた事が本当なのか冗談なのかは分からないが、彼の力であればこの地上を能力の眼で見ていても不思議ではない。
故に、彼女は彼にも聞こえている事を祈りながら語り出す。
「今日でわたしたちもこの学園を卒業です。出来れば八雲さんと一緒に卒業したかったですが、天田さんはこれからも中等部と高等部に進むそうですので、帰ってこられるのでしたらその間でお願いします」
月光館学園の高等部は毎年三月の第一金曜日に卒業式が行なわれる。
そのため彼女と仲間たちも今日でこの学園と別れを告げ、唯一残るは初等部に通う天田のみとなってしまうのだ。
彼自身はその事を寂しく思っているようだが、頻繁に会えなくなるだけで別に連絡が取れない訳ではない。
それにほとんどのメンバーが都内に残っているので、ここにはいない彼と違って時間が合えば会う事だって出来た。
「時の空回りからおよそ一年、八雲さんがいない間も色々な事がありました。まず最初にあったのは姉さんの生徒会長立候補でしょうか。どうやらお母さんとの約束でもあったそうですが、対立候補の男子を

破って見事に当選しました。あ、ちなみに有力候補だった七歌さんは副会長で良いと言って副会長をされていましたよ」
新学年が始まってすぐ、新生徒会の選挙が行なわれるとラビリスが会長に立候補した。
例年通りであれば前年に副会長や委員長を務めた二年生が会長になるのだが、人格モデルとなった少女との約束を果たすため、そして新しい一歩を踏み出すためにとラビリスは自ら立候補して選挙に出馬した。
対立候補は美鶴と仲が良く推薦を受けて生徒会に入っていた七歌と副会長を務めていた小田桐、それと中等部時代に湊の下で女子の副会長をしていた高千穂が立候補すると噂されていた。
しかし、実際に蓋を開けてみれば会長はラビリスと小田桐の一騎打ち、副会長に七歌が立候補し、高千穂は女子テニス部のキャプテンに集中したいからと立候補していなかった。
そして、選挙の結果はラビリスが六割の票を取って生徒会長に就任した。
残念ながら落選してしまった小田桐だが、会長の推薦で風紀委員長として続投し、ある意味では去年とそれほど変わらないメンバーでこの一年生徒会を運営してきた。
「生徒会長としての姉さんはとても立派でした。今日も代表挨拶でスピーチをしていましたが、〝残念ながら今日ここへは来られなかった恩人へも感謝を〟と言ったときには大勢の方が涙を流していたほどです」
卒業生代表の挨拶は毎年生徒会長の三年生が務める事になっている。
よって、今年はラビリスがその大役を務めた訳だが、彼女はそこで暗に湊の事を指して感謝の言葉を口にした。
「わたしたちや桜さんだけでなく、他の生徒や先生方も八雲さんがいない事をとても残念に思っていましたよ」
今も彼の事を強く想ってくれている少女の言葉に、仲間たちだけでなく大勢の生徒や教師に保護者席の方からも泣くのを我慢して鼻を

すする音が聞こえてきたほどだ。
ラビリスのスピーチがとても感動的だったのもあるが、彼がいなくなって一年、どれだけの人が未だ彼の事を愛しているかが分かる素敵な卒業式だったとアイギスは話す。
だが、今の話で出てきた中でそういえば彼に伝えていなかった事があったのを思い出し、この一年で世界に起きた不思議な変化について彼女は説明した。
「ああ、そうです。影時間の記憶補整で世界はあの夜の事とあなたの事を忘れていたはずですが、どういう訳か皆さんの記憶に八雲さんの情報だけが戻ってきています。世界を見てまわるために中退した事になっていて、どうしてそんな形で記憶が戻っているのか分かりませんが、泣いている女子たちを見て順平さんが〝女泣かせな野郎だ〟と溢していました」
その変化がいつから始まったのかは分からない。
影時間の記憶と共に世界から存在を忘れられたため、仲間たちも彼の事は普段意識しないようにして日常を過していたのだ。
だというのに、彼のファンクラブ〝プリンス・ミナト〟の会員だった少女が、受験勉強の疲れから教室で「あぁー、癒やしが欲しい。皇子に頑張ってるねって頭なでなでして欲しい。それは無理でも日本に帰ってきたり近況報告なり情報が欲しいよー」と溢したのだ。
同じクラスだったゆかりは驚きながらも別人の可能性を考えて皇子の名を尋ねると、その少女は「貴様の中学時代の元彼じゃボケェー!」と大声で叫んだため、湊の事を思い出している者たちがいる事が判明した。
それについてゆかりはすぐに元特別課外活動部のメンバーたちに情報を共有し、他の者たちも〝有里湊って覚えてる?〟と大勢に確認を取ってみた。
結果、その時点で既に数えるほどだが彼の事を思い出している者がいて、さらに時間が経つにつれ思い出している者たちが増えていった。
今では皆が彼の事を思い出しているのではないかという状態に

なっており、ＥＰ社のソフィアたちに確認を取ったところ、封印の扉である月の門は今も閉じたまま存在しているらしい。
なので、ハッキリとした原因は不明なままだが、影時間の消滅から時間が経った事で本来現世側だった彼の存在が再び現世側として認識されるようになってきたのではないかとシャロンが仮説を立てた。
それが事実であれば彼も無事に人間として世界に認められた事になるため、朗報と言えば朗報だろう。
もっとも、だからと言って彼がこの世界に戻ってくる兆候や予兆はまだまだ見られないのだが、アイギスは空に向かって仲間たちの近況について話を続けた。
「その順平さんですが四月からはお隣千葉県の体育大学へ進学される事になりました。最初はどうするか悩んでいたようですが、八雲さんの気持ちを無駄にしないためスポーツトレーナーに必要な勉強をしながら、部活で野球をまた始めるそうです」
元々は進学すらもどうするか悩んでいた順平だったが、湊が仲間たちが平和な日常に戻ってからの事を考えて進学費用を残してくれていたと知って、彼もどうせなら頑張ってみようと進学する事に決めた。
残念ながら第一志望だった都内の大学は落ちてしまったが、第二志望の学校に受かった事で学生向けアパートの契約を結び、三月の中旬には千葉県へ引っ越す事になっている。
電車を使えば三十分も掛からないので、隣の県で暮らすと言ってもそれほど離れ離れになるイメージはないが、順平本人は自分だけ別の県かとガッカリしていた事がアイギスの印象に残っている。
「他の皆さんはと言うと、七歌さんは学力の関係から美鶴さんと同じ大学の法学部に現役合格されました。法の番人になって権力を持ってやるとの事です。まぁ、真田さんの後輩になるのは嫌がっていましたが、真田さんは武者修行でアメリカに行かれるのでしばらく会う事はないでしょう。ちなみに、綾時さんも同じ大学ですが八雲さんの仕事から興味を持ったとの事で医学部に進学されます」
話題に出てきた順平の次にアイギスが語ったのは、偶然にも仲間内

での進学率が最も高い国内最高峰の大学へ進学した七歌と綾時についてだった。
去年、経営について学ぶため美鶴は経済学部へ、黒沢に憧れ警察を目指す真田は法学部へ進学したが、今年は法の番人を目指して七歌が法学部へ、医者を目指して綾時が医学部へと進学を決めた。
もっとも、真田は以前に話していた通りに資金と語学に時間かけて準備すると、武者修行だと言って四月からアメリカへと渡る予定でいる。
兄が武者修行に出る事を決意した経緯を知らない妹の美紀から相談を受けた荒垣は、調理師学校へ進学して忙しかった事もあって〝有里に触発されただけだ。好きにさせておけ〟と一応計画的な行動ではある事を伝えて納得させていた。
まぁ、約一名おかしな存在もいるが湊の件もあって有名進学校として名前が売れてきていただけあって、学校側は二年連続で現役合格者を輩出できたことを大層喜んでいた。
校長は湊が残ってくれていれば三人合格出来ていただろうにと惜しんでいたが、それに対しては七歌が「八雲君なら海外の大学を選んだと思いますよ」と誰もが知っている有名大学の名を挙げて、それはそれでさらに惜しいと余計にダメージを与えていたという。
残念ながらアイギスはその場にいなかったが、一緒に校長室に呼ばれた綾時が言っていたので実際にあった事なのは確かだろう。
アイギスとしても湊は海外の大学を選んで、飛び級ですぐに卒業して学歴マウントで真田たちを煽りそうなイメージがあるため、メンバー中五人が同じ大学に通う事はなかっただろうと思う。
「ゆかりさんは新宿区にある私立大学へ進学される事になりました。どうやらお母様の知り合いの伝手でモデル業をやってみるそうなので、芸能活動にも協力的なところへ進学されたそうです。実は学部は違いますが美紀さんも同じ大学への進学が決まっていて、もしかしたら二人でルームシェアするかも知れないとの事です」
そして、七歌たちの大学のある区と隣接する新宿区の大学には、別々の学部ながらゆかりと美紀の二人が進学を決めていた。

ゆかりと美紀はかなり学力に差があったはずだが、その学校は学部によって偏差値にかなり差があるようで、尚且つゆかりは学校が持っていた指定校推薦の枠を勝ち取って成績に下駄を履いて本来の学力より上の偏差値の大学に入る事が出来たらしい。

皆の合格祝いをしたときに七歌がいくら払ったのか尋ねた時には、流石にそこまで落ちぶれてねーわと殴りかかっていたので、彼女も本気で勉強してある程度は狙える範囲まで成績を上げていたようだ。

今は寮生活をしているが三月中には出ていく必要があり、美紀も実家からは少し距離があるのでもう少し近くで部屋を借りられないかと考えているという。

やはり大学生の一人暮らしは憧れるのかギリギリまで探すそうだが、設備や家賃を考えるとルームシェアになる可能性が高いだろうと他の者たちは見ていた。

「風花さんはご両親からは医学部へと望まれていたそうですが、しっかりとお話して自分の夢を応援して貰える事になり目黒区にある大学の理工学部に合格されました。風花さんのご実家は港区なので大学へはそちらから通われるそうです」

一方、医者の家系に生まれながら医者になれなかった父を持つ風花は、医者になる事を望む両親に自分の好きな事を勉強して行きたいと伝え、説得の甲斐もあり応援して貰えるようになって無事に第一志望校に合格を果たした。

実家からの距離は月光館学園までよりずっと遠いものの、無理に近くに部屋を借りるほどでもないので彼女は実家から通う予定だという。

港区内でありながらほとんど中央区のような場所にあるマンションで暮らしていたラビリスもいるため、風花自身も距離を考えれば区を跨ぐにしてもそこまで大変ではないだろうと思っているようだ

「そして、八雲さんが最も気になっていると思われるチドリさんですが、趣味の絵をもっとやりたいからと台東区の芸術大学を受験し、見事に合格する事が出来ました。どうやらある意味ではチドリさんが最も難しい受験だったそうなので、桔梗組の皆さんも盛大な宴会を開

いたそうです」
次々と仲間たちの進路について説明するアイギスは、ついにお待ちかねだとチドリが芸術大学に合格した事を伝えた。
チドリ自身、中等部と高等部の両方で絵のコンクールで賞を取っていたので、他者から評価されるだけのものは持っていたと言える。
テレビで注目されてから湊が貰っていた総理大臣特別賞のような記念枠とは異なり、ちゃんとした審査員たちが評価して与えられる賞を彼女は受賞していた。
無論、中等部や高等部の実績だけで合格出来る訳ではなく、基礎学力を測るようなテストと与えられた時間内にテーマに沿った作品を描くような問題もあった。
自分でも合格は難しいと思っていたチドリはそれに果敢に挑戦し、出来る限りの事はやったと家族に告げてから数日後、Ｗｅｂ上の合格発表で自分の番号を見つけた時には彼女も人前でガッツポーズをするほど喜び、幼い頃から彼女を可愛がってくれていた組員たちも呼んで大宴会を開いたと聞いた。
これまでの彼女の人生は湊に守られ、彼によってある程度道が作られたところを歩く形で進んで来た。
けれど、今回の事はチドリが自分で考えて、最後まで自分の意思で歩みを進めて辿り着いた場所だ。
先の見えぬ未知の場所を進んでゆくのは恐ろしいが、だからこそチドリは彼が守った世界で前を向いて一歩を踏み出し、胸を張って生きていく実感を得られるに違いない。
家族として長い時間を共に過してきた彼女は誰よりも彼との別れを辛く感じていたはず。
それだけに今の強さを感じるその姿をアイギスも見習って行きたいと強く感じた。
「姉さんの進路はと言うと、学校の先生になりたいそうで、千代田区の大学の教育学部への進学が決まりました。グローバルな感じらしいので日本人とは違った見た目の姉さんでも問題なく過ごせるのではないでしょうか」

生徒会長を務めたラビリスはかなり勉強を頑張っていたものの、学校が好きで、誰かの応援もする事が出来る先生になりたいと教育学部を目指した。
学部を除けば本人にはこれといって希望がなかった事もあり、色々と都内のオープンキャンパスへと出掛けて行って志望校を決めたらしい。
本人は既に慣れているようだが、やはり西洋系の見た目をしている事もあって最初は目立ってしまう。
だが、彼女が進学する予定の大学は留学生なども多く受け入れており、彼女の見た目であってもそれほど目立つ事はないだろうとアイギスは見ていた。
彼女は今も暮らしている湊の部屋から大学へと通うため、それなりに高齢になってきているコロマルとの生活も続ける予定となっている。
そして、皆の進路について語ったアイギスは、最後に自分の今後の予定について語った。
「最後にわたしですが、皆さんと違って特にやりたい事や興味のある事はありませんでした。元々、高校卒業後は八雲さんと籍を入れて専業主婦でも良いと思っていたので、先生には色々と学べそうな学部でオススメがあればと紹介して貰いました。皆さんの学校から距離は離れてしまいますが、国立市にある大学で社会学を学んでいく予定です」
彼女も順平と同じように進学するかどうか最初は悩んでいた。
進学する事が嫌なわけではなく、何かしたい仕事がある訳でもなかったが、メンバーの中で一番人間社会での経験がなかった事でやりたい事などが思い付かなかったのだ。
湊が生きていた時には彼と共に人生を歩んでいきたいと思っていたため、未来での再会に希望を持って前向きにはなれても、その間にどうしたいかは簡単に思い付いたりはしない。
そこで彼女は三年時の担任になった佐久間に相談し、自分の学力で行ける一番偏差値の高い学校で色々と勉強出来そうな学部をとりあ

えず選ぶと良いのではとアドバイスを受けた。
佐久間に言わせれば将来就きたい職業が決まっていれば別だが、資格取得や採用条件に卒業学部の指定がない職業なら大学で何を学んでいても関係ないため、迷ったら無難な中で偏差値が高いところにすれば良いらしい。
中学高校の勉強もそうだが学校の勉強など社会に出れば使わないものばかり。
これを言うと〝なら必要ないじゃないか〟と勉強をサボろうとする学生も出てくるが、学生の勉強は社会人にとっての仕事と同じだ。
与えられた仕事についてどれだけ真剣に取り組みしっかりと結果を出す事が出来るか、その結果次第で会社での査定も決まってくる。
学生はその練習として、教わった事を吸収し、足りなければ自分でも学び、そして定期テストという形で結果を出す事で成績が評価されるのだ。
向き不向きがあるのは分かるが、学校の成績が悪いというのは社会で言えば仕事が出来ないのと同義なのだと佐久間はアイギスに教えてくれた。
〝将来には必要なくても、今の貴女には必要で、少し未来の貴女にとっても必要な事だから出来るだけ頑張りなさい〟と真面目な表情でそう言ってくれた佐久間をアイギスは初めて本当に教師だったのだなと思えた。
そして、佐久間のアドバイスに従って進路を決めたアイギスも何とか無事に志望校に合格し、四月からは今も姉とコロマルと共に暮らしているマンションから通う事になっている。
「今後、何を学んでどんな仕事に就くのかは分かりませんが、わたしも出来るだけ頑張って再会した時には八雲さんを驚かせたいと思います。ですから、一足先にここを卒業して行きますが、八雲さんもどうかわたし達を見守っていてください」
再び彼とこの場所で会いたかったがそれはもう叶わない。
なので、せめてこれから巣立っていく自分たちを見守っていて欲しい。

目を閉じて彼に祈ったアイギスが挨拶を終えて戻ろうと振り返ると、入口の方から彼女を呼ぶ七歌と順平の声が聞こえて来た。
「おーい、アイギスー！　一人でこんなとこ来て何やってんの？」
「折角だから校舎の入口前に集まって皆で写真撮ろうってさ！」
ベンチに置いていた荷物を手に持ったアイギスに、同じく卒業の記念品等の荷物を持った二人が声をかけてくる。
さらには後ろから他の仲間たちもやってきたので、アイギスはどこか懐かしい気持ちになりながらここで何をしていたか伝えた。
「あ、皆さん。少し八雲さんへ報告したくて、ここらで宙に一番近い場所で話していました」
「え、ズルイ！　八雲君、次に会うときには女子大生になってるからね！　帰ってくるならその間がオススメだよ！」
「そういう事なら、オレっちも四月からキャンパスライフだ！　次に会うときにはすっげーカワイイ彼女紹介すっから楽しみにしとけ！」
ここで湊に挨拶をしていたと伝えると、仲間たちも折角だからと宙に向かって声を張り上げる。
「有里君、私もこれから芸能界デビュー目指してみるから応援してて！」
「フフッ、私は大学から好きな機械工作の道に進んで行きます。宇宙で使える物を作ったら月からでも見えるかも知れないから楽しみにしててください」
こんな事をしても彼には届かないだろう。そんな事は頭で分かっているが、心の中ではもしかしたらという想いがあって全員が続けていく。
「……帰ってきたら絵を描いてあげる。今よりもずっと上手くなってるはずだから期待してて」
「湊君が学生に復帰する時にはウチは先生になってるかもしれへんけど、それはそれで楽しそうやから担任になれるくらいのタイミングには帰ってきてな」
中には随分と適当な事を言っている者もいるが、あくまで日常側の存在として関わってきた少女などは真面目に近況報告とこれからの

目標などを語る。
「えっと、色んな国の言葉を話している有里君に憧れて国際教養学部に進学しました。帰ってきた時には私も外国語で会話出来るよう頑張って行きますね」
そんな彼女たちの姿を一歩下がったところで見ていた黄色いマフラーを巻いた少年は、ここにはいない友人の姿を思い出し懐かしみながら語りかける。
「湊の影響もあって命を助ける道を選ぶ事にしたよ。とても大変な道だと思うけど、将来はコネで君の病院で雇ってくれると嬉しいな」
真面目に語りかけると思わせつつ、最後は他の者と同じようにふざけた事で仲間たちも思わず噴き出して笑い声を上げた。
皆が未来を向いて笑い合う。この光景は彼がその手で世界を守ってくれているから生まれたものだ。
一年前の卒業式で記憶を取り戻した時にはこんな日常を過ごせるとは思っていなかった。
彼が残していった言葉と仲間たちの支えがあって、今の自分たちは笑えているんだと彼女たちはその幸福に感謝した。
「七歌、呼びに行った君まで何をしてるんだ」
「俺は妹の関係者と言い張れるが、美鶴とシンジはただの卒業生なんだ。あんまり手間をかけさせるな」
そうして、笑っていればいつまでも戻ってこない後輩たちを呼びに美鶴たちも屋上へやってきた。
呆れ顔の真田の後ろには時計を見て時間を気にしている荒垣と、少し背が伸びた天田が移動用ケージに入ったコロマルを連れている。
「ほら、時間もねぇし。下に降りるぞ」
「遅くなると料理担当の荒垣さんが大変ですもんね」
「ワンワン！」
この後は特別に開放される巌戸台分寮を使って卒業記念パーティーを開く事になっている。
提供される料理は調理師学校で腕を磨いている荒垣が担当するため、いくら下準備を終えているといっても量が量だけに余裕があるわ

けではない。
それを分かっている天田が気を遣えば、他の者たちもそうだったと荒垣に謝罪しながら屋上から出ていく。
その最後尾をついていくアイギスは校舎に戻る直前に振り返って言った。
「八雲さん、行ってきます」
この学校を卒業しても終わりではない。人生の旅路はまだまだ続いてゆく。
だから彼女は新たな旅立ちを告げてその場を後にする。
遠い場所、ここではない世界、そこでその声を聞いた青年は静かに笑い。彼女たちの旅立ちを祝福した。